ユーノ・スクライア外伝

重要大事

タテ書き小説ネット Byヒナプロジェクト
http://pdfnovels.net/

注意事項

このＰＤＦファイルは「小説家になろう」で掲載中の小説を「タテ書き小説ネット」のシステムが自動的にＰＤＦ化させたものです。
この小説の著作権は小説の作者にあります。そのため、作者または「小説家になろう」および「タテ書き小説ネット」を運営するヒナプロジェクトに無断でこのＰＤＦファイル及び小説を、引用の範囲を超える形で転載、改変、再配布、販売することを一切禁止致します。小説の紹介や個人用途での印刷および保存はご自由にどうぞ。

【小説タイトル】
ユーノ・スクライア外伝

【Ｎコード】
Ｎ４８０７Ｌ

【作者名】
重要大事

【あらすじ】
それは、狂わされた運命と、それに立ち向かった青年の物語。
異世界を管理する時空管理局のデータベース、元無限書庫司書長、ユーノ・スクライアに訪れた出来事。
魂魄の調整者、「死神」の残した禁忌の遺産・・・
その欠片である「アンゴルモア」を巡る戦いと数奇な運命。
彼はある日突然自主退職をし、その姿を眩ませる。悲しみに暮れる彼の幼馴染の高町なのは。そんな中、彼は死神代行・黒崎一護に命

を救われ、「翡翠の魔導死神」として覚醒する。

護り切れなかったものを護るため、目の前で苦しむ人々を救う為、彼は四年の月日を経て、次元世界を揺るがす壮絶な事件と戦いに身を投じていく。

哀しき運命と、護るための覚悟。そして揺るがぬ想いを胸に抱き、「斬魄刀」の晩翠と仲間たちともに異世界を駆け抜ける。

ユーノ・スクライア外伝　キャラクター&概要説明（前書き）

割り込み投稿ですみませんが、拘ってみました。

ユーノ・スクライア外伝　キャラクター&概要説明

＞i16968－709＜

ユーノ・スクライア外伝

『ユーノ・スクライア外伝』（ゆーの・すくらいあがいでん）は、久保帯人による日本の少年漫画『ＢＬＥＡＣＨ』と都築真紀による魔法少女アニメ『魔法少女リリカルなのはｓｔｒｉｋｅｒｓ』。および、それを原作としたクロスオーバー作品。２０１０年から『にじファン』（小説を読もう）にて連載中。

キャッチコピーは「翡翠の魔導死神」、「なのはは僕が護る！」。

作品概要

週刊少年ジャンプが誇る人気漫画『ＢＬＥＡＣＨ』と、次世代魔法少女アニメの『魔法少女リリカルなのは　ｓｔｒｉｋｅｒｓ』のクロスオーバー作品である。今作品の最大の特徴は、タイトルにもあるように『なのは』側のサブキャラクターであり同作の主人公、高町なのはの幼馴染であるユーノ・スクライアを主人公として物語が展開されている。また、ＢＬＥＡＣＨ側の主人公黒崎一護を始め馴染みあるキャラクターが多数物語に登場し、本作では一護達の年齢は連載時における十年後のものとなっており、なのは達もＪＳ事件より四年後の新暦７９年が舞台となっている。また物語の主体がＢＬＥＡＣＨに大きく寄ったものであることから、なのは達側のキャラクターの扱いがぞんざいになるケースが多く、特にフェイトとクロノの扱いがかなり酷い。また、舞台も話によってミッドチルダだけでなく地球であったり、全くの異世界だったりと多種多様なストーリー展開が主体となっている。本作のもう一つの見所として、ユーノが霊力と魔力という二つの相反する力を手に入れた魔導死神として覚醒し、そんなユーノがなのは達機動六課の面々を自身も前線に参加しながらサポートしていくと言うものであり、魔法の弟子・なのはとの恋の進展も味なところとなっている。作者である重要大事の考え方に則り、同性愛をはぐらかす様な言動は一切排除され、

その為になのはシリーズにおけるなのはとフェイトの関係がわりとあっさり書かれる事が多く、またユーノ自身も師・一護との強い絆を強調したシーンを始め、ヒロインとして位置づけられたなのはとのその後の関係が色濃く描写されている。

主要登場人物

ユーノ・スクライア

声　―　水橋かおり

「主人公設定公開」を参照

黒崎一護（くろさきいちご）

声　―　森田成一　／　少年時代：松岡由貴

身長１８１ｃｍ　体重６６ｋｇ　ＡＯ型　7月１５日生

本作の準主人公。２５歳。高一の頃に虚（ホロウ）に襲われた際にルキアから死神の力を譲り受け、以降彼女の代わりに死神の仕事を代行する。高校時代のクラスメイトであった織姫と結婚し、診療所を開いている。ユーノに死神の戦闘方法を教えた張本人であり本当の意味でのユーノの師匠。実力は護廷十三隊の隊長格に匹敵する。暇を見ては、ユーノ達の手伝いをしている。オレンジ髪に茶色の瞳。

高町なのは（たかまち　―　）

声　―　田村ゆかり

身長１６４ｃｍ　体重５０ｋｇ　Ｏ型　3月１５日生

本作のヒロイン。２３歳。ユーノの幼馴染で、魔法の弟子であるとともに密かにユーノに好意を寄せている。時空管理局の戦技教導官

で、「管理局のエースオブエース」と呼ばれる超一流の砲撃魔導師。六課での役職は戦技教官・及び前線フォワード部隊「スターズ分隊」隊長。ユーノが何も告げずに居なくなったことを自分の贖罪として背負い込んでしまう。四年ぶりに戻ってきたユーノにこれまでのことを謝罪し、告白をし晴れて両想いとなる。

阿散井恋次（あばらい　れんじ）

声　―　伊藤健太郎　／　少年時代：木内レイコ

身長１８８ｃｍ　体重７８ｋｇ　８月３１日生

護廷十三隊三番隊隊長。一護の好敵手。幼馴染で六番隊副隊長のルキアの義兄であり六番隊隊長の朽木白哉を目標にしている。元六番隊副隊長である。山本の命を受け、ユーノの元を訪れその後の事件で行動を共にする。六課での役職は嘱託前線部隊「死神分隊」隊長・及び戦技指導員。

吉良イヅル（きら　―）

声　―　櫻井孝宏

身長１７３ｃｍ　体重５６ｋｇ　３月２７日生

護廷十三隊三番隊副隊長（市丸謀反後は隊長業務を兼任（劇場版２では、隊長権限代行と呼ばれた））・男性死神協会理事で恋次とは同期。直情的な恋次を冷静な判断力でサポートしている。ユーノの類稀なる才能に感嘆している。六課での役職は嘱託前線部隊「死神分隊」副隊長・及び戦技指導員。

フェイト・Ｔ・ハラオウン

声　―　水樹奈々

なのはとユーノの幼馴染で時空管理局執務官。六課での役職は法務・

事件捜査指揮担当・及び前線フォワード部隊「ライトニング分隊」隊長。本作では扱いが結構ぞんざいになっており、レギュラーの座を辛うじて守っているが登場回数が大幅に減っている。なのはの娘であるヴィヴィオの後見人で、教育方針も少々過保護気味。ユーノとなのはの恋を温かく見守る中、若干嫉妬もしている模様。

朽木ルキア（くちき　ルキア）

声　一　折笠富美子

身長１４４ｃｍ　体重３３ｋｇ　1月１４日生

ＢＬＥＡＣＨ側の準主人公。護廷十三隊の六番隊副隊長。山本の命を受け機動六課へ派遣され、ユーノ達をサポートする。恋次の幼馴染で、口調は古風で態度がデカい。六課での役職は嘱託前線部隊「死神分隊」隊長補佐。

地球

空座町

黒崎家

黒崎織姫（くろさき　おりひめ）

声　一　松岡由貴

身長１６１ｃｍ　体重４８ｋｇ　ＢＯ型　9月3日生

ＢＬＥＡＣＨ側のヒロイン。旧姓井上織姫。一護の妻で、仕事とプライベート両方で一護のことを温かく見守り傍らでサポートをしている。『盾舜六花』（しゅんしゅんりっか）を呼び出して盾などを創り、それを用いて自らの意思の力で様々な対象を拒絶する非常に稀有な霊能力を持つ。

コン

声　―　真殿光昭・久保帯人（ＪＦ２００４のアニメ）

身長２７ｃｍ　体重１８２ｇ　１２月３０日生

尸魂界で作られた対虚用の戦闘用改造魂魄（モッド・ソウル）。改造魂魄・強化能力として脚力、とくにジャンプ力に長けている。普段は、ライオンのぬいぐるみに入れられている。　途中から後頭部に、滅却師マークが入っている。十年以上、一護の元で暮らしており現在は織姫を入れた三人で同居。

海鳴市

高町家

高町ヴィヴィオ（たかまち-）

声：水橋かおり

聖王教会系の学校、Ｓｔ（ザンクト）・ヒルデ魔法学院に通学する初等科四年生。古代ベルカ王族聖王オリヴィエのクローンで、現在はそのことを受け入れ普通に生活をしている。自分専用のデバイス「セイクリッド・ハート」をなのはとフェイトから贈られた。術式はベルカ主体のミッド混合ハイブリッド。強くなりたいと言う想いから、ミッドチルダで行われている格闘戦技（ストライクアーツ）をノーヴェより学んでおり、その実力はかなりのものになっている。なのはとユーノを実の両親の様に慕っている。

高町士郎（たかまちしろう）

声：一条和矢

なのはの父。５１歳。喫茶店「翠屋」店主、地元少年サッカーチームの監督も務めている。器が大きく、包容力のある人物。「小太刀二刀御神流」正当継承者であり、恭也・美由希に伝えている。ユーノをなのはを守れる男として認めている。

高町桃子（たかまち　ももこ）

声：天野エリカ

なのはの母。４７歳。「翠屋」のパティシエール及び経理。なのはを心から心配しながら、なのはを信頼し、その意思を尊重する優しい母。士郎とは新婚さながらの仲の良さ。１４年経った時点でも、奈々同様全員が驚くほどの若さを保っている。ユーノとなのはのことを温かく見守る。

高町美由紀（たかまち　みゆき）

声：白石涼子

なのはの姉。３１歳。眼鏡に三つ編みが特徴。兄・恭也と父・士郎より「小太刀二刀御神流」を教えてもらっている。可愛いもの好きで、フェレット状態のユーノを非常に可愛がっていた。なのはがユーノと両想いになったことを心から喜び、祝福している。

スクライア商店

詳細は「スクライア商店紹介」を参照

その他の地球主要登場人物

石田雨竜（いしだ　うりゅう）

声　一　杉山紀彰　／　少年時代：本田貴子
身長１７１ｃｍ　体重５５ｋｇ　ＡＢ型　１１月６日生
絶滅したはずの対虚退魔眷属「滅却師」（クインシー）の生き残りで、一護のクラスメイト。弓状の武器を用いて戦う。一護の悪友で現在は空座総合病院の院長。
茶渡泰虎（さど　やすとら）

声　一　安元洋貴
身長１９７ｃｍ　体重１１２ｋｇ　ＡＯ型　４月７日生
一護の中学生時代からの親友。あだ名は一護が読み間違えたことがきっかけでチャド。霊力によって変化した両腕で戦う。
浦原喜助（うらはら　きすけ）

声　一　三木眞一郎
身長１８３ｃｍ　体重６９ｋｇ　１２月３１日生まれ
表向きは浦原商店なる駄菓子屋の店主。実態は、現世にいる死神に対して霊的商品などを売り、死神の現世における行動を援助している。尸魂界にいた頃は先代護廷十三隊十二番隊隊長、技術開発局創設者にして初代局長を務めた。人様などには口ではいえない物も売っているらしい。ユーノの鬼道と技術開発の師で、陰ながらユーノの事を気にかけている。
握菱鉄裁（つかびし　テッサイ）

声　一　梁田清之
身長２００ｃｍ　体重１３８ｋｇ　５月１２日生まれ
２ｍの長身におさげにメガネというルックスの浦原商店店員。常に浦原喜助をサポートしている片腕的存在で、雨（ウルル）とジン太のお目付け

兼世話役。虚（ホロウ）を素手で倒し、扱いの難しい九十番台の高位縛道を使いこなす等、高い戦闘力の持ち主。

四楓院夜一（しほういんよるいち）

声　―　雪野五月（人間Ｖｅｒ）・斎藤志郎（猫Ｖｅｒ）
身長１５６ｃｍ　体重４２ｋｇ　1月1日生まれ
褐色の肌をしたグラマラスな女性であり、普段は黒猫姿へと擬態させている。かなりの巨乳。少ない食料を多く食べられるとか自由で居られる、服を着ないで居られる等の理由で猫の姿はかなり気に入っている様子。ユーノの白打と瞬歩の師。淫獣フェレットもどきと言ってユーノをからかっている。

アルフ

声：桑谷夏子
ミッドチルダの山奥に住む狼を元にフェイトが作った使い魔。初登場時点で2歳。大形の狼の姿をしており、人間（外見年齢１６歳）の女性に姿を変えることもできる他、Ａ' ｓでは小型犬に変身する新形態「こいぬフォーム」も披露した。勝気で明るい性格。生まれて間もなく死病に侵されて群れからも見放されたところをフェイトに拾われ、彼女と契約することで一命を取り留めた。契約内容は「ずっとそばにいること」であり、実質どちらかが死を迎えるまで契約は有効となる。フェイトを心から慕っており、その関係は主従というより仲のいい姉妹のように見られる。戦闘の援護から身の回りの世話まで献身的にこなす一方、現在はフェイトに仲間ができ、戦闘での補助もほとんど必要としなくなったことで彼女の傍を離れ、ハラオウン家で家事や「無限書庫」でのユーノの手伝いなどをメイン活動としている。フェイトの魔力を食わないための姿を追求した結果、人間形態でも子供の姿をとるようになっている。

有沢竜貴（ありさわ　たつき）

声　一　野田順子

身長１５５ｃｍ　体重４１ｋｇ　ＡＯ型　７月１７日生まれ

織姫とは無二の親友であり、一護とは４歳の頃からの幼馴染で良き理解者。一護や恋次達の正体を黙認し、現在は空座町で空手道場の師範をしている。元オリンピック女子空手部門最年少金メダリスト。シグナムと意気投合する。

石田竜弦（いしだ　りゅうけん）

声　一　成田剣

身長１７８ｃｍ　体重６８ｋｇ　３月１４日生まれ

雨竜の父。空座総合病院の前院長。滅却師十字（クインシークロス）を持ち、最後の滅却師を名乗ることを許されているが、「金にならないから」でその立場を嫌っている。滅却師であることを嫌っているため、雨竜とは不仲ではあるが気にかけてはいる。

沢田奈々（さわだ　なな）

声　一　深見梨加

身長１５５ｃｍ　体重４５ｋｇ　Ｏ型　３月３１日生　牡羊座

ごく普通の家庭的な主婦。年齢は４４歳。性格は天然ボケで夢見がち。ひったくりにあったところを偶然にもユーノと一護達に助けられ、それが縁でユーノ達とは面識がある模様。時折、空座町にビアンキやフゥ太と買い物に来ている。

ビアンキ

声　―　田中理恵
身長１６５ｃｍ　体重５１ｋｇ　ＡＢ型　１１月８日生　蠍座
リボーンの４人目の愛人で、フリーのイタリア人殺し屋。通称「毒サソリ」。年齢は２７歳。「ポイズンクッキング（＝毒入り料理作り）」の使い手（フゥ太の「とっても苦しい毒殺ランキング」では３位）で、料理をすると必ずポイズンクッキングになってしまうという、特異な才能の持ち主。奈々とフゥ太と一緒に空座町を訪れた時、ユーノ達と再会を果たす。

フゥ太（ふうた）

声　―　三瓶由布子
身長１７０ｃｍ　体重５９ｋｇ　Ｂ型　１月１１日生　山羊座
通称「星の王子」「ランキング王子」と呼ばれている情報屋で好青年。本名は「フータ・デッレ・ステッレ（意味は「星たちのフゥ太」）」。年齢は１９歳。出身国はイタリア。空座町を訪れた時、ユーノ達と再会を果たす。

アリサ・バニングス

声：釘宮理恵
なのは、フェイト、はやて達とは今も変わらない親友で、メールのやり取りもしている。彼女達が任務で地球にやってくる際は、別荘のコテージを拠点として貸している。現在は一流の女社長として手腕を振るう。

月村　すずか（つきむら　すずか）

声：清水愛
アリサと同じくなのは達の親友。資産家の娘で大きな屋敷に姉やメ

イド達と共に暮らしている。大の猫好きで猫を何匹も飼っている。大人しく引っ込み思案な性格だが運動神経は抜群で、フェイトが驚愕するほど。

ギル・グレアム

声：長克巳

時空管理局顧問官を務めていた局の重鎮。クロノの父・クライドの上官であり、ハラオウン母子との親交も深く、クロノの執務官研修の担当官を務めた。非常に温厚で、物腰穏やかだが威厳のある人物。なのはの世界のイギリス出身。高い魔法資質の持ち主で、傷ついた管理局員を助けたことにより魔法と出会うなど、なのはと似ている部分がある。闇の書事件終結後自ら局を辞職し、故郷で使い魔であるリーゼ姉妹とともに隠遁生活を送っている。はやては十四年経った今でも、彼の事を心から慕っている。ちなみに、還暦を過ぎた現在では同じ魔法使いでユーノの知人の柊沢エリオルと親交がある模様。

ミッドチルダ

特定遺失物管理部機動六課

隊長陣

八神はやて（やがみ　-）

声：植田佳奈

なのはとフェイトの親友。機動六課での役職は総指揮官・及び「ロングアーチ」総部隊長。現代は非常に稀な古代ベルカスキルの継承者であり、「最後の夜天の書」の主。関西弁がチャームポイント。

クロノ・ハラオウン

声：　杉田智和（A's エピローグ・StrikerS以降）／高橋美佳子（第1期・A's本編）

本局所属の次元航行部隊「クラウディア」の艦長を務める提督。ユーノの悪友でもある。機動六課での役職は機動六課監査役・及び部隊長代行役兼六課後見人筆頭。日頃から扱いがぞんざいになりがち。

ヴォルケンリッター

シグナム

声：清水香里

「ヴォルケンリッター」の将。「烈火の将　剣の騎士シグナム」。4人のリーダー格で、実際に「リーダー」と呼ばれている場面もある。六課での役職は前線フォワード部隊「ライトニング分隊」副隊長。

ヴィータ

声：真田アサミ

「紅の鉄騎　鉄槌の騎士ヴィータ」。見た目8歳ぐらいに見える赤い髪の少女。真面目で一途な性格。六課での役職は戦技教官補佐・及び前線フォワード部隊「スターズ分隊」副隊長。

シャマル

声：柚木涼香

「風の癒し手　湖の騎士シャマル」。医務官免許を所得している。

六課での役職は主任医務官。治療・救護において高いバック能力を誇る。同じ医者である一護とは考え方が異なる所為か、よく口論になる模様。

ザフィーラ

声：一条和矢

「蒼き狼　盾の守護獣ザフィーラ」。六課での役職は部隊守護と要人警護。魔導師ランクを保有しないが、防御力はユーノと同等で非常に硬いものとなっている。同じ狼男である狛村のことを尊敬し、親友となりたいと希っている模様。

前線フォワード部隊

スバル・ナカジマ

声：斎藤千和

１９歳。公安警備隊のセカンドチームの隊長を務める。なのはの事を心から尊敬している。六課での役職は前線フォワード部隊「スターズ分隊」のフロントアタッカー。「シルバーのエース」と称されるまでに成長を遂げている。

ティアナ・ランスター

声：中原麻衣

２０歳。時空管理局本局所属の執務官。六課での役職は法務・事件捜査担当補佐・及び前線フォワード部隊「スターズ分隊」のセンターガード。スバルとは訓練校時代からの腐れ縁で、よきパートナー。なのは同様射撃型の魔導師。

ギンガ・ナカジマ

声：木川絵理子

スバルの姉。２１歳。時空管理局・陸士１０８部隊所属の捜査官で陸曹。魔法術式・近代ベルカ式／魔導師ランク・陸戦Ａ、魔力光は強い青。左利きで、母の形見である「リボルバーナックル」は左手用を使用する。戦闘の際には他に「ブリッツキャリバー」や、スバルと同様「ウイングロード」を使用。六課での役職はスバル同様第二のフロントアタッカー。

エリオ・モンディエル

声：井上麻里奈

１４歳。辺境自然保護隊の所属。六課での役職は前線フォワード部隊「ライトニング分隊」のガードウイング。真面目で誠実な青年で、キャロとは互いにパートナーを組んで日々精進している。ユーノの事を人前ではあまり口には出さないが実際かなり尊敬している。

キャロ・ル・ルシエ

声：高橋美佳子

１４歳。エリオ同様辺境自然保護隊に所属。六課での役職は前線フォワード部隊「ライトニング分隊」のフルバック。竜召喚魔法を使用し、使役竜「フリードリヒ」と「竜騎ヴォルテール」を従える。最近は背丈が伸び悩んでいることを気にしている。

ロングアーチ

リインフォースⅡ（ツヴァイ）

声：　ゆかな
八神はやてが試行錯誤の果てに作り出したユニゾンデバイスの管制人格。愛称は「リイン」。ストレージデバイス「蒼天の書」をはやてと共用。現在は六課隊員に使用者のいない「凍結・冷却系」魔法を習得。機動六課での役職は部隊長補佐／副隊長補佐／前線管制。

アギト

声：亀岡真美
「烈火の剣精」を自称し、炎系の古代ベルカ式魔法を操る。優れた剣の使い手であり魔力変換資質「炎」を有する古代ベルカの騎士、その上魔力光の色までも適合するシグナムはアギトのロードとして最も理想的な存在で、現在はシグナムをロードとしている。六課での役職は前線フォワード部隊「ライトニング分隊」副隊長補佐。

グリフィス・ロウラン

声：箭内仁
リンディの友人であるレティ・ロウラン提督の息子で、シャーリーの幼馴染み。階級は准陸尉。六課での役職は交換部隊責任者・及び部隊長補佐。ＩＩ種キャリア（通称「一般キャリア」）の試験に合格しており、現場に出ずに部隊の運営・指揮を行うキャリア指揮官への道を歩んでいる。ルキノと結婚している。

ヴァイス・グランセニック

声：中村悠一
武装隊所属の青年。六課での役職はヘリパイロット・及びハイパーマシーン整備士。ヘリ操縦士としては最高位のＡ級ライセンスを保有している。階級は陸曹長。アルトとは付き合いが長いらしい。使

用するデバイスは、狙撃銃型のインテリジェントデバイス「ストームレイダー」。

シャリオ・フィニーノ

声：伊藤静

自称「メカニックデザイナー」、ヴァイス曰く「メカオタ眼鏡」。「シャーリー」の愛称で親しまれる、眼鏡をかけた少女。幼い頃に家が近所だったため、グリフィスとは幼馴染。階級は一等陸士。六課での役職は通信主任・及びハイパーマシーン整備担当補佐。

アルト・クラエッタ

声：升望

「機動六課」のロングアーチに所属しているヴァイスの後輩。六課での役職は機器整備員、有事は通信士を勤める。階級は一等陸士。シャリオやルキノと同じく、魔導師としての能力を持たない内勤組。ヘリパイロットの免許を取得している。

ルキノ・ロウラン

声：ゆかな

機動六課のロングアーチに所属する女性でグリフィスの妻。六課での役職は経理事務員、有事は通信士を勤める。階級は二等陸士。元は艦船アースラで事務員兼通信士補を勤めており、クロノの状況についても知っていた。その縁でフェイトの推薦を受け、機動六課に引き抜かれる。アルトとは通信士研修で知り合い、以来公私に渡る友人となる。

バックヤード・及び地上関連

ゲンヤ・ナカジマ

声：大川透

陸士１０８部隊部隊長。スバルとギンガの父親。新暦７１年の空港火災にスバル達が巻き込まれたのは、彼に面会に来る途中のことで、彼自身も途中から現場に駆けつけ、はやてに代わって応援部隊の指揮を執っていた。階級は三等陸佐。新暦７２年時点から、時空管理局陸士１０８部隊長。

アイナ・トライトン

声：高森奈緒

機動六課の寮を管理する寮母。温厚な人柄で、ヴィヴィオからも懐かれている。本編では出番は少ないが、ユーノからもよく家事に関する相談を受けている模様。

コロナ・ティミル

声：　大塚ちひろ

ヴィヴィオ、リオの同級生。ヴィヴィオとは初等科１年生の頃から親友であり、リオともすぐに打ち解ける。コアとなる端末に魔力を込めて練り上げたゴーレム・ゴライアスを自在に操る特殊な召喚魔法を持つ。

リオ・ウェズリー

声：　城雅子

ヴィヴィオ、コロナの同級生。ヴィヴィオとコロナとは初等科３年生の最後のころに出会ったが、すぐに親友になった。電気と炎の変

換資質を両方持つという才能があり、その変換資質と実家の格闘技「春光拳」を組み合わせた技を新技として編み出していた。

アインハルト・ストラトス

声　一　能登麻美子

本名はハイディ・Ｅ・Ｓ（アインハルト・ストラトスの略）・イングヴァルト。Ｓｔ．ヒルデ魔法学院中等科に所属する生徒であり、古代ベルカ時代にあったシュトゥラ王国の国王「覇王イングヴァルト」の末裔。碧銀の髪に、右が紫で左が青の虹彩異色の瞳。純血統であり、一族に稀に現れる覇王の身体資質と記憶を受け継いだ存在にして、古代ベルカの格闘術「覇王流（カイザーアーツ）」の継承者。聖王の遺伝子を持つヴィヴィオと出会い友人になり、共に行動するようになった。

時空管理局本局

リンディ・ハラオウン

声：久川綾

時空管理局総務統括官で六課の後見人の一人。クロノの実母で、１１年前の事件で夫・クライドを亡くして以降、女手一つで彼を育ててきた。穏やかでどこかほのぼのとした雰囲気を持つが仕事の上では厳しく、時に冷酷とも思える判断を下し、勝手な行動をとったなのはやユーノを叱責することも。大の甘党で、緑茶に砂糖やミルクを入れるなど変わった味覚の持ち主。

マリエル・アテンザ

声：阪田佳代

愛称はマリー。本局第四技術部主任として陸士１０８部隊と行動を

共にしていた（官職は精密技術官）。戦闘機人であるギンガとスバルのメンテナンスも担当。ヴィヴィオのデバイス「セイクリッドハート」を作成した。

ミゼット・クローベル

声：清水香里

本局統幕議長。「伝説の三提督」の一人。かつて護衛任務を受け持った、はやてやヴィータ達を気に入っている。護衛任務に就いていた時期があったヴィータ曰く「人の好い婆ちゃん」だったとのこと。山本とは旧知の仲らしく、時折通信を入れて情報を交換している模様。

レオーネ・フィルス

声：納谷六朗

法務顧問相談役。管理局の黎明期を支えた「伝説の三提督」の一人。ユーノに灰頭の撃退を直談判するために六課を訪れた。

ヴェロッサ・アコース

声：小野大輔

時空管理局・本局査察部所属の査察官でカリム・グラシアの義弟。幼い頃に聖王教会に保護された。数少ない古代ベルカ式魔法の継承者であり、それが原因で恵まれた幼少時代は送っていなかったらしい。が、本人はその片鱗さえも見せない明るくのん気な性格。クロノとは親友であり、またユーノとも親しい。はやてからは「ロッサ」の愛称で呼ばれている。偵察向きの、無限の猟犬（ウンエントリヒ・ヤークト）という稀少技能保持者である。

聖王教会

カリム・グラシア

声：高森奈緒

「古代ベルカ式魔法」の継承者で、聖王教会・教会騎士団所属の騎士。管理局にも（名目上）少将として籍を置いている。ヴェロッサの義姉にあたる物腰穏やかな女性。はやてが「機動六課」を設立する際には尽力し、後見役を務めている。六課隊長陣のリミッター解除権限も持っており、希少技能『予言者の著書（プロフェーティン・シュリフテン）』という詩文形式の予言能力を持ち、そのため滅多に教会の外に出ることがない。

シャッハ・ヌエラ

声：阪田佳代

聖王教会所属の修道騎士で、カリムの秘書。幼い頃からカリムとヴェロッサの護衛を務め、ヴェロッサに対しては教育係も務めていた。自身も騎士甲冑と双剣型のアームドデバイス「ヴィンデルシャフト」を有する、近代ベルカ式の陸戦ＡＡＡランク魔導師であり、有事の際は瞬時に戦闘態勢を整える。移動系の魔法を得意としており、戦闘スタイルは高速なフットワークを駆使した近接戦闘型。

尸魂界（ソウル・ソサエティ）

護廷十三隊

山本元柳斎重國（やまもと　げんりゅうさい　しげくに）

声　―　塚田正昭

身長１６８ｃｍ　体重５２ｋｇ　１月２１日生まれ

護廷十三隊一番隊隊長・護廷十三隊総隊長。ミゼット・クローベルとは旧知の仲で、情報交換も行っている。

砕蜂

声　―　桑島法子
身長１５１ｃｍ　体重３８ｋｇ　２月１１日生まれ
護廷十三隊二番隊隊長・隠密機動総司令官及び同第一分隊「刑軍」総括軍団長・女性死神協会理事。

卯ノ花烈（うのはな れつ）

声　―　久川綾
身長１５９ｃｍ　体重４５ｋｇ　４月２１日生まれ
護廷十三隊四番隊隊長・女性死神協会理事長。落ち着いた容姿で言動共に静かで穏やかな女性。既に１００年以上在任している浮竹・京楽をして「大先輩」と呼ばれる、元柳斎に次ぐ古参の隊長。

朽木白哉（くちき びゃくや）

声　―　置鮎龍太郎
身長１８０ｃｍ体重６４ｋｇ１月３１日生まれ
護廷十三隊六番隊隊長。四大貴族の一、朽木家二十八代目当主。朽木ルキアの義兄。恋次の元上官で、常に感情を表に出さない怜悧冷徹な性格。

狛村左陣（こまむら さじん）

声　―　稲田徹
身長２８８ｃｍ　体重３０１ｋｇ　８月２３日生まれ

護廷十三隊七番隊隊長。固い性格の大男。実は人狼であり、その獣の姿ゆえに疎まれ、それを隠すため嘗ては虚無僧のような鉄笠や手甲を着用し、常に顔や手を隠していた。ザフィーラとは良き友人関係を築きたいと願っている模様。

京楽春水（きょうらくしゅんすい）

声　一　大塚明夫

身長１９２ｃｍ　体重８７ｋｇ　７月１１日生まれ

護廷十三隊八番隊隊長。上級貴族・京楽家の次男坊で足袋を履かない。隊長の羽織の上に女物の着物を羽織り、女物の長い帯を袴の帯として使うなど派手な格好をしており飄々とした性格。

日番谷冬獅郎（ひつがやとうしろう）

声　一　朴？美

身長１６０ｃｍ体重５３ｋｇ　１２月２０日生まれ

護廷十三隊十番隊隊長。天才児と呼ばれ史上最年少で隊長に就任した。氷雪系最強の斬魄刀「氷輪丸」を自在に操る。

更木剣八（ざらきけんぱち）

声　？　立木文彦

身長２０２ｃｍ体重９０ｋｇ　１１月１９日生まれ

護廷十三隊十一番隊隊長。前十一番隊隊長を倒し、隊長の座に就いた。非常に好戦的な性格で、一護と会うたびに戦いを申し込む。

涅マユリ（くろつち-）

声　一　中尾隆聖

身長１７４ｃｍ体重５４ｋｇ3月３０日生まれ
護廷十三隊十二番隊隊長・技術開発局二代目局長。スカリエッティに負けず劣らずのマッドサイエンティストで、自分の命すらも弄ぶ。フェイトからは冷たい視線で見られている。

浮竹十四郎（うきたけ　じゅうしろう）

声　一　石川英郎
身長１８７ｃｍ　体重７２ｋｇ　１２月２１日生まれ
護廷十三隊十三番隊隊長・男性死神協会理事（理事長の可能性もあり）。下級貴族の出身。元ルキア直属の上官で父親のような眼差しで見守る心優しき男。

異世界関係／ユーノの交流者

門矢士（かどや　つかさ）　／　仮面ライダーディケイド

声：井上正大
２０歳。第１０管理世界「ディケイド」ではやて達を助けた青年で世界の破壊者と忌み嫌われる仮面ライダーディケイドに変身する。写真家を自称し、二眼レフのトイカメラを常に身につけている。自信家で誰に対しても尊大な態度で接するが、いざというときは世界や他者の為に身を挺する。相手に素性を問われた際の「通りすがりの仮面ライダーだ。覚えておけ！」が決め台詞。写真撮影以外のあらゆる物事をそつなくこなすが、彼が撮った写真は何故か被写体が歪んで写ってしまう。これに対して本人は「世界が自分に撮られたがっていないため」と解釈している。ユーノとは面識があり、連絡も取り合っている模様。

柊沢　エリオル（ひいらぎざわ　エリオル）

声：佐々木望

３月２３日生まれ。ＡＢ型。

ユーノがイギリスに発掘旅行の際に援助をした眼鏡をかけた柔和な青年。頭脳明晰、スポーツ万能、家事万能。正体はクロウ・リードの生まれ変わり。前世の記憶やその魔力を受け継いでいる。クロウの死に際、先のことが全てわかる程の自身の強大な魔力を、分散させようと魂を２つに分けて生まれた存在。魔力を分けることに失敗し、クロウとしての記憶を持っていた自分のみに、強大な魔力が受け継がれたが後にさくらの力によってそれを分けることに成功する。時空管理局の事は、隠居したギル・グレアムからも何かしら聞かされていたため理解は示している模様。

李小狼

声：くまいもとこ

７月１３日生まれ。Ｏ型。

２３歳。さくらの夫。戸籍上は木之本小狼。クロウ・リードとは遠戚に当たる李家の出身で、強い魔力を持つ。考古学関係の職に就いており、同時に遺跡発掘調査や研究で業績を上げている模様。運動神経抜群で、特に武術に秀でている。香港に母親と４人の姉がいる。自分にも他人にも厳しく、無口でクールな反面、極度の照れ屋ですぐ真っ赤になる。護符と至宝の剣を使用する。基本的にさくらの前では少々照れているが、誰よりもさくらの事を心配しているため、守りきるために見えない所で努力をしている。そのため、仕事と性格的にもユーノとは気持ちが通じ合うらしくメールのやり取りもするようになった。さくらの兄の桃矢には「ガキ」、ケルベロスには「小僧」と呼ばれる。食べ物についてはチョコレートと点心が好きで、こんにゃくが嫌い。

サムライ・ドラ

声：　水田わさび
身長１３０ｃｍ　体重９８ｋｇ　５５２１年９月３日生まれ
事実上３０歳。第２９管理外世界「ＥＡＲＴＨ」でユーノ達と協力したＴＢＴ特殊先行部隊「鋼鉄の絆」の隊長。過去に地球で放映されたアニメ「ドラえもん」の容姿にそっくりだが、本人はなりよりもそのことを気にしており、「ドラえもん」などと口にした者には全力で報復する。好きなものはブラックチョコレート（カカオ豆１００パーセント・糖類０）、大嫌いなものは甘いもの。非常に高い戦闘力を持ち、現代に蘇った猫侍の異名をとる手練れ。相手を自分のペースに乗せ理不尽な言葉の暴力で脅迫することを得意とし、白き魔王と揶揄されるなのはやフェイト達を恐怖させるほど。剣術が一流に属することはもちろん、超人的な身体能力と生命力を持ちあわせあらゆるピンチを切り抜けている。加えて、洞察力と戦闘勘も非常に鋭く、また、戦闘においてはかなり頭のキレがいい。剣術の流派は自己流の「人侍剣力流」。元々は三毛猫として生きており、天涯孤独で生きていたところを武誠に拾われのちにこの姿となる。二年前に、別の形でユーノやなのは達と出会っており、この事件をきっかけでユーノとはより交流を深めるようになった。

ユーノ・スクライア　／　仮面ライダーキバ

声：水橋かおり
２３歳。並行世界から異変を感じてやって来たもう一人のユーノであり、仮面ライダーキバに変身する。この世界のユーノと同じく、心優しく仲間想いの性格で誰よりも家族というものを大事にしている。既になのはとは結婚しており、子供も授かっている模様。「歴代最高のキバ」あるいは「最強のキバ」と謳われるファンガイアと人間の血を半分ずつ引いており、魔皇力と呼ばれる魔力を凌ぐ強大

な力を所持している。元の世界での役職は、無限書庫書庫長。

海東大樹（かいとうだいき）／　仮面ライダーディエンド

声：戸谷公人

仮面ライダーディエンドに変身する青年。様々な世界を単独で往来し、「僕の旅の行き先は、僕が決める」という信念のもとで価値のある”お宝”と判断したものを収集している。本人曰く、士とは古い知り合い。また、ユーノとも面識がある。爽やかかつキザな態度をとりながらも、感傷に浸ることなく”お宝”にのみ価値を見出すドライな性格。士は彼の”お宝”への執着について、かつて自分を信じられなくなり、その気持ちを誤魔化すために泥棒になり、お宝を求める様になったと推測している。馴れ合いも好まず、目的の相違から第三者を妨害することもしばしば。料理の腕前も達者。指鉄砲で他人に狙いを定める癖を持つ。「～（し）たまえ」が口癖。

坂田銀時（さかたぎんとき）

声：　杉田智和

身長：１７７ｃｍ　体重：６５ｋｇ　１０月１０日生まれ

２０代（年齢非公開）。ミッドチルダでは架空の世界である『天人に支配された江戸』から平賀源外のマシーンによってやって来た「万事屋銀ちゃん（よろずや銀ちゃん）」という何でも屋を営んでいる銀髪の天然パーマの侍。普段は眉と目の間隔が長く、死んだ魚のような気の抜けた目をしているが、本人によると「いざという時はきらめく」。「〇〇かコノヤロー」が口癖。基本的に無気力でだらしなく、普段から余計かつ卑猥な言動を放つ上に、金に汚い。また向上心が全くなく万年金欠であっても気にしてない様子である。常識がないようで当たり前の知識はあまり無いが、変なところでマニアックでありどうでもいいことはよく知っている。非常に高い戦闘

力を持ち、過去には後期の攘夷戦争に参加し白夜叉の異名をとっていた伝説の侍。当時の経験を踏まえて現在でも高い戦闘能力を誇っており、その強さは「宇宙最強」と称される星海坊主に一目置かれ、強者を求める神威に「獲物」として定められたほど。勝負事において自分なりの武士道（ルール）を持ち、護る事に強くこだわりを持つ。自分が大切に思うものを守ろうとする時は普段の怠惰ぶりを感じさせない。ユーノ・スクライアとの出逢いにより、彼とは強い絆を紡ぐに至った。

消えたユーノ（前書き）

ユ「僕の人生における転換点・・・それは、ある少女との接触が切欠だった・・・嘗ては背中を護ってあげられた彼女も、今では僕には遠い星のような光り輝く存在となった。彼女が輝いていけるのなら、僕はそれでも良かった・・・良かったはずなのだ。これから話す物語は、そんな僕・・・ユーノ・スクライアの身に起こったある事が切欠で始まる、出会いと絆・人を愛すると言う素晴らしさを伝えるための全く新たな物語・・・・・・『ユーノ・スクライア外伝』・・・・・・始まります。」

消えたユーノ

＞ｉ１２１６０―７０９＜

すべてはあの時より始まったーーーーーー

「？これは――――一体？」

一人の青年があの物質を手にしたその瞬間に、世界の運命の歯車は急速にそして大きく狂いだした。

その青年もまた同じように――――

「うわあああああああああああ！！！！！！！！」

時空管理局本局の情報収集の要となるアナログデーターベース、無限書庫。

嘗ては物置同然として扱われていたそこも、今となっては見違えるほどにその機能を全うしている。

それも全ては、彼・・・ユーノ・スクライアの能力あってのことだった。

「司書長、またハラオウン提督から追加の依頼が！」

「また!?全く・・・・・こっちだって二課の捜査資料のまとめで手がいっぱいだっていうのに・・・分かったよ。とりあえず、僕のところに回しておいてくれるかい？」

「は、はい！」

ユーノは悪友から届く依頼を嫌味とも思いながらも、与えられた仕事を確実にこなしていく。

そして、彼を慕う部下の司書たちも申し訳ないと思いつつもそのユーノの寛大な心と能力の高さに無理難題な量の資料請求を任せてしまうのもまた事実。

齢２０歳という若さで、無限書庫司書長を務め上げミッドチルダの考古学界から期待のホープといわれるほどの有望株なこの青年。

ちなみに、そんな彼の周りには時空管理局の行く末を担う未来のエースが大勢いるのだ。

管理局のエースオブエースと謳われ航空戦技教導隊若手ナンバーワン、高町なのは。

本局所属の執務官、フェイト・T・ハラオウン。

仲間内では最も出世頭で古代ベルカの稀少スキルを持つ最後の夜天の書の主、八神はやて。

何れもユーノにとっては大切な幼馴染である。

特に、幼い頃の事情で命を助けられ魔法を教える切っ掛けを与えたなのはとは今でも強い絆で結ばれた古きよき理解者だ。

これで付き合っていないというのがはやて達にとって今でも謎である。

時折、ユーノはそんな彼女たちのことを考えながらも一人無限書庫で仕事をする。

ユーノ・スクライアにとって、彼女たちの幸せが全てだった。

だから、例え自分一人が前へ歩むことをやめ、この無限書庫という場所に閉じこもり立ち止まることが日常となったところで、どうでもいいことなのだ。

そう・・・どうでもいいことだと・・・このときまでは思っていただろう。

「ただいま・・・・・・と言っても誰もいるわけないんだけどね・・・・・」

ユーノは無限書庫での激務を終え、自宅である本局の施設内に設けられた寮へと戻ってきた。

普段が普段だけになかなか帰宅することも出来ない好青年の家はまるで家らしさを漂わせてないほどに、殺風景且つ必要最低限の家具のみが置かれた、文字通り寝るために帰ってくるそんな場所と化していた。

ユーノはそんな寂しさと空虚感が満ち満ちたその部屋の様子を見渡した後、誰もいないその部屋の中へと足を踏み入れ、カバンを埃が被った机の上に置いてからシャワーを浴び、直ぐに寝間着に着替えると一日の疲労を曝け出すようにベッドの上に倒れこんだ。

窓際から差し込む月明かりが、疲れ切ったユーノの乾いた相貌に降り注ぎ、そんな月明かりを虚ろな目で見ながらユーノは寝返りを打った。

そして、ふと枕元に置いてある携帯を取出し待ち受け画面を見つめる。

待ち受け画面は、彼が常々この世界に生きる誰よりも尊く、自らも恋心抱いて仕方のない管理局のエースオブエース、高町なのはと一緒に仲間が写った彼女の１９歳の誕生日会の時の写真。

真ん中に彼女が佇み、その横に親友たるフェイト・Ｔ・ハラオウンや八神はやてら、彼女にゆかりのある面々が笑顔で写真に写る中、この男・・・ユーノ・スクライアだけがその姿を写していない。

と言うのも、彼はこの時カメラマンだったのだから写らなくて当然

なのだが・・・彼はこの役を率先して引き受けたのだ。

つまり、彼は自分の気持ちを隠して自分と他人に遠慮したということになる。

ここで何を言いたいかと言えば、彼は自分と言うものに関しての自己主張や欲望が全くと言っていいほどなく、と言うかそれを無理矢理押し殺しているのだ―ーーーーー無意識のうちに。

幼いころ、彼は生まれてすぐに両親に先立たれ親の愛情を受けることなく育ってきた。

彼自身は自分を育ててくれた一族を”家族”を宣っているが、実際は一族のものたちでさえも無意識のうちに遠慮してきたのだ。

彼はそうやって自分と他人の間にそれそこ見えない壁を作り出すことで、自分が他人に干渉することも干渉されることも出来ないようにしてきた。

そして、何よりも他人の幸せに自分が首を突っ込むことを毛嫌いした。

自分が介入することで、それまでのその人たちの幸せが崩れてしまうのではないか、または変わってしまうのではないかということを念頭に置いていたが故に、彼は自分の存在意義そのものを希薄化させていた。

それが結果的に、”孤独”というものにつながってしまった。

ユーノは、自分と親しい仲であるなのはやその幼馴染たちの前でも、

偽りの仮面をかぶり干渉をできるだけ避けてきた。

花見の時も、全員が集まってパーティーを開くときも、常に自分が立ち入るといったことはせず、決して周りに怪しまれない程度にある一定以上の距離を作ってなのは達を遠ざけてきた。

とくに、なのはの前になると彼は余程の事がない限り自らの意志で近づこうとはしなかった。

何故なら、彼は”高町なのは”と言う女性に対して贖罪を抱え込んでいるから。

その贖罪とは、彼女がとある事故で大怪我を負い、その事故の所為で一時は魔法はおろか歩くことも出来なくなるとさえ危ぶまれた深刻な事故に対してのものだ。

気丈な彼女は、友人たちに心配をかけまいと笑顔でその場を取り繕ったが、彼は知っていたーーーーー聞いてしまったのだ。

偶然にも彼はなのはが一人になった瞬間に、恐怖と痛みに襲われ声がかれるほどに泣きじゃくっていたことを。

奇しくもなのはを魔法の世界に導いたのはユーノに他ならない。

彼はこの時ほど、自分の情けなさと非力さを深く痛感したことはなかった。

ユーノは自分が密かに抱くなのはへの淡い恋心を、この事件を切っ掛けに全部を胸の中に封じ込め、二度と自分の所為で彼女が傷つかないように、泣かないようにということを決意した上でユーノ・ス

クライアは高町なのはに心を閉ざしてしまった。

そしてそれきり、彼女が事故以来教訓として得た無茶をすると危険・他人に迷惑がかかるということとは反するかのように、今度はユーノが無茶をするようになっていった。

そんな無茶を続けた結果、今のユーノの体と精神は満身創痍もいいところだった。

特に精神的な彼の疲労は歳を重ねるごとに重みを増していき、彼の趣味でもある遺跡発掘と論文の作成はあまりに多忙を極め、滞りを見せるようになっていった。

その証拠に、机に置かれた埃を被った鉛筆が無造作にあったのだから――ーーーーー

「・・・・・はぁ。いつまでも僕は女々しいな・・・・・・」

なのはへの想いを完全に封印したはずなのに、つい彼女の笑顔を見るとそれが揺らいでしまうことに少しの憤りを感じるユーノはため息まじりに携帯を閉じると、所定の場所へと戻しそのまま床へとついた。

彼は深い眠りに入ると、夢の中では幼いころの自分の想い人であるなのはが歳を重ねるごとに容姿端麗な女性の姿へと変わっていく姿が目に映ってきた。

なのはは満面の笑みを浮かべ、ユーノに向けて言葉を発するが何を言っているのかは分からなかった。

そして、なのはは暫くすると手を伸ばすユーノの元を去っていき、親友であるフェイトとはやての手を取って、今まで得てきたかけがえのない”戦友”と共に闇の中へと消えていくのであった。

そうーーーーー飛び切りの笑顔を浮かべた状態でーーーーー

その夢を見た直後、彼の目に一筋の涙がこぼれた。

「なのは・・・ーーー」

それからしばらくして唐突に、ある時からユーノはこれまでに一度も感じたことのない強い不安を抱くようになった。

それは勿論、なのは達に対する劣等感である。

ユーノ自身、なのは達と比べれば魔力は決して高くはない。

総合ランクにしても、並みの魔導師ほどの魔力ぐらいしか持ち合わせてないのだ。

そのくせ、自身でも嫌になるくらいの卑下の性分が無意識のうちにユーノをどん底まで追い込んでいく。

さらには無限書庫と言うスポットの当たることのない目立たない役職ゆえ、なのは達のような前線で働く姿がユーノにとってはこの上もなく眩しかったのだ。

ユーノは日に日に増していくなのはと自分との埋めようのない距離に怯えるようになっていった。

自分は所詮穴倉の中でしか何も出来ない、本を探すことしか能のないモグラだ。

モグラがいくら空に向って穴を掘り進めても、その眩しさを前にした後何も出来なくなってしまう。

青年の心に反響する孤独と絶望、悲痛な想いは日に日に大きくなっていく。

そして・・・ユーノは確信した。

・・・管理局（ここ）にもう僕の居場所は無い。なのは達のいる空へは決して届かない。

なのはも、みんなも・・・僕が居なくても立派に自分の空を飛んでいる。

でも、僕にはそれが・・・・・・なのはの隣にいることが出来なかった。

所詮モグラはモグラ・・・天使は天使・・・決して埋めようのない天地にも隔たっている存在だ・・・

僕の出来ることは・・・・・・十年前のあの時で、終わったんだ・・・・・・

それから暫くしてーーー・・・ユーノ・スクライアは万全の処理を済ませてから無限書庫司書長の座を自ら退き、誰にも気付かれるこ

となくミッドチルダから消息を絶った。

ユーノが誰にも気付かれることなく無限書庫を辞めたという知らせは、一週間経ったのち漸く本局の統括官リンディ・ハラオウンの下に届くのであった。

報せをくれたのは友人でも有るレティ・ロウランだ。

『リンディ、ちょっと聞きたいことがあるんだけどさ・・・』

「あら、何かしら?今ちょっと手が離せない状況だから手短にして頂戴ね・・・」

『うん・・・いえね、今管理局の退職者名簿に目を通していたんだけど・・・ユーノ司書長って何時”退職届”出したの?』

リンディは同僚であるレティの言葉から発せられた信じられない単語に思わず手を動かすのを止めて、表情を一変させた。

「・・・はい!?」

『いやだから、ユーノ君が何時無限書庫を辞めたのかって聞いてるんだけど・・・まさかリンディ、このこと知らないの!?』

「知るはずないじゃない!私だって初耳をそんなの!?それで、ユーノ君は何時辞めたって書いてあったの!?」

『ええと・・・書類の日付には7月31日と記載があるから・・・丁度一週間前ね。7月一杯で辞めてることになるかな。』

「そんな!?でも現に、無限書庫は今迄どおりちゃんと動いてるじゃない!?もしユーノ君が辞めたというのなら、それこそ無限書庫の稼動効率が著しく低下するはずよ!」

無限書庫と言う役所は、リンディが言うようにその殆どの機能をユーノ・スクライアの能力で以って動いているようなそう言うところなのだ。

勿論、ユーノ一人にそう言った重荷を負わせないように毎年ユーノをはじめ、リンディもレティも無限書庫の増員を上層部に申し出ているが、過酷な労働条件と待遇の悪さ、更には職にあぶれた者の哀れな行き着く場所と言ったレッテルが貼られており、司書の数は一向に増えないのが現状なのだ。

『そのことなんだけど・・・どうもユーノ君・・・辞める前に自分が居なくなっても困らないよう無限書庫に自動情報検索・処理を行う装置を作っていたらしくてさ・・・稼動効率のほうもユーノ君の穴を埋めるには充分なほどにちゃんと機能してる。』

「な・・・本当なの!?ユーノ君、どうしてそんな手の込んだことを・・・!?てか、ユーノ君には連絡ついてるんでしょうね!?」

『残念だけど、さっき確認したら寮の自室は既にもぬけの殻。連絡も全くつかない状況。一週間も経ってるからどこか別の世界にでも流れてるんじゃないかしら?ほら、スクライアは元々が漂流の一族だし、異世界移動に関しても特別制限とか設けられてるわけじゃないから、探すのは雲を掴む様なものよ。』

レティの希望の無い一言を聞いたリンディは深い溜め息を吐きながらその場に重い腰を下ろした。

「はぁ～～参ったわね・・・・・・でもどうしてかしら・・・ユーノ君が私たちに何の相談も無しに管理局を辞めるなんて・・・それで、なのはさんやフェイト達はこのことを知ってるの？」

『私達だって今日初めて知ったんだから、知るはずないでしょう。で、どうするのリンディ？この後のこと・・・？』

「そうね・・・取り合えずクロノ達と相談してなのはさんやフェイト達を呼び集めるわ。何かユーノ君が辞める様な手がかりを聞けるかもしれないしね。」

そして、それから一週間後のこと。

本局のリンディに呼び集められたユーノの古き友人で幼馴染のなのは、フェイト、はやて、そして悪友のクロノは今回忙しい身でありながら時間を割いて集まることになった。

しかしながら、四人は今回何故集められたか事前に知らされておらず、その理由は未だ分からずの状況だった。

リンディは怪訝そうな表情を浮かべる四人を他所に、真顔で口を開く。

「さて、四人も何かと忙しいのは分かってるつもりだけど・・・今日はかなり深刻な話をしなくちゃいけないの。心して頂戴ね・・・」

真剣な眼差しで四人を見つめるリンディを見たなのは達はただ事じゃないと直感した。

意を決してフェイトがリンディに代表で尋ねる。

「はい。それで母さん・・・一体何があって私たちを今日本局に？」

フェイトのその質問を聞くと、リンディは暫くの間を置いてから徐に話し出す。

「・・・実は・・・つい一週間ほど前なんだけど・・・ユーノ君が突然、無限書庫を自主退職したのよ。」

「「「「え!?」」」」

リンディの言葉を聞いたなのは達は唐突に突きつけられる真実に耳を疑った。

「なっ!?ユーノが!?」

「管理局を辞めた・・・やって!?」

「そんな!!一体どうして!?私たちはそんなこと一言も!?」

なのは達四人は古きよき理解者であり大切な幼馴染が何故自分達に内緒でこんな事をしたかが全くわからないままであった。

「やはりその様子だと、四人もユーノ君のことは何も聞かされて無いようね。今日四人を呼んだのは最近のユーノ君について何か不審な行動や言動をしていたかどうかを聞きたくてね。順番に話して貰うからそのつもりで・・・」

「・・・わかりました・・・」

四人はユーノのことに関してしかなりショックを隠しきれない様子であった。

特になのははユーノとの接点が最も多い上に、最近養子にしたヴィヴィオのことでかなり一緒に居る回数が以前よりも増えたから尚更だった。

「じゃあ、まずはクロノから聞いていこうかしら。」

リンディは早速、クロノ・フェイト・はやて・なのはの順に話を窺うことにした。

「僕の場合は、次元航行部隊の任務のために必要な資料をユーノに請求することはしょっちゅうのことですけど、最近は目立った資料請求もなかったもですからこれと言って何も。事実、ユーノの件も今初めて聞かされましたから。」

「私は別件の任務のほうで忙しかったら、ユーノと最後にあったのは二、三ヶ月前だと思うけど・・・特に変わった様子も無かったし。」

「私もフェイトとちゃんと似たようなもんですわ。最近はユーノくんともそう会っていなし、会う用事もこれと言ってなかっです。」

「そう。なのはさんは・・・どうなのかしら?最後にユーノ君と遭ったのは何時?」

「確か、正しければ一月ほど前だったと思います。ヴィヴィオの授

業参観に一緒に行ったきり、お互い忙しくて連絡もしていなかったですし・・・そのときも何時もと何ら様子は同じでしたから・・・でも、メールのやり取りはしょっちゅうやってた・・・つもりですけど・・・」

なのははそう言いながら携帯のメルアドに登録されているユーノに向けて発信した送信履歴と受信履歴を見てみたが、その時なのははは絶句した。

自分が言うほどのメールのやり取りもあまり無く、ユーノから返ってきた返事も思いのほか素っ気無いものばかりだったからだ。

なのははは思わずその場に項垂れてしまう。

そんななのはを見ながらリンディは渋い顔をしながら納得した様子を見せた。

「・・・わかったわ。しかし、だとしたら謎は一向に深まるばかりね・・・話の流れからすると・・・様子は何時もと変わりなかった。辞めたいなどという言動は一切無かった。いや、ユーノ君の性格上、それをみんなの前で口に出すようなタイプじゃないわね・・・考えても見たら。」

そう・・・ユーノ・スクライアはこの四人が認識している中では誰よりも責任感が強くて強い意思を持った青年なのだ。

幼い頃からリーダーとしての実績経験があり、統率力には長けており自分の部下や仲間のためなら自分の身を犠牲にしてでも守り抜こうとする。

無限書庫が稼動するようになってからは、自分の部下達がこの職務をもっと気楽にやっていけるために常に自分は寝食を忘れて黙々と仕事に従事し、幾度と無く栄養失調とストレスで倒れたことも有る。

このことはなのは達ですら呆れるほどの超他人優先思考なのだ。

でも、だからと言って彼はなのは達幼馴染の前や自分の部下達の前では決して弱みを見せないという強情さを持っていたのだ。

以上の点から、彼が無限所司書長という椅子を理由もなく辞めたことが判らない大きな理由である。

「確かに・・・あいつは僕達が思っている以上に強情で頑固な奴だ。それに、人に迷惑をかけて管理局を去るような人間でもないしな・・・」

「何か私たちには言えない様なストレスかなにかを抱えていたのかな？」

「可能性はあると思うよ。無限書庫の司書長ともなれば責任も提督クラスものや。精神的にも身体的にも追い詰められていったって不思議やないよ。」

「でも・・・だからって突然居なくなることないのに・・・せめて、相談の一つくらい、私たちに言ってくれれば良いのに・・・ユーノ君・・・どうして・・・」

なのはの瞳に浮かぶ涙がが粒になって、膝の上で握り締める手の甲に零れ落ちた。

フェイトはそんななのはを見てハンカチを取り出し、顔を拭く様に言う。

「ほらなのは・・・」

「ありがとう・・・フェイトちゃん・・・」

「いずれにしても、管理局にとってユーノ君の損失は甚大ですよ。無限書庫のことについても、私たちについても・・・今まで頑張ってこれたのはユーノ君の影の努力があってからなんですわ！」

はやては嘗て、ユーノの力を借りて現在のユニゾンデバイスであり亡き初代リィーンフォースの意思を継ぐ二代目、リィーンフォース・ツヴァイを完成させることが出来たのだ。

「そうだな。僕も何だかんだいって・・・あのフェレットもどきにはいつも世話になっていた。事件が起こるたびにあいつの資料がどれほど救いになったかしれない。」

この中では唯一の悪友であるクロノは、次元調査のたびにその資料請求をユーノに頼んでいた。

勿論、膨大な量であるからユーノや他の司書達には相当冷たい目で見られていたがそれでもユーノは文句一つ言わずに資料を送ってくれたのだ。

「私だって・・・執務官になるためにユーノにはつきっきりで勉強見て貰ったから、今こうして事件に立ち向かっていけるんだよ。」

フェイトの場合、今の役職である執務官試験の勉強の為にユーノに

はよく勉強を見てもらったことがある。

ユーノは若干九歳と言う若さで魔法学院を既に卒業しており、高い見識と知識を有していたからそう言った事はユーノの専売特許でもあった。

「私もそうだよ！ユーノ君が居てくれたから、今の私は此処に居る！魔法をユーノ君が教えてくれたから、ユーノ君がずっと傍にいてくれたから、私は沢山の友人や先輩・後輩に支えられて空を飛ぶことが出来るんだもの！一度飛べなくなるかもって言われた時だって、私が諦めずに居られたのも・・・全部・・・全部・・・ユーノ君やみんなが居たからなんだよ！！なのに私は・・・ユーノ君に一方的に甘えてばかりで、ユーノ君を支えることが出来なかった！！！ううううううう！！！！」

なのはから込み上げるユーノに対する贖罪の念。

それが深い後悔となって涙として零れ落ちる。

幼い頃、行き場の無い焦燥と遣る瀬無さに不安を抱いていたなのはに魔法と言う自分にとっての存在を証明するためのかけがえのないものを与えてくれたユーノ。

たとえ、歩く道は違えども二人の絆はずっと繋がっているものとばかりなのはは心の片隅でずっと思っていた。

だが、現実はそう思い通りにはいかなかった。

ユーノは絆を断ち切ってなのはに何も言わずに姿を消し、なのは自身はそんな大切な絆の象徴とも言うべき誰よりも大切な幼馴染で密

かな想いを抱いていたユーノを喪失してしまった。

今までの自分達の甘えがまるでしっぺ返しとなって返って来るかのように・・・

今日まで、なのはの背中を支え続けていた優しかったあの青年は・・・・・もう、戻ってこない。

なのはは隣を預けるものは多くいたかもしれぬが、背中を安心して預けることができたものなど彼以外に居たのであろうか？

皮肉にも、魔法と出会って人を救うことを何よりも生きがいとしてきたなのはにとって・・・その出会いを与えてくれた青年のことを救うことが出来なかったのだ。

目に見える事実と、その裏に隠された真実を見通せるものはそうはいない。

それができる人間がいるとすれば、おそらく・・・・・・ユーノ・スクライアだけなのだろう。

そう思うと、なのはの後悔と悲しみはより顕著に顔に現れる。

そんななのはの表情を一瞥したリンディ達は険しい表情を浮かべたまま、ユーノの行方を全力で捜索することを前提に会議が進められた。

「え！ユーノが辞めたって！？」

フェイトの使い魔である狼を素体とした子犬のような耳を生やした少女、アルフはあまりに頓狂な台詞を主人に聞かされ唖然としていた。

フェイトは何処か重い表情で厳然たるその事実を告げると、徐に尋ねる。

「アルフも知らなかったんだ・・・ユーノが無限書庫を辞めたってこと・・・」

アルフは前線から退くのをきっかけに、ユーノの所へと赴き無限書庫の手伝いをしていた。

その為、他のメンバーと比べれば一番ユーノとの接触時間が多い。にも関わらず、ユーノはそんな戦友であるアルフにも何も告げず立つ鳥跡を濁さず忽然と姿を消した。

「どうしてなんだよ!?どうしてユーノが・・・!?あいつは・・・あんなに無限書庫の仕事に誇りを持っていた筈だろ!仕事は大変だけど、凄く遣り甲斐のあるもんだって言ってたのに・・!!なんで・・なんで急に辞めちまうんだよ!!」

自分の考えとは裏腹に、ユーノが前触れもなく無限書庫司書長と言う職を退いたことに深い疑念と憤りを覚えるアルフ。

フェイトはそんなアルフを宥めながら、ここ最近のユーノの心境を聞き出そうとした。

「アルフ。最後にユーノと一緒にいたとき、ユーノ・・・何か変わ

ったところとかあった？」

「え・・・・・・あ。いや・・・特に何もなかったと思うけど・・・・・」

「そう・・・・・・・」

特にこれといった情報も聞き出すことの出来なかったフェイトは思わず暗い顔を浮かべる。

すると、徐に同じく暗い顔を浮かべていたアルフがなのはのことを聞き出してきた。

「そう言えばフェイト。なのはは・・・どうしてるんだい？」

「それが・・・・・ユーノがいなくなってから直ぐにユーノの寮に行ったらしいんだけど、生活様式の全くなかったその光景を見た途端、愕然としてしちゃって・・・・・・それ以来、なのは・・・・・毎晩毎晩一人で自分の部屋に入るたび・・・・・・・声を押し殺して泣いてて・・・・・・・！！」

「・・・・・・そっか・・・・・・・」

自分を救い出してくれた大切な親友であるなのはのこととなると、自分のこと以上に過敏に反応するフェイトは、人前で涙を見せない気丈で明るい性格のなのはがそのように涙を流して泣く姿を思い出すと、自分も悲しくなって涙を流す。

つまり、それだけなのはにとってユーノ・スクライアという男が心の支えであったのだ。

そして、ユーノがいなくなったことを機になのはの心は日増しに悪くなっていった。

支えのなくなった彼女の心は非常に不安定且つ今にも屈してしまうほどにまで弱り切っていた。

不屈のエースオブエースと言われる彼女だったが、それを護ってきたのはユーノその人だ。

そのユーノがいなくなったことで、なのはは不屈の心から一変、まるで幼い少女のような脆く弱いものへと変わってしまった。

幸いにも、なのはの周りにはフェイトを始め彼女の事を何よりも気にかけてくれる友人や上司、そして後輩たち、愛する娘がいたおかげで最悪の事態は回避できたが、それでも彼女は一人になると急に心細くなり彼のことを思い出してはやはり涙を流した。

そして、彼女はユーノがいなくなってから漸く気づいた。

「そっか・・・・・私・・・・・・こんなにもユーノ君の事・・・・・”好き”だったんだ・・・・・・・」

人間は失ってからそのものの本当の価値を初めて理解する。

なのはとて例外ではなかった。

ユーノを失ってから、高町なのはは初めて彼の存在の大きさと慈愛に気づき、曖昧だった彼への想いが今はっきりと好きという気持ちに判断された。

しかし、気づいた時には彼は彼女の傍からいなくなっていた。

彼はもう二度と、彼女の前には現れない――ーーーーー

そう考えると、なのはの瞳に大粒の涙がこみ上げる。

「そんなの・・・・・いやだよ・・・・・・・！私は・・・・・・・
ユーノ君とずっと一緒にいたいのに・・・・・・・・！私だけ・・・・・・
・取り残されるなんて嫌だよ・・・・・・！ユーノ君・・・・・・・
何処行っちゃったの！？どうして携帯にも出てくれないの・・・・！
！どうして・・・・・・私を一人にするの！！！！うううううう！！！うわあああああああああああああああああああああああああああああああああああ！！！！！！！！！！！！！！！！！！！！！」

彼女もまた、胸の奥に孤独と言うものを強い恐怖を抱く一人の少女に他ならなかった。

そして、やがてなのはを始めユーノと親しかった幼馴染やその友人は休暇を貰ってはユーノの行方を懸命に捜しだすようになった。

なのはも娘のヴィヴィオを連れて一緒に探し回ったが、それでもやはりユーノの行方は分からなかった。

探しても探してもユーノの消息は一向につかめず、気が付けが既に四年の歳月が流れてしまった。

マリアルージュの事件が無事に終結を迎えた頃にも、ユーノはやはり音信不通の状態。

やがて・・・いつしか自分の仕事のことで捜索すら出来ない状況になってしまったなのは達。

だが、なのはは決してユーノのことを諦めてなど居ない。

必ずどこかに居ると信じて、ユーノが居なくなって初めて気付いたユーノに対する恋心を胸の奥にしまい込んだまま、ユーノの帰りを何時までも待ち続けているのである。

その証拠に、首からは常にユーノの顔写真が収められたロケットを下げて仕事に当たっているのだから。

さて、四年の歳月が流れた新暦７９年。

ミッドチルダとは違う異世界、管理外世界の９７番・・・『地球』。

その星の小さな島国、なのはとはやての出身地日本の松前市に、隠れた名店といわれる小さな駄菓子屋がビルの佇む間にあった。

その店を利用する多くのものはリピーターで、世間では子供のおやつを買うにはうってつけと言われている。

店の名前は・・・――スクライア商店。

駄菓子屋というだけあってお菓子は勿論のこと、訳あって時空管理局とは違う立場で魔導師としての生活を送るものや、魔導師とは全く違う存在・・・魂の調整者（バランサー）、通称”死神”相手に様々な情報や物資を提供する重要な拠点が此処なのだ。

そこの店の前で現在、開店準備の傍ら掃除をしている二人の男の会話から始めるとする。

「バッター四番、桃谷鬼太郎ーーーピッチャー振りかぶって投げた!!かっこいいバットスイングからーーーだらあああ!!ナイスショット!!!」

大仰な態度で竹箒を振る赤髪の男とそれを横目に見ながら呆れた表情を見せる眼鏡をかけた青髪の男。

「先輩・・・遊ぶのは勝手だけどちゃんと掃除しないと金ちゃんに怒られるよ・・・」

「うるせーぞ、亀!熊が怖くて掃除なんかできるか!!」

「いやだから・・・先輩は怖いから掃除するんじゃないの?」

「怖くねーっつの!大体てめぇは一々癇に障るんだよ亀のくせに!!!」

「痛い、痛い!!てか全然理由になってないからね!!先輩だって頭空っぽのくせして!!」

「んだと!!もう一遍その台詞吐いてみろ!!!」

桃と亀と呼ばれるこの短気な男と冷静な男はこのスクライア商店の従業員。

仲がいいのかそうでないかは別として、開店前はいつもこんな感じだった。

すると、亀を箒でたたき続ける桃の手を何者かが止めに入った。

「ああ!?」

竹箒を掴んだのは白い服に身を包んだインテリジェンスな容貌漂わす男であった。

「止めんかみっともない。これだから下々のものと来たら、いかんぞそんなことでは。」

「ちっ!何のようだよ鳥!!まだ営業時間じゃ・・・」

「ユーノ店長は居られるか?ちょうど仕入れ時でな・・・」

「あっ、そうですか!分かりましたよ・・・ささ、どうぞどうぞ!」

不貞腐れる桃の代わりに亀が鳥と呼ばれる上流階級のような口ぶりのこの男を店の中へと案内する。

店のドアを開けると、中で荷物を抱えた大柄の男が開店準備を始めていた。

「ん?こら鬼太郎、浦太郎。まだ開店時間には早いーーー!」

「だってしょうがねぇだろうが!鳥が店長に用があるっていうんだからよ!!」

桃がそう言うと、大柄な男は鳥に近付き態度を改めて丁寧な挨拶を交わす。

「白鳥殿でしたか。少々お待ちをーーー今、店長を起こしてまいります故。」

すると、その時ーーー・・奥の方から帽子、甚平という格好で姿を現したこの店の店長であるユーノ・スクライアが出てきた。

「ザーンネンでした。今日もとっくに起きてるよ。ふあああああああああああ～～～～～～～～～・・・」

客を目の前にしても一先気にせず大欠伸をかいたユーノは、靴を履くと白鳥の下まで目を擦りながら歩いてきた。

「お早う。金太郎、鬼太郎、浦太郎。そんでいらっしゃい、白鳥さん。ちょーど昨日、新しいのを第一世界から仕入れたとこですよ。さ・今日は何をお求めで？」

四年の歳月を経て姿を現したユーノの姿と態度はまるで別人だった。

確かに、表情は四年前とさほど変わらずなのはのくれた髪留めのリボンと円い眼鏡をつけているのだが、何というかーーー態度のほうはどこか飄々とした感じで、何か怪しげな雰囲気を醸し出すようになっていた。

「・・・ベルカ式のカートリッジのスペアが一本に伝令神機の燃料・・・と。お、ランクは？」

「一番高いので頼む。」

「Ｓですね・・・それから内魄固定剤を６０本・・・と。あっ、余

計なお節介ですけど、固定剤(これ)の使いすぎは体に毒ですよ？義骸とあんまり同調しすぎると抜けるとき物凄く辛いですから。」

「それは分かっておるのだが・・・最近、義骸との連結が鈍くてな・・・体が動かしづらいのだ。まっ、霊力が戻るまでこちらは魔導師として頑張るしかない。」

「検査しましょうか？お安くしておきますよ！」

「結構である！」

「は～い。」

不満気な声をあげるユーノは白鳥に支払い方法を尋ねる。

「で、お支払いは・・・カードで？」

「いや、コレで頼む。」

そう言うと、白鳥は自らの伝令神機を取り出しユーノに見せた。

「追加給金・・・ですか。」

ユーノはそう言うと、早速白鳥の伝令神機を拝借し記録されている昇華済みの虚を細かくチェックし始めた。

「『コザァートＫ』追加給金０。『リリムタックス』追加給金７０。『レックスボーン』追加給金１００。どれもこれも小物ですね・・・追加給金リストにも大して入ってませんよ。」

すると、ユーノはリストの中に入っていた一際値段の高い虚を見つけ驚愕する。

「お、こいつはかなり高いですよ。『インフェルス』追加給金３０００。この中じゃ最高額ですよ♪」

「ああ。そいつは魔導師と死神を喰らって居るからな・・・斬った瞬間、地獄の門が現れて連れて行かれたぞよ。」

「へーーーーー地獄にですか。あそこはやっぱり怖いところですよね・・・・・・」

「・・・ところで、黒崎さんから私宛に小包が届いていると思うのだが？」

「ああ！届いてますよ！浦太郎、持ってきて！」

「分かりました！」

浦太郎はそう言うと、店の裏側へと向かって行った。

「箱に白鳥さんって書いてあるから・・・」

浦太郎はそう言われながら、店の奥で白鳥に渡す箱を探していた。

「えーっと、確か・・・・・・あ、これこれ♪」

浦太郎は目的のものを見つけると、中を取り出して包みで包まれたものを急いで白鳥の下へと持ってきてそれを手渡した。

受け取った白鳥は中身を確認し、軽く頷いた。

「・・・確かに私宛のもので間違いないようであるな・・・」

「・・・あんまり疑った言い方しないで下さいよ。一応僕・・・一護さんとは古い付き合いなんですからね。」

「・・・・・・・・・わかっておるぞよ。では、ありがたく貰っていくぞよ。」

白鳥はそう言うと、スクライア商店の外へと向い瞬歩でその場から直ぐに消え去った。

さて・・・四年の間にユーノは何故この町で店を構えて、駄菓子屋を装った闇商売をしているのか。

この物語は、まだ始まったばかりに過ぎぬ。

物語は・・・一一一大きく狂い始めたのであった。

消えたユーノ（後書き）

次回

ユ「僕の名前はユーノ・スクライア♪仕事はしがない駄菓子屋の店主・・・なんだけど、その正体は・・・！」

一「おっとストップ！！今はまだ話すときじゃねぇ。それは次の回でのお楽しみって奴だ！」

ユ「ええ～～～一護さんのいけず！！！じゃあ、早く次回予告でもするかな・・・って時間もうないし！！！」

一「次回、ユーノ・スクライア外伝『一護とユーノ』」

ユ「リリカル・マジカル、頑張ります♪」

一「って、それお前の呪文じゃねぇ！！！」

魔導師図鑑ハイパー！

白「私の名前は白鳥礼二（しらとりれいじ）。護廷十三隊八番隊の第三席である。現在、私はこの松前市の担当死神として任務に当たっているのだが・・・」

白鳥はそういいながら、自分の義骸を見る。

白「今は訳があって霊力が著しく低下している。なので、私の体の中に流れる魔力と呼ばれるけったいな力に頼るしかないのだ。」

と、その時伝令神器に反応が出る。

白「虚か。あっちであるな！」

現場に急行しようとした瞬間、謎の一段に踏みつけられる。

観「カラクラスーパーヒーローズ！十年ぶりに復活！！！行くぞ、みなのもの！！」

ジ「よっしゃ！！十年ぶりに行くぜ！！」

夏「待ちやがれ、クソ餓鬼！」

白鳥、踏み台にされながら去っていく三人を見る。

白「な・・・何だ・・・！？」

一護とユーノ

＞i121611―709＜

ユーノがなのは達の前から姿を消して早四年。

ユーノ自身は地球の松前市に店を構えて生活をしているのだが、彼はそのことをなのは達管理局に努める自分の縁のあるもの達には一切伝えていない。

しかし、地球に住むなのはの幼馴染で親友であるアリサ・バニングスと月村すずか、更にはなのはの両親である高町士郎や桃子には自分の現状と居場所を伝えているが、決してなのは達には口外しないことを前提としている。

そんなユーノの思考や居場所すら知らないでいるなのは・フェイト・はやての三人娘は休暇を利用して久しぶりに故郷「地球」へと足を運んでいた。

三人は仕事の都合を合わさ一緒の休暇を取ることが出来、こうして三人で地球を訪れることが出来た訳だ。

現在、三人は先ほど紹介したアリサ・バニングスと月村すずかを交えたお茶会をなのはの実家が経営している「喫茶翠屋」で開いていた。

「ホントご無沙汰だったじゃないの。なのは達も元気そうで何よりだわ。」

「そうだね。三人は怪我とか病気とかかかってない？」

アリサとすずかがそう口にすると、紅茶を一口飲んだ後なのはから順に答えた。

「大丈夫だよ。私達はこの通り健全そのもの。元気でやってるよ。」

「うん。ＪＳ事件も終わってもう四年になるし、大分ミッドチルダ全体も落ち着いてきたところだよ。」

「ま、そのＪＳ事件の首謀者たるスカリエッティが、まさか脱獄するとは思ってもなかったけどな。」

はやてがそう口にすると、隣に座るフェイトは些か複雑な表情を浮かべた。

聞いていたすずかもアリサも表情を固まらせた。

「そうなんだ。だけどそう簡単に脱獄なんて出来るのかな？」

「時空管理局って言ったらそれこそ技術力もシステムも何もかもが地球より断然上でしょ？そんな鉄壁の要塞みたいな組織が管理する場所から逃げ出すなんて・・・正気の沙汰じゃないわね。」

「ま、確かにそうだけど・・・逃走したのはスカリエッティだけじゃいし、戦闘機人にしたって性質の悪いのが三人・・・何が何でも早いところ捕まえないといけないのは確か。」

「そうやね・・・逮捕が遅れれば、またそれこそＪＳ事件の二の舞や・・・」

顔を渋らせるはやてとフェイトの横で、なのはも同じ思いを抱きながらふと何気なく自分の首にぶら下がるペンダントに目を向けた。

その様子に気づいたアリサがこう言って来た。

「そう言えばなのは?あんた何時からそんなもの首に着けてたっけ?」

「ああ・・・これは前にユーノ君が私の誕生日の時にくれたものだよ。」

「「「「あ・・・」」」」

ユーノ、という単語を聞いた四人は一様にそのような言葉を発すると、そのユーノがプレゼントをしてくれたペンダントを寂しげな表情で見つめるなのはが次のように語り出す。

「14年・・・口にしてみれば短い言葉だけど・・・私はその間に色んなものを得て来て・・・だけどその代わりに一番大切なものを失った・・・・・・」

「なのは・・・」

「なのはちゃん・・・」

なのはの知らないところでユーノと何度か遭っているだけに、聞いているアリサとすずかの胸が非常に痛むのを感じた。

「私・・・・・ユーノ君と出逢って、ジュエルシードを集めるようになって、魔法の世界に足を踏み入れて・・・今の自分や沢山の大切な友達を確立してきたけど・・・いつの間にか私は、ずっと一緒に居てくれたユーノ君の事を何処か寂しい場所に置いて来ちゃったのかな・・・」

なのははその後も次々と寂しげな表情でユーノに絡むことを語りだし、その途中なのはの眼から一筋の涙が零れてきた。

「・・・私ね・・・今の自分の仕事も、友達も、ヴィヴィオも魔法も凄く凄く大好きなんだ・・・！だけどやっぱりそれ以上に、ユーノ君は私にとっては誰にも変えることが出来ない世界で一番大切な人なの！！ユーノ君が居てくれたから・・・自分にできることが見つからなくて、寂しかった私に魔法を教えてくれたことが凄く嬉しかった・・・！魔法は私にとっての生き甲斐だから・・・それなのに私は・・・そんな大切なものを教えてくれた人を・・・自分にとっての最愛の人を・・・寂しい場所に置いて来ちゃった・・・！助けてあげられなかった・・・！！！」

「「「「・・・・・・・」」」」

なのはは更に流す涙の量を多くすると、何時もの気丈な態度がまるで嘘のように滝の様な涙を四人の親友に見せながら贖罪の気持ちを込めてこう言った。

「今すぐ遭いたい！ユーノ君に！！遭って、ちゃんとごめんなさいって言いたい！！だけど・・・私は・・・私は・・・！！」

すると、そんななのはにフェイト達がそっと近づき泣きじゃくるなのはを優しく包み込みながら自分たちも涙を瞳に宿してこう言った。

「大丈夫・・・！ユーノは絶対私達で見つけよう！」

「せや。なのはちゃんがこんなに待ってるのに、あの大馬鹿司書長は何処行ったんやか？だけど必ず遭えるよ！なのはちゃんとユーノ君の絆は、まだ断ち切れちゃあらへん！」

「（なのは・・・ごめんね・・・本当の事言えなくて・・・ユーノとの約束とは言え、こんな悲しい思いをさせて・・・）元気出しなさいよ、アンタは！それでも管理局のエースオブエース、高町なのはなの？いつまでもしょげた面してると、私がはっ叩くからね！」

「（なのはちゃん・・・そんなにユーノ君の事思ってるなんて・・・ユーノ君、この事知ったらどう反応するんだろう・・・）きっと伝わるよ。なのはちゃんの気持ちはユーノ君にちゃんとね。」

「フェイトちゃん・・・はやてちゃん・・・アリサちゃん・・・すずかちゃん・・・ぐす！あ、ありがとう・・・・・・ううう、うわあああああああああああ！！！！！！あはあああああああああああ！！！！！！！！」

四人のかけがえのない親友の胸の中で、なのはは人目を憚らずに豪快に涙を流した。

さて、松前市から然程遠くない場所にある空座（からくら）町という町にある、小さな町医者に注目しよう。

評判はそこそこで、頭髪が一際特徴的な院長がこの診療所の主。

名前は黒崎一護。

医学大学を卒業した後、父親の後を引き継ぎ実家とは違う場所で新

しく開業したやり手だ。

現在は高校のときのクラスメイトの井上織姫と結婚して一緒に切り盛りをしている。

「はーい、次の方どうぞ。」

不貞腐れた返事が一護のいつもの調子なのだが、これが慣れてしまえばどうってことのない。

一護は患者を呼び寄せると、丁寧に且つ優しく患者の体を診察していく。

「うん。大分良くなってきてるな・・・よし、今日から薬減らそうな、坊主!」

子供は一護の言葉を聞いて嬉しくなり、満面の笑みを浮かべた。

隣に座る母親もそんな一護に感謝する。

「わーい!ありがとうございます、黒崎先生!」

「先生、本当に有難うございます。」

「別に礼なんかいらねぇよ。俺は特に何もしてないし・・・病気が良くなったのはその子が頑張ったからっすよ。」

あまり他人に褒められるのに慣れていない一護は、いつもこのようにしてその場を乗り切る。

やがて、午前の診療が終わりカルテの作成に取り掛かっていると、妻の織姫が一護に電話が掛かって来たと伝える。

「あなた！電話入ってるよ、ユーノさんから！」

「おお！サンキューナ、織姫！」

一護は机の上の電話を繋ぐと、受話器を取りそれを耳に当てる。

「おお、俺だ。」

『あ、どうも一護さん。ユーノです・・・この間のものはちゃんと白鳥さんに渡しておきましたので。』

「態々報告してくれるのか？相変わらず律儀な奴だな。」

『あはは・・・まぁ、そう言う性分なものですから。』

「ふん。それもそうだな・・・分かったよ、ユーノ。」

『いえいえ・・・ああ、ところで話は変わるんですが、実は最近妙な事件がこの世界を始め様々な場所で多発しているんですが、その件に関して一護さんに相談しておきたいことがありまして。今晩、お時間いただけるでしょうか？』

「え～～と・・・ちょっと待てよ・・・おお、特に予定もないし大丈夫だと思うぜ。分かった、晩飯食ったらそっちに行くわ。」

『そうですか。ではお待ちしておりますね。』

電話を切り終えると、織姫がナース服の姿で近付き一護に尋ねる。

「ユーノさん、何だって？」

「何でも最近変な事件が異世界のあちこちで発生してるらしいんだってよ。それで、俺に相談したいことがあるから今晩来てくれって。晩飯食ったらちょっと行って来るからよ。」

「オッケイ。でも・・・あなたに相談したいってことは、ひょっとして死神絡みのことかな？」

「さぁな・・・でも、その線は否めねぇな。」

やがて、夕飯を終えた一護は特に何も持たずラフな格好で車に乗り込みユーノの家まで車を走らせた。

一護が車を走らせていた丁度同じ頃、松前市のとある森の奥では地響きのような轟音が鳴り響いていた。

周りの木は薙ぎ倒されて、無惨にも大木が地面に横たわっている。

そんな森の中で黒装束の着物で自分の武器である斬魄刀を持った男が木に衝突して、満身創痍の状態でいた。

この黒装束の着物を着たものは畏怖の念を込められ現世ではこう呼ばれるーーー死神と。

「はっ、はっ、はっ、はっ、くそ！」

死神は空ろな目を正面に佇む巨大な存在へと向けながら、震える手

で刀を握り締めた。

その巨大な存在は虚（ホロウ）と呼ばれる所謂魍魎魅魍魎魎の類で、胸にあいた孔が特徴的で、且つ白い髑髏のような仮面が必ずあるのである。

虚は恐怖に怯える死神に一歩ずつ近付き、不気味な笑みを浮かべる。

「死神でも・・・目の前の死には恐怖するらしいな・・・滑稽なことよ・・・だが、それも次で終わりにする。わしが貴様の命、途方も無い闇の奥底に沈めてやろう。」

虚は巨大なその腕を振り上げると、勢いをつけて死神の下へと振り下ろした。

死神もこのときばかりはもう駄目だとばかり思って目を瞑り死を覚悟したのであった。

しかしそれは、二者にとって思いもよらぬもので覆されることになった。

振り下ろされたはずの虚の腕が死神に当たる直前で、障壁のようなもので遮られて攻撃を無効化してしまったのだ。

「なっ！？」

「これは・・・縛道・・・！？」

死神は直ぐにこの障壁が自分達死神が使うことを許された鬼道という高等呪術であることがわかった。

とその時、何者が二人に近付きその人物は驚愕する虚に話しかけてきた。

「全く・・・変な霊圧が涌き出てるから来て見れば・・・案の定趣味の悪い仮面の虚だぜ。それに、そこに居るのは此処の担当死神だろ。」

その人物は頭髪はオレンジ色で死神と同様黒装束の着物を身に纏い、背中には巻き布で巻かれた出刃包丁のような刀を下げていた。

「・・・何じゃ・・・お前は・・・？」

虚はその人物の名を尋ねる。

すると、その人物はニヒルな笑みを浮かべて自分の自己紹介を始めた。

「あァ、悪りー悪りー。自己紹介が未だだったな・・・俺は死神代行ーーー黒崎一護だ。」

そうーーー実は彼、黒崎一護もれっきとした死神なのだ。

二人は名前を聞くと表情を愕然とさせた。

「黒崎一護・・・!?まさかひょっとして、１０年前・・・藍染惣右介の叛乱を鎮圧するのに尽力した伝説の死神!?」

「お?何だよ、俺事知ってるのか?」

「知ってますとも!あなたのことは、十番隊隊長、日番谷冬獅郎隊

長よりよくお聞きしておりますので！」

「おおそうか！お前冬獅郎のとこの奴だったのか！いや～そうかそうか。連中とも暫く遭ってないから俺のこと忘れてるのかと思ってたけど、その様子じゃ大丈夫そうだな。」

一護がそんな笑みを浮かべたその時、痺れを切らした虚が腕を地面にたたきつけて一護を挑発する。

「ひっ！？」

地震のようなその振動に担当死神のほうは度肝を抜かれるが、対する一護はいたって冷静だ。

「・・・成程・・・貴様があの黒崎一護か・・・貴様のことは仲間たちからようく聞かされておる・・・じゃが一護とやら・・・わしはお主に興味が無い。今宵わしが此処に来たのは、白鳥礼二を生け捕りにするため。貴様にかかずらっている暇は無い。そこを退いてもらおう。」

「退けと言われて退く馬鹿が何所にいるかよ。アホかてめぇは。」

若い頃からの口の利き方の悪さは幾つになっても直っておらず、そのことが死神をさらに呆気にさせてしまう。

「（うわ～～見た目以上に札付きの口の悪さだな・・・この人・・・）」

すると、一護は同じく挑発した口調で虚に次のようなことを語った。

「それにーーーてめぇが俺に興味なくても、こっちはてめぇを斬りに来たんだ。相手してもらわないと困るんだよ。」

一護の言葉を聞いた虚は山鳴りのような不気味な笑い声を上げる。

「ひ、ひひひ

勝てぬことも分かっておろう。」

魔導虚は右手に握り締めた巨大な剣を天に翳すように振り上げて一護に見せ付ける。

「何だよその剣!?斬魄刀・・・じゃない!?それよりも無茶苦茶なデカサじゅねぇか・・・」

「そうじゃ!この剣はデバイスと言ってな・・・わしの魔力と霊力を限界まで磨き上げて作ったものじゃ!デバイスの巨大さは即ち魔力と霊力の巨大さ。貴様のその出刃包丁のような斬魄刀で勝てぬことは自明の理だ、小僧!!」

すると、それを聞いた一護は再びニヒルな笑みを浮かべ、余裕な様子で自身の斬魄刀『斬月』の持ち手に手を掛ける。

「・・・そうかい。そんじゃ、いっちょやってみるか!」

「・・・どうやらものは知っていても、死神と魔導師の常識も通じぬ馬鹿らしい・・・・・・よかろう。」

一護に誘いに乗った魔導虚はその巨大な剣を一護に向けて振りかざし、一護も斬月を魔導虚目掛けて振りかざした。

そして、魔導虚の懐に飛び込んだ一護は眉間に皺を寄せながら次のように語る。

「基本から教えといてやるぜ。隊長クラスの死神や魔導師は全員斬魄刀やデバイスの大きさをコントロールしてんだよ。でねぇとどいつもこいつもビルみてぇなデカさの武器振り回すことになっちまう。

今のてめぇみたいにな。それに、本当に強い奴っていうのはな、不容易に武器を見せびらかしたりなんかしねぇんだよ。憶えとけ。武器のデカさで相手の強さは測れれぇ。」

一護が斬月を所定の場所へと戻した瞬間、魔導虚の体は真っ二つに引き裂かれ、そのままその巨大な体を地面に叩きつける様に倒れ込んだ。

「死神や魔導師の類語るのは、それからだクソガキ。」

倒れ込んだ魔導虚は信じられないとばかりに言葉を残して、その場から消え去ってしまった。

「・・・ば・・・馬鹿な」

魔導虚が消え去った後、一護のあまりに次元の違う戦闘能力に死神は唖然とした。

「・・・い・・・一撃・・・・・・・ですか・・・（無茶苦茶だ・・・無茶苦茶強いですよ・・・これが本当にあの伝説の・・・黒崎一護なのかーーー？）」

すると、死神と一護の耳にもう一人別の人物の声が入ってきた。

「ーーーやはり此処でしたか。一護さん。」

一護はその人物の声のするほうへ目を向けて、主の名前を言う。

「・・・来てたのか・・・ユーノ。」

ユーノは店と同じ帽子と甚平を身に纏い、右手に杖を持った状態で一護に歩み寄り帽子を押えて軽く会釈する。

「・・・お久しぶりです・・・一護さん。」

そして、一護と間近で飄々とした態度で話し込み始める。

「いやァ、腕は鈍ってなかったみたいですね、安心しました。」

「何だよ?えらくマトモなこと言うじゃねぇか。」

「そりゃもう♪霊圧しぼんでて僕の所為にされちゃたまりませんよ。」

飄々とした様子で扇子を広げるユーノ。

一護はそんなユーノを一瞥し、少々呆れた表情を見せる。

「あーそうかよ。別に萎んでてもてめぇの所為にしやしねぇよ。それも含めて俺の実力だ。つうか、いい加減その浦原さんみたいな格好やめろよな。」

「いいじゃないですか、僕気に入ってるんですよこれ。で・・・どうですか?四年ぶりの死神の体は。」

「まぁまぁだ。」

「・・・心は・・・・・・晴れましたか?」

「・・・まぁまぁだ・・・元々言うほど恨んじゃいねえんだよ。あ

んな”奴ら”のことは。俺がこの四年の間で、欠片も晴れねえほど恨んでることがあるとすれば・・・・・・それはあの日、織姫を怪我させちまった俺の無力だけだ。」

一護のその言葉にユーノはああやはりかといった表情を見せて、帽子を被りなおす。

「変わらないですね・・・そういうとこ。お父さんとそっくりだ。」

「げっ！親父と一緒にスンナよ！！似てねーよ！」

「似てますって。」

「に、似てねーってっつてんだろう！！」

一護は飽く迄も自分の父親であり、同じ死神である黒崎一心とは似てないと言い張るのであった。

ユーノはそんな一護の態度を見ると、表情を和らげる。

「じゃあ、そう言うことにしておきます。」

すると、ユーノは帽子を押さえ雰囲気を一変させて真面目な表情になると一護に電話で話したことを持ち出す。

「・・・閑話休題。それより、今日あって相談したいことの中身なんですけど・・・多分もう気付いていますよね？」

ユーノにそう言われると、一護も眉間に皺を寄せて返事をする。

「・・・ああ。お前の読み通り、接触しようとしてきたみたいだぜ・・・”白鳥礼二”に。護廷十三隊八番隊所属の死神で、突発的に魔力を手に入れてしまった死神兼魔導師、所謂”魔導死神”だ。てめぇが突発的に霊力を手に入れたのと同じようにな。何故そうなっちまったのか原因も一切不明。厄介だぜ。ただ・・・一つだけ分かってんのは、白鳥と魔導虚が組んでないってことぐらいだな。」

「でも、魔導師（あっち）の味方っていう訳でもないですからね・・・白鳥さん、何だかんだ言って魔導師のことはかなり嫌っていますから・・・」

「まぁな。」

「・・・けど、白鳥さんに接触しようとしてきたということは・・・」

「あァ。連中も何らかの戦いの準備をしてるってことだーー俺たちと同様にな・・・恐らく白鳥を引きこんで戦力を整えて詳しく研究するつもりだったんだろうぜ。それに、今回の件に関しては恐らく尸魂界の連中も感付いてるだろうさ。”魔導虚”共の急激な変化にな。」

「やっぱりさっきの虚は・・・魔力を手に入れた虚・・・”魔導虚（ホロウ・ロギア）”なんですね。」

「今迄も、自然発生した魔導虚らしき存在は時々感知されてきたが、今回のは、今まで確認されてきた魔導虚もどき共とは完成度がまるで別物だった。何百年も進歩の無かった魔導虚もどき共のレベルが、ハネ上がったんだよ・・・ここへきていきなりな・・・お前だって解ってんだろ？こいつはつまりーーー」

「・・・・・・」

そして、間を置いて一護がユーノに向ってある次元犯罪者の名前を口する。

「『ジェイル・スカリエッティ』。あいつが”魔導虚”もどき共に接触し、真の”魔導虚”を作り出そうとしてるってことだ。『禁忌（ロスト）・ロギア遺産』の力を使ってな。別世界の軌道拘置所からセッテって以外の戦闘機人三人と供に脱獄したって言うのは本当だったらしいな・・・」

ジェイル・スカリエッティーーいくつもの次元世界で指名手配された違法研究で知られる広域次元犯罪者。

四年前、ミッドチルダに大規模なテロ行為を仕掛けたが、なのは達機動六課の活躍によって計画は失敗。

ＪＳ事件と命名されたこの事件は、スカリエッティの逮捕によって無事に終焉を迎えたかに思えた。

だが、先にはやてが串にした通り奴は一緒に逮捕された戦闘機人・・・ウーノ、トーレ、クアットロの三名と共に鉄壁と恐れられる軌道拘置所を脱獄したのであった。

「僕も正直驚いてますよ。まさか、スカリエッティが鉄壁のあの軌道拘置所を脱獄してるとは・・・到底思ってもいませんでしたから。」

「そりゃそうだろうぜ。まぁ、無論・・・まだ完成した力じゃねぇ

さ。あの魔導虚はまだ未完成だった。レベルと魔力はハネ上がったが、霊圧の濁り具合で判る。恐らくは『このレベルでどの程度戦えるか』ってデータ集めの為に出してきた試作品だ。今でこそあのレベルだが、『禁忌遺産（ロスト・ロギア）』の力は絶大だ。奴はすぐに実戦で使えるところまで研究を進めるだろうぜ。そして完成した真の『魔導虚』と、強化された戦闘機人を従えて・・・」

「・・・・・」

その直後、一護はスカリエッティの最悪のシナリオを徐に口にする。

「世界を潰しに現れる・・・どうするよ。」

ユーノは一度帽子を深くかぶり直し、一護に対してこう語った。

「・・・なんとかしましょう。いずれにしろこの事態だ。敵味方はともかくとして、皆動きますよ。尸魂界（ソウル・ソサエティ）も、僕達も・・・そしてー一時空管理局も。」

その頃、ユーノの思惑通り時空管理局本局では嘗ての機動六課の前線メンバーがクロノ・ハラオウン提督に呼び集められていた。

部隊長だったはやてを始め、なのは・フェイト、ヴォルケンリッター・・・そしてフォワードの四人。

フォワードの一人で現在は執務官をしているティアナ・ランスターと親友であるスバル・ナカジマ一等陸士はかなり緊張した顔つきだった。

「一体何だろうね、ティア。機動六課の前線メンバー全員召集だな

んて？」

「そんなの言わなくても判りきってるでしょ。スカリエッティ絡みのことで・・・まず間違いないわよ。」

会議室に集まると、クロノは深刻そうな表情で全員を見つめる。

「ーーー急の召集に、全員よく集まってくれた。感謝する。それではこれより、”スカリエッティ・及び戦闘機人三人の脱走に伴う”緊急対策会議を執り行う。」

動き始める三つ巴の勢力。

事件はここより動き始めるーーーーーー

一護とユーノ（後書き）

魔導師図鑑ハイパー！

虚「ぐあああああああああああ！！！！」

松前市に虚が現れる。

それに立ち向かうのはーーーーーー

観「喰らえ！！ゴールデン観音寺弾（キャノンボール）！！！！」

ドン観音寺、手から霊力の塊をぶつけるが軽く弾かれてしまう。

そこへすかさず・・・・・・

ジ「ジン太ホームラン！！」

後ろからジン太が殴りかかる。

そして、止めの一撃。

夏「いくぜ！たつきちゃん直伝！！！！夏梨流絶命シュート！！！！！」

自前のサッカーボールで虚を消滅させる。

虚「ほ、ぎゃあああああああ！！！！！」

観「ミッションコンプリート！！」

夏「やりー！！絶好調！！！」

そんな三人の様子を物陰で覗く白鳥。

と、そこへ・・・

有「何コソコソ見てるのあんた？気持ち悪い。」

白「何！？」

白鳥、大いに驚愕する。

一「おい。魔導師図鑑じゃなかったのかよ？」

ユ「て言うか、全然魔導師関係ないし。」

異世界からのお客

＞ｉ１２１７９―７０９＜

スカリエッティの脱獄と、魔導虚の出現。

そして戦闘機人の再来。

三つの脅威が再びミッドチルダへと迫り来ようとしている中、とある異世界から二人の人物が空座町にやって来るのだが、その前に現在のなのはの様子はと言うと――――――

夜も更け、ほとんどのものが寝静まる深夜。

彼女は一人自宅のベッドの中である夢を見ていた。

それは、ユーノがなのはの前から姿を消してから頻繁に見るようになったなのはの今の心境を強く反映したもの――――――

私は――――――独りです。

独りだから、背中がとても冷たいです。

背中が冷たいと、凄く寂しいです。

どうして独りなのか？

どうして背中が冷たい寂しいか？

それは――――――私が前だけしか見ていなかったら、一番大切な事を見失っていたからです。

ここからは高町なのはの回想を交えながら言葉を並べて行こう。

新暦６７年。

時空管理局員高町なのはは任務の帰り際、生死にかかわる瀕死の重傷を負った。

原因は日頃の無茶なハードトレーニングと疲労困憊な体への反動。

彼女の大怪我は非常に深刻なものだった。

執刀した担当医やシャマルなどによれば、それは魔法は使うことはおろか立って歩くことさえ危うくなるというものだった。

しかし、彼女は死ぬ気のリハビリを乗り越えて怪我を感知させた。

そして、自分の無茶で他人に迷惑をかけることはよくないという教訓の下、彼女の教導はこれを徹底した基礎固めなものへと明確なビジョンが出来上がり現在に至っている。

しかし、その陰でこのなのはが墜ちたということに関してただ一人罪悪感を感じている人間がいた。

それこそが、ユーノ・スクライアである。

これはそんなユーノが入院中のなのはに遭いに行った時の出来事である。

ユーノは表面上では平気な顔をしているが、実際は非常に辛い状況に立たされ絶望さえ感じているなのはの心境をただ一人理解していた唯一無二の友人だった。

そして、魔法と言うものをなのはに教えるきっかけを作ってしまっ

たのもユーノ本人である。

その為、ユーノはなのはのお見舞いに行くときはどうしても込み上げてくる様々な想いに胸が引き裂かれるような感覚に陥ってしまう。

だがそれでもこんな自分でもなのはの役に立ちたい、早く元気になって欲しいという切実な望みを抱きながらユーノは病室へと向かう。

しかし、彼がやってくるのは決まってフェイト達なのはと非常に親交が厚い友人たちが帰った夕方、或いは無限書庫での業務を終えた夜の時が多い。

それはその方が確実になのはと二人きりになって話せる機会が多いことと、もう一つはそんななのはと正面を切って正直な話が出来ると考えていたからである。

ユーノは無限書庫での業務を終えると、なのはの病室の扉をノックする。

すると、なのはの声が聞こえてくる。

「はい、どうぞ。」

ユーノは徐にドアを開き、病室の中へ入る。

「なのは。」

「ユーノ君。」

ユーノはこの時、暗がりではあるがなのはの両目が充血していたこ

とが分かった。

それはなのはが多量の涙を流した証拠。

フェイト達には心配を掛けないよう彼女たちがいる間は決して弱みを見せない気丈な彼女も、いざ一人になったときは唐突に襲ってくる強い不安に負けてしまいこうしてトシ相当に涙を流してしまう。

そんな彼女の性格を知ってか、ユーノの表情は曇り心の中は益々複雑なものとなる。

「なのは・・・調子はどう?」

「う、うん・・・大丈夫だよ。ほら、この通りだいぶ良くなってきてるし・・・まぁ、それでも魔法も足もまだ動かせないけど・・・」

笑顔で取り繕ってユーノでさえ誤魔化そうとするなのはに、ユーノは我慢できなくなった。

ユーノは今にも泣きそうな表情でなのはに近づくと、なのはを二度と放さないとばかりの抱擁で強く抱きしめ、いきなりの事になのはは頬を赤くし驚愕の表情を浮かべる。

「え・・・?ゆ、ユーノ君・・・何を!?」

すると、そんななのはにとって理解不明な行動をとる現在ユーノは抱きしめた状態で徐にこう言った。

「なのは・・・・・・“無理すること”ないよ。」

「え」

意味が分からなかった、その瞬間の言葉になのははは思わずそう呟く。

「・・・泣きたいときは泣いたっていいんだよ。なのはは強いから、みんなに心配させたりするのが嫌いだから・・・今もそうやって笑ってごまかしてるけど、僕にはそんなの見え見えの嘘だって分かるよ。辛いことがあったら周りに気にせず声が涸れるまで泣いたって言い。誰もなのはのことを責める人はここにはいない。こんな僕の前でもいいから・・・・・泣いてくれたっていいんだ・・・・・・」

「ゆ・・・ユーノ君・・・・・・・ううううううう!!!!!!!」

その瞬間、なのはは先ほどまで我慢していたものが急に溢れかえり大粒の涙と叫び声に変わってこれまで抱えてきた自分の辛い本音を赤裸々に暴露する。

「わあああああああああ!!!!!怖かった!!!!!!!私本当はすっごく怖かった!!!!!!!!!痛くて痛くて!!!!死んじゃうかと思ったよ!!!!!!!もう、みんなやユーノ君に遭えなくると思ったら凄く怖かった!!!!!!!」

「・・・なのは・・・」

ユーノは泣き叫ぶなのはを抱きしめながら耳元でなのはの本音をすべて聞き取った。

「魔法も使えなくる!!!!歩くことも出来なくる!!!!!私、そんなの嫌だ!!!!!!折角ユーノ君が教えてくれた大切なものなのに

！！！！それが使えなくなるなんていやだ！！！！！私、もう一度空に飛びたい！！！！！一緒にフェイトちゃんやはやてちゃん達と局でお仕事したいよ！！！！！！！！私の魔法で救える命があるなら救いたい！！！！だけど・・・私は！！！！！！」

「・・・・・大丈夫。そんなこと絶対にさせないよ。僕もみんなも・・・・・・」

「ゆ・・・ユーノ君・・・／／／／／」

「なのはなら絶対に大丈夫だから。きっと元通りに治るよ。今はまだその時期じゃないってだけで、その足も魔法も必ず良くなる。だから、自分を信じて・・・僕や周りの人達を信じて一緒に頑張ろう。」

この時のユーノの笑顔を見た瞬間、なのはの心に今までにはなかった奇妙な感情が芽生え始めた。

だが今はそのことに気づく前に、なのはは素直な自分の気持ちを受け入れ優しく抱擁してくれる自分のパートナーに深い感謝を抱き、嬉し涙を浮かべながらその身を任せた。

「・・・ありが・・・とう・・・ユーノ君・・・／／／／／／」

なのははユーノに身を任せると、泣き疲れそのまま深い眠りに入った。

ユーノはなのはが深い眠りに入ると、静かにベッドの中に戻して布団をかぶせると、起こさないようにその場から立ち去り再び無限書庫へと向かう。

これが彼がこれから先永遠に抱え続ける“孤独”への戦いの幕開けでもあった。

では、再びなのはの語りから話を戻そう。

あの時のユーノ君の言葉や優しさで私がどれほど救われたか知れない。

昔から酷く大人びた性格をして、周りに遠慮しがちだった私が初めて感情をぶつけられたのはユーノ君だけだった。

フェイトちゃんやはやてちゃん、お母さんやお姉ちゃんでもない・・・ユーノ君ただ一人。

だからこそ、私にとってユーノ君は他の誰とも違う特別な存在だった。

ユーノ君は無限書庫の仕事が終わるといつも病院に駆け付けてくれて、私の側で私の事を気にかけてくれた。

私は何気ないことでもユーノ君と一緒に居られる時間が凄く嬉しかった。

リハビリで挫けそうになったときも、悲しいことが遭ったときもユーノ君はいつも傍らで私を励ましてくれた。

だから嬉しかった。

そんなユーノ君の優しが私は大好きだった。

だけど――――――だからこそ気づかなかった。

ユーノ君が他の誰よりも“孤独”であることに――――――

どうして、私は理解できなかったのだろう？

ユーノ君は生まれた時から一人だと言っていて、本当はずっと寂しくて甘えたいはずなのにユーノ君は誰にも甘えたりもしないし、私以上に他人に遠慮してる。

なのに、ユーノ君はいつも笑ってる。

そしてそれは以前私に見せてくれた優しい笑顔ではなく、“取り繕った作り笑い”。

局に勤めるようになって、ユーノ君と会う回数は日増しに少なくなっていった。

メールでのやり取りはするけど、お互いに仕事が忙しくて直接会って話す機会は一突きに一度、酷い時は数か月に一度と言うときもあった。

私は寂しかった。

だから遭えたときはその嬉しさが溢れかえってきた。

ヴィヴィオも懐いて、出来れば三人一緒に居れる機会がもっとあればいいのにと思っていた――――――

だけどそれは適わない願い。

なぜらな、ユーノ君はもう私の手の届かない場所に行ってしまったから。

ユーノ君はもう・・・――――私の側には居ない。

メールも、電話も一切通じない。

本当に何もなくなってしまった。

途方もない空しさと寂しさに、私は急に怖くなって思い出した。

あの時の――――――事故で大怪我をした時の感覚に。

私は泣いた。

子供のように、泣いて・・・泣いて泣いて泣きつづけた。

心に雨が降り注ぐ。

この雨は、きっと永遠に降り注ぐ。

止むことは決してない。

そんな事を思いながら、今日も私は涙を流すのだ――――――

これが今の高町なのはの心境である。

なのははそんな夢を毎晩見つづけ、枕には眠りながら流す涙がいつ

もたまるのであった。

さて、そんなのはとは打って変わって空座町に異世界から宣告に記した通り二人の人物がやってくる。

二人の人物のうち派手な衣装に身を包んだ赤髪の男は一護と織姫、

そしてコンが住まう自宅のインターホンを徐に押す。

そして出てきたのは私服姿の一護であった。

「はーーーい。すみません、木曜は午後から休診になってま・・・」

と、一護がその言葉を言おうとしたとき、赤髪の男はサングラスをかけ、先述にあったとおりの派手な衣装に身を包んで一護にこう言った。

「なははははは!!!!!元気だったか我が友よ!!!!阿散井恋次様が来てやったぞ!!!!」

すると、一護は白けた表情で柵の鍵を閉めて家の中に入ろうとした。

それを見て慌てた恋次が一護の行動を止めに掛かる。

「こらああ!!何でてめぇ鍵閉めるんだよ!!!!一護!!!!」

「当たり前だ!!てめぇいきなり押しかけて来やがって何だよその格好!!てめぇは何所のスターだ!!!!」

「うるせーよ!!これが一番地味な格好だってルキアが言ったから着てきたんだぞ!!!!」

「（うわ～～～こいつ本気で騙されてやがる・・・）」

と、恋次の言葉を聞いた一護が呆れていると、恋次の後からもう一人の男が話しかけてきた。

「ほら阿散井君・・・やっぱり言わんこっちゃない。僕もその格好はやめたほうがいいって・・・」

「わ、悪かったな!!俺だって好き好んでこんな格好してんじゃねぇよ!!」

すると、一護ももう一人の男に気付く。

「あれ?お前・・・吉良じゃねぇか!?お前も一緒だったのか。」

一護はもう一人の男、吉良の登場に驚いていた。

恋次と吉良は共に護廷十三隊三番隊の隊長、副隊長でーーー恋次が新しい三番隊の隊長になってから早十年の年月。

吉良は恋次の補佐をする副隊長として今も頑張っている。

吉良は苦笑いを浮かべると、一護に今回現世にやって来た目的を明かす。

「まぁね。”『魔導虚』との本格戦闘に備えて現世の死神代行組みと合流せよ”っていう上からの命令でね。」

「つー訳だ・・・上がらせてもらうぞ。」

恋次は横柄な態度で一護の家へと上がり込もうとした。

「ちょっと待て!!!まだ上がっていいとは一言も言ってねぇだろうが!!」

「いいじゃねぇかよ別に!!俺たち友達だろ!!」

「都合のいいときだけ”友達”って言葉使うな腹立つから!!!」

一護と恋次の取っ組み合いは暫くの間続いていたが、玄関でこの騒動を奥で聞いていた織姫がコンと共に出てきた。

「あなた。一体どうしたの玄関で騒いで・・・」

「そうだそうだ!五月蝿くて昼寝も出来やし・・・って!!お前ら!!」

「ああ!!恋次君!!それに吉良さん!!」

恋次と吉良の姿を見た織姫はライオンのぬいぐるみであるコンを肩に乗せたまま子供みたいなように、はしゃぎながら二人に近付き再会を喜んだ。

「久しぶり!!恋次君も吉良さんも全然変わってないね!!」

「そりゃあ・・・人間と死神じゃ歳のとり方もかなり違うしな。」

「その点、君は一団と大人の女性になってきてるよ織姫さん。」

「やだ~~~吉良さんったら~~~お世辞が上手いんだから!!!」

すると、恋次はそれとは逆に一護の顔を見ながら哀れむようにこう口にする。

「それに引き換え一護・・・てめぇは老けたな・・・」

「まだ２５だ！！」

「とにかく、立ち話もなんだから上がって上がって！！ちょうどクッキー焼いたところだから、ささ！！」

「っておい織姫！？いいのかよ！！」

「いいじゃないの。家へ来たって事は何か困ってるからなんでしょう。困ったときはお互い様だよ。」

「そうだぞ、一護！素直に織姫さんの言葉は耳を貸やがれ・・・ふっぐう！！！！」

一護は物凄い剣幕でコンの体を握り締めると、そのまま足元まで落として理不尽にも踏みつけた。

織姫の許諾を得て家へと上がった恋次と吉良は出されたクッキーと紅茶を頂きながら、不機嫌そうに皺を寄せる一護に話を始める。

「で・・・なんでお前らなんだよ？」

「一応、厳正な審査が行われて・・・その結果選抜されたのが俺たち二人だったのさ。ルキアは朽木隊長と一緒に別件の任務で現世（こっち）にはこれなかったからな。」

「そうなんだ・・・てっきり朽木さんも一緒だと思ったからちょっと残念だな。」

ルキアが来れなかった事に少々項垂れてしまう織姫。

「仕方ねぇさ。ルキアだって白哉の補佐で忙しいんだ。六番隊の副隊長ともなればそれなりにな。」

一護と織姫の言うルキアとは、現在六番隊の副隊長を務めている隊長の朽木白哉の義理の妹であり、一護に死神の力を託した張本人でもある。

「それで、僕達が君たちに合いに来たのは本格戦闘に備えるっていうよりは・・・実をいうと密偵に近いんだ。」

「?密偵・・・!?」

吉良の言葉を聞いた一護は言葉の真意がよく理解できなかった。

「山本総隊長からは、”魔導虚の出現の根源である広域次元犯罪者、ジェイル・スカリエッティが潜伏していると思われる第一管理世界ミッドチルダへと向かい、時空管理局とは極秘裏に情報散策を行って欲しい”というものだ。」

「ミッドチルダにか・・・!?でも、行く方法なんかあるのかよ?浦原さんだって流石にそこまではできねぇ筈だぜ。」

浦原喜助。

それは嘗ての十二番隊隊長であり、技術開発局の初代局長を務め上げた稀代の技術者だ。

彼の技術力は百余年立った今も尚高く評価されているが、何分掴みどころの無い性格をしているために周囲からは胡散臭い目で見られている。

だが、そんな浦原喜助の技術力を以ってしてもミッドチルダを始め様々な異世界への移動を自由自在に行き来する方法は持ち合わせていないのである。

「無論、そいつは重々承知のこと。俺たちが今回協力を依頼するのは浦原さんじゃねぇ・・・もう一人のほうだ。」

「もう一人って・・・まさか・・・ユーノさん!?」

織姫がそう言うと、吉良は首を縦に振った。

ユーノは以前、一護とともに尸魂界に行ったことがあり、一護とともに山本総隊長による正式な承諾を得たことにより現世における戦闘と闇商売を許されている。

ちなみに、恋次や吉良・ルキアなどは直接ユーノとは遭った事はないが他の隊長たち（浮竹や京楽）の話から存在と来歴を認知しているのである。

「彼は元時空管理局本局、無限書庫の司書長だった男だ。そして何より、異世界への移動は彼の一族の生業上お手の物だよ。管理局にも詳しく魔導師としても優秀な彼ならやってくれるはずだ。」

「引き受けてくるかどうか話してみない分には分からねぇけどな・・・」

「おいおい・・・結構いい加減だなお前ら。で、ユーノには連絡取ったのか？」

「ああ？んなもん取れるわけねぇだろ。」

恋次のその呆気ない言葉を聞いた瞬間、一護と織姫そしてコンは床に倒れ込んだ。

「ああ！？何でだよ！？」

「連絡を取りようにも、俺達は奴の連絡先なんか一切知らねぇし、第一・・・奴は秘密主義者で無闇にそんなことは教えてくれる筈もねぇしな。」

一護はその言葉に思わず深い溜め息をつく。

「じゃあどうすんだよ一体！？」

「だからこそ、君の下に尋ねてきたんだよ。」

「えっ？」

一護、織姫、コンは吉良の言葉に愕然とした。

「君は唯一我々の中で彼との接点があるただ一人の男だ。連絡先も知っているはずだよ。」

「それに・・・奴に死神の力やその技を教えたのもお前だろ。」

恋次が言うように、四年の間にユーノに死神の初歩的な戦闘技術や

簡単な鬼道、更には自らの抱く護るという思考をユーノに叩き込んだのは紛れもなく一護本人だ。

「・・・・・はぁ～～分かったよ、連絡すればいいんだろ。」

深い溜め息をついて二人の交渉を渋々受諾し、一護は携帯電話を取り出してユーノの自宅に電話をかける。

その頃、スクライア商店の茶の間で今度雑誌に載せる為の考古学の原稿論文を書いていたユーノ。

そんな時にかかって来た電話の呼び鈴に反応して、机に置いてある受話器を取るユーノ。

「こちらスクライア商店です。どちら様でしょうか?」

『俺だユーノ。黒崎一護だ。』

「一護さんですか。どうしたんですか・・・何だか疲れた感じですけど・・・」

『ああ・・・精神的に物凄く疲れてるよ・・・でだ、お前にちょっと頼みがあってよ。』

「頼みですか?まぁ～一護さんの頼みなら聞いてあげないことは無いですけど・・・」

『そうか。サンキューなユーノ。いや実はよ・・・・・・』

一護はユーノにこれまでの経緯を全て話した。

そして数分後、一護は携帯電話を切って恋次達のほうへ向き直る。

「で、何だって？」

「引き受けてくれたよ。会って話がしたいからこっちに来てくれってよ。」

「本当か！？よっしゃーーー！！！賭けみたいなもんだったが、上手くいったぜ！！！」

「阿散井君・・・人の家でそんな騒がないほうが・・・」

恋次の子供のような喜び方に一護も吉良もコンも呆れてものも言えなかった。

織姫だけは、そんな恋次を見て微笑んでいた。

その後、恋次と吉良は一護の車に乗り込んで早速ユーノの自宅へと向った。

そして、辿り着いたスクライア商店の外観を見た瞬間・・・恋次と吉良は唖然とした。

「・・・こ・・・ここがユーノ・スクライアの店・・・なのか・・・！？」

「ああ。中身は殆ど浦原さんとこと一緒だ。行くぞ・・・」

気だるい声で恋次と吉良にそう言うと、一護は店の中へと入っていった。

すると扉を開けたその瞬間、大柄な男が突然恋次の前にドアップで現れた。

「いらっしゃいませ・・・」

「ノアああアあああああああ!!!!!!!!!」

恋次はあまりの恐怖に思わず絶叫する。

横目で見ていた吉良が慰めの眼差しを恋次に送る。

「何だてめぇは!!まさかてめぇがユーノ・スクライアか!?」

「ちげーよ。こいつはユーノの補佐で熊谷金太郎。本物はあっちだ・・・」

一護がそう言って茶の間のほうを指差すと、中からは帽子と甚平に身を包んだユーノが出てきた。

「どうも初めまして♪僕がこの店の店長やってるユーノ・スクライアです。宜しければ、以後お見知りおきを!」

初めてユーノの姿を目の当たりにした恋次と吉良は言葉を失った。

そして、二人は同じことを思った。

「「（・・・まるまる浦原さんと一緒じゃんか・・・）」」

暫く立ち話をした後、茶の間に上がった一護達は金太郎が持ってきたお茶を啜りながら今後のことを話し合った。

「成程。それで、あなた達がミッドチルダに行けるよう僕に協力を要請したいと・・・？」

「ああ。無理な要求かもしれないがこの通り頼む。事がでかくなる前に早期解決を望む所存だ。」

「お願いします、スクライア司書長！」

恋次と吉良はユーノに向って頭を深々と下げる。

「その言い方は止してくださいよ、吉良さん。僕は既に管理局を辞めている。地位なんて・・・・・・とっくの昔に捨てましたから・・・」

自嘲気味なユーノの言葉を聞いた一護は、どこか複雑な気持ちだった。

「まぁ～あなた方が一護さんの友人で事件解決を強く望んでいるのはよーくわかりました。良いでしょう♪ミッドチルダへの道は僕が開きます。」

「本当か！？嘘じゃないだろうな！！」

「嘘はつきませんよ。嘘を言ってもしょうがない。但し条件が二つあります。」

「？条件・・・ですか？」

吉良と恋次がユーノの言葉に耳を傾けると、ユーノは徐にこう言う。

「ミッドにはうちの従業員を同行させることと、これから一週間僕と魔導師や対戦闘機人戦に備えた戦い方を勉強してもらいましょ。」

その時、二つ目の条件を聞いた恋次は驚きを隠せなかった。

「ああ？べっ・・・勉強だって！！何だそれ！？修行でもしろって言うのかよ！？そんな暇ねーだろ！スカリエッティがどんな奴なのか、てめぇが一番よく分かってるだろうが！！もたくさしてたら被害は益々・・・」

「わかんない人だな。」

ユーノはそう言うと、立ち上り喋りかけている恋次を持っていた杖で床に押し倒して身動きを取れなくし、そのまま杖を突きつける。

ユーノの突然の行動に恋次も一護も吉良も驚きを隠せなかった。

そして、ユーノは飄々とした態度ではなく何時もよりも低い声で次のように言う。

「言ってるんですよ。死神の常識だけじゃあなた方は死ぬ・と。勝てるんですか？たかが護廷十三隊三番隊隊長っていう実力だけで、勝手の違う魔導師や戦闘機人と戦って。」

恋次はユーノに突きつけられた杖を見ながら、今まで感じたことの

無い巨大な威圧感を感じた。

「（何だ・・・この威圧感・・・！？まるで切っ先を突きつけられているみてぇだ・・・）」

そんな凄む恋次を他所にユーノは話を進める。

「今のあなたの実力じゃ、残念ながら力不足です。三番隊隊長にこんなこと言うのもなんですけど、あなたは弱い。弱者が敵地に乗り込むこと、それは自殺って言うんですよ。『スカリエッティを止めるため』？馬鹿も休み休み言ってください。」

「・・・・・・」

「死にに行く理由に他人を使うなよ。」

そんな人格の変ったユーノと冷や汗を流す恋次を黙って見守る吉良と一護。

「・・・阿散井君・・・」

「・・・ユーノ・・・」

やがて、ユーノは話し終わると恋次を解放して立ち上がると、腕組みをしながら再び語り始めた。

「スカリエッティは・・・おそらく何らかのロスト・ロギアを使って魔導虚や対死神用の戦闘機人を作り出すはずです。とはいっても、いくら奴でも一週間やそこらで作り上げれるような天才じゃない。精々一ヶ月はかかる筈です。これからあなた方を苛めるのに七日間。

ミッドチルダへの道を開くのに三日間。そしてミッドへ到着してから二十日間。充分間に合います。」

「・・・七日で俺達は・・・本当に強くなれるのか？」

恋次は半信半疑のままユーノに尋ねる。

心情は吉良も同じであったが。

「勿論。あなた方が心からスカリエッティを止めたいと願うなら。想う力は鉄より強い。半端な覚悟なら溝に捨ててください。七日間・・・僕と命のやり取り、出来ますか？」

ユーノの不敵な笑みを見た恋次、吉良は互いに顔を見合わせた後、決断を下す。

「どーせ俺らが出来ねーっていっても、他にやる奴なんかいねぇだろ。」

「それに、誰もまだ出来ないとも言ってないしね。」

「しょうがねぇ！やってやろうじゃねぇか！」

二人の決意を言葉として聞かされたユーノと一護は、ほくそ笑み早速二人を訓練場まで案内することになった。

二人の修行の模様は次のお話で。

異世界からのお客（後書き）

魔導師図鑑ハイパー！

恋「よし！早速修行だ！！」

ユ「あ、その前にやることがありますから♪」

恋「何だよ、やることって？」

そう言って取り出したのは、箒と塵取り。

恋「どうするんだよ、んなもん？」

すると、ユーノは恋次にそれを渡す。

恋「あ？」

ユ「協力してあげますから、店の掃除ぐらい手伝ってくださいね♪」

恋「えええええええ！！！！！！！！！」

ユーノとの修行

>i12820―709<

ユーノによって店の地下深くへと案内された一護、恋次、吉良の三人はそこで巨大な空間を目の当たりにする。

「どっひゃーーーーー!!なんだこりゃーーーっ!!?この店の地下にこんなバカでかい空洞があったなんてーーーーーー!!」

ユーノは三人の気持ちを代弁して少々大仰なリアクションを取る。

「ウルセーなユーノ。浦原さんじゃあるまいし、態々代わりに叫ばなくても充分ビックリしてるよ。」

呆れた表情でユーノにそう言う一護と、同じ様なものを一度知浦原喜助の家で見かけたことのある恋次は唖然とした。

「にしても・・・これまるまる浦原さんのとこと一緒じゃねぇか!?」

「そんなことありませんよ。これは浦原さんの技術を下に、僕の結

界魔法と空間魔法を違う形で応用・アレンジを加えたものですよ。まぁ、ともかく・・・閉塞感を緩和させるために天井には空のペイントを施しました！」

ユーノはそう言って、全員に天井の方を見せるが直ぐに吉良が率直なことを言う。

「刑務所と同じ考え方ですね・・・」

「さらに心に潤いを与えるために木々も植えときました！」

ユーノは次に訓練場に植えた木々を見せ付けるが、恋次が直ぐにこう口にする。

「やっぱり一本残らず枯れてるな。」

「これだけのものを道路や他人様の家の地下に内緒で作るのはそりゃあ骨が折れる作業でしたよ！イヤ、よく頑張った頑張った！」

そんな飄々とするユーノを見ながら一護が苦笑いを浮かべつつこう言う。

「おいユーノ・・・こんな事いうのも何だかそれ犯罪じゃねぇのか？」

「この際そんなことは気にしねぇよ。さっさと始めようぜ・・・てめぇの言う『お勉強会』とやらをよ！」

あまり細かいことは気にしない性分の恋次は既にやる気満々だった。

軽くその場で準備体操をすると、ユーノに修行の開始を促す。

「はい。そんじゃお望み通りに・・・」

ユーノはニヒルな笑みを浮かべると、持っていた杖の先端を恋次のデコに当てると、義骸から恋次を抜き出し死神化させたが、突然のことに恋次は驚き後方へとひっくり返ってしまった。

「どあああああああ!!!!!!!」

床にひっくり返った恋次はユーノに文句を言う。

「い・・・いきなり何しやがんだてめぇ!?」

「相変わらずその羽織は似合ってねぇな・・・恋次。」

一護のその言葉に更に腹を立てる恋次。

「う、うるせー!!あと百年もしたら様になるってーの・・・お!?」

と、その時恋次は自身の身体がとても重くなるような感覚に陥り、その場に手を突いて息切れをした。

それを見たユーノは恋次に説明を始める。

「・・・息苦しいでしょ。どうしてか分かりますか?」

「分かるわけもねぇだろ・・・どう言うことだ一体!?」

「いいですか。死神には霊力発生の源である”魄垂（はくすい）とブースターである”鎖結（さけつ）があるように・・・魔導師には魔導師だけが持つリンカーコアと呼ばれる魔力発生の源があるんです。それは個人の資質によって大きく異なってきます。この訓練場は言わば”巨大なリンカーコアの中”と言っても過言ではありません。先ずはこの高濃度の魔力の中で動き回って、この息苦しい状態を改善する必要があります。霊力と違い、魔力は持たない人間がいきなり高濃度の中に居座ると息切れを起しますが、身体が慣れるとそれもなくなります。魔力は魂魄でなくても遣い方さえ判れば肉体だろうと魂魄だろうと使用可能。この魔力空間の中であなたの資質が試されます。」

「・・・あまりよく判んねーが、何だよじゃあ・・・ラジオ体操でもしろっていうのか？」

「まさか。そうですね、口で説明するより始めた方が言いですね。おーい！用意してー！」

すると、ユーノの言葉を聞いた金太郎が恋次の下までやって来ると、腰に指していた恋次の斬魄刀・・・『蛇尾丸』を取り上げた。

突然の金太郎の行動に恋次は思わず仰天する。

「な、何するんだよ！？何で『蛇尾丸』取り上げられなくちゃいけねーんだよ！！」

「最初は感触になれてもらうために、斬魄刀は無しで鬼道と体術だけで戦ってください。彼と・・・」

「あ！？」

ユーノの指差す方向を向いた恋次の先にいたのは、鬼太郎と共に店の掃除をいつもしている従業員の浦太郎だった。

「よろしく。僕の名前は亀井浦太郎。気軽に浦太郎と言ってくださいね！はいこれ・・・」

浦太郎は笑みを浮かべて恋次の足元に専用のグローブとヘッドギアを投げつけた。

「何だよこれ！？」

「・・・これ・・・ちゃんとつけてくださいね・・・ぶち殺されますから。」

その瞬間、不気味な笑みを浮かべた浦太郎が地面を割りながら恋次に近付くと、持っていた槍上の武器、デバイスのフィッシャーマンを恋次の顔面目掛けて振り下ろした。

「え？」

途轍もない破壊力を持った槍の一振りが地面を容易に抉り、恋次の姿を多量の砂埃で覆い隠してしまった。

恋次の身を案じた一護と吉良は彼の名前を思わず叫ぶ。

「れ、恋次！！」

「阿散井君！！！」

「ほら、言わんこっちゃない。」

砂埃の外で多少力を入れすぎてしまったばかりに中のほうを覗く浦太郎。

「ちょっと強くやりすぎちゃったかな。」

中々出てこない恋次のことが気になる一護や吉良、それにユーノ。

「・・・阿散井君・・・出てこないですね・・・」

「・・・死んじまったんじゃないか?」

「・・・どうでしょう?」

と、その時・・・砂埃の中から白い羽織と死覇装に身を包んだ恋次が後転をするような形で出てきた。

「あっ!出てきた!」

恋次は体制を持ち直すと浦太郎のほうへと向う。

「おおっ!向かっていった!」

しかし、向って行ったかと思われたら恋次は戦わずにグローブとヘッドギアを持ったまま逃げ出す。

「と思ったら、スルーした!!」

浦太郎から逃げる恋次はかなり焦った様子であった。

「ヤベーヤベー！何だアレ！？あんなの喰らったら即死じゃねーか！！仕方ねぇ、気休めかもしんねーけどせめてこのヘッドギアぐらいつけねーと・・・」

しかし、その形状からしてどうやって頭につけることが出来るのかが全く思いつかない恋次。

「ってどうやって着けんだコレーーー！？」

すると、見かねたユーノが困り果てている恋次に使い方を教える。

「恋次サン、恋次サン！こうするんですよ！おでこにこうやってくっつけて・・思い切り叫ぶんです。”受けてみよ正義の力！正義装甲ジャスティスハチマキ！！装☆着っ！！”って。」

「そ・・・そうか！わかった・・・ってできるかーーー！！っておわーーーっ！！！！！」

乗りツッコミをした直後に襲い掛かる浦太郎の攻撃。

それを必死で回避する恋次。

「ね？恥ずかしがって場合じゃないでしょ？」

ユーノの言葉を聞いた恋次は羞恥心を堪えて覚悟を決める。

「く・・・くそっ！！しょうがねぇか・・・！！・・・う・・・・・・・・っ”受けてみよ正義の力！正義装甲ジャスティスハチマキ！！装☆着！！！！”」

「うわあ・・・ホントにやっちゃたよこの人・・・」

「普通するかよ・・・・・・」

「はぁ～～阿散井君・・・何をやってるんだ君は・・・」

何も起こらないヘッドギアを手に持ちながら、呆れ果てる三人を見て恋次はこの上も無い屈辱感を憶える。

「てめえら!!!」

「後ろ後ろ!」

ユーノがそんな恋次に注意を促す。

「何!?」

恋次はそれに気付いてどうにか自力でヘッドギアのつけ方を見つけようとする。

「ちっ!」

なんとか、着け方が判ったらしく恋次は直ぐにヘッドギアを頭に取り付けてグローブを履く。

「よっしゃ!!どっかれでもかかってこい!!」

と、行った矢先に浦太郎の攻撃を回避する恋次。

それを見たユーノは思わず恋次の言った言葉をぶつける。

「・・・どっからでも？」

「防衛本能だ防衛本能！！こっからだぜ！三番隊隊長阿散井恋次はな・・・身体暖まるまで、時間がかかるんだよ！」

恋次はとってつけた言い訳をすると勢いよく浦太郎へと向っていき、浦太郎の顔目掛けて拳打を振りかざす。

「せりゃあああ！！！！」

しかし、拳打が浦太郎に当たりそうになった瞬間浦太郎はソニックムーブを使って恋次の前から姿を消す。

「何！？消えやがった！？」

とその時、恋次の背後に移動する浦太郎は再び槍を振りかざすが、気配を感じた恋次は咄嗟に鬼道を撃って攻撃を回避しようとする。

「やべ！！破道の三十三、『蒼火墜（そうかつい）』！」

蒼火墜を放つことで浦太郎の攻撃から身を守ることに成功した恋次。

恋次の機転の利いた行動にユーノや一護たちも感心する。

「・・・ほう・・・」

「咄嗟に蒼火墜を撃って撹乱させやがったか・・・やるじゃねぇか。」

「あれでも一応、三番隊の隊長だからね・・・」

爆風が晴れると、恋次は高速魔法を使う浦太郎に対抗するために、死神の高速移動である瞬歩を使って浦太郎に接近。

「高速移動がてめぇの専売特許じゃねぇんだよ!!」

そして、槍撃をかわしながら恋次は浦太郎の隙を見て拳打を加える。

「刀が使えなくてもな、俺にだって殴る蹴るの体術ぐらいは出来るんだよ!!」

恋次の拳打が浦太郎の頬に命中して、浦太郎の表情が崩れる。

「（よし!クリーンヒットだぜ!）」

しかし、それが恋次にとって命取りとなる。

ユーノは恋次の行動を危惧しながら浦太郎の様子を窺がった。

すると、浦太郎は暫くすると人が変わり突然憤慨して膨大な魔力を放出しながら恋次にこう言う。

「・・・・・のあああああああああ!!!!!!!このクソボケが!!!!!!!!!!」

「「「なっ!?」」」

「あ～～～あ・・・怒らせちゃった・・・」

豹変する浦太郎を見た恋次や一護は何が起こるか不安で仕方なかった。

すると、浦太郎は憤りが頂点に達すると槍の先端を変化させて砲撃モードにし、そこに膨大な青色の魔力を収束させて恋次に発射しようとする。

「一撃・・・滅殺！！！！！」

「何だよ・・・こりゃあ！！！」

恋次が危惧する中で、浦太郎は極限まで収束させた白き魔王が得意とする魔法砲撃を恋次に放つ。

「ディバイン・・・バスター！！！！！！」

砲撃の瞬間、巨大な爆発音と共に周囲の岩や地面が抉り取られていく。

その破壊力は通常のなのはと同じかそれ以上だ。

砲撃が収まり、我に帰った浦太郎が気付いたときには隣にはユーノが立っており、ユーノは砲撃の軌道をずらして恋次に直撃しないようにした。

「セーーーーーフ♪」

一方、砲撃を完全には避け切れなかった恋次は岩に激突してしまったが、そんな恋次を庇ってくれたのが金太郎と一護と吉良だった。

「・・・う・・・・・・げ。」

自身の敗北を察して、改めて浦太郎を見つめる恋次の表情は曇っていた。

「・・・畜生・・・俺の・・・負けかーーーくそ！もう一回お願いします！」

どうしても諦めきれない恋次は再戦の申し出を頭を下げて要求する。

すると、そんな恋次にユーノが思わぬことを口にする。

「オメデトさんですよ。レッスン1、クリアです。」

ユーノの意外な言葉に思わず耳を疑う恋次。

「な・・・なんでだよ!?俺、そいつに負けたんだぞ!?」

「おやァ。僕は『浦太郎を倒したらクリア』とは一言も言ってないですよ?」

「で、でもよ・・・」

すると、そんな困惑する恋次にユーノはこんなことを言って来た。

「元々浦太郎は、対管理局の白き魔王・・・高町なのはレベルの戦闘能力を持った一流の魔導師なんですよ。”斬魄刀がなくて鬼道と徒手空拳でしか攻撃手段を持たない死神だけの力”じゃどう足掻いたって勝てません。それより・・・まだ息苦しいですか?」

「・・・え?・・・あれ?そういえば・・・」

ユーノに言われて改めて体のだるさが無いことに気がつく恋次。

「つまり、既に身体がこの濃度の魔力に慣れたってことです。このレッスンはズバリ身体を慣らすこと!戦いの中で高濃度の魔力を身体に吸収させれるかどうかです。あまり知られていない事実なんですけど魔力というのは本来、ちょっとでも身体に吸収されれば僅かながらですがリンカーコアが形成されるんです。それが出来れば高濃度の魔力を受けても息が上がったりしない。」

「じゃあ、もし仮に俺の中に吸収されなかったらどうなってたんだ?」

「浦太郎のディバインバスター喰らって死んでましたかね。あれ殺傷設定でしたから。」

「てめぇ・・・ホント人事だと思って・・・!」

飄々とした態度のユーノに腹を立てる恋次だったが、一護と吉良の言葉を聞いて機嫌を取り戻す

「まぁ、何はともあれクリアできたんだしよかっただろう。」

「おめでとう、阿散井君!」

「お、おお。まぁ当然といえば当然だけれどもよ!!ああ?つーか、何で吉良はやらねんだよ!!」

「彼はこの後やってもらう予定ですよ。安心してください。さて、

吉良さんがレッスン1を受けている間に、恋次さんはこのまま・・・
」

すると、その瞬間ーーーー・・・天井から巨大な斧が下りてきて、恋次の正面の地面に突き刺さった。

「・・・なっ・・・・!?」

「このままレッスン2へと参りましょう!」

そう言うと、ユーノは金太郎に目を向けて次なるレッスンのための準備を促す。

さてさて、恋次の次なる修行とは一体どのようなものなのか!?

この続きは次回。

金太郎の愛情有る手解き

＞ｉ１２８２１―７０９＜

地球で恋次達がユーノによる修行を開始しているほぼ同時刻、第一世界ミッドチルダでは非情に深刻な事態に直面していた。

それは勿論ーーースカリエッティの脱獄である。

今のところ、目立った事件も無く束の間の平穏を掴んでいるミッドチルダではあるが、時空管理局はかなり焦ったいた。

鉄壁と言われる次元拘置所から立て続けに重犯罪者とその手下が脱獄したとなると、諸世界からの反発も然り信用問題然りと言ったところであり、焦らずにはいられない。

この件に関して、本局は直ぐに緊急会議を開きある一つの打開策を導き出した。

それはーーー・・・機動六課の再結成だ。

四年前の功績を称えて、今回は全面的に三提督の承認の下で六課の再結成が進められ、現在ほぼ同じメンバーがロングアーチに集められ、スカリエッティ捕獲に向けての対策会議が行われていた。

勿論、進行役は部隊長のはやてである。

「さて、未だスカリエッティとその一味である戦闘機人の行方は、今もって掴めていない。勿論、奴の次なる計画も今もって不明のまま。だけど、早々に見つけ出さんと・・・奴のことや、またとんでもないことを企んでるに決まってる。スターズは今回、ミッド海上から東方面全域を。ライトニングはミッド地上から西側方面全域を。シャマルは引き続きシャーリーと一緒に広域探索をお願いな。」

「「「「はい！」」」」

「了解。」

「全力で探し出すよ！」

「私も、頑張って見つけ出します。」

会議を終えたフォワードメンバーはそれぞれの隊長と共にスカリエッティ捜索に向けて動き出す。

様々な場所で情報収集と捜索活動が行われるものの、これといった手がかりも無いままただ時間だけが徒に過ぎていく。

六課前線メンバーにも上層部と同じだけの不安と焦りが積もっていく。

やがて・・・夜になって、隊舎に設けられた寮に戻った前線メンバー。

スバルは風呂から上がるとロビーでジュースを買って今日一日の反省をしていた。

「結局収穫はなし・・・か。ギン姉や他の部署にも協力を仰いでいるのに見つからないなんて・・・一体何所にいるのよもう！！」

スバルはジュースを一気に飲み干すと、空き缶をゴミ箱に投げ入れてティアナと同室の部屋に戻ろうとした。

すると、廊下を歩いていると・・・スバルは長椅子に座りながら月明かりに照らされている直接の上司のなのはを見つけた。

なのはは首から下げたユーノの顔写真が収められたロケットを淋しそうな表情で一人見つめていた。

スバルはそっとなのはに近付き話しかける。

「その人・・・ユーノ先生・・・ですよね・・・」

「え？あ・・・スバルか・・・」

「隣・・・いいですか？」

「うん・・・」

スバルはなのはの許諾を得てなのはの隣に座る。

「・・・いつも・・・そうやってユーノ先生の写真・・・見てるんですか？」

「・・・一人のときは・・・いつもだね。今にして思えば・・・ユーノ君の気持ちがよく判るよ。ずっと一人で、辛いときも淋しいときも私たちには何も言わないで、一人で抱えんじゃところは・・・出合った頃とちっとも変わってないけど、誰よりも努力してる分・・・ずっと光を求めていたんだと思う。でも、それが出来なかった。私やフェイトちゃん、はやてちゃんが自分の空を飛んでいられるように、ユーノ君は一人飛びたくても飛べないままずっと影で守ってくれていた。でも・・・結果的にそんなユーノ君を傷つけたのは・・・他でもない・・・この私だった・・・」

「そ、そんな!?なのはさんは全然悪くないですよ!!ユーノ先生だってなのはさんには何の落ち度も無いって言うに決まって・・・」

「それでも!ユーノ君の居場所を奪ったのは結果的には私なんだよ!!本当は・・・私だってずっとユーノ君の隣でずっと居たかった。変わらないままずっとユーノ君の隣で居れると思ってた・・・でも・・・変わらない人なんているはず無いのに・・・私はユーノ君なら大丈夫だって・・・勝手な自己満足に溺れてた!!!ううううう!!!!!」

なのははスバルの隣で自分を深く責め、大粒の涙を流した。

涙がユーノの写真に零れ落ちる。

スバルはこんなにも自分を責めるなのはを見たことが無く、どうすることも出来ずに困惑し続けた。

その頃、スクライア商店の地下訓練場で修行を続ける恋次は次なる

ステップへと踏みかかろうとしていた。
恋次の前に降り注がれた巨大な斧。
それを見た恋次は思わず表情を凍りつかせた。
「何だよ・・・こりゃあ!?」
「今から恋次さんにはその斧を使って金太郎と戦ってください。」
「はっ!?このバカでかい斧を持てっていうのかよ!!!正気か!?」
ユーノの常軌を逸した発言に思わず恋次は反論する。
「勿論正気ですよ。このレッスン2の課題はその斧を使って金太郎に一撃を入れること。どんな方法でもいいですか金太郎に一撃を入れればクリアです。ただし、その斧の重さはおよそ１００キロ。普通に持っても持ち上げられませんからあしからず。」
「何!!!!!おい!!てめぇさっきから聞いてれば無茶苦茶なことばかりぬかしやがって!!!んなこと出来るかよ!!!」
「御託を言ってる暇は無いですよ。ホラ・・・」
ユーノは飄々とした態度でそう言うと、恋次に警告を促す。
その瞬間、恋次に向ってその斧と同じ大きさのものを手に持った金太郎が恋次目掛けて走ってきた。

「行きますぞ！！！恋次殿！！！！」

「のあああああ！！！！！！く、来るな！！！！！！！」

巨大な斧を振り下ろす金太郎の攻撃を紙一重で回避する恋次。

間近でそれを見ていた一護は顔を引きつった。

「・・・怖えー男だぜ。まさにバケモノの類だぜ・・・」

「金太郎は情熱がありすぎるのが玉に傷だけど・・・決して悪い奴じゃないですからね。」

金太郎の攻撃を瞬歩で回避しながら反撃の機会を窺がう恋次。

「（くそ！！デケーずうたいのくせに、何て小回りが利くんだよ！？おまけに、アレほどまでに巨大な斧を片手で容易に振りやがる！！何つう怪力だ！！けど、ここで負けるわけにはいかねぇ！！そう簡単にやられてたまるかよ！！）」

恋次は意を決して自分の斧がある場所まで急ぎ、それを持ち上げようとした。

「この阿散井恋次が・・・斧なんかで根を上げるかよ！！ほおおおお！！！！！！！！！」

恋次は力いっぱい持ち手を掴んで斧を持ち上げようとした。

ところが、いくら引っ張ったところで斧は全く持ち上がろうとしない。

「えええええええええ！！！！！！！！！何だよこれ！！！！！！！！全然上がんないじゃねぇか！！！！！！」

「余所見は・・・いけませんぞ！！！！！」

金太郎は隙だらけの恋次に向って魔力を纏わせた斧の一撃を振り切った。

その瞬間、恋次は咄嗟に瞬歩で回避することに成功したが、肝心の自分の斧は金太郎の攻撃によって大破してしまい、持ち手が粉々に砕け飛んでしまった。

「だあああああ！！！！俺の斧が・・・！！！！」

恋次は砕けてしまった斧の持ち手を見上げて絶望した。

だが、その時ーーー・・・恋次は空中で舞う持ち手の部分を見てあることに気付いた。

「（落下の速度が・・・速い！？本来、持ち手の重さなんて刃の重さほど重くないはずだ・・・なのにあの速度！？それに地面に抉り込んだ持ち手・・・はっ、そうかそう言うことかよ！！）」

すると、恋次は叫びながら刃の部分だけとなった斧の下まで走り出す。

「ほおおおおおおおおお！！！！！！！！！」

そして、恋次は意を決してその刃を抜こうと引っ張った。

すると案の定恋次の思惑通り、刃だけの斧は今までの嘘みたいに簡単に抜けたのであった。

「思ったとおりだ！！持ち手のほうが極端に重くて、刃の部分だけなら重さは無いに等しい！！」

恋次はそう言うと、刃の部分を器用に使いながら金太郎に近付き隙を見て金太郎に攻撃を加える。

「へっ！持ち手が無くても、使えれば怖いものなんかねぇ！！！」

恋次の渾身の一振りが金太郎の防護服を傷つけて、それと同時に持っていた金太郎の斧も一緒に吹き飛ばす。

吹き飛ばされた金太郎の斧はやはり持ち手の方を下にし地面に食い込んだのであった。

それを見ていたユーノと一護は顔を見合わせ、恋次の勝利を認める。

「おめでとうさんです！よくアレに気づきましたね・・・恋次さん。」

「まぁな！あそこでこいつが攻撃してこなかったら、絶対に気付かなかったと思うがな・・・」

恋次は満更でもない顔を浮かべて鼻を擦る。

それを見たユーノは鼻で笑うと、レッスン２の合格を言い渡す。

「何はともあれ・・・レッスン2クリアです！」

「へっ！当然の結果だけどな！」

「何が当然の結果だよ。散々逃げ回った奴がよく言うぜ・・・」

一護が呆れた様子でそう言うと、恋次は向きになって反論する。

「う、うるせーよ！！！！てめぇだって同じことやって直ぐに出来るのか。ああ！？」

「何だと！！！もう一遍言ってみろコラ！！！」

二人は物凄い剣幕で睨み合い、火花を散らした。

すると、そんな二人を見た金太郎が顔を近づけ二人に裁きの一撃を与える。

「・・・喧嘩は・・・いけません！！！！」

金太郎は二人の頭を鷲掴みにして、二人の顔と顔をぶつけ合って二人を鎮めた。

「「どご！！！」」

これほどにも無い強い痛みに悶絶する一護と恋次。

そして、そんな二人を見ながらユーノが次なるレッスン内容を恋次に伝える。

「そんじゃ丁度いいですから・・・このまま、レッスン3へと参りましょう！金太郎、蛇尾丸持ってきて。」

「承知！」

金太郎は恋次から取り上げていた蛇尾丸を持ってきて恋次に返した。

そして、返した蛇尾丸を手に取った恋次にユーノは次のように語りかける。

「レッスン3はなんと時間無制限！！あなたの全力で僕の帽子を落とせばクリアです！」

「何！？そんな簡単なことでいいのか・・・！？」

今までの修行内容に比べれば遥かに簡単な内容だったので、恋次は呆気に取られていた。

だが、それを聞いていた一護はその内容が決して簡単ではないということを知っていた。

「恋次・・・言っておくけどコレほどまでに難しい修行は無いと思うぜ・・・悪いけど。」

「ああ？何意味わかんねーこと言ってんだテメーは？ただ帽子落としやいいだけの話だろう。簡単すぎるくらいだ！」

「いいですね。その気合・・・久々に僕も熱くなれそうですよ。」

恋次の自信満々の一言に思わずユーノも気持ちを昂ぶらせる。

やがて、広い場所と移動した二人は互いに向き合いそれぞれの武器を手に取る。

恋次は腰から蛇尾丸を抜いてユーノに向けてこんなことを言ってきた。

「てめぇは運がねぇな。この俺が本気になったらてめぇの帽子を落とすなんて赤子の手を捻るよりも楽勝だぜ。時間無制限なんて悠長なこと言ってねぇでよ！3分で片付けてやるぜ！！」

右手で指を三本立ててユーノを挑発する恋次。

それを聞いたユーノはニヒルな笑みを浮かべて持っていた杖を引き出し自身の武器を取り出す。

「・・・ーーーーそうですか。それじゃあ、3分でカタ付けてみましょうか」

ユーノの杖から引き出される細長い直刀。

さて、攻撃魔法の使えないユーノはこの剣で一体どうやって戦うつもりなのか？

ユーノの斬魄刀

＞ｉ１２６４７―７０９＜

現在、時空管理局が血眼になって探している広域次元犯罪者・・・ジャイル・スカリエッティ。

彼は現在、管理局の捜査の網を掻い潜りある場所で密かに計画を推し進めていた。

そのある場所とはーーー・・・何とミッドチルダ地上本部の地下であった。

そこに秘密裏にアジトをつくり、魔導虚と呼ばれる魔力を手にした虚と全く新しい戦闘機人の作成に勤しんでいた。

スカリエッティがそんな作業に没頭していると戦闘機人の一人で、スカリエッティを補佐するナンバーワンの称号を持つウーノからの連絡が入る。

『ドクター、妹達の強化プログラム。無事にスキャニング完了いたしました。』

「ご苦労だったね、ウーノ。あとは君だけだ・・・残りの作業が済んだらこっちへ戻っておいで。私が君の体に直接メスを入れてあげよう。」

『ありがとうございます、ドクター。ところで、クアットロから一つ良い知らせが届いておりますが・・・』

「ほう。それは是非聞かせてもらうおうじゃないか。」

『はい。先日ある異世界での調査任務のときに、ドクターが以前から捜し求めていた究極のロスト・ロギア、『アンゴルモア』の反応が顕著に出ていたそうです。』

「そうか。それは実に素晴らしい！まさかこんなにも早く探しモノが見つかるとは思ってもいなかったから大変興奮しているよ！！直ちにトーレとクアットロを向わせて、回収に急いでくれたまえ。出来るだけ隠密にな」

『はい、了解しました。』

ウーノはスカリエッティとの対話を終えると通信を切る。

通信を切り終えると、スカリエッティは一人研究室の中で不気味な笑みと笑い声を上げる。

「ふふふふふふふはははははははははははは！！！！！！素晴らしい！！！素晴らしいの一言だよ！！！管理局の愚物な局員・・・そして機動六課の雛達よ。この四年間で私がどれほどあの窮屈な穴倉の中で苦しんでいたか判るかい？この私をあまり甘く見るなよ・・・真の天才、ジャイル・スカリエッティは今こそ究極を越えるの

だよ・・・ハハハハハハはははははははは！！！！！！！」

研究室中に響き渡るスカリエッティの高笑い。

その様子を目覚めぬ新たな戦闘機人が入った無数の生態ポットだけが覗き込んでいた。

さて、場所は変わってスクライア商店。

一人留守番を任され退屈そうに欠伸をかいている鬼太郎。

「はぁ～～たく！暇で仕方ないぜ・・・くそ、亀の野郎・・・じゃんけんで勝ったぐらいで調子に乗りやがって！俺だって戦いたかったつーの！！」

すると、そんなムシャクシャしている鬼太郎の前に常連客である白鳥礼二がやってきた。

「ごめんあそばせ。おや？今日はお主だけなのであるかピーチ？」

「誰がピーチだよ！！！マリオじゃねぇーぞ！！けっ、何の様だよ鳥！？店長なら取り込み中だぞ。」

「取り込み中・・・？ん、この魔力反応と霊力はユーノ店長のものだな！珍しいな・・・あの人が直々に戦うなんて。」

「ああ。何でも護廷十三隊の隊長格が任務の為にこっちの来てる様だぜ。」

「十三隊だと!?一体誰が!?」

「行ってみれば判るだろうが!ここ降りていけば訓練場だ。」

不貞腐れた態度で鬼太郎は開かれた畳の下を指差す。

それに気付いた白鳥も一度考えた後、いても経ってもいられずになり地下訓練場へと降りていった。

白鳥が降りて言った後、鬼太郎も一瞬考え込むとやはり自分も気になったらしく「取り込み中」という看板を立てて地下へと向かう。

「だああ!!!やっぱり俺も行く!!!」

その頃、地下訓練場で腕組みをしながらユーノと恋次の戦闘を観戦している一護。

すると、そこにレッスン1をクリアした吉良が近付いてきた。

「おお、吉良。そっちは終わったのか?」

「一応、クリアしたよ。かなり時間はかかったけど・・・あっ、阿散井君のほうは?」

「ああ、今ちょうど面白れーところだぜ。ユーノが久々に刀抜いて戦ってるところだ。これ見逃した損だぜ!」

一護にそう言われ、吉良も二人の戦闘を一緒に観戦する。

さて、話題の中心のユーノはというとーーー・・・杖から引き出し

た直刀型の刀を使って次々と硬い岩を粉々に砕いていく。
攻撃をギリギリで回避しながら恋次はユーノの剣腕を素直に褒める。
「や・・・やるじゃねーか！そんな細せー剣でよ！」
「ありゃ。褒められちゃいましたね。参ったな♪でもだからと言って手加減はしないですよ♪」
ユーノは飄々とした態度で逃げ回る恋次に向って刀を何度も振り下ろす。
恋次は逃げながら負け惜しみのようにこう言う。
「望むところだちくしょうめ！！」
その時、恋次はふとユーノの剣に関してこんな疑問を抱いた。
「（・・・待て。待て待て待て？死神と虚を斬れるのは斬魄刀だけの筈だ？あの刀はさっき、あいつが杖から引き出したもんだ。斬魄刀である筈が無え！！おそらくは魔導師の使うデバイスって奴だ！だったら斬られても何ともない筈ーーーーー）」
恋次はそう思い、後ろを振り返った瞬間・・・ーーーユーノの斬撃が頭から肩にかけて掠った。
その瞬間、恋次の身体から流れ出る僅かな血吹雪。
「え？」

そんな恋次を見ながらユーノは溜め息を吐き、低い声でこう言う。

「気を緩めましたね。”僕が持ってるんだからあれは斬魄刀じゃなくて、デバイスだ。””だから斬られても平気だ”と？つくづく甘い。」

そう言うと、ユーノは握り締めた自分の剣に向かってこう言った。

「月光せよ、『晩翠（ばんすい）』」

すると、ユーノの刀は不気味な音を立てながら徐々に姿を豹変させていき、それを見ていた恋次は愕然とした。

「なっ・・・・・・・・・！」

やがて、刀身を深緑色を発光させながら刀の形がまるでなのはのレイジングハートのような装飾を思わせるようなものへと変わり、柄の数箇所にエメラルドが埋め込まれた鍔のない直刀型の斬魄刀が出現した。

「正真正銘僕の”斬魄刀”ですよ・・・こいつはね。」

ユーノの斬魄刀を初めて目の当たりにした恋次はあまりにも突然のことに頭がついていかなかった。

そして、暫くの沈黙が流れた後漸く言葉を発する。

「・・・斬魄刀の・・・・・・解放だと・・・」

「そう。死神にだけに許された斬魄刀戦術の第一段階、『始解（しかい）』。

そしてこれが・・・”彼(こいつ)”の名前。」

ユーノは驚愕する恋次に向けて刀身を見せつけ、晩翠に声をかける。

「いくよ、『晩翠』。」

その瞬間、恋次のいた巨大な岩場を晩翠の一振りで以って粉砕する。

その衝撃を予想した一護たちは安全な場所へと避難する。

「何て破壊力だ!?これが本当に元管理局魔導師の実力なのか!?」

「何言ってやがる?あいつの恐ろしさはこんなもんじゃねぇよ!」

その様子を影で見ていた金太郎や、また違う場所で観戦していた鬼太郎と白鳥も手に汗握る状況であった。

衝撃によって、後ろに勢いよく飛ばされた恋次は体制を立て直して、自身も斬魄刀を解放する。

「野郎!咆えろ、『蛇尾丸(ざびまる)』!」

蛇腹刀の形状になった割と巨大な刀を使って、恋次は向って来るユーノに攻撃を開始する。

「せりゃあああ!!!」

蛇尾丸の刃節をコレでもかとばかりに延ばしてユーノに斬撃を与えようとする恋次だったが、ユーノはニヒルな笑みを浮かべると目の前にミッド式の魔法陣を展開して斬撃を弾き飛ばしてしまう。

ユーノ・スクライアの得意とする防御魔法の一つ、ラウンドシールドである。

「なっ!?防御魔法!?」

「ストラグルバインド!」

すると、恋次と蛇尾丸の周囲に新たに魔法陣が展開され、そこからユーノの得意とする拘束魔法であるストラグルバインドが恋次の体と蛇尾丸の刃節を絡め取る。

「な!?何だこりゃあ!?」

全く身動きできずにストラグルバインドの餌食になる恋次。

そんな恋次を見たユーノは今度は刀を持つ手とは逆の手で詠唱破棄した鬼道を放つ。

「破道の五十八　『?嵐(てんらん)』」

ユーノの手から放たれる巨大な竜巻が、抵抗むなしく恋次に襲い掛かる。

「莫迦な!?詠唱破棄の鬼道だと!?」

竜巻を直撃した恋次はストラグルバインドが切れると同時に吹き飛ばされてしまう。

「のあああああ!!!!!!」

岩場に激突し、途轍もない轟音を上げる訓練場。

吉良はユーノにこんな才能があるとは思ってもいなかったので、目を疑った。

「・・・阿散井君が・・・一方的にやられてる・・・!?（何て人だ・・・確かに一護君からは、死神の力を手に入れたときに多少の鬼道は教えたと聞いていたが、五十番台の鬼道を詠唱破棄で・・・・・・しかもこの威力!!その上結界魔導師である彼にとって拘束術や防御魔法はお手の物。これで”才能がない”なんて言われたら・・・誰だって耳を疑うよ!）」

ユーノは無言の状態で砂埃の上がる岩場に近付き恋次が現れるのを待つ。

すると、その時・・・膨大な量の霊力が噴出し、砂埃の中から巨大な骨の蛇が現れた。

砂埃が完全に晴れると、恋次がこんなにも早く自らの奥の手を発動させていた。

「・・・卍解・・・『狒狒王蛇尾丸（ひひおうざびまる）』。」

恋次の卍解を始めて目撃したユーノだったが、不思議なことに全く慌てた様子も無く冷静にそれを見つめていた。

対して、卍解を発動させた恋次を見た一護と吉良は驚くばかりだった。

「おいおい！ユーノ相手に卍解かよ！？何もそこまで・・・！！」

「阿散井君！少し手加減というものを！！」

そんな二人の言葉を聞き流して、恋次が次のように言い返す。

「うるせーよ。こいつはてめぇらの思ってるようなそんな甘い奴じゃねぇんだよ。一過ぎ縄じゃこいつの帽子を落とすなんてことは出来ねぇ。隙を見せれば、逆にこっちがやられちまう・・・せめて、全力全開でぶつかってやるのが礼儀ってもんだろうが！！！！」

恋次は蛇尾丸を操りユーノに向って攻撃を開始する。

蛇尾丸の攻撃を防御魔法で受け止めながら後ろに下がり続けるユーノ。

「全力全開・・・か。いいですねその言葉・・・僕の大好きな女性（ひと）の言葉と同じだ。」

そう言うと、ユーノは瞬歩で移動しながら多重の拘束魔法を展開し、蛇尾丸の動きを止めようとする。

それを見た恋次はほくそ笑むと、ユーノにこう言う。

「同じ手が二度も通用すると思うなよ！！『狒骨大砲（ひこつたいほう）』！！」

バインドで拘束される前に恋次は蛇尾丸の口から赤い霊力の砲撃を放ちユーノに攻撃する。

「これでてめぇの帽子は落とした！レッスン3もクリア・・・」

すると、その瞬間・・・――ユーノは不敵な笑みを浮かべ刀を天に翳し、こう叫んだ。

「輝け、『晩翠』！！」

ユーノは崖の上から天に翳すように晩翠を振り上げると、自身の霊力と魔力を掛け合わせた技・・・『翡翠斬（ひすいざん）』を狒骨大砲に向けて放つ。

深緑色の斬撃は狒骨大砲と衝突すると、互いに威力が溶け合い技と技は相殺されてしまった。

その光景を見た恋次や吉良は驚きを隠せなかった。

「何！？始解の技だけで・・・！？」

「阿散井君の卍解の技を・・・相殺させた！？」

驚愕する二人に対して、実の師匠である一護は特に驚いた表情も見せず率直な感想を口にする。

「やっぱ天才だなユーノは・・・魔法と霊力をあそこまで使いこなさせる魔導師は、多分あいつくらいしかいねぇな。」

ユーノの実力に改めて賞賛をする一護と、驚くしかない恋次と吉良。

その後、恋次とユーノの壮絶な戦いは夜にまで持ち越され今尚戦いは続けられていた。

だが、状況は明らかに恋次のほうが一方的に不利だった。

殆どの霊力を消耗してしまい、卍解を使っていられるのも最早限界に近い。

息が上がりこれ以上とばかりの多量の汗を流す。

その一方でユーノはまるで疲れなど全く見せずに、平然と恋次の正面に立っていた。

「はっ、はっ、はっ、はっ、くそ!!」

「・・・3分でカタ付けると言ったのは何所のどなたでしたっけ？既に3時間以上は経過していますよ。」

「はっ、はっ、はっ、はっ、う・・・うるせーよ・・・」

「ふ～～～う。よく考えもせずに無闇やたらと霊力を消耗したのが大きな間違いでしたね。どうしますか？まだ、”その状態”で向ってきますか？なに、僕の帽子を落とすだけだ。そこまで難しい話じゃない。だけど、それはもう度胸や勇気じゃないってだけの話。先に言っておきましょうか。」

すると、ユーノは全身から恋次でさえも恐怖するぐらいの膨大な霊圧と魔力を同時に発生させて冷淡な口調でこう言う。

「まだその卍解（おもちゃ）で僕と戦う気なら、僕はあなたを殺します。」

そのユーノの表情と威圧感を感じ取った恋次は思わず恐怖で逃げてしまった。

「（ヤベー死ぬ!!殺されちまう!!本当にっ!!）はっ!!」

逃げ回る恋次の下にユーノが隣に近付き、斬撃を加えようとする。

恐怖で体が思うように動かせない恋次と、鬼の如く恐怖を与えるユーノ。

「（情けねー!何が三番隊隊長だ!?何なんだ、俺は?何故逃げる?そんなものだったのか、俺の”覚悟”なんてのは?全く。救いようの無い野良犬だ・・・俺は・・・）」

恐怖で精神を支配され、周りがまるで見えなくなってしまっている恋次。

すると、その時ーーー・・・状況を見ていた吉良が恋次に喝を入れるつもりで次ぎのように語りかけた。

「何をやってるんだよ、君は!!」

「なっ!?吉良!!」

「君がここで負けたら、また一人の欲望の為に傷つく人が増えるんだぞ!!君は言ったよな!!”俺が隊長になった暁には、金輪際誰の涙も見せない”って!!あの言葉は、嘘だったのか!!!!」

すると、吉良の言葉を聞いた恋次は我に帰り恐怖を捨て去ると、その場に立ち尽くした。

微動だにせずに立ち尽くす恋次を離れた場所で見守るユーノと、そ

れを見守る一護と吉良。

二人の様子を岩場の影で見ている金太郎や鬼太郎達。

「おい・・・何だよ?二人とも止まっちまったぞ・・・!?」

立ち尽くす恋次を見ながらユーノは静に剣を構える。

その間に、恋次は心の中で自分の覚悟をもう一度確かめていた。

「(そうだよな吉良・・・何をびびってるんだ俺は・・・びびることはねぇ!ただ堂々と胸を張って・・・前に踏み出せばいいことじゃねぇか!)」

覚悟を決めた恋次から発せられる、これまでにないほどに巨大且つ純粋な霊圧。

それを見ていたユーノもほくそ笑む。

恋次は全身全霊の力を込めて最後の一撃を後ろのユーノに向けて放つ。

「いくぜ蛇尾丸・・・こいつが俺達の全力全開だ!!『狒王絶波(ひおうぜっぱ)』!!」

狒王絶波ーーー・・・恋次が隊長になって暫くして、蛇尾丸との修行の末に辿り着いた最大必殺技。

全霊力をひとつの巨大な砲撃に変換することで、全てのものを粉砕するまさしく一撃必殺の大技。

その大技がユーノ目掛けて発射された。

危険を感じたユーノは直ぐに晩翠を水平に立てて事態に対処する。

「鎮め！『晩翠』！！」

暫くして、砲撃が収まった瞬間ーーー・・・空中には破損したユーノの帽子が舞を舞うかのように徐にユーノの傍に落ちてきた。

ユーノは晩翠の能力を使って、全身を緑色の高位結界で包み込んで砲撃から身を守った。

「・・・ふう・・・この”翡翠の殻”が無ければ、上半身全部は持っていかれてたかな・・・」

そう言うと、ユーノは結界を解いて傍に落ちていた帽子を拾い上げて埃を掃う。

「・・・やれやれ・・・帽子も・・・壊れちゃったな・・・」

ユーノは壊れた帽子を被ると、全身の力を使い切った為疲れてその場で寝てしまっている恋次を見ながらこう呟いた。

「しかし・・・まさか最後の一撃がここまでとは・・・・恋次さん・・・あなたはなのは並に恐ろしい死神(ひと)だ・・・」

そして、ユーノはニヒルな笑みを浮かべて目的達成の一言を告げる。

「レッスン3．クリアです！」

ミッドに向う

＞i1265—709＜

七日間のユーノとの壮絶なレッスンを終えた恋次と吉良は、ユーノ達がミッドチルダへの道を開く準備を整える間、残りの三日間を黒崎家で過ごすことにした。

織姫は二人を機嫌よく歓迎してくれたものの、一護は内心かなり不機嫌だった。

それもその筈だーーー・・・吉良はともかくとして恋次の図々しい態度が一護のストレスをどんどん膨れ上がらせているのだから。

恋次は鯨飲馬食の言葉があるように、織姫の作っ料理を貪り食いつくす。

「うめぇ!!井上、近頃料理の腕上げたんじゃねぇのか!?」

「えへへ♪こう見えても料理の腕には自信があるからね!これぐらいは当然だよ!!ささ、吉良さんも遠慮せずにどうぞ!」

「あ・・・そうですか・・・じゃあお言葉に甘えて。」

恋次とは対照的で、脇前を弁えている吉良はかなり遠慮気味ではあった。

そんな吉良を見た恋次が食べることを促す。

「そうだぜ吉良!遠慮するなよ!!ちゃんと喰っておかねーと、あっちに着いたら貧血でぶっ倒れるぞ!」

しかし、そんな恋次の図々しい態度についに一護の堪忍袋の緒が切れた。

「てめぇは少し・・・遠慮しろボケ!!」

一護は食いかけの恋次の顔面を思いっきりパイの上へと押し付けた。

それに腹を立てた恋次は、一護と壮絶な喧嘩を始める。

「てめぇ、一護!!!!!よくもこの俺様の顔に泥を塗りやがったな!!!!!」

「泥じゃねえだろ!!!!パイのクリームだろうが!!!!!!!」

その様子を呆然と眺める吉良とコン。

対する織姫は何だか楽しそうな表情だった。

「やれやれ・・・あの二人にも困ったもんだね・・・」

「バカは幾つになっても直らねーな、こりゃ・・・」

「でも、何だかんだ言って二人ともとっても仲良しだと思うな。まるで、昔を思い出すな・・・」

「・・・ふん。そうだね・・・たまには良いかもね。」

「まっ、今日のところは多めに見といてやるか。」

そんな感じで黒崎家の一夜は騒々しくもあるが、無事に終えていくのであった。

一方、スクライア商店の地下訓練場ではユーノと金太郎がミッドチルダの昨今の状況と時空管理局の動きを入念にチェックしながら、適切な転移ポイントを探していた。

「やはりスカリエッティ脱獄の件もあって、次元移動が厳しく規制されていますね・・・どうなさいますか店長？」

「確かに、本局も地上本部もかなり優秀なサーチャーを使っているようだけども、これと言って問題は無いよ。魔導師としての僕の力だけなら無理だったけど、今の僕にならそれも解決できる。」

「では・・・”あれ”をお使いなさる気ですか？」

「ああ・・・金太郎・・・”次元の扉”を使うよ・・・用意手伝ってくれるかい・・・？」

「承知！」

やがて、三日後の晩。

ユーノからの指示が恋次達の下に届き、一護と織姫、コンと共にリビングの窓を開けながら待機をする恋次と吉良。

「・・・なぁ・・・これでいいんだよな・・・」

恋次は言われたとおりに窓を開けるが、内心かなり不安が付き纏っていた。

勿論、それは吉良自身も同じであった。

「うん。彼からはそう言う指示が出てたけど・・・」

「にしても・・・」

一護はそう言うとユーノが連絡してきたときの内容を今一度思い出す。

〈三日後の午前1時！マドを開けて待っててくださいね！一護さんの家の！〉

「・・・俺はどうも嫌な予感がバシバシするけどな・・・」

「そ、そんな!?考えすぎだよあなた。ユーノさん、別に悪い人じゃないでしょう。」

「いや・・・それは分かってるんだけどよ・・・あいつこの四年の間で性格大分変わっちまったからよ・・・浦原さんみたいに・・・」

「よりもよって厄介な人みたいな性格になっちまったな・・・」

「同情するよ・・・それにしても・・・いい風だな・・・」

そう言うと、吉良は窓から入ってくるそよ風をその身に受けながら浮かぶ満月を感慨深そうに仰ぎ見る。

それにつられて一護や恋次達も同じように月を眺める。

「・・・そうだな・・・あ?」

と、その時・・・恋次は前方から飛んでくる奇妙な物体に目を向けた。

その物体はこちらに近付き、よく見てみるとそこにはユーノの顔と「スクライア商店」と書かれたロゴが印刷されていた。

「な、何だ!?」

「まさか召集か!?」

「って呑気なこと言って暇・・・!!」

一護がその言葉を口にした瞬間、その弾は気味の悪い音を立てて血色の液体を出しながら壁へと激突した。

「げっ!!この展開は・・・もしや!?」

そして、血色の液体が徐に下へと流れ出すとーーー・・・そこに浮かび上がってきたのは!?

「「「・・・なっ・・・?」」」

〈これから直ぐに（スクライア）商店前に来られたし〉

ダイイングメッセージのような形で書かれたユーノからの召集サインだった。

しかし、その気味の悪いものを見て絶叫しないものは誰ひとりいなかった。

「「「「「ギャーーーーーーーッ!!!」」」」」

恐怖の余り恋次達は全員一護の背中に隠れて怯える。

「やっぱりだ!!!な・・・何してくれてんだよあの野郎!!人ん家の壁に!!!これじゃあまるっきり浦原さんと変わんねぇじゃねぇか!!!」

「一体コレは!?惨殺現場のダイイングメッセージじゃねぇか!!!」

すると、そんな恋次の言葉を耳にした織姫はふとこんな事を言って来た。

「あ!恋次君、駄目だよそんなありきたりなこと言っちゃ!ツッコミの才能がないって言われるよ!」

「あ?何だそりゃ・・・ん?」

すると、恋次はP・Sと書かれた部分を見つける。

「何だ・・・こりゃあ・・・?」

「追伸のようだぜ・・・え~~と何々・・・?」

コンは織姫の肩の上で追伸の部分を読んでいく。

〈P・S. 今、これを見て『そんなありきたりなこと言ったらツッコミの才能がない何ていわれる』と思ったり『ダイイングメッセー

ジみたい』などと思った人は・・・漫才の才能がないですよ♪〉

「ガーン！！！」

「「やかましいわっ！！」」

思わぬ一言に意気消沈する織姫。

それとは逆に怒りでソファーの上のクッションを壁にぶつける一護と恋次。

その後、一護の車に乗せられて織姫とコンも同行して恋次と吉良はスクライア商店へと向った。

店の前に着くと、ユーノが店の前に立って全員の到着を待っていた。

「おや？全員時間ピッタリに到着ですね！結構、結構♪」

「当然だろう。そのために此処へ来たんだからな。」

「準備のほうは・・・整ったんですか？」

「ええ、勿論。ささ、立ち話も何だから一度店の中へ入ってくださいね。ちゃんと聞いてくださいよォ。でないと、ミッドチルダに着く前に管理局に捕まることになる。」

ニヒルな笑みを一護達に向けるユーノ。

恋次達はその言葉の意味が気になったが、特に触れずに言われるがままに中へと入っていった。

地下訓練場に降りた一護達だったが、そこでやはり織姫が浦原商店の地下訓練場に始めてきた時と同じようなリアクションを取る。

「・・・す・・・すごーーい!!店の地下にこんなでっかい空間があったなんて!かっこういい!秘密基地みたい!!浦原さんとこにも負けないや!!」

「そうか?」

すると、それを聞いていた金太郎が歓喜の涙を流しながら織姫の手を握り締める。

「・・・す・・・素晴らしいリアクション・・・!この金太郎、いたく感激いたしました・・・!」

「えへへーーー♪どうもどうも!」

「お前・・・相変わらず初対面の人とかと仲良くなるの上手いな・・・」

一護がそんなことを口にすると、ユーノは手をたたきながら全員の注意を自分に向ける。

「ハイハイ皆サーン!こちらにちゅうもーーーく♪ではいきますよーーー♪ほい!」

ユーノが指を鳴らした瞬間・・・一一一空間から現れる巨大な扉。

恋次達はその扉を見て、一瞬驚愕を覚える。

「さ。これがミッドチルダへと続く道。その名も〝次元の扉〟。いいですか、よーーーく聞いといてくださいね。と、その前に・・・」

そう言うと、ユーノは仕込み杖を使って恋次と吉良の義骸から本体を取り出す。

いきなりのことに恋次はユーノに腹を立てる。

「てめぇ！やるなら一声かけろよな！！」

「まぁまぁ阿散井君。この際気にしないほうが・・・」

「ははははははは♪続けますよ！」

扇子を広げながら一人飄々と笑い声を上げるユーノ。

そして、恋次たちのほうへ振り返ると・・・ユーノは真面目な表情になり説明を始める。

「・・・この扉は、通常の次元転移システムを遥かに上回る優れもので、魂魄だろうと何だろうと通すことが出来ます。しかも、行きたい場所がミッドでなくても、その気になれば尸魂界へ行く事も出来ます。」

「ホントかよそれ！？でも何で態々そんな面倒なもん使う必要があるんだよ？お前の転移魔法でやれば済む話だろ？」

話を聞いていた一護が疑問に思ったことを口にする。

「そうしたいのは山々なんですが、現在時空管理局の本局と地上本部が各世界でスカリエッティ捜索の為に高性能な防衛線を張っていて、転移魔法を使って不法に侵入してくる魔導師やその他不確定要素を猫荻捕らえてしまっているんです。つまり、普通に転移魔法を使えば自ずと判るとおりみんな捕まってしまいます。そこで次元の扉！こいつは管理局の捜査網でも絶対気付かれないような特殊な結界を全身に纏ませて、無事に転移をすることを可能にした優れものなんですよ！」

「・・・・・つまりこれを使えば僕達は安心して・・・」

「そう！そのまま管理局にも見つからずにミッドチルダへ入ることが出来るんです！」

吉良の質問を聞いたユーノは疑問に答える。

それを聞いた恋次が浅はかな態度で勝手に乗り出そうと足を進めようとした。

「よーーーし！わかった！そんじゃさっそく乗り込むぜヘッ！！！」

「人の話は最後まで聞きましょうね♪」

ニコニコとしながらユーノは杖で恋次の腹部に打撃を与える。

腹を押えながら悶絶する恋次を見て、一護達は哀れに思う。

「問題は『時間』なんです。我々がこの扉を開いて管理局に見つからずにミッドチルダへと繋いでいられる時間は・・・もって5分！」

その言葉を聞いた恋次達は唖然とした。

「そ・・・そんなんで間に合うのかよユーノ？」

「普通は無理ですね♪」

「何・・・！？」

一護の不安の声を聞いてもあっさりととんでもないことを返答するユーノ。

「元々無茶な話ですからね・・・精一杯引っ張って5分。その間に向こうに辿り着かなければ・・・あなた達は、時空管理局に身柄を拘束されてしまう。言っときますけど、時空管理局はあなた方の思ってるような生優しい場所じゃない。魂魄の姿の死神でも、発見されない可能性はなくはないんです。」

「・・・ど・・・どうすれば・・・」

そんなユーノの話を聞いていた吉良が不安の声を上げると、それを聞いていた鬼太郎が徐に近付き自身の斬魄刀を肩から下げながらこう言ってきた。

「前に進めばいいだけだろうが。」

「えっ？き・・・君は・・・！」

「御託は言い。ミッドチルダへの案内は俺と亀がつとめる。てめぇらは黙ってついて来ればいい。先に言っとくが、前に進もうとする意思の有る奴だけ来い。」

「先輩の言う通り。迷わず、恐れず、立ち止まらず、振り返らず、残していく人達の想いを馳せず、ただ前に進むだけ。それがあなた方には出来ます？」

すると、浦太郎の言葉を聞いた恋次は鼻で笑うと、前に出て来て自信に満ちた表情で応える。

「・・・へっ！何寝ぼけたことぬかしやがる。ここに集まった時点で俺達の心は決まってんだよ！」

「分かっていますか・・・負ければ二度と向こうにも帰れなくなりますよ。」

「隊長格の実力を舐めるな。勝ちゃいいだけの話だろ！」

恋次の覚悟の籠もった一言を聞いた一護やユーノ達は安心し、浦太郎も笑みを浮かべる。

「・・・その通りです！」

暫くして、ユーノと金太郎は互いに向き合い扉を開けるための最終段階に入った。

「用意は良いですか？開くと同時に駆け込んでくださいね。」

「ああ。」

「はい！」

「「了解！」」

四人の返事を聞くと、ユーノは早速金太郎と共に魔力を注ぎ込んでいく。

「いきます！！」

「承知！！」

その瞬間、ユーノと金太郎の魔力が注がれ・・・次元の扉が徐に開かれる。

開かれると同時に恋次、吉良、鬼太郎、浦太郎の四人は中へと入り込んだ。

そして、次元の扉が徐に閉じられた。

ユーノは扉のほうへ手を触れると、とても強い反動を一瞬感じて直ぐに手を放した。

「・・・・・ーーーーーー」

そんなユーノの様子を見た一護と織姫は暫くの間を置いた後、次のように声を掛ける。

「・・・本当に・・・お前は行かなくて良かったのか？知ってんだぜ・・・お前がいつも懐にしまってるロケットに、お前が一番大切にしてる奴の顔写真が入ってるの・・・」

「後悔は・・・してないんですか・・・ユーノさん？」

すると、二人の話を聞いていたユーノは自嘲気味な様子で次のように語る。

「ーーー所詮モグラはモグラ・・・天使は天使・・・最初から、僕となのはは相容れない存在。後悔なんて、とうの昔に捨てましたからーーー任せましたよーーー・・・恋次さん・・・吉良さん・・・なのはやみんなにもしものことがあったら、僕の代わりに守ってくださいね。」

全てを恋次達に託したユーノであったが、本当に彼はこのまま動かずに入るのであろうか!?

魔導虚、来襲

＞i12872―709＜

ユーノの導きにより、次元の扉の中に入った恋次達はミッドチルダへと向けて移動を開始していたが、扉の中は二人の想像を絶するものであった。

怪しげな壁が道の両側にあり、前へ前へと進むに連れて壁がその場から崩れ去っていくのが分かる。

恋次や吉良はそんな光景を見るや否や、冷や汗をかく。

「ど・・・どういうことだ!?壁が追いかけてくるぞ!?」

「俺たちが走り抜けたところからどんどん崩れいきやがる!!」

あまりに奇妙な光景に驚愕する恋次と吉良。

そんな二人に説明をする浦太郎。

「次元の扉はどの世界へも繋がる一方、内部はとても不安定で常にこうなんですよ!死神でいうところの”拘流(こうりゅう)”と同じだと考えてください!」

「くそったれ!!それじゃ万能なんて言葉使うなよな!!」

ユーノの発言に今になって腸が煮えくり返る恋次であったが、鬼太郎はそんな恋次に喝を入れる。

「振り返る暇があるなら一歩でも前に進め!次元の壁に飲み込まれたらそれこそお仕舞いだぞ!!」

と、その瞬間ーーー・・・突然後ろの壁が雪崩のように崩れ落ち、全員の動きを鈍らせた。

「「うあああ!!」」

慌てて前へと進む恋次達だったが、一人出遅れた浦太郎が着けていた自前のマントを壁に絡め取られてしまい、身動きが出来なくなった。

「え?うわぁあ!!せ、先輩!!」

「亀ッ!!」

「浦太郎!?バカが!石田みたいな格好の服着てくるからだ!!」

恋次は呆れながらも腰の刀に手を触れて抜刀をしようとしたが、それを直ぐに止める鬼太郎。

「バカ、止めろ!!斬魄刀は使うな!次元の壁はエネルギー体を絡め取る!お前がそいつを振るえば、それごとてめぇも捕らわれるぞ!!」

「なっ・・・何だと!?ち!なら仕方ねぇ・・・・!!」

それを聞いた恋次は直ぐに刀から手を放すと、急いで浦太郎の下まで駆け寄り絡め取られたマントを強引に手で引き千切り、浦太郎を救出する。

「あ・・・ありがと・・・うわー!!」

浦太郎のお礼も聞かずに、恋次は浦太郎を肩に担いだまま全速力でその場から走り出す。

「礼を言うのは無事にミッドチルダに着いてからだ!とにかく行くぞ!」

「あ・・・はい・・・って、お・・・降ろして下さい恋次さん!自分で走れますから!早・・・!?」

恋次の肩の上でそう言っていた浦太郎でだったが、その時、後ろのほうで浦太郎は何やら気味の悪いものを目撃した。

「ま・・・待ってくださいよ・・・・・・はっ!!先輩、アレ見て!!」

「!!」

浦太郎にそう言われて後ろを振り返ってみたらーーー・・・そこからは骸骨のような姿をしたガス状の物体が気味の悪い声を上げながら、途轍もない速さで近付いて来た。

その姿を目撃した恋次達は思わず絶句し、慌てて速度を上げそのま

ま前へと進んでいく。

その最中、恋次は鬼太郎に近付いてくる物体の正体を問いただす。

「な・・・何だこいつは!?」

「『ポルター』だ!!一月に一度現れるここの”掃除屋”だ!何もこのクソ忙しいときに出る必要ねぇだろうが!!!とにかく逃げろ!!こいつはてめぇらの言うところの”拘突(こうとつ)”並に速えーぞ!!」

迫り来るポルターの追っ手から必死に逃げ続ける全員だった。

やがて、全速力で逃げているうちに前方から一つの光が差し込、みそれが出口であると直ぐに分からせた。

「!?あれは・・・!!」

「急げ!あれが出口だ!!」

出口に向けて一目散に走り出す恋次達だったが、それを邪魔するかのようにポルターも更に速度を上げて全員の後ろギリギリまで近付いてきた。

「せ・・・先輩ダメだ・・・!!追いつかれる・・・!!」

「弱音を吐くんじゃねぇー!あともう少しだけ・・・」

弱腰の浦太郎に鬼太郎が喝を入れたその瞬間、吉良は意を決して後ろに振り返ると、ポルター目掛けて鬼道を発動させるのであった。

「縛道の八十一　『断空（だんくう）』！！」

吉良の放った断空がポルターの動きを封じて、その間に全員は出口の中へと飛び込んだ。

強い光が徐々に晴れ、気がついた時には全員草原のような場所に寝転がっていた。

「いてて・・・ど、どうやら・・・助かったみてーだな・・・！？」

「そ・・・そのようだね。」

「痛・・・全く・・・いきなり最悪な出だしだよ・・・酷い目に遭ったな・・・予想外だ。こんなにも早く・・・まさか替えのマントを使う羽目になるなんて・・・」

浦太郎は暗鬱な表情をしたまま懐から替えのマントを取り出し、それを着こなす。

その光景を見た恋次と吉良は同じことを思った。

「「（こいつ・・・替えまで持ってきてたのか・・・）」」

「でもよかった。誰も怪我なんかしていないようだし。」

「良い訳あるかこのボケ！！！」

安堵の溜め息をついた吉良であったが、その言葉に腹を立てたのは鬼太郎で、鬼太郎は吉良の顔面に怒りの鉄拳を入れた。

あまりの理不尽な態度と猛烈な痛みに吉良は顔を押えながら悶絶する。

「・・・・・・・・・・!!!」

そんな吉良を見ながら、鬼太郎はまさに怒髪天を衝くほどの怒りで満ち満ちていた。

「おい、てめぇ・・・俺の話を聞いてなかったのか!?ポルターに触れたのが障壁部分だったから良かったものの、霊体そのものに触れたたら死んでたんだぞ!!」

「・・・す・・・すまなかった・・・」

まるで上司に叱られたかのように、項垂れてしまう吉良。

それを見た恋次はそんな鬼太郎に弁解の言葉を掛ける。

「いいじゃねぇか、そんな怒らなくても!結果的には吉良のおかげで全員無傷だったんだからよ!」

「てめぇな・・・ことの重大性が分かってねーようだな・・・おい!!」

鬼太郎はそんな恋次の言葉を聞いても、未だに怒りが収まらないままであった。

すると、浦太郎が何かに気付いた。

「！お！先輩・・・どうやら目的地に着いたみたいだよ。」

浦太郎の言葉を聞いた恋次達は浦太郎が指差すほうへと目を向ける。

その眼前に広がってきたのはーーー・・恋次や吉良が今まで見たいことの無いような高層ビルが立ち並び、空には何らかの惑星が浮かんである不思議な雰囲気を漂わせる大都市だった。

恋次達がいた場所は、ちょうどミッドチルダの町並みを一望出来る高台であった。

「こ・・・ここがミッドチルダか・・・！？」

「まるで・・・未来都市そのものだ・・・！？」

違いすぎる文明の高さに思わず言葉を失う二人。

そんな二人に向って鬼太郎が以前、ユーノや浦太郎から聞いた話を下にこの世界の説明を始める。

「まぁな。ここから見えるのはミッドチルダの首都クラナガン。ミッドの政治と経済の中心地で、人口も軽く億を越す。数々の観光スポットが立ち並び、その中央には時空管理局地上本部が設置されている。」

鬼太郎はそう言うと、町の中央に位置する一際巨大な建物に指を向けた。

「あの一際デケーのか・・・」

恋次達は管理局地上本部を見ると、思わず眉をひそめる。

と言うのも、恋次を始め死神と魔導師とは形は違えど巨大な組織の一員に間違いは無い。

あまり知られていない事実だが、古くから護廷十三隊と時空管理局は親交のあることが無限書庫の文献や、大霊書階廊の強制収用記録の中にちゃんと残っている。

しかも、時空管理局本局のミゼット・クローベルと護廷十三隊総隊長の山本元柳斎は５０年ほどにとある事が切欠で知り合っており、旧知の仲なのだ。

「ちなみに、亀は地球の出身でありながら水流魔法に秀でた陸戦魔導師でな、四年前までは時空管理局で働いていたんだぜ。所属は首都防衛隊の陸戦部隊だったか？」

「まっ、とっくの昔に辞めちゃったけどね・・・」

「へえ・・・あっ！そうだ阿散井君！これからのことだけど・・・」

「ああ、そうだな。取り合えず、時空管理局の連中には悟られずに行動したいもんだな。ここからは、より慎重に行動するぜ。一先ず今はこの世界のことについての情報散策からだ。二手に分かれて行動しよう。北側は吉良と鬼太郎。南側は俺と浦太郎で回る。」

「分かった。」

「了解♪」

「よし！そんじゃいっちょ行くか！」

全員はそう言うと、二手に分かれて情報散策を開始するために瞬歩やソニックムーブで移動していったのであった。

その頃、時空管理局地上本部の地下深くのスカリエッティの秘密のアジトではーーー・・・スカリエッティと戦闘機人四名と魔導虚の何体かが集まっていた。

「ふふふ・・・集まったようだね・・・感謝するよ、機人四天王諸君・・・」

スカリエッティがそう言うと、機人四天王の一人で顔に似合わず残忍な謀略家のナンバーフォー、クアットロが笑みを浮かべながら返答をする。

「あら～～！ドクターのお呼び出しでしたらいつでも参上いたしますよこのクアットロ♪そうですわね～～トーレ姉様？」

クアットロにそう言われると、戦闘機人一の好戦的な性格と機動力を持ち合わせたナンバースリー、トーレが答える。

「ああ。ドクターから賜ったこの新たなる力・・・全身から溢れ出る魔力と霊力！漲る無限の可能性！これで従わないというのが可笑しい！」

「そうねトーレ。しかし、ドクター・・・この私にも力をお与えになってくださるとは・・・夢にも思いませんでした。」

「ウーノにはいつも世話になっているからね・・・私からのほんのささやかなプレゼントだよ。有難く受け取ってくれたまえ。」

「はい。ありがとうございます・・・ドクター。」

「・・・・・・」

この無言のまま他の三人とは一際違っているのは、戦闘機人の中でも随一の殺戮能力と潜在能力を秘めた新型の男の戦闘機人、ファイであった。

機人四天王とはーーー・・・スカリエッティと共に刑務所を脱獄した三人の戦闘機人・・・ウーノ・トーレ・クアットロと、新しく製作された男の戦闘機人、ファイを加えたメンバーのことだ。

「・・・・・・・・・」

その中でもやはり、ファイは会議中にも拘らず一切声も出さずに無表情を浮かべたまま。

そして、そのまま会議をほったらかすと徐にその場から動き出し、魔導虚の一体を引き連れて何処かへと行ってしまった。

「ん?って!こらファイ!!まだ会議の途中だぞ!!戻って来い、ファイ!!」

そんな勝手な行動を取るファイを見たトーレがいくら引きとめようとしても、一切聞く耳持たず。

そのまま転移魔法で消えてしまった。

「全く・・・あいつには協調性がまるで無い・・・」

「仕方ありませんよお姉様～～～♪生まれたときからずっとああなんですもの～～～」

「そうね。それにあの子は・・・ああ見えても結構内気なのよ・・・あまり怒らないで上げてね。」

「ふん、どうだか。」

「まぁいいさ。ちょうど新しい魔導虚のテストをしようと思っていたんだ。ファイが行ってくれたなら好都合だ。ゆっくり楽しませてもらおうじゃないか・・・ふふふふはははははは！！！！！！」

アジト中に響き渡るスカリエッティの高笑い。

その様子を見て不気味な笑みを浮かべるウーノ、トーレ、クアットロの三人。

今、ミッドチルダに危機が訪れようとしている・・・――

また一方で、スクライア商店にいるユーノは机の上で作成途中の論文を書いてはペンを置くといったことを暫くの間ずっとやっていた。

「・・・・・」

すると、そんな物思いにふけるユーノに番茶を差し出す一護

「ほらよ、お茶。飲んだらどうだ?」

「あ・・・頂きます・・・」

ユーノは出された番茶を徐に啜りながら、深い溜め息を吐く。

一護は腰を下ろすと、ユーノに次のような言葉を掛ける。

「心配ならお前も行けばよかっただろうが・・・あの高町なのはって奴にもひょっとしたら遭えるかもしれないだろ?」

「さて・・・何のことでしょうか?あっ!茶柱見っけ♪」

あくまでも飄々とした態度で一護に応答するユーノ。

その様子を見た一護も思わず深い溜め息を吐く。

「全く・・・相変わらずだなお前は・・・」

そう言うと、一護は机に置いていたお碗の中のせんべいを手に取り徐に口に運ぶ。

「・・・結構美味いじゃねぇか・・・」

「一護さんも人のうちのせんべい食べて平気でくつろいでますけど・・・内心かなり心配なんでしょう?恋次さんのこと・・・?」

「別に。あいつのことなんか心配のしの字もしてねぇさ・・・」

と、その時。

突然、店の中から響き渡るエマージェンシーコールと赤ランプの光。

その色が、事の重大さを物語るのには充分であった。

「!!何だ・・・一体!?」

「・・・・・・」

ユーノは警戒ランプと音を聞くと、その飄々とした態度を一変させて真面目一色の雰囲気になる。

その時、部屋の襖を開けて奥の方からユーノ達に報告に来る金太郎。

「ご報告いたします、店長!は・・・反応がありました!!座軸、２８００~４２００のミッドチルダ首都クラナガン北部!!補正と捕捉をお願いいたします!!」

ユーノはそう言われると、魔法のディスプレイを呼び出し慣れた手つきで高速のタイピング術を駆使してタッチパネルを操作していく。

そこへ、織姫とコンが弁当の差し入れを持って店の中へと入ってきた。

「あなた!ユーノさん!お弁当の差し入れ持ってきたよ・・・って、何やってるの慌てて・・・」

「おう！いいとこ来たな織姫、コン！！」

「え？」

「ああ？一体どう言う意味だよそれ・・・！？」

「いいから、こっち来て見ろよ！」

一護にそう言われて、玄関口に腰を下ろす織姫とコンはユーノの操作するディスプレイに目を向ける。

「・・・来ました・・・」

ユーノがそう言うと、ディスプレイに映し出されるミッドチルダの首都クラナガンの頭上から、転移魔法を使って隕石のようにして勢いよく何かが落下して来た。

一般市民は突然のことに驚きを隠せなかった。

「・・・な・・・何だ！？何か落ちたぞ！？」

動揺する一般市民。

徐々に晴れていく土煙。

そして、その中心にいたのはーーー・・・巨大なクレータの上に佇むファイと無骨な体格の魔導虚であった。

ファイはその中で上着のチャックを少しだけ下ろして、中からブレスレットのようなものを取り出した。

魔導虚、来襲（後書き）

教えて、ユーノ先生♪

ユ「どうも、ユーノ・スクライアです♪今日から僕の出番が極端に少なくなるので・・・ミニコーナーを始めようと思うよ！最初のテーマは、スクライア商店についてだ。」

ユ「スクライア商店には何でも有る。子供に人気のお菓子は勿論、大人でも懐かしいと思える駄菓子、さらにはちょっとした家電製品や調理器具。そして極めつけは闇市場でしか買えない様な武器や魔導師、死神の使う専用グッズも取り揃えてあるよ♪」

ユ「今、お買い上げの皆さんには・・・スクライア商店だけのポイントカードを差し上げるよ♪１００ポイント溜まったら、５００円分の商品券と交換だ！」

織「うわー！！それいいな！！今度から此処で買い物しようかな！！」

一「織姫・・・頼むからそれだけはやめてくれ・・・」

災いの始まり

＞ｉ１２１６２―７０９＜

ファイと魔導虚の二人がミッドチルダに訪れる少し前、スカリエッティ捜索の為にミッドチルダ東部の路地を歩いているティアナとエリオ。

「今日も特に収穫はなしですね・・・残念ながら・・・」

「そうね・・・全く・・・一体何所に居るのやら、あの狂科学者（マッドサイエンティスト）は・・・」

「スカリエッティもそうですけど・・・僕個人的なことで何ですけど・・・ユーノ先生も何所に行っちゃったんでしょう？」

「あ、そうよね。なのはさんも訓練中でも何だか元気ないし、食事のときもいつも上の空で心配よね・・・確かはあんたは、ユーノ先生とは結構付き合いあるのよね・・・」

「そうですね。小さい頃、僕はユーノ先生には随分とお世話になり

ました。魔法に関することや、その他色々を沢山ユーノ先生から教えていただきました。」

「そうなの。あっ、だとしたらなのはさんもなのよね・・・ユーノ先生から魔法の扱い方教わったのって!?」

「え?そうなんですか!?僕はその辺はあまり詳しくないんですけど・・・」

「あ、御免御免!知らないのなら良いけど・・・いやね・・・前にちょっとだけユーノ先生とは無限書庫で会ったことがあってね・・・執務官試験の勉強を見てもらったことがあるの。そのときになのはさんのこと聞いてね。多分、なのはさんがユーノ先生の第一の魔法の弟子ってとこなのかな・・・」

今から、ちょうど4年前のことだ。

六課が解散する少し前のとある休日、ティアナは執務官試験の勉強の為に勉強にはうってつけの無限書庫を訪れていた。

そこで、偶然にもティアナは当時司書長であったユーノと会ったことがあり、嘗てのフェイト同様執務官試験のための指南を受けたことがある。

その際、ユーノからティアナの知らないなのはの事をユーノの口から聞かされたのであった。

「へえ~~そうなんですか・・・」

と、そんなユーノを中心とした話をしていた・・・・・その時だ

った。

突如として全身から感じてきた、異常なほどに巨大な魔力と自分達にとっては未知である別の何か。

それを感じ取ったティアナとエリオは、あまりの巨大さにその場に足を止め、発汗させた。

「「！！！」」

ティアナ達同様、西側を探索中のスバルとキャロも同じように足を止める。

「何・・・！この魔力反応・・・それに、この妙な力は何！？」

「凄い大きいです・・・！！直ちに全体通信をします！！」

キャロはブースとデバイスであるケリュケイオンを使って、ロングアーチで待機をするなのは達隊長陣に連絡を入れる。

『こちら、ライトニング４。クラナガン北部にて異常な魔力反応をキャッチ！ご指示をお願いいたします！』

キャロのその言葉を聞いたはやては、直ぐにフォワード陣と隊長陣に対してそれぞれ指示を出す。

「了解。キャロとスバルはそのまま現地に向ってくれへんか？ティアナとエリオも直ぐにスバル達と合流できるように急いでな！」

『『はい！』』

はやての言葉をデバイスを通して聞き入れるティアナとエリオ。

「なのは隊長とフェイト隊長、ヴィータ副隊長は一先ずここで待機。現地にはシグナム副隊長に向ってもらう！」

「「「了解。」」」

「シグナム。何分用心はしといてな。」

「はい。」

シグナムは、はやての命を受けるとバリアジャケットに身を包み愛刀のレバンティンを携えて現地へと向かって行った。

ティアナとエリオも防護服を身に纏うと、発生源となっているミッド北部へと急ぐ。

「エリオ！こっからだとスバル達と合流できるのはどれくらいかかる？」

「約１５分程です！」

「オッケイ。あんまり時間はかけられないわ・・・１０分で合流するわよ！」

「はい！」

その頃、スクライア商店でディスプレイに映し出されるファイと魔

導虚の一体を目の当たりにしたユーノや一護達は愕然としていた。
それと同時に、途方もない嫌な予感を感じていた。

「おいおいユーノ・・・こいつはマズイじゃねぇか・・・！」

「よもやまさか・・・既にここまでの魔力と霊力を秘めているとは・・・！？」

「数は二体だけど・・・多分、霊圧と魔力・濃度・安定性から見ても――」

「『成体』・・・ってことだよな・・・おい・・・！！」

動揺を隠し切れないでいる四人と、口を籠もらせるユーノ。

「・・・・・――――――――なのは。」

そして、漸くユーノの口から出る言葉は、一番になのはを思うものがほとんどであった。

さて、一方のファイと魔導虚の一人――グラトニーは自分達が勢いよく落下したことで出来てしまったクレーターの中で次のような会話をしていた。

「ぶはァ～～～！ただの虚だったときに第一世界にも何度か来たが、相変わらず現世も第一世界もつまんねぇ処だなァオイ！霊子がウスすぎて息しづれえしよォ！」

「文句を垂れるな。俺だって同じなんだ・・・少しは我慢という言葉を覚えろ、グラトニー。」

性格的に、この二人はまるで対照的だ。

グラトニーは典型的な硬派な戦闘好き。

ファイは冷静沈着型の分析家兼暗殺者タイプだ。

ファイに無表情のまま喝を入れられたグラトニーはふてくされた様子でクレーターの中から外へと向っていく。

「へーへーすいません。すいません。」

すると、そこでグラトニーは自分のほうへと目を向ける大勢のギャラリーに気付く。

「・・・何だ・・・？」

「おい見ろよ、あの仮面着けたバケモノ!?」

「時空管理局に知らせたほうがいいじゃねぇか・・・!?」

「近付いて大丈夫なのか・・・？」

その時、グラトニーはとても気分が悪くなった。

「・・・・・・・・何だこいつら。ジロジロ見てんじゃねーよ。吸うぞコラ。」

そう言うと、グラトニーは勢いよく腹に溜め込むように広範囲にわたりまわりの人間から魔力と生命エネルギー・・・すなわち魂魄を吸収し始める。

「あっ！！」

「あうあ！！」

「があ・・・！！」

グラトニーの能力によって身体中から魂が抜け出て、次々と倒れていく一般市民。

同じことが、防護服に身を包んだスバルとキャロ達の周りでも起きていた。

「ああがっ」

「「えっ！？」」

自分の傍で唐突に倒れ込む人間に、二人は近付き声を掛ける。

「大丈夫ですか！？しっかりして・・・！！」

だが、二人が声を掛けたときには既にその者は天に召されていた。

「駄目キャロ・・・もう死んでる・・・あれが見えるよね、キャロ。」

スバルはそう言うと、目の前の空に見える無数の発光体をキャロに向って言う。

「ここら一帯の魔力の素養を持った人や、それ以外の人の生命エネルギーを根こそぎ吸い取ってるんだよ・・・」

「・・・そんな・・・どうしてそんな・・・」

「――――・・・・・・・・・急ごう。」

事態が予想以上に深刻なことを察したスバルはキャロを連れて現場へと急行する。

その最中、スバルはキャロにこんなお願いをする。

「・・・一つ・・・頼まれてくれるキャロ・・・？」

「え？」

「私達が現場に着いた時、もしそこに生き残ってる人がいたら・・・キャロはその人を連れて退がっててくれる・・・」

「え！でもそれじゃあ・・・スバルさん一人で・・・」

「・・・戦いたいのは分かるよ・・・でも、私には怪我人を治せない・・・生き残ってる人を助けられるのは、キャロだけだから・・・頼むよ、キャロ。」

キャロもスバルの懇願に了承し、不安を抱えたまま目的地へと走って行く。

一方、大量の人間の魔力と魂魄を吸収したグラトニーだったが、味は彼にしてはないに等しくかなり不服そうであった。

「ぶっは――――っ！！まじィ！！」

「当たり前だ。そんな薄い魔力と魂、美味い訳がないだろ。」

「だってコイツらがヒトのこと客寄せパンダみてーにジロジロ見やがるかからよォ！」

「だからお前は我慢が足らんというのだ。少しは学習しろ。」

「わかっててもムカつくんだよ！で？結局何匹殺しゃいいんだっけか！？」

「5人だ。それ以外を殺す必要は無い。」

「こんだけウジャウジャいる中から五匹かよ！」

「今、ミッドチルダでまともに戦えるレベルの魔力を持ってるのは機動六課という組織の連中で・・・多くても五人だと聞いている。それ以外はゴミだ。探し出すのは容易い・・・！」

その時、ファイはふとその場に倒れている人混みの中から、未だに息の有る一人の男を見つけ些か驚いた。

「・・・驚いたな。生き残りがいるぞ。」

その男の正体は――――スバルとギンガの父親で、陸士１０８部隊の

ゲンヤ・ナカジマ三佐であった。

ゲンヤは肩で息をしながら、地面を這うようにして目の前のグラトニー達を見つめる。

「・・・な・・・何が・・・起きたんだよ一体・・・!?何・・・なんだ・・・あいつらは・・・!?」

すると、ゲンヤの下にグラトニーが近付き不気味な笑みを浮かべる。

グラトニーに見つめられた瞬間、ゲンヤは全く目を逸らす事ができず金縛りのように動かなくなってしまった。

「（何だ・・・こりゃ・・・目が逸らせねぇ・・・?）」

「オレの『魔魂吸（マコンズイ）』で魂と魔力が抜けねぇってことは、出てるにしろ隠れてるにしろ、ちったあ魂魄と魔法の力が有るってことだ!なァ!?」

グラトニーは直ぐにファイに向って山鳴りのような声を上げて確認する。

「ファイ!!こいつか!?」

「よく見ろバカ。お前が近付いただけで魂が潰れかけているだろう。それに、その男からは魔力の反応は感じられん。ゴミの方だ。」

「・・・ちっ。んじゃあ魔魂吸で生き残ったのはたまたまかよ。くだらねぇ。」

期待はずれの答えに不満を抱くグラトニー。

グラトニーは左足を後ろに上げると、そのままゲンヤに向けて蹴りを入れる。

「じゃあな」

だが、グラトニーが蹴りを入れようとした寸前・・・スバルがリボルバーナックルで蹴りを受け止め、ギリギリのところでゲンヤを守ることに成功した。

「・・・あァ!?何だお前ら?」

突然現れたスバルと、後ろのほうでゲンヤを守るキャロに疑念を抱くグラトニー。

スバルは苦悶の表情を浮かべながら、グラトニーの恐ろしさを肌で実感する。

「（こいつただの蹴りがなんて威力なの・・・!!やっぱり、キャロがどうにかできる相手じゃなさそうだ・・・!）」

スバルは一度息を呑むと、後ろのキャロに指示通りに動くように伝える。

「・・・キャロ。話した通り・・・父さん連れて退がって・・・」

「はい・・・あの、無理しないで下さいねスバルさん・・・」

キャロは死人のように空ろな目をするゲンヤを連れて安全な場所ま

で離れる。

そんなスバルを見ながら、グラトニーは再びファイに尋ねる。

「ファイ!!こいつかー!?」

「・・・グラトニー。お前もうちょっと探査神経（ペスキス）を鍛えて自分で判断できるようになれ。一目見ればわかるだろう。そいつもゴミだ。」

「そうかい！」

ファイにそう言われると、グラトニーはスバルを見るなり勝ち誇ったかのような笑みを見せる。

スバルはそれに危機感を感じたのか、カートリッジをロードしてグラトニーに攻撃を行おうとする。

しかし、キャロがふと後ろを振り返った瞬間――それは余りに惨い結果を知らせることになる。

スバルはリボルバーナックルも右腕そのものもグラトニーに破壊されて、瀕死の状態となってしまった。

「スバルさん!!!」

ゲンヤを安全な場所まで避難させて、直ぐに泣きながらスバルへと近付くキャロ。

泣き叫ぶキャロを見ながら一歩一歩近付くグラトニー。

「ファーイ～～～～～い。この女もゴミか？」

不気味な笑みを浮かべながらファイにそう尋ねるグラトニー。

その質問に冷淡な口調で答えるファイ。

「ああ・・・ゴミだ。」

「そうかい！！」

キャロは血塗れになって倒れるスバルの意識を確認しようとするが、全くその気配はなく、ただただ名前を呼ぶことしか出来なかった。

「スバルさん！！！スバルさん！！！（きっとスバルさんは分かってたんだ・・・この人達が凄く強くて・・・わたしでも自分でも歯が立たないってこと・・・そう思ったからスバルさんは・・・ゲンヤさんや私をかばって一人で戦ってくれたんだ・・・）」

キャロは心の中でスバルの言葉と行動の真意を理解し、ある決心をする。

グラトニーはそんなキャロのことなどお構い無しに、指一本で攻撃をしてくる。

「ラウンドシールド」

それをキャロはミッド式の魔法陣から展開されるラウンドシールドでグラトニーの攻撃を防ぐ。

「！？」

意外にも強度のあるキャロのラウンドシールドに驚愕するグラトニー。

攻撃をやめた瞬間、ガラスが割れるように弾け飛ぶラウンドシールド。

「・・・何だ？こいつ・・・」

グラトニーが頭を悩ます中で、キャロはケリュケイオンの力を使ってスバルの周囲に魔法陣を展開させて腕の治療を開始する。

「・・・ヒーリングレイ」

スバルがキャロの力によって治癒されていく様子を、グラトニーは唖然とした表情で見つめる。

「何だァ！？治せんのか！？つーかそいつ生きてんのかよ！しぶてえなオイ！！」

そんな中、一人キャロの魔法を見ながら思考に入るファイ。

「（回復魔法か・・・・・あの歳であそこまでとは・・・大した奴だ。横で飛んでいるのはこいつの竜か・・・竜召還士の末裔・・・キャロ・ル・ルシエ。現在のランクはＡＡＡ＋。主に支援魔法を主力とする、機動六課のフォワードの中でも随一のバックアップ魔導師・・・）」

キャロの技量を目の当たりにして、鼻で笑うファイ。

「・・・中々の能力だ。女・・・」

そんな中、キャロはどうにかしてその場を持ちこたえようと必死で思案する。

「（・・・なんとか・・・なんとか持ちこたえなくちゃ・・・せめてエリオ君やティアさんが来るまで――――――・・・・・・だめ。どうしてすぐ、エリオ君たちに頼ろうとするの。今、エリオ君たちに負担はかけなれない。エリオ君達に頼らず、この人達を追い返して、すこしでも安心させてあげなくちゃ・・・私にできることは・・・きっとそれぐらい）」

キャロは考えた末に、フリードを真の姿に戻すと早速命令を出す。

「フリード！！！」

キャロの言葉を聞いたフリードは雄叫びのような鳴き声を上げる。

「お？」

フリードの雄叫びを聞いたグラトニーはこれから始まろうとする事に多少興味を抱く。

一方のキャロは神経を集中させて、ケリュケイオンを前に突き出すとフリードにありったけの魔力を送り込み言葉を発する。

「・・・ブラストレイ（スバルさん・・・ゲンヤさん・・・フェイトさん・・・ティアさん・・・エリオ君。みんなみんな、私が守るから。）」

そして、誓いと共にキャロはフリードの口腔内から生成される火炎弾をグラトニーに向けて発射する。

「ファイアッ！！！」

グラトニーは発射されたブラストレイを手で軽く遮ると、何事もなかったかのような表情を見せる。

「！！」

キャロはグラトニーのその様子に驚きを隠せなかった。

「何だこりゃ。火の粉か？」

「・・・ふ・・・フリードの・・・ブラストレイが・・・そんな・・・」

「どうするよファイ？こいつレアな竜召還の術使うから、手足もいで持って帰るか？」

「・・・いや。必要ない。殺せグラトニー。」

「あいよ。」

ファイの言葉を聞いたグラトニーはキャロとフリードに近付くと、二人をまとめて攻撃するために巨大な掌を押し付けようとした。

キャロとフリードは恐怖で身体が竦んでしまい、動くことが出来ずまさに絶体絶命の状態であった。

だが、その攻撃が通ることはなかった。

何故ならそれを回避、もと防いでくれたものがそこには居たからだ。

それは――――レバンティンの切っ先をグラトニーの掌に突きつけたシグナムであった。

突然のシグナムの登場に思わず名前を尋ねるグラトニー。

「・・・な・・・何だてめぇは・・・・!?」

「・・・・・・シグナム副隊長。」

シグナムは徐に振り返ると、そんな暗い表情を見せるキャロを見ながらこう言った。

「・・・済まぬ。遅くなったキャロ。ティアナ達はまだ来ておらぬ様だな・・・」

「はい・・・すみません・・・本当にすみませんシグナム副隊長・・・私が・・・私がもっと強かったら・・・」

項垂れるキャロであったが、シグナムは優しく慰める。

そして、気を失ったまま自動回復を受ける重症のスバルを一瞥し怒りを募らせる。

「・・・謝る必要はない、キャロ・・・心配するでない。私がこやつ等を・・・・・・倒して終わりだ!!レバンティン!!」

〈Ｓｃｈｌａｎｇｅｆｏｒｍ〉

今のシグナムはいつも以上に機嫌が悪かった。

レバンティンをシュラゲンフォルムへと移行させて、蛇腹刀のような形状にするシグナム。

「・・・キャロ。離れていろ。」

「――――・・・・・・はい・・・」

そして、シグナムの声色はいつも以上に重く怖かった。

それはまさに・・・強い憎しみと怒りが混じったものであった。

「（――――シグナム副隊長――――・・・）」

シグナムの登場にグラトニーは思わず頭を傾け、後ろのファイに尋ねる。

「レバンティンだと・・・？おいファイこいつ・・・」

「ああ・・・まさかお前の無駄な戦いでこうも簡単に一人目を燻り出せるとはな・・・桃色の髪に・・・炎の魔剣レバンティン・・・間違いない。そいつが一人目の標的だ、グラトニー。」

「捜す手間が・・・省けたって訳だ！！ラッキー（スエルテ）！！！」

ガッツポーズを掲げて、無言のまま立ち尽くすシグナムに向って拳

を振り下ろすグラトニー。

しかし、それをシグナムはいとも簡単にレバンティンで受け止める。

「!?」

驚愕するグラトニーを他所に、シグナムは無表情と怒りの籠もった声で尋ねる。

「スバルの右腕を・・・やったのはお前か・・・?貰うぞ・・・お前の右腕」

シグナムはその瞬間、グラトニーの気付かぬうちに巨大な右腕を斬り落とした。

「・・・な・・・なんだとオオオオツ!?」

斬り落とされた場所から出血をするグラトニーは信じられないとばかりの表情だった。

それは勿論、ファイ自身も同じだった。

「(バカが・・・だから探査神経を鍛えろと言うんだ・・・相手の力量も計らんうちに飛び出しやがって・・・しかしあの女・・グラトニーの『鋼皮(イエロ)』を斬り裂いて腕を斬り落とすとは・・・相当な魔力硬度だ・・・流石は歴戦の勇者というところか。だが・・・この程度ではまだドクターの脅威になるとは思えんが・・・)」

シグナムの攻撃を喰らい続け、身体中の至る場所から血を流し息を切らすグラトニー。

「はっ、はっ、はっ。くそ・・・女(アマ)がぁ・・・っ！！」

「・・・まだ立ってられるのか。見た目通りのタフだな。」

そんなグラトニーを見て、嘲笑うかのような態度でファイが交替を尋ねる。

「随分苦戦してるな。代わってやろうか？」

「うるせえっ！！」

そう言うと、グラトニーは左腕で背中に背負っていた巨大な金棒の持ち手に手を触れる。

「こんな奴相手に、デバイスまで使うのか？」

「うるせえっつッてんだ！！！」

デバイスという言葉に、その瞬間驚きを隠せずに居られなくなるシグナム。

「（デバイス！？背中に抱えていた金棒はこいつのデバイスだったのか！？白い髑髏のような仮面・・・胸の孔・・・デバイス・・・ここに来る前から妙な魔力だとは思っていたが・・・何なんだこやつらは・・・！？それに、この途方も無い別の力は――――！？）」

グラトニーはデバイスを左手で持ち、それをシグナムへと向ける。

「いくぜ・・・ぶち殺ろせ、デーモンコマンド！！！」

グラトニーはそう言うと、金棒をシグナムにむけて振り回した。

しかし、その速度はまるでシグナムが予想していたものとは全然違っていた。

「!?」

速度はまさに音速に近いもので、シグナムはかわすことも出来ずに体に金棒が直撃し、口から吐血が吹き出る。

「がはっ!!!」

その後も、グラトニーは容赦なくシグナムをいたぶり追い詰めていく。

「なははははあはは!!!!オレのスピードに着いて来れるかよ、クソ女!!」

朦朧とする意識の中で、グラトニーの力にどうすることも出来なくなったシグナム。

「ぐっは!!!(何という速さと、破壊力だ!?物理攻撃だけでこの威力!?速さだけならテスタロッサ以上・・・破壊力にいたっては、ヴィータやなのはに負けず劣らず・・・!?)」

「シグナム副隊長!!!」

そんなシグナムを見て、居てもたってもいられなくなったキャロはシグナムを何とか助けようと駆け足で走って来るが、満身創痍のシ

グナムが慌ててキャロを止めに掛かる。

「来るな、キャロっ!!!」

しかし、そんなシグナムの叫びも虚しくグラトニーの平手打ちを喰らったキャロは身体中から血を流してスバルの近くに倒れる。

フリードも巻き添えを喰らい、そのまま気絶する。

「キャロ!!!フリード!!」

「うるせえよ!!!」

シグナムがそう言うと、グラトニーは金棒を振り落としてシグナムに更に攻撃を浴びせ続ける。

「ぐあああ!!!!（くそ・・・体が思うように動かぬ・・・！！コヤツの力がまさかここまでだったとは・・・何ということだ・・・このシグナム・・・一生の不覚だ・・・・・・無念・・・）」

「ハッ!!!さっきはよくもやってくれたな!!死ねッ!!死ねクソ女ッ!!!」

グラトニーの怒涛の攻撃をその身に受け、最早虫の息とかそうとしているシグナムを見ながらファイは一人また思考に耽る。

「（・・・やはりか・・・いくら夜天の書の守護騎士システムといえども、既に力は衰えているか・・・烈火の騎士シグナムも・・・我々の力の前には手も足も出ぬか・・・しかし妙だな・・・さっきから感じるこの妙な胸騒ぎは何だ・・・？今こちらに向って、途轍

もなく巨大な霊圧が近付いて来ている・・・どういうことだ・・・？一体――――・・・）」

だが、ファイのその胸騒ぎはこのあと直ぐに現実のもとなることになる。

「終わりだクソ女！！！潰れて消えろ！！！」

グラトニーはシグナムに止めをさすために最後の一撃を入れるために金棒を振り下ろす。

出血と痛みで体が動かないシグナムはどうすることも出来ず、最悪の結果で幕が閉じようとしていた――――その時だった。

「縛道の三十九『円閘扇（えんこうせん）』。」

突如として、シグナムの正面に現れる円形状の盾。

それが結果としてグラトニーの攻撃を遮り、シグナムを守ったのであった。

「・・・あ！？」

いきなりのことに再び首を傾げるグラトニー。

すると、円形の盾の中から男の声が聞こえてきた。

「けっ！何だよ・・・機動六課の隊長格っていうのも・・・案外頼りにならねぇもんだなおい・・・だがいいさ。ここからはオレの見せ所だ・・・」

そして、盾が崩壊したその中から現れたのは――――吉良と斬魄刀を解放した鬼太郎であった。

鬼太郎は自信に満ちた笑みを浮かべると、グラトニーに向けて自身の最も気に入る決めポーズを見せた。

「俺、参上！」

「・・・何だ!?次から次へとジャマくせえ連中だぜ・・・」

災いの始まり（後書き）

教えて、ユーノ先生！

ユ「今日は、なのはについてだよ♪」

ユ「航空戦技教導隊の教導官で、管理局の白き魔王と呼ばれるなのは。ルックスは良し♪肌はすべすべ♪髪の色も実に魅力的♪スタイル抜群で何をやっても可愛すぎ！！だけど実は・・・そんななのはの唯一つの弱点が・・・運動神経の無さなんだよね・・・」

ユ「小学校のときの体育の成績は僕の知ってる限り常に1～2。よくても3が精々で、普段のなのははその莫大な魔力で以って体の運動能力を飛躍的に上昇させているだけで、とてもじゃないがそれが無かったらマラソンも完走できないほどだよ。」

ユ「その点僕は毎日、ちゃんと42キロ走りこんでるから体力には自信あるよ♪」

一「けどよ・・・あんましなのはのことバラしちまって大丈夫なのか？なのはに知れたらそれこそお陀仏だぜ・・・」

ユ「心配ないですよ♪僕の悩殺スマイルで逆になのはがイチコロですよ♪」

一「・・・なのはにとって・・・お前が一番の弱点なのか・・・」

黒衣と赤鬼

＞i12873―709＜

窮地のシグナム達の前に突如として現れた吉良と鬼太郎。

「・・・何だァ?次から次ぎへとジャマくせえ連中だぜ・・・」

「ふん・・・」

「・・・・・・――――――」

グラトニーを見るなり、鼻で笑う鬼太郎と無言のままのグラトニーを睨み付ける吉良。

「へっ!まあいいや・・・割って入るってことは・・・てめぇらから殺してくれって意味で・・・良いんだよなァ!?」

グラトニーはそう言うと、二人を押し潰そうと金棒を振り下ろす。

しかし、その瞬間・・・鬼太郎は解放した身の丈ほどの赤い大刀の斬魄刀・・・『烈火(れっか)』を一振りして、凄まじい爆炎を交えてグラトニーの体を吹き飛ばした。

「・・・な・・・・・・なん・・・だと・・・!?」

爆炎と共にその場から勢いよく吹き飛ばされたグラトニー。

「くそがあアアアアっ！！！」

大火傷を負ったグラトニーは体勢を立て直すと地面を叩き割り、憤慨して二人を襲ってくる。

その時でも、二人は一切慌てず自分達の役割を決める。

「俺が奴の相手をする。てめぇは連中の介抱を頼む。」

「分かった。」

吉良は鬼太郎の言われたとおり、重傷を負ったキャロやシグナム達の治療に向う。

「待て、コラァ！！！」

吉良の後姿を目の当たりにしたグラトニーは先に吉良を捕まえようと手を延ばすが、それをさせまいと鬼太郎が横に入って烈火を振り回す。

「せりゃあああ！！！」

顔へと来る凄まじい炎と斬撃がグラトニーの表情をいつも以上に醜くさせる。

「ぶ・・・っ！？」

グラトニーが怯んでいるうちに、鬼太郎は烈火に霊力を集中させて得意技の一つをお見舞いする。

「必殺・・・俺の必殺技・・・！！」

刀身に灯る鬼太郎の霊力から作りだされた灼熱の炎が。

「パート1！！」

その炎を纏った必殺の一撃が敵の体を轟音と爆発で以って粉砕する『火炎油田（かえんゆでん）』。

火炎油田をまともに喰らったグラトニーは、その炎で一時的に気を失い爆炎の中で倒れ込んでしまった。

その頃、シグナムの治療を終え、今度は血塗れになって倒れるキャロの下に近付きスバル達を含めた広範囲に逆三角錐型の高位結界を施す吉良。

「縛道の七十三　『倒山晶（とうざんしょう）』。」

朦朧とする意識の中で、自分の目の前で現れる吉良や鬼太郎の姿にキャロは思わず尋ねる。

「・・・あ・・・あな・・・方は・・・一体・・・？」

キャロの予想外の一言に、吉良は驚愕する。

何故なら、鬼太郎はともかくとして自分達死神の姿を見れるのは高い霊力を持ったものだけだからだ。

「・・・なっ！？（この子には、魂魄である僕の姿が見えているの

か!?成程、どうやらこの世界では、強い魔力持ったものは霊力を持たなくても同じように死神の姿や虚の姿が見えるようになるってことか・・・）」

自分の中でそう確信すると、吉良は柔らかな表情を見せてキャロに話しかける。

「心配は要らない。僕は君たちの敵じゃない。あっちで戦う彼もだ・・・」

「し・・・しぐ・・・しぐ・・・な・・・む・・・ふく・・・たいちょう・・・は・・・・・・・」

「大丈夫。損傷は酷いが、命に別状はないよ。今さっき僕が手当てをしてきたところだ。次は君のを治療する・・・そのままじっとしてて。」

「・・・はい・・・」

吉良はキャロをそっとその場に寝かせると、四番隊で培った治癒能力を使ってキャロの損傷した場所を治癒し始める。

と、その時だった。

巻き上がる灼熱の炎の中から気を取り戻したグラトニーが起き上がってきた。

「ばはァっ!!!」

グラトニーの姿を見た吉良は眉間に皺を寄せながら、溜め息をつき

ながらグラトニーの執念深さに呆れかえる。

「・・・アレだけの攻撃を喰らってまだ立ち上がるのか？・・・往生際の悪い奴だね。」

「・・・殺す・・・！ぶっ・・・殺す！！！」

すると、グラトニーは金棒を放り投げると口をこれでもかとばかり開き、口腔内から紅色の高エネルギー体を生成する。

それを見た吉良は直ぐにそれが何なのかを理解し、驚愕した。

「！（まさか・・・虚閃（セロ）か！！！）」

そして、グラトニーはそのまま吉良の方向目掛けて強力な破壊力を持つ光線・・・『虚閃』を放った。

直撃の瞬間、広い範囲に渡る爆風と轟音。

「・・・へへ・・・ざまあみやがれ・・・粉々だぜ・・・俺の虚閃をこの距離でかわせる・・・ワケが・・・・・・・が・・・・！？」

グラトニーは黒焦げの状態で自分の勝利を確信していた。

しかし、爆風が晴れた先に広がってきたのは――――烈火を向けて吉良達を無事に守る鬼太郎の姿であった。

「へっ！」

勝ち誇った笑みを浮かべる鬼太郎と驚愕のあまり動揺を隠せなくな

るグラトニー。

「な・・・何だてめぇ・・・何しやがった・・・!?どうやって虚閃を・・・」

「はっ!見ての通りだバ～カ。弾くと周りが危ねぇからな、似たようなのぶつけて相殺させてもらったぜ。」

「何だと・・・!!」

「信じられねーなら・・・俺の必殺技もう一つ見せてやろうか?俺の必殺技・・・パート2。」

すると、鬼太郎は烈火に再び霊力を収束させて火炎油田とはまた違う炎の飛び技・・・『熾烈波(しれつは)』をグラトニー目掛けて発射する。

「!!」

グラトニーは技が向ってきた瞬間、やられるとばかり思った。

しかし、グラトニーがそう思ったとき、目の前にソニックムーブで現れ熾烈波を手で軽々と弾いたファイ。

その光景を見た鬼太郎や吉良は愕然としてしまった。

「何!」

「あの攻撃を手で弾いた・・・だと!?」

「へへ・・・ファ・・・イ・・・」

ファイの助太刀に思わず笑みを浮かべるグラトニーであったが、ファイはそんなグラトニーの腹を無表情のまま手刀の一発を入れる。

「ぶっほ！！」

「「！！」」

ファイの突然の行動に、グラトニーも吉良達も予想外であったらしくただただ驚くばかりであった。

「な・・・何しやが・・・・・・る・・・」

「バカが。頭に血を昇げ過ぎたグラトニー。こいつらは護廷十三隊の死神だ。しかも霊圧硬度もかなり高いところから、恐らくは隊長格だ。お前のレベルじゃそのままでは勝てん。」

そう言うと、ファイは転移魔法を発動させるとグラトニーを連れて吉良達の下から消えようとする。

「退くぞ。」

ファイの態度を見た吉良は思わず言葉を漏らす。

「・・・逃げる気かい？」

その言葉を聞いたファイは鼻で笑いながら、次のように言う。

「らしくない挑発だな。貴様ら二人がかりで死に損ないのゴミ二匹守りながら俺と戦って、どちらに分が在るか判らん訳じゃあるまい。

差し当たっての任務は終えた。ドクターには報告しておく。あなたが目をつけた機動六課の魔導師は・・・殺すに足らぬ塵（ゴミ）でしたとな。」

その瞬間、ファイとグラトニーは転移魔法によって管理局にも気付かれぬままその場から消え去ってしまった。

鬼太郎は斬魄刀を封印状態にすると、背中に収めて逃がしたことに舌打ちをする。

「ちっ！逃がしちまったか・・・！！」

「・・・さっき、ファイという男が言っていたドクターというのは・・・ジェイル・スカリエッティのことだろうか？」

「――――ああ。多分そうだろうよ・・・」

と、その時――――シグナムが気を取り戻して傷口を押えながら徐に起き上がった。

「うっ！私は・・・助かったのか・・・！？なっ！？」

シグナムは目の前にいる吉良と鬼太郎の姿に驚きを隠せないでいた。

「何だ・・・貴様らは・・・！？私を・・・助けてくれたのか！？うっ！！」

一命は取りとめたものの、完全には傷口は塞がっていないシグナムは思わず胸の傷を手で押さえる。

「あまり動かないほうがいい。まだ傷が完全に塞がっていないんだ。」

吉良がそう忠告を入れると、シグナムも自分の怪我の具合を理解し素直に従う。

「ああ・・・それより・・・私のことよりも・・・」

「判っている。案ずることはない・・・彼女達なら既に応急措置は済ませた。あの青髪の女性のほうは、あの子の早急な治療があったから・・・大事には至らなかった。彼女の連れの白い竜も気絶してるだけだ。」

すると、そんなシグナムと吉良達の耳に甲高い女性の声が聞こえてきた。

それは――――漸く現場へと到着したティアナとエリオであった。

「シグナム副隊長！」

「遅れて申し訳ございません・・・って！どうしたんですかその傷！？」

二人とはシグナムの怪我を見て、心配そうに表情を曇らせる。

「・・・ああ・・・不覚にも・・・敵の攻撃をまともに受けてしまった・・・」

「そんな！？それに・・・スバルにキャロも凄い大怪我じゃないですか！？あっちにはゲンヤさんも倒れてるし！？てかそれより・・・

その人達は一体!?」

「窮地の私たちを助けてくれたものだ・・・名前はまだ聞いていないがな・・・」

シグナムがティアナにそう言うと、吉良と鬼太郎は名前を名乗っていないことに気づき全員に名前を名乗ることにした。

「俺は桃谷鬼太郎。ちょう一格好いい男だ!」

「・・・吉良イヅル。護廷十三隊、三番隊副隊長。」

吉良の口から発せられた聞き慣れない言葉にシグナムやティアナ達は首を傾げる。

「護廷・・・十三隊・・・!?」

「そ・・・そんな組織・・・聞いた事もないですけど・・・!?」

すると、そんなティアナ達の下にビルを飛び越えながら移動してきた隊長羽織に身を包んだ恋次と浦太郎が二人の下に降りてきた。

「吉良!!」

「先輩!!」

二人は吉良と鬼太郎の無事を確認し、安堵の溜め息を吐く。

「無事だったんだな!?」

「阿散井君！よかった。君たちも何も無かったようだね。」

「来るのがオセーんだよ！お前ら何所で何してやがったんだよ！？」

「・・・悪りー。霊圧探るのに手間取っちまってな。それより・・・そいつらは何だよ？」

すると、浦太郎はシグナム達の顔を見るなりやはりと言ったばかりの声を上げた。

「あれ？彼女達って・・・店長が言ってた高町なのはちゃんが教導してるって言うフォワードの人達とヴォルケンリッターのシグナムさんじゃないの？」

「「「！！」」」

浦太郎の言葉を聞いたシグナム達は驚きの表情を見せる。

「我々のことを知っているのか・・・お前！？」

「しかもなのはさんの名前まで・・・！？あなたもこの人達の仲間なんですか？」

「教えてください！あなた方は一体何者です？」

自分達に向かって怒涛のように普通に話しかけていることに気付いた恋次は、シグナム達と同じかそれ以上に驚く。

「おい・・・俺らの姿が見えてるのか・・・こいつら！？」

「どうやら・・・強い魔力を持つものは霊力を持つもの同様、死神と虚の姿が確認できるようだよ、阿散井君・・・さっきそう確信した。」

「ああ?それじゃあ、全く意味ねぇーじゃんかよ!たく、これじゃあ密偵って役目全然果たせてねーぜ!」

吉良の説明を聞いて、恋次はまるで任務の意味を果たせていないことに腹を立てるが、そんな恋次の様子に腹を立てるのはティアナであった。

「ちょっと、質問に答えなさいよ!」

「え?ああ悪い悪い・・・俺は護廷十三隊三番隊隊長、阿散井恋次。死神だ。」

「えっ!?」

「なっ!?」

「死神・・・だと!?」

恋次の素っ頓狂な言葉は魔法にどっぷりと浸かるシグナム達にとっては未知の類であった。

その予想通りの反応に恋次達も特に慌てた様子もしていなかった。

「まっ、いきなりそんなこと言われても理解できるようなもんじゃねぇよな。普通の人間が俺は魔法使いですって言われるのと同じように。」

「そうだね。まっ、でも・・・僕の名前を聞けば少しは話を聞いてくれると思うけどな。この人達も。」

浦太郎はそう言うと、終始何故かニコやかな表情で三人を見つめる。

「ん?そう言えば貴様は・・・まだ名乗っていなかったな・・・いや、待てよ?その顔、どこかで見たような・・・!?」

シグナムは記憶の奥底から浦太郎のことを思い出そうとする。

「おや?僕のことを知っているようだね。でも、名前を聞かないとはっきりとは思い出させそうにないから、教えてあげる♪元時空管理局地上本部、首都防衛隊陸戦部隊所属、亀井浦太郎。」

浦太郎の本名を聞いた途端、シグナム達はすぐに浦太郎という魔導師の存在を思い出す。

「か、亀井浦太郎だと!?」

「まさかそれって・・・四年前まで活躍していた地上本部若手ナンバーワンで、“地上部隊の鉄壁”と恐れられた陸戦部隊のエースオブエース・・・亀井浦太郎一等陸佐!?」

「なのはさんが空のエキスパートなら・・・あなたは陸戦のエキスパート!?でもそれがどうして今更ここに!?」

実は浦太郎は嘗て、時空管理局では珍しい地上部隊のエースオブエースとして名を馳せていた一流の魔導師で実力的名なで言えばあのなのはと肩を並べるほどの手練れである。

しかし、四年前・・・浦太郎はちょっとした事件を機に人間関係のいざこざで自らその地位を捨てた男で、後に今は亡きレジアス・ゲイズ中将は大いに浦太郎の損失を悔やんだそうだ。

「いや実はね・・・うちの店長の命令でこの死神さん達の道案内を頼まれたんだよ。このミッドチルダでの行動のためのね。」

「店長？」

エリオはその言葉に首を掲げるが、浦太郎は気にしなくていいとばかりの態度で受け応える。

「詳しい話は出来ないけど・・・そういうこと。それに、僕らがここに来たのはこのミッドチルダに迫り来る大いなる災いから人々を守るため・・・」

「大いなる災い・・・！？まさかそれってさっきの・・・！？」

「そうだよ。君たちは現物を間近で見ていないから何とも言えないけど、ヴォルケンリッターの・・・」

吉良はシグナムの名前は聞いていなかったので・・・申し訳なさそうな表情でシグナムの顔を覗き込んだ。

「シグナムだ。」

「そう、シグナムさんや彼女達はこの目で見ているから判ると思うが・・・あれの名前は『魔導虚（ホロウ・ロギア）』。魔導師の持つ魔力と死神の持つ霊力という二つの力を併用したバケモノだよ。しかも、それを作り

出しているのは他でもない・・・君たち管理局が現在血眼になって捜している・・・ジェイル・スカリエッティだ。」

「「「なっ！？」」」

自分達の捜し求める重犯罪者であるスカリエッティの手がかりが、まさかこんなところでしかも見知らぬ異世界からの人間の口から言われるとは到底思ってもいなかったシグナム達は大いに驚いた。

「とにかく・・・詳しい話は一度てめぇらのところに着いてから話す事にする。俺たちをさっさとてめぇらの機動六課という場所まで連れてってくれよな。」

「僕からもお願い♪」

恋次と浦太郎の要請を聞いた三人は暫く考え込み、悩んだ末事情聴取もしたいという結果からシグナムは機動六課への同行を許諾する。

「・・・判った。主はやて達には私から言って置こう。ティアナ、エリオ。お前たちは迎えのヘリが来るまでスバル達を頼む。ナカジマ三佐のことは私がどうにかする。」

「はい。」

「了解です！」

やがて、機動六課ヘリパイロットのヴァイスが操縦する積載ヘリが現場に到着すると、一緒に乗っていたシャマルやフェイトに連れられ全員はそのまま機動六課へと護送させる。

機動六課に到着すると、直ぐにスバルとキャロは緊急手当てを受けて、そのまま床に着く。

シグナムもシャマルの治癒を受けて、自分のベッドで安静にしていると様子を見に来たザフィーラが尋ねる。

「どうだシグナム？傷の具合は・・・」

「思ったよりも大丈夫だそうだ。シャマルも驚いていた・・・回復魔法も使わずにこれだけの治癒が可能なのか、と。あの吉良という男・・・相当な腕の持ち主であることは確かだな。」

その頃、部隊長室に集められたなのはとフェイトは恋次達四人の話を真剣な様子で聞いていたのであった。

そこで、はやては事の経緯を順に整理していき納得した様子を見せた。

「・・・そうですか。では恋次さんや吉良さん達はスカリエッティ捜索と魔導虚殲滅のために、そのソウル・ソサエティとか言う異世界から派遣されてきたって訳ですな。」

はやてがこれでいいのかと言いたげな表情で問い直すと、恋次は肯定の返事を口にする。

「ああ。本当は時空管理局には気付かれねーように隠密に行動したかったんだが・・・どうもここは俺らの姿が見える連中ばっかでそれも出来ねぇしよ・・・」

それに便乗して隣に座る吉良がこう言った。

「本来死神は皆通常の魂魄同様、霊力を持たない人間には見えないんだ。でも、此処に来て高い魔力を持った人間にも僕らの姿を確認できることがわかったよ。あの竜召還士の言葉でね・・・」

「キャロのことですね。その節については本当に何とお礼を言ったら良いか。」

「スバルのほうも命に別状はなくて本当に良かった。私達から心より感謝いたします。」

なのはとフェイトは命を救ってくれた吉良や鬼太郎達に向って深々と頭を下げる。

「それにしても魔導虚とは・・・またけったいなもんが現れたな・・・」

はやてが腕を組みながら険しい表情を浮かべると、鬼太郎が口を割ってきた。

「・・・その件に関しては・・・俺が今一度詳しく説明してやろう・・・おい、亀!例のもん持って来い!」

「はいはい先輩・・・ちゃんとうまく書いてよ・・・」

鬼太郎はそう言うと、浦太郎にあるものを持ってこさせた。

そのあるものとは――――・・・いたって普通のスケッチブックとペンだった。

スケッチブックを手に取り徐にペンを走らせる鬼太郎は、出来上がった絵をはやて達に見せながら魔導虚の説明を始める。

「・・・『魔導虚』ってのは、魔力を手に入れ魔導師と死神の力を手に入れた魔力と霊力を併せ持った虚と呼ばれるバケモノの一団だ。今迄数も少なく未完成だったが、そこに何らかの方法でスカリエッティが接触することで、『成体』の魔導虚が完成した。こいつがその一体だ。」

ページをめくり、自分の描いた絵を見せる鬼太郎だが・・・はっきり言って絵の出来は最悪に近かった。

流石にコレにはなのは達も唖然となった。

「ここまではわかるよな？」

「そうやな・・・そのスケッチブックが無ければもっとわかるんやけど。」

うっかりはやてがそう言ってしまったので、鬼太郎はスケッチブックをはやてに投げつけはやてを悶絶させた。

「痛っ！！」

そんな光景を呆然と眺めていた恋次達は、咳払いをして話を戻す。

「・・・当初、尸魂界はスカリエッティが直接コトを起こすまでは時空管理局に任せて静観するつもりだったんだ。だが、予想外に早く成体が完成しそいつが現世や異世界に送り込まれたことでそうも言ってられなくなった。」

「そこで急遽選抜されたのが僕達二人だ。」

「選んだ人は？」

なのはが徐に恋次にそう尋ねる。

「護廷十三隊、山本元柳斎重國総隊長だ。どうやら時空管理局本局の連中の中に知り合いがいてな・・・確か、ミゼット・クローベルとかいう奴とは旧知の仲らしい。」

「ミゼット提督と！？」

「全然そんなこと知らなかった・・・！」

「そうやったんですか・・・しかし、よく管理局に気付かれずにミッドチルダに来れたもんですな。今はスカリエッティ捜索の件で異世界移動がかなり厳しい筈やけど？」

「それなら、僕らも同じことを言われたよ。此処へくるには別の方法を取ったからね。」

「その方法もしゃれになんないようなもんだったけどな・・・お前らの店長はどういう性格してんだよ、なぁ！？」

「俺らに聞くなよ！」

「ウチの店長、気付いたときにはあんなんだったし。でも、間違いなく強いことは確かだよ・・・何せ、隊長クラスの霊力と実力を持った魔導師だからね・・・」

「え?そんな人がいるんですか!?」

浦太郎の言葉に思わず驚きを隠せなくなるフェイト。

「まぁね。いつもは飄々としてるけど・・・いざとなったら最強の部類に入るよ。それにしても・・・君が店長がベタ惚れするなのはちゃんか・・・」

「え!?あ・・・あの・・・?」

顔を赤らめるなのはに甘い誘惑をする者のように近付く浦太郎。

「う~~~ん・・・流石は店長。見る目に狂いは無い・・・スタイル良し。スマイル良し。顔良し。魔力良し。性格良し。まさに才色兼備の名が誇るよ♪」

「え~~~と・・・あの・・・あんまり褒められると照れちゃうんですけど・・・」

流石になのはも年頃の女性ということあってか、そのように褒められると心臓も高鳴り恥ずかしさは頂点に達するものだ。

「ええやないの、なのはちゃん。浦太郎さんの言ってること正しいよ・・・」

「そうだよ、なのは。普通に考えたら美人の領域だし、もう結婚してもおかしくないよ・・・」

二人のからかいの言葉を聞いたなのはは益々表情を茹蛸のように赤

く染めていく。

「う～～～フェイトちゃんもはやてちゃんも意地悪～～～！私結婚なんてそんな・・・！！それに・・・・・・もしするとしても・・・・・・私の好きな人はとうの昔にいなくなっちゃったし・・・・・・」

そう言うと、なのはのテンションは一気に下降し、意気消沈の表情となり様子を窺っていたはやてとフェイトは思わず表情を一変させた。

「あっ！」

「な！？」

「・・・あ！？」

何かに気がつくはやてとフェイトとは裏腹に、話の内容が全く掴めないでいる恋次や吉良。

そして、その話が終わると直ぐになのはは暗い顔を浮かべたまま部隊長室を後にした。

なのはが出て行った後、自分達の取った軽率な言動に後悔を覚えるはやてとフェイト。

「・・・まずいコト言ってしもうたな・・・私ら・・・」

「自重すべきだってね・・・はやて・・・」

大切な友の気持ちも知らないで軽はずみな発言をしてしまったことに憤りを感じる二人と、訝しげな表情を浮かべる恋次と吉良。

「何だかしらねーが・・・複雑そうだったな・・・あの女・・・」

「そうだね・・・何か物凄く淋しい目をしていたのは・・・間違いなさそうだ。」

「「・・・・・・・――――」」

そんな恋次や吉良と違い、ことの事情やなのはのことをユーノから聞かされている鬼太郎や浦太郎は二人が思っている以上に複雑な気持ちであった。

教えて、ユーノ先生！

ユ「今日は、機動六課についてだよ♪」

ユ「正式名称、特定遺失物管理部　機動六課。はやてが部隊長を務めるスカリエッティ逮捕を主眼に再建された部隊で、ロストロギア関連の危険な任務を扱う特定遺失物管理部の機動課（実動部隊）第六の部隊。後見人にリンディ・ハラオウン、クロノ・ハラオウン、カリム・グラシア、さらに三提督を据えており、本局と聖王教会からの支援を得ている。」

ユ「事件が特に無い日は、毎日フォワードメンバー全員はなのは達による厳しい訓練付けの毎日と、スカリエッティ捜索のために日々頑張っている。」

ユ「ま、事務処理が殆ど無いから無限書庫の局員の何人かは魔力だけの能無し部隊とか揶揄する人も要るけど・・・モグラみたいに書庫で閉じこもってる奴にそんなこと言われたくないけどね。」

亀「店長だって・・・元は無限書庫の司書長でしょ。人のこと言えるの？」

ユ「僕は揶揄をするほど愚かな人間じゃないよ♪それに、仮に誰かが僕の愛しのなのはを汚すような事を口にしたら、それこそ地獄に葬り去ってやるよ♪うしししししし！！！」

桃「愛も度を過ぎれば・・・ただの凶器だけどな・・・店長の場合・

・・」

亀「・・・そうだね・・・・」

トーレ来る！迎撃、機動六課

＞ｉ１２１６３―７０９＜

その頃、ミッドチルダ地上部隊の地下アジトへと戻ってきたファイトとグラトニーは、玉座の間へと迎いスカリエッティが悠々と座る前で立ち止まる。

グラトニーはその場に跪き、ファイが報告を行う。

「――――――只今戻りました。ドクター。」

「おかえり。ファイ、グラトニー。さあ、見せてくれファイ。君が地上で見たもの、感じたことの全てを。」

「・・・はい。」

すると、ファイは自分の左目を抉り取ると、眼球を取り出しそれを握りつぶして粉々にした。

「どうぞ。ご覧下さい。」

粉々となった眼球の破片が玉座の間にいるスカリエッティやその他の魔導虚達の能にまで情報が行き渡り、情景が目に浮かんでくる。

そして、全ての情報が頭の中に流れた後――――スカリエッティは次のように言葉を返した。

「――――成程。それで彼女達を『この程度では殺す価値なし』と判

断したという訳か。それと、まさかこの世界に死神が来ていると驚いたな・・・」

「はい。俺自身もそのことにはかなり驚いています。奴らがどうやってこの世界に来たのかは不明ですが、我々の敵であることは明白です。それに――」

「微温いな。」

その時、ファイの話に横槍を入れてきたのは――同じ機人四天王の一人であるトーレであった。

「死神だろうと何だろうと、この私ならば最初の一撃で殺しているものを。」

「・・・トーレ。」

トーレの周りには部下であると思われる魔導虚数名が同席していた。

「理屈がどうだろうがドクターの『殺せ』の一言が命令に入っているのなら、殺したほうが良いに決まっているだろう！ファイ！？」

「・・・同感だな。いずれにしろ敵だ。殺す価値は無くとも生かす価値など更に無い。」

魔導虚の一人で、比較的背の高いシャークエイジがトーレの言葉に同意をする。

「大体グラトニー！お前はボコボコにやられているではないか！！それで『殺す価値なし』と言っても『殺せませんでした』としか聞

こえないぞ！」

トーレの挑発的な口調に黙って聞いていたグラトニーは腹を立てる。

「・・・てめえトーレ。今の見てなかったのかよ。俺がやられたのはあの赤い大刀の男だ。このクソ女じゃねぇ。」」

「わからない奴だな。私ならその男も一撃で倒せるといっておるのだ！」」

「・・・なんだと？」

グラトニーは我慢の限界に達し、トーレに向っていこうとしたが、それを止めたのはファイトであった。

「止せ・・・トーレ。我々にとって問題なのは機動六課の魔導師じゃないってことはわかるか？」

「・・・何？」

「ドクターが警戒されているのは現在の機動六課の戦力ではなく介入した死神の力だ。確かに六課の戦力は並みの部隊と比べればバケモノクラスだろう。だが、それは大きさに不釣合いな程不安定で、尚且つ死神という未知の不確定要素が加われば自滅する可能性も、こちらの手駒に出きる可能性も在ると俺は踏んだ。だから俺は殺さずに帰っていた。」

「・・・それが微温いと言って居るのだ！もしもその死神たちが機動六課の戦力に加わりお前の予想以上に強くなって、我々に盾突くようになったらお前はどうするのだ！？」

「その時は俺が始末するさ。」

「なっ・・・・・・・・・・・・・」

ファイの馬鹿に落ち着いた態度がトーレの心情を大きくかき乱す。

「それで文句は無いだろう。」

すると、話を聞いていたスカリエッティが口を挟んでこう言う。

「・・・そうだな。私はそれで構わないよ。君の好きにすると良いファイ。」

「・・・有難うございます。」

スカリエッティの言葉を聞いて、丁寧な態度で感謝の意を表現するファイ。

だが、トーレだけは未だ納得した様子ではなく終始腸を煮えくり返らせていた。

「・・・くそ・・・！」

一方、機動六課隊舎へとやって来ていた恋次達は現在リビングではやての話を訊いていた。

「という訳で・・・クロノ提督には私から言っといたから、恋次さん達はこの機動六課の隊舎を我が家のように使ってな」

「もし、分からない事があったら遠慮なく私達に言ってくださいね。」

はやての隣に立つフェイトがそう付け加える。

「ああ、分かったぜ。当初の予定とは大分変な方向に軸がずれちまったが、結果的にコレが一番いいのかもな・・・」

「そうだね。何かとここのほうが情報も一番入ってくると思うしね・・・」

「それより僕、汗かいちゃったから入浴タイムに入りたいんだけど・・・」

「亀の言う通りだな・・・俺もひとっ風呂浴びて飯にするか。」

「じゃあ、俺たちもそうするか。風呂は何所にある？」

「それでしたら、突き当りを右に曲がったところに大浴場が・・・」

「よし！早速使わせてもらうとするか！！」

「あっ！！でもちゃんと見て入らないと・・・！！」

恋次は義骸の体でフェイトの話を最後まで聞かずに、大浴場へと向った。

「へへ！！俺様が一番乗・・・り・・・」

恋次が浴場の暖簾を潜った先にあったのは――ちょうど風呂から

上がり、下着をはこうとしているティアナであった。

ティアナの若い肌を間近で目撃した恋次は赤面させ、同じようにティアナも大事な場所を手で隠して恥ずかしさで赤面させると、絶叫する。

「きゃあああああああああ！！！！！！何ジロジロ見てんのよこの変態！！！」

「のあああああああああ！！！！！！！」

浴場の外で悲惨な物音を直に聞く吉良や鬼太郎達。

やがて、怒ったティアナが風呂用具一式を持って出てくると、恋次も顔中を青痰だらけにして吉良達の前に姿を現す。

そんな恋次を見て、フェイトは苦笑いをする。

「だからよく見て入って下さいって言ったんですけど・・・」

「君はいつもこんな役回りだよね・・・阿散井君・・・」

最早定番のようなものになってしまったかのような口ぶりで、吉良は恋次の姿を見ながら同情をする。

さて、場所は変わって今度は隊舎の医務室を覗いてみよう。

戦闘で負傷したスバルは医務室のベッドでいまだ目を覚まさずにいたが、夜の八時を過ぎたところで漸く意識が戻った。

「ん・・・ここは・・・・」

すると、ちょうど目を覚ましたスバルの下に様子を見に来たティアナが入ってくる。

「あら、もう目が覚めたの？」

「・・・ティア。という事は・・・ここは六課の隊舎？」

「――――そう。あの時重症だったあんたを、キャロが必死になって治癒してくれたお陰で、命に別状は無かったのよ。あとでキャロにお礼言っときなさい。」

「・・・うん。あっ！キャロは！？今どうしてるの！？」

「敵にやられて今は自室のベッドの中で眠ったまま。顔へのダメージが酷くてね・・・でも、助けに来てくれた死神さんが早いうちに治療してくれたから、大事には至らなかったけど。ゲンヤさんも、無事に送り届けたしね。」

「え？死神・・・さん！？」

ティアナの口から発せられる死神という単語に思わず耳を傾けるスバル。

「そう言えばあんたはまだ聞いてなかったわよね。良いわ、私が教えてあげる。」

その後ティアナは、今日あった出来事の詳細をスバルに全て話した。

気絶した自分やキャロたちを救ってくれたのは誰か？
死神と呼ばれる存在が一体どういうものなのかを？
自分の理解しているだけのことを出来るだけわかりやすく。
「そうなんだ。じゃあ、その人たちがそいつらを追っ払ってくれたの？」
「まぁね。何でも、スカリエッティ捜索と魔導虚の殲滅ってことで異世界から来たみたいでね、しかもその同行人の一人も・・・私とあんたが前に所属してた陸戦部隊に特別講師として一時出向してきた教導官だった人なのよ・・・」
「陸戦部隊に出向してきた教導官・・・って！もしかして亀井浦太郎教官！？」
実はスバルは依然、四年前に機動六課へ出向となる前は当時所属していた部隊の訓練に参加していた講師の浦太郎による共同訓練を受けたことがあり、その時に一度浦太郎とは何度か世話になっていたのだ。
ティアナもスバルも漸くそのことを思い出した。
「ええ。それでね、クロノ提督の許可を貰ったからその死神さん達と浦太郎さん達の身柄を機動六課で預かることになったって訳。多分、今後訓練にも参加してくれると思うわよ。」
「浦太郎教官が訓練に・・・か。何だかちょっと懐かしいかも・・・」

浦太郎の教導を数年ぶりに受けることが出来るとわかり、スバルは期待を膨らませ笑みを浮かべる。

その頃、自室に戻ってスクライア商店のユーノと中間報告をする恋次。

「て、感じだな。今のところは・・・」

『そうですか♪まっ、結果的によかったことですし安心しました♪それじゃあ、明日からは六課の隊長陣やフォワードのみんなと訓練ですね。』

「ああ。あんまし乗り気じゃねぇんだけどな・・・」

『あらら?またどうしてです?』

「いやだってよ・・・ほとんど女ばっかしじゃねぇか・・・どうも乗れねーよ。」

恋次はこれでも男だ。

男ばかりの職場にされてしまった所為か、あまり女ばかりの職場の雰囲気にはどうもしっくりこなかったらしい。

そんな恋次に向ってユーノは扇子を広げながら、何時ものような態度でこう言う。

『何言ってるんですか♪女だからって気を緩めたら恋次さんのほうがボコボコにされちゃいますよ。特に、なのはは容赦ないですから

ね、昔から♪多分、なのはの本気を止められるのは僕ぐらいですから♪』

「そうなのか・・・？つうかよお・・・お前さっきから聞いてればなのは、なのはって言うけど、あいつとはどういう関係なんだ？」

恋次がそう言うと、ユーノは突然態度を一変させて話題を勝手にそらしてしまった。

『ああお腹すいた♪今日の晩御飯は何かな～～～♪そんじゃ頑張ってくださいね♪』

ユーノはそう言い残すと、恋次にお構いなしに通信を一方的に切った。

「って、おい！！！人の話し聞けよ！！たく・・・ふざけ奴だ。それにしても・・・何であいつ俺たちにあんなこと言ったんだ？」

恋次はこの世界に来る前に、ユーノに言われたある言葉を思い出す。

〈もし、管理局の連中に僕のことを尋ねられても・・・絶対に喋らないで下さいよ♪喋ったりしたら・・・殺しちゃうぞ♪〉

「そこまでして自分の所在を知られたくないのか・・・あいつは。でも・・・俺の知ってる限りあいつは間違いなく最強クラスの魔導死神。それなのに、何故あんなところで燻ってるのか・・・訳が分からねーぜ。」

そんな恋次の思惑とは裏腹に、スクライア商店の外で満月を見つめるユーノ。

その表情は何所か悲しげで、まるで今もユーノの帰りを待ち続けるなのはとよく似ていた。

「店長、食事の用意が出来ましたですぞ。今晩はマーボーなすですぞ。」

そんなユーノの下に、エプロンを身に纏った金太郎が声を掛けてくる。

「ありがとう。金太郎・・・」

金太郎はそのままユーノの隣に立つと、今ユーノが考えていることを口にしてみる。

「・・・気になっているようですな。彼女のことが・・・？」

「・・・どうも最近元気が無いっていう噂が耳に入ってね。気にはしてるんだ。でも、なのはなら大丈夫だよ。だってなのははそんな弱い女性じゃないから。僕がいなくても、なのはには沢山の翼がある・・・不屈のエースオブエースはいつだってそうだったからね。」

「・・・本当にそれで良いのですか？」

「言っただろ。モグラと天使は相容れないって。僕は汚れても構わないけど、なのはが汚れることは絶対に許さない。いつまでもなのはには、輝いて欲しいから・・・その為に僕は汚れるんだ。それが僕に出来る精一杯の償いさ・・・」

「・・・・・――――――」

ユーノの言葉を聞いて何も答えられなくなった金太郎。

二人はその後暫く空で光り輝く満月を呆然と見続けた。

さて、再び場所はミッドチルダに戻そう。

ミッドのビルの欄干に座り全員が集まるのを待ち続けるトーレ。

「・・・揃ったな。」

そして、トーレの下に集まる五人の魔導虚の軍勢。

「誰にも見られていないだろうな。」

「無論だ。トーレ・・・」

トーレに向ってシャークエイジが何か言いたそうだった。

「何だ?」

「・・・此処へ来る途中、二人の強い霊圧と魔力を感じた。ファイの報告と一致しない・・・」

「・・ちっ!探査神経(ペスキス)を全開にしろ。」

トーレも含めた六人全員は探査神経を全開にして、機動六課の周囲に集まる死神の霊圧と魔導師の魔力を感じ取った。

「・・・思った通りだ・・・四人に増えている・・・!尸魂界から

派遣されたのが隊長格二名と強い魔力を持った男と霊力を持った男・・・御託を並べる前に最初から始末しておけばこんな面倒なことにはならなかった筈だ・・・だからお前は微温いと言うのだ、バカが・・・！」

「デュナン。シャークエイジ。ハードヘッド。バンプ。バズソー。行くぞ・・・遠慮も区別も必要ない。我々に立ちはだかる者は・・・一匹残らず叩き潰せ。」

そんなこととは露知らず、機動六課で滞在する恋次達は現在それぞれが別行動を取っていた。

吉良は拾い隊舎の中で自分の部屋が分からなくなってしまい、あちこちを捜し歩いていた。

「あれ？ここはさっき通ったしな・・・ここも違うな・・・こっちも違うな・・・何所だっけな・・・僕の部屋？」

恋次のほうはと言うと、食堂でヴィータでさえも呆れるほどの食事をこれでもかとばかりに腹の中でと収めていく。

「うめぇ！！こっちの世界の食事も悪くないな・・・」

「え～と・・・恋次だっけか・・・お前流石に食いすぎだろ。」

「いいじゃねぇかよ別に・・・腹減ってんだよ。本当は、和食派なんだけどな・・・まぁ世話になるからには文句は言わねえからよ。」

「それにしたって少しは遠慮って言葉憶えろよな・・・後で片付けるスタッフが大変だろうが・・・」

「そこは大目に見てくれよな。その代わり、こっちはちゃんとフォワードの訓練に付き合ってやるからよ・・・」

「ほう・・・それは楽しみだな阿散井。」

すると、二人の下に現れたのは包帯で左腕と頭を巻いたシグナムだった。

「お、シグナム・・・傷はもう良いのか？」

「ああ。手も足も日常生活に支障は無い。戦いは当分休ませないといけないがな・・・それでだ阿散井。もしお前がよければ、今度私と模擬戦してくれないか？」

「模擬戦・・・？ふん、いいだろう。売られた喧嘩は買わなきゃ男が廃るってもんだ。その挑戦、乗った！！！」

「嬉しいぞ。私も腕が鳴る・・・」

二人はどうも似たもの同士であり、互いに火花を散らして闘争心を剥き出しにした。

そんな二人の様子を呆れた様子で見守るヴィータ。

「はぁ～～ここにもバトルマニアが増えちまったな・・・」

また、鬼太郎と浦太郎は隊舎の屋根である雑誌を手に取ったままこんな話をしていた。

「・・・妙だとは思わねえか・・・亀。」

「ん？・・・何が妙なんだい先輩？」

「こいつだ・・・『週刊フライデー』・・・！」

「週刊っていってる割に発効日は不定期だし・・・しかも、書いてる中身はゴシップ誌というより考古学の論文に近し・・・それをそこら中の店にあれだけずらりと並べてやがる・・・しかも売り子に訊けば、店で隠れた人気を誇るって話じゃねぇか・・・とても正気の沙汰じゃ無え・・・！何故こんなもんが隠れた人気を博してるかは知らねえが・・・俺はウラで糸を引いてる奴がいると見たぜ・・・！」

「奇遇だね先輩・・・僕も丁度同じ考えに至ったところだよ・・・！」

また、キャロの自室を訪れ容態を心配するエリオ。

「キャロ・・・もう起きても大丈夫なの？」

「うん・・・戦うのはまだ無理だけど、体を動かす程度なら大丈夫だって、シャマル先生が言ってたし。」

「・・・そうか。でも良かった・・・キャロが無事で。僕がもっと早く着いていれば、キャロをこんな目にあわせずに済んだのに・・・ホント御免・・・」

「うんうん。謝ることはないよエリオ君。そう思ってくれるだけで嬉しいから・・・エリオ君がいつも私のこと守ってくれるから、私

は元気にエリオ君に笑いかけてあげられるんだよ。」

「キャロ・・・ありがとう。」

「私のほうこそ・・・いつも守ってくれて有難う・・・エリオ君。」

二人のその様子はまるで子供の頃のなのはとユーノに近いと言ってもおかしくなかった。

一方、別の場所ではティアナとスバルが一緒になのはとフェイト、ヴィヴィオの共同部屋を訪れヴィヴィオに勉強を教えていた。

「それじゃあ次の問いの答え合わせね・・・ヴィヴィオ、答えは?」

「え~と、およそ7分30秒のズレが生じます!」

「はい正解!やっぱりあんたは優秀ね、ヴィヴィオ。その爪の垢煎じてスバルに飲ませたいくらいよ。」」

「もうティア!私そこまでバカじゃないよ!!いくらなんでも10歳の子よりは勉強できるつもりだって・・・!!」

「じゃああんたに質問。新暦39年の6月4日に起きた時空管理局での大事件と言ったら・・・?」

「えっ!!え~~~と・・・え~~~とね・・・あははは・・・何だけっけ?」

「はぁ~~~ヴィヴィオ、教えてあげてね。」

「はい！新暦３９年６月４日は時空管理局本局の次元航行船『クリッパー』が次元空間で突如消息を絶ってしまい、その後の捜索で一ヵ月後に無事に乗務員全員の無事を確認。事故原因はエンジンルームの航空機能の老朽化だと言われています。」

「よく出来ました。スバル・・・あんた１０歳の子供に負けてるわよ・・・」

「っもう！こんな問題いきなり出されて答えられるわけ無いよ！」

ティアナの言葉に思わず腹を立ててしまうスバルと、そんなスバルを見ながら微笑むヴィヴィオ。

みんながみんなそれぞれの時間を過ごしている頃、はやてとフェイトは廊下を歩きながら今回の一連の騒動について、深刻な思いを抱いていた。

「魔導虚の出現と・・・ジェイル・スカリエッティの企て。今度はそないなことで管理局に戦争仕掛けるつもりなのかしれへんけど・・・それだけは何としても阻止せなあかんな。」

「そうだね。人の命を道具のようにしか見ない犯罪者に、これ以上好き勝手やられるのは御免だからね・・・ところで、なのははどうしたの？」

「今の時間やと・・・また何時もの場所で一人でいると思うよ・・・なのはちゃん、最近いつもそうやから。」

「うん・・・ユーノのこと、なのは今でも諦めずにずっと帰りを待ってるからね。」

「今にして思うと、ユーノ君がまだいたときのなのはちゃんが一番笑ってたかもな。最近はヴィヴィオと一緒でも何となくやけど、半ば無理矢理って感じやし・・・」

「ユーノったら・・・本当に何所に行っちゃったんだろう・・・なのはがこんなになって恋焦がれて待っているのに・・・」

「ほんま困ったもんやね。なのはちゃんもユーノ君も・・・」

二人がそんなことを思っている間も、なのはは一人何時もの場所で一人満月を見ながらユーノの顔写真を淋しそうに眺めていた。

「・・・ユーノ君・・・何所行っちゃの?毎年私の誕生日には、どんなことがあっても顔を見せてくれたのに・・・それすらも忘れちゃったの?私・・・私・・・今はこんなにも淋しいんだよ・・・だから・・・早く帰ってきてよ!!そして・・・ちゃんとご免なさいって言わせてよ・・・!!」

なのはの涙が何時ものと変わらず写真の上へと零れ落ちる。

ここで、少しなのはの所持するユーノから貰ったペンダントについて詳しく説明しようと思う。

一度過去の時間へとさかのぼる―――――

それは、高町なのは１９歳の誕生日を迎えた日。

機動六課が設立される前、なのははフェイトやはやて達と共に地球へと里帰りを果たし、アリサ達を始めとする自分にゆかりのある人物たちと共に誕生パーティーを開催するという予定で、準備を進めていた。

ちなみに、会場は勿論の如く実家が経営する喫茶『翠屋』である。

貸切と書かれた札と、その奥から聞こえる大人も子供も入り混じった何十人もの声。

夜の6時を迎えると、なのはの友人達一同や親兄弟はクラッカーを鳴らし、盛大に誕生日を祝う。

「「「

「なのは。今日で１９歳になった訳だけど・・・心境的にはどんな感じ？」

フェイトがそう尋ねると、なのはは指を顎に当てながら考え始める。

「そうだな・・・あんまり実感湧かないんだけど、十代も今年で最後・・・来年からは紛れもなく大人の世界に足を踏み入れることになる訳だけど・・・私は今のこの日常一つ一つを大切にしていくことは変わらないかな。みんなと笑顔で笑い合って、時には一緒に泣いたり・・・怒ったりも・・・それもひっくるめて今の私があるから、ね♪」

なのはのその言葉を聞くと、既に酔っぱらっていた実父の士郎が指笛を吹く。

「ひゅー！ヒュー！いいぞなのは！！それでこそ俺の娘だ！！ほら、みんなももっとなのはを褒めてやってくれ！！」

「はいはい。なのは、良いこと言ったわね。お母さんも嬉しいわ！」

「お姉ちゃんも嬉しいよ、なのは。だけどあんまり大人ぶってても駄目だからね。甘えたいと気が合ったらいつでも甘えていいんだからね。だから無理して気張らない事。いい？」

「お姉ちゃん・・・うん！ありがとう！」

美由紀の言葉を真摯に聞き入れ、満面の笑顔で答えるなのは。

そして、ちょうど区切りがついたところでいよいよ本格的な盛り上がりを見せ始めるパーティー。

全員がそれぞれに楽しんでいる中、なのはは一人まだこの会場には到着していない人物の事が気になった。

「（そう言えば・・・ユーノ君まだ来てないな・・・）」

実はこの時もユーノは無限書庫で一人仕事をしており、本来ならばタン病パーティーに間に合う予定だったのだが、急ぎの依頼が入ってしまい未だ到着していないのであった。

なのはは少し考えたから何か思い立つと、全員に気づかれないように店を出て、ユーノを迎えに行った。

外は肌寒く、なのははコートに身を包むと小走りで走り出し、街中を徘徊しながらユーノの事を探し続けた。

そして、一つの場所を見付けると徐にその中へと入っていった。

そこは、なのはとユーノが最初に出逢った森の中だった。

なのはは森の中に入ると、十年以上変わることなく立ちつづける周りの木々や草花を見、感慨にふけっていた。

「十年・・・か。思えば始まりはここからだったんだっけ。ユーノ君と出逢った、ここからが私やみんなとの始まり・・・・・・」

すると、なのははその時不意に頭の中にユーノの姿を思い浮かべながらこんなことを考えた。

「昔はずっと一緒だった。だけどいつの間にか遠くなって・・・―

――私とユーノ君は別々の道を行って・・・――一緒に居られなくなっていった。ちょっと、そう考えるとやっぱり寂しいかな・・・・・」

事実、なのはとユーノの距離は日を追うごとに大きくなっていく。

お互い多忙な身であり、片や戦技教官で片や無限書庫の司書長。

なのははそんな事を考えると、何だか胸が締め付けられたときのような切ない気持ちとなり、思わず桑井表情を浮かべてしまう。

と、その時。

「なのは?」

不意になのはを呼ぶ声が聞こえ、一瞬その声に驚きながらなのはが振り返ると、そこに居たのはつい先ほど仕事を終わらせ翠屋へと向かって走っていた嘗てのパートナーであり己の世界を変えてくれたかけがえのない人物、ユーノその人だった。

「ユーノ君。何でここに?!」

「いや・・・それは寧ろ僕の台詞だと思うような・・・なのはこそどうしたの?パーティーの方、楽しんでるかと思ったんだけど・・・」

「あ。その・・・ユーノ君がまだ来てなかったし、そろそろ来てもいいころだなって思ってさ、迎えに行こうとしたんだけど、何だか妙にここに来てみたくなってね。」

「そっか。しかし十年も経つのに、ここは最初の頃と全く変わってないや。」

ユーノはそう言いながら、徐になのはの元へと近づいて行きなのはと同じように周りを見渡す。

すると、なのははそんなユーノを傍で見ながら徐にこう口を開いてきた。

「ユーノ君・・・・・・また無茶してない？」

「え。」

一瞬驚いた顔となるユーノだが、ユーノは直ぐに顔を元に戻してポーカーフェイスを決め込んだ。

「大丈夫だよ。前ほど無茶はしてないつもりだから・・・」

なのははこの時若干のウソを感じていたが、今はそれを問い詰めるという気分ではなかった。

ただ純粋に彼と話がしたかった。

普段いられない分、沢山の事を。

「出逢ったころはいろいろあったけど、それも全部全部大切な・・・私達の始まりの切っ掛けはここだった。傷ついたフェレットを見付けて、それが言葉を話して、魔法の力をくれて、そこから色んなことが起こって・・・」

「なのは・・・」

「私・・・ユーノ君に遭えたこと、凄く嬉しいんだ。だって、ユーノ君と出逢わなかったら、きっと私は今こんなにも幸せじゃないと思う。」

「・・・そっか」

ユーノはなのはに対して何処か複雑な想いを抱きながら相槌を打ってから、暫くの沈黙を保ったのち懐から長方形型の箱を取り出した。

「なのは。あのさ・・・大したものじゃないんだけどさ・・・」

「ん?」

「その・・・よかったらこれ・・・貰ってくれるかな?なのはへの誕生日プレゼント・・・時間無くてこんなものしか手に入らなかったけど・・・／／／」

照れた表情でなのはにそう言うと、ユーノは徐に箱の中身をなのはに見せ、なのははそれを見た途端、顔を薄赤く染め上げる。

箱に入っていたのは、何の変哲もないペンダントではあったが、ユーノからの自分へのタン病尾プレゼントとなれば話は別。

この上もない嬉しさが湧いてくるなのはは素直に感謝の言葉を述べる。

「・・・ありがとう、ユーノ君・・・これ、私大切にするから・・・／／／」

「うん。そうしてくれると、有難いよなのは。」

お互いに照れた様子で言葉を交わすユーノとなのは。

なのははは徐にペンダントを手に取ると、それを落とさないようにしっかりと握りしめユーノに飛び切りの笑顔を向け、ユーノもそれに応えるように柔らかな笑みを見せた。

これが、このペンダントにかかわるユーノとの思い出の話である。

回想終了。

現実の世界へと戻ろう。

なのははそんな事も思い返しながら、今一度手の中にそのペンダントを強く握りしめ、すすり泣きながらユーノの写真に涙を止めどなく落とし続けるのであった。

「ユーノ君・・・／／／」

それから、暫く時間が過ぎたときだった。

トーレ達六人は補足を済ますと、出撃の最終準備に入っていた。

「全員、捕捉は完了したか？行くぞ、一匹たりとも逃がすでないぞ！！」

トーレの掛け声と供に機動六課へと向う五人の魔導虚。

その霊圧を感じた恋次と吉良、鬼太郎と浦太郎。

「――――この霊圧は――――・・・・！」

「魔導虚（あいつら）だ・・・！！」

それと同時に隊舎中に鳴り響くアラートの甲高い音。

なのは達はその音を聞くなり、一気に緊張が走る。

「何！？第一級警戒警報！？」

管制室のモニターで六課へと向って来る未確認の敵にシャーリーやアルト達は動揺を隠せなった。

「ミッドチルダ東部から機動六課隊舎に向けて、未確認体六名が急速接近！」

「魔力数値・及び霊圧硬度から見て、かなりのものであることが判

明してます！！」

「こっちに来てるんかいな！？」

はやては直ぐに全体連絡で隊舎中の局員となのは達前線メンバーに指示を送る。

『隊舎に残ってるスタッフメンバーとフォワード部隊に緊急連絡。謎の未確認体がこちらに向っている。バックヤードスタッフは速やかに避難を！動けるフォワードメンバーで迎撃に出る。戦闘準備を整いてな！』

「了解！」

なのは達同様、死神化した恋次と吉良、そして鬼太郎達も集まり撃激に準備に入る。

「俺たちも出るぞ、吉良！」

「ああ。鬼太郎さんと浦太郎さんにも協力を要請するよ！僕と阿散井君で一緒に出る。君たちは二人で迎撃に向ってくれ！」

「おっしゃ！！燃えるぜ燃えるぜ！！行くぞ、亀！！！」

「オッケイ、先輩！」

エリオはフェイトが待つ隊舎の屋根のほうへ向かい、直ぐに合流を果たす。

「フェイトさん！！」

「エリオ・・・シグナムとキャロのほうは？」

「戦闘には当分出られそうにありません。ここは僕たちで何とかする必要がありますね。」

「そっか・・・構えて、エリオ。来たよ」

フェイトがそう言った瞬間、二人の目の前に高速移動してくる魔道虚の二人。

エリオはあまりの速さにかなり驚いていた。

「！！（速い！！）」

「・・・初めまして。」

フェイトは再び高速移動で姿を消した魔導虚の一体の動きに注意を張り巡らせ、隙を突いて襲い掛かってきた魔導虚の攻撃をバルデッシュの刃で食い止める。

「魔導虚の一人、シャークエイジと申します。」

「・・・時空管理局機動六課、ライトニング部隊隊長フェイト・Ｔ・ハラオウン。」

それを訊くと、シャークエイジは武器を振り払いフェイトと距離を取りほくそ笑む。

「・・・ライトニング隊隊長・・・それはそれは素晴らしい・・・・

・・ならば、私は当たりと言う訳だ・・・！」

「・・・いいえ。多分お前が一番のハズレだから。」

フェイトはシャークエイジに向けて自身の魔力を放出し、威嚇をする。

シャークエイジもフェイトの魔力量に驚きながら、興味津々な様子で見つめる。

「・・・ほう」

また、同じ頃警報を聞いてバリアジャケットに身を包んだヴィータは、なのはとティアナとは別行動で迎撃に向かい、走り出す。

「くそ！何つーデケー魔力だ！？これが魔導虚ってやつらのものか！？」

「何だよ。随分と小せーガキじゃねぇかよ。」

その時、ヴィータの傍で見知らぬものの声が聞こえた。

そして、気がついた時にはヴィータの胸元には魔導虚の一人の手刀が突き刺さろうとしていた。

「ハズレだ！」

しかし、それを止めてくれたのが吉良であった。

「！！」

「・・・ハズレかどうかなんていうのは・・・戦ってから決めるものだよ。」

「・・・ハッ。それもそうだな。そんじゃあてめぇら全員殺してから、もう一度言わせて貰うとするぜ。“どいつもこいつも大ハズレ”だってな！」

ついに始まる魔導虚と機動六課の戦い。

次回、いよいよ戦闘開始！

トーレ来る！迎撃、機動六課（後書き）

教えて、ユーノ先生！

ユ「今日は、浦太郎について教えてあげるね♪」

ユ「浦太郎は、四年前まで時空管理局地上本部で活躍していた、陸戦部隊のエースオブエースで、デバイスはエリオ同様槍状型のアームド型インテリジェントデバイス、『フィッシャーマン』。」

ユ「さらに、切れるとなのはみたいに魔力が急上昇して、あの有名なディバインバスターを撃つことだって出来るんだ。」

ユ「でもちょっと僕心配なんだよな・・・何せあいつ、鬼太郎曰くかなりの女ったらしらしくてね・・・フェイト達はともかくなのはにナンパするのはやめてほしいんだよね、正直な話。」

亀「そんなヘタレたままだから、店長は何時までもなのはちゃんに告白なんか出来ないんですよ。店長が告白できないなら僕がなのはちゃん奪っちゃうおうかな♪」

ユ「（ぶち！）・・・輝け、『晩翠』♪」

亀「ほぎゃあああああああ！！！！！！！（撃沈）」

ユ「全く・・・誰がそんなこと言ったんだよ。僕だって・・・僕だっていつかなのはに自分の想いを告げたいと思ってるんだ！！そう言うわけで、なのはに近付く害虫は容赦なく潰すからそのつもりでね♪」

三番隊の矜持と浦太郎の願い

＞ｉ１２８２２―７０９＜

機動六課へと襲撃してきた魔導虚の軍勢。

それを迎え撃つ機動六課隊長陣とフォワードメンバー、そして死神。

最初の戦いはまず、吉良とヴィータだ。

一瞬のうちに攻撃を喰らいそうになったヴィータだったが、吉良の介入により何とか直撃を済むことはなかったが、あと一歩遅かったら間違いなく命は無かった。

吉良によって掴まれていた腕を振り切り、不敵な笑みを浮かべて距離を取る魔導虚と吉良。

そんな二人を傍らで見ながら、ヴィータは先程までの自分の命の危機に恐ろしくなり、息を切らしていた。

「（・・・死んでた。吉良が来るのがあと一瞬遅かったら・・・・・・私は確実に死んでた・・・）」

「・・・怪我はないかい、ヴィータ？」

「え・・・あ・・・ああ！」

「そうか、それなら安心だ。ヴィータ、君は他の人たちの援護に行ってくれないか？こいつは僕一人で相手をする。」

吉良の思いもよらぬ一言にヴィータは驚愕する。

「ま・・・待てよ吉良！お前一人でこいつを・・・」

「ヴィータ！これか何も一人の戦いじゃない。チームでの戦いなん

だ。個人の感情の為に、仲間が傷ついてもいいのか？」

その言葉にヴィータは、心動かされた。

暫くの思案の末、ヴィータは鼻で笑うと吉良のその場を任せることにする。

「・・・ふん。それもそうだな・・・それじゃ、私はなのはの手伝いでもしてくるわ。ここはお前に任せる・・・吉良。」

「ああ・・・」

ヴィータはそういい残すと、吉良に魔導虚を任せてなのはが向ったであろう別の場所へと急いで走っていった。

そして、隊舎の玄関前で二人だけとなった吉良と魔導虚の一体はその場に立ち尽くし、互いを牽制しあう。

「・・・さァ・・・どーやって殺してやっかなァ・・・！」

吉良はそんな魔導虚を見ながら徐に腰の刀を抜いて、魔導虚をにらみつける。

それを見た魔導虚は薄ら笑いを浮かべると、『響転（ソニード）』と呼ばれる霊力を使った高速移動で吉良の目の前に移動し、手刀で攻撃を仕掛ける。

吉良は魔導虚の攻撃を刀で防ぎながら、衝撃の所為で地面を擦りながら後ろへと引き下がっていく。

吉良は一度空中に移動して、攻撃を回避すると建物を足場にして今度は自分が魔導虚に刃を振り下ろしていく。

魔導虚は吉良の刃を手で防ぎながら、自分の名前を吉良に告げる。

「魔導虚（ホロウ・ロギア）の一人、デュナンだ。」

「三番隊――――――」

「・・・あァ。言わなくてもいいぜ。これから皆殺しにする連中の名前なんか、イチイチ聞いてたらキリ無えからな。」

「・・・そうかい。」

すると、吉良は攻撃を一度やめてデュナンと距離を取ると、次のように言う。

「だったらせめて――――――刀の名前くらい憶えていくと良いよ。」

そう言うと、吉良は自分の斬魄刀を誰かに差し出すように前へ突き出すと、そのまま刀の名前を告げる。

「面（おもて）を上げろ、『侘助（わびすけ）』」

その瞬間、吉良の斬魄刀の刀身が鉤状のものへと変化していく。

「何だそりゃ？そんな妙な刀で一体どうしようって言うんだ？」

「それをこれから君にイヤと言うほど教えてあげるよ。」

すると、吉良は瞬歩でデュナンの傍へと移動し侘助を使って切りかかる。

デュナンは咄嗟に腰に指していた棒型のデバイス、『クリムゾンクロス』を取り出し斬撃を受け止める。

その後空中で繰り広げられる激しい斬撃と棒撃戦。

「ハハッ！！何をするかと思えば何も起きやしねーじゃねぇかよ死神！そんな斬魄刀じゃ俺のクリムゾンクロスには対応できねぇ！！死ねッ！！！」

デュナンはそう言うと、クリムゾンクロスにカートリッジをロードさせて、魔力を爆発的に高めると、そこから血色色の水流を発生させて吉良に攻撃を仕掛ける。

「『ウォーターホイッパー』！！」

吉良は血色の水流に飲み込まれ、近くの建物の壁に激突する。

「がはっ！！（何て水量・・・何て速さだ・・・！？避け切れなかった・・・）」

そんな吉良の苦しむ姿を空高くてで見下ろすデュナンは思わず高笑いをする。

「ハハハハハハハッ！！！ざまーねーな死神！！所詮、てめぇの力じゃ俺は倒すことは出来ねーぞ、おい！」

しかし、それを訊いた吉良はデュナンの言葉に薄ら笑いを浮かべると、こう言った。

「・・・ところで、君は何回僕の斬撃を受けたか憶えてるかい？」

「ああ？何のことだよ・・・そんなもん憶えてる訳・・・」

と、その時だった。

デュナンは右手に持っていたクリムゾンクロスが突然自分ではとても持てないほどにまで重量が加わり、重力に従って身体ごと落下していった。

「なん・・・・・・だ・・・・・・こりゃあ・・・・っ！？」

重力には流石のデュナンとて耐え切ることは不可能であり、その重みによって身体は地面に食い込まれて身動きが取れなくなってしまった。

「・・・く・・・くそ・・・っどうなってやがんだ・・・クリムゾンクロスが急に重くなりやがった・・・！？重力でも操っているのか！？」

「違うよ。」

デュナンの言葉を聞いた吉良がそう否定すると、徐に歩み寄ってきた。

「斬りつけたものの重さを倍にする。二度斬れば更に倍。三度斬ればそのまた倍。それば僕の斬魄刀、『侘助』の能力。君はさっき、

侘助の斬撃を七度そのデバイスで受けた。仮にそのデバイスの重さが2～3?前後と考えて、二の七乗倍すると、２５６?。抱えていられる重さじゃない。」

「カスが・・・小細工しやがって・・・汚ねえ野郎だぜ・・・！！」

「汚い?・・・ああ、そうか。君は僕とは戦いに対する考え方が違うようだね。だったら教えてあげるよ。僕にとって“戦い”とは一体どういうものなのかを。三番隊の隊花は“金盞花”。花の持つ意味は“絶望”・・・それは即ち三番隊の矜持だ。」

「矜持・・・だと!?」

「そうだ。戦いは英雄的であってはならない。戦いは爽快なものであってはならない。戦いとは、暗く・恐ろしく・陰惨なものでなくてはならない。それでこそ人は戦いを恐れ、戦いを避ける道を選択する。僕の斬魄刀『侘助』は全ての斬魄刀の中で最も、この三番隊の考えに即した刀だと、僕は思ってる。斬りつけたものの重さを増やし続け、斬られた相手は重みに耐えかね地に這いつくばる。そして必ず、“侘びるかのように頭(こうべ)を差し出す”。故に、『侘助』。」

「・・・・・・――――――」

吉良の言葉を聞きながら、今一度動けない身体で月光で不気味な光を放つ侘助を見つめる冷や汗をかくデュナン。

「その妙な形の刀で、一体どうするんだと訊いたね。」

次の瞬間、吉良は無表情のままデュナンの首下に鉤状の刃をつきつけ首を落とそうとしていた。

それを見たデュナンは死が怖くなり、吉良に説得を試みる。

「まっ・・・待ってくれ・・・！話せば分かる！！」

「命乞いをするなよ。話したところで何も変わらない・・・」

その瞬間、切り落とされるデュナンの生首。

刃と地面には血が流れ落ち、それはまさしく陰惨な光景でしかなかった。

デュナンの首を切り落とした吉良は佗助を元の状態へと戻し、死んだデュナンの姿をもう一度見ながら徐に刀を納める。

「さようなら・・・戦士デュナン。できれば僕を――――許さないでほしい。」

その頃、吉良が無事に勝利を収めた間――――なのは達は危機的な状況に陥っていた。

圧倒的な力の前に、機動六課自慢の魔法は一切聞かず、魔導虚には傷一ない状態であった。

それに対して、なのは達は魔導虚の攻撃をまともに喰らい、防護服を身に纏っているにもかかわらず傷だらけになっていた。

「はっ、はっ、はっ、はあっ」

「はっ、はっ、はっ」

「はっ、はっ、はっ、くそ・・・！」

満身創痍で、額からも血を流すフェイト・なのは・ヴィータの三人。

そんな三人をそれぞれ別の場所で余裕の表情で見つめる魔導虚達。

スバル達を避難させ、安全を守るはやてやティアナ達はなのは達が苦戦していることに驚きを隠せなかった。

「・・・なのはちゃん・・・フェイトちゃん・・・」

「こんなのって・・・まさか・・・！？」

「なのはママ・・・フェイトママ・・・」

ヴィヴィオの心配を他所に、フェイトは内心かなり焦っていた。

空中で戦っている自分とは違い、陸戦型のエリオは既に魔導虚の一体にやられてその場で血を流して倒れていたのだった。

「はっ、はっ、はっ・・・（・・・エリオ・・・！）」

すると、徐にそんなフェイトを薄ら笑いを浮かべながら次のように発言するシャークエイジ。

「・・・フ・・・隊長格が全力を出してもこの程度・・・・・・極めて残念です・・・確かに貴方は・・・一番のハズレの様だ。」

「くっ！」

その後、各地で繰り広げられる隊長格と魔導虚の戦いは更に熾烈を増していた。

「ディバインバスター！！！」

バスターモードのレイジングハートから発射されるなのはの得意技。

それを迎え撃つ姿勢の魔導虚、バンプはディバインバスターを容易にラウンドシールドも使わず手甲で受け止めると、その威力にも一切動じず。

砲撃が収まると、今度はヴィータがギガトンハンマーを振り上げて攻撃を仕掛ける。

「ギガトンハンマー！！」

しかし、それを見たバンプは手甲を使って子供を手なずけるよりも簡単にハンマーヘッドを受け止めた。

「なっ！！」

「そんな！？」

なのはもヴィータもその光景に流石に目を疑ってしまった。

そして、そんな二人の身体に一瞬のうちに懐に入ったバンプが手甲の打撃を連発し、二人を攻撃してきた。

二人はシールド魔法もままならないうちにバンプの拳撃を喰らった

ことで、内臓が潰れて大量の吐血を出す。

「「ぶっは！！」」

「・・・ク・・・ははははははははは！！！！！！そんなものかよお二人さん！！お前らの魔法ってのは！！お前ら程度のカスが隊長と副隊長か！！時空管理局の底が知れるな！！」

「ヴィータちゃん・・・大丈夫・・・！？」

「ああ・・・私は大丈夫だ・・・それよりお前のほうがヤバイだろ・・・！」

「私だって・・・これぐらいじゃ倒れないよ・・・でも、流石に今ので内臓のどこかは潰れたみたい・・・ぶっは！！！」

なのはは潰れた内臓の箇所を手で抑えながら、口から血を吐き続ける。

「なのは！！！くそ！！！てめぇ許さねー！！！！」

ヴィータは怒りを頂点に達した状態で、なのはに対する怒りと自身の怒りの全てをグラーフアイゼンに乗せてバンプに攻撃する。

「ギガントンハンマー・エクスパンド！！！」

〈ｅｘｐｌｏｓｉｏｎ〉

カートリッジをロードして、クロスレンジを爆発的に高め渾身の一撃を仕掛ける。

打撃の瞬間、巨大な爆発音と爆風が周囲に巻き起こりはやて達も思わず目を向ける。

「ヴィータ！なのはちゃん！！」

「どうなったの・・・一体！？」

やがて、晴れた先にヴィータとなのはが目にしたものは――――――信じられない光景だった。

何と、あれだけの強大な破壊力を持ったヴィータの攻撃を直撃しても、全く顔色一つ変えず怪我もしていないバンプ。

「なっ！？」

「ありえない・・・ヴィータちゃんの攻撃を喰らって・・・傷一つ負わないなんて！？」

「言いこと教えてやるぜ、お二人さん。俺らの体皮は魔法と霊力の攻撃をも防ぐ『魔皮（イエロッヴァイ）』。それ自体が鎧だ！お前らの攻撃なんぞ、屁でもねぇんだよ！！」

「くっ！！」

「バケモノめ・・・！！」

「ふふ・・・もう打つ手はなしか・・・じゃあそろそろ終わりにしようじゃないか・・・お二人さん！！」

〈Ｄｅｖｉｌ　ｅｘｐｌｏｓｉｏｎ〉

バンプの手甲型デバイス、『ハイビットクラッシャー』に漆黒の魔力が注ぎ込まれてエネルギーが収束していく。

「さらば・・・デビルビックバスター！！」

そして、手甲に集められた漆黒の魔力をなのはとヴィータに向けて勢いよく放った。

これぞ、バンプの得意とするディバインバスターとは全く対照的な暗黒砲撃魔法、デビルビックバスターである。

二人は為す術もなくその攻撃に直撃してしまうのかとばかりこのときは思っていた。

だが、その砲撃は二人に当たることは無くある人物の介入により難を脱した。

〈Ｄｅｖｉｎｅ　Ｂｕｓｔｅｒ〉

何所からともなく飛んできた青い魔力光のディバインバスターがデビルビックバスターとぶつかり合い、相殺された。

「「「！！！」」」

三人は唐突な攻撃に思わず表情を一変させた。

そして、そんな三人の下に現れたのは――少しばかりの霊力を使って空中に浮かぶ浦太郎であった。

「いやー！間に合ってよかったよ・・・僕本当は陸戦魔導師だから、空戦は余り得意じゃないけど・・・そう言うことも言ってられないしね。」

「・・・お前・・・誰だよ？」

「ああ、そう言えば君には名乗ってなかったね。いいよ、特別に教えてあげる♪元時空管理局地上部隊、首都防衛隊陸戦部隊所属・・・亀井浦太郎。僕に、釣られてみる？」

「浦太郎・・・さん・・・！？」

「お前・・・私らを助けてくれたのか！？」

「勿論そうに決まってるじゃないか♪女の子が危険な目に遭ってるのに見過ごせるわけ無いしね。特に、なのはちゃんにはこれ以上傷ついてもらう訳にはいかない・・・じゃないと、僕が店長に怒られちゃうから・・・」

浦太郎のその言葉に、疑問の表情を見せるなのはとヴィータ。

「何だか知らないが・・・客人が一人増えたんだ。たっぷりともてなしてやるぜ！！」

バンプはそう思い、攻撃を仕掛けようとしたそのときだった。

浦太郎は空気中の霊子を足場にしてその流れに乗る『飛簾脚（ひれんきゃく）』と呼ばれる歩法に極めて近い方法でバンプの背後に回りこんで、杖を振り回した。

「・・・な・・・！！！」

浦太郎の攻撃を顔に直撃したバンプは激しい衝撃音と供に、額から血を流す。

「くそッ！！何だ、お前は！？」

すると、浦太郎はバンプの首の根元を力いっぱい掴むと苦しみだすバンプに向かって語り始める。

「・・・う・・・ぐあ・・つ」

「君は救いようの無い奴だ。君は危険すぎる。僕達にとって危険以外の何者でもない。だから・・・危険な奴は直ぐに・・・排除。」

〈ｅｍｉｓｓｉｏｎ　ｂｒｅａｋｅｒ〉

すると、浦太郎のデバイス・・・フィッシャーマンは魔力を先端に収束させて魔力を爆発的に高めて、浦太郎の技の中でもかなり高度な魔法攻撃を仕掛ける。

「エミッションブレイカー！」

至近距離で撃ち出されたエミッションブレイカーは周囲に広がり、なのは達をも巻き込む巨大広域砲撃としてバンプに襲い掛かった。

なのは達は衝撃で吹き飛ばされてしまい、爆発の様子を見ながら浦太郎の名前を呼びかける。

「浦太郎さん！！！」

「浦太郎！！！」

すると、二人の言葉に答えるように爆風の中から傷だらけの浦太郎が出て来て、二人の近くにやって来た。

なのはもヴィータも浦太郎の無事を見て一安心する。

やがて、爆風が晴れて三人の前に現れる血塗れのバンプ。

「・・・・・・・・・ぐ・・・・くそ・・・ッくそがあああああっ！！！」

「なっ！？」

「何だ！？」

「何が起きたの！？」

血塗れの体で怒りの咆哮を上げるバンプに思わず三人はたじろぐ。

「魔導師がっ・・・・！！ナメやがって・・・・！！くそっ・・・くそっ・・・殺す・・・殺してやるぞ・・・！」

すると、バンプは両手の手甲をクロスさせると次のような言葉で力を解放させる。

「叩け、『手腕大竜（ハイビッククラッシャー）』」

その瞬、バンプの周りで巻き起こる魔力と霊力が入り交じった竜巻。
その突然のことに思わず身構えるなのは達。
「な・・・何なの・・・これは!?」
「魔力と・・・霊力が爆発的に発生して融合している・・・!?」
「どうなるんだよ・・・一体!!」
竜巻が徐々に晴れ、その姿をなのは達に見せ付けるバンプ。
それを見たなのは達は余りの豹変振りに思わず表情を凍りつかせ、
その状態は何だと尋ねる。
「・・・!!!・・・」
「・・・何だよ・・・それは・・・!?」
「どういう・・・事なの・・・!?」
「何だとは随分じゃねぇか・・・おう?これが俺達『魔導虚(ホロウ・ロギア)』の『真のデバイス解放』だよ。魔導師ども・・・」
その姿はまるでSFやファンタジーにだけ登場するような西洋の竜を模した巨大な怪物であった。
体長は極めて巨大で機動六課隊舎と同じかそれ以上の大きさで、魔導虚の文字通り、膨大な魔力と霊力が身体中が滲み出す、胸に孔が開いた異形の存在となっていた。

「・・・確か未だ・・・お前たちには名前を名乗ってなかったよ。最後ぐらいは教えておくとするよ。」

そう言うと、バンプは驚愕するなのはやヴィータ、浦太郎を見下ろしながら自分の本当の名前を告げた。

「魔導虚(ホロウ・ロギア)の一人・・・バンプ・ギュランドだ。」

三番隊の矜持と浦太郎の願い（後書き）

教えて、ユーノ先生！

ユ「今日は、魔導虚の使う技のお勉強だよ♪」

ユ「大量の魂魄と魔力を喰らう『魔魂吸（マゴンズイ）』」

ユ「霊圧と魔力を探る『探査神経（ペスキス）』」

ユ「高速移動の『響転（ソニード）』」

ユ「強力な破壊力の『虚閃（セロ）』」

ユ「みんな、こんな漢字を書くんだね♪」

恋「どれも難しすぎて全然憶えられねーんだよな・・・」

恋「えーと、これが・・・えーと・・・」

ユ「て恋次さん・・・あなたがそれアカンでしょうが・・・」

ユ「皆は・・・もう覚えられたかな？」

予期せぬ助っ人

＞ｉ１２１６４―７０９＜

なのは達が予期せぬ魔導虚の力の一端を目の当たりにしているその頃、恋次と鬼太郎は機人四天王、トーレとの交戦中であった。

「はあああああああ！！！」

トーレのＩＳ・・・ライドインパルスの速さに対抗するために瞬歩で移動しながら蛇尾丸と烈火を操る恋次と鬼太郎。

ちなみに、魔導虚の一人ハードヘッドは既に鬼太郎が完膚なきまでに粉砕し、現在は恋次に加勢していると言うことだ。

「咆えろ、蛇尾丸！！！」

「熾きやがれ、烈火！！」

死神と戦闘機人との激しいぶつかり合い。

周囲の建物の破損など全く気にせず戦いを続ける三者は、一度攻撃を中止して互いに向き合う。

「・・・まさかここまでとはな・・・死神だからと言って甘く見ていた。」

「・・・てめぇこそ・・・人のこと言えた口じゃねぇぞその力・・・」

「いいじゃねぇか恋次・・・こういう強い奴と戦うほうが俺は好きだぜ・・・」

と、その時。

恋次たちのもとから離れた場所で魔力と霊力が混じった竜巻が発生し、思わずその光景に目を向ける。

「何だ・・・!?このバカでかい霊圧は!?」

「その上魔力も混じってやがる!?どういう事だ!!」

「・・・バンプの奴・・・切れて力をフルドライブさせたか・・・まっ、それも悪くないか・・・」

そして、同じ光景を吉良も隊舎入り口付近で目撃していた。

「これは一体・・・!?急がないと!!」

吉良は瞬歩を使って急いでその場から立ち去り、災厄の元凶のもとへと足を運んでいく。

その頃、その災厄の元凶を近くで目の当たりにしているなのは達はと言うと、真の力を解放したバンプによって魔導虚のデバイスというものに関する説明を受ける。

「『魔導虚(ホロウ・ロギア)』のデバイスは、俺達の能力(ちから)の『核』をそれぞれのデバ

イスの姿に封じたモノ。魔導師のそれとは全くの別物だ。つまり、『デバイスの解放』は俺らの真の能力と真の姿の解放を意味する。解るか・・・この姿こそこの俺の真の姿。そして、この『手腕大竜（ハイビッククラッシャー）』こそがこの俺の真の力だ。」

その瞬間、危険を感じ取った浦太郎はなのはとヴィータを庇って前へと出てバンプの超圧縮型巨大砲撃を一人で受けてしまう。

砲撃の結果、結界魔法を使っているにも拘らずそれすらものともいえないほどの威力で以って結界に皹を入れてしまう。

「浦太郎さん！！」

「浦太郎！！！」

「ははははははははあははははは！！！！！最高！最高だぜ！！これが魔力か！！これが力か！！ただの虚だったときには手にすることも出来ない絶対の力だ！！くたばれ、魔導師！！ぐちゃぐちゃにしてやる。ははははははははははははは！！！！！」

また、一方ではその砲撃に気付いて思わずその場に立ち止まるフェイトの対戦相手のシャークエイジ。

「・・・バンプが解放したか・・・飽きて早く片付けたくなったか・・・或いは思わぬ反撃で深手を負い、解放せざるを得なくなったか――――――――・・・――――――いや・・・それは無いか。」

そういった直後だった。

フェイトがザンバーフォームでバルデッシュをシャークエイジに向

けて振り回してきたのは。

シャークエイジも自身の剣型デバイス、『シザーアームズ』で対抗する。

二つの武器がぶつかり合い、衝撃と爆風が起きる。

「・・・ふん。」

しかし、シャークエイジは問題なくフェイトの攻撃を受け流すと、表情一つ変えずに溜め息をついてこう言う。

「下らん。」

しかし、それを訊いていたフェイトは額から血を流した状態で後ろを振り向きシャークエイジに言った。

「まだだ。」

フェイトがそう言うと、、シャークエイジの頭上から降り注ぐフェイトの雷撃魔法。

雷撃魔法の全てがシャークエイジに直撃し、爆発が起こるが・・フェイトの表情は非常に重かった。

ただでさえ体力が削られてる上に、強力な雷撃魔法はかなり負担が大きいのだ。

息切れをしながらこれで決着がついてほしいと願うフェイトだったが、現実はとても残酷であった。

「はっ、はっ、はっ、はっ・・・・・・くそっ。」

爆風が晴れた瞬間フェイトの眼前に広がってくるほぼ無傷のままのシャークエイジ。

黒焦げの腕を一瞥すると、シャークエイジは身体に流れる霊力を使って傷を癒す。

「・・・フム・・・自らの体力の消耗を省みず、強力な雷撃魔法を使用する・・・今の貴方にとってはワーストもいいところの選択だ・・・残念窮まる。」

「くっ・・・・！」

「・・・息・・・かなり上がっていますね。」

「・・・それがどうした。」

「・・・恐らく、貴方も高町なのは同様、既にリンカーコアはボロボロだ・・・貴方の体と同じく。魔導師としての命が尽きるまでのね――――違いますか？」

シャークエイジがそう尋ねても、フェイトは難しい表情をしたまま何も答えない。

「貴方はプロジェクトFによってプレシア・テスタロッサによって生み出されたアリシア・テスタロッサの劣化コピー。本来、この世に生を受けるはずの無いありえない存在。そんな彼女は愚かにも自らの存在に嘆き・苦しみ・そして自問自答の日々をすごし、本来の

存在価値を忘れて、こんな安寧たる暮らしの中に自らを隔離し、存在を見出そうとしている。時空管理局の魔導師・・・フェイト・T・ハラオウンとして。だが、戦い付けの毎日を送ることで身体にその反動が少しずつ溜まり、気付いたときにはリンカーコアもボロボロの状態となっていた。今の雷撃にしたって、貫通能力も以前のと比べれば格段に威力が低下しているのがわかる。最早あなたは魔導師としての終焉も直に近い。」

「・・・黙れ・・・！！」

「威勢だけはいいですね・・・さて・・・残り魔力も少なくなってきてる筈だ・・・魔力が尽きてから殺すのは容易いが、それでは幾ら弱いと言え隊長に対して失礼と言うもの。せめて、その姿のままで叩き潰して差し上げましょう・・・こちらの最大戦力でね。」

そう言うと、シャークエイジは剣の切っ先を自らの身体に向けると、次の解号で以って自身の力を完全解放する。

「喰らえ、『鮫鋏（シザーアームズ）』。」

解号とともに発生する魔力と霊力が混合した凄まじい竜巻。

それの衝撃に耐えながらフェイトは怪訝そうな表情で何が起こったかを考える。

「くっ！！！凄い魔力・・・！？何が起こったの！？」

やがて竜巻が晴れて、フェイトの前に現れたのは――西洋の神話に登場する海の怪物、リヴァイアサンに酷似した姿のシャークエイジであった。

その姿を目撃して、思わず絶句するフェイト。

「・・・・・・・・・・・・フム。」

シャークエイジは自身の姿を一度確認し、軽くて足を動かして調子を整える。

そしてその直後、一瞬のうちにしてフェイトの身体を鋭い触手で切り刻み血塗れにするシャークエイジ。

「・・・な・・・!?」

「・・・フム・・・一応、本当の名を教えておこうか。魔導虚（ホロウ・ロギア）の一人、シャークエイジ・スクリームだ。よろしく、プロジェクトFの遺産。」

シャークエイジのその様子を、倒れるエリオの傍に立つもう一人の魔導虚バズソー。

シャークエイジはその後、ソニックムーブで逃げ回るフェイトに幾度と無く攻撃を仕掛け続ける。

どうにかこれ以上の深手を負わまいと、必死のフェイト。

それを見ながら、シャークエイジは攻撃を一度止めるとそんなフェイトを褒め称える。

「・・・フム・・・さすがは隊長！これだけの力の差を見せ付けられながらも顔色一つ変えずにいる姿は素晴らしい！実に！」

「・・・・・・・・・・・くそ・・・シャークエイジと言ったか・・・一つ聞きたい。お前たち魔導虚は話に聞く限り、魔力と霊力を手に入れた虚と呼ばれる悪霊のこと・・・スカリエッティは一体どうやってお前たちや戦闘機人を作り出してる!?そして、その目的はやはり管理局施設の破壊なのはか?」

「・・・最初の質問はまだ答えられません。そして、二つ目の質問ですが・・・それは違うと断定してもいいでしょう。ドクターは既に管理局施設の破壊などといった陳腐なことにもう興味はありません。ただ・・・“大いなる遺産”がある世界へと踏み出そうとしているのは確かです。」

「!?」

「分かり良く言いましょうか。魔法には禁じられた術が幾つかあります。代表的なのは“死者の蘇生術”と“過去への干渉”。それは広くどの世界でも決して叶えようのない絶対的な摂理です。ですが、それらを超越して叶えられる方法がひつだけあります。あなたにとってはあまり良い思い出ではない・・・場所ですが・・・」

「場所――・・・はっ!!まさか!?」

「ご察しがつきましたか・・・そうです。ドクターの真の目的は、失われた魔法技術が眠る永遠の都・・・“アルハザード”への扉を開くことです。」

「莫迦な!?そんなことが出来るはずが無い!!そんなこと・・・絶対に!!」

「普通ならそう思うでしょう。ですが・・・今のドクターにはそれが出来る。もう一つ補足しておきましょうか?アルハザードへの道は“既に開かれようとしている”。」

「なっ!?」

フェイトはその言葉に絶句した。

ありえない話なのだ――本来存在するはずのない失われた都、アルハザードに行く等という事など。

だが、それをスカリエッティはその道を開くことに成功してしまった。

その全てが、フェイトには信じられなかった。

「本来、アルハザードへは並みの方法や理論では誰も辿り着くことは不可能。嘗て、あなたの母親・・・プレシア・テスタロッサがそうであったように。ロスト・ロギアの力を以ってしてもそれは同じ。しかし、ドクターはそれを解決する唯一の方法を発見したのですよ。」

「解決する唯一の方法だと・・・!?」

「そうです・・・ある異世界で偶然にも発見した・・・究極のロスト・ロギア。いや、それはロスト・ロギアの存在として扱うにはあまりに高尚なものですがね・・・」

「!!」

「それが発見された世界は人もいない文明の無い世界でした。調べたところ、その物質は通常のロスト・ロギアとは比べ物にならぬほどに強大な力を持った神器でした。ドクターはその力を使い、我々を未完成の状態から完全な成体へと進化させたのです。しかも、その神器は遥か昔・・・“ある死神の技術者”によって創られたものの破片だったのです。」

「!?ある・・・死神の・・・技術者・・・!?」

「ふふ・・・詳しく知りたいのであれば・・・今あそこで戦っている赤髪の死神に訪ねるといいですよ。でも、それは些か無理な話かもしれませぬが。」

「どういう意味だ・・・」

「今、彼が戦っているのは・・・我々を束ねる機人四天王の一人・・・ドクターによって新たなに力を与えられた第3の戦闘機人――“トーレ”なのですから。」

その頃、そのトーレと供に戦闘を激化させる恋次と鬼太郎は、次第に速度を増して肉薄するトーレにかなり苦戦していた。

「ライドインパルス・フルドライブ。」

トーレのスピードは更に加速され、恋次の瞬歩も軽々捕らえてしまうものだ。

「ちっ!破道の三十一　『赤火砲(しゃっかほう)』!」

恋次は詠唱破棄した赤火砲で咄嗟にトーレの動きを鈍らせるが、ト

ーレは直ぐに体勢を立て直して恋次に足蹴りを入れる。

「はあああああああ！！！！」

「ぐおお！！」

攻撃を受けた恋次はそのまま建物の壁にめり込まれる。

トーレは後ろから襲ってくる鬼太郎の烈火の炎に気付き、迎撃に入る。

「俺の必殺技！！！」

「同じ技は二度も喰らわぬ！！ブラスター・インパクト！！」

トーレの腕からロードさえる魔力と霊力が混じった特殊なカートリッジ三本。

そのお陰で、右腕と左腕にはそれぞれ魔力と霊力が籠もる。

ライドインパルスをフルに使って、烈火の炎の中へと飛び込み鬼太郎の腹へと連激の打撃を与えるトーレ。

「がっは！！！」

「止めだ！！！」

トーレは最後の拳に魔力と霊力を組合わせて、渾身の一撃を鬼太郎の顔面に入れた。

鬼太郎は醜い表情を作って地面へと落ちていく。
そのまま地面に食い込まれてしまった鬼太郎。

「ふん・・・!?」

トーレはその時、頭上から襲い掛かってくる恋次の蛇尾丸の刃に目を向けた。

「いくぜ蛇尾丸・・・『狒牙絶咬(ひがぜっこう)』!!」

分離した蛇尾丸の刃がトーレの身体に直撃し、トーレは地面へと落下する。

尚、この技は恋次や蛇尾丸自身にも莫大な負担がかかるため、言ってみればこの技は使い勝手がかなり悪いものなのだ。

息切れをしながら、倒れる鬼太郎の下に駆け寄る恋次。

「大丈夫か・・・!?」

「ああ・・・くそ・・・!!あの女・・・よくもやりやがったな!!」

地面から立ち上る土煙が晴れ、満身創痍の状態で出てくるトーレ。

「は、は、は、は!やってくれたな・・・!こうなったら私も容赦はせぬ・・・」

そう言うと、トーレは腰元のケースから小さなマイクロチップのよ

うなメモリを取り出す。

怪訝そうに見つめる恋次達を他所に、トーレはそのメモリを胸に取り付けられたプラグに差し込む。

その瞬間、トーレの身体から溢れ出す今までとは比べ物にならないほどに巨大な魔力。

「どうなってやがんだ!!いきなり魔力がハネ上がりやがった!!!」

「あのデータチップの効力か!!??」

「ふふふふ・・・はははははははは!!!!!流石はドクター!!まさかここまでのものとは夢にも思わなかった!!これが私に与えられた新たな力か!?実に気分がいい・・・さあ、第二幕の開始と以降じゃないか・・・死神!!」

「・・・やるしかねぇのかよ・・・!?」

「じゃねぇーと・・・俺らだって死ぬからな・・・」

二人は悩んだ末、魔力を放ち続けるトーレに向って武器を手に取り向かって行った。

その後も、恋次達以外の全員もかなり危機的な状況の中で戦っていたのである。

なのは達はバンプの空前絶後の力に圧倒されて、最早打つ手無しといった状態で地面の上で息を切らしながらバンプを見つめていてい

たのだった。

「はっ、はっ、はっ、はっ！もう・・・これ以上は・・・」

「身体が・・・動かせねぇ・・・畜生！！」

「面目ない・・・君たちを守ると言いながら・・・こんなにもボロボロになってしまった・・・全く、つくづくそんな自分が嫌になる・・・！」

そんな満身創痍の三人をふてぶてしい様相で見下ろすバンプ。

「へへ・・・カスの分際でよくここまで持ちこたえたものだ・・・大した奴らと褒めてやるぞ。だが、いい加減お前らの相手をするのも飽きた・・・そろそろフィニッシュにしてやるぜ、おい！！」

バンプはそう言うと、巨大な自分の腕を振り上げてなのは達を潰しにかかろうとする。

離れた場所でその様子を見ていたはやてやティアナ達は背筋を凍らせた。

「なのはちゃん！！！ヴィータちゃん！！！浦太郎さん！！！」

「早く逃げてください！！！三人とも！！！」

「なのはママ、早く逃げて！！！早く！！！」

泣き叫びながらモニターでなのはに逃げるように声を上げるヴィヴィオ。

だが、逃げようにもなのは達は戦闘によるダメージによって身体が言うことをちっとも聞いてくれないのだ。

「くそ！！身体が・・・いうことを聞いてくれねぇ！！！」

「まさに絶体絶命ですよ・・・これは！！」

「そんな！！まだ私に死にたくないよ！！！皆を残して・・・ヴィヴィオを残して・・・死にたくなんかない！！！」

なのははそんなことを口にしつつ、もう一人・・・なのはにとって最も大切な人物の顔を思い浮かべながらまだ生きたいと願い続けた。

「（ユーノ君・・・お願い！！ユーノ君にもう一度会って・・・会ってちゃんとお話しするまでは・・・私・・・死にたくないよ！！！だからお願い！！！私を守ってください・・・お願いします！！！）」

バリアジャケットの中に忍び込ませるユーノの写真が収められたロケットの部分に手を寄せて、そんなことを必死に願い続けるなのは。

なのはがそう思ったとき――――奇跡が起きた。

何と、何所からともなく飛んできた翡翠の閃光が振り上げられたバンプの腕を斬り落としてしまったのであった。

「なっ！！！」

「「「これは・・・！？」」」

腕を斬り落とされ、そこから大量の血を噴出すバンプは猛烈な痛みに悶絶する。

「のあああああああああ！！！！！腕が！！！！！誰だ！！！俺の腕を斬り落としたのは！！！！！」

しかし、そう尋ねたからと言って返事が帰ってくる訳ではなかった。

そして、再び何所からとも無く飛んでくる謎の翡翠の閃光は今度は流星群のように数を無数に増やしてバンプの頭上へと降り注いだ。

「なアアアアあああああ！！！！！！！！！！！！！」

翡翠の閃光をその身に喰らい、呆気なく体を粉々に切り刻まれ消滅していくバンプ。

その光景を目の当たりにしたなのは達は、あまりの急な出来事に驚愕してしまう。

「何だよあれ・・・！？私らは・・・助かったのか！？」

「そう・・・みたいだね・・・でも・・・一体誰が！？」

「・・・・・・――――――――！！」

「お？どうしたんだよ・・・浦太郎！？」

「えっ？いえ・・・何でもありませんよ！！大丈夫ですから！！」

しかし、浦太郎の心は内心かなり驚いていたのだ。

何故なら、その翡翠の閃光の正体を彼は良く知っていたからであった。

その頃、その翡翠の閃光を放った当の本人はというと――――――

「ふう～～～・・・何とか間に合ったかな・・・」

そう、ユーノ・スクライアその人である。

ユーノはなのは達の様子が気になりディスプレイでずっと今迄の様子をこっそり観察していたのであるが、なのはや浦太郎たちが命の危機に瀕したことを確認すると、ユーノは直ぐに店の外に出て、四年間の間に独学で作り出した瞬間転移魔法を使って斬魄刀、晩翠の技、『獅子翡翠群（ししひすいぐん）』をバンプに向けて送ったのであった。

「・・・良かった・・・なのは達が死なずに済んで・・・」

「やはりそうなさいましたか・・・店長。」

その時、店の中から出てきた金太郎がユーノに近付いてくる。

「金太郎・・・見てたのかい？」

「はい・・・勝手ながら全て見させてもらいましたぞ。店長も何だかんだといいながら、あの高町なのはを心から心配しているようですな。だから、態々こんな方法で助けたりして・・・」

「僕の願いは・・・なのはの笑顔を絶やさないこと。もし、僕の所

為で笑顔をなくしていると言うのなら、いずれちゃんと会ってもう一度笑ってくれるようきちんと話すよ。でも、今はまだそのときじゃない。タイミングを待ってるんだ・・・そのタイミングを。だから今は、こうして影でなのはを守ることにしてる。ここに店を構えたのも、なのはの安全を陰で守り続ける僕の勝手な願望からだ。」

「店長・・・」

「大丈夫・・・そのときが来るまで、なのはだって許してくれるよ・・・こんな我儘な僕を・・・」

さて、その頃フェイトはもう後が無い状況まで追い詰められていた。

「（・・・これ以上・・・もう身体がもたない・・・！！エリオ・・・御免・・・！！）」

「・・・フン。いい加減諦めたらどうです？最早あなたにどうすることも出来ない・・・逃げるだけでは私に勝つことなど、永劫叶わぬ。ここで幕引きです！」

その言葉を継げた瞬間、フェイトに向って例の触手を伸ばして襲い掛かる。

フェイトももう駄目かとばかりに目を閉じてしまう。

と、その時だ。

〈Ｆｒｅｅｚｅ　ｂｒｅａｋ〉

忽然とフェイトに向けて伸ばされた触手が凍りつき、そのまま氷解

してしまった。

「!何だ・・・!?」

「この氷結魔法は・・・!?」

すると、そんなフェイトの前に思いもよらぬ男がやって来た。

「全く・・・モニターで見ていたら何だあの様は?そんなことでは、執務官失格だぞ。フェイト。」

その男は黒いバリアジャケットに身を包んで、氷結の杖・・・デュランダルを持ったフェイトの義理の兄――クロノ・ハラオウンであった。

まさかのクロノの登場に、フェイトも驚きを隠せなかった。

「く・・・クロノ・・・!?」

教えて、ユーノ先生！

ユ「へへ。今日は、魔導虚のデバイス解放についてだよ♪」

ユ「魔導虚のデバイスは、彼ら本来の力の核をデバイスの形に封じたもの。」

ユ「デバイスの解放は真の力の解放を意味し、魔力と霊力が途轍もないものへと上昇するんだ♪」

ユ「死神にも、卍解というものがあるようにその力のハネ上がり方は尋常じゃないんだよ。お分かり♪

ユ「ちなみに、僕の斬魄刀の本当の能力はね・・・」

金「今はまだ明かすときではないですぞ、店長。」

ユ「ああん！金太郎のいけず！」

金「今しばらくお待ちくだされ（顔で威圧）」

ユ「そんな顔で威圧しなくても・・・（冷や汗）」

ウーノ、来る

＞ｉ１２６５３―７０９＜

現在、フェイトの眼前にはありえない人物の姿が目に映っていた。

その人物とは、フェイトの義理の兄で時空管理局本局の次元航行船クラウディアの艦長を務めるクロノ・ハラオウンであったのだ。

「ク・・・クロノ・・・！？」

呆気ない声を出してクロノの名前を口にするフェイト。

そんなフェイトの声色を聞いて、後ろに振り返るクロノ。

「どうしたフェイト・・・僕が此処にいることがそんなに不思議か？」

「だって・・・クロノは今クラウディアの次元航行に出てるはずだから・・・普通こっちには居ないはずだから・・・！？」

「その件については、後で追々話すことにするさ。取り合えず今は、こいつを倒すことが先決だ。こいつは僕に任せておけフェイト。君

は今のうちに傷を治しておくがいい。」

「・・・やれるの・・・一人で？」

心配そうにクロノの後姿を見つめるフェイトだが、クロノはそんなフェイトに後ろを向いたまま余裕の声色でこう告げる。

「・・・案ずるな。こう見えても、執務官の資格を持ったＳランク魔導師だ。そう易々とは倒れないさ。」

「・・・分かった・・・じゃあ、無理しないでね。」

義兄の言葉を聞いて、フェイトも納得したのかその場をクロノに任せて自分はエリオを連れてその場から離脱してはやて達の下に急ぐ。

バズソーは体格の問題上、フェイト以上のスピードは出すことは出来ず追う事も不可能だった。

その後、唐突に自分の触手を凍らせ氷解させたクロノを険しい表情で見つめるシャークエイジ。

「・・・何ですか・・・あなたは・・・？」

「時空管理局本局所属、クロノ・ハラオウン提督だ。“ミゼット・ローラン以下三提督の特例”により、僕が現在を以って機動六課へと出向となった。君の相手は僕だ。」

「・・・フム・・・成程・・・あなたが彼女の義理の兄のクロノ・ハラオウン提督ですか・・・見かけよりも随分とお若いようだ。」

「これでも既に三十路間近だけどな・・・だけど、魔導師としての資質はまだ、朽ちていない！」

すると、クロノは氷結の杖ギュランダムに指示を送り氷結魔法をシャークエイジに向けて仕掛ける。

〈Ｆｒｅｅｓ　Ｃａｎｎｏｎ〉

「！！」

一瞬の出来事だった。

シャークエイジの全ての触手は完全に凍りつき、全く使い物にならなくなっていた。

このあまりの自分の触手の姿にシャークエイジは顔を引きつった。

「・・・な・・・・・・何だと・・・！？」

「氷結の杖、デュランダルの氷は並みの力では溶かすことは不可能。君の命運もここで尽きる。」

「くそ・・・！！舐めるな小僧！！」

シャークエイジは身体中の霊圧と魔力を一気に上昇させると、無理矢理にでもその氷を溶かそうとしたが、結果的にその行動が命取りとなった。

「デュランダル！一気に片をつける。」

〈Ｙｅｓ　ｓｉｒ.〉

氷を溶かすことに躍起になっているシャークエイジを見たクロノは、デュランダルを水平方向に持ち直し、軽く目を瞑るとミッド式の魔法陣を展開させデュランダルの誇る氷結魔法を解放する。

「――――――ブリザード・サイクロン」

〈Ｂｌｉｚｚａｒｄ　Ｃｙｃｌｏｎｅ〉

魔法陣が展開され、クロノの周りに集まる氷結の竜巻の数々。

それを見たシャークエイジはその強大な魔力に怖気づいてしまい、バズソーと供に撤退を図ろうとする。

「バズソー、退けっ!!!一時撤退だ!!」

「なっ!?」

シャークエイジの言葉にバスぞーも危機を覚えたのか、急いでその場から離脱しようとするが、クロノは冷静な口調で次のように言う。

「――――その竜巻からは逃げられないぞ。」

氷結の竜巻、ブリザード・サイクロンは逃げる二人の動きを容易に捉えると、巨大な身体をも取り込むとそのまま二人を凍りつかせる。

「「!!のあああああああああああああああ!!!!!!!!」」

氷付けになった二人は竜巻の中で動けなくなり、そのまま暫くのときが経つとすぐに氷解し、氷の破片がその場に散らばった。

〈Ｍｉｓｓｉｏｎ　Ｃｏｍｐｌｅｔｅ〉

モニター画面でその様子を見ていたはやてやフェイト達は、クロノの勝利に大いに喜んだ。

「・・・やった・・・クロノ君がやったんや！！」

「良かった・・・私達・・・助かったんだ！！」

「クロノさん！！凄い凄い！！！」

クロノは徐にはやて達の下に移動してくる。

そんな義兄の姿を見て、自分の身体のこと以上にクロノの身を案じるフェイト。

「クロノ・・・大丈夫？怪我は！？」

「ああ・・・この通りなんとも無い。それよりも、お前のほうは大丈夫なのか？」

「うん・・・一応応急措置は済ませたから。あっ、そう言えばまだ恋次さん達の姿が見えないんだけど・・・！？」

フェイトがそのことに気付くと、浦太郎やなのは達もそのことに始めて気づく。

「そう言えば・・・先輩と恋次さん。まだ戦ってるんじゃないの！？霊圧の揺れ幅が物凄いよ！？」

「うん！それに・・・この尋常じゃない魔力と波長は・・・！？」

と、その時。

シャーリーが隊舎の別の場所から感知される強大な魔力反応に気がつき、はやて達に急いで報告をする。

「八神隊長！大変です！！スカリエッティと供に脱獄した戦闘機人が恋次さん達と交戦中です！！今、全体映像を見せます！」

ディスプレイに映し出される交戦中の恋次と鬼太郎・・・そして、トーレ。

トーレの姿を確認したはやて達は目の色を変えた。

「こ・・・こいつは！？」

「戦闘機人・・・？3・・・トーレ！？」

その頃、隊舎の裏庭のほうで圧倒的な力を手にしたトーレに苦戦を強いられている恋次と鬼太郎。

鬼太郎はそれでも自身の力を信じて烈火の炎をトーレに向けて攻撃する。

「せりゃあああ！！！！」

トーレは鬼太郎の炎の斬撃を回避すると、間髪いれずに襲ってくる鬼太郎の大刀の切っ先を素手で掴む。

「な・・・！」

驚く鬼太郎を他所に、そのままトーレは切っ先を掴んだ状態で鬼太郎を投げ飛ばしてしまう。

吹き飛ばされて、強い衝撃をその身に受けながらも体制を立て直す鬼太郎。

「くそがっ！！！！」

鬼太郎は頭に血が上りすぎて、周りの様子が理解できていなかった。

「止せ、鬼太郎！！！」

恋次が止めの言葉を掛けるのも無視して、単身トーレに突っ込む鬼太郎だったが、ライドインパルスで高速移動したトーレは鬼太郎の正面から拳を入れる。

トーレの重い拳を直撃してしまった鬼太郎は、再び後ろのほうへと転がりながら吹っ飛ばされてしまうのであった。

「鬼太郎！！！！」

それでも、鬼太郎は諦めずにトーレに向っていく。

鬼太郎は満身創痍の身体にも関わらずに、瞬歩を駆使してトーレの背後に回りこむが直ぐにトーレに気付かれてしまい、足蹴りで空へ

と突き上げられそのままライドインパルスで空中に移動したトーレは踵落しを決めて、鬼太郎を地面へと叩きつける。

激しい衝撃によって地面からは土煙が竜巻のように上がる。

そんな様子を空中で退屈そうな表情で見下ろすトーレ。

「・・・ちっ・・・こんなモノがお前たちの力か・・・興ざめだな。ガッカリさせるなよ死神ども!!私の魔力が上がっただけで手も足も出ないのか!!どうなんだ!?」

すると、土煙が晴れた先に現れたのは――――烈火に巨大な炎を纏わせ今にもトーレに攻撃してこようとしてる血塗れの鬼太郎だった。

「――――俺の必殺技。」

「!!」

「パート3!!!」

鬼太郎は始解状態の烈火の最大技で、炎を鳳凰のようにして敵に大ダメージを与える捨て身の必殺技――――『鳳翼炎陣(ほうよくえんじん)』を撃った。

逃げ遅れたトーレはそのまま自身の身を盾にして鳳翼炎陣に直撃し、その結果空中で起こる大爆発。

その爆発を見て、恋次は思わずガッツポーズを取る。

「よし!!今のは直撃だぜ!!これであいつも相当なダメージを食らったはずだ!!」

「はっ、はっ、はっ、はっ！」

息を切らして爆炎が晴れるのを待つ鬼太郎。

そして、爆炎が晴れた先に現れる全身火傷と身体に受けた大きな斬り傷が目立つトーレ。

「・・・何だ今のは・・・？そんな技・・・ファイからの報告には入っていなかったぞ死神ども・・・！」

「・・・へっ。ガッカリせずに済みそうか？戦闘機人。」

だが、その笑いは鬼太郎自身にとってただのはったりでしかない。

「ぬっ！」

鬼太郎は険しい表情を浮かべると、顔を手で押えながら限界に近い自分の身体にもう少しだけ耐えろと自問する。

「（・・・くそ・・・そろそろ体力的にも霊圧的にも限界か・・・あと少しだけ頑張れ・・・俺・・・！！）」

そんな鬼太郎を傍らで見ていた恋次は、苦しい表情の鬼太郎にこう話しかける。

「まだだぜ・・・鬼太郎・・・俺がここいいるの忘れてもらっちゃ困るぜ・・・」

それを聞いた鬼太郎は、思わず鼻で笑う。

「はっ・・・そうだったな・・・」

すると、そんな二人を見ながら不気味な高笑いを上げるトーレ。

「ふっふはははははははははははははははははははっ！！！上等じゃないか死神！！これでようやく、殺す甲斐が出てくるってモノだ！！」

トーレの傷の具合を見ながら、さらに表情を険しくする鬼太郎。

「（・・・くそっ・・・！傷が浅え・・・鳳翼炎陣をモロに喰らってもあの程度かよ・・・パート3は元々一撃必殺の隠し玉だ。使えばそれだけ莫大な量の霊圧を消費する・・・今の状態で残り撃てるのとしたら・・・あと2・3発が限度だ・・・どうする俺・・・！）」

「・・・オイ。ボヤっとしているなよ、死神ども・・・次はこちらの番だぞ。」

トーレはそう言うと、背中からトンファーらしき武器を取り出そうとした。

ところが、そんなトーレの手を止めたのは思いもよらぬ人物だった。

それは何と、同じ機人四天王の一人でリーダー的存在のウーノであった。

「「「！！」」」

ウーノの姿を目撃した三人は驚きを隠せなかった。

「武器を納めなさい・・・トーレ。」

「ウーノ姉様・・・！」

「（何だ・・・!?あいつと同じ戦闘機人の仲間か!!）」

ウーノの手を振り払い、正面に向き直って話をしだすトーレ。

「どういうことですかウーノ姉様!?何故姉様がここに!?」

「“何故”か・・・ですって?解らないの、本当に?独断への機動六課への襲撃・・・五体もの魔導虚の無断動員。及びその敗死――全て、命令違反よ。あなたにもわかるでしょう。ドクターはお怒りよ、トーレ。」

「行くわよ。あなたの処罰は帰還後に下されるわ。」

ウーノのその言葉にトーレも渋々納得したのか、トーレは仕方なく帰還することにした。

「・・・ちっ・・・了解ですよ。」

トーレの行動を目の当たりにした恋次達は当然トーレを問い詰めた。

「・・・ま・・・待て!何所行くんだよこの野郎!!」

「ウルサイぞ。帰るんだよ・・・ドクターの下へな。」

「ふざけんな！勝手に攻めて来て置いて、勝手に帰るだと！？冗談じゃねぇぞ！！下りてこいよ！！まだ俺らとの勝負はついてねぇだろ！！！」

恋次が怒りの声を上げると、それを後ろに振り返ったまま聞いていたトーレは徐に顔を振り向かせると次のように語った。

「・・・まだ勝負は・・・ついていないだと・・・？ふざけるな。勝負がつかなくて命拾ったのはお前たちの方だ死神。特にそこの赤の大刀を持った死神。さっきの技はお前の身体にもダメージを与えると言うことは、今のお前を見れば分かる。撃ててあと2・3発がいいところだろう。だが仮にあの技をお前が無限に撃ち続けられたとしても・・・お前たちに・・・解放状態の私は倒せない。」

解放状態と言う言葉を聞いた恋次と鬼太郎は、思わず絶句した。

「な・・・何だと・・・・！？」

「・・・解放・・・状態だと・・・・？」

「・・・私の名を忘れるでないぞ。そして二度と、聞かないことを祈るがいい。」

すると、トーレは不敵な笑みを浮かべて恋次達のほうに身体を向けて堂々と自分の名前をかたる。

「機人四天王の一人、トーレ。この名を次に聞くときが・・・お前たちの最後だ死神。」

そう言うと、トーレはウーノの転移魔法によってその場から消え去

ろうとする。

すぐにそれを止めに掛かる恋次。

「待てお前！！話はまだ・・・！！」

「退いてくれ！！君たち！！」

と、その時。

突然後ろのほうから聞こえてくる恋次にとっては聞き覚えの無い声。

そう、クロノである。

クロノは転移魔法で移動さえる前にウーノ達を捕らえようと自身の本当のデバイス、Ｓ２Ｕから直射型の魔法、ブレイズキャノンをウーノ達に向けて発射する。

「ブレイズキャノン・フルバースト！！！！」

〈Ｂｌａｚｅ　ｃａｎｎｏｎ〉

飛んでくるブレイズキャノンに一切動じることなく、ウーノは新しく組み込まれたインフィーレントスキルを発動させる。

「ＩＳ発動・・・『ラウンドウォール』。」

ラウンドウォールは広範囲に展開され、ウーノ達をブレイズキャノンの砲撃から完全に護りきる。

「・・・・・莫迦な・・・“戦闘機人が・・・インフィーレントスキルだけで、僕のフルパワーのブレイズキャノンを止めた・・・!?」

防壁が砕け散ると、既にウーノ達は転移魔法で移動していた後だった。

はやては急いでシャーリーに補足の指示を出す。

「シャーリー!転移先の捕捉は!?」

『駄目です!反応完全にロスト!!逃げられました!!』

「申し訳無い・・・!僕の力不足で逃がしてしまった様だ・・・」

クロノの言葉を聞いて隣にいたティアナが弁解に入る。

「そ、そんなことありませんよクロノ提督!この場合は仕方なかった・・・」

すると、ティアナ達の耳に入ってくる鬼太郎の悲痛な叫び声。

「のあああああああああ!!!!!!!!」

「「な!?」」

そして、そのまま地面に倒れ込み意識を失う鬼太郎。

浦太郎達は鬼太郎に駆け寄り意識を確認する。

「先輩！！！」

「鬼太郎さん！！！」

「オイ！！！しっかりしろ！！！オイ！！！！」

「あかんわ！！かなり霊圧と体力が削られて生命機能が著しく低下しとる！！早くシャマルのところに連れていかな・・・」

と、はやてが鬼太郎を連れて行こうとしたその時。

「いや・・・少し待って欲しい。」

全員の目の前に吉良が現れ、はやて達の行動を止めに入った。

「彼の治療は・・・僕が引き受けよう。」

「吉良・・・お前・・・」

「成程・・・君は報告には治癒能力があると聞いている。任せても良いのか？」

「ああ。護廷十三隊には、治癒能力に特化した隊だあってね・・・僕も嘗てそこに一時期席を置いていた。本来、鬼道による治療では多くの場合霊圧の回復から先に行う。それにより、回復した内部霊圧と術者の外部霊圧とで肉体の回復を行う。」

その場で吉良は意識を失う鬼太郎の身体を酷い場所から鬼道で治癒していく。

そんな中で、吉良はただ背を向けたまま空を見上げる恋次に語りかける。

「・・・阿散井君・・・勝負は・・・どうなった？」

「敗けた。」

「・・・何を言っているんだ君は。生きていれば、それだけで勝ちの筈だ。」

「気休めなら止せよ。お前はともかく、鬼太郎が俺だったら・・・そうは言わねえ筈だ・・・俺は何も守れちゃいねえ。傷つけた奴を、倒せてもいやしねえ。俺は・・・敗けたんだ。」

悔しい思いを深く噛み締めながら、今一度トーレの名を口にする恋次。

「・・・機人四天王・・・トーレ・・・」

やがて、一度隊舎の中へと戻ったはやて達はなのはやフェイト、フォワードメンバー以外を除いてクロノと供に会議を行っていた。

「ほんなら、話聞かせてもらおうかな“クロノ提督”。どうして、クロノ提督が機動六課の隊舎に来ているんや？クラウディアのほうはどないしたんですか？」

「実は先程、本局上層部の重役や僕と騎士カリム・・・そして、三提督自らが出席して会議が執り行われたんだ。魔導虚という未知の敵の出現とそれらがもたらす被害の大きさ。そして、もたらす最悪の状況の全て。それらが話し合われた結果、現在の六課の力では少

々力不足と勝手ながら結論が下され、その為に僕が即出向となって現場へと駆けつけたという訳だ。」

「じゃあ、クラウディアのほうは誰が？」

「リンディ母さんが代行を務めてくれる。問題は無いさ。ただ、今回の被害はあまりにも大きすぎだ。戦闘機人のほうも、依然とは比べ物にならないくらいにレベルを上げている。特にあのウーノという、スカリエッティの一番の忠臣。」

「せやな・・・クロノ君のブレイズキャノンをああも簡単に止めてしまうとはな・・・」

「ところで主はやて。一つ気になっていることがあるのですが・・・」

「？何やシグナム一体・・・？」

「ヴィータやなのは達を助けてくれたあの緑色の光の正体は・・・一体なんだったんでしょうか？」

「ああ、それ私も気になってたんだよ！あんな技は今まで見たこともなかっぜ！魔法でもないし・・・かと言って死神の技とも断定できねぇし・・・」

「吉良。お前はそいつを見てたのか？」

「いや、僕はちょうどその時戦いの最中だった。八神さん、その技の発生先は特定できますか？」

「それがな・・・全くサーチャーにも反応がないんですわ。誰がそんな妙なことをしたかはしらんが、コレだけは言える。管理局にも気付かれずにそんな技量を使える魔導師なんて・・・まずほとんどおらへんよ。」

「はやての言う通りだな。あっ、フェイト達の容態はどうだ?」

「大丈夫。シャマルがちゃんと治療してくれたから、命に別状はあらへんよ。今は二人ともベッドでお休み中のはずや・・・」

その頃、隊舎の医務室のベッドで深手を負ったため横になるなのはとフェイト。

しかし、二人はまだ眠ってなどいなかった。

「・・・なのは・・・まだ・・・起きてる?」

「・・・うん・・・」

暫くの沈黙が流れた後、フェイトがなのはにふとこう口にする。

「・・・私・・・悔しかった・・・スカリエッティのこともそうだし・・・魔導虚のこともそうだし・・・そして何よりも・・・自分自身のことが・・・」

「それは私も同じだよ。あのまま攻撃を受けていたら、間違いなく死んでいた・・・ヴィータちゃんも浦太郎さんも・・・」

「でもなのは・・・あの時なのは達を助けてくれたのって・・・一体何だったんだろう?さっき映像で見たけど、どこか見覚えのある

ような・・・あの翡翠（みどり）の閃光・・・」

「それは私にもよく分からないけど・・・でも凄く・・・懐かしい気持ちになったんだ・・・ずっと忘れられない・・・大切な人の温もりに・・・とてもよく似ていた・・・」

「ユーノの・・・こと？」

「・・・うん・・・もしかしたら・・・どこかで届いたのかもしれない・・・ユーノ君の心に、私の想いが・・・ありがとう・・・ユーノ君・・・私たちを護ってくれて・・・」

なのははそう言いながら、机に置いてあったロケットを手に取り自分の胸の中にそれを優しく包み込むように握り締めた。

ウーノ、来る（後書き）

教えて、ユーノ先生！

ユ「どうも♪今日は、クロノの職務について教えてあげるね♪」

ユ「クロノは、僅か１４歳にしてアースラ所属の時空管理局執務官になった秀才で、現在はリンディ提督の後を継ぎ、クラウディアの艦長を務めているんだ♪」

ユ「魔導師としてもなのはやフェイト達と劣らずの実力者で、現在のランクは総合S。また、エイミィさんとの間には既に男女の双子が生まれてるから、立派な父親にもなっているんだ。」

ユ「ま～でも・・・あいつは何かと提督としての仕事が忙しいから殆ど家には帰ってこれないらしくてね、子供たちのほうも電話ぐらいでしかクロノの声を聞いていないみたいだから・・・最早クロノのことは家に電話してくる知らないおじさんとしか思っていないようだね♪」

ク「本当は僕だって・・・たまには仕事休んで子供達と一緒に遊びたいと思ってるんだ！！それなのに本局ときたら・・・（憂鬱）」

ユ「ま♪そう言う仕事なんだから仕方ないって・・・頑張りなよ、“知らないおじさん”」

ク「おい！！誰が知らないおじさんだ！！！そもそも君こそ一体誰だ！？どこかで聞いた声だぞ！？」

ユ「さ～～～て何のことでしょう♪僕はただのしがない駄菓子屋の店主ですけど・・・♪」

ク「怪しい・・・（かなり疑ってる）」

＞ｉ１２８２３―７０９＜

トーレと魔導虚の強襲から数日経過した機動六課では、現在こんな話題で話が持ちきりであった。

それは、恋次となのはが模擬戦をするというものであった。

「模擬戦!?俺と・・・こいつがか？」

食堂で朝食をとっていた恋次は、傍らに立つはやてにそう言われて驚きの表情を見せながらなのはを一瞥する。

「せや。クロノ君と相談したんやけどな・・・死神としての恋次さんや吉良さんの力が詳しく知りたいしな、ここはちょっとなのはちゃんとやってもらへんかな？」

「けどよ、俺は先にシグナムの野郎と約束が・・・」

すると、はやての隣に立つシグナムが戸惑う恋次にこう言った。

「それは構わぬ、阿散井。主はやて達の決めたことに私は逆らわぬ。先になのはとやってくれないか？」

恋次はそう聞かされると、暫く考え込んだ。

そして、徐に深い溜め息をつきながら食器を一度テーブルの上に置く。

「・・・はぁ。まっ、いいけどよ・・・」

「ホンマかいな!?」

「その代わり、俺は女でも手加減無しだからな。」

朝食を食べ終えた恋次は、早速いつもの訓練場へと足を運び、正面に立つなのはと向き合ったのである。

「よろしくお願いします。高町なのは一等空尉です。言っておきますけど、相手がたとえ死神だろうと、全力で行きます!」

「良い心構えだ。俺もそのほうがやり合いがあるってもんだ。じっくり見せてもらうぜ・・・白き魔王っていうてめぇの実力をよ!」

「なっ!?れ、恋次さん!!どうしてその渾名を!?」

なのはは、恋次の口からまさかその単語が出るとは思っていなかったらしく、聞いた途端顔色を変えて全否定をする。

「何でって・・・こっちに来る前に話聞いてたからよ・・・何だ?何か不満なのかよ?」

「不満大有りですよ!!私は魔王なんかじゃありません!!せめて

悪魔ぐらいにしてくださいよ！！」

「どうでも良いだろう・・・そんなもん・・・」

そんな二人の様子を見ながら、ディスプレイを通して見物を行うはやてを始めとするフォワードメンバーの全員と、吉良と浦太郎達が集まる。

はやての隣には、本局から特務で出向してきた制服姿のクロノも一緒だ。

「クロノ君。なのはちゃんのリミッター解除のほうは済んだで。いつでも準備出来とるで！」

「そうか。じゃあ早速模擬戦に入るとしよう。バトルフィールド、展開！」

「了解です！」

シャーリーはそう言うと、バカに上機嫌な様子でタッチパネルを操作してフィールドの設定を行い、バトルフィールドを展開させる。

専用の敷地に設けられる六課自慢のバトルフィールド。

今回は街中を想定したビル群が立ち並ぶものだ。

ディスプレイを通して、なのはと恋次に声援を送るスバルや浦太郎達。

「なのはさん！！頑張って下さいね！！」

「恋次さんも、気を抜かないで下さいよ！！」

フィールドが展開され、なのははレイジングハートを手に取るとバリアジャケットを装着して、専用の杖を握り締める。

「いくよ、レンジングハート。」

〈Ａｌｌ　ｒｉｇｈｔ　ｍｙ　ｍａｓｔｅｒ〉

「へっ！魔王だか何だか知らねーが・・・死神に魔王が勝てるなんて思うなよ！」

「れ、恋次さん！！だから私は魔王なんかじゃないですよ！」

『ほんなら、二人とも用意はできたみたいやし・・・それじゃあ、レディー・・・ゴー！！』

はやての言葉と供に、恋次となのはの模擬戦が開始される。

その瞬間、二人の表情が真剣なものへと変わり早速なのはが先陣を切る。

「レイジングハート！」

〈Ａｘｅｌ　ｓｈｏｏｔｅｒ〉

なのはは先ず軽く数十発のアクセルシューターを恋次に向って発射する。

しかし、恋次は一切動揺することなく的確にアクセルシューター一発一発の軌道を読み取り、瞬歩で回避していく。

その恋次の行動に、流石のなのはや観戦するはやて達は驚いた。

「!?」

「うそ・・・だろ!?」

「恋次さん!なのはのアクセルシューターを・・・あんなにも簡単に・・・かわしてる!?」

すると、そのフェイトの言葉にシグナムが口を挟む。

「いや、ただかわすだけなら私やテスタロッサ達でも出来る・・・無駄が無いのだ。阿散井のあの動きには・・・まるで、既になのはの攻撃を熟知したかのような・・・そう言う動き方だ・・・」

当のなのははと言うと、先程からずっと険しい表情で恋次の無駄のない動きを見ながら自分の攻撃が一発も当たらないことに疑問を抱いた。

「(一発も当たらない・・・!?まるで、私の攻撃法を知っているみたいな動き・・・!?でも、ここで諦める私じゃない!)」

そう言うと、なのはは声を出して更にアクセルシューターの速度を上昇させる。

「アクセル!」

〈Ａｌｌ　ｒｉｇｈｔ．　Ａｘｅｌｌｅｒａｔｉｏｎ〉

急激に速度を増したアクセルシューターに、一瞬驚く恋次が直ぐにユーノが言っていたことを思い出す。

「加速したか・・・あいつの言ってた通りだな・・・」

これは、ミッドチルダに来る前の恋次とユーノの七日間の修行の火に遡る。

〈対・・・白き魔王戦の為の修行だ！？何だよそりゃ！？〉

茶の間のほうで食事をしている恋次にそのように話しかけてくるユーノ。

〈向こうについてからは、戦闘では常に魔法と正面からぶつかるでしょう♪ただでさえ魔法に不慣れで且つ、自意識過剰な恋次さんの場合このまま闇雲に修行しても犬死が必至ですよん♪〉

〈質問の答えになってねーよ！俺が聞いてるのは、その“白き魔王”っていうのが何なのかだよ！？〉

〈そんなの決まってるじゃないですか♪僕の愛しの天使、高町なのはのことですよ♪〉

〈おい！！天使なんだよな、そいつ！？だったら何で魔王なんだよ！！〉

〈天使も時と場合によっては魔王にもなりますって・・・♪〉

〈ならねーよ!!精々悪魔がいいところだろ!!いきなり魔王に進化するかよ!!そもそも、その高町なのはっていうのは強いのか?〉

〈勿論!何せなのはは管理局の不屈のエースオブエース。その上幼い頃になのはに魔法を教えたのは他ならぬ僕なんですから♪〉

〈そうなのか?悪いがそんな態度で言われてもちっとも説得力の欠片も見られねーんだけどよ・・・つうか、何で俺がそんなことしねえといけねーんだ!?〉

〈リンカーコアが形成され、魔法の影響もそれなりに慣れつつある恋次さんが向こうについた時に困らないよう、今以上に強い魔導師の戦い方・・・つまりなのはの戦力に対抗できるまでになって欲しいんですよ♪〉

〈修行する分にはいいが・・・その前にてめーの死神としての力を俺に見せろや。まだ俺はてめーの卍解も見てないんだぜ!〉

〈やだなあ!一介のハンサムなのはバカ商人の僕が卍解なんて出来るワケないじゃないですかもう!〉

〈ウソつくなよ!!狒骨大砲平気で始解の技で防いでおきながら、卍解が出来ねえだと!?てめー自分の正体が何なのか分かってるのか!?てめーが昔時空管理局の無限書庫司書長だったことも、死神の力を手に入れた魔導師だってこともうぜーんぶとっくの昔にバレてんだよ!!〉

〈知ってますよオ、そんなこと♪〉

〈コラ!!てめぇ放せっ!!殴る!!喋ってるだけでこんなイラつ

く奴は浦原さん以来だぜ！！〉

飄々とした態度で言葉を返すユーノにこの上も無く腹を立てる恋次は、ついかっとなってユーノに飛びかかろうとしたが、それを金太郎によって止められる。

そして、そんな恋次を見ながらユーノは複雑そうな表情でこう言ったのだ。

〈・・・兎に角、駄目なんですよ僕じゃ。〉

〈何・・・？〉

〈僕の卍解は、人を鍛えたりとか何かを教えたり、さらには人前で見せれるような・・・・・・そういうのには向かないんですよ。〉

〈――――――・・・・・・〉

〈さァて！この話は置いてといて・・・早速、対白き魔王戦の為の修行に入りましょう♪吉良さんは既に、浦太郎と一緒に地下訓練場で戦闘の最中ですし・・・〉

〈そう言えばあいついないと思ったら・・・そんなことやってたのかよ・・・まぁいい。てめーの卍解は気になるが、今は聴かないことにしといてやる。どうせ後々、嫌でも分かるときが来るんだろう・・・〉

〈さて、どうでしょう♪〉

〈あくまでしらを切るつもりか。いいさ・・・そのときを楽しみに

待ってるからよ。とっと始めようぜ・・・その白き魔王を倒すための秘策を・・・〉

〈・・・はいはい♪勿論です！〉

「（あの時・・・俺は白き魔王・・・即ち今目の前で戦ってる高町なのはと直接対峙し、奴に言われたとおりのやり方で戦っているが、まさか本当に通じるとは思ってもいなかったぜ。本当に、あいつとなのはってのはどういう関係なんだよ！？魔法を教えたと言っていたが、ただそれだけの間柄なのか・・・！？）」

ユーノとなのはの関係に疑問を持ちながらも、加速されたアクセルシューターをやはり同じように瞬歩で回避を続ける恋次。

流石のなのはもこれ以上自分の技が当たらないことに、躍起になっていた。

「くっ！当たれ！！」

そのせいか、なのはのコントロールは当初の頃に比べれば些かいい加減になっていることが恋次にははっきり分かった。

「切羽詰ってきたようだな。だったら、その焦りをさらに高まらせてやるぜ！」

そう言うと、恋次は自身の斬魄刀に手を軽く添えると、刀の名前を叫ぶ。

「咆えろ、『蛇尾丸』」

その瞬間、刀の形状が変化して蛇腹等のようなものへと変貌する。

「えっ！！」

目の前でその光景を見て驚愕するなのはと、ディスプレイ越しにそれを目撃するはやて達は言葉を失った。

「刀の形が・・・変わった！？」

「どういう事だよ、一体！？」

ヴィータがそう言うと、冷静な態度で吉良が説明を始める。

「僕達死神が持つ専用の刀、斬魄刀にはそれぞれ個人に会わせてそれぞれ名前があるんだ。名前を呼ぶと特殊な形になったり魔法に近い鬼道系の力を持った斬魄刀になるんだ。ちなみに、阿散井君の場合は――――――」

恋次は解放した蛇尾丸の刃節を伸ばして、なのはに攻撃を仕掛ける。

「せりゃあああああああああ！！！！！！」

「レイジングハート！！」

〈Ｐｒｏｔｅｃｔｉｏｎ〉

恋次の刃を得意の防御で防ぐなのはだったが、蛇尾丸の予想外の力に圧し負けそうになってしまった。

「ぐっ！！パワーが・・・強い！！」

「俺の力を舐めんな!!咆えろ、蛇尾丸!!!」

すると、恋次は一段とパワーを上げてなのはの防御を破壊使用する。

そして、ついになのはの防御は敗れてそのままなのははは蛇尾丸に押されて後ろに佇むビルの中へと激突していった。

「ぐあああああああ!!!!!」

ビルに激突したことで巻き起こる凄まじい衝撃音と土煙。

ディスプレイでその光景を目の当たりにしたフェイトは、なのはの安否を心配した。

「なのは!」

「なのはさん!!」

「何という威力だ・・・!?力圧しでなのはの防御を破った・・・!?」

クロノもなのはの実力はようく知っていたから、恋次のこの行動には流石に度肝を抜いたのであった。

その頃、巻き起こる土煙を見ながらなのはの次の行動を警戒しつつ挑発をする恋次。

「どうしたよ、高町なのは・・・?もう終わりか・・・不屈のエースオブエースも流石に手も足も出ねーか?」

すると、土煙の中から魔力が急上昇しなのはの声が聞こえてくる。

「ディバイン・・・・・・」

恋次もこの魔力の上昇に気付き、なのはが何をしようとしているのかも理解した。

「なっ!?これはまさか・・・!?」

「バスター!!!!!!」

土煙を突き抜けて発射されたなのはの得意砲撃魔法、ディバインバスター。

「ちっ!!“偏狭の地に咲く草木よ、寄り集まりて我が命ずるままに牢と化す”縛道の七十『樹牢門(じゅろうもん)』!」

七十番の縛道、樹牢門の詠唱を口にした恋次は自分の目の前に樹の枝の塊で作った結界でディバインバスターに対抗するが、予想外にもディバインバスターの威力は樹牢門を破壊するほどの威力を持っていた。

「くっ!!!防ぎ・・・切れねー!!」

そして、ディバインバスターによって樹牢門が突き破られ、恋次はモロにディバインバスターを直撃してしまい、そのまま吹っ飛ばされる。

晴れた土煙の中から出てくる打ち身だらけで息を切らすなのはと、

魔力砲撃によって満身創痍になる恋次。

「はっ、はっ、はっ！（くそ・・・！砲撃魔法でここまでの威力かよ・・・!?ユーノの言ってた通り、まさに白き魔王だぜ・・・ちくしょう！）」

そんな二人の戦いに、ティアナやスバル達フォワード陣は唖然とした。

「な・・・なんてレベルの高い戦いのなの・・・!?恋次さんもなのはさんと良い勝負してるし・・・!?」

「いや、それは違うぞティアナ。僕が見る限り、なのはのほうが若干圧されている。アレだけの物理ダメージを受けておいて、ディバインバスターを放ったんだ。身体は相当堪えてるはずだ。」

「せやな。なのはちゃんも負けん気は昔っから強いほうさかい、勝負に拘って身体酷使するのは悪い癖や。」

「なのは・・・無茶しないでね・・・」

隊長陣がそう言って、再び戦闘の様子を見ていると・・・ついに恋次が自分の奥の手を発動させることにした。

「・・・どうやら・・・俺のほうも少してめぇを見誤ってたらしい。ただの砲撃魔法で七十番の縛道を破るとは、大した女だ。そいつに敬意を表して・・・俺もここからは、全力全開で戦わせてもらうぞ！」

すると、恋次は刀を右上に上げるようにして持つと、霊圧を急上昇

させて卍解を発動させる。

「卍解！」

その瞬間、恋次の身体を包み込む霊圧の竜巻がなのはやはやて達を更に動揺させる。

「くっ！！恋次さん！？」

「今度は何！？」

「凄い竜巻です！？それと、この異常な霊力のハネ上がりは何なの！？」

そして、霊圧の竜巻が治まり土煙が晴れた先に広がってきたのは――巨大な骨の蛇を従え、両肩に猿の毛皮を身に纏った恋次であった。

「『狒狒王蛇尾丸』」

恋次のあまりの変わりようになのはは思わず恋次のその姿を問いただす。

「なっ・・・！？何ですか・・・それ！？」

「吉良さん！？恋次さんのアレは何やねん！？」

戦闘を観戦していたはやて達も同じ気持ちであった。

「あれは卍解と言って、斬魂魄刀の二段階目の解放だよ。卍解の戦

力は、始解時の戦闘能力の五倍から十倍にまでハネ上がる。」

「十倍!?」

「そ、そんなモン隠し持ってたのかよアイツは!?」

「隊長の死神は皆、卍解を会得している。彼の場合は、副隊長だった頃既に手に入れていたけどね・・・」

恋次の本気の姿を見たなのは。

すると、そんな恋次に向ってなのはは素直に恋次を褒めると自身も全力全開で戦いに望むことを決意する。

「・・・凄いですね・・・!これが死神さんの奥の手って奴ですか・・・それじゃあ、私も全力全開でいかせて貰います!エクシードドライブ!!」

〈Ｄｒｉｖｅ　ｉｇｎｉｔｉｏｎ〉

なのはも、自身の最終形態エクシードモードに移行して卍解した恋次に対抗する。

そんな二人の様子を見ながら、吉良はどちらが勝つのか悩んでいた。

「エクシードモードのなのはさん対卍解状態の阿散井君か・・・（果たして、阿散井君に正気はあるのか・・・?ユーノさんが行ったあの修行だけで・・・本当に彼女を負かことが出来るのか?）」

暫く互いの姿を凝視していた恋次となのはだったが、恋次はやがて

なのはに向って蛇尾丸を伸ばして先手をきった。

「いくぜ・・・ほおおおおおおおおおおお!!!!!!!」

巨大な蛇尾丸を駆使してなのはの周りのビルを次々に破壊していく恋次。

ビルの瓦礫がなのはの周りに落ちていくが、それをなのはは空中に回避しながら問題なくかわしていく。

恋次の無茶苦茶な戦い方に、はやて達は呆然とする。

「な、なんちゅうやり方や!?ビルが次々と倒れてく!?」

なのはは空中を飛び回りながら反撃の機会を窺がっていたが、一瞬の隙を取られて蛇尾丸の口元に押されながら下へと落下していく。

それでも、なのはは慌ててなどいない。

「・・・確かに、さっきとは比べ物にならないくらいにパワーが上がってるけど・・・スピードはその分遅い。」

そう言うと、なのははレイジングハートの先端に今迄の砲撃とは比べ物にならないくらいの破壊力を持った砲撃魔法を収束させて、蛇尾丸に向って発射する。

「エクセリオン・・・バスター!!!」

エクセリオンバスターが放たれ、蛇尾丸は木っ端微塵に身体が砕かれる。

しかし、地面に下りたなのはの目に飛び込んできたのは驚くべき光景だった。

「えっ!?」

何と、バラバラになったはずの蛇尾丸の身体が集まり霊圧の刃節によって再びもとの形状となって元通りになったのだ。

呆気に取られるなのはに、恋次はほくそ笑む。

「エクセリオンバスター。エクシードモードのてめぇとレイジングハートから撃ち出されるスターライトブレイカーと同等の威力を持った強化砲撃魔法。知ってるぜ・・・てめぇの攻撃方法のことは、奴とさんざん修行して身体に染み付いてるぜ。だが、悪いな。狒狒王(イッ)蛇尾丸の刃節は俺の霊圧で繋いでるんだ。砲撃じゃ切れねぇ。今のはわざと刃節を外して、てめぇのその砲撃を全てかわしただけのことだ。」

「なっ!?そ、そんな・・・!」

「何をそんなに驚く?言ってるだけだぜ・・・てめぇの砲撃は、見えてる・ってな。狒骨大砲!!!!」

蛇尾丸の口からレーザーのように撃ちだされる霊圧の塊。

なのはは咄嗟にエクセリオンバスターを撃ち、攻撃を回避しようとする。

「！！エクセリオンバスター！！！！！」

強大な威力を持った砲撃がぶつかり合うことで、遠く離れた場所でさえもその影響を何らかの形で受けるはやて達。

「くっ！！！バケモノかよあいつら・・・！？」

「少しは周りの迷惑も考えて戦って欲しいものだ！」

土煙が晴れ、なのはと再び向かい合いながら眉間に皺を寄せる恋次。

「（狒骨大砲を撃った際に、咄嗟にエクセリオンバスターで相殺させたか・・・やっぱ怖えー女だぜ、高町なのは・・・いや、それを言うならこいつに魔法を教えたって言うユーノのほうが怖えーか・・・！？）」

「（エクセリオンバスターで何とかあれを防いだけど・・・流石に今のは危なかった！手が・・・痙攣してる！？身体が無意識のうちに恋次さんを恐れてるの？それとも・・・恋次さんの卍解を恐れてるの？どちらにしても・・・あまり時間はかけられない・・・一気に終わらせる！）」

すると、なのはは恋次と大きく距離を取って空中に浮遊しつつレイジングハートを恋次へと向ける。

「（ここで勝負に出るか・・・！？恐らく、こう言う状況じゃ間違いなくスターライトブレイカーで潰しにかかるだろう。ユーノの話じゃ、あれをまともに防げる結界魔導師は、自分かザフィーラって奴ぐらいしかいねえって話だ・・・俺もここで決着（ケリ）を着けねーとな・

・・だがこの場合は・・・！いや、待てよ！？そう言えばあいつ・・・）」

その時、恋次はユーノに言われた言葉を思い出した。

〈なのはの場合、スターライトブレイカーを撃つ際は必ず大幅に距離を取り、対象を絶対に逃さないように何重にも強いバインドを仕掛けます。バインドに絡め取られればどんな相手もなのはの餌食です。それをさせない為にも、早期に打開策をとる必要があります。僕の知る限り、その場合のなのはに対する一番の有効策はズバリ・・・“こけおどし”です。〉

〈こけおどし・・・だあ！？〉

〈なのはとて完璧超人じゃありません。こちらがこけおどしをすれば、なのはは必ず罠に引っかかってくる。疑うことを知らない無垢な心こそが、なのはの戦闘に於ける最大の弱点なんです。もし、なのはと本気で戦うことになったら試してみてくださいね♪多分、引っかかりますから♪〉

〈多分・・・かよ・・・〉

「・・・賭けに近いが、やってみるか・・・」

そんな恋次の考えなど全く知る由も無いなのはは、レイジングハートと相談しながらスターライトを撃つかどうかを決めていた。

「レイジングハート・・・スターライトブレイカー、いける？」

〈Ａｌｌ　ｒｉｇｈｔ〉

なのははレイジングハートの言葉を聞いて、スターライトを撃つ決心をする。

するとなのはは早速恋次の身体をバインドで拘束しようとするが、そこでなのはが目にした恋次の意外な様子。

「え？」

それは、目を閉じたまま一切迎撃の姿勢を見せずに隙を堂々と見せ付ける恋次であった。

「・・・反撃・・・しようとしてない・・・！？」

この恋次の異様な行動に、流石のなのはも一度考え直す。

「（・・・罠・・・それとも本気で諦めたの！？ここでスターライトを撃てば、それで勝負がつく可能性が高いけど・・・一度近付いてみないとそれも判断しがたい・・・）」

〈Ｍａｓｔｅｒ〉

「うん・・・一度中断して、ギリギリまで近付くよ。」

なのははスターライトを撃つ姿勢を止めると、恋次の近くに慎重に近付き恋次の行動の真意を探ろうとする。

「・・・・・・――――――」

そして、なのはが恋次にギリギリのところまで近付いたその瞬間、

恋次は目を開ける。

「かかったな!!」

「なっ!?」

「縛道の六十一　『六杖光牢(りくじょうこうろう)』!!」

恋次はなのはに向けて人差し指を向けると、そこから放たれる六つに枝分かれした光によってなのはは完全に動きを封じられる。

「くっ!!しまった!!」

「へへ・・・一か八かの大博打は、どうやら上手く言ったらしいな。その鬼道はそう簡単には外せねーぜ。」

「もう!!この!!この!!!!」

必至に抵抗をし、もがき苦しむなのはだがやはり術を解くことはできない。

「さぁ～～て、とどめといこうか・・・確かはあいつは、なのはにとって一番の物理的ダメージは、これだって言ってたな。」

君の悪い笑顔を見せながらなのはに近付く恋次を見て、なのはも冷や汗を流す。

「ちょ、な・・・何する気ですか・・・恋次さん!?」

「へへへ・・・擽り地獄だ・・・この野郎!!」

そう言うと、恋次はなのはの身体中を擽り回してなのはを笑い地獄へと陥れる。

「にゃはははははははははは！！！！！やめてやめて！！！！！にゃはははははははははお願いですからやめてくださいよ！！！！！ひゃははややひゃはやひゃひゃや！！！！！」

「だったら、素直に降参しやがれ！！でーねーとこのまま笑いすぎで殺すぞ。そーれこちょこちょこちょこちょ！！」

降参をするまで何度でも擽り回す恋次。

すると、エースオブエースと言われるなのはもこれには耐え切れず呆気なく降参を認めてしまった。

「にゃはははははははははは！！！！！わ、分かりましたから！！！！！降参しますからお願いです！！！！！にゃはははははっはっは！！！！！」

このなのはの意外な敗北の仕方に、はやて達は唖然とした。

「・・・なのは・・・負け認めちゃったね・・・」

「ああ・・・何とも情けない負けの認め方だけどな・・・」

「ホンマやな・・・ま、たまにはこういうのもありかな。」

だが、一方ではやてはこの戦いを通して恋次の行動をもう一度よく振り返りながら疑問に思ったことが幾つもある。

「（せやけど、奇妙やな・・・どうして恋次さんがなのはちゃんの魔法攻撃や技の名前、さらには私とフェイトちゃん、ユーノ君しか知らないなのはちゃんの弱点を知っとたんや！？）」

ユーノの秘策？魔王を倒す戦闘法（後書き）

教えて、ユーノ先生！

恋「へへ！今日は、俺様の強さの秘密を大公開だ！！」

恋「まずは俺の斬魄刀、蛇尾丸は始解時は刃節によって遠くに離れた奴まで攻撃することが出来、さらに刃節を外して刃を直接ぶつける狒牙絶咬という技もあるんだぜ！」

恋「そして、俺様の卍解・・・狒狒王蛇尾丸になると斬魄刀そのものによる一撃一撃が強力になり、ギリアン級大虚の破面の斬魄刀も容易に打ち砕く！そして、その必殺技の一つが、口からレーザーのように巨大な霊圧の塊を発射する狒骨大砲だ！」

恋「さらにさらに！！俺の強さのもう一つの要は何と言ってもこの頭に巻いてる白い手ぬぐいで・・・」

ユ「『廃炎（はいえん）』♪（恋次に向けて飄々としながら）」

恋「のあああああああ！！！！！！！熱ちちちちちちちちちーーーー！！！！！！！（尻に火がつきそのまま逃走。）」

ユ「全く・・・人のコーナーを勝手に・・・」

ユ「だけど面白そうだな・・・今度また誰かでやってみようかな♪（なのはがいいかなそれとも一護さんかな・・・♪）」

恋「って！どうでもいいから謝れよ！！」

ミッドチルダ消滅

＞ｉ１２８２４―７０９＜

なのはとの模擬戦が終わって、その日のこと。

廊下を歩いていた恋次はフェイトに呼び出され、誰もいないところまで案内された。

「俺に話しだと?珍しいな、お前が俺に話があるなんてよ・・・」

「ええ。実は先日、私と戦った魔導虚の一人・・・シャークエイジが言っていた話って・・・聞いていますよね?」

「ああ。何でも、スカリエッティの野郎が“失われた世界(アルハザード)”への道を見つけたって話だろう。あん時は、クロノって奴も他の連中も信じられないって様子だったしな。で、それがどうかしたのかよ?」

「はい・・・そのことで、奴が奇妙なことを言ってたんですよ。」

「?奇妙なこと・・・!?」

「はい・・・アルハザードへの道を開く際や、魔導虚を作るのに使われたとされるロスト・ロギアを超える究極のロスト・ロギア・・・それが実は・・・ある死神によって創られた物質の破片だと話していたんです。」

「ある死神によって・・・創られた物質の破片だと!?」

「はい・・・その答えを知りたければ、直接恋次さんに聞けと。まだ、このことははやてやクロノ達には言ってません。恋次さん、何かお心当たりはありますか?」

「そうだな・・・ある死神の創りだされた物質の破片・・・ロスト・ロギアを超えるような力を持つようなもの・・・!!」

その時、恋次は身に覚えのある表情を浮かべた。

「あ！？その顔は、何か心当たりがあるんですね！教えてください！！出来ればなるべく詳しく正確に！」

「・・・フェイト、一つ約束してくれ。このことは、まだはやて達には言わないでくれ。俺が良いって言うまでは他言無用で頼む。」

「・・・はい。約束します・・・」

恋次はそう言うと、フェイトに自分の知っているあることについて全て赤裸々に話した。

そして後に、その事実がこの事件の真相に繋がることになる。

二人がそんな話をしている間、午後の機動六課訓練場ではそれぞれに分かれてフォワードメンバーの個人スキルを更に強化する特訓が行われていた。

エリオの相手は、同じ槍使いの浦太郎だ。

「それじゃあ、次行くよエリオ。」

「はい！お願いします、浦太郎さん！」

「よっし♪じゃあ始めようか、フィッシャーマン。」

〈Ｏｆ　ｃｏｕｒｓｅ〉

浦太郎は真剣な眼差しでエリオの顔を見ると、高速の槍術をお見舞いする。

「ソニック・スピア」

〈Ｓｏｎｉｃ　ｓｐｅａｒ〉

浦太郎の変幻自在の高速槍術にエリオは防戦一方の状態だった。

「くっ！！は、速い！！」

「ダメだよそんなチンタラ防御したたら。スピードに圧し負けちゃうよ。」

エリオは浦太郎の言葉通り、力に圧し負けてしまい後ろのほうへと飛ばされていった。

「のあああああああああああ！！！」

その訓練の様子を同じフィールドでクロノの修行を受けるスバルとティアナは唖然とした。

「うっひゃ～～～相変わらず浦太郎教官手厳しい～～～」

「ホントね・・・エリオ大丈夫かしら？」

「無駄口を叩く暇なんか無いぞ。二人とも、次行くぞ！」

「あっ、はい！！」

「お願いがいします、クロノ提督！」

クロノは二人に向って自分の培ってきた技術の全てを使って全力で向っていく。

スバルもティアナも、なのはやこの四年の間に培ってきた技術を駆使してクロノの攻撃に対抗する。

そして、残りのキャロのほうはというと・・・なのはと供に新たな戦術の幅を磨くために独自の訓練メニューを受けていた。

「うん、キャロ。いい感じだよ・・・その調子！」

「はい！」

「後方支援型のキャロが直接先頭に立つようなことは滅多にないけど、来るべき決戦に向けて一人で戦えるようにもしないといけないからね。ちょと、厳しいかもしれないけど頑張ってね！」

「はい！次お願いします、なのはさん！」

「よし！じゃあ、今度はさっきのスピードの三倍でいくよ。レイジングハート。」

〈Ａｘｅｌ　ｓｈｏｏｔｅｒ　ｔｈｉｒｄ　ｓｐｅｅｄ〉

なのはの周りに浮かぶ魔法弾の速度が通常の三倍にまで加速され、満身創痍のキャロに向って襲ってくる。

こうして、機動六課の面々は来るべきスカリエッティや戦闘機人、さらには魔導虚達との戦いに向けて日々訓練を行った。

そんな訓練付けと捜索の日々の数ヶ月で、ミッドチルダを襲った魔導虚や戦闘機人の事件は数知れず、幾度と無くなのは達は窮地に追い遣られたが・・・それでも見事事件を解決することに成功していた。

そんな事件続きの日々が過ぎて早3ヶ月。

ミッドチルダ地上本部の地下深くにあるスカリエッティのアジトでは、誰もいない長い通路を黙ったまま歩き続けるファイの姿があった。

ファイはある部屋の前に立ち寄ると、その中で腕の治療を受けているグラトニーを後ろから眺める。

グラトニーもファイが来たのを確認する。

「・・・・・・・・・・・・ファイか。何の用だよ?」

「治ったじゃないか。念のために斬られた腕を持って帰っておいて良かったな。」

「時間がかかりすぎなんだよ。腕が腐っちまう。俺らの体も機人(オー)四天王らみたいに自動回復すりゃラクなのによォ」

「文句を垂れるな。繋がっただけでもマシだろう。もしあのまま腕すらも消されていたら、お前はドクターに消されていたはずだ。」

「・・・ちっ・・・・・・・そうかもな。」

「・・・処置、終了致しました。」

「オウ。」

グラトニーの腕が専門の魔導虚によって処置が終わり、つけ直った腕の動きを確認するグラトニー。

「いかがですか?動き・反応等切断前と変わりありませんか?」

「・・・オウ」

そう言うと、グラトニーはその魔導虚の頭を治ったばかりの腕で振り下ろし、魔導虚の首を潰して血を吹き出させる。

「・・・ダメだな。本調子なら股まで裂けたハズなんだがよ。」

「・・・下らん、行くぞ。」

「どこへだよ?」

「ドクターがお呼びだ。」

また、その頃地球のスクライア商店のほうでも来るべき戦いに向けての準備が地下訓練場で行われていた。

「のび太という生き方・・・深い文章だと思わないあなた。まだ中学生の子供が書いた作文だけど、私ここまで感動したのは久しぶり!野比のび太という人間は勉強ダメ・運動ダメ・ひ弱でダメな男の子っていう認識から、一変させてくれる内容のものだよ・・・」

「そんな深い作文なのかよソレ?ていうか、態々ユーノの家に来て

までんなもん読む必要ねーから、織姫・・・」

織姫は最近、インターネットの急上昇ワードに出てきたとある中学生の書いた作文を訓練場で読んでいたが、隣に座る一護は半ば呆れ返っていた。

そんな二人の目の前で、激しい修行を繰り広げる白鳥礼二と金太郎。

とは言っても、明らかに白鳥のほうが追い詰められている状況だった。

「何をしとるのですか白鳥殿!!今の攻撃であなたは何度死に掛けているのですか!?そんなことでは、死神と魔導師との架け橋になることなど永劫叶いませぬぞ!!もっと気合を入れてもらわないと困りますぞ!!」

「う、うるさいぞ!!誰が魔導師になんかの為に頑張るかよ!!私は元々死神だぞ!!」

身の丈ほどの斧を持った金太郎に言いたい放題言われる白鳥。

と、その時ユーノがフライパンのそこを叩いて全員に昼食の時間だということを知らせる。

「昼食ですよ!!集まってくださいみなさーん♪集合が一番遅かった人は皿洗いですよ♪♪」

「お・」

一護達はその瞬間、白鳥には想像もつかないような速度でユーノの

もとに集まった。

そのため結局皿洗いを押し付けられてしまう羽目になった白鳥は渋々食器を洗っている。

そんな白鳥を見ながら、織姫は金太郎に修行の成果を尋ねてみた。

「それで、どうなんですか金太郎さん。白鳥さんの魔力と霊力の使い方は？」

「まるでダメですな。見ての通り霊力だけで頼ろうとしています。これでは何時までたっても魔導死神などになれませぬぞ。」

「（クッソ～～～～～～～～～言いたい放題ぬかしおって～～～～～～）」

心の中で激しい屈辱感を覚える白鳥に、一護がさらに追い討ちの言葉をかける。

「才能ないじゃないのか？もう諦めていっそ死ねばどうだ。」

「ウルサイですよ黒崎さん！！修行に参加してくれないあなたにそこまで言われる筋合いはないぞ！！」

「参加してるだろうがボケ。こないだコッソリ鬼道教えたじゃねぇかよ！」

「教えてくれておらぬわ！！大体、あなたは人に教えられぬような鬼道など、そこまで使えぬだろう！！ホントっぽいからやめてくだされ、そーいう冗談」

「気にすんなよ白鳥。一護のいうことなんかに耳貸す暇があったら真面目に修行に励めよな。」

「ぬいぐるみの貴様にあーだこーだ言われたくない！！少し黙っておれ！！」

「バカにすんなよな。俺だって白雷ぐらい詠唱破棄で撃てるっツーノ」

「白雷撃てたぐらいで自慢しないでくだされ！！いい加減自意識過剰はやめてくだされ、このオレンジ髪染め！！」

「髪染めじゃねぇ！！地毛だって言ってんだろう！！！」

「世間的には、おめーの髪は染めてるようにしか見えないんだろうよ。」

コンの言葉を聞いた一護は堪忍袋が切れてしまい、コンの体を理不尽にも踏みつけて窒息死させようとした。

悶絶するコンを見た織姫はすぐに救いの手を差し伸べるが、それでも一護の気は治まらないのである。

その一方で、ユーノは一人静にこの数ヶ月の白鳥の修行とスカリエッティの同行を今一度確認していた。

「（・・・三ヶ月で魔力コントロールと霊力配合の兼ね合いはそう上手くいくようなものじゃないか・・・やっぱり、こればっかしは時間をかけないとどうにもならないか・・・アンゴルモアが完全覚

醒するまで残りあと僅か・・・いや、既に覚醒してるのかもしれない・・・少し・・・急がないといけないな――――・・・・）」

そして、再び場所は変わってスカリエッティ地下アジト。

「ふふ・・・いや、諸君。よく集まってくれたね・・・今回君たちを招集したのは他でもないよ。実は先日、アルハザードからのお土産を持って帰ってきたところなんだ。今から君たちにもプレゼントするとするよ。」

スカリエッティはそう言うと、アルハザートから持ち帰ったという高エネルギー体を機人四天王、そして魔導虚の全員の体に組み込んだ。

「さて、機人四天王と優秀なる魔導虚諸君・・・いよいよ盛大なパーティーの準備は整ったよ。特に、ウーノ達には期待をしてるよ。君達四人の能力を存分に発揮してくれたまえ。この無限の力を得た我々に、敵などありはしない・・・ふふふふ。」

その頃、地上の人間はスカリエッティの企てなど、全く知る由も無く何時もどおりの安穏な一日を過ごそうとしていた。

ヴィヴィオのほうも、今日はクラスメイトと供にバスに乗って管理局地上本部での課外授業を満喫しようとしていた。

「わああ！！すっごーい！！！！」

ヴィヴィオはバスの中から窺がえる管理局地上本部の規模の大きさに、改めて興奮を覚えたのであった。

「はーい、みなさん・・・いいですか?今から団体行動ですからね。ちゃんと先生に着いてくるんですよ。」

担任のノアが児童全員にそう注意を促すと、素直な児童は肯定の返事をする。

やがて、管理局地上本部へと着いたヴィヴィオたちは間近で見る地上本部に目を輝かせていた。

「やっぱ大きいですわね!!管理局地上本部は!!」

大金持ちの令嬢、コロナ・ティミルでさえも驚愕するほどの地上本部とは、一体どれほどの大きさなのであろうか。

ヴィヴィオもそそくさとバスから降りて中に入ろうとしたが、ふとその時・・・自分の中に怒る胸騒ぎ。

「へへ♪♪あれ?(何だろう、この感覚・・・!?さっきから妙な胸騒ぎがするのはどうして?)」

「?どうしたのヴィヴィオ。変な顔してさ?」

コロナと同じ、ヴィヴィオの親友のリオ・ウェズリーが声を掛ける。

「え?あっ、ごめんごめん!ちょっとバスに酔っただけだよ!」

ヴィヴィオ達(ザンクト)Ｓｔ.ヒルデ魔法学院の児童は、地上本部の係員に案内されて中の様子を見学し、地上４００メートルを誇る展望台へと足を運んだ。

コロナは高所恐怖症で窓ガラスの外を全く見ようとせず、それを強引に見させようとするリオ。

「ほら、目を開けなよコロナ！このぐらいの高さなんて、別に大した高さじゃないから！」

「リオ！私は・・・高所恐怖症なんですよ！！絶対に嫌です！！」

そんな二人とは違い、ヴィヴィオは窓の外を見ながら当初感じた胸騒ぎは何だったのかと不思議に思っていた。

「（気のせいだったのかな・・・あの胸騒ぎ？うん、そうだよね・・・きっと気のせいだよね・・・）ああ！機動六課の隊舎が見えるよ！！」

「えっ！？ホントホント！！ほら、一緒に見よう！！」

「いいですよ私は！！」

さて、ここはミッドチルダにあるレールウェイの格納庫。

外に出されたレールウェイの車体を柱の上で腕組みをしながら見下ろす機人四天王の一人、トーレ。

「フン・・・いつ見ても下らぬ光景だな。だが、今はこの光景も役に立つときだ・・・使わせてもらうぞ、地上人どもの下らぬ発明を！」

する、トーレは機械を意のままに操る特殊な電波を発生させて、レールウェイの操作を完全に手中に収める。

また、ハイウェイの中に現れ交通渋滞を起こす車の上で上機嫌に踊り続けるクアットロ。

「う～～～ん♪ああ～～この排気ガスの麗しき香りと、心和ますエンジン音♪たまらないわ～～～♪♪さぁ、みんな・・・踊りましょう♪この私と一緒に。ほぉ～ら、発車オーライ♪」

クアットロもトーレ同様、あらゆる自動車を操る特殊な電波を発生させて何やら怪しげなことをしようとしていた。

そして、航空隊の武装基地にも機人四天王の一人、ファイは現れ空中から離陸してくる超音速機ＨＡサーフェイスＦを見下ろしていた。

「超音速機ＨＡサーフェイスＦか・・・地球人にしては上出来だな。この青い空にも、よく似合う・・・離陸開始。」

機人四天王が独自の動きを見始めて暫くしたとき、とある駅に止まるレールウェイに向って猛スピードで走行してくる奇妙な光を帯びたレールウェイ。

「何だあれ!?」

「こっちに向って来たぞ!!!」

「逃げろ!!!」

人々は直ちに危険を感じて車内から避難を開始した。

激しい衝撃でぶつかるレールウェイはそのまま前方のレールウェイ

を押し進めながら暴走を始める。

やがて、それとほぼ同時にミッドチルダハイウェイ付近で謎の紫の発光体が発生し、忽ち空高くてと垂直に上っていく。

その様子を地上本部の展望台で眺めるヴィヴィオ達。

「すごーい！！何あれ！？オーロラかしら！！」

リオはオーロラだと思っていたが、ヴィヴィオはそれが直ぐにスカリエッティの企みによるものだということを理解した

「（何なのあれ！？まさかスカリエッティが・・・！？でも、それにしては何だか様子が違う気が！？ただ確かなのは、凄く嫌な予感がするってことだけ・・・）」

町の異変に身の危険を感じた管理局内部にいた局員や一般市民は我先にと逃げ出そうとして、内部はまさにパニック状態だった。

「管理局の指示に従ってください！！みなさん、落ち着いて下さい！！」

「Ｓｔ（ザンクト）．ヒルデ魔法学院の児童、早く集まって！！」

ノアの言葉に耳を傾け、人ごみの中で体勢を立て直しながらセイクリット・ハートでなのは達に連絡を取ろうとするヴィヴィオ。

「兎に角、早くママたちに連絡しないと！！」

しかし、何者かによる妨害電波によって通信が一切出来ない状況だ

った。

「（通信妨害!?じゃあ、やっぱりこれはスカリエッティの仕業なの!?それとも・・・戦闘機人!?）」

『エレベーターは現在動きません!下りる際は階段をご利用下さい!!下り方は階段をご利用下さい!!』

エレベーターが使用不能なった現在、人々は設けられた階段によってたかって集まり脱出を試みようとしたが、そんな人々の前に立ち塞がる胸に穴の開いた不気味な生命体が人々を絡め取って自らの餌としていく。

「み、みなさん!!早く上へ戻ってください!!」

ヴィヴィオは依然、この謎の生命体と遭遇したことがあり、その正体が何なのかを知っていたから、驚きを隠せなった。

「（これって・・・!!魔導虚の子供!?）」

大混乱を起こすミッドチルダ。

その様子をモニターで確認したウーノは一人海上付近に姿を現すと、自らも作戦を実行するために動き出す。

「さて、妹達も準備が整ったことだし・・・私も動くとするわ。」

ウーノは海に浮かぶ巨大なフリゲート艦の先端に体を接着させると、新たな力を使ってフリゲート艦との融合に取り掛かる。

「このフリゲート艦は私が貰うわ。ＩＳ・改発動・・・『機械融合（マシーンユニゾン）』。」

フリゲート艦と完全に融合したウーノはコントロールを奪ってミッドの地下水脈を目指して前進し、ミッドチルダは発生した謎の紫色の光がやがてミッドチルダを丸々ドームのように包み込んでしまい、一千万都民はドームの中へと閉じ込められてしまった。

その様子を、機動六課の隊舎でリアルタイムで見ていたなのは達は全員でこの非常事態に関する緊急会議を執り行っていた。

「諸君、非常事態が起きた！あの光のドームの中には、一千万都民が閉じ込められている。地上・空中・地下。外部からは完全に遮断されてしまった。」

「くそ！スカリエッティの野郎！！とんでもねーことを！なのは、ヴィヴィオの奴はどうした？」

「今日は、課外授業で地上本部に行ってるんです！」

「つまりは、あの中に閉じ込められてるってことかよ。」

「強力なジャミングで、内部からの連絡は全て途絶えておる・・・弱ったな。」

はやては頭を抱えて事態の深刻さを痛感する。

「戦闘機人の反応も、魔導虚達の霊圧も全く感知されておりません。」

「今回は、管理局始まって以来の総力戦になることは間違いない。その為に、前線隊長・フォワード部隊・死神メンバー・そしてバックヤードスタッフにも集まってもらった。現在の状況、そしてこれからの作戦を遂行させるために当たって、不備の無いよう心してくれ給え。」

「「「「はい！」」」」

「了解！」

「うん！」

「八神部隊長、クロノ提督！偵察機が持ち帰った映像を出します！」

シャーリーはそう言うと、地上部隊の偵察機が光のドームに向って近付こうとする映像を全員に見せる。

「地上部隊の偵察機のようですね・・・」

「問題はこの後だよ。」

スバルのその言葉に浦太郎がそう答えると、全員の目の前で一瞬のうちに破壊され爆発を起こす地上部隊の偵察機。

「何だ、ありゃ！？」

「フライトカメラの伝送ビデオを、コマ送りにして解析してみます。」

アルトはコマ送りにしながら、映像の解析を急いだ。

「解析したところ、極めて強い衝撃波を放つ飛行隊と思われます。どうやら、空港に到着した武装隊の超音速機ＨＡサーフェイスＦを素体にして作られたもののようですが、しかしやはり、魔導虚反応は見受けられませんでした。」

「魔導虚じゃないとすると、一体何なんでしょう？」

ティアナのその疑問に、フェイトは直ぐに詳細な解析をシャーリーに要求する。

「シャーリー、もっと詳しく分かる？」

「はい、拡大してみます。」

モニターに映し出された謎の戦闘機械を拡大していくシャーリー。すると、その戦闘機械の中から映し出される機人四天王ファイの姿を確認したシグナムは驚きの声を上げる。

「機人四天王、ファイ！！」

「どうやら、今回は機人四天王が直接手を下してるようだね。魔導虚を操って・・・」

「この数ヶ月の間に人類の前に現れ、魔導虚を多く送り込んでは姿を見せていた戦闘機人が・・・ついに自らとはね・・・」

「・・・忘れもしねーぜ・・・機人四天王トーレ。機動六課を狙ってきた、あの時の戦いを・・・」

恋次はそう言うと、数ヶ月前初めてトーレと戦ったときの屈辱的な戦闘を思い出す。

「今回は機人四天王自らが手を下すだけでなく、他の機械と融合して巨大ロボ化も果たしておる。武装隊の戦闘機も融合されてしもうたから、迂闊に近付くことも出来へん。」

「機人四天王全員が直接戦闘に参加してきたってことは、容易ならない事態だぜ。」

「みなさん、管理局地上部隊の戦車部隊が、あの光のドームに接近したときの様子です。」

シャーリーは早速その映像を全員に見せるが、直ぐに光のドームに向った戦車部隊が光に巻き上げられて崩壊していく光景が目に映った。

それを見たエリオは思わず声を上げた。

「どういう事ですか!?」

「成程。高エネルギー粒子の複雑な動きが、付近の空気を押し上げ、さらには構造体の分子結合を崩壊させているんだ。」

「粒子の動きから、『コントラフォール』と命名しました。このエネルギーバリアは、四つの層から成りなっています。解析した結果、この数ヶ月に遭遇したものです。」

「なっ!?」

「第一層は、三ヶ月前にフォワードメンバーを苦しめた超電磁バリアです。」

「勿論エネルギー量は、あの時よりも遥かに増大しています。」

「二層目は、濃縮酸素を蓄えた防御幕です。」

「するってーと、俺みたいな奴が攻撃したら大爆発か!?」

「ウソでしょう!?」

「三層目は、二ヶ月前にミッドチルダでフェイトさん達を閉じ込めた超次元ポットと同じものです。」

「あれには、私もテスタロッサも苦労したな・・・何をしても、外に出られなかった。」

「それに、外からも中に入ることは不可能でしたしね。」

「ここはまた、本局の次元歪曲砲に頼るしかあるまい。」

「そして、四層目です!複数の魔導虚が作り出した地上の太陽、『グランドノヴァ』と同じものです!」

ここまでの説明を補足していこう。

まず、三ヶ月前に起きた機人四天王クアットロの策略によって送り込まれた超電磁能力を秘めた魔導虚によって、ミッドチルダは大規模な停電に見舞われてしまい、それを解決するためにフォワードメ

ンバー全員が直ちに魔導虚殲滅に取り掛かったが、魔導虚のデバイス『電撃神（エレットリコファルス）』の能力に苦しめられ、一時は師の危険に追い詰められたフォワード陣。

二つ目は、ウーノによって送り込まれた魔導虚が作り出した濃縮酸素で出来た暗雲。

その中に閉じ込められた人々を救うためになのはとクロノが救出に向うが、高濃度の酸素に体が異常を起こし、これにも苦戦を強いられた。

第三の超次元ポットとは、ファイによってミッドチルダに送り込まれた魔導虚のデバイス『次元獣（ディメンジョンビースト）』の能力によって、フェイトとシグナムを中に閉じ込めそのまま圧力で以って葬り去ろうとしたが、幸いにもクロノが本局に問い合わせた空間そのものを歪曲させる次元歪曲砲で以ってどうんひか何を脱した二人。

そして、最後のグランドノヴァはトーレが用意した複数の魔導虚を使って作り出した超炎熱エネルギー物体のことで、下手に攻撃を仕掛けるとミッドチルダそのものは勿論、あらゆる次元世界をまるまる破壊し尽くす力を持ったまさに管理局最大の危機だったが、それを本局と機動六課、さらにはクロノの氷結の杖デュランダルの能力をフルに使って見事グランドノヴァを消滅させることに成功したのだ。

「あの中のヴィヴィオたちは無事なの！？」

「コントラフォール内部は極めて常温に近い状態ですので、心配はないのですが・・・」

「内部の温度が高くないってことは・・・つまり・・・」

浦太郎はその時、もう一つの魔導虚に関する事件を思い出し、それと同時に吉良が次のように語る。

「あの中で魔導虚を半永久的に作り出す物質、『魔導虚卵巣（ホロウロギア・プラント）』が作り出されてるってことだよ。それと、その子供も生まれてる頃だ・・・」

『魔導虚卵巣』とは、スカリエッティが作り出す魔導虚の消耗に伴い、機人四天王全員の力とロスト・ロギア、アンゴルモアによって創り出された殺戮能力の高い魔導虚を作り出すための物質で、以前にもこれと同じことをしようとしたが、機動六課の活躍によってその未成熟なプラントを破壊されてしまった。

尚、このプラントから生まれた魔導虚の子供は人間を餌とすることで急激な速度で成長をするというとんでもないものなのだ。

「一千万都民を、魔導虚の餌にするつもりですか！？」

「それだけは、何としても阻止せなあかん！」

「では、僕から作戦を説明する。僕とはやて・なのは達隊長陣・死神の二人・本局の次元歪曲砲でこのコントラフォールを攻略する。大一層は、はやてのラグナロクブレイカーの超振動で、電磁エネルギーを消滅させる。第二層と第三層は、次元歪曲砲で空間に穴を開けて次元ごと捻じ切り、第四層は、粒子をデュランダルで氷結させた後一気になのは達が突入する。ヴィータ達には、空の機人四天王を引き離す囮に・・・」

「おうよ！！」

「了解しました。」

「フォワード陣と浦太郎さん達は、戦艦と融合した機人四天王の気をそらして貰う。」

「「「「了解しました！」」」」

「よし！いっちょやってやるぜ！」

「先輩、あんまし力入れすぎないでよ。」

「しかし、いずれの場合も高エネルギー体の一部を数十秒間しか消滅させられません。」

「数十秒で作戦を遂行しろってか？」

「バリアの穴が閉じてしまう前に、なのはとフェイト、恋次さん達には内部に突入してもらう。」

「うん、わかったよクロノ君。必ずヴィヴィオ達を助けてみせるよ！」

「エネルギーレベルの一番低い、ミッドG地区近辺を突入場所とします。」

「よーし！！一千万都民の命は、私ら時空管理局にかかってる！それじゃあ行くで・・・機動六課、出撃開始！！」

「「「「「「「「「了解！！」」」」」」」」」

はやて達はそう言うとバリアジャケットに身を包み、それぞれの部署に分かれて行動を開始し始める。

フォワード陣と浦太郎達はヴァイスのヘリに乗って戦艦と融合したウーノの下へ、なのは達はミッドチルダ中心部の光のドームに向って飛行をし続ける。

「待っててね・・・ヴィヴィオ。」

「必ず、助けるから！」

なのはとフェイトはヴィヴィオや取り残された市民を助けるために急いでドームへと飛行を続ける。

「能力限定、完全解除！」

クロノは自身のリミッターと供にはやて達隊長陣の能力限定を解除して、全力全開で事に当たる。

なのは達が飛行を続けていると、恋次は真正面からこちらに向って飛んできた音速機と融合したファイを目撃する。

「来たぜ！」

「私らに任せろ！！ギガントンハンマー！！！！」

「飛竜・・・一閃！！！」

ヴィータとシグナムははやて達を守るために、命令どおりファイの囮になって任務遂行の為に奮闘する。

「ぼやぼやすんな、はやて！！さっさとラグナロクブレイカーを使え！！」

「了解や！リィン、準備は良いか！？」

〈はいです！何時でもいけます！〉

リィンとユニゾンしたはやては夜天の書を開き、シュベルトクロッを天に掲げると、魔力を最大限まで上昇させてはやて最強の必殺技を光のドームに向って放った。

「終焉の笛・・・ラグナロクブレイカー！！！」

はやてのラグナロクブレイカーを受けたコントラフォールの第一層は見事に貫通。

『コントラフォール第一層貫通！復元まで時間がありません！！』

すると、なのは達の方向目掛けて地下から撃ち出される砲撃の嵐。

「地下から砲撃か！？」

その砲撃を打っている者の正体は、フリゲート艦と融合したウーノであった。

「ははははははははははは！！！管理局の連中め、思い知るがいいわ！！！」

すると、直ぐに現場に到着した浦太郎達とフォワードメンバーはウーノの行動を止めにかかる。

「邪魔はさせないよ！先輩、みんないくよ！」

「よっしゃー！！」

「「「「はい！」」」」

「「ディバインバスター！！」」

「スターライト・ブレイカー！！」

「サンダーレイジ！！」

「ブラストフレア・サイクロン！」

「俺の必殺技、パート3！！」

それぞれのデバイスと斬魄刀からウーノに向けて放たれる最強技の数々。

装甲はそう簡単には破壊されないものの、注意を引く分には充分だった。

「へっ！一番姉の相手は俺たちだ。もう、逃さないぜ。」

「望むところよ。今こそ、あなた方に止めを刺してあげるわ・・・」

地下の砲撃が済むと、クロノは本局で待機をする自分の母で上官のリィンディ・ハラオウンに連絡を取る。

「リンディ提督、次元歪曲砲を発射してください！！」

「了解よ！エネルギーチャージオッケイ、軌道修正完了。次元歪曲砲、発射！！」

その瞬間、戦艦クラウディアからコントラフォールに向けて発射される次元そのものを歪曲させる砲撃が第二層も三層も貫通させる。

『第二層、第三層貫通！しかし、もう時間が！！』

「僕の出番だ。行くぞ、デュランダル！」

〈Ｙｅｓ　ｂｏｓｓ〉

それを見たファイはクロノ達を中へと入れまいと躍起になって、ヴィータとシグナムの攻撃を振り切ってクロノ達に向っていく。

「ヤベー！なのは！はやて！！」

すると、周りの状況を見た吉良が斬魄刀を解放してファイに向っていく。

「面を上げろ、『侘助』！」

吉良は瞬歩でファイに近付くと、衝撃波に耐えながらファイの体を切り続けて重みに耐えられなくなったファイを落下させる。

「済まない、吉良さん。恩にきるぞ！“悠久なる凍土、凍てつく棺のうちにて、永遠の眠りを与えよ”」

クロノの詠唱と供に展開されるミッド式の魔法陣。

それを見たシグナムやヴィータ達はファイの相手は自分達でどうにかすると言って魔法の発動を促す。

「あとは私達が食い止めます！！」

「よおし！！凍てつけ、エターナルコフィン！！」

〈Ｅｔｅｒｎａｌ　Ｃｏｆｆｉｎ〉

デュランダルの氷結魔法によって、コントラフォール最後の層が凍りつき氷解する。

層が破壊されたと同時に、中へと侵入するなのは、フェイト、恋次。

『第四層氷結及びその氷解を確認し貫通！なのはさん・フェイトさん・恋次さん供にコントラフォール内に突入しました！』

「うん・・・頼んだよ、なのはちゃん・・・フェイトちゃん・・・恋次さん・・・」

中へと突入したなのは達だったが、三人はそこで思いもよらぬ光景を目撃する。

それはミッドチルダの大地がまるまる隆起し、何も見えない状況だった。

「なっ！？こりゃ・・・！！！」

「ミッドチルダが・・・まるまる隆起しちゃってる！？」

「急ごう、なのは・恋次さん！！」

フェイトとの言葉を聞いて空高くへと上っていく三人。

そして、三人が地上に着いたとき・・・ミッドチルダは既に魔導虚卵巣で覆いつくされたまさしく地獄のような光景だった。

「「「これは！！？？」」」

ミッドチルダ消滅（後書き）

教えて、ユーノ先生！

ユ「今回は・・・のああ！！ウソ！！（突然ウーノの妨害に入り、退場させられる）」

ウ「私がＩＳ改について説明をします。」

ウ「ＩＳ改は、ドクターによって新たに書き加えられた最高のインフィーレントスキルで、従来のＩＳと大きく違うところは、何と言っても別の機械と融合してロボ化する『機械融合』です。そして、この力を使って私が融合したのが・・・フリゲート艦です。」

ウ「う～～ん、実に素晴らしいわ・・・惚れ惚れしちゃう♪（手前味噌）」

激突、機人四天王！

＞ｉ１２６８９―７０９＜

殺戮能力の高い魔導虚を、機動六課と本局によって次々と殲滅されてしまい、魔導虚そのものを使い果たそうとしていた機人四天王は、魔導虚卵巣を作り出すためにコントラフォールでミッドチルダの首都、クラナガンを封鎖してしまう。

機動六課は、連携作戦によってなのは・フェイト・恋次をコントラフォールの内部へ送り出すことに成功するが、機人四天王の猛攻は止まらない。

果たして、我らが最強魔導師＆死神軍団は機人四天王を止めることが出来るであろうか！？

『なのはさん達との更新回復しません！ヴィータ副隊長たちは、機人四天王ファイとＢ地区において交戦中です！』

『フォワードメンバーと浦太郎さん達は地下水脈にて同じく機人四天王、ウーノと戦闘を継続中。』

通信を聞きながら、目の前のコントラフォールを凝視するはやてとクロノ。

「後は・・・内部に侵入したなのは達次第か。」

「私たちの希望を信じるしかあらへんよ。」

その頃、スクライア商店でミッドチルダに訪れた最大に危機をモニターデ見ていたユーノや一護達は動揺を隠しきれずにいた。

「まずいぞ、ユーノ!!このままじゃ本当にスカリエッティの思う壺だぜ!!どうすんだよ一体!?」

一護がそう言うと、ついにユーノはある重大な決断を下す。

「分かってますよ、一護さん。だからこそ・・・此処で僕らが動かないと行けないんですよ・・・」

「「「「えっ!?」」」」

「・・・店長・・・ついにご決断されましたか・・・」

「これ以上、あいつの思う通りにさせる訳にはいかない。一護さん、白鳥さん。二人は先に金太郎と一緒にミッドに向ってプラントの破壊を行って下さい。僕は少々準備があるので・・・」

「分かった!そう言うわけだ、織姫・・・ちょっと行ってくるぜ・・・」

「うん・・・気をつけてね、あなた・・・」

「コン、織姫のこと頼んだぜ！」

「おうよ！！織姫さんのことは死んでも俺が守り抜くぜコノヤロー！！」

「白鳥さん、かなり不安が伴いますけど・・・大丈夫ですか？」

ユーノがそう尋ねると、白鳥は鼻で笑い自信に満ちた表情で答える。

「私を誰だと思ってその言葉を口にする。八番隊の期待の星、白鳥礼二だぞ。ソレぐらいなんとも無い！」

「そうですか・・・なら安心しました。それじゃ、プラントの破壊は・・・任せましたよ。」

「おう！」

「任されよう！」

「金太郎、転移魔法を発動させてくれ！」

「承知！」

金太郎はユーノに言われたとおりに転移魔法を発動させて、死神化した一護と白鳥を連れて恋次達のいるミッドチルダへと向った。

その頃、コントラフォール内部へと突入したなのは達だったが、内部からは全く通信が役に立たず、はてややロングアーチとの連絡が一切取れなかった。

「ロングアーチ！シャーリー！はやてちゃん！クロノ君！駄目・・・やっぱり交信できない・・・」

「やっぱり、この中では通信も聞かないようだね・・・」

「仕方ねぇ。ここは兎にも角にも任務遂行が最優先だ！魔導虚卵巣（ホロウロギア・プラント）を成長させているエネルギー源さえぶち壊せば・・・！」

三人は最悪の状況になっていないことを祈りながら、魔導虚卵巣のエネルギー源を探すのに必死になった。

すると、フェイトは空の上から前方に広がってきた謎のエネルギーを発生させる巨大サーキット状のものを見つけた。

「あれだ！！」

「何だよ！？一体・・・！」

「多分・・・環状列車と環状高速道路を利用して、以前のような加速エネルギーを作っているんですよ！」

最初に、魔導虚卵巣が確認されたときも、機人四天王は粒子加速機に魔力と霊力を無理矢理注入して魔導虚卵巣を育て上げようとしたが、それを完成される前になのは達に破壊されて計画は失敗に終わったのだ。

「ミッド中の人が魔導虚の餌になったら、管理局の力を以ってしてもどうすることも出来ないよ！」

「そうならねーよう、ここで俺達が絶対にぶち壊す！！」

「「はい！！」」

三人は全速力で空を駆けてレールウェイと自動車と融合を遂げている機人四天王、トーレとクアットロの下まで急いだ。

その三人の姿をミッド地上本部展望台で見ていたヴィヴィオ達魔法学院の児童と局員達。

「あれは！？」

「なのはママ！！フェイトママ！！それに恋次さん！！」

ヴィヴィオは自分の母親は救出に来てくれたことにとても嬉しくなった。

恋次達はトーレとクアットロに近付くと、一気に潰しにかかるために卍解の力を使って畳み掛けようとする。

「よっしゃ！！卍解！！狒狒王蛇尾丸！！！」

恋次はエクシードモードのなのはとフェイトに声を掛けると、一斉攻撃を仕掛ける。

「いくぜ、てめえら！！同時に攻撃して、あの加速器をぶち壊す！！」

「「了解！！」」

「狒骨大砲！！」

「エクセリオンバスター！！」

「トライデントスマッシャー！！」

三人の必殺が同時にトーレとクアットロに向って発射される。

「「「いっけー！！！！！！！！！！」」」

それ気付いたトーレとクアットロは驚きを隠せなかった。

「ん！？高町なのはにフェイトお嬢様！？それに赤髪の死神も！！」

「よくもプラント内へ！！」

二人は一度攻撃を回避するために加速作業を中断せざるを得なかった。

加速作業が中断されたことによって、コントラフォールは消滅し空もどんよりとした灰色の空が晴れて太陽が再び顔を出した。

「わあああい！！！！」

「空が晴れた！！」

「なのはママ！！フェイトママ！！恋次さん！！」

コントラフォールの消滅を間近で確認したはやて達も思わず喜びの気持ちを露にする。

「クロノ君、やってで！！コントラフォールの消滅を確認や！！」

しかし、喜んだのも束の間。

二人は地盤が隆起し、都市全体が魔導虚卵巣と化した地獄絵図のようなミッドチルダを目撃することになる。

「なっ！？あれは！！」

そのミッドの様子を、転移魔法でスクライア商店から移動してきた白鳥も金太郎も町から大分離れた崖の上ではっきりと目撃していた。

「・・・魔導虚卵巣（ホロウロギア・プラント）だな・・・あれが・・・」

「おそらく最終段階に入っている頃でしょう。この場合、大至急エネルギー供給を断ち切らなければならないですぞ！！」

はやては機動六課前線メンバーに早急に魔導虚卵巣の破壊を指示する。

「全員に告ぐ！総力を以ってあの魔導虚卵巣を破壊するんや！！」

「「「了解！！」」」

しかし、ヴィータとシグナム、吉良の頭上を飛ぶファイはかなり苛立っていた。

「やってくれたな魔導師共！！」

ファイはそう言うと地盤が隆起したミッドチルダに向ったなのは達の下に飛んでいく。

それを見たヴィータ達三人も一目散にファイを追いかける。

「待て!!逃がすか!!」

同じ頃、コントラフォールが消滅したことを確認する地下水脈でフォワードメンバーと浦太郎達と交戦を続けるフリゲート艦と融合したウーノ。

「くっ!まさかあの防壁が破られるとは・・・!?」

「魔導虚卵巣の破壊・・・そして、ヴィヴィオの救出の命がついさっき下りたのよ!」

「だから、てめぇの相手はここまでだ!あばよ、姉ちゃん!!」

すると、逃げ出そうと鬼太郎達を逃がさないよう砲撃を開始しする。

咄嗟にキャロはフリードの背中の上で全体に広くいきわたるようにラウンドシールドを展開して砲撃を止めに掛かる。

「くっ!ラウンドシールド展開!!」

ウーノの攻撃によって、逃げ場をなくしたフォワードメンバー一同。

ウーノはそんな機動六課のフォワードたちに激しい恨みの念を燃やす。

「おのれ！！！！いつもいつもいつもドクターの邪魔をするお前たち機動六課だけは決して許さん！！！！今日こそは抹殺してやる！！ふふふふはははははははは！！！！！！」

ウーノはその瞬間、フリゲート艦に搭載された砲弾から一斉射撃を開始し、狭い地下水脈の中でフォワードの全員を追い詰めていく。

また、コントラフォール内部でトーレとクアットロとの戦闘を繰り広げていた恋次達であったが、必殺技を喰らっても尚機械と融合した二人は再生を行い立ち上がろうとする。

「う・・・のおおおおおおおお・・・・」

「あ・・・あああああああああ・・・」

その光景を目の当たりにした三人は、思わず顔を引きつる。

「再生していく！？」

「くっ！厄介な奴らだ・・・」

「悪いが、再生する時間をやる訳にはいかないぜ！！！」

恋次はそう言うと、一気に狒狒王蛇尾丸の最大必殺技・・・狒王絶波で二人を倒そうとした――その時、突然恋次は飛来してきたファイの攻撃を受けて吹き飛ばされてしまう。

「のあああああ！！！！」

「恋次さん！！」

「あいつは！！」

「貴様らの好きにはさせん！」

そう言うと、ファイは音速で移動してフェイトに向って攻撃を仕掛けてきた。

「きゃあ！！！」

もろにその攻撃を喰らったフェイトもまた恋次同様吹き飛ばされてしまう。

「フェイトちゃん！！きゃああ！！！」

二人のみを案じたなのはも、本の一瞬の隙を取られてファイの音速攻撃をその身に受けてしまう。

「奴らは俺が斃す。貴様らはさっさと魔導虚卵巣を完成させろ。」

「言われなくても・・・！」

「そのつもりだ！」

二人はそう言うと、再び魔導虚卵巣を育てるために環状線と環状高速道路を利用して再び加速作業を開始する。

その作業が再開されたことで、再び太陽は隠れて鈍色の雲が立ち込め、外部には同じように四層からなるコントラフォールが形成されてしまった。

その様子を見ながら、ロングアーチで管制を続けるシャーリーと連絡を取るクロノ。

「魔導虚卵巣の様子は!?」

『駄目です!成長が止まりません!!』

『それに伴い、魔力と霊力反応を確認!プラントが完成に近付いてる証拠です!あと10分ほどで最終段階に至ると思われます!』

「!時間との勝負か・・・!」

そんな中、コントラフォール内部に侵入したファイの攻撃をその身に受け、全身を傷だらけにするなのは達だったが、フェイトはそんな二人を見てある決断を下す。

それは、二人を先にヴィヴィオ達の救出に向わせるために自分一人で囮役を買って出るというものだった。

「バルデッシュ、サードフォーム。」

〈Ｙｅｓ　ｓｉｒ　ｔｈｉｒｄ　ｆｏｒｍ〉

バルデッシュの形状が巨大な大剣の姿に変化するのを見たなのはと恋次は思わず驚きの表情を見せる。

「フェイトちゃん!!」

「フェイト!!お前まさか一人で!?」

「先に行って、なのは、恋次さん！私も後から追いかける。」

フェイトの瞳に宿った確かな覚悟を感じ取ったなのはと恋次は、顔を見合わせ互いに納得するとフェイトにファイを任せることにする。

「わかった。無茶は駄目だからねフェイトちゃん！」

「よし！ここはお前に任せる！！」

二人はフェイトにそう言うと、瞬歩とフラッシュムーブを駆使してその場から離脱する。

ファイは全く二人の姿を追いかけることもなくフェイトの頭上を巨大な体にも関わらず軽快に飛び回る。

「フン・・・観念したか・・・魔導師ども・・・」

さて、場所は変わってミッドチルダ地下水脈ではフォワード陣とウーノによる戦闘が激化していた。

「クロスファイーシュート！！」

「サンダーグレイブ！！」

「俺の必殺技、パート２！！」

クロスミラージュから撃ちだされるティアナの射撃魔法と、エリオの電撃魔法、更には鬼太郎の烈火の炎がウーノの体を傷つける。

「この・・・小癪な！！！」

ウーノはちょこまこと逃げ回りながら攻撃をやめないフォワードメンバーを捉えるために機械の触手を伸ばしてくるが、中々思うようには捉えることはできない。

すると、ティアナが幻術魔法をフルに使ってウーノの動きを一段と鈍らせる。

「フェイクシルエット・・・フルパフォーマンス！」

ティアナの幻術魔法によって、一気に数を増したフォワードメンバーにウーノは困惑する。

「なっ！？なんだこれは・・・！？幻覚の分身だと！？」

困惑するウーノに向って再び攻撃を加えるスバル、エリオ、鬼太郎の三人。

「おりゃあああああ！！！」

「せやあああああああ！！！！」

「この野郎おおおおおおお！！！」

ウーノは力ずくで幻覚も実体も吹き飛ばそうと闇雲に砲撃を放つが、やはり実体には当たらず、隙だらけのウーノに今度は浦太郎とキャロが攻撃を仕掛ける。

「シューティングレイ！！」

「スピアトルネード！」

フリードの火炎、浦太郎の槍術魔法を喰らったウーノ。

そして、とどめの一撃をスバルが加える。

「リボルバー・・・キャノン！！！」

その結果、ウーノの厚い装甲に亀裂が入り破損をするが直ぐにウーノは超速再生能力で装甲の回復を図る。

「おのれ！！」

ウーノは怒りを露にすると、最早形振り構わず手当たり次第に砲撃を行いフォワードメンバーを苦しめていく。

「「「「「「ぐおおおお！！！！！！」」」」」」

「ははははははははは！！！！！！」

フォワード陣の危機をモニターで見ていたユーノは、地下に隠していた次元世界を行き来する大型の諜報用母艦ビルゲイツを緊急発進させる。

「多次元諜報母艦ビルゲイツ、緊急発進！」

タッチパネルで操作を行うユーノ。

ユーノの操作によって多次元諜報母艦ビルゲイツは次元の壁を越え

てフォワード陣を助けるために今出航する。

「ユーノさん、無事に移動を開始しました！到着まであと、１０分！」

織姫もビルゲイツが無事に発信したことをモニターを見ながらユーノに伝える。

「可能な限りのバックアップをしてから、僕も前線に赴きます！（待っていろよ・・・浦太郎、鬼太郎、フォワードの皆。最高のタイミングを計算してやるからな！）」

ユーノは真剣な表情でタッチパネルを操作しながら、多次元諜報母艦ビルゲイツの遠隔操作を行う。

一方、クラウディア内部でミッドの様子を確認するリンディはクロノに状況説明を求める。

「クロノ、六課の子達ははどうなってるの！？」

「ヴィータ、シグナム、吉良さんの三人は現在環状線・及び環状道路戦闘機人に接近中。フェイトは、ＨＥサーフェイスＦ戦闘機人と交戦中。」

「急がなあかんと、プラントが完成してしもう！！」

「一千万都民が・・・魔導虚の餌にされてしまう！！」

クロノ達が恐れるこの最悪の展開は、果てして免れることが出来るのであろうか！？

その頃、コントラフォール内部でファイと高速戦闘を開始するフェイトは、空中に浮かびながらファイと対峙する。

「機人四天王ファイ！一対一の勝負だ！決着をつける！」

「貴様のようなゴミがこの俺に敵うとでも思っているのか・・・フェイト・T・ハラオウン」

その瞬間、音速でフェイトの体に傷をつけるファイ。

「のあああ！！ああああ！！！」

「いくら貴様でも、スピードで俺を上回るのは不可能だな。」

「ほざくな！！」

フェイトはファイのスピードに追いつこうと必死になって移動しながら攻撃を加えようとするが、結果的にあと少しのところでファイに迎撃されてしまう。

「フン・・・鈍い、鈍過ぎる。」

フェイトは猛烈な速度でミッドの都心部に落下していく。

「うあああああああああああ！！！！！！！！」

途轍もない衝撃をその身に受けて尚もフェイトは空に向って飛んでいく。

「ちっ！！！」

「無駄な足掻きだ。」

抵抗をやめようとしないフェイトを見たファイはそのまま音速の攻撃を加え続け、フェイトの体を傷つけていく。

「のああ！！」

「空に生き、空で育ったこの俺に敵うはずもあるまい。」

ファイは一度Ｕターンをすると、再びフェイトを狙って来る。

フェイトはバルデッシュに指示を送り、防御魔法を展開する。

「バルディッシュ！」

〈Ｐｒｏｔｅｃｔｉｏｎ〉

ファイは防御魔法をその身に受けても体の装甲上、一切効果等ありわしない。

「フン、効かんな。」

「はあああああ！！！」

フェイトは勢いをつけてザンバーフォームのバルデッシュをファイに向って振り下ろすが、ファイはまるでフェイトをあしらうかのように容易にそれを回避する。

「何!?」

直ぐに空高く飛翔したファイに目掛けて、ザンバーフォームから一度ハーケンフォームに変化させたフェイトは、ハーケンスラッシュをファイに向けて投げつける。

「のあああああああ!!!!!ハーケンスラッシュ!!!」

それをかわしたファイはフェイトにこんな事を告げる。

「・・・貴様には分かるまい。この空の良さなど・・・」

「くっ!!」

ファイの触手攻撃を喰らい、後方へ飛ばされたフェイト。

すると、フェイトの周りで突然猛烈な乱気流が発生し、フェイトの体制を崩そうとした。

「これは・・・乱気流!?そうか、地盤が隆起したことで・・・ビル風の数十倍以上の突風が起こっているのか!?」

「フェイト・T・ハラオウン・・・貴様との勝負、ここで終わりにさせてもらうとする。」

一方、魔導虚卵巣を育てるために首都環状線と環状高速道を利用し加速エネルギーを作り続けるトーレの前に、ヴィータ・シグナム・吉良の三人が立ち塞がる。

「テートリヒシュラーク!!」

「紫電・・・一閃！！」

「破道の七十三　『双蓮蒼火墜（そうれんそうかつい）』！！」

だが、そんな三人を軽々跳ね飛ばして加速を続けるトーレ。

「ふん、他愛も無い。」

トーレによって激しい衝撃を喰らった三人は彼方まで飛ばされ、地面に勢いよく衝突する。

「「「のあああああああああ！！！！」」」

衝突した三人は、自分達の周りで成長を続ける魔導虚卵巣を目の当たりにし危機感を覚える。

「いかん！魔導虚卵巣が・・・完成してしまう！」

「い・・・急がないと・・・！！」

そんな苦戦する機動六課の魔導師の姿を望遠鏡で見ていた一人の児童が弱音を吐く。

「ああ！！何だか苦戦してるよ！！どうしよう！！」

すると、コロナがそんな児童や不安げな様子の人々見てこう言った。

「皆で、機動六課の人たちを応援しましょう！！」

「そうだね！！なのはママ！！フェイトママ！！みんな頑張れ！！！」

ヴィヴィオにつられて、他の児童や管理局地上本部の中に取り残された多くの人々は必死で戦いを続ける六課の人々にエールを送る。

しかし、そんな彼らのエールも届かない地下水脈の戦いは危機的状況を迎えていた。

ウーノの猛攻によってとうとうスバル達フォワードメンバーは力尽きてしまい、残された鬼太郎も深手を負ってしまい全く動けず、浦太郎もウーノに捕まり体を締付けられたいた。

「ぐっ・・・おおおおお！！！！」

「ははははは！！！！幾度と無く邪魔をされてきて溜まった恨みをついに果たすときが来たのだ！！！ははははははは！！！！」

ウーノは職種を器用に使い、自分とは雲泥の差もある小さな浦太郎の体を締付けながら内臓を破裂させようする。

その体の激痛に思わず浦太郎も絶叫をする。

「のあああああああああ！！！！！！」

誰もがこの戦いは最早為すすべもないと諦めかけた・・・その時。

ユーノが送り込んだ多次元諜報母艦ビルゲイツが次元の壁を越えて立った今浦太郎達の下に到着する。

その姿を見た浦太郎やウーノ、さらには意識を取り戻したスバル達は驚愕する。

「なっ！？」

「何なの・・・あれは！？」

「あれは・・・店長の母艦！！」

「馬鹿め！！いかなる機械だろうが、我が体に融合してやるわ！！ははははは！！！！」

ウーノはそう言うと、自身に向ってきたビルゲイツを取り込み更なる融合を果たそうとした。

しかし、それこそがユーノの思惑だということは浦太郎しかしらない。

「君・・・まんまとかかったね・・・店長の罠に。」

ビルゲイツを取り込んでいたウーノの体は突然高熱反応を起こす。

「何だ！？体が熱い！！」

その様子をモニターで確認しながらタッチパネルを操作するユーノ。

「（多次元諜報母艦ビルゲイツ・・・最後の切り札・・・篤と味わうがいい、戦闘機人。）」

多次元諜報母艦ビルゲイツは、留年回路をオーバーリミットするこ

とによって母艦そのものから高熱のエネルギーを発生させることで、衝撃と供に対象物を爆発させることが出来る・・・まさしく最後の切り札。

〈駆動路、冷却装置停止！冷却中！！〉

冷却回路ですらも破壊され、爆発を起こすウーノの体に取り込まれたビルゲイツ母艦。

その瞬間、爆発を伴いながら苦しみ出すウーノ。

「ぐあああああ！！！何ということを！！！！お前たちも共倒れだぞ！！！」

「悪いけどソレはないよ・・・店長が何も考えずにこれを送り込んでくると思ったの！？」

浦太郎がそういった瞬間、フォワード陣全員と浦太郎達の周囲に展開されるユーノの転移魔法陣。

「はっ！転移魔法！？」

「へっ！死ぬのはてめぇだけだぜ、姉ちゃん！」

全員は爆発の影響を受ける前にユーノの転移魔法によって安全な場所まで避難する。

そして、為す術もないウーノは地下水脈で一人無惨な最期を遂げることになる。

「そんな！！！！ドクター！！！！！！！！！！！」

スバル達が全員転移魔法で戦線を離脱し、更にはウーノが消滅したという報告はシャーリーを通してはやてとクロノに直ぐに伝えられる。

『八神部隊長！クロノ提督！たった今、何者かの救援により戦闘機人ウーノの消滅を確認！！ティアナ達は全員転移魔法によって無事です！』

「ホンマかいな！？」

「しかし、一体誰がそんなことを・・・！？」

勿論、浦太郎達以外はその行動を取った人物の正体を知る物はいない。

さて、フェイトとファイの空中戦も大詰めを迎えようとしていた。

「この後に及んで逃げるか！？後ろを取ったぞ。」

飛びながら逃げ続けるフェイトの後ろについたファイだったが、それを待っていたとばかりフェイトは気流の力を利用してファイの体をザンバーで突き上げていく。

「ほおおおおおお！！！！！！」

「何！？」

「待っていた・・・このときを！！」

「（気流を利用するとは・・・！）」

「空に命をかけてきたのは、お前だけじゃない！！」

そう、フェイトもなのはもファイト同じかそれ以上に空に命を懸けて戦い続けてきたのだ。

フェイトはザンバーをファイの体に突き刺すと、そこから電撃を体内に入れて爆発を起こす。

「（雷撃を俺の体内で直接爆発させるとは！？）」

「いかに素早いお前でも、この距離ではかわせなかったな！！」

爆炎を上げながら急速に降下していくファイに、フェイトは留めの一撃を入れる。

「喰らえ！！」

その瞬間、フェイトの全身の魔力がバルデッシュに注がれファイの体を大爆発させる。

「ほあああああああ！！！！！これで終わりだ！！サンダー・・・クラッシャー！！！！！！」

「のおおおおおおお！！！！！！」

激しい爆発と供にファイの体は粉々に砕け散り、地上へと落下して行った。

フェイトは一度地面に下りると、全身の力を使い果たした所為でこれ以上体を動かすことが出来なくなってしまった。

「ぐっ!!・・・やった・・・だけど、こっちももう動けない・・・」

〈ｓｙｓｔｅｍ　ｐｏｗｅｒ　ｄｏｗｎ〉

さて、二つの戦い終止符が打たれた頃・・・魔導虚卵巣の完成は最早目前まで迫っていた。

環状高速道路を利用して加速エネルギーを作り出していたクアットロはトーレから伝わる凄まじいエネルギーをその体に感じていた。

「感じる・・・私とトーレ姉様のエナジーが・・・魔導虚を育てていくのよ・・・」

すると、クアットロの前方に満身創痍のヴィータ達が武器を構えて待ち構えていた。

「ん?醜い魔導師と死神の連中・・・叩き潰して上げるわ!」

「さあ!来やがれ!!」

ヴィータとシグナムはクアットロにそう言うと、ギリギリのところまで迫り来るクアットロの注意を引き付け、そして意を決してキラに指示を出す。

「今だ!!」

「縛道の六十三　『鎖条鎖縛（さじょうさばく）』！」

すると、吉良はクアットロの体を縛道で拘束すると三人の力を以ってクアットロをトーレの下に投げつけた。

クアットロが飛んできたことにトーレも驚きを隠せなかった。

「なっ！？」

「はっ！？」

二人が衝突したことによって起きる巨大な爆発と轟音。

爆発が収まるとそこには隕石が落下したかのようなクレーターは出来上がり、それと同時にコントラフォールも消滅し、再び太陽が顔を出す。

『全戦闘機人ロボ、殲滅！』

『魔導虚卵巣（ホロウロギア・プラント）のエネルギー供給停止を確認！』

『機動六課前線メンバー、アクセス！』

「素晴らしい活躍やわ・・・よくやってくれたわ、みんな！」

他の前線メンバーが作戦を遂行したことを確認したなのは達。

「やったんですかね、この状況！？」

「ああ・・・ヴィータ達が上手くやってくれたようだぜ！」

そして、その当の本人たちはと言うと・・・――――完全に動けなくなった体のまま地面に座り込み、何時気絶をしてもおかしくない状況であった。

「くっ・・・結構効いたぜ・・・サンキューナ、吉良・・・」

「い・・いいよ・・・お礼を言われるようなことは何も・・・」

「お陰で・・・こっちはもう・・・一歩も動けん・・・」

地上本部で機動六課が戦闘機人に勝利したことを目の当たりにしたヴィヴィオ達は歓喜の叫び声を上げていた。

「やったああ！！！！！」

「なのはママ・・・フェイトママ・・・！！」

ところが、喜ぶのも束の間。

地上本部地下のアジトで全ての様子を見ていたスカリエッティは不敵な笑みを浮かべて魔導虚卵巣に最後の仕上げを施そうとしていた。

「ふふ・・・全ての魔導虚卵巣に私からの最後の仕上げをプレゼントするときが来たようだ・・・ふふふはははははは！！！！」

その瞬間、ミッドチルダの魔導虚卵巣から発生する膨大な魔力と霊力反応。

『魔導虚卵巣から魔力と霊圧を確認!!』

「いかん!!」

はやてとクロノ達の下に再び緊張が走った。

そんなこととは露知らずの満身創痍のヴィータ達の下に、同じく満身創意のトーレとクアットロが現れる。

二人を完全に消滅させたとばかり思っていた三人は驚きを隠せなかった。

「まさか・・・!?何故だ!!」

「ふふふ・・・我々機人四天王は・・・不死身の体を持って居るのだ・・・」

「でも流石に効いたわ・・・もう完全体に戻るほどのエネルギーは残ってないものね・・・美しいじゃないの・・・闇の書の守護騎士と死神・・・殺してやりたいほどに・・・!!!」

クアットロはそう言うと、人格を豹変させて動けない三人目掛けて飛び掛っていた。

しかし、その時トーレは何かに気付き直ぐにクアットロの行動を止めにかかった。

「!!止めるんだ!!クアットロ!!!」

「かあああああ!!!!!なっ!?」

すると、クアットロの前に現れる緑色の発光体がクアットロの体の組織を内部から破壊していき、苦しみの声を上げるクアットロ。

「ひえええええええ！！！！！」

「クアットロ！！！！」

トーレは直ぐにクアットロを救出しようとしたが、トーレ自身もその光には近付く子もできず、クアットロはそのまま内部組織を破壊されていく。

「あああああああああああああ！！！！！！」

「何だ！？こいつは・・・！？」

突然目の前に現れた謎の緑の発光体に驚く三人。

そして、完全に内部組織を破壊されたクアットロは涙を流しながらトーレの下に手を伸ばす。

「・・・・・・トーレ姉さま・・・・・・・」

しかし、トーレの手に触れることも敵わぬままクアットロは粒子となって消滅していったのであった。

「・・・クアットロ・・・愚かなる妹よ・・・」

そう言うと、トーレは巻き起こる悲しみを堪えながら転移魔法で三人の前から姿を消した。

「何だ・・・何が起こったんだ・・・一体!?」

最後まで疑問を残したままの三人だったが、実はコレもユーノの魔法であることは知る由も無かった。

さて、その頃はやて達は最悪の事態を迎えようとしてるこの状況にかなり焦っていた。

『こ、これまでにない膨大な魔力と霊力反応を観測!!首都全域で魔導虚が生まれます!!』

「一千万人が・・・魔導虚の餌に!?」

クアットロが消滅し、トーレは何を脱するために一度地下へと逃げ込んだ。

「はっ、はっ、はっ、はっ!!くそ!!まさかここまでとは・・・」

「漸く見つけたぜ・・・戦闘機人トーレ・・・」

すると、トーレの後ろから聞こえてきたのは・・・ミッドチルダに転移魔法で移動してきた死神化した一護であった。

「なっ!?誰だ貴様は!?その格好・・・貴様も死神か!?」

「“死神”じゃね・・・“死神代行”だ!悪いが、てめぇはここで倒させて貰うぜ。」

一護が背中の斬月に手を伸ばすのを見たトーレは腰を抜かして後ず

さりしながら、攻撃を待つように説得する。

「ま、待ってくれ！！お願いだからこの通りだ！！」

しかし、一護はそんなトーレの言葉を無視して自身の斬魄刀、斬月の唯一の技をトーレに向けて飛ばした。

「月牙天衝！！！」

「のあああああああああああ！！！！！！！」

一護の巨大な霊圧の斬撃を直撃したトーレは痕陰も無く粉々になって死んでしまった。

残ったトーレの体の破片を見ながら、複雑そうな表情で一護はこう言った。

「・・・悪いな・・・別に恨みはねぇが・・・これ以上スカリエッティの手駒としてみてるのが辛くなったんでな・・・安らかに眠れ。」

その頃、パニックに陥る管理局を尻目にしながら空中に颯爽と現れる死覇装姿の白鳥と空中で特注のステージを用意する金太郎。

「ははははははははは！！！！！光臨、満を持して！」

ステージの上に立つ白鳥と、その横で最終チェックを済ます金太郎。

「この世界にはまだ希望があります・・・行きますぞ、白鳥殿！」

「了解だ！天地に奏じよ、『琴線斬（きんせんざん）』。」

白鳥は自身の斬魄刀を解放して、テンションを更に上げる。

白鳥の斬魄刀は一際形が変わっており、それは最早刀ではなくエレキギターそのものの形をしていた。

「琴線斬第八章・四十二節、『滅びの円舞曲』！」

そう言うと、ハイテンションの白鳥は琴線斬の弦を奏でながら演奏を開始し始めた。

その音は周囲に広がり何かが起ころうとしていた。

ついに、白鳥礼二の真の力が発動した。

一千万都民が、魔導虚の餌食になろうとしている今――人類に、明日は訪れるのであろ

激突、機人四天王！（後書き）

教えて、ユーノ先生！

ユ「今日は、多次元諜報母艦ビルゲイツについてだよ♪」

ユ「この母艦は、時空管理局の戦艦同様次元空間を自由に移動することが出来、さらにはどの船にも負けないほどの積載能力と機動力、さらには最終兵器の超次元収縮砲を搭載した僕が開発したスーパーメカなんだよん♪」

ユ「大体、装甲に使われた特殊な金属に無限書庫の司書長時代の給料１０年分を軽く費やしてる感じかな～～～」

一「よくそんなもん作ったもんだぜ・・・一体どうやって金集めたんだよ？」

ユ「そこはホラ！大人の事情って奴ですよ♪」

一「上手い具合にその言葉使ったな・・・お前・・・」

The Death Strawberry

>i13313—709<

戦闘機人・・・機人四天王によって、第一世界ミッドチルダは魔導虚卵巣と化した。

一千万都民、魔導虚の餌食となることを防ぐべく立ち向かう、我らが機動六課最強魔導師＆死神軍団。

四天王を倒すも、自らも傷つき次々と倒れる魔導師達の目の前でついにプラントは完成し今まさに、人類は史上最悪の瞬間を迎えようとしていた。

これは、スクライア商店での出来事から遡る。

〈え？魔導虚卵巣を完全破壊する唯一の方法・・・！？それがこいつなのか、ユーノ！？〉

一護は半信半疑のまま白鳥を一瞥し、ユーノにそう尋ねる。

〈はい♪これが出来るのは、白鳥さんを置いて他ありません！で、どうですか白鳥さん・・・琴線斬による魔法と霊力の組合わせは？〉

〈まだ慣れないところはあるが、最善を尽くす限りだ。〉

そして、白鳥と金太郎の二人は地盤が隆起したミッドチルダを空の上で眺めながら早速特設ステージの上で白鳥のリサイタルが始まる。

〈よっし！！それでは演奏を始めようぞ、ゴールデンベアー！！〉

〈承知！〉

白鳥は腰に挿していた斬魄刀を徐に取り出すと、その真の姿を解放する。

「天地に奏じよ、『琴線斬（きんせんざん）』。」

すると、斬魄刀の形がエレキギターの形状そのものになり、それを手に取った白鳥は軽く弦を爪弾き音色を確かめ、テンションを昂ぶらせた。

「最高だぜ！！」

そして、白鳥は完成間近の魔導虚卵巣と生まれた魔導虚の子供を破壊すべく死の音色を奏でる。

「いくぞよ！琴線斬第八章・四十二節、『滅びの円舞曲』！」

音色がミッドチルダ全域に広がり、音色を聞いた魔導虚の子供は突然動きを停止させると、血を噴出し次々と死んでいく。

また、白鳥が奏でる音色は完成間近の魔導虚卵巣を次々と破壊していく。

その様子を機動六課隊舎の管制室で見ていたシャーリー達は驚きを隠せなかった。

『八神部隊長！クロノ提督！何者かが、空中で奇妙な演奏をしています！！』

はやてとクロノも白鳥の姿を確認すると、驚きの表情を浮かべる。

「誰やねん、あれは！？何をしとるんや一体！？」

「しかも、あの格好は・・・恋次さん達と同じ死神か！？（しかし・・・だとしたら先程から感じる霊圧はともかく、それと混じった妙な魔力反応は何だ！？）」

しかし、そんなことなどお構いなく白鳥の演奏は続けられる。

そして、アルトは白鳥の音色から魔力と霊力のエネルギーを詳細に解析したのであった。

『これは！？超高密度の魔力と霊力のエネルギーソリトンの発生を確認！！』

『魔導虚卵巣、首都全域で破壊されていきます！！』

「何やて！！！？？？」

「そんなことが！！？？」

同じ頃、スクライア商店地下訓練場でディスプレイ越しに同じものを見ていた織姫とコンは愕然とした。

「すごーーい！！！白鳥さんの音波攻撃で、魔導虚卵巣が次々に破壊されていってる！？」

「ユーノ！これがあいつの力なのかよ！？」

コンがそう尋ねると、ユーノは扇子を広げて飄々とした態度で肯定の返事をする。

「その通りですよん♪これぞ、白鳥礼二さんの真の力です。」

機人四天王による、首都制圧が行われる一ヶ月前。

ユーノ・スクライアと黒崎一護は、スクライア商店で白鳥礼二の霊力と魔力の兼ね合いについての解析を行っていた。

白鳥の斬魄刀、琴線斬の力と魔力の組合わせにおいてこれからの戦いにどのような切り札となるかどうかを解明するためであった。

〈やはりそうだったのか・・・〉

タッチパネルを白鳥の戦闘データを詳しく解析していたユーノは勝ち誇ったかのような笑みを浮かべてある結論に達する。

「白鳥さんの真の力は、魔力と霊力を組合わせて奏でる特殊音波攻撃なんですよ♪だが、あの琴線斬の音色によって起こる特殊音波は

扱いを間違えれば次元世界そのものを滅ぼすほどの膨大なパワーを秘めているんです。そのためこの一ヶ月、新たに手に入れた魔力と元々ある霊力両方を常に一定の割合でコントロールする必要があったんです。」

「つまり・・・その為の修行を金太郎さんとずっとやってたってことですか？」

「その通りです♪白鳥さんの場合、魔力操作が苦手でしたから・・・それを重点的に行い、少しでも長く且つ正確にコントロール出来る様に頑張ってもらってたんです。まっ、まだ完全ではないですけど・・・」

「そうまでしても切り札として取っておいた白鳥の力・・・それがこの能力（ちから）ってことだな・・・！？」

「その通り♪白鳥さんの斬魄刀『琴線斬』の能力、『音色辞書』に搭載された特殊音波は、対象物の原子レベルまで入り込みその固有振動に同調させて破壊する。敵の分子構造さえ把握していれば、理論上この攻撃で破壊できないものはありません。通常の霊力に魔力が組み合わさった今、白鳥さんの音色は魔導虚卵巣にとってはまさしく滅びの音色ですよ♪」

すると、雄弁と語っていたユーノの隣に立つ織姫の肩に乗っていたコンは腕組みをしながら何所か冷たい目線でこう言う。

「へぇ～～～それでおめぇは昼夜あいつの戦闘データを記録して、情報を集めていたのか？」

「ありゃあ～～～知ってましたか！？」

コンのこの言葉を聞いたユーノは思わず苦笑する。

「当たり前だ！じゃあ～～～この間金太郎に指示してミッドから持ち帰った魔導虚卵巣のサンプルも・・・」

「当然♪音色辞書の実験に使ったから粉々ですよ♪」

「お～～～ま～～～え～～～！！！！やっぱりこそこそ何かしてやがったんだな～～～！！！！俺達には内緒で～～～！！！！！」

コンはユーノの秘密主義的な態度に我慢が出来なくなり、腸が煮えくり返ってきたが、織姫が優しく宥める。

「まぁまぁコン君・・・でも、この力があれば機動六課の人達は戦闘機人と魔導虚に勝てるよ！！」

「Ｙｅｓ！！滅びの円舞曲の破壊目標は魔導虚卵巣及び魔導虚のみ！！他の物質は一切破壊しません♪♪」

白鳥の演奏を聞いていた吉良は改めて白鳥の力の凄さを実感する。

「・・・これが・・・白鳥君の・・・能力（ちから）！？」

白鳥は全ての魔導虚卵巣と魔導虚の破壊を霊圧で確認すると、演奏を終了し高らかな態度でこう言う。

「発信終了！我が音色の前にひれ伏すがいい！！」

その様子を戦艦クラウディアの内部で確かめたリンディ達は驚きの

声をあげ、そのまま安堵の溜め息をついて喜んだ。

「魔導虚卵巣からの魔力と霊力反応完全消失を確認！」

「奇跡だわ！！全ての魔導虚卵巣と子供の魔導虚が完全に破壊されたわ！！」

モニターでそのことを知った恋次となのはも一安心する。

「終わったようだな・・・なのは・・・」

「はい。急いでヴィヴィオ達の救出に向いましょう！」

「おう！」

二人はそう言うと、血塗れになって倒れる無惨な魔導虚の子供を一瞥し地上本部中へと突入する。

一方、突然自分達の目の前に現れた白鳥を見て疑問の声を上げるヴィータとシグナム。

「・・・それにしてもシグナム・・・あいつは何モンだ！？」

「分からぬ。ただ・・・私達を助けてくれたのは事実らしい・・・」

また、魔導虚卵巣が完全に破壊されたことによってはやてとクロノも漸く安堵の溜め息をつけることが出来た。

「本当に・・・良かった・・・」

「人類は・・・救われたんや！！！」

「ふん・・・そうだな。ふ～～～これより、各地で被災した都民の救助支援を開始する。リンディ提督、お願いしても宜しいですか？」

それをクラウディアで聞いたリンディも早速クラウディアをミッドチルダに向けて発進させる。

「了解！クラウディア、ミッド首都全域の都民と機動六課の負傷メンバーの回収を最優先事項として、発進！」

やがて、暫くしてからはやてがなのはと恋次に通信を入れて現場状況の説明を求める。

「なのはちゃん、恋次さん！そっちの様子はどうや！？」

すると、モニター画面に現れたのはヴィヴィオ以下魔法学院の生徒と教師、及びその他の一般人の救出を完了させたなのはだった。

『たった今、地上本部展望台に到着！』

『全員無事の様子だぜ！何所も怪我一つしてねえ！』

「そうか。なら一安心や・・・二人はヴィヴィオ達を安全な場所まで避難させたらそのままクラウディアに乗り込んでくれへんか？私らもあとで合流するさかい。」

『了解。』

『おう！』

通信をきり終えると、クロノが未だに険しい顔を浮かべたままこんな事を口にする。

「それにしても・・・何故あの隆起現象は収まらないんだ?はやて、フォワードメンバーは?」

「現在(いま)はクラウディアに回収されて、治療を受けてるわ。救援に来たロッサやシスターシャッハもおるさかい、大丈夫やろう。」

「そうか・・・なら良いんだが。」

その後、クラウディアはフェイト・ヴィータ・シグナム・吉良の四人を回収。

「クラウディア、都民及び機動六課ライトニング1、スターズ2、ライトニング2、吉良イヅルを移送を開始します。」

我らが機動六課と、機人四天王の決戦はこうして決着のときを迎えた。

だが、それが恐怖と戦慄に満ちた次なる決戦の単なる序章に過ぎないことを人類は一人の例外を除いてまだ知る由も無かった。

地上本部でなのはと恋次によって無事救出されたヴィヴィオはなのはとフェイトの下に泣きながら駆け寄ってなのはに抱きつく。

「なのはママ!!フェイトママ!!」

余程なのは達のことが心配だったのか、顔中涙でぐっしょりだ。

そんなヴィヴィオをなのはは優しく抱きしめる。

「ヴィヴィオ！御免ね！ママ達遅くなって・・・！！」

「うんうん！！でも・・・良かった・・・なのはママもフェイトママも死んでいなくて・・・」

そんなヴィヴィオの言葉を聞いたフェイトもヴィヴィオに近付きヴィヴィオの目線までしゃがむと優しく頭を撫でる。

「ヴィヴィオ・・・ありがとう・・・心配してくれて・・・」

と、その時だった。

突然地面が急に揺れ始めて、クラウディア内部の機動六課内部にいたなのは達は動揺を隠しきれずにいた。

そして、クラウディアの内部のモニター画面に映ってきた映像を見て全員は度肝を抜いた。

それは、管理局地上本部が突然地面の下に流砂のように沈んで行く光景だった。

「何！！地上本部は沈下していく！？」

「どうなってるの、一体！？」

同じ頃、それを先程と同じところで眺める白鳥と金太郎。

「白鳥殿・・・覚えていますか？四年前、店長とあなたがそれぞれ死神と魔導師の力を手にした“あの事件”のことを・・・？」

「忘れもしない。私やユーノ店長にとって、そして人類にとっての悪夢はあの時から始まったのだ。」

「あの時・・・お二方それぞれが偶然にも手にしてしまった力は、まるで運命とも捉えられるようにように店長と白鳥殿の体に発光体として入り込み、その瞬間莫大なエネルギーが発生した。気を失った二人は、その後目を覚ますと今までになかった相反する力・・・魔力と霊力を各々が手に入れていた。それと同時期、獄中にいたスカリエッティ自身も謎の発光体によって未知なる力を手に入れた。そして、９ヶ月前に脱獄・・・」

この時、なのは達はこの現象も今回の一連の騒動の根本を担う人物の存在が関与しているであろうということを悟った。

「スカリエッティ！？」

「まさか・・・！？」

すると、クラウディアの下にある急報が届いた。

「次元航行船クラウディアに、急報です！」

そして、モニター画面に映し出されたのはいつの間にかクラウディアから抜け出し沈下した地上本部へと向う恋次であった。

「恋次さん！！」

なのはやはやてを始め機動六課の面々やリンディ達も恋次のこの行動に驚きを隠せなかった。

ビルとビルの間を飛び越えて、地面を駆けていく恋次に直ぐにはやては帰還命令を下す。

『恋次さん!!ちょっと聞いてるんですか恋次さん!!』

「何をやってるんだあなたは!?君も治療を受けないと!!」

クロノも思わず感情的になりながらも恋次の帰還を促すが、恋次は一切聞く耳を持たずには知り続け、一度がれきの上で立ち止まると機動六課の面々にこう告げる。

「その前に、この異常な霊圧と魔力反応が気になって仕方ねえんだよ!どうやら地下からしいが、ちょいと行ってくるぜ。もしかしたら、スカリエッティの野郎がいるのかもしれねぇ・・・」

その言葉に思わず機動六課の全員も表情を歪ませる。

「・・・恋次さん・・・あなた!?」

「阿散井君・・・」

「今まで奴には、これでもかとばかりに俺達もその他の連中も酷でーめに遭ってきたんだ・・・今度は絶対に逃すわけにはいかねー!」

そう言うと、恋次は再び目的の場所へ向けて瞬歩で移動を開始し始めた。

そして、胸の中では絶対にスカリエッティを捕まえるという信念の炎を燃やし続けたのであった。

「（待ってろよ・・・スカリエッティ・・・！！）」

やがて、恋次は地上本部跡地の巨大な穴から地下へと侵入し、スカリエッティがいるであろう最深部目指し歩み続けた。

その様子をクラウディア内部のモニターで神妙な様子で眺めるなのは達。

恋次が最深部へと目指しながら歩み続けていると、恋次の眼前に広がってきたのはスカリエッティが以前にも研究を続けていた人間や、さらには魔導虚の素体となった虚の生体ポトッとが左右の壁に陳列されていた。

その光景を見た恋次は思わず顔を引きつる。

「・・・気味の悪りーところだ・・・しかも、何だこいつは・・・！？人や虚がホルマリンの液体みたいなものに入っていやがる・・・」

モニターで恋次と同じものを見ていたフェイトやはやて達もこの光景に絶句する。

「これは・・・やはり生体ポットです！」

シスターシャッハが隣のフェイトやはやて達にそう言うと、フェイトは険しい表情でスカリエッティの非人道的な行動に怒りの炎が燃え上がる。

「あの男・・・懲りずにまだ人や他の生き物の命を弄ぶなんて・・・許さない・・・！！」

暫くそんな君の悪い光景を見ながら先を急いでいた恋次だったが、その時恋次の前についにあの男が近付いてきた。

そう、ジェイル・スカリエッティ本人であった。

「ふふふ・・・ついに此処まで来たようだね、死神・・・阿散井恋次君・・・」

不気味な笑みを浮かべながら恋次の名を口にするスカリエッティ。

それを見た恋次は驚きの表情を見せるや否や刀に手を掛ける。

「てめぇはスカリエッティ！！とうとう見つけたぜ・・・これまでの一連の事件で、よくも無関係な人々まで苦しめてくれたな！！」

「それは心外だよ。私の研究は人々を苦しめるなんていう陳腐なもののためのものじゃない。寧ろその逆だ・・・人々を苦難と苦痛から解放するための研究だよ。この腐った世の中という苦難から・・・死を以ってして・・・」

「ぬかせ！！！！咆えろ、蛇尾丸！！！！」

恋次は蛇尾丸を解放して、スカリエッティ目掛けて刃を伸ばした。

だが、その時何者かの干渉によって蛇尾丸の刃を弾き飛ばされスカリエッティに攻撃は当たることは無かった。

「なっ！？」

「・・・ふふふ・・・君の相手は私じゃない。君の相手は・・・彼だ。」

スカリエッティがそう言うと、恋次の攻撃を逸らした張本人が恋次の前に姿を現した。

「なっ！？お前は・・・！！」

その人物の姿を目の当たりにした恋次は思わず顔を引きつる。

何故なら、その人物は先程の激闘の末にフェイトが倒したはずとばかり思っていた機人四天王の一人、ファイだったのだから。

「機人四天王・・・ファイ・・・！？」

その頃、クラウディアはリンディの指揮の下地上本部跡地からスカリエッティの地下アジトに向けて発進命令が下る。

「クラウディア！！これより沈下した地上本部に開いた巨大空洞より、スカリエッティ地下アジトに向けて侵入を開始します！」

クラウディアが徐に巨大な空洞に近付いたその時。

巨大な空洞から発生す超高密度の魔力バリアによって外部からの侵入を一切遮断されてしまった。

「駄目です艦長！！強い魔力と霊力の結界で侵入が出来ません！！」

為す術もない時空管理局の面々。

さて、一方のスカリエッティ地下アジトではというと、恋次の前に姿を現した機人四天王ファイが恋次の行く手を阻む。

とは言うものの、ファイもフェイトとの戦いでかなり傷つき満身創意であったことに変わりは無かった。

「ファイ・・・てめぇ生きていやがったのか!?」

「あの程度の爆発で死ぬ俺じゃない・・・ドクター。ここは俺が引き付けます・・・あなたは先に脱出を。」

「そうか。それじゃあお言葉に甘えさせえ貰うとするよ・・・」

スカリエッティはその瞬間、足元に紫色の転移魔法陣を展開して脱出を試みる。

モニター画面でそれを見ていた機動六課全員や時空管理局の局員は焦りの表情を見せた。

「スカリエッティが転移魔法で逃げます!!」

「マズい!!早く特定を!!!」

恋次もスカリッティを逃がすまいとして、蛇尾丸を伸ばしてスカリッティの体を捉えようとする。

「逃がすか!!!」

しかし、それをさせまいと恋次の目の前に現れるファイ。

「お前の相手は・・・俺だ。」

ファイの干渉によって恋次はあと一歩のところでスカリエッティの逃亡を許してしまう。

「てめぇに構ってる暇はねえ!!蛇尾丸!!!」

ファイに向けて蛇尾丸を伸ばす恋次だが、ファイは恋次の攻撃パターンを既に見切っており、それをかわすことなど造作も無かった。

そして、一度柱の先端に足を乗せると恋次を見下ろしながらファイは言った。

「お前たちはよく戦った・・・機人四天王も最早俺を一人残すのみ。倒してみるがいい・・・この俺の・・・デバイス解放を目にしてもそれが出来るのなら・・・」

「なっ!?」

ファイはそう言うと、驚愕する恋次に見えるように扇子型のデバイス、『ケツァルコアトルス』を取り出すと、徐に広げながら解号を口にする。

「飛翔せよ、『神聖鳥獣(ケツァルコアトルス)』」

その瞬間、赤い霊圧と魔力が一気に爆発を起こして恋次の視界を遮る。

「くっ！！これが・・・奴のデバイス解放かよ！？何になるんだ一体・・・！？」

そして、恋次が晴れていく竜巻の中で見たファイの姿を見た瞬間愕然とした。

その姿はまるでおよそ一億年前に滅んだ鳥類の始祖、始祖鳥の姿に酷似した体長１３メートルを誇る巨大な翼竜であった。

「・・・な・・・何だよ・・・そりゃ・・・・！？」

「これが俺の・・・真の力の姿だ・・・」

その瞬間、恋次の目の前から消えたファイは霊圧も感じとれぬほどの速さで恋次の体に攻撃を浴びせる。

「どはつ！！」

ファイの高速移動に恋次も苦戦を強いられる。

いくら瞬歩で上手く回避しようとしたり、攻撃を入れようとしてもやはりファイの速さに追いつくことなど到底出来なかった。

「どうした死神・・・そんなことではこの俺のスピードには着いて行けぬぞ・・・」

恋次は険しい表情を浮かべ、考えた末に力で対抗するという決断に至った。

そして、一気に霊圧を上昇させて卍解を果たそうとする。

「くっ!!卍か・・・!!」

「させぬ。」

しかし、直ぐにファイの邪魔が入り恋次は卍解も出来ぬまま只管にファイの音速攻撃をその身に受け続ける。

「のあああああ!!!!」

モニター画面で傷つく恋次の姿を見ながら悲痛の叫び声を上げるフェイトや吉良。

「恋次さん!!!」

「阿散井君!!!」

攻撃を受け続けながらも、恋次は未だ希望を捨ててはいないそんな発言ファイの目の前で口にする。

「く・・・そ・・・!!俺は・・・まだ負ける訳には・・・いかねぇんだよ・・・!!」

「ほざけ。貴様らに最早希望は無い。ドクターは既にアルハザードに向って究極の力を手にしようとしている。いくら貴様ら時空管理局や護廷十三隊が束になってかかろうと、そこにあるのは暗く閉ざされた絶望のみ。貴様達はそれが分かっていて何故戦う?こんな戦いに最初から意味など在りはしないというのに・・・」

ファイが恋次にそう告げて一度攻撃を中断する。

すると、恋次はそんなファイに不敵な笑みを浮かべて徐にこう言う。

「バカ・・・野郎・・・が・・・別に意味なんか求めて戦ってるんじゃねぇよ・・・勝たなきゃならねーから・・・俺たちは戦ってるんだ・・・!!」

恋次は今迄もそうやって戦いを続けてきた。

決して変わることの無い強い信念を胸に抱き、戦いを続けてきたのだ。

しかし、そんな恋次の言葉を聞いたファイは冷徹な表情で無常な一言を告げる。

「・・・愚かなことだ・・・」

ファイは体が殆ど動かすことも出来なくなった満身創意の恋次に再び音速の攻撃を加え続けるファイ。

やがて、朦朧とする意識の中で恋次は自分の非力さを嘆く。

「(くそ・・・!!体が動かねぇ・・・おまけに霊力もすっかからかんで、戦う力すらもなくなりかけていやがる・・・!!俺は・・・何も護れずに・・・こいつにやれちまうのかよ!?くそ・・・俺は・・・俺は!!)」

「幕引きだ。その命、俺に鎖されるがいい!」

ファイの留めの一撃が恋次に注がれようとしていた。

恋次、まさに絶体絶命の危機に瀕した。

「くっ!!ここまでか・・・!?」

恋次の絶体絶命の危機をモニター画面で見ていたはやてもヴィータもその他のメンバーも思わず恋次の名を叫んだ。

「ああ!!恋次さん!!!」

「恋次!!!」

ファイの最後の攻撃が恋次に注がれそうになったその時、突然巨大な斬撃が二人の目の前を飛んできた。

「「なっ!?」」

咄嗟にその斬撃をかわした二人だったが、モニターでそれを見ていた機動六課のメンバーは何が何だか分からなかった。

「何や・・・!?今の光は・・・!?」

機動六課同様、ファイもまた先程の斬撃に疑問を抱いていた。

「・・・何だ・・・これは・・・?」

斬撃の痕をよく見てみると、その凄まじい破壊力によって地面が抉られ地割れのような痕を残していたのだった。

その斬撃と周囲から感じる見覚えのある霊圧に恋次は表情を緩めた。

「この霊圧・・・まさか・・・!!」

すると、そんな恋次の目の前に同じ死覇装姿のオレンジ色の男が現れる。

「よお。随分苦戦してるじゃねぇか・・・恋次。」

そう言うと、オレンジ頭の死神は徐に恋次の方へ振り返りほくそ笑む。

恋次はその男の正体を嫌と言うほどよく知っていた。

黒崎一護――――――恋次にとって忘れも出来ない死神の一人だ。

「・・・お前・・・一護か・・・!?」

突然目の前に現れた一護の姿を目にしたファイは思わず一護に名を尋ねる。

「・・・誰だ・・・貴様は・・・?」

「死神代行、黒崎一護。空座長で町医者をやってる。よろしく!!」

モニターで一護の姿を見た吉良は恋次と同じぐらい驚きの表情を浮かべる。

「・・・一護君・・・この世界に来ていたのか!?」

「何だ吉良!?・・・あいつのこと知ってるのか!?」

一護のことを何も知らないヴィータが全員を代表して吉良に尋ねる。

「ああ。彼は十年前、計り知れないほどの恩を僕達は受けているんだ・・・」

恋次は本来此処には現ることはないと思っていた一護は目の前に現れたので、一護が此処に来た理由を尋ねた。

「一護・・・てめえどうして・・・!?」

「あいつが行くって言い出したんだよ・・・だからその手伝いだ。で、何かお前の霊圧を探ってきてみたらこんなところで油売ってるのを見つけたって訳だ。」

「・・・うるせーよ・・・相変わらずだな・・・一護・・・」

「ふん。お前こそ、元気そうでなりよりだぜ。」

「バカヤローが・・・これの何所が元気そうなんだよ。」

「喋れるだけの元気はあるだろうが!それより、こいつは俺が引き受けた・・・お前は一度連中と合流しろ。こいつのスピードにまともに着いて行けるのは俺だけだ。さっさと終わらせてやる!」

そう言うと、一護は斬月を目の前に突き出すと霊圧を一気に上昇させて卍解を発動させるのであった。

「卍解!!」

その瞬間、一護の周りには漆黒の霊圧は溢れ出す。

一護の卍解の様子を見ていたなのは達も騒然となる。

「こ・・・これは・・・ひょっとして!!」

「ああ・・・彼の卍解だよ!!」

そして、同じく驚きの表情を見せるファイの前の黒い霊圧が収まるとその中から出てきたのは――――――すべてが漆黒ので、普通の日本刀より少し長く卍型の鍔、柄頭に途切れた鎖がついた日本刀を持った具象体斬月の黒いロングコートに似た独特の死覇装を纏った一護であった。

「『天鎖斬月(てんさざんげつ)』」

一護の姿に思わずファイは驚き、その普通とは違いすぎる卍解をした一護に尋ねた。

「何だそれは・・・そんな小さなものが卍解だと・・・?ただの斬魄刀ではないか?」

「果たして・・・そいつはどうかな!」

その瞬間、一護の姿がファイの目の前から姿を消し探査神経もすり抜けてファイの背後に回りこんだ。

「!!(速い!?)」

「ほおおおおお！！！！！」

一護は斬月をファイの体目掛けて振り切ると、自身の霊圧を斬月に喰らわせる事によって刃先から超高密度の霊圧を放出し、斬撃そのものを巨大化させて飛ばず技、月牙天衝を放った。

尚、卍解時の月牙天衝は漆黒の霊圧をしているのだ。

まともに喰らったファイは超速再生で体の傷を癒しながら、一護の速さに負けぬように音速で移動し、攻撃を行う。

「ちっ！」

だが、ファイの音速攻撃ですら一護の速さと比べれば決して速いものではなかったのだ。

「遅せーーー！！！」

ファイの音速攻撃をかわした一護は恋次がファイにやられたように、今度はファイの体に超速の斬撃を入れ続ける。

「のあああああああ！！！！」

苦しみに耐えかね絶叫するファイ。

一護はそんなファイの動きを封じるために縛道を使用する。

「縛道の四　『這縄（はいなわ）』！」

すると、一護の指先から出される光の縄はファイの両翼の自由を奪

いファイを飛行不能の状態に追い込む。

「何だ!?翼が開かぬ!!」

「地の底まで落ちやがれ・・・月牙天衝!!!!!!!!」

一護は落下していくファイの頭上から全身全霊を込めた月牙天衝を放ち、ファイに直撃させた。

月牙天衝を直撃したファイは苦しみ声を上げながら地の底へと落ちていった。

「のあああああああああああああああああああ!!!!!!!!!!」

そして、地の底で巨大な爆発が起こると、一護は複雑そうな表情を見せながら恋次の下まで降りてきた。

「・・・・・・」

「倒したのか?」

「手加減はしてねえ・・これで死んでなきゃ虚化でもするしかねえ。」

すると、その時地下アジト全域から警報ベルが鳴り響き一護と恋次は緊迫する。

「「!!」」

そして、二人の目の前のモニターから映しだされる種的な笑みを浮かべるスカリエッティ。

『いや～死神の諸君、御機嫌よう。』

「スカリエッティ！！」

『お取り込み中悪いがここはもう直ぐ大規模な爆発が起こる。しかし残念なことに出口はすっかり封鎖されてしまった。最早君たちに脱出の方法は無い。』

「何だと！？」

「てめえ！！今何所にいやがる！！出て来いこの野郎！！」

『ははははは。私は今素晴らしい力を体に埋め込んでる最中だ。アルハザードで』

「アルハザード！？」

アルハザートという単語を耳にした一護と恋次、さらにはフェイト達は絶句する。

「まさか・・・本当にあの男！？」

『君達のような逸材を被験体に出来なかったことは少々残念だが、今となってはそれも取るに足らないことになってしまった。さようなら・・・私の戦闘機人（おもちゃ）の遊び相手になってくれて有難う・・・』

その瞬間、スカリッティとの通信が途絶えてモニターには何も映ら

なくなった。

「待て!!くそ!!」

すると、その瞬間地下アジト全域で発生する爆発のオンパレード。

「ヤベーな・・・爆発が始まりやがった!!くそ!!俺が来たところも封鎖されちまった!!」

「どうするんだよ、一体!?」

一護と恋次が途方に暮れていたときだった。

唐突に自分達の足元に浮かび上がったミッド式の転移魔法陣。

「「なっ!?転移魔法!!」」

すると、二人の目の前に現れたのは体の一部を完全に消失したファイであった。

「ファイ!!まだ死んでなかったのか!?つうか何やってんだよお前!?」

ファイは恋次の話の無視して二人が爆発の被害を受けぬようにシールド魔法を施しながら転移先を選んでいた。

そして、最早風前の灯の命のファイが二人の最後の言葉を掛ける。

「俺は・・・戦士として居場所を求め・・・戦士として死ねる場所を求めていた・・・だが黒崎一護・・・阿散井恋次・・・お前たち

のお陰で俺は大切なことを思い出させてくれた・・・礼を言う・・・
」

「「なっ・・・・!?」」

「行け・・・お前たちの居場所が・・・待っているんだろう・・・」

そう言い終わると、ファイは爆発の中に身を投じていき恋次と一護を転移魔法で外へと送り込んだのであった。

「ファイぃ!!!

と、その時事態は一変した。

クラウディアがある膨大なエネルギー反応を地上本部跡地から観測した。

「何事だ!!」

すると、タイミングを同じくしてグリフィスからの緊急通信が入る。

『八神部隊長!クロノ提督!巨大な物体が地上本部跡地から出現します!!』

地上本部跡地から土煙と供にその姿を現す巨大な物体の正体。

「あれは・・・一体!!??」

「この霊圧と魔力反応・・・まさか奴か!?」

その巨大な物体の姿を見たなのは達は直ぐにそれが何者かであることを確信した。

「・・・グラトニー・・・ガルバ・・・!?」

グラトニー・ガルバ。

三ヶ月前、ファイと供にミッドチルダに出現した最初の魔導虚。

数度に渡る激戦を繰り返してきた機動六課のメンバーだったが、彼らはまだこの魔導虚の本当の力を目の当たりにはしていなかった。

今、時空管理局とグラトニーによる最終決戦が、始まろうとしていた。

The Death Strawberry（後書き）

教えて、ユーノ先生！

ユ「今日は、ファイについてね♪」

ユ「デバイスの解放は『神聖鳥獣（ケツァルコアトルス）』。史上最大の翼竜からヒントを得て創り出された空のエキスパート。」

ユ「体長はおよそ１３メートル。体重１２０キロ。得意な戦法は何といってもその翼を利用した音速攻撃と、強力な鉤爪で敵を切り刻む攻撃かな♪」

フ「何故俺がこのような場所にいる・・・？」

ユ「いいじゃない別に♪どうせこのあと出番なんかないんでしょう！？」

フ「俺のことより、自分の出番のほうを気にするべきだと思うが・・・」

ユ「のああ！！（ユーノかなりショック！！）」

翡翠の魔導死神

＞ｉ１２８２５―７０９＜

なのは達機動六課の面々が史上最悪の危機に直面している頃、ユー

ノのも全ての準備が整いミッドチルダに向けて移動をしようとしていた。

「それじゃあ、僕はそろそろ行って来ますね。」

ユーノは織姫とコンに見守られながら転移魔法を発動する。

「はい。あのユーノさん・・・・・・」

「？何ですか、織姫さん？」

「・・・なのはさんと再会したら・・・何て声、掛けるつもりです？」

織姫のその質問を聞いたユーノは鼻で笑うと、目を瞑ってこう答えた。

「・・・いつも通りです・・・まずは久しぶりって言いますかね。それから一通り事態が片付いたら・・・ちゃんと理由を説明して、謝ります・・・」

「・・・そうですか・・・」

「・・・じゃあ、織姫さん。コンさん。留守の間店番お願いしますね。」

「はい！了解しました！！」

「おう！この俺様と織姫さんに大船に乗ったつもりで任せとけ！！」

「はは・・・では、行って来ます。」

そう言うと、二人に店の事を任せてユーノはなのは達の待つミッドチルダへと向けて転送を開始し、二人の前から姿を消した。

その頃、隆起現象を続けるミッドチルダとともにその巨大な姿を現すグラトニーをモニター画面で見ていたなのは達は絶句する。

「信じられないわ・・・高さ３００メートル以上!?」

「ゴジラの類かあいつは!?」

「しかし・・・この霊圧と魔力は・・・!?」

「間違いない・・・!!」

「初めての襲撃で・・・私やスバル達に深手を負わせた・・・!!」

「キャロとフリードの体に酷い傷を作った・・・!!」

「グラトニー・・・ガルバだ・・・!!」

ミッドチルダに姿を現したグラトニーは山鳴りのような声を発して時空管理局やミッドに住まう人間達に宣戦布告をする。

「なっははははははは!!!!!!クソカスの人間ども!!!時は来たぜ!!!」

魔導虚の最後の一体にして、最強最悪の進化を遂げたグラトニー・ガルバが、ついにその真の正体を現した。

今此処に、史上君全絶後の第二決戦の幕が切って落とされたのだ。

グラトニーは黄昏に染まるミッドの空の下で、体の中の触手を町全体と地下に張り巡らせると、身体中の中にさらにエネルギーを吸収して更なる巨大化を図る。

瓦礫の町の中でそれを間近で見ていた恋次と一護は顔を引きつる。

「てっおいおい!!!まだデカくなるつもりかよ!!??」

「・・・十年前・・・俺が昔虚圏で戦ったあのヤミーって破面みたいに、どこまでも巨大化していきやがる・・・!!」

クラウディアの中でその光景を見ていたなのは達も終始唖然とする。

「ミッドチルダを・・・丸ごと取り込んだの!?」

「これはまるで要塞だよ!!」

「と言うより宇宙船・・・いや、次元船だ!!奴は首都圏に張り巡らされたライフラインや元からある霊力と魔力を使って、巨大な次元船を作ろうとしている・・・!」

「くっ・・・!吉良さん、恋次さんとあの一護さんって死神さんと連絡は!?」

はやてのその質問を聞いた吉良は霊圧を確認して生存していることを伝える。

「今さっき生存を確認したところだ。真っ直ぐクラウディアに向って移動中とのことだよ。」

「シグナム、シャマルとザフィーラにも連絡して、こっちに合流するよう伝えてくれへんか？」

「了解しました。」

「急いでくれ、シグナム！このままでは・・・ミッドに残された住人達は、グラトニーもろとも・・・！」

このとき、クロノの頭上に浮かぶ最悪の顛末。

グラトニーが取り残された人々供に次元空間に侵入し、その強大な力を持って全ての次元世界を破壊すると言うシナリオだ。

その頃、同じ光景を離れた場所で見ていた白鳥と金太郎にも緊張が走る。

「かなりの大きさですな・・・あの巨体を倒すのは容易ではありませんぞ白鳥殿。」

「何を今更そんなことを。巨大さでものを言わせるのなら、こちらは結束の力でものを言わせるまでだ。不本意だが、この場合魔導師の連中とも協力することにするさ。それに、ユーノ店長ももうじきこちらに着く筈だ。そうなれば、勝機は我々の手中にある。」

「その通りですぞ！しかし、店長が到着する前になるべく我々で出来ることをやります。行きましょう、白鳥殿！」

「承知した。我が美しき音楽を骨の髄まであやつに聞かせてくれるわ！」

二人はそう言うと、一度一護達と合流を果たすべく空を飛行する。

その頃クラウディア内部でグラトニーの体内のエネルギーを観測していたアレックスはリンディ達にその詳細を語る。

「グラトニー・ガルバ、発電所からの供給網を使い内部に膨大な電力を蓄積中！」

「次元空間に逃走するためのエネルギーを掻き集めてるのね！」

「我々は、ただ見ている事しか出来ないのか！？」

すると、そんな深刻な表情を見せるクロノの下に一護からの連絡が入る。

『そいつは違うぜ、クロノ・ハラオウン！』

一護の姿をモニターで確認したフェイトは思わずはっと驚く。

「あなたはさっきの！？」

『死神代行、黒崎一護だ。訳あってお前らと協力することになった。怪我はしてるが恋次は無事だ。それに、たった今頼もしい助っ人も合流してくれた！』

すると、クラウディアのモニターに追加で映し出される白烏と金太郎の姿。

『皆の衆、ご機嫌いかがかな?』

白鳥と金太郎の姿を確認した鬼太郎と浦太郎は愕然とした。

「鳥!?それに熊まで!?」

「やっぱりこうなっちゃったか・・・と言うことは、店長もそのうち来るってことかな?」

「う、浦太郎教官・・・!?そう言えばさっきから言ってる店長って誰なんです?」

スバルは今迄疑問に思っていた店長と言う謎の人物に関して質問をする。

「僕が今勤めてるお店の店長さ♪普段の性格は何所か飄々としてるけど、根は真面目でナイスガイ。頭の切れも早く強さだって僕達従業員の中じゃ最強さ。」

「そないな人がもうじき来てくれるのか・・・それは頼もしい話やな!!」

はやてやなのはもその頼もしい助っ人という言葉に安堵の溜め息をつくが、その人物と言うことに関して何所か浦太郎は複雑な気持ちだった。

「(ま・・・君たちにとってはよく知ってる人物なんだけどね・・・)」

「クロノ、状況はよく分かってる！今ここでじっとしてても意味がねぇ！俺達がここで奴をぶっ潰さねーと、奴は何をしでかすか判ったことじゃねえ！この数ヶ月の因縁に決着（ケリ）をつけるためにも！！」

「でも恋次さん！！治療を受けないと万全な状態で戦うことなんて・・・！！」

なのはのその言葉に恋次はすぐさま相槌を入れてこう強く主張する。

「分かってるさ！でもんな悠長なこと言ってられる場合じゃねー！今戦わなければ、また振り出しに戻っちまうんだ！！」

「金太郎、恋次のアジャストを頼むぜ！」

「委細承知！」

恋次の隣にいた一護が合流した金太郎にそう要求すると、金太郎もそれを受け入れる。

「騎士シャマルとザフィーラ殿も到着しました。みなさん、ここは私も戦います！こうなったら、何が何でも勝つだけです！」

シャッハのその覚悟の言葉を聞いた機動六課一同と、クロノも戦う決心をつける。

「・・・分かった。諸君、これより敵グラトニー・ガルバとの最終決戦に挑む。今この場にいる一人一人が、次元世界の希望だと言うことを忘れるな。時空管理局の全勢力を投入する。何としても、グラトニーが次元空間に逃走するのを防ぐのだ。我々に残された道は・・・“勝利”しかない！時空管理局本局機動六課、最終作戦開始！

！！」

「「「

は・・・多分なのはだ。みんな・・・あの魔導虚に立ち向かっていくのか。早く僕も合流しないと・・・！」

ユーノはそう言うと、崖の上からおり器用に不自由な足場を飛び越えながら胸に秘めた決意の下になのは達の方へと向かって行った。

「（待っててね・・・なのは・・・今こそ空白の四年間で僕がどれだけ君を守るために力をつけたのか・・・それを見せてあげる。もう、何もできないままの自分で君を守れないのはウンザリなんでね・・・）」

「なははははは！！！！！！！こんだけ喰えば問題はねえだろう！！！このまま次元世界を喰らい尽くしてやるぜ！！！」

「そんなことは絶対にさせへんよ！！！」

その時、夜のミッドチルダに集まりし機動六課の前線メンバー全員と死神&救援メンバー。

「フン！来たか・・・クソ虫どもが・・・！！」

「全員配置は完了したな！準備はいいか？」

「俺達はとっくに準備万端だぜ！！」

「なははははははは！！！！！！！この日が来んのをドンだけ待ち望んでいたことか！！クソカスどもが、俺の力を受けてみやがれ！！！！」

「くっ！！こっちこそ今迄の借りをまとめて返してやるぜ・・・狒

骨大砲！！！！」

恋次はその瞬間、狒狒王蛇尾丸を操り狒骨大砲を発射する。

それに続く形で一護達も各々の技を繰り出す。

「月牙天衝！！！！」

「破道の六十三　『雷吼炮（らいこうほう）』　！！！！」

「アックスオーガ！！！！！」

「エクセリオンバスター！！！！！」

「トライデントスマッシャー！！！！」

「ブレイズキャノン・フルバースト！！！！」

「俺の必殺技、パート４！！！！！」

「ブリザードスピアヘッド！！！！」

「ディバインバスター！！！！！」

「ファントムブレイザー！！！！！！」

「スピアライトニング！！！！！」

「ブラストレイ・バーニング！！！！」

「デアボリックエミッション！！！」

「コメットフリーゲン！！！！！」

「飛竜・・・一閃！！！！！」

「ヴィンデルシャフト！！！！！」

全員による最強技の一斉攻撃がグラトニー目掛けて放たれる。

しかし、爆風が晴れたその先に居たのは驚くべき光景だった。

「なっはははははははははは！！！！！！！何だそいつは！？痒いぜ！！！！！」

しかし、機動六課全ての攻撃を直撃しても尚、グラトニーは痛みは一切感じず体の何所にも傷跡すら出来ていない状況だった。

クラウディア内部でグラトニーの圧倒的な装甲の固さにリンディやアレックスたちも驚愕してしまう。

「駄目です！！！装甲が固すぎて貫通しません！全く効果ありません！！！」

「な！！一斉攻撃を以ってしてもなの！？」

そんな無傷のグラトニーを間近で戦うなのは達はリンディ達以上にショックを受ける。

「今迄の場合とは核が違う！！」

「はは！！・・・クソ虫が！！！！」

グラトニーはショックを隠しきれずにいる目の前のなのは達をビルほどにまで巨大になった腕の一振りで地面を抉りながら風圧で吹き飛ばしてしまう。

「「「

「了解・・・機動六課前線メンバー・・・フォーメーション変更！右翼スターズと浦太郎さんとシスターシャッハ。左翼ライトニングと鬼太郎さんと吉良さん。攻撃開始！」

「了解！！」

「任せておけってーーー！！！！」

クロノ指示に従い、なのは達スターズ分隊とフェイト達ライトニング分隊の一斉攻撃と、援護に入った浦太郎達スクライア商店の従業員とシャッハ・吉良の攻撃がグラトニーの注意を引き付けながら、センターの恋次達の攻撃の隙を作る。

そして、充分に注意を引き付けたことを確認したリンディは中心からの攻撃命令を出す。

「今よ！中心を狙って！！」

「おう！行くぞ、恋次！クロノ！」

一護はそう言うと、斬月に霊力を食らわせると今度は月牙の威力をそのまま刃に留めた状態で恋次・クロノと供にグラトニーに突っ込む。

「月牙天衝！！！！！」

恋次も今度は狒狒王蛇尾丸の唯一の打撃攻撃技、霊圧を極限まで上昇させて体当たりすることで敵もろとも大爆発を起こす狒狒王銃火山を発動させる。

「狒狒王銃火山(ひひおうじゅうかざん)！！！」

クロノは呪文詠唱無し．　杖、または素手での接触によって対象の固有振動波を分析、振動エネルギーで対象を粉砕するブレイクインパルスを発動。

「ブレイクインパルス！！！！」

三人の直接攻撃がグラトニーの体目掛けて襲い掛かる。

「「「ほおおおおおお！！！！！！！」」」

ところが、グラトニーはその三人の攻撃を左手だけで全て受け止めてしまう。

「「「何！？」」」

そして、三人の必殺技を膨大なエネルギーで消滅させるとそのまま力任せに三人を張るか彼方へと投げ飛ばしてしまった。

「「「のはあああああ！！！！！」」」

離れた場所でそれを見たはやてや金太郎は思わず冷や汗を流す。

「信じらへん！！あの三人の攻撃を弾き返してしもうた！！？？」

「それだけの膨大なエネルギーを操ることが出来るのですか！！？？」

「「「ぐっ！！！」」」

瓦礫の山に強い衝撃で激突した一護、恋次、クロノの三人。

「なっはははははは！！！！！！これでも喰らえクソが！！！！！！」

すると、グラトニーは巨大な口を開くと体中に吸収した莫大なエネルギーを口腔内に収束させて絶大な破壊力を持つ魔力と霊力が混同した砲撃、『魔導虚閃（セロ・ロスト）』を発射しようとする。

「あの巨大な霊圧と魔力の上昇・・・まさか魔導虚閃（セロ・ロスト）か！？」

シグナムは表情を凍らせると直ぐにそれが何かを理解した。

事態の深刻さを把握したシャマルはザフィーラ、アコースと供に結界魔法で砲撃を防ぐために行動を起こす。

「ここは私たちに任せて頂戴！ザフィーラ、アコース査察官！」

「心得た！」

「了解です！」

三人は全身全霊の魔力を使って六課全員を守るための強力な結界魔法を町全体に施した。

そして、収束されたグラトニーの魔導虚閃が結界の方へと放たれた。

地面を簡単に抉り取りながらシャマル達の結界魔法を破壊しようとするグラトニーの魔導虚閃。

シャマル達も必死になって砲撃から全員を守り抜こうとするが、どうやらグラトニーの攻撃のほうが一枚も二枚も上手であったのか、結界は破られてしまいシャマル・ザフィーラ・アコースの三人は砲撃で吹き飛ばされてしまう。

「「「のあああああああ!!!!!!!!!!」」」

「シャマル!!!ザフィーラ!!!ロッサ!!!」

悲痛な叫び声を上げるはやて。

「何て奴だ!!あの三人の結界魔法を砕きやがった!!」

鬼太郎は想像を絶するグラトニーの魔導虚閃に圧倒してしまう。

「ミッド中のエネルギーを根こそぎ喰らっているから、破壊力も通常の何万倍にも膨れ上がっているんだ!!」

鬼太郎の傍らに立つ白鳥がグラトニーの破壊能力に関する補足をする。

「やってくるぜ、グラトニー!!だが、勝負はこれからだ!!!」

恋次はそう言うと、一護となのは達と供に再び傷ついた体のままグラトニーに向っていく。

しかし、幾ら攻撃を仕掛けようともグラトニーには一切通じず、代

わりに恋次達のほうが更に深手を負っていく。

「きゃあああああ！！！！！」

「うあああああああああああ！！！！！」

深手を負い、既に瀕死の状態に誓いと言ってもおかしくはない機動六課フォワードメンバーと死神&援護に入ったスクライ商店のメンバー。

なのはは満身創痍の体を何とか杖を使って起き上がると、この危機的状況に動揺する。

「マズイ！このままじゃ、先にこっちがやられちゃうよ！！何！？この感覚・・・！？」

その時、なのは達全員は身体中の力がグラトニーによって奪い取られていく感覚を味わい、体を何とか立たせていたなのはやヴィータ達も思わずその場に跪く。

「何だよこれ・・・力が出ない・・・！？」

「くっ！！・・・リンカーコアの魔力が・・・吸い取られていく・・・！？」

だが、体に異変を感じているのは恋次達死神も同じであった。

「リンカーコアだけじゃねぇ・・・俺達の霊圧もだ・・・！」

それをモニターで見ていたリンディはその場に手を叩く。

「いけないわ！！」

「何が起こっているのですか、艦長！」

「グラトニーは、自分の能力をフルに使ってクロノや恋次さん達のリンカーコアと魂魄から魔力と霊圧を吸い取っているのよ！元々グラトニーには、魔魂吸という霊圧と魔力を奪い取る技があるのよ！」

「でもそれなら、以前彼らには効かなかった筈では！？」

「忘れちゃ駄目よ！グラトニーは今、ミッド中の電力やら何やらを味方につけているのよ！」

「大変です！！全魔導師と死神の魔力残量と霊力残量が残り２６パーセント！は！！どんどん低下していきます！！」

アレックスは著しく低下していくなのは達の魔力と恋次達の霊力の数値を見て、かなり深刻な表情を見せる。

「なのはママ！！フェイトママ！！」

ずっと今までの戦いの様子を見ていたヴィヴィオをも、これには涙を流して叫び声を上げる。

「早く手を打たないと、全員のリンカーコアと魂魄から魔力と霊力が消えうせてしまうわ！！」

隆起現象を続けるミッドチルダでなのは達の魔力と霊力を喰らい尽くそうとしているグラトニーは動けないなのは達に更に追い討ちを

かけるように非常な言葉を口にする。

「はっ！蟻の分際でこの俺のデバイス解放状態、『大魔王（デーモンコマンド）』に楯突こうとするからこうなるんだよ！！てめぇらの残りの魔力も、霊力も・・・全部俺様が干からびるまで喰らい尽くしてやるぜ！！！！なっははははは！！！！！！」

「魔力残量、及び霊力残量共に7．5パーセントにダウン！」

「ミッドチルダの送電システム、止められません！！」

「まさか敵が・・・こんな攻撃手段に打ってくるなんて・・・！？え！？」

その時、クラウディア内部で事態を観戦していたリンディに下にあの人物からの急報が入った。

『リンディ提督、私よ！』

それは、時空管理局の黎明期から現在の形整えた彼の伝説の三提督と呼ばれる者の一人、本局統幕議長ミゼット・クローベルだった。

「ミゼット提督！！？？一体どうして！？」

あまりに予想外の人物からの急報に戸惑いを隠せないリンディ。

『詳しく話してる時間は無いわ！このような状況になった今、敵に対抗するためにはあの手しかないの！だから、あれの使用許可を出すから・・・急いで彼女達の下に！！』

その言葉を聞いたリンディは思わず顔を引きつった。

「まさか！！！」

その瞬間、リンディやアレックス達の脳裏に浮かぶアルカンシェルと同じぐらい危険なスーパーツールの面影・・・その名も。

「『リンカーエクストリーム』ですか！？」

クラウディアを始め本局の次元航行船全機に搭載されたそのリンカーエクストリームは、上層部の許諾が無い限り絶対に使用することは出来ない管理局の切り札。

『敵に勝てる手段があるとしたらそれだけよ！』

ミゼットの言葉を聞いた全員は驚愕の表情を浮かべる。

すると、戸惑いを見せるリンディに下になのはからの通信が入る。

『リンディ提督！私たちからもお願いします！！』

「なのはさん・・・！？」

『大丈夫です・・・！私たちは不屈のエースオブエースと、最高のストライカーで編成された管理局最強部隊です！必ず生きて帰ってきます！！・・・だからお願いします・・・リンカー・・・エクストリームを・・・』

その瞬間、なのはとの通信が途絶しモニター画面から消えるなのはの顔。

「なのはママ！！」

「通信質力低下・・・音声・・・届きません・・・」

「・・・・・・！！」

深刻な表情を浮かべながらリンカーエクストリームを使うか否か迷うリンディだったが、そんな躊躇するリンディにアレックスが声を殺して使用の助言をする。

「艦長・・・彼女達を信じましょう・・・敵のパワーを上回るには・・・リンカーエクストリーム・・・それしかありません！」

アレックスの言葉を聞いたリンディも漸く決心がつき、リンカーエクストリームの使用を決定するのであった。

「・・・ええ！私は賭けるわ・・・これまでも、幾度と無く奇跡を起こしてきた彼女達の可能性に！！」

それを訊いた全艦内の管制人達も同じように覚悟を決めた。

「では、今こそ封印を解きます！」

アレックスはそう言うと、タッチパネルを操作して専用の鍵を使ってリンカーエクストリームの起動画面を浮かべる。

「各部問題なし！リンカーブースター、機動開始！！」

「場所を確認！射出角度算定します。軸合わせ用意！」

すると、クラウディア内部に搭載されていた巨大な砲弾のような物体が現れると、次元空間からなのは達が戦うミッドチルダに向けて射出準備を行い、ついにその準備が整う。

「準備オーケーです！」

「よし・・・リンカーエクストリーム、出撃・・・承認！！！」

「了解！！！」

リンディの承認の言葉を聞いたアレックスは二つの機動スイッチ画面を全身全霊の力で殴り、発射を試みる。

その様子をヴィヴィオや他の管制官達はただただ祈るばかりだった。

「のあああああ！！！！！」

そして、アレックスの最後の機動スイッチ画面を殴った瞬間、リンカーエクストリームの機動スイッチが作動し、クラウディアから勢いよくミサイルの如く飛び出していったリンカーエクストーム。

一護や恋次達死神は突然真夜中のミッドチルダに向けて飛来してきたリンカーエクストリームを見て、一瞬の戸惑いを見せる。

「何だ・・・これは！？」

一方のクロノやなのは達はというと、届けられたリンカーエクストリームを見て失われそうになっていた希望を覚えるのであった。

「来たか・・・」

リンカーエクストリームを見たグラトニーは鼻で笑うと、それの破壊をするために虚弾を連発する。

「下らねーよ、カスが！！！」

しかし、そんなグラトニーの虚弾を防いだのは人一倍体が丈夫なユーノの右腕である金太郎の結界であった。

「私の結界はそう簡単には破られませぬぞ！！！！出番ですぞ、白鳥殿！！！」

「了解だ！！！」

白鳥はそう言うと、空中に飛び上がり琴線斬を解放して音色辞書の項目から一極を選択してその音色を奏でる。

「琴線斬第六章・第十五節『貪欲の家畜』！！」

すると、音色が奏でられた瞬間に金太郎の結果の上から施される強化結界が、グラトニーの虚弾の嵐を防ぐのであった。

「さあ！！今がチャンスである！！」

「急いでこの中へお入りくだされ！！！一護殿たちもです！！！」

「「「「了解！！」」」」

「オッシャー！！！！」

白鳥と金太郎の言葉を聞いたフォワードメンバー、恋次達にヴィータ達、さらには救援に駆けつけてきた一護やシャッハ達もその巨大なミサイルポットの中へと入り込み、最後に入ったはやてが結界で攻撃を防ぐ白鳥達にこう口にする。

「え～と、白鳥さんと金太郎さんやっけか・・・済まないけど６０秒ほどでええから守り抜いてくれへんか！？」

「６０秒か・・・楽勝である！」

「御意！」

二人の言葉を聞いたはやては笑みを浮かべると、全員が待つミサイルポットの中へと入り込みその扉を完全に閉じた。

そして、金色に輝く特殊なスポットを浴びながらクロノは真剣な表情で全員にこう言う。

「みんな・・・分かっているな。このリンカーエクストリームは・・・」

クロノがそう言って手を差し出すと、その上にフェイトが手を重ねる。

「覚悟の上だよ、クロノ。」

同じようにフェイトの手の上からなのはやはやて、さらには全員の掌が重なり合さる。

「管理局のエースとして望むところだよ、クロノ君！」

「それで奴を倒せるなら本望だ！さっさとおっぱじめようぜ！！」

「「「

の虚弾を喰らってしまい白鳥同様吹き飛ばされてしまう。

「金太郎さん！！！！はっ！？」

金太郎の様子をモニターで見ていたヴィヴィオが悲痛の叫び声を上げたそのとき。

リンカーエクストリーム内部から発生する常識では考えも着かないほどに強大な魔力と霊力が金色の光となって空へと上り詰める。

全員が不安の表情で見守る中、リンカーエクストリームから出てきた金色に輝くなのは達機動六課の一同。

金色の光となった魔力と霊力によって今迄暗雲だった空が晴れ渡り、月の光が照らし出される。

そして、究極にまで霊力が高められた恋次の掛け声と供に全員はグラトニーに向って攻撃を開始し始めた。

「・・・行くぜ！！！！！」

全員は通常の瞬歩やソニックムーブなどと言った高速移動技では考えられない速度で突っ込んでいくと一護と恋次、クロノを先陣に攻撃を開始。

「「「はあああああああ！！！！！！！」」」

三人の攻撃を防ごうとするグラトニーだったが、今迄の力とは核が違うことをその身を以って実感する。

「何だと！？」

一護は究極までに高められた最強最大の月牙天衝を、恋次は最強最強の砲撃を、クロノは自身の中で最強無敵の攻撃力を秘めた光弾を刃状にして、それを複数生成・　対象を一斉に串刺しにする攻撃魔法をグラトニーに向けた放った。

「月牙天衝！！！！」

「狒王絶波！！！！」

「スティン　ガーブレイド・エクスキューションシフト！！！」

三人の一斉攻撃によって装甲が傷つき血を噴出すグラトニーは驚きを隠しきれなかった。

「まさか！！！！」

そして、三人の攻撃の後にフォワードメンバー、ヴォルケンリッター、さらには吉良と鬼太郎達、シャッハの怒涛の攻撃がグラトニーを襲う。

「「「「でやあああああああああ！！！！！」」」」

「「「「はあああああああああああ！！！！！」」」」

「「ほおおおおおおおおおおお！！！！！」」

「やあああああああああああ！！！！！」

先程までとは威力が格段に違う機動六課の攻撃をその身に受けて身体中のエネルギーが暴走をし、苦しみの声を上げるグラトニー。

「ぬおおおおおおお！！！

「最後に残るのは・・・絶対になのはママ達！！！私はそう信じる！！！！」

そして、止めの一撃を加えるためにクロノが控えていたなのは、フェイト、はやてに向けて合図を出す。

「今だなのは、フェイト、はやて！！！！最強コンビネーションで止めを刺せ！！！！！」

「「「了解！！！」」」

そう言うと、空高く上り詰めた三人は魔力を限界ギリギリのところまで上昇させると、嘗て闇の書事件で初めて使った三人の最強コンビネーション技を再びグラトニーに向けて使用する。

「受けてみい！！！」

「これが私達の！！！」

「全力全開！！！！」

なのは、フェイト、はやてのデバイスに集められる全く同じ金色の魔力光。

「スターライト・・・・・・」

「雷光一閃！！プラズマザンバー・・・・・・・」

「響け終焉の笛、ラグナロク・・・・・・」

「「「ブレイカー！！！！！！！！！」」」

三人の最強一斉攻撃がグラトニーに放たれると、グラトニーは左腕で全身のエネルギーを使って三人の攻撃を受け止めようとする。

「のおりゃあああああああああ！！！！！」

「「「はあああああああああああ！！！！！」」」

凄まじいエネルギーがぶつかり合う真夜中のミッドチルダでの壮絶な戦い。

グラトニーのエネルギーとぶつかるなのは達の攻撃は徐々に威力を弱めていくと、グラトニーはほくそ笑む。

「へっ・・・何だと！！」

しかし、一瞬の気を抜いた瞬間三人の攻撃をサポートするために他のメンバー全員がグラトニーの左腕に向けて集中攻撃を行い左腕を切り落として三人の攻撃を貫通させた。

「のあああああああああああ！！！！！」

「「「グラトニー・ガルバ！！！！永遠に眠れ！！！！！！！！！」」」

三人の勝利への想いと、全員の心が一つに重なり合いついにグラトニー・ガルバは砲撃に飲み込まれていったのでった。

そして、その壮大な激戦が行われたミッドチルダに朝が訪れた。

ミッドチルダの隆起現象も収まり再びもとの場所へと自然に戻っていった首都全域。

その中心に倒れ込む全く動く気配の無いグラトニー。

そんなグラトニーを見ながら同じ場所に集まって戦いが終わったことを実感する満身創意のなのは達全員。

「・・・終わったな・・・」

「・・・ああ・・・ぐっ!!!」

その時、一護の苦痛の声と供に全員の体にも同じ痛みが走った。

そう――リンカーエクストームを使った際の副作用だ。

「・・・どうやら・・・リンカーエクストリームの副作用が来たみたいや・・・もうこれ以上能力(ちから)を使うことは・・・出来へん・・・!!」

「魔力も・・・もうゼロの状態だし・・・魔力そのものはなくならないけど・・・リンカーコアが完全回復するのには時間がかかりそうだね・・・」

「俺達の霊圧も・・・すでに無いに等しいの状態だしな・・・」

「でも・・・本当に良かった・・・あとはスカリエッティを逮捕すれば・・・」

と、スバルがそう言った直後――――全員の目の前に悪夢が再び蘇ってきた。

「ぐおおお

「なっ!?この距離で虚閃か!!!」

「そんな・・・もうこれ以上は戦う力なんて残ってないのに・・・!?」

「くっ!!ここまでなのか・・・・・!?」

クロノもはやても、そして他の全員もこのときばかりは死を覚悟した。

そんな中でなのはは目を強く瞑ってバリアジャケットの中に入っているユーノの写真が収められたロケットを強く握りながらこんなことを思う。

「（ヴィヴィオ・・・御免ね！なのはママ、もうどうにも出来ないよ!!そして、ユーノ君・・・御免ね・・・私・・・最後の最後までユーノ君に自分の気持ちを言えなかった!!）」

為す術もなくどうすることも出来ないなのは達。

そして放たれるグラトニーの強力な虚閃。

虚閃によって辺りが爆発で見えなくなると、クラウディア内部で見ていたヴィヴィオは絶叫しなのはの名前を叫ぶのであった。

「なのはママ!!!!!!!!!!!!!!」

グラトニーはなのは達の最期を確信しながら、徐々に晴れていく爆風の中を見つめる。

「へへ・・・ざまぁみやがれ・・・クソ虫が・・・跡形も無くなったぜ・・・ん!?」

だが、その時グラトニーは予想外の光景を目の当たりする。

一方のなのは達もあれほどの威力の虚閃を喰らって命は無いと思っていたにも関わらず、自分達はまだ死んでいないことに気付いた。

「・・・う・・・あれ!?死んでない!?」

「どういう・・・こと!?」

と、その時吉良は自分達の目の前にある見覚えのある技に終始驚いた。

「なっ!?これは・・・!!」

それは、死神だけが使える高等呪術で防御・束縛・伝達等を行う「縛道(ばくどう)」のうち、八十九番以下の破道を完全に防ぐ八十一番の縛道、『断空』がそこにはあった。

「断空・・・だと!?」

「ああ!?何だコリャ・・・一体どうなって・・・」

突如目の前に現れた断空に六課の面々同様疑問に浮かぶグラトニー。

と、その時。

「破道の三十三　“蒼火墜”」

自分の足元から放たれる対象に爆炎を浴びせる青い光の炎、蒼火墜。

それを受けてグラトニーも思わず

「ぐあっ！？」

爆炎をその身に受けて軽い火傷を受けるグラトニー。

「な・・・何だぁ！？一体どっから！！」

すると、その瞬間グラトニーの左足が綺麗な断面を残して切断された。

「な・・・に・・・い！！！？？？」

足を切断されたことによって体制を崩したグラトニーは巨大な地響きを起こして廃墟となったミッドの町に倒れ込む。

あまりに突然のことに頭がついていけないでいるなのは達全員。

「これは・・・誰がこんな事を！？」

すると、一護は周囲から感じるある人物の霊圧を感じ取ると鼻で笑い、その人物に向けて声を発する。

「・・・ふん・・・あの野郎、漸く来やがったか・・・遅すぎるんだよ、準備にどんだけ手間取ってんだ！？」

すると、その人物は瞬歩でなのは達全員の下に移動してくると一護に謝罪の言葉を口にする。

「すみません、一護さん。出来る限りのバックアップを済ませてから来るつもりだったので。それに、四年ぶりのミッドに少々迷ってしまって。待たせましたね・・・それと・・・・・・久しぶりだね・・・なのは・・・」

その人物の格好は深い緑色の羽織と甚平に身を包み、帽子を被ったその人物は徐に立ち上がると帽子を脱ぎ、その女性にも似た綺麗な顔をなのは達の方へ向け・・・なのはの名前を優しい声で口にする。

「「「あ!!」」」

「「「「なっ!!」」」」

「「「「嘘!!」」」」

「「あなたは!?」」

「「おお!!」」

「てめぇは・・・!?」

「そうか・・・そうだったのか!」

その人物の姿を目のあたりにした彼をよく知る幼馴染やボルケンリッターの一同、さらにはフォワード陣や恋次達にスクライア商店の従業員やクラウディア内部のリンディ達。

そして、その中で最も彼をよく知るなのはは目を見開きその人物の名前を徐に口にした。

「・・・ゆ・・・ユーノ・・・君・・・!?」

翡翠の魔導死神（後書き）

教えて、ユーノ先生！

ユ「今日は、一護さんについてだよ♪」

ユ「僕の師である一護さんの表向きの顔は空座町で町医者を務める開業医だけど、その正体は嘗て藍染惣右介という元五番隊隊長の謀反を解決するのに一役買った伝説の死神で、その霊力の高さは今も尚健在♪」

ユ「現在は高校生のときのクラスメイトで舜盾六花という能力を秘めた井上織姫さんと結婚して、一緒に医療に携わってるんだ♪」

ユ「ここだけの話・・・一護さんが織姫さんに言ったプロポーズの言葉は・・・」

一「だあああああ！！！！！止めてくれユーノ！！！！！それだけは言わないでくれお願いだから！！！！！（一護かなり必死）」

ユ「俺が・・・どんなときでも・・・お前の傍を全力で・・・」

一「分かった！！！！！！店の商品全部買ってやるからよ！！！！！」

ユ「へへ♪毎度どうも♪♪」

一「てめぇ・・・・・・！！（怒りの炎を燃やす）」

次回予告

な「いつの間にか忘れてしまっていた大切なこと・・・・・・置き去りにしてしまったあの優しい笑顔・・・・・・だから、もう一度会って謝りたい・・・・・・自分の口で、自分の本当の気持ちを・・・・・」

な「次回、ユーノ・スクライア外伝　第２０話『なのはの涙』」

な「ユーノ君・・・・・・こんな私を許してほしいとは言いません・・・・・・だけど、この気持ちは・・・・・・」

なのはの涙（前書き）

な「行き場の無い寂しさと、理不尽な痛み・・・そんなのが嫌いで・・・私はこの道を選んだ・・・だけど、私は結局自分のことしか目に見えてなくて・・・一番大切な・・・私にこの道を導いてくれた大切な人のことなんて、気にもしていなかった・・・」

な「どんなに辛いときも・・・どんなに寂しいときも・・・私の背中はいつも暖かかった・・・これも・・・みんな・・・ユーノ君が居てくれたから・・・なのに・・・私は・・・私は・・・」

な「ユーノ・スクライア外伝・・・・・・始まります。」

なのはの涙

＞ｉ１２１５９―７０９＜

なのは達は現在、目の前にいる意外な人物の姿に驚きを隠せなかった。

そしてそれは、クラウディア内部でモニター画面を見ていたリンディやヴィヴィオ達も同じであった。

「・・・艦長・・・あの方はもしや・・・！？」

「・・・まさか・・・本当に・・・！？」

そして、再びなのはの目線と深層心理から話を再開することにしよう。

「（何所からとも無くやってきたその人の声を聞いた瞬間、ずっと失くしていた心からの安堵と懐かしさを感じた。一瞬、幻聴かとも思った・・・だけど、それは幻聴でもなんでもなくて・・・聞く必要なんて最初から無くて・・・すぐに答えは目の前に現れたのだから。）」

なのはの深層心理に聞こえてきた謎の声の正体。

そして、現在誰よりもその声の主・・・即ち目の前の人物の姿に驚いていた。

何故ならその人物とは、四年前突如として行方を絶ったなのはの幼馴染であり魔法の師・・・更にはなのは自身が最も信頼し恋焦がれる存在――ユーノ・スクライア本人であったのだ。

なのはは思わずユーノの名前を口にし、本人かどうかを確認する。

「・・・ゆ・・・ユーノ・・・君・・・！！」

四年ぶりにユーノの顔を目撃したなのはは動揺を隠し切れずに居た。

あれ程自分や友人達が如何なる手段を使っても探し出せなかった影の功労者が、このタイミングでしかも甚平と帽子と言う格好で現れたのだから。

「ほ・・・本当に・・・本当にユーノ君なの！！？？」

すると、そんななのはとは対照的にユーノは飄々とした態度で扇子を広げ本人であるということを伝える。

「勿論♪正真正銘ユーノ・スクアイア本人だよ♪それにしても・・・四年も経つのに、君は相変わらず昔と同じでよかった・・・なのは・・・僕は四年の間にかなり変わっちゃったけどね・・・・・・」

ユーノがそう言うと、先程なのはに向けたユーノの表情を見ていた恋次が反論の言葉を掛ける。

「かなりどころか、一変してんじゃねーのかよ!!何ださっきの爽やかな笑顔は!!俺達に対してとは随分違い過ぎるだろうがユーノ!!!!」

「そうですか♪何時もと変わらないですよこの悩殺スマイルは♪ただの恋次さんの思い過ごしですよきっと♪」

ユーノはそんな恋次に向ってつかみどころの無い態度でそう言う。

「（え!?恋次さん・・・ユーノ君のこと知ってるの・・・!?）」

恋次とユーノの会話を傍で聞いていたなのはは勿論、他の前線メンバーも驚きを隠せなかった。

と、その時ちょうど向こうのほうから傷だらけの金太郎と白鳥がなのは達の下に駆け寄ってきた。

「みなさん!!!!お怪我はありませぬか!!!!」

二人はユーノの姿を目撃するや否や、その場に足を止める。

「なっ!?ユーノ・・・店長!?」

「おお!!店長も漸く合流ですか!!」

金太郎は満を持してやってきたユーノを目撃すると、感嘆の声をあげた。

「金太郎・・・白鳥さん・・・遅くなってごめん。ちょっと時間がかかりすぎたみたいだね・・・」

「いえいえとんでもございませぬ！私は信じておりました・・・店長は必ずや戦いに間に合うと。」

金太郎は懇切丁寧な態度でユーノにそう言うと、その場に膝を突く。

それを見たユーノも軽く笑うと、扇子を閉じて袖の中にしまう。

「そうか・・・ありがとう金太郎。」

ユーノはそう言うと、なのは達に背を向けて指を鳴らした。

すると、なのは達全員を包み込むようにユーノの翠の魔法陣が展開され全員は結界の中に包み込まれた。

「！？これは・・・！！」

なのはは子供の頃にもこれと全く同じものを受けたことがある。

尤も、その性能はその頃とは比べ物にならないほどに強化されているが。

「結界と回復を施しといたから・・・みんなは少し体を休めておくといいよ。こいつの相手は・・・僕一人でやる。」

「「「えっ！？」」」

なのは・フェイト・はやては勿論のこと、グラトニーを一人で相手をすると言い出したユーノの言葉をここにいた一部の例外を除いて皆が驚きの表情を見せた。

「な、何やて!?」

「そっ!!そんな莫迦なこと・・・!?ユーノ!!!分かってるのか!!お前は攻撃魔法はからっきしな・・・!!」

「クロノ・・・一体“何時”の話をしてるんだ?」

「何!?」

クロノの言葉を聞いたユーノは低い声でそう言うと、口元を緩めて次のように語る。

「僕はもう・・・“四年前(むかし)のユーノ・スクライア”じゃない・・・でも・・・なのは。」

「え?何・・・ユーノ君・・・?」

ユーノに突然自分の名前を口に出されたなのはは一瞬驚くと、ユーノの話を背中越しに聞き入れる。

「僕は確かに・・・昔のユーノ・スクライアじゃないけど、心の中身は何時までも”なのはの知ってるユーノ・スクライア”だから。」

「・・・ユーノ君・・・」

なのはにとって、ユーノ・スクライアという人物は昔からこんな感じの男なのだ。

子供の頃からユーノと誰よりも近くで接してきたなのははそれをよ

うく認識していたのだから。

だから、今の言葉を聞いてなのはも少し安堵の表情を浮かべて思った。

ああ、やっぱりユーノ君はユーノ君のままなんだと。

すると、唐突に一護がユーノに声を掛ける。

「やれるのか・・・ユーノ・・・？」

一護がそう尋ねると、ユーノは一度振り返ると扇子を再び取り出して広げると飄々とした態度でこう言う。

「当然♪僕がこんな怪獣なんかに負けると思ってるんですか、一護さん？」

それを聞いた一護も安心したのか、鼻で笑うとユーノにこの戦いを任せることにした。

「・・・ふん。それもそうだな・・・じゃあ、頼んだぜ。」

「はい♪」

すると、丁度その時。

グラトニーが漸くその巨体を起き上がらせると、切断面から血を吹流しながらユーノのほうを途轍もない剣幕で睨み付ける。

「ふうう～～～

痛えぞクソがァ～～～～～～～～・・・許さねえ・・・許さねえぞ・・・よくも俺様の足を斬りやがったな！！ぶっ殺してやるぞクソ虫が！！！」

山鳴りのような怒声を聞いたなのは達は一瞬恐怖を覚えたが、当の本人ユーノはと言うと全く恐怖を感じておらず、寧ろグラトニーを挑発するような口調でこう言う。

「・・・おやおや・・・随分と頭に血が上っていらっしゃることで・・・そう言う相手ほど、僕にとっては一番・・・やりやすいタイプなんだよな・・・」

「ほざけ！！！！！！！！」

ユーノの言葉を聞いたグラトニーは頭に血を上らせると、ユーノの立つ場所目掛けて渾身の一撃を振り下ろす。

「おおおお！！！！！！喰らいやがれえッ！！！」

ユーノの下に振り下ろされた拳は激しい衝撃と供に凄まじい量の土煙と轟音を発生させ、その場にいたなのは達はユーノの身を案じた。

「ユーノ君！！！」

なのはの声も届かぬまま、グラトニーはユーノが居るであろう場所に拳の乱撃を加え始める。

「オラッ、オラッ、オラッ、オラッ！！！」

すると、突然グラトニーの右腕が一瞬のうちに斬り落とされてしま

い、何も分からぬままグラトニーは斬り落とされた箇所から出る大量の血を止めようとする。

「ぐうッ！？ごォあああああああああああ！！！！！！ちくしょう俺の右腕が・・・よくもやりやがったッ・・・！！」

その時。

グラトニーの目の前に一瞬のうちにユーノが姿を現し、刀も解放していないままユーノは更なる斬撃を加え、グラトニーを苦しめる。

「ぐっはあああああ！！！！！！」

グラトニーは体勢を崩して再びその場に倒れ伏す。

ユーノはそんなグラトニーを空中で仰ぎ見ながらこう言って来た。

「悪いけど・・・その体、封じさせてもらうよ・・・とことん・・・」

そう言うと、ユーノは空中で一度グラトニーと距離を取ると得意の拘束魔法を一段と強化させたものを発動させる。

「ストラグルバインド・・・×１０」

すると、グラトニーの周囲に展開される十個のミッド式魔法陣。

そこから出現する強化魔法を無効化させて相手を拘束する通常の十倍の数を誇るストラグルバインド。

ストラグルバインドは複雑にグラトニーの体を拘束すると、グラトニーの特殊攻撃技を一切使えなくする。

「なっ！！何だコリャ！！？？」

グラトニーは体中に絡まるストラグルバインドを必死で解こうとするが、ユーノのストラグルバインドはあのなのはでさえも恐れるほどの強力なもので、その上空白の四年間のうちに更に強化されたものを解く事など到底叶わぬ。

「まだだよ！」

そう言うと、ユーノはさらにここで死神として身につけた能力を存分に発揮させる為に、六つの帯状の光が胴を囲うように突き刺さり動きを奪う六十一番の縛道を使用する。

「縛道の六十一　『六杖光牢』」

六つの帯状の光がグラトニーの体に突き刺さり更に動きを封じられる。

「ぐっ！！」

しかし、ユーノ・スクライアの猛攻はこれだけでは済まない。

「縛道の六十三　『鎖条鎖縛』！！」

今度は太い鎖が蛇のようにグラトニーの体に巻きつきそれが体の自由を奪う。

「縛道の七十九　『九曜縛』！！」

次にユーノは剣術の基本である9つの斬撃「壱：唐竹」「弐：袈裟斬」「参：右薙」「肆：右斬上」「伍：逆風」「陸：左斬上」「漆：左薙」「捌：逆袈」「玖：刺突」全てを敵の周り縦方向に八つ、胸に一つの黒い鬼道の玉のようなものを出して封じる拘束術をグラトニーに仕掛ける。

「ぬっ！！」

そして、最後の極めつけ。

「縛道の九十九　『禁』！！」

ユーノは詠唱破棄であるにも関わらず、対象をベルトと鋲で拘束する縛道の中の最高位の拘束術である『禁』を易々と使用し、グラトニーの体を完全に動けなくする。

「のあああああ！！！！！」

ユーノの怒涛の拘束術の嵐にグラトニーは体制崩してその場に倒れる。

それを間近で見ていた恋次や吉良、さらにはなのは達機動六課のメンバーは愕然としていた。

「ストラグルバインドで封じた後に、詠唱破棄であんな上級鬼道を連発するなんて・・・！？バケモノかよあいつは・・・！？」

「やはり彼は僕達の想像を絶するほどの・・・鬼道の天才なんだ・・

・！！」

すると、ユーノは動けないグラトニーを攻撃するために上級の破道を撃つ為の詠唱を始めるのであった。

「千手の涯(はて)　届かざる闇の御手(みて)　映らざる天の射手(いて)　光を落とす道
火種を煽る風　集いて惑うな　我が指を見よ」

「何！？」

ユーノが唱える詠唱を聞いていた吉良はその鬼道がどういうものなのはかを理解し、驚愕の表情を浮かべた。

「光弾・八身・九条・天経(てんけい)・疾宝(しっぽう)・大輪・灰色の砲塔(ほうとう)　弓引く彼方　皓皓(こうこう)として消ゆ」

「あ・・・あの詠唱は・・・！！」

「破道の九十一　『千手皓天汰炮(せんじゅこうてんたいほう)』」

ユーノは詠唱を終えると、術者の背後から長細めの三角形の光の矢が無数に降り注ぎ敵を迎撃する九十一番の破道・・・破道の九十一『千手皓天汰炮』をグラトニー目掛けて放った。

怒涛のような無数の連続砲撃がグラトニーの体に直撃し、凄まじい爆発と轟音を響かせながらその技の威力の凄まじさを物語る。

ユーノの驚くばかりの戦闘能力をこれでもかと見せ付けられたなのは達は、あまりに違いすぎるユーノの実力に呆然としていた。

その中でも最も驚かされているのはやはり、なのは自身であろう。

「・・・・・・・・・・・・・・・す・・・凄い・・・」

「これが・・・私らの知ってる・・・ユーノなのかよ・・・!?」

「強さも戦闘能力も・・・まるで・・・別人みたい・・・!?これが・・・私の知ってるユーノ君・・・なの!?」

やがて、爆風が収まると拘束を解かれたグラトニーが体中を黒焦げにしながら自力で立ち上がり、ユーノに対する怒りを露にする。

「くそ・・・くそくそくそくそくそくそくそくそくそくそ!!!

「月光せよ、『晩翠』」

すると、ユーノの細長い杖上の刀は形状を変化させ真の姿へと戻る。

「！杖が変わった！？」

驚愕するなのは達を他所にユーノは徐に晩翠を天に掲げると、目を瞑って以前なのはとヴィータ、浦太郎を助けた例の技を使用する。

「“獅子翡翠群”」

ユーノの突然の行動に何一つ分からぬグラトニーはユーノを凝視する。

「おっ！？」

だがその時、グラトニーの頭上から降ってきた流星群のような夥しい数の翡翠の閃光・・・いや正確に言えば翡翠の斬撃がグラトニーの体へと降り注がれる。

「のあああああああああああああああ！！！！！！」

この獅子翡翠群はクロノの使用するスティン　ガーブレイド・エクスキューションシフトと非常に酷似しているが、ただ違うところはこの技の場合霊力消費がそこまで激しくなく、制御のほうもユーノの思うがままだということ。

そのユーノの使用する技を目の当たりにしたなのはとヴィータは驚愕の表情を見せる。

「あの技は・・・!?私となのはと浦太郎を助けてくれたもんと一緒だ!!」

「じゃああの技は・・・ユーノ君のものだったの・・・!?」

ユーノの獅子翡翠群を全てその身に受け、体中から血を流し悶絶するグラトニー。

「ぐっ・・・くそ・・・痛てえ・・・・・!!何故だ・・・何故俺がこんなクソ虫に・・・!!」

そんなグラトニーの哀れな姿を見たユーノは徐に近付き、こう言葉を掛ける。

「体中のエネルギーのほぼ全てを使い果たした君の力など、僕にとっては恐れるに足りない。それに、力だけでしか僕に挑んでこないような頭の固い奴に僕は倒せない。」

グラトニーは最後の言葉に堪忍袋の緒が切れ、ユーノを捻り潰そうと猛烈な体の痛みを堪えて攻撃を仕掛ける。

「ほざけ!!!!カス!!!!!!」

そんなグラトニーの態度を見たユーノは無表情のまま刀を振り下ろされる拳のほうへと向ける。

「・・・本当に君は・・・どこまでも下品な奴だ・・・」

ユーノはその瞬間、刀を満月を描くように動かすと、そこから深緑の円形の結界を発生させてグラトニーの腕を巻き込みながら止めを

刺す。

「“深緑月華（しんりょくげっか）”」

円形の結界はグラトニーの腕を巻き込み体全体に達すると、その瞬間巨大な深緑の円形ドームが形成されその中に居たグラトニーは大爆発を起こす。

爆発によってグラトニーの体は粉々に砕け散り、周囲には無惨な姿となった手足や上半身などが散らばり、完全に戦闘不能となった。

「・・・そ・・・そんな・・・バカ・・・な・・・・！！」

その瞬間、グラトニーは灰となってユーノ達の前から消え失せる。

ユーノのその圧倒的なる戦闘能力の高さを目の前で見ていたなのは・フェイト・はやて・クロノ達隊長陣は勿論、フォワードのメンバーや恋次と吉良も驚かされていた。

「・・・倒し・・・た・・・・！？」

「あのユーノが・・・一人で本当に・・・・！？」

「なんちゅう・・・規格外な強さや・・・・！！」

そんな全員の反応等全く気にしていないユーノは、何も語らず晩翠を再び元の仕込み杖の形状に戻すと黙ったままなのは達の方へと足を運ぶ。

「・・・・・・――――――」

同じ頃、その様子をクラウディア内部で見ていたリンディやアレックス達も愕然としていた。

「グラトニー・ガルバの完全消滅を確認！ユーノ・スクライア元無限書庫司書長の勝利です！！」

「信じられないわ・・・まるで動物を手懐けるみたいに簡単に・・・ユーノ君・・・この四年の間に一体何があったというの・・・！？」

黙して語らずのユーノがなのは達の下に歩いてくると、なのはは顔色を不安にさせながらユーノに恐る恐る声を掛ける。

「・・・ゆ、ユーノ君・・・」

すると、そんななのはの不安とは他所にユーノは何時もなのはに向けるときと同じ柔らかい表情でなのはにこう言った。

「怪我はない・・・なのは・・・」

その言葉を聞いたなのはも思わず頬を赤らめると、心の底から安堵する。

「！（よかった・・・本当に・・・昔のままの・・・私の知ってる・・・ユーノ君だ・・・！！）」

ユーノの勝利をその目にしっかりと焼き付けた金太郎を始めとするスクライア商店の従業員全員は誇らしげな表情でユーノを褒め称える。

「お見事です、店長。」

「流石は僕らのスクライア商店店長ですね！いや～よかったよかった！！」

「まっ、あれぐらい店長なら訳ねーよな。」

「あはははは♪そんなに褒めなくてもいいよ別に・・・♪本当のことなんだから。あはははは♪」

満更でもないとばかりにユーノは三人の言葉を聞いて扇子を取り出し笑い声を上げる。

そんな手前味噌的なユーノを冷たい目で見つめる恋次。

「（こいつ・・・さり気無く手前味噌な発言したなおい・・・）」

「さて、逃走したスカリエッティの逮捕は後にして・・・今はなのは達の手当てが先かな。少しだけだけど、さっきよりは体が動かせるようになったんじゃない？」

ユーノはそう言うと、指を再び鳴らして結界を解いてなのは達全員を外へと出す。

なのは達もユーノの結界魔法の中で体力と魔力の回復を行ったことで、当初のような体への負荷は全くなくなっていた。

クロノやバックアップが主体のシャマルも、これだけ早い速度での治癒能力には驚かさせていた。

「・・・うそみたい・・・！リンカーエクストリームを使った直後なのに・・・！？」

「確かに・・・この治癒の早さには驚かされた・・・！それに、さっきのお前の変わりようにも・・・ユーノ・・・お前、一体何があったんだ？」

「それを説明するのは、一度クラウディアに戻ってからだクロノ。」

すると、唐突になのはがユーノに向って話しかけてきた。

「ユーノ君！あの・・・！！」

それに気付いたユーノはいつもと同じ様子でなのはの目を見て言葉を返す。

「？どうしたの・・・なのは・・・？」

「・・・帰って・・・来てたんだよ・・・本当に・・・」

なのはの意外な一言を聞いたユーノだったが、暫くの間を置いた後ユーノは答える。

「・・・うん・・・帰ってきたよ・・・ちゃんとね・・・」

お互いに向き合いながら多少照れた様子で四年越しの会話を続ける。

「ちょうど・・・四年ぶりかな・・・直接会って話すの？」

「と言うより、メールも何もしない音信不通の四年間といったほう

が正確なのかな?色々あってねこっちも・・・・・・勝手に何も言わずにいなくなったりして・・・・・・」

すると、ユーノはその場に膝を突くとなのはへ向けて帽子を脱いで深々と頭を下げて謝罪の言葉を口にした。

「本当に・・・すみませんでした・・・!」

全員はこのユーノの行動に目を見開いて驚くが、そのユーノの言葉を聞いたなのはは暫くの間を置くとユーノが思っても居なかった言葉を口にしたのであった。

「・・・謝らないでよ・・・ユーノ君。寧ろ・・・その台詞は私が言うべきなんだから・・・」

「えっ?」

なのはの口から発せられる驚きの言葉に耳を疑うユーノだったが、そんなユーノの目の前で今度はなのはが深々と頭を下げて声を殺して謝罪の言葉を口にした。

「ユーノ君・・・本当に・・・ご免なさい・・・!!」

そんなのはを見ていたはやてやフェイト、フォワードのメンバーも複雑な気持ちで一杯だった。

「なのは・・・」

「なのはちゃん・・・」

そして、なのはの予想外の行動にユーノ自身もかなり驚き戸惑いの表情を見せる。

「何で・・・なのはが謝らないといけないのさ・・・!?勝手に何も言わずに居なくなったのは僕だよ!それなのになのはがどうして謝る必要があるのさ!?」

ユーノにはどうしてもなのはの行動の意図が全く理解できていなかった。

ユーノはそう言ってなのはが何故自分に向けて謝るのかを問いただしてみた。

「そんなの・・・決まってるよ・・・」

すると、なのはから返ってきた答えは意外にも単純だった。

「私がユーノ君の気持ちを何一つ分かっていなかったからに決まってるよ・・・!!」

「え・・・なのは!?」

そのように言うなのはの瞳に浮かぶ溢れるばかりの涙がユーノの目にもはっきりと分かった。

「だってそうじゃない!ユーノ君はずっと一人で私やみんなが自分の空を飛んでいけるようにって影でずっと私達を支えてくれていた・・・!でもそれなのに私達は・・・そんなユーノ君にずっと甘えたままで、ユーノ君自身の気持ちも考えずにいた・・・!!ずっと一人で寂しい思いをしてるんじゃないかとか、私たちのことを恨んで

るじゃないかなんて・・・これっぽっちも思ってなかった!!」

「違う!!僕はなのは達を恨んだことなんか一度も無い!!!確かに、孤独は感じたことがあった・・・でも!恨みなんてものはこれっぽちも抱いたことは無い!!」

「じゃあどうしていなくなったりしたの!?」

「!そ・・・それは・・・」

なのはのその悲痛の言葉にユーノは一瞬何も言えなくなった。

「私がユーノ君の居場所を奪ったからでしょう!?私達がユーノ君を蔑ろにしてきたからでしょう!?」

「!!」

なのはの口からは絶対に言われることのない自分に対する非情な言葉にユーノはかなり驚かされていた。

勿論、なのはだけに自責の念があるわけではない。

フェイトもはやてもクロノもこの場にいる古くからのユーノの知り合いは皆そうであった。

「独りぼっちだったんだよね・・・私たちの前では心配かけないようにって表面上は笑顔で誤魔化してたけど、本当は・・・ずっと一人で寂しかったんだよね・・・」

「なのは・・・」

声を絞りながら始まるなのはの言葉に思わず胸が痛くなるユーノ。

「私ね・・・ユーノ君がいなくなってからの四年間は・・・本当に苦しかった・・・どんなに仕事や子育てに精を出しても・・・どんなに仲の良い友達や家族と一緒にいても・・・心にぽっかり空いたユーノ君へのこの想いは・・・ちっとも埋まらなかった・・・」

「え・・・・・・？」

「それでね・・・居なくなってから私、漸く気が付いたんだ・・・あの時のユーノ君・・・まるで小さいころの私と一緒だったってこと・・・」

「昔の・・・なのはに・・・・！？」

「あなたの辛さも孤独も、もっともっと理解するべきだったのに・・・私はあなたと違って不器用で・・・意固地で・・・前だけしか見てなかったらから・・・後ろを振り返ることも忘れてたんだよ・・・」

なのははまるでこれまでの身勝手な自分の言動を懺悔するかのように次々と反省の言葉を口にする。

「今にして思えば、私は本当・・・どうしようもないぐらいの甘ったれだって実感する・・・初めて魔法を使ったのは他でもなくユーノ君を助けたかったからのに・・・いつの間にか逆にユーノ君を苦しめていた・・・悲しい目に遭わせちゃっていた・・・この手の魔法は・・・理不尽な痛みや辛く悲しい想いを打ち抜くためのものだったはずが・・・私は・・・・・私は！！！」

「・・・なのは・・・」

「なのはちゃん・・・」

零れ落ちる親友の涙を見ては自分たちも同じぐらいの辛い気持ちとなるフェイト・はやて。

「大切な人一人救えなかったくせに・・・何がエースオブエースなんだろう・・・バカみたいだ。思い上がりも甚だしいよ・・・・・・私はあなたが居てくれたから空に居られた・・・例え道は違っても見えない絆で私とユーノ君は繋がっていたから・・・なんでもないことでもユーノ君と一緒なら凄く幸せだった・・・ねぇ、ユーノ君は覚えてるかな?子供の頃に言った私の言葉・・・」

「え?」

そう言われた瞬間、ユーノの脳裏に甦ってきた九歳だった自分に向かって発せられた同じく九歳だったなのはの優しい言葉。

〈ユーノ君、いつも私と一緒に居て守ってくれたよね?だから戦えるんだよ。背中がいつも暖かいから〉

「ああ・・・・・今にしてみれば少し恥ずかしい台詞だったかも・・・・・・」

「そうだね・・・・・・だけど、それは今も昔も私は大事にしているよ。私にとって背中を預けられるパートナーはずっとユーノ君だけだから・・・・・・」

「（！）」

その瞬間、ユーノの胸が一気に締め上げられる。

自分は遠の昔になのはにとっての良きパートナーであることを諦め、その役目をなのはの親しい仲であるフェイトに譲り自分は自然となのはと見えない壁を築き上げ、無限書庫という空とは大いにかけ離れた穴倉で静かに見守ることを決め込んでいたのに、当のなのははそんな自分を今でも”背中を預けられる唯一のパートナー”と呼んでくれたのだから。

「確かに、フェイトちゃんも私にとっての大切なパートナーであることに変わりはないけど、それでも安心して背中を預けられるのはユーノ君だけだもん・・・・・私は本当ならもっと一緒にユーノ君と居たかった・・・もっと一緒に笑いたかった・・・でも何時からだったか、ユーノ君は私の前でもあんまり笑ってくれなくなってた・・・そして、その末に・・・姿を消してしまった。」

「・・・・・・」

「私はあれからずっと怖くて怖くて仕方なかった・・・！！大切な人が急に居なくなって・・・初めてその重さに気付かされた・・・！！自分の手の届かない遠いところへいってしまった時の辛さも・・・寂しさもそこで思い知った！寂しい想いが嫌いでそんな想いは誰にもさせたくなかったのに・・・結局最後は自分にしっぺ返しが帰ってきた！背中から感じなくなった暖かさも・・・声も聞けない寂しさも・・・私にとっては何よりも怖かった・・・！！空を飛んでいる時だって、また落ちちゃんじゃないかって不安が飛ぶたびに大きくなっていった・・・！！みんなと一緒に時間を過ごして、ヴィヴィオや家族と笑いあっても・・・それでも・・・一人ぼっちなった

ら不安に負けて何度も声を上げて涙を流した・・・！！」

「・・・！」

聞いているだけで自分も同じぐらいなのはの辛さを理解できるユーノ。

そして、そんなユーノになのはが今迄ずっと堪えていたユーノを失ったときに抱いた孤独の寂しさを全面に涙を流しつつ訴えかけてきた。

「だから・・・もう居なくなったりしないで！もう・・・・・・私を一人にしないで！！！」

「！！」

その泣きながら訴えかけてくるなのはを見た瞬間、ユーノは驚愕と同時に衝撃で何も言葉が出なかった。

「ごめんね・・・私一人で勝手なことばかり言って・・・・・・今更こんな事言うのも可笑しいと思うけど・・・最後にこれだけはちゃんと聞いて欲しいんだ・・・・・・ユーノ君・・・・・・」

「・・・うん・・・話してごらん・・・なのは・・・」

なのはは一度溢れる涙をバリアジャケットの裾で拭い取ると、ユーノの綺麗で澄んだ瞳を真剣に見つめると、頬を若干赤らめながらユーノへの長年の想いを打ち明ける。

「・・・ありがとう・・・じゃあ話すよ・・・私・・・高町なのは

は・・・世界中のどんなに素敵な男性にプロポーズされようと・・・元無限書庫司書長・・・“ユーノ・スクライア”を除いてそれを受け入れるつもりはありません！」

「！！」

なのははとうとう長年の想いの丈をユーノにぶつけることに成功した。

この時が来るのをどれ程待ち望んでいたかとばかりにスバルやはやて達はなのはとユーノに注目する。

「なのはさん・・・！！」

「ついに言いやがったか・・・なのはの奴・・・」

なのはの言葉を聞きいれ、この場にいる中でやはり最も驚くユーノ。

そんなユーノに想いの丈をぶつけたなのはは更に次のような言葉を掛ける。

「・・・ユーノ君がこんな私のことどう思うとも構わない・・・別にそれでユーノ君が傷ついたりする訳でもない・・・でも・・・私のこの想いだけはちゃんと伝えたかった！！もし良かったら・・・返事・・・聞かせてくれる・・・ユーノ君・・・」

すると、なのはの言葉を聞いたユーノは一度黙り込むと口元を緩める。

「・・・・・そんなもの・・・・・・今更言おうがそうでなかろ

うが関係ないのに・・・だって・・・僕のなのはへの気持ちは昔から変わってないよ・・・・・・」

「え？」

なのはもそのユーノの言葉に驚きながらも、ユーノの返事を頬を赤らめたまま待つ。

「この僕・・・ユーノ・スクライアは・・・この世界に生きている限り・・・どの世界の女性よりも・・・・・・“高町なのは”という女性を・・・この魂に誓っても・・・愛してるってことを・・・」

ユーノ自身も少しばかりの涙を瞳に宿すと、自分のなのはに対する長年の想いを素直にぶつけることが出来たのだった。

ユーノの嘘偽りの無い言葉を聞いたなのはは、その瞬間余りの嬉しさに抑えきれないばかりの歓喜の涙が流れてきた。

「・・・うううう・・・ありがとう・・・ユーノ君・・・！！」

なのははユーノの胸の中に飛び込み背中に両腕を回すと、涙を流しながらユーノの帰還を喜び、それと同時に空白の四年間の寂然が一瞬のうちに消え去る。

「ありがとう！！本当に有難う！！そして・・・お帰りなさい・・・ユーノ君・・・！！私も・・・そんなユーノ君を・・・私の魂に誓っても愛しています・・・！！」

その言葉を聞いたユーノもこの時ばかりは人目を憚らずになのはを力強く抱き寄せると同じように歓喜の涙を流した。

「・・・うん・・・僕もだ。なのは・・・ただいま・・・なのは。」

ユーノのぬくもりを四年ぶりに肌で感じたなのはの心は、既にこれでもかとばかりに満たされていたのである。

「（やっぱり・・・ユーノ君のぬくもりが・・・一番心地良いや・・・懐かしいよ・・・この安心感・・・）」

そんな心の底から幸せそうに涙を流しユーノに抱きしめられるなのはを見たフェイト達やフォワードメンバー、さらにはスクライア商店の従業員も思わず貰い泣きをする。

「よかったね・・・はやて・・・！！なのはがやっと心の底から元気になってくれて・・・！！」

「ほんまやな・・・！！やっぱりなのはちゃんの隣は・・・ユーノくんが一番やで・・・！！」

「なのはさん・・・本当に良かった・・・！！」

「そうね。あんなに幸せそうななのはさん見るの・・・本当に久しぶりね。」

「でもこれで漸く・・・無事に解決できたみたいですね。あの二人の問題は。」

「うん！なのはさんもユーノ先生も・・・本当に良かった・・・！！」

そんな幸せな雰囲気を漂わせる二人を見ていた恋次は、ほんの少しだけユーノを羨ましく思ってしまう。

「フン。全く・・・近頃の連中は羨ましいぜ・・・ちくしょう！」

「なに阿散井君？そんなに彼女とあんな風なことがしたいの？」

吉良の口から発せられる意外な一言を聞いた恋次は全力で否定をする。

「って違げーよ！！！誰もなのはと抱き合いたいなんて言ってねーだろう！！！」

「おい・・・恋次・・・今の発言はマジでやばかったぞ・・・前見てみろ・・・」

「あっ！？何言ってるんだいち・・・ご・・・！？」

妙な冷や汗を流しながら恋次にそのように語りかける一護。

恋次も一体何を言ってるのかとばかりに取り合えず前を振り向いた瞬間、ユーノがニコニコしながら嫉妬の炎を燃やしながらなのはが切れたときに使う例のフレーズを恋次に向けて口にした。

「恋次さん・・・♪少し頭冷やしましょうかね・・・♪」

慌てて自分の命の危機を感じた恋次はその場から後ずさりしてユーノに説得を申し出る。

「ちょちょちょちょちょちょちょちょ待て待て待てユーノ！！

!!俺は何も言ってないからな言っとくけど!!!なあ頼むよユーノさん!!いや、ユーノ大先生!!!」

しかし、ユーノは恋次のそんな説得に耳も貸さずに鬼道を使用する。

「破道の四十　『土竜落(もぐらおとし)』♪」

すると、恋次の頭上から降ってくる巨大な岩石が恋次をそのまま押し潰そうとする。

「っ!!!!何でいつも俺ばっかり!!!!!!!!」

かわすことも出来ずにそのまま岩石に直撃した恋次は全員の同情の気持ちも空しく岩の下敷きになってしまった。

流石のなのはもこれには唖然としてしまい、ユーノに語りかける。

「・・・あ・・・あの・・・ユーノ君・・・これはちょっとやりすぎなような・・・気が・・・」

「ん?何か言ったなのは♪」

しかし、そんなユーノの悩殺スマイルを間近で見てしまったなのは思わず胸の鼓動を早めて顔を真っ赤にしてしまう。

「はっ!いいえ何も言っておりません!!(もう~~~ユーノ君その笑顔反則だよ~~~!!!)」

下敷きとなって気絶する恋次を見下ろしながら、深い溜め息を吐く一護と吉良。

「恋次・・・お前ってどんだけ悲惨なんだよ・・・」

「これでまた書き込みに阿散井君への扱いが酷いって書かれるだろうか・・・？」

「基本、こいつにとっては美味しい役回りなんだけどな・・・」

その後、ユーノも含めた全員はリンディによってクラウディアで回収されると、一度全員で会議室に集まる。

「何はともあれ一先ず難は去った。今日はゆっくりと静養して、これからの事に控えるとしよう。」

「「「「はい！」」」」

「それにしてもや、ユーノくん・・・何ていうかその・・・」

「何、はやて？言いたいことがあるならはっきり言えばいいじゃないか？」

「いや・・・その・・・あれやな・・・ユーノくんの格好っていうか・・・一体どういう風の吹き回しでそないなもん着てるや・・・？」

はやては全員が恐らく一番気になっていたユーノが着ている正直似合っていない甚平や帽子について質問をしてみた。

「君もその質問か・・・はぁ～～～どうせ似合わないって言うつもりなんでしょう。何処かの真っ黒提督のように・・・」

「おい・・・それは僕か！僕のことじゃないだろうな！！」

クロノはユーノが口にした真っ黒提督という言葉に内心かなり腹を立てた。

これでもかとばかりに意気消沈するユーノを見たなのはやフェイトは慌てて弁解の言葉を掛ける。

「そそそそそんなことないよユーノ！！！とってもよく似合ってるよ！！！」

「ふぇふぇふぇフェイトちゃんの言う通りだよユーノ君！！！！！凄い格好いいよ！！！本当に言葉にも出来ないぐらい！！！！！」

「その言葉にウソ偽りはないかいなのは・・・？」

ユーノの言葉を聞くと、なのはも一瞬固まってしまう。

そして、深々と頭を下げると嘘であるということを素直に認めてしまった。

「・・・ごめん・・・ちょっとウソついてました・・・」

ユーノはなのはの言葉を聞いて自暴自棄に陥ると、仕込み杖を引き出して自分の腹部に向けて突き刺そうとする。

「やっぱり似合ってないんだ！！！！！！ああもうやだ自殺する！！！！！」

それを見た一護や恋次は慌ててユーノの行動を止めに掛かる。

「待て待てユーノ！！！！再会して間もないのに何言ってんだよ！！！！」

「放して下さい一護さん、恋次さん！！！！僕を止めないで下さい！！！！」

「なのはだって冗談の一つぐらい言うって・・・！！考え直せって！！」

「なのはが冗談つくような女性（ひと）に見えますか！！！！僕にとってはなのはは何時までたっても純情無垢な天使なんですよ！！！！」

「（その天使を散々俺との修行で魔王って言ってたのは何所のどいつだよ・・・）」

恋次はユーノの暴走を止めながらあの時の修行でユーノが散々口にしていた言葉を思い出した。

「お、落ち着いてよユーノ君！！御免ね変なこと言って！！！！ほら！！！！謝るからお願い！！ねっ！！！！」

なのはの必死の説得もあってか、ユーノも考えを改めて仕込み杖をしまい込んだ。

「・・・はぁ～～～冗談じゃ済まないからね今度は・・・まっいいか・・・どうせ・・・」

そう言うと、ユーノは懐から予め腹に忍ばせておいた血どりを取り

出し、独り言のように次のように口にする。

「刺しても平気なように血どり仕込んで置いたしね・・・」

「「「えっ!?」」」

ユーノの言葉を聞いたなのは達は一瞬耳を疑った。

何故なら今迄のユーノなら決してこのような性質の悪い冗談など口にしなかったからだ。

「・・・ユーノって・・・こんな性格だったけ・・・!?」

「少なくても私らの知ってるユーノは冗談なんか言う奴じゃ無かったはずだぜ・・・」

すると、そんなヴィータやフェイトの疑問に一護が答えた。

「こいつは四年の間にちょいと性格が変わちまったてな・・・まっ、大目に見てくれよ」

すると、クロノがこれまでの一護の言動を聞いていて真っ先に不審に思った疑問を漸くぶつけたのであった。

「そう言えば一護さん・・・あなたはどうしてユーノのことを知っているんです?ずっと気になってたんですが・・・?」

すると、そんなクロノに向ってユーノ自身がこう語り出した。

「そんなの決まってるじゃないかクロノ♪僕に死神の技の諸々を教

えてくれたのは一護さん本人なんだから♪」

「なっ!?」

「本当なの・・・ユーノ君!?」

なのはを始め此処にいた死神以外のメンバーは驚きを隠せなかった。

「勿論♪一護さんには手取り足取り色々教えてもらってさ!!いや～～あの時は本当にお世話になったな♪ねっ、一護さん♪」

「今じゃ俺を上回る死神になっちまったけどな・・・」

「そう言えば、まだユーノ君のこと詳しく聞いてなかったわね。ユーノ君・・・私たちに説明してくれる。この四年間で一体何があったのか?出来れば、その死神さんとの関係も詳しく・・・」

リンディの言葉を聞いたユーノは飄々とした態度を一変させて、真面目な態度になると全員にこれまでのことを話すことを決意した。

「・・・そうですね・・・一通り事が片付きましたしね・・・話しておきましょうか・・・この四年の間に・・・僕の身に何があったのか。そして、その変化が何をもたらしたかも・・・」

ついに語られるユーノの空白の四年間の真実。

ユーノが何故死神の力を手にしてしまったのか!?

ユーノが何故この四年間なのは達と音信不通を続けていたのか!?

全ては次回明かされる！！

なのはの涙（後書き）

教えて、ユーノ先生！

ユ「今日は、色んな高速移動技についてのお話だよ♪」

ユ「死神の瞬歩、魔導虚や破面の響転、滅却師の飛簾脚、フェイトやエリオのソニックムーブ、なのはのフラッシュムーブと言う風に結構色んな形のものがあるんだ♪」

ユ「どれも・・・同じようなもんだけどね・・・」

フェ「いや、ソニックムーブが一番いい！！（フェイト曰く）」

ユ「だけどその長い髪だと、ソニックムーブで移動するとき邪魔なんじゃないの？今更だけど・・・」

フェ「常にバリアジャケットを着た状態では髪は縛ってあるし、頭上にも気をつけているから問題ないよ。（フェイトスマイル）」

フェ「はっ！はっ！はっ！はっ！（ソニックムーブでユーノの目の前を高速で左右に移動する）」

ユ「（杖でフェイトの足を引っ掛ける）」

フェ「きゃあああ！！！（フェイト杖に躓きその場に転び顔面強打）」

ユ「足元も気にしないとダメだよ・・・♪」

井上織姫の今日の一日

ユーノが現地に赴いたため、コンと二人で留守番をすることとなった織姫。

織「えっと・・・これがこの棚で・・・これがここだよね・・・」

与えられたメモを見ながら商品を陳列する織姫。

すると、一護の体に入ったコンが徐に尋ねる。

コ「織姫さん。この箱どこっすかね？」

織「あ！ちょっと待ってね。それは・・・・・・」

その瞬間、謝って箱に躓く。

織「え！あ、きゃあああああ！！！！」

コ「織姫さん！！大丈夫スッか！？」

織「あは～～～ん！！！どれが何所にあるのか分からなくなっちゃったよ！！！！」

空白の四年間

>i12826—709<

それは、ユーノ・スクライアが七月末に無限書庫を自主退職した、半年前のことだった。

一護と織姫、コンの三人は冬休みを利用して北海道を観光するために足を運んでいた。

レンタカーを借り、苫小牧の雄大な雪景色を見ながらの夜間ドライブを楽しみながら運転をする一護と助手席に座る妻の織姫。

すると、そんな時に夜空に輝く星星をすり抜けるかのように落ちていく流れ星を見た織姫は子供のように興奮を覚える。

「あっ!!流れ星!!」

「ああ。結構デカかったな・・・お?何してんだよ?」

「流れ星にお願いしてるの。私たちがずっと一緒に居られます様にって・・・」

「そうか。」

すると、咄嗟に後部座席に座っていたコンが慌てた様子で織姫に尋ねてきた。

「織姫さん!!俺はその中には!?」

「もっちろん！コン君も入ってるよ！」

「よかった！！！」

「お前も被害妄想激しい奴だよな・・・おっ！？」

すると、その時。

雪道を運転する一護と織姫、コンの目の前で突然強い緑色の光を発しながら突然空間を裂いて現れる謎の物体に一護達は驚愕した。

「「「のあああああああ！！！！！！！！」」」

「きゃあああああああ！！！！！」

咄嗟にハンドルを切った一護だったが、雪道の為に車はスリップをしてしまいそのまま横転してしまう。

その結果、極寒の雪道へと弾き出されてしまった一護は同じように弾きだされた織姫とコンの下敷きになってしまう。

「のあっ！！！ぶへっ！！」

「痛い！！！！」

「げっほ！！！」

そして、一護達は体中の雪を払い徐に目の前を向いてその光の正体を探ろうとした。

「何だ!?あの緑の光は・・・!?」

その瞬間、緑色の光はその輝きを一層増すと一護達の視界を遮ろうとする。

未知なる現象を見て危機感を感じたコンは一護の髪を引っ張りながらその場を離れようと説得するのであった。

「逃げるぞ一護!!!!!何か滅茶苦茶ヤベー雰囲気だ!!!!!」

「落ち着けコン!!!髪引っ張るなよな!!!!!」

すると、織姫が光の中で動くもの影に気付き二人を呼び止める。

「あなた!コン君!!ちょっと待って!?」

すると、光が徐々に晴れていくとその中から現れたのは――――――全身を傷だらけにして意識を朦朧とさせる女性にも似た容貌青年、ユーノ・スクライアであった。

「うっ・・・!!」

一護達も突然のユーノの姿に驚きを隠せなかった。

「人間・・・だと!?って、おいおい織姫!」

織姫は一護の声もそっちのけでユーノの下に近付くと、直ぐに傷の具合を確認する。

「よかった・・・命に別状は無いみたい。ただ物凄い怪我しっちゃ

てる。」

一護とコンも慌ててユーノに近付き状態を観察。

「急いで宿に戻って、お前の盾舜六花で治そう。詳しくこいつにも話を聞かないとなんねーし・・・しっかし、一体何者なんだ・・・コイツは？」

「女みたいにも見えるが・・・男なのかよ！？」

四年前のこの日、黒崎夫妻のもとに突如として現れたこの青年こそ・・・後に、“翡翠の魔導死神”と呼ばれ全次元世界存亡の重要な鍵になろうとは、このとき――まだ誰一人として知る由も無かったのだ。

やがて、急いで宿へと引き返した一護達は部屋まで運ぶと織姫の能力を使ってユーノの治療に取り掛かった。

懸命の治療の末、直ぐに落ち着いたユーノはそのまま暫くの間目を覚ますことなく眠り続け、気付いたときには既に午前０時を過ぎていた。

「・・・ん・・・――あれ・・・ここは・・・！？」

見慣れぬ部屋の天井や様子を見て、不審に思うユーノ。

すると、ちょうどその時部屋のほうへと戻ってきた一護と織姫がユーノに気付いて声を掛けてきた。

「ああ、よかった！！目が覚めたみたいですね。」

「後遺症も無いみたいだし、多分大丈夫だろうぜ。俺、こう見えても医者なんでよ！安心してくれよな！」

「あなた方が・・・僕をここまで運んできてくれたんですか・・・？」

「ああ。俺は黒崎一護。こっちは妻の織姫だ！」

「どうも！初めまして、黒崎織姫です！え～と・・・取り合えずあなたの名前も聞かせてくれると嬉しいんだけど・・・いいですか？」

「はい・・・僕はユーノ・・・ユーノ・スクライアというものです。」

「ユーノ・スクライアか・・・あんまし聞かない名だな。外国から来たのか？」

「け～と・・・あのその・・・何と言いましょうか・・・確かに外の国という言い方はあながち間違いではないんですけど・・・」

「けど・・・何だよ？」

「・・・“この世界とは違う世界”から来たという言い方をしても・・・信じては貰えないでしょうね・・・」

「「えっ！？」」

普通、このようなことを聞かされると大概の人間は冷静な対応が出来なくなるものだ。

しかし、二人の場合は普通の人間とは違っていることが多々あり、この世界とは違う世界と聞かされても何ら疑問には思わず、自分達が幾度となく訪れた別世界の話のことであると、思ったのであった。

「俺達の住む世界とは違うっていうと・・・じゃあ、やっぱりお前も“尸魂界（ソウル・ソサエティ）”からやってきた死神か何かか？」

「・・・はい・・・！？」

勿論、一護達の常識を全く理解していないユーノにとってそれは支離滅裂な単語を聞かされたことに過ぎなかった。

「あの・・・今何と仰っしゃいました！？死神・・・！？ソウル・ソサエティ・・・！？何が何だか僕には見当がつかないんですが・・・！？」

「あなた。どうやら私達の言ってることとユーノさんが言ってることはまったく別の話みたい・・・」

「あ・・・そうなのか・・・？そいつは悪かったぜ。じゃあさ、ユーノだっけか・・・お前の言う異世界っていうのが何なのか、もっと詳しく話してくれねえか？俺達も後で詳しい話をするからよ。」

「はい。分かりました・・・それじゃあ・・・話します――――・・・」

ユーノは一護達にこれまでの経緯を全て赤裸々に語り出した。

「僕はつい最近まで、時空管理局というあらゆる次元世界・・・即

ち色々な異世界の安全と平和を守るために日々管理をする組織の一員で、そこのあらゆる世界の情報が網羅された無限書庫で司書長を務めていました。」

「へえ～まだ俺達と同じぐらいなのに随分すげーんだなお前！」

「・・・別に大したものじゃありませんよ。魔法検索能力が人よりちょっと優れていれば、誰でも出来るような役職です。」

ユーノが口にした魔法という言葉に一護や織姫は興味をそそられた。

「ま、魔法って・・・あの！？」

「あ！二人にはまだ言ってませんでしたね。そうです、僕がいた世界ミッドチルダでは魔法が発達し、管理局はその魔法の力を有効に使って各世界の管理を行っているんです。」

「なんか・・・ＳＦ漫画の類だな・・・おい・・・」

「普通の人ならそう思うのは当然でしょうね。」

「あれ？そう言えばさっき無限書庫司書長だったって過去形で話してたけど、どうしてなんですか？」

織姫はふと思った疑問をユーノに尋ねると、苦笑しながら真実を語るユーノ。

「あはは・・・実は色々とありまして、管理局を辞めたんですよ。ほんの二週間前に・・・」

「辞めた!?何でだよ?人間関係か何かか。それとも誰かの権力闘争の犠牲になったのか?」

「いえ、別にそう言った理由で辞めた訳ではありません!自主退職ですよ・・・管理局に・・・もう僕の居場所は無い・・・そう思ったからですよ・・・」

「「――――――・・・・・・」」

ユーノの人知れぬ深い悲しみを感じ取った二人は、掛ける言葉が見つからなかった。

「それで、管理局を辞めた後僕は異世界を放浪としながら古代遺跡の発掘に精を出していました。元々、スクライアは遺跡発掘を所業とする一族なものですから・・・本格的にそっちのほうに戻ろうと思いまして。そんなある日、ある世界の古い遺跡で僕は謎の高エネルギー体を発見したんです。調査団に依頼して保管して貰うとした矢先でした・・・唐突にそれが僕の目の前で爆発を起こして、その衝撃で次元空間を彷徨い・・・気がついたら・・・」

「俺達に助けられてって訳か・・・」

「幸い、あの時周りには僕以外の生き物は居ませんでしたから・・・これと言った被害も無いと思います。しかし、あの時発生した膨大なエネルギーによってもたらされた次元震にはおそらく管理局も直ぐに気付いたはずです。」

「次元震・・・!?」

聞き慣れない言葉に思わず首を傾げる織姫。

「簡単に言えば、次空間で起こる巨大な歪のことですかね。それが大きければ大きいほど次空間は乱れて、最悪次元世界一つを簡単に消し去るほどのエネルギーを作ってしまうんです。」

「凄い危険なんですね・・・次元震って・・・」

「けどよ、そんなバカみたいにデカいエネルギーをその身に受けたお前は何で俺達が発見したときの怪我で済んだんだ?」

「それが一番の謎といえば謎ですね・・・それに、爆発の寸前僕は確かにあの未知のエネルギーを体の中に取り込んだんです。それ以来、どうも僕の体から以前には全く無かったものを感じてるんです・・・」

「?何だよ一体・・・?」

「僕や管理局に勤める魔法使い、魔導師と向こうでは呼んでるんですけど・・・その人達には皆、リンカーコアと呼ばれる魔力発生の源があるんです。個人の資質によってその強弱も変わってきます。僕の場合はこれと言って魔力もありません・・・しかし、あのエネルギーを取り込んでから、不思議なことに自身のリンカーコアの魔力が上がってる気がするんですよ・・・」

「魔力が・・・上がってるだと!?」

「そんなことって・・・あるんですか!?」

「まずそんなことは無いです。加齢や無理な負担によって下がることはあっても上がることはないですから。なのに、僕はその逆をい

っている・・・それに、魔力とは別の・・・違う力も感じてるんです・・・」

すると、一護と織姫はこの部屋から感じる身に覚えのない自分達が持つ力と全く同じものを感じ、驚愕の表情を見せた。

しかも、それを発生させているのは他ならぬこの青年を置いて他にいなかったのだ。

「!?おい・・・ユーノ・・・ちょっと目瞑って全身の神経を研ぎ澄ませてくれないか!?」

「え?あっ、はい!」

何のことだか解らないまま、ユーノは一護に言われたとおりに目を瞑ると全身の神経を研ぎ澄ませてみた。

すると、一護と織姫はユーノの全身を流れる純粋な霊力をその瞳で以ってはっきりと確認することが出来たのだった。

「これは!?」

「まさか!!」

一護と織姫の声色を聞いたユーノも何事かと思い、目を開けて二人に問いただす。

「え?あの・・・一護さん?織姫さん・・・?どうかしたんですか?」

すると、一護と織姫は互いに顔を見合わせるとある結論に達する。

「・・・ユーノ・・・俺をよく見てろよ。」

そう言うと、一護は徐にその場から立ち上がると腰にぶら下げていた髑髏を模した木のペンダントを手に取ると、それを使って軽く体に押し付けた。

すると、その瞬間一護の体の中から出てきたのは死覇装に身を包み身の丈ほどの大刀を背負った一護であった。

「なっ!!」

ユーノは自分の常識では全く考えもつかないようなことが起こりパニックに陥る。

そんなユーノを見ながら姿が見えるかどうか問う一護。

「この姿の俺が見えるのか?」

「なっ・・・!?どう言うことですか一護さん!!何で一護さんの身体から一護さんが!?しかもその格好と背中の剣は何ですか・・・!?」

「これが俺らの言ってた死神って奴だよ!それと、ユーノ。お前の言ってる違う力っていうのは・・・恐らく死神が持つ力と同じもので、“霊力”ってもんだ。」

「れ、霊力・・・ですか!?」

一護はそう言うと、ユーノに事の詳細をなるべく解り易く説明し始める。

勿論、頭の切り替えと理解が早いユーノにとってそれを納得することなど人一倍容易であったことは間違いなさそうだった。

「あ・・・はい・・・つまり、僕にもその霊力があのエネルギー体によって備わってしまったということでいいんですかね・・・？」

「多分な。魂魄であるこの姿が見える以上、そう断言しても良いと思うぜ！しかしまさか・・・魔法使いが霊力手に入れるなんてよ・・・ちょっと羨ましいというか何と言うか・・・ある意味凄げえかもな。」

「そうだね！魔法使いって事は、色んな魔法が使えるんですよね！動物に変身したりとか♪スンゴイ技使ったりとか♪」

「動物に変身する・・・のは確かに出来ますかね。僕も子供の頃は一時期その姿で居ることが多かったですから。でも、凄い技を出すまでは流石に・・・僕は分類で言えば結界魔導師。つまり、防御専門で攻撃魔法はからっきしなんです。」

「そうか・・・」

「すみません。何か私無理言っちゃいまして・・・」

「あ、いえ。別に気にしてませんよ。事実ですから。しかし今はそんなことよりも、この身についてしまった霊力に関してもう少し詳しく知る必要が出て来ましたね。」

この時、ユーノは自分の胸に手を当てながら心の中でふとこんなことを考えていた。

「（一護さんの言う死神の力・・・霊力というものがどれほどのものかはまだ分からないけど、ひょっとしたらこの力が使えれば・・・また・・・なのはの側で闘うことが出来るかもしれない・・・もう一度自分の力でなのはの背中を・・・守ってあげられるかもしれない・・・だとしたら僕は何としても――――――）」

そんな渇望と期待を抱いていたユーノ。

と、その時一護はユーノの表情から見て取れた何か大切なものを守りたいという強い想いと覚悟をしかと読み取り、一度考え込んでからあっさりと結論に達し――――――次のの様に語った。

「なぁユーノ。あのさ、それなら俺で良ければ出来る限りのこと教えてやるってもいいぜ！」

「え？本当ですか一護さん！？」

一瞬驚きの表情を見せるユーノだが、一護は直ぐにこう口にした。

「ああ。困ったときはお互い様だろ！何か事情はよく分かんねぇけど、お前にもお前なりに何か守りたいもんがあるんだろう。そう言う事なら俺なんかで良ければいくらでも力を貸すぜ。色々教えてやるからよ、しっかりついて来いよな！」

ユーノはその言葉を聞いた途端、思わず表情を緩め嬉々としたものに変わった。

「一護さん・・・はい。よろしくお願いします！」

ユーノは一護と織姫の二人に深く頭を下げ、内心この上もなく深い喜びを感じていた。

こうして、ユーノ・スクライアは死神代行黒崎一護の手によって、身につけた魔法以外の新たな能力（ちから）、霊力に関する扱いを憶えていくことになったのだ。

そこまでのことを、ユーノはクラウディアに居たなのは達全員に話をしていた。

「あの後、一護さんに暇を見ては霊力の扱いから死神に関する色々な知識や基本的な技の数々を教えてもらった僕は、死神の能力を開花させその後浦原喜助さんという人の元を訪れて一から九十九番までの破道と縛道の使用法を一通りマスターし、一護さんとの修行で僕の中に眠っていた斬魄刀の真の力を解放させることに成功したんだ。」

「こいつ、いつの間にか詠唱破棄で九十番台の鬼道まで使えるようになっていやがった時には流石にムカってきたぜ！」

「いや～～～どうも僕としては、魔法よりも鬼道の扱いのほうが思った以上に簡単でしてね・・・ちょっと練習したら結構使いこなせたものでしてね。ははははははは♪♪」

ユーノは飄々とした態度で扇子を広げながら高笑いをする。
そんなユーノを見て内心かなり腹を立てたのは一護や恋次の二人であった。

「ははははじゃねぇよ！俺がどんだけ苦労して苦手な霊力操作をしてきたか解ってるのか！？」

「仕方ないですよ♪元来一護さんの霊圧は莫大な分、そういうのをするのには雑なんですよきっと♪」

「卯ノ花さんと同じこと言うのはやめろ！結構気にしてんだぞ！」

「はいはい♪でも・・・鬼道の扱い簡単だったけど、斬魄刀（かたな）の扱いは救いようの無いぐらい酷いものだったな・・・」

そう、確かに当初のユーノの斬魄刀に関する扱いは見て余るものがあったのは事実。

実際、一護との修行の中でもそれは顕著に現れていた。

「のあああああ！！！！」

嘗て級友である石田雨竜が修行のためにとよく使用した滝の近くで剣の稽古を受けるユーノであったが、一護の攻撃に手も足も出ずに逃げるか防戦一方の状態だ。

「だあああああああ！！！！」

岩をも砕き、ユーノすらも斬り捨てようとする一護のやり方にユーノは幾度と鳴く冷や汗をかいた。

「何だよユーノ・・・鬼道の扱いは天才的でも、刀の扱いはまるで駄目かよ!!つーか、逃げてばっかりいないでかかって来いよ!」

「いやだって一護さん・・・今のは本気で殺そうとしたでしょう!?」

「何言ってんだよ!本気でやらねーと意味無いだろうが!!いいかユーノ!お前は確かに凄い奴だ!攻撃魔法が使えない分、防御と結界魔法は滅茶苦茶固いし、破道と縛道も俺以上に使いこなせてるほどだ。でもよ、最大の攻撃手段である斬魄刀を使いこなせないと意味がねえんだよ!てめぇの刀・・・『晩翠』だってお前に使いこなせて貰いたがってる筈だぜ。」

「それは・・・そうかもしれませんけど・・・」

「兎にも角にも、刀の扱いもろくに出来ねえようじゃてめぇは・・・一番大事にしてるっていう“高町なのは”って奴をまた大怪我させる羽目になっちまうかもな。」

「なっ!?」

一護のその言葉を聞いて、ユーノの脳裏に蘇ってくる幼馴染の大怪我をしたときの記憶。

ユーノはなおはが事故で動けなくなったとき、ただ傍にいることしか出来なかった。

今でもユーノは思う。

自分がもっと強ければ、自分がもっとしっかりしていれば・・・なのはにこんな思いをさせずに済んだのにと。

「そんな非力な自分が嫌で、そんな臆病者な自分が嫌だから・・・俺とこうして修行してんだろう。今此処で逃げるのも良し・・・俺と戦うのも良し。好きにするといいぜ・・・」

その言葉を聞いたユーノは、唇を咬むと一護にこう言った。

「・・・・・僕は・・・・・・なのはを自分の力で護りたいです!!もう二度と、なのはにあんな辛い思いはさせたくありません!!そのために、僕は一護さん・・・あなたに全力で向っていきます!!!」

「・・・ふん。いい覚悟だぜ。漸く様になってきたじゃねぇかよ・・・そんじゃ、俺も少し本気でいくぜ!」

一護はそう言うと、瞬歩でユーノの下へと移動し斬月の切っ先をユーノの晩翠の刀身目掛けて突き刺してきた。

「ぐっ!!!」

圧倒的な斬月の圧力に耐え切れなくなったユーノはそのまま岩場へと飛ばされ激しく衝突する。

「撃って来いよ!!晩翠を初めて解放したときと同じように、あの緑色の斬撃をな!!」

一護はそんなユーノのことなどお構い無しに手加減無しの修行を続ける。

岩場に響き渡る轟音と衝撃の数々を見ながらコンは唖然としていた。

「容赦ねぇな・・・一護の奴・・・!!」

「大変!!直ぐに治療しないと!!」

織姫はそう言うと、ユーノの治療をするべく走り出そうとしたが、瞬歩で織姫の前に現れた一護によって止められてしまう。

「!?あなた・・・!!」

「まだだぜ!!」

一護はそう言うとユーノの下まで再び向っていき、満身創痍のユーノを叩き起こすと問答無用で修行を続けた。

やがて、激しい打ち身と肉体的疲労により完全に息を切らすユーノとそれを見つめる無表情の一護。

「はっ、はっ、はっ、はっ、はっ!!」

そんな情けないユーノの姿を見た一護は溜め息をつくと、次のように語る。

「・・・ガッカリだぜ、ユーノ!本当に・・・ガッカリだ。てめぇの覚悟はそんなもんだったのか?口先だけの覚悟で、どうにかなると思ってたのか・・・?」

「そっ・・・それは!?」

「ユーノ。今のてめぇを見てると、昔の俺と戦ってるみたいな気分だ。そう、浦原さんは恐怖ばかりを抱く臆病者の俺にこう言った。戦いに必要なのは“恐怖”じゃないって。かわすのなら“斬らせない”。誰かを守るのなら“死なせない”。攻撃するなら“斬る”!ユーノ・・・よーく見るんだ・・・こいつがてめぇが言う“本物の覚悟”だ!!」

一護はそう言いながら斬月を振り上げると、霊圧を研ぎ澄ませて刃先に自分の霊力を収束させてユーノに見せ付ける。

すると、それを見たユーノも漸く自分の本当の覚悟が決まり徐に立ち上がる。

「――――――!」

そして、驚きの表情を見せる一護の目の前でユーノは一護同様晩翠を振り上げると霊圧を研ぎ澄ませて、覚悟の決まった真の眼を見せ付けた。

「――――――僕は・・・・・立ち止まる訳にはいかない・・・!!」

「――覚悟は・・・決まったようだな・・・」

その二人の様子を間近で見ていた織姫とコンは只ならぬものを感じていた。

「なっ、何だよありゃ？斬魄刀が・・・鳴いていやがる・・・！？」

互いの霊圧によってまるで呼応するかのように鳴り響く斬魄刀同士の霊圧の擦れ合い。

「呼び合ってる・・・！！お互いに斬魄刀同士が斬りたくて仕方ないって言ってる・・・！？」

そして、二人はお互いの刀に集めた自身の霊圧を斬撃として爆発的に解放させて衝突を起こす。

「「せりゃあああああああ！！！！！」」

衝突によって、対消滅が起こりお互いに消しあってしまう際に発生する膨大なエネルギーが周囲の木々や岩を巻き込みさらには地面すらも裂いてしまう程だった。

斬撃が収まると、すっかり根を上げてしまったユーノに向って目を細める一護。

「――――そうだ、そいつを待ってたんだぜ・・・憶えとけよ、これがてめぇの“覚悟の証”だ。」

これが、ユーノ・スクライアという魔導師が死神としての真の能力を開花させたときの出来事であったのだ。

「こうして、四年の歳月が流れる間に僕は空座町と隣接する松前市の一角に店を構え、僕と似たような境遇の三人を従業員として雇い、秘密裏に情報収集を行いながら死神や魔導師に商品を提供してたり、なのは達を影でサポートしていたんだ・・・と、こんな感じかな・・

・」

「そうだったんだ・・・でも、だからって何一つ連絡もしないで突然来ることはないんじゃないの！？」

なのははこれまで四年間一度も連絡をよこさなかったユーノの態度に不満を憶えながら奏尋ねると、思わずユーノも苦笑する。

「あははは♪何しろ急を要する事態だったし・・・元よりそんなことをすれば一発で居場所が特定される可能性もあったからね♪」

「それもそうだよな。何しろ、こいつの居場所を知ってるのも一護だけだしな。あ？そう言えばユーノ、お前店のほうはどうしたんだよ？」

恋次が何気なく思っていたユーノに関する疑問を問いただしてみた。

「ああ、それなら織姫さん達に任せてきましたよ♪暫くは僕もスカリエッティの動向に関してこっちで情報活動をしようと思ってますから。」

すると、それを聞いていたはやてが身を乗り出してユーノに六課への協力を要請する。

「じゃあ！それなら私達と一緒に協力してくれへんか、ユーノくん！！今のこの状況を見た限り、この先は更なる戦力強化と人員が必要になってくる！ユーノくんや一護さん達が良ければ是非とも協力を要請する！！」

「私からもお願い！！ユーノ君・・・勝手なことで申し訳ないけど、

この通りお願いします！！」

「「「「お願いします！！」」」」

なのはや、フォワードメンバーを始めクラウディア内部に居たものすべてがユーノに向けて頭を深々と下げる。

すると、ユーノはそんな全員を見てほくそ笑むとなのはに次のように語った。

「・・・そんなの当たり前じゃないかなのは。僕が此処に来た以上、既に答えは出てるよ。ねっ、一護さん♪」

「ああ。何が出来るかはやってみねーことには解らないが、ベストを尽くすぜ！」

「私も是非協力させていただきますぞ！」

「魔導師の連中に関わるのは私の本心ではないが、ユーノ店長の意思を尊重して協力させてもらうとしよう。」

ユーノの言葉を聞いた一護や金太郎、さらには魔導師をあまり好きではない筈の白鳥もユーノの意思を尊重してということで六課への協力を受け入れる。

実は白鳥も、偶々ユーノと似た境遇の立場にあった人間であり虚退治の最中ユーノとは別の未知なるエネルギーの爆発に巻き込まれ、それを偶々管理局の上層部に救われたは良いものの、根掘り葉掘りプライベートやら自分の事を無理矢理聞きだされたり非人道的な扱いを受けたために、魔導師のことをあまり好ましく思っていないの

である。

「ユーノ君・・・みなさん・・・本当にありがとう!!」

なのははユーノや一護達の言葉を聞いて内心かなりホッとした。

勿論それはクラウディアの艦内にいた管理局の局員全員も同じであった。

その後、機動六課隊舎へと戻ってきたなのは達とユーノ達はバックヤードスタッフが用意してくれた豪勢な食事を囲みながら今回の事件解決とユーノの帰還を祝って宴会を開始しする。

「ほんなら、只今より『ユーノくん、お帰りなさい&事件お疲れ様でした会』を開催いたします!!みんな、今日は一日お疲れ様でした!!乾杯!!!」

「「「「「「「「「「乾杯!!!」」」」」」」」」」

「よっしゃ!!!喰うぜコノヤロー!!!」

恋次は目の前に陳列された料理を獣のように貪り喰らいつく。

すると、隣に座っていた一護の分までいつの間にか手を出していたらしく、それに気付いた一護は激怒する。

「あっ!!てめぇ恋次!!!俺の分横取りすんじゃねーよ!!!!」

「ウルセー!!早いもん勝ちなんだよ!!!」

人目を憚らずに子供の喧嘩のようにお互いに殴り合い、野次を飛ばす一護と恋次を見ながら呆れ返ってしまう吉良と浦太郎。

「全く・・・あの二人は昔から元気過ぎるというか何というか・・・」

「本当。食事のときぐらい穏やかに出来ないのかな～～～」

その頃、各自で盛り上がる機動六課の面々を見ながら落ち着いた雰囲気を醸し出すクロノとフェイト。

「しかしあれだな・・・こうして大勢で集まって食事を囲むことなど、本当に何年ぶりだろうか？」

「そうだね。クロノは仕事で殆ど家に帰れないから・・・こういう食事は懐かしく感じる？」

「まぁな。おお、済まない。」

フェイトは隣に座る義兄の手に持つ空のグラスにワインを注ぐ。

「とりあえず・・・お疲れ様、クロノ。」

「お前もな、フェイト。」

二人はそう言うと、ワイングラスで乾杯をし今日一日の労い祝杯する。

一方、豪勢な食事を手につけながら食事を楽しんでいたスバルだったが、ふとなおはとユーノの二人が居なくなっていることに気がつ

きヴィヴィオに尋ねた。

「あれ？そう言えばヴィヴィオ、なのはさんは？」

すると、ヴィヴィオはなのはの上機嫌な様子を察していたが無邪気な笑顔でこう言った。

「へへへ♪ユーノ先生と一緒ですよ！二人きりで・・・♪♪」

さて、当のなのはとユーノの二人はというと、何時もなのはがユーノを思い一人寂しく腰掛けていた月光を窺がえる最高のポジションで二人より沿い月を眺めていた。

そんなロマンチックな雰囲気の中で、頬を赤らめたなのはが何も語ってこようとしないユーノに意を決して尋ねる。

「・・・少し・・・髪・・・伸びた・・・？」

「そうだね・・・最近は髪も切ってないし・・・それに、あまり切りたくも無いから・・・僕としては。そのほうが、なのはのくれたこの髪留め用のリボンが有効的に活用できるから。」

「ユーノ君・・・うん・・・ありがとう。」

すると、なのはは目を瞑ってそんなユーノの肩に徐に頭を乗せる。

「え？なのは・・・！？」

なのはの突然の行動に、根は相変わらず晩熟のユーノは驚きを隠せなかった。

「暫くこうさせてくれる？ユーノ君の温もりを感じたいから・・・」

頬を赤らめながらユーノにそう言うなのは。

ユーノのそんななのはの言葉を素直に受け入れる。

「なのは・・・うん、勿論・・・」

ユーノはなのはの体をさり気無く自分のほうへと引き寄せると暫く間二人の時間を満喫した。

「帰ってきてくれて・・・本当にありがとう・・・ユーノ君・・・」

「僕のほうこそ・・・寂しい思いをさせて御免ね・・・なのは・・・」

さて、そんな六課のメンバーが宴会で盛り上がっているその頃、アルハザードへと転移しスカリエッティは新しく設けられた研究所で新たなる魔導虚の作成に勤しんでいた。

「ふふふふ！！！！！！！！素晴らしい！！！実に素晴らしいよ！！！ウーノ達を失ったのは正直かなりの誤算だったが、これと言って問題でもない！さぁ～～～いよいよ本番といこうじゃないか！！！その昔死神を殲滅寸前にまで追い込んだという、最強の破面達のデータを元に作った・・・この新型“魔導虚”達と共に！！！」

スカリエッティが作り出したこの新型の魔導虚の正体とは！？

そして、アルハザードでスカリエッティが手に入れたものとは何な

のか！？

戦いは――――次なるステージへと向っていく。

空白の四年間（後書き）

教えて、ユーノ先生！

ユ「ヴォルケンリッターは、夜天の書の主を守護するために作られた擬似人格プログラムなんだ♪」

ユ「最後の夜天の書の主であるはやてを守護するのは、リーダーである剣の騎士シグナムさん・鉄槌の騎士ヴィータ・湖の騎士シャマルさん・盾の守護獣ザフィーラさん。」

ユ「この四人が揃えば、八神家最強軍団が完成するんだよ♪」

リ「ちょっと待ってください！！！！リィンの存在を忘れてませんか！！！」

ユ「あれ？そう言えばそんなことすっかり忘れてたよ♪」

リ「酷いですよユーノさん！！！ちゃんと私のことも紹介してください！！！」

ユ「これは失礼。じゃあ、改めまして・・・リィンは初代リィンフォースの残ったプログラムを元にはやてが作り出した二代目の祝福の風。」

ユ「ヴォルケンリッターやはやて達とユニゾンすることによって、その戦闘能力を爆発的に高めたり、その補佐をしたりするんだ♪」

シ「我らヴォルケンリッターに・・・」

ヴィ「敵はねぇな！」

リ「はいです！！」

ユ「ふ～～ん・・・で、前々から気になってたけどヴォルケンリッターのヴォルケンってどういう意味なの？新種のお笑いトリオみたいな名前。」

シ「私がツッコミで・・・」

ヴィ「私とリィンがボケで！」

シ・ヴィ・リ「って！！！私達はお笑いトリオではない（じゃねぇよ）（です）！！！！！」

ユーノ君大全♪

な「今日は、私がユーノ君のこと紹介するね♪」

な「ユーノ君の出身は遺跡発掘をお仕事とするスクライア。ジュエルシードを発掘したのもユーノ君で、私が魔法と出会う切欠になった大きな節目。」

な「端正な顔立ちで、責任感がとっても強い真面目で優しい考古学者さん♪その所為か、広く管理局の女性からは人気が高い・・・む～～～！！！」

一「何がむ～～～だよ。つうか、勝手に許可なくこんなコーナーやって大丈夫なのかよ？」

な「大丈夫ですよ♪ユーノ君は、私には特別優しいですから許してくれますよ♪」

一「あ、そう・・・・・・」

クロノ絶句、強すぎるユーノ

＞ｉ１２６８８―７０９＜

ユーノが四年ぶりになのは達の下へ戻ってきて早一日。

ミッドチルダは束の間の平穏を満喫していた。

時空管理局の局員によって、首都全域の復興作業が急ピッチで行われている中、別次元にある魂魄が住まう世界、尸魂界（ソウル・ソサエティ）を守護する死神で構成された警察機構、護廷十三隊。

その一から十三の部隊を統括する男、一番隊隊長及び十三隊総隊長――山本元柳斎重国の下に旧知の友より伝令が入る。

「報告！次元空間時空管理局本局より伝令が入っております。」

「うむ。」

元柳斎が裏廷隊からの報告を受けて、モニター画面の前に目を向け

るとそこに映し出された人物とは。

『久しぶりね、山本総隊長。クローベルだけど・・・』

時空管理局本局所属、三提督の一人ミゼット・クローベル。

「こうして、言葉を交えるのも随分長いことなかったものじゃの・・・如何様な用件じゃ？」

『ええ。多分、私たちと同じように十三隊（そちらさん）でも恐らく警戒はしているけど思うけど、ジェイル・スカリエッティの真の目的が・・・アルハザードで着実に実行されつつあるということを・・・』

「無論、わし等も警戒は充分にしてるつもりじゃ。技術開発局局長の涅（くろつち）の話によれば、失われた世界（アルハザード）への道はやはり容易には開けぬとのことじゃ。何しろアルハザードに関しては何かと情報が少なすぎる。御主達の誇る無限書庫でもその手立てが見つからないのと同じように・・・」

『そうね。スカリエッティが次なる事を起こす前に、早急に事態解決に向けて頑張らないといけないわよね・・・管理局も貴方達護廷十三隊も・・・』

「何時如何なる事であろうと、世界の正義を壊そうとするものをわし等は赦す訳にはいかぬ！全身全霊を賭してジェイル・スカリエッティの野望を止めてみせよう。」

『うふ。頼もしい限りね・・・流石は重ちゃんね。』

元柳斎の頼もしい言葉を聞いたミゼットは破顔一笑し、悪戯っぽく

字でそう呼ぶ。

すると、元柳斎も少し砕けた様子でミゼットに次のように言った。

「ミゼット・・・頼むから次からはその呼び方で呼ぶのは止してくれ。お互いいい歳じゃ。」

『はいはい。解っているわよ。』

護廷十三隊、そして時空管理局。

相異なるもの同士がお互いの正義の名の下に、一つの人物を追い詰めるために行動を起こそうとしていた。

そんな中、ユーノがミッドチルダに戻ってきたその翌朝のこと。

ユーノは仕事で一時帰還することになった一護を転送するために隊舎の外へと出ていた。

見送りに来ていたのは恋次、吉良を始めとする一護に深く関係する者たちだ。

「そんじゃ、俺は一度向こうに戻るわ！」

「はい♪こちらで何かわかりましたら直ぐに連絡しますので、それまでは仕事と織姫さんのほうに精を出してくださいね一護さん♪」

「おいユーノ・・・まるで俺がいやらしいことするみたいな言い方やめろよな・・・！！」

すると、その一護の言葉を聞いていた恋次がふとこんな事を口にしようとした。

「ああ？何だよ一護・・・お前その歳でまだろくに・・・」

と、恋次がその次を言おうとした矢先。

「リリカルマジカル♪」

ユーノは笑顔で恋次の顔面目掛けていつも手に持っている仕込杖で突き刺した。

「どっは！！！」

杖の先端が顔面を強打し、恋次はその場にしゃがみこみ鼻血を大量に出しながら悶絶をする。

そんな恋次を哀れな目で一護達が見守る中、ユーノはこの場には余りにそぐわないような笑顔で扇子を広げながら恋次に言う。

「恋次さん♪子供の教育上そう言うことを軽々しく口にしないでくださいね♪」

そんなユーノを見ていた一護は心の中でこう思っていた。

「（ユーノ・・・お前その呪文はなのはのじゃなかったのか？つーか魔法使ってねーぞ・・・）」

その後、ユーノの転移魔法によって一護は無事に織姫とコンが待つ自宅へと帰宅し一先ずの作業を終了させた。

一護を見送った後、鼻にティッシュを詰める恋次はユーノにこの後の予定を尋ねる。

「さて、この後どうするんだよユーノ？」

「そうですね・・・金太郎と相談して色々と役割分担しないといけませんね。まぁ、取り合えず朝食を済ませてから動き出すことにしましょう♪」

「相変わらず適当なんだか思慮深いのか解らねーやつだな・・・」

ユーノ達は立ち上る朝陽を背にしながら六課隊舎の食堂を目指して歩み始めた。

三人が食堂へと向っていたとき、ちょうど朝の訓練を終えたなのは達が同じように食堂へと向っていたユーノ達に気付き、この上も無い笑顔でなのははユーノにおはようと声を掛けてきた。

「あ！お早う、ユーノ君♪今朝は早かったんだね！」

なのはの笑顔を見たユーノもやはりこの上も無いような笑顔で返事をする。

「うん、お早うなのは♪さっき一護さんを向こうに送り届けてきたところなんだ。」

それを聞いていたはやてやフェイト達もああそうかと言って納得した様子だった。

「そうか。一護さんも仕事で忙しい身やもんな・・・」

「でもまぁ、ちゃんと協力してくれるって約束してくれたし。」

「ユーノ君、朝食これから？」

「うん。そうだよ♪」

「じゃあちょうど私達も取ろうと思ってたから、一緒に食べよう♪ヴィヴィオもきっと喜ぶと思うよ♪」

「そう。じゃあお言葉に甘えさせてもらおうかな♪」

このとき、なのはとユーノは完全に二人だけの世界へと入り込み他のものを一切受け付けないような幸せオーラと甘いオーラを全開にしていた。

その様子を見ていた六課の隊長陣は兎も角として、何も知らない恋次と吉良は戸惑いの気持ちを見せながら、その甘すぎる雰囲気に吐き気を感じていた。

「何だよこの甘ったるい雰囲気は・・・！？あの二人から感じるこいつの所為で頭が変になりそうだぜ・・・うええ！！何か気持ち悪くなってきた！！！！！」

「ユーノさんもなのはさんも・・・完全に二人きりの世界に入っているね・・・」

その後機動六課のフォワード陣もスクライア商店の面々を集まって何時も以上に賑やかな雰囲気を醸し出す食堂。

では、ここでそんな賑やかな食堂の様子を一度見てみよう。

まずはスクライア商店の従業員が座るテーブルからだ。

「ん？先輩・・・人参もちゃんと食べなきゃ駄目だよ！」

鬼太郎の隣に座る浦太郎は鬼太郎がこの世の食べ物ではないと豪語する人参に全く手をつけていないのを見ると、老婆心を働かせて食べるように説得を試みるが――――

「う、うるせーな！！んなもん喰わなくたって生きていけるわ！！！」

やはり人参はどうしても食べることが出来ないでいる鬼太郎。

すると、そんな子供のような態度でいる鬼太郎を見ていた白鳥が高飛車な態度でこう言う。

「これだから貧相な舌しか持たぬ庶民は困るのだ。いいか、人参には豊富なベータカロテンが含まれておってな・・・それによって・・・」

白鳥の独演会が始まると、すかさず鬼太郎が止める様に怒鳴りつける。

「てめぇの薀蓄なんぞ聞きたくねぇんだよこの焼き鳥！！！」

と、その時鬼太郎の正面にいきなり普段から怖い顔の金太郎が顔面ギリギリのところでひょっこり顔を出してきた。

「のはあああああ！！！！！」

鬼太郎もこれには心臓が止まりそうになった。

「く、熊！！！！！！！！！！！！！」

そんな鬼太郎を凝視しながら金太郎が低い声で人参を食べるようにと威圧感を漂わせながら説得する。

「何をしておいでかな鬼太郎・・・？人参はきちんと食べてくださいませ。」

「あ・・・はい・・・勿論です・・・金太郎さん・・・」

この世のものとは思えないような恐怖を間近で感じた鬼太郎は、恐怖に打ち勝つために、恐怖を拭い去るために普段は絶対に食べることの無い人参を無我夢中で口の中へと放り込んだ。

そんな金太郎の怖さを隣のテーブルで恋次、吉良と供に食事を食べていたヴィータ達ヴォルケンリッターの面々は冷や汗をかいていた。

「こ、怖えーな・・・あのオッサン・・・」

「ああ。俺も散々怖い目にあったからな。」

恋次はそう言うと、スクライア商店での悲惨な修行の日々を思い出していた。

その中でも最も思い出したくなかったのは、金太郎による愛情ある

手解きと称した変体行為の数々と理不尽な攻防戦だった。

「根は良い人なんだとは思うだけどね・・・」

そんな恋次達の様子を窺った吉良は苦笑しながら金太郎の弁護に入った。

さて、一方のユーノやなのは、ヴィヴィオを始めとする幼馴染の面々はというと、久しぶりのユーノとの会話を楽しみながら食事をしていたが、ふと急にフェイトがユーノの格好を見てこう言った。

「それにしてもユーノ、今日もその格好なの？」

ユーノの格好は相も変わらず深緑の羽織と緑色の甚平と帽子であった。

そんなユーノの服装を見たクロノは哀れみの表情を浮かべてこう言った。

「ユーノ・・・お前・・・とうとうファッションセンスまでヘタレてしまったのか？」

クロノがそう口にした瞬間、ユーノが笑顔でクロノの顔面に拳を強打させてきた。

「ぐっほ！！！」

突然の襲撃を受け、強打した場所を押さえながら悶え苦しむクロノにユーノは笑顔でとんでもない言葉を口にする。

「クロノ♪次ぎなのはやヴィヴィオの前でそんなこと言ったら・・・殺しちゃうぞ♪」

「こ・・・子供の目の前で・・・気安く殺すなどという言葉を使う・・・ほうがどうかしてるぞ・・・フェレットもどきが・・・！！」

すると、ユーノの頭の中の血管が切れる音が聞こえた。

「リリカルマジカル・パート2♪」

ユーノは恋次と同様に、今度は先程の攻撃よりも一段階強化された杖の一撃をクロノの顔面目掛けて叩き込んだ。

「ぐっへ！！！！」

クロノはユーノの攻撃を再び受けると、椅子に座った状態でその場に倒れ込む。

「く、クロノ！！大丈夫！？」

慌てた様子でクロノの身を案じるフェイトがクロノに近付き体を起こそうとする。

すると、クロノは顔面を片方の腕で押さえながらフェイト達にこう言った。

「うっ！！！上腕二頭筋が裂傷した・・・！！」

すると、それを聞いていたなのはが苦笑いをしながら次のように言う。

「あのクロノ君・・・そのネタどこかで聞いたことあるけど、ヴィヴィオには専門的過ぎて分からないと思うんだけど・・・」

「つまり痛いということで解釈してもらえばいい・・・」

ユーノの少し・・・いやかなりやり過ぎた行動を見ていたなのははそんなユーノに注意を促すがその表情は何所かにやけた様子であった。

「ユーノ君、駄目だよ♪無闇にクロノ君のこと殴ったりしたら♪」

「あ、ごめんごめん♪ただのスキンシップの一環だったんだけどな♪」

「な～んだそうだったの♪」

人目を憚らずに二人だけの世界へと入り込むなのはとユーノの行動は誰に止められなかった。

そんな二人の様子をなのは同様幸せそうな表情で見ていたヴィヴィオはフェイトとはやてに次のように口にした。

「なのはママもユーノ先生も本当に幸せそうだね、フェイトママ！」

「あれで未だ幼馴染以上恋人突入段階だというのが不思議なんだけどな・・・」

「これからの二人の進展に期待やな！」

そんなフェイト達の様子を見ながら完全に自分の事を忘れ去れていたクロノは内心かなり腹が立ったことは言うまでも無い。

「おい、君たち・・・僕のことは完全無視か!?」

その後何度呼びかけても全くクロノのことなど眼中に無いユーノ達や談笑に夢中になるフォワードメンバーや恋次達を見ていたクロノはついに堪忍袋の緒が切れて、机を叩いて全員の注目集めた。

「よーし分かった!!!」

全員がクロノの突然の言動に注目する中、なのはの隣でいちゃつくユーノに向ってクロノは指を差して宣戦布告をする。

「ユーノ!!君がどれほどまでに強くなったのか、僕と戦って見極めてやる!!君に決闘をここに申し込む!!!」

「「「「なっ!?」」」」

「「「えっ!?」」」

「何!?」

クロノのあまりに突拍子も無い一言を聞いていたフォワードメンバーやヴォルケンリッター、さらには恋次も一度食事を中断して驚愕の表情を見せる。

勿論、驚いているのは何も彼らだけではない。

ユーノの隣に座っていたなのはが誰よりも驚いていたことは間違い

ない。

「えーーーーー！！！！！！！ユーノ君とクロノ君が決闘！！！！！！？？？？？」

決闘を申し込まれたユーノ以上にパニックに陥るなのは。

そんななのはを落ち着かせようと近付いてくるフェイトとはやてを他所に、クロノは不敵な笑みを浮かべながらユーノに勝負か受けるか否かを尋ねる。

「どうだ、ユーノ！この勝負、乗るか！？」

すると、そのクロノの自信に満ちた表情を見たユーノは黒いオーラを出しながら不気味な笑い声を上げながらその場から立ち上がる。

「フフフフフフ愚かなクロノめ・・・いいだろう。二度とその口でフェレットもどきと呼べなくなるように完膚なきまでに叩きのめしてやるよ！無限書庫での不眠不休の日々の恨み、今此処で晴らしてしんぜよう。」

ユーノとクロノはお互いに全員が見てもはっきりと解るぐらいの黒いオーラを出しながら睨み合い火花を散らす。

そんな二人を見ながら恐怖と危機感を感じるスバルやティアナ。

「ティ、ティア・・・何だか凄いことになっちゃったんだけど・・・止めなくても良いの！？」

「私達が止めれるような状況じゃないわよ！！見なさい！ユーノ先

生とクロノ提督の火花!!やる気満々じゃない!?」

戸惑いの表情を見せる二人とは対照的に、割と落ち着いた様子で二人の火花を見ていたエリオとキャロ。

「何だか・・・因縁の対決っぽくなってきましたね・・・!?」

「ユーノ先生とクロノ提督・・・どっちが強いんだろう!?」

すると、キャロの何気ない疑問を耳に入れると先程までパニック状態に陥っていたなのはが意識をはっきりさせると絶対の自信を持ってユーノが勝つと断言する。

「そんなの決まってるよキャロ!!ユーノ君が勝つに決まってる!!ユーノ君は私の魔法の先生だし、結界魔法のエキスパートなんだよ!!それに、今のユーノ君の実力は私たちでも敵うかどうか分からないぐらいレベルアップしてるんだよ!!」

すると、そんなのはの言葉を聞いていた恋次もなのはの考えに同調する。

「そうだな。俺も奴の強さをこの身で実感したからな。俺もユーノに一票だ!」

更に恋次と同じようにスクライア商店の面々もユーノの勝利を確信する。

「僕達は元々店長が勝つと思ってるから!」

「たかが提督レベルが店長に勝てる訳ねーだろが!」

「御意！」

あまりに自分の実力を軽視し、ユーノを褒め称えるなのは達の言動を聞いていたクロノはユーノに対する絶対的な勝利を誓うのである。

「君達・・・さっきから言いたい放題言ってくれるじゃないか！？いいだろう・・・早速模擬戦を始めるぞ！！フェイト！！はやて！！フィールドの準備をしろ！！」

クロノの怒鳴り声を聞いたフェイトとはやては、一瞬ビクッとさせると直ぐに訓練場まで急いでフィールド設定に取り掛かる。

「わ、わかった！！」

「今シャーリーに準備させてもらうで！！」

訓練場に向って走り出す二人はクロノの態度を見て同じ事を思った。

「「（クロノ（くん）・・・血走ってるよ（で）・・・完全に・・・）」」

やがて、全員が注目する中でユーノとクロノはセットされた訓練スペースでお互いに向き合い、闘志を燃やしていた。

「いつかお前とは本気で闘いと思っていたところだ・・・ユーノ」

「それはこっちの台詞だよクロノ・・・昔の僕とは核が違うってことを嫌と言うほど分からせてあげるよ・・・そう、エイミィさんや子供達にも知らないおじさん扱いさせるほどにね・・・」

世紀の対決をビルの上から眺めていたなのは達や、メカニックデザイナーのシャーリー。

尚、リンカーエクストリームの副作用で本来ならリンカーコアの魔力は一週間しないと回復しないのだが、今回はユーノの回復魔法の効果もあってか僅か十時間での回復で済んだのであった。

「ついに始まるんですね・・・管理局本局の切り札の一人、クロノ提督と・・・」

「翡翠の魔導死神として覚醒した元無限書庫司書長、ユーノ先生の戦いが・・・」

「これはこれからの訓練の良い参考になるし、バッチリ記録しておかんとあかんな!!シャーリー、準備はええか?」

「はい!もうバッチリです!!」

シャーリーは二人の闘いの様子を全て見逃さずに観察できるようにと、高性能のハイビジョンカメラをビルの欄干に設置する。

二人の様子を興味津々に眺めていると、恋次は他の局員も二人の対決を見るために仕事のことなどほったらかしで観戦していることに気付く。

「他の連中もこの戦いには仕事そっちのけで観戦かよ・・・!?まっ、無理もねぇよな。お互いに一部門のトップには変わらねえしな・・・」

「クロノ・・・あんまり頭に血を上げすぎたらどうなるか分からないのに・・・大丈夫かな・・・！？」

「私はあのお方の身が少々心配になってきましたぞ。」

「スクライアの剣碗・・・篤と拝見させてもらうぞ。」

フェイトは何時も以上に頭に血を上らせるクロノの身を案じ、金太郎はユーノにおそらくボコボコにやられるであろうクロノを哀れに思い、シグナムは成長したユーノの剣碗に期待する。

そして、ユーノに絶対的な信頼を寄せる両思いとなったなのははユーノに向って応援の言葉を掛ける。

「ユーノ君！！！！頑張ってね！！！！私とヴィヴィオは応援してるからね♪♪」

すると、ヴィヴィオがユーノのモチベーションを上げるような一言を口にする。

「ユーノ先生！！！勝ったらなのはママが御褒美くれるよきっと！！！」

今日は首都全域があのような事態になってしまったが為に、学校は臨時休業となっている。

だからヴィヴィオもこうして二人の模擬戦をなのは達と供に観戦できるのだ。

ヴィヴィオの言葉に更にモチベーションを上げたユーノは笑顔で自分を見つめるなのはとヴィヴィオに向けて同じく笑顔で声援に答える。

「わかったよ♪♪じゃあ、早いところこんな腹黒提督を倒すとするよ♪♪」

「つくづく厭な性格になったな・・・お前は・・・！！だがその減らず口も今に言えなくしてやる！！はやて！！！始めろ！！！」

クロノの怒鳴り声を聞いたはやては少々呆れながら開始の合図を出す。

「はいはい・・・それじゃあ、Ｒｅａｄｙ　ｇｏ！！」

クロノとユーノは開始しと供に真剣な眼差しになると、お互いにデバイスと斬魄刀を取り出して力を解放させる。

そして、クロノは使用杖であるストレージデバイス『Ｓ２Ｕ』を使って晩翠を解放したユーノに向って攻撃を開始する。

〈Ｓｔｉｎｇｅｒ　ｓｎｉｐｅ〉

鳥のようなエフェクトを描く魔力弾『スティンガー』を発射する誘導操作型型射撃魔法。

貫通力が高く、また『スナイプショット！』というキーワードによって弾速が上昇する。

クロノはこれを自在に操る事で複数の対象を一撃の元に撃ち貫くが、

このように高密度に圧縮され高速で飛翔する魔力弾の制御には極めて精緻なコントロール能力が必要とされており、クロノはこの系統の魔法を得手としている。

「スナイプショット！！」

スティンガースナイプをその掛け声と供に弾速を加速させてユーノを追い詰めようとするクロノに対して、その攻撃パターンを完全に頭の中で読み取り防御を使うことなく警戒にかわしていくユーノ。

「くっ！ならばこれだ！！」

〈Ｂｒｅａｋ　ｓｈｏｃｋ　ｗａｖｅ〉

この技は、クロノが四年ほど前に作り上げた新技の一つで、高密度の魔力エネルギーを大放出することで敵を仕留めるＡＡＡクラスの魔法。

すると、ユーノは自身のみを守るために本来は相手を拘束するために用いる筈のチャーンバインドを半円状のドームの形に形成し攻撃を受け止める。

「チャーンバインド」

大放出された魔力エネルギーを防ぎきったユーノ。

それを見たクロノは間髪居れずに打撃系統の攻撃で浮遊するユーノの下へと接近し、Ｓ２Ｕの棒術を駆使してユーノに攻撃を仕掛ける。

「はあああああ！！！」

そんな気合の入りすぎたクロノの攻撃を晩翠の刀身で受け流しながら、ユーノは空いている左手をクロノのほうへ向ける。

「破道の三十二・・・」

「なっ!?」

「『黄火閃(おうかせん)』」

ユーノはクロノの目をくらませるために詠唱破棄で三十二番の破道、黄火閃をゼロ距離で放つ。

その瞬間クロノとユーノの辺りで爆発が起きる。

ビルの上からそれを眺めていたなのは達はユーノの鬼道に驚き、恋次と吉良は感心した眼差しでこう口にする。

「ほう・・・詠唱破棄であれをあのタイミングで撃ったか・・・流石だな。」

すると、なのはは今迄気になっていた何気ない疑問を恋次にぶつける。

「そう言えば恋次さん、吉良さん?前から気になってたんですが詠唱破棄っていうのは一体何なんですか?」

なのはの疑問を聞いた恋次と吉良はなるべく解り易い説明でその質問に答える。

「強い魔法に呪文があるように、鬼道にもそれぞれ詠唱が存在するんだ。しかし、時と場合によってはその詠唱を唱える時間が無いことが多々ある。」

「だからこそ隊長クラスの死神は言霊の詠唱を無視して鬼道による即時攻撃を可能とするこの技術を身につけるが、威力を保持することが難しくて鍛錬が必要なんだ。霊力が高いからと言って大きな数字の鬼道を詠唱破棄で発動できる訳じゃねぇんだ。」

それを聞いていたスクライア商店の従業員である鬼太郎が更に付け足しを加える。

「けど店長の場合、話は別だ！昨日の戦いで、散々目の辺りにしただろう・・・あれだけの詠唱破棄の鬼道・・・」

鬼太郎にそう言われると、なのは達は昨日の戦いで詠唱破棄の鬼道を連発するユーノの姿を思い出す。

「確かに・・・あん時は呪文なんてほとんど唱えてなかったよな・・・ユーノ！？」

「ああ。縛道に関しては全くの無詠唱だった・・・」

「やっぱり凄いよ・・・ユーノ君は！流石は私の魔法の先生！！」

驚くヴィータやシグナムを他所に、なのはは流石とばかりにユーノの凄さを改めて実感し、胸を高鳴らせながら戦うユーノの姿を見つめる。

その頃、クロノはというと黄火閃を喰らう直前シールド魔法で大ダ

メージを避けた後、爆炎の中からバリアジャケットを些か焦がして空に足を止める。

「ちっ！！」

クロノは舌打ちをすると、勝ち誇った表情で自分を見つめるユーノに向っていく。

「舐めるな！！」

クロノはユーノの刀とＳ２Ｕを密着させると、固有振動数を割り出した上で、それに合わせた振動エネルギーの衝撃波を叩き込む格闘魔法、ブレイクインパルスを叩き込む。

〈Ｂｒｅａｋ　ｉｍｐｕｌｓｅ〉

固有振動数を割り出しの際に、目標と接触した状態のまま数瞬の停止が必要で近接格闘能力に加え、高レベルの魔法の制御能力が必要となるため、難度の高い魔法である。

爆発が起こり、ユーノは煙の中から出てくると着ていた陣羽織の肩を多少焦がしながらも空中に足を止めて飄々とした態度クロノを更に挑発する。

「いや～～～危ない危ない！！今の一撃をまともに喰らってたらちょっとは危なかったかな♪」

「（何が危ないだ・・・！？爆発の寸前に瞬歩で移動して直撃を平気で回避したのは何所のどいつだ！しかし・・・まさかここまで強くなっているとは！？ただの結界魔導師だったユーノ・スクライア

はもう此処にはいない。今のあいつは攻撃能力を手に入れた魔導死神・・・一筋縄ではいかないな・・・ならば！）」

〈Ｓｔｉｎｇｅｒ　ｒａｙ〉

クロノは魔力の光弾を発射する高速直射型射撃魔法であるスティンガーレイをユーノ目掛けて発射する。

威力自体はそれほど大きくないものの、弾速が速くバリア貫通能力にも優れており、連射も可能となっている。

スティンガーレイを瞬歩で回避しながらユーノは斬撃をクロノに加えようと接近していく。

クロノはその斬撃をラウンドシールドで防御しつつ、隙を見てはユーノを攻撃せんとする。

そんな激しい攻防を見ていたはやて達は思わず手に汗を握る。

「クロノくんも本気やね・・・あの様子じゃ、相当ユーノくんの実力に嫉妬しとるで。」

「大丈夫でしょうか、クロノ提督？」

ティアナのその言葉を聞いたはやては些か渋い顔で腕組みをする。

「あとでエイミィにもビデオ送っておこうかな・・・少しクロノにお説教してもらわないと・・・」

フェイトの何気ないその言葉を隣で聞いていた恋次はふとこう思っ

た。

「（こいつの老婆心はどこまで鬱陶しいんだよ・・・）」

〈Ｂｌａｚｅ　ｃａｎｎｏｎ〉

クロノが使う熱量を伴った直射型砲撃魔法、ブレイズキャノン。

魔力の放出量を上手く調整・制御する事で、砲撃系ながらも高速、かつ発射後の隙が軽減されている。

ユーノはブレイズキャノンを魔法行使を出来るだけ避けて有り余る霊力を駆使して瞬歩を最大限に活かして飛来するブレイズキャノンをかわしつづける。

すると、そんなユーノの行動の隙を見たクロノはかつてザフィーラに傷を負わせたＡＡＡクラスの中距離広域魔法をユーノの頭上から仕掛ける。

〈Ｓｔｉｎｇｅｒ　ｂｌａｄｅ　ｅｘｅｃｕｔｉｏｎ　ｓｈｉｆｔ〉

大量に精製された魔力の剣が、対象に向かって一気に降り注がれる直射型攻撃魔法、スティンガーブレイド・エクスキューションシフト。

その規模は半端ではなく、剣の数は画面上で確認できるだけでも１００本を超えており、回避が困難な上に並みのシールドでは防ぎきれない。

爆散させた魔力刃の爆煙によって、相手の視界を攪乱させる効果も

あり、大きく魔力を使用する上に詠唱にも時間がかかるらしく、時空管理局武装局員を囮として、不意をついての使用がほとんど。

「ラウンドシールド！」

その刃の雨を得意の防御魔法で全て防ぎきるユーノであったが、刃の雨が降り止んだ瞬間、頭上から自身を狙って魔力をこれまで以上に高めるクロノ。

「なっ！？」

「お前の方こそ、あまり僕を舐めてもらっては困る！！受けてみろ、これが僕の新たなる広域中規模魔法・・・」

〈Ｓｐｒｅａｄ　ｓｔｉｎｇｅｒ　ｗａｖｅ〉

クロノはそう言うと、オーバーSランクを誇るクロノ自身の切り札である最大技、スプレッド・スティンガー・ウェーブを仕掛ける。

自身の収束させた魔力を爆発的に解放させることで、防御不可能な魔力の波濤で他の一切を飲み込む広域中規模魔法。

すぐにユーノも事態に対処するために瞬歩で移動しようしたが、その時違和感を感じた。

「！？これは・・・ディレイドバインド！？」

ユーノの体を拘束するこの魔法は特定空間に侵入した対象に魔力の鎖が絡みつくディレイドバインド。

魔法をセット後に人差し指を曲げるアクションがトリガーとなる、手動発動型の魔法で死角を突いてくる相手に対し、トラップとして仕掛ける戦法が取られる。

「念を置いといてよかった・・・君のその油断が僕に最大の勝因を齎したんだ。感謝するよ・・・このフェレットもどきが！！」

「のあああああああ！！！！！！」

ディレイドバインドで体を完全に拘束されたユーノは為す術もないままクロノの魔力の波濤をその身に受けてしまう。

ビルの上からユーノのその姿を見ていたなのはとヴィヴィオは悲痛の叫びを上げる。

「ユーノ君！！！！」

「ユーノ先生！！！」

こんな展開をどこかで予測していたはやてやフェイト、ヴォルケンリッターの面々を溜め息をついた。

「あっちゃ～～～ユーノくんやっぱりやられてしもうたか～～～」

「ま、クロノは元々長年個人戦で積んできた経験があるし、何よりも数少ないオーバーSランクの魔導師だからね・・・」

「それに引き換え、ユーノは総合Aランクの魔導師・・・いくら死神の力を手に入れたからと言っても、まだあいつには荷が重かったろうぜ・・・」

すると、それを聞いていた恋次がそんなはやて達にこう口にする。

「はっ！何言ってんだよてめぇら。あれよく見てみろよ！」

恋次の言葉を聞いたはやて達が良く分からないままクロノのほうへと目を向けた瞬間、そこで信じられない光景を目の当たりにする。

さて、そんなことなど全く知らないクロノは大量に消耗した魔力と体力が残り僅かとなっていたため、完全に息を上がらせた状態で自分の勝利を確信していた。

「はっ、はっ、はっ。何とか勝つことが出来た・・・しかし、もしも後一歩攻撃が遅かったら・・・こっちが反撃を食らっていたな。兎も角、これであのフェレットもどきの減らず口も聞かなくて済む。さてと・・・一先ず休憩を入れて・・・」

「エイミィとモリモリいちゃいちゃしようっと――――――――♪」

すると、突然後ろのほうから聞こえてきたのは先程自分が間違いなく倒したはずのユーノ・スクライア本人の声だった。

「なっ！？」

クロノは咄嗟に後ろを振り返って攻撃を仕掛けたが、ユーノは瞬歩で回避すると驚くクロノの正面に回りこむ。

「ユーノ・・・！！お前何で・・・」

「何で普通に後ろで喋ってるんだ――――っ・・・かい？さあて、なんでだろうね？」

白を切るユーノのその言動を聞いたクロノは怒りを抑えきれなくなる。

「・・・舐めるなよユーノ・・・聞いてるのは僕のほうだぞ・・・質問を聞き返すな！！！」

〈Ｂｌａｚｅ　ｃａｎｎｏｎ〉

ブレイズキャノンをユーノ目掛けて発射するクロノ。

それが見事ユーノに着弾するのをその目で確認したクロノは再び安堵の溜め息をつく。

「ふん。フェレットもどきか！調子に乗るからこうなるんだ――――・・・」

と、その時。

突然後ろのほうからユーノの斬魄刀、晩翠が首下に当てられるとクロノは絶句し、それを後ろのほうで構えるユーノは低い声でこう言う。

「あれだけ山程撃つとこ見たんだ。もう喰らわないよ。」

「なっ！！」

その瞬間、クロノは危険を感じ高位結界を自身に施してユーノの技、

翡翠斬の攻撃を最低限のダメージで食い止める。
翡翠の斬撃が起こり、空中で爆発が発生する。
爆風が晴れるとそこには高位結界を施したにも拘らず満身創痍となったクロノ、全く無傷の状態で居るユーノが向かい合っていた。
「・・・理解できないよね?さっきの『スプレッド・スティンガー・ウェーブ』には全弾命中の手応えがあった。なのに何でお前はケロッとしているんだ・・・ってね」
「くっ・・・!!」
ユーノのその言葉に不信感を覚えるクロノ。
そんなクロノを見ながらユーノはあるものを手に取る。
「答えは・・・コレだよ♪」
ユーノはクロノに手に取った黒い小さな球体を口元に運ぶと、それを風船のように膨らませていく。
そして、膨張していったその球体が一定の大きさまで膨れ上がると破裂して中からは今のユーノと同じ格好をした人形のようなものが出てきた。
「・・・なに・・・!?」
「ケータイ用義骸だよっ!」

その義骸と呼ばれる死神が現差で行動を取る際に使用される仮の肉体の頬を引っ張りながらクロノに見せ付ける飄々としたユーノ。

「何だそれは!?そんなもの見たことも聞いたこともないぞ!!」

「だってこれ浦原さんに貰った僕専用の義骸でまだ誰にも見せてないからね。いやァ、試しに使ってみたはいいけど結構扱いが難しいんだよねコレ。多分浦原さんと僕以外の人に渡しても使いこなせないよきっと!身代わりにしようにも入れ替わるタイミングが難しいし・・・」

ユーノはそう言いながら自分の義骸の空気を風船の要領で抜いていくと、それを元の大きさに戻して懐にしまい込み驚愕するクロノに更にこう言った。

「で、どうだったクロノ・・・僕の使いっぷりは?いつ入れ替わったか分からなかったかい?」

「くっ!!!まだだっ!!」

クロノは余りの悔しさに冷静さを失い勝つことだけに執着してしまい、不用意にユーノの下に接近し、ブレイクインパルスを仕掛けようとした。

「わからない奴だな。言っただろう・・・」

クロノの軽率な行動に呆れたユーノは晩翠の刀身を軽く回転させると、クロノのブレイズキャノンとぶつけて技そのものを消滅させた。

この光景に、クロノは目を疑った。

「そいつはもう喰らわないって。さっきの間に技の魔法構成は解析したよ。発射に至るまでの筋肉の動きの癖もね。その二つさえ解ればかわすこともタイミングを合わせて相殺させることも可能だよ。まあ、それなりに難しいけどね。」

「そんな・・・莫迦な・・・・！？」

「莫迦なのはお前だよ・・・クロノ。」

すると、ユーノは晩翠をクロノのＳ２Ｕとぶつけた状態で正方形状の陣を描く。

「“晩翠月光歌（ばんすいげっこうか）・沈黙の鎖”」

その瞬間、クロノの周りに展開された正方形状の結界がクロノを包み込むと体の自由を奪い結界から出れなくしてしまう。

「なっ！！何だこれは・・・・！？体の自由が・・・利かない！？」

「僕の魔力と霊力を練り合わせて作った特殊な拘束術だよ。いくらＳランク魔導師のお前の力を以ってしても解く事は不可能・・・さて。」

そう言うと、ユーノは不敵な笑みを浮かべて勝ち誇った様子でこう言った。

「シメといくかな。」

ユーノは再びその場に今度は三角形の陣を描いてクロノの結界に貼り付ける。

「“晩翠月光歌・岸壁の睡蓮”」

すると、その三角形の陣がエネルギーを発すると結界内に閉じ込められたクロノは激しい電撃をその身に受ける。

「のあああああああ！！！！！！！！このフェレットもどき！！！！」

そして、電撃がクロノの全身に流れ込んだその瞬間結界は爆発を起こしてクロノは黒焦げとなったバリアジャケットを身に纏い地面へと落下していった。

そのクロノの状態を見たユーノは空の上からこう告げる。

「・・・勝負ありかな♪安心しなよ、手加減しといたから。いくら僕でも流石に魔力と霊圧を全開で戦う訳にはいかないからね。頭に血を上げすぎだって言われなかったの、“クロノ・ハラオウン提督殿”。」

「くっ・・・！！僕の・・・負けだ・・・ユーノ・スクライア・・・！！」

ユーノの勝利を目の当たりにしたなのはとヴィヴィオはお互いに抱き合う。

「やったあ！！！！ユーノ君が勝ったよ！！！！」

「良かったね、なのはママ！！！」

そして、ユーノの勝利を祝って万歳三唱をする。

「「万歳！！万歳！！わーい！！！わーい！！！」」

一方のはやて達はと言うと、あのクロノの実力をようく知っているからまさか此処まで圧倒的な状態でユーノが勝つとは思っていなかったらしく、かなり愕然とした。

「・・・驚いたわ・・・まさかクロノくんにまで勝ってしもうたでユーノくん・・・！！」

「それにしても、ユーノさんのあの斬魄刀の能力・・・一体どうなってるんですか！？」

「やっぱり恐ろしい奴だぜ・・・ユーノは・・・」

「これでもし彼が十三隊の隊長の穴を埋めてくれれば、心強いのにね・・・」

「スクライア・・・これはまた楽しみが増えるというものだ・・・フフフ。」

「はあ～～～また始まったぜ・・・シグナムのバトルマニア癖が・・・」

こうして、因縁の対決・・・クロノ・ハラオウンとの勝負はユーノ・スクライアの勝利で幕を閉じることになったのだが、これがシグナムのバトル癖に火をつけたことは言うまでもない。

クロノ絶句、強すぎるユーノ（後書き）

教えて、ユーノ先生！

ユ「今日はなのはの技についてのお話♪」

ユ「なのはが最も得意とする砲撃魔法の一つ、ディバインバスター。」

ユ「相手を拘束するバインド系魔法。」

ユ「エクシードモードのレイジングハートから撃ちだされる強力な破壊力を秘めたエクセリオンバスター。」

ユ「なのはの最大必殺技で、フェイト達曰くあんな砲撃をまともに防御できるものがいないと豪語するスターライトブレイカー。」

ユ「どれも、魅力的で全力全開の魔法の数々でしょ♪」

な「もう、ユーノ君ったら褒めすぎだよ！！（かなり照れてる）」

ユ「いやいや事実を言ったまでだよ、なのは♪もし、君の身に何か起こったときはそのときは今度こそ僕が必ず守り抜くから安心して・・・（かなりドキッとするような目つきでなのはと見つめ合う）」

な「ユーノ君・・・（満更でもない表情でユーノを見つめるなのは）」

ユ「なのは・・・（見つめ合う二人）」

一「こらこらその二人!!!!コーナーほったらかしにすんなよ!!!それと見てて恥ずかしいからやめろ!!!!（顔を真っ赤にする）」

恋「うえ!!!!!何だか気分悪くなってきた!!!!!うえ!!!!!（その場で反吐を出す）」

魔導師図鑑ハイパー!

ユ「ほら、これが昔の僕ですよ。」

ユーノは自分の子供の頃の写真を恋次や吉良に見せる。

恋「な!?何だこの・・・・・ちょっと可愛い顔の少年は・・・本当にお前か?」

吉「印象がまるで違いますね・・・」

ユ「僕も正直昔の自分を見るのは恥ずかしくて・・・・・何か、この写真見せると決まってなのは達は涎を垂らすんですけど・・・何ででしょうか?」

すると、そんなユーノの後ろから涎を垂らしながら写真を見るなのはを発見する恋次。

恋「ひっ!!」

ユ「どうしたんですか?」

恋「いや・・・別に・・・何でもねぇ・・・・！！」

禁忌の欠片

＞ｉ１２６４６―７０９＜

クロノに模擬戦で勝利したユーノ。

その日の昼食、なのはからのご褒美という名の甘い甘い時間を堪能

していた。

「はい、ユーノ君～～～あ～～～ん♪」

「うん♪あ～～～ん」

食堂で相も変わらず平気でバッカプル行為を繰り返し、周囲に甘い雰囲気を漂わせる二人の世界に入ったユーノとなのはを、最早誰も止めることはできない。

そんな二人を見て、恋次は流石に我慢が出来なくなり注意を呼びかける。

「って！！人前で平気でいちゃつくんじゃねーよお前ら！！・・・見てるこっちの気持ちも考えろよな・・・！！」

すると、そんな恋次にはやてが宥めるようにこう口にする。

「まぁ～ええやないの恋次さん。なのはちゃんやってユーノ君と一緒に過ごせるのは四年ぶりやし、別に今更気にすることでもないですよ。」

「それにほら！なのは・・・あんなに笑ってるいるじゃないですか。あそこまで笑ったなのはを見るのは本当に久しぶりなんですよ。」

フェイトに横からそう言われ、改めて幸せそうななのはを見る恋次。

そんな恋次に今度はヴィータやシグナムが口を挟んできた。

「思えばこの四年間・・・ユーノの野郎が居なくなっちまってから

はあいつ作り笑いしかしてこなかったからな。」

「それだけ、スクライアの存在がなのはにとって大きな存在だったと言うことだ。皆を見ろ。なのはが心の底から笑えば我々も自然と笑みが零れる。解ってくれ、阿散井。」

「・・・解ったよ。仕方ねえから、今回は目を瞑って見逃してやるよ・・・」

「その割には結構気にしてるみたいだね、阿散井君。」

「う、うるせー!!!何でもねえよ!!!」

吉良の一言に思わず恋次は赤面させるとすぐさま否定の言葉をぶつける。

そんな恋次を見ていたフォワードメンバーやはやて達、さらにはスクライア商店の面々は笑い声を込み上げた。

そして、昼食を済ませたなのははフォワードメンバーを引き連れて訓練場へと足を運び、午後の訓練を開始する。

「さてと♪今日は何時も以上に調子がいいから、早速午後の訓練にはいろうか♪」

「「「「はい!」」」」

すると、何時も以上に血色のいいなのはを見ていたスバルが念話でティアナに話しかける。

「（ねぇ、ティア・・・なのはの血色が何時も以上にいいのは気のせいかな？）」

「（あれを見て気のせいって思う？ユーノ先生がこっちに戻ってきてから、なのはさんの機嫌上がりっぱなしじゃない！？）」

「（笑ってるなのはさんって・・・実は何時も以上に怖いんですよね・・・）」

「（訓練メニューも何時も以上に密度濃くなりますしね・・・何だか心配になってきたな・・・）」

「四人とも、どうかしたの♪」

上機嫌ななのはに話しかけられたフォワードメンバーは途端に背筋を凍らせ、なのはのほうへと振り返り綺麗に整列をする。

「「「「いえ！！！何でもありません！！！」」」」

そんな四人とは違い、先程からシグナムや恋次達は自分達の鍛錬のためにお互いに話し合っていた。

「阿散井・・・お互い忙しくて中々やる機会がなかったが、約束どおり私と模擬戦してくれるか？」

「ようし、いいぜ！俺の圧倒的な力で叩きのめしてやるぜ！！」

「吉良、お前も今日は私とやらないか？たまには模擬戦も悪くないだろう。」

「まぁ、それは構わないけど・・・大丈夫なのかい？」

吉良はまるで見下すかのような眼差しでヴィータを見下ろした。

その態度に腹を立てたヴィータは癇癪を抱いて吉良に激怒する。

「くっ！！子供扱いするなこの陰険！！！」

また、鬼太郎自身も模擬戦の相手を探そうと辺りを見回していた。

「そんじゃ、俺は・・・おっ！フェイト、どうだ一緒に！？」

「そうですね。私は構いませんよ。」

そんな恋次達の様子を浦太郎は呆れた表情で一瞥し、隣に立つ金太郎や白鳥と供に深い溜め息をつく。

「みんな好きだね。じゃあ、今日の訓練は僕となのはちゃん、白鳥さん、それと金ちゃんが見てあげるよ。」

「よろしくお願い満たしますぞ・・・」

金太郎の傍から見れば恐怖しか抱かぬような表情に、フォワード陣全員が根源的な恐怖を感じ、後ずさりをする。

「「「「はい・・・こちらこそ・・・よろしくお願いします・・・」」」」

「あれ？そう言えばユーノ君は訓練参加しないんですか？」

クロノとの模擬戦を終えたユーノが現在この場にいないことに疑問を抱くなのは。

「店長は暫し無限書庫で調べものがあると仰っていましたので、それが済んでからでしょうな。」

金太郎の言葉を聞いたなのはも納得した様子だった。

その頃、当のユーノ・スクライア本人ははやてが運転する車に乗って無限書庫へと向っていたのであった。

勿論、格好はクロノと模擬戦をしたときと一切変わらず。

「悪いね、はやて。車出してもらっちゃって。」

「ええよ気にせんでも。しかし、ユーノ君が無限書庫に調べものとは・・・四年前までは極当たり前の光景やったのにな・・・えらい懐かしいな～～」

「個人的にちょっと気になることがあってね。ちょっと使わせて貰う傍ら、アルフや局員の人達に御挨拶もしないといけないしね。ところで、はやて？無限書庫の稼動効率は落ちてない？」

「ああ・・・それは心配には及ばんと思うよ。ユーノ君が作ったあの探索機もフル稼働で起動してるさかい、効率的な問題は以前よりも良くなっとる。」

「そうか。それなら安心だよ♪いや～～～あの機械を作ったのはいいけど何時壊れるかなんて考えたら夜も眠れなかったよ♪司書達のほうも、新しい司書長の下でちゃんとやれてるのとかね・・・♪」

飄々とした態度で扇子を広げながら隣で運転するはやてにそう言うと、はやては一瞬黙り込むと徐にこう口にする。

「・・・ユーノくん・・・一つええこと教えたるわ・・・」

「ん?何をだい、はやて♪」

「・・・今の無限書庫にな・・・”司書長”はおらへんのよ・・・」

「・・・え?・・・」

はやての言葉を聞いて、一瞬耳を疑うユーノ。

「ユーノ君が無限書庫を辞めたって知った局員がな、ユーノ君以外に慕える方はおらへんって断固抗議してな、管理局のほうもその熱意に圧されて司書長の席はずーっと空けたままなんや。“ユーノ・スクライア”という永久名誉司書長という席を残して・・・」

「・・・・・・――――――」

ユーノは一切そんなこと知らなかった。

この四年間の間にまさか自分が勤めていた仕事場でまさかそこまで職場の人間に慕われているとは夢に思わず、話を聞いたユーノは暗い表情を浮かべた。

「そんな暗い顔せんでもええよ・・・別にユーノ君が悪い訳やないし。ただ、ユーノ君はちょっと人よりも真面目すぎるんよ。なのはちゃんや私らの為に頑張ってくれたのは嬉しいけど、それで自分の

こと蔑ろにするのはもうせえへんでよ。これからは、自分の為に頑張って欲しいんよ・・・なのはちゃんもそれを望んどるさかい。」

「はやて・・・・・・」

ユーノもはやての言葉を聞いて少し元気を取り戻すと、はやてに礼を言って無限書庫へ車を走らせるように急かす。

やがて、目的地である無限書庫へと到着したユーノは帽子を取ると内部で何時ものように資料請求で忙しくする司書たちに声を掛けた。

ユーノの声を聞いた司書たちも嘗て自分達が慕った司書長の帰還に驚きを隠せなかった。

「スクライア司書長!!」

「お戻りになられたんですね!!!」

「お久しぶりです!!!」

司書たちの多くはユーノの姿を見るなり一度仕事を中断してユーノの下へと駆け寄ってきったのであった。

「ははは。有難う皆。元気だったかい?」

一人一人に挨拶を交わすユーノ。

すると、奥の方からユーノの傍らで常にサポートをしていたフェイトの使い魔、アルフが慌てた様子で走ってきた。

「ユーノ！！！お前何時戻ったんだよ！？」

「アルフ。君も元気そうでなりよりだよ！」

「あたしのことよりあんたはどうなのさ！？そんな変な格好してさ！？」

アルフはやはりユーノの異様な格好を見ると、鋭い指摘をする。

他の司書も同じであったが、あえて体裁を取り繕うためにコメントは差し控えていたのであった。

アルフに痛いところを疲れたユーノは思わず苦笑し、深い溜め息をつく。

「はぁ～～君もそれを言うのかい？何、僕はいたって元気だよこの通り。ちょっと野暮用があってね、無限書庫に調べものに来たんだよ。」

「そうだったのかい。よっし解った！みんな、久しぶりのユーノの検索魔法だ！！これ見逃した損だよ！！」

アルフの話を聞いていた全司書は検索魔法を始めようと空中へと浮遊するユーノに注目をする。

何しろ、やはりユーノ・スクライアという人物の才能を開花させたこの無限書庫の司書全員は四年前までは平気で数十冊の書籍を見回す彼の姿を目の当たりにしていたのだから。

「あははは・・・あまり見られると返って集中できないと思うんだ

けど・・・」

そんなことを口にしたユーノだったが、早速自身の検索魔法をフルに稼動させて調べたい書籍を一気に５０冊以上棚から取り出し目を通し始める。

ユーノ・スクライアの探索能力は管理局随一のものだ。

一般的な司書が十冊程の本を使って調べものをするのに対し、彼はその数倍の数を使って平気で調べられる能力の持ち主なのだ。

それこそ、事務処理能力に秀でたユーノを誰もが放ってはおかない理由の一つだったのだ。

今回、ユーノが独自に調べているものは・・・・・この数ヶ月、スカリエッティがどのようにして魔導虚を生み出し、どのようにして失われた世界（アルハザード）への道を開くことが出来たのかを調べるためである。

さまざま角度から、探索魔法をかけて膨大な量の書籍を片っ端から調べ上げるユーノ。

だがその作業を以ってしても、根本的な解明への道はユーノ自身が思っている以上に難しい課題であった。

「魔導虚の破片を詳しく調べてみた結果、やはり魔力結合と霊力結合が実に複雑に絡み合って一つの結晶体となっている・・・これでは体の一つ一つが一個の生命体だ。そう、ウィルスのような・・・」

これまでに、機動六課と恋次達が殲滅してきた魔導虚は全てに共通する特徴として、必ず周囲の人間の魂魄や高濃度の魔導師から魔力

を吸収していくというものだった。

「魔導虚は、高濃度の魔力や魂魄に宿る霊力を吸収、成長していく・・・これまでは、その成長途中で殲滅に成功してきたが・・・」

ユーノは一向に晴れることの無い疑問に頭を抱えながら書籍を更に引き出し魔導虚事件に関する資料やそれに付随するデータを調べ上げる。

「解らん。何故ただの虚を魔導虚へと進化させることが出来る？スカリエッティはどんな方法で奴らを大量に生み出した？そしてそれを可能にしたという禁忌遺産（ロスト・ロギア）の正体は・・・？」

ユーノは一度検索魔法を止めると、宙に浮かびながら自分なりに考えをまとめていた。

考えをしながらでも大量の書物が一切落ちることなく浮遊し続けている光景に、彼をよく知る司書達はやはり凄いと言った表情で見つめていた。

「もしも魔導虚が完全体へと進化したら、一体何が起こると言うんだ？考えられるとすれば・・・」

その時、ユーノは頭の中に浮かんだ一護達に深く関わる事件について、ある仮説を立てた。

「嘗て一護さん達が交えた仮面を剥いだ虚の一団・・・破面（アランカル）への進化か！？そしてそれを可能にするロスト・ロギア級の物質と言えば・・・」

ユーノはその際、独自に身に付けた死神の住まう世界、尸魂界の全ての事象が強制収用される大霊書階廊へとアクセスを行い、そこから浦原喜助に関する研究データ記録の中からある物質のデータを取り出し、モニター画面で確認する。

「浦原さんが生み出し、織姫さんの力で以って完全に破壊された禁忌の物質・・・『崩玉(ほうぎょく)』か・・・！？」

その頃、午後の訓練場では恋次を始めとする隊長陣各自が熾烈な模擬戦を繰り広げていた。

「咆えろ、蛇尾丸！！！」

「飛竜・・・一閃！！！」

両者の連結刃がぶつかり合い、激しい金属を鳴り響かせる。

「「ほおおおおおおおお！！！！！！！！」」

恋次とシグナムは刃を元に戻すと、互いに接近に持ち込み剣戟の嵐を巻き起こす。

「やるな、シグナム！ワクワクしてきたぜ！！」

「お前もな、阿散井。久しぶりに本気で戦えそうだ！」

また、別の場所ではヴィータと吉良がお互いにぶつかり合い火花を散らしていた。

「グラーフアイゼン！！」

〈Ｅｘｐｌｏｓｉｏｎ〉

グラーフアイゼンにカートリッジをロードさせたヴィータは、第２形態で推進力で勢いを高めたグラーフアイゼンを吉良目掛けて振り下ろそうとした。

「ラテーケン・・・ハンマー！！！」

「破道の三十一　『赤火砲』！」

吉良は向って来るヴィータの視界を眩ませる為に赤火砲を放ち、爆炎を起こすがそれでもヴィータは構わず飛んでくる。

「でやあああああああ！！！！」

吉良は状況を把握すると、侘助を解放させてヴィータのグラーフアイゼンに対抗する。

「侘助！！」

互いにぶつかり合うデバイスと斬魄刀。

僅かな隙を見て吉良の斬撃がヴィータのグラーフアイゼンを襲い、その瞬間グラーフアイゼンの重さが急激に増加する。

「ぐっ！！！！まだだ！！！！」

ヴィータはグラーフアイゼンの重さに負けじと、それでも尚吉良に向って攻撃を仕掛けようとした。

そして、フェイトと鬼太郎の模擬戦もヒートアップしていた。

「プラズマ・・・スマッシャー！」

「俺の必殺技・・・パート５！！」

フェイトのプラズマスマッシャー、鬼太郎の烈火から飛び出す第五の技・『獄炎斬鬼（ごくえんざんき）』が衝突し合い、爆発が起こる。

その爆発の中から出てきた鬼太郎がフェイトに奇襲を仕掛ける。

「俺、最高！！」

鬼太郎の刀をザンバーフォームのバルデッシュで受け止めるフェイト。

「かなりの自信家なんですね。鬼太郎さんは・・・」

「へっ！自信を持つことは悪いことじゃねぇだろ！おらおら、次ぎいくぞ次！！」

そんな彼らが熾烈な模擬戦を行っていた頃、フォワードメンバーはそれぞれの担当教官によって何時も以上に厳しい個人指導を受けていた。

スバルの場合は、ユーノの帰還によって血色のよくなっているなのはだ。

「アクセル！」

〈Ａｘｅｌ　ｓｈｏｏｔｅｒ　ｓｐｅｅｄ　１０〉

なのはの掛け声と供に、途轍もない速さでスバルを襲ってくるアクセルシューター。

「わっ！？何コレ！？動き速過ぎ！？」

余りの速さに思わずマッハキャリバーで逃げ惑うスバルはもう必死だった。

「そのアクセルシューターはこれまでの訓練の中でも一番早いからね、ちょっとでも気を抜いたら着弾するよ♪」

上機嫌のなのははスバルにそう言うが、当のスバルは半泣き状態であったことは言うまでも無かった。

「あはん！！！！！そんな笑顔で厳しいこと言わないでくださいよなのはさん！！！」

続いてティアナは金太郎による個人指導を受けていた。

「アックスオーガ！！」

金太郎の圧倒的な破壊力を持った巨大な斧型デバイス、アックスオーガを受け止めようとダガーモードのクロスミラージュで対抗するティアナだが、やはり力に圧し負けビルの中へと激突する。

「ぐっ！！！きゃあああああ！！！！」

土煙を上げるビルに向って金太郎が客観的な指摘をする。

「装甲が軽い分、あなたは攻撃に対する耐性が非常に脆い。今のがもし実戦だったならば、間違いなく死んでいましたぞ・・・」

土煙が晴れ、瓦礫の中から飛び出してきた満身創意のティアナはもう一度金太郎に向っていこうと立ち上がる。

「は・・・はい！もう一度お願いします！」

「承知！参りますぞ！！」

また、キャロとフリードは白鳥の独特な個人指導の下で引き続き直接戦闘の方法を身につけている最中だった。

「琴線斬第二章・七十九節、『報復の船頭』！」

白鳥の仕掛ける特殊音波攻撃を耳にしたキャロとフリードは、金縛りにでもあったかのように全く体を動かせない。

「ううう！！！！体が・・・動かない！！！」

それを見た白鳥は自身に見についているもう一つの力、魔力を使って炎熱系魔法をキャロとフリードにぶつける。

「ブレストファイア！」

「きゃあああああ！！！！！」

炎熱系魔法をその身に喰らったキャロとフリードは、凄まじい勢い

で後方へと吹き飛ばされてしまう。

「まだまだであるぞ、キャロ。隙が多すぎて攻撃をするのが実に容易い。お前には才能がある。それを十二分に発揮するには、何よりも先ず動揺しないことだ。幾ら戦ったことの無い相手でも、冷静に対処すれば本来の力を出し切れる！さぁ、もう一度である！」

「はい！お願いします！いくよ、フリード！！」

傷だらけになりながらも、白鳥に立ち向かっていくキャロとフリード。

そんな全員の様子を学校が休みのヴィヴィオは自分の勉強になるという名目のもと観戦をしていた。

「みんな派出にやってるな・・・！もう少しこの平和を満喫できないものかな？」

その時、ヴィヴィオの後ろから聞こえてきたのは無限書庫から戻ったユーノの声であった。

「いや全くだよ。なのはも少しは力を抜けばいいの。」

「あ！ユーノ先生！！戻ってたんですか？」

「うん。あっ、そうだヴィヴィオ。さっきアルフから序に渡してくれって頼まれた本、これで間違いない？」

ユーノはそう言うと、アルフから頼まれていた本をヴィヴィオに手渡す。

「はい！ありがとうございます、ユーノ先生！！」

「いえいえ、どういたしまして。」

「ところで、ユーノ先生・・・お願いがあるんですけど・・・聞いてくれますか？」

「ん？僕でよければ何でも言いなよ！」

ヴィヴィオは何故かもじもじした様子でユーノの方を一瞥しては恥ずかしげな様子でこう言った。

「あの・・・その・・・私がこんな事言うのも何なんですけど・・・なのはママが前に男の人でママと同じ人のことをパパって言うのを聞いて・・・もし、ユーノ先生が良かったら、今度からその・・・”ユーノパパ”って呼んでもいいですか！？」

「はい！？ど、どしたのヴィヴィオ・・・！？急にそんなこと言い出して！？」

いくらユーノ・スクライアと言えども流石に驚きを隠しきれるはずも無かった。

「はい・・・私はなのはママと一緒に暮らしてる今でも充分幸せなんですけど、ユーノ先生と一緒にいるとなのはママ更に幸せそうな顔をしてるのを見ると、私も嬉しくなってきて、小さい頃に一度だけ三人でピクニックに行ったときのこと、今でもはっきりと覚えてます！だからもしユーノ先生がヴィヴィオのパパになってくれれば、もっと幸せになれるから・・・なのはママも私も・・・」

そんなヴィヴィオの願いを聞いたユーノの答えは直ぐに決まった。

「ヴィヴィオ・・・・・うん♪勿論良いに決まってるじゃないか！ヴィヴィオがそう言いたいのなら、僕は文句は言わないよ。」

「本当ですか！？じゃあ・・・え～～と・・・ユーノパパ！！」

「おっと、ヴィヴィオ。そう呼ぶのなら畏まらなくても良いよ。なのはママと同じように普通に話してくれれば良いから。だって僕はヴィヴィオのパパなんだから♪」

「うん！分かったよ、ユーノパパ！！」

そんな和やか雰囲気が流れているその頃、失われた世界（アルハザード）へと根城を移したスカリエッティは、現在研究室に籠もり不気味な笑い声を上げながらこう口にしていた。

「ふふふふ・・・素晴らしい！！素晴らしい！！ついに実現しようとする！！！私の新たなる夢が！！！そうだろ・・・プレシア・・・」

すると、そんなスカリエッティのもとに現れたのは、嘗て大魔導師と恐れられ、スカリエッティが築いた人造魔導師の基礎を発展させたフェイトの実の母、プレシア・テスタロッサだった。

彼女はＰ・Ｔ事件の後、次元空間を彷徨っていたところをスカリエッティに助けられ、アルハザードでの計画を供に担う大事な右腕として尽力していた。

「そうね・・・あなたと私の夢がもう直ぐ実現するのね。そうすれば、邪魔な管理局の連中も死神共も全て・・・消える。そしてあの子は生き返るのね・・・」

プレシアはそう言うと、フェイトを作り出す際に素となった今は亡き愛娘、アリシア・テスタロッサが納められた生体ポットに顔を近づけると愛おしそうにポットを撫で始める。

「ああ・・・アリシア・・・もう直ぐよ。もう直ぐだからね・・・」

「ふふふ!!!!アルハザードそのものには流石に死者をも蘇らせる技術は存在しなかったが、代わりに全てを超越するための技術は山程あった!!そして、この究極のロスト・ロギア・・・『アンゴルモア』の飛び散った破片全てを手に入れたとき、私達は文字通り世界の神となる!!!!」

「どんな事象をも崩壊させ、己の願ったことを具現化させる・・・死神・・・浦原喜助の創りしこの世で最も価値のある物質・・・『崩玉』。その破片である『アンゴルモア』により創り出された魔導虚や新たに此処で創り出された破面魔導虚を使えば、崩玉の完成は近いわ・・・ふふふふふ!!!!!」

「私の調査によれば、残る崩玉の破片は全部で３０個。各世界に飛び散った崩玉の破片は通常のロスト・ロギア同様下手に触れば何が起こるかわからない。ここは先ず彼に行って様子を見て貰うとするよ・・・頼むよ・・・“アスモデウス”・・・」

すると、スカリエッティの言葉を聞いて奥から出てきたのは――――魔導虚が更なる進化を遂げ、仮面を剥いだ新たなる存在『破面魔導虚（アランカル・ロギア）』の一人、アスモデウスであった。

「はい・・・ドクターの仰せのままに・・・」

機械的な返事応答するアスモデウス。

果てして、この破面魔導虚の真の力とは一体如何様なものなのか！？

さて、そんなことなど露知らず日も暮れた機動六課の訓練場になのはの号令によって集まる泥だらけのフォワード陣一同。

「はーい！全員集合！」

「「「「はい！」」」」

「私と戦っていたスバルはともかく、三人はあまり慣れない相手と実戦訓練を積んでいたから、かなり疲れたでしょう。」

「かなりというか・・・」

「物凄く・・・です・・・」

「なのはさんも、何時もの数倍弾の切れがよくてこっちは大変でしたよ・・・お陰でもうクタクタです・・・！！」

「にゃははは♪ごめんごめんスバル。流石に自分でもやり過ぎたと思ってるよ。それぞれこれからは捜査の無い日はこうして個人訓練が殆どだと思うから、みんな・・・最後まで頑張っていこう！」

「「「「はい！！」」」」

「うん！じゃあ、午後の訓練は此処まで。シャーワー浴びて、体の泥をちゃんと落としてから寝るように！」

「「「「はい！ありがとうございます！」」」」

フォワードメンバーは疲れ切った様子で寮に向って思い足取りで戻っていく。

そんな四人を見ながら、なのはの隣に立っていた浦太郎が今日のなのはの訓練で気付いた疑問をぶつける。

「そう言えばなのはちゃん？あのアクセルシューター何か前より威力もそうだし、切れが上がってない？」

「分かります？実は今朝、ユーノ君に見てもらってリンカーコアを酷使過ぎないようにって、少ない魔力で速度と魔力強化が出来るバージョンにレイジングハートの性能を改良してもらったんです。そのお陰で大分体も楽に魔法が使える様になりました。」

「流石は店長ですな！」

「美しい・・・実に美しいぞ。正に愛があってのなせる技術である！」

「そ、そんな愛だなんて！！これくらいは普通ですよ！！私とユーノ君の場合！！愛するなら・・・もっと別の方法があるじゃないですか・・・」

「何だよその別の方法って！？」

すると、突然恋次がなのはの傍に現れて質問をぶつけて来た。
いきなりの恋次の出現に心臓が飛び出しそうになるなのは。
「わああ!!!れ、恋次さん!!!何時の間に!?」
「おいおい・・・人をお化けと遭遇したときみたいなリアクションで見るなよ!全く・・・てめぇはユーノが帰ってきた途端元気になりやがって!ウサギかてめぇは?」
「いいじゃないですか別に!!それで他人に迷惑がかかってないんなら、少しくらいユーノ君といちゃいちゃしても!!」
「お前・・・他人に迷惑かけてないと思ってたのかよ・・・」
他人に迷惑はかけていないと豪語するなのはの態度に、恋次は呆れ返ってしまう。
「やれやれ・・・君も店長も相変わらずの仲良しさんだね!」
「時と場所によっては人目を憚るということも覚えるが良いぞ。」
「ううう・・・は~~~い・・・気をつけます・・・!!」
白鳥の客観的な忠告を聞いたなのはは、羞恥心を漸く覚えたのか素直に受け入れることにしたのであった。
「それにしても、結局ユーノは訓練には参加しなかったな。」
「そう言えば、まだ調べものに没頭してるのかなユーノ君?」

「いや、ユーノ店長なら二・三時間前に戻られていたぞ。多分、ヴィヴィオという子供と一緒にいるのであろう。」

「ヴィヴィオとですか?あっ、そっか!ヴィヴィオも何だかんだ言ってユーノ君に懐いてるからな。多分、今頃ユーノ君にべったりだろうな・・・って!!!そんな呑気なこと言って場合じゃないよ!!!!ヴィヴィオにユーノ君取られるのは御免だよ!!!」

そう思ったなのはは眼の色を変えてソニックムーブに近いスピードで隊舎のほうへと向って走り出したのであった。

「待っててユーノ君!!!!!!!!!!!」

ユーノのこととなると途端に周りが見えなくなってしまうなのはに、恋次や金太郎達は唖然としていた。

「行っちまいやがったぜ・・・なのはの奴・・・」

「愛の力ですな・・・愛の力。」

「乙女の心は実に美しいね♪」

「何かその発言が気障っぽいからやめろよな!ぶっ飛ばすぞ!」

白鳥の気障な台詞に嫌悪感を覚えた恋次は拳を突き立てていつでも殴れる体制に入っていた。

その頃、ユーノ・スクライア本人はというと、誰もいない廊下で地球にいる一護に無限書庫での調査報告をまとめたので連絡をしてい

た。

『崩玉の欠片だって・・・！？』

「間違いないです。スカリエッティは何処かでバラバラになった崩玉の破片を手に入れ、それを使って今まで未完成だった魔導虚もどきやただの虚を魔導虚へと進化させることが出来たのでしょう。崩玉の欠片だけでも、普通のロスト・ロギアと同じかそれ以上の膨大なエネルギーを秘めていますからね。」

『くそ！！織姫が完全に消し去ったはずの崩玉が・・・まさか破片となって奴の手に渡っていたなんて！！』

「ただ問題なのはそこじゃないですよ。僕の推測では、ジュエルシードのように崩玉の欠片は異世界のあちこちに散らばり、何所かに潜伏してるはずです。奴は直ぐに部下を送らせて回収に当たるでしょう。そして、集めた崩玉の破片を全て集めて完全な崩玉として覚醒させれば・・・」

ユーノの次に言おうとしている言葉に思わず緊張を走らせる一護。

「それこそ、全ての次元世界を潰すだけの力を発動させるでしょう・・・」

それを聞いた一護は愕然としながらも、直ぐに止める手立てをユーノに尋ねる。

『対抗策はあるのか！？』

「時空管理局の技術を以ってしても、崩玉と何ら関わりのない以上

詳しい所在地を特定するのは難しいでしょう。そこで、一護さん。あなたは一度尸魂界に行って十三隊の皆さんに協力を仰いでください。崩玉に関する詳しい情報提供と人員増加を。あと・・・開発者の浦原さんにも・・・」

『分かった。このことは恋次達には？』

「これから話すつもりです。午後の訓練もちょうど終わったところですし・・・スカリエッティがアルハザードに身を隠して、崩玉を完成させようとしていることが分かった以上、これは最早争奪戦になるでしょう。奴らと僕達・・・どちらが早く崩玉の欠片を見つけられるか・・・」

『そうだな。よし！それじゃあそっちのことは任せたぜ！』

一護と通信をきり終えると、ユーノは四年前の運命の出来事を思い出していた。

「（そうか・・・あの時僕に死神の力を齎したは・・・散らばった崩玉の破片だったのか！？だとしたら魔力の上昇も話がつく。しかし、一体スカリエッティは崩玉を完成させて何をしようと言うんだ？それに、アルハザードへの道もまだ完全には開けない状態だ・・・兎に角、このことを早くなのは達に・・・）」

ユーノは早急になのは達全員を集めるためにロビーに向おうとした・・・その時。

「捕まえたユーノ君！！！」

突然後ろからなのはが勢いよくユーノに飛びついてきたため、思わ

ずユーノは腰を痛めてしまう。

「のはっ！！？？」

そして、改めて後ろを振り返りこの上も無いくらいの笑顔を浮かべるなのはに同じくこの上も無い笑顔でこう答える。

「な、なのは・・・驚いたよ・・・急に抱きついてくるんだもん♪」

「にゃははは♪ごめんね、ユーノ君♪でも、ヴィヴィオと仲良くしてるかもって思うとじっとしていられなくて、探し回ってたんだから♪」

「そうなんだ。なのはは妬き持ち屋さんだな♪大丈夫だよ・・・僕はなのは以外は眼中にないから・・・♪」

「ユーノ君・・・♪」

「なのは・・・♪」

お互いは手を取り合い、見詰め合うと唇を近づけて誰もいないことを良いことに両想いになって初めてのキスを交わそうとしたが、それを遮ったのは彼女であった。

「ああ！！なのはママとユーノパパがチューしようとしてる！！」

「「なっ！？」」

そう、ヴィヴィオであった。

突然のヴィヴィオの登場に当の二人も慌てて手を離してヴィヴィオの方へと顔を向ける。

「ヴぃ、ヴィヴィオ!!何時の間に!!て言うか・・・えええ!!!ユーノパパって何なの!!!!???」

益々落ち着きをなくし、取り乱していくなのは。

「落ち着いてよなのは!ヴィヴィオがそう呼びたいって言うから僕が許可したんだよ!」

「そ、そうなの!?でもいきなりユーノパパって言うから・・・びっくりしちゃったよ!」

「へへへ♪なのはママは厭だった?」

「え!?そ、そんなことないよヴィヴィオ!なのはママもとーっても嬉しいよ!!だって、私とユーノ君、それにヴィヴィオがちゃんとした家族になったような感じがして・・・」

すると、ユーノはそんななのはの言葉を聞くとなのはとヴィヴィオの肩を自分のほうへと抱き寄せると二人を包み込みながらこう口にする。

「もう僕達は家族だよ、なのは。ねっ、ヴィヴィオ?」

「うん!勿論だよ、ユーノパパ!!」

「ユーノ君・・・ヴィヴィオ・・・うん!そうだね!!」

暫しこの三人の間の周りに流れ込む家族という名の平穏な時間。

そして、午後９時。

ヴィヴィオが寝静まった後、ユーノは隊舎にいる全ての人間をロビーに集めるとクロノやなのは達を中心に、聖王教会のカリムと本局のリンディやミゼットにも緊急の回線を繋ぐと、真剣な表情を浮かべて黙り込む。

そんなユーノを見て、クロノが同じく真剣な様子で議題の提示を求める。

「・・・それで、前線メンバーと恋次さん達、僕やカリム・・・さらには母さんやミゼット提督にまで緊急に回線を用意して一体何を話すつもりなんだ、ユーノ・・・？」

「・・・クロノ、今回話すことは急を要する深刻な事態なんだ。ジェイル・スカリエッティの今後の動向とその真の目的が判明したんだ。」

ユーノのその言葉を聞いた全員は目の色を変えて、ユーノの話に注目する。

「・・・スカリエッティの・・・真の目的・・・！？」

「如何にも。これから話すことは僕たち管理局の人間にとっても、そして・・・恋次さん達護廷十三隊の死神にとっても大事なものになってきますので、全員心して聞いて欲しい・・・」

「――――――――――・・・・・うん・・・分かったよ、ユーノ

君・・・」

なのはのその言葉を聞いたユーノは徐に口を開けてスカリエッティの目的に関することを順に話していく。

「・・・スカリエッティが消えてからまる二日。奴が潜伏していた地上本部地下アジトの捜査が続いているのは知っているね。中々に難儀しているよ。何せ大半があの爆発でほとんどの機材が大破してしまったからね・・・研究記録も何もかも修復には時間がかかりすぎる。」

「・・・前置きはいい、ユーノ。本題を・・・」

「・・・そうだな・・・昼間、クロノとの模擬戦を終えた僕は無限書庫へと赴きこれまでの魔導虚事件に関することを全て些細なことまで洗い直していたんだ。それで、無限書庫での捜査を続けていた矢先、魔導虚の製造法に関してある痕跡から一つの答えを導き出した。そう・・・魔導虚製造を可能にしたロスト・ロギアの正体を・・・」

「――――――――・・・・・・そのロスト・ロギアの正体とは・・・？」

クロノがそう尋ねると、ユーノは暫し間を空けてからそのロスト・ロギアの名を口にした。

「『崩玉（ほうぎょく）』」

「「「！！！」」」

崩玉の名を耳にした瞬間、それを深く知る恋次・吉良さらには恋次から以前話を聞いていたフェイトは驚愕の表情を見せた。

「何・・・だと・・・じゃあやっぱり・・・・!?」

「けど・・・まさか崩玉が破壊されていなかったなんて・・・・!?」

「知っているのか!恋次さん、吉良さん!それにその様子だとフェイトも!?」

「ごめんねクロノ・・・みんな。前にシャークエイジと戦った後、奴の言葉に疑問を持って恋次さんに一度相談してたことがあってね、教えてもらってたの。」

「そうやったんか・・・で、ユーノくん?その・・・崩玉・・・いうんはどんなロスト・ロギアなんや?」

「そうだったね・・・詳しく説明するよ。『崩玉』とは、先代護廷十三隊十二番隊隊長及び技術開発局初代局長、浦原喜助さんが造り出した禁忌の物質だよ。」

「浦原さんって・・・ユーノ君がお世話になったっていう人だよね・・・!?」

「うん。当時浦原さんは死神と虚の領域を瞬時に取り払い、魂魄を強化するための解(こたえ)を摸索し、辿り着いた結果がそれなんだ。しかし、その物質はあまりに危険な故・・・破壊を試みたが結局それは出来なかった。そして、月日が経ち・・・崩玉は藍染惣右介という謀反を起こした元五番隊隊長の手によって奪い取られてしまった。彼はその崩玉を使って、仮面を剥いだ虚・・・『破面(アランカル)』を生み出し尸魂

界を攻め落とそうとした。しかし、十年前・・・一護さん達の活躍もあり何とかそれを阻止。そして、一護さんの妻である織姫さんの能力を以って、崩玉は完全に破壊された筈だった・・・」

『・・・筈だったということは――――――完全には破壊されてはなかったということでいいのかしら、ユーノ君?』

画面から聞こえるリンディのその質問に頷くユーノ。

「・・・ええ。『崩玉』は完全には破壊されずに欠片となってジュエルシード同様各異世界へと散らばってしまった。そして、欠片となった崩玉は名を『アンゴルモア』と変えて今も尚、異世界の何所かで潜伏しているんだ。今迄スカリエッティはアンゴルモアの能力を使って、魔導虚を生み出し魔力と霊力を集めようとし、更なる進化をしようとしていたんだ。欠片だけでも通常のロスト・ロギアと同等かそれ以上の絶大な力を秘めた物質だ・・・もし、スカリエッティが全てそれを集めたら、時空管理局や護廷十三隊の力でも手がつけられなくなる。」

「それ、どういうことですかユーノ先生!?」

事態が未だ飲み込めずにいたスバルがユーノに尋ねる。

「『崩玉』の怖いところは、『崩玉そのものが意思を持っている』ということなんだ。崩玉の真の能力とは、自らの周囲に在るものの心を取り込み具現化すること。」

「心を・・・具現化・・・ですか!?」

「簡単に言えば、ありえないような奇蹟を起してしまうということ

だよ。願いを叶えると言う点においてはジュエルシードと似ているけど、崩玉の場合はその範疇を明らかに超えてしまっている。生き物と言うのは不思議でね・・・いかに制限がある崩玉の能力においても、その矮小な心で願うことなら実現できるようになっているんだ。」

「！！」

全員は常識を逸した崩玉の能力に言葉すら失った。

「現在、スカリエッティの下にある『崩玉』の欠片である『アンゴルモア』は一つ。残りの『アンゴルモア』が奴の手に渡り、『崩玉』が完全覚醒すれば――――」

「完全覚醒・・・すれば――――！？」

なのはの不安の声を聞いた後、ユーノは実に重たい表情で無常な真実を告げるのであった。

「スカリエッティが望むことが最悪の方向に向いているのならば、この世に存在する全ての次元世界が崩壊し、そこで生きる人や動物・・・草木の全てが消え失せ・・・次元世界全てが奴の手に堕ちる。」

「「「「！！！！」」」」

「「「「なっ！？」」」」

「「「「そ・・・！？」」」」

「そ・・・そんな・・・莫迦な・・・！？」

誰しもがこの真実を聞いて落ち着いていられるはずも無かった。
慌てた様子で吉良がユーノに事態解決の方法を尋ねる。

「ユーノさん!!方法はあるんですか!?アンゴルモアを探し出し、回収するための方法が!?」

「・・・その為に、現在『地球』の一護さんには別行動で動いてもらっています。僅かですが・・・まだ時間は在ります。散り散りになった崩玉は非常に不安定な状態にあり、早急に封印処理を行えば被害は出ずに済みます。そして、例え一つにまとまったところで、如何なる手段を用いても完全覚醒まで最低でも一月ほどかかります。崩玉が完成しなければ、スカリエッティも世界を潰すなどということは出来ない。奴が本格的に動き出すのはそれからでしょう。」

ユーノはその場に杖を突くと、鋭い目を浮かび上がらせてなのは達にこう言う。

「決戦はそのときだ!それまでに、僕達は力を磨き各々戦いの仕度を整えなければいけない!時空管理局史上・・・最大の決戦になることは、間違いなさそうだ。みんな、覚悟は出来てるかい?」

すると、それを聞いたフォワード陣や恋次達、そしてなのはも既に覚悟は決まっていたらしく返事をするのであった。

「「「「「はい!」」」」」

「おう!これ以上スカリエッティの好きにはさせてたまるかよ!」

「ユーノ君、もう此処にいる時点で覚悟は皆決まってるよ。大丈夫・・・絶対に世界は私たちで守りぬくよ！だってここには、その為の魔導師と死神さん・・・それに、ユーノ君がいるんだから。」

「――――――うん。そうだね、なのは。一護さんからの情報が届き次第、僕達は各世界に散らばったアンゴルモアの回収に取り掛かる。事が事だけに、十三隊のほうも協力をしてくれると思う。ミゼット提督、リンディ提督！お話は以上です。何かご不備な点がありましたらいつでも。」

『いいえ。私からは何も無いわ・・・よくここまで調べてくれましたね。ユーノ・スクライア元無限書庫司書長。』

『流石はユーノ君だわ。私からも特に無いわ・・・では、これから本局で緊急会議を執り行うから、おそらく六課は頻繁に異世界を動き回ることになるけど、大丈夫かしら。』

「大丈夫ですよ！いつでも動けるようにしてはりますから！それが機動六課です！」

「母さん、心配らないですよ。ここにいるメンバーは皆、優秀で頼りになる人ばっかりだから。」

『そう。じゃあ、会議の報告は後日連絡するからそのつもりでね。』

はやてとフェイトの言葉を聞いて安心したリンディやミゼット、カリムの三人は通信を切り終えると本局上層部の重役を集めて緊急の会議を執り行う。

また、話を終えたユーノは一人隊舎の外へと向うと、海の見える場

所に腰を下ろすとこれからのことに関して色々と考え始める。

「・・・・・崩玉・・・・・・か。スカリエッティが崩玉を完成させれば、災い以外の何も起きないことは間違いない。そして、恐らく奴は既にその手駒である魔導虚の進化形態・・・破面魔導虚を完成させているはずだ。手駒を使って世界に散らばったアンゴルモアを集めさせるつもりだろうが・・・そんなことさせない！僕達が・・・絶対に奴の陰謀を阻止しないといけないんだ。そうだろ・・・晩翠」

ユーノはそう言うと、置いていた仕込み杖を手に取り晩翠に意思疎通を求めると、それに反応した晩翠が具象化してユーノの下に現れる。

その姿はユーノとは実に対照的な体付きのいい非常に長身痩躯な男で、服装は深緑の外套に右眼には虚の仮面のような眼帯をしていたのであった。

「私は常に・・・お前と心は一緒だ。ユーノ・・・お前が望むことをすればよい。私はその為ならいくらでも力を貸そう・・・」

そう言うと、再び晩翠は杖の中へと戻りユーノの前から姿を消す。

そんな晩翠に励まさせたユーノはお礼を言って隊舎に戻っていった。

「・・・ありがとう・・・晩翠・・・」

禁忌の欠片（後書き）

教えて、ユーノ先生！

ユ「今日は破面魔導虚（アランカル・ロギア）についてだよ♪」

ユ「破面魔導虚とは、魔導虚が仮面を剥いで変化したものなんだ。殺傷能力も今迄とは桁違いに上昇し、個人が保有する魔力と霊力も比べ物にならないほど巨大になる。」

ユ「さらに、今迄デバイスだけが己の武器であったが今度は斬魄刀を持つことによって魔力と霊力を別々に分けて戦うことが出来るんだ♪」

ユ「またややこしいのが出てきたな・・・」

ス「ふふふ・・・真の天才とは何でもやってのけるものさ！ははははは！！！！」

ユ「お前・・・敵方の大将なのになんでこのコーナーに出てるのさ？ていうかどっから入った？」

ス「何簡単なことだ。出入り口の確保などとうの昔に済んでいるよ！（出入り口のスイッチを押す。）」

ユ「い、何時の間にこんなもの！？（かなりショック）」

ス「最近は興味をそそるようなことが多くてね、君もその興味の対象の一つさ♪よろしければ今度私の研究室で実験体として働かない

かね?序に自慢のコレクションも見せよう。」

ユ「厭だよ・・・（ていうかどうせえげつないものしかないだろうがこのゴミ虫が。）」

ここで公募です。

次回より始まる、アンゴルモア探索篇のお話の内容を何と読者の方より大々的に募集します。

書いてもらいたい世界、話の内容を書いて感想として送って下さい。

こんな拙い文章で言いという方は是非お願いいたします!!

魔導虚篇

登場人物

ジェイル・スカリエッティ（Ｊａｉｌ　Ｓｃａｇｌｉｅｔｔｉ）

声：成田剣

「Ｄｒ．」の通り名を有する、生体改造や人造生命体の開発に異常な執念を抱く科学者（マッドサイエンティスト）。その目的のために過去幾つもの次元犯罪を起こし、広域指名手配がかかっている次元犯罪者。『プロジェクトＦ』のベースとなった基礎理論を構築した人物でもあるため、フェイトは仕事だけでなく個人的にも彼を追っている。並外れて傲慢且つサディスティックなその性格と言動から多くの者に忌み嫌われておる一方で自身が産み出したナンバーズには深い愛情を注いでおり、クアットロのようにチンクやセッテ達を見下す事をしない他、ＪＳ事件で死亡したドゥーエを弔う為に１本の赤ワインを所望している。

「犯罪者でさえなければ歴史に名を遺す」とさえ称される天才であり、人造生命体研究や機械兵器技術の発展はもちろん、両種を融合させた技術を実用可能な域まで完成させたのも彼である。アンゴルモアの影響を受け、ユーノが力を手にした時と同じくしてウーノ達三人の戦闘機人と共に脱獄を果たし、地上本部の地下深くにアジトを構えて手にした崩玉の欠片であるアンゴルモアを使って成体の魔導虚を数多く生み出し、幾度となく機動六課を苦しめ、ついに反旗を翻して再びミッドチルダにテロを仕掛け、首都クラナガンをコントラフォールによって包囲し、トーレ達の力で魔導虚卵巣を大量に作り出そうとしたが白鳥の音色攻撃を受け計画は失敗に終わるも、その後誰一人辿り着くことの出来なかった失われた世界『アルハザード』へと逃走を果たし、その後は動きを見せていない。

機人四天王

ウーノ（Ｕｎｏ）

声：木川絵理子

ナンバーズの１にして、機人四天王の実務指揮官。ウェーブがかった薄紫の長髪をした女性。クローン培養。スカリエッティの秘書を務める彼の側近にして最大の理解者であり、実務だけではなく精神面からも支えている。実務指揮を執るナンバーズのリーダー格だが、

デスクワーク主体の機体であるため戦闘能力は低い。殆どがモニタ越しの登場で、本人が姿を見せることは少ない。初期に作られた戦闘機人だが、その体内パーツは妹達のデータを元にした最新の物へと更新されている。インヒューレントスキル（以下ＩＳ）は隠蔽と知能加速の能力で「不可触の秘書（フローレス・セクレタリー）」と、新たに手にした広域遮断結界「ラウンドウォール」。クラナガン魔導虚卵巣化の際には海上警備隊の護衛艦と機械融合し機人ロボへと変化。幾度と無く自分の邪魔をしてきた機動六課のフォワード部隊との激戦を繰り広げ、浦太郎達を追い詰めるがその後出現したユーノの母艦、ビルゲイツを誤って取り込んだ事が敗因となり大爆発を起こして敗れ去る。

トーレ（Ｔｒｅ）

声：木川絵理子

ナンバーズの３にして、機人四天王の実戦指揮官。長身で他のナンバーズよりも頭一つ分大きい。純粋培養。稼働歴の長さから来る豊富な実戦経験故にナンバーズの実戦指揮を執り、前線での独自行動も許されている。厳格な性格で他のナンバーズを叱りつけることも多く、また無意味とするものに対してはかなり冷淡。セッテの戦闘技術の師でもあり、機械の様な思考をする彼女を注意することもあった。固有武装は虫の羽に似たエネルギー翼「インパルスブレード」で、ＩＳは高速移動能力「ライドインパルス」。機動六課の魔導師を殺さなかったファイに不服を唱え、スカリエッティの指示を仰がずにら５体の従属官を率いて六課を襲撃。鬼太郎や恋次を相手に圧倒的な実力を見せ付けるも、単独行動に気付いたウーノに連れ戻される。魔導虚卵巣化の時はミッドチルダアーバンレールウェーそのものと機械融合し機人ロボへと変化。吉良・シグナム・ヴィータとの決戦に臨むが敗北、最後は一護の月牙天衝の直撃を受け、バラバラとなって死亡する。

クアットロ（Ｑｕａｔｔｒｏ）

声：斎藤千和

ナンバーズの４にして、機人四天王の参謀役。大きな丸メガネと独特の甘ったるい喋り方が特徴。純粋培養。幻惑等による敵の行動妨害を主体とする実働部隊の後衛だが、それ以上に参謀としての色が強い。ナンバーズの中でも最大の独自行動が許されており、ＪＳ事件では機動六課に対する情報収集を行い、またルーテシアのコンプレックスを刺激して後の行動を操り易いように工作もした。伊達眼鏡であり、ゆりかご最終決戦時では自ら投げ捨てている。固有武装はステルス機能を有するマント「シルバーケープ」で、ＩＳは電子を操る「シルバーカーテン」。教育係だったドゥーエの影響でスカリエッティによく似た考え方をしており、愛想の良い振舞い方の下に非常に危険な思想を隠している。他者の人生に対して毛程にも価値を見出さない残忍な性格で、命の尊厳にも一切の配慮はない。また姉妹間でも本音を明かさない部分があり、内心では妹にあたるチンク・セイン・ディエチのことを見下すなど、その本性は極めて凶悪である。魔導虚卵巣化の時は首都高速道路そのものと機械融合し機人ロボへと変化。トーレとともに計画を推し進めるも敗北し、素体のままユーノが時間差で送りつけてきた反ＩＳライドの波動を受け消え去った。また、消滅する際にトーレに向かって「トーレ姉様……」と涙を流しながら言い残している。

ファイ（Ｐｈｉ）

声　―　真殿光昭

スカリエッティが新たに生み出した戦闘機人にして、機人四天王の最後の一人。痩身で真っ白な肌をした黒髪の男を着ている。魔力光は薄緑色をしている。デバイスを解放していない状態でも鬼太郎の「烈火」の攻撃を素手で跳ね返す、隊長格の恋次を追い詰めるなど、

登場初期より高い戦闘力を見せていた。表情及び感情の起伏が極端に少なく、冷静沈着な行動をとるが、自分の目的外の者や関心から外れる者、気に障る者を「塵（ゴミ）」、「屑（クズ）」、「下衆（ゲス）」と呼んで見下す傾向もある。スカリエッティからは信頼を得ているようで、ファイ自身もスカリエッティに恭順の姿勢を見せており、機人四天王の影のリーダー的存在のようにも見える。尚、戦いの中でも動きをまるで読めないことから当初六課の隊長陣は石像か機械と戦っているかのように思わせていた。また素体となった人物の性格から空をこよなく愛している。最終決戦では超音速旅客機と機械融合し機人ロボへと変化。魔導虚卵巣化をサポートするが、敗北後は地下アジトで恋次と対戦。その後駆けつけた一護の力に圧倒され最後は二人を逃がして空の藻屑となって消滅する。

魔導虚（ホロウ・ロギア）

概要

魔導師の能力と死神の能力を併せ持つ虚（ホロウ）の一団。また、虚のまま霊力と魔力を手に入れた虚そのものを指す。魔導虚の成体は仮面と様々な色とデザインの死覇装を身に纏い、自らの真の姿と能力を武器の形に封印した「デバイス」を携えているのが特徴。特に大虚が魔導虚化した場合、魔導虚化と同時に”孔”の部分を除けばほぼ人間と同様の外見になる。但し、確実に人間同様の外見になるのはヴァストローデ級に限り、ギリアン級・アジューカス級は魔導虚化の際に少なからず虚を思わせる特徴を残す場合もある。又、虚の特徴が色濃く残っている者ほど知能が低く、死覇装を身につけていない者もいる。魔導虚の”孔”は虚の時と違い必ずしも胸にあるとは限らず、喉元や腹部、頭のいずれかにある者もいれば、”孔”があるかどうか判別できない者もいる。不完全な「魔導虚もどき」は時空管理局が創設される遥か以前から少なからず存在していたらしいが、

スカリエッティが浦原が作り、織姫が消滅させた筈の崩玉の欠片を入手した頃を境に「成体」が確認されるようになり、数自体も激増した。一部の例外を除いてほとんどの魔導虚は強大な力と引き換えに虚時に保持していた超速再生能力を失っている。また体の構造は、死神に近づいたことで死神と同じく霊力発生源である鎖結がある模様。当然の如く尸魂界の死神や時空管理局の魔導師とは敵対関係にある。

戦闘能力

魔導死神同様、魔力と霊力という相反する力を兼ね揃えたことで虚の魂の限界を超えた戦闘能力を体得する事を可能としており、その戦闘能力は非常に高い。特にヴァストローデ級は元から護廷十三隊の隊長格の死神をも上回る力をもっているので、魔導虚化してからの力は計り知れない。

魔導虚

グラトニー・ガルバ

声　一　乃村健次

機人四天王ファイとともに作中初めて登場した魔導虚の成体。下顎骨を象った仮面を着けており、色黒の巨漢で濁赤色の眉をしており、頭部には角のように突き出た部分がある。目元に眉と同じ色の仮面紋がある。戦い方は力任せで雑であり、霊圧と魔力の探査能力も低い。戦闘においてはスバルやキャロら魔力だけしかない人間を余裕で倒すことは出来るが、デバイスを解放していない状態ではシグナム、鬼太郎、吉良などの戦闘センスに秀でた者に対しては劣勢を強いられていた。最初に現世に降り立った際にシグナムに右腕を斬り落とされるが、斬られた右腕は持ち帰っていたため後に修復された。

粗野粗暴な性格で、自分より下だと思う者を見下す言動を取り、同族であっても躊躇無く殺害する程に短気且つ暴力的だが、相手に翻弄された時には怒りを露にすることがある。運がいい場面に遭遇した場合「スエルテ（ラッキー）！！（Ｓｕｅｒｔｅ…スペイン語で幸運）」と叫ぶ癖、相手の実力が自分より下だった場合に舌打ちする癖がある。力を蓄えた後、デバイスを解放することで魔導虚最強の実力を有する特殊な魔導虚でもある。睡眠や暴食で霊圧が蓄積するほか、怒れば怒るほど巨大化する能力を持っている模様。元々の巨躯が怒りまくった影響で現世襲来時の2倍強程になっていた。また、この状態になると元々の暴力性がさらに増す。四天王が敗れた後はデバイスを解放して地下から巨大な塔のような姿で出現し、首都のあらゆるエネルギーを吸収しクラナガンごと次元空間へ脱走しようとした。巨体を活かした破壊力と強大な魔導虚閃などで一護達機動六課の精鋭を圧倒するも、体内に封じられた諸々の力を加速するリンカーエクストリームにより強化されたなのは・フェイト・はやてのトリプルブレイカーを受、撃破されたかに見えたが、しぶとく復活を果たして渾身の一撃を秘めた虚閃を動けないなのは達に喰らわそうとするも、その直後に援護に来たユーノの深緑月華をその身に受け、バラバラとなったのち灰と化して完全消滅を果たす。

デバイス：『大魔王（デーモンコマンド）』

解放前は背中に担いだ巨大な金棒の姿で持ち歩いている。解放すると巨大な塔のような姿へと巨大化し、圧倒的な破壊力と防御力・更には相手の魔力・霊力などありとあらゆるエネルギーを奪い自らの力とする。頭部の角らしき隆起がより強く顕在化し、肘や背骨に沿って柱に似た角が生え、下顎にあった仮面の名残が、下顎に定着している。また、両肘にはピストンのようなものが突き出ており、これを作動させる事で拳を打ちつけたまま更に追撃を加える。

技「魔魂吸（マゴンズイ）」

自分の周囲（広範囲）に居る魂魄と魔力を豪快に吸う術。これによりミッドチルダの多数の人と魔導師が一瞬で魂を吸われて死んだ模様。

技「虚閃（セロ）」

破壊の閃光を口から放つ。しかし、鬼太郎の烈火に相殺された。解放後は砲台のように放つ強大なものとなるが、結局はユーノの断空によって阻まれた。

技「魔導虚閃（セロ・ロスト）」

魔導虚が使うことを許された王虚の閃光（グランレイ・セロ）に匹敵する絶大な破壊力を秘めた魔力と霊力を合わせた虚閃。グラトニーの場合、その一撃でザフィーラ達三人の強壮結界を打ち壊すほど。

シャークエイジ・スクリーム

声　一　田中秀幸

ギリアン級（元アジューカス級）。左目から頭部にかけて横長の鎧のような仮面を着けた辮髪で長身の男。紳士的な振る舞いをする（時には敬語を使うこともある）。ミッドチルダを訪れ、バズソーと共にフェイトとエリオを襲撃。デバイスを解放せずとも最初からリミッター解除したフェイトを翻弄するが、途中で参入してきたクロノが使うデュランダルの『ブリザードサイクロン』によって凍りつかされ敗れ去った。

デバイス：『鮫鋏（シザーアームズ）』

解放前はシグナム同様剣型のデバイスの姿をしている。解放すると、西洋の神話に登場する海の怪物、リヴァイアサンに酷似した姿に変化し、辮髪はハサミムシの尾のような装甲で覆われ、顔の仮面の領域が顔の左半分から顎まで広がり、右に伸びていた突起が後ろへと伸びた形状に変形する。鋭く伸びた爪は、離れた物でも切り裂く。解号は「喰らえ『鮫鋏』（くらえ『～』）」

バンブ・ギュラント

声　一　遠近孝一

ギリアン級（元アジューカス級）。左前頭骨に仮面を着けた伊達男で、髪は金色で長髪。敵を見下して高笑いをするのが特徴。魔導師のことを「カス」と呼ぶ。ミッドチルダを訪れ、なのはとヴィータを襲撃する。なのは達と静かなる激怒状態の浦太郎を超圧縮型の砲撃で突き飛ばし、三人の攻撃をいとも簡単に防ぐなど、圧倒的な力の差を見せる。しかし、止めを刺そうとしたとき、ユーノが遠隔操作で獅子翡翠群をバンプに振らせ手寄港する暇も与えず粉塵様に斬り裂かれ消滅する。

デバイス：『手腕大竜（ハイビッククラッシャー）』

解放前は手甲型の姿をしている。解放すると、西洋の竜を模した巨大な怪物の姿へと変貌する。体長は極めて巨大で機動六課隊舎と同じかそれ以上の大きさを誇る。頑丈な外皮と重量、巨大な角を利用し、突きを繰り出すほか、魔力砲撃を可能としている。

解号は「叩け『手腕大竜』（たたけ『～』）」

技「デビルビックバスター」

なのはが得意とするディバインダスターとは全く対照的な能力を秘めた暗黒の直射砲撃魔法。デビルカートリッジを消費することで対象を漆黒の闇の中へと誘い、跡形もなく消滅させる。本編では浦太郎のディバインバスターによって阻まれてしまう。

デュナン

声　一　近藤隆

ギリアン級（元アジューカス級）。半月状の仮面を被った男で仮面の一部にフードのようなものを着けている。鋭く尖った歯が目立つ。空中戦を得意とする、と自称していた。ヴィータを助けに来た吉良と交戦、『侘助』を受けてなおデバイス、クリムゾンクロスから水流魔法を発動し吉良を苦しめるが、後から来た『侘助』の能力で身体全体を重たくされた事で身動きが取れなくなり、命乞いも空しく吉良に首を落とされ死亡する。

デバイス：『クリムゾンクロス』

解放前は長い棒型の形をしている。水流魔法を発動することが出来る。デバイスを解放しなかったので名称・能力共に不明。

技「ウォーターホイッパー」

棒の先端に竜巻状の水を生成し、鞭を振るうように自在に操る。

ハードヘッド

声　一　楠大典

ギリアン級（元アジューカス級）。鼻にアイマスクのような仮面を着けた、左半分坊主右半分長髪という髪型をしている巨漢の男。霊

圧を手に圧し固めた強力なビンタを用いて戦う。ミッドチルダを訪れ、恋次と鬼太郎を襲撃するも、鬼太郎に完膚なきまでに叩きのめされ敗北する。デバイスを解放しなかったので名称・能力共に不明。

バズソー

声　一　武虎

ギリアン級。右頭部全体を覆う仮面を被った、無口でおかっぱ頭の太った男。ミッドチルダを訪れ、シャークエイジと共にフェイトとエリオを襲撃する。最初はエリオを圧倒するが、途中で駆け付けてきたクロノのデュランダルの氷結攻撃をシャークエイジと共にその身に受け、そのまま氷解し敗れ去る。デバイスを解放しなかったので名称・能力共に不明。

用語

探査回路（ペスキス）

相手の霊力・魔力の強さや所在を測る能力。漢字は「探査神経」など別の表記を取られる場合がある。

魔皮（イエロツヴァイ）

強固な霊圧。魔力硬度を持つ魔導虚の外皮。外皮の硬さは霊力と魔力の高さに比例するらしく、魔導虚の中にはリミッター解除した魔導師の攻撃を素手で受け止める者もいる。既にそれ自体が『鎧』である為、強い者はデバイスを使わずに戦うこともある。

響転（ソニード）

魔導虚の持つ高速移動能力。元々は破面が使うものだったがスカリエッティの手によって使用可能となった。死神の使う「瞬歩」や滅却師の「飛廉脚」、フェイトが使う「ソニックムーブ」にあたる。霊圧・魔法感知に触れることなく移動することができる。

リンカーエクストリーム

人間の体内に封じされた魔力や霊力などのあらゆる活動エネルギーを爆発的に高める活性化ルーム。一回の出撃で1度しか使用できない。大変危険なシステムで、あらゆるシステムから独立し、上層部の許可がなくてはこれを起動することが出来ず、次元航行船に一台登用されている。起動スイッチとなるデスク両サイドのディスプレイは、ガムテープにより厳重に封印されている。発射時には次元航行船のリボルバーが回転し、巨大な撃鉄で発射する。全身体のエネルギーを急激かつ急速に限界以上に高める為に用いられるもので、強大なエネルギーを持つ相手に対し、そのエネルギーを越える、又は対消滅させる目的で生み出されたが、下手をすれば使用者の命も奪う、ないしは魔力などを失いかねない禁断の切り札で、グラトニー・ガルバとの戦闘で最終兵器となった。

機械昇華の世界

＞i123491―709＜

スカリエッティの真の目的、崩玉の完成を知ったユーノと機動六課一同は未だ来ない一護からの連絡を徒に待ち続けていた。

そして、スカリエッティが消えてから更に二日が経った早朝のこと。

ロビーのソファーで何時もの格好で帽子を顔に伏せて爆睡するユー

ノ。

「くぅ～～～

ユーノは画面上に現れる送られてきた全てのデータを目で確認し、それを端末のデータチップへと転送する。

「オーケー。転送データの確認終了です。お忙しい中、態々ありがとうございました一護さん。」

『気にするなよユーノ。崩玉に関しては俺達とて無視できるような物質(もの)じゃねえからな。協力するのは当然だ。何か手伝えることが直ぐに連絡しろ！こっちも出来るだけ捜査に加わるからよ！』

「はい。有難うございます♪」

その後、朝食を食べ終えるとユーノは隊長陣とフォワードメンバー四人、恋次達死神組みとスクライア商店のメンバーを集めて、一護から送られてきたデータをタッチパネルを操作して中央のモニターに映し出す。

「・・・一護さんから送ってもらったデータを細かく解析して、アンゴルモア、崩玉の霊圧パターンを割り出すと・・・」

そう言うと、ユーノは中央のモニター画面にバラバラに散らばってしまったアンゴルモアの所在地を計算で割り出し、それをマップで現した。

「異世界のあちこちに散らばったアンゴルモアはスカリエッティが持つものと合わせて３１個。これがその所在を推測したマップだよ。」

マップの至る場所に点々と広がる３１個のアンゴルモアを表す赤い

印。

「多いな・・・３１個の破片を集めるのは流石に骨が折れそうや・・・」

「しかも、ジュエルシードみたいに誤って動物や誰かが使ったりしたら、それこそ大問題になるしね。」

はやて、フェイトはその多さとロスト・ロギアという物質の危険さを身を持って知っているために緊張が走った。

「一番近いところは何所だ？」

恋次のその言葉を聞いて、ユーノはタッチパネルを操作して最もアンゴルモアが近い世界の特定を始める。

「ミッドからですと・・・此処が最も近いですかね。」

そして、割り出された異世界の詳細なデータが画面上に映し出される。

「第８管理外世界・・・『プラスター』・・・文化レベルＢ、魔法文化なし。生態系は・・・何これ！？生体反応なし！？」

「どういう事だよ、一体！？」

ティアナ、ヴィータはその書かれている内容が理解できなかった。

勿論、それは他の隊長陣たちも同じであったが。

すると、ユーノがよく分からないでいる全員に説明を始める。

「正確に言えば生物はいるにはいる・・・但し、機械と融合してしまっていると補足したほうが分かりや易いかな・・・」

「「「「え?」」」」

フォワードメンバー四人はあまりに現実離れした発言に更に困惑させてしまった。

全員の唖然とした様子を見て、なのはが代表してユーノに詳しい説明を求める。

「ユーノ君・・・この世界で一体何があったの!?」

「行き過ぎた技術発達の悲惨な末路・・・とでも言っておこうかな。『プラスター』では、生き物全てが永遠の命というものに拘泥し、それを可能にせんと技術を発達させてきた結果、ついにはその集大成である機械生命体へと進化を成し遂げた。」

「何だか・・・ちょっと複雑な気分ですね・・・」

エリオの言葉を聞いて、誰しもがどこか辛い表情を見せた。

「永遠の命・・・なんて求めた結果、この世界の生命は勿論・・・文明も何もかもが機械だけとなってしまう、“機械昇華”の道を歩む結果となった。それは言わば“滅びの道”と同じだよ・・・」

第8管理外世界・・・『プラスター』。

機械工学と植物を融合した科学の発達した世界。
そこに住まう生命と機械が融合し生まれた永遠の命を持った機械生命体。

だが、永遠の命をという名の妄言に取り付かれた人類は技術を発達させすぎた結果、数時間で一つの世界の全生物を機械昇華してしまうという最悪の結果を招いてしまった。

さて、そんな世界に生きる機械生命体とは一体どのようなものなのか？

今回は、そのプラスターで生活を送る進化した機械生命体の生態をじっくり覗いてみることにしよう。

「リサイクルを何度繰り返しても追いつかないほど、世界中がゴミで溢れています。このゴミの島に集められた・・・粗大ゴミを観察して・・・！！限りある資源を今後どうやって使っていくかを・・・よく考えて後で・・・わあああ！！！感想文を提出してもらいます！！！」

「うふふふ！！！」

プラスターに住まうこの機械生命体達にも、人間と同様学校や家族、仕事というものが存在する。

今日、プラスターのとある小学校の生徒たちは人工的に作られたゴミの島へと赴き、社会科見学の真っ最中だった。

尚、此処にいるものの容姿は限りなく人間の姿に近いが中身は紛れ

もなく機械物資で動く機械生命体なのである。

「そ、それじゃあ怪我の無いように各自解散！！！」

担任教師の言葉と供に、生徒たちは各自にゴミの島を歩き回り探索を始める。

「つい最近出たばかりのＭＤＳ壁掛けテレビをもう捨てる奴がいるとはね・・・」

「もったいなーーーい。」

「凄げー！このＤＶＤレコーダー、まだ使えるぜ！！」

「んも臭い！！もう、帰りたい！！！」

「壊れてもいないのに捨てるなんて、始めから買わなければいいのにね！・・・ん！？」

すると、突如としてゴミの島一体に誰もがはっきりとわかる地面の揺れを感じ取った。

「な、何だよ・・・この揺れは！？」

と、その時だった。

ゴミの中から突如として子供たちの前に現れる推定４００メートルは超える馬のような顔をした巨大なロボット。

その巨大な異形の姿を目の当たりにした生徒の一人が、あまりの光

景に声を上げて絶叫する。

「うわあああああああああああああああああああ！！！！！！！！！！！！！！！」

プラスターでの非常事態は直ぐに機動六課管制室のモニター画面に表示され、シャリーと共にそこで監視をしていたリィンは急いでクロノの下に連絡に行く。

「大変ですーーー！！！プラスターで大規模な魔力エネルギーを確認です！！！」

「何！？緊急召集発令だ！！」

事務処理を一息つき、コーヒーを飲んでいたクロノはかなり慌てていたのかコーヒーを口から吐き出すと、プラスターに向ったスバル、ティアナ、恋次、金太郎以外の前線メンバーに緊急召集をかける。

現在、１０８部隊のゲンヤ・ナカジマ三佐と会談をしている部隊長八神はやての下にもリィンが発進する緊急召集が届く。

「お？何やろ・・・一体・・・！？」

目の前のタッチパネルを表示すると、エマージャンシーとかかれた六課への緊急帰還命令が下される。

「（プラスターで巨大な魔力反応やて！？）」

はやては急いでゲンヤに六課へ戻らなくてはならなくなったと、適当な理由で誤魔化す。

「ナカジマ三佐。すみませんが急用が出来たようですねので、今日のところはこれで失礼させてもらってもよろしいですか？」

「急用・・・？まあいい。お前さんも無理しすぎるなよ。」

「分かっておりますよ。じゃあ、ギンガ。スバルによろしく伝えておくよ。」

「はい、お願いしますね！」

ゲンヤの許諾を貰い、スバルの姉でありゲンヤの娘、ギンガ・ナカジマ陸曹に軽く挨拶をするとすぐに部屋から出て行く。

外に出たはやては迎えに来ていたフェイトの車に乗り込み、ロングアーチへと直行する。

「はやて、急いで乗って！」

「うん！すまんなフェイトちゃん！態々迎えに来てもらって！」

また、同じ頃機動六課の屋根の掃除と防衛システム強化を行っていたユーノは、他のバックヤードスタッフの心配を他所に、黙々と作業を続ける。

「ユーノ先生！！大丈夫ですか！？危ないですから早くおりてきて下さいよ！！！」

「大丈夫だよこれぐらい。高いところは別に怖くないから・・・お！？」

すると、ユーノの下にも緊急召集の連絡が入りユーノのテンションは一気に高揚する。

「何だって・・・こうしちゃいられないよ♪」

ユーノはそう言うと、作業を放り出して屋根の上から勢いよく飛び降りると自分の靴につけていたジャットエンジンを全開にして、隊舎の中へと向っていく。

「とう！！！！！ひゃっほーい！！！！！そーれそりゃそりゃ！！！！！」

ジェットエンジンを全開にして、驚愕するバックヤードスタッフの間を通り抜けながら甚平と帽子を着用したユーノは隊舎の中へと飛んで行った。

「ユーノ先生、どちらへ！？」

「緊急召集♪♪」

そして、暫くすると機動六課作戦指令室に徐々に前線メンバーの隊長陣とフォワードのエリオとキャロ、スクライア商店の面々と吉良と白鳥、そしてなのはが集まっていた。

そこに急いで入ってくる部隊長のはやてとフェイト。

「お待たせな、みんな！！」

「ごめんクロノ、なのは。遅くなっちゃった！」

「うんうん。気にしてないから大丈夫だよ、フェイトちゃん。」

すると、今度は有頂天のユーノ・スクライアが指令室の中へとエンジン全開で入ってくると、空中で何らかのポーズを描いて自分の席へと座る。

「はいはいーーー♪♪はは、ら～～～らら～～～ん・・・っと！」

「ユーノ君・・・もう少し静かに入ってこないと駄目だよ♪」

そんな性格が完全に変わってしまっているユーノにも関わらず、なのはは些か呆れながらも優しい声で注意をするのであった。

「あははは、御免御免なのは♪このジェットローラー、質力が強すぎたみたいだよ♪で、どうだい・・・プラスターの様子は？」

気持ちを一変させ、ユーノは真面目な表情を見せるとメインスクリーンに映しだされるプラスターの状況を確認する。

その時、四人をプラスターまで送り届けたヴァイスからの緊急通信が入る。

『大変です！！八神隊長！！なのはさん！！ユーノさん！！クロノ提督！』

「ヴァイスくんか！そっちのほうは大丈夫なん！？」

『ええ。俺は何ともありやせんが、地上のほうはとんでもないことになってますぜ！今、そちらに映像を送りますので見て驚かないで

ください！』

ヴァイスはヘリを操縦品しながら今自分が見ている想像を絶する光景を映像として機動六課隊舎の指令室へと送る。

そこに映し出されたのは、異形の巨大ロボットが生徒たちが乗ってきた船を丸ごと取り込み海上を移動している光景だった。

「何だあれは！？」

驚愕するクロノやなのは達に、ユーノはあくまでも冷静な様子で説明をする。

「おそらくジュエルシードのように、機械生命体を取り込んだアンゴルモアが暴走した姿だろうね・・・！！」

『電気製品のクズで、体を創ってるようっすよ！！』

ヴァイスからの現場管制によって、巨大ロボの全貌が少しずつ明かされていく。

『サテライトビューの映像では、どうやら船ごと取り込まれてるようです。』

管制室のアルトからの情報を聞いて、はやてやクロノは苦悶の表情を浮かべる。

「機械生命体の子供が五人か・・・！？」

「何ということだ・・・！？」

実は逃げる直前、生徒たちの大半は船に乗り込む前にロボットによってそれを阻まれ誤認の生徒だけを残してこのような事態になってしまったのだ。

『こちら、ヴァイス！他の生存者は全員救助しましたが・・・おっ！？』

すると、気絶する学校の生徒と教師を救出したヴァイスの頭上をこの世界の空軍機二機が飛び回り、ロボットへと向っていく。

「おいおい何だよありゃ！？スクランブル中の空軍機か何かか！？」

二機の空軍機はミサイルを発射して海上を移動し続けるロボットに攻撃を仕掛けようとしたが、それをさせる前にロッボトは右腕の砲撃口を広げると高熱のエネルギーを空軍機に直撃させて、撃墜させた。

ユーノは直ぐにタッチパネルを操作して技の解析に乗り出す。

「電子レンジを集積させた家電粒子砲だよ！」

その圧倒的な破壊力を映像で見ていたクロノや、はやて達は勿論、ヴァイスは最悪の顛末を想像し息を呑んだ。

「奴がこのまま市街地へと上陸したら・・・！？」

「首都は壊滅する！！」

恐怖に怯え、巨大ロボットの体に飲み込まれて身動きが取れない子

供達五人であったが、だがその時目の前の彼方から巨大な斧を手に取った巨躯の男が空中を移動しながらロボットへと向ってきた。

そう、金太郎であった。

「行きますぞおおおおおおおおお！！！！！！！！！！！！！！！！」

金太郎は渾身の力と魔力を斧の先に注ぎこむと、それを前進するロボットの体へと振り下ろそうとした。

ところが、その直前ロボットの周りにはバリアシールドが展開され、金太郎の攻撃を防いでしまった。

指令室のはやて達もこれには目を疑ってしまった。

「何やて！？」

「バリアシステムか！？」

「ぐっ・・・のあああああああああああああああ！！！！！！！」

金太郎はバリアシステムを貫くことが出来ず、反動で後ろへ飛ばされる。

それを見ていたロボットは左腕の砲撃口を開くと冷蔵庫を集積させた凍結光線を金太郎目掛けて発射、氷付けにして海へと落とした。

「金太郎の旦那！！！」

ヴァイスの声も空しく、金太郎は冷たく氷付けとなった体を海の底へと沈ませていった。

『どうしますか八神部隊長！！子供がいたんじゃこの世界の軍隊も奴に攻撃出来ないじゃないですか！？』

「たとえ攻撃しても、プラスターの世界の軍事力では奴のバリアシステムは破壊できないよ、ヴァイス君。」

動揺するヴァイスとは裏腹に、ユーノは非常に冷静な態度で客観的な説明を加える。

「バリアシステムをすり抜けて、子供を救出できる者がいるとすれば・・・」

その時、ヴァイス・エリオにキャロ・はやて達隊長陣・吉良に白鳥はあの三人のことを思い出すと、自信に満ちた表情を浮かべる。

『うん！』

「「うん！」」

「「「うん！」」」

「「「うん！」」」

同じように、ユーノも自信に満ちた表情を浮かべるとなのはに恋次達への呼びかけを頼むのであった。

「うん！なのは、恋次さんたちを呼んで！」

「はい♪待機中のスターズ3、スターズ4、恋次さん応答願います！」

すると、プラスターへと到着し金太郎とは若干遅れて現場に到着した恋次、スバル、ティアナの三人はロボットを一望できる場所でなのはからの連絡をずっと待っていた。

「全部聞こえてるぜ！いくら何でも待たせすぎだぜ、お前ら。」

『御免なさい。スバル、ティアナ。カートリッジのほうは大丈夫？』

ティアナはバリアジャケットの中に隠していた非常用のカートリッジと、常時携帯用のカートリッジを確認する。

「大丈夫です、なのはさん。ちゃんと満タンにしてきました。」

『分かってるね、スバル・ティアナ・恋次さん。』

「子供達の救出ですね！任せてください、そう言うことは私の専門分野ですから！」

なのはのその質問に対し、スバルは意気揚々と答えたのであった。

『うん。じゃあ、頼んだよ三人とも！』

「任せておけって！ユーノ頼む！！」

「了解！」

恋次のその言葉を聞いたユーノはタッチパネルを操作して、自身がこの世界へと次元転送させたドリル戦車『ジャベリン』を海底から出動させるとロボットの注意を引き寄せる。

「行くぜ、てめぇら！」

「「はい！！」」

恋次の合図と共にスバルとティアナはロボットの下へとジャンプして、体に取り込まれている船の先端目掛けて移動する。

その頃、船の内部で不気味な物質に怯える子供達五人は恐怖に怯えながら助けが来るのを必死に祈っていた。

「このこのこのこの！！！！えっ！？」

すると、そんな子供達を救ったのは蛇尾丸を伸ばして物質を退けた恋次だった。

「助けに来たぜ！お前ら！」

「ヤッホーい！！おじさん、格好いい！！」

「おいおいオジサンはないだろうよ！こう見えても結構若い方なんだぜ！」

そんな恋次の言葉を聞いていたティアナは、子供を救出する傍らこんな事を思ったのであった。

「（この前自分で私達の１０倍以上年取ってるって言ってなかった

かしら・・・）」

「さぁ、みんな！脱出するぞ！スバル、ティアナ。こいつらをウィングロードで避難させてくれ！」

「了解！ウィングロード！！」

スバルは自身の飛行系魔法、ウィングロードを発動させると子供達をティアナと供に抱いてウィングロードの上に乗るとそのまま安全な場所まで避難させていく。

恋次ももう一人の子供を連れて脱出しようとした矢先だった。

「何だ！？どはあああああああああああ！！！！！」

突然、船の奥から現れた巨大な閃状の物体が恋次を直撃しその勢いで恋次は海へと投げ出されてしまった。

「オジサーーーーーーーーン！！！！！！」

「「恋次さん！！！！！！！！！！！！！」」

恋次が海へと落下した光景を取り残された子供とウィングロードの上のスバルとティアナは悲痛な叫び声を上げて見つめた。

すると、スバルは恋次が助ける筈だった取り残されたままの子供の姿を確認する。

「しまった！一人取り残されてるよティア！！」

「何ですって！？」

そして、海の中から自力で出てきた恋次はその時ロボットのある驚くべき光景に目を疑ったのであった。

「ぷっは！！何だと！？」

何と、ロボットは体を変形させると列車が走る鉄橋の中へと侵入していく。

ヘリに乗って同じものを見ていたヴァイスも思わず汗を流す。

「変形したのか！？」

指令室でその光景をモニターで確認していたクロノやはやて達も驚愕の表情を見せていた。

「機人四天王の能力と酷似している・・・！」

「現時点より奴を、ＡＭ０２と認定呼称する！」

はやてが口にしたこＡＭ０２とは、Ａｎｇｏｌｍｏｉｓ　Ｍｏｎｓｔｅｒのコードネームを略したもので、アンゴルモアによって暴走した知的生命体を総じてそう呼ぶことにした。

列車のような形態に変化したＡＭ０２は生徒一人を乗せたまま猛スピードで加速を続けて、周囲の駅を利用するものたちを吹き飛ばしていく。

『ＡＭ０２は地下鉄構内に侵入、都心部を目指して向っています！

！』

『次の駅到着まであと3分弱！！』

『半径１０キロ圏内に、魔法シールド展開！！』

管制室で現場の状況を確認するシャーリーやアルト、ルキノは状況整理に奮闘する。

そんな中、モニターを見ていたシグナムがＡＭ０２の行動に疑問を抱いていた。

「何故都心を目指すのだ！？」

そして、ＡＭ０２内部に取り残された生徒の一人は暴走するＡＭ０２の中で助けが来るのを待ちながら絶叫を上げていた。

「うあああああああああああ！！！！！！！あっ！？」

すると、ＡＭ０２に追いつくようにこれまたユーノが極秘裏に創った新幹線型移動手段である『トワイライト』が張り合うように迫ってきた。

「新幹線・・・！？」

ＡＭ０２の中で隣を走るそのトワイライトに驚く生徒。

そんな子供を助けようと、恋次は完全自動操縦のトワイライト操縦席で自信に満ちた表情を浮かべていた。

「悪いが逃がしはしねぇーぞ！速さなら、この『トワイライト』のほうが上だぜ！！」

指令室でトワイライトを初めて見たはやて達は驚愕の表情を浮かべ、なのははユーノが造ったと言う事実をすると胸の鼓動を高鳴らせた。

「凄い！！！！あれもユーノ君が造ったの！？」

「地球（むこう）にいる間に密かに造っていたんだよ。さっきの『ジャベリン』もそうだよ♪完全自動操縦だから誰でも乗りこなせる♪」

「お前・・・何時の間にそんなことまで・・・！？」

クロノは、四年の間にとんでもない技術を身に付けたユーノのポテンシャルに驚かされていた。

その時、鬼太郎が海に沈んでいた金太郎の状態が徐々に回復していくのを専用の画面で確認しユーノに伝える。

「熊の内部霊圧で表面の氷が溶け始める！店長、いつでも出撃できるぜ！」

ユーノは首を縦に振るうと、はやてに次の指示を仰いだ。

その頃、急速に速度を上げたＡＭ０２はトワイライトでも追いつけないほどであった。

「くっ！急激に速度を上げやがった！！このままじゃ地上に出ちまう！一端引くか！」

恋次は一度体勢を立て直すために、トワイライトを後方へと下がらせた。

その瞬間、ＡＭ０２は地上に飛び出すと人の迷惑など一切関係ずに元の形態へと姿を戻すと、ある場所へと向っていく。

それは、この都市で最も歴史が古く同時に最も人が集まる巨大建造物であった。

「あれをぶっ壊すつもりだ！！」

船の中でその光景を見ていた取り残された生徒は焦りの表情を見せた。

ＡＭ０２は両腕の砲撃口を全開にすると、ビル内部の人間も全て巻き込むかのように砲撃の発射体制に入った。

だがその時、隣のビルから聞こえてきたのは恋次の声であった。

「待ちやがれ！！」

ＡＭ０２が振り返ると、迎えのビルの屋上にはスバル・ティアナと供に腕組みをしながら立ち尽くす恋次の姿が見受けられた。

生徒も恋次達の姿を確認すると、安堵の溜め息をつく。

「お姉さん達！！あのオジサンもいる！！」

そして、恋次はＡＭ０２に対抗するために蛇尾丸の力を全開にするのであった。

「卍解！！！」

巻き起こる霊圧の嵐。

それが完全に晴れた瞬間現れるのは、巨大な蛇の姿をした恋次の卍解。

「狒狒王蛇尾丸！！」

恋次が卍解をすると、スバルとティアナがＡＭ０２の注意を引くために囮になって向っていく。

「ウィングロード！！！」

スバルのウィングロードを走りながらティアナは隙を見て、ＡＭ０２にクロスファイアーシュートを仕掛ける。

「クロスファイアーシュート！！！」

至近距離で攻撃を受けても傷一つ負わないＡＭ０２だが、二人に気を取られているＡＭ０２の一瞬の隙を見て恋次が懐に入り込む。

「遅せえええええ！！！！！」

そして、恋次は狒狒王蛇尾丸の口を使って船の先端部分を切り取り残された生徒を無事に救出し、ビルの置く像へと非難させる。

「やった！！！助かった！！！！！」

恋次にお礼を言うために、生徒は恋次の近くまで来る。

「ありがとう！！！オジサン！！！」

「オジサンはやめろ！せめてお兄さんって呼べよな・・・ぐっ！？ぐあああああああ！！！！！！！」

と、その時。

ＡＭ０２の奇襲攻撃を受けて体中にケーブルコードのようなものを取り付かれた恋次は、体中に流れ込んでくる高圧電流に苦しめられる。

「恋次さん！！！」

「どうなってるの！？ユーノ先生！！解析を！！」

「えらいことになりましたぜ！！！どうすんですか一体！？」

スバル・ティアナ・ヴァイスの三人は早急の解析をユーノに請求し、ユーノもそれに答えるために必死で解析を行う。

「大量の扇風機をフル稼働させて膨大な電力を作り出し、高圧電流を恋次さんに流し込んでる！金太郎、急いでくれ！スバル、ティアナはその子を避難させたら直ぐに恋次さんの救出に向うんだ！！」

「「はい！！」」

ユーノの指示を聞いて空中を飛行していた金太郎は、ちょうどその時目の前で高圧電流を受けてもがき苦しむ恋次の姿を確認する。

「なっ！？恋次殿！！今すぐに行きますぞ！！！『グラン・カイーダ！』」

〈Ｇｒａｎ　Ｑａｅｄａ〉

金太郎はカートリッジを二発ロードすると、巨大な魔力刃を生成してそれをＡＭ０２の背中へと直撃させた。

攻撃を直撃したＡＭ０２は隙を作ってしまい、恋次へと流し込む電流も弱めてしまった。

この機を逃すまいと恋次は霊圧を全開にして何とか脱出を試みた。

「よっしゃ！ほあああああああああああ！！！！」

恋次はどうにかコードを引き千切ると、ＡＭ０２の内部から抜け出しスバルとティアナ、そして金太郎の下に合流を果たす。

「恋次さんの救出を確認！！スターズ３、４共に恋次さん達に合流！」

「よし！ほんなら頼んだで、四人とも！」

はやては四人の姿を確認すると、無事にアンゴルモアを回収してくれることを祈る。

恋次を取り逃がしたＡＭ０２は四人を攻撃するために両腕から冷却光線と炎熱光線を同時に発射した。

すると、飛んでくる二つの光線を金太郎の魔法防壁によって弾き返す。

「プラズマシールド！！」

恋次達の正面に展開されたプラズマシールドは相手のエネルギーを電気エネルギーへと変換させてダメージを倍返しにするというものだ。

しかし、ＡＭ０２はその攻撃を受けてもバリアシステムが破壊されることは無かった。

「バリアシステム破壊率ゼロ。全く効いていません！！」

『何とーーーー！！！！！』

管制室でその様子を伝えるシャーリーに、指令室のユーノが子供のように悔しがった表情を浮かべる。

それを見たシャーリー達は一瞬顔を引いて驚いた。

「まだよ！！！スターライト・・・ブレイカー！！！！！」

今度はティアナが魔力を爆発的に高めると、なのは秘伝の最大砲撃魔法スターライトブレイカーをクロスミラージュから発射、バリアシステムの破壊を試みる。

「バリアシステム破壊率・・・２０、２５、３５・・・５０！！」

「おし！！！！粉砕や！！！！！！」

リィンの隣でそれを見ていたはやては熱狂的な野球ファンのようなリアクションでＡＭ０２のバリアが破られ、大ダメージを受ける様子に熱狂した。

ティアナのスターライトを直撃し、その場に地響きを立てて倒れ込むＡＭ０２。

「やったあああああ！！！！」

離れた場所でその光景を見ていた救出された子供の方もこのことに歓喜の声を上げる。

「ティア！！やったよ！！！」

「やるじゃねぇか！！」

「いえいえ！それに、まだやられてないですよ・・・」

ティアナがスバルと恋次にそう言うと、スターライトブレイカーをその身に受け体に傷がついていながらも、ＡＭ０２は事故修復機能により破損箇所を再生し立ち上がる。

それを見ていた恋次とスバルは同時に攻撃を仕掛けてＡＭ０２の体制を崩す。

「「せやあああああああああ！！！！！」」

その頃、指令室で管制を続けるリィンもはやて達に状況を報告する。

「駄目です！！！１０秒以内に再生してしまいますです！！！！」

「こうなったら・・・スバル！連係プレーで片付けるぞ！！」

「了解！！」

恋次はスバルにそう言うと、ＡＭ０２の下へと駆け出し狒狒王蛇尾丸の長い体を遣ってＡＭ０２の巨体に巻きつき身動きをとれなくする。

「蛇尾丸！！！！」

体の自由を奪われたＡＭ０２はバリアシステムを展開させて抜け出そうとするが、ティアナと金太郎の攻撃によってそれを阻まれる。

「ファントムブレイザー！！！」

「邪魔はさせません！！！」

二人の攻撃と恋次の策によって完全に無抵抗なＡＭ０２。

そして、機は熟したとばかりに恋次がスバルに留めの一撃を入れるように指示する。

「今だ、スバル！！！コイツの核を取り出せ！！！」

「はい！！！一撃・・・・・必倒！！！！！！！！！！」

ＡＭ０２と距離を取ったスバルはなのはに憧れ身に付けた自身の唯一の砲撃魔法を限界ギリギリまで溜め込むと、マッハキャリバーで

一気に加速しＡＭ０２の中心核目掛けてディバインバスターを撃ち込む。

「ディバイン・・・・・・バスター！！！！！！！！！！！！！！」

バイアシステムもままならない状態のＡＭ０２はディバインバスターを直撃し、体は完全にボロボロに砕け散るとスバルによって中心核が強引に抉り取られようとしていた。

「ほおおお

「よかった・・・子供達も無事みたいだし・・・」

スバルは無事に避難した子供達を一瞥し、安堵の溜め息をつく。

「金太郎、早速だが・・・封印処理のほうを頼むぜ！」

「承知！」

恋次にそう言われると、金太郎は印を結ぶと巨大なアンゴルモア中心核からアンゴルモアと知的生命体を分離させるために封印作業に入る。

「四層結封（しそうけっぷう）、アンゴルモア・・・シリアル０２、封印！！」

その瞬間、中心核が眩い光を放ちながらアンゴルモアと取り込まれた機械生命体が分離して、アンゴルモアだけが金太郎のデバイスの中へと吸収される。

取り込まれた機械生命体のほうは、極めてひ弱そうな馬そのものであったのだ。

「元はこんな奴だったのかよ・・・！？つくづく恐ろしいもんだぜ・・・崩玉の力は・・・！」

恋次は改めて崩玉という物質の恐るべき力に絶句する。

無事にアンゴルモアを回収した四人をモニターで見ていたはやては、早速帰還命令を送る。

「よくやったで、四人とも。取りあえずもうじき本局の局員がそっ

ちに来るさかい、事後処理と被害にあった子供たち、及びアンゴルモアを取り込んでしもうた機械生命体はその人たちに任せて四人はヴァイスくんと一緒に戻って来るといいよ。お疲れさんな！」

『『了解しました！』』

『ああ。流石に疲れたぜ。』

その日の夜、ユーノはなのはと共にプラスターから回収した装甲が思っていた以上に破損したジャベリンの修復作業に取り掛かっていた。

「ふむ～～～結構傷ついたな・・・まさかアンゴルモアを取り込んだ機械生命体が発するバリアシステムで、ジャベリンの装甲をここまで破壊するとはな・・・」

「侮れないね。恐るべきロスト・ロギア、崩玉の破片・・・アンゴルモア・・・」

「兎に角、急いでメンテナンススタッフに手伝ってもらっていつでも動けるように修復しておく必要があるな・・・」

ユーノはジャベリンの修復をしようと、タッチパネルを慣れた手つきで操作する。

そんなユーノの姿を見ていたなのはは思わず頬を赤くし、破顔一笑。

「うふ・・・♪」

「ん？何がおかしいんだい、なのは？」

「いや・・・こうしてユーノ君が機械弄りしてる光景、私初めて見たからちょっと新鮮なの。ほら、ユーノ君ってどっちかって言うと考古学とか文系のイメージだからずっと！」

「僕だって別に考古学だけが取り得じゃないからね。一応、四年の間にこういうメカニック作業も出来るようになったからね、今ではその技術を活かして特捜マシーンの数々を作ってなのは達をサポート出来るようにしてるんだ。」

「・・・やっぱり・・・ユーノ君はいつでも私達のこと・・・気にかけていてくれたんだね・・・ありがとう・・・ユーノ君・・・」

「なのは・・・うんうん。僕のほうこそ、何時も支えてくれてありがとう・・・」

「ユーノ君・・・」

「なのは・・・」

二人は誰見ないはずの部屋で見つめあい、今度こそ恋人になって初めてのキスを交わそうとした――だが。

「あああもう！！！二人ともうちょっとやったのに！！」

二人の愛をまたしても横から槍を入れて邪魔をするの相手、今度ははやてだった。

「は、はやてちゃん！！」

「はやて！！君って奴は人の幸せを邪魔するのがそんなに好きなのか！！！」

ユーノとなのはは必死ではやての取った行動を責めて、そんな感じで騒がしい一夜を過ごしたのであった。

後に、今回のＡＭ０２・・・馬型機械生命体は、あの時自らが破壊しようとした場所に嘗ての塒があったが、それを理不尽なやり方によって人型機械生命体に土地を追い出されたことが恨みとなったことで、アンゴルモアの力を増幅させていたことが時空管理局本局諜報部の捜査で解った。

機械昇華の世界（後書き）

教えて、ユーノ先生！

ユ「今日は、第8管理外世界『プラスター』についてだよ♪」

ユ「ここはでは、生き物が技術の進化を求めすぎたあまり機械と融合してしまった機械昇華と呼ばれる暗黒の世界なんだ。」

ユ「命すらもその機械の体に提供することで、永遠に時を過ごし続ける・・・ある意味哀れな世界なんだ・・・」

ユ「そうそう！機械の体を持つといえばスバルもそうだよね♪」

ス「そうですね。私の体の一部は電子部品が埋め込まれていますから。ほら、左腕のほうとか！」

ユ「修理する際ってどうやっておこなってるの？」

ス「え～～～と・・・私も詳しいことはよく分からないんですけど、マリーさんなら良く知ってると思いますよ。」

ユ「あの人か・・・僕余り良い思いで無いんだよな・・・」

ス「どうしてですか？」

ユ「前にエイミィさんとシャーリーと一緒にフェレットの状態で捕まって解剖されそうになってね・・・偶々通りかかったなのはにどうにか助けてもらったけど・・・あれは正に地獄だったな・・・（

思い出してトラウマになる）」

魔導師図鑑ハイパー！

エリオ・モンディエル、１４歳。

現在の悩みは・・・・・・・

エ「（いいな・・・僕もどうしたら恋次さんやユーノ先生みたいな立派な体になれるのかな・・・？）」

密かに憧れる恋次やユーノみたいな肉体。

浦「どうしたのさ、浮かない顔して？」

エ「浦太郎さん。あの・・・僕も恋次さんたちみたいな筋肉質な体にするにはどうすればいいでしょうか？」

浦「う～～～ん・・・そうだね・・・一番手っ取り早いのはあれかな♪」

そう言って用意したのは、卵の白身たっぷりのドリンク。

それを見て顔を引きつるエリオ。

浦「これ毎日飲めば、君も立派なボディーフィルだーさ♪ささ、ぐぐっと行こうか。」

エ「やっぱり、遠慮しときます！！！！」

プラスター篇

機械子供

声　一　伊藤舞子・吉田古奈美・柏倉つとむ・ならはしみき・　石川ひろあき

人型機械生命体。機械工学と植物を融合した科学の発達した世界、「プラスター」に住まう生命と機械が融合し生まれた永遠の命を持った機械生命体の子供。容姿は限りなく人間の姿に近いが中身は紛れもなく機械物資で動く。社会科見学中にＡＭ０２に襲われるも、恋次達に助けられる。

機械馬／ＡＭ０２

馬型機械生命体。ＡＭ０２と化してプラスターの首都を破壊しようとするも、恋次達の連係プレーの前に敗北し、核を抉り取られる。ＡＭ体となった原因は、嘗ての塒があった場所を理不尽なやり方によって人型機械生命体に土地を追い出されたことが恨みとなり、アンゴルモアの力を発現させてしまった子世にある。

用語解説

崩玉（ほうぎょく）

浦原喜助が開発した死神と虚の領域の境を取り除く機能を持つと言われ、その後の一護やユーノの運命を決定付けた危険な物質。崩玉そのものが意思を持つ物質であること、本来の能力が「崩玉の周囲にいる者の心を崩玉の意思によって具現化する力」である事がユーノから語られた。アルハザードへと逃走を果たしたスカリエッティはこの崩玉の完成を目論見、暗躍を続けている。

アンゴルモア

崩玉が全三十一個の形で分裂した状態で、機動六課が回収を試みている第一級指定ロスト・ロギア。非常に不安定でありながら、莫大なエネルギーを秘めており手にした者の心を読み取り具現化させる力を有する。しかし、本来対象がその力に屈する事の無い強い精神力を持ちうらねば、逆に力を暴走させてしまう。ユーノ曰く、ジュエルシードの範疇を軽々と超えているとのこと。

AM（エーエム）体

はやてが便宜上に命名したアンゴルモアの暴走体を総称したもの。ＡＭとは、Ａｎｇｏｌｍｏｉｓ　Ｍｏｎｓｔｅｒの頭文字を略したものである。

小さな破壊神（前書き）

小説の最後のに出てくる異世界は虚空さんからのアイディアです。

一応、こんな感じでまとめてみましたので呼んでみてください。

小さな破壊神

＞i12350―709＜

機動六課が崩玉の欠片であるアンゴルモアの回収に躍起になっていると同じように、スカリエッティが作り出した破面魔導虚、アスモデウスも様々な世界を渡りながら敵を排除・アンゴルモアの回収に励んでいたが、何れも空振りに終わっていた。

「まっ・・・待ってくれ！参った！！俺の負・・・げぅ！」

目の前の敵を容赦なく斬り殺したアスモデウスは空ろな目つきで今迄斃して来た死体の数々を一瞥すると、深い溜め息をつく。

「・・・此処もハズレか。時空管理局も動き出している今、あまり時間はかけられない・・・ドクターのためにも・・・早くそろえなければ・・・」

その頃、ある異世界では既にアンゴルモアがその活動を始めようとしていた。

第３１管理外世界、『タウリン』

地球やミッドチルダ同様人間が住み、ごく普通に生活を送っているが、この世界の人間たちの間で今最も熱い娯楽があった。

それは、古代ローマで開かれた剣奴達の戦いを思わせるようなデスマッチデュエルであった。

「只今より、デスマッチ王座決定戦・時間無制限一本勝負・地上１００メートル・時限爆弾有刺鉄線・電流爆破マッチを行います！！」

高層ビルが立ち並ぶ都会の一角にポツンと用意された電流が流れる有刺鉄線。

その中には、今最も観客を熱中させる悪役プロレスラーが居たのであった。

「青コーナー・・・挑戦者・・・ライガー原田！！」

タイガーマスクを思わせるような覆面を纏った拳法家が手を振るうと、離れたビルの屋上で試合を観戦する大勢の観客たちは歓声を上げる。

「赤コーナー・・・依然無敗、ＷＢ級世界選手権王者・・・キラー・サム！！」

すると、キラー・サムと名乗るその男はアンパイアに向っていきなりライターで口から火を吹き、闘争心の高さを示す。

「うわあ！！あちちちち！！！！」

アンパイアは背中に纏った炎を消すために鉄線の外へと避難。

そして、ついに試合のゴングが鳴り響く。

最初に仕掛けたのは挑戦者のライガー原田。

原田はサムの首元を狙って回し蹴りを炸裂、直撃させる。

「ぐっは！！へっへへへへ！！」

すると、サムは原田の足首を掴むと不敵な笑みを浮かべて有刺鉄線の方目掛けて原田を投げ飛ばす。

「なっ！？ぐあああああ！！！！」

有刺鉄線にぶつかると、原田はそこから流れる高圧電流に体を焼かれる。

「やれー！！！サム！！！そこだ！！！もっとやっちゃえ！！！」

観客達の熱気を更にヒートアップする中、金棒でさらに原田を追い詰めるサム。

「くたばれ！！！」

原田は最後の一撃を受ける直前、ギリギリで回避すると両足を使ってサムを有刺鉄線の方へと蹴り飛ばした。

「ぐっ！！ぐあああああああ！！！！」

サムが高圧電流をその身に受けた瞬間、リングに仕掛けられた時限爆弾が起動する。

「時限爆弾のスイッチが入りました！！爆発まで後・・・7、6、5、4、3、2、1！！」

アンパイアの掛け声に合わせて、観客のほうもつられてカウントを行い、そして爆発が起こる。

「ぐっ！！」

リングの周りで起こる爆発に原田を頭を押えて低い姿勢でいる。

しかし、爆風の中で深手を負ったサムは怒りを露にすると自分が如何に強い存在であるかを爆風の中で叫ぶ。

「・・・ちっ・・・くしょう・・・！！俺は強いんだ・・・俺は世

界一だ・・・俺は負けねえぜ!!!!おっ!?」

その時、サムの目の前に飛び込んできた謎の発光体物質。

何も知らないサムはそれを徐に手に取った。

だがそれが、アンゴルモアという名のロスト・ロギアであると言うことはこのときまだ誰も気付いていなかった。

やがて、爆風が晴れ原田がサムの姿を確認しようと前を向いたとき、原田は信じられない後継を目の当たりにする。

「のおおお!?」

そこにいたのは、完全に異形の姿へと変貌した凶悪化したサムであった。

「ひいいいい!!・・・助けて!!!!!」

余りの恐怖に腰が抜けた原田は鉄線を超えてその場から戦線離脱。

「・・・俺は・・・俺は世界一だ・・・!!!!!!」

すると、サムの体に取り込まれたアンゴルモアのエネルギーが急激に増大を始め、サムの体を巨大化させて全く違う姿のバケモノへと変貌させたのであった。

そして、巨大なバケモノの姿へと変貌したサムは手当たり次第にビルというビルを破壊し、暴走を始めたのであった。

これには流石に人々も試合観戦などという悠長なことは言っていられなくなり、脱兎の如く恐怖に怯えながら逃げ惑うのであった。

一方、機動六課に設けられたユーノ専用の部屋の中では、前線メンバーの戦力強化と死神が持つ斬魄刀の能力を飛躍的に高めるための装置がユーノの手によって作られていた。

「調整完了。新型カートリッジシステムと斬魄刀強化を可能とした補助デバイスがついに完成した。あとは実戦でどこまで通じるかが問題だけど・・・え!?」

その時、隊舎に鳴り響くアラート音がユーノの耳にも届く。

「このタイミングで第一級警戒警報!?アンゴルモアが動き出したのか!?」

ユーノは急いで完成したばかりの新型機を持ち出し、部屋から出ると指令室のほうへと向って走り出した。

また、はやての命によって先にこのタウリンに調査に来ていたヴィータと吉良は無惨にもビルを破壊し、一向に破壊活動をやめることの無い暴走したサムの姿を別の場所から眺めていた。

「何だよあいつは!?あれもアンゴルモアに取り付かれた生物なのか!?」

「素体となった人間が余程強暴だったんだろうね・・・町中破壊するつもりだ!」

「んなこと絶対させるかよ!!行くぞ、吉良!」

「ああ！」

ヴィータは吉良と共にサム・・・即ちＡＭ０３に向って攻撃を仕掛けるのであった。

「おりゃあああああ！！！！」

ヴィータのデバイス、グラーフアイゼンがＡＭ０３の体に叩き込まれた。

だが、グラーフアイゼンの力を以ってしても尚装甲は一切輝も入ることは無かった。

その余りの強度にヴィータ自身のほうが苦悶の表情を浮かべる。

「こいつ、何て固てえんだ！？普通のグラーフアイゼンじゃびくともしねえ・・・だったら！！」

〈Ｔｈｉｒｄ　ｆｏｒｍ〉

ヴィータはそう判断すると、グラーフアイゼンを第三形態へと変化させギガトンハンマーで一気に粉砕しようとする。

「力なら力で押し潰すまでさ！！行くぞ、アイゼン！！！」

〈Ｙｅｓ　ｓｉｒ〉

ヴィータの渾身の一撃が今、ＡＭ０３の頭上に振り下ろされる。

「ギガントンシュラーク！！！！」

巨大化したギガトンハンマーのハンマーヘッドが頭上に振り下ろされそうになった瞬間、ＡＭ０３は右手でそれをガードすると、ハンマーヘッドを素手で掴んだ。

「何！？」

そして、ハンマーと一緒にヴィータをビルのほうへと投げ飛ばすＡＭ０３。

「のあああああああああ！！！！」

ヴィータの様子を見ていた吉良は焦りの表情を見せ、今度は自分がＡＭ０３に向っていく。

「ヴィータ！！！くそ！！！」

吉良はＡＭ０３に近付くと、佗助を解放。

「面を上げろ、『佗助』！！」

そして、吉良は斬り付けたものの重さを二乗に重くする斬撃を食らわせるためにＡＭ０３に切りかかるが、その瞬間ＡＭ０３の攻撃が先に襲ってくる。

「なっ！？」

攻撃をまともに喰らった吉良はヴィータと同じビルへと吹き飛ばされる。

「くあああああああ！！！！」

二人が満身創痍の状態になっているのを見ると、ＡＭ０３は自分の分離させてハンマー投げの要領で振り回し二人の体を押し潰す。

「「うあああああああああ！！！！！！」」

ヘリで駆けつけたヴァイスは二人の苦しむ姿を見て、叫び声を上げる。

「ヴィータ副隊長！！吉良の旦那！！」

機動六課指令室で現場の状況を見ていたはやて達の胸に悪寒が走った。

「ヴィータ、吉良共に損傷が激しい！もう限界に近いです、主はやて！！」

「まずいな！打ち所が悪かったか・・・大至急シャマルは現場に向ってくれへんか！？」

「はい！」

シャマルははやての指示を受けると、白鳥と共に転送ポートでタウリンの方へ移動を開始。

「しかし、だとしても今回の問題は早急に対処しないと危険だぞ！あのアンゴルモアの素体は、この世界でも屈指の凶暴な人間らしい。」

モニター画面に映し出された素となったキラー・サムの詳細なデータを見て、クロノはかなり動揺していた。

「怒りと破壊の感情がアンゴルモアの力を更に引き出し、尋常ではない力を出しているんだ！」

「ヴィータちゃん！！吉良さん！！しっかりして！！ヴィータちゃん！！」

フェイトやなのは達の悲痛な叫びも届かないまま、二人は体を動かせなくなり再起不能の状態にまで陥る。

「ぐっ！！！体が・・・動かねえ・・・！！」

「あ・・・阿散井君・・・僕がいなくなった後のこと・・・隊士達にはよろしくと伝えて・・・欲しい・・・！！」

吉良の縁起でもない一言に、恋次は焦りと怒りの気持ちを爆発させる。

「何莫迦なこといってやがんだよ！！！吉良！！！！！お前が死んでも、俺も三番隊の隊士も喜びはしねえんだよ！！！ごちゃごちゃ言ってねえで、立ち上がれ！！！！」

「そうは・・・言っても・・・傷が・・・酷くて・・・ぐあああああ！！！！」

「吉良！！！ぐあああああ！！！！」

二人は為す術もないままＡＭ０３に手足を踏みつけられる。

「「ヴィータ副隊長！！」」

「シャマルはまだか！？」

「高速転送ポートで移動したから、もう少しで着くとおもうけど！！」

ヴィータも吉良もこの時ばかりはもう駄目かと思った。

だが、その時あの二人がやって来た。

高速転送ポートで移動してきた白鳥は琴線斬の音色でＡＭ０３を吹き飛ばし、ヴィータと吉良を助ける。

「「なっ！？」」

白鳥の登場と、隣に現れるシャマルの姿に驚きを隠せない二人。

「待たせたである！」

「大丈夫、二人とも！？」

「シャマル・・・白鳥も・・・！？」

「シャマル！こいつは暫く私が相手をする！お主はその隙に治療を！」

「はい！」

白鳥はシャマルに治療の一切を任せると、徐に起き上がるＡＭ０３を倒すべく鬼道と魔法を駆使して攻撃を開始。

「破道の五十四　『廃炎（はいえん）』」

まずは廃炎でＡＭ０３の胸部に炎をぶつけて、出方を窺う白鳥。

「更にブレストファイア！！」

続いて、炎熱系魔法で更に動きを封しようとする白鳥。

白鳥がＡＭ０３の動きを止めている間に、シャマルは得意の回復系魔法でヴィータと吉良の傷を癒していく。

「助かったぜ・・・シャマル・・・少し痛みが引いてきた・・・」

「ありがとうございます・・・シャマルさん・・・」

「お礼には及ばないわ。湖の騎士、シャマルの仕事はこっちだから！」

だが、そんな三人に思わぬ展開が待ち受ける。

ＡＭ０３の攻撃を喰らい、瀕死の状態になった白鳥が三人の下へと飛ばされてきた。

「のあああ！！！！」

「「「なっ！？」」」

瓦礫の中に埋もれ、意識を失った白鳥にヴィータ達は驚愕の表情を浮かべる。

「し、白鳥！？」

すると、ＡＭ０３はそんな三人目掛けて再び腕を振り回して叩き潰そうとする。

「くっ！クラールヴィント！！お願い！！」

クラールヴィントの能力で自分達の目の前に盾を張るシャマルだが、ＡＭ０３の圧倒的なパワーの前に表情を曇らせる。

「凄い・・・何て力なの・・・！！」

シャマルがほんの一瞬気を緩めた瞬間、盾は破壊されてシャマルは白鳥同様瓦礫の中へと吹き飛ばされてしまった。

「きゃあああ！！！！」

「「シャマル（さん）！！！」」

すると、意識を取り戻した白鳥が隣で傷つくシャマルを見ると、ＡＭ０３の非常な行動に堪忍袋の緒が切れた。

「女性に手を上げるとは見下げた奴だな・・・我が音色の前に鎮まれ！！」

白鳥は琴線斬の音色を最大にして衝撃波を送り、ＡＭ０３の装甲を

破壊しようとする。

だが、その衝撃波を以ってしても装甲は破壊できず敵の攻撃を受け返り討ちにあってしまう白鳥。

「くあああああ！！！！」

「白鳥！！！」

「くそ！！！僕達の攻撃がまるで歯が立たないなんて！？何という奴だ・・・！！」

シャマルの治療で先程よりは動けるようになったヴィータと吉良であったが、いずれにしても勝機はほとんど無い状況だった。

同じ頃、六課指令室でそれを見ていたはやて達も険しい表情を浮かべる。

「シャマル！白鳥さん！」

「このままじゃ四人ともやられちゃうよ！！こうなったら私も行く・・・」

なのははそう言って転送ポートに向おうとした矢先だった。

部屋の中へとは言って来たユーノによってそれを止められる。

「その必要はないよ、なのは！」

「「「「えっ！？」」」」

「「「「えっ!?」」」」

突然姿を現し、思いもよらぬ言葉を聞いた全員は首を傾げてしまった。

「ユーノ君・・・それどういう意味なの!?」

「そのままだよ。ヴィータと吉良さんだけで奴を倒せると・・・この新型カートリッジシステムと斬魄刀補助デバイスを使って!」

ユーノは自信に満ちた表情で完成したばかりの新型カートリッジと、斬魄刀補助デバイスを全員に見せ付ける。

「ユーノ!?お前・・・そんなもの何所で!?」

クロノはユーノが持っていた見覚えの無い代物に驚き、思わず尋ねる。

「これからの事を考えて色々と準備はしといたんだ。六課前線メンバー全員分はまだ出来ていないけど、取りあえずこの二種を二人に転送するよ。ソフトも完成したばかりだし、実戦で使ったことはないから何とも言えないけど・・・これしか手はない!」

すると、はやてもその言葉を聞いて覚悟を決める。

「・・・うん。せやな、ユーノくんの言う通りやわ。急いで転送準備に入って!!何としてもヴィータと吉良さん、シャマルと白鳥さんを助けるんや!!」

「「「「了解！！」」」」

「「「「了解！」」」」

全員は早速タッチパネルを操作して転送場所を算定し、座標軸を固定する。

「はやてちゃん、シャーリーから転送準備完了を報告！いつでも行けます！」

「こっちも座標軸の固定は済んだよ、はやて！」

「よし！ユーノくん、お願いや！！」

「ああ！行くぞ・・・新型カートリッジシステム、斬魄刀補助デバイス・・・転送！！」

ユーノは高速転送ポートを使って自らが発明した二種の機械をヴィータと吉良の下へと転送する。

追い詰められ、まさに絶体絶命に陥っていた満身創意の二人。

「ぐっ！！！！！なっ！？」

すると、そんなヴィータと吉良の頭上から転送ポートを使って現れる二種の機械。

「何だ・・・これは！？」

そのとき、二人の下にユーノからの通信が入る。

『ヴィータ、吉良さん！僕の話を聞いて欲しい！』

「ユーノさん！？」

「どういう意味だよ、ユーノ！？」

『そこにある二種の機械は、僕が作った新型のカートリッジシステムと斬魄刀の能力を補助・強化する装置だ！それを使えば、奴に対抗できるはずだ。実戦で使うのは今回が初めてだけど、それで奴を叩きのめしてくれ！！』

それを聞いた二人は顔を見合わせると、お互いに納得し首を縦に振るう。

「おうよ！！そう言うことならお安い御用だ！！」

「勝つ為には・・・こうするしかないのなら、僕はやるよ！！」

「待ってろよシャマル、白鳥・・・直ぐに助けてやるからな！」

ＡＭ０３が気を取られて攻撃を中止している間に、二人はそれぞれの専用機械を拾い上げると自分のデバイスと斬魄刀に取り付ける。

「カートリッジシステム・・・セットオン！！」

〈Ｙｅａｒ　Ｆｏｕｒｔｈ　ｆｏｒｍ〉

「侘助、能力向上！！」

ヴィータが新型カートリッジシステムをグラーフアイゼンに装填させた瞬間、グラーフアイゼンの形状が大きく変化を遂げ、ギガトンハンマーとはまた違うごつごつとしたハンマーとなった。

モニター画面でその変貌したグラーフアイゼンの姿を見ていた全員は絶句した。

「何だあれは・・・!?グラーフアイゼンにあんな形態は無かったはずだが!?」

「これがユーノ君が造ったカートリッジシステムの力!?」

「そう。新型カートリッジシステム、通称『ＩＰカートリッジ』は使い手のデバイスに合わせて形状を変化させ、その人の心に強く反応するように出来ているんだ。思いが強ければ強いほどＩＰカートリッジは力を発揮する。」

一方の吉良の侘助は、形状そのものは変化しないものの飛躍的にその力は増幅され能力も桁違いに向上していた。

「侘助!!“十段斬り”!!」

吉良の斬撃を十回その身に受けたＡＭ０３は一瞬にして途轍もない重さで体の体制を崩しその場に這いばる用に倒れ込んだ。

恋次もすぐに能力向上した侘助の力に驚愕する。

「凄げー!!吉良の攻撃が何時もの数倍以上も重くなってやがる!!」

「佗助の二乗重加能力を四乗重加能力へとグレードアップさせたんですよ！あれなら、一太刀でも強力な一撃を食らわすことが出来ます。」

間近でそれを見ていたシャマルも白鳥もあまりの凄さに言葉を詰まらせる。

「凄い・・・吉良さんの攻撃でＡＭ０３の動きが・・・！？」

「完全に止まった・・・！？」

吉良はＡＭ０３の動きを完全に封じると、止めの一撃を入れるようヴィータに告げる。

「今だヴィータ！！アンゴルモアを取り出せ！！」

「おっしゃあああ！！！！グラーフアイゼン・・・決めるぞ！！！」

ヴィータは空中に飛び上がると、ビルほどまでに巨大化したグラーフアイゼン、第四形態を渾身の力で振り上げるとＡＭ０３に狙いを定める。

「受けてみやがれ！！！私とグラーフアイゼンの新たな力・・・クラッシャー・・・シュラーク！！！！！」

クラッシャーシュラーク。

それは、ＩＰカートリッジを使用したことによって変化した鉄の伯爵グラーフアイゼンの第四形態にして、全ての物質を粒子以下の状態にする鉄槌の騎士ヴィータの最強にして最大の破壊力を持った必

殺技なのだ！

「せりゃあああああああああああ！！！！！！！！」

クラッシャーシュラークがＡＭ０３に振り下ろされた瞬間、中心核の部分だけを残してＡＭ０３の体は完全に消滅、見事勝利を収めた。

「やった！！！」

「おお！！見事であるぞ！！」

シャマルも白鳥もこの勝利に胸躍らせ、安堵の溜め息をつく。

ヴィータはグラーフアイゼンを元の状態に戻すと、カートリッジを取り出しじっとそれを見つめた。

すると、吉良がヴィータに近付き声を掛ける。

「やったね、ヴィータ。」

「おうよ！！それに・・・ちゃんと核も取り出したな！シャマル、そんな体で悪いが・・・封印処理頼めるか？」

「ええ。勿論！」

シャマルは自分の怪我の事など全く気にもしないで、取り出された大玉サイズのアンゴルモア核にそっと手を触れるとクラールヴィントにキスをして封印作業に入る。

「クラールヴィント・・・お願いね。」

〈Ｓｅａｌｉｎｇ〉

すると、中心核が光り輝き出すや否やアンゴルモアが取り出され素体となった人間も休眠状態で無事に解放されたのであった。

クラールヴィントの中に納められるアンゴルモア。

六課のメンバーも漸く一安心する。

「ＡＭ０３の殲滅、及びアンゴルモアの封印を確認！」

「ふ～～～一時はどうなるかと思ったわ・・・」

「取りあえず、無事にアンゴルモアは回収したことだし、本局の人に後は任せて戻って来ると良いよ。」

なのはのその言葉を聞いて、ヴィータも吉良も白鳥達も頷く。

『ああ。シャマルも白鳥も傷が結構酷いからな。』

『それにしても、ユーノさんが造ってくれたこれがなかったら・・・正直僕達はやられていただろう・・・本当に有難うございます。』

「世辞はいいですよ。お陰でちゃんと作動して倒せたんですから。帰ってきたら一先ずそれを僕に返してください。改めて現物データを取り込んでソフトを完全にしてからお返ししますので。」

『解った。あんがとな、ユーノ。』

その後、ヴィータと吉良、シャマルと白鳥はヴァイスのヘリに乗って無事に任務を果たして機動六課へと帰還する。

だが、彼らが立ち去った後・・・破面魔導虚アスモデウスはまたしても先をとられてしまったことに激しい憤りを感じていた。

「・・・またしても空振りか・・・時空管理局・・・機動六課・・・この次はそうはいかんぞ・・・」

アスモデウスはそう言うと、転移魔法を使ってタウリンから姿を消し次なる場所へと向ったのであった。

さて、その日の機動六課では恋次とユーノがモニターと睨み合って残りのアンゴルモアがあると推測される場所のマップを確認していた。

「残り２８個か・・・まだまだ道は遠いなこりゃ・・・」

「地道にやっていくしかないですよ。一応、アンゴルモアは厳重に封印処理をかけて保管してますから。」

「それにしてもユーノ・・・あんなものどうやって造ったんだよ？吉良の斬魄刀の能力をあそこまで向上させるなんて・・・」

「浦原さんに色々と魂魄技術や霊力技術を提供してもらいまして、それを僕なりに工夫して造り出したんです。」

「つーことは、俺の蛇尾丸も更なる能力向上が可能って訳か？」

「ええ。ただ、人数分の確保はもう少し時間が掛かります故それま

でもう暫くの辛抱を♪」

「へいへい。まっ、気長に待つとするさ。」

やがて、自室に戻ったユーノは本日ヴィータと吉良が使用した二種の機械から現物データを解析し、さらなる改良とソフトの完成を目指して徹夜で作業を続けていた。

「（アンゴルモアが発する膨大なエネルギーは方や世界そのものを破壊できる力を有している・・・そして方や正しきものには真の力を与える・・・）」

すると、一度ユーノは作業を中断させて月明かりを見ながら心中こう思った。

「（ＩＰカートリッジシステムも、斬魄刀補助デバイスも・・・その動力源となる強い思いが力となり、デバイスと斬魄刀を究極にまで力を高める。皆にはこれからの決戦に備えて力をもっとつけてもらわないといけない。そして、なのは・・・君がもう無茶をしないで全力全開で戦える為にも・・・このシステムを早く完成させないと・・・）」

ユーノの言葉の真意は今だ謎に包まれたままであるが、これが一体なのはにどんな影響を齎すのかはまだ話すわけにはいかないのである。

その頃、アルハザードへ一時帰還したアスモデウスはスカリエッティに深々と頭を下げて、謝罪の言葉を口にしていた。

「ふふふふ。そうか・・・またしても機動六課に先をとられたか・・

・」

「申し訳ありません・・・ドクターの期待に応える事が出来なくて。」

「何、気に病むことはない。彼らが私と同じものを集めているというのなら話は簡単だ。彼らよりも更に早く動けばいいだけだよ。次なる場所は既に特定済みだ。」

スカリエッティはそう言うと、モニターに次なるアンゴルモアがあると予測される異世界のデータをアスモデウスに見せ付けた。

「ここは・・・！？」

その世界の情報を確認したアスモデウスも思わず驚きの表情を見せる。

「ふふふふ。面白い場所だとは思わんかね、アスモデウス？」

「はい・・・それはもう実に・・・」

スカリエッティの不敵な笑みにつられて、アスモデウスも不敵な笑みを浮かべた。

「さあ！行って来るといいよ・・・そして、今度こそアンゴルモアの回収に尽力するんだ！」

「はっ！了解しました。」

では、次なるアンゴルモアが潜伏していると予測される異世界の情

報を公開しよう。

第９９管理外世界『リバイバル』

別名、もう１つの尸魂界（ソウル・ソサイティー）。

この世界は、青春時代（約１５～１８歳）に人生を満喫できなかった子達（例えば、身体に障害を負った子、夢なかばで事故死したもの）の救済場所。

尸魂界とは、直接的な関わりはないが、ごく一部の死神には、知られている。

今回の騒動の発端は、あまり目立つことも無く青春時代を暗く過ごし、何となく死んでしまった人生に失望した青年の独り言から始まる。

「（僕の名前は海堂直人（かいどうなおと）・・・性格は根暗で友達なんか一人もいない。人生なんて・・・退屈以外の何物でもない。繰り返されるつまらない日常・・・愛想笑いを振りまき、媚を売る毎日。それはまるで生きているようで死んでいるような・・・心に孔が開くという表現はこう時に使うべきなのか？そんなある日・・・僕の前にあいつは現れたんだ・・・）」

「ちょっと！聞いてるの直人！！」

「え？ああ・・・勿論聞いてるよ。」

「だったら返事くらいしてよもう！」

リバイバルという世界でこの二人は運命の出会いを遂げた。

「（こいつはシンシア。何故だかは解らないが、自分の死に方に強い不満を持ち何としてでも成仏をしようと僕を駆け巡らす女で、性格はかなりキツメだ。シンシアは生前、陸上の全国大会にまで足を進めることが出来たほどの有望株だった。ところが、彼女は地区大会の予選当日・・・）」

〈きゃあああああ！！！！！〉

「（たまたまブレーキを踏み損ねたトラックに衝突・・・帰らぬ人となってしまった。そしてシンシアはこの世界に送られ、僕と出会った。一見すると、僕とは境遇も性格も似ても似つかないが・・・ただ一つ、こいつの顔から滲み出る深い悲しみは見て解る。最初はいやいやこいつの茶番に付き合っていたが、今はこいつの笑顔を取り戻してやりたいと思っている。シンシアという女が・・・せめて成仏できるようにする為に・・・もう一度笑顔を取り戻してくれるように・・・）」

その日の夕方、沈む太陽を見ながら直人の隣で項垂れるシンシアは深い溜め息を吐く。

「はぁ～～～結局今日も成仏できなかったな・・・」

そんなシンシアの顔を見て、複雑な表情を浮かべる直人。

「御免・・・また力になれなかった・・・」

シンシアの態度に意気消沈させる直人を見たシンシア自身は手を横に振って尚との所為ではないと弁解をする。

「べ、別に直人の所為じゃないから！こんなことに付き合ってもらってるだけ・・・私は充分嬉しいから・・・」

「気休めならよしてくれよ。お前のそんな作り笑いを見ても、僕は何の嬉しくも無い・・・」

「直人・・・・・・」

「お前の未練がここでは叶いづらいというのは重々分かってるよ・・・でも、例え1パーセントの可能性だろうと僕は諦めない！だから頑張ろう・・・諦めたらそこで終わりなんだ！そこが終点になっちゃうから！」

「・・・うん・・・ありがとう、直人！」

直人の前向きな言葉にシンシアも元気を取り戻し、二人は再びこの世界で成仏を達成させるために歩き始める。

「（昔の僕ならこんな台詞・・・口にすることも無かった。こいつが・・・シンシアが僕のそんな性格を変えてくれたんだ・・・根暗で引っ込み思案だったこの僕の世界に・・・漸く光が差し込んだんだ！だから僕は力が欲しい・・・シンシアが未練を断ち切り成仏できるように・・・シンシアがもう一度心の底から笑ってくれるように・・・その為の力が・・・僕は欲しい！！）」

と、直人が強くそう願ったとき。

突然草陰から強い光が発光し、歩いていたシンシアの目に止まった。

「あれ！？」

シンシアは不審に思い、隣を歩く直人に声を掛ける。

「直人・・・あの光・・・一体なんだろう！？」

「え！？」

シンシアと共にその光のほうへと慎重に歩み寄る直人。

草陰を探ると、強い光を放つ極めて小さな欠片が二人の目を惑わせる。

「何かな・・・この欠片・・・！？」

直人はその謎の欠片に手を伸ばし、触れた瞬間光は先程とは比べ物にならないほどにまで巨大になり直人とシンシアを飲み込んだ。

「「わあああああああああああああ！！！！！！！！！！！！！！」」

これが、海堂青年とシンシアがＡＭ０４へと変貌する切っ掛けとなるとは、二人も思いもよらなかっただろう。

あの後、数日が経った後――――――事件はついに動き出す。

リバイバルにも地球やミッド同様、文明は栄えている。

道路には普通に自動車が走り街中を移動する。

そんな街中で、突然信号機が誤作動を起こし点滅をしなくなった。

「あれ？どうしたんだ！？」

車を運転していたドライバーや歩行者は全く動き気配のない信号機の故障に困り果てていたその時だった。

「あ！？」

突如として、後ろから現れる猛スピードで滑走する不気味な声を発する一台のトラック。

『魂食わせろ！！！！！！！！！』

「「「「わあああああああああああああああああ！！！！！！！！」」」」

人々は逃げる暇も与えられず、謎のトラックと激突。

魂を根こそぎ奪い取られてしまった。

この情報は直ぐに機動六課へと届けられ、クロノも事件の犯人がＡＭ０４であると断定する。

「ＡＭ０４だな・・・」

「今回のＡＭ０４は、真夜中の道路上にトラックの姿でいきなり現れ、いきなり消える特殊な奴や。」

「でも、何のためにだろ？」

フェイトの何気ない疑問を聞いたエリオは以前ユーノから聞いたこれまでのＡＭについての推測をフェイトに改めて話す。

「確かユーノ先生の話じゃ、アンゴルモアに取り付かれた素体の知的生命体そのものの感情によって外見も能力も左右されるって言ってましたよね。」

「分かった！今回のＡＭ０４は、トラックが好きで好きで堪らないトラックマニアだよ！！」

スバルはそう判断し、手を成程というばかりに叩くが隣に居たティアナはあまりに短絡的な考えのスバルに呆れてしまう。

「そんな人そう滅多にいないでしょうスバル・・・単純すぎよ・・・」

「え～～～そうかな～～～？」

すると、スバルのその考えを聞いて弁解に入ったのは孫の手で背中をかく鬼太郎だった。

「だが、可能性は捨てきれないぜ！今までだってそういったケースだったしな。元々住んでいた土地を追い出された馬。血の気の多いプロレスラー。どいつもこいつも精神的に不安定な奴が素体となっていたからよ。」

「素体によってアンゴルモアの発するエネルギーは変わってくるけど、強い願いであればあるほど力の制御が利かずに暴走しちゃうから、早い対処が必要だね。」

なのはのその言葉を聞いたフォワード陣もそう思い、真剣な表情を浮かべる。

すると、なのはの隣の席に座っているユーノは険しい表所を浮かべながら今回のＡＭ０４の対処法を考えていた。

「しかし、今回のＡＭ０４は思った以上に厄介だよ。」

「と、言いますと？」

ユーノの言葉に金太郎がそう尋ねると、ＡＭ０４の詳細なデータをモニターに映しながら説明を始める。

「まるで虚と同じで、無差別に魂魄を喰らってしまう性質の悪いタイプなんだ。被害者数は分かってるだけでも数十名を超える。」

「現れた世界は何所ですか？」

吉良の言葉を聞くと、ユーノは直ぐにＡＭ０４が確認された世界の情報を探し出しメインスクリーンに表示する。

「第９９管理外世界『リバイバル』か・・・あれ？ここって確か・・・！？」

「どうしたの、ユーノ君？」

「いやね。この世界について、前に浦原さんに聞いた話なんだけど・・・魂魄が住まう世界尸魂界と同様、青春時代に人生を満喫できなかった子達が導かれるもう一つの魂魄の世界で、別名をアナザー・

ソウル・ソサエティ。」

「アナザー・ソウル・ソサエティ？」

「直接尸魂界とは関係は持たないけど、極一部の死神は知っているとのことだよ。お前も知ってるだろう、鬼太郎。」

「そうっすね。前に知り合いからそんな話を聞いたことがあったんで、ちらっとだけですが・・・」

「何れにしろ、このまま放置するわけにはいかんな。アンゴルモアが暴走を加速化させれば、また被害が大きくなるからな。」

腕組みをしてながら眉間に皺を寄せるシグナムは事態の早期解決を提案する。

「今回は魂魄の世界だから、魔導師である六課の前線メンバーは残念ながら行くことは不可能だよ。回収は死神である恋次達と白鳥さん、鬼太郎の四人で頑張ってもらうしかないよ。」

「よっし！ほんなら今回の作戦はその四人で行くとして・・・あ！？」

その時、はやては会議中にもかかわらず大鼾をかいて熟睡する恋次を見て、呆れてものも言えなくなってしまう。

「かあああああああ～～～～～～～～～！！！！！！！」

「く～～～～！！静かに席についてると思ったらこれかい！？はぁ～～～ほんまにこの人隊長さんでええのかな～～～」

「阿散井君も連日の出動で疲れてるんだよ。分かってあげて欲しい。」

「ま～吉良さんがそこまで言うんならええかな。」

「よし♪出動するまえに四人にはこれを渡しておくよ・・・はい♪」

ユーノはそう言うと、机の引き出しから完全調整を終えた斬魄刀補助デバイスを吉良、鬼太郎、白鳥に手渡す。

「ユーノ店長・・・私にも!?」

「ＡＭ０４が暴走したら、止められるのは四人だけだよ。自分の力を最大限に発揮して暴れられるように、ちゃんと改良もした。前線メンバーにも明日ぐらいにあげるから♪」

「「「「ありがとうございます!」」」」

「よし、それじゃあこれより転送ポートを開く。アンゴルモア回収に向けて、死神部隊・・・出動!」

「ぐあああああああ～～～～～!!!!!」

クロノがそう告げたときでも、恋次は今だ起きることなく熟睡をし続ける。

終いには涎が大量に机の上に流れ込んでいた。

クロノ自身もとうとう我慢を堪えられなくなり、大声を上げて恋次

を叩き起こすことにした。

「あなたもいい加減起きろ!!!」

もう一つの魂魄の世界、リバイバルとは一体どんな世界なのか？

そして、彼らを待ち受けるＡＭ０４はどんな能力を秘めているのか!?

小さな破壊神（後書き）

教えて、ユーノ先生！

ユ「今日はＩＰカートリッジシステムについてね♪」

ユ「ＩＰカートリッジのＩＰとは、Ｉｎｆｉｎｉｔｙ　Ｐｏｔｅｎｔｉａｌの略称で・・・魔導師のデバイスを究極までに力を増幅させ、魔導師そのものの無限の可能性をエネルギーとした全く新しいカートリッジシステムだよ♪」

ユ「使い手によって形状も能力も大きく違ってくるけど、この能力をフルに発動させれば死神の卍解にも匹敵する力を得る。」

ユ「今回ヴィータが使ったグラーフアイゼンの第四形態は、ヴィータの内に眠る闘争本能を呼び覚まし、形にしたものこそがグラーフアイゼンクラッシャーフォームなんだよ♪」

ヴィ「けど結構重くてよ、改良してくれよユーノ・・・」

ユ「贅沢言わないの。こっちだって改良作業で忙しいんだから。」

ヴィ「せめてもっと持ちやすい形状にしてくれてもいいだろうが！」

ユ「その形になったのは君の心を具現化させたからだよ。文句は自分に言いなよ。」

ヴィ「私が自分に謝っても意味ねえだろう！！」

ユ「え？夜中に変な音が聞こえる！？」

ヴィ「そうなの！ユーノパパ、調べてくれない！？」

ユ「よし！可愛い娘の頼みだ♪喜んで！！」

夜中、ユーノが音の原因を調べるため深夜まで寝ずにいると・・・

ユ「お！早速聞こえてきたぞ。」

ユーノは音のする方へ走っていき、徐に部屋の扉を開く。

ユ「誰だ！変な音を出している・・・って！？」

中にいたのは琴線斬を解放し、演奏している白鳥。

白「おや？ユーノ店長、如何した？」

ユ「紛らわしい音だしてもう・・・・・・」

タウリン篇

キラー・サム／ＡＭ０３

声　―　江川央生

タウリンの世界における悪役派プロレスラーにしてＷＢ級世界選手権王者。奇抜な格好と無数の棘が生えた棍棒で相手を苦しめ、更にはアルコール度の高い酒を口から吹きやけどを負わせる危険な戦闘スタンスを持ち味としている。負けたくない・自分が最強という欲望から偶然手にしたアンゴルモアの力を発動させてしまい、ＡＭ０３となって吉良たちを窮地に追い詰める。

ライガ―原田

声　―　宮本充

キラー・サムに挑戦を仕掛けに来たタイガーマスクを思わせるような覆面を纏った拳法家。ＡＭ体と化したキラー・サムの姿を見て一目散に逃げ出す。

用語解説

ＩＰ（アイピー）カートリッジシステム

ユーノ・スクライアが開発した新たなるカートリッジシステム。Ｉｎｆｉｎｉｔｙ　Ｐｏｔｅｎｔｉａｌの略称で魔導師のデバイスを究極までに力を増幅させ、直接魔力を力にしているのではなく、魔導師そのものが持ちうる奥底に眠る無限の可能性をエネルギーとした全く新しいカートリッジシステム。ブーストデバイスなどのカートリッジシステムを搭載していないデバイスに関しては別個に装着具として存在し、厳密には「ＩＰブースター」と呼称している模様。尚、使用方法は従来のカートリッジシステムと同じである。

斬魄刀補助デバイス

ＩＰカートリッジと一緒に開発した斬魄刀の能力を強化・補助するデバイス。柄頭に装着することで個々の死神の霊力に反応して斬魄刀の形状や能力などを自在に変化させ攻撃力や防御力などを高める。

もう一つの尸魂界（前書き）

今回の話の最後に出てくる世界も虚空さんからのアイディアです。

ありがとうございます。

＞ｉ１２８７４―７０９＜

霊力と魔力を併せ持った虚、魔導虚。

遥か昔、彼らは虚の状態から偶発的な出来事から魔力を手に入れた不完全な存在だった。

だが、浦原喜助が作り出しバラバラとなった禁忌のロスト・ロギア、『崩玉』が彼らを完全なる魔導虚へと変貌させ、ジャイル・スカリエッティの手により仮面を剥いだ存在・・・破面魔導虚に進化して

いったのである。

機動六課死神部隊よりも先にこのリバイバルへと訪れていた破面魔導虚、アスモデウス。

彼のその表情からはただならぬ威圧感を感じるのであった。

「本当の恐怖は・・・既に始まっている・・・」

暗く光の当たることも少ない密林の奥深くの木々に足を止めていたアスモデウス。

「ロスト・ロギア・・・アンゴルモア・・・今日こそは回収させてもらうぞ・・・」

そう言うと、アスモデウスは響転を使って夜の都市へと移動し、回収目的であるアンゴルモアを捜索すべく密林の頂上を飛んでいったのであった。

同時刻、魂魄の世界『リバイバル』へと到着した恋次達一向は尸魂界とは全く文明も建物も、それら以外も異なる世界へと到着。

四人は横断歩道橋の上でその余りに文明の違いすぎる世界を一望していた。

「ここが・・・リバイバル・・・!?」

「まるで尸魂界とは文明も世界観も違うね・・・!」

「寧ろ、地球と似てるって言った方がいいのかもな。」

「さて、現在の時刻は午後１１時５０分。霊圧を探れば、発信源はまもなくこの付近の道路を通過する筈であるが・・・」

白鳥が時計を確認しながら、問題の幽霊トラック・・・即ちＡＭ０４を待ち伏せしていたちょうどその時だった。

ユーノからの緊急電信が四人の下に届いた。

『恋次さん！来ました！警戒、お願いします！！』

「何！？」

恋次達がユーノの言葉に息を呑み、前方からやってくるであろうＡＭ０４を険しい表情で待ち構えるのであった。

そして、その目標がついに彼らの前に現れ猛スピードで道路を走りながら奇声を発しながら何時ものフレーズを口にする。

『魂食わせろ！！！！！！』

その時、ＡＭ０４が発する『霊波（れいは）』と呼ばれる魂魄の生命維持を著しく狂わせる特殊な波長が自分達にも影響が出ると考えた恋次は一時空の上へと回避することを全員に提案する。

「ヤベー！！！てめえら逃げるぞ！！！」

だが、恋次・吉良・白鳥の三人はいち早く回避をすることが出来たが僅かに遅れた鬼太郎がＡＭ０４が通り過ぎた際に発する霊波を体に浴びてしまい、絶叫し始めた。

「うあああああああああああああああああああ！！！！！！！！！！！！！！！」

そして、鬼太郎はそのまま誰もいない橋の上へと倒れこみ動かなくなった。

慌てた恋次達三人が鬼太郎の状態を確かめるために傍まで近付く。

「鬼太郎！！」

「おい！！大丈夫であるか！？」

すると、白鳥の言葉を聞いて倒れこんでいた鬼太郎が苦しそうな表情を向けると、意地を張った様子でこう言う。

「あ・・・当たり前だろ・・・俺様を・・・誰だと思ってやがる・・・かっ！」

「鬼太郎さん！！」

鬼太郎は再び意識を失い、恋次達の心配を更に仰いだ。

すると、指令室で鬼太郎の異常を感知した金太郎やティアナ、浦太郎も心配になり恋次達に通信を入れる。

『どうしたんだ、鬼太郎！！』

『恋次さん、どうしたんですか！？』

『先輩!!一体何があったの!?』

「一先ず鬼太郎を六課に運ぶぞ!!急がないとやべえ!!」

「「ああ!!」」

恋次の賢明な判断で、一度機動六課に戻った一向は直ぐに鬼太郎を集中治療室へと運び、全ての処置をユーノと金太郎達に任せる。

尚、機動六課へ戻る途中吉良の応急処置もあってか生命機能の停止は免れることは出来た。

そして、治療が終わり病床で呼吸器をつけ深い眠りに着く鬼太郎をユーノとなのはは複雑な表情で見つめていた。

「う～ん・・・鬼太郎の魂魄を以ってしても防ぎきれないほどの霊波を発してダメージを負わせるなんて!?」

「完治まで、１４時間は要するよ・・・ユーノ君・・・」

「たく、あの時吉良さんが傍に居なかったら・・・鬼太郎の魂魄は生命を維持できなかった筈だよ。」

「でも、どうして鬼太郎さんだけがこんなにも重症を負ったのかな？恋次さん達だって条件は同じな筈でしょ？」

「うん。鬼太郎は普通の死神と違ってどちらかというと魔導師としての血の方が濃いんだよ。鬼太郎の両親は、母親が魔導師。父親が死神でね・・・鬼太郎は母親似なんだ。純粋な死神である恋次さん達と比べて些か魂魄の力が弱かったんだろう。」

こうして、鬼太郎の予期せぬ負傷が機動六課の捜査時間を大幅に削る羽目になったことは目に見えた事実である。

そして、次の日の夕方・・・漸く学校が通常通りの日々を取り戻し明日からの連休に関する説明をヴィヴィオの担任、ノアが説明をしているときだった。

「それでは、明日からの連休。怪我や風邪に気をつけるように・・・宿題はありません！」

「「「「わあああああいいいいい！！！！！」」」」

宿題がないと知った瞬間、生徒達全員は教材を天井に向けて放り投げ大喜びをする。

それぞれの生徒が連休の予定を尋ねたりしながら下校をする中、教室で帰り支度をしていたヴィヴィオの親友、リオ・ヴェズリーに一人の男子生徒が連休の予定を聞く。

「ウェズリーのとこはどっか行くのか？」

「私はね！お母さんのほうのおじいちゃんの家に泊まりに行くことになってるんだ！」

「ああ、いいな！私はママもパパも六課で働いてるから何所にもいけないんだ。」

せっかくの連休だというのに、なのはもユーノも機動六課に二十四時間勤務であるために何所にも行く予定のないヴィヴィオは羨望の

眼差しを浮かべた。

「でもヴィヴィオは私達と違って貴重な時間過ごせる分良いと思うけど。」

「えへへ♪それもそうだね♪」

すると、また一人の男子生徒がヴィヴィオ達に向って誇らしげに連休の予定を告げる。

「ふふふ。僕はママ達と地球の沖縄だけどさ！」

だが、それを聞いていたコロナがそんな男子生徒に向って破顔一笑を浮かべて更に上であろう自身の予定を口にする。

「沖縄ですか。いいですわね・・・私はワイハですよ。ワ・イ・ハ。」

男子生徒はそれを聞いた瞬間悔し涙を流し、コロナは少し勝ち誇った感じで男子生徒に向って目を細めた。

そんな様子を見ていたヴィヴィオやリオ達は呆れる以外何も出来なかった。

さて、その日の夜――――――完全回復を果たした鬼太郎と供に恋次達四人は再びリバリバルへと足を運び、自身の霊圧を頼りにＡＭ０４が出現するであろうポイントに向けて移動を開始。

その様子を特殊なサテライトヴィーで映像を確認する管制室のシャーリー。

「現在異常なし。死神部隊、全員待機中。」

暗い夜の街を離れ郊外のほうへと出ていた恋次達だったが、その時四人はＡＭ０４と思われる異様な霊圧を確かに感じ、連絡を取り合う。

「!?この霊圧は・・・近いぞ!」

「ああ・・・分かってる。」

「先程からビシビシ痛いほど感じるぞよ!」

「たく・・・随分血走った奴だぜ・・・今回の相手は・・・」

四人は、霊圧の発生源を目指してそれぞれに移動を開始。

だが、そんな四人のことを誰にも気付かれぬことなく密かに霊圧を探っていた破面魔導虚アスモデウスは木の上から鬼太郎の動きをずっと探っていた。

「この霊圧・・・大きさから見ても間違いなさそうだ・・・死神・・・か・・・」

アスモデウスの不可解な行動は、この時まだ誰にも予想がつかなかった。

その頃、機動六課指令室で恋次達の動きをモニターで確認していたクロノ達も神妙な表情で四人を眺めていた。

「恋次さん達全員も、感知したようだな。」

「現在四人は座軸２９００~３２００へ北上中です！」

「魂魄を喰らい、無差別に霊魂の命を食い漁る幽霊トラックか・・・恐ろしいことだ。」

「奴の発する特殊霊波は鬼太郎の魂魄をあそこまで追い込んだほど強力なものだ。恋次さんとて迂闊に近付くのは無理だろう・・・」

「どうするつもりだ、ユーノ？」

「僕の作った霊波遮断外套を着た吉良さんと白鳥さんに賭けるしかないだろう。あれを着ていれば霊波による攻撃から身を守ることが出来る。」

霊波遮断外套。

鬼太郎の予期せぬ損傷を間近で確認したユーノが、僅か１２時間で作成した霊波を完全シャットアウトする特殊な外套。

あまり時間が賭けられなかった分、あまりに強すぎる霊波であれば外套を着た吉良達とて影響を受けない訳ではない。

「ここはユーノ君の作戦を信じてみよう、みんな！」

「「「「はい！」」」」

「おう！」

「うん！」

「ああ。」

なのはのユーノに対する信頼は本物だった。

なのはの言葉を聞いてフォワード陣全員、ヴィータやシグナム、さらにはフェイトやはやても肯定の返事をするのであった。

順調に郊外を走りながら六課からの指示を待ち続ける吉良、白鳥。

すると、ティアナからの通信が二人に入る。

『吉良さん、白鳥さん。作戦手順・解説書全２９項目、全て丸暗記できましたか？』

「一文字も逃さずにね。」

「我々の頭脳をどこかの下等な二人と同じにしないでもらいたいぞよ！」

『了解。』

その言葉を聞いてティアナも安心した。

だが、白鳥の癇に障る発言を聞いていた恋次と鬼太郎は怒りを抑え切れずに白鳥に文句をつけてきた。

『『おい！！下等な二人って言うのは俺達のことか！！！』』

白鳥は怒りを静めることの出来ない二人を完全に無視して、一人目の前に広がってきた小さな町の方を見ながら独り言のように呟く。

「あの町の向こうか・・・・・・」

やがて、夜も大分更けて辺りが完全に静まり返ったとき。

それぞれのポイントでＡＭ０４が出現するのをじっと待っていた四人と機動六課指令室のメンバーたちの下についにその知らせが警報として入って来た。

「ん！？」

トンネルを抜けて誰もいない一般道を猛スピードで走り去るＡＭ０４をモニターで確認したはやて達の下に緊張が走る。

「出てきたで・・・噂の幽霊トラックや！」

「一般道だって言うのになんて飛ばしてるの！？」

ふとフェイトは一人そんなことを思ったそうな――――――。

ＡＭ０４が通りかかる直前、待ち伏せをする吉良と白鳥の下にキャロの指示が入る。

『吉良さん、白鳥さん。スタンバイお願いしますね！』

「ああ。行きますよ、白鳥さん！」

「了解である！」

二人はユーノから渡された霊波遮断外套を身に纏うと、瞬歩を最大限に活かしてＡＭ０４の速度に追いつこうとする。

二人の様子をモニターで見ていたはやて達だったが、強い霊波の影響で画像が可笑しくなり映像が乱れたところでリィンが口にする。

「これ以上のサテライトヴィーは不可能です！」

「あとは遮断外套を着た吉良さんと白鳥さんに任せるしかないですね。」

浦太郎のその言葉を聞いて、フェイトはユーノに外套の強度を尋ねる。

「ユーノ、あの遮断外套ってどの程度までもつの？」

「大体霊波３００万から５００万てところかな。調べたところ、奴の放つ霊波はおよそ７００万てところだ。」

「え！？そんなので本当に大丈夫なんですか、ユーノ先生！？」

「大丈夫だよ、エリオ♪心配はいらない・・・あの二人は全ての霊魂を調節する死神だからね♪」

ユーノは信じていた。

あの二人が必ずや作戦を遂行出来る死神であるということを。

二人はトラックの両サイドにつくと、片方の手を霊波を放ちながら

走行をし続けるＡＭ０４に向けて五十九番の破道で攻撃をする。

「「破道の五十九・・・・・・」」

二人の声がぴったり合さりあい、掌から放たれる電撃を纏った氷雪の竜巻。

「「『氷雪雷（ひょうせつらい）』！！」」

氷雪雷を両サイドから直に受けたＡＭ０４は霊波を消滅させ、吉良と白鳥は作戦成功に歓喜の声を上げた。

「「やったあ！！」」

霊波が弱まったことによって指令室のスクリーンも復活、映像が映し出される。

「霊波・・・弱まってます！」

「サテライトヴィー・・・復活します！」

二人の成功を目の当たりにしたユーノは誰よりも喜びの声を上げる。

「おお♪いいぞ、成功だよみんな！」

「よおし！！恋次さん、鬼太郎さん！！ＡＭ０４を捕獲だ！！」

「「了解だ！！」」

クロノからの指示を受け、待ってましたとばかりに威勢のいい返事

をする恋次と鬼太郎。

二人はＡＭ０４の正面に先回りして待ち伏せをしていた。

そしてギリギリのタイミングを見計らって蛇尾丸の刃と鎖条鎖縛でＡＭ０４の動きを完全に捕らえようとした。

「咆えろ、蛇尾丸！！」

「縛道の六十三　『鎖条鎖縛』　！！」

二人の息の合った連携によって、ついにＡＭ０４は動きを完全に封じられその場に急停車したのであった。

「やりましたね、二人とも・・・ん！？」

なのはも作戦の成功に安堵の表情を浮かべたが、だがその時事態は予想もつかない方向へと進んでいったのであった。

何と、停車したＡＭ０４は再度強い霊波を発生させるとその勢いで周囲にいた恋次達を吹き飛ばし束縛を解いてしまったのだ。

「うあああああ！！！」

「のあああああ！！！」

「何だよこりゃ！？」

「まだ何かあるのかよ！？」

四人が体勢を立て直し警戒態勢を取っていた矢先、それは起こった。

ＡＭ０４はトラックの形状から今迄蓄えてきた多くの魂魄を一気に爆発させると、強力な霊波を放つ地獄のＡＭ死神へと進化したのであった。

モニターでＡＭ０４の変貌振りを目の当たりにしたユーノとクロノ達も驚愕の表情を浮かべた。

「なっ！？」

「あれは・・・！？」

ＡＭ０４の霊波光線が四人の下に発射される。

四人はその攻撃を素早く回避、鬼太郎は空中に浮かんだ状態で斬魄刀を解放。

「熾きやがれ、烈火！！」

烈火を振り上げた鬼太郎は刀身に炎を纏わせ、一気に斬りかかる。

「せりゃあああああ！！！！」

だが、強い霊波を盾代わりにするために烈火の炎を以ってしても攻撃が貫通することは無かった。

「ぬうううう！！！！！！！！！！」

鬼太郎の苦戦する様子を見ていた恋次達は早速ユーノから渡された

斬魄刀補助デバイスを柄頭に装着させる。

「早速こいつの出番だぜ！いくぜ・・・蛇尾丸、能力向上！！」

柄頭に補助デバイスを装着させた恋次は、そのまま卍解を発動させる。

「卍解！」

卍解を発動させると、恋次の狒狒王蛇尾丸の容貌もかなりの変化が見られた。

通常は骨のような形状をしている筈の狒狒王蛇尾丸も、材質が金属のようなものに変化しより強度が増していたのであった。

それを見て恋次も一瞬驚くが、直ぐに気持ちを改め鬼太郎の加勢に入る。

「ここは一先ず俺と鬼太郎に任せろ！吉良、白鳥！お前らは沿道の民家を守れ！」

「「ああ！」」

二人はそう言うと、火が広がろうとしていた民家に住まう住民達の避難と消火作業をそれぞれが分担して取り掛かる。

「アクアジェット！！」

白鳥の水流系の魔法が燃え盛る民家の炎を次々と消化していく。

「縛道の三十七　『吊星（つりぼし）』！」

吉良のほうは、高所に避難していた住民達を吊星を使って飛び降りるように指示を出す。

「さあ、もう大丈夫だ。」

二人が救難作業に勤しんでいる頃、ＡＭ０４と熾烈な戦いを繰り広げる恋次と鬼太郎の二人。

「“烈火斬回転撃（れっかざんかいてんげき）”！！」

霊波光線を烈火を高速回転させて炎の壁で弾き返す鬼太郎だが、さらに強化された霊波に苦悶の表情を浮かべていたのであった。

「さっきよりも霊波が強くなってやがる！？こいつは一筋縄じゃいかねえ・・・店長！」

鬼太郎のその言葉を聞き、指令室のユーノはほくそ笑むと事前に四人に伝えていた作戦プランを実行するように言う。

「わかってる。作戦通りだよ！鬼太郎、吉良さん、白鳥さん、恋次さん！フォーメーションＤ展開！」

「「「「了解！」」」」

「フォーメーション・・・？」

「Ｄ・・・ですか・・・？」

何も知らないスバルやティアナはユーノの発言の意図が全くつかめず、首を傾げるのであった。

ユーノの言うフォーメーションDとは次のような戦い方だ。

先ず吉良が補デバイスで強化した侘助を使って、霊波が最も薄い頭上付近に斬撃を加え重力で敵の動きを鈍らせる。

「侘助、“肩透かし”」

霊波と同等の侘助が発する重力場がぶつかりあうことで、一時的に霊波が弱まる。

「今だ鳥!!霊波を消滅させろ!!」

この機を逃すまいと、鬼太郎は次の指示を白鳥に送る。

「心得た!琴線斬特別序曲・『滅亡輪廻(ほろびのりんね)』」

強化された琴線斬の新たなる音色、『滅亡輪廻』は周囲の波長の全てに対応し同質同量の反エネルギー波を発することで、波長そのものを消滅させるという技なのだ。

白鳥の演奏で、霊波が消滅していくのを見て鬼太郎と恋次は一斉攻撃を仕掛ける。

「“烈火大斬撃・炎熱嵐”!!」

「“鋼鉄狒骨大砲(こうてつひこつたいほう)”!!」

鬼太郎の烈火から放たれる灼熱の炎の嵐と、金属物質を含んだ霊圧の塊を吐き出す恋次の狒狒王蛇尾丸。

「「くたばれ！！！！！！！！！！！！」」

二人の攻撃が同時に直撃した瞬間、ＡＭ０４は大爆発を起こしその中心核だけは分離し見事その回収に成功した。

「よし！！」

「やったである！！」

吉良と白鳥も二人を見ながら、今回の作戦成功を実感する。

ＡＭ０４が破壊されると、恋次と鬼太郎は互いに握手をし合う。

「へっ！やるじゃねえかよ・・・」

「お前もな！」

その後、外へと放り出された中心核から素体とアンゴルモアを分離させるために恋次は白鳥に封印処理を任せる。

「白鳥、封印を頼む！」

「任せておくれ！」

白鳥の魔法によって、中心核は元の素体とアンゴルモアに分離されていく。

アンゴルモアの素体となっていた直人とシンシアは気を失ったままであった。

「こいつが今回の素体か・・・二体の魂魄とは初めてだな・・・」

「取りあえず任務は完了した。早いところ引き上げよう。」

吉良がそう言うので、白鳥も早いところアンゴルモアを封印しようとしたその時。

突如として彼らの元に虚弾の雨が降ってきた。

「危ない！！」

何の予兆も無く降り注いできた虚弾の雨をどうにか回避した恋次達は、虚弾が降ってきた頭上を見上げながらその犯人に問いかける。

「誰だ！？いきなり攻撃してくんのは！？」

すると、月明かりに照らされながら恋次達の前に姿を現したのは――白い服装に身を包み胸に孔を開け、虚の仮面を剥いだ男・・・アスモデウスであった。

「なっ！？」

「何だ・・・あいつは・・・！？」

恋次達同様、スクリーンでその異様な姿をした謎の敵に驚愕の表情を浮かべるユーノ以外のメンバー。

「胸に孔が空いている・・・まさか・・・魔導虚!?」

なのはがそう言うと、ユーノが冷静な様子で訂正の言葉を口にする。

「いや違うよ。よく見て、あの割れた仮面。あれは魔導虚が更なる進化を遂げた姿・・・破面魔導虚(アランカル・ロギア)・・・!」

「アランカル・・・」

「ロギア・・・!?」

ユーノの口から告げられる聞きなれぬ未知なる敵の名前を思わず復唱するエリオとキャロ。

また同じ頃、通信機でその名前を聞いていた恋次達も直ぐにアスモデウスがスカリエッティの手下の一人であると確信する。

「という事は、スカリエッティの回し者かよ!?ちっ!こんなタイミングで現れるかよ、普通!?」

「つべこべ言ってる暇はないよ。来る!」

吉良が恋次に忠告した瞬間、アスモデウスは再び虚弾を炸裂させると隙を見て響転で白鳥の間合いに入り込み封印処理をしようとしていたところを回し蹴り。

白鳥を蹴り飛ばしてしまった。

「白鳥!!」

「鳥!!くそが!!邪魔すんじゃねえ!!」

アスモデスウの行動に我慢できなくなった鬼太郎は、ついに自らの卍解を発動させる。

「卍解!!」

その瞬間、鬼太郎の回りを竜巻のような炎が囲い込む。

そして中から出てきたとき、鬼太郎の背中からは炎で出来た羽を生やし烈火は二刀流となって柄から刀身まで全て炎で精製された卍解へと変貌する。

「『鳳仙烈火(ほうせんれっか)』!!」

鬼太郎は背中の羽で一気に加速すると、冷酷な表所を浮かべるアスモデウスに向って炎の斬撃を振りかかった。

しかし、アスモデウスは一切動じることなく腰に挿していた斬魄刀を抜いて軽がると炎の剣を受け止めた。

「!!(ざ・・・斬魄刀だけで・・・俺の卍解を止めた!?)」

「お前たちと遊んでいる暇は無い・・・回収させてもらうぞ・・・ドクターの夢の欠片を・・・」

すると、アスモデウスは片方の指を斬魄刀の刀身に押し当て、血を出すと急激に霊圧を上昇させて手の甲に収束させる。

それを見ていたユーノは直ぐにその技の正体を察知し、鬼太郎に大

至急回避をするように指示を出す。

「この霊圧の異常な上昇は・・・!?鬼太郎、今すぐ逃げるんだ!!!」

だが、その言葉が届いた直前その技は撃ち込まれた。

「『王虚の閃光(グランレイ・セロ)』」

王虚の閃光が鬼太郎に向けて放たれた瞬間、咄嗟に卍解状態の鬼太郎は灼熱の鎧を身に纏い王虚の閃光に対処しようとする。

「(やば!!)“烈火鳳剣舞(れっかおおとりけんぶ)”!!」

しかしながら、王虚の閃光を至近距離受け流すなどという事は極めて無謀な行動であり、防御もろくに通用しないまま、鬼太郎は王虚の閃光に直撃する。

「のあああああああああああああああ!!!!!!」

強化された卍解状態で攻撃を受けたことが不幸中の幸いだったのか、鬼太郎は体中を満身創痍にして気絶はしていたものの、命を奪われることはなかった。

「鬼太郎!!!!」

「鬼太郎さん!!!!」

大急ぎで鬼太郎のもとまで駆け寄る恋次と吉良。

「・・・・・所詮・・・・・・・死神の力など知れている・・・」

アスモデウスは鬼太郎を一瞥すると、白鳥が封印し損ねたアンゴルモアの下に足を運ぶ。

「てめぇ!!!!狒骨大・・・!!」

恋次はアスモデウスの行動を止めるべく狒骨大砲を発射しようとしたその時、恋次達四人はアスモデウスの作り出した強力な結界魔法によって閉じ込められてしまった。

「なっ!?結界・・・だと!?」

「くそ!!僕達も閉じ込められた!!」

「これでは動くことも出来ない!!」

全く身動きの取れなくなった恋次達を確認すると、アスモデウスは鼻で笑いアンゴルモアの下へ近付いていく。

「――――――ふん。」

そして、宙に浮かぶ不安定な状態のアンゴルモアを自身のデバイスを使って封印する。

「封印・・・開始・・・」

〈Ｓｅａｌｉｎｇ　ｍｏｄｅ〉

「ロスト・ロギア・・・アンゴルモア・・・シリアル０４・・・封

印。」

アスモデウスのデバイスの中へと吸い込まれていくアンゴルモア。

〈Ｃａｐｔｕｒｅ〉

「・・・・・・――――――」

アンゴルモアを回収したアスモデウスは転移魔法を使ってすぐさま恋次達の前から姿を消した。

アスモデウスが転移する直前で結界は崩壊したが、恋次達が追尾することは不可能だった。

「待て！！」

恋次の怒声も全く気にせず、アスモデウスは四人の前を後しアルハザードへと帰還する。

六課のはやて達は直ちにアスモデウスの転移先を特定しようと動き出す。

「シャーリー！捕捉は！？」

『駄目です！！まるでサテライトが通用しません！！』

「くっ・・・逃がしてしまったか・・・！！」

クロノは悔しさの余り唇を咬んでしまう。

アスモデウスが立ち去った後、未だに目を覚まさないで居る鬼太郎に必死にコンタクトを求める恋次達。

「鬼太郎!!おい、大丈夫か!?鬼太郎!!」

すると、恋次の声が届いたのか鬼太郎は徐に目を開ける。

「う・・・あ・・・ああ・・・たいしたことじゃねえ・・・」

「良かった・・・無事で何よりだ・・・」

「なっ!?そう言えばあの野郎は!?」

鬼太郎はアスモデウスが何所へ消えたのかを三人に問いただすが、その表情は重苦しいものであった。

「済まぬ。アンゴルモアを奪われて取り逃がしてしまった・・・」

それを聞いた鬼太郎は悔しさの余りその場に拳を叩き込み、アスモデウスに対する怒りを露にしたのであった。

「くそ!!!!!!!!!!あの野郎!!!!!!!!今度会ったら絶対叩きのめしてやる!!!!!」

その後、任務失敗の報告をロングアーチへと報告する暗い表情の恋次。

『済まない、みんな。任務失敗だ。本当に何て言って侘びれば言いか・・・』

「気にすることは無い。あれは不可抗力だったんだ・・・それに、誰もこのような展開になるとは・・・僕達全員も思っていなかったはずだ・・・」

「今日のところは一先ず戻って来るといいよ。アンゴルモアを敵に奪われたのは仕方の無いことや。また次挽回すればええよ・・・」

『・・・済まない・・・はやて・・・』

『・・・・・・くっ！！』

「先輩・・・・・・」

「鬼太郎・・・・・・」

鬼太郎の晴れることの無い表情を見ていた浦太郎、金太郎の二人は複雑な気持ちで一杯になった。

一方、恋次達からアンゴルモアを奪い取ったアスモデウスはスカリエッティの待つアルハザードへと一時帰還をした。

「ドクター、アンゴルモアの回収に成功しました・・・」

「ご苦労だったね。アスモデウス・・・」

アスモデウスから受け取るアンゴルモアを手に取り、本物かどうか確認するスカリエッティ。

「う～ん、確かに本物のようだ・・・感謝するよ。」

「お褒めに預かり、光栄です。」

「少し疲れただろう。君は暫く休むといい・・・代わりに次の捜索は・・・彼に任せるとしよう。」

そう言うと、スカリエッティは次なる刺客を奥の部屋から呼び出しアンゴルモア捜索を命じる。

果たして、スカリエッティが送り出す次なる刺客とは一体どんな相手なのであろうか！？

ＡＭ０４との戦闘を追え、任務を遂行できずに機動六課へと戻ってきた鬼太郎は一人夜の海を眺めながら自分の失敗と非力さを一人で責めていた。

偶々その光景を目撃したなのはは、何かしらの言葉を掛けてあげようと鬼太郎に近付こうとしたが、その行動を止めるものがいた。

「・・・あっ・・・」

なのはの行動を止めたは、鬼太郎のことをなのはよりも知るユーノ・スクライアその人だった。

「・・・ユーノ君・・・」

「そっとして置いてあげてくれないかな、なのは・・・あいつはあいつなりに責任を感じてるんだよ。僕達が横槍を入れるのは余計なお節介だよ。」

「・・・うん・・・」

なのはもユーノの言葉を素直に受け入れると、ユーノと供に複雑な気持ちを抱えたまま鬼太郎の前から立ち去った。

鬼太郎は二人が居なくなってからも、自分の事を攻め続け悔しさの余り涙を流した。

「くっ・・・・・・・！！」

アスモデウスにアンゴルモアを奪い取られて暫くして、機動六課に新たなるアンゴルモアの反応を異世界の人口密集地でサテライトシステムがキャッチした。

第８１管理世界『アビリティ』

この世界は、能力者が世界の総人口の４割を占める近未来都市が密集するミッドチルダに非常に良く似た世界である。

今回、機動六課からライトニング部隊総出で現場調査に向うことになった。

管理世界ということだけあって、時空管理局の存在も知られている。

そのため、今回の任務はより慎重且つ念入りな捜査が必要とされている。

ライトニング部隊は、最近この世界の能力者達の間で広く使用されているという謎の能力向上機器、『ボーダーブレーカー』と呼ばれる機器の調査に協力することから今回の事件は始める。

だが、彼らはこの時まだ知らなかった。

そのボーダーブレーカーのメイン演算装置のコアにアンゴルモアが使われていることなど。

ヴァイスのヘリに乗って現場へと向うライトニング部隊。

エリオとキャロは初めてのアンゴルモア捜索任務に若干の緊張をしながら、今回訪れたこの世界の情報をフェイトに尋ねる。

「能力者って・・・魔法や霊力みたいな異質な力を持ってるってことですか？」

「ま・・・正解のようで正解じゃないってところかな。アビリティでは超能力が科学によって解明されていて、科学技術を基本とする科学サイドと魔術を基本とする魔術サイドっていうのに別れてるの。管理局も、長い間この世界とは親交が強くてね・・・色んな技術提供をしてくれたりもするんだよ。」

「そうなんですか。」

「この世界では広く、超能力者が政治的・軍事的権限を握っている。そして、更にその超能力者も五段階の序列に別れている。レベル０から５あるうちの、レベル５というのが『超能力者』と称され、単独で軍隊と戦える力を有する。これとは別に『神の領域』とも呼ばれる『絶対能力（レベル６）』概念上は存在する。全人口のうち約６割は『無能力者（レベル０）』で、最高位のレベル５は７人しかおらず、その７人が事実上この世界の全てを動かしていると言っても過言ではない。」

「で、今回私達が調査に向うのは此処。最近、レベル３以下の人たちが急激に能力向上を果たしているという未知の能力向上機器『ボーダーブレーカー』の調査。アンゴルモアとどう関係してくるかは分からないけど、ロスト・ロギア級の力を持っているかもしれないってことで私達が調査を依頼された。」

「いずれにしろ、この世界にもアンゴルモアがあることは確かだ。気を引き締めていかねばならぬぞ。」

「はい！」

「頑張ります！」

その後、ライトニング隊四人はそのボーダーブレーカが置かれている科学センターを訪れ、現物のそれを間近で確かめる。

尚、今回は開発者自らがマスコミ関係者を集め、ボーダーブレーカーの性能を大々的に発表するという催しものが開かれていた。

『こちらは、いよいよ世界で始めて能力者の能力向上の最終段階を迎えようとしているハイド中央科学センターです。世界に先駆け、能力向上システムを完成させたのは・・・ご存知、アビリティーきっての天才物理学者・・・平賀電光（ひらがでんこう）博士です』

ナレーションの説明を受けて、スポットライトの前に現れる開発者・・・平賀電光。

フラッシュ撮影の嵐を誇らしげな表情で受けながら、早速ボーダーブレーカーの機能説明を雄弁に語り出す。

「私の理論をもとに完成された、この能力向上機器『ボーダーブレーカー』により、それまで能力の突破に苦戦をしていた能力者達の限界を超え、更なる進化を可能にしたのです。では、実際に見てみましょう。レベル3の能力者がレベル4へと向上するその瞬間を！」

平賀博士はそう言うと、予め実験に協力の姿勢を見せていたレベル3の能力者を機械の前に連れて行き、ボーダーブレーカーを発動させる。

発動終了後、レベル3の能力者が向上された能力をマスコミの前で披露すると、確かにその能力はレベル4と呼べるほどにまで向上されていた。

「「「「おおおお！！！！！」」」」

マスコミの後ろのほうでその光景を見ていたエリオとキャロも驚きの表所を見せる。

「す・・・凄い・・・！」

「本当に能力が向上してる・・・！」

「この展開・・・お前はどう見る、テスタロッサ？」

「普通に考えて、こんなやり方で能力が向上するとはとても思えません。あの機械・・・何か凄くいやな力を感じます・・・そう・・・ロスト・ロギアの・・・」

「私もだ・・・ここは人気がいなくなってから調査に乗り出すほう

がいいな。あの平賀とか言う科学者も、どうも信用できないしな・・・」

フェイトとシグナムはこの異様な光景に危惧と疑念を抱き、人気が無くなった時機を見計らっての調査に乗り出そうと計画していた。

マスコミが科学センターを後にして数時間が経った頃、ボーダーブレーカーの前で一人不気味な笑みを浮かべる開発者平賀。

「ふふふふふ・・・やはりは私の理論は完璧だ！数多くの能力者の強度の限界をこうも容易に突破させるこの理論は！！いや・・・私の理論もそうだが、全てはこのボーダーブレイカーの核（コア）に流用されているあの欠片が全てを可能にした・・・」

平賀はそう言いながら、ボーダーブレーカーの前に立つ。

「これさえあれば・・・無能な上層部の連中に任せずとも、この世界を治めるだけの絶対的な力を得ることが出来る！！さあ！！今度は私の番だ・・・ふふふふふはははははははは！！！！！！！」

平賀が口にしたこの言葉の真意とは一体何なのかは、この後嫌と言うほど思い知らされることになろうとは、この時誰も考えていなかったのだ。

昼も過ぎ、人々は相変わらず偽りの平和の中での生活を送っていた。

「ふあ～～～～～」

渋滞する高速道路で一人のドライバーが欠伸をしたその時、突然車

のバンパーが凹み始めサイドミラーが割れていく。

「あ？何だ！！」

と、次の瞬間。

道路の底から這い上がってくるマグマのような高熱の液体が、車を次々と飲み込み人々も車もドロドロに溶かしていく。

同じ頃、地下鉄内部でも信じられない現象が起こっていた。

それは突如として前方から膨大な量の水が流れ込み、地下鉄もろとも飲み込んでいくのであった。

「「「「「のあああああああああああああ！！！！！！！！」」」」」

「「「「「うあああああああああああああ！！！！！！！！」」」」」

アビリティーでの異常事態を全く知らないユーノは、いつもの格好で金太郎と供になのは専用のカートリッジシステムの開発に励み、ついにそれが完成したのであった。

「よし♪ついに完成だ！！なのはとレイジングハート専用強化バックアップカートリッジ・・・『ＡＲカートリッジ』とそのマガジン！リンカーコアの疲労を極限まで減らし、なのはの全力全開を最大限に発揮する新型カートリッジシステムがついに完成したぞ♪」

「おめでとうございます、店長！やはりあなたは天才ですね！！」

「天才・・・ではないよ。想う力が人よりも強かっただけさ♪さ～

早速なのはに届けてあげないと・・・」

すると、その瞬間警報ベルが部屋中に鳴り響いた。

「「！！」」

『ユーノ！アンゴルモアが活動を開始し始めた。直ぐに集まってくれ！』

「またこのタイミングかい・・・はぁ～～～了解・・・」

クロノからの連絡を受けて、深い溜め息を吐いたユーノは金太郎と供に指令室へと向う。

ユーノと金太郎が到着した後、指令室のはやて達はフェイトからの連絡を受けて度肝抜いていた。

「フェイトさんからの連絡では、アビリティー各地で謎の超常現象が起きているようです！」

「超常現象やと！？」

「シグナムからの追加連絡です！どうやら超常現象を引き起こしていると考えられる物体が地下を移動中とのことです！」

『破壊活動が起きるたびに、その物体も移動していると思われます。』

アルトからの補足を受けて、クロノも驚愕の表情を浮かべる。

「何だと!?」

「待ってください、クロノ提督!」

「ん!?」

すると、ティアナがシャーリー達の補足作業が成功したことを伝え、敵の移動パターンをスクリーンに映し出す。

「シャーリーさん達が逆算ルートを辿る事に成功しました。今映像に出します!」

スクリーンに映し出された敵の移動パターンを見ていたユーノはその発生源を見た瞬間思わず声を上げた。

「あれはフェイト達が向った科学センターじゃないか!?」

その頃、地下に取り残されていた人々は救助隊の必死の救出に関わらず全く人員が足りない状況であった。

「落ち着いて!!もう直ぐだから!!」

と、次の瞬間。

天井の岩盤が崩れ落ちて人々に落下しそうになった。

救助隊もこの時ばかりは駄目かと思われたが、地獄で仏・・・救いの手が現れた。

〈Ｒｏｕｎｄ　Ｓｈｉｅｌｄ　Ｃｏａｔｉｎｇ〉

崩れ落ちてきた岩盤を防ぎきったのは、キャロの強化防壁であった。

「ギリギリ二次災害防止成功です！」

「キャロの魔法は鉄壁ですから、もう安全ですよ！」

キャロを始めとし、ライトニング隊全員が現場に到着し救援に入る。

「管理局です。お手伝いに参りました。」

「助かります。」

指令室で現場の状況を確認する為にフェイトと連絡を取るなのは。

「フェイト隊長、状況は？」

『うん。あれが事故の原因らしい・・・』

そう言って、スクリーンに映し出される巨大な空洞の痕。

『何かが移動した痕みたい・・・』

「やはりＡＭ０５の仕業と見て間違いないかな・・・この世界の地下を移動してありえないような超常現象を巻き起こしている。」

「そいつがこの事件の犯人なら・・・急いで捕まえないとあかんな！」

アビリティー各所で起きる謎の超常現象とＡＭ０５の出現！？

この事件の結末は一体どのようなものになるであろうか！？

もう一つの尸魂界（後書き）

教えて、ユーノ先生！

ユ「今回は鬼太郎のお話だよ♪」

ユ「鬼太郎は、魔導師と死神の血を半分ずつ受け継ぐハーフなんだ。母親はその昔管理局の前線で活躍していた優秀な魔導師で、今で言うなのはみたいな人だったんだ。」

ユ「一方、父親のほうは護廷十三隊の二番隊離廷隊で伝令を主にしていた隠密機動の一員で、どちらかというと鬼太郎は母親の血の方が濃い。」

ユ「それでも、鬼太郎は斬魄刀『烈火』を操り、さらには卍解『鳳仙烈火』を使いこなす凄い奴なんだ♪」

鬼「俺様の卍解、格好いいだろうてめぇら！！」

ユ「でもこの卍解、何で背中から翼が生えるの？」

鬼「空を高く飛びたいという俺様の願望が叶ったんじゃないですかね！！いくぜ！！とーーーー！！！（空を飛ぼうとジャンプしようとするが）」

ユ「えい♪（ズボンの裾を踏みつける）」

鬼「のあああああ、いた！！！！！（派手に地面に激突する）」

魔導師図鑑ハイパー！

ユーノは現在、探し物をしていた。

ユ「あれ？どこいったのかな・・・！？」

ス「ユーノ先生。何探してるんですか？」

ユ「ん？眼鏡さ・・・・・あれはなのは達から貰った大切な眼鏡で、僕のトレードマークみたいなもんさ。」

ス「だったら、私も探します！」

ユ「ありがとう。じゃ、その辺探してくれる？」

二人は一生懸命に眼鏡を探し続けるが、そんな二人を他所にはやて・フェイト・なのはの三人は・・・

は「うしし！！！ユーノ君の眼鏡なし写真はバッチリや！これで女性局員の心はイチコロ。大儲け間違いなしや！」

フェ「だけど、流石にユーノに悪い気が・・・」

な「でも、眼鏡なしユーノ君も普段と違う格好よさがあるし・・・このままでもいいようなそうでないような・・・」

なのははユーノの眼鏡を持ちながら照れた表情で色々と考えていた。

それを見ていたフェイトは嫉妬心が燃え上がる。

フェ「（ユーノ・・・・・・私のなのはをよくも・・・！！！）」

リバイバル篇

海堂直人（かいどう　なおと）／ＡＭ０４

声　一　甲斐田ゆき

リバイバルに住まう青年。性格は根暗で友達が一人もいない模様。生前、人生に関して虚無感を抱いており死してなおその考え方が変わらずにいたが、シンシアと出会ったことで変化の兆候が見られ始めていた矢先、アンゴルモアに飲み込まれシンシアと共にＡＭ体と化してしまった。

シンシア・クレーモフ／ＡＭ０４

声　一　半場友恵

直人と一緒に行動を共にするリバイバルの女性。直人曰く性格はかなりキツメな模様。シンシアは生前、陸上の全国大会にまで足を進めることが出来たほどの有望株だったが、彼地区大会の予選当日ブレーキを踏み損ねたトラックに衝突し帰らぬ人となりこの世界に送られた。直人はシンシアの深い悲しみを理解し、笑顔を取り戻すために彼女と一緒に行動を送る様になり、そんな中で彼女も直人に心を開き始めていた。そんな折、直人と一緒にアンゴルモアに飲み込まれＡＭ０３と化してしまう。

用語解説

破面魔導虚（アランカル・ロギア）

ジャイル・スカリエッティの手によって魔導虚が更なる進化を遂げた仮面を剥いだ姿の魔導虚。戦闘能力は魔導虚を遥かに凌ぎ、知能も高く一個人で世界を掌握するものもいると言われている。今だなぞの多い存在。破面魔導虚の一人であるアスモデウスは恋次達からアンゴルモアを強奪し逃走する。

稲妻の力

＞ｉ１２８７５―７０９＜

第８１管理世界『アビリティ』。

ライトニング部隊は、最近この世界の能力者達の間で広く使用されているという謎の能力向上機器、『ボーダーブレーカー』と呼ばれる機器の調査に協力する為、ハイド中央科学センターを訪れた。

その後、突如としてアビリティ各所で発生する謎の超常現象の数々。

原因究明と都民を救うべく立ち上がった機動六課ライトニング分隊だったが、彼らはそこでとんでもない者との先頭に直面することになるのであった。

都心で発生する原因不明の超常現象。

それを陰で操っているのは、ボーダーブレーカーと直接融合を果たし無限の力を手に入れた開発者の平賀電光であった。

彼は、科学センターの地下深くにもぐりこみ全次元世界を壊滅へと導くある恐るべき能力を発揮しようとしていた。

「ふふふ・・・さて、ウォーミングアップはこれくらいにして・・・次はいよいよ本番といこうか？見ているがいい、これがレベル５を超越した“レベル６”の能力だ！！」

その頃フェイト達とは別に先に科学センターのほうへと向っていたシグナム。

すると、その時周りからあるただならぬ気配を感じ足を止めた。

だが、周りを見渡してもそこには誰もいない。

「何だ・・・？この辺りから確かに妙な気配を感じたと思ったのだが？」

だが、その時既に異常は起こっていた。

シグナムは突然襲い掛かる体の急激な重さの変化に耐え切れず、その場に跪き最後には体を地面に接着させて動けなくなってしまった。

「なっ!!こ・・・これは・・・!!」

いくら起き上がろうとしても自分でも信じられないぐらい加速度的に重さを増していく体にどうすることも出来ないシグナム。

「体が・・・重い・・・!!は、はや・・・く・・・主はやてに・・・伝えなければ・・・!!」

アビリティーでそのような事態が起こっている頃、ミッドチルダに位置するヴィヴィオが通う教会附属の魔法学院は現在昼食の時間の真っ最中だった。

ヴィヴィオは友達と一緒になのはが作ってくれた弁当のおかずを幸せそうに食べていた。

「あ~ん♪ふふふふ♪あれ?」

すると、ヴィヴィオは一向に弁当に手をつけないでいるコロナの様子が気になった。

「コロナ・・・お弁当食べないの?」

「え!?ああ・・・はい。ちょっとおなかの調子が悪く手ですね・・・!!」

「残すくらいなら私が食べてあげるけど!!」

リオがそんなことを言ってコロナの弁当に手をつけようとしたが、そこに割り込んできたのは何時もコロナと何かと言えば張り合うカイ・マルコルであった。

「みんな乙女心を分かっていないね～～～！コロナがそんな理由で昼食を抜くと思っているのかい？」

「じゃあ、一体どうしてなのさ？」

「ふふふふ！コロナ・・・ズバリ君は近頃体重が・・・ごっ！！！」

カイが不敵な笑みを浮かべてコロナにそう言おうとした途端、コロナからの鉄拳が顔面を直撃する。

「なっ、何を言っているのですかあなた！！そんな訳ないじゃないですか！！ほら見てください！！この体の何所が太っていると言うのですか・・・きゃ！！」

コロナはそう言いながら机の上に腰をかけた・・・その時だった。

突然机が足場を壊しコロナを乗せたまま倒れたのは。

思わぬ展開にコロナ自身も後ろへと倒れ、仰向けの状態となって驚いていた。

「コロナ！？大丈夫かい？」

ヴィヴィオやリオ、カイが心配な様子で声を掛ける。

コロナは直ぐに起き上がろうと力を入れるが、全く体は起き上がろ

うとしない。

「うぬぬぬぬぬぬぬぬぬ！！！！！！うぬぬぬぬぬぬぬぬぬぬぬぬぬぬ！！！！！！！！」

「ほら見たまえ！やっぱり君はダイエットが必要だったんだよ♪なっ！？」

カイは癇に障るような言い方でコロナにそう言ったが、その直後カイ自身も突然襲ってきた体の重みで倒れこみ苦しみ出す。

「ぐあああああ！！！！重い！！！！僕はコロナと比べて太ってないはずなのに！！！！」

「何故そこで私と比べるのですか！！！！」

「ど、どうしたの二人とも！？うあああああ！！！！」

「きゃあああああ！！！！！」

ヴィヴィオとリオが何が何だか分からず混乱していると、二人と同様の現象が襲い掛かってきた。

二人は急激な体の重みに耐え切れず、地面に体を接着させたまま全く動けずにいた。

ヴィヴィオ達だけではない。

この学校にいるもの全て・・・いや、この次元世界に生きる全ての生き物がこの重力の異常をその身に受けて苦しんでいた。

「体がどんどん重くなる！！！」

「一体何がどうなってるの！！！誰か助けて！！！なのはママ！！！ユーノパパ！！！」

また、アビリティーで救難活動を行っていたエリオやキャロ、フェイト達にも嫌と言うほど強力な重量が体を押し潰そうとする。

「くっ！！！急に体の重量が！！！」

「この重圧は・・・！！！」

その瞬間、キャロのラウンドシールドが破壊され補強していた岩盤が崩れ落ち三人の頭上を襲ってきたのであった。

「「うあああああああああ！！！！！」」

「あああああああああああああ！！！！！」

同じ頃、機動六課指令室のなのは達も異常な重力に押し潰されそうになりながら、フェイトとの応答を試みていた。

「フェイトちゃん・・・！！！応答してくれへんか！！！フェイトちゃん！！！」

はやての呼びかけにも、フェイトからの連絡は一切無し。

『ユニタリティー限界以下の領域で、イクス粒子が増大中です！！！』

『重力係数!!!!増大します!!!!』

管制室のシャーリーとアルト達も襲い掛かる重圧に耐えながら、何とかクロノ達に詳細な情報を提供する。

ユーノ自身も、この重圧化の中でモニターを見ながら険しい表情で事態の深刻さを目の当たりにしていた。

「信じられない!?全ての異世界で非イクス波の・・・エネルギーポテンシャルが異常に高まってる!!!」

「分かりやすく・・・説明してくれ!!」

体の重量に押し潰されそうになりながら、クロノが辛そうな顔でユーノに説明を求める。

「異常重力だ・・・!!重い物質はより重く・・・それぞれの質量に応じてその重さが・・・加速度的に増している・・・!!!」

「つまり・・・このままだと・・・うおおおお!!」

クロノはとうとう重さの限界を超え、座っていた机の上にひれ伏す。

恋次達はこの異常重力をその身に受けながら、吉良の佗助の能力の恐ろしさを改めて身を持って実感した。

そんな中、スバルは地面に体を沈めながらこの後の顛末を口にする。

「みんな・・・ペシャンコですか・・・!?うおっ!!」

「くっ・・・！！！もう・・・駄目や！！！！！」

「くっ！！！！！！ユ・・・ユーノ君・・・！！！ヴぃ、ヴィヴィオ・・・！！！」

はやてやなのは達も今だ嘗て味わったことの無い超常現象に困り果てるばかり。

ユーノは額に汗を流してスバルの質問の答えを返す。

「いや・・・ペシャンコどころか・・・全ての世界がこれで沈没するよ・・・！！」

すると、その時指令室にシグナムからの緊急回線が入る。

『こちら・・・ライトニング２・・・シグナム・・・地下に・・・超常現象・・・重力をを操る・・・ＡＭ０５を・・・発見・・・！！』

「重力を・・・操るだと・・・！！」

「じゃあ・・・この重力異常も・・・そいつの・・・！！」

シグナムの言葉を聞いたクロノやはやて、フォワード陣全員も今回の非常事態がＡＭ０５の仕業だということを理解し、その恐るべき能力に絶句する。

アビリティーや次元世界全てにこの異常重力を発生させているＡＭ０５となった平賀電光は重みによって崩れ廃墟と化した町に出現し、

さらに重力を強くしていく。

地上で動けずにいるシグナムや、地下に取り残され瓦礫の中に埋もれるエリオ、キャロ、フェイトの三人もどうにかこの状況を打破しようと模索するが、結局その答えは見つからない。

「くっ・・・！！これでは・・・一歩も・・・動けん・・・・！！」

「つ・・・潰れる・・・・！！」

「かああ！！！」

「だ、駄目だ・・・動けない・・・・！！誰か・・・動ける人は・・・いないの・・・・！！」

クロノも、この状況を見て諦めの声を上げる。

「全ての希望は・・・絶たれたか・・・！！」

そんな無抵抗な人間たちの様子を気にかけながら、自身の力に溺れ奢り昂ぶる平賀。

「脆いものだな・・・少し重力を強めただけでこの有様とは。荒療治だが、これで世の中もマシな方向に動くはずだ。ふふふふふははははははははは！！！！！！」

全員が諦めの気持ちで心が折れそうになる中、ユーノはどうにか手を動かしタッチパネルを操作すると、店の次元倉庫からあるものを起動させる。

「くっ・・・まだだ・・・まだ終わっちゃいない・・・！！」

「ユ・・・ユーノ・・・一体どうするつもりだ・・・！！」

「まだ実働テストも行っていないが・・・あれしか僕らに残された・・・希望はないんだ・・・！！それをこれから動かす・・・！！」

「動かすって・・・一体何をなの・・・！！」

ユーノの言葉を聞いていたなのはが地面に付した状態で尋ねる。

「強い重力をその身に受けても・・・活動が出来る強靭なパワーを秘めた・・・マルチ機械・・・マッコーリフさ・・・！！」

ユーノはなのはにそう答えると、機動パスワードを入力し準備を整えた。

「頼む・・・間に合ってくれ・・・！！」

ユーノは機動スイッチを押し、店の倉庫から戦車型のマルチ機械マッコーリフをアビリティーのＡＭ０５迎撃に向けて発進させる。

次元空間を移動しながら、他のどの世界よりも重力の影響が大きいアビリティーに到着したマッコーリヒだったが、ユーノが言っていた通りこの重力の中でも押し潰されることなく前進をし続ける。

「この重力の影響かで・・・まともに攻撃を仕掛けるとなると・・・あれだ・・・！！」

ユーノはマッコーリフからの映像を頼りに、敵に気付かれずに攻撃

を仕掛けられるポイントを探し、目標を捕捉するとマッコーリフに搭載された砲撃を発射する。

「Ｍ７ブラスター砲・・・発射・・・！！」

マッコーリフから発射される強力な質量エネルギー搭載の砲撃が、重力の影響で軌道が変化しアビリティーで最も大きな天文台へと激突する。

天文台は砲撃を直撃した瞬間、坂を滑り落ちるかのように転げ落ちちょうど良いタイミングでＡＭ０５の頭上へ落下していった。

「ははははははは・・・ん！？」

重力が通常の何倍も加えられた天文台をその身に受けた瞬間、ＡＭ０５は強力な衝撃を受け、重力発生装置の機能をストップさせてしまう。

「のあああああああああああああああ！！！！！！ば、莫迦な！！！！」

重力発生装置が止まったことによって、全ての世界での異常重力が完全に消滅する。

「うあああああ！！！！！！って・・・！？あれ！？」

「やっほー！！！体が軽くなった！！」

「なっ！？酷い目に・・・あった・・・！」

「ユーノ先生が・・・やったのかな!?」

「多分そうみたいだよ。」

ユーノの造ったマッコーリフによって、どうにか重力から解放された六課前線メンバーは胸を撫で下ろしユーノに感謝する。

「ふ～～～助かったで。ユーノくんのお陰や!」

「すまないユーノ、感謝するよ。」

「礼なら後でいいよ。あの時、高重力化の中での天文台の重さは数千トン以上。その衝撃は砲弾なみだよ♪」

「重力計数、正常値に戻りました!」

「ようし・・・ライトニング、反撃だ!!」

クロノはそう言うと、漸く連絡がついたライトニング全員に指示を出す。

また、マッコーリフの攻撃をその身に受けたＡＭ０５は怒りの炎を燃やし、マッコーリフを破壊しようとする。

「ふざけるな!!!」

マッコーリフが攻撃を受けたその時、地面の下から現れる灼熱の火炎弾の乱撃。

その攻撃を受け、何があったかとその場所を除くＡＭ０５。

すると、そこに現れたのはフリードを従えたキャロとエリオであった。

「よくも乙女の体を重くしてくれましたね！」

「自由に動ければこちらのもの！借りはたっぷり変えさせて貰うぞ！」

「ガキが！！不遜な口を聞くな！！！」

二人の言葉に憤慨するＡＭ０５は、多量の太いコードを伸ばして攻撃を仕掛け二人はそれを高く飛び上がって回避。

「フリード、ブラフマストラ！！！」

「サンダー・・・クッシャー！！！」

フリードの新技、ブラフマストラは僅か1分間の間に高熱の火炎弾を数百発も乱射することが出来、サンダークラッシャーはストラーダの先端から電撃を地面に送ることで地下からの電撃を相手に与える。

それをＡＭ０５はコアとなっているアンゴルモアの力を発動させて、自身の周りに厚い膜を作って身を守る。

「ふふふふふ・・・愚かな管理局の犬め！！」

ＡＭ０５はそう言うと、再び重力発生装置を起動させようとする。

「いけない！早くしないと、重力装置が再生してしまう！」

エリオが危惧の念を浮かべると、復活したシグナムがＡＭ０５に向って行き、ＩＰカートリッジを装填する。

「私に任せろ！レバンティン、ＩＰカートリッジ・・・ロード！」

〈Ｈｙｐｅｒ　ｅｘｐｌｏｓｉｏｎ〉

その瞬間、レバンティンの形状は通常の数倍以上に巨大化すると、刀身に紅蓮の炎を纏い凄まじい炎の一撃をＡＭ０５へと斬りかかった。

「紅蓮・・・一閃！！」

シグナムの強力な炎の一撃を喰らった瞬間、ＡＭ０５は重力発生装置を可笑しくしてしまいあのときと同じことは出来なくなってしまう。

「のあああああ！！！！！」

「テスタロッサ！今のうちだ！！」

「了解！」

シグナムにそう言われ、空中で出番を待っていたフェイトは一度深呼吸をし、ＩＰカートリッジを取り出しセットアップする。

「いくよ、バルディッシュ。」

〈Ｙｅｓ　ｓｉｒ〉

「ＩＰカートリッジ・・・セット・アップ！」

〈Ｇｅｔ　ｓｅｔ　Ｊｕｐｉｔｅｒ　ｆｏｒｍ〉

バルディッシュ・アサルト・ジュピターフォーム。

フェイトの潜在能力が具現化したもので、今までの形状と大きく違ってくるは何と言っても用途そのものだ。

アサルトやハーケン、ザンバーと違ってジュピターはクロスボウ、ボウガンの形状をしている。

それから発射される雷撃を纏った矢は、如何なる固い装甲をも撃ち抜く破壊力を持つ。

その新たなるバルディッシュの姿を目の当たりにしたエリオ、キャロは驚愕の表情を見せる。

「あれが・・・！？」

「フェイトさんの新しいバルディッシュの姿・・・！？」

ＡＭ０５もフェイトのバルディッシュの姿を見て、思わず息を呑んで尋ねる。

「何だ・・・それは！？」

「ＡＭ０５・・・覚悟！」

〈Ｅｌ　ｒｅｌａｍｐａｇｏ　ｄｅｌ　ｆｉｎ〉

バルディッシュの矢にフェイトの魔力が注入され、凄まじい電撃が発生する。

そして、エネルギーが極限まで高められた瞬間・・・フェイトは引き金を引く。

「電光撃雷・・・終焉の稲妻・・・『エル・レランパーゴ・デル・ファン』！！」

バルディッシュから発射された激しい雷撃の矢は周囲に轟音を響かせながらＡＭ０５の体の装甲を砕き、矢の先端が体に突き刺さり強力な電撃が襲ってくる。

「ぬおおお

「剣の騎士シグナムが魂・・・炎の魔剣レバンティン・・・その新たなる姿・・・」

シグナムがそう言って二発目のＩＰカートリッジをロードすると、今度は身の丈程の大きさの双頭槍にさらに刃を付けた武器に変形。

「ストラーダ、ＩＰカートリッジロード！！」

〈Ｂｌａｚｅ　ｆｏｒｍ〉

ＩＰカートリッジをロードした瞬間、今迄槍の姿をしていたストラーダがエリオの予想に反して大型のカノン砲へと変貌。

「ケリュケイオン、ＩＰデバイス！」

〈Ｅｘｔｒｅｍｅ　Ｂａｌｌｅｔ〉

二人とは違い形状は一切変わらないものの、その効力は計り知れないほどにまで高められているキャロのデバイス。

キャロはＩＰカートリッジのシステムで更に強化した支援魔法をフリードに送り込む。

すると、フリードの体は突然光を放ちその姿を変えていく。

体の色は赤く染め上がり、大きさもヴォルテールに匹敵するまではいかないものの明らかにＡＭ０５と並ぶほどのものへとなる。

「エキゾースト・フェニックス！」

「プラズマ・ブラスター・・・雷光弾！！！」

「フリード！デスペラードレイ！！」

三人の新たなる力が一斉にＡＭ０５へと向けられる。

シグナムの炎の不死鳥、エリオの雷の砲撃、フリードの超破壊能力を秘めた魔力砲撃。

その全てがＡＭ０５に直撃すると、ＡＭ０５は悲鳴を上げながら消滅を果たそうとしていた。

「のあああああああああああああ！！！！！！！！私の・・・私の夢が！！！！！！！」

大爆発を起こすと、ＡＭ０５はボーダーブレーカーと融合を果たしていた開発者平賀の姿と、コアとして使われていたアンゴルモアとに分離される。

フェイト達は直ぐにアンゴルモアに封印処理をかけて回収すると、夕陽が照らされる中絶望の表情を浮かべる平賀を拘束する。

「何故だ！？何故なのだ・・・！！全ては完璧だったはず！？なのにどうしてこうなった！？」

すると、シグナムとフェイトが冷ややかな目線でこう口にする。

「愚問だな。貴様もあの男と同じだ・・・平賀電光。」

「！？どういうことだそれは！？」

「自分の欲望のためだけに、人の命をも顧みずにデコイのように弄ぶ・・・そう言うところが腐ってるって言うんだ！お前もスカリエッティと同類だ！！」

フェイトのらしからぬ言動に思わず身震いをするエリオとキャロ。

スカリエッティとの因縁があるフェイトにとって、平賀のような男は赦しがたい存在だったのだ。

「フェイトさん・・・」

フェイトの言葉を聞いて何もいえなくなってしまった平賀はその場に膝を突いて項垂れたまま完全に自信を喪失する。

「・・・・・・――――――」

その後、駆けつけた現地の警察関係者に平賀の身柄を受け渡すフェイトは最後に次のように告げたのだった。

「あとの処理は任せます。この男の処罰も、第一級者の重課罪ですから・・・おそらく極刑は免れないかと思いますが、せめて・・・この男が少しでも罪を認め償いの気持ちが持てるよう、よろしくお願いします。」

「はい、本日はご協力感謝します。ハラオウン執務官殿。」

「ほら、さっさと歩け！」

任務が終了し、ヴァイスのヘリで六課へ帰還をするライトニング隊。

その中で、重い表情を浮かべるフェイトを隣に座っていたシグナムがこう呟く。

「・・・何時にも増して感情的だったな。」

「すみません。ああ言うタイプはどうも良い思い出がないものでつい・・・・」

「気にしないで下さい、フェイトさん。一先ず事件は解決しましたし・・・核とされていたアンゴルモアも封印しましたから。」

「取りあえず、今日の所は六課へ戻りましょう。」

エリオとキャロの言葉を聞いて、少し元気を取り戻したフェイトは目を細めると漸く何時ものような口調で返事をした。

「・・・うん。そうだね・・・」

アビリティーでの任務があってから数日が経ったある日、ユーノ達スクライア商店メンバー、恋次と吉良はユーノの自室兼特別研究室でこれまでに回収されたアンゴルモアを確認していた。

「現在までに回収が出来たアンゴルモアは計４個。」

「そのうち一つはあの破面魔導虚に持ってかれちまってるしな・・・」

恋次の悪気の無い一言を聞いた鬼太郎は悔しさが蘇り壁の隅でしゃがみ込んでしまった。

「くそ！あの時俺が・・・！！」

「先輩、その話はもう良いよ。それより店長、なのはちゃん専用のカートリッジが出来たって本当なんですか？」

「ああ♪三日三晩夜も寝ないで昼寝して、開発したのがこのＡＲカートリッジだ♪なのはの固有魔力だけに反応し、リンカーコアの消耗を元来の６０パーセントを抑制できる。さらに、ブラスターモードを使わずともそれと同等の破壊力を秘めた強化具も一緒に装備しておいた。後は、なのは自身の潜在能力によって全て決まる♪」

「白き魔王の潜在能力か・・・あれ以上強くなったら誰が止めるんだよ？」

「それは勿論、僕に決まってるじゃないですか♪あはははははははは♪」

ユーノの飄々とした態度を見ながら、恋次は心の中でこんなことを思った。

「（こいつの台詞に妙な説得力があるのが怖いぜ・・・）」

すると、白鳥が地球の一護から発進されてきた通信に気付き、ユーノに知らせる。

「おや？黒崎さんからの連絡ですよ。」

「一護から？何だよあいつから連絡よこすなんて・・・」

恋次達も不思議に思いつつ、モニターに映し出される一護の顔を覗き込んだ。

『よう、お前ら！元気にしてるか？』

「ああ、お陰様でな。何かと忙しい日々を送ってるぜ。」

『そうか。ところで、アンゴルモアの回収のほうだが・・・』

「現在見つけた数は5個。そのうち回収できたのは4個。1個は残念ながら敵方に奪われてしまいましたよ。」

『成程、お前らも大変だな。』

「ところで一護君？今日はどういった用件で僕たちに？」

吉良がそう尋ねると、一護も気がついた様子で用件を話し出す。

『ああ、そう言えばまだ言ってなかったな。実はよ・・・・・・俺達の地球（せかい）でアンゴルモアの反応が確認されたんだ！』

「「「「「「なっ！？何！！」」」」」」

一護からの突拍子も無い意外な一言にユーノ以外の全員は驚きを隠せなった。

ユーノは真剣な眼差しを浮かべると、帽子を深く被りなおし詳しい話を求める。

「・・・――――詳しくお話伺いましょうか？」

その後、なのは達全員も指令室に集めたユーノは一護から聞かされた詳しい内容を打ち明ける。

「何!?地球にアンゴルモアが!?」

「一護さんからの情報によれば・・・アンゴルモアが感知された場所は・・・此処!」

タッチパネルを捜査しながら、地球の具体的場所をサーチするユーノ。

マップに示された場所は日本の東京に位置する高級住宅地。

「ちょうど松前市から車で30分走ったところにある上流階級の家庭が密集する町、田園調布。その一角にある都内でも屈指の名門女学園・・・聖ルチアーノ女学院。そこで使われている古いモニュメントにアンゴルモアがあるとのことだよ。」

「聖ルチアーノ女学院か・・・私も名前だけは聞いたことあるよ。日本全国から集められたお嬢様というお嬢様を集めて、英才教育をこれでもかとばかりに叩き込む超ハイパーな学校や!」

「アリサも、前にそこの転入を受けたことがあるって言ってたけど・・・」

「あまりに厳しすぎるから入学拒否したって言ってたよね・・・」

はやて、フェイト、なのはの三人は以前親友であるアリサ・バニングスから聞かされたそんな話を思い出し、この学園の存在を確認し

た。

「地球か・・・それも金持ちのボンボンが集まったお嬢様の園・・・ここは潜入捜査が妥当だとは思うが、誰が行くんだ？」

恋次がそう言うと、真っ先に名乗りを上げたのは部隊長のはやてであった。

「それは勿論なのはちゃんと私や！」

「え！？は、はやてちゃん・・・！！私も行くの！？」

「決まってるやないの。地球のことは地球人である私となのはちゃんが行くのが妥当や！そうやらクロノ君！」

俄然乗り気のはやてであったが、話を聞いていたクロノが呆れた表情で無常な現実を告げる。

「あのな・・・仮にも君はここの部隊長だぞ。容易なことでは此処から動かすことは出来ない。」

「ええ～～～！！そんなつれないこと言わんといてよ～～～！！」

はやてはクロノの言葉を聞いた途端、その場にしゃがみ込みすっかり意気消沈してしまう。

「ここは誰か他の方を連れて行くしかありませんな。誰か適任はいませんかね・・・」

金太郎のその言葉にここにいた誰もが頭を捻らせ、困惑する。

「俺達は絶対無理だろう。男だしな・・・」

「スバル達も少し目立ちすぎるし・・・キャロにしても背丈的に問題が・・・」

「今日はシグナム達もオフシフトやし・・・あと他に地球に詳しい女性なんて・・・」

すると、何故か全員の視線がユーノのほうへと向けられた。

何故自分に視線が分からないでいるユーノは困惑の表所を浮かべる。

「ん？何だよ一体！？何でこっち見るの、ええ？」

全員はそんなユーノを見て、無条件に全会一致の判断に達し不敵な笑みを浮かべる。

そして、なのははこの上も無い幸せそうな様子でユーノを見ながらはやてにこう告げる。

「にゃはははは♪はやてちゃん・・・私ユーノ君と一緒ならオッケイーだよ♪」

「Ｗｈａｔ‘ｓ？何言ってるのなのは！！！！」

今回の潜入捜査は女性とばかり思い込んでいたユーノはなのはの言葉に思わず叫び声を上げる。

そして、そんなユーノに追い討ちをかけるような言葉をはやてとク

ロノは口にする。

「うん！それもそうやな！！ユーノ君なら髪下ろして制服に着替えれば女の子に充分見えるわ！」

「その手があったことをすっかり忘れていたな。ユーノ、何ならエイミィに化粧道具も貸してくれるように問い合わせておこうか？」

クロノが冗談半分、悪気半分の言葉を不用意に口にした瞬間ユーノは瞬歩でクロノの傍に移動すると首元に杖から抜いた刀をクロノに突きつけながら本気で殺すつもりでこう言った。

「クロノ・・・首切られたくなかったら今の言葉すぐに撤回しろ・・・！！」

クロノも流石にこれには命の危険を感じたのか、冷や汗を多量に流しながらユーノに謝罪の言葉をかける。

「わ・・・悪かった・・・今のは撤回しよう・・・！！」

「けど、店長だったら何も女装しなくても潜入ぐらい出来るでしょう。」

「然様。隠密活動は店長の得意分野ですからな！」

「ま～得意と言えば得意だよ。四年間ずっとそう言うことをしながら地球に身を潜めていたんだし・・・ほとんどの地理も知り尽くしてる。」

すると、その時指令室のメインスクリーンに一護からの通信が突然

入ってくる。

『だったらいいじゃねぇかよ、ユーノ！一緒に行けば！』

「一護さん！？またいきなりですか！？」

『悪い悪い。そうだ！高町なのは。こっちの捜査に来るんなら、もう一人調査に同行させて欲しい人員がいるんだが・・・いいか？』

「はい！でも一体誰ですか！？」

すると、一護の後ろからひょっこり顔を出したのは織姫であった。

『どうも！！みんな元気してる？』

「井上！？まさかお前かよ！？」

『へへへ♪そうなんですよ・・・♪なのはさん、ユーノさん！一緒に捜査に協力させてくれますか？決して足手纏いにはなりませんから！』

「私は全然構いませんよ。寧ろ、心強いですから！」

「織姫さんが加われば百人力ですよ♪調査もスムーズに進むはずです♪それでいいだろう、はやて？」

「私もそれでええよ別に。他に反対意見のあるものはおる？」

「「「「ありません！」」」」

「おなじく。」

「いいんじゃねえか！」

「同感♪」

フォーワードメンバー四人、フェイト、恋次、白鳥を始めこの場にいた全員が異論はないと意思表示をする。

「よし、では改めて今回のアンゴルモア探索任務。第９７管理外世界『地球』への派遣メンバーは・・・スターズ分隊隊長、高町なのは一等空尉。機動六課特別エグゼクティブアドバイザー、ユーノ・スクライアの計二名だ。」

「学校って言うのが今回の一番の難題やけど・・・二人とも、頑張ってくるんやで！」

「「了解」」

二人は息の合った返事をし、今回の任務に当たることになった。

「ほんなら！早速なのはちゃんとユーノ君の制服用意せなあかん・・・」

はやてが冗談半分本気半分の言葉を口にした瞬間、笑っているに目が全く笑っていないユーノが鬼道をはやての横に打ち込むと、殺意のこもった声色でこう言う。

「はやて・・・僕のはいいんだよ♪」

「はい・・・すみませんでした・・・！！」

本気で殺されると思ったはやてはクロノ同様多量の冷や汗を流しながら、直ぐにユーノに謝ってのであった。

そして、その日の晩・・・地球から取り寄せたなのはのサイズに合うような制服を聖ルチアーノ女学院から取り寄せたはやては、一度胸囲やその他諸々を測ってからなのはに手渡す。

そして、制服に着替えたなのはがスバル達の前に現れると、スバル達はその着こなしぶりに思わず歓声を上げる。

「うぁ～～～なのはさんよく似合ってますよ！！本当に女学生みたい！！」

「にゃははは♪そ、そうかな・・・」

スバルに褒められ、思わ照れてしまうなのは。

「なのはママすっごく可愛い！！ねっ、フェイトママ！」

「そうだね。よく似合ってるよ、なのは。」

「ありがとう、フェイトちゃん！ヴィヴィオもスバルもありがとう♪」

そんななのは達女性陣の盛り上がりを見ていた恋次は隣にいる吉良に向ってこう言う。

「ホント、女っていうのはどうして服ぐらいで盛り上がるんだよ？」

「そう言うものだよ、女性は。乱菊さんだって現世に買い物するときはあんな感じだったはずだよ。」

「乱菊さんの場合は・・・その数十倍性質が悪りー・・・結局に持つ運びされるのがおちだろうが。」

「それにしても・・・」

ふと吉良は壁に止しかかり本を黙読していたユーノに目線を向け、ユーノ自身も不思議そうな表情で吉良を見ていた。

「あなたはどうして何時もその格好なんです?偶には違う服着ればいいじゃないですか?」

「これが一番動きやすく、フィットしてるものですから♪今更変えるのは面倒くさいですよ♪ははははははははは♪♪」

「・・・あっ、そうですか・・・」

恋次と吉良はユーノの態度を目の当たりにした瞬間、これ以上何もいう気が起きなかった。

すると、そんなユーノの下にかなり照れた様子でなのはが近付いてきた。

「あの・・・ユーノ君・・・」

「?」

「そ・・・その・・・似合う・・・かな・・・!?」

自信の無い様子でなのはがユーノにそう尋ねると、ユーノは優しい笑みを浮かべると素直になのはの服装を褒める。

「うん♪よく似合ってるよ・・・なのは。」

その言葉を聞いた瞬間、なのはは途端にこの上も無いぐらいに嬉しくなり最高の笑顔をユーノに向ける。

「・・・あ、ありがとうユーノ君!!」

ユーノとなのはは人目を憚らずに完全に二人の世界に入ってしまう。

その様子を見ていた鬼太郎は恥ずかしくなったか、ユーノに向って遠慮をするように言葉を掛ける。

「だから店長・・・人前でいちゃつくのは止めろってば・・・」

「う~ん、美しい!実に美しいぞよ!」

「あなたの何の美学評論家ですか?」

白鳥の言葉を聞いていた浦太郎はそんな白鳥の言動を聞いてふとそんなことを思ったのであった。

次の日の朝、二人は万端準備を整えて転送ポートの前に立ち、全員に見送られながら地球へと向うのであった。

「それじゃ、二人揃って行って来るね♪」

「気をつけてね、なのは。ユーノももしものことがあったらなのはをちゃんと守ってあげなよ。」

「言われなくてもそのつもりだよ、フェイト。クロノ、転送準備は？」

「ああ。万端整っている・・・よし、それじゃあ行くぞ！」

クロノはそう言うと、転送ポートの機動スイッチを押して二人を地球へと送り出した。

「行っちゃったね・・・なのはさんとユーノ先生。」

「そうね。そう言えば、二人がこうして同じ任務に出るのって初めてじゃない？」

「ですね！なのはさんもユーノ先生も二人揃ってのアンゴルモア捜索の出動はこれが初めてですね！」

「昔はなのはちゃんとユーノくん・・・一緒に住んでたから居る時間も多かったんやけどな・・・」

はやてのその言葉を聞いた瞬間、恋次は飲んでいたお茶を思い切り口から吹き出した。

「ぶっは！！！！！」

被害を受けた吉良を他所に、恋次は大慌てではやてに問い詰める。

「おい！！！！今何て言った！？あいつら・・・一緒に住んでたのか！？」

「ええ。そうやけど・・・何や恋次さんユーノ君から聞いてなかったんですか？」

「知るわけねえだろう！！あの野郎～～～どこまでも癇に障る野郎だ～～～！！！」

恋次は拳に怒りをためながら、頭の中で飄々としているユーノの姿を思い浮かべていた。

「まっ、なのはちゃんが魔法に出会う切っ掛けはユーノ君との出会いがあったからなんよ。ユーノ君との出会いがなければ、私やフェイトちゃん・・・今ここにいるみんなとは出会わなかったんよ。」

「言ってみれば、ユーノが全ての始まりの鍵・・・で良いのかな？」

「はあ・・・・・・」

顔を拭きながら吉良もその言葉に耳を傾け、そう返事をする。

「そう言えばはやて・・・昨日、織姫さんと言う人の話を聞いててふと思ったんだが・・・」

「ん？何やクロノ君・・・神妙な顔つきで？」

全員が見守るなか、クロノは閉じていた口を徐に開きこう口にした。

「・・・あの織姫さんと言う女性・・・エイミィと声と性格がそっ

くりだった・・・と思ってな・・・」

全員はその言葉を聞いた瞬間、かなり長い沈黙をする。

そして、徐に恋次が全員の気持ちを汲み取ってクロノにこう言った。

「・・・・・・だから何だよ・・・・・・・」

稲妻の力（後書き）

教えて、ユーノ先生！

ユ「今日は、アビリティーについて教えてあげるね♪」

ユ「ここは魔法使いは勿論、さまざまな能力者が住まう文明が発達した世界で、それぞれの力の大きさに合わせてランクが決められているんだ。」

ユ「一番上のレベル５の人たちは単独で軍隊と渡り合えるだけの力を持っていて、その人たちがこの世界の政治・軍事を動かしてるんだ♪」

ユ「その下のレベル４やレベル３、２、１の人たちは能力の壁を越えない限り進化を果たすことが出来ないんだ。」

キャ「でも、具体的に能力と言ってもどんなのがあるんでしょうか？」

ユ「それはやっぱり、人には言えないようなものじゃないの♪」

キャ「え！？人には言えないってことは・・・もしかして・・・！！（一人違う方向で考えてしまい、顔を真っ赤にする。）」

ユ「（何を考えるんだろう・・・キャロも思春期だからな・・・）」

魔導師図鑑ハイパー！

例の如く、はやてはとんでもない発言をする。

は「ユーノ君の秘蔵写真を売って、今期の予算を確保するんや！！」

全員は呆れながら消極的な姿勢を見せる。

は「何やみんな！テンション下がっとるで！？」

恋「何で俺達がんなことしなきゃいけないんだよ！？」

ク「いくら予算が少ないからと言って、唐突過ぎるぞ。それに、何でユーノなんだ？」

は「ふふふ！！！管理局でもユーノくんの人気は男女問わず絶大に高い。もしも、ここでユーノくんのお宝写真があれば一気にボロ儲け・・・予算の心配はせいへんよ！！！てな訳でみんな健闘を祈るわ♪」

そう言って、各自にカメラを渡して後日再び集まってみると・・・

全員はユーノに返り討ちに合いボロボロの状態であった。

な「はやてちゃん・・・失敗しちゃった・・・」

は「ち。なのはちゃんでもダメやったか・・・」

アビリティ篇

平賀電光（ひらがでんこう）／ＡＭ０５

声　一　河野匡泰

ハイド中央科学センターの所長を務めるアビリティの世界における天才物理学者。科学者としての技術や知識はトップクラスで、マッドサイエンティストとして知られている。能力者のスキルを容易に乗り越える装置「ボーダーブレイカー」を開発し、知名度を上げていたが実はその装置にアンゴルモアが使われており彼はその力を使って自らが世界の中心に立って掌握を握ろうとしていた。超常現象を引き起こし、重力を操り人々を苦しませるがユーノやフェイト達の活躍によって計画は失敗に終わり、逮捕されることとなる。

レイジングハート・マキシマム・ブレイド

＞i12351―709＜

さて、管理外世界97番『地球』へと無事に到着したユーノとなのはは、一先ず誰にも気付かれぬように織姫と待ち合わせをした人気の無い場所へとやってきていた。

「よしと♪無事に到着だね！」

「うん。こっちに帰ってきくるのは三週間ぶりかな・・・尤も僕の店は北側のほうだけどね♪」

「にゃはは♪私もこっちは本当久しぶり！この前ヴィヴィオを連れて実家に帰ったのが・・・大体半年くらい前かな。」

「結構帰ってなかったんだ。まっ、仕事が仕事だけに仕方なかったけどね・・・」

「でも、こうして二人で地球（こっち）にいると・・・何だか凄く懐かしいね・・・」

なのはがそう言うと、ユーノも和やかな表情を浮かべて辺りの平穏な雰囲気と心地よい風をその身に感じる。

なのはもユーノと同じようにそんな気分に浸っていると、徐にこんなことを口にし出す。

「出合った頃はまだお互い名前も知らなくて・・・突然色んな事件に巻き込まれて・・・辛いこと・悲しいことも多かったけど・・・嬉しいこともそれ以上に沢山あって・・・」

「なのは・・・君はこの世界に入ったこと・・・後悔したりとか・・・してる？」

「うんうん。私はちっとも後悔なんてしてないよ。全部自分で選んで此処にいるから。それに・・・その私に魔法っていう素敵なものを教えてくれたのは誰？他でもない・・・ユーノ君その人でしょ？」

「なのは・・・うん・・・そうだね。」

「ユーノ君は・・・ひょっとして私がこっちの世界に携わったこと、後悔してる?」

「最初のうちはそんなことを思ったりもしたよ。でも、それもなのはの決めた道なら僕は良いと思った。あの時・・・なのはが落ちたって聞いたときは流石に感情が込み上げて爆発しそうになったけど、それでも僕は決めたんだ・・・なのはがもう二度と自分の空を飛べなくなるようなことはさせない!自分が汚れ役になっても、モグラになろうが空の上の天使を見守り続けようって・・・」

すると、そんなユーノの手をなのはは優しく包み込むように握り締める。

ユーノは突然のなのはの行為に若干頬を赤らめる。

「え!?」

緊張するユーノに対して、なのはは目を瞑った状態で呆れながらこう言う。

「また始まった・・・いいよもう・・・私のことより、もっと自分のことに目を向けないと。ユーノ君は他人を優先しすぎだよ。私とて同じ。気にかけてくれるのは嬉しいけど・・・それで自分を蔑ろにするのは駄目。自分を傷つけてまで私を守ろうとしないで。自分のこともちゃんと気にかけて、それでもって言うなら・・・私は何も言わないよ。」

「・・・なのは・・・ごめん・・・」

「謝らないで。私とユーノ君の仲でしょ♪それに、折角恋人同士になれたんだから・・・一人で何でも背負わずに私に言ってよ。それとも・・・私はユーノ君の恋人には相応しくないの？」

上目遣いで悲しげな表情を見せるなのはを見て、慌てて手を横に振って否定をするユーノ。

「そ、そんなことないよ！！僕にはなのはしかいないよ！！他の誰にも・・・なのは以外の代わりなんて出来やしない・・・！！」

ユーノはキッパリと断言する。

それを聞いていたなのはも安堵し、頬を桃色に染め上げるとユーノと見つめあう。

「ユーノ君・・・」

「なのは・・・」

同じようになのはと見詰め合うユーノ。

そして、今度こそ初のキスが交わされようと二人が顔を近づけた瞬間・・・あの女性が現れたのであった。

「ほほほ！！お二人とも中々お熱いようで～～～」

「「！！」」

そう、一護の妻でありユーノの恩人の一人である織姫である。

織姫はなのは同様聖ルチアーノの制服に身を包むと、待ち合わせの場所に向って走ってきたが、そこで偶然にも二人が見つめあいキスをしようとしているところを目撃したというわけだ。

ユーノとなのはは織姫の突然の登場に驚き、慌ててお互いに距離を取ると顔を真っ赤にした。

「お、織姫さん!!何時の間にここへ!!」

「えっと・・・!!確かあなたが・・・!?」

「そうです!!現地の民間協力者、黒崎織姫２５歳です!しかしユーノさんも隅に置けないですね!!噂のなのはさんってこんなに美人だったなんてね!!しかも私達夫婦と同じぐらいラブラブだしね!!」

「べ、別にこれくらい普通ですよ!というか、来るんなら来るんで連絡してくださいよ・・・」

ユーノは未だ恥ずかしさが抜けずに頬を桃色に染めながら、織姫の言葉に相槌を入れる。

そんな談笑に近い会話を横で見ていたなのはは呆然と立ち尽くしながら、織姫の容姿やスタイルを自分と比較していた。

「（え～と・・・私なんだか取り残されてる感じ・・・!?この人がユーノ君を助けてくれたっていう織姫さんか。近くで見ると本当に綺麗な女性(ひと)だな・・・胸もフェイトちゃんよりも大きいし・・・

いやそれよりも何だかこの人・・・エイミィさんに声も性格もそっくりなんだけど・・・！？）」

そんななのはに気付いたユーノは怪訝そうな表情で話しかけてくる。

「なのは？どうかしたの！？」

「え！！うんうん！！何でもないよ！！え～と・・・こ、こちらこそご協力感謝します。機動六課スターズ分隊隊長、高町なのは一等空尉です！」

なのはは改めて体裁を取り繕うことも合ってか、自信の自己紹介を済ませる。

織姫も丁寧な対応でなのはに今回の一連の出来事に関して謙った態度で精一杯頑張るという気持ちを表す。

「こちらこそ、不束者ですかよろしくお願いします。えっと、私となのはさんは制服着てるから潜入に問題はないと思うけど、ユーノさんはどうする気ですか？その格好じゃ完璧不審者以外の何物でも無いですよ。」

「勿論、こんな目立つ格好でうろつけませんよ。だから・・・」

そう言うと、何時もの甚平と羽織、帽子を着ていたユーノは嘗てなのはと一緒に生活をしていた頃に身を隠すためと燃費を抑えるためという理由で変身をしていたフェレットの姿へと変わる。

「あ！」

なのはも久しぶりに見たユーノのフェレット姿に内心かなり興奮していた。

ユーノはフェレットに変身し終えると、なのはの足を伝って肩まで昇る。

「この姿ならなのはと一緒に校内に忍び込めますから♪」

「うふ♪ユーノ君のフェレットさんモード懐かしいな♪ちょっと触ってもいい？」

悪戯心が芽生えたなのはは肩に乗っていたユーノを手の中に納めると暴れるユーノに構わず腹の部分を擽り始める。

「な、なのは!!くすぐったいから止めてよ!!」

そんなのはとユーノの仲睦ましい光景を見ていた織姫は破顔一笑すると、ユーノが漸く心から笑ってくれていることに内心ホッとした。

「（よかった・・・ユーノさん・・・嬉しそうにしてる・・・なのはさん・・・やはりあなただけがユーノさんの最高の活力になることは、間違いなさそうですね。）」

その後、なのは・ユーノ・織姫の三人は田園調布の一角に位置する今回の調査対象である聖ルチアーノ女学院へと潜入する。

聖ルチアーノ女学院。

総面積およそ１０００ヘクタール。

総生徒数９８０人。

あらゆるところのお嬢様というお嬢様が集められ、将来の有望あるエリートへと育て上げるために作られた由緒ある女子高である。

カリキュラムはそれぞれの進路に合わせて、一年時から選択が可能で自主自律をもっとうとしている。

語学は全２０ヶ国語対応・資格所得も豊富なラインナップが取り揃えてある。

まさに生徒のためにはありとあらゆることを取り揃えた学院なのである。

校舎内に入ったなのはと織姫はその生徒達の数と雰囲気の凄さに圧倒されていた。

「うわ～～～何だか如何にもお嬢様って感じの学校・・・ですね・・・」

「みんな頭良さそうな人ばっかり・・・！！流石は超一流のことだけはあるね！！」

「アンゴルモアの反応はこの校舎の裏にある中庭のほうからですね。一先ずここは転入生ということで教室に入っていこう。なのは、織姫さん。行きましょう。」

「うん！」

「はいはい！」

ユーノはそう言うと、一度なのはの鞄の中へと身を潜める。

校内に入って教室へと案内されたなのはと織姫は容姿端麗な若い女子生徒たちの注目を集める中、担任の教師からの説明で以ってホームルームが始まる。

「さて、今日は皆さんに新しく転入してきたクラスメイトを紹介します。両親の都合で急にこの学校に入学することになった・・・」

「た、高町なのはです！よろしくお願いします！」

「井上織姫です！みんなよろしくお願いします♪♪」

緊張で上がりっぱなしのなのはと違い、織姫は寧ろ慣れた様子で自分なりの自己紹介を済ませる。

やがて、休み時間に入った途端なのはと織姫はクラスメイト全員からの質問攻めに襲われるのであった。

なのははかなり動揺を見せながら、念話でユーノにこんな事を話すのであった。

「（あはは・・・ねえ・・・ユーノ君・・・何かクラスの人の反応が凄いと言うか何というか・・・その・・・注目の目線が痛いよ・・・）」

「（そりゃ、なのはも織姫さんも世間的に見れば美人の枠に入るんだよ♪それぐらい普通だって・・・）」

「（そ、そうかな・・・！！）」

「（自覚して無さすぎだよ・・・まっ、それがなのはらしいと言えばそう言うことになるけど・・・取りあえず、適当にクラスの人に愛想を振りまいといてね。あと、決して自分の正体を悟られないようにすること。織姫さんにもそう言っといて。）」

「（うん。了解！）」

「ねえ！向こうの学校ってどんな感じでした？」

「え～と・・・ここと同じぐらい素敵なところでしたかな・・・！？」

なのはは早速飛んできた一人の生徒の質問に取ってつけた話をかなり焦りの気持ちを露にしながら答える。

「凄い急な転入ですけど、どうしてですの？」

「いや～両親が気まぐれでこっちに来たいって言い出してね！」

なのはと同じように質問攻めにある織姫だったが、なのはと違いやはり慣れた様子で慌てる素振りも見せずにすらすらと答える。

「綺麗な髪ですね！トリートメントは何を使用されて？」

「えっと・・・普通のですけど・・・！！」

「語学のほうはどれくらい嗜んでおいでで？」

「う～んと、フランス・中国・英語・ドイツ・・・あと韓国語も少々！」

そんな自分とは相反する織姫の態度を傍らで見ていたなのははは唖然とする。

「にゃはは・・・（織姫さん・・・何で話し合わせるのそんな上手いの！？こっちは質問に答えるのも一苦労なのに・・・！）」

その後、漸く解放されて昼休みに入ったなのはと織姫は廊下を歩きながら先程の質問攻めの出来事を思い出していた。

「いや～～！！凄かったですね！！私なんかその場のノリでああ言っちゃったさ！！ははは♪♪」

「ノリであそこまで言えるものなんですか、それ？私はあんなに質問攻めにあったの初めてで、答えるだけで頭が爆発しそうになっちゃいましたよ！」

「仕方ないですよ、それは。まっ、無事に潜入できたことだし・・・私たちも早速捜索にかかろう！なのはさんは中庭の方を、私は校舎内を見て回ります。」

「分かりました。何かあったときは、直ぐに連絡お願いしますね。」

なのはと織姫が気を取り直してアンゴルモア捜索に取り掛かって移動していたその頃、フェレットモードのユーノは先に二人とは違いこの拾い敷地内を移動しながらアンゴルモア捜索のために霊圧を研ぎ澄ませていた。

「（・・・・・感じる・・・強い霊圧をこの校内から確かに感じる・・・・・・・）」

ユーノは中庭のほうから見える古い建造物に目を向けた。

「あれか・・・」

ユーノが見ているこの建造物は嘗ての校舎であった。

老朽化が進み今では記念館として扱われているが、そこに立ち入るものはそう多くなかった。

ユーノはその旧校舎の方を険しい表情で見つめていたその時、ユーノを見かけて走ってきたなのはの声が耳に入ってきた。

「ユーノ君!!」

「お？なのは。」

「そっちはどう？」

「うん。あれだよ・・・あそこの建物・・・」

ユーノはなのはの肩まで上ると、旧校舎のほうをなのはに差し示す。

「１００年前、聖ルチアーノ女学院に立てられた最初の校舎。今は新校舎に移り変わって記念館みたいになってるけど、間違いなくあそこからだよ。」

「危険な匂いが凄いするね・・・まだ校内には人も沢山残ってるから、誤ってアンゴルモアが発動したら大変だね。織姫さんにはこのことは？」

「大丈夫。連絡はしておいたよ。直ぐに合流してくると思う・・・」

と、ユーノが何気なく後ろを振り見た瞬間だった。

ユーノとなのはあるとんでもない光景を目の当たりにする。

「「え？」」

それは、偶々中庭のほうで憩いの時間を過ごしていた大勢の女子生徒たちがなのはの肩に乗るフェレットモードのユーノに羨望の眼差しを向けながら寄ってたかってきたのだ。

「きゃああ！！可愛い！！それ、高町さんのペット！？」

「フェレットかしら？私前々からこう言うペットに憧れてたんですよ！！」

「えっと・・・この子は・・・その・・・！！」

突然のことに慌てふためくなのはだったが、一人の女子生徒が隙を見てなのはの肩に乗っていたユーノを手に掴む。

「ちょっと触ってもいいかしら！？」

「ほら追いで！！」

一人の生徒がユーノを取り上げると、他の生徒達も挙ってユーノを我先にと触ろうとして奪い合いを始めるのであった。

「あっ！ゆ、ユーノ君！！」

ユーノを女子生徒たちに奪い取られ、そのまま別の場所へと持ってかれそうになる助けを請うユーノを見ながらなのはは困惑の表情を見せる。

「あちゃ～～～・・・どうしよう・・・（ユーノ君・・・大丈夫？）」

「（僕は何とか・・・けど・・・流石にこの状況は・・・理性が・・・！？）」

念話でそんなことを話していたユーノであったが、今の自分の状況に困っていた。

それは、若い女子生徒たちの胸の谷間に挟まれながら押し競饅頭をされているような状態であったのだ。

ユーノも男であることには変わりない・・・理性が平気で吹っ飛び最早オーバーヒート寸前である。

そんな顔を真っ赤にするユーノを見たなのはの心に嫉妬の炎と同時にユーノに対する失望の念が湧いてきた。

「（って！ユーノ君何赤くなってるの！！私という恋人があろうと言うのに！！）」

「（いや！！誤解だよ、なのは！！別にそう言うつもりじゃ！！）」

「（ふんだ！いいもん・・・若い女の子と一緒に思う存分可愛がられれば！！もう知らない！！）」

なのはは念話でユーノにそう告げると、完全に怒りを露にしながらユーノを見捨てて旧校舎の方へと歩いていった。

「（ちょっと！！なのは！！待ってよ！！なのはってば！！なのは様！！！助けてよ！！！！）」

ユーノは何度も何度も念話でなのはに助けを求めるが、やはりなのはは怒ったままである。

その時ちょうどなのはの下に織姫が走ってきた。

「お待たせ！！ってあれなのはさん！？ユーノさんは・・・！？」

「知りません！あんな淫獣のことなんか！！」

織姫のその質問にも頬を膨れ上がらせながらなのはは非常な台詞を口にし、そのまま歩き続ける。

「えっ！？ちょっと、なのはさん！どうしたんですか！？」

織姫も状況を理解できないまま、旧校舎へと向ってどんどん歩き出す不機嫌なのはの後を追っていくのであった。

やがて、二人は人気が全く感じられない旧校舎の中へと入り込み静けさが支配する廊下を徐に歩き出す。

「ここで間違いないようだね・・・」

「そうですね・・・それにしても・・・・・・・」

なのはは老朽化した建物の天井や廊下、さらには使われなくなった教室の方を見て険しい表情を浮かべる。

「あんまり居心地のいい場所じゃないですね・・・気味が悪いです・・・！」

「そうですね・・・でも私は結構平気かな・・・？普段から幽霊なんてしょっちゅう見てるし・・・」

「えっ！！！ゆ、幽霊をしょっちゅう見てるんですか！！！？？？」

「いやほら・・・私も旦那も霊力が高いしさ・・・魂魄見るのなんて日常茶飯事だし、この間なんか、頭に包丁が突き刺さったままの魂魄なんかも見たしね♪」

「それ普通に怖いですよ！！！！！笑顔で恐ろしいこと言うの止めてください！！！！」

と、その時。

なのはの後ろのほうから聞こえてきた水の零れ落ちる音。

それを聴いた瞬間なのはは恐怖に支配され、エースオブエースと周りから損傷されているとは全く思えないような情けない声を出して全速力で前へと走り出した。

「きゃあああああああああ！！！！！」

「な、なのはさん！！なのはさんってば！！！」

絶叫しながらやがて姿が見えなくなってしまったなのはを、織姫はただ呆然と眺めていた。

「ありゃらら・・・エースオブエースがまさかこの手の話で取り乱すとは・・・私達の常識ってひょっとしてかなりのダメージ与えるのかな・・・向こうの人には・・・？」

その後、織姫はなのはの霊圧を探ってしゃがみ込んだまま体を震え上がらせるなのはにそっと声を掛けて慰めに入る。

「大丈夫だよ、なのはさん！御免ね、変なこと言っちゃって！」

なのはも漸く気持ちを落ち着かせて徐に立ち上がり、溜め息をつく。

「はぁ～～すみません、こっちも急に走り出したりして。フェイトちゃんと同じで幽霊とかその手の話は正直苦手なんですよ。その逆ではやてちゃんはこの手の話は大好きでしてね・・・三人でホラー映画見たときも、私とフェイトちゃんが怖がって絶叫してるのにはやてちゃんだけはお菓子食べながらゲラゲラ笑ってたんです。」

以前、休暇を取った三人が映画館で見たホラー映画。

その時、なのはとフェイトはあまりの怖さに絶叫して涙を流していたがはやては一人ゲラゲラと笑いながら買ったポップコーンを食べていたという話は今も鮮明に覚えるいるらしい。

「ありゃりゃ・・・死神の恋次君たちと普段一緒にいるのにそういうのは苦手なんだね・・・ん？」

すると、織姫は近くの部屋から何やら物音を聞き取った。

「織姫さん・・・？」

「静かに！今あそこで変な音がした。」

「えっ！？」

織姫にそう言われ、動揺をするなのは。

二人はその物音がした部屋の方へ足音をなるべく立てずに近付いていく。

ついた処は嘗て広く使われていた音楽室の扉の前だった。

「音楽・・・室・・・といえば・・・！！」

「ベートーヴェンの肖像画がうすら笑いを・・・」

「やめてください！！その話はもうやめてください！！」

織姫の悪身を帯びた発言に、なのはが直ぐにやめるように説得する。

「なのはさん！静かに！」

「あっ！す、すみませんでした！！」

その際、自分の大きすぎる声量を聞いて忠告を入れる織姫。

なのはもそれに関して謝罪の言葉を掛けると、緊張した様子で部屋の前の取っ手に手をかけ息を呑んだ。

「・・・それじゃあ・・・開けるよ・・・・！」

「・・・はい・・・気をつけてください・・・・！」

二人が意を決して徐に扉を少し開けて中の様子を見た瞬間、そこに広がってきたのは・・・

「御免・・・私もう・・・我慢できない・・・お願い・・・・！」

「ちょっと・・・止めなさいよ！！誰かに見られたら・・・それこそ退学ものじゃない！！」

「そんなこと大したことじゃないわ！今はこの気持ちが抑えられない！！」

「「あっ・・・・・・・！！」」

その光景を部屋の外で見ていたなのはと織姫は顔を真っ赤に染め上げると、直ぐにその状況が何なのかを理解し、思わず顔を引きつった。

「こ・・・これってひょっとして・・・・！！」

「同性愛（ホモセクシャル）・・・だよね・・・・！！」

「はっ！誰だそこにいるのは！？」

すると、中にいた生徒の一人が部屋の外から聞こえてきたなのは達の声に気づく。

「いけない！！気付かれちゃった！！」

「は、早くに逃げたほうがって・・・きゃあ！！！」

「なのはさん！！危ないって、あああああ！！！」

二人はかなり慌てていたためか、その場に派手に蹴躓いてしまい体を重なり合わせて全身に伝わってくる痛みを感じていた。

「「痛たた・・・！！」」

二人が目の前から感じる先程の生徒の殺気の籠もった目線を感じると、冷や汗を流しながらとってつけた言い訳をして誤魔化そうとする。

「えっと！！私たちは決して怪しいものじゃなくて・・・その！！ちょっと道に迷ってしまったというか・・・！！」

「そ、そうなんですよ！！別に覗き見なんてやらしい真似は決して！！」

「嘘をつくな貴様ら！今、はっきり覗き見と言ったではないか！！」

「（ヤバ！つい口が滑っちゃった！！）」

織姫の軽はずみな発言がなのはの心を更に焦らせる。

「見ない顔だな・・・さては当校に忍び込んできた不法侵入者だな！おのれ侵入者！！よくも土足で神聖なこの学院に入り込んでくれたな！！」

そう言うと、生徒は懐からアーミーナイフを取り出して二人に向ける。

なのはと織姫は突然出てきた凶器に怯えながら何故それを所持しているのかを尋ねる。

「って！！何でそんなもの持ってるの！！？？」

「護身用だ！！」

生徒はそれだけ口にすると、ナイフを二人に向けて振り下ろす。

二人はギリギリのところでそれを避けると、急いでその場から立ち去ろうとする。

「なのはさん！！兎に角一先ず逃げましょう！！」

「そ、そうですね！！！」

二人は脱兎の如くその場から立ち去るが、生徒も二人の後ろからハンターのように追い詰めていき、とうとう行き止まりのところに追い込まれたなのはと織姫。

「さぁ、追い詰めたぞ侵入者！大人しく投降してもらおうか！」

「だから誤解だってば！！私たちはこの学校に今日転攻してきたばかりで・・・！！」

「お願いだからそのナイフは下ろして、ねっ！！」

「言い訳は聞かん！！覚悟！！」

「「くっ！！」」

二人は覚悟を決めて目を瞑った。

だが、その瞬間ナイフを振り上げたその生徒は誤って足を踏み外してしまい、豪快に地面のほうに蹴躓いてしまった。

「のあああ！！？？」

生徒が派手に蹴躓いたなのはと織姫はその呆気ない光景を見て唖然とする。

「あれ・・・？転んじゃった！？」

「あの・・・大丈夫ですか・・・えっ！？」

織姫がその生徒の身を案じて体を起こそうと近付いた瞬間、織姫となのははとんでもないものを見てしまった。

何と、今迄女だと思っていたその生徒の正体が実は女装をした男の姿であったのだ。

「お、男!?」

「はっ!くっ・・・見破られてしまったか・・・!!」

その男子も二人に自分の正体を知られてしまったことに深い後悔をする。

「えっと・・・何で女子だけのこの学校に男子が・・・それも女装なんかして・・・!?」

「・・・話せば・・・長くなるんだが・・・」

聞けば、この青年・・・野崎衛(のざきまもる)は、幼馴染で恋心抱いていた春野すみれと小学校、中学を通してずっと一緒だったが、すみれがこの学校に入学することを気に離れ離れにならなければいけなくなった。

衛は自身の気持ちも伝えぬまま、すみれと離れ離れになることがどうしても我慢できなかった。

そこで取った策が、女装をしてでもこの学園に転入するという方法だった。

元々、容姿がユーノと同じように中性的であった為誰にも気付かれぬことなく転入することが出来たというわけであった。

「そうだったんだ・・・それでこんな女装までして・・・」

「それだけ・・・すみれちゃんって子の事が大好きなんだね・・・衛君は・・・」

「当たり前だ。小さい頃からずっと一緒に居たんだ。今更離れ離れなんて出来っこない！すみれはどう思ってるか分からないけど、俺はあいつの傍にいたい！そして・・・この気持ちをあいつに伝えないといけないんだ。」

「成程ね・・・幼馴染か・・・私にもね、そう言う幼馴染が一人いるよ。」

「そうなのか？」

「うん♪ユーノ君って言ってね・・・どっちかっていうと衛君と同じような中性的な顔でね、９歳の頃にある出来事を切っ掛けに知り合ったんだ。根は凄くやさしくて、暖かくて、だけど私のいないところで無茶ばかりして・・・そう言うやんちゃな人なんだ。」

「・・・そのユーノという奴のこと・・・お前はどう思ってるんだ？所詮は幼馴染という言葉だけで片付けてるのか？」

「・・・四年前まではそうだったかも・・・でも・・・離れ離れになって漸く気付いたんだ・・・今迄、当たり前のように隣にいた温もりが・・・突然消えてしまったときの途方も無い寂しさと・・・自分の思い上がりを・・・だから、そう言う寂しい思いは私にもよく分かるよ。今はもう・・・ただの幼馴染で片付けるには言葉が足りない。いや、最初からそんなじゃなかったけど・・・これだけは言える。ユーノ君はもう・・・私にとってこの世で一番愛する人・・・かな。」

そのなのはの言葉を聞いた織姫は凄く穏やかな気持ちになった。

「なのはさん・・・（よかった・・・ユーノさんに気持ちを伝えられたんだ・・・）」

「・・・そうか。お前は羨ましいな・・・」

「え？」

なのはは衛の口から告げられる想定外の一言に思わず首を傾げる。

「俺はどうも臆病者でいかん・・・すみれに何度アタックしようとしたが・・・結局気持ち一つ言えないんだ・・・」

「衛君・・・」

と、その時であった。

「きゃあああああああああ！！！！」

「「「えっ！？」」」

突然三人の耳に届くすみれの悲鳴。

「この声は・・・！！」

「すみれの悲鳴だ！！奥の方から聞こえる！！」

「行こう！衛君！なのはさん！」

三人はすみれの悲鳴が聞こえてきた奥のほうへ駆け足で向っていく。

その最中、織姫となのははは神経を研ぎ澄ませてアンゴルモアが力を発動したということを感じる。

「（この霊圧・・・！？まさかアンゴルモアが発動したの！？）」

「織姫さん！！これってやっぱり！！」

「多分そうだと思う！すみれさんが危ない！急がないと！！」

三人がたどり着いた場所は理科室であった。

すみれを第一に思う衛が理科室のドアを力任せに開けて、すみれの名前を叫ぶ。

「すみれ！！はっ！？」

その時、三人が見た光景は余りに衝撃的であった。

数分前、衛と別れたすみれは昼休みも終わりに近付いたので現校舎に戻ろうとした瞬間、理科室のほうから何かに誘われるかのように足を運び、部屋の中に置いてあった記念碑のようなものに手を触れた瞬間、すみれの心に反応したアンゴルモアが発動し、すみれを薄い膜状のもので取り込んでしまい暴走を始めたのであった。

「何だ・・・これは！？」

「アンゴルモアがすみれさんを取り込んで、暴走してるんだ！」

「アンゴルモア・・・！？一体何のことだ！！」

「詳しい説明は後！兎に角すみれさんを助けないと！！」

なのははそう言って取り込まれたすみれを助け出そうとした瞬間、暴走したアンゴルモアは特殊な触手を伸ばしてなのはと衛を襲ってきた。

「「なっ！？」」

「『三天結盾（さんてんけっしゅん）』！」

だがその時、咄嗟に織姫が自信の能力である盾瞬六火を発動させてヘアピンから火無菊・梅厳・リリィの三人を呼び出し三人が逆三角形の頂点にそれぞれ位置取ることで盾を張り、あらゆる攻撃を防ぐ三天結盾を発動させ、触手を防ぐ。

織姫の能力を間近で見たなのはと衛は驚きの表情を見せる。

「織姫さん！それは・・・！？」

「私の能力は、『盾』を張って『拒絶』する力！待ってて、今すみれさんを助ける！椿鬼（つばき）、お願い！」

織姫は再びヘアピンから椿鬼と呼ばれる男を呼び出し、すみれ救出を試みる。

「おう！待ってたぜ！」

「『孤天斬盾（こてんざんしゅん）』！！私は拒絶するッ！！！」

孤天斬盾は織姫唯一の攻撃技で物質の結合を解く力を持ち、対象を

真っ二つに裂くことが出来る。

その力を使って織姫は特殊な膜に取り込まれて気絶しているすみれを救出する。

「すみれ！！」

救出されたすみれを衛が直ぐに抱きかかえる。

「早いところアンゴルモアを封印しないと、被害が大きくなる！」

「了解！レイジングハート、いくよ！」

〈Ａｌｌ　ｒｉｇｈｔ　ｍｙ　ｍａｓｔｅｒ〉

なのはは織姫の言葉を聞いて、ロケットと一緒に首にかけていたレイジングハートを取り出しバリアジャケットを着用し、杖を持つ。

「なのは・・・お前その姿は・・・！？」

一瞬にして姿が変わったなのはを見て、驚愕の表情を浮かべる衛。

「ごめん衛君。こればっかりは言えないの！だから早くすみれさんを連れて逃げて！！」

「わ、分かった！」

衛はすみれをしっかりと抱きかかえると、急いで旧校舎の外へと脱出していった。

衛がいなくなったことを確認すると、なのははレイジングハートに指示を出してアクセルシューターを発射。

「アクセルシューター！！」

全ての攻撃は着弾したものの、ＡＭ０６は一度天井を突き破ってなのは達の前から姿を消した。

「しまった！逃げられた・・・！！」

「何所行ったんだろう！？」

だが、その時・・・外から聞こえる生徒達の悲鳴声と地響きを感じた二人が急いで外に出てみると、そこで二人は恐るべきものを目の当たりにした。

「「はっ！？」」

それは、ＡＭ０６となったアンゴルモアがすみれのエネルギーの代わりになる原住生物を取り込んだ後、学校中にあるあらゆるものをエネルギーにするために次々と取り込んでしまっているのだ。

「原住生物を取り込んだんだ！いや、それだけじゃない！学校中にあるもの全てを手当たり次第に取り込んでる！？こんなタイプは初め！！」

なのははは直ぐにロングアーチ指令室に緊急入電を送り、学校を始めとする半径１０キロ四方に封鎖領域を展開するように申請を送る。

「なのはさんからの緊急入電です！聖ルチアーノ女学院でＡＭ０６

と交戦！封鎖領域の展開をお願いします！」

「了解！半径１０キロ四方に封鎖領域展開！一歩たりとも逃したらあかん！」

はやての指示の下、学校を含めた半径１０キロ四方に封鎖領域が展開される。

完全に生徒がその場からいなくなったと思われる状況の中、なのはと織姫は学校ほどの大きさにまで巨大化したＡＭ０６を仰ぎ見ながら険しい表情を見せる。

「ここまで巨大だと、流石に学校が滅茶苦茶になっちゃう！」

ＡＭ０６はなのは達に向ってエネルギー砲撃を発射。

それを直ぐに織姫が三天結盾で防御する。

「三天結盾！」

「ありがとうございます！ここはやっぱり・・・一点集中で核を取り除きます！」

〈Ｄｅｖｉｎｅ　Ｂｕｓｔｅｒ〉

なのはは砲撃モードにすると、ＡＭ０６のように狙って核を取り除くために得意のディバインバスターを撃ち込もうとする。

「ディバイン・・・・・・って！？」

だがその時二人は核の中に取り込まれているあるものに目を奪われた。

それは、先程脱出をはかり逃げたとばかり思っていた衛とすみれであった。

「衛君！！すみれさん！！」

「逃げ遅れたんだ！くっ・・・卑怯な・・・！！」

なのはが唇を咬んでこの後の処理をどうするべきかと悩んでいた瞬間、隙を見たＡＭ０６が二人の頭上に向って体を落下させてきた。

「「はっ！！」」

二人は防御が間に合わず押し潰されるとばかり思っていたが、そんな二人を助けたのはこの二人であった。

「なのは！！」

「織姫！！」

そう、フェレットモードから人間モードに戻り晩翠を解放したユーノと織姫の危機を感じ取って態々ここにやってきた一護であった。

二人は晩翠と斬月の刃でＡＭ０６を押え込み、二人の安全を確認する。

勿論なのはと織姫の二人の登場には驚きを隠せなかった。

「ユーノ君！！」

「それにあなたまで！！どうして此処に！？」

「やばい霊圧を感じたんでな！すっ飛んできたんだよ！ここは俺達に任せて、お前らはあいつらの救助に回れ！」

するとその時、二人の体に巻きついてきた理科室のエナメル線が全身に超電流を流し込みユーノと一護に膨大な磁場の圧力を与える。

「「のあああああ！！！」」

「ユーノ君！！！」

「あなた！！！」

二人は斬魄刀でエナメル線を切り取ると、空中に回避してから反撃を行う。

「くっ！！月牙天衝！！！」

「輝け、晩翠！！！」

二つの斬撃がＡＭ０６に直撃し、体はその攻撃によって大ダメージを受けたはずだった。

しかし、ＡＭ０６は吸収した様々なエネルギーを利用して受けた傷口を一瞬のうちに再生してしまうのだった。

「何だコイツ！？超速再生しやがる・・・！？」

「おまけにここじゃ満足に戦えない・・・なのは！一端織姫さんと一緒に離れて！バトルフィールドを展開する！」

「バトルフィールドって・・・どうやって！？」

「見てれば分かるよ。晩翠・・・“月面（げつめん）”展開！」

ユーノはそう言うと、なのは達が離れたことを確信してから晩翠を垂直方向に地面に突き刺した。

すると、地割れと供に打ち込んだ地点を中心にした空間そのものを周囲へ押しのける事によって円筒形の戦闘フィールドを作り出される。

機動六課でその常識外れの光景にクロノをはじめ、前線メンバーや死神達は度肝を抜いた。

「なっ！？空間が湾曲を起こしただと・・・！？」

「周囲の建造物が空間湾曲によって押しのかされ・・・戦闘フィールドが作り出された！！」

「どうなってんだよこりゃ！！」

ユーノの持つ斬魄刀、晩翠の知られざる能力の一つであるこの技・・・『月面』は、空間湾曲エネルギーを利用し数十キロ四方の土地を一定時間凝縮移動させることが出来る。

ユーノのこの驚くべき技によって、周囲の建物は一切は解されるこ

と無く空間凝縮されたままの状態であるため、バトルフィールド内に落ちたＡＭ０６と心置きなく戦うことが出来るようになった一護、ユーノの二人。

「よし！これで心置きなく戦える！織姫、俺達が奴の気を引いてる隙になのはと一緒にあいつらを助けろ！」

「わかった！行きましょう、なのはさん！」

「了解！ユーノ君、頼んだよ！」

「うん♪任せておいてよ・・・それじゃあ・・・行きますよ、一護さん！」

「おう！」

なのはと織姫に衛達のことを任せた二人はバトルフィールド内で激しい交戦を始める。

「月牙天衝！！！」

「獅子翡翠群！！」

二人がＡＭ０６との激しい戦いを繰り広げている中、なのはは織姫と一緒に核の中から衛とすみれを無事に救出する。

「もう大丈夫ですよ！さっ、今のうちに脱出を！」

「済まない。礼を言う・・・なのは、織姫。」

衛はなのはに礼を言った後、織姫にすみれのことを任せて自身はなのはに抱かれて安全な場所まで回避する。

「破道の八十　『土蜘蛛地雷（つちぐもじらい）』！」

ユーノは八十番の破道でＡＭ０６の足場を陥没させて身動きを取れなくする。

そこに一護がすかさず斬撃を与えにやってくる。

「ほあああああああ！！！！」

一護の斬撃がものの見事にＡＭ０６の腕を切り落とすものの、先程と同じで瞬時に再生をしてしまう。

「くそ！幾ら攻撃してもこれじゃキリがねえ！！」

すると、二人のことを織姫に任せてユーノ達と一緒に戦いに参戦するなのはが到着する。

「ユーノ君！こっちは救助完了！私も手伝うよ！！」

「分かった！じゃあ、持ってきたこいつを渡しておくよ！」

ユーノはそう言うと、懐から作ってきたばかりのあのカートリッジを宙に浮くなのはの手元に投げつける。

それを受け取ったなのはは怪訝そうな表情を浮かべる。

「これは！？ひょっとして私の・・・！？」

「なのは専用のカートリッジシステム、ＡＲカートリッジ。そいつをレイジングハートに装填すれば、リンカーコアを酷使せずにエクシードと大差ない力を発揮できる。」

「凄い・・・よし！レイジングハート、ＡＲカートリッジ装填！」

なのははレイジングハートにユーノから受け取ったＡＲカートリッジを取り付ける。

〈Ｇｅｔ　ｓｅｔ．　Ｍａｘｉｍｕｍ　Ｂｌａｄｅ〉

その瞬間、レイジングハートの形状がなのはの予想もしていなかったまったく別の形へと変貌する。

それはエクシードモードとも違い、完全に一護の斬月と同じような身の丈ほどの巨大な大剣の姿になってしまったのだ。

「これが・・・レイジングハートの新しい姿・・・！？」

全く新しいレイジングハートの姿に終始唖然とするなのはだったが、そんななのはの耳に届くユーノからの指示。

「なのは！僕と一護さんでこいつの動きを封じる！後は全力全開で攻撃すればいい！！その新しいレイジングハート・・・『マキシマム・ブレイド』で！」

「レイジングハート・・・マキシマム・ブレイド・・・うん！了解！！」

なのははユーノから告げられるレイジングハートの新たなる名前を復唱すると、早速連携攻撃へと転じる。

先ずは一護とユーノが縛道とバインドでＡＭ０６の動きを完全に封じる。

「雷鳴の馬車、糸車の間隙、光もて此れを六つに別つ。縛道の六十一『六杖光牢』！」

「ディアブロバインド！」

六杖光牢とユーノの開発した独自のバインドの一つで、あらゆるものを絡め取る悪魔の拘束魔法、ディアブロバインドがＡＭ０６の身動きを取れなくした。

「「今だ！こいつに止めを刺せ！！」」

「了解！いくよ・・・レイジングハート！！全力全開！！」

大剣を振り上げたなのはは、刀身に自信の魔力を注ぎ込むとエクシードモードと同等かそれ以上の破壊力を持った新たなる砲撃兼斬撃魔法をＡＭ０６に叩き込んだ。

〈Ｍａｒｉａ，ｓ　Ａｆｅｃｔｏ〉

「シューーーート！！！！！」

なのはの全力全開で撃ち込まれた『マリアの慈愛（マリアズ・アフェクト）』がＡＭ０６の体を全て粉々に破壊すると、中心核を取り除きそのままレイジングハートに封印され、無事に吸収された。

ＡＭ０６が完全消失を果たすと、周りには何事も無かったかのように取り込まれていた全てのものが元あった場所に再生される。

これがマリアの慈愛の能力の最たるところなのだ。

「よっしゃ！！」

「やった！！！」

一護、ユーノ、織姫は勿論の事ながら機動六課指令室でなのはの驚異的なその能力を目の当たりにしたスバルやティアナ、さらにはここいるもの全員は愕然とする

「す・・・凄い威力・・・これが・・・なのはさんの新しい力！？」

「スターライトと・・・いや、明らかにそれ以上の威力だわ・・・！」

誰もが驚く中、初めてＡＲカートリッジを全力全開でしようしたなのはは、空中に浮かんだまま息を切らしてＡＭ０６の破壊を確認する。

「はっ、はっ、はっ・・・や・・・っ・・・た・・・？」

すると、その瞬間なのはは使い慣れぬ力に全身の力が一気に抜け足場を保てずそのまま落下していった。

「なのはさん！」

織姫が気を失い落下していくなのはに声を掛けたそのとき、直ぐにユーノがなのはを抱きかかえると申し訳なさそうな表情でなのはに優しく声を掛ける。

「御免ね、なのは・・・いきなり全力全開は無茶だったね・・・お疲れ・・・ゆっくり休んで。」

「助かった・・・すみれ・・・良かった・・・」

安全な場所で無事に戦いが終わったことを確認した衛は、傍で倒れるすみれの無事に安堵の溜め息をついた。

その日の夕暮れ時、自宅へと戻る一護と織姫は今日の出来事を振り返る。

「たく、一時はどうなるかと思ったぜ。」

「でもありがとう、あなた!助けに来てくれて!!」

「当たり前だろ。言ったじゃねえかよ・・・”何が何でもお前だけは守り抜く”ってよ・・・」

一護の照れた表情を見た織姫は、同じく照れた表情を浮かべて返事をする。

「・・・うん・・・そうだね。」

また、任務を終えたユーノは眠ってしまったなのはを背中に背負って六課へ帰還すると、なのはを連れて部屋まで送り届けていた。

「う・・・あれ・・・私・・・あの後・・・あっ！」

「やあ、目が覚めたかい？」

「ご、ごめんねユーノ君！重いでしょう！！」

「いや別に。なのはは全然重くなんかないよ。少し休んだほうがいい・・・いきなり全力全開はきつかったでしょう。直ぐに調節しないとね。」

「・・・うん。あっ！ユーノ君。ありがとうね・・・」

「えっ？何がだい。」

「あの時・・・ユーノ君が渡してくれたあれのおかけで、無事にアンゴルモアも回収できたし・・・それに何というか・・・ユーノ君の温もりをあれから感じたんだ・・・だから使っていたとき、凄く安心できた。」

「・・・なのは・・・」

「ねえ、少しこうしてもいい？」

なのははそう言うと、ユーノの背中にそっと頭を乗せると目を瞑り再び眠りに着こうとしていた。

それを見たユーノも柔らかい表情を浮かべると、なのはを抱えなおして返事をする。

「うん・・・なのはがそうしたいなら・・・よろこんで。」

だが、このときユーノ達は気付いていなかった。

あの時――――――――ＡＭ０６を近くで見ていた敵の脅威のことなど。

「けっ！ユーノ・スクライア・・・また奴の所為で逃しちまったぜ！！胸糞わりー・・・！！だが・・・こちっが態々捜さなくて、全部集まったところを奪い取れば話が早い！ふふふははははハッははははははは！！！！！！！！！！！！」

教えて、ユーノ先生！

ユ「今日は、ＡＲカートリッジについてお勉強だよ♪」

ユ「ＡＲカートリッジとは、Ａｌｌ　Ｒｅｌｅａｓｅのことで・・・意訳すると全力全開の意味になる。即ち、なのはの為だけに作られた専用のアイテムなんだ。」

ユ「リンカーコアの魔力消耗は歳と供に激しくなっていく。なのはの場合あの性格上酷使することが多いよね。そこでこのＡＲカートリッジを使えば、その消耗を極力制限してその制限した中で全力全開の最大魔力を出すことが可能の夢のようなカートリッジなんだ。」

ユ「ま～でも、いきなり全力全開で戦わせたのは酷だったかなと今も思ってる。」

織「大丈夫ですよ、ユーノさん♪なのはさんなら使いこなせますから♪」

ユ「そりゃ、なのはは僕と違って才能もあるし・・・美人だし・・・他人から好かれてるし・・・天使だし・・・（その他色々とユーノの小言が始まり、意気消沈する）」

織「え～と・・・ユーノさん・・・そんな落ち込まなくてもいいんじゃ（困惑する織姫）」

一「ほっとけ織姫。今に始まったことじゃねえよ・・・」

魔導師図鑑ハイパー！

キャロがなのはにこんな相談をしていた。

な「え？仲良しの秘訣？」

キャ「はい。私、なのはさんとユーノ先生みたく、もっともっとエリオ君と仲良くなりたいんです！何か秘訣みたいなものはありませんか？」

な「そうだな・・・私とユーノ君の場合、特別なことはやってないんだけど・・・強いて言えば、一緒に寝たりとか♪」

キャ「一緒に寝るんですか！？ユーノ先生と！！」

な「うん♪勿論、ユーノ君はフェレットさんモードだけどね♪それこの間やったら、次の日ユーノ君真っ赤になってさ・・・それがまた可愛かったんだよね・・・！！！」

すると、キャロもそれを聞いてある決意をする。

キャ「よし！私も今日からエリオ君と一緒に寝ます！！」

エ「何で！？何でそうなるの！！！」

聖ルチアーノ女学院篇

登場人物

野崎衛（のざき　まもる）

声　一　斎賀みつき

聖ルチアーノ女学院の生徒に扮した青年。幼馴染で恋心抱いていた春野すみれと小学校、中学を通してずっと一緒だったが、すみれがこの学校に入学することを気に離れ離れにならなければいけなくなったが、衛は自身の気持ちも伝えぬまま、すみれと離れ離れになることがどうしても我慢が出来ず、中性的な容姿を逆手にとって女装し学園へと侵入。

春野すみれ（はるの　一）

声　一　藤村歩

野崎衛の幼馴染で聖ルチアーノ女学院の生徒。旧校舎で衛（当人とは気付いていない）とひと悶着があった後、ＡＭ０６に取り込まれようとするが、なのは達に助けられる。

ＡＭ０６

聖ルチアーノ女学院にあったあらゆるものを取り込み巨大な姿と化したＡＭ体。元々は学院内部にいた原住生物を取り込んでいただけだったが、暴走する中で力を増幅させてしまい院内のものを自身の体に取り込むに至る。超速再生能力を有して一護やユーノ達を苦し

めた。

用語解説

聖ルチアーノ女学院

総面積およそ１０００ヘクタール。総生徒数９８０人。あらゆるところのお嬢様というお嬢様が集められ、将来の有望あるエリートへと育て上げるために作られた由緒ある女子高。カリキュラムはそれぞれの進路に合わせて、一年時から選択が可能で自主自律をもっとうとしている。語学は全２０ヶ国語対応・資格所得も豊富なラインナップが取り揃えてある。アリサも一時この学院への入学を進められたが、厳しい校則やカリキュラムの多さ故に入学を拒んだとのこと。

ＡＲ（エーアール）カートリッジシステム

ユーノ・スクライアが開発した高町なのはの固有魔力に合わせて作り上げたなのは専用の新型カートリッジシステム。ブラスターシステムの使用に代わる形で組まれたもので、リンカーコアからの魔力消耗を極力制限してその制限した中で全力全開の最大魔力を出すことが可能。ＡＲとは、Ａｌｌ　Ｒｅｌｅａｓｅの略称で意訳すると全力全開の意味となる。

レイジングハート・マキシマム・ブレイド

ＡＲカートリッジを使用したことによって誕生したレイジングハート・エクセリオンの新たなる姿。形状はエクシードモード時の槍型とは異なり、名前の通り巨大な刃を模した姿となっているが、従来通り先端から砲撃を撃つことが可能であり斬術に変換させることも

できる。威力はエクシード時の5倍を誇る。

ビルゲイツ出航

＞ｉ１２６９０―７０９＜

特定遺失物管理部　機動六課。

ＪＳ事件から四年後、脱獄したスカリエッティの逮捕を主眼に、異世界に散らばった禁忌の物質『崩玉』の欠片であるアンゴルモア関連の危険な任務を扱う特定遺失物管理部の機動課（実動部隊）第六の部隊。

アンゴルモアの回収を専任として、本局と聖王教会からの支援、さらには時空管理局を支えてきたミゼット・クローベルを始めとする三提督からの後ろ盾も得ている。

部隊長は、この部隊の創設者にして総合ＳＳランクを保有する最後の『夜天の書』の主・・・八神はやて二等陸佐。

その監査役でこの部隊の後見人の一人にして、ミゼットからの直属の命を受けて機動六課へと出向してきた総合Ｓの魔導師・・・クロノ・ハラオウン提督。

前線の要となる機動六課スターズ分隊の隊長にして、総合Ｓ＋を保有する管理局のエースオブエース・・・高町なのは一等空尉。

同じく、機動六課ライトニング分隊隊長で、クロノの義理の妹・・・フェイト・Ｔ・ハラオウン執務官。

更には、尸魂界からスカリエッティ捜索のためにミッドチルダへと赴き、機動六課に協力することになった護廷十三隊三番隊隊長、阿散井恋次と副隊長の吉良イヅル。

その彼らの案内役で、元管理局の局員であった亀井浦太郎を始めとする特殊技能所持者達。

そして、この機動六課に最新型のカートリッジシステムの提供・敵スカリエッティが狙うアンゴルモアの研究は勿論、戦闘・救助用のスパーマシーンの開発・整備を始め、隊員達の日常生活に関わる事まで、隊舎のあらゆる機能を総括・運営するシステムを改善・改良した男・・・それが彼である。

「ふあああああああああああ～～～～～～～～・・・また夜更かししちゃったよ・・・」

元時空管理局本局、無限書庫初代永久名誉司書長にして・・・機動六課最強にして最後の切り札、“翡翠の魔導死神”こと機動六課特別エグゼクティブアドバイザー、ユーノ・スクライアである。

恋次達死神組みや彼の類まれなる頭脳と技量を味方につけて・・・新生機動六課は日夜、次元の平和を乱す脅威と戦い続けているのである。

「さて、今日の朝練の前に一つ連絡事項です。陸士１０８部隊のギンガ・ナカジマ陸曹が本局からの正式決定によって今日から六課へ出向となります。」

何時もの機動六課訓練場で行われるなのは達によるフォワード陣の訓練。

今回、本局の正式決定によって戦力増加のため陸士１０８部隊からスバルの姉であるギンガ・ナカジマが六課に出向してきた。

なのはの紹介を経て、隣に立つギンガは四人に自己紹介をする。

「はい。１０８部隊、ギンガ・ナカジマ陸曹です。よろしくお願いします！」

「「「「よろしくお願いします！」」」」

「それから・・・もう一人・・・」

フェイトがそう言うと、シグナムの隣で宙に浮くリィンほどのサイズをした赤髪のユニゾンデバイス、アギトがサバサバとした態度で挨拶をする。

「おっす！久しぶりだなお前ら！！」

「アギト！！」

スバルを始め、アギトと久しぶりに会話をする四人はかなりご満悦の様子であった。

「ギンガと同じく、アンゴルモア捜索のために六課に出向となった。主に私との行動が多く見られると思うから、そのつもりでな。」

「へへ！！模擬戦の相手ならいつでもシグナムの旦那と同じように気軽にやってやるぜ！」

「「「「はい！」」」」

すると、紹介が無事に終わるとフォワード四人に恋次が朝練の開始を宣言する。

「おうし！紹介が済んだところで・・・早速今日も朝練おっぱじめるぜ！！」

「「「「はい！」」」」

四人はそれぞれの担当の隊長のところへと駆け足で走って行く。

「ライトニング、集まって！」

「「はい！」」

フェイトの呼びかけによって、エリオとキャロは集まり詳しい訓練メニューを聞く。

「今日は、私と浦太郎さん。そして吉良さんが担当するからね。」

フェイトがそう言うと、隣に立つ浦太郎と吉良が軽く微笑み二人を一瞥する。

また、今回ティアナの個人スキル向上を担当するのは白鳥だ。

「ティアナは、今日は私とやるぞ。」

「はい！」

「琴線斬序曲第二楽章二十七節。」

「お願いします、白鳥さん！」

そして、フロントアタッカーであるスバルの下にはヴィータと恋次が二人掛りでスバルの訓練を行う。

「よし、スバル！今日は俺とヴィータがみっちり鍛えてやるぜ！」

「はい！って！！私一人に対して二人掛りですか！？」

「こう言う事態も想定しておかねえとな。それに、今日はお前のＩＰカートリッジの性能も見たいところだしな。覚悟しとけよ！へへ。」

「あ～～～ヴィータ副隊長目が全然笑ってないですよ！！」

そんな妹の様子を見て目を細めていたギンガ。

すると、なのはがギンガの近付き声を掛けてきた。

「ギンガ。」

「はい？」

「ちょっと、渡したいものがあるから手を出して。」

「はい・・・こうですか？」

何も知らないギンガはなのはに言われるがままに手を差し出すと、なのははギンガの掌の上にＩＰカートリッジを置いた。

「これは？」

「ＩＰカートリッジシステム。ユーノ君が開発した新しい形のカートリッジ。使い手によって形状も能力も全く異なる。一先ずスバルの訓練の様子を見てこれのことを理解して。」

「はい！」

ギンガはそう言われると、一度スバル達の訓練をその他の全員と一緒に見物をしながらＩＰカートリッジシステムの性能を確かめることになった。

全員が見守る中、森の中で激しい戦闘を繰り広げるスバル・ヴィータ・恋次の三人。

「せやあああああああ！！！！」

「おりゃあああああああ！！！！」

スバルは恋次とヴィータの猛攻を辛うじて回避しながら反撃の瞬間を狙っていたが、流石にそう簡単には狙わせてくれない。

「グラーフアイゼン！！！」

「蛇尾丸！！！」

「くっ！！」

〈Ｐｒｏｔｅｃｔｉｏｎ〉

スバルは右掌で防壁を作り出して、二人のハンマーヘッドと刃を防ごうとするもやはり力圧しで圧倒されてしまい、防壁は簡単に砕け散る。

「貰ったあああああ！！！！！！」

ヴィータはスバルの防御が崩れた瞬間、グラーフアイゼンの重たい一撃をスバルに直撃させ木の幹に激突させる。

二人の厳しい訓練の様子は他のものが見ても唖然となるような光景だった。

「阿散井君もヴィータのほうも・・・かなり気合が入ってますね。」

「御意。愛情ゆえの厳しさですよ。」

「熊に愛情なんて感情わかんのかよ・・・のあああ！！」

鬼太郎が金太郎の何気ない一言にツッコミを入れた瞬間、隣に立つ金太郎の鉄拳が鬼太郎の頭上に直撃、その場に一際大きな瘤を作って気絶する鬼太郎。

「先輩も余計なこと言わないの。」

鬼太郎の横で浦太郎が呆れながらそう口にする。

その頃、ヴィータに吹っ飛ばされたスバルは徐に傷だらけの体を起こしながら土煙の向こうで構える恋次とヴィータのほうを見る。

「どうしたどうした?そんなものじゃねえだろ!とっと起きて来いよ、スバル!!」

恋次の挑発に近いその言葉を聞いて、スバルも体を起こして再び戦闘態勢に入る。

「くっ・・・痛てて・・・手厳しいな二人とも・・・でも、やられっぱなしはカッコ悪い!ここで一気に挽回してみせる。いくよ、マッハキャリバー!IPカートリッジ、セットアップ!!」

〈Ｈｙｐｅｒ　ｅｘｐｌｏｓｉｏｎ　Ｂｌａｓｔｅｒ　ｆｏｒｍ〉

リボルバーナックルにＩＰカートリッジを装填したスバル。

その瞬間、マッハキャリバーと連動しているスバルのデバイスの形状が徐々に変わり始める。

まずはマッハキャリバーのほうであった。

通常はローラーブレード型をしているが、カートリッジをロードした瞬間・・・ローラーが九十度回転し、車輪そのものが横に倒れるとジェットエンジンが噴出し、本来陸戦型のスバルをウィングロード無しで浮かび上がらせる。

「えっ!?と、飛んだ!!」

モニターでスバルの新たなるデバイスの姿を見ていたティアナ達三人やギンガは驚きの表情を浮かべた。

「あれがスバルのマッハキャリバー・・・!?」

「ウィングロード無しでエンジンの推進力だけで浮いてる・・・!?」

スバル自身も最初は戸惑いの気持ちもあったが、直ぐに気持ちを切り替えて新しい自身の相棒の姿に感激する。

「凄い・・・!!これがお前なんだね、マッハキャリバー!!」

〈Ｙｅｓ　ｍｙ　ｂｕｄｄｙ〉

「よし!じゃあいくよ!!」

スバルはエンジンを全開にして恋次とヴィータのほうへと向っていく。

向って来るスバルに俄然やる気が出てきた恋次とヴィータはほくそ笑み、自身の持つ武器をスバルに向けて構える。

「へっ！面白れー！！そうこなくっちゃな！！いくぜ、恋次！！」

「俺様に命令すんなよ！」

二人はスバル同様全速力で向っていく。

「おおおおおおお！！！！！！！！」

「「ほおおおおおおおおお！！！！！！！！」」

その後空中で展開される三者の激しいぶつかり合い。

互いに衝突しあいながら、己を高めあい学びあうその姿は差し詰め何処かの格闘技のようなものだ。

スバルは一度二人から距離を取ると、今度はリボルバーナックルの新たなる形状を発動させて勝負に出る。

〈Ｇｒａｎｄ　ｆｏｒｍ〉

すると、その瞬間リボルバーナックルの大きさが今までとは比べ物にならないぐらい巨大化し、装甲もより強固なものへと変貌する。

「リボルバー・・・・・・」

スバルの攻撃の様子を見た恋次とヴィータはこの後の顛末がどうなるかを考え、すぐにそれが最悪の方向になることを悟った。

「「なっ！？」」

何とか攻撃を回避しようとした二人だったが、既にスバルの射程圏内に入っていたため、後戻りは出来なかった。

そして、スバルの最大の攻撃制度を誇る巨大な豪腕・・・リボルバーデストロイアーが二人に向けて炸裂する。

「デストロイアー！！！！！」

スバルの攻撃の瞬間を見ていたギンガやティアナ達は変わり果てたリボルバーナックルの形状に終始唖然。

「リボルバーナックルが！？」

「巨大化した！！！」

そして、リボルバーデストロイアーが貫通した瞬間に起こる大爆発。

クロスレンジの爆発力に長けるスバルのこの技は、あまりに他を圧倒していた為、至近距離で使えば間違いなくスターライトの威力を超える威力を秘めてることは確かである。

だが、それをコントロールする術をまだ知らないスバルがいきなりこれを至近距離で使うことは自身にとっても諸刃の剣になってしまう。

爆発の瞬間、威力によって吹き飛ばされるボロボロの恋次とヴィータ。

そしてその反動で吹き飛ばされる同じくボロボロのスバル。

「「のあああああ！！！！！！！！」」

「ちょっちょちちょあああああああああ！！！！！！！」

「スバル！！」

「あのバカ・・・！」

ギンガとティアナ、なのは達全員は急いで吹き飛ばされた三人を助けようとした・・・と、その時。

その必要は全くなくなった。

三人は偶々この場に姿を見せていたあの男によって一箇所に集められ、緑色のアクティブガードとホールディングネットによってこれ以上の怪我は済まずにすんだのであった。

「・・・やれやれ。三人とも注意力が無さ過ぎだよ。僕がこうして見に来なかったら、今頃どうなっていたことか。少し反省してください。」

三人を助けた男とは、ご存知翡翠の魔導死神ユーノ・スクライアである。

ユーノは空中に浮遊しながら優しくも厳しい言葉を口にする。

「ユーノ先生・・・あ、ありがとうございます！」

「助かったぜ・・・ユーノ。」

「悪い悪い。ちょっと油断しちまったぜ・・・！」

ユーノの介入によってどうにか三人が無事であることを確認したなのは達全員も漸く安堵の溜め息をなでおろす。

「ふう～～～危なかった。」

「ユーノ君が咄嗟に止めてくれて本当に助かった・・・」

ユーノに助けられた三人はその後他の隊長陣や同僚にこっぴどくお叱りを受ける羽目になった。

「もう！スバルも気をつけないと駄目でしょ！」

「あははは・・・ごめんギン姉・・・！！反省してる・・・」

「ヴィータも阿散井も揃って注意力が欠けていたぞ・・・」

「少しは緊張感を持って戦えよな！」

「「面目ない・・・」」

ギンガ、シグナムとアギトに痛いところを突かれたスバル・恋次・ヴィータの三人が意気消沈し、自身の未熟さを反省した。

その三人とは別に、なのは・フェイト・金太郎の三人がユーノの下に近付き助けてくれたお礼等を口にしていた。

「しかし珍しいですな。店長が態々朝練に出向くとは？」

「気分転換がてら、ちょっとなのは達の様子を見にね♪」

「でも正直助かったよ。あの時ユーノ君が止めてくれなかったら私今頃何してた分からなかったよ♪」

それを聞いた途端、ユーノとフェイトの表情が凍りつきフェイトが恐る恐るなのはに尋ねる。

「なのは・・・その言葉に深い意味は無いよね・・・!?」

「えっ?それどういう意味、フェイトちゃん?」

二人はこれ以上の余計な一言は自身の身を破滅させると判断し、心の中で結論に達し何も言わないことにした。

「「(気にしないほうが身のためかな・・・)」」

その後、一通りの訓練メニューが終わるとなのはは笛で集合の合図をかける。

「じゃあ、みんな集合!」

「「「「「はい!」」」」」

「折角だから、ギンガも入れたチーム戦・・・やってみようか!フォワードチーム五人対・・・」

なのはがそう提案して、フォワードチーム五人と戦う相手となったのが・・・ーーー

「スクライア商店最強四人チーム。」

「「「「「・・・・・え・・・・・・・ええええええ!!!!!??
??」」」」」

なのはのその言葉を聞いたフォワード五人は暫しの沈黙の後に、ありえないとばかりの声を張り上げてヤル気充分のユーノ達四人を見るのであった。

「ほ、本気ですかなのはさん!?」

「ユーノ先生達と・・・戦うんですか!?」

スバルとエリオがそう言うと、なのはは笑顔で勿論と言い次のように語り始める。

「みんなは、まだユーノ君と戦ったことないでしょう?この先のことも考えると、色々いい勉強になると思うよ。でも、ユーノ君は強いから・・・気を抜いたら即やられるからそのつもりでね♪」

なのはがそう話し終えた後、ユーノも不敵な笑みを浮かべて持っていた仕込み杖を肩に乗せながらフォワード陣にこう言う。

「君達と戦うのは初めてだけど、手加減はあまりしないつもりだから。金太郎、鬼太郎、浦太郎。本気で潰しにいくよ♪」

「「「了解!!」」」

スクライア商店とフォワード陣のチーム戦を聞いて、恋次も吉良も興味津々の様子だ。

「ほ～～中々見ものだぜこれは・・・」

「フォワードメンバーが彼と何所まで渡り合えるか楽しみだね。」

「ＩＰカートリッジの使用は原則一度まで。それ以上の使用は禁止ね♪時間制限無し、全力全開でぶつかって行こう！」

「「「「「はい！」」」」」

なのはのその言葉を聞いて、気合を入れなおすフォワードチーム。

そして、ユーノの掛け声とともについにチーム戦が始まる。

「じゃあ、やってみようか♪」

ユーノ達がチーム戦を丁度始めたその頃、隊舎内にいたクロノはげっそりとした表情を浮かべ、お腹を摩りながら廊下を歩いていた。

「はぁ～～取り合えず収まったか・・・」

そんなクロノを見かけたはやては何があったかを尋ねる。

「何やクロノくん・・・お腹の調子でも悪いんか？」

「ああ・・・昨日食べた鯖の刺身に中ったみたいだ・・・起きた瞬間この調子だ・・・・・・」

「それはお気の毒にな。あ、そうや！これ胃薬。これ飲んで少し様子みるといいよ。」

はやては持っていた胃薬を取り出し、クロノに手渡す。

「済まないな・・・有難く使わせて貰う・・・・・・のおお!!!
また!!!また来た!!!!!」

胃薬を持ったままクロノは再びトイレへ直行。

哀れに思いながらはやてはその様子を見ていた。

すると、はやてを見かけたヴィヴィオが学校の制服を着た状態で話しかけてきた。

「おはようございます、はやてさん!」

「ん!?ああ・・・お早うヴィヴィオ!」

「クロノ提督・・・どうしたんですか?」

「何や魚に中ったみたいや。今はトイレで命を賭けた戦い繰り広げ取るよ・・・」

「へえ~~~」

はやての言ったその言葉はあながち間違いではなかった。

クロノは何時ものクールな表情など一切浮かべず、劇画のような表情で自身の体の中から毒素を取り除こうと奮闘していた。

「のあああああああああああああ!!!!!!!!!!」

また、暫くして訓練場のほうを覗いて見るとチーム戦が終了し、まるで攻撃を受けた形跡などないユーノ達スクライア商店メンバーと満身創痍で息を切らすフォワード陣というまるで対照的な光景が広がっていた。

「はい！じゃあ、今日はここまで・・・！」

「全員防護服解除。」

なのはとヴィータの言葉を聞いて、フォワード陣五人は辛そうな表情を浮かべながら何とか返事をするのであった。

「「「「「はい・・・・・・！！」」」」」

鬼太郎のほうは斬魄刀を納めるとそんなフォワード陣を見て呆れんだ様子でこう口にする。

「何だよお前らボロボロじゃねえか！そんな力出した覚えはないんだがな・・・」

「先輩、悪いけど目茶目茶本気出してたけど。」

「店長も人が悪いですな。せめて少しぐらい加減なさっても・・・」

「それは戦士にとって侮辱だよ。一護さんも言ってたでしょう♪やるからには本気でやる。それが最高の待遇だよ♪」

ユーノが嘗て一護に戦い方を教えてもらったときに一護が口にしたこの言葉を、ユーノは今でも座右の銘のように心のうちに留めてい

るのだ。

スクライア商店のメンバーに完膚なきまでに叩きのめされたフォワード陣は悔しさを言葉に表しながら、ユーノの凄さを改めて実感する。

「はぁ～～～！！ユーノ先生も金太郎さん達も強すぎ！！シフトの切り替えがまるで通用しなかった～～～！！」

「うわ～～～自信喪失するよ～～～！！」

「フォロー足りなかったね。御免ね・・・！！」

「いえ！」

「ギンガさんは全然！！」

そんなフォワード陣の様子を見ながら、ヴィータはグラーフアイゼンを肩に乗せたまま反省レポートをまとめる様に指示する。

「悔しい気持ちのまま、反省レポートまとめと置けよ。」

「「「「「はい・・・！」」」」」

「ちょっと休んだら、クールダウンして上がろう。お疲れ様！」

「「「「「ありがとうございました！」」」」」

なのは達に挨拶を終えたフォワード陣は軽めの柔軟をしながらこんな内容の会話をしていた。

「しかし強すぎだったね。あれがユーノ先生の実力なの・・・って思っちゃった！」

「金太郎さん達とはよく訓練で模擬戦はやるけど、ユーノ先生とはやったことがなかったから正直吃驚してる。」

「一応、機動六課最強にして最後の切り札ですからね・・・ユーノ先生。」

「なのはさんでも、本気の砲撃でユーノ先生の防御は破れないって言ってましたし・・・死神の力が備わった今、まともにやりあえる人は多分此処にはいないですよ。」

「まるでトランプのジャーカーみたいですよね・・・」

「でも、ユーノ先生がこっちに来てくれたお陰でアンゴルモア捜索では色々助かってるし、なのはさんもヴィヴィオも毎日幸せそうだし！」

スバルはそう言うと、なのはと幸せそうに会話をするユーノの姿を一瞥する。

それを見たギンガも目を細めて返事をする。

「そう！」

一方、ユーノのことを以前シグナムから聞いていたアギトのほうはすっかり姿も様子も変わり果てたユーノを見て言ってはならない一言を口にしてしまう。

「シグナムの旦那・・・何であいつあんな変な格好してんだよ?」

「アギト・・・それはあまり触れないでやってくれ。スクライアに聞こえたら事だぞ。」

「大丈夫だって!聞こえないって・・・!!」

そう言ってアギトが横を見た瞬間、ユーノが笑顔を振りまきながらアギトの体を手で掴んで覇気をぶつける。

「もうしっかり聞こえてるよ・・・ばっちりね♪」

アギトは間近で感じるユーノからの只ならぬ殺意に全身から汗をびっしょりと流す。

やがて気付いたときには全身をボロボロにした状態で地面に倒れていたのであった。

「だから言わぬことでない。」

それから8時間ほど経った後、ヴィヴィオと一緒に前線メンバーは指令室に集まりこれまでに確認されたＡＭ体の特徴をユーノから説明されていた。

「今迄アンゴルモアと接触したものがＡＭ体へと変貌してきたのにはそれぞれ共通点があるのは知っての通りだろう。何らかの形で潜在意識に強い憎しみや・悲しみ・欲求不満や羨望などといったものが、行動として表れていると思われる。」

「成程な。願ったことがそのまま力として表れるなんて・・・とんでもねえ代物だぜ。」

「まさしく禁忌の物質だね・・・」

鬼太郎と浦太郎はアンゴルモアの恐るべき力に今一度危惧の念を抱く。

「ユーノ、次のアンゴルモアの回収ポイントで確実そうなのは何所だ？」

「そうだな・・・この世界なら割と確かだと思う。」

クロノにそう言われ、ユーノはタッチパネルを操作して次の世界の詳細なデータをメインスクリーンに映し出す。

「第１１管理外世界・・・『オーシャン』。その名の通り海で満たされた世界だね。」

「しかも今度の反応は海の中。深海に潜っていかんといけないわな・・・」

「準備は整ってるよ。漸く残骸を回収して修理したあれを使える♪」

「あれ・・・と言いますと？」

ティアナが怪訝そうな表情でユーノに尋ねると、ユーノは笑顔を振りまいてフォワードメンバーにこう口にした。

「ウーノとの戦闘のときに僕が送った多次元諜報母艦ビルゲイツだ

よ♪」

ユーノはタッチパネルを押すと、その瞬間機動六課の隊舎の前に突如として現れる巨大な次元航行船。

それは正しくティアナ達がウーノとの戦闘で見たものと同じものであった。

「「「「「おおおおお!!!」」」」」

「これが噂のか・・・!!」

「想像以上の大きさだ・・・!!」

初めてビルゲイツを目の当たりにした恋次や吉良を始め、多くのものがその大きさに驚愕した。

クロノ自身、これだけ巨大な母艦を見るのは初めてのようで実際自身の母艦であるクラウディアよりも更に一回りも大きかったのだから、反応は誰よりも凄かった。

「凄く大きい・・・!!これもユーノパパが作ったんだ!!」

「やっぱり、ユーノ君は頼りになるね♪」

ユーノが造った母艦を間近で見たヴィヴィオは興奮で胸が高鳴りっぱなしだった。

なのはもユーノの発明を見るたびに、頬を染め上げてユーノのことを誇らしげに思う。

多次元諜報母艦ビルゲイツ。

ユーノ・スクライアが開発した、あらゆる世界の情報をいち早くキャッチできる次元航海を可能とした巨大な移動コンピューターシステムである。

今回、ビルゲイツに搭乗することになったのはなのは達スターズと恋次・吉良・そして開発者であるユーノ・スクライアである。

シャーリーたち管制官の何名かを連れて第１１管理外世界『オーシャン』へと向ったビルゲイツは、その海で満たされた世界に着くとすぐに潜水を開始。

アンゴルモアの反応が顕著に現れているポイントまで潜水を続ける。

「潜水は極めて順調です。目標到達地点までの距離・・・モニターに出します。」

ビルゲイツと指令室のスクリーンに映し出される目標地点までの深度。

その深度を見た瞬間、クロノは机を叩いて驚愕の声を上げた。

「深度１万メートル！？何という深さだ！！」

「こんな深い海の底にアンゴルモアが・・・！？」

クロノ同様、ライトニングの全員もスクライア商店の従業員も愕然とした。

すると、一緒に行きたいとどうしても聞かなかったヴィヴィオが艇長席に座りながら険しい表情を浮かべるユーノにふと尋ねる。

「ユーノパパ、それってどれくらい深いの？」

「そうだな・・・地球の科学技術では１万メートルの深海は未知の領域そのものだよ。１９５７年、マリアナ海溝を潜水していたソ連海軍艦艇『ヴィチャージ』が深度１１，０３４ｍの計測に成功したと発表し、そこをヴィチャージ海淵と名づけた。絶対圧１千１気圧・・・光すら届かぬ暗黒の世界だよ。」

「それじゃあ、この母艦（ふね）もそんな深くまで潜ったら水圧で潰れるんじゃねえか！？」

急にそんな不安が過ぎった恋次が心配になってユーノに尋ねると、ユーノは飄々とした様子で扇子を広げながらこう答える。

「その心配はありません。このビルゲイツの特殊装甲は深度１万メートル以上の水圧にも耐えうるものです♪更に魔法で強化していますから潰れる心配はないでしょう♪」

「そんな笑顔で言われても安心出来ねえよ！」

その後も一抹の不安を抱えたままビルゲイツは深度１万メートルを目指して潜水を続けていると、目標地点でアルトがあるものを発見した。

「深度１万メートルに到着します！あっ！？あれを見てください！」

「何あれ！？」

海の底深くにあったもの・・・それは古代人が嘗て文明を築き上げたときに海底に建立された寺院であった。

「こんな深海に遺跡があるなんて！？」

ギンガがそう言うと、ユーノは眉間に皺を寄せながらそれがどう言った物なのかを知っていたのか全員に聞こえる声でこう口にする。

「・・・海底寺院か。噂には聞いていたが、まさかこんな所でお目にかかれるとは。」

「海底寺院？ユーノ君、それって何なの？」

「遥か昔・・・古代人がその高度な技術を以って海底に造った信仰寺院だよ。非常に古い歴史や言い伝えがあるにも関わらず、未だ嘗てそれを目撃した事例は無い。僕も文献や風の便りで存在することは知っていたけど、実際に見るのは初めてだよ。大体四半世紀ぐらいまで隆盛を誇り、その後滅びていった。」

「そこにアンゴルモアが・・・！？」

謎の海底寺院に辿りついた機動六課。

果たして、この寺院の奥にアンゴルモアがあるのか！？

そして、彼らを待ち受ける壮絶な運命とは！？

ビルゲイツ出航（後書き）

教えて、ユーノ先生！

ユ「今日はちょっとした教養を教えちゃうよ♪」

ユ「地球で一番深い海って何所だか知ってる？そう、マリアナ海溝だね♪」

ユ「マリアナ海溝は１９２５年、日本の測量船『満州号』が重りのついたケーブルをおろして測定する方法（鋼索測深）によりマリアナ海溝の海域において９，８１４ｍを測定、この海域が世界でもっとも深い部分であることを世界に知らしめた。」

ユ「今回僕が作中で言っていた『ヴィチャージ海淵』については、その後何度調査を行ってもこれほどの深度は測定されなかったため、西側諸国によって『マリアナ海溝の神秘』と揶揄され、現在ではこの記録の正確性に疑問が持たれており、公式記録としては認められていないんだ。」

ギ「１万メートルの深海って色々怖いですよね・・・見たことも無い深海魚もうようよ泳いでいましたしね。」

ユ「そこまでの深度で生きてる魚も不思議だといえば不思議だね・・・あっ、そうそう♪スクリューにさっきこんなものが引っかかってたんだ♪（ホウライエソの死体を見せ付けるユーノ）」

ギ「きゃあああああああ！！！！！！（絶叫して逃走するギンガ）」

ユ「これそんなに怖いかな・・・？」

な「ユーノ君・・・普通の人なら誰でもびっくりするよ・・・（困惑するなのは）」

魔導師図鑑ハイパー！

恋次と吉良は用事で首都クラナガンに足を運んでいた。

そして、修理中の地上本部を仰ぎ見る。

恋「大分直ってきたな・・・」

吉「そうだね。あの時はほんと見る形もなくなってたからね・・・しかし・・・」

そう言いながら、吉良は改めて地上本部を仰ぎ見。

吉「近くで見るとデッカイな・・・」

恋「事故でも起きたら、洒落になんないよな。」

吉「そんな不吉な・・・って！？」

恋「な！」

すると、二人の瞳に映ってきたのは何故か作業服に身を包んだ鬼太郎だった。

恋「鬼太郎!?」

吉「何やってるんだい、そんなところで!?」

鬼「決まってるだろ!地上本部の修築のアルバイトだよ!今月はちょっと金使いすぎたからな・・・手っ取り早く貯めるにはこの方法が一番なんだ!!ははははははは!!!!

それを聞いた二人は呆れながら・・・

恋「お前・・・馬鹿だろ・・・・・・」

大海の悪魔

＞i12876—709＜

次なるアンゴルモアを求めて、多次元諜報母艦ビルゲイツに乗って海が満ちる世界・・・『オーシャン』へとやって来たヴィータを抜かすスターズ分隊、恋次、吉良、そしてユーノの六人。

彼らは、深海1万メートルの底に建立された古代人が残した海底寺院へと接近。

果たして、彼らに待ち受けるものとは一体何であろうか・・・!?

ビルゲイツからの情報を指令室で聞いていたはやて達はメインスクリーンに映し出される海底寺院の方を凝視する。

「ビルゲイツからの情報によれば、どうやらあの海底寺院には特殊な結界が施されていて、そこに入ると1千1気圧の外部とは違い、通常空間と同じ気圧が保たれているようです。」

「未知のテクノロジーが今以て働いているのか・・・此処からは更に慎重にならないといけないな。」

すると、丁度その時スバルとユーノからの連絡が入ってきた。

『スターズ3、およびスターズ5。これより寺院内部に突入を開始します。』

『僕と吉良さんも同行するよ。遺跡調査は僕の専売特許だからね。』

「ああ。頼んだぞ、ユーノ。」

クロノとの通信が切れると、今度はビルゲイツからユーノを第一に思うなのはがヴィヴィオと共に不安な表情を浮かべる。

『ユーノ君。スバル達のことお願いね。それと・・・気をつけて。』

『ユーノパパ・・・頑張って！』

「うん。分かってるよ、なのは・ヴィヴィオ♪」

ユーノは二人の不安を拭い去るように、笑顔で返事をすると通信を切りスバル・ギンガ・吉良の三人を連れて寺院の内部に突入を開始。

内部の様子は、数千年という時が経つにもかかわらず割としっかりとした造りで、目立った破損部分も見受けられなかった。

そして何より、海底1万メートルという海の底深くだということを一切忘れさせる程の地上と同じぐらいの気圧調整が保たれている。

「・・・それにしても不思議・・・どうしてここだけ気圧が地上と同じなんだろう？」

奥へと続く一本道を歩きながら、スバルはふとそんなことを疑問に思った。

「おそらく、この寺院は円形状の特殊な魔法結界によって中の気圧が変化しないように防壁をかけているんだ。外部からの侵入があっても余程のことがない限り壊れたりはしない。」

「では、一体誰が何のためにそこまでしてこんなことを・・・！？」

ユーノの隣を歩く吉良がそう尋ねると、長年遺跡発掘に携わってきたユーノの推測が口に出される。

「大概こう言う場所には古い時代に秘宝として崇められていた何かがあります。それを外部からの攻撃やその他一切のことから守るた

めにでしょうね。」

「その他一切・・・！？」

ギンガがその言葉に疑問を抱いた・・・その直後事態は急変した。

突然寺院全体から地震の様な物音を感じると、四人は緊張を走らせる。

「な、何・・・この音！？」

「・・・どうやら・・・歓迎されたみたいですよ・・・僕達。」

「・・・そのようですね。」

すると、一本道の廊下の奥から現れるこの寺院に侵入してきた不確定要素を取り除くために造られた機械の兵隊・・・総勢２０体。

「これは・・・！？」

「この寺院を守る番兵だよ。数は多いが・・・大したことはない。」

ユーノは三人の前に出ると、仕込み杖を抜いて襲い掛かってきた一体をその一振りで真っ二つにする。

「スバル、ギンガ、吉良さん！僕が道を作るからその隙に最深部へ！」

「「了解！」」

「分かりました！」

ユーノはそう言うと、その場にいた番兵を次々と斬り倒し三人が通れるほどの道を作る。

三人は道が出来ると直ぐに全速力で寺院の奥深くへと走って行く。

その三人を遮ろうと有象無象に壁を突き破って現れる番兵が後ろから追いかけていくと、瞬歩で移動したユーノが番兵の前に立ち塞がり、薄ら笑いを浮かべてこう口にする。

「君たちの遊び相手は僕だ・・・さぁ、もう少し楽しませてもらおうか？」

ユーノはそう言うと、再び有象無象に増え続ける番兵に向って斬り掛かっていった。

そんなユーノのことを心配しながらも、最深部へと駆け足で進んでいくスバル・ギンガ・吉良の三人。

「ユーノ先生！大丈夫かな！？」

スバルの一抹の不安を聞くと、吉良はそんなスバルに断言する。

「それは愚問というものだよ！彼の強さを君らは身を以って知ってるはずだ！」

「そうよスバル！ここは急ぎましょう！」

「うん！分かったよ！」

ギンガの言葉を聞いて、スバルも確信したのか気持ちを入れ替えて最深部へと目指して行った。

だが、奥へ奥へと進むに連れて先程同様番兵が三人の行く手を阻むように現れる。

「「「なっ！？」」」

目の前で立ち塞がる番兵を見た三人は一度足を止めると、険しい表情を浮かべる。

「くっ！！何としてでも通すつもりはないというわけか・・・ならば仕方ない！」

吉良は腰から斬魄刀を抜き出し、佗助を解放。

「面を上げろ、『佗助』！」

スバルもギンガもデバイスを起動させると、リボルバーナックルの連携攻撃で吉良と共に番兵を蹴散らしていく。

「リボルバーシュート！！」

「スートムシュート！！」

三人の攻撃が通り、番兵のほとんどが戦闘不能に陥ると吉良はチャンスだと判断し、スバルとギンガに前進するよう声を掛ける。

「よし、今だ！奥へ進もう！！」

「「はい！」」

三人の様子をロングアーチで見守るはやて・クロノ・ヴィータ・ライトニング分隊・スクライア商店の面々。

「スターズ3、スターズ5、吉良さん共に遺跡最深部へ先行！」

「エネルギーレベル、現在上昇中！」

「この奥に・・・アンゴルモアが眠っているのか？」

「エネルギーの反応からしてまず間違いないよ。せやけど・・・何や・・・さっきから感じるこの厭な予感は・・・」

後に、このはやての悪寒が的中するとはこのときまだ誰も思っていなかったのだ。

その後、三人は番兵達の猛攻を潜り退けてついに寺院最深部へと辿りついた。

「ここが最深部のようだ。」

見渡す限り特に何も無い広い空間が三人の目の前に飛び込んでくる。

その部屋の中央に位置する不気味な銅像が安置された謎のスペース。

ギンガはこの部屋から感じ取れるアンゴルモアの反応をセンサーで確認。

「エネルギー磁場の反応が一際大きい・・・間違いなくこの部屋の何所かにアンゴルモアがあります！」

「手分けして捜しましょう！」

三人が直ぐにアンゴルモア捜索のために動き出そうとした・・・そのときだった。

再びこの寺院全体に地震のような揺れが発生・・・しかもその震源はこの部屋全体からであった。

「「「！？」」」

三人は一度地面に低い体制で屈むと、この部屋全体から起こる強い揺れに疑問を抱く。

「どうしたの！？一体何が起こってるの！！」

ビルゲイツからもこの寺院で起きていた異変に危惧の念を抱くなのは達だったが、するとその時モニター画面を見ていたティアナがなのはにこう言う。

「なのはさん！スバル達のいる部屋から異常なエネルギー上昇を確認！！アンゴルモアが発動します！！」

「本当なのティアナ！？」

「何だと！？」

なのはと恋次はアンゴルモアがこのタイミングで発動するとは夢に

も思っていなかったらしく、この後何が起こるのか全く予想もつかなかった。

一方、スバル達三人もその事に気がつき警戒態勢をするのであった。

「くっ!!アンゴルモアが発動しようとしているのか!?だとしたら一体何所に!?」

吉良がそう思ったとき、突然部屋全体から三人の耳に届く不気味な笑い声。

「ははははははは!!!!!愚かなる侵入者達よ!!!!!我が聖域に足を踏み入れたが最後、ここから生きては出られないであるぞよ・・・ははははははははは!!!!!」

「何、この声!?一体何がいるって言うの!?」

「はっ、見ろ!!あの銅像を!!」

吉良は戸惑いの表情を浮かべるスバルとギンガに、中央のスペースに位置する謎の銅像のほうへと目線を向けるように言葉を掛ける。

銅像は何かをした訳でもないのに、瞳は不気味な色を輝かせている。

「彫像の目が・・・光ってる!?」

「どうなってるの・・・一体!?」

すると、その瞬間・・・・・・銅像は三人の目の前で爆発を起こして粉々に砕け散った。

思わぬことに目を瞑った三人。

そして、目を再び開けて見た時・・・目の前に広がってきたのは驚くべきものだった。

何と、銅像の姿と全く同じ存在が実際に立ち尽くし言葉を話していたではないか。

「ははははははははは!!!!!!!!!ついに・・・ついに我は蘇ってきたぞ!!!!!何時以来だ・・・再びこうして人間を間近で見るのは!!!!!」

三人はその場から立ち上がり、武器を構えるとその謎の存在に尋ねる。

「誰だ貴様は!?この遺跡の番人か!?」

「番人・・・?そんなものと考えるでない!我は遥か昔・・・古代人によってこの寺院の奥深くに封印されし海の支配者であるぞよ!!!」

「海の支配者・・・!?それが何故封印を解いて僕たちの前に現れた!?」

「お前たちが此処に現れたのはとんだ偶然に過ぎぬ!!!!しかし、我が蘇ることができたのは・・・こいつのお陰よ!!!!!」

そう言うと、海の支配者なる存在は手に握り締めていた光り輝く欠片を三人に見せ付けると、それがアンゴルモアだということに三人

は気付く。

「「なっ!?アンゴルモア・・・!!」」

「やはりそれの仕業か・・・おとなしくそれをこちらに渡してもらおう。それはとっても危険な物質なんだ!」

吉良はあくまで強い口調でアンゴルモアの明け渡しに応じるが、海の支配者は全くそのようなつもりは無かった。

「誰が渡すものか!!!!長きに渡り封印され、怨念を募らせてきた我にとって今はまたとない機会であるぞ!!!!この海に再び恐怖と絶望を与える為に、この力有効に使わせてもらうぞ!!!!」

すると、海の支配者はアンゴルモアを持ったまま瞬間移動で吉良達の前から姿を消そうとする。

「待て!!!!」

慌てた三人が海の支配者を取り押さえようとするが、運悪く逃走を許してしまった。

「き、消えた!?」

「何所に行ったの!?」

すると、その時ビルゲイツからティアナの緊急入電がスバルの下に届く。

『スバル、急いで此処から逃げて!!突然海が様子を一変させて荒

れ始めたわ！！！早くしないと寺院が崩れる！！！』

「「「な、何だって！？」」」

だが、そう聞かされたときには既に遅かった。

寺院は崩壊を始めて、結界を破って多量の海水が三人を襲ってきたのだ。

「「「うわあああああああ！！！！！！」」」

三人は海水に飲み込まれて、なのは達との応答を絶ってしまう。

通信が途絶すると、ティアナとなのはは直ぐにスバル達に応答を請う。

「スバル！！！ギンガさん！！！吉良さん！！！」

「スバル！！！みんな！！！応答して！！！！ユーノ君！！！お願いだから返事をして！！！ユーノ君！！！！！！！！！！！！！！」

ユーノからの連絡も途絶え、なのははビルゲイツの内部でユーノの名を泣き叫びながら声が嗄れるまで叫び続けた。

スバル達三人が意識を取り戻したとき、三人はまだ水圧で潰れたりも溺死もしていなかった。

「うっ・・・はっ！？」

スバルが目を覚ましたとき、自分は翡翠に輝く薄い膜のようなものに囲まれていた。

隣には吉良もギンガも一緒であった。

そんな驚く三人に声を掛けたのはユーノであった。

「みんな・・・怪我は無い!?」

「ユーノ先生・・・助かりました!!」

ユーノは晩翠を解放して、その能力である翡翠の殻を自分とスバル達を囲むように発動させると、1千気圧の深海を移動していた。

「ユーノ先生・・・今のは一体!?」

ギンガが先程目撃した海の支配者と自称する存在について、ユーノの説明を待つ。

すると、ユーノはその真の正体を徐に三人に語り出す。

「あれは遥か昔・・・『大海の悪魔』と忌み嫌われ、古代人を寸でのところまで追い詰めた邪神でだよ。この文明が滅びたのも一説にはそいつが原因だって言うものもあるんだよ。大海の悪魔は、大海原を荒ぶらせ、天候をも支配する強力な力を秘めたバケモノだ。嘗て、大海の悪魔を古代人は特殊な呪術で押さえ込み、この寺院の奥深くに封印した・・・」

「それがアンゴルモアの影響で復活したということは・・・!?」

「ええ・・・このままでは復活した大海の悪魔の力がアンゴルモアによって更に増大し、この世界はおろか全ての世界すらも海に飲み込まれるかもしれない！」

それを聴いた瞬間、最悪の光景がスバル達の頭を過ぎり、全身を凍りつかせる三人。

「そんな!?一体どうすれば！！」

「一刻も早く奴を止めないと！急いでビルゲイツに戻ってなのは達と合流しよう！」

「「「了解！」」」

その頃、水深1万メートルの深海でユーノ達を必死に捜索していたなのは達も、海底各所で起きる熱水の噴出と急な海流の流れに機体が悲鳴を上げていた。

「これ以上は我々も危険です！！諦めて浮上しましょう！」

シャーリーがそう言うと、なのはは諦めきれずにユーノ達を探そうとする。

「でも！！まだユーノ君達が・・・！！」

「僕達がどうかしたって?」

すると、驚愕するなのは達の後ろから現れたのは――――――無事に怪我なくビルゲイツに戻ってきたユーノ達四人であった。

それを見たなのはとヴィヴィオの目にも涙が籠もる。

「！！ユーノ君！！！スバル達も！！！良かった・・・みんな無事だったんだ・・・！！」

なのは達はユーノ達に近付き、生きているという事実を確かめる。

「お前ら！！よくもあの水圧で生きてたな！！！」

恋次も四人の無事という事実を喜びながら、あの水圧化で生きていたことに驚きを隠せなかった。

「彼の斬魄刀が僕達を守ってくれたんだよ、阿散井君。」

「晩翠の作り出す『翡翠の殻』は、僕の魔力と霊圧を消費して周りの環境に応じた特殊な防壁を半円形状に作り出す。強い圧力が掛かる中でも、作用反作用のように逆側から同じだけの圧力を返して圧壊を免れていたんですよ。」

「何て出鱈目な能力（ちから）だよ・・・！？」

恋次はユーノの斬魄刀の出鱈目な能力に愕然とする。

「そんなことより、直ぐに海上に上がるんだ！大海の悪魔が活動を始めている！」

「大海の悪魔・・・！？」

「説明してる暇はない。急ぐんだ！」

ユーノはなのは達の疑問を取りあえず聞き逃して、直ぐにビルゲイツを海上に上がらせるように指示を送る。

その頃、噂の大海の悪魔はアンゴルモアの力を使って更に力を高め、その身体を海の支配者ポセイドンのような大きさまで成長させ、ＡＭ０７と変貌する。

ＡＭ０７へと変貌を遂げた大海の悪魔は天候を操り、嵐を巻き起こし大海原を時化という時化で荒ぶらせる。

「ははははははははああ！！！！！何だこの溢れる力は！！！！！！こいつから流れる力か！！！！！何でも出来そうな気分だ！！！！！お！？」

大海の悪魔の目に映ってきたのは、海岸線上で生活を送る人間達の町の姿であった。

「ふふふ・・・早速腕試しにはもってこいだ・・・」

すると、大海の悪魔は両手を突き上げると海を操り大津波を発生させる。

「波よ！！！！我の命令に従え！！！」

波を自由自在に操り、大津波を発生させて海岸線の町を飲み込んでいく大海の悪魔。

為す術もなく逃げる人々も、次々と波に飲み込まれそれだけで多くのものが犠牲になっていき、町は一瞬にして海の中に沈んでいく。

浮上するビルゲイツの下に、それを見ていたクロノから報告がユーノの下に届く。

『ユーノ、なのは！海上に突如巨大なバケモノが現れて人々を襲っている！！急いで向ってくれ！！』

「大海の悪魔が動きだしたんだ・・・エンジンフルスロットル！急速浮上！！」

「了解！急速浮上！！」

シャーリーとアルトはエンジンをフルスロットルにしてスクリューの回転を全開にし、海上へと上がっていく。

ビルゲイツが海上に到着すると、なのは達は荒れる海の中に佇む巨大な姿の大海の悪魔をその目に焼きつけ、驚愕の表情を浮かべる。

「何だあれは・・・！？海を操ってるのか！？」

「かなり大きい・・・どうやって戦えば良いんでしょうか！？」

スバルが戸惑いの表情をユーノに浮かべると、ユーノは冷静な態度で次のように説明する。

「スターズ分隊全員と恋次さん達死神組み、そして僕も含めた六人だけであれを相手にするしかない！」

「でもユーノ先生！私は陸戦型の魔導師です！海上での攻撃は・・・あっ！？」

「そうか！」

ティアナはスバルやギンガと違い、空中戦が全く利かない陸戦型の魔導師であることに代わりは無いが、それを可能にする方法を彼らは以前の任務で見ていたのだ。

それこそが、ユーノ・スクライアが作り出す空間湾曲エネルギーを利用したバトルフィールド発生技、月面である。

「そう♪海を割って月面を発動させれば・・・バトルフィールドを展開できる！みんな、防護服着用！何としても、大海の悪魔の暴走を止めるんだ！！」

「「「「「了解！」」」」」

荒ぶる大海原と天候の中で、依然破壊活動をやめない大海の悪魔であったが、そこに近付き海に向って晩翠を突き立てるユーノ。

「月面展開！！」

その瞬間、海がモーセの十戒の如くある一定の距離まで二つに割れると直ぐに円形状の巨大な戦闘空間が展開されその中に放り込まれる大海の悪魔。

「ほお・・・・・人間の分際でこんなことが出来るとは・・・」

バトルフィールド内に集まったユーノを始めとするヴィータを除いたスターズ分隊全員と、恋次・吉良の合計七人のメンバー。

「みんな、いくよ！」

「「「はい！」」」

「おう！！」

なのはの掛け声と供に大海の悪魔を倒すべく動き出す六人。

まず、早速動き出すのはスターズのフォワード三名。

ユーノから渡されたＩＰカートリッジをそれぞれのデバイスに装填する。

「「「ＩＰカートリッジ、セットアップ！！」」」

〈Ｂｌａｓｔｅｒ　ｆｏｒｍ　ａｎｄ　Ｇｒａｎｔ　ｆｏｒｍ〉

〈Ｒｏｃｋｅｔ　ｆｏｒｍ　ａｎｄ　ｓｈａｄｅ　ｆｏｒｍ〉

〈Ｍｅｇａｔｏｎ　ｆｏｒｍ〉

スバルは以前形状を話しているので省かせてもらうが、スバル同様リボリバーナックルとローラーブレード型のデバイス、ブリッツキャリバーを持つギンガの場合、スバルと酷似している。

ただ、左腕に付けられたリボルバーナックルの用途はスバルとは全く異なる。

ギンガのリボルバーナックルの新形態、シェードフォームは巨大な竜巻をスピナーの高速回転によって発生させ、その竜巻によって敵の攻撃を吸収・反射することが可能なのである。

「ストームプロテクション！！」

大海の悪魔から飛んでくる波の砲弾をギンガはシェードフォームの能力を存分に発揮させて見事そのまま大海の悪魔に跳ね返し、動きを怯ませる。

「何と！？」

自分の攻撃を跳ね返してきたことに驚きを隠せない大海の悪魔だったが、それを見たティアナがスバルと共に何時もの連係プレーで攻撃を行う。

「スバル、行くわよ！」

「おう！！」

ブラスターフォームのマッハキャリバーで空中を滑空するスバルは、二発カートリッジをロードするとグラントフォームによって形状変化をした、巨大なリバルバーナックルで連撃を喰らわせる。

「リボルバー・・・ガトリング！！！」

リボルバーシュートを一段と向上させ、威力を極限まで高めた連射型の魔法弾・・・リボリバーガトリングが、大海の悪魔の身体を後退させていく。

その隙にティアナがミサイルのような形状に変貌したクロスミラージュ・メガトンフォームのスコープで大海の悪魔に狙いを定める。

「射程距離算定！メガトニック・・・シュート！！！！」

その瞬間、銃口から発射される強力な一撃を秘めたミサイル弾頭とクロスファイアーシュート同様無数の魔法砲撃が大海の悪魔の身体を直撃し、更なるダメージをくわえる。

「のあああああああああああ！！！！！！！！ええい！！！我に歯向かうと言うのか！！！！！」

三人の攻撃を受け、腹を立てた大海の悪魔が反撃をしようとした直後、恋次と吉良が補助デバイスを着けた状態で大海の悪魔の後ろから攻撃を仕掛ける。

「『狒牙連刃凶（ひがれんじんきょう）』」

「侘助、肩透かし！！」

蛇尾丸の攻撃と侘助の斬撃をその身に受けて、その場に倒れこみ身体を重みで動かせなくなってしまった大海の悪魔。

「ぐっ！！！体が・・・動かぬ！！！！！」

それを見たユーノとなのはが抜群のコンビネーションで最後の仕上げに入る。

「なのは、僕が奴の周りを固める！合図を出したら一気にバスターで止めを！」

「了解！」

ユーノはそう言うと、重さで身動き一つ取れない大海の悪魔を封じ込めるために空中に浮かんだ状態で霊力を使った高位結界術を発動させ、それを大海の悪魔の前方に設置する。

「！！」

「軍相八寸退くに能わず、青き閂、白き閂、黒き閂、赤き閂、相贖いて大海に沈む。“竜尾の城門”」

その瞬間、大海の悪魔の前方に聳え立つ木を積み重ねて造ったような防壁。

「“虎咬の城門”」

次に左側に設置される歯車のような形をした防壁。

「“亀鎧の城門”」

更に右側に設置される亀の甲羅にも似た防壁。

「“鳳翼の城門”！！」

そして、最後に大海の悪魔の頭上に設置される鳥の翼にも似た防壁。

「『四獣塞門』！！！！！」

その四つの壁で作られた直方体の結界で相手を閉じ込める鬼道こそが、この四獣塞門である。

「これは・・・！！！！何の真似だ！！我をこんなもので閉じ込めた

ところで、どうすることも出来ないぞ！！」

「・・・それは違うよ・・・なのは！今だ！！」

「！？」

ユーノがそう合図を出すと、虎咬の城門からレイジングハート・マキシマム・ブレイドで大海の悪魔を狙うなのは。

そして、狙いを定めると通常の破壊力の数倍にも達するディバインバスターを至近距離で直撃させる。

「ディバイン・・・・・・バスター！！！！！！」

その瞬間、ユーノが作った四獣塞門に輝が入るとディバインバスターを直撃した大海の悪魔は奇声を放ちながら完全に消滅して行ったのであった。

「ひえええええええええええええええええええ！！！！！！！！！！！！！！！！！！！！！！」

なのは自身も、強力すぎる今回のディバインバスターの反動によって完全に息を上がらせ、汗だくになっていたのであった。

「はぁっ、はぁっ、はぁっ、はぁっ・・・！！」

だがその瞬間、力を使い果たし空を飛ぶことも出来なくなったなのははそのままスバル達の目の前で落下して行った。

「なのはさん！！！！」

それを見たユーノが瞬歩で素早く移動し、落ちてくるなのはを俗に言うところのお姫様抱っこで抱きかかえる。

なのはは疲れ切った様子でユーノに感謝の言葉を掛ける。

「・・・ありがとう・・・ユーノ君・・・」

「・・・“四獣塞門”に輝が入るとはね・・・マキシマム・ブレイドでの破壊力は本当に恐ろしい威力だ・・・これは、帰って訓練する必要があるね。」

「・・・そうだね・・・折角ユーノが作ってくれたものだもん・・・ちゃんと使いこなせるように頑張る・・・」

ビルゲイツ内部で作戦の成功を見届けたヴィヴィオはその場から飛び上がって大はしゃぎ。

「やった!!!なのはママとユーノパパ達がやったああ!!!」

ロングアーチで待機していたはやて達も作戦の成功に胸を撫で下ろす。

「ＡＭ０７、消滅を確認!!アンゴルモア、分離します!」

「これで６個か・・・」

「あと２４個・・・まだ先は長いね・・・」

クロノとフェイトはまだまだ先の見えないアンゴルモア回収の日々

に不安を抱きながら、作戦を終えたなのは達の姿を温かい目で見守っていた。

そして、作戦から戻ってきたその次の日の朝。

自室のベッドから目を覚ますなのは。

「・・・う・・・ん・・・」

すると、自分の隣で一緒に眠るヴィヴィオとフェイトの寝顔を見てほのぼのとした気持ちになり軽く微笑むなのは。

「・・・ふふふ・・・」

なのはがベッドから起き上がり、何時もの制服に着替えていると今だ眠り続けているヴィヴィオが寝言でこんな事を言って来た。

「・・・うんん・・・なのはママ・・・ユーノパパ・・・」

それを聞いたなのははは一瞬驚きはしたものの、直ぐにそんな無邪気な娘の言葉に気持ちが更に和やかになるのであった。

「うふ♪」

なのははは二人を起こさないように部屋から出ると、何時ものように訓練場まで向っていく。

すると、その途中でなのははロビーで鼾をかきながら熟睡する人物を発見。

「あっ！」

「かぁ～～～～～～！！！！かぁ～～～～～～！！！！！」

それは、なのは達のためにこれから先必要になるであろうものを作り出すために試行錯誤を繰り返して、その結果自室で寝るのも忘れていたユーノであった。

ユーノは帽子を被ったままいつも来ている甚平と羽織を身に纏ったままソファーの上で眠りについている。

なのははその人の見ていないところで努力するユーノに静かに近付くと、くすっと微笑みユーノの帽子をそっと取り上げる。

「あらあら・・・ユーノ君またこんな所で寝てる。」

なのははそう言うと、何処からか持ってきた毛布をユーノにそっとかけてあげた。

「ちゃんとベッドで寝ないと・・・風邪引いちゃうよ♪」

なのははそう言うと、ふとある事を思いつき顔を染め上げながらユーノの顔に近付き・・・

「・・・お休み・・・ユーノ君・・・」

ユーノに気付かれないように唇に自分のを重なり合わせた。

あろうことか、これが二人にとってのファーストキスになろうとははやて達も思ってもいなかっただろう。

「うふ♪」

なのはは上機嫌な様子でユーノの前から立ち去って言ったが、なのはがいなくなった後で実は既に起きていたユーノは唇のほうに手を当てると、顔を赤く染め上げながらこんな事を口にするのであった。

「・・・・・・不意打ちはズルイよ・・・なのは・・・」

大海の悪魔（後書き）

教えて、ユーノ先生！

ユ「今日は四獣塞門について♪」

ユ「この結界は、仮面の軍勢の有昭田鉢玄さんという人が使った、途轍もない強度を誇るものなんだ。」

ユ「四つの四神の名にちなんだ城壁によって相手を閉じ込め、その中にいる相手をなのはみたいに狙い撃ちをすることも出来る。」

ユ「ただ、あの結界に燁を入れたのは二番隊の砕蜂さんとなのはぐらいだけなんだよね・・・」

砕「私が何だというのだ？」

ユ「うわ！！急に現れた！？しかも本物！！」

砕「何だ貴様は？浦原喜助のような格好しおって・・・不愉快だ、ここで死んでもらうぞ！！（雀蜂解放）」

ユ「ちょちょちょちょ、ちょと！！！僕は浦原さんじゃないですよ！！」

砕「問答無用！弐撃決殺！！」

ユ「ぎゃあああああ！！！！！」

魔導師図鑑ハイパー！

テ「失礼します。ユーノ先生、書類を届けに・・・」

すると、その瞬間なのはがティアナの口を押さえて無理矢理移動させる。

テ「ふごがおあはながおあ（なのはさん・・・！？）」

別な場所へ移動した後、なのはに事情を尋ねる。

テ「あの、なのはさん・・・どういうことですか？」

な「ごめんね、ティアナ。だけど、今は行かなくていいから。ユーノ君、今・・・論文の作成で忙しいから。」

テ「あ、成程。だけど、何でそこまで気を遣わないと？」

な「ユーノ君・・・・・ここんところ忙しくて全然原稿が書きたくても書けていなかったの。空いてる時間を有効に使わせてあげないと、藪蛇を受けるのは私達のほうだよ。」

なのはにそれを言われると、ティアナも鳥肌を立たせる。

テ「は、はい・・・気をつけます・・・！！」

オーシャン・大海の悪魔篇

大海の悪魔／ＡＭ０７

声　一　藤原祐規

遥か昔、オーシャンの世界において古代人を寸でのところまで追い詰めた海の邪神。オーシャンの古代文明が滅びたのも一説には大海の悪魔が原因であったとの推論もある。大海原を荒ぶらせ、天候をも支配する強力な力を秘めたバケモノ。嘗て、古代人は特殊な呪術でこれを押さえ込み、海底寺院の奥深くにブロンズ像として封印したがアンゴルモアによって封印が解かれ覚醒を果たし、ＡＭ体となって再び海上に出現するがユーノ達の活躍で完全消滅する。

オーリスの復讐、ユーノへの思い（前書き）

まだまだ異世界ネタ募集中です！！

どんどん送ってください！！！

あと、今回もガオガイガーネタが・・・ああ！！どうして僕はオリジナルの話が書けないんだ！！！！！

オーリスの復讐、ユーノへの思い

＞ｉ１２３５２―７０９＜

第５５管理外世界『アーミー』。

幾度と無く繰り返された戦争によって、人々は自らの文明を破壊し、この世界そのものを消滅させてしまった。

今では、誰もいない荒果てた町並みとその面影が残る緑が広がる辺境の世界へと変わり果てているが――――――その世界に、ある女性が足を運んでいた。

聡明な表情を思わせる２０代半ばの眼鏡をかけた女性、オーリス・ゲイズ。

彼女は以前、時空管理局地上本部で父親であり地上本部のトップであったレジアス・ゲイズ中将の実の娘でもあり補佐役であった。

だが、父親の裏の事情を熟知しながらそれを公にしなかったという判決の下、彼女はこの四年間レジアス亡き後、管理局の保護化で監視を続けられることになった。

ＪＳ事件で父親を亡くし、心に深い傷を負ったオーリス。

そんな彼女が心の静養を行うために訪れたのかこの世界、アーミーであった。

緑が広がる世界の大地をあても無く歩き続ける晴れる表情のないオーリス。

彼女は草陰に落ちていた今にも萎れてしまいそうな花を摘むと、死んだレジアスのことを思いながら暗い表情を見せる。

「・・・・・・お父さん・・・・・・・ん!?」

その時、同じ草陰で突如光り出すものに目を奪われた。

「何かしら・・・これ・・・!?」

オーリスがその光を発する何かに手を触れた瞬間、それが一層輝きを強くしてオーリスを飲み込んでしまった。

「えっ!あああああああああああああああああ!!!!!」

それから暫く経ったある日、地上本部と密接な関係を築く各異世界の巨大組織では何時ものように凡庸ながらも急がしい毎日を送っていた。

「それがさ・・・こうなんだよ!!」

「マジかよ!?」

「昨日のファイル、ちゃんと届けた?」

「はい!常務の方に確かに渡しました。」

しかし今このとき、この凡庸な日常を劈く恐るべき事件が起こってしまうのであった。

機動六課は連日に渡って発生する謎の怪事件を調査するためにとある異世界へと来ていた。

「・・・こりゃ酷でーーー・・・!!」

ヘリの上からヴァイスは地上に広がる巨大なクレーターの痕を眺め

ていた。

指令室でヴァイスからの映像を見ていたはやて達も深刻そうな表情を浮かべてこの一連の事件の謎に迫っていた。

「これで5日連続か・・・狙われているのは、管理局地上本部と密接に関係している異世界の組織という組織ばかり・・・」

「それに空や海の部隊の連中も多数犠牲になってやがる・・・！」

5日前・・・・・突如として地上本部と密接な関わりを持つ組織が立て続けに襲撃を受け、多数の犠牲者を出して崩壊してしまった。

アンゴルモア関連の事件と考えられると結論付けた本局は、機動六課に捜査依頼を出したが未だ進展は見られない。

「事件発生時刻は、５日間全て１３時じゃすとです。」

「時間まで同じなんて・・・！？」

「シャリー、探査結果は出たん！？」

『サーチャーにＡＭ体と思わしき反応ありません。アンゴルモアのエネルギーも検出されていません！』

「はぁ～やっぱり同じか・・・」

その頃、被害にあった場所へヴァイスと供に現場検証に来ていたティアナは間近で見る巨大なクレーターに愕然としていた。

その傍らで、人々の救助と残骸の回収を行うスタッフ達の声があちこちから聞こえてくる。

「オーライ、オーライ、はいストップ！」

「しかし何て大きいクレーターなのかしら・・・！？まるで隕石でも落ちたみたい・・・」

「おいおいティアナ。冗談キツイぜ！そんなことあるかよ！？」

「す、すみません。ちょっと考えすぎだったですかね・・・」

この時、ティアナはヴァイスの言葉を聞いて軽く受け流してしまったが、六課に戻った後にフェイトからの一言で事態は一気に進展を向かえる。

「いや、ティアナの考えは当たらずとも遠からずだと思うよ。」

「どういう事ですかフェイトさん？」

「見てくれみんな・・・」

そう言うと、ユーノはタッチパネルを操作して再びこれまでの事件の痕跡である巨大なクレーターをメインスクリーンに映し出し、こう説明し始める。

「これは爆発の衝撃だけで出来たものじゃないよ。何か巨大な物体が落下してきた痕のようでもあるんだ。」

「巨大な・・・物体ですか！？」

説明を聞いた途端、エリオはユーノが口にした巨大な物体という言葉に驚きを隠せなくなった。

それはエリオだけではない、ティアナ自身も何かを思い出した。

「そう言えば・・・現場検証のときに!?」

〈しっかりして下さい!一体何があったんですか!?〉

現場検証のとき、担架で運ばれていく局員に何があったのかを尋ねるティアナ。

すると、瀕死の重傷を負う局員が弱々しい声でこう言ったのだ。

〈音が・・・凄い音が・・・〉

〈どんな音だったか分かりますか!?〉

〈爆発の後に風を切る音が・・・〉

〈爆発の後・・・ですって!?〉

ティアナの話を聞いたユーノもやはりばかりの表情を見せると、持ち前の頭脳で一つの答えを導き出しタッチパネルを打ち続ける。

「やはりそうか。落下音が後から来た・・・つまり、音よりも早く何かが落下したという証拠だよ。」

すると、クロノはシャーリーに連絡をして全てのデータを洗い直す

ように指示を出す。

「シャーリー、落下速度・質量入射角・・・全てのデータの見直しを頼む！」

『了解！』

暫くすると、シャーリーから送られてきた見直しのデータがメインスクリーンに映し出されて詳細なデータを下にユーノがクロノに言った。

「結論が出たね。これは巨大な大砲による砲撃だ。」

「大砲だと！？質量物質を使った攻撃だというのか・・・しかも白昼堂々！？」

「間違いないよクロノ。あらゆるデータがそれを裏付けている。」

「ならば直ぐにでも対応策を取らんと！？」

切羽詰った様子ではやてがそう言うと、ユーノの隣で聞いていたなのはが困った表情を浮かべながらはやてに返事をする。

「でもね、はやてちゃん・・・ちょっと困ったことがあってね・・・」

「え？何やのなのはちゃん・・・！？」

その時、同じく困惑した表情を見せるルキノがモニター越しにある質量兵器のデータをはやて達に見せる。

『見てください。先史時代のミッドで造られた超巨大戦艦『カタストロフ』の主砲ですら、口径６０センチ。試算しますとこの砲弾は１００センチ近い口径になります。』

「１００センチの砲弾・・・！？」

ルキノの言葉を聞いたキャロはあまりに常識を超えた推論に驚きの声を上げる。

すると、ヴィータがありえないとばかりの表情でルキノの説明は間違っていると説明をしようとしたその時、ユーノのが口にした言葉で全員は愕然となってしまうのだ。

「おいおい！そいつは間違いだぜ、ルキノ！口径１００センチもの大砲なんて、全ての異世界を捜しても存在するはずは・・・」

「いいや・・・一つだけあるよ。」

「「「「えっ！？」」」」

「「「「なっ！？」」」」

「旧暦の時代・・・ミッドチルダの旧カストロ軍が建造した・・・次元世界最大の火砲・・・１００センチ列車砲、『チョイバルサン』だよ！」

その頃、ユーノが口にした問題の１００センチ列車砲はというと・・・アンゴルモアに取り込まれ更には列車砲と融合を果たしたオーリスの意思によって今も尚、レジアスを死の淵に追い遣ったと錯覚す

る管理局や他の全ての組織に対する復讐の怨嗟を剥き出しにしながら砲弾を装填する。

「破壊・・・管理局・・・破壊・・・父を・・・殺した・・・管理局・・・破壊・・・」

最早片言の言葉でしか喋れなくなったオーリスは、列車砲の姿で暗いトンネルの中からその姿を現そうとしていた。

彼女の次なる標的は兎も角として、なのは達はユーノに１００センチもの列車砲が今になって動き出しているのかが不思議に思い弁明を求めた。

「でもユーノ君、旧カストロ軍が開発した列車砲が・・・何で今になって・・・!?」

「『チョイバルサン』の残ったものの幾つかは、大戦後ずっと行方不明のままだったんだ。ところが、最近になって大戦末期に密かに異世界のいたるところに運び込まれていたという事実が判明したんだ。しかも、どの世界でも通用するように改造されて・・・」

「７０年以上前の超兵器が、現代に蘇ったというのか・・・!?」

「もしそれがアンゴルモアによってパワーアップしていたとすれば・・・!?」

「砲弾の落下速度は、音速の5倍から6倍。事実上、迎撃は不可能だろうね。」

「ほな、どうすればいいんや!?」

はやてやこの場にいる全員はこの状況を如何にして解決するかが、皆目見当もつかない状況であった。

その時、同じように頭を捻らせていた恋次がある事を思い出しユーノに尋ねる。

「待てよ!?おい、ユーノ!確かお前・・・前に俺に見せてくれたものにちょうどいいものがあった気がするんだが!?」

「ええ♪いいところに気付きましたね。迎撃が不可能なら、爆発そのものを消し去ればいいんですよ♪」

「そんなことが可能なのユーノ!?」

フェイトは半信半疑のままユーノにそう尋ねると、ユーノは扇子を広げて自信に満ちた様子で勿論と断言し、それに付け加えるかのように金太郎が補足説明をする。

「店長がこんなこともあろうと造って置いた超振動発生機を使えば、爆風を宇宙の外へと吹き飛ばすことが出来ます!」

金太郎の傍に立つ白鳥は直ぐに金太郎に現在の時刻を尋ねる。

「現在の時刻はどれくらいか分かるであるか、ピーチ。」

「鬼太郎だ俺は!!え～と・・・今は１１時２０分!１３時まであと１時間４０分だ!」

「成層圏を通過して来る砲弾の着弾地点を推測するには・・・本局

の軌道上に浮かぶ人工衛星追跡レーダーを使おう。」

「ユーノ、直ちにマッコーリフに乗ってクラナガン方面に向ってくれ！」

クロノからユーノに与えられる命令を聞いていたギンガは、思わず行き先をクロノに聞き返してしまう。

「クラナガン・・・ですか！？」

「これまでの被害状況からして・・・敵が次に狙うのは・・・時空管理局の地上の要、ミッドチルダ地上本部だ！」

ユーノはクロノの命（かなり不本意）を受けて、以前異常重力化の中をものともせずに走行することが出来、事件解決に大きく貢献した戦車型マルチ機械マッコーリフに搭乗し首都クラナガン方面を目指した。

スカリエッティによって崩壊をしてしまった地上本部も漸く着工工事が終わり、元通りの姿になった。

そこに再び攻撃を仕掛けようとするものがいる。

ユーノを始め機動六課の前線メンバーは険しい表情に汗を流しながらデジタル時計の時刻が１２時５９分になるところを見ていた。

そして、ついにそのときがやって来た。

「１２時５９分です！！」

すると、その瞬間機動六課指令室に響き渡る非常事態警報ベルと赤ランプ。

『衛星追跡レーダーに反応!!』

シャーリーからの報告を受け、マッコーリフ内部で画面を確認していたユーノも確信を持って指令室の全員に知らせる。

「放物線弾道軌道・・・間違いない、１００センチ砲弾だ!」

『目標確認をお願いや、ユーノくん!』

「たく!何で僕がこんな狭いところで・・・しかも計算の要素が多すぎるんだよ!!!え～いそれそれそれそれそれそれそれ・・・これでどうだ!!!」

ユーノは不満をぶちまけながら狭いマッコーリフ内部でタッチパネルを高速で操作し、頭をフル回転させて着弾ポイントを割り出し、最後のパネルを強く押す。

そこに映し出されるのはクロノが予想していた通り、ミッドチルダ本部であった。

『どんぴしゃ!地上本部だ!!』

「よし!!ユーノ、健闘を祈る!!」

「他人事だと思ってお前は!!!!」

クロノの理不尽な言葉を聞いて、あとで絶対に嫌がらせをしてやる

と心に誓ったユーノはクラナガン臨海公園の草葉から出て来てマッコーリフを地上本部に向けて走らせるが、公園にいたものの多くはいきなりの光景に度肝を抜いたことは間違いない。

ユーノは落下ポイントに到着すると、砲台を空に向けるとセットした超振動発生機の照準を砲弾に直撃するよう計算する。

「チャンスは一瞬だけか・・・！」

『着弾まで、あと２０秒です！』

スバルの中で聞いていたユーノは画面を見ながら、落下してきた１００センチ砲弾を見て眉間に皺を寄せながら、超振動発声機のスイッチを押す。

「精密射撃モード、超振動発生機・・・作動！！」

その瞬間、砲弾に向って発射されるユーノが開発した超振動発声機。これは超振動によって爆発や電磁波などのエネルギーを中和し、また被害が出ない方向へ偏向させるメガトンツールで、起動させることに弾頭が消費される。

弾頭のサイズには、偏向する対象のエネルギー量に合わせて様々なサイズが存在する。

二つの異質な物質が衝突した瞬間、爆発にも似た超振動が空へと舞い上がり宇宙空間へと排出される。

その結果、地上は一切被害を出すことなくユーノ自身も地上本部も

全く無傷の状態であった。

メインスクリーンでそれを確認したシャーリーはなのは達に作戦の成功を報告。

『成功です！！着弾のエネルギーをほぼ１００パーセント消去しました！』

「よし！ユーノ、よくやった！！」

「「「「「「「「やったああ！！！！」」」」」」」」

なのは達全員は今回の作戦成功に大喜びをし、ユーノへの感謝の念を募らせた。

だが、その束の間の安心は突然鳴り響く非常警戒ベルによって消え去ることになる。

シグナムは画面に映し出される衝撃の事実に驚きの声を上げた。

「なっ！？に、二発目の砲弾を確認！！」

「嘘でしょう！！！着弾まで４８秒です！！！」

「何やて！！！」

「そんな！！！ユーノ君の話じゃ、通常のチョイバルサンなら次の砲弾を装填するのに最低１０分は掛かる筈だって！？」

「やはりアンゴルモアが関わっているんだ・・・ＡＭ体となった所

為で、連射性能も飛躍的に向上してるんだ・・・！！」

クロノ達が危機感を覚える中、マッコーリフから出て空を見上げていたユーノも再度落下してくる砲弾に気付くと、一気に表情を雲らせる。

「ぬ！？」

ユーノの方向へ落下してくる１００センチの砲弾。

ユーノは一つの結論に達すると、仕込み杖を取り出し晩翠を解放する。

「こうなったら・・・残された手段はただ一つ・・・！！」

ユーノは魔法防壁に加えて晩翠によって作り出した特殊結界を砲弾が落下してくるところに設置すると、自分を盾にして地上本部を守ろうとする。

その姿をモニターで見ていたクロノやなのは達は驚愕の表情を見せる。

「ユーノ、まさか盾になるつもりか！？」

「お願いユーノ君！！！！それだけは止めて！！！！！」

なのはの悲痛の叫び声がユーノの耳に届くが、ユーノは覚悟の籠もった瞳でなのは達に向ってこう言った。

「今此処で僕がやらなかったら、地上本部はまた壊滅だ！！！」

そして、カウントが無常にもゼロになった瞬間――――――ユーノの下に落下する１００センチ砲弾。

凄まじい熱破壊エネルギーを大量に放出しながら、ユーノが作り出した二重の防壁を突き破ろうとする。

流石に翡翠の魔導死神となったユーノ・スクライアでも今回の砲撃には自慢の結界術も為す術もなく、呆気なく砕け散るとユーノの下に迫ってくる砲撃のエネルギー。

それを喰らう直前、ユーノは決して表情一つ変えずにその砲撃を見ていたのであった。

ユーノが大砲のエネルギーに巻き込まれる直前、ヴィヴィオは何時も通りの学校ライフに精を出していたのであった。

「はい！ではこの問題を・・・！！！」

担任のノアが生徒達に問題を解いてもらおうと使命をしようとした直後、地震にも似た巨大な地響きが生徒達や周辺に住まう人々にも届く。

「きゃあああ一体なんなの！？」

ヴィヴィオは窓の外を見ると、地上本部のほうから上がる巨大な爆風を見て確信する。

「これって・・・地上本部のほうから・・・！？」

「ユーノ君！！！

火傷は避けられたが全身に受けた傷によって頭から足からといたるところから血を流し、呼吸もかなり乱れるユーノがクレータの中で仰向けになって倒れていた。

傍にはすっかり破壊されてボロボロになってしまった愛刀、晩翠が横たわっていた。

ヴァイスのヘリに乗って駆けつけてきたなのはやシャマル、更には恋次達がユーノを見た瞬間顔色を変えて事態の深刻さを理解する。

「急げ!!!かなりの深手だ!!慎重に運べ!!!」

吉良は地上本部の局員に手伝ってもらい、血塗れのユーノを慎重に担架に乗せる様に指示を出す。

なのははそんな呼吸の乱れているユーノの固く握り締めながら、涙を浮かべてユーノに気を確かにするように呼びかける

「ユーノ君、しっかりして!!!!ユーノ君!!!!!」

「こ・・・これくらいで・・・くたばって・・・たまるか・・・ぐっ!!!

ユーノはそう言うと、気を失い辛そうな表情で目を瞑ってしまった。

「ユーノ君・・・目を覚まして・・・ユーノ君!!!!!!!!」

「まずいぞ!!!!鰓動がかなり弱まってやがる!!!六課の集中治療室に運ぶんだ!!!!急がねえと本当に死んじまう!!!!」

恋次もユーノの魂魄の動きが著しく低下をしていることに気付き、急いでヘリの中に運び機動六課へと連れ帰っていった。

ヘリの中でシャマルによる救済処置を受けている間も、ユーノの手を握り締めたままユーノに呼びかける涙目のなのは。

「ユーノ君!!!!お願いだから死なないで!!!!ユーノ君!!!!」

隊舎に戻ってすぐに始められるユーノの緊急手術。

幸いにも、爆発の直前ユーノが自分の周りに施していた翡翠の殻のお陰で爆発による死亡は免れ、こうして生きていられることになった。

だが、その代償は余りに六課には大きかったことは間違いない。

手術が無事に終わり、眠ったままのユーノをモニターで見ていた前線メンバーやスクライア商店の従業員達は一先ず安堵の溜め息をなでおろす。

「ユーノ先生の魄動・血圧、通常値まで安定。怪我のほうも処置は既に完了してます。」

「兎も角無事でよかった・・・」

何時もユーノに何かしらの嫌味を言うクロノも、このときばかりは素直にユーノの無事な様子に安心した。

「直撃の瞬間、あの翡翠の殻で咄嗟に身を守ったことが功を奏した

ようやで。」

「あれを使ってなかったら・・・間違いなく死んでいたぜ・・・！」

「だけど、損傷はかなりの深手を負ったことに変わりは無いよ！ユーノ君が生きているだけまだ良いけど、もうこんな姿のユーノ君を見るのは嫌だよ！！！ううううううう！！！！」

なのははそう言うと、大粒の涙を流しながら両手を顔に押さえつけて泣き始める。

それを見ていたフェイトはなのはと同じぐらい辛い表情を浮かべる。

「・・・なのは・・・ん？どうしたんですかシグナム！？」

すると、その時はシグナムの下にザフィーラからの報告が届いた。

「ザフィーラからの緊急入電だ！ＡＭ０８の隠れ家を突き止めた様だ！」

暫くしてから、ザフィーラが指令室のほうに入ってくるとはやての下まで歩み寄ってきた。

「ご苦労さんや、ザフィーラ！」

はやてはザフィーラの頭を軽く撫でると、早速報告を聞かせてもらうようザフィーラに言いつける。

「はい。主・・・早速ですがこれをご覧下さい。」

ザフィーラはそう言うと、メインスクリーンに自分の持ち帰ってきたＡＭ０８に関する詳細なデータを全員に見せ、説明を始める。

「これが被害地の座標と予想される砲弾の入射角です。本来、列車砲は左右の射角が取れません。したがって、原則的には線路の延長上にしか発射できないはずです。」

「成程な。そこから逆算すれば・・・」

「その通りです。そして、これが問題のＡＭ０８です。」

ザフィーラが持ち帰ってきた今回のＡＭ０８の大きさと姿を見たなのは達は、あまりに田を超越したその巨大さに目を奪われた。

「何という大きさだ・・・!?流石は１００センチ列車砲というだけのことはある!」

「場所は、第５５管理外世界『アーミー』北部に位置する山間の線路上。前世紀途中、完成間近で破棄されたもののようです。」

「でもどうするんですか!?相手は射程距離１００センチ以上のバケモノ。近付く前に狙い撃ちされてしまいますよ!!」

ティアナの説明の後に、エリオが困惑した表情でそう言うと、はやて達も腕を組んで困り果てていた。

すると、その時。

「いいえ!」

「「え！？」」

沈黙を破ってその言葉を口にしたのは金太郎であった。

「私に考えがあります！」

「金太郎さん！？一体どういうことですか？」

「これから作戦を説明します。但し、これは一か八かの一発勝負ですけどよろしいですかな！？」

すると、フェイトも金太郎の言葉を信じて首を縦に振るう。

「ええ。それでも構わないですよ・・・はやて、クロノ。今回の作戦は、金太郎さんに全てを託そう。後は、私たちで何とかする。なのははユーノの傍についてあげて。」

「でもそれだとフェイトちゃん達が・・・！？」

「身体を張ってまで、ユーノは人々を守り抜いたんだ・・・今度は私達がユーノと人々を守る番だよ！」

「「「「「はい！」」」」」

フェイトの言葉を聞いたフォワード五人も肯定の返事をすると、はやても意を決して金太郎からの作戦内容を尋ねる。

「そうやな。あんな格好いいところ見せられて、何にも恩返しせえへん訳にはいかんわな・・・金太郎さん、作戦聞かせてくれるか？」

「承知！」

その作戦内容とは次のようである。

金太郎を始めスクライア商店の従業員全員と白鳥を含めた合計四人でＡＭ０８が潜伏するアーミーまで分散して赴き、それを補助する目的でフェイトとザフィーラが別ルートで現場に向う。

「各人、足並みは？」

アーミーに到着したフェイトが自身の車の中で指令室のティアナ達にそう連絡する。

「各人とも順調に進行中！予定通り、１２時５８分に合流予定！」

「まさか敵の目前で一斉攻撃とはな・・・」

「でも迂闊に接近して１００センチ砲の直撃を喰らえば、いくらあいつらでも！？」

ヴィータの危惧の言葉を聞くと、腕組みをしていたシグナムが次のように言う。

「離れていては迎撃できん。敵に悟られぬようにするには、分散して近付くしかあるまい。」

『現在１２時４５分。敵がトンネルの中から現れる頃です！』

アルトからの連絡を受けると、全員は緊迫した様子でモニターを眺める。

「頼んだぞ、スクライア商店の従業員・・・この作戦に延期はありえない！」

クロノは険しい表情でスクライア商店の従業員と白鳥に全てを託す。

なのはのほうも、未だ目を覚ます気配の無いユーノの傍で作戦の成功を祈るしかなかった。

四人がＡＭ０８の下に向っていたその頃、トンネルの中から出てくる巨大な列車砲と化したオーリス・ゲイズ、もといＡＭ０８は再び片言な言葉を口にしながら徐に姿を現す。

「破壊・・・父を殺した・・・管理局・・・破壊・・・」

ＡＭ０８が姿を現したことをスクリーンで確認したはやては、合流を果たした四人に作戦の決行を宣言する。

「よっし！！作戦開始や！！」

それを聞いた四人は、自らの武器を解放して隠れていた場所から現われ線路上にいるＡＭ０８の巨体の後ろに回りこむ。

「どうですか！？真後ろには撃てませんぞ！！」

金太郎がそう言った直後、四人の足元にある線路が形状を変化させて四人の身体に巻き付いてくるのであった。

「「「「なっ！？」」」」

線路が四人の身体に巻きつき身動きを取れなくすると、ＡＭ０８は機体を１８０度反転させて砲撃を四人のほうへ向け、チャージを始める。

六課でその様子を見ていた前線メンバーも一気に緊張が高まる。

「線路も身体の一部なのかアイツは！？」

「マズい！！！」

「ぐっ・・・ぐおおお！！！！！」

「これでは・・・身動きが取れん・・・！！」

「これ相当僕達マズイんじゃないの先輩！！！」

「うるせえ！！！言われなくても分かってるわ！！！！！」

「破壊・・・破壊・・・排除！！」

完全に線路に絡め取られて逃げることも出来ない金太郎達の下に、ＡＭ０８が徐に近付いてくる。

「スクライア商店組み四人、分散できません！」

「ＡＭ０８列車砲より、エネルギー反応増大！」

「逃げてください、皆さん！！」

「金太郎！！！！！お前ら！！！！！！！」

モニターを見ながら、クロノや恋次達が四人に逃げるように声を張り上げる。

すると、金太郎はある一つの方法を思い出しそれを実行する。

「私は諦めません・・・店長のためにも・・・世界の人々のためにも！！！！！おおおおおお！！！！！！！！！」

金太郎は自力で身体に巻きついていた線路を引き千切ると、アックスオーガを発射されてきた１００センチ砲弾に向けて莫大な魔力を消費して、刃を砲弾の先端部分に直撃させる。

「ダイナミックチョップ！！！！！」

すると、その瞬間――――――――アックスオーガと１００センチ砲弾が衝突の際に空間湾曲を起こして拮抗した状態で爆発せずに動きを止めた。

この光景にははやて達も度肝を抜いた。

「なっ！？何と！！！」

「アックスオーガの一振りで空間湾曲を起こして、砲弾を真っ二つに割ろうとしとるで！！！」

金太郎は険しい表情を浮かべながら砲弾のエネルギーを消費させていく。

『少しずつですが、砲弾のエネルギーが減っていきます！！』

『空間を歪ませて、最大射程距離の数百万メートルを・・・僅か十メートルの間で再現しようとしてます！！』

管制室のシャーリーとアルトやルキノも金太郎の行動に驚かされていた。

「ぬおおおおおおおおおおおおおおおおお！！！！！！！！！！！！」

金太郎は自分のことなど一切省みずに砲弾のエネルギーを消そうとする。

すると、ＡＭ０８はそんな金太郎に追い討ちをかけるように次弾を装填し発射しようとしてくる。

「二発目が来ます！！！」

「金太郎さん！！！」

指令室の全員はこの最悪の状況に直面する金太郎達をただ見守ることしか出来なかった。

すると、今迄身動きがとれずにいた鬼太郎が次のような言葉を口にして全員の士気を仰ぐ。

「くそが！！！！これしきのことで根を上げたら・・・俺達全員店長に合わせる顔が無いぜ！！！そうだろ、熊・亀・鳥！！」

「当然だよ！僕にとって店長の存在があったから今まで頑張ってこ

れたんだよ！！！」

「私も、彼が力を貸してくれたから今の私は此処いる！！」

「俺様もな・・・店長には返しきれない程の恩があんだよ！！！！！死んだらそれも返せねえじゃねえか！！！！ほおおおおおおお！！！！！」

「「ほおおおオオオ大おおおおおおおお！！！！！！！」」

その瞬間、全員は全身の力を使って拘束されていた身体を開放する。

「此処に居る我々全員の気持ちは一緒！！！！全てはユーノ店長あってのスクライア商店です！！！！我々は負けません！！！！ほおおおおおおおお！！！！！！！」

「「「のおおおおおおおおおおおお！！！！！！！！！！」」」

金太郎の下に集められる鬼太郎達三人の有りっ丈の力という力。

その力を受け取った金太郎はアックスオーガで空間を更に湾曲させて砲弾のエネルギーを消し去ろうとするものの・・・

「駄目です！！！！砲弾のエネルギーを湾曲し切れません！！！！」

指令室のギンガはそのことを金太郎に伝える。

「ならば！！！！肉を切らせて・・・骨を断つまでです！！！！！」

金太郎は湾曲空間に魔力弾を送り込んで爆発を起こして一撃目を回

避すると、後ろにいた鬼太郎達と供に一斉攻撃を開始する。

「店長の借りはきっちり返すぜ！！！！最後に勝つのは俺達だ！！！俺の必殺技、パート２！！！！」

「スピアトルネード！！！！」

「琴線斬！！！！」

「ダイナミッククロス！！！」

鬼太郎の熾烈波、浦太郎のスピアトルネード、白鳥の琴線斬の音色、そして金太郎のダイナミッククロスがＡＭ０８の大砲の中に入り込み、発射しようとしていた砲弾を無理矢理押し込み中で爆発を起こす。

それを見ていた前線メンバーはこんな発想の攻撃を全く予想もしていなかったため、声を上げて驚くばかりだった。

「「「「「「うおおおおおお！！！！！！」」」」」」

「凄げーーー！！列車砲内の砲弾が誘爆してやがる！！！！このままじゃ大爆発だぜ！！！」

「四人とも！！！急いでアンゴルモア核を回収するんだ！！」

ヴィータの警告を聞いて、クロノは四人にアンゴルモア核の回収を指示するが、肝心の四人はクロノの応答に一切応じようとしない。

『金太郎さん！！！四人とも！！！！どうしたんだ！！！』

四人は全ての力を使い果たした所為で、意識が朦朧として返事をすることも出来なかった。

そして、四人がその場に跪いた瞬間・・・ＡＭ０８が大爆発を起こしてモニター画面が爆発の影響で何も見えなくなった。

「金太郎！！！！！！！！！鬼太郎！！！！！！！！！」

恋次の叫び声が空しく指令室に響き渡った。

爆発の光が収まると、シグナムははやてに状況の確認を報告する。

「・・・ＡＭ０８・・・沈黙しました・・・」

すると、フェイトからの報告が指令室に届くとスバルは四人が無事であるとことを確認してはやてに伝える。

「はっ！四人とも生存を確認！！！間違いなく生きています！！！」

爆発の中ですっかり動けなくなってしまった金太郎が三人よりも早く意識を取り戻すと、自分達の周りに施されるフェイトとザフィーラの防御魔法に気付き、炎の中を見ると・・・フェイトがバリアジャケットを身に纏い、ザフィーラが人型モードで無事に回収したアンゴルモア核を傍に置いていた。

「・・・フェイト殿・・・ザフィーラ殿・・・アンゴルモア核を・・・守ってくれたのですか・・・！？」

「はい。もう、安心してください。」

「・・・そうですか・・・それでは・・・後を頼みます・・・」

その後、フェイトの封印作業によってアンゴルモアと分離したオーリスはザフィーラの背中に背負われ金太郎達と供に一緒に回収されることになった。

「直ちに、ヴァイス君を向わせて四人の回収を！」

はやてはヴァイスを向わせると、オーリスを監査役のものに引き渡してフェイト達を六課の下へと連れて帰った。

その後帰ってきた四人は怪我の手当てを受けると、ユーノの下へ向う。

夕陽が照りつける自室のベッドで目を覚ましていたユーノは思い表情を見せる金太郎達に向かって言葉を掛ける。

「・・・金太郎・・・みんな・・・」

「・・・申し訳ありません店長！我々が不甲斐ないばかりに！！！」

四人はユーノに深々と頭を下げて謝罪の言葉をそれぞれ口にし、悔しさの余り涙を流していた。

それを見たなのははユーノに返事をしてあげるよう声を掛ける。

「・・・ユーノ君・・・」

「うん。何でそこまで泣く必要があるのさ？戦いは四人の活躍で無

事に終わったじゃないか！四人が頑張ってくれたから、オーリスさんも救われたんだよ♪」

「・・・店長・・・しかし・・・しかし・・・いや・・・ここは素直に喜ぶべきでしょう・・・有難うございます！！！」

「・・・うん。それでいいんだよ♪」

四人の顔を見ながら、ユーノは笑顔を振りまいた。

オーリスの復讐、ユーノへの思い（後書き）

教えて、ユーノ先生！

ユ「今日は、地上本部についてだよ♪」

ユ「ミッドチルダ地上本部は、厳格な体制で地上の正義を守っている新暦の時代に作られたもので・・・嘗てはレジアス・ゲイズ中将がその中枢を担っていた。」

ユ「また、古くから地上本部は海や空の部隊を始め、本局の魔導師とは亀裂が生じやすくその度に諍いが起こったりもする。」

ユ「つまり、簡単に言えばこの陸の部隊の人は魔法が使えないから魔導師のことを僻んでるんだよ・・・」

浦「でも僕・・・そんな地上本部で働いてた陸戦魔導師なんだけどな・・・」

ユ「案外浦太郎は人当りが良かったからいれたのかもね・・・」

浦「ふふふ！！僕の口先一つで上の連中なんかちょちょいのちょいだよ♪」

ユ「自惚れもほどほどにしなよ・・・」

魔導師図鑑ハイパー！

ユーノがロビーで本を読んでいると、突然後ろから・・・

ヴィ「悪い、ユーノ！」

ヴィータがユーノの目を押さえてきた。

ユ「わ！！何するのさ、ヴィータ！？」

ヴィ「ウルセー。大人しくしてくれ！」

シ「はあああああ！！！！」

そして、その瞬間シグナムがユーノの口にあるものを入れる。

ユーノがそれを徐に味わう。

ヴィ「どうだ！？」

ユ「うん・・・普通に美味しいよ！なんだいコレ？」

シ「ああ・・・主はやてが作ったお菓子なのだが・・・美味の癖に全く食べてくれる人がいなくてな・・・」

ユ「何でですか？」

すると、シグナムはお菓子の入った箱を取り出す。

シ「これだ。」

中に入っていたのは、タヌキの置物にそっくりな饅頭だった。

ユ「そりゃ食べないでしょう・・・・・・・」

苦笑いを浮かべるユーノ。

は「ユーノくんも六課のみんなも、美的感覚が可笑しいで！！！！！」

ユ「違うでしょ・・・」

アーミー・オーリス篇

オーリス・ゲイズ／ＡＭ０８

声：桑谷夏子

ＪＳ事件で殺害された地上部隊の実質上のトップであったレジアス・芸図の娘で副官でもあった女性。当時の階級は三佐。査察によって六課の失態を暴きそれを「海（本局）」や教会への攻撃材料に使おうというレジアスに対し、冷静に六課が何時でも切れるトカゲの尻尾に過ぎない状態にあることを指摘するなど理知的な性格。また、はやてやヴォルケンリッターなど、過去に事件を起こした者に対しては偏見を抱く節がある。父親の裏の面についても熟知しているが、それについて思うところはありながらも補佐に全力を傾けていた。

ＪＳ事件後は管理局に身柄を拘束されており、心身の静養の為にアーミーを訪れていたがそんな折にアンゴルモアの力に飲み込まれてしまい、父親を死に追いやった管理局とそれに繋がりを持つ組織に関して復讐を決意し、列車砲による攻撃を繰り返した。

列車砲『チョイバルサン』

オーリスと融合を果たしたＡＭ体の母体となる列車砲。アーミーの世界で破棄されていた旧暦の時代に使われていた１００センチの砲弾を発射し、あらゆる次元に対応できるように改造を施されたもの。砲弾の落下速度は音速の五倍から六倍を誇り、威力はユーノの絶対防御に近い翡翠の殻をも破壊する。

ライダーシステム（前書き）

今回はＮＥＷ電王さんのリクエストで『ディケイド』の世界を書いてみました。

仮面ライダーが苦手、もしくは世界観が壊れるのが嫌だという人は退出をお願いします。

挿絵に士君を載せてみました。

それでも読むというと人はどうぞ読んでみて下さい。

ライダーシステム

＞ｉ１３２６０―７０９＜

それは、ＡＭ０８を倒したその日の晩のことである。

機動六課の隊舎にあるラボには、計６個のアンゴルモアが厳重に封

印をかけられ保管されている。

当然、ラボに入るためにはそれぞれ個人識別用のパスワードが必要であり、滅多なことがない限り盗まれることなど無い・・・筈だった。

しかし、今此処にそんなことを一切無視してラボに侵入するものが居た事をこのとき・・・一人の人間以外誰も気付いていなかったのである。

「へへへへ・・・・・・・・・・――――――――――」

次の日の朝、その平穏はリィンによる叫び声によって破壊されることになる。

「大変です!!!!!!!!!」

食堂で朝食を取ろうと集まっていた全員に前にかなり慌てた様子で飛んでくるリィンを見て、全員を代表してはやてが尋ねる。

「どうしたんや、リィン!?そんな大きい声出して!?」

すると、リィンははやて達にラボの中の様子をモニターで見せる。

「これを見てください!!!!」

「え?」

そこに映し出されていたものとは、ものの見事にあらされる形跡も一切無いのに保管していた全てのアンゴルモアが奪い取られてしま

った痕であった。

「ラボに保管していた全てのアンゴルモアが・・・全部なくなっちゃったんです！！！！」

「「「「なっ！？」」」」

隊長陣とフォワードメンバー、恋次達は急いでリィンに連れられラボに向かい中を確認するとモニターで見たとおりものの見事に奪い取られた痕が目の前に寒々と広がってきた。

俄かに信じがたい光景になのは達全員は唖然とする。

「嘘だろ！？」

「そんな・・・！？」

「こんなことが！？」

その後、メンバー全員はシャーリーに昨夜のラボの様子を監視カメラでチェックさせ、その中身を確認した。

すると、そこには何一つ人影など映っておらず不可解に思ったクロノが詳細な画像解析をしてもらった結果、アンゴルモアを盗んだものはセンサーにも引っかからないほど巧妙な方法で姿を隠して、アンゴルモアを根こそ盗み取ってしまったのだ。

「何と言う奴だ・・・姿を完全に見えなくしてユーノの改良したセキュリティを破るなんて！？」

「クロノくん・・・犯人はやっぱり・・・・！？」

「恐らくスカリエッティの部下・・・破面魔導虚の仕業と見て間違いないだろう。」

すると、恋次は破面魔導虚の仕業であると聞いた瞬間床に拳をぶつけ、強い憎悪感と無常感にさいなわれた。

「くそがっ！！また連中に根こそぎ奪い盗られるなんて・・・俺達は何をしてたんだよ！？」

それを聞いていたシグナムやはやて、なのは達残りのメンバーも自分達の未熟な対応能力に強い後悔だけが残り、表情を暗くした。

「ああ。阿散井の言う通り、今回は我々全員の失態だな・・・」

「そうやな。これで敵の手に渡ったのは今迄私らが集めた6個のアンゴルモアと元々スカリエッティが手にしていた2個、計8個か・・・これはかなり痛いで・・・」

「心配はないよ、みんな♪」

すると、そんな全員の前に現れたのは車椅子に座った療養中のユーノであった。

全員はユーノの姿を見た途端目の色を変えて心配そうな表情を浮かべて近付いてくる。

「店長！まだ寝ていなければなりませんぞ！？」

金太郎がそう言ったあと、なのはは先程のユーノの言葉が気にかかり思わず尋ねる。

「えっ？ユーノ君・・・それってどう言う意味・・・！？」

そう言うと、ユーノは誇らしげな様子で甚平の中から四本の極普通の鉛筆を取り出す。

「じゃん♪」

この場には余りにシュールな代物を見た全員は愕然とした後、深い溜め息をついて恋次がみなの気持ちを汲み取ってユーノに返事をする。

「おいおいユーノ・・・んなもん出してどうだって言うんだよ・・・」

「見た目はただの鉛筆４本・・・でも正体は・・・こんな感じかな♪」

恋次にそう言うと、ユーノは左手に持っていた鉛筆を持ちながら右手の指を軽く鳴らす。

すると、鉛筆にかけられていた幻術が解けてその正体を現す。

それは――――――昨夜、ラボから根こそぎ奪い取られてしまった筈のアンゴルモアであった。

「「「「「ああああああ！！！！！！！」」」」」

「「「「なっ！？」」」」

「「「「ほ、本当に！？」」」」

その場にいた全員はまさかアンゴルモアをユーノがカモフラージュを施して密かに手元に持っていたとは知らなかったので、この光景はまさに地獄で仏である。

「体力と魔力が完全じゃない分・・・全てをカモフラージュするのは出来なかったけど、取り合えず４個だけは守り抜いたよ。夜中感じた妙な霊圧で目を覚ましてね、ラボに行っておいてよかった。」

「成程・・・！！」

「おまえ・・・何所までも抜けない奴だな・・・」

「でも、ユーノ君のお手柄だよ！！！ありがとう、ユーノ君！！！」

なのははこの上も無い笑顔でユーノに笑いかけると、ユーノ自身も満更でもない様子で頬を赤らめたのであった。

「いやいや、これぐらいどうってことないよ♪問題は奪われた２個だ・・・連中の手には少なくとも計４個のアンゴルモアがあるんだ。油断は出来ない・・・」

その頃、機動六課からアンゴルモア６個のうち２個だけしか奪い取れなかった破面魔導虚の一人、リヴァイアサンは心底悔しそうな表情を浮かべながらアルハザードに造られた自らのアジトに帰還していた。

すると、そんなリヴァイアサンの様子を見たアスモデウスが鼻で笑うと次のように口にした。

「してやられたな・・・リヴァイアサン・・・」

「うっせー!!俺はちゃんとやったぞ!図ったのはあのユーノ・スクライアって奴だ!!胸糞悪りー!!」

「・・・ほう・・・ユーノ・スクライアか・・・」

すると、その単語を口にしながらスカリエッティが奥のほうから現れる。

「ドクター・・・ご存知で?」

「勿論だよ。彼も私と同じ選ばれしものの一人だ。そうか、彼が六課に味方に付いたと言う事は・・・これは中々手厳しいな。何せ彼は私と匹敵するほどの頭脳の持ち主だ。一筋縄では出し抜けんよ。」

「では・・・これからどうするおつもりで?」

「急いで同胞を増やすとしよう。なに、アンゴルモアが今は4個もあるんだ・・・直ぐに作れる。待ってい給え、機動六課の諸君・・・そしてユーノ・スクライア!!私の最高の傑作達が君たちに絶望を味わらせて上げるよ・・・ふふふはははは!!!!!!!!!!」

ユーノの咄嗟の判断によって何と四個のアンゴルモアを守り抜くことに成功した機動六課の面々は、ユーノの設計した強化セキュリティの下で完全監守のもとアンゴルモアの管理を行うことを決定。

そして、次なるアンゴルモアを捜索すべく忙しい日々を送っていた機動六課の下に急遽本局からのこのような任務がはやてとクロノに舞い込んできた。

「え?はやてがクロノと!?」

「そうなんよ、フェイトちゃん!急に決まったたんやで!」

「これから僕達は本局が開発した対破面魔導虚迎撃用の新システム実験が行われるためその警護に向わねばならない。暫くの間、六課の留守を預かって欲しい。」

「けどよ、何で態々此処の責任者のお前らが護衛に向わないといけねえんだ?本局の連中も何考えてんだよ?」

フェイトとその場に居合わせていた恋次は今回の急な判断に些か疑問を抱いていた。

「それは本局の決定ですから、仕方ありません恋次さん。ところで、二人が留守の間は六課の責任者は誰になるの?」

「そりゃ勿論・・・恋次さんないの!」

「ちょっと待て!!!!!!!!何で俺なんだよ!!!!??嫌だからな、そんな面倒な役回り!!ユーノがいるじゃねえかよ!!!!」

はやての言葉を聞いた恋次は断固拒否の姿勢をとったが、はやては至って冷静な様子で恋次にこう言うのであった。

「ユーノくんは現在療養中や。なのはちゃんもフォワード五人の教

導の傍ら、ユーノくんの看病せなあかんといかんし、フェイトちゃんも似たようなもんや。」

「だからって俺である必要はあんのかよ!?吉良のほうがよっぽどそう言うのに向いてるだろ!!!」

「そこは隊長としての腕の見せ所や!しっかり頼むよ、三番隊隊長さん!!」

はやての言ってることは決し間違いではなかった。

肩に手を置かれた恋次は少々考え込むと、止むを得ずはやての言葉を聞き入れることにした。

「うっ!!ち!分かったよ・・・やればいいんだろう、やれば!!」

「ほな、臨時部隊長の阿散井恋次さん・・・留守の間はよろしくお願いしますわ!」

「君の隊長としての真価が問われる。精々頑張ってくれたまえ。」

「なっ!?てめえに言われるのが一番腹立つんだよ!!!!」

クロノの何所か上から目線の言葉を聞いた瞬間、恋次の頭の血管が切れクロノの顔を溢れるばかりの怒りを込めた鉄拳を直撃させた。

「のあああ!!!!」

クロノは恋次の拳を喰らって床に倒れると、脳震盪で暫く動けなくなった。

やがて、ヴァイスのヘリに乗って派遣先に赴くはやてとクロノであったが、クロノ自身は未だ何故殴られたのかがいまいち理解できず、腫上がった頬を手で撫でていた。

「痛てて・・・何もあそこまで殴ることないだろう・・・」

「クロノくんもその高飛車な性格直さんとあかんよ。ただでさえ皆普段からイラッと来てるってこの前ユーノくんが言ってたで！」

「あいつ・・・また根も葉もないことを平気で・・・僕に何の恨みがあるんだ・・・！」

「それにしても大きいな！！！あれがそうなん！？」

はやては目的の世界に到着すると、ヘリの上から一望できる巨大な研究施設を見て胸躍らせていたのであった。

「ああ。直径１０キロ・・・巨大な円形型をしているのがこの研究所の特徴だ。」

第１０管理世界『ディケイド』

時空管理局がどの世界よりも警戒を厳重にしている危険因子に満ちた世界。

事あるごとに常に何らかの危険因子が突然衝突を起こし、その度に管理局による干渉が行われてきた。

その世界で暮らす人々は不安と恐怖に怯えながらも生活を送ってい

けるのは、ある都市伝説が人々の心を支えているからだ。

それは、危険因子を退治し再びこの世界に平和を齎す異色の英雄の存在・・・それこそがこの世界の名の由来・・・“ディケイド”である。

今回、はやてとクロノがこの『ディケイド』に訪れたのは・・・本局の技術スタッフが開発した対破面魔導虚迎撃用の新戦闘システム実験が行われるディケイドに建造された化学実験施設『ＢＯＡＲＤ（ボード）』の警護の為である。

だがそれが、彼ら二人を誘い込む敵の罠であるということなど・・・二人は知る由も無かったのだ。

ヘリから降りた二人の様子を密かに護衛に来ていたユニゾンデバイスのリィンとアギトは草陰に隠れながらスコープで二人の様子を確認する。

「はやてちゃんと、クロノ提督の到着を確認です！」

「取り合えず、今のところ何にも無いみたいだな！」

アギトはそう言うと、スコープの先に映る二人を出迎える研究員の姿を確認。

「アイツが実験主任の・・・え～と・・・！？」

「橘（たちばな）さんですね！」

「そうそう！その橘・・・！！」

橘朔也（たちばなさくや）

このディケイドに造られた巨大な円形型の研究施設『ＢＯＡＲＤ』の設計を担当、さらにはライダーシステムという全く新しい戦闘方法を提唱、その開発に成功した科学技術者である。

「ようこそ、『ディケイド』においで下さいました。クロノ提督。」

「いえいえ。此方こそ、若輩のみでありますが全力を尽くす限りですよ・・・橘さん。」

「お会いできて光栄です、橘博士。八神はやて二佐です。」

はやては、橘の前に出てくると自己紹介の後に握手を求める。

「僕が現在出向している機動六課の部隊長を務めている。」

橘もはやての態度を見て、体裁を取り繕うと用に握手を返すと同じように自己紹介をする。

「私がこの研究所『ＢＯＡＲＤ』の設計及び実験主任の橘です。よろしくどうぞ。」

橘に案内され、はやてとクロノは研究所の地下に作られた特別実験施設に案内される。

そこに移動する途中、はやては橘から聞かされるライダーシステムという単語に首を掲げるのであった。

「ライダー・・・システム・・・ですか？」

「この世界には太古の昔から『ライダー』と呼ばれる特異能力者が存在し、その時代毎に姿も形もそして能力も変化しながら人々を災厄から守ってきました。しかし、今回我々は人工的にそのライダーの能力を作り出すことに成功しました。」

「それが・・・ライダーシステム・・・」

「ええ。発想のヒントは・・・八神二佐。あなたの故郷である地球から輸入しているんですよ。」

「え、本当ですか！？」

橘のこの言葉を聞いたとき、流石のはやてもはたまたクロノも驚きの表情を浮かべる。

「尤も、地球上ではライダーとは子供達に人気の特撮ヒーローという位置付けでしかありませんけど、現実に再現すればどれほどの戦力になるか・・・これからお見せいたしましょう。さっ・・・もうじきライダーシステムの実験が開始されます。」

二人は地下深くに建造された特殊実験施設に到着すると、手すりの下で行われようとしているライダーシステムの実験の様子を目のあたりにしていた。

「あれが、我がＢＯＡＲＤの開発したライダーシステム・・・『カードデッキシステム』です。」

はやてとクロノの目に浮かんできたのは、一見するとただのカード

デッキのようにしか見えない表面に龍の紋章が刻まれた黒いケースだった。

「見た目は普通のカードデッキのようですね・・・」

「あれでどうやってライダーに？」

「では早速ご披露いたしましょう。実験準備開始しろ！」

橘がそう言うと、研究員達は直ぐに実験を行うための準備を始める。

その頃、機動六課で臨時部隊長の役を受け持つことになった恋次は不満を自室のベッドで安静にしている筈のユーノにぶちまける。

「たく・・・何で俺がんなこと引き受けないとならないんだよ！」

「ついてない時もありますよ♪これも仕事のなんですから我慢しましょう♪」

「そりゃそうだけどよ・・・ところで、ユーノ・・・仮のも療養中なんだからよ・・・論文を書くのは別のときにしたらどうだ？」

恋次がそう言うと、ユーノは飄々とした態度で相も変わらずベッドの上で専門分野である考古学の論文を書き続ける。

「いや～～～これ来月号の原稿なんですよ♪こういう時にこそ書いておかないとまた何時発行できるか分からないですから♪」

「原稿って・・・何の原稿だよ？」

「これですよ♪『週刊フライデー』！！」

ユーノはそう言うと、机の引き出しからその雑誌を取り出し、恋次の前に見せ付ける。

「そういや・・・前に鬼太郎達がんなこと言ってたような・・・って！？あれお前が書いてたのかよ！？」

「そうですよ♪気付かなかったんですか？」

「気付くわけねえだろ！！大体、何時も店で論文書いてると思ったら・・・それに載せる為のものだったのか！！」

「そうに決まってるじゃないですか♪ミッドの考古学会を抜けた以上、研究の成果を発表できるのはこういう雑誌ぐらいだけですから♪」

「どこまでお前はそう言う奴なんだよ・・・ええ！！」

恋次の中から湧き上がってくるクロノとは違う別の怒り。

思わずユーノを殴りたいと思った恋次だったが、今ここで殴ればユーノ自身に後で何をされるか分からない上、傍にはそれ以上に恐ろしい白き魔王の存在を思い出したのか、此処は怒りを抑えて我慢することにしたのであった。

一方、ＢＯＡＲＤの地下実験所でライダーシステムの実働テストを行おうとしていた研究員達は準備が整ったことを主任である橘に伝える。

「主任、スタンバイ完了！いつでも実験始められます！」

「よし、それではカードデッキシステム・・・作動！」

そう言うと、実験フィールドに現れた適合者である男が予め装着していたベルトに例の黒いカードデッキをベルトに装着する。

「変身！」

すると、その瞬間全身を覆いつくす漆黒のアーマーとライダーの特徴の一つである複眼の仮面・・・・・・――――――

「「おお！！」」

はやてとクロノは魔法以外にこのようなことが現実に再現できるとは夢にも思わず、ただただ常人のように驚くばかりであった。

「あれが、カードデッキシステムによって変身したライダー・・・『龍牙』です。魔導師のバリアジャケットと違い、全身を覆い尽くすアーマー。そして特徴的なその仮面。それでは、軽くその力の一部をお見せしましょう。」

すると、変身した龍牙の前に現れるのは・・・・・スカリエッティが以前ＪＳ事件のときに広く用いた自立行動型の魔導機械『ガジェットドローン』に酷似した大型の物理兵器であった。

「あれは！？」

「ＢＯＡＲＤがライダーシステムの研究とその実験のために作り出した特殊ガジェットドローンです。今迄のそれとは性能も機動力も

まるで違います。今、彼があのガジェットを一人で倒して見せます。」

ガジェットの攻撃を容易に回避しながら、龍牙はカードデッキから一枚のカードを取り出し左腕に装着していたバイザーと呼ばれるガントレッド型のカードリーダーに上部カバーを開き、その中にカードを装填・取り出したカードを読み込ませる。

「ベントイン！」

〈ＳＷＯＲＤ　ＶＥＮＴ〉

その時、何所からとも無く頭上から降ってきた専用の剣が龍牙の目の前に突き刺さる。

はやてとクロノはこの光景に目を疑う。

「剣が現れた！？」

龍牙は剣を手に取ると、それを振り回しながらガジェットの身体を傷つけていく。

「はっ！！」

唖然とする二人を一瞥し、橘は薄ら笑いを浮かべながら更にこう言う。

「驚くのはまだ早いです。これからがこのライダーシステムの最たるところ！」

すると、龍牙は再び別のカードを取り出すと暗黒龍召機甲ブラック

ドラグバイザーに漆黒の龍がデザインされたカードを読み込ませる。

〈ＡＤＶＥＮＴ〉

その瞬間、龍牙の頭上から突如として現れる巨大な漆黒の龍・・・暗黒龍ドラグブラッカー。

クロノとはやては竜召還をした形跡も無いのに現れる体長６メートルを超える巨大な竜に目を奪われる。

「何だ・・・あのモンスターは!?」

「龍牙の契約モンスター・・・暗黒龍ドラグブラッカーですよ。」

「契約モンスター・・・!?」

「カードデッキシステムを使うライダー全てにはそれぞれ１３体の契約モンスターが居り、それが言わば彼らの力の根源です。バイオテクノロジーによって生み出した特殊な生物でしてね、契約者以外には実に凶暴ですので・・・決して近付かないで下さい。さて、そろそろ決着がつくでしょう」

龍牙はドラグブラッカーの攻撃によってすっかり動きが緩慢になったガジェットに止めを刺すために、カードデッキから自身のデッキと同じ紋章が描かれたカードを取り出し、装填する。

〈ＦＩＮＡＬ　ＶＥＮＴ〉

龍牙の必殺技は自らの体を空中に浮かせてからドラグブラッカーのエネルギーを受けて、左足で飛び蹴りを決める「ドラゴンライダーキック」。

「はあああああ！！！！！」

それを目の前のガジェットに向けて浴びせると、ガジェットは大爆発を起こして跡形も無く破壊されてしまった。

その恐るべき力を目にした二人が愕然とするのに対し、不敵な笑みを浮かべながら龍牙の力に感嘆する橘。

「素晴らしい！！嘗てここまで強大な力を秘めた戦士は存在しなかった。」

そんな橘に危惧の念を抱いたクロノが次のように尋ねる。

「これほど大きな力を持ったこのライダーシステムが・・・返って争いの種になったりはしないでしょうか？」

「ご安心下さい。既に、そうならないように対策は打ってあります。それこそ、互いに拮抗しあう力による抑制です。」

「互いに拮抗しあう力による・・・抑制！？」

「ライダーシステムは何もカードデッキシステムだけではありません。現在、この研究所にあるのライダーシステムは全部で９個。それぞれ、特徴的な力を秘めたライダー達ですので、万が一争いが起こったとしても・・・残りのシステムを使えば充分対処可能です。これで、魔導師などというものに頼らずとも・・・世界の秩序が保たれることでしょうな・・・ふふ」

「橘さん・・・」

橘の言葉に益々疑念と畏怖の念を抱くクロノとはやて。

「クロノ提督、申し訳ありませんがメインコントロールルームに行かなければならなくなりました。暫くご自由に・・・見学でもしていて下さい・・・それでは。」

橘が不気味な表情を浮かべながらその場を後にすると、二人は顔を見合わせある一つの答えを導き出した。

「「・・・うん・・・」」

そんな二人を他所にメインコンとロームと偽りある場所へと向う橘は、不気味な笑みを浮かべるとその正体を明らかにする。

「ふふふ・・・実に可笑しいことだ・・・」

すると、橘の姿が地球上に棲息する昆虫や甲虫に似た概観と特性を持つ異形の姿へと変貌を遂げる。

彼こそは、この地でライダーシステムの開発を行い密かに世界転覆を企む高度な知性と後述する特殊な形態・能力を駆使し、密かに人間を殺害しながら繁殖し続けている危険因子・・・『ワーム』の頭である。

「人間というのは何所までも愚かな生き物だ。誰一人、我々の存在に気付かぬとは！そう、あの管理局の魔導師でも・・・ふふふ！！！」

本来の姿に戻った橘は目の前に広がってくる元々此処で働いていた

研究員の死骸を誇らしげに見つめながら、薄ら笑いをする。

「最早・・・人間に勝ち目など無い。この世界も直我々『ワーム』のものとなる。そして全ての世界すらも・・・所詮人間など、我々の家畜として生きていれば良いのだ・・・ふふふふ!!!」

橘のその左手に握られている不気味な光を放つもの・・・それは紛れも無く別世界に散らばったはやて達の捜し求めるアンゴルモアであった。

そう・・・ワームがライダーシステムを作り上げることに成功したのは偶々別世界で手に入れたこのアンゴルモアがあったからなのだ。

ワームの陰謀など知らぬクロノ達は研究所内部を密かに探っていると、そこで彼らは信じられないものを目撃する。

「クロノ君!?」

「これは・・・!!」

そんな二人のことなど知る由もない機動六課の面々は夕方になると、それぞれの時間を満喫していた。

なのははヴィヴィオと供にユーノの部屋を訪れ、家族三人甘い一時を過ごしていた。

「ユーノ君・・・あ〜〜〜ん♪」

「あ〜〜〜ん♪」

何時ものように甘すぎる雰囲気を醸し出しながら、なのははウサギの形にカットしたリンゴをユーノの口の中に運ぶ。

「うふふ♪ユーノパパ、顔赤いね！じゃあ、今度は私が・・・はい、あ～～～ん♪」

「うん！あ～～～ん♪」

ヴィヴィオのほうもそんな父親の姿を見て微笑むと、なのはと同じようにユーノの口にリンゴを運ぶ。

「偶にはこういうのも悪くないな♪大好きな人に甘えられる機会なんて滅多にないから♪」

「ユーノ君は頑張りすぎだよ。何時だって私やヴィヴィオに甘えて良いんだよ♪だって、もう私達は家族なんだから♪」

「なのは・・・うん♪そうだね！」

なのは・ユーノ・ヴィヴィオの三人が平穏な時間を笑い合って満喫していた・・・丁度その時、隊舎中の前線メンバーに届くリィンとアギトからの緊急入電。

なのはとユーノもそれに気づくと、怪訝そうな表情を浮かべる。

「これって、リィンとアギトからの緊急入電？」

「二人とも何があったんだろう？」

そして、前線メンバーの前に映し出される動揺を隠しきれていない

二人。

『大変です！！はやてちゃんとクロノ提督の身が危ないんです！！』

『急がないとマジやばいんだって！！』

それを聞いた前線メンバー全員は直ぐに指令室に集まり、ユーノが作ったマシーンに乗って選抜されたヴィータ・シグナム・浦太郎の三人がリィンたちの下に向う。

「はやてがまさかこんな事に巻き込まれるなんて・・・絶対に私が助け出して見せるぜ！！」

「しかし護衛のはずの二人が捕まっちゃったら溜まったものじゃないよ。」

「はやてとクロノがそうなったってことは、敵も相当ヤバイ連中なんだろうな。気をつけないと私らもミイラにされちまう・・・シグナムも注意しろよ。」

「ああ。（無事でいてください・・・主はやて。クロノ提督。）」

三人が第１０管理世界『ディケイド』に到着すると、リィンとアギトと待つポイントまで向う。

三人の到着を待っていた二人の下に、シグナム達の姿を確認するアギト。

「おっ！シグナムの旦那！」

「済まぬ、遅れてしまったようだ。中の様子はどうだ？」

「はい・・・管理局施設というのはどうもデマだったようです。此処は既に廃棄された違法研究所のようですが、二人を誘き出すために虚偽のデータを送ったらしいです。しかも、本局上層部も誰一人疑いを持たぬよう入念に。」

「中はまるで迷路だぜ！おまけにＡＭＦ濃度も高い・・・魔法はあまり使えないと思うぜ！」

「くっ！兎に角突入せねば何も始まらん。私はアギトと北側から向う。ヴィータ、お前はリィンと東側を。浦太郎は西側を頼む。」

「おう！」

「はいです！」

「了解♪」

「よっしゃ！突入開始だ！！」

アギトとリィン万が一のことも考え予めシグナムとヴィータとユニゾンを果たし、それぞれのゲートからの突入を開始する。

シグナムが人気の無い研究所の地下深くへと入り込んでいくと、ある広い空間にたどり着く。

警戒をするシグナムであったが、そこでシグナムが見たのはあのおぞましい光景であった。

「何だ此処は!?人間の死体が大量に・・・!?」

〈うええ!!何つー気色の悪い!!〉

すると、シグナムの後ろからヴィータと浦太郎が合流をしてきた。

「シグナム!!」

「ヴィータ、浦太郎にリィンも無事のようだな。」

「ああ・・・それよりこの死体の山は何だよ!?見たところ・・・あまり人に自慢できる研究はしてなかったようだな・・・」

「うっ!!凄い腐敗臭!!!一体何の研究をしてたんだろ!?」

と、その時。

武器を構える三人の下に橘とその仲間である人死んだ研究員に擬態した8人の男たちが暗闇の中から姿を現す。

「ようこそ、時空管理局の魔導師諸君・・・」

橘の姿を確認したシグナム達は武器を彼らに向けて、次のように問いただす。

「お前か。主たちをこのような処に連れ込んだのは!?」

「ふふ!何とも莫迦な連中なことだ・・・ちょっと言葉を変えれば直ぐに信用してしまうんだからな。つくづく管理局というのは無知な連中の集まりだ!」

「てめえ!!!はやてのことを馬鹿にするのか!!」

「止せ、ヴィータ。挑発に乗っては奴らの思う壺だ。だが、これ以上の問答も不要というのも間違いではない。」

シグナムはそう言うと、アギトによって強化されたレバンティンに炎を灯して橘達を鋭い眼光で睨み付ける。

「時空管理局を敵に回した以上、ここで大人しく身柄を拘束させて貰うか!」

「ふふふ!!!愚かなことよ・・・貴様らは何一つ分かっていない。この我々・・・ワームという存在が既に貴様ら人間を遥かに超越した存在だということにな!」

「!?ワーム・・・だと?」

「ではどちらが優れているのか力試しと行こう。この我々が開発した・・・“ライダーシステム”を以ってして!」

橘達は薄ら笑いを浮かべると、各々が所持しているライダーシステムを取り出す。

一人は使用者の願いを具現化する力を持つ霊石“アマダム”を埋め込み作り出した変身ベルト・アークルを身体の中から取り出し、一人は龍牙のカードデッキを取り出し、一人は金色の携帯電話を開いて『０００』のコードを打ち込み、一人は黄色のケルベロスの描かれたカードをバックルに装填し、一人は黒い音叉を身体の何所かに当てると額に翳し、一人は飛んできたコーカサスオオカブトのよう

な機械を手に取り、一人は金色に輝くマスターパスを使って、一人は黒いコウモリに手を咬まれることで変身を可能とし、橘自身は黒いSと書かれたUSBメモリのようなものを取り出しスイッチを押す。

〈Standing by〉

〈SKULL〉

「「「「「「「「「変身!!」」」」」」」」」

〈Open up〉

〈Henshin cast off Change Beetle〉

〈Gaoh form〉

〈SKULL〉

9人はそれぞれに与えられた固有のライダーシステムによって、クウガ・ライジングアルティメト、龍牙、オーガ、グレイブ、歌舞鬼、コーカサス、牙王、ダークキバ、スカルへと変身を遂げる。

「「「なっ!?」」」

三人は今まで見たことも無いものの姿に絶句し、畏怖の念を覚える。

「ふふふ。これが・・・ライダーシステムの真の力の姿だ!!」

ライダーシステム（後書き）

教えて、ユーノ先生！

ユ「今日は特別篇と題して、ライダーシステムについて教えるよ♪」

ユ「ライダーシステムの根本的な発想は、地球で放映されている特撮番組の仮面ライダーシリーズからヒントを得ているんだね♪」

ユ「今回登場してきたライダーたちは殆どが劇場版と作中で実際に出てきた悪役ライダーが中心だったね。」

は「せやけどまさかライダーをネタにするとは・・・段々話の方向変わってあらへんか？」

ユ「クロスオーバーっていう点はいいと思うけど、肝心の死神要素が薄くなってるよね・・・」

恋「だったらもう少し俺の出番を増やしてもらうとかしろよな！！」

ユ「恋次さんの場合、技が単調すぎますから・・・そろそろ日番谷さんとか出したほうが話的には面白いと思いますよ♪」

恋「切実な感想をいうのはやめろ！！気にしてんだから！！」

井上織姫とシャマル先生の今日のお料理

一護とユーノは縄で巻かれ、口を鎖され身動きできない状況であった。

織「あなた、ユーノさん。野菜炒めを作るから！」

シャ「すぐに美味しいのを作るから楽しみにね♪」

料理をしている間、一護は背中越しのユーノに尋ねる。

一「グゴグアガカウグアイカハニアウア（何で、こうなるんだよ！？）」

ユ「ボヤオエヤカウヤクアキャエエイ（僕が知りませんよ！て言うか、シャマル先生の料理は危ないんですって！！）」

すると、こんな会話が聞こえてきた。

シャ「ちょっと、汁が出てきたわ。」

織「じゃ、シチューに変更しましょう！」

聞いていた二人は一瞬寒気が走る。

シャ「それナイスだわ！あ、スイカって野菜かしら？」

織「野菜ですよ！どんどん入れちゃってください！」

命の危険を感じた二人は何とか解こうとするも、こう言うと気に限って解けない。

織「出来た！」

シャ「美味しそうね！」

そして、運ばれてきた料理を見た二人は絶句。

一・ユ「！！！」

織・シャ「はい、どうぞ！」

一・ユ「モホウホアオア（もう嫌だ！！！！！）」

１０を名に持つ英雄

＞ｉ１３２６１―７０９＜

その頃、敵の罠に掛かり身動きの取れないはやてとクロノは現在死んだ研究員の死骸が転がる格納庫のような場所で蔓に絡まれている状態だった。

「駄目や！！ＡＭＦ濃度が高くて魔法が一切使えへん！！」

「くそ！！一体この研究所は何がどうなってるんだ！？」

二人が悪戦苦闘しているように、ライダーたちの猛攻をＡＭＦ濃度が比較的高い中で叩き続けるシグナム達三人。

「はあああああ！！！！」

アギトとユニゾンしているにも拘らず、自慢の剣碗を充分に発揮できないシグナムを子供のようにあしらうコーカサス。

「ふん。遅いですね！」

〈ｃｌｏｃｋ　ｕｐ〉

すると、コーカサスは目にも止まらぬ速さでシグナムを一方的に攻撃し、圧倒的な力を見せ付ける。

「〈のあああ！！！だああ！！！！うあああああ！！！〉」

シグナムとアギトを苦しめるこの超高速移動、クロックアップは・・・ワームが持つタキオン粒子の流れる目でなければ視認することはできないもので、ワーム側から見れば、クロップアップ中は自分たち以外の空間を流れる時間がほぼ止まっているに等しい。

「シグナム！！！」

「余所見してんじゃねえ！！」

リィンとユニゾンしたヴィータはシグナムのことが気にかかり戦いに集中しきれてなかった。

その為、隙を見た牙王の剣がヴィータの身体を斬り捨てる。

「のあああああ！！！！！」

剣の直撃を受けたヴィータはその瞬間リィンとのユニゾンを強制解除されてしまうことになった。

また、浦太郎のほうも魔法が殆ど使えないために槍撃のみで攻撃を行わなければいけない。

そんな圧倒的不利な状況の中で、浦太郎は自分よりも軽快な動きを見せるダークキバに苛立ちを感じていた。

「この！！ちょこまかと！！！」

浦太郎は我武者羅に攻撃を加えるが、そんな攻撃がダークキバに当たることはない。

「ふふふ・・・槍使いの魔導師よ・・・私の力を以って絶滅するがいい！」

ダークキバは腰に携えているフエッスルというものを手に取ると、ダークキバットベルトに止まるキバット?世にそれを吹かせる。

〈Ｗａｋｅ　ｕｐ　１〉

その瞬間、辺りは紅色に染まり地下であるはずなのに満月が浮かんでいた。

そして、ダークキバはポーズを取ると遥か上空へと舞い上がりそこからストレートパンチを繰り出す「ダークネスヘルクラッシュ」を浦太郎にお見舞いする。

「!?のあああああああ!!!!」

魔法防御すらも貫通するその破壊力に浦太郎は満身創痍になる。

三人がライダー達の猛攻を受けている間も、未だ身動きとれずもがき続けるはやてとクロノはもうどうする事も出来ないのかと一瞬諦めかけた・・・その時。

何所からとも無く飛んできた銃弾が二人を狙ってきた。

「なっ!?」

「何や!!」

だがその銃弾は決して二人を狙ったのではなく巻き付いていた蔓を狙ったのであった。

「おっ!!」

「助かってで・・!!」

身動きが完全に取れるようになった二人が前方を見たとき、暗い部屋の中で佇む一人の仮面を着けたこの研究所の者ではない全く知ら

ないライダーが二人を凝視する。

「き、君は一体!?」

「あなたも・・・ライダー・・・何ですか!?」

「ああ、そんなもんだ。詳しい説明は後だ!それより早くお前らの仲間を助けにいかないと手遅れになるぞ!」

二人はそう言われると、直ぐに頭を切り替えバリアジャケットを身に纏ってそのライダーと供にシグナム達の救援に向う。

そのシグナム達の方はというと、ライダーの猛攻によって寸での所まで追い詰められていた。

「ははははは!!!!弱い・・・弱いですね!!!!機動六課自慢の魔導師の実力がまさか此処まで脆弱とは。興ざめですよ・・・ふふふふふ!!!!!」

スカルに変身していた他のライダー達と一緒に地に這い蹲る満身創意のヴィータ・シグナム・浦太郎・リィン・アギトの五人を見下ろす。

「くっ・・・くそ!!ＡＭＦが無ければ・・・こんな奴らなど・・・!!!」

「はやて・・・を・・・助けないと・・・!!」

シグナムとヴィータがそう言ってそれでも尚戦おうとする中、スカルはやれやれと言った表情を浮かべて留めの一撃を加えようとした

ときだった。

ライダー達に向って長距離魔法弾が飛んで来たのは。

「!?」

橘達がそれをかわすと、状況を整理しようとする。

「何だ!?」

〈Ｂｌａｚｅ　ｃａｎｎｏｎ〉

すると、今度はクロノのブレイズキャノンが発射されライダーの一人であるグレイブの装甲を破壊し、消滅させた。

「グレイブ!!くそ!!一体どうなっている!?」

突然の光景に驚きを隠せない五人だったが、そんな五人の前に現れる騎士甲冑姿のはやてを見た瞬間、全員は安堵の表情を見せる。

「みんな、無事で何よりや!」

「はやて!!」

「はやてちゃん!!」

「ご無事で何よりです・・・主はやて。」

「よかったぜ!!!本当!!」

はやての肩を借りて起き上がるシグナム達の下に、防護服姿のクロノがデバイスを持ってライダー達に構える。

「済まない。救援に遅れた・・・彼が助けてくれなかったら、僕達もどうなっていたことか？」

「彼・・・！？」

浦太郎が怪訝そうに口に出した瞬間、暗い地底の奥から徐に歩いてくるトイカメラを首からかけた２０歳前後の青年。

青年はライダー達の前に現れると、雄弁に次のように語り出す。

「漸く正体を現したな・・・ワーム。アンゴルモアだか何だか知らないが、そんなものを使ってコソコソ企んでいたようだが、それも全て終わりだ。」

青年はそう言うと、研究所内に仕掛けていた爆弾を起動させて保管していた全てのライダーシステムを破壊する。

「なっ！？おのれ！！！よくも我がライダーシステムを！！！」

「お前たちのそれはライダーとは言わない。ライダーとは、常に人々の不安を拭い去り、悪という名の闇を滅ぼす・・・それこそがライダーという存在！お前たちのように、欲望のためだけに災厄をもたらす力を・・・俺は見逃すわけにはいかない！！」

「くっ！！貴様・・・何者だ！？」

青年は橘にそう尋ねられると、不敵な笑みを浮かべながら持ってい

た白いバックルを取り出すとそれを腰に装着する。

すると、左側にはライドブッカーと呼ばれる専用ツールが現われそこから青年は一枚のカードを取り出し、橘に向ってこう宣言する。

「通りすがりの仮面ライダーだ。覚えておけ！変身！！」

青年は開いたバックルに持っていたカードを装填し、変身を遂げる。

〈ＫＡＭＥＮＲＩＤＥ　ＤＥＣＡＤＥ〉

青年が変身したその姿は、身体はマゼンタを基調とした色で緑の複眼にバーコードを思わせる仮面を身に纏ったこの世界で生きる都市伝説であり全てのライダーを破壊する唯一の存在・・・ディケイドへと姿を変えた。

「「「「「なっ！？」」」」」

はやてとクロノ以外の五人は青年がライダーに変身を遂げると、その姿に驚きを隠せなくなり、橘達の方も青年が変身した姿を見て愕然とした。

「お、お前はディケイド！！まさか実在していたとは！？」

「ふん・・・俺は俺だ。ワーム共、お前たちの野望・・・全てこの手で破壊してやる！！」

「ええい！！ディケイドも諸共全て始末しろ！！」

橘の命令を聞いた残ったライダー7人は一斉にディケイドに向って

行く。

ディケイドの方もライドブッカーを手に取ると、走りながらソード形態に変化させてライダー達に斬りかかって行く。

すると、牙王が背後からディケイドに近付き剣を振り降ろそうとするのをはやて達はしっかりと見ていた。

「あかん！！ディケイドさんが！！」

だが、ディケイドはライドブッカーからカードを取り出しディケイドライバーに装填すると、ソード形態から銃形態へと変化させる。

〈ＡＴＴＡＣＫＲＩＤＥ　ＢＬＡＳＴ〉

銃形態のライドブッカーから撃ち出される銃弾を受けた牙王は装甲を傷つけられ、攻撃を中断してしまう

「ぬあああ！！！！」

「あのカードの入った箱・・・銃にも剣にもなるのかよ！？」

「中々やるな・・・あの男・・・！」

ディケイドの予想外の力に圧倒されっぱなしのシグナム達。

徐々にディケイドはライダー達を追い詰めていく中、橘はまだ諦めずに向かっていこうとする。

「まだまだ！！」

「ふん。似非ライダーと本物のライダーの違いを篤と味わうがいい！」

ディケイドはそう言うと、ケータッチと呼ばれる黒い筐体にマゼンタのストライプが入った外観のタッチパネル式携帯電話型ツールを取り出し、そこに専用のカードを入れるとパネルに浮かび上がったクウガからディケイドまでの紋章アイコンを順にタッチしていく。

〈ＫＵＧＡ　ＡＧＩＴＯ　ＲＹＵＫＩ　ＦＡＩＺ　ＢＬＡＤＥ　ＨＩＢＩＫＩ　ＫＡＢＵＴＯ　ＤＥＮ－Ｏ　ＫＩＶＥ・・・〉

電子音が鳴り響いた後、ディケイドはバックルを開いて最終形態へと変貌する。

〈ＦＩＮＡＬ　ＫＡＭＥＮＲＩＤＥ　ＤＥＣＡＤＥ〉

ディケイドは基本カラーが銀色と黒に、眼の色が緑から赤になり、頭部はコンプリートフォームのライダーカードが配された、すべてのライダーの頂点に立つ存在としての証ディケイドクラウンに変化、肩から胸にかけて装着された追加装甲ヒストリーオーナメントには、９人のライダーカードが配置された装甲へと変化、バックルも腰に当てられ元の位置にはケータッチが填められる。

「「「「「なっ！？」」」」」

「「「「「「「「「「そ、それは！？」」」」」」」」」」

「これがライダーという真の存在が使うことを許された・・・力の姿だ！！」

ディケイドはライドブッカーを再びソード形態にすると、刀身を軽く手で撫で橘達を斬り付けていく。

「はっ！はっ！！はっ！！！」

防戦一方のライダー7人はディケイド・コンプリートフォームに明らかに圧されている。

ディケイドは一度ケータッチを取り外すと、パネルに表示された龍騎の紋章をタッチし、「F」の文字をタッチ。

〈ＲＹＵＫＩ　ＫＡＭＥＮＲＩＤＥ　ＳＵＲＶＩＶＥ〉

これにより紋章に対応した各最強フォームの仮面ライダーを実体のある分身として召喚し、その能力をディケイドに投影すし、召喚時はヒストリーオーナメントの全てのカードが召喚された最強フォームのライダーのカードに替わる。

今回召還したのは仮面ライダー龍騎・サバイブである。

ディケイドは龍騎のファイナルアッタクライドカードを装填させる。

〈ＦＩＮＡＬ　ＡＴＴＡＣＫＲＩＤＥ　ＲＹＵ、ＲＹＵ、ＲＹＵ、ＲＹＵＫＩ〉

同じように必殺技を繰り出そうとする龍牙がディケイドに襲い掛かってくるが、ディケイドの動きに連動した龍騎と供に炎の剣の一撃を炸裂、見事龍牙とドラグブラッカーを消滅。

同じ要領で、今度は電王の最強フォームであるライナーを呼び出す。

〈ＤＥＮ－Ｏ　ＫＡＭＥＮＲＩＤＥ　ＲＩＮＥＲ〉

電王・ライナーフォームが現れるとディケイドはファイナルアタックライドを発動。

〈ＦＩＮＡＬ　ＡＴＴＡＣＫＲＩＤＥ　ＤＥ、ＤＥ、ＤＥ、ＤＥＮ－Ｏ〉

二人の後ろから出現した金色のレール上を滑るように移動しながら後方より現れるオーラライナーと共に突撃するライナースラッシュを牙王に仕掛け、これを消滅させる。

さらにディケイドの猛攻は止まらない。

〈ＫＵＧＡ　ＫＡＭＥＮＲＩＤＥ　ＵＬＴＩＭＡＴＥ〉

ディケイドはクウガアルティメットを召還して、ライジングアルティメットを打ち倒そうとする。

〈ＦＩＮＡＬ　ＡＴＴＡＣＫＲＩＤＥ　ＫＵ、ＫＵ、ＫＵ、ＫＵＧＡ〉

二人の連動した途轍もない威力を秘めたキック技がライジングアルティメットに直撃し、爆発を起こして消滅する。

「凄い・・・これが彼の・・・ディケイドの力か！？」

「一魔導師と渡り合えるどころか・・・オーバーＳランク魔導師に

匹敵する力や！！」

その後もディケイドはコンプリートフォームの力をふんだんに使って、スカルに変身した橘以外のライダー全てを葬り去る。

「さぁ、どうするよ？仲間はみんなやっちまったぜ。残すはお前ただ一人！」

「くっ！！まだ終わらぬ・・・我がワームが貴様ら如き人間などに駆逐されると思うたか！！！見せてやる・・・本当の絶望を！！！」

橘はそう言うと、アンゴルモアを取り出して限界ギリギリまでそれを発動させると倒されたライダー達の残骸を全て取り込み巨大な怪物の姿であるＡＭ０９へと変貌。

それをディケイドの隣に来て見ていたクロノ達は驚愕の表情を見せる。

「なっ！ＡＭ０９に進化したのか！？」

「こいつは相当デケーな・・・！！」

ＡＭ０９は圧倒的な破壊力を秘めたエネルギー砲をディケイドとはやて達全員に発射。

「「「「「「うわあああああ！！！！！」」」」」」

それを直撃した瞬間、全員は爆風によって吹き飛ばされ大怪我に近い状態になる。

ディケイド自身もコンプリートフォームが解けてしまい、既に立つこともままならなくなっていた。

「ははははははははは！！！！！虫けらとはこのことを差すのだな！！！！脆弱な人間どもよ・・・我が力の前に屈しているがいい！！！！」

すると、満身創痍になりながらはやては力を振り絞ってシュベルトクロイツ片手に立ち上がり険しい表情を浮かべながらＡＭ０９にこう口にする。

「・・・誰が・・・そんなことすると思ってるんや・・・！！私ら機動六課が・・・時空管理局が世界を守らな・・・誰がここでお前を止めるん！！」

はやての言葉に励まされるように、クロノや他のメンバーも徐に立ち上がり鋭い目線をＡＭ０９に向ける。

「そうだ・・・僕らがここで止めなければ・・・世界はお前みたいな奴の所為で・・・再び闇に沈む・・・！！そんなことは・・・絶対にあってはならない！！」

「ここで我々が負けることは・・・あってはならぬ！！」

「舐めんな・・・私らの実力をな！！」

それを聞いていたディケイドは、鼻で笑いながら同じように力を振り絞ってはやて達の前に立ち上がり、ＡＭ０９に雄弁と語り出す。

「こいつらの言う通りだ・・・！！俺達がここで戦わずして・・・

世界の平和はありえない！！世界の破壊者と忌み嫌われ、この地に居座り・・・戦い続けてきた俺だからこそ、最も世界の平和を望んでいるんだ！！それを壊そうとするのなら・・・たとえ刺し違えてでもお前を倒す！！俺達全員の力で！！」

と、その時。

ライドブッカーか突然開いたかと思いきや、クラインの壺から三枚のカードがディケイドの手元に飛んできた。

そこに印刷されているのは、何らかの武器の姿とはやて・クロノ・浦太郎の三人が映ったファイナルフォームライドカードであった。

「・・・ふん、面白い！」

ディケイドは早速はやてが描かれたカードをディケイドライバーに装填する。

〈ＦＩＮＡＬ　ＦＯＲＭＲＩＤＥ・・・ＨＡ、ＨＡ、ＨＡ、ＨＡＹＡＴＥ〉

「おい、嬢ちゃん。ちょっとくすぐったいぞ！」

「はい！？えっ・・・何する気で・・・」

ディケイドの言葉の意味を理解できないでいるはやてを他所に、ディケイドははやての背中に回りこんで徐に両手を突き刺すように背中に入れると、はやての身体が唐突に変化し始める。

「ななな・・・何やこりゃ！！？？」

皆が驚愕する中恐らく当の本人が一番驚いているであろう、はやてはディケイドの力によって自身がデバイスの姿となった巨大な十字型の杖・・・『はやてクロイツ』に変貌しディケイドの手中に収まる。

「主はやて！！！？？？」

「はやての形が変わりやがった！！」

はやての姿が変わったことに終始驚きっぱなしのシグナム、ヴィータ、リィン、アギトの四人。

「序に・・・お前たちもだ！」

そう言うと、ディケイドはクロノと浦太郎が描かれたカード二枚を装填。

〈ＦＩＮＡＬ　ＦＯＲＭＲＩＤＥ・・Ｕ、Ｕ、Ｕ、ＵＲＡＴＡＲＯ　Ｃ、Ｃ、Ｃ、Ｃ、ＣＲＯＮＯ〉

「痛みは一瞬だ！」

ディケイドは片方の手しか使えないため、足蹴りで器用に二人の背中に直撃させて形状を変化させる。

「なっ！？これどうなってるの！？」

「うわ！僕までか！？」

「う、浦太郎とクロノが！？」

浦太郎は自身の使うデバイスとは全く関係なく、巨大な青いレイピア状の形に変化した『ウラタロウレイピア』に、クロノも同じくデバイスとは無関係なカノン砲のような形状に変化した『クロノカノン』の姿になると、それぞれシグナムとヴィータの手中に収まる。

レイピアを受け取ったシグナムは鼻で笑うと、アギトとユニゾンを果たす。

「ふん。成程・・・悪くない。」

「面白れー！！」

ヴィータもやる気になったのか、リィンとユニゾンを果たしてその小さな身体で普段は使うことの無い重火器となったクロノを肩に担ぎ、ＡＭ０９に照準を合わせる。

「行くぜ、お前ら！」

ディケイドは、はやてクロイツを片手に持ちながら三枚のファイナルアタックライドカードを装填する。

〈ＦＩＮＡＬ　ＡＴＴＡＣＫＲＩＤＥ　ＨＡ、ＨＡ、ＨＡ、ＨＡＹＡＴＥ　Ｕ、Ｕ、Ｕ、ＵＲＡＴＡＲＯ　Ｃ、Ｃ、Ｃ、ＣＲＯＮＯ〉

三人は魔力を一気に高めると、はやてクロイツの特殊バインドによって動きを封じた瞬間にシグナムの剣戟、ヴィータの砲撃、そしてディケイドの超遠距離魔法がＡＭ０９に同時に直撃する。

「「「はあああああ！！！！！！」」」

その攻撃を受けたＡＭ０９は大爆発を起こすと、体中からプラズマのようなものを溢れ出しながらこんな筈ではなかったとばかりに言葉を残して完全消滅をしていく。

「ば・・・莫迦な・・・！！我々ワームが・・・お前ら如き下等な人間になど・・・のあああああああああああああ！！！！！」

消滅と供に爆発していくＡＭ０９。

爆炎の中からはアンゴルモアが飛び出していき、シグナムはそれを素早く封印するとレバンティンの中に収めた。

全てに決着がつくとはやてもクロノも、そして浦太郎も元の姿に戻る。

「終わったな・・・」

「ああ。」

その後、研究所の地下から出てきたはやて達とディケイドとなった青年はすっかり暗くなり満月が浮かぶ中で、暫く談笑をすると青年はバイクにまたがりはやて達の前から立ち去ろうする。

「本当に行ってしまうんか？まだ話したいことがギョウサンあるのに？」

「言ったろ・・・俺は通りすがりの仮面ライダーだと。まだこの世界で旅を続ける必要があるんだ。俺に待つ使命と居場所がそこにあ

ると信じてな・・・」

「・・・そうか。ならば仕方ない。元気でな・・・ディケイド。」

「もしもいずれ会う機会があれば、私と戦ってくれるか？」

「シグナム・・・またかよ・・・」

「懲りない人だね・・・」

シグナムの燃える闘争心を見ながら、アギトを除きヴィータと浦太郎、リィンは呆れた様子を見せていた。

「ふん。ああ・・・その時は相手になってやるさ！」

鼻で笑った青年もシグナムの誘いを受けると、再開のときを願ってバイクを走らせ夜の世界を駆け抜けていった。

「・・・『仮面ライダーディケイド』・・・風のように現れ風の様に去って行ってしもうた・・・」

「だが、お陰で僕達は窮地を脱した。彼には感謝しないとな。」

その日の夜遅く、機動六課の自室で月を見ながら感慨に耽っていたユーノは突然部屋の前に現れる灰色のカーテンから出てくるディケイドの青年にこう口にする。

「・・・今日は、はやてとクロノがお世話になりました。」

「別に大したことじゃない。ワームを殲滅できたのは、あいつらの

力があってのものだ。寧ろ、俺が感謝してるくらいだぜ・・・ユーノ。」

「兎も角、これつまらない物ですけど良かったら受け取ってください♪」

ユーノはそう言うと机の上に置いてあったミッドでも有名なお茶菓子をその青年・・・『門矢士(かどやつかさ)』に手渡す。

「ありがとな。頂いておく・・・お礼と言っちゃ何だが、俺からもプレゼントだ！」

士はお茶菓子のお礼だと言ってはやて達と話していたときにコッソリトイカメラで撮った写真をユーノに渡すが、それは最早写真とは言いがたい程酷く歪んでいたため、ユーノ自身これには苦笑するしかなかった。

「あははは・・・士さん・・・写真はもう少し綺麗に撮ってくださいね・・・」

「文句は俺に言うな。世界が俺に撮られたくないと思っているんだ。文句なら世界に言え！！」

「はいはい・・・じゃあ、また会う機会を楽しみにしてますよ♪」

「今度は何時会えることやらな・・・まぁでも、気が向いたら助けに来てやるからよ！」

そう言うと、士は現れたときと同じ灰色のカーテンの中に入り込んでいくと自分が旅を続ける世界へと戻っていった。

「・・・本当に素直じゃないな・・・士さんは・・・でも、有難うございます。」

１０を名に持つ英雄（後書き）

教えて、ユーノ先生！

ユ「今日は特別篇第二段、仮面ライダーディケイドについてだよ♪」

ユ「ディケイドとはラテン語で１０を意味し、英語では１０年間を表す。」

ユ「今回、このディケイドに変身した門矢士さんは、僕とはちょっとした仲でね・・・偶に連絡を取り合って情報交換したりしてるんだ♪」

ユ「性格は見ての通りの高飛車な性格だけど、クロノと違って根は凄くいい人だから僕も嫌いじゃないんだ♪」

ク「おい！！その言い方だと・・・僕が大嫌いと言ってるように聞こえるぞ！！！」

ユ「嫌だな♪大嫌いなもんか・・・死ぬほど嫌いなんだよ♪（笑顔）」

ク「お前！！！！！もう我慢の限界だ！！！！！（クロノ激怒。デバイス発動させる）」

ユ「ほらほら、こっちだこっち♪（軽くあしらう）」

ク「待て待て！！！！！」

士「何だかんだ言っても・・・お前らって仲良しだよな・・・」

魔導師図鑑ハイパー！

吉「あれ？」

吉良が扉を開けると、そこは給湯室。

ギ「うふ。ここは給湯室ですよ。」

吉「あ、いや・・・間違えちゃった。」

二人は歩きながらこんな内容の話をしていた。

吉「すまないね。三ヶ月もいるのに時々道に迷うことが合ってね・・・」

ギ「仕方ないですよ。向こうの世界とこっちとじゃ、勝手も違いますから。」

すると、そんな二人の前に恋次が現れる。

恋「全くだぜ。」

吉「阿散井君・・・？」

恋「いや・・・俺もさっき迷っちまってな・・・入り込んだ場所がシグナムの私室でな・・・」

恋次はその時、シグナムにこの世のものとも思えない罰を受ける。

その結果、顔中痣だらけになっていた。

恋「いや～～～ほんと死ぬかと思ったぜ！！」

そんな笑っている恋次を見ていた二人は冷や汗をかく。

恋「あ？どうしたんだよ？」

ギ「い、いえ・・・」

吉「何でもないよ・・・」

ディケイド篇

門矢士（かどや つかさ）／仮面ライダーディケイド

声：井上正大

「異世界関係／ユーノの交流者」を参照

橘朔也（たちばな さくや）／　仮面ライダースカル／ＡＭ０９

声：天野浩成

ディケイドに建造された対破面魔導虚迎撃用の新戦闘システム実験が行われる化学実験施設『ＢＯＡＲＤ（ボード）』の研究所長。だが実はそれは表向きの顔であり、実際はアンゴルモアの力を使ってライダーシステムを作り出し、世界を屈服させようとしているワームと呼ばれる存在であった。はやてやクロノ達、更には救援に駆け付けたシグナム達をその力で追いつめるが仮面ライダーディケイドである士の登場で計画は失敗に終わり、敗北することとなった。

仮面ライダー

仮面ライダーディケイド

門矢士が変身する仮面ライダー。基本カラーはマゼンタ。「全てのライダーを破壊する存在」「全ての破壊者」「世界の破壊者」「悪魔」とも呼ばれる。様々な並行世界のライダーの力を受け継ぐとされ、後述のカメンライドにより他のライダーに変身できる。様々な異世界やミラーワールドを自在に行き来することが出来、原典では特殊な方法でしか倒せない怪人（アンデッド、魔化魍）も倒すことが可能。アタックライドにより、ライドブッカーの各モードにおける強化技である「ディケイドスラッシュ」や「ディケイドブラスト」、自身を分身させる「ディケイドイリュージョン」を発動する。また、各世界のライダーを支援兵器または武器に変形＝ファイナルフォームライドさせ、ファイナルアタックライドにより必殺技を繰り出すこともできる。又、この時に現れるカードのエネルギーはディケイドだけでなく、他の仮面ライダーや搭乗した機体が共に潜り抜ける事でも効果を発揮できる。ボディのいたるところに「１０」を意味する「十」や「Ｘ」の意匠が取り入れられている。

ディケイドが使用するアイテムにはディケイドの顔を模したマーク（ディケイドマーク）が描かれているが、これはバーコードがモチ

ーフとなっている。

必殺技：「ディメンションキック」

ファイナルアタックライドにより自分と標的との間に現れる複数のホログラムカードを通過することで、それらのエネルギーを自身に集中させて放つ跳び蹴り。

必殺技：「ディメンションブラスト」

ライドブッカーの各モードを最大強化して放つ中で、ブラストモード時おける必殺技。

必殺技：「ディメンションスラッシュ」

ライドブッカーの各モードを最大強化して放つ中で、スラッシュモード時おける必殺技。

コンプリートフォーム

9人のライダーの力を取り戻したディケイドが、ケータッチを用いてファイナルカメンライドしたディケイドの最強形態。別名歩く完全ライダー図鑑。基本カラーが銀色と黒に、眼の色が緑からマゼンタになり、頭部はコンプリートフォームのライダーカードが配された、すべてのライダーの頂点に立つ存在としての証ディケイドクラウンに変化、肩から胸にかけて装着された追加装甲ヒストリーオーナメントには、9人のライダーカードが配置される。なおバックル部にはケータッチを装着し、取り外したディケイドライバーのバックルはベルトの右腰に装着する。カメンライドしなくてもクウガからキバまでの9ライダーの能力を発揮できる他、戦闘能力が他のフ

ォームよりも上昇しているが最強フォームでは珍しく専用武器が無く、ライドブッカー（主にソードモード）を使用する。ケータッチでカメンライドを発動することにより、カードに対応する9ライダーの1人を実体のある分身として、最強フォームの状態で召喚する。召喚されたライダーはディケイドとシンクロした動きをとる。召喚時はヒストリーオーナメントの全てのカードが召喚された最強フォームのカードに替わり、その能力がディケイド自身に投影され、自在に他のライダーの最強フォームの能力を発揮することが可能となっている。それぞれに対応したファイナルアタックライドのカードをディケイドライバーに装填することによって、各最強フォームの必殺技を、召喚したライダーと同時に発動する。武器を用いた必殺技はライドブッカーソードモードで代用する。斬撃、光線の色はディケイド側はマゼンタ。

必殺技：「強化ディメンションキック」

ディメンションキックの強化版。

カメンライド

カードによってディケイドや他の仮面ライダーに変身した形態及びその変身能力の総称。ディケイドが使う「トリックスター」と呼ばれる動力源を代用とすることで、適合条件（ファイズの「オルフェノク因子」、ブレイドの「アンデッド融合率」、電王の「特異点」、キバの「魔皇力」など）が必要なライダーへの変身を可能にしている。カメンライド時の姿は、ベルトがディケイドライバーであること以外はオリジナルと同様である。そのため、オリジナルのライダーがベルトで引き出す能力（クウガやキバのフォームチェンジ、カブトのクロックアップなど）や、それぞれ異なる種類のカードを必要とする能力（例：龍騎のアドベントカード、ブレイドのラウズカ

ード）は、フォームライドやアタックライドで代用する。また対応するライダーのファイナルアタックライドにより、必殺技も発動できる。強いダメージを受けると、ディケイドの姿に戻る。

召喚したライダーとの必殺技

仮面ライダークウガ　アルティメットフォーム：アルティメットキック
仮面ライダーアギト　シャイニングフォーム：シャイニングクラッシュ　／　シャイニングライダーキック
仮面ライダー龍騎サバイブ：バーニングセイバー
仮面ライダーファイズ　ブラスターフォーム：フォトンバスター　／　フォトンブレイカー
仮面ライダーブレイド　キングフォーム：ロイヤルストレートフラッシュ
仮面ライダー装甲響鬼：音撃刃・鬼神覚声
仮面ライダーカブト　ハイパーフォーム：ハイパーライダーキック　／　マキシマムハイパーサイクロン
仮面ライダー電王　ライナーフォーム：デンカメンスラッシュ
仮面ライダーキバ　エンペラーフォーム：ファイナルザンバット斬　／　エンペラームーンブレイク

専用ツール

ディケイドライバー

ディケイドの変身ベルト。普段はバックルの状態で、装着者の腰に当てることでベルトが伸長して装着される。バックル部にはクウガからキバまでの紋章（ライダーズクレスト）が描かれている。バックル両側のサイドハンドルを外側に引くことで、バックルが９０度回転してカード挿入口が

上部に露出する。そこにライダーカードを装填すると、そのカードの種類が発声されて待機音が鳴る。ハンドルを押すことでそのカードの能力名（ファイナルフォームライド、ファイナルアタックライドは「ディディディ　ディケイド」のようにスクラッチ調の音声）が発声され、同時にカードの裏面に描かれたライダーの紋章が投影されて効果を発揮する。ディケイドがカメンライドにより他のライダーに変身しても変異せず残り、引き続きカードの力を行使することができる。なお、バックルは脱着も可能であり、ディケイドがコンプリートフォームに変身した際はバックルのみ右腰に装着され、カードを装填後にバックルを叩くことでカードの効力を発揮する。

ライドブッカー

左腰に携行される本型の専用武器。内部はクラインの壺へと通じており、ここにライダーカードやエネルギーを無尽蔵に貯蓄している。カードバインダー型のブックモード、剣型のソードモード、銃型のガンモードの3形態をとる。ディケイドライバー同様、ディケイドが他のライダーに変身しても変異せず残る。また、ディケイドが他のライダーに変身した時にソードモードを使うと、斬撃音がそのライダーの武器と同じになる。専用武器が無いコンプリートフォーム（おもにソードモード）も使用する。

ライダーカード

様々なエネルギーを2次元の世界に封じ込めたカード。普段はライドブッカーに収納されており、ディケイドライバーに装填することで封じられたエネルギーを解放し、各々の効果を発揮することができる。描かれたライダーに変身するカメンライド、他のライダーに変身した状態からさらにフォームチェンジするフォームライド、武器の呼び出しや技・特殊能力が使えるアタックライド、コンプリー

トフォームに変身するファイナルカメンライド、他の仮面ライダーを変形させるファイナルフォームライド、必殺技を発動するファイナルアタックライドなどが存在する。ブッカーから取り出す際には、バイクのエンジン音のような効果音が鳴る。またディケイドが直接ブッカーから取り出す場合もあれば、カード自体がディケイドの手元に飛んでくる事もある。また、手裏剣のように投擲武器として使用することもある。

ケータッチ　（Ｋ－ＴＯＵＣＨ）

ディケイドをコンプリートフォームへとファイナルカメンライド＝強化変身させる、タッチパネル式携帯電話型ツール。黒い筐体にマゼンタのストライプが入った外観。専用のコンプリートカードを挿入した後、パネルに浮かび上がったクウガからディケイドまでの紋章アイコンをクウガから順にタッチする事で電子音声が発生され、ディケイドライバーのバックル部をケータッチと差し替える事により変身完了する。変身後はパネルに表示されたアイコンを、ライダーの紋章から「Ｆ」の文字の順にタッチする事で、「ライダー名・カメンライド・フォーム名」という電子音声を発声する。紋章に対応した各種の最強フォーム状態の仮面ライダーを実体のある分身として召喚し、その能力をディケイドに投影する。またケータッチ自体もこのフォーム中で着脱でき、操作する（ライダーを召喚する）際は一度手元に持って行うことがある。

マシンディケイダー

ベース車　－　ホンダ・ＤＮ－０１
全長：２３２０ｍｍ
全幅：８３５ｍｍ
最大出力：１４７ｋＷ

最高時速：３５０ｋｍ
士が乗用する専用バイク。基本カラーは白、黒、マゼンタ。通常時はＶ型２気筒エンジンによるガソリン走行だが、戦闘時はクラインの壺から無尽蔵の次元エネルギーが供給され、あらゆる環境を走破することに加え、アタックライドによりボディを変異させて他のライダーのマシンに変形するスーパーマシンとなる。さらに並行世界の移動や陸・海・空・宇宙空間での走行、ミラーワールドへの突入やディケイドの意思による無人での自動走行も可能。

地獄のデスレース

＞i12353—709＜

それは、何時もの機動六課指令室での恋次の一言から今回の任務は始まる。

「何だと!?バイクレースの優勝商品にされちまってる!?」

恋次はユーノから聞かされる今回のアンゴルモアの在り処を聞いた瞬間、思わず聞き返してしまった。

「間違いないですね。第８１管理外世界『サーキット』・・・そこで毎年開催される異世界中のバイクレーサーが一同に集まる年に一度の祭典、『Ｆｒｅｅｄｏｍ　ｂｉｋｅ　ｔｏｕｒｎａｍｅｎｔ』・・・通称ＦＢＴの優勝商品にアンゴルモアが選ばれてしまったようです。」

「確か、あそこの世界って・・・レースに関しては特別な法律があるんですよね・・・」

「特別な法律って!?」

ティアナのその言葉を聞いていたスバルは、ティアナに向ってその法律の中身を尋ねると、代わりにフェイトとはやてがスバルの質問に答える。

「“レースに出場できる選手とそのスタッフにはその素性と経歴を一切問わない”だよ。」

「つまり、観客を熱狂させてくれれば悪人だろうが犯罪者だろうが全然オッケーってことや！」

「かなり・・・無茶苦茶な法律ですね・・・」

スバルと同じように、聞いていたエリオやキャロ、ギンガもその法律の中身に唖然。

また、鬼太郎自身はその中身を聞いた途端以前地球でやったことのあるテレビゲームの中身と酷似していることに気付く。

「け！何処かのレースゲームの設定にそっくりだぜ！」

「まぁ～でも、アンゴルモアがレースに商品にされちまってるんなら・・・急いで回収しに行こうぜ！」

すると、恋次の言葉を聞いた瞬間浦太郎が否定の言葉をぶつける。

「無理ですよ、恋次さん。」

「何でだよ？」

その恋次の疑問に答えたのはユーノであった。

「トーナメントが開催されるまで、優勝商品は何が何でも表舞台には決して姿を現さないようにしてるんです。しかも、もし盗もうとする輩が現れれば・・・厳格な刑罰によって禁固１００年以上が課せられますよ♪」

「１００年！？そ、そいつはちょっと勘弁だぜ・・・！！」

「では、一体どうすればいい？」

吉良は如何にしてアンゴルモアを回収すれば良いのかをユーノに尋ねようとすると、金太郎がそれの答えを口にするのであった。

「詰まる所・・・レースに出場して勝たなければなりませぬ。」

「レースに・・・出場ですか？」

金太郎の言葉でなのは達の様子は騒然となる。

クロノは一度咳払いをして事態を収拾すると、ティアナ以外のフォワードメンバーと恋次や吉良にレースに於ける詳細な規定を説明する。

「一チーム三人ずつの出場で、そのうち一人でもトップでゴールすればそのチームの優勝となり商品を手に出来るという訳だ。」

「なら話は早いもんだぜ！！レースに出場して勝てば良いんだろう・・・こんな簡単なことは他にないぜ！！」

恋次は手を叩くと、指令室を飛び出し目的地であるサーキットでのレースのためのバイクをヴァイスから調達しようとしたその時、ヴィータの次の言葉を口にする。

「おい、待てよ恋次！！聞くが・・・お前バイク乗ったことあるのかよ！？」

すると、痛いところを突かれた恋次はその場に立ち止まるとあから

さまな様子でヴィータや他の全員にこう言う。

「げっ！そ、そんなもん気合でどうにか出来るってーの！！バイクも自転車も似たようなもんだろ！！」

「あの恋次さん・・・私から言わせて貰えば、バイクと自転車は全然違いますよ・・・」

ティアナは隣にいるスバルと一緒に苦笑をしながら恋次にそう答える。

「でも困ったな。レースに出場して勝たないとアンゴルモアは誰かに持っていかれちゃうし・・・」

「かと言って出場できるメンバーも限られてくるしね・・・前線の中でバイクに乗れるのって言ったら・・・」

フェイトとなのはが手を顎に当てて深く考え込んで周りを見渡すと、自然とその目線はティアナの方へ向けられる。

「ティア・・・ぐらいですかね・・・他に誰か後二人乗れる人いないかな・・・？」

スバル達フォワードメンバーも真剣な表情で考え込み、唸り声を出していたとき・・・あの男が名乗りを上げたのだった。

「僕、乗れるけど♪」

「「「え？」」」

「「「「「え・・・!?」」」」」

全員の視線が扇子を広げて飄々とするユーノに向けられると、暫くの沈黙の後に全員は声を揃えて驚きを表現した。

「「「「「「「「えーーーーーーーーーー!!!!!!!!!」」」」」」」」

誰もが驚愕の表情を浮かべるなか、代表してなのはとはやてがユーノに尋ねる。

「ほ、本当なのユーノ君!?」

「嘘やったら真面目にぶっ叩くで!!」

はやてのその乱暴な言葉を聞いていたフェイトは冷や汗をかきながら、耳打ちでそっと先程の言葉を撤回するように言う。

「はやて・・・それはなのはの怒りを買うから止めといたほうが・・・」

そう言ってはやてが恐る恐るなのはの方を振り向くと、なのはは黒いオーラを出しながらニコニコしているなのはを見て恐怖を感じ、直ぐにその言葉を撤回。

「嘘はつかないよ♪現世にいる間にバイクの免許は取っていたから。何なら、実際に皆に見せてあげようか♪」

ユーノは全員にそう言うと、一度隊舎に設けられた自動車教習場のような場所まで連れて行くと深緑のライディングスーツに身を包み、

地球から持ってきたバイクに乗って軽快に滑走をし始めた。

そのハンドルテクニックはまさにプロのレーサーそのもので、コーナーの切り方や体重のかけ方もどれを取っても一級品で、ユーノの走る姿を見ていた全員は驚愕した。

なのはの方は、そんなユーノを羨望と憧れの眼差しで見つめながらユーノの魅力に惚れ直していた。

「わぁ～～～！！！ユーノ君、格好いい！！！！！」

「凄いハンオン・・・まるでプロレーサーの走りを見てるみたい・・・！！！」

「店長はああ見えてやれば出来る人ですからな。これぐらいは御茶の子さいさいです！」

「そりゃ、乗りたての頃は危なっかしくて見ていられなかったけどよ・・・」

「今となってはご覧の通り。すっかり一流レーサー並だよ♪」

唖然とするティアナ達に向ってスクライアの面々がそう答える。

久しぶりにバイクを走りまわしたユーノはなのは達の下に来てバイクを止めると、ヘルメットを取り外し、一息を突くとなのは達に微笑みかける。

そんなユーノに素直に簡単の言葉を口にするなのは。

「凄い凄い凄いよ、ユーノ君!!!本物のレーサーみたいで格好よかった!!!」

「いやいや♪なのはにそこまで言われると照れるな♪」

「でも、これで出場できる人数はあと一人になったな。ティアナは大丈夫か？」

クロノもユーノのバイクテクニックに安心し、隣に立つティアナにそう尋ねるとティアナはきりっとした態度で肯定の言葉を返す。

「はい！バイクのほうは結構乗っていますから！心配には及びません。」

「ティア、運転上手いんですよ！」

スバルも笑顔でクロノにそう言うと、全員はあと一人は誰がなるかで議論を交わす。

「あと一人か・・・失礼だが、僕は私はバイクに乗れると自負するものは挙手を頼む。」

吉良がそう言って挙手を求めたが、誰一人として挙げる者はいなかった。

「・・・誰一人なしか・・・」

「もうこの際手段は一つだよ♪僕に考えがある・・・」

そう言うと、ユーノはある最終手段に達すると彼に紅蓮のライディ

ングスーツを着せるとヘルメットを被せてヴァイスから借りてきたバイクに跨らせる。

「ちょっと待て!!!!何で俺がレースに出場する羽目になるんだ!!!!」

皆さん、この展開で既にお分かりいただけただろう。

そう・・・こういう役回りになるのは決まって恋次なのである。

「だって恋次さん、レースに出場したいって言ってたでしょう♪それに、バイクも自転車も似たようなもんだとも♪」

「後者のほうは言った記憶はあるが、前者の方は言った覚えはねー!!!!」

「でもこの機会だから、バイクの運転も覚えておいて損はないと思うよ阿散井君。」

「ほな!早速特訓と行こうか!!」

吉良とはやての他人事の用は言葉に恋次は途方もない怒りを覚える。

「てめぇら・・・自分が乗らないからって他人事のように・・・!!」

「よし!俺様が直々に乗り方を教えてやるぜ!!恋次、俺の話をよく聞いて置けよ!」

「分かったよ!で、まずどうすればいいんだ?」

鬼太郎は恋次の前に出てくると、早速バイクの運転方法をレクチャーする。

「先ずは右手で軽くアクセルを回してみろ！」

「こ、こうか・・・？」

言われたとおりに恋次は恐る恐る右手で握るアクセルを回す。

アクセルを回すと、当たり前だがエンジン音が鳴り響く。

「そのままハンドルについてる赤のスイッチを押してください。」

ティアナが横から恋次に指示を入れると、恋次は素直にその言葉を聞いて実行する。

「あ、ああ・・・」

恋次が赤いスイッチを押すと、バイクの馬力が一段と上がりかなり動揺する恋次。

「のおおお！！？？」

「慌てなくても大丈夫ですよ。そのままの姿勢なら大丈夫ですから！」

「そ、そうなのか！？」

フェイトの言葉を聞いて落ち着きを取り戻す恋次。

すると、鬼太郎が次なる指示を出してくる。

「よし！次は左手のクラッチを握ったまま、左足を蹴ってギアを一足に入れてみろ！」

「分かった！」

「右手でアクセルをぶん回せ！」

「え？」

ティアナはその時、鬼太郎の指示に疑問を持った。

何故ならそれらのやり方をすれば必ず恋次は悲惨な目に遭うことが頭の中に浮かんできたからであった。

「アクセルを・・・回すんだな！」

ティアナのそんな心配など全く知らない恋次は何の疑いも持たずに鬼太郎の言葉に耳を傾け操作をこなす。

「今だ！クラッチをぱっと放せ！！」

恋次がクラッチを放した瞬間、バイクは恋次を乗せたまま勢いよく後転し地面に突き落としてしまった。

「どあああああ！！！！！」

思わぬことに恋次は驚き、そのまま身体を強く打ってしまう。

フェイトやなのは達は直ぐに恋次の下に駆け寄り声を掛ける。

「れ、恋次さん!?」

「大丈夫ですか!?」

ティアナは些か困った表情を浮かべて鬼太郎のレクチャーの間違いを問いただす。

「鬼太郎さん!何で間違った運転方法を教えるんですか!?クラッチを急に放したりしたら!!」

「最初に怖い思いをしたほうがいい!此れが俺流の教え方だ!!」

「てめえ!!!危うく頭蓋骨に皹が入るところだったぞ!!!」

鬼太郎のその態度に激怒する恋次に対し、フォワードの五人は冷や汗をかきながら鬼太郎のサディスティックなやり方に唖然とした。

「「「「「(酷い・・・人だ・・・)」」」」」

「先輩!それ仮にもヴァイスさんのバイクですからね、壊したりでもしたらどうするんですか?」

浦太郎のその言葉を聞いても、何とも曖昧で行き当たりばったりな言葉で返す鬼太郎。

「何とかなるって!どうだ、恋次・・・楽しかったか?」

「楽しい訳ねえだろ！！！」

その後も、恋次は鬼太郎の厳しい訓練メニューの下バイクを乗りこなすために奮闘するが、やはりなれない文明の利器にかなり戸惑う恋次。

「ぐっ・・・！！やべ！！」

転びそうになるたびに恋次はヴァイスから借りたバイクだとは一切気にせず、自分の身を守るためにバイクを放り投げる。

その様子をかなり不安そうな表情で見ていたヴァイスはバイクが傷つく光景に絶叫する。

「なぁ！！！！俺のバイクが！！！！」

「まだまだ！！！・・・でも駄目だった！！！！」

恋次は持ち前の意地で何とかバイクを乗りこなそうとするが、ハンドルが上手く切れずに壁に激突してしまう。

ヴァイスの心境と表情はどんどん悲惨なものになっていく。

「ひえ～～～！！！！壊れる！！！！！」

そして、２・３時間の練習の甲斐あって漸く極普通に走行できるようになった恋次。

「くっ・・・！！大分慣れては来たが・・・！！」

だが、乗れるようになったからと言って鬼太郎の厳しい指導と野次が収まる事は無かったのだ。

「何をチンタラ走ってやがんだ!!!そんなんじゃレースで勝つことなんて出来ねえぞ!!コーナーをがんがん攻めろ!!!」

「んなこと急に言うな!!」

そんな哀れな恋次を見ながら、訓練場から寮へと足を運ぶスバルやエリオ達。

更には教導に参加していた白鳥。

「わぁ～～～鬼太郎さんの教導・・・厳しい・・・・！」

「あれじゃあ恋次さんも大変ですね・・・・」

「だが、私には奴が嬉しそうにも見えるぞ。」

「ま～確かに・・・嬉しそうではありますが・・・あれって他人を苛めて喜んでる人のあれと同じなような・・・」

「ピーチはああいう奴なのだ。根っからのサディストだから、最近は苛める対象がいなくてストレスが溜まっていたのだろう。」

白鳥の言葉を聞いてもう一度鬼太郎の顔を覗き込むスバル達。

その表情は白鳥が言ったように、何所か苛めることで楽しんでいる人と同じものであった。

そんな鬼太郎を見た後、フォワード陣は深い溜め息をついて寮へと戻っていったのであった。

一方、ティアナはスバル達と一緒に訓練には参加せずにユーノと供にレースに参加するためのバイクに追加装甲と特殊エンジンを施していた。

「でも、ティアナは本当にいいのかい？あのレースは別名『地獄の片道切符』とも言われる物凄く危険なレースなんだよ。もしものことがあったら・・・なのはや他のみんなに何て謝ったらいいか・・・」

「大丈夫ですよ、ユーノ先生。自分の身はしっかり自分で守ります。それに、アンゴルモアが関わってる以上・・・私も覚悟の上ですから。」

「・・・そうか。さて、武装強化はこれで完了したと。あとは実働テストをしさえすれば・・・」

と、その時。

教習場のほうから聞こえてくるバイクの衝突音と、それを見て泣き叫ぶヴァイスの声。

「なぁ！！！！！俺のバイクが！！！！！」

そんなヴァイスの哀れな声を耳にし、苦笑するユーノとティアナは同じことを呟く。

「「・・・・・お気の毒に・・・・・・」」

その日の夕方、鬼太郎の教導からどうにか解放された恋次だったが・・・身体はすっかりボロボロの状態であった。

恋次の変わり果てた姿に唖然とするなのは達と、それを見ながら飄々とした態度で構えるユーノ。

「いや～～～ちゃんと乗れるようになって良かったじゃないですか♪身体はかなりのボロボロ状態ですけど・・・」

「くそ！！こいつの指導の所為で散々な目に遭ったぜ！！」

恋次は隣に立つ鬼太郎に対して実に不満気な眼差しを向ける。

「何だよその目は！？俺様が指導したから、乗れるようになったんだろう！！」

険悪モードになる恋次と鬼太郎。

見かねたティアナが恋次に向けて次のような言葉を掛ける。

「と、兎に角・・・一度シャマル先生のところに行って怪我の手当てを受けてください・・・その後レースの内容についてとバイクの装甲についてお話しますから。」

「？バイクの・・・装甲だと？」

シャマルの治療を終えた後、恋次はティアナの言葉に疑問を持ちながら再び指令室へと戻ると、ユーノによるモニター画面を使った説明が始まる。

「ＦＢＴは別名を“地獄の片道切符”と言い・・・毎年レース中に衝突事故や妨害によって多くの死者が出ています。しかも、その死因の八割近くが同じレーサーによる妨害工作。なので、それを回避するためにバイクの装甲そのものに仕掛けを施しました。尚この装甲はレースそのものを勝ち抜くためにも必要になってきます。」

そう言うと、ユーノは自分と二人のバイクに施した機能説明を詳しく図解を交えながらどうようになっているかを噛み砕いて言う。

「装甲は魔力強化に加えて、ブーストそのものに僕の霊力を元に造った特殊霊力発生器を取り付けていますから・・・万が一妨害が起ころうとも目には見えないバリアがバイクそのものを覆い、攻撃を防いでくれます。」

「つまり、より安心してレースに集中できるというわけか？」

「そう言うこと。次に車輪そのものです♪中央についているこのボタンを押すと、スバルのマッハキャリバー・ブラスターフォームと同じようにホバー機能が発動して宙に浮くことが出来ます。更にこの黄色のボタンを押せば、オフロードバイクのように砂利道なんかを平気で走行出来る。そして・・・問題の赤いボタンですが・・・」

「何だよ・・・一体そいつを押したら何が起こるんだよ？」

「このボタンを押せば通常のブーストの遥か上を行くブーストを引き出すことが可能なんです。但し、一度きりしか使えない上・・・乗り手に莫大な負担が掛かることが難点なんです。しかし、今回のレースの終盤にはこれを使わないと突破できない所があります。」

そう言うと、ユーノはトーナメントで実際に使用されるコースのうち、最終ポイントを突破した先にある途中でレーンが途切れてしまっている2キロ以上レーンが隔絶された運命の臍というコースを見せる。

「見てください。レーンが途中で切られているでしょう。此処を突破しないとゴールへは辿り付けません。しかも、ホバーモードは原則禁止です。」

「マジかよ・・・こんなバケモノみたいなレーンを飛び越えないといけねえのか!?」

「見積もっておよそ２０００メートルってところですね・・・!?」

レースに出場することになった恋次とティアナにとってこれほどの難所はまさに想像を絶する光景でしかなかった。

「それでもこのレースに勝てるかどうかは分からない。危険がかなり伴うし、何が起こるかも分からない。覚悟があっての出場となるが・・・良いのかい?」

ユーノが口ごもった声で二人にそう尋ねると、二人は顔を見合わせた後覚悟の籠もった瞳を向けて肯定の言葉を返す。

「「はい!（おお!）」」

二人の言葉を聞いたユーノも安心した表情を浮かべて、帽子を被りなおすと大会までの予定を二人やスタッフとして参加するなのは達に指示を出す。

「了解。それじゃあ、トーナメントが開かれるのが４日後の正午。『サーキット』の幹線道路を貸し切ってのレースになるから、それまで僕たち三人はレースの為により高度な運転テクニックを磨かなければならない。ティアナ、恋次さん・・・準備のほうは？」

「私は何時でも！」

「俺様もだ！！」

「それじゃあ、早速明日から始めるとしましょう！なのは達には本番に備えてピットでの役割を教えるからしっかり聞いといてね♪」

「うん、了解！」

「「「「フォワード一同、全力で取り組みます！」」」」

その後、大会が開かれ４日間は目まぐるしいものであった。

恋次とティアナはユーノの供にそれぞれのコースに対応するためにより高度な運転技術を身に付ける為に昼夜全身打撲の痕をつけてはシャマルの下に行き、治療を受けては練習に復帰するというものであった。

そして、光陰矢のごとしという言葉があるように時間は瞬く間に過ぎていき、ついに大会前日の最後の練習となってしまった。

恋次は死に物狂いで身に付けた洗練されたバイクテクニックでユーノの後を追っていき、それぞれのポイントごとに使うホイールもそれなりに使いこなしていた。

「逃がさないぜ！！」

恋次の前を颯爽と駆け抜けるユーノとそれを追いかける恋次。

すると、二人の目の前に高い壁が現れるとユーノは直ぐにホバーモードを起動させるとが追いかけることに無我夢中だった恋次は一瞬の判断が遅れた。

「のあああああ！！！？？？」

それでも何とか恋次はホバー機能を発動させて後方に回避する。

「ふ～～～～～～～～～～～～のはっ！？」

だが、一難去ってまた一難・・・後方に待ち構えていた壁に激突した恋次はバイクごと六課の訓練場の直ぐ近くにある海の中へと落下していった。

海に落ちてずぶ濡れになった恋次を金太郎と吉良が拾い上げようとする。

「恋次殿、いけませんぞ！油断しないで下さい！」

「前だけ見てるからそう言うことになるんだよ！」

「くっそーーー！！！」

ユーノの判断により最後の練習を終えた恋次とティアナであったが、指令室に戻った恋次はジャージに身を包むとくしゃみを頻繁に出しては鼻水をかみ続ける。

「へっくしゅん！！！！」

そんな恋次の様子を見ていたクロノが深い溜め息を突きながら不安を恋次にぶつける。

「やれやれ・・・レースは明日だというのに、大丈夫なんですか？」

「ふん！！俺は花粉症なんだよ！！か・ふ・ん・しょう！！！」

クロノの言葉に腹を立てて詭弁を弄する恋次だったが、はやてとフェイトが苦笑をしながら冷静にこう口にする。

「今は花粉の季節じゃあらへんよ、恋次さん。」

「それにアレルギーが出るほどの量もないですよ、きっと。」

「じゃかしい！！！」

二人の言葉にそういい返す恋次の鼻からそよぐ鼻水。

なのはやユーノ達はそんな恋次を見て気付かれない程度に笑い声を出すのであった。

そして、ついに迎えた本番当日。

機動六課総で赴く今回のアンゴルモアが潜伏する世界・・・『サーキット』。

多くのレース大会が開かれ、その度に観客を熱狂させるレーサー達。

今回はそんなサーキットで開かれる次元世界で最も巨大且つ最も豪華なバイクレースの大会通称ＦＢＴ。

次元世界を問わずに銀河系からも名のあるバイクレーサーが一堂に会すお祭りなのだ。

会場に集まった想像を絶する人数の多さに圧倒されるなのは達機動六課のメンバー。

「凄い人の数・・・こんなに集まるとは思ってもなかったです・・・！！」

「ユーノ君、この大会で注意しないといけない人はどのくらい？」

「そうだな・・・僕の目安では、特に注意しないといけないのは・・・あの人達かな。」

なのはにそう尋ねられたユーノは会場を見回すと、顔でその要注意人物の一人を全員に知らせ、説明を始める。

「本大会の優勝候補の一人、銀河系レーサー会のカリスマ・・・フォーミュラー・ジャクバーン。幾多のレース大会で優勝してる凄腕のバイク野郎だよ。」

「まずは奴に勝つことが先決だな・・・」

すると、その時ティアナは会場内を見回しているとある人物の姿を目撃するや否や驚愕の表情を浮かべなのは達に知らせる。

「ん!?ユーノ先生、なのはさん!あれ見てください!」

「どうしたの、ティアナ?」

「『ブラックレックス』ですよ・・・!」

「何だと!?」

ティアナが口にするブラックレックスという言葉を聞いた瞬間、それを知るクロノやフェイト、更にはヴォルケンリッターの面々は驚愕の表情を浮かべるが、スバル達の方は全くその聞きなれない言葉に首を傾げるばかりだった。

「ブラック・・・レックス・・・!?」

見かねたティアナがそのブラックレックスのリーダーと思わしきティラノザウルスにも似た恐竜人を険しい表情で見ながら説明をする。

「ブラックレックス。銀河系で最大規模を誇る暴走族にして、そのヘッド・・・ガルガン!まさかあいつも出場していたなんて!?」

ティアナの説明を聞いていたユーノも次のように言葉を返す。

「そう。あいつがもう一人の要注意人物さ。正当なバイクレーサーであるフォーミュラーと違って、ガルガンは勝つためには手段を選ばない冷酷且つ残忍な奴だよ。去年も奴によって粛清された数は相当なものだ。」

「この大会・・・命が幾らあっても足りないな・・・」

ユーノ達はその後レースが開始される直前まで専用のピットでマシーン整備を行い最終確認を済ませていた。

「え～と・・・取り敢えずは大丈夫そうだ・・・」

「ユーノ君♪」

すると、ユーノの耳からなのはの声が聞こえてきたので振り返ってみたところ、そこに立っていたのはレースクイーンのような格好をしたなのはと一緒に来ていたヴィヴィオであった。

「え!?なのは・・・!?どうしたのその格好!?」

性格は変わってもなのはに対する接し方は以前変わっていないユーノはなのはの予想外の格好を目撃するや否や赤面する。

「にゃははは・・・え～とその・・・似合わない?」

ユーノ同様頬を赤らめながら不安げにそう尋ねるなのはであったが、ユーノ自身は即座に首を大きく横に振ると恥ずかしそうにこう言う。

「そそそそそんなことないよ!!!!とってもよく似合ってるよ♪」

「ありがとう・・・ユーノ君♪」

ユーノの正直な感想を聞いて心から喜ぶなのは。

そんな二人の様子を微笑ましい表情で見ていた娘のヴィヴィオ。

「良かったね、なのはママ！！ユーノパパ喜んでくれて！！」

「ヴぃ、ヴィヴィオってば！！もう～～～親をからかわないでよ！！」

ヴィヴィオの言葉に思わず顔を真っ赤にして言葉を返すなのは。

同じ頃、ティアナの方も愛車の整備をしながらスバル達にコンディションを尋ねられていた。

「ティア、調子はどう？」

「そうね・・・やっぱりこういう大会に出るのは初めてだから心臓の高鳴りが治まりそうにも無いわね。」

「頑張ってくださいね、ティアさん！僕達応援してますから！！」

「大丈夫よ、ティアナ！あなたなら必ずやれるって信じてるから！」

「有難うございます、ギンガさん。あんた達もありがとうね！」

ティアナは応援してくれるスバル達四人に微笑みかけると、スバル達のほうも同じようにティアナに向って微笑みかける。

また、恋次のほうはというと・・・吉良が準備を整える恋次に一言かける。

「阿散井君・・・ちょっといいかな？」

「お？何だよ、吉良・・・」

「レースに出場するに当たってユーノさんからこれを渡すようにと。」

吉良はそう言うと、懐からユーノが今回のレースに出場するに当たって恋次のために作った専用のゴーグルを手渡す。

「おお！！あいつも気が利くじゃねえか！！ふふふ！！！俄然ヤル気が出てきたぜ！！」

恋次はこう見えてゴーグルを集めるが趣味である。

普段は手ぬぐいを巻いて代用をしているが、常に行き付けの眼鏡屋『眼鏡の銀蜻蛉』の新商品に目を通しているのだ。

そんな恋次に今回手渡されるユーノからの願ってもいない餞別に闘志を燃やす恋次。

「ようし！！！俺様が優勝だぜ！！！なはははははは！！！！！！」

ゴーグル一つでここまでテンションの上がる恋次を傍で見ていた吉良は聞こえない声でこう呟く。

「君は本当に単純だね・・・」

現地時間の１２時直前。

レース参加者は一斉にバイクに跨りエンジンを響かせながらスタートラインにつく。

『さぁ～～～ついに始まろうとしています！！異世界中のバイク好き、バイク野郎が一同に介する年に一度の祭典・・・ＦＢＴが間も無く開始されようとしています！！！！実況はこの私、フラストレーション・マルタがお送りいたします！！』

実況の言葉と供に観客の歓声も一層盛り上がりを見せる。

『このレースはご存知の通り予め決められた四つのチェックポイントを通過し、その順位を競うことになっております！只、途中には様々な障害が待ち構えた危険に満ちたコースの連続であります！！！スピードだけではなく、鉄のような意思・火のような勇気・そして水のような冷静な判断力が必要となってまいります！！！』

それぞれの思惑を抱きながらレースに参加する総勢２００名以上のライダーたち。

その中には今大会の優勝候補であるフォーミュラーと暴走族のガルガンも混じっている。

「優勝は戴きだな。」

「へへ！！商品は俺様が貰ったぜ！！！！」

レースが開始される直前、ユーノ・恋次・ティアナの三人はヘルメットを被りゴーグルをしっかり着けていることを確認すると、自分なりの精神集中に入る。

「落ち着きなさい・・・ティアナ・ランスター・・・あなたはやれば出来る・・やれば出来る・・・！」

「くっ・・・緊張してきたぜ・・・！」

「・・・よし。バッチリ♪」

そんなレーサーたちの様子を専用のピットで見つめる神妙な表情のなのは達機動六課の前線メンバー。

「いよいよ始まるで・・・みんな、心して見る様にな！」

「「「「はい！」」」」

「ユーノ君・・・ティアナ・・・恋次さん・・・お願いだから怪我だけはしないで・・・！」

「ユーノパパ・・・」

「ティア・・・」

「阿散井君・・・」

『全者が、グリットに静止してからいよいよレースがスタートです。さぁ、シグナルを待ちます！！』

そう言うと、スタートラインの上に取り付けられたシグナルのランプが徐に赤から順に青へと変わろうと動き出す。

シグナルを見ながら汗をかき、アクセルを回すユーノ達を始めとする２００名のライダー達。

そして、ついにランプが青へと変わりレーサー達は一斉にスタートを切る。

『今、スタートです！！』

「おおおおおお！！！！！！」

「行くわよ！！！！！！」

「ふん！！！！！」

恋次・ティアナ・ユーノの三人はアクセルを全開にして２００名のライダー達に混じって愛車を動かし豪快に駆け抜けて行った。

地獄のデスレース（後書き）

教えて、ユーノ先生！

ユ「どうも♪今日は、ロストロギア関連の事件の名称についてだ♪」

ユ「みんなが知ってる中だったら、僕となのはが出会うきかっけとなったＰＴ事件（プレシア・テスタロッサ）、またはジュエルシード事件や、はやて達が深く関わった闇の書事件。」

ユ「スカリエッティと戦闘機人が中心となったレリック事件に始まったＪＳ事件（ジェイル・スカリエッティ）。」

ユ「そして、今回新たに命名されたのが魔導虚（ホロウ・ロギア）事件だ。事件の詳細としては、脱獄したスカリエッティと機人四天王により引き起こされた大規模テロ事件およびその解決に尽力した奇跡の部隊、機動六課と元無限書庫司書長の助力によって解決されたと記述してある。」

一「恋次達死神のことは書いてねぇのか？」

恋「そうだぜ！あんだけ苦労したのに評価すらされねぇのか？！」

ユ「一般人には死神は見えませんからね、評価されなくても不思議じゃないですよ♪」

恋「そ、そうだった・・・！！」

恋次、いまさらながら絶望する。

一「そうがっかりするなよ、恋次。」

恋「ちくしょ・・・！！」

魔導師図鑑ハイパー！

クラナガンで用事を済ませ、機動六課に帰還したユーノ。

ユ「ただいま♪今帰ったよ♪」

な「おかえりなさい、ユーノ君♪結構遅かったね。」

ユ「無限書庫のみんなに差し入れを買っていたからね♪」

な「そうなんだ。」

ユ「ところで、何か変ったことは無かったかい？」

すると、そんなユーノの手元に大量の書類を手渡すはやてと恋次。

ユ「な！？何ですか！！」

訳が分からないでいるユーノ。

恋「クロノの奴がこれ全部ユーノに渡しておけってっよ。」

は「この前の模擬戦のことどうもまだ根に持ってるらしいんよ、クロノくん。」

すると、それを聞いたユーノは顔に血管を浮かべて霊圧を放出させながら怒りを露にする。

ユ「何だと!?あのクソクロノ!!!!!明日あったら、挨拶なしでぶっ殺してやる!!!!!!!」

それを見ていたなのは達はあまりの恐怖に戦く。

な「（ユーノ君・・・キャラ変わってるよ・・・・!!）」

フェ「（クロノ・・・明日生き残れるかな・・・）」

音速を超えて！

＞i13262―709＜

「さぁ、始まりだぜ！！」

恋次はユーノから受け取ったゴーグルをしっかりヘルメットの上から掛けると、次々とレーサー達を追い越していきながら首位を奪おうとする。

すると、そんな恋次に向って早速妨害工作を行うガルガンのところの三下。

「ぬおお!!何だ!?」

自分のバイクを衝突させておかまを掘ってくるトリケラトプスの恐竜人は、恋次に不敵な笑みを浮かべて見下したような態度を取る。

それを見た恋次も鼻についたのか、反撃を開始する。

「くっ!!!てめぇ・・・やりやがったな!!!お返しだ!!!」

恋次はこの四日間で磨き上げたバイクテクニックを披露させ、ガルガンの手先のバイクを同じ要領で吹き飛ばし強制退場させる。

「ふん!!舐めんなよ!!!この四日間・・・死ぬほど痛い目にあって来たんだ!!そう簡単にやられるかよ!!」

恋次が爆走を続ける中、ティアナもスピードを徐々に上げながら巧みなドライビングテクニックを発揮してユーノと供に首位を目指す。

「ここで負けたら、何のためにレースに出場したか分かったものじゃないわよ!!」

『さぁ!!!各車一斉にスタートです!!選手たちは最初のチェッ

クポイント『エアーズパーク』に向います!!Ｎｅｘｔ　ｃｈｅｃｋ　ｐｏｉｎｔ　ｉｓ　ａｉｒｓ　ｐａｒｋ!』

最初のチェックポイントであるエアーズパークは、地球で言うところのエアーズロックのような巨大な岩場と崖が多く存在し、道も砂利道が殆どを占める場所なのである。

三人は直ぐにタイヤをオフロードバイクのような不整地でも衝撃を吸収してくれるタイヤへと変化させると、首位を狙って走り続ける。

そんな中、車体もタイヤもどれを取っても超重量級の三つの車輪を持つオートバイ、トライクに乗って強引に相手をクラッシュさせながら首位を目指すガルガン。

『おっと!!ゼッケン９番崩壊、クラッシュ!!』

「ぬはははははははは!!!!どいつもこいつもぶっ壊すぜ!!!!」

ガルガンとは対照的に、正統派レーサーのフォーミュラーは愛車であるブラッシャベリアの性能を確認しながら、余裕の表情で走り続ける。

「今日も我が愛車『ブラッシャベリア』。調子は最高だな!」

やがて、ユーノ・恋次・ティアナの三人はレーサー達を自力で抜かしていくと何時の間にその順番に首位を独占していたのであった。

中継カメラの様子から窺える三人の様子を見て、安どの表情を浮かべるなのは達。

「やったわ！！ティアナ達が首位を独占よ！！凄いわ、三人とも！！」

「よし！！そのまま独走だ！！」

三人でエアーズパークを駆け抜けながら恋次は真ん中で次のように言う。

「へへ！！！ちょっとカッコつけ過ぎたか！！」

「油断は禁物ですよ、恋次さん！」

「そうですよ♪ただでさえ、あなたは注意力に欠けるんですからね、気をつけてください♪」

「ただでさえは余計だ！」

『先頭争いは激しいデッドヒート！！“グーリンラベル”か“ヴィーナスクロス”か、それとも“俺、参上号”か！？』

すると、実況から聞かされた自分のバイクにいつの間にか付けられた名前を聞いた瞬間恋次は直ぐにそのつけた犯人の下に通信を入れて文句を言い始める。

「ちょっと待て！！！！何だその“俺、参上号”って！！！鬼太郎、お前か変な名前付けたのは！？」

「へへ！！最高に格好良い名前だろう恋次、感謝しろよな！！」

すると、恋次は名前が気に入らなかったのかアクセルを緩めると態と他のレーサー達に抜かしても良いとばかりの態度を取って見せた。

『てっ、コラー！！！なに追い抜かれてんだよ！！！』

この恋次の態度を見た鬼太郎は本気で怒りを露にした。

『さぁ！！第一チェックポイントを一位で通過すのは、果たしてどのバイクだ！？』

ユーノ達の目の前に見えてくる第一のチェックポイント。

それを潜ろうとアクセルを更に加速させる三人。

「第一ポイント接近中。第一ポイント通過！」

ユーノ達の後に続くようにこの短い間に残り１００台ほどにまで減ってしまった残りのバイクも全てチェックポイントを無事に通過する。

『全車、第一ポイントを通過！選手たちは一斉にウォーターシャワーを潜るないしは飛び越えて巨大植物園へ向います！！Ｏｋ！ｈｅｒｅｗｅｇｏＢｉｏｌｏｇｙＰａｒｋ！！』

第二チェックポイントの巨大植物園は、バイオテクノロジーによる品種改良された巨大な観賞用の草花は勿論、食物用の野菜も育てている誰もが楽しめる場所である。

恋次達の目の前に現れる巨大植物園へと続く滝のシャワー。

「あれがウォーターシャワーか・・・よし！ホバーモード！！」

恋次を始め多くのレーサー達はホバーモードを起動させて、ウォーターシャワーを越えていきその先に広がってくるのは文字通り巨大な植物の楽園であった。

生い茂るら植物の楽園の奥深くに降り立った恋次達多くのレーサー達は只でさえ走りずらい森の中を爆走し、次のチェックポイントを目指す。

『さぁ！！そろそろ第二チェックポイントが近付いてきた！！』

レーサー達の多くが苦戦する中、ガルガンのトライクである『レックスインフェルノ』はその重量と装甲に任せて木を次々と薙ぎ倒し強引に通り抜けていく。

「ぶはははははははははははははははは！！！！！！！！！！！！！！」

ガルガンは森を通り抜けると、前を走るレーサー達をクラッシュさせて機体を破壊していくのであった。

『おっと！！！ゼッケン８番『ライディーン』クラッシュ！！続いて『ゴロウ』もクラッシュ！！！』

「はっはははははははははは！！！！！！！！！！！！」

常に死と隣合わせのこのレースを誰よりも速く、そして華麗なテクニックでバイクを操りゴールを目指すこの勝負、果たして栄光は誰の手に？

『こちら、第二チェックポイントです！そろそろ先頭が・・・来ました！！！』

先頭を走るのは正統派レーサーのフォーミュラーのマシーン、『ブラッシャベリア』。

その後に続く形で既に５０台を下回ったバイクがチェックポイントを高速で駆け抜けていく。

観客も実況の熱気も更にヒートアップしていく。

『さぁ！！選手たちは一同スカイスクレーパーゾーンに向います！！激しいデッドヒートの中、現在のところ・・・１位はブラッシュベリア！２位はグリーンラベル！３位はレックスインフェルノ！４位ヴィーナスクロス！５位バースト！６位俺、参上号の順です！！』

中継カメラの様子を見ながら移動を続けるなのは達機動六課のメンバー。

「今のところ、ユーノがフォーミュラーとデットヒートを繰り広げているな・・・」

「ティアさんも恋次さんもいい感じです。」

「三人とも、頑張って！！！」

その頃、ユーノ達三人は第三チェックポイントであるスカイスクレーパーゾーンへと突入を開始していた。

その名の通り、此処は『サーキット』でも有数の摩天楼が立ち並ぶ密集地。

左右も前方も見渡す限りの超高層ビル群が恋次達を圧倒させる。

『さあ、各マシーンは一斉に第三チェックポイント・・・スカイスクレーパーゾーンへと向っています!!このスカイスクレーパーゾーンでは、低速運転が義務付けられています!!』

レースのために一般者は侵入を禁止をされた主要幹線道路を爆走する恋次であったが、周りのビルを見ては何故か心が萎縮して行った。

また、ティアナの方はあまり得意ではない低速運転にじえったさを感じていた。

「ビルばっかだな・・・あんましこういうところは好きになれないぜ・・・」

「低速運転って結構大変なのよね・・・じれったいしコントロールもキツイし。」

『さぁ、こちらは第三チェックポイント!!果たして一位通過をするのはどのバイクだ!?』

多くのレーサー達が規定にあるように低速でバイクを走らせるのに対し、勝つことに執念を燃やすガルガンはそんなこと等お構い無しに周りよりも明らかにスピードを出して強引に相手のバイクをクラッシュさせて追い越していく。

「抜くぞ!!!」

ガルガンの行動を先頭を走っていたユーノが逸早く気付いた。

「何!?くそ!!」

ユーノは自分の身を守るためにガルガンの攻撃を回避して後ろに回りこむという安全な方の策を取る。

だが、それを取らなかった5番手のバーストはガルガンの巻き添えを受けてクラッシュする。

『おっと!!!バーストがクラッシュ!!!』

ガルガンの非道且つルールを無視したやり方に嫌悪と危惧の念を抱く現在1位をキープし続けるフォーミュラー。

「莫迦な!?高速運転禁止ゾーンだぞ!?」

「こいつが俺様の低速運転なのさ!!」

ガルガンはそう言うと、フォーミュラーの隣につきマシーンを衝突させてくるがフォーミュラー自身も並みのレーサーとは違い、ぶつけられたからと言っても順位を落とすことは無かった。

「やるな、フォーミュラー!!」

「貴様如きにやられはせん!」

『来ました!!!首位はレックスインフェルノです!!』

首位をフォーミュラーから奪い取ったガルガンはアクセルを更に回して差をつけようとする。

後れを取っていたユーノ・恋次・ティアナは現在の首位であるガルガンを追ってエンジンを加速させていく。

『さぁ、選手たちはスカイスクレーパーゾーンを後に・・・最大の難所、地雷が一杯のランドマインエリアに向います！！』

すると、恋次とティアナのバイクのモニターにユーノからの通信が入る。

『二人とも、打ち合わせどおり此処はピットでパーツ交換だ！』

「はい！」

「了解だぜ！」

二人はユーノの指示を聞くと機動六課が待機をしているランドマインエリアから２００メートルほど離れた場所へと向った。

移動型のピットで三人が来るのを心待ちにしていたなのは達。

すると、スバルが前方から走ってくる三人の姿を確認し全員に伝える。

「あっ！来ましたよ！！」

ユーノ達はそれぞれの場所にバイクを止めるとなのは達によって一度全てのパーツ交換とエネルギー補給を済ませる。

はやて達隊長陣の声がピット中に響き渡る。

「急いで4番のパーツを頼むで！！シグナムはタイヤの交換を！！」

「はっ！」

「ユーノ君、はいお水。」

なのははかなり疲れた様子のユーノにコップに入れた水を一杯持ってくる。

ユーノもそれを受け取ると笑顔で感謝の言葉を返す。

「ありがとう、なのは♪ちょうど喉が渇いていたんだよ。」

ユーノはコップの水を一気に飲み干す。

すると、そんなユーノにタオルを差し出してくるヴィヴィオ。

「タオルもどうぞ！」

「ありがとう、ヴィヴィオ。気が利くね♪」

ユーノは笑顔でヴィヴィオの頭を優しく撫でると、タオルを受け取り汗をふき取る。

その頃、ティアナのバイクを整備していたスバル達の方ではちょっとした問題が浮上した。

「ティア、エンジンの調子があんまし良くないみたい。ちょっと時間掛かるけど待っててくれる!?」

「分かったわ!ギンガさん、交換に掛かる時間は!?」

「約3分ってところかしら!?」

フォワードメンバー四人はティアナのバイクに取り付けられているエンジンを急いで取り外すと、スペアのエンジンを奥のほうから引っ張り出し取り付け作業にかかる。

エンジンの取り付けが行われていた丁度その時、恋次とユーノの完全チェックが完了する。

「よし!こっちは完了したよ!何時でも発進可能です!!」

「こっちもオーケーだ!ティアナ、恋次さんと先を行くよ!」

「了解です!私も直ぐに追いつきますから!」

「そんじゃ、三人で首位独占が出来るよう願うぜ!!」

ユーノと恋次は再びヘルメットにゴーグルを着用すると、バイクに跨りアクセルを全開にしてティアナが追いつくことを信じてランドマインエリアを目指して走り去っていく。

二人がピットを後にして直後、ティアナのエンジン交換が済んだエリオ達は顔中を泥だらけにしながらティアナに伝える。

「ティアさん、終わりました!!」

「発進可能です！！」

「サンキューね・・・エリオ、キャロ！よし・・・行くわよ！！」

ティアナはバイクを前に出すと、エンジンの音を確認してからヘルメットとゴーグルをつけてユーノ達二人の後を追っていくのであった。

スバルは最後にティアナに応援の言葉を送り、ティアナ自身もそれに答える。

「ティア！！頑張ってね！！」

「任せておきなさい！！」

そして、ユーノ達三人は他のレーサー達の中に混じって最大の難所である地雷が大量に仕掛けられたランドマインエリアへと向う。

『さぁ、いよいよ最大の難所・・・ランドマインエリアに突入です！！』

三人はこのときのために用意していたバイクに施した魔法結界を発動させる。

「「「魔法結界、展開！！」」」

ボタンを押すと、バイク全体を囲み目には見えない魔法結界が展開される。

ランドマインエリアに突入すると、その直後次々と地雷によって地面が爆発を起こし多くのレーサー達が巻き込まれてリタイアしていく。

魔法結界によって走る分には問題ない三人であったが、恋次とティアナは地雷の爆発によって伝わってくる衝撃に苦い表情を浮かべる。

「ぐっ!!バリアを張ってるのにここまでの衝撃かよ!?」

「流石に・・・キツイわね・・・!!」

「何とかここを突破すれば、ゴールは間近だよ・・・なっ!?」

と、その時。

ユーノの後ろから何者かがマシーンを衝突させて攻撃を仕掛けてきた。

それは、ランドマインエリアに苦戦し低速で運転していた為に遅れを取っていたガルガンであった。

「どうした、どうした!?後が閊えてるぞ!!」

自分達の先頭を走るユーノの危機的状況を目撃し、焦燥を抱く恋次・ティアナ。

「ユーノ!!」

「ユーノ先生!!」

同じ頃、中継カメラの様子で同じ光景を見ていたなのは達全員の下にも危機感が迫ってくる。

「ああ！！！ユーノ君が！！！」

ユーノはガルガンからの妨害工作と地雷による衝撃を供に受けながらの走行を強いられる。

「この！！！止めろ・・・！！！ぐっ！！」

「ぬふふふふ！！！！ビールみたいな名前しやがって！！これで終わりだ！！！レックスアタック！！」

そう言うと、ガルガンは止めの一撃をユーノのバイクであるグリーンラベルに食らわせると、ユーノは軌道を外れて地雷が大量に仕掛けられている場所へと押しのかれ、爆発の衝撃で更に後方へと飛ばされた。

「うのあああああああ！！！！！！！」

「「「ユーノ（先生）（君）！！！！！」」」

「まだまだ・・・！！！特殊ブースト、展開！！」

ユーノはそう言うと、自分のマシーンに仕掛けられている特殊ブーストを作動させて体勢を立て直すと、一度地雷が埋まっていない場所へと何とか難を逃れる。

ちなみに、そこは中継カメラが通っていないためにユーノの安否はなのは達からは全く分からないのであった。

『こちら、ランドマインの出口です！この後選手たちはシャインロードを駆け抜け、運命の臍に飛び込むわけですが、さぁ・・・トップは？来ました！！！』

ランドマインの出口を最初に駆け抜けてきたのは・・・フォーミュラーとユーノを倒したと思い込んでいるガルガンであった。

二人は互いに拮抗しあいながら激しいデットヒートを繰り広げる。

「フォーミュラー！やはり俺達の一騎打ちのようだな！！」

そんなガルガンたちの後に続く形でランドマインの出口から出てくるのは恋次とティアナである。

「まだ俺達も負けてねえ！！！」

二人はユーノのことを心の底から心配しながらも、今は必死で首位に追いつこうとアクセルを全開にして走り続けなければならなかった。

ちなみに、ランドマインエリアを通過できているのは今のところこの４台だけであり、他のレーサーは皆地雷の餌食に会ってしまい既にリタイア。

ガルガンも最終コーナーが近付くに連れてフォーミュラーを追い越そうと奮闘するが、肝心なときに限ってエネルギーが切れてしまう。

「ち！エネルギー切れか！こいつは大喰らいだからな。キットマシーン、来てるか！？」

『は！ガルガン様！』

ガルガンはピットで待機をする三下に連絡を取ると、一度コースを離脱してピットへと向うのであった。

「よ～し、シグナルオン！マーク！」

「ランデブー完了！」

ガルガンがマシーンをランデブーさせると、三下達命じてエンジンと装備の交換を指示し、自身は肉を食べる。

「急げ、一分で済ませろ！エンジンは一番！装備は４番に換装しろ！」

「ガルガン様！４番は禁止装備ですが！？」

「構わん！！運命の臍には中継カメラは入らんからな！」

「はっ！」

「待ってろ、フォーミュラー！」

ガルガンの卑劣な方法がこの後フォーミュラーを襲うことになるが、今はコメントを控えておこう。

その頃、ランドマインエリアでリタイアしたレーサー達のバイクの残骸を回収し、エンジン部分をこれでもかとばかりに取り付けるユーノ。

「よし♪これで準備完了っと！さてさて・・・大どんでん返しの始まりだ！！」

ユーノはそう言うと、ヘルメットを被りなおして取り付けた全てのエンジンを点火させる。

「エンジン全開！」

すると、全てのエンジンが点火したお陰でユーノのバイク“グリーンラベルは地雷の影響など全く無視する程の途轍もない速度でランドマインエリアを爆走し、首位を目指して駆け抜ける。”

『現在、ランドマインを通過していないのはグリーンラベルだけとなりましたが・・・おっ！来ました、グリーンラベルです！！』

中継カメラの映像に映るユーノの姿を確認したなのは達は、漸く安堵の溜め息をつく。

「ユーノ君！！」

「よかった、無事だったんだ！！」

「ユーノパパ！！ＧＯＧＯ！！」

ヴィヴィオを始め、なのは達もユーノに声援を送ると一気にテンションは最高潮にまで達する。

ユーノ自身はこの推進力の強さに険しい表情を浮かべながらも、先を行く恋次達を目指してアクセルを回し続ける。

「この翡翠の魔導死神こと・・・機動六課特別エグゼクティブアドバイザー、ユーノ・スクライアの真の実力を履き違えるなよ!!!」

『さぁ、レースもいよいよ終盤です!!トップで運命の臍に飛び込むのは果たして誰か!?ゴールでチャッカーフラッグを最初に受けるのは一体誰なのでしょうか!?』

ユーノが首位を取り戻そうと必死に前を追いかける中、先にフォーミュラーを追いかけていた恋次とティアナの下に今回の最終ポイントであると同時に最も警戒していたレーンが途中で切れた場所が前方に広がってきた。

「問題の場所だ!」

「恋次さん、用意はいいですか!?行きますよ!!」

恋次にそう指示を出すとティアナはマシーンに付けられている赤いボタンに指を添える。

現在1位で走行を続けるフォーミュラーもエンジンを一気に加速させて勝負に臨む。

「こちらも一気に駆け抜けるぞ!」

「「マキシマムブースター、イグニィッション!!」」

恋次とティアナはレールを飛び越える直前を見計らって、最高出力での加速を可能にする赤いボタンを押して空中をその強力な推進力で以って滑走する。

空を駆け抜ける三人の下には広大な海が広がっていた。

「あと少し!!あと少し追いつけるのに!!」

「くそ!!!負けられねえ!!」

二人はどうにかして首位をキープし続けるフォーミュラーのスピードに追いつこうとするが、あまりに強い加速に身体が思う通りに動かせず後一歩のところで突き放されてしまう。

「どうやら勝利の女神は、私に微笑んでくれたか・・・ん!?急速接近!ガルガンのレックスインフェルノか!?」

と、その時恋次とティアナを追い越し更には首位を守り続けていたフォーミュラーも追い越していったのは・・・ユーノのグリーンラベルであった。

「あれは!?」

「ユーノ先生!!」

二人はユーノの無事を確認し、一安心する。

目の前で自分を通り越していくユーノを見ていたフォーミュラーは、正統派らしく勝負魂に火がつき最後の追い上げを見せようとする。

「成程、こいつは予想外だった!だが負けるものか!こちらもスーパーチャージャー全開だ!ん!?何だ!!!操縦不能だ・・・!!緊急脱出!!」

マシーン異常が起きてしまい、止む終えずリタイアをしたフォーミュラーがパラシュートで脱出し、破壊される愛車を見た瞬間・・・恋次とティアナも含め目撃したものは二つノ取りを施したガルガンのレックスインフェルノであった。

「何だよありゃ!?」

「まさか・・・ガルガンの!?」

「レックスインフェルノ!?ガルガンめ!!卑怯な!!!くっ・・・気をつけろよ、グリーンラベル!!」

迫り来るガルガンの脅威など知らぬユーノはそのままエンジンを全開にしたままゴールへと目指していく。

「よし!このまま僕が独走すれば優勝は戴き・・・アンゴルモアの回収も完了する!!ん!?何だ・・・後ろから急速接近中!?」

ユーノは咄嗟に後ろを振り返ったその時、禁止装甲を施したガルガンがユーノのマシン目掛けて急速接近してくる。

「ははは!!!」

「ガルガン!?おのれ!!!禁止装甲を施したのか!!!」

「ふふ!!ぎゃあああ!!!」

ガルガンは自分の動きと連動するコネクターを使ってレックスインフェルノに取り付けられたドリルの先端が螺旋状であるストレート

ドリルをユーノにお見舞いする。

「ストレートドリル！！！」

魔法防壁を施しているユーノのマシーンでも、このドリルの威力には防壁にも輝が入ってしまう。

「ぐっ！！！」

更にガルガンはもう一つの先端から放物線状のスパイラルドリルをお見舞いする。

「スパイラルドリル！！！」

更に輝が大きくなっていき、防壁は既に限界に達していた。

「止めろ！！この恐竜が！！！」

「ははははははははは！！！！！！ははははははははは！！！！！いや、済まんな！！！手が滑ってお前のバイクのほうにいっちまったよ！！！」

「くっ！！あまり調子に乗るなよ！！！全速全開！！！！マキシマムブースト、最大質力！！！」

ユーノはグリーンラベルに付けられている赤いボタンを押すと、余計に付けられたエンジンと一緒に加算された莫大な推進力を秘めたブーストを最大限に引き出してガルガンから逃れようとする。

「あははははははあははははは！！！！！！全く運の良い奴だぜ！！！！だが、それも終わりだ！！！喰らえ！！！ドリルクラッシャー！

！！！」

ガルガン自身もユーノに後ろに追いつく勢いでエンジンを全開にすると、二つのドリルを向けて最後の止めを刺そうと攻撃を仕掛けてきた。

その瞬間、ユーノは不敵な笑みを浮かべるとつけていた余分エンジンを全て取り外す。

「かかったな！エンジン分離！！」

すると、取り外された余計なエンジン全てはガルガンのマシーンの目の前に現れてガルガンは回避することも出来ずにエンジンに衝突し、大爆発を起こした。

「ぬお！？おあああああああああああ！！！！！！！！！！」

ガルガンを倒したユーノの後姿をガッツポーズをして喜ぶ恋次とティアナ。

「よっし！！やったぜ、ユーノの奴！！」

「流石はユーノ先生！よし、私達も行きますよ！！」

「おう！！！」

ユーノの後に続く形で恋次とティアナはエンジンを全開にしてゴールを目指した。

ゴールのところでは多くの観客とピットで待ち構える不安げななの

は達が三人の到着を祈っていた。

『さぁ～～～果たしてトップのレーサーは誰だ!?おっと見えてきました!!!グリーンラベルです!!!今、1位でゴールイン!!!』

ユーノがグリーンラベルに乗ってゴールを通過したのを見て、なのは達は歓喜の声を上げて嬉しさを全力全開で表現する。

「やったあああ!!!!」

「「「「万歳!!!!!」」」」

「ユーノパパの優勝だ!!!!」

その後、ユーノの後を追っていた恋次とティアナも無事にゴールに辿り着く。

『続きまして、2位俺、参上号!!3位ヴィーナスクロスがゴール!!!!!』

ユーノ・恋次・ティアナはヘルメットを取り外すとお互いに健闘したことを称えて強く握手を交わした。

すると、ユーノの下に飛び込んでくる上機嫌のなのは。

「ユーノ君!!!!!」

「なのは♪」

なのははユーノの首に手を回し人目を憚らず抱きつくと、ユーノにこの上も無い笑顔を向ける。

「はははははは！！！！やったねユーノ君！！！！優勝だよ！！！！」

ユーノ自身も嬉しいことには嬉しいのだが、なのはの抱きしめる際の力が思ったよりも強かったらしく若干顔を引きつって苦しんでいた。

「ははははは♪なのは、ちょっと苦しいよ・・・」

同じように、ティアナの下に駆け寄ってきたスバルも肩に手をあてティアナを称える。

「ティアも良く頑張ってね！！凄かったよ！！！！」

「まっ、当然でしょうね！」

恋次の方も、浦太郎やはやて達に褒めはやされ満更でもない様子であった。

「凄くカッコよかったですよ、恋次さん！」

「ほんま、男の中の男やで！！」

「ははははははは！！！！見たか、これが俺様の実力だ！！」

すると、その時なのはとヴィヴィオとスキンシップを取っていたユーノの下にフォーミュラーが近付いてきた。

「見事だったよ、グリーンラベル。流石の私も完敗だ。」

「いえいえ、とんでもないですよ。僕達も貴方と戦えたことを誇りに思います。」

そう言うと、恋次とティアナもフォーミュラーに駆け寄ると握手を交わして今回のレース健闘をお互いに称える。

「ああ。また何時か勝負できる日を楽しみにしているよ。」

『さぁ！今大会優勝者であるユーノ・スクライア選手に、本大会の優勝商品が贈られます！！』

壇上に上がったユーノは大勢の観客に見守られる中、大会主催者から直々に優勝商品となっていたアンゴルモアが入った箱を受け取る。

「おめでとう！」

「ありがとうございます・・・あれ？」

だが、その時ユーノが箱を空けて中身を確認したとき中にはアンゴルモアなど何所にも入っていなかったのだ。

これには全員も首を傾げる。

「空っぽ！？」

「そんな莫迦な！？」

すると、その時ユーノ達の耳に届いてくるあの恐竜人の笑い声。

「なははははははははっは！！！！言ったろ！！！！商品はこの俺が戴くと！！！！」

そう、ガルガンであった。

ガルガンは衝突の瞬間、パラシュートで回避すると何とか自力で気付かれないようゴールへと向かい主催者が持っていたアンゴルモアの箱を盗み中身だけを抜き取ったのだ。

「ガルガン！！！おのれ、何所まで卑怯な！！！！」

「まずい！！急いであれを取り返さないと！！！！」

機動六課の面々は直ぐにスタッフ達と協力してガルガンを覆い隠すが、ガルガンは不敵な笑みを浮かべてアンゴルモアの力を発動させる。

「ははははは！！！！何だか力が漲ってきたぞ！！！！俺様は無敵だ！！！！！」

その瞬間、発動したアンゴルモアがガルガンを包み込むと巨大な恐竜の怪物へと変貌させてしまう。

「なっ！？」

体長はおよそ２００メートル。

正しく恐竜のバケモノといったところだろう。

「ＡＭ１０になりやがった！！」

「みんな、逃げろ！！！」

観客は直ぐに管理局の指示の下大慌てでその場から退避し始める。

スバルとエリオはバリアジャケットに身を包むと、攻撃を開始し始める。

「うりゃあああ！！！！！」

「たあああああああ！！！！」

だが、二人の攻撃を受ける直前でＡＭ１０は強靭な脚力を利用して巨体に似合わぬスピードでスバルとエリオの後ろに回りこんだ。

「何！？」

「速い！！」

と、その時ＡＭ１０は巨大な尾を振り回してスバルに強力な一撃を喰らわせる。

「うわああ！！しまった！！！きゃあああああ！！！」

「スバルさん！！」

すると、エリオはＡＭ１０によって掴まれてしまい体の自由を奪われる。

「うわあああああ！！！！」

「ハーケンセイバー！！」

「アックスオーガ！！」

「アクセルシューター！！」

「クロスファイアー・・・シュート！！！」

その時、フェイト・金太郎・なのは・ティアナの救援によって難を脱したスバルとエリオ。

「助かった・・・！」

「気を抜かないの、馬鹿スバル！」

スバル達を助けたことを確認すると、恋次と白鳥は斬魄刀を使った一撃を入れる。

「咆えろ、蛇尾丸！！！」

「琴線斬！！」

二人の攻撃が通りその場に倒れこむＡＭ１０。

「やったか・・・！？なっ！！」

だが、ＡＭ１０はその時身体を無数に分離させると分離させた身体の一つ一つを自爆する性質を持ったベロキラプトルへと変化させる。

「分身しやがった！！」

ラプトル体となった無数のＡＭ１０はなのは達の攻撃を素早い動きでかわしながら背後へと近付き次々と自爆していく。

「「「「「うあああああ！！！！」」」」」

「くっ！！分身を自爆させるなんて、何て卑怯な戦い方だ！！」

「本体は何所に居るんだ！？」

爆発をその身に受けながらラプトルの中に混じっている本体を探し出そうとするなのは達。

「なっ！？あそこだ！！」

すると、その時吉良が一匹だけ離れたところで分身の様子を窺うほかとは明らかに違うラプトルを発見した。

「くそ！！あんなところに居やがったのか！？せりゃあああああ！！！！」

恋次は蛇尾丸を伸ばして本体を捕まえようとするが、分身の妨害によって軌道がずれてしまい捕獲し損ねる。

「しまった！！！」

「ストラグルバインド！！」

その時、ユーノが油断した本体の身体を得意のバインドで頑丈に捕

縛する。

「油断したな、ガルガン。」

「ユーノ君！！」

その後、応援に駆けつけた来た鬼太郎やシグナム達の活躍によって分身体は次々と消滅を果たしていく。

「俺の必殺技、パート２！！」

「コメットフリーゲン！！」

「紫電・・・一閃！！」

そして、全ての分身体が消滅した後なのはは本体に狙いを定めると止めのディバインバスターを発射する。

「ディバイン・・・バスター！！！」

なのはのディバインバスターが貫通し、ＡＭ１０はアンゴルモアと分離をしてもとのガルガンへと戻っていった。

ユーノは直ぐに封印処理を掛けてアンゴルモアを回収する。

「終わったか・・・」

「結局レースの後は戦いかよ！？二度手間だったな・・・」

「仕方ないですよ、それは♪」

こうして、壮絶なデスレースの後に待ち受けていたＡＭ１０との戦いも見事完遂した機動六課のメンバーはアンゴルモアを回収してミッドチルダへと帰還した。

さて、その頃ミッドチルダと相反する魂魄が住まう世界・・・尸魂界。

恋次達が任務を完遂して帰還をしていた頃、総隊長山本元柳斎重国の下に呼び出される区神の女性死神。

「御呼びでしょうか、総隊長。」

「うむ。お主を呼び出したのは他でもない。先日時空管理局本局のミゼット・クローベルからの要請で、隊長格をもう一人機動六課に派遣して欲しいとの連絡があった。直ちにお主にはミットチルダ機動六課に滞在中の三番隊隊長、阿散井恋次と副隊長吉良イヅルと合流を果たしてもらう。任せたぞ・・・六番隊副隊長、朽木ルキア。」

「はっ、仰せのままに！」

音速を超えて！（後書き）

教えて、ユーノ先生！

ユ「今日はブラックレックスについて♪」

ユ「銀河系で最大規模を誇る暴走族、ブラックレックスはバイオテクノロジーで蘇った恐竜を機械融合させることによって生まれた生機融合体の集まりなんだ。」

ユ「性格はとっても凶暴で、何よりもバイクを愛している分それが傷つけられたときには誰だろうとお構い無しに殺しちゃう。」

ユ「言ってみれば・・・極度のバイクバカってところ。」

ル「そんなことより、次回より私の活躍が期待されるのだから私の紹介をしたらどうなのだ！？」

ユ「いや、そうは言われましても・・・何事にも順序ってものがありますから・・・」

ル「ならばこの私が優先的に上ではないか！！ええ！！そうではないのか・・・（この後永遠に文句を言い続けるルキア）」

ユ「やれやれ・・・一護さんの気持ちが分かる気がする・・・」

一「だろ・・・」

魔導師図鑑ハイパー！

機動六課に滞在中の間、死神達は通常戦闘以外では義骸を着用している。

恋「外回り行って来るぜ！」

恋次は義骸の収められたロッカーを探っている。

フェ「義骸・・・何もロッカーに入れる必要は無い気がするんですけど・・・」

恋「固いこと気にするなよ。はやての野郎に頼んだところで、まともな置き場所なんか提供してくれるとも思えないしな・・・」

そんな恋次の様子を見ていたフェイトと吉良であったが、その時恋次は突然大声を上げる。

恋「？」

吉「なっ！！」

恋「なんじゃこりゃー！！！！！！！」

すると、そんな恋次の声を聞いたはやてがやって来て笑いながら謝罪をしてきた。

は「いやはや・・・すんませんな、恋次さん・・・実は前にユーノ君が点検した後、元に戻そうとしたら誤って汚してしもてな・・・だから、私が衣装を新着しときました！」

そう言われながら恋次が着ているのは、はやて特性のタヌキの衣装であった。

恋次はあまりの自分の姿に項垂れる。

吉「何でタヌキなんだい？」

は「てへ♪」

サーキット・ＦＢＴ篇

フォーミュラー・ジャクバーン

声　一　野田圭一

ＦＢＴの優勝候補の一人で、銀河系レーサー会のカリスマ。幾多のレース大会で優勝してる凄腕のバイクレーサー。常に正々堂々とした勝負を好み、勝負においては全力全開で挑んでくる。

ガルガン・レックス／ＡＭ１０

声　一　渡部猛

銀河系で最大規模を誇る暴走族にして、そのヘッド。フォーミュラ

ーとは違い勝つためには手段を選ばない冷酷且つ残忍な性格で、大会中に彼によって粛清されたレーサーは数多い。禁止装甲を施し、ユーノを苦しめるも逆にユーノの策にはまりリタイアとなるが優勝商品であるアンゴルモアを奪いＡＭ体と化す。その後、機動六課によって倒され取り押さえられる。

フラストレーション・マルタ

声　　一　飛田展男

ＦＢＴを始め、あらゆるレースの司会進行を務めるフリーの実況家。逆立った頭が特徴で異常にテンションが高いことがこの名前の由来となっている。

登場マシーン

『グリーンラベル』

全長：２３００ｍｍ
全幅：８４５ｍｍ
最大出力：１５０ｋＷ
最高時速：３６０ｋｍ

ユーノが乗用する専用バイク。基本カラーは深緑と黄緑。通常時はＶ型２気筒エンジンによるガソリン走行だが、ＦＢＴ時にはリンカーコアからの魔力エネルギーが供給され、あらゆる環境を走破することに加え、霊力によって作られたシールドを展開されることが可能。ユーノの意思による無人での自動走行も可能。

『ヴィーナスクロス』

全長：２２５０ｍｍ

全幅：７６０ｍｍ
全高：１２１０ｍｍ
最高時速：３２０ｋｍ
ティアナが乗用するバイクで、ヴァイスの所有するものを改造したもの。ＦＢＴに参加するに当たりあらゆる性能が強化され、車体は敵に体当たりしても傷ひとつ付かず、魔力攻撃を受けても大破しない程の耐久力を持つに至る。加速性に優れ、それを活かした走行を可能にしている。

『俺、参上号』

全長：２１２０ｍｍ
全幅：７９０ｍｍ全高：１２９０ｍｍ
最高時速：３８０ｋｍ
最大馬力：３５５馬力
恋次が乗用する専用バイク。基本カラーは赤。動力系に超小型原子力エンジン・ＡＳ－２５Ｅアトミックストームを採用しており、ヴィーナスクロスと比較して加速性能は劣るが、最高速で勝る。恋次の意志を受けての無人走行が可能となっている。名前を考えたのは鬼太郎であり、恋次はこれを不満に思っている。

『ブラッシャベリア』

全長：２０７０ｍｍ
全幅：８１０ｍｍ
全高：１４１０ｍｍ
最高時速：４２０ｋｍ
最高出力：３２０馬力
フォーミラー専用マシンとして彼が所属する財団が開発したスーパーバイクであり、フォーミラーは普段からこのマシンを使用してい

る。基本カラーは青と水色。動力系に超小型原子力エンジン・ＡＢ－２７Ｅアトミックブラストを採用しており、通常のバイクとは比較にならないほどのスペックを持つ。細やかな動きを得意としており、最高加速時のスーパーチャージャーの速力は音速を超えるとも言われる。

『レックスインフェルノ』

全長：４２００　ｍｍ
全幅：１０７５ｍｍ
最大出力：２９０ｋＷ
最高時速：２８０ｋｍ
ガルガンが乗用する専用トライク。基本カラーは抹茶色。重厚な形状と絶対的な防御力によってあらゆる衝撃に対する体勢を兼ね揃えている。その反面、加速や小回りなどが利かないのが欠点でもある。装備を自由に換装することが出来、ＦＢＴ時には左右にスパイラルドリルとストレートドリルを装備し、フォーミラーのマシーンを破壊する。

竜騎融合

＞ｉ１３２６３―７０９＜

ここは、ヴィヴィオが毎日のように通う魔法学院。

夕方になると、生徒達は一斉に親元の方へと寄り道などせずに帰宅する。

ヴィヴィオは親友のリオとコロナに挨拶を済ませ、現在の自宅のような機能を果たしている機動六課へと向うのが日課だった。

「じゃあね、ヴィヴィオ！また、明日！！」

「御機嫌よう、ヴィヴィオ。」

「うん！じゃあね、リオ。コロナ！」

二人に別れを告げたヴィヴィオは上機嫌な様子で校門の外へと走って行く。

その時、ヴィヴィオは校門の外で待っていた意外な人物の姿を目撃する。

「ふふふふふ♪あっ！」

「やあ。お帰り、ヴィヴィオ♪」

「ユーノパパ！！迎えに来てくれたの？」

ヴィヴィオは校門の外で迎えを待っていたユーノの下に飛びつき、ユーノ自身もそんな無邪気な我が子を優しく抱きしめ、髪を撫でる。

何故、ユーノがヴィヴィオの迎えに来れたのか、その経緯はというと・・・

「店に一度戻って留守番用のコピーロボットがちゃんと動いてるか

どうか見に行って来てその帰りだよ♪その序がてらヴィヴィオのお迎えに。」

その日、ユーノははやてからの許諾を得て一度自分の店に戻って留守番役をここ数ヶ月以上任せっきりの織姫の負担を失くす為にユーノは自分達のコピーロボットを作成し、その機能がきちんと作動しているかどうかを確かめに行っていたのだ。

「そうなんだ！じゃあ、一緒に帰ろう！！」

「うん！」

二人は親子仲良く手を繋いで微笑ましい様子で六課へと向かって行った。

帰路の途中、ヴィヴィオはユーノの何時もの服装を見てふと疑問を浮かべた。

「そう言えばユーノパパはいつもその格好なんだね？偶には他の格好したら・・・」

「う～ん・・・これに着慣れた所為か今更普通の洋服着るのに凄い抵抗があるんだよね・・・まぁ～でも、どうしても着ないといけない場面ではスーツぐらいは着るけどね。」

「ふ～ん・・・そうなんだ。」

そんな他愛も無い談笑をしていたとき、二人の後ろから猫をかぶったホラーマンガの受け売りの妙な淑女キャラ的な口調で話すある女性の声が聞こえてきた。

「あの～すみません・・・ちょっと、道をお尋ねしたいのですか？」

「え・・・あっ、はい♪いいですよ。どちらの方まで・・・って、あなたは！？」

ユーノは飄々とした態度で後ろに振り返りその人の言葉に快く肯定の返事をしたとき、ユーノはその女性の姿を見た途端驚きを隠せなかった。

その頃、一日の仕事（フォワードの訓練と自主練習がほとんど）が一段落した恋次はくたくたの様子で大きくを伸びをし、食堂の方へと向かって行った。

「あ～あ・・・今日も一日よく働いたぜ！！さてと・・・今晩の献立は何だろうな・・・？」

恋次はそんな言葉を口にしながら食堂へと迎い、テーブルに着いたときだった。

恋次のテーブルにあのホラーマンガの妙な受け売りキャラでその場を通す女性が親切にも夕飯を運んできてくれたのだ。

「よっこいしょっと！！」

「今晩のメニューは鯖の味噌に胡瓜と白菜の漬物、若布の味噌汁と白玉のぜんざいになっております♪」

「ほう～随分豪華じゃねぇか！やっぱ偶には和食食わないとな・・・って？」

恋次は目の前に置かれた食事に感激し、運んできてくれた者に返事をしようとしたが・・・その聞き覚えのある此処にはいないはずの人物の声に一瞬耳を疑った。

そして、恐る恐る横を振り返ってみるとそこに立っていたは・・・恋次の幼馴染で現在は六番隊の副隊長を務めている女傑、朽木ルキアであった。

「・・・る・・ルキア・・・!?」

「・・・久しぶりだな、恋次!」

冷や汗をかく恋次と、何所か男にも似た眼差しを浮かべるルキア。暫くの沈黙がその場に流れた後、恋次は人が居るのも気にせずに信じられないとばかりの大声を上げるのであった。

「えええええええええええ!!!!!!!!!!!!!!!」

傍で聞いていたルキアは勿論、夕食を堪能していた他の職員にはさぞかし迷惑であっただろう。

「何でだよ!!!!!なんでてめぇが此処にいるんだよ!!!!つーか何しに来・・・」

恋次がかなりの動揺を露にしながらルキアに理由を問いただそうとしたとき、ルキアはそんな恋次の顔面に唐突に鉄拳を食らわせる。

「えぶ!!!!」

理由もなく幼馴染に入られる鉄拳に更に混乱する恋次。

「な・・・何しやがん・・・あ!?」

恋次は反撃をしようとその場から立とうとした時、後ろの方にいつの間にか立っていた吉良によって両腕を押えられ反撃できない様子であった。

それを良いことに、ルキアは恋次の頬に今度は嵐のような往復ビンタを炸裂。

「おぶ!ぶッ!!」

往復ビンタを喰らった恋次の頬は無惨にも腫れ上がる。

「てめ・・・!!」

「何だそのアホ面は!?そんなことで隊長として自覚を持てるというのか!!」

「質問に答えろ!!何でてめぇが此処にいるんだって聞いてんだよ!?」

口喧嘩を始めた恋次とルキアだったが、そこに横から口を挟んできたのはユーノだった。

「それは僕がお応えしますよ♪」

「ユーノ!?おい、一体どういうことだよ!!」

「ルキアさんは総隊長さんからの直々の命令で機動六課へと派遣されてきたんです。依頼人は、ミゼット提督を始めとする三提督のみなさんです♪」

「ユーノ殿の言う通りだ。しかしお前という奴は・・・暫く見ないうちに随分とだらけてしまったな！」

「何だと！？おい・・・てめぇ俺が何時だらけたりしたんだよ、ええ！！」

「お前の行動全てが既にだらけておる！大体、死神ともあろうものがこんな簡単に姿を知られてどうするのだ！当初の目的はあくまで隠密行動だったはずだぞ！」

「し、仕方ネエだろ！！此処にいる奴ら皆バカでかい魔力を持ってる連中だから俺らの姿が平気で見えちまうんだよ！！」

「ならばもう少し上手いやり方を思いつかなかったのか！！」

「俺だって色々やったんだよ・・・！！」

二人は機動六課のメンバーが唖然とする中で、長きに渡る口喧嘩を勃発させる。

そんな二人の様子を前線メンバーのなのは達やユーノ、更には吉良は苦笑いを浮かべながら離れた場所で見守っていた。

「・・・やれやれ・・・始まったよ。」

「でもいいじゃないですか♪こういう光景も。」

「ユーノ君、ルキアさんと恋次さんとはどういう関係なの？」

「彼女は恋次さんと同じ流魂街出身の幼馴染なんだよ。幼少の頃を南流魂街７８地区『戌吊』で過ごし、真央霊術院に入学したからは死神になる為に日々努力し、彼女が朽木家に引き取られてから５・６０年・・・今では互いの良き理解者であり深い絆で結ばれた仲だよ。まっ、僕となのはと似たようなものだよ♪」

「そうなんだ。そう言えば、何所と無く・・・恋次さんの表情が何時も異常に楽しそうな気がする♪」

なのははユーノからそう説明を受けると、喧嘩はしているものの何所か楽しそうな雰囲気を醸し出す恋次を温かい目で見守っていた。

「また、頼もしい人が協力してくれるとは・・・こっちとしては願ってもいない朗報や！よし！！今日はルキアさんの歓迎会や！！」

はやてはそう言って歓迎会の開催を提案するが、シグナムやヴィータ達の言葉によってあっさりと否定されてしまうことになる。

「しかし、主はやて・・・今から準備をするのは無理がありますが・・・」

「はやてのお祭り好きにも困ったもんだぜ・・・」

すると、なのは達全員はそんなはやてにも聞こえる声で笑い始める。

他のバックヤードスッタフ達も釣られて連鎖反応を越すように笑い

出すなか、はやては赤面させてその場にしゃがみ込んでいじけてしまい、恋次とルキアは相変わらず喧嘩を続けていたのであった。

ルキアが六課に迎えられて丸一日が経ったそんな翌日の昼下がり、アンゴルモアの新たな反応先が見つかり前線メンバーは全員指令室に集まり、メインモニターに目を通していた。

「今回の場所は・・・また厄介なところやな・・・」

はやてやフェイト達隊長陣がそう言うのも無理は無い。

何故なら、次なる世界の状況は今までとはかなり勝手が違っていたのだ。

「第２３管理外世界『セルバ』。多くの密林と熱帯雨林が生い茂る正しく森だけの世界。セルバという言葉も、地球上では南米で好んで使われるジャングルの別の呼び方だからね・・・」

ユーノはそう言うと、一度背もたれに止しかかると腕を組みながら険しい表情を浮かべる。

「それで、今回のアンゴルモアはこの世界のどの辺にあるんだ？」

クロノの言葉を聞いたユーノは、タッチパネルを操作して場所の特定に入る。

「密林の奥深く・・・ちょうどこの辺り。」

メインモニターに表示される密林を現したマップの中央付近に表示された赤い斑点。

そこを皆は目を向けながらユーノの説明を受ける。

「常に霧で覆われ、サテライトですら全く写真が撮れないところにある謎の秘境にそれがあると思われる・・・」

すると、秘境という言葉に何故か高揚する恋次。

「秘境か・・・何だかワクワクするじゃねえか!!」

そんな恋次の様子を見ながら実に冷たい表情でツッコミを入れるルキア。

「子供か貴様は。」

「でも、充分に用心はしといてくださいよ。秘境には何が潜んでいるか分かったものじゃないですからね。もしかしたら・・・人食い植物が待ち受けていたりとかも・・・!!」

ユーノはそう言いながら柄にも無い恐ろしい形相でなのは達全員が恐怖を仰ぐ発言すると、エリオが直ぐに口を挟んでくる。

「や、止めてくださいよ・・・ユーノ先生!!そう言う冗談は!!」

「しかし、そういった秘境にこれから探索に行くわけやけど・・・誰に行かしたらいいのかな・・・?」

はやてが判断に困っていると、ルキアが挙手をして自らが先導することを伝える。

「ならば、私が率先して参ろう。」

「ルキア!?お前・・・大丈夫なのかよ一人で?」

恋次はかなり不安且つ小馬鹿にした表情を浮かべてルキアにそう口にすると、ルキア自身もかなり不服そうな表情で意外な言葉を口にする。

「何を言っているのだ、恋次!お前も一緒だ!!」

「何だと!!てめぇ、俺この間も任務で散々痛い思いしたんだぞ!!暫くは勘弁してくれ・・・!!」

「戯けが!!そんなことでどうするのだ!!仮にも死神。それも隊長格なのだぞ!!ぶつくさ言わずに一緒に来い!!」

ルキアの強引で理不尽な言葉に猛反対する恋次であったが、はやては少し考えた末ルキアの考えに合意する。

「うん!それはええかもな♪恋次さん、そう言うわけやからルキアさんと頑張ってな!!」

「狸娘!!!!てめぇ、何調子の良いこと言ってんだよ!!!俺は絶対やだからなって・・・ルキア!!何すんだよ!!」

恋次はその時、はやてにまだ全ての事を話し終わる前にルキアに死覇装を引っ張られながら転送ポートへ向っていくのであった。

「それではこれより、六番隊副隊長朽木ルキアと三番隊隊長阿散井恋次の両名は『セルバ』へ向けて出発したいと思う所存であります。

出来れば、サポートに二人ほど同行をお願いしたいのですが？」

「そうやね・・・あっ。フェイトちゃん！キャロとアギトを同行させてもええかな？」

「キャロとアギトを？私はいいけど・・・本人たちにも一応聞いてみないと？」

フェイトがそう言ってキャロとアギトを一瞥すると、二人は笑顔を向けて直ぐに返事をするのであった。

「私は全然構いませんよ、フェイトさん！」

「おう！私だっていいぜ！！」

それを聞いたフェイトも笑顔を向けてはやてに返事をする

「だ、そうだよ。」

「ほんなら、ライトニング４及びライトニング５は朽木ルキア、阿散井恋次と供にその同行を命ずる。」

「「了解！」」

キャロとアギトははやてに敬礼を済ませると、仕度を整えて恋次とルキアが待つ転送ポートへと向う。

転送ポートの中では未だに恋次は子供のように駄々を捏ねながら行きたくないという気持ちを赤裸々に表現していた。

「ちくしょう!!俺は絶対やだからな!!!おい!!!聞いてるのか!!!」

見かねたユーノが苦笑をしながら転送ポートのボタンを押すと、恋次たち四人はセルバへと向けて出発して行ったのであった。

「行っちゃったね・・・」

「恋次さんも気の毒に・・・」

「ま～でも、朽木さんが一緒だしこれはこれで良いのかもですね・・・」

すると、吉良のその言葉を聞いてはやてが二人の仲に興味を抱いたのか実に女性がすきそうな話題を吹っかけてきた。

「何や、二人も実はなのはちゃんとユーノ君みたいな仲なん?」

「いや・・・それは無いと思うよ・・・彼らに限って・・・」

「何やつまらん・・・」

はやては吉良から聞かされた実に消化の悪い答えに深く落ち込み、その場にしゃがみ込んでしまった。

そんなはやての落ち込む様子を見ていたなのはやユーノは苦笑いを浮かべる。

「はやて・・・別にそこまで落ち込まなくても・・・」

「この手の話好きだからね・・・はやてちゃん・・・」

その頃、恋次たち四人は無事に転送ポートによって第２３管理外世界『セルバ』と到着していた。

セルバは先述にもあったように、世界の殆どがジャングルによって構成された全くの未開拓地であり、人間が住んでいる形跡は一切見受けられない。

そんな森という森を掻き分けながら奥のほうへと目指す恋次たち一行だが、恋次自身正直この森の異様な雰囲気が正直嫌いだった。

「・・・薄気味悪りーな・・・妙に熱いのも応えるぜ・・・」

「文句を言うな！少しは黙って前に進んだらどうだ。見ろ、キャロとアギトは文句一つ言わずに歩いているではないか。」

ルキアはそう言うと、自分達の前を文句一つこぼさずに歩き続ける防護服姿のキャロとアギトを最後尾の恋次に向けて指差す。

それを見た恋次は付かれきった表情を浮かべながらこんな言葉を口にする。

「・・・元気だよな、子供は。」

「爺くさいぞ、恋次。」

すると、そのときアギトが森の中から聞こえてくる奇妙な音を聞いて全員に警戒を呼びかける。

「お?なんだ・・・何か変な音が聞こえねえか・・・?」

「何だと?」

アギトの言葉を聞いてその場に立ち止まり耳を澄ませる恋次・ルキア・キャロの三人。

すると、その奇妙な音は徐々に大きくなりながらこちらに近付いていく。

「何でしょうか・・・この不気味な音・・・!?」

「分からぬ。だが、果てしなく危険な予感がしてならぬ・・・!!」

と、その時恋次は後ろに振り返った瞬間に奇妙な音を発するその標的が向ってきたことを慌てて全員に伝えた。

「おい!!何か来たぞ!!」

四人の後ろから近付いてきたのは・・・とても常識では考えられぬほど巨大で偉業の姿と化した団子虫のような生物だった。

その生物は身体を丸めた状態で背中から何千本もの棘を出しながら地面と木を削り猛スピードで転がってきた。

「「「「ああああああ!!!!!!!!」」」」

四人は世にも恐ろしいものを目撃した瞬間、泣きべそをかきながらその場から逃げ出す。

「逃げるぞ！！！！！！！！」

「「「のあああああああ！！！！！！！！！」」」

四人は任務のことなど最早そっちのけで今は逃げることだけに全身系を集中させたが、恋次は何故このような生物が居るのかを疑問に思っていた。

「何だよありゃ！？団子虫のバケモノかよ！！」

「私に訊くでない！！兎も角先ずは逃げるぞ！！」

だが、その時キャロがその場に生えていた植物の蔦に足を取られてしまい転んでしまう。

「きゃあ！！」

「あっ！キャロ！！」

アギトは直ぐにキャロの下に駆け寄って起こそうとしたが、目の前には既にあの生物が棘を向けて二人を串刺しにしようとしていたのだった。

「「ああ！！」」

「破道の三十三　『蒼火墜』！」

その時、ルキアが咄嗟の判断で蒼火墜を団子虫に放出させて彼方へと吹き飛ばす。

「今だ！！逃げるぞ！！」

キャロとアギトにルキアに助けられると、急いで立ち上がり全速力で走る恋次の方を目指して走り出す。

「助かりました、ルキアさん！」

「気にするでない！貴様にもしものことがあったら、フェイト殿に顔向けが効かぬ。」

三人はどうにか恋次に追いつき奥へ走って行ったが、彼らは森の奥に張り込んだ際に目を疑うような光景を目撃したのであった。

「なっ！？此処は・・・！！」

四人が目撃したのは、巨大な奇怪生物・虫と植物が生い茂る未知の領域であった。

それはある種の虫たちの桃源郷といった方が良いのであろうか？

それともエイリアンの住処と言っていいのか分からぬが。

「・・・何だこれは・・・こんな植物今迄見たこともないぞ・・・！いや・・・植物だけでない。虫も・・・動物も・・・全てが我々の常識では考えも付かぬ姿をしている！」

メインスクリーンで同じものを見ていたクロノやフォワード陣も驚きの表情を見せるのであった。

「どう言う事だ一体・・・この生物達は何なんだ！？」

「うえ～～～何か気持ち悪い～～～！！」

ユーノは送られてきた画像と付近の状況をタッチパネルで打ち込んでいき、詳細を話し出した。

「調べたところ、恋次さん達が居る辺りは火山帯のようだな・・・間歇泉から出る火山ガスや硫黄、硫化水素を活動エネルギーとして生きているらしい。人間も寄り付かぬ辺境の土地で育ったことにより、進化の過程が著しく他を逸してしまったようだ・・・」

四人は酸素が著しく少ないこの土地で動き回れるようにキャロの魔法によって酸素の量を一定に保ってくれる特殊な棒劇を見に纏いながら、目に余る生物たちを他所に奥へと進んでいく。

そんな中で、恋次は互いに喰らい始める虫たちの姿に顔を引きつる。

「げっ！こいつら・・・共食いしてるぜ！！」

「弱肉強食の世界という奴か・・・生々しいな・・・」

「アギトさん、ごめんなさい！私、あまり見たくないから目瞑っても良いですか？」

「私だって好きでこんな気持ち悪いもん見たくないって！」

すると、恋次は旅の底から感じる嫌な感触に気づき思わず見てみると、案の定虫の死骸と体液が付着していた。

「のおお！！何か変な虫踏んじまった！！！」

「喧しいぞ、恋次！！もう少し静かに歩かぬか！」

ルキアが恋次に注意を入れたとき、アギトが再び奥の方から何かを目撃した。

「あれ・・・！？何か奥のほうにゴッツイもんが飛んでるぜ！！」

アギトにそう言われて、恋次・ルキア・キャロの三人が奥の方を見てみると、火山の火口付近で飛び回る羽の生えた強大な生物を目撃し、それが何なのかを理解した。

「竜！？」

「此処には虫以外にも竜までいるのか！？」

すると、ルキアは懐の伝令信機から発するバイブルを感じ取り出してみると、火口付近から感じる高エネルギー反応を確認する。

「！？この尋常ならぬエネルギー反応は・・・！！恋次、キャロ、アギト！この先にアンゴルモアがあることは間違いない！急いで奥へ進むぞ！」

「分かった！」

「了解です！」

「よっしゃ！いっちょ行くか！！」

キャロはフリードを元の姿に戻してから三人を背中に乗せると、問

題の場所まで飛んでいったのであった。

指令室では、メインモニターに映し出される竜の群れを見ながら全員が険しい表情を浮かべていた。

「竜の巣窟か・・・リンカーコアの反応から見ると、数はざっと１００体以上か・・・」

「しかし、何でこんな秘境に竜がうじゃうじゃ。しかも大量に？」

そんなヴィータの疑問にユーノが冷静な様子でタッチパネルを叩きながら説明をする。

「元々竜とは熱い空気を好む。火山帯は彼らにとって恰好の餌場であり良き住処。さらには非常食としての異形生物がそこかしこに散らばってる。増殖は自明の理だね。」

「間も無く、キャロたちが火山帯に接近します！ああ！！エネルギー反応急激に増大！！」

エリオはそのとき画面に映し出される急激に増え続けるエネルギー反応に驚愕する。

「大変ユーノ！！アンゴルモアが発動しようとしてる！！しかも、その場所は火山の中から！！」

「何だって！？」

「フェイトちゃん！直ぐに四人に連絡して逃げるように言って！！」

なのはの指示によってフェイトから四人に届けられる緊急連絡。

四人はその時火山の火口付近に居たのであった。

「何だと!!ルキア、訊いたか!?」

「ああ!どうやらそうらしいな。キャロ、アギト!もうじき火山が大噴火を起こす!!此処は溶岩が退いてから出直そ・・・!!」

ルキアがそう言おうとしたときだった。

四人は後ろから聞こえてくる竜の嘶きを聞き取り後ろを振り返ってみると、空中に浮かんでいた竜の群れによって狙われていたのであった。

「これは!?」

「みなさん・・・この状況で逃げるのは・・・不可能に近いですよ。」

「竜の群れだ!!しかもこんな巨大な!?」

四人を今にも喰らい尽くそうとばかりの瞳で見下ろす漆黒の竜。

「キャロ、この竜のことは分かるか?」

「はい!同じ種を以前見たことがあります。黒い瞳に悪魔を思わせるような大きくて鋭い翼・・・そして、どんな獲物も噛み砕く強靭な牙。間違いなく、これは暗黒竜デモンストーム!」

「デモンストーム・・・！？」

暗黒竜デモンストーム。

アルザスの里を始め、数多くの異世界でその巣を展開させる大型の竜。

知能は低いが凶暴性が高く、獲物に対する執着心は相当なものである。

コウモリのようなその両翼はどんな攻撃も弾き返し時には突風をも巻き起こす。

一箇所に固まって警戒する四人であったが、その時デモンストームの一匹が口から炎を生成して四人を狙い撃ちしようとしてきた。

「！？何か撃つ気だ！！一先ず散るぞ！！」

ルキアの言葉を聞いて四人は炎を討たれる前にばらばらに分かれて攻撃を回避する。

散らばった直後、四人が元いた場所に発射された火炎弾。

「火炎弾か・・・なっ！？」

空中に散会した恋次がその炎を凝視していたその時、炎が消えた瞬間に岩場の足元が突然解け始めて崩れ落ちていく後継を目の当たりにした。

「こりゃ濃硫酸か・・・！？」

すると、別の一匹がフリードの背中に乗っていたキャロに向けて例の火炎弾を発射、それをラウンドシールドで防御しようとするキャロ。

「ラウンドシールド！！」

しかし、炎エネルギーと魔法防壁ですら溶かしてしまう特殊な酸によってキャロのシールドは破壊されフリード供に落下してしまう。

「きゃああ！！！」

「キャロ！！こいつらよくも！！バーニングフレア！！」

怒り心頭のアギトが炎熱系魔法を発動させて竜に攻撃を仕掛けるが、竜は翼を操って起用に炎をラケットのように弾いてしまう。

「何！？翼で防いだ！！」

アギトが驚きの余り隙を見せた直後、竜の群れは一斉に火炎弾を発射してきたがルキアがすぐに断空を使って炎を遮断する。

「縛道の八十一　『断空』」

「助かったぜ、ルキアの旦那！」

「油断するでないぞ。ここは何としても逃げ切るのだ！恋次、言われたとおりにな！」

「分かってるよ!!」

ルキアの言葉を聞いた恋次は蛇尾丸を解放すると、一匹の竜目掛けて刃節を延ばしていった。

「いくぜ・・・咆えろ、蛇尾丸!!」

刃節に当たった竜の群れは力に押されてドミノ倒しの要領で次々と地面に落下していく。

「今だ!!全速力で逃げるぞ!!」

ルキアはキャロを起こすと、急いでフリードの背中に乗って噴火直前の火山からの脱出を試みる。

指令室の前線メンバーや管制室のシャーリー達の下にも緊張が走る。

『間も無く火山が爆発します!!!5、4、3、2、1・・・0!!』

その瞬間、セルバで最も巨大な火山・・・『グレンマウンテン』が大噴火を起こして多量のマグマを噴出しながら火山灰を空へと打ち上げる。

「来たぜ!!」

「キャロ、フリードで恋次たちと空高くまで避難してくれ!!私はこの火砕流を止めてあれの回収をする!!」

「そ、そんな!?無茶ですよルキアさん!!飲み込まれた一溜まりもありません!!」

「下手な考えはやめたほうがいって、ルキアの旦那!!」

「戯けが。策も弄せず行き当たりばったりのどこぞの刺青男と一緒にするでない。」

「っておい!!それは俺のことか・・・!?」

「まぁ、見ておれ。」

ルキアはそう言うと、溶岩がまだ流れてきていない場所へ降り立つと斬魄刀を抜き出しその力を解放させるであった。

「舞え、『袖白雪(そでのしらゆき)』」

ルキアが解号を口にした瞬間、能力解放と共に刀身も鍔も柄も全て純白の形状に変形し、柄頭に先の長い帯が付くのであった。

指令室でルキアの斬魄刀を見ていたはやて達は興味津々であった。

「あれは!?」

「ルキアさんの斬魄刀・・・!?」

「白くて綺麗やわ・・・!」

ルキアはその場に刀で地面を四ヶ所突き、そこから強大な凍気を一斉に雪崩のように放出して、敵を凍らせる技を向って来る溶岩に向

ける。

「次の舞・『白漣(はくれん)』」

白漣を受けた瞬間、本来なら絶対に凍りつくことなど無い溶岩が全てものの見事に凍り付いてしまったのであった。

これを間近で見ていたキャロやアギトを始め、メインスクリーンから見ていたクロノ達も絶句するのであった。

「凄い！！溶岩を一気に凍らせちゃった！！」

大半が愕然とする中、一人興奮が収まりきらないで居るスバル。

すると、そんなスバルを含めた全員に吉良がルキアの袖白雪に関する情報を口にする。

「彼女の持つ袖白雪は氷雪系の斬魄刀にして、現在でも尸魂界で最も美しいと言われる斬魄刀なんだ。柄も鍔も刀身も、全てが純白の斬魄刀だよ。」

空の上からルキアの姿を見ていた恋次達もこれには喜びを隠しきれない様子だ。

「よくやったぜ、ルキア！なっ！？」

その時、恋次の攻撃を受けて地面に落ちていたデモンストームの群れが再び恋次達に牙を向けてきたのであった。

「そう言えば、まだこいつらが残っていたな・・・」

「戦いましょう、恋次さん！」

「よし！行くぞ！！」

そう言うと、恋次は補助デバイスを装填させて蛇尾丸の刃節をデモンストーム達に向けて延ばしていった。

「せりゃあああああああああ！！！！！！」

羽を切り落とされ、完全に宙に浮かぶことが出来なくなったデモンストーム数体。

更にキャロやアギトも恋次を援護する形で攻撃を仕掛ける。

「シューティングレイ！」

「フレアタイタニック！！」

シューティングレイとアギトのフレアタイタニックによってその数を大きく減らしていく中で、ルキア自身も数体の竜を見るなり袖白雪の力を発動させる。

「初(そめ)の舞・『月白(つきしろ)』」

ルキアは刀で円を描いた場所の天地全てを凍らせる月白を使い、竜を凍らせそのまま氷解させるのであった。

「よし！この調子なら我々だけで何とか・・・？」

「どうした、ルキア！？」

恋次やキャロたちは一度怪訝そうな表情を浮かべるルキアの近くにまで行くと、徐に何があったのかを尋ねる。

「・・・異形生物と竜達の様子がおかしい・・・全てが火山の方を向いて・・・」

ルキアに言われたとおりに恋次達がこの場に居る生物達の様子を窺うと、確かにその全ては火山の方を向いていた。

「まるで何かに祈ってるような・・・」

と、その時だった。

突然火山の中から噴出した大量のマグマが空へと舞い上がるや否や何かの形へと姿を変えていくのであった。

「「「「！！」」」」

間近でそれを見ていた恋次達は、恐怖と驚愕を同時に感じていた。

「な・・・何だよあれ・・・！？マグマが噴出して何かの形になろうとしてやがる！？」

「くっ！一体何が起こっておるのだ！？」

「！・・・か・・・形を成してきたぜ・・・！！」

マグマはアンゴルモアを核として、徐々にその姿を変えていく。

成しえた形はこの世界のどの生物とも比較にならないほど巨大で畏怖の念を抱かせるマグマの翼竜であった。

「な・・・ななな、何だよあの竜は!?あれも竜・・・なのかよ!?」

マグマの竜を見るなり動揺を隠し切れないで居る恋次だったが、隣に居たキャロの様子が可笑しいことに気付き横を振り返ってみたら、キャロは誰よりも驚愕した様子で目の前に見えるその竜の名前を徐に口にした。

「・・・あ・・・あれは・・・“ヴラド”です・・・!!」

「・・・ヴラド・・・!?」

「遥か1万年の昔、全ての次元世界を焼き尽くし・・・破壊の限りを尽くした竜の邪神です・・・でも・・・あんなもの・・・本の挿絵でしか見たことがありません・・・!“邪竜(ヴラド・ツェペシュ)”・・・アルザスの言葉ではドラクル・・・!!」

「・・・・・・・・・・・・」

「在り得ない話です・・・!ヴラドは嘗ての戦いで既に生命エネルギーを使い果たして息絶えたはずなのに・・・それがどうして!?」

「恐らく・・・アンゴルモアと火山のエネルギーを吸収して再び蘇ったのだ・・・!だがどうする・・・我々四人だけで戦える相手ではないぞ・・・!!」

すると、邪竜ヴラドは鼓膜が破れるほどの嘶きを上げるとその場に居た異形生物や竜の群れを全て翼の炎で焼き尽くす。

「「「「「！！」」」」」

四人が驚愕する中で、焼き尽くされた全ての生物をヴラドは炎の触手を使って拾い上げて巨大口の中へと放り込み、噛み砕いていく。

「な！！！」

「ッわ・・・っ」

「こ・・・此処の生物をまるごと喰らいやがった・・・何て奴だ・・・！」

あまりの光景に思わず目を疑うルキア達だったが、その時恋次が奇妙な笑い声を上げる。

「・・・へへ・・・」

「・・・何が可笑しいのだ、恋次？」

「・・・あんなバケモノ相手に戦い方云々考えてる暇なんてねえだろ・・あんな奴は・・・」

「あんな奴は・・・？」

アギトがそう聞き返した瞬間、恋次は昔の一護のような態度でこう宣言した。

「斬って斬って斬って斬って力の限り斬り倒す！！それ以外に無えッ！！！行くぜお前らッ！！」

「ま・・・ままま待て恋次貴様ッ！！」

ルキアは一人で突っ走る恋次を止めようとしたが、無駄であった。

恋次はヴラドの首を狙って高く飛び上がると、蛇尾丸を使って斬り落とそうとする。

「オオオおおお

・・！）大丈夫か恋次！！」」

「おう・・・割と大丈夫だぜ・・・」

と言う恋次ではあったが、額からは目に余るぐらいの血を流していた。

「全く何を考えておるのだ貴様は！？今のでどうやってアレを倒す気だったのだ！？」

「イヤ・・・首を斬り落とせば取り合えずは何とかなると思ったんだけどよ・・・意外と難しくてな・・・」

「・・・何とも浅墓な奴だ・・・一護にそっくりではないか・・・」

「ハッ！よせよ！一護の名前出されちゃホメられてる気がしねえぜ！」

「褒めてなどおらん！貶しているのだ私はっ！！」

「二人とも、言い争いをしてる場合じゃないですよ！あれを如何にかしないと、中のアンゴルモアは取り除くことが出来ません！ここは私が一つ・・・！」

そう言うと、キャロはケリュケイオンの力をフルに発動させてミッド式の召還魔法陣を展開させるともう一騎の竜を呼び出す。

「竜騎召還・・・ヴォルテール！！！」

すると、恋次・ルキア・アギトの正面に現れる漆黒の鎧を身に纏っ

た山のように巨大な騎士で、アルザスの地を守る古き守護竜ヴォルテール。

「こ・・・こりゃあ・・・一体!?」

「おお!!キャロのもう一騎の竜・・・ヴォルテール!!間近で見るとやっぱデカイな!!」

「あやつ・・・こんなものまで隠していたのか!?」

ヴォルテールの召還に成功したキャロは指示を送ってヴラドに攻撃を仕掛ける。

「バニシングレイ!!」

その瞬間、ヴォルテールは両腕から灼熱の火炎弾を生成するとそれをヴラドに向けてぶつけていったが、ヴラド自身も構えの姿勢を一切見せずに不完全ながらであるが強大なエネルギー砲をバニシングレイに向けて発射する。

二つの技がぶつかり合った瞬間起こる凄まじい衝撃と反動。

それは正しく神々の戦いと言っても過言ではない。

「「「「くっ!!」」」」

反動を受けながら何とかその場に立ち続ける恋次達四人。

「ただの砲撃でこの威力とは・・・伊達に世界を破壊したっていうだけのことはあるぜ!!」

「エネルギーの放出量が実に不安定だ・・・恐らくはまだ覚醒しておらぬ筈だ。完全覚醒を果たしたら管理局や私達にもどうすることも出来ぬ・・・何としてでも此処で叩くぞ！」

ルキアのその言葉を聞いた全員はそれぞれの持てる力のすべてを発動させる。

「ＩＰカートリッジ、セットオン！」

〈Ｖｏｌｔａｉｒｅ　ｆｉｇｈｔｅｒ　ｍｏｄｅ〉

ＩＰカートリッジを発動させた瞬間、キャロのヴォルテールの姿が鎧を脱ぎ捨てた戦うためだけの姿へと解き放たれる。

「ユーノ殿から頂いたこやつの性能・・・篤と拝見させてもらう！」

ルキア自身もユーノから受け取った補助デバイスを柄頭に取り付けると、袖白雪の力の一端である『樹白（じゅはく）』を強化した技を発動させる。

「『完全氷白（かんぜんひょうはく）』！」

ルキアは地面に刀を突き刺すと、ヴラドに向って伸び続ける氷雪によって両翼と両足を凍りつかせて身動きを奪う。

その隙に、卍解した恋次とアルフが連携攻撃を繰り出す。

「鋼鉄狒骨大砲！！！」

「私だって！！おりゃあああああ！！！！！」

鋼鉄狒骨大砲とアギトの炎の竜巻が動けないヴラドに直撃、そしてファイターモードのヴォルテールの鉄拳が追い討ちをかける。

しかし、それでもこれといったダメージを負った形跡も見せないヴラド。

「ちっ！俺達の攻撃を以ってしてもこの有様かよ・・・！？」

「一体どうすれば！？」

と、その時キャロのデバイスの下に届くユーノから緊急通信。

『まだ諦めるのは早いよ、四人とも。』

「ユーノ先生！」

「どういう事だよ、一体！？」

『あるんですよ・・・奴を倒す秘策が・・・それを握ってるのはキャロ、君だよ！』

「え！？私が・・・ですか！？」

ユーノからの思いもよらぬ一言を聞いて思わず耳を疑うキャロや恋次達。

『そう♪キャロ、ＩＰカートリッジを装填したケリュケイオンに命じて。『竜騎融合』って・・・！』

「あ・・・はい！ケリュケイオン、“竜騎融合”！」

キャロはユーノに言われるがままにケリュケイオンに指示を出す。

すると、その瞬間ケリュケイオンが眩いばかりの光を放出しながら音声を発する。

〈Ｄｒａｇｏｎ ｆｕｓｉｏｎ ｅｘｐｌｏｓｉｏｎ Ｓｉｅｇｆｒｉｅｄ〉

そして、それと同時にヴォルテールとフリード自身も光を放ちながら球体状に変化していくと、空へと舞い上がるや否や二つのものは融合を始める。

「・・・フ・・・フリードとヴォルテールが・・・！？」

「融合・・・しておる・・・！？」

指令室でその光景を見ていたフェイトやはやてを始めこの場にいた全員が目を疑う中、ユーノ自身はどこか誇らしげな表情を浮かべていた。

そして、そんな全員の前に現れる一つとなった光から飛び出してきた白き竜の飾りを胸元につけたロボットを思わせるような姿をした聖剣パラディンを手に持つ竜騎士。

ヴォルテールとフリードリヒが融合を果たして生まれた最強の竜・・・その名は、聖竜騎士ジークフリート。

「これは・・・何がどうなってるの！？」

「ユーノ、ケリュケイオンに何施したの!?」

「“竜騎融合”。IPカートリッジにより可能となったケリュケイオンの能力であり、フリードとヴォルテールを融合させて誕生する巨大な騎士だよ。力の根幹はキャロ自身の意思によって決まる。キャロが強く願えば願うほど、聖竜騎士ジークフリードの力は向上する!」

キャロ自身も心でジークフリートの名前を知り、直ぐにその能力を理解するとジークフリートに命じてヴラドに攻撃を仕掛ける。

「ジークフリート、パラディンソード!!」

すると、ジークフリートはパラディンソードをヴラドに向けて振り下ろし、片方の翼を完全に斬り落とすのであった。

圧倒的な攻撃力を秘めたジークフリートの力を見た恋次達は驚愕と同時に勝利を確信する。

「おお!!これならいけるぜ!!」

「よし!私達はあやつの動きを封じよう。恋次、アギト!行くぞ!!」

「「おお!!」」

ジークフリートに万全の状態で攻撃を仕掛けてもらうために、三人は翼を斬り落とされもがき苦しんでいるヴラドの身体を押さえつけるために近付いていく。

「肆の舞　『白霜雨（はくそうう）』！」

「“狒牙絶鉄（ひがぜってつ）”！！」

「バーニングバインド！」

十年の間にルキアが新たに生み出した袖白雪の技、白霜雨は雨のように降らせた霜によって相手を凍りつかせて身動きを奪う。

恋次の狒牙絶鉄は通常の狒牙絶咬に補助デバイスの効力によって一段と硬化された蛇尾丸の刃で相手を隙を付く。

そして、アギトのバーニングバインドはその名の通り炎熱系の拘束術によってダメージを与えつつ相手の自由を奪うものだ。

「負けない！！私もジークフリートも・・・此処にいる恋次さん達も誰も諦めたりなんかしない！絶対にあなたを倒すんだから！！！」

そう言うと、身動きが取れないヴラドに止めの一撃を与える為にキャロは魔法陣を展開させて詠唱を唱え始める。

「“全てを初期化する聖剣よ、我が竜騎士ジークフリードに天の御心を宿し、邪神を斬り捨てよ”」

〈Ｄａ　ｃａｐｏ〉

すると、ジークフリートが握り締める聖剣パラディンソードに刻まれたミッドの文字で初期化を表す言葉が赤色に染まり、エネルギーがチャージされる。

「一閃制裁、ダ・カーポ！！！」

ジークフリートは背中の翼で一気にヴラドの下まで加速すると、聖剣パラディンソードを振り上げ・・・裁きの一撃を加える。

ヴラドはパラディンソードの一撃によって頭上から二つに斬り下ろされると、マグマで出来ていた体は全て元の火山の中へと戻っていき、生命をエネルギーを完全に消失したヴラドことＡＭ１１はアンゴルモアだけを残したのであった。

「やった！！」

「よっしゃあ！！」

指令室でそれを見ていたはやて達全員も安堵の表情を見せる。

「状況終了。ＡＭ１１の消滅を確認。アンゴルモア、無事に回収されました。」

「ほお～～～ひやひやされてくれたわ・・・！」

「でも、凄かったねキャロの竜騎融合。それに、ルキアさんの氷雪攻撃だって計り知れなった。」

「四人とも、お疲れ様です♪ゲートを作るから待ってて。」

ユーノはそう言うと、ゲート作り出すために捜査を開始。

メインスクリーンに映し出される疲れ切った様子の恋次とルキア達

三人。

『ああ。済まないな・・・』

『俺はもうくたくただぜ・・・当分は任務パスだからな！』

『私は何時でもいいけどな！』

そんな中、キャロがユーノに向ってお礼の言葉を掛けてきた。

『有難うございます、ユーノ先生！お陰で今回は無事に回収を済ませることが出来ました。』

「ああ。その力は皆を守るためのものだ・・・本当に必要なときは何時だって使って良いからね。それで皆のことをしっかりと守っていくんだよ。」

『はい！頑張ります！！』

竜騎融合を果たし、聖竜騎士ジークフリートへと進化を遂げたヴォルテールとフリード。

残るアンゴルモアは残り１９個となった今・・・彼ら機動六課に待ち受ける次なる脅威は何なのか！？

そして、勝利の女神は微笑むのであろうか・・・！？

竜騎融合（後書き）

教えて、ユーノ先生！

ル「今日は私の袖白雪についてだ！」

ル「舞え、『袖白雪』の口上と供に全てが純白の斬魄刀へと姿を変える。」

ル「その技である月白は円形状のドームの中のものを凍りつかせ、氷解させる。白漣は文字通り波のような氷雪を相手に食らわせるものだ。」

ル「そして白霜雨は雨のように降らせた氷河で相手を凍りつかせる。いや～～～どれも実に美しいな～～～（自画自賛）」

ユ「こらこら、駄目ですよルキアさん。人のコーナー勝手に取ったら・・・」

ル「済まぬ、済まぬ。まぁ～でも見てくれこの私の袖白雪を！一護の腹黒い刀とは訳が違うだろう！！ははははははは！！！」

ユ「どっちが腹黒いんだか・・・」

一「あいつはああいう奴なんだ・・・」

魔導師図鑑ハイパー！

機動六課エグゼクティブアドバイザー、ユーノ・スクライアの活躍

は魔導虚事件を切欠に管理局中を駆け巡り、今やなのは達と同じかそれ以上の有名人となっていた。

そんなある日、六課に雑誌の取材がやってくる。

ユ「え？取材ですか・・・この僕に？」

記「是非とも、お願いいたします！出来れば、管理局のエースオブエースとのツーショットと言う形で！」

ユ「はぁ・・・・・しかし、僕個人的にはどうもそう言うのは・・・」

記「そこをどうか！お願いいたします！！」

困惑するユーノと懇願する記者達。

すると、それを見ていた金太郎が突然前に出て来て・・・

金「お引取り願いましょう・・・」

記「え！？あ、あのですね・・・！！」

恐怖に足が竦む記者達。

金「お引取り願いましょう・・・」

更に、顔をズームアップする金太郎。

記者達は恐れをなして足早に引き上げていった。

ユーノはほっと安堵の溜め息を吐く。

ユ「ありがとう、金太郎。助かったよ。」

金「いえいえ。店長のためならば。」

セルバ篇

邪竜（ヴラド・ツェペシュ）／ＡＭ１１

遥か１万年の昔、全ての次元世界を焼き尽くし、破壊の限りを尽くした竜の邪神。アルザスの言葉ではドラクル。嘗ての戦いで既に生命エネルギーを使い果たして息絶えたがアンゴルモアと火山のエネルギーを吸収して再び蘇った。しかし、キャロの竜騎融合「ジークフリート」の一撃により切り捨てられ、完全に消滅する。

暗黒竜デモンストーム

アルザスの里を始め、数多くの異世界でその巣を展開させる大型の竜。知能は低いが凶暴性が高く、獲物に対する執着心は相当なもの。コウモリのような両翼はどんな攻撃も弾き返し時には突風をも巻き起こす。

クロウ・リードを継ぐ者（前書き）

今回は特別篇第二段。

カードキャプターさくらの世界が登場。

作品を知らない、嫌いだ、または作品が壊れるというを嫌う方はお勧めしません。

それでもいいという方はどうぞ読んでみてください。

かなり今回は続きます。

クロウ・リードを継ぐ者

＞i13264—709＜

ミッドチルダの平日は何時も大勢の人で賑わっている。
毎日のように観光客や労働者達が町に溢れ、慌しい一日を送っている。
そんなミッドの町を使い魔と一緒に私服で歩く機動六課ライトニング分隊隊長、フェイト・T・ハラオウン執務官は、現在オフシフトの真っ最中だ。
彼女の使い魔であるアルフも主人と一緒の休日は本当に久しぶりだったので、非常にご満悦な様子であった。
「いや～～～久しぶりだな!!フェイトとこうして一緒に休日過ごすなんてさ♪」
「御免ね、アルフ。六課の方での仕事が忙しくてあんまり会いに行けなくて。」
「良いよ、そんなの!!フェイトだって色々忙しいんだから。私は

フェイトの使い魔でフェイトは私のご主人様、ただそれだけだよ！今こうして一緒に居られる時間を楽しもうじゃないの、精一杯さ！」

「アルフ・・・うん！そうだね。じゃあ、今日はアルフの好きな物沢山御馳走してあげるね。」

「本当かい！？じゃあ、やっぱり私は肉だよ肉だよ！！」

「はいはい・・・そんなに慌てなくてもちゃんと食べさせてあげるからね。」

フェイトはアルフと共に今日一日の休日を心置きなく満喫しようと歩み出していった。

だが、この休日はあるとんでもない事件によって覆されるとはこのとき二人は思っても居なかったのであった。

その頃、昼食時の機動六課隊舎では何時も通り、皆それぞれが昼休みを過ごしている。

ユーノはロビーのソファーに座って、コーヒーを啜りながら新聞を広げある記事を見た瞬間あからさまな驚き方で声を上げる。

「え～～～嘘だ～～～信じられない～～～マルハンとコウサンが経営統合するの？止めといた方がいいのに～～～何を考えてるんだか、ここの社長二人は？」

そんなユーノを他所に、隣の机で将棋を指す鬼太郎と浦太郎。

「王手！へへ、先輩どうする？」

「く～～～～～！！！！！！まだだ！！！！まだ勝てる可能性が在るはずだ！！！！」

鬼太郎は頭を掻き毟りながら、逆転の一手を考えていた。

その傍らで金太郎と供に筋肉強化のための無謀な特訓を受けている白鳥。

白鳥は地面に置かれた重さ３００キロのバーベルを顔を真っ赤にしながら持ち上げようとするが、全くびくともしない。

「何をしているのですか、白鳥殿！！まだまだ根性が足りませぬぞ！！！」

「う、うるさいなゴールデンベアー！！こんなもの根性でどうにか出来るものか！！！！」

我が強く、個性豊かなユーノを含めたスクライア商店のメンバー。

その五人の様子を見ながら顔を若干引きつるなのはと神妙な様子のルキア。

「・・・しかしあれだな・・・ユーノ殿を含めあそこの従業員は皆キャラが随分と濃い連中であるな・・・」

「にゃはは・・・まぁ、ユーノ君は昔はあんなんじゃなかったんですけどね・・・もっと大人しめの男性だったんですけど・・・四年の間に大分変わったらしいですからね。」

「だが・・・あれは実に力の強い持ち主である。一護から多少なりともユーノ殿の力や才能は聞いていたが、予想以上だった。攻撃魔法のほうは確かにからきしだが、その他の能力や死神の戦術の基本、“斬拳走鬼”をほぼ完璧に使いこなしておるのだからな。」

「そうなんですか・・・やっぱり凄いな・・・ユーノ君は！」

「なのは、お前が魔導師として天才的な才能を持つ様に・・・ユーノ殿は“死神”として天才的な才能を持っておるのだ。」

すると、ルキアのその言葉を聞いた途端なのはは何所か複雑な表情を浮かべてしまう。

「う～～ん・・・私的にはちょっと複雑かも～～～できればユーノ君にはあまり強くなって欲しくないですから。」

「ん？どういう事だ！？」

「だってですよ、ユーノ君・・・私と模擬戦するときも全然容赦してくれないし、マキシマムブレイドの形状にあまり使い慣れていないにも関わらず本気で刺しに来るし・・・それに・・・強ければ強いほど・・・何だか遠くに行ってしまいそうな気になるっていうか・・・一人で背負い込んだまま私の前からまた居なくなるんじゃないかって・・・心配になるんですよね・・・」

暗い表情を浮かべるなのはを横で見ていたルキアだったが、ルキアは鼻で笑うとなのはの肩にそっと手を置いて次のように言葉を掛ける。

「・・・案ずるな。ユーノ殿はそんな男ではないはずだ・・・それ

はユーノ殿とずっと隣に居たお前が一番分かってるはずだぞ、なのは。」

「・・・ルキアさん・・・」

「今のユーノ殿があるのは全てなのはが居たからなのだ。今のなのはがあるのがユーノ殿のお陰であるように・・・支えてやってやれ、お前の座右の銘・・・全力全開の力でな。」

ルキアの激励の言葉を貰ったなのはは、暗い気持ちを払拭させて笑顔で返事をする。

「・・・はい！勿論ですよ！！」

ルキアに励まされたなのはは、強い決意の下に普段と何気ない様子で過ごすユーノを見つめながら心の中でこう抱いた。

「（今の私があるのは・・・ルキアさんの言ったとおり、ユーノ君が傍に居てくれたから・・・子供の頃からずっと私の背中を優しく・暖かい心で支えてきてくれたみたいに・・・今度は私がユーノ君を傍でずっと支えていくね。もう、私の所為で居場所をなくさないように・・・一人で背負い込まないように・・・ずっとずっと・・・）」

そんなのはの顔を見て、ルキア自身も安心したのか鼻で笑う。

すると、その時隊舎中から鳴り響く前線メンバーへの緊急召集コール。

「ふん・・・！？緊急召集？」

休憩室や寮・そしてロビーで寛いでいた前線メンバー各位は指令室へと急ぎ、何が起こったのかをはやてから知らされるなのは達が、それは実に衝撃的なものだった。

「フェイトちゃんとアルフが！？」

何と、フェイトとアルフが謎の集団によって拉致されてしまったという内容であった。

驚きを隠しきれないで居るなのはを始めとする前線メンバーの大半。

「買い物から帰ろうとしたときに連れ去られたらしいで・・・これがそのときの監視カメラの映像や！」

ミッド市街地に取り付けられた監視カメラの様子から窺える、フェイトとアルフの最後の映像。

二人を気絶させて拉致して行ったのは、完全に黒い服で姿を隠した六人の集団だった。

「黒ずくめの服で顔がはっきりとは分からないですね・・・一体何なのかしら？」

ティアナ達もこの謎の黒ずくめの集団の取った行動と目的を頭の中で模索しながら、拉致されたフェイト達をどのように救出するかを考えていた・・・その時。

突如、なのはとユーノの頭の中に入り込んでくる謎の念話が全ての騒動を解決へと導く鍵となるのであった。

〈助けて!!お願いだから、誰か助けて!!〉

「「え!?」」

共通して入り込んできた謎の念話に驚愕の表情を浮かべる二人。

そんな二人の様子を見て、はやてが怪訝そうな表情で尋ねる。

「どないしたんや、なのはちゃん。ユーノくん?」

「ねえ、はやてちゃん・・・さっき誰かの声が聞こえてこなかった・・・念話で?」

「念話?いや別に何も・・・」

「僕もなのはと同じものを聞いたよ。女の人の声で助けてって・・・」

「じゃあ、やっぱり!誰かが私たちに助けを!?」

二人は顔を見合わせて謎の念話について色々と言葉を交わしていたが、クロノの方は謎の念話のことよりもフェイト達救出の方に優先順位を置いていた。

「だが、今はそれどころではない筈だ。フェイトとアルフの救出の方が先・・・」

と、クロノが言いかけたときだった。

前線メンバーの目の前で唐突に起こり始めた強い光の球体。

「「「「「なっ!?」」」」」

「これは・・・何だ!?」

誰もがその光の球体に目を奪われる中で、吉良がその球体の中から現れる人影に気付き皆に伝える。

「見てくれ!!誰かの姿が現れるぞ!!」

吉良の言葉を聞いて光の中に注目する全員。

そして、皆が緊迫した様子の中現れたのは・・・茶色のショートヘアーをしたなのは達と同い年ぐらいの女性であった。

思いもよらぬ人物が現れたことにより、呆気に取られる恋次や鬼太郎達。

「お、女・・・!?」

「見た目的には僕らと同じぐらいか・・・は!もしかして貴方ですか・・・僕らに話しかけてきたのは?」

ユーノは恐る恐る何所か悲しげな表情を浮かべるその女性にそう尋ねると、女性は頷き自身の名前を言い始める。

〈はい。私は木之本桜(きのもとさくら)・・・あなた方と同じ魔法使いです・・・〉

「魔法使い!?」

さくらの言葉を聞いた瞬間、誰もが想定外の発言に唖然とした。

〈と言っても、あなた方が使っているような魔法とはちょっと違いますが・・・それより今はお願いがあります。あなた方の力で、私の夫を救って欲しいのです!!あなた方の大切なお人方も一緒に捕まってるいるはずです!〉

「なっ!?」

「何だと!?」

なのは達は状況の整理をつけると、早速このさくらと言う魔法使いから詳しい話を聞きだすことにした。

さくらはクロノ達からの質問に答えながら、自分が魔法使いとなった出来事を語り始めその中である魔術師の名前をなのは達に伝えた。

「クロウ・リード・・・?」

クロウ・リード・・・その魔術師の名を聞いても一人を除いて誰一人として知る由も無かったのであった。

普段から次元航行部隊で指揮を執るあのクロノでさえも。

「聞いたこと無いな・・・普段から多くの情報を取り扱っている僕もそんな人物の名は一度も・・・」

「私も全然だよ。ねえ、ユーノ君は聞いたことある?」

なのはがそう言うと、ユーノは当然といった顔で肯定の言葉を口にする。

「あるよ。前にイギリスに遺跡発掘の旅行に行った際に、その人の生まれ変わりに出会ってね・・・話を聞かせてもらったよ。」

ユーノの最後のほうの言葉を聞いていたさくらも、子供の頃に色んなことで世話になった友人・・・もといクロウ・リードの生まれ変わりである柊沢エリオルのことを知っていたことに安心感を覚えた。

〈じゃあ、エリオル君のことを知っているんですね!?〉

「勿論♪彼には旅行中随分とお世話になりましたからね!」

ユーノがイギリスを訪れた際にどういった事でエリオルに世話になったのかを話すのは長くなるので省略しておこう。

「じゃあ、ユーノくん。その人から聞いたんやったら早く教えてくれへんか!?」

「うん・・・クロウ・リードとは、イギリス人の父と中国人の母を持つ不世出の魔術師兼占い師だよ。巨大な魔力を持っていて、全く新しい魔法を生み出すほどの力の持ち主だったんだ。」

「そんな人が居たなんて・・・」

ユーノの話を聞いていた前線メンバーはそんな途轍もない力を持った魔術師が存在していたとは思いもよらず、ただただ驚くばかりであった。

「知らなくても無理は無いさ。管理局ですら彼に関する情報はその魔力によって入手不可能の状態になっていたんだ。それで・・・彼の作り出したクロウカードというものがあるんだけど・・・」

「クロウ・・・カード・・・？」

またしても聞きなれぬ単語を聞いた全員は首を傾げる。

「封印が解かれるとこの世に災いが起こるとされる魔法のカードだよ。カード1枚1枚が生きていて、それぞれに名前・姿・魔力がある。確か今は・・・さくらさん。あなたが集めて新しい主となっていると、柊沢さんから聞きましたけど・・・」

〈はい・・・でも・・・その私の杜撰な管理責任能力が・・・今回の騒動を引き起こしてしまったのです・・・〉

「と、言いますと!?」

〈あれは・・・夫が何時ものように仕事に出かけて、夫がよく書斎に使ってる図書室の掃除をしていたときでした・・・〉

さくらはそう言うと、ユーノ達に事件の発端を語り始める。

さくらの夫である中国人の李小狼（リ・シャオラン）は、小学生の頃に散らばってしまったクロウカードを集めるためにさくらの住む町にやって来て、暫くの間はさくらと対立していたのであった。

しかし、何時の間にかさくらの性格に惹かれて恋に堕ちた小狼はさくらと両想いになり、厳しい家庭の事情を解決して、日本で一緒にさくらと結婚生活を送っているのであるが、そんな彼が事もあろう

に事件の被害者になってしまった理由とは・・・再びさくらの語りに戻ろう。

〈そこで偶然・・・今まで見たことも無いような強い力を発する本を見つけました。〉

さくらが図書室の掃除をしているときだった。

目の前の本棚の中から異様な強い力を発する謎の黒い本に目が留まったのは。

「何だろう・・・小狼君の本かな・・・？」

さくらは何気ない気持ちでそれを手に取ろうとしたときだった。

黒い本は強い光を発すると、硬く頑丈に閉じられていた鍵が破壊されて文字の羅列がびっしりと書かれた数百ページにも渡る本が勢いよく捲れ上がった。

「わわわわあわあわあああああ！！！！！何！？」

突風が吹いたわけでもないのに継ぐ告ぐとめくれ上がる本のページ。

「どうなってるの！！！あ！！！」

するとその時、本の中から漏れ出した力の一部がさくらが肌身離さず所持しているカードが入ったケースに侵入。

その瞬間、カード達は一斉にその中から解き放たれてしまい嘗てのように家の外へと散らばってしまうのであった。

「カードさんが！！！きゃああ！！！駄目！！！！！」

ここまでのことをユーノ達に話したさくらの表情は実に深刻なものであった。

〈その本の力に当てられて、私の持つクロウカード・・・今はさくらカードですけど、それが一枚だけを残して全部散らばってしまったんです・・・〉

「残ったカードは？」

なのはがそう尋ねると、さくらは桃色を基調とした細長いカードを全員に見せる。

〈この・・・『希望（ホープ）』のカードです・・・〉

カードに描かれているのは、上の方に漢字で『希望』と書かれ下の方に英語で『ＴＨＥ　ＨＯＰＥ』と書かれた羽の生えたハートを抱える女の子の姿だった。

それを見た全員は一様に何か心を暖かくさせる優しい力を感じ取った。

「何だろう・・・とっても優しい力を感じる・・・」

〈はい。この子は私と夫を両思いにさせてくれた・・・思い出のあるカードですから。でも全部で５２枚のカードが散らばってしまったことで、その影響が出始めているんです。〉

「・・・よく分からねえが・・・それとてめえの夫とが何の関係があるんだ？」

恋次は未だにさくらの説明に納得がいかずにそう訪ねた瞬間、さくらは表情を一変させて大声で次のように話してきた。

〈大有りなんです！！小狼君は今、そのカードさん達に幽閉されているんです！！〉

「「え！？」」

「「「何！？」」」

「「「「「そんな！？」」」」」

ユーノはさくらの夫、小狼の名前を聞いたとき以前エリオルから聞かされた人物のことを思い出し徐に尋ねてみた。

「・・・小狼・・・その人はもしや、李家（リ）の・・・？」

〈はい。仰るとおりです。〉

「ユーノ、何だ、その李家とは？」

「クロウ・リードの遠い遠い血縁だよ。さっきも言っただろ・・・クロウのお母さんは中国人だって。李家って言うのは、クロウのお母さんの実家なんだ。中国でも有名な導師の家系らしい。」

「そこの出身のお前の夫がカード達に捕まっちまったって・・・一体何でだよ？」

〈・・・カードさん達は・・・小狼君を・・・生贄にして・・・この世で最も恐ろしい災いを蘇らせるつもりなんです・・・！！〉

「災い！？一体どんな！！」

スバルがそう尋ねた直後、その答えを口にしたのはユーノであった。

「“好きな人の記憶を失うこと”だよ。」

「え？ユーノ君・・・！？」

〈知っているんですか！？〉

「柊沢さんからある程度のことは・・・」

「どういう意味なのですか、ユーノ殿！？」

大抵の事を理解できる機動六課のメンバーや死神でも、このあまりにも抽象的な応えには流石に尋ねざるを得ない状況だった。

「そのままですよ。好きな人の記憶を失う・・・つまり、僕がなのはに対する好きという気持ちを失ったり、なのはが僕に対する好きという気持ちを失ったり・・・いや、恋愛感情だけでない。友達から家族・すべての人の記憶から“人を好きでいる”という思いが消えるんです。物理的な災いと違って・・・これ程にまで恐ろしい災いがあると思います？」

「ユーノ君が私を・・・私がユーノ君やみんなを好きでいる気持ちが・・・全部なくなる・・・そんなの！！絶対に嫌だよ！！」

ユーノの言葉を聞いた直後、なのはは涙を浮かべながら全否定の姿勢を取った。

同じようにスバルやエリオを始め、多くのものが声を上げて焦りの様子を見せたのだった。

「私だって!!!なのはさんを好きでいるという気持ちを無くしたりしたら嫌です!!」

「僕もです!!!キャロやフェイトさんを好きでいる気持ちは・・・ずっと大切にしたいです!!!」

「（え!?エリオ君・・・今・・・!?）」

キャロはエリオの思わぬ一言に頬を赤くし、顔中から湯気を出した。

〈みんな誰だって同じはずです!人を嫌いになることはあっても、人を好きでいる気持ちを失くしてはいけません!急がないと、小狼君とあなた方の大切な人達の魔力を媒介にして・・・カードさん達が大いなる災いを蘇らせて、全ての世界の人から一番大切な気持ちを奪ってしまいます!!だからお願いします!!力を貸してください!!お願いします!!!〉

さくらはそう言うと、その場に跪いて土下座でなのは達にそう言った。

「さくらさん・・・」

「・・・お前・・・そこまでして・・・」

さくらの真剣な様子に心打たれる機動六課前線メンバー。

そして、暫くした後・・・徐にはやてが静まり返った指令室に声を発してさくらに向って次のように返した。

「・・・何を言うてますの、さくらさん。」

〈え?〉

「言われなくても協力させてもらいますよ!そして、助けますよ・・・あなたの夫も、フェイトちゃんもアルフさんも。そうやろ、みんな!!」

「「「「「はい!」」」」」

「おう!」

「はい。」

「はいです!!」

「勿論だぜ!!」

はやての言葉を聞いて、フォワードメンバー五人も、ヴィータやシグナムもそして、リィンやアギトも肯定の返事をする。

「管理局員としても、人としても当然のことだよ!」

「なのはの言う通りだね♪全力で三人の救出に向うよ。」

「おっと、俺達を忘れるなよな！死神の力が必要になるかもしれねだろ。俺達も協力するぜ！」

「「うん（ああ）！」」

恋次達も協力の姿勢を見せてくれたのを見て、さくらは大粒の涙を浮かべながら感謝の言葉を口にする。

〈みなさん・・・よかった・・・よかった！！本当に有難うございます！！〉

「いえいえ。お礼を言うのはまだ早いですよ。それに・・・私も漸く一番大切な気持ちを伝えたばっかりなのに、それを直ぐに失うなんてことは嫌ですから・・・！？」

すると、なのはや他のメンバーは目の前で身体が消えかけようとしているさくらに度肝を抜いてしまった。

「さくらさん！？身体が・・・！？」

ギンガにそう言われて、さくらも魔力の限界に達したと自覚して消える寸前に次のように語ったのだった。

〈どうやら・・・魔力が限界にきたみたいです・・・何しろ今の私は別世界からのコンタクトを行っていますから・・・消費魔力がかなり激しいんです・・・安心してください・・・私のお友達があなた方の力になって・・・くれる筈で・・・〉

その言葉を最後に、さくらは光と供に全員の前から姿を消したので

あった。

「さくらさん！！」

「ユーノ！すぐにさくらさんのコンタクトを！」

クロノの言葉を聞いたユーノは直ぐにタッチパネルを操ってさくらとのコンタクトに応じようとするが、やはりそれは出来なかった。

「駄目だ。完全に消失してしまった・・・」

「くそ！遅かったか。」

「だけど、魔力の痕跡からコンタクトを行ってきた世界を特定することは出来た。今、メインスクリーンに映すよ。」

ユーノはそう言うと、メインスクリーンにさくらが現在居るであろうと推測できる異世界の情報を映し出してきた。

「第６２管理外世界『ライク』。此処にさくらさんはいる筈・・・そして、この中央付近の強い魔力反応・・・恐らくフェイトとアルフ、そして小狼さんだろう。」

「よし！ほんなら早速ライトニング１、及びその使い魔であるアルフと魔術師木之本桜さんの夫である小狼さんの救出に出発や！」

と、はやてがそう言った直後だった。

ルキアははやてを狙ってきた何者かの存在に気付き、咄嗟に庇おうと走り出してきた。

「!?危ない、はやて殿!!」

「え!?わあああああ!!!」

ルキアははやてを抱えて奇襲を仕掛けてきた侵入者の攻撃からはやてを守りぬいた。

「主はやて!!」

シグナムやヴィータは直ぐにはやての下に近付き安否を確かめる。

すると、そんな全員の前に現れたのは・・・・・壁をすり抜けてサーチャーすらも掻い潜った黒い道化師のような姿の人物だった。

「何だよこいつは!?どっから入ってきやがった!!」

恋次やフォワードメンバーは臨戦態勢に入って、侵入者を睨み付ける。

ユーノ自身はその侵入者の姿を見ると、神経を研ぎ澄ませて身体から発する魔力とそれとは違う別の力を感じ取った。

「(この魔力反応・・・そして、この不安定なエネルギーの感触・・・)みんな!そいつはアンゴルモアによって暴走したさくらさんのカードだ!!」

「何だって!?ならば直ぐに捕まえなければ・・・って!?」

クロノがそう言っていたとき、壁をすり抜けて背後から襲いにかか

る暴走したさくらのカード。

「身体がすり抜けていった!?」

常識離れのその不可解な力に動揺を隠し切れない全員に対し、ユーノはエリオルから聞かされた話からこのカードの正体を突き止めた。

「こいつは『抜(スルー)』のカードだよ!物体をすり抜ける力を持っているんだ。」

スルーのカードはその後も指令室の壁という壁を移動しながらなのは他前線メンバーを翻弄し続ける。

そんなスルーの行動に業を煮やした鬼太郎が烈火を解放して力を発動させようとする。

「ええい!!ちょこまかとウザったい野郎だ!!この!!!」

それを見た金太郎が咄嗟に前に現れ止めにかかる。

「待ちなさい、鬼太郎!!ここでそんなものを振り回してはなりませぬ!!」

「じゃあ、どうすればいいんだよ!!」

全員は何所から襲ってくるかも分からぬ未知の力を持った存在に完全にお手上げ状態であったが、ユーノだけはそんな全員に次のように語りかける。

「落ち着くんだみんな。身体の中に流れ込んだアンゴルモアのエネ

ルギーを放出させれば、元のカードの姿に戻るはずだよ。ここは神経を研ぎ澄ませて・・・・・・」

ユーノは目を瞑り、神経を研ぎ澄ませる。

暫くの沈黙が指令室全体に流れ、なのは達は神妙な様子でユーノのことを見つめる。

そして、ユーノは微弱なスルーの魔力を感じた瞬間、破道を放った。

「そこか！破道の一　『衝（しょう）』！」

弱い衝撃波を放つ一番の『衝』が誰もいない壁に向けられると、壁から出てきたスルーに見事直撃し、スルーはアンゴルモアのエネルギーを放出して元のカードに戻っていた。

「やった！！」

「詠唱破棄の“衝”だけで一発KOとは・・・！？（やはりユーノ殿・・・あなたは天才であるな・・・）」

地面に落ちていたさくらカードを拾い上げ、まじまじと見つめるなのは達。

「これがさくらカード・・・何ていうか本当に見た目はただのタロットカードみたいだね。」

「けど、確かに強い魔力を感じる・・・これがあと51枚もあるのか・・・はやて。ここは手分けして暴走化したカード達の捕獲から先に取り掛かろう。」

「よし！ならチーム編成を発表する。スターズ班・ライトニング班・死神班・スクライア班の計四チームでさくらカードの捕獲を頼む。その後、所有者であるさくらさんに返すこと。」

「「「「「了解」」」」」

「「「はい」」」

「「「了解！」」」

「「「「「わかったよ（ぜ）（である）！」」」」」

「シャーリー、カードの反応はどんな感じか分かるか？」

クロノが管制室のシャーリーに連絡を入れると、早速回収したスルーを解析させて魔力の波長を特定してもらった。

『え～とですね・・・幸いなことに、今はミッド周辺に散らばっている模様。魔力のある人を見つけては捕まえているようですね・・・』

「それじゃあ、各自全力を尽くすように。作戦開始！」

機動六課前線メンバーは早速、それぞれに散らばった暴走したさくらカードを捕縛すべく行動を開始し始めるであった。

なのは達スターズの五人は、ミッド市街地で武装隊の魔導師を襲っているさくらカード５体の殲滅に取り掛かる。

「おっりゃあああああ！！！！」

スバルのリボルバーナックルが直撃し、凶暴と化したさくらカードは元の姿である『雷（サンダー）』へと戻っていく。

「はっ！」

〈Ａｘｅｌ　ｓｈｏｏｔｅｒ〉

なのはもアクセルシューターを衝突させて、巨大化したその身体を以ってして魔力保有者を襲っていた『大（ビッグ）』を撃退。

「テートリヒシュラーク！！」

「クロスファイアー・・・シュート！！」

「ストームウォール！！」

ヴィータ・ティアナ・ギンガの三人も残りの『花（フラワー）』、『幻（イリュージョン）』、『剣（ソード）』の三体を撃破し、カードの姿へと戻していった。

同じ頃、フェイト以外のライトニング四人は『影（シャドウ）』、『鏡（ミラー）』、『盾（シールド）』、『消（イレイズ）』との交戦を繰り広げていた。

「サンダーストーム！！」

「バーニングヘルフレア！」

「フリード、ブラスレイ！」

「飛竜・・・一閃！」

それぞれの攻撃がカード達に直撃し、暴走したさくらカードは次々とカードとなって地面に落ちていった。

また、恋次達も斬魄刀や鬼道を駆使しながら『雨（レイン）』、『浮（フロート）』、『樹（ウッド）』を始めとするカードを倒していく。

「咆えろ、蛇尾丸！」

「破道の十一　『綴雷電（つづりらいでん）』」

「『樹白（じゅはく）』！」

蛇尾丸の斬撃を受けて、フロートは破裂。

吉良の綴雷電をその身に受けて戦闘不能と課すレインと、ルキアの樹白によって凍り付いてしまうビルに絡み付いていたウッド。

そして、最後のユーノ達のほうもカードの殲滅に全力を尽くしていた。

「・・・ふん！」

金太郎は素手だけで暴走化した巨大な南京錠姿の『錠（ロック）』を撃破し、白鳥の方も六十二番の百歩欄干を使って『駆（ダッシュ）』、『移（ムーブ）』、『波（ウェーブ）』の三体を各々の技でしとめる。

「縛道の六十二　『百歩欄干（ひゃっぽらんかん）』」

百本の欄干によって身動きの取れなくなった三体。

「今であるぞ！」

「よっしゃあ！！俺の必殺技・・・パート４！！」

「スピアグレネード！」

鬼太郎の炎と浦太郎の槍撃が三体の急所を突き、ダッシュを始めとする三体はカードの姿へと戻っていく。

そして、ユーノ自身の方は『時（タイム）』、『戻（リターン）』、『夢（ドリーム）』と言った何れも高い魔力を消費するカード達を一人で相手をしていた。

突撃してくる三体に向って翡翠斬を撃ち込むユーノ。

「輝け、晩翠！」

翡翠斬を直撃した三体は一気にアンゴルモアが抜けて、カードの姿へと戻っていった。

ユーノはそれを拾い上げると懐の中にしまい込む。

隊舎のほうでその様子を見ていたはやてとクロノも安心したようであった。

『スターズ・ライトニング・死神・およびスクライア班、順調にさくらカードの回収に成功。残りあと僅かです！』

すると、その時シャーリーがなのは達の方に急速で近付いていく残

りのさくらカード達の反応を確認した。

『ああ！！大変です！！スターズの方向に急速に残りの全てが接近中です！』

「すぐに皆をそっちの方へ向わせるんや！何としても此処で全部回収するんや！」

シャーリーからの連絡を受けたスバルは、現場に近付いてくる残り全ての動きに警戒をしながらなのはに現状を報告する。

「なのはさん！こっちに残りカードたちが接近中です！」

「凄い数・・・ざっと数えて２０体以上です！！」

「皆が来るまで、出来るだけ叩いておこう！」

「来ます！！」

ギンガがなのは達にそう言った瞬間、前方の方から現れる合計２６体の暴走したさくらカードの大群。

なのは達は臨戦態勢になると、向ってきたさくらカード達に向けて攻撃を開始する。

「コメットフリーゲン！！」

「リボルバー・・・シュート！！」

「ストームハリケーン！！」

「ファントムブレイザー！！」

スターズの息の合ったチームプレーによって、数を減らしていくものの流石になのは達五人とて魔力を持った残り１０体以上の相手をするのは骨の折れる作業だった。

「はっ、はっ、はっ。流石に結構きついかも・・・！？」

息を切らしていたなのはがほんの一瞬隙を見せたその時、戦闘服姿に身を包んだ女の子が背後からなのはを狙ってきたのであった。

それに気付いたなのはは直ぐに防御魔法を展開させる。

「レイジングハート！」

〈Ｐｒｏｔｅｃｔｉｏｎ〉

防御魔法を発動させて攻撃を凌ごうとするなのはであったが、相手は更に魔力を上昇させて強い拳打を連発させ、なのはの防御を打ち破ってしまった。

「きゃあ！！」

「なのはさん！！」

なのはは衝撃によって後ろへと飛ばされ、地面に思い切り叩きつけられる。

「うっ・・・・・・！！」

痛みを堪えながらその場から立ち上がるなのはであったが、その瞬間目の前に拳を立てて現れるさくらカード、『闘(ファイト)』。

防御魔法を展開しようとしたなのは。

しかし、レイジングハートを別の場所に投げ飛ばされ尚且つ痛みと疲労で魔力結合が上手くできないなのははどうする事も出来なかった。

「なのは!!」

「「ああ!!」」

ヴィータもスバルもティアナ達も攻撃を喰らいそうになる絶体絶命のなのはに目を向ける。

なのはもこの状況には思わず目を瞑ってしまう。

だが、その時ファイトの拳を受け止め、蹴りの一発でファイトを吹き飛ばした男がなのはの前に現れる。

「うっ・・・あっ!」

なのはが徐に目を開けた先に居たのは、何時もの深緑色の羽織と甚平・帽子に身を包んだユーノであった。

ユーノは拳の骨を鳴らし始めると、なのはに牙を向けてきた事に対するファイトへの怒りを露にする。

「・・・全く、さくらカードだろうと何だろうが・・・少々おいたが過ぎるんじゃないのかな・・・『闘（ファイト）』さん・・・」

「ユーノ君！！」

「「「ユーノ先生！」」」

「へ！いいタイミングで来やがるぜ！」

ユーノの蹴りを受けたファイトは徐に起き上がると、空ろな目を向けながらユーノに向って闘う姿勢を見せると、それを見たユーノも鼻で笑い駆けつけてきた金太郎に持っていた晩翠を投げつける。

「・・・ふん。面白い・・・素手での戦いがお好みのようだ。ならば・・・」

ユーノは金太郎に晩翠を預かってもらうと、腕を少し捲くって徒手空拳だけでの戦闘方法でファイトに望んでいく。

「僕もその方法でいかせて貰うよ。」

二人は徒手空拳の構えを取り、お互いに睨み合った後・・・繰り広げられる目にも止まらぬほどの攻撃の嵐。

その激しい戦闘の様子を見ていたなのは達や駆けつけてきた全員はあまりにレベルの違い過ぎる戦いの様子に唖然としていた。

アンゴルモアの影響を受けたファイトはその後、予備動作の無い攻撃方法でユーノに向って拳打を仕掛けていき、その度にユーノは空に回避しながらファイトの動きを観察する。

「予備動作がないな!!アンゴルモアの影響でこうまで変わるんだな!」

ユーノは利き腕に力を込めると、ファイト目掛けて重い一撃を入れていくがその都度ファイトも空中に回避する。

ユーノが空中でファイトの後ろを捉えると、ファイトは即座に体を捻り拳を入れようとするがユーノもそれを瞬歩で回避していく。

「流石に早いな・・・だけど、短慮な子供であることに変りはない。」

そう言うと、ユーノは渾身の一発をファイトの腹部目掛けて打ち込みファイトを撃墜させた。

ファイトが撃墜したことを黙って観察するユーノ。

「・・・・・・」

すると、撃墜されたファイトは土煙の中から現れると脈絡もなく超高速の拳の乱打をユーノに仕掛けてきた。

「(高速の連打か!?)」

ユーノはそれを腕でガードをし続けながら、反撃の機会を窺っていた。

「本当に頑丈なカードだ・・・攻撃も力強い。だが、やはり若い・・・君の攻撃は一直線すぎるよ。」

だが、その時ファイトはニヒルな笑みを浮かべると背中から出してきた夥しい数の腕を使った反則的とも思える拳の乱撃をユーノに仕掛ける。

間近で見ていたユーノや、地面の方で眺めていたなのは達も驚きを隠せなかった。

「！」

ユーノは嵐の如くその乱撃をその身に受けると、目の前が衝撃によって見えなくなってしまった。

「ユーノ君！！」

「店長！！」

ユーノの身を案じるなのはやスクライア商店の面々、そしてスターズと死神の三人。

やがて、爆風が晴れた先に現れる勝ち誇った様子のファイトであったが、ファイトは目の前の光景を見た瞬間に目を疑った。

「何だい・・・届いてないよ。」

なのは達全員もファイトの前に立ち塞がるユーノの姿に驚愕した。

ユーノは袖の部分だけはボロボロになっているにしろ、それ以外は目立った傷も無く全てのファイトの乱撃を捌き切ると、自分の左手でファイトの右拳を鷲掴みにしながらこう言う。

「アンゴルモアが純粋な格闘家の心すらも蝕んだのか・・・・・・・・可愛そうに」

低い声でそう言うと、ユーノは片腕の拳から強烈な打撃をファイトに繰り出す。

「“一骨(いっこつ)”」

ユーノの一骨をその身に受けた瞬間、ファイトは遥かなたへと吹き飛ばされ廃墟と化したビルを次々に薙ぎ倒しながら元のカードへと戻っていった。

ちなみに、この一骨という技は元々は護廷十三隊総隊長・・・山本元柳斎重國が繰り出す規格外の力を有した徒手空拳技の一つであり、両拳による強烈な打撃を繰り出す際は“双骨(そうこつ)”と称され、ユーノ自身はこれを知らぬ間に会得していたらしい。

ユーノの放った途轍もない破壊力を秘めた拳を目の当たりにした瞬間、全員は思わず絶句したのであった。

すると、その時遅れてきたライトニングの四人が漸くなのは達に合流した。

「みなさん!!大丈夫ですか!?」

「すみません!!遅れました!!」

「ああ・・・私らは何ともねえ・・・ユーノが来てくれたからな・・・それにしても・・・」

ヴィータはそう言うと、遥か前方から窺える廃ビルの無惨な光景を凝視し、なのは達と供に空中に立ち尽くすユーノを見上げたのであった。

「にゃはは・・・こ、これには流石に私もびっくり・・・かな・・・」

「打撃一発で・・・この威力とは・・・!?」

「スバルや私も・・・これは無理かな・・・」

スバルやギンガとて、このような打撃を打つことなど到底不可能だ。

一方、恋次達はユーノの繰り出した技を見た瞬間目の色を変えた。

「あの技は確か・・・総隊長が使うものと同じだ!」

「『一骨』・・・まさかユーノ殿があれを会得しているとはな・・・」

「つくづく恐ろしい奴だぜ・・・あいつは・・・」

クロウ・リードを継ぐ者（後書き）

教えて、ユーノ先生！

ユ「今日は、クロウ・リードさんいついてね♪」

ユ「彼は高い魔力を有した不世出の魔術師で、普通の人が出来ないようなことを平気やってのける凄い人手ね・・・全く新しい魔法を創り出したりもしたんだ♪」

ユ「時空管理局ですら、その正体が謎に包まれた存在だけど・・・性格はかなりの悪戯好きであったようだよ♪」

エ「お久しぶりです、ユーノさん。その節はどうも♪」

ユ「これはこれは柊沢さん♪どうやって此処まで？」

エ「簡単なことですよ。楽屋のドアにここがスタジオと書いてありましたから。」

ユ「このコーナーって・・・楽屋で行われていたの？」

魔導師図鑑ハイパー！

事件が起こる前日の夜のこと。

スバル達はロビーで寛いでいると、目の前に全身ボロボロとなったなのはが現れる。

ス「な、なのはさん!?」

ギ「どうしたんですか、一体!?ボロボロじゃないですか!?」

なのはは肩を落としながら、その理由を答える。

な「あ・・・実はさっきユーノ君と模擬戦してね・・・この通り完全にボロ負けしちゃった・・・」

テ「え、ユーノ先生とですか!?だけど、何をしたらそんな風に・・・?」

な「う~~~ん・・・最後の一撃のとき、私がバスターを撃とうとしたら、ユーノ君が手からスッごい大きな光線を出してきてね・・・呆気なく撃墜しちゃったの。あああああ!!!!ユーノ君が砲撃使うなんて聞いてないよ!!!うえええええええ!!!!」

なのは、その場に悔しさと痛みえ泣き崩れる。

フォワードメンバーは声も出せなかった。

カードの叛乱

＞ｉ１３２６５―７０９＜

機動六課の早急な対応によって、ミッドチルダ市街地で魔力保有者を手当たり次第に狙っていた暴走したさくらカード５２枚のうち、

計４６枚の回収に成功。

しかし、残りの６枚の行方は未だに消息が掴めないままでいた。

なのは達は机に置かれた一枚一枚に魔力が宿っている自分達の想像を遥かに超える魔術師の使う未知の力を秘めたカードを全員で凝視しながら、残りのカードのことを考えていた。

「回収したカードは全部で４６枚・・・」

「あと６枚足りない・・・一体何所にあるんでしょう？」

スバルが腕組みをしながら頭を抱えていたとき、ユーノが残りのカードの正体を皆に伝え、警戒心を強めるように注意を促す。

「恐らくフェイト達が捕まっているところに残りの６枚が在るんだろう。ちょうど、無いのは四大元素と『光（ライト）』と『闇（ダーク）』のカードだから、油断は出来ないよ。」

「四大元素・・・？」

「『光』と『闇』・・・！？」

再び聞きなれない言葉を聞いた途端、なのはとはやてを始めユーノ以外の人間は全員首を傾げて怪訝そうな表情を浮かべる。

「さくらカードの中でも魔力が特に強い６枚のカードだよ。『風（ウィンディー）』・『水（ウォーティー）』・『火（ファイアリー）』・『地（アーシー）』が四大元素、『光』と『闇』の２枚が最高位カード。多分、この６枚が一番の敵であることは間違いなさそうだ。はやて・・・一先ず集めたさくらカードを届ける必要がある。

メンバーの選出を。」

「わかったよ。じゃあ、今回はなのはちゃんとライトニング２・３、それとこの中では一番さくらさんやカードのことには詳しいユーノ君が行ってくれるか？」

「「「了解」」」

「分かった。クロノ、座標の固定を。」

「ああ、今やっているさ・・・よし、準備完了！」

クロノは『ライク』への座標を固定すると、四人が転送ポートに乗り込んだことを確認し終えると、転送ボタンを押した。

四人が向こうの世界へと出発したのを見送ると、はやては任務成功を心から祈る。

「ほんなら、健闘を祈るで・・・四人とも！」

その頃、さくらカードによって身柄を拘束されているフェイトとアルフは現在眠らされた状態で暗く湿気に満ちた地下牢獄の中に閉じ込められていた。

二人は魔力結合を封じる特殊な手枷と足枷で身体の自由を奪われながら、壁に接着した状態で気絶していた。

暫くしてから、アルフの隣で気絶していたフェイトが漸く目を覚まし自分達の現状を確認し驚愕するのであった。

「う・・・此処は・・・・え!?」

フェイトは眠っていたときの記憶を辿りながら、自分達が拉致されこの場所で拘束されているということを理解する。

「何なのこれ・・・魔力が封じられてる・・・アルフ!!しっかりして、アルフ!!」

フェイトのその言葉を聞いた瞬間、何故か大人の人間形態でいたアルフが徐に目を覚ます。

「うっ・・・フェイト・・・?」

「よかった。気がついたんだね!」

「ああ・・・何とか。それより、この状況はどういうことだい!?」

「私にも分からない・・・でもこれだけははっきり分かる。どうやら私達は何者かによって捕まっているってこと。」

「何だって!!くそ・・・こんなもの!!」

「無理だよ、アルフ。魔力が結合できなくなってるの・・・自力で脱出するのは多分出来ない。」

「くっ!!じゃあ一体どうすりゃ・・・!?」

悔しさと怒りの気持ちを露にしたその時、アルフは前方のドアの向こうから聞こえる足音に耳を済ませた。

「アルフ・・・！？」

「静かに！フェイト・・・何かが近付いてくる・・・」

「え！」

足音は次第に大きくなりながら、緊迫した二人の方へと近付いてくる。

そして、閉ざされたドアが徐に開いた先に現れたのは――――――非常に怜悧冷徹な表情で二人を見つめる黒を基調とした身体の女性だった。

女性は慇懃無礼にも似た態度で二人に話しかけてくる。

「御無礼をお許し下さい・・・管理局の魔導師とその使い魔さん。」

「・・・誰だい・・・アンタ？」

「嘗ての我が主は私のことを『ウィンディー』と呼んでおりました・・・」

「嘗ての・・・それってどう言う！？」

「申し訳ありませんが、これ以上のことはお話できません。あなた方には悪いと思いますが暫しの間此処で時が来るのを待って頂きたい。大いなる災いが蘇るその日まで・・・」

「ふざけるんじゃないよ！！誰がアンタらなんかの言いなりになるかい！！早く此処からフェイトと一緒に解放しな！！」

「大いなる災いとは・・・一体何のことだ！」

フェイトともアルフもウィンディーの態度に腸が煮えくり返り、抑えきれない怒りをぶち撒けながら質問をするが、やはりウィンディーは何一つ答えと言える答えを返してはくれなかった。

「詳しい内容は申せません。ただ、あなた方にはその為の生贄の一つとなってもらいます。その巨大な魔力が、あの方の魔力と同調して大いなる災いの起爆剤となることは間違いないでしょうから・・・」

「あの方！？」

「訳の分からないことばっかり言ってるんじゃないよ！！あとで痛い目見るよ！！」

「果たしてそれはどうでしょうか？それでは、ごゆっくり・・・」

「なっ、待て！！」

フェイトが呼び止めるのも無視して、ウィンディーは二人の前から姿を消し扉を閉めた。

「何だったんだい・・・今のは！？」

「・・・強い魔力を感じた・・・でも何だろう・・・魔導師ではなかった。それに、微かにだけど、アンゴルモアの反応も感じ取れた。」

「アンゴルモアって、フェイト達が探してるあれかい・・・！？」

「うん。でもどういう事だろう・・・一体！？それに彼女が言っていた、大いなる災いって・・・！？」

フェイトとアルフの疑問は一向に深まれるばかりだったが、ウィンディーを始めとする最高位に位置する６人のカード達の計画は着実に進行を開始していた。

さて、一方のなのは・エリオ・シグナム・ユーノの四人は転送ポートによって無事に第６２管理外世界『ライク』へと到着した。

「着きましてね！」

「テスタロッサ達はこの世界の何所かに居るはずだ・・・だが、何所に居るのだ？」

すると、なのはが周りを見回していたときに不意に前方の空から自分達の方へと飛んでくる謎の飛行体を目撃する。

「あれ？何か飛んで来るよ・・・！？」

四人がなのはの言葉を聞き入れ、飛んでくるものの方向へ目を向ける。

その飛行体は近付いて注意深く見るとかなりの大きさのもので、姿はまるでライオンの背中から翼が生えたような正しく幻獣と呼べるようなものであった。

地面に降り立った幻獣が徐に四人に近付いてくると、ユーノ以外の

三人はデバイスを取り出し臨戦態勢に入る。

「なっ!?何だこいつは・・・!!」

「幻獣・・・!?それとも合成生物!?」

戦う覚悟を決めるなのは達だったが、そんな三人を見たユーノは気の抜けるような笑い声を上げると、ユーノの態度にきょとんとするなのは達にこう告げる。

「あはははは♪違うよ、みんな!彼はさくらさんの言ってた友達・・・もとい、さくらさんの身の安全やカードを監視する封印の獣・・・ケルベロスさんだよ♪そうでしょう・・・ケロちゃん♪」

すると、ユーノのその呼び方を聞いた途端目の前のケルベロスは雰囲気を一変させてまるで関西人のような口調でユーノに文句を言い始める。

「なっ!!何やコラやめんか!!その呼び方で呼んでええのはさくらと知世だけやで!!」

「まあまあいいじゃないですか、細かいことなんて♪」

「何所が細かいんや!!ええか!!わいは封印の獣ケルベロスや!!主以外の奴にそんな図々しく接して貰いたくないわ!!」

ユーノの飄々とした態度に機嫌を損ねるケルベロスと、それを軽く受け流しながら自分のペースにケルベロスを乗せようとするユーノ。

そんなケルベロスの想定外の性格に呆然とするなのは達三人。

「・・・え～と・・・何かイメージと全然違いますね・・・」

「・・・ああ・・・ザフィーラとこやつだったら絶対にザフィーラの方がマシだな・・・」

「て言うか・・・何で関西弁なんでしょうか・・・？」

「コラそこ!!!何コソコソ話とんねん!!」

三人の会話を地獄耳で聞いていたケルベロスが喝を入れると、三人は動揺を隠し切れなくなってしまう。

「え!?あ、はい!!すみませんでした!!」

その後、漸く状況が落ち着くとケルベロスは溜め息をつくと四人に向ってこう口にする。

「で、あんさん達がさくらから頼まれた時空管理局の魔導師っちゅう奴か？」

「はい、初めまして。高町なのは一等空尉です！」

「ヴォルケンリッターの将、シグナム一等空尉だ。」

「エリオ・モンディエル二等陸士です！」

「なのはの魔法の師で、機動六課特別エグゼクティブアドバイザーのユーノ・スクライアです♪以前地球では柊沢エリオルさんとも面識が少々。」

「ほう・・・クロウの生まれ変わりとか?だったら詳しい説明はあんまし居らへんやろう。兎に角、あんましこっちの姿で居るのは疲れるんや・・・」

「?こっちの姿って・・・!?」

「まあ、見てれば分かるよ♪」

なのはの疑問にユーノがそう答えた瞬間、ケルベロスは宙に浮かぶと両翼で身体を包み込むと平時魔力の消費を抑える為のもう一つの姿へと変わっていった。

そして、再びその姿を現したケルベロスの姿を目撃した瞬間、ユーノ以外の三人は度肝を抜いたのであった。

「「「え!?」」」

その姿とは、先程の獰猛な獣姿とは打って変わって・・・まるで羽の生えたぬいぐるみのようなものであった。

そして、声色も低い男性的なものから女性のような声色に変化して普段どおりの喋り方で第一声を発した。

「すまんがこの姿で暫く居させてもらうで♪ん!?どないしたんや三人して・・・汗がぎょうさん出とるで・・・?」

ケルベロスがそう言って前を見ると、なのは・シグナム・エリオは顔中から冷や汗を多量に流しながらケルベロスの方を指差し、あまりの衝撃的な出来事に思わず絶叫する。

「「「えええええええええええええ！！！！！！！！！！！！！」」」

三人の突然のことに耳を塞ぐケルベロスと、傍で聞いていたユーノ。

「うううううううううう嘘！！！！！！！ライオンさんの姿からぬいぐるみになった！！！！！？？？？？」

「ししししししししし信じられん！！！！！！！一体どういうことだ！！！！？？？？」

「ささささささささささ触ってもいいでしょうか！！！！！！！？？？？？」

三人の自分に対する侮辱的な発言に堪忍袋の緒が切れたケルベロス。

「コラー！！！！！！！！！！！！！誰がぬいぐるみや！！！！！！！わいのチャーミングな姿をバカにすんやない！！！！！！！つーか、誰が触らせるか！！！！！！！！！」

そんな驚愕の態度を見せるなのは達や憤慨するケルベロスを見ながら一人飄々とした態度のユーノは笑いながらなのは達にこう口にする。

「あはははははは♪三人とも、これはケルベロスさんの仮の姿だよ。魔力消費を抑えるための形態でね、僕だって同じ事やってじゃないか？」

「そ、それはそうだけど・・・ユーノ君とはまた勝手が違うから・・・！！」

なのはの言うことも一理ある。

ユーノは確かに幼い頃、当時9歳だったなのはと供にフェレットの姿で魔力の回復と消費を抑えるために動物形態になっていたが、ケルベロスの場合またそれとは違うものだ。

そんな動揺をし続ける三人を見たケルベロスは溜め息を吐くと、呆れた表情で次のように口にした。

「やれやれ・・・感受性の乏しい小娘たちや！少しはそこの緑の兄ちゃんを見習ったらどうや？」

それを聞いた途端、三人は顔を引きつり悔しさと恥ずかしさの余り顔を真っ赤にする。

「う・・・！私としたことが・・・これしきの事で取り乱すとは！！」

「よく考えたら変身魔法なんて結構ざらにありますからね・・・！！」

「にゃはは・・・反省してます・・・！！」

三人が項垂れていると、苦笑していたユーノがあることを思い出しケルベロスに尋ねる。

「ところで、ケルベロスさん？“月（ユエ）”さんは一緒じゃないんですか？」

「ああ・・・あいつならさくらと一緒や・・・これからわいと一緒にさくら達の方へ向うさかい、その時にこれからの事を考えんとな。」

「よし。じゃあ、急ごうみんな。」

「「「了解！」」」

ユーノの言葉を聞いて気を取り直したなのは達はケルベロスに導かれるままにさくらが待つという場所まで移動を開始する。

第６２管理外世界『ライク』は、言ってみれば中世のヨーロッパを思わせるような景観が殆どの世界である。

あちこちに広がる嘗ての王が造らせた古城が異たる所に点在し、さらには教会の周りには荘園と呼ばれる土地があり、封建的な支配体制の下で住民は強制労働である賦役と生産物地代である貢納がそれぞれに決められていた。

そんな周りの状況を物見遊山な気持ちで眺めながら、歩いているとふとケルベロスがなのは達の方へと振り返りこんな事を言って来た。

「しかしあんさん達・・・ほんまバケモノみたいに強い魔力を持ってるんやな・・・体中からビシビジ感じるで・・・」

「そうですか？私は別にそんなたいしたほどじゃないと思うけどな？」

「なのは・・・それは大間違いだと思うがな・・・」

なのはの怪訝そうな表情を見ていたシグナムやエリオが顔を引きつりながら横から口を出してくる。

「うちの場合は特別なんですよ♪極端に強い魔力保有者が一遍に集まった部隊なものでしてね・・・皆平均してニアSランクの魔導師ですよ♪」

「そりゃあ末恐ろしいや・・・いや、しかし緑の兄ちゃんからも何や魔力とは違う巨大な力を感じるんやけどな・・・!?」

「ユーノ君には魔力以外に霊力ってものがやどってるんだよ。まぁ、ユーノ君の場合はそっちのほうが強いんだけど。それこそちょっと霊力を放出すれば、それだけで私を含めてみんな気絶しちゃうくらい・・・」

「霊力ね・・・何やよう分からんけど・・・兄ちゃんがさくら並みにその力を持ってるってことがよく分かったで・・・お!目的地に着いたで。」

ケルベロスが四人にそう言うと、ケルベロスは先にその建物の中に入って行った。

建物自体は実に極普通の二階建ての建物で、別段変わった様子は窺えない。

しかし、なのは達は建物の中から感じる強大な魔力に体中からビシビシ感じていた。

「此処にケルベロスさんの主である木之本桜さんが・・・!?」

「・・・開けるぞ。」

シグナムは緊張した様子で建物のドアを開けて中へと入っていく。

そして、自分達の目の前に現れたのは実態を持つ本物の木之本桜だった。

「みなさん！よく来てくれました！」

さくらは笑顔で四人のことを出迎えてくれたが、当の四人のほうはというとさくらが無意識のうちに発する途轍もない魔力に困惑していた。

「「「う！！！」」」

三人は膨大な魔力に当てられてしまい、思わずその場に跪き肩で息をする。

一方のユーノはさくらと同じだけの膨大な霊力とそれよりは低いが魔力も秘めているため表情は何時もと変わらない様子で、息切れをするなのは達に声を掛ける。

「大丈夫、三人とも？」

そんなユーノの言葉を聞きながら、なのは達はどうにか立ち上がり壁に手を突きながらなるべくさくらから視線を逸らしていた。

「（凄い魔力・・・！！私なんかよりもずっと強力だ・・・！！しかもこの大きさから言うと・・・！？）」

「（主はやてと同等・・・いや、それ以上か!?）」

「（この人・・・幻のＳＳＳランク魔導師の素質を持っているんだ・・・!?）」

三人の重く苦しそうな表情を見ていたさくらは困惑した様子だった。

「あの・・・どうかしたんですか?そんな険しい表情なんかして・・・?」

すると、建物の中の壁に寄りかかっていた紫がかった銀の瞳と長い銀の髪を持った、華奢で無表情な青年の姿をした人物がさくらに話しかけてきた。

「・・・お前の魔力に当てられて困惑しておるのだ。少し抑えた方が良い・・・」

「え!?ご、御免なさい!!いま、抑えますから!!」

その人物、月に助言されてから初めて自覚したさくらは直ぐに魔力をコントロールする。

魔力が抑えられたことによって、なのは達も漸く圧迫感から解放され大きく深呼吸をするのであった。

「ふ～～～喉が詰まるかと思いましたよ・・・」

「そうかな?僕は全然・・・」

「ユーノ君はハイブリットだから平気だけど、私達は結構辛かった

んだよ・・・！」

「一先ず、助かりました。直接会うのは初めてですね。」

「あ、はい！初めまして、木之本桜です！ケロちゃんのことは多分良いよね・・・もう一人の方を紹介しますね。こちら、ケロちゃんと同じカードの監視と審判をする月と書いてユエさん。」

「・・・・・・」

さくらの紹介を受けた月だったが、相変わらずの愛想の無い態度で目を瞑り腕組みをしたまま黙して何も語らない。

そんな月の態度を見たさくらは苦笑すると、なのは達に向って謝罪の言葉を掛ける。

「御免なさい。ユエさんあまり喋るのは好きじゃないの・・・取り合えず、一先ずその辺に座ってください。」

すると、その時奥のほうから紅茶を運んだ状態でさくら達の前に現れる長い黒髪が特徴の整った顔の女性。

「さくらちゃん、紅茶をお持ちしましたわ！」

その丁寧声を話す女性の声を聞いたさくらもその方向へ振り返り、名前を口にする。

「知世ちゃん！態々御免ね。」

「いえいえ。ちょうどお客様もいらしたことですし・・・良いタイ

ミングですわ。」

「あの・・・あなたは？」

四人を代表してなのはがその女性に素性を尋ねる。

「申し送れましたわ。私、さくらちゃんの親友の大道寺知世と申します。さくらちゃんの数知れない秘密を知っているものの一人ですわ。」

「それじゃあ、あなたも魔法を使うんですか？」

「いいえ。ただ、私は身近なことでさくらちゃんをサポートして来ました。クロウカードを集める際も、さくらカードに作り変えるときも・・・その度、さくらちゃんには可愛らしいお洋服を着ていただいたのですが・・・最近はそう言う機会もめっきり少なくなってしまったので非常に残念ですわ！！ああ～～～私の心は潤いが満ち足りませんわ～～～！！」

なお、ファン以外にはあまり知られていない事実だが彼女は“面白くてかわいい”さくらに自分の作った服を着てもらい、撮影することが至上の悦びであり、その為には如何なる手段を用いてでもコシュチュームを着せようと日々模索しているらしいが、最近は双方の都合でそういった機会がなく、彼女自身はかなり欲求不満を抱えているのだ。

そんな自分の世界にすっかり陥ってしまった知世を傍らで見ていたさくらや何も知らないで居るなのは達は苦笑いを浮かべる。

「え～～～と・・・さくらさん・・・知世さんって・・・」

「ほえ～～～昔からああなの。だからあまり気にしないで・・・って、ケロちゃん！一人でお菓子食べちゃ駄目だって！！」

さくらが少し目を離しているうちに、知世が紅茶と一緒に持ってきたお持て成しようの茶菓子をケルベロスはぬいぐるみ状態のまま一人で食べ始めていた。

慌てたようでケルベロスを止めにかかるさくら。

そんな個性豊かなさくらの関係者を見つめながら、ユーノも含めなのは達はさくらの苦労がどれ程のものかを実感した。

「やれやれ・・・さくらさんも大変そうだな・・・」

漸く落ち着きを取り戻すと、四人はテーブルに座りながら軽く自分達の仕事のことや経緯をさくらたちに話すと、ユーノは今回の本題を口にしようとする。

「さて、それじゃあそろそろ本題に入りましょうか・・・と、その前に。なのは、あれを。」

「うん。さくらさん・・・これを。」

ユーノにそう言われると、なのはは懐からミッドで回収した４６枚のさくらカードを取り出しさくらに手渡す。

「さくらカード！どうしてあなた達が！？」

「此処に来る前に、ミッドで暴走化したカードが出現して僕達を襲

ってきたんです。尤も、四大元素と光と闇は居ませんでしたけど・・・しかし、いずれにしても暴走化したその原因は・・・僕らが今集めてるロスト・ロギア、『アンゴルモア』が原因ですよ。」

「ロスト・ロギア・・・アンゴルモア・・・何やよく分からん単語言われてもピンとけえへんな・・・！？」

ケルベロスを始め、さくらも知世もいまいちしっくりこなかった。

それを様子を見たエリオが噛み砕いて説明をする。

「簡単に言えば物凄く危険な代物・・・ですかね。」

エリオがそう説明したことによって、さくら達もそれなりに納得する。

そして、なのはが意を決して今回の騒動の詳細をさくらに尋ねる。

「詳しく話してくれませんか、さくらさん。貴方の夫である小狼さんがどうしてカード達に捕らえられてしまったのか、その理由を・・・」

なのはの言葉を聞いたさくらは思い表情を浮かべて暫く黙り込んだ後、徐に騒動の詳細を語り始めるのであった。

「・・・はい・・・あれは、散らばってしまったカードを探しに行こうとしたときのことです・・・」

ここからはさくらの回想シーンである。

さくらは家を飛び出すと、外へと散らばっていったさくらカードを探すために走り出そうとしたが、その瞬間さくらの前に現れるのはアンゴルモアの影響で実体化した黒いウィンディーであった。

〈え!?〉

突然、目の前に現れる見覚えのある者の姿に驚きを隠せなくなるさくらと、黙して何も語らない無表情のウィンディー。

〈あなたは・・・ウィンディー・・・!?〉

〈我が主よ・・・いや、最早我々に主など不要です。我々は最早ただのカードである必要はなくなったのです。〉

〈言ってる意味がよく分からないよ!他の皆は!?何所にいるか知ってる!?〉

〈・・・知る必要は在りません・・・〉

〈どうして!?一体どうしちゃったの!あなたや他のカード達に一体何があったの!?〉

さくらは黒く変色し、心も変わり果ててしまったウィンディーに困惑するばかり。

すると、そんなさくらに向ってウィンディーは唐突にこう口にする。

〈・・・主よ・・・あなたは覚えていますか?月との審判のときに見た大いなる災いを・・・〉

〈！大いなる・・・災い・・・！？〉

さくらは大いなる災いという言葉を聞いた途端、小学生のときに実際に見た人を好きでいるという感情がなくなった世界のことを思い出す。

それは、さくらが今まで見てきたこと・体験してきたことの中で最も残酷で冷たく・悲しい世界であった。

〈我々が解き放たれた以上・・・再びこの世に大いなる災いが降り注ぎます。但し、その為には少々生贄となって頂かねばなりません・・・〉

そう言うと、ウィンディーはその場にある映像を映し出す。

その映像を見た瞬間、さくらは驚愕の表情を見せる。

映し出されていたのは、数時間前に仕事に行った筈の愛する夫・・・小狼であったのだ。

〈は！！小狼君！！どうして・・・！？〉

小狼はフェイト達と同様、魔力が結合できなくなる枷によって手足の自由を奪われ、更には何者かによっていたぶられたような後が顔中に克明に残っていた。

〈あなたには酷かもしれませんが・・・彼には大いなる災いを齎すための起爆剤となってもらいます。〉

〈え！？〉

〈知っての通り・・・大いなる災いとは即ち“好きという感情を失う”こと。ですから、あなたがこの世で最も愛する人・・・即ち夫である小狼様を大いなる災いを齎すために一役買ってもらいます。〉

〈そんなこと駄目!!!小狼君を直ぐに解放して!!お願い、ウィンディー!!〉

涙目になりながら、必死に小狼の解放を求めるさくら。

しかし、ウィンディーはそんな声を荒げるさくらを目の当たりにしても一切動じず怜悧冷徹な態度でこう返す。

〈・・・言ったはずです。我々は最早主など必要ないと。つまり、あなたに従う必要はなくなったと・・・さようなら、我が主・・・木之本桜様。〉

ウィンディーはそう言うと、風の衝撃波を掌から発生させてさくらに向って飛ばす。

〈はっ!!〉

さくらもその衝撃波をその身に受けてしまい、そのまま気絶。

気がついた時にはウィンディーの姿は無く、目を開けたらその場には心配する知世やケルベロス達に見守られながらベッドで眠っていたそうだ。

「それから私が魔力の気配を追っていったときには・・・カードさん達は異世界に散らばっていて、小狼君に与える膨大な魔力を得る

ために次々に魔力保有者を狙って・・・」

「我々の所にも現れたという訳か・・・・・・・」

「この世界へはどうやって？」

「わいと月の魔力と、残ったホープのカードとさくら自身の魔力を使ってやって来たんや。そしたら知世も絶対に行くって聞かんさかい・・・仕方なく。」

「さくらちゃんのピンチに黙っている訳には参りませんわ！李君だってさくらちゃんとの再会を望んでいるはずです！たとえ、力はなくても・・・協力をするのは親友として当然ですわ！」

「知世ちゃん・・・ありがとう・・・！」

知世のさくらを思う純粋な気持ちに心打たれるのさくらと、なのは達四人。

「でも相手は暴走した四大元素と最高位カード二枚・・・その上フェイト達も人質に取られてる以上、容易に解決できる話じゃないな・・・」

すると、そんなユーノの言葉を聞いて深刻な表情を見せるなのは達にさくらがふとこんな事を言って来たのだ。

「大丈夫ですよ、みなさん！」

「え？それ・・・どういう意味ですか！？」

さくらの言葉を聞いたなのはがそう尋ねると、満面の笑みを浮かべたさくらは自身の座有名をなのは達に教えるのであった。

「確証はないですけど、こういう時こそ気の持ちようです。心頭滅却すれば火もまた涼し・・・とはちょっと違いますけど、私が何時も使ってる無敵の呪文があるんです。それをみなさんにも教えますね！」

「無敵の呪文・・・ですか？」

「あれですね！」

「あれやな！！」

「・・・ふん。」

さくらの口にした無敵の呪文という言葉を聞いた知世・ケルベロス・月、そしてエリオルから話を聞いていたユーノはその言葉がどういったものなのかを理解していた。

何も分からないままのなのは達はさくらにその言葉が何なのかを問いただす。

「一体その言葉とは・・・？」

エリオがそう言った直後、さくらは自身に満ちた表情でこの言葉を口にした。

「“絶対、大丈夫”・・・です！」

すると、その言葉を聞いたなのは達の心は自然と温かくなっていった。

心に生まれる嘗て体験したことの無いような絶対的なものに安堵の表情を浮かべるなのは・エリオ・シグナム。

「・・・うふ。絶対大丈夫・・・か。何だか凄っく暖かくて強い力を感じますね！それじゃあ、私からも教えてくれたお礼に一つ・・・私が使う無敵の呪文・・・て言うか口癖を教えますね！」

「なのはさんにも・・・あるんですか？」

「是非聞かせて欲しいですわ！」

興味津々のさくらと知世を見たなのはも、自信に満ちた表情を浮かべて自分の座右の銘を口にするのであった。

「勿論！私の使う無敵の呪文、それは・・・“全力全開”です！」

その前向きな一言を聞いたさくら達はなのは達と同様心に非常に強い力を感じ取り、安堵の表情を浮かべる。

「ええやいかそれ！中々見所あるな、姉ちゃん！！」

「素敵ですわ！！さくらちゃんに負けないぐらい力の籠もった言葉ですわ。」

「うん！こっちも凄く元気が出てきたよ！！ありがとうございます、なのはさん！」

「こっちの方こそ、元気が出る御呪いを教えてくれてありがとうございます、さくらさん！絶対に助け出しましょう・・・小狼さんもフェイトちゃんたちも！」

「はい！」

こうして、なのは達とさくら達は供にお互いの意識を高めながら囚われの身にある小狼とフェイト、アルフの三人を必ず助け出すと心に誓うのであった。

その頃、その三人が捕まっている古城の奥ではアンゴルモアの影響で実体化し、心すらも失ってしまった四大元素カードとライトとダークが水晶を見ながら談義を行っていた。

「感じる・・・強い力を感じる・・・」

「強力な魔力が三体・・・いや、四体もいやがるぜ！！」

「しかも一人は飛び切りでかい力を持ってる・・・まさに打ってつけだぜ！！」

「だが油断するでないぞ・・・この世界には元主やケルベロス達も来ているのだからな。」

「関係ないわ。最早我々に主なんてものは必要ないのだから・・・」

「同感ね。主なき私達が今すべきことは大いなる災いを蘇らせること。そのために必要なのは膨大な魔力保有者。」

すると、談義の最中に突然四大元素の一つであるファイアリーが抜

け出すとさくら達が身を潜めている下まで向おうとする。

「飛んで日にいる夏の虫だぜ・・・私が先に行ってとっ捕まえてくるよ!!」

そんなファイアリーに警告を入れるこの六人を取り仕切る同じ四大元素の一人であるウィンディー。

「・・・あまり甚振り過ぎぬようにな・・・『火(ファイアリー)』・・・」

ファイアリーは軽くウィンディーに返事をすると、黒く変色した地獄の業火で形成された翼を広げると、古城を飛び出しさくら達の方へと跳んで行った。

そんなファイアリーの気配を建物の中から感じ取ったさくら・なのは・ユーノ・ケルベロス・月の五人の表情が一気に凍りつく。

「「「「「!」」」」」

「さくらちゃん・・・どうなさいました?」

「感じる・・・ファイアリーの魔力を感じる・・・!」

「近付いて来たで・・・ごっつ速さや!!」

「来るぞ!」

ユーノ達は急いでドアを開けて外へと飛び出した。

その瞬間頭上から降り注いできた漆黒の火球が全員を襲う。

そんな全員を見下ろしながら、実体化したファイアリーは好戦的な態度でこう口にしたのであった。

「ははははははははは！！！！！！見いつけた！！！！！こんな処に隠れてやがったのか、蛆虫が！！！」

始めて目撃する四大元素カードの実体化した姿に険しい表情を浮かべるシグナム。

「あれがファイアリー・・・！？随分と凶暴な奴なのだな・・・」

ケルベロスは一度真の姿へと戻ると、驚愕するシグナム達に向けて補足説明を加える。

「四大元素の中でも好戦的な奴でな・・・その名の通り炎を自由自在に操る。しかも、同じ四大元素のウォーティーよりも更に性質が悪いんや。しかし、何やこの姿・・・カードのときとはえらい違うで！？」

ケルベロスも月のほうも、容貌がすっかり変わり果てたファイアリーを見ながら眉間に皺を寄せる。

そんな二人にユーノが説明を加える。

「アンゴルモアの影響で姿も性格もより凶暴になっているんですよ！」

「ここは一先ず知世さんを安全な場所に移さないと！」

なのはの賢明な判断を聞いたさくらは直ぐにケルベロスに命じて、知世を安全な場所へ避難させる様に指示を出す。

「ケロちゃん！知世ちゃんをお願い！！」

「分かった！！」

ケルベロスは知世を背中に乗せると、その場から離れようとする。

すると、知世が不安げな様子でさくらに声を掛ける。

「気をつけてください、さくらちゃん！」

「うん！大丈夫・・・絶対に返ってくるから！」

その言葉を聞いた知世もさくらの実力を信じて、ケルベロスと供にその場から離れていったのであった。

知世が避難したことを確認したなのは達は、それぞれのデバイスを取り出すと臨戦態勢に入る。

「みんな、いくよ！レイジングハート・・・」

「レバンティン・・・」

「ストラーダ・・・」

「「「セットアップ！！！」」」

三人がその掛け声を口にした瞬間、自分の身体に纏われる専用の防

護服と武器となるデバイス。

そんな三人の姿を見て驚愕するさくらであったが、直ぐに自分も一緒に戦うために胸元から星型の鍵を取り出し呪文を唱え始める。

呪文を唱え始めた瞬間、さくらの真下に現れるさくら専用の星の魔法陣。

「“星の力を秘めし鍵よ、真の姿を我の前に示せ。契約のもと、さくらが命じる”・・・封印解除(レリーズ)！！」

すると、星の鍵は真の姿であるピンクを基調とする杖の姿へと戻りさくらの手中に収まる。

ユーノ自身も仕込み杖を引き抜き晩翠を解放し、全員が戦闘可能の状態になったことを見たファイアリーは闘志を燃やし始める。

「へへへ！！待ってました・・・戦いのときをよ！！！」

ファイアリーはそう言うと、先程よりも数を増した火球を六人に向って発射する。

さくらはなのはから受け取ったさくらカードの中から巨大な鳥が描かれている『翔(フライ)』のカードを使い、火球を回避する。

「『翔(フライ)』！」

さくらの背中から生える天使を思わせるような立派な翼。

その翼を使ってさくらはなのは達と供に空中へと舞い上がる。

なのははレイジングハートに指示を出して、アクセルシューターを発射する。

「アクセルシューター！！」

アクセルシューターによって撃破されていくファイアリーの火球。

そのファイアリーの背後からエリオがストラードによる雷撃攻撃を発揮する。

「サンダーレイジ！」

ファイアリーは咄嗟にエリオの動きを読み取って無駄の無い動きで回避する。

「へへへ！！！んなもの喰らうかよ・・・お！？」

と、その瞬間今度はシグナムのレバンティンがファイアリーに対して炎の斬撃を向けてきた。

「紫電・・・一閃！！」

シグナムの炎を斬撃をその身に受けたファイアリーは地面へと突き落とされるが、直ぐに立ち上がって空へと舞い上がると傷を軽く舌で舐める。

「ぐっ！！いいぜ・・・今の結構効いたぜ・・・だが・・・」

そう言うと、ニヒルな笑みを浮かべたままファイアリーは主である

さくらの方へ向けて炎の竜で攻撃を仕掛けてきた。
咄嗟にさくらは『盾（シールド）』のカードを取り出し、攻撃を防ぐ。
「『盾（シールド）』！！」
炎の竜はシールドに防がれたことによって、跡形も無く消滅していく。
「はっ！！運のいい奴！！でもそれで防いだつもりかよ！！！」
すると、今度は三体の炎の竜を操ってさくらに攻撃を仕掛けてきた。
原則としてカードは一回しか使うことは出来ないため、二度目のシールドを発動することは不可能であった。
「なっ！？」
さくら自身もこのときはやられるとばかり思っていたが、そんなさくらの危機を救ったのはなのはであった。
〈Ｐｒｏｔｅｃｔｉｏｎ〉
なのははさくらの前に現われと、レイジングハートによって形成した魔法防壁によって漆黒の三体の竜を険しい表情で防いでいた。
「なのはさん！」
「大丈夫です・・・！ちょっとキツイですけど・・・！！」

さくらに攻撃してきたことに激情した月はファイアリーに向けて六角錐状の結晶を多数ファイアリーに向けて発射する。

「おのれ・・・許さん!!」

月の攻撃を翼でガードをするファイアリーは、月に対する怒りが燃え上がる。

「ち!五月蝿い審判め!!てめえには用は・・・ねえ!!!!!」

ファイアリーはこれまでで最も巨大な火球を作り出し、それを月に向って投げ飛ばした。

月は回避が間に合わずにその攻撃を受けて地面に落下していった。

「のあああああああ!!!!!」

「月さん!!!!」

「ははははははは!!!!!私の司るものは『太陽』!ケルベロスが相手ならどうだったか分からないが、てめぇの力は私には通用しねえ!!」

そう月に向って言い張るファイアリーであったが、そんなファイアリーの背後に気付かれないように回りこんでいたユーノは耳元でこう口にする。

「ほう・・・なら僕の力ならどうかな?」

「何!?」

「“晩翠月光歌・散り行く砂”」

ユーノはその瞬間、月の魔力を使ってその場に無いはずの砂を巻き起こしてファイアリーの視界を砂嵐によって完全に見えなくする。

「な、何だこりゃ!?目が・・・見えない!!」

ユーノの攻撃で身動きによって身動きが取れないで居るファイアリーを見たなのは達は、一気に勝負出る。

「今だ!ディバイン・・・バスター!!」

「ライトニングスマッシャー!!」

「陣風!!」

なのはの砲撃魔法とエリオの雷撃の閃光、そしてシグナムの剣戟による突風が同時にファイアリーの身体に直撃する。

「のあああああああ!!!!!!」

ファイアリーは攻撃を受けた瞬間、吹き飛ばされ地面へと叩きつけられる。

「止めだよ。」

そして、それを見たユーノは水流系の鬼道を扱いファイアリーに最後の一撃を加える。

「破道の八十二　『爆水弾（ばくすいだん）』！」

爆水弾は、その名の通り氾濫する川の如く大量の水流を発生させて敵を洗い流す水流系の破道であり同時に数少ない特殊攻撃技の一つである。

爆水弾をその身に受けたファイアリーは本来言わずと知れた火。

そのまま水の力によって力を奪い取られていき、ついに力尽きて水の中へと沈んでいく。

「なあああああああ！！！

「一先ず身体を休ませて体力と魔力の回復を図ろう。突入はそれからだ。」

ユーノの判断によって、一先ず体力と魔力の回復を最優先事項と考えたなのは達は返ってきた知世とケルベロスと供に軽い食事を作って、栄養補給を済ませていた。

さくらはあの時間近で見たなのは達の魔法にすっかり心奪われていた。

「しかし凄かったですね！あれがなのはさん達の魔法ですか！！杖の先から砲撃を出せるなんて！！本当に驚きです！！」

「にゃはは・・・そうですかね・・・ミッドでは普通ですよ。私達としてはさくらさんの使う魔法のほうが新鮮に感じますね。」

「そうだな。私もあのような形の魔法は初めてだ。カードにあわせて能力も用途も随分違うものなのですね。」

「その鍵の形をしてるのが、さくらさんの杖ですね？」

「うん、そうだよ！みなさんのも大体似た形をしてるんですね。シグナムさんは剣の形をしてるし、エリオ君は腕時計。なのはさんは宝石・・・そう言えば、名前があるんですね。」

「ええ。私のはレイジングハート。元々は私のじゃなかったんですけどね・・・へへ。」

なのはが舌を出しながらそんなことを言うのを聴いた瞬間、ケルベ

ロスはそんななのはに向ってとんでもないことを言おうとした。

「何やて!?ちゅーことは姉ちゃん・・・まさか何所かから盗んで・・・ぐほ!!」

そんなケルベロスの発言を聞いていたさくらが慌ててケルベロスの首を手で握り締めながら口が聞けないようにすると、かなり慌てた様子でなのはに謝罪の言葉を掛ける。

「なななな何言ってるのケロちゃん!!そんなことするわけ無いじゃないの!!御免なさいね、なのはさん!!この子が変なこと言っちゃって!!」

「いえいえ!私は気にしてないですよ・・・」

なのははさくらにそう言いながら、今にも窒息しそうになるケルベロスに同情の視線を送ったのであった。

「それでは、そちらのレイジングハートはどなたのですの?」

「うふ♪これは元々ユーノ君のものだったんですよ。ね、ユーノ君♪」

「うん♪ま、今では完全になのはのデバイスですけどね・・・・・・はぁ～～どうせ僕なんて・・・なのはと違って才能なんてないし堅物だし蛆虫だし攻撃魔法もろくに使えないし・・・・・・」

ユーノは完全に何時ものトラウマ状態に入ってしまい、部屋の隅の方で縮みこんでしまったのであった。

それを見たなのはが慌てた様子でユーノに近付き、励ましの言葉を掛けて慰めようとする。

「ゆゆゆゆゆユーノ君!!そんなに自分を卑下したら駄目だよ!!ほら、元気出して!!ね?私も変な事言って御免ね。」

そんな二人の様子をずっと見ていた傷を受けた月は無表情のままシグナムにこう言う。

「・・・仲が良いのだな・・・あの二人。」

「ああ。なのはとスクライアは9歳からの幼馴染で、恋人同士だ。普段から甘ったるい惚気を発しているのが最近の悩みの種だ・・・」

「あら、素晴らしいことじゃないですか・・・お互いを信頼し合った存在というのは。“好き”という気持ちは何時までも大切にしていただきたいですわ。」

「そうだね・・・でも羨ましいな・・・あんなに仲睦ましい光景を見てると・・・小狼君・・・はっ!何暗い方向に考えてるんだろう私!!絶対に大丈夫・・・小狼君は絶対に大丈夫!!」

さくらは暗い気持ちを払拭させるために頬を叩いて気合を入れなおす。

そんなさくらの姿を見て、エリオが知世に話しかける。

「前向きですね、さくらさんは。」

「そこがまた、さくらちゃんのいい所ですわ!」

食事が終わり、暫くの休憩時間を過ごしていたユーノは二階へ上がるとこの世界の沈む勇気を眺めながら物思いに耽っていると、後ろからやってくる月の姿を目撃する。

「・・・・・・――――――おや？」

月は黙り込んだままユーノの隣に立ち、二人の間には暫しの沈黙が流れる。

「・・・どうしたんです、僕なんかに用ですか？」

すると、月は重い口を開きユーノに向って意外なことを口にする。

「・・・先程は助かった・・・礼を言う。」

「何～だ、そんなことですか♪別にいいですよ、お礼なんて♪」

「あらだけの力を持ちながら、何故自分を卑下する必要がある？私の目に狂いが無ければ、全ての能力に於いて最も優れているのはお前のはずだ。あのなのはという女性もそれは分かってる筈だが？」

「確かに・・・言っていることは間違いじゃないですよ。ただ、常に自分を卑下するのが習慣みたいになっていたもので。四年前までの弱い僕がそうだったもので・・・」

「・・・・・お前は自分が思っている以上に強い男だ。お前を見てると、あやつのことを思い出す。」

「・・・小狼さん・・・ですか？」

「我が主の身に何かあったりせぬよう、常に影ながら見守っていた。それこそ、自分の身がどうなろうと厭わず。あやつは口癖のように言っていた・・・“俺がさくらを守ってやらずに、誰がさくらを守るんだ”と。」

「・・・小狼さんもきっと感じていたんでしょうね・・・非力な自分が大切な人をどうやったら守れるのかと。だから気ばかり焦ってしまうんでしょうね・・・僕も一時期そうでしたから。でも、小狼さんもそのうち気付く時が来るでしょう・・・さくらさんがどれだけ小狼さんのことを信頼し、頼りにしているのかを。そろそろ下に戻りましょう・・・作戦会議を始めますから。」

「・・・そうだな。」

ユーノは月にそう言うと、月と供に階段を下りていき下で待っているなのは達のほうへと向かって行った。

その後、夜になって始まった小狼達を奪還するための作戦会議。

ユーノの説明を聞きながら、ディスプレイに映し出された三人が捕まっていると思われる古城までの地図を見ながら真剣な表情を浮かべるなのは達。

「魔力の反応から判断すると、残りのカードが居るのはこの古城の中。小狼さんもフェイト達もこの中の何所かに居るはずだよ。」

「問題はどうやって敵に気付かれぬように忍び込むかだね。」

「見張りの数もどれほどのものか分からぬ以上、迂闊には入り込め

ん。この城の見取り図を見ても、これと言って侵入できそうなところもないしな。」

「では、一体どうすれば？」

エリオの言葉を聞いて、頭を抱え込むなのは達全員。

すると、その時ユーノがある大胆な方法を思いつき全員に提案してきた。

「――ねえ、こう言う手はどうかな・・・？」

ユーノの作戦を聞いた瞬間、なのは達もさくら達もその意見に同意すると早速行動を開始しようとするが、その前に知世が部屋の奥からあるものを取り出してそれをさくらに渡したのであった。

その渡されたものを見た瞬間、さくらも含めた全員は少々呆れ返ってしまったが、さくらは知世から渡されたものをしっかり受け取ると、部屋の奥へ走っていく。

果たして、知世がさくらに渡したものとは一体なんだったのか？

この真相は次回！！

カードの叛乱（後書き）

ケロちゃんにおまかせ

ケ「こにゃにゃちわ～～～！！！ついに復活したこの伝説のコーナー、ケロちゃんにおまかせがみんなの前に戻ってきたで！！！今回はあの緑の兄ちゃんに代わってなのはっちゅう姉ちゃんのバトルコスチュームの紹介や！！」

ケ「いやしかし、魔導師っちゅうんは中々センスのいいもん着とるんやな～～～！！」

ケ「では、早速コスチュームの解説や。白を基調とする何や天使を思わせるような服やな。バリアジャケットと呼称されるように、素材はかなり丈夫らしいな～～～この靴に羽を生やすことによって、空を自由に飛び丸ことが出来るんやな。」

ケ「ほんでここでケロちゃん～～～チェック！！！！！」

ケ「姉ちゃんが使う杖、名前はレイジングハートやったか？この赤い宝石みたいのが中々センスがあって格好ええな！さくらの杖とはまた違うのがおしゃれや！」

ケ「でやった？このコーナー初めてみた人もそうでない人も楽しんでもとうたかな？次回もわいが大活躍するさかい、見逃さんといてな・・・ほなな～～～」

魔導師図鑑ハイパー！

侵入作戦の直前、なのは達はユーノの鬼道の威力に改めて感心していた。

な「でも、さっきの技は凄かったよ！あれも鬼道なんだ。」

シ「そう言えば、お前は大概の鬼道が詠唱破棄で撃つことが出来るのだったな。」

エ「鬼道って、やっぱり難しいんですか？」

ユ「そうだね・・・ある種魔法にも似てるけど微妙に違うかね。基本的な所作はこうやって掌に波動を集めることから始まるんだけどね♪」

そう言うと、ユーノは左手に霊力を集める。

なのは達はそれを凝視する。

な「ねぇ、ユーノ君。私にも霊力って使えるかな？」

駄目元で尋ねると、返ってきた言葉は・・・・・・

ユ「・・・ふふ・・・・・・無理♪」

な「やっぱり！！！」

なのは、あっさりと断言されたことにショックを受ける。

友達だから

＞i13266—709＜

ユーノ達の作戦が開始されようとしていたその頃、ファイアリーがやられた事を古城にある推奨によって確認していた残り五人となってしまったさくらカード達。

ウォーティーは無様にもやられてしまったファイアリーに嫌悪感を抱きつつ、その場に在ったコップを投げて粉々にする。

「全く!!言わんこっちゃない!!ファイアリーの奴め!!どこまで鈍くさいんだよ!!」

業を煮やすウォーティーとは対照的に、至って冷静な様子のアーシーやライト、ダークのウィンディーを除く三人。

現在、ウィンディーはある方に呼ばれて席を外していた。

「これで残るは我ら五人だけとなってしまった・・・果たして我々だけで大いなる災いを蘇らせることは出来るのであろうか?」

「何を今更言っているの?私達に敵うものなど、この世に居るはず無いわ。」

「徹底的に思い知らせて上げましょう・・・私達の力を・・・ふふふ!」

そして、当のウィンディー本人はというと怪しげな空間の中を浮か

ぶ黒い本に向って跪きながら、さくら達の動きを伝える。

黒い本はウィンディーの意識に直接働きかけると、心の中に言葉を送り込んでくる。

〈そうか・・・木之本桜が時空管理局と手を組んでついに動いたか・・・〉

「どうやら、仲間を募って魔導師達を奪還せんと画策している様子。恐らく、今宵にも乗り込んでくるものかと・・・」

〈かかったな・・・飛んで日にいる夏の虫とは正にこのこと・・・強大な魔力を秘めたお前たちの元主木之本桜・・・そして、時空管理局のSランク魔導師達・・・その力を手に入れたとなると大いなる災いも蘇ること間違いなし・・・我の覚醒も磐石というもの・・・頼んだぞ・・・ウィンディー・・・〉

「は！仰せのままに・・・“終末の書”様・・・」

やがて、夜が更けるのを見計らってユーノを筆頭とするなのは達五人・・・いや、四人と一匹はそれぞれの武器と防護服に身を包むと月明かりに照らされながら三人が捕まっていると思われる古城の屋根へと上り、下の警備の様子を見下ろす。

ユーノは帽子を深く被りなおすと、羽織を何時もよりもカチッと着こなしなのは達に此処へ来る前に決めた悪ふざけにも似た合図を出す。

「・・・いくか。魔法戦隊マジレンジャー・・・！！」

「「「「「参る！！」」」」」

全員がそういい終えた後、知世から渡された新作のバトルコシュチュームに身を包んださくらが赤面させながらユーノにこう言った。

「はう～～～！！やっぱり恥ずかしいですよ～～～～！！！」

「ええやないか、さくら。わいは結構好きやで！」

ケルベロス自身は派手なことが好きであるためにそのような事が言えるのが、実際さくら以上に恥ずかしいと思っているのはなのはを始めとする六課の三人であった。

暫くすると、ユーノ達は手筈どおりの作戦で場内に進入して行った。

そんな中、ユーノ達が場内に進入したことなどまったく気付きもしないで居る見回りの人間二人は、ランプを抱えながら場内の警備見当たっていたが一人の何気ない一言が事態を一変させる。

「月の光ってさ・・・何か神秘的な感じだけどさ・・・あれって実は闇の力の根源なんだって・・・」

「貴様、勤務中に何を言い出すかと思えば・・・」

「いや、マジなんだって。表向きは光源である太陽の光を反射するだけのものって言われてるけど、実際は魔法から何やらと言った凄い能力を極限まで引き出してくれる闇の力を宿してるらしいぜ。」

「貴様またそんなこと言って私を謀るつもりだろう！」

「本当なんだってば。ダークさんがそれで闇の力を高めたらしいよ？」

「いい加減にしろ！あの木之本桜や時空管理局の連中がこの場内に入り込んでいるかもしれぬのだぞ！」

「いやいや・・・緊張ほぐそうと・・・あ、ヤベ！俺ちょっと小便行ってくる！」

「ああ、おい！！全く・・・緊張が無いやつめ・・・」

一人となった見張りの一人は用を足しに行った一人がいなくなったことを確認すると、月を仰ぎ見ながら大仰な態度で月に向って祈り始める。

「お月様！！！どうか私にも闇の力を与えてくだされ！！！」

と、その時。

男の頭上の月が徐々に男の方へ向けて近付いてきたのであった。

「あれ・・・月が近付いて・・・ふぎゃ！！」

見張りの男はその瞬間、月に化けて変装していたユーノの踵落しを首筋に喰らうとそのまま気絶してしまう。

その場に降り立ったユーノは張子の月を脱いでから懐にしまうと、気絶する見張りに向って次のように語った。

「悪いね・・・闇の力なんて手に入れるだけ性格悪くするよ・・・

僕みたいにね。」

ユーノの意味深な言葉はさて置き、それではこれより魔法戦隊マジレンジャー（ユーノが勝手に呼称した）のメンバーの紹介をしよう。

まずはトップバッターであり、自称リーダーのこの男・・・――

ユーノ・スクライア。

必殺技、翡翠斬・獅子翡翠群・その他色々。

騒ぎを駆けつけた他の見張りが到着すると、侵入してきたユーノを見るなり警戒態勢に入った二人組みの男。

「おい！何を騒いでお・・・！？貴様は！！」

「くそ！！侵入者め！！ぐっ！！」

「おい、どうした！？ぐああ！！」

すると、見張りは同じく侵入してきたなのはのアクセルシューターの打撃によって呆気なく気絶してしまうのであった。

見張りの近くに降り立ったバリアジャケット姿のなのははユーノに軽くウィンクをすると、ニコニコとした表情でこう口にする。

「御免なさい二人とも・・・ちょっとだけ気絶してて♪」

高町なのは。

必殺技、ディバインバスター・スターライトブレイカー・その他色々。

また、同じ頃城内の別場所では真の姿となったケルベロスが番兵を次々と気絶させていき、ある者は威嚇だけで逃げて行ってしまう。

「ぐああ！！！」

「わあああ！！！止めろ！！！！！おわあああああ！！！」

「なんや情けないな・・・もう終いかいな～～～？」

ケルベロス（真）

必殺技、名前の無い火炎放射。

「名前くらいあるわ！！！！ギガブレイスや！！！！！」

徐々に騒ぎを駆けつけた別の場所で待機していた数百人という数の見張りが月明かりに照らされながらこんな愚痴をこぼしていた。

「たく！何で態々こんな日に！」

「さっさと済ませて月でも見ながら宴会の続きといこうや！」

「ほう・・・ならば酔い覚ましに私達からの餞別だ！」

すると、走っていた見張りの全身に伝わる気絶させるだけの威力を持った電流と、火炎、そして氷結魔法。

「「「のあああああ！！！！！」」」

電流を喰らった見張りはそのまま黒焦げになって気絶し、火炎を受けたものは水のあるところ目指して全力疾走、氷結魔法を喰らったものはその場に凍りついたまま動かなくなった。

その攻撃を行ったものの正体は、言わずと知れたこの三人だった。

「はう～～～上手くいったよ・・・！」

そう、電流はエリオ・火炎はシグナム・そして氷結魔法は『凍（フリーズ）』をしようしたさくら本人であった。

今回は三人まとめて紹介をしておこう。

シグナム・エリオ・さくら――――――トリプルライトニングフラッシュ。

必殺技、紫電一閃・ライトニングザンバー・さくらカードその他色々。

ユーノ達の作戦によって城内の警備はすっかりガタガタの状態であった。

そんな慌しい様相を見せる城内の様子を屋根の上から高みの見物をするかのように見下ろすウィンディー。

「成程・・・下手な隠密戦術は捨て四方を撹乱する作戦に出たか。素人にしては上出来だな・・・だが私達には通用しないぞ・・・実力の違いを教えてやろう。」

さて、一方のユーノ達の方はというと・・・数を更に増やしてきた見張りに追われながら城内を逃げ回っていた。

「逃がすか!!待て、侵入者!!」

「しつこい奴らだ。何とか無駄な労力は使いたくはないのだが。」

「ほえ～～～!!!何かいっぱい前からも来た!!!」

さくらがそういった直後、前方からも現れる夥しい数の番兵。

ケルベロスは走りながら思い表情を浮かべるユーノに解決策を講じる。

「どないするんや!!おい、兄ちゃん!!何かいい道具はないんか!?」

「そんなものはないよ。ここまで来た以上、強行突破しかないな!道は僕が作る・・・そしたら一気に走り抜ける!月光せよ、『晩翠』!」

ユーノは杖から刀を引き出すと、晩翠を解放して走りながら翡翠斬を目の前のパンペイを殺さない程度の力で放つ。

「輝け、晩翠!!」

翡翠斬をその身に受けた番兵達は次々と横に倒れていき、自然と中央部分ががら空きとなったのであった。

「今だ！！」

ユーノの後に続く形でなのは達は城内の最深部を目指して進んでいった。

その中で待ち受ける数々のトラップが、なのは達の行く手を悉く阻もうとするがそんなことで諦めるようなマジレンジャーではない。

持ち前の根性と技量で、難所のトラップを突破して行ったのだ。

その様子をモニターで見ていた管制室の人間が別空間からそれを拝見する終末の書に向って危機を知らせる。

「終末の書様！！トラップが次々と突破されていきます！！」

すると、終末の書は至って落ち着いた様子でその人物の心に意思を伝えてきた。

〈案ずる事はない・・・最後の番人は・・・〉

ユーノ達が城内の奥を目指して早くも三十分近くが経った時、とうとう六人は追っ手を巻き上げて城の最深部へと到着した。

最深部は全員が思っていた以上に広大な空間であった。

さくらを始めとする大半のものがその光景を見る前にすっかり息を上げてくたくたとなってしまっていた。

「はう〜〜〜何とか奥まで侵入できたよ・・・！！」

「せやかて、随分なトラップの数やったな!?もうあらへんよな?」

「此処までくれば流石に。追っての方ももう来ないと思うけど・・・フェイトちゃん達はどこだろう?」

「それにしてもさくらさん・・・その格好・・・如何にかなりませんかね?」

エリオはそう言うと、自分が見ても周りが見ても明らかにやり過ぎな感じがする知世の最新ファッションに顔を赤くしていた。

さくら自身も頬を赤らめながら苦笑いを浮かべ、エリオに弁明の言葉を掛ける。

「はう~~ごめんね、エリオ君。これは知世ちゃんからのリクエストだから、着ないわけにはいかないよ!それに、知世ちゃんが作ってくれるバトルコシュチュームは私にとってはなのはさん達のバリアジャケットみたいなものですから!」

それを聞いたユーノも、手を叩いて納得した様子であった。

「成程♪それは言えますね・・・ん!?あれは・・・!!」

と、その時ユーノ達の前方に広がってくる壁の一部が反転すると、その中から出てきたのは捕らわれの身である小狼とフェイト、アルフの三人だった。

「小狼君!!!」

「フェイトちゃん!!アルフさん!!」

「フェイトさん!!」

エリオは直ぐにフェイト達を助け出そうと駆け出して行ったが、シグナムはこの状況に違和感を感じ直ぐに止めにかかった。

「待て、エリオ!!近付くな!!!」

エリオがフェイト達に近付いていった直後、壁の方から飛んで木来る無数の針。

ユーノは全員に注意を呼びかけ低い姿勢になるよう声を張り上げた。

「伏せろ!!!」

エリオやなのは達の方へ容赦なく飛んでくる無数の針の嵐。

「「きゃあああああ!!!!!!!」」

「さくら!!」

ケルベロスはさくらが怪我などをしていないことを祈りつつ、自分の身を守り続けた。

針の嵐が収まると、ユーノは床に突き刺さった一本を徐に引き抜くと針先を慎重に舌で舐めて唾を吐き捨てる。

「これは・・・毒針!?」

ユーノがそう確信をした瞬間、部屋の方から聞こえてきたのはウィ

ンディーの声だった。

「ふふ・・・残念だったな。彼女達はもう直ぐ始まる大いなる災いの為の生贄の一部に過ぎない。あなた方に渡すわけにはいかぬ。」

突風が巻き起こったと同時に現れる黒く変色したウィンディー。

それを見たなのは達も驚きを隠しきれない様子だった。

「なっ!?お前は・・・!!」

「ふふ・・・暫くぶりですね、我が元主よ。」

「ウィンディー!!」

「何やて!?あれがウィンディーか!!」

ケルベロスは間近で見る変わり果てたウィンディーを凝視しながら、カードに描かれている温和な雰囲気のウィンディーの姿を重ね合わせていた。

なのは達の方はというと、ウィンディーが発する邪悪で巨大な魔力に冷や汗をかいていた。

「凄い魔力・・・あのファイアリーと同じか・・・いや、それ以上!?」

「本来は温和で心優しい性格なのに・・・アンゴルモアの影響で人格すらも捻じ曲がってしまったようだね。」

「どうやらファイアリーは捕まってしまったようだが、私達はあんな出来損ないと一緒ではないですよ。あなた方も・・・大いなる災いの為の生贄の一人となってもらいます。できるだけ魔力は大いに越したことは無い。マジレンジャーだか何だか知りませんが・・・その魔力・・・全て戴かせてもらいます・・・」

ウィンディーはそう言いながらユーノ達に近付いていくと、部屋の隅で隠れていたフードで姿を隠す仲間を呼び寄せる。

ユーノ達は一度固まると、武器を構えてウィンディー達を睨み付ける。

「私達が・・・最強の五人です。」

ウィンディーがニヒルな笑みを浮かべてそう言った瞬間、フードを脱ぎ捨てて現れる全員が黒く変色し、性格が気丈になったり捻じ曲がってしまった残りのカード達。

「水流の悪魔、『黒水（シャドーウォーティー）』！」

「大地の支配者、『黒地（シャドーアーシー）』」

「黒に染まりし光、『黒光（シャドーライト）』」

「全てを黒に染めし闇、『黒闇（シャドーダーク）』」

「荒れ狂う烈風、『黒風（シャドーウィンディー）』・・・五人揃って・・・」

ウィンディーを中心として、五人はそれぞれの所定の位置でポーズを取ると決め台詞を口にするのであった。

「「「「「五行戦隊エレメント5！」」」」」

その瞬間、五人の後ろで起こる派手な演出用の爆発。

さくら達はカード達のこの行動に最早言葉すらも失っていた。

「ほえ～～～・・・」

「何や派手な演出やな～～～」

「って、そんな事言ってる場合じゃないですよ！！早く三人を助けないと！！」

なのはがそう口にしたとき、ウィンディーは鼻で笑うと持っていたスイッチで五人を分散させてしまい、捕まった三人には近づけないようにしたのであった。

「あ！」

「ちっ・・・一対一に分散されたか・・・」

分散されたユーノ達機動六課のメンバーと、ケルベロスと供にいるさくら。

「さくら！わいから絶対に離れるなよ！！」

「うん！」

そんな戦力的に明らかに状況が悪い中、現在エリオはかなり厳しい

立場にあった。

「くっ！状況が極めてよくない・・・」

エリオの相手となるカードは、体中が１００パーセント水分だけで形成された人魚の姿を模ったウォーティー。

「へへ！！あんたの腕・・・篤と見せてもらうよ！」

また、ユーノの方はというとさくらカードの最高位カードで闇を自在に操るダークがその相手であった。

「翡翠の魔導死神！！！」

ダークは闇から作り出した物質を鋭利な形に加工すると、ユーノ目掛けて斬りつけてきた。

ユーノは咄嗟に晩翠でそれを防ぎにかかる。

隣の方で見ていたなのははユーノの身を案じて声を上げる。

「ユーノ君！！！」

ダークはユーノに肉薄していくと、終末の書から聞かされたユーノに関する情報を口にしながらユーノを倒そうとする。

「貴様のことはあのお方からよく聞かされている・・・よくよくも我々の崇高な目的に関して邪魔ばかりしてくれるな・・・」

「あのお方だと・・・！？どういう意味だい、それ？詳しく聞かせ

てもらおうじゃないか！」

ダークの言葉に疑問を抱いたユーノは一度刀を捌いて、ダークと距離を取ると激しい剣戟を繰り広げながらダークから答えを聞き出そうとする。

しかし、ダーク自身は一切話す姿勢を見せまいとする。

「誰が話すかよ、お前なんかにな！！」

「ただとは言わない！！この僕と戦って僕が勝ったら教えてもらうよ。ま、勝負は最初から着いてるけどね。」

「言ってくれるじゃないの・・・この『黒闇』の力を見誤るでないぞ！！」

ユーノの挑発を聞いたダークは更に加速させると、得意の闇の魔法を使ってユーノに攻撃を仕掛けていった。

そんな二人の激しい戦いを目の当たりにしたなのはは直ぐにユーノの下に加勢しようと動き出そうとした。

「ユーノ君！！待ってて、今助けに行く・・・はっ！！」

〈Ｐｒｏｔｅｃｔｉｏｎ〉

その時、なのはの下へと飛んでくる光の球体。

レイジングハートの判断によって攻撃を開始できたなのはであったが、前方の方ではウィンディー以上に慇懃無礼な態度でなのはを挑

発してくる黒く染まったライト。

「ふふ・・・流石だわ。管理局のエースオブエース・・・いや、ここは白き魔王と言ったほうがいいのかしら?あら、御免なさい♪親しみを込めてなのはちゃんと呼んだ方がいいのかしら・・・なのはちゃん。」

「あなた・・・さくらさんのカード、『光』でしょ。なのに何でこんなことするの!?それに、そんな態度で馴れ馴れしく下の名前で呼ばないでくれる。白き魔王と呼ばれる方が・・・よっぽどマシ!」

また、別の場所ではシグナムがアーシーと対峙していた。

「ふん。私の相手がこんな女とはな・・・ヴォルケンリッターだか何だか知らぬが、地を司る私に火が通じると思うたか?」

「生憎心配は無用だ。直に貴様にも分かる・・・炎が地すらも焼き尽くす力を有していることをな。」

そして、各地で勃発する壮絶な生死を賭けた戦いの火蓋。

エリオのほうは得意の電撃魔法をを使って素早い動きで翻弄をさせながらウォーティーに攻撃を仕掛けていく。

「エレクトニックスピア!!」

地面に突き刺したストラーダの先端から流れ出す高圧電流だったが、それをウォーティーは掌で作り出した激しい威力を秘めた水流で高圧電流を無効化させてしまう。

「ウォーターホイッパー!!」

電流を無効化させたウォーティーは高笑いを上げながらエリオに向ってこう口にする。

「ははははは!!分かってるはずだ!!電気は純粋な水には利かぬ事を!!純粋な水は不純物が無いため、セラミックやゴムのように絶縁体。つまり、私とお前の相性は最悪!勝敗は見えている!!」

「くっ!!まだだ・・・まだ策があるはずだ・・・!」

「この期に及んで負け惜しみとは・・・戦士なら潔く諦めろ!ウォーターリヴァイアサン!!」

すると、ウォーティーは自身の姿を伝説上の巨大な海蛇の姿へと変貌させてエリオの前に立ち塞がった。

「なっ!?」

驚愕するエリオは直ぐに回避をしようと走り出したが、流れが速い水の動きには勝てずに呆気なく海蛇姿のウォーティーに飲み込まれてしまう。

「のあああああああああああ!!!!!!」

大量の水をその身に受けたエリオは体中を水浸しにしながら床に倒れ伏していた。

最早虫の息のようになってしまったエリオの姿を確認したウォーティーは元の姿に戻ると水浸しになった床を歩きながらエリオの下へ

と近付いていく。

「ははははは！！！！終わりだ、子供！！その歳の割りによく戦ったと褒めてやる！安心しろ、殺しはしない・・・魔力諸共大いなる災いの為の生贄とするだけだ！」

すると、エリオは息を切らしながら鼻で笑うとウォーティーにこう言った。

「はっ、はっ、はっ・・・ふん・・・残念ながらそうはいかないよ。」

「何・・・ほっ！？」

その瞬間、ウォーティーの純粋な水の身体に混入してくる異物質がウォーティーの身体を蝕んでいく。

「こ・・・これは・・・貴様！！一体何をした！？」

「不純物を混入させたのさ。水は不純物があれば電気絶縁性はないに等しくなる・・・戦士にとって大切なのは諦めることじゃない。戦い続けることで何かを守り続けることだ！ランダーレイジ！！」

そう口にすると、エリオはストラーダの先端を不純物が混入して身体が麻痺を起こしているウォーティーに向けて突き刺し、電流を流し込んだ。

「がああああああああああああああああ！！！！！！！！！！！こ・・・こんな筈では！！！！！！！！！！」

高圧電流をその身に受けてしまったウォーティーは実体を失うと、アンゴルモアの力が身体から抜け出しさくらカードの状態へと戻っていった。

同じ頃、ユーノとダークの戦いも佳境へと向かって行った。

ダークは闇の魔法を操って、自分とユーノの周囲を闇だけで形成された特殊な空間へと閉じ込めるであった。

「カオス・カーテン！」

「！！」

闇によって視界を完全に奪われ、何も見えなくなってしまったユーノ。

当然、ここから先は一歩踏み出すのも危険な行為になってくる。

「・・・闇の空間を創り出して、僕を閉じ込めたのか・・・（外部との霊圧も魔力も完全に封じられたか・・・幸いにも使えないのは目だけか・・・奴の動きは音と気配で察知できるが、この空間内に長居するのはどちらにしても避けたい。早いところ終わらせよう・・・）」

そんな目の利かないユーノの耳元に入り込んでくるダークの不適な笑い声。

「ふふふ・・・視界ゼロの状態でどこまで耐えられるか？翡翠の魔導師・・・お前にこの地獄はさぞかし恐ろしいことだろうな・・・」

その瞬間、ユーノの真下のほうから仕掛けられてきた闇の魔法弾。

「下か！？」

ユーノはそれを回避するために飛び上がり、ダークの気配に注意しながらなるべく安全な場所へと動き出した。

「いい反応だった！だが・・・闇から生まれ、闇を自在に操る私に貴様の攻撃は通らぬ。“ブラック・ワンポイント”」

ダークはそう言うと、強い重力によって生み出された暗黒物質をユーノに向けて飛ばしてきた。

ユーノは気配とエネルギーの量だけで方向を確認すると、激しい電撃を帯びた砲撃をそれに向けて放ったのであった。

「破道の六十三　『雷吼炮（らいこうほう）』」

激しい轟音を発しながら爆発を起こす両者の技。

しかし、ダークはその後もその技を連発させて逃げ回るユーノを追い詰めていく。

「無駄。無駄！無駄！！鬼道でどうにかなるのなら、こんな空間など直ぐに破ることが出来るはずだ！！生き物は本能的に闇を恐れ、その本能によって生まれる恐怖が無意識のうちに動きを半歩遅らせるのだ。お前とてそれは同じ事！」

そして、ダークは闇の魔法の力を上昇させて空間そのものを歪曲させるほどのエネルギーを秘めた大技を使用する。

「“ブラックパニッシュ”」

ブラックパニッシュが仕掛けられた瞬間、ユーノは咄嗟に翡翠の殻を発動させて攻撃から身を守ろうとする。

強い闇魔法を受けながらも、決して屈しることのないユーノはついにブラックパニッシュを防ぎきることに成功した。

そして、ダークが口にした言葉に次のような言葉で返事をしてきた。

「“生き物が本能的に恐怖を感じるのなら・・・魔術師クロウ・リードが創りしカードの意思とて同じ”だよ。解ってる筈だ・・・どんなに闇を操ることが出来ても、絶対に恐怖しないなんてことは在りはしない。だからこそ生き物は、“寄り合って、手を取って一緒にいようとする”んじゃないか？恐怖から逃れ、希望という光を求めて。」

「詭弁を弄しても、何ら解決策にはならない。”ロスト・ルム”」

ダークはその瞬間、闇の波を使ってユーノを深い闇の中に飲み込んでしまおうとした。

ユーノは得意の防御魔法と鬼道を駆使しながら強力な力を秘めた闇の魔法に対抗していく。

徐々に焦りの表情を見せるユーノに、ダークはブーメランのように闇を飛ばして相手を絶望へと追いやる闇魔法を仕掛けてきた。

「カオスヘッター」

カオスヘッターが飛んできたことによって、ユーノは瞬歩で回避を続けながら翡翠斬で飛んでくる全てのカオスヘッダーを撃ち落していった。

そして、ダークから逃げ回っていたユーノがある程度のところまで距離を取ると、深い溜め息を吐いて次のように語ってきた。

「・・・全く・・・これじゃあ鬼ごっこしてるみたいだよ・・・・・・翡翠斬も幾ら撃ってもこの闇の中じゃあまり意味がないし、晩翠の“仮の力”はここじゃあまり役に立たない・・・」

ユーノはそう言った直後、再び深い溜め息を吐くとある一つの決断を下した。

「・・・仕方ない。今なら誰も見ていないし、ちょうどいい機会だ。始解状態で試したことは無いけど、やってみるかな・・・久々の“晩翠の真の力”を・・・」

「・・・何の話だ、一体？」

「僕にとってこの場は“晩翠”の恰好の餌場だよ。僕の斬魄刀“晩翠”は暗黒系最強。全ての闇は、晩翠の武器――――――」

すると、その瞬間ユーノとダークを覆い隠していた闇に異変が起こり始めた。

「！！」

驚愕するダークを他所に闇はまるでユーノに従うかのような動きを

見せると、闇の中から翡翠に輝く幻想的な月明かりが見え始め、ユーノはその真下でダークに向ってこう宣言した。

「全ての闇は――――――僕の支配下(テリトリー)だ。」

突如として起こったこの異様な現象に愕然とするダーク。

「何だ・・・・・これは・・・・・・!?」

「“暗夜行路(あんやこうろ)”。晩翠の持つ能力の中で最も強大な力さ。本来、晩翠の力の根源は夜にある。昼間は月が殆ど見えないから充分に力を発揮できない。何時も使う翡翠斬だって・・・仮の力の一端に過ぎない。それに、僕自身も夜の力を発動するのは出来ればしたくないんだ・・・なのは達にあまり見られたくないからね。だが、今回は状況が違う。久しぶりに使わせてもらうよ・・・闇が支配する空間や月明かりのある夜の世界では全て僕の思うがままだ。但し、この力は卍解状態でしか使ったことがないけどね・・・お目にかかれることを光栄に思うことだね。いくよ・・・」

そう言うと、ユーノは霊圧を急激に上昇させると闇を操り始め見え始めていた翡翠の月を完全な状態で姿を露にさせ、晩翠の真の力を解放する。

「“闇天翠月(あんてんすいげつ)”」

ユーノが技の名前を告げた瞬間、翡翠の月は怪しげな月明かりをダークの居る方向目掛けて照らしていった。

ダークは危機感を感じて止み魔法で対抗をしようとする。

「！“ダークネス・・・・”」

だが、それをする前にダークは月明かりに照らされる。

月明かりに照らされた瞬間ダークの身体を覆い隠してくる不気味な黒い影。

これこそが、この技の最も恐ろしい力なのであった。

「な・・・・・・何だこれは・・・・・・・・！！」

「“闇天翠月（あんてんすいげつ）”。頭上に浮かぶ翠色に輝く月に照らされたものは全てを闇に喰われ、同時に深い闇に堕ちる。僕の技の中で一番陰気で一番卑劣なものさ・・・『闇（ダーク）』が闇に喰われるなんて・・・実に皮肉なものだね。」

そう言いながらも、ダークの身体は闇によって侵食されていき終には身体全体を闇によって覆い隠されたことによってダークの中にあったアンゴルモアのエネルギーは消滅し、その途端に頭上を覆っていた闇が消え、ダークは元のカードの状態へと戻っていった。

ユーノはカードに戻ったダークを拾い上げると、それを凝視しながら最後にこう口にしたのであった。

「・・・悪いね。だから僕は真の力を人前で遣いたくなかったんだ・・・」

ユーノがダークとの戦いで勝利を収めたその横では、なのはとライトによる攻防が今だ続いていた。

「ディレイドインパルス！」

なのははレイジングハート・マキシマム・ブレイドの刃先から高密度に圧縮された光の衝撃波を連続で発射し、ライトのほうも負けじとその光で全てを飲み込む技を発動させる。

「エミッション・イン・ライト！」

ディレイドインパルス全てがライトの光によって全て飲み込まれると、なのはは魔法刃を形成してライトに向って突進していく。

「ＡＣＳドライバー・マキシマム・ブレイド！」

〈Ｄｒｉｖｅ　ｉｇｎｉｔｉｏｎ〉

持てる力の全てを出し切るつもりで、ライトの胸元目掛けて突進をしていくなのは。

「はあああああああ！！！！！！」

ライトは逃げる姿勢も見せずに、なのはのＡＣＳドライバーを素手で受け止めるとそのまま魔法刃を握り締めたまま不敵な笑みを浮かべなのはに向ってこう言う。

「ふん。やはりね！魔法に関する扱いは天才的でも、それ以外の戦闘センスは壊滅的ね。」

「馬鹿にしないで！これでも毎日、ユーノ君に色々教わってるんだから！！」

すると、ライトはそんななのはの言葉を聞くと次のように返す。

「だけど、その彼の居場所を奪ったのは何所のどなたかしら？」

「な！！」

「あなたでしょ・・・彼を絶望へとおいやった張本人は。それなのに、またあなたは彼から全てを奪い去ろうとしてる訳？傲慢も此処まで過ぎれば大罪ね。魔王と揶揄されることはあるわね・・・“なのはちゃん”」

「黙れ！！！！」

なのははその言葉に我慢が出来なかった。

力任せにマキシマム・ブレイドの持ち手を振り回しながら、ライトに攻撃をしかけるがライトは容易にそれを避けながら、なのはと距離を取った。

なのははそんな自分をあしらうライトを睨み付けながら、マキシマム・ブレイドの持ち手を強く握り締める。

「さっきから聞いてれば・・・変な事ばかり言ってくれるわね・・・確かに、ユーノ君の居場所を奪ってしまったのは私！それは認めないといけない・・・でも、だからこそこれからはずっと傍にいて、ユーノ君の居場所を守って・・・そして新しく創っていこうって決めたの！！！私はそのためにこれから頑張っていくって・・・心に誓った！！それをそんな言い方で・・・ユーノ君への想いを踏みにじるようなことをするなら・・・私は全力全開で容赦はしない！！レイジングハート！！」

〈Ｄｉｖｉｎｅ　Ｂｕｓｔｅｒ〉

なのはは先端をライトに向けて、ディバインバスターを発射しようとパワーをチャージをし始める。

「あらあら・・・自棄になったからし？光を司るこの私にディバインバスターを放とうとするなんて、愚昧もいいところだわ。教えてあげるわ・・・本物のディバインバスターを」

すると、ライト自身も左手を前に突き出すと掌に魔力を収束させてディバインバスターをなのは目掛けて発射しようとする。

そして、二人のエネルギーが臨界点ギリギリのところまで収束された瞬間・・・双方のディバインバスターが勢いよく発射される。

「「ディバイン・・・バスター（！！）」」

なのはとライトが放つディバインバスターがぶつかり合い、凄まじいエネルギーを放出しながら、拮抗した力で押し合いを続ける。

暫くすると、若干ライトが放ったディバインバスターのほうがなのはのそれに競り勝とうとしたが・・・・・・――――――

「ふん・・・・・・なっ！？」

なのはのディバインバスターは後半になってからライトのディバインバスターを取り込みながら二倍のディバインバスターで以ってライトを狙っていった。

ライト自身は余りの衝撃に足が動かず、驚愕の表情を浮かべていた。

「そんな!!そんなの嘘よ!?私のディバインバスターが・・・破られるなんて!!」

「教えてあげる・・・本物のディバインバスターを使えるのは・・・心に何か大切なものを抱いてる人だけなの!今の貴方ではそれを使いこなせはしない・・・アンゴルモアの影響で心の中の光を失ったあなたには!!だから直ぐに・・・主の下に戻りなさい!!!!」

なのはがそう言った瞬間、二倍の威力を秘めたディバインバスターはライトへと直撃。

「きゃあああああああああああああああああ!!!!!!!!」

ライトがディバインバスターに直撃したとき、ふと頭の中に蘇ってくるさくらとの思い出の数々・・・その全てが走馬灯のように脳の中に流れ込んでくる。

ディバインバスターが収まると、その場に残っていたのは元の姿に戻ったライトのカードだけであった。

また、アーシーとの勝負を繰り広げていたシグナムは圧倒的に不利な状況の中でも自分の言葉を曲げずにレバンティンの炎でアーシーに挑んでいく。

「紫電一閃・火炎車!!」

レバンティンの刀身の炎が火炎の輪を生成すると、その輪がアーシ

ーに向けて飛ばされる。

「アースグレイク！！」

アーシーは腕を振り上げると、床下から先の尖った岩を突き上げて炎をかき消してしまう。

それを見たシグナムはＩＰカートリッジを装填し、レバンティンの炎を更に強化させる。

「レバンティン、ＩＰカートリッジロード！」

〈Ｈｙｐｅｒ　ｅｘｐｌｏｓｉｏｎ〉

紅蓮色に煌々と燃え上がるレバンティンに灯されし炎。

シグナムは神経を研ぎ澄ませると、アーシーに目掛けて研ぎかかりレバンティンを振り下ろしていった。

「紅蓮・・・一閃！！」

しかし、アーシーはそんなシグナムの分かりきった攻撃パターンなど今迄の戦いを通して理解していた。

アーシーは地面から突き出していた岩を操り、小さく砕いた無数の岩の破片をシグナムに向けて飛ばしてきた。

「ロックブラスト！」

岩の破片がシグナムの身体に突き刺さり、その瞬間激痛が体中に走る。

「ぐっ！！！」

シグナムは攻撃を中断すると、突き刺さった岩の破片を強引に抜き出してそれを投げ飛ばす。

傷跡から生々しく垂れたものや岩に付着した血が床の至る所に斑点模様のように広がっていた。

思わぬ深手を受けたことで多量の汗を流し、息を切らすシグナム。

「ふん・・・大層な口を叩いた割には何とも情けないな、剣の騎士シグナム！所詮、炎の攻撃など大地の豊かさには足元に及ばぬ。それ、滅びなさい。」

アーシーはシグナムに止めを刺すつもりで岩を操り、突き出た岩そのものを竜のような姿にすると、一斉に攻撃を仕掛けてくる。

「“ドラゴニックブラスト”」

シグナムへと襲い掛かる岩の竜達がシグナムの身体を途轍もない激痛を与える。

「うあああああああ！！！！！！」

竜の攻撃をその身に受けながら喚き続けるシグナムであったが、やがて竜の動きが一つの動作にまとまると複数の竜による最後の一撃がシグナムに向けられ、シグナムはその一撃を受けて宙を舞う。

そのまま勢いよく地面に叩きつけられ、大量の血を流すシグナムであったが決して諦める態度は取らずにレバンティンを握り締めたまま徐に立ち上がる。

「くっ・・・・・・！！」

「そんな傷だらけになりながらもまだ立ち上がるなんて・・・一体何を考えているの？何故そうまでして戦う？あなたの戦う目的は何！？」

シグナムのこの行動に皆目理解がつかないアーシーがシグナムにそう尋ねる。

すると、そのシグナムはアーシーには思いも付かぬような答えを口にするのであった。

「戦いに・・・目的などありはしない・・・」

「・・・何・・・？」

「戦いそのものに理由や目的は無くとも・・・戦いの中に見出すものがある・・・常に我々はそうやって前を向いて敵と向かって行った・・・前に目的があると信じて！！」

「では聞くわ。その前にあるというあなたの目的は何なの？」

「・・・知れたこと・・・我が主の大切な友人であり・・・そして、私の大切な戦友でもある・・・テスタロッサ達を助けて・・・六課に笑って帰るためだ！！レバンティン！！」

〈Ｆｉｎａｌ　ｅｘｐｌｏｓｉｏｎ〉

シグナムは最後の力を振り絞ってＩＰカートリッジを三本消費すると、レバンティンの柄頭と鞘を連結させてレバンティンの最終形態へと変化させていく。

レバンティンは紅蓮の炎を巻き上げながら徐々に形を変えていく。

アーシーはこの光景に目を疑うばかりであった。

「・・・これは・・・！！」

「剣の騎士・・・シグナムが魂・・・炎の魔剣レバンティン・・・刃と連結時に見せるもう一つの姿・・・そして、最後の姿・・・」

その瞬間、レバンティンは全てが炎で構成された巨大な弓の形に変化すると、不死鳥を思わせるような矢を作り出す。

シグナムはそれを徐に引くと、アーシーに向って力いっぱい矢を射るのであった。

「翔けよ、不死鳥！」

〈Ｐｈｏｅｎｉｘ　ｆａｌｋｅｎ〉

不死鳥は紅蓮の炎を纏わせながらアーシーの下へと飛んでいく。

それは最早矢と呼べるようなものではなく、正しく火の鳥と呼べるような動きをしていた。

アーシーは竜を操り不死鳥を撃ち落そうとするが、不死鳥はその竜すらも貫通してアーシーに向っていく。

そして、為す術もなくなったアーシーの身体を完全に貫通する不死鳥。

アーシーは貫かれた身体を見ながら驚愕の表情を浮かべて、カードの姿へと戻っていった。

「な・・・ば・・・か・・・な・・・・！！」

実体を失い、カードの姿へと戻ったアーシーを拾い上げたシグナムは懐にしまいこむと独り言の様にこう呟いた。

「言ったはずだ。炎が地すらも焼き尽くす力を有していると・・・同じ主を身に持つのならば、お前も早く主の下に帰るがいい・・・主も本当のお前を望んでいるはずだ。」

そして、最後の戦い・・・・・・さくら・ケルベロス対ウィンディーの決戦の方はというと、元々戦いを好まないさくらにとってこの状況はとても分が悪い。

ケルベロスとて、力を増したウィンディーをさくらを守りながら充分に相手を出来るとはとても思っていない。

ウィンディーの風を操る巧みな攻撃に翻弄され続ける、さくらとケルベロス。

ケルベロスはさくらを狙って集中的に攻撃をしてくるウィンディー

についに我慢の限界が達した。

「この！！！」

ケルベロスは口からギガブレイスを吐き出して、ウィンディー目掛けて攻撃を仕掛けるがウィンディーは逆に突風を巻き上げてギガブレイスをそっくりそのままケルベロスへと跳ね返した。

「のあああああああ！！！！！」

自分の攻撃をまともに受けてしまったケルベロスは、大火傷を負ってしまい暫く意識を失ってしまう。

「ケロちゃん！！！はっ！！」

さくらがケルベロスに駆け寄ろうとした瞬間、さくら目掛けて向って来るウィンディー。

「『翔』！！」

さくらは咄嗟にフライを使って空中に回避するが、さくら自身は未だにウィンディーに攻撃が出来ずに一方的な状況であった。

そんな攻撃をかわし続けるさくらを見ながら変わらず攻撃を仕掛けるウィンディーは疑問に思い、思わず尋ねる。

「そうやって逃げてばかりいては、何時までも私を倒すことは不可能ですよ。」

「私はあなたを倒すなんてこれっぽちも考えていないよ！あなたの

目を覚ますことだけを考えている!!ねえどうして!?どうしてこんな酷いことをしてみんなを傷つけるの!?」

「大いなる災いの為には・・・多少の犠牲は仕方ありません。」

ウィンディーのその言葉を聞いたさくらであったが、ついに今迄我慢していた感情が爆発してウィンディーに向って叱咤を入れる。

「いい加減にしてよ!!どうしてそこまで大いなる災いに拘るの!?あなただって知ってるはずだよ!!誰一人好きという気持ちを持たない世界が・・・どんなに寂しくて・・・どんなに辛い世界なのか・・・私は実際にこの目で見てきた!!あんな思いをするのはもう嫌だよ!!ウィンディーだって、本当はこんなこと望んでないでしょう!!もし、自分の気持ちを裏切ってまで大いなる災いを蘇らせたりしても・・・あなたを好きでいる人は誰一人いなくなる・・・この私も含めて!!!」

「なっ!?」

その時、さくらのその言葉を聞いていたウィンディーの心が突然揺らぎ始めた。

「(・・・主よ・・・あなたはどうして昔からそうなのです・・・!!何故、カードだけの存在である私達にそこまでの感情を抱くのです・・・!?理解できない・・・我々は・・・いや、何故私はこの方の下にずっといたのか!?)」

さくらの本心を確かめるために、ウィンディーはさくらと距離を取ると風を巨大化させて全てのものを切り刻む技を作り出していた。

しかし、そんなさくらの目は先程と同じように何所か悲しげではあるが友達を助けるために絶対に諦めないという目をしていた。

ウィンディーはその瞳で自分を見つめるさくらのことが益々分からなくなっていた。

「主よ!!何故あなたはそんな目で私を見るのです!?我々はただのカードです!!なのに何故そんな眼で私や他のカードたちを見るのです!!教えてください!!あなたにとって我々は何なのですか!?」

「・・・そんなの・・・決まってるよ・・・」

「え?」

さくらの口から発せられる言葉に思わずきょとんとするウィンディー。

そして、そんなウィンディーに向ってさくらは思いのたけを赤裸々に告白する。

「・・・カードさん達も・・・ウィンディーも・・・ケロちゃんや月さんも・・・形は違えど・・・みんなみ・・・みんな・・・私の大切な・・・・・・大切なお友達だよ!!!」

「!!」

その言葉を聞いた瞬間、ウィンディーの心は大きく揺れ動いた。

「（友達・・・友達・・・ともだち・・・！？そんな・・・そんな言葉で・・・そんな目で・・・そんな気持ちで・・・私達を見ていたのか・・・はっ！そうか・・・だからだ・・・だから私はあの時主を殺せなかったんだ・・・本当なら、もっと早く始末できた筈だ。なのにそれをしなかった・・・いや、出来なかったんだ。歳月を重ねるうちに、我々は何時の間にかこのお方の心に惹かれていったんだ。優しくて・慈愛に満ちて・尚且つ芯のしっかりとしたこのお方に・・・大いなる災い・・・？何を考えていたのだ、我々は・・・！！そんなことをすれば、主にも・・・そして主を好きでいる者が誰一人いなくなる！主には笑って欲しい・・・それが、主さくらに使える我々カード達全ての願いだ！）」

心の中でさくらに対する気持ちを再び取り戻したウィンディーは、何と自力で自分を支配するアンゴルモアの呪縛を解き放ち、元の温和で優しい姿へと戻っていった。

「はあああああああああああああああああああああ！！！！！！！！！」

アンゴルモアの影響から解放されたウィンディーを見ながら、さくらは自分に向けて慈愛に満ちた眼差しを向けるウィンディーに思わず涙を浮かべる。

「う、ウィンディー・・・・・元に戻ったんだね！！」

「はい。ご心配をかけました・・・主。他の者達も呪縛から解き放たれました。あの方達と主の頑張りがあったからです。主の言葉・・・確かに私の心に届きましたよ。」

「ウィンディー・・・よかった・・・本当によかった・・・！！」

さくらは大粒の涙を浮かべたまま、ウィンディーの胸元に抱きつき歓喜の泣き声を上げた。

ウィンディー自身も涙を流しながらそんな主を優しく抱擁する。

すると、戦いを終えたユーノやなのは達が傷を負ったケルベロスと供にさくらの方へと集まり声を掛けてきた。

「さくらさん・・・本当におめでとうございます！」

「見事です。言葉だけで呪縛を解き放つとは、我々も感服いたしました。」

「あとは、フェイトさん達を助けるだけですね。」

「あっ！そうだ！！早くみんなを助けないと！！」

さくらもその言葉を聞くと、急いでなのは達と供に捕らわれの三人の救出に取り掛かった。

幸いなことに、三人は特に目立った怪我もなく命に別状はなかったのであった。

さくらは枷から解かれた小狼の傍で名前を呼び続けて、意識を確認する。

「小狼君！！大丈夫！？小狼君！！！」

すると、その言葉を聞いた小狼は重い瞼を徐に開けるとさくらの方

を見たのであった。

「う・・・さくら・・・!?お前なのか・・・?」

「よかった!!無事でいてくれて・・・ははは!!!」

小狼が無事であることを確認したさくらは、嬉しさのあまり人目を憚らずに小狼に抱きついていった。

小狼は顔を真っ赤にさせながらそんなさくらに向って注意を入れる。

「わっああ!!こ、コラ!!!人前で抱きつくのは止めろって!!!」

そんな二人の様子に安心したなのは達はフェイトとアルフに声を掛ける。

「フェイトちゃん、アルフさん!!大丈夫!?」

「なのは・・・うん、何とか・・・」

「しかし、酷い目にあったよ・・・全く・・・」

「どうやら二人とも大した怪我も無いようですね。」

「ふん。世話のかかる隊長だな、お前は。」

「し、シグナム・・・!あまりそれを言わないでくださいよ・・・!」

フェイトはシグナムの言葉とに思わず顔を赤くしてしまい、それを見ていたアルフやなのは達、更にはさくらと小狼は思わず笑みを浮かべる。

すると、さくらが小狼に事件の発端と思われる黒い本についてのことを尋ねる。

「小狼君・・・一つ聞いてもいい?あの図書室に合った黒い本は何所で手に入れたの?」

「ああ・・・前に遺跡の発掘調査に藤隆さんと同行したときに偶然見つけて・・・持ち帰って調べようとしていたんだ・・・」

「黒い・・・本・・・・!?」

と、フェイトがそう口にしたその時。

突然、城が揺れ始めたかと思えば途方もない程に巨大な力を発する何かがなのは達全員の身体から感じ取られた。

「何!?この嫌な気配は!!」

すると、その時さくら達の目の前に空間を裂いて現れるウィンディーたちを操っていた力の根源である黒い本・・・終末の書。

「あの本!私が見たのと同じ!!」

「気をつけてください、主!あれが我々の意思を操りこの騒動を起こした災厄の根源です!」

さくらの傍らに居たウィンディーも終末の書を見ながら、警戒を強めるようにさくら達に注意を呼びかける。

さくらを始め、なのは達全員も不気味な力を発する闇の書にも似た謎の黒い本を見ながら武器を構えるが、武器を持つ手からは震えが止まらなかった。

「何だ・・・この底知れぬ悪寒は・・・!?一体何なのだ・・・これは・・・!!」

すると、そのシグナムの疑問に答えたのはユーノであった。

「『終末の書』だよ。」

ユーノの言葉を聞いた途端、なのは達の視線がユーノに注がれる。

「ユーノ君!?」

「な、何ですかその終末の書って・・・!?」

「古代の独裁者が世界を支配していた時代、それを止めようとした者たちが創ってしまったロスト・ロギアだよ。その名の通り、世界一つをリセットする力を有した危険な代物だ。僕の推測では、転生を繰り返していた終末の書がある時さくらさんの住む世界に偶然にも転生し、封印状態にあったそれがさくらさんの魔力によって覚醒。その後、強い魔力を有するさくらカード達の意思を操り、この世界を拠点に大いなる災いを引き起こそうとした。そして、その能力を更に飛躍させた物質・・・アンゴルモアが恐らくあれの中に取り込まれている!」

「じゃあ、あれを止めれば！！」

「全て・・・決着が付く！」

なのは達は直ぐに終末の書の破壊を試みるために動き出そうとした。

だが、その瞬間・・・中に取り込まれていたアンゴルモアが終末の書の起動と供に発動をしてしまい強い力を発し始めたのであった。

「こ、これは・・・！！アンゴルモアが発動したのか！！」

「あ！！！終末の書から何かが現れてきました！！」

エリオの言葉を聞いた全員が終末の書を凝視すると、終末の書のページが捲り上がるや否や漆黒の闇が本の中から勢いよく飛び出していくと巨大な何かへと姿を変えていく。

愕然とするなのは達やさくらにウィンディーはこう口にした。

「終末の書に宿りし・・・大いなる闇の姿！！」

巨大化を果たしていく終末の書の闇がやがて建物を破壊していき、天井に穴を開けると同時に古城が崩壊を始めた。

「建物が崩れるぞ！！」

すると、その時さくらの耳元に知世の声が聞こえてきた。

「さくらちゃん！！！」

さくらが知世の声のする方へ目を向けた瞬間、知世は月に抱えられた状態で空を飛んでいた。

「知世ちゃん!!月さん!!」

月は突如として起こったこの奇怪な現象を見るなり、ケルベロスに状況の説明を求める。

「これは一体どういうことだ!?」

「何やエライもんが出て来てしもうたみたいや・・・これを止めれば、全て片がつく!だが、その前に先ずは脱出や!!」

「みんな、行くよ!」

ユーノの言葉を聞いたなのは達は、急いで空へと舞い上がって城の中から脱出を果たす。

さくらと小狼もケルベロスの背中に乗って城の中から無事に脱出を果たすと、今だ成長を続けるはっきりとした実態を持たない終末の書の闇・・・ＡＭ１２を空の上から見上げながら険しい表情を浮かべる。

フェイトとはバリアジャケットに身を包むと、アルフと供にＡＭ１２に向けて攻撃を仕掛けるのであった。

「よくもフェイトや私をこんな目に合わせてくれたね!!」

「たっぷりとお返しさせてもらう!!」

〈Ｔｈｉｒｄ　ｆｏｒｍ〉

バルディッシュをザンバーフォームへと変化させたフェイトは、アルフとのコンビネーションプレイによってＡＭ１２を消滅させようとする。

「いくよ、フェイト！！チェーンディストラクション！」

アルフはミッド式の魔法陣をＡＭ１２の周りに展開させると、鎖によって相手の四肢の動きを奪いそして破壊するチェーンディストラクションを発動し、ＡＭ１２の手足を?ぎ取る。

「有難う、アルフ・・・いくよ。雷光一閃・・・プラズマザンバー！！！」

フェイトはアルフに軽くお礼の言葉を口にすると、バルディッシュを振り上げて激しい雷電を帯びた一撃をＡＭ１２へと流し込んだ。

目を瞑ってしまう程に激しい雷撃と轟音がなのは達の耳に届く中、小狼がフェイト達の頭上から自分の剣を使って護符に宿りし雷の力を発動させ、ＡＭ１２に攻撃を仕掛ける。

「助けてくれた礼も何も出来ないまま、引き下がる訳にはいかない！雷帝招来！！」

小狼の止めの一撃によって、爆発を起こすＡＭ１２。

「やったか・・・？」

小狼は一度ケルベロスの背中に戻ると、さくらやなのは達と供に爆

風が晴れるのを待つ。
「「なっ！？」」
そして、爆風が晴れた先に居たほぼ無傷のＡＭ１２の姿を見るなりフェイト達は驚愕する。
「あれだけの電撃を受けて・・・傷一つ無いなんて・・・どうなってるんだい！？」
すると、ユーノがそんなアルフの疑問に答える。
「終末の書の闇は強い光がないと浄化できないよ！普通の攻撃は一切通用しない。」
「強い光・・・はっ！だったら・・・！！」
その時、さくらはある方法を思い出しなのはに提案をしてきた。
「なのはさん！！私と一緒にやってくれませんか！！私とあなたの魔法であいつを浄化させます！！」
それを聞いたなのはもさくらの言葉を了承して協力の姿勢を見せる。
「了解！協力させていただきます！！ユーノ君、使ってもいいよね！？」
「ああ！全力全開で行って！！大丈夫・・・二人なら・・・“絶対に大丈夫”だから！！」
「うん、そうだね！よし・・・ＡＲカートリッジ、セットアップ！

！」

なのははＡＲカートリッジを装填して、マキシマム・ブレイドを発動させると刃の先を成長を続けるＡＭ１２に向け、さくら自身は星の杖を取り出すと小狼・ケルベロス・月の三人の魔力を分け与えてくれるようにお願いをする。

「小狼君！ケロちゃん！月さん！私に力を貸して！！」

「「「ああ！」」」

三人の魔力がさくらの星の杖に注がれ、星の杖には膨大な量の魔力が宿っていく。

それを見たＡＭ１２が二人の攻撃の邪魔をするために闇魔法を使って攻撃を仕掛けようとしてきたが・・・・・

「邪魔はさせない！」

〈Ｅｌ　ｒｅｌａｍｐａｇｏ　ｄｅｌ　ｆｉｎ〉

フェイトはジュピター・フォームのバルディッシュの必殺技を発動させて、向ってきたＡＭ１２の闇魔法を消し去る。

同じように、ＩＰカートリッジを装填して形状を変化させたエリオとシグナムが加勢に入る。

「プラズマ・ブラスター！！」

「エキゾースト・フェニックス！」

二人の攻撃を受けて、苦しみの動きを見せるＡＭ１２であったが、ユーノとアルフが協力して光の拘束魔法を発動させて完全に身動きを出来なくする。

「「ディバインディレイド！」」

身動きが完全に取れなくなったこと確認すると、さくらはフライの力で空中に浮かびながらなのはの横に立つと、合図を送る。

「行きましょう、なのはさん！私達の・・・全力全開で！！」

「はい！！」

さくらはそう言うと杖の先に溜め込んでいた魔力全てを解放させて、『光』のカードの力を発動させる。

「全ての闇を払い去り、再び我が下に光を！！『光（ライト）』！！」

一方のなのはも、以前ＡＭ０６を消滅させたときに使ったマリアの慈愛をＡＭ１２に向って勢いよく発射する。

「『マリアの慈愛（マリアズ・アフェクト）』！！」

二人の強い光魔法がＡＭ１２に注がれた瞬間、ＡＭ１２はアンゴルモアと終末の書の二つに分かれると、終末の書の闇だけがさくらとなのはの光によって浄化されていく。

浄化されたことによって漆黒の闇は消え失せ、世界は再び何事もなかったかのように朝を迎えることが出来たのであった。

消えていく闇を見ながら、朝日を浴びるユーノや小狼達。

「闇が・・・消えていく・・・」

「終わったんだ・・・何もかも・・・」

「これで・・・もう大いなる災いは起きないはずだ。主たちの心の光が、この闇を打ち破ったんだ。」

「そやな。しかし、ごっつ肩凝ったで！おい、小僧！！何時までわいの背中に乗ってるつもりやねん！？」

「だ、誰が小僧だ！！お前もいい加減その呼び方で俺を呼ぶのは止めろ！！」

その後、なのは達はさくら達と最初に合流した建物まで戻ると身体の傷をある程度回復させてから、さくら達に見守られながら帰還を果たそうとしていた。

「ありがとうございます。なのはさん達のお陰で、私達も世界の人たち皆も・・・救われたんです！」

「いいえ。それが時空管理局の仕事ですから。私達の方こそ、色々お世話になりました！フェイトちゃんたちも無事に救出できましたし。」

「本当に・・・この度は何と言ってお礼をしたら良いか。」

「ホントにもう！感謝してもしきれないよ！！」

「そ、そんな私の方こそ・・・！！無事に小狼君を助けられましたから。」

「本当によかったですわ！もしここで李君が永遠にさくらちゃんと離れ離れになっていたらそれこそ世界は終わっていましたわ！！」

「大道寺・・・それは言いすぎだぞ・・・」

「はう～～～知世ちゃん・・・」

知世の大仰な言葉を聞いた瞬間、小狼とさくらは顔を真っ赤にしてしまった。

「それじゃあ、僕達は引き上げるとするかな♪さくらさんも小狼さんも、これからも末永くお幸せに。」

「はい！」

「ああ。ありがとう、ユーノ。なのはもありがとう・・・さくらを助けてくれて。」

「私だけに言うんじゃなくて、ここにいる全員に言ってくださいよ。」

「・・・そうだな。ありがとう・・・みんな。」

小狼の言葉を聞いた起動六課全員は目を細めると、そのまま転送ポートを使ってさくら達の前から姿を消したのであった。

「行ってしまわれましたわね・・・」

「また会えるかな？」

さくらのそんな疑問を聞くと、小狼は微笑みかけまた会えることを願いこう口にする。

「会えるさ・・・この世界が平和である限り・・・きっといつかな・・・」

そして、全ての騒動が決着したさくら達も元の世界・・・『地球』に帰る為に魔力を使用してまた平和な日常を取り戻すのであった。

友達だから（後書き）

ケロちゃんにおまかせ

ケ「こにゃにゃちわ～～～！！！先週に引き続きケロちゃんにおまかせのコーナーがやってきたで！！さぁ～～～今回もびしっといこうか！」

ケ「今回はさくらの新しいバトルコシュチュームや。」

ケ「知世の趣味がそのまま反映された今回のデザインのモデルはズバリゴスロリのお姉ちゃんたちや。ふりふりの袖が何とも可愛らしいやろ。」

ケ「でもって、ケロちゃん～～～チェック！！！」

ケ「この髪留めが今回の引き立て役になっとるんやな。小僧もこれ見たら顔中真っ赤にしてたからな。」

ケ「でやった?二回に及ぶケロちゃんにおまかせは楽しかったか?また緑の兄ちゃんの目を盗んでは来るさかい、楽しみにしててや。ほなな～～～ぐおお！！（ケルベロス、ユーノに殴られる）」

ユ「ほななじゃな～～～い！！人のコーナー勝手に改変させて何してるんですか！！という訳で、序だから僕のコーナーも続けてやるからね♪」

教えて、ユーノ先生！

ユ「さて、気を取り直して今回はいよいよ僕の斬魄刀晩翠の能力についてだ♪」

ユ「斬魄刀にはそれぞれ能力によって種類があるよね。炎熱系・氷雪系・水流系・直攻撃系などさまざま。その中で、現在確認されている最強の名を持つ斬魄刀は山本総隊長の使う炎熱最強の『流刃若火(りゅうじんじゃっか)』。日番谷隊長の氷雪系最強の『氷輪丸(ひょうりんまる)』。」

ユ「そして、今回僕が紹介する暗黒系最強の斬魄刀『晩翠』。闇を自在に操り闇を自らの力にする鬼道系の斬魄刀の中でも特に異質で、強力な力を持ったものだよ♪」

ユ「昼間は月がほとんど見えないから仮の力である翡翠斬のような技しか使わないけど、夜になれば昼間とは比べ物にならないくらいの力を発揮するんだ♪」

ユ「しかしこうして思うと、僕となのはの力って随分対照的なんだよな・・・」

晩「全くだな・・・これでは翡翠の魔導死神ではなく黒き覇王だな。」

ユ「晩翠!!何時の間に!?」

晩「それより一つ聞きたい。何故私の出番が極端に少ないのだ!?」

ユ「斬魄刀の本体が直接話に出ることなんてそうないでしょう。異聞篇じゃないんだから・・・」

晩「何だと!?それでは私は一生ミニコーナーだけの存在となってしまうのか!?うううううう!!!!（晩翠、号泣）」

ユ「・・・そのうち作者も書いてくれるって・・・多分・・・」

魔導師図鑑ハイパー！

ある日の朝、テレビの占いを見ていたユーノ達。

ア「今日最もついていないのは・・・・・・かに座の方です。今日は何をやっても上手くいきません。」

すると、それを聞いていた鬼太郎が溜め息を漏らす。

鬼「何だよ・・・朝からテンション下がるな。」

恋「お前、かに座だったのかよ・・・以外だな・・・」

鬼「悪いかよ、かに座で！」

そのとき、アナウンサーの口からとんでもないことが。

ア「特に、かに座で・・・髪の毛を赤に染め、今御飯を食べている方・・・」

鬼「お？」

ア「今日、”死にます”♪」

鬼「えええええええ!!!!

鬼太郎、思わず食べていたものを吐き出す。

ユ「汚いよ、鬼太郎。」

そんな驚愕する鬼太郎にアナウンサーは更に追い討ちをかける。

ア「幸運を切り開くラッキーカラーは緑。何か緑色のもので、血にまみれた体を覆い隠しましょう。」

すると、それを聞いた途端鬼太郎はユーノに詰め寄る。

鬼「店長!!!!今日だけでいいっすから服貸して!!!!!」

鬼太郎は大泣きしながらユーノに頼みこみ、ユーノは少々呆れていた。

ユ「・・・はぁ・・・」

さくら篇登場人物

木之本（きのもと）　桜（さくら）

声　一　丹下桜

4月1日生まれ（誕生花はソメイヨシノ）。A型。23歳。通称「さくら」。「はにゃーん」「ほえ～」（時々「はう～」）などが口癖。なのはと同じ地球の出身で、友枝町に家を構える。性格は、明るく素直で優しく非常に友達思い。そして少々天然。前向きな頑張り屋で「絶対だいじょうぶだよ」が無敵の呪文。運動神経抜群でスポーツ全般が得意。大抵の家事はこなせるが、裁縫（特に編み物）は少し苦手。エビフライや麺類が好きで、こんにゃくが嫌い。正体が分からないもの、特に幽霊に関しては極端に怖がる。大道寺知世とは小学3年生の時からの同級生。また又従姉妹同士で、互いに6親等の関係。父と園美が小学校の運動会で再会するまでは、木之本家と大道寺家が親類であることは知らなかった。他人の恋愛感情には少々鈍感。夫である小狼に対してはかなり惚気気味ではあるが、強い信頼関係が築かれている。クロウカードを全てさくらカードに変え、自身の属性である星の力を宿した星の杖を所持する。なのはが困惑するほどの強い魔力の持ち主で、エリオが推測するにSSSランククラスはある模様。アンゴルモアの影響でカードが暴走を果たして散らばってしまい、ユーノ達に救援を求めた。

李 小狼（リ・シャオラン）

声　一　くまいもとこ

「異世界関係／ユーノの交流者」を参照

ケルベロス

声　一　久川綾（仮の姿）　／　小野坂昌也（真の姿）

クロウによって作られた、クロウカードの2人の守護者の1人で封印の獣で、選定者。現在はさくらカードの守護をつかさどる。通称「ケロちゃん」。普段は魔力の消費を抑えるために、ぬいぐるみのような小さい姿をしているが、さくらや戦闘においては真の姿に戻

る。真の姿は翼の生えたライオンを思わせる獣。クロウカードの入っていた本が長い間大阪にあった影響で、大阪弁で喋る。性格は非常に陽気でナルシスト。お菓子とたこ焼きとモダン焼きが大好物で、食いしん坊。「人生楽しまんとな」が信条。ギリシア神話のＣｅｒｂｅｒｕｓとは、甘い物の好きな番犬という性質以外は共通点がほとんどない。番犬でありながら、クロウカードの封印が解かれるまでおよそ３０年間居眠りをしていた。ユーノにも当初、「ケロちゃん」と言われからかわれた。

月（ユエ）

声　―　緒方恵美

クロウカードの２人の守護者の１人で審判者。現在はさくらカードの守護をつかさどる。紫がかった銀の瞳と長い銀の髪を持った、華奢で無表情な青年の姿をしている。面倒なことが嫌いで、寝起きが最悪らしい（ケルベロス談）。クロウへの敬愛心は人一倍強いため、当初はクロウへの未練からさくらを主と認めようとはしなかったが、認めた後は良き助言者となる。強い力を持ち、小狼と同じような性格をしたユーノに一目置いている模様。

大道寺（だいどうじ）　知世（ともよ）

声　―　岩男潤子

９月３日生まれ。Ａ型。

２３歳。さくらの同級生で一番の親友。資産家の大道寺家の一人娘で典型的なお嬢様。そのため家はものすごいお金持ちで、ボディガードが何人もいるほど。超一流のファッションコーディネーターとして世界に名を馳せている。歌が得意。趣味は料理、裁縫、ビデオ撮影。見た目はおっとりと穏やかで、母の園美がさくらの母である撫子に似せるために伸ばした長い黒髪が特徴。常に敬語で話す。非

常に落ち着いた性格で思慮深い。さくらのことが大好きで、そのさくらに自分の作った服を着てもらい、撮影し、その映像を観ることを至上の喜びとしている。さくらのバトルコスチュームを手作りしたり、ビデオカメラを片手に彼女を応援し、「さくらの勇姿は1秒たりとも逃さない」という信条を持つ。魔力はないが、人の心理を読み取る洞察力が非常に鋭く、小狼の恋心にもいち早く気付いている。さくらとは母方の又従姉妹の関係。今回の事件に関しても、どんな形であれ力になりたいと言う強い想いから、さくらたちと行動を共にする。

ウインディ（ＴＨＥ　ＷＩＮＤＹ）「風」

声　一　小林沙苗

さくらが最初に手に入れたカード。温和で優しく争い事を嫌う性格で、さくらと出会った時には自ら本の中に戻った。風をまとった女性の姿を取り、風を生み出し操る力を持ち、風の鎖で相手を捕らえる、風を使って相手を包み込み動きを封じるなど捕獲系のカードとしてさくらを何度も手伝う。四大元素カードのひとつで「月」の属性カード。アンゴルモアの影響により、「黒風（シャドーウィンディ）」と化して性格も冷徹となってしまい、さくらに襲い掛かっていったが、さくらの純真無垢で心の籠った言葉を聞いて、正気を取り戻す。

ウォーティ（ＴＨＥ　ＷＡＴＥＲＹ）「水」

声　一　坂本真綾

人魚を連想させる少女の姿で実体化。水が多くある場所を好み。攻撃用に造られたため、気性は荒く攻撃的。「水」にまつわるカード（例：「雨」）の力を逆に利用することができ、実体を持たないため封印も難しい厄介なカードだが低温には弱く、凍らされると動けなくなってしまう。「月」の属性を持つ四大元素カードのひとつ。

「黒水（シャドーウォーティ）」となってエリオと対戦するも、自らが水に不純物を混合された結果強い電撃を受け敗北。

ファイアリー（ＴＨＥ　ＦＩＲＥＹ）「火」

声　一　日高のり子

攻撃力はほぼ同等ながら、気性の荒さと攻撃的な性格は「水」のそれを上回る。四大元素カードのひとつで、「太陽」に属するカードの為、ケルベロスが本当の姿になるには必要となる。「黒火（シャドーファイアリー）」と化してさくらのアジトを奇襲してきたが、ユーノ達の活躍によって阻止され、爆水弾を受けて敗北。

アーシー（ＴＨＥ　ＥＡＲＴＨＹ）「地」

声　一　篠原恵美

原作、アニメ共に最後に登場したカードで、巨大な土の龍の姿となって実体化（カードに戻すと女性の姿になる）。五行相克の関係上、「樹」に弱いという弱点を持つ。四大元素カードのひとつで、「火」のカード同様ケルベロスの「太陽」属性カード。「黒地（シャドーアーシー）」としてシグナムと対戦し一時は優位になるも、シグナムのフェニックスふぁる権をその身に受け倒される。

ライト（ＴＨＥ　ＬＩＧＨＴ）「光」

声　一　佐久間レイ

カードの解放後、さくらの心の中に存在し、すべてが闇に包まれても、さくらだけは光を失わずにすんだ。あきらめない心が呼び寄せたカード。「闇」とは双子の姉妹のような関係。クロウカードの中で「闇」と同じ最高位カード。ケルベロスの第一配下カードで、「太陽」の属性カード。言葉を話すことができるカード。「闇光（シャドーライト）」と

なってなのはと対戦。口八丁でなのはの心を動揺させるも、なのはの想いの籠ったディバインバスターに押し負けてしまいカードに戻る。

ダーク（ＴＨＥ　ＤＡＲＫ）「闇」

声　一　佐久間レイ

劇の最中にさくらを闇に包ませた。特殊カードであり、「光」と同時でないと封印することが出来ない。クロウカードの中で「光」と同じ最高位カード。ユエの第一配下カードであり、「月」の属性カード。言葉を話すことができるカード。「黒闇（シャドーダーク）」と化してユーノと対戦。漆黒の闇魔法で追いつめようとしたところを、逆にユーノの闇天翠月をその身に受けてしまい、敗北しカードに戻った。

『終末の書』の意志　→『終末の書』の闇／ＡＭ１２

声　一　渡部猛

今回の事件の黒幕で、アンゴルモアの影響で暴走した強大な力。古代の独裁者が世界を支配していた時代、それを止めようとした者たちが創ってしまったロスト・ロギアでその名の通り、世界一つをリセットする力を有した危険な代物。ユーノは転生を繰り返していた終末の書がある時さくらの住む世界に偶然にも転生し、封印状態にあったそれがさくらの魔力によって覚醒したと推測。その後、強い魔力を有するさくらカード達の意思を操り、この世界を拠点に大いなる災いを引き起こそうとした。暴走した終末の書だが、さくらとなのはの強い光の魔法をその身に受け、消滅を果たした。

呪われた聖剣（前書き）

今回の元ネタは銀魂・『紅桜篇』です。

紅桜の代わりになる刀は何でしょうか！？

呼んでみたら分かります。

呪われた聖剣

＞ｉ１３２６７―７０９＜

蛾は闇を飛んでいた。

真っ暗な闇の中を蛾はただ只管に飛ぶ。

闇を恐れ、光を求め――――――ただ只管に。

光を見つけた蛾はその周りを飛び続ける。

だが、その時はもう・・・自らの意思とは関係なく蛾は光から離れられなくなっている。

第４６管理世界『ＫＥＮ』・・・異文明との接触により急速に科学が発達した、日本の江戸時代にもにた雰囲気を漂わせる異国情緒のある世界。

宇宙船が昼夜飛び交い、宇宙人たちが人間に混じって闊歩する。

そんな世界・・・・・月明かりが照らす空の上に浮かぶ巨大な母船の上に集まる怪しげな男達四人。

「・・・各々方・・・万事抜かりのないように頼むぞ。」

「心配しなくても大丈夫ですよ、武田先輩。」

「当面表立って動くのは私だけだよ・・・」

四人のうちの三人がそのような会話を話していると、先頭の方で楊枝で歯槽を取り除いていた盲目の男が横から口を挟んでくる。

「いくぞ・・・俺達の伝説の幕開けだ・・・」

動き出す光に集いし虫達が、彼を・・・翡翠の魔導死神に何を齎すのか・・・!?」

そんな彼らの動きを今だ知る由もない当の翡翠の魔導死神ユーノ・スクライアは自室の中で仕込み杖を取り出し刃の手入れをしていた。

「ほんほんほほ〜〜ん・・・♪・・・ん!?」

鼻歌を歌いながら刃に専用の薬品を丁寧に当てていたユーノの耳に、部屋の中からでも聞こえる程の大音声が食堂から聞こえてくる。

しかも、それは決まって恋次とルキアの二人であった。

「・・・やれやれ・・・またあの二人か・・・ちょっと見てくるかな・・・」

ユーノは手入れ作業を終えると、杖を仕舞い込んで食堂の方へと足を運んだ。

その頃、恋次とルキアの二人はテーブルに置かれた中華料理のご馳走を吉良と供に頂いていたのだが、まるで子供の喧嘩のように最後のしゅうまいを箸で取り合っていた。

「おいてめぇ、ルキア!!さっきからそれ食いすぎなんだよ!!」

「き、貴様こそ私の粽、多く食べたではないか・・・!!」

二人の取り合いは暫くの間続いたが、不意に力を抜いた恋次の隙を突いてルキアは最後のしゅうまいを勝ち取ったのであった。

「あっ!?てめぇ!!じゃ、蟹チャーハンも〜らい!!」

しゅうまいを取られ、大層悔しがる恋次であったがそれに対抗してか恋次はルキアが取っておいたと思われる蟹チャーハンを奪い取る。

「私の蟹!!」

当然、大事に取っておいたものを取られて黙っているはずもないルキア。

しかし、恋次は全く返す気など見せずにルキアの目の前でチャーハンを貪り食い始める。

「いいじゃねえかよ!ちょっとくらい喰っても!」

「貴様のちょっとは全部食べるのに等しいではないか!?一口だけでもよこせ!!貴様は底意地が悪いだけでなく食い意地も悪いのか!?」

「何だと!?そこまで言われちゃ、黙っていられるかよ!!おいルキア表に出ろ!!一度痛い目に合わないといけないようだな!!」

「上等だ!!貴様のその曲がった根性を叩きなおしてやるわ!!」

二人は互いに火花を散らしながら椅子から立ち上がると、斬魄刀に手を掛ける。

その二人の様子を見てすっかり呆れ返ってしまう機動六課前線メンバー全員。

ヴィータは溜め息をつきながら手をつけていたエビチリを口に運ぶ。

「・・・全く・・・あいつらは仲がいいんだか悪いんやら・・・訳分かんねえな・・・」

「喧嘩するほど仲が良いって言葉が在るから、直ぐに仲直りするよ。」

「彼らの場合・・・仲直りという言葉はもとよりないけどね・・・」

なのはの言葉を聞いていた取り残されていた吉良がそう言うと、全員は苦笑するのであった。

その後、恋次とルキアは本当に訓練場で大暴れをして互いの実力の全てをぶつけあった。

尚、勝負の方は策を弄したルキアの方に軍配が上がり恋次は体中を黒焦げにして全員の前に帰ってきたのであった。

恋次は悔しい気持ちを完全に消化し切れないまま、クロノ達とともに浴場の更衣室の方で服を脱いでいたのであった。

「たく！ルキアの奴・・・今度は絶対痛い目に合わせてやるぜ！！」

「恋次殿も情けないですな・・・あそこで鬼道を使わないからそのような結果になるのですよ。」

黒焦げになるところを見ていた金太郎がそう言うと、恋次は何も言えなくなる。

そこから、全員による恋次に対する言葉の暴力が始まる。

「そう言えば、恋次さんってあまり鬼道得意じゃなかったよね？」

「大概の使えるやつもほとんどはルキアちゃんから教えてもらったんだよな！この前吉良が言ってたぜ！」

「ほう～～それは初耳だな。」

鼻につくような喋り方で恋次を小馬鹿にする鬼太郎・浦太郎・白鳥の三人。

「恋次さんって口は大層なこと言いますけど、案外不器用なんですね。」

「力だけが全てではないですよ、恋次さん。」

追い討ちをかけるようにエリオとクロノからもそのように言われるのを聞いた瞬間、恋次もとうとう我慢の限界に達した。

「う、うるせーよ！！！！！さっきから聞いてれば散々人のこと馬鹿にしやがって！！！！！吉良が余計な言うからだぞ！！！！」

「それは悪かったよ・・・謝るから。」

恋次に怒鳴りつけられた吉良は苦笑をしながら恋次に謝罪の言葉を掛けるが、恋次の気分は全く収まることを知らない。

恋次は怒りを鎮められないまま浴場の自動ドアを何故か素手で開ける。

「たく！胸糞悪い！！ここは早いところ風呂に入って・・・あれ？」

と、その時。

恋次は前方に広がる今迄見たことのない扉の向こうに広がる露天風呂に目を奪われた。

「おい。六課の風呂に露天なんかあったか？」

「ああ。そう言えば、ユーノが造ったみたいですよ。はやての無理な注文を聞き入れて。」

「あの狸娘がか～～～気が利くじゃねえか！よし、後で入ろう！！」

露天風呂が出来たことを知った恋次は、先程とは打って変わったかのように機嫌を直した。

あまりにも単純な恋次の態度の変化に終始呆れ返ってしまうクロノ達。

その後、恋次を含めた男全員は早速ユーノが造った露天風呂に入りながら空に輝く星明りや月を見上げながら今日一日の疲れを癒していた。

すっかりご満悦な様子の恋次達であったが、その時恋次がユーノだけがこの場にいないことに気づき話を持ち出した。

「あ？ユーノって言えばよ・・・俺達って今迄あいつと風呂に入ったことないよな？」

「そう言えばそうだね。何でだろう？」

恋次の言葉を来た吉良や他のメンバーも今更の疑問に首を傾げ始める。

「クロノ提督、ユーノ先生とは付き合いが長いんですよね？少し、知っている限りのユーノ先生のことについて教えてくれませんか？」

「エリオがそう言うのなら・・・あいつとはよく口論になって喧嘩ばかりしていたな。僕がクラウディア、あいつが無限書庫で働くようになってからは仕事上のことでしょっちゅうあいつのところに資料請求をしていたな。その度にあいつの嫌そうな表情は今でも忘れられない。」

「てめえのその道具を扱うような態度に嫌気が差したから、無限書庫辞めたんじゃねえか？」

「失敬なことを言わないで下さい！僕だけに責任があったわけではない！！」

恋次の半分図星、半分冗談の内容の言葉に動揺を隠せなくなったクロノ。

「まぁ、でも・・・ユーノ店長は未だに私達でもよく分からないことが多いからな。」

「そう言えば、君達は一体何時ごろからユーノと一緒なんだ？」

クロノにそう尋ねられると、金太郎から順にユーノとの出会いを語り始める。

「私が店長と始めてお会いしたのはちょうど四年前のことです。まだ、店長が一人でスクライア商店を営んでいるとき・・路頭に迷っていた私を救ってくれたのがそのきっかけです。」

「俺も亀も似たようなもんだな！店長の場合は、来るものは拒まずだったし。」

「だから誰にでも好かれるんだよね♪」

好かれると言う単語を聞いた瞬間、恋次は表情を引きつったままユーノが常に着用しているあの甚平と羽織と帽子も好かれるものなのかが疑問に思い、思わず尋ねる。

「だったらあの格好もそうだと言うのか！？」

「服装に関しては私達でも皆無だ。何時ごろからあれを好んで着る様になったのであろうか？」

「色々謎が深まりますね。」

すると、エリオの言葉の直後に恋次がユーノに関するもう一つの謎を浮かべる。

それは、ユーノの斬魄刀である晩翠についてだ。

「謎と言えばもう一つ・・・あいつの斬魄刀、『晩翠』のことだが・・・あれは正直どういう能力なんだ？」

「確かに・・・彼の場合は鬼道系の類に入るとは思うが、どうも今一はっきりしない力だ。阿散井君の狒骨大砲を翡翠斬で相殺させ、翡翠の殻はどんな圧力にも屈せず、クロノさんの攻撃をも凌ぐ破壊力。まだ始解状態でしか力の一端を見たことはないが・・・卍解はどんな能力なんだ？」

「ユーノ先生の卍解か・・・想像がつかないですね？」

「そもそも卍解という力を本当にユーノが有しているのですか！？」

「それは間違いねえ筈だ。あいつは自分で言っていた・・・“僕の卍解は、人を鍛えたりとか何かを教えたりとか、人前で見せれるようなものじゃない”ってな。待てよ、金太郎達なら見たことあるんじゃないのか、ユーノの卍解！？」

「・・・残念ながら私達も始解までですね。店長は絶対に卍解を人前では使いませぬから。」

「俺だって、見たいとは思ってるんだけどな・・・」

「・・・そうか・・・お？」

すると、その時恋次達の耳に入り込んでくる露天風呂ではしゃぐなのは達女性陣の声。

そんな女性陣の様子を耳にしたクロノは呆れた表情でこんな発言をする。

「・・・やれやれ・・・女というのは騒がしいものだな。ゆっくり湯を楽しむということは出来ないのか？」

「発言一つ一つが爺臭せー野郎だな。若年寄ほど、友達出来ないぜ。」

「「「「「「うんうん！」」」」」」

恋次の言葉に同意の様子を見せるクロノ以外の男性陣全員は首を縦に振るう。

「なっ！？それはどういう意味だ！！まるで僕に友達がいないみたいな発言は止めてくれ！！！」

「友達いたんですか・・・クロノさん？」

「いるに決まってるでしょう！！！一番友達がいなさそうなあなた

に言われたくないですよ！！！」

吉良の思いもよらぬ一言に何時もの冷静さを忘れて怒りを露にするクロノ。

「おいおい、それはまた言いすぎじゃないのか・・・って！！！何してんだ鬼太郎！！！」

クロノの理不尽な発言を聞いた恋次も言いすぎだと口を挟んでいたその時、鬼太郎が何故か不自然に穴の開いた女湯と隔たっている壁の方に近付き向こうの方を覗いている様子を目にした。

「スゲーーー！！！透け透けじゃねえかよ！？」

あの先に映ってくる未知の世界に興奮を覚える鬼太郎を見て、その場に居た全員が顔を真っ赤にさせながら鬼太郎に注意を呼びかけるのだが・・・・・・

「先輩！！！！何一人でとんでもないことやってるの！！！僕にも見せてよ！！！」

「違う！！！！！そこは止めるところだろ！！！！！」

浦太郎はそう言いながら鬼太郎の傍まで駆け寄ると、一緒に穴の中を覗く。

それを見た恋次が大声を張り上げて否定の言葉を口にする。

慌てた金太郎やクロノ達が全員係でみっともない行動を起こす二人を止めようと手を引っ張るが、そんな全員の力に屈しまいと抗い続

ける鬼太郎と浦太郎。

「止めないか、鬼太郎！！！浦太郎も止しなさい！！！」

「ピーチ、貴様という奴には恥じという言葉はないのか！？」

「うるせー！！！女に飢えてんだよ！！！少しくらい良いだろうが！！！」

「よくありませんよ！！最低ですよ、男として！！」

「君は見たくないのかい、エリオ！？キャロちゃんのピチピチの肌を！？」

「なっ！！」

浦太郎のその言葉を聞いた瞬間、エリオに脳裏に浮かぶキャロの人には言えないような姿が頭の中を駆け巡る。

未だそう言った事に見慣れていないエリオはちょっと考えた瞬間、湯気を立てその場に倒れこんでしまった。

「のぼせちまったぞ・・・こいつ！？」

「ふん、若いな。」

「言ってる場合か！！！」

恋次はクロノにそう言うと、気を取り直して再び二人の行動を止めに入ろうとしたのだが、彼もまた男であった。

体の奥底に眠る異性に対する欲情がこんなまたとない状況に耐えられる訳がなかった。

結局、恋次もクロノも・・・いや、気絶したエリオ以外の全員が顔を真っ赤にしたり、鼻血を流しながら若い娘の肌に興奮を覚えたのであった。

風呂から上がった鬼太郎と浦太郎の血色は実に良かったが、恋次達残りのメンバーの顔は血色が良すぎて既に茹蛸のようであった。

「いやいや～～～いい目の保養になったな！！」

「そうだね！何だかんだ言ってエリオ以外は皆見てたしね・・・しかもガッツリ！」

「「「「・・・・・・！！」」」」

「まっ、気付かれなければいいんだよ！！」

鬼太郎はそう言いながら七人と供に廊下を歩いていた・・・・・・その時だった。

彼等の下に本物の死神が現れたのは――――――

「気付かれないね・・・・・本当にそうかな？」

全員がその聞きなれた男性の声を聞いて冷や汗を流しながら声のする方向に徐に振り返ってみると、そこに立っていたのは目が決して笑っていないユーノであった。

「なっ!?店長・・・!!一体どういう意味です!?」

「態とあの穴を作ってみんなの考えそうなことを確かめてみて正解だったよ♪なのは～～～みんな～～～用意はいいかい♪」

すると、ユーノの言葉を聞いたなのは達女性陣全員がバリアジャケットに身を包んだ状態でデバイス片手に物凄い剣幕と黒いオーラを出しながら恋次達を睨み付けて来た。

「「「「「「「ギク!!」」」」」」」

女性陣のその様子を見た瞬間、彼らは自らの命の危機を悟った。

「クロノ・・・・・あとでエイミィにもキツイお仕置きがあるけど・・・その前に私からのお仕置きを受けようね・・・」

「・・・全員・・・頭冷やそうか・・・?」

ユーノ同様決して目が笑っていないなのはが例のフレーズを口にすると、恋次と吉良は心の中で確信する。

「「(死亡フラグ・・・決定!!)」」

「おい!!!!兎に角逃げ・・・!!!!」

鬼太郎は兎にも角にも逃げることを第一目標において全員にそう指示を送って走り出そうとしたが、そんな全員の動きをかなりキツめのバインドで動きを封じるユーノ。

ユーノはなのは達以上に黒いオーラを放ちながら、性格を一変させて次のように発言する。

「誰が逃がすと思ってるの♪お仕置きをするのはなのは達だけじゃない・・・なのはの肌を誇りも捨てて平気で覗いたてめえらを・・・赦す訳にはいかねえんだよ・・・！！」

「おいユーノ・・・口調が変わってるぞ・・・！」

クロノ達は急に口調を変えたユーノになのは達以上の恐怖を抱く。

ユーノはそんなクロノ達に徐に近付くと杖を取り出し手入れをしたばかりの晩翠を輝かせてなのは達と供に徐に歩みよって行く。

「・・・問答無用・・・心配するな。殺さない程度に加減してやる・・・ふふふ」

ユーノの不気味な笑い声となのは達の恐怖の笑みに全身から汗を流し恐怖に怯えるクロノ達の運命は・・・既に決まっていた。

「「「「「「「「ギャあああああああああ！！！！！！！！」」」」」」」」

夜が更ける中、六課の隊舎に響き渡る哀れな男達の叫び声。

その声は眠っていた動物達もを起こすほどであった。

その後、見る影もないぐらいに惨い仕置きを入れたユーノは一人浴場に向うと、露天風呂に入りながら持って来た日本酒をお猪口に入れながら月を仰ぎ見、口に運ぶ。

「――――――月明かりを見ながらの日本酒はいい。春は夜桜、夏には星、秋には満月、冬には雪。それで充分酒は美味い。それも、露天から呑むものは格別だな。」

そんな風情ある夜の時間を肩まで湯に浸かりながら楽しんでいたユーノ。

すると、岩場においていた仕込み杖の中から具象化して現れるユーノの斬魄刀の本体である晩翠がそんなユーノの近くに来るなり、酒を注ぐようにと口にする。

「私にも一杯ついでくれ。」

「晩翠!?また勝手に出てきたのかい・・・?」

「偶には良いだろう・・・ほれ。」

驚くユーノを他所に持って来た器を差し出す晩翠。

ユーノはやれやれと口にしながら小瓶に入っていた酒を徐に注いでやった。

晩翠は早速ユーノから分けてもらった酒を口に運び、酒の味に酔いしれる。

「・・・ああ。いい酒だ・・・何所のだ、これは?」

「士郎さんから前に教えてもらったお酒だよ。最初は結構気持ち悪くもなったけど、慣れれば素晴らしいよ。」

「お前は酒のようなものに関しては、昔から強かったな。女には滅法なくせに・・・」

「五月蝿いな。晩熟なのは昔からなの！それに、大分直って来たつもりだよ。」

「本当か？だったら今度、お前のガールフレンドと一緒に混浴でも入ればよかろう？」

その発言を聞いた瞬間、ユーノは飲んでいた酒を思いっきり口から吐き出した。

「ぶっ！！！！止めてよ、晩翠！！！！出来るかそんなこと！！！！なのはだって嫌に決まってるよ！！！！」

「そうかな。あの子は結構天然だからな・・・気にしないと思うぞ。混浴ぐらい・・・まして好きな人と入れるのだから尚更だ。それとも、お前は彼女の肌を触りたくないのか？」

「如何わしい発言は止してよ！まるで僕がなのはを犯すみたいな言い方に聞こえるぞ！」

「何だ・・・つまらん。」

「つまらんってなんだよ！！！！どう言う期待を抱いていたんだお前は！！！！」

ユーノの斬魄刀、晩翠は顔に似合わずユーノですら驚愕するほどのとんでもない事を平気で口にするというかなり変わった斬魄刀であった。

でも、こんな斬魄刀とユーノだからこそ・・・・・この後に控える事件に立ち向かっていけたのは。

クロノ達があの悲惨な一夜を経験してから二・三日が経過したとき、新たなるアンゴルモアの反応を感知したリィンが全員を指令室へと呼び出し緊急対策会議が行われた。

そして、今回のアンゴルモアの対象が今迄とはまた一風変わった代物であったのだ。

「呪われた・・・聖剣・・・？」

スバルを始めとする多くのものはリィンから聞かされた今回の事件の鍵を握る『呪われた聖剣』という耳慣れない単語に首を傾げる。

そんなフォワード陣達を見て、クロノが説明を加える。

「最近、異世界の各地で起きている通り魔事件を知っているだろう。その事件にどうもアンゴルモアが関わっているらしい・・・ということだ。」

それは一週間前に遡る。

各世界で突如として起きる女性ばかりを次々と襲った謎の通り魔事件。

被害者の全ては剣で斬られた様な傷跡を残して死んでいった。

ユーノは更に詳しい情報をメインスクリーンに映しながら、補足説

明を始める。

「事件で犯人が使ったと思われる謎の刀・・・別名を『呪われた聖剣』。その名の通り、噂では祭儀の時に広く使われていた神への捧げ物だったらしいのだが、いつの間にか殺人の道具として使われてしまい、手にしたものは一人の例外もなく飢えた獣の如く人を斬らずにはいられなくなると言う怪しの剣。かなりの業物だと聞く。」

「誰でも手にすれば殺人鬼にしちまうって訳か・・・」

「殺人鬼と言えば、十一番隊にも似たような奴いるよな。」

鬼太郎のその何気ない質問を聞いた恋次は、顔を引きつりながら返事をする。

「更木(ざらき)隊長の場合は、生まれながらの殺人鬼だろうけどな・・・で、今回のアンゴルモアはその剣に宿ってるって言うのか?」

「そうみたいや。ユーノくん、反応のほうはどうや?」

「ちょっと待ってね・・・・・・来た。此処だよ!」

メインスクリーンに映し出される今回の世界の詳細なデータと名前。

「第４６管理世界・・・『ＫＥＮ(ケン)』?変わった名前ですね・・・」

「文化レベルＢ。魔法文明は無し。どうやら日本の江戸時代に近い感じだな・・・服装は皆着物が殆どだね。ただ不思議なことに・・・異文明テクノロジーとの接触がある。つまり、宇宙から齎された高度なテクノロジーが共生しているということだよ。」

「江戸時代と異文明テクノロジーの共生か・・・訳分かんないぜ。」

「でも、この世界の何所かに呪われた聖剣・・・もとい、アンゴルモアがあるんでしょ。だったら、黙っているわけにはいかないよ。」

「よし、早速メンバー選出に入ろう。今回の場合は・・・」

クロノがそう言って、メンバーの選出を考え始めたその時・・・全員の耳に入り込んでくるかなりハードボイルドな声色の男性の声。

〈待て。〉

「「「なっ!?」」」

突如として入り込んでくる謎の男の声に思わずユーノ以外の全員は思わず警戒心を立てた。

「何・・・この声!?まさかまた・・・!?」

「いやでも・・・この前とはまた違うような・・・?」

ざわめき出し、動揺を隠し切れなるなのは達であったがそんな全員を見ながら大きく溜め息をついて説明をするユーノ。

「・・・ごめんみんな・・・多分コイツだよ。」

「え?ユーノ君・・・こいつって!?」

ユーノの言葉に思わず怪訝そうな表所を見せるなのはを始めとする全員。

すると、その時ユーノの杖の中から出てくる深緑色の煙。

煙はやがてユーノの隣で大きくなりながら徐々に形を整えて言ったかと思えば、なのは達の前に姿を現す具象化した晩翠。

「私だ・・・」

突如として現れた晩翠を目の当たりにする一度目を点にして固まる死神とスクライア商店以外のなのは達機動六課前線メンバー。

そして、あまりの常識離れした光景に絶叫をしたのであった。

「「「「「「「「「「えーーーーーーーーーーーー!!!!!!!!!!!!!!!!!!!!!!」」」」」」」」」」

その声の大きさに思わず眉間に皺を寄せて不思議がる晩翠。

なのはやフェイト達は晩翠を指を向けながらパニックに陥っていた。

「ゆゆゆゆゆゆゆゆユーノ君の杖から・・・人が出てきた!!!!!!!!!!!!!!!」

「どどど

「斬魄刀の本体だと!?そんな馬鹿げた事が!!!」

「本当だぜ、クロノ。お前らには言ってなかったけど・・・斬魄刀にはそれぞれ意思が宿ってんだよ。俺の蛇尾丸だって、本体は猿のバケモノだぜ。」

「しかし意外ですね・・・ユーノさんの晩翠の本体がそんな姿だったとは・・・」

「一護に斬月と何所か似ていますな。」

吉良もルキアも間近で初めて目にする晩翠の本体の姿をまじまじと見つめる中、ユーノは少々呆れた表情で晩翠に具浄化した理由を尋ねる。

「晩翠・・・何のようなのさ?勝手に具象化して・・・」

「何・・・普段お前が世話になってる人達にちょっと挨拶も兼ねてな。う~んと・・・お。」

「ふえ?」

晩翠はなのはの姿を確認すると、未だ晩翠の姿に緊張をし続けるなのはの下へと歩き出しある程度の距離まで行くと顔をまじまじと見つめる。

「お前が高町なのはか・・・・・・・?」

「はい・・・そうですけど・・・!?」

晩翠の妙な行動に思わず顔を赤くするなのは。

すると、晩翠はそんななのはを見て鼻で笑うや否やこう発言をした。

「・・・ふん。成程、ユーノが惚れるわけだ。いい顔をしている。」

「え!?そ、そんな・・・!!」

思わぬ晩翠のお褒めの言葉に更に顔を赤くするなのは。

そんななのはの様子を見てユーノの嫉妬の炎が頂点に達する。

「うんうん。中々可愛いじゃないか・・・のあああ!!!!」

晩翠はその瞬間、嫉妬で満たされたユーノの肘落しを頭に喰らいその場に倒れて頭を押さえ悶絶する。

「てめぇ・・・人の彼女に彼氏の前で何さらしとんじゃい!!」

あの時のように再び口調が乱暴になるユーノ。

晩翠はその場から立ち上がると涙目になりながらユーノに反論をする。

「まだ何もしてないだろう!」

「充分しただろうが!!見てみろ、なのは真っ赤じゃんか!!」

「女子はみんな理性に顔を近づけられたらああなるだろう!!」

「理性じゃねえだろう!!!お前は斬魄刀だろうが!!!」

「何だと・・・やるのかフェイレットもどき!!」

「そっちこそやんのか、陰険黒ずくめ!!」

二人は睨み合い、火花を散らすと恋次やルキア顔負けのしょうもない喧嘩をなのは達の前で勃発させた。

慌てたティアナやギンガ達が止めにかかろうとする。

「ゆゆゆユーノ先生!!止めましょうよ、喧嘩は!!」

「落ち着いてください、二人とも!!」

そんな二人の様子を呆然と眺めながらどうしていいか分からないままなのは達。

「まさか斬魂魄刀と喧嘩するとはな・・・ユーノ殿の場合、かなり不思議な光景だ。」

「なのはのことになると、性格が一変するんだな・・・嫉妬深い奴だ。」

一応、二人の喧嘩はティアナとギンガの仲裁によって何とか収まったが晩翠の顔はユーノに殴られたあとが多数残っており、実に悲惨なものであった。

恋次はそんな晩翠に向って呆れた表情を浮かべながらこう言う。

「全く・・・油断もすきもないオッサンだな・・・」

「オッサン言うな!!これでも結構若い方だぞ!!」

晩翠の言葉を聞いた瞬間、まだ気分が落ち着かないユーノが次のように返す。

「何所だよ!?バリバリのコスプレした新種の変体にしか見えないよ。」

「服装に関してはお前も似たようなもんだろうが!!!」

「全身黒ずくめで変な外套羽織ってる奴と僕のそれを一緒にするな!で、お前は何を言いに具象化した訳?」

ユーノのその言葉を聞いた晩翠も、漸く真面目な表情に戻ると具象化した理由を前線メンバーに伝える。

「ああ。そのことなんだが、今回の任務は私がこんなことを言うのもなんだが・・・六課の女性陣や子供には荷が重すぎると思うところだ。」

「と、言いますと?」

「アンゴルモアの対象が呪われた聖剣という以上、いつ犯人に斬られるやも知れぬ。それに、下手に触れて自分が呪われて仲間を斬っても意味がない。お前たちは見たいか・・・意識を乗っ取られた自分の手で仲間を無惨に斬り殺す光景など・・・」

晩翠のその言葉を聞いたなのは達六課の前線メンバーが言われたままの光景を頭に思い浮かべてみた。

その瞬間、誰もが冷や汗をかいて表情を暗くする。

「・・・確かに・・・それは絶対にイヤだな・・・」

「でも、封印処理をすれば大丈夫ですよきっと！！」

「果たしてそれはどうかな？」

「え！？」

ティアナのその確証のない言葉を聞いたユーノがそう口を挟むと、自分の推測を語り出す。

「あの手の剣にはアンゴルモアが関わろうがなかろうが、何れも斬られたものの怨念が宿っている。アンゴルモアはあくまでも剣に宿りし死者の怨念を増幅させているだけに過ぎない。なのは達でも平気で触れるかどうかは断定出来ないよ。」

「では、一体どうすれば！？」

「だからこそ、今回の任務は私が同行をしようと言っているのだ。私なら、剣に宿りし怨念に取り付かれることはない。安心してアンゴルモアの回収が出来る。私もユーノも、お前たちに仲間同士で殺し合うなどと言った真似はさせたくない。」

晩翠とユーノの同様の想いを聞いたはやては、暫く考え込むとその言葉を受け入れそれも踏まえたメンバー選出を考え始める。

「・・・分かりました。ほんなら、今回はそれでいこう。隊長陣もフォワードメンバーもそれでええかな？」

「うん。私はそれでいいよ。」

「私も同感。」

「「「「同じくです。」」」」

「済まないな、無理を聞いてくれて。」

「いえいえ。僕たちのほうも助かりますよ。では、今回は晩翠さんの同行の下・・・ユーノとザフィーラ、それとルキアさん。この四人で行って貰うとする。」

「はっ！」

「心得た。」

「晩翠、つくづく向こうの警察に捕まらないように気をつけなよ。」

「なっ！？お前に言われる筋合いはない！！！」

ユーノの不愉快な発言に思わず激情する晩翠。

そして、選出されたユーノ・ルキア・ザフィーラ・晩翠の四人は転送ポートに乗り込むと今回の任務先である第４６管理世界『ＫＥＮ』と出発した。

今回はルキアも晩翠もユーノが作り出した特殊な義骸に入った状態での任務であるため、少々義骸の居心地に不安を抱いていた。

そして、人目が付かない場所へと無事に到着した四人は早速当たりの様子を目で確認し始める。

「着きましたね。」

「これがこの世界の文明か・・・・・・何だ、あの空を飛ぶ妙な物体は！？」

ルキアはそう言うと、人生で初めて見る巨大な飛行体を指しながら驚愕の表所を見せる。

「宇宙船ですよ♪この世界では宇宙人とのコンタクトによって頻繁に宇宙船が来航してるんですよ。ほら、あそこに見える一際巨大なタワーが見えるでしょ？あれが宇宙船が停泊するターミナルタワーです。」

ユーノはその場から窺える地上本部と同じぐらい巨大な細長い建物、ターミナルを指差す。

他にも、ターミナル近辺の町並みはミッドチルダと大差のないぐらい高層ビル群が立ち並ぶ大都会であり、車も人もそして宇宙船が頻繁に空や地上を走り回っていた。

そんな都会からは離れた処にある庶民が暮らす江戸時代の様子を残す有楽町のような町を歩きながら、道中を闊歩する宇宙人を物珍しいそうに見つめるルキアやザフィーラ。

「異星人のほうも、それなりには居るようだが・・・それ以外は日本の江戸とあまり変わりないな。多少なりとの誤差はあれ、人が住む世界であることは間違いない。」

すると、そんな四人の前を走り去っていく大勢の人々。

晩翠はそれを見るなり、ただ事ではないと直感した。

「お?何だか随分と騒がしいな・・・何かあったのか!?」

「・・・行ってみよう。」

ユーノは四人と供に人々の後に続く形で目的の場所へと向かって行った。

ついた場所は橋の下で藁に包まられている辻斬りの被害を受けた女性であった。

奉行のものが死体の様子を詳しく調べるなか、ユーノ達は野次馬に混じりながらその死体の様子を遠目で窺っていた。

「オイオイ、何の騒ぎでェ?」

「また死体が上がったらしいよ。」

「なんでィまた“辻斬り”かィ。もうこれで何人目だ?」

「狙われてるのは女ばかりだという話だがねェ・・・これじゃ恐ろしくて男と夜遊びにも行けやしないよ。」

「まっ、暫くは家で旦那の相手でもしなってことさね。ははは！！！」

この町で暮らす元女や気の強い女性はそんな談笑をしていたが、聞いていたユーノ達の表情は実に複雑であった。

「・・・辻斬り・・・ユーノ殿これはもしや？」

「その可能性は高いですね。ここは一つ調査する必要があるな・・・晩翠、お前はこの世界での辻斬り事件のことについて詳しく調べてくれ。僕達もそれぞれに分かれて呪われた聖剣について情報散策をしてみるよ。序に、これ以上の被害者が出ないように警備も兼ねて。」

「分かった。だが、気をつけるんだぞ。」

「大丈夫だよ。ルキアさん、ザフィーラさん。行きましょう！」

「分かりました。」

「心得た。」

四人はそう言うとそれぞれに分かれて町中の人間から辻斬り事件・及びアンゴルモアが宿りし呪われた聖剣に関する情報を探し始めた。

操作の方はかなり難航はしていたが、とある質屋に訪れたルキアが店主の女性からある有力な手がかりを掴んだ。

「呪われた聖剣？聞いたこともないね、そんなもん。」

「そうですか。いや実は・・・最近、ある場所から盗まれたとの噂を聞いたものですから、ひょっとしたらこういった場所に置いてあるのではないかと思案しまして。」

一応、公に本当のことを話すわけにはいかないのでその場を誤魔化すためにルキアは適当なことを言って店主を納得させる。

「当てが外れたようだね。生憎家には置いてないよ。まっ、あんたが探してるその呪われた聖剣かどうか知らないが、面白い刀の噂なら耳にしたよ。」

「面白い刀？」

「近頃、ここいらで辻斬りが流行ってるのを知ってるかい？ま、出合った奴はみんな斬られちまってるが、遠目で見た奴が居るらしくてね・・・そいつの持ってる刀が、刀というより“生き物”みたいだったって。」

その情報を頼りに、ルキアはザフィーラと連絡を取り合いある一つの考えに達した。

ちなみに、この考えは一歩間違えば自分の命すら危うくなる危険な賭けであった。

それは即ち、辻斬りに直接接触して話を聞くというものであった。

夜も大分更けて辺りがすっかり暗くなったのを見計らった二人は建物の間に隠れて辻斬りが必ずと言っていいほど出現する河川敷の橋を見ながらその時を待っていた。

現在はザフィーラが一人で辻斬りが来るのを待っていたが、ちょうどその時後ろから差し入れを持って来たルキアが戻ってきた。

「・・・朽木か。」

「差し入れです。よかったらどうぞ。」

「忝い。」

ザフィーラはルキアからの差し入れを貰うと、起用に足を使ってパンを食べ始めルキア自身も牛乳を一口。

「どうですか？辻斬りの輩は現れましたか。」

「まだだ。」

「しかし、本当に大丈夫なんでしょうか。辻斬りに呪われた聖剣のことを尋ねるなんて。まだ呪われた聖剣を所持しているのがそいつとも断定できませんし・・・」

「他にこれと言った手がかりもない以上、止む終えないさ。」

と、そんな会話をしていたときだ。

「あ・・・あの・・・！？」

「「！！」」

二人の不審な行動を見た着物を着た若い女性がルキア達に恐る恐る

尋ねてきた。

「何をされているのですか？こんな夜遅くに・・・」

「いえいえ、私達は別に！あ、あなたこそ・・・こんな夜道をあなたの様な若い女子が一人で・・・！？」

「いえ、あの！私は仕事の帰りなんです！！でも、気をつけてくださいね・・・最近ここいらじゃ・・・」

女性がその次の言葉を口にしようとした瞬間、突如女性は身体を真っ二つにして血の雨を降らせながらルキア達の足元に上半身を倒れこんできた。

驚愕するルキアとザフィーラであったが、そんな二人の目の前についに待ち望んでいた人物が傘を被り刀を振り切った状態で現われこう告げる。

「辻斬りが出るから危ないよ。」

「なっ！？」

「き、貴様は！！！」

ザフィーラは本能的に誰かを守るという意思が働きかけ、ルキアを後ろに蹴り飛ばすと身を挺して辻斬りの刃を受け止めようと思い立った。

そんなザフィーラを見ながら、ルキアは声を張り上げる。

「ザ、ザフィーラ殿！！！！！！」

辻斬りは刀を振り上げるとほくそ笑みながら思い切り刀をザフィーラ目掛けて振り切ったが、その瞬間ゴミバケツの中から出てきた意外な人物の手によってザフィーラは危機を解したのであった。

刀は月明かりを受けながら宙を舞い、地面に突き刺さる。

そして、ゴミバケツの中から現れるその人物の姿を目撃したルキアとザフィーラは驚愕の表情を浮かべる。

「やれやれ。聖剣を捜してこんな処まで来てみれば・・・・・・どっかで見た面じゃないか。」

「ゆ・・・ユーノ殿！！」

「スクライア、お前はこいつを知っているのか！？」

「・・・ええ。知ってますよ・・・よ～く知ってます・・・」

すると、眉間に皺を寄せながら自分のことを見つめるユーノを見た辻斬りも傘を脱ぎ捨ててその顔を三人にさらす。

「ホントだ。その女みたいな匂い・・・何所かで嗅いだことがあるね・・・」

辻斬りの正体は盲目の浪人であったが、ユーノ自身は四年前に違う形で接触したことがあったらしく、心境は複雑であった。

「やっぱり。お前だったのか・・・出奔した元護廷十三隊二番隊第

三席にして、隠密機動屈指の居合いの達人・・・金丸彦斎（かねまるげんさい）・・・」

「何だと!?まさか、件の辻斬りが死神の仕業だというのか!?それにユーノ殿も・・・何故こやつのことを御存知で!?」

「昔、一護さんと修行で遠出したときに襲われたことがありましてね・・・どうも形振り構わず色々斬り捲くってるらしいですよ・・・正しく、人間が抱いている本物の“死神”のように・・・」

ユーノはそう言うと、刀を拾い上げた金丸の方に近付き同じく杖を取り出し始解状態で待機する。

一方、金丸の方はというと不気味な喋り方でユーノとの再会を喜ぶ。

「うれしいねェ。まさか、こんな世界（ところ）で昔殺し損ねた奴にお目にかかれるとは・・・今は斬魄刀は持ってないが、新しくこいつを手に入れてち¥よ・・・何でも災いを呼ぶ妖刀と聞いていたがね・・・どうやら強者を呼び寄せるらしい。ユーノ・スクライア・・・以前と比べて大分力をつけたらしいね・・・そう考えると、俺にとっては吉兆を呼ぶ刀かもしれん。」

「ふざけた事をぬかしおって、死神としての誇りはないのか貴様には!!」

すると、ルキアのその言葉を聞いた金丸は三人が思いもつかぬような発言を口にする。

「死神としての誇り・・・?勿論あるに決まってるじゃないか・・・“人の命を刈り取る”という誇りがね・・・」

「腐ってるな・・・お前。」

「腐ってても結構。どうせ腐るならとことん腐った方が気持ちが軽くなるよ。そう言やアンタ・・・何だか随分と血色が良くなってるそう言う匂いじゃないか?前嗅いだときは心が死にかけていたのに、今はまるで別人のようだね。女・・・でも出来たのかい?そりゃ元気にもなるさな・・・でも驚いたね。女みたいな匂いを漂わせるアンタに寄ってくる女も珍しいね。」

「なのはのことをそれ以上侮辱するな。お前なんかに何が分かる!」

「なのは・・・?それがお前さんの女の名前かい?いい響きだよ・・・斬ってみたいね。俺もおニューの刀を手に入れて気分が昂ぶっているものでね・・・是非ともお願いす・・・」

と、その瞬間ユーノは晩翠を振り上げて金丸のほうに走り出し斬りかかって行った。

ユーノの表情と口調からはなのはを侮辱したことに対する怒りが滲み出ていた。

「何度も同じこと言わせんじゃねーよ。てめーみてーなただの人殺しに、なのはをこれ以上侮辱することは赦さねえ!!」

「ククク・・・何時にも増して血走っているね・・・余程その女のことが大事だと見た。だからこそ斬ってみたいのさ・・・アンタと一緒にそのなのはって女のことも。俺とコイツが・・・なア・・・『夷綱(いづな)』よ。」

すると、その瞬間ユーノの斬撃を受け止めていた刀に集まるように

金丸の右腕から出てくるコードのようなものが刀を包み込んでいく。
その異様な光景を目の当たりにしたユーノとルキア、ザフィーラは驚愕の表情を浮かべるのであった。

「「「な！」」」

その頃、三人とは別に辻斬り事件に関して黙々と調査を続けていた晩翠は一人港の方まで来ると自分の力の根源でもある月を仰ぎ見ながら独り言を呟いていた。

「すっかり夜が更けてしまったな。この世界における一連の辻斬り事件に関して色々調べては見たが、皆共通して返ってきたのは生き物のような刀であったということ。呪われた聖剣・・・生き物のような刀・・・考えれば考えるだけ頭が混乱してくる・・・今日は一度返って出直すとでもする・・・ん？」

その時、晩翠は目の前の港を通り過ぎる謎の船の姿を確認する。

「何だ・・・あの船は！？」

すると、晩翠の後ろの方から複数の浪人たちが集まりこんな話し声が聞こえてきた。

「おい！どうだ、見つかったか？」

「駄目だ。これは例の病気が出たな・・・金丸さん。」

「何処かの死神にやられてから暫く大人しかったのに・・・」

「やっぱ危ねーよ、あの人・・・この間も女の首を刈り取って来たなんてぬかしてたし。」

「どうすんだ!?お前らがちゃんと見張っておかないから!あれの存在が明るみに出たら・・・」

「取り合えず、船に戻って出直そう。」

周りの景色と同化して姿を隠していた晩翠は浪人たちが居なくなったことを確認すると、先程通り過ぎて行った謎の船に乗り込み行動を起こそうとした。

「・・・こんなところでまさかこんなビックニュースが舞い込んでくるとは・・・私の運もまだまだ捨てたものじゃないな。よし、私も乗り込むと・・・」

だが、その時晩翠は遠く離れたところから感じる自分の主であるユーノの霊圧の尋常ならぬ揺れを察知して血相を変えた。

「!!この霊圧は・・・ユーノ!!」

その頃、ユーノのほうはと言うと盲目の死神金丸彦斎の使う謎の刀の脅威に防戦一方の状態であった。

完全に金丸の右腕と同化し、刀の形を成しえないその代物に圧倒的に不利な状況に立たされているユーノ。

「ぐっ!!」

ユーノは金丸の斬撃を受け流すと、橋の方へと走り攻撃を回避しよ

うとしたが・・・金丸は空の上からユーノ目掛けて斬りかかって来た。

「そこ!!」

途轍もない破壊力の斬撃がユーノを遅い、橋は陥没し浅い川の中へと落ちるユーノ。

「ぐふ!!がべべ!!」

水浸しになりながら苦戦するユーノを橋の上で見ながら不気味な笑みを浮かべる金丸。

「おかしいねオイ・・・アンタもっと強くなったはずだろ?」

すると、ユーノはもう一度金丸の右腕と同化を果たしているその刀の姿を見ると、ある刀の事を思い出し自分に向って来る金丸に確信を以ってこう発言した。

「・・・・おかしいね、オイ。お前それ本当に刀かい?斬魄刀を捨てておニューの刀に切り替えたって?冗談じゃないよ!こいつは“呪われた聖剣”なんて代物じゃない・・・こいつは・・・“獏(ばっ)交刀(こうとう)”じゃないか!!」

その瞬間、再び始まる河川敷における二人の激しいぶつかり合い。

「ユーノ殿!!!」

「スクライア!!!」

二人の戦いの様子を不安げな表情で窺っていたルキアは、ユーノが口にした獏爻刀という言葉を聞くなり信じられないとばかりの表情を見せる。

「（莫迦な・・・“獏爻刀”だと・・・!?あれは１０年前、一護達と供に完全に消滅させた筈!?だがこの独特の禍々しい霊圧・・・そして、あの手と同化した刀の形・・・あれは紛れもなく獏爻刀・・・!!）」

ユーノは隙をついて金丸の足を狙うと、バランスを崩して自分が有利な状況を作り出し刀を振り上げる。

「!ぐっほ!!」

「喧嘩は剣だけでやるものじゃないんだよ!一護さんからの教えだ!!」

「ふん・・・」

すると、その時金丸の腕と同化した獏爻刀『夷綱』から伸びる特殊なコードがユーノの振り上げた晩翠を絡めとり動きを封じる。

「!!何!?」

「“喧嘩”じゃない・・・“殺し合い”だろうよ・・・」

金丸は不敵な笑みを浮かべるとユーノの持つ晩翠の刀身を夷綱の渾身の一振りで真っ二つに折ると、そのままユーノを石造りの壁へと激突させる。

「のあっ！！」

「ユーノ殿！！！！！！」

「スクライア！！！」

ユーノの危機的状況に思わず叫び声を張り上げるルキアとザフィーラ。

ユーノは痛みを堪えながらその場から立ち上がり、金丸の方を見る。

「ぐっ・・・（野郎・・・前にあったときは全然レベルが違う・・・最早死神の力じゃない！）」

と、その時ユーノのいつの間にか着られた箇所から吹き出る血吹雪。

それを見たユーノは驚愕の表情を浮かべると、かなり深刻な様子を見せる。

「・・・オイオイ・・・これは危な・・・」

すると、その瞬間不意を付いた金丸の止めの一撃がユーノの身体に突き刺さり辺りは沈黙し、それを見ていたルキアとザフィーラも口から血を吐き出すユーノの姿を見るなり顔を真っ青にした。

「（・・・ウソ・・・嘘だ・・・ユーノ殿が・・・ユーノ殿が・・・ユーノ殿が・・・ユーノ殿！！）」

辛うじて両腕で夷綱を受け止めている瀕死状態のユーノに、金丸は不敵な笑みを浮かべながら独断を始める。

「後悔しているかい？以前、俺とやり合った時何故殺しておかなかったと。俺を殺しておけば、アンタも今迄の犠牲者もこんな目には遭わなかった。全てはアンタの甘さが招いた結果だ・・・翡翠の魔導死神。さぞかしガッカリだよ・・・ちょっとは期待していたのにこんなものかい？アンタ達みたいな弱い魔導師がいるからスカリエッティなどという奴に足下をすくわれる。護廷十三隊の死神とて同じことよ・・・秩序だ節義だ、下らんものは我々には必要ない。我々に必要なのは敵を容赦なく斬り捨てる力のみさね。剣の折れたアンタはもう魔導師でも死神でも何でもない。惰弱な戦士は、この世界から消えるがいい・・・」

すると、ユーノは薄ら笑いを浮かべると血塗れの身体に突き刺さる金丸の夷綱を両腕でしっかりと握り締めると、驚愕の表情を浮かべる金丸にこう語り出す。

「！」

「剣が折れたって？剣ならまだ在るよ。とっておきのがもう一本。」

「！！（抜けな・・・）」

すると、その瞬間・・・月夜の空から金丸の下に降ってきたのは晩翠を両手で握り締めたまま怒りの表情を浮かべる『晩翠』であった。

「だあああああああああああああああああああああああああ！！！！！！！！！！！！！！！」

「晩翠殿！？」

驚愕するルキアとザフィーラを他所に晩翠は右腕と同化した夷綱を腕ごと斬り落とした。

腕を斬り落とされた金丸は特に痛がる様子も見せずに呆気ない返事を晩翠に返す。

「ア～ララ～～～腕が取れちまったよ。酷いことするね、アンタ。」

「それ以上来てみろ!!ユーノに近付くというのなら、次は左手を貰う!!」

『晩翠』はユーノを必死で守ろうと、晩翠の両手で握り締めたまま金丸を物凄い剣幕で睨み付ける。

すると、その時この世界の奉行所の者達が騒ぎを駆けつけ金丸の下にやってきた。

「オイ!そこで何をやっている!?」

「チッ。うるさいのが来ちまった。勝負はお預けだな・・・まァ、また機会があったらやり合おうや。」

金丸はそう言うと、斬り落とされた夷綱を残った左腕で拾い上げると晩翠の前から走り去っていった。

「追え!!待てェェ!!」

奉行所の者達は逃げて行った金丸を追いかけていく。

その間に、ルキアとザフィーラ、そして晩翠の三人は重傷を負い血

塗れになって倒れる瀕死状態のユーノに声をかけ、意識を確認する。

「ユーノ！しっかりしろ、ユーノ！！」

「ユーノ殿！！御気を確かに！！」

「スクライア、大丈夫か！？」

すると、晩翠の顔を見ながら汗だくになっているユーノが次のように語る。

「ヘッ・・・へへ・・・晩翠・・・お前はやっぱり優しい奴だと思ってたよ・・・」

ユーノはそれだけを言い残すと、意識を完全に失い眠りに入ってしまった。

「ユーノ・・・ユーノ！！」

意識を失ったユーノに向って悲しみの声を上げる晩翠。

空の上には何も知らない満月が今日もそんな三人を照らしていたそうだ。

呪われた聖剣（後書き）

教えて、ユーノ先生！

ユ「今日は、何か僕が大変なことになっちゃたけど構わずコーナーはやり続けるよ。今回は晩翠のプロフィールについてだ♪」

ユ「身長１９０センチ。体重８０キロ。常に髑髏が欠けたような眼帯を右眼にし、深緑の外套を羽織る黒ずくめの服を着た男さ。」

ユ「ああ見えてオッサンという言葉に敏感で、自分の見た目を知ってか知らずか若いと勘違いしてるらしい。」

晩「勘違いしているのはお前の方だ。こう見えても、私はお前と同い年なのだぞ。ふふ・・・漸く私の大活躍が期待できそうだな・・・次回から！晩翠異聞篇がスタート！乞うご期待！！」

ユ「始まらないよそんなの・・・それにこの小説のタイトル知ってるの？ユーノ・スクライア外伝だからね・・・ユーノ・スクライア外伝！！」

魔導師図鑑ハイパー！

ヴィヴィオは現在、ユーノにこのことについて教えられている。

ユ「ヴィヴィオ。今日は、これについて説明するよ♪」

そう言って取り出したのは、死覇装が描かれた巻物。

ユ「死覇装とは、死神が戦闘時に着用している魔導師で言うところのバリアジャケットと同じだよ。和服をそのまま黒一色にしたものと考えたほうが一番分かりやすいかな♪意外と動き易い構造になってるんだけど、強度はそれほど高くないんだ。」

ヴィ「へえ、成程！そうだったんだ。ところで、ユーノパパ。」

ユ「何だい？」

ヴィ「ユーノパパにも死神の力あるんでしょ？死覇装を着たところを見たことが無いんだけど・・・」

ユ「・・・・・・」

すると、暫くの沈黙の後・・・ユーノは瞬歩でその場から消え去る。

ヴィ「あ、ユーノパパ！！」

斬魄刀と猟爻刀（前書き）

晩翠を描いてみました。

意外と渋かったな・・・

斬魄刀と獏爻刀

＞ｉ１３２６８―７０９＜

獏爻刀・・・・・所有者の霊力を喰らうことで、その力を際限なく向上させる反面、時に所有者そのものを死に追いやるという霞大路家の秘術を以って造られた恐ろしい妖刀。

第４６管理世界『ＫＥＮ』を訪れ、今回のアンゴルモアが取り付いていると言う別名『呪われた聖剣』の捜索に尽力していた私達の前に現れたその呪われた聖剣・・・もとい、獏爻刀『夷綱』を使い辻斬りを行っていた、元二番隊の第三席・・・金丸彦斎。

激しい戦いの末、瀕死の重傷を負ってしまったユーノ。

何故、金丸が獏爻刀を所持しているのかは分からぬが・・・・・・今回のこの事件、嘗て経験した中でも、かなりの危険が身にまとうことは間違いないだろう。

瀕死の重傷を負ったユーノを連れて、一度六課へ帰還した晩翠達三人。

シャマルの必死の治療によって、一命を取り止めたユーノであったがかなりの重症を追ったことに間違いはなく、不安げな表情を浮かべるなのはの横でユーノは眠り続けていた。

シャマルはそんななのはにユーノの体のことを伝える。

「取りあえずは大丈夫かしらね。傷は結構深かったけど、ユーノ君の命には別状はないかな。でも、当分は動かないほうがいいわ。」

「そうですか・・・ありがとうございます・・・シャマル先生。」

「ちょっと薬とって来るから、なのはちゃんはユーノ君の傍に居てね。」

「はい・・・」

なのはは寝ているユーノの手を握り締めたまま、早く意識を取り戻してくれることを祈りその握った手をずっと離さなかった。

その頃、指令室の方に集まった前線メンバーの前で一人激しい怒りと悔しさを露にするユーノの斬魄刀の本体、晩翠。

「くそ!!私としたことが・・・何故もっとユーノの下に急ぐことが出来なかった!!私はあいつの斬魄刀のくせに何をやっていたのだ!!」

「晩翠殿・・・少し落ち着いてください。責めていても何も解決しません！」

「なっ！？す・・・済まない・・・」

ルキアノ言葉を聞いた晩翠も一端気持ちを落ち着かせようとするが、心の奥底から巻き上がる悔しさは消化できないままだった。

すると、ザフィーラがルキアに対して次のような質問をしてきた。

「ところで、朽木・・・一つ聞いてもいいか？あの時スクライアが口にした、獏爻刀とは如何様なものなのだ？アンゴルモアの反応が検出されたのは間違いないが・・・不吉を呼ぶ妖刀とか、呪われた聖剣などといった生易しい代物ではなかったぞ。」

「「！？獏爻刀だと！！」」

ザフィーラの口から発せられた信じがたい言葉に思わず恋次よ吉良は驚愕の表象を見せる。

それを見たはやてや他のメンバーも怪訝そうな顔で二人を見つめる。

「何や？恋次さん達も知っておるんかいな！？」

「教えてください！その獏爻刀と呼ばれる刀の正体を・・・私達にでも分かるように！」

フェイトや他のメンバーの表情を窺い、顔を見合わせた三人。

そして、話すことを決心した三人はルキアから順に説明を始めたの

であった。

「・・・獏爻刀とは、尸魂界の名門貴族、霞大路家（かすみおうじけ）の秘術で作られた刀剣で持ち主によって刀の種類が異なる斬魄刀とは違い、持ち主が異なっていても所有することができる代物だ。刀そのものが持ち主の霊力を吸収することで、能力を引き出し、力を増大させることができる。また、より強力な霊力を持つ者が所有すれば刀自体の真の力を引き出せるが、その反面さらなる強化のために刀に力を喰らわれつづけると所有者自身が爆発または焼失するという副作用もある危険な代物だ。」

「１０年前、俺達はその獏爻刀を使って影で霞大路家を乗っ取ろうと画策していた霞大路家の黒幕、雲井尭覚（くもいぎょうかく）の手により、一時期大変な目にも遭った。だが、俺達はあの時確かに獏爻刀の製造法も残っていた獏爻刀も全て消去したはずだがな・・・」

「・・・天貝隊長のも含めてね・・・」

この時の吉良の表情は複雑だった。

吉良の言う天貝とは、１０年前に当時空席だった三番隊の穴を埋めるために遠征隊で実力をつけて伸し上がってきた当時の三番隊隊長であった天貝繍助（あまがいしゅうすけ）のことで、実際は霞大路家でのお家騒動の影の黒幕であり、裏で霞大路家の雲井と結託し、獏爻刀に手を染めていたが、最後は自らの斬魂刀の力によって自害する。

一方、恋次達が獏爻刀に関する情報を前線メンバーに伝えている間、第４６管理世界『ＫＥＮ』の港で偽装して停泊をする船の中で、負傷した金丸や彼の仲間である武田・黒頭の二人が夷綱片手に黙り込んだままの金丸と話をしていた。

最初に話を切り出したのは謀略家でもある武田であった。

「こっ酷くやられたものだな。夷綱を勝手に持ち出した上にそれほどの深手を負って逃げ帰ってくるとは・・・腹を切る覚悟は出来ているのか金丸?」

「片手を斬り落とされてもコイツを持ち帰ってきた勤勉さを評価してもらいたいものだな。こいつにも良い経験になったとは思うんだがね・・・?」

すると、そんな金丸に徐に近付き眉間に皺を寄せる金丸の弟子である黒頭。

「師匠の最近の身勝手ぶりは目に余る物があります。時空管理局や、尸魂界の死神に獏爻刀の存在を知られたらどうするつもりですか?師匠・・・行動を慎んでくださいよ。しかも、狙ったのはユーノ・スクライア?そんな管理局を刺激するような相手を狙って、一体何考えてるんですか?師匠・・・自分がそんなに強くなったと思ってるんですか?勘違いも甚だしいですよ。師匠が勝てたのは、全てはその夷綱のおか・・・」

と、黒頭がまだ何かを言いかけたその時。

突然、金丸の左腕から例のコードが飛び出してくると黒頭の首を締め上げ始める。

「ぐっおおお・・・!!」

何が何だか把握出来ずにただ首を絞め続けられる黒頭は必死にそれ

を解こうともがき出し、そんな黒頭を見ながら金丸は不敵な笑みを浮かべてこう告げる。

「おっと・・・悪く思わないでくれ・・・最近はすっかり侵食が進んじまってるみたいでね・・・もう俺の体を自分のものと思ってるらしい。俺への言動は気をつけな。」

そう告げると、自然と黒頭の首を締め付けていたコードも解けて黒頭はどうにか窒息死を免れることが出来た。

「ぐっ!!」

「金丸・・・お前!?」

金丸の侵食の具合に危惧の念を抱く武田。

すると、金丸はふとこんな事を語り始めた。

「どうにも目障りなんだよ。時空の平和だの、魂魄の調整などと言ったそんな下らないものの為に戦う魔導師も死神も全部だ。目障りなんだ・・・邪魔なんだよ・・・秩序も平和も何もいらない・・・破壊こそが全て!俺達はそのために集まった。そして、最後の獏爻刀・・・夷綱を使って世界の全てを壊す。そして俺達は伝説となる・・・ふふふ。」

再び場所は戻って機動六課。

長らく眠り続けていたユーノであったが、漸く意識を取り戻し目を覚ました。

「う・・・・・」

ユーノが徐に目を開けたとき、学校から帰って来たヴィヴィオがユーノを見つめていた。

「あ！ユーノパパ・・・気がついた！？」

「ヴィヴィオ・・・ということは・・・」

すると、ユーノの自室のドアが開き中に入って来たのはなのはであった。

「そう。六課のユーノ君の部屋・・・・・・」

「なのは・・・・・そうか・・・金丸にやられたんだっけか・・・お、ヴィヴィオ・・・？」

ユーノが暗い表情を浮かべながらふとヴィヴィオのことを見た瞬間、ヴィヴィオは声を殺して涙を流していた。

そして、怪訝そうな表情で見つめるユーノに向ってヴィヴィオは思いの丈を全てユーノに吐き出したのであった。

「ユーノパパ・・・どうして・・・そんなに酷い怪我して返ってくるの！？どうして！！どうして私やなのはママ・・・それにみんなのことをこんなに心配させるの！？もしもユーノパパが死んじゃったりしたら・・・なのはママやヴィヴィオはどうなるの！！！」

ヴィヴィオの自分に対する思いの丈を一言一句聞き逃さず聞いていたユーノの心境は実に複雑且つ罪悪感でいっぱいだった。

「ヴィヴィオ・・・・・・」

なのはは泣き崩れるヴィヴィオをそっと自分の方へと抱き寄せると、優しくヴィヴィオの背中をさすりながらユーノにこう口にした。

「ユーノ君・・・・・・少し、お話聞かせてくれる・・・あの時何があったのか・・・」

「・・・うん・・・分かった・・・」

その頃、指令室で話し合いをしていたはやて達の方はというと・・・恋次達が尸魂界から持ち帰って来た今回の事件の首謀者、金丸彦斎の情報に関すること全てを赤裸々に話していた。

「“金丸彦斎”。その死神が、今回のユーノの負傷と一連の辻斬り事件に関する重要人物だと!?」

「ああ。俺達も、尸魂界の方に問い合わせて色々調べたんだが・・・どうやらそいつで間違いなさそうだぜ。でも、まさか・・・犯人の正体が俺達と同じ死神だったとはな。」

「それに、金丸彦斎と言えば・・・凄腕の居合いの達人ではあるが、不要な殺人を繰り返してその挙句隠密機動で粛清されそうになった所を、逆に帰り討って尸魂界を逃走。そんな奴が何でアンゴルモアが取り付いた獏爻刀を所持してこのようなことを・・・!?」

「兄様から聞きだした情報によれば、金丸は自分以外にも同じ出奔した死神である元三番隊出身の謀略家、武田貫流。技術開発局出身の白連(パオ・レン)。そして、金丸の弟子である黒頭亮雲(くろずりょううん)を中心に、『唐傘(からかさ)』を

復活させたと聞く。」

「唐傘！？」

「嘗て、金丸が隠密機動で率いていた独自の部隊さ。任務達成率もほぼ１００パーセントの凄腕の連中だって聞いたぜ。金丸は、何所かで手に入れた獏爻刀を密かに大量に作り出し、そいつを使って異世界の各地で破壊の限りを尽くすのが奴の狙いだろう。」

「何にせよ、このまま奴らの好き勝手にさせる訳にはいかへんよ。」

「直ちに本局に連絡を入れて、緊急会議を執り行わなければ。唐傘の思い通りにはさせてたまるか。何としてもここで食い止める。」

その後、クロノとはやては前線メンバー各位と本局の重役達と連絡を交わすと今回の大規模犯罪の発生を警告、対応策を講じるのであった。

また、同じ頃自室で眠っていたユーノのほうも泣き疲れてすっかり眠るヴィヴィオを一瞥しながら真剣な眼差しで話を聞くなのはに概ねのことを伝えたのであった。

「・・・事情は大体分かったよ。ユーノ君も、とんでもない人に目を付けられていたんだね。金丸は、この後どうするつもりだろう？」

「大方、獏爻刀を大量生産して世界各地で大規模な破壊活動をする筈だよ・・・」

そう言うと、ユーノはなのはの方を見るなりふとこのようなことを口にした。

「・・・なのは・・・もしかして・・・いや、確実に怒ってる?」

また、ユーノがなのはとそのような会話をしていた同時刻、晩翠は一人ユーノが動けない代わりに敵地に乗り込もうと雨が降りしきる港まで来ていた。

晩翠は建物の陰に隠れながら船の周りを徘徊する複数の浪人たちの動きを警戒していた。

「(ユーノが動けぬ以上・・・ここは私が何とかするしかない。あの船から感じる霊圧は・・・間違いなく昨日の辻斬りの・・・しかし、この状況はどうする?何やら浪人共がうようよしておるし、私のこの姿もあまりに目立ちすぎる・・・事態打破をするにはどうすれば・・・ん!?)」

と、その時晩翠は浪人の格好をして狼の耳を生やした極めて不自然な姿のザフィーラを目撃し、思わずドン引きしてしまう。

「(何か変な耳の生えた変体がいる!?)」

晩翠が船への侵入方法を模索している頃、船の中を歩いていた黒頭は首元を手で軽く押さえながら眉間に皺を寄せ独り言のようにこう呟いていた。

「おえ!!あ、痛た・・・師匠め、調子に乗りやがって・・・(あの剣・・・ホントに大丈夫なんだろうか?何だかとても危険なものに感じたけど・・・!?)」

そんな時、黒頭は何時の間にか白連が獏爻刀を大量に製造している

工場兼研究室の方へと足を踏み入れていた。

黒頭が入ってきたことを確認した連は振り返るなりこう口にする。

「おや?君が此処に来るとは珍しいね・・・」

「連さん・・・一人で何してると思えば、夷綱のほうはどうです?」

「おおよそのデータは採取したから、あと12時間もすれば完成だよ・・・」

連はそう言うと、目の前で怪しげな液体に満たされている獏爻刀『夷綱』が納められたケースに手を触れる。

「しかし、これだけあると返って不気味だぜ。まぁ、不気味なのははこいつをこんな短期間で作ってしまうあんたのほうかもしれないけど・・・」

「褒め言葉として受け取っておくよ。私の技術力をもってすればこの程度のことは造作もないよ。はぁ~~~早く完成しないかね・・・このしなやかな刀身の色合い・そして全てを切り裂く刃。この私の最高傑作である夷綱に・・・切れぬものはない!!」

その頃、浪人の格好に変装していたザフィーラはやはりとばかり浪人たちに勘付かれ質問攻めに合っていた。

「おい!何だ貴様!?」

「怪しい奴め!!」

「こんな怪しい奴は生まれて始めて見るぞ。」

「怪しい奴を絵に描いたような奴だ！」

晩翠は物陰でザフィーラを見ながら、何を考えての行動なのはかを疑問に思っていた。

「（ちょ、何をやっておるのだあの人！あ、人じゃなかった。おい、ザフィーラ！？あっ！！そんなことより、殺られる！？）」

そう思った瞬間、ザフィーラは不適笑みを浮かべると魔法陣を発動させる。

すると、港で停泊していた金丸達の船が突然爆発を起こした。

そう、これはザフィーラの得意とする魔法の一つ『鋼のくびき』である。

中にいた船員を始め、研究室やトイレなどにいた武田・黒頭・そして連の下にも衝撃音と供に振動が伝わり危機感を抱かせる。

「これは・・・！？」

「爆発！？まさか・・・襲撃か！？」

一方、ザフィーラの能力を見た瞬間驚きの余りを腰が抜けてしまった浪人二人。

すると、そこへ仲間の浪人がやってきて仲間に危機を知らせる。

「な・・・何してんだてめぇ!?曲者!!曲者だ!!」

ザフィーラの想定外の行動に思わず衝撃を受ける晩翠。

「ザフィーラ!!お前!?」

すると、そんな晩翠の姿を見たザフィーラは低い声で船の中へ進むよう助言をする。

「先に行ってください、晩翠殿。スクライアの為にも・・・・・・」

「・・・ああ。任せたぞ、狼男!!!」

晩翠はザフィーラの言葉を聞くなり、港で偽装された例の船に向って乗り込んでいった。

晩翠の最後に自分に向って口にした狼男という言葉に思わず鼻で笑ってしまうザフィーラ。

「・・・ふん。そのフレーズで呼ばれるのは久方ぶりだな。」

一方、また場所は変わって機動六課のユーノの自室。

先程のユーノの言葉を聞いたなのはは複雑な表情を浮かべながら質問の答えを口にする。

「当然だよ。こんなになるまで無茶ばっかりやって・・・私が前に同じようなことで大怪我して、みんなに迷惑かけた時と全く一緒だよ。」

「・・・うん・・・」

「・・・でも・・・ちょっとだけ、安心したりもしてるかな。」

「え？」

「行くんじゃないかと思ったりもしたから・・・そんな身体でも。私達の目を盗んでこっそりと。」

「・・・・・・――――――」

「そんな身体で行っても、死んじゃうだけだからね・・・」

「・・・そうだね・・・」

「・・・ユーノ君・・・あんまり無茶をするのはもう止めてね。ユーノ君がいなくなったら、私もヴィヴィオも・・・それに皆も寂しがるから。」

なのはの言葉を聞いたユーノはふとなのはから顔を逸らすように背中を向けて寝返りを打つ。

「昔はユーノ君も私も若気のいたりで色々やんちゃやってたかもしれないけど、もうそんな事する歳じゃないよね？」

「・・・・・分かってる。少し眠るから、なのはは皆の所に行って晩翠達のサポートを頼むよ。」

「うん。じゃあ、私行くね・・・」

なのはがユーノの下から去って行ったことを確認すると、ユーノは静かに寝返りを打ち徐に起き上がると、寝ているヴィヴィオを起こさないように立ち上がり修復したばかりの仕込み杖と何時もの三点セットを身に纏い、こんなことを呟いた。

「御免ね・・・なのは・・・ヴィヴィオも・・・御免ね・・・」

ユーノは仕度をし終えると、自室から出て行きみんなに気付かれぬようにこっそりと転送ポートの方へと歩き出した。

「僕だってこんな歳でやんちゃなんかしたくないけどさ・・・晩翠を一人で行かせるわけにはいかないよ・・・お!?」

と、その時・・・・・ユーノの目の前に居たのはやっぱりと言ったばかりの表情で自分を見つめる些か神妙な顔つきのなのはであった。

「・・・やっぱり・・・行くんでしょ?用意してあるよ・・・転送ポート。はやてちゃんからはちゃんと許可を取っといたから。命令を無視してでも、自分がどうなろうと・・・大切な人を助けに行くってユーノ君が決めたなら、私は止めないよ。その代わり、絶対に私達のところに戻ってきて。約束だよ・・・」

「・・・うん。約束する・・・必ずなのはとヴィヴィオ達の下に帰ってくるって。」

ユーノはなのはにそう断言すると、不安げな表情を浮かべるなのはの口元にそっと自分のを重ね、転送ポートの中へと消えていった。

ユーノを見送ったなのはは、ユーノとキスした感触を忘れぬように

指を唇に当てながらユーノが無事に帰還することを心の底から祈ったのであった。

「（ユーノ君・・・約束だよ・・・絶対に帰って来てね！）」

その頃、港で停泊していた金丸達の母船はと言うと突如頭上から何者かによる砲撃を受けるという緊急事態を迎えていた。

先導に現れた金丸を慕う部下達が様子を見に来る。

「何だこの騒ぎは！？まさか政府の犬に勘付かれ・・・！！」

「いや、違う！！あれは・・・！？」

すると、一人の男が頭上に浮かぶ四艘の戦艦に気付き指を差した。

その戦艦は明らかにこの世界のものではなく、時空管理局本局が誇る最新型の千間ばかりが頭上に浮かんでいた。

そして、その時一艘の戦艦から聞こえてくる艦長と思わしき女性の声。

『そこまでです！私は時空管理局本局、リンディ・ハラオウンです！貴方方の今回の行動を黙って見逃すわけにはいきません。件に於ける辻斬り事件の犠牲は極めて甚大です。よって、あなた方全員を時空管理局法・次元破壊及びその行使の為の禁止兵器密輸・製造と大量虐殺の罪で逮捕します。尚、貴方方の母船も今此処で破壊させていただきます。大人しく我々に拘束することを要求します。さもなければ・・・』

と、次の瞬間。

リンディが率いる四席の艦隊に向けて敵側が反抗の姿勢を取って砲撃を開始し始めた。

砲撃の一発を喰らい、揺らぐ艦内。

「ぐっ！！あくまでそう言う態度で出るわけね・・・いいわ。こちらも攻撃開始！発射！！」

言動による交渉は不可能とした判断したリンディは金丸達の母船目掛けて同じように砲撃を発射する。

また、母船のトイレから出て来た武田と黒頭は部下からの報告を受けると直ぐに船を浮上させ発進させるよう指示する。

「何・・・時空管理局が！？直ぐに船を出す準備を・・・このままでは上空から狙い撃ちされ撃沈される。」

「ち！面倒くさいことになりましたね・・・師匠が余計なことをしなかったら、こんなことにはならなかった筈だ。」

「それもまたいた仕方ない。しかし、夷綱の正体が露見した以上事を急がねばならない。何が何でもほぼ１００パーセントの確率で目的は完遂する・・・それが唐傘だ。」

また、船内が慌しく揺れ動いている中主犯である金丸の方は一人別の場所で侵食が進む夷綱に苦しみながら痛みを堪えていた。

「うっ・・・！！はっ、はっ、はっ、はっ！！」

すると、そんな金丸の下にやって来る夷綱の開発者である連。

「ふむ・・・どうやらかなりのお苦しみのようだ。少しいいかね？」

金丸は連の言葉を聞くと、黙ったまま振り返り再び侵食される腕を押さえる。

「君のお客さんだ。色々派手にやってるようだよ・・・お陰で世界とやり合う前に、最大の敵・・・時空管理局とやり合うことになってしまったよ。」

「ふん・・・」

「翡翠の魔導死神・・・をやり損ねたらしいね。それで、それだけの傷を受けておきながらデータはちゃんと取れたのかい？夷綱もさぞ喜んでいることだろうよ・・・他の猟爻刀と違い、夷綱は強さだけを求めるかなりのじゃじゃ馬だよ。」

すると、その瞬間連は腰に指していた刀を抜くと大きく振りかぶって金丸の下に刃を振り下ろしていった。

その瞬間、夷綱と同化した金丸の右腕が本能的に反応すると連の刃を受け止める。

「・・・ほう・・・立派な腕が生えたではないか。文字通り一心同体という奴だね。仲良くやっているようで安心したよ・・・さっさと動きたまえよ。私は夷綱の最終調整に入らねばならないのだよ。」

些か表情が苛立った感じの連は刀を納めると静かに金丸の下を去っ

ていく。

「・・・ふん・・・知った口を。」

その後も、外のほうでは空へと浮上して逃走を続ける金丸達の母船とリンディ達管理局本局の次元航行船による激しい衝突が行われていた。

両者は一歩も引かずこのまま勝負は持久戦に持ち込まれるかとさえ思っていたが、一気に選挙区を変える出来事が起こったのはこの後だ。

夷綱と右腕を完全に同化させた金丸は宙を滑走することが出来るホバーバイクに乗り込むと、母船のハッチを開けてリンディ達の戦艦へと向かって行った。

戦艦内部でその様子を見ていたリンディ以外の艦の局員は驚愕の表情を浮かべる。

「何じゃあれは!?」

「あ、あれは金丸・・・!!金丸彦斎!?」

「たった一人で何をするつもりだ!!撃て!!撃ち落してしまえ!!」

金丸の姿を目の当たりにしたその艦の艦長は直ぐに金丸に向って砲撃を始めるが、目標が小さすぎて小回りの利く金丸の動きに翻弄され続けた。

金丸は一度急上昇すると、狙ってきたその戦艦を見るなり舌を嘗め回し、夷綱を構えるや否や全速力で戦艦のほうへと声を張り上げながら突っ込んでいった。

「うおおお

「ぬおおお

「なっ！？」

「ほう・・・お前は確か翡翠の魔導師の斬魄刀の・・・！？」

武田がそう言うと、その人物は自らの名前を二人に向って口にする。

「晩翠だ。」

一方、金丸の猛攻に苦戦していた本局の次元航行部隊と形振り構わず戦艦を斬り下そうと突っ込んでくる金丸。

「うおおお

『三番艦、高度不能！！総員退避せよ！！！！総員退避せよ！！！！』

爆風を巻き上げながら沈んでいく次元航行船から次々と脱出をしていく艦内の局員達。

金丸は一度Uターンをすると、次の標的を目指して向っていく。

「ふふ、どうだい？この夷綱と供にこの下らない世の中全てを無に帰してやるよ。全てを壊してやるよ！！ふふふあははははははあはは・・・ん！？」

と、その時。

金丸の右腕と同化していた夷綱に異変が起こり始め、金丸の右腕に激しい痛みを加え始めていった。

「こ・・・これは・・・！？ぬ！！！こんな時に！！」

そんな金丸とは裏腹に、浪人全てを気絶させたザフィーラは元の狼姿へと戻ると空で激しい戦いを繰り広げている戦艦にどのようにして乗り込むかを模索していた。

すると、その時真後ろの方から現れる機動六課の転送ポートに気付く。

「ん！？」

転送ポートから出てきたのは、スクライア商店メンバーと白鳥を除くスターズ分隊・ライトニング分隊・そして死神分隊全体であった。

全員はバリアジャケットに身を包んだ状態でザフィーラの下へと駆け寄ってくる。

「ザフィーラ！！」

「ヴィータ・・・それにお前たちまで！？」

「機動六課前線メンバー全員も、事態の対処に当たることになりました。」

「船の用意はできています。ザフィーラ殿も参りましょう！」

「分かった。では行こう！」

ザフィーラはなのは達と供に急いでクロノに用意してもらった小型艦へと向うと、晩翠が待つ金丸達の母船に向って行くのであった。

また、その晩翠の方はと言うと駆けつけてきた部下に囲まれながら幹部である武田と黒頭の方を見ながら話をしていた。

「で、態々復讐に来たわけか？主人を傷つけられたことに対する怒りを晴らすために。」

「勘違いをするでない。私はユーノがあの程度のことで根を上げるような弱い男ではないと思っている。だが、主人を傷つけられて黙っていられるほど私も愚かではないことは確かだ。色々と調べさせてもらったぞ・・・あの獏爻刀のことも・・・そしてお前たちの計画も・・・何もかもな。」

すると、その瞬間船内の夷綱製造工場が大爆発を起こして火の手が上がる。

「「なっ！？」」

思わぬことに思わず振り返り驚愕の表情を見せる武田と黒頭、そして部下の者達。

そんな彼らに向って晩翠はこのように告げた。

「・・・貴様達の野望・・・悪いが闇に消えてもらう。」

突然火の手が上がり煙が立ち込める金丸達の母船を見ていたリンディ達は何が何だか分からず思わず唖然とする。

「何だ！？一体何が起きたんだ！！」

一方、夷綱全てとその材料やら機材らを残らず破壊されてしまった音に酷く嘆く金丸達の部下と、怒り心頭の黒頭と武田。

「工場が！！夷綱が！！！」

「おのれ！！！斬魄刀風情が！！！」

「貴様、生きて帰れると思うな！！！」

「ふん。世界を転覆させようなどという莫迦な考えを持つのは止める事だな。悪いが、この闇の覇王・・・晩翠と翡翠の魔導死神ユーノ・スクライアを敵に回した以上、貴様らに明日はないと思え。参る！！」

『晩翠』は決め台詞のような言葉を口にしながら、晩翠の切っ先を武田達に向ける。

「くそが！！いい気になりやがって・・・ミンチにして・・・！！」

黒頭は憤りを抑えきれなくなると、腰の斬魄刀を抜いて解放状態にすると晩翠に攻撃を仕掛けようとするが、その時武田が何かに気付き咄嗟に行動を止めた。

「待て、あれは！？」

「何だ・・・何かこっちに・・・！？」

その時、晩翠と武田達が見た光景とは小型艦で勢いよく母船に突っ込んできたなのは達機動六課であった。

戦闘にはザフィーラが防壁を張って衝撃に備えていた。

「でやあああああああああああああ！！！！！！！！！！」

船が突っ込んできた瞬間、金丸達の船は爆発を起こし衝撃が襲ってくる。

「船が突っ込んできやがった！！何て真似を！？」

爆風が晴れた先、彼らが見たものはデバイスと斬魄刀を片手に向って来るなのは達であった。

「「「「やあああああああああああ！！！！！！！！！」」」」

「「「「「「はあああああああああああ！！！！！！！！！！」」」」」」

「「「でやあああああああああああ！！！！！！！！！！」」」

なのはは既にはやてからの許可を貰い、エクシードモード状態であった。

「機動六課前線メンバー！！唐傘の思い通りさせちゃ駄目だからね！！！！行くよ！！！！」

なのはの声を聞くと、前線メンバー全員が声を揃えて返事をする。

機動六課の登場に業を煮やした黒頭は部下と供になのは達を殲滅にかかる。

「ええい！！！管理局の連中が！！！！全員たたっ斬ってやる！！！！」

その瞬間、始まる機動六課前線メンバー全員ＶＳ唐傘部隊全員による激しい戦い。

なのは達の思わぬ登場に終始驚かせる晩翠。

「ザフィーラ！！それにみんなも！！」

すると、ザフィーラやなのは達隊長陣は晩翠を守りながら後ろに後退りをし、次のように話しかける。

「助けに来ましたよ、晩翠さん！」

「六課のほうも、こんな状況を黙っている訳にはいかないですよ。」

「此処の雑魚共は私らに任せろ！お前は奥へ！」

「・・・ああ。済まぬ！」

晩翠はヴィータや他のメンバーの言葉を無駄にしないように、その場を離れ船の内部へと逃げた黒頭と武田を追って走り出す。

晩翠の行動を見ていた部下の数人が晩翠に向って斬りかかって行く。

「させるか！！」

しかし、晩翠は持ち前の力量で部下を峰打ちで気絶させる。

「そこを退け！！！」

晩翠は煙がいたる場所から立ち込める船内を走りながら黒頭達を目指して行く。

すると、その時後ろの方から晩翠を追ってくるザフィーラに気がついた。

「ん！？ザフィーラ！！」

「あなた一人では心細いだろう・・・私もお供するぞ。」

「・・・ああ・・・そうだな。」

ザフィーラの言葉に思わず心が温かくなるのを感じた晩翠は、ザフィーラと供に奥へ奥へと進んでいく。

すると、その瞬間解放した黒頭の斬魄刀の攻撃が二人を襲ってきた。黒頭の斬魄刀の解放形態は最早剣ではなく二丁拳銃の姿であった。

「悪いがてめえにこれ以上好き勝手させるかよ!」

「悪いが謀略家と言えども鬼になることはあるのだよ。念密に立てた計画、これを台無しにされることが一番腹が立つこん畜生。」

二丁拳銃を慣れた様子で振り回す黒頭と、腰に刺していた斬魄刀に手を添える武田。

「くっ・・・なっ!?」

困惑する晩翠であったが、ふとその時徐にザフィーラが人間形態に変化すると腕を鳴らしながら前に出てくる。

「お前たちの相手は私と晩翠殿だ。久しぶりに暴れたくてうずうずしている。スクライアの受けた傷・・・何倍にもして返してやる。」

それを傍らで聞いていた『晩翠』も安堵の表情を浮かべると、手に持つ晩翠を強く握り締めて剣を構える。

また、同時刻。

母船の屋根の上で連による調整を行っていた全身汗だくの金丸の下

に、ふり何者かの足音が聞こえてきた。

二人が徐に振り返り前を見た瞬間、そこに立っていたのは・・・・・・杖を右肩に軽く添えた状態で目を瞑るユーノであった。

ユーノは自己ＰＲをすると、人をおちょくるような笑みを浮かべて手を広げた。

「ユーノ・スクライア・・・２３歳。特技、検索及び結界魔法。好きなものは・・・高町なのは！！」

右肩に添えてい仕込み杖を持つと、ユーノは徐にそれを引き出し解放状態にまで持ってくると、鋭く光る刃を向けながら金丸の方を見る。

金丸の方も調整の方が済むと、そんなユーノの方を凝視しお互いに牽制をする。

そして、二人は薄ら笑いを浮かべると全速力で走り出し斬りかかって行った。

長いこと闇の中にあると、目玉には映らん僅かな光すら拾えるようになる。

そいつが生き物の放つものだとしったのは何時だったか・・・？

線香花火のように生き物もまた消え行くとき、一際大きく美しい華を咲かす。

だが稀にこいつを生きながらに背に負う輩が居る・・・その光は酷

く不安定で攻撃的で、そして悲しい色を帯びていた。

知ってか知らずか、その光に惹かれて人が集まる・・・そう、まるで蛾のように。

だが、一度あの光を見てもう闇の中に戻ることは俺にも出来なかった。

俺も立派な蛾だ・・・・・再び篝火を失うなうことを恐れる蛾。

そして、激しく燃える篝火に飲まれまいと必死で抗う蛾。

篝火を指針に舞う蛾――――――何所も彼処も蛾だらけだ。

だが虫けらに混ざって妙なものが一匹・・・・・こいつは蛾なんかじゃない。

酷く朧けに思えるが、確かに僅かに光が見える。

そう・・・・・例えるのなら月。

夜空に浮かぶ不気味に煌々と照らす満月・・・朧に光る、翠色だ。

だがどうしてかな・・・どうにもこいつ色は・・・気に入らねえ！！

そんなことを思いながら、ユーノの持つ晩翠と熾烈な斬り合いを開始する顔中汗だくとなっている金丸。

「人が一仕事してる間に無粋な輩が上がりこんでいると思えば・・・

アンタも一緒に来てたとはね！！火事場泥棒にでも来たかい！？そんな身体で何が出来る！自分がやってることも分からないぐらい可笑しくなっちまったかい！？」

「そう言うお前も随分と調子悪そうじゃないか！？顔色悪いよ！腹でも下したか、んん！？」

「腹壊してんのは、アンタだろ！！」

そう言うと、明らかに無理をしているユーノの塞ぎきっていない腹の傷口の方に手を当て強く握り締める金丸。

「ぐっ！！くっ～～～～～てやあああああ！！！！」

傷口に走る強烈な痛みに思わず顔色を変えるユーノであったが、そこは何とか持ち堪えると強引に刀を捌いて距離を取る。

「ふふふ・・・オイオイどうした？血が出てるよ・・・」

金丸は指についたユーノの傷口から出てきた血を見る。

すると、その瞬間自分の手が裂けて血が噴出す光景を目のあたりにした。

「なっ！？」

「オイオイどうした！？血が出てるよ。」

ユーノのその挑発にも似た言葉を聞くと、更に気分を高揚させた金丸がユーノに向って走り出していった。

「ふふふふはははははははあ！！！！！！！！」

また、二人が熾烈な争いを繰り広げている間下のほうではなのは達による部下達殲滅が行われていた。

「エクセリオン・・・バスター！！！」

「ハーケン・・・セイバー！！！」

なのはとフェイトの攻撃によって、多くの部下が気絶し動けなくなっていく。

「「「のあああああああああ！！！！！！！」」」

他のフォワードメンバーの方も順調に数を減らしていきながら、部下の殲滅を行っていた・・・その時、ヴィータがなのは達に向って屋根の方を指差す。

「お！？なのは！！あれ見ろ！！」

なのはを始め前線メンバー全員が屋根の方を見上げると、そこに居たのは金丸と死闘を繰り広げる険しい表情を浮かべたユーノであった。

「ユーノ君！！」

「まさかユーノが！？夷綱相手に一人でやるつもりなの！！」

「無茶だ！無茶にも程がある！！あいつはまだ、傷口が塞がってな

いのだぞ！？」

シグナムを始め、多くのものがユーノの傷の具合を想定しながらあまりに無茶な行動に不安げな表情を浮かべる。

また、同じ光景を内部で戦いをしながら晩翠もモニターでちらちらと確認していた。

晩翠はユーノと戦う金丸の動きに危惧の念を抱いていた。

「（最早死神の動きではないな・・・夷綱の伝達指令に着いて行けずに、身体が悲鳴を上げている・・・霊圧も既に風前の灯・・・）あの男・・・死ぬぞ。貴様には分かっていたはずだ。獏爻刀を使えばどうようなことになるか？師匠だろ、何とも思わんのか！？」

すると、金丸の弟子である黒頭は鼻で笑うと次のように語り出す。

「あれは・・・師匠が自ら望んでやったことさ。あれで死んだとしても本望だろうよ・・・」

同じことを武田から聞き出していたザフィーラも思わず聞き返す。

「本望だと！？」

「その通りだ。あの男はな・・・正しく刀になることを望んでいた。破壊という名の篝火を守るための刀に。再び闇に戻るくらいならば、火に飛び入りその勢いを同調させるのも厭わん男だ。光に焼かれ、最早それ以外は見えない・・・何と哀れで愚かな男か。しかし、それは我々も同じ。そしてそこに、その善も悪も超えたところに美がある。一振りの剣と同じく、そこには美がある。」

「刀は斬る・・・刀匠は打つ・・・死神は・・・何だろうな?ま、何にせよ・・・一つの目的のために存在するものは強くしなやかで美しいのさ。斬魄刀(こいつ)のように・・・ふふ、単純だろう?だが、嫌いじゃないぜ。俺達も目の前の一本の道しか見えちゃいねえ。畦道に仲間が転がろうが、誰が転がろうが構いはしねえ。たとえ師匠でもな・・・」

「あれの何所が美しい!!あんなものなんかに何の価値がある!?そもそも夷綱とは一体何なんだ!?」

「ならば教えて進ぜよう。あの獏爻刀『夷綱』の正体を・・・」

その事を、別の場所でルキアは袖白雪を解放した状態で白連から聞き出していた。

「対戦艦用機械機動兵器だと!?」

「そうだよ。あの獏爻刀『夷綱』は私が改良に改良を加えた最強の力を秘めた刀だよ。人工知能を有し、使用者に寄生することによって霊力を際限なく吸収しその身体をも操る。更に、戦闘の経緯をデータ化し学習を積むことによって刀自身がその能力を向上させていく、正しく生きた刀。霞大路家の奥深くで眠っていた秘密の設計図を盗みだした金丸がこの私に作成の依頼を要請し、それを私が創り上げたのだよ!!しかも、金丸の振るう夷綱には私のデータをも翻すほどの驚異的な力が宿っておるのだよ!!」

「アンゴルモアのことか・・・!?」

「まぁ・・・どちらにしろ、あの男に勝てる要素は一つもないよ。

ただの斬魄刀の力じゃ、私の夷綱に敵うわけが・・・・・・」

と、その直後であった。

ルキアと連の直ぐそばまで吹き飛ばされて意識が朦朧とする金丸が現れたのは。

「う！！」

「「なっ！？」」

連とルキアは信じられないといったばかりの表情を浮かべながら、激しく息切れを起こしながら未だ屈していないユーノの方を見つめる。

「ば・・・莫迦な！？」

「はっ、はっ、はっ、はっ！！」

勿論、その様子を見ていたのはなのは達もであった。

なのは達の予想に反して、金丸の振るう夷綱を圧倒しているユーノの実力に驚愕していた。

尤も、開発者である連がこの中では一番驚愕していたのであったが。

「（夷綱と互角・・・いや、それ以上の力でやり合っているだと！？そんな筈はない！！彦斎は夷綱の侵食で体力が衰えているとは言え、夷綱そのものは能力データを重ね数段向上している筈！？まさか・・・！！）」

「ぐっ・・・でえええええええええ！！！！！！」

体力も霊力も既に限界に達していた金丸はそれでも尚ユーノに向って斬りかかって行く。

常人の目ではとても追いきれぬほどの動きにユーノは着いていきながら、金丸と激しい斬り合いを繰り広げ続ける。

その様子に終始驚かされ続ける連やなのは達。

「（あの男・・・夷綱を上回る早さで成長している！？いや、あれは極限の命のやり取りの中で・・・体の中に眠る、戦いに対する本能が蘇ったのか！？）」

ユーノは金丸の動きを見切ると、振り切った夷綱の刀身の上に乗っかると修羅にも似た表情で晩翠の切っ先を金丸の腕へ突き刺し、伝達神経を破壊しようとする。

そして、ユーノの実力をこれでもかと目の当たりにした連は確信した。

「（あれが・・・翡翠の魔導死神！？）」

また何時ものと違う雰囲気を漂わせながら戦うユーノの姿を下の方で唖然としながら見つめているなのは達。

「す・・・凄い・・・！！」

「ユーノ君・・・あんな傷なのに・・・！」

「最早・・・我々が手を出すまでもないな・・・」

そして、ユーノと熾烈な戦いを繰り広げていた金丸自身はユーノから受けた一撃に苦しみながら腕を押さえつけ背中を向ける。

ユーノはその間に晩翠を両手で握り締めたまま金丸を牽制する。

「うっ!!（消えねえ・・・!!何度消そうとしても・・・目障りな光が・・・消えねえ!!）」

と、その時だった。

金丸の強い想いを感じ取った封印状態にあった夷綱の中のアンゴルモアが発動を起こし、金丸の身体に変化を齎した。

ユーノはその事に気付き、驚愕の表情を浮かべる。

「はっ!!」

また、そうとは知らずに内部で戦いを続ける晩翠とザフィーラ。

晩翠は翡翠斬を連発して逃げ続ける武田に攻撃を仕掛ける。

「翡翠斬!!」

武田は身軽な動きで全ての翡翠斬をかわすと、晩翠の目の前に立ち塞がる。

「ふむふむ・・・流石は翡翠の魔導死神の使う斬魄刀・・・能力的

に実に安定している。どれも強力だ・・・だが、それだけでは俺を倒すことは出来ない。ちなみに俺の斬魄刀の能力はね・・・敵の中を透け透けにして覗くことが出来るものでして・・・」

「おおおい!!!それじゃあただの変体じゃないか!!!」

予期せぬ武田の発言に思わず突っ込みを入れる晩翠。

「俺はね・・・どっちかって言うと頭脳はタイプだから、こう言うのは何時もあの猪男に任せてるんだ。」

「誰が猪男だ!!そのへっぴり腰に一発ぶち込んでやろうか!!」

武田の暴言を聞いていた黒頭は銃弾を一発武田に発射するが、武田は器用にもそれを避けきる。

黒頭はそのまま走りながら銃弾を連発してザフィーラと戦闘を続ける。

「実戦は度胸ですよ、先輩!!こっちがやらなきゃ、やられるだけですよ!!」

銃弾をアクロバティックな動きでかわし続けていたザフィーラは空中へ高く舞い上がる。

それを狙っていた黒頭は身体の自由が利かないことを狙ってザフィーラに銃弾を発射。

「かかった!(空中では自由も利くまい。死ね!!)」

黒頭の撃った弾がザフィーラに貫通、勝利を確信する黒頭であったが・・・・・・

「（やった・・・なっ！？）」

だが、ザフィーラは持ち前に筋肉質な身体で銃弾を弾き返してしまうと、地面へ通り達黒頭の足場を崩し形勢を逆転させ、拳を振り上げる。

「盾の守護獣ザフィーラ。そんなことで私を倒そうなどとは百年早いわ！！」

「くっ！！」

と、その時だった。

天井が突然穴を開けて屋根が崩れ落ちてきたのは。

「「「「！！」」」」

驚愕する四人が崩れてきた場所の方を除いてみると、瓦礫の中から現れたのはコードで体中を巻かれ意識を失ったユーノであった。

「ユーノ！！」

「スクライア！！」

そして、もう一つはアンゴルモアによって身体を完全に乗っ取られてＡＭ１３へと変貌を遂げた夷綱と完全同化した金丸だった。

変わり果てた金丸の姿を見た黒頭も武田も思わず驚愕する。

「な・・・何!?何ですかこりゃ!?」

「か、金丸!?」

「これは・・・アンゴルモアが発動して暴走しているのか!?」

すると、その時ＡＭ１３と化した金丸は奇声を口にしながら武田のほうへと特殊なコードを伸ばして攻撃を加えてきた。

「ぐっ・・・・・わあああああああああああああ!!!!!!!!」

ＡＭ１３の攻撃をまともに喰らった武田はそのまま勢いよく吹き飛ばされる。

「のあああああああ!!!!!!!!!」

壁に激突した武田は口から吐血を出すと、そのまま影に寄りかかった状態で気絶する。

「がっは!!だから・・・こう言うの苦手なんだって・・・ば・・・」

「武田先輩!!師匠、あんた乱心したのか!?」

「ぐあああああああああ!!!!!!!!」

「!?意識が・・・まさか夷綱に・・・嫌な予感が的中したぜ。止

まれ、師匠！！」

黒頭は自我を失いＡＭ１３と化した金丸を如何にか止めようと銃弾を連発するが、それを喰らってもびくともしないＡＭ１３。

「ぐっ！！！！！ぐえええええええええええええ！！！！！！！」

黒頭の願いも空しく聞き耳を持たないＡＭ１３は再びコードを伸ばして黒頭を攻撃した。

「のっは！！！」

ＡＭ１３の攻撃を受けた黒頭は武田同様そのまま気絶して動かなくなった。

そして、ルキアが底が抜け落ちた屋根の上からＡＭ１３の様子を窺っていると目の前に立っていた連が誇らしげな表情を浮かべながらこう口にした。

「ふん。完全に夷綱に侵食されたようだよ。自我すらも失った金丸はこれこそ正に全身剣と化したよ！最早翡翠の魔導死神でも止められないよ。あれこそが夷綱の完全なる姿。あれこそが究極の剣！一つの理念の下、余分なものを捨て去った者だけが手に出来る力！つまらぬことに捉われるお前たちに、止めることは出来ないよ！！」

ＡＭ１３は気絶したユーノをコードで縛り上げたまま徐に持ち上げる。

その様子を見ながら声を張り上げる晩翠とザフィーラ。

「ユーノ！！」

「スクライア！！」

「う・・・消えない・・・目障りな光が・・・消えない・・・・！！」

ＡＭ１３はコードの中から夷綱を取り出すと、ユーノを斬り殺そうと刃を振り上げる。

すると、それを見た晩翠の身体が動き出しユーノを助け出そうとＡＭ１３に斬りかかって行った。

「はあああああ！！！！！！」

『晩翠』は晩翠の切っ先をユーノを握り締めるＡＭ１３の腕に突き刺し貫通させると、ユーノを必死で助け出そうとする。

「晩翠殿！？」

「ぐっ・・・！！！き・・・きさ・・・ま・・・・！！！」

「死なせるか・・・！！こいつは死なせてたまるか！！！こいつが死ねば、私も含めて・・・悲しむものが増えるだけだ！！！折角こいつが・・・ユーノが心から笑ってくれるようになったのに・・・こいつを愛するものと漸く結ばれたというのに・・・こいつの幸せをこんな奴に壊させてたまるか！！！！」

すると、抵抗をしようとＡＭ１３が先に晩翠を斬りかかろうとして来たが、咄嗟にザフィーラが鋼のくびきを使い動きを封じると、自

らの肉体で攻撃を仕掛けていく。

「でやあああああああ！！！！！！！！！」

晩翠とザフィーラの行動に思わず焦りを見せる連。

「なっ！？何をしているのだ、貴様ら！！」

「余所見をするでない！」

「何！？」

すると、隙を見たルキアが袖白雪で攻撃を仕掛けてくる。

「次の舞・『白漣』」

ルキアの袖白雪から流れ出す漣の如く流れる氷雪が連を凍らせる。

「のあああああああああああああ！！！！！！」

ルキアの技によって完全に氷付けになった連はそのまま動けなくなった。

一方、晩翠とザフィーラの必死の攻撃にも関わらず暴走が止まらないＡＭ１３は更に力を増幅させて暴れ出す。

「のあああああああああああああああ！！！！！」

力任せに強引に晩翠とザフィーラをなぎ払ったＡＭ１３は、地面に叩きつけられた二人に止めの一撃を加えようと夷綱を振り上げる。

だが、その時振り上げられた夷綱の刀身に反射する光によって意識を取り戻したユーノは晩翠を強く握り締めたままコードを切り裂き、ＡＭ１３の目の下を斬り裂いた。

「はっ！！」

激痛に苦しむＡＭ１３から脱出を果たしたユーノは晩翠を使いながら徐にあまり動かす事が出来ない満身創意の身体を起こし、ユーノの姿を見た『晩翠』とザフィーラは安堵の声を上げた。

「ユーノ！！」

「スクライア！！」

すると、ＡＭ１３は苦しみながらユーノに向ってこのように言ってきた。

「何故だ・・・！何故消えねえ・・・！！何故お前は俺に光を・・・そんな光を見せる・・・！？気に入らねえ・・・気に入らねえ・・・！！お前も・・・その斬魄刀も！！夷綱を超える力など・・・この世には二つも要らぬ・・・！！刀は武器だ・・・斬魄刀は敵を殺すためだけの道具に過ぎん・・なのに何故・・・何故なんだ！！」

それを聞いた瞬間、ユーノは歯に力が入りＡＭ１３に向って一喝する。

「・・・斬魄刀は人殺しの道具なんかじゃないよ！！」

「「なっ！？」」

「知ったような口を聞くなよ・・・斬魄刀を捨てたお前に・・・力に溺れ、野心に身を焼かれたお前に・・・斬魄刀の何が分かる!?夷綱を超える力・・・そんなものは二つと要らない?大層なことぬかしんじゃないよ・・・!!自分以外しか信じられない奴にそんなことを語る資格はない!!色んなもの背負って、頭抱えて生きる度胸もないてめえに・・・死神だなんだ格好つけるんじゃねえ!!」

そう言うと、ユーノは怒りと信念の下に晩翠の刃をＡＭ１３に向け、こう宣言する。

「見とけ・・・てめぇがただの殺しの道具だとぬかす斬魄刀が、どれほどの力を持ってるのか。自分の魂で精魂込めて創り上げたこいつの切れ味・・・身を以って知るがいい。」

「う・・・うあああああああああああああ!!!!!!!!!!」

それを聞いたＡＭ１３もユーノに向って走り出し、最後の勝負に入った。

「ユーノ!!止めろ!!!正面からやり合っては夷綱には!!!」

「スクライア!!!止めるんだ!!!!!」

「ぐあああああああああああああああああああ!!!!!!!!!」

振り上げられた夷綱と、ユーノが構えた晩翠がほぼ同時に振り切られる。

「でやあああああああああああああ！！！！！！！！！！！！！」

そして、両者の刀が振り切られ暫くの沈黙が流れる。

すると、その瞬間・・・・・・夷綱が粉々になって大破すると同時に金丸を支配していたコードも全て消滅し、中に取り込まれていたアンゴルモアも分離してユーノの刀の中に封印されていった。

夷綱が消滅したことによって意識を取り戻した金丸だったが、既に霊力はなくなり光とって消滅して行ったのであった。

「（眩しくて・・・いけねえや・・・）」

晩翠とザフィーラは背中を向けたまま黙しているユーノに近付き、傷の具合を確認する。

その頃、残っていた残党と未だ交戦を続けていたなのは達であったが、流石の数の多さに魔力もカートリッジも限界に来ていた。

「フェイトさん！これ以上は限界です！！もう持ち応えられません！」

「くっ！まだユーノ達が中に・・・え！？」

その時、フェイトはこの母船に向って近付く一艘の巨大戦艦に目を奪われた。

なのは達もそれに気付くと、その一際巨大な戦艦を凝視する。

「何だ・・・あの戦艦は！？」

「味方の船か・・・？」

すると、フェイトはこれが本局の船ではないことに気付き動揺を隠し切れなくなった。

「いや、違う！あれは本局の援軍じゃない！！」

フェイトと同じくなのは達隊長陣のほうも信じがたい光景に目を背けたくなった。

「そんな莫迦な！？何故奴らがここに・・・！？『源氏蛍』・・・次元海賊『源氏蛍』だ！」

次元海賊『源氏蛍』

次元世界で最大規模を誇る犯罪シンジケート。

異世界の各地で強盗・殺人は勿論のこと、ロスト・ロギアの密輸による多額資金を活動費に置いている時空管理局も手を焼くほどの犯罪結社である。

源氏蛍の戦艦から出てくる夥しい数の船員達が、唐傘の部下に混じってなのは達を襲ってくる。

なのは達は必死でそれに持ち堪えながらユーノ達が現れるまで待っていた。

「どうなってるの！？源氏蛍が何故此処に！！」

「金丸の奴！俺達を倒すためにこいつらとも手を組んだか！？」

全員が圧倒的に数で勝る唐傘と源氏蛍のメンバーに苦戦していたその時、ザフィーラの攻撃がなのは達を襲ってくる源氏蛍を撃退する。

「鋼のくびき！！でやあああああ！！！！」

同じように、晩翠が獅子翡翠群を降らせ唐傘と源氏蛍に攻撃を仕掛ける。

「獅子翡翠群！！」

二人の攻撃を喰らい急激に数を減らす源氏蛍と唐傘の残党。

晩翠とザフィーラは晩翠を突きながら満身創意の身体を引きずるユーノの道を作っていく。

「貴様ら！！道を開けろ！！！！」

「ユーノ・スクライアがお通りだ！！！」

ユーノ達の無事な姿を確認したなのは達は安堵の表情を浮かべる。

「ユーノ君！！！晩翠さんに、ザフィーラさん！！」

「痛てて・・・元気がいいな晩翠もザフィーラさんも・・・！」

「「「はあああああああああ！！！！！！！！」」」

すると、そんなユーノに向って源氏蛍のメンバー複数が一斉に襲い

掛かってくるが、それを見た晩翠が素早く移動し、全員を切り伏せる。

「退け。私は今虫の居所が悪いんだ。」

なのは達は全員の背中を向け合いながら一箇所に固まると、周りを囲む敵の数の多さに頭を抱える。

「数が多い・・・何とかして脱出しないと！」

「けど、この状況を打破するには・・・ちょっと私達でもきついかも・・・」

「なのはさん！もうカートリッジがもちません！！」

「仕方ない・・・ここは強引に逃げるしかないね。」

なのははそう言うと、ＡＲカートリッジを取り出し砲撃で強行突破しようと考えたが、その時ルキアがあるものに気づき注意を呼びかける。

「あ！なのは、あれを！！」

全員がルキアの指し示す方向に目を向けると、頭上にはクロノの乗る次元航行船クラウディアが浮かんでいた。

「クロノの戦艦！」

すると、その時クロノからの退避命令が全員に下る。

『全員、早くこれに乗り込め！アンゴルモアは回収した筈だ。それと夷綱の殲滅も済んだのだろう？急いで戻って来い！』

「やった！助かった！！」

「よし、急いで脱出だ！」

すると、それを早速阻もうと源氏蛍と唐傘の残党がなのは達を襲ってきた。

「させるか！！全員残らず刈り取れ！！」

それを見た瞬間、ユーノと晩翠は顔を見合わせて互いの手に収まる晩翠を使って襲ってきた源氏蛍と唐傘の残党を切り伏せる。

「てや！！」

二人の行動に思わず驚愕するなのは達。

「ユーノ君！！晩翠さん！！」

「退路は私達が守る！お前たちは先に行け！」

「でも、ユーノ先生！？」

「いいから、早く行って！なのは！！」

ユーノの言葉を聞いたなのはは、ユーノを信じようと決心しスバル達を引き連れて先に行くことにした。

「うん、わかった！行くよ、スバル・ティアナ・ギンガ！」

「エリオ、キャロ！」

「「はい！」」

「私達も行くぞ！」

ユーノと晩翠は全員がクラウディアに戻ったことを確認すると、背中を預け合いながら目の前の夥しい数の敵に向っていく。

「行け！！！あの二人の首を取れ！！」

数にものを言わせて二人を討ち取ろうとする唐傘と源氏蛍であったが、二人の驚異的な戦力に次々と仲間が斬られて行く。

その様子を源氏蛍の戦艦に混じりながら陰で見つめる謎の男が一人。

「あれが”伝説の死神代行黒崎一護”が育て上げたという次元世界最強の”翡翠の魔導死神ユーノ・スクライア”・・・・・・強い・・・・・一手仕様てもらいたいものだ。」

「ひ、怯むな！！圧せ圧せ！！畳み掛けろ！！」

ユーノ達の実力に恐怖するも、数でものを言わせようとする源氏蛍。

そんな中、熾烈な斬り合いの中で晩翠はユーノに向ってこんなことを話してきた。

「ユーノ！！」

「ああ！？」

「世の中というのはどうしてもこうも争いばかりが起こるのであろうな！？戦う以外に共存する道はないものかな！？」

「そんなの無理に決まってるじゃないの！確かに、戦わないことも大事だよ！でもね、戦わずして為し得ない物なんてこの世にはない！そうだろ！！」

「確かにな！！ユーノ！！」

「ああ！？」

「お前と私は常に一心同体だ！お前が望むことをすればいいのだからな！」

「晩翠、お前に言われなくてもそうするつもりだ！その為に僕が此処に居る！それじゃあ・・・」

「「逃げますか！」」

そう言うと、二人は急いでクラウディアの下へ走り出しクラウディアに飛び乗ると、そのまま源氏蛍と唐傘の残党に向ってこう告げて立ち去った。

「「ははははは！！！去らば！！」」

「逃がすな！！撃て、撃て！！」

クラウディアを逃がすまいと砲撃を撃って来る源氏蛍の戦艦であったが、クラウディアは急いで次元空間に逃げると、どうにか難を脱したのであった。

船の内部に戻った満身創意のユーノは晩翠と供になのは達の居るとことまで歩き出す。

すると、そんなユーノに晩翠がこんな事を言って来た。

「・・・斬魄刀はただ人殺しの道具じゃない・・・か。お前にしては、案外臭い台詞だったな。」

「・・・うるさいよ。用が済んだらさっさと帰れ・・・鬱陶しい・・・」

斬魄刀と獏爻刀（後書き）

教えて、ユーノ先生！

ユ「今日は夷綱についてだよ♪」

ユ「夷綱は他の獏爻刀と大きく異なり、人工知能を有した能力向上型の刀で、正しく生きた方と呼ぶに相応しい代物だ。」

ユ「でも、所詮は獏爻刀であることに変わりないから、霊力を喰らい続けられると金丸のように身体が消滅してしまうんだね。」

ユ「何にせよ、過ぎた力は結局身を滅ぼすだけだからね・・・みんなも、そう言うのには気をつけなよ♪」

一「また今回は随分懐かしい話題だったな・・・瑠璃千代の奴、元気にしてるかな？」

ユ「また会いたくなったら会いに行けばいいじゃないですか♪」

一「そうは行っても仕事があるしな・・・・・・」

ユ「偶には休むことも必要ですよ！」

一「お前に言われるとどうもしっくりこないのはどうしてだ・・・」

魔導師図鑑ハイパー！

事件から遡ること、数日前・・・・・・

首都クラナガンにデートに出かけたユーノとなのは。

な「にゃはは♪こうして恋人同士でのお出かけって初めてだね♪」

ユ「そうだね♪いっつも変な邪魔ばかり入って二人きりの時間を過ごせていないから、今日は命一杯語り合おう♪」

な「うん！じゃ、一先ず何所かでお茶でもしよう♪」

そんな二人を例の如くストーキングするはやてと、なのはを盗られた事に密かな嫉妬心を抱くフェイト、更には無理矢理連れてこられた恋次達。

は「うししし！！野次馬心全開やけど、二人のラブラブデートはしっかりビデオに撮らせてもらうで！」

フェ「私のなのはを・・・・・ユーノ・・・・・・！！！」

静かな怒りを燃やすフェイトに恋次がツッコム。

恋「何考えてんだよ、お前？同性愛なんて趣味、いい年した大人がすることかよ！？」

フェ「愛に性別なんて関係ないですよ！！！」

すると、その瞬間何所からとも無く九無（くない）が飛んできて、はやてのカメラとフェイトの足元に突き刺さり大いに驚く二人。

フェ・は「ひいいいいい！！！！！！」

投げたのは、なのはと腕を組んで歩いてるユーノ本人であった。

夷綱篇紹介

唐傘

金丸彦斎を頭としてならず者で結成された過激派のテロ集団。元々は隠密機動での任務中に金丸が率いていた独自部隊で任務達成率もほぼ１００パーセントに達する。尸魂界出奔後に顔ぶれを新たに復活した。猟爻刀「夷綱」を大量生産して異世界各地で大規模なテロを行うことを画策している。メンバーには頭である金丸を始め、黒頭亮雲や武田貫流などのいずれも戦闘能力と策略に長けている者が多い。後ろ盾として時空管理局も警戒視する次元海賊源氏蛍とも手を組んでいる。

メンバー

金丸彦斎（かねまる げんさい）／ＡＭ１３

声優：青山穣

１０月１０日生まれ。身長１８５ｃｍ。体重７５ｋｇ。

元護廷十三隊二番隊第三席・隠密機動第一分隊「刑軍」所属の死神。盲目ながら抜き身を見せずに敵を斬る、居合い斬りの達人。若い頃に病気で視力を失った代わりに、嗅覚・聴覚・勘が人一倍発達している（本人曰く「前よりもいろんなものが見えるようになった」とのこと）。人を斬った時に見える“魂”を追っているうちに第４６管理世界『ＫＥＮ』では「辻斬り」と呼ばれるようになる。生きながらに死に行く魂の輝きに魅せられている。昔、ユーノが一護と修行で遠出した時に剣を交えるが刀を折られ敗北する。その後、しばらく身を潜めていたが、強さを求めるために自身の斬魄刀を捨てて白連製作の対戦艦用機械機動兵器獏爻刀「夷綱」を用いてユーノと再戦し、一度はユーノに重傷を負わせ追い詰めるものの、その際に激昂した晩翠に右腕を切り落される。その後リィンディ達本局の次元航行部隊が攻め込んできた際にたった一人で戦艦二隻を落とすが、この頃から夷綱を制御しきれなくなり始めていた。後のユーノとの再戦でついにアンゴルモアを組み込んでいた夷綱に精神と肉体を支配されて暴走し、最後はユーノによって倒され灰となって消えていった。

獏爻刀：『夷綱（いづな）』

霞大路家の秘術で作られた刀剣のうち、奥深くに封印されていたもの。金丸が白連と手を組み、技術を研究し、その技術をアンゴルモアの力と融合させ「対戦艦用機械機動兵器（たいせんかんようからくりきどうへいき）」に造り変えた。人工知能を有し、使用者に寄生することによって霊力を際限なく吸収しその身体をも操る。更に、戦闘の経緯をデータ化し学習を積むことによって刀自身がその能力を向上させていき、使い慣らせば一振りで戦艦十隻もの戦闘力に匹敵する。金丸がこれを右腕に融合、刀身を凄まじい長さに伸ばし、次元航行部隊の戦艦を次々と斬って撃沈させた。ユーノと金丸の決着と同時に消滅し、他に開発・量産されていたものも晩翠によって全て破壊された。

白連（パオ・レン）

声　一　三宅健太

４月１６日生まれ。身長１７０ｃｍ、体重６０ｋｇ。

涅マユリに強い影響を受けた技術開発局出身の死神。話の語尾に「だよ」をつけることが多い。霞大路家の奥深くで眠っていた秘密の設計図を盗みだした金丸から夷綱の作成を依頼され、それを見事に作り出す。改良を重ねることで獏爻刀「夷綱」とアンゴルモアと融合させ、対戦艦用機械機動兵器として開発した。夷綱に「斬れない物は無い」「自分の全て」と豪語するほどの自信を持っている。最終的に、ルキアの白漣を受けて氷塊と共に砕け散った。

黒頭亮雲（くろずりょううん）

声　一　木村亜希子

８月１日生まれ。身長１５９ｃｍ。体重５０ｋｇ。

金丸と同じく元護廷十三隊二番隊第四席・隠密機動第一分隊「刑軍」所属の死神。斬魄刀の真の姿は二丁の拳銃（回転式拳銃）で、それを武器に戦う拳銃使いであることからメンバーの間では「死の弾丸」と呼ばれている。目は若干ツリ目。早撃ちと相まって動きはかなり俊敏である。性格は短気で攻撃的。戦闘でも臆せず攻撃を仕掛けることが多いが、落ち着いている時は常識人らしい言動が目立つ。また勘が鋭いのか「嫌な予感」がよく当たる。暴走した金丸の手にかかり、戦闘不能となる。

斬魄刀：『珠禁（しゅきん）』

上記にも記してある通り、回転式の二丁拳銃。その精度はかなりのもので霊力を込めた弾丸を連弾して発射する。

武田貫流（たけだ　かんりゅう）

声　一　堀川仁

7月29日生まれ。身長177cm。体重77kg。

恋次が隊長に就任する以前に出奔していた元護廷十三隊三番隊所属の死神で、唐傘一の策略家。メンバーの間では「変人謀略家」と呼ばれている。どんな時でも表情を崩さないポーカーフェイスが特徴。常に冷徹だが、真剣での実戦には不慣れで晩翠との対決時は怖気づいていた（一応互角に戦っていることから必要最低限の実力はある模様）。亮雲からは「先輩」または「変態」と呼ばれ、よく悪口雑言を言われるが、腐れ縁のせいか行動を共にする場面が多い。黒頭よりも先に金丸の手にかかり、戦闘不能となった。

斬魄刀：『出歯亀（でばがめ）』

形状の変化は見られないが、その能力は対象の中を透け透けにして覗くことが出来るものらしい。晩翠曰く「ただの変態」とのこと。

関連用語

源氏蛍（げんじぼたる）

次元犯罪者で結成された次元海賊団で、次元世界最大の犯罪シンジケート。異世界の各地で強盗・殺人は勿論のこと、ロスト・ロギアの密輸による多額資金を活動費に置いている他、非合法薬物などの密売にも手を出している。金丸は邪魔な時空管理局を壊滅させるために手を組んでいた。

復活、サイボーグ・ムスカ（前書き）

今回は特別版第三弾！

ラピュタ篇をお送りいたします。

ムスカが再び舞い降りる・・・はは！！見ろ、人がゴミのようだ！！

復活、サイボーグ・ムスカ

＞i12165―709＜

ミッドチルダ中央ターミナル。

異世界の各地からやってくる多くの観光客や通勤客が一同にごった返す巨大なステーション。

今日もレールウェイから降り立った乗客の何気ない談笑が響き渡る。

「やっとミッドに入るわね、長かったわね」

「ああ。レッドバレーからとは言え、長い旅路だったな。」

そんな乗客の多くが車内から降り立ち感傷に浸る中に混じって、茶

色のスーツを着こなし知的な雰囲気を漂わせる眼鏡をかけた男性がふと一人呟く。

「・・・レッドバレー・・・か・・・随分と変わったものだな。五年もすると、異世界をも移動できるのだからな・・・」

そして、彼こそが今回のアンゴルモア騒動の重要な人物になろうとは――――――ユーノ・スクライア外伝・ラピュタ篇・・・始まります。

金丸との激闘を終え、六課へと帰還したユーノであったが・・・幾重にも渡る戦いと負傷した体へのダメージが戦いの終焉と供に一気にユーノを襲い深い眠りへと導いた。

そして、ユーノが目を覚ましてみたとき最初に映ってきたのは六課に設けられた自分の部屋の天井であった。

「・・・・・・――――――――ん？」

ユーノは自室のベッドで寝かされていたことを理解すると、徐にまだ完全には治癒されていない体を起こし、辺りの様子を確認する。

外の景色はどうやら太陽が昇っていたこともあり、夜ではないことは火を見るより明らかだった。

「・・・・・・あれ？今何時だ・・・？」

ユーノはふと現在の時刻が気になり机の上に置いてある目覚ましに手を掛け、時刻を確認したとき、思わず驚愕する。

「え!?昼過ぎ・・・!?ええーーーー!!!僕、何時間眠ってたんだよ!?」

と、その時。

部屋のドアが開くと中に入ってきたのはユーノ達の様子を見に態々地球から織姫と供に尋ねてきた一護であった。

「よお!やっと起きやがったか。」

「一護さん・・・どうして此処に?仕事は!?」

「定休日だよ。ユーノの様子を見に来て見れば、この様だ。相当無茶やらかしたらしいな・・・傷は二・三日で治るとは思うが、今日一日はゆっくり静養しろ。」

「あ・・・はい・・・」

ユーノは一護にそう言われると、少々顔を項垂れ何を言えなくなってしまう。

そんなユーノの傍まで近寄り近くにあった椅子に座る一護は不満気な表情でこんなことを口にしてきた。

「たく!何で俺がシャマルの奴にお前の代わりに叱られないといけないんだよ!!監督責任がどうのこうのって、俺はお前の保護者じゃねっつーの!」

「あははは・・・いや、本当にスミマセンね・・・」

「最初、俺が来たときには爆睡だったぜ。聞いた話じゃ、何でも帰って来た途端気絶したらしい。それから10時間ぐらい眠ったままだった・・・・・お前、最近激務と戦いの日々で殆ど眠ってなかっただろう。溜まってた疲れが爆発したんだよ。これを機に少しは身体を休めろ。そうじゃねえーと医者が忠告しなくても死んじまうからな。」

「はい。どうもご迷惑をお掛けします。」

「・・・お前が重傷なんて負ったら、なのはだって辛いだろう。一度お前は、卍解の修行のときに”死んでる”んだからな・・・」

「正確には”死んで生き返った”ですけどね・・・・・・ええ・・・分かってますよ。」

ユーノは一護からそのことを口にされると、複雑な表情を浮かべてその様に返す。

ユーノと一護、そして織姫・コンを含めた数名だけが知るユーノの卍解に関する極秘事項。

後にこれは、一護の口から直接なのは達に伝えられることになるのだが・・・それはなのは達にとっては余りに次元の違いすぎる過酷な話しであることは、今は話さないでおこう。

さて、その頃六課の方へと休日を利用して一護と供に尋ねていた織姫、コンはというと・・・久し振りのルキアノとの再開にすっかり気分が高揚していた。

尤も、コンの場合は別の意味で高揚していたが・・・・・

「・・・ネ・・・・・・・ネ・・・ネエさ――――――――――～～ん！！！！」

コンはこの上も無い表情を浮かべながらルキアの方へと飛び込んでいったが、ルキアは真顔を浮かべながら飛び込んできたコンを足で受け止め、そのまま踏みつける。

「オフン！！ホップ！！」

ルキアに踏みつけられながらも、内心かなり満足しているコン。

「久し振りだな、コン！相変わらずの様子で安心したぞ。」

「ああ・・・！およそ四年越しの再開にも関わらず一片の迷いも無いこの踏み付け・・・これぞまさしくネエさん・・・！！オレは・・・オレは幸せっス、ネエさん・・・！！」

また、コンと同様ルキアとの再開に喜びを隠しきれない様子でいる織姫。

「でも本当に久し振り！！朽木さん！！元気だった！？」

「ああ。私の方は相変わらずだ。井上も元気そうでなりよりだ。一護やコンのバカさ加減にうんざりしてはいないかと冷や冷やしていたぞ。」

ルキアの非情な発言を恋次達の傍で聞いていた一護は眉間に皺を寄せながら、ルキアへの怒りを募らせ反論する。

「俺とコンを同類と考えるな、てめぇは！！」

「でも、ようこそいらして下さいました一護さん。時間の許す限りではありますが、どうぞ寛いで行って下さいね。」

はやてを始め、機動六課前線メンバー全員が一護と織姫に敬礼をし歓迎の意を表する。

一護もはやて達の態度に心から感謝すると、お礼の言葉を口にする。

「ああ、サンキューな！そうさせて貰うぜ。織姫！折角ルキアと一緒に入られるんだ。二人でどっか行って来いよ！」

「本当、あなた！？わぁ～～～い！！！じゃあ、朽木さん！！ちょっと市街地にでも行ってみようよ！！こっちのお店とか色々探検したいし！！」

「ああ。私は構わぬが・・・私も来たばかりだからあまりこっちの地理には詳しくないのだが・・・」

「それでしたら、私がご案内しますよ。」

すると、二人の会話を聞いていたギンガが自ら道案内を引き受けると申し出てきた。

「そうか。済まぬな、ギンガ。」

「それじゃあ、レッツラゴー！！」

織姫はかなりの上機嫌な様子でルキアとギンガと供に隊舎を後に、

市街地へと走り出して言ったのであった。

そんな織姫の様子を見ていた恋次・吉良・一護の三人は微笑ましい表情を浮かべる。

「楽しいそうだね、織姫さん。朽木さんも何時もよりも楽しそうだ。」

「ま、あいつらは昔から仲良かったからな。」

「いいもんじゃねえか。友達って言うのは・・・・・・」

すると、そんな一護の方へ近付いてきたなのはがふとこんな事を尋ねてきた。

「あ、そうそう一護さん・・・少しお願いがあるんですけど?」

「お?何だ・・・」

「この後何も予定がなければ・・・ちょっと、フォワードメンバーの出来を見てもらえませんか?フォワードメンバーも一護さんと直接戦うのは初めてですし、いい経験に繋がると思いますから。」

「ああ、いいぜ!俺もお前らの魔法っていうのがどんなものか見たいしな。何しろユーノが使うのは防御系の魔法だけだったからな!!」

「にゃはは・・・それはユーノ君に失礼な気が・・・」

一護の言葉を聞いていたなのはも本当のことを言われると、苦笑い

を浮かべてしまうほかなかったのであった。

そんな彼らとは別に、ターミナルを出発したあの男はミッドを一望出来る高台に足を運び、ミッドチルダの景観を見下ろしながら部下からの報告を背中越しに聞いていた。

「・・・翡翠の魔導死神・・・それがこの世界で最も強い者の名前らしいな。」

「然様でございます、ムスカ様。そして、彼が現在席を置いています部隊・・・機動六課が集めておられるロスト・ロギア・・・」

「アンゴルモア・・・だろ?調べは付いているよ。何せ私もあれの力があったからこうしてサイボーグとして蘇ることができたのだよ。準備は万全整った・・・アレの力を使ってもう一度ラピュタの科学を我が手に・・・そして、あのガキ共に復讐をしてやる・・・ふふふふはははははははは!!!!」

スカリエッティに負けず劣らずの野心を抱く冷酷卑劣な男、ムスカ。

今始まろうとするムスカによるラピュタ復活のための恐怖の円舞曲(ロンド)。

それを機動六課が知ることになるのは、ユーノが完全回復を遂げた5日後のことであった。

早朝の機動六課・・・――――何時ものように朝練のために準備へと向う教導官姿のなのはは自分の周りを飛んでくる小鳥に微笑を浮かべると軽く手の甲に乗せて挨拶を交わす。

「お早う、今朝も元気だね。ふふふ・・・・・・!あ!!」

そんな時、なのはは一人先に訓練場の方で三点セットを身に纏い目を瞑って精神統一を果たすユーノの姿を目撃する。

「（ユーノ君・・・こんな朝早く・・・こんな処で・・・？）」

と、なのはが背中を向けるユーノに徐に近付いていこうとした・・・・その時。

ユーノは鋭い眼光を浮かべると、そのまま莫大な霊圧と魔力・・・そして気を放出させながら声を上げ始めた。

「オオオオオオオオオオオッ！！！！！！！！！！！！！」

突然のユーノの行動に驚愕してしまったなのはは思わずその場に倒れこんで声を上げた。

「きゃあっ！！！」

後ろの方から聞こえてきたなのはの声を聞いた瞬間、ユーノは振り返り汗だくになりながら驚愕し続けるなのはに近付き体を起こそうと手を伸ばした。

「！なのは・・・？大丈夫！？」

「お・・・お早う・・・ユーノ君・・・うん・・・何とか・・・」

ユーノが差し伸べる手に捕まりなのはは体を起こすと、ユーノから事情を聞きだす。

「あはははは、ごめんごめん♪びっくりさせちゃった!?」

「びっくりも何も仰天だよ・・・!ユーノ君、こんな朝早くにどうしたの?稽古とか。」

「稽古と言うより、体が鈍らないように気を締めていただけだよ。恭弥さん達だって時々やるでしょ?僕も斬魄刀を振るうようになってからは毎朝コッソリやっているんだ。勿論、なのは達には気付かれないように。でも、なのははバレちゃった♪」

「そうなんだ。でもユーノ君が心身を鍛えるなんてちょっと意外かも。だってあまりユーノ君って訓練にも顔見せないし、何時もデスクワークや研究とかで忙しそうだから。」

「まぁね。でも・・・常に気を締めないと心の具合が悪くて気持ちが黒くなっていくんだよ。ただでさえ、僕の能力は人には見せられないようなモノがあるんだ・・・斬魄刀の力に飲み込まれない様に・・・魂が闇に堕ちないように・・・いつでも『ただいま』って言ったら笑顔で『おかえり』って言ってくれる人の下にいられるように・・・翡翠の魔導死神として生きていく覚悟を決めた以上、これだけはかかせないんだ。」

覚悟と決意に満ちたユーノの表情を窺うなのはは、何時も以上に逞しくもあり優しい幼馴染兼恋人の姿に見とれるのであった。

「・・・ユーノ君・・・(そうか・・・ユーノ君は何時もそんなことを思っていたんだ。やっぱり、強いんだな・・・私がユーノ君を好きになった気持ちが、今改めて分かった気がする。昔とは違うようで実は昔と全然一緒。私の大好きなユーノ君はいつも・・・此処

にいる。）」

昔と変わらず自分の傍にいるユーノに安心感を抱くなのはは、そんなユーノと歩きながら一緒にフォワードメンバーが何時も使う主要訓練場へと歩き出す。

「そう言えば、今気付いたんだけど・・・？」

「ん？何がだい、なのは。」

「ユーノ君の体って・・・・・かなりの筋肉質なんだね・・・！」

「・・・ああ・・・まあね・・・」

その日の晩のこと、光り輝く星空と供に一際大きな月明かりが照らすミッドからそれなりに離れた場所に位置するヒルクライムという山がある。

およそ７０００年前の昔、大規模な火山噴火によって出来た大型丘陵。

頂上には寺院が設けられ、麓にはカルデラ湖のような形をした池がありミッドの隠れた名所のひとつでも現在も人々に古くから親しまれている。

その山の頂上から全く幻想的ではない町明かりを眺める薄ら笑いを浮かべるムスカ。

「・・・いい町だな・・・レッドバレーもこれぐらい科学が発達すればいいのだが。おっと、此処では魔法と言ったほうがいいのか？

何れにしろ、翡翠の魔導死神や管理局の奴らに私の存在を知ら示すには打って付けの場所だ。おい、用意はいいか?」

ムスカがそう言うと、部下の一人が駆け寄りしゃがんだ状態で次のように説明する。

「ハッ!砲弾の射程距離・車軸確認は完了いたしました。」

「ではショータイムの合図を頼むよ。ラピュタ復活とサイボーグ・ムスカの記念すべき復讐の円舞曲のための合図を・・・」

ムスカ達がとんでもない事を画策しているその頃、機動六課一同は隊舎のほうから満月を眺めながらの月見を楽しんでいた。

「わあ!見て下さいよ蛍!」

スバルがそう言うと、なのは達の下に飛んでくる無数の儚くも美しい蛍の光。

その光景に心打たれながら月見団子や酒を酌み交わす前線メンバー各位。

「風情やねぇ。やっぱええもんやな~~~こうして月を見ながらのお酒は!」

はやてはご満悦名表情を浮かべながら、再びコップに注いであった酒を豪快に飲み干す。

「そうだな。だが、その酔っ払い四人を抱える僕の身にもなって欲しいものだが・・・」

「わらひれんれんよってへんろ（私全然酔ってないよ）」

「ひっく！！僕だけ何か他の人よりも扱いがムゲですよね・・・どうせ僕なんかユーノ先生と比べれば・・・ひっく！！」

「キャロ・ル・ルシエ！ここで脱ぎます！！！」

「チクショー！！何であたしはホントは年上の癖に年下扱いなんだよ！！！」

最早呂律の回っていないフェイトと、甘酒を飲んだだけで突拍子も無いとんでもないことを口にするエリオや服を脱ごうとするキャロに、管を巻くアギト。

キャロの行動を見ていたスバル達が慌てた様子でそれを止めにかかり、フェイト・エリオ・アギトの三人は呆然とするクロノに寄りかかったまま酔いつぶれていた。

「にゃはは・・・フェイトちゃん、私と一緒でお酒強くないからね、エリオとキャロもアギトも甘酒でここまで酔うとはね・・・」

ユーノとヴィヴィオと供に情けない姿となっているフェイトを見ながら苦笑するなのは。

一方、恋次の方はそんな三人を見ながらこんなことを言ってきた。

「情けねー連中だぜ。まだまだ修行が足りないんじゃないのか？」

「阿散井君・・・お酒の修行って一体どんなものだい？」

恋次の言葉を隣で聞いていた吉良はそんな疑問を恋次にぶつけ、ルキアの方はがつがつと月見団子を貪る恋次に注意をする。

「それより貴様は酒もそうだが、団子も食べすぎだ！少しは遠慮というものをしろ！！ヴィヴィオの分がなくなってしまうだろ！！」

「大丈夫ですよ、ルキアさん。僕のところにまだありますから。ほら、ヴィヴィオ。僕の上げるよ♪」

「ありがとう、ユーノパパ！有難く頂きます！！」

ユーノから受け取った月見団子を懇切丁寧な態度の返事で感謝の意を表するヴィヴィオ。

そんな二人を見ながら微笑むなのはは、ユーノが手に持つお猪口に熱燗を持ってきてそっと注いであげた。

「うふ。はい、ユーノ君・・・どうぞ。」

「お？ありがとう、なのは。」

なのはに注いでもらった酒を徐に口に運び、風情漂わせる呑み方をするユーノに思わず間隙の声が漏れる。

「言い飲みっぷりですな、店長！」

「粋だね！！先輩とは大違いだ。」

浦太郎はそう言いながら、ユーノとは対照的な飲み方をする鬼太郎

の顔を何所か小馬鹿にした表情で一瞥する。

「ああ!?どう言う意味だ、それ!!」

すると、浦太郎の言葉に怒り心頭の鬼太郎に横から酒を口に運ぶ白鳥がこう補足する。

「そのままである。ピーチの場合は飲み方が実に汚らしい・・・まるで恋次さんと同じようにな・・・」

「ちょっと待て!!!!俺も一緒に入ってるのかよ、俺も!!!!」

白鳥の言葉を聞いていた恋次は鬼太郎と供に白鳥に怒りをぶつける。

その様子を見ていたスバルとティアナは二人を宥めようとする。

「まぁまぁ、折角のお月見ですから喧嘩は止めましょうよ!」

「そ、そうですよ。野暮な争いは月見には似合いませんし・・・!」

二人の言葉を聞いた恋次と鬼太郎も考えを改め、仕方なく収まりきらない怒りを必死に抑えて月見を再開することにした。

「それにしても・・・・・ホント・・・いい月だわ・・・」

ギンガの言葉を聞いていたなのは達も美しく夜を照らす月明かりに心打たれながら、夜長を鳴き通す虫たちの声に耳を澄ませていた。

「・・・平和だな・・・偶にはこう言う平和も満喫しないと、息が詰まっちゃうしね。」

ユーノがそんなことを言って、再びお猪口の酒を口に運んだその時だった。

突然、ヒルクライムのほうから響き渡る轟音が機動六課全員の耳に届いた。

「！！」

風情醸し出す夜長を穿つ轟音に一同は何が何だか分からない状態だった。

「な・・・なに・・・今の轟音！？」

「花火？」

ヴィヴィオを始め多くのものが花火かそれに近いものだとばかり考える中、一人眉間に皺を寄せながら黙り込んだままのユーノだけは違う考えに至っていた。

「（いや・・・聞き覚えがある・・・あの独特の質量物質による風切音。あれは確かレジアス・ゲイズ中将が以前導入を推進していた超強力兵器の一つ・・・）」

ユーノがある兵器のことを思案しているその頃、ヒルクライムからその質量兵器を発射したムスカの部下は砲撃の命中を知らせる。

「命中でございます、ムスカ様。」

「見事だ。流石は亡きレジアス殿が導入を試みていただけのことは

ある・・・アインヘリアル。ラピュタの科学の次に素晴らしい代物だ！」

また、六課のほうで先程の轟音に疑問を抱き続けているなのは達は騒然としていた。

「何だったんだ、さっきのは一体！？」

「山の方から聞こえましたな・・・何か不吉なことが起こっていないことを祈りますが・・・」

「果たして・・・そう思うようにいくか・・・」

金太郎の言葉にそのように相槌を入れるユーノであったが、まさかその言葉を口に言った直後に悪い知らせが飛び込んでくるとは思ってもいなかった。

隊舎の中からはやて達の下にヴァイスが息を上がらせながら走ってきたのだ。

「八神部隊長！！クロノ提督！！大変です！！」

「ヴァイス君？どうしたの、そんな血相を変えて！？」

「さっきの轟音、聞こえませんでしたか！砲撃っすよ！！何者かがヒルクライムから一撃！聖王教会本部が直撃を被りました！！」

「「「「「なっ！？」」」」」

「「「「「え！」」」」」

「「「「うそ！？」」」」

ヴァイスからのあまりに突然の知らせに一同は愕然とした。

「今、騎士カリムからの連絡があったんですよ！幸いにも怪我はありませんでした。八神隊長、この後のご指示を！」

「分かったよ！これより機動六課一同総動員でヒルクライムと聖王教会へと向う。私はカリムのところに行って事情を聞くさかい、ヴァイス君。ヘリを頼むよ！」

「うっす！了解しました！」

「スターズとライトニングは被害状況の確認にはやてと供に聖王教会へ。スクライア商店と死神部隊はヒルクライムへ向ってくれ。六課のほうは僕とシグナム達が守る。」

「わかった。そう言うわけだから、ヴィヴィオ・・・ちょっとなのはママとユーノパパは出かけるから、留守を頼むよ。」

ユーノはクロノにそう言った後、隣に座っていたヴィヴィオの両肩に手を添えながら優しい眼差しでそのように伝える。

「うん！なのはママも気をつけてね・・・」

「大丈夫だよ、ヴィヴィオ。直ぐに戻って来るからね。」

ヴィヴィオの不安げな表情を見たなのはは、ユーノの後ろからヴィヴィオに微笑みかけてとヴィヴィオを安心させようとした。

その後、二手に分かれて夜の町を飛びながらなのは達は襲撃された聖王教会本部へと向かい、ユーノ達はヒルクライムへと向かって行った。

やがて、聖王教会本部へと到着したなのは達は無惨にも破壊された教会の姿に思わず声を詰まらせ、辺りを見回した。

「・・・酷い・・・」

「なんでこんなことに!?」

キャロやスバルは辺りの状況の悲惨さに驚愕するばかりであった。

一方、なのはやフェイトは隊長同士今回の襲撃に関して色々と考えていた。

「一個人の仕業とは、思えないね。」

「うん。こんな事が出来る人なんてそういないと思う・・・」

と、その時。

はやて達のことに気付いたカリム・グラシアがシスター・シャッハと供に駆け寄ってきた。

「はやて!」

「カリム!シスター・シャッハもご無事で!」

「お陰様で私達はこの通り無事よ。」

二人の無事な様子に一安心したなのは達。

その後、直ぐにフェイトが今回のことに関してカリムに質問をする。

「騎士カリム、シスター・シャッハ。これは!?」

「残念ながら私達にも分かりません。しかしながら、幸いにも怪我人は誰一人いません。延焼も免れましたしね。」

「そうですか・・・」

「カリム、念のために聞いておくけど・・・予言には何か今回のことを仄めかすことは書いてあったんかいな?」

「いいえ。そんなことは一言も・・・私の稀少スキルであるプロフェーティン・シュリフテンは二つの月の魔力が合わないと発揮できないものだし、予言そのものも半年前のので止まったままだし・・・」

「・・・ですよねぇ・・・でもどうして聖王教会?それもこんな真夜中に!?」

「管理局を直接襲わずに聖王教会を襲ってきた敵の意図がいまいち分からないな・・・預言書の破壊という線もあるが、それも何か引っかかるしな・・・」

なのはやはやて達は襲撃者が何故、管理局そのものを襲撃せずに聖王教会を狙ってきたのがその意図が全くつかめず困り果てていた。

「兎に角、これから現場調査を行います。スターズのみんなは、私と一緒に中の方を。」

「「「了解！」」」

「ライトニングは周辺の被害状況を確認するから。」

「「「はい！」」」

スターズとライトニングがフォワードメンバーを連れて現場調査に乗り出していくのを確認すると、はやてはカリムとシャッハと供に夜空に浮かぶ満月を仰ぎ見ながらふと物思いにふけるのであった。

「――――――こないいい月の出てる日に、どうしてこうも嫌な事件が起こるかね・・・」

一方、ヒルクライムへと赴いていたユーノ達はバックヤードスタッフと供に頂上付近の現場検証をしながら、犯人側の残した証拠を探っていた。

そんな時、恋次とユーノは何かの衝撃によって幹が完全に折らてしまった神木を発見するのであった。

「へし折れた神木が一つだけか・・・痕跡すらも残ってねえな・・・」

すると、恋次の言葉を聞いた直後ユーノが隠れて見えなかった重要な痕跡を発見する。

「いや、見てくださいよこの深い台座の跡・・・恐らくはこの神木

を反動止め代わりにして砲撃を発射したんですよ・・・“アインヘリアル”を使って。」

ユーノの傍らでその兵器の名前を聞いた金太郎は、徐に尋ねる。

「アインヘリアル・・・確か四年前に、レジアス中将が導入を進めていた超兵器ですよね？」

「ＪＳ事件以降、導入は白紙になったけどね。でも、痕跡から見ても間違いない。尤も、今回の場合は人の手で担げるほどにまで改良されたものだね。」

「でも、一体如何様にしてこんなことを。しかも、犯人の目的は・・・？」

ユーノ達がそんな犯人側の狙いに頭を抱えていたとき、白烏・鬼太郎・浦太郎があるものを発見したことを伝えに来た。

「ユーノ店長！ピーチ達が妙なものを見つけたようです。」

「店長、さっき草むらでこんなものを・・・犯行声明のようなものですね。」

ユーノの下に発見した手紙のようなものを手渡す浦太郎。

ユーノは徐に恋次達が見守る中その髪の中を広げて何が書いてあるのかを確かめてみた。

すると、そこにはミッドの文字ではない極めて不可解な文字がびっしりと書かれていた。

「何だ、この字は!?見たことも無いぜ・・・」

「ミッドの文字でもないようですね・・・!?」

「古代ベルカ文字にも似てるがまた違う字形だ・・・ラテン語に近いと言ってもいいか・・・取り合えず読んでみよう・・・」

ユーノは兎も角出来るだけ書かれてあるラテン語に近いその文字を知識をフルに活用して解釈を試み、文章の内容を読み始めた。

「“我は再びこの地に君臨する。そして、全てを超越した偉大な力を手中に収め大いなる王となる。世界は我の手にあるべし。Ｒｏｍｕｓｋａ Ｐａｌｏ Ｕｒ Ｌａｐｕｔａ”・・・ロムスカ・・・パロ・・・ウル・・・ラピュタ・・・ラピュタ・・・ラピュタだと!?」

ラピュタ・・・という単語に驚愕の表情を浮かべるユーノを見て、恋次がきょとんとした表情で尋ねる。

「何だよ、知ってるのかユーノ!?」

すると、ラピュタという単語を聞いて浦太郎がふとこんな事を呟く。

「ラピュタ・・・それってスウィフトのガリヴァー旅行記に出てくる空に浮かぶ城の事かな・・・!?」

しかし、その言葉を聞いていたユーノは直ぐに否定の返事をする。

「・・・いや・・・スウィフトの書いたものは単なる空想に過ぎな

い。『ラピュタ』は実は存在するんだよ。第７４管理外世界・・・『レッドバレー』の空高くに・・・そして、ロムスカとは嘗てラピュタを使って地上を支配しようとした男の秘密名のこと・・・」

「でもよ、店長！確かそれって、地球では『天空の城ラピュタ』っていうアニメ映画だけの話だろ！？実際にムスカが存在するとは思えないし、第一劇中ではムスカは死んだはずじゃ・・・！？」

「次元世界に於いて、ある世界では架空のものでも・・・ある世界では現実のものであるものが多い。ムスカが実在したとておかしくはない。」

「だとしたら、そのムスカって奴の狙いが・・・ラピュタ復活だとして、何でミッドの聖王教会を狙う！？そこが腑に落ちねえぜ・・・」

「・・・・・確証は無いですけど、奴はラピュタの力を手中に収める前に自分達の力を管理局（ぼくら）に見せ付けたかったのではないでしょうか？」

「俺達にだと・・・！？」

「嫌な予感がしてきましたね・・・ラピュタに・・・ムスカ・・・そしてアンゴルモア・・・どうして諍いの種ばかりが舞い込んでくるんでしょうかね・・・」

ユーノはそう言うと、はやて達同様空高くで自分達を照らす満月を仰ぎ見ながら、一抹の不安を感じていた。

その後、現場検証を終えたユーノ達が先に戻っていたなのは達と合

流を果たすと山頂付近で発見した例のものと今回の犯人と思しき人物の名前を口にした。

「ムスカやて！？」

地球出身で昔、映画でムスカを見たことがあるはやてやなのは達は驚愕の表情を浮かべる。

「宮崎アニメのラピュタに出てくる・・・あのムスカかいな！？」

「ああ。犯行声明も置いてあったし、態々自分の出身世界のことも書いてあった。第７４管理外世界『レッドバレー』。間違いない・・・」

「だとしても、ムスカって話の中ではバルスで目をやられて城の崩壊と供に海に落ちて行ったんじゃなかったっけ？」

「毎年金曜ロードショーであれが放送されると、決まって2チャンネルはバルスの書き込みでサーバーがパンクするしな。」

この話はファンの間では広く知られている周知の事実である。

「そんな話はいい。しかし、僕達管理局に挑戦を叩き込んできたということは・・・余程の自信があるらしいな。おまけに、偶然かどうかは定かではないが・・・アンゴルモアの検出もこの世界で確認された。危険な匂いがしてきたな。」

「アンゴルモアがムスカの手中に収まっていなければいいけど・・・」

全員の不安が更に大きくなる中、ティアナがはやてに指示を仰いだ。

「八神隊長、クロノ提督！先ずは行動を起こさないと何も始まりません。ご指示を！」

「せやな。まずは現地の有力な民間協力者に接触をせなあかんな。スバル、ギンガ、鬼太郎さんと浦太郎さん。四人はあの二人を探し出して事情を説明してくれへんか？」

「あの二人・・・！？」

はやての口にしたあの二人という単語に首を傾げるスバルとギンガであったが、鬼太郎と浦太郎は直ぐにそれが誰の事を指しているのかを理解し、驚愕の表情を浮かべる。

「まさか！はやてちゃん・・・その二人って！？」

「オイオイ、マジで言ってるのか！？」

二人が動揺しながらそのように尋ねると、はやては鼻で笑いこう言った。

「大真面や！ムスカが関わってる以上、あの二人に協力を仰ぐのは必然的や。鍵はあの二人が握ってる・・・何としてもムスカよりも早く探し出して欲しいんや！」

それでは、その二人が今現在何をしているのかを実際に第４６管理外世界『レッドバレー』から拝見してみよう。

スラッグ渓谷。

嘗ては炭鉱で栄えたこの谷も今ではすっかり穴だらけの岩ばかりが残るものとなっていた。

しかし、そんな谷を救ったのがテクノロジーと言うものである。

この世界は地球でいうところの１８世紀頃のイギリスで始まった産業革命期にリンクしていて、掘りつくされた炭鉱の代わりに製鉄技術や加工機技術が齎され、人々はそこから得る収入によって昔と変わらぬ生活を送っていけるのであった。

その谷に住まう一人の青年と女性こそが今回の重要人物である。

青年は製鉄所の仕事から帰宅すると、小屋のドアを開き帰って来たことを妻に伝える。

「ただいま、今帰ったよ。」

帰宅した夫の声を聞いた妻は台所の火を止めると、夫の下に近寄ってきた。

「お帰りなさい、パズー。夕飯の仕度、出来てるわよ。」

笑顔で夫・パズーを迎えた妻のシータはテーブルに載せてある料理に感激するパズーに更に先程火にかけていた料理を運んでくる。

「わぁ～～～！今日は豪勢だね！！」

「うふふ。今日は結婚記念日だもの。腕によりをかけて作ったんだから、一杯食べてね。」

「うん！そうさせて貰うよ、シータ。それじゃあ・・・」

パズーはそう言うと、シータと向き合いながら手をそろえて食事の挨拶を済ませる。

「「いただきます！」」

そして、このレッドバレーで何時も通りの朝を迎えた翌日。

機動六課から派遣されてきたスバル・ギンガ・鬼太郎・浦太郎の四人が転送ポートを使って人気の無い渓谷に足を踏み入れた。

「ここが・・・レッドバレー・・・？」

スバルは来て早々、辺りの景色を物珍しげに観察をする。

前方の方には工場とそれに隣接する町が散らばっていた。

ギンガは以前地球のことに関する歴史をしるした本でこの光景に極めて似た情景を見たことを思い出し思わずこう口にする。

「まるで産業革命の頃のイギリスの下町・・・ってところかしら？」

鬼太郎と浦太郎の方も、正しく映画さながらの風景に驚嘆していた。

「景観も正しく映画そのものだな。」

「でも本当にいるのかな・・・ムスカが居るからパズーとシータちゃんがいるっていう安直な考え方は些か危険だよ。」

「可能性がゼロじゃないんです。やるだけやってみましょう、浦太郎教官！」

「二手に分かれて情報散策しましょう。」

ギンガの発案を聞いた二人もそれを受諾し、二手に分かれて下町の人々から重要人物であるパズーとシータに関する情報を探し出していた。

そして、数時間後・・・・・何の手がかりも無いまま混迷するスバル・ギンガ・鬼太郎の下に浦太郎が朗報を持ち込んできた。

「みんな！！！有力な情報を手に入れたよ！！」

「本当ですか！？それで、その二人は・・・！？」

「此処から南に行った先・・・スラッグ渓谷にある製鉄所で働く少年にパズーと思わしき人物がいるとの情報を掴んだ。しかもラッキーなことに、シータちゃんのほうもゴンドアの方からヤクを連れて数年前に引っ越して来たらしい。」

「願ってもいない好機だぜ。よし！行くぜ、てめら！！」

「「「了解！」」」

全員はそう言うと、少し歩いた先に位置する今ではすっかり製鉄と加工技術の町と化したスラッグ渓谷へと足を運んだ。

鬼太郎は正しく映画で見たものと全く同じものであることに深く感

激する。

「おう!!此処だ、此処!!映画で見た町並みそのものだぜ!!」

「先輩見てよ!!あれ、パズーが残業のときに買いに来た肉団子屋さんだ!!」

浦太郎も思わず映画で見たものと同じものを実際にこの目で見て、思わず声を上げて興奮する。

そんな任務そっちのけで辺りを子供のようにはしゃぎながら見続ける二人に呆然としながらスバルとギンガは立ち尽くしていた。

「あはは・・・随分興奮してますね、二人とも・・・」

「当たり前だ!!映画の世界が実在するなんて・・・考えも付くか!?」

「それもそうですね!あ、あれじゃないですか・・・例の製鉄所!?」

ギンガはそう言うと、目の前に見えてくる一際大きな煙突から煙を黙々と出す工場を指差し鬼太郎達に伝える。

「よし・・・早速聞き込み開始だ。僕が言って事情を説明してくる。」

「頼むぜ、亀。」

浦太郎は工場に先に赴き、今回の事情をかなりの嘘で誤魔化し工場

の責任者をだま蔵貸すことに成功すると、急いで三人の下に戻る。

「交渉成功！中を案内してくれるそうだよ。」

「いいかお前ら。あんまり余計なことは喋るなよ！」

「「はい！」」

四人はそう言うと、いよいよパズーが働いていると思われる製鉄所内部へと進入を試みるのであった。

その頃、肝心のパズーのほうはというと油塗れになりながらこの頃調子の悪い竈の中と外を器用な腕で以って修理を試みていた。

「ふんと！！ふんと！！ふ～～～う・・・ふんと！！」

パズーが修理に汗を流していたその時、同じ職場でよき理解者の一人である親方のダフィーが大声で名前を呼んできた。

「パズー！！」

ダフィーの声に気付いたパズーは一度作業を中断して、後ろを振り返る。

「お？親方！如何したんです！？」

「ちょっと下りて来い！お前に客だ！！」

「お客？誰だろう・・・・・・」

パズーは言われるがままに竈から居り、顔を拭くと自分に合いに来た浦太郎達と初のご対面をする。
パズーがやってくると、浦太郎が何所か余所余所しい話し方でこう言って来た。

「あっ！どうも初めまして。僕達実はとある事情がありまして貴方にお話をお伺いしたいと思いまして・・・」

「僕にですか？いいですよ、構いませんが。」

「そうですか！では休憩室の方でお話をさせてください。」

四人はパズーにやはり何所か余所余所しい笑顔を向けながら休憩室の方まで赴くと、早速自分達が何者であるかを赤裸々に話し始めた。
それを聞いたパズーは次々と出てくる聞きなれぬ単語に思わず首を傾げる。

「時空管理局？何ですかそれは・・・！？」

「簡単に言えば、色んな世界の秩序と平和を守る組織のことだな。お前らのところで言えば、国家憲兵っていう奴か？」

「あ、成程！でも色んな世界の平和って・・・話がまるで見えないんですけど？そもそも貴方達の目的は何ですか？」

「目的と言うか協力要請と言ったほうが言いのでしょうか・・・パズーさん。」

「え！？僕の名前を知ってるんですか！？」

「知ってますよ。色んな意味で・・・・・・」

「え？」

「あ、いやいやこっちのことですから！！ですね、今回何故我々時空管理局が貴方個人に協力要請を申したのかというと、ちょっと酷な話・・・ある人物が世界を手中に収めようと画策しているんです。」

「世界をですか！？一体誰がそんな馬鹿げたこと・・・！」

パズーが身を乗り出して浦太郎達にそう聞き出してくると、浦太郎は険しい表情を浮かべたままパズーにとっては悪い因縁しかないあの男の名前を口にする。

「・・・ムスカ・・・と言えば驚くでしょうか・・・？」

「！！ムスカ・・・だって！？」

パズーはその言葉を聞いた直後、驚愕の余り力が抜けてしまった。

その後、激しい動揺を四人前で見せ付ける。

「そんな・・・そんな莫迦な！？あいつはあの時、ラピュタから落ちて海に沈んだはずじゃ！！」

「そう思うのが普通です。しかしですね・・・奴は何らかの方法で生き延び、我々に挑戦状を叩き込んできたんですよ。これがその時の犯行声明です。」

浦太郎は懐から持って来たコピーを取り出し、パズーの前にそっと置いた。

パズーは紙を広げると、そこに書かれてあるムスカの名前を見るなり険しい表情を浮かべるのであった。

「ロムスカ・パロ・ウル・ラピュタ・・・・・・奴のもう一つの名前だ・・・!!」

「思い出したくない記憶を掘り返すようで悪いですけど・・・ムスカのことを詳しく話してくれませんかね?今回の事件解決のためには、あなたと・・・そして彼女の力が必要です。」

浦太郎やスバル達の真剣な眼差しを目の当たりにしたパズーは、その熱意に負けて数年前のあの忌まわしき出来事を徐に語り出す。

飛行海賊ドーラ一家に追われ、逃げてきた現在の妻シータを助けたこと。

そのドーラと供にラピュタへと向かい、ムスカの野望を打ち砕くために滅びの呪文“バルス”を発動させたことなど全てを、赤裸々に話した。

「・・・という感じですかね。でも、ムスカが生きていたとなると・・・かなり厄介ですね。あいつは目的のためなら手段を選ばない冷酷な男ですから。」

「どこの世界でもそんなもんだよ。ところで、シータちゃんの方は今どうしてる?」

鬼太郎がそう尋ねると、パズーは何時ものような感じで質問に答える。

「ああ・・・シータなら僕の家でヤクの世話をしてますよ。」

だが、パズーのその何気ない一言を聞いた途端・・・鬼太郎と浦太郎は声を揃えて思わずきょとん顔を浮かべた。

「「はい?」」

二人の様子に違和感を感じたパズーは思わず二人に聞きなおした。

「あ・・・あの・・・何か変なこと言いましたか?」

すると、パズーの言葉を聞いていた鬼太郎と浦太郎が恐る恐る問いただしてきた。

「おい・・・今・・・僕の家に居るって言ったけどよ・・・」

「まさか・・・同棲でもしてるんですか・・・!?」

「え?そうりゃあ、そうですよ!“結婚”してるんですから!!」

パズーがさも当たり前のようにその言葉を口にした瞬間、二人はあまりのショックに思わず石化をしてしまい、一言も喋らなくなった。

「「・・・・・・――――――」」

石化してしまった二人を目の当たりにして、どうしていいか分から

途方に暮れてしまうスバルとギンガ。

「あの・・・浦太郎教官!?鬼太郎さん!?」

「石化しちゃったわね・・・!?」

「何か僕また変なこと言っちゃったかな・・・」

自分御言葉のあやに何も言えなくなってしまったパズーは、二人のことを一先ずスバル達に任せると一度職場に戻って仕事を再開し、残されたスバルとギンガは二人の意識を取り戻そうと試行錯誤を繰り返したそうだ。

一方、六課の指令室でスバルからの報告を聞いていたなのは達の方も騒然としていた。

パズーとシータが結婚した、という事実を聞いて思わずはやては大暴れしそうになっていたのであった。

「何やて!!!!!!!!!パズーとシータが結婚!!!!!!!!!?????そんな都合のいい話あるか!!!!!!!!!!!!!!!」

机から身を乗り出し暴れ出そうとするはやてを必死に抑えるヴィータとシグナム。

「お、落ち着いてください主はやて!!!御気を確かに!!!!」

「気持ちは分かるが仕方ないだろ、はやて!!!!!」

「止めないでくれへんか、シグナム・ヴィータ!!!私も実際に行

って確かめる！！！！」

そんな乱心するはやてを呆然としながら見ていたティアナやなのは達。

「すっかりご乱心ですね・・・八神部隊長・・・」

「はやてちゃんは昔からジブリ作品が好きでね、特にラピュタはお気に入りだったの。でもまさか・・・あの二人が結婚してるとはね・・・！？」

なのはもフェイトも中学生のときに、はやての家でラピュタを見たことがあり何度も同じシーンで泣かされたりもしたが、流石にその後の展開がこんな事になるとは思ってもいなかったらしい。

「ちょっと・・・意外だね・・・いや！考えられない話でもないか・・・」

「浦太郎も鬼太郎も相当ショックだったらしいよ♪ギンガが石化したって言ってきたし・・・はやてはあだし。」

ユーノが半ばはやての部隊長らしからぬ行動に言葉を詰まらせていると、恋次が現在の四人の動きを確認してきた。

「で、連中はどうしてる？」

「パズーさんの仕事が終わってから家に行ってみるそうです。シータさんにも色々詳しい説明をしないといけませんしね。」

やがて、レッドバレーでの時間が夕方になり仕事が漸く片付いたパ

ズーは鞄を持って四人と一緒に自宅の方へと歩き出した。

そして、丘を少し登った先にある映画よりも一回りも大きくなった木と煉瓦で造られた小屋とヤクの宿舎がある処が見えてきたのを確認すると四人の方へ振り返る。

「お疲れ様、着きましたよ！」

鬼太郎は目の前に広がってくるパズーの小屋に思わず声を上げた。

「おお・・・正しくパズーの小屋だぜ・・・！！」

「でも、映画よりも大分大きくなってない！？それに、ヤクを飼育する宿舎も出来てるし・・・！？」

「と、兎に角中に入りましょう。話はそれからですよ！」

ギンガの言葉を聞いて、鬼太郎達はパズーの後に続く形で小屋の中へと入って行った。

「ただいま、シータ！お客さん連れてきたんだけど！？」

パズーがそう言うと、奥のほうから現れるのは当初と同じように黒髪でお下げをしたシータ本人であった。

「お帰りなさい、パズー。あら・・・随分大人数ね。ご飯足りるかしら？」

シータの何とも可愛らしい姿に見とれる四人であったが、浦太郎が直ぐに気を遣わせまいと断りの姿勢を見せる。

「あ、いやいや！！そんなお気遣い無く！！」

「そう言う訳にはいきませんよ。ささ、上がってください。夜も更けて来たことですし・・・どうぞ食べて行ってください。」

シータの無垢な笑顔を見た瞬間、断れなくなってしまった四人は仕方なく夕食を頂いていくことにしたのであった。

「あ～～～じゃあ～～～お言葉に甘えさせて貰います～～～」

その後、食事を済ませた四人はシータにもパズーに話したことと同じことを此れまでの経緯を踏まえながら話したのであった。

「ムスカが生きている・・・ですって！？」

自分にとっては悪い思いでしかない過去の人物であるムスカが生きているという事実に驚きを隠しきれないでいるシータ。

そんなシータに分かりやすく浦太郎達のことを語りだすパズー。

「そうなんだ。でね・・・この人たちは時空管理局って言う、異世界の平和を守ってる国家憲兵みたいな人達で、その関連部署の一つが昨日の夜遅くにムスカの仕業によって破壊されたらしい。」

「そうなんですか・・・でも、ムスカが何で！？」

「あいつのことです。どうせラピュタの力を蘇らせて世界を手中に収めるつもりですよ。おまけに、次元世界を移動する手段を持ち合わせている以上・・・全ての世界をね。」

「それで、私達としては是非とも二人に協力の要請をお願いしたのですが・・・如何でしょう？」

すると、スバルのその言葉を聞いた二人はとっくに覚悟を決めたという表情を浮かべた協力の姿勢を見せた。

「勿論、協力させていただきます！」

「ムスカの野望は止めないといけません！私達でよければ、お願いします！」

「そうですか、ありがとうございます！あれ？そう言えばシータさん・・・さっきから気になって居たんですけど、そのペンダントは？」

スバルはその時、シータの首に光る独特の色合いの宝石に目を奪われた。

「え？ああ・・・これは私の家に古くから伝わるもので・・・」

と、シータがまだ説明をしようとした矢先、鬼太郎と浦太郎が声を揃えて宝石の名前を口にした。

「「飛行石だ（よ）」」

「「「「え！？」」」」

二人の言葉を聞いて思わず驚く四人であったが、何よりも驚いているのはパズーとシータ本人達であった。

「知ってるんですか・・・これのこと!?」

「勿論!よく知ってますよ・・・滅びの呪文は特に有名でしてね・・・僕たちの暮らす世界では・・・」

「滅びの呪文が・・・ですか!?」

あまりに不可解な発言に顔を見合わせるパズーとシータであったが、鬼太郎はあまり気にしないでくれと言って話を変えて来た。

「ところで、シータちゃん。ラピュタが天空に上がっていった後、その後その石は?」

「全然反応しなくなりましたね。滅びの呪文によって効力の殆どを失ったと思います。」

「そうですか・・・ん!?」

と、話を聞いていた浦太郎が外から聞こえてくる不審な物音に気付くと、全員に警戒をするように注意を呼びかけた。

スバル達やパズーとシータはこの不審な物音に動揺しながら、警戒を続ける。

「何だろう・・・この音は・・・!?」

すると、鬼太郎が段々近付いてきたその物音に危惧の念を抱くと一度外へと飛び出し空を見上げて確認をした。

鬼太郎の予感が的中したのか、その物音の正体は爆撃機であった。

「爆撃だ！！」

鬼太郎のその言葉を聞いて思わず外に飛び出した他の五人も此方に向って爆弾を降らしてくる爆撃機に驚愕した。

「やばい！！！」

爆弾が振り下ろされた瞬間、巨大な爆炎が巻き上がり誰もが焼け死ぬかと思っていたが実際はまだ死んではいなかった。

身を挺してシータを守っていたパズーが目を開けた瞬間、そこで驚くべきものを目撃した。

「うっ・・・え！？」

シータのほうも目を開けて見ると、その驚くべきものに目を疑った。

「そんな・・・！！」

そこに居たのは・・・・・・バリアジャケットに身を包んで爆撃から二人を守ろうと防御魔法を発動させたスバルとギンガ、そして強化防壁を使用する鬼太郎、浦太郎であった。

「大丈夫ですか、二人とも！？」

「スバルさん！！それは一体・・・！？」

「信じてもらえるか分かりませんが・・・時空管理局とは魔法使い

が集まった集団でもあるんです！」

「「魔法使い！？」」

科学が発達しそうとしているこの世界で、科学とは相反する言葉を聞いて直ぐには信じられないでいるパズーとシータ。

すると、その直後再び襲ってきた爆撃機が再度爆弾を投下しようとしてきた。

「スバル！また来るわよ！」

パズーは今までに見たこと物無い形をした爆撃を見るなり、驚愕の表情を浮かべる。

「何だ、あの飛行機！早い上に見たことも無い形だ・・・！！」

すると、鬼太郎が襲ってきた爆撃機の姿を凝視してその正体を突き止めた。

「ありゃ、確か・・・ミッドの武装隊で使われてる戦闘機じゃねえか！？」

「あんなものがあるってことは・・・ムスカの仕業か！？」

浦太郎の言葉を聞いてそう判断したスバルとギンガは連係プレーを発動させて第二撃目の爆撃を投下させまいと動き出した。

「スバル、行くわよ！」

「おう！」

二人はマッハキャリバーとブリッツキャリバーを加速させて爆撃機の増したに回り込むと、リボルバーナックルにカートリッジをロードさせる。

「「ロードカードリッジ！！」」

カートリッジをロードしたリボルバーナックルの高速スピナが回り出し、魔力エネルギーが収束されていく。

そして、エネルギーが充分に溜まるとスバルとギンガは振ってくる爆弾目掛けて魔力弾と風圧魔力をぶつける。

「「リボルバー（ストーム）・・・シュート！！」」

二つの攻撃が合さり強化されると、投下された爆弾は全て地面に落ちる前に爆発する。

その光景を見ていたパズーとシータは安堵の表情を浮かべる。

「やった！」

「いや、未だだぜ！爆撃を回避したところで、何の意味もねえ！」

「こういう時は、僕に任せてよ♪やるよ、フィッシャーマン」

〈Ｙｅｓ　ｍａｓｔｅｒ〉

そう言うと、浦太郎はスコープで爆撃機に照準を合わせると生体反

応がないことを確認してから魔力を先端に収束させ、砲撃発射準備をする。

「生物反応無し。安全確認。ディバイン・・・バスター!!!」

その瞬間、フィッシャーマンの先端から放たれる青色に輝くディバインバスターが見事爆撃機に直撃すると、爆撃機は大爆発を起こして谷底へと墜落していった。

パズーとシータはイメージしていた魔法とは大分かけ離れたその代物に唖然としながらも、浦太郎の砲撃の威力に驚愕していた。

「す・・・凄い!!一発だ!!」

「これが魔法・・・!?」

急いで浦太郎達の下に戻ったスバルとギンガは二人の無事を確認する。

「お!?何かが出てきた・・・!」

すると、爆撃機が墜落していった谷底のほうから強い魔力を発する何者かが飛び上がって浦太郎達の前に現れた。

現れたのは、ストレージデバイスを手に持つ不気味な雰囲気を漂わせる銀髪の男であった。

「ふふふ・・・管理局の魔導師・・・そしてパズーとシータとお見受けする。」

怪しげな雰囲気を漂わせるその男に警戒を強めるスバル達と、シータを守ろうと前に出ながら男に素性を尋ねるパズー。

「誰だ！！ムスカの仲間か！？」

「如何にも！リム・グラス・・・“コピー魔導師のリム”の異名を持つ男さ。」

「コピー魔導師・・・！？」

「聞いたことがあるわ。特殊なリンカーコアを持ち、様々な魔導師の技をコピーすることが出来る稀代の魔導師・・・あいつはその中でも天才と謳われる超一流のコピー魔導師！？」

「わざわざ説明を有難う・・・ギンガ・ナカジマ陸曹。そうさ！コピー魔導師である俺にとって如何なる技も俺の思うがまま。貴様達の攻撃など、俺の前では意味を持たん。それを今から証明してやろう・・・喰らえ、エクセリオンバスター！」

「「「「なっ！？」」」」

その瞬間、リムのストレージデバイスから発射されるエクシードモードのなのはが使う強化砲撃魔法であるエクセリオンバスターは全員の方目掛けて発射された。

パズーとシータを抱きかかえたスバル達が一度その場から離れて砲撃をかわすものの、直線上に位置していた二人の住まいは無惨にも粉々に破壊されてしまった。

「家が！？」

「何て酷いことを！」

「なのはさんのエクセリオンバスターまで・・・！？」

「コピーの腕も本物ね！」

ウィングロードで空へと散開していたスバルとギンガは、正しく本物顔負けの戦闘能力を有するリムの魔法に驚愕した。

すると、そんなリムを見下ろしながら鼻で笑う鬼太郎は斬魄刀を抜いて臨戦態勢に入る。

「はっ！本物にいくら似ていようが、本物に敵うものか！俺にやらせろ！亀、スバル達と一緒に二人を安全な場所に避難させろ！！」

「分かった、先輩頼んだよ！」

浦太郎はそう言うと、スバル達と供にパズーとシータを連れて一端その場から回避した。

鬼太郎は空中からリムに向っていくと、烈火を解放した。

「熾きやがれ、烈火！！」

烈火を振り下ろした鬼太郎の攻撃を回避したリムは、不敵な笑みを浮かべながら鬼太郎のことを凝視する。

「ほう。お前は翡翠の魔導死神のところの桃谷鬼太郎・・・」

「俺のことを知ってるようだな。でも、だからと言って何も出やしねえよ！！」

鬼太郎はそう言うと、再び烈火の炎をリムに向って仕掛けていく。

リムはストレージデバイスで鬼太郎の攻撃を防ぎながら、反撃の期を探っているが鬼太郎のほうは至って余裕の表情を見せながらこう口にする。

「はっ！斬魄刀相手じゃ、コピーも出来まい！！」

「確かに！だが・・・コピーは何も一つのパターンだけではない！」

すると、リムは烈火の刃をデバイスで受け止めた状態で片方の手に魔力を雷へと変換させた魔法攻撃を発動させようとし、それに気付いた鬼太郎も思わず驚愕の表情を浮かべる。

「！？」

「トライデントスマッシャー」

その瞬間、リムの掌から放たれるフェイトの雷撃魔法が鬼太郎に襲い掛かろうとするが、いち早くそれに気付いた鬼太郎は距離を取ると烈火を回転させて炎の壁を形成。

「烈火斬回転撃！！」

炎の壁を気付いたお陰で、大事には至らなかった鬼太郎であったがリムの姑息な手段に内心かなりご立腹であった。

「けっ！人の知り合いの技ばかりパクリやがって・・・いけ好かねえ野郎だ。」

「勝てばいいのだ・・・所詮は世界とはそういうものだろ？」

「そんな典型的な台詞なんぞ聞きたかねえよ。烈火大斬撃・炎熱嵐！！」

鬼太郎はその瞬間、灼熱の炎の嵐を発生させてリムを燃やし尽くそうとするが、リムは鼻で笑うとはやての使う氷結魔法を発動させる。

「ふん。氷結の息吹・アーテムデスアイセス！」

空中に浮かぶキューブから放たれる冷気によって、炎の嵐は全て凍りつきそのまま氷解を起こす。

「なっ！？（はやての氷結魔法だと！）」

「そら、これならどうだ？」

すると、隙を見たリムが魔法陣を展開させるとユーノと全く同じ魔法陣からストラグルバインドを発動させて鬼太郎の体を絡め取る。

「のあああ！！」

コピーされたユーノのストラグルバインドによって技を発動できなくなってしまった鬼太郎はその場に倒れ付してしまう。

「こりゃあ・・・店長のストラグルバインド！？」

必死で抵抗を続ける鬼太郎に徐に近付いてくる薄ら笑いを浮かべるリムは、鬼太郎にデバイスを向けると次のように語り出す。

「これでもまだ減らず口が聞けるか？あまり貴様に時間はかけている暇は無い・・・終わらせる！」

そう言うと、リムは至近距離でなのはのディバインバスターを収束させると鬼太郎目掛けて発射しようとした。

「！！」

体の自由が利かず、最早絶体絶命状態の鬼太郎であったが・・・そんな鬼太郎の危機を救ったのはあの技であった。

「輝け、晩翠」

ディバインバスターが発射されそうになった瞬間、リムに向かって飛んでくる翡翠に輝く斬撃。

リムはそれに気付くと、一度攻撃を中断させて翡翠斬を回避する。

鬼太郎のほうはこの見慣れた技を目の当たりにし、思わず驚愕した。

「なっ！？この攻撃は・・・！」

すると、その時暗闇の中から現れたのは三点セットに身を包んだ晩翠を解放させたユーノ・スクライアであった。

「・・・あまりウチの従業員を甚振らないでくれるかい？じゃないと、僕が痛い目に遭わせるよ。」

「店長！！」

「・・・翡翠の魔導死神か・・・これはツイている！」

「ツイている？何を言ってる・・・君は不運だよ。僕を相手にした時点でね・・・」

「ん～～～面白いことをぬかす。果たして本当にツイていないのはどちらのほうかな！？アクセルシューター！」

挑発的な言動でユーノにそう口にすると、なのはが何時も使うアクセルシューターと同じ攻撃をユーノに向けて放ってきた。

数はなのはのとはまた比べ物に成らないほどに夥しいものであったが、それでもユーノは無駄の無い瞬歩で軌道を呼んで次々と回避していく。

「・・・ほう・・・軽快で且つ無駄の無い瞬歩だ。流石は機動六課最強にして最後の切り札。しかし、これしきのアクセルシューターをかわすだけでは意味が無い。アクセル×１００！」

その瞬間、今迄のアクセルシューターの速さが一気に１００倍にまで加速されると、ユーノの四方全体を覆い隠してしまう。

これには流石のユーノも驚かないわけが無かった。

「！」

「何だあの速さは！？なのはのとは比べ物にならねえぜ！！」

「コピーだけと高をくくっていても私には勝てん！“コピーの中に見出すオリジナルを扱える者こそが、真のコピー魔導師”なのだ！」

その瞬間、アクセルシュータ全弾がユーノに被弾し爆風が巻き起こった。

これを見たリムは勝ち誇った表情を浮かべ、鬼太郎は驚愕の表情を見せたが・・・爆風が晴れた先にいたのは全身を翡翠の殻で覆うユーノであった。

「なっ！？」

あれだけの数とスピードを持ったアクセルシュータを受けてなお、傷一つ負っていないユーノの姿を信じられないとばかりに凝視するリムであったが、ユーノの声色はまるで白き魔王と化したなのはのように暗く冷たいものに変わっていた。

「・・・確かに・・・スピードならなのはよりも上かもしれない・・・・・でもそれだけだ。なのはのアクセルシューターと比較することもないけど、彼女のアクセルシューターのほうがずっと切れのある動きをするし強力だ。模倣の中に見出すオリジナル？笑わせるな・・・」

すると、ユーノは晩翠を一度地面に突き刺すと両手を合掌させ、七十五番の縛道を発動させる。

「縛道の七十五　『五柱鉄貫（ごちゅうてっかん）』」

すると、リムの上空から降り注ぐ五つの五角柱によってリムが五体

の動きを完全に封じられてしまう。

「のあああ！！」

五角柱の重さによって体を全く動かせないリムを冷酷な目つきで見ながら、ユーノは距離を取り掌を向けた。

「・・・なのはの技を盗んだ以上・・・白き魔王に代わってこの翡翠の魔導死神が死の報復をプレゼントしよう。これはなのはと模擬戦をした時に本気で泣かせた技でね・・・加減は無しだ。」

すると、ユーノの掌に集まってくる莫大な量の霊力が収束し巨大な砲撃を作り出していく。

それを見ていた鬼太郎も思わず冷や汗をかきながら驚愕する。

「のあ！？あの技は・・・！！」

「破道の八十八　『飛竜撃賊震天雷砲（ひりゅうげきぞくしんてんらいほう）』」

ユーノがそう口にした瞬間、掌から巨大な光線が放たれリムに向って襲い掛かっていった。

五体を封じられ身動きが取れないリムに回避する術などなかった。

「のあああああああああああああああああ！！！！！！！！！」

飛竜撃賊震天雷砲が直撃した瞬間、凄まじい轟音と大爆発が起こり爆炎が巻き起こった。

パズーとシータを安全なところまで避難させていた浦太郎やスバル達も、夜の静けさを穿つほどの勢いの爆炎を目の当たりにし、驚愕していた。

「あの光は何だ!?」

「この魔力反応と霊圧・・・そしてあんな技使えるのは・・・店長!?」

浦太郎達は急いで二人を連れて元の場所へと戻っていった。

爆風が晴れると、その先に居たのは・・・・・粉々に砕けた五柱鉄貫の下敷きになって黒こげとなったリムであった。

「ば・・・莫迦な・・・!?」

リムは力尽きると、まるで昇華されるかのように全身を灰にして空へと散らばっていった。

ユーノはそれを見るなり直ぐにそれが本物でないことを悟った。

「（灰になった・・・どうやらクローンのようだな・・・）」

と、その時・・・・・浦太郎達が二人を連れてユーノ達の下に戻ってきた。

「先輩!!店長!?」

「ユーノ先生!来ていたんですか!?」

「まぁね。それより、パズーさんとシータさんは大丈夫なの？」

「ええ。この通り無事です・・・でも・・・家は焼失しちゃいましたけど・・・」

ユーノも時代の深刻さを痛感すると、動揺するパズーとシータの下に近付き帽子を取って深く頭を下げた。

「申し訳ございません。我々とあろうものが、不覚でした。」

「そんな！別に気にすることはないですよ！！こっちは命を助けてもらったのに・・・！」

「そうですよ！寧ろ感謝してるぐらいですから・・・！！幸いにも鳩達もヤク達も無事ですから・・・」

「これかれどうするつもりですか、店長？この二人の家が無い以上・・・寝泊り出来る場所といったら・・・」

「協力してくれるという許諾は得たんでしょ。だったら一先ず事件解決まで六課に身柄を預けることにしよう。親方さんのほうには僕から伝えておく。」

ユーノは浦太郎にそう言うと、家をなくしたパズーとシータを連れて一先ずロングアーチへと帰還することにした。

その頃、リムがユーノにやられたことを巨大飛行船艦『ネオゴリアテ』で部下から報告を受けていたサイボーグムスカはと言うと・・・

「ムスカ様。リム様がやられたようです・・・」

「やはり、あの程度のクローンでは駄目か。この石もまだまだ力を完全には引き出せていないようだ。もう少し熟成させよう・・・それに、いいデータも取れた。これは倒し甲斐が出てきたよ・・・翡翠の魔導死神・・・ユーノ・スクライア。」

ムスカに左腕に埋め込まれたアンゴルモアを加工した石を見ながら、次なる方法を模索していた。

蘇ったムスカは一体どのような方法で彼らに報復してくるのであろうか！？

復活、サイボーグ・ムスカ（後書き）

教えて、ユーノ先生！

ユ「今日は特別篇第三弾、ラピュタについてだ♪」

ユ「１９８６年に地球で公開された宮崎駿のアニメ映画の中でも常に人気上位を誇る傑作のひとつだ♪」

ユ「その中でも、今回の敵であるムスカ大佐の言動は後世でも広く伝えられ、金曜ロードショーで放映されるたびに決まって最後のシーンで出てくる滅びの呪文が書き込まれる。」

ユ「声優はワンピースのルフィの声で知られる田中真弓さんと旧ドラえもんのドラミちゃんの声を担当した横沢啓子さんだよ♪」

一「こうして見ると、大先輩ばっかりじゃねえか！確かお前の声の人って・・・女の声優じゃなかったっけか？」

ユ「水橋さんですか？そうですけどそれが何か？」

一「いや・・・お前、男なのに女の声だからよ・・・くくくく！！！」

ユ「（血管が切れる）・・・頭冷やしましょうか♪」

一「のあああああああああ！！！！！！！！（この後は想像に任せる）」

一護との模擬戦終えたフォワードたちの感想。

ス「強かったね、一護さん！流石はユーノ先生のお師匠さんだけあるって感じ！！」

テ「そうね。あんな大きな斬魄刀なのに、あの瞬歩の速さといい斬撃といい、全部がうちの隊長陣のそれを上回ってたわ。」

エ「シグナム副隊長、いつもながら闘志が血気盛んでしたし・・・」

キャ「一護さん・・・今度シグナム副隊長と会ったら大変ですね・・・」

ス「そう言えば、一護さんって恋次さんとは好敵手だって聞いたけど・・・その割には仲あんまり良くないよね・・・」

テ「似たもの同士ほど、喧嘩するものね。」

すると、そんなティアナの頭目掛けて恋次が拳骨を入れる。

テ「痛い！！！！（ティアナ、涙目を浮かべて悶絶）」

恋「誰が一護と似てるだ！ああ！！」

テ「す・・・すみませんでした・・・！！」

失われし天都

>i13269—709<

ムスカの送り込んできた刺客によって、家を破壊されてしまったパズーとシータはユーノの計らいにより、事件解決まで六課に協力するという条件での身柄預かりを受諾。

その後、二人は自分達の住む世界とは全く文明も科学も違う未知の領域に足を踏み入れる形となり、かなりの戸惑いも見せていたが六課の指令室へと案内された。

パズーとシータが指令室に入ってきた瞬間、はやての歓喜の叫び声が響き渡った。

「きゃ！！！！！！！！！！本物や！！！！！！！！！！本物の・・・パズーとシータや！！！！！！！！！！」

はやての突然の行動に唖然となる二人に対し、はやて自身はパズーとシータに近付き子供のような胸の興奮を覚えながら二人を凝視、固い握手を交わす。

「ははは！！！！！感激やわ！！！！！！本物に会えるなんて夢にも思わんかった！！！！！しかも声まで同じや！！！！！ようこそいらっしゃいました！！！ここ機動六課ロングアーチの部隊長、八神はやてです！！！狭いところでは在りますが、どうぞよろしく！！！！」

「あ・・・はい・・・僕らのほうこそよろしくお願いします・・・」

「何だか・・・随分賑やかな方ですね・・・」

シータの戸惑いの言葉にクロノやなのは達は思わず恥ずかしさの余り頬を赤らめた。

「はやて・・・興奮しすぎだ・・・」

その後、パズーとシータははやて達から自分のたちの活躍をアニメという形でテレビ放映されていたことを聞かされ、終始驚いていた。

「それじゃあ、はやてさんやなのはさん達は向こうの世界で僕たちの活躍を映像で見たということですか！？」

「だから飛行石のことや、滅びの呪文の存在を知っていたんですか・・・！？」

「そうなんですよ。でもまさか・・・お二人が結婚しているとは流石に予想もしませんでしたよ。ご結婚されたのはいつで！？」

「大体二年前ですかね。僕がゴンドアのほうに遊びに行って、暫く同棲をした後、色々話し合って・・・結果的にゴールイン！」

「その後、ヤクを連れてスラッグ渓谷に引っ越してきて・・・一緒にパズーの家で住み始めてたんですけど・・・その家が・・・」

すると、シータとパズーの顔色を窺った鬼太郎と浦太郎は意気消沈し、項垂れてしまう。

「「面目ない・・・」」

二人の様子に罪悪感を感じてしまったパズーとシータは直ぐに謝罪の言葉を掛ける。

「ああ！すみません！！別にそう言ったつもりで口に訳では無いですから！！」

「私の軽率な言葉が誤解を招いたなら謝ります。本当にすみません！！それよりも、ムスカはどうやって生き永らえているのでしょうか！？」

シータがそう言うと、はやての隣に座っていたユーノが自分の立てた仮説を口にする。

「おそらく、アンゴルモアのエネルギーを使って生命を維持しているんじゃないえすかね。もし、何らかの形で加工して体の何所かに取り込んでいれば、反応も検出されにくいですから。」

「アンゴルモア・・・？何ですかそれは！？」

パズーとシータは全く聞きなれない言葉に首を傾げるしかなかった。

「ああ、そうでしたね！そのことについて詳しく話しておきませんと・・・！」

その後、ユーノは出来るだけ簡潔した内容で自分達が探しているアンゴルモアという危険なロストロギアのことについて説明を行い、二人は真剣な眼差しでユーノの話を聞いていた。

「一応、話はそんな感じですかね。ご理解頂けましたか？」

「ええ・・・ちょっと信じられないところもありましたが、大体は。」

「でもそうなると・・・ムスカは直ぐにでも行動を起こす筈よね。ラピュタがあんな奴の手に渡ったら本当に世界の終わりだわ。」

「でも、飛行石を持たないあいつがラピュタの位置を特定することなんか出来ないよ。第一、シータの飛行石ですらあれ以後全く反応を起こしていないのに・・・」

「う～～ん・・・捜査は実に難解なものだな・・・」

思っていた以上にことの解決が難しいと判断したクロノやはやて達は頭を抱えて対応策を練っていたが、これと言っていい方法は見つからなかった。

暫く考えても何も浮かんでこなかった恋次は先ずは行動を起こすことが第一だと判断し、クロノに出発の要請を試みる。

しかし、その直後鬼太郎とクロノから切実な言葉を聞かされる。

「今此処で悩んでいても仕方ない。ムスカの目的は分かってるんだ。奴よりも先にラピュタを見つけ出すことが第一目標さ。」

「けどよ、恋次!?映画じゃラピュタはあの後宇宙にまで飛んでいっちまったんだぜ・・・幾らなんでも次元航行船もなしに宇宙に行けるのかよ!?」

「それに、クラウディアのほうも現在整備中だ。提督である僕の権限を以ってしても、不確定な捜索活動のために次元航行船を発進させるよう上層部に許諾を得るのは難しいだろう。」

「あ〜〜も〜〜〜!!!!じゃあどうすりゃいいんだよ!!!!!!」

と、恋次が何とも情けない声を上げ自分の机に両腕を叩きつけたそのとき・・・ユーノは鼻で笑うとそんな恋次に向って自身に満ちた表情でこう言った。

「・・・うろたえないでくださいよ、恋次さん。」

その言葉を聞いた恋次達も、思わずユーノに視線を向ける。

「あ?どういう意味だよ、ユーノ!?」

「何か、秘策でもあるの・・・ユーノ君?」

なのはがそう尋ねると、ユーノは飄々とした態度で扇子を広げ金太

郎に何かを持ってくるように指示を出した。

「勿論♪こんな時の為に、準備は万端整えていたよ。金太郎、“あれ”持ってきて！」

「おお！！承知！！」

金太郎はユーノの言葉を聞くなり、猛烈な走りで部屋から出て行き言われた代物を取りに行ったのであった。

フォワードメンバーはユーノが口にしたあれという言葉の正体が一体何であるのかが非常に気がかりであった。

「・・・あれって・・・何のことだろう！？」

フォワードメンバーの大半が疑問に思う中、鬼太郎と浦太郎はどうやら答えを導き出し納得した表情を見せた。

「はっ！そうか店長！！あれですね！！」

「成程な！！！あれがあったな、あれが・・・！！」

「だからそのあれとは一体・・・お！？」

ルキアが二人に尋ねようとしたとき、僅か1分も経たないうちに金太郎が戻って来るて懇切丁寧な態度でユーノに何かを手渡した。

「お持ちいたしました、店長！！これを！！」

金太郎がそれを受け取ると、ユーノは被さっていた布を取り外して

箱のようなものを全員に見えるようにした。

「ユーノ先生、それは！？」

「ふふ・・・みんなには黙っていたけど・・・ちょっとしたものを呼び起こすための起動スイッチさ！さて、行きますかな！！」

そう言うと、全員が見守る中ユーノは箱の中から飛び出した“ユーノ・スクライア承認”と刻印されたマスターキーを取り出し、大仰な態度で天に翳して・・・・・・

「大次元空母艦ナキサワメ・・・・・・起動・・・・・・承認！！！！！！！！！！！！！」

その瞬間、ユーノの専用デスクのモニター画面のうち、今迄閉じられていた場所が突然開口される。

そして、その開かれた場所に設置されていた鍵穴にマスターキーを挿入し、右回りに回した。

すると、モニター画面にはＮＡＫＩＳＡＷＡＭＥと表記された何かのロックが解除されたことが表示された。

『Ｄｒｉｖｅ ｉｇｎｉｔｉｏｎ ｎａｋｉｓａｗａｍｅ ｐｒｅｐａｒａｔｉｏｎ』

ユーノがキーを発動させた瞬間、六課の隊舎全体に響き渡る地響きが全員の足元から感じ取れた。

突然のこの不可解な現象に戸惑いを見せるフォワードメンバー全員。

「何だ・・・この地響きは・・・！！」

「何が起きたというのだ！？」

と、その時シャーリーからの緊急入電がはやての下に届く。

『八神隊長！！大変です！！訓練場の下から何かが出てきました！！』

「訓練場の・・・下からやて・・・！？」

全員はその言葉を聞くと、直ぐに訓練場の下まで走って行き訓練場の方を見てみた。

すると、何時も使っている訓練場の地面が左右に開かれ巨大な空洞が見えたかと思えばその下から現れたのはなのは達の想像を絶するものであった。

「「「「なっ！？」」」」

「「「「え！？」」」」

「「「「何！？」」」」

「「「「これは！？」」」」

全員がその時目の当たりにしたのは・・・・・全長およそ３００メートル誇るほど巨大な緑色の次元航行船であった。

あまりに巨大で且つ想定外の出来事を目の当たりにした全員のうち、恋次が気持ちを代弁して驚愕の声を上げた。

「な・・・何だこりゃあああああああ!!!!!!!!!?????????」

そんな唖然とする全員に対して、ユーノは腕組みをした状態でこの巨大な次元航行船の説明を始める。

「“大次元空母艦ナキサワメ”。宇宙空間や次元空間での長期滞在は勿論、未知なる脅威との戦闘に備えてあらゆる武装手段を搭載・格納出来る超巨大次元戦艦。置き場所が無くてさ、勝手ながら六課の訓練場の地下深くに隠していたんだ♪当然、バレないように防護魔法を施してね！」

「またとんでもないモノを造っていやがったんだな・・・つくづく抜け目ない男だぜ！」

「でもこれなら、ラピュタ捜索に乗り出せるよ！」

「せやな！よし、明日の早朝・・・機動六課前線メンバー一同はナキサワメに搭乗し、第一追跡目標、天空の城ラピュタを目指して出発をする。各自、準備を整えて明日の出発に備えよ！」

「「「「「「「「「「了解！」」」」」」」」」」

「「「ああ（はっ）！」」」

はやての指示を受けた全員はその夜、明日の出発の準備をしに部屋に戻ると荷造りを開始する。

一方、ユーノのほうはというと月明かりに照らされながら一際巨大な影を作るナキサワメの最終チェックを済ませると、装甲部分を手で触りながら物思いに耽っていた。

「・・・・・・――――――ラピュタか・・・ん？」

と、その時。

そんなユーノの下に歩み寄ってきたパズー。

「ああ、ユーノさん。ちょっといいですか？」

「パズーさん。ええ、構いませんよ。」

パズーはユーノと供に月明かりを仰ぎ見ながら自分の赤裸々な気持ちをユーノにぶつけた。

「ユーノさん・・・僕・・・正直言うと、これから先のことが怖くて堪らないんです。あそこは僕とシータにとってはあまり思い出したくない場所ですから・・・」

「そう思うのは当然と言えば当然ですよ。けど、あなたは実に勇敢な人だ・・・こんな得体の知れない僕らに何の疑いもなく協力の姿勢を見せてくれたんですから。」

「僕やシータは、あたな方が悪い人だとは思ってませんよ。ユーノさん・・・それはあなたの目を見れば直ぐに分かります。あなたはどうも僕と似た雰囲気を感じるんですよ・・・」

「僕がですか！？」

「何だか・・・ユーノさんとは一緒に居てもとても心安らぐと言いますか、何というか・・・親しみを持てるんですよね。家族であるかのように・・・ユーノさん・・・あなたには心から守りたいと思う女性（ひと）は居ますか？」

「・・・・・居ますね。僕にとっては、世界中の誰よりも僕を理解してくれる彼女こそが、僕にとっての全てですから。だから、守り抜きますよ・・・彼女がずっと傍で笑ってくれる為にも・・・」

ユーノは隣のパズーに向ってそう言うと、なのはたに対する新たな決意を胸に満月のと周りで光り続ける一等星に目をやった。

そして、いよいよ出発の朝がやって来た。

フォワードメンバーと死神部隊、スクライア商店のメンバーは先に搭乗を済ませている間、はやてとクロノは二・三日の間留守を預かってくれるリンディや他のメンバーの全員に挨拶を済ませていた。

リンディの隣には不安げな表情を浮かべるヴィヴィオも一緒であった。

「それじゃあ、リンディ提督。留守の間はよろしくお願いします。」

「了解したわ。くれぐれも、無理はしないようにね。」

「分かってますよ。よし、ほんなら全員出発といこうや！」

『『『『『『『『『はい！』』』』』』』』』

はやてはそう言うと、六課のメンバーに挨拶を済ませるとスーツケースを転がしてクロノと一緒に搭乗を完了させ、全員が待機をする中央指令室へと直行する。

全員が登場し終えたことを確認したユーノは、通信機を手に取り軽くテストを行ってから出発の合図を出す。

『あ・・・あ・・・前線メンバー各位及びバックヤードスタッフの方に連絡。本船は只今より第７４管理外世界『レッドバレー』の宇宙空間に存在すると思われる天空の城ラピュタへと向け出発を開始する。ムスカも恐らくはラピュタへと向けて行動を開始していると思われる。全員一丸となってラピュタ捜索に取り掛かるようお願いしたい。発見したら、直ちに部隊長八神はやてもしくはクロノに報告をするように。さぁ、みんな！しまって行くぞ！！』

クルー全員に激励の言葉を掛けたユーノは、艦長席に座るとシートベルトを着用してタッチパネルを操作し始める。

同じように、操舵手を務めることになっているシャーリー・アルト・ルキノの三人はナキサワメのエネルギーの充填確認と、操作方法を確認すると艦長であるユーノに向って声を掛ける。

「発進準備、完了致しました！」

「大次元空母艦ナキサワメ、エンジン異常なし。その他各部問題なし！」

「よし！ウルテクエンジン全開・・・・・・ナキサワメ、テイクオフ！」

ユーノがそう指示を出した瞬間、六課の訓練場から凄まじいエンジン音を出しながら空中へと舞い上がる大次元空母艦ナキサワメ。

ナキサワメはウルテクエンジンを全開にすると、開かれた次元ルートに向って飛び出し六課の預かりを任されたリンディ達に見送られながら姿を消していった。

ナキサワメが姿を消した後、ヴィヴィオはなのはとユーノ達のことを心配に思いながら必ず帰ってくることを祈った。

「なのはママ・・・ユーノパパ・・・」

同じように、リンディ達も全員が無事に帰還することを願ったのであった。

「・・・怪我の無いようにね・・・みんな・・・」

その頃、ナキサワメはレッドバレーに辿り着くと直ぐに宇宙空間へと飛び出しラピュタへと向けて順調に航海を進めていた。

ユーノはその間、全員を一箇所に集めるとタッチパネルを操作しながらシータから拝借した飛行石のエネルギー残量を下にラピュタの場所を特定していた。

「シータさんの飛行石に残ったエネルギーから過去の出来事をデータ化して、ラピュタがあると思われる場所を特定してみた結果・・・このような経路となる。」

その瞬間、メインスクリーンに映し出されるのはラピュタへと続く

果てしない経路。

「此処からだと、およそ９００光年先の宇宙空間にラピュタがある筈だよ。」

「９００光年!?おい、ルキア!光年って言うのは大体どれくらいなんだ!?」

「１光年がおよそ９．４６×１０１２キロメートル・・・即ち、９兆４６００億キロメートルだ。」

「９兆４６００億キロメートルだ!?てーことは９００億だと・・・・・のあああ!!!!一体何時になるんだよ到着は!?」

「普通に行ったらまず僕達が生きている間に到着できる可能性はないですよ♪だからこそ、それを未然に防ぐためにワープ航法システムというものがあるんじゃないですか♪」

「ワープ航法システム・・・!?」

聞きなれぬ言葉に思わず怪訝そうな表情を浮かべる恋次に、ティアナが説明を加える。

「宇宙空間などの膨大な距離を移動するために使う、空間そのものを吹っ飛ばす移動手段のことですよ。」

「これからそのワープに入りますので、取り合えず席についてください。衝撃がかなりきますから。」

「何だか・・・僕らにはとても考えられない世界だね・・・」

「本当・・・話が大きすぎるわ・・・！」

改めてパズーとシータはあまりにレベルが違いすぎる文明レベルに唖然とするしかなかったであった。

やがて、ユーノの言葉を聞いた前線メンバー全員が席についてシートベルトをしっかりと着用すると、ユーノはモニターに向かいながらワープ航法システムを発動させる準備に入る。

「衛星軌道上を通過したから、これよりワープに入る。各自自分の席に着いたらシートベルトをしっかり着用するように。」

「もうしっかり着用してるよ、店長♪」

「よし。ワープ航法システム各機問題なし。宇宙空間歪曲、開始！」

ユーノはそう言うと、目の前のスイッチを押してワープ航法システムを発動させる。

その瞬間、ナキサワメの前方が突然歪曲を始めて・・・ナキサワメそのものが未知なる歪曲空間へと入り込み宇宙空間から逸脱した。

「これより数十時間・・・宇宙空間を歪曲しながら目標へと向う。暫くはこのワープ空間の中での移動になるから、外の景色は見えない。それまでに体を休めるなり食事を取るなりまたは訓練や調査などを行うならそれでもいいけど。」

「了解。じゃあ、フォワードメンバーは早速訓練場に向って体を温めておこうか。」

「「「「「はい！」」」」」

なのははそう言うと、フェイト・ヴィータとシグナム、恋次達、スクライア商店従業員と供にフォワードメンバーの訓練を行うため内部訓練場へと目指した。

「何かあったら直ぐに連絡するさかい、それまで頑張ってなみんな。」

はやてはなのは達にそう言って見送ると、一度コーヒーを入れに立ち上がった。

一方、クロノはこの後のパズーとシータ・・・二人の行動に関してどのような処置をとるのかについて尋ねるのであった。

「ユーノ、パズーさんとシータさんはどうする？」

「そうだな・・・メカニックのパズーさんには僕と一緒に調査の手伝い等をしてもらうかな。シータさんは申し訳ないですけど、バックヤードの人達と一緒に人数分の食事の用意を手伝ってもらいませんか？」

「ええ、私は構いませんよ。」

「僕も出来ることがあるなら何でも協力しますよ！」

「ありがとうございます、二人とも。」

二人の肯定的な態度を見て心から安心したユーノは、早速パズーと

供に調査に乗り出した。

シータはその間、調理場のほうへと向いバックヤードと供に食事の用意を手伝っていた。

暫く時間が経った後、ユーノとパズーは一度エンジンルームへと赴き、交換箇所はないかどうかを見て回っていた。

すると、パズーがユーノに向ってこんなことを言って来た。

「それにしても、ワープ航法システムとは凄い科学技術ですね！でも、瞬間移動とはまた違うんですね。」

「そうなんですよ♪多くの人は、ワープというと瞬間移動手段と勘違いなさってるようですが、実際は宇宙空間歪曲航法のことで・・・予てからどの世界でも提唱されてきた宇宙空間における移動方法でした。しかし、並みの科学力ではワープ航法の際には宇宙にある全エネルギーの１００億倍のエネルギーを要するため現実では理論上、実現不可能という結論が出されて来ました。しかし、管理局は創設以来・・・魔法文明を発達させる傍ら、こう言った難題を解決する方法を導き出しました。それが、この船のエンジンルームにも用いられている無限エネルギーサーキット・・・」

そう言うと、ユーノはこの船の動力源に使われている巨大なコンビナートをパズーに見せてその中で発光を続けながらエネルギーを作り出すものの名前を口にした。

「『リンカーブースター』です。これは、魔導師の魔法能力の根源でもあるリンカーコアの数百倍の高エネルギーを発する高密度の発光体です。これを使った最終兵器に、リンカーエクストリームと呼

ばれるものが次元航行船全てに搭載されています。」

そう、以前なのは達が使用したあのリンカーエクストリームの動力源は無限エネルギーサーキットであるリンカーブースターを素に作り出されているだ。

パズーは常識を逸した途轍もないテクノロジーに驚嘆していた。

「凄いテクノロジーだ・・・こんなものが現実に存在するなんて！？」

「パズーさんの世界ではどうか分かりませんけど・・・科学が“平和”に発達すれば、きっと似たようなものが開発されるでしょう。」

「科学が平和に発達か・・・・・・そもそも科学って、何なんでしょうね？」

「・・・本来的には、人を幸せにすることが科学の根本でした。しかし、あまりに人間中心に物事を考えるから、人は過ちを犯し科学を間違ったものへと導いてしまう。細菌兵器や核物質・・・世界はそうやって科学による平和から滅亡への一途を辿り、幾度と無く滅んできた。所詮は、人間のエゴが招いた悪しき結果ですよ。科学を如何に発展していくかは、使う人間によって大きく左右される。そして何より・・・科学を人間だけが使うという考えも払拭していかないと、過ちは永遠になくならない。」

「・・・・・・――――――」

そんな哲学的なユーノの、でも決して他人事ではない正論を真剣な表情で一言一句聞き入れていくパズー。

「ちょっと、哲学的過ぎましたかね・・・♪」

「いや、いい教訓になりましたよ。ユーノさん・・・そうですよね・・人間は何時の間にか自分達が中心に居るとばかり錯覚するから、世界を自らの手で滅ぼしたりするんです。世界は僕達だけのものじゃないのに・・・」

「それを分かってもらえれば、きっと希望が見えてくるはずですよ。少なくとも、貴方のような方が一人でも多く、理解してもらえれば・・・きっとです。」

一方、そんな二人とは裏腹に鬼太郎は一人こっそりと訓練を抜けると、誰にも気付かれないような足取りでシータがいる調理場のほうへ赴き、窓の向こうに移る得意げに料理を作るシータを見て、鼻の下を延ばす。

「へへへ・・・!!」

そして、鬼太郎はそんなシータに聞こえるように扉を叩く。

「はい。」

シータの声が聞こえると、鬼太郎は身だしなみを整えて意を決してドアを開ける。

「・・・よし!」

ドアが開かれた瞬間、シータは入ってきた鬼太郎に食事の用意がまだできて居ないといたって普通の態度で応える。

「御免なさい、ご飯未だなんです。次元船の台所って初めてで・・・」

「ああ・・・そうだよね・・・・！！」

「？あの何か・・・？」

シータはそう言うと、変に目を輝かせながら自分を見つめる鬼太郎に声を掛ける。

「・・・いいよな・・・」

「え？」

「あ、いやいや！！暇だから・・・何か手伝おうかな、何てな・・・！！」

「まあ、ありがとう。じゃあ、棚からお皿出してくださる。」

「へへ！！お安い・・・ご・・・！？」

と、シータの言葉を快く受け入れた鬼太郎が勝ち誇ったかのような笑顔で歩き出した瞬間、鬼太郎の目に飛び込んできたのはシータの隣で先に芋の皮を剥いている浦太郎であった。

鬼太郎に気付くと、浦太郎は鬼太郎以上に勝ち誇った表情で返事をする。

「いや～～～先輩～～～！」

「亀!!!お前さっき腹が痛いって!!!」

すると、驚愕する鬼太郎の後ろの扉が開くと今度は何所から摘んできたのか知らぬが花束を抱えた白鳥が入ってきた。

「私は今、暇を持て余しておる。何か手伝えることは・・・のああ!!!主ら!!!」

「げっ!!!鳥まで!!!」

その後、何故かスクライア商店メンバーでいっぱいになってしまい一気に人口密度が高くなる調理場では、鬼太郎と白鳥が野次を飛ばしながら調理の手伝いをしていた。

「退けよ!!!たく、狭いな!!!」

「何が腹痛であるか!!!」

と、鬼太郎と白鳥が浦太郎にそんな文句を言っていたとき・・・また扉が開いたかと思えば今度は恋次が入ってこようとした。

「よう!!!何か手伝える・・・ってお前ら!?」

「「「お前もかい!!!」」」

やがて、7時間ほど経過してミッドの現地時間ではすっかり夜の6時を回ろうとして時、仕事をする傍ら休憩を取っていたはやてとクロノはチェスをして時間を潰していた。

「ラピュタか・・・未だにどうも実感湧かへんな。」

「大体みんなそうさ。僕だって映画の中のことが実在するとは夢にも思ってもいなかったさ。」

「へへ♪しかし、クロノくんも案外やんちゃやからな！」

「何が言いたいんだ、君は！？」

「ラピュタ見たとたんに実は一番はしゃいだりしたりしてな！」

「何だと！？馬鹿を言うな。子供じゃあるまいし！」

「そうかな・・・あ、王手や！」

「何！？」

そして、午後６時過ぎ。

空腹で唸り声を上げていた前線メンバー全員に待ちに待った食事タイムがやって来た。

シータが作っていたこともあってか、夫であるパズーやスクライア商店のメンバーや恋次はなのは達が唖然とする中、獣のように貪り食い尽くしていく。

「こりゃうめえや！！！」

「退け、そりゃあ俺のだ！！！！」

「主は散々食べただろう！！！」

そんな男達の様子を見ていたシータは鍋を抱えたままお代わりがあることを伝える。

「あの～～お代わりあるから・・・」

「シータ！」

「はい、パズー。」

シータはパズーから渡される空の皿を受け取り、食事を装うとした瞬間・・・鬼太郎達も我先にと空の皿を前に出してきた。

「「「お代わり！！！」」」

「えっ！？そ、そんな一遍に！？」

そんな戸惑いを見せるシータや競い合う男達の様子を目の当たりにしていたフェイトやなのはは映画のワンシーンを思い出す。

「何だか、まるで映画のドーラ一家みたい・・・・・・」

「にゃはは・・・凄い人気だね、シータさん。」

「全く・・・食べるときはガツガツしないで欲しいものですな。」

「喉詰まらせないように気をつけなよ・・・って言ってる傍から！！！」

ユーノがそう言おうとした瞬間、目の前で座っていたスバルがうっかり何かを喉に詰まらせ窒息しそうになっていた。

「うっごごっごごご！！！！」

「ちょっとスバル！！！アンタ何やってるのよ！！」

「早く飲み物飲ませんと！！」

「フェイトちゃん、お茶お茶！！」

「う、うん！！」

フェイトは直ぐに自分のお茶をスバルの下まで持って行くと、エリオに手渡し飲み込ませるように指示を出す。

「スバルさん、どうぞ！」

「おありがほおお・・・っぷは！死ぬかと思った・・・！！」

全員は一安心した様子で胸を撫で下ろし、ユーノもスバルに注意をしようとした矢先だった。

「よく咬んで食べないと駄目だよ・・・って！！！今度はお前かい、鬼太郎！！」

すると、今度は恋次と競い合って食べていた恋次が喉に詰まらせ同じように窒息しそうになっていたのであった。

「先輩！！何莫迦なことしたのさ！！」

「呆れましたな・・・本当にもう。」

浦太郎も金太郎も鬼太郎の子供のような行動にかなり呆れながらも、喉に詰まっているそれを取り出そうとしたが一向に取れる気配はなかった。

「はぁ～～～待ってな、鬼太郎・・・ちょっとくすぐったいけど我慢しなよ。」

見かねたユーノが深い溜め息を吐くと、持っていた杖の先端を鬼太郎の額に当ててくる。

すると、杖の先が額に当たった瞬間鬼太郎の肉体から魂魄が引き離され、その衝撃によって喉の奥に詰まっていたものを吐き出すことが出来たことができた。

「ぶっは!!はっ、はっ、はっ!!はぁ～～～苦しかったぜ!!」

「先輩、気をつけないと駄目だよ!」

「少し反省しないといけませんぞ!」

「わ、分かってるよもう!!」

周りからこっぴどく叱られる鬼太郎であったが、パズーとシータ以外のなのは達全員は白目を向いた状態でいる抜け殻となった鬼太郎と魂魄状態の鬼太郎を見ながら背筋を凍らせていた。

「（て言うか鬼太郎さんの身体から鬼太郎が出てきたことに何で驚

かないの、あの人たち!?あっち白目向いてなんか抜け殻みたいになってるんだけど・・・!）」

やがて、午後の１０時を過ぎるとなのは達はそれぞれに与えられた寝室で束の間の休息取っていた。

ユーノの方も、艦長席で大鼾をかきながら帽子を顔に乗せて熟睡していた。

「かぁ～～～かぁ～～～かぁ～～～！！！」

そんなユーノの様子を見ながら呆れた表情を浮かべる恋次と苦笑する浦太郎。

「当直の役のくせして、鼾かきながら眠りやがって。お気楽だぜ、あいつは・・・」

「許してあげてよ、恋次さん。店長も疲れが溜まってるんだよ。ああ見えて、人が数人係でやる仕事の数百倍の量をたった一人でこなしてるんです。」

「ま、それもそうか・・・お？」

すると、丁度パズーが扉を開いて恋次と交替を果たしに来た。

「交替ですよ。」

「お、ありがてえ！」

恋次はパズーにその場を任せると、部屋に戻って仮眠を取り始める。

その間、熟睡するユーノのことを気にかけながらパズーは浦太郎の隣でふとこんなことを尋ねてきた。

「・・・浦太郎さん・・・一つ いいですか・・・？」

「何ですか？僕にでも答えられる奴？」

「・・・ユーノさんはどうしてあんなに他人優先なんでしょうか？今日の一日の行動を見ていてふと思ったんです。休むこともほとんどしないで仕事ばかりやって・・・身体も結構悲鳴を上げていると思うんですが・・・」

「ああ。店長のあれは今に始まったことじゃないからね・・・口をすっぱくして言った所で多分一生治らないと思いますよ。でも、少なくとも前ほど他人優先ではなくなったかな。」

「え！？それじゃあ、今までの方がもっと酷かったんですか！？」

「酷いも何も、悪いときなんか３・４日寝ないで仕事してるときもあったから♪だけど、なのはちゃんが居てくれるから、前ほど無茶もしなくなったかな。」

「なのはさんが・・・ですか？」

「店長にとってなのはちゃんは元気の源でもあり、活動意欲そのものですよ。彼女の笑顔のためなら、自分の身がどうなろうと知ったことじゃないんですよ。尤も、今は自分の身を犠牲にするほどの考えは改めたようだけど・・・」

「そうですか・・・ユーノさんはそんなになのはさんのことを・・・少し安心しましたよ。」

「え？何がです！？」

「いや、僕にもシータっていう大切な人がいるように・・・ユーノさんにもなのはさんっていう守るべき人が居てくれたことにですよ。人は守るべきものが在るから、強くなれる。大好きな人が居るから頑張れる・・・まっ、ありがちな言い回しにはなりますけど・・・」

そんな二人の会話を帽子を被りながら聞いていたユーノは鼻で笑うと、パズーの言葉に心の中で感謝の意を表した。

「（・・・・・ありがとうございます・・・パズーさん・・・）」

そう思って、ユーノが帽子を深く被りなおして眠りに付こうとしたその時、突然パズーが何かに気付いたらしく声を上げたのであった。

「ん！？何だあれは！！」

「「え！？」」

不審に思ったユーノと浦太郎は一度パズーが指差すところに目をやった。

「ほら！あそこ！！」

ユーノは眼鏡を直した後パズーの指差す方向を凝視して見た。

すると、ワープ空間の中で航行をしていた巨大な戦艦を目の当たり

にした。

「なっ！？この戦艦の形・・・そして、この大きさは・・・！？」

ユーノは直ぐに回線を入れると、クルー全員に緊急連絡を入れる。

『緊急連絡！！ムスカのゴリアテだ！！！真下に居るぞ！！！』

「「「「え！？」」」」

「「「「うそ！？」」」」

「「「「本当（マジ）か！？」」」」

部屋で仮眠を取っていたなのは達もそれに気付いて、急いで制服に着替えて部屋を出てみると、確かに窓の外にはムスカの乗るゴリアテが浮かんでいた。

前線メンバーは一度中央司令室に集まると、ユーノの指示に従い自分の席についてシートベルトを締める。

その後、ユーノはシャーリーたちに大至急回避するように声を張り上げた。

「面舵、逃げろ！！」

ナキワヤメが進路を変更してゴリアテから回避しようとした矢先、ゴリアテは砲撃を発射してナキワヤメを攻撃してきた。

艦内が砲撃によってかなり揺れる中、シャーリーたちは必死に航路

を変更して何とか別のワープ空間へと逃げ切り、ゴリアテの攻撃を振り切った。

ナキワヤメが姿を消した後、本来辿る筈だった経路を悠々と通っていくムスカは逃がしたことを些か公開した。

「ふん・・・逃げ足の速い連中だな。だが、今は奴らに構っている暇はない。最大速度。このままワープ空間を抜けるぞ。」

一方、ムスカの突然の襲撃によって進路を変更せざるを得なくなってしまったユーノやシャーリー達はタッチパネルに向き合いながら進路変更に関する計算をしていた。

「くそ！ムスカの攻撃で思ったよりも進路がずれてしまった。パズーさん、シータさん！飛行石の反応はどちらを示しています！？」

「此処からだと、東側を指しています！」

「およそ5分後にワープ空間を脱出します。衝撃に備えた方が良さそうです！」

「了解。」

ユーノはそう言うと、一度中央指令室を離れ戦いの準備をしていたなのは達やバックヤードスタッフ全員に再び通信を行う。

『機動六課前線メンバー及びバックヤードスタッフ各位に連絡。間も無く本船はワープ空間を抜けて、再び宇宙空間へと飛び出す。衝撃に備えて欲しい。』

なのは達はデバイスを手にとって指令室に戻って来ると、座席についてシートベルトを着用する。

そして、金太郎はユーノに向ってワープ空間を抜けることを伝える。

「店長、ワープ空間を抜けます！」

その瞬間、前方の景色があの時と同様歪みを生じながら強い衝撃を発生させていく。

前線メンバーはその場にあるものに手を乗せると、襲ってくる衝撃に耐えていた。

「「ぐっ！！！！」」

「くっ！！！！」

そして、衝撃が収まった瞬間辺りの景色は再び宇宙空間となっていた。

「抜けたのか・・・・・・！？」

「はっ！パズー！！見て、あれを！！」

シータの驚愕の声を聞いた瞬間、パズーやユーノ達は窓の外の景色を見てみた。

「なっ！？」

「あれは・・・まさか！？」

ユーノ達がそのとき、窓の外で見たものとは・・・・・自分達がまさに目標としていた天空にそびえる伝説の城、古代人の残し大いなる遺産・・・ラピュタであった。

全員は目の前に広がってくる今尚も活動を続けているラピュタに目を奪われた。

「・・・ラピュタ・・・・!?」

「あれが・・・・!?」

「映画で見たものと全く一緒だ・・・まさかこんな宇宙の果てで実物にお目にかかれるとはな!!」

「ん!?あの戦艦は!!」

と、その時。

吉良はラピュタの傍で停泊している巨大な戦艦を見て、驚愕した。

「ゴリアテだ!!」

「くそ!ムスカに先を越されたか・・・ウルテクエンジン全開!全員バリアジャケットを着用後、スペースシップに乗り込んで突入を開始する!」

「「「「「了解!」」」」」

クロノはそう言うと、なのは達前線メンバーにバリアジャケットの

着用を指示すると、ナキサワメに収容された五機のスペースシップを起動させる。

「パズーさん、シータさん。二人は僕と一緒に着いて来て下さい。念のため、これを渡しておきますから。」

ユーノはそう言うと、パズーとシータに一個ずつ自己防衛のための魔法砲撃用の大砲を手渡し扱い方を簡単に説明する。

「ありがとうございます、ユーノさん！」

「さぁ、みなさん・・・行きましょう！」

ナキサワメは慎重な走行でラピュタへと近付いていく。

すると、その瞬間艦内に響き渡る第一級警戒ベルが全員の緊張を走らせる。

「ユーノ先生！！ゴリアテがこちらに気付いたようです！！４０秒後に砲撃が来ます！！」

「敵方も本気のようだ・・・浦太郎、金太郎！プロテクトシェード展開準備！！」

「「了解！！」」

ユーノにそう指示を受けた二人は、タッチパネルを操作してナキサワメに取り付けられた反射鏡の位置を整える。

そして、その瞬間ゴリアテの放つ高エネルギー砲がナキサワメ目掛

け発射される。

ナキサワメは反射鏡を使って空間を湾曲させ、ごく薄い反発的防御空間を形成するプロテクトシェードを発動。

この空間は強い反発効果を有しており、ここに到達した光学攻撃（ビームやレーザーなど）を蓄積、反射させることができるのである。

ゴリアテから発射されたエネルギー砲は綺麗に別の宇宙空間へと弾き飛ばされ、攻撃を無事に免れた。

「砲撃のエネルギーを９９パーセント反射出来ました！」

「よし！こちらも反撃開始だ！！七人岬、分離発進！！」

クロノはそう言うと、この母艦そのものを七機の戦艦に分離させると、自動操縦によってゴリアテに向けて一斉攻撃を開始、敵の注意をひきつける。

その間になのは達はスペースシップに乗り込んでラピュタの中へと向っていく。

「行くよ、みんな！！」

『『『『おう！！』』』』

最大五人まで登場が可能なスペースシップに乗り込んだスターズ・ライトニング・死神メンバー・スクライア商店・そしてユーノとパズーとシータはクロノ達が注意をひきつけている間にエンジンを全開にしてラピュタの中へと侵入していった。

「前線メンバー各位、ラピュタへと突入を開始しました！」

すると、躍起になったゴリアテが更に砲撃の回数を増やして分離した七人岬に攻撃を加えてきた。

「八神隊長！ゴリアテの攻撃が更に増え続けています！！」

「ええ度胸やないの・・・あんまし調子乗りおるとどうなるか思いしらせてやろうやないの。ユーノくんが造ったこの艦の力、存分に味わうがいい。クロノくん！！」

「ああ。リフレクタービーム、発射！！」

「はっ！リフレクタービーム・・・発射します！！」

クロノの命令を受けたルキノはリフレクタービームの起動スイッチを押して、今迄飛んできた砲撃を反射鏡を使って全て敵に向けて跳ね返すと、ゴリアテの装甲に傷をつける。

一方、特殊な酸素皮膜によって宇宙服を着た状態になっているなのは達は無事に城内に侵入すると、部隊ごとに分かれてムスカ捜索に取り掛かる。

「城内に無事侵入完了！これより、部隊ごとに分かれてムスカの探索を行う。シータさん、ムスカはこの場合・・・」

「おそらく・・・ラピュタの中枢へ向ったと思われます。中枢はラピュタのコントロールエリア。でもあそこは、私やあいつのような王族しか入れない場所だから・・・」

「心配には及びません。幸いにも、一度滅びの呪文を使ってしまったこともあってか・・・そう言った制限はなくなったと思います。なのは、僕は二人を連れてムスカを追う。君やみんなはこの城の中に潜んでる敵の殲滅を頼むよ。」

「うん、気をつけてね！」

「よし・・・作戦開始だ！」

ユーノはそう言うと、パズーとシータを連れてラピュタの中枢を目指し、なのは達はそれぞれに分かれて城内に潜んでいる敵の殲滅に取り掛かっていった。

スクライア商店のメンバーが城内を走り回っていると、早速というばかりに目の前の通路から現れるラピュタに配備されていた自律式ロボット兵器が鬼太郎達の前に現れる。

「のお！？」

ざっと数えて数十体と言う数のロボットたちに多少唖然とした鬼太郎だったが、直ぐに鼻で笑いながら刀を取り出すと浦太郎達と供に殲滅に取りかかろうとする。

「へっ！早速お出ましかよ・・・無骨な宮崎ロボット共・・・亀、熊、鳥！！行くぜ行くぜ行くぜ！！！」

「「「おお！！」」」

また、同じ頃なのは達スターズのほうも現れたロボット達の数に圧

倒されていた。

「わっ!?何こいつら・・・!?」

「この城の兵隊ロボット。気をつけて、意外と皆すばしっこいから!」

「ぶっ壊してやる!!!!」

ヴィータは先陣を切ってグラーフアイゼンをロボット達に向けて振り下ろしていった。

そして、ライトニングほうは既にロボット達と戦闘を繰り広げていた。

「紫電一閃!!」

「サンダー・・・ブレイク!!」

「プラズマスマッシャー!!」

「バーニングレイ!」

アギトとユニゾンを果たしたシグナムのレバンティン、フェイトとエリオの電撃魔法、そしてフリードの口から放たれる炎によってロボットは次々と破壊されていく。

一方、恋次達のほうも無尽蔵に増え続けるロボット達をなぎ払いながら数を減らしていく。

「咆えろ、蛇尾丸！！」

「面を上げろ、侘助！」

「舞え、袖白雪！」

三人は一斉に斬魂魄刀を解放すると、同時の攻撃によって目の前のロボットを次々と破壊していった。

「「「はあああああああ！！！！！」」」

ラピュタの中枢を目指して走り続けていたユーノ達の耳からは、上で激しい戦闘を繰り広げているなのは達の戦う様子は窺えた。

「凄い爆発だ・・・なのはさん達が戦ってるのかな・・・！？」

「ええ。きっとそうです・・・さっ、気をつけて下りてください！」

ユーノはそう言うと、軽快な動きで太く張り巡らされた木の根を下りて行き、パズーはシータの手を掴みながらゆっくりと下りてくるように声を掛ける。

「シータ、こっち！」

「ありがとう、パズー。」

木の根を下りた三人はその後も草の根を掻き分けながら、ラピュタの中枢である巨大飛行石が待つ所まで走り続けた。

その間に、シータ自身は気付いてはいなかったが徐々に首の飛行石

が力を取り戻していく光景が窺えた。

「間も無く、最深部へと着く筈です！！」

シータの言葉を聞いて、ユーノとパズーは更にスピードを上げて目の前に見えてきたラピュタの中枢へと漸く足を踏み入れることが出来た。

だが、その時三人の目の前に広がってきたのは・・・あの男であった。

「「「なっ！？」」」

「ふふふ・・・待っていたよ。大体2年ぶりの再会と言っておいたほうがいいのかな・・・小僧、リュシータ・・・そして、初めまして・・・翡翠の魔導死神。」

「ムスカ！！」

「本当に生きていたなんて・・・でもどうしてなの！？」

パズーはシータを守ろうと、前に出てユーノから渡された大砲を取り出しムスカを狙う。

ユーノの方も杖を引き出し晩翠を解放して、ムスカを牽制する。

「確かに、あの時私は目をやられ海へと沈んでいった。しかし、そんな私の命を繋いでくれたのが・・・この石だ。」

ムスカはそう言うと、左腕に埋め込まれた不気味な色を放つ宝石の

ような石を三人に見えるようにした。

ユーノは直ぐにそれがアンゴルモアだということを理解した。

「!?アンゴルモアを・・・取り込んだのか!?」

「ほう。流石は翡翠の魔導死神・・・一目見ただけで、こいつが何かを理解したか。だが、一つ残念なお知らせだ。お前たちが例え束になってかかろうと、今の私には遠く及ばない。もうじき全ての世界は私の手中に納まることだろう。ラピュタの科学こそが、人類の夢なのだからな。」

「違う!!科学だけが人間の夢なんかじゃない!!人の夢は科学では決して計り知れないものだということを、何故お前は理解しようとしない!!」

「パズーの言う通りよ!!あなたにラピュタは応えない!どんなに可愛そうなロボットを操っても、どんなに強力な力を使っても・・・一度土から離れたあなたにラピュタは絶対に応えてくれないわ!!」

「ムスカ・・・悪いがお前と愚論を交わしている暇は無い。大人しく投降してもらおうか?そして、その腕の中に取り込んだアンゴルモアを素直に渡せ。」

「ふふふ・・・私のことを以前の私と考えているのなら大きなミスだよ。新生、ムスカの真の力の一端を見せてあげよう・・・」

そう言うと、ムスカは専用のトランクを取り出すとその中から自分の身体の力を数十倍にまで高め、補佐をすることを目的とした特殊な装甲服を装着する。

「装着（イークイップ）！！」

アンゴルモアという未知なる無限情報サーキットの力を身体に宿したサイボーグ・ムスカは、装着変身することによって超進化人類へと生まれ変わるのであった・・・その名は、アンゴルモア・ムスカ・・・またの名をＡＭ１４。

「くっ！装着変身したのか・・・！？」

「では見せてあげるよ。これが私の実力だよ！」

ムスカはそう言うと、超高速で加速してユーノが全く気付かない間に背後に回りこんで攻撃をしようとしてきた。

「！！」

ムスカの想像を絶する力に思わず驚愕するユーノ・・・果たして、彼の運命は！？」

また、その頃ロボット達と相変わらず戦闘を繰り広げていたスクライア商店のメンバーであったが、現在窮地に立たされていた。

「のっは！！！」

鬼太郎はムスカの手によって予め改造されたロボットクローンの攻撃を受けて、勢いよく後ろへと飛ばされた。

「先輩！！」

「くっ!!琴線斬!!!」

白鳥は鬼太郎の仇を取ろうと、琴線斬の音色をロボットクローンに浴びせるが・・・その音色ですらも弾き返してしまうロボットクローンの特殊装甲に驚愕する。

「私の音撃を弾いた!?」

「ムスカによって改造された特殊クローン・・・しかし、これは最早そんな生易しいものではありませぬぞ!!」

すると、金太郎のその言葉を聞いた鬼太郎が自力で立ち上がって三人の下まで歩いてくると、ある一つの決心をするのであった。

「ふざけやがって!!こうなったら久し振りにあれやってみるか・・・おい、てめえら!!“クライマックス”やるぞ!!」

「仕方ないな・・・じゃあ、行きますかな♪」

「承知!!」

「不本意ではあるが、致し方ない。」

鬼太郎の言葉を受理した三人はそう言うと、一斉にそれぞれの色に合わせた携帯電話を取り出すと、専用のボタンを押していく。

〈Ｍｏｍｏ　Ｕｒａ　Ｋｉｎ　Ｔｏｒｉ〉

四つの形態から鳴り響く独特の音声と不思議な待機音。

「「「「全員集合!!」」」」

そして、四人は携帯を掲げて状態で通話ボタンを押す。

〈Ｃｌｉｍａｘ　ｆｏｒｍ〉

その瞬間、浦太郎・金太郎・白鳥の身体が粒子のようなものに変化すると鬼太郎の携帯へと入り込み、それを確認した鬼太郎は専用のデバイスにそれを取り付ける。

すると、鬼太郎の身体に装着される浦太郎のバリアジャケット・金太郎のアックスオーガを模した特殊装甲・白鳥の琴線斬を模したもう一つの斬魄刀が烈火と合体される。

これこそが、スクライア商店メンバーが使う究極の融合形態奥義・・・その名も、クライマックスフォームである。

その間、鬼太郎の身体を主体として浦太郎達の意識は全て一つの身体に集約される。

「（どうやら、上手くいったみたいだね。）」

「（そのようですな。）」

「（しかし、何だこの気色の悪い格好は!?何故私がメインではないのだ!?）」

「馬鹿野郎!気持ち悪いのはこっちだ!!それにてめえなんぞに主役の位置を渡すかよ!!」

すると、その瞬間ロボットクローンがそんな鬼太郎に向って襲い掛かってくるが、鬼太郎はそれを烈火で受け止めると、強力な斬撃を浴びせる。

「（いけませんぞ!!）」

斬撃以外にも、魔力を使った強化攻撃もこの場合の鬼太郎には可能となる。

「（僕に釣られてみる?）」

また、勝手に意識だけの三人が行動を起こそうとすることがあるのである。

「（光臨、満を持して!）」

更に、怒涛の攻撃をロボットクローンに浴びせ続ける鬼太郎のテンションは高揚していくのであった。

「おりゃあああ!!俺、参上!!格好いいな俺!!」

やがて、激しい攻撃を受けてほとんど戦闘不能の状態となったロボットクローンに止めを刺すために、鬼太郎はデバイスに取り付けてあった携帯のエンターキーを押す。

すると、その瞬間不思議な待機音が再び流れ始める。

「いくぜいくぜ・・・取って置きのクライマックスだぜ!!!」

鬼太郎はそう言うと、武装強化された烈火の柄頭をデバイスに付け

てエネルギーを充填させる。

〈Ｃｈａｒｇｅ　ａｎｄ　ｕｐ〉

その瞬間、烈火の刀身へと集まる全員の魔力と霊圧が一つとなった虹色に輝く光。

「俺達の必殺技・・・・・！！」

鬼太郎は充分に構えを取ると、一気にロボットクローン目掛けて駆け出し最後の斬撃を食らわして破壊を完了させる。

「「「「クライマックスバージョン！！」」」」

ロボットクローンはその直後、大爆発を起こして完全に消失する。

鬼太郎はクライマックスフォームを解除すると、刀を鞘に納めて決めポーズをとった。

「へっ！決まったぜ！！」

また、なのは達のほうも戦いは佳境を迎えていた。

「ＡＲカートリッジ、セットアップ！！」

なのははレイジングハートにＡＲカートリッジを装填すると、スバル達が数を減らしている間に魔力を収束し始める。

ヴィータ・スバル・ギンガ・ティアナの四人はＩＰカートリッジ状態での自分のデバイスを使って有象無象のロボット達を破壊してい

く。

「ギガトンクラッシャー！！」

「リボルバー・・・デストロイアー！！」

「ストーム・・・ハリケーン！！」

「メガトニック・・・シュート！！」

激しい爆発が起こる中、残り僅かとなったロボット達を見てスバルが止めの一撃を加えるようなのはに声を掛ける。

「今です、なのはさん！」

スバルのその言葉を聞いたなのはは、ユーノとの密かな訓練で編み出した新しい砲撃魔法を発動させようとした。

「いくよ・・・レイジングハート・・・新必殺技！！」

〈Ａｌｌ　ｒｉｇｈｔ　ｍｙ　ｍａｓｔｅｒ〉

その瞬間、レイジングハートに装填されていく計二発のカートリッジ。

「マキシマムブースター・・・セカンドドライブ！」

〈Ｍａｘｉｍｕｍ　Ｂｕｓｔｅｒ〉

マキシマム・ブレイドの先端に集められる尋常ならぬ魔力エネルギ

ー。

それを限界まで溜めると、なのはは一気に砲撃を放つ。

「シューーート！！！」

なのははそう言うと、マキシマム・ブレイドの先端からエクセリオンバスターを遥かに凌ぐ破壊力を持った超強化砲撃マキシマム・ブーストをロボット達に浴びせて全機破壊。

尚、この魔法には四段階の階級が存在しており今回なのはが使用したレベル２の状態であり、レベル４の力は未だ制御できないのである。

別の場所でなのはの攻撃を聞いていたフェイト達は既にロボット達の殲滅を完了し、ユーノ達の下に急ごうとしていた。

「この音は！？」

「なのはの砲撃・・・！？」

「どうやらあちらの方も片付いたようだな・・・」

「急ぎましょう、ユーノ先生の下へ！」

「うん！」

フェイト達は急いで破壊されたロボット達を跨ぎながらラピュタ中枢で戦いを繰り広げているユーノ達の下へ急いだ。

その頃、肝心のユーノのほうはと言うと・・・・・・アンゴルモアムスカの戦闘能力に圧倒され、満身創痍の状態であった。

「ぐっは!!」

ムスカの蹴りを受けて、壁に飛ばされるユーノを間近で見ていたパズーとシータは悲痛な叫び声を上げる。

「「ユーノさん!!」」

パズーは我慢の限界に達したのか、渡された大砲を使ってムスカに砲撃を仕掛ける。

「ムスカ!!貴様!!!!!!」

ムスカはパズーの攻撃を一切避け様としないで、わざとに砲撃を直撃する。

しかし、爆風が晴れた先にパズーが見たのは一切無傷のムスカであった。

「何!!」

「・・・ふふふ・・・そんなモノで私の身体をどうにか出来ると本気で思っていたのかね?小僧!!」

そう言うと、ムスカはパズーの目の前に現れるとパズーの胸倉を掴んでユーノが飛ばされた場所までパズーを投げ飛ばした。

「わあああ!!!!」

「パズー！！！！」

「彼の心配より自分の心配をし給えよ、リュシータ！」

ムスカはその瞬間、傍でパズーを心配していたシータの首下を狙ってラピュタを操るの必要な飛行石を奪おうとする。

「は！」

だが、シータの危機を感じたパズーは持ち前の生命力で直ぐに起き上がると、シータの目の前に立ち塞がりムスカに向けて至近距離からの砲撃をお見舞いしようとした。

「近付くな！！シータに触れてみろ・・・この至近距離で大砲をぶっ放す！！」

「ふふ。威勢がいいな、小僧・・・だが・・・」

すると、ムスカはパズーの持っていた大砲の先端を左の一握りで簡単に破壊して使い物にならなくする。

「！？」

「生憎私に大砲などは効果はないよ！死ね！！！」

ムスカはパズーに止めの一撃を加えようと拳を振り上げた・・・が、その瞬間ユーノの翡翠斬がムスカ目掛けて放たれる。

「輝け、晩翠！！」

ムスカは翡翠斬をその身に受けると後ろへと飛ばされ、激しい衝突を起こす。

その間に、パズーとシータの前に現れる満身創意で肩で息をするユーノ。

「「ユーノさん!!」」

ユーノの攻撃をその身に受けたムスカのほうも、爆風の中から多少なりとも傷は受けているがいたって平然とした表情を浮かべながらユーノの前に現れる。

「ふふふ・・・流石にあの程度では死ななかったか。だが、その手負いの身で果たして何所まで私と戦えるかな、ええ?」

「はっ、はっ、はっ、はっ!」

「ユーノさん!!もう止めてください!!このままじゃ、本当に死んで・・・!!」

「死にませんよ!僕は未だ死ねない・・・!!愛する人を残して死ねるほど、僕は弱い男じゃない!僕が此処で死ねば、なのはももう二度と笑ってくれなくなる・・・・・・彼女の笑顔が僕にとっての・・・そして、皆にとっての希望の光なんだ。また彼女にとっての光が僕であるのなら、僕は生きる!!ムスカ・・・お前には分かるまい・・・力だけしか見ようとしないお前なんかに・・・人を愛することの意味を!」

「饒舌もここまで過ぎれば単なる負け惜しみにしか聞こえるがね。

人を愛するだと・・・？ははははは！！！！随分と面白いことを言うじゃないか！所詮、人間など常に自分以外しか見ていこうとしない人種だ。愛するなど、妄言以外の何物でもない。」

「・・・だったら教えてやるよ・・・僕らが・・・人を愛することの素晴らしさを。お前のその腐敗した脳髄に刻み込んでやる！」

ユーノが晩翠をムスカにそう言い放ったその時だった。

突然、シータの首下にかかっていた飛行石が光りエネルギーを解放し始めた。

「「「「！？」」」」

全員は一度、突如として光出したシータの飛行石に目を奪われた。

「飛行石が・・・光出した・・・！？」

「素晴らしい・・・素晴らしい！！その光だ！！その光がやはりラピュタには必要なのだよ！！ふふふ・・・小僧と翡翠の魔導死神を始末した後にゆっくりと貴様を甚振ってやるからそのつもりで居給え。」

すると、ムスカのその非常な言葉を聞いたユーノは突如言葉遣いを一変させる。

「・・・てめぇ・・・何所までも腐りきってる野郎だな・・・前言撤回だ。脳髄だけじゃまだ足りねえ・・・てめえの五体に嫌と言うほど叩き込んでやる！！」

「ははははは！！！！是非、そうしてくれたまえ！！」

二人はそう言うと、お互いに走り出し空中や地上における激しい戦いを繰り広げ始めた。

ムスカは腰のほうからぶら下げていた専用のナイフを取り出すと、ユーノの晩翠に対抗する。

「アンゴルモアナイフ！！」

ユーノの晩翠、ムスカのアンゴルモアナイフが激しくぶつかり合い繰り広げられる鍔迫り合い。

お互いのエネルギーを放出させながらの戦いは正に壮観であった。

「「はあああああ！！！！！！」」

一度二人が距離を取った後、パズーはシータの持っていた大砲を使ってムスカの身体に砲撃を発射した。

「ムスカ！！！」

ムスカは容易にそれをアンゴルモアナイフで切り裂くと、パズーのことを高飛車な態度でこう口にした。

「ふん・・・下らんよ、小僧！甘すぎて目眩がするわ！！」

だが、パズーは何故かムスカにそう言われても全く平気な表情をしており、そんなムスカに向ってこのように発言をした。

「へっ！余所見をする暇なんかないぞ！」

「何！？」

すると、パズーの言葉に疑問を抱くムスカの前に現れる非常に目つきの鋭いユーノ。

「甘いのはてめぇだ、ムスカ！！」

ユーノはその瞬間、晩翠を振り上げ力いっぱい向って来るムスカの頭上目掛けて振り下ろした。

振り下ろされた瞬間起こる、猛烈な衝撃音と土煙が周囲に広がり一時ユーノの目の前が何も見えなくなった。

ムスカに一太刀入れたユーノであったが、その瞬間煙の中から現れるアンゴルモアナイフにピアノ線を張り巡らせたものを投げてくるムスカの攻撃。

「！」

ユーノは咄嗟に左手の掌でそれを受け止めるが、煙の中から現れるのは不適な笑い声を上げ、アンゴルモアナイフを突き刺そうとするムスカであった。

「ははははは！！！！どちらが甘いのかね！！」

だが、ユーノはその瞬間鋭い眼光を浮かべたまま掌を貫通したピアノ線が張り巡らせてあるアンゴルモアナイフを手繰り寄せると、ムスカの動きを捉える。

「何!?」

ユーノの想定外の行動に思わず焦りを見せるムスカと、変わらず鋭い眼光でムスカを睨み付けるユーノ。

「つーかまえたーーー・・・」

ユーノはそう言うと、ムスカの特殊プロテクターに向って晩翠の切っ先を突き刺し、ムスカに強い衝撃を与える。

反動によって後ろの方に反り返るムスカに対して、ユーノは怒りの表情を浮かべた状態で次のように語りかけた。

「さぁ・・・スクライア先生の講演会の時間だ・・・最後まで聞いていきやがれ!!」

その時、ムスカと対峙するユーノの脳裏に浮かんできたのは・・・これまで幾度となく自分のことを救ってきてくれた幼馴染兼恋人であるなのはの笑顔や照れた顔、その他全ての顔であった。

〈ユーノ君!!見て見て!!ほら、可愛いでしょ!!〉

〈ユーノ君・・・へへ♪似合うかな?〉

〈あっ、ユーノ君!お早う!!〉

〈あんまり、無茶しないでね・・・ユーノ君・・・じゃないと、私もヴィヴィオも悲しくて泣いちゃうから・・・〉

このなのはの全ての表情と性格・良さ・愛を知り尽くしているユーノにとって、愛を全くの無価値なものだと断言するムスカのことがどうしても許せなかったのだ。

ユーノは怒りを露にしながら、晩翠を振り上げ猛烈な勢いのもと再び特殊プロテクターに向けて刃を振り下ろした。

攻撃を受けた瞬間、ムスカのプロテクターには皹が入りムスカは口から血のように真っ赤な油が大量に吹き出す。

その後もユーノの猛攻は止まることを知らず、只管ユーノはムスカの顔や脇腹・顎下などを晩翠で叩き、斬り付けていく。

「でやあああああああああああ!!!!!」

だが、ムスカのほうもユーノに防戦一方の状態にはいさせてはくれず、体勢を立て直すとアンゴルモアナイフを持ち、ユーノの身体目掛けて突き刺そうとしてきた。

「ぐあああああああああああああああ!!!!!」

向って来るムスカの攻撃を見るなり、ユーノも渾身の一撃を込めた斬撃をアンゴルモアナイフが身体に刺さる前にムスカに浴びせようとする。

「でやあああああああああああああ!!!!!」

両者の攻撃がほぼ同時にぶつかり合った瞬間、ムスカはユーノの斬撃を左腕に受けてアーマーごと斬り捨てられ、ユーノはアンゴルモアナイフを右肩に受け血を流し、晩翠をパズーとシータが立ちつく

すところまで飛ばされてしまった。

ユーノの様子を見ていた二人は思わず声を上げて安否を気遣う。

「「ユーノさん!!」」

お互いに息を切らしながら満身創意となるムスカとユーノであったが、ムスカはこれほどにまで力を発揮するユーノに疑念を抱き、納得していない様子であった。

「ぶっ・・・くっ・・・何故・・・貴様が・・・私と拮抗する力を・・・!?己を捨てることも出来ん連中に・・・己の居場所ほしさに仲間も切れん連中に・・・愛だのそんな妄言を吐く連中に・・・私は・・・全てを捨ててきた・・・!!己の地位も・・・居場所も・・・仲間も・・・愛する者も・・・ラピュタのために・・・ラピュタの科学のために・・・!!なのに、何故・・・何故なんだ!!」

すると、ムスカの話を聞いていたユーノは乱暴な言葉遣いではあるが芯の通った言論を納得していないムスカに向って説明をする。

「・・・・・・未だ分からねえか!?」

「何!?」

「・・・お前が捨てたもんの中には・・・大切な荷も混ざってたんだよ・・・仲間を捨てた?違う・・・仲間を失うのが怖かったんだろう。居場所を捨ててきた?違う・・・最初から一人であれば、孤独になる苦しみもねえからだろ。愛するものを捨てた?違う!てめぇは愛する感情も、愛される感情からも目を背けた・・・ただの臆病者だ!!」

そう言うと、ユーノは必死でシータのことを守ろうとするパズーと不安げな様子でパズーの手を握り締めるシータを一瞥しながら再び驚愕の表情を浮かべるムスカに自身の計景観から次のように口にする。

「あの二人を見て分からないのか・・・例え一人では駄目でも、二人で一緒に居れば乗り越えられる・・・絆という名の愛で結ばれたものがそこにはある。それすら知らないお前には理解出来まい。臆病者の相手は、臆病者で充分だ・・・てめぇの相手は・・・この僕で、充分だ!!」

「ぬかせ!!!」

今迄のユーノの言葉を聞いていたムスカも業を煮やして腕を振り払おうとするがユーノは絶対に振り払わまいと更に手に力を込めて、そんなムスカに向ってこう言った。

「てめえに・・・愛だの何だのを語る資格はねえ!!」

また、この時もユーノの脳裏に浮かんできたのは自分を支えてくれる愛すべきなのはの純粋無垢な笑顔であった。

そして、ユーノの怒りが頂点に達し・・・ムスカに止めの頭突きを喰らわせる。

「てめえに・・・・・死んでも愛する者を守り抜くだけの覚悟が、あるか!!!!!!!!!!」

ユーノの渾身の力を込めた頭突きがムスカに直撃すると、ムスカは

暫くの間歯を食いしばった状態のユーノと同じように睨み合った後、力尽きてプロテクターが破壊されると同時にその場に倒れこんだ。

プロテクターが破壊されたことによって、腕の中に取り込まれていたアンゴルモアが自然と身体から分離し、ユーノの手の中に納まった。

厳重に封印処理をかけた後、ユーノは無言のまま倒れたムスカを見下ろしながら突き刺さっていたナイフを取り出し投げ捨てた。

パズーとシータはそんなユーノに徐に近付きながら、拾い上げた晩翠をユーノに差し出す。

「・・・・・ユーノさん・・・・・・」

ユーノはパズーから晩翠を受け取ると、杖の状態に戻して帽子を深く被り直して二人にラピュタから離れるように指示を出す。

「・・・・・――――――帰りますよ。目的は果たしました・・・そいつはアンゴルモアが無くなった時点でもう生きていけない・・・」

ユーノの言葉を黙って聞いていたパズーはその場に倒れているムスカを一瞥し、複雑な表情を浮かべた状態で哀れみの言葉を掛ける。

「・・・・・ムスカ・・・・・お前は本当に・・・・・・可愛そうな男だよ。」

だが、その時・・・・・ムスカは最後の力を振り絞ってその場から起き上がると落ちていたアンゴルモアを手に取りユーノの後頭部

に向けてきた。

「「はっ！！」」

未だ息絶えていないムスカの恐るべき執念と生命能力に驚愕する二人であったが、ユーノは背中をムスカに向けたままその場を動こうとしない。

「ムスカ！！」

「止めろ、ムスカ！！！」

必死でムスカの行動を止めようとするパズーとシータであったが、意外にも狙われているユーノのほうはいたって冷静であり、そんなムスカに背中越しにこう口にする。

「・・・もう・・・止めとけ。てめえの周りには何もいやしねえよ。そこにいるのは最初から、遥か頭上の星を仰ぎ見て・・・空に向って手を伸ばし続けようとする・・・哀れな生き物だけだ・・・」

「・・・ふん・・・何を世迷言を・・・そんなことは・・・遠の昔に知っているさ・・・」

ムスカは鼻で笑いそう言うと、ユーノ目掛けてナイフを振り上げた。

「「止めろ（て）！！！！ムスカ！！！！！」」

声を張り上げてムスカにやめるように説得を試みるパズーとシータ。

そして、目を瞑って覚悟を決めるユーノ・・・・・・だが、その結

末は三人が予想もしていなかった形となる。

ムスカはなんと振り上げたナイフを自身の心臓がある場所へと突き刺し、滝のような油を噴出しながらその場に倒れこんだ。

「「はっ！！」」

「なっ！？」

このムスカの行動に三人は驚きを隠せなくなり、油まみれになった床で倒れ付すナイフが突き刺さったままのムスカはそんな三人に向って最期にこう口にして、息絶えた。

「・・・・・ふん・・・・・・最期の・・・最期ぐらい・・・死に際は自分で選ばせてくれ給えよ・・・・・・せめて、玉座の間で終焉を・・・迎え・・・させ・・・て・・・・く・・・れ・・・」

「・・・・・ムスカ・・・・・・」

ユーノとパズーとシータはそんな言葉を残して動かなくなったムスカの最期の姿を見て、ただ呆然と立ち尽くしていた。

と、丁度その時なのは達全員がユーノ達の下に駆けつけてきた。

「ユーノ君！！！」

「店長！！！なっ！？それは・・・！」

なのは達は三人の前で倒れ、息絶えたムスカの悲惨な死場を目撃する。

そんな愕然とするなのは達にユーノは背中越しにこう口にした。

「・・・――――ラピュタに全てを捧げて・・・一番大事なことを忘れてしまった・・・哀れな男の末路さ・・・・・・・」

ムスカが自滅し、アンゴルモアも無事手中に収めることが出来た機動六課は逮捕されたゴリアテの乗務員と供にミッドチルダへと帰還を果たした。

そして、数日の間パズーとシータの身柄を預かる傍らスクライアメンバーによる家の修復作業が急ピッチで行われ、最後の仕上げを見るために全員は一度スラッグ渓谷へと足を踏み入れていた。

最後の仕上げを施し終えた鬼太郎と浦太郎は顔中汗まみれであった。

「よし！！家も無事に修理完了！！」

安心した様子のパズーとシータを見て、隣に立っていたユーノは一声掛ける。

「これでまた、平和に過ごせますよ。」

「有難うございます。わざわざ家の修復まで手伝ってくれて！」

すると、そんなシータの言葉を聞いた浦太郎と鬼太郎が近付き顔を若干赤らめながら次のように言って来た。

「何の何の♪僕らは好きでやってるものですから・・・ね、先輩！」

「ああ。偶には大工仕事も悪かねえな！」

「本当に、色々とお世話になりました。ユーノさんも大した怪我で済まずにすんでよかったですね。」

「ご心配を掛けてしまい、申し訳ありません。また後でなのはに叱られるとは思いますけど・・・痛てててて！！！」

と、その瞬間ユーノの隣には何時の間になのはが立っており、なのはは笑顔でユーノの頬を抓りながらユーノに向けてこう言って来た。

「にゃはは♪もう叱ってるよ。毎度毎度怪我ばっかりして・・・今度は承知しないよ♪」

「なのは！！なのは！！！目が笑ってないから！！！痛てててて！！！」

その様子を見ていたパズーとシータは顔を見合わせると、純粋に込み上げてくる笑いを上げてその場の雰囲気を和ませる。

「「ふふっふはははははは♪」」

二人の笑い声に便乗した他のフォワードメンバーも実に和やかな気持ちで笑いを込み上げた。

「「「「「「はははははははははははははは！！！！！！！」」」」」」

「「「「「「はははははははははははははあは！！！！！！！」」」」」」

その後、六課一同は二人に向かい合った状態で別れの挨拶を済ませ

る。

「ほんなら、これからも二人仲良く元気で居てくださいね。出来れば、子供が出来たら私らにも見せてくださいね♪」

「は、はやてさん!!」

「もう!!からかわないで下さい!!」

はやての冗談半分本気半分の言葉に思わず赤面させる二人。

そして、頬が腫れ上がったユーノの掛け声と供に全員は転送ポートへと歩き出した。

「それじゃ、僕達はこれで♪」

「色々とご迷惑をお掛けしました。」

「あばよ、シータちゃん!!また美味い飯作ってくれよな!!」

「はい!みなさんも・・・お元気で!!」

「さようなら!!元気で居てくださいね!!!あ、ユーノさん!!なのはさん!!」

「「はい?」」

パズーの言葉に思わず振り返るユーノとなのはであったが、その瞬間パズーは満面の笑みで二人にこう言ったのであった。

「早く二人も僕たちみたいに結婚でもして下さいね！！」

その言葉を聞いた瞬間、二人は盛大にその場に扱けた後・・・体中を真っ赤にした常態でお互いの顔を向き合い叫び声を上げた。

「「えええええええ！！！！！！！！！！！！」」

失われし天都（後書き）

教えて、ユーノ先生！

ユ「今日は、ムスカについてだよ♪」

ユ「ジブリ作品の悪役は根っからの悪党ではなかったり、どこか憎めないキャラクターである場合が多いが、ムスカはその中でも珍しく最後まで冷酷非情な存在として描かれているんだ。」

ユ「その人気は後世にも広く流布され、一種カルト的な人気を博している。」

ユ「ちなみに、裏設定では未来少年コナンに出てくるレプカという人が彼の子孫であるとされているんだよ。」

ム「ははははははは！！！！私はやはり後世でも絶大な人気を博しているようだ。ま、当然と言えば当然だけどね。」

ユ「それじゃあ、ここでみんなにスペシャルサービスだよ♪これをやらなきゃラピュタ篇は終われない♪」

ム「ん！？一体何のことだね？」

ユ「それじゃあ、いくよ・・・せーの・・・バルス！！！（飛行石を握ってバルス発動）」

ム「のあああああああ！！！！！！ああ！！！！目が！！！！目が！！！！！！！」

魔導師図鑑ハイパー！

機動六課メカニックデザイナー、通信主任のシャーリーには密かな野望があった。

それは・・・・・・ーーーーーー

シャ「絶対に変なことしませんから、ユーノ先生の杖、拝見させてください！！！」

土下座までしてユーノに請願するシャーリー。

ユ「う～～ん・・・・僕は構わないけど、晩翠がさ・・・」

そう言うと、具象化した晩翠が登場。

晩「私は絶対ヤダからな！！こんな機械オタクに弄られるなど！！！！」

シャ「そこを何とかお願いします！！改造なんて真似はこれっぽちもしませんから、どうか！！」

晩「嫌だ！！！！絶対改造する気だろうが！！！！！！」

そんな二人の様子を、離れたところで見守る持ち主であるユーノと偶々通りかかったなのは達前線一同。

ラピュタ篇登場人物

パズー

声　一　田中真弓

第７４管理外世界『レッドバレー』のスラッグ渓谷に住まう青年。銀鉱山が荒廃したのち、新たに出来た製鉄所で働いている。両親とは死別している。ラピュタの発見に関して詐欺師の汚名を着せられたまま死んだ父のため、自作の飛行機でラピュタの実在を証明することを夢見ていた。シータと出会ったことで、ラピュタを巡る冒険の旅へと出、シータと男女の関係となって結婚する。現在はシータと共にヤクを連れてスラッグ渓谷にある改装した小屋で同棲している。正義感と行動力にあふれ頑丈な身体の持ち主で、視力も良い。日の出と共にトランペットを吹き、飼っているハトに餌をやるのが日課。ムスカ復活とラピュタ強奪をユーノ達から聞かされ、積極的に協力する姿勢を見せる。

シータ

声　一　横沢啓子

パズーの妻。同棲する前はゴンドアの谷に住んでいた。身長はパズーと同じくらい。長い黒髪を二本の三つ編みおさげにしている。ラピュタ王家の末裔で、本名はリュシータ・トエル・ウル・ラピュタ。ラピュタ語で「トエル」は「真」、「ウル」は「王」と呼び、「真

のラピュタ王」を意味する。家の暖炉に隠されていた飛行石のペンダントを首から下げている。山育ちでパズー同様、視力は良い。両親とは死別し、一緒に暮らしていた祖母もすでに他界している。嘗てラピュタを狙うムスカの陰謀をパズーと共に阻止。男女の仲となってパズーと一緒になる。料理の腕前はプロ級。名の由来はインドの叙事詩『ラーマーヤナ』のヒロイン・シーターから。パズーと共にムスカノ陰謀を止めるためにユーノ達と協力する。

ムスカ／ＡＭ１４

声　一　寺田農

ラピュタ篇の黒幕。シータの家系と分かれたもう一つのラピュタ王家の末裔であり、本名はロムスカ・パロ・ウル・ラピュタ。表向きは慇懃な口調で紳士的に振舞うが、目的の為には手段を選ばず、部下や味方も見捨てて行動する。最後は「滅びの呪文」によって一度は死んだかに思われたが、偶然にも手にしたアンゴルモアを取り込んだ事でサイボーグとなって復活。ラピュタ復活と次元世界征服の為に不穏な動きを見せ始める。アイヘリアルを改良したもので聖王教会を襲撃し、コピー魔導師リムを手玉に取る。ネオゴリアテを搭乗して宇宙の彼方を漂流していたラピュタを発見。最深部ではユーノ達と激しい戦闘を繰り広げる。一度はユーノを圧倒し、居合わせたパズーとシータをその手にかけようとするも、人間の風上にも置けない振る舞いに激怒したユーノに阻止され、最終的には自らその命を絶って敗北。

リム・グラス

声　一　石田彰

“コピー魔導師のリム”の異名を持つ男。特殊なリンカーコアを持ち、様々な魔導師の技をコピーすることが出来る稀代の魔導師で、

その中でも天才と謳われる。ムスカの命を受けてパズーたちを葬り去ろうとするが、助けに来たユーノの返り討ちを受け灰となって消えた。ユーノはそれを見てクローンであると判断した。

狙われた本局（前書き）

更新遅れてスミマセン。

最近仕事が忙しくて・・・・・・今回は気分を変えてミッドでのアンゴルモア騒動です。

狙われた本局

＞ｉ１３２７０―７０９＜

時空管理局本局、通称本局。

次元防衛の要である彼ら管理局の本拠地がこの次元空間の中の海に浮かぶ不可解な形をした巨大な建造物である。

時空管理局の二大勢力の一つで、都市クラスの施設を内包する巨大な艦でありながら、次元航行部隊の本拠地として機能するほか、次元世界の監視と管理を行うという次元航行部隊の主任務を象徴する為、全ての世界が存在している次元世界に建築されている。

無限書庫も本局の一施設で次元航行艦の整備はここで行い、アルカンシェルも普段はここに封印されているである。

そして、その防衛ラインは地上本部以上に強固で頑丈と呼べる代物であり、正しく鉄壁の要塞である。

だが、この鉄壁と言われる本局の防衛システムに、いま、魔の手が忍び寄ろうとしていた。

それは、8年前の管理局隊員就任式に遡る。

ここに今正に、今回のアンゴルモア事件の重要人物が大勢の局員に混じってこれから呼ばれるある男の隣に立っていたのである。

「航空戦技教導隊教導官、高町なのは。執務官、フェイト・T・ハラオウン。特別査察官、八神はやて。アースラー新艦長、クロノ・ハラオウン。無限書庫司書長・・・・・・」

男の名前はマナブ・フルカワ。

ユーノと同じように無限書庫で司書をする傍ら、無限書庫の次期司書長と思いはやされた中々に優秀な男であった。

フルカワは緊張した表情で自分が呼ばれることを信じて割りと平然としているユーノのことを一瞥する。

彼は、ユーノの類稀なる司書としての能力にかなり嫉妬していた。

だから、ここで自分が司書長ともなればこんな男は直ぐに無限書庫から追い出すことも、雑用にするなどやりたい放題なのであった。

しかし、現実は彼の思うようにはならなかった。

呼ばれた名前はそのユーノ自身なのであったのだから。

「ユーノ・スクライア。」

「な・・・・・・」

ユーノが正式に司書長となったことを期に、フルカワは司書を依願退職し放浪の旅に出た。

彼は心の中で思った・・・何時かユーノ・スクライアを見返してやる。

自分の能力の方が優れていることを、管理局の局員全てに思い知らせてやると。

そんな歪んだ願いが彼の心を侵食し、多重人格を作ってしまい・・・偶々ある異世界で手にしてアンゴルモアによってそれが顕著に現れ始め・・・今回の事件へと繋がったのだ。

ミッドチルダへと戻ってきたフルカワはアンゴルモアを握り締めた状態で黙り込み、心の中に出来たもう一人の人格によって邪神を呼び起こされていた。

「（8年前のあの出来事、忘れられないでしょう・・・憎いでしょう・・・悔しいでしょう・・・見せてあげなさい、あなたの力を）」

フルカワはもう一人の人格からその言葉を聞いた瞬間、握っていたアンゴルモアが覚醒し光の中に消えたかと思いきや、ある場所へと向けて進行を開始した。

果たして、彼の標的は一体・・・・・何所なのであろうか!?

その頃、時空管理局本局では今日も相変わらずの忙しい日々を送っていた。

今回、この本局には任務報告と別件の以来で足を運んでいたはやて・クロノ・リィンの他、臨時教導を任されたなのはとシャマルと一緒に見学に来ていた恋次、それに何時もの健康診断をするために本局の医療施設へ訪れていたスバルとギンガがいた。

あとのメンバーは、今日はオフシフトであったり留守番であったり別件の捜査であったりと各自の時間を過ごしていた。

本局の内部を物珍しげに見学をしていた恋次であったが、ある局員に人手が足りないという理由で次元航行船のフル点検を手伝う羽目になった。

最初はいやいやそうにしていた恋次であったが、ユーノから一通りのやり方は以前聞かされており何度もやったことがある為、それほど苦にはならず局員の方も手伝ったお礼に昼食を奢ると言ってきたので更にやる気が湧いたそうな。

次元航行艦の整備をする恋次と局員達。

局員の一人が内部の電源を入れて簡易操作を行い、部分点検を済ませる。

そこには恋次も腕組みをしながら立っていた。

「はい、オッケイーです！」

「すみません、阿散井さん。手伝ってもらっちゃって。」

「約束の昼飯、忘れるなよ。」

また、恋次と供に本局に訪れていたシャマルには別の用事もあった。

それは次元航行中に負傷を追った艦隊局員達の身体の調子を診察することだった。

モニターに向かいながら、シャマルはベッドで横になる局員達の目を他所に真剣な表情を浮かべる。

些か怖がった様子の局員の一人が恐る恐るシャマルに容態を尋ねる。

「どうですか、シャマル先生？」

すると、そんな彼等の思いとは裏腹にシャマルは笑顔でこう答えた。

「うん。みんな良い感じ！お腹空いたでしょう、お待ちかねのランチタイムよ！」

シャマルのその言葉を聞いて思わず胸を撫で下ろし、元気を取り戻す局員達。

「了解！」

シャマルもそんな彼等の笑顔を見て、内心かなりホッとする。

と、シャマルが何気なく局員達の心電図を見たときだった。

一瞬、ジャミングにでもあったかのような現象がシャマルの目の前で起こった。

「あら？」

シャマルのほうも不審には思ったが、あまり気にしないことにしてランチを取りに廊下の方へと出て行ってしまった。

だが、この行動が後に命取りに繋がると思っても居なかっただろう。

一方、定期健診のために本局の医療施設の一室では本局第四技術部主任であり精密技術官でもあるマリエル・アテンザによってスバル、ギンガ両名の身体の隅々までが検査されていた。

「脳波正常に稼働中。神経ケーブル異常なし。点検作業終了っと！」

今回も無事に診断を終えたスバルとギンガは安堵の表情を浮かべ、スバルは急に気が抜けたのかお腹の辺りをさすりマリーにこう言って来た。

「じゃあ、そろそろお昼にしましょうよ！」

「ダーメ。その前に、マッハキャリバーとブリッツキャリバーの点検があるでしょ。」

「もう少し待ち待ちましょうよ、スバル。」

「えへへ・・・は～～～い。」

ギンガの言葉に渋々了承をするスバルはそのままギンガの隣で横になってデバイスの点検を済むのを待った。

だが、このときもマリーはシャマル同様モニター画面を走った謎のジャミングに気付いていながらも大したこととは思わずそのままデバイスの点検に取り掛かってしまったのであった。

そして、その頃クロノとはやて、リィンは昼食を取るために休憩室で寛いでいた。

三人が休憩室で寛いでいたとき、突然部屋の扉が開くと中に入って来たのはクロノの母親で後見人の一人であるリンディ・ハラオウンである。

「は～い。クロノ、はやてさん。元気にしてる？」

「リンディ提督！何かありましたか！？」

「いえね・・・お昼休みを取る傍ら、ちょっと様子を見にね・・・あら？」

すると、リンディはその時机の上に乗っていた白い箱に目を奪われ

た。

「はやてさん。何、これ？」

「ついさっき、ロッサが送ってくれた特性ケーキです。よろしければどうですか？」

「あら！良いわね・・・それじゃあ、頂こうかしら！」

はやての言葉に賛同したリンディはクロノの隣に座ると、早速全員分のお茶を用意してアコースが趣味で作った手作りケーキを頂くことにした。

リィンは実に幸せそうな笑みを浮かべながら、ケーキには手をつけず黙ってお茶を啜るクロノに向ってこう言った。

「クロノ提督も食べればいいじゃないですか？」

「だから、僕は甘いものは苦手なんだ。リンディ提督も、少し砂糖の量を控えてはいかがですか？もういい年ですよ。」

クロノはそう言いながらかなり呆れた表情で、緑茶に砂糖やミルクを入れるなど変わった味覚の持ち主である実の母親に注意を促すが、リンディは至って平然とした表情でこう答える。

「大丈夫よ♪糖尿病にならない程度に抑えてあるから♪」

リンディは極度の甘党であり、このお茶は通称リンディ茶と呼称されなのは達ですら恐れ戦く代物である。

そんな他人には絶対に口に出来ぬような味を有したお茶をこれまた幸せそうに啜るリンディに、顔中をクリームだらけにするリィン。

「それにしても、アコース査察官の作ってくれるケーキは格別です！！」

すると、そんな四人の下に現れたのは臨時教導を終えたばかりのなのはであった。

「あれ？皆お揃いで何してるの？」

「なのはさん！！」

「あら、なのはさん。今日はこっちに用事かしら。」

「はい。定例報告と教導隊の臨時教導に参加していたもので、ついさっき終わったところなんです。」

「なのはちゃんも食べていく？ロッサの作ったケーキ。」

「ああ！いいの？もっちろん、食べていく！後でユーノ君とヴィヴィオにも持って行ってあげないと・・・！？」

と、なのはが満面の笑みでそう答えようとしたその時だった。

突然、本局全体に響き渡る第一級警戒警報。

「「「「！？」」」」

その警報を聞いて表情を一変させるリンディ達。

クロノは直ぐにこの非常事態の原因をリィンに尋ねた。

「何事だ!?」

リィンはタッチパネルを操作して、本局のコンピューターにアクセス。

原因を調べた結果、あるとんでもないことが判明したのだった。

「緊急コード０８発令!未確認の不穏分子が・・・本局内に侵入したようです!!」

「何ですって!?何所にいるの!侵入者の数は!?」

「わかりません!」

クロノやなのは達は重い表情を浮かべると、本局のメインコンピューターをも狂わせるほどの敵のハッキングスキルに驚愕する。

「本局のコンピューターまで混乱させるなんて・・・!?」

「リィン!セキュリティーシステムはどうなっとるんや!?」

「只今、検索中です!」

リィンは何時も以上に真剣な様子で目の前のパネルを操作して、セキュリティーシステムの構造を探ろうとしていた。

しかし、その間に本局のシステムは謎の不穏分子によって次々と誤

作動を起こし始める。

「第5、第6、第7ブロック・・・全て突破されました！目標なのは・・・しまった！見失いました！！」

「マズい！あの近くには管理システムが・・・！！」

「何て奴や・・・本局のセキュリティーシステムを突破するなんて・・・！！」

その頃、本局のメインシステムが誤作動を起こしてしまった結果、医療施設内部で横になっていたスバルとギンガの体に高圧電流が流れる。

「「う、あああああああああ！！！！！！！！」」

突然苦しみ出す二人の様子を見て驚きを隠せなくなるマリー。

「スバル！ギンガ！！」

マリーは直ぐに二人を解放しようとシステムを解除しようと試みるが、全く反応を起こさない。

「！！システムが・・・止まらない・・・！！」

「「うあああああああああ！！！！！！！！」」

身体に流れる高圧電流に苦しみ続けながらも、必死でもがき続けるスバルとギンガ。

普通の人間ならば先ず即死であるが、二人は嘗て戦闘機人開発における実験素材として生まれた存在であり生身の人間よりはかなり丈夫なのである。

だが、それでもこのまま電流を流し続けると身体への後遺症が残ってしまうことはもとより、まずその身体そのものが先にくたばってしまう。

マリーは直ぐに二人に駆け寄り助け出そうとしたが・・・・・・

「二人とも!!!きゃあああ!!!!」

マリーは電流を身体に受けると、思わずショックで気絶しその場に倒れこんだ。

スバルは苦しみの表情を浮かべながら気絶するマリーの名前を叫んだ。

「ま、マリーさん!!マリーさん!!!!」

同じ頃、次元航行船の点検をしていた局員達の下にも被害は広がっていた。

突然、次元航行船のパーツが外れたかと思えば誤作動を起こして局員達を襲ったらり、医務室の方ではシャマルが請け負っていた患者がベッドに身体の自由を奪われ圧迫されていたのであった。

恋次とシャマルは一度、最も被害が大きい次元航行船の方へと駆けつけるがその時には被害は尋常ならぬほどにまで拡大し、悲惨な状況が目の前に広がってきた。

シャマルは思わず欄干の上から傷つき倒れる局員を心配し声を上げる。

「みんな!!」

「何をやってんだよ、てめーら!!早くシステムを切り替えろ!!」

恋次は直ぐに叱咤をして、次元航行船のシステムを切り替えるように指示をするが返って来るのは局員の苦悩の声。

「やってますよ!!切り替えらない筈はないんだ!!」

「メイン電源のカットは出来ないの!?」

「しています!!サブまで切っているんです!!」

シャマルはその言葉を聞くと、欄干の上に設置されているモニターに目を向けた。

モニター画面は不規則に色々な映像を見せては一つにまとまろうとしていない。

シャマルの疑念は益々大きくなるばかりであった。

「一体どうなってるの・・・はっ!?」

その時、シャマルの目の前に落ちてきた次元航行船のパーツの一部。

巨大であったがために、パーツは欄干ごと破壊するとシャマルの足

場を崩してその場から転落させそうにしたが、咄嗟に恋次がシャマルを右腕で抱えると崩れる足場を器用に移動しながら安全な場所まで運びきった。

恋次に助けられたシャマルは安堵の表情を浮かべると、恋次を仰ぎ見お礼の言葉を口にする。

「あ、ありがとうございます。」

「だから言ってるだろ。身体は常に鍛えてろって。おい！はやて、機動六課！応答しろ。」

恋次は懐から持たされているトランシーバーを使ってはやて達か留守を任させているユーノ達機動六課のメンバーに通信を入れようとしたが、ジャミングによって一切連絡が通じないことを悟った恋次はそのままトランシーバーを握りつぶす。

「くそ！！通信も出来ねえのかよ！！」

不穏分子の破壊活動によって、本局に居た殆どの局員が機能停止の状態に追い込まれまともに動けるのは休憩室で被害を受けていなかったリンディ達ぐらいであった。

リィンは必死でメインコンピューターにアクセスを繰り返して不穏分子の活動を止めようと画策したが、結局不穏分子のほうに軍配が上がりパネルに映っていた本局のセキュリティー画面がアンゴルモアと書かれたものに書き換えられてしまった。

リィンは思わず悔しさの余りパネルを叩き、現状を報告する。

「駄目です!!システムを・・・書き換えられました・・・!!」

あまりの信じがたい出来事を耳にしたリンディ達は驚愕の表情を浮かべ、絶句する。

「莫迦な・・・この時空管理局本局が・・・乗っ取られた・・・ですって!?」

暫くの沈黙が流れる休憩室であったが、クロノは重い表情を浮かべながらこのような真似が出来る人物のことについて考えていた。

「（こんなことが出来るのは・・・・・・一体・・・・・・!?）」

と、その時。

休憩室に居たリンディ達の目の前に映し出される一つの映像。

そこに映し出された人物の姿を見た瞬間、リンディ達は驚愕の表情を見せた。

〈フフフフフフフフッフ〉

「「「なっ!?」」」

そこに映し出されたのは、アンゴルモアと同化したことによって四肢を完全に別なものへと変化した元無限書庫司書、フルカワであった。

「あれは・・・!?」

「まさか・・・・！！」

「嘘やろ・・・・・・まさかハッキングしたのが・・・・・・フルカワさん！？」

「ＡＭ体化しているのか・・・・！？」

「そんな・・・・！！」

ＡＭ体と化したフルカワは人としての意識を失い、不気味な笑い声を上げていた。

〈ハハハハハハハハ！！！！！！！ハハハハハハハハハハハハッハハ！！！！！！！！〉

なのは達が重大な危機に瀕している頃、下校中だったヴィヴィオは何故かは分からぬがなのはの身に関してただならぬ不安を感じた。

「はっ！まさか・・・・・・なのはママ・・・・！？」

ヴィヴィオは急いで六課で留守番をしているユーノにこのことを伝えようと走り出し、ユーノ自身もなのは達の異変を感じて動き出そうとしていたのだった。

また、二人が行動を起こそうとしている丁度その時、システムが暴走化したことによって整備中の次元航行船からは爆発が起こり、熱線が飛び交っていた。

恋次やシャマル、局員達は逃げ回りながら何とかシステムを復旧させようと試行錯誤をするが結局どうにもならないままであった。

恋次の隣に居るシャマルはこの最悪の状況にすっかり匙を投げてしまっている。

「恋次さん！これ以上はどうにもなりませんよ！！」

「バカ野郎！！簡単に根を上げるな！お前、医者だろう！！」

「ええ～ん！今この状況でそれは関係ないですよ！！」

一方、クロノ達の方は何とか休憩室からの脱出を図り非常レバーを作動させようとしていたが、その非常レバーからは電流が起こり開くことも出来なかった。

「くっ！！」

クロノは思わず掴んでいた手を離して、扉の前から離れるしかなかった。

「非常レバーもいかれてしまってる様だ！」

なのははパネルを見ながら本局の全通路にシェルターが下ろされ、完全に通路を断ち切られ脱出不可能となったことを伝える。

「全通路を断ち切られました！脱出不可能です！！」

なのはからの報告を聞いたリンディは重い表情を浮かべながら、ＡＭ化したフルカワに向ってどうにか説得を試みる。

「くっ・・・フルカワさん！私達は元同僚ではないですか！？せめ

て他の局員達は解放してあげてください！フルカワさん！！」

しかし、リンディがいくら説得に応じようと声を掛けたところで意識を奪われたフルカワに声が届くことなどなかった。

そう判断したクロノはリンディに悲しい現実を告げるしかなかった。

「無駄ですよ、リンディ提督。悲しいですが、ここまでＡＭ化した以上・・・人としての意識は恐らくないでしょう・・・」

クロノの言葉を聞いたリンディも複雑な気持ちになりながら、現実を直視する。

「・・・そうね・・・現時刻より彼を、ＡＭ１５と認定呼称するわ。」

その頃、ユーノと供になのは達の救出に向けて動き出していたヴィヴィオはとある公園まで来ると、ユーノが知っている本局諜報部専用の隠し通路を目の当たりにし感心していた。

「凄～～～い・・・！」

「諜報部専用の緊急通路だよ。ここを使えば別システムを使って本局に侵入できる。」

ユーノはそう言うと、ヴィヴィオを連れて緊急通路の中へと入っていく。

二人が動き出した頃、リィンはフルカワの居場所を突き止めリンディ達に報告をする。

「リンディ提督、フルカワさんの居場所が分かりました。時空管理局本局の無限データベース中枢、無限書庫Sラインと思われます。」

モニター画面に映し出されるその場所は、ユーノが四年前に無限書庫を立ち去る前に作り上げた現在の巨大自動検索システムが設置された場所で通称Sライン。

フルカワはそこに侵入をして、それごと身体の中に取り込んで本局のシステムをハッキング、全ての情報を手に入れていたのであった。

〈ククククククハハハハハハハハハ！！！！！！！！〉

「ユーノくんの作った検索システムをまるまる占拠したということなの！？」

「そう言えば、フルカワさん・・・昔からユーノ君の才能に嫉妬していたって聞いたことはあったけど・・・」

「それじゃあ、今回の暴走もユーノくんへの当て付けか何かかいな！？」

驚愕の表情を浮かべるなのは達であったが、画面上のフルカワは不敵な笑みを浮かべると次なる行動を起こそうとした。

〈フフフフフフフフ・・・・・・〉

その瞬間、休憩室の景色が赤一色になるや否や再び第一級非常警戒ベルが鳴り響く。

「「「「「！？」」」」」

なのは達はこの異常な内部の様子に疑問を抱き、フルカワの行動を真意を探ろうとした。

「今度は何をする気なの・・・！？」

すると、目の前に映し出された本局内部の全てを一望できる見取り図の中心部に異常が生じているのが見つかった。

クロノはそれを見るなり思わず声を上げて焦りを顕著に表す。

「いかん！動力炉！！」

「冷却装置を停止させたようです！！このままでは、動力炉が暴走してしまいます！！」

本局のエネルギーを全てまかなう動力炉は、冷却装置を停止させると臨界点を越えた瞬間に大爆発を起こしてしまうのだ。

「駄目だ！！本局ごと爆発するぞ！！」

「フルカワさん！！」

なのははフルカワに張り詰めた思いで声を掛けるが、フルカワ自身は止める様子など一つも見せずに高笑いを上げるだけであった。

〈ハハハハハハハハハハハハハハハハハハハハ！！！！！！！！〉

その頃、ユーノはタッチパネルに映し出された現在の本局内部の様

子と隠し通路の順序を一通り整理すると、ヴィヴィオを残して一人で侵入を開始しようとするが、それを見たヴィヴィオが声を出して止めにかかった。

「ユーノパパ！私も行くよ！！」

ヴィヴィオの予想外の言動に驚くユーノであったが、直ぐに否定の言葉をかけて次のように語りかける。

「駄目だ。許可できない。このまま本局の動力炉が苛烈すれば・・・・・」

ユーノはそう言うと、起こりうる最悪の事態を頭の中に思い浮かべながらヴィヴィオに説明をした。

「次元空間そのものが大規模な次元震によって消滅してしまい、全ての世界に多大な影響が及ぶ。だから、ヴィヴィオは少しでも遠くへ避難して欲しい・・・」

「でも・・・なのはママ達を見捨てるわけにはいかないよ！」

「此処から先は僕に任せてよ。」

すると、どうしても納得のいかないヴィヴィオは声を張り上げて断固としてユーノの言葉を聞こうとしなかった。

「嫌だよ！！私だけ逃げるなんて真似は出来ない！！」

「ヴィヴィオ・・・」

「それに・・・私を誰の娘だと思ってるの!?管理局のエースオブエース、高町なのはと翡翠の魔導死神、ユーノ・スクライアの娘!!」

「なっ!?確かにそうだけど・・・・・そんな大事な娘を危険な目に遭わせるなんて真似は父親として出来ない。だけど、それでもヴィヴィオは聞いてはくれないんだよね?」

「当然!だって私はなのはママの子供だもん!聞かん棒はママ譲りだからね!だからお願い・・・一緒に行かせて、ユーノパパ。私だって、これでも戦えるだけの魔法は使えるつもりだから!ね、クリス!」

そう言うと、ヴィヴィオは外装がうさぎ人形型の専用デバイス、セイクリッド・ハート・・・通称『クリス』に同意の意見を求める。

すると、マスターであるヴィヴィオに向ってクリスも肯定の言葉で答える。

〈Ａｌｌ　ｒｉｇｈｔ〉

ヴィヴィオとクリスの言葉を聞いて、少し考えたユーノであったが二人の実力と強い熱意に圧されたのか笑顔で同行を許可することにした。

「・・・了解♪」

ユーノはそう言うと、ヴィヴィオを背中に乗せた状態で緊急通路の扉を開放しシステムを解除していく。

開かれた扉の前に立つと、真剣な表情を浮かべるヴィヴィオに向って作戦実行の合図を送る。

「それじゃあ、作戦を開始するよ。」

「うん！」

ユーノとヴィヴィオは意を決すると、開かれた通路目掛けて飛び込んでいった。

一方、本局内部の様子は更に酷い状況になっていた。

スバルとギンガは未だに流れ続ける高圧電流によって身体の動きがとれずに苦しみ続けていた。

「「うっ・・・うあぁ・・・！！」」

二人不自由な身体何とか動かしては床で気絶したままのマリーの方を一瞥する。

そんな全員の様子をSラインで悠々と高笑いをしながら見ているフルカワ。

〈フフフフフ・・・・フフフフッハハハハハハハハハハ！！！！！〉

為す術もなくただ徒に時間過ぎていく中、動力の暴走によって部屋の体温が徐々に上がっていく。

はやて達は着ていた上着を脱ぎ、汗だくになりながら険しい表情を浮かべていた。

「くっ・・・六課のみんなとも、本局に来ているスバルやシャマル達とも連絡が着かへん・・・他の武装局員も・・・暫くは動けん筈だし・・・」

「くそ!他に手はないのか!?」

「一体どうすれば・・・・・・・!?」

と、その時・・・・・・なのは達の様子を見たリンディがふとこんな言葉を掛けてきた。

「なのはさん。」

「え?」

「大事な人を忘れてるわよ・・・・・・こんな時でも駆けつけてくれる、あなたの大事な人がね♪」

それを聞いた瞬間、リィンも納得した表情を浮かべた。

「成程!!そうですよ!!」

「え、リィンまで・・・なっ!?」

怪訝そうな顔をするなのはやクロノとはやてであったが、その時・・・・・部屋全体に伝わってくるジェットローラーのような推進音。

「この音は・・・!?」

「一体・・・！？」

「・・・これは・・・何だろう・・・はっ、まさか！！！」

と、なのははその瞬間このジェットエンジンを使うものを持っている人物の顔が頭に浮かんだ瞬間、思わず明るい表情を見せる。

「そうだ！！！ユーノ君！！！！！」

ユーノは靴底のジャットエンジンの推進力を微調整しながら本局内部のある場所へと向けてヴィヴィオと供に向っていた。

ユーノが侵入してきたことを察知したフルカワは直ぐに侵入してきた不確定要素であるユーノのデータを引き出し、読み上げていくうちに怒りが湧いてきた。

〈ン！？元無限書庫・・・初代永久名誉司書長・・・ユーノ・スクライア・・・！！〉

なのはやクロノ達は最後の希望をユーノに託すと、作戦成功を祈るしかなかった。

「（頼んだぞ・・・ユーノ。）」

そんななのは達の期待を背負ったユーノとヴィヴィオは今のところはフルカワに気付かれないまま隠し通路を通り抜け、クロノの戦艦でもあるクラウディアへと向っていた。

「本局にこの前行ったとき、リンディ提督に許諾を得てクラウディアにちょっとした細工を施しといたんだ。本局のシステムと独立し

て行動が取れるように。だから、敵の支配は受けていないはずだよ。」

「それじゃあ！」

「うん。クラウディアを使ってフルカワさんを倒すよ。」

ユーノはそう言うと、急いでフルカワの支配を受けていないクラウディアに向ってエンジンを全開にして進行を続けた。

しかし、そんなユーノ達の考えを他所にフルカワは二人の動きを察知して動き出そうとしていた。

〈フフフフフフフフフフ〉

また、ユーノに希望を託したなのは達ではあったが上がり続ける部屋の温度と動力炉の暴走に為す術もなくなっていた。

リィンは絶望した様子で大仰な反応を見せていた。

「駄目です！！動力炉、止まりません！！このままじゃ、大爆発です！！はやてちゃん、どうしましょう！！！」

「くっ・・・！！頼む、急いでくれ・・・ユーノくん・・・！」

なのは達はクロノの居る前でも気にせず、上着の下着姿を露にしながら焦りの表所を見せており、リンディとクロノの方も団扇を煽りながらその時を待っていた。

そして、二人は漸くクラウディアの内部に突入することに成功し、

ユーノは背中からヴィヴィオを降ろすと予め教えておいたクラウディアのコンピューターの起動を指示する。

「ヴィヴィオ、そこのコンピューターを起動させて。僕はフルカワさんの正確な居場所を突き止めるから。」

「うん！」

ヴィヴィオはユーノの指示に従いパネルを操作してコンピューターを起動させる。

すると、その瞬間ヴィヴィオはある異変に気付きユーノに伝える。

「あっ！？ユーノパパ！！」

「何！？」

ユーノがヴィヴィオの言葉に耳を傾け、メインモニターに目を向けた瞬間・・・そこに映し出されたのはコンピューターの中を移動してきたフルカワであった。

「コンピューターの中を移動できるのか！？」

〈フフフフフフハハハハハハハハハハ！！！！！！！！！〉

驚愕するユーノと、不適な笑みを浮かべるフルカワ。

そして、本局の動力炉も臨海に到達しようとしていた。

「間も無く・・・臨界点に達するぞ・・・！！」

「もう・・・ジ・エンド・・・なの！？」

なのは達は諦めの表情を浮かべ、意気消沈する中・・・はやてだけが一人そういった態度を見せずに項垂れるなのは達に激励の言葉を掛ける。

「まだよ！！」

「「「「え！？」」」」

「時空管理局がこないなことで諦めてはいかんよ！！例え、どんなに絶望的な状況にあろうが、そこで諦めたら終いや！！私達は諦めへん・・・絶対に！！！！」

「「はやてちゃん・・・」」

「はやて・・・」

「はやてさん・・・」

同じように、クラウディア内部に居たヴィヴィオもはやてと同じ見解に達していた。

「そうだよ！私もユーノパパも絶対に諦めない！！どんなことがあろうとも！！必ずなのはママ達を助けてみせる！！」

〈フフフフフハハハハハハハハハハハハ！！！！！！！！！〉

フルカワはそんなヴィヴィオの態度を見ても、負ける気などこれっ

ぽっちも見せずにスクリーンの中から特殊なコードを伸ばして二人の息の根を止めようとした。

そんなフルカワとは裏腹に、リンディは一人汗だくになりながらもリンディ茶を啜り一人こんな事を考えていた。

「（フルカワさん・・・もし、あなたがクラウディアのコンピューターに移動していたのなら、多分・・・それがあなたの敗因であり・・・運の尽きですね・・・）」

と、その時だった。

〈ナッ！？〉

「あ！！」

クラウディアのメインスクリーンに徐々に映し出されていくユーノの顔写真がコンピューター内部に侵入してきた不穏分子、フルカワを追い詰めていった。

〈オアアアアアア！！！！！！！〉

完全にユーノの顔によって追い詰められたフルカワはコードを断ち切ると、不適な表情を浮かべるユーノを信じがたいと言った表情で見つめ、ユーノはそんなフルカワに向ってこう言った。

「・・・かかったな、フルカワさん・・・僕の造った侵入者破壊プログラムに。」

〈バ・・・バカ・・・ナ・・・！！〉

フルカワがその言葉を口にした瞬間、画面上からフルカワが消えて本局のメインコンピューターが無事に復帰したことが窺えた。

「やった!!!局の機能システムが戻った!!!」

「まぁね。でも、敵はまだ活動可能だろう・・・本当の勝負はここからさ!」

局のシステムが復旧したことによって、暴走していた全ての機能が落ち着きを取り戻し、恋次とシャマルがいた次元航行船の整備倉庫の方も漸く静かになったのであった。

恋次とシャマル達は体中を満身創痍にしながら、どうにか助かったことに歓喜する。

「・・・な・・・何とか・・・止まりやがってぜ・・・!」

「酷い目に・・・あいましたね・・・」

スバル達のほうも、高圧電流が収まった事によって何とか難を脱したが当然の如く暫くは身動きが取れない状況であった。

そして、休憩室に居たなのは達の方はというと直ぐに冷却システムを再起動させて動力炉の冷却を開始。

「高圧注水メインポップ作動!ＥＣＣＳ、作動!!」

システムが正常に作動したことによって、爆発の危険を回避したことをクロノはリンディに伝える。

「爆発の危険性ありません。管理システム、我々の手に戻りました。」

「リィン、フルカワさんの居場所は!?」

「はいです!!フルカワさんの現在位置・・・本局次元航行部隊、交換パーツ格納庫です。画像を出します!!」

モニターに映し出されたのは、這い蹲りながら次元航行船のパーツに向っていくフルカワであった。

〈ノアァ・・・力ヲ・・・チカラを・・・!!!〉

その頃、ユーノとヴィヴィオは一度クラウディアから出ると、それぞれに分かれて行動しようとしていた。

ユーノはヴィヴィオになのは達の下へと急ぐように指示を出し、自身はフルカワの下に急ぐことを伝えた。

「・・・フルカワさんはこの下に逃げたようだ。ヴィヴィオは上のなのは達の様子を見に行ってくれないか?僕が先に行ってフルカワさんを止める。」

「絶対無茶したら駄目だからね!!約束だよ、ユーノパパ!!」

「了解♪約束したよ。」

また、丁度その時。

フルカワは次元航行船のパーツを片っ端から寄せ集めることによって、巨大なロボットの姿へと変貌を遂げたのであった。

リンディやクロノ達はその変わり果てたフルカワ、いや・・・最早ＡＭ１５と呼称するほうが正しいのか、兎に角驚愕の表情を浮かべていた。

「次元航行船のパーツを・・・！？」

「寄せ集めるなんて！？」

「戦艦ロボットになりましたです・・・！！」

〈ウオオオオオオオオオオオオ！！！！！ユーノ・スクライア！！！！！！！！〉

戦艦ロボに変貌を遂げたＡＭ１５は船の動力源に使われるエンジンが搭載された右腕を使って、格納庫の壁を殴りつけ破壊を試みた。

その瞬間、休憩室のなのは達の下にまで伝わる凄まじい衝撃。

「「「「「わあああああああああああ！！！！！」」」」」

その後もＡＭ１５は壁を壊そうと殴り続けるが、そのうちに誤作動を起こしたハッチが開いたことによってＡＭ１５はそこから外に出ようよ動き出そうとした。

と、その時・・・・・頭上から降ってきたユーノが刀の切っ先を身体に突き刺しＡＭ１５を止めにかかろうとした。

「貴方の相手はこの僕のはずだ！！ここでは暴れさせない！！」

モニター画面でユーノの様子を見ていたなのは達は驚きの表情を見せる。

「ユーノ君！！」

その後、ユーノは晩翠を突き刺した状態でＡＭ１５の真下に緑色の魔法陣を展開させて全く別の場所へと転移した。

「転移魔法で戦闘場所を移したのね・・・・直ちに応援を送るよう手配するのよ！」

「了解！」

リンディは直ぐに転移先を補足した後、クロノに動ける武装局員に連絡を入れるようクロノに指示を出す。

すると、丁度その時部屋の扉が開くとユーノとともに駆けつけてきたヴィヴィオがやって来た。

「なのはママ！！！みなさん！！」

「ヴィヴィオ！？どうして此処に！？」

「ユーノパパと一緒に着いて来たの！御免なさい、危険なことして。でも、なのはママ達のことが心配で・・・・・・」

ヴィヴィオは今迄堪えていた悲しみが一気に噴出し、瞳には涙が籠もる。

それを見たなのはは、優しくヴィヴィオを抱きしめると感謝の言葉を口にした。

「ヴィヴィオ・・・うんうん・・・ありがとう、ヴィヴィオ。その気持ちだけで・・・なのはママは凄く嬉しいから。」

また、その頃・・・・・・ミッドでジョギングを楽しんでいたヴィヴィオの親友、コロナとリオは海辺の道路のところまで走りに来ていた。

コロナは普段、あまり運動をしないせいか息切れを起こしてリオの後を追っていた。

「お待ち下さいリオ・・・少し休みましょうよ・・・」

「これくらいで何息上げちゃってるのさ、コロナ！」

リオは後ろに振り返り、笑顔を浮かべてコロナにそんな言葉を掛けた・・・その瞬間。

二人の目の前の海上にユーノの転移魔法陣が浮かぶや否や、そこから舞い上がる大量の海水が二人の上から降り注いだ。

「「はい！？」」

突然のことに思わず驚く二人であったが、その時目の前に現れた巨大な戦艦ロボの姿を見ると度肝を抜いた。

〈スクライア！！！！！！！！！！！！！！〉

「「なあああああ！！！！！！！！！！」」

二人は恐ろしくなり、直ぐにその場から全速力で逃げて行った。

必死で刀を突き刺したままのユーノであったが、とうとうＡＭ１５に掴まれてしまいそのまま投げ飛ばされてしまう。

「うあああ！！！！」

ユーノは投げ飛ばされた瞬間、霊子で足場を作ってその場に浮遊すると晩翠を解放する。

「けっ！月光せよ、晩翠！！」

ユーノは体制を立て直すと、八千本の翡翠斬を一度に敵に浴びせる。

「“翡翠斬・八千刀（はっせんとう）”！」

しかし、ＡＭ１５は戦艦のバリアシステムを使って八千本の翡翠斬を全て受け流す。

それを見たユーノは、晩翠を両手で持って天に掲げると特殊な霊圧と魔力を放出させて敵のバリアシステムを分解しようとする。

「“翡翠月風（ひすいげっぷう）”」

すると、晩翠の刀身から発生するユーノ自身の魔力と霊力が合さったそよ風のようなものがＡＭ１５のバリアシステムを分解する。

「バリア、分解!!輝け、晩翠・・・!!」

ユーノはこの期を逃さまいと、ギリギリまで近付き翡翠斬を放とうとした瞬間、ＡＭ１５の右腕が伸びてユーノを海の中へと飛ばした。

「のあああああ!!!!!!」

ユーノの危機的状況をモニターで見ていたはやては思わず声を上げる。

「ユーノくん!!」

また、同じ頃リィンは損傷を受けた武装局員と戦艦の状態があまりに酷すぎる状態で出撃が出来ないことを伝えた。

「武装局員、および次元航行船。損傷が激しすぎてその八割以上が出撃不可能です!!」

「おまけに恋次さん達も身体の傷が酷くて現在治療中です。一時間は出られません。六課のメンバーも斑に連絡が取れない状況です!」

「何てことなの・・・あれ!?そう言えば、なのはさんとヴィヴィオちゃんは!?」

「「何(やて)!?」」

リンディにそう言われて、改めて部屋を見回したはやて達だったが、そこには先程まで一緒に居たはずのなのはとヴィヴィオが何所にも居なかった。

一方、ＡＭ１５と戦いを繰り広げていたユーノは敵に身体を掴まれ、高圧電流を流されていた。

「のあああああああああ！！！！！！」

喘ぎ声を上げて苦しみ出すユーノであったが、その時何所からともなく飛んできたアクセルシューターによってユーノは敵から解放させることになる。

〈Ａｘｅｌ　ｓｈｏｏｔｅｒ〉

攻撃を受けて思わず手を離すＡＭ１５。

ユーノが直ぐにその場から離れて飛んできた方向を見てみると、そこに居たのはあの二人であった。

「なっ！？」

それは、クリスを起動させて大人モードへと変貌したヴィヴィオとバリアジャケットに身を包んだなのはであった。

「なのは！ヴィヴィオも！！」

「お待たせ、ユーノパパ！」

「私の大切なユーノ君に・・・何て酷いことを・・・絶対に許さないんだから！！行くよ、ヴィヴィオ！！」

「うん！！」

二人はその瞬間、それぞれの技を駆使してユーノの援護に入った。

「レイジングハート！」

「クリス！」

〈Ｄｉｖｉｎｅ　Ｂｕｓｔｅｒ〉

〈Ｓａｃｒｅｄ　Ｃｌｕｓｔｅｒ〉

なのはの砲撃魔法と、ヴィヴィオの使う拡散型の砲撃魔法がＡＭ１５に直撃し動きが徐々に怯んできた。

だが、負けじとＡＭ１５も腕を振り上げて二人に向って拳を降ろしてきた。

なのははヴィヴィオを庇おうと前に出て防御を展開しようとしたとき・・・そんななのはの魔法よりも先にユーノの翡翠の殻が現れ拳から身を守った。

「ユーノ君！」

「誰にも傷つけさせない・・・・・・なのはとヴィヴィオは・・・・・・この僕が守る！！翡翠斬・八千刀！！」

ユーノはそう言うと、再び八千本の翡翠斬をＡＭ１５に放って今度はちゃんと直撃させた。

直撃を食らったＡＭ１５は傷跡を手で押さえながら三人の方をにらみつける。

「なのは！動きが遅くなってる今だ！」

「了解！スターズ１、高町なのは・・・行きます！！」

なのははユーノの言葉を聞くと、砲撃モードにするとレイジングハートに魔力を収束させて大威力の砲撃魔法を発動させようとチャージを開始。

〈Ｓｔｒｉｋｅ　Ｓｔａｒｓ〉

だが、その時ＡＭ１５も右腕をなのは達のほうへ向けると、腕を一度中に引っ込めると砲撃を開始しようとエネルギーチャージに入った。

「「なっ！？」」

この様子をモニターで見ていたリンディ達は顔色を一変させる。

「アルカンシェル・ミニマムですって！？」

アルカンシェル・ミニマムとは、対迎撃用に開発された次元航行船が持つ常備攻撃技の一つで、通常のアルカンシェルの威力には遠く及ばないもののその威力はかなり強力である。

そんな驚愕するなのはとヴィヴィオに、ユーノが説明を加える。

「敵は本局の次元航行艦のデータとパーツを使ってるんだ・・・アルカンシェル・ミニマムを撃てても可笑しくはない。」

「それでも・・・私は負けない！！！！！」

なのはそう言うと、ストライク・スターズを発射してＡＭ１５を破壊しようとする。

しかし、ＡＭ１５も撃たれたなのはの砲撃に向ってアルカンシェル・ミニマムを発射してぶつかり合わせた。

両者の技が暫く拮抗した状態でぶつかり合った後、対消滅が起きて消しあってしまった。

はやては思わずその光景に目を疑った。

「相殺されたやて！？」

なのはとユーノの傍らで状況を見ていたヴィヴィオは険しい表情を浮かべると、ある一つの決断に達する。

「それなら・・・・・クリス！！」

〈Ａｌｌ　ｒｉｇｈｔ〉

すると、ヴィヴィオは二人の前に出てくると魔力を放出させながら精神を集中し始めたのであった。

「ヴィヴィオ！？」

「何をする気だ！」

「私の聖王の鎧の力で、あいつの身体から核を取り出す！！いくよ、

クリス！！」

〈Ｈｏｌｙ　ｒｉｇｈｔ　ａｒｍ〉

ヴィヴィオはそう言うと、眠っていた聖王の鎧の力の一端を右の拳に宿すと全力全開の力で駆け出しＡＭ１５の額にあるアンゴルモア核を抉り出そうとした。

「はあああああああああああああああああああああ！！！！！！！！！」

ヴィヴィオがホーリーライトアームを使おうとした瞬間、ＡＭ１５は隠していた左腕の手を外に出すとヴィヴィオの攻撃を防ぎにかかった。

「え！？」

「「まさか！！」」

〈スクライア！！！！！！！！！！！！！！！！！！！！！！！！！！！！！〉

ヴィヴィオの攻撃を左手で受け止め、大威力の魔力を互いに放出させるヴィヴィオとＡＭ１５の両者。

「ヴィヴィオの力ですら上回るの・・・あいつは・・・！？」

すると、そんな驚愕の表情を見せるなのはにユーノはほくそ笑みながらこう口にする。

「いや・・・それは違うよ、なのは・・・よく見てみなよ。」

「くっ！！私は負けない・・・絶対に負けない！！！！！！！！！！！！！！！」

と、その瞬間・・・・・ヴィヴィオは身体中の中から溢れる無限の可能性という名のエネルギーによって一気に魔力を増加させて力圧しにＡＭ１５の左腕を破壊して核の部分に手を伸ばした。

「はあああああああああああああああああああああああああ！！！！！！！」

ヴィヴィオの攻撃が取ったことを確認したユーノとなのはは、ヴィヴィオのフォローに回るため最後の攻撃を施す。

「今だ！輝け、晩翠！！」

「ディバイン・・・バスター！！！」

二人の斬撃と砲撃が巨大なＡＭ１５の身体を貫通する。

そして、ヴィヴィオも最後の力を振り絞って額のアンゴルモア核を取り出し後ろの二人に向って投げ飛ばした。

「のおおおおおお！！！！！！えええええい！！！！！！！！！！！」

ヴィヴィオがアンゴルモア核を投げ飛ばした瞬間、体制を崩したＡＭ１５は海へと沈んでいき大爆発を起こした。

ユーノとなのははアンゴルモア核を受け取ると、直ぐにヴィヴィオの下まで駆け寄って行った。

モニター画面で三人の勝利を見届けたはやて達は安堵の表情を浮かべる。

「やりましたです！！！！」

「高町家三人の連携プレーの勝利や！！！」

「本当ね・・・よくやったわね・・・大した親子よ。」

「ええ。出来れば・・・この三人は敵に回したくないですね・・・」

そんな冗談交じりのクロノの話を耳にしたはやて達は漸く緊張の糸が切れたのか、思わず笑顔を浮かべた。

同じ頃、ユーノ達三人もアンゴルモアの封印を完了させ、フルカワの救出を終えると家族三人久し振りの水入らずの時間を堪能することにした。

ヴィヴィオは任務で忙しく、中々一緒に居られなかったなのはとユーノに今日はとことん甘えながら六課のほうへと手を繋いで帰ったそうだ。

二人もそんな満面の笑みを浮かべるヴィヴィオを手に取りながら、それに負けないくらいの笑みを浮かべていたそうな。

狙われた本局（後書き）

教えて、ユーノ先生！

ユ「今日は娘のヴィヴィオのついてだよ♪」

ユ「ヴィヴィオは元々、『最後のゆりかごの聖王オリヴィエ』のクローン体『聖王の器』であり、古代ベルカ王族の固有スキル『聖王の鎧』を保持しているんだ。」

ユ「その後、なのはによって救われたヴィヴィオは正式になのはの養女となり、強くなりたいと言う理由から格闘技も習っているんだ♪」

ユ「デバイスはうさぎ型のインテリジェントデバイス、セイクリッド・ハート。通称『クリス』。これを起動させればヴィヴィオは大人モードになって魔法を行使することが可能になるのだ♪」

ユ「でも・・・僕としては大人モードって抵抗があるんだよね。何しろいきなり９歳の娘が１９歳の大人の姿になるのってどうよ・・・」

ヴィ（大）「ふふ。じゃあ、ユーノパパはこっちの姿の私となのはママ・・・どっちが綺麗だと思う？」

ユ「なぬ！？いきなり何言い出すの！！（ユーノ仰天）」

な「ヴィヴィオ！！ユーノ君を誘惑しちゃ駄目！！！ユーノ君は私のほうが切れだと思ってるよね！！ユーノ君♪（なのは、ユーノの

右腕を掴む。）」

ヴィ（大）「違うよね！！なのはママよりも私のほうが綺麗だよね、ユーノパパ♪（ヴィヴィオ、ユーノの左手を掴む）」

な「ユーノ君は私のほうが好きなの！！」

ヴィ（大）「なのはママよりも私なの！！」

ユ「いてててててててて！！！！！（ユーノ、二人に引っ張られる。）」

ユ「くっ！！！！！！！！！！いい加減にしろ二人とも！！！！！！（ユーノ、切れる）」

な・ヴィ（大）「わあああ！！！！（ユーノの形相に恐怖）」

ユ「少しは反省しろ！！！！（ユーノ、二人に怒鳴る）」

な・ヴィ（大）「御免なさい・・・・・・（その場に跪いて項垂れる）」

魔導師図鑑ハイパー！

味覚オンチで知られる機動六課の医務主任、シャマル。

そんなシャマルが新作の料理を出して来た。

シャ「みんな！！シャマル先生の新作料理、食べてみない？」

すると、それを聞いたよく知るものとそうでないものとの反応は歴然であった。

何も知らない恋次は興味ありげに料理を覗き込む。

恋「ほう？中々うまそうじゃねぇか・・・どれどれ。」

すると、それを止めようとシグナムとヴィータが詰め寄った。

ヴィ「や、止めろ恋次！！！」

シ「口に入れるな、阿散井！！！」

しかし、とき既に遅し・・・・・恋次はそのまま白目を向いて気絶。

シャマルは死神を危篤状態にまで追い込んだ罪により、減俸処分を申し渡された。

シャ「だから！！！何で私ばっかり！！！！」

時空管理局本局襲撃篇

マナブ・フルカワ／ＡＭ１５

声　一　曽我部和恭

元無限書庫所属の司書。ユーノと司書長担当を争い落選、ユーノが正式に司書長に就任した直後に退職した。その心の闇をアンゴルモアを手にしたことで顕著となったもう一人の人格につけ込まれアンゴルモア化、無限書庫を通じて時空管理局本局を乗っ取りユーノと対峙した。ＡＭ体は次元航行船のパーツを吸収したロボットであり、その力を利用してアルカンシェル・ミニマムを発動させることも可能。最後はユーノ・なのは・大人モードのヴィヴィオの活躍によって倒される。

鋼鉄の絆（前書き）

今回は、前から書いていた自作の小説のキャラたちのコラボです。

かなりぶっとんだ内容になると思いますので・・・気をつけてください。

鋼鉄の絆

＞ｉ１２３５４―７０９＜

第２９管理外世界『ＥＡＲＴＨ』。

なのは達の出身世界、地球と瓜二つであるこの世界で今――今回のアンゴルモア騒動の根本が関与する事件が多発していた。

それは、アンゴルモアが発する未知の特殊素粒子『ＤＲ』によって周辺の機械類が誤作動を起こして暴走を始めるというものであった。

被害が集中的に起こっているのは、日本の北側にある広大な自然豊かな場所、北海道。

そこの後志地区に属する異国情緒漂う港町・・・――小樽市。

地元の警察もこの不可解な事件に日々頭を悩ませる中、国連直属の

ある特殊機関に属する七人のメンバーが、この事件の解決を目指して夜を徘徊していた。

一人は浪人の侍のような格好に身を包み、腰から刀を携えている２０代初期の男。

もう一人・・・いやもう一体は球状の頭部と胴体、手足を持ち体色は黄色であるが、顔面と腹部は白色であり、鼻としっぽの先が赤色であるあの某ネコ型ロボットに酷似した存在が犯人の痕跡を追って調査に得ていた。

尤も、そのネコ型ロボットはあのネコ型ロボットとは違い最初から耳を生やしており外見も恋次達隊長格の死神同様、白い羽織に黒い着物と袴、足袋と草履、そして刀を挿した状態ではあったが。

二人は捜索範囲を何時もよりも広げてすっかり静まり返った町の繁華街から海辺のほうまで隈なく捜索を続けたが、結局犯人の決定的な証拠などは見つからなかった。

「駄目です、兄貴！センサーにも反応ありません！」

二人は車の通っていない真夜中の街中に一度足を止めると、メンバーの一人から入る報告を聞く。

端末に映し出されたのは青い髪が特徴的な童顔の青年であった。

『こっちも同じだ。一端引き上げて作戦を練り直そうぜ、ドラ。』

そう呼ばれると、和服の男・・・山中幸吉郎の隣に立つそのドラえもん・・・違った、今回の話の重要人物、サムライ・ドラは深い溜

め息をつく。

「・・・止むを得ないな。引き上げて作戦を練り直すか・・・くそ！！何としても絶対追い詰めてやる・・・待ってろ・・・刈谷（かりや）・・・！！」

ドラは湧き出る悔しさと怒りを露にしながら、彼らを嘲笑うかのように美しく光る月明かりを仰ぎ見たのであった。

そんな彼等の捜査が続いているその頃、第１管理世界ミッドチルダの機動六課訓練場ではフォワードメンバーや恋次達が注目する中で、ある模擬戦が行われていた。

それは、不屈のエースオブエース・・・高町なのはと翡翠の魔導死神・・・ユーノ・スクライアの一騎打ちであった。

二人は今迄自分達の模擬戦を全員に公開してやったことはなかったが、そろそろ良い頃合ではないかと判断したユーノがなのはと話し合った結果、全員にそれを報告し現在に至るのである。

現在、なのははユーノの攻撃をかわしつつマキシマム・ブレイド状態のレイジングハートで得意の牽制攻撃を仕掛ける。

「アクセル！！」

〈Ｓｎｉｐｅ　ｓｈｏｔ　ｍａｘｉｍｕｍ〉

ユーノは何時もの何倍ものスピードと正確さを有したアクセルシューターを軽快な瞬歩で回避していきながら、なのはに向って行く。

そして、不敵な笑みを浮かべながらユーノはそんななのはの目の前で瞬歩を駆使し、四体の分身体を作り出した。

「幻影!?本物は・・・!?」

分身体のユーノが晩翠片手に困惑するなのはに四方から襲ってくる。

なのはが四人のユーノに警戒をしながら反撃の機会を窺っていたその瞬間、四人の幻影が全てなのはの前から突然姿を消し、本物のユーノがビルの中から現れた。

「!!」

「輝け、晩翠」

ユーノは晩翠を振りかぶって空中に浮かぶなのはに攻撃を仕掛けようとする。

咄嗟になのはは防御を展開して攻撃を防ごうとする。

「レイジングハート!」

〈Ｐｒｏｔｅｃｔｉｏｎ〉

なのはは右手にラウンドシールドを展開して、ユーノの一振りを止めにかかるがユーノはその瞬間、瞬歩を使用して防御が施されていないがら空きのなのはの背中に回りこんだ。

「え!?」

それに気付いたなのはも思わず後ろを振り返ってみたが、不適な笑みを浮かべたままのユーノはこの気を逃さないと敢えて蹴りを加える。

「言霊を口にしたからと言って翡翠斬を放つと思ったら大間違いだ。」

ユーノの蹴りをまともに喰らったなのはは地面に蹴飛ばされ、その瞬間地面から土煙が上がった。

「きゃあああ！！！」

ビルの上からそれを窺っていたなのはの実力を普段の訓練からよく知るフォワード陣は驚愕の表情を見せた。

すると、徐に地面の中から立ち上がる険しい表情を浮かべるなのはを見下ろしながらユーノは晩翠を掲げて技を発動させる。

「“晩翠月光歌・蒼の夜空”」

そう言うと、なのはの神経が突如思う通りに働かなくなり動きが著しく鈍くなった。

「くっ！！！」

身体が鈍くなったことに更に戸惑いの表情を浮かべるなのは。

その時、容赦など全く考えていないユーノはなのはの正面に瞬歩でやって来ると刀を振りかざしてなのはに襲い掛かってきた。

「うそ！！」

「はっ！！」

ユーノの攻撃を受ける直前、なのはは何とかマキシマム・ブレイドの刀身で晩翠のやい倍を止めたが、そのまま力に圧されながら地面を引きずり後退していく。

スバル達や恋次達はこの光景を目の当たりにして、いくらユーノが相手とは言えあまりに防戦一方のなのはの姿に驚いていた。

「・・・信じられない・・・なのはさんが防戦一方だ・・・！？」

「流石ユーノ先生・・・なのはさんのことは熟知してるだけのことはあるわね・・・」

「中々面白い光景だよな！あのなのはがこうもボロボロの姿になるなんて、滅多に見られないからな！」

「何時もは二人とも、僕たちには内緒で練習していたらしいけど・・・今日はどういう風の吹き回しか、全員に公開すると言ってきたからね。」

「確かになのはは強え・・・そいつは私らにとっては周知の事実だ。だが・・・」

「ああ。スクライアの場合は話が別次元だ。敵を容赦なく斬り、斃すという覚悟が備わっている他・・・拳打・反応能力・防御・回避・巧みな技の多用・・・全てを上手く組合わせている。幾らなのはでも、魔法だけであれほどの技量を持ったあやつとでは手も足も出な

い。」

「まして・・・恋人が相手なら尚更・・・ですか？」

「ああ、かもしれん。」

全員はこの模擬戦の行く末がどうなるかは自ずと見当はついていたが、それでも最後までしっかり戦いの経緯を入念に観察し続けることにした。

そんなフォワード陣に見守られながら、刃と刃を競り合わせるなのはとユーノであったが、基本的になのはは刀の使い方はずぶの素人。

それに引き換えユーノは、当初こそあれであったが今ではすっかり手馴れたものになっているのだ。

ユーノはそんな苦笑するなのはのマキシマム・ブレイドの刀身目掛けて更になのはを追い詰めようと晩翠の連撃を加える。

「ふん！」

「くっ！！！」

なのはは両手で杖を握りながらユーノの攻撃を何とか受け止めては流していたが、それでも敗色濃厚の状況は変わらなかった。

その後、ユーノの重い一撃がなのはに向けられた。

なのはは直ぐにラウンドシールドを作り出してユーノの一撃を防ぐ。

しかし、ユーノは帽子の下から余裕の表情を浮かべるとこう告げる。

「守ってばかりじゃ僕に傷を負わせられないよ。破道の四　『白雷』」

すると、ユーノは左手の指先から一条の雷を放ちなのはのシールドを崩壊させる。

「なっ!?」

これには流石のなのはもフォワード陣も驚きを隠しきれなかった。

何しろ、なのはの防御は前線隊長の中でもユーノとザフィーラに続き硬いものであったから、詠唱破棄した白雷で破壊されることなど思いもよらなかったのだ。

「なのはさんの防御を貫通して破壊した!!」

「何て人なの!?」

防御を破壊したユーノは驚愕の表情を浮かべるなのはに向って直ぐに攻撃を仕掛けようとする。

「まだだよ!!」

ユーノが晩翠を振りかざしたのを見たなのははマキシマム・ブレイドの刀身を垂直に立ててユーノの斬撃を受け止めた。

「くっ!」

「やるね♪ふん！」

その後も、先程同様怒涛の斬撃を加え始め、険しい表情を浮かべるなのはに語りかける。

「大分その状態での扱いも慣れて来たみたいだけど・・・やはり普段から魔法に頼りすぎている分、息切れが目立つよ。」

「うっ！！痛いとこつかないでよ、ユーノ君！！こっちは防ぐだけでいっぱいいっぱいなのに！！」

「追い込んで追い込んで力を増幅される・・・僕はそうやって一護さんに扱かれてきたんだよ。特に、剣を振るうものにとって戦いとは重要な成長場面でもある。もっと心を研ぎ澄ませてみて。自ずと何かが見えてくると思うよ。」

「え～～～～！！！！分からないよ～～～～！！！！私、お姉ちゃん達と違って剣の稽古とかやったことないもん！！！！！」

なのははまるで子供の頃のような実に情けない声を上げながら、ユーノの攻撃を防いでいた。

それを見たユーノは些か呆れた表情でこう言った。

「やれやれ・・・まだまだ修行が・・・足りないようだ・・・ね！！！」

ユーノはそう言うと、渾身の一振りでなのはを吹き飛ばして距離を取ると課題を突きつけたのであった。

「今日の課題。“心を澄ませて剣の切っ先に宿る何かを見つけること”。それが出来なかったら当分いちゃいちゃ禁止♪」

「え～～～！！！！！！そんな理不尽な！！！！！！！」

ユーノの思わぬ一言を聞いた瞬間、重大な危機と感じたなのはは喘ぎ声を上げて抗議をするものの、ユーノは笑顔でそんななのはに止めの一撃を加える。

「理不尽でも何でもないよ♪輝け、晩翠♪」

晩翠から放たれる翡翠斬がなのはに直撃し、なのははレイジングハートを持ったままビルの方へと吹き飛ばされた。

「きゃあああああああああああああ！！！！！！！！！！！」

ビルに激突し、完全に戦闘不能となるなのはと晩翠の切っ先の汚れを拭い取るユーノ。

「今日の模擬戦終了。これで３０敗０勝。完成度は徐々に高くなってるけど、まだまだ。そんなことでは教導官として示しがつかないよ。なのは♪」

ユーノの言葉を聞いてビルの中から出てきた泥だらけのなのはは悔しさを顕著に表しながら声を張り上げた。

「う～～～～～～悔しい～～～～～～～！！！！！！」

その様子を見物していた恋次は、なのはのみっともない光景を見た瞬間全員が驚愕する中一人大笑いをし始める。

「ぶっ・・・ははははははははははあは！！！！！！！！！何だよあのみっともない声は！！！！！！！！！ぶはははははははははあははははあ！！！！！！！！！あれが！！！！！本局のエースオブエースと呼ばれる奴の態度かよ！！！！！！！！はははははははははははは！！！！！！！！！！」

恋次の笑い声を聞いていたルキアは直ぐに二人に気付かれぬうちに笑いを止める様に渓谷を促す。

「おい、恋次！！！！あまり大声で笑うでない！！！二人に聞こえたらどうするつもりだ！！！」

すると、その時吉良が顔を真っ青にしながらルキアにこう告げた。

「いや・・・朽木さん・・・もうとっくに聞こえてるよ・・・」

「「え！？」」

その言葉を聞いた瞬間、恋次は一度笑いを止めるとルキアと一緒に途轍もない殺気を発する方へと冷や汗をかきながら振り向いた。

ルキアは直ぐにフォワード陣と供に一時避難を開始したが、逃げ遅れた恋次はそのまま腰を抜かした状態で近付いてくる殺気を丸出しにするユーノとなのはの方を見た。

ユーノとなのははこの世のものとは思えない形相を浮かべて、指先を恋次に向けると実に乱暴な言葉であのフレーズを口にし、砲撃を発射した。

「「少し・・・頭冷やさんかいコラ！！！！！」」

「のあああああアアアアああああああ！！！！！！！！」

二人の怒りの制裁を喰らった恋次は全身を黒焦げにしたまま彼方へと飛ばされてしまった。

そんな飛んでいく恋次の姿を呆れた表情で仰ぎ見るアギトとリィン。

「哀れだな・・・」

「ですね・・・」

二人の模擬戦から数時間が経った時、クロノの呼び出しによって指令室へと集まるフォワード陣（恋次は医務室で眠ったまま）は今回のアンゴルモアの場所を早速聞き出す。

はやてやなのははユーノから聞かされる異世界の情報に驚きを隠せなかった。

「もう一つの・・・地球やて！？」

「そうなんだ。取り合えず、これを見てよ。」

ユーノは早速、メインスクリーンにもう一つの地球に関する詳細な情報を映し出した。

「姿も形もまるで一緒。文明も科学技術もなのは達の住んでいた地球とほとんど変わらない。第２９管理外世界『ＥＡＲＴＨ（アース）』。文字通り地球だよ。」

「そこに今回のアンゴルモアが流れ着いたと・・・！？」

「うん。しかもその場所は・・・・・・」

タッチパネルを操作し、詳しい場所を拡大していくユーノ。

「日本やて！？しかも北の大地・・・北海道や！！」

「北海道か・・・俺達も前に従業員で旅行に行ったよな！」

「あの時のラーメンは格別だったよね♪」

鬼太郎や浦太郎を始めとするスクライア商店のメンバーは以前、社員旅行と銘打った北海道での旅行の出来事を思い出し感傷に浸っていた。

「まぁ、ラーメンも勿論美味しかったけど・・・今回は寿司のほうがいい所だよ。」

ユーノは鬼太郎達にそう言うと、後志地区の画像を拡大して小樽市の地図を映し出す。

「小樽か。確かにあそこは昔から有名な漁港だからね・・・」

「異国情緒漂う風情ある街・・・私も一度で良いから行ってみたいな。」

地球出身のなのはやはやて、更には数年地球で過ごしたフェイトは、一度は訪れたいと言う気持ちを露にしていた。

それを見たユーノは一度考えると、今回の任務をはやて達に任せたほうが良いと判断しクロノに頼んだ。

「クロノ。同じではないけど一応、地球だし・・・ここはなのは達に任せたほうがいいかもよ。」

「そうだな。よし、今回は特別に・・・はやて。君も行ってくるといい。」

「ええ!!ほんまかいなクロノくん!?」

クロノの思わぬ言葉に思わず耳を疑うはやて。

何しろクロノは滅多なことではやてに出動命令を出さないのだ。

はやては憧れの北海道の小樽を訪れることが出来ると知ったや否や、頭の中で勝手な期待を膨らませていった。

「地球とほとんど同じだというのなら、君も居た方が色々と役に立つだろう。ユーノ、お前ははやてが勝手に何所かに行かないようしっかり監視を頼むぞ。」

「はいはい。分かってますよ・・・」

その瞬間、はやての頭の中の期待は一気に崩壊し現実に引き戻された。

「ガーン!!!やっぱりそう言うことかいな!!!!!ガックシ!!」

床に手を突き、悲しみのオーラを全開にするはやてになのはとフェイトが困惑した表情で声を掛ける。

「そうガッカリしなくてもいいんじゃないの、はやて。」

「そうだよ。元気出していこう！」

「なのはちゃんはええやんか・・・常にユーノくんと一緒で元気なさかい・・・」

「どき！？にゃははは・・・そ、そんな本当のこと言われると・・・！！」

なのはは思わず頬を赤らめて照れた表情を浮かべるが、そのなのはの言葉を聞いていたフェイトは呆れた表情を浮かべながらこんな事を思った。

「（否定はしないんだ・・・）」

その後、転送ポートで早速目的地へと向った・・・なのは・フェイト・はやて・ユーノの四人は北の大地、北海道小樽市の街中に無事に到着した。

「着いたみたいだ。」

なのは達は一度、周りの景色を見回してみた。

建物も人も道路も自分達の住む地球と殆ど変わらないことに安心感と驚嘆の念を覚える。

「本当に地球とほとんど変わりないな・・・でも、本当にここ小樽？何か観光雑誌で見た写真よりもビルがいっぱいあるような気がするけど・・・？」

なのはやフェイトは小樽という町のイメージに関して、一般人と同じくらいの異国情緒が漂うレンガ倉庫が立ち並ぶものを考えていたが、実際のところはビルの密度が高くレンガ倉庫もそれほど多くはない町並みに些か疑問を抱いた。

「実際に目で見るものとはまた感じが違うもんよ、なのはちゃん。」

「だけど、それにしたって・・・」

と、その時だった。

突然四人の耳に入ってくる轟音。

「「「「！？」」」」

全員が轟音のする方向へ目を向けてみると、遥か前方のビル群の間から立ちこめる爆発による噴煙。

「何や一体！！」

「事故かな・・・！？」

「行ってみよう。」

四人は早速事態を突き止めるために逃げ惑う人々を掻き分けながら現場へと向った。

現場へと到着したなのは達がそこで目の当たりにしたものは想像を絶するものだった。

目の前に現れたのは、車が幾つにも重なり合って出来た車の巨人であった。

数は実に１０体は超えていた。

「何、こいつ！？」

「車の・・・巨人！？」

「来るよ、皆！！」

ユーノが三人にそう言うと、なのは達は襲い掛かるロボットの攻撃を回避して事態の対処を考えていた。

「どうする、はやて！」

フェイトにそう言われると、はやては一度周りを見渡し人がいないことを確認する。

「幸いにも人はいなくなったことやし・・・今なら使っても大丈夫や！」

「うん。それじゃあ、レイジングハート！」

「バルディッシュ！」

なのはとフェイトはそれぞれのデバイスを取り出すと、魔法を発動させよとする。

「「セット・・・ア・・・！！」」

すると、その時ユーノが後ろから自分達の方に近付いてくる何かに気付いて一度発動を中止させようと声を掛けた。

「待って、二人とも！」

「「え！？」」

と、二人がユーノの言葉を聞いて後ろへ振り返ろうとした瞬間、自分達の横を通り過ぎて行く浪人姿の若い男。

その光景に目を奪われたなのは達を他所に、その男・・・山中幸吉郎は刀を抜いて独特の構えを取るとロボット目掛けて強力な破壊力を秘めた刺突を繰り出す。

「“狼猛進撃（ろうもうしんげき）・壱式・牙狼撃（がろうげき）”！！」

幸吉郎は強靭な脚力で助走をつけると、一気に駆け抜けなのは達の目には止まらぬほどの速度でロボットの身体を貫通し撃破する。

突然の幸吉郎の登場と攻撃技を目の当たりにした四人は唖然とした。

「何や、あの人は！？刀一本・・・しかも刺突（つき）だけで・・・！？」

「！まだ誰か来るよ！」

と、フェイトが更に後ろから走ってくる二人に気付きはやて達に伝える。

応援に駆けつけたその二人の容姿はというと、一人は逆立った髪型にハチマキをした白い服装の両腕にテーピングをした男で、もう一体はあのサムライ・ドラであった。

二人はユーノ達の前を通り過ぎると、目の前の敵に向って自慢の拳と剣碗を披露する。

「ほおおおお！！！！！！！！万砕拳（ばんさいけん）、『玉砕（ぎょくさい）』！！」

逆立った髪の男、駱太郎は右の拳を振りかざしてロッボトの身体を粉々に破壊する。

一方のドラは、冷静な表情を浮かべたまま超高速で移動して残りのロボット目掛けて目にも止まらぬ乱撃を加える。

「人侍剣力流（じんじけんりょくりゅう）、『刹那乱閃（せつならんせん）』」

ドラが技を繰り出した瞬間、残りのロボットは体中を切り刻まれ爆発を起こし全滅した。

その様子を見ていたユーノやなのは達は絶句した。

「う・・・そ・・・！？」

「あれだけの数を・・・たった三人で・・・しかも・・・あれは！！」

なのははそう言うと、驚愕の表情を浮かべたまま刀を徐に納めるドラの姿に目を奪われ、はやてやフェイトも思わずドラを凝視する。

「「まさか・・・あれは・・・!?」」

そんななのは達を他所に、破壊された残骸を確認した駱太郎は任務が無事に完了したことに喜びの声を上げた。

「よっしゃ!!ミッションコンプリートだぜ!!」

「他愛もありませんでしたね。俺らも舐められてますよ、こりゃ。」

「別にいいさ。敵は殲滅したことだし、さあ~~~本部に戻る・・・!?」

ドラは幸吉郎と駱太郎を連れて仕事場に戻ろうとしたとき、目の前に立つなのは達の姿を目の当たりにする。

ドラがこちらを見たことに思わず緊張するはやて達。

「あっ!こっち見たで!!」

ドラは四人の姿を信じられないと言ったばかりの表情で見つめるのに対し、何も知らない幸吉郎や駱太郎は怪訝そうな表情を浮かべる。

「あ?何だあいつら・・・こっちの方ジロジロ見やがって。」

「兄貴・・・どうかしたんですか?」

幸吉郎がドラの様子が可笑しいことに気づき、声を掛けたとき・・・

ドラはユーノの顔を見た瞬間思わず歓喜の声を上げて指を差した。

「やっぱり!!!ユーノさん!!それになのは!!」

「「「「え!?」」」」

四人は驚くしかなかった。

見知らぬ世界の住人が何故自分達の名前と顔を知っているのが全く理解できなかった。

そんな驚愕する四人に向って近付いてきたドラは徐にユーノの手を取り固い握手を交わし、奇妙なことを語り出す。

「いや!!!久し振りじゃないですか!!!元気にしてました!?て言うか、何ですかユーノさん、その格好!?浦原喜助みたいな格好なんかして?」

「(なっ、僕らのことを知っている!?しかも・・・浦原さんの名前まで!)」

ユーノは自分達のことは愚か、元十二番隊隊長である浦原喜助の名前すらも知っているこのドラの言動を聞いて更に疑問を募らせ、恐る恐る尋ねた。

「あの・・・!!申し訳ないんですけど・・・あなたは一体!?」

「え・・・?あ、そうか・・・ひょっとして、あなたは“あっちの世界のユーノさん”じゃないのか。」

「「「「!?」」」」

四人はドラの口から発せられた奇妙極まりない言葉に驚いた。

「あっちの世界の・・・!?」

「ユーノ君じゃない・・・!?」

「どういう事ですか、一体!?」

はやて・なのは・フェイトの順に質問攻めにあうドラであったが、見かねた幸吉郎と駱太郎がドラに近付き尋ねてきた。

「兄貴、知り合いだったんですかそいつら?」

「何だよ水くせーじゃねえか、ドラも!友達が来てたなら紹介ぐらいしろよな。」

「御免御免、二人とも!いや、ホラ!前にオイラと長官が“異世界”に迷い込んだときにお世話になった人たちがいるって言ってたでしょ。この人たちがそう!まぁ～でも・・・どうやらこの人たちは“並行世界(パラレルワールド)”から来た人たちだと思うけど・・・」

「「「「パラレルワールド!?」」」」

次々とドラの口から離される予想外の言葉に頭を抱えるなのは達。

「ど、どう言うことですかそれ!?第一、私らのことを少なからず知ってる・・・あなたは一体どなたですの!?」

「おっと、申し遅れた。オイラ、この世界の時間の秩序と平和を守護するＴＢＴ特殊先行部隊、『鋼鉄の絆（アイアンハーツ）』隊長・・・サムライ・ドラです！よろしくどうぞ。並行世界の機動六課諸君。」

ドラはそう言うと、敬礼をし怪訝そうな表情を浮かべる四人に向って自己紹介をした。

「ＴＢＴ・・・！？」

「特殊先行部隊・・・！？」

「アイアンハーツ・・・！？」

「サムライ・・・ドラ・・・！？」

その後、ユーノ達はドラから諸々の事情を説明された。

二年前、ドラはある事故が原因で別の世界・・・パラレルワールドに存在するもう一つのミッドチルダへ飛ばされた際、ドラはそこで無限書庫司書長であるユーノとなのは達、真・機動六課の面々と一緒にモルガーノと言うユーノの因縁の相手と死闘を繰り広げたことを順に説明した。

尚、詳しい詳細を知りたい人は『サムライ・ドラ&リリカルなのは～翠の瞳が消えるとき～』を検索。

「つまり、あなたは以前もう一人の僕やなのは達が住む別のミッドチルダへと行き、そこで真・機動六課ブレイド隊の隊長として、力を貸していたというわけですか！？」

「そうです、そうです！あっちの世界のユーノさんやなのは達には随分世話になったもんだ。あっちの世界のユーノさんとなのはは既に結婚してましたけどね・・・」

「「けっ、結婚!?」」

結婚という単語に思わず顔を赤くしてしまうなのはとユーノ。

「何や二人とも?別にそう思われても不思議やないやろう。公認のバカップルやさかい・・・結婚って言葉ぐらいで驚いてどうするの？」

フェイトやはやてはそんななのは達とは裏腹に至って冷静な様子だった。

すると、二人の言葉に便乗してドラも二年前の出来事を思い出し語り始めた。

「そうそう。その甘ったるい雰囲気の所為でオイラがどれだけ死ぬ想いをしたか知れない。」

「兄貴、甘いもの大嫌いですからね・・・」

傍で聞いていた幸吉郎が笑顔でドラにそう言うと、鼻で荒い息を出しながらキッパリと肯定の言葉を口にするドラ。

「ああ、大嫌いだ・・・甘いものなんて大嫌いだ！」

「そうですか・・・ああ、ところで一つ尋ねたいことがあるんですけど・・・此処は本当に北海道の小樽市なんでしょうか?」

フェイトはドラに恐る恐るそう尋ねると、返ってきた答えは意外なものだった。

「勿論、我が故郷小樽市。と言っても・・・時代は西暦５５３９年ですけど。」

「「「「５・・・５３９年・・・！？」」」」

四人はもう一度辺りを見回し、桁数の多い西暦の割りにちっとも進歩した様子を窺えない町並みとドラの話に度肝を抜いた。

「そそそそそそんなアホな！？だってその割には町並みも私らの住んでた地球と大差ないし、こう・・・何というか・・・近未来的な乗り物なんてどこにもないやろう・・・！？」

すると、そんなはやての様子を見た幸吉郎が呆れながらこう言った。

「馬鹿だな、お前。何でそう言う考え方しか出来ないんだよ。」

「幸吉郎の言う通りだよ。いいかい、此処は鉄腕アトムやドラえもんの世界じゃないの。そんな発想は止めてくれない。」

「ドラえもんの世界じゃないって・・・“ドラえもん”の姿のあたなに言われてもどうも・・・」

「ドラえもんじゃない！！！！！」

フェイトのその禁句を耳にした瞬間、ドラは怒りを抑えきれずにフェイトの顔面目掛けて鉄拳を食らわした。

「のっほ！！！」

顔面に直撃したドラの拳を受け、鼻血を出しながら後ろへと倒れるフェイト。

「ふぇ、フェイトちゃん！？」

「だだだ大丈夫かいな！？」

慌てたなのはとはやてが頭に鳥を浮かべているフェイトを抱きかかえて、突然殴りかかってきたドラに抗議をするが・・・・・・

「ちょっと、ドラさん！！フェイトちゃんにいきなりなに！！」

「ああ！！やんのかコラ！！！刀で粉みじんにして今晩のおかずの味噌汁の具にするぞココラ！！！！！！」

なのは達はその瞬間、ユーノ以上に恐ろしく尚且つ理不尽な威圧に圧倒されてしまい、逆に屈服してしまったのであった。

「「「は・・・はい・・・どうも・・・すみませんでした・・・」」」

三人の哀れな態度を見ていた駱太郎と幸吉郎は次のように説明した。

「そいつはドラにとっての禁句だから、今後は一切口にするなよ。」

「もし二度目その言葉を口にしたら最期・・・・・・待つのは死だぜ・・・」

「「は・・・はい!!絶対に言いません!!」」

三人は素直に二人の言葉を聞きいれると、今も尚怒りの炎を燃やすドラを一瞥し、冷や汗をかいていた。

なのは達のその様子を窺いながら、一人苦笑するユーノ。

「あははは・・・何だかとんでもない人が絡んできちゃったな・・・」

「さて、立ち話も何だし一度本部に戻ってみんなに事情を説明しないと。」

「俺もちょうど腹、空いてたしな!帰って団子も食うかな!!」

「お前は団子のことしか頭にないのかよ・・・」

駱太郎の極楽蜻蛉な言葉に何時ものようにツッコミを入れる幸吉郎。

「それじゃあ、本部に行きましょう!きっと皆も大歓迎ですよきっと!!」

「本部・・・!?」

「ですか・・・!?」

ドラは駆けつけた同じ職場の部隊に残骸の回収を任せた後、幸吉郎と駱太郎、ユーノ達四人と供に小樽に本部を置く職場へと向った。

数十分後、ドラ達はその職場へと到着する。

「さぁ、着きましたよ。此処がオイラ達の仕事場、ＴＢＴ小樽本部オフィイスビルです。」

ユーノ達は目の前に聳え立つ地上５００メートルを誇る巨大な高層ビルに目を奪われた。

このＴＢＴ本部こそが彼の仕事場であり、小樽市内で最も巨大な建造物なのである。

「大きい・・・！」

「地上本部と同じぐらいの大きさやな・・・！！」

「ところで、ドラさん？さっきから言ってるそのＴＢＴと言うのは何のことですか？」

「Ｔｉｍｅ　Ｂａｌａｎｓｅｒｓ　Ｔｅａｍの略称で、日本語名を『時空調整者団体』。ＴＢＴとは北海道小樽市に本部を置き、世界１９２カ国に支部を展開しタイムトラベルシステムが発明されたことによって発生してしまった時間犯罪を専門に扱いそれを未然に防ぐ国連直属の組織のことですよ。」

「タイムトラベルシステムって・・・それって本当なんですか！？」

はやての信じられないと言ったばかりの言動を聞いて、冷淡に答える幸吉郎。

基本的に幸吉郎はドラと年上である長官と龍樹の三人以外は誰であ

ろうとタメ口である。

「嘘をついてどうなるんだよ。兄貴、兎に角こいつらを早いとこ仕事場まで案内したほうが良いですよ。」

「オッケイ。それじゃあ、中をご案内致します。」

ドラは早速ユーノ達を中に案内すると、専用エレベーターに乗り込み窓の外を見ながら１００階にある仕事場まで向う。

「しかし高いね。一体何階まで上るんです？」

「オイラ達のオフィイスは最上階である１００階にあるんだよ。あとオイラ達のほかに四人メンバーがいるから。」

「ま、揃いも揃っての個性派連中だけどな！」

「お前が言うか！」

駱太郎の言葉を聞いた幸吉郎がそう答えると、ドラも混じっての談笑が始まった。

そんな三人を横で見ながらユーノ達四人は呆然としながら同じ考えに至った。

「「「「（確かに・・・この三人は個性的だ・・・）」」」」

やがて、エレベーターが１００階まで辿り着くとユーノ達はドラ達の後ろについていきながら廊下を歩き、ある自動扉の前で立ち止まりドラの説明を受けた。

「此処が、オイラ達の部署！」

ドラの指差すものを見ると、扉には『ＴＢＴ特殊先行部隊専用オフィイス』と書かれてあるのことが分かった。

「ＴＢＴ・・・特殊先行部隊・・・専用オフィイス・・・？」

「特殊先行部隊って・・・一体何だろうね？」

「時間犯罪における特別な部署か何かかな？」

ユーノ達の予想は兎も角として、扉が開くとドラ達と供に広いオフィイスへと通される。

「ただいま、サムライ・ドラーズ帰還したよ。」

ドラがそう言うと、出迎えてくれたのは赤い和服に身を包んだ容姿端麗の１０代の女性と、その女性と楽しく会話をしていた青い髪の青年、そして袈裟に身を包んだ老人であった。

「お帰りなさい。お疲れ様です三人とも・・・あれ？そちらの四人はどちらですの？こっちじゃお見かけしない格好と顔ですが？」

「お！本当だ。しかも女なばっか・・・一人は・・・男なのか？」

青髪の青年・・・写ノ神（うつのかみ）がそう言うと、ユーノは自分のことだと直ぐに気づきショックでその場にしゃがみ込んでいじけてしまった。

「（やっぱり僕って女に見られてたんだ・・・・・・ユーノショッ

ク！！）」

「ああ！！ユーノ君！！！しっかりして！！！」

慌てたなのはがユーノを励まそうと声を掛けていると、袈裟の老人・・常法（つねのり）がはやてとフェイトに近付きまじまじと覗いてきた。

「それにしても随分血色のいい娘ばかりじゃの！！おお！！この子なんか金髪の上に美人ときたぞ！！こりゃ花々しいのう！！」

すると、そんな気分を高揚させる常法を横で見ていた駱太郎が腕組みをしたままこう言う。

「おい、エロ爺！！下心丸出しだぞ！！たく、お前ら何も分かってねえな。こいつらはドラの知り合いのそっくりさんだってよ！」

「知り合いのそっくりさん？何だよそれ！？意味分かんねえよ、単細胞。」

写ノ神がそう口にした瞬間、駱太郎は頭に血が上って怒りを爆発させる。

「だ・か・ら・・・いい加減その名で呼ぶのはやめろって言ってんだろうが、ドチビ！！」

それを聞いた写ノ神も頭にきたのか、駱太郎と向き合い互いに罵りあう。

「あんだと、この破廉恥単細胞！！」

「やるのか、ドチビ之助！！！」

二人の一触即発の様子を見た和服の女性、茜はかなり慣れた感じで喧嘩の仲裁に入っていった。

「ほらほら、二人とも！喧嘩はお止めになってくださいよ！」

そんな駱太郎達の様子を見ていた何とか立ち直ったユーノがドラと幸吉郎にこう言った。

「いいんですか・・・あれ止めなくて！？」

「日常茶飯事です。あの二人の喧嘩なんて。」

「気にしねえほうが一番だぜ。あいつらに関わるとこっちの仕事が手に取れないからな。」

その後、茜の仲裁あって殴り合いまでには発展しなかった二人の喧嘩を止めた後、ドラはユーノ達を来賓用のソファーに案内して茜にコーヒーと紅茶を入れるように頼み込んだ。

「さて、先ずは一服してから話をしていこうじゃないの。茜ちゃん、ブラックと紅茶。ここに居る全員分お願い！」

「あ、はい！畏まりました！」

茜は笑顔でドラにそう答えると、早速全員分の紅茶とドラだけが飲むブラックコーヒーを淹れはじめ、カップに人数分を入れ終えるとソファーに座るなのは達の下に丁寧に紅茶を差し出した。

「ささ、どうぞお召し上がり下さい。」

「あ、どうも。頂きます。」

「有難うございます。それじゃあ、遠慮なく・・・」

ユーノやなのは達は茜の淹れた紅茶を早速飲み始める。

紅茶を啜り、カップをコースターに置いた瞬間全員は驚嘆の言葉を口にする。

「うわ～～！！この紅茶凄く美味しい！！」

「こんなに美味しい紅茶飲んだのは初めてだ♪」

「だろ！茜ちゃんの淹れる紅茶は本部で働く全ての男性局員が飲みたがる格別な代物だからね。ま、オイラは紅茶じゃなくてブラックコーヒー派だけど。」

ドラはそう言うと、茜の淹れたブラックコーヒーを啜り始める。

すると、隣に座る幸吉郎がふとあることに気付いた。

「そう言えば兄貴。俺達まだ自己紹介してないような気が・・・？」

「おお、そうだった。じゃあ、順に紹介していこうか。幸吉郎。」

「はい！ＴＢＴ特殊先行部隊『鋼鉄の絆』副隊長、山中幸吉郎（やまなかこうきちろう）だ。兄貴の右腕を務めてる！」

誇らしげにドラの隣でユーノ達にそう言う幸吉郎。

「で、あっちの団子を貪り食い尽くしてるのが・・・・・三席の三遊亭駱太郎君。オイラは個人的な理由から駱太郎って呼びたくないからR君って呼んでるけどね。」

はやてはドラの言葉を聞くと、心の中でふと思った。

「（三遊亭駱太郎・・・・・・落語家の名前かいな・・・・・・・）」

その後、常法・茜・写ノ神の順に自己紹介がされていく。

「拙僧が四席の龍樹常法じゃ。この中では最年長の七十七歳。」

「あちらの方が、私の大好きな五席の八百万写ノ神君です！！そして、私が六席の朱雀王子茜です！よろしくお願いします。」

「もう一人、蠃蛞壌って言うかなり偏屈な奴がいるけど・・・あいつは組織として群れるのが嫌いだからな。多分どっかに居ると思うけど、気にしないで良いからよ。」

「（それでいいのかな・・・それで！？）」

フェイトは仮にも巨大な組織に属する人間としてそんな勝手な行動を取る男にかなり疑問を思った。

「そう言えば長官は？」

ドラはコーヒーを飲み干すと、近くに立っていた茜に自分達の上司のことを尋ねた。

「ジュースを買いに行くって言ってセブンイレブンまで行きましたけど・・・あ、帰ってきたみたいです。」

その時、自動扉が開くとコンビニの袋を抱えた２０代半ばの男がドラ達の前に姿を現した。

「よう！ただいま。いや～～～ファンタが残り一本しかなくてマジ焦った・・・！？」

すると、長官・・・昇流（のぼる）はなのはとフェイトの姿を見た瞬間コンビニの袋を床に落として驚愕。

「・・・なのはちゃん・・・・・・・それに・・・フェイトちゃん！！！」

「「え！？」」

昇流は困惑する二人の下に全速力で走り出し、飛びかかっていった。

「また会えるなんてこれは運命の悪戯なのでしょうか！！！ごひゅ！！！」

だが、そんな下心を丸出しにする昇流の顔面に腰に挿していた刀の柄頭を使い、慣れた様子でお仕置きを下すドラ。

その場に倒れ、気絶する昇流を見ながら困惑するなのは達に向ってこう説明するドラ。

「この懲りないモッコリ男めが！ああ、こちらＴＢＴの事実上ナン

バーワンの長官・・・杯昇流（さかずきのぼる）ね。見ての通り、威厳無し・駄目人間の変体野郎だから気をつけてね。」

「「「あ・・・はい・・・」」」

ドラはその後、七人全員でユーノ達の今回の訪問理由を全て聞き、ユーノがこれまでどういった経緯で今のようなことになっているのかも聞き入れた。

「成程ね・・・つまりはユーノさんは四年前に無限書庫司書長を依願退職。その後、世界を転々としながらあるとき突如死神の力を手に入れ、黒崎一護の下で修行を受け翡翠の魔導死神として覚醒。また、同じ頃・・・ジェイル・スカリエッティが脱獄を果たして、崩玉の欠片であるアンゴルモアを使って世界を全て破壊しようと画策。それを阻止せんと現在六課総出でそれの回収を行っている。阿散井恋次達と供に・・・」

「はい。お分かりになりましたか？」

「一度異世界に足を踏み入れた身ですからね、オイラと長官は。幸吉郎達にはちょっと話がチンプンカンプンだったかもしれないけど・・・」

ドラがそう言って幸吉郎達の方を見ると、案の定六人は頭がついていけていない様子であった。

すると、はやてがふとドラにこんな事を尋ねてきた。

「それにしてもドラさん。ドラさんのその格好・・・恋次さん達と同じものやけど・・・！？」

「ああ、これ？いや実はね・・・オイラの着てるこの服はまるまる死神の着る死覇装をそっくり真似したものなんだよ！」

「そうなんですか！？でも、どうしてドラさんが死神さんのことをご存知で！？」

「ああ・・・それは・・・これだよ！」

そう言うと、ドラは自分の机の下から本棚を取り出すとその中に収められているある漫画の単行本のいくつかを取り出しユーノ達に見せ付けた。

すると、それを見た瞬間ユーノ達は驚愕した。

「「「「なっ！？これは・・・！！」」」」

その漫画の表紙に描かれていたのは若き頃の黒崎一護と阿散井恋次であった。

「これ『ＢＬＥＡＣＨ』って言う週刊少年ジャンプで連載している漫画の単行本。ほら、表紙にはちゃんと阿散井恋次が載ってるでしょ。ちなみに、なのは達の活躍もこっちの世界では漫画とアニメでばっちり描かれている。これがそのファンブックだ！」

ドラはそう言うと、昇流の机の中から『魔法少女リリカルなのはＡ’ｓ』と書かれたアニメのファンブックを取り出した。

「ああ、コラ！！それは俺のだぞ！！」

勝手なドラの行動に困惑する昇流であったが、ファンブックを見せ付けられ終始唖然とするなのは達四人。

「ほ・・・本当だ・・・！」

フェイトは徐に中身を見てみると、ページの至るところに9歳の頃の自分達の様子が赤裸々に映し出されていた。

中には正直見ては行けないようなファンサービス画像も混じっていた。

なのはとフェイトは思わず顔を赤くしてしまう。

「あ～～～ん！！！こんなの恥ずかしいよ！！！子供時代のことが赤裸々に書かれてある！！」

「う～～～ん・・・この時の私らまだ若いな・・・ユーノくんもこんときはまだフェレットやったさかい・・・出番も多かったんやけどな♪」

「切実な発言は控えてくれるか、はやて。斬り殺されたくなかったら！」

はやての言葉に思わず仕込み杖から刃を少しだけ見せるユーノ。

一連の話を漸く理解した幸吉郎達は感慨に浸りながら、こんな事を口にしてきた。

「しかし、こっちの世界ではアニメだけの存在のなのはさん達が実際にこうして目の前にいるとなると、かなり驚きですよね！！」

「事実は小説よりも奇なりとはよく言うが、結構当たるもんだよな。」

「拙僧たちの出会いも、これに勝らず劣らずの出来事じゃったけどな・・・」

「ということはだ・・・てめえらは崩玉の欠片であるアンゴルモアがこの世界の何所かに散らばったからそれを探すために此処へ来た訳だろ。となると、色々と情報が必要になるわけだ・・・」

幸吉郎の言葉を聞いた瞬間、昇流はドラにこう言ってきた。

「ドラ。ここは一つなのはちゃん達に協力してやれ！俺が許す！！」

「え！？いいんですか・・・！？」

昇流の言葉を聞いたユーノは思わず驚愕の表情を見せた。

「昔の腐れ縁みたいですけど、オイラは全然構いませんよ。但し、これは長官としての命令ではなくオイラ個人としての見解だ。どうせこの人なんかろくでもないこと考えてるだけだからね。」

「う、うるせーよ！！」

ドラの冷ややかな言葉を耳にした昇流は顔を赤面させながら猛反発。

「そうですか。色々助かりますよ♪何しろアンゴルモアに関しては情報が少なすぎますし・・・出来れば資料みたいなものがあれば助かるんですが・・・」

「資料ね・・・お、そうだ！幸吉郎、ＷｉｋｉｐｅｄｉａでＢＬＥＡＣＨって検索すれば何か出てくるかもしれない。ちょっと調べてみて！」

「了解！！直ぐにやらせていただきます！！」

ドラの指示を聞いた幸吉郎は上機嫌な様子で自分のパソコンを使って検索を開始し始めた。

「何やこの世界は私らの知ってること全てが漫画の話なんですね・・・あ、そうそう。ＴＢＴって要は時間の平和を守る組織のことですよね。ドラさん達特殊先行部隊って言うのは具体的に何をしてらっしゃるんですの？」

「オホン！説明しよう・・・ＴＢＴ特殊先行部隊、通称『鋼鉄の絆（アイアンハート）』とは、年々増加する時間犯罪・組織暴力・密輸その他元来の縦割り組織が対応に苦慮していた全ての犯罪に対応するため、部署を温存して与えられた唯一の捜査機関である。つまり、一分隊から四分隊がどうしても手に負えないような危険な任務を担当するのが特殊先行（チ）部隊（ウ）ってこと。」

「けど、早々危険な任務なんてもんはないから・・・殆ど地元の警察の手伝いや書類整理がほとんどだけどな。」

「それと、長官の教育指導もな。」

ドラを始めとするアイアンハーツ全員は実に冷ややかな目で作りかけのボトルシップに再び手を加えようとする昇流を凝視する。

「そ、そんな目で人を見ないでくれ、お前ら！！」

「あとは、現代教育に関するお勉強をドラさんから教えてもらっているんですよ！」

「現代教育・・・？そう言えば、ドラさんは良いとして・・・不思議と杯さん以外の五人はどうも今の人とはかなり服装が違うような気が・・・！？」

ユーノの言葉を聞いたとき、駱太郎は団子を口に頬張り込むと説明をし始めた。

「てめえも似たようもん着てるだろ。けど、質問には答えてやるよ。幸吉郎を始めとする
俺・爺・写ノ神・茜・そして蠖蛄の六人は全員・・・“過去の世界の人間”なんだよ」

「「「「！？過去の世界の・・・人間・・・！！」」」」

駱太郎の頓狂な言葉に思わず頭を混乱させる四人。

「ど、どういうことですかそれ！！過去の世界から・・・人間を連れてきたんですか！？」

「そんな莫迦な話！！大体過去の世界って・・・一体何時のころのですか！？」

「俺達が元いたのは１６０４年・・・つまり、江戸時代の本当の初期のころだ。」

「江戸時代！？」

「そんな４０００年前の時代から・・・！？」

「何でですか！？分かってるはずですよね・・・そんなことをしたら、次空間が乱れてそれこそ時間の秩序が崩れる！！」

「流石はユーノさん・・・よくお分かりだ。そう、確かにそんなことをすれば時間の秩序が乱れ、それこそ世界の崩壊に繋がる可能性がある。だが、幸吉郎達は例外なんですよ。幸吉郎達六人は全員“特異点”と呼ばれる存在だからです。」

「特異点？何ですかそれ・・・！？」

「一部の存在（人物）だけが持つ、時間からのあらゆる干渉を受けない特性じゃよ。時の運行に変化が生じてもそれによる影響を受けず、最悪の場合自らが本来属する時間が消滅しても、本人だけは消滅しない・・・噛み砕いて言えば、どの時間に居ようが何しようが平気だという事じゃ。」

「しかも、その特異点を持つ六人が偶然か必然か兄貴の下に集まった。そしてチームを組んでこうして現代で働いているという訳だ。」

「何だか・・・ご都合主義な話やな・・・」

「本当だね・・・・・・」

自分達の常識では計り知れないほどの巨大すぎる話に終始唖然とするなのは達。

「あ、そうだ！兄貴、調べ終わりましたよ。こちらが全部になります！」

幸吉郎はドラに早速インターネットサイト、『Ｗｉｋｉｐｅｄｉａ』で調べた『ＢＬＥＡＣＨ』に関する情報をまとめた資料を手渡す。

「ありがとう、幸吉郎。ユーノさん、これがアンゴルモアに関することとその他死神の詳しいデータが書かれたファイルです。ま、一護本人から聞いていることもあるから多少なりとは知ってるはずですけど・・・」

「ありがとうございます。有効的に使わせていただきます♪」

ユーノはドラから渡された資料に目を通し始めた。

と、その時昇流が四人に向ってある事件のことに関することを話し出した。

「・・・それとよ・・・なのはちゃん達の探してるアンゴルモアかどうかは未だ分からないが、最近ここら辺で妙な事件が多発してるんだが・・・」

「妙な事件・・・と言いますと？」

「最近、何故か小樽を中心に謎の怪事件が起きていましてね・・・さっきユーノさん達が見たあの車の寄せ集めロボット・・・あれを始めとする様々な機械が暴走を起こして、住民を襲ってるんです。しかも、回収した残骸からはこの世界では絶対に検出されない特殊素粒子『ＤＲ』を放出して・・・」

「特殊素粒子・・・！？まさかそれが・・・！」

「まだそれが崩玉の欠片なのかどうかはっきり断定は出来ないが、可能性はない訳じゃない。」

「その上、ここ数日になって数が急に増えてしまいましてね・・・対応に追われているんですよ、私達も。」

「まだ、今日の相手なんか何時もの量に比べたら稀に見る少なさだったけどな。」

「で、俺達は色々調査していた傍ら・・・今回の一連の事件に深く関与していると思われる人物を漸く掴むことに成功した。」

昇流はそう言うと、机の上に乗っていた事件の主犯と思われる人物の顔写真が止められたファイルをユーノ達に見せつけた。

「刈谷総一（かりやそういち）。２０年前、違法光学機械開発における爆発事故によって・・・時間犯罪者が収容される時間犯罪刑務所で１６年を過ごし、２年前に釈放されたんだ。」

「拙僧らはチーム一丸となって捜索に当たっているのだが、未だ成果は見られず。その上回収出来たものと言えばただの残骸となった鉄屑のみ。」

「それでですが・・・もし、よろしければユーノさん・・・うちのスタッフが回収した残骸のデータベースからアンゴルモアと判断出来るものがあるかもしれません。あとで調べてみますか？」

「はい。是非お願いします。」

ユーノは早速、ドラに案内されて四分隊の研究室へと赴き回収した残骸を詳しく調べ始め、結果の出ている情報と比較しながらアンゴルモアなのかどうかを検証し始めた。

およそ数時間後、あたりがすっかり茜色が美しく輝く夕方になった頃、ユーノはなのは達の前に姿を現した。

「どうやった、ユーノくん。結果のほうは？」

「アンゴルモアとみて間違いないね・・・・・あとはその位置だが、どうもこの前みたいに特定することが出来ないな。」

「そうか・・・これは困ったことになったね・・・」

四人は腕組みをしながらどのようにアンゴルモアを特定するかを思案し始めたが、これと言っていい考えも思いつかなかった。

「あんまし根つめていても、いい結果なんてやってこないさ。」

「兄貴の言う通りだぜ。ここはもっと気を楽によ・・・リラックスだぜ。」

「お、そうだ！！どうせならこれから全員で夕食でも食べに行こうや！！なのはちゃん達の歓迎会も兼ねて！」

「ああ、いいですねそれ♪」

「偶には気が利くじゃないですか、長官！」

「え!?そ、そんな別に気を遣わなくても・・・!!」

「何を言っているのじゃ。めでたい事は盛大に祝うのが日本人の心得じゃよ!遠慮することはない!」

「どうせみんなで行くなら、ここはやっぱり豪勢に焼き肉か寿司のどちらかにしましょうよ!!」

「そりゃあいい、幸吉郎!あ、でもオイラ寿司あまり好きじゃないしな・・・」

「だったら焼き肉にしようぜ!偶にはカルビを貪り喰いたいんだよ!」

「私も焼き肉に賛成です!!」

「俺も茜と同意見!」

「そんじゃ、焼き肉にするとしますか!予約は俺に任せろ。今なら大仁門も間に合うはずだ!」

ドラ達はユーノ達を他所に勝手に話を進めるが、当のユーノ達は些か困惑してた。

「(にゃはは・・・え~~~と・・・何だか向こうは随分盛り上がっちゃってるようだけど・・・良いのかな・・・?)」

「(まあ、でも・・・歓迎してくれるってだけだから良いんじゃないかな。)」

「（うん。悪い人じゃないみたいだし・・・捜査に協力してくれるからきっと大丈夫だよ。）」

「（焼き肉か・・・北海道いうことはやっぱジンギスカンやわな～～！！）」

「（ジンギスカンか・・・わぁ～～何だか楽しみだね、フェイトちゃん♪）」

「（うん・・・そうだね・・・）」

なのは達もそんな期待を胸に歓迎会に賛成の意向を示すのであったが、ユーノは何故かこの流れから判断したのか、ジンギスカンが出るとはとても思えなかった。

「（何故だろう・・・どうも違う展開を予測してしまうのは・・・！？）」

そして、仕事が終わったドラ達はアイアンハーツと長官昇流はユーノ達を引き連れて小樽の老舗焼き肉店、『大仁門』へと訪れ歓迎会を楽しみ出した。

「「「「「「乾杯！！！」」」」」」

アイアンハーツの面々はウーロン茶や焼酎を片手に盛り上がり始める。

「へへ！！なのはちゃん達の歓迎会と慰労会だ！！今日は遠慮なく喰って飲んでいこうぜ！！」

「気前が良いですね、長官!!ボーナスもそれぐらい気前よく払ってくださいよ。」

「それとこれとは話が別だ。」

ドラ達は目の前に置かれてあるカルビやたん塩、サガリなどを箸で取ると早速鉄板の上で焼き始める。

このとき、七人のテンションは最高潮に達している。

「よっしゃ!!焼くぞ、カルビ!!」

「あ、兄貴。そこの肉もう焼けごろですよ。」

「お、サンキュー!」

「いやはや・・・戒律を破るようで申し訳ないが・・・やっぱ肉はいいもんじゃの!!」

「おい!!爺!!人の肉まで食うんじゃねえよ!!」

「はい、写ノ神君～～～どうぞ食べてください♪」

「何時も悪いな、茜♪けど、今日はお前もどんどん食って良いんだぞ!」

それぞれが自分の好みに合わせて焼き肉を食らう中、ユーノ以外の三人は期待していたはずのジンギスカンが一皿も出ていないことに疑問を抱き、思わず尋ねた。

「あの・・・ドラさん・・・みなさん・・・焼き肉は別にええんですけど・・・折角北海道に居るんさかい、ジンギスカンとか食べないんですの!?」

「そうだよね・・・北海道の人はよくジンギスカン食べるって聞いたことがあるけど・・・」

すると、そんなはやてとフェイトの言葉を聞いた瞬間、ドラは芋焼酎の入ったジョッキを持ちながらこう口にした。

「何言ってるのさ、二人とも!北海道に住む誰もがジンギスカン好きだと思ったら大間違いだぞ!焼き肉にジンギスカンなんて邪道だ。焼き肉するなら牛か豚のどちらかを食え!」

そのドラの言葉に便乗して、幸吉郎たちも焼く肉を食べながらこう言ってきた。

「大体、あんな羊の肉の何所が美味いんだよ?牛肉みたいにジューシーでもなければ、豚のような蛋白源もないあれの何所がだ!?」

「俺は断然羊よりも牛派だがな!」

「拙僧は豚の方が好きじゃがな。戒律を破るようであれだが・・・」

「北海道人＝ジンギスカン好きの等式は止めてくれよ。あれ意外と喰わない北海道人多いんだぜ!ま、元々俺らも北海道人じゃないが・・・あんまし好きじゃないことは確かだな!」

「それにジンギスカンでしたら、北海道の人よりも青森の遠野市に住む方のほうが週に一度のペースで食べていると、この前聞いたこ

とがありますし・・・」

「つまりは・・・ここにいるメンバーはジンギスカンは焼き肉じゃないと思ってる連中なの！そうだろ、お前ら！！」

昇流がそう言うと、ドラ達全員は声を揃えてこう言った。

「「「「「「「ジンギスカンなんてクソくらえー！！」」」」」」」

ドラ達のあまりに北海道人らしくない発言に思わず唖然とする四人。

「「「「「（道産子（どさんこ）じゃないみたい・・・この人たち・・・）」」」」」

「しかし、歓迎会は嬉しいんですけど・・・あんまりのんびりしてもいいのでしょうか？こうしてる間にまた別の事件が起こってるかもしれないのに・・・」

「でもね、なのは・・・警察やオイラ達が暇だってことは、それだけ世の中も平和ってことじゃないのかな？考えようによってはとっても素晴らしいことじゃないの？」

「それは・・・そうですけど・・・」

ドラの全うな意見に思わず考え込んでしまうなのはであったが、次にドラが口にした一言に思わずキョトンとなってしまう。

「何てこと言ったら隊長っぽいか！！」

「「「「「「「「「あははははははははは！！！！！」」」」」」」」」

すると、ドラの言葉を聞いたアイアンハーツの一同は大爆笑。

再び気分を高揚させて焼き肉を食べることに精を出す。

ドラは気分が高揚した状態で一気にジョッキの芋焼酎を飲み干すと、追加注文をする。

「おじさん!!芋焼酎追加!!あと五・六本持ってきて!!」

「（芋焼酎なんだ・・・意外と飲むものが親父臭い・・・）」

なのははふとそんなことを思ったそうだ。

「辛気臭い話は無しだぜ!!今日はこれからのことも考えて、パーっと盛り上がろうぜ!!」

最初から最後まで自分達の予想に反して盛り上がりを見せるかなり個性的な七人を見ながら、ユーノ達は念話で次のような会話をしていた。

「（にゃはは・・・何だか・・・個性が強すぎてついていけないね・・・）」

「（はぁ～～～何だか先が思いやられてきたわ～～～）」

「（本当・・・私達こんなので本当に大丈夫なのかな・・・？）」

「（僕達・・・・・何しに来たんだろう・・・・・・）」

鋼鉄の絆（後書き）

教えて、ユーノ先生！

ユ「今日はサムライ・ドラさん率いるアイアンハーツについてだよ♪」

ユ「鋼鉄の絆と書いてアイアンハーツと読ませるこの特殊先行部隊には現在七人のメンバーが属している。それでは此処で、作者の思い描くキャラの声優を務める人も紹介しながら、順に見ていこう。」

ユ「先ずはリーダーのドラさんの声は、勿論・・・二代目ドラえもんの水田わさびさん♪」

ド「ドラえもんじゃないから！！！言っとくけど！！！！」

ユ「次に、ドラさんの右腕である幸吉郎さんの声には・・・斑目一角さんやその熱い男を演じる、檜山修之さん。」

幸「兄貴！！！何所までも着いていきます！！！」

ユ「三席の駱太郎さんには、るろうに剣心で相楽左之介を演じたりポケモンのタケシをしている、うえだゆうじさん。」

駱「二重の極み！！・・・何てな！！」

ユ「龍樹さんには、阿笠博士などを担当する重鎮・・・緒方賢一さん」

龍「まだまだ若いもんには負けんわい！」

ユ「写ノ神さんと茜さんは同じ教育テレビの料理番組で競演した青山桐子さんとおみむらまゆこさん」

写「良いのか、そんなはっきり言って・・・」

茜「多分・・・大丈夫ですよ・・・」

ユ「そして、今だ搭乗していない螻蛄さんの声は・・・雲雀恭弥ですっかりファンが急増、近藤隆さん。」

螻「・・・君たち、群れてるね・・・虫の息にするよ・・・」

魔導師図鑑ハイパー！

ザフィーラとヴァイスが次のような会話をしていた。

ザ「ほう。死神の中に狼の隊長が・・・」

ヴァ「そうなんすよ、旦那。恋次さんの話じゃ・・・名前は狛村左陣隊長。忠義を重んじる旦那にそっくりな人っすよ！」

ザ「それは是非とも一度会ってみたいものだな。ところで、一つ気になるのだが、その隊長が現世での活動の際・・・義骸はどうなるのだ？」

ヴァ「え！？狛村隊長の・・・義骸っすか・・・」

ヴァイスは一瞬、普通の犬の姿を思い浮かべる。

ザ「一体如何するつもりなのだろう？」

ヴァ「そりゃ・・・・・・（ヴァイス困惑）」

三人娘を恐怖させる猫

＞i13271―709＜

前回までの流れ。

第２９管理外世界『ＥＡＲＴＨ』を訪れたユーノ達一向は、そこで時間の秩序と平和を守るために働いているサムライ・ドラ率いる特殊先行部隊、通称アイアンハーツと接触。

彼の協力を得た四人は、歓迎会と題した宴会に呼ばれたはいいものの・・・個性の強いドラ達にたじたじの様子であった。

焼き肉を食べ終えたユーノ達はドラ達と供に夜道を歩きながら、他愛もない会話をしていると茜がふとこんなことをなのはに尋ねてきた。

「そう言えば、四人は今日泊まる宿は確保してあるのですか？」

「え？あ、そう言えばまだだったかも・・・」

茜に言われたから漸くそのことに気付いたはやて、フェイト、ユーノの三人。

四人は歓迎会の雰囲気に圧倒されてそんな大事なことをすっかり忘れていたので途方に暮れていた。

すると、そんな四人の様子を見た茜がある考えを思いついた。

「でしたら、今日は折角ですし私達の家に泊まっていってくださいよ！家も隣同士ですから何かあった直ぐに駆けつけられますし！」

「そりゃあいいや！！泊まっていきなよ！！ユーノさんはオイラの家に来てください！」

茜の提案を聞いていたドラ達もそれに便乗して、自分達の家に泊まるようユーノ達を説得する。

ユーノ達はそれを聞いた後、色々話し合った結果それが最善の選択だと結論付け、ドラ達の行為を受け入れることにした。

「あ・・・そうですか・・・それじゃあ、そうさせて戴きます。」

ユーノ達はそう言うと、早速ドラ達と供に帰路を歩いて行った。

数分後、互いに隣同士の庭付き一軒家に到着すると、ドラ・幸吉郎・駱太郎の三人が一緒に住むドラの家にはユーノが、写ノ神・茜・龍樹が一緒に暮らす家にはなのは・フェイト・はやての三人が上がることになったのだが・・・・・・

「で、何で俺と龍樹さんもこっちで寝泊りしないとならないんだ？」

何故か、今晩は写ノ神と龍樹もドラ達の家に泊まることになっていた。

理由は自ずと想像がつくが、現在六人は円くなって談笑をしていた。

写ノ神はかなり不満気な表情でドラに文句をつけていたが、ドラ自身は至って冷静だった。

「仕方ないじゃん。なのは達を写ノ神達と一緒にいさせる訳にはいかないよ。女性は女性だけでいるほうがいいの。男はみな狼なの。今日一日ぐらいは茜ちゃんとの就寝は諦めなさい。」

ドラの言葉を聞いても何所か未だ納得した様子を見せない写ノ神であったが、そんな写ノ神を見たユーノが飄々としながら次のように語る。

「それに、結構楽しいものですよこういうのも♪修学旅行みたいで。」

「あんた・・・修学旅行行った事あるのかよ？」

写ノ神もそうであったが、彼以上に不満を抱いていたのは犬猿の中である駱太郎のほうであった。

「全く・・・何で俺がこんな爺と写ノ神と一緒に朝までいないといけねえんだ。虫唾が走るぜ・・・！！」

「俺だって願い下げだぜ！誰がこんな単細胞と一緒に過ごせるかよ

！」

売り言葉に買い言葉とはこのことだ。

駱太郎は頭の血管が切れると、写ノ神と睨み合い何時もの険悪な雰囲気を漂わせ口論を始める。

「何だと！！このドチビが！！！」

「誰がドチビだ！！単細胞！！！！」

二人は、茜がいなかったために口喧嘩では収まらずに終には実力行使に打って出たのであった。

ユーノ以外の三人はかなりの呆れ顔でその様子を見ていたが、ユーノ本人は結構そう言う光景は六課では見慣れているらしく、扇子を広げながら飄々とした態度でこう口にした。

「あははは♪賑やかですね・・・あの二人は・・・」

「ただうるせーだけだよ。」

「やれやれ・・・女三人寄れば姦しいとはよく言うが、男二人でも相当喧しいものじゃの・・・」

「頼むから早いところ静かにしてくれないかな・・・」

ドラ達のそんな苦悩とは裏腹に、花のある女性陣の方はというと・・・・・茜が茶の間に三人が眠れるように来賓用の布団を敷いてくれたのであった。

「どうぞ、布団はここに置いておきますから。もしも何か不便なことがあったら遠慮せずに言ってくださいね。」

「ありがとうございます。わざわざ泊まる所まで提供してくれて。」

「本当に感謝してます。」

なのはやフェイトの言葉を聞いた茜は笑顔を向けながら、堅苦しく話す必要はないと言ってきた。

「そう堅苦しくならないでくださいよ。同じ女同士なんですから、仲良くしましょう♪」

「そうですね、じゃあ・・・お言葉に甘えさせてもらいます、茜さん！」

「はい！よろしく、お願いします！」

三人も茜の言動を聞いて、同じように笑顔でそう答える。

すると、はやてが食器棚のところにおいてあった一枚の写真立てに気付き、近付いていった。

「あれ？これって・・・」

はやてと同じようになのはとフェイトも写真立ての写真を見てみると、写っていたのは満面の笑みを浮かべながら写ノ神にお姫様抱っこされるウェディングドレス姿の茜とタキシードを着た写ノ神であった。

「茜さん、この人って確か・・・？」

「そうですよ！それ私と写ノ神君の結婚式の写真なんです。一応、この国では随分前に法律が改正されたらしくて・・・今じゃあお互いに１６歳で結婚可能となっています！私達もちょうど半年前に式を挙げたばかりですから・・・まだ新婚ホヤホヤです♪」

「そうなんですか！おめでとうございます、茜さん！」

なのは達は頬を赤く染める茜に祝杯の言葉と拍手を送った。

「へへ・・・どうもどうも♪」

と、その時茜が１６歳であると初めて気付いたなのははこんな事を口にした。

「じゃあ、という事は私達のほうが年上ってことだよね？」

「そうですね。だから、今更ですが別に名指しでも構わないですよ。」

「でも・・・流石にそれはちょっと。」

「せめて、ちゃんづけぐらいでも構わないでしょうか？」

しどろもどろするなのはやフェイト、はやてであったが茜は特に遠慮は要らないと言ってきた。

「遠慮は不要です。呼び方は人それぞれですから♪」

「そうですか。それじゃ、これからは茜ちゃんと呼ばせて貰おうかな。」

なのは達は笑顔でそう答えると、茜もなのは達に負けないぐらいの笑顔でそう答えた。

四人は女同士他愛のない話から仕事のことなど、女の話題は尽きることはなく茶の間で時間を忘れて会話していた。

そんな時、はやてがこんな事を茜に言ってきた。

「ところで、茜ちゃん？一つ気になってたんやけど、いいかな？」

「はい。何ですか？」

「部隊長さんのドラさんって・・・何で・・・その・・・ああいう姿をしているのかなって・・・思ったりして。」

「あ・・・うん。それは私も思ってたよ、はやて・・・」

「にゃはは・・・実は私も・・・」

昼間のこともあった成果、何所か言いづらそうに茜に尋ねるはやてとそれに便乗して苦笑いを浮かべる二人。

「ああ。これはあまり他言はしたくはないんですけど・・・・・・元々ドラさんは生まれた当初は只の三毛猫だったんですよ。」

「「「え！？三毛猫！？」」」

茜の口から開かされるドラの姿に関することが、何故か想定外な方向にずれて行った。

そして、茜は複雑な表情を浮かべながらドラの過去を静かに語り始めた。

「あれは・・・今から32年前のことです・・・ドラさんは生まれて直ぐに両親に捨てられました。ですから、ドラさんは両親の顔も愛情も何一つ知らないまま一人で生きていくことになりました。」

その話を聞いた途端、フェイトやはやての頭の中に浮かんでくる過去の悲しき思い出。

そして、両親を持つなのはでも幼き頃の孤な日々のことを思い出しドラのこの上も無いほどの切なさを理解した。

「両親の顔も愛情も知らないまま・・・・・一人で・・・・か・・・」

「それって・・・・・・凄く辛い話だね・・・・・・」

「何だか・・・・・・私らの境遇によくにておるな・・・・・・」

「その後、ドラさんは野生の猫の間では知らぬものは居ないと恐れられた獰猛な猫として野良猫界を蹂躙するようになっていました。自分が生きるためには敵を容赦なく殺すことなど厭わぬほどに残酷な猫として・・・生きてゆくしか在りませんでした。孤独という名の寂しさ・苦痛から逃れるにはそれしかなかったからです。しかし、そんなドラさんに転機が訪れたのが・・・後にドラさんをあの姿へと変えた張本人・・・武志誠(たけしまこと)さんでした。」

ここからはドラの回想シーンに入る。

それは、三毛猫ドラが1歳となり野良猫界を蹂躙していた時だった。

人間達は獰猛なドラを恐れて誰一人近付こうとしない猫の屍が至るところに散らばるところを畏怖の念を込めて“魔猫（まびょう）の餌場”と呼んだ。

そんな屍のある場所を住処とするドラは何時ものように、屍の上で肉を引き裂き食事を堪能していた。

すると、そんな食事をしていたドラの頭を突然人間の手と思わしき者が触ってきた。

徐にドラが振り返ってみたところ、案の定そこには人間が立っていた。

彼こそが、後のネコ型ロボット・・・サムライ・ドラの生みの親となる遺伝子工学の天才学士、武志誠であった。

〈・・・屍を喰らう化け猫が出ると聞いて来て見れば・・・お前がそうか？また随分と・・・・・・可愛い化け猫がいたものだな・・・〉

不適な笑みを浮かべながらドラにそう話しかける誠であったが、ドラは危険を感じて誠の手を振り払うと臨戦態勢に入り屍の中に転がっていた恐らく何処かの野良猫が拾ってきたナイフを口に運び、誠を睨み付けた。

〈・・・それも屍から剥ぎ取ったのか？〉

ドラのその姿を見てそう口にする誠は、更に獲物を取る目をしたドラに向って話し出す。

〈子猫一匹、屍の身ぐるみを剥き・・・そうして自分の身を守ってきたのか。大したもんじゃねえか・・・だけど、そんな強さ・・・もう要らないさ。〉

そう断言した誠はその瞬間、懐に手を伸ばすと何かを取り出そうとした。

〈社会（せかい）の全てに怯え、自分を守るためだけの力なんて・・・もう捨ててしまえ。〉

ドラは誠が武器を取り出すとばかり思い、警戒心を更に強めたが・・・出てきたのは全く予想外のものであった。

それは、カカオ豆１００パーセント糖類０のブラックチョコレートであった。

誠はブラックチョコを呆然とするドラに向って投げつけた。

〈くれてやるよ。そのチョコ・・・・・そいつがもっと食いたくなって、孤独から逃れたいのなら・・・ついて来るといい。これからはそいつを喰らい、敵を喰らうのではない・・・弱き己を喰らうために。己を守るためではない・・・己の意地を守るために。〉

誠はそれだけを言い残すと、呆然とするドラの前から立ち去っていった。

これがドラの人生を大きく変えるターニングポイントであったのだ。

そんな話をなのは達に話し終えた茜は、徐にお茶を啜り終え机に置くと更に話し出す。

「そんなことがありまして・・・ドラさんはその後、武志さんの下で生活を送るようになったんです。ドラさん達が住んでるあの家は元々、武志さんの住んでいた家なんですよ。」

「そうだったんだ。」

納得した表情を浮かべるなのはとフェイトであったが、はやては肝心なことに気付いた。

「ん?ちょっと待ってくれへんか・・・その武志さんって人は今はどうしてるんや?」

それを聞いた茜は何故か悲しげな表情を浮かべると、重い口を開けてこう告げたのであった。

「・・・ああ・・・武さんなら、22年前に既にお亡くなりになってます・・・」

「「「え!?」」」

茜から語られるとんでもない事実に思わず絶句するなのは達。

「ある犯罪組織に殺されちゃいましてね・・・・・・それ以降、ドラさんは私達と会うまでは天涯孤独に逆戻り。長官さん曰く、笑っ

ているのに何所か寂しい目をしていたそうです。だからこそ、今の生活を壊したくないんです。ドラさんが二度と・・・一人にならないためにも・・・死が絆を分かつまで・・・ずっと一緒に。私達と一緒に！」

「茜ちゃん・・・」

茜の深い深い言葉を真剣に聞いていたなのは達三人。

それを心の中で誰よりも深く受け止めていたのはなのはの方だったのかも知れない。

勿論、その対象はユーノのことであることは間違いないだろうが。

暫く沈黙が続き、重い空気が漂っていたが・・・茜が突然笑顔を向けるとこう言ってきた。

「何て暗い話はやめときましょう！！今日はもう遅いですし、そろそろ休みましょう！！と、その前にお風呂ですね♪宜しければ、一緒に入りましょうよ！」

茜のその言葉を聞いて、気分を転換させたはやてはなのは達と顔を見合わせ軽く頷いた。

「・・・うん、そうやね！よっし！！！茜ちゃんの胸がどんくらいあるか私がちゃんと見とるさかい覚悟しーよ！」

「「！！は、はやて（ちゃん）！！」」

はやての頓狂な発言に思わず顔を赤くするなのはとフェイトの二人。

そんな中睦ましい三人の様子を見ていた茜は笑顔を浮かべ、こう口にした。

「ふふふ♪仲がよろしいですね、お三方とも！まるで、ドラさんと幸吉郎さんと駱太郎さん達を見てるみたいです！」

そして、次の日の朝。

ユーノ達がそれぞれの家で一夜を過ごし、ドラの家で寝泊りをしたユーノは朝の6時に目が覚めると恐らくまだ誰もいないはずである筈の茶の間のほうに向った。

「ふぁあああああああ～～～～～～～～～～よく寝た～～～～～あれ？」

大欠伸をしながら何時もの三点セットに身を包んで茶の間のドアを開けてみたところ、そこには朝のニュースを見ながら朝刊を広げコーヒーブレイクを堪能するドラが昨日と同じ格好で座っていた。

「やあ、お早うございますユーノさん。」

「お早うございます。早いですね、ドラさん。何時もこの時間なんですか？」

「本当は一時間前にとっくに起きていて、ついさっきまで日課のジョギングと公園の清掃・ラジオ体操を高齢者の方と一緒にやってきて・・・今はコーヒーブレイクタイムですよ。」

「そうなんですか。それにしても・・・・・猫がコーヒーを飲み

ながら新聞を読む光景って、あんまり見たことないんですけどね・・・」

「オイラを何所ぞの猫型ロボットのパクリだと思ったら大間違いですよ。そろそろ幸吉郎達も起きて来る頃でしょうから・・・あれの用意でもするかな。」

ドラはそう言うと、怪訝そうな表情を浮かべるユーノを他所に新聞をたたみ何かの準備のためにその場から立ち上がった。

「あれ・・・って何ですか？」

「見てれば分かりますよ♪」

何故かユーノに最後歯を見せて笑顔を浮かべたドラ。

そして、６時を少し過ぎた後続々と部屋の扉が開いて寝起きが実にみすぼらしい駱太郎と写ノ神、それとは対照的な幸吉郎と龍樹が起きて来た。

「ふぁああ～～～お早うございます・・・・・兄貴。」

「う～～～茜がいねえと実に目覚めが悪いぜ・・・・・・」

「くそ～～～昨日は飲みすぎた～～～頭いて～～～！！」

「うむ！！実に爽やかな目覚めじゃわい！」

それぞれ独特の寝起きの素顔を見ながら机の椅子に座るユーノと、四人を集めるドラ。

「全員揃ったようだね。それじゃあ・・・運命の当番くじ・・・始めるよ。」

ドラはそう言うと、毎朝必ず三人が行っている炊事・洗濯・調理という文字が書かれた割り箸くじが入った瓶を取り出し五人はそれぞれに選んだ割り箸の先を摘む。

今回は写ノ神達もいることなので、休みと書かれた割り箸も二本混じってある。

全員は覚悟を決めて一斉に割り箸を抜いた。

「「「「「「「せーーーの!!!」」」」」」」

そして、写ノ神・駱太郎・幸吉郎・龍樹・ドラが引いたくじは次の通りだ。

「『休み』」

「『掃除』」

「『調理』」

「『休み』」

「だあああああ!!!!!!また『洗濯』か!!!!!これで四ヶ月連続だ!!!!!!!」

ドラは絶望した表情を浮かべながら、地面に跪き力が抜けていくの

が分かった。

ドラ達の様子を見て状況を直ぐに理解するユーノ。

「あ、成程♪そう言うことだったのか・・・」

その後、ユーノと写ノ神達が見守る中さくさくと準備を始めるドラ達三人。

幸吉郎は手馴れた様子で朝食を作り、駱太郎は頭痛が激しい頭を押さえながら掃除機を掛け、三つの中では最も面倒且つ最悪な家事である洗濯を四ヶ月連続で担当する羽目になったドラ。

ドラは洗濯機の中に駱太郎の汗だくになった本人曰く男気溢れる白い服を鼻を摘みながら放り込んでいく。

その後、三人の作業が完了し全員揃っての朝食を始めていた。

「あはは♪つまり、ドラさん達三人は毎朝割り箸くじで家事当番を決めているんですけど・・・ドラさんの場合は毎回洗濯三昧・・・」

ユーノは味噌汁を啜りながら、顔中を真っ青にするドラに向ってそう口にする。

「もう嫌だ・・・こんな生活・・・ああ!!!!!何で毎朝同じものばかり引くんだよ!!!確率的には一万分の一だぞ!!何でオイラがあんな汗だくで変な匂いのするR君の服まで洗わなきゃいけないんだ!!」

「変な匂いで悪かったな、おい！！」

ドラの爆発した不満の声を傍らで聞いていた駱太郎は直ぐに猛反発をする。

「それにしても、今日は大人数じゃの。何時も三人ずつだから新鮮な気分じゃ！」

「俺的には茜の手料理のほうがいいですけどね。」

写ノ神はそう言いつつも、幸吉郎の作った朝食を次々と口に運んでいく。

「残念ながら俺は茜じゃねえ。文句があるなら喰うな。」

「誰もそんなこと言ってないだろう。心配するな、単細胞が作らなかった分良かったと思ってるから。」

すると、写ノ神の言葉を聞いた瞬間・・・駱太郎は箸を真っ二つに折って怒りを露にする。

「てめぇ！！！それどう意味だ！！！！！」

その後、犬猿の仲である二人は昨夜と同様朝から呆れるばかりの喧嘩を勃発する。

流石に朝から喧嘩の様子を見ても、笑えないでいるユーノ。

「朝から賑やかですね・・・あの二人・・・」

「やれやれ・・・食事ぐらい穏やかにさせてくれ。ズームインのニュースが聞こえないじゃんか。」

ドラはそう言うと、テレビの音量を上げてズームインのニュースを聞いていた。

その後、朝食を食べ終えたドラ達は茜達と供に何時もどおりＴＢＴ本部へと出勤した。

仕事場に到着したドラ達アイアンハーツのメンバーはリーダーであるドラの目の前で姿勢を整えると、次のように語り出す。

「てな訳で・・・・・こっちに滞在している間は同じ特殊先行部隊の一員・・・ＴＢＴの臨時職員としてユーノさん達にはオイラ達と一緒に働いてもらうからそのつもりで。」

「許諾のほうは長官が取っといた。一応感謝しておけ。」

幸吉郎がそう言うと、四人を代表してユーノが感謝の言葉を口にする。

「分かりました。ありがとうございます。」

「さてと・・・それじゃあ、早速恒例の早朝訓練に入ろう。茜ちゃん、あれ持ってきて。」

「了解です♪」

ドラに何かを持ってくるように頼まれた茜は全速力でオフィスから飛び出すと、何処かへ向い一分も経たないうちに戻ってきてなの

は達三人に赤いジャージを手渡した。

「はい、こちらどうぞ！」

手渡された赤いジャージに言葉を詰まらせるなのは、フェイト、はやて、そして一人だけジャージを渡されなかったユーノ。

「あの・・・・・・」

「これは一体・・・・？」

「オイラ達が何時も訓練のときに来ているジャージだよ。男は青。女は赤。それに着替えたらオイラ達と一緒に特別訓練場に移動するから。」

「特別訓練場・・・ですか？」

「そうですよ。ま、ユーノさんはともかく・・・三人が何所まで着いてこれるかが楽しみだ・・・にししししししし！！！！！！」

不気味な笑い方で三人にそう告げるドラと、嫌な予感を肌で感じるなのは達三人。

この後、ユーノ以外の三人に待ち受ける途轍もなく過酷な訓練とは一体何なのか！？

赤いジャージに着替えたなのは達と何時もどおりの格好のユーノはドラ達と供にＴＢＴ内に作られた特別訓練場へと足を運んだ。

ここは、特殊先行部隊専用の訓練場でもあるのだ。

大きさは機動六課のそれを劣るが自動車教習所並の大きさを誇る。

全員は青いジャージに身を包んだドラに向って立つとドラの指示を聞いていた。

「それじゃあ、ジャージに身を包んだので早速訓練を開始します。まずは身体を温めるために柔軟体操から。今日はバージョンDに設定。各自ペアを組んで開始。」

「「「「「はい！」」」」」

すると、アイアンハーツの面々はそれぞれにペアを組んで背中と背中をくっ付け合い引っ張りあい始めた。

ペアの組合わせのほうは・・・幸吉郎・駱太郎、写ノ神と龍樹、ドラとユーノ、そして茜はなのは達と一緒である。

幸吉郎は早速容赦のないやり方で駱太郎の背中を押し上げてきた。

「コノヤロウ！！！」

「のあああああ！！！痛ててててて！！！！！」

背中が急激にそれたことで激痛を伴う駱太郎は必死な様子であった。

一方の龍樹はちゃんと加減して写ノ神を持ち上げる、とても七十七とは思えない力で。

「これが効くんじゃよ！！！」

「あああああ！！！！！！！！！！！！！！」

男達の様子を見ていたなのは達は茜の補助の下で同じようにやり始める。

「なのはさん達は初めてですから、私が三人のお相手をさせていただきますね♪」

「にゃはは・・・お手柔らかに・・・」

「よろしく・・・」

なのは達は苦笑いを浮かべながら満面の笑みを浮かべる茜に嫌な予感を感じていた。

「「「いてててててててて！！！！！！！！」」」

なのは達は容姿の割りに非情なやり方で身体を反らしてきた茜に恐怖を感じると同時に、普段魔法ばかりに頼って根本的に身体の至るところが鈍っていた所為か、激痛を感じ涙を目に浮かべその場に倒れる。

そんな呆気ない三人の様子を見てきょとんとする茜。

「三人とも意外と身体が硬いですね・・・もっと柔軟にしないと駄目ですよ。」

そう言うと、茜は今度は倒れる三人の身体を起こすと三人同時に背中を押して長座前屈を開始する。

その瞬間、身体の固いなのは達は情けない声を上げて痛みを訴えた。

「「「あああああああ！！！！！いたたたったたたたたた！！！！！！！」」」

そんな哀れななのは達のことを傍らで見ていたユーノはドラに茜のやり方について、こう話しかけた。

「手厳しいですね・・・茜さん・・・」

「ああ見えて、顔の割りに結構キツイ性格なんですよ茜ちゃん。それにしても・・・何ですか、なのはのあの情けない声は！」

「すみません・・・なのはは普段魔力ばっかりに頼って身体の機能を向上させているものですから、全く使わないままではへな猪口もいいところでして・・・」

「ユ～ノ君～～～それ言いすぎだよ～～～！！いたたたたたたた！！！！！！！」

思わず本当のことを言われて、涙目で反論するなのはだがそんななのはの両足を容赦なく開脚させてくる茜。

そして、準備運動が完了したときには既にユーノ以外の三人は虫の息に近かった。

そんな三人を見るなり頭を抱えるドラ達。

「全く・・・準備体操ぐらいであんな声あげるとな・・・これはビ

シバシ鍛えないといけないな。よし、それじゃあ最初の訓練は・・・これだ！！」

ドラはそう言うと、非常階段の方を指差すと全員にこう言った。

「ここ百階から一階まで非常階段を使って走りながら降りていき、一階にあるコーンを回って再び元来た道で帰ってくる。途中リタイアは一切受け付けない！」

「「「そ、そんな！！！」」」

余りに無茶苦茶な訓練の内容を聞かされ、声を上げるなのは達三人娘。

「無理ですよそんなの！！」

「いくら何でも身体が持ちませんよ！！」

「私達を殺す気ですか、ドラさんは！！」

三人はドラに向って断固抗議をするのであったが、ドラはそんな三人の言動を聞くなりこのようのものとは思えない形相と威圧感を発して三人に向ってこう叫んだ。

「問答無用！！！さっさと行けコノヤロー！！！！！」

ドラの言葉を聞いた瞬間、殺されるとばかり思ったなのは達は声を震え上がらせながら急いで幸吉郎たちと供に非常階段へと下りて行った。

「「「は、はい！！！」」」

先程の準備運動で身体の痛みがまだ残っているなのは達は息切れをさせながら非常階段を下っていくが、正直ここまで身体が動かないと感じたことはなかった。

「へっ！へっ！へっ！何であんなに怖いの、ドラさんって！！」

「下手すれば！！なのはよりも怖いかも！！」

「それにしたって！！この訓練は流石に無謀過ぎるで！！！！！？？？？」

はやてはそう言うと、既に見えなくなっている幸吉郎達の姿を上から窺った。

アイアンハーツは常にこのような常人離れした意味が正直あるのか否かの訓練メニューをこなしおり、今回のことも別に大したことではなかったのであった。

すると、そんな三人の後ろから通り過ぎていくのはあの茜であった。

「お先に失礼します♪」

茜は笑顔でなのは達にそう言うと、軽快な足取りでなのは達を追い越していった。

「あ、茜！？」

「うそ！！何であんな身体軽いんや！？」

「あ！そう言えば、ユーノ君は！？」

すると、そんななのはの目の前に現れたモニター画面に映るユーノ。

『僕ならとっくにドラさんと一緒に先頭を走ってるけど。』

「「「ええええ！！！！！本当に！？」」」

なのは達三人はユーノが既に自分達の遥か前を走っていたことに驚きを隠せなかった。

元々ユーノは魔導死神になる以前から基礎代謝と身体能力を高めるために日々隠れて運動を行っていたこともあると同時に、死神となったことで飛躍的に身体能力が向上。

だから、ユーノは先頭を走るドラと供に既に一階まで来ていたのであった。

『早いところ、なのは達も下まで降りてきなよ♪ドラさん・・・怒らせると怖いから♪』

ユーノはそう言うと、なのは達と通信を絶った。

なのは達は冷や汗を大量に流しながら恐らく自分達の中では最も怖いと思われるドラのこの後の展開を考え、一気に恐怖が倍増された。

「・・・は、早くしたまで行こう！！フェイトちゃん！！はやてちゃん！！」

「「う、うん！！」」

三人は命の危険を感じて痛む身体を引きずるように階段を下りていくが、その時そんななのは達の前を通り過ぎていくドラやユーノ達一向。

「「「げっ！！」」」

「折り返しだぜ、俺達！」

「まだまだ修行が足らんの！！」

「そんじゃ、お先に♪」

「じゃあね、なのは♪」

ドラは一度三人の横に立ち止まると、笑顔でこのように言った。

「三人とも、茜ちゃんに追い抜かれないようね。もしそうなったら・・・・・とことこん苛めてやるからな・・・へへへへへへへへ！！！！！！！」

「「「そ、そんな～～～！！！」」」

その言葉を聞いた三人は情けない声を上げて精一杯の力で何とか下まで到着し、折り返しを果たそうとしたが結局茜には先を越されてしまい着いたのは既にドラ達が戻って1時間もした後であった。

なのは達は多量の汗をかきつつ、尋常ならぬ息切れをしながら床に倒れ付していた。

「「「はっ！はっ！はっ！はっ！はっ！」」」

そんな三人の様子を見て、ユーノは恐る恐る尋ねた。

「大丈夫かい・・・三人とも？」

「これの！！何所が・・・！！大丈夫なように！！見えるんや・・・！！」

「普段から魔法ばかりで身体を動かしていないから、息切れなんか起こすんだよ。」

「だからって・・・！！これは流石に運動量の・・・！！限度を・・・！！超えている気が・・・！！」

「んなことはねえぞ。俺達は普段、何時如何なるときもこれくらいの運動はしてるぜ。じゃねーと、昨日の連中みたいな奴とまともに遣り合えねえからな。」

「拙僧たちには、魔法などというものはないが・・・その代わり隠れた特殊技能を有しておる。しかし、それを充分に発揮するためにも日々の訓練は必要じゃ。」

「結果的に、ユーノさん以外の三人は茜ちゃんには追い抜かれ１時間遅れでゴール。という訳で・・・約束どおりお仕置きを受けてもらおうかな♪にひゃひゃひゃひゃひゃひゃ！！！！！！」

「「「げっ！！」」」

不気味な高笑いをするドラを見た三人は冷や汗をかきながらドラを凝視し、ユーノはそんなドラに何をするのかを尋ねた。

「あの～ドラさん・・・一応聞きますけど、なのは達のお仕置きと言うのは具体的に何を？」

「おほん！今から三人には・・・・・・オイラ達アイアンハーツのメンバーの誰かと、本気で戦ってもらう！！」

ドラの思わぬ一言を聞いた瞬間、三人は顔色を変えて驚いた。

「え！？それってつまり・・・戦闘訓練って・・・ことですか！？」

「それが・・・私達のお仕置き？」

「ま、そう言うことだ。勿論、魔法は別に使っても構わないから。」

「でもそれだと、ドラさん達の方が絶対不利な気が・・・？」

すると、そんなはやての言葉を聞いた幸吉郎達が自信に満ちた表情でこう言ってきた。

「はっ！俺達の力を見誤るなよ、狸女。俺達にも、てめぇらの魔法同様特殊技能があるって龍樹さんが言ってただろ。てめぇらの魔法がどれほどのものか知らねえが、負ける気なぞ最初（はな）からねえ！」

それを聞いたなのは達は顔を見合わせると、自信に満ちた表情を浮かべて幸吉郎達に向かってこう答えた。

「・・・うふ。了解！じゃあ、こっちも全力全開で挑むだけですよ

！そうでしょ、二人とも！？」

「「うん！」」

「やる気になったみたいだな。それじゃあ、早速対戦相手を決めよう。ユーノさん、オイラの机から割り箸の入った瓶を持ってきてくれませんか？」

「また割り箸ですか・・・」

ユーノは多少笑いながらも、言われたとおりに割り箸を持ってきてドラに手渡す。

抽選の結果、対戦相手は以下の通りになった。

八神はやてＶＳ八百万写ノ神。

フェイト・Ｔ・ハラオウンＶＳ山中幸吉郎。

高町なのはＶＳサムライ・ドラ。

「よろしゅうな、写ノ神くん。茜ちゃんからは聞いているよ・・・何でも相当なやり手なようやないの。楽しみにしてるよ。」

「こっちこそ、お互い悔いの無い様にな。」

二人は軽く握手を交わすと、お互いに気持ちを鼓舞し合った。

そんな二人に向って茜と龍樹が声を掛けてきた。

「頑張ってくださいね、写ノ神♪勿論、はやてさんも！」

「気を抜くでないぞ、写ノ神。」

同じように、フェイトは幸吉郎と握手を交わし挨拶を済ましていた。

「よろしくお願いしますね、幸吉郎さん。」

「ああ。確かお前、兄貴の話ではスピードのエキスパートって話だったか。だが、俺には通じねえよ。俺のこの“狼猛進撃”の前では。」

幸吉郎はそう言うと、愛刀である『狼雲（ろううん）』を取り出しその刀身に自分の素顔を映し出した。

「（狼猛進撃・・・・・昨日の凄い突きのことか！？）」

そんなことを考えていたフェイトに向って、駱太郎が忠告をしてきた。

「気をつけなよ、姉ちゃん。そいつは加減ってモノを知らねえからな。」

「お前じゃあるまいし、下手なことなんかしねえよ！」

そして、なのはがドラとの対戦に当たったことにユーノは些か・・・いや、かなりの不安が付き纏っていた。

「まさかなのはがドラさんと当たるとは・・・なのは、本当に大丈夫？」

「大丈夫だよ、ユーノ君♪身体は少し痛むけど、魔法があれば少し緩和できるし・・・それに何より、結構ワクワクしてるの。ドラさんとの模擬戦。」

「いいのかな・・・そんなこと言って？オイラはパラレルワールドでもう一人のなのはと闘ったことがあるんだぞ。技の多くは熟知している。それでも勝てる気でいると？」

「当然です。やるからには絶対勝つ！それが私の性分です！！」

すると、そんななのはに向ってユーノは痛い台詞をなのはに向ける。

「けど、僕との模擬戦ではまだ一回も勝ててないよね？」

「う！？ゆ、ユーノ君！！それ言っちゃだめ～～～！！」

ユーノの一言に恥ずかしさの余り顔を赤くするなのはと、意地悪そうな表情を浮かべながら扇子を広げるユーノであった。

その後、なのは達はバリアジャケットを装着するとデバイスを持ってそれぞれの対戦相手と向き合い合図を待った。

見学者であるユーノ達四人は上の階に設置された部屋の窓から三人に準備完了の合図を送るのであった。

「準備完了です！」

「戦闘フィールドの形成は完了じゃ。何時でも始められるぞ。」

『オーケー。それじゃあ、R君・・・スタートをお願い！』

「おし！そんじゃ・・・試合・・・開始！！」

駱太郎はそう言うと、ブザーを押して試合の開始の合図を鳴らした。

そして、ついに始まる機動六課隊長陣ｖｓアイアンハーツの実力者達による模擬戦。

最初に動いたのは幸吉郎と対戦するフェイトであった。

「いくよ、バルディッシュ！」

〈Ｙｅｓ　ｓｉｒ.〉

フェイトは早速得意の高速戦法で幸吉郎の背後へと回り込み、鎌を振り上げた。

「はあああああ！！！！！！」

すると、幸吉郎はフェイトの想像を絶するほどの反応速度で攻撃を回避、そのまま大幅に距離を取った。

「外した！？」

「中々初動の動きは良かったぜ。見掛け倒しではなさそうだ・・・それじゃあ、俺も早速行くぜ！」

そう言うと、幸吉郎は昨日と同様独特の刺突の構えを見せると、一気に強靭な脚力を使ってフェイトに突進していった。

「“狼猛進撃・壱式『牙狼撃』”」

「！！（速い！！）」

〈Ｐｒｏｔｅｃｔｉｏｎ〉

フェイトは常人離れした幸吉郎の速さに驚愕し、慌てて防御を展開するものの、思っていた以上に刺突の威力が強力であったがために防御に皹が入った。

「なっ！？（只の突きなのに・・・防御に皹が・・・！？）」

「気を抜くなよ。“狼猛進撃・弐式『風花（かざばな）』”」

幸吉郎はそう言うと、雪の積もっているところから風に吹かれて飛んでくる雪の如く、相手に動作と速さが一定としない刺突（つき）を連続で加える弐式『風花』をフェイトの防御に加え、防御を破壊。

すると、フェイトは一度空高くへと舞い上がって体勢を立て直し、電撃を発射しようとする。

「バルディッシュ、フォトン・・・！！」

「それで避けたつもりか、金髪女！！」

すると、幸吉郎は強靭な脚力を駆使してフェイトが浮かぶ空へと飛び上がりそのまま刀の切っ先を向けてきた。

「！（“対空”の牙狼撃！？しかもこんな高度まで）」

フェイトは幸吉郎の攻撃の切り替えに瞬時に身体が反応しきれず、直撃は避けられたものの脇下の部分に刀の切っ先が突き刺さり、バリアジャケットが傷つく。

更に刺突によって来る衝撃は想像を遥かに超え、痛みは体中を駆け巡った。

「く・・・！」

「腰をひねって直撃を回避したようだな。思ったよりいい反応だぜ・・・だが、詰めが甘い！！！」

すると、幸吉郎はその瞬間刀を横薙ぎで払いフェイトの身体に峰打ちではあるが斬撃を加え、フェイトにダメージを与え蹴りの一撃で空中から落とした。

「のあああああああ！！！！！」

地面に激突したフェイトは下りてきて再び刺突の構えを取る幸吉郎を虚ろな目で見ながら幸吉郎の話を聞いた。

「刺突（つき）を外されても間髪入れずに横薙ぎの攻撃に変換できる。俺はあまり刺突以外での攻撃は得意じゃねえが、こういう場合も想定して稽古はしている。」

「ハァ、ハァ、ハァ、ハァ！」

「理解できたか？これが俺の狼猛進撃による狼の牙だ。速度が自慢のお前でも、同じ速さでは攻撃力の高いものが戦局を制する。まだ

まだ終わらせるなよ・・・態々峰打ちで済ませてやったんだ。本当なら即死は免れてなかったぜ。」

「（・・・この人・・・強い・・・魔法も何も使わないでのあの脚力・・・あれがこの技の最大の秘密か!?確かに、特殊技能と言うだけはある。最早人間の脚力じゃない・・・この勝負、気を抜けば即やられる・・・！）」

その頃、はやての方はというと対戦相手の写ノ神と向い合ったまま暫く硬直状態が続いていた。

「（リィンが居ない分・・・魔力コンロールは多少鈍くなるが・・・相手はたった一人。しかも私より年下や。ＳＳランク魔導師の実力・・・今此処で見せたる！）」

「どうしたよ?こないならこっちから行くぜ！」

「ごめんな。ちょっと考え事や。先行は悪いが取らせへんよ・・・写ノ神くん!!」

はやてはそう言うと、写ノ神の頭上高くへと飛び上がり夜天の書を開いてその中から攻撃技の一つを発動させるために、詠唱を始める。

「“来よ、錬鉄の刃。白刃の太刀。我が武器となりて、天地へと降り注げ”」

すると、その瞬間・・・写ノ神の頭上に浮かぶ謎の暗雲。

「・・・来るか・・・」

はやては魔力を収束させると、その暗雲の中から刃の雨を一斉に降らせる。

「刃の雨、“ブレイドスコール”！！」

その瞬間、写ノ神の下に降り注ぐ夥しい数の刃の雨。

写ノ神は幾ら非殺傷設定とはいえまともに喰らえば敗北は目に見えていると判断し、刃のギリギリ届かない死角へと逃げ切り、刃が納まると懐からトランプぐらいの大きさのカードを取り出した。

はやてもそのカードに気付き、何をするのかを考えていた。

「！？カード・・・！」

と、その時・・・・・写ノ神は一枚を取り出し呪文を唱えてはやて目掛けて投げつけた。

「“雷牙は我が力、激しきその雷電を今ここに宿せ”、『電（スパーク）』！」

すると、投げられたカードはカードそのものから激しい雷撃を発生させるや否や雷の竜を生み出しはやてに向かって行った。

「なっ！」

はやては咄嗟に別の魔法で雷の竜と衝突させ、技を相殺させた。

「で・・・電撃の・・・攻撃！？まさか、写ノ神くんも魔法が・・・！？」

「違うぜ。俺のは魔法とは違う・・・“魂札（ソウルカード）”。俺の持つ特殊技能にして、全５２枚で構成された自然の力を宿し力よ！」

「そ・・・そんなものが！！」

「ふん。強力な広域魔法な分・・・コントロールとチャージには時間が掛かることはさっきの攻撃でよく分かった。悪いが俺は広域でも瞬時に攻撃は出来るんだぜ。今からそいつを教えてやるぜ。」

そう言うと、写ノ神は更に二枚の魂札を取り出し詠唱を始める。

「（二枚の・・・魂札を取り出した・・・！？）」

「“その風刃と破壊力で以って、世の一切のものを切り裂け”。『風刃（ウィンドブレイド）』、融合！！『風剣（ふうけん）』！！」

写ノ神はそう言うと、カードを頭上に浮かべるとカードの力を融合させて風で生成されたサーベルを手に取りはやての方を向いた。

「なっ！二つの力が・・・合さりおった！？」

驚愕するはやてであったが、その瞬間写ノ神の剣戟が襲い掛かってきた。

「“風剣・崩斬の舞い”！！」

写ノ神は風剣を力いっぱい振り切ると、そこから発生する風圧をはやてに向けて攻撃していった。

襲ってくる風圧に耐え切ろうと空中で防御を張るはやてであったが、

風は防御をすり抜けはやての騎士甲冑をも切り裂いていく。

「くっ!!この・・・風圧と・・・風を切る威力は・・・・!!」

やがて、風圧によって体制を崩したはやてはそのまま壁の方へと飛ばされていった。

「きゃあああああああ!!!!!!」

壁に激突したはやては切り刻まれた強固な騎士甲冑を見て、驚きを隠せずにいた。

そんなはやてを見ながら写ノ神は近付きこう言ってきた。

「・・・『鎌鼬』・・・そいつを喰らったのは初めてのようだな。知っての通り、旋風の起きた場所で真空の渦が出来ると、物体はそいつに切り裂かれる。こいつは正にそれと一緒だ。尤も、こいつは俺の親友から教えてもらったもんを俺なりに工夫した奴だがな。」

中々に苦戦するフェイトとはやての様子を待機所で見ていたアイアンハーツのメンバーとユーノであったが、正直彼等の力を見誤っていたそうな。

「二人とも、中々やりおるの。」

「いや、まだまだ五分の一も出しちゃいねえさ!」

「そうでしょうか?それなりに力は出していると思いますよ。」

「みなさん、お強いですね♪三人もあれぐらいの能力は持っている

んですか？」

「そうですね・・・私達の能力もそれぞれ特徴的ですけど・・・全員が全員凄いという訳ではありませんから。」

「ふん！俺の万砕拳は超絶凄すぎて言葉では表現できないぜ！！」

「ただの横暴な拳の間違いじゃろ？」

「違げーよ！！！！！」

龍樹の冷めた言い方に思わず腹を立てる駱太郎。

「ははははは・・・・・・さて、残るのはなのはとドラさんか・・・・・そう言えば、ドラさんも刀使いですけど、幸吉郎さんとはどっちが強いんですか？」

「幸吉郎さんはあくまでも刺突が専門ですから、総合的な能力ではやはりドラさんが圧倒的に上ですよ！」

「それに・・・あやつには拙僧達ですら人目置く凄い能力を持っておるんじゃよ。」

「？凄い・・・能力ですか・・・お、なのはのアクセルシューターか。」

ユーノはそう言うと、今正に撃たれようとしているなのはのアクセルシューターに目を向けたのであった。

「レイジングハート！」

〈Ａｘｅｌ　ｓｈｏｏｔｅｒ〉

なのはは手加減など一切せずに、得意のアクセルシューターでドラに攻撃を仕掛けていく。

だが、ドラのほうは以前パラレルワールドでなのはの技のパターンを見切っており、ある程度の知識も有していたので、鼻で笑うとなのはのアクセルシューターをかわしながら驚愕の能力を発揮する。

「・・・フン。」

ドラはその瞬間、瞬歩の如く目にも止まらぬ速さでなのはの間合いを侵略し、なのはの後ろを取って刀を振り上げた。

「なっ！？」

なのはも慌てて後ろに振り返った見たところは、ドラは不敵な笑みを浮かべたまま刀を振り下ろしていった。

「お～ら～よ！」

「くっ！」

なのはは咄嗟に防御を展開させて、ドラの攻撃から身を守ると直ぐに距離を取って牽制をしながら何故ドラがあんな一瞬で自分の後ろに立つことが出来たのかを考える。

「（今のは何・・・！？一瞬で消えたかと思えば私の後ろに・・・まさかドラさんも死神さんの能力を・・・瞬歩・・・なの！？）」

と、なのはがそんな思案をしていたとき・・・ユーノからの念話が入ってきた。

「（いや、それは違うよなのは。）」

「（！ユーノ君！？どういう事？）」

「（あれは“縮地（しゅくち）”と言ってね・・・強靭な脚力で、初速からいきなり最高の速さに達して相手の間合いを侵略する幻の体技だよ。流派を問わず剣術界に広く流布されて伝えられ、決まると常人の目にはまるで仙術の類を使い地脈を縮め距離を短くし瞬間移動したかの如く映ることからそう呼ばれている。）」

「（じゃあ・・・ドラさんはそれを使って・・・）」

「（そう言うこと。気をつけなよ、なのは。ドラさんにはまだ、未知なる特殊技能が隠されているとのことだから。）」

「（うん、分かったよ。ありがとうね、ユーノ君！）」

なのははユーノからの助言を受けると念話を終え、再び敢えて攻撃をしてこなかったドラに向って杖を向ける。

「ユーノさんとのお話は済んだかい？」

「こっちのことはお見通しってわけですか。成程・・・でも、本当の勝負は此処からです！」

〈Ａｘｅｌ　ｓｈｏｏｔｅｒ　ｔｅｎ　ｓｐｅｅｄ〉

なのははそう言うと、魔法陣を展開して通常のアクセルシューターの十倍の数とスピードを有した誘導弾をドラに向けて一斉に発射する。

始めてみる術式に些か焦るドラであったが、持ち前の冷静さと豊富な戦闘経験から直ぐに身体を慣らすと先程同様縮地を駆使して回避を続ける。

「ほう～～～向こうのなのはと比べたら随分数も増えてスピードも速くなってるな。ユーノさんの教えの賜物か何かかな・・・！？」

と、ドラがなのはの方に目を向けた瞬間・・・なのははＡＲカートリッジを装填しマキマム・ブレイドへと移行させていた。

「ＡＲカートリッジ、セットアップ！」

〈Ｄｒｉｖｅ　ｉｇｎｉｔｉｏｎ〉

ドラの目の前でレイジングハートの形状が独特の巨大な刃を持った刀剣の形に姿が変わると、なのはは一気に加速させてドラに向って刃を振り下ろした。

「はあああ！！！！！！」

ドラは直ぐに鞘に一度納めていた刀を抜くと、なのはのマキシマム・ブレイドを凝視しながら激しい鍔迫り合いを繰り広げる。

「何だい、それ？見たこともない形だ・・・・・・」

「ユーノ君が私のために造ってくれた、新型カートリッジシステム。ARカートリッジです。これはそれを使った時のレイジングハートの新たな姿・・・マキシマム・ブレイド。」

「成程、面白いじゃんか。流石はユーノさんだ・・・でも、幾ら形や能力が変化したても使い手が未熟なら、武器(あいぼう)は完全に力を発揮できない。そうだろ?」

「くっ!」

「ユーノさんの教えの序にオイラからも一つ刀の扱い方を教えてやるよ。刀を使うということがどういうものなのかを。人侍剣力流・・・」

そう言うと、ドラはなのはと距離を取ると神経を研ぎ澄ませ技を発動させようとする。

「!」

〈Ｐｒｏｔｅ・・・〉

なのははそれに気付いたとき、直ぐに防御を展開させようとしたのだが、その前にドラの一瞬の攻撃がなのはの身体に叩き込まれた。

「『刹那乱閃』」

技がなのはの身体に叩き込まれた瞬間、なのはは衝撃で後ろのほうへと吹き飛ばされてしまう。

「きゃあああああああ!!!!!!!!!」

「なのは！」

思わず声を上げてなのはの名前を叫ぶユーノ。

なのはは吹き飛ばされながらも体制を持ち直し、エクセリオンバスターに匹敵する強化砲撃魔法の一つ、マキシマムバーストを発射する。

「くっ！！マキシマム・・・バスター！！！」

「そうこなくちゃね！！」

ドラは胸躍らせながら何と真正面からなのはのマキシマムバーストに向って突撃して行ったのであった。

それを見ていた駱太郎達も固唾を飲んで見守った。

「ドラさんも勝負に出るようですね！」

「やるのか・・・あいつの・・・本気の力の解放を・・・」

「さぁな。」

ドラはそう言うと、撃たれたマキシマムバーストを突進力と剣の力だけで押しのけるようにして切り裂いていった。

これには思わずユーノも驚愕の表情を浮かべる。

「なっ！？なのはのマキシマムバスターを剣と突進力だけの力で圧

倒していく・・・！何て人なんだ・・・！」

「行くぞ、人侍剣力流・・・・・・！！」

ドラはマキシマムバスターを突破すると、次なる技を繰り出そうと剣を振りかざした・・・その時だった。

突然、訓練場全体に響き渡る緊急召集シグナルの音。

「「「

「五分隊の入念な捜査と、ユーノの協力があって漸くな・・・場所は２１世紀の日本、東京お台場臨海付属。そこにある改装中のビルだ。」

「２１世紀か・・・よし、早速乗り込むよ。みんな、準備して！」

「「「「了解！」」」」

幸吉郎達は早速任務に必要なものを準備し始める。

「僕達も行きますよ、ドラさん。」

「ええ、勿論。アンゴルモアはあなた方のお探し物・・・当然同行するのは自明の理です。」

「ほんなら、私も出動と行こうか！」

「「「うん！」」」

「それじゃあ、全員四分隊のタイムエレベーターに移動する。アイアンハーツ・・・出動！」

ドラ達１０人は早速四分隊の管轄である８０階まで降りると、時間移動を可能とする専用のタイムマシーン、タイムエレベータまで案内される。

初めて見る全く予想外の形をしたタイムマシーンの外見に呆然とするなのは達。

「これが・・・タイムマシーン・・・・！？」

「思っていたのと随分違うな・・・もっとこう・・・あれ的なイメージをしてたんやけど・・・」

「ドラえもんって言うんじゃないだろうね。アニメに影響されるな・・・実際のタイムマシーンなんて結構期待はずれなもんだよ。それに、乗り物型もあるにはあるけど維持費とかの問題でこっちのほうが都合が良いのさ。」

ドラの口から離される如何にも現実的は内容に思わず苦笑いを浮かべる四人。

「現実的は話ですね・・・」

「にゃははは・・・夢が壊れそうだね・・・」

「夢を見るなら帰ってからベッドの中で見なよ。そら、乗った乗った。」

ドラはそう言うと、全員を何とか狭い機内に押し込むと行き先の時間と場所を算定してエレベーターのスイッチを押した。

その瞬間、エレベーターは降下を始めて過去へと移動を開始する。

果たして、過去で待ち受ける刈谷の招待とは一体何なのか！？」

教えて、ユーノ先生！

な「今回は、ユーノ君の技について私が教えるね♪」

な「基本的にユーノ君の得意な魔法はバインドを始めとする結界・治癒・防御と言った補助魔法。魔法の構成をデバイスなしでやってのけてしまうほどの頭の良さと、誰にも気づかれずにバインドを仕掛けられる驚異的な計算速度、そしてなりより私のそれを容易に上回る防御の硬さが魔法におけるユーノ君の強み。」

な「死神としてなら、多種多様な斬魄刀から出される特殊な攻撃や鬼道の併用。更には高い身体能力がよりユーノ君を強くしたんだね。」

ド「どチートにもほどがあるけど、ユーノさんなら許してやってもいいな。これが他の誰かだったらオイラぶち切れてたと思うよ。」

ユ「具体的に誰です？」

ド「そうですね・・・・・・あ、あいつ！腹黒提督のクロノとか！！」

それを聞くと、ユーノとなのはは思わず笑ってしまう。

ユ・な「ぷっ！（いけない、いけない・・・！！）」

ユーノ達が留守の間、事務仕事を担当している鬼太郎・浦太郎の二人の下へギンガが箱詰めの郵便物を抱えて持ってくる。

ギ「郵便物が届きました。はい、どうぞ！」

ギンガは数枚の葉書を鬼太郎に手渡す。

鬼「おい、ギンガ。残りは？」

ギ「はい。白鳥さん宛てです。ほとんど本局と地上本部に務める女性局員からですね・・・」

浦「白鳥さん、何だかんだ言って最近好感度上げてるらしいからね♪」

鬼「け！何であんな鳥がもてるのかが全く分かんねぇよ！」

ギ「そ・・・そうですよね！鬼太郎さんのほうが良いところいっぱいありますもんね！！」

鬼「例えば・・・？」

浦・ギ「・・・・・・・・・・（二人沈黙）」

鬼「ねぇのか！！！！！」

Phantom mind　フェイトの場合

＞i13312—709＜

この世界では具体的に過去へと旅行をすることをタイムトラベルと称し、ＴＢＴのような犯罪が絡む捜査の場合はタイムムーブと称する。

ドラ達は目的の場所に到着すると、人目を気にしながらビルの陰から出てきた。

ついた時には既に夕陽が茜色に染まっていた。

「着いた、東京だ。」

全員は目的の場所の方角に佇む臨海付属の改装中のビルのほうへと目を向ける。

ユーノはそこから紛れもないアンゴルモアの反応を感知する。

「確かに・・・あの向こうから強いアンゴルモアの反応を感じる・・・」

「間違いないようだね。」

「よし、行くぜ！」

駱太郎の掛け声と供に全員はビルに向って走り出していった。

ビルに向っていく最中、彼等の前に現れたのは派手な色の背広を着たちょっと気障な表情をした男であった。

男はドラ達の方を向くと何処かのイベントの会場を訪ねようとしてきた。

「ちょっと・・・すみません。」

「あ？」

駱太郎は急いでいる所為もあってか、男のその何所か気取ったような気障な態度に苛立ちを感じていた。

「全日本心の演歌・・・カラオケ大会の予選会場は、どちら・・・」

「知るか！！！！！！」

駱太郎はそう言うと、一般人であることも構わずに渾身の力を込めて顔面を殴りつけ、男を吹っ飛ばして気絶させた。

「な！」

男の鼻からは鼻血が溢れ出ていた。

「「「「「あ・・・」」」」」

「「「「「やっちゃった・・・！」」」」」

全員は駱太郎の行動に何も言えなくなってしまった。

暫くの沈黙が流れると、ドラは駱太郎の下まで言って大声で叱り始める。

「コラ！！！！！！一般人を殴れっていつ教えたの！！！！！！」

「任務の邪魔だ。悪いが少しの間眠ってもらうぜ。」

全く悪びれる様子もなく、何所か格好つけたい方でそう口にする駱太郎の態度にドラを始めとするアイアンハーツの男性陣が拳を鳴らして、一斉に駱太郎の顔面を殴りにかかった。

「「「「眠るのは・・・てめーじゃ！！！！！」」」」

「ぐおおお！！！！！！」

殴り飛ばされた駱太郎であったが、その後更に四人による集団リンチを受ける。

「コンノヤロー！！！誰があとで始末書書くと思ってるの！！！！！」

「少しは兄貴の言葉ちゃんと聞きやがれ！！！」

「だからテメーは単細胞なんだよ！！！！」

ドラ達の行動を見ていたユーノは流石にまずいと判断し、止めに入ろうとする。

「あの・・・みなさん！！そんなことしてる場合じゃ・・・！！」

すると、そんなユーノの言葉を無視してドラ達四人は物凄い形相で振り返り理不尽な言葉をぶつけて来た。

「「「「じゃかしい！！！！少し黙ってろ！！！！」」」」

これには流石のユーノやなのは達も何も反論出来ずにいたのであった。

「あ・・・はい・・・」

お仕置きが済んだ後、全員は終に刈谷が潜伏していると思われる改装中の双子のビルを緊張した様子で仰ぎ見るのであった。

「此処だな・・・」

「いよいよですね。しかし、刈谷は本当に此処にいるのでしょうか？」

「信じるしかねーな。しかし、些か不安もあるな・・・何しろ俺達七人じゃな・・・」

すると、それを聞いていたユーノ達は苦笑しながら七人にも聞こえるように軽く咳払いをして自分達のことを思い出させる。

「あ・・・ん、ん！！」

ユーノの咳払いを聞いて、目を点にしながら徐に後ろへと振り返るドラ以外のメンバー。

そして、六人は四人を一瞥すると再びビルに目を向けてこんな事を口にする。

「・・・・・・俺達七人じゃな・・・」

「他にまともに戦える奴いねえかな・・・」

写ノ神と駱太郎の言葉を聞いたユーノは握っていた杖に力を入れて、思わず込み上げてくる怒りを爆発させそうになった。

「僕らがいるでしょうが・・・ここに・・・！！」

ドラは深い溜め息をつくと、そんなユーノに向って謝罪の言葉を掛ける。

「すみません、ユーノさん・・・後できつく叱っておきますので・・・」

全員は緊張した様子でビルの中へ入り込んでいく。

電気も何もついていないところを慎重に歩いていくドラ達であったが、暫く歩いた時・・・突然建物の明かりがついたかと思えば、目の前に現れたのは想像もしていなかったものだった。

「「「

を書き始めた。

そして、静かに合掌をするや否や足元に現れたのは朱雀皇子家の家紋が描かれた独特の曼荼羅。

「「「「！」」」」

突然のことに、驚きを隠せないなのは達一向。

そして、準備の整った茜は地面に両手を突いて召還獣を呼び出すのであった。

「畜生祭典（ちくしょうさいてん）・巨の陣！出てください、真之介君！！」

すると、その瞬間茜の足元から現れたのは・・・キャロのフリードリヒの真の姿と同じくらいの大きさをした青い皮膚をした竜であった。

「なっ・・・竜召還やて！？」

はやて達は突如として現れたそれを見たとき、そう感じたがドラが直ぐに横から口を挟んできた。

「違うよ。こいつが茜ちゃんの特殊技能・・・“畜生祭典”だよ。」

「畜生祭典！？」

「朱雀王子家の当主が代々受け継いできた血で契約をすることであらゆる畜生を思うがままに操る力。茜ちゃんはその朱雀王子家十代目の当主なのさ。」

青色に輝く竜、真之介を召還した茜は真之介の背中に乗ると襲い掛かる猛獣達の攻撃を退けながらドラ達に先へ進むように指示を出す。

「ここは私達が何とかします。ドラさんとなのはさん達は上の階へ急いでください。写ノ神君、龍樹さん！」

「おう！」

「久し振りに暴れるか！」

茜にそう言われると、写ノ神と龍樹も臨戦態勢に入って向って来る猛獣達の相手を買って出たのであった。

写ノ神は先程の魂札を使い、龍樹は円い鈴がついた杖を使って猛獣達の相手をする。

ドラは三人の気遣いに感謝して、ユーノ達を連れて刈谷の下へと急ぐことにした。

「今のうちだ！ユーノさん、行きましょう！」

「はい！」

ユーノ達はドラの後に続く形でエレベーターの中へと進んでいく。

それを見た猛獣の数匹がドラ達に向っていくが、龍樹が直ぐに止めにかかる。

「この先へは行かせんぞ！三法印（さんぼういん）・諸行無常印（しょぎょうむじょういん）！！」

龍樹が猛獣の一体に杖を向けてそう口にすると、突如地震が発生して印をかけられた一匹以外の猛獣の多くが突如として消え失せた。

先程まで自分達を襲いかかろうとしていた猛獣が目の前から消えたことに驚きを隠せなくなるなのは達。

「あれは!?」

「爺の特殊技能、三法印だ!元々爺は諸国を旅していた行脚僧でな、そんときに仏さんから授かったとぬかしてやがるが、果たしてどうだかな!?」

「案外、解脱の中で見出した境地と言ったほうがいいかもしれないけど・・・」

ドラはそんなことを口にしながら、エレベーターのボタンを押して扉を閉める。

その頃、屋上のほうで東京の町並みを沈む夕陽と供に眺める男が一人木材が至る所に置かれてある場所に仁王立ちをしていた。

男は上着のポケットに納められたアンゴルモアを手で握りながらドラ達が向っていることを気配で感じていた。

「ふん・・・のこのこと入って来たか・・・見かけぬ連中もいるが、まぁそれも良い。どれ・・・私も少し遊んでやるとするかな。こいつを使って・・・」

そして、暫くするとエレベーターが屋上へと到着し中から出てきた

ドラ達は敵の奇襲に警戒しながらアンゴルモアの反応を追っていた。

「アンゴルモアはこの屋上からです。何所かに刈谷も潜んでいるはずですから、気をつけて下さい。」

「ええ。」

ユーノの言葉を聞いて、ドラも警戒を更に強める。

しかし、駱太郎はそんな雰囲気をぶち壊すかのように一人勝手な行動を取り始める。

「おっ！おおおお！！！！！随分いい眺めじゃねえか！！！」

駱太郎はそう言うと、ドラ達を他所に階層途中の建物の端へと向って走り出した。

「あ、っておい！！！駱太郎！！！！てめえ何所行くんだよ！！！」

見かねた幸吉郎が駱太郎を追って走り出す。

駱太郎は足場が一枚だけの板の上を器用に歩いていくと、今にも折れそうな板の足場など全く気にした様子も見せずに東京の夜景を見て感動していた。

「スゲー！！！！！百万ドルの夜景だぜ！！！！！」

それに対して、足場を気にして這うように板の上を慎重に這うようにて駱太郎のほうへと向っていく幸吉郎。

「おい、駱太郎!!!止せよ!!!!!危ねーだろ!!!!!」

すると、その時・・・ドラがエレベーターの更に上のほうにあるオブジェの上に立つ怪しい人影を見つけ、全員に知らせる。

「なっ!?あそこに人影が!」

「行こう、みんな!」

ユーノはそう言うと、なのは達を連れて設置された階段を伝って上り始める。

それを見ていた駱太郎も更に上のほう眺めも良さそうだと判断し、幸吉郎を飛び越えても解いた場所までジャンプしていった。

「お!あっちのほうが眺め良さそうじゃねえか!!」

すると、その時・・・幸吉郎の座っていた板が折れてしまい幸吉郎はそのまま落ちそうになったのであった。

「え!?のあああああ!!!!!!」

あまりに突然のことに幸吉郎は一瞬だけ、心臓が止まる想いをしたそうな。

幸吉郎はへし折れた気に何とか掴まりながら、これ以上板が折れないことを祈りつつ何とか這い上がろうとした。

一方、階段を上りながら人影のほうへと目指していたはやて達であ

ったが、はやてはその時身体の中の魔力が一切結合できなくなっていることに気がついた。

「何やここ・・・！？魔力が全然結合できん！！」

「ＡＭＦと同じ力が発揮されているのか・・・！？」

「という事は・・・空も飛べないってこと！？」

なのははそれに気付くと、ふと階段の下を徐に覗いて見た。

下は正に落ちたら一巻の終わりという表現が実によく似合うほどに高く、そして恐ろしく暗い空間が広がっていた。

全員が階段を伝って最上部へと上り詰めたとき、そこで待っていたのは紳士的な雰囲気を漂わせる中年の男であった。

「ふふ・・・待っていたよ、ＴＢＴの諸君。」

それを見たドラは早速、その中年の男に返事をする。

「態々のお出迎えありがとう・・・元東京大学光学研究所所長兼名誉教授、刈谷総一。」

「それじゃあ、この人が！？」

「漸く社場に姿を現しやがったか・・・これで心後らず殴れるぜ。」

駱太郎はそう言うと、自分の拳を鳴らして敵意を剥き出しにするが・・・刈谷は慌てた様子も見せず逆に挑発的な言動をしてきた。

「大層な物言いだな・・・だが、それは無理な話だ。」

刈谷は上着からアンゴルモアを取り出し、全員に見せ付けた。

アンゴルモアを目撃し、驚愕するユーノ達。

「「「「！アンゴルモア！？」」」」

「あれが崩玉の欠片か・・・・・・確かに肌でビシバシ感じてくるよ。刈谷、そいつを大人しく渡してもらおうか。そいつは彼ら時空管理局の探し物だ。お前が持っていても碌な事には使わないからな。」

「使い道も見ていないのにそんなことを言うとは・・・何とも軽薄な連中だ。」

「軽薄結構。組織とはそんなものだ。何かに属している以上、オイラ達はそこのルールに従わなければならない。例え、中身が腐っていようがな・・・だがそれでも、己の心までは裏切るつもりはない。己の信じたことをオイラはただするだけだ・・・お前を逮捕することが即ちオイラと組織の見解の一致ならそうするまでよ。」

「成程・・・それがお前の・・・いや、貴様らの正義という訳か・・・」

すると、そんな刈谷の声に反応してきたのは何時の間にドラの隣に立つ汗まみれの幸吉郎であった。

「正義なんてもんで片付けんじゃねよ。俺達はそんな言葉で動くよ

うな連中じゃねえ・・・だが少なくとも、俺は兄貴と同じ考えに至ってることは間違いないがな。」

幸吉郎の言動は傍から見ればかなり格好いいのだが、体中から汗が流れ出ていたことでそれすらも壊されてしまい、そんな幸吉郎を見るなり心配そうに声を掛けるなのは。

「大丈夫ですか、幸吉郎さん?汗だくですけど・・・」

「何処かのバカの所為でこうなったんだよ!!!!」

「あ、誰のことだ?」

「オメーだよ!!!!」

すると、二人の息の合った会話を見ていた刈谷は突然笑い出した。

「ははははははははは!まるでコントだな!流石はテレビでも有名なお笑いトリオ、サムライドラーズと言ったところか!」

「え!?ドラさん達・・・テレビにも出てるんですか!?」

フェイトは意外なドラ達のもう一つの一面を聞いて、思わず本人に確かめてみた。

「副業でね・・・オイラ達はサムライドラーズって芸名で色々看板番組持ってるの。って、そんなこと今はどうでもいい!!さっさとそいつを渡せ!!」

「ふん。欲しければ、私を捕まえてみるがいい。」

すると、その瞬間アンゴルモアを持った刈谷はドラ達の前から姿を消した。

「消えた！」

「高速で移動しやがって・・・追うぞ、みんな！」

「「「「「はい！」」」」」

ドラ達は自分達の足を使ってオブジェの中を動き回り、逃げ続ける刈谷を捕まえようとするが、人数も人数だけに衝突もかなり多く中々刈谷を捉えられないでいた。

「くっ！！ちょこまか、ちょこまか・・・苛々するぜ！！」

苛々を募らせていく駱太郎や他のメンバー。

魔法と霊力を刈谷の力によって一切行使が出来ないユーノとなのは達は自力だけで刈谷を追い詰めようとするものの、それは中々厳しいものである。

はやては追いかけていくうちにうっかり転んでしまい、そのはやての背中を踏みつけながら刈谷やドラ達、更にはなのは達は通り過ぎていく。

「ぐえ！ぐえ！ぐえ！ぐえ！ぐえ！！踏まんといてや！！」

「「「あ、御免！」」」

はやての言葉を聞いて漸くそのことに気付いた三人は、手を合わせて謝罪の言葉を送る。

そして、オブジェの中から出てきたスピードを落とした刈谷を頭上から狙うはやて達。

しかし、運悪く捉え損ねてしまいはやてはドラと幸吉郎にまたしても踏まれてしまう。

「ぐえええええ！！！！」

そして、漸く四方に囲んで刈谷を追い詰めることが出来たはやて達。

絶体絶命の状況に追い詰められた刈谷。

すると、頭上から聞こえてくる駱太郎の声に思わず刈谷は反応してしまいアンゴルモアを投げてしまった。

「おい、パスパス！」

「ほい！あっ！！」

それを見たなのははいち早く遠い場所へと移動し、駱太郎にアンゴルモアを投げるように声を掛ける。

「駱太郎さん、パスパス！！」

「おう！！受け取れ、姉ちゃん！！」

「あ！！飛ばしすぎです！！」

勢い余った駱太郎の投球は軌道を大きく外れてなのはがいる所よりも遠くへと向ってしまった。

慌てたなのはも直ぐに全速力でアンゴルモアのほうに走り出し、ユーノ達もそれを追おうとしたが、刈谷に道を阻まれてしまいドラ達五人は正面衝突を起こしてしまう。

「「「「「のあああ！！！」」」」」

なのはは何とかアンゴルモアの目の前に移動して、キャッチをしようとしたがその瞬間刈谷がなのはを押しのけアンゴルモアを奪ってしまった。

「きゃあああ！！！」

なのははバランスを崩しながら別の場所へと勢いで移動していき、何時しかなのははビルの端にある円形状の先端のほうで一人落ちそうになっていた。

「うわわわわわわわわわ！！！！！！！！ああああ！！！！！！！ううううう！！！！！！！へっ！へっ！へっ・・・へへ・・・きゃあああああああ！！！！！！！！」

そして、とうとうバランスを保てなくなったなのははそのまま滑り台の要領で傾斜のあるところを滑り落ちていった。

「「なのは！！！！！！」」

直ぐになのはを助け出そうと全速力で駆け出していくユーノとフェ

イト。

二人はなのはの前にやって来ると両手を使ってなのはを止めようとしたが、一向に止まる気配などない。

「「「あああああ！！！！！！」」」

しかし、それでも諦めずにいたユーノとフェイトはギリギリのところでなのはを止めることは出来たもののその衝撃今度はフェイトが転がりビルから落ちそうになった。

「！！あああああ！！！！！え！？」

目の前に飛び込んでくる地上６００メートルの絶景がフェイトの身体を竦ませたが、そんなフェイトの腕を掴んで引っ張り上げたのは下で戦っていた写ノ神であった。

また、写ノ神の他に茜と龍樹も駆けつけなのはとユーノの傍にいた。

「危ないところでしたね、フェイトさん。」

「茜・・・それに二人も・・・！？」

「フェイトちゃん、大丈夫！？」

「うん、なのはも大丈夫なようだね。」

ユーノに抱えられた無事な様子のなのはを見て、内心かなりほっとするフェイト。

すると、写ノ神がそんなフェイトに刈谷の居場所を尋ねてきた。

「おい、刈谷は何所だ?」

「え、下は!?」

「片付けて来たぞい!」

龍樹はそう言うと、下で取ってきた証拠の写真をフェイトに見せる。

そこに映し出されていたのは、へのへのもへじの形でくたばった猛獣達の姿であった。

その後、急いで上まで戻ったユーノ達はドラ達と合流を果たして足場が木の板で敷き詰められた場所に居る刈谷を見つけると、龍樹は持っていた杖をドラに預けてその場にあった鉄鋼を拾い上げてこう言った。

「観念せい!もう逃げ場はないぞい!」

すると、そんな龍樹に向って刈谷は冷静な態度でこう口にする。

「誰も逃げてなどいない。」

はやてもそんな龍樹に近付き、刈谷の様子を窺っていたときだった。

龍樹が暫くの沈黙の後にこんな事を言ってきた。

「・・・・・実は・・・・・・御主とは友達になれそうだと思うのじゃが?」

「はい！！？？」

訳の分からない龍樹の突然の発言を間近で聞いていたはやては思わず声を上げて驚いた。

すると、そんな龍樹の言葉を聞いた刈谷もはやての予想と反した返事をしてきた。

「実は俺もだ。」

これには龍樹もはやても驚きの表情を見せた。

「おお！本当か！？」

「嘘だ。」

しかし、直ぐに刈谷は真顔でそう口にした。

「あ・・・あちゃ・・・」

それを聞いていたはやては呆然とする龍樹の様子が徐々に怒りで支配されていくことに気付き、龍樹は鉄鋼を握り締める力を強くしていった。

「・・・年寄りの・・・冗談を・・・性質の悪い言い方で返しよって・・・許さねー！！！！！！」

そして、龍樹の怒りが頂点に達すると言動を一変させて龍樹は持っていた鉄鋼をとても七十七歳の老人とは思えない力で刈谷に投げつ

け、それだけでは飽き足らずに足元の木の板も手当たり次第に放り投げていく。

しかし、どれもこれも刈谷には一発も当たらず刈谷は軽快にかわしていく。

「そりゃああ！！！そりゃああ！！！！そら！！！そら！！！！ぬおりゃああ！！！！！」

と、龍樹は周りのことなど完全に見失っておりはやてが立っていた足元の板まで取り外してしまったことにより、はやてはそのままビルの下へと落下していった。

「わっ！？あああああああああ！！！！！！」

はやては何とか鉄棒に身体が引っかかったことにより、地面に落下することは免れた。

自力ではやては鉄棒に手を掛けて身体を持ち上げる。

「う～～～～～～！！！！でっは！！はっ、はっ、はっ、はっ！！！！！」

刈谷はアンゴルモアを持ったままなのはが落ちた円形状のフィールドに立ち尽くすと、迂闊に飛び込んでいけないドラ達九人の方を向く。

「迂闊に近づけない・・・一体どうすれば・・・！？」

「魔法が使えない上に・・・肉弾戦は私達の不得意分野だかね。」

すると、なのはとフェイトの言葉を聞いた駱太郎がついに自分の見せ場だと判断し、自分が刈谷との一対一の勝負をすることを伝える。

「だったら、此処は俺がやる。漸く俺の特殊技能を見せるときだぜ！」

「暴れすぎるなよ、単細胞。」

「うるせー！」

写ノ神にそう言うと、駱太郎は徐に刈谷のところ目指して歩き出した。

その間、はやては何とかなのは達の下に上がろうと床下から板を上げて上がってこようとしていたが、運悪く駱太郎に板子と踏まれてしまった。

「う・・・！！！あっ！！！」

駱太郎が刈谷に向かっていく様子を見たユーノはドラに駱太郎の能力を尋ねる。

「ドラさん・・・駱太郎さんの特殊技能とは・・・？」

「その拳で全てのものを破壊する力・・・その名も“万砕拳（ばんさいけん）”。前にオイラの作った政経のテストで不良債権って書くところをそうやって書いていた気がします。」

「何所をどう間違えたら不良債権が万砕拳になるかな・・・」

「さぁ・・・・・・」

聞いていたなのはやユーノ達は何故そう言う答えになるかが分からなかった。

刈谷とある程度の距離で向かい合った駱太郎は不敵な笑みを浮かべると、刈谷を挑発してくる。

「素手でいいのか？」

「貴様こそ。」

全員が固唾を飲んで二人の様子を見ていた丁度その時、はやてが龍樹の直ぐ近くにあった先程の足場から何とか這い上がってきた。

龍樹はそんな疲れ切った様子のはやてを見るなりこう口にした。

「おい、お主！何所へ行っておった！？」

「龍樹さんの所為やろ！！」

そんなことはさて置き、刈谷と駱太郎は向かい合い暫くの沈黙が流れた後・・・二人は徐に近付いていき、最初に拳打を仕掛けたのは駱太郎であった。

「うらあああ！！！！」

駱太郎は得意の徒手空拳を駆使して、刈谷に打撃を加えようとするものの刈谷は駱太郎の動きまるで最初から分かっているかのように

警戒にかわす。

「この！！！玉砕！！！！！」

そんな刈谷の動きに翻弄されながら駱太郎は玉砕を始め、蹴りも加えた連続攻撃に入るが刈谷には全く当たらず、刈谷は空中で半回転すると円形状のフィールドの端に移動する。

「うらあああああ！！！！！！」

駱太郎はそれを追って、再び拳打と蹴りを混ぜた攻撃を汗だくになりながら攻撃を続けて行ったが、刈谷は余計な動きを一切見せずに足の動きだけで攻撃を回避していく。

「ふん！！！この！！！！逃げんな！！！！おら！！！おらおらおら！！！！オラ！！！！！のああ！！！」

と、その時刈谷がその場から動いたことで体制を崩した駱太郎は身体をそのまま前に倒れそうになってしまい、今にも落ちそうであった。

「「「「「「「「「ああ！？」」」」」」」」」

そんな駱太郎を見つめるドラやユーノ達は言葉すらも失った。

駱太郎は必死で身体を動かしながら何とか体制を元に戻そうとする。

「あらららららら！！！！！ららららららら！！！！！」

そして、どうにか落ちずにその場に手をついた駱太郎であったが、

既に緊張と死の恐怖から息が上がりきっていた。

「へ！へ！へ！へ！！！」

そんな駱太郎の様子をずっと傍らで見ていた刈谷はニヒルな表情でこう呟いた。

「変わったダンスだな。」

「何！！！てめえ！！！」

その言葉に腹を立てた駱太郎は立ち上がって再び拳打と蹴りを今度は先程よりも早い動きで浴びせ続ける。

尚、拳には今迄とは違い炎や氷などのような特殊な力が宿っていた。

「炎砕！！！！玉砕！！！風圧砕！！！水砕！！触砕！！！雷撃砕！！！！」

だが、刈谷はそんな駱太郎の攻撃を以ってしても一切動じず、駱太郎が振り上げた右足を右手で掴むと、こう口にする。

「退屈だな。」

「何！？のあああ！！！」

駱太郎はその瞬間、刈谷の足蹴りを暗いその場に倒れこんだ。

そして、立ち上がった瞬間駱太郎の身体へと的確な急所を突いて拳打と蹴りを加えてくる刈谷。

「ぶっへ！！！のああ！！がああ！！！ぐっ！！！」

刈谷の攻撃をもろに受けた駱太郎の身体全身打ち身だらけであった。

そんなふらふらの駱太郎を見た写ノ神、茜、龍樹は直ぐに駆け寄り身体を支えた。

「あやつ・・・とんでもなく身体能力の高い奴じゃの！」

「力だけが取り得の単細胞を倒すなんて・・・！」

「一対一じゃ無理ですよ！」

三人はニヒルな表情を浮かべる刈谷の方を見た後、色々考えた結果・・・写ノ神が一つの方法を思いつく。

「だったら・・・みんなで行けばいいだけの話だ！」

「「おお！」」

三人はそう言うと、刈谷と向かい合うと徒手空拳の構えを取って一斉に向かって行った。

「「「いやあああああああ！！！！！」」」

三人は駱太郎の代わりに刈谷に攻撃を仕掛けていくが、刈谷はそんな三人の動きを的確に把握しながら逆に攻撃を仕掛けていく。

すると、そんな攻撃を入れられていく三人を見ていた駱太郎が再び

刈谷に向かって行った。

「くっ・・・まだだ!!!!!!!」

しかし、四人になっても戦局は刈谷のほうが有利であった。

刈谷は傷一つ受けないまま逆に四人に拳打と蹴りを仕掛けているのだから。

そんな戦う四人の様子を見ていた幸吉郎が、不満の声を上げた。

「大の男が四人がかりで倒せないのかよ!!!」

それを隣で聞いていたドラは真顔で幸吉郎にこう言った。

「茜ちゃんは女だよ。」

すると、業を煮やしたはやてが我慢できなくなったのか自らも動き出す。

「もう見ちゃいられへん!なのはちゃん、フェイトちゃん!私らも行くよ!!」

はやては二人にそう言うと、逸早く刈谷の下に向かって行った。

「は、はやて!!」

「ちょ!!待ってよ、はやてちゃん!」

慌てた二人もはやての下に駆け出していったが、ユーノはそんな三

人に向って戻って来るように声をかけるがもう既に遅かった。

「おいおい、三人とも！」

三人も駱太郎達に加わり徒手空拳で刈谷を倒そうとするが、悉く返り討ちにあって行き、攻撃を受けたはやてはその場に倒れこみ、打ち込まれた腕を押さえながら痛みに苦しんでいた。

「いたたたたたた！！！！！！」

そんなはやての様子を見ていたドラ達三人は唖然とした。

「な！？はやて、弱い！！」

「全く言わんこっちゃない。仕方ない・・・ドラさん、僕達も行きましょう。」

「分かりました。幸吉郎、オイラ達も加勢だ！」

「了解！」

ドラは幸吉郎にそう言うと、ユーノと供になのは達を助けようと援軍に加わるもののそれでも尚、刈谷はこの人数を相手に平気な表情で攻撃を決めていた。

そう、あの翡翠の魔導死神ユーノ・スクライアと現代に蘇った猫侍サムライ・ドラの力量を持ってしてもなのだ。

そして、時は流れた・・・・・・・・・

何時しか彼ら全員は老人の姿へと変わり果てて、すっかりよぼよぼとなった老人のユーノはそれでも刈谷に拳打を繰り出そうとする。

「ほげ～～～～～～～～！！！」

しかし、老人の動きなど最早止まっているも同然の刈谷がそれを避けきれぬ筈もなく、容易にかわすとユーノの背中に拳打を加え返り討ち。

一方のなのはは身体の自由が利かなくなったフェイトを肩に抱えながら最後まで諦めぬようにと声を掛ける。

「し、しっかりするんじゃ・・・・・・・」

と、その時・・・・・全員はこのことが明らかに可笑しいことに気づき訂正を求めてきた。

「「「「「「「「「「これじゃ、流れ過ぎだって！！！」」」」」」」」」」

まっ、こんな冗談はこれくらいにして・・・・・・元の時間に戻すとしよう。

ドラとユーノ達は全員の力を結集させて刈谷に攻撃を仕掛けていったが、結局返り討ちにあって一発も攻撃を加えることのないまま夜明けを迎えようとしていた。

息一つ上げずにニヒルな表情を浮かべる刈谷と、完全に息を上がらせるドラ達とユーノとなのはの八人。

「「「「「「「「「はっ、はっ、はっ、はっ、はっ、はっ！！！」」」」」」」」」

それに対して、八人の後ろで倒れ付して息を上がらせるはやてとフェイト。

「こんな奴に勝てっこないわ！！！」

「私・・・もう限界・・・！！」

「出鱈目な力使いやがって・・・ん！？」

と、その時・・・ドラの通信端末に長官昇流からの緊急連絡が入る。

『お、ドラ。大丈夫か？』

「長官！何ですか、この非常時に！？」

『実はよ・・・刈谷のことに関して一つ言い忘れてたことがあってさ、お前ら。』

「「「「「え！？」」」」」

『刈谷は人の頭の中を読めるんだよ。普通の攻撃は一切通じないぜ。』

昇流のその言葉を傍で聞いていたアイアンハーツの全員は、一度沈黙すると直ぐにモニター画面の昇流に向って口を揃えてそんな昇流に激怒する。

「「「「「「「「!?最初に言え、このタコ!!!!!」」」」」」」」

『へへ・・・じゃあ後は頑張れよ。』

六人の言葉に圧倒された昇流は苦笑いを浮かべたま通信を切り、ドラの端末からいなくなった。

「じゃあ、私達の動きは全てお見通しって訳!?」

「だからと言ってこれだけの人数を相手に!?」

流石のなのはやユーノもこれには信じられなかった。

後ろでそれを聞いていたはやてやとフェイトもそうであった。

すると、真顔のままの刈谷はそんな驚愕するドラ達全員に向ってこう口にした。

「ヒマラヤの山中で獣同然の生活をしながら修行し、身に付けた力だ。」

あまりに予想と反したとんでもない話に思わず言葉を失い、驚愕を超えて呆れ返ってしまうドラとユーノ達。

すると、茜が全員の気持ちを代表して刈谷にこう語りかける。

「・・・くっ!そんな凄い能力があるなら私欲のためじゃなくてもっと人の役に立つことをしたらどうなんですか!?」

「・・・こんな世の中の役になど立ちたくはない。貴様らが本当に

この下らない世界を救いたいと思うならこの私を倒してみせろ。さぁ、かかって来い・・・私をもっと楽しませろ・・・燃えさせろ！」

「この変体クソ爺が！！」

駱太郎はそんなことを言って明らかに可笑しい感性を持つ刈谷に叱咤をした。

そんな時、なのはが刈谷を倒すためのある一つの方法を思いつき全員に提案してきた。

「ん！？ねえ、歌は？歌を唄って頭の中を空っぽにすれば？」

「空っぽになったら何にも出来ねーだろうが、姉ちゃん！？」

「だから！何にも考えずに戦うんだよ！！無我の境地だよ！！！」

それを聞いていた駱太郎はそんなことをしたら何も出来なくなると反論してくるが、幸吉郎は何も分かっていない駱太郎に更に補足を加える。

「んなこと出来るか！テニスの王子様の世界じゃないんだぞ！」

すると、そんな駱太郎の態度を見ていた刈谷は真顔でこう言ってきた。

「ほう・・・三遊亭駱太郎。こんな時にでもお前の頭の中には彼女である緑川絵里の姿がいるな。仕事よりも彼女のほうが優先か・・・」

それを聞いた瞬間、ドラと幸吉郎は刀を駱太郎の首筋に突きつける。

「「何だと!!」」

「嘘だよ!!流石にプライベートと仕事はちゃんと分けてる!!それより歌だろ、歌!」

すると、幸吉郎はかなり機嫌の悪そうな表情をしながら歌とは思えないような無茶苦茶な歌を即興で作り、唄いはじめた。

「けっ!お・れ・さ・ま・が、お・じ・さ・んに、なぁ~あったら、お・ま・え・も・お・じ・さ・んだ!!」

聞いていたユーノは心の中でこんな事を思いつつ、絶対に口には出してはならないと思ったのであった。

「(うわ~~~かなり無茶苦茶だ・・・・・・しかも結構音痴・・・)」

「待て!歌なら拙僧が唄おう!!」

龍樹はそう言うと、一歩前に出てくると全員の期待を背負って歌を唄い始めようとするのである。

「頑張ってな、龍樹さん!」

「任せろ。覚悟しやがれ!!」

龍樹はそう言うと、懐から携帯を取り出し中に入れてある着メロから今から唄う歌のインストゥルメントを流し始めたが、それはドラ

達が考えも着かなかった不相応なものであった。

「（著作権上の問題の為削除させていただきます。ご自分で想像してください）」

「「「「「はっ！？」」」」」

七十七歳の歌声には全くに合わないある子供向け番組で実際に使われた軽快な音楽を聴い瞬間、ドラ達アイアンハーツのメンバーやユーノ達の表情が凍りついた。

そんな中、龍樹はすっかり気分を高揚させながら振り付けをいれながら歌の続きを唄っていく。

「（著作権上の問題の為削除）♪」

見かねた写ノ神が我慢できずに龍樹の背中を蹴って強制的に歌を止めさせ、ユーノ達以外の全員は気持ち悪い唄い方をした龍樹に制裁を加え始める。

「止めんかい！！！」

「気持ち悪いんですよ！！第一、それ私の声の人が歌ってる曲じゃないですか！！！」

「しかも何で選曲がミラクル〇〇〇なんですか！！！演歌とかがあるでしょうか！！」

「いいではないか別に！！！それより、年寄りを集団でリンチするのはやめんか！！」

「うるせー！！！気持ち悪いもんは気持ち悪いんだよ！！！！」

制裁を加えたドラ達であったが、はやては険しい表情を浮かべまともな歌を唄えるものはいないのかと周りを見渡していた。

「くっ！まともな歌を唄えるのはいないんか、此処には！？」

と、その時・・・・・ドラはあることを思い出しフェイトの顔を見るなりこう言った。

「お、そうだ！フェイト、お前歌が上手かったよな！？この際だ、お前が唄え！」

「え！？私が・・・！？」

「そうだよ！フェイトちゃんがいたよ！！」

「せやせや！！昔から、シグナムもフェイトちゃんの歌は他を抜いて抜群に上手いって褒めてたしな！」

「フェイト、唄うんだ。選曲はこの前ＣＤチャートで一位になった・・・あれ！」

三人に唄うように言われるフェイトであったが、突然のことに上手く唄えるかどうか心配になるフェイト。

「そ、そんな・・・！！いきなり言われても！！」

「フェイト！！オイラ達や世界がどうなってもいいのか！？真面目

に唄わないと今此処でお前の首をオイラが介錯するぞ！！」

ドラのその言葉を聞いた瞬間、フェイトは覚悟を決めて唄うことにした。

「わ、分かりました！」

フェイトはそう言うと、刈谷の前に出てくると徐々に昇ってくる朝陽をバックにしながらユーノの流すミッドでオリコンチャートで一位を獲得した曲のメロディーに合わせて歌を唄い始める。

「“（著作権上の問題の為削除）”」

「こ・・・これは・・・！！」

その時、フェイトの歌声を聴いていた刈谷に異変が生じ始める。

「“（著作権上の問題の為削除）”」

フェイトの澄んだ歌声と純粋な気持ちを直に頭の中で感じ取った刈谷は、その瞬間頭を抱えながら苦しみ出したのであった。

「うあああああああ！！！！！！！！うあああああああ！！！！！！！！！！！！！」

「今だ！！！」

それを見たドラは反撃のチャンスだと判断し、一斉攻撃を仕掛ける。

最初は幸吉郎と駱太郎の二人がツートップで右ストレートを腹部に

一発。

「「せりゃあああ！！！！」」

次に写ノ神、茜、龍樹の三人が上半身に一発ずつ。

「「「ええい！！！！」」」

更に、なのは・はやて・ユーノの順に身体の急所を的確に拳と杖で攻撃する。

「ごめんなさい！！」

「許してな！！」

「リリカルマジカル・パート3！」

七人の攻撃を受け、既に満身創痍となってふらふら状態の刈谷にドラが最後の一撃を加えるために駆け出し刀を鞘ごと抜き出して、刈谷の顔面をバットの要領で叩いた。

「止め～～～じゃ～～～～！！！！！」

ドラの止めの一撃を受けた瞬間、刈谷は顔を腫れ上がらせて鼻血を出しながらその場に倒れ付し気絶した。

そして、最後まで美しい歌声で唄いきったフェイトと一緒にドラ達は昇る朝陽を見ながら感傷に浸ったのであった。

「心に響く音楽とは・・・・・こう言うのをそう呼ぶんだね・・・

いい歌だったよ、フェイト。」

「水樹奈々に匹敵する歌声だったぜ、姉ちゃん・・・」

「実際にアニメで声をやっているのもその人ですけどね・・・」

ユーノ達は暫くの間、昇る朝陽を見ながら今回の戦いをもう一度振り返りつつ、忘れかけていた大事な何かに気付かされたそんな気持ちになった。

「お。そうそう・・・アンゴルモアを回収しないとね・・・」

と、ユーノが最大の目的を思い出し徐に刈谷が倒れている場所に振り返ってみると、刈谷は既に何処かへと消えてしまっていた。

「あれ？」

「居ない！！」

「野郎！！！何所行きやがった！！」

「ははははははは！！！！！！！！残念だったな・・・私はここだ！！！！」

すると、そんなドラ達の耳元に顔中腫れ上がった状態の刈谷が一番最初に立っていたオブジェの上に佇んでいた。

手にはアンゴルモアが握り締められていた。

「刈谷！！」

「しまった！！」

「ふふふふ・・・見ているがいい・・・この下らぬ世界の終わりが来るのをその目で！！！」

そう言うと、刈谷は持っていたアンゴルモアを口へと運ぶとそれを咬まずに飲み込んだ。

全員はその光景に驚愕する。

「なっ！？飲み込んだと！！！」

刈谷がアンゴルモアを飲み込んだ瞬間、刈谷の身体は不気味な漆黒へと変貌を遂げると、それと同時にさっきまで朝陽が見えていた世界も不気味な暗黒へと引きずり戻された。

あまりに突然のことに驚愕するドラやユーノ達であったが、刈谷は邪な願望をエネルギーに変換すると凄まじい覇気を放出させようとした。

「おおおお

それぞれ違った場所に飛ばされたドラ達と、同じ場所に飛ばされたユーノ達。

はやてとフェイトは改装中のビルの足場に引っかかったおかげで、落ちずには済んだが真上からユーノが降ってきた。

二人はユーノを助けようと手を伸ばし、ユーノも二人の手に捕まった。

すると、今度はユーノの上から叫び声を上げながらなのはが落ちてきたのであった。

「なのは!!!のおおお!!!!!」

ユーノはフェイトとはやてに支えられながら上から落ちてきたなのはを助け出そうと両足を出して、なのはをキャッチしたはいいが、意外なことになのはの体重は思った以上に今のユーノにとってはかなりの負荷であったらしく、そんな苦しそうな表情を浮かべるユーノに向って掴まるなのははこう言ってきた。

「ごめん、ユーノ君!!!!!!生きて帰ったら少し痩せるから!!!!!」

また、ドラ達アイアンハーツのメンバーのうち、ドラ・幸吉郎・駱太郎の三人はというと。

「だあああああ!!!!!!こっち来るな!!!!!!」

「止めろ!!!!!!俺のほうに来るな!!!!!」

シーソーのように互いに下に上にと動きをする今にも落ちそうな不安定な鉄板の上でドラと幸吉郎はその両端に位置し、駱太郎は板の中央でバランスを保ちながら左右のどちらに移動しようかと思案するものの、下手に動けば三人は地上数百メートル下に落ちてしまうのだ。

「じゃあ、俺はどっちに行けばいいんだよ！！！うわあああ！！！」

と、苛立ちを募らせていた駱太郎であったがその瞬間バランスを崩してドラの方へと下がってきてしまった。

「だあああああ！！！！！」

奇声を上げながら絶体絶命の危機を直感するドラであったが、何とか後ろにあった二本の鉄棒を両手で握り締めると、ブリッジをするような格好で必死で落ちまいと頑張っていた。

そんなドラの顔に向って駱太郎が両足を乗せて来たのだ。

幸いにも、落ちずには済んだドラ達であったがその体制から動こうとしない駱太郎にドラは激怒する。

「コラー！！！！！！オイラの顔に足を乗せるな！！！！！」

と、その時。

駆けつけたユーノがドラ達を発見してくれたのであった。

「ああ、ドラさん！！良かった無事なようですね！」

「早く助けて!!Ｐｌｅａｓｅ　ｈｅｌｐ　ｍｅ!!」

ユーノはなのは達と供にドラ達や別の場所で落ちまいと頑張っていた写ノ神を救出、刈谷の下へ急いだのであった。

しかし、ドラ達が辿りついた時には刈谷の姿は何所にも見当たらなかった。

「刈谷は!?」

「あの野郎、何所に消えやがった!?」

すると、はやてがオブジェの上に佇む物陰に気付き全員に目を向けるように声を掛ける。

「はっ!みんな、あれを見!!」

「ん!!」

全員がはやての指差すほうを目を向けた瞬間、オブジェの上に立っていたのは・・・明るい紫色とかなり派手なカラーリングが特徴のこの世界ではトランスフォーマーと呼ばれる存在へと変貌を遂げた刈谷がそこに立っていた。

「何だ・・・あれは・・・!?」

「刈谷・・・なのか・・・!?」

ドラ達はアンゴルモアによって変貌を遂げた全く別の存在に思わず目を疑った。

「あれが・・・アンゴルモアと同化したことによって生まれる悪しき存在・・・アンゴルモアモンスター・・・コードネーム、ＡＭ１６。」

「アンゴルモア・・・モンスター・・・！？」

「それにしたってあれはどうも見てもモンスターじゃなくて、ロボットだろ！しかし、何だあの姿は！？」

「まるでビーストウォーズに出てきたガルバトロンみたいだな。」

ドラがそんな話をしていたとき、はやては自分の中の魔力が再び結合できるようになっていることに気付いた。

「お！魔力が結合できるようになってる！？」

「完全にアンゴルモアが刈谷と一体化したことで、他への影響がなくなったか・・・」

「そうと分かれば話は早い。ここからは総力戦だ！全員であいつをぶっ倒す！！」

「「「

の刀の意外な能力に驚かされることになるのだ。

「月光せよ、晩翠！」

ユーノは早速ＡＭ１６に向ってドラと供に飛び上がりながら晩翠を解放。

すると、それに便乗したドラが自身の刀に向ってこう叫んだ。

「敵（かたき）を斬れ、『ドラ佐ェ門（ざえもん）』！」

その瞬間、ドラの刀の形が変化を起こした。

鍔の装飾はドラの顔を思わせるようなものへと変わり、細部には赤い装飾が付けられた若干長さが増したものへと変化する。

ドラの刀の変化に思わずユーノとなのは達は驚愕する。

「あれは！」

「まさか・・・斬魄刀でもないのに、形が変わるなんて！？」

横で目を見開くユーノを見ながら、ドラはユーノの持つ晩翠に目を向ける。

「それが、ユーノさんの斬魄刀ですか！？」

「ええ・・・それより、ドラさんもその刀！？」

「こいつはちょっと曰くつきの刀でしてね、斬魄刀に見えても可笑

しくないですね。兎に角、こいつを倒さないと事態は解決しません。行きますよ、ユーノさん！！」

「はい！！」

二人はそう言うと、お互いに刀を振り上げてＡＭ１６に向って渾身の力を込めて振り下ろしていった。

「「はあああああああ！！！！！」」

しかし、二人の渾身の一振りにも拘らず身体はまるでびくともしない程固いものであった。

「くっ！！硬い！！！」

険しい表情を浮かべるドラであったが、その時ユーノが身の危険を感じてドラに大至急離れるよう声を掛けた。

「はっ！ドラさん！！」

ドラはユーノの言葉の意味を理解すると、直ぐにユーノの供にＡＭ１６から回避する。

離れた瞬間、ＡＭ１６は背中の鋸状翼のマントを分離させて如何なるものも粉々に砕く巨大な鋏を使って二人を攻撃しようとしたのだ。

ＡＭ１６の攻撃を回避し、空中に足を止めるユーノと幸吉郎達の下に降り立つドラ。

幸吉郎やなのは達もその余りに他を逸した武器の形と大きさに驚愕

する。

「何だよ、あのバカでかい鋏は！！」

「あれに巻き込まれたら即死だぜ！！」

「距離を取りながらの攻撃しかないか・・・ならば！」

すると、ドラは専用足袋からジェットエンジンを噴射させて空中に舞い上がると、ドラ佐ェ門に周囲の魂魄を吸収させてエネルギーを蓄え始める。

そして、ユーノ・駱太郎・なのは・フェイトと供に一斉攻撃を仕掛ける。

「『魂魄弾（こんぱくだん）』！！」

「輝け、晩翠！！」

ドラとユーノの刀身から放たれた翡翠の斬撃と、純白の魂魄エネルギー弾。

それに続く形で駱太郎が右の拳から炎を、なのはとフェイトが魔力砲撃を叩き込む。

「万砕拳、炎砕（えんさい）！！」

「ストライク・スターズ！！」

「ライトニング・・・スマッシャー！！」

五人の攻撃が直撃し、爆炎が起こるとはやてもこの機に準じて幸吉郎達と一緒に攻撃を仕掛けることを提案する。

「私らもいくで！！」

「「「ああ（はい）！」」」

先ず、はやては夜天の書を開くと嘗て初代リィンフォースが使った魔法を使うことを決意し徐に詠唱を始める。

「刃もて、血に染めよ。穿（うが）て、ブラッディダガー！」

すると、血に染まった剣が三本ＡＭ１６の前方に撃たれる。

また、写ノ神は魂札のうち四枚のカードを取り出すと大技のための詠唱を開始。

「“我が司るもの、世界の力、今ここに主写ノ神が命じる、四大属性の力を一つに”」

写ノ神はそう言うと、四枚のカードをＡＭ１６に向って投げつけると印を結んで術を発動させる。

「『四大爆鎖（エレメントイクスプロージョン）』！」

その瞬間、四枚のカードから出てくる白・黒・緑・青の四つの色を帯びた鎖がＡＭ１６の身体を拘束し、それと同時に大爆発を起こす。

これに続けて茜は真之介の背中に乗りながら氷結の息吹を吹かせ、

龍樹は三法印の力を使ってＡＭ１６を封じ込める。

「真之介君、“大氷結帰（だいひょうけっき）”！」

「三法印・諸行無常印・弐之型『桐棺（きりのひつぎ）』！」

真之介の口から放たれる氷結の息吹によって、体中を凍らせたあと龍樹の術によって身体全体を桐の棺桶のようなもので封じ込めれたＡＭ１６。

全員は固唾を飲んでその光景を見ていた。

「果たして、本当にこれで奴を封じられるのか・・・あるいは・・・」

と、その時・・・ユーノは封じられたＡＭ１６から鳥肌が立つような底の知れない邪悪な気配を感じ取った。

「！？何だ・・・・・この底の見えない邪悪な気配は・・・！？」

全員もユーノ同様、肌でそれを感じたときだ・・・桐の棺の中から漆黒の煙が漏れ出すとＡＭ１６の高笑いが聞こえてきた。

「ははははははあはは！！！！！！！！！まさか貴様ら・・・こんなもので私を封じたつもりか・・・甘いぞ・・・今から貴様らに本当の私の能力（ちから）の姿を拝ませてやろう・・・ははははははははははは！！！！！！！！！トランスフォーム！！！！！！！」

すると、その瞬間桐の棺が破壊されると中から姿を現したのは・・・――体長２００メートルを誇るＡＭ１６が変形する最強最後の形

態・・・ドラゴンＡＭ１６であった。

「「「「「なっ！？」」」」」

「「「え！？」」」

「「・・・くっ！！やっぱりか！！」」」

両膝にはガトリング砲が設けられており、両肩には長いドリルのような装甲が施されていた。

「・・・ＡＭ１６・・・最強形態にして最大の姿・・・『ドラゴン』！くそ！！まるまるビーストウォーズのガルバトロンをぱくりやがって！！」

「来ます、兄貴！！」

幸吉郎がドラにそう口にした瞬間、ＡＭ１６は飛翔すると早速地上のドラ達目掛けて口から灼熱のエネルギーを発射した。

ドラ達は一度、茜の従える真之介の背中に乗って攻撃を回避して空中に飛び上がったが、エネルギー砲を受けた場所はドロドロに溶解されて、建物を熱で溶かしていった。

間近で見ていたはやてやなのは達は目を疑った。

「何て熱破壊能力や！？建物が溶けていくで！！」

「魔法防御でも、これは流石に防ぎきれないかも・・・！」

「下手に飛び込めば奴の餌食だ・・・くっ！どうすれば・・・！？」

ユーノが険しい顔を浮かべてそう口にしたその時だった。

「君達、何してるの？」

「「「「え？」」」」

四人の耳元に飛び込んできた謎の低い男性の声。

それを聞いたドラ達は、一瞬耳を疑ったがそれが直ぐに誰なのかを悟った。

「この声は・・・！？」

「まさか！！」

すると、そんなドラ達の横を通り過ぎて空中を駆け抜けていく全身を黒い戦技教導官服のようなものに身を包んだ眉間に皺を寄せた男が、ＡＭ１６に向っていく。

そして、ドラゴンの姿のＡＭ１６の姿を見るなり男はほくえ笑みこう口にする。

「君・・・強そうだね・・・でも・・・君は少しおイタが過ぎたようだ。よって、僕が君に制裁を下す。虫の息という名の制裁をね・・・」

すると、男は手に収まるぐらいの立方体の箱を取り出すとそこから何かを取り出して両腕に装着する。

「“蟲融術（インセクトフィージョン）”」

すると、両腕に装備されるのは巨大な蟷螂の両鎌。

男は両鎌を装備すると、命の危険を顧みずに素早い動きでＡＭ１６の身体を傷つけていく。

あのユーノとドラが苦戦した固い装甲を男は蟷螂の鎌だけで傷つけていく。

実はこの男こそが、アイアンハーツ第七席（形式上は）にして事実上ドラに続くメンバー屈指の戦士、螻蛄壌なのだ。

彼の特殊技能は、立方体から取り出したあらゆる蟲の力の一部を宿した武器を装着することでその力を得る『蟲融術』である。

壌の攻撃によって、ＡＭ１６の装甲はどんどん剥がれ落ちていき、次第に絶叫する始末であったのだ。

「何!?あの人は一体・・・・!?」

「あいつが俺達アイアンハーツの最後のメンバー、螻蛄壌だ!強者を求める性格故、めったなことでは俺達の前に姿を現さないのが玉に傷だけどな・・・」

なのは達は壌の恐るべき戦闘能力に驚かされっぱなしであった。

「バケモノかあの人は・・・あのドラゴンに一人で攻撃してるなんて!?」

「ただの命知らずと言ってくれ。でも、壌が来てくれたお陰で形勢は逆転した。そろそろ終いとするかな！みんな、最後はしっかり決めるよ！！」

「「「「「了解！！」」」」」

ドラは全員の士気をあおると、隣にいたユーノに向ってこう言ってきた。

「ユーノさん！すみませんけど、その力借りさせていただきますよ！」

「え？それどういう意味で・・・」

「話は終わってからします！だから、お願いします！ドラ佐ェ門、“魂魄兵装（こんぱくへいそう）”！！」

すると、ドラの刀の鍔に施されたドラの顔と酷似した装飾の目が光り出すと、ユーノをそのまま刀の中に吸収していった。

「なっ！？これは・・・！！」

ユーノは理由もよく分からぬまま、ドラ佐ェ門の中へと吸収されていき、それを間近で見ていたなのは達も驚愕の表情を浮かべる。

「ゆ、ユーノ君！？」

「ユーノがドラさんの刀に吸い込まれた！？」

「何がどうなっとるんや！？」

これは、ドラ佐ェ門の能力の一つであり・・・他人の魂を一時的に刀に宿すことによりその能力を使うことが出来る。

これをドラは『魂魄兵装』と名づけている。

ドラはドラ佐ェ門から感じ取れるユーノの尋常ではない力に正直驚かされていた。

「（凄い・・・これがユーノさんの力・・・体中から感じてくる・・・これならいける！）幸吉郎、お前も全力で奴に向って行け！！剛金狼撃・・・解放承認！」

「待ってましたよ、兄貴！！よっしゃ！！久し振りに行くぜ！！」

ドラの承認を得た幸吉郎は意気揚々と、腰に下げていた袋から狼雲専用の強化パーツを取り出しそれを狼雲に装備していく。

「武装強化！！狼猛進撃・改！！剛金狼撃（ごうきんろうげき）！！」

武装が施されると、幸吉郎の狼雲は通常の何倍もの破壊力を秘めた狼猛進撃を遥かに超越した刺突、『剛金狼撃』を撃つことが可能な形状へと変化する。

「幸吉郎さんの刀が武装強化された・・・！？」

「まだあんな物を隠し持ってたんだ！？」

すると、幸吉郎の刀に目を奪われていたなのは達三人に向ってドラ

が叫んできた。

「なのは！フェイト！はやて！！三人も全力全開で向って行け！！今ここに力を一つに結集させろ！！オイラ達アイアンハーツと、お前ら時空管理局の力を一つに！！」

「「「はい！！」」」

それをＡＭ１６と戦いながら聞いていた壌は、不満気な表情でドラに話しかけてきた。

「こいつは僕の獲物だよ、余計なことしないでくれる？」

すると、ドラは鼻で笑うとあっさり壌にこう返してきた。

「嫌だよ。言ったろ、お前はオイラの言うことを聞かない分、オイラもお前の言うことは聞かないって！」

「・・・そうだったね・・・」

壌も渋々納得したのか、本当なら群れて痛くない性分を我慢して一度ドラ達の下に行くと、唸り声を上げるＡＭ１６と向かい合い、チーム一丸となって最後の攻撃に出る。

「いくぜ・・・剛金狼撃・肆式（よんしき）・“狼咆撃（ろうほうげき）”！！」

「万砕拳、『集圧砕・大嵐』！！！！」

「三法印・諸行無常印・参之型『釈迦腕（しゃかのかいな）』！」

狼雲に装備されたブースターによって、超高速で移動することが可能となった幸吉郎から繰り出される牙狼撃の強化版、狼咆撃。

周りの空気を圧縮させ、それを一気に爆発的に解放することで巨大な竜巻を起こす駱太郎の集圧砕・大嵐。

そして、釈迦の腕を異空間から出現させて腹部を貫通させる龍樹の釈迦腕がＡＭ１６に直撃し、かなりのダメージを与える。

三人の後に続いて、写ノ神が二枚のカードを取り出し術式を開始。

「『小槌（ハンマー）』、『鋼（アイアン）』、魂札融合（カードフィージョン）！！」

二枚のカードを天に掲げた瞬間、力が合さりあって二枚のカードは一つの力の姿へと変貌を遂げる。

それはヴィータのグラーフアイゼン、ギガトンフォームと同じくらいの鋼鉄のハンマーであった。

写ノ神は高く飛び上がると、ハンマーを振り上げてＡＭ１６の頭部に振り下ろした。

「『金槌（かなづち）、“鉄槌重撃（アイアンヘビーショット）”！！』

金槌の威力によって、ＡＭ１６の頭部には皹が入りＡＭ１６は激痛に伴い絶叫する。

更に、その後茜が真之介の背中に乗りながら印を結び真之介に必殺技の発動を促す。

「真之介君！！大砲撃いきますよ！！『朱雀蓮舞（すざくれんぶ）』！」

真之介は茜を背中に乗せた状態で、身体全体を火の鳥へと変化させたそのままＡＭ１６に向って突っ込んでいく。

また、追い討ちをかけるように壌も両腕の鎌を振りかざして真空の斬撃を喰らわせる。

「『螳螂真空斬（とうろうしんくうざん）』」

両者の攻撃が通ると、ドラゴン形態のＡＭ１６の身体に生えた鋸状の翼は炎を上げながら身体中に傷を負って落下していった。

「ほんなら、私達も・・・！」

そして、飛べなくなったＡＭ１６に照準を定めたなのは・フェイト・はやての三人は魔力を上昇させて各々の技を発動させる。

「スターゲート・・・ランチャー！！！」

「サンダー・・・スラッシュ！！！」

「デアボリック・バーン！！」

三人の技が悶え苦しむＡＭ１６に注がれ、ＡＭ１６はいよいよ窮地に追い込まれる。

そして、幸吉郎は止めの一撃をドラに求める。

「兄貴！！止めをお願いします！！」

「よっしゃあ！！！！行きますよ、ユーノさん！！」

〈はい！〉

ドラは刀の中で意識を保つユーノにそう言うと、自身の持つドラ佐ェ門の力とユーノの持つ晩翠の力を一つに融合させた、奇跡の斬撃をＡＭ１６に向けて放った。

「「輝け、“晩翠ドラ佐ェ門”！！」」

すると、ドラの刀から放たれるのは翡翠斬と魂魄弾の威力が混じった超巨大且つ大威力を秘めた斬撃であった。

ＡＭ１６はそれを直撃させると、身体を粉々に破壊されながら最後に苦しみの声を上げた。

「のあああああああああああああああああ！！！！！！！！！！！」

光に包まれながら大爆発を起こすと、アンゴルモアと分離した満身創痍の刈谷が吹き飛ばされながらビルの何処かへと叩きつけられると、這い蹲りながらそれでも逃げようとする。

「ぐあああああああ！！！！ぐっ！！！！」

すると、そこへユーノを解放したドラが現れ刈谷に向ってこう口にした。

「ＴＢＴだ！刈谷総一、お前を時間法第２条、『過去への時間干渉及びその破壊による時間への影響による多大な被害』の現行犯で逮

捕・・・する！！！」

刈谷がドラの方を振り向いた瞬間、ドラは渾身の力を込めて刈谷の顔面を殴り、それによって刈谷はとうとう力尽き気絶した。

「痛って！！！！！」

地味に自分の拳が痛かったことに我慢しながら、ドラは直ぐに手錠をかけると気絶した刈谷を肩に担ぐ。

すると、そんなドラの下へ解放されたユーノが徐に近付き話しかけてきた。

「これで・・・漸く全て解決ですね・・・」

「ええ。ユーノさん、みんな・・・色々有難うございます。」

ドラはそう言うと、アイアンハーツのメンバーやアンゴルモアを回収したはやて達の方を一瞥し、ユーノに握手を求めてきた。

すると、ユーノもそんなドラの気持ちに応える為に握手を交わしてきた。

「はい。僕達の方こそ・・・本当に感謝してますよ、ドラさん。」

事件が解決したとき、全員がビルの屋上から見た朝陽は最高に美しかったそうな。

その後、事件から一日が経った後・・・・・・恋次達がユーノからの報告を受けていたときであった。

「で、無事に帰ってきたはいいものの・・・」

恋次はそう言うと、後ろへと振り返り医務室のベッドで全身筋肉痛で苦しむなのは・フェイト・はやての三人を一瞥する。

「「「う～～～～～～～～！！！！！！痛くて動けない（へん）よ～～～～～！！！！！！！！」」」

そんな三人を哀れに思いながら、一緒にいた吉良とルキアはユーノの方に顔を向けた。

「三人とも全身筋肉痛になってしまったというわけですか・・・」

「一体、何をしたらこいつらがこうなるんだよ！？」

「さぁ。でも、僕は色々と楽しかったですけどね♪あんな楽しい人たちに遭ったのは本当に久し振りだったな・・・」

ユーノはそう言うと、羽織の下から現地で撮影した歓迎会のときの写真を取り出し、楽しそうにしているドラや自分達を見ながらほくそ笑み、心の中でこう思った。

「（またいつか遭えたら良いですね・・・ドラさん・・・）」

Ｐｈａｎｔｏｍ　ｍｉｎｄ　フェイトの場合（後書き）

教えて、ユーノ先生！

ユ「今日はサムライ・ドラさんのプロフィールについてね♪」

ユ「５５２１年の３月９日生まれ。身体の色は黄色で服装は名の通りの侍装束だが、黒い着物と黒袴で上に白い羽織を着ている。羽織の後に人侍と書かれた刺繍がしてあるんだよ♪」

ユ「腰にドラ佐ェ門という刀を携えており、履物は足袋と草鞋。幼い頃に人侍剣力流という我流剣術を生み出し、その力に目をつけたＴＢＴの杯（昇流さんのお父さんがドラさんをＴＢＴの特殊先行部隊隊長に任命したんだ。」

ユ「好物は、白米と目玉焼きでお菓子はカカオ豆１００パーセント糖類０のブラックチョコを一日５キロ食べる。毎朝５時に起床し、ジャージに着替え小樽の町をロードワークし、その後公園に寄りごみ拾いをし、高齢者と混じりラジオ体操をするのが日課。」

ユ「飲酒は基本的に鹿児島県産の芋焼酎のストレートでしか飲まず、酒はＴＢＴ一強い。あと何かしろ色んな資格を持っているらしい。」

ユ「現在はアイアンハーツの現代教育のために、毎日政経の授業を行っているとのことだよ♪」

ド「もし、オイラの活躍が見たいという人は・・・サムライ・ドラ＆リリカルなのはでも読めるから、そこでまた会おう！」

ユ「あっちの小説の中の僕は、何だか影の主役みたいだけどね♪」

魔導師図鑑ゴールデン！

動けない三人の代わって、ユーノがはやての買って来たお土産をメンバー全員に手渡す。

ユ「ささ♪小樽で買って来たお土産だよ♪ちゃんと全員分あるからね！！」

それでは、スバル・ティアナ・エリオ・キャロ・ギンガ・ヴィータ・シグナム・リィン・アギト・クロノの順に品物を見ていこう。

ユ「かまえいの蒲鉾だろ。小樽市役所のペナント。昇さんの作ったボトルシップ。ドラさん特性の非売品人形『毛玉くん』。熊の彫刻。盾。地元の牛から作ったアイスクリーム。ジンギスカン。それと・・・」

ユーノはそう言いながら、クロノに一枚の紙を手渡す。

ク「なっ！おい、ユーノ！！これって単なる請求書じゃないか・・・しかもこんな高額な！！」

ユ「結構値が張っちゃってさ♪はやてからの伝言。今回のお土産代はみんな経費でつけといて・・・」

ク「絶対駄目だ！！！！」

ＴＢＴメンバー紹介。

ＴＢＴ

『Ｔｉｍｅ　Ｂａｌａｎｓｅｒｓ　Ｔｅａｍ』の略称で、日本語名を『時空調整者団体』。北海道小樽市に本部を置き、世界１９２カ国に支部を展開しタイムトラベルシステムが発明されたことによって発生してしまった時間犯罪を専門に扱いそれを未然に防ぐ国連直属の組織である。

鋼鉄の絆（アイアンハーツ）

ドラ達が所属するＴＢＴ特殊先行部隊の通称。七人の固い絆によっていかなる事件も皆解決に導いてきた功績から、その名がついた。特殊先行部隊は年々増加する時間犯罪・組織暴力・密輸その他元来の縦割り組織が対応に苦慮していた全ての犯罪に対応するため、部署を温存して与えられた唯一の捜査機関である。つまり、一分隊から四分隊がどうしても手に負えないような危険な任務を担当する。なお、ドラを除くメンバー全員が時間に関してその影響を受けない特異点の持ち主であり過去の人物でもある。

メンバー

サムライ・ドラ

声　一　水田わさび

「異世界関係／ユーノの交流者」を参照

山中幸吉郎（やまなか　こうきちろう）

声　一　檜山修之

身長１８３ｃｍ　体重９２ｋｇ　１５８５年１２月３１日生まれ。２０歳。ドラの右腕であり、ドラが最も信頼を置く青年。ＴＢＴ特殊先行部隊「鋼鉄の絆」副隊長。一人称は「俺」。嘗て、とある時間犯罪者によって両親を殺害され、他に身内もいなかった幸吉郎は飢えを凌ぐために山賊をしていたが、そんな時に任務に来ていたドラと出会いその生き方と強さに惚れ込み付き従うことを決意し現在に至る。狼猛進撃の使い手。基本的に口調は粗暴で態度もデカいがドラと直属の上司である杯昇流に対しては敬語を使っているが、本当の意味で敬意を示しているのはドラのみ。刺突による攻撃を得意としているが、状況に応じて薙ぎ払うなどの基本的な刀の使い方も心得ている。副職では、ドラと駱太郎と共にお笑いトリオ以外に声優や俳優にも挑戦している。

三遊亭駱太郎（さんゆうてい　らくたろう）

声　一　うえだゆうじ

身長１８５ｃｍ　体重９５ｋｇ　１５８７年５月５日生まれ。１８歳。ＴＢＴ特殊先行部隊「鋼鉄の絆」第三席。一人称は「俺」。頭に鉢巻を巻き逆毛だった髪型をしており、短絡的な思考や言動から写ノ神から「単細胞」と呼ばれる事も多く、折り合いが非常に悪い。ドラは個人的な理由から「Ｒ君」と呼称している。直情的な熱血漢で、気風のいい兄貴肌の人物。団子が大好物。一本調子な面ゆえ、幸吉郎や周囲にやたらと馬鹿・阿呆呼ばわりされているが、戦闘においては意外と頭が切れる一面も見せている。ドラと幸吉郎と共にお笑いトリオを組んでおり、多数テレビ番組に出演して副職活

動を展開させている模様。ちなみに、緑川絵里なる恋人がいる模様。

神に賜りし能力（ちから）、万砕拳を使うことが出来る。

龍樹常法（たつきつねのり）

声　一　　緒方賢一

身長１７０ｃｍ　体重７８ｋｇ　１５４４年７月１０日生まれ。７０歳。ＴＢＴ特殊先行部隊「鋼鉄の絆」第四席。一人称は「拙僧」。古代インドの王朝、サータヴァーハナ朝の保護のもと大乗仏教を伝えた、ナーガルジュナ（龍樹）の末裔。五歳の時に出家して、それ以来諸国を旅する行脚僧として生きてきた。ガウダマ・シッダールタ、所謂釈迦より、「三法印」と言う御仏の力を授かった。ドラはその力を解脱の中で見出したものとも捕えている。その中には、「諸行無常印」・「諸行無我印」・「涅槃静寂印」があり、それから様々な派生技が存在する。現代社会にいち早くなじみ、新しいものに関する知識欲がある。また、出家しているにも関わらず本人は平気で戒律を破り、肉を食している。

八百万写ノ神（やおよろずうつのかみ）

声　一　　青山桐子

身長１７５ｃｍ　体重６２ｋｇ　１５８８年１０月１日生まれ。１６歳。ＴＢＴ特殊先行部隊「鋼鉄の絆」第五席。本名。千葉神太郎。八百万写ノ神とは、当時彼を指揮していた次元犯罪者の部下が付けた呼称。一人称は「俺」。父親との何気ない口喧嘩で家を飛び出し、そのまま消息を絶った。１６歳になり、親友の大渡六助と共に故郷に戻ってみたところ、辺りは見るも無残に何も無くなっていた。絶望した写ノ神は生きるためには他人を省みない自我を追求する男となり、多くの尊い命を奪ったがそんな自分をドラに救われ、行動を共にし茜と籍を入れる。本人は否定しているが、実は茜に関

しては何気ないしぐさや言動で直ぐに赤面してしまうほど。写ノ神の主力武器の魂札（ソウルカード）は、彼が旅先で出遭ったゼウスと名乗る老人から頂いた、自然界のあらゆる元素を組み合わせたりすることによって力を発揮する札で、これで嘗て幸吉郎と駱太郎を苦しめた。

朱雀王子茜（すざくおうじあかね）

声　一　おみむらまゆこ

身長１７０ｃｍ　体重５５ｋｇ　１５８８年６月３１日生まれ。１６歳。ＴＢＴ特殊先行部隊「鋼鉄の絆」第六席。１４６７年の「応仁の乱」以降、実力を伸ばした守護大名の一族で、徳川家康と石田三成の天下分け目の争い「関ヶ原の戦い」でも、徳川の勝利に加担した言われる四聖獣家と呼ばれるものの一つ、朱雀王子家の十代目初の女当主。しかし、裏の世界を支配する四聖獣家が歴史の表舞台に出ることはなく、表側の歴史書には記されておらず、裏の歴史をまとめた『天裏列伝』にそれが記されている。一人称は「私」。特別な血の契約によって妖怪や空想上の生物、畜生をこの世に出現させることが可能な技、畜生祭典を操る。容姿端麗で常に誰に対しても丁寧語で話し、気さくで優しい性格。写ノ神と結婚したばかりで新婚ほやほや。且つバカップル。戸籍上は「千葉茜」としているが仕事上では「朱雀王子茜」のままで通している。顔に似合わず強い芯の持ち主で戦いにおいては冷静沈着に対処する。また、腹黒い一面も持っておりなのは達に対して訓練においてはかなりきついやり方で苦しめた。彼女が居れる紅茶は全局員の男性が飲みたがるほど人気が高い。

蝋蛞壌（けらじょう）

声　一　近藤隆

身長・体重・生年月日・年齢不明

ＴＢＴ特殊先行部隊「鋼鉄の絆」第七席（事実上はドラに次ぎメンバー最強）。通称・ジョウ。一人称は「僕」。好きな言葉は「蟲の息にするよ」「ワオ」。軍服のような服を着用した男で、生まれながらにして個々に特異な殺戮能力を授かりし血筋、無二族の末裔。壌が生まれながらに授かった能力は、如何なる条件下においても万物を自分の易のままに操作できるという「自然淘汰（ナチュラルセレクション）」。加えて、様々な蟲の能力を己の武器として戦闘可能にした『蟲融術』（インセクト・フュージョン）を使用する。好戦的な戦闘マニアで、より強い相手と戦いたいという願望がある。『蟲融術』を使った近距離攻撃を得意としており、全体的に身体能力スペックが高い。また、群れることと束縛を嫌う一匹狼で、他人が群れているところを見ると「弱くて群れる草食動物は嫌い」という理由で襲い掛かる。基本的に他者に興味を示すことはないが、嘗て自分を負かしたドラには何かと興味を抱いており、ドラもそんな壌の思考を読み取って「自分の言うことを聞かなくてもいい代わりに壌の言うことも聞かない」という契約でチームに加えているが、基本的に滅多なことではその姿を現さない。

関連キャラクター

杯昇流（さかずきのぼる）

声　一　神谷浩史

身長１７８ｃｍ　体重６９ｋｇ　５５１７年１０月２１日生まれ。２２歳。ドラ達直属の上司でありＴＢＴの長官。二枚目だが性格があまりに杜撰且つ低劣なためにドラ達からは冷ややかな目で見られ、上司としての威厳が全くない。好物は鯖の味噌煮に鰯のつみれと言った魚もの。趣味は読書とボトルシップ作り。ドラとは２０年来の付き合いで、その当時はまだ5歳だった。父の後を継ぎエスカレーター形式でＴＢＴ長官に。なのは達ともドラ同様違う形であるがあ

っており、大の女好きである事から再会を果たしたなのは達に飛びかかろうとしたところをドラに一蹴される。それでも、銃の腕前に関してはＴＢＴ随一であり、華麗なアクロバットを駆使した銃撃戦を得意としている。中でも、弾痕が一つしか残らないワンホールショットやその応用系のホールインワンショットと言った神業を容易にやってのける程。武器は愛銃コルト・パイソン３５７。

刈谷総一（かりやそういち）／ＡＭ１６

声　一　筈見純

身長１８６ｃｍ　体重９０ｋｇ　５４９２年1月19日生まれ。４７歳。元東京大学光学研究所所長兼名誉教授。２０年前、過去の時間において違法光学機械開発における爆発事故を追及され逮捕となり、時間犯罪者が収容される時間犯罪刑務所で１６年を過ごし、２年前に釈放された。黒い肌が特徴。冷静沈着・冷徹な性格で、格闘術の達人である。また超能力者であり、相手の頭の中を読んだり金縛り状態にさせることも可能。この超能力に関しては「ヒマラヤの山中で獣同然の生活をして修行し身に着けた力」と劇中で語っている。後にお台場にあるアジトでドラ・幸吉郎・駱太郎・常法・写ノ神・茜・ユーノ・なのは・フェイト・はやての９人と同時に戦い、相手の頭の中を読む能力で優位に立つが、歌で頭の中を空っぽにして戦うドラ達の作戦によって頭の中を読む力を封じられ、激しい頭痛に見舞われている隙にドラ達の殴打を順に食らって敗れた。その後アンゴルモアの力を使って驚異的な能力を手に入れるが、ユーノ達の連係プレーによって見事に撃墜してしまい、最後はドラに殴り倒された。

バトル裁判・容疑者ティアナ（前書き）

今回は白砂糖さんのリクエストを元に書きました。

話の主体は龍騎裁判のパロディです。

バトル裁判・容疑者ティアナ

＞ｉ１３２７２―７０９＜

１５個目となるアンゴルモアを回収し、帰還したユーノ達。

しかし、ユーノ以外の三人は向こうの世界でドラによって扱かれた所為で全身筋肉痛となってしまい、帰ってきて二日目となる今日もベッドから動けないという異例の事態へと発展し、何時もどおり朝練に参加するフォワードメンバーはユーノからのその報告を受け驚愕していた。

「え？なのはさん達が・・・活動不能！？」

「そうなんだよ♪なのはもフェイトもはやても・・・三人揃って全身筋肉痛で身動き一つ出来ない状況。普段から魔法ばかりに頼ってまともな運動していないから、こんな事になるんだけどね♪」

「つーことで、今日はなのはがいない分、いつも以上にビシバシ鍛えてやるかなら。気をつけねーと死ぬぞ！」

ユーノの隣に立っていたヴィータや恋次はフォワード全員に不適な笑みを浮かべると、明らかに手加減なしと言った感じで武器を手に取った。

フォワードメンバーはそんなヴィータ達の顔を見るなり、表情を引きつらせ思わず冷や汗を流す。

「「「「「あ・・・はい・・・！！」」」」」

やがて、なのはが居ないことをいいことにフォワードメンバーは全員、ヴィータ・恋次を中心とする好戦的な連中によって何時もの何十倍もハードな訓練をさせられる羽目になった。

精神的にも肉体的にも疲労困憊のフォワード陣が寮に向うのを見送

った後、ユーノは恋次と供に隊舎の食堂へと向っていた。

「しかし、ベッドから動けないなんて・・・まるで寝たきり老人だなオイ。」

「結構痛いんですよ、あれ。僕だって一護さんとの修行では毎日のようになっていましたから。本当・・・あの時は毎日のように鎌を持った変な妖精みたいなものが見えてたもんだな・・・」

ユーノはそう言うと、嘗ての修行で毎日のように見えていた黒い服に身を包み鎌を振り上げた骸骨のことを懐かしそうにしみじみと恋次に語っていたが、恋次はそれを聞くなり真顔でこう返してきた。

「おい・・・ユーノ・・・そいつは妖精じゃねーぞ・・・本物の死神だぞ・・・」

その後、朝のキツイ訓練が終わり、朝食を取ったフォワードメンバーのうちティアナだけが動けないはやての代わりを務めるユーノの目に従って、微弱ながらアンゴルモアの反応が感知された第１００管理世界『ジャッジメント』へと訪れ、そこで有力な情報を掴んでいるという雑誌社、アカシＪｏｕｒｎａｌの編集長、桃井麗子との接触を試みていた。

ティアナは社内の応接室に通されると、桃井よりケーキが出される。

「どうぞ。」

「ありがとうございます、頂きます。」

ティアナは徐に置いてあったフォークを手に取る。

「機動六課のティアナ・ランスター執務官ですね？電話で話した、あなた達が探してるアンゴルモアについて・・・うっ！！」

桃井がティアナに早速アンゴルモアについての情報を口にしようとした矢先だった、突然桃井は後ろ首を押さえるや否や苦しみ出し、そのまま地面へと倒れこんでしまった。

「え！？」

突然の桃井の異変に思わず硬直するティアナであったが、直ぐに桃井に駆け寄り意識を確認しようとする。

「ちょ、編集長さん！！しっかりして下さい！！編集長さん！！」

ティアナは何度も身体を揺すって目を覚まそうとするが、脈拍を調べたときには既に息をしていないことが分かり、ティアナはその場にしゃがみ込み絶句する。

「うそ・・・死んじゃったの！？」

すると、その時・・・応接室のドアを開いて一人の男が入り込んできた。

男は床で倒れてる桃井を見ると、驚愕の顔を浮かべて桃井に駆け寄りかｒ打を揺すって意識を確認し始める。

「編集長！！桃井さん！！」

男は桃井の胸元に耳を押し当てて、心臓が動いていないことを確認

すると大声を上げて編集部内にいる社員に救急車の手配を要求する。

「誰か救急車!!」

と、男がそう言った後に傍でしゃがみ込んで何故かフォークを手に持ち続けているティアナを見るなり腕を掴み問いただしてきた。

「あんたが殺ったのか!?」

「ち、違いますよ!!私は何もしてません!!」

男の突拍子もない言葉にティアナは全否定をするものの、そんなティアナの追い討ちをかける出来事がこの後待ち構えていたのであった。

その後、警察までがアカシＪｏｕｒｎａｌに駆けつけると社内は騒然とし始めた。

そんな騒然とする社内にたった今出社して来た男が遺体となって運ばれていくシートに包まった桃井を見るなり動揺を隠し切れなくなった。

「編集長!!」

男の名前はシンジ・ヒラコ。

この会社での部署はカメラ担当を務めているかなりのやり手である。

シンジは警察に身を乗り出そうとするところを抑えられると、運ばれていく桃井を見ながら未だに信じられないと言った表情を浮かべ

ていた。

「・・・桃井編集長が殺された・・・嘘だろ!?」

すると、その時・・・・・・編集部の奥の方から出てきたのは警察に身柄を押さえられ連行されていくティアナであった。

「放してください!!私は何も!!ただ、話を聞きに来ただけです!!」

「ほら、歩け!」

「黙ってなさい!」

ティアナは必死に事情を説明し、無実であると主張するものの警察の者は誰一人ティアナの言うことを信じようとはしなかった。

シンジもその光景を見ながら、何気なく周りを見渡していたときだった。

シンジの目に飛び込んでいくのはあの時最初に桃井の下に駆けつけてきた男で、嘗てシンジとチームを組んで居た元社員、レン・カザマであった。

シンジは何故こんな朝早くしかも、会社を辞めた筈のレンが此処に居るのかい疑問を抱いた。

「レンさん!?どうして此処に?」

謎が深まる中、騒動を聞きつけた副編集長のアイゼンがシンジに駆

け寄り事情を聞き始めた。

「シンジ君。一体これは何の騒ぎだ？」

「副編・・・あ！」

シンジは廊下から姿を消していくレンを見るなり慌てて後を追いかけていった。

そんなシンジを見ながら、アイゼンは編集部の机の上に置いてある雑誌を手に取り、そこに書かれてあるある特集記事を見るなり不敵な笑みを浮かべる。

特集ページには次のように見出しが書かれてあった・・・『戦士（グラディエーター）によるバトルロワイヤル裁判制度を語る』と。

その頃、ティアナにおきた危機など全く知る由もないスバル達残りのフォワードメンバーはというと、なのは達隊長陣が不在と言うこともあって午後の訓練は中止され代わりに溜まっている事務処理の方を四人で協力して分担することになっていたが、朝の厳しい訓練の所為で四人はタッチパネルを打つことも億劫であった。

「う～～～！！朝練の後の事務仕事ってキッツー！！」

スバルは伸びをしながらそんなことを呟くと、エリオやキャロも同様のことを口にする。

「今日は一段と厳しかったですからね。余計にそう感じますよ。」

「シグナム副隊長も、ヴィータ副隊長も恋次さんも・・・手加減な

んて全然してくれませんでしたしね・・・」

「ある意味何時もの訓練が普通に思えちゃうのが不思議よね。」

「本当～～～」

ギンガの言葉にスバル達も首を縦に振る。

そんな四人の目の前にある机では、大量の資料と向き合いながら機械的に事務処理を行うユーノが愚痴を零しながらこんな事を言っていた。

「全く・・・クロノは本局の用事で今日はオフィスにはいないし・・・はやても全身筋肉痛で動けないし・・・結局事務処理するのは僕だし・・・」

「でも、ユーノ先生は事務処理得意だからいいじゃないですか。私なんか、こういう作業のほうが寧ろ苦手で！」

「別に僕だってあまり得意じゃなかったよ。けど、無限書庫で働けば嫌でも得意になるよ。だって考えてもみなよ・・・毎日のように本局やいろんな部隊からの請求がそれこそ山のように届いて、検索魔法で情報調べて報告書として送る作業を続けていたら、誰でも文章が達者になるよ。おまけに何処かの腹黒提督の嫌がらせのような資料請求もあるんだよ。僕はそれを毎日のように不眠不休でやらされていたんだ。」

全員はユーノから赤裸々に語られる無限書庫での仕事内容に唖然としながら、ユーノの大変さを改めて知ったのであった。

「あはは・・・そ、それは・・・大変でしたね・・・」

「僕達・・・そう考えるとかなり・・・いやいや！！この上もなく恵まれている気がしますね！！」

すると、そんなユーノに追い討ちをかけるように白鳥が山積みの資料を抱えてユーノの元にやって来た。

「ユーノ店長。まだ追加の書類がありますぞよ！」

「ええ！！まだあるの！？もう・・・僕だって色々忙しいのに・・・今日はなのはが動けないからそっちの看病もしないといけないんだ！」

ユーノはそんな文句を呟きながらも、スバル達には到底真似できないような速度で出された資料に目を通し処理を済ませていく。

「とか何とか言いつつも、凄いスピードで処理してるのは気の所為かしら・・・」

全員はユーノの事務処理のスピードに最早目を疑うしかなかった。

「ところで、ユーノ店長。ティアナの姿が見えないのですが・・・？」

「ティアナだったら外出中ですよ。今日は第１００管理世界『ジャッジメント』で、新しく感知されたアンゴルモアの捜索のために、朝練が終わって直ぐ出かけました。」

「新しく反応があったのですか？」

「微弱だけど、間違いないですね。まだ、暴走はしていないようですからティアナ一人でも充分だと判断しましてね・・・」

と、その時だった。

恋次と金太郎が血相を変えて執務室へと入ってきた。

「ユーノ!!!大変だ!!!!」

「店長!!!一大事、一大事ですぞ!!!」

「恋次さん・・・それに金太郎もどうしたの？」

「いいから!!ちょっとニュースかけてみろ!!ティアナが大変なことになってるんだ!!」

「え？ティアが・・・!?」

「どういう事だろう？」

話を聞いていたユーノとスバル達は怪訝そうな顔を浮かべながら、言われたとおりテレビ画面を映し出し、ニュースチャンネルに切り替えた。

すると、画面に映し出されたのは衝撃的なものであった。

『本日午前。週刊誌アカシＪｏｕｒｎａｌの編集長、桃井麗子さんが編集部内で殺害され、その場にいた時空管理局本局遺失物管理部機動六課所属のティアナ・ランスター執務官を殺人容疑で逮捕しま

した。』

「「「「え!!」」」」

「「何!?」」

ニュースから飛び込んでくる衝撃的な内容にその場にいた他の局員を始め、ユーノやスバル達は愕然とした。

『ランスター容疑者は容疑を否認しており、当局では被害者の桃井さんとランスター容疑者の関係性、犯行の動機など現在調査中とのことです。』

長年、ティアナとチームを組んできたスバルはこの突然の報せにショックを隠しきれないようであった。

勿論、ショックを受けているのはスバル達だけではない。

「う、嘘でしょ!?」

「ティアさんが・・・殺人容疑って!?」

「こんなの何かの間違いですよ!!」

フォワードメンバーの誰もがティアナのことを信じようとするのに対し、ニュースを見ていた白鳥は恋次の隣で腕組みをしながら徐にこう口にした。

「・・・うむ。とうとうやってしまったか・・・」

それを聞いていた恋次もついつい乗せられてしまう。

「ああ。って、おい!!!何言わせるんだよ、てめーは!!」

白鳥のあまりに軽率な発言を聞いたスバル達は猛反発をする。

「不謹慎なこと言わないでくださいよ、白鳥さん!!ティアが殺人なんて・・・そんな莫迦なことする訳ないですよ!!」

すると、ユーノは冷静に話の内容を整理すると直ぐにスバルと白鳥に指示を出す。

「スバルの言う通りだ。先ずは本人に直接聞き出すしかないな・・・スバル、白鳥さん。二人は直ぐに現地に向ってティアナに接見。詳しい話を聞きだすんだ。」

「「はい!」」

「・・・やれやれ・・・一体何しちゃったの・・・ティアナ・・・」

ユーノはそんな事を思いながら、画面に映されている容疑者ティアナと書かれた写真を見つめるのであった。

その頃、逮捕されたティアナは特別法廷にて裁判官からの裁判内容を説明されていた。

「君の裁判は、バトルロワイヤル裁判制度によって行われる。」

「バトルロワイヤルで裁判・・・?よく分かりません!」

「戦士がそれぞれの意見を、戦いという公判でぶつけ合う。バトルロワイヤルが始まっている。戦士に選ばれたもの達は、特別空間ユグドラシルと言う世界で最後の一人になるまで戦い合う。検事と弁護士、そして事件の関係者が選ばれる。そして最後に残った一人が・・・君に判決を下すのだ。」

「何それ!?そんなことで正しい裁判なんて出来る訳ないでしょ!裁判ならちゃんと、法律っていう規則で有罪か無罪かを図るべきよ!非合理にも程があるわ!!」

「意見を持つものが直接ぶつかり合い、勝ち残ったものの意見が判決となる。バトルロワイヤル裁判制度は最も合理的且つ公正で公平だ。」

執務官として活躍するティアナにとって、こんな非合理且つ法律を無視した裁判制度など全く理解できることが出来なかった。

しかし、この世界で犯罪を犯した以上、ティアナが納得しようがしまいがこの裁判方法に従うしかないのは自明の理であった。

そんなティアナの不満を他所に、特殊空間ユグドラシル内部では選出された１０人の戦士達が支給される擬似デバイスを使って、それぞれが戦いを繰り広げていた。

現在戦いを繰り広げているのは四人の戦士達。

二人ずつとなって戦いを続ける中、柱に飛ばされた危機に陥っていた戦士の一人が迫ってくる戦士に向ってこう口にしてきた。

「ぐっ!!お前はどっちだ!?有罪か、無罪か!?」

すると、その問いかけている人物ではなく別なところで今戦っている戦士が答える。

「私が立件した以上、判決は有罪以外ありえない！」

追い詰められた戦士は攻撃を容赦なく受け続けるが、起死回生を図ろうと擬似デバイスに組み込まれている魔法を発動させる。

〈Ｓｔｒｉｋｅ　ｓｈｏｏｔ〉

戦士は装備された武器から魔法弾を発射するが、相対する戦士は同じく擬似デバイスの中の魔法を発動させる。

〈Ｃｌｅａｒ　ｓｋｉｎ〉

すると、その瞬間戦士の身体は周りの景色と同化させ攻撃を回避。

透明なことを良いことに戦士は不意をついて攻撃を仕掛けていく。

こうして、この場に居る四人の戦いを熾烈を極めていくのであった。

「止めろ！！もう分かった・・・俺の負けだ！」

透明化した戦士の攻撃を受け続けた戦士は、その場に倒れると命乞いをし始める。

それを見ていた戦士も鼻で笑い勝利をこの手に掴んだと確信する。

「ふん！」

だが、その戦士が油断しているのを見た瞬間、命乞いをした戦士は鼻で笑うと自身の擬似デバイスの中に組み込まれている召還魔法を発動させる。

「今だ！」

〈Ａｄｖｅｎｔ　ｃｒａｂ〉

「！？」

その瞬間、戦士の目の前に現れる化け蟹の召還獣。

召還獣は戦士の動きを捉えると、そのまま空間の外へと引きずり出そうとする。

また、同じ頃この事件を担当するティアナを起訴した検事も無罪を主張する事件の関係者に止めを誘うとしていた。

〈Ｓｈｏｏｔ　ｂｕｌｌｅｔ〉

検事は巨大な大砲のようなものを取り出すと、魔力を収束させて戦士に向けて発射する。

「お前も死刑になれ！」

「だあああ！！！！」

戦士は砲撃を喰らうと、ユグドラシルの内部から弾き出される。

弾きだれた戦士あるいはバトルの敗者はその後一切、バトルには参加することが出来ない。

「ぐっ！！！！卑怯！！！のあああああ！！！！！」

そして、召還獣によってユグドラシルの外に引きずり出されようとしていた戦士もやがて力に圧倒され空間の外へと出てしまう。

外に出た瞬間、支給された擬似デバイスが消去されてバリアジャケットが解除される。

そんな敗者をユグドラシルで見ながら勝ち残った戦士はこう高らかに言う。

「あはははははは！！！！！！卑怯もらっきょうも大好物だぜ！！！はははははははは！！！！！」

高笑いを浮かべる戦士であったが、そんな戦士の下に徐に後ろから近付いてくる黒いバリアジャケットに身を包んだ別の戦士。

気配に気付いた戦士が振り返ってみたところ、その人物の正体はあのレン・カザマであったのであった。

今迄の戦いの光景をモニターで見ていたティアナは、我慢の限界に達し裁判官に弁護士の要求を求めてきた。

「こんな裁判絶対嫌よ！！弁護士、誰か弁護士を呼びなさい！！！」

ティアナの発言を受けた裁判官達は話し合いの結果、弁護士を選出することを承認。

接見室で警察官に監視されながら弁護人が現れるのを待つティアナであったが、内心かなりの不安と怒りが込みあがっていた。

「（もう・・・何で私がこんな目に・・・！！）」

すると、その時接見室のドアが開くと中に入って来たのはあの二人であった。

「おう。弁護士を呼んだのは誰かな？」

「すみません・・・」

「本当に弁護なんて出来るんですか、白鳥さん！？」

「すみません・・・」

六課の人間とはばれぬ様に態々弁護士バッチをつけてスーツに身を包んだ白鳥と、何時もどおりの格好をするスバルであったが、スバルは白鳥がティアナの弁護を出来るのかかなり不安でいっぱいだった。

そんな白鳥の容姿を見た警察官の一人が素性と身分の確認をしてくると、白鳥は眉間に皺を寄せながら弁護士バッチを見せ付けた。

「・・・白鳥礼二。この凶悪犯の・・・弁護人だ！」

「失礼しました！」

と、ティアナも漸く白鳥とスバルの到着を確認すると白鳥の頓狂な

発言に思わず驚愕してしまう。

「何ですって!?」

「あはははははは!!!全ては大船に乗ったつもりでこの私に任せるがいい!!!」

自信過剰な白鳥に対し、スバルはティアナに詰め寄り事情を聞きだそうとする。

「ティア!殺人容疑って・・・一体何があったの!?」

「私が教えて欲しいわよ!」

すると、ティアナの顔を見るなり不満を一気に爆発させ手錠のかかった両腕であるにも関わらずティアナは器用にスバルの頬を抓り出す。

「いたたたたたたたたたたたた!!!!!!!!!!!!!ティア痛い!!!!!痛いよ!!!!!!!!!」

「もう!!!私が何したって言うのよ!!!」

すると、そんな二人を一瞥しながら白鳥のほうに話しかけてきたものがいた。

「あ、あの・・・・・」

白鳥は声の主の方向に目を向けると、明らかに刑事には見えないその男の素性を問いただしてきた。

「おや?そう言えば・・・主は何だ?刑事には見えないな。」

「シンジ・ヒラコ。殺された桃井さんの部下です。」

「では、お主は・・・見ていたのか?この凶悪犯が・・・」

「ちょっと!!!」

「無抵抗の女性を残酷に手にかける姿を・・・」

「ちょっとってば!!!!!」

白鳥の性質の悪い冗談を聞いていたティアナはその場に居たスバルを押し倒して白鳥に詰め寄り、怒りを露にしてきた。

「いや。僕が出社したときには・・・もう警察も来ていて・・・死因は首の鋭い刺し傷。そして、彼女の手にフォークが。」

シンジは順に出社したときの当時の様子を可能な限り克明に語り出し、白鳥に事件の全容を伝えた。

すると、フォークを持っていたことに疑問を抱いている白鳥とスバルにティアナは弁明をしてきた。

「あれは・・・ケーキが出されたんです。ショートケーキが!」

それを聞いた白鳥は、ちょっと妬ましそうな目でティアナを一瞥するとこんな事を言って来た。

「ショートケーキだと?死刑であるな。」

「だから、何でですか!!!」

「白鳥さん!!」

白鳥の発言を聞いた二人は抗議をしてきた。

白鳥は悪びれる素振りなど全く見せずにあれは冗談だったと弁明する。

「冗談である。」

「もう・・・私は只・・・あの人に此処の世界のアンゴルモアに関して有力な情報を知っているって言うから会いに行っただけなのに・・・信じてください!」

「わ、私は信じてるよ!!ティアのこと!!」

「・・・スバル・・・」

「大丈夫・・・必ず助けるから!」

スバルはそう言うと、不安げな表情を浮かべるティアナに向って強い眼光でそう断言したのであった。

その後、白鳥とスバルは一度ティアナに別れを告げるとシンジと一緒に道端を歩きながらこれからの事について話し合っていた。

「それにしてもどうします?ティアを何とか無罪にしようにも、一

体どうやって？」

「そう言えばその服装・・・あなた方はひょっとして機動六課の？」

シンジがスバルの着ていた格好を見てそう尋ねると、スバルは敬礼をして自分の名前と所属を口にする。

「はい。機動六課スターズ3、スバル・ナカジマです！」

「ティアナとは長年の付き合いでな・・・お互いに相棒同士だ。」

「相棒・・・か・・・」

白鳥が口にした相棒と言う言葉を聞くとシンジは複雑そうな顔を浮かべる。

白鳥はそんなシンジに疑問を抱きながら、肩からぶら下げている鞄を見て尋ねてきた。

「？ところで、お主は雑誌記者ということは、カメラマンか何かなのか？」

「あ、はい！僕は編集でカメラを担当しています。」

「被害者の関係者という事は・・・お主も戦士に？」

すると、シンジは懐から支給された擬似デバイス『サカナデ』を取り出し、二人に見せながら胸中のことを語りだす。

「・・・はい、選ばれました。でも、話していてティアナさんが犯

人とは思えないし、バトルには参加することを迷っています。」

「もしかして、ティア以外の犯人に心当たりが？」

シンジはスバルの言葉を聞くと、脳裏に浮かんでくる今朝のレンに関して疑念を抱いたが、ふとその時シンジや白鳥達は目の前に浮かんできた特殊空間ユグドラシル内部で戦いを行っているレン達の姿を目の当たりにする。

「あれが・・・戦いの舞台ですか！？」

「・・・“特殊空間ユグドラシル”・・・」

それを見た白鳥は背中から下げていた細長いケースを手に取ると、特殊空間ユグドラシルのほう目掛けて歩き出した。

「では、一つ行ってみるとしようではないか。」

「え！？」

「出来るんですか、白鳥さん！？」

「私はティアナの弁護士で、ユーノ店長同様・・・魔導死神なのだからな。」

白鳥は驚愕する二人にそう言うと、特殊空間の前に立ち止まった後ケースから斬魄刀を取り出し琴線斬を解放する。

「天地に奏じよ、『琴線斬』。」

解放されたエレキギター状の刀を手に取ると、白鳥はユグドラシル内部へと入り込んでいった。

それを見たスバルは驚愕と同時に関心した様子でこう口にした。

「流石！」

その頃、ユグドラシル内部ではレンと卑怯なやり方で勝っていた戦士が戦いを続けていたが、レンは大刀を振り回しながら戦士を追い詰めていく。

「待て！！分かった！！じゃあ、無罪・・・無罪でいい！！ぐあああ！！」

戦士が再び同じようなことを口にして命乞いを求めるがレンは容赦なく剣を振り回し、挙句の果てにこう口にしてきた。

「俺は・・・判決には興味がない。」

「え！？じゃあ・・・何でこのバトルロワイヤルに！？」

不可解なレンの言動に疑問を抱く戦士であったが、レンはそれだけ言うと擬似デバイスを発動させて止めの一撃を加える。

〈Ｆｉｎａｌ　Ａｔｔａｃｋ〉

レンは魔力を竜巻状に構成すると、一気に飛び上がってその竜巻状の魔力と供に戦士に向ってスピンキックをしていった。

「うあああああ！！！！！」

スピンキックを直撃した戦士はその瞬間爆発を伴い、強制的にユグドラシルの内部から外へと弾き出されたのであった。

レンは残った戦士の遺留品を回収すると、複雑そうな表情を浮かべていた。

すると、そんなレンの前に現れるのは死覇装に身を包んだ琴線斬を抱えた白鳥であった。

「ん！？」

怪訝そうに自分を見つめるレンを高所で見下ろしていた、白鳥は徐に足場を使って下りてくると周りを見渡しレンと向かい合う。

「・・・此処が特殊空間ユグドラシルか・・・中々楽しいではないか。」

白鳥の登場に警戒心を剥き出しにするレンは帯刀を取り出すと、白鳥に向って走り出す。

「弁護士として、貴様に尋ねたい。」

襲い掛かろうとするとレンに対して、白鳥は冷静な様子で懐から機動六課特別身分証明書を取り出し見せ付けた。

レンはそれを見ると、攻撃を中断し白鳥に質問してきた。

「？何だそれは・・・時空管理局か！？」

「・・・悪いな。ちょっと訳ありという奴でな・・・」

「・・・ふん。」

レンは鼻で笑うと、刀を鞘に納めて白鳥の前から立ち去ろうとした。

白鳥は行動の真意が読めないレンに疑問を抱く。

「？」

と、その時・・・・・そんな二人の前に何者かによる砲撃が襲い掛かってきた。

「「のあああああ！！」」

二人は攻撃が発射された場所に目を向けると、高所に立ってたのは両肩にバズーカを装備したティアナを起訴した検事であった。

「素人に判決など下せるか！有罪だ、有罪！！」

検事はそう言うと、再び二人に向ってバスーカ砲を発射して襲い掛かってきた。

二人は一度土管の陰に隠れると、攻撃から身を守ろうとする。

白鳥はいきなりの奇襲にかなりご立腹の様子であった。

「何だ奴は！？」

「多分、立件した検事だ。」

「ん～～無性に無罪にしたくなってきたぞよ。」

しかし、その瞬間バズーカ砲の一発が二人の目の前に飛んできてしまいその直撃を受けた白鳥とレンはそれぞれ来た場所へと弾き出されてしまう。

「のあああ!!!!」

白鳥が戻って来たのを見たスバルはシンジと供に駆け寄り、白鳥に向ってスバルはこんな事を口にしてきた。

「あはは!!白鳥さん!!それですよ!!」

「・・・何がである!?」

「バトルロワイヤルに参加し続けるんですよ!白鳥さんや私が勝ち残れば、ティアに無罪判決を言い渡せる!それに、ティア以外に真犯人がいるのなら・・・そいつも戦士として戦いに参加してる可能性が高い!そこまで考えてバトルロワイヤルに飛び込んだんですよね!?」

「・・・ま・・・当然であるがな・・・!!」

スバルの前ではそんな事を口にする白鳥であったが、本当のことを言うとそこまで深い意味など考えずに戦いの中に飛び込んで行ったのである。

「よし!!こうなったら・・・とことんバトルロワイヤルに挑戦しましょう!!」

「お前も戦うのか!?」

「勿論ですよ!!ティアを助けるためなら、意地でも勝ち残ってみせますよ!!」

「・・・・・・――――――」

強い決意を胸に抱くスバルと、些か不安げな表情を見せる白鳥を他所にシンジは一人あの時特殊空間で戦っていたレンの姿に複雑な心境を抱いていた。

その後、白鳥とスバルはシンジに連れられ事件現場であるアカシＪｏｕｒｎａｌを訪れ、副編集長のアイゼンと接触を試みた。

「副編集長のアイゼンです。」

「弁護士の白鳥礼二である。」

「助手のスバル・ナカジマです!事件のことについて聞きたいんですけど?」

スバルがアイゼンに事件当時のことを聞き出そうとすると、アイゼンは重い表情を浮かべてこう語り出した。

「・・・許せません。話を聞く振りをして編集長を・・・」

これはアイゼンが部下から聞き出した桃井とティアナとの対話の一部始終である。

〈あの・・・電話した機動六課のティアナ・ランスターですが・・・〉

〈ああ、私が桃井です。アンゴルモアについて聞きたいって・・・あなた?〉

〈はい、そうです。〉

〈ふふ。緊張しないで。あ、そうだ!ケーキ、食べる?〉

〈はい、有難うございます。〉

それを聞いたシンジはティアナを犯人だと思い込んでいるアイゼンに向って次のように言って来た。

「でも・・・編集部員でも、殺害現場を見たものはいません!」

「いや・・・室内には編集長とあの女だけだ。密室だよ。」

「あなたはその時何所に?」

白鳥がそう尋ねると、アイゼンは三人を連れて桃井が殺害された応接室へと向った。

応接室の中に入った白鳥は無意識のうちに現場のものを足で荒らしていく。

スバルは直ぐに止める様に声を掛ける。

「白鳥さん!駄目ですよ・・・現場を勝手に荒らしたりしたら。」

そんな白鳥に向って、アイゼンはブラインドを少し開けると外を見つめ当時の様子を口にし出す。

「・・・あそこで・・・出社前に紅茶を飲むのが、私のスタイルです。あんなことが起こってることも知らずに。」

「じゃあ・・・最初に事件を確認したのは、シンジさん?」

スバルはアイゼンの話を聞くと、シンジの顔を向いてそう尋ねるが・・・アイゼンはそんなスバルに向って直ぐにこう言って来た。

「いや。レン・カザマです。」

「・・・レン?」

「・・・昔、この会社にいた男です。他所に引き抜かれて辞めたのに・・・何故かあの朝顔を出してた。」

シンジは複雑な表情を浮かべると、事件当時のときに見かけたレンの姿を思い浮かべる。

すると、シンジに向ってアイゼンがこんな事を口にした。

「そう言えば・・・彼もバトルロワイヤルに参加してるとか?」

「レンさんが戦士に!?・・・じゃあ、あれはやっぱり・・・」

シンジもスバルも疑念を抱きながら、これまでの事件の流れを頭の中で確認していたときだった。

突然、アイゼンが白鳥に向ってこう言って来た。

「さて・・・そろそろやりますか？」

「その言葉・・・待っていたぞよ。」

「この裁判は、私が判決を下します。」

アイゼンはそう言うと、懐から擬似デバイス『キョウカスイゲツ』を取り出すと白鳥に宣戦布告をしてきた。

「いいであろう。私も思いっきり・・・戦わせてもらおうぞよ。」

すると、二人の目の前には特殊空間ユグドラシルが発生しバトルの準備が整った。

二人はユグドラシルの前に立つと、それぞれの武器を取り出し力を解放させる。

「・・・キョウカスイゲツ・・・セットアップ。」

〈Ｓｅｔ　ｕｐ〉

白鳥はその擬似デバイスの名前を聞くや否や、驚きを隠せなかった。

「！？（キョウカスイゲツ・・・）くっ！天地に奏じよ、琴線斬！」

今此処で深く考えても仕方がないと判断した白鳥は琴線斬を解放すると、紺色のバリアジャケットに身を包み、専用のガントレットを

右腕につけたアイゼンと供にユグドラシルへと向おうとする。

「・・・勝って下さいね、白鳥さん。」

「無論だ。」

スバルは白鳥にそれだけ伝えると、白鳥はアイゼンと供にユグドラシル内部へと入り込んで行ったのであった。

ユグドラシルへと入った二人は向かい合うと、お互いに牽制をしながら武器を手に取る。

「私に勝てる戦士など、いませんよ。」

「ああ・・・皆そう言う。」

白鳥はそう言うと、琴線斬の音色を奏で始め音撃を加えていった。

アイゼンはそれをかわしながら、キョウカスイゲツに組み込まれた魔法の一つを発動させる。

〈Ｂｌｏｏｄｙ　ｓｗｏｒｄ〉

「ふん！」

白鳥は思った以上に早くて鋭いアイゼンのブラッディーソードに苦戦しながら、琴線斬でそれを受け止めていく。

すると、アイゼンは白鳥を追い詰めるために召還獣を呼び出す。

〈Ａｄｖｅｎｔ　ｇｈｏｓｔ〉

その瞬間、白鳥の前に現れたのは無数の悪霊と言う悪霊であった。

「何だ!?こやつらは!!」

今までに見たこともない攻撃方法を使うアイゼンの未知なる能力に翻弄され続ける白鳥。

そんな白鳥に向ってアイゼンは強力な一撃を加えようとする。

〈Ｓｔｒｉｋｅ　ｂｕｌｌｅｔ〉

アイゼンは白鳥目掛けてガントレットから襲っていたゴースト達を収束させて砲弾として発射していった。

ゴーストの砲弾を直撃した白鳥はそのまま高く飛び上がり、地面に激しく叩きつけられた。

「のあああ!!!!」

白鳥は満身創痍の身体を何とか起こすと、奥の手を使うことを決心する。

「くっ!!こうなったら・・・!」

すると、その時・・・別な場所から白鳥を狙っていた戦士の一人が大量の召還獣を従えて白鳥を襲ってきた。

奇襲を受けた白鳥は止むを得ずそちらの相手をする羽目になり、そ

んな様子を影で見ていたアイゼンはこう呟くと一人立ち去っていく。

「バトルに参加してる戦士は、私達だけではない。君の手の内、見せてもらいますよ・・・ふふふ。」

白鳥がユグドラシルで戦いを繰り広げているその頃、スバルは社員から聞きだした辞職したレンの仕事場を訪れ、事件のことを聞き出していた。

「弁護士助手だって？」

「はい。レン・カザマさん・・・あなたが事件現場にいた理由を聞きたくて。」

「桃井さんに会いに行っただけだ。」

「もう何年も会ってなかったと聞きましたが・・・・・・」

「・・・・・・――――――」

スバルの言葉に黙り込んでしまうレンはそのまま記事の内容を書くためにタッチパネルを打ち続ける。

そんなレンの姿を見ながら、スバルは部屋中に飾ってあるシンジとのコンビ時代の写真や表彰状を見るなりレンにこう言った。

「シンジさんと、いいチームだったみたいですね？」

すると、それを聞いたレンは記事を書くのを止めると徐に立ち上がりシンジと一緒に写ってある写真に手をかける。

「・・・シンジがカメラ。俺が記事。俺達は最高のチームだった・・・だが俺が壊した。」

「・・・・・・――――――」

すると、そんな沈黙が続いていた部屋に入って来たのはシンジであった。

シンジは冷ややかな目でレンを見つめながらこう話しかけてきた。

「本当に戦士になったんだな・・・レンさん・・・」

「シンジ・・・」

「三年前、うちのトップ記者だったあんたは大手の雑誌社に引き抜かれ、チームの俺に何にも言わずに消えた。あんたは俺や桃井さんを裏切ったんだ。」

「シンジ・・・俺は！」

と、レンが何かを言い出そうとしたとき・・・シンジは机の上に置かれてあるレンの書いた記事を手に取りくしゃくしゃに丸めて床に叩き付けると、擬似デバイスを取り出しユグドラシルを発生させる。

「サカナデ！」

シンジの戦う姿勢を目の当たりにしたレンは、覚悟を決めると擬似デバイス『ムルシエラゴ』を取り出し、お互いに構築させる。

「「セットアップ！」」

〈〈Ｓｅｔ　ｕｐ〉〉

その瞬間、二人の身体を包み込む黒と赤の対照的なバリアジャケット。

シンジの左腕にはアイゼンと同じように専用のガントレットが装着されていた。

二人はユグドラシル内部へと入り込んでいく。

それを見届けたスバルはシンジが床に投げつけた丸まった記事を徐に拾い上げてその中身を確認した。

記事の見出しはこうだった・・・『戦士達の命をかけた壮絶バトル！』。

ユグドラシルに入り込んだシンジは戦う姿勢を見せないレンに向って殴りかかっていく。

「いやああ！！！はっ！！！」

レンはシンジの拳をかわすと、直ぐに無意味な戦いを止める様に説得する。

「止めろ！シンジ・・・お前に戦いは似合わない。」

「五月蝿い！あんたはあのティアナって人を有罪にするために、バトルに参加してるんじゃないのか！？」

「何のために!?」

「あんたは現場の直ぐ近くにいた!彼女の目を盗んで桃井さんを手にかけ、その罪を彼女に着せた!」

シンジはそう言うと、攻撃をしようとしないレンの顔面を力いっぱい右の拳で殴りつけた。

幾度か殴り続けるうちに、一度だけ殴るのをためらったシンジであったが・・・それでも込み上げる怒りを抑えることが出来なくなり再び殴りかかろうとした。

「くっ・・・!!!いやあああ!!!!!」

と、その時そんなシンジの攻撃を妨害したのは白鳥の攻撃を受けて飛ばされた戦士であった。

二人がそれを凝視してると、白鳥が二人の後ろから走ってきた。

「退け退け退け!!」

二人は左右に避けると白鳥の道を作った。

「動くなよ。動くと痛いぞよ!!」

白鳥はそう言うと、ふらふらの戦士に向って琴線斬の持ち手と弦の部分を逆さまにするとその弦の部分を戦士に叩きつけてユグドラシル内部から強制退場させた。

「のあああああ！！！！！！！！」

戦士がまた一人脱落していく様子を、法廷で目のあたりにしていたティアナは実に複雑な心境であった。

「また・・・戦士が一人・・・白鳥さん・・・スバル・・・」

戦士との決着がついた後、白鳥は怪訝そうな表情で凝視するレンとシンジに向かってこう口にしてきた。

「私も混ぜてもらおうか・・・先ずは主との決着からだ。」

「おい・・・！？」

シンジは白鳥にそれは止める様に口に出そうとしたが、レンはシンジの行動を止めると白鳥の挑戦を受けることにした。

その様子を影で見ていたのはあのアイゼンであった。

「ふん・・・」

レンが戦う姿勢を見せると、白鳥も嬉しくなったのかあの時アイゼンに使おうと思っていた奥の手をここで発動することにした。

「さて、それでは此処は一つあれを試してみるとするか。」

そう言うと、死覇装の中から白鳥が取り出したのはユーノに新しく創ってもらった羽の形をした専用のインテリジェントデバイス『ジーク』であった。

「ジーク、セットアップ。」

〈Ｓｅｔ　ｕｐ〉

すると、その瞬間白鳥の死覇装の上から装着される純白に輝く長めのバリアジャケットと琴線斬に装備される鋭い槍状のもの。

「「！？」」

驚愕する二人に向って白鳥は高らかに自分の名前を告げる。

「我が名は白鳥礼二。またの名を、白翼の魔導死神と呼んでもらおう。」

白鳥はそう言うと、レンと供にシンジを置いて戦いの場所へと向かって行った。

「白翼の・・・魔導死神！？」

白鳥の口にした聞きなれない言葉に思わず復唱するシンジ。

そして、地下駐車場へと戦いの場を移した白鳥とレンは肉薄した戦いを繰り広げていた。

「お前本当に弁護士か！？戦士なのか！？お前のような戦士、取材でも聞いたことがない！」

「そうであるか？だが、我々は貴様達のことは知っている。これでも、時空管理局の仕事に携わって居るからな・・・不本意ながら。」

そう言うと、白鳥はジークの機能を発動させ琴線斬の形状を変化させた。

〈Ｆｉｒｓｔ　ｆｏｒｍ〉

デバイスからそう聞こえると、琴線斬に施された槍状のものが更に伸びて長刀ぐらいの大きさへと変化する。

白鳥はそれを使ってレンに激しい剣戟を加え、ある程度のダメージを当てると再び形状を変化させる。

〈Ｓｅｃｏｎｄ　ｆｏｒｍ〉

すると、今度は長刀の姿から巨大なシールドへと変化する琴線斬。

白鳥は反撃してきたレンの攻撃をそれで防ぎながら、隙を見てはレンに重い一撃を加える。

白鳥の一撃を喰らったレンはムルシエラゴの中の魔法のうち、最もトリッキーな能力を発動させる。

〈Ｔｒｉｃｋ　ｍｙｓｅｌｆ〉

その瞬間、レンの身体がティアナの使うフェイクシルエット同様何人かに分身した。

白鳥は一度セカンドモードを解除すると、鼻で笑いながらこう言った。

「ほう・・・だが、分身を使うならもっと高度なものを使うことを

お勧めするぞよ。」

〈Ｗｉｎｇ　ｆｏｒｍ〉

白鳥はそう言うと、ジークの中でも最も際ある能力でもある第３形態を発動させる。

第３形態を発動させると、白鳥の背中には翼が生え、更には空中を飛び回りながらの攻撃はもとより、敵の正体を瞬時に見破る能力も向上するのだ。

白鳥はそれを使い分身を容易く回避すると、空中から本物のレンを見つけ出して琴線斬でレンを攻撃してきた。

攻撃を受けた本物のレンが吹き飛ばされると、分身体のレンも自然に消滅する。

その光景を近くで見ていたシンジは倒れ伏すレンを見ながらこう口にする。

「いい様だね、レンさん・・・あんたは俺達を裏切った。そして、桃井さんまで手にかけた。」

白鳥は何とか立ち上がろうとするレンに近付き琴線斬を振り上げる。

それを見た瞬間、シンジは深く考え込むとレンの正面に張り込み白鳥に向ってこう言った。

「！？」

「こいつに止めを刺すのは・・・・・・俺だ！」

「お前・・・シンジか？戦いたくなかったのではないのか？」

「ああ。だが、この人が教えてくれたよ・・・人間なんて結局、みんな一人ぼっちで自分勝手なんだって。だから・・・戦うしかないって！」

それを聞いた白鳥も内心間違っては居ないと思いつつ何所か腑に落ちないで居た。

すると、そんな三人の後ろから奇襲攻撃をしてきたものが居た。

「「「！！」」」

レンが攻撃を喰らった後、後ろに振り返ってみるとそこに立っていたのはアイゼンであった。

「奴は！？」

「すみませんね、皆さん。短い時間で結審するのが、今の裁判です。」

〈Ｇｈｏｓｔ　ｗａｖｅ〉

アイゼンはそう告げると、キョカスイゲツの力の一端を解放し、三人を強制的にユグドラシルの外へと排除する。

「「「うあああ！！！！」」」

その頃、レンの事務所からシンジと一緒に写ってある写真を手に取りながら外に出てきたスバルの表情は何所か複雑であった。

すると、そんなスバルの目の前に現れたユグドラシルの空間から出てきたのは満身創痍の白鳥、シンジ、そしてレンの三人であった。

「白鳥さん!!」

「くそ・・・何だあ奴は・・・規格外の強さである・・・!!本当に只の副編か!?」

スバルはボロボロの三人に近付くと、決着がつかなかったことを悟る。

「どうやら、決着は着かなかったようですね。」

「レンさん・・・何でバトルロワイヤルに参加する!?桃井さんを殺し、その罪を他人に押し付けるためか!!」

「違う・・・」

「だったら何で戦士になったんだ!?何の為に・・・!?」

シンジはレンの真意を探ろうと、胸倉を掴んで問い詰めるがレンは何も答えようとせずにシンジの手を解くとそのまま三人の前から立ち去っていった。

レンはボロボロの身体を引きずりながら、暫く当てもなく道を歩いていたときだ。

ゴミ捨て場のほうから見えてきたユグドラシルの中に居た金色のバリアジャケットに身を包んだ戦士を見るなり顔色を変えると、ユグドラシルに向って走り出した。

「・・・今度こそ・・・見つけてやる・・・！！」

レンはユグドラシルの前に立つと、ムルシエラゴを取り出し構築させる。

「ムルシエラゴ、セットアップ！」

〈Ｓｅｔ　ｕｐ〉

その頃、喫茶店でこれまでのことをスバルに話した白鳥は重苦しい表情を浮かべる若干の怒りも窺えるシンジの話をスバルと供に聞いていた。

「・・・これではっきりしたな。」

「「・・・・・・・――――――」」

「真犯人は、レン・カザマだ。」

「確かに・・・会社はとっくに辞めて居るのに、事件の日に態々来るっていう偶然はないであるしな・・・」

「でも・・・シンジさんとチームだったんですよね！？」

「・・・何度も凄いネタを掴んで、賞も受けた。だけどあの人は・・・・・・俺達を捨てたんだ。」

「でも、どうして今更編集長を殺すんですか!?」

「知るか。今度は雑誌を乗っ取るつもりなんじゃないか?」

「レンが真犯人なら・・・ティアナは無罪か・・・!?」

白鳥はかなり残念そうな感じの声でそう口にすると、当然聞いていたスバルは白鳥の言動に注意を入れた。

「ちょ、白鳥さん!!」

「そうだ!早くあの人を自由にさせてあげなきゃ!」

シンジはそう言うと、喫茶店を飛び出し白鳥とスバルを連れてティアナの下に急いだ。

その頃、今だ拘留され続けているティアナは牢の中で一人くらい表情を浮かべながら一抹の不安を抱えていた。

「バトルロワイヤル・・・最後の一人になるまで戦う・・・そんな戦いにスバルが参加したら・・・・・・!?」

ティアナは大事な相棒であるスバルがバトルロワイヤルに参加して、万が一取り返しのつかないことになるのではないかと考えれば考えるほど、不安は大きくなっていく。

ティアナは牢の柵に手を掛けると、声を張り上げて自分の身柄を解放するようにもう一度説得をしてみた。

「誰か!!誰かいないの!!私・・・こんなことしてる場合じゃないのよ!!」

その時のティアナの心情は実に大きく揺れ動いていた。

考えていたのは勿論・・・・・スバルの身の安全のことであった。

それでは此処より暫くの間スバルとティアナのこれまでの経緯をダイジェストで送ろう。

〈・・・ティアとはずっとコンビだったから・・・ティアがどんな夢見てるとか、魔導師ランクとか、昇進に・・・どれくらい一生懸命なのかも・・・よく知ってる・・・!!〉

〈だから!!こんなところで・・・私の目の前で・・・!!ティアの夢をちょっとでも躓かせるのなんて・・・嫌だ!!一人で行くのなんて・・・絶対嫌だ!!〉

〈自分なりに強くなろうとか・・・そんなにいけない事なんでしょうか!!自分なりの努力とか、そう言うことも・・・やっちゃいけないんでしょうか!!〉

〈たとえ、任務や場所は違えど・・・私達はずっと一緒のパートナーだから!躓いたって、道を間違えたって、二人で一緒なら乗り越えられる・・・だから・・・一緒に頑張ろう!ティア!!〉

そんな想いを抱きながら若干目には涙を浮かべていたティアナ。

すると、そんなティアナの下にやって来た監視の者が面会が来ている事を伝える。

「面会だ。」

ティアナは監視員によって接見室に連れて行かれると、そこには既に白鳥やスバルを始め、シンジとあのアイゼンまでもがそこに居た。

ティアナは机に座ると、黙り込んでいた全員のことを怪訝そうに見渡す。

そして、そんな沈黙を破ったのはアイゼンの言葉であった。

「態々呼び出して何かと思えば・・・レン・カザマが真犯人?成程、ありそうな話だ。」

「だから、警察と相談して・・・一度バトルロワイヤルを中断する申請を出します。レンについての裁判を改めて開くんです。」

「という事は・・・真犯人が見つかったなら、私は自由なんですね!?」

シンジの説明を聞いたティアナはそう思うと嬉しくて仕方なかった。

しかし、白鳥はそんな喜々とするティアナの顔を見るなり思い口を開けた。

「冤罪事件ということだから、執務官を辞める必要もない。だが、危険なお前が・・・再び世に放たれるのか・・・」

「白鳥さん!」

ティアナはここに来てから白鳥の自分に対する不快な言動に度々腹を立てていたが、反抗することは出来ないので仕方なく引き下がることにした。

「あなたも承知であるな？この裁判は中止だ。」

白鳥がそう言うと、アイゼンも黙って首を縦に振った。

しかし、只一人・・・スバルだけはこの裁判の中止に反対するのであった。

「・・・いや・・・駄目ですよ。」

「スバル・・・！？あんた何言ってるの？」

まさかのスバルの発言に驚きを隠せなくなったティアナ。

「レンさんが真犯人だとは、私には思えないよ。」

「君はレンさんのこと何も知らないだろう！！」

「・・・レンさんは・・・自分が全て壊したって言ってた・・・そう言った時の顔が、私の知ってる人の顔に似ていた。」

「ん？」

白鳥はスバルの口から聞かされる知っている人という言葉に疑問を抱いた。

「私の知ってる人も・・・自分は検索魔法や本を調べる調べること

しか出来ないなんて言う・・・凄い自分のこと卑下するけど・・・本当は・・・周りや・・・たった一人の大切な人を守るために戦ってる。私は・・・あの人を信じてみたいんです！」

スバルはそう言うと、持って来たレンとシンジが写った写真を見ながら全員に胸中の想いを赤裸々に打ち明けた。

白鳥もその時、スバルの話の内容から判断できるその人物のことを思い浮かべ、レンとその人物・・・ユーノとを照らし始めた。

そんなスバルの話を聞いていたアイゼンは真犯人は誰なのかを訪ねる。

「奴が犯人じゃないんなら・・・誰だというのだ？」

「良いのか！？無実のティアナさんは・・・また牢に閉じ込められるんだぞ！？」

机を叩いて、スバルの言葉に猛反発するシンジ。

暫くの沈黙が流れると、シンジは荷物を持って接見室から立ち去っていった。

スバルは重い表情を浮かべながら、黙り込んだままのティアナに向って謝罪の言葉を口にする。

「ティア・・・・・ごめん・・・・・・」

すると、そんなスバルの言葉を聞いたティアナの口から返ってきたのは意外な言葉だった。

「・・・バカ・・・謝るんじゃないわよ・・・あんたのそう言う性格・・・ずっと前から分かりきってたことだし・・・それに、あんたが信じるって言うなら私も信じる・・・」

「ティア・・・」

「だって私達は・・・一蓮托生のパートナーでしょ。」

ティアナはそう言うと、悲しげな表情など一切見せずに笑ってスバルに返事をする。

それを見たスバルも、浮かべていた涙を拭い去ると笑顔で約束をした。

「・・・うん・・・ありがとう・・・ティア!ごめんね・・・もう少しだけ、待っててくれる?」

「ええ。待ってるわよ・・・あんたが証拠を掴むまで・・・ずっとね。」

その頃、金色のバリアジャケットを身に纏った戦士と孤独な戦いを繰り広げていたレンはボロボロの体であることも厭わずに戦士に剣を振るっていく。

「やっと見つけた!!お前のキーをよこせ!」

レンはそう言うと、何度も何度も剣を振っては戦士にダメージを与えていく。

そして、止めの一撃を加えるのであった。

〈Ｆｉｎａｌ　ａｔｔａｃｋ〉

竜巻状の魔力に乗ってスピンキックを食らわせたレンは、バトルに勝利を収めると金色の戦士の遺留品が漸く捜し求めていたものを見つけ出しユグドラシルの中から出て行った。

レンがユグドラシルの中から出てきた光景を偶々通りがかったシンジが目撃し、シンジはレンに駆け寄ると息切れを起こすレンの胸倉を掴みながら罵声を浴びせる。

「また戦ってたのかこの人殺し！！」

すると、そこへやって来たのはスバルであった。

「シンジさん！！シンジさん！！止めてください！！」

「あんた甘すぎる！！」

スバルは掴んでいたシンジの手を離すとレンを優しく起こそうとする。

「大丈夫ですか・・・！？」

と、その時・・・スバルはレンの右手に掴まれていた謎の鍵に着目し質問してきた。

「この鍵は・・・！？」

シンジもそれに気付くと、レンに近付き手に握られた鍵をまじまじと見つめ鍵の名前を口にする。

「・・・“過去鍵（パストキー）”・・・！」

「昔、取材の中で聞いたことがあった。過去に戻る能力を秘めた鍵が在るってことをな！」

「でも、そんなものどうやって使うんですか！？」

「バトルロワイヤルを行う際、支給される擬似デバイスにはそれぞれに鍵穴がついているだろう・・・そいつにこれを差し込んで構築すれば・・・」

「それじゃあ、あなたはずっとこの鍵を探していたんですね？」

スバルにそう言われると、レンは黙ったまま小さく頷く。

「何でそんなことを！？」

「俺はあの日・・・桃井さんに呼び出された。三年ぶりだった・・・大事な話があると。だが一足違いで桃井さんは・・・だから聞きたかった！何を言いたかったのか！」

「だが、バトルロワイヤル以外でそいつを使用すれば・・・即ジャッジから外される決まりだ！」

「俺は只・・・桃井さんの言葉を知れれば、それでいい。」

と、その時・・・・・今だ閉じぬユグドラシルの中からレンを狙

っていたキョウカスイゲツを発動させているアイゼンが攻撃を加えようとしてきたのであった。

「ふふ・・・」

「!!白鳥さん!!」

スバルはそれに気付き、近くで待機していた白鳥にそう言うと白鳥は攻撃を行おうとしていたアイゼンをユグドラシルの中に引きずり込んでいった。

「待っていたぞ、このときを!!」

攻撃を阻まれたアイゼンは地面を転げ回り、徐に立ち上がると白鳥に向って尋ねてきた。

「何故此処に!?」

「スバルが言っていたのだ。“本当の犯人が、今度はきっとレンの口を塞ぎ、罪を着せるって”と。真犯人は貴様だ。」

「違う!私じゃない。真犯人はレンだ!それを告白させようとしただけだ。」

「・・・私は昔から人を信じることがあまり出来ない。人の痛みを感じることも・・・だから、スバルが信じることは私も信じるだけである。彼女は無駄に元気と頑丈さと優しいことが取り得のバカであるからな。」

「お前たちは大事なことを忘れている。私はあの時離れたビルにい

た・・・戦士にもなっていない私が・・・どうやって桃井編集長を手にかけたというのだ!?」

その話しの内容を外で聞いていたレンは、立ち上がると鍵を手に取りムルシエラゴを取り出そうとした。

「その方法も・・・この鍵で分かる・・・!!」

すると、そんなレンの腕を掴んで行動しようとするところを止めたのはシンジであった。

「その身体じゃ無理だ。俺が行きます・・・」

シンジはそう言うと、レンの持っていた鍵を取り上げると懐からサカナデを取り出し、鍵穴にそれを差込む。

「サカナデ!」

〈Ｓｔａｎｄ　ｂｙ　ｒｅａｄｙ〉

「シンジ・・・」

レンは神妙な表情でシンジの名前を口にすると、シンジも一度レンの方を振り向くと鍵を左回りに回転させて構築させた。

「セットアップ!」

〈Ｓｅｔ　ｕｐ　ｐａｓｔ　ｔｉｍｅ〉

その瞬間、パストキーの効力によってシンジとスバルは一度ユグド

ラシルの中に吸い込まれると過去の時間を遡ってまだ桃井が殺されていない直前の時間まで移動した。

ちょうどその時は、ティアナが桃井にケーキを出されて話を聞きだそうとしていたときだった。

「ティアナ・ランスター執務官ですよね？」

「はい。」

「電話で話した、あなた達が探してるアンゴルモアについて話してたわね？」

「はい。この世界に、危機が起こってるはずなんです。」

すると、その時・・・ユグドラシルの中から現れたのはバリアジャケットを解除したシンジであった。

シンジは勢いによってティアナの前に倒れこんできた。

「わっ！！」

ティアナはシンジの下敷きになって直ぐにどけると、今度は白鳥とスバルの二人が一緒にティアナの下に飛び込んできたのだ。

「「ああ！！」」

これには流石のティアナも避けきることは出来ずに、二人の下敷きになって気を失った。

桃井は突然のシンジ達の登場に驚愕するのみであった。

「なっ！！し、シンジ！？あ、あなた何！？」

白鳥は直ぐにその場から起き上がると、急いでブラインドの外へと目を向けた。

すると、そこには窓の外から何らかの術を使ってこちらを狙っていたアイゼンであった。

アイゼンは右手を振りかざすと、そこからゴーストの力を有した衝撃波を放ってきた。

シンジは直ぐに傍に居た桃井を守ろうとする。

「危ない！！」

「きゃあ！！」

シンジの咄嗟の反応によって、殺害されることのなくなった桃井であったが、シンジは窓から飛んできたその衝撃波を受けた切り裂かれたソファーを見て確信した。

「これが編集長を殺した凶器・・・！？」

白鳥とスバルは気絶したティアナをその場において、急いでアイゼンの下に走っていった。

すると、丁度その時部屋のドアを開けてきたのは最初に現場を目撃したことになっているレンである

「編集長!?何ですかこの騒ぎ・・・って、シンジ!?」

「レンさん・・・」

「あ・・・レン、シンジ・・・実はね・・・」

「レンさんに話したいことがあるんですよね!?それって!?」

「何で知ってるんだよ、お前!?」

過去のレンは自分だけが知っているはずの桃井との話の内容をシンジが知っていたことに驚きを隠せなかった。

「あ・・・実は・・・レン。そろそろ戻ってきても良いんじゃないって。」

「え?」

桃井の口から話されたその内容を聞いた瞬間、レンもその場に居たシンジも驚愕のヒョ上を浮かべ、話の続きを二人一緒に聞くことにした。

その頃、桃井殺害に失敗した過去のアイゼンは作戦を練り直そうと一度退散しようとしたが、それをさせまいとやって来た白鳥とスバルによって道を阻まれた。

「何だお前ら!?何故俺の計画を!?」

「何だはこっちの台詞よ。今のは人間技じゃないでしょ・・・こん

なトリックありなの！？」

すると、そんな二人の方を押さえてきたのは未来からやって来たもう一人のアイゼンであった。

「「！？」」

これには流石の白鳥やスバル、そして過去のアイゼンは驚いた。

「・・・見たな。」

「ちっ！貴様もパストキーが発動した瞬間、我々と一緒に飛んできたのか！？」

「俺は人間の振りをしてこの世界に潜り込んだ。だが桃井に気付かれそうになり殺した。殺したはずだった・・・！！」

白鳥とスバルは未来のアイゼンの手を振り払うと、臨戦態勢に入る。

そんな未来のアイゼンを見ながら過去のアイゼンは問いかけてきた。

「お・・・お前・・・誰！？」

「お前は・・・私だ。」

未来のアイゼンはそう言うと、過去のアイゼンに近付き自分の身体の中に過去のアイゼンを吸収した。

「うわあああ！！！！」

この光景を目の当たりにした白鳥とスバルは絶句する。

「何!?」

「嘘・・・過去と未来のアイゼンが・・・一つに!?」

アイゼンは二人に向かい合うと、キョウカスイゲツを取り出し構築させる。

「キョウカスイゲツ、セットアップ!」

〈Ｓｅｔ　ｕｐ〉

バリアジャケットに身を包んだアイゼンは、キョウカスイゲツを発動させて再びゴースト達を召還する。

〈Ａｄｖｅｎｔ　ｇｈｏｓｔ〉

ゴースト達は召還されると、白鳥とスバルに向って襲い掛かっていった。

一方、気絶するティアナを他所にシンジはレンと供に桃井の話の真相を聞いていた。

「編集部を出ればって、勧めたのは私なの。ね、レン。」

「え?」

「・・・そうなんだ。あの頃、俺はお前の写真に嫉妬していた。」

「何言ってんだよ、レンさん!?」

「俺がどんな記事でも、お前の写真一枚に負けてる気がしてな。何にも見えなくなってたよ・・・そんな時編集長が暫く別の会社に移ることを勧めてくれたんだ。」

「・・・・・・――――――」

「外に出て分かったよ・・・勝ち負けなんかじゃない・・・二人で一つだったって。」

レンの思いの丈を聞いたシンジはそんなレンに向かって自分の気持ちを正直に話してきた。

「そうなんだ。俺の写真だけじゃ駄目なんだ!レンさんの書いてくれる記事で、俺もっと飛べるんだ!」

それを聞いたレンもシンジに向って微笑みかけ、聞いていた桃井も内心ほっとしていた。

「だから、そろそろ戻ってきなさいって、言うつもりだったのよ。実は今・・・新しいネタを追ってるの。この世界に、人間以外のものが入り込んでる。副編集長のアイゼンも、その一人かも。」

すると、その時・・・・・・漸く意識を取り戻したティアナが頭を押さえながらシンジに向って質問してきた。

「いててて・・・あの・・・さっき私の上に降ってきたの・・・スバルと白鳥さんですか?」

「そうだ・・・白鳥、スバル！レンさん、此処に居てください！ティアナ、僕と一緒に来て！！」

シンジは状況のよく理解できていないティアナの手を掴んだまま強引に部屋の外へと連れ出して言った。

「え！？ちょ、何所に連れていくんですか！？」

「おい、シンジ！？」

レンもシンジの行動を止めようとしたが、シンジは構わずティアナと供に白鳥とスバルの下へと駆け出して行った。

二人が現場に到着したときには、そこでは既にスバルと白鳥が生身のままゴーストとたちと戦っていたのであった。

「スバル！！白鳥さんも！！」

ティアナとシンジは直ぐに加勢すると、ゴースト達と戦う白鳥とスバルの援護に入る。

そんな四人の戦う姿を見ながら、アイゼンはこう口にする。

「ここはユグドラシルではない。此処で負ければ・・・命はない。そんな戦いで、俺に勝てるか？」

「「きゃあああ！！」」

「「のあああああ！！！」」

ゴーストの攻撃を受け、その場に倒れ伏す四人。

「最も力の強いものが判決を下す。それがお前たちの定めたことだ。この場で私が、死刑を申し渡す！」

すると、それを聞いていたシンジが徐に立ち上がるとアイゼンに向ってこう言った。

「僕は・・・・・・一人で戦ってるんじゃない！」

「莫迦な！人間は皆・・・自分のために戦うのだ。」

アイゼンはあくまでもそう言い切るが、シンジの言葉に便乗したスバルやティアナ、そして白鳥も自分なりの考えを口にしながら立ち上がる。

「私達は時に・・・自分一人の為に戦うときもある・・・この手で・・・でも・・・この手で相手の手を握ることも出来る！」

「そうよ・・・その時は私達は・・・弱くても・・・愚かでも・・・一人じゃないわ！」

「今は・・・我々がチームだ！」

そう言うと、全員はデバイスを取り出し構築させる。

「「「「セットアップ！」」」」

〈〈〈〈Ｓｅｔ　ｕｐ〉〉〉〉

デバイスを構築させると、全員はそれぞれのバリアジャケット身を包んで臨戦態勢に入るのであった。

「行くわよ、スバル！」

「おう！！」

スバルとティアナは長年のコンビネーションを発揮させながら、無尽蔵に現れるゴースト達を次々と撃破し、白鳥とシンジも即席ながら負けず劣らずのコンビプレーでゴーストを倒していく。

そんなスバル達や白鳥を見て、アイゼンは怪訝そうに尋ねる。

「くっ！貴様ら・・・何者だ！？」

「古代遺失物管理部機動六課。我々のことを知らぬなど、素人もいいところであるな。」

白鳥はそう言うと、琴線斬の音色であらかじめ戦ったゴースト達の戦闘記録から固有振動に同調させる音を発して、残り全てのゴーストを撃破する。

ゴーストが撃破されると、スバルは拳を強く握りながらアイゼンにこう宣言する。

「これからが、本当の戦いよ！」

「そうであるな。シンジ、ティアナ。やるぞ！」

「「はい（ああ）！」」

ティアナとシンジは白鳥の言葉を聞くと、武器を構えてアイゼンを睨み付ける。

「へへへへへへ。」

すると、アイゼンはそんな四人を見ながら最終攻撃手段に打って出る。

〈Ｆｉｎａｌ　ａｔｔａｃｋ〉

その瞬間、空気中に漂っていた倒された筈のゴーストがアイゼンのもとに集まると、一個の生命体へと形を変えた。

それは正に・・・・ガス状の実体を持たぬ幻影と言ったところであった。

「「「「なっ!?」」」」

驚愕する四人であったが、その瞬間早速アイゼンは巨大なガス状の腕で四人を捻りつぶそうとしてきた。

四人は攻撃を皮一枚で防ぎきると、色々な手段の攻撃を試すもののこれと言ったダメージを与えることは出来ず困り果てていた。

「くそ・・・一体どうすればいいのだ!?ガス状の敵に最も効果のある攻撃は・・・他にないのか!?」

「ガス状・・・はっ!そうか!!」

「ティア!?何かいい方法思いついたの!?」

「ちょっと考えがあるの。白鳥さん、シンジさん。私の作戦・・・聞いてくれます?」

「「ああ。」」

ティアナはそう言うと、耳元で二人の自分の考えを打ち明けると二人もそれに従い作戦を開始し始める。

「スバル!クロスシフトA行くわよ!」

「おう!!」

ティアナは得意のスバルとのクロスシフトを使って、アイゼンに向って攻撃を加えていくものの、やはり効果はない。

「ははははははははあは!!!!!!何度やっても同じことだ!!!!貴様らの攻撃は・・・この私には効かん!!!!」

「確かに・・・いくら弾丸を撃っても、ガス状のあんたには効果はないわ。だけど・・・ガス故の弱点があることも・・・知っておいたほうがいいわよ。」

「ん!?」

ティアナのその言葉に疑問を抱くアイゼンであったが、その時・・・アイゼンの左右に現れる翼を生やした白鳥と召還獣の力を使って空中を飛んでいるシンジ。

「「ウィング・トルネード！！」」

二人は一斉に両方の翼から猛烈な風を起こしてガス状のアイゼンに攻撃を浴びせる。

すると、その瞬間・・・アイゼンの表面をコーティングしていたガスが完全に晴れるとアイゼンは元の姿へと戻ってしまった。

「しまった！！」

「やっぱり、ティアの想ったとおり・・・あれはゴーストの集まりだったってわけだね！」

「ゴーストが取れちゃえばこっちのものよ。一気に勝負をつけるわよ！！」

「「「おう！！」」」

スバルとティアナは懐からＩＰカートリッジを取り出すと、それぞれの形態へと変化させ、白鳥は琴線斬に魔力と霊力を注ぎ込み、シンジは最終攻撃手段に打って出る。

〈Ｆｉｎａｌ　ａｔｔａｃｋ〉

「クロスブラスター・・・シュート！！！！」

「リボルバー・・・デストロイヤー！！！！」

「琴線斬奏曲、『鼓瓜田（つづみかでん）』！！！」

「ビックバンクラッシュ！！」

四人の一斉攻撃が同時にアイゼンに放たれ、アイゼンはかわすことも出来ずに四人の攻撃に直撃し、吹き飛ばされた。

「のあああああああ！！！！」

バリアジャケットが解除され、粉々になったキョウカスイゲツ。

すると、そのキョウカスイゲツの中から出てきたのは今迄反応等全く感じもしていなかった本来の任務の目標、アンゴルモアであった。

「な！？あれは・・・・！？」

「アンゴル・・・モア・・・・！？」

「成程な。道理であんな規格外の技が出せると思った・・・」

白鳥はそう思いながらアンゴルモアの回収を行おうとしたときだった・・・突然、莫大な量の魔力が解き放たれ全員は身動きが取れなくなった。

「「「「！？」」」」

すると、そんな全員に向って高笑いをしながらアンゴルモアを手に取るアイゼン。

「あはははははは！！！！あはははははははは！！！！！」

アイゼンは高笑いをしながらアンゴルモアの力を使って四人の前か

ら姿を消し、別の世界へと逃亡した。

「ま、待て！！」

「止しなさい、スバル。もう逃げられたは・・・多分、別の世界へ。」

「くっ！逃がしたか・・・」

アイゼンを取り逃がし、アンゴルモアを回収し損ねたスバル達であったが・・・何はともあれティアナが無罪放免になったことと、シンジとレンのチームが再び復活したことに喜びの声を上げながら、アカシＪｏｕｒｎａｌへと戻っていった。

「チーム復活か？」

「やっぱりいいですね！！」

すると、そんな笑顔を浮かべるスバルに向ってシンジがこう言って来た。

「君と彼女のチームには敵わないかもな。」

「え？私とティアの・・・？」

「さっきこっそり撮って置いたんだ。プリントしといた・・・いい顔してる。」

シンジはそう言うと、現像した一枚の写真を取り出しスバルに手渡す。

スバルと白鳥がそれを見ると、そこに写っていたのは帰り際に何時ものように会話をしているツンデレなティアナと頬を赤くしたスバルであった。

「あはは！！」

「ふん・・・確かにな。」

二人は思わず笑みを浮かべて、写真をまじまじと見つめる。

すると、そんなスバルの胸倉を掴んでくるかなり不機嫌そうなティアナ。

「てぃ、ティア！？」

「さっきはよくも突き倒してくれたわねスバル・・・このお礼はきっちり返すわよ！」

ティアナはそう言うと、周りに人がいいことを気にせずにスバルの決を踏んだり顔を抓ったりとやりたい放題であった。

「いたたたたたたたた！！！！！！！！てぃ、ティア！！！あれは不可抗力だって！！！！！！いたたたたたたたたた！！！！！！！！」

「うっさい！！！！！！！地味にセクハラをしてたくせに！！！！！！！」

「それはしてないって！！！！！！！！！」

そんな二人の仲睦ましい光景を見ていた白鳥を思わず腹から声を上げて笑い出した。

「・・・ぶっ！ははははははははははははは！！！！」

そして、笑いながら白鳥はこんな事を思ったそうな。

「（やっぱり・・・この二人はこうでなくては。）」

バトル裁判・容疑者ティアナ（後書き）

教えて、ユーノ先生！

ユ「今日は、ちょっと真面目に現行の裁判の仕組みについてね♪」

ユ「日本の場合は、裁判員制度というものがあるよね？これは、抽選で選ばれた２０以上の成人が刑事事件に参加して、その刑罰の重さを決める重要なものなんだ。」

ユ「構成員は原則６名。公判に立会い、裁判官と一緒に評議や評決を行い判決が宣告させるという流れだ。」

ユ「ちなみに、アメリカやイギリスなどは有罪か無罪かといった具体的な刑罰を決めないのが陪審制。ドイツやフランスなどの刑罰の内容まで決めるのが参審制と言われている。」

ティ「ほんと・・・あんな裁判二度と受けたくないわよ・・・」

ユ「お疲れ様、ティアナ。」

白「危険なお前が再び世に放たれるのか！！！」

ティ「だから、白鳥さん！！その言い方やめてくださいよ！！！」

魔導師図鑑ゴールデン！

自室でフェイと供にベッドから動けないでいるなのは。

な「いたたた！！！あは～～～ん！！！まだ体中が痛いよ！！！」

フェ「そうだね。日頃の運動不足がここまで影響してくるなんて思っても無かったね。」

な「日頃の運動不足って言うよりも、あんな訓練をまともにやれるドラさん達のほうが異常だって！」

フェ「でも、ユーノは全然平気そうだったけど？」

な「う～～～ん・・・そう言われてみればそうだっけ。ユーノ君、普段私達の知らない間にどんな訓練してるんだろう？」

フェ「案外、人には言えないようなものだったりして。こっちの意味で♪（フェイト、小指を突き立てる）」

な「ふぇ、フェイトちゃん！！！！（なのは、顔を真っ赤にする）」

ジャッジメント・バトル裁判篇

シンジ・ヒラコ

声　一　水谷百輔

「アカシＪｏｕｒｎａｌ」のカメラマン。桃井殺害事件の裁判で戦士『グラディエーター』に選ばれる。かつて相棒だったレンが何も言わず他社に移ったことを裏切りと感じており、事件当日現場に来ていたレンを犯人ではないかと疑う。

レン・カザマ

声　一　北村栄基

グラディエーターや様々な戦士について調べているジャーナリスト。桃井殺害事件の裁判でグラディエーターに選ばれる。かつて「アカシＪｏｕｒｎａｌ」でシンジのパートナーとして働いていたが、３年前にシンジに何も告げずに他社に移籍していた。グラディエーターバトルの際には事件の判決ではなく、カードの強奪を目的とするなど不可解な行動を取る。

ソウスケ・アイゼン／ＡＭ１７

声　一　入江雅人

嘗て星の戦士カービィによって倒された暗黒の帝王ナイトメアが化身した中年の男。人間態でも腕から水色の真空波を放つ能力を持つ。アンゴルモアの力でカービィに復讐する機会を窺う一方、体力の回

復と情報収集の為にジャッジメント侵入し、「アカシＪｏｕｒｎａｌ」副編集長として人間社会に潜伏。桃井殺害事件でグラディエーターとして選ばれる。白鳥とティアナ達に敗北後、「ポップスター」へ逃亡。

桃井麗子（ももいれいこ）

声　一　高橋佐衣

「アカシＪｏｕｒｎａｌ」の編集長。人間外生命体の調査を行っているうちにアイゼンが人間ではないことを感付き、アイゼンに殺害されてしまう。

ピンクの悪魔、登場！（前書き）

更新お待たせしました。

最近は色々忙しくて、更新が出来ませんでした。

実はこの間、検査で腎臓結石って言われちゃったんですよ。

ああ～～ほんとあの時はびっくりしました。

てな訳で、気を取り直して・・・今回は前回の話に絡んでくるお話です。

何と、あのピンクの悪魔がまさかのコラボレーション。

続編なので、見逃したら損ですよ。

ピンクの悪魔、登場！

＞i133111―709＜

あの夢を見るようになったのは、何時ごろだっただろう。

毎晩のように、僕はあの夢に魘される。

一番大切な人が――――・・・途方も無い暗闇の中に消えていってしまうあの夢を。

〈エリオ君！！！！！！！〉

〈キャロ！！！！！！！〉

僕は闇の中に引き込まれていく悲痛な叫び声を上げるキャロを助けようと手を伸ばしたが、それを阻むかのように僕の体を黒い触手のようなものが絡め取る。

〈放せ！！！！！放せ！！！！！キャロ！！！！！！！！待って！！！！キャロ！！！！！キャロ！！！！！！！！！！！！！〉

僕は触手を解こうと必死に抵抗をしたが、それは強固に絡み付いており全く解けることは無かった。

キャロはそのまま深い闇の中へと連れ込まれていった。

周りに響いていたのは、僕の名前を叫び続けるキャロの泣き声だけだった。

そして、そこで必ず僕は一度目を覚ますのだ。

「だっあ！！！！！はっ！はっ！はっ！！！はっ！！！」

体中から汗を流すエリオは、まだ日も昇っていない辺りの景色を見た後、ベッドの上に置かれてある目覚ましの時刻を見た。

時刻は午前2時を少し過ぎたあとであった。

「・・・また・・・あの夢か・・・・くっ・・・・！！」

エリオは夢の中の出来事を頭の中に映像として克明に思い浮かべると、夢の中の自分の非力さとキャロを守れなかったことに強い憤りを覚えた。

それと同時に、これまでの六課における自分のぱっとしない活躍と周りへの劣等感からエリオの心を苦しめていった。

そんなエリオが行動を起こし始めたのは、二日ほどたった真夜中のことだった。

その日、偶々用を足しに夜中に起きた恋次は出すものを出して自室に戻ろうと廊下を歩いていたとき。

「ふぁ～～～～～～寒いとやけに小便が近いぜ～～～～～あ？」

恋次は窓の外のほうから見えるある人物の姿を確認すると、一度歩くの止めてそれを凝視していた。

恋次の瞳に写ってきたのは、訓練服に身を包んで汗だくになりながらも自主練習を続けるストラーダを振るうエリオであった。

「・・・エリオ・・・？」

怪訝そうな表情でエリオの姿を窓越しに眺める恋次。

その後、恋次はその行動が気になったのかエリオの一日の過ごし方を影ながら探り始め、数日間のエリオの自主練習の回数や時間などをメモに取ると、心配になったのか一度ユーノに相談を持ちかけることにした。

ちなみに、フェイトに相談をしなかったのは大体察しがつくから言わないで置こう。

「え？エリオが・・・ですか？」

ユーノは、吉良と供に行っていたスーパーマシーンの手入れを中断して車体の下から出てくると恋次の話を聞き始める。

「ああ。どうもここ最近、夜中にコソコソ一人でやってるみたいな

んだよ・・・」

「思春期ってことですか？」

「そっちの意味じゃねえよ！俺が言いてえのは、夜中に一人で修行してるってことだよ。」

「修行？あのエリオがかい！？」

恋次の話を聞いていたユーノと吉良は予想外の答えに思わず顔を見合わせた。

「間違いねえ。昨日も一昨日も４時間以上、俺達が寝静まった後に汗だくになるまで稽古してたのを、俺はばっちり見てたぜ。その証拠に・・・この隈が分かるだろう！？」

恋次は自分の目の下の濃い隈を二人の前に持ってくる。

「わざわざ見せなくていいですよ・・・ふ～ん・・・エリオがね・・・ま、考えられるとすれば彼なりに色々焦っているんじゃないですかね。」

「焦り・・・ですか？」

吉良がそう復唱すると、ユーノは自分と何所か似た雰囲気を漂わせるエリオのことを次のように語り始めた。

「いえね・・・エリオはそう言う所も含めて、僕とそっくりなんですよ。自分の非力さをこれでもかと呪い、卑下し、好きな人のためにただ只管に力を求めようとする。それで身体がどうなろうと知っ

たことじゃない。僕がなのはを守りたいように、彼もまた・・・傍に居る大切な人を守りたいという思いで必死なんでしょう。」

「キャロのことか？」

「多分。」

ユーノがそう言うと、恋次と吉良は暫く黙り込む。

その後、沈黙を破ったのは吉良の冷静な見解であった。

「けど、体調管理もろくにせずにそんな自主練を続けていては、返って非効率と同時に身体そのものがくたばってしまうのでは？」

「ええ。けど、そんなことはエリオが一番知っているはずですけどね・・・」

「「・・・・・・――――――」」

その日の夕方、フォワード五人はなのは達隊長陣の前に整列をし、姿勢を正した状態でなのはの話を聞いていた。

「みんな、お疲れ様。じゃあ、今日の午後の訓練は予定通りお休みね。」

「明日に備えて、ご飯食べて、お風呂でも入ってゆっくりしてね。」

「「「「「はい！」」」」」

なのは達が戻っていったあと、隊舎寮に戻ろうとするフォワード五

人であったが、エリオだけはその場に立ち止まるとスバル達に向ってこう言ってきた。

「・・・あの・・・皆さん・・・僕、これから少し一人で練習してきますから・・・」

「自主練、エリオ君?だったら、私も付き合うよ!」

「じゃあ、私も!」

「私も!」

キャロやスバル、ギンガなどはエリオの自主練習に付き合うと言って手を上げてきたが、エリオは首を横に振って軟ならかな表情でこう言った。

「・・・ありがとうございます。でも、これぱっかりは一人でやりたいもので。スバルさん達は寮に戻ってゆっくり休んでて下さい。」

「あ・・・うん・・・」

エリオはそう言うと、訓練着を着けたままストラーダと供に林の中へと姿を隠していった。

そんなエリオのらしからぬ行動に不信感を覚えたのは、嘗て同じようなことをしていたティアナやパートナーであるキャロであった。

「(エリオ・・・・・・?)」

「(エリオ君・・・・・・)」

エリオ以外のフォワードメンバーが寮に戻ったことを確認すると、エリオはストラーダを持つと声を上げながら槍を振り回し始める。

そんなエリオの様子を隊舎の物陰で夕陽を背中に浴びながらスコープで監視をするのはユーノと吉良の二人であった。

「・・・午後の訓練がないのにも関わらず自主練か・・・フェイト、これに気付いているのかな？」

「どうでしょうね。彼女の場合、ちょっとでも無茶をしようとすれば過剰に反応しますからね・・・特に、秘蔵っ子のエリオやキャロなら尚更。」

「あれ？そう言えば恋次さんの姿が見えないのですが？」

「ああ・・・阿散井君ならきっと・・・」

吉良がユーノに何を言おうとしたのは、これから分かることになる。

周りの景色は光陰矢のごとしの言葉通り、暗黒に染まりきり夜が世界を支配する。

幾つかの星の輝きと、月明かりがエリオの姿を照らしているがエリオはそんなことは一切気にせずにストラーダを振り回し続ける。

「はっ！はっ！はっ！はっ！はっ！！！やあああああ！！！！」

一度その場に跪いたエリオは肩で息をする。

すると、その時エリオの後ろから物音が聞こえてきた。

「え!?」

エリオが不審に思い、振り返ってみるとそこに居たのは腕組みをした状態の些か呆れ顔の恋次であった。

「もう5時間も続けてるぜ。いい加減ぶっ倒れるぞ。」

「・・・恋次さん・・・見てたんですか?」

実はあの時、恋次はユーノと吉良とは別にエリオの訓練の様子を間近で見るために予め何時も自主練に使っている林の中に身を潜めていたのであった。

「本当のこと言えば、ここ数日の間ずっとな・・・・・・一体どうしたんだよ?過度な自主練なんてお前らしくもない。無理な詰め込みで、変な癖をつけるのも良くないぜ。」

「・・・・・・――――――」

恋次の話を何所か複雑そうな表情を浮かべながら聞いていたエリオであったが、それでも納得などはしていない表情でもあった。

「ん!?て、これは一個人としての見解に過ぎねえ。あまり気にすることはないがな・・・ただ、理由ぐらいは聞かせてくれないか?どうして今になってコソコソ自主練なんて真似をする?」

すると、エリオは重い口を徐に開けて恋次に夢のことを話し出した。

「・・・・・・夢を・・・・・・・見たんです・・・・・・・」

「夢・・・？」

「・・・僕の所為で・・・キャロを・・・守れなかった夢を・・・一日だけじゃない・・・ここ毎日のように見るんです・・・・・・僕は弱い・・・・・僕が弱いから、キャロが大怪我を負ったり、命の危険にさらすことになったら・・・僕は・・・だから強くなりないんです・・・キャロを守り抜けるぐらい強く・・・！！」

「・・・成程・・・事情は大体分かった。本当・・・てめぇはユーノが言ってたようにそっくりだな。」

「え？ユーノ先生と・・・ですか！？」

エリオは意外な人物の名前が出てきたことにかなり驚いていた。

「ああ。あいつは言っていた・・・自分とエリオは色んな所も含めてそっくりだってな。ただ一人の女のために、そこまで自分を痛めつけるところとかが特に。お前の気持ちはよく解るぜ。けど、お前は自分が思ってる以上に強いと俺は思うけどな・・・」

すると、そんな恋次の言葉を聞いたエリオは唇を咬むと背を向けた。

「強くなんかありませんよ。僕は・・・ユーノ先生みたく頭の切れだって良くないし、強固な結界や防御・強力な鬼道や剣術が使える訳でもないし・・・恋次さん達みたいな死神さんとも違う。凡人の僕がそんな天才や秀才と混じって肩を並べて戦うには、それこそ寝る間も惜しんで、死ぬ気で練習しないと、強くなんてなれませんよ！」

「・・・・・・――――――」

「だから、僕のことはもうほっといて下さい。大丈夫です・・・フェイトさんやキャロには・・・迷惑をかけないつもりですから・・・」

エリオはそう言うと、再びストラーダを振り回し始める。

恋次はこれ以上何も言えなくなってしまったのか、深い溜め息をつくと最後にこう口にする。

「・・・はぁ～～～解ったよ。それじゃ、俺はこれ以上何も言わねえ。お前がそこまで言うんなら、止めたりもしない。体にだけは気をつけろよな。」

「ありがとうございます！大丈夫ですから！」

恋次に背中越しにそう言うと、エリオはストラーダを更に大きく激しく振り回しだした。

そんなエリオを一瞥して、恋次は隊舎のほうへと歩いていったのであった。

夜の道を歩いていると、隊舎の影で見ていたユーノと吉良が近付いてきた恋次に話しかけてきたのであった。

「失敗しちゃったようですね。」

「悪い・・・言い返せなくなっちまった・・・」

「やれやれ・・・君といいエリオといい・・・相当な頑固者のようだね。」

「俺は頑固じゃねえよ!頑固一徹なら、なのはの方が断然上だ!」

「あははは♪確かにそうでしょうね・・・・・・でも、恋次さんだって似たようなことしてきたでしょう?ルキアさんの為に。」

「ち、違えーよ!!あれはだな!!」

「何ですか?ルキアさんを助けたかったから、卍解の会得に死に物狂いになっていたんでしょ♪」

「君も結局、そう言うところはエリオに負けず劣らず似ているよね。」

「う、うるせー!!ほっといてくれ!!!」

二人にからかわれる恋次は、顔中を赤面させると必死で取ってつけた言い訳を二人にぶつけて、抵抗をしようとしたのであった。

その次の日、ユーノは無限書庫の職員から直々の通信を貰った。

内容は、ユーノが四年前に完成させた自動探索機械が故障を起こしてしまい稼動効率が大幅に下がってしまったという事態に対処をして欲しいとのことであった。

ユーノは早速、六課の前線メンバーの数人を一緒に同行させようとしたが、無限書庫の仕事の大変さをよく知っている彼らが自主的に

行きたがる筈はなかった。

色々と考えた末、ユーノは自分とじゃけんをして負けた者を無限書庫に同行させるという方法で人員を選ぶことに成功したのであった。

結果、ユーノと同行することになったのは恋次と吉良の二人であった。

不満気な表情を浮かべる二人であったが、ここでユーノに逆らうと後で酷い仕打ちを受けるのではないかと思い、渋々同行することになった。

その後、朝の9時から夕方の6時まで続いた機械修理と資料探索という激務を終えた三人は夕暮れの町を歩きながら六課へと戻っていった。

ユーノを除く二人の顔はげんなりしていたことは、言うまでも無い。

二人は今迄試したことも無い魔法、それも探索魔法と言うかなり適合者の少ない魔法を使ったことによって、頭が割れそうになっているのだ。

「畜生・・・何で俺と吉良まで無限書庫の手伝いしないといけないんだよ・・・じゃんけんで負けたとはいえ・・・あの機械の修理だけならユーノ、お前一人で充分だろうが！」

「そうは言いますけどね、機械修理してる間はどうしても人手が足りなくなってしまうんですよ。どうもあの機械を作ったのはいいが、一度便利なものに頼ることに慣れてしまうと、人間っていうのは堕落していきますからね。僕も他の司書達も改めてそのことに実感し

ました♪たまには良いじゃないですか、こう言うのも♪」

「まぁ、そうですけど・・・しかし、無限書庫の職員はどういう頭の構造をしているのでしょうか？あれだけの量を毎日、しかも検索と読書魔法を併用してその上報告書としてまとめる作業は・・・はっきり言って地獄でしたよ。」

「あ～～～頭痛て～～～！！！お前、よくあんな職場に居て平気だったよな～～～感心するぜ～～～」

「あはははは♪適正というものが在りますからね、無限書庫ってところは。実際、リンカーコアが形成されて魔法を初めてあいう形で使った二人も相当すごいですよ。下手に使えば、検索魔法だけで頭が支配され最悪の場合・・・脳卒中と同じ現象が起きますからね♪」

「笑顔で不吉なこと言うなよ・・・死神が死んだなんて洒落にもならねーよ！」

「そう言えば、ヴィヴィオは確かあの歳で無限書庫の司書だと聞きましたが・・・？」

「ええ♪よく友達と一緒に調べ物に来るって、この前アルフから聞きましたし・・・実際にヴィヴィオからも話を窺っていますから♪」

「なのは達も、検索魔法とか使ったことあるのか？」

「あるとは思いますが、１時間もしないうちにばてたと思いますよ。あれ、合わない人にはとことん合わないですから♪」

「ふ～～～ん・・・お！？」

と、そんな雑談をしていたときだった。

目の前の河川敷には多くの野次馬が集まり、スバルとギンガの父親であるゲンヤ・ナカジマが部隊長を務める１０８部隊の車と局員が現場検証を行っていた。

「・・・１０８部隊の人たちですね・・・」

「事故でもあったのでしょうか？」

三人は気になったのか、野次馬の間を通りながら１０８部隊の局員に身分証明書を見せると、腕組みをしながら険しい表情を浮かべるゲンヤの下に近付いていった。

「ゲンヤさん！」

ユーノの声を聞くと、ゲンヤは振り返りこちらの方へ走ってきた三人を見る。

「ん？ああ、スクライアの司書長さんか。それと、八神の処の阿散井と吉良も。三人揃ってるとは、珍しいじゃねえか。」

「無限書庫の手伝いで同行してもらってたんですよ。それより、事件ですか？」

「まぁな。水死体だよ・・・あそこに見えるだろ。」

ゲンヤの指差す方角を見た三人は、現在局員が回収を行おうとしている水死体を目撃する。

「気分悪くなるぜ。あれって腐乱するとかなり匂うんだよな・・・」

「そう言えば、最近・・・夏場の水死事件が多発してるとニュースでやってましたけど、ひょっとしてこれと関係してるんでしょうか？」

「遺体を引き上げて、身元を確認しない分には断定は出来ないですね。」

吉良の疑問にユーノがそう答えたとき、１０８部隊の局員の一人がゲンヤに報告をしに来た。

「ナカジマ三佐、遺体の引き揚げ作業完了致しました！」

「そうか。それじゃあ、早速身元の確認を済ませろ。直ぐに司法解剖に回すようスタッフに伝えろ。」

「了解です！」

三人が偶然にも出くわした謎の変死事件・・・普通ならば陸士部隊の処理によって片付けられるような事件に過ぎなかったが、この事件をきっかけに次なるアンゴルモア騒動の幕が降りることになるのだ。

六課に戻った三人は、前線メンバーと供に食事を頂いていたが、何故か恋次は食欲が余りなく箸を殆どつけていない状態であった。

不審に思ったルキアがそんな恋次に向って何があったかを尋ねてきた。

「ん?どうした恋次・・・珍しいな、食欲がないのか?」

「いや・・・その・・・帰り際に食欲の湧かないものに出くわしてな・・・」

「食欲の湧かないものって、何だよ!?」

隣のテーブルで聞いていたヴィータがそう尋ねると、吉良が代わりにこんな事を話してきた。

「今話せば、一週間はハンバーガーが食べられなくなると思うけど。」

「何だよ、そりゃ!?そんな気持ち悪い話なのかよ!?」

益々理由が分からなくなるアギトや前線メンバーであったが、そんな前線メンバー（女性限定）に水を差したのはなのはとヴィヴィオの間で食事を取るユーノであった。

「特に女性は見てもあまり気持ちのいいものじゃないと思うよ♪これだけは言える。」

「女性が見てあまり気持ちよくないもの・・・?ん～～～何だろうね?」

なのはやヴィヴィオが目を点にして考え込んでいたとき、はやてはユーノ達の想像を絶するような答えを口にしようとした。

「分かったで!ひょっとして男同士の熱愛・・・!!」

「「「絶対違う！！！」」」

はやての回答を聞いた瞬間、ユーノ達三人は声を揃えて真っ向から否定した。

三人の形相に思わず顔を引きつるはやては、冷や汗をかいていた。

「そ、そんな頭から怒鳴らんでも・・・・・・」

すると、その時・・・今迄何故か話に登場してこなかったグリフィスからの連絡がはやての下に入ってきた。

『八神部隊長、通信が入っています。１０８部隊のナカジマ三佐からです。』

「え、父さんから！？」

「珍しいわね、六課に連絡してくるなんて。」

スバルとギンガは滅多なことでは六課とは直接関わってこない自分の父親の部隊からの連絡、それもその父親本人からの連絡に大いに驚いた。

「そうやね。まぁ、ええわ！グリフィス君、繋いで頂戴。」

グリフィスは早速ゲンヤと通信を交わすと、それをはやての下に繋いだ。

『八神か。食事中、悪いな。』

「別に良いですよ、私は。それで、どうしたんですの急に連絡してくるなんて？」

『ああ・・・実は折り入って相談があるんだけどよ。今日、河川敷で引き上げた水死体に関して、どうも不可解な部分があってよ。』

「水死体って・・・僕達が帰り際に見たあれですか？」

『ああ。ちょうどいい、スクライヤの司書長。それに八神のところのシャマル。ちょいと死体検分に付き合ってくれないか？』

「「「死体・・・！？」」」

「「「「検分・・・！？」」」」

その瞬間、食堂で夕食を取っていたものの手が止まったことは言うまでも無い。

連絡を受けてから1時間後、全員が死体の到着を緊張した様子で待っている中、死体と言う言葉に過剰に反応している鬼太郎やスバルなどはそわそわした態度で落ち着きがなかった。

「おいおい、可笑しいだろう！？何で六課に死体が運び込まれるんだ！？あれって監察医のやる仕事じゃねえのかよ！？」

「嫌だな私・・・死体見るのって苦手だよ～～～！」

「誰も好きで見る人なんていないわよ。」

スバルの言葉を隣で聞いたティアナは呆れた表情でそう返答する。

一方、顔を真っ青にしながら冷や汗をかく吉良はふとこう呟いた。

「僕・・・精神耐えれるかな・・・！？」

「死神が死体に怯えてどうするのだ？」

吉良の情けない言葉に思わず、そう口にするルキア。

それぞれが色んな感情を思い浮かべていたその時、ゲンヤ達１０８部隊の局員がロングアーチに到着するのを確認し、ユーノは全員にそれを知らせる。

「お、来たようだよ。」

はやてやクロノを始めとする全員は入ってきたゲンヤに敬礼をすると、ゲンヤも同じように全員に向けて敬礼をする。

「お疲れ様です、ナカジマ三佐。」

「ああ。お前さん達も悪いな。こんな遅くに変な事につき合わせちまって。」

「いえいえ。困ったときはお互い様ですよ、ゲンヤさん！」

「そうか。で、早速で悪いんだが・・・例の死体の検分を頼むぜ。」

ゲンヤがそう言うと、局員の数名によって中に運び込まれてくる死体が収まった棺。

鬼太郎はそれを見るなり、顔を青ざめた状態でこう口にする。

「のあ〜〜〜棺桶だ〜〜〜！！」

「見れば分かるよ、先輩。」

鬼太郎の臆病な態度に思わず溜め息をつく浦太郎。

ユーノはこの死体が六課に運び込まれてきたことに関して、ゲンヤから話を窺った。

「六課（うち）に運び込まれたということは、やはりそれ関係のことなんでしょうか？」

「まぁな。兎も角、ちょいと急いで見て欲しいんだが？」

「分かりました。直ぐに検証させていただきます。」

はやてはそう言うと、シャマルとユーノに検分作業を任せると死体の入った棺を局員に運んでもらう。

ユーノはシャマルと供に健勝に向おうとするが、その際ユーノは笑顔でこう言ってきた。

「鬼太郎、吉良さん。一緒に来てくださいね♪」

「ギク！！やっぱり！！」

「て、店長！！俺も見るんすか！！？？」

何となくこんなことを予想していた吉良と、全く予想もしていなかった鬼太郎は表情を重くした。

「何事も経験が大事だよ♪暫くはフライドチキンもハンバーガーも食べられなくなることは覚悟しときなよ♪」

ユーノにそう言われると、鬼太郎はその場に膝を突くと絶望感に襲われる。

「のあああああああああああ！！！！！！！！！！！いやだ！！！！！！！死体なんて見たくねえ！！！！！！！！！！！！！！！」

と、鬼太郎が一人そんな事を口にしていると吉良は覚悟を決めたのか鬼太郎を引きずりながら死体検分へと向った。

「やめろ！！！！！！！！！！俺は死体を見るのはガキの頃から嫌いなんだよ！！！！！！！！！！」

なのは達はそんな鬼太郎の哀れな姿を目の当たりにしながら、気の毒そうな眼で二人の健闘を祈った。

「「「「「「「「「（お気の毒に・・・・・・）」」」」」」」」」

四人は、解剖室に入り込むと布が被せられている死体の前に立つ。

シャマルとユーノは手を合わせて解剖に望もうとするが、吉良と鬼太郎だけは未だに動揺を抑えきれずにいた。

「おい・・・やべえよ吉良・・・俺どうかしそうだぜ・・・」

「奇遇ですね・・・ぼ・・・僕もですよ・・・」

「さて、では亡骸さんの解剖といきますかな♪」

ユーノはそう言うと、全身に被せられた布を徐に取り外していく。

四人の瞳に写ってきたのは、すっかり体中のあちこちが腐敗を起こしたわりとがっしりとした身体つきの若い男性の死体であった。

「「う！！！！！」」

死体から漂ってくる腐臭と、表情に思わず眼を背ける吉良と鬼太郎に対して、あくまでユーノとシャマルは客観的にそれを見ていた。

「酷い腐敗の仕方ですね。死後、数週間は経ってますかね？」

「そうね。それにしても・・・この仏さん、いい身体つきしてるわね。ほら、此処なんか特に！」

「お、これは凄い！中々ここは鍛えられませんよ！！プロテインでも飲んでたのかな！？」

二人は勝手に死体の意外な場所に目を奪われていると、顔を青ざめたままの鬼太郎が早く検分を始めるように促す。

「う！！！て、店長・・・！！！」

「え？ああ・・・ごめんごめん。気を取り直して・・・傷の幅は・・・２０ミリってところですかね？」

「劣化が著しい上に、深さも結構入ってるわね。約９０ミリね。」

シャマルはマスクをしながら、劣化した死体にメスを入れながらユーノと供に丁寧な検分を始める。

「「・・・・・・――――――」」

一方、吉良と鬼太郎の方はと言うと・・・死体の姿をまともに見れない状態であることに変わりはなかった。

「見てちょうだい、ユーノ君。これが致命傷ね！」

「成程。これが・・・」

シャマルが致命傷となった箇所をユーノや吉良達にも報告をすると、ユーノだけがそれを真面目そうな表情で見ていた。

二人は検分を始めてから僅か数分で限界を迎えたのか、口を押さえた状態でユーノにこう言ってきた。

「あの・・・すみません・・・！！」

「俺達・・・ちょっと・・・失礼します・・・！！」

二人はそう言うと、解剖室から急いで外に出るとある場所へと一直線に駆けて行った。

検分が終わるのをロビーで待っていたなのは達前線メンバーであったが、丁度その時スバルが解剖室の方から出てきた吉良と鬼太郎を

目撃した。

「あ、二人が出てきた！」

「先輩、吉良さん・・・どうかし・・・！？」

浦太郎の言葉も無視して、二人は口を押さえた状態で男性用トイレの中に入っていった。

「何があったんだ、あいつら！？」

「まっすぐトイレに向かいましたけど？」

と、その時・・・トイレのほうから聞こえてきたのは激しい嘔吐をする吉良と鬼太郎の声であった。

「「うえええええええええええええ！！！

「うえええ！！！お前も・・・一度見れば分かる・・・うえええええ！！！！！」

「僕は・・・誰だ・・・？」

鬼太郎とは違い、吉良のほうは自分の存在すらも忘れかけているという状態まで追い詰められていたのであった。

「気をしっかり持つのだ！しっかりせんか！！」

ルキアと恋次は吉良を揺さぶり意識をはっきりさせようとした。

それから待つこと数十分。

漸くユーノとシャマルが解剖室から出てくると、報告書と大き目の透明な袋を持ってなのは達の前に現れた。

「はぁ～終わった。」

「ご苦労だったな、二人とも。」

「一応、体の外傷以外にも胃の中とかを調べてみたけど・・・どうも奇妙なんだよね。」

「奇妙・・・一体何がなの？」

フェイトがそう尋ねると、シャマルが怪訝そうな表情で次のように答えた。

「あのね、切開手術の痕があったんだけど・・・どうもそれが医者の私から言わしてみれば、縫合の仕方がプロのやり方ではないのよ。」

「縫合のやり方やって!?」

「つまり、素人が意図的に遺体の腹を切って持ち合わせの縫合一式で縫い合わせたってことだよ。死因は刃物による出血多量だとは思うけど、態々犯人が腹を切って何かを隠し・・・その後川に捨てた。これはどう考えたって不審すぎるでしょう?」

「確かにな・・・それで、中からは何か出てきたのか?」

「ああ・・・なのは達にはあまり見せたくないけど・・・これが。」

クロノにそう言われたユーノは険しい表情を浮かべながら、後ろのほうに隠していたあの袋をなのは達の目の前に持ってくる。

すると、その瞬間・・・袋の中のものを見たなのは達の顔が一気に凍りつく。

「「「「「なっ!!」」」」」

「「「「「う!!」」」」」

「「「「「げっ!!」」」」」

ユーノが持っていた袋に入っていたのは、被害者の血で真っ赤に染まり上がったピンクボールのような手足のついたぬいぐるみであった。

「そ・・・それって・・・・！？」

「血染めの・・・ぬいぐるみ・・・ですか！？」

「それが胃の中に・・・・！？」

「ええ。押し込まれていたの・・・無理矢理ね。」

「しかも、このぬいぐるみからは微弱ながらアンゴルモアの反応も検出された。」

「何だって！？」

全員はアンゴルモアと言う言葉を聞いた瞬間、漸くゲンヤの行動の意図に合点がついた。

「だから、父さんは六課に依頼を！？」

「身元を確認したところ、被害者は第６６６管理世界『オーメン』出身の僕と同じ考古学者であるトゥキトゥデス・ガン・ロード、享年２７歳。２週間前から遺跡発掘のために家を空けていたそうだが、今日の夕方になって水死体となって発見。そして、更に言うならば胃の中に押し込まれていたあの人形はオーメンで造られたものでないことが判明した。」

「オーメンで造られていない！？」

「そう。造られたのは・・・第９９５管理外世界『ポップスター』と言う緑豊かな世界でだよ。どうやらこのピンクボールみたいなキ

ャラクターは、その世界で実在する生き物をデザインとしている。何故このぬいぐるみからアンゴルモアの反応が感知されたのか？そしてトゥキトゥデスさんは何故このような殺され方をしたのか？双方に調べる必要がある。はやて、クロノ。指示を頼む。」

「了解や。ほんなら、明日、早速先発メンバーには二つの世界に行ってもらう。オーメンのほうには、シグナムとアギト、ルキアさんの三人。ポップスターには恋次さんと吉良さん、後はエリオ・・・行ってくれるかいな？」

「はい！了解いたしました！」

エリオははやてに向って敬礼をするが、そんなエリオの様子を見ていた恋次とキャロは何所か複雑な気持ちであった。

「・・・・・・――――――」

「（エリオ君・・・・・・何だか・・・・・・顔が強張ってる・・・・・）」

一方のユーノは、袋の中にあるピンクボールのぬいぐるみを見ながら何所か頭の片隅に引っかかる何かに苦悩していた。

「（しかし・・・このピンクボールのキャラクター・・・前に何所かで見たことあるんだけどな・・・何所だっけ？）」

それでは、早速今回の事件の舞台となる弟９９５管理外世界『ポップスター』の詳細な情報を公開しよう。

ポップスターは、世界の８割が雄大な自然に囲まれ、希少生物たち

が住むには絶好の環境となっている。

また、植物の中には高度な知性を宿し意思疎通を行うことが出来るものがある。

この平和な世界がこうして平和を保っていられるのは、一重に一人の星の戦士の活躍があってからなのである。

嘗て、ナイトメアと呼ばれる脅威から全宇宙の存亡を食い止めたその星の戦士の名はカービィ。

またの名を、『星のカービィ』と言う。

そのカービィはと言うと、海が一望できる崖に作られた『フーム』と書かれた墓標の前に花と分厚い本を供えると、暗い表情を浮かべながら故人の名を口にする。

「・・・・フーム・・・・・」

すると、そんなカービィの後ろから近付いてきたのは、カービィと同じぐらいの背丈で仮面を着けて体をマントで覆うメタナイトと呼ばれる星の戦士の一人であった。

「此処に居たのか・・・カービィ・・・」

「・・・メタナイト卿・・・」

メタナイトはカービィの傍にやって来ると、時化が酷い大海原を見ながらカービィとしみじみ昔のことを話していた。

「早いものだな。あれから既に２００年も月日が流れた・・・残った顔見知りは、ブレイド・ソード。そして、そなただけになってしまった。」

「寂しいものですよね・・・大好きな人たちが時間の経過と供に死んでいって、気付いたら一人ぼっちになって・・・そう言うときが一番、心が曇るときなんですよね。」

「仕方ないことなのだ。我々は此処の住民とは、歳の重ね方が数十倍も遅い・・・この星での２００年も、お前や私にとっては２０年の長さでしかないのだ。」

「でも、その２００年の間に・・・フームも・・・ブンも・・・誰もいなくなってしまった・・・あのデデデやエスカルゴも・・・」

「ああ・・・今日はちょうど、彼女の命日か？」

「・・・ええ。フームは昔から本が好きでしたからね・・・宇宙で見つけてきた彼女が好きそうな本を、供えて置きました。」

カービィはそう言うと、メタナイトと供に墓前を後して自分達住む村、ププビレッジの方へと歩いていった。

カービィは一度後ろに振り返ると、フームの墓標を見ながら柔らかい表情を浮かべてこう口にしたのであった。

「また・・・来年の盆に来るよ・・・フーム。」

その頃、アンゴルモア捜査のために動き出した恋次達は転送ポートによって、真昼のポップスターに到着する。

「到着ですね！」

「随分と田舎っぽいところだな・・・現代に蘇った昭和の日本の風景ってところか？」

「昭和の頃の日本を、君は見たことがあるのかい？」

恋次の何気ない言葉に思わずそのようなツッコミを入れる吉良。

エリオはストラーダに組み込まれたこの星の地図とあのぬいぐるみの画像を見ながら、今回の調査目標を確認し始める。

「確か・・・このぬいぐるみのモデルになった実在の生き物を探すことが第一目的でしたよね？これだけ広いと、流石にサーチャーでも搾り出すのには時間が掛かりますね。」

「な～に、何とかなるものだろう。取り合えず、人が居るところに出れば何かしらの情報が得られるはずだ。」

「此処からだとそう遠くはないよ。歩いて１０分ほどだ。」

「では、行きましょうか。」

恋次達三人は、あるいて１０分程先の場所にあるププビレッジに向けて歩き出す。

その間、エリオはこの星の詳細な情報を確認していた。

「第９９５管理外世界『ポップスター』。文化レベルＢ、魔法文化

なし・・・人間も生息していないようですね。」

「人間がいないとなると・・・この星には何がいるって言うんだ?」

「キャピィ族というはにわのような姿の種族だね。古代からププビレッジと言う土地に住んでいたが、ある時別の種族によって追い出され、１００年ほど前にププビレッジへ戻ってきたらしい。ほら、あれがププビレッジだよ。」

吉良は恋次とエリオにそう言うと、目の前に見えてきた雄大な自然と共存を図る小さいな町を指差した。

「いい町じゃねえか。特に何も無いが、俺は結構好きだぜ。」

「そうですね・・・僕も見ていて何だかほっとしますね。」

「ふん。本当にそう思ってるなら、もう少し肩の力抜いたらどうだ?」

「え!?」

恋次の突然且つ明確な一言に、エリオは思わず仰天する。

「気付かないとでも思ったのか?さっきから力み過ぎなんだよ、お前は。確かに、失敗したくない気持ちや夢のことが気にかかるのはよく解るが、そんなんじゃ出せる力も出せなくなるぜ。」

「阿散井君の言う通りだ。気を張り詰めてばかりいると、可笑しくなるよ。」

「恋次さん・・・吉良さん・・・」

と、エリオが二人の話を真剣な表情で聞いてその時だった。

町の方から少し離れた場所に聳え立つ古風な城のほうから爆発が起こった。

「「「!?」」」

三人が爆音に気付き城の方を見てみると、爆音は更に激しさを増していき城壁の一部が崩壊を始めた。

「爆発・・・!?」

「あの城のほうからだ!」

「行きましょう!!」

三人は急いで装備を整えると、全速力で城のほうへと向った。

その頃、その城の中のほうではとんでもないことが起こっていた。

この城の主で悪政で人々を毎回苦しめてきたデデデ大王の子孫、ドドド大王が曽祖父であるデデデが残した魔獣配信サービスというものを起動させたことがそもそもの始まりだった。

適当に弄っていたら、今ではすっかり何の意味も持たないその機械から魔獣がランダムに転送されてきて、彼が目の当たりにしたのは巨大なロボット型の魔獣ＨＲ－Ｈが現れ、興奮していたドドドを他所に暴走を始めたのだった。

ドドドは側近のエスカルゴＪｒ．を引き連れてＨＲ－Ｈから逃げていると、再度ＨＲ－Ｈに向って説得を試みる。

「ぎゃあああああ！！！！止せ！！！！止すぞい！！！！！ワシの言うことが解らんのかぞい！？おい・・・！！ぎゃあああああ！！」

ドドドの声など全く聞く耳など持たないＨＲ－Ｈはドドドの方角向けて巨大な腕を振り下ろす。

「陛下、何を言っても無駄でげすよ！！今はお逃げを！！」

エスカルゴＪｒ．がそういった瞬間、今度は両腕が二人の下に振り下ろされる。

「「ぎゃあああああ！！！！！！！！」」

二人は全速力でＨＲ－Ｈから逃げていく。

「エスカルゴ！！！何でわしがこんな目に遭わねばならんのだ！！！！」

「陛下が！！！あんないかさまインチキ商法の塊を勝手に弄くるのがいけないんでげしょう！！」

「わしは只、曾お爺ちゃんが楽しんでいた遊びを自分もやってみたかっただけぞい！！！！」

「それがいけなかったって、さっきから言ってるでげしょう！！！！」

その頃、城内の非常事態に気付いたメタナイトと部下のソードナイト、ブレイドナイトの三人は魔獣の姿を確認すると、驚愕の声を上げる。

「あれは!?」

「メタナイト卿、まさかこれは!?」

「・・・信じがたいが、恐らくナイトメアの造りし魔獣・・・まさか生き残りがいたとは・・・直ぐにカービィに連絡をしろ!それから陛下と住民の避難を急げ!」

「「はっ!」」

メタナイトがそう指示を出したその時だった。

ＨＲ－Ｈはエンジンを噴射して、城の屋根を突き破って市街地のほうへと飛んでいった。

「いかん!市街地に飛んでいったか!!」

その頃、城を目指して走っていた恋次達の三人の瞳にも城から飛翔したＨＲ－Ｈの姿を確認できた。

「あ!!恋次さん、吉良さん!!」

「ロボットか!?それにしても、何てデカさだ!!」

その規格外な大きさに驚愕する三人であったが、ＨＲ－Ｈはそんな

三人の驚愕を他所に施されたミサイルを投下し、ププビレッジを爆撃し始めた。

「ミサイル爆撃！」

爆撃を喰らった町は、一瞬にして焼け野原と化してき全人口の3割以上が熱風によって焼死してしまった。

生き残った人々も、悲鳴を上げながら被害から逃れようと逃げ回っていた。

「ジェノサイドとは・・・随分カスなポンコツだぜ・・・だがこれ以上好きにさせるか！！咆えろ、蛇尾丸！！」

恋次はその場から飛び上がると、空中に浮遊するＨＲ－Ｈに向けて蛇尾丸の刃を伸ばして攻撃を開始する。

エリオと吉良も恋次の援護に入るべく、高く飛び上がると加勢を始める。

「ストラーダ！！！カートリッジロード！！」

周囲の建物を使って空へと飛翔したエリオはカートリッジをロードすると、槍の先端に電気を溜めてＨＲ－Ｈに向けて攻撃をしようとしたが。

「サンダーレイ・・・のあああああ！！」

その瞬間、ＨＲ－Ｈの叩きによってエリオは地面へと飛ばされてしまった。

「エリオ！！」

「くっ！面を上げろ、侘助！！」

吉良は侘助を解放させると、侘助の刃でもってエリオを叩き落した腕を切り落とした。

ところが、切り下ろしたはずのその腕は電磁力によってＨＲ－Ｈに引き寄せられると再び連結をする。

「何！？切られた箇所を元に戻せるのか・・・！？」

驚愕する恋次と吉良に向って、ＨＲ－Ｈは更なるミサイル攻撃を行い二人を苦しめる。

一方、叩き落されたエリオが徐に体を起こしたときだった。

「いててて・・・！！はっ！！」

「あははは～～～ん！！！！ママ！！！！ママ！！！」

キャピィ族の子供が瓦礫の下敷きになりながら声を上げて泣いていた。

「子供が・・・こんな処に！」

エリオは直ぐに炎の中をくぐって行き、子供を下敷きにしている瓦礫をストラーダで破壊すると、背中に乗せて避難をしようとする。

「大丈夫だよ！！直ぐに僕が安全な場所まで送り届けるから！！」

恋次達のほうも、ＨＲ－Ｈの攻撃をどうにかかわしていきながらエリオを探していると、恋次は子供を背中に抱えたエリオの姿を確認する。

「居た！エリオはあそこだぜ！！」

「子供を助けてるようだね。」

と、その時。

ＨＲ－Ｈが標的をエリオに変更すると、額の水晶のようなものからレーザー光線を発射する。

「なっ！おい、吉良！！」

「（レーザー光線！？しかも、この方角は！！）」

レーザー光線は真っ直ぐにエリオの方角へと飛んでいく。

「エリオ！！直ぐに逃げろ！！！！」

「え！？」

恋次の声を聞いた瞬間、エリオが頭上を見た瞬間・・・レーザー光線が自分の方角へと発射されていった。

「なっ！！」

子供抱えて上に、足を捻挫した状態のエリオがソニックムーブを使うことは先ず不可能であった。

「「エリオ!!!!!」」

「「わあああああああああ!!!!!!!!!」」

回避も出来ないまま、レーザー光線が直撃し爆風が舞い上がった。

二人もこの時ばかりはどうすることも出来ないと思っていたが、そんな二人の予想を覆す出来事が起こったのであった。

「「!」」

何と、爆風の中から現れたのは星型の乗り物に乗ってエリオと子供を抱きかかえる星の戦士カービィの姿であった。

「う・・・あれ?僕は・・・一体!?」

エリオが先に気を取り戻して自分の状態を確認したとき、カービィも安堵の表情を浮かべてエリオに話しかけてきた。

「ふう〜〜〜ギリギリセーフ。大丈夫ですか?」

「あ!」

カービィの姿を確認した三人は、思わ驚愕の表情を浮かべる。

「吉良・・・もしかして・・・もしかすると!?」

「ああ。間違いない・・・被害者の胃袋に入っていたぬいぐるみと全く同じ・・・と言うことは、彼がそうなのか!?」

エリオはカービィの腕から解放され、地面に降り立つとカービィに質問をし始める。

「あ・・・あの・・・君は一体!?」

「詳しい説明はあと。今は魔獣を倒すことが先だよ。」

「ま、魔獣!?」

エリオは聞きなれない単語を耳にし、怪訝そうな顔を浮かべる。

カービィは二人を下ろした後、直ぐに魔獣ＨＲ－Ｈに向って専用の乗り物ワープスターに乗って空を滑空、攻撃の機会を窺っていた。

「カービィ!!」

「ん!?メタナイト卿!」

「これを!!」

すると、そんなカービィに向ってメタナイトが地上から自身の剣、ギャラクシアをカービィ目掛けて投げつけた。

「よっし!!」

カービィは投げられたギャラクシアを見るなり、勢いをつけて口の中へと吸い込みを開始する。

その勢いは恋次達の想像を絶するほどの風圧を与える。

「な、なななな何だこの吸引力は!?」

「吸い込まれそうだ!!!」

カービィはギャラクシアを口の中に完全に吸い込み、準備を整えた。

エリオは地面の下からカービィの不可解な行動と信じられない光景に眼を疑った。

「剣を・・・吸い込んだ!?」

そして、カービィはその場から回転をしながら高く飛び上がると、その瞬間吸い込んだ宝剣ギャラクシアがカービィの右手に現れると同時に、頭には緑色の民族帽子のようなものを被って再びＨＲ－Ｈの前に現れた。

恋次達はカービィの固有スキル、コピー能力の姿に驚愕するばかり。

「な、何だ・・・あの姿は!?」

「剣を吸い込んで・・・それを写し取ったのか!?」

ＨＲ－Ｈはミサイルやレーザー光線を手当たり次第にカービィ目掛けて撃ち込むが、カービィはそれを剣の一振りで撃破していき、エネルギーをソードに蓄積させそれを一気に放出させた。

「“ギャラクシア・ソードビーム”！」

月牙天衝にも似たそれをＨＲ－Ｈに放ったカービィ。
ＨＲ－Ｈはそれを受けた瞬間、身体が真っ二つに裂けてしまい爆発を起こしてしまった。
カービィの技を見ていた恋次達は言葉を失った。
「す・・・凄い・・・！」
「まるで月牙天衝を見てるようだぜ・・・何なんだよ・・・あのピンクボールは！？」
カービィは変身を解くと、ワープスターに乗ってエリオの下へと降りていくと怪我がないかどうかを確かめる。
「怪我はない？」
「え？あ、うん！僕は平気。この子も気を失ってるだけだし・・・」
エリオはそう言うと、隣で眠っている子供のほうを一瞥する。
「そっか。なら言いや。ところで、君たち三人は何者なの？見たことも無い種族のようだけど、おまけにその武器も・・・」
「え～と・・・詳しく話すと長くなるんだけど・・・」
エリオは一先ずストラーダを大気状態に戻すと、何か上手い言葉はないかと頭を回転させ始めた。

後からエリオの傍に降りてきた恋次達も、カービィとメタナイトに凝視されながらどうやって説明すればいいかと考えていたその時だった。

「あん？」

そんな恋次の通信機から入ってきたのは、浦太郎の慌てた声だった。

『気をつけて、恋次さん！』

「何だ、あの丸っこい奴のことか？」

『あれは・・・カービィ！『星のカービィ』とも呼ばれている！』

「・・・星のカービィ？・・・・」

『そう。何処かの惑星からやって来た地球外生命体だよ！世界を手中に収めんとする野望と・・・それを実現するのに充分な魔力を持ってる！強靭な胃袋は何でも飲み込み、無惨に溶かしてしまうそうだよ。そして、相手の能力を強奪するコピー能力で相手の仲間になりすまして隙を突き、捕食するんだ！おまけに、自由に飛びまわす飛行能力を備え、一度付け狙われたら最後逃げ場がないそうだよ・・・・・！！まさに、『魔王』と呼ぶのに相応しいだろう・・・・・・恐ろしい・・・っぐお！！』

「おい、どうしたんだ・・・浦太郎！？」

「いててて・・・！！」

浦太郎はユーノによる杖の一撃を受け、涙目を浮かべていた。

「嘘教えてどうするのさ、浦太郎。スマブラのやり過ぎだよ。」

『はぁ!?何だよ、じゃあ今迄のは全部出鱈目だったのかよ!?』

「本当のことも混じっていますよ。彼のことは、彼自身がちゃんと自分の口から説明すると思いますよ。」

ユーノの言葉を聞いた恋次達は、カービィからの詳しい話を窺い、カービィの話の内容を聞いた上で自分達のことも詳しく話したのであった。

今此処に、伝説の星の戦士と魔導師と死神の奇妙な物語が動き出そうとしていた。

ピンクの悪魔、登場！（後書き）

教えて、ユーノ先生！

ユ「今日は、カービィについてね♪」

ユ「星のカービィは、、１９９２年４月２７日に任天堂より発売されたゲームボーイ共通のアクションゲームで、開発元はＨＡＬ研究所。生みの親は当時２２歳の桜井政博って人が作ったんだ。」

ユ「コピー能力と言う相手の能力をそっくりそのままコピーする力を秘めていて、どんな敵でも倒してしまうということから、別名『ピンクの悪魔』と呼ばれているんだ♪」

一「じゃあよ、白い魔王のなのはとピンクの悪魔のカービィを戦わせたら、どっちが勝つんだ？」

な「だから！！！私は悪魔じゃないですよ！！！ね、ユーノ君！」

ユ「どうだろ・・・なのはって一方的に叩きのめして、人の話なんか全然聞かないし、我儘だし、魔王としての資質は充分あると思うけどね・・・（悪意に満ちた笑顔）」

な「ガーーーーン！！！！！！！ユーノ君だけは信じてたのに・・・！！！！（なのは、ショック！！その後、いじける）」

一「今回はガツンと言ってやったな。見直したぜ。」

ユ「でも、ちょっと言い過ぎましたかね？（後でお詫びのケーキで

もご馳走しようかな。）」

魔導師図鑑ハイパー！

クロノ・ハラオウンは本局との仕事を掛け持ちしているために六課の中では多忙を極めるポストなのだ。

今日も書類整理に追われながら、本局の仕事を片付けていた。

ク「あああ！！！忙しい、忙しい、忙しい！！！忙しい、忙しい、忙しい！！！恋次さんからの報告書はまだか！？」

局「まだです！」

ク「何！！（クロノ、恋次に怒りを覚える）」

すると、そこにフェイトが書類を持ってやってくる

フェ「クロノ。事件捜査の報告書、持ってきたよ。」

クロノ、筋肉を緩めほっと一息。

ク「済まんな。フェイトは何時もちゃんと報告書を期限までに出してくれて助かる。」

フェ「これくらい当然だよ。」

と、そこへユーノが慌てた様子でやって来る。

ユ「ポップスターに、アンゴルモア反応！！ＡＭ１７だよ！！」

全員がそのことに驚愕する中、クロノは次のように言った。

ク「何！？早速本局の特集の為に取材に行かないと！！」

フェ・ユ「・・・・・・（クロノ・・・何言ってるわけ？）」

ピンクの魔王、なのはカービィ

＞ｉ１３２７３―７０９＜

カービィと恋次達はお互いの話をある程度理解すると、それぞれの今までの話の流れを整理していった。

「つまり、お前は星の戦士カービィで・・・２００年前に宇宙艇に乗ってこの星を訪れそれ以来ずっと此処で暮らしてるのか？」

「それにしても随分と長生きなんだね。」

エリオは２００年間という長い時間を生き続けているカービィとメタナイトに関して素朴な疑問を持ったが、直ぐにカービィが答える。

「僕やメタナイト卿は、この星の住民と違って・・・歳のとり方が極端に遅いからね。この星で２００年のときを過ごしても、僕ら二人は２０年の時しか過ごしていないことになるんだ。」

「ある意味、死神と同じだな・・・」

「そなた達のことは大方分かった。その人形と言うもの恐らく・・・この星で造られたものであることは間違いない。カービィは、この星の住民にとっては英雄として謳われておるからな。」

「へ～凄いんだね、カービィって！」

エリオが英雄と言う言葉に反応し、カービィを褒めたときだった。

カービィは何所か複雑な表情を浮かべると次のように返した。

「・・・別に大したことじゃないよ。英雄なんて言っても、所詮は戦ってしか人を守ることの出来ない“悪魔”に変わりない・・・」

「「「・・・・・・・」」」

三人は予想外のカービィの一言に思わず言葉を詰まらせた。

「おっと、話の腰を折ってしまったね。それで、何所まで話したっけ？」

「ああ、そうだね。えっと・・・町を破壊していたあのロボットについてだが、あれは一体何だったんだ？」

吉良がそう尋ねると、メタナイトがカービィと顔見合わせてから徐に答えた。

「あれは・・・魔獣だ。」

「魔獣・・・!?そんなものが居るのかよ?」

「居るんですよ。この宇宙には、魔獣を自由にダウンロードできる特別な配信装置があるんです。僕が全てをお話しましょう・・・この僕が星の戦士として生き続けてきた今迄の経緯と一緒に。」

「・・・分かった・・・」

恋次達はカービィの話を聞くために、一度星の戦士達がシェルターとして使っている英知の岩、カブーへと移動し、その中で三人はカービィの話を真剣な表情で聞いていた。

「それは数万年前、一人の男によって引き起こされた邪悪なる夢がそもそもの始まりでした。ナイトメアという邪悪なる存在が至る所に魔獣を送り込み、宇宙の征服にかかった。それに対抗すべく、自由を愛する者達が立ち上がりました。『銀河戦士団』が結成され、あらゆる星星でナイトメアとの戦いが始まりました。メタナイト卿もその一人でした・・・しかし、無尽蔵に繰り出される魔獣の前に戦士団は崩壊。わずかに生き残った星の戦士たちは宇宙の片隅に追いやられつつもナイトメアを倒す新たな方法を探していた。一方、ナイトメアは企業帝国『ホーリーナイトメア社』を設立し、組織的かつ効率的に魔獣を生み出し、宇宙各地の大から小の悪党や金を持てあます金持ちたちに魔獣を売りつけるという方法で自らの勢力を拡大させていきました。」

「何か・・・スケールが随分デカイ話だな・・・おい・・・」

「スターウォーズを思い浮かべるみたいだね・・・」

「それで、ナイトメアはどうなったの!?」

「はい・・・それを話す前に少し続きを聞いて欲しい。戦いの後、敗北し傷ついたメタナイト卿は宇宙の各地を彷徨い、放浪の旅をしながら生き続けた。希望を捨てなかったからです。」

「希望?」

「メタナイト卿が決して最後の戦士ではない。次世代の若い戦士がきっと生まれている。それを見届けるまでは生きなければならないと・・・そして、２００年前・・・メタナイト卿はこの星に流れ着き、当時ホーリーナイトメア社の魔獣配信サービスを使ってこの星に災厄を齎していた、デデデ大王の家来となった。」

「何で、そんなクソみたいな奴に!?意味分からないぜ!」

恋次は思わず思ったことを口にするが、話しているカービィは冷静そのものだった。

「次世代の宇宙艇は、自動的に魔獣の居る星に向うんです。つまり、若い戦士はこのポップスターに現れる可能性が高いということです。そして、その星の戦士こそが・・・僕だったんです。」

「成程。カービィが・・・」

「はい。だけど、その時の僕は若過ぎました。」

「若過ぎた!?」

カービィの不可解な発言に思わず顔を見合す三人。

「ポップスターの魔獣を僕の宇宙艇がキャッチしたとき、僕の目覚めは予定よりも２００年も早かった・・・それが原因で僕はゆりかごの宇宙艇を操縦できず、不時着した。早過ぎた誕生のために、僕は何も知らず言葉すらも話せない・・・つまり、僕は赤ん坊の戦士だったんです。」

「赤ん坊の戦士・・・！？そんなんで、どうやってナイトメアを倒せたんだよ！？」

「確かに、一人では不可能でしたね。無知という事は、悪いか良いかの判断も出来ない。でも、僕には仲間が居た。僕を心の底から愛するものも居た・・・だから僕は負けなかった。僕は仲間が居たから、最後のナイトメアとの決戦時・・・奴を葬り去ることが出来たんです。でも、その仲間も・・・今ではメタナイト卿や一部の人を除いて、みんな死んでしまいました。」

カービィの寂しげな表情を見た瞬間、エリオや恋次達は罰のあるそうな顔を浮かべた。

「カービィ・・・・・・」

「悪い・・・空気を読むべきだった。」

すると、そんな三人の様子を一緒に聞いていたメタナイトがフォローに入る。

「そなた達が気にすることは無い。これも星の戦士の宿命（さだめ）と言うものだ。命あるもの、何れ必ず死ぬ。それが遅いか早いか・・・」

メタナイトの言葉を聞いた恋次も、正論を聞いたお陰で少し気分が吹っ切れた。

「まぁな。で、お前の話は大体分かったから・・・今度は俺達の話を聞いてくれないか？」

「何ですか？」

「実は僕達、アンゴルモアって言う凄く危険な物質を探してるんだ。青紫色をしたガラスの破片ぐらいの大きさの石なんだけど・・・心当たりない？」

「ガラスぐらいの大きさの石か・・・残念だけど、見たことも無いな。」

「この星の殆どは緑だ。住宅地はこの辺り以外では珍しくて、そういった類のものをこの近辺に住んでいる我々が見たことが無いということは、此処にはない可能性が高いということになる。」

「弱ったな・・・ルキア達の方に任せるって言うのも釈然としないしな・・・」

「もう少し捜索範囲を広げてみよう。その為の魔法や鬼道があるじゃないか。」

「何としても、見つけ出しましょう！」

「ああ、分かってるさ。」

恋次は気を取り直すと、カービィ達と供にカブーの中から出る。

「僕達も出来ることなら捜索に力を貸しますよ。」

「え、でもそんな悪いよ！」

「困ってる人を放っておけないんだよ、僕は。それに、エリオ君だっけ・・・君とはもう少し話をしたい。」

「え？」

カービィの思わぬ言葉に訝しげな表情を見せるエリオ。

すると、メタナイトはカービィに後のことを任せると、町のほうへ歩き出す。

「カービィ。彼等のことは任せるぞ。私は町に戻って復旧作業に取り掛かる。」

「分かりました。」

メタナイトを見送った後、恋次と吉良、そしてエリオとカービィは二手に分かれてアンゴルモア捜索に取り掛かることにした。

道中、カービィはエリオとすっかり意気投合したのか何気ない談笑で場の雰囲気が和むとエリオの生い立ちなどを聞くことが出来たのであった。

「そっか・・・エリオ君はクローンなんだ・・・」

「うん。僕の恩人も同じプロジェクトで創り出されたクローンでね・

・・突然両親と引き離され、その際に事実を突きつけられた途端に両親が抵抗を止めてしまったことや、研究施設での非人道的な扱いから僕は一時期重度の人間不信に陥ったんだ。周りにいる全ての人が敵に見えて、毎日を送ることが怖くて仕方なかった。だけど、その人・・フェイトさんって言うんだけど、真摯に僕のことを受け止めてくれたから、僕はこうして前を向いて生きていける。それに・・・僕には命を賭してでも守らないといけない大切な人が居るから・・・」

そう言うと、エリオは頭の中にキャロの姿を思い浮かべて決意を新たに拳を強く握り締めた。

だが、そんなエリオの言葉を聞いていたカービィは険しい表情を浮かべると次のような言葉を返すのであった。

「命を賭してか・・・僕から言わせてみれば、それは凄く馬鹿げたことだと思うけど。」

カービィの想定外の発言を聞いた瞬間、エリオはもう反発。

「え!?ど、どうしてなのさ!大切な人を命がけで守ろうとすることが、そんなに馬鹿げたことなの!!君には分からないんだよ!僕と違って力もあって、強くて、周りから尊敬される君には・・・!!」

「違うよ、それは。僕だって君の気持ちは痛いほど分かる・・・だけど、命を賭して守りたいものを守っても、結局それは守れたことになんかならないよ。」

「!」

その言葉を聞いたエリオは、何かに気付いたのかその場に足を止めた。

そんなエリオを見ながらカービィは自分の考えを次のように語りだす。

「死んで大切なものを守ったとしても、守られたものは決して喜ばない。死んだら何の意味も無いんだ・・・！死んだら・・・何の意味も・・・無いんだ・・・！！」

「カービィ・・・君は・・・！？」

そうエリオに向けて溢れる想いを惜しみなくぶつけるカービィに、思わずエリオは驚愕する。

「エリオ君・・・君が何を守りたいのかは分からない・・・だけど、戦士と生きる以上これだけは覚えおくといいよ。」

「・・・――――」

「“死してまで守り抜く意味など、この世にありはしない。生き残ってこそ意味がある。”」

「生き残って・・・こそ・・・！」

「だから、僕は生きている・・・死んでしまった仲間のためにも・・・僕を心から愛してくれた人のためにも・・・」

カービィはそう言うと、頭上で煌々と照らす太陽を仰ぎ見ながら嘗

ての自分の仲間の姿を思い浮かべながら話を続けた。

「僕は生き続けて、戦っていくしかないんだ。最後の命の炎が消える・・・そのときまで。」

カービィの話を聞いたエリオは、漸くあの時自分のことを気にかけてくれた恋次の行動や周りの人たちの目線に気付き、改めて此処数週間の自分を振り返ってみた。

「・・・・・・――――――（そうか・・・恋次さんはこのことを僕に伝えたかったのか・・・いや、恋次さんだけじゃない・・・僕を気にかけてくれる人は気付かせようとしていたのか・・・僕はまだまだ修行が足りなかった。そんな大事なことも忘れて、毎晩毎晩体のことも無視して訓練するなんて、どうかしてたよ。）」

エリオは大切なことを思い出し、もう二度とあのようなことはしないことを堅く決意すると、それを思い出させてくれたカービィにお礼の言葉を口にする。

「・・・ありがとう、カービィ。僕・・・漸く分かったよ。」

「？」

「もう・・・命を賭けてまで大切なものを守ろうなんて考え方は持たない。これから先、どんな戦いが待っていようと、僕は生き残る！生き残って、僕の大切な人を守り抜いてみせる！」

カービィもエリオのその言葉を聞くと、顔を綻ばせてエリオに笑いかけた。

「・・・うん！そうだよ。それが大事なんだ！分かってもらえて、嬉しいよ！」

そして、二人は急に嬉しくなったのか久しぶりに笑顔で笑い始めた。

そんな二人の様子をこっそりモニターで見ていた恋次と吉良も安心した様子であった。

「ふん。漸く気付きやがったな・・・エリオの奴・・・」

「君の立場的には、いいところは全部カービィに持っていかれたね。」

「まぁ、いいさ。大事なのはあいつが分かってくれるかどうかだ。説得するのが誰だろうと関係ねえよ。これであいつの中のもやもやも、消えるはずだぜ。」

「そうだね。さて、探索範囲を広げてみるかな。」

モニター画面を切ると、吉良は懐から特定の縛道を使用するのに用いる塗り薬のようなケースを取り出すと、それを自分の指先に付けていく。

「アンゴルモアの反応を霊圧に置き換えて、縛道で探索出来るかのか？」

「理論上は可能のはずだよ。ものは試しだ・・・いくよ。」

そう言うと、吉良は地面に特定の陣を書きながらアンゴルモアの探索を開始する。

「“南の心臓　北の瞳　西の指先　東の踵　風持ちて集い　雨払いて散れ”　縛道の五十八、『捕趾追雀（かくしついじゃく）』！」

その瞬間、人の中に映し出される場所を特定するための数字の羅列が高速で駆け巡っていく。

「・・・３１・・・６４・・・８３・・・９７・・・反応捕捉！西三百三十九。南二千五百六十一！」

恋次は吉良から捕捉先の場所を地図で確認すると、数キロ先に見えてくる森のほうに目を向ける。

「あの森の奥からか・・・エリオ、応答しろ。アンゴルモアの反応を捕捉した。」

『本当ですか！？』

「ああ。この先の森の奥からだ。カービィ、あの森は近付いても大丈夫なのか？」

『ウィスピーウッズは事情を話せば分かってくれます。危険性はそんなに無いでしょうが、一応用心はしてください。僕も道案内ぐらいはしますから。』

「そうか。助かるぜ。それじゃ、直ぐに森の入り口に集合だ。」

『了解！』

その後、恋次達はププビレッジから数キロ先にあるウィスピーウッ

ズと呼ばれる樹齢何百年と言う木が守る森の入り口へと向う。
先に到着した恋次達は森の入り口でエリオとカービィが来るのを待っていた。
暫くすると、バリアジャケットに身を包んだエリオとカービィが走ってきた。

「お、来たみたいだな。」

「すみません、お待たせしました！」

「気にすることはないよ。僕達もそんなに待っていたわけじゃない。さて、カービィ。早速だが道案内をしてくれないか？」

「分かりました。それじゃあ、行きましょう。」

カービィはそう言うと、先頭に立ってウィスピーウッズが居る森の奥へと進んでいった。

鬱蒼とする森の中を只管に歩き続けるカービィ達であったが、カービィはこの森の様子が何時もと違うことに気付き訝しげな表情を浮かべる。

「・・・おかしいな・・・？」

「あ？何がだよ。」

「普段なら、もっと小鳥もリスたちも多いはずなのに・・・今は全くそれが感じられない。それどころか、森の木々たちの心の声すら

も聞こえない・・・どう言う事だ・・・？」

「眠ってるだけじゃねぇのか？」

「それはないですよ。こんな日光のある昼に木が眠るなんて、どうかしてる。それに気がかりのはウィスピーウッズの方だ。彼だけはそう簡単に異常が起きない筈だとは思うんだけどな・・・」

と、カービィがウィスピーウッズの無事を心配していたその時だった。

「ぐあああああああああああ！！！！！！！」

「「「「！？」」」」

突然、森の奥から聞こえてくる悲痛な叫び声。

「アアアアアアアアアアアア！！！！！！！！」

「何だ、この気味の悪い叫び声は！？」

「！ウィスピーウッズです！！この先の奥からです！！」

カービィはウィスピーウッズの身の危険を感じ取り、すぐさま恋次達と供にウィスピーウッズが生えている森の最深部へと走り抜けていった。

そして、カービィ達が最深部へ辿り着いたとき・・・そこで四人が見たものは。

「あっ！」

「「「なっ！？」」」

木の養分を完全に抜き取られ、瀕死の状態のウィスピーウッズであった。

カービィは直ぐにウィスピーウッズに駆け寄ると、意識を確認する。

「ウィスピーウッズ！！！しっかり、ウィスピーウッズ！！！」

カービィの必死の呼びかけを聞いたウィスピーウッズは、最後の力を振り絞ってカービィにこう言い残した。

「・・・か・・・カービィ・・・に・・・げろ・・・お前には・・・逃げて・・・欲しい・・・間も無く・・・この星・・・は・・・・・・ぐっは！！」

ウィスピーウッズは死んではいないが、体中の力が抜けてしまったことによりそのまま意識を失い萎れてしまった。

「ウィスピー・・・目を覚まして・・・ウィスピー！！！！！」

「生命エネルギーを根こそぎ奪われている。幸い、まだ死んではいないようだけど・・・何者かがこの森全体の生き物からエネルギーを奪っていたんだろ。」

「だから、動物の気配するらも無かったってことか・・・」

「でも一体誰がこんなことを！？」

恋次や吉良、そしてエリオがこのような惨いことをする犯人に憎悪の炎を燃やしていると、自分達の後ろから足音のような物音が聞こえてきた。

「「「「!?」」」」

四人がその音の方向に振り返ると、歩いてきたのは不適な笑みを浮かべる以前ティアナ達が取り逃がしたあの男、アイゼンであった。

アイゼンは驚愕する恋次達を他所にカービィの名前を口にする。

「ふふふ・・・ついにこの時を待っていたぞ・・・２００年ぶりの再会だな・・・カービィ。」

「誰だ?」

カービィは自分の名前を知っているアイゼンの言動に些か恐怖を覚える。

「な!あいつは・・・!?」

「この前ティアナ達が取り逃がした奴か?」

「ふふふ・・・あの時の魔導師の仲間か・・・その節は随分世話になったな・・・ふふふ」

すると、その瞬間・・・アイゼンは自分の本来の姿に戻り再びカービィの姿を凝視する。

その姿は、奇抜なサングラスをかけ、２本の細長い角が生え、星柄のマントで体を覆った人の姿をした邪悪なる化身であった。

カービィは信じられないとばかりの表情を浮かべ、その邪悪なる化身の名前を口にする。

「！莫迦な・・・お前はナイトメア！？」

カービィのその言葉を耳にした恋次達は、思わず驚愕の表情を浮かべる。

「何！？それって・・・お前が２００年前に倒したはずじゃなかったのかよ！？」

「ふふふ。私は人の心の中にある悪夢をエネルギーとしている。一度貴様に倒されたからと言って完全には消滅はせぬ。お前を葬り去る為に、この世に蘇る機会をずっと窺っていた。そして、私はアンゴルモアの力を有して、再び完全なる力を取り戻すことが出来た。だが驚くのは未だ早い・・・今の私は只のナイトメアなどではない。」

「！？・・・どういう意味だ、それは！？」

「ふふふ・・・ならば見せてやろう。新たなる我が力の姿を！！！はあああああああああああああ！！！！！！！！！」

その瞬間、ナイトメアは体の中に取り込んだもう一つの邪悪なる化身の力をアンゴルモアの能力によって覚醒させると、暗黒に包み込まれていく。

「「「こ、これは！？」」」

「くっ！！」

凄まじい邪悪なるエネルギーに思わず後ずさる恋次達やカービィ。

そして、漆黒の闇が晴れた瞬間・・・四人の目の前にあられたのは、体の中央に不気味な眼球上のものを埋め込み、周りに二つの鏡を浮かばさせたもう一つの闇の姿となったナイトメアの姿であった。

「ふふふ・・・我が名はナイトメア、改め・・・闇の支配者“ダークマインド”。」

「ダーク・・・マインド！？」

ダークマインドという名を聞いたカービィは思わず復唱してしまう。

「いくぜ、てめぇら。」

「ああ。」

「はい！」

放心状態のカービィを他所に、恋次達は武器を取り出しダークマインドに向けて攻撃を開始する。

「咆えろ、蛇尾丸！！」

恋次の攻撃がダークマインドに直撃したその瞬間、ダークマインドは鏡から作り出した虚像となって恋次の攻撃を回避した。

「何！？」

「鏡の虚像！？」

攻撃を回避したダークマインドが再び四人の前に現れると、不敵な笑みを浮かべながら雄弁に語りだす。

「ふふふ・・・我は貴様達の心の悪夢から生まれし存在・・・故に実体などありはせぬ。」

「くそ！！おい、カービィ！一度はあいつを倒したんだろ！？何か弱点の一つや二つ知らないのかよ！？」

「あるにはありますが、此処じゃ使えないんですよ。ナイトメアを倒すには、夢の中でスターロッドという武器を使わないといけないんですよ！」

「ちっ！夢の中に入れてくれるような相手じゃなさそうだな。」

その後も、四人はそれぞれの技を駆使してダークマインドに幾度が攻撃を仕掛けるが。

「一閃必中！！」

〈Ｌｉｏｔｔ　ｓｐｉｒｅ〉

「破道の五十八　『？嵐』！」

「ファイナルカッター！！！」

エリオの電撃を帯びた槍撃、吉良の鬼道、そしてカービィのコピー能力によって蓄積された経験によって生み出された上級技ファイナルカッターがダークマインドに向けられたが、鏡の虚像によって全て防がれてしまう。

「ふん。何度やったところで同じこと。この現実世界で我を倒すことは不可能。最早貴様らの敵う相手ではないと何故理解できぬ？」

「くっ！！何を・・・！！」

「・・・これ以上の論議は不要か・・・哀れなる小さき命よ・・・我の力の前に滅ぶがいい。」

そう言うと、ダークマインドは両手から邪悪なるエネルギーによって造り出された無数の星の塊を恋次達とカービィ目掛けて飛ばしていった。

「“スターバレット”」

攻撃を受けた四人は勢いに圧されて森の木々に体をぶつけてしまった。

「「「「のあああああああああ！！！！！！！！」」」」

「ぐあああ！！！」

カービィは一人打ち所が悪かったのか、恋次達以上に満身創痍の状態であった。

「カービィ！！」

エリオは直ぐにカービィの下に駆け寄り、意識を確認する。

「大丈夫！？カービィ！！」

そんな満身創痍のカービィを見ながら、不敵な笑みを浮かべるダークマインド。

「ふふふ・・・脆いものだな・・・それが嘗て我を滅ぼした最強の星の戦士の姿か？やはり今の貴様では相手にもならんな。所詮貴様は、あの小娘の力なくしては何も出来ぬ半人前だと言う訳だ。」

その瞬間、ダークマインドの言葉に反応したカービィが激情。

「！！き、貴様！！！！！！フームのことを軽々しく語るな！！！！！！」

カービィは恋次やエリオの忠告を無視して、再びファイナルカッターを生成し一人でダークマインドに向かって行った。

「止せ！！！カービィ！！！」

「カービィ！！止めて！！」

「でやあああああああああ！！！！！！」

そんな周りが見えなくなってしまっているカービィを見たダークマインドは、鼻で笑うと止めの一撃を加える。

「愚かなる戦士よ。」

ダークマインドはそう言うと、体の中心に埋め込まれた眼球を開いてその衝撃波をカービィに至近距離から直撃させ、カービィを吹き飛ばす。

「なあああああああああああああ！！！！！！！！！」

「「「カービィ！！！！」」」

カービィはウィスピーウッズの幹に体を直撃させると、傷の深さと受けたダメージが余りに大きかった為、そのまま気を失ってしまった。

三人は急いでカービィの下まで駆け寄る。

「カービィ！！目を覚まして！！カービィ！！！」

エリオの呼びかけにも拘らず、カービィは全く起きる気配など無かった。

「ふふふ・・・今日のところはこれくらいにしておく。次に我が現れ時は、この星が消えてなくなるだろう・・・それまで、拾った命は大事にすることだな。ぬはははははははははは！！！！！」

ダークマインドはそういい残すと、恋次達の前から鏡が割れるかのように姿を消した。

「消えた！」

「カービィ！！しっかりして、カービィ！！！カービィ！！！！！」

三人はすぐさま、六課のシャマルのところまでカービィを運ぶと直ぐに手当てをさせた。

シャマルは手術室の中で重度の傷を負ったカービィを必死に直そうと、奮闘した。

手術室の前でエリオは椅子に座った状態で駆けつけたメタナイトや恋次達と供に手術が成功することを祈るしかなかった。

そして、ランプが消えドアが開かれるとシャマルがマスクを取って出てきた。

「あっ！シャマル先生！！！カービィは！？」

「大丈夫よ。傷は酷いから直ぐには起きられないと思うけど、命に別状はないから。」

それを聞いた一同は安心したのか、深い溜め息をついた。

「よかった・・・本当に・・・」

「メタナイトも態々着いて来てもらって済まねぇな。」

「構わぬ。カービィを見守ることが、私の務めだ。それに、ナイトメアが再びこの世に復活したと聞いて、黙っていることなど出来ぬ。」

「そうだね。急いで対策を練らないと。」

四人は一先ずカービィのことはシャマルに任せて、前線メンバーが集まる指令室へと向った。

ドラが開くと、そこには別件の任務から戻ってきたシグナムとアギト、ルキアの三人が全員に話をしようとしていた。

「おう。お前たちも戻ったのか。」

「ルキア、シグナム達も！」

「丁度いいところに戻って来てくれた。これから、我々が掴んだ情報を伝えるところだ。その場でいいからよく聞いてくれ。」

恋次達はシグナムの言葉を聞くと、壁などに腰を寄せるとはやて達と一緒に三人の報告を聞いていた。

「被害者トゥキトゥデス・ガン・ロードの出身世界、オーメンに向った私達は彼と親しい関係にあった知人から彼に関する様々な情報を聞き出し、その中で・・・彼が死ぬ間際まで滞在していたという古代遺跡に関する情報を入手した。」

「しかも、その古代遺跡っていうが・・・エリオ達が向ったあのポップスターって場所にあるらしいんだ。」

「え！？本当ですか！」

「間違いなさそうだ。しかも、その遺跡は普通の古代遺跡と比べると規模も防衛システムも並みのセキュリティでは太刀打ち出来ない

ものらしい。」

「而して、その遺跡とは？」

メタナイトがそう尋ねると、ルキアが一拍間を置いた後にこう口にした。

「全てが鏡の中に存在する・・・大迷宮。」

「鏡の中に存在する大迷宮？」

「どう言う事や、それ！？」

フェイトやはやてを始め、殆どのものがその遺跡の特徴に首をかしげた。

すると、ポップスターに長年住んでいるメタナイトが先陣を切って説明を始めた。

「一つの鏡を遺跡の入り口とし、入れば無数に存在する鏡が無限のルートを作り出し、入ったものを永久に鏡の迷宮に閉じ込めてしまうというポップスターの禁断の遺跡。そして、その奥には未だ発見されていない宝が眠っていると言われるが、詳細は分からぬままだ。」

「その通り。で、私らの調べじゃ、被害者はその鏡遺跡にたった一人で入り込んで行ったらしく、大体一週間ぐらいした時だったかな・・・彼は何と奇跡的に鏡の外に帰還し、秘宝を見つけたんだ。」

「だが、その秘宝と言うのが・・・今回、エリオや阿散井達が遭遇

した敵の正体、ダークマインドが封じされた壺だった。」

「「「なっ！？」」」

「ナイトメアは、被害者の持ち帰った壺を手中に収めんとし、隙を突いて被害者を殺害し壺を奪った。その後、壺の中に封じられていたダークマインドを自身の中に取り込み、更なる力を蓄えんとした。」

「だが、膨大なエネルギーを消費するそれを維持するためにはどうしても捕食するものが必要だった。そこで、奴がとった行動が・・・」

「アンゴルモアを使ってのパワーコントロール！？」

「そうか・・・だが、アンゴルモアでも足りない分のエネルギーを周りの生き物から奪っていたのだろう。」

「だからあの時、森の生き物が全部・・・」

漸く全てのことが繋がった恋次達は、今日一日の出来事を思い返していた。

すると、メタナイトは自分の推察を次のように語りだした。

「ナイトメアが被害者を殺した後、自身の復讐を遂げるべくカービィを罠に誘い込もうとしたのか、或いはそなた達を先に始末しようとしたかはどちらかは不明だが、カービィの人形を被害者の胃の中に入れて両者を誘き出そうとした事はほぼ確定だな。」

恋次達は全てがナイトメアによって仕掛けられた罠であったことに、深い憤りを覚えると拳を握る力を強くした。

と、その時だった。

『八神部隊長!!大変です!!ポップスターの上空に、不審な物陰が!!』

シャーリーからの突然の報告が事態を一変させる。

「何やて!?」

「メインスクリーンに映すよ。」

ユーノは早速タッチパネルを操作してポップスターの映像を映し出す。

ポップスターの上空には、暗雲によって形を成したダークマインドの巨大な顔であった。

「なっ!あれは・・・!!」

全員は唾を飲んでその光景を凝視する。

そして、不敵な笑みを浮かべながらダークマインドは次のように宣戦布告する。

『うふふふはははははは!!!小さき命よ・・・我が名は闇の支配者ダークマインド・・・明晩を以って、我はこのポップスターを手始めに全宇宙に向けて魔獣による総攻撃を開始する。ふふふ聞

いているかカービィ・・・もう直ぐお前の愛するこの星は消えてなくなる。お前の愛する小娘の思いでも何もかもが詰まったこの星は・・・我の手により消える！！！！それまで、最後の晩餐でも楽しむがいい・・・ふふふはははははははははははは！！！！！！！！！』

そう言うと、ダークマインドは上空から姿を消してしまう。

ダークマインドの宣戦布告を聞いた恋次達は込みあがる怒りを爆発させようとする。

「あの野郎・・・舐めた真似しやがる！！」

その時、突然エリオが拳を壁に思い切り殴りつける音が聞こえた。

「「！」」

エリオの思いもよらぬ行動を見た恋次や吉良、更にはフェイトやキャロを始めとする前線メンバー全員が驚愕の表情を浮かべる。

「エリオ・・・！？」

「エリオ君！？」

「・・・・・・――――――」

動揺を隠し切れないでいるフェイトとキャロ、そしてそんなエリオの様子を黙って見つめるユーノ。

すると、エリオは悲しみと怒りに満ちた低い声で次のように語りだ

した。

「・・・許さない・・・カービィにあんな酷いことをするだけじゃなくて・・・その上・・・カービィの思い出がいっぱい詰まった世界を壊そうとするなんて・・・」

「エリオ・・・お前・・・」

「そんなことはさせない！カービィは僕の大切な友達だ！友達の思い出が詰まった大切な場所を、仲間の記憶がいっぱいの大切な星を・・・ナイトメアなんかに壊させたりしない！！！」

エリオの決意は確固たるものだった。

キャロは今迄こんなにも決意の固いエリオを見たことなかった。

勿論、フェイトや他の前線メンバーもそうであった。

エリオはカービィの星を必ずやダークマインドの脅威から守り抜くと言う決意の下、左腕に付けていたストラーダを取り外し、それを強く握り締める。

ダークマインドによる宣戦布告があってから三時間が経った頃、カービィは未だ包帯を体に巻いた状態で目を覚まさないままであった。

そんなカービィの傍でずっと付き添っているのはエリオとメタナイトであった。

エリオは連日の披露の所為か、まともに睡眠を取っていない付けが回りカービィが目を覚ます前に深い眠りに入ってしまった。

そんな様子をメタナイトが見ていると、部屋のドアを叩く音が聞こえた。

「誰だ?」

「シャマルです。」

メタナイトはドアを開けると、バスケットに差し入れを積めて来たシャマルを部屋の中へと通す。

「これよろしかったらどうぞ。差し入れです。」

「済まないな。」

「具合はどうです?」

「熱は下がったみたいだが、あの怪我じゃ戦闘には・・・だが、カービィが助かって本当によかった。そなたの手術のお陰だ。」

「いいえ。医者としては当然です。それに、お礼なら私じゃなくてエリオに言ってください。最近、色々と思いつめてエリオが・・・カービィくんと出会ってから何か吹っ切れたみたいだし。カービィくんが目を覚ますのを待ってずっと傍に居るんですから。」

シャマルがメタナイトにそう言った直後だった。

カービィが徐に眼を覚まし、自分の周りを見渡した。

「ん・・・・・?」

「あ！」

シャマルとメタナイトはカービィの傍に駆け寄ると、眠ってるもう一人の人物エリオを起こす。

「・・・あれ・・・僕は・・・？あっ！」

エリオは虚ろな表情を浮かべるカービィの意識が戻ったことに、安堵の表情を浮かべる。

「「カービィ！」」

「気が付いたみたいね！」

シャマルは直ぐに指令室で作戦会議を行っているメンバー全員に招集をかける。

『みんな、カービィくんが目を覚ましたわ！急いでこっちに来て！』

恋次を先頭に全員は駆け足で医務室のほうへと向い、ドアを開いて中へと入ってきた。

「カービィ！」

全員はカービィの無事な姿を確認すると、同じように安堵の溜め息をつく。

その後、エリオがカービィに話しかける。

「カービィ、大丈夫!?意識しっかりしてる!?」

すると、カービィは虚ろな目を浮かべたまま次のようなことを口にする。

「エリオ君・・・メタナイト卿・・・久しぶりだね。」

「久しぶり?何を言っているのだ君は?」

吉良は頓狂な発言をするカービィの言動に思わずそう返事をするが、聞いていたユーノが怪訝そうな表情を浮かべる全員にこう言った。

「恐らく、傷による一時的な記憶の混乱だろうね。」

「わぁ・・・何か人が一杯いる・・・もしかしてこの人たちが機動六課の前線メンバー?」

カービィは虚ろな目で辺りを見渡しながらそう口にするが、メタナイトが真剣な表情で次のように語りだす。

「カービィ、今はそれどころではない・・・ナイトメアがとうとう・・・!」

「ナイトメア?ほ〜〜〜ナイトメアですか・・・ナイトメア・・・――――――!!」

すると、突然カービィの表情が一変、そのまま黙り込んでしまった。

「・・・カービィ・・・?」

不審に思ったエリオがカービィに声を掛けた瞬間、カービィが勢いよく起き上がると、エリオに詰め寄るように強引に話しかけた。

「エリオ君!!!ナイトメアは!!」

「え!?」

「ナイトメアからあの後宣戦布告とはなかったかって聞いてるの!!!」

「ええ・・・えと・・!!三時間前に明晩ポップスターに魔獣と一緒に総攻撃をかけるって言っていたけど!!」

「何だって・・・!?それじゃあポップスターの皆は・・・こうしちゃいら・・・ぐあああああ!!」

カービィは直ぐにでも動き出そうとしたが、思いのほか体へのダメージが大きかった所為か直ぐに傷口を押さえて苦しみ出した。

「カービィ!」

「ほら、言わねえことじゃねぇ。無理するな。傷口が開いちまう!」

エリオや恋次を始めとするメンバーはカービィに動かないように言葉を掛ける。

すると、傷口を押さえながらカービィは食べ物を持ってくるように要求する。

「ぐっ!!!!た、食べ物・・・食べ物持ってきて・・・!!」

「食べ物って、お粥か？」

鬼太郎が冗談っぽくそう言うと、カービィは痛みを堪えな顔を険しくさせながら怒りを露にする。

「そんなもんじゃ力にならないよ・・・！！血が足りない・・・何でもいい・・・じゃんじゃん持ってきて！！！」

「そ、そんなこと言われてもよ！？」

「仕方ない。僕達で何とかするしかない。みんな、急いで六課中の食べ物をかき集めてこよう。」

「「「「了解！」」」」

ユーノはそう言うと、スクライア商店メンバーを引き連れて六課中の食べ物を手当たり次第に掻き集めて、医務室へと運んだ。

運ばれてきた食べ物を見た瞬間、カービィはなのは達の目の前でそれこそ悪魔のような食欲を発揮させて、体の中へと次々に食べ物を放り込んでいく。

「はぐっ！！はっぷ！！」

全員はカービィの呆れるぐらいのとんでもない食欲と胃袋の大きさに言葉すらも失っていた。

「す・・・凄い食欲って言うか・・・どうなってるのこの子の胃袋！？」

「正しくブラックホールの胃袋だな。」

「え～と・・・明日の分の食料って・・・大丈夫なのかな？」

クロノの隣に立つフェイトは些かそんな心配をしていたが、カービィ自身はそんなフェイトの不安を他所に既に２０人前以上の食事を体の中へと入れていく。

途中、飲み物を飲んで喉の通りをよくするカービィだったが、恋次は慌てた様子で食べ捲くるカービィに一喝する。

「バカヤロー。んな慌てて喰うんじゃねぇよ！胃が受け付けねぇぞ。」

「ぷはっ！ウルサーイ！！十二時間もありゃジェット機だって直るわ！！！」

恋次にそう言うと、カービィは更に口の中に食べ物を放り込んでいくが、先程のカービィの言葉の意味がまるで分からない恋次は訝しげな表情を浮かべてユーノに尋ねた。

「・・・何の話だよ、一体？」

「さぁ・・・」

カービィはその後も常人には考えられないような食欲を発揮させ、一気に目の前にあったものを大きさに関係なく飲み込みんだ。

「はっぷ！！！！・・・・・・・・・！！！！！」

だが、一気に物を入れすぎた為に恋次達が危惧していたことが起こった。

カービィは喉を詰まらせ顔を真っ青にすると口を押さえてベッドに倒れこんだ。

「ほら喉詰まらせた。え、洗面器か？」

恋次がそう言うと、カービィは口を押さえたまま恋次に次のように言ってきた。

「グググオオゴイグギホグググジョジョ！！！！！」

「え！？何だって、え！？」

「何ですって？」

「・・・食べたから寝ると。」

その後、再び眠りに付いたカービィを一瞥しながら医務室に集まった前線メンバー全員はメタナイトからカービィに関することを聞いていたのであった。

「そうだったんですか。カービィを見守る為に。」

「しかし、カービィがこの様じゃな。」

恋次なそう言うと、椅子に座った状態でベッドで寝ているカービィの方を一瞥し溜め息をつく。

すると、クロノがメタナイトにカービィとの関わりを尋ねる。

「メタナイト卿は、カービィとは深い関わりがあるようだが？」

「私はカービィよりも先にナイトメアとの決戦に挑んだ銀河戦士団の生き残りだ。癪な話、私ではナイトメアを倒す程の力はない。」

「あなたはカービィの何所までを知っているのですか？」

「全て・・・或いは極一部か。私にも分からない。」

「そう言えばカービィ、あの時ナイトメアとの戦いのときに・・・」

エリオはそう言うと、ふいにダークマインドととの戦いの中でカービィが憤慨したときの台詞を思い出した。

〈！！き、貴様！！！！！！フームのことを軽々しく語るな！！！！！！〉

「って言ってましたけど・・・そのフームって言うのは？」

「フームはカービィがまだ赤ん坊だったときに、彼を大きく成長させる切欠となった女性だ。今は自由に使えるワープスターを唯一制御出来る存在であり、同時にカービィを心から愛するものだった・・・今は既に故人だがな・・・」

「けどよ、カービィを愛するものなんてポップスターには腐るほどいるんじゃねぇのか？あの性格なら、人当りも良さそうだしよ。」

鬼太郎がそう口にしたときだった。

ふいに先程から起きていたカービィが次のように返事をしてきた。

「そんな上辺だけの愛情とは全然違うんですよ。」

「カービィ、起きてたの！？」

「・・・もう２００年も昔の話さ・・・僕は何一つ知らない・・・食べて寝ることを繰り返すだけの・・・只の赤ん坊だった。」

カービィはそう言うと、２００年前の出来事を走馬灯のように振り返り始めた。

初めてポップスターに漂着したときのこと、フームや弟のブン・更にはデデデ大王との接触、仲間と遊んだあの日の思い出の数々や、魔獣と戦いを繰り広げた日々。

それらが全て克明に思い出されていった。

「だけど、あの頃が一番楽しかったな。周りにはいつも友達がいて、くたくたになるまで遊んで、時には冒険をしたり、往きつけの料理屋に行って満腹になるまで食べたり、雄大な海で泳いだり、森の中を歩き回ったり・・・思い出したらキリがない。魔獣との戦いも多かったけど、それも全て僕の思い出の一つ。そして、どんなに辛くても僕が戦ってこれたのは・・・みんな、フームの存在があったからなんだ。」

カービィはそう言うと、目を瞑りフームと過ごした日々を思い返し始める。

「フームは聡明で、優しくて、時々お転婆で、だけど凄く暖かくて・・・僕の心を洗い流してくれた。彼女と一緒に居れば、どんな嫌なことも忘れられた。尤も、当時の僕に何が嫌なことでそうじゃないかなんて、分からなかったけどね。だから、彼女が死んだとき・・・事実を受け入れられなかった。」

「・・・・・・――――――」

エリオや他のメンバーはカービィの話をまじまじと聞いていた。

「僕は泣いた・・・泣いて・・・泣いて・・・泣きぬいた。そして、もう二度と泣かないと決めた。何時までも泣いていたら、天国のフームに顔向けなんか出来ないからね。けど、恥ずかしい話・・・フームが死ぬ直前まで、これと言った恩貸しも出来なかったな・・・今にして思えば・・・」

自嘲気味にカービィが鼻で笑うと、聞いていたエリオはそんなカービィに優しく微笑みこう語りかけた。

「うんうん。カービィは、もう・・・沢山の恩返しをしてきたと思うよ。」

「え？」

「きっと天国のフームさんも、そんなこと分かってると思う。だって、カービィはその人が心から愛した存在なんだから。君が今こうして元気に生きていることだけで、充分過ぎる恩返しだって、言ってる気がするんだ。」

「エリオ君・・・・・・」

すると、その時カービィは子供の頃にフームと交わしたある約束を思い出した。

〈カービィ。一つ約束してもいいかしら?〉

〈ぽよ?〉

〈私はカービィと違って何百年も長生きすることは出来ない。ブンもデデデも一緒。きっとカービィが死ぬよりも先に死んじゃうと思うわ。だけど、それでも・・・カービィはそんな私達の分までしっかり生きて。あなたの傍から私が居なくなっても、私はずっとあなたの心の中で生きていけるから。カービィはあなたらしい生き方をしていけばいいの。大丈夫・・・あなたは一人じゃないんだから。〉

〈ぽよ!!〉

大昔に交わした最愛の人との約束を思い出したカービィは、エリオにお礼の言葉を口にした。

「・・・ありがとう・・・エリオ君・・・」

そして、いよいよダークマインドによるポップスターへの総攻撃が始まろうとしていた。

ダークマインドはポップスターの衛星軌道上に現れると、円盤型の殺戮兵器デスタライアー数十機と夥しい数の魔獣を従えて総攻撃を開始しようとしていた。

「ふふふふ・・・いよいよこのときが来たか・・・前哨戦の幕開けだ！！！いくぞ、我が想像の産物種よ！！！」

魔獣は奇声を発すると、ダークマインドに続く形でポップスターへと降り立っていった。

その様子を城の中から見ていたメタナイトの部下、ソードナイトとブレイドナイトはダークマインドを確認するとメタナイトに知らせる。

「卿、来ました！」

「全１０機のデスタライアーにより、一斉攻撃です！」

「ああ、分かっている。機動六課の諸君、手筈通りに頼む！」

メタナイトは報告を受けると、トランシーバーを使って隊舎のクロノに連絡をいれる。

「了解だ。ユーノ、準備はいいか？」

『ああ。こっちは何時でもオーケーだ。』

「ほんなら、ユーノくん。結界のほうは任せたで！」

ユーノは通信をきり終えると、ポップスターの各地に散らばったスクライア商店の四人と白鳥に念話で結界を張る準備が整ったかを確認する。

「（みんな、結界を張る用意は？）」

「（俺は何時でも大丈夫っすよ！）」

「（僕も絶好調♪）」

「（この金太郎、しくじり等致しませぬ！）」

「（私もである。さぁ、始めようぞよ！）」

ユーノは全員の準備が出来たことを確認し終えると、印を結んで魔法陣を展開しつつ霊力を一気に解放させて天にそれを上らせていく。

同じように、鬼太郎達も自分の魔力と霊力を天に上らせていく。

「「「「「「はあああああああああああああああああああ！！！！！！！！！！」」」」」」

五人の魔力と霊力が五芒星の形になってププランド全体を囲むと、強固で巨大な結界が形成されていった。

「「「「「『五行結封（ごぎょうけっぷう）』！」」」」」

五行結封が形成されたお陰で、デスタライアーによる無差別攻撃が遮断され、結界の中にいる住民に被害が及ぶことは無かった。

「何！？デスタライアーの攻撃を・・・！？だが、送り込んだ魔獣の数には手も足もでまい。行け、我が僕よ！！！！」

ダークマインドはそう言うと、異次元の力を使って魔獣を次々と内部へと送り込んでいく。

しかし、それを待ち構えていたのは卍解状態の恋次やエリオと吉良、カービィであった。

「そんなことはさなせない！ストラーダ、ＩＰカートリッジロード！」

〈Ｂｌａｚｅ　ｆｏｒｍ〉

ストラーダをブレイズフォームに変化させると、エリオは銃口にエネルギーを蓄えてそれを一気に向ってきた魔獣に向けて発射した。

「エクスプラズマカノン！！」

エクスプラズマカノンによって、襲い掛かってきた魔獣の半分近くが一掃される。

それに続く形で恋次と吉良が補助デバイスで強化した斬魄刀の技で加勢に入る。

「狒骨大砲！！」

「“比重王斬（ひじゅうおうざん）”！」

「ファイナルカッター！！」

四人が順調に雑魚を倒していっているその頃、地上で戦いを繰り広げているメタナイトやシグナム達の方はと言うと。

「ソード、ブレイド、行くぞ！」

「「はっ！」」

メタナイトはソードとブレイドに指示を出すと、雑魚魔獣を剣碗によって次々と斬り捨てていく。

それに刺激されたシグナムがアギトとユニゾンを果たして攻撃を開始する。

「中々の剣碗だな。私達も負けてはいられぬな。アギト、ユニゾイン！」

「おっしゃあ！！暴れるぜ！！！」

アギトとユニゾンを果たしたことによって、シグナムの頭髪とバリアジャケットの色は少し変わっていく。

そして、ユニゾンしたシグナムはレバンティンを鞘から抜くと、カートリッジを一発ロードして、アギトの力が加わった炎の斬撃を魔獣に向ける。

「紫電一閃・竜神の舞い！」

炎の一撃が竜の様な形になると、炎の竜は次々と魔獣を灰燼の姿へと為していく。

同じように、ルキアも別な場所で袖白雪の力を使って次々に凍らせていく。

「初の舞・『月白』」

月白によって凍らされた魔獣達は氷解していく。

また、結界の外のほうではエクシードモードのなのはやヴィータ、フェイトとスバル、そしてヴォルテールを召還したキャロがデスタライアーを撃ち落していく。

「エクセリオン・・バスター！！」

「ぶち抜け！！！」

「リボルバー・・・デストロイアー！！！！！」

「ライオットザンバー！！」

「バニシングワールド！」

五人の攻撃を受けたデスタライアーは次々に撃破され、次々に海へと落ちていく。

そして、結界内部で先頭を繰り広げる他のフォワードメンバーの活躍によって魔獣達も少しずつではあるが、確実に数を減らしていく。

それを遥か頭上で眺めていたダークマインドは不敵な笑みを浮かべると、ついに自らが動き出すことを決める。

「ふふふ・・・愚かなることを・・・いいだろう。ならばこの私が直々に相手をしてやろう！」

ダークマインドは邪悪なる力によって結界をすり抜けると、カービ

ィ達四人のほう目掛けて突進してきた。
それを見た恋次は待ってましたとばかりの表情を浮かべる。
「来たぜ！いよいよ、大将のお出ましだ。」
「リターンマッチと言うことだね。」
「今度は絶対に倒してみせる！」
「ナイトメア・・・！！」
「ははははははは！！！！！我を倒す！？上せるなよ。前にも言ったはずだ。我はお前達の心の闇から生まれし存在。実体のない我をどうやって倒すと言うのだ？」
すると、その言葉を聞いたカービィは鼻で笑うとダークマインドに向って次のように語りかけた。
「ふん。ナイトメア・・・いいや、ダークマインド。僕達が、今回も前回と同じ轍を二度も踏むとでも本気で思っているのか？」
「！？」
「てぇめのことは調査済みなんだよ。ユーノ、頼む！！」
恋次はユーノにそう念話を送ると、ユーノは印を結んで特殊な結界術を発動させる。
「“夢幻結界（むげんけっかい）”、展開！」

すると、その瞬間ダークマインドとカービィ達四人の周りにユーノの魔法陣が展開され、別な場所へと転送されていく。

「くっ！！！これは・・・！？」

ダークマインドは予想外の技に一瞬目を瞑ってしまい、目を開けたとき彼が目の当たりにしたのは、食べ物が宙を舞っている広大な宇宙空間であった。

「ここは・・・・・・まさか・・・・・・・！？」

「その通り。」

すると、驚愕の表情を浮かべるダークマインドの前に現れたのはカービィ達四人の姿であった。

「此処は僕の夢の中さ。実体のないお前の正体は、夢の中に住まう悪夢そのもの。故に、此処でならお前に存分な攻撃が可能！」

「ふん。成程・・・・・・確かに考えはしたようだな・・・・・・・だが、それでも貴様らには我は倒せぬ。羽虫がいくら束になってかかろうと痛くも痒くもないわ。」

「だったら、一度攻撃を受けてから決めるんだな！！」

カービィはそう言うと、夢の彼方からワープスターを呼び出す

「ワープスター！」

ワープスターはカービィの手のひらサイズにまで小さくなる。
すると、カービィはその小さくなったワープスターを吸い込み究極のコピー能力を発動させる。
それこそが、嘗てナイトメアを倒したときの武器、星の杖・・・スターロッドである。

「スターロッド！」

「あれが・・・カービィの究極の武器、スターロッド！」

カービィはスターロッドに星の力を収束させると、それをダークマインド目掛けて円を描くようにして無数の星型弾を発射する。

「でやあああああ！！！！！！！」

無数の星型弾はダークマインドの体を覆い囲むと、ダークマインドの力を弱めていく。

「ぐあああああああ！！！！！！！！」

スターロッドの効果をその体に受け、唸り声を上げて苦しみ出すダークマインド。

「へっ！俺達のことも忘れるなよな。狒狒王銃火山！！」

「破道の七十三　『双蓮蒼火墜』！」

「一撃必殺、ライトニング・・・ブラスター！！」

恋次達の怒涛の三段攻撃が苦しむダークマインドの体に直撃すると、凄まじい爆音と爆発がカービィの宇宙空間に響き渡る。

カービィはスターロッドを解除すると、恋次達の下に降り立ち爆風が晴れるのを待つ。

「やったか？」

だが、爆風が晴れた先に見えてきたのは、カービィやエリオ達が考えていたものとは全く違うものであった。

「「「「な！？」」」」

ダークマインドは、あれだけの攻撃をその身に受けていながら全くのノーダメージで、スターロッドですら倒せないという事実を同時に突きつけられた瞬間でもあった。

「ふふふふはははははははは！！！！！効かぬ、そんなものなど最早効かぬ！」

「そ、そんな・・・！？スターロッドの力ですら奴を倒すことは出来ないのか！？」

「バケモノかよ・・・あいつは！！」

ダークマインドの恐るべき力の前に、カービィや恋次達は為す術もなく呆然と立ち尽くす。

「ふふふふ・・・小さき命よ・・・愚かなるお前達に・・・神の制

裁を与えよう。」

すると、ダークマインドは腹部の眼球を徐に開けると大技の一つを発動させる。

「“リバースワールド”」

その瞬間、恋次達の体と天地の区別も無い宇宙空間が逆転し、逆さまの世界へと変貌を遂げた。

「なっ!?これは・・・!」

「天地が逆転したのか!」

「ぬはははははははは!!!!!!!哀れなる小さきものよ。我が野望の布石となるがいい。“ダークレーザー”!」

ダークマインドはそう言うと、眼球から邪悪なるエネルギーをレーザーにして発射する最強技、ダークレーザーを四人目掛けて発射した。

「「「「ぐあああああああああああ!!!!!!!!」」」」

ダークレーザーをその身に喰らった四人は、全身傷だらけとなってその場に倒れ伏してしまった。

夢幻結界の中の様子を、その場に映し出されたモニターで確認したキャロは傷つき倒れるエリオやカービィの名前を叫ぶ。

「エリオ君!!!カービィ君!!!」

メタナイトはその様子を見ると、仮面の下で険しい表情を浮かべながら次のように語りかけた。

「まずい！我々の想像を絶するほどにダークマインドは力をつけてしまっている。最早スターロッドの力だけでは、奴を倒すことは不可能！」

「そんな！？じゃあ、一体どうすれば！？」

この時、誰もが星の戦士カービィの敗北を覚悟していたが、この後なのは達の想像を絶するような出来事が奇跡的に起こるのである。

夢の中で四人を瀕死の状態にまで追い込んだダークマインドは、傷ついたカービィを見下したかのような態度で見ながらこう口にした。

「ふふふふ・・・小さい・・・小さいものだな。カービィ、貴様は覚えているかどうかは知らぬが、お前が我を裏切った粗悪な魔獣であったときにもっと早く始末しておけがよかったと、今となっては後悔しているぞ。」

「「な！？」」

「そ・・・そんな・・・カービィが・・・魔獣！？」

ダークマインドの言葉を聞いた瞬間、恋次と吉良、そしてエリオは耳を疑った。

「・・・・・・――――――」

カービィは黙ったまま何も答えない。

「嘘だよ!!カービィが魔獣である筈ないよ!!!カービィはこれまでずっと、この星や宇宙の為に、フームさん達を守るために魔獣やお前と戦ってきたんだ!カービィのことを何も知らないのに、何故そんなことが言える!!」

「生みの親ならば少なくともある程度のことは知っている。そやつは魔獣でありながら、生まれつき正義の心を宿していた。そして我に逆らい・・・我を一度は葬り去った。だが、それも今ではどうだ？所詮貴様は、小娘の力を借りなければ何も出来ない只の雛っ子に過ぎんのだ・・・ふはははははは!!!!!!!!」

ダークマインドの言葉を聞いていたカービィは、悔しさと大きすぎる力の差に歯を食いしばった。

「・・・・・・くっ!!」

その頃、結界の外では応援に駆けつけたデスタライアーの第二群が五行結封を破壊しようと一斉攻撃を開始し始めた。

只でさ、この結界は魔力と霊力の消費が激しいためにそう長いこと保つことは出来ないため、これ以上の攻撃を受ければ結界が崩壊することを早めてしまうのだ。

ユーノ達五人は険しい表情を浮かべながら何とか結界を張っていたが、かなり厳しい状況であることは言うまでも無い。

「くっ!この結界を保っておくのも限界が近い・・・まだ勝負は付かないのか!?」

ユーノの様子を気にかけながら、なのははデスタライアーを砲撃で落としていく。

「もう少しだけ堪えて、ユーノ君！大丈夫、カービィ君とエリオ達を信じよう。」

すると、なのはのその言葉を聞いていた浦太郎達がこんな事を言ってきた。

「だけど、頼みのスターロッドが効かない以上どうすることも！」

「他に何か方法はないのであるか！？」

白鳥のその言葉を聞いていたブレイドは、メタナイトに起死回生の方法は無いのかを尋ねる。

「メタナイト卿。」

「・・・スターロッドを上回るほどの星の力を宿した何かがあれば、戦局を覆すことが可能かもしれぬ。」

それを聞いた瞬間、結界を張っていた鬼太郎と浦太郎、白鳥の三人が険しい表情でメタナイトにこう言ってきた。

「スターロッドを上回る星の力の武器だと！？」

「そんなもの、一体何所にあるっていうのさ！」

「あればとっくに夢の中に送っているところであるぞよ！」

と、その時。

ユーノは頭の中に浮かんだ賭けに近いものではあるが、その可能性を充分に秘めたあれを思い出し、なのはに通信を入れる。

「はっ！そうか・・・なのは、聞いてほしいことがある！」

「え！？何、ユーノ君！」

『君のレイジングハートを、カービィのところに届けるんだ。』

「「「え！？」」」

「「「な！？」」」

ユーノの口から発せされた頓狂な一言を聞いた瞬間、なのはを始めその場で戦っていた全てのものが驚愕した。

「しょ、正気かユーノ！？レイジングハートをカービィに届けるなんて！？」

「第一、カービィには魔力がないから、届けても使えないよ！」

ヴィータとフェイトがユーノにそう言った時だった。

メタナイトが、シグナムの傍で思いがけない一言を口にしたのは。

「いや。それは違うな。」

「メタナイト！？」

〈どういう事だよ、それ？〉

シグナムとユニゾンを果たしているアギトがそう尋ねると、メタナイトはこう語りだす。

「カービィの能力は、相手の能力や姿をそのまま写し取るコピー能力。たとえ、魔力を持っていなくとも、コピー出来ないという確証もない。この方法に賭けるしか奴に打ち勝つ手段はない！」

『なのは。メタナイト卿もそう言ってる。お願い・・・レイジングハートを！』

ユーノの必死の請願を聞いたなのはは、少し黙り込んで考えると・・・ユーノの言葉を信じてレイジングハートをカービィに届けることを決意する。

「・・・うん。分かったよ、ユーノ君。それしか手がないなら、私は文句は言わないよ！」

「なのは！」

「「「なのはさん！」」」

「ほんまに大丈夫なんか、なのはちゃん！？」

指令室でそれを聞いたはやても心配になって通信を入れるが、なのははユーノを信頼しきっているという表情を浮かべて、こう答える。

『私は一度だって、ユーノ君の言ったことを疑ったことはないよ。大丈夫、きっと出来るから。レイジングハート、モードリリース。』

〈Ａｌｌ　ｒｉｇｈｔ　ｍｙ　ｍａｓｔｅｒ〉

なのははバリアジャケットだけを装着したまま、レイジングハートを解除するとユーノの下まで行くように指示を出す。

「ユーノ君のところまで、行って！」

レイジングハートはなのはの指示を聞くと、直ぐに結界を張り続けているユーノの下へと飛んで行った。

ユーノの目の前にレイジングハートが到着すると、ユーノは印を結んでレイジングハートの真下に魔法陣を展開させる。

「待ってて、カービィ。今、君の下にもう一つの星の力を届ける。いくよ、レイジングハート。カービィの夢の中に、転送！」

レイジングハートはその瞬間、夢幻結界の中のカービィの下へと転送される。

一方その頃、ダメージを受けてほとんど動けないで居るカービィや恋次達を見下ろしながら不敵な笑みを浮かべる。

「ふふふふ・・・雌雄は決した。漸く長年の恨みにも終止符が打てるな・・・ふふふふふ・・・」

カービィは自由に動けない体を必死で動かそうとするものの、やはり言うことを利いてはくれないのであった。

そんな中、カービィは心の中で自分の非力さを嘆きながら如何することも出来ない状況に悔しさを覚えていた。

「（くそ・・・・・僕はこんな所で・・・・・・また、大切な友達も守れないまま・・・・・・え!?）」

と、その時だった。

突然、カービィの目の前現れたのは・・・始めて出合った頃のカービィの最愛の人物、フームであった。

驚愕するカービィに向って、フームは優しくカービィの名前を口にする。

〈カービィ。〉

「・・・フーム・・・？」

〈大丈夫。あなたならきっと救えるわ。だってあなたは一人じゃないもの。何時もあなたの傍には私達がいるじゃない。だから、此処で諦めてはいけない。あなたの友達が、あなたを信じるものがいるんでしょ？〉

「フーム・・・・・・」

〈行きなさい。私達は何時までも・・・あなたの心の中にいるから・・・〉

フームはカービィにそれだけを言うと、カービィに笑いかけてから

姿を消した。

カービィはフームの言葉に励まされたのか、今までびくともしなかった体を引きずり起こしてダークマインドに諦めなど決して宿っていない眼差しを浮かべた。

「!?」

「あ!」

「「おお!!」」

それを見ていたエリオや恋次達、そしてダークマインドも立ち上がったカービィに驚愕するが、ダークマインドは面白くないとばかりの表情でカービィに尋ねる。

「ふん。往生際の悪い奴だ・・・・・・何所までも我に歯向かうというのか。」

「・・・僕は・・・まだ倒れない・・・倒れるわけにはいかない!僕を迎えてくれる人がいるから・・・僕を迎え入れてくれる仲間がいるから!」

「ふん。そんなもの何所に居る?貴様の仲間など・・・誰一人居はしない。」

すると、その言葉を聞いたエリオが同じように体を立ち上がらせると、カービィの下まで徐に近付き次のように言った。

「違う!少なくとも・・・僕はカービィの味方だ。カービィは僕に

教えてくれたんだ・・・守ることの本当の意味を。焦って、自分を見失いかけていた僕に・・・カービィは思い出させてくれたんだ。本当に大切なことを。カービィの隣に誰もいないのなら・・・僕が隣に立つ！」

「一人で・・・何格好いいことぬかしてやがんだよ。」

エリオがそう言うと、それを聞いていた恋次と吉良も重い体を起き上がらせて二人の隣に近付くと、傷口を押さえながらこう言った。

「俺達も居るぜ。」

「友達や仲間は、多いほうがいいだろう。」

三人の言葉を聞いたカービィは、今まで失いかけていた仲間の暖かさを取り戻し、心が洗い流されていく感覚になった。

「恋次さん・・・吉良さん・・・エリオ君・・・」

「ふふふはははははははは！！！！！滑稽だな！！！小さきものの習性と言うやつか？弱いものほどよく群れるとは言ったものだ。何度束になってかかろうと同じことだと何故分からぬ！？貴様らはカービィの何だ？」

すると、エリオの言葉を基点とし、三人は声を揃えてこう答えた。

「僕らは・・・カービィの・・・」

「「「友達だ！」」」

三人がダークマインドにそう口に下その時、結界の外からユーノの魔法によって届けられたレイジングハートがカービィの方へ飛んできた。

「!?」

ダークマインドを始め、その場に居たカービィや恋次達は大いに驚いた。

「あれは!?」

「なのはさんのレイジングハート・・・!?」

「どうしてあんなものが!?」

と、カービィが訝しげな表情を浮かべた瞬間・・・心の中からフームの声が聞こえてきた。

〈カービィ、吸い込んで!〉

「(フーム!?・・・うん、分かった!)」

カービィは心のフームの声に従って、飛んできたレイジングハートを大きく息を吸うように口の中に吸い込んだ。

「カービィ!」

「レイジングハートを吸い込んだだと!?」

「何をするつもりだ、貴様!?」

そして、レイジングハートを吸い込んだカービィはその場から高く飛び上がると回転をしながらレイジングハートを構築させていく。

〈Ｓｔａｎｄ　ｂｙ　ｒｅａｄｙ〉

レイジングハートが杖の形に構築されていくと、カービィの頭にはなのはのサイドポニーを模したものが生え、更には白のバリアジャケットが施され、全てがセットアップされるとカービィはレイジングハートを左手に持つ。

「はっ！」

カービィの変わり果てた姿を結界の外で見ていたなのは達は驚愕の余り言葉を失っていた。

「あの姿は・・・！？」

「やったか、カービィ。」

「ユーノ君、あれって！？」

「レイジングハートに記録されたなのはの能力をそっくり写し取ったんだ。今、彼は・・・“なのはカービィ”となった。」

「なのは・・・カービィ！？」

なのはカービィと言う奇跡のコピー能力を手に入れたカービィからはダークマインドが怯むほどの強力な魔力と星の力が漏れ出す。

「な・・・何だ、その姿は・・・知らんぞ！そんな姿は知らんぞ！！」

すると、両足に生やした羽によって宙を浮いていたカービィはレイジングハートを天に翳すと、エクシードモードを発動させる。

「エクシードドライブ！」

〈Ｄｒｉｖｅ　ｉｇｎｉｔｉｏｎ〉

レイジングハートもそれに従って、自身の形状をエクシードモード時の槍型の姿へと変貌させる。

エリオ達はエクシードモードに移行したカービィの姿に仰天する。

「エクシードモード！」

「あの姿もコピーできるの！？」

そして、カービィは今では殆ど使っていないなのはの禁じ手であるブラスターピット４機を取り出し、全てのブラスターピットでダークマインドの動きを拘束していく。

「ブラスター３！」

４機のブラスターピットによる拘束で、ダークマインドは強い魔力と星の力によって身動きが取れなくなってしまった。

「ぬっ！！これは一体・・・！？身体が・・・身体の自由が！！」

その様子をモニターで見ていたヴィータやフェイトはなのは以上に驚いていた。

「あれは！」

「ブラスターピット！？」

「ぐっ！！！この！！！何故だ！！！何故解けぬ！！！！」

すると、そんな動けないダークマインドの全方位からブラスターピットを設置したカービィは魔力を急上昇させていき、周囲に漂う魔力残留をも掻き集めて巨大な桃色の魔力弾を生成していく。

「あの魔力量は・・・まさか！」

「カービィも・・・ここで決めるつもりだな・・・俺達は奴の援護に回るぞ！」

「「ああ（はい）！」」

恋次は二人にそう言うと、カービィに砲撃に必要な時間を充分に取らせるために拘束された状態のダークマインドに向って更なる追い討ちをかける。

「縛道の七十九　『九曜縛』！」

「サンダークラッシャー！」

「鋼鉄狒骨大砲！」

吉良の九曜縛で更に動きを封じられたダークマインドの体に、エリオの雷撃と恋次の鋼鉄狒骨大砲が与えられ、更なるダメージを受ける。

「ぐっ！！！！お、おのれ！！！！」

そして、限界ギリギリまで魔力が集積されるとレイジングハートがカービィに向って合図を出す。

〈Ｍａｓｔｅｒ〉

「うん。ダークマインド・・・僕らの全力全開、その体に受けてみろ！」

「カービィ！」

「行け！！」

「今がチャンスだ！」

カービィは三人の声を聞くと、軽く頷き杖を掲げてなのはの決め台詞を言いながら、最後の攻撃に入る。

「全力・・・全開！！！」

恋次達の攻撃を受け、多少の傷を負うダークマインドが砲撃を発射しようとするカービィを見た瞬間、思わず恐怖を感じてしまった。

「くっ・・・・・・・はっ！！」

そして、カービィはレイジングハート、ブラスターピット全機によるなのはの代名詞でもある集束砲撃魔法スターライトブレイカーを放つのであった。

「スターライト・・・ブレイカー！！！！」

その瞬間、ダークマインドの全方位から発射される桃色の強力な星の力と魔力を有した砲撃がダークマインドの体に直撃する。

ダークマインドはそれを喰らった瞬間、この世のものとは思えない声を上げて苦しみ出した。

「ぐあああああああああああ！！！！！！！！！！のあああああああああああああああああああああああ！！！！！！！！！！」

「ブレイク・・・シュート！！！！！！！！！」

カービィは最後にダークマインドとナイトメア、そして体の中に埋め込まれたアンゴルモアを分離させるために最大威力で砲撃を行う。

それを喰らうと、ダークマインドはナイトメアとダークマインドと言う二つの邪悪なる存在に分離すると、両者は悲痛な声を上げながら光の中に飲み込まれていく。

「「だあああああああああああああああ！！！！！！！！何故だ！！！！！何故我が！！！！二度も・・・こんな力に！！！！！！！許さぬ！！！！！！貴様だけは！！！！！！！ぐあああああああああ！！！！！！！！！」」

スターライトブレイカーによって、光に飲み込まれてしまったナイ

トメアとダークマインドは、アンゴルモアだけを残して四人の前から完全に消滅してしまった。

ナイトメアが消滅したことにより、全ての魔獣とデスタライアーは機能を停止し、自己消滅を始めていった。

「！魔獣が・・・デスタライアーが・・・！？」

「消えていく・・・！？」

「カービィとエリオ達がやったんだ。」

「エリオ君！」

全員は暗闇が晴れ、徐々に昇っていく朝陽を見つめながら自分達の勝利に大いに喜んだ。

メタナイトの方も、部下のソードとブレイドと供に朝陽を見ながら戦いの終幕を実感する。

「よかった。これで漸く・・・・・・・」

「ああ。我々の勝利だ・・・・・・宇宙は・・・・・救われたのだ。」

ユーノは五行結封を解くと、直ぐに夢の中からカービィ達四人を現実世界に連れ戻した。

夢の中から出てきたエリオを見たキャロは直ぐにエリオの下に駆け

寄った。

「あ！エリオ君、みなさん！」

「キャロ・・・・・無事でよかった。」

エリオもそんな自分のことを心配してくれるキャロに近付いていった。

「エリオ君、大丈夫。怪我とかは！？」

「うん。大したことじゃないよ。心配してくれてありがとう。」

一方、変身を解いたカービィは疲れ切った様子の恋次と吉良の間に立っていた。

「やれやれ。一時はどうなるかと思ったけどよ、まさかあんな裏技まで使えるとはな。」

「名実供に、ピンクの悪魔・・・いや、ピンクの魔王だったね。」

カービィは二人の言葉に苦笑いを浮かべると、なのはの下へ歩き出し手に持っていたレイジングハートをなのはに返した。

「はい、なのはさん。それはお返しします。」

「うん。ありがとう、カービィ君。でも驚いちゃった。まさかスターライトブレイカーまでコピーするなんて。下手したら、私のよりも凄かったからも。」

「カービィ。よくやったな・・・」

「お見事でございます、カービィ殿。」

メタナイトやソード達がカービィを祝福する中、カービィはそんな二人の言葉を聞くと首を横に振ってこう答えた。

「うんうん。僕だけの力じゃないよ・・・みんなが居たから頑張れた。それに・・・フームが心の中で元気を僕に与えてくれたから・・・」

カービィはそう言うと、朝陽に浮かぶフームの姿を見ながら心の中で感謝の言葉を送った。

「（ありがとう・・・フーム・・・）」

戦いが終わった後、アンゴルモアを回収したエリオはカービィと向き合い転送ポートの前で別れの挨拶を交わしていた。

「短い間の付き合いだったけど、君と出会えてよかった。」

「僕もだよ。また、会えるかい？」

「勿論だよ！もう、僕とカービィは友達なんだから。会いたくなったら、何時でも会いに来ればいいよ。」

エリオの言葉を聞いたカービィは思わず満面の笑顔を浮かべた。

その後、ユーノがエリオの後ろからカービィに向って同じように歓迎の意思を示した。

「そうだね。僕らは何時でも君を歓迎するよ。あ、でも・・・食料全部食べるなんて真似はしないでね♪」

「あはは♪どうかな～～それは？」

「ははははは！！！」

全員はカービィとエリオの笑い声につられる形で笑いを零した。

そして、エリオ達は転送ポートの中でカービィに手を振りながら本当の別れを済ませる。

「じゃあね、カービィ！また遊びに来てね！」

「エリオ君も！今度会った時は、一緒にご飯でも食べようね！」

カービィがそう言うと、機動六課の前線メンバーは転送ポートによってミッドチルダへと帰っていったのであった。

機動六課のメンバーがポップスターを去った後、メタナイトはカービィに向って次のように話しかけた。

「カービィ。」

「はい？」

「・・・久しぶりにいい顔になったな。」

「え・・・ふん。そうですね・・・これなら、フームもきっと安心

して見守ってくれるでしょうかね？」

「ああ・・・きっとそうさ。」

あの後、六課の隊舎に戻ったエリオは廊下を歩いていたキャロを見つけるとキャロに向ってこう話しかけてきた。

「あのさ・・・キャロ・・・！」

「？何、エリオ君。私に用事？」

「ちょっと・・・手を前に出してくれるかい？」

「え？えっと・・・うん。こう？」

キャロは言われるがままにエリオの前に出した。

すると、エリオはその場に跪くとキャロの手をそっと握り締めると、騎士のような言動で赤面するキャロを他所に次のように語った。

「！」

「神の名に誓っても、我、槍騎士エリオ・モンディエルはキャロ・ル・ルシエを如何なることがあとうとも、守り抜くことを誓うものであります。命を賭す事などは決してせず、命を粗末にすることなく、生き残って彼女を守る所存であります。」

「・・・・・・！！」

エリオの突然の行動に頭がついていけないで居るキャロ。

それに気付いたエリオも慌てた様子でキャロに言葉をかける。

「あ、いや!!その!!別に深い意味とかはないから!!ただ・・・只・・・僕の覚悟の表れを示しただけでその・・・!!」

すると、そんな照れくさそうな表情を浮かべるエリオを見たキャロは満面の笑みでお礼の言葉を口にした。

「・・・うん・・・ありがとう・・・エリオ君。」

「え!?」

「私、やっとほっとした!エリオ君、最近ずっと思いつめていたから。迷いがなくなって本当によかった。これからも、ずっと私を守ってくれる・・・エリオ君?」

「・・・うん!勿論だよ。君は僕が必ず・・・守りに抜くよ。」

「嬉しい。」

二人は手を取り合ってお互いを見詰め合ったのであった。

その様子を影で見ていた恋次と吉良であったが、恋次はどうも釈然としない様子であった。

「・・・なあ・・・これで良かったのか、本当に?」

「ま、結果オーライということでよしとしたらどうだい?」

「だが妙に気に入らねぇのはどういう事だ・・・・・何で六課（ここ）には・・・バカップルばっかりがいるんだよ！！！！！！！！！」

その恋次の不満の声が、隊舎中に響き渡ることとなったのは言うまでもなかったのであった。

1978

ピンクの魔王、なのはカービィ（後書き）

教えて、ユーノ先生！

ユ「今日は、なのはカービィについてね♪」

ユ「これは、レイジングハートのレコーダーに記録されているなのはの今までの戦闘データと魔法パターンを読み取ってコピーされた究極の姿なんだ。」

ユ「あのスターライトブレイカーもコピーすることが出来る上に、カービィの潜在能力は今以て未知数。いや～～～これはなのは何かよりもこっちのほうが怖いわ～～～」

メ「カービィの新たなる成長・・・実に見事だ。だが、それでもカービィには謎が多いもの。」

ユ「そうですよね。えっと、ところで・・・謎といえばメタナイト卿の仮面の下はどうなってるんですか？」

メ「・・・・・男には、謎が多い方がいいものだ。」

ユ「（呆れた表情で）あ・・・そうですか・・・」

魔導師図鑑ハイパー！

恋「そう言や、前々から気になってたんだけどよ・・・」

ユ「何ですか？」

恋「お前の此処での役職、特別エグゼクティブアドバイザーって具体的に何するんだ？」

ユ「色々ありますよ♪前線メンバーの訓練に参加したり、指導をしたり、災害救助マシーンの開発や修理・隊舎の機能設備の改善でしょ、山のような事務処理を片付けたり、時には無限書庫での手伝いに行ったりとか・・・言い出したらキリがないですよ♪」

恋「お前・・・そんなんでよく身体がダウンしないよな・・・」

ユ「ま、階級的には機動六課事実上のトップですから僕♪」

カービィ篇登場人物

カービィ

声　一　大本眞基子

第９９５管理外世界『ポップスター』に住むピンクで小さい体をした宇宙最強の星の戦士。嘗てホーリーナイトメア社から続々と送られる魔獣を倒し、プププランドの平和と安全を守る正義のヒーロー。戦いから２００年の歳月の末、一般的な良識と言葉は使え羽陽になった模様。敵と戦うときにはコピー能力を使う。これは敵の体の一部や機械・道具などを空気と共に吸い込み、その特長を自身に移し

取る能力で、無数の変身レパートリーがある。変身中に技を使う際はその名前を心の声で叫ぶ。まれにコピーを行わず、吸い込んだものをそのまま勢いよく吐きだして攻撃することもある。吸い込みは基本的にコピー能力を得て、戦いやすくする為の手段として用いられる。コピーに関してはカービィ自身「何を吸い込んだらどんなコピー能力が得られるか」を知っている。魔獣に襲われていたエリオを助け、お互いに打ち解けて友達となる。この世に復活したナイトメア（のちにダークマインド）に重傷を負わされ窮地に陥るも、機動六課の力を借りて再び夢の中で対戦。スターロッドが通じないダークマインドの力に諦めかけたとき、なのはのレイジングハートを吸い込み「なのはカービィ」となって、ブラスターモードでのスターライトブレイカーを放ちダークマインドを消滅させる。

乗り物

ワープスター

普段はカブーの中に隠されている。呼ぶと、カブーの口から出てきて、カービィが乗る。これにより素早い戦闘、3次元の戦いができるようになる。カービィの追跡力はかなりのもので、カービィが誤って落ちてもほとんど拾ってくれる。一部が欠けると力が出なくなる。カービィの力の源でもあり、戦いでダメージを受けていてもワープスターを見ると元気になる。「スターロッドカービィ」になるためのキーアイテムとなっているが、カービィだけはワープスターを「人」の様に扱っていた。　カービィとは以心伝心で、カービィの行きたい所はワープスター同様行きたい所となっている。　嘗てはフームだけがワープスターを呼び出せていたが、今ではカービィの意思で呼び出せる。

技「ファイナルカッター」

２００年の歳月の末、発現することを可能とした上級技。コピー能力を使わない場合カービィにとって唯一の飛び道具である他、攻撃範囲も広く貫通能力がある。

コピー能力

ソード

敵の持っている剣などでコピー。剣を操って戦う。そのほかにもメタナイトの剣、ギャラクシアなども扱え、剣術にぬきんでている能力だ。必殺技兼決め技はエネルギーをソードに蓄積し放出するソードビームで、本編ではギャラクシア・ソードビームを放った。

スターロッド

先端に星型の造形物が付いた杖。２００年前のナイトメアとの決戦の時、ナイトメアが見せた悪夢の中でフームが投げたワープスターを吸い込みコピー。これのみ帽子はかぶらない。無数の星屑を出現させ、敵を包み込んで消滅させる。

なのは

レイジングハートのレコーダーに記録されているなのはの今までの戦闘データと魔法パターンを読み取ってコピーされた究極の姿。なのはを模したツインテールと白のバリアジャケットを着用している。最終決戦では、ブラスターピット全てを使ってスターライトブレイカーを発動させ、ダークマインドを葬り去る。

メタナイト卿

声　一　私市淳

元星の戦士であり、凄腕の剣士、デデデ城の騎士。カービィよりもひとまわり大きい。英名は「Ｍｅｔａ　Ｋｎｉｇｈｔ」。かつてナイトメア軍団と激戦を繰り広げた「銀河戦士団」に所属していた星の戦士の生き残り。部下はソードナイトとブレイドナイト。２００年経った今でもカービィのよき理解者と共に先輩として戦闘におけるアドバイスをしている。カービィに関する知識は豊富であり、吸い込みの影響を受けたことがないためカービィに吸い込まれない方法も分かっているようだが、具体的な理屈は明かしていない。素顔が登場することは一度も無く、ユーノにそれを尋ねられた時は「男には、謎が多い方がいいものだ。」と言ってお茶を濁した。

フーム

声　一　吉田小百合

カービィの親友でありカービィが愛した女性。道理に合わないこと、卑怯なこと、人に迷惑をかけることが大嫌いで、カービィをいじめたり、魔獣で悪巧みをするデデデ大王やドクター・エスカルゴンとはよく対立する（普段のエスカルゴンとは仲は悪くない）。彼女もまたカービィを心の底から愛しているため、彼のためにワープスターを呼ぶことのできる唯一の人物でもある（現在はカービィ一人でも呼び出せる）。母性の表れか、カービィを愛し、守ろうとする気持ちは誰よりも強い。彼のピンチを救うための掛け声「カービィ、吸い込みよ！！」「来て、ワープスター！」は、一種の決まり文句と言える。カービィを守ろうとする姿勢は時には、カービィを危険から避け、逃げの方向に持って行ってしまう。その為、逆にカービィに試練を与えて成長させようとするメタナイトとは衝突する事もある。２００年の歳月の中で、既に他界しているがダークマインドとの最終決戦のときには霊体となってカービィの前に現れ、レイジ

ングハートを吸い込むことを促した。

ブレイドナイト

声　一　神崎ちろ

メタナイト卿の従者の騎士。剣術の腕はかなりのもので、メタナイト卿を意識不明にした火炎魔獣チリドッグを追い詰める、ソードナイトとの連携プレーでシリカと互角に渡り合う、などの活躍を見せたことがある。昔、銀河大戦争による混乱の中でソードナイトと共に山賊まがいの稼業で生計を立てていたが、偶然縄張りに入ってきたメタナイト卿を襲った際、彼を追ってきたチリドッグの奇襲に巻き込まれ、逆にメタナイト卿に救われた。その後2人は彼に忠誠を誓った。ソードナイトよりも背が低く、緑色の鎧を着用。

ソードナイト

声　一　時田光

メタナイト卿の従者の騎士。剣の腕はブレイドナイトと互角で、良きライバル。ブレイドナイトよりも背が高く、鎧の色は青みがかかった紫色。機械に、温かな家庭料理への憧れなど、性格や嗜好はブレイドナイトとほぼ同じ。常に面をかぶっているため顔がわからないという点も共通。

ドドド大王

声　一　緒方賢一

デデデ大王の曾孫にあたる自ら独裁者を名乗り、プププランドに圧政を敷く大王。デデデに負けず劣らずの良識の無い人物。魔獣転送システムをいじった結果、プププランドに魔獣ＨＲ－Ｈを呼び出してしまう。

ドクター・エスカルゴＪｒ．

声　―　龍田直樹

ドドドの側近で、いつも主人の側にいる黄緑のカタツムリ。プププランドの実質ナンバー２の人物。同じくデデデに仕えたドクター・エスカルゴの曾孫に当たる。

ナイトメア↓ダークマインド／ＡＭ１７，

声　―　銀河万丈

劇中の黒幕。奇抜なサングラスをかけ、２本の細長い角が生え、星柄のマントで体を覆った人の姿をしている。役職上はホーリーナイトメア社の会長で、実態は「神聖なる悪夢」と言われる邪悪の化身にして”闇の帝王”である。宇宙中の悪夢が具現化したことで誕生し、数万年前に魔獣を創り出し、ホーリーナイトメア社を設立。２００年前の戦いで、スターロッドカービィの放った大量の星屑に囲われ消滅したが、「全ての生き物が恐怖を覚える限り、私は何度でも蘇る」と言う言葉通り再びこの世に復活し、復讐の機会を窺っていた。ティアナ達から逃れた後、更なる力を手にするためにトゥキトゥデス・ガン・ロードがポップスターの古代遺跡で発掘したダークマインドが封印された壺を強奪し殺害。過ぎた力をコントロールする為にアンゴルモアを利用する。ダークマインドに変貌を遂げた直後、カービィを寸での所に追い詰め、ポップスターに総攻撃をかけようとした。ユーノ達とカービィの活躍により計画は阻止され「なのはカービィ」のスターライトをその身に受け再び消滅を果たした。

1986

結界魔導師ユーノ・スクライア

＞ｉ１３２７４―７０９＜

世界には、偶然と必然と言う言葉がある。

そして、人々の出会いとは常にこのどちらかによって決まる・・・きっかけとはそんなものだと僕は思う。

僕がなのはと出合って一緒にジュエルシードを集めたことも、一護さんと出合って翡翠の魔導死神として覚醒したことも、きっかけの一つだった。

尤も、それが偶然か必然かと尋ねられたとき僕がどう応えるか？

僕はきっと偶然と応える・・・ある漫画ではこの世には必然しかないなんて言うけれども、それはつまり、自らの運命に抗うことは出来ないことだと考える。

それに、例えそうであっても僕は必然なんて使いたいとは思わない・・・だって、世界の全てが必然で成り立っているなんて想像してごらん。

全く以って考えることも行動することも楽しくない世界ということになっちゃうからね。

さて、ミッドチルダもいよいよ夏本番。

基本的に、何所の世界でも夏は暑いのが当たり前です。

毎日のように人は暑いという言葉を口にし、スーパーやコンビニなどでは飛ぶようにアイスや冷凍食品、保冷剤などが売れていきます。

また、このうだる様な暑さから逃れるために家族連れや若い人たちは挙ってプールや海などに行って命いっぱい遊んで涼むのが定番です。

しかし、時空管理局は年中無休が当たり前な訳ですからまとまった休みなどあるはずもなく、僕が現在滞在している機動六課では毎日この猛暑の中をなのはやフォワードの五人を始めとする前線は訓練場で汗をかき、僕もバックヤードのほうで頑張っています。

ですが・・・やはりこればっかりは言わせてください・・・・・・

――――――

「～～～～～暑～～～～～～～～～～」

まぁ、でも・・・休みがそうそう取れないからと言って休まないことは仕事にも体にも影響が出てしまうわけですから、適度な休息は

非常に大事です。

なので、今日は機動六課の一同を初め現世の一護さんと織姫さんにコンさん、更にはクロノのお母さんのリンディさん、奥さんのエイミィさんも誘って安くて済む原始的な涼みの行事、納涼怪談大会を開催しています。

みんな、浴衣を羽織って暗いロビーで鬼太郎の怪談話を聞いています。

まぁ、一護さんはあまり興味なさそうな表情を浮かべていますが・・・・一応体裁は取り繕ってくださいよ。

それにしても、なのは・・・・・君の浴衣姿は何時見てもグッジョブ!!!

「・・・あれはよ・・・今日みたいに蚊がぶんぶん飛んでる、クソ暑い夜だったな・・・ガキの俺は学校で友達と一緒に花火やってたんだけどよ、いつの間にか辺りは真っ暗になってよ・・・いけね!母ちゃんにぶっ殺されるって話しになって・・・帰ることになったわけだ・・・でだ・・・散らかった花火片付けて、ふっと学校の方を見たわけだ・・・そしたらよ・・・もう真夜中だぜ・・・そんな時間にさ・・・学校の窓から赤い服の女の子がこっち見てんのだ!!マジかよ、これが噂の花子さんかって思いもしたけどさ・・・トイレでもないのに花子さんが出るのかって思いしてさ・・・俺もぎょっとしちまって・・・でも気になったから恐る恐る聞いてみたんだ・・・何やってるの、こんな時間にって?・・・そしたらその女・・・にやっと笑ってさ・・・」

と、全員が注目する中で鬼太郎が最後のオチを言おうとした瞬間・・

・・・金太郎が懐中電灯を顔に当てながらマヨネーズがふんだんにかかった焼きそばを持ち、この世のものとは思えない形相で・・・
・・・

「マヨネーズが足りないんですけど！！！！！！！！！」

あまりに突然なことに、なのは達一同は思わず叫び声を上げてしまった。

「「「

それを見た全員は顔を引きつり、一護は立ち上がって率直に思ったことを口にする。

「て！！！もう充分かかってんじゃねえかよ！！！何だよそれ！！！！それ、最早焼きそばじゃねえよ！！！黄色い奴だよ！！！つうかそれだけで焼きそばも台無しだろうが！！！！」

と、その時・・・エイミィとフェイトがクロノの異常に気付いた。

「あれ！？クロノくん？」

「く、クロノ！？」

一護は不思議に思い、後ろを振り返ってみた瞬間・・・思わず顔を引きつった。

「げっ！！」

何と、クロノはあの時金太郎が暗がりに見せたマヨネーズがかかり過ぎた焼き傍を見て、思わず気を失い、口からは泡を吹いていた。

全員は思わず気絶したクロノに近付き、意識を確認する。

「クロノ提督！！！」

「大変です！！クロノ提督が！！」

一護は気を失ったクロノをそばで見ると、頭を両手で抱えながらクロノの情けない姿に酷く嘆いた。

「マヨネーズで気絶しやがった・・・最悪だこいつ！！！！！」

全員が騒然としていたその時、焼きそばを両手に抱えたユーノがなのは達の前に現れた。

「ふふ～ん♪みんな、ユーノ先生特製の焼きそばが出来たよ・・・あれ？何があった訳？」

「あ、ユーノ君♪」

「ユーノパパ♪」

なのはとヴィヴィオはユーノに近付くと、先程あったことを耳打ちで伝えた。

「クロノの奴、何で泡吹いてるの？」

「にゃはは・・・実は・・・かくかく云々・・・と言う訳かな？」

「ぶふふ！！！マヨネーズで気絶とは・・・クロノの奴段々阿呆キャラに成り下がってきてるね！！！！！ぶはははは！！！！！！」

ユーノはクロノの余りに情けない光景を見ると、持っていた焼きそばを二人に手渡して床に手を叩きながら大笑いを始めた。

「ユーノパパ、駄目だよ。あまり人のこと笑ったら。」

「ぶはははははは！！！！！大丈夫だよ、ヴィヴィオ♪どうせ気絶してる人間に聞こえる訳ないって♪」

「今起きたんですけど、この通り！！！！！」

すると、ユーノの笑い声を聞いてクロノが復活を果たした。

ユーノはそれを見た瞬間、舌打ちをして不満気な表情を浮かべた。

「何だ・・・意外とピンピンしてるじゃないか？ちっ！もう少し面白い展開を期待してたんだけどな・・・つまらん。」

「つまらないって何だよ！！！僕をギャク漫画のキャラと何かと思っているのか！！！」

すると、そんな激怒するクロノを見ながら恋次や一護は次のように語る。

「最近、お前そう言う役回り多いから俺もてっきりそう思ってたんだが・・・やっぱ違うのか？」

「ああ。声の人だってジャンプでも有数のギャク漫画の主人公演じてるしな。火曜いージャンでも共演したことあるしな。俺としてはそっちの方が面白いんだが。」

「誰ですかそれ！！！！！と言うか、声の人とか・・・経理関係を危うくする発言は控えてください！！！！！」

クロノは周りから冷やかされて完全に頭に血が上っていたが、そんなクロノを落ち着かせよと妻のエイミィが慣れた様子で宥める。

「まぁまぁ、クロノくんも少し落ち着きなよ。ささ、折角ユーノ君

が焼きそば作ってきてくれたんだし、冷めないうちに食べよう！」

その後、一同はユーノが作ってくれた焼きそばを戴きながら談笑を楽しんでいた。

勿論、ユーノはなのはとヴィヴィオによるハーレム状態ではあったが。

だが、それよりも注目すべきは新品のマヨネーズを買ってきた金太郎の行動であった。

金太郎は全員が顔を引きつる中、あれだけかかってあるマヨネーズの上に更にマヨネーズをかけていたのだから。

それを見た鬼太郎と浦太郎が思わずこう口にした。

「おい、熊・・・まだかけるのかよ、マヨネーズ・・・」

「すっぱくないの・・・？」

「何を言っているのですか、二人とも！マヨネーズはどの食材にも合うように作られているのですぞ！！」

「だからって限度ってものがあるとは思うがな・・・」

一護も織姫とコンの近くで呆れながらそれを見ていたが、そんな金太郎にまともな意見を言ったのはリンディであった。

「金太郎さん・・・それは体に毒ですよ。長生きしたかったら、お止めになって。」

しかし、それを聞いていたフェイトは真顔でこう言った。

「いや、母さんも人のこと言えた口じゃないよね・・・」

「それにしても、この焼きそば本当美味しい!!!!」

「絶妙な味付けよね!!!」

まぁ、それはそれで置いといて・・・全員はユーノが作ってくれた絶妙な味付けの焼きそばにすっかりご満悦の様子であった。

「そりゃあ、ユーノ君が作ってくれたんだもん♪美味しくないはずないよ!万が一不味いって言えば・・・私とヴィヴィオが容赦しないけどね♪」

「ね～～～♪」

なのはは笑顔でそう言うと、ヴィヴィオと一緒に笑顔で顔を見合わせた。

その言葉を聞いていたルキアは心の中で密かに固い決意をした。

「（・・・絶対口にしないようにしよう・・・命が幾つあっても足りない・・・あの二人が相手では・・・）」

そんな楽しい時間を暫く過ごしていたときだ。

「あ!?」

恋次の頬に一匹の蚊が止まり、恋次はすぐに頬を叩いて蚊を潰した。

「何だよ・・・随分と蚊が多くなってきたな・・・」

「ま、夏だからね・・・」

吉良が恋次にそう口にした――――――その時だった。

『死ね～～～～～死ね～～～～～～死ねよ～～～～～～ピーチ～～～～～～頼むから死んでくれよ～～～～～～』

突然、隊舎の外から気味の悪い声が全員の耳に入り込んできた。

「・・・何だ、この気味の悪い声は・・・！？」

「ま、まさか本当に！！」

「「「「え！？」」」」

そう誰かが言った瞬間、全員は急に怖くなったのか体を縮こまらせたり、誰かと抱き合って恐怖を紛らわせようとしたり、只管悲鳴を上げるかのどちらかをとった。

「ああアアアア！！！！！！ユーノ君、助けて！！！！！！！」

「あああああ！！！！ユーノパパ！！！！！！怖い！！！！！！！」

なのはとヴィヴィオはユーノに抱きつきながら恐怖に怯えているが、ユーノ自身は苦笑しながらこの不気味な声の主を知っていた。

「あははは・・・いや・・・これはきっと・・・」

ユーノはそう言うと、持っていたブラインドのスイッチを入れて閉じられていたブラインドを開けた。

すると、窓の外に写っていたのは・・・――――。

「は！」

「死・・・！？」

大木に打ち付けられた鬼太郎の写真を頭に火をつけた蝋燭を立てながら打ち続ける死人が着る白い着物に身を包んだ白鳥だった。

白鳥は全員にそれを見られると、慌てて持っていた五寸釘と小槌を背中に隠した。

鬼太郎は怒りを敢えて堪えながら、白鳥が行っていたことを問いただす。

「・・・何してんだ・・・鳥・・・こんな時間に・・・！？」

「じょ、ジョギング・・・である。」

「嘘つくんじゃねえよ！！！！！！そんな格好で走ったら頭火達磨になるだろうが！！！！！！儀式だろ！！！！！俺を抹殺する儀式を開いていただろ！！！！！！」

「やれやれ。本当ピーチは自意識過剰であるな・・・そんなことではノイローゼになるであるぞよ。」

「人を葬り去ろうとしてた奴にんなこと言われたくないわ！！！！！！」

その後、このことで鬼太郎と白鳥の間には奇妙な亀裂が入ってしまい、事あるごとに小さな争いを勃発させるようななったとか。

では、ギャグパートはこれぐらいにして・・・早速今回の本編に入ろうと思う。

事件の発端となるのは、時空管理局の高官が住まう高級住宅地。

生憎、その日は大雨が降り注いでおり雷も鳴っていた。

そんな高級住宅の一室でいま、灰色の覆面を被った男による殺戮が行われていた。

標的とされているのは、この家の主である本局の高官。

「ああ・・・あひ・・・」

高官は窓に背中をつけながら、目の前で殺されてしまった自分の部下と武装局員を一瞥しながら、血塗れの鞭を鳴らして近付いてくる気味の悪い笑い声の男に怯えていた。

「うふふ・・・うふふ・・・」

「た・・・頼む・・・金ならいくらでも出すから・・・だから、い・・・命ばかりは・・・」

「おやおや?時空管理局の高官様も金の湯水を浴びてボケちまったかい?うふふ・・・」

「ひいいい!!」

高官は急いで建物の外に逃げ出そうとしたが、その瞬間覆面の男は目から特殊な力を発して、高官の金縛りの状態にした。

「!?」

高官は突然動けなくなった体を必死で動かそうとするが、その間に覆面の男は不気味な笑い声を発しながら鞭を鳴らしていく。

「あひ・・・あふ!?(な・・・何だ・・・体が動かない!どうなっているんだ!?)」

「うふ・・・うふふ・・・死―ね♪」

覆面はそう言うと、鞭を思い切り高官に打ち付けて高官を殺害した。

「ぎゃあああああああっ!!!!!!!!」

部屋中には高官の血が飛び散り、外の大雨は益々強くなっていき、雷も幾度か落ちたのであった。

そんな事件が起こっていることなど、全く知らない機動六課の前線メンバーは、ユーノ達に留守番を任せて定期健康診断のために本局に向った。

留守を任されている間、ユーノは訓練場で一護のために調節をした

特性の補助デバイスを手渡し、性能を拝見していた。

「月牙・・・天嵐！！」

一護はユーノや恋次達が見守る中、斬月の柄の巻き布を振り回して月牙天衝を嵐のように繰り出す月牙天嵐を発動させる。

補助デバイスが付けられた斬月の月牙天嵐は、比べ物に成らないぐらいに強化されておりターゲットを一瞬にして破壊する。

「「「おお！！！！」」」

これには流石の恋次やルキア、吉良も驚愕の表情を見せた。

「す、スゲー・・・！！」

「ここまで上がるものなのだな・・・！」

「一護さんの霊圧に調節するのは結構大変だったんですよ。高濃度の上に霊子結合もかなり複雑に出来ていましたから、微調整を繰り返して漸くですね。万が一のことも考えて、持っていても損はないと思いますよ。」

「サンキューな、ユーノ！有難く使わせてもらうぜ！」

一護はユーノにお礼を言うと、自分の体に戻って織姫とコンを連れて帰宅しようとしていた。

「それじゃ、俺らはそろそろ帰るからよ。」

「ああ。一護、あまり井上に迷惑はかけるでないぞ。」

「かけねえよ、言われなくても！」

ルキアの一言を聞いた一護は、眉間に皺を寄せながら些か怒りを露にした。

「うふふふ♪朽木さん、今度は何か差し入れでも持ってくるからね、飛び切り美味しい料理作ってくるから！！」

「ああ。楽しみにしているぞ、井上。」

「そう言や、一護。お前もいい加減いい年なんだし・・・子供の一つでも作ったらどうなんだよ？」

「「なっ！？」」

恋次の思わぬ一言を聞いた途端、一護と織姫は顔を赤面させる。

ルキアと吉良はそんな形振り構わず率直過ぎる恋次に厳重注意をする。

「き、貴様恋次！！！唐突に何を言い出すかと思えば！！」

「阿散井君・・・言ってて恥ずかしくないのかい！？」

「何でだよ！別にガキの一人作るぐらい普通だろう。２５にもなってそれなりの事もしないほうが異常だって！そうだろ、ユーノ？」

「さぁ・・・それは人それぞれですから・・・」

恋次にそんな事を言われたユーノは、苦笑いを浮かべながら怒りの炎を燃やしている一護の方を一瞥する。

「てめぇ恋次・・・今度遭った時は只じゃ済まさねぇからな・・・覚えてろよ・・・!!」

「一護、あんまし怒ると血管切れるぞ・・・」

コンはそんな一護を見ながら織姫の手の中で一護を宥めようとした。

一護達が地球に帰還した後、ユーノ達四人は隊舎のほうへと歩いていた。

「全く・・・貴様は少し考えてから話す事は出来ぬのか?井上もあれで結構頑張っておるほうなのだぞ。」

「そうか?あの様子じゃ、夜の活動はほとんど無いに等しいって俺には思えたけどな。」

「彼らは彼ら。人は人だよ。その内に朗報も入ってくると思うよ。」

「そうですよ、恋次さん。あの二人なら・・・きっといい子を授かりますって♪」

「井上は兎も角と、一護にそっくりのクソ餓鬼が生まれたらそりゃ大変だぜ。」

恋次がそう言うと、ユーノとルキア、吉良の三人は思わず顔を引きつってしまう。

「しかし、今日はやけに静かですな・・・」

「スターズもライトニングもはやて達も午前中の今は本局で健康診断を受けている頃ですから、前線で六課に居るのは僕らとウチの従業員くらいですよ♪」

「そうなると・・・今日はわりと平和に過ごせそうだぜ・・・」

と、恋次がそんな事を口したその時だった。

突然、本局の制服に身を包んだ一人の局員が四人に話しかけてきた。

「あの・・・お取り込み中申し訳ありません。」

「「「「？」」」」

四人は目の前に立つ局員の顔を見ると、一度顔を見合わせ吉良が素性を尋ねる。

「どちら様ですか？見たところ・・・本局の制服を着ているところから管理局の方だとは思いますが・・・？」

「はい。此方にユーノ・スクライア元無限書庫司書長がいらっしゃるとお聞きしたのですが・・・？」

「ユーノ・スクライアは僕ですが？」

「おお！！あなたがあの！！これはこれは！！お会いできて光栄です！私、本局の法務顧問会のアイザック・ローズと申します。」

アイザックはユーノに近付くと、両手でユーノの手を握りしめる。

「法務顧問会と言うと・・・フィルス相談役の・・・？」

「はい。実はスクライアさん・・・折り入ってお願い事がありまして・・・これは、レオーネ・フィルスより直々のものであります・・・！」

「え？」

ユーノがアイザックの言葉に疑問を抱いたとき、隊舎のほうに止まっていた車から降りてきた人物を見た瞬間、恋次以外の三人は大いに驚いた。

「「なっ！？」」

「あ？」

「あ・・・あなたは！」

何と、車の中から現れたのはその法務顧問会の相談役にして管理局の中では三提督と言われる偉大な人物、レオーネ・フィルスその人だったのだ。

やがて、健康診断から戻ってきたはやて達も突然のレオーネのご訪問に動揺しながらも、ユーノと向かい合って話をしているレオーネの姿を柱の影で見守っていた。

ヴィータは小さい声で恋次に事の経緯を聞こうとした。

「・・・おいおい・・・どうなってるんだよ!?」

「俺が知るかよ!」

「それにしても・・・空気が重いな・・・」

「健康診断から帰って来たかと思えば・・・いきなりこれやもんな・・・!」

「でも・・・一体何の用件で六課に来たのかな、フィルス相談役!?」

「私・・・間近で伝説の三提督を見るの初めて・・・!!」

「私も同じよ・・・!本局でも滅多にお目にかかれない偉大な方だものね・・・!」

すると、スバルとギンガの話を聞いていた恋次はとんでもない言葉を口にしてしまう。

「伝説の三提督?何だよ、あの爺さんがそんなに凄いのか?」

それを聞いた瞬間、シグナムとルキアは恋次に喝を入れる。

「き、貴様阿散井!!!無礼な発言は控えろ!!!!」

「恋次!!!私より長いことミッドにいるくせにそんなことも知らんのか!!」

「あの方はレオーネ・フィルス殿と言いましてな・・・新暦前後の一番混乱していた管理局の黎明期から今の形に整えた功労者の一人で、ミゼット提督と肩を並べるお方なのですぞ。」

「簡単に言えば、京楽隊長と浮竹隊長と卯ノ花隊長の三人と同じだと考えてくれればいいよ。」

「ああ・・・成程・・・そう考えれば確かに凄い爺さんだな・・・」

「だから公の場で爺さんはやめろって!!!」

「ヴぃ、ヴィータちゃん!!声が大きいよ!!!今、ユーノ君とフィルス相談役が真剣な表情で話してる最中なんだから・・・!!」

そんななのは達とは打って変わって、ソファーに座りながら話を進めるユーノとレオーネ。

「君とこうして顔を合わせるのは初めてか?クローベルからはよく聞いているよ・・・機動六課での功績からアンゴルモア回収に関すること、無限書庫での貢献から何まで。私どもとしても非常に惜しい人材を無くしたと思っている。管理局にもう一度勤める気にはどうしてもなれんかね・・・?」

「お気持ちは分かりますが、これも僕の意思ですから。ただ、この一件が無事に片付くまでの間は精一杯尽力する所存です。」

「そうか。ならばこの話は一先ず置いておくとしよう・・・」

レオーネはそう言うと、出された紅茶を一口啜る。

「して、僕に願い事とは一体？」

「そのことについてなのだが、話す前に一言・・・これは管理局の威信に関わる問題。メディア各社にも緘口令を施いている極秘事件だ。くれぐれもこれは君や機動六課と私達の間だけの話しと言うことで、どうか御内密に頼むよ。」

「分かりました。」

「では話を進めよう。お願い事とは他でもない。スクライア君、君にある兇賊を倒して欲しいのだ。」

「兇賊？」

「通称“灰頭（はいかぶり）”。現在、政・財・官界で活躍する私達と同じ所謂キャリア組みの管理局高官や管理局と古くから馴染みのある名誉元帥などを狙い、管理局を脅迫している殺人鬼で、この十年異世界各地に出没して凶行を繰り返すこと数十回・・・一度も仕損じたことのない凄腕の人物だ。」

すると、レオーネの話に付け加える形でアイザックがこう口にした。

「おまけに、殺害方法も特徴的でして・・・バインドのようなもので凶行を行っていると思われます。」

「バインド・・・ですか？」

「そうだ。調査部の結論からすれば、灰頭はおそらくバインド系を得意とする指折りの“結界魔導師”だとの話だ。」

「（結界魔導師・・・・・・――――――）」

「栄職に就いた高官を狙えば私達も本腰を入れて警護に動き、また狙われた当人も権力と財力を尽くして護衛に力を入れる。そうして施かれた鉄壁の守りを突き崩してどれだけ人を惨めに殺せるかを灰頭は楽しんでいるのだよ。二ヶ月前、奴がミッド西部に現れた時は当人・局員・護衛合わせて３４人が殺害され、５６人が重傷を負わされてしまった。」

「ちょっと待ってください。相手が凄腕と分かっているのなら、当然武装局員だってその時配置されていたはずですよね。それなのに何故そんな大惨事に・・・！？」

「それが・・・どういう訳か武装局員は魔法行使をする前に全員真っ先に殺されてしまったのだ。辛うじて一命を取りとめた者の話によればまるで金縛りの様に体が突然動かなくなり、その隙に攻撃されてしまったと――――――」

すると、ユーノは持っていた紅茶のカップに写った自分の顔を覗きながらふとこんな独り言を呟いた。

「“上位心情拘束魔法『マインドスキャン』”ですか・・・」

「え？」

「その人物は、大方結界魔導師としての実力を周りから評価されない余り、本来の使い道を踏み外した方法で結界魔法を殺人の道具として使い続け、今では意思とは関係なく血の色と匂いだけに心奪われてしまったのでしょう。同じ結界魔導師なのに、何故その様なことになってしまったのか・・・」

「スクライア君・・・」

「（ユーノ君・・・）」

ユーノの妙な態度に疑問を抱いた、レオーネとなのはであったがユーノはそれだけを言うと紅茶を黙って啜るのであった。

「・・・・・・――――――」

それから数時間後、ユーノは浦太郎を同行させてレオーネと供に予告上が届けられた時空管理局地上部隊の高官で、レオーネの幼馴染でもあるエルゴ・カーチェス幕僚長の自宅を訪れる。

「護衛の助っ人？いらんいらん。相手はたかが兇賊一匹。助っ人どころか本局の警護も要らんわ。」

椅子に堂々と鎮座しながらレオーネの言葉を軽くあしらうエルゴ。

「甘すぎるのではないか、エルゴ。相手はあの灰頭だぞ！」

「口を慎め、レオーネ！此処では私のほうが階級は上である。三提督のお前とてこのエルゴ・カーチェス幕僚長のこの私に法務顧問相談役如きが意見する気か！」

「そうは言うものの、事は一刻をも争う。解っているのか？相手は結界魔導師・・・遣り方一つで惨めに人を殺す力を有しているのだぞ。」

「ふん。解っておるからこうして選りすぐりの最強護衛団を組んで

おるのよ！陸軍省にその人ありと言われるエルゴ・カーチェスに心酔している猛者ばかりのな！」

エルゴの背後には、エルゴが独自に揃えた地上部隊の局員が大勢立ち並んでいた。

「そうだぜ！エルゴさんには俺らがついてるからよぉ！」

「本局（うみ）の旦那は帰って大人しく床にでもついてな！」

昔から地上部隊と本局はことあるごとに諍いを起こし、亀裂が入っていた。

ＪＳ事件が解決し、トップのレジアス・ゲイズがいなくなった今でもそれは変わらない。

「そもそも、外部のどこの馬の骨を助っ人に頼もうとするなぞ何と誇りのない！！その助っ人がお前の配下全員合わせたより強いとでも言うのか！？恥知らずめが。」

「・・・面目も無いが・・・その通りなのだ。」

「なぬ？」

と、その時。

部屋のドアが開かれると、呆れた表情を浮かべたユーノが部屋に入ってきた。

エルゴは一瞬、ポカンとした表情を浮かべていたがユーノの言葉を

聞いて表情を一片させるのであった。

「はぁ～～～聞いてみればエルゴさんも随分“偉そう”にしていますね。毎回無限書庫に来ては土下座をしてまで僕に資料請求を頼んできた頃とはまるで別人のようですよ。」

「ゲッ！！」

すると、今度は浦太郎が部屋に入ってくるとエルゴの背後にいる管理局員を見るなりこう呟いた。

「ちょっと、ちょっと。何所が選りすぐりの最強なの？見た限り一度は僕が扱いた覚えのある人たちばっかりだよ。」

「「「「ゲゲッ！！」」」」

そう・・・実は彼らは以前、浦太郎が教官を務めているときに扱かれた元生徒なのだ。

ユーノはエルゴを見ながら破顔一笑し、次のように答えた。

「馬の骨が護衛ではさぞ心外でしょうけど、今夜一晩は大目に見てやってください♪」

すると、エルゴは掌を返したかのように先程のレオーネとは打って変わって言動を改め冷や汗をかきながらこう答えた。

「と・・・とんでもない・・・身に余る光栄です・・・」

すると、浦太郎のほうも口を開いたままの元生徒達に向けて笑顔で

こう言った。

「と言う訳だからさ、今夜だけは昔のことは忘れて仲良くやろうね、今夜だけね♪」

「「「「は・・・・・・はい・・・・・・・！！」」」」

「エルゴ、この二人の他に外に武装隊を配置するがよろしいか？」

「ふん！勝ってにせい！」

「はい？」

「いや、是非お願いします！！」

レオーネの言葉にドライなエルゴだが、一度ユーノが介入すれば言葉を慎む。

何とも、分かりやすい男であろうか・・・・・・

やがて、日も暮れ辺りが夜になると建物の外の警護は昼間よりも厳重なものとなる。

そして、中で警護を続けているユーノと浦太郎は予告状の時間である午前一時になるまでの間、将棋を指しながら時間を潰していた。

そんな二人の様子を地上部隊の三下局員達は恐る恐る眺めていたそうな。

「予告時間まであと五分・・・しかし、本当に来るんですかね？」

「ん・・・まあ来なければ来ないに越した事はないんだけどね。」

「アンゴルモア捜索で六課も立て込んでいるのに、本局も人使いが荒いですよね。ヴィヴィオちゃんはもう寝てる頃ですよね？」

「ああ。明日は学校で地域交流会があるから朝早くから準備があるって聞いた。９時ごろにはとっくに寝てたと思うよ。」

「でも店長よくこの件引き受けましたよね。アンゴルモア捜索で色々忙しいのに、こう言う個人的な頼まれごとは正直断ると思っていましたから。」

「ん・・・勿論、乗り気にはなれなかったよ。けどフィルス相談役が態々直談判に来て、その上結界魔導師の仕業と聞いて黙っているわけにもいかないよ。灰頭の凶行を終わらせないとまた不幸な人たちが増える一方・・・灰頭自身も含めてね・・・――――――それより浦太郎の方こそよく手を貸す気になったものだね。」

「だってこんなぞくぞくする話聞いたら血が騒いじゃって！」

浦太郎は子供のような単純な理由でそう言ったが、後ろのほうで聞いていたレオーネは苦笑いを浮かべ心の中でこう思った。

「（血の気が引くほうの間違いじゃないのか・・・）」

「じゃあ、質問序にもう一つ良いですか？」

「何だい？」

「昼間に話していた上位心情拘束魔法『マインドスキャン』って言うのは何です?ひょっとして店長、灰頭に心当たりがあるんじゃなくて?」

「質問が二つになってるよ。」

「揚げ足取りはお互い様ですよ。教えてください。」

ユーノは浦太郎にそう言われると、一度溜め息をついて質問に答える。

「噂だよ。」

「噂?」

「十数年前に聞いた噂――まだスクライアのみんなと一緒に遺跡発掘をしながら世界を渡り歩いていた頃、心当たりといえば心当たりになるが・・・今の時点では如何とも――――」

と、その時だった。

「うぎゃあああああああああ!!!!!!!」

「「!」」

突然、外のほうから警護に当たっていたと思われる局員の悲鳴が聞こえてきた。

「な、何だ今の悲鳴は!?」

「室内(なか)からじゃねぇ！外からだったぞ！！」

騒然となる室内。

ユーノと浦太郎は直ぐに窓を開いて、外の方を確認してみると案の定・・・表の門を警護していた武装局員全員が血塗れとなって倒れていた。

「武装局員が血塗れに！？」

「来るぞ！！最前列は僕と浦太郎で固める！他の人は後ろに続いて！！」

ユーノの言葉を聞いて、室内の警護に当たっていたものは言われたとおりの配置につく。

しかし、ただ一人標的とされているエルゴは動揺で状況判断が付かずしどろもどろしていた。

「・・・あ？・・・え？・・・い？・・・」

そんなエルゴを見ていた浦太郎は思わず、かかと落しをエルゴの頭にヒットさせる。

「動揺しないの！大将は真ん中でどんと構えるのが相場と決まってるの！」

「う！」

エルゴは頭に瘤をつくると、浦太郎に言われた通り真ん中の席で凶

族が来るのを固唾を飲んで待つことにした。

全員がそれぞれの場所で配置について、予告状の時間が来るのを待っていた。

そして、ついにその時間である午前一時を知らせる鐘の音が部屋中に響き渡った。

ユーノと浦太郎がそれぞれの武器を持って灰頭が現れるの待つが、肝心の灰頭はまるで現れようとはしなかった。

「一時・・・」

「来ない・・・・・・？」

後ろのほうで警護をしていた地上部隊の局員は拍子抜け態度となると同時に、安心したのか思わず胸を撫で下ろす。

「けっ、何だよ脅しかよ。ふう～～～」

一人の武装局員が溜め息をつきながら、窓の拍子に体重をかけた――――――その時。

突然、窓の外から灰色の覆面を被った男が現れバインドの鞭で局員の体を叩きつけた。

「ギャ・・・！！」

「「！！！」」

襲われた局員は悲鳴を上げてその場に倒れこみ、慌てたユーノと浦太郎達も後ろの方を振り返ると、そこにはこの事件の犯人である灰頭が不気味な笑い声を発しながら登場した。

「うふふ・・・いるいる・・・命知らずの馬鹿共が・・・」

一方、その頃・・・機動六課隊舎の自室のベッドで眠っていた筈のなのはは妙な胸騒ぎを感じてしまい目が冴えて眠れないで居た。

「・・・・・・ふう・・・」

なのはの隣には、既に熟睡しているヴィヴィオとフェイトが眠っていたが、なのはの様子に気付いたフェイトが徐に目を擦りながら声を掛けてきた。

「なのは・・・眠れないの？」

「うん・・・何だか妙な胸騒ぎがしちゃって・・・」

「まぁ、ユーノのことだから大丈夫だと思うけど・・・一応浦太郎さんもついてるし・・・」

「・・・そうだね・・・・・・（大丈夫だよね・・・ユーノ君――・・・）」

なのはは一抹の不安を感じながら、部屋の中に入り込んでくる月を見ながらユーノの無事を祈ったのであった。

その頃、当のユーノ達はと言うと・・・・・・ついに現れた謎の覆面殺人鬼、灰頭の姿を凝視しながら緊迫した様子で灰頭の動きを捉

えていた。

「ひい・・・ふう・・・みい・・・思ったよりは少ないな。」

灰頭は指で目の前に居る敵の数を数えながら、不気味な笑い声を発する。

そんな得体の知れない殺人鬼、灰頭を見ながら浦太郎はユーノと作戦を練っていた。

「あれが兇賊“灰頭”ですか。成程、あの眼は危険過ぎますね。」

「分かる様だね。浦太郎、奴は僕が相手をする。お前はエルゴさんを頼む。」

ユーノがそう言って、仕込み杖を抜こうとした時だった。

エルゴが後退りをする局員に向って喝を入れ始めたのは。

「何をボケッとしとるかお前達！さっさとかからんか！」

「「！？」」

「高い給金を払っているのだ！きちっと働け！！奴を倒した者には十倍払ってやる！陸士部隊の省仕官も世話してやる！」

「十倍！」

「仕官！」

エルゴの言葉を聞いて、欲に目が眩んだ地上部隊の三下局員達は手柄を我先に頂こうとして、数人係で灰頭に向かって行った。

「よっしゃあ仕官は貰った！！」

「いや、俺が頂く！！」

慌てた浦太郎が軽率な行動を取る局員達に向って大声で止めにかかる。

「何やってるの君ら！！欲に負けて命を捨てるつもりか！！」

すると、そんな命知らずの局員達を見た灰頭は不気味な笑い声を上げながらバインドの鞭を振って局員数名を一瞬で負傷させてしまう。

「うふ・・・うふふ・・・うふわはは！！！！」

「「「「ぐあああああ！！！！！」」」」

「ん――――む・・・この感触・・・いいね・・・」

浦太郎は目にも止まらぬ身のこなしとバインドを使った攻撃方法に驚愕する。

「（速い！ホイップバインドを鞭の様に振って急所を突いている！）下がりな、君ら！！君らじゃこいつの相手は務まらない！！」

「「「「うわっ・・・ひいぃ・・・」」」」

急に灰頭の強さに弱腰になった地上部隊の局員は、浦太郎の言葉に

促されてその場から逃げようとしたが、その瞬間・・・灰頭はこの場にいる者に特殊な術をかける。

「逃がさんよ!!」

「「「!?」」」

すると、灰頭の目から発せられた特別な力によってその場に居たものの殆どが金縛りにあったかのように身体が動かなくなってしまった。

「な・・・なんじゃ・・・今のは!?」

「体が動かない!!」

エルゴとレオーネも技にかかってしまい、必死で動こうとしたが意味は無かった。

「逃げたら駄目だな。一度抜き合わせたらどちらが死ぬまで戦う。そうじゃないと楽しくないだろ?」

「「「うああ・・・あ・・・あ・・・ひい!!」」」

すると、その時・・・武装局員から始末にかかろうとした灰頭の後ろから浦太郎の声が聞こえてきた。

浦太郎は術にかかっていながらも、何とか体を動かせることは出来たのだ。

「く・・・貴様・・・何をしたんだ!?急に体が・・・重くなった

けど・・・！！」

そんな浦太郎の方を振り返った灰頭は、感心した様子で浦太郎にこう口にした。

「ホウ・・・『マインドスキャン』にかかってもまだ動けるとは、ただの馬鹿とは一味違うようだな。」

「！（マインドスキャン！）」

浦太郎は先程ユーノから聞いてその言葉を再び灰頭自身の口から聞いて、終始驚いていた。

と、その時・・・そんな浦太郎の背後から灰頭目掛けて仕込み杖を抜いたユーノが斬りかかって来た。

「上位心情拘束魔法“マインドスキャン”。またの名を“心読みの術”。まさかとは思っていたけど、お前が灰頭だったとはね。」

「！」

灰頭はユーノの攻撃に気付くと、咄嗟に右手に持っていたホイップバインドを振いユーノの斬撃を凌ごうとした。

両者の技がぶつかり合い、ユーノは着地するや否やホイップバインドによる攻撃を左腕に受けてしまっていた。

「スクライア君！！」

ユーノの身を案じ声を掛けるレオーネ。

ユーノは出血した箇所を持ち合わせの布で応急処置をしながら、斬撃を喰らい床にしゃがみ込んでいる灰頭を見ながら次にように語りだす。

「僕が子供の頃、ミッドチルダで・・・噂話にある男のことを聞いた。嘗て結界魔法における天才と言われ、管理局でも人目置くほどの結界魔導師だったが・・・ある時より突然狂気に走って、その結界魔法をよもや人殺しの道具に使い『マインドスキャン』を極めた達人だと言う。」

マインドスキャン――――別名を心読みの術と言い、結界魔法における上位魔法であると同時に最も不気味で恐れられる相手の心を掌握する上位心情拘束魔法。

叩き込むことで相手を不動金縛りにするという秘儀中の秘儀であり、結界魔導師の中でもこれを使えるものは数世代に一人といわれるものの、一度使えば技の効力に飲まれて自分を失くすことなどの理由から禁忌とされてきた。

「マインドスキャン・・・攻め手にかけて使うかと思っていたが、戦意をなくして逃げようとする者にかけてバインドで殺そうとするとは、随分外道なやり方じゃないの。元時空管理局本局所属、“ゼムナス・フォーラム准尉”。」

ユーノがそう言うと、灰頭は顔を覆い隠していた覆面を剥がすとユーノの方を振り向きこう語りだした。

「俺も噂に聞いたことがあるぞ。『翡翠の魔導死神』とかいう渾名を持つ俺と同じ結界魔導師でありながら、別の力を有したあの物置

同然だった無限書庫を活動可能にした天才・・・元無限書庫司書長・・・“ユーノ・スクライア”！！」

「！！」

ユーノはその瞬間、ゼムナスの目から発せられるマインドスキャンに落ちかけそうになる。

「スクライア君！！」

レオーネはユーノの名前を叫んだ。

「ハアッ！！」

すると、ユーノは魔法陣を展開させて一気に自分の周りに結界を発動させてマインドスキャンの発動を無効化した。

「！何と！？」

これには流石のレオーネ達も驚愕する余りだった。

「『マインドスキャン』は強力ではあるが、同じ結界魔導師同士の戦いやそれを発動できる魔導師ではあまり効果がありません。だから、同じだけの結界魔法を自分自身に発動させれば術にはかからないですよ。」

ユーノはレオーネにそう言うと、再びゼムナスの正面を向くと刀を向けて素直に投降するよう申し出る。

「大人しく縄について下さい、ゼムナス元准尉。さもなくば、僕が

相手を致します。」

「ユーノ・スクライアが相手か。願ってもいない。だが！」

ゼムナスはそう言うと、壁の方で全く動けないで居る弱腰のエルゴを見る。

「ヒッ！」

「なっ！」

ユーノが気付いたときには、既にゼムナスはホイップバインドを右手に持ち半泣きをするエルゴの息の根を止めようと飛び掛っていった。

「先ずは予告状の内容を果たしてからだ！！」

「あひっ――――！！」

「（しまった！）エルゴさん、結界魔法を発動して下さい！！」

「無駄だ！お前ならいざ知らず、腐り肥えた者には決して解けん！昔は大金を払ってまで結界魔導師を重用しておきながら、今は結界など役に立たないとぬかす手前勝手な腐れ官僚にはなァ！！」

ホイップバインドがエルゴの首筋に当てられそうになったその時、浦太郎は自力で結界魔法を発動させて術を解き・・・・・・

「僕を・・・忘れるなよボケが！！！」

「！」

「浦太郎！」

「王手には・・・まだ早いよ！！」

すぐさま、猛烈な勢いで部屋を駆け抜け置いてあったブロンズ像をホイップバインドの手前で落とすと、ギリギリのとこでエルゴの命を守りぬいたのであった。

「どうだ！」

「うふふ・・・」

「！？」

すると、そんな浦太郎に向けてゼムナスは不適な笑みを浮かべながら、針状のバインドであるニードルバインドを浦太郎の右手首に突き刺した。

「うぐっ！！（針状の・・・バインド・・・だと！？）」

ニードルバインドの攻撃を受けた浦太郎は険しい表情を浮かべながら、貫通した右手首から出る血を抑える。

「うふわははははははははは！！！！！！！」

エルゴは浦太郎に傷を与えられたことに大いに喜びを感じ、高笑いを浮かべるがそれを見てたユーノは怒りが頂点に達し、全速力でゼムナスの下に飛び込んでいった。

「ゼムナスッ――――！！！！！！！！！！」

「うふわははははははは！！！！！」

ゼムナスはホイップバインドを併用させてユーノの刀を凌ごうとするが、ユーノは天井裏に足を掛けるとそのまま勢いをつけてゼムナスに切りかかっていく。

「！？」

驚愕するゼムナスであったが、その瞬間ユーノの刀から強力な峰による一撃が顔面に直撃し、地面に転がり込む。

すると、その瞬間全員にかかっていたマインドスキャンが解けて身体が自由の身となる。

「！おお！」

「体が動くぞ！！」

ゼムナスは軽い身のこなしで開いている窓のほうへと移動すると、出血を軽く手で拭いながらユーノに人差し指を向けてこう言った。

「うふふ・・・これは面白い。こんなに面白いのは何十年振りだろうか？標的変更。次の獲物はお前だ。翡翠の魔導死神ユーノ・スクライア！！」

ゼムナスはそれだけ言い残すと、夜の世界を飛び回りながら闇の中に溶け込んで姿を消していったのであった。

「近いうちに再びお前の前に現れよう。それまでに精々怪我の無いよう注意することだな！！ふわはははははは！！！！！」

ユーノは吊り上げていた目を元に戻すと、刀を杖に収めて負傷した浦太郎に近付く。

「大丈夫かい、浦太郎？直ぐに治療をするから腕出して。」

「すみません店長・・・お願いします。」

ユーノは直ぐに浦太郎の傷にフィジカルヒールを施し、治療を行う。

すると、そんなユーノを見たレオーネが申し訳なさそうな表情でこう言ってきた。

「スクライア君・・・」

「フィルス相談役、急いでやられた者の手当てを。上手くいけばまだ助かるはずです。」

「わ・・・わかった。しかし、スクライア君。これで・・・今度は君が狙われる羽目に・・・」

「構いません。寧ろ好都合ですよ。」

「店長・・・まさか最初からこうなることを予測して、それでこの頼まれごとを？」

「・・・欲を言えばこの場で片をつけたかったが、流石にそうはさ

せてくれない。（灰頭のゼムナス――――・・・一筋縄ではいかない強敵（ヤツ）だな――――）」

事件のあったその日の早朝は靄が掛かっていた。

靄が立ち込めるビル群を歩きながら、静まり返ったミッドの市街地でユーノと浦太郎が昨晩のことを話していた。

「重症六名。軽症三名。灰頭事件でこんなに被害が少ないのは初めてのことですって。」

「計九名は素直には喜べないな。」

「贅沢は言わないほうがいいですよ。死人を出さなかっただけでも大したものですって。灰頭・・・ゼムナス・フォーラムですか。元時空管理局本局の准尉にまで上り詰めた男は今となっては精神に異常をきたした殺人鬼・・・けど、こっちには最強の結界魔導師がいるんですから、何とかなりますよ！」

浦太郎は楽観的な態度でそう言うと、ユーノの肩を叩いた。

「そうでもないよ・・・てか、痛いよ。」

「え？」

「僕はこの数年間、自らの結界魔法を戦いで使用したことはない。ほとんどがバインドや鬼道といったものだし・・・最近じゃ斬魄刀による戦闘が専らさ。だけど、ゼムナスは進んで結界魔法を使って殺人を繰り返してきた。“結界魔導師”として、この差はかなり大きい。」

「店長・・・・・・」

「ゼムナスがいつマインドスキャンを習得したかは知らないが、奴は管理局でも恐れられる超一流の結界魔導師だったそうだ。」

「そりゃ、准尉にまで上り詰めたって言うならそうでしょうね。」

「実際、奴は結界魔法に関しては僕と匹敵するほどの腕を持っているだけでなく、それを使った封殺型の攻撃法も熟知している。おまけに、攻撃魔法もそれなりに使えるからいざとなったらそれを使えば如何にでも対応が利く。でも、いつの間にか奴は結界を守る為から封じる為に使うようになっていき、十五年前に局を抜け、今度は流浪の殺し屋として活躍し始めた。」

「時空の平和を守る仕事から真逆の仕事に転職とは・・・思想も主義もまるでない人ですね。」

「今のゼムナスに在るのは十八番の結界を使って、人を殺したいという欲求だけだよ。殺人欲で管理局を綻ばせるために猛威を振う、極めて危険な男さ。」

「これはもしかすると・・・僕やなのはちゃん達の出る幕じゃないですかね?」

「奴の狙いは僕一人だ。相手は僕だけでするよ。その代わりと言ったら何だけど、浦太郎・・・一つ頼まれて欲しいんだけど。」

ユーノが浦太郎の頼んだ事とは一体何なのか?

それは、この後浦太郎が機動六課隊舎に戻ってから分かることになる。

「ただいま・・・って・・・」

浦太郎は隊舎に戻ってきたとき、真っ先に目に入って来たのは制服を着たまま涎を垂らして熟睡しているなのはの姿であった。

「くかぁ～～～・・・」

浦太郎はかなり呆れた表情を浮かべながら、周りに居るフェイト達に事情の説明を求めた。

「・・・ねえ・・・何これ？」

「あ、いえ！！その・・・何と言いますか・・・その・・・！！」

「す、睡眠不足ですよ！普通の・・・！！」

スバルとティアナはなのはの面目を保とうと嘘を言うが、浦太郎にそんな冗談が通じる筈がない。

「睡眠不足ね・・・早寝早起きのなのはちゃんがかい？」

「すぴー」

未だに起きる気配のないなのはの一瞥して、恋次は深い溜め息をつく。

「全く。だらしねえ顔しやがって。まぁ、年頃の娘が涎垂らして寝

るなよな。」

「何か、昨夜は一睡も出来なかったみたいですよ・・・なのは。」

「ふうん。成程ね・・・それで、起こさなくていいの？」

浦太郎がそう言うと、スバルはなのはの体を軽く揺すってなのはを起こそうとした。

「なのはさん。起きてください。」

「ん・・・」

しかし、なのはは中々起き様とはしない。

すると、見かねたはやてがスバルに向ってこう口にする。

「任せとき、スバル。こう言うのは私の得意分野や。」

はやてはスバルを後ろに下がらせると、なのはの両側の口元を引っ張りながら試行錯誤を繰り返した。

「起きんといて、なのはちゃん。」

その時のなのはの顔が余りに傑作だったのか、恋次とヴィータ、アギトに鬼太郎は壺に嵌ってしまい爆笑をする。

「「「「ぶはははははあはははははは！！！！！！！」」」」

しかし、笑い声を聞いたなのはは直ぐに目を覚ますとそんなはやて

を含めた五人に魔王の鉄拳を食らわせ、目に悔し涙を浮かべながら浦太郎におかえりと返事をする。

「オカエリナサイ」

浦太郎の後ろでは頭に大きな瘤をつくった恋次達が目を回しており、浦太郎は冷や汗をかきながら返事をする。

「ハイ・・・タダイマ。」

「「「「「（痛った――――！！）」」」」」

「――――って、あれ？浦太郎さん、ユーノ君は？」

だが、直ぐになのはは浦太郎と一緒にいるはずのユーノがいないことに気付き周りを見渡した。

すると、浦太郎はそんな動揺するなのはに真顔でこう言った。

「店長なら帰ってこないよ。」

「え？」

なのはは、一瞬頭が真っ白になった。

浦太郎はそんななのはや前線メンバー全員にユーノから頼まれていた言伝を伝えた。

それは、標的にされたのが自分である以上なのは達を危険に巻き込みたくない・・・だから此処から先は一人で灰頭の探索を行うから

暫くは戻らないというものであった。

「そう言う訳で、今度は店長が狙われることになってしまったと言うことだから、周りに迷惑がかからないように暫くは六課（ここ）には帰らないって。それで、留守の間はなのはちゃん達のことを任せて欲しいって僕が頼まれた訳。」

「そ、そんな！」

一同はユーノの危険極まりない行動に思わず顔色を変えた。

すると、なのはが直ぐに浦太郎に詰め寄りユーノが何所に言ったのかを問いただそうとした。

「そ、それで！ユーノ君は何所に行ったんですか！？」

「何でも、灰頭の魔力波長を追って適当に異世界を回り歩いてみるって。同じ結界魔導師の考えそうなことは、自分にしか分からないって言うのが店長の持論だそうだよ。」

すると、なのはは居ても立ってもいられなくなりレイジングハートを首にかけてユーノのことを捜しに行こうとした。

「おいおい！！何所行くんだよ、なのは！！」

恋次や吉良がなのはの突然の行動を見て何をしようとするのかを尋ねようとしたら、なのはは二人に向ってこう口にする。

「決まってますよ！ユーノ君を捜しに行くんです！」

「無理だよ、なのは！範囲が広すぎるよ！」

「せやで！それに、仕事だってあるやんか！」

「はやて殿の言う通りですぞ。なのは殿・・・ここは店長を信じて待ち――――――」

フェイトとはやて、金太郎はなのはに正論を口にするがその時、金太郎や前線メンバー全員はそんななのはの瞳に大粒の涙が溜まっていることに気づき、驚愕の表情を浮かべる。

「なのはさん・・・」

「泣いてる・・・！？」

スバルを始め、フォワードメンバーは自分達の前では涙など見せたことのないなのはが涙を浮かべる姿は相当珍しかったらしく、大いに驚いていた。

「じゃあ、聞きますけど・・・灰頭と戦った後、もしそのままユーノ君が私達に黙って何所かに行って、此処に帰ってこなかったらどうするんですか！？」

「そ・・・それは・・・」

「折角・・・四年越しに想いを打ち明けられたのに・・・ヴィヴィオも懐いて・・・私の心に開いた傷も・・・ユーノ君が居てくれたお陰で、塞がりかけてきたと思ったのに・・・また何所かに一人で行かれちゃうなんていやだよ・・・また・・・大好きな人が一人で何所かに居なくなるなんて御免だよ！！！もう・・・一人ぼっちに

はなりたくないよ!!!危険な目に遭ってでも、私はそれでもユーノ君とずっと一緒に居たいの!!!」

なのはが、全員に向ってそう言った瞬間なのはの瞳に溜まっていた涙が地面に零れ一瞬の沈黙が流れた。

「なのは・・・」

「なのはちゃん・・・」

親友であるフェイトやはやてもこんなにもユーノのことを想っているなのはの態度を見て、一瞬心を動かされそうになったが、聞いていた恋次は腕組みをしながらなのはに向って隊長としての見解を口にする。

「・・・気持ちは分かるが、お前は仮にも此処機動六課のスターズ分隊隊長。しかも、教導官っていう立場なんだぜ。団体行動と自分の役職をよく考えてからものを言えよな。何時までも子供染みた発言はするんじゃねえよ。」

「恋次にしては・・・かなりまともな見解だな。」

「俺は一般論を言ったまでに過ぎないぜ。」

すると、恋次の話を聞いていたはやても気持ちを一度整理すると毅然とした態度でなのはに向って部隊長としての命令を言い渡す。

「せやな。“高町教導官”・・・そう言うわけや。部隊長としても隊長の勝手な行動を赦す訳にはいかへんよ。今回の案件はあくまでスクライアアドバイザー個人と本局上層部だけの問題や。私らが首

を突っ込むわけにはいかへん。解ってくれへんか？」

すると、それを聞いていたなのはは暫く黙り込んだ後、悔しい気持ちを右腕に籠もらせてはやての命令に従うことにした。

「・・・はい・・・解りました。軽率な発言と行動・・・申し訳ありませんでした。」

傍らでそれを見ていた鬼太郎を始めとするスクライア商店の心境は何所か複雑だった。

「・・・やれやれ。店長と離れるのが不安でたまらないってか。相変わらず我儘な女だぜ。」

「ま、恋心と我儘は切り離せないからね。仕方ないよ。」

「さて、問題はユーノ店長が無事に帰ってこれるかどうかであるな。浦太郎にそれだけの傷を負わせたとなると、かなりの手練れであるな。」

「我々は待つだけです。店長が此処に帰ってくるのを・・・待つだけです。」

金太郎は鬼太郎達にそう言うと、ユーノが無事に帰還することを祈って仕事に戻ることにした。

その頃、ユーノはゼムナスの魔力波長を探索魔法で特定した結果、ある異世界に潜伏していることを掴みそこを訪れていた。

甚平の中には捜索している最中に届けられたゼムナスからの果たし

状が入っていた。

第１９３管理外世界『孤（みなしご）』。

決して夜の明ける事の無い月明かりだけが唯一の光である鬱蒼とした森が支配する世界。

人は・・・・・誰も住んでいない。

居るのは闇を好む夜行性の蟲と猛禽類だけである。

そんな森の中で、ゼムナスは懐中時計を見ながら不気味な笑い声を上げながらユーノの到着を心待ちにしていた。

「うふ・・・うふふ・・・ふふ・・・ふふ・・・うふ」

と、その時・・・ゼムナスの背後から物音が聞こえてきた。

ゼムナスは吸っていた煙草を地面に落とすと、懐中時計をしまい物音のほうへと振り返った。

「さて、丁度零時。約束の時間だ・・・楽しい一時の始まりだ。」

ゼムナスが振り向いた先に居たのは、何時ものように甚平と帽子に身を包んだユーノであった。

「なぁ、ユーノ・スクライア。」

「・・・・・――――――」

その時、ゼムナスが見たユーノの瞳には抑えがたい怒りと憎しみが籠もっていた。

「うふふ・・・うふふ・・・いい眼だ。怒っておるな？昨晩のことがそんなに腹立たしいか。それとも、罪もなき人間を傷つけたことへの怒りか？」

「そのどちらもだよ、ゼムナス。浦太郎に傷を負わせてしまったことと、それを阻止できなかった僕自身に今怒っている。」

そんな二人の様子を、シャーリーが密かに六課のサーチャーを使って指令室のモニターでその時の映像をリアルタイムでなのは達に見せていた。

なのは達は固唾を飲んでその様子を見守っていた。

ユーノはサーチャーに気付いていながら、それを無視してゼムナスと話を進める。

「うふふ・・・上等上等。怒りはお前の力を普段よりも増幅させる。力が増せば増すほど鳥肌が立つほどのギリギリの一線で殺し合える。一番面白い戦いとなる・・・うふふ。」

「気味の悪い笑い方をするのが好きだな。何故そうまでして結界魔法で人を殺す？何がお前の心を地に追い遣った？」

「うふふ・・・貴様なら自ずと分かるはずだ・・・管理局と言うところが如何いうところなのかを？所詮、我ら結界魔導師の存在など前線に立って活躍する武装隊の魔導師と違い日陰だけの存在。結界を張ることが当たり前と言われ、どんなに影で苦労しようともそれ

を褒め称えるものなど居はしない。実力主義・戦技主義の管理局の考えが根底から崩されぬ以上・・・我らの存在を認めるものなどいない！」

「・・・そうか・・・ならば今回は・・・・・・」

すると、ユーノは手に持っていた仕込み杖をその場に落とした。

モニターでユーノの意外な行動を見ていたなのは達は大いに驚いた。

「「「なっ！？」」」

「何！？」

「・・・公平且つ公正に・・・同じ結界魔導師として決着をつけよう・・・ゼムナス・フォーラム・・・今回・・・僕はこの戦いにおいては、斬魄刀も鬼道も使わない。翡翠の魔導死神ではなく・・・“結界魔導師ユーノ・スクライア”として戦う。」

「うふふ・・・いいだろう・・・ならばこちらも全力でいかせてもらう・・・ユーノ・スクライア・・・だが、いいのか？貴様は結界魔法やその他の補助系の魔法は天下一品だが、攻撃魔法はまるで使えないと聞いた。そんな奴がこの俺にどう挑んでくるというのだ？」

「策は幾らでもあるさ。僕は力任せに技を出すのが好きじゃないだけでね。」

「うふふ・・・今宵は人生でも稀に見る面白い戦いになりそうだ・・・ならばその実力、篤と見せてもらうぞ！！」

その瞬間、ゼムナスとユーノは真正面からぶつかり合っていった。

ユーノはチェーンバインドを生成すると、ホイップバインドで攻撃を行ってきたゼムナスに対抗すべくチェーンバインドを振った。

その光景は普通の魔導師同士の戦いとは思えぬほど、殺伐とし且つ緊迫したものであった。

「うーふ・・・うふふ・・・うふ！」

ゼムナスはユーノから一度離れると、昨晩浦太郎達を苦しめたマインドスキャンを発動させようと目から特殊な魔力を発しようとするが、ユーノは直ぐにそれに気付くと自身に結界を施し術を退ける。

「小ざかしい！！」

マインドスキャンを退けたときのユーノの態度はなのはが知っている穏やかなユーノとはまるで違っていた。

モニターでそれを見ていたなのははそんなユーノに若干恐怖を覚えた。

「マインドスキャンは僕には通じないことは分かってるはずだ！」

「うふふ・・・ならばこちらもそれ相応の力でぶつかるまでだ。」

すると、ゼムナスは印を結んで足元に黒い魔法陣を出現させると、ユーノの覆い隠す特殊な結界魔法を発動させる。

「！？」

「超圧縮結界・・・ユニトリス！」

その瞬間、ユーノを覆い囲んだ超圧縮型結界ユニトリスそのものが収縮を始め、ユーノを押し潰そうと迫ってきた。

「（これは・・・結界内に閉じ込めたものを圧縮させてそのまま崩壊させる結界魔法の上位種！？Ｓランククラスの封殺型結界・・・これに圧し潰されたら終わりだ！）」

すると、ユーノはこの魔法を打ち破るために自身も対抗策となる魔法を発動させるために印を結んで詠唱を始める。

「“妙なる響き、光となれ。内なる場所に眠りその力を、今此処に爆発させよ。”」

すると、ユーノの足元の現れる緑色の魔法陣からユニトリスを押し返すだけの魔力が放出され、圧縮され始めていた結界が元に戻り始める。

そして、暫くすると結界が崩壊してユーノはユニトリスから無事に脱出を果たした。

「うふふ・・・ならばこれならばどうだ！」

ゼムナスはそう言うと、足元の魔法陣から魔力によって作られた鴉を召還してそれをユーノに向けて飛び立たせた。

「『ゾーンデリーター』」

ゾーンデリーターは、移動能力を秘めた動物に酷似した魔力の塊を相手にぶつけて爆発させることで、相手に致命傷を負わせるＡＡＡクラスの特殊魔法である。

飛んでくる鴉の大群を見たユーノは、スクライア一族に密かに受け継がれし魔法を今この場で発動させる

「封じよ、オデュッセイア！」

ユーノが地面に手を突いた瞬間、魔法陣から現れたのは人の腕を象った呪われた右腕の称号を持つ、オデュッセイアであった。

「『シュバルツ・レールザッツ』！」

召還された右腕は巨大化すると、その掌で全ての鴉を捕らえてしまい一瞬にして消滅させてしまった。

オデュッセイアがゾーンデリーターを消滅させると、右腕そのものを消えていった。

「ほう・・・スクライアの秘伝魔法か・・・正に壮観なり。」

「さ、次は如何する気だ？マインドスキャンも通じない・・・下手な結界魔法や攻撃魔法も僕には何の意味も無い。それに、同じ結界を使ったやり方でも・・・お前と僕とじゃお前のほうが不利な事は解り切ってるはずだ。それでもまだやるって言うのか？」

「うふふ・・・饒舌だな。ユーノ・スクライア・・・確かに、お前と俺とでは同じ結界でもここまでの差が生じる・・・流石は幾多の事件を解決へと導いてきた機動六課の切り札と褒めておくべきか。

だが、一つ いいことを教えておく。俺の力の底など、未だお前には見せていないということをな。」

「!?」

「うふふ・・・マインドスキャンは本来相手の心情を掌握し、相手を竦ませる術。では、もしその術を逆に利用すれば?即ち、自分自身の心情を掌握し、潜在する全ての力を引き出す。見せてやろう・・・我が秘儀、『マインドリレイション』を!」

「・・・マインドリレイション・・・!?」

ユーノがゼムナスの言葉に驚愕する中、ゼムナス本人は構えを取ると自分の深層心理には鋳込み、精神集中を始めた。

「はぁ!!!!!!!!!!」

すると、その瞬間・・・――ゼムナスの全身が黒い球体状のものに包まれると、凄まじい魔力が放出されユーノの視界を遮った。

モニター画面で同じものを見ていたはやて達も驚愕の表情でそれを目の当たりにしていた。

「な、何や一体!?」

「マインドリレイションだと!?」

「何をしようって言うんだ・・・あの野郎!?」

やがて、立ち込めていた土煙が晴れていくとユーノの目の前に何か

の姿が見えてきた。

「!?」

「うふふ・・・これを使うのは・・・管理局を抜けるとき以来、十五年振りだな・・・」

そして、完全に土煙が晴れた先に立っていたのは、全身を漆黒に染めた背中から魔力で出来た悪魔の翼を生やしたゼムナスであった。

それを見たユーノや指令室に集まっていたなのは達、ヴィヴィオやザフィーラはあまりの光景に仰天した。

「な、何あれ!?全身の色が・・・真っ黒になってる!!」

「人間じゃないの・・・!?」

すると、そんなユーノですらも思っている全員に疑問にゼムナスが徐に答え始めた。

「マインドリレイションとは、リンカーコアの奥底に特殊な結界で封印していた人間本来の能力と魔導師の能力を解放させ、その上強い暗示によって肉体そのものを最終兵器へと変化させる・・・俺の切り札さ。」

「(肉体そのものを・・・!?)」

それを聞いたユーノは、一度鼻で笑うと冷や汗をかきながらゼムナスに向ってこう口にする。

「ふん・・・これは驚いたな・・・まさか結界魔法を自分のリンカーコアにまでかけていたとはな・・・ん!?」

すると、その時・・・ユーノの下になのはからの通信が入る。

『ユーノ君、聞こえる!?』

「ん!なのはかい!?」

『よかった!無事だったんだ・・・モニターの様子を見ていて、心配になって連絡してみたんだけど。状況は相当まずい感じ!?』

「うん・・・モニターで見てるなら分かるはずだよ。目の前にバケモノみたいなゼムナスって人が居る。」

『え!?それって・・・ゼムナス元准尉のこと!?』

「そうだよ。で、そっちはどうなの?フィルス相談役から何か伝言とかはあったかい?」

「今のところ、ないよ。ただ、私やっぱり心配なの!ユーノ君・・・一人で今回の件引き受けちゃってるでしょ!?私は・・・私は・・・もうユーノ君と一緒に居られないかもって思ったりしたりすると・・・私・・・怖くて怖くて駄目なの!!」

「なのは・・・ん!?待て!!」

なのはの胸のうちを聞いていたユーノは複雑な思いで一杯であったが、その時目の前のゼムナスが自分に向けて攻撃を仕掛けようとしていることに気付いた。

「うふふ・・・仲間と会話とは随分余裕のつもりのようだな・・・果たして・・・何時まで持つかな！！！！！」

ゼムナスはそう言うと、ユーノに向って背中の翼を使って突進してきた。

「なのは、後で連絡する！」

『え！？ゆ、ユーノ君！？ちょっと！！』

ユーノはそう言うと、なのはと一方的に通信を切って飛んでくるゼムナスの攻撃を回避するために空高く跳躍し、ゼムナスと逆の方向に着地する。

だが、ゼムナスはユーノが思っていた以上に反射神経が鋭くなっており常人では考えられないような動きで再びユーノに向かって行った。

「（速い！？）こうなったら、僕も久し振りにスクライアの技を全力で使わせて貰うとするよ！オデュッセイア！！」

ユーノはそう言うと、自身の魔法陣から緑色の腕を無数に出現させ、飛んでくるゼムナスに向けてそれを全て伸ばしていった。

「『アンドラ・モイ・エネッペ』」

指令室のモニターでそれを見ていたなのは達は、ユーノの使うその技に驚愕していた。

「あ！」

「！夥しい数の・・・腕だと！？」

すると、金太郎が誇らしげな顔でユーノの技を見ながら全員に説明をする。

「スクライア一族の者だけに密かに受け継がれし、高位拘束魔法。その腕に巻き取られたものは、呪いによって身体が侵食され、灰と化す。」

自分に向ってきた無数の腕の攻撃を咄嗟に回避することが出来ないゼムナスは、正しく飛んで日にいる夏の虫である。

「なぬ！？」

ゼムナスは体を無数の腕に巻き取られると、そのまま腕に拘束され動かなくなった。

「悪く思うなよ。」

ユーノは勝ち誇った表情を浮かべて、そう口にした・・・その時だった。

「うふふ・・・それで終わりか？」

「な！？」

「あ、あれは！！」

その時、ユーノや指令室のはやて達が見たものは・・・ゼムナスに絡みついた無数の腕が逆に灰となって消滅していく光景であった。

「ユーノくんの魔法で出来た腕が逆に灰になって・・・術そのものを消していっとる!?」

「!（あの腕は・・・アンドラ・モイ・エネッペにより朽ちるはず・・・どうなってる!?）」

ユーノは目の前で起こっているあまりに不可解な現象に、驚愕の余り言葉を失った。

そして、灰となった腕から出てきたゼムナスはアンドラ・モイ・エネッペの効果を受けてしまった灰となった左腕を高速治癒能力で再生させた。

モニターでそれを見ていたスバルやティアナは絶句した。

「う、嘘!!」

「切られた腕が再生していった!?」

腕を再生させたゼムナスは不気味な笑い声を上げながらユーノに向っていく。

「うふふ・・・所詮防御や拘束魔法では、この俺に攻撃をまともに与えることもままならん!!」

「舐めるなよ。バインド系の魔法が時として攻撃技にもなることを忘れてないかい?僕は確かに砲撃のような強力な攻撃魔法はほとん

ど使えないけど、バインドによる肉弾戦法は可能だ！」

「ほう・・・ではやってみるがいい！」

ゼムナスに挑発されると、ユーノは右掌に鞭の形をしたホイップバインドを作り出す。

「ホイップバインド・・・――」

そして、それを高速で振いながら地面を叩きつけ、相手を攻撃すると言うの肉弾戦法をやってみせた。

「“スピード・オブ・ライト・テン”！！」

技の様子から判断したクロノは些か驚きながらも、冷静に解説をする。

「ホイップバインドをその名の通り鞭のように振い、高速で敵を攻撃する気か・・・！」

「うふふ・・・！」

だが、ゼムナスは全く動じることなく捲りあがる地面と土煙の中に身を投じていく。

そして、ユーノの高速で振われるホイップバインドを想像を絶するような動きで全て的確に回避していく。

「上下左右下前左右下右上下左左右下左下・・・」

「ば、莫迦な！？」

ユーノもこの光景には流石に眼を疑った。

その後も、ゼムナスは早口で避ける方向を口にしながら攻撃を全て見切っていく。

「右下左上上左右下下上左右下上」

「（この見切りは反射神経のレベルじゃない・・・技が既に攻略されているのか！？）」

「うふふ・・・既に技を攻略していると思っているようだろうが、それは間違いだ。俺は昔からこの手の攻撃の軌道を読むのは得意なんだよ。しかも、この状態になると普段の何倍にも神経が研ぎ澄まされて、より正確に攻撃の方向を見切るれるのさ！！」

「！！（まさか・・・そんなことが！？）」

「うふわははははははは！！！！！！！死ね！！！！！！！」

ゼムナスはそう言うと、ユーノの腹部に向けて右腕を突き刺した。

ユーノはそれを喰らった瞬間、内臓器の一つが潰れてしまい口から血を吐く。

「ぐっは！！！」

モニターでそれを見ていたなのはやヴィヴィオ、そして他のメンバーは目を見開いて悲痛な叫び声を上げる。

「ユーノ君！！！」

「「「ユーノ！！」」」

「ユーノパパ！！！」

ユーノはその場に倒れこみ、傷口を押さえながら険しい表情を浮かべながら口から血を吐いていた。

額には多量の汗が、地面には腹部から出血した血が流れ出ていた。

「ぐっ・・・！！」

「ふん。やはりな・・・所詮攻撃魔法の使えぬままのお前では、俺には手も足も出ぬか。結界魔導師にも此処までの差が開くものなのだな・・・ユーノ・スクライア・・・」

そう言うと、ゼムナスは煙草を一本取り出し火をつけるとそれをユーノの目の前で吸い始める。

「ふぅ～～つまらないな。もっと俺を楽しませてくれよ。それとも・・・所詮魔導師としての実力は・・・この程度のレベルだったということか？成程・・・それならばあの高町なのはとか言う奴に後れを取るのも分かる・・・」

すると、“なのは”と言う言葉を軽々しく口にしたゼムナスに抑えがたい怒りを抱いたユーノはその瞬間、何時もの声色とは全く違う低い声でゼムナスの名前を口にする。

「・・・・・ゼムナス・・・」

「どうした?本当のことを言われて腹が立ったのか?なら矛先を向けるのは俺じゃない・・・その高町なのはの方ではないのか?」

と、不適な笑みでゼムナスがそう口にした瞬間・・・ユーノは瞬歩とはまた違う高速移動を用い、一瞬にしてゼムナスの前から姿を消した。

「?」

ゼムナスも突然消えてしまったユーノに驚愕するが、驚愕する暇もほとんど与えないままユーノのホイップバインドによる攻撃が鼻先にヒットし、ゼムナスはその衝撃で鼻と口から出血を起こし、同時に鼻の骨も折れた。

「ヴぶ!?」

ユーノはそんなゼムナスの背後に回り込むと、モニター越しで見ているなのは達でも感じ取れるほどの殺気を纏いながらホイップバインドを消滅させた。

一方、攻撃をまともに受けたゼムナスは不気味な笑い声と供にユーノの豹変振りに歓喜する。

「うほおう。今のは・・・攻撃の瞬間はおろか体のこなしすら見えなかった!これぞ本物の実力!これぞ、本物のユーノ・スクライアか!」

すると、ユーノは狂喜乱舞するゼムナスのほうへ振り返ると、殺気

の籠もった釣り上がった眼を見せながら低い声でこう口にした。

「なのはの名前を軽々しく口にするなよ。なるべく、傷・・・浅いまま捕まりたいだろ？」

指令室でユーノの声の調子と言動の豹変振りを見ていたなのはは、今まで感じたことのないようなユーノとの心の距離感を感じ、寂しげな表情でユーノの戦う姿を見つめていた。

「（ユーノ君・・・・・・）」

また、ユーノ本人のほうはと言うと、ゼムナスの顔を睨み付けるように見ながら低い声で次のように語りだす。

「どうやら・・・お前は、この程度の力だけを見て結界魔導師ユーノ・スクライアに勝てたつもりで居るようだね？」

「何！？」

「だとしたら、勘違いにも程がある。教えてあげるよ、ここからが“結界魔導師ユーノ・スクライア”の真骨頂だってことをね。」

ユーノの言葉の真意が気になるはやてやフェイト達は騒然とした。

「ユーノくん・・・一体何をする気なんや！？」

「何か秘策でもあるのかな！？」

すると、クロノが突然今のユーノを見ながら以前、管理局の創設の歴史と言う書物を読んでいた時に出てきたある結界魔導師のことを

思い出しそれを全員に話し出した。

「そう言えば、こんな時にとなんだが・・・嘗て管理局が創設されたばかりの頃、今のユーノにそっくりな結界魔導師がいたと聞く。」

「ユーノ君にそっくりな・・・結界魔導師・・・！？」

「それどういう事なの、クロノ！？」

「管理局が創設されたばかりの頃、その人物は攻撃魔法はまるで使えなかったがその代わり補助魔法、特に結界魔法に関しては正しく鉄壁と謳われた最強のバックアップだったそうだ。誰にでも気さくに接し、温和な性格と中性的な表情をしていたことから誰からも慕われ愛されていた。だが、ある時同じ局に勤める彼の恋人が任務の途中に危機に陥ったということを知った彼は、その時だけは守りを捨てて、その結界魔法を逆に利用して、誰よりも多くの敵を倒し、無事に恋人を守り抜いたという。」

クロノが程なく説明を終えた丁度その時、ユーノ自身も今迄使う機会が殆ど無かった秘策のバインドを発動させようとする。

「これを使うのは・・・実戦では初めてだな。だけど、同じ結界魔導師として・・・お前に負けるわけにはいかない。いくよ、制限解除（リミット・リース）。」

その瞬間、ユーノの足元に緑色の魔法陣が展開されると普段は封じている自分の魔力の制限を取り払う。

翡翠の魔導死神として覚醒したユーノの場合、総魔力量は初めてなのはが魔法とであったときと同じＡＡＡクラス。

しかし、普段ははやてと同様自らの体に４ランクダウンさせて封じているため、実際にこれまで使ってきた魔法は全てＣランク程の力でしかなかったということだ。

と言うのも、ユーノはそれを遥かに上回るだけの霊力が備わっているために強力な魔法を行使する必要も無かったのだ。

だが、今回は状況が状況だけに、魔法による本気の戦闘になってしまったために長い間かけていた魔力制限を解除するに至ったのであった。

全魔力が一気に解放されたことにより、ユーノの体からは翡翠の魔力光が発生。

目の前に立つゼムナスとモニター画面を見ているなのは達は思わず片目を瞑ってしまう。

「こ、これは！？」

「この光は・・・何なの！？」

全員が魔力光に目をやられていると、やがて光はユーノの右手の人差し指に球体状に集まると何かの形に出来上がっていった。

光が収まり、ユーノの人差し指にあるその出来上がったものを見たなのは達は驚愕の余り言葉を失う。

「「「「「あっ！」」」」」

「「「「お！」」」」

「「「「何と！？」」」」

「「「！」」」」

「「「「あれは・・・！？」」」」

ユーノの目の前でそれを見ていたゼムナスも、思わずユーノに人差し指にあるものを恐る恐る尋ねてしまう。

「・・・な・・・何だ・・・それは・・・！？」

ユーノの右手の人差し指にあるのは、自身の魔力光と同じ色をした魔力を極限まで圧縮させて造られた手錠であった。

「“ハンドカフ・バインド”。お前を捕らえるための、手錠（バインド）だよ。」

モニター画面でユーノが作り出した手錠の形をした未知なるバインド、ハンドカフ・バインドを見ていた一同は、思わず唾を飲んだ。

「な・・・あれは・・・！？」

「おいおいマジかよ・・・店長のことだから、どんなバインドを用意してるかと思えば、まさか手錠かよ！？」

「手錠で・・・一体どうやってゼムナスを捕らえるつもりなんだろう・・・ユーノ！？」

フェイトはこのバインドの使い道を色々と考えては見たものの、手

錠で如何にしてゼムナスを捕縛することが出来るのかがまるで分からなかった。

だが、一方のユーノは右手にハンドカフ・バインドを持つと一つの輪から棘状のものを生成しゼムナスを睨み付ける。

「覚悟はいいかい？」

そんなユーノのハンドカフ・バインドを見ながらゼムナスは頭の中で思考を巡らせる。

「（手錠・・・手錠型のバインドか・・・初めて見る・・・あんな形のバインドは！？確かに、あの棘には攻撃能力はあるかもしれぬが・・・所詮は手錠に変わりない。能力的にも普通のバインドと大差はないはずだ。手錠と言うのはどう考えても・・・）俺にぴったりだ！！」

すると、ゼムナスは自信に満ちた表情を浮かべながらユーノに向って突進していく。

ユーノもゼムナスに向って突進していくと、そこで激しい肉弾戦が始まる。

ユーノはゼムナスから繰り出される高速パンチの連打を的確に読み取りながら、手錠の棘を使ってゼムナスの腕を切り付けるが・・・ゼムナスにはあまり効果が無かった。

「効かぬは！」

何故なら、体組織が傷つけられた瞬間から瞬時に傷口が高速治癒さ

れてしまうからだ。

「ちっ！」

舌打ちをしたユーノはその後もゼムナスと激しい攻防を繰り広げる。

モニター画面を見ながら、そのスピードにまともに着いていけるものは高速戦闘を得意とするフェイトやエリオ、恋次達死神かスクライア商店のメンバーだけであった。

「ユーノ先生！！」

「二人とも・・・何て速さだ！」

そして、暫くの攻防が続いていたが業を煮やしたゼムナスがユーノに渾身の一撃を加えようと右腕で攻撃を仕掛ける。

「くたばれ！！」

すると、ユーノが棘のある輪の方でゼムナスの腕を拘束する。

「！？」

「もう逃がさないよ！」

ユーノはハンドカフ・バインドを左手で持ちながら、右手にホイップバインドを生成して反撃をしようとした矢先。

「ふん。甘いな・・・」

ゼムナスは拘束された右腕の一部分を切り離して自由にすると、瞬時に切り離した部分を再生させる。

「！」

驚愕するユーノに、ゼムナスは渾身の一撃を拳に乗せて後方にある大木目掛けてユーノを殴り飛ばした。

大木に激突し、凄まじい衝撃がユーノの体に襲う。

モニター画面を見ていたザフィーラやなのは達一同はユーノの身を案じながら、先程のゼムナスの荒技に頭を抱えた。

「はっ！スクライア！！」

「何だったんだよ、今のは・・・！？人形の腕でも仕込んでやがったのか！？」

「いや、そうではないな。」

「え！？」

恋次やアギトの素朴な疑問に、シグナムが険しい顔で答え始める。

「ああ。あれは恐らく、蜥蜴の尻尾と同じだろうな。」

「どういう事だよ、シグナムの旦那！？」

「蜥蜴は、危険を察知すると自らの尾を切り下ろしてその後再生をするという。ゼムナスもそれと同じだ。」

「ですが、人間の腕と蜥蜴の尻尾が同じと言うのは・・・！」

ティアナはシグナムの仮設を聞くと、あまりに埒外な能力に疑問を抱いた。

「仮定ではあるが、奴は普段から魔力をリンカーコアの奥底に結界を施して封印をしていたと言っていた。もしも、その魔力によって瞬時に切られた箇所の細胞を復元させて復活させる高速治癒能力を持っていたとすれば・・・不可能な話じゃない。」

「で、ですけど・・・早過ぎませんか！？」

「我々の常識など、奴には一切通用せぬ。ゼムナス・フォーラム・・・何とも恐ろしい男だ。」

すると、なのはが大木に打ち付けられたユーノが徐にゼムナスの方へと向っていく姿を確認する。

「あ！！ユーノ君が！！」

ユーノの身を案じたのか、なのはは矢も盾も止まらなくなり、転送ポートに向かって走り出そうとした。

「なのはママ！」

「待て、なのは！！今行くのは危険だ！！」

ヴィータや恋次達が転送ポートに向おうとするなのはを止めにかかるが、当のなのはは抵抗しながら転送ポートに向おうとする。

「放してヴィータちゃん!!今行かなかったら、ユーノ君が死んじゃうよ!!私が助けに行かないで、誰がユーノ君を助けるの!?」

「バカ野郎!!お前だって分かってるはずだ!ゼムナスは並みの敵じゃねえんだ!浦太郎の腕を見ても分からないのか!俺達が行った所で、かえってユーノの足手纏いになるだけだ!!それに、こいつはあいつの誇りをかけた戦いなんだ。野暮な真似はするな。」

「誇りが何だって言うんですか!!そんなもの、命に比べれば・・・大したものじゃ・・・!!」

すると、そんななのはの言葉を聞いたルキアは自らの経験と十三番隊隊長、浮竹十四郎から教えをなのはにも話してやった。

「なのは。私の話を聞いてくれ・・・これは十三番隊、浮竹十四郎隊長の持論なのだが・・・お前が今ユーノ殿に力を貸せば、成程・・・それでユーノ殿の命は救われるだろう。だが、それは同時にユーノ殿の誇りを永遠に殺すことになるのだ。いいか、よく覚えておけ。戦いには二つあり、我々は戦いの中に身を置く限り常にそれを見極め続けなければならない。命を守るための戦いと・・・誇りを・・・守るための戦いと・・・!」

「・・・――――!」

ルキアが口にした誇りを守るための戦いという言葉を聞いた瞬間、なのはは今一度ユーノが何のために一人でゼムナスと戦っているのかを考えてみた。

すると、ルキアの言葉に補足する形で吉良がなのはにこう言った。

「今・・・彼は誇りのために戦っているんだ。結界魔導師の誇り。六課の誇り。そして何より、彼自身の誇りのために・・・つまらない意地と思ってくれて構わないよ。だけどお願いだ・・・彼を・・・このまま戦わせてやって欲しい・・・」

「・・・――――くっ!!（ユーノ君・・・・・・）」

なのはは、悔しい気持ちを何とか抑えてユーノがこの戦いで勝つことを信じてその場に留まることを決意した。

その頃、満身創痍の状態のユーノの怒りの炎は頂点に達していた。

「・・・よくも僕をここまで痛めつけてくれたな。」

「うふふ・・・それが?」

「あとでなのはに叱られるだろうが。傷がまた増えてるって。」

「うふふ・・・まだ分からないようだな?お前では俺には勝てない。」

すると、ユーノは手錠にぶら下がっている切られたゼムナスの腕の一部を見る。

「これがあるからかい?高速治癒に加えて、瞬時に体の一部を切り離す能力とは・・・随分珍しい力だ。でも、一度見せてもらえば充分だよ。」

「うふふ・・・俺の結界魔法はそんじょそこらの能力とは訳が違う。

魔導師の持つ魔力の限界強度と、人間の持つ限界強度の壁を結界爆破によってぶち破って、あらゆる生物のリミッターを超えた能力を生み出すことが可能。」

「ふ～ん・・・それで？」

「うふふ・・・だから、こんなことも出来る。」

すると、その時ユーノの手錠からぶら下がっていた切り離された腕の一部が高速治癒を始めてユーノの顔を鷲掴みにしながら身体が再生していった。

なのは達はこの光景を見るなり、背筋を凍らせた。

「莫迦な！！手だけの状態で、全身を再生できるというのか！？」

「信じられねえ・・・！？」

「ユーノ店長！」

顔を鷲掴みにされ続けているユーノであったが、咄嗟にホイップバインド使って再生しようとするゼムナスの体を崩壊させた。

「くっ！」

ゼムナスの体はまるで風船のように崩壊し、それを見ていた本体のゼムナスは大いに満足した表情であった。

「うふふ・・・やるな。だが、攻撃魔法を一切使えぬ以上・・・この絶望的な戦局を乗り越えることは不可能。その手錠だけで何が出

来る?残念ながら、そのバインドは俺の能力の前では相性最悪だ。もう諦めてくたばったほうがいい。」

すると、ユーノはニヒルな表情を浮かべながらゼムナスが思いつかぬような一言を口にする。

「・・・やれやれ。“攻撃魔法”なんて要らないんだよ。」

「?」

「今のこの僕に、最早攻撃魔法なんていらないんだよ。」

その時、ユーノの両手には何時の間にか二つに増えたハンドカフ・バインドが振り回されていた。

「何?ハンドカフ・バインドが!?」

これをモニターで見ていたなのは達も大いに驚いた。

「何時の間に二つに!?」

だが、驚きはそれだけではなかった。

何と、先程まで二つだと思っていたハンドカフ・バインドが全員が気付かぬうちに倍の四つに増えていたのであった。

ユーノはそれを器用に両手の人差し指で回しながらゼムナスにこう言った。

「結界魔導師の誇りも捨てたお前には、死よりも辛い制裁を与えて

あげるよ。殺人とその他諸々の罪で、お前を逮捕する。」

「二つやない・・・四つや!?」

「ユーノの奴、何をする気だ!?」

ユーノの行動の真意が全く読めないでいるはやてやクロノ達は、この後ユーノの恐るべきバインド拘束術をお目にかかることになる。

「抵抗は認めないよ。」

「うふふ・・・面白い手品だ。だが、ハンドカフ・バインドを幾ら増やしたところで、俺には通用せん!!」

そう言うと、ゼムナスは低い体制の状態から加速するや否やユーノに攻撃を仕掛けに行く。

ユーノもゼムナスに向って動き出すと、先程よりも更に速さを増した肉弾戦をゼムナスと繰り広げる。

最早、フェイト達ですらその攻防のスピードを目で追うことすらままならない状態であった。

「は、速い!!」

「何て奴だ・・・!さっきよりも攻撃のスピードが上だ!!」

しかし、ユーノはなのは達では決して真似できぬほどの反射神経と読みの速さで的確にゼムナスの拳を開始していく。

「だが、流石店長ですな。全部見切っています。」

そして、ユーノはそのまま両方の手錠をゼムナスに嵌める。

「無駄無駄！！バインドを幾つ填め様と同じことの繰り返しだ。」

「僕も同感さ。十や二十ならね・・・・・・」

「ん！？」

すると、その瞬間・・・・・ユーノが握っているハンドカフ・バインドが強い光を発すると同時に無数の手錠がゼムナスの腕に現れていった。

「な、何！！！」

「こ、これは！？」

なのは達が驚愕する中、ハンドカフ・バインドはその後も増え続けていきゼムナスが体を切り離すよりも早く腕から足、体全てを手錠が嵌めていく。

「ま、間に合わん！！体を切り離すよりも早く、手錠が！！！！」

と、ゼムナスが気付いたときには大中小さまざまな大きさのハンドカフ・バインドが全身を拘束し、首と両腕、両足に嵌められた手錠から伸びたチェーンバインドをユーノが握っていた。

「なななななな何だこれは！！！！！！」

「捕まえたよ。」

ゼムナスの動きを完全に封じたニヒルな表情のユーノを見ながら、モニターを見ていた前線メンバーはその脅威のバインドの能力に唖然とした。

「て、手錠が・・・強固な拘束具のように!?」

「何て技だ・・・!?」

「ゼムナスが蜥蜴の尻尾切りをするスピードを・・・ユーノ先生の魔法がそれを上回ったって事!?」

ティアナを始め、フォワードの五人はこんな荒技をやってのけるユーノの隠れた魔法の才能にただただ驚愕し、クロノは些か動揺しながらも冷静に結界魔導師というものについて語りだす。

「結界魔導師は、その名の通り結界を始めとする拘束魔法や補助魔法の達人だ。しかし、まさかあんな形態になるバインドは僕も初めて見る・・・ユーノのオリジナルか・・・!?」

また、ハンドカフ・バインドで全身を拘束されたゼムナスは動揺を隠し切れないで居た。

「こ、こんなバインド・・・聞いていないぞ!!!」

すると、そんな動揺を見せるゼムナスに向ってユーノは自身の役職、結界魔導師というものについて、自らの経験から次のように口にした。

「ゼムナス・・・結界魔導師って言うものがどう言うものか分かるか？前線で攻撃を行う魔導師が安全且つ安心して攻撃が行えるように、前後に被害が及ばぬようにするのが僕らの務めだ。それすらも分からなくなって、結界魔法をあろうことか人殺しの道具にするとは・・・哀れみに値するよ。さて、締め上げよう・・・」

そう言うと、ユーノは三つの鎖を徐に引いてゼムナスに嵌められた全ての手錠でゼムナスの全身を締め上げていく。

身体が締め上げられることによって、呼吸がままならなくなり体のあちこちが悲鳴を上げるゼムナスの顔からは多量の汗が流れていた。

「ぐっ！！！締まる！！！！！！聞いてない！！！！！！こんな技があるなど聞いてないぞ！！！！！ユーノ・スクライアがこんな魔法を使えるなんて！！！！！！苦しい！！！！！！誰か助け・・・！！！！！！」

そんなゼムナスの苦しむ姿を呆然と見つめていた恋次であったが、鼻で笑うと改めてユーノの実力の凄さに感服する。

「（ふん・・・お前らしいな・・・ユーノ。伊達に今迄結界魔導師として活動してきたわけだぜ。その上、こんなオリジナルのバインドまで生み出しちまうとは・・・つくづくテメーの頭はどうかしてるぜ・・・）」

やがて、ゼムナスはとうとう呼吸が出来なくなってしまい泡を吐くと瀕死の状態になってユーノが力を抜くと同時にそのまま地面に倒れこんだ。

ユーノは殺さない程度に加減をすると、泡を吐いているゼムナスに

近付き次のように語る。

「思ったよりも情けないね・・・それでも一流の結界魔導師ゼムナス・フォーラムなのかい？悪いが・・・お前と僕とじゃ、力の差は火を見るよりも明らかだ。」

「くっ・・・くそ・・・まだ・・・俺は・・・！！」

ユーノのその言葉に腹を立てたのか、ゼムナスは悔しげな顔を浮かべながら往生際の悪い言動を口にしようとする。

そんなゼムナスを見ながらユーノは溜め息を吐く。

「往生際の悪い奴は、嫌われるけど？」

「まだ・・・だ・・・未だ俺には・・・やるべきことが・・・ある・・・俺には・・・やるべき・・・ことが・・・」

と、その時だった。

この森の中から感じる尋常ならない巨大なエネルギーの反応をユーノは確かに感じ取った。

「！？」

そして、ゼムナスの感情に答えるかのようにゼムナスの叫びによってエネルギーの大きさが最高潮に達した。

「あるんだ！！！！！！！！！！！！！！」

そう・・・このエネルギーの正体こそが言うまでもなくアンゴルモであったのだ。

アンゴルモアは強い光を放ちながらゼムナスの下へと飛んでいき、ユーノは咄嗟にゼムナスの近くから離れた。

一方、同じ頃六課のほうでもアンゴルモアの発動に焦りを見せていた。

「な、何だ一体!?」

「このエネルギー反応は・・・アンゴルモアです!!」

「何やて!?」

ユーノは光が目に入ってくるのを右腕で隠しながら、アンゴルモアと融合を果たそうとするゼムナスの方を凝視する。

「こ・・・これは・・・!?（この世界で行方不明となっていたアンゴルモアが反応し・・・ゼムナスの思いに引かれて・・・発動したのか!?）」

「おあああああああああああ!!!

ユーノも思わず身構え、何も見えなくなったゼムナスの攻撃を警戒する。

モニターでゼムナスの姿を見ていたなのは達であったが、アンゴルモアのエネルギーによってカメラが異常をきたしてしまい、何も見えなくなってしまった。

「な・・・何も見えない・・・・！？」

「どうなってるんだよ、あっちの様子は！？」

「映像・・・回復します！！」

リィンがそう言うと、徐々にモニター画面に向こう側の様子が克明に映し出される。

「うふふ・・・うふふ・・・感じるぞ・・・感じるぞ・・・これが力・・・これが我だ！！！！！！！」

「なっ！？これは・・・！」

その時、ユーノとなのは達が目の当たりにしたのは・・・・・・体長４００メートルを誇る程いまで巨大化した、漆黒の翼と鎧のような体をした怪鳥の姿をしたゼムナス、ＡＭ１８であった。

「うわあはははははは！！！！！！何だこの力は！？全身から漲るこの力は何だ！？だがこれで・・・貴様如きに遅れは取らぬ・・・行くぞ！！！！！！」

ＡＭ１８はユーノに向って真っ直ぐ突進していく。

ユーノは体を飛行魔法で宙に浮かばせると、ＡＭ１８の攻撃を回避しながら印を結んで取って置きの結界魔法奥義を発動させる。

「“我、使命を受けし者なり。深き眠りから目覚めし爆鎖の龍よ、闇は光に、雷牙は筒に。そして、大いなる戒めを与えたまえ”」

すると、ユーノの足元に魔法陣が現れると同時にＡＭ１８の真下の地面にも計５つの魔法陣が現れ、魔力が急上昇する。

「ほっ！？」

「ユーノの魔力量が・・・今迄よりも上昇している！？」

「何をするっていうんだ、あいつは！？」

怪訝そうな顔でユーノが行おうとすることをじっと見つめるなのは達。

そして、ユーノは全ての準備が整うと地面の魔法陣に指を向けてこう口にする。

「いでよ、結界龍。主ユーノ・スクライアの名の下に！『チェーン・ディストラクション・ドラゴン』！！」

すると、その瞬間・・・５つの魔法陣からチェーンバインドで出来た五体の龍が出現しＡＭ１８を覆い囲んだ。

「あれは！」

「チャーンバインドで形作られた・・・龍！？」

五体のチェーン・ディストラクション・ドラゴンを目の当たりにしたＡＭ１８は全てを叩き潰そうと両翼から強力な風圧を起こす。

「賢しいわ！！！！！！！！」

しかし、チェーン・ディトラクション・ドラゴンは風圧にも屈せずに逆にＡＭ１８の体にしっかりと巻きつき体の自由を奪う。

「な、何！？」

「今度はそうはいかないよ。」

すると、ユーノは印を結びながら魔法陣を展開すると五体の龍の魔力を限界ギリギリのところまで高めて、それを一気に爆発させる。

「“チェーン・カタストロフ”！」

その瞬間、ＡＭ１８に巻き付いていた五体のチェーン・ディトラクション・ドラゴンが連鎖反応を起こすかのように次々と大爆発を起こす。

「のあああああああああああああああ！！！！！！！！」

「鎖の龍が・・・次々に連鎖反応の如く爆発していく・・・！？」

「これがこの魔法の効力か！？」

ＡＭ１８は爆発の効果によって、大火傷を負いながら多量の血を流

していた。

先程まで風圧を起こしていたあの悪魔のような翼は、既に燃えてなくなりかけている。

「ぐあああああああああ！！！！！！！！！何故だ！！！！！！！！！何故我が！！！！！！！！こんな！！！！！！！！こんな優男に！！！！！！！！！」

ＡＭ１８は爆発の影響で体に相当なダメージを受けてしまい、何とか飛行を続けようとしたがそれも出来なくなり、そのまま重力に従って地面に落下していった。

「よし、今だ！」

そう言うと、ユーノは地面に食い込んだ巨大なＡＭ１８の周囲を特殊な結界で封じ込めると、印を結びながら詠唱を始める。

「“妙なる響き、闇となれ。邪に染まりしその円のうちに、永遠の地獄を与えたまえ”」

すると、ＡＭ１８を囲む結界が漆黒に染まっていきＡＭ１８そのものを見えなくしてしまう。

そして、ユーノは魔力を漆黒の炎へと変換し、それで相手を封じたまま焼き殺す封殺型結界魔法を発動させた。

「『エーヴィッヒ・シュラーフ』」

技の発動と同時に、漆黒に包まれた結界の中ではＡＭ１８の焼かれ

て苦しむ喘ぎ声が聞こえ始めた。

「のあああああああああああ！！！！！！！！！！！」

ユーノはその声を黙ったまま耳に入れ、声が聞こえなくなるまで待ち続けた。

そして、完全に声が聞こえなくなったことを確認するとユーノは指を鳴らして結界を破壊した。

破壊された結界からは、全身を黒焦げにした元の姿に戻ったゼムナスと分離されたアンゴルモアが宙に浮かんでいた。

ユーノはアンゴルモアに封印処理を掛けて素早く回収すると、仰向けで大の字の姿で何故か笑みを浮かべる全身黒焦げのゼムナスを見下ろす。

「・・・・・・――――――」

「うふふ・・・わ・・・解らないって表情（ツラ）をしてるな・・・」

「・・・ゼムナス・・・お前・・・」

すると、ゼムナスはそんなユーノを見ながら笑いを止めて自分の思いの丈を素直に放し始めた。

「・・・悔しかったんだよ・・・誰からも認められることも無く、まるで道具のように扱われるそんな生活と人間関係に嫌気が差し・・・気がついたらこの様だ・・・だから証明したかった・・・お・・・俺がこの手で・・・結界魔法を愚弄する馬鹿共に・・・こいつが役

立たずじゃないってことを・・・だが、それもお前に敗れたことで・・・それも出来なくなっちまった・・・」

その時、ユーノはゼムナスの言葉に偽りがある事に直ぐに気づいた。

「・・・ゼムナス・・・お前は僕に嘘をついているだろ？」

「何・・・？」

「もし、お前がそんなことを思っているのなら・・・誇りにしてる結界魔法を誇りを踏みにじるようなあんな使い方するはずが無いだろ。そうじゃない・・・本当はお前・・・単に“孤独”から抜け出せずにいて苦しんでいたんだろう。」

「なっ！？」

ゼムナスは、ユーノにまさか自分が抱えていた本当の苦しみを言い当てられたことに、驚愕していた。

「強い力を持つものは何かしらの迫害を受ける。お前とて同じだろ？管理局に勤めている間、誇りにしていた結界魔法にお前は何時しか恐れを抱くようになった。周りもまた同じように・・・いっそのこと捨ててしまえば楽になれるとも考えた。だが、一度踏み込んだ世界からはそう簡単に抜け出せるはずも無かった。そんなジレンマに苦しみ続けるうちに、お前の心は歪んでいき、何時しか殻を作ってそこに閉じこもった。“自分自身”という結界を張って。そして、湧き上がった狂気に躍らされた・・・違うか？」

「・・・・・・――――――」

俺と奴らとは住む世界が違う――――俺は選ばれた人間なんだ。

孤独を受け入れられず、孤独であることを人の所為にした。

人から拒絶されることを恐れ、自分から拒絶した。

傷つくのを恐れ、孤独な好きな芝居をした――――心に壁が出来ていく。

その癖宙ぶらりになった自己顕示欲だけが、日増しに大きくなっていく――――他者に認められたい――――認められてもまだ満足できない、俺はもっと出来る、俺はお前らとは違う！

思い知らせてやる――――俺と言う存在を！！

ああ・・・ユーノ・スクライア、お前の言う通りだ。

いつの間にか忘れていた――――俺が本当に欲しかったもの・・・・・・

地位や名誉、武功でも才能でも、自分を認めてくれる理解者でもない――――・・・

俺は只・・・・・・誰かとなりに居てほしかった。

ただ・・・誰かに見て欲しかった・・・ただ・・・一人が嫌だった・・・ただ――――

正面から受け止めてくれる仲間――――――――正面から俺を見、ぶつかってくる奴。

ただ・・・本当の仲間が欲しかった――――――――それだけなのだ。

「・・・うふふ・・・そうだな・・・お前の言う通りだ・・・俺は只・・・孤独だったのだ。誰からも受け止めて貰えず、俺自身も誰ともぶつかっていけなかった・・・だから、己という結界に閉じこもり、力に心酔することでそれを忘れようと足掻いていただけに過ぎん・・・結局・・・俺は何も分かっちゃいなかったんだ・・・何一つ・・・結界魔導師・・・ユーノ・スクライア・・・お前に言われるまでは・・・」

「・・・・・・――――――――」

すると、ゼムナスの目から一粒の涙が零れ、ユーノに完全敗北をしたことを自ら認めたのであった。

「・・・俺の負けだ・・・――――俺は狂気に躍らされ本当の自分を失っていた・・・完敗だ・・・ゼムナス・フォーラムは結界魔導師ユーノ・スクライアに・・・完全に敗北した・・・そして・・・礼を言うぞ・・・・・・“すまなかった”・・・・・・」

すると、ユーノは先程までの険しい表情を些か和らげると、ゼムナスに手を差し伸べる。

ゼムナスもユーノの意外な行動に驚愕したが、そんなゼムナスに向ってユーノはこう口にした。

「・・・ゼムナス・・・これからお前を待っているのは牢獄という名の結界であることは間違いないだろう。だが、忘れないでくれ・・・お前はもう一人である必要は無いんだ。同じ結界魔導師同士・・・

今度は志同じく、再び心を通い合わせることが出来る。お前の隣には・・・僕が立ってあげるよ。」

その瞬間、ゼムナスは歓喜の余り先程よりも多くの涙を流しながらユーノの手を強く握りしめながら、嬉しさを抑え切れなくなった。

「・・・・・ありがとう・・・・・・重ね重ね・・・・・・すまぬことをした・・・・・・」

こうして、元時空管理局本局ゼムナス・フォーラム准尉は・・・結界魔導師ユーノ・スクライアの手による、第１９３管理外世界『孤』にて午前０時５５分・・・捕縛。

結界魔導師ユーノ・スクライア（後書き）

教えて、ユーノ先生！

ユ「今日は、色んな結界魔法や補助魔法についてね♪」

ユ「これらは使いようによっては強力な武器にもなりうるんだ。攻撃魔法だけが全てではないということだね♪では幾つか紹介していくね。」

ユ「鎖状のバインドで相手を拘束するチェーンバインド。通常のバインドに、対象の魔力を打ち消す力を秘めたストラグルバインド。鞭上の形をした、使いようによっては武器にもなるホイップバインド。」

ユ「そして、今回僕が使ったオリジナルの拘束魔法ハンドカフ・バインド。これは、魔力を圧縮した手錠で相手を嵌めることは勿論、数を無数に増やして身動きを取れなくしたりもするんだ♪」

ユ「極めつけは、拘束魔法であると同時にそれ自体が攻撃能力を秘めた僕の奥の手、チェーン・ディストラクション・ドラゴン」

ユ「あまり、使う機会がない技なんだけどね。」

恋「にしても、バインドって使い道が色々在るもんだな。なぁ、ユーノ。俺は昔から鬼道が下手糞なんだ。代わりにこいつ教えてくれよ。」

ユ「無理ですよ。恋次さんのリンカーコアではこれは使いこなせま

せんし、はっきりいって才能はありませんよ♪」

恋「のあああああ！！！！！そんなあああああ！！！！！」

吉「気の毒に・・・」

魔導師図鑑ハイパー！

恋「最近翌朝キツイんだよな。」

ユーノ・恋次・吉良が六課の廊下を歩いていると・・・

局「お早うございます、ユーノ先生！」

ユ「あ、お早う。」

恋「今のって・・・クロノのところのクラウディアクルーじゃなかったか？」

ユ「そうなんですよ♪この間の事件（本局襲撃事件）以来、仲良くなっちゃいまして♪」

吉「そうそう。クロノ提督が妙にユーノさんのこと意識してるんですよ。『僕に対して、クルー達の尊敬の念が減った』とか言って。」

ユ「気にする必要は無いのに・・・」

恋「クロノが尊敬されてたとも、思えんし。」

吉「何気に酷い事言うよね・・・君も。」

灰頭篇登場人物

ゼムナス・フォーラム／ＡＭ１８

声　一　大塚明夫

元時空管理局本局所属の准尉で、指折りの実力を有した結界魔導師。主義や思想などは持たず、強い殺人欲のみで動く危険人物であるが、ただの狂人ではなく独自の殺しの美学を持つなど知的な一面も覗かせている。白目と黒目が逆転した目付きと、「うふふ」「うふわははは」という独特の笑い方が特徴。初めは結界魔道師としての誇りを持ち合わせており、結界を守る事の為に使っていたが誰にも認めてもらえないことや、強すぎる力を恐れられるあまり孤独になってしまい、そのトラウマが原因で管理局を抜け出し殺人という形で自分の存在理由を認めてほしいと希うようになり、それが結果的に精神に異常をきたすようになってしまう。。管理局を辞めてからも、高官暗殺人「灰頭」として殺人を続けていた。標的を暗殺する際は、まず予告状を送りつけ、あえて標的に厳重な警護をさせ、その中に単身で斬り込み任務を達成すると共に、己の欲望を満たしていた。

ユーノとの対戦

ゼムナスから予告状を送り付けられたエルゴ・カーチェスの警護をレオーネ・フィルスから依頼されたユーノが、浦太郎と共にカーチェス邸で待つ中、ゼムナスと邂逅することになる。カーチェス邸では浦太郎がゼムナスのバインドを封じるも、ニードルバインドでゼムナスが浦太郎の腕を貫いて重傷を負わせ、逃走。その後、ユーノ一人を誘き出す形で第１９３管理外世界「孤」に召喚させ怒りの募ったユーノと再戦することになる。長年結界魔法を戦闘で用いていなかったユーノと、結界魔法で人を殺し続けてきたゼムナスとの間には歴然たる実力差があり、初めの内はユーノはゼムナスに歯が立たなかった。ゼムナスはその差を決定的なものにするために管理局を抜ける以来１５年ぶりの使用となるリンカーコアの奥底に特殊な結界で封印していた人間本来の能力と魔導師の能力を解放させ、強い暗示によって肉体そのものを最終兵器へと変化させるマインドスキャン影技・マインドリレイションを発動して闘いさらに追い詰める中ゼムナスは「それならばあの高町なのはとか言う奴に後れを取るのも分かる」と、そのまま攻撃することをせず、ユーノの感情を高ぶらせ、ユーノ・スクライアの真の実力を覚醒させた。覚醒したユーノは魔力リミッターを解除したことでハンドカフバインドと言う手錠型のバインドを多数に増殖、全身を拘束して形勢が逆転する。その後、ゼムナスの負けたくないと言う強い想いに引き寄せられた「孤」にあったアンゴルモアが反応し、ゼムナスを怪鳥の姿へと変貌させるも、チェーン・ディストラクション・ドラゴンとエーヴィッヒ・シュラーフをその身に受け戦闘不能の状態に陥る。結局ゼムナスは「孤独から抜け出せずにいた」という事実をユーノに見透かされ、殺人鬼としてではなく同等の結界魔導師としてユーノと心を分かち合い後悔も無く涙を流しながら『すまなかった』と言い残し、捕縛される。このゼムナス・フォーラムの事件は後に「灰頭事件」と呼ばれ、ユーノ・スクライアの名と強さをより強く上層部に知ら

しめるものとなった。

使用魔法

ユーノと同じく結界魔導師であり、バインドや結界魔法を使った攻撃が主流。また、マインドリレイションによる驚異的な身体能力の上昇も強さの秘訣。

ホイップバインド（Ｗｈｉｐ　Ｂｉｎｄ）

鞭状に形作られた魔力で相手を拘束・時には攻撃可能なバインド系補助魔法。

ニードルバインド（Ｎｅｅｄｌｅ　Ｂｉｎｄ）

生成したバインドを尖らせて殺傷能力を持たせる。

超圧縮結界ーユニトリスー（Ｙｕｎｉｔｏｒｉｓ）

結界内に閉じ込めたものを圧縮させてそのまま崩壊させる結界魔法の上位種。Ｓランククラスの封殺型結界。

ゾーンデリーター（Ｚｏｎｅ　Ｄｅｌｅｔｅｒ）

移動能力を秘めた動物に酷似した魔力の塊を相手にぶつけて爆発させることで、相手に致命傷を負わせるＡＡＡクラスの特殊魔法。

マインドスキャン（Ｍｉｎｄ　Ｓｃａｎ）

別名を心読みの術と言い、結界魔法における上位魔法であると同時

に最も不気味で恐れられる相手の心を掌握する上位心情拘束魔法。眼から気を発し、相手の眼に叩き込み金縛り状態にする瞬間催眠術。同じ結界魔導師同士の戦いや発動時の術者と等しい結界魔法を使用すればかからない。

マインドリレイション（Ｍｉｎｄ　Ｒｅｌａｔｉｏｎ）

マインドスキャンで己に暗示をかけ、リンカーコアの奥底に特殊な結界で封印していた人間本来の能力と魔導師の能力・全ての潜在能力を解き放つ技。ゼムナスは管理局を抜ける時と、結界魔導師としてのユーノと戦った時に使った。使用後は全身を漆黒に染めた背中から魔力で出来た悪魔の翼を生やす。そして、傷ついた箇所を魔力による瞬時に回復することが出来る。

関連キャラクター

エルゴ・カーチェス

声　一　西村知道

時空管理局地上部隊の幕僚長で、レオーネの幼馴染でもある。「陸軍省にその人あり」と言われているらしい。しかし、実際はユーノの前では頭が回らず無限書庫に資料を請求をする際はその都度土下座をしていたらしい。ゼムナスから予告状を送られて殺されかけるも、ユーノと浦太郎の活躍により助かった。

アイザック・ローズ

声　一　松野太紀

本局の法務顧問会所属でレオーネの側近。機動六課に訪れた際に、ユーノに今回の事件についての懇願を申し出てきた。

夏休み企画・機動六課大合宿（前編）（前書き）

ホントすみません。

海の話を書こう書こうと思ってずっと書いていませんでしたから、割り込みで載せておきます。

全部多分三部構成になると思います。

ユ「とうとうなのはの水着姿が拝めるのか・・・・・・いけない！僕が淫獣フェレットって呼ばれてること忘れてた！！ああ！！！どうしよう！！ネット上でまた叩かれる！！」

一「いつまでも気にしてたら身がもたねぇぜ。取りあえず、本編始まるぜ。」

な「ユーノ・スクライア外伝　夏休み企画編・・・・・・始まります♪」

夏休み企画・機動六課大合宿（前編）

それは、ユーノ・スクライアの活躍により、凶悪な恐慌を続けていたゼムナス・フォーラムが犯人の灰頭事件が無事に片付いた数日後のことだった。

平時の通り仕事をしていたユーノ達の元に、なのはを始め六課の女性陣が機嫌のよさそうな態度で近づきある意外な事を口にしたが始まりだった。

「え、全体休暇が取れたって？」

なのはから伝えられたその言葉を聞き、つい聞き直す

「そうなんだよ、ユーノ君♪ミゼット提督が本局の方に最近頑張ってる私達にご褒美を挙げてもいいじゃないかって話しになってね！」

「何と、一泊二日の慰安旅行をプレゼントしてくれることになりま

した。」

「しかも、場所は海鳴の街が一望できる海が近くの旅館や！」

なのはの後に続く形でフェイトとはやてが補足する。

三人の話を聞き、意外そうな顔を浮かべるユーノを含めた男性陣。

「へぇ～～～随分太っ腹だね、上層部も。」

「やるときは、やる連中だってことがよく分かったぜ。」

「そうだね。で、それって僕達も休暇を取ってもいいってことでいいのかな？」

吉良が若干不安げな様子でそう尋ねると、ルキアが肯定の返事をする。

「ああ。我々死神とスクライア商店のメンバーを含めた機動六課前線メンバーが対象となっている。出発は二日後の朝９時だ。」

「なのは、ちょうど良い機会だしヴィヴィオを海鳴りの海で遊ばせてあげようか。」

「うん♪」

ユーノの一言を聞くと、同じ考えに至っていたなのはも上機嫌な様子で首を縦に振った。

「となると、どうせなら人は多いほうが盛り上がるな～～～ユーノ、

一護に連絡して都合聞いてみろ！」

と、恋次がそう言った直後ルキアが言葉を発した。

「それなら既に、私が井上に連絡を入れた。一護も井上もオーケーだそうだ。」

「序に、なのはちゃんの家族とアリサちゃんとすずかちゃん、それにクロノくんの奥さんのエイミィさんとアルフも現地で合流や！」

「そう言うことに関しては、行動が早いね・・・・・・」

ふとそう口にしたユーノ。

すると、唐突になのはが顔を赤くしながら躊躇った様子でこう言って来た。

「それで、ちょっとお願いがあるんだけど・・・いいかな？」

「ん。何だい、なのは？」

「え～と・・・これから・・・その・・・女性陣だけで先に現地に行って下見をしたいのと当日の水着を買に行きたいくてその・・・」

「つまりは、俺達に留守番しろって訳か？」

「頼まれて、くれます？」

なのはやフェイトの言葉を聞き、顔を見合わせた男性陣は思わずため息をつく。

そして、些かこうなることも予見したようにこう言った。

「大方見当はついていたが・・・・・・」

「いいよ、別に。買ってきなよ♪」

「本当!?ありがとう、ユーノ君♪」

「そんじゃ、私らはちょっくら地球で買い物してくるさかいな。スバル、ティアナ、ギンガ、キャロ、行くで！」

「「「「は、はい！」」」」

こうして、ユーノ達からの許諾を受けたなのはを始めとする機動六課前線主要メンバーは早速第９７管理外世界『地球』の海鳴市に向けて私服に着替えるや否や旅立った。

なのは達が居なくなり、急に静まり返った隊舎の中でエリオはふとこんな事を呟く。

「女性って・・・沢山集まると凄いですね・・・」

「今更気付いたのかい、エリオ？」

「でも女を見縊るなよ～～～あとで痛い目に遭うからな。」

「女性に縁がないピーチがそんなことを口にするとは思ってもいなかったである。」

「どういう意味だ!!!」

鬼太郎は白鳥の言葉に憤慨すると、そこからどうしようもないぐらい実にしょうもない喧嘩を勃発させたのであった。

これには流石に、ユーノを始めとする面々は呆れかえって仲裁に入ることすら億劫と感じてしまった。

その頃、喧騒とする六課とは裏腹に現地、地球の海鳴市に降り立ったなのは達女性陣はと言うと、あらかじめ待ち合わせをしていたなのはの母親、桃子と姉である美由紀、更にはなのはの親友のアリサ・バニングスと月村すずかを始め現地の縁のある人物を待つために駅前の方で佇んでいた。

些かその容姿端麗な彼女を起点とした女性の群れは男子たちの格好の目の行き場となっていたことは間違いなかった。

暫くなのは達が辺りを見渡してその人物たちが到着するのを待っていると――――

「え～と・・・あっ！お母さん、お姉ちゃん!!」

「アルフ!!エイミィ!!」

なのはとフェイトがそう声を発すると、彼女の母親である桃子と姉の美由紀、更にはフェイトの使い魔アルフ、クロノの妻のエイミィ・ハラオウンが到着する。

「なのは!!」

「お帰り、なのは！！」

「フェイト！！！久しぶり！！」

アルフはあの事件以来なかなか時間を共に出来ていない自分の大好きな主人、フェイトに向かって飛びつき、フェイトはそんな使い魔を優しく受け止め抱擁する。

桃子と美由紀は久しぶりに再会を果たすなのはと固いハグを交わし、なのはも上機嫌な様子で二人との再会を大いに喜んでいた。

そんな中、スバルとティアナは桃子に関して共通の見解を抱いていた。

「（相変わらずなのはさんのお母さん、若！）」

「（本当ね・・・）」

以前の任務で、桃子の容姿端麗且つあまりの若々しさをその目でしっかり焼き付けた二人にだったが、四年という時間が経った今でも若々しさを保つ彼女の美貌には正直恐ろしさを覚えた。

「久しぶり、なのは！！元気にやってる？」

「うん！元気元気♪見ての通りだよ！」

「ほんと、元気そうでよかったわ。ところでなのは。はやてちゃんから聞いたわよ。とうとうユーノ君に告白したようね♪」

「お、お母さん！ちょっと！！あんまりからかわないでよ！！」

悪戯な笑顔を見せ自分をからかう母の態度に娘のなのはは思わず素の感情を赤裸々に暴露し、この時ばかりは機動六課のスターズ分隊隊長と言う肩書を忘れて娘の姿に戻った。

その横で、アルフとエイミィはフェイトの会話をしていた。

「久しぶり、フェイトちゃん。暫く見ないうちにまた胸が大きくなって。」

「あはは・・・えと・・・どうかな・・・!?」

エイミィが発した言葉に思わず顔を赤くしながら曖昧な様子でそう答えるフェイト。

アルフはそんなフェイトを嬉しそうな様子で見ながら、自分と同じぐらいの背丈になっているリィンとアギトに向かって挨拶を交わす。

「リィンとアギトも久しぶりだな。二人とも、その服可愛いぞ。」

「有難うございますですよ、アルフ!!」

「アルフこそ、相変わらず元気そうだな!!」

三人は笑顔で談笑を交わし、非常に貴重な時間を堪能した。

やがて、なのははこの場にはまだ来ていないアリサとすずかのことを徐に尋ねた。

「そう言えば、お姉ちゃん。アリサちゃん達は?」

「もう直ぐ来ると思うけど・・・あ、来た来た！」

美由紀がそう言うと、肩で息をしながら小学校時代からのなのはの親友である現在は社長令嬢のアリサ・バニングスと月村すずかの二名が到着する。

「ごめん、ごめん！遅くなりました！！」

「なのは！フェイト！はやて！」

「アリサちゃん！！」

「すずかちゃん！！」

なのはとフェイト、はやての三人は二人の元に駆け寄りすっかりご無沙汰となっていた2人と友情の握手を交わした。

「なのは！！久しぶり！！ほんと、ご無沙汰だったじゃない！！」

「にゃはは。ごめんね、色々こっちも忙しかったものだから。すずかちゃんも、久しぶり！」

「うん！元気そうでよかったよ、なのはちゃん。フェイトちゃんもはやてちゃんも久しぶり！」

「うん。すずかもアリサも元気そうでよかった。」

「すずかちゃんはホンマ髪つやつやでええな。アリサちゃんもいい感じ胸膨らんで・・・」

と、半分本気な様子ではやてが獣の如く鋭い目でアリサの胸に視線をずらしながら手を構えた直後、すかさずアリサははやての腕を掴んでこう言った。

「おっと！公の場でそんなことしたらどうなるか分かってるでしょうね・・・はやて・・・？」

全身から感じ取れるアリサの凄まじい殺気に恐怖を覚えたはやてはその瞬間、身も心も凍りついた。

「あ・・・はい・・・じょ、冗談やでアリサちゃん！！あはははは！！！」

そんなはやての様子を窺いながら、ヴィータふと心の中でこう思った。

「（間違いなくマジだっただな。あれは・・・）」

すると、アリサは徐になのはの横に立つ比較的背丈の小さいルキアに目を向け、徐に尋ねる。

「えっと、なのは。そちらの女性が前に話してた・・・？」

「そ。朽木ルキアさん。今、機動六課で協力してもらってる死神さんね！」

「初めまして。護廷十三隊六番隊副隊長、朽木ルキアと申します。」

「あ、これはこれはご丁寧に！アリサ・バニングスです。なのはの

親友の一人で、こっちは月村すずか。」

「よろしく、お願いします。」

アリサとすずかはルキアの挨拶につられて自分たちも自己紹介を済ませると、軽く握手を交わし、今度はフェイトがルキアになのはの母親と姉についての紹介を行う。

「ルキアさん、こちらがなのはのお母さんの高町桃子さん。隣が、お姉さんの美由紀さん。」

「初めまして。」

「よろしくお願いします！」

笑顔で挨拶を交わす二人に、ルキアも純粋な笑顔で言葉を返す。

ちなみに、エイミィとアルフに関しては既に紹介を受けているので別段問題はなかった。

すると、徐にキャロが周りの異様な女性陣の密度の高さに思わずこう呟いた。

「しかし、こうして見ると・・・女性陣の人口密度が此処だけ異常に高いですよね。」

「正に女の園って奴だな。」

「だが、むさ苦しい男がいないのは悪くはない。」

と、シグナムが呟いたその時、機動六課の方で仕事をしながら留守を任されていたユーノを始めとする男性陣一同は一様にくしゃみをしたのであった。

「「「「「「「へっくしゅん！！」」」」」」」

そして、再び場面を海鳴の方へと戻すことにしよう。

「さてと、はやてちゃん。そろそろ水着の買出しに向かいましょうか？」

シャマルがそう言うと、はやてもその言葉を聞き入れる。

「せやな。それじゃ、早速移動開始や！」

はやては部隊長らしく先頭を切って歩きはじめ、なのは達一同ははやての後ろに続く形でその場から歩きはじめる。

歩きながら、なのははふとこの場には来ていない織姫に関してルキアに質問をぶつける。

「そう言えばルキアさん、織姫さんは来られないんですか？」

「生憎仕事の都合で買出しにはこられないそうだ。だが、当日はちゃんと一護と一緒に来るから安心しろ。」

「そうですか。なら安心ですかね♪」

ほっと胸を撫で下ろすなのは。

織姫もなのはにとって見ればユーノで言うところの一護みたいな存在で、自分にとって見れば美由紀とはまた違うお姉さんのような人なのだ。

暫く歩きつづけていると、徐にアリサが足と止めて目的の場所を指さした。

「あ、此処だわ！いい水着が沢山置いてある店は！」

アリサはそう言いながら、目の前に広がってくる水着を専門に扱う店の看板をっゆびさし、全員はそれを見ると顔を綻ばせて胸を躍らせた。

「わっは！早く入りましょうよ！」

「そんなに興奮するんじゃないわよ・・・恥ずかしい。」

ティアナはそう言いながらスバルの事を軽く注意するのであったが、内心一番ドキドキしていたのは彼女の方であった。

と言うのも、実は彼女今回の海水浴に関してある一つの悩みを抱えていた。

それは、ヴァイス・グランセリック陸曹長に対して抱く胸を掻きたてるような奇妙な恋心のようなそうでないような正直奇妙な感覚だ。

ティアナはそんなヴァイスへの感情を抱きつつ、目の前に陳列された水着のうちの一つを取って顔を赤くしながら真剣に悩んでいた。

「（どうしよう・・・派手過ぎるかしら？でも、折角の海なんだし

ちょっとくらい頑張っても・・・いやでも、お臍を見せるのは流石にまずいかも!!それで、ヴァイス陸曹長に軽い女みたいな目で見られたりしたら・・・!!）」

そんなティアナの事を横で水着を選びながら見ていたスバルはいつのも感じでこう言って来た。

「ティア、何悩んでの？スタイルいいんだし、ここは積極的にアプローチしないと損だよ♪」

「う、うっさいわね!!アンタに言われたくないわよ!!」

ティアナはツンデレモード全開で隣のスバルにそう言った。

また、そのスバルの横ではギンガはティアナとはまた違い別な意味で水着の選択に頭を悩ましていた。

「う～ん・・・どれがいいかしら・・・よく分からないわ・・・」

ギンガは益々悩み続けるのであった。

「よし!私はこれにするかな。」

その一方で、はやてはあっさりと自分の水着を選び抜き、そんなはやての姿にシグナムは思わず惚れ直してしまう。

「（お!流石は主はやて・・・水着を選ぶ姿も凛々しいものだ・・・はっ!いかんいかん!!自分の水着を選ばねば!!）」

と、自分の水着選びに集中しようとした矢先、はやてはシグナムに

別の水着を持って現れる。

「シグナム。シグナムの水着も選んであげたで。」

「え?」

「これや!!」

はやてはそう言うと、自分が選んであげたシグナムの水着を見せつけるが、シグナムはその水着を見るなり、頭に衝撃が走った。

「なっ!?(莫迦な・・・こんなダサ・・・いや、派手すぎ・・・いやいや待て!主はやての選択に間違いなどある筈がない!!だが・・・それでいいのか?相手が主はやてだからと言って、時には主張することも・・・!?)」

自分の趣味には全くと言うほど似合わないその水着に危惧の念を抱いたシグナムは、主であるはやてに自分の主張を伝えるために自分が選んだ水着を見せようとした。

「あ、主はやて。私はこちらの模様の水着のほうが・・・」

と、シグナムが主張しようとした直後、はやては既に精算を済ませていた。

「これ下さいな♪」

「畏まりました。」

「(主はやて~~~!!!)」

思わず涙がこぼれる烈火の騎士、シグナムであった。

また、ヴィータとリィン、アギトと言った背丈の低いもの達は彼女らとはまた違った水着の選択に頭を抱えていた。

「う～～ん、これもいいんだけどな・・・ちょっと場違いなかな？」

アルフがそんなことを呟きながら水着を選ぶ最中、リィンはヴィータと一緒に盛り上がっていた。

「ヴィータちゃん。それ凄く似合うと思いますよ！」

「そうか？私的にはこっちの方がいいと思うけどな・・・アギトはどうだ？」

と、ヴィータが話を振った瞬間、アギトはヴィータの話を無視して一人自分の水着を選ぶことだけに集中していた。

「う～ん・・・やっぱり肌の露出は日焼けが多くなるしな・・・やめとこうかな・・・」

「人の話全然聞いてねえし・・・・・・」

また、その横の方ではキャロ、すずかとエイミィがこんな会話をしていた。

「ねぇ、キャロちゃん。これ一度着てみれば？エリオ君、きっと顔真っ赤にするよ。」

「す、すずかさん！無理ですよ、私には！！逆に着られちゃいますって！！」

「そうかな。キャロは元が可愛いから、きっとエリオも喜ぶと思うよ。」

「エイミィさんまで、そんな私・・・可愛いだなんて／／／／／／！！」

顔を真っ赤にするキャロにすずかとエイミィはお互いに顔を見合わせほくそ笑む。

更に、美由紀と一緒に人一倍気合を入れて水着選択をしていたエースオブエース、高町なのははと言うと。

「これ何かどう、なのは？」

美由紀がそう言って水着を見せると、なのはの眉間に皺が出来る。

「ん～～～何か違うような～～～はぁ。自分の水着っていつものことながら選ぶのって難しいんだよね・・・（それに今回はユーノ君も居るし・・・いつも以上に気合入れていかないと！！）」

恋人となったユーノに気に入られてもらうために尚更気合の籠るなのは。

そんななのはの事を気にかけながら、フェイトは自分に似合う水着の種類が少ないことに愚痴を零していた。

「いいな。なのはは元がいいから色んな水着のバリエーションがあって・・・やっぱり私って白とかって似合わないな・・・」

「ふふ・・・フェイト。」

「ん？」

すると、そんなフェイトの前に徐にほくそ笑みながらアリサが現れる。

「へへ。アンタにぴったりの水着・・・見つけたわよ！」

そう言ってアリサが取り出した水着を見た瞬間、フェイトはあまりに露出度の高いそれに激しい衝撃を受けた。

「がっ！！（アリサ・・・それは駄目だよ！！）」

直ぐにフェイトはアリサに対して説得を試みる。

「ちょ、ちょっと待ってアリサ！！それは流石に大胆すぎるよ！！大事なところが殆ど隠せないって！！」

「私よりスタイルいいくせに何言ってるのよ。」

と、二人がそんな会話をしているとその横から桃子が割り込んできた。

「あら、素敵じゃないのフェイトちゃん。」

「あ、桃子さん。」

「私もこれに決めたことだし。」

桃子が笑顔でそう言いながら二人に自分の選んだ水着を見せると、二人はやはり露出度の高い桃子の水着に衝撃が走った。

「「がっ！！」」

「ちょうどいいから、フェイトちゃんはそれにしちゃったらいいわ。」

「え！？でも、桃子さん・・・！！」

フェイトがそれはどうかと言わんばかりに言葉を発した瞬間、桃子は笑顔を浮かべたまま威圧感漂う言葉をフェイトにぶつけた。

「それになさい・・・フェイトちゃん・・・」

「は・・・はい・・・すみませんでした・・・」

「（桃子さん・・・怖っ！！）」

フェイトとアリサは言われるがままに強制的に水着を選ばされてしまい、この時以上に桃子に恐怖を覚えたことはなかったそうな。

そして、ついに巡ってきた機動六課前線メンバー総出の一泊二日の海水浴を含めた慰安旅行。

海鳴の海に到着した一同は早速水着に着替えて砂浜に降り立ち、ユーノや一護と言った男性陣は既にそれぞれの個性に合わせた水着に

着替え終わると女性陣が来るのを待っていた。

その間、ユーノがこんなナレーションを行う。

「と、言う訳で。日頃の疲れを癒すために機動六課一同、地球の海鳴市にある海が近くの旅館に慰安旅行にやってきました♪現在、僕ら男性陣は既に水着を着ています♪」

ま、男の水着にさほど興味がわかないのは誰だって同じであるが・・・――――そんなことを思いながら一護はユーノにこう言った。

「誰に向って喋ってんだよ、ユーノ？」

「それは勿論、読者の方々にじゃないですか一護さん♪」

「それにしても、女性陣が一人もいないようだけど？」

吉良が不思議そうにそう言うと、隣に立っていた恋次がこう言った。

「ああ。それならまだ着替え中だぜ。にしてもユーノ・・・海に来たときでもその羽織と帽子は必要あるのかよ？この糞暑いのに羽織なんか着てたら逆上せるぞ。」

そ。

実はユーノは海に来ているというのにもかかわらず、何故か上半身裸の上に帽子といつも着用している緑の羽織を身に纏っているのだ。

すると、ユーノはそんな疑問符を浮かべる恋次や他の面々に向かって扇子片手にこう言って来た。

「羽織は何が何でも外せません。それにこの炎天下において、熱中症対策の一環として帽子は必需品です。怖いですよ、熱中症は。今年に入ってそれで何人死んだことか・・・うんうん。」

「何所の評論家だよお前は・・・」

と、思わず突っ込む一護だったが、その時一護の隣に立っていたなのはの父親である士郎がユーノに関して次のような評価を下してきた。

「しかし、ユーノ君も随分立派になったものだな。うん、いい身体つきで頼もしいことだな。はははははは!!!」

ユーノの肩を叩きながら高笑いを浮かべる士郎にどう反応していいのかわからなくなるユーノ。

「あ・・・はは・・・ここは素直に笑えばいいのでしょうかね、士郎さん・・・」

その時だった。

「あっ!ユーノ君♪」

「ユーノパパ!」

待ち侘びていたとばかりになのは達女性陣がそれぞれが真剣に選び抜いた水着に着替えてむさ苦しい男性陣の前に現れたのだ。

「お!テメえらも漸く来たか!!」

ユーノが振り返った直後、彼は自分の目の前に映ってきたなのはのプロポーションの良さに思わず顔を赤らめ目を奪われた。

「・・・！（なのは・・・・・・なんて・・・・・・綺麗なんだ・・・！！）」

ユーノだけではない。

他の男性陣もそれなりにここにいる容姿端麗でプロポーション抜群の機動六課女性陣の水着姿にみな心を奪われており、白鳥や金太郎、浦太郎はこう呟いた。

「うむ・・・素晴らしい目の保養であるな・・・」

「みなさん方、美しいですな。」

「う～ん・・・僕がみんな後で釣ってあげるね♪」

「亀は魚だけ釣ってろ。」

思わずそうツッコミを入れる鬼太郎だった。

なのはは自信なさ気にヴィヴィオと共にユーノに徐に近づくと、恥ずかしがりながらユーノに自分の水着の評価を尋ねた。

「えっと・・・その・・・ユーノ君・・・どうかな？」

「え・・・！あ、うん。似合ってるよ、なのは♪」

「（やったあ・・・！！）ありがとう、ユーノ君♪」

「よかったね、ママ。ユーノパパに褒めてもらって♪」

なのはは満面の笑みを浮かべながらユーノに飛びつき、ユーノはその瞬間なのはの豊満な胸が胸板に当たるや否や蒸気を出して違う意味で逆上せあがった。

ユーノ以外の面々も、それぞれに水着の評価やこの後の予定を尋ねていた。

「ねぇねぇ、あなた！この水着石田君が作ってくれたものなんだけど、どう？」

「ま、石田にしては上出来だな。似合ってるぜ。」

割と平静な様子で織姫の水着姿を褒める一護も、内心はかなり興奮していた。

また、その隣ではフェイトが鬼太郎などに向かって勝負の申し入れをしていた。

「あとで勝負しませんか？」

「ふん、いいぜ。俺様の強さを思い知らせてやる。」

一方でヴァイスはティアナの水着に関して素直に褒め称える。

「ほう～～～随分攻めてるじゃねぇか？似合ってるぜ。」

「！！あ、ありがとうございます！！」

ティアナはこの瞬間、生まれて来てよかったばかりの涙を流したそうだ。

そして、元祖バカップルこと高町夫妻はこんな感じだった。

「何時見ても綺麗だぞ、桃子。」

「あら。もうあなたったら♪」

「姐～～～さ～～～ん！！！！っごっぎゅ！！！！」

それから、一護達と一緒にぬいぐるみ姿で来ていたコンはルキアの水着姿に興奮し、思わず飛びついて行ったが直ぐに一蹴されてしまった。

ヴィータはそんなコンを見ながらシグナムに尋ねる。

「なぁ、あれ何なんだ？」

「ただの変体ライオンだな。」

しかし、一番危ない思想を抱えるのは何もコンではなく部隊長の矢上颯その人であったとも取れる。

「いや～しかしこれだけ集まると壮観やわ。（ふふ・・・これだけ大勢居るんやさかい、ちょっとぐらいセクハラしても気付かれへん・・・）」

邪な計画を企てるはやてであったが、そんなはやての考えにいち早く気づいたアリサは殺気を放ちながらこう言ってきた。

「はやて・・・今どうせしょうも無いこと考えてるでしょう？」

「ギク！！な、何の事やろうなアリサちゃん！？なははははは！！！！」

取り繕ったかのようにあからさまな笑いを浮かべるはやてであった。

「なのはママ！！もう泳いでもいい？」

「うん。あんまり遠くに行ったら駄目だよ。」

「はーい！！」

手早く準備運動を済ませると、ヴィヴィオはアルフ達と共に海の方へと向かっていった。

「よ～し！！じゃあ、俺達も遊びまくるぜ！！！」

「「「「「おお！！！！」」」」」

こうして、機動六課の面々は海鳴の海での楽しいひと時を堪能することになったのだった。

「あははははは♪えい！！」

「やったわね！！この！！」

スバルやティアナは仲良く海の水を掛け合う。

「鬼太郎！そっちにいったよ！！」

「おっしゃあ！！！俺の必殺・・・ぐおお！！」

吉良とペアを組んでビーチバレーをしていた鬼太郎は飛び上がった直後、シグナムの一撃を受けそのまま撃沈する。

「ふん。まだまだ甘いな。」

「やりましたね、シグナム。」

シグナムとフェイトのペアは絶妙なコンビネーションでこの二人を追い詰める。

また、浦太郎は自分の趣味である釣りを堪能しており、早速とばかりに竿にかかった魚を前に興奮を覚える。

「おっ！！！来た来た！！！！これはかなりの大物！！！！金ちゃん、ちょっと網持ってきて！！！」

「承知！！！」

それから、一護と恋次の方はと言うと、相も変わらずつまらぬことで張り合いをしてしまっていた。

「へへ！！此処で決着をつけようじゃねぇか、一護。」

「望むところだ。この前の借りはきっちり返すぜ！！」

そんな子供の様な二人にあきれ返りながら、ルキアと井上、更にはコンの三人はビーチパラソルの中で一息ついていた。

「やれやれ・・・あの二人は毎度のことながら喧しい限りだ。」

「でも賑やかでいいと思うよ、朽木さん。」

「そうっすよ、姐さん。今日は無礼講でいきましょ・・・っぶっほ！！」

コンはルキアの胸にてを触れようとした直後、返り討ちを食らった。

また、自称白翼の魔導死神の白鳥礼二は持ってきたサーフボードに乗ってサーフィンを楽しんでいた。

「ははははは！！！我のサーフィンの腕に勝てるものなど何所にも居ないぞよ。ははははは！！！！！何！？」

と、高飛車な様子でそう口にした直後隣りを見ると、クロノが同じようにボードに乗って張り合って来た。

「悪いが、白鳥さんには負けていないつもりですけど。」

「くっ～～～！！！提督如きに後れを取るものか！！！！！」

白鳥はその後クロノとのサーフボード対決に執念を燃やして挑んだのであった。

そんな各々が楽しむ光景を遠目の方で見ていた翡翠の魔導死神ユーノ・スクライアは、まるで子供を温かく見守る父親のような態度で

ほくそ笑み、こう呟いた。

「みんな楽しいそうだな・・・・・・偶にはいいよね・・・・・・こう言う日があっても。」

と、その時後ろの方からなのはの声が聞こえてきた。

「ユーノ君♪」

「ん？」

ユーノが振り返ると、なのはは恥ずかしがりながら徐に背中に隠していたあるものを取出しこう言った。

「あのさ・・・その・・・よかったら私に・・・オイルとか・・・塗ってくれる？」

「なっ！！！！！！！」

ユーノ・スクライアはその言葉を聞いた直後、嬉しさとその先を越えた感情に言葉を失った。

「（え・・・オイル！？マジで・・・本気で！？あのなのはが僕にオイル塗ってって頼んでるの！？それってつまり、なのはの肌に直接手を触れるってことだろ・・・！？あのなのはの体に僕みたいな淫獣の手が触れてしまうということだろう！？いかんいかん！！！それは流石にマズイ！！！！てか、僕は何厭らしいこと考えてるんだ！！！だから世間から淫獣なんて・・・思われたり・・・）」

ユーノの思考は駆け巡り、興奮のあまり後頭部から湯気を発してい

た。

「えっと、ユーノ君・・・湯気出てるけど、大丈夫!?」

心配そうに尋ねるなのはを余所に、ユーノの頭は爆発寸前だった。

そんなユーノの事を見ながら、一護は鼻で笑いながらこう呟いた。

「ふん。相変わらず晩熟な奴だな・・・」

そして、ユーノは特に断る理由もなかったので胸の興奮を必死に抑えながら愛するなのは
の白い背中を前に、オイル片手にこう宣言した。

「それでは、これよりオペを始める!ミスは、絶対に!許されない!!」

そう意気込むユーノであったが、それを聞いた瞬間なのはは苦笑いを浮かべながらこう言って来た。

「あのユーノ君。そんな固くならなくても大丈夫だよ。普通に塗ってくれればいいから。」

「だ、だけど・・・僕みたいな晩生のそれこそ淫獣フェレットが君の様な美白美人の肌に手を触れるということが、一体どういうことなのか分かってるのかい?このオイルを手に取った瞬間から、僕は日本中のなのフェイファンを既に敵に回してるんだ!」

「にゃはは・・・あんまり細かいことはよく分からないけど、兎に角早く塗ってほしいな。なんなら、そう気分が乗る様にもっと大胆

になってあげようかな・・・」

「え？」

言葉の意味に困り果てるユーノ。

すると、突然なのははうつ伏せの状態で背中に手を回して胸のひもを緩めて完全に背中を丸見えの状態にした。

「な！なのは！！！！何を！！！！」

「だってオイル塗るのに紐があったら邪魔でしょ♪こうしたほうがユーノ君も塗りやすいと思って・・・・・って、ユーノ君？聞いてる？」

なのはがそう思いながら目を向けた直後、ユーノは完全に逆上せあがって意識を失いかけていた。

「ゆ、ユーノ君！？だ、大丈夫！？」

慌てふためくなのは。

そんな二人の様子を目を向けながら、桃子と士郎は温かく見守っていた。

「あらら。二人とも相変わらずの仲良しね。」

「あははは。実にいいものだな。だけどちょっとお父さんは寂しいぞ、なのは～～～！」

その後意識を半分失いかけながらもどうにかなのはの体にオイルを塗ったユーノのことは暫くの間六課の方では笑いの種になったらしい。

暫く遊ぶことに精を出していた一同だが、流石に炎天下の海は答えるらしく全員の体からは汗がにじみ出ていた。

「それにしても熱いな～～～氷でも欲しくなってきたぜ～～～」

「それだったら、あそこに海の家があるからかき氷でも貰ってきたらどうかな？」

すずかがそう言うと、なのはは積極的に取りに行く姿勢を見せた。

「じゃあ、私が行って取って来るよ。」

なのはがそう言うと、それに呼応するようにユーノ・一護・恋次・フェイトも次々に名乗りを上げた。

「それじゃあ、僕も。」

「俺も付き合うぜ。」

「俺もだ。」

「私も。」

結局、五人ぐらいで海の家へと向かったユーノ達だった。

海の家に到着すると、一護は中にいる店員に向けて声を発した。

「すみません～～～かき氷３０人前ぐらい欲しいんですけど・・・」

すると、一護の言葉に反応して中から大柄な男が現れた。

「む・・・」

その男こそ、一護の中学時代からの同級生で同じく霊力を持つ茶渡康虎であった。

一護は意外な知人の登場に思わず目を奪われた。

「ちゃ、チャド!!何で此処に!?」

「お知り合いですか、一護さん?」

なのはがそう尋ねると、一護の代わりにユーノが答える。

「一護さんの中学時代からの同級生で、同じ霊力を持つ茶渡康虎さんだよ♪」

「何してんだよ、チャド・・・こんな所で!?」

「まさか・・・バイトでもやってるのか?」

恋次が冗談交じりにそう尋ねると、チャドは肯定の返事をした。

「ああ・・・石田に頼まれた。」

「石田に!?」

すると、その時厨房の方からフライパン片手に調理をする一護の悪友で滅却師の生き残り、石田雨竜が言葉を発した。

「騒々しいぞ、黒崎。」

「石田!!じゃあ、この店って!?」

「ああ。石田が出してる海の家だ。俺はその手伝いで此処に居る。」

「ユーノ、あの人は?」

疑問符を浮かべるフェイトはユーノに再び尋ねる。

「石田雨竜さん。滅却師(クインシー)と呼ばれる虚を滅却する力を持った一族の最後の一人さ♪空座町で総合病院の院長を務めてる。ちなみに、一護さんの悪友だよ♪」

「「へぇ〜〜〜」」

「おいおい、どういう事なんだ一体!?」

訝しげな様子の一護や恋次だったが、その直後織姫たちが徐に後ろから現れる。

「それは私から説明するよ。」

「織姫!」

「朽木さんがね、石田君と茶渡君に頼んだんだよ。」

「死神は僕の敵だが、朽木さんに頼まれちゃ断れないからね。」

「そう言うわけだ、一護。阿散井。」

「今日はこの浜辺は私達の貸切なんだって。はやてさんが頑張って貸切にしてくれたお陰で、ゆっくりと羽を伸ばせるって訳！」

「にゃはは・・・はやてちゃんもよくやるよね・・・」

「うん・・・こういう事は本当に行動が早いよね・・・はやて。」

相変わらず遊ぶことに関しては準備良い自分たちの上司に思わず苦笑いを浮かべるなのはとフェイト。

そして、一護はそんなはやてに関してこう呟いた。

「そこまで大掛かりにやってたのかよ、あの狸女は・・・」

「それより一護さん・・・かき氷いいんですか？」

ユーノが目的を忘れかけている一護にそう言うと、一護も当初の目的を思い出す。

「ああ、そうだったな。おい、石田！かき氷３０人前欲しいんだけど！」

「それは僕に言うんじゃなくて、彼に頼んでくれ。」

「彼・・・？」

石田がそう口にした直後、海の家の中で日陰で眠っていた銀髪の少年が徐に起き上がり、頭追掻き毟りながらこう言って来た。

「・・・やれやれ・・・毎度のことながら何で俺なんだか・・・」

その少年を目の当たりにした瞬間、恋次は慌てふためきながら驚愕する。

「ひ、日番谷隊長!!現世(こっち)に来てたんすか!?」

「まぁな。」

「ひょっとして、この人も死神さん?」

なのはが日番谷を見ながらユーノに尋ねると、ユーノは首を縦に振った。

「そう。十番隊隊長、日番谷冬獅郎さん。若くして護廷十三隊の隊長に就任した天才だよ。氷雪系最強の斬魄刀『氷輪丸』の使い手さ♪」

「成程~~~」

なのはやフェイトはつくづく死神の世界の常識と管理局側の常識は全然違うということを改めて認識する。

そんな二人を余所に、一護は久しぶりに見た日番谷の成長ぶりにかなり驚かされていた。

「しかし、暫く見ないうちに随分背でかくなったな・・・どういう成長の構図してんだよお前は・・・」

「ほっとけ。」

「それより、まさか此処にある氷って言うのはひょっとして・・・？」

恋次が顔を引きつりながらそう口にすると、焼きそばを作りながら石田はこう答える。

「ああ。日番谷君には、海の家で使う氷を全て氷輪丸で出してもらってるんだ。」

「またかよ・・・いい様に利用されてるな、お前・・・」

「うるせー！」

一護の言葉を聞いて、思わず癇癪を起した日番谷だった。

ユーノは一度全員に向かってこう呼びかけを行った。

「はいはい！！皆さん！！！これから日番谷冬獅郎さんによるスーパーイリュージョンショーが始まりますよ♪集まって集まって♪」

「人を客寄せパンダみたいに言うな！」

ユーノの飄々とした態度と言葉に怒り心頭にツッコミを入れる日番谷。

そして、全員が日番谷に目線を合わせると徐に一護が合図を出した。

「そんじゃ、冬獅郎。氷頼むわ！」

「はぁ～～～」

深いため息をつきながら、日番谷は斬魄刀を翳してやる気な下げな口調で解号を口にした。

「霜天に坐せ、『氷輪丸』！」

すると、その瞬間日番谷の霊圧で作り出された水の氷の竜、氷輪丸が出現し始めてみる日番谷の華麗な氷の竜に全員が目を奪われた。

「「「「「「おお！！！！！」」」」」」

「凄いです！！！！！」

「綺麗ね！！」

「持ってけ。」

日番谷がそう口にした後、一護は暫くの間を置いて冷静にこう呟いた。

「・・・だから、デカ過ぎるって・・・」

そう一護が呟いた瞬間、白鳥がこんなことを言って来た。

「では、半分は私が貰おう。折角だからこれで彫刻でも彫るである

ぞよ。」

「一応聞くが、鳥は一体何を彫るつもりなんだよ?」

「ふふ・・・勿論、我を象った美しき姿であるぞよ。ははははははは!!!!!!!!」

高笑いを浮かべる白鳥のその光景は些かシュールであった。

チャドはそんな白鳥を見ながら一護にこう言ってきた。

「・・・一護・・・こいつは一体何者なんだ?」

「ただのナルシストだろ。」

こうして始まったひと夏の機動六課題前線メンバーによる慰安旅行だが、これから先一体どんな口では言えないようなハチャメチャが待ち受けているのであろうか?

中編に続く。

教えて、ユーノ先生！

一「今日は珍しく俺がユーノの代わりにこのコーナーを仕切るぜ。つっても、何を紹介すればいいんだか・・・・・・」

悩んでいる一護だったが、その時とある指示が届けられる。

一「何？ユーノの普段の日常生活をこと細かくレポートして来いだと！？何でんな面倒なこと俺がしないとならねぇんだよ！俺は御免だぜ。」

恋「まぁそう言うなよ一護。実は共通の指令が俺達のも届けられてるんだ。」

一「誰だよそんなもん送りつけて来たのは・・・」

ル「よく分からぬが、と言うわけで次回からユーノ殿のマル秘日常生活暴露大作戦を決行するぞ！」

な「私達でも知らないユーノ君の日常生活の詳細をこと細かく突き詰めていくよ！」

一「結局そういう方向なのかよ！？つうか、俺たち全員ってどんだけなんだよ！」

次回、ユーノ・スクライアのマル秘日常生活暴露レポート、開始！

魔導師図鑑ハイパー！

なのは達が着替え終わるのを待つ間――――――

ユーノ・スクライアは悪友クロノ・ハラオウンとこんな会話をしていた。

ユ「なぁ、クロノ。正直言うと僕はものすごく怖いんだ。」

ク「ほう。お前にも怖いものがあったのか。何が怖い？それほどまでにお前が恐れるものとは何なんだ？」

ユ「僕が恐れるもの・・・・・・それは読者の反応だ。」

ク「読者の反応？」

意味が分からないとばかりの表情を浮かべるクロノにユーノは更に続ける。

ユ「クロノ。僕はネット上では何て言われてる？」

ク「淫獣フェレットもどきの変態ユーノか？」

ユ「だろ！！淫獣フェレットもどきの変態ユーノだろ！！そんな僕が大胆にもなのはと一緒に海水浴に来てるんだぞ！！これは絶対に叩かれる！！なのフェイファンに殺される！！」

何とも表現しにくいリアルなユーノの恐怖に返すことがば思いつかなくなるクロノだが、暫く考えた末あっさりとこう言った。

ク「なら仕方ない。いっそのこと殺される方がいいのではないか？」

ユ「お前が先に殺されたいのか、ああ！！」

夏休み企画・機動六課大合宿（中編）　（前書き）

ユ「今回は砂でいろんなものを作る企画とスイカ割りが企画されたお話だよ♪さて、一体どんな展開になるかな・・・」

ク「ユーノ・スクライア外伝　夏休み篇・・・・・・始まります！」

ユ「何でお前がナレーションに参加してるんだよ？」

夏休み企画・機動六課大合宿（中編）

機動六課一同は三提督の許可の元、現在海鳴市にある海辺を貸し切っての慰安旅行を堪能している真っ最中。

かき氷を食し終えた一同は、唐突にはやてとユーノに集められた。

「はいはい！！機動六課一同、集合！！」

訝しげな様子で全員が集合すると、徐にフェイトが二人に集合させた理由を聞いてきた。

「はやて。ユーノも私達を集めて何するの？」

「へへ。こんなに人数がおるんさかい、何か企画を催さんと損や。そこで、私とユーノくんプロデュースのレクリエーションを今から開催や！」

「レクリエーション？何するつもりだよ、一体？」

「まずは皆の日頃の芸術性を見たいということで、こちら♪」

そう言うと、ユーノは徐に砂浜に立てかけたあるものを全員に見せ、一護はそこに書かれた内容を読み上げる。

「『第一回機動六課＆死神・スクライア商店海浜藝術会』！？」

「要は、砂で色んなものを作って一番を決めようっていう大会や。審査は高町家のみなさんとエイミィんさん、それにヴィヴィオが行うさかい。」

「よろしくお願いします！」

ヴィヴィオは桃子たちと並んで頭を下げると、早速とばかりに審査

用紙を手に取った。

「と、言う訳ですから・・・それじゃあ、各自2・3名に分かれて始めて下さい♪」

しかし、ユーノがそう言うにもかかわらず若干恋次を始めとする前線メンバーの数名が愚痴を零してきた。

「せっかくの海のなのに、砂あそびかよ!?」

「スイカ割りとかキモ試しとかしてぇよ、はやて!!」

ヴィータもアイスをかじりながらはやてに請願すると、はやては呪文のように次の言葉を呟いた。

「文句は言わんといてな。優勝者には三提督より金一封が贈呈や!」

その言葉を聞いた途端、一部を除いて前線メンバー全員の目が光り、一目散にその場を後にしたのであった。

「「「

残されたのはクロノ・ハラオウンとヴァイス・グランセりっくだけとなった。

「連中は行っちまいましたけど、クロノ提督はどうしましますか？」

「そうだな・・・僕は金一封などに興味はないが、芸術性を見せると言う分には吝かではないかもしれない。」

「んじゃ、俺らも参加ということで！行きましょうか！」

ヴァイスはそう言うと、クロノと共に作品を作るために適当な砂場へと向けて歩き始めた。

ユーノ達が居なくなり、残った高町家の面々と主催者のはやて。

そして何故か吉良と浦太郎も一緒だった。

不審に思ったエイミィは徐に吉良に尋ねた。

「吉良さん達は参加しないんですか？」

「僕は・・・見てるだけでいいですよ。」

「僕も、創作とかは正直苦手だし・・・・・・」

「さて、みんなは一体どんな作品を作るんだろうな。いや～～～楽しみだな！」

「そうね。じゃ、みんなの作品が完成するまでここでのんびり待たせてもらおうかしら。」

「大体３０分ぐらいしたら一端様子を見に行くとしましょうか！」

はやて達は全員の作品が出来上がるのを見計らって、海の家でのんびり時間を過ごすことにしたのであった。

では、早速チーム別に創作の様子を拝見してみよう。

先ずは、なのは・フェイト・織姫チーム。

なのはは辺りを見渡しながらフェイトと共にバケツを探していた。

「どこかにバケツないかなあ。最初に砂濡らさないと」

「そうだね。でも、手ごろなのがないね。」

すると、そんな二人の様子を見ていた年上の織姫が徐にこう言って来た。

「大丈夫ですよ、二人とも。バケツなんて必要ありません！」

「「え？」」

「私達はね♪こーやってチョット胸をよせて・・・そこに水をすくう・・・そして濡らしたい場所にまたがって・・・ゆっくり胸の間から水をたらす・・・」

織姫は嘗て十番隊の松本乱菊より教えを受けた教育上いけない際どい行為をなのはにも伝授をしようとし、なのはも真摯にその説明を受けながら自分の胸を必死に寄せる。

「こうですか？」

「早々！上手ですね♪あとはちゃーんとお膳に伝わせてたらすんですよ♪」

真昼間から危ない行為に及ぶ二人を見ていたフェイトは顔を真っ赤に染めながら止めに入った。

「織姫さん！！昼間から何教えてるんですか！！！なのはも実践しなくていいから！！！」

とまぁこんな感じでこの三人は独自の作品を作り上げていくのであった。

しかし、何を作るんだろうか・・・・・こんな方法で？

続いて、一護・恋次・鬼太郎チーム。

三人は手際よく砂を固めて見事な城門を完成させていた。

「よし！こんなもんでいいか？」

妥協した様子で一護がそう口にすると、恋次と鬼太郎が次のように語った。

「まだまだ！次は誰が最初に城門を開通させられるか・・・」

「勝負だぜ！！」

「・・・イヤいーよ。そんなガキみてーな勝負キョーミねえし。」

と、鬼太郎の言葉を軽く受け流す一護だったが直後鬼太郎はそんな一護に向かって挑発的な言葉を発した。

「あぁん!?何だそりゃ言い訳か!?負けんのが怖えェかコラッ!!」

その途端、一護のプライドに火が付き血管が浮かび上がった。

「あぁん!?」

そして、鬼太郎の挑発に完全に反応してしまった一護はすっかりやる気モードとなって宣戦布告をした。

「よっしゃア!!やったらア!!」

「おォし!負けねーぞ!!」

「そりゃこっちの台詞だぜ!!」

三人は位置に構えると、一斉に城門の開通の為に砂の中に潜りこんだ。

「「「うりゃあああああああ!!!!!!!!!」」」

似た者同士な、と言うか非常に短気で子供な三人は我が一番とばかりに勢いよく砂をかき分け穴を掘り進めていく。

そんな三人の様子を窺いながら、白鳥が不敵な笑みを浮かべながら

現れ、あらかじめ拾って来た野生のカニを手に取り鬼太郎に近づく。

「うししし・・・・・・！！」

そして、白鳥は悪意に満ちた表情で何も知らない鬼太郎の水着の中にカニを突っ込んだ。

「いくぜいくぜいくぜいくぜ！！！！ん！？のあああ！！！！？？？？」

鬼太郎は突然襲い掛かってきた激痛に声を上げ、掘り進める作業の中で暴れ出した結果、砂が崩れ落ち生き埋めになってしまった。

一護と恋次は一度作業を中断し、鬼太郎の様子を窺った。

「ぶっは！！どうした、鬼太郎！？」

「のああ！！！鬼太郎が生き埋めに！！？？」

「掘り出すぞ、恋次！！」

「おうよ！」

二人は急いで生き埋めとなった鬼太郎を掘り出そうと砂を必死にかき分けた。

白鳥はそんな撃沈した鬼太郎を前にしながら読者に向けてピースサインを出した。

「ふふふ・・・大成功であるな・・・」

そんな一護達を余所に、ヴィータ・ルキアチームの方はと言うと―
――――――

「たく。騒がしい奴らぜ・・・もっと静かに作業出来ないのかよ？」

「構うことはないさ、ヴィータ。周りを気にする暇があるなら、己の作品に全身全霊を込めるのだ。」

「あ、ああ・・・それもそうだな。」

ルキアに促され、ヴィータは自分の作品に集中し始める。

ヴィータが今作っているのには、はやてが自分にプレゼントしてくれた呪いのウサ人間を象った砂の彫刻だった。

元々芸術性にはそこまで豊かではないヴィータだが、己の限界に挑む覚悟で不器用ながらも砂に水をつけては丁寧にウサ人形を形作っていく。

そうすると、多少歪な形であるがそれなりの姿になってきたのでヴィータも一安心だった。

「（よし・・・中々の出来栄えだぜ・・・！私の芸術センスも満更悪くねえかもな・・・）なぁ、ルキア。私のどう思・・・！？」

と、ヴィータがルキアに声をかけようとした直後、ヴィータの目の前に広がってきたのはあまりにシュールなルキアのうさぎ・・・とはとても言い難いほどに下手くそな作品だった。

「うむ。いい感じに仕上がってきた。流石は私だな！」

自分の作品を見て自画自賛するルキアだったが、一方でヴィータはルキアのあまりの下手くそな作品に衝撃を覚えた。

「（えええ！！！！！何だよこりゃあ！？もしかして、ウサギ！？ありえねぇ！！そんな筈があってたまるか！！だって・・・こんなのがウサギな訳ないだろう・・・！！こりゃ・・・私が相当頑張んないとやばいな・・・）」

ヴィータはルキアには期待できないと判断すると、自分の作品の精度をさらに上げるために再び作業に集中し始める。

そんな二人の用を窺いながら、ヴィヴィオはウサギ人形型のデバイス、セイクリッドハートにこう言った。

「へへ♪やっぱり女の子はみんなウサギが好きなんだ。ねぇ、クリス。」

〈Ｙｅｓ．〉

ここまでは比較的普通に流せるのだが、問題はここからだ。

と言うのもこのチーム、クロノ・ヴァイス・グリフィスチームには些か、いやかなり大きな問題が付きまとっていた。

グリフィスは黙々と砂を押し固め、作品を造り上げるクロノに新しい水を届けに駆け足で戻ってきた。

「クロノ提督、替えの水持ってきましたよ！」

「ああ。済まない、そこに置いといてくれ。」

グリフィスは替えの水を適当な場所に置くと、自分が付き先ほど見てきた各々の作品に関してクロノに報告を行った。

「いや～～～皆さんも中々頑張ってるようですよ。まぁ、レベルは似たり寄ったりといった感じですけど・・・僕達は一体どんな作品を作るんですか・・・って」

と、グリフィスが口にした直後彼が見たものは――――――

「まぁ、こんなとこか。後は髪を整えさえすれば・・・・・・」

後にコラボをすることになる某ジャンプ漫画の主人公である死んだ魚の様な目をした天然パーマの男であった。

「作品が違うわ！！！！！」

グリフィスはこれを危険因子と判断し、迷うことなくクロノが作成したその砂の彫刻の顔を破壊した。

「おいおい。何をするんだ、君は！？僕がその顔作るのにどれだけ苦労したと思ってるんだ、コラァ。」

「クロノ提督こそ！んなもん作ったら著作権に引っかかるかもしれないってことが分からないんですか、コラァ！」

すると、言い争いを始める二人の前にヴァイスが横で作っていたものを見せつける。

「クロノ提督。木刀が出来ましたっすよ！」

グリフィスは砂の彫刻の横に並ぶ形で立てかけられた砂の木刀を見た途端、再び血相を変えて先輩であるヴァイスを注意する。

「だあああああ！！！！何作ってるのヴァイス先輩！！！それじゃ本当に盗作ですよ！！！！！」

グリフィスの慌て方はクロノやヴァイスにとっては明らかに異常としか捕えられなかった。

徐にクロノは落ち着いた様子でグリフィスにこう言い返した。

「グリフィスよ～～～君は何？何を勘違いしてるか知らないけどよ、これはあれだよ・・・“坂田金時”さんだよ。坂田銀時ではないんだ、断じて。」

「銀時って言いましたよ！！さっきまぎれもなく銀時って言いましたよ！！大体金時って誰ですか！？金太郎のこと！！！」

だがしかし、そんなグリフィスの言葉を無視してクロノとヴァイスは壊れた顔の修復に取り掛かり始める。

「全く。君は少し過剰になりすぎている。少しはもっと頭を柔らかくしないといけないぞ。ほら、顔を作り直すから手伝ってくれ。」

「グリフィスも、あんまし細かいことに拘ってたら折角貰った嫁さんに逃げられるぞ。」

「いや、それとこれとは話が違う気が・・・・・・」

すると、そんな三人の前に白鳥が現れた。

「お～お～中々いい出来ではないか、腹黒提督。」

「あ、白鳥さん。言ってあげてくださいよ、この提督さんと陸曹長さんに。どう見ても盗作ですよね？」

グリフィスは性格は多少変わっているが比較的真面な白鳥にこの二人を諫めてもらおうと声をかけたつもりだったが、その直後白鳥はグリフィスの予想に反した言葉を呟いた。

「おや？坂田金時さんではないか・・・完成度高けぇなおい・・・」

信じられないとばかりにその話を聞いたグリフィスは思わず声を上げた。

「え？えええええ！！！！！！何で知ってるの！！！！！居るの！！！！マジで居るの！！！！！僕だけ知らないの！！！！！」

驚きを隠せない様子のグリフィスだったが、そんな彼にクロノ・ハラオウンはこう言って来た。

「不屈の侍魂宿し、常に死んだ魚のような目をした、現代の駄目人間の先駆者だ。」

「嘘付け！！！だからそれ“銀時さん”のほうでしょうが！！！！声同じだからって何調子のいいこと言ってるんだよ！！」

「それより白鳥さん。何でこんな処に居るんですか？作品はどうしたんです？僕らのを見ている暇なんてあるんですか？」

「あはははは！！！私のは既に完成している。見るがいい！」

白鳥はそう言うと、完成した自分の砂の彫刻を指さした。

三人が目の当たりにしたのは、白鳥そのものを象った巨大な砂の彫刻であり背中には何故か翼が生え、上半身裸の状態だった。

クロノとヴァイスはあまり関心のなさそうな眼つきでそれを見上げていたが、グリフィスは素直に驚いていた。

「おおお！！！！何ですかこれ！！？？何かよく分からないけど、凄いじゃないですか！！！」

「ふふふ！！そんな大したものではないぞよ。私は凝り性なものだから止まらなくなってしまって・・・タイトルは『飛翔』。」

「いや～～～凄いですよこれ！！！白鳥さんがモデルなんですか！？」

「あはははは！！！！愛情が籠もり過ぎたようだ！！！似ていても無理はない！！！あはははははは！！！」

完全に手前味噌と化している白鳥だったが、その時不意に恋次が現れ何処からともなく持ってきたシャベルを使い、白鳥を象った砂の彫刻の足を削り始めた。

「てめぇにしては、随分筋肉質過ぎねぇ？この辺削ぎ落としたほう

がいいって！！」

恋次の行為を目撃した瞬間、白鳥の表情は凍りつく。

「恋次殿！！何をしておられる！！？？勘弁しておくれ！！非常に微妙なバランスで立っておるのだぞ、それ！！！てか、何時の間に来ておられた！？」

と、その直後。

白鳥の肩を強く握りしめるものが現れた。

白鳥が汗ばみながら徐に振り勝ってみると、そこにいたのは先ほどまで生き埋めとなっていた怒り心頭の鬼太郎であった。

「こ～ら鳥！！！！！！よくもさっきは俺のケツにカニを入れてくれたな！！！！！」

「な！？な、何のことであるかな・・・一体！？」

必死にお茶を濁そうとする白鳥だが、鬼太郎には全てお見通しであった。

「惚けんじゃねぇよ！！！マジで死ぬかと思ったんぞ！！！ケツにカニが食い込んだんだぞ！！この恨み百倍にして返してやる！！！！俺の必殺技、パート２！！！水着バージョン！！！」

鬼太郎は烈火を解放すると、燃え滾る炎と一緒に砂を巻き上げて白鳥の作品ごと白鳥に自分の恨みのすべてを押し流した。

「ぬあああああ！！！！！我の傑作が！！！！！！止めて！！！！！こないでえええええええ！！！！！！！」

白鳥は哀れにも自分の作品の中に生き埋めと化してしまい、結果作品は当初の砂と化してしまったのであった。

生き埋めとなった白鳥は偶然にも通りかかった吉良の目に留まり、吉良は埋もれた状態の白鳥に向かってこう言った。

「・・・何が何だか分からなくなってしまった様だね・・・」

「・・・何故・・・私ばかりが・・・」

白鳥が鬼太郎の手にかかり、脱落したことで敵数が減った今回の芸術会。

クロノ達は自分の持ち場に戻ると再び坂田金時の作成を続けるが、グリフィスだけは乗り気になれなかった。

「ちょっと、二人ともまだ続けるんですか？そのまま続けたら本当に訴えられますよ。」

「大丈夫だグリフィス。二次創作って名目でこの小説が書かれているのだろう？多重クロスオーバーをしている今更において別に問題はないさ。」

「開き直らないで下さい、クロノ提督。それでも提督って役職なんですかアンタ！？」

と、その瞬間クロノ・ハラオウンの頭に何かが下りた。

「そうだ！僕、ここでいい事思いついた。翼付けよう、翼！」

「クロノ提督、それいいっすよ！！最高っすよ！！何でそんな発想出来るんですか！？」

「いや・・・何か知らないけど、ぴんと来た。ぴんと！」

呆れかえるグリフィスを余所に、クロノとヴァイスの二人だけは盛り上がりを見せる。

すると、そんな彼らの前にユーノとなのは同様仲良しの二人組、ライトニングフォワードであるエリオとキャロがやってきた。

「あ、クロノ提督。」

「皆さんも頑張ってるようですよ。」

グリフィスは二人が近づいてくると、言葉を投げかける。

「やぁ、エリオ。キャロ。君達のほうは出来上がったのかい？」

「それが、中々いいアイディアが浮かばなくて・・・色んな人のを見て参考にしてるところなんです。」

「でも皆さん凄いですね・・・えっと・・・これは一体何なんですか？翼が生えた・・・お侍さん？」

キャロが不思議そうに見たままの様子を口にすると、グリフィスは呆れかえりながらこう言った。

「いや。ただの盗作ものだよ。」

「だ・か・ら、盗作ではないと言ってるだろう。」

グリフィスの言葉に必死に弁解をするクロノだったが。

と、そんなやり取りを聞いて更にアリサ・バニングスが様子を見にやってきた。

「へぇ～～クロノさん達も随分凄いの造ってるじゃないの！」

「アリサさん。見に来たんですか？」

「参考程度にちょっとね。それよりこれって・・・坂田金時さんじゃないの！？完成度高けーなおい・・・」

「だから、何で知ってるんだよ！？」

グリフィスは先ほどの白鳥同様、この砂の彫像を熟知しているアリサの言葉に思わず鋭いツッコミを入れるが、アリサは更に坂田金時に対するコメントを次のように語り出す。

「別名“裸の大将”。年中ランニングシャツを着ておにぎりと画材道具一式を持って日本中の自然や景色をあるがままにペンで描き、それを記録したという天才的な画家よ。」

「さっきと話違うんですけど・・・てか、それって山下清ですよね・・・」

アリサとクロノの話の食い違いを鋭く指摘するグリフィス。
エリオはそんなアリサにこう尋ねた。
「アリサさん。他にも見てきたんですか？」
「まぁね。さっき見てきた中で結構凄いものあったわね、そう言えば・・・」
「何所のチームのですか？」
「あれは確か・・・シャマルさん達のチームかしら。」
アリサはそう言って、クロノ達をシャマル・ザフィーラが拠点としている場所へと連れて行った。
連れてこられたクロノ達が目にしたのは、狼モードのザフィーラをモデルにした滑り台と会談を兼ね揃えた一種のアミューズメントだった。
これを見たグリフィスやエリオ達は思わず興奮で胸を高鳴らせた。
「おお！！凄い！！アミューズメント化してる！！」
「これ、シャマル先生たちが作ったんですか？」
キャロがそう尋ねると、ほくそ笑みながらシャマルはザフィーラと共にこう言って来た。
「うふ♪芸術と言っても遊び心は必要でしょ？子供でも楽しめるよ

うに滑り台も施してみたの♪」

「お前達も、是非遊んでいってみてくれ。」

すると、ザフィーラの言葉を聞いた瞬間アリサが徐にサーフボード片手に階段を使わず滑り台から上り始めた。

これには思わず作成者であるシャマルとザフィーラも疑問符を浮かべた。

「いやあの・・・アリサちゃん・・・遊び方が違うんだけど・・・!?」

「ロッククライミング的な!」

「違う!滑り台だぞ、それは。」

だがしかし、そんなザフィーラの言葉を聞いているのかは定かではないが、アリサは持っていたサーフボードを使って滑り台を滑り落ちる。

「やっほ!」

「それで滑るな!」

アリサの行為を諌めるザフィーラだが、その直後妨害工作にやって来たヴィータが途中まで階段を上った形跡を見せておきながら、ザフィーラの顔に杭を指してぶら下がる。

「おい、ザフィーラ。これ階段何所にあるんだ?」

「ヴィータ、貴様もか・・・貴様もあくまでロッククライミング！？明らかに途中まで階段上った形跡があるだろ！！」

その一方でシャマルはアリサのお蔭で傷ついてしまった滑り台を見ながら悲痛な表情を浮かべていた。

「あ～あ・・・折角の滑り台が傷だらけ・・・！！直ぐに修復にかからないと・・・え！？」

と、その直後シャマルに向かって一緒に滑り台を下っていたエリオとキャロが急接近してきた。

「「しゃ、シャマル先生！！！退いてください！！！！」」

「きゃあああああ！！！！！！こっち来ないで！！！！！！」

シャマルは二人と激突すると、鼻血を出しながら目を増して気絶をし、エリオとキャロもお互いに気を失ってしまった。

「シャマル！！くっ・・・貴様達寄ってたかって我々を蹴落とす気か！？だが、そう簡単に落とされてたまるか！！！」

ザフィーラはそう言いながら空中で半回転をし、自分の彫像の上に降り立ったが、その直後彫像に亀裂が入った。

「ん！？」

そして、呆気なく彫像は崩れ落ちザフィーラはシャマルと共に砂の中へと埋もれるのであった。

「のあああああああ！！！！！！！！！！」

これで脱落者は一気に三チームにまで及んだのであった。

クロノ達はライバルが減ったことを好機と見て、急いで自分たちの持ち場へと戻り更なる工夫を施すのであった。

それは、何故か坂田金時の彫像の前に滑り台を設置するというものだった。

ちなみに、考えたのはヴァイスであった。

クロノはこのような奇抜は発想を思いつくヴァイスの思考を高く評価する。

「ふむ。ひょっとしてヴァイス陸曹長。君は天才かもしれん・・・まさか滑り台をつけるなどと言う発想は・・・常人には降りてこないだろう。」

「よく分かんないっすけど、ふと降りてきたんですよ！インスピレーションって凄いっすね！！」

「元が盗作のものにインスピレーションもないと思いますけど・・・」

グリフィスは精神的に疲れ切った様子でそうツッコミを入れる。

すると、またこの三人の前に今度はティアナが現れた。

「あれ？ヴァイス陸曹長。何ですかその滑り台は・・・！？」

「何だよ、ティアナ。お前も偵察かよ？」

「そ、そんなんじゃないですよ！私はただ・・・純粋な気持ちで見学してるだけで・・・」

「じゃあ、何で顔が赤いんだい？」

「あら！これよく見たら・・・坂田金時さんじゃないですか！完成度高けーなおい。」

「もう原形留めてないのに、何で分かるんだよ！」

グリフィスは執務官で唯一一番真面だと思っていたティアナが亜理紗たちと同じことを口にしたことに思わず突っ込んだ。

「“東ロンバルディ帝国はゼメテキア帝国とクライン公国の板挟みなりながら停戦協定を結ぼうとしているのだが、その事をいち早く察知した十王ゴライアスは一気に形勢を自軍の勝利に導くためにキングクリムゾンを召喚使用したんです。ダークエレメント抜きで”」

「どうでもいいし、長げーよ！つうか何だその説明！？」

あまりに長いうえに支離滅裂としたティアナの説明に若干怒りさえ感じたグリフィスだった。

「それで、ティアナはスバル達と一体どんなものを作ったんだ？」

「いえその・・・大したものは・・・！」

「あ。」

すると、グリフィスは目の前に広がってきた明らかにティアナたちが作ったであろうヴァイスを象った砂の彫像を発見する。

「何だかあそこに、君達が作ったとしか思えないような代物があるんだけど・・・」

「ち、違いますよ!あれは、ヴァイス陸曹長じゃないですよ!あの・・・集英社・メガミマガジン並びに作者とは一切関係のない代物ですから!」

ティアナはそう言いながら顔を赤らめヴァイスから目線を外す。

そんなティアナの事を気にかけながら、スバルとギンガは自分たちが作った作品を熟視しつつこう言って来た。

「それにしても、ティア。作ったはいいけど・・・これちょっと異様に足が長かったんじゃない?ヴァイス陸曹長ってもっと足短かったよ。」

「ちょっと幻想入り過ぎたかしら・・・・・・」

「う、うるさいはねスバル!!!ギンガさんもあんまり変なこと言わないで下さいよ!!」

だがしかし、ヴァイス本人は非常にこの作品を高く評価していた。

「いや、こんなもんだろ。凄げーなおい、そっくりじゃねぇか!これ優勝いったんじゃねぇ?流石に俺もこれは壊せねぇわ。」

「え!?嘘!!褒めてくれるんですか!?」

「褒めるも何も俺は思ったことを言ったまでだぜ。」

ティアナはヴァイスの言葉を聞くと、顔を真っ赤に染めこの世に生まれて来てよかったばかりの涙を流した。

と、その時クロノはこの砂の彫像を奇妙な腕の形に関して疑問を抱いた。

「ところで、この不自然な手は何なんだ?」

クロノがそう指摘したところは、明らかに御姫様抱っこをする時の様な抱える時の手であったというところだ。

「ああ。これはアレですよ!ティアのアイディで作ってみたんです。ギン姉、ちょっと肩貸して。」

ギンガの肩を借り、スバルは砂の彫像の手の中に体を収める。

「こうやって・・・これで完成・・・ぐおおおお!!!!!??? ??」

と、その瞬間重みに耐えきれなかった彫像の両腕が綺麗にもげてしまった。

ティアナとヴァイスは思わず声を上げた。

「きゃあああああ!!!!!スバル何やってくれたのよ!!!!!

！」

「だあああああ！！！！何してるのお前！！！ヴァイス君の手が！！！！早く直して、早く！！！」

「ご、御免なさい！！！えっと・・・腕は・・・腕は・・・！！はやく付けなきゃ！」

スバルはそう言いながら大急ぎで取れた両腕を持ちながら修復作業に取り掛かろうとしたが、その直後何か非常に柔らかいものにそれが当たり見上げてみるとそこにははやて達と共に審査の方に当たっていたシグナムが立っていた。

シグナムはヴァイスではないが非常に似た感覚の所為か錯覚を起こし、血管を浮かび上がらせながらヴァイスを殴り飛ばした。

「・・・何・・・するのだこのドスケベ男が！！！！！！！！」

「何で俺っすか！！！！！！？？？？？？」

ヴァイスは空中に高く浮かび上がり、勢いよく地面へと激突する。

そして、それと同時にシグナムはそれが勘違いだったということに気づいた。

「何だ。てっきりヴァイスに触られたと思ったのだが・・・済まぬ事をしたな。ん？これは坂田金時さんではないか？完成度高けーなおい」

シグナムは最早坂田金時でもないヴァイスの兆候を見ながらそう口

にした。

「違うから！これ絶対違いますから！！」

「馬鹿面さげたどうしようもない坂田金時だな。」

「何！？結局何なの坂田金時！！」

もう何が何だか全く分からなくなるグリフィスだった。

「シグナム。審査のほうに回っていたのではないのか？」

「はい。大体の審査は既に終わっています。あと残っているのは、クロノ提督達のチームとスクライアと金太郎殿のチームぐらいです。」

「そう言えば・・・ユーノの奴も作品を作ると言っていたな。」

「ここは一度ユーノ先生のレベルを見てみましょうか！」

クロノ達は早速シグナムと共にユーノ・金太郎チームが拠点とする場所へと足を運んだ。

全員が唖然とする中、金太郎は上機嫌な様子でやって来たクロノ達にこう言った。

「おお！これはこれはクロノ殿！皆様もお揃いのようですな。丁度いい機会ですので、私と店長の作品を見ていってくだされ。中々に凝っておりますぞ！」

クロノ達は金太郎にそう言われと、目の前に佇む恐ろしく巨大で精巧に造られたどこかの雪まつり会場にでもありそうな建造物に目を奪われ、一護やなのは達も思わず言葉を失った。

「「「「「なっ!?」」」」」

「「「がっ!?」」」

驚愕のあまり何も言うことの出来ないでいる全員に向けて、一人砂の彫刻を作り続ける翡翠の魔導死神ユーノは飄々した様子で話しかけてきた。

「おーい、なのは♪一護さん♪みんな!どう、結構凄いでしょ♪」

「「あ・・・・・・!!」」

クロノとヴァイスは一護達以上にあまりに次元の違いすぎる作品を見て、思わず口を開けてしまっていた。

「流石は店長!芸術感覚も実に研ぎ澄まされておりますな!それで、クロノ殿達はどんなものを作ったのですか?」

「ん・・・あの・・・あれですよ・・・」

若干声を低くしながら金太郎の質問に答えようとするクロノだったが、内心はヴァイスと一緒にこう感じていたのだ。

「(は、恥ずかしくて言えねえ・・・!!僕達今迄何やってたの!?坂田金時って何!?あんなのただの盗作じゃねぇか・・・!!)」

「あ、本音言っちゃったよ・・・ついに。」

「（あれじゃあ優勝どころか参加賞も無理っすよ・・・・・・）」

「（レベルが違いすぎる・・・・・あいつは僕達とは次元が違う・・・）」

と言うわけで結局、あまりの次元の違いすぎる作品を造り上げたユーノ・金太郎チームが優勝と言う形になってしまい、全員は非常に悔しい思いをしたそうな。

だが、ユーノ自身はクロノ以上に金一封と言うものに興味はなく、貰った賞金は全額全員のために使うことにしたのであった。

すると、ちょうど芸術界が終わりを迎えると石田・チャド・日番谷の三人が海の家で作った料理と飲み物を抱えて全員の前に現れた。

「てめぇら・・・・・昼食の出前だぞ・・・・・・」

「海の家特性の焼きそばとおにぎりだ。心して食してくれ。」

「飲み物もある。」

「おっ！ちょうどいいタイミングや。それじゃあ、これから昼食の時間や！みんな、一旦ランチタイムや！」

はやては全員を招集させると、三人が抱えてきた大量の料理と飲み物を全員で協力して配り終え、挨拶を済ませて昼食を始めるのであった。

「「「

てしまった。

その一方で、なのはの父である士郎はユーノとなのはのラブラブな様子を見て異常なまでの殺気を漂わせ日本刀を手に取っていた。

「くそ・・・！お父さん・・・もう我慢の限界だよ・・・！なのは・・・すまないが一度ユーノ君の事を試させてもらう必要がありそうだよ・・・！」

そんな士郎の様子を窺いながら、桃子と美由紀は冷静に対処をする。

「あなた。駄目よ、そんなイジワル言っちゃ。」

「そうだよ。折角なのはとユーノがいい感じなのに、邪魔するなんて・・・万が一邪魔したら逆になのはに殺されちゃうよ。」

その美由紀の言葉を聞いた直後、全員は共通の見解に達し心の中で頷いた。

やがて、全員が昼食を食べ終え日陰で寛いでいるとユーノがふと何かを思い出したかのような口調でこう言った。

「あ、そうだ。“デザート”のあれを用意しとかないと。」

「何だ？スイカでも持ってきてるのか？」

「いいね！やっぱ海に来たのなら、スイカ割りはかかせないでしょ！」

鬼太郎達がスイカとばかり思いこれから吸いスイカ割りでも行うの

ではないかという淡い期待を抱いていると、ユーノとはやては顔を見合わせ不敵な笑みを浮かべるととんでもないスイカ割りの始めを宣言する。

「ほんなら、早速レクリエーション企画第二段といきますかな、ユーノくん♪」

「ああ。名づけて、『割られるな。奴らは非情にお前を狙ってるスイカ割り』の始まり始まり♪」

ユーノが口にしたそのレクリエーションの名前を聞いた一同、途方もない悪寒に苛まれ思わず顔を引きつった。

「え・・・普通のスイカ割りじゃないんすか？」

「つか何だ・・・そりゃ・・・」

「にゃはは・・・何だか厭な予感がしてきたんだけど・・・大丈夫かな？」

「ユーノパパとはやてさんが企画したものだし、きっと大丈夫だよ！」

「そうかな・・・」

娘のヴィヴィオはそう言って絶対安全だと確信しているが、当のなのはは完全に不安をぬぐうことが出来ないでいた。

「で、肝心のスイカは何所にあるんだよ？」

一護がそう言うと、ユーノは飄々とした笑みを浮かべがら辺りを見渡しこう言った。

「それだったら・・・ほら、出てきましたよ♪」

すると、その直後全員の目の前に砂の下から技術開発局の協力の元、開発改良を試みたスイカの頭部を持ち、体長５メートルほどの巨大な化け物が出現した。

一護達はそれを見た途端、目を丸くして声を上げた。

「「なっ！！何だありゃああ！！！？？？」」

驚愕のあまり口が大きく開く一護と恋次に、ユーノは飄々とした様子で扇子を広げてこう言って来た。

「今回のスイカ割りのスイカですよ♪技術開発局の人たちが開発・改良を施した対虚用のスイカです♪」

「あれか！けど、今回は規模も昔のとは比べ物にならないぐらいデカイじゃねぇか！」

一護達は十年前、女性死神協会の面々と海に行った際にこれと同型のスイカの化け物と戦ったことがあるが、今回はその当時よりも一段とグレードアップしたものとなっていた。

そして、その一方でスバルはそのスイカを見て動揺を隠し切れないでいた。

「どどど・・・どうすればいいの！？」

「お、落ち着きなさいスバル！大きくても所詮はスイカよ！」

冷静に対処しようと平静を装うティアナ。

すると、そんな二人に向かってはやてが悪戯っぽくこう言った。

「へへ。あんまり舐めてると痛い目に遭うよ。それ結構強暴なんやで。」

「「え！？」」

すると、その直後対虚スイカは蔓を伸ばしてスバルとティアナの体を掴みとり、完全に体を捕えたのであった。

「「きゃあああああああ！！！！」」

「スバル！ティアナ！」

全員がその光景を見ながら苦い表情を浮かべていると、虚スイカは捕えたスバルとティアナの水着の中に蔓を入れたり大事な場所を触ったりなどとやりたい放題の事を始め、二人の顔を赤面させた。

「！！きゃあああ！！！！ど、何所触ってるのよ！！！」

「あああああ！！！！蔓が水着の中に！！！！！」

ユーノを始め、男性陣一同はその光景を見て赤面させる。

その一方で桃子と士郎は場違いなリアクションを取るのであった。

「あ～ら、凄いわねこれ。」

「いや～実に元気のあるスイカだな。どんな味がするんだろうな。ははははははは！！！」

両親のあまりに場違いなリアクションに流石のなのはもツッコンだ。

「って！お父さんもお母さんも何呑気なこと言ってるの！！」

その一方で、浦太郎はこれを大儲けの機会と判断し予め持ってきたカメラでスナップ写真を撮り始めた。

「いいね、いいね♪こりゃ、写真撮ったら大儲け出来そうだよ♪」

「撮らんでいいわ！！！てめぇは！！！！」

一護はそんな人として男として羞恥心を失った浦太郎の顔面を思い切り殴り飛ばした。

「ぐっほ！！！」

そして、鬼太郎と金太郎は浦太郎が撮った全ての写真データを回収してあとでしっかりと処分をしたのであった。

「フェイトちゃん！いくよ！」

「うん。」

なのはとフェイトは二人を助けるために首にぶら下げていたレイジ

ングハートとバルディッシュを取り出し水着の状態で起動させると、一気に勝負を仕掛ける。

「レイジングハート！」

〈Ａｃｃｅｌ　ｓｈｏｏｔｅｒ〉

「バルディッシュ！」

〈Ｐｈｏｔｏｎ　Ｌａｎｃｅｒ〉

二人の攻撃が目の前のスイカ虚に着弾しようとした直後、アクセルシューターとフォトンランサーはスイカ虚の蔓によって攻撃そのものをかき消された。

「「え！？」」

驚きを隠せない様子のなのはとフェイトに、はやてとユーノは次のように言った。

「言い忘れておったけど、魔法攻撃や霊圧による攻撃は一切効かんよ二人とも。」

「あの蔓には放出された魔力・霊圧を吸収ないしはかき消す力があるんだ。倒すには直接攻撃系の技で仕掛けるしかないよ。」

「斬魄刀とかで斬るしかねってことか。くそ！代行証は今は持ってしコンもコンで何処行ったか分かんねぇから死神になれねえ。おい、ルキア！吉良！何とかならねぇのかよ！？」

「ごめん一護君・・・今日は義魂丸を持ってきてなかったようで・・・！」

「す、すまん一護・・・！私もちゃっぴーは海の家だ・・・」

申し訳なさそうな表情を浮かべるルキアと吉良に一護の肩の力が一気に落ちる。

「くそ・・・！」

と、その時恋次が徐に解放した自分の斬魄刀、蛇尾丸を取り出した。

「！？恋次！」

「へっ！こんなこともあろうかと、俺は蛇尾丸を用意してきたぜ！この間の借りはきっちり返すぜ！」

と言うのも、恋次は以前現世の海に来た際これと全く同じスイカ型の虚の攻撃を食らってしまい、こっ酷い思いをしていたのだ。

そんな雪辱を晴らすばかりに、恋次は空中へと飛び上がって蛇尾丸の刃節を大きく伸ばした。

「咆えろ、蛇尾ま・・・！！」

と、攻撃を加えようとした直後、恋次の足にスイカの蔦が絡まり恋次は十年前と同様、そのまま海の方へと投げ飛ばされてしまったのであった。

「のあああああ！！！！！」

「恋次！！」

「またこんなオチか・・・」

「つくづく恋次もついてない奴だ。」

一護・吉良・ルキアの三人はやはりこのような展開となってしまった恋次に最早憐み以上のものは何も抱かなかった。

「おめぇら、来るぞ！」

鬼太郎がそう言うと、一護達は一斉に飛び上がってスイカ虚の攻撃を回避する。

全員はこの未曾有の敵の脅威に頭を抱えていた。

「くそ！コンの野郎、一体何処までほっつき歩いてやがんだよ！！」

「居ないもののことを言っても仕方ないだろう。ここはこの状態でなんとかするしかあるまい！」

「しかし、普通の魔法が通用しない分にはどうすることも出来ですよ・・・！」

と、クロノがルキアにそう言ったその時だった。

織姫とエイミィは足首を捕まえられそのままスイカ虚の餌食となってしまった。

「あああ！！！あなた！！！」

「クロノくん！！」

二人が捕まってしまうと、一護とクロノが激しく動揺する。

「織姫！！！」

「エイミィ！！」

その瞬間、再びスイカ虚の攻撃が二人に牙を向け、二人はその攻撃の軌道を読んで素早く回避する。

「なんてこった・・・！織姫とエイミィさんまで捕まっちまうなんて！」

険しい表情を浮かべ事態の深刻さに頭を悩ませる一護。

その直後、石田とチャドがそれぞれの武器である銀嶺弧雀（ぎんれいこじゃく）と「巨人の右腕（ブラソ・デレチャデ・ヒガンテ）」を解放して応戦してきた。

「疾（し）っ！」

「『巨人の一撃（エル・ディレクト）』！」

しかし、やはり先ほどのなのは達同様二人の攻撃をものともせずにスイカ虚は霊圧を吸収し攻撃を無効化させた。

「ち。やはり駄目か。だがこのまま諦める訳にもいかない。黒崎！ここは僕と茶渡君が引き受ける！その隙に代行証を取ってこい！」

「分かった！すまねぇ石田！」

一護は二人の行為に感謝し、大急ぎで代行証を取りに走っていくが、その途端一護の道を阻むとばかりに目の前の砂浜の中から別のスイカ虚が出現した。

「な・・・何・・・！」

ここに来てまでこんな展開なのかと言うような表情を浮かべる一護だったが、その瞬間蔓が伸びて一護の体は完全に拘束されてしまった。

「しまった！！」

絶体絶命のピンチに陥る一護。

そんな一護に容赦なくスイカ虚の蔓が襲い掛かろうとしていた。

「ち！」

と、その時だった。

今までの話を聞いていた士郎が不敵な笑みを浮かべたかと思えば、桃子より自分の刀を受け取りこう言って来た。

「ふふ・・・みんなだらしないぞ。ならば仕方ない。ここは俺の出番のようだな・・・」

「え！？お父さん！！？？」

なのはは突然態度と雰囲気の変わった実の父の姿に困惑する。

その一方で桃子は笑顔を振りまきながら夫の士郎にエールを送る。

「あらあら・・・気をつけて頂戴ね♪」

士郎は妻からのエールを受け、徐に鞘から刀を抜くとスイカ虚に向かって走り出しなのはに向かってこう言った。

「はははははは！！！！！見ておきなさい、なのは！！！これがお父さんの実力さ！！！！」

士郎は高く飛び上がると、全身に刻まれた刀傷から分かる様に数多の死線を潜り抜けて培った飛び抜けた身体能力を使って持ち前の剣技でスイカ虚の一体を一刀両断。

スイカ虚は呆気なく細かい粒子となって消えていった。

前線メンバーは一般人でそれなりの歳にも関わらずこれだけのことをやってのける士郎の戦闘能力の高さに非常に驚いた。

「す、凄げーーー！！刀の一振りで真っ二つかよ・・・」

「流石ですな。ならば私も！レバンティン！！」

〈Ｅｘｐｌｏｓｉｏｎ〉

士郎に刺激を受けたシグナムはレバンティンを取出し、スバル達を捕えたスイカ虚目掛けてレバンティンの一撃を食らわせる。

「紫電一閃！！」

シグナムの一撃が決定打となると、スイカ虚は消滅していき、捕えられていたスバル・ティアナ・織姫・エイミィの四人は無事に解放された。

「「きゃあ！」」

「いた！」

「た、助かった・・・！」

そして、その後シグナムに続く形でヴィータ・鬼太郎などによる怒涛の反撃が始まった。

「テートリヒシュラーク！！」

「俺の必殺技、パート１！！」

現れたかなりの数を誇っていたスイカ虚は一気にその数を減らしていき、一護達は安堵の表情を見せ始めていた。

「よし！これなら！！」

「まだまだや！この後に大ボスが控えておるんよ。」

「「！？」」

はやての言葉を聞き、全員が訝しげな表情を見せ始めると、その途

端砂場の下から今までの中で一番サイズの大きい何故かクロノの顔をしたスイカ虚が出現し、全員はそのスイカに目を疑った。

「こ、これは！！」

「クロノの顔をしたスイカだ！！」

「おい・・・！こんなスイカがあるってことは・・・用意したのはもしかして・・・！！」

フェイトがそう言った瞬間、待っていましたとばかりの嬉々とした表情を浮かべながらユーノが晩翠片手に走り出していった。

「よっしゃあああ！！！！来た来た来た来た！！！！！！」

「ふぇ・・・ゆ、ユーノ君！？」

「やっぱり・・・あいつかよ・・・」

何となく展開を読んでいた一護達を余所に、ユーノは勢いよく走り出すと日頃の恨みを晴らさんとばかりにこう言った。

「ははははははははは！！！！！！こいつが来るのをどれほど待ち望んできたことか！！！！！いくぞ、シスコン馬鹿提督且つ無限書庫ブラックリストナンバーワン小市民駄目亭主クロノ・ハラオウン！！！！！！！！地に堕ちろ！！！！！！」

「オイー！！！！！！！やっぱりお前はそう言う奴だったのか！！！！！！て言うか、一体どれだけ僕の事を罵倒するつもりなんだ！！！！」

長々と自分の事を罵倒するユーノの言葉にクロノは激しく抗議をするが、そんなことなど一切気にも留めずにユーノは高く飛び上がるや否やクロノスイカを真っ二つに斬り下した。

「とう！！！！！！」

月牙天衝さながらに見事な斬撃を披露したユーノはクロノスイカを消滅させ、それを傍で見ていた士郎と桃子も安どの表情を浮かべた。

「うん。いい剣碗だ！はは！！本当に立派になったものだな、ユーノ君は。」

「なのはも良かったわね。ユーノ君みたいなあんないい人恋人が出来て♪」

「お、お母さん／／／／／／」

母親にそう言われると娘であるなのはも恥ずかしさを隠し切れなくなり、それを横でほほえましくヴィヴィオが見守っていた。

だがしかし、ユーノはクロノスイカを倒したかと思えば今度は本物のクロノ目掛けて走り出し牙を向けてきた。

「まだあったかスイカ！！！！その息の根止めてくれるわ！！！！！」

「待て、ユーノ！！！！僕はスイカじゃない！！！！！！」

クロノは斬魄刀片手に自分に向かって襲い掛かってくるユーノから必死で逃げ回り始める。

そんな追いかけっこを繰り広げる二人の姿を見ながらフェイト達はこう呟いた。

「く、クロノ!?大丈夫かな・・・」

「・・・すっかりギャグ路線に定着してしちまったな・・・あいつ・・・」

「でも、いいんじゃないのかな偶には。クロノ君も何だかんだ言ってユーノ君と仲いいし。」

すると、そんなエイミィの言葉を聞くとクロノは即座に反応した。

「エイミィ!この状況を見てまだそんなこと言ってるのか!!!」

「死にさらせ、クロノ!!!」

「あああああ!!!!来ないで!!!!!」

クロノ・ハラオウンは慰安旅行にも拘らず疲れを取るどころか逆に疲れがたまるばかりであったそうな。

クロノが追い回されている間に、一護達は恋次を釣り上げ意識を確認する。

「たく。しっかりしろよな、恋次。」

「全く。相変わらず世話の焼ける奴だ。」

呆れかえりながらルキアがそう言うと、恋次は水浸しの体でこう言った。

「ケポッ！ま・・・またこんなオチかよ・・・チクショー・・・」

こうして、機動六課前線メンバーの図らずも壮絶とした楽しい海でのひと時は終わりを迎えようとしていたのであった。

では最後に、この場にはいなかった日番谷君の様子を見て終わりにしよう。

日番谷がいないことに気づいた吉良が海の家を覗くと、日番谷は一人かき氷を食しながら休憩を取っていた。

「あれ？日番谷隊長は参加しなかったんですか？」

「ウルセーな。だから俺は熱いのは苦手なんだよ・・・・・・」

そう言って、日番谷は今日も氷を食すのであった。

夏休み企画・機動六課大合宿（中編）　（後書き）

教えて、ユーノ先生！

特別編：ユーノ・スクライアのマル秘日常生活！

一「（俺の名前は黒崎一護。空座町で町医者を営んでる。今日俺は、愛弟子である翡翠の魔導死神ユーノ・スクライアの日常を探るべく朝早くから仲間たちと共に張り込みをしている。それでは早速リアルタイムでユーノの日常の様子を実況していこう。）」

午前5時：ユーノ起床

一「（ユーノの朝は兎に角早い。誰よりも早く目を覚ますと、軽い準備体操をしてジャージに着替えるや否や恒例のジョギングに出かけ、そこでしっかりと体力づくりを行う。）」

午前6時：帰宅、及び顔洗いなど

な「（六課に戻ってくると、ユーノ君は歯磨きとモンダミン、それと洗顔をすませる。そして、何事もなかったかのようにロビーで新聞を読み綴る。それにしても・・・何だかこの時のユーノ君ってまるでお父さんみたいでカッコいいな～～～）」

午前7時：朝食

恋「（早朝練習が終わり、ユーノは俺達と一緒に朝食をとる。ちなみに今朝のメニューは己大好物の和食だ。俺が焼き魚定食であるのに対し、ユーノはアジの開き定食。この四年の間地球に滞在してい

たせいか、すっかり和食通になっていたらしい。）」

まだ続く！

魔導師図鑑ハイパー！

ユーノ・スクライアはギャップの差が激しい。

悪友であるクロノの前では非常にドライなのに対し、恋人であるなのはの前ではそれが一変、超甘々と化してしまう。

例えばこんな感じに。

ク「おい、ユーノ！！よくもあんなスイカを作ってくれたな！！本人がどれだけ傷ついたか分かっているのか！！」

ユ「はて、何の事かな？僕は技術開発局の人達にあくまでリクエストしただけだよ。実際に造ったのは局員の人達だ。文句ならその人たちに言え。」

ク「く・・・！その態度が妙にイラつくな・・・！！大体お前はだな・・・！！」

と、クロノが文句を言おうとした矢先、なのはがユーノに向かって声をかけてきた。

な「ユーノ君！一緒にボートに乗ろうよ♪ヴィヴィオも待ってるよ！」

ユ「分かったよ、なのは♪今いく♪」

そう言って、ユーノは上機嫌でなのはの元に走り出し完全にクロノを無視した。

ク「おい！！！人の話ぐらい最後まで聞いていけこの淫獣フェレットが！！」

結局最後までぞんざいに扱われるクロノに一護達はこう思った。

一「こいつはどこまでユーノにいじられるが性なんじゃねぇか？」

恋「可愛そうな男だよてめぇは・・・」

夏休み企画・機動六課大合宿（後編）（前書き）

ユ「どうも♪夏休み篇もいよいよ後半。最後までギャグ路線で行くよ」

一「んじゃ、ユーノ・スクライア外伝　夏休み篇」

な「最後まで、楽しんでいってください！」

夏休み企画・機動六課大合宿（後編）

海での楽しい楽しいひと時を心行くまで堪能した機動六課前線メンバーは夕方、海からさほど距離のない歩いて五分ほどの場所に佇む風情漂う宿泊施設を訪れていた。

「ささささ♪今日、僕達が止まる旅館は此処だよ♪」

ユーノがそう言って全員にその旅館の外見を全員に見せると、一護達は普通にいい感じな雰囲気を醸し出す旅館に目を輝かせた。

「へぇ。結構いい旅館じゃねぇかよ。」

「山奥の鄙びた旅館って感じ！」

「風情が出るね。」

「今日はゆっくり温泉にでも浸かって、日頃のストレスと疲れ、嫌な事も何もかも綺麗さっぱり温泉で洗い流しましょう。さ、ご案内いたします♪」

そう言うと、ユーノは宿泊施設のものがよく着ている格好で一護達全員を施設の中へと案内すると、順に館内の事を説明し概ねの事が伝え終わると真っ直ぐに浴場へと向かって歩き出した。

全員が風呂用具一式を手に取って歩いていると、不意にはやてがこんなことを口にしてきた。

「やっぱりええもんやな、温泉って。あ、そうそう！この旅館な・・・実は何所かに“混浴”があるらしんよ。」

その言葉を聞いた瞬間、一護達男性陣は耳をそばだて驚愕の表情を見せた。

「「「「「こ、混浴だと!?」」」」」

顔を真っ赤に染め上げる一護達だったが、それに対してユーノは至って普通の表情を浮かべていた。

「ま。何所にあるのかは分からないですから、探すのは一苦労だね。さて、早速温泉にでも入ってリフレッシュでもする・・・ん!?」

と、ユーノが男湯の暖簾を潜って中に入ろうとした途端、何故かなのはや一護と言った前線メンバー全員は一様にユーノの事を凝視する。

「・・・何・・・みんなして・・・何で揃いも揃ってそんな目で僕を見るわけ・・・?」

すると、その直後全員は顔を綻ばせる、全員の気持ちを代表して浦太郎がユーノにこう言って来たのだ。

「へへ♪店長。フェレットになりたかったら遠慮くなくそう言ってもいいですからね♪見たいんでしょ、なのはちゃんのか・ら・だ」

だが、それはユーノにとっては言ってはならない一言だった。

ユーノは浦太郎の言葉を聞いた瞬間、血管を浮かび上がらせ溢れる怒りのエネルギーをすべて浦太郎の顔面に叩きつけた。

「のあああああ!!!!!!!」

浦太郎は鼻血を出しながら床に気絶する。

そして、恐怖のあまり顔を強張らせる全員の前でユーノは怒り心頭にこう言った。

「誰がフェレットになるか！！！！！ど阿呆！！！！！」

すると、そんなユーノの一言を聞いた瞬間、なのはとヴィヴィオは口を揃えて寂しそうにこう言った。

「「え～～～ならないの～～～？」」

「なる訳ないでしょ！！！！！て言うか二人とも！！！！！羞恥心ぐらい覚えなよ！！！！！僕これでも健全な男なんだから！！！！」

二人の羞恥心を無視した言葉にユーノは顔を赤くしながら必死に弁解をするのであった。

やがて、前線メンバーは男湯と女湯に分かれて服をすべて脱ぐと必要なものだけを持って風呂の中へと入っていった。

色々と問題もあるため、女湯の描写は極力避けさせてもらう。

なので最初はムサイ男湯の光景から描写をすることにしよう。

ユーノを始め、一護達はそれぞれ屋内に設けられた広いお湯の中で日頃の疲労と体の赤を流してゆったりと寛いでいた。

一護も肩の力を落とすとユーノと士郎と一緒に並んで入浴を堪能し

ていた。

「はぁ～～～～」

と、その時一護の目の前で顔中痣だらけの先ほどユーノに殴られた浦太郎がケツをお湯に出しながら通り過ぎて行った。

「僕は可愛い人魚♪」

一気に雰囲気をぶち壊れたことで、一護は浦太郎に厳しく注意をする。

「気持ち悪りーーーことすんなよ!!!!」

憤慨する一護だったが、そんな一護をユーノが宥めようとする。

「まぁ許してやってください、一護さん。今日は始めから終わりまでギャグ路線なんですから。」

「だからってアレは許してもいいって言うのか？つうかどっかの漫画で見たことあったぞ!?」

「まぁまぁそう堅苦しくなるな。無礼講でいこうよ、一護君。」

士郎はそう言うと、何処か納得のいかない一護の肩に手を乗せ、一護はそんな士郎を見ながらふとこう言った。

「てか・・・あんたいつの間に俺の名前を・・・？」

「僕が教えたんですよ♪一護さんにはこっちでは色々とお世話にな

りましたからね。偶に織姫さんがケーキの差し入れとかあったの覚えてますか?あれは翠屋で買ってきたケーキなんですよ。」

「そうなのか?美味いケーキだと言うことは覚えてるが、まさか作ってたのがなのはの実家の親父さんだったとはな。」

「ははは。あれは俺じゃないよ。桃子が作ったものだよ。しかし、君があの時・・・ユーノ君と出会ってくれたことが、今のユーノ君やなのはの仲を取り持ってくれたようなものだな。」

しみじみと語り出す士郎。

一護は些か疑問符を浮かべていた。

「そっすか?俺は単にユーノがなのはや大切な仲間を守れるようになりたいって言うから協力しただけで・・・」

すると、その一護の言葉に反応してユーノが和やかな表情を浮かべながらこう言った。

「それだけじゃないですよ。僕にとって、一護さんは僕が今までの自分から変わる切欠をくれたかけがえのない人なんですから。あなたがあの時、見ず知らずの僕を何の迷いもなく助けくれたことや、死神の力を教えてくれたことに僕はどれだけ感謝してることか・・・・」

「ユーノ・・・・・」

愛弟子のユーノの口からそのような言葉が出るとは夢に思っていなかった一護は思わず心打たれてしまう。

「地球に滞在するようになってから、僕はちょくちょくなのはには内緒で士郎さんや桃子さん達、それにアリサ達に接触して今の僕の身に起こってることを全て話しました。」

「最初聞いたときは、なのはの魔法と同じぐらい今一ピンとこなかったが、ユーノ君の真摯な態度と行動を見て、何となく分かったんだ。それに、ユーノ君がなのはのことをどれだけ大切に思っているのかも自ずと伝わってきたしな。」

「ふ～ん・・・それで、俺にどうしろと？」

一護がそう言うと、士郎はそんな一護にこう告げた。

「別に何もすることはないさ。ただ・・・・・一言お礼を言いたいだけだよ。一護君、なのはとユーノ君の関係を取り持ってくれて、ありがとう。」

士郎は頭を下げて一護に対してお礼の言葉をかけるが、当の一護はイマイチ褒められる理由が何なのかが分かっていなかった。

「う～ん・・・今一お礼を言われる意味が分からない気がするんだけどな・・・」

「あはは♪じゃあ、あまり気にしないで下さい。ささ、露天風呂にでも行きましょう♪」

ユーノはそう言うと、一護達全員を引き連れて露天風呂へと向かった。

尚、この旅館もユーノ達の貸切となっているため今日は誰にも迷惑をかけることなく入浴を堪能できるわけだ。

露天風呂に入ると、一護達は中のお湯とはまた違う露天ならではの風情と言うものを満喫していた。

「は～～～露天風呂なんて、最高っすね！」

「ああ。極楽だな。」

「ほんと・・・一日の疲れが取れる・・・ん！？ああ・・・白鳥君はまだ気絶している。」

吉良はそう言うと、先ほど床に足を滑らせ頭を強く強打した白鳥の様子を見ていてふとそう口にした。

「だらしねぇ男だぜ。なっ！？」

と、鬼太郎が白鳥の姿に憐れみを抱いているとその直後、彼は湯気の中から見えてきたあるものの姿に目を疑った。

「どうしたんだよ、鬼太郎？」

「なぁおめぇら・・・あの髪型・・・ってひょっとして・・・！？」

そう言いながら、恐る恐る鬼太郎と怪訝そうな表情の一護達が顔を覗かせると、湯気の中から見えてきたのは独特の尖った髪に鈴をつけた大柄な男の姿であった。

一護達は一瞬目を疑ったが、その男の方はと言うと背中を見せなが

ら高笑いをする。

「ははははははは！！！！！！！！いい湯じゃねぇか！！！！！！！！」

男の声と容姿をはっきりと見た瞬間、一護と恋次の表情が凍りつく。

「なっ！！！け、剣八！！！！！！」

「更木隊長！！！！！？？？？」

「ああ？何だよ、一護と阿散井じゃねぇかよ。」

一護と恋次の声を聞くと、護廷十三隊十一番隊隊長、更木剣八は徐に振り返る。

すると、その後ろから剣八の部下で十一番隊第三席のスキンヘッド、斑目一角と五席の綾瀬川弓親が反応してきた。

「何だ。お前らも来てたのか？奇遇だな。」

「一角さん！？」

「なになに、僕らの知り合い？」

「弓親（ゆみちか）まで！？」

驚き返る二人だったが、その直後更に二人は目の前にいる人物たちに驚いた。

岩場を見れば、そこにはタオルを巻いた状態で岩場の上で寛ぐルキ

アの義理の兄、六番隊隊長朽木白哉を団扇で仰ぐ九番隊隊長、檜佐木修兵がいたのだ。

「檜佐木(ひさぎ)さんに・・・朽木隊長まで!?」

「な、何で隊長陣が揃いも揃ってこんなところに!?」

すると、そんな一護達に一緒に居た日番谷がこう告げてきた。

「そう言えば言ってなかったな。偶然かどうか知らねぇが今日は俺ら護廷十三隊男性陣隊長格による慰安旅行だ。」

日番谷がそう言うと、それに便乗して弓親と一角が答える。

「思い出作りってことだね♪」

「京楽隊長と浮竹隊長の方は、それぞれ残務整理やら病欠やらで来てないけどな。」

「ははははは!!!!てめえらこそ、どうして此処にいる!?」

剣八が高笑いを浮かべながらそう言うと、一護は顔を引きつりながら剣八の質問に受け答えする。

「え・・・?ああ・・・俺の知り合いのユーノって奴の誘いで同じように慰安旅行に来てるんだ・・・30人ぐらいつれて。」

「何だと・・・?俺達と同じ慰安旅行だと!?ざけんじゃねーぞ!!!」

剣八は妙に怒り心頭な様子で一護にそう言い、理不尽な怒りを露わにする剣八に一護は大いに戸惑った。

「んな怒ること言ってねぇだろ!?」

「と、兎に角落ち着きましょうよ・・・!」

すると、その時剣八は風呂桶を手に取ると徐にお湯を入れて一角たちと一緒に一護達全員に狙いを定めてこう言った。

「ははははは!!!!面白れ!!!!ちょうど身体がうずうずしてたところだ!此処で遭ったからには一護!!決着つけてやるぜ!!」

「え!?そ、それはマズイって剣八!!」

貸切とは言え、大暴れの様相を見せる剣八たちに大いに焦りを見せる一護やユーノ達。

しかし、そんな一護達のことなど気にもかけずに剣八は勝負の開始を宣言する。

「“十一番隊ｖｓ一護達”の・・・お湯かけ合戦だ!!!!ははははは!!!!!」

剣八は勝負を宣言すると同時に、一護に向けてお湯をかけていったが咄嗟に一護はそれを回避し、運悪くお湯は吉良の顔面へと直撃する。

「のあ!?」

「吉良！！」

「あははは。中々面白い人たちじゃないか。」

一護の隣の士郎が腕組みをしながらそう言うと、一護はそんな士郎にツッコミを入れる。

「呑気に言ってる場合かよ、アンタは！」

「はははははは！！！ガンガン行くぞ！！！」

剣八は更に勢いを増してお湯を飛ばしていき、その結果クロノ・ヴァイス・グリフィス・エリオと言った四人を瞬殺させた。

「やめろって剣八！！風呂でんなことすんじゃねぇよ！！」

「うるせーぞ一護！！負け惜しみなら死んでからにしろ！！」

剣八はそう言うと、再び一護に狙いを定めてお湯をかけるがまたしても一護はそれを上手く回避する。

一護が回避すると、剣八のお湯は気絶した白鳥の頭へと直撃し、白鳥はその衝撃で目を覚ました。

「熱い！！！何をするであるか・・・って！？更木隊長！？他の隊長陣も何故此処に！」

そして、白鳥が復活した事を気に鬼太郎達スクライア商店メンバーの勝負魂に火がついた。

「てめぇらよくも遣りやがったな！」

「負けていられませぬな！」

「はっ！喧嘩は派手にやったほうがいいしな！俺も付き合うぜ！！」

恋次も参戦と言う形で人数が整い始める中、一護とユーノは未だ困惑していた。

「たく・・・お前らは何でいっつもそうなんだよ。ユーノ、仕方ねぇからやるぞ！」

「あ、はい・・・！」

一護とユーノは仕方なく風呂桶を持って準備に入ると、士郎も何故か一緒に風呂桶を持って構えを取り始めた。

「俺も混ぜてくれよ、ユーノ君。一護君。」

「士郎さんまで・・・！？」

「くそ！どうなっても知らないぞ！」

そして、両チームはメンバーの選出を終えるとお互いの維持と執念・プライドなど自分のすべてをかけたお湯かけ合戦を開始した。

「「「「「「「「でらあああああああああああ！！！！！！！！」」」」」」」」

激しくぶつかり合う露天風呂のお湯とお湯。

そんな光景に直面していながら、ユーノは読者に向かってこう言った。

「あはははは・・・良い子は真似しちゃ駄目だよ♪」

両チームのお湯かけ合戦が苛烈を極めていると、唐突に勝負に参加していなかった岩の上で寛ぐ白哉がこう言った。

「・・・熱いな・・・」

すると、それを聞いた瞬間勝負に参加していた檜佐木が思い出したかのように手を止めた。

「おっと!今は俺が扇ぎ役だった。大丈夫ですか、朽木隊長!?今扇ぎます・・・・・熱!!!!誰が一体!?くっそ反撃だ!!!」

檜佐木は背後からお湯をかけられると後ろに振り返り勢いよくその相手目掛けてお湯をかけた。

「ふん。思い知ったか・・・ん!?お、お前は・・・!!」

そう言って振り返ってみると、檜佐木の目に写ってきたのはお湯をかけられびしょ濡れとなった殺気を漂わせフィッシャーマンを手に取る亀井浦太郎だった。

「ふふふ・・・温泉ぐらい・・・静かに入らせろやボケ!!!!!!」

粗悪な口調でそう口にすると、浦太郎はスピアトルネード（温泉バ

ージョン）を使って檜佐木を彼方へと吹き飛ばしていった。

「ぐおおおおお！！！！！！」

豹変した浦太郎を見た途端、スクライア商店メンバーは顔を引きつる。

「亀！」

「あ～あ・・・浦太郎怒らせちゃったよ・・・可愛そうに・・・」

すると、今まで勝負には参加せずお湯につかって居た日番谷は呆れかえりながら徐にタオルを巻いて露天風呂から出て行った。

「くだらねぇ・・・俺は先にあがるぞ・・・」

日番谷が居なくなると、元々遠慮のなかった剣八たちの勝負が一層激しさをましていった。

「ははははははははは！！！！！もっともっと楽しもうぜ！！！！！！」

剣八の怒涛のお湯かけ攻撃を回避しながら、一護は風呂桶を使った月牙天衝を剣八に向けて仕掛ける。

「月牙天衝！！！！お湯かけバージョン！！！！！」

月牙の形をしたお湯が剣八を襲うが、剣八はそんなお湯を自分の風呂おけで叩き壊しながら高笑いを続ける。

「ははははは！！！！まだまだこんなもんじゃねぇだろ一護！緩めるなよ・・・出来るだけこの戦いを愉しもうぜ！！！」

「チクショー！！慰安旅行なんだから、少しはゆっくりさせてくれ！！！！！」

ユーノはそう言ってはた迷惑なこの剣八と勝負を続けるのであった。

そんな喧騒漂う男湯の様子を気にしながら、美女であふれかえる機動六課女性人たちの方はと言うと――――――

「何だか・・・隣は随分騒がしいね・・・」

「男なんてもんは騒がしい生き物やで、フェイトちゃん。」

「しかし、いいお湯ですね！！」

「はぁ～～～極楽極楽～～～～♪」

機動六課の前線メンバーと織姫、ルキアと言った面々は男たちとは打って変わって女同士日頃の疲れをいやすためにゆったりとお湯につかっていた。

ヴィヴィオはなのはの膝の上に座りながら極楽の表情を見せていた。

「なのはママ～～～私天にも昇っちゃいそう～～～」

「ほんと気持ちいねぇ～～～ユーノ君達も何だか楽しそうだし。」

なのははそう言うと、隣にいるユーノの事を気にかけた。

「出来ればフェレットさんモードのパパと一緒に入りたかったのにな～～～」

「にゃはは♪そうだね・・・私もちょっと残念♪」

すると、唐突にエイミィがふと思い出したかのようにあの話を持ち出した。

「それより、本当にこの旅館って混浴とかあるのかな？」

「それはもう間違いありませんってエイミィさん。事前に私が入念に下調べをしておきました！」

「は！と言うことは――――――」

なのははその直後、頭の中で混浴で自分と一緒に浸かるユーノの姿を思い浮かべ、それを想像した途端、涎と一緒に鼻血を流した。

「にゃはは♪もし見つけられればユーノ君と一緒にそれこそ何のためらいもなく一緒に入れる・・・♪」

なのはの涎と鼻血を見たアリサとルキアは呆れかえりながらその事を注意する。

「ちょ、なのは。鼻血！」

「涎も垂れておるぞ、なのは。お湯の中に垂らすな。はしたない。」

すると、今度はアルフが隣にいるキャロに向かってこんなことを言

って来た。

「キャロもエリオと一緒に入りたいだろ？」

「うん！最近エリオ君誘ってもちっとも一緒にお風呂に入ってくれないから寂しくて・・・」

最近は昔とは違い、めっきり一緒に入る機会がなくなってしまったことにキャロは大いに寂しがっているが、そんなキャロの反応を見たスバルやティアナは苦笑いを浮かべつつこう言った。

「キャロ・・・一応エリオも健全な男なんだし、それが普通だと思うけどね・・・」

「て言うか、エリオもエリオで大変なようねぇ・・・」

そんな談笑を交えながら女性陣が温泉を堪能しているその間も、男湯では未だ激しいバトルが繰り広げられていた。

「ははははは！！！！！まだまだ終わらねぇぜ！！！」

「ほあああああああ！！！！」

一護と剣八の戦いはエスカレートを増し、風呂桶と一緒に霊圧を放出させながらの凄まじい争いを勃発させていた。

横でその光景を見ていたユーノは思わず二人に向かってこう言った。

「だ・か・ら・・・温泉は戦場じゃないんだからほどほどにしてくださいよ！！」

「隙あり！！」

と、その直後隙を見せたユーノに向かって一角の牙が襲い掛かる。

だがしかしユーノは一角の気配を読み取ると体をひねって一角の攻撃を躱し、一角は思わず驚愕の表情を見せた。

「何！？」

そして、ユーノは風呂桶に霊圧を圧縮させてからお湯と一緒に一角を攻撃。

「輝け、晩翠・湯布院の森！！」

一角は霊圧を帯びたユーノのお湯に直撃すると、ひっくり返りノックダウンする。

「ぐあああ！！」

「一角！」

弓親は一角が倒されると動揺を隠し切れなくなる。

すると、ユーノに刺激を受けた士郎が風呂桶を二つ手に取りこう言った。

「ようし。俺も少々本気を出させてもらうぞ。」

士郎は瞳を殺す覚悟の籠った剣客の目に変化させると、自分の剣術

流派である御神真刀流小太刀二刀術を発動させた。

「御神真刀流小太刀二刀術・草津熱湯!!」

士郎の怒涛の攻撃が炸裂し、弓親と射場鉄衛門は圧倒された。

「「のっは!!!」」

恋次は間近で副隊長二人を生身の状態で圧倒する士郎の実力に驚愕した。

「やるな・・・なのはの父ちゃん・・・!」

「そりゃ何て言っても、士郎さんは屈指の剣豪♪御神真刀流小太刀二刀術の正統な後継者ですからね♪」

「序に、俺も少しユーノ君に剣術を教えたんだぞ♪」

こうして、ユーノと士郎の活躍により一気に数を減らした機動六課の男性陣一同だが、その直後白哉が岩の上に立って真顔でこう言った。

「少々甘く見ていたようだ。ならば、私が殲滅する・・・」

そう言うと、白哉は何処に隠し持っていたは定かではないが自分の斬魄刀を取り出し徐に鞘からそれを抜いた。

一護と恋次はそれを見た瞬間、直ぐに白哉を説得しようとした。

「な!白哉!!まさかこんなところで・・・!!」

「く、朽木隊長！！それは流石にまずいっす！！」

しかし、白哉はそんな二人の言葉を無視して容赦なく斬魄刀を解放する。

「散れ『千本桜』」

「「「ああああああ！！！！」」」

白哉が解号を唱えると、刀身が桃色に光り出すや否や千本の刃の桜の花びらに枝分かれし、その力によって男湯と女湯を遮る壁が破壊され、一護達はそのまま桜の花びらと一緒に女湯の方へと流されていった。

「いててて・・・・・・！！」

ユーノが目を覚ますと、いつの間にか剣八たちはその場から退散しておりだれ一人残っていなかった。

「は！このシチュエーション・・・マズイ！」

そして同時に、自分が今相当マズイ状況にあることを悟ると、師匠である一護や士郎たちを置いて一目散にその場を逃げ出した。

ユーノがその場から猛ダッシュで逃げていく様子を見ると、一護は声を上げてユーノを呼び止めようとした。

「おい、ユーノ！！お前何処行くんだよ・・・！！」

と、その時だった。

気を取り戻した男性陣の耳になのは達女性陣の低い声が聞こえてきた。

「おかしいな・・・・・みんな・・・どうしちゃたのかな・・・」

一護達が冷や汗を流しながら徐に振り返ると、そこにはタオルで全身を巻いたなのは達全員が殺気を漂わせながら立っていた。

いつもとは違う低いトーンで話すなのはを見て、男性陣一同は恐怖した。

「一護・・・恋次・・・はともかく、茶渡や石田までもが落ちたものだな・・・」

ルキアと井上はとても冷ややかな眼差しを一護達に向ける。

「ち、違うんだ朽木さん!僕らは何もしていない!ただの不可抗力だ!!」

「井上もそんな目で見ないでくれ!俺達は潔白だ!!」

必死に弁解をする二人だったが、ルキアと織姫はまるで聞く耳を持たない。

そして、フェイトとエイミィは非常に恐ろしい目線で後ずさりするクロノを凝視する。

「お兄ちゃん・・・・・これどういうこと?」

「クロノ君・・・・・説明してくれるかしら・・・？」

「ちょ！待て二人とも！！僕は見たくてこんなことをしたのでは・・・いや本当だ！！断じて僕はユーノと違って嫌らしいことなど一つたりとも考えなどいない！！」

「そこでユーノ君をまた取り上げるなんて・・・・・・クロノ君もまた随分と堕ちちゃったもんだね・・・・・・」

「駄目だよクロノ・・・・・・ユーノは何もしてないんだから・・・・・」

クロノはどす黒いオーラを発する自分の正妻と義理の妹を見て、これほどまでに恐怖を覚えたことは泣かった。

そして、それ以外の場所でもこんな会話が繰り広げられていた。

「白鳥さんも・・・吉良さんも、それに鬼太郎さん達も・・・最低ですね！」

スバルやギンガは拳を鳴らしてお仕置きをするつもりでいたらしく、白鳥や吉良はそんな二人を見ながら自分たちに銃口を向けるティアナにも恐怖した。

そんな武器を構えるなのは達に向かって、一護は必死で説得を試みる。

「ちちちち違げーよ！！！！これは白哉がなりふり構わず斬魄刀を解放してだな！！」やめろって言おうとした矢先あいつが！！」

そのように言って一護は必死で弁明するが、女性陣には全く聞いてもらえない。

「兄様がここにいるはずなかろう。馬鹿も休み休み言え・・・」

「ホントなんだって!!!頼むから織姫も信じてくれ!!!」

自分の妻にだけは信じて欲しいと願う一護だが、この時ばかりは織姫もルキア達の味方だった。

「ごめんねあなた・・・今回は私・・・あなたの敵だから・・・」

「が!!!!」

大いにショックを受ける一護。

その横では、なのはの父である士郎が同じく妻の桃子に弁解を試みていた。

「桃子!!なのはも美由紀も俺は何もしてないぞ!!潔白だ!!」

「お父さん・・・娘の肌を見ておきながらそれはないんじゃないの？男なら、潔く腹を切るのが筋ってものだよ・・・」

美由紀はそう言うと、持っていた日本刀を取出し波紋を見付けた。

士郎は自分の娘が自分に牙を向けてきたことに失禁しそうになった。

そして、殺気立った雰囲気の中はやてはなのは達に声をかけた。

「私らの裸見たツケは大層デカイで・・・・・・みんな・・・全員戦闘態勢はオッケイかいな？」

はやてがそう言うと、デバイスを起動させたなのは達は悪意に満ちた表情でこう言った。

「・・・いつでも・・・・・」

「“殺戮モード”に移行します・・・」

フェイトの口から発せられたフェイトらしからぬ言葉を聞いた瞬間、クロノは思わず声を上げた。

「フェイト！！！君は今“殺戮”って言ったな！？あれだけ人の命を尊ぶ君が僕らに向かって殺戮って言ったよな！！て言うか！！！何であのフェレットもどきが真っ先にここにいないんだよ！！！」

クロノはこんな時でもユーノを悪者に仕立て上げようとするが、そんな見苦しいクロノの言葉を聞いて、なのはは更にこう言って来た。

「クロノ君・・・ユーノ君はクロノ君みたいなエロ提督と違って私達の裸ぐらい堂々と見てもいい人なんだよ・・・初めから器の違う人なんだよ・・・」

「意味わかんねぇよ！！つうかどんな器！？聞いたことねぇぞ！！！」

思わずそう言ってしまう一護だった。

「問答無用。」

「ごめんなさいね、あなた。一応流れ的にお仕置きしないといけないみたい。」

「あなたもね・・・士郎さん♪」

桃子からの非情な一言を聞かされ、士郎は一気に全身の力が抜けた。

「そ、そんな!!!!桃子!!!」

全員が顔を引きつり後ずさりをする中、はやては最後にこう言って来た。

「・・・さぁ・・・お前の罪を数えろ・・・」

その瞬間、なのは達の怒りの一撃が一斉に仕掛けられ一護達はこの世のものとは思えないほどの生き地獄を体験することとなったのであった。

「「「「「「うっ・・・・・・あああああああああ!!!!!!!!!!」」」」」」

やがて、一護達の声が収まり辺りが静まり返ると、この貸切の旅館に設けられた温泉とは別個に存在するはやて達が言っていた正真正銘の混浴の方では、既に先客が入っていた。

入っていたのはイタリアで最大規模を誇るマフィアグループ、ボンゴレファミリーの若き十代目ボス、沢田綱吉（さわだつなよし）とその妻である沢田京子（さわだきょうこ）の夫婦であった。

先ほどまで喧騒としていた隣のお湯が急に静まり返ると、綱吉・・・通称ツナは訝しげな表情でこう呟いた。

「・・・隣の人達。やっと静かになったみたいだけど、何処かで聞いたことのある声だったな・・・」

ツナがそう言うと、京子は笑みを浮かべてこう言った。

「うふふ。案外、私達の知ってる人だったりしてね。」

「あはは。そうかもしれない。」

京子につられてツナも笑みを浮かべる。

そして、京子は徐に持っていた熱燗をツナの御猪口に注ぎ始める。

「はい、ツっ君。どうぞ。」

「ありがとう、京子ちゃん。いただきます。」

妻からの晩酌をいただくと、ツナはそれを一気に飲み干し夕焼けに染まる景色を見ながらこう呟いた。

「それにしても久しぶりだね。こうしてのんびり夫婦水入らずの旅行は・・・それもこんな立派な温泉に宿泊できるなんて。」

「うん。新婚旅行以来忙しくて旅行なんて全然出来なかったからね。でも、ハルちゃん達には感謝しないとね。」

今回、二人の旅行を計画してくれたのはファミリーの幹部とその妻たちだった。

「そうだね。獄寺君や山本たちが上手くスケジュールを作ってくれたおかげで、こうして愛する京子ちゃんと一緒に混浴を堪能出来てるんだから♪」

「うふふ♪もう～ツっ君たら目がエッチだよ～♪」

鼻の下を伸ばす夫の顔を見ながら満更でもない表情を浮かべる京子。

「あはは♪だって・・・京子ちゃんが綺麗すぎるから～♪」

「もう～♪恥ずかしいよ♪」

この二人もまた、ユーノとなのは以上のバッカプルであることは間違いないが、この二人が本格的にユーノ達とかかわってくるのはもう少し後になってからになる。

「「あはははははは」」

最後は二人揃って笑顔を浮かべて笑い合うのであった。

その後、風呂から上がった一護達はと言うと・・・・・・なのは達女性陣から食らった一撃が相当応えたのか、全身ボロボロの状態で浴衣を身に纏い、廊下を歩いていた。

「たく・・・何で風呂に入って余計疲れがたまるんだよ・・・お前はお前でそそくさと逃げやがって・・・！俺達がどんな仕打ちに遭ったか知ってるのかよ!?」

そう言いながら愚痴を零す一護に一人だけ難を逃れたユーノが苦笑いを浮かべてこう言った。

「あはは・・・それはそれは・・・ご愁傷様でした。」

「兎に角、もうあんな目に合うのは御免だぜ・・・・・・早いところ晩飯にありつきたいぜ全く・・・」

そう言いながら恋次や一護達は食事が用意されている大広間へと向かって歩いていた。

会場につき、漸く食事にありつけると思っていた一護達だったがその時、一護達はそこで待つ未だ殺気を漂わせる女性陣と一緒に掲げられていた看板を前に目を丸くした。

「『班別対抗!!夕飯争奪中隠し芸大会』だと!!!」

「チクショー!!!晩飯ぐらい普通に食わせろボケ!!!!」

男性陣がこの突拍子もない企画に大いに腹を立てる中、企画発案者及び実行委員長の八神はやては不敵な笑みを浮かべながらこう言った。

「ふふ!逃げられはせえへんで。たとえ夕飯であっても絶対に気はぬかせへん。と言うわけで“ムサイ男チームＶＳセクシー美女チーム”に分かれての判別争奪戦をここに宣言するで!!」

「ふざけんじゃねぇぞタヌキ娘!!慰安旅行に来て性懲りもなくんなことさせようってか!!つうか、ムサイ男とは言ってくれるじゃ

ねぇかよ！！」

恋次がそのように文句を言うと、ルキアは不敵な笑みを浮かべながらちょっと小ばかにした様子でこう言い返した。

「ふん。悔しかったら我々に勝ってから言うことだな。とは言っても、貴様らではこの最強の女チームの前に逆に跪くのがオチだろうな。ははははは！！」

「舐めやがって・・・！！！」

「店長！！こうなったら何が何でも勝ちましょう！！」

「男のプライドに掛けて絶対に！！！」

闘志の炎を燃やす一護達好戦的な男たち。

そんな男性陣を見ながら、ユーノは若干複雑な気持ちでいっぱいだった。

「はぁ～～～またこんな展開か～～～」

と言うわけで、超豪勢な料理を掛けて行われる今回の判別対抗のかくし芸大会のルールを簡単に説明しよう。

各チームは一人、または複数のペアを組んでそれぞれが最も得意とするかくし芸を披露し、総合得点が一番高かったチームが見事料理を手にすることが出来るという寸法だ。

審査担当は高町士郎と桃子、美由紀の三人とエイミィ・ハラオウン

とアルフ、それにアリサと月村すずかである。

では、早速第一ラウンドの開始。

トップバッタはーは男チームは鬼太郎、女チームはヴィータだ。

「よっしゃ！！俺から行くぜ！」

「へ！大したことも出来ねぇくせに口先だけは一著前だな！」

「るせーぞ！！黙って見てろ！！」

すると、そんな鬼太郎の後ろから浦太郎達の応援が聞こえる。

「先輩！頑張って！！」

「絶対に勝つのだぞ！！」

「負ければ即貴様はピーチに格下げだ！」

「てめぇは元からピーチって言ってるだろうが！！」

そんなツッコミを白鳥に入れると、鬼太郎は烈火を取り出し用意していた駒を数個を回して空中に放り投げた。

「どらあああああ！！！！」

全員がその光景に注目する中、鬼太郎は烈火の剣先でその駒を受け止めものの見事に落とさずそれを回し続ける。

「どうだ！見たか！！」

この光景を目の当たりにした一同は素直に手を叩いて驚いた。

「すごい！すごい！！鬼太郎さんこんなことが出来たんだ！！」

「やるときはやる男だということか。」

すると、そんな鬼太郎の絶技を見てもなおヴィータは鼻で笑って来た。

「は！まだまだ。私だってそれぐらいのこと、出来ない訳じゃねぇんだよ・・・」

そう言うと、ヴィータは頭の上にグラーフアイゼンを乗せて機能にバランスを取り始めた。

「これぞ、ヴィータ流・グラーフアイゼン吊るし上げ・・・」

と、言おうとした瞬間、ヴィータは足を滑らせ壮大にずっこけた。

「ぎゃあああああああ！！！！」

思わず目を瞑ってしまうなのは達だったが、ヴィータは目を回して頭にこぶを作って気絶していた。

「ヴぃ、ヴィータちゃん！？」

「大丈夫ですかヴィータ副隊長！？」

「なははははは！！！無理をするからそうなるんだよ！この勝負いただきだな！！」

そう言って鬼太郎が審査員席を見て獲得ポイントを確認すると、鬼太郎が７０点なのに対してヴィータは何故か９６点と言う高得点を獲得していた。

「何でだよ！！！！何でヴィータの方が高いんだよ！！」

文句をつける鬼太郎に対し、すずかは笑顔でこう言った。

「やっぱり、かくし芸は笑いを取った方が面白いから♪だから今回はヴィータちゃんの方に軍配ってことで♪」

鬼太郎はちょっくのあまり、肩の力が抜けてしまう。

「く！！！負けた・・・！！！」

第二ランウド、シグナム＆アギト対ヴァイス＆グリフィス

「よっしゃああ！！燃えて来たぜ！！」

「アギト。今こそ我らの実力差を篤と見せてやるぞ。」

「おうよ！そんじゃ、ユニゾン・イン！」

シグナムとユニゾンを完了させると、シグナムはレヴァンティンに炎を灯して目の前に用意された鉄の塊を切り刻んだ。

「火龍一閃！！」

加減を間違いないように切り刻んだシグナム。

そして、鉄の塊は切り刻まれると熊の御木彫りのような姿となってその姿を現した。

「題して、『後別川に流れる鮭を食らうヒグマ』！」

驚愕する一同だが、ヴァイスとグリフィスは物怖じ一つ見せずに自分たち芸を披露する。

「流石っすねシグナム姉さん。だけど俺達だって負けちゃいねぇぜ！グリフィス、俺達も行くぞ！」

「はい、ヴァイス先輩！」

そう言うと、ヴァイスは用意したコーラ1・5リットルのふたを開けると、それを躊躇なくグリフィスの口の中へと送り込む。

「グリフィス一気飲みだ！！」

「ぐっほぐあがががが！！！！」

見ているだけで吐き気を催すその光景に顔を引きつるユーノ達。

そして、全部飲み終えた瞬間グリフィスは顔を真っ青に染めてその場に倒れこんだ。

ルキノは急いでグリフィスに駆け寄った。

「ぐ、グリフィス君!?大丈夫!」

「見たっすか、俺とグリフィスのコンビプレーは!」

と、ヴァイスが得点を確認すると自分たちのチームがマイナス５０点に対してシグナムとアギトのチームは１２０点と評価されていた。

「あああああああ!!!!!何てこったああ!!!」

「馬鹿だろ!!!てめぇ馬鹿だろ!!」

恋次は激しく喚き声を上げるヴァイスに抗議したのであった。

第三ラウンド、クロノ・ハラオウン対朽木ルキア

先行はルキアからである。

「では、早速見せてやろう。私の高速スケッチ術を!ほおおおおおお!!!!!」

ルキアはそう言うと、スケッチブックに今のこの場の光景を描写し始め、全員がその光景に固唾をのんで見守っていると、僅か３０秒と言う短い時間で絵が完成する。

「出来た!どうだこの私の画力は!」

そう言ってルキアが全員に見せたその絵は、最早絵とはとても思えないほどに下手くそ且つ全部ウサギで描かれた何時もの絵であった。

「って!やっぱそれじゃねぇかよ!!何処か凄いんだよそれの!!」

「だ、黙れ！！」

一護は昔から絵に関しては進歩の見えないルキアにそう言うと、ルキアはそんな一護に向かってスケッチブックを投げつけた。

「やれやれ。これは勝負あったな。それじゃあ、クロノ・ハラオウンのかくし芸を披露してやろう。心して見ていると言い。」

クロのはそう言うと、全員の注目を浴びる中声色を変化させ何処かで聞いたことのあるＢＧＭを流しながら物真似を始めた。

「“サンタクロースをいつまで信じていたかっなんてことは、他愛もない世間話にもならないくらいのどうでもいい話だが、それでも俺がいつまでサンタなどと言う想像上の赤く爺さんを信じていたかと言うと、俺は確信を持って言えるが最初から信じてなどいなかった。幼稚園のクリスマスイベントに現れたサンタは偽サンタだと理解していたし、御袋がサンタにキスをしているところを目撃した訳でもないのに、クリスマスにしか仕事をしない爺の存在を、疑っていた賢しい俺なのだが、果てさて、宇宙人や未来人や幽霊や妖怪や超能力者や悪の組織やそれらと戦うアニメ的・特撮的・漫画的ヒーローたちがこの世に存在しないということに気づいたのは相当後になってからだった”」

と、その後も恐らく話の続くであろうクロノに物真似を半ば強制的に終わらせたのは妻のエイミィだった。

「えっと・・・長いからマイナス１２０点ね、クロノ君。」

「おい！！！何でだよ！！！何で僕にはそんなに厳しいんだよエ

イミィ！！！」

妻からの衝撃的な言葉に耳を疑うクロノだったが、全員は今までのクロノの物真似を見ていてふと思った。

“こいつ、絶対アニメオタク”だと。

第四ラウンド、一護対シャマル

「こうなったら、俺が何としても大幅に点数を稼ぐしかねぇな！」

「ふふ。それは無理な話ですよ、一護さん。あなたみたいないい加減な医者なんかに、私は倒せませんから・・・」

「それはこっちの台詞だ・・・てめぇみたいな料理の下手くそな超過保護な医者なんかにゼッテー負けねぇよ・・・！！」

同じ医者としてのプライドに掛けて、シャマルと一護は火花を散らす。

そして、最初に動いたのはシャマルだった。

「絶対に勝って見せるんだから！！行くわよ、シャマル先生スーパーお料理術！」

シャマルはフードプレフェッサーに決して混ぜてはいけないようなものを大量に放り込み、それを細かくすりつぶしてミックジュースを作り上げた。

そして、出来上がった紫色の液体をコップに入れるとそれを審査員

の方々に差し上げた。

「はい、どうぞ召し上がれ♪」

審査員は顔を引きつりボードに点数を書き込んだ。

「シャマルさん、マイナス１０００点！」

「何で！！！！何でそうなるんですか！！！！」

「シャマル！！貴様！！我々の行為を無駄にするとは！！」

「どうしてくれんだよ！！このスットコどっこい！！」

「あああ！！！ごめんなさい！！！そう言うつもりじゃなかったのに！！！」

この瞬間、一気に形勢が逆転してしまい一護達はガッツポーズをして喜んだ。

「よっしゃあ！向こうの方から自滅してくれたぜ！実をいうと俺、かくし芸なんて何一つなかったんだよ！」

内心、ほっとする一護でもあった。

そして、迎えた最終局面。

対戦相手はユーノ・スクライアＶＳ八神はやて

「ふふ・・・・・ついにこの時が来たな。シャマルがちょいと失

敗してしもうてかなり差を開けてしまったが、そこらへんは主である私がカバーせなあかんな。ユーノくん、ここは何としても私が勝つ！！！」

ユーノに絶対勝利宣言を突き付けるはやて。

ユーノはそんなはやてや女性陣の死線を見ながら汗を流した。

「あ・・・・・どうすればいいんだろうか・・・・・・」

躊躇するユーノだったが、一護達男性陣の声が聞こえてきた。

「ユーノ！！！負けんじゃねぇぞ！！何が何でも勝て！！！」

「ここで負けたら、てめぇこの先一生後悔させてやるからな！！」

「気合を入れてくださいませ、店長！！」

ユーノは男性陣から厚い信頼を受けると、否応なくその期待に応えるしかないと割り切るのであった。

そして、はやてはそんなユーノを見ながら徐にあるものを取り出した。

「ほんなら、私の取って置きの奴をお見せするよ。シグナム！音楽や！！」

「は！」

シグナムはそう言うと、用意していたＢＧＭを流し部屋の電気を暗

くした。

そして、その直後部屋全体に必殺仕置き人的なＢＧＭが流れてきた。

戸惑いながら何をするのかとばかりに辺りを見渡す一同。

すると、別な場所にいつの間にか移動していたはやては襖の陰から徐に取り出したメジャーを口に咥えてゆっくりとそれを伸ばしていった。

「な・・・何をするつもりなんだ・・・！？」

と、恋次や一護達がそのはやての行動を警戒していると、はやては伸ばしたメジャーで恋次の体を絡め取る。

「は！」

「のあああ！！」

メジャーに絡め取られた恋次ははやてによってゆっくりと引っ張られ、そしてはやては軽快に飛び上がって背を向けると、測り取った恋次の体のサイズ諸々を読み上げる。

「首回り４０。胸囲９０。ウエスト７５。」

読み上げると、はやてはメジャーを軽く指で鳴らして恋次の体へと振動を伝える。

「ひゃ♪」

気持ちよかったのか、そのような声を上げる恋次だった。

こうして、八神はやての実演は終了する。

「どうや！これが八神はやてちゃんの“必殺メジャー測り”や！」

女性陣ははやての見事な技量に感服し、拍手喝采を送る。

「すごいすごい、はやてちゃん！！」

「あんな凄いこと、何時の間に出来るようになったんだ！」

「なははははは！！！これぞ機動六課の部隊長の実力や！さぁ、どないして私に勝負するつもりや、ユーノ・スクライアアドバイザーさん？」

挑発的な口調でユーノにそう言うはやて。

すると、ユーノは不敵な笑みを浮かべると徐に立ち上がってあるものを取り出した。

「成程。なかなか面白い芸当を見せてくれるじゃないか・・・・・・ならば、僕もそれに恥じぬよう相応の力で答えてあげようじゃないか・・・ふふふはははははは。“津軽三味線”。選曲は勿論、“津軽じょんから節”」

ユーノは自分の趣味でもある津軽三味線を取り出すと、バチを持って徐に演奏を始めた。

ユーノの華麗な三味線の演奏とその奏でられる音色を聞くと、なの

は達は全員驚愕と同時に湧き上がる凄まじい魂の鼓動を感じた。

「す・・・凄い・・・！何なのこの魂の鼓動は・・・！」

「ユーノ君の三味線が・・・・・・体中を温かくする！」

魅了される機動六課前線一同。

そして、その音色は向こうの部屋で食事をいただいているツナ、京子たちの耳にもしっかりと行き届いた。

「あ。ツっ君。向こうで三味線弾いてる人がいるよ」

「本当だ。誰だか知らないけど、いい響きだな。」

二人もまた、このユーノの奏でる三味線の音色に心動かされる。

すると、そんな二人に向かって二人のペットの様な存在である雄と雌のライオンが料理を頭に乗せて二人に届ける。

京子とツナはライオン二匹から料理を受け取った。

「ありがとう、ナッツ君♪」

「ガオ♪」

「ココもありがとな。はい、これ。」

「ガオ♪」

ツナは京子のライオンでありココにお礼を渡し、ココは上機嫌な様子でツナのライオンのナッツと共にそれを仲良くいただいた。

「美味しいねここの料理。」

「うん。まぁ、俺は京子ちゃんの料理の方がずっと美味しいと思うけどね。」

「うふふ♪もうツっ君ったら、煽てても私しかあげれないよ。」

すると、それを聞いたツナは京子の手を取って甘い雰囲気を漂わせながらこう言った。

「じゃあ、貰ってもいいんだね？」

「うん。後で優しくしてね・・・♪」

こうして、この二人のバカップルと機動六課の面々それぞれの時間は過ぎていくのであった。

夕食の件は結局ユーノが勝利を収めたのだが、彼の計らいによりみんなで仲良く食べようということとなり全員は豪勢な料理を堪能することが出来た。

やがて、夜が更け全員がそれぞれの部屋で床に就く。

「あ～～～今日は色々と疲れたな～～～でもこれで漸く眠ることが出来る。」

ユーノはそう言いながら、部屋の照明を消して布団の中に潜り込む。

と、その時不意に部屋のドアを叩く音が聞こえてきた。

「ん？誰だろう・・・・・・こんな夜中に」

そう思いながらドアを開けると、立っていたのはなのはとヴィヴィオだった。

「ユーノ君・・・」

「ユーノパパ・・・」

「なのは。ヴィヴィオも。どうしたの二人揃って？」

「あのさ・・・・・・トイレに行きたいんだけど・・・・・・」

「出来れば一緒について来てくれる？」

「え？」

二人の言葉に一瞬戸惑いを見せたユーノ。

すると、そんななのはの後ろからぞろぞろと他のメンバーもやってきた。

「ユーノ先生。僕達も一緒にいいでしょうか？」

「お願いしますよ、店長！」

「何でみんな揃いも揃って一緒につれしょんな訳！？」

そんなことを口にしながらもユーノは仕方なくなのは達を引き連れて暗い廊下を歩きはじめる。

「ねぇ・・・何でこんなに廊下が暗いの?もしかして、停電!?」

「かもしれねぇな・・・・・・それにしても妙に生臭い臭いがしないか!?」

「せ、先輩の思い過ごしだって・・・まさか幽霊なんか出る訳ないって!」

「そ、そうだぜ・・・死神が幽霊にビビってたら仕事にならねぇからな・・・はははははは!!!」

恋次はそう言って笑っていたが、本当はものすごく恐怖を抱いていることは誰が見ても自明の理だった。

と、その時暗い廊下から重苦しいそうな足音を立てて近づいてくる気配を一同は感じた。

「ひい!!何!!この足音・・・!?」

「聞く分には・・・鎧を着てるような感じだけど・・・!」

「ま、まさか鎧武者の亡霊か・・・!?」

そう考えた直後、全員の頭に浮かんできた恐怖の象徴たる鎧武者。

なのはとヴィヴィオは泣きながらユーノの首を無理矢理掴んだ状態

で一目散に走り出した。

「「きゃあああああ！！！！助けて！！！！！！」」

「ぐおおお！！！！な、なのは！！！！！！！苦しい！！！！！」

三人がその場を後にすると、全員も恐怖の負けてしまい全力疾走で逃げて行った。

「「「あああああああああああ！！！！！！！！」」」

しかし、実際のところ彼らの耳に聞こえてきたのは鎧武者の人形を弄るネズミの物音にすぎなかったのだ。

館内に響き渡る叫び声は既に夫婦抱き合って一つの布団で眠っているツナと京子の耳にもしっかり届き、ツナは物音に反応して目を覚ました。

「ん？」

ツナが目を覚ますと、今日もそれにつられて目を覚ます。

「どうしたの？」

「今音がしなかった？」

「え？私は聞こえなかったけど・・・」

ツナは音の正体を確かめようと、徐に襖を開けて廊下を見渡すが、やはりそれらしきものは何もなかった。

「空耳かな。て言うかこんな夜中に一体他の宿泊客は何してるのかな？」

「肝試しとか、怪談大会じゃない？」

「う・・・俺その手の話はやっぱり苦手だな・・・」

「でも、やっぱり温泉に来て肝試しとかすると、わくわくしちゃうよね♪」

笑顔でそう答える京子を見て、ツナは顔を引きつりながらこう呟いた。

「・・・京子ちゃん・・・やっぱりエキセントリックだ・・・！」

こうして、機動六課の一泊二日における日程は無事に終わりを迎えることが出来たわけだが、結局一番この日を愉しんでいたのは実は他の誰でもない。

作者自身なのではないかと、ユーノ達は思うのであった。

夏休み企画・機動六課大合宿（後編）（後書き）

教えて、ユーノ先生！

ユーノ・スクライアのマル秘日常生活　後編

午後３時：休憩時間

フェ「（休憩時間になって、ユーノは仕事を済ませると厨房に行っておやつを作り始めた。どうやら四年の間に桃子さんからも料理やお菓子作りを教えてもらったらしく、かなり手際が良い。ちなみに今日作ったのはベイクドチーズケーキ・・・ああ・・・私も出来れば食べたい・・・）」

午後４時：室内トレーニング

吉「（書類整理を片付けたユーノさんは室内訓練場に行くと、金太郎さんを相手にボクシンググローブをつけてスパーキングを始めた。全身から汗を流す姿は宛らロッキーと言うべきか。て言うかなのはさん・・・そんなきらきらした表情でユーノさんの事見てる暇があったら観察手伝ってくれないかな・・・）」

午後７時：定時時間

ル「（漸く今日の一日が無事に終了した。こうして見ると成程、ユーノ殿の日常はかなり充実しておるもののようだな・・・・・・ん？ユーノ殿が後ろを振り向いてきた・・・！！）」

警戒する一護達だったが、その直後ユーノが投げた無数の苦無が飛

んで来た。

六人「ぎゃあああああああ！！！！」

すると、ユーノは瞬歩で近づき殺意の籠った笑顔でこう言って来た。

ユ「一日中何をしているのかと思えば・・・こんな下らないことして、面白いですか？」

一「いや、これはあれだ！作者からそう言う指示があったから俺達だって仕方なく！！」

な「そ、そうだよユーノ君！お願いだから怒らないでよ！！私ユーノ君の恋人でしょ！？」

ユ「ごめんねなのは・・・一護さん・・・生憎人の後ろをこそこそと嗅ぎまわるような輩は僕の恋人でも恩人でもないんだよね・・・」

一・な「ひい！！！」

恋「よ、止せ！！ユーノ！！頼む！！！」

フェ「お、落ち着こうよユーノ・・・！ブレイクブレイク！！」

だがしかし、ユーノの怒りは誰にも止められなかった。

ユ「頭でも冷やしてね♪破道の九十一『千手皓天汰炮』」

六人「あああああああああああ！！！！！！！！！！！！」

魔導師図鑑ハイパー！

旅館で深い眠りについていたユーノ。

日頃の疲れも出ていた所為か、ユーノは全く起きる気配を見せない。

すると、そんなユーノの部屋にまたしてもなのはが忍び込んでくると、照れた表情を浮かべながら眠るユーノを見下ろす。

な「てへ♪来ちゃった。」

なのはは掛布団を捲ると、徐にユーノの隣に横になって顔を赤くしながら一緒に眠りにつくのであった。

な「お休み・・・ユーノ君♪」

最後にキスをしてユーノと一緒に眠るなのは。

早朝、ユーノは隣で眠り浴衣のはだけて胸が大きく開いたなのはに興奮し、全身を赤く染め上げたことは言うまでもない。

主人公設定公開（前書き）

今更ですが、ユーノ君の本作におけるプロフィールです。

ｗｉｋｉｐｅｄｉａ風に書いてみました。

色々と参考にさせていただいた文献もありますので、その辺はご了承下さい。

主人公設定公開

ユーノ・スクライア

ユーノ・スクライア（Ｙｕｕｎｏ　Ｓｃｒｙａ）は、テレビアニメ作品『魔法少女リリカルなのは』シリーズに登場する架空の人物であり、重要大事の小説『ユーノ・スクライア外伝』に登場する本作の主人公。作中では翡翠の魔導死神、または絆の完現術士の名でも呼ばれている。アニメの声優は水橋かおり。

＞ｉ２５１８５―７０９＜

プロフィール

・本作開始時で２３歳（行方不明となった当初は１９歳。
・身長：１６８ｃｍ（ＳｔｒｉｋｅｒＳ時）→１７０ｃｍ
・体重：６８ｋｇ
・前所属：時空管理局本局「無限書庫」／ミッドチルダ考古学会学士会
・役職／階級：無限書庫司書長（のちに初代永久名誉司書長）・スクライア商店店長
・出身：ミッドチルダ南部
・機動六課での役職：特定遺失物管理部機動六課特別エグゼクティブアドバイザー・及び嘱託前線部隊「スクライア商店」隊長／機動六課システム管理総責任者
・魔法術式／魔導師ランク：ミッドチルダ式／総合Ａランク（試験を受けていないが、実際のところはオーバーＳランク相当）
・特技・特記事項：検索魔法・読書魔法の同時併用が可能。口八丁で相手を説き伏せることに長け、高い見識と鋭い洞察眼、管理局随

一の頭脳を持つ。
・資格：運転免許（第一種運転免許・第二種運転免許全て、いわゆるフルビット）、自家用操縦士免許、小型船舶操縦士免許、漁業免許、危険物取扱者、気象予報士、中小企業診断士、秘書技能検定、宅地建物取引主任者、衛生管理者、ボイラー整備士、電気工事士、自動車整備士、潜水士、鉄骨製作管理技術者など多岐に渡っている。
・苦手なこと：ネコと戯れること　人に頼ること

人物

本作の主人公。表向きは「スクライア商店」なる駄菓子屋の店主だが、実態は現世（地球）にいる死神や訳ありの魔導師に対して魔法関連・霊的商品などを売る・浦原喜助のような商売方法を取って魔導師や死神への援助を行う闇商人。白鳥の現世における行動を援助している（彼以外の死神・魔導師相手の商人は作中では登場しておらず、公式の職業かは不明である）。一人称は「僕」。自称「ちょっと影あるハンサムなのはバカ店主」。正体は新暦００７６年七月まで裏方として貢献していた時空管理局のデータベース「無限書庫」の司書長であり、ミッドチルダ考古学会の若き学士を兼任した結界魔導師にして、魔法と霊力を使いこなす「魔導死神」と分類される存在。現在確認されている魔導死神はユーノと白鳥の二人だけ。鬼道を術名すら唱えず使用し、得意の結界魔法を活かしたオリジナル技、さらには大規模災害における人命救助マシーンなどの技術開発も積極的に行っている。本編では、前線メンバーの戦力強化のために独自に開発した新型カートリッジシステム「ＩＰカートリッジ」となのは専用の「ＡＲカートリッジ」を授けている。なお浦原喜助から貰い受けた発明品”携帯用義骸”を使用することで変わり身の防御技を習得している。戦闘においては規格外の強さを発揮させ、悪友のクロノ・ハラオウンを赤子同然にあしらうなど、彼の作中における実力を垣間見ることができる。事実上のなのはの魔法の師と

して、彼女の能力を伸ばすための助力を行ってきた。また、一護のことはユーノが死神の力をつける際に世話になったらしく、師弟的な関係が気付かれている模様。オートバイの免許を持ち、専用の車体「グリーンラベル」を運転しその腕前はプロレーサー並。アンゴルモア篇では最も登場回数が多く、登場のたびにほぼ一人で事件を解決してしまう程の実力者。『番外編』では、なのは達を守る影として裏でなのは達の邪魔をする外道な輩を自分が退治するという信念を見出し、大和屋雲鶴を撃破している。

出身・家族・交友関係

遺跡発掘をして流浪の旅をするスクライア一族の一員。両親供にユーノが生まれたときには既にいなく、スクライアの一族に育てられてきたと語っている（だが管理局勤めが長くなり音信不通であったこと、更には翡翠の魔導死神として力を手にしたことが却って一族の反感を買い、一方的にユーノはその縁を断たれることとなった）。管理局を辞め、地球に滞在するようになってからはスクライア商店を松前市の一角に構え、金太郎以下三名の従業員と一緒に同居。なのは・フェイト・はやて達とは9歳からの幼馴染。特になのはとは強い絆的なもので結ばれた関係で、本作において漸く恋愛と言う点で進展が見受けられた。一方のクロノ・ハラオウンとは幼い頃からの悪友で、ユーノは四年の経過によってクロノに対する嫌悪感を更に強めた。なのは達古くから付き合いのあるものからは「ユーノ君【（くん）】」「ユーノ」「スクライア」と呼ばれ、スバル達フォワード五人や局員達からは「ユーノ先生」、スクライア商店の従業員からは「店長」、ヴィヴィオは「ユーノパパ」と呼称。また、世界各地に諸事情より友人が多数存在し仮面ライダーディケイドである「門矢士」やクロウ・リードの生まれ変わりである「柊沢エリオル」、アンゴルモア捜査で協力をした「サムライ・ドラ」とは定期的に連絡を取り合っている模様。

外見・性格

薄栗色の髪に翡翠の瞳。名前は、おそらくマツダ（日本の自動車メーカー）がかつて有していたブランドの名前、ユーノス（Ｅｕｎｏｓ）に由来すると思われる。好きなものは高町なのは。尊敬する人物は師である黒崎一護と浦原喜助。いつも浦原喜助のような帽子、甚平という格好（同じものを百個ぐらい持っている）で、杖と扇子を携帯し、今でもなのはが幼少時に結っていた緑のリボンを髪留めに使い、なのはとフェイトが選んでくれた丸眼鏡をつけている。懐にはなのはの写真が収められたロケットが携帯されている。飄々としていて真面目なのかふざけているのか判別が難しい。初登場時からことあるごとに何かを隠しているような、あるいはほのめかすような言動を繰り返している為その真意が掴みにくい。以上の性格・言動のために、恋次達一部からは「胡散臭い」「変態」と思われている。一方で地声で凄むと恋次が凍りつくほどの迫力がある。義理堅く争いを好まない心優しい性格で、魔導師としても優秀な能力を持つ結界魔導師。結界魔法による防御・治癒などの補助魔法を得意とし、また豊富な知識をもってなのは達をサポートしている。他の誰よりもなのはの身を案じ、なのはを心から愛するが故に、なのはが侮辱されることを絶対に許さない。幼い頃、自らが発掘した「ジュエルシード」が事故によって散らばってしまったことに責任を感じ、独自にその回収を行っていた。封印に失敗して重傷を負ったところをなのはと出会い、一命を取り留める。その後の成り行きから彼女に協力を申し出、「レイジングハート」を託す。『１期』では地球にいる間はフェレットに似た姿に変身しており、その姿のまま高町家にペットとして預かられることになる。またフェイトやアルフには初め「ネズミ型使い魔」に間違われ、クロノには「フェレット」「使い魔」ネタでからかわれることもある。最初、なのはに保護された時も（体力・魔力の温存のため）フェレットの姿だったた

め、なのはもフェレットが本当の姿だと思っていたらしく（そのためユーノの前で平気で着替えたり風呂に入ったりしていた）、後々ユーノが人間に戻ったときは仰天していた。一方のユーノ自身は初対面時に人間の姿を見せていたものだと勘違いしていた。なお、A's公式サイトでは、「男の子ではなくペット扱いされているのが悩みのタネ」と書かれているため、少なくともフェレット時はなのはは男の子として見ていないもよう。死神としての力を身につける為に世話になった一護や織姫、浦原喜助、護廷十三隊の隊長や副隊長に対しては「さん」付けで呼んでいる。四年の間に芽生えた二重人格のために感情的になり我を忘れた時の1人称は「俺」になることがあり、口調も粗悪になる。周囲から天才と称されることを嫌う反面、なのは達のことを才能の塊と評する。また、時として仲間内であっても非情な態度を見せ、その人を救う為ならば容赦なく攻撃を仕掛けるなどと言う側面もある。上記のとおり、責任感が人一倍強く両親の愛情を知らない事から他人に甘えられず、無意識のうちに距離を置く節があり、同時に自分の事を愛せないでいる。

才能・能力及び戦闘力

リーダー資質、統率力があり、指揮能力が高い。デバイスに対する知識が高く、実際に検査も出来ると思われる。小説版では『1期』開始以前にすでに学院を卒業しているとのこと。管理局を依願退職した後、とある異世界での遺跡発掘の最中に偶然発見した謎のエネルギー結晶体の影響（後にユーノ曰くアンゴルモアであると結論付ける）によって新婚旅行で北海道を訪れていた一護達と遭遇。それと同時に総合Aランクの魔力値がAAAランクにまで上昇し、魂の奥底に眠っていた死神としての素質が覚醒し、後に「翡翠の魔導死神」と呼称されるようになる。魔力光と霊圧色は供に翡翠色。死神としての経験は浅いが、一護や浦原喜助との戦闘を経て死神の基本戦闘技術である斬・拳・走・鬼のほぼ全てを隊長格と渡り合うだけ

の高い実力を身に付け、「斬」は【卍解】まで至り、「拳」に関しては、ＡＭ化した『闘』を一骨で打ちのめす程。また「走」では「翡翠の魔導死神」覚醒後に瞬歩を身につけ戦闘における高速戦闘を可能にした。なお「鬼」にあたる鬼道に関しては、劇中では最も多くの鬼道を体得しており、そのほとんどが詠唱破棄で使えるほどで、吉良曰く「鬼道における天才」とのこと。元々が結界魔導師であるが故に、術式の構造はユーノ曰く魔法よりも簡単であると語っている。一護との往年の修行により恋次達に負けず劣らずの筋肉質な体となっている。非常に動体視力と反射神経が高く、相手の攻撃を的確に回避することが出来る。ただし、眼鏡をかけているのは単純な近視の所為である。また、翡翠の魔導死神として一護に鍛え上げられたことで超人的な身体能力を手に入れることとなり、デコピン一発で大男を吹き飛ばすほどの怪力とメリケンサックを頭に受けても決して怯まない打たれ強さ、更には指先だけで刀の一太刀を受け止めるだけの技量を持つに至る。即席で鉄パイプを小太刀の代用として使い雲鶴に勝利したことから、武器を選ばずとも超一流の戦闘センスを発揮させることが可能であることが窺え、出鱈目な戦闘力の高さはまさに次元世界最強と呼ぶに相応しく、その才能と進化は計り知れない（本人は飽く迄も努力の上でなしえたものだと語っている）。カードバトルにおける才能もあり、素人でありながら一度ルール本を見ただけの命を懸けたデュエルにおいて、見事その実力を発揮させ敵を葬っている。殺気を常に内側に潜め、場合によってはそれにより相手を気絶ないしは萎縮させることが出来る。

教導理論・戦闘における思考

「模擬戦で徹底的にきっちり打ちのめした方が、教えられる側は学ぶことが多い」というなのはの戦技教導隊の教育方針に基づいた実戦型のやり方とは対照的で、あくまで理論に基き最良の方法を選択し攻撃の動きを見極めるという推察型の思考に則った戦闘方法を見

せる。基本的になのは達の訓練には参加しないことが多い。ユーノ曰く、「人を活かす戦い方をするなのは達と違い、人を殺す戦い方を知った自分が教えられることは何も無い」とのこと。また、師である一護から教わった戦闘の方法や喧嘩の仕方、更にその志は逐一胸の中にしっかりと収め、今も尚戦いにおける原動力の一つとなっている。元来、平和主義を貫くつもりは毛頭無いが目の前に苦しむ人や傷ついた人を放っておけない性分な為、理不尽な暴力を行うものに対しては徹底的に叩きのめす。その際、言動と表情が修羅の如く豹変するということもある。

師・一護との絆

自分の戦闘における師匠であり人間として最も尊敬する黒崎一護のことは、なのは達には想像もつかないほどの強い信頼と絆で結ばれており、ユーノ曰く「人生で初めて認める師匠で、尚且つ一生超えられないたった一人の男」とのこと。そして同時に「一護と一護の幸せと笑顔を守る為に、自分が戦う」という決意を見出している。また、嘗て自分が抱いていた「なのはと彼女の守りたいものを守る」と言う欲望は、既に一護が叶えてくれたものだと述懐している。

三人の死神の師匠

先に記した通り、ユーノの死神のおける師匠は一護以外に浦原喜助と四楓院夜一がいる。斬拳走鬼の四つの戦術のうち、斬と拳は一護が担当し技術開発と鬼道に関しては浦原喜助が、瞬歩と高等白打（体術戦闘）は夜一が担当した結果、ユーノの戦闘能力とその他のスペックが全体的かつ爆発的に高められることとなった。

翡翠の魔導死神

魔導虚事件を境にして管理局上層部の者が、ユーノの容姿と格好・発動した技を見て、そう口にしたことを口火に、管理局を始め幾つもの次元世界各地で浸透するに至る。魔導虚事件以降管理局に対して敵対意識を抱く次元犯罪者たちは、「白き魔王」と恐れられるなのはよか「翡翠の魔導死神」であるユーノの方を最も恐れる対象として見、同時に人間として規格外な戦闘能力有することから「次元世界最強の男」と称される程。しかし一部の管理局上層部からは「危険因子」として見られ、少なからず標的対象ともなっている。

父親として

第２３話以降、ヴィヴィオからも父親として認識されパパと呼ばれるようになってはいるが、保護した当初のなのはの心境同様、内心は非常に複雑かつ揺れ動いているが、自分に懐くヴィヴィオや両想いとなったなのはと共に過ごす中で、次第に「父」としての自覚に目覚めていく。重要曰く、ユーノは両親の愛情も顔も知らないが故に子供に対してどう接したらいいか、面と向かってぶつかっていけるのかという込み上げる気持ちを醸し出しつつも、周りに諭されながら父親像を築き上げていく姿を描写しているとのこと。また、授業参観の際にも、実の父親以上に父親らしい言動を現し、父親としての尊厳と言うものをホウスイ・テゼマに思い出させようとすることもあり、着実に父と呼ぶにふさわしい姿となってきている。教育方針は基本厳しくもあり、多少なのはよりも甘い面が見受けられる。ただ、怒る時はしっかり怒る。

過去

嘗てジュエルシードの回収の折り、自らの命惜しさの為になのはを魔法の世界に引っ張り込んだことで、彼女が瀕死の大怪我を負ってしまったことを自分の贖罪だと思い込み、それ以降罪悪感を抱きな

がらも一定以上の距離を置いてなのはやフェイト達と接してきたが、何時の日から感じ始めるようになった自分となのは達との埋めようのない隔たり、更には無限書庫に引きこもり穴倉のような生活をしている自分に嫌気が差すようになり、自分の居場所を喪失したと思いこんでしまい新暦００７６年の七月末に無限書庫を依願退職。なのは達とも一切連絡を絶って失踪し、失踪直後の事故で魔導死神として覚醒し、力を身に着けて以降それでも尚なのは達を守るために自分の手を汚す陰役として敵と処理したものをその手にかけてきた。そんな経緯もあってか、救える命は救ってやりたいという考えを持つに至り困った人の助けになることを心がけるようになり、いつしか世界中の人たちを救うことや世界を変えることを新たな自分の欲望とし、遺跡発掘の傍ら多額の寄付や紛争地帯への旅を行っていた。ところがその寄付を内戦の資金に利用されて情勢が悪化し、アフリカの紛争地帯の村で心を通わせた少女ユウを目の前で失う。このとき現地の人々とともに武装勢力の人質にされたが、ユーノを熟知する同じ元管理局員の根回しによりただ一人釈放され、さらにこの一件を「戦地を救った勇敢な局員の知り合いの青年」という美談に仕立て上げられてしまった。この事件と先述のなのはの件、そして幼少期から放浪のその場暮らしを強いられていた家庭環境や多彩な才能のために大抵の欲が叶っていたり、最初から持ち合わせて無かったことに加え、他人の欲望に翻弄され続けてきた経験や、世界という現実の前での無力感、無思慮な善意で多くの人を犠牲にしてしまい自分だけが無事に生還してしまった責任感と罪悪感から、自分自身の欲望や自らの命に対する執着を失っている。それ以降は吉良曰く「人間としての使命感」に憑りつかれ、なのは以上の無茶を平気でするようになった。故に数時間前に知り合った他人でさえ助けるなど、周囲の願いやエゴを自らが引き受け、自分ひとりで全てを背負い込むためには己の命さえ全く顧みない。２０歳のころの死神の力との出会い以来、ごく僅かな期間で始解・卍解という足掛かりを踏んできたが、その卍解の会得の際、卍解を使うに足りる器である

かどうかを判断するためにユーノは地獄に堕とされ、半年間もの間地獄で苦痛の日々を過ごした。半年後、現世に戻り目を覚ましたユーノであったが、現世での生き地獄が残っており、地獄での日々がフラッシュバックし、全身から毎日多量の出血を繰り返し、魔法や霊力の発動、更には手足を動かすことはおろか呼吸することもままならない状況が三カ月もの間続き、その生き地獄を耐え抜き地獄から正式に「贖罪者」として選ばれ、背中に地獄の門を模した呪印を刻むに至る。故に呪印を見られたくないが為に恋次達とは余程の事がない限り一緒に入浴はしたくなく、卍解を使いたがらない理由になっている。

1期・A' s時（少年期）

『1期』はなのはのサポート言う形で前線に出ていたが、『A' s』の「闇の書事件」では主に裏方にまわり、「闇の書」に関する調査をほぼ一人で引き受け、事件解決に大きく尽力した。また、最終局面ではなのはのもとに駆け付け、苦戦するなのはに打開策を見出したり助言を告げたり、後方からフォローに「闇の書の闇」転送サポートにと地味ながら堅実な活躍をしている。6年後では管理局の「無限書庫」司書長に就任し、眼鏡をかけている。考古学者としても古代史の論文を著す等の実績を積んでいる。第1期序盤でフェレットの姿になっていた時にすずかの家の猫に追い掛けられたためか猫が苦手で、『A' s』でも猫を素体にした使い魔であるリーゼロッテに気に入られた時には顔を強張らせていた。

StrikerS時（青年期）

19歳。魔法術式・ミッドチルダ式／魔導師ランク・総合A。時空管理局「無限書庫」司書長を務め、若き考古学者としても名を馳せ、「先生」と呼ばれていた。ヴェロッサが無限書庫に調べ物にやって

きた際、ユーノが調べ物に協力したことがあり、それ以後、彼とも親しい。ユーノがホテル・アグスタのオークションでゲストとして呼ばれた際、なのはやフェイト達も、機動六課の任務でその場に居合わせていた。その後、ヴェロッサから機動六課にユーノの護衛任務という形で引き継がれ、フェイトやなのはと親しく語り合っていた。ＪＳ事件でも無限書庫での調査という裏方で貢献している。

魔導虚篇

恋次達が尸魂界から命を受け、現世に来た際に一護からの懇願を聞き入れ恋次及び吉良を魔導師達との戦闘に慣れさせるため、高濃度化の魔力を体の中に入れてリンカーコアを生成する修行や直々にユーノが特訓をしたり、恋次たちをミッドチルダへ送り出したりなどと協力する。当初は恋次たちに任せて静観するつもりであったが、スカリエッティが事を予想以上に大きくしてしまったために、一護達と共に自らも現地に赴きグラトニーとの決戦で窮地に立たされていたなのは達の前に現れグラトニーを撃退。その後四年ぶりに再会を果たしたなのはに対して何も告げずに失踪したことに関して謝罪した。そして、なのはの告白を聞き入れた上で自分の気持ちを伝え、晴れてなのはと両想いとなる。

アンゴルモア捜索・増殖篇

スカリエッティの真の目的、崩玉の欠片であるアンゴルモアを回収するため嘱託勤務で機動六課特別エグゼクティブアドバイザーとして席を置き、スクライア商店メンバーやなのは達六課前線部隊、恋次達と共に数々のアンゴルモア事件を解決に導いている。また、時折フォワードメンバーの訓練に参加したり個人的な依頼を受けることがしばしばある模様。

パトリオット篇

金太郎が松前市で買出しに行った最中に、パトリオットの1人、白鴎恭一郎に襲撃を受けたことから現世の一護達やなのは達機動六課・恋次らと共にパトリオットとの戦いに身を投じることになる。白鴎との戦闘でアックスオーガが大きく破損し窮地に陥るが、ユーノがその後異世界を探し回り金太郎の父の墓より見つけた初代パトリオット、エドワード・コークの血とブラッドカートリッジシステムを埋め込んで復活させた「アックスオーガ・カタストロフ」を託し、一護らと共にパトリオットの地下洞窟へと侵入する。そこでパトリオット（物語後半、真の黒幕で元護廷十三隊十番隊隊長）の1人、高円寺虎彦と激闘を繰り広げるも、不意を突かれパトリオット7人の尸魂界逃亡を許してしまう。その後、ユーノ自らが穿界門を開き一護を案内役としてなのは達前線メンバーを尸魂界へ導き自身も赴く。なのは達が十三隊と協力してパトリオット迎撃の傍らで一護と共にダイシーを受け継ぐ少年、狼谷銀太郎を追って九九琉閑の池へと向い、そこで高円寺と再戦。その後、一護と共闘して双?の丘で激しい激突を繰り広げるものの真の継承者となった銀太郎が介入し、高円寺を逃がす。駆けつけてきたなのは達が加勢するも銀太郎の圧倒的な力に追い込まれる。しかし、真の目的を明かした高円寺によって銀太郎は打ち伏せられ、隠された至宝「王濫」を使って過去の世界へと逃亡するが、山本総隊長らの協力で前線メンバー全員で過去の世界へと赴くことに成功。最終決戦において見事高円寺を撃退。その後、元の時間へと戻っていき、暫くの休息の後になのは達と共にミッドチルダへと無事帰還していった。

アンゴルモア・銀魂篇

「天人」と呼ばれる異星人によって支配され、天人達が我が物顔で江戸の街を闊歩する異世界の江戸から、剣術道場の跡取りで若輩な

がら古風な侍気質を持つ志村新八が、平賀源外が発明した瞬間移動装置の実験中の事故により、ミッドチルダへと流れ着いたときより事件は始まる。隊舎の外で倒れていた新八を保護したユーノ達だったが、新八に引き続いて嘗て攘夷戦争において白夜叉と恐れられた侍、坂田銀時を始めとする新八と同じ世界の人間が次々に迷い込んで来てしまう。聖王教会でユーノははやて・銀時達と共にアンゴルモアを狙っていると思われる広域次元犯罪者、通称カトゥーンの話を聞かされた直後、カトゥーンが送り込んできた漫画キャラクター軍勢の襲撃を受け、銀時達と共に否応なく戦いに巻き込まれていく。カトゥーンは目的遂行の為に次々に強力な漫画キャラクターを送り込み、その為にテトラカトゥーンを手足に暗躍を続ける。また、聖王教会からの依頼で取引指定ロスト・ロギアを狙って神出鬼没に現れるカトゥーンの送り込んだ怪盗ルパン三世捕縛の為、オークションの警備を任される。その騒動の最中、仮面ライダーディエンドこと、海東大樹がユーノへの言伝を残す。その後ユーノをリーダーとしたロスト・ロギア「プリズムシード」探索班は探索に乗り出すこととなるが、探索中、ユーノは自分と5歳ほど歳の離れた「真っ直ぐな魂」を持つ少年剣士・明神弥彦と出逢い、惹かれながらも幾度となく衝突した。戦いを通じて弥彦と分かり合おうとしたが、弥彦はユーノを庇って銃弾に倒れ息を引き取る。直後ユーノ達はＴ２に上陸したテトラカトゥーン・漫画キャラによる強襲を受け、その際テトラカトゥーンに新八を拉致されてしまい救出へ向かった銀時の重傷を負った姿を目撃し、今まで自分が後悔した時の映像が鮮明に甦り感情が爆発、クシャナーダ化を果たし暴走。破壊の限りをつくしなのは達ですらどうすることも出来ない状況に一護達が駆けつけ、完全虚化の一護の力で暴走は収まったが、その結果ユーノは仮死状態となってしまい再起不能に陥る。辛うじて精神世界に居座っているユーノだがまたも大切な友人（弥彦）を守れなかった事に絶望し廃人同然の状態となり、仲間たちからの応答にも一切答えなかった。だが一週間後、漫画キャラとの最終決戦で窮地に陥るなのは

達の身を案じたヴィヴィオに、なのは達を助けてくれと懇願され精神世界の中で動揺する。そして精神世界の中で動けないユーノに晩翠が背中を押し、晩翠が地獄の呪いを肩代わりしたお陰で、絶望から立ち上がり漫画キャラに追い詰められたなのは達の前に霊力と魔力を封じられながらも弥彦から貰い受けた逆刃刀・真打を携え駆けつける。立ちはだかる大量の漫画キャラを撃破しながらカトゥーンの元に向かう。近辺では海坊主と対峙、ジェットブーツのエンジンの推進力を追加した状態での九頭龍閃で勝負に打ち勝ち海坊主を撃破する戦果を挙げる（その際、海坊主はそのあまりに人間離れした能力に「本当に人間か？」と驚きをもらした）。その後カトゥーンに最後の戦いを挑む。苦戦を強いられるも新八を救出し駆けつけてきた銀時・一護らと共闘し勝利を収める。しかし、「カトゥーンキャッスル」の崩壊は止まることを知らず、足場を崩した銀時を救い出そうとユーノが手を伸ばした直後、足場が崩れユーノは銀時と共に虚数空間へと消えていった。しかし、自身の卍解「月霊晩翠」を発動させ、虚数空間を脱出、空間の狭間より帰還した。だが「月霊晩翠」を使用した代償で己の魔力・死神と全ての霊的な存在も感知できなくなるほどの霊力を失い、晩翠とも別離するがユーノは必ず戻ってくると信じ待ち続けることを決意。そして、銀時達との別れの際、銀時から洞爺湖木刀を譲り受け、ユーノも被っていた帽子を手渡し再会を約束する。

ハイパーマシーン

ユーノ・スクライアが密かに貯めた資金を元にユーノ自らにより開発された災害救助・情報収集他軌道上での長期滞在を目的としたサポートマシン。高性能且つ頑丈にできているため、容易には壊せない。常時点検が必要で、ユーノが毎日欠かさず行っている。また、本局や地上部隊から要請があれば快く貸している模様。

トワイライト

新幹線に似た形状の鉄道車両。ほとんどの鉄道路線を走破できる軌間可変台車、ほとんどの鉄道車両と連結できる万能連結器を装備。短時間なら飛行も可能である。完全自動操縦であるため、誰にでも乗りこなせる。

全長：２４．６ｍ
重量：５５．４ｍ
最高速度：５２６ｋｍ／ｈ

ジャベリン

二基のドリルを備えた戦車。左右に分離することが出来る。陸海空どこでも運用できる万能車両でもある。

全長：１８．２ｍ
重量：２９８ｔ
最高速度：１２０ｋｍ／ｈ

マッコーリフ

戦車の形態をしたマルチタイプのマシーン。圧倒的な防御力を誇る。高出力ウルテクエンジンを最初から搭載している。射撃兵器はマッコーリフキャノン以外搭載していない。

全高：２５．５ｍ
重量：６２５．０ｔ
最高速度：　１５６ｋｍ／ｈ
最大出力：１，０００，０００馬力

武装：マッコーリフキャノン／技：Ｍブラスター砲

ファルコン

飛行速度：マッハ５を誇る大型ジェット機。「ファルコンーミサイル」を主武装とし、ゴッドゼノンの上半身となる。

全長：６２．１ｍ
全幅：４８．６ｍ
全高：１９．８ｍ
総重量：４．７万ｔ

合体電神ゴッドゼノン

ファルコン、ジャベリン、マッコーリフが合体した巨大ロボット。ユーノが対巨大ＡＭ体との戦闘を想定して開発された。得意技は両腕から飛ばすゴッドパンチと、強力なアッパーを放つゴッドブレイカー。

身長：８０ｍ
重量：１０万ｔ
出力：２００万馬力

多次元諜報潜水艦　ビルゲイツ

情報潜水艦。サテライトサーチ機能を搭載。ユーノとの連携により前線への情報支援を行う。攻撃手段（魚雷）を装備するが、あくまで自衛程度。小型偵察機と小型潜水艇を搭載。

大次元空母艦ナキサワメ

宇宙空間や次元空間での長期滞在は勿論、未知なる脅威との戦闘に備えてあらゆる武装手段を搭載・格納出来る超巨大次元戦艦。プロテクトシェード（空母艦周辺部に展開したプロテクトシェード展開ブロックを張り巡らせている。）展開による防御能力を持ち、反射も可能。母艦そのものを七機の戦艦に分離させ七人岬と呼ばれる単独自動操縦艦での攻撃が可能。太陽光や砲撃などを拡大させて使用するリフレクタービームを装備。中にはスターシップを搭載している。

高速転槽射出母艦アクトン

カタパルト移動基地であると同時に磁力反発式射出装置・ミラーカタパルトを搭載した飛行甲板空母。パトリオット篇での移動基地として使用される。

使用魔法

上記のように結界魔法による防御・治癒などの補助魔法を得意としており、使用する魔法の大半が補助系のものとなっている。

防御系

その名の通り防御のための魔法で、物理・魔力による攻撃を防ぐことができる（ただし、その分魔力は消費する）。『ＳｔｒｉｋｅｒＳ』で４種類の防御系魔法があることが判明しているが、そのうちの３種類「フィールド系防御魔法」「バリア系防御魔法」「シールド系防御魔法」を使用する。

バリアジャケット（Ｂａｒｒｉｅｒ　Ｊａｃｋｅｔ）

魔導師が戦闘時に纏う、魔力で構成された衣服で、フィールド系防御魔法に分類される。衣服だけではなく、衣服に覆われていない部分やデバイス本体も防御フィールドを生成して身を守ったり、空気抵抗を無効化している。魔力で出来ているので、発動中（身に付けている間）は常に術者の魔力を消費し続ける。　このため、基本的には必要な時のみにしか装備しない。　また、その消費魔力量には差があり、防御力に比例していると考えられる。相手の攻撃のみならず、自らの使用した魔力の逆流、暴発という危険性からも身を守るために、戦闘時だけではなく大規模な魔法の行使の時に着用することもある。嘗てのスクライア一族のものは本作では着ていない。その理由は殺す戦いに慣れてしまったユーノにとって自分の身を守るためにバリアジャケットを着ることは馬鹿らしい・己の覚悟が鈍るという見解に達しているため（のちにこれは自己への欲望を失い命に対する執着を失った故の言動と垣間見れる）。

ラウンドシールド（Ｒｏｕｎｄ　Ｓｈｉｅｌｄ）

魔法陣を使用した円形の盾を作り出す防御魔法で、シールド系防御魔法に分類される。一方向のみの防御しか出来ないが、その分防御力は高く、特に魔力弾への防御に優れる。多くの魔導師が使用する防御魔法。ユーノの代名詞と言える魔法。ユーノの使用するラウンドシールドは、元々が結界魔導師である故に非常に強固なものになっており、なのはでも本気を出さないと破れる事は出来ない程。『外伝』では魔力値が増大したことによりさらに練度が上がり、ほぼ全ての攻撃をこれだけで凌ぎきることが出来る。なお、高速での飛行魔法、転送魔法を起動させつつ、片手でヴィータの攻撃を捌いていたりなどをやってのけると言うこともあり、今作品においてユーノの防御を単純な魔法攻撃などで破壊できた描写はない。

サークルプロテクション（Ｃｉｒｃｌｅ　Ｐｒｏｔｅｃｔｉｏｎ）

地面を中心に、半円状の防護膜を張る防御魔法。空中発動の場合は、２つの魔法陣で挟むような筒状のバリアとなる。バリア系は、「攻撃を相殺し、やわらかく受け止めることを旨とする汎用性の最も高い防御魔法」とのこと。後に、アルフにも伝授。実際に下記の「スフィアプロテクション」と同時に発動している。

スフィアプロテクション（Ｓｐｈｅｒｅ　Ｐｒｏｔｅｃｔｉｏｎ）

全方位による球状のバリアを張る防御魔法。対象者を完全に包み込むため、魔法ランクもそれなりに高いと思われる。ユーノは、自身と別の位置にいるなのは、フェイト、アルフの４つを同時発動し、闇の書による魔力攻撃を完全遮断した。類似の防御魔法に複数（２～３人程度）を覆うバリアを張る防御魔法の「オーバルプロテクション」（Ｏｖａｌ　Ｐｒｏｔｅｃｔｉｏｎ）がある。

捕縛（拘束）系

拘束用の魔法で、相手の手足や全身をリング状の魔力で縛り上げる。大まかに、バインド系とケージ系が存在する。

チェーンバインド（Ｃｈａｉｎ　Ｂｉｎｄ）

鎖状の魔力で対象を縛り上げ、その場に拘束するバインド系捕縛魔法。四年の間に錬度と精密さを上げたことで、倍数方式で数を増やすことが出来る。また、複数のチェーンバインドを操り敵を捕らえて押し固め圧潰させるアレスターチェーンという派生技もある。その際の詠唱は「捕らえて固めろ、封鎖の檻“アレスターチェーン”」。

ストラグルバインド（Ｓｔｒｕｇｇｌｅ　Ｂｉｎｄ）

対象魔力を打ち消す効果のある拘束魔法。魔力強化した相手への効果は絶大で、魔力で構成された生物なら武器ともなる。こちらも倍数方式で数を増やすことが可能。

ディバインディレイド（Ｄｉｖｉｎｅ　ｄｅｌａｙｅｄ）

相手の動きを巨大な光の輪で動きを封じる拘束魔法。アルフと共に使用した。

ホイップバインド（Ｗｈｉｐ　Ｂｉｎｄ）

鞭状に形作られた魔力で相手を拘束・時には攻撃可能なバインド系補助魔法。

“スピード・オブ・ライト・テン”

ホイップバインドを高速で振い相手を攻撃する。ゼムナス・フォーラムとの戦闘で初使用るが、全ての軌道を読まれて躱される。

“スピード・オブ・ライト・テン・ライトニングホイップ”

通常のスピード・オブ・ライト・テンに綴雷電を組み合わせることで、電撃を帯びたものへと変化させ、威力を上げる。

ハンドカフバインド（Ｈａｎｄｃｕｆｆ　Ｂｉｎｄ）

ユーノが制限解除（リミット・リリース）を使用した際に発動させた、手錠の形をした強化

拘束魔法。手錠そのものから棘のようなものを出現させて、それ自体で相手を傷つけることも可能。さらには、魔力を上昇させることによって手錠の数を猛烈な勢いで増殖させ、相手の動きを完全に封じてしまうユーノオリジナルのバインド。

レストリクトロック（Ｒｅｓｔｒｉｃｔ　Ｌｏｃｋ）

バインド系捕縛魔法（小説）で、全作品を通じて最大最強の拘束魔法。範囲対象の捕獲魔法で、光の輪で目標を固定する。集束系の上位魔法（１期ＳＳ０１のユーノの台詞）。発動から完成までの間に指定区域内から脱出できなかった対象全てをその場に固定し、捕獲輪で動きや移動を封じる。『パトリオット篇』で銀太郎との決戦で、チェーンデバイスなしで使うことは造作もない。効果時間が長く、また抵抗も困難。

封殺型結界魔法

結界魔法において、相手の動きを封じたまま攻撃を可能とする上位魔法。作中で登場する技は全てユーノが独自に編み出したものとなっている。

チェーン・ディトラクション・ドラゴン（Ｃｈａｉｎ　ｄｉｓｔｒａｃｔｉｏｎ　ｄｒａｇｏｎ）

別名、結界龍。多大な魔力を使用するために滅多なことでは使わないユーノの奥の手の一つ。計五体までの召還が可能で、それ自体が高い攻撃能力を秘めているだけではなく相手の動きを拘束し、魔力を限界まで高めて連鎖反応のように爆発させるチェーン・カタストロフ（Ｃｈａｉｎ　ｃａｔａｓｔｒｏｐｈｅ）という技も存在する。詠唱は「我、使命を受けしものなり　深き眠りから目覚めし爆鎖の

龍よ、闇は光に、雷牙は筒に　そして、大いなる戒めを与えたまえ」

エーヴィッヒ・シュラーフ（Ｅｗｉｇ　ｓｃｈｌａｆ）

相手を特殊な結界に閉じ込めると、魔力を漆黒の炎へと変換して中にいるもの全てを灼熱地獄で焼き尽くす封殺型結界魔法。詠唱は「妙なる響き、闇となれ。邪に染まりしその円のうちに、永遠の地獄を与えたまえ」

コンカーバインド（Ｃｏｎｑｕｅｒ　Ｂｉｎｄ）

『パトリオット篇』で銀太郎に発動した封殺型の捕縛魔法。対象のリンカーコアを征服して、魔力による自滅を誘うユーノが創り出したオリジナルのバインド。リンカーコアの質にもよるが、強いものであればあるほど爆発の規模は大きくなり、手で触れられるとこの術に堕ちる。

補助・転送・結界魔法

ラウンドガーダー・エクステンド（Ｒｏｕｎｄ　Ｇｕａｒｄｅｒ－Ｅｘｔｅｎｄ）

回復と防御の結界魔法。外敵や攻撃に対し、強靭な防御力を誇る結界防御魔法「ラウンドガーダー」。それに加えて、肉体・魔力回復の効果を付加した高位術。『外伝』では、グラトニーとの戦闘の際負傷したなのは達に対して、今までとは比べ物にならないほどにまで強化されたものを指を鳴らすだけで発動させた。詠唱は「妙なる響き、光となれ！　癒しの円のその内に　鋼の守りを与えたまえ」

封時結界

特定の空間を切り取り、時間信号をズラす結界魔法。対象者・対象物以外の人や物に対する被害や干渉を妨げる効果がある。

広域結界

「封時結界」と同じ効果を持ち、より広い対象をの被害・干渉を妨げることが出来る。

フローターフィールド（Ｆｌｏａｔｅｒ　Ｆｉｅｌｄ）

特定空間に足場を形成する結界魔法のひとつ。工事、発掘現場などで用いられる。『１期』において、フェイトに撃墜されたなのはを受けとめるために使用。

トランスポーター（Ｔｒａｎｓｐｏｒｔｅｒ）

術者と、範囲内の対象（術者が許可する者）を別の場所に瞬間移動させる移動魔法。『１期』ではアルフをフェイト、なのはから引きはがすことを目的として使用。また、別々の場所にいる人・物を同時に別の同じ場所に瞬間移動させる高位転送魔法のトランスポーター・ハイ（Ｔｒａｎｓｐｏｒｔｅｒ　Ｈｉｇｈ）と言うのも存在するが、『Ａ's』時ではヴィータの張った強力な結界に阻まれ、発動出来ずに終わった。

次元転送

次元空間などから別の次元や世界に転送を行う移動魔法。『１期』ではアースラのポートを用いて発動した。

強制転移魔法

『Ａ－ｓ』においてシャマル、アルフと共に力を合わせることで、闇の書の闇を宇宙空間へ長距離転送した。

五行結封（ごぎょうけっぷう）

五点に散らばり、魔力と霊力を解放させて作り出す強固な結界魔法。作中ではユーノとスクライア商店メンバー、白鳥と共に使用。

夢幻結界（むげんけっかい）

対象者を夢の中へと導く特殊な結界。ダークマインドを倒すためにカービィの夢の中に送るために使用。

その他の魔法

シーリング（Ｓｅａｌｉｎｇ）

ジュエルシードや、アンゴルモアの回収の際に使用されるもの。

シールド・グライブ（Ｓｈｉｅｌｄ　Ｇｒａｉｖｅ）

封印魔法の上位種。封印対象となるものを防護壁で包み込み、その後結界内部に閉じ込め圧縮させてからデバイス、ないしは別な場所に封じ込める。ユーノはこれをエリオに教え、『パトリオット篇』でエリオは使用した。

トランスフォーム（Ｔｒａｎｓｆｏｒｍ）

動物形態への変身を指す。魔力消費も少なくて済むらしく、治癒能力も上がる。

フィジカルヒール（Ｐｈｙｓｉｃａｌ　Ｈｅａｌ）

治癒魔法。『１期』、『Ａ' ｓ』では負傷した局員たちや、ヴィータに撃墜されたなのはに使用し、『外伝』ではゼムナスの攻撃を受けた浦太郎にも行使。

飛行魔法

ユーノも魔導師として高い資質を持っており、Ａ' ｓにおいては複数の魔法を展開しつつ、ヴィータとの高速飛行で空中戦を繰り広げられるほど。なのはにも教えた。ユーノ曰く、「初歩の最後の方の魔法」らしい。なのはは、レイジングハートを用いて、両足にフライヤーフィンを展開して飛行する。初めてなのはが空を飛んでから「なのはは、ほかのどんな場所よりも青い空がよく似合う」となんとなく感じていたらしい。現在は専ら霊子で足場を作ることがほとんどで、使う頻度は本作品中では少ない。

探知魔法

シャマルを探すために使用されていた魔法。なのはの「エリアサーチ」に近いと思われる。

検索魔法

無限書庫での調べ物の際に使用する魔法。ユーノは１５～１６冊を一度に魔法をかけられる上、読書魔法と念話も併用して使用している程の優秀さを発揮している。なお、ユーノ曰く「適性しない人に

はとことん合わない」魔法とのことで、慣れていないものが使うと、膨大な情報に脳がついていけずに混乱し、最悪の場合脳卒中と同じ現象が起きてしまうと言う。

アクティブガード（Ａｃｔｉｖｅ　Ｇｕａｒｄ）

衝突・衝撃緩和の魔法。

ホールディングネット（Ｈｏｌｄｉｎｇ　Ｎｅｔ）

対象を受け止める魔法。

フェイク・シルエット（Ｆａｋｅ　Ｓｉｌｈｏｕｅｔｔｅ）

ティアナが使うものと同種の高位幻術魔法。激しい動作や衝撃を与えない限り、小型の物ならば数時間から丸一日の偽装が可能。ラボラトリーに保管していたアンゴルモアが奪われそうなったところを、ユーノが逸早く気付き密かにカモフラージュを施していた。

インサイド・イクスプロージョン（Ｉｎｓｉｄｅ　ｅｘｐｌｏｓｉｏｎ）

リンカーコアの魔力を強制魔法によって爆発的に上昇させて、外界から迫ってくるものや魔法を退けることが出来る。詠唱は「妙なる響き、光となれ　内なる場所に眠りその力を、今此処に爆発させよ」

オデュッセイア（Ｏｄｙｓｓｅａ）

スクライア一族に密かに受け継がれし呪われた右腕を名に持つ高位拘束魔法。魔法陣から召還した右腕を巨大化させ、掌で握りつぶす

「シュバルツ・レールザッツ」や必殺技として「アンドラ・モイ・エネッペ」があり、召還される無数の腕に絡め取られたものは、呪いによって灰となる。

オプティックハイド（Ｏｐｔｉｃ　Ｈｉｄｅ）

術者と術者に接触した対象を透明にし、見えなくする幻術魔法。身体や衣服の上に複合光学スクリーンを展開し不可視状態になる。また、この時単純なレーダー・センサー類であれば騙した完全なステルス状態になることも可能。　かけられた対象が、激しく動いたり魔力を大量に使用するとスクリーンの寿命は加速度的に縮んで、姿を現すことになる。

斬魄刀

斬魄刀の名は『晩翠（ばんすい）』。

始解

封印時は仕込み杖の形状で常に持ち歩いており、能力解放と共に鍔の無い短めの直刀に変形する（但し、柄にはエメラルドが幾つか埋め込まれ細部の装飾はレイジングハートを思わせるようなものである）。また、それとは別に「輝け『晩翠』（かがやけ『～』）」の解号で刀身から斬撃を飛ばすといった様々な技を繰り出す。始解状態であるにもかかわらず、恋次の卍解と互角以上の力を見せ付けるなど、能力は極めて高い。暗黒系最強の斬魄刀。解放前の杖は悟魂手甲と同じ効果を有しており、肉体から魂魄を引き離すことができる。また基本能力の一つとして闇を支配する「暗夜行路」があり、その能力により広範囲の闇を従属させることが可能。

解号は「月光せよ『晩翠』（げっこうせよ『〜』）」

卍解

【卍解】の名は『月霊晩翠（げつれいばんすい）』

全斬魄刀の中で唯一、地獄の番人クシャナーダと契約を結び発動を許された禁忌の卍解。発動の際に地獄の門が現れ、門が開くと同時にクシャナーダがユーノの体に取り付きユーノ自身を般若を思わせるような鬼神へと変貌させる。通常十年以上かかると言われる卍解習得の修行をユーノはなのはへの想いから一カ月足らずで成し遂げ、地獄の試練にも堪えぬいた。（ただし、修行を成し遂げた場面は描かれていない）。通常の死神の卍解に比べ戦闘能力は規格外なものであり、解放された強大な霊力と地獄の力によって神の定めた事象を崩壊させるという能力を発揮させる（例えば、一度壊れてしまった世界の事象を否定する、即ち世界を元通りに復元させるという奇蹟を起す）。

技

ここでは通常状態と魔導死神状態とで区別する。

通常状態

「褥返し（しとねがえ）」

杖と威圧で相手を抑え込み、布団に貼りつけたような体勢を取らせる技術。

「リリカルマジカル」

クロノへのお仕置きや、言ってはいけないことを平気で言う相手に対して発動させる杖を使って攻撃をする。レパートリーが幾つかあるらしい。

「胴回し回転蹴り」

空手技の一つ。命中率の低い大技だが、まともに食らえば相手の顎を骨折させられるほどの威力を持つ危険な技である。プロ格闘家でも得意としている選手は少なく、絶妙なタイミングと高い運動能力が必要とされる。

「刃断」

片手で敵の剣を制すると同時に武器破壊を行う、究極の白刃取り。ユーノの場合、親指と人差し指だけでそれをやってのける。

「御庭番式小太刀二刀流」

ユーノがサムライ・ドラの話と簡単な理論を下に再現した護身術の域を超えた小太刀二刀流。高町士郎・恭也・美由紀が継承する御神真刀流小太刀二刀術と肩を並べ、実戦的な面を言えばそれを上回る程。ユーノは本来二刀流では無い為、あり合わせの木の棒や鉄パイプを使ってやってのけた。

「陰陽撥止」

1本目の小太刀の柄頭を2本目の小太刀の切っ先で突いて押し飛ばす飛刀術。2本目の小太刀が1本目の後に隠れる為、相手の隙を誘い易く、2本目を避けても術者の別の攻撃を喰らってしまう。

「呉鉤十字」

小太刀を十字に交差させ、鋏の様に斬りつける技。主に相手の頸動脈を狙う。なお、呉鉤とは本来中国刀の一種の名称である。

「陰陽交叉」

1本目の小太刀の峯に2本目の小太刀を直角に叩きつけ、勢いをつけて斬りつける技。

「回天剣舞・六連」

御庭番式小太刀二刀流奥義。回天剣舞を両手で使う超高速の六連撃で、初撃は左右どちらからでも選択可能で、相手に攻撃の起点を悟らせないという利点を持つ。ユーノが以前訪れた異世界、「ＥＡＲＴＨ」の住人であるサムライ・ドラから聞いた理論を元に自己流で具現化したもの。

「流水の動き」

緩急自在に動き回る移動法でユーノの秘技。「動」の動きに慣れている剣術使いだけでなく、なのはやフェイトのように剣術使い以外の者も、この動きを捉えることはできなかった。ただし攻撃の際に「動」の動きが出てしまうのが唯一の隙。ここから攻撃の回避等にも使用される。

「無限一刀流・加法・十二本」

十二本の刀を重ねな相手を固めながら打ち付けていく技。

「無限一刀流・乗法・二十四本　」

加法で重ねた十二本の刀をさらに打って十二本全ての刀で斬る技。

「抜刀術」

居合いとも言う。日本刀（打刀とは限らない）を鞘に収めた状態で帯刀し、鞘から抜き放つ動作で一撃を加えるか相手の攻撃を受け流し、二の太刀で相手にとどめを刺す形、技術を中心に構成された武術。なのはの父である高町四郎より技の極意を学びこれを収めた。またその派生技として、一撃目に鞘で相手を浮かし、二撃目に刀で斬りつけるという二段構えの抜刀術も可能。

「天翔絶攻」

刀の刀身ないしは峰の部分を使い、相手を天空へと突き上げる友人であるサムライ・ドラが使う人侍剣力流の技。この技は、ドラが愛読する少年漫画の中に出てくるものを参考にアレンジを加えたもの。このとき、相手を天空へ突き上げる際には相当の力を必要とするが、魔導死神として持ち合わせた強靭な筋力を持ち合わせるユーノにも使用可能。

「龍槌閃」

空高く飛び上がり、自然落下を利用した威力の高い斬撃で一気に斬り裂く。弥彦の技を見、ユーノなりの改良の末会得。

「龍巻閃」

回転による遠心力を利用した技。相手の攻撃を真半身でかわし、そのまま回転しながら相手の背後に回り込み、後頭部や背中に打ち込む。先手をとって使うことも可能だが、返し技として使って最も威力を発揮する技。

”龍巻閃・旋”

龍巻閃の派生技。錐揉み状で相手に突進し、斬りつける。

”龍巻閃・凩”

龍巻閃の派生技。

”龍巻閃・嵐”

龍巻閃の派生技。空中高く飛び上がり、刀を手前に構え前方宙返りにより相手を切り裂く技。尚、以上三種類の龍巻閃を連撃として使用することも出来る。

「龍巣閃・咬」

全身の急所を攻撃する高速乱撃術である龍巣閃の派生技。一部分のみを狙い集中乱撃する。

「天龍閃」

ユーノが編み出したオリジナル。空中できりもみ回転しながら斬る。

「九頭龍閃」

神速を最大に発動させ、剣術の基本である９つの斬撃「壱：唐竹、もしくは切落」「弐：袈裟斬り（けさぎり）」「参：右薙、もしくは胴」「肆：右斬上」「伍：逆風」「陸：左斬上」「漆：左薙、もしくは逆胴」「捌：逆袈裟」「玖：刺突」を同時に繰り出す乱撃術にして突進術の技。

「刹那乱閃」

瞬歩を駆使して一瞬のうちに相手の間合いを侵略してその隙に超高速の斬撃を相手の身体中に叩き込む技。加減をして峰打ちしても、その衝撃は容易に大男一人を気絶させるほどの威力がある。

「神速衝閃」

人侍剣力流極意。刀を両手でしっかり持った後、縮地・瞬歩を最大限駆使して相手に攻撃を与える技。この技は一撃必殺にかなり近いもので、その衝撃の規模は場合によっては建物一つ容易に粉々にするほど。初速における瞬間最高速度は時速３００キロにも及ぶ。

「天翔龍閃」

飛天御剣流奥義。超神速の抜刀術。右足を前にして抜刀するという抜刀術の常識（通常、抜刀術は刀は左から抜刀するため、左足を前にすると抜刀時に斬ってしまう危険性があるため）を覆し、抜刀する瞬間に絶妙のタイミングで鞘側の足、つまり左足を踏み出し、その踏み込みによって刀を加速し「神速」の抜刀術を「超神速」にまで昇華させる。初撃をかわされたとしても、超神速の刀が空を切ることで弾かれた空気が敵を打ち据えて行動を阻害し、さらに空気が弾かれてできた真空空間が元に戻ろうとする作用が相手を引き寄せ、回転による遠心力も加えたさらに強力な二撃目で斬る、二段構えの

抜刀術。

「顎割」

刀で一刀両断する技。巨大な敵であっても問題はなく、一撃でムーさん？号の左腕を切り落とした。本来は斬魄刀での使用が普通。

「二刀流　七十二煩悩鳳」

漫画「ワンピース」に出てくる技を拝借したもの。刀二本で放つ煩悩鳳（ポンドほう）で、いわゆる「飛ぶ斬撃」である。

「一刀流　三十六煩悩鳳」

同じくワンピースより拝借した技。一刀流で放つ煩悩鳳。飛ぶ斬撃の形は線状であったり扇状であったりする。

「鬼デコピン」

指先に霊圧を収束し、強力なデコピンを放つ技。一撃で複数のビルをなぎ倒すほどの威力を持つ。

「竹蜻蛉」

相手を投げ、回転させて頭から落下させる投げ技。

「滝鯉」

相手の蹴りなどを手と足で受け止め、体勢を崩させる技。

「吊柿」

相手の放った拳や蹴りに自分の手足をかけて攻撃の軸にする戦闘手段。もともとは夜一の生み出した技。

「撞指」

人差し指と中指を相手の背中に付け、遠くへ弾き飛ばす技。

魔導死神状態

「翡翠斬」

始解時に使用。一護の斬魄刀・斬月の技「月牙天衝」に似た、離れた敵に魔力と霊力を掛け合わせた翡翠の斬撃を飛ばす技。恋次の狒骨大砲を相殺するほどの威力を持つ。また、なのはのディバインバスターのように状況に応じたバリエーションコンボが存在する。

“翡翠斬・八千刀”

一度に八千本の斬撃を繰り出す。翡翠斬のバリエーションの一つ。

“月光一閃”

霊圧と魔力を極限まで圧縮・凝縮させた巨大な一撃を剣先から放出する。翡翠斬の中で最も強い威力を誇る。『パトリオット篇』での高円寺との最終決戦の時に、金太郎の時間を稼ぐために使ったのがこの技。

「翡翠の殻」

始解時に使用。「鎮め　『晩翠』（しずめ　『～』）」の解号で全身を半円状の翡翠の膜で包み、敵の攻撃を防ぐ防壁を張る技。強い圧力がかかる中でも、作用反作用のように逆側から同じだけの圧力を返すことが出来る。

「獅子翡翠群」

始解時に使用。頭上から流星群のように降り注ぐ無数の刃で敵を攻撃する。

「深緑月華」

始解時に使用。刀を満月を描くように動かし、そこから深緑の円形の結界を発生させ相手を包み込み、対象を巨大な深緑の円形ドームの中で爆殺させる。大爆発を起こす。

「晩翠月光歌」

敵対する対象に応じて使用する様々な用途が存在する技で、バリエーション豊富。

“沈黙の鎖”

正方形状の結界を展開し、相手の体の自由を奪う。

“岸壁の睡蓮”

三角形の結界内に閉じ込めたものに激しい電撃を与える。

“散り行く砂”

月の魔力を使ってその場に無いはずの砂を巻き起こし視界を遮る。

“蒼の夜空”

対象の神経伝達を鈍らせる。

“隠者の呪縛”

チェーンバインドによって相手の動きを拘束した後、それを伝って灼熱の業火を相手に与える。

「月面」

刀を突き刺し、空間湾曲エネルギーを利用し数十キロ四方の土地を一定時間凝縮移動させることが出来る。フィールド形成術の一つ。

「一骨」

片腕の拳から強烈な打撃を繰り出す。戦闘ではＡＭ状態の「闘（ファイト）」を圧倒する程の威力を見せ付けた。

「闇天翠月」

晩翠本来の能力。卍解状態での発動が普通だが、状況によっては始解状態でも発動可能。頭上に浮かぶ翠色に輝く月に照らされたものは全てを闇に喰われ、同時に深い闇に堕ちる。ユーノ曰く数ある技の中で一番陰気で一番卑劣なものらしい。「黒闇」に対して使用され、見事ＡＭ化した「黒闇」を撃退する。

「翡翠月風」

晩翠の刀身から発生するユーノ自身の魔力と霊力が合さったそよ風のようなもので、相手の防御を無力化させる。ＡＭ１５のバリアシステムを分解するのに使用。

「瞬歩」

移動補助体術のうち、極めれば眼にも映らぬ程の高速移動のこと。更には朽木白哉の話を元にその気になれば回転を掛けた特殊な瞬歩“閃花”や、夜一からの指南を受けた瞬歩による分身を可能としている。

「霊絡」

大気中の霊気を視覚化したもの。上位の死神のみ見たり触れたりすることができる。相手の位置を捕捉することにも用いられる。過去の模擬戦で、恋次・吉良・エリオの三人を見つけ出すのにこれを使用している。

「闇影晩翠」

剣先から出した黒い渦で相手の影を縛り拘束する。

「悪辣晩翠　月下終焉」

「闇影晩翠」の影の繋ぎ目から怨霊のような流れ込み、黒色の満月にも似た爆発を起こす。

「闇天斬」

始解時に使用。晩翠本来の能力であり夜に力を発揮するもう一つの翡翠斬とも言うべき斬撃。翡翠斬とは対照的に斬撃の色は黒一色で純粋な霊力で出来たもの。アークの鎧を身に纏ったヴォルドの体を傷つけるほどの強力な威力を持つ。

“闇天斬・凶過仙鬼”

コンボの一つで相手が初撃を避けた場合でも、月の力を使って四方から無数の闇天斬を相手に放つことが出来る。

“闇天斬・魔断”

詠唱により殺傷能力を上げた一撃を相手に与え、闇へと葬り去る。詠唱は「妙なる響き、闇となれ。我が魂より造られし刀に、正しき闇を与えたまえ」。

「月牙八式兵法」

十年間の間に一護が自らの唯一の技である月牙天衝を用途に分けて徹底的に極めた八段階のレパートリーに分かれた月牙の形態。本来、月牙天衝とは斬魄刀の名前に「月」がある、ないしは力の根源が月に依存している斬魄刀にのみその発動を許されたものであるため、弟子であり月の力を源にする晩翠を所持するユーノにも月牙を使用することが可能。

“阿修羅月牙”

五色。目にも止まらぬ斬撃の連続によって、対象を斬り刻む七式の

風切月牙よりも物理破壊能力に富んだもの。

“一刀月牙”

八式。月牙天衝そのものを刃に留め、威力を保持したまま相手に強力な一太刀を加える。

「楔晩翠」

敵に向けて大量の楔を打ち込む。

「月牙天衝」

一護の斬魄刀『斬月』によるものと同様の技。個々によって能力が異なる斬魄刀で、一護の指南をもとにユーノ自身が晩翠より教えられた月牙を使用する。

「針山晩翠」

地面から無数の針を出現させ、敵を串刺しにする。

「地獄壊象」

すべての定められた事象を否定し、事象そのものを自分の思うがままに覆す月霊晩翠最大の能力。

本体

晩翠

声　一　中田譲治

深緑の外套に右眼には虚の仮面のような眼帯をした長身痩躯の男。ユーノの精神世界に存在し、ユーノからは晩翠と名指しで呼ばれている。人の話を聞かずに勝手に話を進める節があり、勝手に具象化することもしばしば。時にはユーノと大喧嘩をすることも珍しくない。尚、晩翠のいるユーノの精神世界は、全てが闇で覆われており闇以外のものは存在しない。作中では、呪われた聖剣（獏爻刀『夷綱』）の捜索の際に具象化し、ユーノやルキア、ザフィーラと共に任務に参加。重傷を負ったユーノを守れなかったことに後悔を覚えながら、独自に敵の船に潜入し大量生産されていた夷綱を破壊。その後、復活したユーノと肩を並べて次元海賊『源氏蛍』を退ける。アンゴルモア・銀魂篇では最終的にユーノに自分の想いを伝え、彼と銀時の命を救う為自らが卍解時の副作用を請け負い地獄に堕ちることとなった。そしてユーノが卍解を発動する直前涙を流しながらも斬魄刀の姿となり、ユーノに別れを告げている。

鬼道

非常に鬼道に秀でており、そのほとんどを詠唱破棄で使い四獣塞門のような高等技術を使いこなす。

・破道の一「衝」

「抜」の撃退の際に使った鬼道。

・破道の四「白雷」

なのはのプロテクションを貫通破壊するのに使った鬼道。

・破道の十「光凛響（こうりんきょう）」

光弾による爆発で強い光を発し、視界を遮る。

・破道の三十一「赤火砲」

地下洞窟での戦闘の際、目玉の軍勢と化したギガトロン破壊のために使用。

・破道の三十二「黄火閃」

クロノとの戦闘において、目暗ましのために使った鬼道。

・破道の三十三「蒼火墜」

グラトニーとの戦闘の際に使用。詠唱破棄でも相当な威力のものを放てる。

・破道の四十「土竜落（もぐらおとし）」

上空から巨大な岩石を落とし、相手を押し潰す。恋次のお仕置きとして使用。

・破道の五十四「廃炎」

ミニコーナーを勝手に乗っ取った恋次のお仕置きとして使用。

・破道の五十八「？嵐」

恋次との戦闘の際に使用。

・破道の六十三「雷吼炮」

「黒闇」との戦闘の際に使用。

・破道の八十「土蜘蛛地雷（つちぐもじらい）」

ＡＭ６との戦闘の際、時間稼ぎの為に使った。

・破道の八十二「爆水弾（ばくすいだん）」

「闇火」への止めの際に使用した鬼道。

・破道の八十八「飛竜撃賊震天雷炮」

コピー魔導師リムの動きを封じた後に使用。

・破道の九十「黒棺」

九十番台の上級鬼道でその威力は並みの鬼道とは別格。バインドで拘束した銀太郎との決戦の際に使用した。完全詠唱での黒棺を見た恋次やなのは達が絶句した程。

・破道の九十一「千手皓天汰炮」

グラトニーの動きを封じた際に詠唱を唱えて使用。

・縛道の四「這縄」

近藤救出のために使用。

・縛道の六十一「六杖光牢」

グラトニーの動きを封じるために使った鬼道。

・縛道の六十三「鎖条鎖縛」

グラトニーの動きを封じるために使った鬼道。

・縛道の七十「樹牢門（じゅろうもん）」

地下洞窟での戦闘中、一護を助けるために詠唱破棄で使用。詠唱は「偏狭の地に咲く草木よ、寄り集まりて我が命ずるままに牢と化す」。

・縛道の七十五「五柱鉄貫」

コピー魔導師リムの動きを封じるのに使用。

・縛道の七十九「九曜縛」

グラトニーの動きを封じるために使った鬼道。

・縛道の八十一「断空」

なのは達をグラトニーの虚閃から守るために使用。こちらも詠唱破棄でありながら八十九番以下の破道を完璧に防ぐ。

・縛道の九十九「禁」

グラトニーの動きを封じるために使った鬼道。

その他・応用技術

分類不明の物も含む。

・四獣塞門

相手の前方に“竜尾の城門”、左に“虎咬の城門”、右に“亀鎧の城門”、上に“鳳翼の城門”という四種類の壁を発生させ、その壁で作られた直方体の結界で相手を閉じ込める鬼道。かなりの強度を誇る。なのはの「レイジングハート・マキシマムブレイド」から放たれるディバインバスターを大海の悪魔に命中させるために使用。詠唱は「軍相八寸退くに能わず・青き閂　白き閂　黒き閂　赤き閂・相贖いて大海に沈む」

・鏡門

パトリオット篇でユーノが金太郎を外界からの攻撃から護る為に使った鬼道。内側からだと案外容易く破ることが出来る模様。

・天輝銀月華

霊魔秘法。自身の霊力と魔力を練り合わせて強力な波動して相手に撃ちこむ。ホウスイの凶闘気無限暗黒を圧倒する威力を見せる。

・激昂黒焔

自分の背後に漆黒の焔を出現させる。その姿はまるで焔で出来た巨大な壁。多大な霊力と魔力を消費するため、あまり使い勝手のいい

ものではないが威力は絶大。

・五行奉神剣

プログラム方式であるミッド式とベルカ式の魔法とは異なる木之本桜の夫、小狼が得意とする中国式魔法を極めたもの。形式の違う魔法でもユーノ曰く鬼道に近い自然の力を秘めた性質となっているため発動が可能となっている。五行の力を刀に集約させることで強力な威力を秘めた刀剣へと変化させ、伸縮自在な刀身で敵を一刀両断する。技の発動の際には中国式の魔法陣が足元に出現する。五行とは、木・火・土・金・水の五つの気を総称したもので、一定の法則に従ってバランスを保っている。詠唱は「玉帝有勅神硯四方　金木水火土　雷風　雷電神勅　軽磨霹靂　電光転　急々如律令」

クシャナーダ化

銀時が新八を救おうとし、逆に斎藤一に敗れ血塗れとなった姿を目撃した際、過去の記憶に封印したなのはが重傷を負った場面と内戦で失った少女ユウ・弥彦の死がフラッシュバックし、それによって感情が爆発、地獄の番人クシャナーダの状態に変貌したユーノの姿を指し、ユーノの身体に封印された地獄の呪いが暴走した状態を指す。通常時は背中に刻まれた地獄の門を模した呪印によって卍解の力を封じると同時に呪いそのものを抑え込んでいる。気を抜けばたちまち呪印が顕著にその力を現し独特の文様が首筋から広がり、怒りなどによりユーノの感情が爆発すると容貌と内面さえもクシャナーダに近い状態に変貌させる。これは、ユーノが依り代ではなく正式にクシャナーダの選定を受けた「選出者」であることからこのような能力を発現することが出来る。変貌後はスーパーサイヤ人となった悟空を打ちのめす程の大打撃を与えたが、完全虚化した一護の渾身の一撃がきっかけとなり元に戻った。その際、身体は人間の姿

へと戻り、同時に背中には呪印が刻まれている。基本的に一護の完全虚化同様、自分の意志で元に戻る事は出来ない。外見はクシャナーダの巨体をそのまま人間サイズに小さくしたものであるが、若干細部が異なり口元が凶暴なものとなっている。内面は仲間を含む他者の言葉は通じない、自分が敵と判断した者には味方であろうと攻撃を開始する、深手を追った相手にも容赦はしないとユーノの意識は残されておらず完全に獣同然と化している。戦闘力も地獄の番人クシャナーダに匹敵するものを持ち、魔導死神として別次元の実力を持つ本来のユーノの力を上回るほどの異常な力を見せている。初登場時はスピードに優れていフるェイトが目で追いきれないほどの超高速戦闘を発揮させた。

「壊業線」

口腔内から放つ地獄の業火。その威力は完全虚化での一護の虚閃と同等で、テトラカトゥーンの悟空のかめはめ波を簡単に打ち消し、更には管理外世界「T2」の大地と海の五割を吹き飛ばしてしまうほどの威力を持っている。色は漆黒。

「壊転響（かいてんきょう）」

クシャナーダ化した際の高速移動能力。瞬歩やソニックムーブとは違い、どちらかと言うと破面の使う響転（ソニード）に近いもの。常人や高速戦闘に慣れているフェイトでさえ、それを目で追うことは出来なかった。

武器・アイテムなど

羽織

翡翠の魔導死神ユーノ・スクライアの力を抑える為に、浦原が開発した重さ２０貫の肩当と筋肉の逆さを反るバネが仕込まれている。同じものを百着ほど所持している模様。作中、この外套を脱いだのは授業参観に行くときであり、なのはやフェイトなどはあまりの重さに手も足も出なかった。

月山

ユーノが持つ晩翠とはまた別の日本刀。　鎌倉期から室町にかけて活躍した刀工月山とその一派が造り上げたもので、出羽国月山を拠点とした。鎌倉期から室町期にかけて、月山の銘を刻んだ刀剣は実用性の高さと綾杉肌の美しさの両面から全国に広まり、この刀工集団を「月山鍛冶」、その作品を「月山物」と呼んだ。シグナムとの戦いで使用したのがこれである。ちなみに、柄には鎖を仕込んでおりそれを使って刀を飛ばすことも出来る。カトゥーンとの戦いで大破する。

主人公設定公開（後書き）

参考文献
・ＤａｔａｂａｓｅＩＩ　－　無限書庫の風景（仮）Ｗｉｋｉ
・Ｗｉｋｉｐｅｄｉａ（ＢＬＥＡＣＨ及び魔法少女リリカルなのは登場人物より）

魔導師図鑑ハイパー！

そこにいるのは、険しい表情を浮かべながら横になる恋次と吉良。

恋「くっ！！！！！」

吉「うっ・・・！！」

苦しみながら、吉良は恋次に話しかける。

吉「阿散井君・・・く、苦しい・・・！！」

恋「吉良・・・俺はもう駄目かもしれない・・・俺が死んだら、部下達の面倒・・・見たやってくれ・・・のあああああああ！！！！（絶叫）」

吉「そんな！阿散井君・・・しっかり・・・ぐあああああああああ！！！！（絶叫）」

しかし、絶叫の真実は・・・シャマルとルキアが二人の足の壺を圧しているだけ。

ル「肝臓が大分弱っておるな。」

シャ「お酒の飲みすぎよ、二人とも。」

そう言って、二人は壺をさらに強く刺激する。

恋・吉「ぐあああああああ！！！！！！！！！！」

スクライア商店紹介（前書き）

ユーノに引き続きスクライア商店の事も書きました。

隅っこの少年はこの後の話で出て来る重要人物です。

それまでは内緒です。

スクライア商店紹介

＞i18185―709＜

スクライア商店

空座町に隣接する松前市のとあるビルの一角に佇む駄菓子屋。浦原商店と同様、ユーノが自ら霊的・魔法関連商品を取り扱う。安さから子供には絶大な支持を受けリピーターも多数。駄菓子以外にも様々な日常品も取り揃えている。メンバーは皆、ユーノを始めとする管理局を下野したものや死神の力を有した戦闘の能力が飛びぬけて高い者ばかり。また、ユーノに対する忠誠心が非常に高く、機動六課に協力しているのは全て彼の手伝いをしたいと言う従業員の考えに基づいたものである。

ユーノ・スクライア

声　―　水橋かおり

身長１７０ｃｍ　体重６８ｋｇ

２３歳→２４歳。元時空管理局「無限書庫」司書長。スクライア商店の店長にして本作の主人公。彼に関する詳しい記述は「主人公設定公開」で参照。

熊谷金太郎

声　―　梁田清之

身長２１０ｃｍ　体重１４８ｋｇ　5月12日生まれ。

４５歳→４６歳。魔法術式・ベルカ主体の混合ミッドチルダ式／魔導師ランク・総合ＳＳ＋。魔力光は金色。握菱鉄裁に酷似した２ｍ越えのスクライア商店店員。一人称は「私（わたくし）」。もっとも古い従業員で常にユーノをサポートしている片腕的存在。浦太郎と鬼太郎のお目付け兼世話役。高い戦闘力の持ち主。その強面な表情から恋次やなのは達は当初恐怖したほど。戦闘における負傷でもその驚異的な回復力の高さから非常に身体機能が優れていることが窺われ、眼鏡以外は無傷や潰れた臓器が数時間で修復するなどあり得ない体の持

ち主。熱血過ぎる面が多々あり、度を過ぎて恋次達には変態キャラとして扱われることもある。極度のマヨラーであり、マヨネーズをかけて合わないものはこの世に存在しないと考えており、チャーハンやプリンなどにもあらゆる料理に大量にかけて食べる。丼1杯の白米の上にマヨネーズをかける通称「金太郎スペシャル」は大和屋兄弟の弟を一撃でノックアウトさせる破壊力を持つ。数十年前は、時空管理局武装隊名誉元帥として管理局を束ねる要職に就いていたが、見えてたものが見えなくなったという理由から突如辞職。その後、ひょんな事が切欠でユーノと巡り合い、ユーノの人間性の大きさに感服しその後行動を共にするようになる。責任感が非常に強く、自分が招いたトラブルはたとえ自己犠牲でもケジメをつけようとする。また、ユーノ同様無用な戦いは極力避けているがどうしようもない状況や仲間を救うためならば積極的に戦闘に参加する。そして、ユーノ・スクライアと言う男における本質的な強さを一護となのはと同じぐらい理解している。他者を感動・感涙させることにこだわりがあるようで、決め台詞として「私の強さにあなた（ら）が泣いた！」と言い、倒した相手に涙や鼻水を拭うための懐紙を渡すのを流儀とすることがある。六課での役職は戦技教官・及び嘱託前線部隊「スクライア商店」副隊長／ハイパーマシーン整備主任。

デバイス

『アックスオーガ』→『アックスオーガ・カタストロフ　』声：菅生隆之

金太郎の父である欽之助が、当時5歳だった金太郎に譲り渡したインテリジェントデバイス。通称「破壊の戦斧」。重さ10？にも及ぶ身の丈ほどの重量級のデバイスで刃に魔力を送り込むと凄まじい破壊力を持った一撃へと変貌する。また、地面を容易に割ることやその状態から岩盤を持ち上げると言った荒業も使用できる。真っ向

から力で圧倒する戦闘スタイルが特徴。パトリオット篇ではブラッド状態の白鴎との戦闘で大破したアックスオーガを修理し更にアックスオーガの要望でユーノ自ら探し出した初代パトリオット、エドワード・コークの血を媒体にリベル式のブラッドカートリッジシステム『ＣＶＫ０００』を搭載してアックスオーガ・カタストロフとして生まれ変わる。形態のバリエーションは近距離線を得意とした斧型の《オーガフォーム》、近接戦闘での高い防御力を発揮し、重力魔法攻撃を発揮する《アックスフォーム》、アルティメットフォーム（アックスフォーム・ダイナミックハデス）から引き継いだ最大出力用のフルドライブ時の超大斧形態の３種類がある。原則使用は禁止の《ダイナミックハデス》は魔法の制御に失敗すると使用者もデバイスも破壊される為とユーノに言われていた。《ダイナミックハデス》の特徴として、術者の限界値まで大幅に能力を上げる事が挙げられる。結局は物語中盤での銀太郎との戦闘で使用し、大威力魔法を連発したが壊れずに済んでいる。それだけ金太郎の魔法制御力と身体能力が優れているということだと思われる。当初、アックスオーガは譲り受けたものとばかり思っていた金太郎だったが、パトリオット篇でユーノから告げられた初代パトリオットの直系尊属に代々受け継だれてきた古代のリベル式インテリジェントデバイスであることを黙認する。尚、強化される以前にはパトリオットによって奪われた聖地への扉を開く鍵（ロスト・ロギア）が装飾品として組み込まれていた。

使用魔法

上記でも説明したように、真っ向から力で圧倒する戦闘スタイルが特徴で重力操作による魔法攻撃も得意とする。

ダイナミックチョップ（Ｄｙｎａｍｉｃ　Ｃｈｏｐ）

刃に圧縮した魔力より強化したアックスオーガ・オーガフォームで

敵を両断する。

グラン・カイーダ（Ｇｒａｎ　Ｑａｅｄａ）

カートリッジを二発ロードして、巨大な魔力刃を生成。それにより敵を両断・圧砕する。ダイナミックチョップの発展系。

ダイナミッククロス（Ｄｙｎａｍｉｃ　Ｃｒｏｓｓ）

ダイナミックチョップの派生技。圧縮した魔力による斬撃を十字にしてより強力な一撃を加える。

アースクエイク・ロックブラス（Ｅａｒｔｈｑｕａｋｅ　Ｒｏｃｋ　Ｂｌａｓｔ）

アックスオーガを地面に突き刺して巨大な岩の塊を敵に衝突させる。鬼太郎のエキシビジョン形式での模擬戦で使用された。

ボルカニックボム（Ｖｏｌｃａｎｉｃ　Ｂｏｍｂ）

アックスオーガに集束した魔力を火山から吹き出る火山弾の如く強力な熱破壊能力を秘めた魔力弾を無数に発射する。白鴎との初戦で使用。

ハデスの一振り（Ｔｈｅ　Ｓｗｅｅｐ　ｏｆ　Ｈａｄｅｓ）

金太郎最大最強の切り札であり、彼の代名詞ともなっている魔法。エクストリームチャージの掛け声で金太郎本人（＋カートリッジ）の魔力に加えて、戦場に漂う残留魔力をもかき集めて特大の一振りを放つ超広域破壊魔法。絶大な威力に加え、戦場に漂う残留魔力を

利用することで「金太郎自身はほとんど魔力が残っていない」状態からでも発動できる反面、金太郎との魔力、体力、気力の全てを使い尽くす程に消耗してしまう上にチャージ時間を長々と取ってしまうため、「最後の一撃」としてしか使用されていない。

ハデスの一振り＋（Ｔｈｅ　Ｓｗｅｅｐ　ｏｆ　Ｈａｄｅｓ　Ｐｌｕｓ）

ハデスの一振りの欠点である「チャージ時間の長さ」の解消をあえて無視し、逆にチャージ時間を延ばすことで威力の大幅アップを狙った破壊魔法。発動時には、アックスオーガが発射までのカウントダウンを行う。結果的に、威力の大幅アップに加えて、金太郎が思ってもみなかった結界機能の完全破壊機能が付加されている。『パトリオット篇』第２話では、ロングアーチでも解析できなかったリベル式の結界を破壊して脱出路を切り開いた。

ダイナミックハリケーン（Ｄｙｎａｍｉｃ　Ｈｕｒｒｉｃａｎｅ）

アックスオーガを振り切り凄まじい勢いの突風を嵐のように発生させ、敵を吹き飛ばすことは勿論迎撃することも可能。金太郎の意思で自由にコントロールし、その都度威力変更が出来る。

ダイナミックストーム（Ｄｙｎａｍｉｃ　Ｓｔｏｒｍ）

アックスオーガに集積させた自身の魔力を強烈な勢いを持った魔法の乱気流に変化させる。直撃すれば、大概のものならば跡形もなく吹き飛び粉砕する。

ダイナミックスラッシュ（Ｄｙｎａｍｉｃ　Ｓｌａｓｈ）

直撃攻撃魔法。ダイナミックチョップよりも鋭い一閃で敵を切り裂く。

グレイトリッパー（Ｇｒｅａｔ　Ｒｉｐｐｅｒ）

直接攻撃系魔法。ダイナミックスラッシュに類似しているが、リッパーと言う名の通り刈り取ることを主眼に置いているのがこの技。銀太郎との初戦では、容易に受け止められてしまう。

ダイナミッククエイク（Ｄｙｎａｍｉｃ　Ｑｕａｋｅ）

アックスオーガを地面に突きさし巨大な衝撃波を発生させる。

防御系

その名の通り防御のための魔法で、物理・魔力による攻撃を防ぐことができる（ただし、その分魔力は消費する）。

バリアジャケット（Ｂａｒｒｉｅｒ　Ｊａｃｋｅｔ）

魔導師が戦闘時に纏う、魔力で構成された衣服で、フィールド系防御魔法に分類される。衣服だけではなく、衣服に覆われていない部分やデバイス本体も防御フィールドを生成して身を守ったり、空気抵抗を無効化している。

ダイナミックフォーム（Ｄｙｎａｍｉｃ　Ｆｏｒｍ）

金色を基調とした戦国武将が着用する鎧に酷似したバリアジャケット。重厚な分、機動力には劣るが高い防御性能を発揮する。汎用性を考慮し、魔力消費も少なくて済む。

アックスフォーム（Ａｘｅ　Ｆｏｒｍ）

金太郎の新装甲バリアジャケットであり、ブラッド状態そのもの。絶対的な強度を誇りリベルの魔法を容易に跳ね返す。基本カラーは金色。仮面は斧型のレリーフがレールを伝い眼前に固定。外側が左右に展開して「金」の字を象っている。モチーフは金太郎の前掛け。腕力と防御力は魔導師中最強で、アックスオーガの特性もあり、強固な体の敵に有効。

プラズマシールド（Ｐｌａｓｍａ　Ｓｈｉｅｌｄ）

初めてのアンゴルモア捜査で使用された、雷撃系防御魔法。空気抵抗により静電気を発生させ、直射砲撃に対する体勢を発揮させ、受けた衝撃をそのまま跳ね返すことが出来る。ＡＭ０２には効果は見受けられなかった。

プロテクション（Ｐｒｏｔｅｃｔｉｏｎ）

バリア系防御魔法に分類される。正式名はアクティブプロテクション（Ａｃｔｉｖｅ　Ｐｒｏｔｅｃｔｉｏｎ）。触れたものに反応し、対象を弾き飛ばす性質を持った防御バリアを発生させる。特に物理攻撃に対する耐性が高い。発動速度が早く防御範囲が広いうえ、魔力も小さくてすむが、元々の防御力は低い。パトリオット篇では白鴎のブラッドカートリッジの影響で未発動で終わった。

アックスプロテクション（Ａｘｅ　Ｐｒｏｔｅｃｔｉｏｎ）

ブラッドカートリッジシステムにより強化されたプロテクション。防御力はプロテクションに比べて格段に上がっており、その防御力

は、金太郎のプロテクションを破った白鴎のエクストリームパワーフォースを真っ向から防げるほど。魔力消費が大きくなった為に、ブラッドカートリッジシステムで強化された魔力を頼りにしている。また、この魔法を使用中に派生魔法のダイナミックバースト（Ｄｙｎａｍｉｃ　Ｂｕｒｓｔ）を使ってバリアを爆破することで、相手にダメージを与えながら、爆風と衝撃により距離をとることが可能。初出は、ブラッドカートリッジ強化イベント後の白鴎との再戦時。

補助・転送・結界魔法・その他の魔法

五行結封

ユーノと従業員一同で使用した強壮結界。

四層結封

ＡＭ０２の封印の為に使用された。四層に渡る厳重封印魔法。

亀井浦太郎

声　一　遊佐浩二

身長１７３ｃｍ　体重６８ｋｇ　１０月５日生まれ。２５歳↓２６歳。魔法術式・近代ベルカ式／魔導師ランク・総合Ｓ。魔力光は青色。スクライア商店店員で一護の悪友の石田雨竜に似た顔つきの男。一人称は「僕」。東京都練馬区のとある町の出身で、銀行の頭取である父親と弁護士である母親との間に一人息子として生まれる。冷静沈着で頭の回転も早いが、実は隠れサディストな上にキザで女好き。更に嘘をついて人を騙すことを得意とし、口八丁で周囲の人間を手玉に取る詐欺師のような性格が窺える。好物はハーゲンダッツ。決め台詞は「（お前／お前たち、）僕に釣られてみ

る？」や「千の偽り万の嘘」、「言葉の裏には針千本」。魚や釣りを用いた喩えが多く、相手を手玉に取ることを「釣り」と称する。相手を翻弄したり情報を引き出す術に長け、ピアノや華道など女性に受けが良さそうなことは何でもそつなくこなす器用さも持つ。当初、従業員で同い年の鬼太郎とは犬猿の仲（自分よりも誕生日が早い鬼太郎を「センパイ」と呼ぶが敬意はない）だったが、次第に緩和される。金太郎の事は「金ちゃん」、ユーノの事は「店長」と呼ぶ。ユーノと金太郎同様、元時空管理局地上本部首都防衛隊所属の陸戦教導官だった。上級キャリア試験には、１６歳のときに、総合能力的な面から一発合格。所属当時の階級は一等陸佐。「地上部隊の鉄壁」と謳われる優れた防御性能と、そのしたたかな攻撃方法などから一部からは「狡猾の亀」と揶揄されるほどであったが、一方で「地上部隊のエースオブエース」などとも呼ばれ、なのは同様一騎当千の実力者。また、数ある中でも非常に稀有な水流魔法の変換資質を持ち、それを駆使した技を使用する。僅かばかりの霊力もありユーノの指南を受け、霊力を使っての飛行術も使える。尚、切れると性格が豹変しお仕置きの為にディバインバスターを使うことがある。掛け声は「一撃滅殺」。高速戦闘もフェイト程ではないがそれなりに出来る。教導官時代に可愛がっていたヒカリ・ガーレイドを救うことが出来ず、彼女を死に至らしめたアツシ・ムラナカを告訴するも認められなかったことが切っ掛けで、人生に絶望し世の中を見限り世界を放浪としていた。自分なりのプライドを持ち合わせており、自分を救ってくれたユーノに強い恩義と敬意を抱き、ユーノや彼の守るべきもの（なのは達）には協力するなど、義理堅いところもある。他人を手玉に取る反面、なのは達後輩やフォワードに対して世話を焼く等、面倒見がいい面もある。自分が他人に引き込まれる＝釣られることは好まない。鬼太郎ら他の人間の発言には突っ込みを入れる事が多い。六課での役職は戦技教官・及び嘱託前線部隊「スクライア商店」のガードウィング。

デバイス：『フィッシャーマン』声：遊佐浩二

浦太郎が使う専用のアームド型インテリジェントデバイス。浦太郎の身の丈程もある長槍型。なのはやフェイト同様インテリジェントデバイスでありながらベルカ式カートリッジシステムを搭載しており、カートリッジロードや援護魔法による強化を受けると、先端から砲撃や水流魔法を発動する事可能となる。待機時は戦闘時のものを縮小したものとなり、浦太郎は普段懐にしまい常時携帯している。当時、地上部隊の魔法科学研究所のスタッフたちの手に寄り本局魔導師の力と拮抗できる力を模索し、その前進として作られたのがフィッシャーマンである。しかし、出力調整や扱いが困難であったことから多くの陸戦魔導師は匙を投げた中、浦太郎だけがその性能を引き出すことが出来専用のデバイスとして重宝される。《ストレートスピアフォーム》を基本形態とし、フォルム２（ツヴァイ）である《スピアバスターフォーム》は先端部を開口し砲撃や水流魔法を飛躍的に高める形態で、出力調整も浦太郎の意思で可能。そして、隠し機能である《ロッドフォーム》は棍棒と釣竿二つの意味を持ち、どちらの用途でも使用可能。中距離白兵戦は勿論、水中や空中にいる敵に対しても優位に戦闘を進めることができ、戦闘を離脱しようとした敵を強制的に引き戻すこともできる浦太郎の潜在能力を最大限に発揮させる為の形態である。

使用魔法

白兵戦は勿論、一体多数の戦闘も得意としており、使用する魔法の大半が槍撃系攻撃・水流系魔法のものとなっている。

ディバインバスター（Ｄｉｖｉｎｅ　Ｂｕｓｔｅｒ）

直射砲撃魔法で、スピアバスターフォームで使用。足元に魔法陣を描く他、フィッシャーマンにもリング状の魔法陣（環状魔法陣）が４つ追加される。防御が間に合っても魔力を削られるどころか「えぐられる」程の貫通力を持つが、威力に比例してチャージ時間も長いのが欠点。カートリッジシステムを使うことで威力が強化され、なのはに匹敵する力を秘めている。

エミッションブレイカー（Ｅｍｉｓｓｉｏｎ　Ｂｒｅａｋｅｒ）

浦太郎本人（＋カートリッジ）の魔力に加えて、戦場に漂う残留魔力をもかき集めて破壊の一撃を加える直撃型魔法。『魔導虚篇』ではフィッシャーマンの先端に魔力を収束しゼロ距離から攻撃する形となり、大きな損傷を受けながらバンプに寸での傷を負わせる。文字通り敵を排除するために組まれた殺傷設定魔法となっている。

ソニックスピア（Ｓｏｎｉｃ　Ｓｐｅａｒ）

高速且つ変幻自在の槍撃で敵にダメージを与える。のちにスピアトルネードと共にエリオにも教えた。

スピアトルネード（Ｓｐｅａｒ　Ｔｏｒｎａｄｏ）

浦太郎が最も得意とする水流系直射型砲撃魔法。魔力を水流に変換させ、槍の先端から圧縮された竜巻を噴射し、敵を貫く。

ブリザードスピアヘッド（Ｂｌｉｚｚａｒｄ　Ｓｐｅａｒ　Ｈｅａｄ）

魔力水流を極限まで硬化させ、氷結の一撃を対象に与える。魔力変換資質ではなく大気による冷却を強制的に起こさせ使用可能として

いる。

スピアグレネード（Ｓｐｅａｒ　Ｇｒｅｎａｄｅ）

槍撃の際に、先端部を開放して小型水流型爆撃を送り込みダメージを与えるもの。単純な槍撃からのコンボとして使われることが多い。

ウェーブ・コンサバティズム（Ｗａｖｅ　ｃｏｎｓｅｒｖａｔｉｓｍ）

カートリッジを使用して巻き起こす波濤で対象物を飲み込み、魔力を削りながら外界に出られなくする。

ウォーターホイッパー（Ｗａｔｅｒ　Ｗｈｉｐｐｅｒ）

槍の先端に竜巻状の水を生成し、鞭を振るうように自在に操る。

ウォーターネットサーフィン（Ｗａｔｅｒ　Ｎｅｔ　Ｓｕｒｆｉｎｇ）

カートリッジを一発ロードし、フィッシャーマンの先端に網目状に張り巡らされた水流魔法を発動させ、それを向かってくる敵へと放り投げる。放り投げた網目状の水流魔法は対象を捕獲すると、絡め取られた敵は身動きが出来ず、その瞬間起こった水の流れによって押し流される。

スピードオブフロウ（Ｓｐｅｅｄ　ｏｆ　Ｆｌｏｗ）

その場に魔力水流を発生させ、その水流に引っかかったものを捕捉する。補足対象を水のスクリーンを通して視認可能。

ドルフィンドライブ（Ｄｏｌｐｈｉｎ　Ｄｒｉｖｅ）

カートリッジを使用して巨大なイルカを模した水流魔法で対象に攻撃する。

ドルフィンアタック（Ｄｏｌｐｈｉｎ　Ａｔｔａｃｋ）

オーリーとの戦闘の際に用いられた、ドルフィンドライブのバリエーション。矛先から不規則に乱発させるイルカを模した水流弾をぶつける。

ソリッドアタック（Ｓｏｌｉｄ　Ａｔｔａｃｋ）

フィッシャーマン・ロッドフォームを敵に突き刺し、亀甲状の網「オーラキャスト」に変化させる、或いはフィッシャーマン・ロッドフォームで敵を薙ぎ払う様な形でフリーエネルギーの光弾を放つ。また、「ソリッドアタック」により動きを封じた状態から跳び蹴りを放つ技も可能。

ロッドスピア・アクアリウム（Ｒｏｄ　Ｓｐｅａｒ　Ａｑｕａｒｉｕｍ）

スピアトルネード時よりも巨大で大威力の水流の竜巻を発生させ、対象物を水の圧力で押し潰す。

ウォータースラッシャー（Ｗａｔｅｒ　Ｓｌａｓｈｅｒ）

水圧で出来た薄く伸ばした刃で対象を斬り裂く。

アクアマインド（Ａｑｕａ　Ｍｉｎｄ）

矛先から純粋な水流を発生させ、水圧で対象を破壊する。

クラーケントライデント（Ｋｒａｋｅｎ　Ｔｒｉｄｅｎｔ）

大威力の広域水流型攻撃魔法で、カートリッジをロードし巨大な水流魔力で出来た烏賊を自身の背後に召喚させ、三つに分裂させ敵を捕らえダメージを与える。オーリーの「レオールルッジート」とは互角の威力を発揮する。

ポセイドンクラッシュ（Ｐｏｓｅｉｄ?ｎ　Ｃｒｕｓｈ）

浦太郎の最大最強の切り札。合計八発のカートリッジを一度に消費することで、浦太郎は全身を覆い隠すほどの青い魔力光から創り出された身の丈を容易に超す巨大な海の神、ポセイドンが持つ三叉矛を操り、一撃必殺の威力を有した水流系魔法の奥義。高円寺の介入により威力のほどははっきりしていないが、なのはのスターライト級の技であることは間違いない。

防御魔法

『ＳｔｒｉｋｅｒＳ』で４種類の防御系魔法があることが判明しているが、そのうちの３種類「フィールド系防御魔法」「バリア系防御魔法」「シールド系防御魔法」を使用する。

バリアジャケット（Ｂａｒｒｉｅｒ　Ｊａｃｋｅｔ）

魔力で出来ているので、発動中（身に付けている間）は常に術者の魔力を消費し続ける。　このため、基本的には必要な時のみにしか

装備しない。　また、その消費魔力量には差があり、防御力に比例していると考えられる。

スタイリッシュフォーム（Ｓｔｙｌｉｓｈ　Ｆｏｒｍ）

フィッシャーマンによって構築された、浦太郎の汎用性抜群のバリアジャケット。魔力消費を抑えることで長時間の活動に適した形態。なのはのアグレッサー同様「個人での」絶対的な強敵との戦闘は想定されていないが、集団戦や通常戦闘であれば必要十分にこなすことが可能な性能を持つ。

ロッドフォーム（Ｒｏｄ　Ｆｏｒｍ）

浦太郎のバリアジャケットの隠し換装形態。別名甲冑モードとも言われる。基本カラーは青。仮面は海亀のようなレリーフが頭頂からレールを伝い眼前で固定されると、ヒレが逆転して角状に可変。甲羅部分がマルチアイを象る。オーラアーマーはソードフォームのパーツを前後逆に着装し、胸部が左右に展開、ショルダーガードになる。チェスト部分もまた亀甲柄を思わせる。キック力と防御力は従業員・白鳥の中では2番目で、巧みな話術や足技を絡めたテクニックを駆使し相手を翻弄する。防御性能も高いが、高円寺による不意打ちには対応できなかった。

ディフェンサープラス（Ｄｅｆｅｎｓｏｒ　Ｐｌｕｓ）

高速自動防御魔法。機動力に優れ、「防ぐ」よりも「かわす」ことに特化した浦太郎は、パトリオット篇でフィッシャーマンの自動詠唱により自身の体にかかる身体的負荷を最小限に抑え、攻撃命中箇所に集中することにより防御効果を高めている。

補助・転送・結界魔法・その他の魔法

五行結封

ユーノと従業員一同で使用した強壮結界。

ウォーターバインド（Ｗａｔｅｒ　Ｂｉｎｄ）

『パトリオット篇』第２話で白鴎を拘束したバインド系捕縛魔法。浦太郎の場合、特有の魔法変換資質を使って水流をバインドにすることも可能とし、近距離ならば、相手が気付く前に縛る事も出来る。

桃谷鬼太郎

声　－　関俊彦

身長１７５ｃｍ　体重７１ｋｇ　８月３１日生まれ。２５歳→２６歳。スクライア商店店員の赤い頭髪をした男。魔導師である母と死神の父の血を半分ずつ受け継ぐハーフで、魔導師であった母親としての血が濃い。一人称は「俺」。よく店の手伝いをサボり、金太郎にしかられているやんちゃ坊主な性格。「強くカッコよく戦う」という信条の為に力を行使する。短気かつ好戦的だが、涙もろく良識もある程度持っているなど、単純で憎めない性格。恋愛に関しては興味がないように思えるが、とある女子大生の可愛さに惚れている模様。決め台詞は「俺、参上！」や「俺は最初から（最後まで）クライマックスだぜ！」等で、特にクライマックスという言葉は気に入っている。戦闘を始める際には、「行くぜ行くぜ行くぜぇ！」と叫ぶ。好物はプリンで、にんじんが死ぬほど嫌い。買い物計算が苦手で後先考えずに給料を使ってしまうため、貯金をすることができない。魔導虚篇では、なのは達に魔導虚の説明をするために、スケッチブックを用いたが、ルキアといい勝負である絵の

腕前を見せる。。幼少の頃より死体を見ることが苦手で、見るだけで吐き気がするらしい。相手を名指しや呼び捨てで呼ぶことが多く、顔見知りには苗字の頭文字・見た目から浦太郎、金太郎、白鳥をそれぞれ「亀（公）／（スケベ）亀」「熊（公）／バカ熊（公）」「鳥／焼き鳥野郎」、一護を「オレンジ頭」と呼ぶが、ユーノに関しては「店長」と金太郎や浦太郎同様敬意を見せている。ユーノと出逢った当初は若干反抗的な姿勢を見せていたが、真摯に自分の事を見守り命懸けで守ろうとしてくれたユーノの姿に感銘を受け、それ以来固い忠誠心を抱くに至る。ユーノ同様魔力と霊力を持っているが魔導死神とは言えず、魔力操作も基本的に劣っている。虚の数十倍の殺率能力を持つ魔導虚を軽く撃退するほどの実力があり、フェイトともスピードでは比較を取らない。鬼道もある程度使用が出来、その大半はユーノから教わっている。なお、「俺の必殺技」の後には、パート1－5などといった呼び名が付く。教育方針も過激で、一度怖い目に遭わせてから指導に入るというやり方で恋次にバイクの乗り方を教えた。六課での役職は戦闘指導員・及び嘱託前線部隊「スクライア商店」のフロントアタッカー。

斬魄刀：『烈火（れっか）』

一護の斬月よりも巨大な大刀。炎と刻まれた常人では振り回すのが困難なほどの大きさであり、その大きさから敵の飛び道具に対する盾として使用することもしばしばである。鬼太郎の霊力を炎熱系の技に変換して様々な技を繰り出すことが出来る。解号は「熾きやがれ『烈火』（おきやがれ『～』）」

【卍解】：『鳳仙烈火（ほうせんれっか）』

解放と同時に、鬼太郎の背中からは炎で出来た羽を生やし烈火は二刀流となって柄から刀身まで全て炎で精製されたものへと変貌する。

能力は始解時の能力が増大したもので、火炎を自在に発し操る。又、全てが炎でできている為、空気中の酸素を瞬時に燃やして発火させることが出来る。この卍解は鬼太郎が心の奥底で願った形を具現化したものだと語っており、未だ発展途上の力である。

ソードアーマー（Ｓｗｏｒｄ　Ａｒｍｏｒ）

ユーノの作った専用のベルトと付属品のパスで変身する鬼太郎の新装甲。鬼太郎のオーラをフリーエネルギーに変換して、基本カラーが赤で仮面は桃のレリーフが顔のレールを伝わって眼前に収まり、中央から割れた状態で固定され、葉の部分はチークガードのように移動するオーラアーマーを桃太郎の着ている羽織をモチーフとする甲冑となり身を包む。

技「火炎油田（かえんゆでん）」

炎を纏った必殺の一撃が敵の体を轟音と爆発で以って粉砕する。必殺技レパートリーの一つ目。

技「熾烈波（しれつは）」

刀身に霊力を収束させ、高温の火炎弾を飛ばす。必殺技レパートリーの二つ目。

技「鳳翼炎陣（ほうよくえんじん）」

始解状態の烈火の最大技で、炎を鳳凰のようにして敵に大ダメージを与える捨て身の一撃。必殺技レパートリーの三つ目。

技「苛烈閃（かれつせん）」

鋭い斬撃と熱波を同時に食らわせる。必殺技レパートリーの四つ目。

技「獄炎斬鬼（ごくえんざんき）」

地獄の業火と評した炎熱エネルギーを爆発させ、周囲に撒き散らす。必殺技レパートリーの五つ目。

技「火達磨蛍（ひだるまほたる）」

火の粉を切っ先から蛍のように無数に飛び散りさせ相手を焼き尽くす。必殺技レパートリーの六つ目。

技「烈火斬回転撃（れっかざんかいてんげき）」

烈火を高速回転させて炎の壁で弾き返す、またはその状態から火炎弾を飛ばすことが出来る。

技「烈火大斬撃　炎熱嵐（れっかだいざんげき　えんねつあらし）」

烈火から放たれる灼熱の炎の嵐であらゆるものを灰燼に帰す。

技「烈火鳳剣舞（れっかおおとりけんぶ）」

灼熱の鎧を身に纏い自身の身を守る。

技「烈火嵐空牙（れっからんくうが）」

両手に持つ烈火の剣より肉食動物のようなものを象った火炎攻撃を発動させる。放たれる炎は正に生きているかのように滾っている。

技「鳳仙火（ほうせんか）」

背中の翼に炎を集めて、巨大化したそれから無数の火の粉をぶつける。

技「烈火大炎乱（れっかたいえんらん）」

切っ先に集めた灼熱の業火により、周囲にあるものを焼き尽くす。

技「烈火鳳翼状（れっかおおとりよくじょう）」

鳳仙烈火の両翼の炎を自身の霊圧により極限まで巨大化させ、それによる熱波と炎熱攻撃を同時に食わらせる。

技「エクストリームスラッシュ」

烈火の剣先を霊圧とフリーエネルギーによって生み出される炎でコーティングし強化したもので敵を一刀両断する地面をも割る豪快且つ破壊力のある技。

鬼道

使用頻度は少ないが、ある程度の鬼道は使用できる。上級鬼道に関してはユーノによる直伝があって詠唱破棄でも使えるものもある模様。

・縛道の四　這縄

白鴎を捕縛するのに使用された。

・縛道の六十三　鎖条鎖縛

補助・転送・結界魔法・その他の魔法

五行結封

ユーノと従業員一同で使用した強壮結界。

白鳥礼二

声　－　三木眞一郎

身長１６５ｃｍ　体重６６ｋｇ　1月7日生まれ。

護廷十三隊八番隊第三席。中級貴族・白鳥家の長男坊。魔力光は白色。一人称は「私／我」。自身を「八番隊の期待のホープ」と豪語する。高飛車な立ち居ふるまいを好むなど、自己中心的な性格で、仕事や品の無いことを嫌い、一見すると席官としての品格を疑われそうな男だが、実はユーノと並ぶほど思慮深く、真実を見通す力に優れており、いざというときになると冷静で的確な判断を下す。鬼太郎とは非常に折り合いが悪い。白鳥もユーノと同じくロスト・ロギア（崩玉ではない）の作用により魔力を手に入れた魔導死神であり、「白翼の魔導死神」と自称している。爆発の被害を受けたところを管理局員に救われたが、人道から外れた上層部の扱いを受けたことから魔導師のことを嫌悪している節があるが、ユーノやなのは達に対しては協力している模様。ギターの演奏が趣味だが、感覚がずれているせいか白鳥以外には騒音にしか聞こえず、周りから苦情がくるほど。魔力を手に入れてからユーノの店に頻繁に通うようになっており、パトリオット篇では鬼太郎たちと共に一時同居をしている。魔導師としての才能はなのは達も驚嘆するものであり、電気・炎・凍結・水流の変換資質を同時に持つという確認できる中で最も

稀なタイプの魔導師である。しかし、本人は魔導師としてではなく死神としての誇りを大切にしている。ユーノには一目置いており、その師匠たる一護や織姫達とも親交がある。また、スクライア商店の従業員に対しては名前から英語で呼称することがあり、鬼太郎を「ピーチ」金太郎を「ゴールデンベアー」と呼ぶことが多い。スバルとティアナの二人をよき相棒であると黙認し、陰ながら二人の事を見守っている。また相手の感情を理解せず何かにつけて科学者的見地を持ち出す困った面もある。特に昆虫観察を趣味とし、マッドサイエンティスト的な一面も覗かせる。戦闘は基本的に斬魄刀で行うがユーノから専用のデバイスを授かっており、それも組み合わせて戦うことも可能。機動六課では主にフォワードと一緒に訓練に参加し、アンゴルモア捜査に協力している。立場的には、死神部隊に所属しているがスクライア商店にも寄っているという中間的なポジション。最近は女性局員からの人気を集めている。決め台詞は「降臨、満を持して！」、「我が音色の前にひれ伏せ！」。六課での役職は戦闘指導員・及び嘱託前線部隊「死神分隊」副官補佐。

斬魄刀：『琴線斬（きんせんざん）』

能力解放と共に刀そのものがエレキギターのような形状に変化し、音色による攻撃や物質を振動させる攻撃を得意とする。基本能力の「音色辞書」があり、搭載された特殊音波は、対象物の原子レベルまで入り込みその固有振動に同調させて破壊する。敵の分子構造さえ把握していれば、理論上この攻撃で破壊できないものはないとユーノは断言している。また、攻撃は勿論のこと結界を生み出すことや弦による斬撃も可能としている。解号は「天地に奏じよ『琴線斬』（てんちにそうじよ『～』）」

技「琴線斬第八章　四十二節“滅びの円舞曲”（きんせんざんだいはっしょう　よんじゅうにせつ　“ほろびのえんぶきょく”）」

対象の固有振動に同調させて対象物の分子構造を制圧・破壊する。

技「琴線斬第六章　第十五節“貪欲の家畜”（きんせんざんだいろくしょう　じゅうごせつ“どんよくのかちく”）」

音色による強壮結界を作り出す。

技「琴線斬第二章　七十九節“報復の船頭”（きんせんざんだいにしょう　ななじゅうきゅうせつ“ほうふくのせんどう”）」

音色を聞いた対象物の自由を奪い、金縛りのような状態にする。

技「琴線斬特別序曲“滅亡輪廻”（きんせんざんとくべつじょきょく“ほろびのりんね”）」

補助デバイスにより強化された琴線斬で使用。周囲の波長の全てに対応し同　質同量を反エネルギー波を発することで、波長そのものを消滅させる。

技「琴線斬奏曲“鼓瓜田”（きんせんざんそうきょく“つづみかでん”）」

大音量の音色を衝撃波として相手に放つ。

技「琴線斬第百章　秘曲“ＤＥＩＣＩＤＥ”（きんせんざんだいひゃくしょう　ひきょく“ディーサイド”）」

ウィングフォームにおける白鳥の使用する「神殺し」の異名をとる死の音色。チャージしたエネルギーを全て琴線斬に集め全物質の固

有分子結合を内側から破壊する

技「琴線斬第三章十九節“隔壁の丞相”（きんせんざんだいさんしょう　じゅうきゅうせつ“かくへきのじょうしょう”）」

弦を靡く際に生じる音の振動によって、敵の体組織を膨張させ内側から破壊する。

技「琴線斬第一章　二十二節“巌の落石”（きんせんざんだいいっしょう　にじゅうにせつ“いわおのらくせき”）」

音色を奏でると、対象の頭部及び脳細胞に強い衝撃を与え、戦闘行動を麻痺させる。

技「琴線斬”裂音”（きんせんざん　“さきね”）

音波・音撃を鋭い刃に変換する。

デバイス：『ジーク』声：三木眞一郎

ユーノが、白鳥のために製作した専用のインテリジェントデバイス。待機状態は鳥の羽のような形をしている。あまり使用頻度は少ないが機動六課の前線メンバー中最も機動力に特化しており、敵の攻撃を避けつつ重い一撃を叩き込む格闘戦と、先端に施された槍状に変化した琴線斬を使い分ける。しかし、白鳥の性格上、油断しやすく危機を招くこともある。槍状の装備を延長させ琴線斬を長刀に変化させる《ファーストフォーム》や、琴線斬を鳥の翼に模した盾へと変化させる《セカンドフォーム》、第三形態の《ウィングフォーム》は空中も自在に滑空でき、視野は鷹の様に広がるため広域制圧も可能としている。また、敵の本体を見破る能力も備わる。

鬼道

詠唱破棄による即時発動が出来る。かなり優秀な使い手であるらしい。

・破道の五十九「氷雪雷」

吉良と共に発動。電気を帯びた氷雪でダメージを与えつつ凍結させる。

・縛道の六十二「百歩欄干」

暴走したさくらカードの捕縛の為に使用。

・縛道の六十三「鎖条鎖縛」

ＡＭ化した新八に対して吉良と共に使用。

使用魔法

白鳥の使用する魔法の多くには己の資質である「魔力変換資質・炎熱、発電、凍結、水流」によって、多種多様な効果が付与されている。

ブレストファイア（Ｂｒｅａｓｔ　Ｆｉｒｅ）

胸部から精製した炎熱弾で対象物を燃やし尽くす。

アクアジェット（Ａｑｕａ　Ｊｅｔ）

貫通能力のある高圧水流により攻撃することは勿論、消火の際にも使用可。リバイバルでの任務の際、沿道の民家の火災をこれで鎮火させる。

ウイングトルネード（Ｗｉｎｇ　Ｔｏｒｎａｄｏ）

背中から生えた両翼からの突風を巻き起こす。

ウイングカッター（Ｗｉｎｇ　Ｃｕｔｔｅｒ）

ウイングフォーム時における技。両腕の先から羽根型のミサイルを飛ばして相手にダメージを与える。切れ味に関しては抜群。

ウイングエッジ（Ｗｉｎｇ　Ｅｄｇｅ）

背中に生やした翼を硬化させ、飛行をしながらも相手の懐に入り込み切り傷を与える。それによりダイヤモンドですら綺麗に切断することが可能となる。

防御魔法

バリアジャケット（Ｂａｒｒｉｅｒ　Ｊａｃｋｅｔ）

相手の攻撃のみならず、自らの使用した魔力の逆流、暴発という危険性からも身を守るために、戦闘時だけではなく大規模な魔法の行使の時に着用することもある。

ホワイトホークフォーム（Ｗｈｉｔｅ　Ｈａｒｋ　Ｆｏｒｍ）

白鳥のイメージを具現化させたバリアジャケット。死覇装の上から羽織るような形となり、隊長羽織に酷似しているが後ろにはシンボルマークの鷹が描かれている。背中から翼を生やして飛ぶこともできる。

ウィングフォーム（Ｗｉｎｇ　Ｆｏｒｍ）

新たにユーノに装備をして新調した甲冑。デザインは基本カラーが白で、ウイングバックルの色は水色。変身直後に一瞬だけメカニカルなフォルムの翼が開き、仮面は白鳥のような形状で、首を折りたたむように変形して装着される。

補助・転送・結界魔法・その他の魔法

五行結封

ユーノと従業員一同で使用した強壮結界。

シーリング（Ｓｅａｌｉｎｇ）

ジュエルシードや、アンゴルモアの回収の際に使用されるもの。リバイバルでは封印作業中にアスモデウスの妨害に入られてしまう。

ナーノ・Ｔ・スクライア

声　－　鈴村健一

身長１６２ｃｍ　体重５７ｋｇ　７月９日生まれ。１６歳。魔法術式・ミッドチルダ式／魔導師ランク・総合ＳＳＳ（空戦適性有）。魔力光は紫色。一人称は「僕」。アンゴルモアの影響により、１６年後のミッドチルダからやって来た「翡翠の魔導死

神（絆の完現術士）ユーノ・スクライア」と「高町なのは」の間に生まれた嫡男。義理の姉であるヴィヴィオ同様、左右で瞳の色が異なる虹彩異色（右目が紫、左目が緑となっている）。髪はなのはと同じ茶色で顔つきはユーノ似。職業は異世界を旅しながら各国で奉仕活動を行う「グルマディア（ｇｒｕｍａｄｉａ：ポルトガル語のＯ　ｇｒｕｐｏ　ｑｕｅ　ａｊｕｄａ　ｕｍａ　ｐｅｓｓｏａ　ｍｕｎｄｉａｌを縮めたもので“世界の人を助ける集団”の意）」に所属しその団長を務めるボランティア魔導師（プロボラ）で、「竜神の寵児」の異名を取る。アンゴルモアの余波を生まれながらに引き継いでおり、ユーノ同様グリード・及びヤミーに対抗する能力を持つ。歪められた時空を潜り抜けて新暦００７９年の９月のこの時代にやって来、謎の声を開いたことで過去での自分の使命・自らの欲望を全うするため、ユーノと機動六課の橋渡し役として、ユーノや前線メンバーに接触しコアメダルやカンドロイドなどを提供すると同時に、運命の日までの間、陰ながらサポートを行っていた。それ以降は積極的にユーノ達に協力する姿勢を見せ、機動六課に身を置く。尋常でないほどの高い魔力を有しており、魔導師のおける幻のランクＳＳＳを取得している。平時の口調は冷静かつ落ち着いているが、ヴィヴィオの前では無邪気、甘えん坊となる。また鬼太郎など一部の気心知れたものに対しては行動が強引且つ一方的で、相手に「ーするけど、いいよね？」と許可を求めるが、決め台詞でもある「答えは聞いてない！（聞かないけど）」と言い放ち即行動に移す。スクライア商店メンバーを昔見たヒーロー番組の登場人物にちなんで、「亀さん」（浦太郎）、「熊さん」（金太郎）、「鳥さん」（白鳥）、「モモタロス」（鬼太郎）と呼ぶ。ダンス（特にブレイクダンス）が好きで、しばしばヘッドホンで音楽を聞きながら踊っている。子供や仲のいい人間や動物などをこよなく愛するが、暴力でそれらを虐げる者には容赦なく攻撃を仕掛ける。人間に軽い暗示をかけて精神を支配する能力を持ち、この力で周囲の人間をバックダンサーにして踊る。ラーメンが大好物で、小柄な体に似合わず大人

１０人分の量を一人で食してしまうほどの大食漢で、また自分でも趣味で調理するほど。ユーノと同じで、ミッドのトップクラスの実力を有するアルハンブラナスル魔法大学をわずか６歳で入学しただけでなく、その２年後に大学と同時にスバル達の母校である時空管理局武装隊ミッドチルダ北部第四陸士訓練校を飛び級で首席卒業したという稀代の超エリート。その為、１６歳とは思えないほどの幅広い知識とノウハウ、ユーノ顔負けの高度な演算能力を有し、体力的にもなのはやスバル達を遥かに上回る。父親のユーノのことは心から慕っており、ユーノからは魔法と共にそれ以外の戦いの指南を直接受けた。基本的にユーノとは戦闘で共闘する事も多いが、一方でユーノの極端に自己犠牲的なスタンスは「目的が何もないのに戦うのは不気味」と父親でありながらも懐疑的に見ている。ヴィヴィオの事を溺愛し、同時に頭が上がらず「ヴィヴィオ姉ちゃん」「姉上」と呼ぶ。逆に、母親のなのはに対しては甘えたり、欲しがる素振りを一切見せず余所余所しい言動で接する。更には、なのはの作る教導メニューを「一度も自分の手を汚した事のない者の綺麗事」と否定的に捕え、魔法そのものに関してナーノは人を守るための手段の一つとしてしか認識していない。本を始めとする活字やマニュアルを読むのが「嫌」ということで、ヴィヴィオとは違いほとんどの書籍には手を触れない。途方もないほどに現実主義且つ、悲観的な一面を持ち、性悪説に人間を常に弱い存在として認識し長く実戦を経験しているせいか、リセットの利く戦い（模擬戦など）を好まず、自らを弱い者と位置付け強くありたい・なりたいといった欲望を全く抱かず、向上心が見受けられないがユーノに匹敵するほどの規格外な戦闘能力を持ち、父譲りの結界魔法による防御・治癒などの補助魔法と卓越した剣腕での近距離戦を得意とし、また母譲りの精密コントロール射撃・砲撃の才能を秘めている。精密射撃の腕は六課随一の実力を誇り、暗がりの中磨き上げた反射神経と感覚により、的確に標的を撃ち抜けることに加え、なのはが持つこともままならず途轍もない反動を秘めたガンモードを生身の状態で使いこな

す。自分自身の雑さとは裏腹に洞察力と観察力が鋭く、ユーノ同様自分を天才と称される事を嫌悪する。ただ、自分の欲望に関しては万里一空な態度をとる。また、使命の一つとしてセルメダル集めを行い、グリード・ヤミーで手に入れたセルメダルはすべてメダルタンクへと収納している。六課での役職は嘱託前線部隊「スクライア商店」のセンターガード。

デバイス：『ライジングハート』声：　鈴村健一

ナーノが使う専用のアームド型インテリジェントデバイス。なのはのレイジングハートを雛形にしてユーノが組み上げた刀剣併用拳銃型。待機状態は紫の宝石、あるいはバックル。バックル時はナーノが常時着用している。ナーノとは「一心同体」ともいえる程に息の合ったコンビで、ナーノのことは「ロード」と呼んでいる。非常に冷静沈着な性格で、ナーノの緻密な精密射撃と魔力生成をサポートしている。形態のバリエーションは近距離戦闘用に特化した刀剣の《ブレイドフォーム》、砲撃重視の《ガンフォーム》の2形態。《ガンフォーム》に移行すると、それに伴ってバリアジャケットも重厚な鎧となり、戦闘能力も向上する。

使用魔法

上記のように近距離での白兵戦と一対一の戦闘においては防御と剣を使い、グリードやヤミーが出現した際は主に第二形態・ガンフォームでの中・長距離による砲撃戦を可能としている。

砲撃・射撃・集束魔法

バイオレットバレル（Ｖｉｏｌｅｔ　ｂａｒｒｅｌ）

補助効果付きの複合高速砲撃魔法。照準・弾道安定・発射直後の暴発や拡散を防止するための補助魔法「バレル展開」を行うと同時に、その目標を逃がさないために不可視型のバインドを発射、そしてそれらを成功させるために殺傷力はないが強度の物理衝撃を伴う衝撃波を放つ。通常の砲撃魔法を軽く上回る多大な魔力消費、さらに高度な魔力運用能力と集中力を必要とするが、ユーノ譲りの頭脳からナーノはこれを容易く瞬時に発動できる。

スナイプショット（Ｓｎｉｐｅ　ｓｈｏｔ）

魔力光弾をコントロール、一発の射撃で複数の対象を殲滅する魔法。カトゥーンキャッスルにおける漫画キャラのほとんどをナーノはこれで一掃した。

ワイルドショット（Ｗｉｌｄ　Ｓｈｏｔ）

ガンフォームと両肩のドラゴンジェムから弾丸状のエネルギーを射出する大型魔力エネルギー砲。非常に高い威力を誇るが、ナーノ自身を砲台と化すことから動きが制限されるリスクがある。

クロスファイアーシュート（Ｃｒｏｓｓ　Ｆｉｒｅ　Ｓｈｏｏｔ）

ティアナが使用するものと同様の中距離誘導射撃魔法。複数の誘導弾によって空間制圧を行う事を目標として組まれた魔法である。空中に複数の魔力スフィアを形成し、同時に発射する。正確無比なコントロールに加え、ティアナを遥かに上回る魔力スフィアの数と拘束射撃を可能としている。

ディバインバスター（Ｄｉｖｉｎｅ　Ｂｕｓｔｅｒ）

母親であり砲撃魔導師のなのは譲りの直射砲撃魔法で、ガンフォームで使用。膨大な魔力を直接目標に向けて放出するという、シンプルながら高威力の攻撃魔法。魔力のぶつかり合いならば、ほぼ負けなしの威力を誇る。ナーノの場合、その威力はヤミーを一発で消滅させるほどの強力なものであり、ナーノの意思によって調整が利く。

ディバイン・メトラバスター（Ｄｉｖｉｎｅ　Ｍｅｔｒａ　Ｂｕｓｔｅｒ）

無限装弾神聖砲と表記される。ライジングハートより無数のディバインダスターを連射する。それにより敵陣を一度に壊滅状態に追い込むことが出来る。加減はナーノの意志により自由にできる。

バリアブルシュート（Ｖａｒｉａｂｌｅ　ｓｈｏｏｔ）

多重弾殻射撃。弾丸の周りに更に魔力を被せ、バリアや障壁を突破出来るように強化し発射する魔法。

コスモライトキャノン（Ｃｏｓｍｏｌｉｇｈｔ　Ｃａｎｎｏｎ）

胸部に装着する遠距離型砲撃ユニット。砲身部のドラゴンーランチャーから弾丸状のエネルギーを射出する大型キャノン砲。絶大な威力を誇るが、ワイルドショット同様ナーノ自身を砲台と化すことから動きが制限されるリスクがある。特殊カートリッジを装填することで魔力エネルギーを増幅させ、強力なビームとして放出する「コスモライトキャノンシュート」を発動する。

ドラゴンバスター（Ｄｒａｇｏｎ　ｂｕｓｔｅｒ）

竜の仮面を模した武器で、右腕にはめて使用する。専ら砲門より「

ドラグクロスファイヤー」を放つ。

インフィニティーバルカン（Ｉｎｆｉｎｉｔｙ　ｖｕｌｃａｎ）

左腕に装着する魔法機関砲ユニット。その名の通り、無限の如く魔力弾を連射し、相手に逃げる隙を当てることなく効率よくダメージを与えることが可能。カートリッジの装填により威力強化が自由に調節出来る。

コスモライトブレイカー（Ｃｏｓｍｏｌｉｇｈｔ　Ｂｒｅａｋｅｒ）

ナーノ最大最強の切り札であり、ナーノが組み上げたオリジナルの魔法。天性の超広域魔力素集束能力によってなのはのスターライトを凌駕する大きさの集束砲撃魔力球を生成する。まるで銀河の光のごとく周囲の魔力が集束していく様が「コスモスターライト」と呼ばれる所以。その威力は、超絶的なもので、都市一つを壊滅させることも可能。ただし、魔力の集束中は術者が全く動けないという欠点はスターライト同様である。但し、生まれ持った高い魔力量と超人的に鍛え上げられた肉体を持っている故に、ナーノ自身は魔力、体力、気力を使い切ることがなく、連発をしない限り息切れを起こさない。また、ドラゴンベンダーで使用する際は、龍の口にあたる部分から、魔力素を集束しガンフォームとの同時射撃も可能。使用魔力が普通では考えられないほどの量であり、使用できる人間がナーノしかいない魔法である。発射の際の掛け声は「全力否定」。

防御・結界・その他の魔法

バリアジャケット（Ｂａｒｒｉｅｒ　Ｊａｃｋｅｔ）

ブレイドフォーム（Ｂｌａｄｅ　Ｆｏｒｍ）

紫を基調とした和服と羽織を模した防護服。軽量で汎用性に優れ、魔力消費を抑えることで長時間の活動に適した形態。ナーノ・Ｔ・スクライアとしての真髄を現したもの。

ガンフォーム（Ｇｕｎ　Ｆｏｒｍ）

ナーノの砲撃魔法時における換装形態。基本カラーは紫。仮面は龍の顔で、アーマーは宝玉を持つ龍の前脚を模している。キック力と機動力はブレイドフォームより優れ、総合的なスペックも高い。特性上接近戦では不利になることもあるが、上記のとおり遠距離戦が可能。ダンスの動きを取り入れた格闘戦や銃撃戦により、一方的に攻撃して相手に反撃の隙を与えない戦闘スタイルをとる。フルチャージによって必殺技を発動することが出来る。ヤミー・グリード戦では専らこれを使う。

ラウンドシールド（Ｒｏｕｎｄ　Ｓｈｉｅｌｄ）

魔法陣を使用した円形の盾を作り出す防御魔法で、シールド系防御魔法に分類される。一方向のみの防御しか出来ないが、その分防御力は高く、特に魔力弾への防御に優れる。多くの魔導師が使用する防御魔法。ユーノから教えてもらったことで、同じだけの強度を誇る。

フィジカルバリア（Ｐｈｙｓｉｃａｌ　Ｂａｒｒｉｅ）

ユーノのラウンドガーダー・エクステンド同様の回復と防御の結界魔法で、ナーノが組んだもの。それは瀕死の重傷を負ったスクライア商店メンバーを完全完治させるほどの効果を持つ。

次元転送

次元空間などから別の次元や世界に転送を行う移動魔法。運命の日まではこれを使いユーノ達の前に現れてはサポートを続けてきた。

オプティックハイド（Ｏｐｔｉｃ　Ｈｉｄｅ）

術者と術者に接触した対象を透明にし、見えなくする幻術魔法。身体や衣服の上に複合光学スクリーンを展開し不可視状態になる。

ハイパーヒール（Ｈｙｐｅｒ　Ｈｅａｌ）

ナーノが使用する超高位治癒魔法。フィジカルヒールを凌駕する強力なサイコキネシス能力を有し、外部から人体生命機関の働きを活性化させると同時に、その調整を行う。この力で、生命危機に陥っていたユーノを復活させ、シャマルとマリアからは演算能力を超えたものと驚嘆された。

ホールディングネット（Ｈｏｌｄｉｎｇ　Ｎｅｔ）

対象を受け止める魔法。

ドラゴンレッグ（Ｄｒａｇｏｎ　ｌｅｇｓ）

両脚部に装着する移動支援兼近接格闘ユニットで、龍を模した重厚な武装となる。踵部分に付けられたエンジンにより推進力をつけ、高速での移動が可能となる。単なる移動の他、ユニット自身の重量を利用してのキック力の上昇に加えて、回転するドラゴントゥースを押し付けグリード・ヤミーの身体からメダルを削り取るといった副次効果による、攻撃兵装としても利用できる。

ソニックステップ（Ｓｏｎｉｃ　ｓｔｅｐ）

ナーノが使う高速移動術。ナーノの場合、鍛え上げられた脚力を軸として、魔力をほとんど使わない状態からも使用が可能。これを応用した残像の生成を得意とし、相手を翻弄する。

バイオレットスクラッチ（Ｖｉｏｌｅｔ　Ｓｃｒａｔｃｈ）

ユーノの翡翠斬、或いは一護の月牙天衝に似た紫色の魔力斬撃を対象目掛けて飛ばす。ユーノの指南を受けたことから型は非常に酷似したものとなっている。

羽衣

一瞬にして相手を切り伏せる神速の抜刀居合い。魔力をほとんど使わない状態でもかなりの威力を誇り、それこそユーノに匹敵するほどの剣筋を誇る。

クライマックスフォーム

スクライア商店従業員三人と白鳥を合わせた四人の魔力と霊圧をユーノが制作したそれぞれのシンボルカラーの専用携帯を使い、一挙にフリーエネルギーに変換して変身する形態で、四人の融合強化形態。モモ・ウラ・キン・トリのボタンを押した後に「全員集合！」の掛け声で発動する。決め台詞は特にないが、ラピュタでの戦闘で「俺達、参上！」と言った。発動と同時に浦太郎・金太郎・白鳥は粒子へと変換され鬼太郎が所持する携帯へと取り込まれ、専用のデバイスを装着することで鬼太郎の体に浦太郎のバリアジャケット・金太郎のアックスオーガを模した特殊装甲・白鳥の琴線斬を模した

もう一つの斬魄刀が烈火と合体し装着完了となる。その外見から、白鳥や敵に「気持ち悪い」と評される事もある。ちなみに、甲冑モードでの変身の際、基本カラーは赤で、４つの仮面を各部（浦太郎が右肩、金太郎が左肩、白鳥が背部）に配したその形状となり、沖田総悟はてんこ盛りと称した。頭部の仮面は、ソードフォームから桃の皮が剥ける様なイメージで変形する。各四人の長所を併せ持ち、四人全ての武器と必殺技を使うこともできるが、基本人格が鬼太郎であるため、使用するのはほとんど斬魄刀である。考案者であるユーノはこの奥義を気に入っているが、従業員らの方は窮屈なため積極的に変身することを嫌っている。また、彼らの心が一つにならなければ変身できないが、全員が同じことを考えてさえいればその内容に制限はない。痛覚はそれぞれの箇所に対応する者が感じるため、鬼太郎は殆ど痛みを感じないが、他の三人がいきなり動いた場合などは鬼太郎が痛みを感じる。総合的な戦闘力では、前線隊長中最強の戦闘力を誇り、その威力は絶大。

必殺技：ボイスターズキック

フルチャージにより、背面のウィングフォームの仮面を巨大なフリーエネルギーの翼に変化させて空中高く飛行、上空から跳び蹴りを繰り出す。

スクライア商店紹介（後書き）

魔導師図鑑ハイパー！

スクライア商店一同は挿絵に出てきた最後の一人の少年の正体がどうしても分からず声を漏らしていた。

鬼「やっぱりわからねぇな。何なんだ、あの小僧は？」

浦「話の展開上、登場はまだ先になるとは言っていたけど・・・何なんだろうね。」

金「もしかしたらですが・・・・・・」

白「分かってるのであるか、ゴールデンベアー？」

金「あくまで私の憶測ですが、あの少年の正体は恐らく・・・」

鬼・浦・白「恐らく・・・・・・」

まじまじと金太郎の言葉を待つ三人。

そして――――――

金「店長の――――――」

ユ「ストップ！！！！！！！そこから先は言わないの！！！！！」

ユーノの思わぬ介入により、全員は思わず。

四「え～～～～～！！！！」

血塗れの記憶・蘇る自由者達（前書き）

ついに完成しました。

特報にも書いてあった通り、挿入話『パトリオット篇』です。

かなり長い内容になります。

しかも、今回はソウル・ソサエティーまで絡んでくる話になっていますので、是非読んでみてください。

それでは、ユース・スクライア外伝　パトリオット篇・・・始まります。

血塗れの記憶・蘇る自由者達

＞ｉ１２３５５―７０９＜

振り子は、振れ戻る。

未来へ未来へと進み続けた物語は今回の物語を語る上で一度過去へと振れ戻る。

それはほんの僅かな時間。

しかし、それ故恐るべき速度で遥か彼方へ。

知らねばならぬ。

だが、知られてはならない。

そこにあるのは“魔法”の真実。

時は遡ること１０年前

３月６日　ＰＭ９：０５

東京都・空座町（からくらちょう）。

この町に住む一人の少年が今回の物語の鍵を握る。

少年の名は、狼谷銀太郎（おおかみだにぎんたろう）。

齢５歳と言う若さでありながら、早く事故で両親を亡くしてしまい親類の援助を受けながら現在はこの空座町で一人暮らしをしている。

生まれつき、身体が病弱であるが故に同世代の子供とは付き合いが殆ど無く何時も一人で居ることが多いが、本人はそれも仕方ないことだと割り切っている。

年齢の割りに、大人顔負けの冷静さを持ち誰にでも好かれる体質である。

だが、この時彼は知らなかった――――――この後彼自身に起きる人生の思わぬ転換期のことなど。

銀太郎は生まれた頃から通院している空座町一の規模と設備を揃えた石田総合病院から帰宅し、暗い居間の中へと歩みを進めた。

奉公人も誰もいない５歳の少年が住むには大きすぎる邸宅は、空しすぎるぐらい静まり返っていた。

銀太郎は主治医であり、院長でも石田竜弦から貰った処方箋を持ち

ながら自宅の留守電のランプが着いているのに気付き、再生ボタンを押した。

〈留守電メッセージは、一件です。〉

機械音の後に聞こえてきたのは、院長竜弦の声だった。

〈もしもし?空座総合病院院長の石田です。確か・・・明日は銀太郎君の誕生日だった筈だよね?明日の検査の後、一緒に食事でもどうかと思い電話させて貰いました。明日、病院に来る前にでも返事をくれたら幸いです。では、よろしく頼むよ。〉

〈メッセージは、以上です。〉

「・・・ふん・・・」

銀太郎は石田の話の内容を聞き終えると、ほくそ笑み薬を持ったまま、二階の自室へと向かって行った。

自室に着くと、銀太郎は重い腰をベッドに下ろすとスタンドライトを点けて本屋で適当に買ってきた読みかけの本を横になりながら読み始めた。

別に読書が趣味と言うわけではないが、何かしていないと自分が変になりそうだという理由から最近では本を読むようにしているらしいが、内容はとても世間一般の5歳児が読むような安易なものではなかった。

しかし、銀太郎は分かって読んでいるらしくそう言うところから鑑みても彼が普通では無いと言うことが窺い知る事が出来た。

だが、本当に普通ではなくなるのはこの後のことであった。

銀太郎が読書に没頭してると、目覚まし時計の針は既に午前０時を迎えようとしていた。

銀太郎もふと目覚ましを一瞥して、そのことに気付く。

「あ。もう１２時・・・・・・」

やがて、目覚ましの短針が丁度長針とぴったりと重なった瞬間・・・――――彼の転換期は突然訪れた。

銀太郎が横になって本を読み続けていたとき、ベッドの下から伝わってきた大き目の地震。

銀太郎もそれに気付くと本をその場に置き、突然の地震に驚く。

「！？じ、地震・・・！！」

銀太郎は直ぐに低い体制になると、枕を両手で持つとそれを頭に被せうずくまった。

しかし、それは地震などではないことが直ぐに証明される。

揺れは収まることを全く知らず、更に規模を大きくしていくようにも思えた。

銀太郎も不思議に思い、一度瞳を開けて周りを見渡そうとした・・・その時。

銀太郎の身体に流れる血が沸騰したかのように熱くなっていくような感覚に陥った。

「！何だ・・・身体が・・・熱い・・・！！」

体の中を流れる血はまるで揺れと連動するかのように、規模を大きくしていった。

銀太郎も何が何だか判断が全くつかず、ただ熱を増していく体から多量の汗を流しながら心臓の辺りを手で力いっぱい押さえ込んでいた。

すると、そんな瞳孔を完全に開いた銀太郎の耳元に何所からとも無く見知らぬ英単語が聞こえてきた。

〈Ｔｈｅ　ｎｏｉｓｅ　ｏｆ　Ｄｉｃｅｙ，ｓ　ｂｌｏｏｄ　ｉｓ　ｃｏｎｆｉｒｍｅｄ．（ダイシーの血のざわめきを確認）〉

「な・・・何だ・・・！？」

耳元に唐突に入り込んでくる見知らぬ言葉と声。

そして、声が入ってくるのと同時に胸の中から小さな光の球のようなものが銀太郎から飛び出してくると、その光の球から先程耳元に入ってきた声で後退りする銀太郎を照らしながらこう言って来た。

〈Ａｃｔｉｖａｔｉｎｇ（起動）〉

「へっ！？な・・・！！」

銀太郎は驚愕をしつつ、その光の中をじっと見つめていた。

これが、全ての始まり――――――魔導師の知られざる真実を語るための序章。

そして、振り子は再び未来へと戻り始めるのだ――――――

新暦７９年　８月３日　ＰＭ０：２３

機動六課隊舎・隊舎寮。

結界魔導師ゼムナス・フォーラムによる管理局の高官ばかりを狙った犯行は、機動六課エグゼクティブアドバイザー、ユーノ・スクライアの手により無事に解決。

早くも一週間が経とうとしていた。

最近は、残り１３個となったアンゴルモアの目立った反応は無く、その上アンゴルモア自身が世界を渡り歩いていると新事実が判明したことにより捜索は思った以上に難航していたが、幸いにもスカリエッティ達の動きも見られず、比較的世界は平和であった。

ユーノは、前線メンバーが自室で寝静まっている中一人外のほうで自分を反映している月明かりをぼんやりと眺めながら煙管の様なものを銜え煙を黙々と出していた。

「・・・・・・――――――」

黙して何も語らず只ぼんやりと月を眺める何時もの格好のユーノ。

すると、そんなユーノの後ろから声を掛けてきたのは金太郎であった。

「煙草は、健康に悪いですぞ・・・・・・店長。」

ユーノの体のことを考えて、健康を案じる金太郎であったがユーノはその言葉を聞くとほくそ笑み、口に銜えていた煙管の様なものを取り出す。

「ん？これは煙草じゃない。レロレロキャンディーだよ。ほら♪」

ユーノの口から出てきたのは、形は煙管そのものであるが銜える先は完全にフィルターではなくリンゴ味のキャンディバーであった。

ユーノ曰く、これは舌で激しく嘗め回すと煙突から煙がでる仕組みになっているらしい。

「まぁ、そんなことだろうとは思っていましたが・・・・・・」

ユーノの性格をなのは並みに分かっている金太郎も想定内の予想を立てつつ、ユーノの隣に立つと何所か神妙な表情を浮かべながら月明かりを眺める。

「どうしたの？そんな神妙な表情なんか浮かべてさ。」

ユーノも気になり、尋ねてみる。

「・・・何やら不吉な予感がしてなりませぬ。それもかなり厄介なものですぞ・・・」

すると、そんな金太郎の言葉を聞くとユーノは溜め息を吐き次のように語り出す。

「余りネガティブ思考にならないほうがいいよ。世界とは常に、利害が衝突し合いお互いに血で血を争ってる。諍いの火種となる出来事が毎日のように生まれ、そして火種は大きくなりやがて世界ひとつをも壊してしまう・・・そうならないよう、僕らは比較的平和を望む。そして、その為に色々と努力する。」

「・・・・・・――――――」

金太郎自身もそんなユーノの言葉を聞きながら、月明かりを眺め続ける。

「僕もただ願うだけさ・・・・・仮初でもいいから、出来れば世界が平和であり続けることをさ・・・・・」

そんな二人の願いとは裏腹に、事件は幕を開けようとしていた。

ミッドチルダの首都クラナガンから東に３０キロ離れた山間の場所に、時空管理局直属の魔法研究所がある。

ラボラトリーＧＸ・・・――魔法と技術の正しき進化を促進し、更なる発展を目指して日々研究・開発が行われている巨大な建造物である。

研究員は皆、それぞれに時空管理局で建研を積んできたニアＳランク、もしくはＡＡＡ資質の優秀な魔導師が集まっておるため、緊急時の場合の対処も難なくこなす。

しかし、そんな優秀な魔導師が集まったこの研究所が突如として襲われたのだ。

「ぐあああああああ！！！！！」

研究所内各所で発生する大爆発。

連鎖反応を起こすかのように、その速度と規模は徐々に早まり大きくなる。

研究員達の多くはその爆発によって、外に飛ばされたり負傷をしてしまう中、幹部の数名は局長と供に一箇所に集まりこの事態に驚愕していた。

「何事だ！？」

「研究所全体で爆発が！！」

「何だと！？侵入者か！？何所から入った！！」

「分かりません！！」

すると、局員の一人が局長の手に持つ装飾の入った試験管のような容器を一瞥し、数名の局員と一緒に局長を円形状に囲んで安全を確保しようとする。

「ええい！！何としても局長の命と“ダイシーの血”は守るのだ！！これは死守義務である！！」

すると、炎が立ち上る研究所内から煙幕が発生し研究員達の視界を封じる。

「（煙幕か！！）」

「（目と耳が利かぬ！！）」

「（くそ！これでは何も見えん！）」

しかし、研究員達は直ぐに煙幕の中から攻撃が来ることを予想し事態に対処しようとする。

「（攻撃が来る！！）」

局長を覆い隠しながら局長の身を守ろうとする研究員六名は足元にミッド式の魔法陣を展開すると絶対の防御力を誇る立方体状の防御魔法を全員で発動させる。

「「「「キュービック・プロテクション展開！！！！！！」」」」

しかし、この絶対的な防御力を誇るキュービック・プロテクションであったが、煙の中から飛んでくる攻撃は彼らの予想に反して威力は凄まじく、僅か数分もしないうちに破られてしまうことになる。

「ぐあああああ！！！！」

「のあああああ！！！！！」

衝撃で吹き飛ばされる局長を含めた七人。

やがて、煙が晴れ攻撃が収まったとき・・・一人の研究員が意識を取り戻すと頭を抱えながら徐に立ち上がり、倒れた他の六人の体を順に起こしていく。

「・・・攻撃が・・・止んだぞ・・・」

「・・・そうらしいな・・・」

「くっ・・・はっ！」

と、その時。

研究員の一人が左腕から血を流す険しい表情を浮かべた局長の姿を確認する。

「局長！大丈夫ですか！？怪我を！」

六人は慌てて局長に近付いていく。

「掠り傷だ。大したことじゃない・・・」

すると、今度は泣きっ面に蜂と言わんばかりに更なる不幸が訪れた。

「のあ！！だ、ダイシーの血が！？」

研究員が目にしたのは、粉々になった試験の中から入っていた血液を床に零す局長が必死で守ろうとしていたダイシーの血と呼ばれるものであった。

これは、この研究上が創設以来ずっと大事に保管していた謎多きもので時折取り出しては研究を行っていたのだ。

今日もその日の一つであったのだが、上記の通り試験管は見事に粉々になってしまった。

落胆する研究員であったが、局長は直ぐに気持ちを切り替えて六人に指示を出す。

「全ての出入り口を封鎖せよ。誰一人この研究所から逃がすな。」

六人も一先ず、局長の指示を聞き入れると研究所内の全ゲート及び脱出口を完全に封鎖して外部からの侵入と内部犯の脱走を出来なくした。

「出入り口全て封鎖。監視カメラの映像を分析します。」

研究員の一人は直ぐに、破損を起こしていない監視カメラの映像を解析し始める。

「全てが仕組まれていたようにも思えます。下手に動かないほうがいいでしょう。」

すると、それを聞いていた新人の研究員が驚愕の表情を見せた。

「！全てが仕組まれていた・・・だと！？」

「ああ。恐らく、誰かがこのダイシーの血の価値に感ずいたのだろう。そして、それを奪還、或いは破壊しようとしたんだ。」

「・・・！」

「そのように思えるのか・・・」

局長も長年付き添ってきた研究員の一人の言葉に黙って耳を傾け話しを聞き終えると、研究員の一人から手当てを受ける。

すると、新人研究員が申し訳なさそうな表情で局長にこう口にする。

「しかし、局長・・・ダイシーの血が・・・」

だが、そんな研究員を見た局長は微笑み意外な言葉を口にする。

「心配するでない。あれは敵の目を欺くために用意した精巧なフェイクだ。」

「フェイク！？」

「本物のダイシーの血は、この研究所の奥の金庫にしまってある。金庫には私が施したミッド式とベルカ式の魔法を混合させたバリアが張ってある。あれならどんな魔法攻撃にも耐えうる。」

「そんな手を打っていたとは・・・流石は局長です！」

「何としても侵入者を見つけ出し、一刻も早く始末せねばならない。ダイシーの血が公に知られれば、それこそ管理局の崩壊だ。」

「局長・・・・・・」

すると、その時・・・――――研究員の一人が金庫のほうへ足を運ん

でみたところ、そこで信じられない光景を目の当たりにした。

「！！」

そこで研究員が見たのは、金庫を守ろうとし敗北した仲間の研究員と無惨にも破壊され中身を持ち去られた跡の金庫であった。

「きょ、局長！大変です！！き、金庫が・・・破壊されています！！」

「何！？」

「そんな！」

「！！」

研究員からの予期せぬ報告を受け、顔を真っ青にして驚く局長以下五名の研究員達は、直ぐに金庫の近くに駆け寄った。

「そんなこと不可能だ！！」

「そうだ！何が起こっても破壊されない魔法防壁をどうやって破るんだ！？」

「ありえん！他に局長の魔法をすり抜ける力があるとでも言うのか！？」

それは正に神の徒だったのか？

研究所内でトップの実力を持つ局長の魔法を打ち破るものが、今回

の犯行に携わっていたとすれば、事態はかなり深刻なものとなる。

局長も自分の施した魔法がこう簡単に破られたことにショックを隠しきれないでいた。

「（莫迦な・・・どんな魔法攻撃にも耐えうるミッド式とベルカ式の混合シールドをこんな短時間で突破することなど・・・！？）」

すると、その時研究員の一人が煙が上がる金庫室の中に数名の人影を発見する。

「おい！金庫室のほうに誰かいるぞ！」

研究員の一人が直ぐに銃型のデバイスを取り出し、攻撃に備えようと銃口を向けた瞬間・・・敵の攻撃が瞬く間に飛んできたかと思えばデバイスを粉々に破壊する。

「な！？」

流石にこの光景には研究員も驚きを隠せなかった。

煙の中から飛んでくる石を鋭くしたかのような無数の塊。

研究員は掌にミッド式の魔法陣を展開させると、魔力変換資質で雷の強固なバリアを作り出して身を守ろうとした。

「サンダープロテクション＋！」

大抵の魔法攻撃ならば、このバリアによってほとんどが防ぐことが可能。

しかし、今回の攻撃は防ぐことはおろか魔法そのものを打ち消しバリアを通り抜けてしまったのであった。

「!!（俺の魔法が・・・打ち消されただと!）」

「伏せて下さい、局長!」

研究員は局を庇いながら、床に伏せ攻撃から回避する。

「こんな攻撃魔法・・・一度も見たことがないぞ!!」

「誰だ、そこにいるのは!?」

怒鳴り声を上げながら研究員が煙の中の人影に応答を要求したとき、彼らは煙の中から姿を徐に現した。

しかし、現れた人物達の姿を見た瞬間研究員達は度肝抜いた。

「!!」

「え・・・?」

研究員達の前に現れたのは、独特な鎧に身を包んだ中学生ほどの容姿と背丈の男性5人と豊満な胸の女性であった。

「何だ・・・お前達は!?何故子供がこの研究所に!?」

すると、そんな局長の質問に対して中学生ほどの容姿でありながら豊満な胸を持つ女性が冷徹な返事をする。

「答えるつもりはない。」

そして、その女性の隣・・・全員の中央に立つ黒い鎧を身に纏った青髪の少年は金庫から奪還した本物のダイシーの血を手に取りこう口にした。

「“ダイシーの血”は返してもらうよ。この血は元々僕ら“パトリオット”のものだから。」

「な!?」

「パトリオットだと!?」

「聞いたこともないぞ・・・そんなの!」

「ど・・・どういう意味だ・・・説明しろ!!」

少年の口から語られる意味不明な単語に困惑をする研究員と局長だが、やはりと言わんばかりに女性が冷酷な返事をする。

「二度も同じことを言わせるな。答えるつもりはない。」

すると、女性の言葉の後に続く形で少年が若干悲しそうな目を浮かべながら研究員達に次のように語る。

「どうしても僕らには必要だったんだ。今後の僕らの計画のためにはね。」

「(計画!?)」

少年の言葉に更に頭を悩ませる局長や研究員達であったが、そんな彼らのことなど一切無視して少年は奪ったダイシーの血を予め傷つけていた腕に一滴血を流した。

「力を取り戻して・・・」

すると、血を流された腕が突然強い光を発する。

「僕ら・・・パトリオットの誇りを取り戻す為に。」

「！！」

「あの光は・・・！？」

研究員が驚愕する中、光はやがて少年の体を包み込みんでいった。

「「「「ぎゃあああああ！！！！！！！！！」」」」

その瞬間・・・聞こえてきたのは局長以下七名の研究員の叫び声。

そして、研究所は襲撃を受けてから数十分後に巨大な爆発を起こして全てが吹っ飛んでしまうという大惨事に発展してしまったのであった。

研究所が襲撃されたその日の早朝。

機動六課訓練場では何時ものように前線メンバーによる早朝訓練が行われており、今はエキシビジョン形式で鬼太郎と金太郎による模擬戦が行われていた。

「うりゃあああああ！！！！！！」

「行きますぞ！！！！！！」

二人の激しいぶつかり合いを離れたところで見ながら、なのは達隊長陣やスバル達フォワードの一同は関心した瞳で戦闘の参考なるところを探っていた。

それとは対照的に、恋次や浦太郎、白鳥の三人は呆れた表情を浮かべながらふと思ったことを口にする。

「朝っぱらから暑苦しい連中だな・・・・・・」

「気合の入れすぎなようにも見えるけどね・・・」

「まぁ、でも・・・二人だって偶には本気で勝負したくもなるのではないか？」

「あれでも一応戦力的には半分くらいしか出してないけどね。」

浦太郎は白鳥にそう言うと、再び腕組みをしながら二人の戦いの行方を見守る。

尚、今回の朝練には珍しくユーノも参加していたらしく当然この戦いも見物していた。

「俺の必殺技・・・パート５！！」

鬼太郎は火の粉を烈火の切っ先から蛍のように無数に飛び散りさせ

相手を焼き尽くす『火達磨蛍（ひだるまほたる）』を発動する。

「新技ですか・・・ですが、甘いですぞ！！！」

〈Ｅａｒｔｈｑｕａｋｅ　ｒｏｃｋ　ｂｌａｓｔ〉

金太郎はそう言うと、アックスオーガを地面に突き刺して巨大な岩の塊を自分に向けて飛んでくる蛍の如く光とぶつけて消滅させ、そのまま飛ばした岩で鬼太郎に攻撃していった。

「のああ！？うそ！！！！んなのアリなのかよ！！！！！！！」

鬼太郎は攻撃性能に関しては、なのは達でも目を置くほどの使い手であるが、防御力に関してはあまり感心できるほどの力は無い。

性格的な問題もあるが、はっきり言えば鬼太郎は防御技は苦手なのである。

飛んできた予想外の金太郎の攻撃を躱せず、直撃を受けてしまった鬼太郎はそのままかお重を傷だらけにし、目を回してその場に倒れこんだ。

「はーい！そこまで！！」

なのはもこの状況を見て模擬戦の終了を宣告する。

「あ～あ・・・」

「鬼太郎さん・・・惜しい！」

フォワードのキャロやエリオ達は負けた鬼太郎に優しい言葉を掛けて慰めるが、一方の浦太郎や白鳥、ユーノなどの鬼太郎をよく知る者たちの言葉は冷たかった。

「先輩も見せ方云々よりも戦略を考えればいいのに。」

「あの性格は直らないだろうね。いくらお前や僕達が言ったところで。」

「それもそうですね。」

そう言うと、浦太郎と白鳥は戦いを終え気絶している鬼太郎の下に向った。

ユーノとなのは達は全身から多量の汗を流す金太郎の下へと近付いていった。

どうも・・・僕はユーノ・スクライアです。

割と最近までは、極々平凡な駄菓子屋の店長をしながら世捨て人の様な生活を送っていたんだけど・・・春先に起こったとある事件が切欠で僕の魔法の弟子であり恋人でもある高町なのはが出向している機動六課に協力することになってしまいました。

「お疲れ、金太郎。はい、これ。」

ユーノはそう言うと、持っていたタオルを金太郎に手渡す。

「有難うございます、店長。」

この大柄な人物の名前は熊谷金太郎。

松前市にある僕の店、スクライア商店に勤める一番古い従業員だ。

昔は管理局の出世回廊を驀進中だったらしいけど、何があったか知らないけど突然僕や浦太郎と同じように管理局を辞めてしまったんだ。

今は訳あって僕と従業員一同、なのは達機動六課のアンゴルモア捜査に協力しているんだ。

金太郎がユーノから受け取ったタオルで汗を拭いていると、インテリジェントデバイスのアックスオーガが金太郎に言葉を掛けてきた。

〈Ｇｏｏｄ　ｊｏｂ　ｍｙ　ｍａｓｔｅｒ（やったな、金太郎。）〉

「お前もよくやったぞ。アックスオーガ。」

〈Ｔｈａｎｋ　ｙｏｕ（ありがとう）〉

で、この巨大な斧の形をした武器が金太郎のインテリジェントデバイス『アックスオーガ』。

金太郎がまだ小さい頃にお父さんから譲り受けた由緒あるデバイスらしいんだけど・・・金太郎曰く、まだまだ解明されていない未知なる力が隠されているとの噂もある曰くつきのデバイスだそうだ。

早朝訓練を終えた前線メンバー一同は、寮に戻って汗を流し終えると隊舎の食堂で仲良く食事を取りながら段を取っていた。

その間、鬼太郎は顔に出来た傷口を過剰な心配性な性格のフェイトによって、治療を受けていたが消毒液が傷口に染みるのが思った以上に嫌いであった。

「痛てててて！！！！！てめぇ！！！もうちょっと優しくやれ！！！」

「あ！！そ・・・その・・・御免なさい・・・！」

鬼太郎に諌められ、思わず項垂れてしまうフェイト。

鬼太郎は基本的に女子供は問わず、素直に思ったことを口に出してしまう性格であり気を遣うなどと言うことはほとんどないのだ。

だから、痛いものを痛いたくないと体裁を繕って相手の機嫌を窺うなどと言うことは一切しないのだ。

すると、そんな鬼太郎の非情な態度を見ていた浦太郎は鬼太郎に近付きこう言った。

「先輩～～～折角フェイトちゃんが優しくしてくれてるのに、その言い方はないんじゃない・・・の！！」

浦太郎は真顔で持っていた大き目の絆創膏を鬼太郎の傷に思い切りたたきつけた。

その瞬間、鬼太郎は声をあげながらその場に倒れこんで涙を流した。

「のあああああ！！！！！痛てーーーーーー！！！！！！」

そんな様子を見ながら、ユーノとなのはは呆然とし間に挟まれていたヴィヴィオは鬼太郎のオーバーなリアクションや今迄の言動を見てふとユーノにこう言った。

「ユーノパパ・・・何であんなに鬼太郎さんって怒りっぽいの？」

「う～ん・・・昔から感情を面に出しすぎるのがあいつだったからな。カルシウムが不足しているからかもね。」

「カルシウムが不足してるだけであそこまで怒るかな・・・？」

そんなユーノ達の雑談を聞いていた鬼太郎は不機嫌な表情を浮かべたまま立ち上がり、自分の席に着く。

「けっ！どうせ俺はカルシウムの足りない男っすよ！」

そう言うと、鬼太郎は眉間に皺を寄せたままテーブルの上に置かれていたコーヒーを徐に啜り出した。

と、その瞬間鬼太郎はあまりのコーヒーの不味さに我慢できずに口から噴水のように吐き出してしまった。

「ぶっは！！！な、何だよこのコーヒー！？どろっどろじゃねぇか！！！誰が淹れたんだこんな不味いコーヒー！？」

すると、その言葉を聞いた金太郎が不満気な表情で鬼太郎に反論してきた。

「失敬ですな！私が善意で淹れたコーヒーを不味いと申すのか？」

「俺はサラサラの喉越しのいいコーヒーが好きだって言ってるだろうが！！こんなドロドロのコーヒーの何所が美味いんだよ！？」

「そのほうがこくが出て美味しいのですぞ！」

「わかんねぇよ、んなもん！！」

二人はそのまま全員の視線を一切気にすることなく、口論を続けた。

恋次やルキアはそんな二人の様子を見ながら共通の意見を口に出す。

「・・・あいつら・・・意外と仲いいよな・・・」

「・・・あれはあれで、名コンビかもしれぬな・・・」

と、それを聞いた瞬間鬼太郎は恋次達のほうへ詰め寄り真っ向から否定をする。

「こんな奴とコンビなんか組みたくねぇよ！！」

ユーノはそんな鬼太郎を宥めようと前に出てくる。

「まぁまぁ・・・抑えて抑えて・・・ん？」

と、その時だ。

偶々映し出されていた朝のニュースがユーノ達の目に飛び込んできた。

『お早うございます。早速現場を呼んでみましょう。クワさん！現

場のクワアナ！』

ニュースの内容は昨夜遅くに起こったラボラトリーＧＸの爆破事件のもので、テレビ画面には中継カメラの映像によって映し出される跡形も無くなった研究施設と事故原因を調査する局員の姿が映し出された。

『はい、こちら現場のクワです。ラボラトリーＧＸで起こった突然の爆発で死者数は数百名を越え、重傷負った研究員達も病院に搬送され治療を受けているとのことです。火災は現在鎮火されていますが、煙はいまだ立ち上ってる状態です。尚現在は、時空管理局の局員によって披見の調査と事故原因の解明が進められています。』

「ラボラトリーＧＸ？一体どんな研究所なんだ！？」

すると、そんな恋次の質問にティアナとギンガを始めとするフォワードメンバーが答える。

「管理局が魔法文明と技術の進化の為に、更なる飛躍を目指して５０年前に創設させれた魔法研究所ですよ。」

「本局上層部や地上部隊の人間も、ここだけは毎年必ず多額の出資をしている場所なんです。」

「でも、そこが被害に遭ったってことは・・・テロ行為みたいなものかな？」

「まだそうとは言えないけど、何らかの形で管理局に宣戦布告をしてきたと考えるのが妥当じゃないかしら？」

しかし、ニュースを聞いていたヴィータがパンを一齧りしながらある疑問を浮かべる。

「けどよ・・・あそこの研究所ってみんなＡＡＡクラスの凄腕の魔導師が集まったかなり優秀な部署じゃなかったか？いくら敵に攻め入られたとしても、こんな無惨に殲滅されるものか！？」

「確かに・・・それも不思議といえば不思議だ。」

シグナムも不思議に思いつつスプーンを口に運ぶ。

「アンゴルモア事件とは直接関係はないが、管理局を狙った何らかの挑戦なら六課とて黙っておく訳にはいかんよ。」

「そうだな。一先ず、警戒と言う言葉は頭の片隅に置いておいてくれ」

はやたとクロノがそう言うと、全員も顔を引き締める。

クロノはそんな全員の表情に安心したのか、相変わらず友人達からは似合わないと評される制服を着ながら、ブラックコーヒーを啜り出す。

しかし、クロノ自身は気付いていなかったのか・・・そのコーヒーには自分が無意識のうちに大量に投入した砂糖が含まれており、飲んだ瞬間クロノは余りの甘さに鬼太郎同様噴水のように吐き出した。

「ぷっは！！！！甘い！！！！！！」

だが、今回は状況が違っていた。

クロノはコーヒーを吐き出した方向には丁度なのは・フェイト・ユーノの三人が座っており、三人はクロノからかけられたコーヒーによって顔中がコーヒーまみれになっていた。

しかも、三人は全員が気絶しそうになるほどの殺気を出しながら笑顔でクロノのほうを睨んでいたのであった。

「ギク！！」

クロノは三人の様子に気付くと、思わず床に倒れこみ後退りをする。

「・・・・・・クロノ・・・・・・・」

「・・・・・・クロノ君・・・・・・ちょっと・・・・・・」

「・・・・・お話があるんだけど・・・・・・？」

三人はそう口にしながら、どす黒い殺気を出しながら全身から汗を流すクロノにゆっくりと近付いていく。

「なっ！！ま、まままままま待て！！！！！！話せば分かる！！！！な、頼む！！！！！」

しかし、クロノがいくら説得したところで三人の怒りは抑えることは出来なかったのだ。

そして、クロノは２９歳と言う若さで生きながらにして三つの地獄を体験することとなったのであった。

「ぎゃあああああああ！！！！！！！！！！！」

その後、事情を聞いたクロノの母親であるリンディはモニター越しから顔中を腫れ上がらせるクロノを見ながら次のように話し出す。

『あらあら・・・それでそんな顔になってしまったという訳ね？』

「全く・・・あの三人にも困ったものだ・・・イテテ・・・」

『でも、クロノが甘いものを克服したとは私も知らなかったわ。』

「克服などしてませんよ。間違って入れてしまったんですあれは・・・それより、そちらのほうは問題などないでしょうか？」

『そうね・・・こっちも本局へのドッキング受け入れとクラウディア整備の準備はね。』

「？」

その時、クロノはリンディの言葉にある種の違和感を感じた。

すると、案の定リンディは思わしく無い表情でクロノに語り出した。

『こっちの方では、あんまり嬉しくない事態が起こっているのよ・・・』

「嬉しくない事態・・・と言いますと？」

『ニュース見たでしょ。研究所から盗み出されたものなんだけど・・・それがロスト・ロギア級の第一級危険物であると言うことがつい

さっき判明したの。』

「え！？」

『生き残っていた研究所局員の話によれば、初めてそれが発見されてから時折実験に使うこと以外は、頑丈な金庫に閉まって保管していたらしくてね・・・その研究員も用途のほうはあまり分かっていないようなの・・・捜索担当班はもう大騒ぎ。』

「そうですか・・・」

『捜査員を派遣して、今はその子達の報告待ちね。』

「・・・はぁ。何故こんな事態になってしまうのでしょうか・・・」

クロノはリンディの話を聞き終えると、深い溜め息をつきながら天井の方を仰ぎ見た。

また、同じ頃・・・ユーノはヴィヴィオの魔法の練習を見る傍ら、何所か浮かない表情をしながら流れ行く雲を凝視していた。

「・・・・・・――――――」

すると、ユーノの表情を見たヴィヴィオが疑問に思い声を掛けてくる。

「？ユーノパパ、どうかしたの？」

「え？ああ・・・何でも無いよ。さ、次のステップにでも進めようか？」

「うん！」

ヴィヴィオは満面の笑みでユーノにそう答えると、早速次のステップへと進んでいった。

やがて、時間はあっという間に過ぎ去り――――――――辺りが完全に静まり返った深夜。

第９７管理外世界『地球』で事件が起こり始めていた。

８月４日　ＡＭ２：２３

松前市　オフィス街。

そこのビル陰で、事件は静かに起こっていた。

「「のあああああああ！！！！！！！！」」

管理局局員の二名が、謎の襲撃を受けて昏倒されていた。

「ぐっ！！」

「・・・うっ！！」

その局員二人を昏倒させたのは、何と昨夜ミッドチルダのラボラトリーＧＸを襲撃し、ダイシーの血を強奪した子供の一人であった。

昏倒させた少年は両腕につけられた鉤爪を研ぎながら、ニヒルな表情を浮かべながら瀕死状態の管理局局員を見下ろす。

「こんなものか？所詮、ミッド式の魔法なんか・・・俺達の敵じゃねぇな。」

すると、そんな少年の後ろからもう一人の少年が近付き声を掛けてきた。

「白鴎。」

「あ？」

「あまり、派手に動かないほうがいいぞ。管理局の連中が血眼になって我々のことを探してる。連中に関われると面倒だ。」

「分かってるよ。銀太郎の迷惑はかけない様にするから。だから今は・・・早いところ見つけ出そう・・・聖地への扉を開く鍵を。」

白鴎と呼ばれたその少年がもう一人の少年にそう言うと、局員を昏倒させたまま懐を軽く探り目的のものが無いことを確認すると、軽く舌うちをしてその場から立ち去った。

それから、数時間後。

８月４日　ＰＭ４：２４

空座町　空座総合図書館。

今日、此処には黒崎一護の悪友でもあり滅却師（クインシー）と呼ばれる得意な能力を持った男が訪れていた。

石田雨竜。

空座総合病院で、父であり前院長の石田竜弦に代わって院長を務めている若手のエリートである。

何故彼がこの図書館に来ているのかと言えば、前々から借りていた本を返すのと同時に余暇のときに読む真新しい本を探すためであった。

「・・・え～と・・・確かこの辺に・・・ん？」

と、石田が本棚を手でなぞりながら目当ての本を探していた時、偶々その間から見えたもう少しで取れそうなところで取れないでいる一人の少年を発見する。

少年は必死に本を取ろうと手を伸ばすが、中々上手くいかなかった。

すると、そんな少年の代わりに本を取って手渡してくれたのは石田であった。

少年もこの石田の行動には驚きを隠せなかった。

「あ！」

「君の取りたがってたものは、これかい？」

「はい・・・ありがとうございます！」

その後、二人は気が合ったらしくお互いに打ち解けあい談笑をしていた。

「そうか。何所かで見たことある顔だと思ったら、君が銀太郎君だったのか！？」

「はい。時々見かけていたんですよ。あれ？ひょっとして石田院長先生の御氏族の人かな～～～何て思っていたんですけど、まさか本当にそうだったなんてびっくりですよ！」

実は石田、竜弦からは嫌々ながらも病院の患者のことについては聞いていたらしくその中でも銀太郎のことは普通の患者のこと以上によく聞かされていたのだ。

しかも、１６の時に一度幼い頃の銀太郎を見かけていたのだ。

「自己紹介が未だだったね。僕は石田雨竜。君の担当医だった竜弦の息子で、今の空座綜合病院の院長だ。」

「じゃあ僕も改めて。狼谷銀太郎です。変な苗字ですよね？狼谷なんて・・・」

「そんなことはないよ。力強い苗字だと僕は思うけどな。」

「ありがとうございます！」

二人はその後、何気ない会話をしながら図書館の廊下を一緒に歩いていた。

すると、廊下の端では銀太郎の帰りを待っていた同い年ぐらいの少年が立っており、少年は軽く石田に会釈をする。

「それじゃあ、石田院長先生。僕はこの辺で。」

「ああ。体調が悪くなったら、何時でも来るといいよ。」

「はい。それじゃ・・・お話してくれてありがとうございます。」

「どういたしまして。気をつけてね、銀太郎君。」

石田と銀太郎は互いに微笑みながら、別れの挨拶を済ませるとそれぞれの家路へと戻っていったのであった。

銀太郎を待っていた少年、田吾作は銀太郎の隣を歩きながら話しかけてくる。

「銀太郎・・・熱くないか?」

「うん、平気だよ。田吾作は?」

「俺は全然だ。」

銀太郎にそう言われると、田吾作は笑顔で質問に答える。

暫く二人で一緒に歩いていると、銀太郎の目の前に豊満な胸の女性の姿が見えてきた。

「あ、オーリー!」

「ああ。」

銀太郎が満面の笑みでオーリーと呼ばれる彼女の名を叫ぶと、オー

リーも清々しい表情で返事をする。

やがて、三人で家までの旅路を辿っていると銀太郎がふとオーリーに尋ねる。

「今日の夕御飯・・・オーリーと田吾作は何食べたい？」

「ああ・・・そうだな・・・悩むものだな。」

「スーパーで材料を見ながら、考えようぜ。」

「うん、そうだね。」

すると、銀太郎はふと思い出したのか一人の少年の名前を口にする。

「あ、そう言えば・・・白鴎は今日も何所かに出かけてるのかい？」

そう言われると、田吾作は困惑した表情を浮かべる。

「ああ・・・えっと・・・そうだな・・・」

見かねたオーリーがフォローを入れる。

「外の世界を色々と見て回ってるようだが、瀬間子（せまし）がついているからあまり心配はないだろう。」

「あそう・・・」

「けど、少し距離が離れていようとも・・・俺達はずっとお前の傍にいるから心配するなよ。」

「ああ。我らは何時も、お前の傍に。」

田吾作とオーリーの言葉を聞いた瞬間、銀太郎は嬉しくなったのか頬を赤く染め上げて二人にお礼の言葉を言う。

「・・・うん・・・ありがとう・・・」

さて、それから数時間が過ぎた午後7時43分の第1世界ミッドチルダの機動六課隊舎では、ある熾烈な戦いが幕を開けようとしていた。

テーブルに集まった恋次・吉良・ルキア・白鳥、そしてスバルの四人は真剣な表情を浮かべながらあるものに注目していた。

それは――――――・・・・・・

「さぁ・・・ジョーカーだ。混ぜて・・・」

「吉良、ちゃんと切ろよな!」

「・・・分かってる・・・」

吉良は険しい表情を浮かべると、ルキアから手渡させれたジョーカーを51枚のトランプに混ぜてシャッフルする。

切り終えた吉良は全員に行き渡るようにカードを分配し、全員はカードを広げて共通の二枚だけを次に次に抜いていく。

ルキアは自分のカードを見ながら、相手を見下したかのような目で

恋次と吉良を一瞥する。

「ふふふ・・・ばばぬきで私に勝負を挑んできたのが運の尽きだったな・・・さぁ、始めようか。“明日の隊舎中の掃除を担当する掃除当番”を決めるばばぬきを。」

「最初は私から引きます！」

「よ～し・・・僕のから引け、スバル・・・」

吉良はそう言うと、スバルの目の前に自分のカードを持ってくる。

「え～～～と・・・・・・あっ！揃った！！」

「やったあああああああ！！！！！」

スバルとチームを組んでいる吉良は、あまりの嬉しさにあの性格上滅多に喜ばない気持ちを素直に面に出した。

そして、次にルキアとチームを組んでいる白鳥のカードを引こうと吉良が手を伸ばした瞬間、白鳥は突然声を張り上げて吉良を脅かす。

「だっ！！！」

「うわああ！！な、何だよ一体・・・・・・くそ！」

気を取り直してカードを引くものの、結果はハズレ。

大いに悔しがる吉良であったが、それに対して白鳥は次の恋次から当たりのカードを引き当てたらしく実に誇らしげな表情を浮かべて

いた。

「あっ！阿散井君！！揃ってないの引かせてよね！」

「仕方ないだろ。運なんだから！！・・・・・合った！！どうだ！！」

吉良に怒鳴れた恋次であったが、次のルキアから当たりを引き当てたことを嫌味を込めて吉良にこれでもかと自慢する。

「うっ！」

「やめんか、戯けども！いい年した大人がみっともない。」

「そうであるぞ。勝負に集中せんか。」

「元はと言えば阿散井君が普段から掃除をしていたら、こんな事にはならなかったんだよ！」

「お、俺の所為かよ！！」

見苦しい言い争いをし始める恋次と吉良。

それを呆れた表情で見つめるルキア・白鳥、そしてそんな彼らを遠くから見つめるフォワードの四名。

ティアナは腕組みをしながら、疑問に思ったことを口にする。

「何やってるのよ・・・スバルも含めて恋次さん達も・・・」

「何でも・・・普段から掃除当番すっぽかしてる恋次さんに業を煮やした八神部隊長が、連帯責任や!!って言って死神さん達みんなで隊舎の掃除を罰として押し付けたらしいんだけど・・・」

「そしたら恋次さんが、ばばぬきで負けた奴が一人で明日の掃除一手に引き受けるのはどうだろうって提案をしてきて・・・」

「全員賛成してきたってわけね・・・でもだからって何でスバルまで?」

「スバルさんは面白そうだからって言って・・・」

「はぁ〜〜〜本当、バカよねあの子は・・・」

実の姉であるギンガよりも、最も姉らしい態度を取るティアナの溜め息はエリオ達が思ってる以上に重いものであった。

そんな時、ヴィヴィオが本を手に持ったまま誰かを探しているらしく隊舎の中を歩き回っていた。

「あれ?おかしいな・・・何所行っちゃったんだろう?」

ヴィヴィオの様子に気付いたティアナが誰を探しているのかを尋ねる。

「あら、ヴィヴィオ。誰探してるの?」

「ティアナさん!実はこれ返そうと思って金太郎さんの部屋に行ったんですけど・・・もぬけの殻でして。」

「金太郎さんなら一度地球に戻ったわよ。何でもあっちでしか買えないものがあるから買いに行くって。」

同時刻。

松前市　市街地上空。

紅色の鎧を着た少年、白鴎が目を閉じたまま何かの気配を掴もうとしていた。

「・・・・・・――――――」

すると、そんな白鴎の下にやってきたのは護衛役の瀬間子という少年だった。

「どうだ、白鴎(はくおう)。見つけられそうか？」

「・・・地球(ここ)に居る様な・・・居ない様な・・・」

「・・・・・・――――――」

「ミッドチルダで時々感知された妙に俺達と似た力を発する魔力反応が確認されたけど・・・もしからしたら、そいつが聖地への扉を開く鍵を持っているのかもしれねぇ。」

「分かれて探そう。くれぐれもブラッドカートリッジは無駄遣いするなよ。」

「オッケー、瀬間子(せまし)。お前もしっかり探してくれよ。」

「承知している。」

瀬間子はそう言うと、白鴎と別れて聖地への鍵と呼ばれるものを探し出すため行動を開始した。

白鴎のほうは、足元にミッド式ともベルカ式とも違う六芒星を模した全く違う系統の魔法陣が展開される。

「空間凍結・・・展開。」

空間凍結とは、その名の通り周囲の人間から建物と言った対象物以外のものの動きを一定の間だけ封じ、戦闘をしやすくするためのものである。

高度な結界魔法の部類に入る。

機動六課のほうでは、ユーノがいち早く松前市で起こっている事態に気付き画面上に浮かび上がった警戒と書かれた文字を見るなり険しい表情を浮かべる。

「!?これは・・・!」

また、そんなこととは露知らずの金太郎は目的のものを買うために松前市のオフィス街を一人でぶらぶらと歩いていた。

すると、その時デバイスのアックスオーガからの緊急の報せが入る。

〈Ｃａｕｔｉｏｎ　ｅｍｅｒｇｅｎｃｙ（警告、緊急事態発生。）〉

「なぬ?」

すると、金太郎の周りの人々や車などの動きが突然止まり、動いているのは金太郎ただ一人だけとなってしまった。

「空間凍結結界・・・！？」

空間凍結結界を展開することに成功した白鴎は、その中で偶々飛び込められている金太郎の魔力反応を確認する。

「魔力反応。ついに見つけた・・・鍵の在り処！」

そう言うと、白鴎は魔法陣を消滅させて移動を開始し始める。

「いくぜ、コンボイ。」

〈Ｃｏｎｓｅｎｔ（了解）〉

白鴎は金太郎のいる場所目掛けて空中を凄まじい速度で滑空する。

また、白鴎が近付いていることは金太郎にも直ぐに分かった。

〈Ｉｔ　ａｐｐｒｏａｃｈｅｓ　ａｔ　ｈｉｇｈ　ｓｐｅｅｄ　ｔｈｅ　ｏｂｊｅｃｔ.（対象、高速で接近中。）〉

「近付いてきている・・・だが、何故私に！？」

金太郎は対象である白鴎が飛んでくる場所を見ながら、一度考えるとある思い切った行動に打って出ることにした。

「・・・止むを得ませんな・・・」

その頃、市街地上空を滑空中の白鴎はデバイスであるコンボイからの報告を受けていた。

〈Ｉｔ　ｉｓ　ａｐｐｒｏａｃｈｉｎｇ　ｔｈｅ　ｏｂｊｅｃｔ．（対象、接近中）〉

黙して報告を聞き終えると、白鴎は更に加速して金太郎の下へと急ぐ。

また、白鴎を待ち伏せしようとビルの屋上で周囲を警戒していた金太郎。

すると、そんな矢先にアックスオーガからの報せが届く。

〈Ｉｔ　ｃｏｍｅｓ．（来るぞ）〉

「なっ！」

金太郎が正面の空を見上げてみたとき、遥か彼方から飛んできたのは爪の形をした誘導弾であった。

「あれは・・・！？」

〈Ｉｔ　ｉｓ　ａ　ｇｕｉｄｅｄ　ｍｉｓｓｉｌｅ．（誘導弾だ）〉

金太郎は即座にラウンドシールドを展開し、誘導弾から身を守ろうとするがそのとき金太郎はこの誘導弾から感じる違和感に疑問を抱いた。

「くっ！！！（何だこれは・・・魔力が打ち消されていく・・・！？）」

〈Ｉｔ　ｉｓ　ａ　ｂａｃｋ．（後ろだ）〉

と、アックスオーガが金太郎に警告を発したその瞬間・・・攻撃を防ぐ金太郎の背後から巨大な鉤爪のようなアームドデバイスを装着させた紅色の鎧を身に纏った白鴎が奇襲をかけてきた。

「しまっ・・・！！」

慌てて振り返った金太郎であったが、時既に遅し。

「アブソリュート・パワーフォース！」

攻撃が直撃した瞬間、ビルの屋上で巻き起こる凄まじい爆発と轟音。

金太郎はシールドを展開したまま衝撃で高さ数十メートル下へと落下して行った。

「のあああああ！！！！！」

攻撃を与えた白鴎は、落下する金太郎を完全に仕留めるべく向かって行った。

その間、金太郎は待機状態のアックスオーガに呼びかけ構築を行う。

「アックスオーガ！！」

〈Ｙｅｓ　ｓｉｒ　Ｓｅｔ　ｕｐ〉

アックスオーガの声と同時に、金太郎の体を包み込む金色の魔力光。

金太郎は防護服を着用すると、空中に足場を作って浮遊する。

一方、金太郎を狙ったあの白鴎はと言うと・・・金太郎の様子を警戒しつつ次なる攻撃を仕掛けようとしていた。

白鴎は、両腕に装着された鉤爪を金太郎に向けると足元に六芒星を模した特殊な魔法陣を展開させて術式を発動させる。

〈Ａｂｓｏｌｕｔｅ　ｄｉｓｐａｉｒ〉

「喰らえ！！！」

掛け声と供に、白鴎の鉤爪から発射される鋭い爪による弾丸の嵐。

バリアを張った金太郎にそれが直撃し、砂埃が上がると白鴎は滑空して金太郎を仕留めようとする。

「うおらあああああああ！！！！！」

鉤爪による攻撃が土煙をも吹き飛ばすと、煙の中から金太郎が飛び出してきた。

そして、険しい表情を浮かべながら白鴎に向ってこう語りかける。

「くっ！！全く、とんだ躾のなっていない子供ですな！！私が何をしたと言うのですか！？人に恨みを買われる様な覚えなどありませぬ！」

しかし、白鴎はいくら金太郎が呼びかけようとも応答の意思は全く見せずにただ両腕の鉤爪を金太郎に向けるだけであった。

「厭くまでそう言う態度を取ると言うのなら・・・私にも考えがありまず！！」

そう言うと、金太郎は右手を広げると白鴎の背後から自身の魔力で作り出した斧型の誘導弾を使って背後から攻撃を仕掛ける。

「！」

白鴎もそれに気付くと、後ろを振り返って飛んできた誘導弾をあの六芒星の魔法陣を展開して攻撃を逸らしていくが、意外にも破壊力はあったらしく反動でぶつかりそうにもなった。

「うわっお！！」

何とか攻撃を凌ぎきった白鴎は、金太郎を凄まじい剣幕で睨み付けると反撃を行う。

「このオヤジ！！！！！！！！」

突進してきた白鴎の攻撃を、高速で回避すると金太郎は距離をアックスオーガに内蔵された遠距離攻撃モードを発動させ、バッドを振る要領でアックスオーガを持ち刃先に魔力を集束する。

「！？」

白鴎もアックスオーガに集められる魔力に驚いたのか、一瞬動きを

止めた。

そして、金太郎は自身の魔力を刃先に乗せると一気にそれを白鴎へとぶつける。

「武力行使は・・・いけません！！！！」

〈Ｖｏｌｃａｎｉｃ　ｂｏｍｂ〉

金太郎は、アックスオーガに集束した魔力を火山から吹き出る火山弾の如く強力な熱破壊能力を秘めた魔力弾を無数に発射して、白鴎を攻撃していった。

白鴎は必死に飛んできた魔力弾を回避しようと動き回るが、魔力弾の一発が白鴎の腰にぶら下げていたお気に入りの飾りを貫いてしまった。

白鴎が慌ててそれを見たとき、お気に入りの飾りは破損をしながら地面へと落下していった。

その瞬間、白鴎の瞳の色が変化し瞳孔が完全に開き金太郎に怒りの眼差しを向けた。

「・・・てめぇ・・・やりやがったな・・・！！！！！！」

「なっ！？」

白鴎の突然の心境の変化に、大いに戸惑う金太郎。

すると、白鴎は魔法陣を展開すると鉤爪型のアームドデバイスであ

るコンボイに次のような指示を送る。

「コンボイ！ブラッドカートリッジ、ロード！」

〈Ｃｏｎｖｏｙ　ｂｌｏｏｄ　ｅｘｐｌｏｓｉｏｎ〉

すると、コンボイに搭載されたカートリッジシステムに一発の弾丸が装填される。

これはベルカ式の魔導師や近代ベルカ式の魔導師が使用する圧縮した魔力によって爆発的に魔力を高める武装手段であり、浦太郎と金太郎もそれを使いこなす。

普通に考えれば何ら変哲も無いカートリッジにように思っていた金太郎であったが、そこで彼が見たものは彼の想像を遥かに超えていた。

何と、カートリッジが装填されると同時に術者である白鴎の身体が見る見るうちに巨大になっていくと同時に身体つきもまるでファンタジーゲームに登場してくる幻想的な竜のようなものへと変貌し、鉤爪も体に合わせてより派手で強固なものとなる。

「うおおおおお！！！！！！！！」

変わり果てた白鴎は全身から魔力を解放すると、竜の嘶きの如く叫び声を挙げて金太郎を威嚇する。

金太郎はそんな白鴎の姿に驚愕を覚えていた。

「なっ！？（デバイスだけでなく、使い手の姿も変わった！？どう

なっておるのだ！！）」

「エクストリーム・・・！！」

白鴎はそう言うと、背中から正しく竜の翼を出現させるとそれを大きく羽ばたかせて高速で金太郎の正面に突っ込んでいった。

「うおおおおおお！！！！！！」

金太郎はすぐさま防壁を張って攻撃を受け止めようとしたが、鉤爪による攻撃が先程とは比べ物にならないぐらい強力なものとなっていると同時に魔法そのものが充分に発揮できていないことが判明し、それによって防壁は容易に崩壊しアックスオーガの持ち手に白鴎の鉤爪が食い込み燁が入った。

「しまっ！！」

「・・・クリムゾン・フォース！！」

攻撃が直撃すると同時に発生する大爆発。

金太郎は圧倒的な破壊力によって、そのまま煙の中から真後ろのビルへと吹き飛ばされてしまう。

「のあああああああああああ！！！！！！！！！！」

金太郎はそのままビルの窓ガラスを突き破って、中へと不時着する。

白鴎は一度深呼吸をすると、金太郎の様子を確認する為にビルの中へと向った。

その頃、ビルの中では金太郎が満身創痍の状態で大破したアックスオーガを持ちながら徐に体を起こそうとしていた。

「げっほ！！げっほ！！げっほ！！！」

すると、異形の姿へと変貌を遂げた白鴎が金太郎に向ってコンボイを向けて突進していった。

「うおおおおお！！！！！！！！」

〈Ｐｒｏｔｅｃｔｉｏｎ〉

危機を感じたアックスオーガはオートで金太郎の身を守るために防御を展開しようとしたが、肝心の防御魔法が全く発動しないことに気付いた。

「！バリアが・・・生成できない！？」

「貰ったあああああああ！！！！！！！！」

白鴎は渾身の力で右手の鉤爪を金太郎の腹部に向けて突き刺し、金太郎はそれを喰らった瞬間口から血を流して後ろの壁へと激突する。

「がっは！！！！」

金太郎に己の渾身の一撃を加えることに成功した白鴎は、息を上がらせながら砂埃が立ちこめる壁の方を凝視する。

「はっ、はっ、はっ、はっ、はっ、はっ、はっ。」

煙が晴れると、金太郎は腹部と口から多量の血を流しながらすっかりその機能を果たせなくなったボロボロの防護服と右手に握られた無惨に大破したアックオーガが握られていた。

「うっ・・・!!身体が・・・うご・・・か・・・ん・・・!!」

そんな血塗れの金太郎にゆっくりと近付きながら、白鴎は大破したアックスオーガを一瞥しふとこう口にしたのであった。

「・・・アックスオーガ。まさかとは思ってたが、こんなオヤジの手に渡っていたとはな。」

「(!何故・・・何故この者がアックスオーガのことを!?)」

金太郎自身も白鴎のその言葉には度肝抜いた。

「封印処理がされているようだが、別段問題はないだろう。悪いが、あんたに恨みはないが・・・ここで消えてもらうぜ。」

そう言うと、白鴎は徐に右腕を振り上げると鉤爪を伸ばして最後の攻撃を加えようとする。

金太郎は思うように動けない体でありながら、何とか攻撃をしようと大破したアックスオーガを険しい表情を浮かべながら白鴎に向けるが、やはり力が入らなかった。

「(こ・・・こんな終わり方で・・・いいのか・・・?私はまだ・・・終わるわけにはいきません・・・鬼太郎・・・浦太郎・・・店長!!)」

金太郎は心の中で自分が普段から大切に思っているユーノやスクライア商店メンバーの顔を思い浮かべ一瞬だけ、死を覚悟し目を瞑った。

と、その時・・・――――思いもよらぬ出来事が金太郎の目の前で起こった。

金太郎が何時までたっても仕掛けられてこない白鴎の攻撃に疑問を抱き、目を開けた瞬間・・・金太郎の目の前には白鴎の鉤爪を斬魄刀“烈火”で防御する鬼太郎と、傍らにはユーノが金太郎の周辺に防御を展開していた。

「は！」

思わぬ援軍に驚きを隠せなくなる金太郎に対し、白鴎の攻撃を受け止めている鬼太郎は振り返りこう口にした。

「けっ！随分情けねぇ姿じゃねぇか・・・熊！」

金太郎が自分のことを小馬鹿にする鬼太郎の姿を凝視していると、傍にいたユーノが話しかけてきた。

「ごめん、金太郎。遅くなった。」

「店長・・・それに・・・鬼太郎も！？」

「何だお前ら・・・このオヤジの知り合いか？」

そう言うと、白鴎と鬼太郎は互いに武器を離すと距離を取り構えを

取る。

鬼太郎は鼻で笑いながら刀身に炎を灯し、少年に向ってこう言った。

「へっ！知らねぇな・・・んな奴のことはな！」

振り子は動き出した――――――

未来へ未来へと動き続けていた物語は、一度路線を変更して別な物語を語り出す。

そして、彼らが辿り着く終着点は何所にあるのか？

振り子は何所で止まるのか――――――？

血塗れの記憶・蘇る自由者達（後書き）

教えて、ユーノ先生！

ユ「今回はキーワードであるパトリオットについてね♪」

ユ「これは元々の由来が愛国派の意のパトリオットから来ていて、アメリカ独立革命に際して独立を主張した人々をいう。」

ユ「彼らは本国イギリスよりも『アメリカ』という国を愛するという意味でこうよばれ、本国の政策に同調する『ロイヤリスト』Ｌｏｙａｌｉｓｔｓ（国王派）に対抗して、革命前の反本国運動を展開したんだ。」

ユ「今回の場合のパトリオットって言うのは、新たに出現した謎の魔導師集団の呼称の一つだけど・・・果たしてどうなるのやら・・・」

な「でも、どうして急に挿入話なんて入れようと思ったのかな？」

フェ「ネタが考え付かなくなってきたのかな？」

ユ「それもあると思うけど、作者曰く劇場版ＢＬＥＡＣＨ～地獄篇～にあやかっての物語だそうだよ♪」

一「あんまし関係はなさそうにも思えるがな。ま、兎に角みんな・・・劇場版ＢＬＥＡＣＨ、最新作地獄篇の公開を楽しみにしてくれよな！」

ユ「もしかしたら、またそれにあやかってアンゴルモア篇でも地獄篇を書くかもしれないからね♪」

ユ・な・フェ・一「応援よろしく!!」

魔導師図鑑ハイパー!

機動六課には、現在密かに恋次を中心として結成された男だけの集会がトイレで開かれていた。

恋「よう!全員集まってくれたな、コノヤロー!!（機動六課男待遇促進協会会長）」

ク「・・・・・・（クロノ、そんな恋次を黙ってみる）」

恋「・・・副会長。ぼさっとしてねぇで今日の議題だ!」

ク「ええッ!?僕がですか?!あなたまさか内容忘れたんじゃ・・・ぐっほ!!!（クロノ、殴られ顔十痣だらけ）」

ク「ほほ・・・本日は・・・”モテル男”についてだ・・・コノヤロー（機動六課待遇促進協会副会長）」

恋「使えもしねぇのにヤンキーフレーズ使うな、ボケ!!」

そして、順番に発表されていく。

ヴァ「男なら、油まみれでヘリに乗る男が一番だコノヤロー!」

恋「ダセー!!男舐めんな!!つーか、てめぇも使うんじゃねぇボ

ケ！！」

鬼「やっぱヒーローだろ、男は！でもって決めポーズは両手を前後に広げて『俺、参上！』・・・」

恋「てめぇも自分のこと自慢してんじゃね！！！」

吉「僕の考える男らしさを全て書いてきました！眼は鋭く蛇のようで、狐顔で何考えてるかちょっと分からないぐらいの感じで・・・」

恋「市丸ネタ引っ張るんじゃね！！！地獄に堕ちろ！！！」

エ「えっと！！僕はそのモテるとかそんなことよく分からないですけど・・・取り合えず、女性に優しくするのが絶対条件だと思いますけど・・・！！」

ク「そう言うとな、女と言うのは付け上がるものだ。（エイミィで実証済み）」

浦「どうだろう。ここは一度”男”という発想から離れてみたらどうかな？今は草食系男子って言うのもはやってるし・・・」

恋「”男”には拘れ！！！！ていうか、んなもん男じゃねぇ！！」

ザ「・・・狼の着ぐるみ・・・」

恋「うるせー黙っとけ、狼もどき！！！」

そんな、難航するトイレでの話し合いを偶然目撃したユーノは資料片手に何をやっているのだろうと呟いていたそうな。

パトリオット強襲、砕かれたアックスオーガ（前書き）

金「それは、小さな願いでした。望んだのは平凡で静かな日々。待っていたのは、無事に事件を解決して再びやってくる店での生活。しかし、訪れたのは突然の襲撃者。出会い・戦い・強大な力・・・・・運命は今静かに動き始めて、嵐の中の心を繋げた絆を信じて。」

ユ「ユーノ・スクライア外伝　パトリオット篇・・・始まります。」

パトリオット強襲、砕かれたアックスオーガ

＞ｉ１３２７６―７０９＜

金太郎が謎の少年、白鴎に襲われた同時刻。

空座町の一角に診療所兼自宅を設ける黒崎家の中では、織姫が高校時代のクラスメイトであり一護の悪友でもある石田と電話で久々の会話を楽しんでいた

「へぇ～～～。そう、そうなんだ。ははは！！！うん、うんうん！！でも、石田君も元気そうで良かった。」

「あはは・・・僕は別段何時もと変わらないよ、井上さん。何処かの無駄に元気な死神とは違うからね。」

すると、それを横で聞いていた一護も聞こえたらしく血管を浮かび上がらせながら石田への怒りを露にした。

「てめぇ、石田・・・聞こえてんぞ！！」

『おっとこれは失礼。』

石田は受話器の向こう側で、メガネの位置を直して一護の言葉を軽く受け流す。

「ははは！相変わらず、石田君もあなたも仲が良いよね。」

「何所がだよ！？あんな陰険メガネなんか大嫌いだっつーの！！」

『なっ！？陰険メガネではない！君のほうこそ、頭の空っぽないい年下した大人が見ても恥ずかしいオレンジ頭のくせに！』

「んだと！！！これは地毛だって何遍も言ってんだろうが！！！」

一護は織姫から受話器を取り上げると、電話越しに石田と口論を始めた。

コンは呆れた様子で織姫の肩の上で一護の様子を見ていた。

「全く。一護も石田も似たもの同士だぜ。」

「あの二人はああやってお互いの中を築き合ってるんだよ、きっと。」

一方、一護達とは違い鬼太郎とユーノの二人はと言うと、緊迫した状態で白鴎と睨み合っていた。

距離をとって牽制する鬼太郎を同じように睨み付けながら白鴎は徐に鉤爪の装着された右腕を振り上げた。

鬼太郎も持ち手に力を加えながら、刀身に纏った炎を調節していく。

そんな二人の牽制を後方で虚ろな目で見つめる血塗れの金太郎と傍らのユーノ。

横には大破したアックスオーガが床に転がっている。

そして、烈火を手に取り牽制する鬼太郎を見ながら白鴎は次のように語り出した。

「あ、そう。ならどう料理しても良いってことで解釈するけど？」

「はっ！そいつは間違いだ。てめぇを料理するのは・・・この俺様だ！！」

「ちっ！てめぇ・・・名前は？」

「スクライア商店従業員兼、特定遺失物管理部機動六課嘱託局員・・・桃谷鬼太郎。」

「・・・・・・――――――」

鬼太郎の名前を聞いた白鴎は、一度口を籠もらせ鉤爪を構え直す。

「抵抗すんなら、相手になってやるぜ。俺に前置きはねぇ。最初から最後まで徹底的にクライマックスだぜ！どうする、やるか？やらねぇのか？」

鬼太郎は挑発的な態度でそう言うと、白鴎に向けて烈火の刀身を向けた。

すると、その鬼太郎の挑発を聞いた白鴎は異形の姿を維持したまま鼻で笑い誘いに乗った。

「面白い！！やってやろうじゃねぇか！！着いて来い！！」

白鴎はそう言うと、割れた窓ガラスから再び結界が施された市街地フィールドへと移動していった。

「店長！熊のこと頼んだぜ！俺はあのクソ餓鬼にヤキ入れてくるからよ！」

「分かった。無茶はするなよ。」

「了解！行くぜ、行くぜ、行くぜ！！」

鬼太郎はお決まりの台詞を連呼しながら、勢いよくビルの中から飛び出し白鴎を追って行った。

鬼太郎が居なくなった後、金太郎は口から血を吐き出し虚ろな目でユーノに話しかける。

「・・・店長・・・」

「喋るな。持ち前の生命力で呼吸は何とか出来ているけど、臓物の幾つかは潰れてるはずだ。今は喋らなくていい。」

「・・・・・・・・・・・・」

ユーノの叱咤を貰い、金太郎は言われたとおりに沈黙する。

そして、ユーノはそんな金太郎の負傷した箇所に手を当てながらフィジカルフィールと霊圧治癒を混ぜたものを施しながら現場に駆けつけるまでの経緯を語り出した。

その間、傷は徐々に回復していき金太郎の体は元の状態へと戻っていく。

「僕の部屋のセンサーが、突然鳴り響いて・・・六課のほうで調べたら空間凍結の結界が出来てるし、場所は地球の・・・しかも金太郎のいる近辺だったから、はやてに許可を貰って急いで転送ポートに乗って飛んできたんだ。」

「・・・そうですか・・・・・・すみません・・・・・・・ありがとうございます・・・・・・」

「あれは誰？何で金太郎を？！」

「・・・私にも全く・・・皆目見当がつきませぬ・・・」

金太郎の話を聞いたユーノは、顔の筋肉を緩めて穏やかな表情にすると意気消沈する金太郎に向って優しく語り掛ける。

「そうか・・・でも、もう大丈夫だ。鬼太郎も居るし、浦太郎もいるから。」

「？・・・浦太郎も・・・・！」

金太郎は意外な人物の名前がユーノの口から発せられたことに大いに驚いた。

その頃、市街地では異形の姿の白鴎と鬼太郎による激しい攻防が繰り広げられていた。

「行くぜ、烈火！『烈火大斬撃・炎熱嵐』！！」

鬼太郎の得意の炎熱系攻撃が、足元に魔法陣を浮かべた白鴎の下に飛んでいく。

「コンボイ！」

〈デモン・メテオ〉

白鴎も負けじと鉤爪の弾倉から全弾を発射して、それを流星群の如く数で鬼太郎の炎を打ち破ろうとしてきた。

「はっ！！！」

二つの技が真正面からぶつかり合い、爆発を起こすが鬼太郎の炎が大半のデモン・メテオを全て焼き尽くし白鴎に向っていく。

「障壁！」

〈Ｂａｒｒｉｏ〉

危険を察知した白鴎は直ぐにコンボイに指示を出し、防壁を展開させる。

防壁を展開して炎の斬撃を受け止める白鴎であったが、自分の力とは又勝手の違う死神の能力とその属性に大いに困惑していた。

「くっ！こいつ・・・魔導師じゃねぇ・・・最近、機動六課に協力してるって噂の死神か・・・・・・はっ！？」

と、白鴎が炎を防いでいたその時――――――自分の真下から聞こえてくる救援に駆けつけてきた浦太郎の声。

「カートリッジロード！」

〈Ｅｘｐｌｏｓｉｏｎ〉

浦太郎はフィッシャーマンにカートリッジをロードさせると、槍の先端に竜巻状の水を発生させて白鴎目掛けてそれを発射した。

「ウェーブ・コンサバティズム！」

「ち！効くか！！んなもんが！！！」

白鴎はそう言うと、自身の魔力を一気に解放させて鬼太郎の炎を何とか退け真下から襲ってきた浦太郎の水流攻撃を鉤爪の一振りで打ち消した。

自身の技がいとも簡単に自分よりも遥かに年下の者に打ち消されたことに対して、浦太郎はかなりの衝撃を覚えた。

「なっ！（僕の魔法が・・・打ち消された！？）」

浦太郎の奇襲に対して、白鴎は業を煮やして反撃を行おうと浦太郎に突っ込んでいく。

「この！！！！！」

だが、その瞬間鬼太郎の炎熱攻撃が繰り出させれる。

「俺の必殺技・・・パート2！！！」

「！」

鬼太郎の攻撃を想定していなかった白鴎はそれに直撃し、白鴎の周囲は炎で覆われ爆発を起こした。

「先輩！」

「亀！あのガキにお前や熊の魔法は効かねぇ。あいつを叩くのは俺がやる。亀は俺のサポートに回れ！」

「了解！」

二人はそう言うと、爆炎の中から出てくる白鴎を攻撃するため武器を構え直す。

やがて、爆炎の中から出てきた黒焦げの白鴎は荒い息をしながら徐に立ち上がると頭の中で思案し始める。

「くっ！（野郎・・・よくもやりやがったな・・・！炎熱系の能力か・・・俺とは相性最悪って訳か。それにあの亀って呼ばれてるあいつも、かなりの腕と見た。ブラッド状態をキープするのには、ちとばっかし魔力を使いすぎた。一度解くしかねぇか・・・）」

すると、白鴎は今までの異形の姿であったブラッド状態を解くと、元の中学生くらいの年頃の少年の姿へと戻る。

この光景には流石の鬼太郎と浦太郎も驚いた。

「何だ、あの野郎・・・姿が人間に戻りやがった!?」

「どうなってるの!?」

二人とは別に金太郎を肩で担ぎながら遠く離れたビルの屋上から見ていたユーノは眉間に皺を寄せながら白鴎の使う魔法体系を見て確信する。

「（やはりそうだ・・・あの魔法体系は・・・!）」

一方の金太郎は少し体力と怪我が治った体で鬼太郎の隣に立つ浦太郎の姿を凝視する。

「浦太郎も来てくれたのですか・・・!?」

「従業員の危機に駆けつけるのは当然だよ。それに、なのは達も六課の指令室で状況を確認しながら、動いてると思うよ。」

同じ頃、ユーノの言う通り六課の指令室では前線メンバー各位と管制室のシャーリーたちが未知の魔法によって構成された結界の解析に手を焼いていた。

モニター画面は以前砂嵐の状態となっている。

はやては歯痒い気持ちを何とか抑えながら管制室のシャーリーに連絡を入れる。

「シャーリー、結界の解析・・・まだ出来へんのか！？」

『何とかやっているんですが、解析をしようにも魔法構成が全然分からないんです！』

中央のメインスクリーンに映し出される未知なる言語で書かれた魔法文字の羅列を見ながらクロノやフェイトは冷静な態度で次のように語る。

「・・・術式が違う・・・ミッドチルダ式でも、ベルカ式のものとも違う・・・見たこともない結界魔法だ・・・」

「おい！それってどういう意味だよ！？」

恋次は全く訳が分からない状態であったが、フェイトがそんな恋次に説明をする。

「そのままの意味ですよ。この結界は、ミッド式の魔法でもベルカ式の魔法でもない・・・管理局始まって以来、初めて見る魔法体系なんです。」

再び場所は戻って地球。

鬼太郎と浦太郎、そして白鴎の攻防は大詰めを迎えていた。

「この！！！！！」

ブラッド状態を解いた白鴎はコンボイを鉤爪で鬼太郎に向って攻撃をしようと突進していくが、隙を取られて浦太郎のバインドで体を拘束されてしまう。

「うっ！？」

ブラッド状態では浦太郎の魔法も効果はなかったが、一度状態を回帰させてしまえば無敵ではなくなるというのがこの魔法の欠点でもある。

白鴎を拘束すると、浦太郎は不敵な笑みを浮かべながらこう言った。

「もうさっきみたいなことはさせないよ。大人しく魚は釣られていなよ。」

浦太郎のバインドだけでは心配だと判断した鬼太郎は、縛道で念には念を入れておくことにした。

「縛道の四　『這縄』！」

這縄に体を絡め取られた白鴎は、その強固な拘束技を何とか破ろうともがくが、死神の鬼道とバインドを同時に解くことは今の白鴎には到底不可能であった。

「くっ！この・・・くそ・・・！！」

「けっ！漸く文字通りお縄についてくれたぜ。」

「終わりだね。君の名前と出身世界、目的を教えてもらうよ。」

勝ち誇った表情で浦太郎は白鴎に諦めて言う通りにするように語り掛ける。

「くう～～～～～～～！！！！」

白鴎もこれ以上に無いばかりの悔しそうな表情を浮かべて、ここまでかと思った・・・その時であった。

鬼太郎がふと全身から感じた悪寒に危機を抱いた。

「はっ！おい、亀！！何かヤバいぜ！！！」

鬼太郎が浦太郎に警告を入れた瞬間だった。

突然、浦太郎の目の前に夕方まで銀太郎と一緒に行動していたオーリーと呼ばれる女性が鎧に身を包んで双銃剣型のデバイス『チータス』を使い浦太郎を攻撃してきた。

「うわっ！！」

浦太郎はオーリーの奇襲を間一髪で回避すると、足元を滑らせながら後ろへと下がった。

白鴎は目の前に現れた仲間のオーリーの登場に驚愕する。

「オーリー！」

すると、今度は先程まで別行動をしていた瀬間子がグレムリンを模したブラッド状態で鬼太郎を襲撃してきた。

「うおおおおおおおお！！！！！！！」

「何！？」

鬼太郎は何とか瀬間子の拳を烈火で受け止めると、力ずくでそれを振り払う。

「くっ！！この！！！！」

その間、オーリーはチータスを天に掲げてブラッドカートリッジをロードする。

「チータス。ブラッドカートリッジ、ロード！」

〈Ｃｈｅｅｔｏｒ　ｂｌｏｏｄ　ｅｘｐｌｏｓｉｏｎ〉

オーリーはブラッドカートリッジをロードした瞬間、全身がチータのような形状へと変化してデバイスそのものが頭部へと融合を果たした。

その光景を見た瞬間、浦太郎は度肝を抜いた。

「なっ！！嘘でしょ！？」

「シューティング・ソニック！」

オーリーは身軽になった体を遣って全身の魔力を解放させながら浦太郎に目にも止まらぬ速さで突進して行き、頭部と融合を果たし角のような姿へと変貌したデバイスで浦太郎のフィッシャーマンを攻撃した。

「くっ！！なっ！？」

フィッシャーマンはオーリーの一撃によって、持ち手が真っ二つに折れてしまう。

驚愕する浦太郎を他所にオーリーは止めの一撃を加えようとデバイスを振りかざす。

「はっ！！」

その瞬間、浦太郎を守ろうと持ち手が折れたフィッシャーマンは防壁を自動展開する。

〈Ｄｅｆｅｎｓｏｒ　Ｐｌｕｓ〉

しかし、オーリーの一撃は非常に重く浦太郎はそのまま真下のビルへと思い切り叩きつけられてしまった。

「亀！！！」

鬼太郎も直ぐに浦太郎を助け出そうと動き出すが、目の前に立ちすがって来たのは瀬間子であった。

「こんの！！退きやがれ！！」

「断る！」

二人はそう言うと、再び刃と拳を交えながら激しいぶつかり合いを勃発させる。

この非常事態を屋上で見ていた金太郎は大いに戸惑っていた。

「・・・鬼太郎・・・浦太郎・・・・！」

「マズイな。助けなきゃ。」

ユーノはこの状況を見てかなり危険であるということを判断すると、回復魔法を金太郎に自動で施してくれるものと一緒に外的からの攻撃を防ぐ死神の使う結界を添加する。

「外側からは中々破れない高等結界『鏡門』。これを施しておいたから、自動回復が済むまで、金太郎は此処を動かないこと。」

「は・・・はい・・・！」

ユーノは金太郎にそう言うと、浦太郎が叩きつけられた土煙の上がるビル目掛けて空を駆けて行った。

一方、浦太郎を退けたオーリーはブラッド状態のままバインドと這縄で体を絡め取られた白鴎に向ってこう言った。

「どうした、白鴎。油断でもしたか？」

「うるせーよ！こっから逆転するところだったんだ！！」

「ブラッド状態の維持が出来ずに変身を解除した挙句、その様だ。お前はあれを何だと思ってるんだ？」

「分かってるよ！いいからこれ解いてくれよ！」

「世話の焼ける奴だ。」

呆れた表情を浮かべながら、オーリーは魔力を使って浦太郎のバインドを打ち消し、一体化したチータスの刀身で鬼太郎の仕掛けた這縄を断ち切った。

「あんまり一人で前進はしないことだ。お前が怪我でもすれば、銀太郎は目の色を変えて心配するのだからな。」

「だから、わーてっるよ！」

白鴎は何時までたっても子ども扱いする自分の将の口ぶりにかなりご立腹であった。

「ふん。それから、落し物だ。」

そう言うと、オーリーは膨れっ面を浮かべる白鴎の手に金太郎によって落とされた銀太郎から貰ったお気に入りの飾りを手渡した。

「お！」

白鴎はそれを受け取ると、破損箇所がなくなってることに気付いた。

「破損は直しておいたぞ。気をつけるんだな。」

白鴎は何時でも自分達のことを気遣ってくれるパトリオットの将であるオーリーのそんな優しさに若干照れ臭さを覚えながら、感謝の言葉を掛ける。

「・・・ありがとう・・・オーリー。」

白鴎に飾りを手渡したオーリーは、真下でぶつかり合う鬼太郎と瀬

間子の激しい戦いを見ながら冷静に状況判断を行う。

「状況は・・・実質3対3・・・1対1だろうと多人数だろうと・・・我らパトリオットに・・・」

「敵はねぇ!!」

白鴎は大声でそう言うと、オーリーと供に浦太郎とユーノが居るビルへと近付いて行った。

その頃、ユーノは浦太郎が落下したビルの最下層へと向い負傷した浦太郎の体を徐に起こしていた。

「大丈夫か、浦太郎!?」

「ええ・・・何とか・・・」

浦太郎の真横には、先程のオーリーの攻撃によって一刀両断されてしまったフィッシャーマンが横たわっていた。

「酷い・・・フィッシャーマンが・・・!」

「大丈夫ですよ。本体は傷ついていないです。これぐらいなら、修復可能です。」

〈Ｒｅｃｏｖｅｒｙ〉

浦太郎は折れたフィッシャーマンの柄を握ると、魔力を注ぎ込んで指導修復をかけて元の姿へと戻した。

フィッシャーマンを手に取ると、浦太郎は立ち上がって抜けたビルの底を除きながらユーノにこんな話をしだす。

「店長・・・この魔法の結界内から、僕達全員同時に転送することって・・・出来ます？」

「うん。霊力を使えば、どうにか。」

「僕が前に出ますから、その間にやってみてください。」

「分かった。」

浦太郎はユーノにそう言うと、念話で鬼太郎に今話したことを伝える。

鬼太郎はその間、襲撃してきたブラッド状態の瀬間子と対峙していた。

「（先輩。聞こえた？）」

「（ああ。結構面倒な状況だが、何とかしてみるぜ！）」

「それじゃあ、行きましょう！」

「ああ。」

二人はビルの底から飛び出すと、手筈通りに事を運ぶためにそれぞれのパトリオットに向って空を駆けていく。

その間、離れたビルの屋上から二人の魔力光を見ていた鏡門内の金

太郎の不安は募るばかりであった。

「・・・店長・・・浦太郎・・・」

浦太郎自身も、結界の中にいる金太郎の様子を一瞥すると、柔らかい表情を浮かべると直ぐに真剣な表情に戻してユーノと供に敵に向っていく。

さて、空座町に住まいを設ける狼谷銀太郎は彼らパトリオット達がユーノ達と激しい攻防を繰り広げていることなど、気付いてはいるがそこまで気にかけずに今晩の夕飯の仕度をしていた。

鍋に蓋を閉めて、火加減を調節しながら手馴れた様子でキャベツを千切りし、カレーに入れる人参を程よい大きさにする銀太郎。

「よしと・・・お?」

と、その時――――――懐にしまいこんでいた自分の携帯電話が鳴り響き、銀太郎は急いで着信の相手と電話をする。

「もしもし?」

『あ、もしもし銀太郎?俺、田吾作だけど。』

掛かって来たのは、１０年前から同居をしている家事全般を補佐する田吾作であった。

「あ・・・どうしたの?」

『実はさ・・・あいつらがどうも聖地への扉を開く鍵を見つけたら

しんだけど、結構苦戦してんだわ。ちょっくら俺も手伝ってくるからよ、夕飯の手伝いは出来ないからさ！』

「ああ・・・そう。無理はしないようにね。ご飯のほうは別にいいから、みんな揃って帰って来るんだよ。折角のカレーが食べられなくなっちゃうよ。」

『わーってる、わーってる。じゃ、あいつら拾って帰るから。それじゃ！』

田吾作はそう言って銀太郎と電話を切ると、携帯を仕舞い込み結界の端のほうからオーリーや白鴎達が戦闘を繰り広げている様子を見ながら、眉間に皺を寄せる。

「・・・結局・・・俺も手伝わないといけないわけか・・・面倒くせえな。エアラザー、位置捕捉、頼むぜ。」

〈Ｙｅａｈ〉

田吾作の持つワシのペンダント型の待機状態であるインテリジェントデバイス、『エアラザー』に指示を出すと、田吾作は鎧を装着してある人物の位置補足を始める。

田吾作が独自の行動を開始し始めたその頃、浦太郎はブラッド状態のオーリーと修復したばかりのフィッシャーマンを使って激しい槍撃を加えていた。

オーリー自身も魔法も何も使わずに接近戦だけで自分にこれ程の攻撃が出来る人間など見たことも無かったらしく、かなり苦戦していた。

だが、オーリー自身も魔力を大幅に上昇させては浦太郎の対して際どい攻撃を仕掛ける。

「くっ！！！」

険しい表情を浮かべる浦太郎であったが、負けたくないという一心からブラッド状態のオーリーに対して変わらず高速の槍撃を入れ続ける。

「ぬっ！！！」

流石のオーリーもこれには少々苦戦する。

何しろ、浦太郎の槍撃は同じ槍使いのエリオとは比肩にならぬほどにまで磨き上げられた槍撃の達人と呼ばれる位置に属するものなのだ。

「魔法が使えなくても、接近戦なら得意なんだよ！！」

すると、高速の槍撃を回避していたオーリーの闘争本能にも漸く火がついたのか、浦太郎に対して大技を仕掛ける。

「くっ、愚かな。」

〈Ｍａｘｉｍｕｍ　ｄｒｉｖｅ〉

一体化したチータスから聞こえてきたブラッドカートリッジをロードする合図と、必殺技の発動を示す掛け声。

オーリーは頭の刀身に竜巻を纏わせると、その竜巻の風圧を使って浦太郎を遥か彼方へと吹き飛ばしていった。

飛ばされた浦太郎は後ろのビルへと再び激突すると、満身創痍の状態でビルの中から現れ大いに怒りを露にしていた。

「この！！！！！！！！クソ餓鬼が！！！！！！！！」

怒髪天を衝くとはよく言ったものである。

浦太郎はオーリーに向ってフィッシャーマンの先端からフルパワーの水流魔法を発動させて、オーリーを攻撃したがオーリー自身はそれを直撃しても全く無傷の状態であった。

「何！？」

「・・・小技が使えない状況にしては悪くない選択だ。だが、リベルのパトリオットに白兵戦で挑んできた考えは・・・感心しない！」

オーリーはそう言うと、一瞬にして浦太郎の前から姿を消した。

「何所だ！？」

消えたオーリーを必死に捜索する浦太郎であったが、その瞬間目の前に現れたのはブラッド状態のオーリーであった。

「はっ！！！」

浦太郎は間髪居れずに攻撃を仕掛けてくるオーリーの刃をフィッシャーマンで受け止めるが、オーリーの力は常人では考えられないほ

どに強力なもので、浦太郎の顔は苦悶の表情を浮かび、フィッシャーマンも本体部分に皹が入る。

「く！！」

「チータス！撃つべし、撃つべし！」

〈Ｙｅｓ！！〉

オーリーはそう言うと、ブラッドカートリッジをロードし双銃剣型のチータスの形状を今度は銃へと変更して、銃口を浦太郎に向けて至近距離から発射する。

浦太郎はそれを回避することが出来ずに、勢いよく地面に激突し反動で口から血を吐き出す。

「ぐお！！！」

ビルの屋上から浦太郎が撃墜された光景を見ていた金太郎は大いに動揺した。

「浦太郎！！！」

浦太郎が撃墜されたその間に、ユーノは目を瞑ったまま左手に霊力と魔力を練り合わせた特殊な転移術を発動させようとしていた。

「・・・・・・――――――」

それを邪魔しようと、ユーノに突っ込んできたのは白鴎であった。

「はあああ！！！！！」

白鴎の行動を瞬時に読み取ったユーノは空いている右手で断空を発動させる。

「『断空』」

ユーノの断空が襲ってきた白鴎の攻撃を退け、二人は距離を取った。

「くそが！！」

白鴎は両腕の鉤爪を研ぎなおしながら、ユーノのことを睨み付ける。

ユーノ自身もこの状況には少々困り果てていた。

「ちっ（転送の準備は出来ているのに、これじゃあ逃げようにも逃げれない・・・鬼太郎、そっちはどう？）」

ユーノの念話を聞いていた鬼太郎のほうも、状況的にはユーノと似たようなものであった。

鬼太郎の炎熱攻撃をその体で受け止めながら、鬼太郎にそれでも向って来るパトリオット中最高の耐久性を誇る瀬間子。

鬼太郎もこの頑丈な瀬間子の体には大いに手を焼いていた。

「（こっちも似たようなもんっすよ。このクソ鬚、意地でも俺達を帰す気はないようでっせ！）」

そして、そんな二人よりもずっと深刻な状況に立たされている浦太

郎は叩きつけられた地面から真上のオーリーの様子を見ながら一人考察をしていた。

オーリーはその間、ブラッドカートリッジを再装填していた。

〈Ｌｏａｄ　ｂｌｏｏｄ〉

浦太郎も漸くあれの存在に気付き、一人考え込む。

「（あれだ・・・あのカートリッジ・・・あの妙なカートリッジの所為で、魔法が一切発動できないでいるんだ・・・おまけに、己の姿を変化させ能力を爆発的に高めるあの力・・・）」

すると、そんな浦太郎の姿を見下ろしていたオーリーは浦太郎に対してこう告げる。

「終わりか？ならばじっとしていろ。抵抗しなければ、命までは取らん。」

「誰が！！増せガキが調子こいてるんじゃねぇよ！！！」

自分よりも年下の子供、それも女性に上から目線でそのようなことを口にされてしまい浦太郎の立場もプライドは大いに傷つき、怒りが更に湧いていった。

「ふん。いい気迫だな・・・私はリベルのパトリオット、ダイシーの末裔・・・狼谷銀太郎の右腕、オーリー・エンダ。そして、我が双銃剣チータス。お前の名は？」

「・・・元時空管理局地上本部・・・首都防衛隊陸戦部隊所属。そ

れで今は、スクライア商店従業員兼機動六課嘱託魔導師、亀井浦太郎。こいつは相棒のフィッシャーマン！」

浦太郎はオーリーの正面にやって来ると、自分の名前と経緯、そして自分の相棒であるフィッシャーマンをオーリーに見せ付けた。

「・・・亀井浦太郎・・・それにフィッシャーマンか・・・」

そう言うと、オーリーは構えを取ると浦太郎と牽制をし合い・・・そして、両者は再び白兵戦を繰り広げる。

ユーノ・浦太郎・鬼太郎の三人がそれぞれの相手と孤独な戦いを強いられる中、勝手の違う未知なる敵の実力に苦戦をする鬼太郎と浦太郎。

「のああ！！痛て！！！」

鬼太郎は不意を衝かれてしまい、勢いよく瀬間子の拳に直撃してしまいそのまま地面へと叩きつけられてしまう。

ユーノも杖を引き出して封印状態のまま白鴎の攻撃を防いでいるが、その顔に余裕の一文字は無かった。

そして、浦太郎のほうも以前劣勢である状況に変りはなかった。

「この！！！」

「はあああああ！！！！！」

三者の凄まじい勢いで繰り広げられる戦闘の様子を、鏡門の中から

黙って見つめていた金太郎のであったが流石に状況が状況だけに、これ以上じっとしているこが出来なくなった。

「くっ・・・助けなくては・・・うっ！！」

何とか体を動かそうとするものの、まだ完全には治癒されていないために金太郎は走ってくる痛みに苦悶する。

「私が・・・店長達を・・・助けなくては・・・！！」

金太郎がそう口にした時だった。

大きな損傷を受けてしまったアックスオーガの本体部分から声が聞こえてきた。

〈Ｍａｓｔｅｒ〉

「！アックスオーガ！？」

〈Ｕｌｔｉｍａｔｅ　ｆｏｒｍ　ｅｘｐｌｏｓｉｏｎ〉

すると、アックスオーガは金太郎の意思とは関係なく残っていたカートリッジを全て装填させ自身の最強形態であるアルティメットフォームへと変貌。

「・・・アックスオーガ・・・お前・・・」

〈Ｐｌｅａｓｅ　ｄｏ.　Ｔｈｅ　ｓｗｅｅｐ　ｏｆ　Ｈａｄｅｓ〉

金太郎はアックスオーガの口から発せられた技の名前を聞いた瞬間、

目の色を変えた。

「ば、バカを言うんじゃない！そんな状態で・・・！！」

〈Ｉｔ　ｉｓ　ｐｏｓｓｉｂｌｅ　ｔｏ　ｄｏ.〉

「あんな自滅覚悟の魔法・・・・・・アックスオーガが壊れてしまうかもしれぬのだぞ！」

〈Ｉ　ｂｅｌｉｅｖｅ　ｉｎ　ｍａｓｔｅｒ〉

「・・・・・・――――――」

アックオーガの思わぬ負とことに、金太郎は言葉を詰まらせる。

〈Ｔｒｕｓｔ　ｍｅ　Ｍｙ　ｍａｓｔｅｒ〉

金太郎はアックスオーガの言葉を聞き入れると、覚悟を決めた。

「・・・分かった・・・お前が私を信じるというのであれば、私もお前を信じよう。」

金太郎はそう言うと、残っていた魔力を一回りも大きくなったアックスオーガ全体に流し込みながら念話でユーノ達全員に指示を出した。

「（店長、鬼太郎、浦太郎。私が“ハデスの一振”りで、この結界を破壊します！その間に店長は転送を！！）」

ユーノを含め、鬼太郎や浦太郎は大いに驚いた。

何故なら、金太郎の使おうとしているハデスの一振りとはなのはで言うところのスターライトブレイカーと同じものであり、絶大な威力を発揮する代わりに術者とデバイスに尋常ならぬ負担を強いる魔法である。

「（く、熊!?）」

「（金太郎・・・大丈夫なのか?あれはお前の最後の切り札。絶大な破壊力を持つ分、お前とアックスオーガには尋常ならない負担が生じるんだよ。）」

「金ちゃん・・・・・・」

「（ご心配には及びません。私を誰だと思っているのですか?元時空管理局本局、武装隊名誉元帥・・・熊谷金太郎ですぞ!）」

金太郎は念話で三人にそう言うと、アックスオーガに指示を送る。

「アックスオーガ!エクストリームチャージ!!」

〈Ｅｘｔｒｅｍｅ　ｃｈａｒｇｅ〉

その瞬間、アックスオーガに刃に集まっていくこれまでに無い魔力の増大。

これには流石のパトリオット達三人も大いに困惑した。

「何だ・・・!?」

金太郎の突然の行動に訝しげな表情を浮かべてるオーリーだが、そんあオーリーに対して攻撃を入れてくる浦太郎。

「余所見をするな！！」

オーリーは何とかそれを回避し、金太郎の動きに警戒をする。

また、ユーノと対峙していた白鴎も言い知れぬ不安と言うものを感じしていた。

「あれは！？」

そんな白鴎に向ってユーノは冷静な表情で逃げることを勧める。

「逃げたほうが身のためじゃないのかな？」

そして、瀬間子のほうも金太郎の最大魔法に非常に強い警戒心を抱いていた。

すると、鬼太郎は金太郎のほうに目が行っている瀬間子に向って斬撃を喰らわせる。

「せりゃあああ！！」

「うっ！！」

瀬間子は鬼太郎の攻撃を受け止めることが出来ずに、ビルのほうへと叩きつけられた。

三人が何とか時間を稼いでいる間に、金太郎は魔力をアックスオー

ガに集束させるが肝心のアックスオーガのほうは損傷が大きかった所為もあり、パワーチャージが難しくなっていた。

「アックスオーガ・・・大丈夫か!?」

〈Ｎｏ　ｐｒｏｂｌｅｍ〉

金太郎の期待に応えるべく、アックスオーガはどうにか魔力をチャージし終え、何時でも発動できる体制となった。

金太郎も漸く、攻撃が出来ることに安堵し大きく構えを取るとハデスの一振りを発動させるべくアックスオーガを振り上げた。

「行きます・・・っぐほ!?」

だが、その時・・・――その場に居た全員の時間が止まった。

「き・・・金ちゃん・・・!?」

浦太郎はオーリーと共に、金太郎の身に起こった異常に目を疑った。

金太郎は目を見開きながら、自分の胸の中心から突き出した鳥の鉤爪のような腕に絶句しながらアックスオーガを振り上げたままだった。

「は・・・・・・はっ・・・・・・・・!!??」

この技を発動させた本人である田吾作は、やってしまったと言わんばかりの表情を浮かべながら対象を変更させる。

「しまった！こいつじゃねぇよ。こっちこっち。」

田吾作はそう言うと、異空間に手を入れなおすとアックスオーガに取り付けられていた装飾を強奪し、アックスオーガに損傷を与えてしまう。

「アックスオーガ！！」

金太郎もアックスオーガから奪い取られたものを見ながら、輝が入っていくアックスオーガに危機感を覚えた。

「金太郎！！」

「金ちゃん！！！！！！はっ！！」

ユーノや浦太郎が直ぐに金太郎に駆け寄ろうとしたが、行く手を阻むオーリーと白鴎。

そして、アックスオーガはパーツの一部を奪い取られてしまったことによって非常事態信号を発していた。

〈Ｅｍｅｒｇｅｎｃｙ　ｅｍｅｒｇｅｎｃｙ〉

そんなアックスオーガのパーツの一部を奪い取った田吾作はそれを確認すると、懐にしまいこんだ。

「悪いけど、聖地への扉の鍵は・・・ちゃんと貰っていくぜ。回収っと！」

金太郎は田吾作から受けた妙な攻撃によって、折角回復しつつあっ

た臓物がまた一つ潰れてしまい、よろよろの状態であった。

「アックスオーガ！！！くっ・・・まだまだ・・・負けては居られませぬ！！！！」

金太郎は何とか最後の力を振り絞って、アックスオーガを天高く振り上げハデスの一振りを発動させようとする。

〈Ｔｈｅ　ｓｗｅｅｐ　ｏｆ　Ｈａｄｅｓ〉

「・・・くっ・・・！！ハデスの・・・」

金太郎は険しい表情でアックスオーガを握りしめながら、流れえる血を一切気にすることなくアックスオーガを振り切った。

「一振り！！！！！！！！！」

その瞬間、アックスオーガの刃から放たれる尋常ならぬ破壊力を秘めた魔力がスターライトブレイカーの如く広がり、リベルの魔法で形成された結界であるにも関わらずそのことも無視して結界を破壊した。

結界が破壊されたことによって、ミッドの機動六課の指令室のモニターにも漸く画像が映し出されようとしていた。

「結界、破れました！」

「映像、来ます！！」

全員がモニターに映し出される映像に注目すると、今までの戦いの

経緯や敵の姿・魔法などの一部始終がはっきりと映し出されたが、その光景を見たなのは達は唖然としてしまう。

「何これ!?一体どういう状況!?」

「これは・・・こいつらは・・・一体!?」

金太郎とアックスオーガは最後の力を使い切ってしまったことによって、お互いに限界を迎えてしまいそのまま倒れて動かなくなった。

アックスオーガは完全に粉々に砕け散ってしまい、魔法を行使することは不可能となってしまった。

一方、結界が破られたことにパトリオット達は大いに驚いていた。

「（結界が抜かれた!?何なのだ、あやつのあの魔法は!?）」

「（だけど、助かったぜ。ありがとな、田吾作。）」

「（世話かけさせやがって。一端散って、また集合。何時もの場所で合流だ。）」

四人はそれぞれの転送魔法を使って、銀太郎の下へと帰還して行った。

パトリオット達の動きを捉えるために、管制室のシャーリーやアルト達はタッチパネルを叩きながら何とか補足をしようとしていた。

「ああ!!!逃げる!!!ロック急いで!!!転送の足跡を!」

「やってるんだけど！！」

四人が居なくなった後、前線メンバー各位はこの事件の犯人と思われる彼ら四人のパトリオット達の姿に驚愕していた。

「年端もろくにいかない・・・中学生ぐらいの子供が・・・この事件の犯人だと！？」

「僕やキャロと同い年ぐらいだね・・・」

「うん・・・」

そして、なのははモニター画面に映し出された金太郎の姿を見るなり目の色を変えてはやてに懇願する。

「いけない。金太郎さんが・・・！八神部隊長、急いでシャマル先生を現地に飛ばしてください！」

「了解！高速転送ポート、開放や！」

その後、はやては六課内のバックヤードスタッフに連絡を入れて補足を加える。

「それから、大至急本局内の医療システムの手配を！」

『了解です！』

そして、管制室のシャーリー達の方も結局パトリオット達を捕捉する事は叶わなかったらしく、ルキノは小さい声でシャーリーにこう告げた。

「駄目！ロック、外れちゃった！」

「ああ・・・もう！！！くっ！！」

シャーリーは悔しさの余り、机を叩いた。

その後、申し訳なさそうな表情を浮かべてはやてに連絡を入れる。

『すみません、八神部隊長、クロノ提督・・・しくじりました・・・』

「仕方ない。一先ず此処はユーノ達の回収が済んでからだ。（それにしても・・・あの魔法陣といい・・・カートリッジといい・・・姿といい・・どれも僕らが見たこともないものばかりだ・・・一体何者なんだ、あいつらは！？）」

クロノのそんな疑問を他所に、現地のユーノ達は負傷した金太郎の傍に駆け寄り意識をはっきりさせようとしていた。

「おい、熊！！しっかりしろ！！熊！！」

「金ちゃん！！目を覚ますんだよ、金ちゃん！！」

「くそ！まだ死なせてたまるものか！！待ってろ、金太郎！」

瀕死の重傷を負ってしまった金太郎と、原形を留める事も無くなったアックスオーガ。

アックスオーガから奪い取られたものとは何か？

そして、彼らパトリオットの目的は何なのか！？

事件は――――――――今、動き出していく。

教えて、ユーノ先生！

ユ「今日は、本編よりも先にブラッドカートリッジについて教えちゃうよ♪」

ユ「これは、通常のカートリッジシステムとは違い動力源に優秀な魔導師や魔導生物の血を配合させているんだ。」

ユ「発動させると、術者の姿を素材となったものの生物へと変貌させて、更にはミッド式とベルカ式の魔法を打ち消す能力を手に入れることが出来る。そして、ブラッドカートリッジを使ったときのことをブラッド状態と呼ぶんだ。」

金「恐ろしい力ですな・・・店長、私のアックスオーガはどうなるのでしょうか！？」

ユ「次回を見ないと何とも言えないかな・・・」

鬼「心配すんなよ、熊。お前と同じで無駄にしぶとい奴だからよ！」

金「無駄とは何ですか、無駄とは！？」

魔導師図鑑ハイパー！

とある日、恋次と吉良はこんな会話をしていた。

恋「そう言や、ユーノのあの髪留め・・・・・・昔なのはがガキの

頃使ってた奴なんだよな？」

吉「聞く所によると、もう十年以上愛用してるらしいね。」

恋「それにしちゃ、長持ちしすぎだろ？」

そう言うと、恋次は自分の手ぬぐいの方に目線を向ける。

恋「俺だってこの手ぬぐい、かれこれ百年以上使ってきてるから流石に匂いがきつくてな・・・」

そんな真顔の恋次をみながら吉良は冷静にこう口にする。

吉「君も人のこと言えないでしょうが・・・て言うか、そんな爆弾発言をこの場でしないでくれるかい・・・」

退魔の魔法・吹き荒れる戦いの嵐（前書き）

浦「それは、小さな願いだった。笑いを交わすこと。何気なく心を触れ合うこと。だけど、僕達を迎えたのは新たなる脅威との戦い・・・奪われてしまったもの・・・傷ついてしまった僕らの相棒。はっきりとは掴めてない、戦うべき相手と・・・自分達の為すべき事。それでも、僕達は・・・・・・」

ユ「ユーノ・スクライア外伝　パトリオット篇・・・始まります。」

退魔の魔法・吹き荒れる戦いの嵐

＞ｉ１３２７７―７０９＜

８月４日　ＰＭ８：４５

時空管理局本局

瀕死の重傷を負った金太郎は機動六課前線メンバーと共に、本局の医療施設まで訪れていた。

直ちに緊急呪術が開始され、およそ2時間にも及ぶ手術は無事に終了した。

幸いにも、ユーノが事前に行った応急措置のお陰で体にダメージが残ると言うことは無かったが、動けるまでには相当な時間がかかるとのことだ。

現在、手術を終えた金太郎は本局の医療施設のベッドで深い眠りについていた。

そんな金太郎の術後の経過と、破損したアックスオーガのことをな

のははエレベータの中でフェイトに話していた。

「検査の結果、驚異的な生命力で潰れていた臓物も全て元に戻ったようだよ。ただ、金太郎さんのデバイス、アックスオーガに組み込まれていた何かが抉り取られたようで、異様なほど魔力値も低下してる状態。」

「そっか・・・今は、アックスオーガはどうしてるの？」

「うん・・・ユーノ君が取りあえず修復作業に取り掛かってるところ。浦太郎さんのフィッシャーマンも相当なダメージを受けたみたいだから、時間はそれなりにかかると思うよ・・・」

「そうだね。それより、あの子達のことだけど・・・」

フェイトは複雑な表情を浮かべると、六課のメインスクリーンで見た今回の事件の関係者であるパトリオット達のことを思い出す。

「年頃的には、エリオ達と同じくらいの・・・ちょうど中学2年生って感じの子だったね。あんな子供が、何故こんな事を？」

「クロノが現在（いま）、調査団に依頼して追跡を開始しているけど・・・まだ詳しい情報は掴めないまま。それと気がかりなのは、あの魔法体系・・・」

フェイトはなのはにそう言うと、薄ら覚えではあるがパトリオット達が操っていた自分達の使う魔法体系とは全く違うものに脅威を感じていた。

「ミッド式とも、ベルカ式とも違う・・・まったく別の魔法・・・

あんなもの、一体誰が創ったんだろう?それを使ってあの子達は何をしようとしているんだろう!?」

「謎が謎を呼ぶね。今回の事件・・・流れ的に六課に回ってきそうだね。」

「仕方ないよ、なのは。事件の当事者が金太郎さんだったわけだし、身柄を確保しているのは機動六課で間違いないんだし。」

「アンゴルモア捜査がまだ続く中で今回の事件・・・果たしてどんな結末になるのか、想像もつかないね。」

複雑な表情を浮かべたままのなのはとフェイトは、今回の報告を持って一度総括官であるリンディ・ハラオウンの下へと急ぐのであった。

その頃、本局の医療スタッフが廊下を往来する中、手当てを終えたばかりの浦太郎がルキアと供に治療室から出てきた。

「それにしても、運が良かったな。怪我がその程度で済んだのだ。」

ルキアはそう言うと、浦太郎の右手に巻かれた包帯を一瞥する。

金太郎とは違い、バリアジャケットに護られていた浦太郎は手首の軽症と全身の打撲ほどで事が済んだのだ。

「全くだよ・・・あのガキ・・・手加減してやがったな・・・」

浦太郎はそう言うと、険しい表情を浮かべてあの時のオーリーの攻撃を今一度思い出していた。

「舐められたものだな。余程の自信家であることは間違いなさそうだな・・・連中は。」

「く～～～～！！！！あのガキ！！！！今度会ったら絶対倍返しにして叩きのめしてやる！！！！」

浦太郎は込み上げてくるこれ以上ない悔しさと恥辱を胸に、オーリーとの再戦を強く渇望するのであった。

その頃、午後１０時を回ったところで漸く目を覚ました金太郎はシャマルによる精密検査を受けながら何所か思い詰めた顔をしていた。

「う～～～～～～ん・・・・・・・・ほんと恐ろしいぐらいの回復力だわ、金太郎さん。あれだけのダメージを受けたのにもう傷が塞がってきてる。」

「頑丈なだけが取り柄ですからな。」

すると、そんな二人の下にやって来たのは浦太郎とルキアであった。

「あ、浦太郎さん。ルキアさん。ちょっと、金太郎さんのことよろしくね。」

「分かりました。」

「了解♪」

「それじゃあ、また後で来ますから。」

シャマルは金太郎にそう言い残すと、駆け足で本局の廊下を走って行った。

シャマルが出て行った後、部屋には重苦しい雰囲気が漂い金太郎と浦太郎は互いに目を逸らして中々言葉を発しようとはしなかった。

ルキアもこの光景には溜め息すらも出なかったが、暫くすると浦太郎が複雑な表情で金太郎に話を吹っかけてきた。

「金ちゃん・・・・・・その・・・・・・」

すると、そんな浦太郎を見た金太郎は次のような相槌を打つ。

「・・・そんな渋い顔をしなくてもいい。全ては私の甘さが招いた結果だ。浦太郎には何の落ち度もない。お前こそ、怪我は大丈夫なのか？」

「僕のほうは、掠り傷みたいなもんだよ。こんなの全然♪それより、金ちゃんは・・・！？」

「この通り平気ですぞ。ただ、少々眼鏡が重態ですが・・・ははは・・・ん？浦太郎・・・如何なさった？」

作り笑いを浮かべながらひび割れた伊達の眼鏡をかけ直す金太郎であったが、そんな金太郎の瞳に映って来たのは、後悔の念で顔をしかめた浦太郎だった。

「・・・くっ・・・・！！」

「！浦太郎・・・おっと！！」

金太郎はそんな浦太郎を見ていられずに、体を起こして浦太郎に近付こうとしたが体は未だ回復はしていないために直ぐに足元がオおぼつき倒れそうになった。

「あ！金太郎殿！！」

「金ちゃん！！」

二人はその場に倒れそうになった金太郎の体を支えて、その場に立たせる。

「す、済まぬ。まだ体の調子がよくないみたいだ・・・」

「臓物が潰れておったのだ。無理もないですよ。」

「金ちゃん・・・あんた・・・」

すると、そんな浦太郎に向って金太郎は軽く微笑むと礼を口にする。

「ふん。助けに来てくれて、有難うな。それから・・・鬼太郎も。」

金太郎はそう言うと、誰も居ない筈の後ろの壁のほうに目線を向けた。

その瞬間、忍者の如く壁と同化していた鬼太郎が三人の前に姿を現した。

「うっ！？ち、気付いてたのかよ・・・」

浦太郎とルキアは鬼太郎の思いもよらぬ登場にかなり驚いた。

「そんなところに居たの、先輩！？」

「忍者か、貴様は！？」

「う、うるせーな！大体、熊に感謝されてもちっとも嬉しくないんだよ！気持ち悪くて寒気が走りくらいだ！」

鬼太郎は若干頬を赤らめると、腕組みをしたまま金太郎から目線を遠ざけた。

それを見ていたルキアが鼻で笑うと、次のように口にした。

「ふん。素直ではないな、貴様は。」

「！！だから違うって言ってるだろうが！！！」

鬼太郎はルキアの言葉を聞いて、思わず猛反論をしたが三人はその後、そう言う鬼太郎の素直ではない性格を少々からかったとか。

やがて、服に着替えた金太郎はルキア達と一緒に現在ユーノやなのは達全員が集まる本局のデバイスルームへと向った。

ユーノは真剣な表情で大破したアックスオーガと浦太郎のフィッシャーマンの修復作業に取り掛かっていた。

全員が無事に修復されることを祈ってその様子を見ていると、デバイスルームのドラが開き、金太郎達四人が中に入ってきた。

「お！」

「金太郎！浦太郎！それにピーチも！」

白鳥は金太郎達を見るなり、心なしか嬉しそうな表情を浮かべ名前を口にしたが鬼太郎だけは不機嫌な顔をした。

「だ・か・ら、俺は鬼太郎だって言ってるだろうがこの焼き鳥野郎！！」

「まぁまぁ。兎も角、無事に歩けるようになってなによりですよ。」

吉良がそう言うと、全員は金太郎や浦太郎の方を見て安堵の表情を浮かべた。

浦太郎はそんな全員の顔を見ると、少し照れた様子で感謝の言葉を口にする。

「ありがとう・・・みんな。」

すると、金太郎は無言のままアックスオーガの下へ徐に近付いていった。

「？金太郎・・・・・・」

「熊・・・・・・」

全員が金太郎に注目する中、金太郎は謝罪の言葉を口にしながらアックスオーガのほうを凝視する。

「・・・済まない・・・アックスオーガ・・・私の力が及ばないために、お前が傷ついてしまうことになるとは・・・！！」

「金太郎殿・・・」

クロノはそんな金太郎を見ながら、ユーノに二機の破損状況を尋ねる。

「破損状況は？」

「正直・・・あんまりよくない。今は自動修復をかけてるけど、基礎構造の修復が済んだら・・・一度再起動して、部品交換とかしないと。」

「・・・そうか・・・」

すると、スバル達フォワードメンバーは大破したアックスオーガやフィッシャーマンを見ながら未だに信じられないと言わんばかりの表情を浮かべてこう口にする。

「でもまさか・・・金太郎さんや浦太郎さんのデバイスをここまで粉々にするなんて！？」

「ああ・・・あやつら・・・かなり強い。それに、あんな魔法も見たことがなかった・・・」

「確かにな・・・なぁ、ユーノ。あの連中の使ってた魔法のついて何か知らないのか？」

ヴィータがそう尋ねると、ユーノは徐にこう答えた。

「あれは恐らく・・・“リベル式”だ。」

「リベル式!?聞いたことも無いぞ、そんなもの。」

クロノやなのは達はユーノの口から話される聞きなれぬ魔法体系にキョトンとする。

「知らなくても無理はないよ。リベル式は、ミッド式とベルカ式とは別にある特定の人間達が独自に創り出した、“退魔の魔法”なんだ。」

「退魔の・・・魔法!?」

「どういうことですか、それ?」

「リベル式とは、嘗てミッド式とベルカ式の魔法を操る二つの対立する魔導師達によって被害を受け、命を落とした者達を偲び、両者を決して許さないという人々が集まり二つの魔法を消し去る力を研究し始めたのがその始まりと言われ、その研究の末に辿り着いた解(こたえ)・・・それがリベル式だよ。遠距離や広範囲攻撃は勿論、対人戦闘にも特化した魔法体系で、それを使いこなす者は、“パトリオット”と呼ばれる。」

「そう言えば、あの女の子・・・自分のことをパトリオットって言ってたかな。」

浦太郎は今までのユーノの話を聞いて、オーリーがあの時自分を指して言った言葉を思い出した。

「最大の特徴は、ベルカ式のカートリッジシステムに倣って独自に開発された“ブラッドカートリッジシステム”と呼ばれる武装。」

「ブラッドカートリッジシステム！？」

「優秀な魔導師や強力な力を持つ魔導生物から採取した血液を儀式で圧縮した弾丸と一緒にデバイスに組み込むことで、半永久的に規格外な魔法破壊能力を得る・・・言ってみれば、カートリッジシステムの極み・・・そして、ブラッドカートリッジが発動している間・・・ブラッド状態って言うんだけど、ミッド式もベルカ式の魔法も打ち消す力を有する。」

「成程。あれはそう言うことだったのか・・・・・・」

一連の話を聞き終えた鬼太郎や全員は納得した表情を浮かべるが、金太郎は話を理解したところでアックスオーガへの無念が晴れることは無かった。

「・・・アックスオーガ・・・」

「そのうち、本局からの今後の動きに関して連絡がくると思う。多分、私らがこの事件の担当になると思うけど・・・」

「果たして、無事に解決できるかどうか・・・」

はやての言葉を聞いたシグナムはざらにも無く不安げな表情を浮かべる。

そんなシグナムに喝を入れるヴィータ。

「やってもいいねえのに弱気な発言はやめろよ！」

だが、シグナムだけが不安なのではない。

六課前線メンバー全員がこの未知なる脅威にどう立ち向かうか、不安で仕方が無いのは自明の理だった。

「リベル式・・・・・私達の魔法を封じる魔法・・・」

「何所までやれるか分からないけど・・・必ず止めよう。」

「「「「「はい！」」」」」

なのはの言葉を聞いて、スバル達フォワード五人は決意の返事をする。

その後、一時各所に分かれて行動をする機動六課のメンバー。

ユーノは作業を一度中断すると、クロノと供に本局に設けられた自動販売機でお茶を購入し口に運ぶ。

すると、そこへシャーリーが二人の前に現れる。

「ユーノ先生。クロノ提督。」

「ああ。シャーリーか・・・」

「頼んでいたアックスオーガとフィッシャーマンの部品、今さっき発注してきましたよ！今日明日中には揃えてくれるそうですよ。」

「うん。ありがとう、シャーリー。」

「それで・・・クロノ提督の方には多分連絡が来てると思うんですが、先程正式に今回の一件が六課の担当になりました。」

「やっぱりか。あれ?でも、今クラウディアは整備中の筈だろ?」

「その通りだ。でだ・・・ユーノ。お前に一つ頼みたいことがある。ビルゲイツをこの事件が終わるまで使わせて欲しい。」

「そう来ると思ってたよ。悪いが、あれも整備中なんだ。今は動かせないよ。」

「そうか・・・だがそうなると・・・」

クロノは顎に手を添えると、別の空いて居る次元航行船が無いかどうかを考える。

すると、そんなクロノに対してユーノは意外な言葉を口にする。

「心配は要らないよ。ビルゲイツは無理でも、別な奴を使わせてあげるからさ。」

「え!?別な船があるんですか!?」

クロノと一緒に話を聞いていたシャーリーも驚愕の表情を浮かべる。

「ちょっと着いて来なよ、二人とも。格納庫に閉まってるあれを見せるから♪」

ユーノは早速二人を一度六課の方まで連れていくと、地下格納庫に閉まっていたナキサワメの隣にある壁を取り外して問題のものを見せる。

「さぁ、これだよ。」

カバーを取り外して、それを見た瞬間シャーリーは興奮を抑えきれなくなった。

「わっほ！！！！！！」

「また何時の間にこんなものを・・・！」

それとは対照的にクロノは唖然としながらその巨大な船を見上げたのであった。

大きさは、ビルゲイツと同じくらいではあったが細部の装飾がかなり違っていた。

それぞれの反応を見せる二人にユーノは早速この船の名前と機能説明を始める。

「高速転槽射出母艦アクトン。ビルゲイツとはまた違い、カタパルト移動基地であると同時に磁力反発式射出装置・ミラーカタパルトを搭載した飛行甲板空母だよ。これを事件が終わるまで使わせてあげるけど、勝手にその辺とか弄らないでくれよ。」

「弄るわけないだろ。子供じゃあるまいし・・・」

「お前じゃないよ。そっち。」

ユーノは不安げな表情を浮かべると、クロノの隣に立つ目を煌めかせているシャーリーに親指を突き立てた。

「はいはい！！！分かってますよ！！！！ふふふふふ！！！！！」

メカニック兼デバイスマスターのシャーリーにとって、常にユーノの造る発明品は心を動かされるものばかりなのだ。

勿論、新型カートリッジシステムだけでなくこう言った船や戦車も例外ではないのだ。

ユーノとクロノはシャーリーのそんな嬉しそうな顔を見ると、珍しく同じことを思ったのか顔を見合わせ深い溜め息を吐いた。

「「・・・はぁ～～～・・・」」

同日　同時刻。

空座町内　狼谷家。

此処の家の主である狼銀太郎と、十年前から同居をしているオーリー以下四人のパトリオット達は静かに銀太郎と一緒に夜を過ごしていた。

暫くすると、家事当番の田吾作が銀太郎の下にやって来た。

「銀太郎、風呂の用意できたぜ。」

「うん。ありがとう。」

「ガス代がもったないないからよ、白鴎も一緒に入いっちまえよ。」

「へいへい。」

すると、ソファーで新聞を読んでいた私服姿のオーリーが白鴎と一緒にいる銀太郎に対してこう告げた。

「明日は、朝から病院だ。あまり夜更かししないようにな。」

「うん、分かったよ。」

「そんじゃ、今日は買ってきたばかりのシャンプーでも使うとするかな？あ、オーリーは風呂どうするんだ？」

田吾作がそう言うと、オーリーは新聞を畳みながら応答する。

「私は今夜はいい。明日の朝にするよ。」

「ああ、そう。」

「風呂好きが珍しいじゃん。」

白鴎も今夜のオーリーのこの発言は、かなり意外であった。

「偶には、そう言う日もあるさ。」

「じゃあ、先に入ってるよ。」

「ああ。」

銀太郎はオーリーにそう言うと、白鴎と田吾作と一緒に風呂場へと向かった。

三人が居なくなった後、部屋に残っていた瀬間子はオーリーに近付き低い声でこう言った。

「・・・今日の戦闘か・・・？」

「聡いな。その通りだ。」

オーリーはそう言うと、服をめくって浦太郎によって傷つけられた切り傷を瀬間子に見せた。

「ブラッド状態にありながら、お前の鎧を撃ちぬいたか・・・？」

「済んだ太刀筋だった。伊達に地上部隊でエースと呼ばれていただけの猛者だ、あの男は。万が一、ブラッド状態でなく武器に差がなかったとしたら・・・少々苦戦したかもしれぬ。」

「だが・・・・・・それでもお前は負けないだろう？」

「・・・そうだな・・・」

そんな二人とは対照的に、白鴎と田吾作と一緒に入浴中の銀太郎は田吾作が買って来たシャンプーで髪を洗っていたが、感触があまり気に入らなかったらしい。

「わぁ～～何このシャンプー！？頭がスースーするよ！」

「それが気持ちいいんだろう。」

「う～ん・・・僕にはよく分からないよ！」

渋い顔を浮かべる銀太郎を見ながら、白鴎と田吾作は微笑み・・・オーリーと瀬間子は中庭に出ると夜空の星を仰ぎ見ながら決意を新たにする。

「我ら、パトリオット・・・リベルの自由と誇りを取り戻すために・・・」

さて、パトリオット達による襲撃から一夜が明けた午前8時過ぎ。

ギンガが一人本局内の廊下を歩いていると、治療終えて帰宅しようとしていた浦太郎とばったり出くわした。

「あれ？浦太郎さん。」

「いや、ギンガ。昨日のことで朝まで仕事詰めだったでしょ？お腹も空いて来たところだし、どうだいこれから朝食でも？」

「あら、いいですね。じゃあ、お言葉に甘えさせてもらいます。」

ギンガは浦太郎の言葉に甘えて、朝食を頂くことにした。

また、そんな二人よりも先に六課のほうに帰還したスバル達四人は廊下で金太郎の意外な過去について談笑をしていた。

「え？金太郎さんって・・・親なしなの？」

「そうみたいだよ。何でも、６歳の頃に事故で早くに両親に死なれて・・・管理局の保護施設で育って、育ててくれた人たちに恩返しがしたいからって理由で管理局に入ったんだって。僅か数年で、名誉元帥と言うポストにまで上り詰めたけど・・・突然の辞職。金太郎さん曰く、見えてたものが見えなくなってしまったからだって言ってたけど・・・」

「見えてたものが見えなくなったか・・・けど、金太郎さんの見ていたものって何だったのかしら？」

「きっと、僕達には想像もつかないようなものだったんでしょうね。」

「でも、少なくとも守ろうとしていたものは私達と共通したところ、あると思いますよ。境遇は違えど、私達魔導師の考えって大体そういうものだと思いますから。」

「そうね・・・そう言えば、スバル。ギンガさんはどうしたの？」

「うん。浦太郎教官に食事に誘われてるから、ちょっと行って来るって。」

「食事か・・・思えば僕達もまだでしたね。」

「いい機会だし、何か食べましょう？」

「「「はい（うん）！」」」

ティアナの言葉を聞いた全員は、返事をすると早速食堂のほうへ向かって行った。

一方、フォワードメンバーが六課に戻っている間、隊長陣達は本局に留まり今後の話し合いを行うため会議を開いていた。

会議が終わった後、恋次は最終調整を受けているユーノの個人艦であるアクトンを窓越しに見ながら何となく時間を過ごしていると、丁度そこへなのは・ルキア・吉良の三人がドアの向こうからやってきた。

「恋次さん。」

「ああ・・・なのは。吉良とルキアも一緒か。」

「事件資料のほうは、ちゃんと目を通しましたか？」

「心配するな。さっき全部見たぜ。」

「しかし、今回の事件が地球を中心に起こっているとは・・・偶然か必然か・・・或いは。」

「そうだね。しかも、密集して多くの被害が出ているのは・・・なのはさん達の故郷の海鳴市。一護君達の住む空座町。そして、ユーノさんの店がある松前市の三点。」

「一応、一護さんにも連絡はしてあるので・・・もしもの時は応援に駆けつけてくれるとは思いますけど・・・相手が相手だけに、かなりの苦戦は否めませんね。」

「斬魄刀を使える俺達やユーノが事件の根幹を担うことになるが、そもそも奴らの目的は何なんだ？あんな規格外の力があって魔導師

に恨みを持つ筈なのに、何故管理局を真っ先に潰そうとしない？」

「他に何か目的があるんでしょうか？」

「彼らの目的はどうあれ、今は上からの指示を待とう。」

と、四人がパトリオット達の行動に関してあれこれ疑問を抱いていると、はやてから連絡が入ってきた。

『なのはちゃん。恋次さん。今からクロノくんが今後の六課の方針についての説明がある。ミーティングルームに集まってくれへんか？』

なのは達は直ぐに本局のミーティングルームへと向い、六課に戻っていたフォワード陣もモニター越しにクロノの話を聞くことになった。

集まった前線メンバーが真剣な表情でクロノの顔を見る中、クロノが早速機動六課の方針を全員（ヴィヴィオも同行）に伝える。

「では、我々機動六課前線スタッフは今回・・・アンゴルモア捜査から一度外れて、リベル式の魔法を操る謎の魔導師達の捜索、及びその目的の解明を主眼として捜査に当たることとなった。今回は移動性のある標的と言うことで、次元航行船に臨時作戦本部を置く予定であったのだが、肝心のクラウディアが現在使えない都合上・・・スクライア特別エグゼクティブアドバイザー個人が保有する高速転槽射出母艦アクトンに臨時作戦本部を置くこととなった。分割は、観測スタッフのグリフィス・シャーリー・アルト・ルキノの四名。」

「「「「はい！」」」」

「ティアナをリーダーとした、フォワードメンバー一同。」

『『『『『はい！』』』』』

「司令部は、僕と部隊長のはやて。スターズとライトニングの隊長陣四名。」

「俺達はどうなるんだよ？」

「恋次さん達三人は、もしもの場合も想定して空座町の一護さんと合流し駐屯。ユーノ達も一度自分の店に戻って彼らの監視を頼む。」

「わかった。」

クロノの説明が一通り終わると、はやてが前線メンバーに対してしめの言葉を口にする。

「では、以上５組に分かれて捜索を開始する。ちなみに、ヴィヴィオのほうは護衛と言うことも兼ねて、なのはちゃんのご両親のところで滞在や！」

はやての意外な発言を聞いた瞬間、なのはとフェイトの隣に挟まれて座っていたヴィヴィオは驚くや否や嬉しさの余り歓喜の言葉を口にした。

「え・・・あは！！！！やった！！！！！！！」

なのはやフェイト達全員もヴィヴィオが笑うと、自然と笑みを浮かべた。

そんな訳で、ヴィヴィオはなのはに連れられて一度海鳴市で喫茶店『喫茶翠屋』を経営する両親の下へと向った。

なのはは両親との再会に喜び、ヴィヴィオも義理の祖父母である士郎と桃子に暖かく迎え入れられた。

「「いらっしゃい！！ヴィヴィオちゃん！！」」

「へへ♪桃子お婆ちゃんも士郎お爺ちゃんも元気そうで何よりだよ！！！ついこの間、遭ったばっかりなのに何か変な感じだけど・・・」

このついこの間と言うのは、何れ番外編で語られる『機動六課の大合宿』での出来事でのことだが、今はそのことを話すのはもう少し後にしよう。

「そうね。なのはも色々大変ね。皆さんも暫くはこっちに？」

「うん。昼間は私もフェイトちゃん達とユーノ君の船にいることが多いけど、仕事が終わったらこっちに帰ってくるから。」

「そうか。じゃあ、久々に飛び切り美味いもの作ってやらないとな！」

「お母さんはりきっちゃう！ヴィヴィオちゃんも楽しみにしててね♪」

「うん！ありがとう、桃子お婆ちゃん！！」

すると、一緒に店を手伝っている姉の美由紀になのはにこう尋ねてきた。

「そう言えば、なのは？肝心のユーノはどうしたの？」

「あ・・・配置が違うから今は自分の店に戻っていると思う。クロノ君の命令で、スクライア商店メンバー一同で松前市の店で、犯人の監視を任されてるの。」

すると、それを聞いていた桃子がなのはも思わず赤面する一言を口にする。

「残念ね・・・折角ユーノ君も誘って豪勢に婚姻パーティーでも開いて挙げ様と思ったのに・・・」

「お、お母さん！！！私まだユーノ君と結婚した訳じゃないからね、言っとくけど！！！」

「何言ってるのよ。もう決まったようなものじゃないの、なのは。」

「お、お姉ちゃんまで！！！！」

なのははすっかり教導官の立場を忘れて、普通の女の子に戻っていた。

そんななのはの様子をヴィヴィオと士郎は柔らかい表情で見ていた。

「あははは。うん！今日も賑やかでいいな。はははははは！！！」

「なのはママも、嬉しそうで何より。えへ♪」

さて、同時刻。

松前市のビルの一角に佇むスクライア商店に二ヶ月ぶりに戻ってきたユーノ達商店メンバーと白鳥はと言うと、束の間の休息を過ごしていた。

鬼太郎は自分の部屋に行くなり、自分の匂いが染み付いたベッドに倒れこみ犬のようにはしゃいでいた。

「やっほーい!!!!!久々の自分のベッドだぜ!!!!!」

鬼太郎の子供のようなはしゃぎっぷりを横で見ていた浦太郎や白鳥は呆れ返っていた。

「はしゃぎ過ぎだよ、先輩。一時帰宅しただけでしょ・・・この事件が終わったらまた暫く空けないといけないんだよ。」

「いいじゃねぇかよ、亀!自分の匂いはいつだって恋しくなるもんなんだよ!へっへ!!!俺の枕ちゃん・・・寂しかったでちゅか?」

鬼太郎は赤ちゃん言葉を多用しながら、愛用の枕を愛おしそうに抱いていた。

流石にその光景には浦太郎も白鳥も、そして金太郎も鳥肌が立った。

「・・・完全に壊れているであるな・・・・・・ピーチ。」

「何時ものことです・・・放っといてくだされ・・・」

また、ユーノのほうはと言うと店先のほうでコピーロボットから渡されたこの二ヶ月における店の収入が細かく記載された明細に目を通しながら、計算をしていた。

「しかし、留守中にこんなに稼いでいたとは・・・僕も流石に予想外だった。しかも、結構な感じで駄菓子も切れてるし・・・ん？」

すると、そんなユーノの正面に映って来たのは空座町にいる一護であった。

『よう、ユーノ！そっちはどうだ？』

「一護さん！お陰様で、大丈夫ですよ。そっちはどんな感じですか？」

『見ての通り、こいつら三人が家にいるだけで五月蝿ったらありゃしねえ・・・おい！！いい加減静かにしろよ！！！』

一護の後ろでは、コンと恋次がつまらないことで喧嘩をしてしまったらしく家中はパニックに陥っていた。

「あははは・・・まぁ、お互い大変でしょうけど・・・無事に事件解決が出来るよう全力で頑張りましょう。」

『ああ。それじゃあ、明日また連絡する。しっかりやれよ。』

一護との通信を終えると、ユーノは明細を懐にしまい込むと徐に立ち上がり店の奥に居る四人に尋ねた。

「さてと・・・みんな、ちょっと翠屋のほうでケーキ買ってくるか

ら。何が食べたいか言って♪」

ユーノの言葉を聞いた途端、鬼太郎は部屋から飛び出すや否や子供のように興奮しながら食べたいケーキの名前を口にする。

「じゃ、じゃあ!!俺、プリンケーキで!!」

後から浦太郎達も食べたいケーキの名前を言っていく。

「僕は抹茶で♪」

「私はシンプルにバターとシュガーのケーキを。」

「我は優雅でエレガントなベイクドチーズケーキを。」

「はいはい。じゃあ、僕はシンプルにショートケーキにするかな♪」

ユーノは四人の要望を聞き入れると、靴を履きなおして止めていたバイクに乗って松前市から３０分ほど離れた場所にある喫茶翠屋へと向った。

３０分かけて、バイクを走らせ海鳴市へと向ったユーノは適当な駐車スペースにバイクを止めると、ヘルメットを脱いで帽子を被ると翠屋のほうへと歩き出した。

店の外に出されたテーブルには、学校帰りの女子高生達が集まり憩いの時間を堪能している。

ヴィヴィオもまた、桃子の作った特性ケーキを口に入れながらなのはとフェイトの間で幸せそうにしていた。

「ほら、ヴィヴィオ。口元にクリームついてるよ♪」

「あ。本当だ！」

なのはは優しく微笑みながら、ヴィヴィオの口についたクリームを取ってあげた。

「ありがとう。なのはママ！」

「うふふ。どういたしまして。」

すると、そんな二人の微笑ましい光景を見ていたフェイトは後ろから歩いてきたあの人物の姿を目撃する。

「あ、ユーノ。」

フェイトの言葉を聞いたなのはとヴィヴィオも直ぐにユーノのほうへと顔を向けると、満面の笑みを浮かべて名前を口にした。

「ユーノ君！！」

「ユーノパパ！」

「やぁ、三人とも♪今は休憩中かい？」

「うん。中ではやてが桃子さん達と話してるところ。ユーノのほうこそ、どうしたの？」

「折角こっちに帰って来たし、士郎さん達にも会いたくなったし・・

・ケーキを買いに来たんだよ。」

「そうなんだ。あ、待っててユーノ君！もう少しではやてちゃんの話も終わると思うから。」

なのは達が外で会話をしている頃、翠屋の中で諸々の事情を士郎と桃子に説明するはやては漸く話に区切りがついたところであった。

「そんな訳で、暫くヴィヴィオのほうはよろしくお願いしますね。士郎さん、桃子さん。」

「あ、いいのよ、全然♪はやてちゃんも何かあったら何時でも相談に乗ってね。」

「何かとはやてちゃんも上の立場で大変だろうけど、頑張りなさい。そう言えば、クロノ君は今何所に？」

「はい。それでしたら・・・・・ん？」

はやてが士郎に返事をしようとした直後、ユーノが店の中へと入ってきた。

「士郎さん、桃子さん。お久しぶりです。」

「あら！！ユーノ君じゃないの！！」

「おお！待っていたよ、ユーノ君！！」

士郎と桃子、それに美由紀の三人はユーノに近付いていくと歩く握手を交わして再会を喜んだ。

「ユーノくん、どないしたんや？店のほうは？」

「大丈夫♪直ぐに戻るから。ちょっと士郎さん達に挨拶をする傍ら、ケーキを買いに来たんだよ。と言うわけで、桃子さん。プリンケーキと抹茶ケーキ・バターシュガーケーキ・ベイクドチーズケーキとショートケーキ、それぞれ一つずつ下さいね♪」

「はいはい♪ちょっと待っててね♪」

すると、美由紀が徐にユーノの肩に腕を巻いてくると耳元で不敵な笑みを浮かべながらこんなことを言って来た。

「ところでユーノ・・・最近、なのはとはどうなのよ？」

「ええ！？な、何を急に・・・！？」

「はやてちゃんから聞いた話じゃ、あんた・・・相当隠れてなのはとコソコソしてるって噂じゃないの？」

「なっ！！は、はやて！！！何を出鱈目なことを！！」

「まぁまぁ。嘘とも言いきれんやろ？」

「（この狸女が・・・！！！！）」

ユーノは悪意に満ちたはやての笑みを見るなり、心の中に憎悪の炎を燃やした。

やがて、桃子が箱に入れたケーキをユーノに手渡した。

「はい、ユーノ君これ♪落とさないように気をつけてね。」

「ありがとうございます。じゃあ、これで。」

ユーノは代金を桃子に手渡すと、軽く士郎や中に入ってきたなのは達と談笑をすると、再びバイクに乗って自分の店へと戻っていった。

その頃、次元空間にある高速転槽射出母艦アクトンに司令部を置くクロノはと言うと、一人モニター上に映し出されたユーノからの情報を頼りに考察を行っていた。

内容は勿論、リベル式の魔法体系とパトリオットについてである。

「（未知なる魔法体系・・・リベル式の最大の特徴、ブラッドカートリッジシステム。使えば忽ち術者に莫大な力を齎し、ミッド式とベルカ式の魔法を打ち消す。だが、その反面術者本人にかかる魔力の負担も尋常ではなく、普通の魔導師がこれを使えばあまりの力に体そのものがついていけずにクラッシュを起こしてしまう。そのため、彼らパトリオットにもブラッド状態における時間制限があるはず。何としても・・・ブラッド状態を使われる前か、或いはタイムオーバーを迎えた瞬間に捕縛しなければ・・・）」

クロノのそんな考察をしている間に、あたりはすっかり夜になってしまった。

空座町に家を構える銀太郎は、既に就寝をしていた。

銀太郎の隣で一緒に寝ていた白鴎は銀太郎が寝静まったことを確認すると、静かにベッドから降りると服に着替えてある場所へと向か

った。

白鴎が向った先には既に、オーリー達三人がビルの屋上で白鴎の到着を待っていた。

白鴎は屋上へ続く階段を上がり、ドアを開くとオーリー達と合流を果たす。

「来たか。」

「ああ。」

「管理局の動きも本格化してくると思うから、此処から先は更に慎重に動かないといけないな。」

「鍵は手に入ったのだ。後は聖地への扉を見つけるまで。」

「心当たりは?」

白鴎がそう言うと、瀬間子は目の前にディスプレーを表示させると数箇所の異世界の情報を映し出した。

「目ぼしい所は・・・・・・この数箇所だ。」

「よし!さっさと聖地への扉を見つけて鍵を開けようぜ!早く銀太郎を真のダイシーの後継者にして、パトリオットの楽園を取り戻す。そして・・・そこでずっと静かに暮らすんだ・・・銀太郎と一緒に・・・」

白鴎のその言葉を聞いた三人は決意に満ちた表情を浮かべる。

そして、瀬間子が行動の開始をオーリーに告げる。

「行くか。もうあまり時間もあるまい。」

「ああ。」

オーリーはそう言うと、懐からペンダント型の待機状態をしたチータスを取り出す。

「行くぞ、チータス！」

〈Ｙｅｓ！〉

同じように、田吾作・白鴎・瀬間子の三人もデバイスを取り出す。

「導いてくれよ、エアラザー！」

〈Ａｌｌ　ｒｉｇｈｔ〉

「やるぜ、コンボイ！」

〈Ｏｆ　ｃｏｕｒｓｅ〉

「供に行こう。ダイノボット」

〈Ｙｅａｈ〉

四人はデバイスを起動させると、リベルのパトリオットだけが着る鎧を身に纏い武器を構築させる。

「それじゃあ・・・夜明け時にまた此処で。」

「白鴎。あまり熱くなるなよ。」

「わぁーてるよ！」

そして、四人はそれぞれの転移魔法を使って一人ずつ聖地への扉があると思われる世界へと移動していった。

同時刻。

彼らの行動に気付いていないユーノはと言うと、リベル式の魔法に対抗すべく新しい形の補助装置の作成に監視をする傍ら没頭していた。

すると、そんなユーノの下へシャーリーからの通信が入る。

「ん？通信。しかも、シャーリーから？」

ユーノはモニター画面に向うと、シャーリーと通信を入れる。

「はいはい♪ユーノ・スクライアだけど？」

『ああ。ユーノ先生！シャーリーですけど・・・』

「またこんな夜遅くにどうしたの？」

「実は、浦太郎さんと金太郎さんから預かってあるフィッシャーマンとアックスオーガの二機なんですけど・・・アックスオーガだけ、

何だか変なんです。』

「はい？」

「部品交換と修理は終わったんですけど、エラーコードが消えなくって・・・」

『エラー？何系の？』

「ええ・・・必要な部品が足りないって・・・今、データの一覧を。」

シャーリーそう言うと、急いでユーノに部品の一覧が書かれたデータを送った。

「お、来た来た・・・・・・何！？」

ユーノは送られてきたデータを見た瞬間、思わず書いてあることに疑った。

「足りない部品って・・・・・・まさか、これ！？」

「ええ・・・これ、何かの間違いですよね？と言うか、こんな部品見たことも聞いたことも無いんですけど・・・！？」

シャーリーは困り果てた顔でユーノにそう言うが、ユーノだけはこの部品のことを知っていたのだ。

ユーノが今見ている画面には次のように書かれてあった。

〈エラーコードＥ３９３。必要な部品が不足しています。エラー解決のための部品、“ＣＶＫ－０００”を含むシステムを組み込んでください。〉

『アックスオーガは、このメッセージを表示したままコマンドを全然受け付けないんです。それで困っちゃいまして・・・』

「（アックスオーガ・・・・・本気なのか！？ＣＶＫ－０００・・・リベル式・・・ブラッドカートリッジシステム・・・！？だが、いくら管理局でもこんなものを取り寄せられるはずが・・・！？）」

すると、そんな険しい表情を浮かべるユーノの見ている画面にアックスオーガからのメッセージが表示された。

〈Ｐｌｅａｓｅ〉

「（アックスオーガ・・・・・そうか・・・・・分かったよ・・・・）」

ユーノはシャーリーと通信を終えると、杖を持って店の外へと向った。

金太郎はユーノのその不審な行動に疑問を感じたのか、何所へ行くのかを尋ねる。

「？店長、どちらへ！？」

「金太郎・・・ちょっと２・３日店を開ける。なのは達には上手く誤魔かしといて。」

「え！？」

「・・・探し物を探してこなくちゃ行けない・・・アックスオーガの為に・・・」

ユーノはそれだけを言うと、転送魔法を使って探しものを探すために移動を開始した。

果たして、アックスオーガの切なる願いは叶うのであろうか・・・

――――！？

教えて、ユーノ先生！

ユ「今回は喫茶翠屋についてだよ♪」

ユ「喫茶翠屋は、なのはのご両親が経営する喫茶店で海鳴市の駅前中央に位置する。」

ユ「ケーキとシュークリームは勿論、自家焙煎コーヒーが自慢の喫茶店で学校帰りの女の子や近所の奥様方に人気のお店なんだ♪」

ユ「僕もよく此処でケーキを買っていくけど、士郎さん達と話しこむと中々帰れないんだよね・・・」

士「ははは！！！まぁ、いいじゃないかユーノ君！いつも贔屓してくれてるんだ、それぐらいいいだろ？」

ユ「まぁ・・・良いですけど、それは・・・」

士「そう言えばユーノ君・・・君は俺の大事なのはと何をしたって言うんだい・・・？（士郎、顔が修羅になる）」

ユ「え！？ちょ、士郎さん！！僕何もしてませんからね、なのはには！！！（ユーノ、かなり焦る）」

士「ちょっと道場まで来てもらおうか・・・（士郎、刀を取り出す）」

ユ「ぐっ！！貴方とだけは戦いたくなかったのに・・・（ユーノ、仕方なく晩翠を抜く）」

桃「あらあら。二人とも仲が良いわね♪」

美「言ってる場合！？」

魔導師図鑑ハイパー！

朽木ルキアのハートフル日記

ル「（今回は久しぶりの現世滞在だ。我々三人は一護と井上の厚意に甘えさせてもらい、一護の家に上がらせてもらっているが・・・）」

恋「てめぇ！！！！よくも俺様の神なるヘアースタイルを崩しやがったな！！！」

コン「てめぇこそ！！！俺様のセクシーなパーフェクトボディーになんつーことしてくれんだよ！！！！」

二人は火花を散らしあい、喧嘩を始める。

織「ああ！！恋次君もコン君も落ち着いて！！」

吉「止めるんだ、二人とも！ぐっほ！！！」

吉良は巻き沿いを受け、気絶。

一「てめぇら！！！人ん家で暴れるんじゃねぇ！！！」

ル「（まぁ、一日目はこんな感じで過ぎていくのであった。）」

新生、アックスオーガ・カタストロフ　（前書き）

な「それは、小さな思いでした。」

フェ「新たに始まる・・・私達の日々。」

は「決めたのは、戦うことを諦めないこと。」

金「誓ったのは、昨日より更に強くなること。」

ユ「動き始めた運命に、立ち向かうために・・・もう二度と、大切なものを傷つけないために・・・ユーノ・スクライア外伝　パトリオット篇・・・始まります。」

新生、アックスオーガ・カタストロフ

＞ｉ１３２７９―７０９＜

ＡＭ６：３０

狼谷家　銀太郎部屋

銀太郎は目覚ましの鳴り響く音と同時に目を覚まし、まだ完全には覚め切っていない体を動かして目覚ましを止めた。

目覚ましを止めた銀太郎は、徐に起き上がると大きな欠伸をし隣で大鼾をかきながら熟睡する白鴎を一瞥する。

「ふん。」

銀太郎は白鴎の寝顔を見ると、思わず微笑み布団をかけてあげると白鴎を起こさないように静かに一階へと下りて行った。

リビングに到着すると、銀太郎は薄暗い中ソファーの上で腕組みをしたまま眠りにつくオーリーと、犬のように床で眠る瀬間子を目撃

する。

「あ。」

銀太郎はそんな二人に近付くと、少々呆れながらも二人の体に何かかけるものはないかと探しに行った。

ＡＭ６：３５

松前市望洋台林道。

高台にやって来た金太郎は白鳥が見守る中、毎朝の日課である筋肉トレーニングを行っていた。

腕組みをする白鳥を他所に、金太郎は全身から汗を多量に流しながら腕立て伏せを続ける。

「ふ、ふ、ふ、ふ、ふ、ふ、ふ、ふ、ふ、ふ！」

腕立て伏せを始めてかれこれ１０分以上経とうと言うのに、金太郎は一向に止める気配は無く、寧ろ更に回数を増やしていく様子であった。

そんな金太郎の姿を見ていた白鳥は、思わず溜め息をつく。

「・・・・・はぁ～～よくやるであるな・・・・・」

ＡＭ６：４１

海鳴市内市街地　ビル屋上。

金太郎と同じように、浦太郎は一人で海鳴市まで赴くとなのは・フェイト・ヴィヴィオに見守られながら訓練用の長槍を振りながら、己の精神を磨き上げていた。

「ふん！ふん！ふん！ふん！ふん！」

何時もは見せぬような真剣な表情を浮かべる浦太郎の訓練の様子を見ていたなのは達三人は、何所か浦太郎の行動から焦りのようなものを感じ取っていた。

「「「・・・・・・―――――」」」

ＡＭ６：４５

別世界　古代遺跡跡地

金太郎と浦太郎がそれぞれの行動を起こしている頃、ユーノは一人転移魔法を使っては異世界を渡り歩き、アックスオーガの武装強化のために必要なブラッドカートリッジシステムを探しつづけていた。

ブラッドカートリッジシステムは、管理局でも入手経路が存在しない以上手に入れることは出来ない貴重な代物であり、それを探し出すことは正に雲を掴むようなことであるのだ。

「・・・・・此処でもないか・・・・・となると、あれは何所に・・・」

だが、ユーノはそれでも諦めては居なかった。

人通りパトリオットに関連しそうな古代遺跡を探し終えると、ユーノは再び転移魔法を使って次なる古代遺跡を目指して移動した。

さて、再び場所は変わって銀太郎の家に戻る。

銀太郎はオーリーと瀬間子に毛布をかけてあげると、朝食の仕度を始めていた。

手馴れた感じで味噌汁を作る傍ら、包丁で添え物の野菜を切っていく。

「・・・う・・・あ！」

オーリーが目を覚ますと、銀太郎は台所のほうから振り返りオーリーに言葉を掛けた。

「あ、ごめん。起こした？」

「あ！いや・・・」

「ちゃんとベッドで寝ないと駄目だよ。風引いちゃうから。」

「そ、そうだな・・・心配かけた。」

「ま、いいけどさ。」

オーリーは銀太郎に謝ると、徐に立ち上がりかかっていた毛布を丁寧に畳みなおす。

オーリーが目を覚ますと同時に、床で眠っていた瀬間子も重い瞼を開けた。

瀬間子も目を覚ますと、掛けられていた毛布を同じように畳みなおす。

すると、銀太郎が調理をしながらオーリーに尋ねる。

「オーリー。また昨日もみんなで夜更かしして、聖地への扉を探しに行ってたの？」

「ああ・・・その・・・少しばかり・・・」

「あんまり頑張りすぎると、体壊すよ。」

銀太郎の言葉を聞いたオーリーは、些か項垂れる。

その後、部屋のカーテンを全開にして朝陽を家の中へと取り込む。

すると、銀太郎がオーリーに近付き御盆の上に乗っていたコーヒーを差し出す。

「はい、オーリー。」

「銀太郎・・・？」

「飲みなよ。眠気覚ましのコーヒー。ミルクも入れておいたから。」

「・・・ああ・・・ありがとう・・・銀太郎・・・」

オーリーは照れた様子で御盆の上のコーヒーを取ると、そっと口に運ぶ。

「瀬間子にもあるよ。」

「忝い。」

銀太郎はもう一つのコーヒーを瀬間子に差し出すと、瀬間子は低い声で礼を言う。

と、その時。

リビングのドアが勢いよく開くと同時に寝癖が酷い田吾作が入ってきた。

「だあああ!!!寝坊した!!!」

「お早う、田吾作。」

「おう!お早う!!悪いな、銀太郎!用意に遅れて!畜生!!俺としたことが・・・!!」

「いいよ。気にしてないから。」

自分を責める田吾作に、銀太郎は優しく慰める。

田吾作が起きて来たのとほど同時に、二階から降りてきた明らかに眠り足りないといった感じの白鴎がリビングに入ってきた。

手にはお気に入りのアザラシのぬいぐるみが握られていた。

「お早う・・・・・・」

「あはは・・・随分と眠そうだね、白鴎。」

「眠い・・・・・・・」

銀太郎はそんな白鴎に対して破顔一笑する。

田吾作のほうはと言うと、世話焼きの母親のような口調で白鴎に注意を促す。

「全く、お前は・・・・・・顔ぐらい洗えよ、不細工はこの世の恥なんだぞ！」

「う・・・・・・牛乳飲んでからな・・・・・・」

白鴎は目を擦りながら田吾作にそう言う。

それを聞いた田吾作は冷蔵庫から牛乳を取り出し、容器に移し白鴎に手渡す。

「ほらよ。」

そんな平和な光景をずっと見ていたオーリーは、ふとコーヒーに映る自分の歪んだ顔を見ると手から伝わってくるコーヒーの暖かさに顔を緩める。

「（・・・暖かい・・・な。）」

さて、松前市に店を構えるスクライア商店のほうはと言うと。

ユーノが留守で、おまけに金太郎も浦太郎も買い物に行っているため、店番を任されていた鬼太郎と白鳥だが、白鳥は一人ラジオから流れる奇妙な絵描き歌に挑戦していた。

「♪いびつな玉子が三分の二ほどありまして～～～♪かわったやーねがついていて～～～♪ニョキニョキへんなのでてきたぞ！！」

「〈セリフ〉変なのとは何だネ！！私は護廷十三隊十二番隊隊長及び技術開発局二代目局長、涅（くろつち）マユリだヨ！！私を侮辱する奴は、一人残らず研究材料にしてやるヨ！！！」

「涅マユリの～～～で～～～きあ～～～がーーーり～～～（ハモリ）」

白鳥は絵描き歌に従って、髪と鉛筆だけを使って自分の所属する護廷十三隊の十二番隊隊長の顔を描く事に成功し、興奮していた。

「で・・・出来たであるぞ、ピーチ！！本当に！！」

白鳥は、鬼太郎に出来上がった絵を見せるが鬼太郎はあきれ返った声で適当にあしらう。

「あ～～～そうかい、そうかい。そりゃ良かったな。（たく。お気楽な鳥野郎だぜ・・・ん？）」

すると、店の前の玄関に座っていた鬼太郎の瞳に、客の姿が映ってきた。

客は大学生くらいの長髪の女性で、密かに鬼太郎が恋焦がれる桃花と言う名前の天真爛漫な人物であった。

「こんにちは――――っ」

桃花が店に入ってくると、鬼太郎は血相を変えてその場から立ち上がり激しく動揺する。

「うおっ！ままままた来やがったのか、このヤロウ！！」

「うん。だって、安いんだもん」

桃花の天真爛漫な笑顔を見た瞬間、鬼太郎は思わず赤面し彼女の持っていた鞄を取り上げてお菓子を入れていく。

「い、いつもの通り菓子５００円分だな！！」

鬼太郎は５００円分と言いながら、明らかに１０００円以上はするであろう程の大量のお菓子を適当に鞄に詰めて桃花に手渡す。

「おらよ！！！」

「いつも思うけど・・・・多くない？」

「気のせいだ！とっと出てけ！！俺は他にもやることが山程あんだよ！今日だって、地元の連中にサッカーの試合の助っ人頼まれてんだ！」

「わ――――凄いね！！じゃあ、お守りにこれ貸してあげる。はい、

バームクーヘンマン！大事にしてね！！」

桃花はそう言うと、彼氏から貰った誕生日プレゼントであるバームクーヘンの顔をしたぬいぐるみを鬼太郎に差し出した。

鬼太郎はその瞬間、胸の奥の高まりを感じながらそのぬいぐるみを貰うか否か迷っていたのであった。

「（ドーン、ドーン、ドーン、ドーン・・・）バカヤロウ、てめぇ！！男がぬいぐるいなんか・・・なんか・・・なんか・・・なん・・・か・・・」

だが、結局桃花の笑顔を見ると貰わないわけにはいかなくなり鬼太郎はぬいぐるみを受け取り彼女を見送ったのであった。

「・・・・・・・・・」

桃花が居なくなった後、鬼太郎は受け取ったぬいぐるみを握りしめたまま桃花の顔を思い浮かべてみた。

すると、そんな鬼太郎の様子をずっと見ていた白鳥が近付き悪意に満ちた笑顔を浮かべる。

「ほほう・・・」

「げっ！！」

「貴様のような蛮人にも、恋心なるものはあったのだな。」

「誰かがだ！！！！！てめぇはイチイチうるせーんだよ！！！！」

鬼太郎は白鳥の言動に激しい憤りをするが、白鳥自身はそれに負けじと嫌味や鬼太郎の癇に障る言葉を浴びせ続けたそうな。

その頃、アクトンに駐屯しているクロノは恋次と映像通信をしながら連絡を取り合っていた。

『どうだ、クロノ。アクトンの居心地は?』

「ええ。機材も設備も一級品ですよ。正直、クラウディアよりもこっちのほうが余程優れているぐらいで。今は、周辺探査のネットワークを。」

『そうか。こっちは周囲の霊圧を探って、連中の痕跡を調査してるところだ。奴らもまた、俺達と似たようなそうでないような・・・兎に角、独特の霊圧を発しているらしいからな。』

「そうですか。引き続き、捜査を続けてください。」

『ああ。あと、それから・・・ユーノがアックスオーガの修理に必要な部品を探しに、3日ぐらい店を空けるから居ない間は頼むって言ってたぜ。昨日、金太郎から連絡貰った。』

「またか・・・あいつにも困ったものだな・・・部品を探しに?一体何が足らんと言うのだ?全く・・・」

クロノはいまだに行動の一つ一つが掴みきれないユーノに半ば呆れながら、恋次との通信を終える。

暫くすると、艦長室のほうに紅茶を持ったはやてが中に入ってきた。

「クロノくん。恋次さんは何て？」

はやてはお盆に乗せた紅茶をクロノに差し出すと、自分も席に着いて話を始める。

「ああ。連中の身体から出される特殊な霊圧の痕跡を辿って、捜索を続けているそうだ。そっちのほうはどうなんだ、はやて？」

「うん・・・よくあらへんよ。昨夜もまた騒動を起こしたみたいや。今度は割りと遠くの世界・・・現場にいた魔導師局員は勿論、遺跡発掘で借り出されていた人も挙って。」

「遺跡発掘に借り出されていた人だと？」

クロノははやての口から出た、遺跡発掘と言う予想外な一言に大いに驚いた。

すると、はやてはタッチパネルを操作してティアナ達がまとめた報告書をモニターに表示しながら、クロノに説明をする。

「どうやら、あの子達は・・・何処かの遺跡やそれに類似するところにある、何かを探してるように思えてならへん。一応、スターズとライトニングの報告ではな・・・パトリオット達は金太郎さんのアックスオーガから強奪したパーツを奪った後、古代遺跡のような人が立ち入るのが困難な場所にある何かを探し回って、広範囲に世界を移動してるみたいなんや。奪われたアックスオーガの部品の形から推測するに、きっとこれは扉を開くための鍵のようにも思える。」

はやては長い説明を終えると、アックスオーガから強奪された例のパーツの画像を表示した。

クロノもそれを見ると、顎に手を当てて考えに更けこむ。

「鍵か・・・確かに、その可能性は否めないな。」

「しかし解せんわ。あの子等・・・何でパトリオット達は今更になってこんな事件を起こしながら私達の前に現れたんやろう?そもそも、金太郎さんのアックスオーガだって色々と分かっていない箇所もあるし・・・」

「無差別に自分達の前に立ちはだかる管理局局員や現地の人間を襲い、尚且つ鍵穴の嵌る扉のようなものを探し歩くパトリオット・・・本当に、奴らは何が目的なんだ?そして、何がそこまで奴らを駆り立てるんだ?」

謎が謎を呼ぶ今回のこの事件。

彼ら、パトリオット達の真の目的とは何か――そして、彼らパトリオットに対して機動六課はどう立ち向かうのであろうか?

午後2時過ぎ。

鬼太郎は今日、地元空座町の大学生サッカーチームの助っ人として試合に参加していた。

今回の対戦相手は空座中央大学のサッカーサークルだ。

このサッカーサークルの首相は、容姿端麗で人望も厚い所謂良い人

なのだが・・・ちょっと変わった一面がある。
それをこれから紹介していこう。

「水宮の奴、誰か助っ人を頼んだらしいっすよ！」

「何、こっちには最強の首相がいるんだ。負けは無いぜ。なぁ、首相！」

「勿論だ。俺達に敵う相手などいるはずがない。」

首相は鼻から息を出しながら、自信満々にそう宣言する。

すると、その時・・・今回の対戦相手がやって来て一人が声を掛けてきた。

「よう！待たせたな！！」

首相が声のする方へ向いてみると、首相はその人物の顔を見た瞬間絶望した。

「なっ！！！（あれは・・・桃花が誑かされそうになってるクソ赤髪！！）」

「あれが助っ人！？」

「赤髪だぜ！」

「あ・・・いや・・・お前達・・・」

「おまけに、赤髪のヤロウ・・・ぬいぐるみなんて持ってよ。」

「え？」

「アレ桃花に俺のやった誕生日プレゼント！！！！！！！！！！」

「（何で桃花の誕生日プレゼントが・・・むりからストラップにされてあのクソ赤髪に・・・チクショー・・・取り返してやる・・・絶対に！！！！）」

首相は鬼太郎のズボンにぶら下げられた自分の彼女に渡した誕生日プレゼントを何としてでも取り返そうと決意し、試合に臨むのであった。

そう――例えどんな手を使ってでも――――――

そして、試合がとうとう始まった。

元々、好奇心旺盛で運動神経が発達している鬼太郎の実力を味方につければ、試合の流れは完全に鬼太郎側のチームに傾くのであった。

鬼太郎は敵側のフォワード陣を次々に避けながら、ゴール目指して突き進む。

「ギャハハハハハハ！！！！！くらえ！！鬼太郎ドリブル！！邪魔する奴はみんなミンチな！！」

と、鬼太郎が一人で前進していた・・・その時。

鬼太郎は真正面から感じる尋常ならぬ殺気に思わず目を向けた。

「！！」

すると、目の前に居たのは鬼太郎を殺すつもりで飛び掛ってきたこの世のものとは思えない形相をしたあのサッカー部首相だった。

「わーちょー！！！！！（殺殺殺

何とか蹴りを食らわせ、その場から脱出した鬼太郎が後ろを振り向いてみれば首相はまるで猛獣のような素振りで鬼太郎のほうを見ら見つける。

最早ボールなど一切見向きもしていなかった。

「（おい・・・狙ってんのは明らかにボールじゃねぇ・・・一体！？はっ！）」

その時、鬼太郎は首相が執拗に自分を狙う理由に漸く気がついた。

そう、彼が狙っているのは鬼太郎がぶら下げているバームクーヘンマンの人形なのだ。

「（そ・・・そうか!!コレだ!!コイツが狙ってのはどういうアレか知らねぇがこの女神のストラップ!!）」

目的がはっきりと分かった鬼太郎は、不敵な笑みを浮かべた後殺気を全開にして首相を亡き者にしようと動き出すのであった。

「フフ・・・そうかよ・・・殺ってやる!!!」

そんな事とは露知らず、金太郎は店番をほったらかしたままサッカーの試合に行ってしまった鬼太郎を探していた。

「鬼太郎――鬼太郎――・・・まったく店番さぼってどこへ行かれたか・・・」

金太郎はあちこちを捜し歩き、サッカーの試合が行われているグランドの周辺までやって来る。

「鬼太郎――――鬼太・・・・・・ん？むゥ・・・・！？あ・・・あれは・・・・・・いかん！！」

金太郎はその時、遥か前方で斬魄刀を抜いて首相に斬りかかって行く鬼太郎とそれに対抗しようと素手で向っていく首相を目撃した。

「うおおおおおおおおおおお！！！！！！」

「はあああああああああああ！！！！！！」

両者が激しく衝突を起こそうとした瞬間、金太郎は全速力で鬼太郎のいるほうへ走っていき名前を叫んだ。

「おおおおおお！！！！！！鬼太郎！！！！！！！！」

「なっ！熊！？」

予想外の金太郎の登場に鬼太郎は驚愕する。

「いけませんぞ！！鬼太郎！！普通の人間相手に斬魄刀など使ってはっ・・・い・け・ま・・・」

鬼太郎はそう言いながら、争いの原因になっていると思われるバームクーヘンマンの人形を無理矢理毟り取ってきた牢から奪った。

「せ――――――――――――ん！！！」

バームクーヘンマンのぬいぐるみは無理矢理毟り取られたお陰で、綿が飛び出し目もとれかけてしまったのであった。

それを見た鬼太郎と首相は滝のような涙を流しながら絶叫する。

「「ぎゃあああああああああ！！！！！！」」

こうして、無意味な二人の時間は・・・呆気なく終わったのであった。

ユーノ・スクライア外伝・・・――――完！！

と、その時。

ユーノと一護が画面から飛び出して怒りを露にしながらこう言った。

「「終わりません！！！」」

一方、銀太郎の家ではオーリーと田吾作が二人で話しこんでいた。

今日はオーリーが銀太郎と一緒に定期健診の為に病院に付き添うこととなっている。

「それじゃあ、銀太郎のことは任せるぜ。しっかり頼むよ、オーリーちゃんよ！」

「ああ。白鴎と瀬間子はもう・・・・・・」

「つきさっき、出かけたぜ。」

田吾作はそう言うと、横に置いてあった箱から１６本入りのブラッドカートリッジを取り出し、懐から最も重要な魔導師・魔導生物の

血液を数本取り出す。

「ブラッドカートリッジか・・・」

「貴重な武器だからな。昼間のうちに作り置きしとかないと、これからの本格戦闘の時に弾切れなんて事態なんてことがあるかもしれねぇしな。」

「済まんな。お前一人に任せっきりで・・・」

「バックアップが俺の役目だぜ。このくらい当然！」

田吾作はそう言うと、エアラザーの力を使って血と一緒に魔力を圧縮させてそれを弾丸に組み込むと言う作業を始めた。

一方、機動六課の前線メンバーの動きはと言うと、ティアナをリーダとしたフォワード一同が現地での現場検証を追え、通信でなのはに報告をしていた。

「じゃあ、今日の報告は以上ね。引き続き、現地での現場検証の方をお願いね。」

『『『『了解！』』』』

なのはは五人と通信を終えると、一度ヴィヴィオの様子を身に翠屋の方まで向った。

「あれ？」

と、その時なのはの携帯にクロノからのメールが届く。

携帯を開いて中を確認すると、以下のような内容が書かれていた。

〈捜査はこちらも順調に進んでいる。君とフェイトは、僕やはやてが要請をするまでは成る丈ヴィヴィオのそばに居てやってくれ。あと、ちょくちょくで済まないが・・・金太郎さんや浦太郎さんのことも気にかけてやって欲しい。特に金太郎さんは未だ体調も完全ではないし、肝心のアックスオーガもフィッシャーマンも修理中だ。非常時は君とフェイトが二人を守ってやってくれ。現在、ユーノはアックスオーガの足りない部品を探しに店を空けている。頼りになるのは二人だけだ。追伸1・・・シャーリーの話では、二機の修理は来週には終了するようだ。追伸2・・・ユーノが戻ってきたら、君からもう少しガツンと言ってやってくれ。あの淫獣フェレットもどきにな・・・！〉

さて、一方銀太郎のほうはと言うと・・・オーリーに連れられて石田が院長を務める空座総合病院まで来ていた。

担当医は石田竜弦から引き継いだ雨竜本人であった。

石田は銀太郎の体を検査すると、カルテを見ながら渋い顔でこう言った。

「う～ん・・・やっぱりあんまし成果は出ていないようだね。」

石田のその言葉を聞いた銀太郎とオーリーは内心かなり複雑な気持ちであった。

「まぁでも、今のところ副作用も出ていないようだし・・・もう少しこの治療を続けてみようか？」

「あ・・・はい。えっと・・・お任せしますね。」

「お任せって・・・自分のことなんだし、もう少し真面目に取り組もうよ。」

「あ。いえ、その・・・・・・・・・僕、石田先生を信じてますから。」

「・・・・・・銀太郎君・・・・・・・」

石田は一度、銀太郎を外に出すとオーリーだけを残して二人で話を始める。

「銀太郎君。日常生活はどうだい?」

「偶に肺炎を患うことはありますが、それ以外なら健康そのものです。」

「そうなんだよね。辛いだろうが、今は僕達も全力を尽くしてみるよ。」

「はい。」

「今はなるべく、体への器官機能の麻痺に進まないように治療を続けているが・・・・・・これから段々、入院を含めた辛い治療になると思うよ。」

「はい。本人と、相談してみます。」

石田との話が終わった後、病院を出た銀太郎はオーリーと一緒に繁華街の方へと向い、ひさしぶりにレコードショップに立ち寄った。

銀太郎が適当に洋物の音楽ＣＤを手に取っていると、ふと目の前に映って来たのは以前銀太郎に曲を勧めてくれた寡黙で巨躯な男、茶渡泰虎であった。

茶渡は視聴用のヘッドオンをしながら音楽を鑑賞していた。

銀太郎は茶渡に近付くと、軽く肩を叩いて話しかけた。

「お久しぶりです、茶渡さん。」

「・・・銀太郎か・・・？」

二人は一度何所か座れる場所まで移動すると、そこで談笑を始めた。

「茶渡さん。さっきは何を聞いてたんですか？」

「む。ユージン・チャドボーンのセカンドアルバムをな・・・何だか少しじんとくる感じの歌詞だった・・・」

「ああ！ユージン・チャドボーンなら僕も好きです。買ってみようかな？」

「それなら、まだ在庫が在るから買うなら今のうちだぞ。」

「はい。そうさせて貰います。」

二人の何気ない会話を遠く離れたところで見守っていたオーリーは、

ふと銀太郎の方を見ると手に持ってい病院の処方箋を見る。

オーリーの気持ちは、何所か晴れないままであった。

やがて、夜の9時を過ぎた頃・・・なのはの実家で保護と言う形を取られているヴィヴィオはなのはやフェイト達に挨拶を済ませると、寝室のほうへと向う。

「じゃあ、お休みなさーい!!」

「「「お休み、ヴィヴィオ（ちゃん）。」」」

士郎を始め、高町家の人間は笑顔でヴィヴィオを見送った。

なのははパジャマ姿で、ヴィヴィオに歯を磨くように促す。

「ちゃんと歯を磨いてから寝なよ。」

「分かってます。」

ヴィヴィオが居なくなった後、フェイトは軽く微笑むとなのはに対してこう口にする。

「ふふ・・・さて、なのは。ちょっと向こうで話があるんだけど、いいかな?」

「うん。大方見当はついてるけど。」

なのははフェイトに連れられて、別の部屋へと移動するとそこでこんな話をし始めた。

「率直な感想を聞かせて。なのははあの子達のこと、どう思う？悪い人たちのように見える？」

「えっと・・・まだ、私は一戦交えてないから良いか悪いかと、はっきりとは分からないな・・・ただ、年端もいかない齢１４～１５歳の子供にも何か凄く強い覚悟があることは今迄の報告書や金太郎さん達からの話で分かった気がする。」

「うん。少し、あの子達は不思議な感じがするんだ。上手く言えないけど、私達管理局の魔導師を恨んで攻撃をすると言うよりは、もっと何か別なことの為に戦っているという気持ちのほうが強い気がするんだ。私も戦ったことはまだないけど・・・」

「そっか。せめて、目的を聞きだすことが出来れば何か平和的に解決できる道が開けるかもしれないのにね。」

「けど、あの時は流石に話が出来そうな雰囲気じゃなかったしね。強い意思で自分を固めちゃうと、周りの言葉って中々入ってこないから。私もそうだったしね・・・」

フェイトはその瞬間、暗い表情を浮かべる。

なのはもそんなフェイトの気持ちを知ってたか、重い表情になる。

「私は・・・母さんのためだったけど、傷つけられても・・・間違ってるかもって思っても・・・疑っても・・・だけど、絶対に間違っていないって信じてたときは、信じようとしていたときは・・・誰の言葉も入ってこなかった。」

「フェイトちゃん・・・・・ふう～その話はしないでおこう。何時までも、過ぎちゃったことを悔やんでも仕方ないよ。今はただ、前を向いて進んでいけばいいと思うよ。振り返るのはもう少し後からでもいいはずだよ、きっと。」

「なのは・・・・・うん・・・・・そうだね。ありがとう・・・ごめんね。急に変なこと話したりして。」

「いいよ、全然気にしてないよ・・・私は。だけど、言葉を投げかけることは決して無駄じゃないと思う。きっと分かり合えるときが来るよ。あの子達と私達の隔たりにも・・・きっと・・・私とユーノ君の間に出来ていたそれが、無くなったみたいに・・・きっと・・・」

「うん。必ず、分かり合える・・・今はそれを信じて頑張ろう。」

二人はそんな会話をしながら、彼らパトリオット達と分かり合えることを信じて寝室のほうへと戻っていったのであった。

そんななのは達とは違い、朝早くから聖地への扉を探すために異世界を渡り歩いていた白鴎と瀬間子は、古代遺跡群の中で眠っていた番兵との先頭を繰り返しながら目的のものを探し続けていたが、容易には見つからなかった。

「はっ！はっ！はっ！くそ！！」

ブラッドカートリッジの消費を抑えるため、通常状態での戦闘を続けていた白鴎の体は大分疲労と傷が著しくなっていた。

「中々・・・見つからんな。」

「ああ。鍵がるのに肝心の扉がなかったらそれこそ宝の持ち腐れだぜ。まぁ、機動六課の魔導師にまだ居場所を特定されていないだけ、マシだけどな。次行くぞ、瀬間子。」

「休まなくて大丈夫なのか、白鴎？」

「平気だよ。俺だって立派なパトリオットだ。この程度の戦闘で疲れるほど柔じゃない。」

「・・・・・・――――――」

瀬間子は白鴎の言葉を黙って聞き入れると、再び扉を探すために別の世界へと向った。

こうして、パトリオットの足が中々掴めないまま徒に日にちだけが過ぎていった。

その間に、なのは達は自分達の訓練とパトリオットの捜索を続け、金太郎や恋次達も練磨絶やさず修行と探索を行った。

そして、地球に駐屯してから三日が経ったある日。

ついに、あの男がアックスオーガの願いを叶えるべく異世界から帰還してきた。

そう、ユーノ・スクライアが探し物を見つけ出したのだ。

ユーノは本局でメンテナンスを受けているアックスオーガのある部屋に入ると、アックスオーガを見ながら次のように語った。

「・・・待たせたね・・・アックスオーガ。漸く君の探し物が手に入ったよ。確率的には五分五分。成功すれば今までに無い力を破棄することが出来るが、失敗すれば二度と力を使うことは出来ない。それでも、君はこれを選ぶんだね？」

〈Ｐｌｅａｓｅ　Ｍｒ．Ｙｕｎｏ〉

「・・・分かった。じゃあ、早速始めようか・・・ブラッドカートリッジシステムと、この・・・“エドワード・コークの血”を使ってね。」

ユーノはそう言うと、探し出してきたブラッドカートリッジに組み込む重要な血の入った試験管を取り出すと、アックスオーガを手に取り儀式を始めた。

ユーノは空のカートリッジにアックスオーガの魔力と手に入れてきたエドワード・コークなる血を注ぎ込むと、それを慎重に組み込みながら圧縮させていく。

「エドワード・コークよ。敵はパトリオット・・・それもダイシーの末裔だそうですよ。どんな気分ですか？」

ユーノはそんな独り言を口にしながら、アックスオーガに新装備を施していく。

アックスオーガがどのように生まれ変わるのか！？

更に四日後に、それがいよいよ明らかになるのであった。

本局を訪れた金太郎は最期の検診を終えると、医務室から出てきた。

「ありがとうございました。」

すると、タイミングよく浦太郎や鬼太郎達スクライアメンバー一同が金太郎の下に駆け寄ってきた。

「熊！！」

「検査結果はどうであったか！？」

「はい。無事、全快いたしました！」

「それは良かった。こっちも、無事に全快だよ。受け取って。」

浦太郎はそう言うと、金太郎に修復されたアックスオーガを手渡した。

左手には、自分のデバイスであるフィッシャーマンが握られていた。

「ああ。済まぬな。」

金太郎はアックスオーガを受け取ると、一度本局の休憩室で待つユーノの下へと向かい、その後ユーノはアクトンで滞在するはやてとリィンに連絡を着けた。

「そうですか。それは良かったです！！今、どの辺ですか？」

『２番目の中継ポートだよ。あと、１０分くらいでそっちに戻れるから。』

「分かった。ほんなら、帰ってきたら今後の捜査に関する会議があるさかい、出席のほうを・・・あっ！！」

と、その時――――――アクトンのレーダーにパトリオット達と思わしき魔力反応を確認し、警報が鳴り響いた。

「こ、これは！？」

「ついに来おったで。クロノくん、パトリオット出現や！至近距離にて、緊急事態！」

はやては別室にいるクロノに連絡を着けると、指示を待つ。

「ああ。ちょうど恋次さんからも同じ報告を受けているところだ。」

クロノの目の前には、パトリオットの発する霊圧を感知した恋次が映像で連絡をつけてきた。

『空座町の都心部上空で、捜索指定の対象2名を発見した。今、浦原さんに頼んで強壮結界を張ってもらってるところだ。』

「相手は強敵です。交戦はなるべく避けて、外部からは結界の強化と維持を！」

『分かった。』

「現地には、スターズ1とライトニング1を向わせます！」

クロノはなのはとフェイトを現場に急行させると、モニター画面を

見ながら渋い顔を浮かべた。

一方その頃、先に現地に到着していた一護達死神四人は帰宅途中の白鴎と瀬間子を四方に囲むと、徐々に間隔を狭めていった。

「もう逃げ場はないぜ。大人しく言う通りにしろよ。」

一護が挑発的な口調で二人にそう言うと、瀬間子は険しい表情を浮かべる。

「ちっ！死神か・・・よもやこんなところにまでいたとはな・・・」

「でも、俺達もそこら辺の奴らとは格が違うってことを・・・今此処ではっきりさせることが出来る。返り討ちにしてやるぜ！」

すると、一護は鼻で笑うと恋次達と供に二人から遠く離れていった。

「何だ・・・撤退しやがった！？」

四人の行動に疑問を抱く白鴎。

すると、瀬間子が上空にあるものに気付き、白鴎に警告する。

「上だ！白鴎！！」

白鴎が急いで上空を見上げてみると、そこにはフェイトが既に雷系の大魔法を発動させようとしていた。

そして、フェイトは雷の雨を多量に降らせて二人を攻撃して行った。

「ライトニング・レイ！！はっ！！！！！」

「ちっ！！」

瀬間子は白鴎を守るために自分から前に出ると、防御を展開させてフェイトの攻撃を受け止める。

激しい轟音と爆発が響く中、フェイトは多少の息切れを起しながら爆風が晴れるのを待った。

「はっ、はっ、はっ、はっ。少しは・・・通ったか・・・！？」

一護達も同じように攻撃が通ったことを祈るしかなかった。

「やったか！？」

「まだ、分からぬ。」

爆風が晴れると、彼らの目に映って来たのはフェイトの雷魔法を受けて左腕を黒焦げにする瀬間子の姿であった。

白鴎は瀬間子の左腕の傷を見て、声をあげる。

「！瀬間子！？」

「気にするな。この程度でどうにかなるほど・・・柔じゃない！！」

そう言うと、瀬間子は自己修復を掛けて黒焦げになった左腕を回復させる。

「へへ・・・上等！！」

白鴎は鼻で笑うと、悔しそうな表情を浮かべるフェイトの顔を睨み付ける。

「くっ！」

一護達の居る場所でその様子を見ていたなのはは、始めて間近で見るパトリオットの驚異的な能力に唖然とする。

「フェイトちゃんの攻撃を防ぐなんて・・・やっぱりあの子達、只者じゃない。」

すると、状況を見た一護が斬月を持ち直してなのはに提案をしてきた。

「なのは。ブラッドカートリッジを使われたら、お前らには不利だ。此処は俺と恋次で二人を弱らせる。その隙に捕縛を！」

「了解！」

また、なのは達が戦っているその頃、アクトンの管制室で現場指揮を補佐しているはやてとリィンはなのはとフェイトに連絡を取る。

「前線部隊、配置終了！なのはさん、フェイトさん。宜しいですか？」

『『大丈夫』』

「それから今、現場に助っ人を転送をしたよ二人とも。」

「え？」

フェイトがはやての言葉に疑問を持ち、ふと後ろを振り返ってみると、ビルの屋上には既に修復されたデバイスを手にした金太郎と浦太郎が立っていた。

「はっ！金太郎さん・・・浦太郎さんも！！」

二人の後ろのほうには、鬼太郎と白鳥も一緒に居た。

白鴎は金太郎たちの姿を見ると、激しい憤りが込みあがってきた。

「あいつら！クソが！！」

「ふふ・・・さてと、それじゃあ・・・リターンマッチといこうかな？この前はよくも僕のプライドを虚仮にしてくれたね。今度は、僕が君達を虚仮にする番だよ。」

そう言うと、浦太郎は待機状態のフィッシャーマンの隠しスイッチを押すと、今まで使わずに居た甲冑モードを発動させ、構築する。

「行くよ、フィッシャーマン・・・甲冑モード。」

〈ＯＫ．　Ａｒｍｏｒ　ｔｈｅ　ｒｏｄ　ｆｏｒｍ〉

「私も行きますぞ。アックスオーガ、セットアップ！」

金太郎がアックスオーガを構築しようと、声を張り上げた瞬間・・・アックスオーガは凄まじい魔力を放出させながら奇妙な待機音と供

に次のように語り出す。

〈Ｏｒｄｅｒ　ｏｆ　ｓｅｔ　ｕｐ　ｗａｓ　ａｃｃｅｐｔｅｄ.
Ｏｐｅｎｉｎｇ　ｃｈｅｃｋ　ｗｉｔｈ　ｔｈｅ　ｎｅｗ　ｓｙｓｔｅｍ　ｈａｓ　ｓｔａｒｔｅｄ.　Ｅｘｃｈａｎｇｅｄ　ｐａｒｔｓ　ａｒｅ　ｉｎ　ｇｒｅｅｎ　ｃｏｎｄｉｔｉｏｎ.〉

金太郎自身もアックスオーガのこの突然の行動に大いに驚かされる。

「こ・・・これは・・・一体何が!?」

すると、その時金太郎の下にユーノからの通信が入る。

『金太郎、落ち着いて聞くんだ。』

「店長!?」

『今のアックスオーガには、新しいシステムを積んでいるんだ。』

「新しい・・・システムですか!?」

『アックスオーガが自らの意思で、自分の思いで望んだんだ。』

「アックスオーガ・・・お前・・・！」

金太郎は一度、手の中のアックスオーガを見ると強く握りしめた。

『呼んであげて、アックスオーガの・・・新しい名前を!』

〈Ｇｅｔ　ｓｅｔ〉

「了解です、店長！アックスオーガ・カタストロフ！！」

〈Ｄｒｉｖｅ　ｉｇｎｉｔｉｏｎ　ａｘｅ　ｆｏｒｍ〉

準備が整った二人は、声を揃えて共通の言葉を口にした。

「「変身！！（♪）」」

その瞬間、二人の体を包み込む青と金色の魔力光。

魔力光が晴れた瞬間、なのは達の目の前に現れたのは・・・――――基本カラーが青で、仮面が海亀のようなレリーフが頭頂からレールを伝い眼前で固定され、ヒレが逆転して角状に可変した甲羅部分がマルチアイを象る浦太郎と、基本カラーが金で面が斧型のレリーフがレールを伝い眼前に固定され外側が左右に展開して『金』の字を象っている金太郎の姿であった。

なのはとフェイトは、自分達が見たことも無い姿をした浦太郎と金太郎の甲冑に驚愕し、言葉を失った。

「あ、あれって！？」

「今迄と・・・違う・・・！？」

同じように、白鴎と瀬間子のほうも変り果てた金太郎、そして武装強化が施されたリベル式のデバイスとして生まれなかったアックスオーガの姿に眼を奪われた。

「なっ！？」

「あのオヤジのデバイス・・・あれってまさか!?」

二人は構築を終えると、手に持つデバイスをしっかりと握りしめると白鴎と瀬間子の方を凝視するのであった。

待ちに待った新生アックスオーガと、浦太郎の隠し玉がついに発動した。

次回、いよいよ第二ラウンドへと突入する。

新生、アックスオーガ・カタストロフ　（後書き）

教えて、ユーノ先生！

ユ「今日は、石田雨竜さんについてだよ♪」

ユ「彼は、一護さんの高校時代からの悪友で、現在は空座町で一番の規模を誇る空座総合病院の院長を務めているんだ。」

ユ「頭の切れがよく、滅却師であることに誇りを持っていて、マントには特に拘りがあるらしい・・・」

一「へ。どうせ大したもんじゃねぇくせに。」

石「何を言ってるんだ、黒崎！このマントにこそ、滅却師の白さをより引き立たせてくれる重要なアイテムなんだぞ！もっとマントの重要性を理解し給え。」

一「いや・・・努力はしてんだけどよ・・・」

ユ「嘘つきました？」

一「ちょっとだけ・・・・・・って、ユーノ何言わせるんだよ！！」

魔導師図鑑ハイパー！

遡ること数時間前。

久しぶりに髪を切りに行った鬼太郎。

すると、そこへ・・・・・・

白「あれ!?ピーチではないか!」

鬼「げっ!!と、鳥!!」

白「ピーチめ・・・ピーチの分際で美容院か・・・」

鬼「いいだろ、別に!」

白「そんな鬱陶しい赤髪などやめて、いっそのことオバサンパーマーでもかけてはどうだ?」

鬼「いい訳ねぇだろ!!!これは神聖なる鬼ヘアーって言う!!」

と、そのとき横で倒れていたイスが立ち上がり鬼太郎の目に映って来たのは・・・・・・

店「お疲れ様です。」

鬼「なっ!!てめぇは・・・チャド!?」

茶「・・・・・・――――――」

白「ほう。お主の頭は何所からが頭で何所までがそうなのか一度マジックで・・・」

鬼「わああ!!!おい、止め・・・ぐああ!!!」

鬼太郎、止めようとしてイスから謝って落ちる。

パトリオットの願い（前書き）

銀「それは・・・小さな願いでした。何事も無く続いていく静かな日々・・・ただ、穏やかに続いてく毎日・・・僕は何も望んだりなんかしない。僕はどんな力も欲しくないから・・・ただ・・・傍にいてくれればよかった。そうしたら、僕がみんなを守るから・・・気持ちが少しすれ違うときも、だけど・・・それでも・・・」

ユ「ユーノ・スクライア外伝　パトリオット篇・・・始まります。」

パトリオットの願い

＞ｉ１３２８０―７０９＜

さて、空座町の一角で白鴎達が金太郎達と本格的な戦闘を始めようとしていたその頃・・・銀太郎は田吾作を引き連れて近くのスーパーで今晩の夕食の買出しに出かけていた。

店内には、仕事帰りの人がごったがえしており店内から流れるアナウンスの購買文句に人々は挙って足を運んでいく。

『いらっしゃいませ。ボクレンショップにようこそ！本日のサービス商品は、暑い夏を乗り切るヘルシー食材！店内特設コーナーにて、各種取り揃えております。生肉売り場では豚肉フェアを開催中。豚肉は栄養たっぷりのヘルシー食材！タイムサービスでは、何と半額の品もあります！皆様、是非お買い求め下さい。』

生肉売り場に並べられた買得商品を手に取る銀太郎であったが、ふと銀太郎は田吾作に対してこう呟いてきた。

「ところでさ・・・最近、みんなあんまり家に居なくなってるけどさ・・・」

「げっ！ああ・・・まぁ・・・その・・・あれだ・・・聖地への扉を探すのにあいつら夢中なんだよ！ガキみたいにさ。」

「実際、僕達見た目はまだまだ子供だよ。それに、みんなが僕のために頑張ってるってことぐらい分かってるつもりだよ。パトリオットの誇りを汚す様なことは、僕だってしたくない。同じパトリオットのボスとして・・・」

「銀太郎・・・・・・」

「僕は・・・みんなと出会う前は、ずっと一人だったしさ。一人で居ることには慣れてる。」

そう言う銀太郎の顔は何所か寂しげなものであった。

すると、居た堪れなくなった田吾作が銀太郎にこう言って来た。

「銀太郎、大丈夫だ！今は、連中も忙しいけどよ・・・その、直ぐにまた・・・きっと・・・」

「・・・そっか。田吾作がそう言うんだったら、そうなんだろうね。今夜は東海林（しょうじ）も来てくれるし、お肉はこんなもんかな？」

銀太郎は田吾作に微笑みかけながら、肉詰めのパックを四つ手に取った。

そんな銀太郎の笑顔に釣られて、田吾作も笑顔で返事をした。

「だな。」

「今日も暑いし、今夜はさっぱりとした冷しゃぶで決まりだね。」

「ああ。」

その後、冷しゃぶに必要な材料を買い揃え会計を済ませた銀太郎は田吾作と一緒に袋片手に自宅へと向かって行った。

その間、銀太郎は頭上に浮かぶ星を仰ぎ見ながらオーリー達の身を案じる。

「（みんなも・・・外で頑張りすぎてないといいんだけど・・・）」

その頃、救援の為に現場へと向ったオーリーは目の前にある浦原喜助の技術によって作られた空間凍結の強壮結界を見て一人思案していた。

「強壮型の捕獲結界・・・しかも、これは死神の術だな!?どうやら、白鴎達は閉じ込められたらしい。」

〈Ｐｌｅａｓｅ　ｃｈｏｏｓｅ　ｙｏｕｒ　ａｃｔｉｏｎ.〉

そんなオーリーに向って、双銃剣型デバイスのチータスが言葉を投げかける。

「チータス。お前の主は、ここで退くようなパトリオットだったか？」

〈Ｎｏ〉

「そうだ、チータス。私は・・・今迄もずっとそうしてきた。」

オーリーはそう言うと、足元にリベル式の魔法陣を展開させてブラッドカートリッジ一発をチータスにロードさせて、異形の姿へと変貌を遂げる。

一方、結界の内部では隠していた力を発動させて青き甲冑を身に纏った浦太郎とブラッド状態を発動させて金色の鎧を装着している金太郎が白鴎と瀬間子に向って決め台詞を口にする。

「お前・・・僕に釣られてみる？」

「私の強さに・・・あなたが泣いた！」

そんな挑発的な浦太郎の言葉と金太郎のふざけた台詞に思わず癇癪起こす白鴎と険しい表情を見せて構えを取る瀬間子。

「誰が・・・泣くかよ！」

「貴様・・・くっ！」

と、その瞬間――――――頭上から突然結界を破って中に侵入してくる謎の発光体の巣型が眼に入ってきた。

「「「「！」」」」

「「あ！」」

なのはとフェイトが光が落ちた場所に目を向けてみると、そこにいたのは紛れも無くブラッド状態のオーリーであった。

オーリーの姿を確認すると、浦太郎も思わず彼女の名前を口にする。

「おや？あれは確か・・・オーリー！」

オーリーもまた、以前対戦した時とは姿は違ってはいるが身体から感じる魔力の波長から直ぐに目の前に映ってくる人物が浦太郎であることが分かった。

「（外見は変わっているが・・・あの魔力・・間違いなく、亀井浦太郎か！？）」

すると、ブラッド状態である金色の鎧を身に纏った金太郎は仮面越しに鬼太郎やなのは達にこう言って来た。

「鬼太郎！白鳥殿！なのは殿！フェイト殿！私が良いと言うまで手出しは無用！！私があのわっぱに現実の厳しさを教えてあげます！！」

「ちっ！調子に乗りやがって！」

金太郎の発言を聞いた白鴎は思わず舌打ちをする。

「おいおい、マジかよ・・・熊の奴・・・！？」

「マジなのだろう。」

すると、そんな鬼太郎の頭の中に浦太郎の念話が飛び込んできた。

「（先輩。）」

「（あ？）」

「（僕も・・・この間の借りが残ってるから・・・彼女と。）」

浦太郎は鬼太郎にそう言うと、黙って自分の方を凝視するオーリーを仮面越しに睨み付ける。

浦太郎の言葉を聞き入れた鬼太郎は、頭上のほうで腕組みをしている瀬間子のほうを見上げる。

「ああ。俺も野郎に・・・ちょいと話があるんだよ。」

「ん？」

それぞれの相手が決まったところで、フェイトはパトリオット達のことを一先ず金太郎達三人に任せて、隣にいるなのはと鬼太郎の近くの白鳥に念話で次のように言って来た。

「（なのは・・・それなら丁度良い。私となのは、白鳥さんと手分けしてあの子達パトリオットのボス、ダイシーの血の後継者を探そう。）」

「（ダイシーの血の後継者？）」

「（一体何のことである？）」

「（シグナム達からの報告によれば、パトリオットと名乗る者の上には彼らのボスである者が存在し、彼らはその中でもダイシー派と呼ばれるパトリオットに分類される。ダイシー派のボス、即ちダイ

シーの血の後継者を探し出して、話し合いに持ち込めばきっと分かって貰えるかもしれない。）」

「（了解である。では、私とフェイト殿で外を。なのは殿は中を頼む。）」

「（分かりました。）」

三人はその後、それぞれに分かれてオーリー達のボスである銀太郎を探すために四方へと散らばって行った。

さて、白鴎と対峙している金太郎のほうはと言うと・・・。

〈Ｍａｓｔｅｒ〉

「？」

〈Ｐｌｅａｓｅ　ｏｒｄｅｒ　ｍｅ　ｔｏ“Ｂｌｏｏｄ　Ｃａｒｔｒｉｄｇｅ　Ｌｏａｄ”〉

「分かった！」

金太郎はアックスオーガからの要求を受け入れ、早速ブラッドカートリッジを使用する。

「アックオーガ！ブラッドカートリッジロード！！」

〈Ｂｌｏｏｄ　ｌｏａｄ　ｃａｒｔｒｉｄｇｅ〉

ブラッドカートリッジを読み込むと、金太郎の持つアックスオーガ

の形状が若干変化し大きさも今までよりも巨大化する。

同じように、甲冑モードを発動させた浦太郎に対してフィッシャーマンが話しかけてくる。

〈Ｍａｓｔｅｒ〉

「大丈夫。ちょっとお灸を据えるだけさ。流石に女の子に本気で手を上げるほど、先輩みたいに性根は腐ってないからね♪」

「誰が腐ってるだ、この野郎！！！」

浦太郎の言葉を偶々近くで聞いていた鬼太郎はその言葉に思わず激怒する。

浦太郎はそんな鬼太郎の言葉を受け流すと、フィッシャーマンのシステムを手動で切り替えてブラッド状態のオーリーに対抗する。

〈Ｒｏｄ　ｆｏｒｍ　ａｘｅｌ　ｄｒｉｖｅ〉

浦太郎がフィッシャーマンを構え直すと、向かい合っていたオーリーも気をしき締めて牽制をする。

そして、白鴎の隣に立っていた瀬間子は冷静に金太郎のアックスオーガを見ながら白鴎に警告をする。

「あの男・・・デバイスにブラッドカートリッジを組み込んだのか・・・気をつけろ、白鴎！」

「言われなくても！！」

それぞれが自分なりの思いの丈を抱き、武器を取る。

そして、空座町の空へと散っていく色鮮やかな魔力光と霊圧色。

空中を移動しながら、白鴎は後ろから接近してくる金太郎に向ってこう言った。

「ふん！何をどうやってブラッドカートリッジを組み込んだのかは知らねぇけどよ、オヤジの攻撃は、俺には通用しねえよ！」

「やりもせずして何を言ってる！それで、もし私が勝ったなら・・・お前達の目的を説明してもらいますぞ！例え、泣くことになっても！！」

「だから泣かねぇよ！やれるもんならやってみろよ！！」

白鴎はそう言った後、その場に立ち止まると両腕の鉤爪から魔力を放出させると技の発動に入ろうとしていた。

〈Ｎｅｉｌ　ｃｒａｓｈｅｒ〉

「ふん！！」

白鴎の鉤爪から発射される夥しい数の魔力の爪弾。

金太郎はその体に似合わないほど軽快な動きでそれを全部防ぎ切る。

「コンボイ！」

〈Ｂｌｏｏｄ　ｅｘｐｌｏｓｉｏｎ〉

白鴎はブラッドカートリッジの使用と同時に、姿は最初に対戦したときと同様流のような異形のものへと変化し、莫大な魔力を放出させながら金太郎に突っ込んできた。

〈Ｅｘｔｒｅｍｅ　ｃｒｉｍｓｏｎ　ｆｏｒｃｅ〉

「うおおおおおおりやあああああああ！！！！！！！！！」

「来るか！」

〈Ａｘｅ　ｐｒｏｔｅｃｔｉｏｎ〉

金太郎はアックスオーガに組み込まれた新防御魔法のアックスプロテクションを発動させ、白鴎の凄まじい攻撃を見事に防ぎきっている。

白鴎は今まで体感したことの無い堅い防御壁をどうにか破ろうとするも、全く歯が立たない状況であった。

「くっ！！！堅すぎ・・・る！！！！！」

「現実の厳しさを思い知らせてあげよう！」

〈Ｄｙｎａｍｉｃ　Ｂｕｒｓｔ〉

金太郎はその瞬間、防御壁を強制的に爆発させると白鴎を後ろへと後退させた。

「うわあああ！！！！」

突然のことに思わず体のバランスを崩してしまう白鴎に対して、金太郎は白鴎に狙いを定めるとテニスのラケットを振るようにアックスオーガを構えた。

〈Ｌｅｔ’ｓ　ａｔｔａｃｋ“Ｄｙｎａｍｉｃ　ｈｕｒｒｉｃａｎｅ”〉

「承知！ダイナミックハリケーン！！」

〈Ｄｙｎａｍｉｃ　ｈｕｒｒｉｃａｎｅ〉

金太郎がアックスオーガを振り回した瞬間、凄まじい勢いの突風がそれこそ嵐のように発生し、それがそのまま白鴎に向かって行った。

これには金太郎も度肝を抜いた。

「何と！」

白鴎は軽く足元がふらつく中、金太郎の攻撃に気付くや否や顔色を真っ青にさせる。

「うっ・・・・・はっ！！」

白鴎の下に迫り来る巨大な魔法の嵐。

〈Ｃｏｎｔｒｏｌ，ｐｌｅａｓｅ〉

金太郎はアックスオーガにそう言われると、神経を集中させて魔力

の嵐で白鴎を覆い隠し身動きを取れなくする。

嵐の中で白鴎は負け惜しみのようこう呟く。

「阿呆が！こんな乱雑な動きをする魔法嵐・・・制御なんて出来る訳がない！潰れて消えろ！！」

白鴎はそう言うと、金太郎の下に向って爪弾を発射させてコントロールを妨害しようとするが、それに口を挟んできたのはアックスオーガであった。

〈Ｙｏｕ　ｃａｎ　ｄｏ　ｉｔ．　Ｍｙ　ｍａｓｔｅｒ〉

すると、その瞬間・・・――ダイナミックハリケーンの一部が金太郎の下へと向けられた白鴎の爪弾を全て突風で粉砕してしまった。

それを見た白鴎も思わず愕然とする。

「・・・ま・・・マジで・・・！？」

「これが・・・現実の厳しさと言う奴だ。悪いことをした聞かん坊には、お仕置きですぞ！！！！」

金太郎はアックスオーガを持ち直すと、白鴎に一点集中させるとダイナミックハリケーンをコントロールする。

「ダイナミック・・・・・・」

「くっ！」

〈Ｂａｒｒｉｅｒ〉

危険を感じた白鴎が咄嗟に防御壁を全身に身に纏うが、その後直ぐに金太郎のダイナミックハリケーンが襲い掛かってきた。

「ハリケーン！！！」

途轍もない魔力の突風が白鴎の防御に皹を入れる。

白鴎は悔しい想いを胸に険しい表情を浮かべて金太郎を睨み付ける。

「このオヤジ・・・！」

二人が激戦を繰り広げている同じ頃、浦太郎とオーリーのほうも負けず劣らずの攻防をビルとビルの間を通りながら空中で行っていた。

「逃げんな！」

空中へと逃げていくオーリーを追いかけていく浦太郎。

そして、二人は広い空を舞台に大空中戦を繰り広げる。

「はあああああ！！」

「おおおおお！！」

互いにぶつかり合う刃と槍の一撃。

〈Ｗａｔｅｒ　ｗｈｉｐｐｅｒ〉

浦太郎は距離を取ると、得意の水の変換資質魔法を発動させて槍の先端に竜巻状の水を生成する。

「な！」

これには流石のオーリーも大いに驚く。

「ふふ・・・ウォーターホイッパー！！！」

浦太郎はフィッシャーマンから勢いよく強力な水の竜巻をぶつけていった。

「チータス！」

〈Ｂｅａｓｔ－ｓ　ｓｈｏｕｔ〉

オーリーはブラッドカートリッジの力を使い、ミッド式とベルカ式の魔法を打ち消す咆哮を発生させて水を砂と化した。

「ＧＡＡＡＡＡＡＡＡＡ！！！！」

咆哮を発生させた直後、浦太郎が一瞬の内にオーリーの背後に回りこむとフィッシャーマンの機能を変換させる。

〈Ｒｏｄ　ｆｏｒｍ　ａｔｔａｃｋ　ｄｒｉｖｅ〉

その瞬間、フィッシャーマンの先端に現れる三叉の矛先。

「魔法だけが僕じゃないよ。一度釣られてみれば・・・分かる！！」

浦太郎はそう言うと、オーリーのがら空きの部分目掛けて三叉を差し込んだ。

「ぐあああああ！！！！」

思わぬ攻撃を受けてしまったオーリーは傷の痕を手で押さえ、ブラッド状態を一度解くと浦太郎の前から姿を喰らわせようと動き出す。

「くっ！」

距離を取ろうとするオーリーを見ながら、浦太郎はフィッシャーマンを担ぎながら追跡を開始する。

「悪いけど、今度の僕は逃がさないよ。」

〈Ｒｏｄ　ｆｏｒｍ　ｓｐｅｅｄ　ｏｆ　ｆｌｏｗ〉

浦太郎はその場に魔力水流を発生させると、その水流に引っかかったものを捕捉しようとしていたのであった。

「何所に隠れた？」

四方へと散らばる魔力水流が徐々に範囲を拡大させていく。

すると、浦太郎は左下のほうから感じ取ったオーリーの魔力を捕捉する。

「お？」

魔力水流に映し出された逃げるオーリーに向って、浦太郎はあからさまな様子で次のような一言を告げたのであった。

「あ～あ・・・この先に武装局員と一緒に店長が待ち構えてるって知らないの？」

「何！？」

「な～んてね♪それ！！」

浦太郎はその瞬間、フィッシャーマンの先端から釣り針を伸ばしてオーリーの体を捕らえると自分の下までオーリーを釣り上げたのであった。

「のあああああ！！！！！」

釣り上げられたオーリーが空中に叩きつけられると、汚い手段を使って自分をおびき出した浦太郎に抗議をする。

「き、貴様・・・卑怯だぞ！！」

「よく言われるよ。せりゃあああ！！！」

浦太郎は開き直ったかのようにそう答えると、猛烈な槍撃を息の上がったオーリーに喰らわせる。

「だはあああああ！！！！」

ブラッドカートリッジの反動によって、身体が完全に調子を取り戻せていないオーリーは浦太郎の思う我慢の攻撃を空しく体に入れ続

けられる。

満身創痍になったオーリーを確認すると、浦太郎はカードのようなものを取り出し腹部のベルトの下にそれを翳す。

「そろそろ三枚におろすか？」

「くっ！！」

カードをベルトに翳した瞬間、浦太郎の魔力が一気に上昇する。

〈Ｆｕｌｌ　ｃｈａｒｇｅ〉

そして、上昇した魔力をフィッシャーマンに集めると浦太郎はそのままオーリーの体目掛けてフィッシャーマンを投げつけた。

「はっ！！」

投げつけられたフィッシャーマンをオーリーの体に入り込み、体の自由を奪う。

「ぐっはっ！！！」

そして、それと同時にオーリーの目の前に現れる六角形の的に向って浦太郎は助走をつけて飛び上がりキックをしていった。

「いやあああああ！！！！！」

「のあああああああ！！！！！」

浦太郎の蹴りがまともにヒットすると、オーリーは勢い余って後ろのビルへと激突する。

そんな立場の逆転したオーリーに向って浦太郎がこう口にしてきた。

「ブラッドカートリッジシステムは、確かに強力だ・・・けど、その分魔力の消費も使用者には尋常じゃない負担となりうる。だから、一度が変身をといて魔力消費を抑えないといけない。正に諸刃の剣と言うべきもの・・・かな?」

「くっ!!!強いな・・・亀井浦太郎・・・」

〈Ｓｗｏｒｄ　ｆｏｒｍ〉

オーリーは徐に浦太郎の前に現れると、チータスを剣の姿へと変化させる。

攻撃をその身に受けているにも拘らず、オーリーの表情は何所か楽しそうであった。

「それに、フィッシャーマンも!」

オーリーの言葉を聞いたフィッシャーマンも紳士的な口調で返事をする。

〈Ｔｈａｎｋ　ｙｏｕ〉

「人に褒められること、僕ってあんまりないんだけど・・・一応受け取っておくよ。」

「この身に、為さねばならぬことがなければ・・・心躍る戦いだったはずだが、仲間達と我がボスのため、右腕として今はそうも言ってられん。殺さずに済ます自信はない。」

オーリーはそう言うと、リベル式魔法陣を展開させて剣型のチータスに魔力を集めていく。

「この身の未熟を許してくれるか？」

「以外だね。てっきり、君達の狙いはミッド式とベルカ式両方の魔導師を潰すことだとばかり思っていたから。その言い方は興味深いよ。それに、許すも何も・・・僕は最初からそうしてきたつもりだよ。女の子は戦士であっても許すべき姿だからね。」

「・・・成程・・・」

お互いに敵同士であることははっきりしているが、この二人の場合は何所か違っていた。

戦っている時でも、楽しさを決して忘れてはいなかったのだ。

そんな金太郎や浦太郎の戦闘を他所に結界の補助を担当する一護達死神組みと、ダイシーの後継者を結界の外と中で捜索し続けるなのは達。

この戦い・・・・・一体どのような雲行きへと展開するのであろうか？

また、同じ頃鬼太郎と瀬間子のほうもかなり荒っぽいやり方ではあるが激戦を繰り広げていた。

「せりゃあああああ！！！！！」

鬼太郎の炎熱攻撃が刀身に乗って、瀬間子へと牙が向けられる。

瀬間子は険しい表情を浮かべたまま必死で烈火の炎を受け続ける。

「ぐっ！！！！！」

「この髭クソ男！！！てめぇらのボスは何所だ！？遭って話ぐらいさせやがれ！！！！！」

「誰か貴様ら魔導師や死神風情に、我らパトリオットのボスを遭わせるものか！」

「何を！！」

「我らのボスは、もうじきパトリオットの楽園を取り戻し、我らはボスと供にこれからずっと・・・誰にも干渉を受けずに静かに暮らすのだ！！それを邪魔する気か、貴様！！！！」

「へっ！悪いな・・・それが俺の趣味なんだよ！！！！」

その瞬間、一気に烈火の炎が大きくなるとその場で大爆発が起こった。

「うっ！！けっい！！！」

爆発の中から出てくると、瀬間子は頭上で繰り広げられる戦闘の様子を見ながら念話で近くに来ている田吾作と連絡を取り合っていた。

「（状況は・・・あまり良くないな。オーリーや白鴎が負けるとは思わんが、此処は退くべきだ。田吾作、何とかできるか？）」

その頃、結界の外で策を考えている田吾作も予想もしなかった事態に頭を悩ませていた。

「（何とかしたいけど、死神の連中が外で結界維持してるんだよ。俺の魔力じゃ勝手の違う霊力結界は破れねえ。オーリーのシューティング・ブラスター・ソニックか、白鴎のアルティメット・パワー・フォース級の魔力を出さねえと・・・）」

「（二人とも手が出せん。止むをえん・・・俺が何とかしよう。）」

「（けど、それじゃあ瀬間子が・・・！！）なっ！？」

「（田吾作・・・どうした、田吾作！？）」

田吾作の様子が突然可笑しくなったことに、動揺する瀬間子。

そして、その田吾作自身はと言うと・・・・・後ろからなのはのレイジングハートを突きつけられ動けないでいたのだ。

なのはは冷淡な口調で田吾作に対して、武装解除を求める。

「管理局局員への危険魔法使用、及び殺人未遂の現行犯で・・・あなたを逮捕します。直ぐに騒乱の停止と武装の解除を。」

モニターでその様子を見ていたクロノやはやて・リィンの三人も安堵の溜め息をつく。

「やりました！」

「流石、なのはちゃん。ナイスや！」

「ああ。これで一先ず大丈夫だろう」

田吾作はなのはにバインドを掛けられると、そのままなのはの言葉を背中越しに聞いていた。

「じっとして。抵抗しなければ、弁護の機会が君にはある。同意するなら、大人しく・・・」

「くっ・・・あ！」

と、その時だった。

「え！？」

なのはが後ろを振り向いた瞬間、何者かが突然なのはの背中に向って蹴りを入れてきたのだ。

「ふん！」

「きゃあああああ！！！！！」

なのはは勢いよく吹き飛ばされると、ビルの鉄格子に衝突する。

背中を多少痛めたなのはが目の前を向くと、田吾作の隣には同い年ぐらいの少年が立っていた。

「くっ・・・・・な、仲間・・・!?まだ居たの・・・?」

なのはの援護にやって来たフェイトも、この状況は思いしていなかった。

「そんな!」

『はやて、リィン。今のは!?』

「それが・・・分かりません!こっちのサーチャーには何の反応も!?」

「どうなってるんや、一体!?何で、どうして!?」

少年は田吾作のバインドを解くと、軽く腕を回したのであった。

田吾作はそんな少年の姿を見るなり、眼を見開いた。

「東海林・・・何でお前が!?銀太郎の処に行ってたんじゃなかったのかよ?」

「行ったさ。行ったけど、お前達が戻ってないから不思議に思ってな・・・探しに行ったらこれだ。何をやってんだよ。」

「う、うるせーな!どうしようもない状況だったんだよ!」

「はいはい・・・此処は俺が結界を破る。破壊したら、一目散に逃げるぞ。」

「けど、大丈夫なのか？あの結界は・・・」

「死神の作った物である事ぐらい、知っている。それに、俺の力のことはよく知ってる筈だぜ。結界破壊はお手のものさ。」

「・・・分かった。じゃあ、頼むぜ。」

田吾作に許諾を貰うと、東海林は戦闘を行っている残りのメンバーに念話で指示を出す。

「（お前ら、よく聞け。）」

「（なっ！東海林か！？）」

「（今から結界破壊の砲撃を撃つからよ、上手くかわして・・・そのまま撤退だ。）」

「「「おう！」」」

なのはは直ぐに体を起すと、東海林と田吾作の前に現れレイジングハートを構える。

「あなたは一体誰！？あの子達の仲間なの！？」

「パトリオット、東海林棗（しょうじなつめ）。ダイシーの血の後継者であり俺らがボスを守護する六人の一人。訳あって、今回の件に加担している。」

「レイジングハート！」

〈Ｄｉｖｉｎｅ　ｂｕｓｔｅｒ〉

なのはは東海林に向けてバスターを放とうとしたその瞬間、田吾作の横槍が入ってくる。

「はっ！」

「そうは・・・いかない！！！」

田吾作はエアラザーのスピードを駆使して、なおはの背後に回りこむと突風でなのはを吹き飛ばした。

「きゃあああああ！！！！！」

「！！なのは！！」

フェイトはなのはを助けようと直ぐに飛んでいく。

その間に、田吾作は東海林に指示を出す。

「今だ、東海林！」

「ああ。行くぜ、ライノックス。」

〈Ｒｈｉｎｏｘ　ｂｌｏｏｄ　ｅｘｐｌｏｓｉｏｎ〉

東海林はブラッドカートリッジをロードした瞬間、姿はトリケラトプスをモチーフとしたかのようなものへと変り、ビルの屋上に巨大なリベル式魔法陣を展開させると、結界の真上に巨大なエネルギー物質を生成する。

それを見ていた一護やルキア達もその突然の出来事に驚愕する。

「これは！」

「はあああああ！！！！」

フェイトは怒りの矛先を田吾作に向けると、ハーケンフォームで田吾作に切りかかっていった。

田吾作はエアラザーの力でそれを受け流しながら、フェイトと会話する。

「そうカリカリしなさんな。それに、今は動くなよ。」

「何だと！？」

「時を待て。それが正しいと直ぐに分かる。」

「正しい・・・だと！？人を平気で傷つけるような奴に・・・正しいも何もあったものじゃないだろ！！」

〈Ｐｌａｓｍａ　ｌａｎｃｅｒ〉

フェイトはプラズマスフィアを生成し、それを田吾作に向けて発射する。

田吾作は軽快な動きでそれを回避しつつ、フェイトを挑発するかのような口調でこう言って来た。

「そうやって戦うことでしか言葉を交わそうとしない奴の言葉に、

説得力は果たしてあるのか？」

「黙れ！」

「全く・・・どいつもこいつも自己中だな。」

そんな攻防をしている間に、東海林は準備を整えると結界魔法の魔法を発動させる。

「撃て、黒き旋風の一撃！」

〈Ｎｏｂｌｅ　ｓｔｒｅａｍ〉

結界を維持していた一護達もこの状況は流石に危険であると判断したのか直ぐに金太郎たちの下へと急いで向う。

「げ！マズイな・・・ルキア、恋次、吉良！間に合うか！？」

「やってみよう。」

「一か八かだがな！」

また、クロノの命令でなのはの救援に向ったユーノはなのはの救護へと向う最中、金太郎たちの危機を察知して、魔力防御を発動させようとした。

「あれは・・・！？兎に角、ここで防御を！」

徐々に輝が入り破壊されようとしていく浦原喜助の作り出した強壮結界を仰ぎ見ながら、オーリーは浦太郎にこう言って来た。

「済まぬ、亀井浦太郎。この勝負、預けるぞ！」

オーリーはそう言うと、浦太郎の前から姿を消した。

「・・・やれやれ・・・釣った魚はでかく見える・・・だけじゃないか。」

同じ頃、金太郎と戦いを続けていた白鴎は金太郎に向って自分の本当の名前を告げてきた。

「パトリオット、ダイシーの血の後継者を守護する六人の一人。白鴎恭一郎。オヤジの名は？」

「・・・元時空管理局本局、武装隊名誉元帥・・・熊谷金太郎！」

「熊谷金た・・・ん！？キンタ・・・ええい！！！卑猥な名前だ！！！！」

白鴎は金太郎の名前がはっきりと言えないと、逆上し金太郎の名前が卑猥だと文句をつけてきた。

そのことに、金太郎は思わず肩の力が抜ける。

「ガク！ど、何所が卑猥なのですか！？」

「兎も角だ！！一先ず勝負はまた今度だ！次は捻りつぶすからな！完膚なきまでにな！！！」

金太郎にそれだけ言い残すと、白鴎は全速力で結界の外へと逃げて

行った。

「こ、こら!!勝手に逃げるでない!!おっと!?」

金太郎は直ぐに白鴎を追いかけようとしたのだが、何所からともなく襲ってくる結界破壊の技によって、追跡が出来なくなってしまう。

同じ頃、鬼太郎と対戦していた瀬間子も逃げる際にこんなことを言い残した。

「仲間を守ってやれ。直撃を受けると危険だ!」

「何・・・!?あ、ああ・・・」

鬼太郎は瀬間子にそう言われると、頭上から降り注がれる巨大な魔力爆撃から金太郎達全員を守るために防御に回る。

そして、鬼太郎が防御に回ったその瞬間・・・頭上から東海林の発動させた巨大魔力爆撃が天より降り注がれた。

モニターが突然砂嵐上になって映らなくなると、クロノははやてとリィンに連絡を入れ、状況の確認を急がせる。

『状況は!?』

「魔力爆撃・・・物理被害はありません!でも、ジャミングされてサーチャーとレーダーが!」

魔力爆撃が収まると、鬼太郎はユーノの防御魔法の上から本来は余り得意ではない防御魔法を重ねて金太郎やなのは達と言ったこの場

にいた全員の防衛に成功した。

鬼太郎は思い溜め息をつくと、空中で胡坐をかいた。

「はぁ～～防御は得意じゃねぇんだけどな。」

「しっかりするである。」

一緒にいた白鳥はそんな鬼太郎の肩を軽く叩いて労ってあげた。

ユーノは、軽い打ち身をしたなのはに心配そうな表情で怪我の具合を尋ねる。

「なのは、大丈夫!?」

「うん・・・一応・・・ありがとう、ユーノ君。」

近くにいた一護は徐々に消えていく結界を仰ぎ見ながら、険しい表情を浮かべパトリオットを取り逃がしたことを後悔する。

「逃がしちまったか。それも新しい仲間の乱入とは、見当もしてなかったぜ。」

その頃、オーリー達五人の帰りを一人自宅で待つ銀太郎はと言うと、突如起こった停電によって身動きがとれずにいたが、慌てる様子も余り見せずに落ち着いて部屋の中を物色し蝋燭を持ってくると、火をつけた。

ぼんやりと灯る蝋燭の日を頼りに、銀太郎は読みかけの本を読んで時間を潰す。

すると、そんな銀太郎の下に最初に帰ってきたのは・・・オーリーでも白鴎でもなく、前進をずぶ濡れにした一人の男であった。

男は黙ったまま銀太郎の下に近付き、銀太郎もその男に気がつくと本に目線を向けたままその男の名前を口にする。

「高円寺さんですか？」

高円寺と呼ばれるその男は、銀太郎の呼びかけに対して黙って頷くと暗い部屋を見渡してから返事をする。

「暗いな。」

「急に停電になっちゃって。でも、蝋燭があれば本は読めます。これでいいんです。」

「相変わらずだな。」

「そっちこそどうしたんです？雨も降ってないのに、びしょ濡れじゃないですか？」

「うっかり、車に水をかけられた。」

「服を乾かしたほうが良い。風邪を引きます。電気が復旧したらお茶を淹れます。」

「気を使わなくていい。ところで、他の連中は如何した？」

「外に出てます。多分・・・厄介ごとに巻き込まれてるんだと思い

ます。」

すると、その時。

テーブルの上に置いてあった銀太郎の携帯電話が鳴り響いた。

銀太郎がそれを取ろうとすると、高円寺が親切心から先に手を出して電話を取ってあげた。

「ああ・・・俺が取ろう。」

高円寺は携帯の着信ボタンを押すと、直ぐに銀太郎の手元までそれを運んだ。

銀太郎が耳を当てると、聞こえてきたのは公衆電話越しに申し訳なさそうな声色で話をしてきた田吾作だった。

「もしもし、俺・・・田吾作だけど!銀太郎・・・あの・・・その・・・本当に悪かった!直ぐ済むと思ってたんだけど、全員と中々落ち合えなくてよ!それで・・・時間掛かっちゃって・・・ああ・・・携帯も置いてっちゃってよ・・・今は・・・公衆電話からかけてるところ。あと、１０分くらいで帰るから・・・ああ・・・みんな一緒だぜ。えっと・・・何て謝ったら良いか・・・」

「気にしなくていいよ。それよりもよかった・・・え?別に怒ってないよ、僕は。平気だよ。謝らないで。こっちも急に停電しちゃったし・・・何よりさっき高円寺さんも到着したところだから。うん・・・これで全員揃ったね。帰ってきたら、みんなで冷しゃぶでも食べながら今後の話をしよう。」

「分かった・・・本当に悪かったな・・・じゃあ、直ぐに帰るから。あ、その前に白鴎に代わるわ。」

田吾作はそう言うと、外で待っていた白鴎と電話を代わる。

白鴎は田吾作から受話器を取ると、銀太郎と話を始めた。

「銀太郎・・・もしもし?」

そんな様子を何所か複雑そうな表情を浮かべながら一瞥するオーリーや瀬間子・東海林の三人の下に田吾作が歩み寄ってくる。

すると、徐にオーリーが田吾作にこう口にしてきた。

「・・・寂しい想いを・・・させてしまったな・・・」

「ああ。」

「それにしても、もう少し到着が早くても良かったんじゃないのか、東海林?」

瀬間子が隣にいた東海林にそう言うと、東海林は軽く一息ついて返事をする。

「こっちも探すので一杯一杯だったんだよ。」

「管理局の連中も、これで更に益々本腰を入れてくるだろうな。」

「ブラッドカートリッジの浪費は避けたいところなのにな・・・」

「だが、あまり時間もない。」

「ああ。」

「確かに・・・」

オーリーの言葉を聞いた白鴎以外の全員は、ある一つの願いが胸中に浮かんでいた。

「一刻も早く、銀太郎を・・・真のダイシーの後継者にしなくては。」

「そうだな。」

オーリーがその決意を胸に、待機状態のチータスを強く握ると電話ボックスの中から白鴎が受話器を持ったままオーリーに声を掛けてきた。

「オーリー？銀太郎が代わってって。」

「ああ・・・・・・――――――――もしもし、オーリーだ。」

オーリーは白鴎から受話器を取ると、銀太郎と話し始めたのであった。

その後、オーリー達は成る丈急いで銀太郎が待つ自宅へと帰ってきた。

オーリー達が無事に帰ってくると、銀太郎も夕食の用意を整えていたところであった。

「帰ってきたね。おかえり、みんな。」

「ああ。本当に悪いことをした。」

オーリーを始め、五人の表情は実に重いものであった。

「だから謝らないでよ。それより、高円寺さんから良い報せだよ。」

「良い報せ？」

白鴎は銀太郎の言葉に思わず首を傾げる。

すると、そんな全員のほうに近付いてきた高円寺がポーカーフェイスを浮かべたまま、オーリー達が度肝を抜く一言を発した。

「・・・聖地への扉は・・・この町にある。」

「「「「「な！？」」」」」

オーリー達はこの一瞬間、自分達が苦労しても探し出すことが出来なかった聖地への扉が意外にもこの町にあると言う事実を聞いた途端、言葉を失った。

「灯台下暗しってやつだよ。明日になったら、みんなで一緒にそこに行こう。聖地への扉が開かれるとき、パトリオットの誇りは完全に取り戻される。」

「全ては・・・パトリオットの誇りの為に。」

高円寺がそう言うと、オーリー達の表情も真剣そのものになった。

一体、パトリオット達が捜し求める聖地への扉とは一体何のことなのであろうか！？

その頃、空座町に家を構える一護の家に一度怪我の手当てをするためにやってきたユーノ達や、クロノと供にユーノの呼び出しを受けたティアナ達フォワード一同は、今までの捜査の流れとパトリオットの目的に関する考察を交えながら、今回金太郎のデバイスに組み込まれたリベル式のブラッドカートリッジシステムに関する説明を受けていた。

「本来なら、ブラッドカートリッジシステムはミッド式とベルカ式のデバイスには絶対に組み込めない勝手の違うものなんだ。パトリオット達が、独自の研究の末に辿り着いたそれを御しきれるデバイスなんて、リベル式以外はないんだけど・・・」

「無いんだけど・・・？」

なのはがそう言うと、ユーノは一拍置いてから更に続ける。

「うん・・・アックスオーガがどうしてもって。余程悔しかったんだろうね。自分が金太郎を守って上げられなかったこと、金太郎の信頼に答え切れなかったこと。」

ユーノの言葉を聞いた金太郎は、自分の掌の上に置かれたアックスオーガを見つめながら、深い感謝の気持ちを覚えた。

「アックスオーガ・・・お前・・・」

〈Ｎｏ　ｐｒｏｂｌｅｍ〉

「ブラッドカートリッジを使用すると、ブラッド状態と呼ばれる戦闘体系に変化するが、金太郎の場合はあの金色の甲冑がそれだから。それから・・・アックスオーガの場合、フルドライブのアックフォーム・ダイナミックハデスは、デバイスは勿論・・・身体的な負担も大きいからあんまり使って欲しくないんだ。切り札は最後の最後まで温存しておかないといけないからね。」

「はい。分かりました、店長。」

「けどよ、お前の話じゃブラッドカートリッジはリベル式のデバイスしか使えないはずだろ?何でアックスオーガはリベル式のブラッドカートリッジが使えたんだよ!?そいつは元々が浦太郎のフィッシャーマン同様、ミッドとベルカの混合型だろ?」

話を聞いていた恋次がソファーの上で、気になった疑問をユーノにぶつけて来た。

「ええ。その通りです・・・ところが、修理の際に詳しく調べてみたところ・・・アックスオーガには封印されていたある力があることが判明したんです。」

「な!?封印されていた力・・・!?」

「一体何なんや、それは!?」

フェイトやはやてを始め、前線メンバーの殆どがその事実に驚愕しユーノに事の真相を問いただそうとした。

「うん。それを話す前に・・・金太郎。アックスオーガを手にしたのは何時の頃？」

「はい。私がまだ5歳の頃に、父上から譲り受けたものですが・・・それが何か？」

「そうか。なら一つ間違いがある。お前はアックスオーガを“譲り受けた”んじゃない。“受け継がれた”んだよ。お前のお父さんから。」

「！？」

「「「何！？」」」

「ど、どう言う事だユーノ！？」

ユーノの言っている言葉の意味がいまいち理解できないクロノが解り易く説明をするようにユーノに求めた。

「金太郎の父、熊谷欽之助は先代からずっとこのアックスオーガを受け継いで来て、それを自分の息子である金太郎へと継承した。ある機能をデバイスの奥底に封印してからずっとね。」

すると、その瞬間白鳥の頭に何かがぴんと来た。

「！まさかその機能とは・・・！？」

「ええ。僕が話そうとしているそれですよ。知らないようなら教えてあげるよ、金太郎。君のご先祖さんは・・・パトリオットの礎を築いた、最初のパトリオットだったんだよ。」

「な！！」

「「「本当に！？」」」

「「「「「信じられない！？」」」」」

「説明してくれるか、ユーノ。金太郎の先祖のこと・・・それと、アックスオーガについても。」

一護がそう言うと、ユーノは間を空けてから徐に調べ上げた金太郎の血筋とアックスオーガに関する記憶を全員に話し始めた。

「・・・今から１０００年以上前・・・ミッド式とベルカ式の魔導師達による激しい勢力争いが頻発して多くの者達が巻き添えを食らっていた頃、それに打ち勝つために寄り集まった者達がパトリオットの前進である結社を創った。そして、極秘裏にリベル式の魔法形態を創り出すための研究が始まった。紆余曲折はあったが、１００年の歳月が幸を結んで・・・彼らはついにそれを成し遂げた。もう分かるだろ・・・このリベル式魔法やブラッドカートリッジシステムを開発したのが、金太郎の先祖で初代パトリオット“エドワード・コーク”だ。」

「エドワード・コーク・・・！？」

「あの『権利の請願』を起草した人と同じ名前ですね・・・」

「アックスオーガとは、そのエドワード・コークが使っていた最初のリベル式のデバイスだった。だが、ある時強すぎる力を恐れたエドワードの部下達数名のパトリオットが彼の没後にリベル式の力を

デバイスの奥底に封印し、代わりに自分達が恨んでいる筈の決して交わることの無かったミッド式とベルカ式の力を混合させたデバイスへと改造を施した。」

「何故、そんなことを!?」

「当時、パトリオット達の間では両者の魔法に妥協しようとする穏健派と徹底的にそれらを排除しようとする急進派の二者達の間で内乱が勃発していた。エドワードは穏健派の代表として、そして・・・もう一つの派閥、急進派のリーダーのアルバート・ヴェン・ダイシーの主張はぶつかり合い、平行線を辿った。」

「そうか。奴らの言っていたダイシーって言うのはそいつのことだったのか・・・!!」

恋次と鬼太郎はユーノの話を聞いて、漸くパトリオット口にしていた謎だったダイシーと言う言葉の意味を理解した。

その後も、ユーノの説明は続く。

「エドワードは何度も何度もダイシーに説得を応じてみたが、彼の答えは決まって“ミッド式とベルカ式の魔導師は皆同じ。例えいい奴でも、外敵であることに違いはない”と。やがて、両者はちょっとした諍いからお互いに力を交え・・・仲間同士で殺し合った。激闘の末、エドワードはダイシーを自らの手で殺してしまうほどの強すぎる力を酷く呪った。そして、それと同時にこの魔法が何れ破滅を齎すものと考え、力の根絶を決意した・・・エドワード自身も気付いていたんだろうね。元々が復讐の為に創られたこの魔法は何も生み出さないと。」

「だから、自らの魔法を捨ててミッド式とベルカ式の魔法が正しく使われることを願い全てを委ねて眠りに付いたということか。皮肉なものだな・・・」

「だけど、彼の死後もアックスオーガだけは場所は違えど彼の血を引く直系尊属に密かに受け継がれて、金太郎もまたそれを受け継ぐものだったのさ。」

「私が・・・エドワード氏の・・・！」

「エドワードの部下は、万が一の時のためにデバイスの奥底に封印したリベル式の魔法を解く鍵をちゃんと残していてくれた。後世にダイシーの血を受け継ぐものが惨事を起こし、世界を破滅へと導くことを危惧し、それに対抗するために。そして、その封印を解くのに必要だったのが・・・これだ。」

ユーノはそう言うと、懐から試験管のような小瓶に入れられた赤い血を全員に見せた。

「初代パトリオット、“エドワード・コークの血”だよ。」

「「「「な！？」」」」

「エドワード・コークの・・・！？」

「血・・・！！」

「で、でも！！何でユーノ君がそれを持ってるの！？」

動揺する全員の気持ちを代弁して、なのはがユーノに尋ねる。

「探しに行ってたんだよ。エドワードの部下が世界の何所かに隠したというこれを見つけ出す為にね。実際、相当苦労したよ。当てもなく異世界中を飛び回って、漸く見つけたんだ。しかも、見つかったのは金太郎・・・お前のお父さんのお墓からなんだ。」

「！父上の・・・！？」

「罰当たりと思いつつ、お墓を掘り返してみたら・・・見つかった。エドワードの血と一緒にこの手紙もね。」

そう言うと、ユーノはエドワードの血と一緒に金太郎の棺の中から見つかった年期の入った茶色の手紙を取り出し、金太郎に手渡す。

金太郎がそれ受け取り、徐に中を開いてみるとそこに書かれていたのは次のような内容であった。

「こ、これは・・・！？」

〈金太郎。これを読むときには恐らくダイシーの子孫が血を使って騒動を起こしている頃だと思う。お前には今まで黙っていたが、私達は初代パトリオット、エドワード・コークの代よりインテリジェントデバイスであるアックスオーガの力と、血を守り続けてきたのだ。別に隠すつもりは無かった・・・だが、お前にはこの宿命が重荷になるのではないかと感じて、最後まで言わなかったんだ。本当に済まないと思ってる・・・だが、謝ったところで意味は無い。事態が深刻になる前に、真実を聞いたのならば・・・ダイシーの子孫が聖地に眠りしあれを見つけ出すその前に、彼らを止めてくれ。これ以上、彼らに罪を重ねさせないでやってくれ・・・・・父より。〉

手紙の内容を聞いた恋次は、最後の行に書かれていたあれと言う言葉に疑問符を浮かべた。

「あれだと!?ひょっとして、そいつが連中の狙いか!?」

「何なの、あれって!?」

「それはまだこの段階じゃ分からないけど・・・少なくとも、彼らが聖地と言う場所に向おうとしていることははっきりした。」

話を聞いていたスバルを始めとするフォワード五人は聖地と言うものが何を指しているのかを自分達なりに考えていた。

「聖地って何のことだろう・・・?」

「イェルサレムのことでしょうか・・・?」

「イスラム教やユダヤ教じゃあるまいし、それは無いってキャロ。」

「と言うより、どうしてキャロがイェルサレムを知っているのかしら?」

ティアナとエリオは何故キャロが地球のそれもそれなりに難しいことを知っているのかが今一分からなかった。

すると、ギンガが隊長陣に金太郎の奪われた謎のパーツのことを思い出し、次のように話しかけてきた。

「もしかして、奪われたアックスオーガのパーツと言うのは・・・

その聖地と何か関係しているのでしょうか？」

「多分。その可能性は大きいだろうね。」

すると、鬼太郎と白鳥がふとオーリー達パトリオット達の言動に関して疑問符を浮かべた。

「それより、気になるのは・・・あいつらダイシーの後継者を守護する六人のことだけどよ・・・」

「どうも妙であるな・・・」

「妙って、何がですか？」

「どうも腑に落ちねぇんだよな。連中はまるで、管理局に恨みを持つというよりは守護すべきボスと静かに暮らしたいとぬかしてやがった。パトリオットの誇りを取り戻した暁には・・・って。」

「それともう一つ。今までの調査の中で判明したのだが・・・あやつらからは魔法とは別に独特な霊圧の波長をも感じた。」

「！霊圧の波長・・・！？じゃあ、彼らには霊力も備わっていると言うのですか！？」

フォワードメンバーが白鳥の言葉に驚愕したその時・・・・・・玄関のほうから中に入ってきた一人の男によって話が一度中断する。

「その件に関しては僕が説明をしよう。」

「え！？」

「「「「あ！」」」」

全員がその男の声のする方へ振り向くと、目の前に映って来たのは眼鏡をかけた一護の高校時代からの悪友で、滅却師でもある石田雨竜であった。

一護は突然の石田の訪問に関して、大いに驚いた。

「――――――石田・・・！何でお前、此処にいる！？」

「君やユーノ君に、どうしても伝えておかなければならないことがあってね。偶々鉢合わせた井上さんと一緒に此処へやってきたと言う訳だ。。」

「どうしても伝えておかなければならないことだと？」

「そうだ。君達は、あのパトリオット達のことで今頭を悩ませているんだろう？魔法を使う者でありながら、奇妙な霊圧を発する彼らの素性について・・・」

「ああ。けど、何でお前が連中のこと知ってんだよ！？」

一護のその言葉を聞くと、石田は眼鏡をかけなおしてから話を始める。

「・・・9年前の話になる。当時、僕の父・・・石田竜弦（いしだりゅうけん）の経営する空座総合病院にある子供と一緒に、四人の親戚と語る人たちが現れたそうだ。父も不審に思って密かに調べてみたところ、ある事実が判明した。その四人は・・・9年と言う歳月において、“全く姿

も歳も変わっていない”ことが判明した。

「「「「「なっ！？」」」」」

「「「「「そ！？」」」」」

「んな、莫迦なことが！？」

一護・ユーノは勿論、なのは達機動六課の面々や恋次達死神のメンバーもその頓狂な言葉に思わず言葉を失った。

「そして、これがその当時の監視カメラが捉えたの四人の顔写真だ。」

石田はそう言うと、懐から病院の監視カメラからプリントアウトしたその当時のものと現在のものとが映された顔写真を全員に見せた。

全員はその写真に写っているその人物達の姿を見るなり、度肝を抜いた。

「なっ！これは・・・！？」

写真に収められていたのは、紛れも無く先程自分達が拘束しようと奮闘したパトリオット達なのであったのだ。

「あの子達だ！！」

「ま、マジかよ・・・！？」

「で、でもそんな・・・それじゃあまるで彼らが人間じゃないって

言ってるようにも思えるじゃないですか!?」

「人間じゃないとすると・・・我々と同じ闇の書に組み込まれた擬似人格か・・・!?」

すると、シグナムのその言葉を聞いた石田が直ぐに返事をしてきた。

「いや、彼らは間違いなく人間だよ。ただ、“普通の人間ではない”と言うだけでね・・・――」

「普通の・・・人間じゃない・・・はっ!おい、石田、まさか!?」

「そんな!?石田・・・!!」

「一護さん・・・やっぱり彼らは!?」

一護・ルキア、そしてユーノの三人はふと頭の中に浮かぶ一つの結論に関して、半信半疑ではあったがかなりの確信を持っていた。

恋次も吉良もそんな一護達と同じ考えに至るが、なのは達だけは全く話が読めずに戸惑いの表情を浮かべていた。

「え!?ゆ、ユーノ君も一護さんもルキアさん達も・・・分かってるんですか!?」

「お、教えてくださいよ!私達も分かるように・・・あの子達の正体を!?」

すると、石田は間を空けた後に彼らパトリオット達の正体をなのは達に明かした。

「――――彼らは・・・・・・“バウント”だよ。」

パトリオットの願い（後書き）

教えて、ユーノ先生！

ユ「今日はエドワード・コークについてね♪」

ユ「これは本当に実在する人物からとったものだけどね。エドワード・コークとは、法の支配という憲法原理を確立させた人物で、あの権利の請願を起草した人物でもあるんだ。」

ユ「彼は当時のステュアート朝の王、ジェームズ一世の王権神授説に対して異を唱え『国王といえども神と法の下にある。』と言ったことで有名だね♪」

恋「随分難しい話じゃねぇかよ。つうか一体お前は何所でそんな知識を拾って来るんだよ！？」

ユ「本を読んでいれば自然と身に付くものですよ♪恋次さんも偶には本でも読んでみたらどうですか？」

恋「う！！あ・・・ああ・・・ど、努力してみるぜ。」

一「恋次。顔から汗が垂れてるぞ・・・」

魔導師図鑑ハイパー！

地球滞在中、実家で泊り込んでいるなのは達。

そんなある日、士郎は物思いに一人腕を組みながら溜め息を吐いて

いた。

士「はぁ～～～～～」

桃「あら、どうしたの？」

士「ん・・・最近、妙に白髪が増えてきてさ・・・この前なんか髪の中に数十本ぐらい混じってたんだ。俺、このまま白髪だらけのオッサンになるのかな・・・」

肩を落とし落胆する士郎。

桃「そんなことないわよ。それに、私はどんな姿になたってあなたの事を愛し続けるわ・・・」

士「桃子・・・・・ああ・・・俺もだ！」

桃「あなた・・・」

完全に二人きりの世界に入り込む中、美由紀と手伝いのヴィヴィオは困惑した様子で伺う。

美「どうでもいいから・・・仕事中にいちゃいちゃしないの。」

ヴィ「これぞ、元祖バッカプルか・・・！」

衝撃！パトリオットの正体（前書き）

田「それは、小さな願いでした。」

瀬「何事も無い、穏やかな日々・・・ただ静かに過ぎていく日々・・・」

白「何よりも愛しかったその日々。暗く・静かに落ちた影。」

オ「運命と言う名の鎖を断ち切る力・・・この手に獲ることが出来るなら・・・全てを捨てても構わないと。誓いは遥か彼方のリベルの星の下、この手の魔法で・・・未来を開く！」

ユ「ユーノ・スクライア外伝　パトリオット篇・・・始まります。」

＞ｉ１２５０９―７０９＜

石田の口にしたバウントと言う言葉を聞いた瞬間、その場に居た全員は沈黙する。

そして、暫くの間を空けた後ユーノが複雑そうな表情でバウントと言う言葉を呟く。

「バウント・・・か・・・」

「バウント？」

なのはは聞き覚えの無い単語に首を傾げるが、その一方で恋次は頭を抱えながら思い出したかのようにバウントのことを語りだす。

「そっか！俺達が感じたあの妙な霊圧は・・・バウント独特のものだったのかよ！けど、何で今になってまたバウントが・・・！？」

完全に置いてけぼりを食らう機動六課前線メンバーであったが、は

やてとヴィータが全員の気持ちを代表してバウントの説明を求める。

「ちょ、ちょっと！私らだけ蚊帳の外じゃ困りますよ！説明してください！」

「そうだぜ！早く教えろよ！！」

二人にそう言われると、ユーノは一護と一度顔を見あせてから徐にバウントのことを語り始めるのであった。

「・・・あれは一護さんが高校一年生の頃、とある事件が空座町で発生した。突然、人間の魂が抜き取られ、抜き取られた人間は砂となって消滅すると言う奇怪な事件が・・・そして、その事件の真相に居たのが、バウントと呼ばれる一族だったんだよ。」

「一族だと！？」

シグナムがその言葉を復唱すると、ユーノは更に詳細な説明を始める。

「数は少ないんだけど、バウントは石田さんみたいな滅却師（クインシー）同様、特殊な能力を持つ人間だよ。尤も滅却師は、自分達に災いを齎す虚を滅却する力を持つだけだが・・・バウントは、人間の魂を吸収し自らの糧とするんだ。また、滅却師は人間として生まれ人間として死んでいくが、バウントは人間の魂を吸い続ける事によって永遠に生き永らえることが出来るんだ。」

「永遠に生きる・・・！？」

ある特別な条件でこの世に生を受けたフェイトも、永遠を生きる生

物がこの世界『地球』に存在していることには大いに驚いたらしい。
勿論、それは他のメンバーも同様ではあったが。

「うん。バウントは人間の魂を吸い取って糧とし永遠に命を得る。そう言う種族なんだよ。地球でよく吸血鬼の話が出てくることがあるでしょ？あれは時代と場所によってバウントが地球でそう呼ばれていたからなんだよ。」

「そうだったんだ・・・」

納得した様子でなのはがそう言った後、今度は一護が過去の事件のことを話し出した。

「だが、バウントは１０年前・・・生きた人間の魂を吸って、その力で尸魂界を攻め落とそうとしたんだ。俺達が総力を挙げて何とか連中の野望を阻止することは出来たが、まさかこんな形で再会することになるとはな。」

すると、今度は石田が捕捉の形でパトリオット達の事を話し出した。

「しかも、あのバウント達はどうやら、狩谷や他のバウント達とは違い・・・ドールを持たない代わりにリベル式の魔法を操り、それと同時にその時代のダイシーの継承者に仕えると言う形で、魂魄を吸わずして永遠を行き続けていたらしいんだ。」

「つまり、大昔のダイシーがあの連中を改造して・・・自分の召使にしたってことか！？」

「そんな感じだろうね。流れ的に・・・」

その後、ユーノは腕組みをしながらそんなパトリオット達の不可解な行動と思想に大いに頭を悩ました。

「ただ、それが間違いない事実だとしても・・・彼らは人格など現すなどいうことは無いはずなんだ。ダイシーの守護だけが彼らの務めだからね。」

「しかし、あのわっぱ・・・白鴎は喜怒哀楽の感情がはっきりしていました。」

「うん。僕もオーリーからもちゃんと人格を感じ取ったし。為すべきことがあるからとか、仲間とボスの為とか言ってたけど・・あれってつまり、聖地を見つけることだったのかな?」

金太郎と浦太郎はそう言いながら、先ほどの戦闘における二人の言動を今一度思いだしていた。

「ボスのためか・・・」

クロノが現在最も気になるのは詰まる所それと、あと一つ・・・聖地に関することである。

「それに聖地・・・そこが彼らの目的なら、彼らよりも先にそこを見つけださんとな。」

「転移頻度から見ても、ボスがこの空座町一体の何所かにいることは分かってる。案外、ボスのほうが簡単に捕まるかもしれない。」

「おお!!そいつは分かりやすくていいぜ!」

クロノのその言葉に、恋次は今までの渋い表情を一変させて柔らかい表情を浮かべる。

すると、早速吉良が全員に明日の捜査内容について話し出す。

「それなら、明日からは全員でこの空座町一体の捜査に入るとしよう。ボスが捕まれば、パトリオットとて迂闊には手は出せないからね。」

「あとは、あの子達が探してる聖地って処のことだけど・・・いまいち手掛かりが掴めないな。何かいい方法は無いかな?」

なのはのその言葉を聞いて全員がいい考えはないかと色々模索していると、石田が徐にこんなことを言って来た。

「・・・それなら、僕にいくつか心当たりがある。」

「え?」

一護は石田のその言葉に少々驚いたが、直ぐに石田から詳しい内容を聞くと全員もそれを了承することにし、一端自分の持ち場に戻ることになったのであった。

会議が終わると、ユーノは一護とともにネオンが未だ明るく照らし出す高層ビルが立ち並ぶ歩道を歩きながら、こんなことを話していた。

「パトリオットの次はバウントかよ・・・おまけに、聖地は空座町の何所かにあるって石田は言うし、つくづく厄介ごとばかりが舞い

込んでくるぜ・・・全く。」

「仕方ないですよ、一護さん。このまま放っておくと、彼らの場合何をするかがよく分かっていない以上、対応が出来ませんよ。」

「はぁ～～それもそうかもしれねえけどよ。」

二人はそんな会話をしながら、横断歩道の信号機が青くなるのを待っていると・・・ふと一護がユーノにこんなことを言って来た。

「にしてもユーノ。お前、よく血(あれ)を見つけ出したよな。大したもんだぜ！」

「多分・・・死ぬときはろくなものじゃないでしょうね。」

「考えすぎだろ。大丈夫だ・・・きっと普通に魂葬されてあっちで安穏と暮らせるから。」

「だといいですけど・・・お。」

と、その時。

ユーノの懐に仕舞われていた携帯が突如震え出した。

取り出して確認してみると、なのはからの写真付きのメールであった。

「何だ？なのはからか。」

「写真が添付してある。何だろう・・・？」

何気ない気持ちで添付されていた写真を公開したユーノであったが、その中身を見た瞬間・・・二人は顔を赤面させた後多量の鼻血を流してその場にぶっ倒れた。

「「だあああああ！！！！！！」」

二人が見て倒れたその写真と言うのが、なのはの家の浴場でフェイト・ヴィヴィオ・なのはの三人が全裸で体を流し合っているというものであった。

〈なのはから、ユーノ君へ♪今、ヴィヴィオとフェイトとちゃんと一緒に仲良く入浴中です♪明日の捜査に備えてしっかり寝ないと駄目だよ♪〉

一護はユーノよりも先に起き上がると、携帯を拾って急いで中を閉めると漏れ出る鼻血を押さえながら怒りを露にした。

「だからってそれとこれの何所が関係あるんだよ、あいつは！！！！」

その横で、ユーノはなのはの全裸を見てしまったことに関して未だ興奮が止まずに多量の鼻血をそれこそ滝のように流し続けていた。

それは正に一つの怪談のような光景であった。

「あああああ！！！！！鼻血が！！！！！鼻血が止まらない！！！！！！」

さて、その頃――銀太郎以下彼を守護する六人のパトリオット達

はと言うと、空座町某所にあるとある洞窟の奥底へと潜り込んでいき、その奥にある一際広い空間へ到着する銀太郎はほくそ笑んでこう呟いた。

「ついに、見つけた。僕達の・・・聖地への扉がある場所だ。」

七人の眼前には、不自然に何かが置かれていそうなスペースが存在し、それを見た他の六人も此処がその場所であることに納得し思わず感慨に耽った。

「長かったな・・・このときが来るのを、どれほどまでに待ったことか。」

「銀太郎。鍵はちゃんと持っているな?」

オーリーにそう言われると、銀太郎はポケットからアックスオーガから奪い取った聖地への鍵を取り出した。

「うん。ここに・・・間違いなくあるよ。」

「それじゃあ、早速準備に取り掛かるとしますか!」

そう言って張り切った様子の田吾作が準備に取り掛かろうとした矢先、突如白鴎が銀太郎にこんな質問をぶつけて来た。

「その前にさ・・・なぁ、銀太郎・・・一つだけいいか?」

「何だい白鴎?出来れば簡単な質問にしてよ。」

「あのさ・・・俺今一聖地って言うのが何なのかが分からないんだ

けどよ、一体そこには何があるんだよ?第一に、その聖地って言うのは何所のことなんだ?自分達で扉を出すのはいいがそこんところ、もう少し詳しく教えてくれよ。」

白鴎のその言葉を聞くと、銀太郎は仕方ないとばかりに大きく溜め息をつくと白鴎を始めと高円寺以外の今一聖地のことを理解していない五人に詳細な場所を告げた。

「・・・はあ・・・しょうがないな。いいよ。僕の説明でよければ話してあげるよ。僕らがこれから向う聖地というは・・・――――――のことだよ。」

「え!?」

「「「「なっ!?」」」」

「・・・・・・――――――」

高円寺を除く五人はその意外な場所に大いに驚いた。

そして、そんな驚愕する五人を他所に銀太郎は一人適当な岩場に腰を下ろすと何となく天井を仰ぎ見ながら昔の話をし始めた。

「扉を開く前に、ちょっと昔話をしようか・・・・・・そう・・・・・みんなと僕が初めて出合った・・・あの日の事を・・・――――」

遡ること十年前。

銀太郎が始めてオーリー以下高円寺を除く五人と始めて邂逅するあ

の運命的な出来事。

突然、大きな揺れが自分を襲うかと思いきや揺れと連動するかのように熱くなっていく身体の中を流れる血のざわめき。

そして、耳元に唐突に入り込んでくる見知らぬ言葉と声。

「な・・・何だ・・・！？」

〈Ａｃｔｉｖａｔｉｎｇ〉

声が入ってくるのと同時に胸の中から小さな光の球のようなものが銀太郎から飛び出してくると、その光の球から先程耳元に入ってきた声で後退りする銀太郎を照らしながらその言葉を言って来た。

「へっ！？な・・・！！」

銀太郎は驚愕をしつつ、その光の中をじっと見つめていた。

このとき、銀太郎の胸の中からはリンカーコアが出て来ており、そのリンカーコアが体内に放出されると同時に、リベル式の魔法陣が展開され更に強い光を発した。

そして、恐る恐る銀太郎が目を開けて目の前を見てみると・・・そこにはあの五人が歴代のダイシーに仕えてきた時と同じ格好で畏まった様子で膝を突いていたのであった。

「うっ・・・・・はっ！？」

銀太郎の目の前では、既にオーリーを起点として白鴎・田吾作・瀬間子・東海林の五人が床に膝を着きながら杓子定規の台詞を口にす

る。

「ダイシーの血のざわめき、此処に確認した。」

「我ら、ダイシーの継承者を守り、命令あればその通りに動く貴方様の従属官でございます。」

「ダイシーの継承者に集まりし、我ら・・・」

「パトリオット。何なりとご命令を。」

暫くの沈黙が流れ、何時までたっても自分達の言葉に何の返答もしない銀太郎に不審を抱いた白鴎が一度畏まった態度をやめ、銀太郎の様子を見に行く。

そして、オーリー達に念話で話しかけてきた。

「（ねぇ・・・ちょっとちょっと・・・）」

「（白鴎・・・静かにしろ！）」

「（でもさ・・・）」

「（黙っていろ！ダイシーの血の継承者の前で無礼は許されん。）」

「（無礼ってかさ、こいつ・・・・・・気絶してるように見えるんだけど？）」

白鴎にそう言われてオーリー達が改めて銀太郎を見てみると、銀太郎は完全に眼を回しながら意識を失っていたのであった。

これには流石のオーリー達もマズイと直感した。

「なっ！？」

「マジ！？」

「早く、病院に！！」

銀太郎が気がついた時には既に空座総合病院のベッドの中で朝を迎えていた。

ベッドから徐に起き上がった銀太郎は、主治医であり当時の院長であった竜弦と面と向って話していた。

「銀太郎君。よかった・・・何ともなくて。」

「ええと・・・すみません・・・」

「まぁいいけどさ。ところで、あの変な格好の人たちは誰なんだい？」

「え？なっ！！」

竜弦にそう言われて、険しい表情を浮かべる医師達に囲まれながら毅然とした態度で立ち尽くしているオーリー以下五人の不審者の姿を確認した銀太郎は思わず絶句。

そんな過去の出来事を思い出していた白鴎やオーリー達は思わず大笑いをしたり赤面をしたりしていた。

「はははは!!!!!いや・・・あん時は、正直かなり焦ったぜ!」

「まぁな。」

そして、回想シーンに再び戻る。

眉間に皺を寄せながら竜弦は銀太郎に尋ねる。

「どういう人たちなんだい?春先とは言え・・・まだ寒いのに・・・銀太郎君に上着もかけずに運び込んできて。変な格好してるし、言ってることは訳分からないし。どうも怪しい・・・」

「ああ・・・えと・・・その・・・何と言いましょうか・・・!?」

自分でもよく分かっていない思わぬ事態にどう返していいか分からない銀太郎。

すると、何気なくオーリーを見た時・・・頭の中に突如声が入ってきた。

「(命令を頂ければ力になるが・・・如何するのだ?)」

「え!?」

突然頭の中に流れ込んでくるオーリーの声に銀太郎はこの上も無いぐらい大いに驚いていたが、直ぐにオーリーが助け舟を出す。

「(思念通話だ。心で、念じてもらえれば力になってやろう。)」

そう言われると、銀太郎は暫く考え込んだ末こう言ったのだ。

「（じゃあ・・・命令と言うかお願いがあるんだけど・・・）」

「（？）」

「（ちょっと、僕と話を合わせて欲しいんだ・・・いい？）」

「・・・分かった・・・」

そして、意を決したかのように銀太郎は今だ険しい表情を浮かべながらオーリー達を見つめる竜弦にこう言って来た。

「えっと・・・石田院長先生。」

「ん？何だい、銀太郎君。」

「実は、あの人たち・・・僕の親戚でして・・・」

「親戚！？」

「遠くの祖国から、僕の誕生日をお祝いしに来てくれたんですよ。それで、びっくりさせようと態々仮装までしてくれていたのに・・・僕がそれにびっくりし過ぎてしまったと言うか・・・その・・・そんな感じです・・・はい。ね、そうだよね？」

銀太郎はそう取り繕うかのように田吾作やオーリーに目線を合わせると、二人も何とかその場を乗り切るための嘘を取り繕うのであった。

「あ、ああ・・・そうなんっすよ！はは！！」

「その通りです。」

「あははは・・・はははは・・・・・」

竜弦は一応、疑念は抱いていたが取り合えず銀太郎の親戚だと名乗るこの五人を信じて一度銀太郎を連れて帰ってもらうことにしたのであった。

そして、そんな昔の出来事を思い返しながらオーリーはふと銀太郎とこれまでのダイシーについて比較をしていた。

「（我々が守護することとなった、新しいダイシーの血の継承者・・・狼谷銀太郎（おおかいだにぎんたろう）は、年の若さもそうだったが・・・これまでの継承者とは随分違っていた。）」

家に戻った銀太郎は、五人から概ねのことを聞くと直ぐに状況を理解した。

「そうなんだ・・・・・僕がそのパトリオットのボスで、ダイシーって人の血を受け継ぐリベルの魔導師の末裔ってことか・・・」

「ああ。」

この時も五人は畏まった態度で膝をついていた。

「それに魔法使いか・・・何だか未だに信じられないな・・・だってまだ僕、見た感じ6歳の少年なんだよ。一番、遊び盛りな腕白小

僧だよ。」

「それはそうだけど・・・・・・それより、覚醒の時と眠ってる間に・・・血のざわめく音を感じなかったか？」

田吾作がそう言うと、銀太郎は机の上で探しモノを探しながら返事をする。

「う～～ん・・・僕そう言うのに関しては鈍感だから漠然とだったけど・・・あ、あった！」

そう言うと、銀太郎はメジャーを取り出して五人の目の前に立つと次のように言って来た。

「分かったことが一つある。ダイシーの血を受け継ぐもの、パトリオットのボスとして・・・みんなの衣食住を家で面倒みないといけないといけないってことかな？幸い、住むとこはあるし・・・料理も得意だから。取りあえず皆の洋服買ってくるから、サイズを測らせてくれる？」

この銀太郎の言動には正直なところ、オーリー達は呆然とするしかなかったのだ。

「（そう・・・本当に・・・今迄のダイシーとは何もかもが違っていた。銀太郎の我々への対応は、これまでの先代のダイシーのような高圧的なものであったり、道具のように扱うものでなく、まるで・・・家族や友人にするようなものであった。）」

戸惑いとこれまでにない暖かな銀太郎の接し方は、彼ら五人にとって今までに無い感情を抱かせるようになっていった。

風呂の中で、銀太郎とともに入浴していた白鴎。
隣には六歳の子供らしくシャボン玉を吹いて楽しそうに笑う銀太郎がいる。

「あははは。」

何となく銀太郎の方を見てみた白鴎だが、何所か照れ臭くなったのか直ぐに顔を逸らしてしまうのである。

「・・・お・・・」

「ん？どうかした。」

「べ、別に・・・何でもない・・・！」

風呂から上がった銀太郎は全員の食事の用意をすると、早速一家六人揃っての夕食を満喫しようとしていた。

「さぁ、出来た。食べようか？」

「戴きます。」

そして、銀太郎は手を合わせていただきますの掛け声をする。

それにつられるかのように、五人も多少戸惑いながら復唱する。

「「「「「いただきます。」」」」」

白鴎は当初、箸の使い方など全く分かっていなかった。

だが、少なくとも銀太郎の作った料理が格別に美味であったことはその食欲から窺うことができたのであった。

「（私達は、戸惑いながらも・・・新たなダイシーの継承者の望むままに・・・静かな日々を暮らし始めていた。）」

「・・・おかわり・・・」

「はーい！」

それから暫くして、銀太郎がオーリーと田吾作を連れて図書館に出かけたときだった。

銀太郎はオーリーから自分達の本当の正体を告げられたのだ。

「バウント？それが皆の本当の名前なの？」

「ああ。我々は何世代にも渡り、その姿を変えずに人間の死んだ魂を吸収して生き永らえ続けてきたんだ。」

「しかも、俺達の場合は初代のダイシーによって改造された特殊なバウントでな、人間の魂魄を喰らうことをせずとも、ダイシーに仕え続けることでその命を保ってきたと言うわけさ！」

「そっか・・・何だかある種吸血鬼みたいなものだね。それにしても、ダイシーって言う人は何のためにリベル式って言う魔法を作り出したのさ？」

「え!?あ・・・いや・・・それはだな・・・!」

六歳の銀太郎に対して、復讐のために作り出したなどとは迂闊には言えなかった為に田吾作は返答に困っていた。

すると、そんな田吾作に代わってある種正しき答えをオーリーは口にした。

「誇りのためだ。我らがパトリオットの誇りの為に、リベル式の魔法は生み出された。」

「へぇ〜〜〜パトリオットの誇りか・・・何か格好良いね!あ、そうだ!皆の甲冑はまだなかったんだよ?今から、それの資料を探しに行くから、着いてきて!」

「あ、ああ・・・」

二人はそう言うと、家で留守番をしていた白鴎も連れて近くの百貨店に足を運んだ。

銀太郎が田吾作と白鴎共に向った場所は、玩具売り場であった。

「あの・・・銀太郎、此処は?」

「いいから、いいから!こう言う所にこそ、それっぽい材料が・・・・」

「ん?」

白鴎は言われるがままに田吾作と一緒に銀太郎の後を着いて行くが、

その時ふと眼に留まったものに心奪われてしまい、その商品を見ながら座り込んでしまった。

「白鴎・・・どうしたんだよ？白鴎？」

銀太郎もそれに気付いたのが、白鴎の気持ちを読み取ると白鴎が心奪われた商品を買って上げたのであった。

夕陽が煌々と照りつける帰り道、銀太郎の横であるく田吾作が話しかけてきた。

「良い風だな。」

「だね。」

「天気もいいし、空気は美味いし・・・もう最高だぜ！」

「こう言うのを絶好の散歩日和って言うんだよ。」

そんな二人の後ろを歩きながら、白鴎は手に大事そうにサミット袋を抱えていた。

「・・・――」

すると、銀太郎が徐に後ろに振り返ると白鴎に言った。

「白鴎。」

「お！？」

「もう、サミットから出してもいいよ。」

そう言われると、白鴎は直ぐにサミット袋から中身を取り出して手に持った。

銀太郎が買ってくれたのは、動物がロボットに変形するというトランスフォーマーの玩具であった。

白鴎は思わず頬を赤らめ、買ってくれた銀太郎にお礼を言おうとした。

「あああ！！！！銀太郎、ありが・・・あれ！？」

お礼を言おうとしたその時には、二人は既に家路へと向っていた。

それを見た白鴎も笑顔で二人の後を追いかけて行ったのだ。

「へへへへへへ！！！！！」

「（時はゆっくりと過ぎていき、私達は・・・ただ銀太郎と供に、何事もない日々を過ごしていった。）」

そして、また暫くしたある日。

銀太郎は中庭のほうでオーリーと共に夜空を美しく輝かせる星達の群れに感動していた。

「わ～～～凄いや！」

純真向くな瞳で星空を眺める銀太郎の横で、オーリーは何所か神妙

な表情を浮かべながら徐にこんなことを言って来た。

「・・・銀太郎・・・本当にいいのか？」

「え、何が？」

「ダイシーの血のことだ。お前の命あらば、私達は直ぐにあれを回収し、それをお前の体に流し込み覚醒させる。さすれば、お前はその絶大な力を手にし大いなるダイシーの継承者となるのだぞ。この体も・・・よくなる筈だ。」

「それは駄目だよ。ダイシーの血とか、大いなる力なんて僕は要らない。そんなものがなくても、僕は充分に幸せだよ。それと、この世で最もしてはいけないことは何か教えてあげようか。自分の身勝手で人に迷惑をかけることだよ。」

「・・・銀太郎・・・」

齢六歳という若さでありながら、ここまで大人びた見解を言える子供は居ただろうか？

オーリーはふとそんなことを思ったりもした。

「幸せの尺度は人によって違う。僕にとっては今がその幸せの中にあるんだよ。お父さんもお母さんも物心着く前に死んじゃったけど、遺産の管理とかは高円寺さんがやってくれるし。」

「お父上の・・・ご友人・・・だったか？」

「うん。みんなのことも知っていたらしいよ。高円寺さんも実はパ

トリオットで、先代のダイシーに仕えていたんだ。お陰で、生活には困らないし・・・それになにより、今はみんなが居るからね。」

「あ！」

銀太郎の何気ない一言、そして純真無垢な笑顔に普段は感情を面に出そうとしないオーリーの表情もこのときばかりは柔らかくなったそうだ。

「・・・ふん・・・」

そうして、暫く星を眺めていたときだ。

二人の耳に白鴎の声が聞こえてきた。

「銀太郎！」

「ああ・・・どうしたの、白鴎？」

「銀太郎。冷蔵庫のアイス、食っていいか？」

「お前・・・夕食をあれだけ食べてまだ食べるのか？」

呆れた食欲を見せる白鴎に思わずオーリーがそう口にすると、白鴎はむきになる。

「うるせーな！育ち盛りなんだよ！！銀太郎の飯は神のような美味さだからな！」

「仕方ないな。ちょっとだけだよ。」

「おお！」

白鴎は銀太郎の許可を貰うと、直ぐに冷蔵庫のほうへ走った。

「やれやれ。」

スリッパを履き替えて家の中に入ろうとしたときだった。

銀太郎がオーリーにこんな事を言って来た。

「オーリー。」

「何だ？」

「オーリーはみんなのリーダーなんだし・・・これだけは約束して。」

「約束？」

「“現ダイシーの継承者、狼谷銀太郎”は、ダイシーの血なんかには何の望みも無い。僕が皆のボスでいる間はダイシーの血のことは忘れといて。みんなの仕事は、家で仲良く暮らすこと。それだけだから。」

「・・・・・・」

「約束できる？」

「・・・誓うさ。パトリオットの誇りに賭けて。」

だが、事態は彼らが思いも知らぬ最悪の事態へと向っていることがすぐに解ったのである。

それは銀太郎の定期健診の際に、主治医の竜弦の言葉を聞いた瞬間・・・オーリー達は自体を受け入れることが出来なくなったのだ。

「命の・・・危険!?」

「銀太郎が!?」

竜弦の表情は重苦しかった。

「・・・ああ。銀太郎君の体は、原因不明の神経性麻痺とお伝えしたが・・・この9年の間に、麻痺が徐々に悪い方向に進行しているのだ。この二ヶ月は特に顕著で・・・最悪の場合内蔵機能の麻痺に発展するやもしれん。」

竜弦の言葉を聞いた二人は、銀太郎の居ないところであまりのショックと絶望に打ちひしがれオーリーは思わず壁を叩き田吾作は頭を抱え涙を流していた。

「何故!?何故気付かなかった!!」

「悪い!!悪い・・・俺は・・・!!」

「お前にじゃない!自分に言っている・・・!」

「(銀太郎のそれは・・・病気などではなかった。ダイシーの血の呪い・・・銀太郎が生まれたときから体内を巡っていた本質的な血

は、銀太郎と密接に関わっていた。抑圧された強大なダイシーの力は、リンカーコアが未成熟な銀太郎の体を徐々に蝕み、健全な肉体機能はおろか、生命活動さえ阻害していた。そして、銀太郎が第一の覚醒を迎えたことでそれは加速してしまった。それは、私達五人の活動を維持するために極僅かとは言え銀太郎の魔力を使用していることを無関係とは言えないはずが無かった。）」

オーリーは全ての事実を白鴎・瀬間子・東海林・・・そして、中学3年に進級したばかりの銀太郎にも伝えたのであった。

オーリーから語られた覆そうの無い事実に、銀太郎自身も大いにショックだった。

「なっ！」

「そんな！！」

「うそだろ・・・それ！？」

「僕が・・・・・僕の命が・・・もう長くないって・・・！？じゃあ、僕が死ねば・・・みんなも一緒に死んじゃうってことなの！？」

銀太郎がオーリーに詰め寄ってそう尋ねると、オーリーは険しい表情で肯定の言葉を口にする。

「・・・ああ・・・その通りだ・・・」

事実を告げられた銀太郎はオーリーの服を話すと、その場に項垂れる。

他の五人も気持ちは同じであった。

すると、白鴎が涙を浮かべながら押し潰した声でこう言って来た。

「・・・助けなきゃ・・・」

「「「「え!?」」」」

「白鴎・・・!?」

「銀太郎を・・・助けないと!!」

そう言うと、大粒の涙を流しながら白鴎は田吾作に詰め寄った。

「おい、田吾作!!お前治療系得意なんだろう!!それで何とかならないのかよ!?んな病気ぐらい、治してみせろよ!!」

「悪いが・・・俺の力じゃ・・・どうにも・・・」

「何でだ?!何でなんだよ!?うあああああああああ!!!!!」

白鴎はその場に泣き崩れると、コレまでにない悲しみを赤裸々に表現した。

それを見ていた瀬間子と東海林はオーリーに他の方法はないのかと言ったばかりの表情を浮かべる。

「田吾作・・・・・」

「オーリー。」

「私達に出来ることは、余りに少ない。だが・・・何としても銀太郎の命は絶対に守ってみせる！」

すると、オーリー達が自分の為に何をやろうとしているのかを悟った銀太郎は直ぐに行動を改めるようにオーリー達に言おうとしたときだ。

「だけど、それだと僕の所為で周りの人が迷惑を・・・ぐっお！！！」

その瞬間、銀太郎はその場に膝を突くと口から吐血を出した。

「「「「「はっ！」」」」」

慌てた五人も直ぐに銀太郎に駆け寄って身体の心配をする。

「銀太郎！！」

「銀太郎！！しっかり、銀太郎ってば！！」

「ぐっ・・・くる・・・しい！！！」

胸を押さえながら苦しそうな表情を浮かべる銀太郎を見て、オーリーの表情は強張る。

「マズい。呪いの進行が加速している・・・このままでは・・・！」

「クソ！！！一体どうすりゃいいんだよ！！」

白鴎が悲痛な叫び声をあげたちょうどその時――――――。

「うろたえるな、お前達。」

「「「「「「え!?」」」」」」

六人の下に現れたのは、9年ぶりに日本に戻ってきた銀太郎を守護する最後のパトリオット・・・高円寺虎彦であった。

「高円寺・・・さん・・・!?どうして此処に!?」

今まで手紙と電話だけのやり取りしかしてこなかった高円寺が、今になって自分達の目の前に現れたことに銀太郎は大いに驚く。

そして、高円寺はそんな六人に命を取り留める方法を助言する。

「お前の命を取り留める方法は、一つしかない。お前が生きていれば、そいつらも死なぬ。これからも今迄通り静かに暮らせるのだ。」

「みん・・・なと・・・静かに・・・暮らせる・・・!?」

「ほ、本当なのかそれは!?一体どうすればいい!!教えろ!!」

白鴎が高円寺に詰め寄って解決策を問いただす。

「教えてやる。但し、先ずは銀太郎の意思を尊重せねば。お前はどうしたい、銀太郎。このまま苦しみながら死を待つか?それとも、生きる方法を選択し実行するか?お前はどうしたいのだ。答えろ・・

・」

高円寺がそう問いかけたとき、銀太郎は一度黙り込んだ。

だが、銀太郎はみんなと一緒に居たいという気持ちが人に迷惑をかけることはしないという彼自身の矜持と節度を押し殺したのであった。

「・・・僕は・・・・・・みんなと・・・・・・一緒にいたい！だから教えて下さい！！僕が・・・みんなと一緒いられるようにする方法を！！」

そして、銀太郎は高円寺からその唯一の方法を聞きだすと・・・一度日と目に付かないビルに全員で集まり心の準備をしていた。

「（銀太郎の体を蝕んでいるのは、ダイシーの血の呪い。）」

「（銀太郎が異世界の何所かに隠されているダイシーの血を体に流し込んだ後、リベルの聖地で覚醒し、真の継承者となれば！）」

「（我らがボスの病は消える！少なくとも、進行（すすみ）は止まる！）」

「（銀太郎の未来を血で汚したくないから、成る丈人殺しはしない。）」

「（だけど、それ以外だったら・・・何だってする！）」

「御免ね・・・みんな・・・僕の身勝手なお願いを聞き入れてくれて・・・オーリーも・・・約束を破るような真似をさせてしまって。」

「構わぬ。もとより、私はお前が元気で生きていることのほうが大事なのだ。お前の命を失ってしまっては、元も子もない。」

「・・・オーリー・・・ありがとう・・・みんな、行くよ！」

「「「「「おう！！！」」」」」

そう言うと、五人と銀太郎は甲冑を装備すると異世界へと向けてあのダイシーの血を探しに行ったのであった。

これが――――――銀太郎とオーリー達の邂逅の経緯である。

一方その頃、ユーノは金太郎達と自分の店に戻った後直ぐに明日のために備えて作成途中の対リベル式魔法装置の完成目指し手を薦めていた。

「急がないとな。明日まであと7時間しかないし・・・・・・人数分の確保は間に合いそうに無いかな・・・・・・」

すると、そんなユーノを心配したのか金太郎がコーヒーを持ってきてくれた。

「店長。眠気覚ましのコーヒーは如何ですかな？」

「お。ありがとう金太郎♪頂くよ。」

ユーノは金太郎からコーヒーを貰うと、徐に口に運んだ。

「店長・・・一ついいですかな・・・」

「？何だい、金太郎。」

「・・・あの・・・その・・・・・・・ありがとうございます。」

「え？」

突然、金太郎はユーノに感謝の言葉を口にしたがユーノは何故感謝されるのかが分からず困惑していた。

「あの・・・僕何もしてないけど・・・？」

「いいえ。店長は私のアックスオーガと私に、大変素晴らしい力をお与えになさいました。そしてそれだけではなく、亡き父上の残した最後の言葉を見ることが出来て・・・私はこの上も無いくらい店長に感謝しています。本当に・・・ありがとうございます！！」

「金太郎・・・」

自分に向って深々と頭を下げる金太郎の姿を見て、ユーノは少々照れてしまう。

「ふん。どういたしましてと素直に言っておこうかな。さぁ、明日はダイシーの継承者と接触するんだ。早めに寝たほうがいいよ。僕もなるべく早く床に就くからさ♪」

「はい！では、お休みなさいませ店長。」

「ああ、お休み。」

金太郎はそう言うと、ユーノの部屋から出て行き自室へと戻った。

金太郎が居なくなった後、ユーノは一度作業を中断し晩翠を手に取り精神世界へと入って行った。

ユーノの斬魄刀、晩翠の住む精神世界は全てが暗黒で構成され光は一切見当たらない言わばユーノの心の闇を具現化したものである。

ユーノは晩翠と精神世界で久々にコンタクトを取ると、晩翠も意外そうな表情を浮かべる。

「ふん。お前がこっちに来るとは・・・どういう風の吹き回しだ？」

「別に。ただ何となく気分転換で来ただけだよ。」

「まぁ・・・別にそれでもいいがな・・・」

二人は暫くの間沈黙し遭うが、その沈黙を破ったのは何所か複雑そうな顔を浮かべる晩翠であった。

「ユーノ。」

「ん？」

「・・・くれぐれも事態が逼迫したものになろうと、“卍解”は使うなよ。あれを使えば・・・お前はまた“奴ら”の下に魂を奪われることになるのだからな。」

「・・・・・分かってるよ。卍解は絶対に使いたくないのは同じさ。」

「済まぬな、ユーノ。私にもっと力があれば・・・・・お前をあんな奴らから突き放してやれるのだがな・・・」

「別にお前が謝ることじゃないよ、晩翠。それも含めて僕の力なんだ。だけど、それは同時に・・・・・僕の心の闇の本質なのかもしれない・・・」

「・・・ユーノ・・・」

二人の間だけで交わされたこの意味深長な言葉の真意は、今は未だ語ることが出来ないがこれは後に待ち構える世界の存亡をかけた戦いにおいて、嫌と言うほどなのは達は思い知ることになるのだ。

衝撃！パトリオットの正体（後書き）

教えて、ユーノ先生！

ユ「今日はバウントについてね♪」

ユ「バウントは、嘗て一護さん達が戦った吸血鬼のような存在で、戦う武器として意思疎通能力を持ったドールと呼ばれるものを使っていたんだ。」

ユ「彼らは元々尸魂界の技術開発局の母体となった組織が実験中の事故で誕生してしまった存在で、それは異世界の魂魄にも影響を及ぼしていたんだね♪」

な「と言うことは・・・今まで地球で語られていた吸血鬼はみんなバウントって訳だよね？」

一「ある種ロマンもクソもないな・・・こりゃ。」

ユ「一護さんにロマンもクソもないと思いますけど・・・ははは♪」

一「てめぇ・・・マジで殺すぞ・・・！！（刀を手に持つ）」

な「い、一護さん！！それは押さえて抑えて！！（慌てて止めようとする）」

魔導師図鑑ハイパー！

夜の高町家・なのはとヴィヴィオ・フェイトのベッド。

なのはの夢の中ではーーーーーー

ユ「なのは♪はははははは♪」

ユ「ほら、なのは♪こっち来てみなよ♪」

ユ「なのは・・・君を一生愛するよ・・・」

なのはの願望がそのまま夢に反映されているため・・・

な「にゃはは・・・ユーノ君・・・まだHは早いって・・・♪」

傍でそれを偶々聞いていたフェイトは狼狽する。

フェ「（なのは！！！！それは駄目！！！！！）」

番外編・その1　ユーノと一緒に空座見学。付き纏うのは不運ばかり?!（前書き）

ユ「どうも♪みなさん、お久しぶりです。今回は本編に行く前にちょっと寄り道したいと思います。なのはサウンドステージを参照した今回の番外編、楽しんでもらえれば幸いです。」

な「それでは、ユーノ・スクライア外伝　番外編・・・」

ユ・な「始まります！」

番外編・その1　ユーノと一緒に空座見学。付き纏うのは不運ばかり?!

>i13915-709<

ユーノ達が地球に滞在してから四日後のこと。

ユーノは異世界から調達してきたブラッドカートリッジシステムと、その起動に必要な初代パトリオット、エドワード・コークの血を無事にアックスオーガに追加装備した後、何事も無かったかのように自分の店へと戻ってきた。

「ただいま・・・・・・」

「あ、おかえりなさい店長!早かったですね・・・意外と」

「まぁね♪それよりお腹すいちゃった。朝ごはんは未だかい?」

「俺も腹減ったぜ。おい、熊!飯はまだか!?」

ユーノが今の卓袱台の前に座ったときには、既に起きて来た浦太郎

と鬼太郎、そして白鳥の三人が金太郎の作る朝食を待ち望んでいた。

僕、ユーノ・スクライアは２３歳。

今年の春までは、四年前からの勤める従業員の・・・鬼太郎、浦太郎、そして金太郎の三人と一緒に平凡な世捨て人ライフを満喫していたはずだったんだけど・・・色々な事件がありまして、僕の暮らしには大きな変化が訪れました。

中でも、最近一番の大きな変化は・・・・・・

「お待たせいたしました、みなさん！朝食の用意が出来ましたですぞ！！」

僕が最初に出会ったこの店の従業員で、元時空管理局の名誉元帥だった僕の右腕・・・熊谷金太郎が謎の魔導師、パトリオットに襲撃されたこと。

「今朝のブレックファーストは何ぞよ？」

今は、パトリオットが潜伏していると思われるこの地球に臨時本部を置いて、僕の恋人高町なのはが席を置く機動六課のみんなと恋次さん達死神さんと一緒に駐在任務で店に一時帰宅しています。

今回は、白鳥さんも一緒で今はこの５人で生活しています。

「ふふ・・・よくぞ聞いてくださいました、白鳥殿。私が愛情をこめてみなさんに食べていただきたいのは・・・こちらですぞ！」

金太郎はそう言うと、五人の目の前に異様なものが盛られた丼を人

数分出してきた。

「名づけて、“金太郎スペシャル”！！」

その丼の上に盛られていたのは、金太郎が好物にしているマヨネーズをこれでもかとばかりに大量に御飯に持っただけの極めて料理とは言えない代物であった。

四人はそれを目撃した瞬間、衝撃のあまり言葉を失い頭に雷が奔った。

「「「「（がああああああああああああ！！！！！！！！！）」」」」

「（こ・・・これは・・・！！！！！）」

「（いつぞやの漫画で同じものを見たことがあるが・・・！！）」

「（まさか本当に再現するなんて・・・！！）」

「（こやつ・・・どうかしているぞ・・・！！）」

勿論、誰しもこんな料理と呼べるような代物じゃないこれを進んで食べようとは思わないだろう。

ユーノ達四人は食べることを躊躇い、時間稼ぎのように辺りを見回していたが金太郎はそんな四人の気持ちなどお構いなしに更に追い討ちをかける。

「ささ、みさなん・・・・・全部食べてくださいね・・・デザー

トもありますから・・・」

金太郎は奥の方から、マヨネーズをふんだんに使って作ったケーキやらシュークリームらを並べて顔による圧力をかけてきた。

金太郎の性格を知る四人は、あとで逆らうとろくな目に遭わないことを直感し、渋々肯定の返事を口にしたのであった。

「「「「「・・・・・・はい・・・・・・」」」」」

その後、直ぐに体調を崩したユーノ達四人は幾度と無くトイレに通い詰め、挙句の果てに胃の機能が著しく低下するという悲惨な事態にまで発展したため、ユーノは直ぐに四人を引き連れて師である一護の自宅兼診療所を訪れた。

「「「「「う～～～

・胃薬を・・・！」

その最中、鬼太郎と白鳥のまるで悪夢を見たときのような唸り声が聞こえてきた。

「マヨネーズを近づけるんじゃねえ！！！！」

「ケチャップ・・・ケチャップがいいぞよ・・・！！」

それを見た他の四人も、このただならぬ雰囲気に唾を飲んだ。

「重症だな。」

「あなた・・・早く薬飲ませてあげよう。」

「そ、そうだな・・・」

一護は早速人数分の胃薬、もとい調合薬を作って四人に煎じて飲ませた。

そのお陰で、四人は漸く苦しみから解放され正気を取り戻した。

一護達は正気を取り戻したユーノ達から今回の原因を聞いたが、流石にそれを聞いたときには顔を引きつってしまった。

一部の例外を除いて。

「はぁ～～～取り敢えずは落ち着いてきたました・・・」

「しっかし、マヨネーズの丼にデザートとは・・・大変だったな。」

「お陰でこっちは酷い目にあいましたよ。」

「ああ。半分意識がどっかに飛んじまってた。」

「私は死神の癖に魂葬されそうになったぞ。」

「それはどうかしてるな・・・」

「て言うかよ、ユーノは喰わなくてもよかったんじゃねぇか？店長なんだし・・・」

一護がそう言うと、ユーノは若干顔を引きつりながらその時の金太郎の雰囲気を思い出しながらこう言って来た。

「金太郎のあの態度見て、断れる雰囲気じゃなかったですし・・・」

「あ、成程・・・確かにそれは言えてますね。」

「ある種最強の人間だな。」

聞いていた恋次も吉良も、金太郎の人間性は短い時間ではあるがそれなりに理解していたので思わず苦笑いを浮かべる。

すると、話しの区切りがついたところで一護がユーノにこんなことを聞いてきた。

「ところで、ユーノ。今日はクロノの奴から何か言われてないのか？」

「ああ・・・クロノは今日、別件の仕事で本局に行ってるはずです。僕が居ない間にはやてから連絡があったらしくて、捜索詰めの毎日じゃ流石に疲労も溜まるから・・・今日一日は全員オフにするとのことです。」

「そうなんですか。あ、だったら・・・折角ウチも定休日なことだし、機動六課のみんなを連れてこの街のこと案内しようよ。」

「成程!!さっすが、織姫さん!!」

「へへ。」

織姫の粋な提案を肩に乗りながら聞いていたコンは織姫を褒め称え、織姫は思わず照れる。

「確かに、いいかもしれないな。ルキア、恋次、吉良。お前らもどうだ?」

「ああ。悪くないと思うぞ。」

「現世は何かと面白いところがあるからな。俺もたまには羽を伸ばすか。」

「僕も、現世研究に精を出そうかな。」

三人も織姫の提案に乗り、久々に時間をとった現世でのオフを楽しむことにした。

「じゃあ、なのは達に僕から連絡してみますね♪なのはもフェイトもはやても、空座町のことはよく知らないと思うし。きっと喜びま

すよ♪」

ユーノはそう言うと、早速それぞれの場所で待機しているなのは達前線メンバー一同に誘いの連絡を取り、なのは達はそれを快く了承して丸一日を費やす機動六課での休日を満喫することとなったのだ。

ユーノ・スクライア外伝　パトリオット篇

番外篇・その１　ユーノと一緒に空座見学。付き纏うのは不運ばかり？！

一方、ユーノ達が集合場所に集まる間、空座町のとある交差点では現在六課が追跡をしているパトリオットの一人、白鴎とその主でありダイシーの血を受け継ぐ少年、銀太郎が図書館に向おうとしていた。

今は銀太郎の通う馬芝中学校も夏休み真っ只中だ。

ちなみに、この馬芝中はあの一護とその友人の茶渡泰虎が通っていた母校でもある。

交差点で信号が変るのを待っていた白鴎と銀太郎であったが、その最中白鴎は目の前を通り過ぎて行く黒いリムジンに思わず眼を奪われた。

「わぁ～～～デッケー車・・・！」

「ほんとだ。アレって確か・・・キャデラックのリムジンだよ。海鳴に本社を置くバニングスカンパニーの若女社長がいっつも乗ってる。」

「キャベジンの・・・ゴールドS？」

「ははははは。白鴎、それじゃ栄養剤の名前だよ。お、信号青だ。白鴎！」

「オッケー！」

二人は信号が青に変わるなり、助走をつけて一気に交差点を駆け抜けていった。

「図書館向けて、発進！」

「レディーゴー！」

交差点を駆け抜けていく最中、白鴎は空座町では見かけない白い制服を着た小学生の児童に目を向けた。

「ん？あれって何所の小学校だ？見かけない制服だけど・・・？」

「ああ。隣町の海鳴市にある聖祥台小学校の子だよきっと。今度、空座南小学校と合同授業の一環として、総作劇をやるんだって。夏休みからずっと練習してるんだよ。」

「へぇ。どうりで制服着てると思った。」

「みんな元気でいいことじゃない。」

「馬芝中の連中はみんな眼が死んでる奴ばっかりだからな。ああいう目が輝いてる子供とか見ると、ちょっと新鮮な気分だ。」

「まぁ、確かにそうだけど・・・僕だって一応馬芝中の生徒なんだけどな・・・」

「銀太郎は別だって。あいつらにちったあ銀太郎の爪の垢煎じて飲ませてやりたいぐらいだ！馬芝は今、崩壊の危機に瀕している。」

「ははははは。凄いこと言って来たね・・・でも、馬芝中でもみんながみんな悪い訳じゃないよ。茶渡さんだって馬芝の出だし、石田先生の友達のお医者さんだって・・・馬芝なんだよ。」

「そうなんだ。結構馬鹿には出来ないな、馬芝も。」

「でしょ。」

そんな何気ない会話を楽しんでいた二人であったが、その時前方に立つ一人の女性の姿を確認した。

その女性とは、パトリオットの将を務めるオーリーであった。

「あ、オーリーだ。」

「本当だ。オーリー！」

二人はオーリーの名前を呼びながら、急いで駆け寄っていった。

オーリーもそんな二人に向って軽く返事をする。

「ああ。」

銀太郎はオーリーが自宅から持ってきた買い物カートを一瞥し、更に続ける。

「オーリー。ついでとは言え買い物カートまで持ってきてくれて悪いね。」

「いや、いいさ。田吾作の指示だからな。」

「図書館の帰りに買い物していくんだよな？銀太郎、アイス買っていいか？」

「いいけど、Ｌサイズは止めておきなよ。白鴎がまた食べ過ぎて、お腹冷えて壊したらダメだしね。」

「う・・・！人の過去の傷跡を・・・」

「そう言えばさっきは、話の途中ではなかったのか？」

「ああ。学校の話とかだよ。」

「おう。別に他愛も無い話だったぜ。」

「学校か・・・石田先生が仰っていたな。状態によっては学校も休まざるを得なくなると。」

「う・・・石田先生らしい現実的な見解だな。僕は別に・・・学校は行っても行かなくてもどっちでもいいけど・・・」

「そうなのか？」

「国民の三大義務は守らないといけない気もするけど、僕が家にいなかったらみんな家事とかはっちゃめっ茶になると思うし。」

銀太郎のその言葉を聞くなり、二人は一気に顔が赤くなり急に畏まった態度になった。

「すまない。お世話になってます。」

「感謝してます。」

実を言うと、田吾作以外のパトリオットは戦いにおいてはエキスパートではあるがそれ以外のことは全くどうしようもないぐらいの不出来な人間で、事実・・・銀太郎が風邪を引いたときに家事を任せたときは酷い有様になって寝込むに寝込めなかったということがあるのだ。

「ははははは。リベルの統率者、パトリオットの主・・・十代目アルバート・ヴェン・ダイシーとして当然の務めだって。」

そんな二人を優しく大空のような心で優しく抱擁する銀太郎。

銀太郎は図書館で読み終えた本を返し終え、新しい本を借りると軽くそこで宿題も済ませ予定にあったとおりに買い物を終えて無事に家へと帰宅した。

銀太郎達を迎えてくれたのは、ナプキンを頭につけた田吾作であった。

「おかえり、銀太郎！」

「ただいま、田吾作。」

「買い物・・・ハイよ。」

「ああ。あんがとな、白鴎。」

白鴎から買い物袋を受け取ると、田吾作は中身を確認する。

その間に、銀太郎は机の上においてあった自分のナプキンを頭につけ掃除用の手袋を嵌めるのであった。

「さて、今日は夏の大掃除だ。気合入れて家中ピカピカにしよう。」

「「おお!!」」

「ああ。」

銀太郎の言葉によって士気の上がる白鴎達。

三人は早速自分の掃除用具を身に付け買ってきた洗剤を取り出し始める。

僕、狼谷銀太郎は１５歳。

１０年前までは、極々普通の親無しの５歳児だったのですが・・・誕生日に起きたとある事件が切欠で、異世界の魔法使い・・・パトリオットを束ねるダイシーと呼ばれるマスターになってしまいました。

「クレンザーは俺のだからな。手、出すなよ。」

「俺はクレンザーより、バスマジックリンの方が好きなんだよ。」

「洗剤の事でイチイチ騒ぐな。掃除をするんだから、結局は同じだ。」

洗剤の種類ぐらいでひと悶着を起す白鴎と田吾作に、すかさず諫めるオーリー。

「ははははは。瀬間子、ただいま。」

オーリーはそんな三人を一瞥し、微笑を浮かべるとソファーの上で腕組みをしながら黙り込んでいた瀬間子に声を掛ける。

瀬間子もそれに低い声で答える。

「ああ。おかえり。」

僕は、この四人とあと二人のパトリオットを束ねるダイシーの継承者として・・・みんなの暮らしを守ってます。

「さて、白鴎。お前は先にガス代の油汚れをそれで綺麗に拭いてきてくれ。」

「あいよ！」

「ありがとう、白鴎。」

「見違えるほどにまで綺麗にしてやるからな！」

白鴎は銀太郎にそう言うと、一人台所へと向い手に持つクレンザーでガス代を丁寧に掃除を始める。

その間に、田吾作はテーブルの上の汚れを落としつつ銀太郎が買ってきた今晩の夕食のメニューを確認する。

「ん？ちくわに大根・・・昆布に卵・・・今夜は暑い夏を更に熱くするおでんか？」

「ザッツライ！暑いときに熱いもの食べて、新陳代謝を活発に働かせよう。」

「いい心がけだな。」

「じっくり煮込んで美味しく作るから、楽しみね。」

「ああ。」

「手伝うぜ！」

時々大変なこともあるけど、みんなとの暮らしは毎日が楽しいです。

その頃、ユーノ達はと言うと・・・・・・

「よし！全員集まったな！」

私服に着替えた一護がそう言うと、ユーノの目の前には同じく私服姿のなのは達前線一同とヴィヴィオがそこに集まっていた。

「はい。この通り全員ですよ！」

「今日は、私達機動六課前線メンバー一同がお世話になります！」

「「「「「よろしくお願いします！」」」」」

はやてとなのはの言葉の後に、スバル達フォワード五人が一護に頭を下げる。

その最中、ヴィータとシグナムはこんな会話をしていた。

「しっかし、考えてみれば・・・海鳴と空座町ってホント目と鼻の先立ったんだな。」

「ああ。だが、私もこの町のことはよく分からぬ。」

「世界はそれだけ知らないことが多いってことや、シグナム。」

「楽しみだね、ヴィヴィオ。今日はユーノパパも一緒だから思いっきり楽しめるよ。」

「うん！でも、本当に嬉しいのはなのはママのほうでしょ？」

「え！？も、もう！！ヴィヴィオったら！！！」

ヴィヴィオの言葉に思わず顔を赤くするなのは。

その横で、フェイトが軽く笑う。

「ふふ。」

「ふぇ、フェイトちゃんも笑わないでよ!!」

「あ、ごめんごめん。」

こうして、ユーノ達一行か一護と織姫を先頭に空座町の市内を適当に歩きながら何所に行くかを考えていた。

ちなみに、コンは一護の判断で留守番することとなってしまった。

「さて、どっから行く?」

恋次が一護にそう尋ねる。

「そうだな・・・織姫。何所か行きたい場所とかあるか?」

「え~~とね・・・あ!だったら、あそこがいい!!」

「?あそこって何所だよ・・・?」

そう言う一護に対して、終始笑みを浮かべる織姫。

そして、ユーノ達が織姫の案内で連れてこれた場所は町の子供達が通う近所の風臨会館と言う空手道場であった。

「は~~~い!!みなさん、ご到着です!!」

「何だよ、ここだったのか。」

「織姫さんらしいですね♪」

「えへへ♪」

織姫に案内された場所に納得した表情を浮かべる一護やユーノであったが、なのは達はやはり戸惑いの表情を見せていた。

「あの・・・ココは一体？」

「俺の幼馴染が師範やってる空手道場だよ。ちょうどいいや、スバルとギンガもいい勉強になると思うぜ。」

「それは言えてますね。シューティングアーツにも、ヴィヴィオのストライクアーツにも能力の向上にはもってこいの場所ですからね♪」

「へえ。それは楽しみですね！」

「ワクワクするね、ギン姉！」

すると、そんな興奮を抑えきれないでいるスバルにティアナがこのように言った。

「あんまりはしゃぎ過ぎて、ハメを外さないでよね・・・アンタは。」

「え！？ティア！私そこまでおっちょこちょいじゃないもん！」

すると、そんな反論するスバルを見ながらヴィータがこう呟く。

「どうだかな。」

「ヴぃ、ヴィータ副隊長まで！！」

「じゃあ、早速入ってみようか。」

なのはがそう言うと、フォワードは返事して一護の後を追う形で空手道場の中へ入って行った。

中に入ると、早速夏休みだけのことはあってか沢山の門下生が空手衣に身を包んで汗だくの状態で練習をしていた。

「はい、次。正拳突き１００回。始め！」

「「「押忍（おす）！」」」

その様子を見たエリオは素直な感想を述べる。

「活気があっていいですね。」

「ま、師範が師範だからな。」

「確か、一護。ここの師範って・・・・・・」

「ああ。そうだよ、たつきだ。」

「え～っと・・・あ、いたいた！！たつきちゃん！！！」

織姫がそう言うと、門下生に指導をしていた一人の女性が振り返り織姫の顔を見た。

「？織姫！！それに、一護も！！」

「わっは！！！久しぶり、たつきちゃん！！！元気だった！？」

織姫はそう言うと、この道場の師範を務める一護の幼馴染で織姫の親友の有沢たつきに近付いていき仲睦まじく会話を始める。

「私のこの通り！元気があり余り過ぎて、戦いたくてうずうずしてるって！」

「し、師範って女の人だったんですか？」

キャロは予想して師範とはかなりかけ離れた人物に思わず驚いた。

「でも、凄く強そうですね。」

ギンガが横でそう言うと、聞いていたユーノがたつきの事を説明し始めた。

「そりゃそうだよ。何たって、一護さんの幼馴染でここの道場の師範の有沢たつきさんは元オリンピック女子空手部門の最年少金メダリストだからね♪」

「き、金メダリスト！！」

「凄いんですね！！」

すると、たつきは一護の後ろに立つなのは達に気付き早速問いただしてきた。

「ん？一護・・・コノ人たちは？まさかあんた織姫と言う美人がい

ながら！！」

「違げーよ！ユーノのところの幼馴染とその教え子だ。」

「ああ、なんだ。そう言えば、ユーノも暫く見てなかったわね。あんた、ちょっと見ないうちに顔色良くなったね。」

「え？そうですか。」

「そうに決まってるって。あんた、出会った頃は表面だけ笑顔で取り繕って、何か片意地張って思いつめた顔してたじゃないの？」

「ははは・・・こりゃ参った♪」

ユーノとたつきが親しげに話す姿を見たなのはは思わず一護に尋ねた。

「一護さん。ユーノ君のこと、あの人にも話してるんですか？」

「ああ。俺の知り合いのほとんどはあいつのこと知ってるぜ。何かしらねーけど、あいつには俺やお前とは違う人を寄せ付ける魅力ってのがあってな・・・自然と寄って来るんだよ。」

一護のその言葉を聞くと、恋次もルキアも同じ考えに至った。

「確かに、それは言えてるかもな。」

「ああ。私や恋次達も自然とこうしてユーノ殿を中心に集まってきたからな。」

そんなユーノの人を寄せ付ける不思議な魅力に改めて感服したなのははは心の中でこんな事を思ったそうな。

「（やっぱり、ユーノ君は凄いな。自然と人を寄せ付ける魅力・・・か。私が初めてユーノ君と出会ったあの時も、魔法以外にも実はそう言うところがあったのかもしれないな。）」

ユーノを見ながら微笑むなのはを横で見ていたヴィヴィオは不審に思い、思わず声を掛ける。

「なのはママ。どうかしたの？」

「うんうん。何でもないよ。」

一護はことの経緯をたつきに話し、たつきもそれに納得した様子で話を整理し始める。

「ほうほう。それでコノ人たち連れて町を見物してて、私のところに寄ったと。よし！それじゃ、空手道場に来たからにはそれなりの事してもらわないとね。」

そう言うと、たつきは奥の方からあるものを取り出してきた。

「はい、これ。」

なのは達の目の前に投げられたのは、人数分の空手衣。

「空手衣？」

「あ、これ前に来たことある！」

ヴィヴィオは以前、なのはの実家を訪れた際に格闘技を習っていることを士郎達に話したところ、調子に乗った士郎が柔道も習っておいたほうがいいのではないかと言って、一度だけヴィヴィオに柔道の指南をしたことがあるのだ。

「それに着替えたら、私がみっちり鍛えてあげるわ！」

「「「はい！よろしく、お願いします！」」」

たつきの言葉に意気揚々と返事をする三人を見て、吉良は一人呟く。

「目が輝いてるな・・・この三人・・・」

更衣室に向い、渡された空手衣に身を包んだユーノ達。

すると、不服そうな表情を浮かべながら・・・・・・

「で。着替えるのはいいとして・・・」

一護と恋次は納得していない様子でたつきにこう言った。

「何で俺達も何だよ。」

「あんたら死神でしょ。腕だって相当立つんだから、このくらいどうってことないって。」

「質問の答えになってねぇよ。」

たつきを始め、一部の霊力のある一護の友人は一護が死神であるこ

とを黙認している。

そのため、恋次達の正体も当然のことながら知っているのである。

「それより俺と織姫は別にいいだろう。」

一護とは裏腹に、俄然やる気になっている織姫を一瞥しつつたつきにそう言う一護。

「何言ってるのさ。ここに居る以上は私の指示に従ってもらうから。たとえ、一護でもね。」

「たく・・・面倒くせぇな。」

「まあまあ。いいじゃない、あなた♪楽しく賑やかにやろうよ、ね！」

全員はたつきの計らいによりトーナメント形式での対戦が行われることとなった。

「それじゃあ、早速トーナメント形式でやっていくわよ。」

そして、早速第一試合の相手が大勢の門下生とユーノ達が見守る中、目の前に現れる。

その対戦相手とは――――――・・・・・・

「第一シード。織姫対なのはちゃん。」

そう、織姫となのはである。

二人は真剣な表情で向かい合うと、お互いに挨拶をする。

「よろしくお願いします、織姫さん。」

「こちらこそ。なのはさんも全力全開で向ってきてくださいね。」

「なのはママ！ファイト！！」

「頑張ってください、なのはさん！」

壁際でそれを見ていたヴィヴィオとスバルはなのはに応援のエールを送る。

「織姫も運がねぇな。なのはといきなり当たるとは。」

哀れむかのようにヴィータが横でそう口にすると、一護が鼻で笑いながらこう返してきた。

「ふん・・・いいや。寧ろその逆だぜ。」

「ん？」

言葉の意味がよく分からなかったヴィータだが、それはすぐに理解できるものとなるのだ。

そして、試合が開始され先手を切ってきたのはなのはであった。

「行きますよ、織姫さん！全力全開・・・！！」

なのははは勢いよく織姫に向っていくが、その瞬間織姫は勝ち誇ったかのような笑みを浮かべながらなのはに向って走って行き、なのはの右腕を力強く握りしめた。

「って!?」

そして、そのままなのはの予想に反して織姫はなのはを一本背負いで投げ飛ばしたのであった。

「はああ!!!」

「れーーーーー!!!

フェイトがそう尋ねると、一護は真顔でこう答える。

「織姫はああ見えて、たつきに空手習ったことがあってな、軽く初段ぐらいはあるぞ。最もあれは空手じゃなくて柔道だけどな・・・」

一護のその言葉を聞いた瞬間、全員は容姿に違わず意外な一面を持つ織姫に若干の恐怖を抱いた。

「・・・ま・・・マジかよ・・・」

「（織姫さんとは・・・ケンカしないように頑張ろう・・・）」

気絶したなのはを運んだ後、続く第二試合目が開始された。

「第二シード。一護対吉良さん！」

先程同様真剣な表情で向かい合う二人を見ながら、白鳥と鬼太郎はこんな事を呟く。

「何か微妙な組合わせであるな・・・」

「ああ。今一垢抜けねぇな。」

「って、うるせー！」

「吉良！一護に容赦はいらねぇ。捻り潰してやれ。」

「え！？あ・・・！！」

恋次のその言葉を聞いて若干躊躇いを覚える吉良だが、その時ふと一護を見てみると悪意に満ちた笑みを浮かべながら闘争心を剥き出しにする一護が自分を睨みつけてくる。

そんな一護を見ながら吉良は狼狽しつつ、挨拶だけを済ます。

「よ・・・よろしく・・・」

「始め！」

掛け声と同時に、一護が途轍もない勢いで吉良に向って突進していく。

それはさながら獲物を見つけた肉食動物のごとく。

「ほあああああああああ！！！！！！」

「ひいい！！！！」

そんな血の気を漂わせる一護を見て、恐怖で足が竦んでしまった吉良は容易に一護の攻撃を許してしまう結果となる。

「回し蹴り！！」

「ぐっは！！！」

一護は吉良にクリーンヒットで回し蹴りを食らわせて、吉良を空中に浮かばせながら軽くノックダウンをさせたのであった。

吉良は鼻血を出しながら宙を舞い、やがて勢いよく地面に叩きつけ

られ動かなくなった。

「ふん。他愛も無え。」

「「強！」」

圧倒的な戦闘能力の高さを目撃したスバルとティアナは声を揃えて同じことを口にする。

そんな一護を誇らしげに思いながら声をかけるユーノ。

「流石は一護さん♪伊達にヤンキーやってきた訳ですね。」

「だから、違げーよ！！」

そして、恐らくは今回最も注目すべき一戦が行われようとしていた。

それこそ――――――・・・・・・

「第三シード。ユーノ対鬼太郎」

空手衣に身を包んだユーノと鬼太郎の一本勝負であった。

ユーノ自身は、鬼太郎とは違いあまりモチベーションが上がらないままであった。

「何か今一モチベーションが上がらないな。」

すると、そんなユーノを見ていた復活したなのはが声援を送る。

「ユーノ君！頑張ってね！」

その瞬間、ユーノは桃色のオーラを出しながら満面の笑みを浮かべながらなのはの方へ振り返り返事をする。

「うん♪頑張るよ、なのは♪」

そんなユーノを見ながら、一護は呆れながらこう呟く。

「現金な奴だ・・・」

「へへ。相手が店長だからって、俺は容赦しないっすよ！こう見えて、空手には自信あるんすから！」

「ほう～～～それは面白い。是非、見せて頂戴よ。」

互いに挑発的な口調で士気を高める二人を見ながら、ふとフェイト達幼馴染組みはこんな会話をしていた。

「ユーノは確かに身体能力は私達の中で随一だけど、空手なんてやったことあるのかな？」

「そうだね。あんましユーノ君って空手とかやるイメージじゃないしね。」

すると、そんなのはとフェイトの話を横で聞いていた一護が示唆してきた。

「ま、見てれば分かるさ。」

「始め！」

「うっしゃあああああ！！！！行くぜ、俺の必殺技・・・！！！！」

鬼太郎はユーノに突進しながらそのような掛け声を発する。

そんな鬼太郎を見て鼻で笑い待ち構えるユーノ。

「・・・ふん♪」

そして、鬼太郎の正拳突きがユーノの顔面に入ろうとしたその瞬間だった。

「黒帯バージョ・・・」

ユーノは絶妙なタイミングでそれを回避すると、その場で体を捻らせながら体勢を低くする。

「！？」

「せいや！！！」

「のあああああああ！！！！！！」

そして、ユーノはその状態から蹴りを鬼太郎の顎にヒットさせ、そこから繋がる止めの一撃を頭に直撃した鬼太郎はそのまま床に身体が食い込み動かなくなった。

見事なまでに床が陥没し、完全に気を失う白目を向く鬼太郎とユーノのその時の技を目撃したなのは達は終始唖然とした。

「・・・あ・・・あ・・・」

「ユーノパパ、凄い！！！」

「何だよ・・・その技・・・！？」

すると、そんな恋次の質問にユーノが飄々とした態度で答えた。

「『胴回し回転蹴り』って言うんですよ♪前にたつきさんがテレビの試合でやってるのを見て、練習したんですよ♪」

これは空手技の一つで、命中率の低い大技だが、まともに食らえば相手の顎を骨折させられるほどの威力を持つ危険な技である。プロ格闘家でも得意としている選手は少なく、絶妙なタイミングと高い運動能力が必要とされる。

「やるじゃないの、ユーノ！私でも成功するのは滅多にない大技よ、あれ！」

「はは。自分の身と目に映る人を護るために身に付けた護身術ですよ♪ははははは」

ユーノの技を見ていたたつきは感服した様子でユーノを褒め称え、そのユーノ本人は相変わらずの飄々とした態度で軽く頭に手を添える。

そんなユーノの言葉を聞いていた一護やなのはは顔を引きつる。

「それは最早護身術の域を超えてるだろ・・・」

「（ユーノ君とは絶対無いと思うけど、ケンカはしないようにしよう・・・命が幾らあっても足りないから・・・）」

影で白き魔王と揶揄されるなのは自身も、これぱかりは流石に自分の身が危険になるやも知れぬと考えユーノは絶対に敵に回さないことを固く誓ったのであった。

それから二時間ほどの稽古の後、一護達はたつきの空手道場を後にし再び市街地を歩き回っていた。

スバルやギンガは嬉しそうな表情でこんな会話をしていた。

「いや～～～いい勉強になったね！」

「ほんと！」

「私もなんだか強くなった気がする！」

ヴィヴィオはそう言いながら、たつきに指摘された箇所に注意をしつつ歩きながらの正拳突きを行う。

一方のなのはは、疲れきった表情を浮かべながら肩の力を落とす。

「はぁ・・・私は何かつかれたちゃった。織姫さんの攻撃意外と痛かったから・・・」

「ああ！！ご、ごめんなさいね！！」

なのはの言葉を聞いてすぐさま謝罪の言葉を掛ける織姫。

「せやけど、いい人やったな。」

「はい。また是非手合わせ願いたいものですね。」

「お前、たつきとは何だか気が合ってたみたいだからな。」

好戦的な性格ゆえ、シグナムとたつきは妙に気が合ったらしくトーナメントが終わっても二人で最後まで張り合っていたそうだ。

「でも、やり過ぎないように注意してくださいね。」

「そうだぜ。戦いすぎるのは旦那の悪い癖だ。」

「わ、分かっておる。」

リィンとアギトの言葉を聞いて、些か動揺するシグナム。

「で、コノ後はどうすんだ?」

「こばな空いてきたしな。ここらで一服するか。」

「賛成!」

「では、何所か喫茶店でお茶にしましょう。」

「じゃあ、あそこだな。」

一護がそう言うと、目の前に見えてきた一際行列の目立つ喫茶店に目を向けた。

「凄い行列ですね。」

「あれ？あの店って・・・・・・」

なのははその喫茶店の名前と外装を見た瞬間、何所か神妙な顔つきになった。

「なのは、知ってるの？」

「うん。お母さんから聞いた話でね、並盛町って海鳴からちょっと行ったところにある町の人気のケーキさんが姉妹店を出したって聞いてたけど、ここにあったんだ。」

すると、そんななのはの話を聞いていたユーノがふとこんな事を言って来た。

「並盛町だったら、僕の知り合いが住んでるよ♪」

「お前、人脈広いんだな。イギリスにも知り合いがいるんじゃなかったか？」

「柊沢さんは旅行中お世話になりましたからね・・・時々情報交換してますよ。」

「正しく、人間タウンページだな。」

「それって使い方あってるのかな？」

恋次がふとそんな事を呟くと、吉良が軽く突っ込みを入れる。

そして、全員は行列に並び数十分間待った後漸く店の中へと入ってこれた。

「いらっしゃいませ。」

中に入ると、外と同じかそれ以上の数の客が店内に溢れ返っていた。

「結構混んでるな・・・」

「１１時前だって言うのにね・・・」

「さて、何を頼もうかな・・・」

すると、そんなユーノ達の後ろから一人の女性の声が聞こえてきた。

「あら！ひょっとして、ユーノ君じゃないの？」

「ん？」

ユーノや一護が声の聞こえるほうへ振り返ってみると、そこにいたのはショートヘアーが似合う見た目３０歳前後の女性が笑顔を浮かべながら立っていた。

「やっぱり！ユーノ君！！しばらくね！」

「奈々さん。」

ユーノ、一護、織姫の三人は奈々と呼ばれるその女性を目撃すると近付いていき再会を喜んだ。

「本当だ！お久しぶりです、奈々さん！」

「織姫ちゃん！それに一護君も一緒なのね！二人とも、すっかり夫婦姿が板についてきたわね。」

「へへ。どうもどうも♪」

「こっちに用があったんすか？」

蚊帳の外となっているなのは達であったが、フェイトが徐に尋ねる。

「ユーノ。あの人は？」

「さっき言ってた並盛の知り合いで、沢田奈々さん。ひったくりに遭ったところを偶々助けたのが縁でね。一護さん達も一緒だったんだ。」

「そうなんや。しかし、若いな・・・歳、幾つなんや？」

「なのはのお母さんより三つ年下だよ。」

すると、その言葉を聞いた瞬間全員は目を疑った。

「え！？あれで・・・うそ！！」

「「若作りし過ぎ！」」

なのはの母親である高町桃子もスバル達が驚くほどの容姿端麗の女性であり、同時にとんでもないほど若作りをしていることで有名だ。

そんなとんでもなく若作りをしている女性が今自分達の目の前に現れているのだから、驚かないほうが無理も無い。

「世の中と言うのは、見た目では中々判断できぬことが多いな。」

「それにしたって、若すぎるだろ。いいとこ四十・・・んご!?」

恋次が危険な一言を口にしようとした瞬間、場の空気を読んだ金太郎が恋次の口を塞ぐ。

「夢を壊すような発言はいけませぬぞ。」

すると、そんな談笑をしていたユーノ達の前に奈々の連れの二人が近寄ってきた。

「あら。暫く見ない顔ね。」

「ほんとだ。一兄(いちにい)とユーノ兄、それに織姫姉(ねえ)も居る。」

「あ!ビアンキさん!!フウ太君も!」

「げ!毒蠍(どくさそり)ビアンキ・・・!」

笑顔の織姫と顔を引きつる一護達の前に現れたのは、ランキングフウ太の異名を取るフウ太と呼ばれる青年と、作った料理が須らくポイズンクッキングと呼ばれる猛毒の料理になってしまう毒蠍ビアンキと呼ばれる艶やかな女性であった。

「随分な物言いね。あなたも相変わらず派手な髪の毛してるわね、

黒崎一護。」

「う、うるせー！これは地毛だって言ってんだろ。」

そんな二人のことをなのは達に紹介していくユーノ。

「こちら、奈々さんの息子さんの知り合いでビアンキさんとフウ太君。」

「綺麗な人です！」

「結構胸でかいな。」

リィンとアギトがそんな思ったことを口にすると、はやてがビアンキの胸とシグナムの胸を見比べながらこんな事を口にする。

「う～～ん・・・こりゃヘタしたらシグナム越すな。」

「あ、主はやて！何を！？」

「あら。その人はユーノ君の彼女さん？」

奈々がそう言うと、ユーノとなのはは思わず顔を赤くする。

「え！？あ、はい・・・まぁ・・・」

「あ、あの！高町なのはです！！ユーノ君とは幼馴染で！！その！！」

「あら、そうなの。よかったわね、ユーノ君。綺麗な彼女さん出来

て。」

「「あ・・・その・・・はい・・・」」

奈々に軽く茶化されたユーノとなのはは思わず沸騰して顔から湯気を出す。

その後、各々自分の好みに合わせたケーキやお茶を注文すると、比較的席がある外でのブレイクタイムを堪能することにした。

フォワード達は翠屋のケーキと比肩するほどの絶妙な上手さを表現した『ラ・並盛リーヌ』のケーキに満足していた。

「ん!!!最高です!!」

「ホント、うまいなコレ!!」

「あは～～ん!!私天国いっちゃいそう!!」

「天国じゃなくて、ソウル・ソサエティじゃないの?」

「言えてるわね。」

「エリオ君。これあ～～んする?」

「え!?いや・・・僕は!!」

そんな中、紅茶を啜りながらなのは一護と織姫、そして奈々と談笑をしながら憩いの時間を楽しむユーノに目をやった。

「・・・・・」

すると、そんななのはを見ていた隣に座るヴィヴィオやフェイト、はやての三人が声をかけてきた。

「なのはママ？」

「気になるの、なのは。」

「あ、うん。ちょっとね。」

「だったらちょっと失礼って言って割り込んで話加わればいいんちゃうの？」

「うん。だけど・・・折角の知り合いとの再会を野暮なことで邪魔するのは悪いよ。それに、私はユーノ君と一緒ならいつでも幸せだから。」

すると、そんななのはの言葉を同じテーブルで聞いていたビアンキとフウ太がこう言って来た。

「いいわね。愛の力は・・・」

「ふぇ？」

「あなたとユーノを見てると、あの二人のことを思い出すわね。」

「そうだね。ツナ兄も京子姉も、隼人兄達も今頃どうしてるだろうね？」

フウ太がそんなことを思いながら遠い異国の地で裏社会の闇と戦う青年達のことを思ってる傍らで、恋次は横のテーブルでビアンキの素性を吉良から聞かされ驚きを隠せずにいた。

「何!?あの女の作る料理がみんな毒に・・・!」

「しっ!声が大きいよ。一護君の話じゃ、彼女は『毒蠍ビアンキ』と呼ばれるヒットマン、つまりは殺し屋のようなんだ。」

「何で殺し屋が普通に一般人と行動してんだよ!?」

「それはよく分からぬが・・・兎に角、裏社会の人間が時折市井の中に紛れ込んでいることは間違いないそうだ。」

一方、ユーノ達は奈々との談笑を楽しみながら始めて遭ったあの時のことをしみじみ思い出していた。

「でも、本当あの時は助かったわ!ちょうど息子とお嫁さんが並盛に帰ってきて、久しぶりに私がはりきって美味しいもの作ろうとしたら引ったくりにあうんだから。」

「ま、あん時は俺とユーノが近くにいたから何とかなりましたけどね。」

「そう言えば、息子さん・・・結婚したんですね。今はどちらに?」

「お嫁さん連れてイタリアの方に行ったわ。時々手紙は貰うけど、どうも心配でね。ま、京子ちゃんがいれば大丈夫だと思うけど。」

「結婚したのは何時です?」

「もう6年も前の話ね。あの子、中学の頃から京子ちゃんと仲良かったけど・・・まさか本当に結婚するとは思ってなかったから、驚いたわ。でも、あの二人のことだからラブラブでやってるわ。私と主人みたいに♪」

「18で結婚して、イタリアに行くとは・・・相当なやり手なんすね。」

「仕事は確か、貿易関係だとか・・・？」

「ええ。会社も大きいから色々大変だって、この間手紙に書いてあったわ。」

後に・・・この奈々の息子である沢田綱吉と、妻である京子がとある事件を切欠にユーノ達機動六課の面々と出会う事となろうとはこのとき未だ誰も知る由も無かった。

「そうですか。ところで、今日はどういった用件で空座町に？」

「ああ、そうそう。実は前々から此処に行こうと思ってたんだけど、今日やっと来れたのよ。」

奈々はそう言いながら、バッグの中から一枚のチラシを取り出しユーノ達に見せた。

チラシには撮影された子犬や子猫が沢山写っていた。

「『ハートフルペット祭り』。」

「わあ！！可愛い！！」

「子犬とか子猫がいっぱいで素敵でしょ。他にもウサギとかカピバラとか、珍しい動物も沢山いるんですって。あ、そうだわ！良かったらこれからみんなも一緒に行きましょうよ。大勢のほうが楽しいし。」

「あ、それいいですね！」

「けど、この大人数で行ってもいいですか？」

「いいの、いいの。私、賑やかなほうが好きだから。」

奈々の誘いを聞いたユーノはその旨をなのは達に伝えると、全員は快くそれを了承。

と、言う訳で。奈々さんのご好意に甘えさせてもらい僕は今・・・空座町で開かれているペット祭りに来て自由行動を取っています。

全員は庭園内で動き回る沢山の子犬や子猫、更にはカピバラなどの珍獣を見て胸がきゅんとなっていた。

「きゃあ！！可愛い、この子！！！」

「ほんと。心が癒されるわね。」

「ちょ、ちょっとあんた。あんまり顔は嘗めないでよ、くすぐったいから。」

スバル、ギンガ、ティアナの三人はその場にいた子犬を優しく抱え

上げると子犬の顔で自分の頬を撫でたり頭をさすったり、更には顔を嘗められたりなどとそれぞれに戯れる。

「フリードにも見せてあげたかったね。」

「そうだね。」

ライトニングの二人はほのぼのと二人で居眠りをする子犬と子猫をしゃがんで眺めていた。

「わああ!!この子・・・アルフそっくり!!」

フェイトはと言うと、自分の使い魔であるアルフの子犬形態によく似た子犬を見つけて思わず胸を高鳴らせると優しく子犬を抱きかかえ頭を撫でる。

「よしよし。いい子だよ♪」

はやてとリィン達は子猫が多く戯れる場所まで行くと、その子猫を抱えながらご満悦の表情を浮かべていた。

「きゃっは!すずかちゃんとこのにゃんこも可愛いけど、こっちのにゃんこもほんまめんこいな!!」

「リィンも思わずハグしちゃうです!」

また、別な場所にあるチンパンジーのコーナーへと向った恋次はそのチンパジーと遊ぶのではなく遊ばれていた様子で髪を引っ張られていた。

「コラ！！！俺の髪をちょすんじゃねぇ、この猿！！」

そんな恋次を見ながら吉良は皮肉のようにこう呟く。

「君はやっぱり猿に縁があるようだね。」

そして、その横でシロウサギに持っていた白玉団子を見せながら自分の下へと引き寄せるルキア。

「さぁ、私のところに来いチャッピー！お前の大好きな白玉だぞ！！」

「朽木さん・・・ウサギは人参だと思うけど・・・」

一護と織姫はと言うと、ブルドッグの子供を見ながら穏やかに楽しんでいた。

すると、織姫がふとその中から一匹を抱え一護に見せ付けた。

「わあ、あなたこの子凄いよ！！このしかめっ面、あなたそっくり！！」

自分の顔と似てると称されたそのブルドッグを見ながら、一護は苦笑いを浮かべる。

「そ、そうか・・・」

さらに、スクライア商店メンバーと白鳥はイグアナなどの爬虫類コーナーに赴き、そこで浦太郎は鬼太郎にそっくりなイグアナを見つけた。

「先輩、これ見てよこいつ。先輩のアホ面によく似てる♪」

「てめぇ!!!誰がアホだと!!」

浦太郎の言葉に腹を立てる鬼太郎を、金太郎と白鳥が呆れた表情で取り押さえる。

「まぁまぁ、落ち着きなさいな。」

「だから、お主は野蛮な猿だと言われるのだぞ。」

「何だと!!てめぇなんか、そこにいる鶏と同類だろうが!!」

「何を貴様!!」

互いに物凄い剣幕を浮かべながら一触即発状態となる鬼太郎と白鳥であったが、そんな二人の仲裁に入ったのがビアンキであった。

「止めなさい、あなた達。」

ビアンキはそんな二人を見ながら、両手に抱えていた自分の作ったポイズンクッキングを見せ付けた。

「それ以上やるなら、私の作った料理を食べさせるわよ。」

「「なっ!!」」

これには流石に命の危険を感じた二人は、直ぐに喧嘩をやめて仲直りをする。

そんな二人を見ていたフウ太が軽く注意を促した。

「あはは・・・二人とも、ケンカはダメだよ。」

「なのはママ！見て見て、あれがカピバラだよ！」

「あ、本当だ。すごい大きいね。」

そして、なのは・ヴィヴィオ・ユーノの仲良し親子三人はカピバラの親子に近付き餌を食べさせながら徐に近付いていった。

「触っても大丈夫かな？」

「大人しそうだから、大丈夫だよきっと。」

逃げられないように慎重に近付いていくヴィヴィオ。

そして、徐に頭の毛を優しく撫でた瞬間ヴィヴィオは笑顔を浮かべる。

「わぁ！！ふかふか！！」

そんなヴィヴィオの傍にやって来た奈々がカピバラの顔を見ながら自分の息子のことを思い出した。

「この顔見てたら・・・何だかツナを思い出してきちゃったわ。」

「ふふ。あれ？」

愛娘の微笑ましい姿に笑みを浮かべるなのはであったが、なのははその時一人何所か落ち着かない雰囲気を漂わせるユーノに目を向けた。

「ユーノ君。さっきから何そわそわしてるの？」

「え！？あ、ああ・・・・・・べ、別に僕は何も・・・・・・」

あからさまに動揺をするユーノに全員が疑問を感じると、フェイト達が更に話しかけてきた。

「そう言えば、ユーノ。何だか子猫の場所からかなり遠ざかってるみたいだけど。」

「ギク！え！？な、何のこと！？」

「子猫・・・・・・はは～～ん！そうか、ユーノくんさてはにゃんこ達と遊ぶのがこわいんやろう？」

「はっ！！」

「あ！そう言えばユーノ君・・・すずかちゃんの家に言ったときに追い回されていたことがあったもんね。すっかり、忘れてたよ。」

そんななのは達の言葉を聞いた恋次が鼻で笑いながらこう言った。

「何だよ、ユーノ。ネコが苦手だったのか？ふん、大したことねぇな。」

「意外ですね。ユーノ先生がネコ苦手なんて。」

「そうよね。苦手なものはないとばかり踏んでいていたしね。」

フォワードメンバーはユーノの意外な苦手にわりと驚かされていたが、当の本人はネコに関しては嫌な思い出しか残っておらずそれが今でもトラウマとなっているのだ。

「（苦手にもなるわ！僕はネコにはいい思い出がないんだ！！フェレットだったときは鼠と勘違いされて追い回されるし、リーゼ姉妹のアリアさんには食べられそうになるし・・・僕、本当にネコにはいい思い出がない！！）」

「でも、このネコ達すっごく大人しくて可愛いよ。」

「ユーノも、勇気を振り絞って頑張ってみようよ。」

「ああ。お前も男だろ。びしっと決めろ！」

「いや、しかしですね一護さん・・・・・・」

ヴィヴィオやフェイト、一護に促されたユーノであったがそれでもやはり躊躇いの気持ちのほうが大きい。

すると、そんななよなよした様子のユーノに業を煮やした一護が強引にユーノを猫の群がる場所まで突き倒した。

「ごちゃごちゃ言ってねぇで、さっさと中に入れボケ！」

「うわあああああ！！！」

勢いよく一護に突き倒されたユーノが徐に顔を上げると、待ち望んでいたばかりに子猫達が獲物を捕らえるかのような鋭い目つきでユーノを睨みつける。

「へ！？」

ユーノもそれには大いに驚き、体を動かそうと思ったが力がまるで入らず猫達の一斉攻撃を受けてしまうこととなった。

「ぎゃあああああああ！！！！！！！や、止めて！！！！！！！！あああああああああああ！！！！！！！」

会場を後にしたユーノ達一行であったが、ユーノ本人は猫たちによって受けた傷が顔中に目立ち、なのはの横で終始項垂れていた。

「だ、大丈夫・・・ユーノ君！？」

「はぁ・・・生きてて良かった・・・」

「ネコが苦手なんて、可愛そうな男ね。うちの隼人とは大違いね。」

「ま。こんなこともあるさ、ユーノ。」

「取り合えず、クロノがいなかっただけマシとしよう。あいつが居たら後で小馬鹿にしてくるに決まってるから。」

「にゃはは・・・あ、ありえない話じゃないかも・・・」

苦笑いを浮かべるなのは達。

実際、本当にクロノがいた時はどんな嫌味などを言われるかは分かったものではないのだ。

「じゃあ、私達はここで失礼するわね。」

「はい。気をつけて帰ってくださいね、奈々さん。ビアンキさんとフウ太君も。」

「ええ。ありがとう。」

「またね、ユーノ兄。」

「「「「「お気をつけて！」」」」」

全員に見守られながら、奈々たち三人はユーノ達一向と分かれて並盛町行きの電車に乗って帰って行ったのであった。

その後も一向は町の行き着けスポットで時間を堪能し、昼はなのは達女性陣が作ってきた弁当を胃の中に収め、更に時間を費やすうちにあっという間に夕陽が立ち上る時間となった。

「すっかり夕方になってしもうた。」

「気がつけばあっという間に午後の六時か。」

「どっかで飯にしようぜ。腹減ってしょうがねぇよ。」

「昼にあれだけ食ったやつがよく言うぜ。」

「ま、お腹がすいたのは確かですしね。どこかいい店はないかな・・

・ん？」

と、ユーノ達が河川敷近くの道を歩いていると目の前に映ってきたとある光景に目をやった。

「あれは・・・！」

それは、橋の下で複数の柄の悪い男達が会社帰りのサラリーマンに暴力を振う光景であった。

「集団リンチ！？」

「早く止めないと・・・！」

なのはがそう言いながら走りだそうとした矢先だった。

突然、目の前にいたユーノと一護がなのはの行動を手で止めてきた。

「ユーノ君！？一護さん！？」

「まぁ、待てよ。あんな奴なんかの為にお前らの手を汚すまでもねぇさ。」

「そうそう♪ここは、僕と一護さんと恋次さんに任せて。」

「て、俺も入ってるのかよ！？」

思わぬ一言に突っ込みを入れる恋次。

「恋次さんだって、放っておけないでしょ？」

「・・・ま、それもそうだな。」

「行くぜ。」

そう言うと、ユーノと恋次は一護と一緒に男達の下へ向かって行った。

「あなた！あんまりコテンパンにし過ぎないでね。」

「分かってる！」

「大丈夫かな！？」

不安げな様子を浮かべるなのはに向って、ルキアが腕組みをしながらこう言って来た。

「心配はいらぬ。男の喧嘩に女の我々が手を挟むこともあるまい。」

「だけど、喧嘩って言うのがどうも私は嫌いですから・・・」

「私も・・・」

すると、そんなのはとフェイトの言葉を聞いていた白鳥が鋭い指摘を入れる。

「喧嘩は嫌いなくせに、模擬戦が好きな奴らがよく言うわ。」

「「う！」」

それを聞いた二人は思わず苦笑し、聞いていたはやては一人大笑いをする。

「ははははは！こら、一本取られたな二人とも！」

さて、その頃柄の悪い男達は顔中に傷跡をつけるサラリーマンに向ってナイフを突きつけ金を要求してくる。

「ひぃ！！」

「なぁ、頼むよおっちゃん。ほんのちょっとでいいからお金貸してくれない？まだ、美味いもん食べて、いい女を抱きたいだろ？」

「へへへ！！」

「だ・・・だれか・・・たす・・け・・・」

恐怖に怯え、声が震えるサラリーマン。

「へへへ・・・がよっ！？」

暴力と威圧で金をせびり取ろうとした男が不適笑みを浮かべてその瞬間、真後ろから一護の蹴りが加わり男は河川の中に飛び込んだ。

「ああ！！トシちゃん！？」

「トシ！？」

仲間達は突然の出来事に思わず狼狽をするが、すぐにその原因である不機嫌そうに眉間に皺を寄せる一護に目をやり文句をつけてきた。

「な、何だお前は!?イキナリ出て来てトシちゃん蹴倒しといて。何考えてんだてめぇ?死ぬか?あァ!?」

「・・・・・・」

「何とか言えこの・・・」

男が無視を決め込む一護に言葉を投げかけようとしたその瞬間、一護は理不尽にもその男の頬に蹴りを入れてノックダウンさせる。

「おっプッ」

仲間がまた一人やられると、男達は更に動揺を募らせる。

「ああッ!キュウちゃんがやられた!!」

「何だか知らんがヤベェ・・・あんな理不尽な暴力見たことねぇ・・・」

「あいつ絶対アレだ・・・あんなとやったら確実に殺される・・・!」

と、その時。

そう言った男の後ろからユーノが飄々とした態度を見せながら後ろから蹴りを入れてきた。

「ギャーギャー喧しいよ♪」

「おフッ」

ユーノはその男を踏み倒しながら、飄々とした態度で残りの男たちに向って顔中傷だらけとなったサラリーマンを指差す。

「みんな～～～♪この人を見なさい！！」

突然のことに訳が分からなくなる男達であったが、すかさずユーノが自分のテリトリーに持ち込む。

「問1！！コレは一体何でしょうか♪ハイ、そこの一番風呂とかちゃんと入ってなさそうな異臭漂う君！！

「え・・・？お・・・俺？て言うか異臭・・・」

ユーノの言葉にかなりショックを受けるパンクの男が、徐にユーノの質問に答える。

「あ・・・あの・・・俺達がカツアゲしてたおっさん・・・」

「大正解♪♪」

ユーノは男の言葉を聞くや否や飄々とした態度で蹴りを入れて男を突き上げた。

「イッちゃーーーん！！」

すると、また後ろのほうから今度は恋次が男たちに質問をしてくる。

「問2！！！」

「わぁあ！！また別な奴が来た！？」

「じゃあ、どうしてこのおっさんは・・・こんなにボロボロなんでしょうか！？」

「そ・・・それは・・・」

「中々金ださねぇから・・・みんなでリンチしたから・・・？」

その瞬間、恋次はその男二人に右ストレートを入れてノックダウンさせる。

「ぎょえん！！」

「だとよ、一護。」

「な～～～るほど。そう言う訳か。」

一護はそれを聞くと、はじめに自分が蹴倒した男のもとまで行くと、懐をあさり出す。

「ってコラ！！何勝手にトシちゃんのポケットあさってんだよ！！」

残った仲間内五人は激しく抗議をするが、一護はお構いなしに懐をあさり目的のものを見つける。

「おっ、あったあった。ユーノ！」

一護がそう言ってユーノに投げつけたのは携帯電話であった。

ユーノは一護から携帯を受け取ると、１１９番の番号を押して耳を当てる。

「あ。空座総合病院ですか？スミマセンけど、救急の手配お願いします♪」

「きゅ・・・救急車だぁ！？」

「てめぇ！俺らとやる前から自分らの心配か！！」

ユーノの舐めた態度にご立腹の様子の男達であったが、ユーノは構わず話を続ける。

「場所は西鳥屋２丁目、小野瀬川の橋の下。台数は――――――」

そう言いながら、ユーノは指で残りの男の数を数え始める。

「１・２・３・４・５・・・・・・５台♪」

最後に不敵な笑みを浮かべたユーノに堪忍袋の緒が切れた五人はユーノ達に向って突っ込んでいった。

「「「「「てめえら！！！」」」」」

「派手にやりますか！」

「おう！！」

「行くぜ、コノヤロウ！」

三人はそう言うと、持ち前の高い戦闘能力を発揮させて一分も経たないうちに五人を満身創痍の状態に追い込み陥落させた。

完膚なきまでにやられた男達は涙を流しながらこう呟いていた。

「こいつら・・・ほんとに何モンだよ・・・！？」

「俺が知るか・・・」

一方の一護と恋次は余裕の表情であった。

「ふん！雑魚だったな。」

「所詮、掃き溜めの集まりだ。」

ユーノ自身は怪我をしたサラリーマンの傷を一通り手当し、気をつけて帰宅することを促す。

「怪我は一通り治しておきましたから。早く帰って大人しく寝てください。」

「あ・・・はい。ありがとうございます。」

サラリーマンは持ち物を持って一護達に軽くお礼をすると、駆け足で帰路へと向かった。

「上さん大事にしろよ！」

そんな今までの三人の様子、特にユーノの様子を見ていたなのは達

は言葉にも出ないぐらい驚いていた。

「あ・・・・・な・・・何て言うか・・・その・・・」

「かなり一方的な結果ですね・・・」

「ユーノくん・・・喧嘩も強かったんやな・・・」

「つくづくあいつは何を学んできたんだ・・・!?」

「さぁな・・・」

こうして、この騒動は無事に解決したかに思えたが・・・実はこのことが大変な騒動を引き起こす序章になろうとは思ってもいなかったのである。

番外編・その1　ユーノと一緒に空座見学。付き纏うのは不運ばかり?!（後書

教えて、ユーノ先生!

ユ「今日は空座町の地理についてだよ♪」

ユ「なのはの実家がある海鳴市と空座町は隣同士にあり、都会の喧騒を離れた郊外にあるごくごく普通の町並みが特徴だ。」

ユ「町の西を流れる小野瀬川と、支流の空須川に挟まれた一角がこの町の中心部で、そのど真ん中に空座本町駅がある。」

一「にしても、海鳴と隣接していたとは言われるまで気付かなかったな。」

ユ「人間そんなもんですよ♪目先のことって、案外気付かないものですから。」

一「ところで、ウチの親父は出てこないよなこの回に・・・」

ユ「さぁ・・・どうでしょうか・・・」

魔導師図鑑ハイパー!

一人、留守番を任されてしまったコン。

「いやだあああああああああ!!!!!!!俺もお外にいきてえよ!!!!!!!!一護のバカヤロー!!!!!!!!」

ソファーの上で涙を流しながら駄々を捏ねるコン。

「チクショー！！！！！俺みたいなマスコットキャラが遭ってこそ、魔法少女ジャンルはなりたつのに～～～～！！！！！」

そして、一人家の中でこう叫んだ。

「俺も魔法少女アニメに出てれば良かった！！！！！！！！チクショー！！！！！！！！！」

番外編・その2　サービスカットも必要だよね？　（前書き）

温泉ネタきた！！！

と言っても、ムサイ男ばっかですけど・・・

どうでもいいけど、主人公設定はちょくちょく書き加えてます。

では、始まります。

番外編・その2　サービスカットも必要だよね？

＞i13916―709＜

集団リンチを行っていた柄の悪い男達を全員病院送りにした一護、ユーノ、恋次の三人を始めとする六課一同はすっかり辺りが暗くなった街中を歩いていた。

「ふう。ひと暴れしたらはら減ってきたぜ。」

「ちょうどいい時間ですし、夕食にでもしましょう。」

「賛成！」

「昼はお弁当ガッツリ食べたからな・・・何所か往きつけのお店とかあります？」

「そうだな・・・この人数だから・・・やっぱあそこがいいかもな。」

「うん！じゃあ、みんなで私達夫婦がお勧めのお店に連れて行ってあげるね。沢山食べれるから、安心してね！」

「じゃあ、私に何頼もうかな？」

「スバル・・・調子に乗ってお金使いすぎないでよね。」

そんな談笑をしている一行の後を気付かれぬように後ろで見ていたのは、一番最初に一護に蹴倒されたあの男であった。

「くっ・・・そ・・・・!!あいつら・・・・!!」

男は一護達に強い怒りと復讐の念を募らせると、急いで自分が属している空座町の外れに家を構える極道一家、『大和屋一家（やまとやいっか）』の幹部二人にことの事情を話すのであった。

「何!?では、松村に出川までもが・・・その三人組みにやられたと?くっ、おのれ我ら大和屋一家を嘗め腐りおって!」

「聞けば、あの大島もこの町で町医者を営むオレンジ頭の男を恐れて家業から身を引いているとか?」

「腰抜けどもが!己の身命を省みず、仁義を貫く我ら極道の本質を忘れおったか。」

いや、仁義どころかただ暴力振るっていただけでしょ・・・あんたらの舎弟。

「だが、これは好機なのでは?部下がやられた以上、我ら兄弟が行動を起こしてそのオレンジ頭を潰しておけば、厄介なタマはなくなり侠客としての我らの巣を拡大できるやも知れぬ。」

「そして、我ら大和屋一家はそれを手始めに全国の極道に我らが存在を知らしめる絶好の機会となるのだ。」

「滅法強いといったところで、所詮そやつは一介の町医者に過ぎぬ！」

「して、その町医者のことは・・・調べはついているのか？」

「うむ！的は稀代のヤンキーにして、町医者の黒崎一護！！」

その男達、大和屋兄弟は早速標的である一護の写真を持って行動を開始し始めた。

一方の一護達はと言うと、一護と織姫がよく行き行きつけの店で夕食を取るところであった。

「いらっしゃい！！」

「みんな、順番に奥の方に詰めてな。」

「ヴィヴィオはこっちの出口側のほうがいいでしょ？」

「うん！ありがとう、フェイトママ。」

はやてを始め年長組みの指示に従い、フォワード陣一同は順番に奥の方へと座っていくが、生憎全員は流石に座れなかったため恋次と金太郎の二人だけはカウンターで食事を取ることとなった。

「女将さん、私は何時ものお願いします！」

「はい。」

「みんなも、自分の食べたいものを食べていいからね！」

「はい。ありがとうございます。」

「よし!!私はこれに決〜〜〜めたと!!」

各々がメニューを見ながら自分の食べたいものを順に注文していると、この店の女将が一護と一緒にいるユーノ達の姿に些か驚いていた。

「あら。黒崎先生がユーノ先生連れて一緒に来てるの見るの初めてだわ。」

「今日は特別だよ。可愛い弟子とそれの弟子を連れて楽しく食事するのも悪かねぇ。」

「よ!流石は一護さん!僕の偉大な師匠!!」

「言っておくが、俺はてめぇの弟子じゃねぇけどな!」

一護のそんな発言に尊敬の念を抱くユーノと、、機嫌を損ねるカウンターに座る恋次。

「ご注文は以上で宜しいですか?」

「はい。大丈夫です。」

「暫くお待ちくださいませ。それまで、楽に寛いでください。」

注文の品が来る間に各々が適当に寛いでいる中、そんな一護を狙って大和屋兄弟の二人が鋭い目線で一護に的を絞っていた。

「（ふふ・・・黒崎一護め。まるで隙だらけではないか。これならば容易に始末できそうだ。行くか？）」

恋次と金太郎の間に座る一人が兄に向って目線を送り、行動を起こそうとした矢先だった。

「お待たせしました。“織姫スペシャル”です！」

女将が運んできた丼を見た瞬間、二人を始めなのは達全員が凍りついた。

「「（ぐあああああ！！！！！！）」」

丼の上には織姫の独特の舌のセンスに合わせたものがふんだんに盛られており、考えようによっては金太郎のマヨネーズ丼以上に恐ろしかった。

「わっはーい！！美味しそう！！いっただきます！！」

織姫は満面の笑みを浮かべながら箸を割って豪快にそれを食べ始めた。

そんな織姫の食べるものを顔を引きつりながら恐る恐る尋ねるはやて。

「あ・・・あの・・・織姫さん・・・それは一体！？」

「これ？私がコノ店に来た時に必ず頼む織姫スペシャル。良かったら、食べてみる？」

「「「

「お、来た来た！」

興奮する恋次を他所に、吉良は徐に尋ねる。

「それ・・・阿散井君が頼んだのかい？」

「ああ。メニューに載ってて喰ってみたくなった。」

そんな可笑しなメニューとそれを注文する客に違和感を覚える大和屋弟。

「（な、ナンなのだこの店は！？変な奴らばっかだ！！）」

「はい。マヨネーズスペシャル丼のお客様。」

と、その時再びカウンターのほうに運ばれてきたのは金太郎が注文した今朝ユーノ達が食したものよりも更にマヨネーズをふんだんに使ったマヨネーズ丼であった。

「ひいい！！！！（え！？今度は何！！マヨネーズ！！！！）」

「おおお！！！来ましたか！！！！！待ち侘びましたぞ！！」

その丼を見た瞬間、兄弟二人もユーノ達全員もショックを隠し切れずにいた。

「「「「「（こ、こいつ・・・！！朝も昼もマヨネーズずくしか！！！！）」」」」」

「こ・・・これはもう・・・」

「ツッコム余裕もあらへんよ・・・」

すると、そんな金太郎の丼を見た瞬間恋次は箸を動かすのを一度やめてこう言って来た。

「おいおい、金太郎。ちょっと悪いんだけどよ・・・席外してもらえねぇか?そんなもん横でべちゃべちゃ喰われたら食欲失せるわ。ね、おじさん。」

「え?俺!?」

恋次に突然振られてしまい、戸惑いを隠しきれずにいる大和屋弟。

すると、そんな恋次の発言を聞いた金太郎が反論してくる。

「だったら恋次殿が席を外したほうが得策ではありませんか。御飯に小豆をかけて食べる味覚のどうかしている方にカウンターにいて欲しくありませぬ故。ですよな、おじさん。」

「あ、え!?また俺・・・!?」

「太古の昔から、炭水化物と甘いもんは合うとされているのを知らねーのか?アンパン然り、ケーキ然りよ。ねぇ、おじさん?」

「え!?いや・・・知らないけど・・・!?」

「何を味わうにも、先ずそれを引き立てるイレギュラーさが必要なのを知らないのですか?塩気酸味を利かせることで元ある食材の旨みがより引き立つのです・・・つまりはマヨネーズです。ねぇ、お

じさん？」

「いや！！もう俺に振らないでくれない！関係ないから！！」

そんな金太郎の発言に対して、心の中でユーノはこんなツッコミを入れる。

「（金太郎・・・お前のそれはもう食材の旨みを殺してるだけの只の不摂生だからね、言っておくけど・・・）」

そして、二人の口論は更にエスカレートを増す。

「俺の宇治金時丼をてめぇのイヌの餌と一緒にすんなよ！これはな・・・昔、デザートと飯をバラバラに食うのがタルかった・・・あん！！サンドイッチ伯爵が作り出した由緒正しき食べ物なんだよ。ね、おじさん？」

「いや！！何でサンドイッチ伯爵！？サンドイッチ全然関係ないから！！それ御飯じゃん！！」

「それを言うなら、私だって・・・御飯とマヨネーズをバラバラに食べるのが億劫であったグスタフ・アドルフ殿がですね・・・」

「だから誰その人は！！ハンガリーの名将か！？マヨネーズなんて、必ず取らなきゃいけないものでもないし！！」

二人の口論に勝手に巻き込まれた大和屋弟は業を煮やし、怒りを露にする。

「そんなに言うなら、宇治金時丼とお前のそのイヌの餌スペシャル。

どっちが優れているか食べ比べてみるか、ね、おじさん？」

「ね、おじさんって何！？」

「上等ですな！ね、おじさん？」

「ちょ、待て！！全然上等じゃないから！！え、何！？俺が食べる感じになってるの！？」

突然の二人の提案に最早どうしていいか分からずパニックなる弟を見ながら、大和屋兄は苦笑いを浮かべていた。

「公正な判断は赤の他人じゃねぇと下せねぇだろ。そう言うことだ。ね、おじさん？」

「頼みますぞ、ネオジサン。」

「ネオジサンって何！？何か名前みたい・・・ぐっほ！！！！！！！！！！！ぐはあああああああ！！！！！！！！！！！

「ネオジサン！！」

「「お前らは一体何をやっとるんじゃああ！！！！！！！！」」

そんな二人に喝を入れる一護とユーノであったが、そんなことは全く気にもしていなかった織姫は織姫スペシャルを完食したのであった。

「ぷっは！！ご馳走様！！！」

「ありがとうございました！」

その後、体をぐったりさせる弟を方で担ぎながら先に出て行った一護達の後ろ姿を睨みつける大和屋兄と意識が朦朧としている弟。

「くそ、思わぬ邪魔が入ったな。何だったんだあの赤髪と眼鏡の巨体は！？だがここで諦めてなるものか！こんどはあの赤髪もまとめて黒崎一護同様始末してくれよう。」

「任せろ、兄者。次こそは俺が必ず・・・うぇ！！！！！」

弟はその瞬間、マヨネーズと一緒にまだ残っていた小豆を豪快に嘔吐してしまった。

一方の一護達はつまらぬことで張り合った恋次と金太郎に呆れながら注意を促した。

「たく！ガキの張り合いなんかしやがって！見てるこっちが恥ずかしいだろうが！！」

「おまけに食欲までそがれちまっしな・・・」

「二人とも、少しは反省してくださいね。」

「「面目ない・・・」」

機動六課の面々にまで厳しい一言を言われてしまった年上の二人はすっかり意気消沈としてしまう。

と、一護達が暫く歩いていたその時思わぬ人物二人が現れたのだ。

「あれ？なのは、なのはじゃない！！」

「え？」

なのはがその声のする方へ振り返ってみると、そこに居たのは小学校からの大親友であるアリサとすずかの二人であった。

アリサとすずかの二人は手にお風呂用具一式を持ってなのは達のもとに近付いてきた。

「なのは！！フェイト！！」

「はやてちゃん！！」

「アリサちゃん！すずかちゃん！」

「ほんまや！！」

なのは達三人は二人との再会に大いに喜び、童心に帰った。

「わぁ、二人ともこんな所で会うなんて奇遇だね！」

「ホント！久しぶりって・・・ほどでもないか。この前海に行って来たばかりだしね。」

「うんうん！」

「アリサ達はどうして空座町に？」

フェイトがそう尋ねると、アリサは思い出したかのように一枚のチラシを取り出す。

「あ、そうそう！実は私達、今からここに行こうと思ってるの！」

チラシに書かれていたのは、空座町に新装開店したばかりの入浴施設であった。

「何だ？温泉・・・？」

「海鳴のスーパー銭湯の姉妹店みたいでね、規模もかなり大きいの。よかったらなのはちゃん達も一緒に行かない？」

「温泉か・・・そういや、俺もしばらく温泉に浸かってねぇな。」

「だったら、これからみんなでいこうよ！」

「ああ。絶好のタイミングとは正にこのことだな。」

「じゃあ、みんなで一緒にこの温泉に行ってみようか？」

「「「「「はい！！」」」」」

「その前に、着替えとお風呂用具一式持ってこなんとあかんな。」

「じゃあ、一先ず戻って身支度済ませてたらまたここに集合しようか。」

「温泉なんて、久しぶりです！！」

「ああ！！何かワクワクしてきた！！」

「羽目をあまり外すなよ。これでも任務中なのだからな。」

温泉と言うワードに一同意気揚々とする中、ユーノはなのは達に次のように言って来た。

「あ、だったら僕ちょっと寄る所があるから少し遅れるよ。」

「うん、分かった。ユーノ君もなるべく早く来てね。」

「はいはい♪なのは達は先に温泉を満喫しててよ。」

ユーノはそう言いながら、なのは達と一度別れてある場所へと一人向かって行った。

ユーノが向った先は、一護の家から歩いて数十分ほどの場所にあるビルの佇まいに駄菓子屋を構える浦原商店と呼ばれる場所であった。

この店こそ、ユーノが一護の次に尊敬する人物が住まう場所である

と同時に重要な死神達の前線基地の様なところなのだ。

目的地に辿り着くと、ユーノは帽子を深く被りなおすとかるく息を吐いて自分の店と全く同じ造りの店の姿に些か懐かしさを感じていた。

「ふう～～～。コノ店に来るのも本当に久しぶりだな。元気にしてるかな・・・」

ユーノはそんなことを口にしながら、徐に店に近付いていくと閉店時間だと言うにも関わらず少しだけ開いている扉を静かに開けながら挨拶をする。

「ごめんください。」

ユーノの声に反応したのは、金太郎と姿が大変酷似したこの浦原商店の従業員であり元鬼道衆総帥兼大鬼道長の握菱鉄裁（つかびしてっさい）であった。

「お、これはこれは珍しいお客様ですな。」

ユーノはそんな鉄裁に軽く会釈を済ませる。

鉄裁は直ぐに奥に居るこの店の店長を大声で呼ぶ。

「店長！店長！」

「分かってるよ、鉄裁。そろそろ来る頃だと思っていましたから・・・」

そう言いながら奥から出てきたのは、ユーノの今の格好と性格に強

い影響を及ぼした張本人であると同時に、ユーノに諸々の鬼道と霊的技術を伝授した昼行灯である。

「どうやら元気そうですね・・・浦原さん。」

「ありゃ！褒められちゃいましたか♪これはアタシも驚きました。」

その男もユーノと同じ甚平と帽子、杖と言う三点セットを身に纏ったこの店の店長・・・そして、元十二番隊隊長にして技術開発局初代局長を務めた天才・・・浦原喜助であった。

浦原もユーノ同様軽く帽子を手で押さえながら挨拶をするのであった。

「お久しぶりっす。スクライアさん。」

浦原はユーノを店の中に上がらせると、久々の再会に大いに喜びながら他愛も無い話をしていた。

「いや～～～こうして直に話すのも久しぶりっすね♪噂は黒崎サンや阿散井サンから伺ってます。安心しました。」

「安心？何をです。」

「そりゃもう♪まるっきりアタシと同じ性格になったら、アタシの立場的にたまったもんじゃないっすからね♪」

「ははは♪大丈夫ですよ。服装と性格は影響されても、結局の話僕は浦原喜助にはなれない。ユーノ・スクライアという一人の男でしかないんです。」

それを聞くと、浦原も満足した様子の表情を浮かべ今回ユーノが訪れた理由である本来の話を持ち出す。

「・・・そうですか。分かりました。ところで、前に頼んでいたパトリオットの件に関して・・・アタシの技術を使って対策を講じたいと言っていましたね。」

「はい。こちらとしても、浦原さんの技術力は非常に必要なものであると考えております。出来れば、何時攻めてきてもおかしくないように色々と準備はして欲しいと思いまして。勝手なことと重々承知で・・・」

「アタシは構いませんよ。スクライアさんがそんなに言うなら喜んで力を貸しましょう。少し時間は掛かりますがね・・・」

「浦原さん・・・ありがとうございます。ところで、夜一さんの姿が見えないのですが？」

「儂がどうかしたのか？」

すると、その時ユーノの横に現れる全身黒い毛で覆われた猫。

この猫こそ、浦原の無二の親友にして元二番隊隊長兼隠密機動総司令官及び同第一刑軍統括軍団長を務めたユーノの瞬歩と肉弾先頭の師匠、四楓院夜一（しほういんよるいち）である。

「夜一さん！お久しぶりです♪」

ユーノは猫の状態である夜一の前足を軽く握りながら、久々に聞く

夜一の声に懐かしさを覚える。

「ユーノも元気そうじゃの。流石は盛りっぱなしの淫獣フェレットもどきだけのことはある。」

「その言い方はやめてくださいよ。未だに気にしてるんですから！」

「まぁ、細かいことはこの際気にしないほうがいいっすよ♪」

「細かいことじゃないですよ、浦原さん。」

その後、暫く他愛の無い話をしたユーノは店を出ると浦原達に見送られてその場を後にしようとしていた。

「それじゃあ、ジン太君と雨（ウルル）ちゃんにもよろしくお願いしますね。」

「はい。京都から帰ってきたら、そう伝えておきます。」

「ユーノもあまり無茶をするでないぞ。」

「分かってますよ。それじゃ・・・」

と、ユーノが浦原商店を後にしようとしたとき・・・浦原が徐にユーノを呼び止めた。

「スクライアさん。」

「はい？」

「・・・アタシがこんなこと言うのもなんですが・・・アナタの卍

解は我々死神の中では特に異質な能力です。使えば間違いなく黒崎サンの完全虚化を遥かに凌ぐ。だが、その反面代償も大きい。くれぐれも、アナタの卍解を発動することなく事を片つけてくださいね。」

浦原のその言葉を聞いたユーノは、背中越しにこう言った。

「・・・ええ。分かってます。」

この話しの詳細は現時点では定かではないが、この浦原が危惧するユーノの卍解の能力とは一体どれほどのものなのか？

そして、一護の完全虚化を凌ぐ力とはどのようなものなのか？

真相は未だ先になりそうだ。

さて、その頃空座町に家を構えるパトリオット達の住まい、狼谷家では現在銀太郎が台所でおでんの仕込を完了させたところである。

「うん。仕込みは完了っと。」

銀太郎の傍でずっとおでんの仕込を手伝っていた白鴎は漂ってくる匂いに興奮を覚えていた。

「あ～～～いい匂いだ～～～銀太郎、銀太郎。腹減った。」

「まだだよ。このまま置いといて、お風呂に入って上がった頃が食べ頃だから。」

「はぁ～～～待ち遠しい～～～」

「白鴎とオーリーはこれでも喰ってつないでおけ。はいよ。」

そう言って、田吾作が出してきたものにオーリーが尋ねる。

「これは？」

「俺が作った和え物だ。若布と蛸のゴマ酢和え。」

田吾作が作ったという事実を聞いた瞬間、オーリーと白鴎は顔を見合わせ恐る恐る田吾作に尋ねる。

「・・・大丈夫か？」

「大丈夫だわい！！」

「お前の料理は偶に暴発と言うか・・・核兵器と化すことがある。」

「見た目に騙されないぜ。」

「てめぇら・・・！！」

二人の発言に思わず怒りを募らせる田吾作を優しく宥める銀太郎。

「まぁまぁ。田吾作の料理も年々上達してるんだし、平気だよ。さっき僕も味見したし。」

「なら、安心だな。」

「いただきます！」

銀太郎が味見を舌と言うことに安心感を覚えた二人が箸をつけたことにイマイチ納得のいかない田吾作。

「くっ・・・瀬間子。うちの爆乳女と大食い小僧はまるで情がないと思わねぇか！？」

「（聞かれても、困る！）」

田吾作の無茶な質問に、念話で返答する少々不機嫌な瀬間子。

「瀬間子まで！！残酷だ！！」

「田吾作。瀬間子が困ってるよ。そんな細かいことで落ち込んだらダメだよ。」

すると、そんな銀太郎の発言に疑問を抱いた白鴎。

「あれ？銀太郎・・・今の思念通話受けてないよな？」

「え？思念通話、してたの。」

銀太郎が瀬間子にそう尋ねると、軽く瀬間子が謝罪の言葉を掛ける。

「失礼した。お耳に入れることでもないと思ってな。」

「いいよ、別に。瀬間子は茶渡さんみたいに寡黙だから偶に喋ってくれると嬉しいよ。」

「じゃあ、銀太郎問題！今の銀太郎の言葉を受けて、瀬間子は今どんなことを考えてるか？」

「う～～ん・・・そうだな・・・『お言葉は大変嬉しいのだが、無闇に言葉を発しないのは我が主義故』・・・とか？」

「どうだ！？」

「寸分違わずに。」

「スゲー、スゲー！！何で分かったんだ！？」

「はは。もう十年以上も一緒に居るんだよ。分かるよ、それぐらい。」

それを聞いたオーリーと田吾作は銀太郎のそんな広い心を賞賛する。

「素晴らしいことだ。」

「理解溢れる主を持って、幸せだな俺達！」

「はは。褒めても今晩のおかずしか出ないけど。」

「へへ！さて、風呂の用意はそろそろいいかね～～～」

そう言うと、田吾作は風呂の温度を確認する為にその場を離れた。

その間に、オーリーと白鴎は田吾作の作った和え物を口にする。

「うん・・・銀太郎の調理と比べることもないが、田吾作のこれも

悪くは無いな。」

「そだな。取り合えず、腹には入る。」

「ダメだよ。田吾作だって影で努力してるんだから・・・・・うん！美味しいよこれ！！ほら、瀬間子も一口食べてみなよ。」

銀太郎にそう言われて瀬間子も一口口の中に入れる。

「・・・うん・・・美味い・・・・」

と、その時。

「だあああああああああああああああ！！！！！！！！！！！」

突然、風呂場のほうから田吾作の叫び声が聞こえてきた。

「「何だ！？」」

「田吾作！」

「田吾作！？どうしたの！？」

四人が風呂場に行って見ると、そこに居たのは意気消沈して肩を落と田吾作だった。

田吾作は四人の方へ振り返ると、全力全開で頭を下げ始めた。

「あはあああああああ～～～～ん！！！！！！す、すみませんでした！！！！！風呂の温度設定間違えちまって・・・冷たい水がすり

きり一杯湯船に！！！！」

「はあ！！！！！！！！？？？？？？」

あまりに馬鹿馬鹿しい失態に白鴎は思わず声を漏らした。

オーリーは頭を抱えて呆れ返ってしまう。

「沸かしなおしか・・・」

「だけど、ここの風呂お湯炊きには時間がかかりすぎるしな。」

「田吾作、しっかりしてくれ。」

「すいませんでした！！！！」

すると、白鴎がとある方法を思いつきオーリーに提案をしてみた。

「オーリーさ・・・チータスの火力で水に突っ込めば直ぐ湧くんじゃね・・・」

「断る！」

「ち。即答かよ・・・」

「う～～～ん・・・ここはダイシーの血を受け継ぐものとして、僕が魔法で何とかしようかな・・・」

「あ、それは別にいい！！やっぱりここは俺が何とか・・・」

「炎熱系の魔法は得意だが、微妙な調節は正直苦手だ。」

「火事とかになったら洒落になんないぞ。」

「とかいいよ。こんな下らないことで魔力消費するなんて馬鹿げてるよ。」

「「「う・・・・・・」」」

銀太郎のその言葉に思わず声を詰まらせる三人。

「だけど困ったな・・・・・・あ、そうだ。田吾作、ポストに入ってたチラシの束・・・取っといてあるかな？」

「え？あ、ああ・・・今週の分なら・・・」

「ちょっと、持ってきて。」

銀太郎に言われるがまま、田吾作は取って置いたチラシの束を持ってくると銀太郎に手渡し、銀太郎はチラシを一枚一枚確認しながら何かを探していた。

「えっと・・・・・・あ、これだこれ！」

そう言って取り出したのは、アリサ達が持っていたあのチラシであった。

「『空座スーパーラグーン！新装開店・・・』」

「『記念大サービス』？」

「何だよ、これ？」

「海鳴にあるスーパー銭湯の姉妹店がこの町にもできたんだよ。」

「ああ！あのスーパー銭湯のか！？」

「えっと、何々・・・温泉を始め、滝の湯に泡のお風呂、バイブレーションボディーマッサージバス、電気風呂に紅茶の湯・・・それからウォータースライダーと各種豊富だそうだよ。」

「それはまた素晴らしいことだが・・・」

「何だか楽しそうじゃん！！」

「新装開店サービスで安い！しかも、三名様以上だと更に割引だ！」

「ありがとう！市民の味方！！」

「これはもう、行くっきゃないってことでしょ！」

「行った！」

「よっしゃ！行くか！」

銀太郎のその提案に白鴎と田吾作は大変興奮しているのに対して、オーリーはあまり反応がよろしくなかった。

「ん？我が家で一番の風呂好きが何か反応鈍いよ・・・」

「ああ・・・いや・・・」

それを聞くと、銀太郎は念話でこんな会話をする。

「・・・（オーリーはまた、身内の失態を僕に補ってもらうのは良くないとでも思ってるのかい？）」

「（いや・・・まぁ、そうなんだが・・・）」

「（口をすっぱくして言うけど、オーリーは少し真面目すぎるんだよ。それはみんなのリーダーとしていいことだけど、真面目すぎるのはあんまり良くないよ。）」

「（すまない）」

「（僕がいいって言ったらいいんだよ。みんなの笑顔が、僕の幸せだから。）」

「（ああ。すまなかったな。）」

「（すまないと思わなくていいから、僕を主と思ってるなら・・・僕の言葉を信じてね。）」

「（ああ。信じてるさ。我が主の言葉を。）」

「でも、何だか楽しそうだなよな！」

「ホントだ！」

「はは。だから、オーリーも行こうよ！」

「ああ。分かった。じゃあ、お言葉に甘えさせてもらう。」

「「ヤリー！」」

「瀬間子も行こうよ。どうせなら皆のほうが賑やかだし？」

「お誘い誠にありがたいのだが、俺は留守を預からせてもらう。」

「そうなの？」

「夕餉（ゆうげ）の見張りもあるからな。」

「て言うか、お前は風呂が嫌いだからな。」

「う・・・！」

白鴎の思わぬ一言に声を詰まらせる瀬間子。

その事実を思い出したのか、銀太郎も思わず笑い声を上げる。

「そうだったね。ま、みんなで行ってもどうせ瀬間子はロビーで待ってるだけだと思うし・・・じゃあ、御免ね。瀬間子は留守番と言うことで。」

「御意。」

「それじゃ、みんなは着替えとタオルを持ってお出かけの準備だ。」

「「おー！！」」

「田吾作。私の着替えは何所だ？」

「それなら風呂場のほうのハンガーに掛かってるだろ。」

「風呂上りにコーヒー牛乳でも飲もうっと！あ、シャボン玉も持っていくかな。」

「お前、恥ずかしくないのかいい年して。」

「ウルセー！見た目はこれだ！なんともねぇ！！」

銀太郎達はそれぞれの準備のために一度自分の部屋へと戻っていった。

その間に、オーリーと瀬間子は次のような会話をしていた。

「銀太郎に窘（たしな）められたか？」

「ああ。だが、何故だろうな。恥じ入る気持ちはあるのだが・・・不思議と心が温かい。」

「誠の主従の絆とは、そう言うものなのだろうな。」

「そうなのかな。」

「不安もあるだろうが、心身の休息も戦いのうちだ。銀太郎と共にゆっくりと寛いでくるといいだろう。」

「うん。お前も少し眠っておくといい。今夜も捜索は深夜からだ。」

「承知している。」

すると、準備を終えた白鴎が玄関先からオーリーを呼ぶ。

「オーリー！何してんだよ、早く行くぞ！」

「ああ。今行く！」

オーリーは素早く準備を済ませると、銀太郎達と一緒に空座スーパーラグーンへと向って出発したのであった。

銀太郎達がちょうど温泉に向ったちょうど同じ頃、一護達一向も風呂用具一式を持ってかなりの大きさのある空座スーパーラグーンへ無事到着した。

「デケーな。空座町にんなデカイ銭湯があったのかよ！？」

「全然気がつかなかったね。」

「でも、何だか楽しそうですよ♪」

「早く入りましょうよ！！」

スバル達に促されて、一同は早速施設内へと入って行った。

「中もかなり広いなって・・・」

その時、一護の目の前に映ってきたのは中学時代からクラスメイトで同じ霊的能力者である茶渡泰虎と悪友であり空座総合病院の院長

を務める石田雨竜であった。

「チャド！石田！」

「む。」

「な！黒崎・・・！井上さんに朽木さん・・・それになのはちゃん達も！？」

一護の声に振り返った石田はあまりの突然のことに大いに驚いた。

なのは達もまさかこんなところで一護の知り合いに出くわすと思っても居なかったため、一護達同様驚愕する。

「茶渡さん！それに石田さんまで！？」

「ああ！あの時の海の家の人か！」

「お前たちも浸かりに来たのか？」

「あ、いやその・・・僕は別にそういったつもりではなくてだね・・・」

何故か白を切ろうとする石田であったが、茶渡が一護達にことの事情を話す。

「俺がここの割引券をやったたら、一緒に来たんだ。」

「さ、茶渡君！それは言ってはダメだ！！」

それを聞くと、一護や恋次は鼻で笑うかのように石田のことをバカにする。

「何だよ。意外と貧乏性なんだな、石田。」

「空座総合病院の院長が聞いて泣けて来るぜ。滅却師の誇りは何所へ消えたんだよ？」

「う、うるさい！それとこれとは滅却師の誇りは関係ないのだよ！」

大声を張り上げる石田であったが、周りの状況を見たヴィータとシグナムがそんな三人に注意を促す。

「おいおい。こんな人が大勢居る前で喧嘩なんてするなよ、みっともねぇ。」

「他のお客様に迷惑だ。さっさと受付を済ませるぞ。」

「と言うか・・・この大所帯・・・」

「明らかに浮いている気がする。」

「同感。」

スバルやティアナ、ギンガの三人はふとそんな事を思ったそうな。

一向は男湯と女湯にきっちりと分かれて、それぞれのロッカーを確保して着替えを始めていた。

男湯に入る前に、キャロとフェイトがエリオに対して向けた一緒に

入りたいという誘惑はあったものの、恋次と一護の二人に諌められてそれはなくなったという。

脱衣をしていた一護達であったが、恋次・鬼太郎・そして白鳥の三人は海の家で見たとき以来となる茶渡の鍛え上げられた体に思わず声を漏らした。

「「「「おおお!!!」」」」

「ん。俺の体に何かついてるのか?」

「あ、いえ!別にそう言うのじゃなくて・・・ですね!」

「久しぶりに見るとやっぱりお前の身体ってゴツイなと思って・・・」

「ま、チャドは昔からアイアンボディーだったからな。」

すると、そんな一護の発言に石田がこんな言葉を入れる。

「君の身体も無駄に頑丈だしね。」

「無駄に頑丈ってどういうことだよ!?」

と、その時。

突然、浦太郎が深い溜め息を突きながら辺りを見渡していた。

「はぁ〜〜〜」

「あ?どうしたよ、亀。」

「いや・・・こうして見ると・・・むさいおっさんや男ばっかりだなと思ってさ・・・」

浦太郎に言われて全員も辺りを見渡してみると、そこにいるのは当たり前のようだが初老の男や還暦を迎えたご高齢の人たちばかりである。

その光景を見た白鳥は思わず苦笑する。

「確かに、そうであるな・・・」

「あ～～～あ。男ばっかりだな全く以って。」

「男湯なんだから当たり前だろ、お前ら!!」

一護がそんなツッコミを入れる一方で、浦太郎はこんな事を呟き始めた。

「大体、何でこう言う場面で男湯が先にクローズアップされるのさ!?普通、女湯からでしょ?だって元となってるのがリリカルなのはな訳だし・・・」

「作者的に、男女平等というのが基本方針にあるようだから仕方ないとは思うけど。」

「でもよ、それにしちゃこの小説男ばっかり優遇されてねぇか?」

「男尊女卑って言いたい訳か?」

「それは無いと思うけど。作者はＢＬＥＡＣＨ寄りの作品展開で色々混ぜ込んでるみたいなだけで、男も女もいいところの折衷で妥協してるんだよ。」

「だが少なくとも、扱いが酷いキャラも中にはいるだろう。」

「そう言えば、クロノ提督とフェイトさんの扱いがあんまりよくないような。」

「作者は徹底したクロノ痛めつけ路線と、同性愛廃絶・純愛主義、それになのフェイ路線の排除を貫いているからね。」

「何しろ、ユーなのファンだからな・・・うちの作者。」

そんな全員の会話の内容を聞いていた一護は思わず大声でツッコミを入れる。

「何の話だよ、お前ら！！」

「騒がしいぞ、黒崎。少しは静かにしたまえ。他のお客さんに迷惑だぞ。」

「ちっ！」

石田に諌められて舌打ちをする一護。

すると、パンツを脱ごうとしていた石田はロッカーに足をぶつけた拍子に片足だけで目の前を前進し始めてしまった。

「わっあ！！！あ！あ！あ！あ！！」

「石田！！」

「何やってんだよ！てめぇは！！」

呆れかえる一護達であったが、茶渡がその時目の前のある扉を見るなり焦りの声を漏らす。

「マズイ！あのボイラー室の扉は女湯と繋がってるんだ！」

「「何！？」」

茶渡の発言を聞いた鬼太郎と浦太郎は思わず鼻血を出してしまう。

「止まれ！！何とか止まってくれ、僕の身体！！幸い、扉は開いていない・・・」

石田は何とか扉の目の前で体を止めようとしたのだが、運悪くボイラー室の方から担当のものが出て来てそのまま扉を開けてしまったのだ。

「えええええええ！！！！！！！！」

これには流石の石田も万事休すとなる。

「や、や、ヤダ！！！！！！！！！！」

更に運の悪いことに女湯へと繋がる扉のほうも全開になっていたため、石田は大変恥ずかしい姿で女湯へと入ってしまうこととなった。

その結果・・・・・・待っていたのは死の報復だった。

「きゃあああ！！！！！石田さん、変体！！！」

「痴漢よ！！！！！」

「うわあああああああああああ！！！！！」

石田の悲惨な叫び声を聞いていた一護達全員は石田の無事を祈りながら同じことを思った。

「「「「「「「「（お気の毒に・・・）」」」」」」」」

その後、一護達がそんな人騒動があった後温泉で体の疲れを癒しているちょうどその時、銀太郎達も漸く温泉に到着したのであった。

「かなり混んで来たね。」

「平日の7時だって言うのにこの盛況振りとは・・・」

店内の人の多さに唖然とする四人。

「それじゃあ、オーリー。お風呂上りにまた。」

「ああ。白鴎、田吾作。銀太郎のことは頼むぞ。」

「「はいよ！」」

男湯に入った銀太郎達であったが、白鴎は浦太郎同様周りが男ばか

りであることに少々不満気な気持ちで一杯だった。

「はぁ・・・男湯はどうもおっさんの匂いばっかりでいけねぇや・・・」

「男湯なんだからそれが普通だよ。それに、偶に小さい子供とかも入ってるでしょ？」

「それはそうだけど。」

「それにしても、随分広い脱衣所だな～～～！！」

「おお！！スゲー・・・広い！！」

「内装も綺麗でしっかしてる。おまけに、バリアフリーの完備とノーマライゼーションにも対応した造りになってるしね。」

「ノーマライゼーション？」

白鴎が聞きなれない言葉に頭を抱えていると、口にした銀太郎が説明をする。

「う～～ん・・・簡単に言えば、障害を持った人でも普通の人と同じような生活を送れるようにする考え方かな。」

「よくそんな難しい言葉知ってるな。」

「この前の学校の試験問題で出たんだよ。」

「それよりロッカーはと・・・・・お、ここだ。」

田吾作は人数分のロッカーを確保すると、それぞれの鍵を二人に手渡す。

「こっちが銀太郎のロッカーで、こっちが俺と白鴎の。鍵はちゃんと持ってるんだぞ。」

「うん。大丈夫だよ。」

「ひひ！早く入ろうっと！！」

白鴎は早速着ていた服を豪快に脱ぎ捨て床に散らかす。

それを見ていた田吾作が呆れながら注意を促す。

「白鴎。家じゃないんだから、服を脱ぎ散らかすなよ。」

「ちゃんと片付けるんだからいいじゃんかよ！」

「パブリックプレイスでのマナーを言ってるんだ、俺は。」

すると、そんな細かく注意をしてくる田吾作の態度が気に入らなかったのか、白鴎は挑発的な口調でこう口にする。

「・・・たく・・・ウルセーな、うちの家政夫（かせいふ）はよ・・・」

「それ以前の人間としての心構えだ。それにお前は日頃からだらしないところが目立つ・・・」

「ああ、もう！姑じゃあるまいし、ネチネチ五月蝿せーな！！」

「だったら、五月蝿く言われることをしなければいいだろうが！」

そんな二人の言い争いに銀太郎が気付き、頭にクエスチョンマークを浮かべた。

「ん？」

その間に、二人の言い争いは更にエスカレートを増していく。

「けっ！ちょっと腹筋が割れてるぐらいでいい気になるなよ！」

「な！？な、なんだよそりゃ！？何でそんな話になるんだよ！」

「無闇に筋トレばっかしやってるから、頭と心のほうに余裕がなくなるって言ってんだよ、この筋肉マンもどきが！」

「！！て、てめぇ！！！誰が筋肉マンもどきだ！？誰が！？そこに直りやがれ！エアラザーの爪で皮ごと剥ぎ取ってやる！！」

「あんだと！？そっちこそ、コンボイの拳で誰だか分からなくなるまでぶん殴ってやろうか！！」

二人はそう言いながら、デバイスを取り出しお互いに火花を散らす。

それを見て流石にマズイと思った銀太郎が二人の仲裁に入る。

「はぁ～～～コラコラ、二人とも。喧嘩するなら夕食後のデザートは出さないよ。」

「！だって、この筋肉マンもどきが！！」

「だから、誰が筋肉マンもどきだ、誰が！！」

すると、そんな納得のいかないでいる二人に銀太郎が顔を赤く染めながら次のような一言を言った。

「田吾作・・・それに、白鴎も。そんな生まれたときの状態で大声を出さないでよ。恥ずかしくないの？」

「「はっ！！」」

銀太郎に言われて漸くそのことに気付いた二人は、急いで大事なところを手で隠す。

「全く。そんなつまらないことで喧嘩するなんてどうかしてるよ。ほら、二人とも謝って仲直りしよう。」

「む～～～～～家政夫さんを馬鹿にするような物言い、悪かった。ごめんなさい。」

「俺も、些細なことで大人気なく熱くなった。すまなかった。」

「はい。仲直り。めでたしね。取り合えず、全裸で歩かないでよ。ちゃんと腰にタオルは巻いていなよ。」

「「は～い。」」

銀太郎にそう言われた二人は直ぐに籠の中のタオルを手に取り、腰に巻く。

すると、白鴎がふとオーリーのことが気になった。

「それより、オーリーの奴は大丈夫なのか？」

「あいつは性格と見た目の割りにとんでもない爆乳女だからな。周りから凄い目で見られそうだな。」

「ここへ来る途中も、おじさん達の如何わしい視線に機嫌を悪くしていたからね。」

「体中の栄養の八割が胸にいってたりしてな！」

「ははは！！そいつはいい！！そうに違いねぇ！！」

「ま、多分そんな事はないと思うけど・・・準備も出来たところだし、早速入ろう。」

「「おおお！！」」

三人は洗面用具を桶に入れると、早速風呂の中へと入って行った。

さて、風呂の中がどのようになっているか・・・・・・先ずは女湯から覗いてみよう。

織姫とルキアは二人並んで美肌効果のある湯に浸かっていた。

「うわああ！！！うはあああ！！！あははは！！！！こ～れ気持ちい！！！」

「ああ。やはり温泉はいいものだな。溜まっていた疲れと肩こりによく効く。」

「朽木さんは戦闘要員だもんね。私は旦那の手伝いのデスクワークだけど、時々肩と背中がキツくって。」

「そうか。だったら、井上。坐床が多いものの為のいいストレッチがあるから、今度試してみるといい。」

「ほんとに!?ありがとう、朽木さん!」

「ああ。」

「はぁ～～～～～それにしても・・・・・・」

織姫のその言葉と同時に、ルキアも一緒に二人は同じ言葉を吐いた。

「「気持ちい～～～!!!」」

また、アリサの方はと言うと・・・自分の会社で今度発売する新商品のインスピレーションのためにあまり人が寄り付かないような変った風呂に入ろうとしていた。

「う～～～ん・・・この電気風呂は中々面白そうね。あんまり入ってる人はいないようね。新しいインスピレーションの為にも、チャレンジチャレンジと!」

アリサが電気風呂に入ろうとしていたとき、そこには既に爆乳女と田吾作たちから揶揄されていたオーリーが先客として湯に浸かっていた。

「ふう。体中からプラズマイオンが流れ込んできて、最高だな。」

「ごめんね。隣いいかしら?」

「あ、どうぞ。」

アリサはオーリーにそう言うと、隣に座って電気風呂の効果を肌で感じ始める。

「おお!!早速来た!!!!!ぴりぴりする!!!!!!だけど、気持ちい~~~!!」

「・・・・・・」

そんなアリサの横で一人静かに湯を楽しむオーリーであったが、不意にアリサがオーリーに声をかけてきた。

「ね、あなた一人で来たの?」

「え?いや・・・私はその・・家族と一緒に。あなたは?」

「私も、友達とその友達の教え子さんに私よりも二つ年上の人たちさんと一緒に!」

「あ、そうなのですか。」

「へへ。このお風呂気持ちいいわね~~~!!」

「はい。全く以ってそうですね。」

そう言うと、二人は織姫たち同様体中から一気に疲れが放出され思わず声を漏らす。

「「はぁ～～～」」

また、別の場所にある紅茶風呂にははやて・シグナム・ヴィータの三人が仲良く並んで浸かっていた。

「気持ちええな！」

「はい。久しぶりですね、この快適感は。」

「シャマルの奴、羨ましがるぞ！あれ？そう言えば、リィンとアギトの奴は？」

「二人で露天のほうに先に行ったぞ。我々も、あとで行って見ましょうか？」

「そやね。星空の下の温泉・・・そこに集いし豊満なおっぱいの数～～～あ～～～これ以上の幸せはあらへんね！！！」

「あの・・・主はやて・・・何を考えていらっしゃるのでしょうか？」

はやての発言に思わず顔を引きつるシグナムであったが、そんなシグナムにヴィータが口を挟んでくる。

「言われなくたって分かってるくせに。」

「う・・・た・・・確かにそうだが・・・」

「シグナムも織姫さんもみんなみんな、私の餌食輩ね♪」

「は・・・はぁ・・・」

はやてのこれから起そうとしている行動に一抹の不安を抱えるシグナムと、女性の胸を揉むことに最高の幸せを感じている自称“おっぱいマニア”のはやて。

果たして、この女の性分は誰に似たのであろうか・・・？

その頃、ムサイ男湯のほうはと言うと・・・一護達や銀太郎達が風呂に入ったよりもかなり遅れた形でユーノがタオルを巻き、髪を完全に下ろした状態で入浴してきた。

「るんるんるん♪さぁ～～～て、僕も温泉を楽しもうとするかな。取り合えず、これから混むであろう露天を先に入っておくとするかな。」

ユーノは一先ず客足の少ない露天へと向い、徐に外へと続く扉を開いた。

露天風呂には既に白鳥と浦太郎の二人が入浴していた。

「ん？お、ユーノ店長。」

「どうどうも♪白鳥さんも露天で？」

「ああ。後々混むと煩わしいのでな・・今のうちに制覇しておこうと思うてな。」

「僕と一緒ですね♪それにしても・・・」

ユーノはそう言いながら、目の前に飛び込んでくる多数の男の魂魄を黙認しながら白けた目で白鳥に話を持ちかける。

「この露天はやたら魂魄が集まってきてますね・・・ムサイ男達の・・・」

「水場には魂魄が溜まりやすいと聞いたことはあるが、こんなに集まるとは思っても居なかったぞ。」

「磁気が強いのかな、ここ？なのは達は魔法があるから霞む程度にしか魂魄は確認できないけど、これ見たらきっと目回しますよ♪」

「目を回すだけなら可愛いものぞよ。あっちにはもっと重症の患者がおるぞよ。」

「え？」

そう言われて、ユーノが白鳥の指差す方向へ目を向けてみると・・・そこには頭を岩に激しくぶつけながら血を流す浦太郎を確認できた。

「気絶しろ！！！僕、気絶しろ！！！」

「浦太郎！！！」

ユーノと白鳥は大急ぎで浦太郎の行動を止めにかかる。

「ちょっと！！！何やってるの、お前！！！」

「くそ！！！何で気絶しないんだよ！！！死ね、僕！！！！！！」

「落ち着くぞよ！たかが魂魄ぐらいで狼狽するでない。」

「うるさーーい！！！おっさんの魂魄なんてまっぴら御免だ！！！何でしかも揃いも揃ってメタボばっかりなんだよ！！！これは悪夢だ！！！ナイトメア！！！！」

そんな露天風呂から聞こえてくる浦太郎の声を隣の露天で聞いていたはやてや先に入浴していたキャロ・リィン・アギト・すずかの四人は不審に思った。

「お？何や随分騒がしいな。浦太郎さんどないしたんやろ？」

「何か変なものでも見たのかな？」

「それって・・・ひょっとして幽霊とか？」

「まさか！！幽霊なんかそう見るものじゃありませんって。ここは新装開店したばかりですよ。」

「きっと楽しくてはしゃいでるだけですよ、きっと。」

「ほんま。男の子って幾つになっても子供やね。ま、それがいいんやけど。」

「そう言えば、一つ気になってることがあるんだけど？」

「何や、すずかちゃん？」

「うん。最近、なのはちゃんとユーノ君・・・その後上手くいってるのかなって。」

「心配せえへんでも大丈夫よ、すずかちゃん。あの二人に限って、破綻なんて言葉はありえへん。」

「はいです！なのはさんも、ユーノさんも呆れるくらいのラブラブバカップルですから！」

「それが時々私らの士気に影響が出るのが玉に傷だけどな。」

「でも、私もエリオ君もあのラブラブっぷりは見習いたいと思います！」

「ふふ、そっか。確かに、あの二人は昔から仲良しだもんね。」

「仲がええのもそうやし、本人達はどうも愛と同じだけの深い絆で繋がってる。私らには到底理解できぬほどの深い・・・実際、今のなのはちゃんを見てるとほんま安心や。四年前、突然ユーノくんがいなくなった時は見るに耐えられんかった。だから、ユーノくんが戻ってきてくれて本当に良かったと思ってる。癪な話、なのはちゃんの真の心の支えは私でもフェイトちゃんでもスバル達フォワードの皆でもない。ユーノくんただ一人だけや・・・」

そんな事を神妙な顔つきで口にするはやては、最後にこんな事を口にする。

「だから、私らはこれからもあの二人の絆を守っていくよ。なのはちゃんもユーノくんもどちらも笑顔でいられるように。あの二人が

笑ってれば、私らも同じように笑えるんや。」

さて・・・はやてが露天風呂でそんなことを思っているちょうどその頃、男湯のほうで様々な風呂を満喫している恋次は次の風呂へと移動を開始していた。

「はぁ～～～ここの温泉は色んな湯があって飽きずに楽しめるぜ！次はどの風呂に入るとするか・・・あ？」

と、恋次の目の前に飛び込んできたのは映画を見ながら風呂を楽しめるという今までの温泉には無かった新感覚の風呂であった。

「映画見ながら風呂には入れるのか・・・・・変ってんな。だが、やってるのは少女アニメと任侠モノか・・・どっちも見る気しねぇな・・・」

だが、そう言いつつも少しだけ興味を持った恋次は騙されたつもりで映画風呂の室内に入っ行った。

暗がりの中で多くの利用客と一緒に現在話題沸騰の少女アニメを観賞している恋次。

『私が寂しいときに・・・いい子ってしてくれるのも・・・私の大事なヴィヴィドだよ。私はヴィヴィドの本当のママじゃないけど、これから、本当のママになっていけるよう努力する・・・だから・・・いちゃいけない子なんて、言わないで！』

「ぐっ・・・・う・・・ぐっ・・・・！！！！！！！」

恋次は湯に浸かりながら涙腺が緩み、普段なら人前で見せないはず

の涙が滝のように噴出してきた。

「ぐっす・・・！！やられたぜ・・・大人の観賞にも充分堪えうる映画だ。いや、大人にこそ見て欲しい映画だ・・・！！」

そんな恋次の後ろには、先程の妨害によって一護を仕留め損ねた大和屋弟が湯に使って呆然としていた。

「（どこで泣いてるんだ、この赤髪は？だがこの暗がりなら仕事もしやすいわ。後ろから・・・ズブリと！さっきの恨み晴らしてくれる・・・覚悟！！）」

すると、その時更に後ろから聞きき覚えのある声が聞こえてきた。

「おい、そこの！」

大和屋弟が気になって振り返ってみると、そこに居たのはティッシュを箱ごと抱え、鼻水を垂らしてないている一護であった。

「グズグズうるさいんですけど・・・！全然聞こえないんだよ・・・！今、なはの何て言ったんだ！？本当のママが何！？」

「あ、すまねぇ・・・！なはのはどうやらあの子にママである・・・な！？」

「ああ！！」

恋次と一護は互いに顔を確認すると、そこから激しい口論となる。

「何だよ一護じゃねぇか！！大体さっきから何なんだよ、てめぇは

！！俺の行くところ行くところ現れやがって！！」

「こっちの台詞じゃボケ！！何だ！？腰巾着のつもりか、てめぇは！？」

「誰が腰巾着だ！アホか！？何か後ろで鼻水タラタラ流してるウルセェ奴がいるかと思ったら・・・！！出てけ、すぐ出てけ！」

「うるせえ！！鼻の奥の鼻水全部外に出すのに夢中になってたらな、もう映画の内容について行けなくなっちまったんだよ！もう、訳分かんねえんだよ！！もう俺には・・・鼻かんだティッシュしかねぇんだよ！！」

そう言うと、怒りを露にしながらかみ終えたティッシュを恋次にぶつけてきた。

大和屋弟は理不尽にもその被害を受けながら、恋次の後ろのほうで身を隠そうとする。

恋次は飛んでくるティッシュを振り払いながら、一護の怒りを更に上昇させる。

「医者の癖に、自分の体のことも分からずにいるからそうなるんだよ！馬鹿か、てめぇ！！そんな河童みたいな髪になりやがって、気持ち悪いんだよ！！」

「刺青甘党男に言われたかねぇんだよ！！その刺青！アイデンティティのつもりか！？逆なんだよ！！自己同一性を欠く以外の何物でもねえよ！！」

「うるせえ・・・ぐっほ!?」

流石に我慢の限界に達した大和屋弟は反論しようと前に出てこようとしたが、恋次の妨害を喰らい床に倒れ、恋次は一護の発言に堪忍袋の緒が切れる。

「表に出ろ、コラ!!墓前には何を備えて欲しい!?ヘアスプレーか!?ティッシュか!?」

激しい喧騒を繰り広げる一護と恋次の足の下では、踏みつけられた大和屋弟が二人にやめるように説得をするが聞く耳を持たない。

「いててて!!!!ちょ!!!!やめて!!!!!!」

すると、その時映画を鑑賞していた他の観客が一斉にこの二人の喧騒に文句をつけ始めた。

「おい!!お前らうっせんだよ!!」

「映画の内容がふっ飛んじまっただろうが!!迷惑なんだよ!!」

すると、それを聞いた二人は一度喧嘩を中断させると、一護から順に大和屋弟に責任を擦り付けるような形でこう言って来た。

「何だ、てめぇら!?いい男がこんな少女アニメ見やがって!?キモいんだよ、死ねコラ!!・・・とこの顔傷のあるオジサンが言ってました。」

「え!?俺!!」

「こっちはイライラしてんだよ!!かかって来いよ・・・とも言っていました。」

「待て!!何で俺が!?」

二人の発言に大いに困惑する大和屋弟。

「上等だ!!やっちまえ!!」

すると、そんな一護と恋次の発言に業を煮やした観客が一斉に大和屋弟や一護達に向ってきた。

「よいしょ!!!」

一護は襲ってきた観客の一人を足蹴りで返り討ちにする。

一方の大和屋弟は為す術も無く観客たちに踏みつけられる。

「あいてて!!!ちょっと待っ・・・はっ!!(しめた!!この混乱に乗じて、仕留めれば・・・!)」

好機と感じた大和屋弟は、タオルの裏に隠していたナイフを取り出し戦闘で周りが見えなくなっている恋次と一護を仕留め様とした・・・その時。

大和屋弟は何者かに肩をつかまれ、掴まれたと同時にスクリーン目掛けて飛ばされてしまった。

「あ・・・」

大和屋弟の異変に気付いた一護達がスクリーンを見たとき、奥の方から強面の表情で現れた金太郎が注意を促してきた。

「みなさん・・・・・・」

一護達が恐る恐る振り返ってみると、金太郎はその鍛え上げられた筋肉を露にしながら黒いオーラを発しつつ人差し指を口元に当てた。

「映画は静かに見ましょう・・・」

そして、映画の上映が終わるまで一護達は大人しく顔を押さえながら映画を鑑賞していた。

「泣けるね・・・この映画・・・!!」

映画風呂から上がり、完全にノックダウンしてしまった大和屋弟を担ぎながら一緒に来ていた大和屋兄は二人に対する怒りを更に増幅させる。

「お・・・おのれ・・・!!黒崎一護とあの赤髪め!!次こそは必ず仕留める!弟の仇だ!!」

恋次の方はと言うと、一護との下らぬ言い争いから疲れを癒すどころか返って疲れを溜めてしまう結果となり、男湯の中をふらついた足取りで歩いていた。

「(何〜で温泉に来てるのに逆に疲れが溜まる一方なんだよ。これも全て一護の野郎と行くとこ行くとこで出くわしちまうせいか・・・?認めたくねぇが俺とあいつの思考はどこまでも似通ってるらしい。)」

そう思った恋次の目の前に飛び込んできたのはサウナ室。

「はぁ～～～こうなったらサウナで汗流してマッサージチェアで昼寝でもするか・・・」

しかし、恋次は今までのことから疑心暗鬼に陥ってしまった。

「（だが、騙されんぞ。俺が考えてるということは恐らく一護もそう考えている。つまり、逆を行って俺が今行きたくないところに行けばいい・・・と、奴は考えていそうなので俺は更にその逆をついてストレートにサウナに行けばいいと思います。む！あれ？作文！？とか奴は考えているので・・・）」

そう考え抜いた末、恋次は次のような結論に達する。

「俺はその逆の逆だ！！！」

が、しかし予想は恋次のそれを呆気なく覆すこととなった。

恋次は横でタオルを被りながら座る不機嫌そうな一護に腹を立てつつ一護となるべく目を合わせずにいた。

すると、そんな恋次に対して一護が正面を向きながら話を持ちだしてきた。

「れ～んじく～ん・・・いい加減にしてくれ・・・・・・俺はな、俺が行こうとするところはまたお前が来ているんじゃないかと思って、逆に行きたくないところに行こうと思ったけど、お前のために行きたくねぇところに行くのはやだったので自分に素直に生きます

！む！あれ？作文！？とか思って此処に来たらこの様かよ！！」

「ちくしょう！あれ？作文！？しかあってねぇじゃねぇか。お前の思考を深読みした俺がバカだった。」

「まぁいい・・・これだけ居合わせちまうのも何かの縁かもしれねぇ。取り合えず、出て行け。」

「何で俺がお前の指図を受けなきゃならねぇ。出て行くならお前が出て行け、一護。」

「おいおい、お前は小学生か？俺はこうして顔を突き合わせているとどうせまた喧嘩になるから、顔合わせねぇでいこうと至極大人の意見を言ったんだよ。」

「だから、てめぇが出て行けばいいだろう。」

「だ、から！！それを言うなよ！！俺が今出て行こうと思ったのに、お前に言われてから出て行ったらお前に従ったことになんだろうが！もう出れねえだろうが！！察しろ、ガキ！」

「うるせえ！てめぇもガキだろうが！！」

「言っとくけど、てめぇが出るまで俺は出ねぇぞ！」

「ふざけんな！俺も出ねぇぞ！」

二人は他の客の迷惑など全く顧みることなく口論を激化させていき、他の利用客は二人の口論が激しくなるに連れて徐々に一人一人と出て行き遂には一護と恋次の二人だけがサウナに残ることとなった。

だが、しかしこの時そんな一護達の前から最後に出て行ったその男、大和屋兄が不敵な笑みを浮かべながら二人同時に始末する方法を画策していたのであった。

大和屋兄は口論で周りの見えなくなっている二人を見ながらこう思った。

「（ふん。二人莫迦なところも似ているようだな。ここで意地を張り合っているがいい）」

部屋から出て行いくと、大和屋兄はサウナ室に鎖で鍵をかけ更には清掃中と書かれた札を立てかけて誰も入らないようにして二人を閉じ込めたのだ。

「（割って、干されて、干からびるまでな！！）」

閉じ込められているとも露知らず、一護と恋次は意地を張り合って互いに一歩も外へ出ようとしないまま座り続ける。

そんな全身を汗だくにする一護を見ながら恋次は挑発的な口調でこう言って来た。

「おい・・・いい加減にしておけよ・・・お前全身汗だくじゃねぇか・・・脱水症状でぶっ倒れるぞ。医者ならそれぐらい分かるだろ・・・ま、俺は大丈夫だけど。」

「そんな軟じゃねぇんだよ・・・！お前こそ笑顔が引きつってるぞ。水飲みてぇだろ？俺は大丈夫だけど・・・」

「いや、お前より俺のほうが大丈夫だ。」

「いや・・・お前の大丈夫より俺の大丈夫のほうがデカイ。」

「そんなことぬかしてるが、ホントはシンドイのは分かってんだ。てめぇの腹は読めてんだよ・・・」

「バカ言っちゃいかんよ!俺はサウナ大好きだからね!蒸すのが大好きでよ・・・この間もな、コンと織姫に蒸しパン作ってやったら引いてたぜ。あれ凝りすぎたな、ありゃ・・・何ならもっと、室温上げるか?俺はもっと熱いのが好きなんだ・・・」

そう言うと、一護はサウナの中にあった尺でバケツの中の水を一杯汲み取ると、原始的な方法で温度を上げている焼け石にかけた。

その光景を外でずっと見ていた大和屋兄は驚愕した。

「(えええ!!!!更に室温を上昇させやがった!!??)」

すると、そんな一護の行動を見ていた恋次がなんと大胆にもバケツの中の水全部を焼け石にかけて室温を最高潮にまで上昇させる。

「足りねぇよ・・・バケツの中の全部入れろ・・・!」

それを見ていた大和屋兄は驚愕を通り越して、理解できぬ状態であった。

「(あ、あいつら馬鹿!?お前ら閉じ込められてんだよ!?こ、こっから出られねぇんだよ!!)」

一護は最高潮に達した室温に耐えながら全身から汗を噴出しながら肘を立てて横になり、恋次はそれに負けじと床で一人腕立て伏せを始める。

「あ・・・ああ・・・ご・・・極楽だね・・・!!あ、エピネフリンが物凄く分泌されてさ・・・はははははは・・・・!!!!!」

そんな光景を外で見守る大和屋兄はやせ我慢をし続ける二人に哀れみさえも感じていた。

「（あ・・・いや、ホント・・・極楽行っちゃうかな・・・ここ・・・ホント・・・パラダイス・・・・）」

「無理すんなよ!そろそろ意識朦朧としてんじゃねーの!ユー、降参しちゃいなよユー!言っとくけど、俺はしないよ。いや、ホント・・・・・・」

そう言って一護が話しかけているのは木の桶であり、恋次では無かった。

それを見た大和屋兄は思わず心の中で突っ込みを入れる。

「（お、おほーい!!!!!誰と喋ってんの!?誰と喋ってんの!?）」

また、その横で尺の持ち手を口にくわえて嘗め回すという可笑しな行動を取る恋次。

「へへ・・・そろそろ限界のようだな・・・あれ?全然、このレロレロキャンディー・・・味しねぇぞ・・・?」

「（いや、それレロレロキャンディーじゃないから！レロレロキャンディーじゃないよ！）」

すると、業を煮やした限界に達しようとしている一護が恋次に話しかけてきた。

「おめぇよ・・・ホント本気（マジ）いい加減にしてくんない！？」

「何、ナンなのオマエは！？こんなところで死ぬつもりか・・・こんな、くだらん意地の張り合いで！？」

「お前みたいな奴でもな、死んだら悲しむ奴がいっぱい居るの！それでも降参しないなんて、それはエゴだよっ・・・バカヤロウだよお前は！悪いことは言わねぇ降参しろって。頼むから・・コーヒー牛乳奢ってやるから！」

「コーヒー牛乳で誰が動くか！！」

そんな片意地を張り続ける二人を見ていた大和屋兄は一人こんな事を思っていた。

「（・・・なんて・・・莫迦な奴らなんだ・・・！？でも、何でだ・・・こんな莫迦な奴等なのに、こんなに胸が・・・！！仁義の下に命を懸ける俺達極道。こんな下らないことに命を懸けられるこいつらにそこに違いなんて・・・！！）」

と、その時中の一護に変化が訪れた。

「おい・・・・・・」

「あ・・・？」

一護は恋次にそう言うと、息を上がらせながら苦い顔を浮かべ自分の敗北を宣言する。

「へへ・・・全く・・・大した野郎だよてめぇは・・・参ったよ・・・どうやらこの勝負・・・俺の負けらしい・・・」

そう口にした瞬間、一護は限界に達してその場に倒れこんだ。

「おい、一護！」

恋次はすぐに倒れた一護のもとに駆け寄った。

そして、意識を朦朧とさせる一護の言葉をその場で聞いた。

「す・・・すまねぇが・・・織姫とユーノ達に伝えてくれ・・・・・・“あばよ”って」

そう言うと、一護は徐に目を瞑り永遠の眠りにつこうとした・・・その時だった。

恋次がそんな一護の体を引きずりながら肩で生きをしつつも部屋の外へと運ぼうとするのであった。

「・・・てめぇ・・・俺は面倒は御免なんだよ・・・そいつは自分で伝えるんだな・・・」

そんな熱い二人に心打たれたのか、大和屋兄は二人を殺すことが出

来なくなった。

「（出来ぬ・・・俺にあんな熱い奴らを殺すことなど・・・出来ん！！！）」

大和屋兄は直ぐに鍵を外して、部屋の扉を開けて二人にこう叫んだ。

「おーい！！！お前ら早く出て来い・・・えええ！？」

と、大和屋兄が目の前を見た瞬間だった。

今まで倒れていたはずの一護が突然起き上がり、隙を見せた恋次に向って飛び蹴りを仕掛けてきたのだ。

「な～んて、甘めえんだよてめぇは！！！」

が、一護の行動を予め読んでいた恋次は一護の蹴りをかわす。

一護もそれには大いに驚いた。

「あ！？」

そして、恋次はそのまま一護の肩を捕まえたまま全速力でサウナ室を出て行ったのだった。

「へへ！！てめぇの腹は読めるって言っただろうが！！！！」

「「ぐあああああ！！！！」」

そう・・・・・目の前に大和屋兄がいる事など全く気付かずに。

勢い余って床にぶつかった一護と恋次は体を起すと、どちらが先に出たかでまた口論となる。

「「いたたたたた・・・・!!!」」

「ち!引き分けか。」

「いいや!!おめぇの方が絶対先に出て行った!」

「いいや!!おめぇの方が・・・!!」

すると、そんな口論をしていた二人に水を差してきたのはエリオ達他の男性陣であった。

「あの・・・一護さん・・・恋次さん・・・」

「「あ?」」

「その人、誰ですか?」

エリオはそう言うと、目の前で鼻字を出しながら大事なところが丸見えとなっている哀れな姿の大和屋兄を指差す。

一護と恋次もそのことに初めて気付いたらしく、風呂から出るまでの間、大和屋兄が何者であるかが全く分からない様子であった。

「あれ?」

「誰だコイツ?」

番外編・その2　サービスカットも必要だよね？　（後書き）

教えて、ユーノ先生！

ユ「今日は、浦原さんについてだよ♪」

ユ「僕の鬼道と技術分野の師匠である浦原さんは、普段は飄々とした性格の昼行灯だけど・・・実際は元十二番隊の隊長で技術開発局の初代局長を務めた天才的な頭脳の持ち主なんだよ。」

ユ「藍染との決戦では夜一さんと共に一護さんたちに協力してくれたんだ♪」

浦「いや～～～！！嬉しいっすね！アタシもスクライアさんのコーナーに出られるなんて夢に思ってもいなかったっすから♪」

ユ「これから二人で、もっともっとこのコーナーを盛り上げていきましょう！浦原さん♪」

浦「これを気に、アタシの出番も増やしてもらいましょうか！」

ユ「いいですね！クロノとフェイトの出番をカットして♪」

ク・フェ「それはダメ！！！」

フェ「私となのはのイチャイチャシーンが無くなって、これ以上出番減らされるのはヤダだよ！（フェイト号泣）」

魔導師図鑑ハイパー！

女湯のなのは・フェイト・ヴィヴィオの仲良し三人組みはと言うと・・・

ヴィ「それ！！！なのはママのお胸いただき！！」

な「きゃは！！もう、ヴィヴィオったらやったな♪じゃあ、私はフェイトちゃんのを！」

フェ「な、なのは！！く、くすぐったいよ・・・！！」

楽しく親子で胸の揉み合いをしていると、ヴィヴィオの目に映ってきたのは・・・

ヴィ「あ・・・」

な「どうしたの？」

ヴィ「あの人・・・凄い大きいお胸だよ・・・ホラ！」

ヴィヴィオに言われて二人が見てみると、目の前を歩いていたのはオーリー。

フェ「本当だ・・・私よりもあるかも・・・」

な「はやてちゃんがいたら、きっと涎垂らして狙ってただろうね。」

だが、なのはの言葉通りはやては影でヤラしい視線をオーリーに向けながらその気を狙っていた。

は「ひへへへへへへへへ・・・・！！！」

番外編・その3　御神真刀小太刀二刀術対御庭番式小太刀二刀流（前書き）

御神真刀流とるろ剣の蒼紫の技を対決させてみました・・・

でも、御神真刀流の技って全然分からない。

だから、そこは自分なりのイメージで都合よく解釈しました。

では、どうぞ。

番外編・その3　御神真刀小太刀二刀術対御庭番式小太刀二刀流

＞i13917－709＜

男湯での一悶着があった後、茶渡は全身から汗を噴出しながらサウナから出てくると真っ直ぐ脱衣所のほうへと向った。

「ふう。少し飲み物でも買ってくるか・・・」

一方で、白鴎と田吾作と一緒に風呂を渡り歩いていた銀太郎はと言うと。

「さて、次は何所へ行こうか？」

「露天は最後の締めだからな！やっぱり！」

「サウナとか行ってみるか？」

「う～ん・・・そうだね・・・」

と、銀太郎が次の場所を決めかねていたときだった。

偶然にも、脱衣所に向っていた茶渡が銀太郎達を発見した。

「む?銀太郎か?」

「あ、茶渡さん!」

「あ。」

銀太郎は茶渡のもとへ近付いていき、その場で立ち話を始めた。

「茶渡さん、紹介しますね。こちら、うちの大食漢の白鴎恭一郎です。」

「あ・・・えっと・・・白鴎恭一郎です。よろしくお願いします・・・」

意外にも初対面の白鴎と茶渡。

柄にも無く畏まった態度で茶渡に挨拶を交わす白鴎。

「む。茶渡泰虎だ。よろしく頼む。」

「はい。」

「田吾作も久しぶりだな。」

「はい。茶渡さんも何方かとお風呂ですか?」

「ああ。中学時代からの友人と一緒にな。」

「そうなんですか。何だか、偶然とは言え運命的なものを感じますね！」

「ふん。そうだな・・・」

「茶渡さん。この後何か予定とかありますか？良かったら、晩御飯ご一緒にとか？」

「そうだな。俺の知り合いの医者と一緒に外に食べに行こうと思っているところだ。もし、良かったら一緒に来るか？」

「ああ・・・残念です。うちはもう用意してしまったものでして・・・」

「鍋の中でおでんが待ってるんだ！」

「おでんか・・・暑い日でもいいものだな。」

「はい！新陳代謝が活性化します！！」

「それじゃ、また今度ですね。近いうちにまた是非。」

「ああ。俺はいつでもいいぞ。都合のいい日に呼んでくれたら。」

「銀太郎の料理、超美味いっすよ！！」

「あ、白鴎。あんまり僕にプレッシャーかけないでよ！」

「ははははは！！！は、はくしょん！！」

そう言うと、湯冷めした田吾作が豪快なくしゃみをその場でした。

それを間近で見た茶渡は銀太郎達にこう言ってきた。

「ああ、悪い。こんな所で立ち話なんてしてしまって。銀太郎も悪かったな。」

「僕のほうは御気になさらず。あ、茶渡さんのほうもお友達と一緒に来てるなら、あんまり引き止めてもダメですね。帰ったらメールしますね。」

「ああ。俺の方の友人も、今度ちゃんと紹介する。」

「はい。楽しみにしてます。」

そう言うと、銀太郎達一向は茶渡に挨拶を済ませると別の風呂へと移動を開始した。

「また会いましょう、茶渡さん。」

「失礼します！」

「それじゃあ、どうも！」

「気をつけて帰るんだぞ。」

銀太郎達と別れを告げた後、すぐに入れ替わるかのようにユーノが

近付いてきた。

「茶渡さん！！」

「ユーノか。」

「誰か知り合いですか？」

「ああ。前に話してた銀太郎だ。」

「ああ、何だ！もう少し早く言ってくれれば挨拶できたんですけど。」

「ふん。でも、こんなところで挨拶もなんだから、また近いうちにな。」

「そうですね♪」

「ところで、ユーノ。お前の背中の呪印はどうしたんだ？」

「あはは・・・ちゃんとカモフラージュで誤魔化してますよ。あんなもの、恋次さん達には見せられませんからね。さて、そろそろ上がりましょうか？なのは達ももうじき出る頃だと思いますし。」

「そうだな。一護達を呼んでくるか？」

「はい♪」

二人はそう言うと、一護達を探すために二人揃って広い風呂の中を再び歩き回ることとなった。

また、茶渡が口にした“呪印（じゅいん）”と呼ばれるものの詳細は定かではないが、これこそがユーノの卍解の秘密における重要な鍵の一つであることは一護、織姫、コン、石田、茶渡の五人しか知らないのだ。

一護達を見つけたユーノ達は、風呂から上がると手際よく服に着替えるとロビーに集まりそこでなのは達女性陣を待ちながら自販機で購入したコーヒー牛乳に舌鼓。

恋次は一気にコーヒー牛乳を飲み干し、声を漏らす。

「ぷっは！！！やっぱこれだな！！」

「お風呂上りに飲む牛乳。格別ですね。」

「すっかり、余暇を堪能できたね。」

「全くですね♪それにしても、なのは達遅いな・・・」

「着替えに手間取ってんじゃねぇか？」

「それにしちゃ遅すぎるだろうが・・・」

全員が予定よりも着替えに手間取っているなのは達に些か呆れていると、思わぬ事態が待ち受けていた。

「きゃあああああああああ！！！！！！！！！！」

「「「！？」」」

ユーノ達の耳元に飛び込んできたのは、普段なら絶対に叫び声など上げることのないキャロの悲鳴であった。

「この声！！！」

「キャロ！！！！！みなさん！！」

キャロの悲鳴を聞いて危機感を感じたエリオと一護は一目散に女湯のほうへと走り出し、人目を憚らずに中へと入って行った。

「織姫！！！どうした！！！！！」

その光景を見ていた石田やユーノは止める暇も無かった。

そして、案の定エリオではなく一護には女性陣による報復が待っていた。

「きゃあああ！！！！！痴漢よ！！！！！！」

「ぐあああああああああ！！！！！」

一護の悲鳴がユーノ達の耳元に克明に反響され、一護は全身を傷だらけにしながら豪快に女湯の中から出てきた。

「っててて・・・何するんだよ！！！」

一護がそう文句を言うと、拳に力を入れたルキアが怒りを露にしながら言い返す。

「戯け！女湯に入ってきたのだから、当然の報いだ。」

「あ、ごめんねあなた！怪我大丈夫？」

織姫は一語に近付き謝罪の言葉を掛ける一方で、我を忘れて女湯に入ってしまったことに羞恥心を感じるエリオは全身茹蛸のように赤く染まっていた。

そんなエリオにキャロが怪訝そうに尋ねる。

「エリオ君も・・・大丈夫？顔真っ赤だよ。」

「いや・・・その・・・これは・・・！！」

そんなエリオの行為を見ていた浦太郎が羨ましがっていた。

「ああ！！いいな、エリオ！！」

「羨んでどうする！」

「何があったんだい、なのは？」

事情を聞きだそうと、ユーノがなのはに尋ねたところなのはかなり狼狽した様子でユーノ達にこう言って来た。

「それが大変なの！！！みんなの下着が無くなってるの！！」

「「「「「「「「「「下着がなくなってる！？」」」」」」」」」」

あまりの突然のことに男達は大いに驚愕し、同時に深い怒りを覚えた。

「もう最悪よ！！！あれ、この前かったばかりのお気に入りの一つだったのに！！！」

「私も・・・その・・・気にいってた奴なんだけどね・・・」

激怒するアリサに対して、恥ずかしそうに声を漏らすフェイト。

「おまけに、私達と一緒にヴィヴィオのまで盗まれてるの！」

「ヴィヴィオのまで！？一体誰がそんな淫らなことを！！」

と、ユーノが怒りを露にしながらそう口にした時だった。

全員の視線が何故か一様にユーノのほうへと向けられ、白い目で見られた。

そのことに、ユーノは全く以って理解できない様子であった。

「な、何でみんなして僕を睨むの！？やってないからね僕は！！コラ！ティアナ達までそんな目で僕を見るな！」

すると、そんなユーノに更に追い討ちをかける様に石田と恋次が痛い一言をかける。

「・・・女湯に気付かれずに侵入して、彼女達の下着を盗めるものなんて・・・」

「フェレットに変身できるお前ぐらいなもんだろ？」

それを聞いた瞬間、なのはは笑顔を向けてはいるが激しい殺気に満ちた様子で手に力を込めてユーノの肩を握り締めこう告げた。

「ユーノ君・・・白状すればブラスターなしのスターライトで許して上げる♪だから、お願い・・・みんなの下着返して、ね♪」

その様子を見ていた一護がかなりの恐怖を抱いたそうだ。

「（顔が笑ってない。声に殺気が籠もってる。）」

昔のユーノならば、もしなのはにそのように責められたのならば為す術も無く弱腰のままなのはの報復を受けていたのは間違いないだろう。

だが、しかし今のユーノはそんななのはでも到底予想もしていなかった非情な側面をこの後見せ付けてしまうのである。

ユーノはなのはの言葉を聞くと、静かに怒りを募らせその怒りを一気に爆発させた。

「だ・か・ら・・・・・・僕じゃないって言ってるのが分からないのか、てめぇは！！！！！！！！！！！」

「ふぇ！？」

「ゆ、ユーノ！？」

突然のユーノの性格の豹変振りにたじろぐなのは達。

そして、ユーノはなのはに対して徹底的な言葉の報復を行うのであ

った。

「大体さっきから聞いてみればなんだてめぇは!?人を何の根拠も無く淫獣フェレットもどきの汚名で下着泥棒扱いしやがって!!!!子供の頃のお前はもっと純然たる魔法少女だっただろうが!!!!それは今はどうだ!?ただの横暴な白き魔王じゃないか!!!!その上恋人である僕を疑うか!!!!ああ!!!!もうやってられんねえ!!!!僕は決めたぞ!!!もうなのはの恋人も親友も辞めてやるよ!!!!絶交してるよ、この砲撃魔王!」

「ガーンン!!!!!!!!!!」

なのはは恋人であり一番の理解者出るユーノに突きつけられた非情な言葉に心が砕かれてしまい、そのまま魂が抜け落ちたかのように床に沈みこみ気を失ってしまった。

「な、なのは!?」

「なのはさん!!」

「大変!なのは・・・目が完全に逝っちゃてる!」

「ショックが大きすぎたんだよ。」

白目を向いて気を失うなのはを抱きかかえるフェイト達であったが、アリサは余りに酷い言い方をしたユーノを諌めるために一人文句をつける。

「ちょっと、ユーノ!あんた恋人に向ってそれは言い過ぎ・・・」

と、アリサが最後まで言おうとしたその時・・・ユーノは徐に振り返ると血管を浮き上がらせながら殺意の籠もった表情を見せつけた。

「ああ？やんのか、コラ！！！！」

それを見たアリサや他のメンバーも恐怖のあまり、反駁することが出来なくなってしまった。

「・・・あ・・・言え・・・何でもありません・・・！！」

「一護。一体どういうことだ！？ユーノ殿の性格がまるで変わってるではないか？」

不審に思ったルキアが小さい声で一護に尋ねると、一護は次のように語った。

「あいつは感情が昂ぶると、二重人格の側面が顕著に現れるんだよ。どうやらその性格は俺や恋次と同じで粗暴なものらしい。」

すると、そんなユーノのことが心配になってきたヴィヴィオが解決法を聞き出す。

「あの！どうしたら、ユーノパパは元に戻るんですか！？」

「取り合えず、このまま機嫌が直るまで放っておくしかないな。それよりも先ずは下着泥棒の犯人探しだ。被害者は、お前らだけか？」

「うん。他の人たちの下着は誰一人取られてないよ。本当に私達だけみたいなの。」

「すると、犯人は恐らく僕らの正体を知っているものである可能性が高いな。しかも、なのはちゃん達のことも調べられているとすれば・・・」

「犯人もまた俺達と同じ霊力を持つものか魔導師ってことか？」

茶渡がそう口にすると、石田も首を縦に振る。

「それにしたって、陰湿極まりないぜ全く！」

「見つけ次第、レバンティンの錆にしてくれる！」

「んで！そのあとは顔中ぼっこぼっこにしてアンパンマンみたいに腫れ上がらせてやる！」

シグナムやヴィータは下着泥棒に強い殺意を抱くと、それぞれの武器を取り出し目を光らせた。

「兎に角、手分けして怪しい人物を探し出すとしよう。」

「ほんなら、早速捜査開始や！まだそう遠くには行っておらへんよ。」

そう言うと、一護達は数人のグループに分かれて下着泥棒の捜索を開始し始めた。

その間に、なのははまるで死人のように動かないままであったが、アリサとフェイトが何とか体を引きずりながら連れ出していった。

「ほら！なのはも行くわよ！！」

「なのは。しっかりして・・・！」

「・・・砲撃・・・魔王・・・私は・・・砲撃・・・魔王・・・」

うわ言のように同じ言葉を連呼するなのは。

ユーノの非情な言葉が余程のショックになったらしい。

全員が施設内の至る所を隈なく捜索しているその頃、当の下着泥棒である男・・・一護と恋次に辱められたあの大和屋兄は見つからないように不敵な笑みを浮かべていた。

「ふふふ・・・上手くいったな。これで黒崎一護を誘き出すいい餌となった。さぁ、早く来い黒崎一護！！今度こそ、この大和屋(やまとや)竜(ぎょう)がお前の首を討ち取る！！！」

と、竜がそう口に出したその時だった。

自分の背後に待ち望んでいたばかりの人物とその弟子が拳を鳴らして現れたのだ。

「そうかよ・・・そいつは是非やってもらいたいものだな・・・」

冷や汗を流しながら竜が恐る恐る振り返ってみると、そこに立っていたのは殺気を籠もらせた一護とユーノの二人であった。

これには思わず竜も仰天してしまう。

「げっ！！！」

「俺を誘き出すために織姫たちの下着を盗むとは、どうやら見も心も腐ったヤロウなようだな・・・そうだろ、ユーノ？」

「そうですね・・・何のために一護さんを誘き出そうとしたのかは知らないが、僕の大事なのはの汚れなき下着まで盗むなんて・・・死んでも許すわけにはいかねぇ・・・！！！」

そう言うと、二人は徐に尭へと近付いていく。

「ひ・・・ひ・・・」

あまりの恐怖に腰が抜けてしまった尭。

その間に、二人は殺気をむき出しにしながら一歩一歩歩み寄ってくる。

「ひやあああああああああああああ！！！！！！！」

尭は二人の攻撃を何とかかわしてその場から全速力で逃げ出していった。

「なっ！逃げやがった！！」

「追いかけましょう！！」

二人は逃げた尭を追いかけるために同じように全速力で走り出した。

それを見かけた恋次は二人に尋ねる。

「おい！一護、ユーノ！どうした！？」

「犯人見つけた！！捕まえるの手伝ってくれ！！」

それを聞いた先程まで沈んでいたなのはは一気に立ち直ると、全員を引き連れてユーノ達の後を追いかけるように声を掛けた。

「みんな、行くよ！」

「「「「「はい！」」」」」

なのは達はユーノ達の後に続く形で下着を盗んだ尭を追いかけていった。

走りながら、アリサやユーノは尭に向って下着を返すように強く要求する。

「コラ、てめえ！！私の買ったばかりの下着返せ！！！！」

「待て！！！なのはの下着返せ！！！！」

「てめぇ！！！よくも俺に恥をかかせてくれたな！！！！ただじゃおかねぇ！！！」

「し、しつこい奴等だ・・・って！！！」

「「「「「

予想していた数を遥かに上回る数で自分を追いかけてくることに、尭は驚きを隠せずに居た。

「ここで逃がしたらあかん！何が何でも捕まえるんや！！！」

「絶対に返してもらうんだから！！！あの下着、ユーノ君と何れのときのための勝負下着なのに！！！」

すると、そんななのはの思わぬ発言に全員がこけそうになったが、アリサがそんななのはのに拳骨をいれ厳しく諌める。

「痛い！！」

「なのは！！！そんなことは大きい声で言わないの！！！ユーノに聞こえたら洒落にならないでしょ！！」

しかし、当のユーノの耳にもそのことは一言一句しっかりと聞こえており顔中が真っ赤に染め上がっていた。

「（・・・！！もうばっちり聞こえてるんだけど・・・！！）」

こうして、数十分にも及ぶ逃走劇であったが、尭は人気の無い敷地に迷い込むと完全に逃げ場を失ってしまった。

「な！？しまった！！」

そして、追いついた一護達が尭の周囲を取り囲むと殺気を露にする。

「もう逃げられないぜ。さぁ、とっととそいつを返しな。痛い目に

遭いたくなければな・・・」

「くっ・・・!!お!?」

と、絶体絶命の尭の前に思わぬことが起こった。

「!」

一護達の背後から現れたのは柄の悪い武器を持った男達が二百人と、顎に十字傷のある灰色の髪をした長刀を携えた男であった。

突然の出来事に困惑する全員。

すると、長刀を持ったその男が尭に向ってこう言って来た。

「・・・・・よくやったな、尭。あとは私達に任せろ。」

「おじき!来てくれたんすね!!」

危険を感じたユーノ達は全員で一箇所に固まり防衛体制に入った。

「な、何なのこいつら!?」

「やべえ雰囲気だぜ・・・!」

「てめぇら、何もんだ?」

すると、長刀を持ったその男が代表して一護の質問に答えた。

「私達は無く子も黙る極道、大和屋一家。夕方、うちの舎弟が貴様

やそこの赤髪に随分世話になったらしくてな。」

そう言うと、大和屋一家の主であるその男は夕方一護達にやられた大怪我をした部下を見せ付けた。

それを見た一護達も苦笑しながら納得した様子であった。

「あ・・・そう言うことかよ・・・」

「ついてませんね。」

「それに、大和屋一家って言ったら・・・最近空座町のハズレに家を構えたばかりの極道崩れの集まりじゃねぇかよ。性質の悪い輩に絡まれたもんだ。」

「絡む切欠を作ったのは君だろ、黒崎。」

「う、ウルセーな！」

石田の言葉に思わず腹を立てる一護。

「どうする、なのは！？」

「何とかしようにも、数が多いし・・・こんな人前で魔法を使うわけにはいかないし・・・かと言って体術戦闘はスバルやギンガならともかく、私達は得意じゃない。」

「ここは一先ず、逃げることが最優先や。」

はやては賢明な処置を取ろうと、全員でその場から逃げようとした

が大和屋一家がそのようなことを許してくれるような輩ではない。

「おっと。逃がしはしないさ。」

大和屋一家の主は指を鳴らすと、部下達二百人でなのは達全員を逃げ場の内容に包囲した。

「「「「「「！」」」」」」

「か、囲まれた・・・！」

「これじゃあどうしようも・・・！」

「ヴィヴィオ！なのはママから絶対に離れないでね！」

「うん！」

なのははヴィヴィオの安全を確保するために、自分の後ろにヴィヴィオを隠した。

一護本人はと言うと、汚いやり方でなのは達を巻き込む大和屋一家に激しい憤りを覚える。

「くそ。関係ねぇこいつらまで巻き込むとは、とことん腐った野郎だな。仕方ねぇ・・・ここは責任を取って俺がお前らの相手を・・・・」

と、一護が一人前に出ようとしたとき。

「！？」

突然、ユーノがそんな一護の行動を手で止めてきた。

「ユーノ？」

「ユーノ君！？」

突然のユーノの行動に理解できずに居るなのは達。

すると、ユーノはそんな一護に向って次のように言って来た。

「一護さん。その役、僕に代わって貰えませんか？」

「何！？」

「どうもこいつらを見てると怒りが湧き上がる一方でしてね・・・それに形はどうあれ一護さんやなのは達を巻き込んだことが僕は絶対に許しがたい。しかも、今の僕は最高に機嫌が悪い・・・ここらで憂さ晴らしぐらいさせてもらわないと明日クロノが死ぬことになる。」

「しかし！この人数相手に一人では！？」

「安心してください、吉良さん。伊達に僕は一護さんの弟子じゃないんですよ。正しい喧嘩のいろはをこのバカどもに叩き込んでやりますよ。そんで、なのはの下着を取り返します！」

そう言うと、ユーノは一人大和屋一家の舎弟に向って歩き出した。

「ユーノ君！！待っ・・・！」

なのはが咄嗟にユーノを呼び止めようとすると、ユーノは振り返ってこう言って来た。

「大丈夫。なのはが手を出すまでも無いよ。」

「でも・・・」

「僕はヤクザ如きなんかに遅れはとらない。安心して・・・それと・・・さっきは酷いこと言って君を傷つけてしまって・・・御免ね。」

そんなユーノの言葉を聞いたなのはは思わず頬を赤くする。

「ユーノ君・・・・・・うんうん・・・私のほうこそ、疑ったりして・・・ごめんね。」

「なのは・・・」

「ユーノ君・・・」

二人は無意識のうちに手を取り合い人目を憚らずに見詰め合う。

すると、それを見ていた恋次が二人の行動を止めるために口を挟む。

「だ・か・ら!!!人前で見つめ合うんじゃねぇよ!!!殺すぞ!!!」

同じように、気に背中を預けながらその光景を見ていた大和屋一家の主も呆れいた。

「茶番なら他所でやってもらおう。やっちまえ、野郎ども。」

部下にそう指示を出すと、部下達は一斉に武器を構えてユーノのことを睨みつけながら不敵な笑みを浮かべる。

すると、そんな部下達を見たユーノは哀れむかのようにこう口にする。

「碌に喧嘩もまともに出来ない奴が、無闇に武器を持つとは・・・哀れなだね。」

「ほざけ、この女男が!!」

「そのツラ!!二度と見れないようにしてやる!!」

「俺からいくぜ!!」

そう言うと、巨体の男が懐からメリケンサックを取り出し利き手である右手に嵌める。

「メリケンサック!?」

「ユーノ!!」

この光景には流石に危ないと感じたフェイトや石田達が思わず声を上げる。

「黒崎一護をやる前に、まずはてめえから血祭りだ。」

自身に満ちた様子でその様に口にする巨体の男を前にして、ユーノは挑発的な口調でこう口にする。

「なんだ。まるで力士崩れじゃないか？そんな体にメリケン一つで、僕をどうにかできるのかい？」

「ほざけッ！おおおおおおおお！！！！！」

巨体の男は勢いよく突進していき、メリケンサックを嵌めた右手を大きく振り上げてユーノの顔面目掛けて拳を振り下ろし顔面に直撃させた。

それを見ていた恋次は思わず声を張り上げた。

「ユーノ！！」

すると、そんな恋次に対して真顔の一護が口を挟む。

「喚くな、恋次。あんなんでユーノがどうにかなるかよ。ほら・・・」

一護にそう言われて、全員がユーノを見てみると目に映ってきた光景に全員は言葉を失った。

何と、メリケンサックをつけた拳であるにもかかわらず、ユーノにはまるで効いておらず頬に打撲がある程度であった。

これには流石に攻撃を仕掛けた巨体の男も二百人の舎弟たちも驚いていた。

「なっ！」

巨体が言葉を失っていると、ユーノは不機嫌そうな表情を浮かべながらこう話しかけてきた。

「何だいこれは？メリケン使ってこんなもんかい。てんで話にならないね。」

「ば、莫迦な！？」

「あいつ！！顔面直撃しただろう！？」

なのは達を始め、シグナム達ヴォルケンリッターの面々や石田や茶渡といった一護以外のものは信じられずに居た。

そんな信じられないでいる全員に一護が自信満々にこう口にした。

「アホ。俺が四年の間であいつに何してきたと思ってんだよ？打たれ強さも、度胸も何もかも、俺の持ちうる全てを叩き込んで育て上げたのが・・・今のあいつなんだよ。」

そんな一護の言葉を聞きながら、なのは達が再びユーノに目を向けたときユーノは深い溜め息をつきながら足が竦んで動けずにいる巨体の男のデコに折った中指を構える。

「全力を出すまでも無いね。そんなことしたら弱いものイジメになっちゃう。君は指一本で充分だな。」

そして、その瞬間ユーノはデコピンを巨体の男にヒットさせてその一撃一つで男を後方へと吹き飛ばしてしまった。

「がっ！！？」

男を昏倒させると、ユーノは一護から伝授された正しい喧嘩の仕方と呼ばれるものをその男や全員に聞こえる声で口にする。

「正しい喧嘩の仕方その一『喧嘩はグーでやるべし』。ま、今はデコピンだけどね・・・」

傍らでユーノの一連の動作を見ていたフォワード陣は驚愕のあまり顔を引きつった。

「でこぴん一発・・・」

「うそでしょ・・・」

大和屋一家の舎弟達は、一家の中でも指折りの一人がデコピン一つで倒されたことに大いに驚くと同時にユーノの異常な戦闘能力の高さに恐怖すらも覚えた。

「ひわわわわ・・・」

「くそっ！」

業を煮やした鉄パイプを持った男がユーノに向かって行ったが、ユーノはその男の攻撃を軽く避けると一度その場にしゃがみ込む。

「正しい喧嘩の仕方そのニ・・・・・・・」

そして、一気に男の腹部目掛けて右ストレートを叩き込む。

「ぎぇ！！」

「『鉄パイツは厳禁。まして――――――』」

「この！！！！」

そう言いながら男を倒したユーノが刀を持った男のほうへ目を向けると、男の斬撃をかわしてエルボーを喰らわせた。

「ぐっ！！」

「『刃物を使うのは論外』」

こうしてあっという間に三人を打ち倒したユーノに、後退り気味となる大和屋の舎弟二百人。

「くそ！何だこいつは・・・！？滅茶苦茶強い！！」

そんな怖気ずいている舎弟に向って、ユーノは士気を高めるために挑発をする。

「まだまだ。合計三発・・・憂さ晴らしには到底及ばない・・・」

そう言いながら、右の人差し指でかかって来いと合図を出した。

それを見た舎弟全員は堪忍袋の緒が切れ、一斉に武器を持ってユーノに飛び掛っていった。

「・・・・・コノッ・・・ヤロウ！！」

「二百人相手に勝てると思ってるのかァッ！！」

その頃、温泉から上がった銀太郎達が外でコーヒー牛乳などを飲みながら一息をついていると、四人の耳元に山鳴りのような音が聞こえてきた。

「！」

四人が辺りを見渡し聞こえてくる方向に目を向ける。

「なんだなんだ。」

「何の声だ・・・？」

「山鳴り・・・じゃねぇな・・・？」

「ああ。山の方からではないな。ここからそう遠くは無いと思うが・・・一体何だこれは？」

「犬の遠吠えとかじゃないの？それとも他の――――――」

銀太郎がそんな思考を巡らせていると、また豪快な音が耳に入ってくる。

もうお気付きだとは思うが、これはユーノが二百人の舎弟をたった一人で相手をし、一方的にユーノが殴りつけている音である。

「はあああああああ！！！！」

「ぐあああ！！」

「ごあああ！！！」

幼い頃のユーノとは全く違い、まるで喧嘩番長のように次々にヤクザ者の男達をその拳だけでノックダウンさせていくユーノ。

たとえ、複数が後ろからの奇襲をかけたとしてもユーノはそれを察知して両手で何も見ずに相手を気絶させていく。

そうして、気がついた時には二百人いた舎弟が残り一人を残して全滅してしまったではないか。

これには流石のなのは達も目を疑った。

そして、同時にユーノの通常時における戦闘能力の高さに言葉を失った。

「つ・・・強い！」

少なからず、男として魔導師として尊敬の念を抱くエリオはこれ程のまでの実力を有したユーノには驚き返るが、そんなエリオに一護が口を挟む。

「当たり前だろ。勝つために鍛え上げられた超絶的に洗練された身体と反射神経は俺と同等かそれ以上だ。下手な集団戦法が通じないのは自明の理だ。」

「だから、最初のチーム戦のときに・・・私達の連係プレーが全く意味を持たなかったのね。」

「恐るべし・・・」

ティアナとギンガは最初のチーム戦で、自分達が何故ユーノに一方的に負けてしまったことに納得のいかない部分が残っていたが、一護の発言で漸く合点がいった。

「くっ」

動揺する残った一人の男。

そして、ユーノは最後の仕込み杖を持ったその男に対して低い声と鋭い目線でこう話しかけてきた。

「まだそんなものでどうにかする気か？もうこれ以上戦ったところで意味など無い。憂さも晴れたところだし、止めて下着を返せばそれでお終い。さもなくば・・・――」

「ふざけるな！そんなみっともない真似できるかぁ！！」

すると、その男は左手を鍔元ギリギリのところの持ち手に添えて握りしめる。

それを見ていた石田は危惧の念を抱いた。

「！あの構えは・・・」

「石田君？」

男は奇声を発しながら全速力でユーノに向っていく。

「キィッエエエエエエエエエエエッ！！！！！！」

それを見た石田が確信した様子でこう口にする。

「やはりだ！前に図書館で読んだ本の中に書いてあった、薩摩の最強剣“二ノ太刀不要（にのたちいらず）”の示現流！」

「ユーノ君！！避けて！！」

石田の話を聞いて危険だと感じたなのはがユーノに直ぐに避けることを警告するが、隣に立っていた一護はそんななのはとは裏腹に避ける必要は無いと断言する。

「避ける必要はねぇよ。確かに示現流は石田の言ってる通りの比類なき豪剣。だが・・・」

「チェスゥトオツ！！！！」

男が渾身の一撃をユーノに振り下ろす瞬間、一護は確信した口調でこう言い放つ。

「『翡翠の魔導死神ユーノ・スクライア』の前では全くの無意味だ。」

一護がその言葉をくしにした瞬間、ユーノは何とその渾身の一撃を右手の親指と人差し指で器用に受け止めそのまま白刃取りをやってのけたのである。

「！！」

この光景を見た男とシグナムや恋次は大いに目を疑っただろう。

「お、親指と人差し指だけで・・・刀の切っ先を止めただと！！」

「白刃取りを・・・あんな離れ技でやってのけやがった！？」

切っ先を二本の指で受け止めたユーノは冷淡な表情を浮かべながら男に向ってこう口にする。

「その程度の一太刀、僕には効果(きか)ないよ。だって、僕の師匠はその数百倍もの威力の太刀筋を僕にぶつけてきたんだからね。」

そう口にした瞬間、ユーノは指に力を入れると刀の切っ先を真っ二つにした。

「喝！！」

これこそ、相手の武器を制しつつ同時に武器破壊に繋げる白刃取りの究極系・・・『刃断(はだち)』である。

「な！！！」

それを間近で見ていた男は仰天し、頭がついてこれなくなった。

「大人しく降参すればいいものを。」

ユーノは止めの一撃の拳を一気に男の顎へと食らわせ、最後の一人を容易に昏倒させ二百人抜きを達成したのであった。

「ぐっは！！！」

「正しい喧嘩の仕方その三。『喧嘩は理不尽な暴力で勿れ。故にやり過ぎは厳禁。』」

最後の一人もやり過ぎない程度に倒したユーノは、木の幹に腰を預けながら戦いの行方を拝見していた大和屋一家の主の方を睨みつけ、言葉を投げかける。

「さて、残すは・・・君一人だけだけど、その顔つきを見るからに相当腕に自信があるようだね。」

ユーノにそう言われると、大和屋一家の主である大和屋雲鶴（やまとやうんかく）が徐にユーノの前に現れ不敵な笑みを浮かべる。

「ふふ・・・部下ニ百人を僅か五分で陥落させるとは、たいした男よ。これは久々に熱くなれそうだ。漸くこの私が直々に戦えるときが来たんだよ。先程の戦いで主の力は見させてもらった。残念ながら、ここで主は負けて私が勝つ。」

そう言うと、雲鶴は左手に携えていた長刀から二本の小太刀を取り出しユーノに向けて次のようなことを口にした。

「私の振るう・・・この、“御神真刀流小太刀二刀術（みかみしんとうりゅうこだちにとうじゅつ）”の手にかかってな。」

その流派の名前を聞いた瞬間、なのはやフェイト達は驚愕した。

「！御神真刀流小太刀二刀術って・・・まさか・・・！！」

「お父さんやお兄ちゃんが使う・・・あれのこと！？」

「まさか、そんな！？」

御神真刀流小太刀二刀術――――――

御神流とも呼ばれるそれはなのはの父親、高町士郎や息子である恭也が収める永全不動八門（えいぜんふどうはちもん）の内の一派。

それははるか昔に存在した、とされる幻の流派で正確には流派というよりも、ある人物が身につけた技術や知識を１つに纏めたもの。

その人物は己の全てを後世に遺そうとしたが、あまりにかけ離れた才能ゆえ、その全てを受け継げる者はいなかった。

そのため、その技術や知識を８つに大別し、それぞれを才能ある人物たちに受け継がせた。

それらが後の世における永全不動八門の原型となっている。

正しくは『永全不動八門一派・御神真刀流、小太刀二刀術』と称され、現在は小太刀二刀を主に扱うが、元は太刀を主体とする流派だった。

戦国時代に様々な経緯があり、もう一つの流派である不破裏天流の流れを色濃く残しており、斬撃を主体とするものが現在の御神流となっている。

そんな御神流の流派を受け継ぐ男が、ユーノの目の前に現れその技量を発揮しようとしている。

一護は一抹の不安を抱えながら、ユーノに警戒を促す。

「厄介な相手だな。ユーノ、気をつけろよ！」

「分かってますよ、一護さん。」

ユーノは一護の言葉を聞くと、雲鶴の持つ二本の小太刀を見ながら独り言のように言葉を発する。

「成程・・・士郎さんや恭也さんと同じ御神真刀流小太刀二刀術の使い手か。確かに、小太刀二刀流は実に厄介だ。小太刀と言う刀そのものが防御を可能とした小回りの利くもの。その上御神真刀流小太刀二刀術という暗殺に徹した最強の古武術が相手。倒すのは容易ではないか。ならば・・・」

そう言うと、ユーノはある行動を取ったがその行動を見たなのは達は度肝を抜いた。

「ん！？」

「え！？」

「何！？」

ユーノは咄嗟に大和屋一家の舎弟が使っていた小太刀程度の長さの鉄パイプを二本拾い上げると、雲鶴の小太刀二刀流に倣ってこう口にした。

「僕もそれに対抗して、小太刀ではないがこの鉄パイプで代用してみせるさ。僕の使う“御庭番式小太刀二刀流（おにわばんしきこだちにとうりゅう）”を。」

「お、御庭番式小太刀二刀流・・・？」

「何だよそりゃ・・・？」

「前にドラさんから教えてもらった理論を僕が形にしたものだよ。僕は出来るなら不要の闘争は避けたいんだけど、素直に聞いてくれる性分でもなさそうか。」

「聞くまでも無かろう。勝負はきっちり着けてもらう。その鉄パイプ二本で何が出来るかは知らぬがな。」

「確かに、急ごしらえの鉄パイプでは小太刀に対抗できるとは到底思わないさ。だが、僕は武器を選ばない。あり合わせの道具でも、御庭番式小太刀二刀流は使用可能だ。」

「成程。噂に聞いていたが、伊達に翡翠の魔導死神と言われる手練れであるという訳だ。」

「！あの人、ユーノ君のことを！？」

なのははユーノの正体を知るこの雲鶴の言葉に大いに驚いた。

そして、そんな二人が向かい合い静かなときが流れる。

夏の半ばに差し込んできたその日の風は決闘と言うものにはおあつらえ向きのもので、二人の男が今正に世紀の勝負を始めようとすることの前触れとも取れた。

そんな無言のまま向き合うユーノと雲鶴の様子を見ながら、織姫は一護に尋ねる。

「あなた。この戦い、本当に助太刀しなくていいの？」

「そいつはあいつにとっての侮辱だぜ、織姫。それに、小太刀の特性を考えれば・・・容易に俺達だって介入できねぇさ。刀よりも短い分、攻撃力に劣るが軽量で小回りが利く分防御力が高い・・・“盾として使える刀”。それが小太刀の特性・・・」

「確かに、あれを相手に攻めに回るのはかなり不利か・・・」

「ユーノパパ・・・」

ユーノの身を案じるヴィヴィオや他の面々。

そして、暫くの沈黙の後雲鶴が最初に動き出すのであった。

「いくぞ。急ごしらえの鉄パイプなど、私の小太刀で斬り崩してやる。」

「（来る。）」

そして、雲鶴が動き始めたかと思いきや、その速度はまるで死神の瞬歩、滅却師の飛簾脚、フェイトのソニックムーブに匹敵するほどのものであった。

これを見ていたスバル達やスクライア商店の面々は驚愕した。

「なっ！！」

「速い！」

これぞ、御神真刀流の使い手が得意とする神速である。

ユーノはそんな神速の動きをしっかりと捕らえようと鉄パイプをしっかりと握りしめる。

「先ずは小手調べだ。御神真刀流小太刀二刀術――――――」

そう言うと、雲鶴は神速を活かした巧みな動きで敵を切り刻む暗殺術本来の理にならった剣術をユーノに仕掛ける。

「“真刀剣舞（まとうけんぶ）”」

ユーノはそれを素早く回避しながら、対策を講じる。

「（士郎さんの十八番を使ってきたか。これを回避し続けるのは至難の業だな。）」

すると、ユーノは咄嗟に上空に舞い上がると片方の鉄パイプを雲鶴の頭上から振り下ろす。

しかし、その動きを読んだ雲鶴は素早く右手の小太刀で防御に徹する。

「上だ！！」

と、その瞬間ユーノはもう片方の鉄パイプを瞬時に着地を待たずに仕掛けてくる。

「！？」

それに気付いた雲鶴は素早く左手の小太刀を使って何とか攻撃を凌ぎきる。

「初撃の後に間髪いれずにもう一つのほうで攻撃してきたか。中々の判断だが、それぐらいでは俺の小太刀二刀は破れる代物ではない。」

「・・・・・・」

無言のまま鋭い目線をし続けるユーノに、雲鶴は一度距離をとると高速の乱舞による小太刀二刀術を発動させユーノに牙を向けた。

「はっ！御神真刀流小太刀二刀術、“御神絶空（みかみぜっくう）”」

ユーノはその乱舞攻撃をどうにか鉄パイプで防いではいるが、ところどころの切り傷が目立ち始めた。

これにはヴィヴィオも思わず声を上げる。

「ユーノパパ！」

隙を見ては雲鶴に攻撃を仕掛けるユーノだが、敵も小太刀の使い手である以上容易にはこれを崩すことは出来ないのも事実。

「何度打ち込んでも無駄だ。防御に徹した時の私の小太刀はライフルの弾丸とて防ぎきる。所詮主の鉄パイプでは私の小太刀二刀流には歯が立たん」

すると、そんな雲鶴の言葉を聞いたユーノが次のようなことを口にする。

「そうでもないさ。」

「？」

ユーノは攻撃を受け流すと、大きく後ろに下がると理論を具現化したドラより伝授された御庭番式小太刀二刀流の力の一端を発動させる。

「御庭番式小太刀二刀流――――陰陽撥止（おんみょうはっし）！」

ユーノが発動したのは、本来ならば1本目の小太刀の柄頭を2本目の小太刀の切っ先で突いて押し飛ばす飛刀術、『陰陽撥止』である。

「！（鉄パイプを飛ばした飛刀術！）」

飛んでくる鉄パイプを小太刀の一振りで薙ぎ払う雲鶴であったが、その瞬間雲鶴の目の前に思わぬ光景が飛び込んできた。

何と、一本目の後ろに隠れていたもう一本の鉄パイプであった。

「！（一本目に隠れて全く同じ軌道の二本目だと――――！！？）」

この技の利点は、2本目の小太刀が1本目の後に隠れる為、相手の隙を誘い易いことにある。

雲鶴は紙一重でその二本目を回避することが出来たが、それが命取りとなる。

「く！！！」

「隙だらけだよ。」

ユーノはその一瞬の隙を突いて、雲鶴の正面に入り込んできた。

「しまっ・・・！」

そして、雲鶴の顔面の右ストレートで豪快に殴りつけ吹き飛ばした。

戦況をこれ程までに容易く覆したユーノの姿を見て、鬼太郎やフォワードメンバー、白鳥などは言葉を失った。

「（・・・つ・・・強え・・・・・・・！）」

「（相手が刀で、ユーノ先生自身は鉄パイプであるにも関わらずこれだけの力量の差！）」

「（無茶苦茶にも程があるぞよ・・・！）」

ユーノの拳をまともに受け、唇から血を流す雲鶴は徐に起き上がり血を拭う。

「くっ・・・油断したか。」

そして、小太刀を拾い上げてユーノの顔を見ると、一人ほくそ笑みこんな事を口にしてきた。

「感服するぞ。私の小太刀二刀流相手に本当にその鉄パイプだけで対抗するとは・・・“天才”とはよく言ったものだな。」

「そんなもん関係ないよ。天才なら、僕の周りには五万といるさ。そこで不安そうな顔を浮かべるなのは然り、僕の師匠である君らが逆恨みをする一護さん然り。僕は自分のことを断じて“天才”だと思っていない。」

「あくまでも卑屈な態度で応答するか・・・勿体無いな。残念だよ・・・全く！」

そう言うと、雲鶴は体を地面のほうへと沈める。

「沈みやがった！？」

「何をする気だ！？」

「御神真刀流小太刀二刀術――――――」

全員が警戒する中、雲鶴はその状態から高速回転へと移行し竜巻のような勢いでユーノに斬りかかって行った。

「“戦乱ニ刀閃（せんらんにとうせん）”！！」

思わぬ攻撃の仕方に顔を強張らせるユーノ。

そして、その瞬間ユーノの懐に雲鶴の小太刀二刀が襲い掛かってくる。

「はっ！」

紙一重のところで鉄パイプを盾に急所を逃れたユーノであったが、勢いの余り後方へ吹き飛ばされてしまう。

「くっ！」

「ユーノ先生！」

「ユーノ君！！」

その後も、雲鶴は怒涛の連続攻撃に移る。

「御神真刀流小太刀二刀術――――鋏刀剣戟（きょうとうけんげき）！」

雲鶴は神速を最大限に発揮させ、ユーノの頸動脈を狙って二本の小太刀を交差させて斬りかかって来た。

それを見た一護がユーノに声をかける。

「来るぞ、ユーノ！！」

すると、ユーノ自身もそれに対抗して雲鶴の技と同様の二刀術を繰り出す。

「くっ！御庭番式小太刀二刀流――――呉鉤十字（ごこうじゅうじ）！」

小太刀を十字に交差させ、鋏の様に斬りつけるこの技は雲鶴同様、主に相手の頸動脈を狙う。

なお、呉鉤とは本来中国刀の一種の名称である。

両者の技がほぼ同時にぶつかり合い、威力は互いに殺され二人は後ろに距離をとった。

「互角か！？」

「分からぬ。」

二人の戦いを見ていたなのは達は、まるで自分の身に起こっているかのような緊張感で二人の姿を見続けていた。

一方で、攻撃を仕損じた雲鶴は些か顔を歪めながらユーノの方を向く。

「御庭番式小太刀二刀流・・・今ので主の頸動脈は切断したと思っていたが、成程それは御神真刀流小太刀二刀術の使い手でも感服するほどの剣術のようだ。益々惜しい奴よ。」

「何がだい？」

「それだけの秀でた才能と力が有りながら、何故凡百の駄菓子屋の主に納まり、その上彼女たちの翼を守り続ける？男なら、世界を相手にひと暴れもふた暴れもしたいとは思わないのか？最強の名を欲しいとは思わないのか？」

「・・・・・・」

すると、そんな無言のままのユーノに向って雲鶴はこんな提案をしてきた。

「私と手を組まないか、ユーノ・スクライア。この大和屋雲鶴（やまとやうんかく）と手を組み、極道界に旋風を巻き上がらせた後・・・今のこの腐った世の中に喝を入れてやろうじゃないか。そして、主の魔法とやらの力

を持ってすれば全ての世界を相手に我らの存在を知らしめることが出来る。闇の者がいつまでも闇の中で埋もれるのは実に勿体無い。外の世界で、私と一緒に光を浴びてみようぞ！」

その言葉に誰もが危惧の念を抱いたが、当のユーノ本人はとういと次のような言葉で返事をしてきたのであった。

「生憎だけど、凡百の駄菓子屋の店長って言うのも存外いいものだよ。」

「何？」

「それに、僕は今パトリオットって言う奴らを追ってて色々と忙しいんだ。君ら極道の事情なんか知ったことじゃない。闇の者が闇の中に埋もれるは勿体無い？僕は敢えてこの中を選んだんだ。なのは達は僕らにとっての光だ。だけど、なのは達未来の優秀な若者を邪魔する外道な連中裏の世界には少なからず存在する。ならば僕に出来ることはせめて、なのは達が表で飛んでる間に裏でそう言った外道な輩を退治すること。」

そして、ユーノは決意のこもった瞳で雲鶴にこう告げたのであった。

「それが、『翡翠の魔導死神ユーノ・スクライア』が見出した解（こたえ）だ。」

「ユーノ君・・・」

「ユーノ・・・そんなことを・・・」

なのは達は自分達でも理解できぬほどの思考を持つユーノの覚悟の

籠もった言葉に、思わず神妙な顔つきになる。

そして、ユーノの言葉を聞いた雲鶴もまた然りであった。

「・・・そうか。やはり主の思考は至極読めぬ・・・だが、誠のことながら実に惜しい。ならば私のこの小太刀で、無理矢理にでも“はい”と言わせてくれるは!!」

そう言うと、雲鶴は神速を使ってユーノの懐に飛び込んでいった。

「残念だけど死んでも“はい”と返事もしないし、首肯もしない。御庭番式の小太刀二刀流の真髄で終わらせてやる。」

すると、ユーノもまた雲鶴の神速に対抗して鉄パイプを振り上げ攻撃を仕掛ける。

「動いた!」

だが、その時なのは達はユーノの動きに違和感を覚えた。

「あれ?」

雲鶴の神速とは違い、ユーノの動きがこれまで以上に遅いのだ。

「何だ・・・!?あの動きは・・・・!?」

雲鶴もユーノのこの動きには疑問を抱いた。

「(遅い!?)」

雲鶴はユーノの攻撃を小太刀で防ぐが、ここでユーノの異常なまでの動きの遅さに頭を悩ませるばかり。

「（一体、なんだこの動きの遅さは・・・）」

と、ユーノの動きを目で捕らえていたその時だった。

「！！」

雲鶴を始め、なのは達全員も目の前の光景に大いに驚いた。

「！！（これは・・・まさか・・・！？）」

雲鶴は目の前でユーノが自分の正面に現れては消え、背後に回ったかと思えば消えるという不可解な現象の正体を知っていたが、なのは達はこのユーノの特殊な動きに目で追うことが出来ず困惑していた。

「何あれ・・・目がちかちかする・・・！？」

「私も。動きが定まらないからまるでユーノ君の動きが読めない。」

「おい、シグナム！何なんだよありゃ！？」

「分からぬ。剣一筋で生きてきた私でも、あのような動きは初めて見る上・・・動きが捕らえられぬ。」

すると、その時吉良がそんな驚愕するなのは達に向って次のような単語を漏らした。

「“流水の動き”」

「吉良・・・！？」

「古い文献で見たことがある。緩急自在の動きで相手の視覚を惑わす体技だ。僕らが彼の動きをはっきりとと捕らえられないのは、普段静動のはっきり分かれる戦いや訓練に慣れているからだ。」

剣舞とも言われるこの動きは、東北地方の新仏供養の念仏踊を指し、鎮魂の方式と考えられる。土地によっては鬼剣舞、念仏剣舞、雛剣舞といい、盆や秋祭りに出て家々を巡り、祖先の供養に、また悪魔払いに踊る。

しかし、今回ユーノが発動させているのはそれら“儀式剣舞”と違い、御庭番式小太刀二刀流の技とあらゆる体術を組み合わせて昇華させた“実戦剣舞”と呼ばれるもので、そうした剣舞は吉良が先刻口にした流水の動きとも言われている。

それを知っていた雲鶴は敢えて攻撃はせずに、慎重にユーノの動きを読んでいた。

「くっ！こやつ・・・まさか広く剣術界に流布されてきたこの幻の体技を使えるとは・・・侮れぬ奴よ。だが、この動きの特性を知らぬ私だと思ったか。流水の動きは攻撃に転じる一瞬の『動』の動きこそが、この技の最大の隙。」

「はっ！そうか！！」

「まずいぞ！」

雲鶴の言う通り、流水の動きの最大の弱点は攻撃の際に「動」の動きが出てしまうのが唯一の隙で、高速戦闘になれたものならばその一瞬を捕らえて攻撃を防ぐことが出来る。

雲鶴はユーノの動きをよく捕らえ、一瞬の『動』の動きである攻撃が発動すると同時に左手に持つ小太刀でユーノの鉄パイプを防御する。

「そこだあ！！！」

ユーノの鉄パイプが見事なまでに雲鶴に防がれたかと思いきや、ユーノは右手に持つ鉄パイプを徐に振り上げる。

「え？」

そのユーノの行動に不信感を抱いた雲鶴であったが、その瞬間ユーノは掛け声と共に驚きの行動を取った。

「はっ！！！」

何と、左手に持つ鉄パイプに右手の鉄パイプを直角に叩きつけてきたのだ。

「御庭番式小太刀二刀流――陰陽交叉（おんみょうこうさ）！！」

すると、叩きつけられたその衝撃によって雲鶴の左手の小太刀の刀身が見事なまでに二つに折れ、刀身が地面へと落ちた。

これを見ていたなのは達はこれこそがユーノの目的である事が漸く理解できた。

「武器破壊！」

「やるな。これで戦況はユーノに有利になった！」

「あいつ、そこまで考えていたのか！」

「流石だな。まさか鉄パイプであのようなことをやってのけるとは・・・夢に思っていなかったがな・・・」

ユーノの高い実力と機転に改めて感慨無量するなのは達と、自分の小太刀が鉄パイプで折られてしまったことに驚きを隠しきれずに居る雲鶴。

「私の小太刀を折った・・・だと・・・!?主め・・・最初からこれが・・・!?」

と、雲鶴がユーノの方に目を向けたその時だった。

ユーノは両手の鉄パイプの持ち方を逆手に変更し、構えを取っていた。

「！（鉄パイプを逆手に持った！！）」

「終わりにしよう。」

ユーノの不可解な行動に一護やなのは達一同は終始唖然とする。

「何をするつもりだ、あいつは！?」

一方の雲鶴自身はユーノがこれから発動しようとする技の輪郭を自ずから察知していた。

「（まずい。これは小太刀二刀流の使い手でも使用できるものは極めて僅かと言われる究極奥義・・・回天剣――――――）」

雲鶴はユーノの攻撃に備えて残った右手の小太刀を防御に徹して構えを取ったが、その時雲鶴はユーノの動きに自分の知るものの動きではないことに気付く。

「！！（違う・・・これは・・・！！）」

「御庭番式小太刀二刀流奥義――――――」

その瞬間、ユーノは目にも止まらぬ動きで超高速の六連撃を雲鶴に浴びせる。

「『回天剣舞・六連』！」

超高速の六連撃が見事なまでに決まると、雲鶴はもう片方の小太刀を手から離して胸に強打を負うとそのまま意識を失いその場に沈み込んだ。

「くっは！（そ・・・そんな・・・私の・・・御神真刀流小太刀二刀術が・・・こんな鉄パイプ二本で・・・敗れる・・・なんて・・・）」

フォワードやなのは達はこの技を目の当たりにした瞬間、言葉すらも失った。

そして、雲鶴を倒したユーノは神妙な表情で最後にこんな事を口にした。

「士郎さんは御神真刀流小太刀二刀術が如何に危険な剣術かよく知っている。これ以上こんな危険な剣術を使わせる訳にはいかないよ。それに、最強の称号が欲しくはないかと戦いの間際に言っていたけど・・・そんなもの、何の価値も無い。僕にはうざったいだけだ。今の僕には、助けを待つ人と帰りを待つ人の方が何万倍も大事なんだ。」

その言葉を聞いたなのは達は、思わず顔を綻ばせた。

「ユーノ君・・・！！」

ユーノは気絶する尭の懐から下着がぎっしり詰められた袋を取り出すと、それを左腕に抱えこう言った。

「下着はちゃんと返してもらうよ♪」

そして、ユーノは服の汚れを手で払いながらなのは達の方へと近付きなのはに向って柔らかい表情でこう口にする。

「ただいま・・・なのは。」

すると、それを聞いたなのはも満面の笑みを浮かべて返事をする。

「・・・うん！おかえりなさい、ユーノ君♪」

その後、無事に下着を取り戻した女性陣は安堵の声を漏らした。

やがて、帰宅時間になったたはやては一護達に今日一日のお礼を済ませる。

「それじゃ、今日は本当にありがとうございました。明日からまた頑張って捜査の方に精を出しますね。」

「ああ。お前らも色々と大変だろうけど、困ったときは何時までも助けになるぜ。」

「「「「「はい！ありがとうございます！」」」」」

「それじゃ、各自解散と！」

ユーノも金太郎達と共に自分の店に戻ろうとしたとき、不意になのがが声をかけてきた。

「ユーノ君。」

「？何だい。」

「・・・ちょっと、二人でお散歩しようか。」

「・・・うん。分かった。」

二人は夜の河川敷を歩きながら、こんな会話をしていた。

「ヴィヴィオは？」

「フェイトちゃんに任せてきた。先に帰って休んでてって言って来たから。」

「そっか。」

「ねぇ・・・ユーノ君・・・」

「ん？」

「さっきの言葉のことだけど・・・やっぱり、変えるつもりは無いの？」

なのはの言葉に一瞬声を積もらせるユーノだが、直ぐに返事をする。

「・・・悪いけど、これっぱかしは変更できないな。たとえ恋人に強く何と言われようとね。」

すると、なのはは意外な一言を口にする。

「そっか。じゃあ、私もそれ以上余計な横槍は入れない。」

「珍しいね。案外素直に引き下がるなんて。」

「だって、ユーノ君の頑固一徹は私がいくら言ったって直らないでしょ。それに、ユーノ君が決めたことに私がどうこう言うほうが間違ってるもん。だから、これだけは約束だよ。もう・・・絶対に一人で何所にも行かないって。ヴィヴィオや私達と一緒に傍でいるって！！」

そう言うなのはの目には薄っすらと涙が浮かび上がっていた。

「なのは・・・うん。約束する。」

ユーノもそんななのはの涙を軽く手で拭いながら、そう口にする。

「絶対・・・絶対約束だよ！」

「うん！絶対約束する！破ったらスターライトでも何でも受けてたつよ♪」

「もう！ユーノ君ってば！」

冗談交じりのそんなユーノの言葉に思わず顔を赤くするなのはであったが、ユーノはそんななのはを見て急に笑い声を込み上げる。

「ははははは！！！」

ユーノが笑い出すと、なのはも自然と笑い声が込み上げてきて一緒に笑った。

「ははははははは！！！！」

そして、二人は暫く笑い声を込み上げた後・・互いに頬を赤く染め上げ徐に顔を近づけ・・・唇を交わしたのであった。

そして、温泉を堪能した銀太郎達は談笑をしながら帰路へと向かっていた。

「はぁ～～～風呂は楽しかったし、暖まったけど・・・腹は減った・・・」

「はは。家で瀬間子と熱々のおでんが待ってるよ。」

「ああ！」

「締めようのうどんもあるし・・・御飯だって炊いてるからね。」

「ようし！！全部喰うぞ！！」

「おいおい、白鴎・・・」

「意地汚いのは考え物だぞ。パトリオットとして・・・」

「うるせーよ！」

「へへ。はぁ・・・それにしても、今夜はみんなと一緒で本当に楽しいな。」

「あ・・・」

銀太郎のその言葉に、思わず声を詰まらせるオーリー。

「晩御飯食べて、ちょっとのんびりして、偶に一緒に眠って・・・今の時代には珍しい実に家族らしい暮らしだよ。」

銀太郎がそう言うと、白鴎と田吾作も肯定の言葉を述べる。

「そうだな。」

「これからもずっと・・・このまま続いていく暮らしだ。」

「うん。」

この時、オーリー達は思った。

早く銀太郎を安心させて、このまま静かにずっと一緒に暮らそうと・・・

果たして、彼らの願いは叶うのであろうか・・・それとも・・・

一方、一護達五人が家に帰宅すると、奥の方からコンが涙を流しながら駆け寄ってきた。

「ね、姐～～～～～～～～さ～～～～～～ん！！！！！！！！！！」

すると、そんなコンをルキアは邪険な態度で顔を踏み倒した。

「ふっご！！！」

「よう。取り合えず元気そうだな。」

「元気そうだじゃねぇよ！！！一人だけ留守番させやがって！！！！！俺がどんだけ寂しい思いで帰りを待っていたと思ってやがる！！！！！！」

「あははは。ごめんね、コン君！一人でお留守番有難うね。」

織姫はそう言いながら、コンを優しく抱き寄せ頭を撫でてやる。

すると、コンの機嫌は自然とよくなり満面の笑みを浮かべた。

そんなコンの態度に呆れかえる四人。

「「「「本当に現金な奴だ・・・・・・」」」」

一護達が暫く居間で寛いでいると、ルキアがふとこんなことを持ち出してきた。

「しかし、今回の件で改めて実感した。」

「何がだよ?」

「ユーノ殿のことだ。あれは間違いなく才能の塊だ。あの常人を遥かに凌ぐ超人的な戦闘力もそうだが、決して曲げることの無い強い覚悟・・・私達はしかと見定めたぞ。」

「確かに、ありゃひょっとしたらなのはよりも頑丈だろうぜ。それに、戦闘能力的な面で言えば軽く朽木隊長とも比肩をとらないかもな。」

「本当に・・・彼は一体何者なんだ?」

すると、そんな吉良の言葉を聞いた一護が鼻で笑いながらこう返してきた。

「そんなもんどうでもいいだろう。」

「え?」

「何者かなんてもんは関係ねぇ。あいつは自分の魂に正直に従ってるだけだ。俺はあいつの、そう言う魂に真っ直ぐなユーノが守りたいもんを守る手伝いをし続けるだけだ。俺は少なくとも、あいつの

味方で有り続けたい。あいつの幸せを、俺は守ってやりたいんだ。」

そんな一護の言葉を聞いた恋次達も顔を綻ばせて、同じことを口にする。

「・・・ああ。そうだな・・・」

やがて、夜が吹け銀太郎がベッドで寝静まった深夜0時を過ぎた頃、居間に集まったオーリー達は甲冑に身を包むと田吾作からブラッドカートリッジを手渡される。

「はいよ、ブラッドカートリッジ。オーリーと白鴎、瀬間子に六発ずつ。」

「すまねぇ。」

三人は田吾作からそれを受け取ると、デバイスの中に組み込む。

「直ぐにまた作っておくから、遠慮なく使い切っちまってくれ。」

「ああ。」

「では田吾作・・・留守を頼む。」

「任せておけ。」

「みんな・・・気をつけろよ。」

「行ってくる。」

「夜明け前には戻る。」

三人は田吾作に銀太郎のことを任せると、銀太郎に気付かれないように静かに玄関のドアを開けて聖地捜索へと乗り出していった。

三人を見送った田吾作は、一人静かに銀太郎の自室へと向い、ベッドでぐっすりと眠る銀太郎を微笑ましく見ていた。

銀太郎は熱い所為か、タオルを蹴飛ばして寝ていた。

「ふん・・・銀太郎・・・風邪を引くぜ。」

田吾作はそっと近付き銀太郎にタオルをかけ直してやった。

そして、ふとこんなことを思った。

「（こんな幸福なときは・・・俺達の生涯でもう二度とないかもしれない。どんな宝物より尊い、銀太郎がくれた今のこの暮らし。だから守ってみせる。俺達にこんな暖かな幸せをくれたこいつを・・・どんな悲しい運命からも・・・きっと救い出してみせる。それが俺達の誓い・・・）」

そんな想いを抱きながら、熟睡する銀太郎に向って田吾作はこう言い残して部屋を後にしたのであった。

「・・・おやすみ・・・我がボス、ダイシーよ・・・」

番外編・その3　御神真刀小太刀二刀術対御庭番式小太刀二刀流（後書き）

教えて、ユーノ先生！

ユ「今日は、小太刀についてだ♪」

ユ「日本刀の一種で、６０センチ前後の刀の小太刀は一口で言えば刀と脇差の中間。脇差全般がそれに当たるという説、大脇差をそう呼ぶという説、また、大小二本を差すときは刀、脇差とそれぞれ呼び、一本のみを使用するときに小太刀と呼ぶなど、諸説は色々。」

ユ「小回りがよく利き、防御に徹することが特性として上げられ、更には二刀小太刀によって可能とする技も各種存在する。」

ユ「今回、僕が使った回天剣舞なんかはその極めの奥義だね♪これも、ドラさんの理論提供があってのことだけどね。」

ド「流石はユーノさん！オイラの理論を形にするなんて、やっぱ天才ですよ。」

ユ「でも、いいんですか？あんまり僕がチートなことになったら・・・小説のイメージ崩れませんかね？」

ド「初期設定の段階で既にチートなんですから、大丈夫ですって！」

恋「この猫・・・よく分かってるじゃねぇか・・・」

魔導師図鑑ハイパー！

帰り道、なのははユーノにこんな事を尋ねていた。

な「そう言えば、ユーノ君は一護さんのこと随分尊敬してるんだね。」

ユ「それは勿論♪一護さんと出会わなかったら、今の僕は誕生しなかったもん♪」

な「具体的に、一護さんにはどんなこと教わったの？」

ユ「そうだね・・・基本的に戦闘のことに関しては碌に教えてくれなかったかな？」

な「え！？そうなの・・・！？」

ユ「だって一護さんの場合・・・・・・終日（ひもすがら）戦い続けの修行だったから教えてもらった経験がほとんどないんだよ。ま、お陰でスタミナと度胸は嫌でもついたけどね♪」

その話をもとに、なのはは修行の内容を想像してみた。

一〈月牙天衝！！！〉

ユ〈ひあああああああ！！！！〉

鳥肌が一瞬走り、改めてこう思った。

な「（よかった・・・私ユーノ君が先生で・・・）」

番外篇

登場人物紹介

大和屋一家

空座町の郊外に屋敷を構える新興の極道一家。極道本来の理を順守しようとする姿勢の傍ら、邪魔となる存在を一方的な暴力で排除してきたならず者の集まり。最近では最も危険自分だと囁かれていた一護の排除を画策している模様。

大和屋雲鶴（やまとやうんかく）

声　一　安原義人

空座町の郊外に構える極道、大和屋一家を束ねる左顎に十字傷を持つ組長にして、御神真刀流の継承者。灰色の髪の毛に赤い瞳を宿し漆黒のコートを着用。全世界に大和屋一家の名を知らしめるという野望を抱く。特にユーノに個人的な恨みはないが、その師匠である一護が自分の配下の部下を八つ裂きにしたことからその仇討の為に部下２００名と共に近づき、ユーノと敵対する。年齢は四十代半ばだが外見はかなり若々しい。体格も小柄なので非力に見られがちだが、実際はユーノに匹敵するほどの凄まじい筋肉質の持ち主で剣の腕前も士郎顔負けのものとなっている。一護の代わりに舎弟と戦い全滅させたユーノに興味を抱き、交戦する。一旦は自分と組まないかと持ちかけるも拒否された。その後、片方の小太刀をユーノに折られその後の奥義「回転剣舞・六連」を浴びせられ敗北する。

御神真刀小太刀二刀術

御神流とも呼ばれるなのはの父、高町士郎や息子である恭也が収める永全不動八門（えいぜんふどうはちもん）の内の一派。正確には流派というよりも、ある人物が身につけた技術や知識を1つに纏めたもの。技術や知識を8つに大別し、それぞれを才能ある人物たちに受け継がせた。それらが後の世における永全不動八門の原型となっている。正しくは『永全不動八門一派・御神真刀流、小太刀二刀術』と称され、現在は小太刀二刀を主に扱うが、元は太刀を主体とする流派だった。戦国時代に様々な経緯があり、もう一つの流派である不破裏天流の流れを色濃く残しており、斬撃を主体とするものが現在の御神流となっている。雲鶴は士郎と同じかそれ以上にこれを日常的に扱い、不都合な存在を消していっていた。

武器

小太刀：『古獅子（こし）』／『景虎（かげとら）』

打刀と脇差の中間の長さの刀。刃渡りが短いために攻撃力の面では打刀に劣るが、軽く小回りが効くので、敵の攻撃を捌く盾としての機能は打刀以上。守りに徹すればライフルの弾も防ぐこともできるとのこと。普段は、1本の鞘の両端に2本の小太刀を仕込んで持ち運んでいる模様（鞘に収めると長刀に見える様になっている）。

技

神速（しんそく）

御神真刀小太刀二刀術を極めた者が使うことを許された高速移動技。目にも止まらぬ移動の速さからこの様に言われ、フェイトや死神が得意とするソニックムーブや瞬歩と肩を並べるほど。

真刀剣舞（まとうけんぶ）

神速を活かした巧みな動きで敵を切り刻む暗殺術本来の理にならった剣術。ユーノ曰く士郎の十八番とのこと。

御神絶空（みかみぜっくう）

小太刀による高速の乱舞で敵対象を斬りつける。

戦乱二刀閃（せんらんにとうせん）

地面に沈む形で体制を低くし、その状態から高速回転へと移行し竜巻のような勢いで斬りつける。回避が困難。

鋏刀剣戟（きょうとうけんげき）

神速を最大限に発揮させ、相手の背後を掌握してそのまま頚動脈を狙う形で二本の小太刀を交差させて斬りかかる。御庭番式の呉広十字と性質は同じ。

大和屋暁（やまとやぎょう）

声　一　檜山修之

大和屋一家に属する兄弟の長男。対抗勢力になり得るものを打倒するため密かに計画を建て、重要危険人物と認知した一護（ついでに恋次や金太郎）の命を狙うが、有無を言わさず一護と恋次の争いに巻き込まれ、ことごとく失敗する。そして、挙句の果てなのは達の下着を盗み出し逃走。のちにユーノの報復を受け昏倒する

大和屋次郎（やまとや　じろう）

声　一　保村真

大和屋暁の実の弟。兄と共に計画を立てて一護達を狙うも、何もしてないうちから恋次や金太郎からのとばっちりを受け、戦闘でのひと悶着によって撃沈する。

群雄衝突、そして・・・（前書き）

金「誰かと心がすれ違うたび、ぶつかり合うたび・・・・・・ずっと思っていた。言葉で、心で、気持ちで・・・思いの全てが伝われば良いと。」

一「けど、言葉より正しさより・・・強い願いを持つ奴がいる。」

な「必要なのは、言葉じゃなくて・・・強い心。」

フェ「嘘も迷いも何も無い、心を決めた真っ直ぐな瞳に私達は立ち向かう。」

ユ「ユーノ・スクライア外伝　パトリオット篇・・・・・・始まります。」

群雄衝突、そして・・・

＞ｉ１５２９６―７０９＜

石田から告げられた真実と、パトリオット達が潜んでいると思わしき空座町の聖地捜索に全力をとすこととなった機動六課。

パトリオットが潜伏していると思われる聖地で、彼らをどんな運命が待ち構えているのか？

さて、現在前線部隊が臨時本部としているユーノの母船、アクトンの艦内ではクロノが上官であり母親でもあるリンディとモニター通信をしていた。

『こっちのデータは以上よ。お役に立ってる？』

「ええ。有難うございます。助かります、リンディ提督。」

『ねぇ、今日はこっちに顔を出すんでしょう？』

「はい。パトリオットについての近況報告も兼ねて。」

『時間合わせて、偶には親子水入らず食事でもしましょうか？金太郎さんのことも聞きたいし。』

「金太郎さんの・・・？」

『いえね・・・ユーノ君から色々と聞いてはいるんだけどね・・・最近、何だかずっと思い詰めた顔をしていたから気になっちゃって。』

「しかし、何故母さんがそこまでして？」

『似てるの。あの人と・・・そう・・・昔のクライドさんと思い詰めた顔がそっくりでね・・・他人事には思えないよ。』

リンディが口に出したクライドとは、クロノの実の父親である。

２０年ほど前のことであるが、クロノの父であるクライドははやてが所有する夜天の書の諸悪の根源であった闇の書の封印と護送中に闇の書が暴走を起し、その結果状況を見た当時のギル・グレアム提督はアルカンシェルでクライドの乗る船ごと蒸発させたのだ。

それが切欠で、当時のクロノは闇の書と嫌な因縁を持つようになったのだ。

そんな過去を背負うクロノの目の前で母親から発せられる今は亡き父親の名前と、当時の面影が胸の奥に蘇ってくる。

そして、何所か神妙な表情を浮かべるリンディを見るとクロノも胸

が張り裂けそうになる。

「・・・母さん・・・」

さて、一晩明けたその日の午前6時。

松前市に店を構えるスクライア商店では、鬼太郎の叫び声が聞こえ喧騒な一日の始まりを告げる。

「でああああああああ!!!!!!!」

鬼太郎の部屋から聞こえてきた穿つような叫び声に、流石のユーノ達も何事かと思った。

「ん!?」

四人が駆け足で鬼太郎の部屋に行って見ると、目の前に映ってきたのは頭を掻き毟りながら自暴自棄になっている鬼太郎。

呆れた様子で白鳥は不機嫌そうな表情を浮かべ一喝する。

「何であるか騒々しいぞよ!」

「先輩、何があったのさ?」

「近所迷惑ですぞ。少し落ち着きなさい!!」

金太郎はそう言うと、いまだ我を忘れて混乱している鬼太郎の腹部に強烈な拳を入れる。

「ぐっほ！」

金太郎の咄嗟の判断のお陰か、鬼太郎は漸く意識を取り戻して溜め息を吐く。

「ツ――――――！おっと。ふう・・・よかった夢で・・・」

「夢如きでそこまで騒ぐとは・・・何と低俗な！」

「何だともう一遍言ってみろ！！」

白鳥の罵声に思わず怒りを露にする鬼太郎だが、直ぐに二人の間に入って宥める。

「まあまあ。話は聞いてあげるよ・・・何の夢だったの？」

「それがっすね・・・・・・・・・――――――」

ユーノに夢の内容を伝えようとした鬼太郎であったが、突然言葉が無くなり沈黙が走った。

不審に思う四人はお互いに顔を見合わせる。

「どうしたの、先輩？」

すると、浦太郎の言葉を聞いた瞬間鬼太郎は頭を押さえながら意外な一言を口にする。

「あれ・・・何だっけ？」

「「「「だあああ！！！！」」」」

あまりに素っ頓狂な発言に四人は思わず床に倒れこんだ。

そんなしょうもないやり取りから始まり、何所か独特の団欒風景を醸し出すスクライア商店メンバーであるが、今日はそんなスクライア商店に待ちわびたあるものが届けられることとなっていた。

居間の方ではユーノを除いた四人がその商品が掲載されたパンフレットを見ながら期待に胸躍らされていた。

「へぇ～～～～～最近の地デジ対応テレビって言うのは、ちっちゃいものなら案外手頃な価格で手に入るんだね。」

そう、今最も熱い家電商品・・・地上デジタル放送対応テレビのことである。

「ああ。この前、ベスト電気に行ったときは１０インチで五万弱だったぜ。」

「そうやって家電エコポイントを溜めて商品券を貰う魂胆なのだろう。しかも、国家予算も限られておるから来月でポイントそのものも大幅に下がる。だから挙って駆け込んでくるのだな。愚かな消費者よ・・・」

すると、そんな白鳥の上からの発言に思わず鬼太郎がツッコミを入れる。

「てめぇもウチの店の消費者だろうが！」

そんな談笑をしていると、金太郎が襖を開けて両腕に抱えられた大き目の箱を見せながら笑顔で話しかけてきた。

「みなさん！お待ちかねのテレビがやって来ましたぞ！！」

「「おお！！待ってたました！！」」

大興奮の鬼太郎と浦太郎や、新しいものに興味を覚える白鳥は金太郎に箱の中を開けるように促す。

「早く！箱を開けぬか！！」

「少々お待ちを！」

すると、そんな四人の騒ぎを耳にしたユーノが奥の方から出てきた。

「何の騒ぎだい・・・って。あ、今日だったのか発送日は。」

四人が騒ぎ立てている理由に納得した様子のユーノ。

「店長も見てくださいよ、これ！こんだけデカイくせにたったの八万で買えたんですよ！」

「ま、これも一重に俺の巧妙なマーケティングがあったこそだけどな！」

「普段はずぼらなくせに、こういう事になると頭が働く。」

「喧しい！」

そんな四人の大興奮ぶりにユーノも思わず鼻で笑う。

「ま、テレビ買うのはいいけどさ・・・ちゃんと使えるように設定しないと買った意味無いからね。それと、それはあくまで個人的な支出だと判断するとして、経費には入らないからそのつもりで。」

「「「了解です。」」」

と、再び奥の研究室に戻ろうとしたユーノだったが、ふと思い出したかのように金太郎にあるものを手渡す。

「あ、そうだ。金太郎、はいコレ！」

そう言ってユーノが金太郎に渡したのは、デバイスに装着できる特殊な装置二つであった。

「店長、これは？」

「試作品の対リベル式装着具の試作機。浦太郎の分もあるからそれつけておきなよ。一時間ぐらいならブラッド状態でも魔法が無効化されることはない。」

「承知しました。」

「これで、僕も思いきっり暴れられるって訳ですね♪」

「つうか、店長。奴等は空座町のどの辺に潜伏してるか分かったもんじゃないっすよ。」

「まぁね。だけど、一護さん達だっているし・・・浦原さんにだっ

て協力は仰いである。何とかなるだろう。」

「それに、あの白鴎ともきちんと話をしないともいけませぬしな。」

金太郎の一言を聞いた途端、全員は眉間に皺を寄せながら神妙な表情となる。

「・・・そうだな。俺も髭クソ野郎とちゃんと決着つけないと気が済まねぇ。」

「オーリーともね・・・」

「問題は彼らがその主と共に、聖地で何をしようとしているかだ。少なくとも、彼らの願いが悪い方向に向いていないことは金太郎や浦太郎の話から何となくだけど想像はついた。武力を介さず、和解で話し合えることが出来たら一番いいけど・・・先ずは何よりボスと直接遭って話をしない分には・・・・・・」

ユーノは一人そう言いながら襖の方に背中を預け、腕組みをする。

「彼らのボスがどんな者かも知らぬが、あのパトリオットを束ねるということは相当な器の持ち主なのであろう・・・・・・ん!?」

そう言いながら冷蔵庫のドアを開けた白鳥だったが、その時白鳥はある異変に気付いた。

見かねたユーノが何があったのかを尋ねる。

「どうしたんですか?」

すると、白鳥はそんなユーノや鬼太郎達に衝撃的な事実を口にする。

「冷蔵庫の電気が消え取るぞ。」

「「「「何！！」」」」

慌てた四人が冷蔵庫を見てみると、確かに電気が消え冷気が全く伝わってこないことに気付く。

ユーノが周辺を詳しく調べてみると、冷蔵庫の後ろに感電死した鼠が冷蔵庫のプラグを齧った形跡が見受けられた。

「だあああああああああ！！！！！！！プラグが鼠に齧られている！！！！」

「どうするの！！！僕のハーゲンダッツがみんな溶けちゃうじゃない！！」

「のあああああ！！！！俺の・・・俺のプリンが！！！！」

冷蔵庫の一大事に頭を抱える浦太郎と鬼太郎。

金太郎は困惑した表情を見せながらユーノにこう言って来た。

「これはまた・・・買い換えないといけませんな・・・」

それを聞くと、ユーノは思わず深い溜め息をつく。

「はぁ。余計な出費だ・・・・・・」

思わぬ事態に直面したユーノ達スクライア商店一同は、一度コピーロボット達に店番を任せると早速市内の家電量販店へと向った。

ちなみに、どの冷蔵庫を買うかで大いに揉めている四人を離れた場所で疲れた表情を浮かべながらユーノと、遅番のなのはやヴィヴィオが一緒に見ていた。

「やれやれ、テレビの次は冷蔵庫まで買い換えるなんて・・・何もドミノ倒しにように壊れる必要なんかないでしょう。」

「でも、家電製品って一つが壊れるとバタバタって壊れるものだって昔から言うし。」

「仕方ないって諦めなよ、ユーノパパ。」

「そうだね。でも、いいのかい二人とも。こんなことでつき合わせちゃって。なのはだって捜査があるはずだろ?」

「私は夜シフトだし、昼間は全然オッケイだよ。ちょうどヴィヴィオを連れて散歩にでも行こうと思ってたから。」

「うん!また家族三人一緒だね♪」

「はは。ありがとう、二人とも。」

中睦ましい光景の三人であったが、丁度その時鬼太郎が声をかけてきた。

「店長!これなんかいいじゃないっすか!?」

鬼太郎に呼び出されて選んだ冷蔵庫を開けてみるユーノやなのは達。
なのはとヴィヴィオはかなり真剣な様子で冷蔵庫を見たあと、自信満々に高い評価を口にする。

「確かに・・・この冷蔵庫いいよ！機能性も申し分なし。」

「よく入りそうだし、長持ちしそう！」

「如何でしょうか？」

「ああ・・・みんなが良いなら僕は全然構わないけど。」

「よし！これにしようぜ！！」

「これなら僕のハーゲンダッツ沢山入るよ！」

「俺のプリンもな！」

「先ずは精算をしてからぞよ。」

そう言うと、興奮を抑えきれないでいる鬼太郎と浦太郎、そして金太郎・白鳥の四人は店員と値引き交渉をするために一度レジのほうへと向った。

そんな四人の後姿を見ながら、ユーノは些か呆れたような表情を浮かべていた。

「やれやれ・・・冷蔵庫ぐらいであんなにはしゃいじゃって・・・子供みたいだな。」

「にゃはは。新しいものが来たら誰だって興奮しちゃよう。」

「でも、お金大丈夫なのユーノパパ？」

「心配ないよ、ヴィヴィオ♪ユーノ君、貯金いっぱい持ってるもん。」

「それ・・・遠回しに根暗な高給取りって言ってるようにも聞こえるんだけど・・・」

すると、なのはもその発言には思わず羞恥心を覚えたのか顔を赤面させながらユーノに誤解だと説明してきた。

「あ、別にそう意味じゃないから!!き、気にしないでいいよ!!!」

「ならいいけど・・・ん？」

と、ユーノはふと購入する冷蔵庫の扉に張られていたポップの言葉を見る。

「『忙しい奥様方にぴったり！』・・・・・・ウチの従業員に女なんていないでしょ。」

そんなことを思いつつ、値引き交渉を成功させた四人は冷蔵庫を購入。

一度自宅に戻ると、早速冷蔵庫の中のもの整理を始めようとする。

「さて、冷蔵庫が来る前にちゃっちゃか中のものだそうぜ。」

「なのははさっきはやてから連絡があって、ついさっきアクトンに行っちゃったからヴィヴィオ一人が手伝いに来てくれました♪」

「よろしくお願いします！」

ヴィヴィオは懇切丁寧に四人に挨拶をする。

それを見た金太郎と白鳥も顔を綻ばせる。

「色々とすみませんな。」

「助かるぞよ。」

ヴィヴィオは二人にそう言われた後、何気なくユーノの見せの中を見渡してみた。

そして、意を決したかのようにユーノに尋ねる。

「ところで、ユーノパパ。意外と質素なところに暮らしてたんだね・・・」

「ははははは♪何しろ、元々が放浪の一族だからね・・・あんまし飾ったりすると返って落ち着かないんだよ。質実剛健・・・これが一番さ。」

「成程！勉強になります！」

「それより、中のものは大丈夫かよ？肉とかも入ってるんだろう。」

「ああ！大丈夫だよ。ちゃんと保冷剤も入れて置いたらから♪」

浦太郎はそう言いながら、冷蔵庫の扉を開け中に入っていた保冷剤を鬼太郎に見せた。

「変なところマメだよな・・・亀って。」

ユーノ達は準備を済ませると、作業に取り掛かろうとしていた。

「ようし！早速中のものを整理していくぞ。いるものは全てダンボールに詰めて、いらないものはゴミ袋に入れる。いいね？」

「「「「「「はい！」」」」」」

「それじゃ、先ずは野菜室から行くぞ。」

ユーノはまず野菜室のものから順に出していくと、受け渡し方式でキャベツやピーマンをどんどん渡していく。

「はい、コレ！」

「承知！」

「ヴィヴィオ、入れてくれ。」

「はい！」

着々と中のものが外に出され、ダンボールの中に入れられていく中、浦太郎が鬼太郎に手渡したものは・・・――――。

「はい、先輩。」

「ああ・・・って!?」

鬼太郎が手渡されたものは、彼がこの世で最も忌み嫌うオレンジ色の食材・・・人参であった。

これには流石の鬼太郎も眉をひそめた。

「（人参かよ・・・）」

鬼太郎はしばらく人参と睨みを合いをしたあと、誰にも気付かれぬように袋に入ったその人参をこっそり用意されたゴミ袋の方へと入れようとした。

すると、それを目撃した金太郎が笑顔を振りまきながら鬼太郎に声をかけてくる。

「鬼太郎。」

「はい!!!」

「人参はダンボールですぞ。」

「はい!!金太郎さん!!!」

金太郎の恐ろしさをこれでもかと認識している鬼太郎はこの計画を断念し、大量の冷や汗をかきながら素直に従うことにした。

と、その時。

ユーノは野菜室の中から奇妙なものを発見した。

「あれ？」

「どうしたの？」

「何だろう、コレ？」

そう言ってユーノが手の上に乗せてきたのは、古い新聞紙にぐしゃぐしゃに巻かれたものであった。

「むむむ！？」

金太郎は危険かどうかを判断するため、徐に顔を近づけ匂いを嗅ぎ始める。

それを見たユーノは真顔でこう言って来た。

「おい・・・自分の手の上で嗅ぎなよ・・・」

「よく分からないので捨てたほうがいいですぞ。」

金太郎の言葉を聞くと、ユーノもそれが妥当だと判断しゴミ袋の中に投げ入れた。

「はいはい・・・」

作業を再開するユーノであったが、何故かその中身が気になったヴ

ィヴィオ、浦太郎、白鳥の三人は顔を見合わせてると作業を中断してゴミ袋に入っているそれを取り出した。

「中・・・気になるぞよ。」

「開けてみましょうか。」

「何が入ってるんだろうね。」

そう言うと、浦太郎が慎重にその新聞紙の中を開けていく。

そして、中のものを見た瞬間三人は背中に寒気が走り思わず悲鳴を上げた。

「「「・・・・・・だあああああああああ!!!!!!!!」」」

浦太郎は直ぐに中のものを新聞紙で覆い隠し、再びゴミ袋の中に入れた。

三人は冷や汗をかきながらいまだに先程の光景が信じられずにいた。

「な、何あれ!?」

「私が知る訳あるまい!」

「多分・・・次元世界のものじゃないですよあれ・・・!」

と、ヴィヴィオがそんな事を口にしたその時だった。

「なあ！？」

「ユーノパパ！？」

再びユーノの奇声が耳には言って来た。

「今度は何だ？」

そう言うユーノの手に握られていたのは透明な袋に入った紫色の液体と茄子のような形のものであった。

全員はそれを見ると、一度固まりぶら下がった謎の物体を凝視する。

「何かの漬物っすかね？」

「色から見ると茄子のようにも見えなくは無い・・・」

「いやいや。もっと最初は違う色をしていたのかもしれないですぞ。」

「「「「「ん～～～」」」」」

金太郎の発言に思わず深く考え込んでしまう四人だったが、浦太郎がふと思い出したかのようにこう言って来た。

「あ、早くしないと電気屋来ちゃいますよ！」

「そうだ！よし、次は冷凍庫！」

その後も、冷蔵庫の中を整理していくと奇妙なものが次々と現れそ

の都度大いに驚くユーノ達だったが、何とか全ての食材を整理することが出来た。

だが、ユーノは何故か呆れた表情を浮かべながら目の前の光景を見ていた。

「で、結局・・・いるものは全て・・・ダンボール一個で収まってしまい・・・あとは全～～～部ゴミ。こんなに無駄なものを冷やした覚えはないんだけどな、僕は。」

眼前に広がってきたのは、見事なまでに綺麗にダンボール一個に収まった食材と、それと対比するかのように大量に並べられたゴミ袋。

すると、浦太郎が恥ずかしそうに声を出してきた。

「あ、新しい冷蔵庫が来たらこうならないようにみんなで頑張ろう！！」

「お、おう！！」

鬼太郎もそれに便乗して声を出すが、見ていたユーノ達三人は白けた目で二人を見る。

そして、それに耐え切れなくなった二人は謝罪の言葉を口にする。

「「すみません・・・・・私達です・・・」」

「これどうするの？」

「名前書いて間違われないようにしないとな。」

ユーノは食材全てに名前を書き入れると、ヴィヴィオを連れてなのはの両親が経営する翠屋に赴き事情を説明し、承諾を得る。

「そんな訳でいいでしょうか？」

「いいわよ。それぐらいお安い御用よ。」

「ユーノ君は、もうウチの家族だからな。遠慮することは無いぞ。」

士郎も桃子も快くユーノの要求を受け入れてくれた。

ユーノはそんな何気ないことでも自分を許容し、家族と言ってくれる二人の優しさがこの上も無く嬉しかった。

「ありがとうございます、士郎さん。桃子さん。ヴィヴィオも今日は有難うね。」

そう言うと、ユーノは手伝ってくれた愛娘の頭を優しく撫でてやり、ヴィヴィオもそれにご満悦な様子であった。

「へへへ♪お役に立てて何よりです♪」

翠屋を後にしたユーノは、冷蔵庫が無事に届いているかなどと言うことを考えながらバイクを走らせていた。

「さて、冷蔵庫は届いたかな・・・・・・！？」

と、その時。

ユーノの持っていたセンサーが突然反応を示し、警報を鳴らしてきた。

同じように、スクライア商店全体でも警報ベルが鳴り響いていた。

「！！」

「これは・・・！！」

ユーノが急いで店に戻ってモニターを確認してみると、砂漠の無人世界で魔導生物と先頭を繰り広げるパトリオット、オーリーと瀬間子の映像が映ってきた。

五人はその映像を見ながら、アクトン艦内から通信を入れ来るはやたとリィンに状況説明を求める。

「状況はどうなってるの？」

『文化レベル０。人間はいない砂漠の世界のようですけど・・・』

モニターを見ながら、パトリオット達の行動に疑念を抱く鬼太郎。

「何をしてやがるんだあいつら！？」

「ブラッドカートリッジに必要な魔導生物を倒しに来たんだろうね。」

「結界を張れる局員の集合まで、最速で四十五分。ユーノくん、これは結構マズイ状況や。」

「既に現場にはなのはさんとフェイトさんが向っていますが、魔力を無効化するブラッドカートリッジを使われたら戦局は圧倒的に不利になります。」

「分かった。それなら、鬼太郎と浦太郎、それに僕もちょっと行ってくるよ。早速試作品の実働テストだ。」

「了解！」

「ワクワクしてきたな。」

『了解や。ほんなら、金太郎さんと白鳥さんはバックス。ここで待機しといてな。』

「了解しました。」

「ま、私が手を下すまでもないか。」

ユーノは愛刀である晩翠を手に持ち、準備を済ませた浦太郎と鬼太郎に向ってこう言って来た。

「ボスを見つける傍ら、あの二人の口をなんとしても割らせてあげよう。」

「「はい！」」

「行くよ、フィッシャーマン。」

〈ＯＫ〉

その頃、ユーノ達が現地に向っている間にオーリーと交戦をしていたフェイトが肩で息をしながらオーリーの歳不相応な戦闘能力の高さに正直驚かされていた。

「は、は、は、は。年の割りに何て戦闘センスなんだろう・・・下手に攻撃してもブラッドカートリッジで無効化されるがオチだし・・・どうすれば・・・」

「あくまで私達に楯突くと言うのなら、ここで沈んでもらう！」

〈Ｂｌｏｏｄ　ｃａｒｔｒｉｄｇｅ　ｌｏａｄ〉

オーリーはブラッドカートリッジを一発ロードすると、外見を角の生えた虎のようなものに豹変させ、フェイト目掛けて突進してきた。

「来た！」

フェイトはバルディッシュを構えて、オーリーの攻撃を受け止めようとしオーリー自身は勢いをつけてフェイトに一本角を突き立てる。

「はあああああああ！！！！！！！」

と、その時。

〈Ｄｏｌｐｈｉｎ　ｄｒｉｖｅ〉

その瞬間、オーリーの頭上から巨大なイルカを模した水流魔法が降ってきた。

「な！？」

オーリーはそれをどうにか回避したつもりであったが、その背後から感じた殺気に危機感を感じて振り返ってみるとそこには既に浦太郎が甲冑モードで待機していた。

「お、お前は！」

「釣り上げ時だな。」

浦太郎がカードをベルトに翳した瞬間、浦太郎の魔力が一気に上昇する。

〈Ｆｕｌｌ　ｃｈａｒｇｅ〉

そして、上昇した魔力をフィッシャーマンに集めると浦太郎はそのままオーリーの体目掛けてフィッシャーマンを投げつけた。

「はあああああああ！！！！！！」

浦太郎の攻撃を食らうと、オーリーは地面に落下しそのままブラッド状態を解かれてしまう。

「くっ！！」

同じ世界において、瀬間子と対峙していたなのはは数キロ先から感じる見覚えのある魔法に若干驚いていた。

「あの水流魔法は・・・！？」

〈Ｍａｓｔｅｒ！〉

と、レイジングハートがなのはに警告したその瞬間・・・瀬間子がなのはの隙をついて一気に突進してきたのであった。

「しまっ・・・！」

「貰ったあ！！！！」

慌てて防御に徹するなのはであったが、瀬間子の猛攻は止まるはずもない。

だが、なのはが攻撃を受けそうになったその瞬間・・・なのはにとっては正に地獄で仏とも言うべき優しい緑の斬撃が瀬間子に直撃する。

「のあ！！」

瀬間子はそれに直撃すると、大幅になのはと距離をとって撃ってきた人物のほうへと目を向ける。

「あ！」

なのは自身も振り返ってみると、そこには自分の最も大切な人である晩翠片手のユーノと、烈火を解放したにやけた表情の鬼太郎が空中に立っていた。

「なのは、助けに来たよ。」

「よう！」

「ユーノ君！鬼太郎さんも。」

この二人の登場には思わずなのはも顔をほころばせる。

二人の登場に、瀬間子は眉間のしわを深く寄せ拳を構える。

「翡翠の魔導死神と・・・・・お前か。」

瀬間子は鬼太郎の方へと目を向けると、その表情を一層深いものにする。

「へへ。決着、つけようじゃねぇか。髭クソ男。」

鬼太郎は瀬間子の前に立つと、烈火に炎を灯す。

「なのは。一先ず鬼太郎にこの場は任せよう。僕らはこの辺の警戒だ。」

「うん。分かったよ。」

ユーノにそう言われると、なのはは素直に聞き入れ後ろに下がる。

そんなユーノの計らいに鬼太郎も顔をほころばせる。

「粋な店長の下で働けて俺は幸せだよ。さぁ、これで漸く一対一だ・・・亀とてめぇのボスと同じようにな。」

「オーリーは我らの将だが、ボスなのではない。」

「てめぇのところのボスは、ダイシーって言う奴って訳かよ。」

同じころ、フェイトを助けた浦太郎はオーリーと向かい合いながら、仮面の下で師ｈン妙な表情を浮かべていた。

そんな浦太郎の背後からフェイトが恐る恐る尋ねる。

「浦太郎さん!?あの・・・どうして魔法が・・・!?」

すると、浦太郎はフィッシャーマンに取り付けられた装置を徐に見せる。

「これ、店長が作った対リベル様の装着具。一時間程度ならブラッド状態でも魔法が使えるらしいんだ。」

「ユーノがそんなものを・・・」

「店長の才能はまだまだ未知数なの♪それはしっかり覚えておくと良いよ。さて・・・」

そう言うと、浦太郎は再びオーリーのほうへと向き直しフィッシャーマンを構える。

「こいつは僕が釣り上げるよ。フェイトちゃんは弱ったところを捕縛してくれる?」

「あ、はい!」

そんな浦太郎の動きを牽制しながら、オーリーは田吾作から渡されているブラッドカートリッジを補給していく。

「亀井浦太郎・・・・・・貴様もやはり、私達の邪魔をするか？何故管理局の味方をし、彼女たちを助ける？」

「そうだね・・・僕は一度管理局を辞めちゃった身だし、今更腐った管理局に迎合する気なんかないけどね・・・」

「く、腐ってるってそれは言いすぎじゃ！？」

浦太郎の言葉を聞いて思わず後ろのフェイトも言い過ぎではないかと注意するが、浦太郎はフェイトの期待とは裏腹に更に続ける。

「事実腐ってるでしょ。正義を軽々しく口にし、大儀の名の下に巨大な武力を行使する連中は根幹から腐ってるの。必要悪とか子供を戦場に出させるのがその典型じゃん。店長や僕、それに金ちゃんはそれを痛いほどよく知ってる。」

「ま・・・確かにそうかもしれませんけど・・・」

浦太郎の言葉に一理共感するところがあったために、フェイトはそれ以上何も言い返すことができなかった。

「では、何のためにだ？」

オーリーがそう言うと、浦太郎は自信満々にこう断言する。

「・・・店長の守りたいものを守る手助けをしたいから・・・それだけさ♪」

「「・・・・・・」」

少なくとも、二人は今の浦太郎の言葉を聞いて何処となく浦太郎の飄々とした調子の言葉に隠れたユーノへの強い覚悟を悟った。

「そのために、立ち塞がる者は誰だろうと邪魔をする。それに限っては、嘘も偽りもなくね。」

「そうか・・・悪人だったな、私は・・・」

そう言うと、オーリーはブラッドカートリッジを一発ロードし、ブラッド状態である幻獣の姿へと変貌し浦太郎を睨み付ける。

二人が戦闘を開始しようとした矢先、アクトン内部とスクライア商店内部の警報が鳴り響いた。

「！これは！？」

「もう一箇所です！！」

スクライア商店でそれを見ていた白鳥と金太郎に緊張が走る。

「一つ現ればまた一つ・・・ゴールデンベアーの相手が出てきたぞよ。」

そう白鳥が言うように、モニターに映ってきたのは白鴎であった。

金太郎はそれを見ながら複雑な表情を浮かべる。

そして、はやての命令が下るのであった。

『金太郎さん。お願いします！』

「委細承知！」

金太郎は直ぐに身支度を済ませると、転送ポートを使って白鴎の元へ急いだ。

また、その頃・・・一護は実質上の師であり今でもそれなりの付き合いを見せている浦原喜助に呼び出され、現在織姫とコンと共に浦原商店に赴いていた。

居間のほうでは、一護が出された茶を飲みながら浦原の話を聞いていた。

「急に御呼び立てしまい、すみません・・・黒崎サン・・・」

「何、いいさ。今日は午後から休診だしな。あんたも相変わらず何考えてるか分かったもんじゃなさそうだな。浦原さん。」

「ふふ♪黒崎サンにそれを言われると、褒められてる気がしませんね。」

「褒めてねぇし。つうか、どういう用件なんだよ今日は？」

「そっすね・・・実は以前スクライアさんがアタシのところを尋ねてきましてね・・・」

「ユーノがか？」

「はい。現在、管理局機動六課が追跡中の謎の魔導師集団パトリオットに対抗するため私の技術を使わせて欲しいというものでした。

ま、パトリオットはボスを除けばすべてバウント。十年前のあの事件のときに使ったバウントセンサーの技術を提供したりなどその他色々。」

「そうか。ユーノも色々大変そうだな・・・」

すると、そんな一護の言葉を聞くと直ぐに浦原が声をこもらせながらこう続ける。

「彼の場合、その存在自体が我々死神と彼女達魔導師とはまた違うもの・・・特にアタシの創った崩玉の所為で人生を狂わされてしまった・・・」

そう言う浦原の言葉には自責の念が込められていたのを、一護は直ぐに感じ取った。

「浦原さん・・・・・・」

そして、徐に間を開けると浦原は一護に対して次ようなことを頼んできた。

「黒崎サン。一つ、お願いしても宜しいでしょうか?」

「何だ?」

「スクライアさんのこと、くれぐれもよろしく頼みますよ。彼に何かあってからでは遅い・・・彼を護ってあげられるのは、師匠である黒崎サンと彼の恋人である高町サンだけっすから。」

「・・・ああ・・・」

浦原の言葉を聞くと、一護も決意のこもった表情返事をし、残っていたお茶を飲みほしその場から立ち上がる。

そして、玄関先で鉄裁たちと楽しく話していた織姫に帰宅することを告げる。

「待たせたな、織姫。」

「あ、うん！」

「遅いんだよ、おめぇは！」

意外と話が長かったことにご立腹気味のコン。

「うるせぇな。ほら、帰るぞ。」

「はーい！それじゃ、浦原さんも夜一さんも体に気をつけてくださいね。」

「ハイハイ♪わざわざのご心配、感謝しますよ。」

「井上もくれぐれも一護には用心せい。男は皆野獣じゃ。寝込みを襲われては元も子もないからのう。」

猫の姿でいる夜一がそう言うと、一護はかなり顔を赤くしながら夜一に文句を言う。

「じゃかしい！！」

また、場所は変わってアクトン内部の廊下を歩いている報告書をまとめたスバルとティアナはパトリオットに関してこんな会話をしていた。

「ねぇ、ティア。」

「何？」

「あの子達が・・・パトリオットが石田さんの言うバウントだって言う話なら、永遠を生きるってどう言う気持ちになるんだろう・・・」

「何よ神妙な顔つきで・・・あんたらしくないわよ。それに藪から棒ね。」

「うん・・・いや、ついそんなこと考えちゃってさ・・・今回の事件について何か考えると・・・最近じゃ安眠もなかなかできなくてさ。」

「そう・・・ま、気持ちは分からないでもないわね。私だって色々と複雑な気持ちでいっぱいだし、永遠を生きるって話を聞いたときも正直感覚が掴めなかったし・・・だけど・・・」

「だけど・・・？」

「何百年・・・いや、何千年と歳もとらずにただ流れていく時間の中で生きていくって言うのは、かなり切ないものよね・・・子孫も残せない・・・周りからはバケモノのように見られ・・・愛することも愛されることもない・・・そんな人生・・・この上も無く辛いものよ。」

ティアナのその言葉を聞くと、スバルも共感したかのような複雑な顔を浮かべる。

そして、二人はそんな気分のまま報告書を持ってはやての元へと向かっていくのであった。

さ、こんな長ったらしい会話はこのぐらいにして・・・そろそろ浦太郎とオーリーたちの決闘シーンを実況使用と思う。

二人は一度地面に降り立つと、互いに適度な距離を測りながら対話をする。

「預けた決着は、出きれば今しばらく先にしたいが・・・錬度と経験はお前のほうが上だ。そして、速度もな・・・・・・」

「ふふん♪フェイトちゃんには負けるけどね。」

飄々とした口調でそう返す浦太郎に対して、フェイトは苦笑しながら今までの経験から分かった浦太郎の実力を具に口にする。

「そ、それはどうでしょうか?結構浦太郎さんも負けず劣らず速いですよ。」

「こりゃ、どうも♪」

「ま、逃げられないのなら戦うしかあるまい。」

「僕も同感だよ。そのつもりで此処に来たからね。」

二人は話を終えると、お互いに構えをとり臨戦態勢に入った。

フェイトは被害を受けない程度に距離をとるとそのまま戦いの行方を見守ることにした。

そして、二人はほぼ同時に動き始めた。

「貰い！」

「はっ！！」

ぶつかり合う両者の槍と剣が、火花を散らす。

高速の戦いが繰り広げられ、両者の熾烈な争いは手に汗握る光景となる。

浦太郎とオーリーは互いに全く隙のない動きで近づいては攻撃し、近づいては攻撃するという攻防を繰り返すが、浦太郎が一瞬の隙をついてオーリーの背後に回り込んだ。

「しま！」

「食らえ！！」

浦太郎はフィッシャーマンの先端を勢いよくオーリーに向かって突き刺していくが、負けじとオーリーも自身の体と融合した剣を突き立て防御に徹する。

「はあああ！！！」

そして、間髪入れずに剣劇を浴びせる。

「おっと！」

浦太郎はそれを回避すると、オーリーはブラッドカートリッジをロードして、更なる形態変化を見せつける。

〈Ｃｈｉｍｅｒａ　ｆｏｒｍ〉

すると、オーリーの背中からは翼が生え、顔は予想外の双頭になったために後ろのほうで観察していたフェイトはかなり動揺していた。

だが、浦太郎に至っては割と冷静でいられた。

そしてそのまま挑発的な口調を浴びせる。

「まだまだ物足りないな。」

〈ｌｏａｄ　ｃａｒｔｒｉｄｇｅ　ｒｏｄ　ｓｐｅａｒ〉

浦太郎はカートリッジをロードすると、矛先に圧縮した魔力を水流に変化させ巨大な渦を発せさせるとそのまま向かってくるキマイラのオーリーに向け発射する。

「ロッドスピア・アクアリウム！」

水流の竜巻がオーリーの視界を遮り、浦太郎はその隙に空中へと回避する。

「く！はあああああ！！！！！」

オーリーがどうにかしてアクアリウムの渦から脱出すると、その隙をついて浦太郎が空中からフィッシャーマンを振り下ろしてくる。

「な！」

「釣られろ！！」

〈Ｓｐｅａｒ　ｔｏｒｎａｄｏ〉

浦太郎は十八番のスピアトルネードで一気に勝負にかけてフィッシャーマンを振り下ろしたが、その攻撃をなんとオーリーは二つの口を使って防ぎ、フィッシャーマンを噛んでいた。

「な！？口！！」

「はあああああ！！！！！」

オーリーはその状態のまま強靭な足で浦太郎を一蹴させ、地面にたたき落とすが浦太郎は落ちながらの状態で矛先をオーリーに見せてドルフィンアタックを発動させる。

「くっ！！」

〈ｄｏｌｐｈｉｎ　ａｔｔａｃｋ〉

矛先から不規則に乱発させるイルカを模した水流弾がオーリーを狙う。

「しま！！」

空中で起こる大爆発を見ながら、浦太郎はどうにか体勢を立て直して地面に着地する。

そんな中、この凄まじい戦いを一人観察していたフェイトは今までの戦いをもう一度思い返しながら改めて自分の範疇を超えたレベルものだということを実感する。

「・・・な・・・何て戦いだろう・・・浦太郎さんもそうだけど・・・あのオーリーって子も凄い・・・！（まるで私なんか・・・蚊帳の外だ・・・）」

些か感じた嫉妬心を必死で押し殺しながら、フェイトはバルディッシュを握る力を強くする。

〈Ｒｏｄ　ｆｏｒｍ〉

浦太郎が基本状態のロッドフォームに戻したと同時に、地面に落下してきたオーリーも当初のブラッド状態に戻る。

〈ｌｉｏｎ　ｆｏｒｍ〉

そして、両者はお互いにカートリッジを多めにロードすると、大技を発生させるために多少大仰な構えをとる。

「クラーケン・・・・・・」

浦太郎がそう言うと、背後には巨大な水流魔力で出来た烏賊が現れる。

「レオール・・・・・・」

オーリーのほうも、自身の魔力を極限まで口腔内で圧縮させる。

「トライデント！！！」

その瞬間、背後に出来た巨大烏賊が三つに分裂してオーリーに向かっていく。

「ルッジート！！！」

一方のオーリーは口から最短破壊射程能力を秘めたレオールルッジートを口腔内から一気に発射した。

二人の大技がぶつかり合うと、お互いに威力が相殺され巨大な爆発が発生する。

その爆発の中から、浦太郎とオーリーは再び空中戦へと持ち運んでいくのである。

「はあああああああああ！！！！！」

「おおおおおおおおおお！！！！！」

果たして、この両雄の決着は着くのであろうか！？

一方、二人と同じかどうかは定かではないが、鬼太郎と瀬間子の激突も熾烈なものであった。

「えい！！」

「ちっ！！」

お互いの攻撃がこうも拮抗することに鬼太郎と瀬間子も少々驚いていた。

そんな二人の様子を黙って見守るユーノとなのは。

すると、鬼太郎が息を上げながら徐に瀬間子に話しかけてきた。

「てめぇも・・・パトリオット・・・ダイシーに仕える守護者ならよ・・・ボスの間違いを正そうとは思わねぇのかよ！？」

すると、瀬間子はそんな鬼太郎やユーノ達に対して驚きの返答をするのであった。

「我らのボス、ダイシーは間違ってなどいない。これは誇りを取り戻すため、そして何より・・・残り限られた我らのボスの命を救うため・・・我らは聖地へと向わねばならぬ。」

「何！？」

「今、何て言ったの！？」

「ボスの命を・・・救う・・・？」

あまりに予想外な言葉に、動揺を隠しきれないでいるユーノやなのは。

そして、鬼太郎がそんな動転した状態のまま弁明を求める。

「どういう意味だよ！？クソ鬚！」

鬼太郎の言葉を聞くと、瀬間子は拳を強く握り間を置いてから更に続ける。

「ボスのためなら血に染まることも厭わず・・・我と同じ志の男よ・・・お前もそうではないのか！？」

「確かに、店長ためならなんだってするさ・・・けどな・・・けどな！！」

一部共感するとこともある鬼太郎であったが、だがやはりどうしても納得できなこともある。

鬼太郎はこんなにも複雑な心境になったのは初めてであった。

その頃、別世界で自分のブラッドカートリッジに使う血を求めて空中を飛んでいた白鴎も田吾作からの念話を聞き、深刻な表情を浮かべる。

「（オーリー達が！？）」

「（ああ。砂漠で交戦してるぜ・・・・・・亀井浦太郎と桃谷鬼太郎って男二人と。）」

「（・・・長引くとまずいな・・・助けに行くか・・・）」

そう思っていた矢先、白鴎は突然その場に足を止めると目の前に見えてきたあるものの姿に警戒するのであった。

「な!?」

白鴎の遥か前方にいたのは、仁王立ちをしたまま腕組みをしたブラッド状態でいた金太郎であった。

「・・・・・・」

金太郎は黙して何も語らず、仮面越しに白鴎を凝視するだけ。

一方の白鴎もそんな金太郎を眉間にしわを寄せながら睨み合いをするが、白鴎の突然が突然途切れたことを不審に思った田吾作が口を出した。

「（白鴎!?）」

「（くそ・・・こっちにも来た!例のエドワード・コークの末裔・・・）」

田吾作にそのことを伝えると、白鴎は声を張り上げて金太郎のフルネームを口にするが・・・

「熊谷金〇〇!!」

下の名前をあまり口にしてはならないような言葉で言われてしまったことに、聞いていた金太郎は思わず体勢を崩してしまいそうになり、すかさず猛反発。

「ぐ!?金太郎ですぞ、私は!!き・ん・た・ろ・う!いけませぬぞ、そんな卑猥なワードを大声で口にしては!!」

その後、金太郎は大きく仮面越しに溜息を吐くと徐に白鴎へ次のように持ち出す。

「はぁ・・・・・白鴎。やはり、話を聞かせてもらうわけにはいかぬか?もしかすれば・・・我らに手伝えることがあるかもしれぬぞ。」

すると、その言葉を聞いた瞬間白鴎の頭に銀太郎の屈託のない笑顔を過り、どことなく金太郎の言葉に共感してしまいそうになった。

しかし、やはり自分たちは信念のもとに相容れないもの同士であることに変わりはないと判断し、強い口調で言い返す。

「くっ・・・!!う、うるせー!!管理局の人間の言うことなんて信用できるか!!」

「誰も管理局を信用しろとは言わぬ。これは、私個人を信用して欲しいと申しておるのだ。」

「同じだ!!結局魔導師なんてどいつもこいつも嘘つきの傲慢なうすらトンカチには変りねぇんだ!!」

すると、その言葉を聞いた金太郎は一度口をこもらせるとまるでユーノが常々そう思っているような口調でこう返事をしてきた。

「確かにそれもある・・・非を認めぬのは最も重い罪だ。だが、少なくとも私や店長はそれを認めておる。自らを悪と断言もする。何と罵ろうと構わぬ。全てを・・・赤裸々に話してはくれぬか?」

金太郎の真摯な言葉と態度を見ていた白鴎は沈黙を保ったまま、この状況を打開するための策を思案してた。

「（・・・俺達の目的は、聖地（むこう）で連中と戦闘になったときのためのブラッドカートリッジの補給と強化・・・・・・余計な戦闘でカートリッジの無駄使いも避けたいし・・・・・・）」

「白鴎・・・」

金太郎がそう呼びかけたのち、白鴎は意を決すると強硬手段に踏んで出てきた。

「ぶっ倒すのは・・・・・・また今度だ！」

白鴎は鍵爪に魔力を集中させると、それを掌に集約させて一つの光球を作り出す。

状況を理解した金太郎は仮面の下で眉をひそめる。

「く！」

「滾（たぎ）れ！！コンボイ！！」

〈Ｓｌｅｅｐｉｎｇ　ｌｉｏｎ〉

「くっ！！」

白鴎はその瞬間、光球を鍵爪で叩き割ると衝撃波と光とともに金太郎の視界を攪乱させその場から素早く離脱していった。

「脱出！」

金太郎はあまりの光の強さに思わず手で目を覆い隠した。

そして、気づいた時には白鴎との距離はかなり広がってしまっていた。

「くっ・・・しまった！」

その距離おおよそ2キロ弱。

なのはのような優秀な砲撃魔導師でもないかぎり、この手の距離から攻撃することなどまずもって不可能に近い。

だが、そこは元武装隊の名誉元帥にしてエドワード・コークの末裔である。

待機状態のアックスオーガはすかさず金太郎に指示を仰ぐ。

〈Ｍａｓｔｅｒ〉

「止むを得ないな。」

その頃、大幅に距離をとることに成功した白鴎はすっかり安心しきっていたのか若干の油断を見せていた。

「よし。ここまで離せば攻撃もこねぇ。」

そう思い、白鴎は魔法陣を展開し、次元転送で金太郎の前から姿を消そうとした。

「次元転送・・・・・・！？」

と、白鴎が金太郎を警戒していたその時だった。

金太郎はアックスオーガを起動させると、アックスフォーム時における最長の攻撃性能を誇る遠距離魔法を使用する。

〈Ａｘｅ　ｆｏｒｍ．Ｄｒｉｖｅ　ｉｇｎｉｔｉｏｎ〉

「行いますぞ。私の愛情が詰まった一撃を！」

〈Ｂｌｏｏｄ　ｃａｒｔｒｉｄｇｅ　ｌｏａｄ〉

金太郎は声高らかにそう口にすると、ブラッドカートリッジを二発ロードし、大きく腕を振り上げるとリベル式とミッド式、ベルカ三種の魔法陣が混同したものを足元に展開させ斧の切っ先に魔力を集中させる。

一方で、それを遠距離から見ていた白鴎は唖然としながら信じられないとばかりの声を上げる。

「まさか・・・攻撃するのか・・・あんな距離から！！」

〈Ｄｙｎａｍｉｃ　ｓｔｏｒｍ〉

そして、金太郎はアックスオーガに集積させた自身の魔力を強烈な勢いを持った魔法の乱気流に変化させ、勢いよく斧を振り切った。

「ダイナミック・・・・・・ストーム！！！」

振り切った魔法の乱気流は猛烈な威力と風速とともに怯んで動けずにいた白鴎めがけて襲いかかっていき、白鴎はそのまま直撃を受けることとなる。

「嘘！！」

直撃の瞬間、巨大な爆炎と爆発が発生しその技の威力のすごさを物語る。

〈Ｉｔ’ｓ　ａ　ｄｉｒｅｃｔ　ｈｉｔ！（直撃だな！）〉

アックスオーガが歓喜の声を上げる中、爆炎を見ながら斧を無形の構えに戻した金太郎は白鴎の安否を気づかう。

「少々やり過ぎたか？」

〈Ｄｏｎ’ｔ　ｗｏｒｒｙ（心配ないだろう）〉

金太郎はそんなことを考えながら、晴れていく爆炎を徐に見ていた。

すると、爆炎の晴れた先には金太郎の予想もしなかったものが映ってきた。

「な！」

なんと、あのダイナミックストームを受けながら傷一つ負っていない白鴎・・・いや、正確に言えば白鴎の前に現れた中年の男がその攻撃を受け止め守っていたのである。

その男とは、白鴎達もその多くは知らないでいるパトリオット・・・高円寺虎彦である。

白鴎は突然の高円寺の登場に大いに驚いていた。

「お・・・・・お前・・・高円寺・・・・！？」

「行け。カートリッジの補給があるのだろう。さっさと済ませて来い。終わり次第、整地へと向う準備をする。」

「あ、ああ！」

高円寺にそう言われると、白鴎は当初の目的を思い出し別世界への転移を始めるために魔法陣を展開する。

それをさせまいと金太郎は第二発目のダイナミックストームのために斧を振り上げる。

「ダイナミック・・・・・・」

すると、高円寺は徐に指を鳴らすと何かを発動させた。

高円寺の術に気づいたアックスオーガが金太郎に警告する。

〈Ｍａｓｔｅｒ！〉

「な！？」

金太郎が気づいた時には、既に時は遅し。

周囲には高円寺の作り出したリベル式のバインドで覆われており、金太郎は為すすべもなくそのバインドの餌食となってしまった。

「ぐ！！これは・・・バインド！？だがあり得ぬ！！店長のような方で無い限り、あんな距離から一瞬でなど・・・！？」

金太郎自身、こんなことがあるのかと疑問にも思った。

長いことユーノの傍にいる金太郎にとって、彼を上回るほどのバインドの達人など今まで見たことがなかった。

というより、ユーノが明らかに多を逸したほどの補助魔法の天才であるからこそそれは証明されるのであるが。

高円寺がバインドで金太郎の動きを封じ込めている間に、白鴎は次元転送を済ませて既に金太郎の前から消えていた。

金太郎は魔力を全開にして、何とか高円寺のバインドを解こうと奮闘した。

「くっ・・・うおおおおおおおお！！！！！」

どうにかして、バインドの拘束を逃れた金太郎であったがその時には高円寺の姿も消えており、辺りには金太郎だけしかいなかった。

〈Ｓｏｒｒｙ．ｍａｓｔｅｒ〉

「いいや。私の油断だ。」

金太郎は後悔と自責の念を抱きながら、徐に頭上の雲を仰ぎ見た。

また、同じころ砂漠で熱戦を繰り広げていた浦太郎とオーリーの熾烈な争いもクライマックスを迎えようとしていた。

両者は何度もぶつかり合ってるうちに、互いに体力的に限界を迎えようともしている。

オーリーのほうは、ブラッド状態を解いているため、先ほど浦太郎の攻撃で受けた肩の傷口から血を流しながら息を上げていた。

「はっ、はっ、はっ、はっ（ここに来て・・・尚速い・・・目で追えぬ攻撃が出てきた・・・早めに決めないとマズイな・・・）」

同じように、浦太郎自身も甲冑モードであるにもかかわらず左足に大きな損傷を受けてしまい甲冑が壊れて血を流していた。

「は、は、は、は（この子・・・強い！この強度に絶対性をおいた亀甲の鎧にダメージを与えるなんて・・・一先ずスピードでその場凌ぎはしているが、長引けば装置の効き目が切れて形勢はオーリーに傾く！）」

互いに同じような結論に達すると、覚悟を決めた二人は武器を構えると自身の持つ最強技の発動を思案する。

「（シューティングスターブラスト・・・当てられるか！？）」

「（ポセイドンクラッシュ・・・やるしかないかな・・・）」

そんな甲冑姿の浦太郎のことを、周辺を警戒しつつ不安のこもった表情で見守るフェイト。

「浦太郎さん・・・・・・」

浦太郎とオーリーは暫くの膠着状態を保ったのち、二人同時に駈け出して行った。

「「はあああああ!!!!!」」

と、その時・・・事態は思わぬ方向へと傾いてしまう。

飛び出していった浦太郎の腹部から突然何者かの腕が突き刺さり、浦太郎を貫いた腕には生々しく浦太郎の血が大量に付着していた。

「ぐっは!!」

浦太郎は襲ってきた激痛に悶絶し、それを見ていたフェイトやオーリーは驚愕のあまり言葉を失った。

「は!!」

「な!!」

悶絶する浦太郎が徐に首を後ろに振り向いてみると、背後に立っていたのは先ほど金太郎の攻撃を退いたばかりの高円寺の姿であった。

「くっ・・・・・・お・・・お前は・・・・!」

「亀井浦太郎・・・・!」

「浦太郎さん!!!!」

高円寺は黙ったまま、更に浦太郎の体に魔力電撃を流し込み浦太郎を苦しめる。

「ぐあああああああ！！！！！！」

攻撃をまともに食らった浦太郎はそのまま前方に倒れて、動かなくなった。

この高円寺の非道なやり方には流石のオーリーも声を張り上げた。

「高円寺！貴様！！」

「・・・退くぞ・・・」

オーリーに向かって高円寺は感情のこもっていない声でそう言うと、オーリーはその場に倒れている浦太郎に申し訳なさそうな表情を浮かべると仕方ないとばかりに舌打ちをする。

「・・・ちっ！」

オーリーはチータスを待機状態に戻すと、高円寺の後に続く形でその場から撤退しようとするが、それをさせまいとフェイトが行動を起こす。

「ま、待て！！！！」

〈Ｈａｋｅｎ　Ｓａｂｅｒ〉

フェイトは咄嗟にハーケンセイバーを生成すると、逃げようとする

高円寺の元目掛け怒りを交えながらそれを振り飛ばした。

「はあああああああ！！！！」

ところが、高円寺はそれに気づくと後ろに振り返らずに右手だけで受け止めると、徐にそれを砕いてしまう。

これにはフェイトもバルディッシュも度肝を抜いた。

「何！？」

〈Ｕｎｂｅｌｉｅｖｅｒｂｌｅ〉

「邪魔だ。」

すると、その瞬間高円寺はもう片方の手を使って魔力弾を生成しフェイト目掛けて発射した。

フェイトは防御でそれを回避しようとしたが、結局のところ浦太郎のように装置を持っていなかったフェイトはそれを回避しきれず魔力弾に直撃してしまった。

「ぐっは！！！」

爆炎が巻き上がり、その中からバリアジャケットを焦がしたフェイトがつらそうな表情を浮かべて出てくると、その時には二人はフェイトの前から姿を消してしまっていた。

突然の高円寺虎彦の乱入によって、両者の戦いはこのような幕引きとなってしまった。

次回、パトリオットの聖地目掛けてついにユーノ達が動き出す！！

群雄衝突、そして・・・（後書き）

教えて、ユーノ先生！

ユ「今回は、能力限定解除についてだよ♪」

ユ「知ってのとおり、機動六課は高い魔力保有者がいっぺんに集まるチート部隊。そのため、普段は能力限定という形でなのは達隊長人は魔力を制限されている。」

ユ「また、死神である恋次さんや吉良さん達隊長・副隊長も現世や異世界での行動の際、その世界の霊的存在に不要な影響をもたらさないよう、それぞれの隊章を模した限定霊印を体の一部に打ち、霊圧を極端に制限されるんだ。その制限率は８０パーセント♪」

は「何やて！！！！何でそんな大事なこと早いとこ言わんの！！！」

恋「いや、言おうと思ったんだがよ・・・つい忘れてたんだよ。」

シ「ということは、解除が出れば貴様は今までの五倍の力が出せるということか・・・ふん。面白い！これは戦い甲斐が出てきたというものだ！（シグナム、闘志の炎を燃やす）」

恋「は、上等だぜ！俺様の実力はまだまだこんなもんじゃねぇって思う存分見せてやるぜ！！！（同じ闘争の炎を燃やす）」

それを横目であきれ返りながら見守るヴィータや吉良。

吉「やれやれだね・・・」

ヴィ「全くだぜ・・・」

魔導師図鑑ハイパー！

ユーノがなのはの実家を訪れた時、見つけたもの・・・

ユ「何だい、この古いアルバムは？」

な「さっき、押入れを掃除していたら出てきたんだよ。」

ユ「どれどれ・・・・・・」

徐に開いてみると、そこには中学生のころのなのはの写真が収められていた。

な「あ！これは・・・！」

ユ「わあ、懐かしいな♪中学生のころのなのはだ。八年ぐらい前だよね？」

な「にゃはは♪みんな、若いね♪」

微笑ましくそれを見ていると、ユーノはふと桃子が写った写真を見る。

ユ「桃子さんはあんまり変わらないね・・・」

さらにページをめくってみると。

な「こっちは、私たちがまだ9歳だったころの写真だね。」

ユ「十四年前だよね・・・うわあ!僕が普通にフェレットだよ♪」

な「あどけないな、私も。お母さんもあの頃はもっと若かか・・・・・」

と、なのはとユーノが桃子を見てみると今も昔も姿が全然変わっていないことに気づき思わず顔を青ざめてしまう。

ユ「一緒だ!!」

な「いつからあのままなの!?」

ここでアンケート募集です。

これまでのお話の中で、ユーノのパートナーだったらこいつが一番だというキャラクターの人気ランキングを行いたいと思います。なのはキャラ、ＢＬＥＡＣＨキャラは勿論、敵キャラでも構いません。それを絵にして今度載せてみたいと思っています。応募、お待ちしております。

死神部隊全滅！？　地下洞窟の罠（前書き）

ユ「それは、小さな痛みでした。ぶつけ合う思いは届くことなく阻まれてしまって、絡み合う願い・縺れ合う心と希望・・・・・・見失いそうになる真実。」

な「悲しい過去があっても、未来が暗く霞んでも・・・立ち向かっていかなきゃいけない。きっと誰もが同じときを戦っているから。」

ユ「ユーノ・スクライア外伝　パトリオット篇・・・・・・始まります。」

死神部隊全滅!?　地下洞窟の罠

＞ｉ１８７５１―７０９＜

高円寺による突然の奇襲により、体に大きな傷を負ってしまった浦太郎は駆けつけたユーノ達に回収され、現在司令部としているアクトンに収容されシャマルの手当てを受け眠りについていた。

体を貫通した結果、腹部に大きな穴を作ってしまった浦太郎であったが、シャマルの賢明な治療とユーノの開発した治療薬の効果もあり、並の人間では考えられないほどの速度で傷の回復が進んでいた。

一方のユーノ達は、一度アクトン内部の会議室に集まり全員に今回の件に関して話し合いを行っていた。

「浦太郎さんは、身体に相当なダメージを負ってしもうたみたいやけど、幸い命には別状あらへんよ。」

「魔力ダメージによる高圧電流を喰らったみたいだから、あと数時間は痺れが取れないだろうね。」

「一先ず、ユーノ達があの時現場に直ぐ駆けつけて助かった。救援が遅かったら、今頃どうなっていたことか。」

「だね。」

すると、そんな中一人白鳥が腕組みをしながら何処か納得のいかない表情を浮かべていた。

「しかし、どうも腑に落ちぬ。」

「何がですか？」

スバルがそう尋ねると、白鳥は間を置いた後すぐに説明を始める。

「・・・ピーチ達が出動して暫くして、スクライア商店とここアクトンの管制システムがクラッキングにより一時粗方ダウンしてしまったことで、指揮や連絡が取れなくなった・・・妙だとは思わぬか？」

「確かに、店長が造ったシステムにそう易々と侵入できるものなど限られていますしな・・・」

ユーノの技術力の高さをよく認識している金太郎自身も、今回の件に関してはまるで納得していないのが現状だ。

「居るとしたら・・・・・・」

エリオがそう口にすると、ユーノは徐に浦原の名前を挙げてきた。

「僕の鬼道と技術開発の師匠である浦原さんか、相当なメカニックってところだよ。いずれにしろ、僕の造りこみの甘さが招いた結果さ・・・何と謝ったら言いか・・・」

思わず自分の所為だと思い込んだユーノは暗い表情を浮かべて意気消沈する。

そんなユーノを見たなのはとフェイトは励ましの言葉をもちかけ元気を取り戻そうとする。

「そ、そんなことないよユーノ君。ユーノ君が直ぐにシステムを復旧させてくれたお陰で、此処とも連絡が取れた訳だし・・・襲撃者の映像もちゃんと残せた。」

なのははそう言うと、中央のモニター画面に浦太郎を襲撃した高円寺の映像をその場に映し出した。

「自分を卑下しなくていいんだよ、ユーノ。私だって油断してこうなっちゃったんだし・・・」

フェイトはそう言いながら、負傷した左手の甲をユーノに見せる。

「なのは・・・フェイト・・・」

二人に励まされ、多少の元気は取り戻したユーノ。

しかし、フォワード一同はやはりこんな不測の事態になると夢に思わずにいたので頭を悩ます一方であった。

「でも、おかしいですね。向こうとアクトンで使っているのはユーノ先生が造った超高性能の管制システムなのに、それを外部からクラッキング出来る人間などいるのでしょうか？」

「そうこであるぞ。防壁も警報も、何もかももすり抜けていきなりダウンさせるなどと・・・」

「ちょっと、ありえないですよね・・・」

「僕の方もユニットのブロックはしているが、もっと強力なブロックを考えておくべきだった。」

「それだけ、凄い技術者がいるってことですか？」

キャロがそう口にすると、金太郎は腕組みをしながら推論を口にする。

「うむ・・・可能性としたら、パトリオットに与している強力な助っ人がいると思われますが・・・それが明白でないかぎり何とも・・・」

「そう言えば、鬼太郎さん達から聞いた話も状況や関係がよく分からないな。」

クロノがそう言うと、鬼太郎は重い口を明けながら襲撃を受け、自分たちが明けつけた時の出来事を語り出す。

「ああ・・・俺と店長となのはが駆けつけたときには、もうあの男は居なかった。けど、あいつが・・・オーリーが亀とフェイトを抱きかかえてて・・・“言い訳は出来ないが、すまないと伝えておいてくれ”って。」

「益々謎ですね。」

すると、話に区切りをつけるかのようにユーノがはやてに向かってこう言って来た。

「はやて。浦太郎のことは任せたよ。あと、対リベル式の装着具も全員分ではないが、完成に近づいている。」

「分かったよ。いっつも、済まんな。」

ユーノの陰ながらの努力に助けられているはやては勿論、その場にいた全員もユーノに感謝の意を抱いた。

「それと、シグナムさんとヴィータには甲冑にちょっとしたモノを装備しておきたいのでこの後宜しいでしょうか?」

「ああ。私は構わぬが。」

「何するんだよ?」

「もしものための備えとでも言っておこうかね♪」

「それでは、引き続きパトリオットと謎の襲撃者の捜索を再開する。各自所定の場所に戻ってくれ。」

「「「

浦太郎には相当なダメージが残ってしまったがな・・・」

オーリー自身、今回の高円寺のやり方は非道だとは内心思ってはいるが、それでもあの時高円寺が介入していなければ戦局はどうなっていたかは分からないと考えたのも事実。

そんな複雑な心境のオーリーに対して、高円寺がこう語りかける。

「魔導師の心配など、しても仕方有るまい。いずれ皆滅び行く存在なのだからな。」

「・・・・・」

この言葉を聞くと、オーリー自身は更に複雑な心境になる。

すると、そんな高円寺に対して腕組みをしていた東海林が質問をしてきた。

「つうか、一つ聞いてもいいか高円寺。」

「何だ?」

「同じパトリオットの癖に、何でお前だけ独自行動を取る?パトリオットは代々その時代のダイシーに仕え、服従するのが使命だろ?勝手な行動は厳禁だぜ。」

「お言葉を返すようだが、お前たちも忘れた訳ではあるまい。」

「あ?」

「ダイシーに使えるパトリオットも元々はバウント。バウントはそれぞれが独立独歩に生きている。群れて行動すること自体可笑しな話だろう。」

「そりゃそうだけど・・・」

「俺は独自の立場から銀太郎を護るさ。そして、邪魔な魔導師達は皆全て葬り去る。」

そう言うと、高円寺は徐に立ち上がり五人の前から姿を消していった。

高円寺がその場からいなくなると、東海林は唾をその場に吐いて高円寺の態度にむしゃくしゃする。

「ぺっ。たく！いけ好かない野郎だ。」

「俺も正直苦手だよ。」

「よく銀太郎はあんな奴に信頼を置けるよな。」

「銀太郎は、性格はどうあれ同じ志を持つパトリオットに絶対的な信頼を抱いているのだ。」

「ふう。」

自分達でもこの高円寺虎彦という男のことに関して、あまりよく認識していない五人は一抹の不安を抱える。

「なぁ、家を空けたはいいが本当に此処は大丈夫なのか？万が一見

つかったどうする？」

東海林がふと思ったことを口にすると、バックアップ専門の田吾作が答える。

「それは無いと思うぜ。洞窟全体には俺の頑丈な結界が張り巡らされているし、もともと洞窟そのものが霊子と魔法粒子がイオン化して溶け合ってるんだ。銀太郎に危害が及ぶこともないだろう。」

「念のためだ。田吾作はなるべく銀太郎の傍を離れんほうがいいだろう」

「分かった。」

すると、瀬間子の横で何処か重い表情を浮かべていた白鴎が徐にこんなことを四人に言って来た。

「なぁ・・・聖地に行ってさ・・・銀太郎が本当のダイシーの後継者になってさ・・・それで銀太郎は幸せになれるんだよな？」

「何だ。いきなり？」

「真のダイシーの後継者になることで大いなる力を得る。守護者である俺達はそれを誰よりも知っているはずだろ？」

今更のことである質問に、オーリーと田吾作がそう答えると白鴎は更に浮かない顔のままこう続ける。

「それはそうだけど・・・そうなんだけどさ・・・俺は何か・・・何か大事なことを忘れてる気がするんだ・・・」

「「「「・・・・・・」」」」

白鴎の言ってることは、あながち間違いではなった。

なぜなら、四人も白鴎と同じ気持ちになっていたことは間違いなのだ。

そんな五人のことを第一に考えているボスである銀太郎は、洞窟の内部に設けられた自室のベッドから目を覚ました。

「う・・・ん・・・？」

銀太郎は徐にベッドから起き上がり、顔を洗うために洗面所に行こうとした・・・その時だった。

突如として、銀太郎の体の中に流れる完全には消え去っていないダイシーの血の呪いが活性化し、銀太郎の心臓に負荷をかけ始めた。

「う！！！こ・・・これは！！！！」

言葉で表現できないような激痛に苦しみだした銀太郎は、必死に胸を手で押さえながらその場に倒れこみ・・・ついには悲鳴を上げる。

「ぐあああああああああ！！！！！」

「「「「「は！！」」」」」

銀太郎の悲鳴を耳にした高円寺を抜いた五人は直ぐに銀太郎のところまで走っていき、そこでもがき苦しむ銀太郎を目撃する。

「銀太郎！！」

「銀太郎！」

白鴎は銀太郎に駆け寄り、銀太郎の体を揺すりながら意識を確認する。

「銀太郎！銀太郎！！」

「動かすな！そっとしておけ！」

「あ、ああ。」

瀬間子に諌められ揺するのをやめた白鴎であったが、するとその時銀太郎が多量の汗をかきながら徐に立ち上がり全員に向かってこう言ってきた。

「だ・・・大丈夫・・・呪いの侵食がちょっと進んだだけだよ・・・これくらいで・・・どうにかならないよ・・・！」

五人を心配かけまいと必死で取り繕う銀太郎を見ていたオーリー達は、心が苦しめられる思いでいっぱいだった。

「銀太郎・・・・・・」

その頃、アクトン内部の医務室で眠っていた浦太郎も漸く目を覚ましたところであった。

「う・・・此処は・・・？」

浦太郎が目を覚ますと、そこにはちょうど様子を見に来たフェイトの姿を確認できた。

「目が覚めましたか、浦太郎さん。」

「フェイトちゃん・・・」

「はい。」

浦太郎が徐に体を起こすと、全身から感じる痺れに思わず顔をひきつらせた。

「う！体中が何か痺れる・・・！？」

と、その時。

浦太郎は自分の足元で寝息を立てている鬼太郎の姿を見て些か驚いた。

ベッドには鬼太郎の涎が付着していた。

「先輩・・・涎なんか垂らして汚いな・・・」

「許してあげてください。鬼太郎さんも、あの後ずっと浦太郎さんにつきっきりですから。」

「あれ？と言うことはここは？」

辺りを見渡しそこが自分の自宅であるユーノの店でないことに気が付き、フェイトもそんな浦太郎にこう答える。

「はい。ユーノの船、アクトンの艦内です。あなたは砂漠での戦闘中に背後から何者かに襲われて気を失っていたんです。」

「本当に!?」

「魔力ダメージによる高圧電流を喰らったみたいですけど、直ぐに治るそうです。心配ありません。」

「ち・・・油断したか。」

「管理局とユーノのサーチャーでも確認できなかった不意打ちですよ。仕方ありません。」

「店長のサーチャーを!?何者だいそいつは?」

「詳しくは分かりませんが、パトリオットのオーリーが高円寺と口にしていたことから仲間であるとは思いますが、いまは何も。」

「そう・・・」

「だけど、何よりも先ず浦太郎さんが無事でよかったです。あなたにもしものことがあったら、私・・・ユーノに何て侘びたらいいか・・・」

思わず自分の失敗を想像してしまい、暗い表情を浮かべるフェイトを見て、浦太郎はフェイトの優しい気持ちに感謝しながらお礼の言葉をかける。

「フェイトちゃん・・・・・・気持ちは嬉しいよ。ありがとう。」

「あと数時間ぐらいはゆっくり休まないと戦闘もそうですし、日常生活にも支障が出てしまいますからこのまま静養していて下さいね。」

「うん。そうさせてもらうかな。」

「あ、そうだ。お腹空いてません？」

フェイトはそう言うと、その場から立ち上がり扉の方へと歩きだし浦太郎に尋ねる。

「何か軽い食事と飲み物を持ってきます。何がいいです？」

「え？でも・・・悪いよ・・・」

「遠慮せずにどうぞ。」

屈託のないフェイトの笑顔を見た浦太郎は少し考えた後、その厚意に甘えさせてもらいさり気無く自分の食べたいものを注文した。

「あ・・・じゃあ・・・デザートはハーゲンダッツがいいな♪」

「うふふ。分かりました。」

フェイトはそう返事をすると、早速浦太郎に言われたものを取りに食堂へと向かった。

フェイトが部屋から出て行ったあと、浦太郎は些か表情を綻ばせながらこんなことを呟く。

「やれやれ、過保護すぎる面もあるけど・・・やっぱり性根は優しい子だよ・・・ん？」

と、その時浦太郎はぶっきらぼうではあるが同じぐらい性根の優しい鬼太郎の寝顔を見る。

「亀・・・・・・」

「先輩も先輩で素直じゃないな・・・」

さて、その頃ユーノの方はと言うと・・・シグナムとヴィータの甲冑に施行を完了させた後一人アクトンの管制モニターを操作しながら、襲撃者・高円寺虎彦の画像を何度も見返し難しい顔を浮かべていた。

「・・・・・・」

そんなユーノを目撃したクロノは徐に近づき、話しかけてきた。

「難しい顔をしているな、ユーノ。」

「ああ・・・流石にこれを見ればそうならざるをえないさ。」

ユーノはクロノと会話をしながら、襲撃当時の映像を見せつける。

これにはクロノも同じぐらい難しい表情を浮かべる。

「例のパトリオットか・・・」

「正直、この男は他のパトリオットと比べれば明らかに異常だ。考えてもみなよ・・・この二つの世界、最速転移でも２０分はかかるはずの距離だ。金太郎の新型の直撃攻撃を防御、長距離バインドをあっさり決めて・・・それから僅か９分後には・・・浦太郎やフェイトに気配すら感じさせずに背後から忍び込んで一撃・・・フェイトすらも圧倒した。」

「かなりの使い手と言うべきか・・・だが、一人でそんな真似が出来るものなのか？誰かが二人がかりで変装しているという点は考えられないか？」

「それも考えたけど、魔力波長は全くの同一人物・・・結論から言うと、この男一人の仕業と断言するよ。」

「ユーノ、お前だったらこの短時間で転移することは出来るか？」

「無理に決まってるだろ。いくら翡翠の魔導死神の僕でも、理論的にもこの時間じゃどう足掻いたって出来っこない。そんな人間・・・いる方がどうかしてる。」

「確かに・・・この男はどうかしてるな。」

クロノはそう口にしながら、改めてこの高円寺虎彦の画像を凝視する。

「あと、これは僕の直感に過ぎないが・・・この男・・・高円寺と呼ばれる男からは途方もない邪な野心を感じる。一番厄介な相手になりそうだから、特にこいつには要注意しないといけない。」

「ああ。僕からもなのは達にそう伝えておく。」

「兎に角、今は出来るだけ対策を講じてみるよ。対リベル用の装着具の最終調整もしておく。」

悪友であると同時に、数少ない親友であるユーノの頼りになる一言を聞いたクロノは冗談半分でつい禁句を口にしてしまう。

「頼りにしてるぞ、フェレットもどき・・・ぐっほ！！」

禁句を聞いた瞬間、ユーノはクロノの腹部に杖の一撃を入れて憤慨する。

「その名で呼ぶなって言ってるだろうが、ボケ！」

襲撃から一夜明けて、浦太郎は金太郎並の回復力でユーノ達が待つスクライア商店に戻ってきたのであった。

「ただいま♪復活したよ。」

浦太郎の無事な帰還を見た金太郎や白鳥は安堵の声を漏らす。

「おお！！良かった。何ともなさそうだな。」

「心配かけさせよって。」

「いやいや、ごめんごめん。」

「ま、あのぐらいでどうにかなるようなら一等陸佐の名が泣いてるっつうの！」

「先輩。昔のことだよそれ・・・今の僕はここの従業員。」

すると、奥からユーノが出てきて浦太郎に声をかけてきた。

「浦太郎はまだ完全回復したわけじゃないから、戦闘には当分出ない方がいいかな。」

「そうですね。ゆっくり休ませてもらいますよ。それより、今後の捜査の方は？」

「ああ。当面は呼び出しがあるまでは僕らは引き続きパトリオットの動きを監視し続けるようにとのことだ。恋次さん達も結構あちこち探してるから、そろそろ当たりが来ても起こしくはないと思うけど。」

「いずれにしろ、俺たちは出動待ちって訳すか・・・」

「ティアナ達も追跡調査をしてくれている。見つかるのは時間の問題である。」

「あとは、いつ決戦になるかわからないからしっかり健康管理を行うこと。それぐらいかな♪」

「「はい」」

「承知！」

「任せるである。」

光陰矢のごとし・・・時間はあっという間に過ぎて行った。

そして、それから二・三日が経ったのち、ついにパトリオット迎撃のために死神部隊三人が動き出した。

夜明けとともに、空座町に佇む家の屋根を飛び交う恋次とルキア。

二人は、吉良が待機している市街地からおよそ二キロ先にある山に向かって移動を続ける。

そして、合流地点にたどり着いた二人はそこで待っていた吉良の方へ振り返り吉良の話を聞く。

「パトリオットが、見つかったようだね。」

「金太郎達が連中とやり合ってる間に、石田が漸く連中のアジトを嗅ぎ付けていたらしい。」

「ユーノさん達はまだ?」

「ああ。後から一護となのは達と一緒に合流する予定だ。」

「よし!それじゃ、俺達が先に中の様子を見に行くとするか。」

「油断はするなよ。奴らは死神一人、相手に出来るほどの戦闘能力を備えておるのだからな。」

「「ああ。」」

二人はそう言うと、ルキアと共に石田が待機している山の中に出来

た洞窟の方へと移動を開始し始める。

また、同じころ朝陽を外で浴びながらユーノは仕込み杖と全員分の装着具の入った鞄を横に置きながら電柱に腰かけていた。

「いよいよか・・・お？」

と、その時・・・一番最初にユーノの元にやってきたのは師匠である一護であった。

一護は既に死覇装の姿で、愛刀である斬月を腰に背負っていた。

「よう、待ったか？」

「一護さん。ナイスタイミングです♪ちょうどこちらも量産型の完成形が出来たところです。」

ユーノはそう言うと鞄の中から一個を取り出し、再度問題個所が無いかを確認する。

「よし、問題はなさそうだな。」

確認し終えると、ユーノは徐にそれを鞄の中にしまいこんだ。

「こいつがそうか？」

「ええ。三時間ほどの間、ブラッド状態のパトリオット達の力から逃れることが出来る装着具です。人数分を造るのは骨が折れましたが、何とか出来上がりです。これで、なのは達も彼らと心置きなく戦える。」

「ああ。そうだな・・・・・・お前の方はどうなんだ？」

「準備は万全♪何時だって戦えますよ！」

「ふん。なら聞く必要なかったぜ。」

一護は鼻で笑いながら、ユーノの横に立ってなのは達が到着するのを待つ。

「なのは達と連絡は？」

「もう直ぐ此処に来るはずです。恋次さん達はもうアジトの方に向われたようですね。」

「ああ・・・朝起きたときには、書置きだけして出発してたからな。多分、今頃石田と合流してるところじゃねぇか？」

一護の予想通り、恋次達三人は洞窟の入り口で待ち構えている白を基調とした滅却師の衣装に身を包んだ石田と合流を果たしていた。

石田は三人が来ると眼鏡を軽く直しながら声をかける。

「・・・やぁ、来た様だね。」

石田の姿を確認した恋次は、ふと何気なく思ったことを口にした。

「いいのか、石田。仕事ほったらかして来ても。」

「今日は元からオフの日だ。問題はないさ。今から、アジトの中に

侵入するが・・・気をつけたほうがいい。一人だけ異常に魔力と・・・それから霊力の高いパトリオットがいる。それこそ・・・僕らと対等に渡り合うだけの実力がね。」

「分かった。」

「よし、行くぞ！」

恋次は吉良・ルキア・石田の三人を引き連れて徐にアジトである洞窟の中へ進んでいった。

恋次達がアジト内に侵入したことは、すぐにパトリオットにも感知できた。

四人の気配を感じとった高円寺は表情を一変させる。

「！」

「高円寺・・・？」

疑問に思った白鴎は一度ブラッドカートリッジの補給を止め、言葉を投げかける。

「侵入者（やつら）が来る。かなりの数・・・死神のようだ。」

「「「「「「！！」」」」」」

高円寺の言葉を聞くや否や、結界を張り巡らせていた田吾作は勿論後の五人も大いに驚き戦いていた。

「莫迦な!?俺の結界を潜り抜けれるなんて!?」

自身の魔法を容易に潜り抜けて侵入してくる四人の実力・・・いや、正確には事前に結界の僅かな亀裂を見つけ出し効力法を見つけ出した石田の用意周到さと部脳であるが、それでも田吾作は狼狽するには十分だった。

そんな田吾作に向かって高円寺はこう言って来た。

「慌てるな、田吾作。お前達は、此処でブラッドカートリッジの補給をしながら大人しく待っていろ。俺が直々にお相手をしてくる。」

すると、そんな高円寺のことを不安げな表情で見つめながら銀太郎が声をかけてきた。

「気をつけてください、高円寺さん。」

「案ずるな。俺は魔導師のような軟弱で非情な連中や、死神相手に後れを取るほど脆弱ではない。お前達が退屈するような戦いは決してしないさ。ふふ・・・」

不敵な笑みを浮かべながら、高円寺は銀太郎やパトリオット五人を後に一人恋次達の迎撃に向かっていった。

その頃、なのは達の到着を待ち続けているユーノと一護であったが、ふと一護がユーノに向かってこんなことを聞いてきたのだ。

「なぁ、ユーノ。」

「?」

「・・・結局のところ、連中はその聖地って所へ行くのが目的で・・・その為に鍵となる金太郎のアックスオーガを狙ったり、扉がある遺跡を探してたってことだろ。」

「まぁ・・・そうですね。」

「だとしても、どうも俺もお前と同じように、奴らが真に魔導師に対して恨みを持っているとは思えねぇな。」

「一護さん・・・」

「お前の話じゃ、リベルのパトリオットはその昔ミッドとベルカの魔導師によって命を奪われた者の遺族が創り上げた復讐の産物。だけど、どうしてかよくわかんねぇけど・・・連中は恨みを晴らすなんて考えはこれっぽっちも持っちゃいない気がしてさ・・・・・・連中はただ、自分のことを大切にしてくれるボスと一緒にいたいだけなんじゃねぇのか？」

「・・・そうなると、彼らの言っているボスは案外・・・彼らと同じ中学生くらいの人物なんでしょうか？」

「かもしれねぇな。あいつらが抱いているボスへの忠義と愛着がどれ程のものかは分からねぇけど・・・少なくとも、そいつのことを心の底から信頼してるってことは間違いないみたいだな。」

「信頼ですか・・・僕も信頼してますよ、一護さんのこと。」

「ああ。俺もてめーを信頼してるぜ。おっと、こんなこと言ったらなのはの奴に文句言われそうだな。」

「ご心配なく、一護さん♪僕となのはの絆は話がまた違いますから♪」

「ふん、成程。」

この二人の抱く師弟の絆とは、なのはや仲間たちが抱く絆とはまた違っており、特にユーノと一護の間で成り立つ絆の糸は途轍なく強固で頑丈なものであるこは言うまでもないのだ。

「ユーノ君！お待たせ！」

と、ちょうどそのときフォワードを引き連れたなのは達前線一同がユーノ達の元へ走ってきた

「なのは。みんなも来たね。」

一護は一通り周りを見渡し、全員がいることを確認すると安堵の表情を浮かべる。

「よし、これで揃ったな。ユーノ、早速あれ渡しとけ！」

「はいはい♪よいしょっと！」

ユーノは下に置いていた鞄の中から、量産型の対リベル式装着具を人数分を取り出し一人一人に手渡していき順次説明をしていった。

「説明したとおり、それは長くはもたない。せいぜい三時間かその程度だ。出来るだけ交戦は避けて、兎に角ボスであるダイシーを見つけることに専念しよう。」

「うん、分かってる。今回は、あまり大人数で行くのは返って危険だから・・・出撃は私とフェイト隊長・ユーノアドバイザーと死神代行の一護さん、それと金太郎さんの五人で行くから、フォワードの皆は現場待機ね。」

「そっちの指揮はシグナム副隊長とヴィータ副隊長だから。留守を頼んだよ。」

「「「「「はい！」」」」」

なのはとフェイトの話を聞き終えると、フォワードはいつも通りの真剣な表情で返事をし、その直後浦太郎の隣に立っていた鬼太郎が懐から何かを取り出し金太郎に投げつけた。

「おい熊、ほれ！」

鬼太郎に投げつけられたそれをキャッチした金太郎が、手の中を覗くとあったのは笹で包まれた弁当のようであった。

「鬼太郎・・・これは？」

「おにぎりだよ！」

「なぬ？」

予期せぬ鬼太郎の行動に、思わず金太郎はきょとんとしてしまう。

すると、鬼太郎が多少照れくさそうにしながら金太郎にこう言って来た。

「お前・・・図体デカイから直ぐ腹減るだろ。途中で喰えよ・・・」

その時、話を聞いていた白鳥が鬼太郎の肩に手を置きながら更に補足する。

「ゴールデンベアー、それはピーチが握ったんだぞよ。いつも反発ばっかりしているが、案外お主のことを心配して・・・――」

「う、うるせーーー！！余計なことは言うじゃねえよ！！鳥は黙ってろ！！」

鬼太郎は白鳥の話を聞くや否やその場を誤魔化すかのように白鳥の頭を両手でぐりぐりと痛めつけ、そのあまりの痛さに白鳥は涙目を浮かべる。

「いいいいい痛い、痛いぞよ！！！！何たる無礼な！！！」

そんな素直ではないが、根は非常に優しい鬼太郎のぶっきらぼうなところに思わず金太郎は顔をほころばせ、お礼を口にする。

「・・・ああ。ありがとう、鬼太郎。」

ユーノも同じ気持ちになると、徐に金太郎に手持ちのブラッドカートリッジについて尋ねる。

「金太郎。ブラッドカートリッジの充填・・・大丈夫？」

「完全に装備は整っております！」

「よし。さて、仕度も出来たことだし・・・殴りこみにいくかな。」

「ああ、行くか！」

一護がそう言うと、ユーノ・金太郎・なのは・フェイトの四人は一護の後に続く形で敵、パトリオットが潜伏している地下洞窟目掛けて徐に前進し始めた。

徐々に姿が見えなくなっていく五人の後姿を見ながら、現場指揮を任されているシグナムは鬼太郎や浦太郎達に向かってこんな事を行ってきた。

「お前達は本当にいかなくても良いのか？」

「我々の勝負は慌てずともこれからぞよ。」

「ああ。クライマックスにはまだ早いぜ！」

「それに、戦闘に関しては僕はまだ完全じゃないしね。」

そして、五人の姿を完全に見えなくなった後スバルはなのはやユーノ達が無事に帰還することを祈りながら作戦の遂行を祈るのであった。

「頑張ってくださいね・・・なのはさん・・・ユーノ先生・・・」

一方、ユーノ達が出発したのとほぼ同じころ・・・パトリオットが潜む地下洞窟では迎撃のために高円寺が秘密の部屋で怪しげに四方を蝋燭で灯しながら準備を始めていた。

高円寺は机に自身の血でリベルの魔法陣を描くと、それを皆がら不気味な笑みを浮かべる。

「では・・・・・始めるとしようか・・・・・・・」

そう言うと、高円寺は徐に自分の相棒の名を囁くように口にする。

「出でよ・・・“ギガトロン”」

召喚の掛け声とともに、地下洞窟全体に張り巡らされている高円寺のデバイス、ギガトロンの魔法が効果を発揮し始める。

そんな事など、全く知る由もない筈の洞窟内に侵入していた恋次達一向は、細心の注意を払いながら薄暗い洞窟の奥へと進んでいく。

すると、その時不意に余人の耳に唸るような物音が入り込んでくる。

四人は自然と足を止め、その物音に耳を傾ける。

「何だ?」

「あまり良い感じは・・・しないようだね・・・」

音はその後も徐々に洞窟内部に反響していき、不気味な雰囲気を一層醸し出す。

すると、恋次が全員に向かって前進することを促す。

「行くぞ。」

全員は恋次の言葉に促され、再び洞窟の奥へと足を進めていく。

暫く前へと進めたところで、全員は高さ五メートルはある巨大な六つのオブジェに目を奪われた。

「ん？何だ・・・」

オブジェの細部には不気味な目玉が装飾されており、誰もがそれに不快感を覚えるが実はそれが高円寺のデバイスであるギガトロンが憑依したものとは思いしない。

目玉を通して別室で見ていた高円寺は、不敵な笑みを浮かべながらこんなことを呟く。

「死神三名と滅却師の一名御一行・・・死出の旅路にご案内・・・」

そう言うと、高円寺は指を鳴らしてリベルの魔法陣の内部に何かを浮かび上がられる。

「先ずは小手調べといくか・・・」

陣の内部に浮かび上がってくる三叉矛は一体何をもたらすのであろうか？

一方の恋次達は、自分たちの目の前にある謎のオブジェに疑念を抱いていた。

「何でこんなものが？」

「あまりいい趣味じゃないね。パトリオットと言うのは美的センス

がかなり欠落しているようだ。」

「見てくれ。こっちにも同じものが！？」

「ただの飾りではないのか？」

「・・・そうだな。先を急ぐぜ。」

ルキアの言葉で飾りだと自分で納得ずけた恋次達は周囲を警戒しつつ先に進むことを決意し、再び前と足を運んだ。

と、歩き始めた直後・・・それは突然に起こった。

「疾(し)っ！」

石田の背後に佇むオブジェの下から唐突に巨大な三叉矛が飛び出し、それに気づいた石田が衣装の下に隠していた『魂を切り裂くもの（ゼーレシュナイダー）』を取り出し、防御する。

「「「な！」」」

後ろからの奇襲に恋次達も気づき、思わず冷や汗をかく。

「三人とも、油断しすぎだよ。」

石田は冷笑を浮かべながらも、オブジェの下から不規則に飛び出してくる三叉矛をゼーレシュナイダーで防御する。

「石田！」

ルキアが石田の心配をしていると、ルキア自身も目の前のオブジェの下から飛び出してきた三叉矛に勘付き、刀を抜いて切っ先部分を切り落とす。

「くっ！」

恋次と吉良も不意に現れる三叉矛に苦戦しながら、互いに背中を預け刀を構える。

「どっから現れやがった！？」

ルキアと石田も合流し、四人はお互いに背中を預けながら四方を警戒する。

そんな四人の様子を先ほどからずっと監視している高円寺の口元が思わず緩む。

「・・・ふん・・・」

高円寺はギガトロンを操り、恋次達を囲みながら三叉矛の攻撃を続ける。

攻撃に対処していた恋次達であったが、埒が明かないと判断し苦渋の決断をする。

「囲まれた！分かれよう！」

「そうだね。そのほうが良い。」

石田はそう言うと、ルキアとは正反対の方向に向かって走り出していく。

「行くぜ、吉良！」

恋次と吉良は二人そろって別な場所へと回避していった。

しかし、そんな四人の行動をまるで予測していたかのように高円寺はほくそ笑みながら魔法陣の中央に再び別の何かを浮かび上がらせる。

「ふふ・・・思う壺だな・・・」

恋次達とは別れ、ルキアは一人遺跡の中を走り回っていく。

暫く走り回ると、ルキアは柱で覆われている狭い空間へと迷い込んでいった。

いつ先ほどのような奇襲があるかも知れまいと思いつつ、細心の注意を払いながらルキアは奥へと進んでいく。

その時、前方の柱の陰に潜んでいる敵と思わしき気配にルキアは察知し、すかさず斬魄刀を解放する。

「舞え、袖白雪。」

ルキアは袖白雪を刀に刺しながら、白漣を発動させる。

「次の舞・白漣！」

勢いよく噴射される凍結の冷気が前方の柱を破壊し、凍結させていくが・・・敵と思わしきものは何処にも見受けられなかったのだ。

「!?何も無い・・・だと・・・」

腑に落ちないままでいるルキアだったが、そんなルキアに対して高円寺はついにその牙を向けてきたのである。

「ふん。」

一先ず先を進んでいくことを決めたルキアであったが、前進し続けていたその直後・・・頭上からつり天井が出現し、落ちそうになってきた。

「なっ!?」

ルキアがそれに気づいて咄嗟に避けたが、それこそが高円寺の狙い。

高円寺は陣の内部にバインドと思われるものを浮かび上がらせ、ルキアの体を上下から文字通り絡め取る。

「ぐ・・・ごおおお!!!!」

バインドによって天井に吊るし上げられるルキア。

ルキアは何とかしてこの状況を打破しようと、必死に腰の刀に手を伸ばしバインドを断ち切ることが出来た。

その衝撃で、床に激突したルキアであったが高円寺はそんなルキアの背後から最初に襲った三叉矛を呼び出し襲撃をかける。

「は！」

気づいたルキアであったが、時すでに遅し。

高円寺はルキアを仕留めたことをギガトロンから伝えられ、不敵な笑みを浮かべる。

「まず一人・・・ふふふふふ・・・ふふふふふはははは！！！」

同じころ、別な道を進んでいた恋次と吉良であったがそんな二人の前に夥しい数の謎の物体が現れ二人の行く手を阻む。

「「！」」

謎の物体は二人の周囲を囲みながら、不気味な目玉を見せながら睨み付けてくる。

二人はそんな物体の動きに警戒しながら脱出方法を模索していると、吉良が抜け道を見つけ直ぐに恋次を誘導する。

「こっちに！」

吉良と恋次は抜け道を通っていき、謎の物体も二人を追って後ろから追尾してくる。

抜け道を走り抜けていた二人であったが、先に走っていた吉良が目の前のオブジェに道を阻まれてしまう。

「まずい、行き止まりか！？」

恋次は一先ず後ろの敵を始末することに専念しようと、その場に立ち止まり刀を振り回す。

「でやあ！！」

吉良も恋次と同じように目の前の物体を切り捨てようと刀を抜こうとした瞬間、不意に吉良の目の前のオブジェの下から巨大な腕が飛び出し、吉良の腹部に重い一撃を与える。

「ぐおおお！！！」

吉良の異変に気付いた恋次が、壁に激突した吉良の安否を気遣う。

「吉良！」

と、その時。

恋次の周囲を飛んでいた謎の物体が集まり、纏まった目玉から黒い物質を発生させそのまま恋次の体を金縛りにあったかのように身動きをとれなくする。

「ぬおあ！！？？」

恋次の悲鳴が聞こえると、地面に横たわっていた吉良はその諸悪の根源を確かめようと目を向けた。

するとどうだろう・・・吉良は今まで自分が見てきたどの魔法とも違う、全く見覚えのない特殊な術によって動きを封じられた恋次がそこにはいたのだから。

「く・・・くそ！！！！どうなってやがる！！！」

「（なんだこの魔法は・・・！？今までのパトリオットの魔法とも違う・・・これだけが、明らかに異質すぎる・・・！？）」

そう推測する吉良を余所に、恋次は必死に抵抗をしながら自分を縛り付ける原因を作っている目玉目掛けて鬼道を放つ。

「く！！破動の四『白雷』！」

目玉を破壊すると、恋次の体は自由になり拘束から解放される。

それを別室で見ていた高円寺は軽く舌打ちをしながら次なる手を打つ。

「ちっ。ならば・・・これでどうだ。」

そう言うと、高円寺は指を鳴らして陣の内部に人の腕を浮かび上がらせる。

体の自由を取り戻した恋次は直ぐに、満身創痍の吉良の元へと駆け寄った。

その時だった。

破壊された筈の目玉が再び寄り集まり、巨大な一つの腕となって天井の岩場目掛けて伸びていった。

「「！」」

岩場に激突すると、徐に輝が入り天井が崩落しようとするのが一目で判った。

「ノッキングといこうか？」

高円寺はギガトロン指示を送ると、更に天井の岩場を崩落させようと促した。

無理やり岩場を動かした結果、天井が崩壊をし始め岩が落ち始めた。

「天井が崩れるぞ！！」

恋次は急いで吉良を方で担ぎながら逃げようとしたが、手負いの吉良を担ぎながらの移動は岩が崩れる速さには敵わず、遺跡の内部に叫び声だけが響いた。

「「わあああああああ！！！！！！！」」

天井が崩落し、恋次と吉良は遺跡の中に生き埋めとなってしまう。

ルキアに続き二人を始末したことに対して、高円寺の心は大いに高揚する。

「ふふふふ・・・あと一人・・・ふふふふふ」

また、別の場所では石田が銀嶺弧雀を解放させながら周囲を飛び交う恋次達を襲ってきた無数の目玉の物体と対峙していた。

「それにしても、数が多い。倒しても倒しても、僕の銀嶺弧雀の連

射段数を超える速度で増殖していく・・・思った以上に相性の悪い相手だ。」

そんなことをぼやきながら、石田は襲い掛かってくる目玉を銀嶺弧雀の矢で次々に撃ち落していく。

この石田の戦う姿を見ていた高円寺は笑みを浮かべると、ふとこんなことを呟く。

「苦戦しているようだな、滅却師。ギガトロン、お前の力の一端・・・見せてやろうじゃないか。」

高円寺はそう言うと、例のごとく指を鳴らして陣に何かを浮かび上がらせる。

すると、石田の周囲を飛んでいた目玉が一つに集まり巨大な腕へと変貌を遂げる。

「は！」

石田は巨大な腕の攻撃を飛簾脚で回避していくと、矢を頭上から無数の雨のように降らせる滅却師固有の技を発動させる。

「ちっ！“光の雨（リヒト・レーゲン）”！！」

降り注ぐ弧雀の矢の雨によって、巨大な腕は一度姿を消すが再び再生すると石田の体を捻り潰すかのように握りしめる。

「ぐおおおお！！！！！」

体に走り激痛に悶絶する石田は、そのまま岩場に激突し更に苦しみを与えられる。

「ぐあああああああああああああ！！！！！！！」

そんな石田の聞くに堪えない叫び声を別室で聞きながら、高円寺は不敵な笑みを浮かべながら高笑いをする。

「ふふふふ・・・ふふふふふ・・・ははははははははは！！！！！！！」

一方、漸く洞窟の入り口へと到着したユーノ達五人は内部から反響して聞こえてくる不気味な物音に耳を傾けながら、冷や汗をかいていた。

「何ですかこの音は！？」

「既に始まってるみたいですね。」

すると、そんな金太郎やフェイト、更にはユーノとなのはに向かって一護が出発を促す。

「行くぜ。」

「「「「はい。」」」」

五人は入り口に入ると、徐に奥の方へと前進していく。

ユーノは恋次達の安否を気遣いながら、奥に潜んでいると思われる

邪な何かに一抹の不安を抱える。

「（恋次さん・・・みなさん・・・無事でいれくれ。）」

また、高円寺が恋次達を迎撃していることは奥でブラッドカートリッジを補充しているオーリーや他のパトリオット達の耳にもしっかり届いていた。

「結構派手に暴れてるようだな。」

「ま、確かにこれなら退屈はしないで済むかな?」

すると、銀太郎が再び胸を押さえながら苦しみ出したのだ。

「ぐ・・・!」

「銀太郎・・・!」

「銀太郎!!」

オーリー達は直ぐに銀太郎の元に駆け寄り、銀太郎の容体を気遣う。

銀太郎は心配をかけまいと、作り笑いでその場を取り繕うとする。

「大丈夫・・・これぐらいの痛み・・・!!」

口では表現できないような激痛に耐えながら、必死で笑顔を作る銀太郎を見て思わず白鴎が涙目を浮かべる。

「だけど!!早くしないと!!何やってるんだよ、高円寺の野郎!

！悠長に相手してたら・・・！」

「高円寺さんを責めないでよ、白鴎。僕なら平気だよ。」

「銀太郎・・・お前・・・」

「焦らなくても大丈夫・・・もう直ぐだ・・・もう直ぐ僕らの楽園が蘇る。そして、そこで僕らはずっと静かに暮らすんだ。」

銀太郎は胸の痛みを必死で抑えながら、不安げな表情を見せる白鴎達に向かって拳を強く握りしめ決意の言葉を口にする。

「・・・そこでの役目を成し遂げるまで・・・みんなと笑って暮らすために・・・僕は・・・僕は何としても生き残って見せる！！」

パトリオット達と銀太郎が掲げる大いなる夢・・・――――

そんなパトリオットを迎撃するため地下洞窟に乗り込んだユーノ達。

この先、彼らに待ち受けるものとは何か・・・――――

決戦の火ぶたは切って落とされた。

絵は出来ていますが、色塗りがまだなので待ってください。

教えて、ユーノ先生!

ユ「今日は、僕の通り名である『翡翠の魔導死神』の由来についてね♪」

な「そう言えば、本編では全然語られてなかったよね。いつの間にか浸透してたし、教えて教えて!」

ユ「それでは、教えちゃいましょう♪これは、魔導虚事件を境にして管理局上層部の誰かが僕の格好と発動した技を見て、そう口にしたのがいつの間にか広がり・・・現在では次元世界各地の至る所で使われてしまっているんだ。」

一「翡翠って言うと、何か堅苦しく聞こえるけど・・・英語だと何て言うんだ?」

な「私はエースオブエースって言われてるけど・・・ユーノ君の呼称をかっこよく英語で言えば・・・う～ん・・・と・・・?」

ユ「そうだな・・・『ザマジックリッパーオブザジェイド』とか・・・かな?」

な・一「何か今いちピンとこないね（な）」

ユ「うん。僕もそう思った・・・」

魔導師図鑑ハイパー!

敵のアジトに到着したユーノ達一向が潜入しようとする際・・・―
―

一「行くぜ！」

金「お待ちくだされ！」

一「何だ金太郎？」

金「いえ・・・戦いの前にスタミナ補給をしておきたいのですが。」

そう言って懐から渡されたおにぎりの包みを取り出す金太郎。

ユ「お、さっき貰った弁当だね♪」

一「たく、この時間のねぇときに！」

金「いいではないですか。腹が減っては戦は出来ませぬ。」

そう言いながら、おにぎりをかぶりつく。

その瞬間、金太郎は顔を赤面させて口から炎を吐いて転げまわる。

金「ぼあああああ！！！！！！何ですかこれは！！！！！」

なのはが手にとって中身を確認してみると・・・

な「これは・・・激辛唐辛子が入ってるよ！？」

フェ「あはは・・・鬼太郎さんだよね、こんなことするのって・・・・」

金太郎、あまりの辛さにダウン。

そんな金太郎を哀れに思いながらユーノと一護は声を揃えて・・・

ユ・一「最後までそれかよ。」

潜入！　迎撃の五人（前書き）

銀「僕は幼いころからずっと一人ぼっちだったから・・・病気とかで死んでしまうこととかはそんなに怖くなかった・・・だけど、今は違う。守りたい日々があって・・・大切に幸せにしてあげたいみんながいる。みんなのために・・・僕は生きていよう。笑顔でいよう。強くいよう。そう思った・・・僕はみんなのボスだから・・・」

ユ「ユーノ・スクライア外伝　パトリオット篇・・・・・・始まります」

潜入！　迎撃の五人

＞ｉ１８７５２―７０９＜

ユーノ・スクライア外伝・・・・・・これまでのハイライト。

謎の魔法集団、パトリオットを追跡するユーノ達機動六課と死神部隊。

そして、ついにアジトを発見した恋次達が地下洞窟に侵入する。

そこで待ち構えるパトリオット、高円寺虎彦。

高「それじゃあ、始めるとするか。」

ル「く！」

ル「！！」

高円寺の仕掛ける罠に次々に襲われる死神達。

吉「ぐおおおお！！！」

恋「吉良！」

恋・吉「「わあああああああ！！！！！！」」

石「ぐおおおお！！！！！！」

高「ふふふふ・・・ふふふふふ・・・ははははははははは！！！！！！！」

到着したユーノ達も、不安を隠しきれない様子となる。

金「何ですかこの音は！？」

フ「既に始まってるみたいですね。」

一「行くぜ。」

全「「「「「はい。」」」」」

ユーノ達が洞窟内部へ侵入を開始し始めたその頃、アクトン内部では待機中のスバル達フォワード一同が作戦遂行を祈りつつ、五人の帰還を信じていた。

「なのはさん達・・・・・・大丈夫かな？」

「相手はフェイトさんや浦太郎さんを追い詰めるほどの強敵ですから・・・簡単にはいかないと思いますけど。」

「でも、だからってなのはさん達がやられるとは思わないわね。」

「そうね。ユーノ先生や一護さん、それに金太郎さんもついてることだし。今は信じて帰りを待ちましょう。」

「うん！そうだね。」

ティアナやギンガの言葉を聞いて、スバルも元気を取り戻したらしく今はただ信じて帰りを待つことに専念しようと心に決めるのであ

った。

一方、洞窟内部へと侵入した五人はと言うと慎重に足を進めながら、パトリオットの気配を辿ろうとしていた。

「どうだ、ユーノ。パトリオットの気配は？」

一護がそう言うと、隣に立つユーノは難しい表情を浮かべながら徐に答える。

「・・・霊子と魔力がそれぞれに拡散して、特定が掴めないですね。この先に居ることは間違いないと思うんですが、詳しい場所の探索まではいかないですね。それにこの辺一帯はどうも大気中の魔法粒子と霊子がイオン化して溶け合ってるんです。この洞窟を発見するのに時間がかかったのも多分その所為でしょう。」

「成程ね。」

「道理で捜索が思った以上に難航してたって訳か・・・」

ユーノの話を聞いていたなのはとフェイトも納得した様子を見せる。

「先を急ぐぞ。」

一護の掛け声とともに、五人は更に奥へ奥へと進んでいく。

壁には蝋燭が所々に灯っており、不気味な雰囲気を漂わせながら五人を妖気あふれる世界へとまるで導いているかのように思えた。

「ルキアさん達、大丈夫かな？」

「嫌な気配がするね。」

そんな不安を抱えるなのはとフェイトに向かって、先頭を歩く一護が背中越しに話しかける。

「仮にも隊長格一人と副隊長格が二人・・・それと石田だっているんだ。あの四人が早々簡単にやられるとは、思えねぇけどな・・・」

そう言う一護ではあったが、完全に不安がないわけではなかった。

何しろパトリオットの力は未知数であり、その中にはあの浦太郎を一瞬のうちに瀕死の状態にまで追い込んだ高円寺もいるのだから。

そんな言い知れぬ不安と恐怖を抱く五人を例の部屋で監視していた高円寺はと言うと、奥へと入り込んでくるユーノ達を見つけると、不敵な笑みを浮かべ迎撃の準備をする。

「ふ～～～次の獲物の登場だな。いいだろう・・・」

高円寺は指先を噛んで血を出すと、その血を使って先ほどと同じリベルの魔法陣を書きながら相棒であるギガトロンに声をかける。

「行けるか、ギガトロン？」

〈Ａｌｌ　ｒｉｇｈｔ．Ｎｏ　ｐｒｏｂｌｅｍ（当たり前だ。問題ない。）〉

「ふ。結構だ・・・――それじゃあ。」

高円寺はそう言うと、書き直した陣の内部に何かを浮かび上がらせる。

すると、その瞬間遺跡の奥へと入り込んでいたユーノ達五人の目の前に夥しい数の目玉の物体が現れたのであった。

「「「「「なっ！？」」」」」

頭上を舞うかのように現れる目玉の物体が、五人の行く手を阻む。

「あれは・・・？」

「予感的中。」

なのはとフェイトはデバイスを取り出し、バリアジャケットを構築させ臨戦態勢に入る。

「ちっ！」

「出てきましたか！」

ユーノと一護、金太郎もそれぞれに斬魄刀とアックスオーガを取り出し襲撃に備えて武器を構える。

このとき、既に金太郎はブラッド状態たる金色の甲冑に身を包んでいた。

五人が身構えた瞬間、飛びかかってくる夥しい数の目玉。

ユーノ達はそれらを如何にか退けていくが、流石に数が膨大であっ

たがためにキリがないと判断し、奥へと逃げることにした。

「構ってたらキリがない。逃げましょう！」

ユーノの指示に従い奥へと逃げる五人。

そして、奥へと足を進めた瞬間・・・五人の目の前に飛び込んできたのは予想もしなかったほど巨大な空間と地下都市であった。

「お！？何だ此処は・・・？」

「・・・遺跡のようですね・・・古代の地下都市と言ったところです。」

「こんな処に秘密の隠れ家を造っていたとは・・・リベルの魔導師は古くから相当技術的に高い者達のようですね。」

広大な地下都市を見渡しながら、パトリオット達が潜伏していると思われる最深部へと足を運んでいたユーノ達だったが、その時・・・なのはがユーノに向かって話しかけてきた。

「ユーノ君、あれ！！」

ユーノを含めた四人が振り返ってみた矢先、頭上には先ほど振り切ったはずの夥しい目玉の大軍が先回りをして待ち構えていたのだった。

数に物を言わせて襲い掛かってくる目玉を見た一護は、斬月を取り出し月牙天衝を放つ。

「ちっ！月牙天衝！！！」

月牙天衝が決まり、大量の目玉がそこで消えていく。

一護に触発されたフェイトや金太郎も装着具を取り付けて、続けざまに攻撃を開始する。

「ハーケンセイバー！！」

「ダイナミックスラッシュ！」

ハーケンセイバーと金太郎の直撃魔法であるダイナミックスラッシュで更に数を減らしていく目玉の大軍を、今度はなのはとユーノの技が飛び交う。

「スターダスト・ブラスター！」

「破道の三十一　『赤火砲（しゃっかほう）』！」

二人の砲撃と鬼道が数百居たと思われる目玉を一瞬にして無に帰らす。

しかし、倒してもすぐさま超速の再生能力で復活してしまい、結局はプラスマイナスゼロの状態になってしまう。

それでも、一護は攻撃をやめなかった。

「つらあああああ！！！」

斬月を使った斬撃で必死に数を減らそうとする一護であったが、そ

んな一護の隙をついた目玉の群れが一気に一護に襲いかかる。

「！」

これには流石の一護も危ないと感じたが、そんな一護を守ったのが弟子であり信頼おける男のユーノであった。

ユーノはすかさず一護の目の前に詠唱破棄で樹牢門を発動させる。

「縛道の七十　『樹牢門』」

前方に現れた寄り集まった大樹の幹に守られた一護は、ユーノの方へと振り返りお礼の言葉をかける。

「サンキュウーな、ユーノ！」

「イェイ！」

二人は何故か妙にテンションの上がった態度で、お互いに指を立てて喜んだ。

「いけませぬ！！！！」

金太郎はアックスオーガを振り続け、その後も敵を打ち砕いていく。

「はあああああ！！！！！」

フェイトもこの前のような失態を二度としまいと、挽回する意気込みでバルディッシュを扱い敵を撃ち落すが、やはり数では圧倒的に敵方が有利であることに変わりはない。

「くそ！何て数だ！！」

「潰して潰してもキリがないですね。」

すると、そんな金太郎やフェイトに向かってユーノがこんな提案をしてきた。

「このままじゃ埒が明かない。もっと狭い通路に誘き寄せて、全員で攻撃しよう。」

話を聞いていた一護もなのはも、ユーノの考えに賛成した。

「ああ！」

「うん。わかっ・・・え！？」

と、その時・・・・・なのははユーノの背後にあった巨大な岩場から何かが動いているのをその目ではっきりと捕えることが出来た。

「あれは・・・・・・！？」

「なのは・・・どうしたの？」

神妙な顔を浮かべる恋人であり最も大切な女性であるなのはに声をかけるユーノであったが、その瞬間ユーノの背後から唐突に軽くユーノを捻り潰せるほど巨大な腕が出現し奇襲をかけてきた。

「ユーノ君！後ろ！！」

「！」

なのはに言われたことで事の重大さに気づいたユーノは、襲い掛かってきた巨大な腕の攻撃を皮一枚で躱して、空中に浮遊する。

「ユーノ！」

「店長！」

ユーノの無事を気遣う事実上の師である一護と、ユーノに絶対の服従を示す右腕である金太郎は思わず声を上げる。

「ちっ。不意打ちを入れられるとは・・・僕もまだまだだな。」

「よかった。無事みたい。」

ユーノが無事であることを確認したなのはやフェイトは思わず安堵の表情を浮かべる。

一方の金太郎はユーノに攻撃をしてきた巨大な腕に憤りを覚える。

「この！！！店長を狙うとは何たる不届き者！！！！」

金太郎は巨大な腕を破壊するため、単身アックスオーガを片手に切りかかっていく。

すると、嫌な気配を感じた一護は金太郎に警告をする。

「金太郎！危ねえ！！」

すると、一護の予感が的中したのか・・・金太郎の四方から障害物の下より現れた刀剣の形をした腕が金太郎を攻撃しようとする。

「な、何ですと!?これでは防御が間に合わん!!」

「金太郎!!」

防御の間に合わない金太郎はどうすることもできない状態であったが、それを助けようと一護は瞬歩で金太郎に近づき四方からくる刀剣の腕を斬月で斬りおとす。

そして、金太郎を退かして自分がユーノを襲った刀剣の形にいつの間にか変化した腕と対峙し、刃を斬月で食い止めていた。

「く・・・!!こ・・・この!!」

一護と刀剣の腕による斬り合いは熾烈を極めたが、その直後一護の背後から近づくもう一つの影に気づいたユーノが一護に向かって叫び声をあげる。

「一護さん!後ろ!!」

「!」

ユーノに言われて後ろを振り返った瞬間、一護の背後にはチェーンソーのような形に変化した腕が待ち構えていたので、一護も大いに驚いていた。

「何!!!!!!!?????」

別室でギガトロンを巧みに操っていた高円寺は勝利を確信し、一護に止めを加えようとする。

「これまでだ。」

そう言いながら指を鳴らすと、チェーンソーの腕が身動きの取れない一護目掛けて襲い掛かってきた。

「ひえええええ！！！！！！」

一護も情けない叫び声をあげて死を覚悟したが、その時・・・高円寺も一護も目の前の光景に衝撃を受けた。

「な！」

勝利を確信していた高円寺の期待を裏切るかのように、逸早く一護の元に駆けつけたユーノが十八番のラウンドシールドを展開させて一護を守っていた。

「ユーノ！！」

「ナイスでございます、店長！」

「なのは！今だ！！」

ユーノはそう言うと、エクシードモードになったなのはに指示を仰いで砲撃を促した。

なのはは狙いをユーノの前方の腕だけに集中させ、エクセリオンバスターを放つ。

「エクセリオン・・・バスター！！！」

なのはが放つエクセリオンバスターによって、チェーンソーの腕は見事なまでに破壊されその場から姿を消した。

しかし、また違う形に再生する腕が幾度となく五人を襲ってくるが、ユーノ達は決して怯むことなく攻撃を続けるのであった。

「おおおおおお！！！！！」

一護は自分と対峙していた刀剣の腕を倒すべく前に向かって走り出す。

一護を助けるためにフェイトも加勢し、二人は一気に畳みかけようとした。

「「はあああああああ！！！！！！」」

それを見ていた高円寺は二人の行動を阻むべく、手を変えて事態にあたる。

「そうはいかん！」

高円寺を指鳴らすと、陣の内部にバインドを浮かびあがらせる。

するとどうだろう・・・一護とフェイトの前で対峙していた刀剣が突如としてバインドの形へと変貌し、二人は不意を突かれ捕えられてしまった。

「な、何だこれ!?」

「身体が動かない!!」

複雑に体に絡まってしまったバインドを解こうとしても、もがけばもがくだけバインドは絡まりいっこうに解けようとしない。

二人の危機を襲い掛かる目玉を振り払いながら見ていたなのはやユーノと金太郎は顔をひきつり焦りをあらわにする。

「フェイトちゃん!一護さん!」

「おのれ!!」

「早く何とかしないといけないのに、こいつら!」

二人を助け出そうとするも、ユーノ達を阻む無数の目玉。

一護とフェイトはバインドに絡め取られたまま芋づる式に腕が現れている場所まで引き寄せられていく。

それを見ていたなのははこの奇妙な魔法に違和感すら覚えた。

「何なの・・・あの魔法は!?一体どこから!?」

徐々に徐々にと物体に引き寄せられる抵抗も余儀なくされた一護とフェイトはそれでもバインドを解こうとするも、やはりそれを解くことは出来ないでいた。

「くっ!!この!!!!離れろ!!」

「このままじゃ・・・！！」

二人の様子を見ていた三人の胸に、一層焦りが募っていく。

「マズイですぞ、これは！！」

「このままじゃ、あの物体の中に引きずられちゃう！」

「こいつらを片づけようにも、数が多すぎる・・・！！」

ユーノ達はそんな事を口にしながら、目の前を飛び交う無数の目玉の大軍に手を焼いていた。

一護の方も、この自分の状況は流石に洒落にならないとばかりに悔しさがにじみ出していた。

「く・・・そ・・・！！」

一方で、そんなユーノ達の帰還を信じて待機していたフォワードとシグナム達であったが、何の前触れもなくシグナムの髪留め用のリボンが切れて地面に落ちてしまう。

「シグナム副隊長！髪留めが！？」

「何？」

エリオの言葉を聞いて地面を見てみると、そこには糸が解れて千切れてしまったシグナムの黄色のリボンがそこにあった。

シグナムもそうだが、傍にいたアギトやヴィータも多少の不吉さを感じる。

「切れたのか・・・何の前触れもなく・・・こんなことが起こるとは・・・」

「不吉だな。何か悪いことでも起こってるのか？」

「縁起でもないことは言わないで下さいよ、アギト！」

アギトの不用意な発言に対してリィンは思わず叱咤する。

「だってよ・・・！」

そんなフォワードたちを見ながら、はやてはなのは達が無事であることをただただ祈りばかりであった。

「（なのはちゃん・・・みんな・・・無事でいてな・・・）」

しかし、はやての祈りとは別に現在ユーノ達五人は窮地の状態であった。

高円寺のバインドに絡め取られた一護とフェイトは体を引きづり込まれながら、体から自らの力が吸収されていることに気づく。

「こいつ、霊力も魔力もみんな吸収してやがる!?体に力が・・・入らねぇ・・・！！」

「く・・・！！魔力が・・・奪われる・・・！！」

もがき苦しむ一護達と、有象無象に増え続ける無数の目玉に大苦戦を強いられるユーノやなのは・金太郎の三人。

そんな苦しむ五人のこと別室で覗き見ながら、高円寺はほくそ笑み決着をつけようとする。

「さて・・・そろそろ終わりにしようか？」

高円寺はギガトロンに止めを刺すように指示を送ると、それによってギガトロンも一護達を引く力を最大限に発揮させる。

どうしようもなくただただ引きずり込まれるだけの一護とフェイトは最早絶対絶命。

「う・・・！！」

「く・・・くそ！！」

そんな二人を見たユーノやなのはは、非常に焦った表情を浮かべる。

「一護さん！」

「フェイトちゃん！」

「くそ！！いい加減に・・・！？」

金太郎が仮面の下で顔を強張らせていたその時、予期せぬことが起こった。

「次の舞・白漣！」

一護達二人の目の前に突如として冷気が噴射され、バインドで絡め取られていた一護とフェイトは氷漬けになったバインドからどうにか抜け出すことに成功し、技の出所を確認するとそこにいたのは・・・――――

「あ、あなたは・・・・・・」

フェイトがそう口にすると、瞳に映ってきたのは満身創痍姿のルキアであった。

「ルキアさん！」

ルキアの思わぬ登場には、一護達も安堵の表情を浮かべると同時にそんなボロボロの状態にもかかわらず自分たちを助けに来た行為に感謝の念を抱く。

「済まぬ。遅くなった」

ルキアの技によって氷漬けになった高円寺のバインドは、自力で氷を砕くと一度姿を消して見えなくなる。

そして、再び岩場の下から巨大な腕となって一護達の前に現れる。

「まだ来るぞ！」

一護とフェイトが武器を身構えて事態に対処しようとすると、攻略法を知ったルキアは同じ轍を踏まぬようにすかさず攻撃に転ずる。

「そうはさせぬ！」

ルキアはそういうと、袖白雪を使って巨大な腕が出現している岩場を切り崩す。

すると、岩場が崩れたことにより出口がなくなり巨大な腕は消滅していった。

「これは・・・！？」

大いに驚くフェイトやなのは達に向かって、ルキアは次のような指示を出す。

「こやつは、周りの障害物から実態を作り出す能力を秘めているのだ！ここら一帯の障害物を一つ残らず叩き潰すのだ！」

「了解！」

ユーノはルキアの指示を聞き入れると、晩翠を解放して周囲の岩場と言う岩場を翡翠斬で粉々に砕いていく。

「輝け、晩翠！」

ユーノを手伝うために、なのはと金太郎も相棒を使っての攻撃に乗り出し障害物を一気に破壊していく。

「グレイトリッパー！！！」

「ディバンイバスター！！」

三人の行動により、周囲の障害物はすべて破壊され跡形もなくなる

とそれを好機と見た一護が鋭い目つきで頭上に浮かぶ無数の目玉に狙いを定める。

「よし！あとはこいつ等だ！！」

一護はそう言うと、斬月を大きく振りかぶって最大規模の月牙を放ち、フェイトも魔力地の限界まで高めたサンダーブレイドで目玉の軍勢を攻撃する。

「月牙天衝！！」

「サンダーブレイド！」

二人の攻撃によって、周囲に浮かんでいた目玉はすべて破壊されものの見事に一掃されたのであった。

予期せぬ事態に別室で見ていた高円寺は多少の苛立ちを覚えた。

「・・・ふん・・・死に損ないが。」

高円寺の机に描かれた魔法陣を通して、ユーノ達五人の様子が窺える。

ユーノ達は負傷したルキアの近くまで行くと、ルキアの安否を気遣い自分たちも受けたダメージがどれほどのものかを確認していているのが分かった。

すると、高円寺もそんな六人の状態を改めて見直した後、ほくそ笑み一度血の魔法陣を拭き取ったのであった。

「・・・まぁ、いい。連中もある程度ダメージは受けたことだし、まだ先はあるさ。」

高円寺が作戦を練り直している間、六人は一度その場に座り込み円になってルキアの傷の具合や全員の体の調子を確認していた。

「ルキア。無事だったのか!?」

一護がルキアに心配そうな声でそう尋ねると、ルキアは苦笑いを浮かべながら答える。

「ああ・・・何とかな。しかし・・・恋次達とは別れてしまったため、あやつらのことまでは分からぬ。霊子が拡散して魄動がはっきりとは掴めぬだ。」

「だろうな。恋次達のことだ、多分生きているとは思うが・・・・・それよりも先ずは連中のいる場所に向わねぇと。」

「みんな、まだ動けるかい?」

ユーノが全員にそう尋ねると、なのはやフェイト、金太郎の三人は笑顔で大丈夫であることを主張する。

「私は全然。大丈夫だよ。」

「私も。多少魔力が奪われたけど・・・これくらいなら平気。」

「行きましょう、店長。」

「よし・・・じゃあ出・・・」

と、ユーノ達が奥へと向かおうとしたその時・・・洞窟全体から今回の襲撃者である高円寺の声が聞こえてきた。

『聞こえているか？』

「「「「「「！？」」」」」」

高円寺の声に耳を傾けるユーノ達。

高円寺は警戒心をむき出しにする六人に向かってさらに続ける。

『俺の名は高円寺虎彦。パトリオットだ。デバイスの名前はギガトロン。以後、お見知り置きを。』

「（高円寺!?浦太郎を襲撃した・・・!?）」

「てめぇ!!何のつもりだ!?」

高円寺のふざけた挑発に激怒する一護であったが、高円寺は至って冷静な態度で独談を始める

「まぁ俺の話を聞いてくれよ。我々は現在、リベルの魔導師の誇りを取り戻すため聖地への扉を開こうとしている。パトリオットの聖地には常識では計り知れない絶対的な力が存在する・・・・・そして力を手に入れれば、全ての誇りを取り戻すと同時に、何千年にも渡って苦しみ続けたリベルの悲しき因果を解き放ち、魔導師を一人残らず根絶できるのだ。」

「魔導師を一人残らず・・・根絶!?」

「どうしてそんなことを！？」

なのはとフェイトが高円寺の言動に思わず声が荒げるが、そんな二人に高円寺はこう言って来た。

『時空管理局の魔導師には決して分からないだろう。いや、リベルの魔導師でもないものが、我らの受けてきた辛い過去を理解できるはずも無いか。』

「くっ！」

「自らの罪を省みようとせず、血で血を争いながら貴様ら魔導師は我々の同胞や家族を悉く殺していった。だからこそ、リベルの魔導師は独自に研究を重ねミッド式とベルカ式の魔法をも打ち砕く力を手に入れた。しかしながら、それでも俺達は尚悲しいんだ。我々は静かに暮らしたいんだ。ただ何事も無く平穏に暮らしたいだけなんだ。にも関わらず、我々の仲間はお前達魔導師による下らぬ勢力争いの巻き添えになり、その多くが死んでいった。」

高円寺は長い台詞を口にしながら、机の上を両手でたたき大仰な言い方で自分たちの受けた辛い過去を伝えようとする。

「大量殺戮！大量破壊！世界を守るなどと偽善を吐く魔導師の言うことなど信じられるか！我々は日陰で生き延び、毎日毎日恐怖に怯えながらいつ殺されるかもしれぬ生活をしてきたのだ！その苦しみ・・・お前達には分かりますまい！！」

と、高円寺の話を最後まで聞いたその時・・・今まで何かを押さえていたなのはが一気に自分の感情を爆発させて声を張り上げた。

「く・・・！！分かんないよ！！」

「なのは！」

なのはの大声に思わず驚いてしまうユーノ達であったが、なのははそんな高円寺の言い分に対して自分が抱く言い分を口に出してきた。

「あなた方の境遇に、同情の余地が無いわけじゃないです。でも・・・だからと言って、他人を傷つけたり、ましてや人の命を奪って良い道理なんてものはないんだよ！！」

なのははそう言いながら、これまで自分が数多く受け持ってきた様々な事件での悲しい出来事や結果などをもう一度思い返しながら、決意を新たにこう断言した。

「私は・・・・・・私の信じた道をこれからもずっと歩き続ける。そして、間違いを犯した人は、全力全開で叩きのめすだけ！」

「なのは・・・」

今も昔も変わらぬ真っ直ぐな考え方を持つなのはに対して、ユーノは若干の安心感を抱きつつこれこそが高町なのはという女性なのだと言うことを再確認する。

すると、そんななのはの言葉を聞いた高円寺は次のように言い返し来た。

『どうにもお前達には、言葉が通じないようだな。仕方ない・・・・・体に教えてあげるさ。俺は奥で待っている。此処まで辿り着け

るかな？』

「舐めやがって！！」

高円寺の挑発的な言葉を聞いて一護は立ち上がって奥まで走り出そうとするが、それを引き留めたのはユーノの声であった。

「一護さん。」

「！？」

「僕も行きます。」

ユーノはそう言いながら徐に立ち上がると、金太郎も同行する意思を見せる。

「私もですぞ。」

「ユーノ君！？金太郎さんまで！？」

二人の言葉に衝撃を受けるなのはとフェイトであったが、ユーノはそんななのはに向かって次のように言って来た。

「なのは、ごめん。フェイトとルキアさんの怪我の手当てを頼むよ。」

「待って！私は・・・」

ユーノのその思わぬ一言を聞いた途端、フェイトは大丈夫であると言おうとするが直ぐにユーノに阻まれてしまう。

「駄目だ。」

残酷にもつきつけられたその言葉に、フェイトは自分の非力さと役に立つことが出来ないという現実に心を痛めそうになった。

「・・・ユーノ・・・」

悲痛な表情を浮かべ、ユーノの後姿を黙って見つめるフェイトにユーノは冷静にこう話してきた。

「此処からは、僕と一護さん・金太郎の三人だけで行く。フェイトだってさっきの攻撃で魔力がかなり消耗してる・・・それに、気づかれないようにしてると思ってるなら、ギガトロンとの戦闘中に受けた足の怪我はもっと上手い誤魔化し方を考えるべきだよ。」

「！」

ユーノが自分に向けて放つ冷静かつ鋭い言葉に、今まで黙っていた足の傷が疼くのをフェイトは全身で感じた。

「フェイトちゃん・・・まさか足の怪我・・・ずっと黙ってたの？」

「・・・・・ごめん・・・・・心配かけたくなったから・・・・・」

親友でありよきパートナーとして長年つきそってきたなのはの自分に向けられる一言が今のフェイトにはかなり痛かったそうな。

そんなフェイトのことを気にかけながら、ユーノはなのはに指示を

出す。

「なのは、二人の治療の序にとなんだけど・・・後ろから敵が攻めてきたら砲撃でみんなを守ってやって。」

「分かったよ。」

すると、話の区切りがひと段落ついたところでルキアが一護に話しかける。

「一護。奥には石田や恋次達もいると思うが、気をつけるんだぞ。私達も回復したら直ぐに追いかける。」

「ああ。」

了承の返事をした一護であったが、その一護の顔は意気消沈したままでいるフェイトに向けられる。

「・・・・・・」

そんなフェイトを見た一護は頬を掻きながら、慰めの言葉などを考えてみたがやはり元来そういうことがあまり得意でない一護であったため、自分の思ったままの言葉を素直にフェイトに言うことにした。

「・・・なぁ、フェイト。」

「はい？」

「あんまし落ち込まないでくれよ。ユーノはあくまで客観的に状況

を読んだうえで言ったんだろう。何もお前が戦力外だとは言っちゃいねぇ。大丈夫だ。お前のことを役立たずとは誰も思っちゃいねぇよ。少なくとも、ここにいる全員はそうさ。」

「一護さん・・・」

一護の自分に向けられた優しい言葉にフェイトの心はかなり救われた気になった。

そんなフェイトに、親友のなのはが更なる激励の言葉を投げかけた。

「フェイトちゃん。ここは治療をしてからだよ。怪我を治して、直ぐに追いつけばいいだけだよ。ね、ユーノ君。」

「うん。その通りだよ。」

二人のよき友に恵まれたフェイトは、思わず涙ぐみそうになったがここはそれを我慢して素直に湧き上がってきた笑顔だけを浮かべて元気を取り戻す。

「・・・ありがとう・・・なのは・・・ユーノ。変なこと考えちゃったな、私・・・」

仮面の下で安堵の表情を浮かべて金太郎は、ユーノと一護に奥へ進むよう促す。

「参りましょう、店長。一護殿。」

「「ああ。」」

「ユーノ君！絶対、絶対に無茶だけはしちゃダメだよ！！一護さんも、金太郎さんもなるべくなら無茶はしないようにしてください！」

これまでの経緯から、自分のことを一番に思ってくれるようになったなのはの言葉を聞いて、その期待を裏切らないようにとユーノも力のこもった返事をする。

「うん。分かってるよ、なのは。」

「心配してくれてありがとよ。よし・・・行くぜ、ユーノ！金太郎！」

「はい！」

「承知しました！」

三人は、駆け足で暗い遺跡の奥へと向かっていき、それを見ていたなのは達は三人の無事な帰還を祈り治療に専念することにした。

「ユーノ君・・・・・絶対無茶はしないでね・・・」

なのはの言葉を頭の中で反復させつつ、ユーノは出来るだけの霊圧と魔力残留を辿って一護と金太郎と共に奥へ向けて走り続けていた。

「ユーノ！方向はこっちで合ってるのか？」

「確証は出来ませんが、僕の勘はそう言ってます！」

「勘とは・・・実にお前らしくない答えだな。」

ユーノの隣を走りながら、最もユーノらしからぬ言葉に些か驚く一護であったが、当の本人や金太郎はそんな一護に向かって次のように語ってきた。

「こう見えて僕って結構行き当たりバッタリなんですよ！策が浮かばないときは、大抵勘で乗り切っているんです。」

「店長とはそう言うお方ですぞ、一護殿。」

「ああ・・・そう言やそうだったな！」

二人の言葉を聞いた一護も、昔のことを思い出し納得するとそのまま走り続けて奥へと進み続けていった。

その途中、広い空間に辿り着くとルキアの言葉を思い出し三人は徹底して周囲に散在する障害物と言う障害物を刀と斧で破壊しつくす。

「おりゃあ！！」

「ぬん！！」

「はああ！！！」

粗方の障害物全てを破壊した三人は一度一カ所に集まり、周囲を警戒しながら背中を預ける。

「ルキアの話だと、実体を生み出す障害物さえ破壊すれば・・・ギガトロンの能力は発揮できないって話だったな！？」

「だと良いんですけど・・・」

「え？」

ユーノの意味深な言葉を聞いた金太郎はクエスチョンマークを浮かべたが、ユーノの不安はまさに的中することになる。

高円寺は描きなおした陣の内部に両腕を浮かび上がらせると、指を鳴らして呟いた。

「そう・・・・・・甘いぞ。」

その瞬間、一護達三人の足元からギガトロンの能力によって、巨大な両腕が出現し始めたのであった。

これには一護や金太郎も驚愕の表情となる。

「何！？」

「そうか。私たちも障害物という訳ですな！」

「やっぱりそうか。」

高円寺は机に両肘をつきながら、不敵な笑みを浮かべ三人の息の根を止めようとする。

「今度こそ・・・・・・」

巨大な両腕が変化し、刀剣の形状になるや否やユーノ達三人に向けて勢いよく振り下ろされる。

「「「！」」」

三人は何とか防御に徹しようと己の武器を前に出そうとする。

「ちっ！」

しかし、そんな三人の防御理も早くギガトロンの攻撃を防いだものが目の前に現れた。

「「「な！」」」

三人の目の前に立っていたのは、満身創痍の状態であった恋次と吉良の二人であった。

「あなた方は・・・！？」

この二人の登場に一護達は驚愕し、同時に傷は折ってあるものの生きている二人を確認できたことに安堵する。

「恋次、吉良！？」

「何度も同じ手が通用すると思うな！！」

二人はギガトロンの腕を刀で防ぎながら、先ほどの仕返しとばかりに反撃に移る。

「「はっ！！」」

二人は蛇尾丸と侘助を操り、三人の足元から出現したギガトロンの腕を斬り伏せ、その後消滅させることに成功する。

静かに刀を鞘に納めると、恋次は深いため息をついて全身の疲労を外に放出する。

そんな恋次に向かって一護がお礼の言葉を持ちかける。

「お陰で助かったぜ。」

「二人とも、無事だったんですね。」

「ユーノさんこそ。無事で何より・・・ぐっ!!」

すると、吉良は前に受けた体のダメージが来たらしくその場に片膝をついて血を流す。

「吉良!」

「吉良殿!」

「吉良さん!」

ユーノ達は直ぐに吉良の近くに駆け寄り、安否を気遣うが当の本人はあくまで大丈夫であると言うことを主張する。

「心配ないです。」

「お前もか?」

一護が恋次に向かってそう言うと、恋次もボロボロの死覇装を見せながら答える。

「ああ・・・残念ながら完全に無事とは言いがたいがな・・・」

「済まねぇ・・・そんな状態で・・・」

「構わねぇさ。パトリオット如きに油断した、俺達が悪い。」

ユーノと金太郎を負傷した吉良を担ぎながら、一護と恋次と共に奥へと進み始めた。

それを見ていた高円寺は湧き上がる不快感を解消するために、新たな策を講じる。

「しつこい奴らだ。」

高円寺は陣の内部に鎌のようなものを浮かび上がらせると、洞窟の天井に出現させた。

五人は頭上から感じる違和感に緊張を走らせ上を向いてみると、そこには自らの体を容易に切り裂くほどの鎌が宙にぶら下がっていた。

「「「「「!」」」」」

鎌は周囲ぶら下がっていた鍾乳石のような尖った岩を切り崩していき、一護達を襲撃する。

恋次は危険を感じ、五人に散開するよう指示を出した。

「散れ!」

落ちてくる巨大な岩を回避しながら、攻撃の機会をうかがっていると偶然にも金太郎の周囲には落ちてきた岩で囲まれてしまった。

金太郎はアックスオーガを構えてギガトロンを警戒していると、早速とばかりに背後の岩の下から三叉矛となったギガトロンが出現し襲い掛かってきた。

「！」

金太郎は空中に避けて三叉矛を回避していると、横から吉良が援護に入って三叉矛の軌道をずらしてくれた。

「面目ありません！」

そんな後ろからの奇襲しかしないギガトロンの戦術に吉良は内心腹を立てていた。

「後ろからしか攻撃しない・・・自分で言うのもなんだが、何所までも卑怯な奴。面を上げろ、侘助！」

吉良は侘助を解放すると、三叉矛のギガトロンの体に六度斬撃を加えた。

すると、侘助の能力によってギガトロンの体は重くなってしまい地面に倒れ伏し動かなくなった。

予期せぬ事態に高円寺は焦りの表情を浮かべる。

「！どうした・・・ギガトロン！？」

「僕の佗助は、斬りつけたものの重さを倍にする。二度斬れば更に倍。三度斬ればそのまた倍。その腕は、封じさせてもらった。」

「何だと・・・く・・・小癪な！」

そう言うと、今度は鎖尽きの鉄球であるモーニングスターの形を浮かび上がらせて反撃に臨もうとする。

すると、吉良の付近に落ちていた岩場からモーニングスターの形状となったギガトロンが背後から襲いにかかる。

「な！？」

思わぬ攻撃の仕方に度肝を抜いた吉良に、高円寺は焦燥をにじませた表情で呟く。

「腕はまだあるんだよ！」

素早い動きで吉良を襲うギガトロンであったが、恋次が蛇尾丸を解放してギガトロンの攻撃を妨害する。

「咆えろ、蛇尾丸！！」

恋次はギガトロンの攻撃を妨害し、それを如何にか抑え込むことに成功すると吉良に止めの攻撃を促す。

「吉良！」

「ああ！」

恋次の合図とともに、吉良は走り出し勢いよく侘助を振り回して鉄球にたたきつけた。

「はっ！てやあああああ！！！！！！」

数十回と切り付けられたことによって、鉄球は完全に動けなくなってしまいその場に落ちてしまった。

高円寺はこれほどまで抵抗してくる恋次達死神に更に怒りを募らせる。

「く！！！死神風情が！！こうなったら・・・ギガトロンのモードを変更しないといけないか・・・あの能力からは逃れられんからな！」

そう判断した高円寺は、机の陣を拭き取り全てのギガトロンを自分の手元に戻した。

『戻れ、ギガトロン』

ギガトロンが戻ったことにより、その場に伏していたモーニングスターと三叉矛は消え辺りは静まり返った。

「け！借りは返させて貰ったぜ。」

二人の様子を離れた場所で窺っていたユーノ達三人は、直ぐに声をかけた。

「恋次さん！吉良さん！」

「二人とも、大丈夫か！？」

と、その直後であった。

「「「！！」」」

遺跡の地盤が緩んでしまい、天井が崩れ落ちてきたのだ。

一際巨大な岩が前方に落ちてくることによって、ユーノや一護、金太郎は恋次達の元に行くことが出来ないでいた。

すると、そんな三人に恋次が大声でこう言って来た。

「一護！ユーノ！金太郎！先に行け！！この先に、石田も居るはずだ！」

「僕達も別な道を見つけて、追いかけるから！」

「しかし・・・！」

「さっきの奴は、恐らくこのアジトを守る番犬だ！奴を突破すれば、本命のパトリオットのボスに辿り着けるはずだ！」

それを聞くと、ユーノと一護は顔を見合わせ同じ結論に足り金太郎に呼びかける。

「金太郎！」

金太郎もやむを得ないということを理解し、二人と一緒に奥へ進むことを決意。

「承知しました！」

二人は落石に注意をしながら、遺跡の奥へと進んでいった。

そんな中、最深部では銀太郎の容体が更に悪くなる一方であり、銀太郎は胸を押さえてもがき苦しんでいた。

「う！！！！く・・・苦しい！！！！！」

「銀太郎！！」

白鴎やオーリー達は銀太郎に駆け寄り、安否を気遣うと同時にいまだ決着のつかないでいる高円寺に嫌悪感すら抱いていた。

「くそ！まだ片付かぬか！？」

「こうなったら俺も参る！」

遣る瀬無い気持ちでいた瀬間子がデバイス片手に出動しようとした矢先、銀太郎が大声を挙げて否定の言葉を投げかけた。

「それはダメだよ！」

思わぬ銀太郎の言葉に驚愕する瀬間子と、疑問の念を抱く東海林や田吾作。

「何でだよ！？お前が死んじまったら、聖地もクソも無いだろうが！」

「銀太郎！！」

確かに、銀太郎が死んでしまっては聖地もなにもないのが事実であるが、銀太郎は何より仲間であり家族でもあるパトリオットを裏切るような真似はしたくないというのが奥底にあったがために、他の全員に戦いの横やりはして欲しくない・・・そんなジレンマを抱えていたのだ。

「く・・・！！だ・・・だけど・・・！！信じて・・・あげないこと・・・には・・・！！」

呪いによって体を侵食されている銀太郎であったが、痛みを何とか抑えながら汗だくとなった体を起き上がらせ懐から自身のデバイスを取り出す。

「オプティマスプライム・・・少しだけ、お願い・・・！！」

銀太郎はそう言うと、懐から取り出したカードデッキ型のデバイス、『オプティマスプライム』に向かって何かを要求した。

主人の命令を聞き入れたオプティマスプライムは、絶対服従の態度で銀太郎に返事をする。

〈Ｙｅｓ　ｂｏｓｓ〉

すると、オプティマスプライムは銀太郎の胸に向かって光を注ぎ込んでいく。

このダイシーが代々持つことを許された古のデバイス、オプティマ

スプライムの能力とは一体どれ程のものなのかは定かではないが、いずれこのオプティマスプライムとアックスオーガが交わるのはそう遠い未来ではないことは間違いなさそうである。

潜入！　迎撃の五人（後書き）

教えて、ユーノ先生！

ユ「今日は、数少ない機動六課の男性職員について♪」

ユ「前線部隊をヘリで運んでくれるアウトレンジショットの達人のヴァイス君」

ユ「はやての副官で、レティ・ロウラン提督の息子であるグリフィス君」

ユ「それ以外だったら、メカニックスタッフのみなさんや食堂のおじさん。あとは前線のエリオや恋次さん達とうちの従業員と僕ぐらいかな？」

ク「おい。僕も入ってるだろ！」

ユ「あれ？やっぱりお前も入れておかないといけないけい？」

ク「当たり前だ！！僕だって一応六課の後見人で部隊の監査役なんだぞ！！」

ユ「小市民ダメ亭主の分際で、偉そうによく吠えるね・・・」

ク「誰が小市民ダメ亭主だって！！お前に言われたくないんだよ！！」

ユ「言っとくけど、これは僕が言ったんじゃなくてエイミィさんが

言ってたんだよ。この前フェイトの口から聞いた。」

ク「何!!!!??!?」

クロノ、あまりのショックに石となり砕け散る。

ユ「夫の面目丸つぶれだな。」

吉「いつの時代でも、夫とは孤独な生き物ですね・・・」

魔導師図鑑ハイパー！

ヴァイスとグリフィスはこんな話で盛り上がっていた。

ヴ「しかし、お前が結婚とは・・・予想もしてなかったぜ。」

グ「それどう意味ですか？まるで、僕が結婚できない男だと言ってるようにも思えるんですが・・・」

ヴ「いや、別にそういうつもりで言ったわけじゃないからよ。てことはあれだ・・・新婚なんだから、ルキノの奴に何かこう甘えたりとかしてるのか？例えば膝元で耳かきとか・・・？」

グ「ヴァイス先輩！そんな恥ずかしいこと出来る訳ないですよ！」

すると、話を嗅ぎ付けた浦太郎がやってくる。

浦「恥ずかしいことかな？むこうじゃさも当たり前のようにやってるけど？」

ヴ・グ「え？」

言われた二人がロビーに行ってみると、ソファーではなのはに膝枕をしてもらいながら耳かきをさせているユーノがいた。

な「ユーノ君、痛くない♪」

ユ「うん。大丈夫だよ♪」

な「もう・・・ダメだよ♪ちゃんと自分でやらなきゃ♪」

ユ「なのはにやって貰いたかったんだよ♪」

な「ふふ。ユーノ君の甘えん坊さん♪」

それを見た二人は唖然とし、浦太郎はごく自然な態度で感想を尋ねる。

浦「ほらね？どう・・・二人的に？」

ヴ・グ「今はブラックコーヒーが飲みたい気分です（っす）・・・」

黒崎一護、魂の卍解（前書き）

一「物心つく前から、俺は幽霊が見えて・・・自然と幽霊と話したりもしてた。別に霊が見えるから優越感なんて感じちゃいなかったし、それで食っていこうとも思わなかった。」

一「ただ、あの日・・・俺がルキアから譲り受けた死神の力で、俺はこうして大切な仲間を守っていける。だから俺は守るんだ。どんなことがあっても、俺は大切な仲間を守り抜く。自分の命を削る覚悟で・・・俺は守るんだ！」

ユ「ユーノ・スクライア外伝　パトリオット篇・・・・・・始まります。」

黒崎一護、魂の卍解

＞ｉ１８７５３―７０９＜

ユーノ・スクライア外伝・・・・・・これまでのハイライト。

地下洞窟内部へと潜入を開始した、ユーノ達一向。
そこで待ち構えるパトリオット、高円寺の罠。
高「ふ～～～次の獲物の登場だな。」
な「ユーノ君、あれ！！」
襲い掛かるギガトロンの能力
一「ちっ！月牙天衝！！！」
フ「ハーケンセイバー！！」
金「ダイナミックスラッシュ！」
な「スターダスト・ブラスター！」
ユ「破道の三十一　『赤火砲』！」
苦戦を強いられながら、奥へと進もうとするユーノ達にギガトロンの未知なる能力が行く手を阻もうとする。
な「ユーノ君！」
ユ「！」
背後から忍び寄るギガトロンと、バインドに絡め取られてしまう一護とフェイト。

フ「う・・・！！」

一「く・・・くそ！！」

だが、その時・・・窮地の二人を救ったのはルキアであった。

ル「次の舞・白漣！」

ルキアは五人にギガトロン攻略の方法を助言する。

ル「こやつは、障害物から実態を作り出す能力を秘めているのだ！ここら一帯の障害物を一つ残らず叩き潰すのだ！」

更に、奥へと進んだユーノ達を助けたのは恋次と吉良だった。

一「恋次、吉良！？」

恋「咆えろ、蛇尾丸！！」

吉「はっ！てやあああああ！！！！！！」

ユーノ達を助けた恋次と吉良だったが、落盤が起こり道が分断されてしまう。

恋「一護！ユーノ！金太郎！先に行け！！」

ユ「金太郎！」

金「承知しました！」

二人の到着を信じた三人は、高円寺が待ち構える遺跡の奥地へと駒を進めるのであった。

迷路のように入り組んだ遺跡の内部を全速力で走り続けるユーノ・一護・金太郎の三人。

「「「!?」」」

そして、進み続けること数分が経ったところで三人は目の前に広がってきて尖った岩場と石柱が周囲に散在する体育館ほどの空間に足を踏み入れたのであった。

「ここは・・・」

思わず声を漏らすユーノであったが、三人は徐にその空間の中に足を踏み入れ細心の注意を払いながら前絵と進み続ける。

すると、そんな三人の目の前に見覚えのある人物が目に写ってきた。

それは、一護の悪友であり滅却師でもある石田雨竜が自慢の装束に身を包んだまま地面に倒れこんでいたのだ。

石田を見つけると、一護達は声を上げて名前を叫ぶ。

「石田!」

一護が石田の元へ駆け寄ろうとすると、ユーノがギガトロンの気配に気づき一護に声 r をかけた。

「一護さん!来ますよ!」

すると、ユーノが危惧していた通り目玉の大軍と化したギガトロンが一護達を追って現れたのであった。

「くっ!忌々しいですね・・・!!」

「くそ!」

「嫌でも進ませるつもりは無いという訳か・・・」

三人は苦笑を浮かべながら、各々自分の武器を取り出し迎撃に写る。

そんな三人の動きを監視していた高円寺は不敵な笑みを浮かべながら今までとは全く違うギガトロンの形状を陣に浮かび上がらせた。

「これがギガトロン・オベリスクフォームだ。」

浮かび上がってきたのはまるで巨人のような姿と化したギガトロン。

ユーノ達は大量のギガトロンの軍勢を相手に、武器を振り回していた。

「ふん！ふん！ふん！！」

「はっ！はっ！はっ！」

「ぬん！ぬん！ぬん！」

ユーノ達がギガトロンの陽動にまんまと引っかかっている間に、石田の近くにある岩場から巨人姿となったギガトロンが足元より徐に現れた。

すると、それに逸早く気が付いたユーノが振り返った瞬間石田の名前を叫ぶ。

「石田さん！」

「「！」」

一護と金太郎もユーノの叫び声に気が付き振り返ったみると、石田の背後には獰猛な巨人と化しているギガトロンが唸り声を挙げながら登場し、一護はこのギガトロンの姿に思わず絶句する。

「何だ・・・!?」

ギガトロン・オベリスクフォームは三人を見下ろしながら、口元に涎を集めてそれを大量に地面へと足らし、自然と三人の恐怖を煽り立てる。

「デッケー・・・!!」

「バケモノめ・・・」

「こやつ・・・!」

恐怖に戦く三人を監視しながら、高円寺はどうやってユーノ達を血祭りに上げるかを思案し始める。

「さぁ。どいつから先に潰してやろうか?と、その前にこれを返しておかないとな。」

すると、高円寺はギガトロン・オベリスクフォームに命令を下すと地面に横たわっていた石田を拾い上げてそれを巨大な掌に乗せ、徐に捻り潰すそうとする。

「!止めろ!!」

一護がギガトロンの行動を止めにかかるが、ギガトロンはそのまま

捻り潰すふりをして力いっぱいに石田を岩場の方へと投げつけたのであった。

金太郎は素早く移動すると、落ちてくる石田の軌道を読んでギリギリのところで受け止めることに成功する。

二人は直ぐに金太郎の元へと駆け寄った。

「大丈夫か!?」

「石田さん!」

「石田殿!!」

すると、三人の声を聞いた瞬間・・・石田が重い瞼を明けて満身創痍の体で悔しげに語りかけてきたのであった。

「・・・う・・・僕とした事が・・・随分と情けないやられ方をしたようだね・・・日頃の運動不足のつけかな・・・?黒崎に助けられるのは癪な話だけど・・・・・・どうやら僕も焼きが回ったな・・・・・・」

「石田・・・」

石田の言葉に神妙な顔つきとなる一護であったが、そんな四人をオベリスクフォームを通して観察していた高円寺が話しかけてきた。

『ほう?まだ息が合ったのか・・・滅却師というのも死神と魔導師同様案外しぶといんだな。』

高円寺の言葉を耳にした金太郎は、狡猾な手段でしか攻撃しかしてこない高円寺に怒りを募らせ言葉を投げかける。

「貴様・・・何所に隠れている!?出て来い!」

『ふふふふふふふはははははははは!!!!!!!』

金太郎の問答に関わらず、高円寺はギガトロンを通して薄気味悪い甲高い笑いを洞窟全体に響かせるだけであった。

そんな高円寺の笑いを耳にしながら、自然とユーノの力は右手の晩翠に注がれていた。

「・・・いけ好かない野郎だ。本体が出てこないなら、このバケモノを倒して引きずり出すしかないか。」

「然様ですな。」

そう判断した二人がオベリスクフォームに向かおうとした矢先、一護がそんな二人に徐に語りかけてきた。

「ユーノ。金太郎。」

「「?」」

「ここは俺に任せてくれねぇか?」

「一護さん・・・?」

突然の一護の発言に、驚きを隠せないでいるユーノと金太郎だが、一護は更に続ける。

「連係プレーって言うのも悪かねぇ。六課ではそう言うのは至極当然のことだからな。それから、昔浦原さんに教えられたように直接攻撃だけが能じゃないのも知ってる。けどな、近頃そんな状況に慣れちまって、俺の中に油断みたいなものが出来始めちまってるんじゃないのかって。」

「一護さん・・・」

「一体どうしたのですか、急に？」

「よく考えてみろよ。俺や恋次のやり方は・・・喧嘩はタイマン。負けるときは死ぬとき。そして、自分と仲間を生かすために戦うんだってな！」

「一護殿・・・」

一護は、そう二人に語りかけながら四年前・・・つまり、自分がユーノと出会ってからその後に起きた自分の中では嫌でも思い出さざるを得ない妻・織姫を危険に晒し暫くの間死神活動を自粛していたあの出来事を思い返しながら話を進めた。

「俺は・・・そんな油断があったから、四年前・・・織姫にあんな大怪我をさせちまったんだ。あの時、誰かが助けに来てくれるって気持ちが、どっかにあったのかもしれねぇ。それが・・・結果的に織姫を危険に晒しちまった。どうも・・・ここ最近の俺は、色々と緩みすぎていたらしい。この辺で気合入れ直して、派手に暴れてやるぜ。」

「・・・・・・――――――」

自分の師匠であり、この世界へと導いてくれた尊敬する男である一護の決意の籠った言葉を真剣に聞き入れるユーノや傍らで耳を傾ける石田や金太郎。

「それに、この先にもまだパトリオット達は残ってる。ユーノ達は体力を温存しておけ！」

「一護殿・・・あなた・・・」

金太郎は顔を傍まで近づけて心配そうにのぞきこむが、そんな金太郎を見た一護は些か怒りを露わにしながら金太郎にこう言った。

「くっ！伝説の死神代行、黒崎一護がこの辺で露払いをやってやろうって言ってんだ！文句あんのかよ！？」

あまりの迫力に、これには金太郎も思わず後ずさり。

「あはは・・・分かりましたよ。」

一護は気合を入れなおすと、ギガトロンの前まで出てきて背中の斬月を徐に取り出して構えをとった。

「てめぇの相手は、この俺だ！」

そんな無謀を通り越して愚かとも捉えていた一護の行動に、高円寺は鼻で笑いながら話しかけてきた。

『一人でこのギガトロン・オベリスフォームと戦うというのか？無謀なことを・・・ギガトロン、潰せ。』

オベリスクフォームのギガトロンは高円寺の指示を受けるや否や、右腕を振り下ろして一護に攻撃を仕掛けてきた。

「そうはいくかよ！」

一護はギガトロンの拳を避けると、適当な岩場へと足を運んで・・・斬月の刃を前に突き出しながら霊圧を極限まで高めて卍解を発動させる。

「卍解！」

その瞬間、一護の周りに吹き荒れる漆黒の霊圧の嵐が洞窟全体に広がっていく。

一護の膨大な霊圧によって、洞窟全体も地響きを起こしユーノやギガトロンも漆黒の霊圧の中にいる一護を黙って見つめる。

そして、嵐が晴れた先に現れる漆黒のロングコートのような死覇装に身を包み、卍の字を模した鍔の漆黒の日本刀を携えた一護が姿を現した。

「天鎖斬月！」

ギガトロンは一護が姿を現すとすぐに、攻撃に転ずるために右手を振りかざして勢いよく一護へと向けて攻撃を開始した。

一護も、ギガトロンの攻撃するタイミングを見計らって天鎖斬月の

刃をギガトロンの拳へと焦点を絞り走り出した。

「ほあああああああ！！！！！」

高円寺は別室でギガトロンの右腕を魔法で斧の形状に変化させて、一護を切り伏せようとするが、一護の卍解『天鎖斬月』の超高速能力の前に置いてはあまり意味を持たず、一護の方に形勢が傾き始める。

だが、それでもギガトロンは両腕を使って一護の隙を突こうと攻撃をつづけ、一瞬の隙をついたギガトロンが変化した左腕で一護の体を切り伏せようとする。

「一護さん！危ない！！」

ユーノが石田の肩を担ぎながら戦局を見ていた金太郎と共に危惧の念を抱くが、一護は鼻で笑いながら自身の得意とする斬撃をお見舞いする。

「ふん。月牙天衝！！」

天鎖斬月から放たれる漆黒の斬撃がオベリスクフォームのギガトロンの攻撃を簡単に凌ぎ、その後も体の大きいギガトロンは小回りが非常に利くだけでなく攻撃能力も非常に高い一護の卍解に翻弄され続ける。

そんな思う通りに攻撃の出来ないギガトロンに一護は勝ち誇った表情で語りかける。

「その程度の攻撃じゃ、俺の天鎖斬月のスピードには追いつけない

ぜ！伊達に藍染を倒した伝説の死神代行って言われてるんだ。まだまだこんなもんじゃ俺の相手にはならねーぜ！」

この一護の言動を聞いたユーノと金太郎は感心した表情を浮かべるが、石田一人だけは手前味噌な一護に眼鏡の位置を直しながら内心腹を立てる。

「おお！！」

「流石は一護さん。僕の師匠だけはあるな♪」

「全く・・・調子のいい奴だ・・・」

一護は天鎖斬月を両手でしっかり握ると、ギガトロンを睨み付けながら勝負に決着をつけようとする。

「悪いが、一気に行かせて貰うぜ！」

すると、高円寺はこの一護の言葉を聞いて暫く考えた末一つの判断を下した。

「・・・仕方ない・・・」

高円寺は指を鳴らして、ギガトロンを手元に戻す。

その結果、一護と対峙していたオベリスクフォームもその場から姿を消した。

「何だ！？」

『お前の戦い方に付き合うのは、得策ではないな。』

高円寺がそう口にした瞬間、一護が乗っている岩場の足元から三叉矛に変化したギガトロンの腕が一護の背後から襲い掛かってきた。

「のあああああ！！！！」

気が付いた一護が防御に徹しようとした瞬間、三叉矛は一護の体をかすめてダメージを負わせ、傷ついた一護は地面へと吹き飛ばされる。

「くっ！！」

地面へと落下した一護に追い打ちをかけんばかりに、様々な武器の形に変化したギガトロンの四肢が次々に一護に襲い掛かり、一護は攻撃を転がりながら開始し続け落した斬月を取りに行こうとする。

何とか斬月を拾い上げた一護であったが、体は既にギガトロンの狡猾な攻撃によって傷だらけとなっており、胸と額からは血がにじみ出ていた。

「はっ、はっ、はっ、はっ」

満身創痍の状態と化している一護を離れたところで見ていた石田や金太郎は思わず声を上げる。

「黒崎！」

「一護殿！！」

金太郎は居てもたってもいられなくなり、直ぐに一護の救援に入ろうとするがユーノが前に出てきて金太郎の行動を止めにかかる。

「止めろ！」

「店長、しかし！」

ユーノとて、気持ちは金太郎以上に強いものなのだが・・・ユーノは一護のことを信頼しており野暮なことで一護の誇りを潰したくないとも考えている。

「一護さんの戦いの邪魔をするな。言っただろ・・・一護さんはこの戦いをサシでつけるつもりなんだよ。僕らが横から手を出すのは失礼なんだよ。忘れたわけじゃあるまい。戦いには、命を守るための戦いと・・・誇りを守るための戦いがあるのを。」

「しかし！！」

それでも、ユーノ言うことに未だに割り切れていないでいる金太郎。

すると、そんな金太郎に向かって一護が大声で語りかけてきた。

「金太郎！」

「！？」

「ユーノの言ったとおりだ。黙って見ていろ。ふん、こっから逆転するんだからよ！」

「一護殿！」

すると、そんな余裕の言葉を口にした一護に向かって高円寺が洞窟全体から話を持ちかけてくる。

『ほう・・・どうやって？最早お前には何の方法も残されていないんだぞ。ふふふふ・・・・・・ん？これは・・・！？』

その時、密かに最深部にいる銀太郎達のことを監視していた高円寺の目にオプティマスプライムの能力を発動させている銀太郎の姿が写ってきた。

「（なるほど・・・オプティマスプライムの能力で自身の体を蝕むダイシーの呪いを一時的に退けることに成功したらしいな・・・）」

何を企んでいるかは知らぬが、その表情は明らかに何らかの欲望で満ち溢れていた。

一先ず、高円寺は銀太郎と思念通話をしてみることにした。

「（銀太郎。体の方はもう大丈夫か？）」

「（はい。何とか侵食から逃れることは出来ました。ただ、いつまでも呪いを避けれるか分かりません。早いところ、聖地へ向かいたいのですが・・・）」

「（了解だ。俺もそろそろ決着をつけなければと思っていた。直ぐに終わらせて聖地へ向かうとする。）」

「（頼みます。）」

高円寺は銀太郎と話し終えると、一護に向かって再び話を持ちかける。

『状況が変わった。死神代行・・・・・・此処で片を付けさせてもらうぞ』

高円寺はそう言うと、ギガトロン・オベリスクフォームを一護の正面へと召喚し、ギガトロンの登場に一護も眉間に寄せる力が強くなる。

「出てきやがったな・・・」

体の傷の痛みに耐えながら、目の前に聳えたつ巨大な怪物を前に一護は苦い表情を浮かべる。

「く・・・・・・！」

『大したものだ、その闘志。死ぬのが分かっていながら尚向って来ようとは、何て愚かだ。貴様を葬り去るのは簡単だが、いいだろう。その気持ちに応えて・・・お前の漆黒の衣装と刀ごと、ギガトロンの力で粉々にしてやる。さぁ・・・これで最後だ。』

高円寺は指を鳴らして陣の内部に巨人の姿のギガトロンを浮かび上がらせ、最後の攻撃に転ずる。

「行け、ギガトロン！」

命令を聞き入れたギガトロンは最後の攻撃のために一護目掛けて突進していく。

すると、一護は懐から以前ユーノから渡されていた自分専用の斬魄刀補助デバイスを斬月の柄に取り付けるとユーノに向かってこう言った。

「ユーノ！お前から貰ったこいつ・・・使わせて貰うぜ！！」

一護が補助デバイスを柄に取り付けた瞬間、天鎖斬月の鎖が一気に増え、一護はそれを手に取ると斬月を頭上で振り回しながら霊圧を集めていき・・・自己流で生み出した月牙天衝のレパートリーの一つを発動する。

「月牙・・・天嵐！！！」

斬月から放たれる通常時の威力をはるかに凌ぐ強力な漆黒の斬撃が、嵐のように広がりギガトロン・オベリスクフォームは勿論、その場にあった全ての障害物を吹き飛ばした。

「「「お！」」」

あまりの凄まじい威力を目の当たりにしたユーノ達三人は思わず声を漏らした。

一方のギガトロンは月牙天嵐をまともに食らったせいで、体が怯み動けないでいた。

「ギガトロン、どうした！？くそ！一度退くか・・・？！」

と、その時。

月牙天嵐の影響により、洞窟全体の岩場が緩み落盤が起き始めた。

「落盤か！？」

洞窟が揺れ始め、落盤が起こり始めると高円寺が隠れていた別室の岩場も崩れ一護達の前に姿を現した。

「何！！」

「！店長、あれを！！」

「あそこだ！あそこから奴はギガトロンを操っていたんだ！」

漸く姿を見せた高円寺の姿を見たユーノ達は、鋭い表情となって高円寺を睨み付ける。

高円寺自身は、思わぬアクシデントに舌打ちをする。

「ち。思わぬアクシデントだ・・・」

高円寺はそう口にしながら、体を動かすことの出来ない未だ唸り声を上げるギガトロンの傍らまで移動し、一護も鼻で笑いながら高円寺と対峙する。

「へっ！漸く見つけたぜ。てめぇが高円寺って野郎か・・・？」

「ふん・・・お前達に派手に動かれると迷惑なんだけどな。」

「迷惑なのはこっちのほうだ。空座町で変なことして・・・デカイことになったらそれこそ周りの連中の大迷惑になるんだからよ！」

すると、高円寺は首を振りながら溜息を吐いて一護に指をさす。

「はぁ。・・・お前・・・食われなきゃ分からないらしいな。」

その瞬間、傍らで唸り声をあげていたギガトロン・オベリスクフォームが高円寺のベルトに集まり手には構築用のパスが握られていた。

〈Ｓｔａｎｄ　ｂｙ　ｒｅａｄｙ?〉

「ち、来るか・・・」

一護も高円寺のセットアップを前に斬月を強く握りなおす。

そして、高円寺はパスを徐に手から離すと大仰に両手を広げながらセットアップと口にする。

「ギガトロン。セットアップ」

〈Ｓｅｔ　ｕｐ〉

腰元に落ちたパスは起動音と主に特製の甲冑を構築し、高円寺のボディカラーは黒と紫を基調としており、人間形態、蝙蝠、双頭龍、巨人、手、刀剣の６つの形態に変形する能力を持った特製の甲冑であるマイティーフォームへと変貌し、高円寺の顔も異形のものとなった。

両者は互いに武器を取ると、そこから激しい死闘を勃発させる。

二人の衝突は苛烈を極め、周囲の岩場が容易に崩れる光景が目の魔に広がってきた。

「一護殿！」

傷の癒えていない一護を遠く離れた場所で見つめる金太郎であったが、その時ユーノが流石に状況的にあまりよくないと判断したのか、一護を助けよと決心し金太郎には奥へ進むよう指示を出す。

「金太郎、先に行け。僕と石田さんで奴を食い止める。」

「何ですと！？しかし、石田殿は怪我を！」

すると、そんな金太郎の言葉を聞いた石田がボロボロの状態にもかかわらず苦笑いを浮かべながら答える。

「僕のことをあまり舐めないで貰いたい。それに、黒崎には借りができたようだからね・・・早く行ってください。」

二人の言葉を聞いた金太郎は、仮面の下で決意の表情を浮かべると肯定の返事をしたのであった。

「・・・委細承知！」

金太郎は一護のことをあとの二人に任せて、遺跡の最深部へと向かう。

「幸運を祈りますぞ！！」

一抹の不安と一縷の望みを胸に抱きながら、遺跡の最深部へ向けて走り続ける金太郎。

そして、漸くそこと思わしき他とは造りも年代も異なる比較的明るい空間へとたどり着いた金太郎。

金太郎は徐にその空間に足を踏み入れながら、その内部をまじまじと見つめていた。

「此処は・・・一体何なのだ？」

疑問を抱く金太郎であったが、その時金太郎の耳にあの少年の声が飛び込んできた。

「お待ちしておりました。ようこそ・・・エドワード・コークの末裔さん。」

「！？」

金太郎が正面を向いてみると、前方に見えてくる岩の階段と台のような場所には高円寺を除いたパトリオット全員と、オプティマスプライムの力で呪いを退けている何処か覚悟の籠った表情を浮かべた十代目ダイシー、狼谷銀太郎が佇んでいた。

金太郎は徐に近づきながら、銀太郎に話しかける。

「もしや・・・お前がパトリオットのボスか・・・？」

「はい。狼谷銀太郎。１５歳。あなたのことは、白鴎や田吾作の口からよく聞かされていますよ。それとあなたの持つデバイス・・・初代パトリオットの遺産、アックスオーガのことも。」

銀太郎はそう言うと、階段を伝って徐に金太郎の近くまで歩いてい

く。

両者は決して笑みなど浮かべず、ただ沈黙を保ったまま互いに睨み合いを続けるだけ。

「・・・・・・」

「・・・・・・」

片や初代パトリオットの末裔、片やその初代パトリオットと争ったダイシーの末裔・・・両者が何千年と言う時を超えて子孫と言う形で再びこの地に相対する時がやってきたのだ。

そんな両者をダイシーを守護するパトリオット五人は黙ったまま静かに見守るだけであった。

「「「「「・・・・・・」」」」」

銀太郎が金太郎と一定の距離まで近づくと、金太郎は仮面の下から今まで疑問に思っていた今回の騒動に関して話を持ち出した。

「何故だ!?何故このような真似をする!?お前は何を欲しておるのだ!!」

そんな金太郎の熱い問答に、銀太郎は十五歳とは思えぬほど冷静な態度で答える。

「一言で言えば、“誇り”ですよ。失った僕らパトリオットの誇りを取り戻すことこそ、僕らが悲願・・・その為に、僕やみんなは戦う覚悟を決めました。人に迷惑をかけるのは不本意なんですが、そ

れでも・・・どうしても取り戻さないといけないんです。」

「くっ！」

「高円寺さんの足止めで、そのまま此処に来ないことを望んでいましたが・・・仕方ないようですね。まだ、目当ての扉が開くには・・・もう少し時間がかかりそうだ。」

「！扉・・・まさか！！」

「ええ。聖地への扉ですよ。それを開くのに必要なのは・・・田吾作があなたのデバイスから奪った封印の鍵。そして、この地底に建造されたこの場所だったんですよ。」

銀太郎はそう言い終えると、一護達と戦闘中である高円寺の魔力を感じ取り、些か不安な表情となったがそんな高円寺が戻ることを信じて決断を下す。

「まだ高円寺さんが戻ってきてないけど、多分これなら間に合うはずだから・・・今のうちに地球を去る準備をしておくかな。」

「地球を去るだと！？」

銀太郎が口にした奇怪な一言に、金太郎は反芻する。

「はい・・・僕らはこれから聖地へと踏み出します。」

そう銀太郎が口にすると、金太郎は声を荒げりながら銀太郎に向かってその聖地に関する詳細な説明を必死で求めた。

「聖地とは一体なんなのだ!?まさか・・・・・お前たちもスカリエッティ同様に失われた世界、アルハザードへと向かうつもりなのか!?」

「・・・・・・」

金太郎の言葉を聞き終えた銀太郎は、見当違いなことを口にされてしまい困った表情を浮かべたまま口をこもらせた。

一方の金太郎は、数か月前に起きたばかりの広域次元犯罪者ジェイル・スカリエッティが起こした大規模なテロ事件たる『魔導虚事件』のことが克明に思い出される。

そして、スカリエッティがその後失われた世界・・・『アルハザート』へと消えたことに関して、自分の目の前にいる少年やパトリオット達もそこへ向かうのではないのかと言う危惧の念が思い浮かぶ。

「どうなのだ!?」

金太郎の叫び声が最深部の中で大きく反響する。

すると、銀太郎は籠らせていた声を溜息として吐き出すと、階段の上で見守っているオーリー達に向かって背中越しにこう言ってきた。

「はぁ・・・ここはいいよ。みんなは準備を始めて。」

銀太郎の指示を受けると、瀬間子は徐に目をつむるとドイツ語にも似た言語を口にし、呪文を唱え始めた。

「Andere welt anschlinessende p

ort. Tauch dich sofort auf. Andere welt anschliessende port. Tauch dich sofort auf.（異世界へとつなぐ門よ、我らの前に姿を現せ。異世界へとつなぐ門よ、我らの前に姿を現せ。）」

すると、瀬間子の呪文と一緒に異空間から現れ始めた光がやがて一つの門へと変貌し、その門の中央には異世界へと続く異空間が彷徨い、台の上へと降下していった。

「！あれは・・・！！」

金太郎は初めて見るパトリオットが使う聖地への扉に思わず声を漏らして驚くが、一方の銀太郎はそんな金太郎に向かって意外な事実を口にした。

「僕達パトリオット達が使う聖地への扉。あなた方に分かるように噛み砕いて言えば、特殊な“穿界門（せんかいもん）”ですよ。」

「何ですと!?」

声を上げて意外な事実に驚く金太郎に、オーリーが銀太郎に声をかけてきた。

「そうだ。制御は私がやろう。」

「頼むよ。オーリー。」

オーリーは早速、穿界門の制御のために特殊な魔力を注ぎ始める。

そんな中、白鴎は金太郎を見ながら歯がゆい思いで拳に力を入れる。

「畜生・・・やっぱりあの時ちゃんと俺が仕留めていれば！！」

白鴎はそう思いながら密かにデバイスを起動させようとした。

それに気づいた銀太郎が冷静な態度で止めにかかる。

「白鴎、止すんだ。」

「！銀太郎・・・でも！」

銀太郎の言葉に阻まれてしまった白鴎だが、銀太郎自身は次のように語り出す。

「気持ちは分からないでもないよ。だけど、僕もそろそろ自分の力を試してみたいんだ。しかも相手は、嘗て互いに力を交えた初代パトリオットの末裔なら尚更。体もオプティマスプライムの力で随分と楽に動かせる。熊谷金太郎さん・・・・・お手合わせ、願いますか？」

銀太郎の要求を聞くと、金太郎自身も戦うことを決意しアックスオーガを構える。

「良いでしょう。アックスオーガでお前の歪んだ心諸共、あの扉を叩き壊してしんぜよう！！」

金太郎はアックスオーガをしっかりと握ると、助走をつけて走り出し直接攻撃系の魔法であるグレイトリッパーをバリアジャケットも特に施した様子もない銀太郎に仕掛ける。

〈Ｇｒｅａｔ　ｒｉｐｐｅｒ〉

真下から振り上げるように銀太郎にアックスオーガの刃を突き立てる金太郎。

「ぬん！」

〈Ｄｅｆｅｎｃｅ〉

その瞬間、銀太郎のデバイスであるオプティマスプライムが自動的に発動し、銀太郎の右腕に桁違いな防御を発揮させ、金太郎のグレイトリッパーを技と共に刃までも受け止めてしまう。

この信じられない光景に、仮面の下で金太郎は目を疑った。

「な！！」

銀太郎はグレイトリッパーを受け止めた後、容易にそれを受け流すと金太郎に向かった冷笑な眼差しで語りかけてくる。

「こんなものじゃない筈ですよ。」

〈Ｐｒｉｍｅ　ｓｔｒｅａｍ〉

銀太郎はそう言いながら左手を前に突きだし、金太郎目掛けて魔力衝撃を発動する。

金太郎はプライムストリームを直に受けてしまうと、あまりの衝撃の強さにそのまま吹き飛ばされてしまう。

「ぐあああああ！！！！！！」

吹き飛ばされた金太郎は激しく体を打ちつけられ、地面に転がりながら勢い余って岩場に激突する。

表情一つ変えないでいる銀太郎の実力に、東海林は思わず冷や汗をかく。

「・・・な、何て力だ・・・これがダイシーの血を受け継ぐ者の力なのか！？」

一方の金太郎は、砂煙の中から傷ついた甲冑のままアックスオーガを杖替わりにしながら出てくると、銀太郎の防御性能と攻撃力の高さに驚くばかりであった。

「（どうなっておるのだ・・・確かに手ごたえはあった筈だ・・・！？アックスオーガを素手で受け止めるなど・・・信じられん！）」

そんな金太郎の力を圧倒する銀太郎を見ていた白鴎と瀬間子はこんな会話をしていた。

「・・・つ、強え・・・！！」

「当たり前だ。あれこそ、我らが唯一信頼して仕えることが出来る、ダイシーの真の継承者なのだ。そして、あれが真に覚醒しつつあるダイシーの真髄。」

瀬間子の言葉を聞くと、白鴎はデバイスを懐に仕舞い込んでこの戦いの行く末を見守ることにした。

「見定めてやるぜ。」

銀太郎は金太郎が立ち上がったことを確認すると直ぐに、冷笑な表情を変えずに金太郎目掛けて走り出す。

銀太郎が自分に向けて突進してくると、金太郎はアックスオーガを手に取り前に突きだす形で攻撃を加える。

「ふん！！」

だが、銀太郎は全く臆することなくアックスオーガを指先ひとつで受け止める。

「な！？」

年齢的にも体格的にも、そして力的にもすべてが自分よりも下であるはずなのに、この少年はそんな金太郎の施行を悉く打ち砕くようなことを平気でやってのける。

そんな驚愕と衝撃のあまり隙を見せている金太郎の腹部に、銀太郎はそのままあっすくおーがを指で受け止めたまましゃがみ込んでパンチを加えた。

その威力は、オプティマスプライムと体を流れるダイシーの血の効果により象を昏倒させるだけのものとなっており、その衝撃は甲冑に皹を入れ直に金太郎に伝わってきた。

「ぐっは！！」

痛みのあまり仮面の下で吐血をする金太郎が倒れそうになると、銀太郎は非情にも右足でけりを入れて金太郎を空中へと舞い上がらせる。

「のはっ！！！」

そして、徐に落下してくる金太郎の巨体に銀太郎の最後の蹴りが綺麗に決まると、金太郎はアックスオーガを持ったまま階段の方へと吹き飛ばされ、地面を削りながらアックスオーガは溝にはまってどこかへ飛んでいき、金太郎は階段に激しく激突した。

「がっは！！！」

銀太郎は冷笑な表情で金太郎の元へと歩いていき、階段の上で見ていた白鴎達はそんな銀太郎を黙って見つめるばかり。

そして、銀太郎は階段に体がめり込んだ状態でいる金太郎の甲冑を少し見た後、頭部を鷲掴みにして無理やり金太郎を自分の目線まで持ってきたこう口にする。

「もう終わりですか？」

「く・・・う・・・！！」

銀太郎の言葉を聞いて悔しさを滲み出す金太郎だが、銀太郎は徐に目をつむると金太郎を後ろへと投げつけた。

「ぐは！！」

その後、銀太郎は何処か悲しげな表情を浮かべながら更に続ける。

「あなたは全く、アックスオーガの力を引き出そうとしていない。何故フルドライブを使わないのですか？」

それを聞くと、金太郎はボロボロの状態になりながら返事をする。

「ぐっ・・・無闇に・・・力を使うことは・・・私は好まぬ・・・そしてそれは・・・アックスオーガも同じこと・・・！」

「・・・それが、あなたとアックスオーガの共通見解と言うことですか・・・」

金太郎はその言葉に耳を傾けながらも、自分の傍らにある自身の相棒であるアックスオーガを取ろうと手を伸ばすが、銀太郎から受けた深刻な体へのダメージが負荷となって手足も思う通りに動かず、視界すらも朦朧としていた。

「く・・・く・・・そ・・・！」

あともう少しの所と言うとこまで手が届いているのに、アックスオーガを手に取ることが出来ないでいる金太郎。

と、その時・・・・・そんな金太郎の霞んだ視界に入ってきた銀太郎の足がアックスオーガを蹴り飛ばしてしまう。

「此処までですね。」

「そんなことは・・・ない！！」

相も変わらず冷笑な表情を浮かべる銀太郎にそう断言する金太郎であったが、銀太郎はそんな金太郎に予想だにしてなかったことを語りかけてくる。

「・・・そうですか・・・それじゃあ、せめて此処を去る前に十代目ダイシーからエドワーク・コークの血を受け継ぐあなたにパトリオットの聖地に関して教えてあげますよ。」

「何!?」

銀太郎の突拍子もない発言を聞いたパトリオット達全員は大いに驚き、穿界門の制御にあたっていたオーリーも一瞬手を止めた。

「「「「!」」」」

「銀太郎!」

「・・・・・・――――――」

瀬間子に一喝された銀太郎であったが、当の本人は落ち着いたままだ。

「気にすることはないよ。元々僕は隠すことは嫌いなんだ。」

銀太郎はそう口にしつつ、徐に金太郎の甲冑に手を伸ばすとそこを強い握力で持ちながら徐に聖地に関する情報を暴露していく。

「聖地が失われた世界、アルハザードだって?そんなものは、あなた方が自分たちの都合で勝手に拡大解釈しただけのものです。そんなことをして何になるんですか?」

「く・・・では・・・・！？」

「僕達パトリオットの聖地・・・――――それは、ある方法でしか行くことの出来ない場所なんですよ。当然、管理局の転送システムを以ってしても不可能。あなたも自ずと予想はついているはずですよ。パトリオットの聖地とは失われた世界、アルハザードなどではない。あの扉の向こうにある聖地とは・・・“尸魂界（ソウル・ソサエティー）”ですよ。」

「何！？」

「僕達のご先祖は、嘗て尸魂界において聖地を築き上げ、そこにパトリオットの全てを封印したんですよ。僕らパトリオットの誇りを取り戻すための力を。」

ついに、十代目ダイシー・狼谷銀太郎の口から語られる聖地に関する詳細な情報。

それは何と、恋次達死神が住む世界である尸魂界であった・・・――

あまりの衝撃に金太郎は絶句し、その世界の名を復唱してしまう。

「ソウル・・・ソサエティー・・・だと・・・・！？」

次回、聖地への扉が――――――――開かれる――――――――

黒崎一護、魂の卍解（後書き）

教えて、ユーノ先生！

ユ「今日は一護さんの能力についてね♪」

ユ「一護さんの斬魄刀の名は『斬月』。不格好な出刃包丁のような形が特徴的で、柄頭についた巻布を飛ばした攻撃も可能。」

ユ「卍解は『天鎖斬月』。全てが漆黒の長めの日本刀へと変化し、鍔の形も漢字の卍を模したデザインに変化する。」

ユ「更には、爆発的に霊圧を上昇させる虚化（ホロウか）と呼ばれるものや、一度使えばすべての死神の力を失う最後の月牙天衝というのもある。」

一「まぁ、最後の月牙天衝を使うことはもうないとは思うけど・・・正直あの時の俺はチートにも程があったぜ。」

ユ「あんまりいないですよ・・・ジャンプの主人公が物語の中で自身の能力を失うなんてパターン・・・」

一「それも久保先生らしいと言えばらしいな・・・ん?待てよ・・・もし、なのはが俺的な路線を突き進んで最後のスターライトブレイカーなんて使ったりしたら・・・どうなるんだ?」

ユ「え・・・と・・・どうなるでしょう・・・!?」

思わず、困惑するユーノであった。

魔導師図鑑ハイパー！

は「今更気づいたんやけど・・・・・・機動六課の男性陣は随分なイケメン揃いやな。」

フ「そう？」

フェイトが疑問を浮かべながらそう言うと、鼻息を出しながら答えるはやて。

は「だって、よく考えてみーな！ユーノくんはオトメンの代表格やろ？恋次さんは男気あふれるナイスガイ！クロノくんはクールガイの先駆者。一護さんにしたって渋さも醸し出しとる！ヴァイスくんや吉良さん達もかなりの大玉や！」

フ「まぁ・・・確かにスペックは高い気がするけど・・・」

そんな話を拡大させ、はやてが女性陣限定のこんな企画を発案した。

は「てな訳で、第一回機動六課男性陣人気投票、開催決定！！」

テ「あの八神部隊長・・・何ですか、これ？」

は「機動六課の女性陣を対象に、この中で一番格好いいと思う男の人を選んで投票や。期限は来週の月曜までやから！」

そして、運命の投票結果。

過半数を大きく上回って・・・いや、人数分の数値を明らかに超えてユーノがダントツ。

それを見た全員がなのはの方を振り向いた。

フ「なのは・・・・・・ユーノに何票いれたの？」

な「にゃはは・・・・・・♪」

笑ってごまかすなのはであった。

誇りと自由を・聖地への扉が開かれるとき（前書き）

ユ「人は前を向いて生きていく・・・・・・それはそこに確かではないが、未来と言う名の希望があるから・・・・・・だから、人は前を向いて歩いていく。」

金「だけど、前だけを見続けると・・・・・・後ろにある小さなものが置いて行かれ、やがてそれは歳月と共に大きく・・・・・・そしてどうしようもない程黒く澱んでいく。」

な「未来に目を向けてばかりいると、きっと忘れてしまう。時には後ろを振り向いて自分のしてきたことをもう一度見直してみる必要だあるのかもしれない・・・・・・未来に後悔をしないために・・・・・悲しい思いをしないために・・・・・・」

ユ「ユーノ・スクライア外伝　パトリオット篇・・・・・・始まります。」

誇りと自由を・聖地への扉が開かれるとき

＞ｉ１５７９３―７０９＜

ユーノ・スクライア外伝・・・前回の三つの出来事。

一つ：高円寺のデバイスと一対一の対決を望む一護。

二つ：金太郎が、ついに十代目ダイシー狼谷銀太郎と接触。

そして、三つ：その銀太郎から聖地に関する驚愕の事実が告げられる。

銀「僕達のご先祖は、嘗て尸魂界において聖地を築き上げ、そこにパトリオットの全てを封印したんですよ。僕らパトリオットの誇りを取り戻すための力を。」

金「ソウル・・・ソサエティー・・・だと・・・・！？」

遺跡の最深部で金太郎が銀太郎から驚愕の事実を語られ、ユーノと一護達はギガトロンを構築させた高円寺と激突を繰り広げているその頃、ルキアとフェイトの怪我の治療の為に留まっていたなのはは、遺跡の奥から不規則に聞こえてくる騒音に不安な気持ちになる。

ユーノから直々に教えてもらったフィジカルフィールを二人にかけながら、時を置くごとに激しさを増していく戦闘の物音に表情を曇らせる。

そして、また音が大きく・・・今度はフェイト達が戦くほどのものだ。

「この音は・・・！？」

「奥から聞こえてきたけど・・・・・・ユーノ達かな！？音の大きさからして、かなり激しい戦闘が行われていると思うけど。」

「こうしてはおられぬ。先を急がねば・・・」

そう言うと、ルキアはまだ完全ではない体を起こしながら苦い表情を浮かべる。

そんな辛そうな雰囲気を醸し出すルキアになのはが声をかける。

「ルキアさん・・・まだ無理しないほうがいいですよ・・・」

「大丈夫だ。お前の治療のお陰で、大分身体が楽になった・・・この程度なら問題ない。」

と、ルキアが感謝の気持ちをなのはに口にしたその瞬間だった。

遺跡全体を通して凄まじい揺れが三人の体にしっかりと伝わってきた。

「「「!!」」」

この揺れを感じた三人がユーノ達が走って行った奥の方へ顔を向けると、より鮮明に聞こえてくる戦闘の衝撃音によってなのは達にリアルな状況を想像させる。

「先程よりも一段と戦闘が激化している・・・!」

すると、なのはの胸の中ではあの時のユーノの言葉が思い返されると同時に、奥底に秘めるユーノが再び自分の前から居なくなってしまうのではないかという途方もない不安が胸を苦しませる。

「・・・ユーノ君・・・一護さん・・・金太郎さん・・・」

一方、そんななのはの不安が具現化したように戦局は高円寺の方に傾き、三人はこの強すぎる高円寺の能力に非常に苦戦を強いられていた。

「ぐあっ！！」

一護は高円寺の繰り出す強力な技をその身に受け、深手を負ってしまう。

「黒崎！！ちっ！！」

石田は一護を助けようと、１２００の連射段数を誇る銀嶺弧雀の矢を一斉に高円寺に向けて発射するが、高円寺はそれを何の防御も使わず全て受け流してしまう。

「何！？」

驚愕する石田であったが、そんな高円寺の背後からユーノが晩翠を振りかざして翡翠斬をお見舞いする。

「輝け、晩翠！」

ユーノが放つ翡翠斬を感知すると、ギガトロンは特殊な打消し魔法を高円寺の周囲に発動させた。

〈Ｉｇｎｏｒａｎｃｅ〉

すると、翡翠斬は効力がかき消されてしまい高円寺に直撃する前に

斬撃そのものが消滅してしまった。
間近で見たユーノと石田はあまりの出来事に言葉を失った。
「「！？」」
その瞬間、高円寺は二人に掌を向けると圧縮した魔力砲弾を二人に向けて発射した。
〈Ｒｅｖｅｇｅ〉
魔力砲弾に直撃した二人はそれぞれ岩場の方へと吹き飛ばされ、激しい轟音を響かせる。
「「ぐあああああ！！！」」
「石田！ユーノ！」
一護は自分の目で確認できる悪友であるが頼りになる仲間である石田と、自分の弟子で最も信頼しているユーノがこんな得体のしれない男に圧倒されるなど、考えもできなかった。
「悪いがここでお前達は足止めだ。これから大事な儀式が始まるんでな・・・俺もそれに出席しないといけないんだよ。」
そう言い終わると、高円寺は魔力を右手に集中させ莫大なエネルギーを作り出して、それを洞窟全体に行きわたるように地面に殴りつけながら送り込んだ。
すると、送り込んだ魔力によって空間が激しく揺れ始めると、その

まま落盤を発生させて攻撃を受け身動きが出来ないでいた一護やユーノ達の元に降り注いでいた。

「「「ぐあああああああ！！！！」」」

岩が三人の頭上から降り注ぎ、やがて声が聞こえなくなると高円寺は徐にギガトロンとの変身を置いて生き埋めの三人にこう言い残し、銀太郎の元へ向かった。

「永遠に瓦礫の中で埋まっていろ。」

全く以て、この男はいったい何者なのであろうか？

最強の部類に入る一護やユーノと言った男三人をこうも簡単に打ち負かすとは・・・――彼の能力の詳細は現時点でははっきりしないが、ユーノの予見した通り最も注意しなくてはいけない人物であることは間違いないようだ。

さて、最深部の方で銀太郎に衝撃の事実を突き付けられた金太郎は未だ頭の中では理解できずにいたため、再度銀太郎に問い直した。

「・・・どう言う事なのだ・・・・！？」

「遠い昔、僕達のご先祖・・・・・・即ち、初代ダイシーとその仲間達数名は秘密裏にある計画を実行しました。それは、リベルの魔導師が後世でミッドとベルカの魔導師からの受ける排斥や苦痛から逃れるため、失ったパトリオットの誇りを取り戻すためのもの。記録に残っていたのは、当時のパトリオットが既に自らの体を霊子へと変換し、尸魂界と世界を繋ぐ術を持っていたということ。初代ダイシーは尸魂界へと渡り、死神の存在を黙認する。彼ら死神達が不

法に侵入してきた魂魄を“旅禍（りょか）”と罵り、抹殺しようとしたことも直ぐに分かった。だが、ダイシー達はそれでも死神の追ってから逃れ、何とか生き延びた。そして、誰にも気付かれぬよう強大な力と供にパトリオットの全ての技術をある場所へと隠し、後世に伝えようとした。それが“聖地”なんです。聖地には、僕らの人智を超えた力が眠っていると言われています。しかし、聖地への扉を開くのは容易なことではありませんでした。ダイシー派の多くは世界中を這いずり回りながら誇りのためにとこれを探し続けたが、あと一歩のところで見つけることは出来ず・・・心なき魔導師の手によりその多くが虚しく命を落としていった。」

「・・・・・・――――――」

そんな長々と語る銀太郎の話を、全身の痛みに耐えながらも金太郎は力なき目線を向けながら黙って聞いていた。

「この洞窟は、ダイシー派の多くの同胞が迫害から逃れ、魔導師に復讐をせんと密かに建造し隠れ住んでいた地下都市です。かなりの大きさでしょ?それだけ、ダイシー派の人間が存在していたという証拠ですよ。それが・・・・・今残っているのはほんの僅か。元々ダイシー派は魔導師に対して交戦的な姿勢を取っていましたから、消えていったのは自然の摂理のようなものでしょうけど・・・・・・それでも、魔導師がそんなダイシー派や多くのパトリオット達を汚い手を使って消去しようとしたのは事実なんです。だから僕らは取り戻すんです。失った多くの同胞の為に・・・・・・そして、パトリオットの栄光と誇りの為に。僕達は聖地へと足を踏み出さなければならないんだ。俺らの悲願は、聖地に眠りしパトリオットの神秘なる力を復活させ、再びこの地にパトリオットの楽園を創り上げること。そして・・・・・・そこで僕らは争うこともなく、凡庸な日々を過ごす。大切な家族と一緒に・・・・・・」

「うっ・・・・・・！！」

「これが全てですよ。」

銀太郎はすべての話を終えると、持ち上げていた金太郎を用済みのもののようにぞんざいに投げつけた。

「ぐあああああ！！！！！！」

身体に深手を受け、疲労困憊状態の金太郎は地面にたたきつけられると、首元を手で押さえながら咽り続ける。

「ぐは！！ぐは！！」

一方の銀太郎の方は、やはり先ほどと同様冷笑な表情ばかりを浮かべ、自分よりも明らかに年上であるはずの金太郎を貫録のようなものを纏わせながら眺める。

暫くすると、金太郎は仮面越しに銀太郎を徐に見つめると自分の考えを素直に口にしてきた。

「・・・私には・・・分かりかねるな・・・魔導師がお前達パトリオットをどうかしたということなど・・・しかし！！自分達や先祖がどれだけ酷い仕打ちを受けようと・・・だからと言って、同じ人間である魔導師を傷つけていいことなど・・・一つもありはしない・・・！！」

「・・・――――」

そう言うと、金太郎は立ち上がり傍に落ちていたアックスオーガを拾い上げると両手でしっかりと握り、ブラッドカートリッジを一発ロードし魔力を上昇させる。

銀太郎はそんな金太郎を無言で見つめるだけ。

「私は逃げませぬ！自分の運命にも・・・血筋にも！！」

その瞬間、アックスオーガを地面に突きさし巨大な衝撃波を発生させた。

〈Ｄｙｎａｍｉｃ　ｑｕａｋｅ〉

「ダイナミッククエイク！！」

銀太郎に向かって放たれた巨大な衝撃波は真っ直ぐに地面を走っていくが、銀太郎は自分の目の前に現れた金太郎の技をオプティマスプライムの防御力で容易に退け、軽くあしらうかのように手で軌道をずらした。

軌道がずれたダイナミッククレイクはそのまま後ろの岩場に激突し、凄まじい轟音を立てながら周囲のものを粉砕する。

その金太郎の渾身の一撃を間近で見た銀太郎は些か表情を綻ばせながら口を開く。

「・・・成程。流石はエドワード・コークの血を受け継ぐものと言ったところですか？やっと力を出してくれて嬉しいですよ。」

笑みさえ浮かべる銀太郎に対して、金太郎自信はこの渾身の一撃が銀太郎には全く通用しないという事実にショックを隠し切れないでいた。

「バカな・・・!?」

「ですが、僕ものんびりはしていられません。」

そう言うと、銀太郎は脚力を高めると一瞬のうちに金太郎の懐に入り込み手刀で金太郎の腹部を狙って来た。

「何!?」

金太郎が気づいた時には、既に銀太郎の手刀が甲冑に食い込み、本来ならばユーノや一護でもそう簡単には破壊できないはずのブラッド状態時における金太郎の甲冑に難なく日々を入れて、体格差のある金太郎を軽々と吹き飛ばしたのだ。

「ぐああつ!!!」

後方に吹き飛ばされ、破壊された甲冑からは生々しくも金太郎の血が噴き出ていた。

しかし、金太郎はそんな状態にもかかわらず未だ立ち続け決して倒れようとはしなかった。

「まだまだ!!」

「本当に・・・呆れるくらい丈夫な体ですね。力の上昇は見受けられましたが、そんなものじゃ僕は何時までも倒せませんよ。」

すると、その挑発を聞いた金太郎はアックスオーガを持って全速力で銀太郎に向かっていった。

「はあああああああああ！！！！！」

金太郎のフルスイングが銀太郎に直撃しそうになった瞬間、銀太郎は瞬間転移を使っていとも簡単に金太郎の背後を掌握する。

「！？」

振り返ろうとした瞬間、金太郎の腹部に脚力が飛躍的に高められた銀太郎の蹴りが出血した腹部に直撃する。

「ぐっは！！」

倒れそうになる金太郎の顔面に更に銀太郎の膝うちが入り込み、ついには天井に突き上げられてしまい頑丈である仮面すらも割ってしまった。

重力によって徐に落下し、地面に一度激突すると銀太郎が止めの蹴りを加えて金太郎を瀕死の状態寸前にまで追い込む。

金太郎は攻撃を受ける過程で、アックスオーガを手放してしまい完全に無防備状態と化す。

そして、為す術もなく倒れ伏す金太郎に銀太郎が足を背中に乗せ、更に金太郎を苦しめる。

「のああ！！！」

「僕の体の中に流れるラボラトリーＧＸから強奪したダイシーの血が、僕に更なる力を与えた。僕らは、ただ静かに平和に暮らしたいだけなんだ。時空管理局の魔導師が翡翠の魔導死神が何だというのですか！パトリオットの楽園を築き上げるため、あなたには前哨戦として、此処でくたばって貰います！」

本来、めったなことでは感情を高ぶらせないはずの銀太郎がこのときばかりはパトリオット達の前で素直に感情を表現していた。

金太郎は血でにじんで視界がはっきりと確認できない顔のままじっと目をつむり、銀太郎に追い詰められていく。

「（・・・くそ・・・私は此処までなのか・・・・・・・いや！）」

すると、そんな窮地に陥る金太郎の脳裏にユーノやなのは達機動六課の仲間の顔が走馬灯のように思い浮かんできた。

「（・・・私は一人で・・・此処まで来た訳ではないのだ。）」

金太郎は負けたくない、死にたくない、何としても彼らパトリオットを救ってやりたいという気持ちだけを発条にし、力を振り絞って立ち上が等とする。

「（・・・こんな所で・・・終わってたまりますか！！）」

「？」

全身を奮い立たせながらも自力で立ち上がった金太郎は、疑問符を浮かべる銀太郎を余所に地面に突き刺さったアックスオーガを目指

してゆっくりとした足取りで向かっていく。

「・・・アックスオーガ・・・」

往生際の悪い金太郎の態度を見た銀太郎は警告を促す。

「止めておいたほうがいいです。アックスオーガは、もうあなたの気持ちには応えてくれません。」

「・・・黙れ・・・」

銀太郎の警告など一切お構いなしに、金太郎は重い足取りで只管アックスオーガ目指して歩いていき、届きそうなところで手を伸ばした。

すると、そんなアックスオーガを先に移動していた銀太郎が取り上げた。

「!?」

銀太郎は驚愕の表情を浮かべる金太郎を余所に、アックスオーガを手に取る。

「何をするのだ?!」

「初代パトリオット、エドワード・コークの使った伝説のインテリジェントデバイス『アックスオーガ』。直系尊属の間だけに受け継がれてきたこれも、使い手がそれでは充分に答えてなどくれません。あなたが持っていただけは、宝の持ち腐れです。」

「くっ・・・！！」

「魔導師にとって、デバイスとは武器であるとともに場合によっては己の分身ともなりうる。あなたにとっての相棒がこれなら、その相棒の手によって止めを刺されるのは本望と言ったところでしょう？」

銀太郎はそんなことをアックスオーガを金太郎に向けながら語りかけたが、すると金太郎はそんな銀太郎を・・・いや、自分に向けられたアックスオーガを見ながら不敵な笑いをする。

「・・・ふん・・・ふふふふ。」

「？何が可笑しいんですか！？」

突然の金太郎の笑いに、戸惑いを見せる銀太郎。

そんな銀太郎を余所に金太郎は徐にアックスオーガに近づきながらこんなことを語りかけてきた。

「・・・アックスオーガ。聞こえておるのだろう・・・今、お前は何をしておるのだ？」

金太郎がアックスオーガの目の前まで歩み寄ると、そのままアックスオーガの斧の先端部分を両手で握りしめる。

「私の声が聞こえているのなら・・・」

「あなた・・・何を・・・！」

予期せぬ金太郎の行動に声を荒げる銀太郎だったが、金太郎はその瞬間大声を上げながら勢いよく握っていたアックスオーガの先端を自分の腹部に突き刺した。

「お前の声を聞かせろ！アックスオーガ！！」

アックスオーガを突き刺したその瞬間・・・・・古のインテリジェントデバイス『アックスオーガ』の心がそのまま金太郎の精神世界とリンクし、痛みを感じる間もなく金太郎は静かに具現化したアックスオーガの住む世界で目を開けた。

アックスオーガの精神世界は、すべてが立方体で造られた画一された世界であり、具現化したアックスオーガ自身は金太郎が今着用しているこのブラッド状態たるアックフォームに酷似していた。

金太郎は目を開き、今一度自分の相棒であるアックスオーガと正面からコンタクトを取る。

「・・・アックスオーガ・・・」

金太郎が徐に口を開くと、アックスオーガも仮面越しに金太郎に話しかけてきた。

「覚悟は出来たか？」

「心の何所かで、甘えがあったのかもしれぬな。私の周りには、店長を始め未来の優秀な魔導師がいる。だから、彼らは私の力などなくとも自らの力で困難を切り開いていける。そう言う仲間への過信が、私に戦いに対する隙と甘さを作り出した。」

「恐れるな、金太郎！迷いあらば刃は曇る。嘗てお前は、迷い無き思いで力を手に入れ、それを使っていた。今一度問おう。お前の覚悟とは・・・お前は何のために戦う？誰のために力を欲する？」

そう尋ねられると、金太郎は真顔を浮かべながら何故自分が魔導師となったのか、何のために力を使って来たかを思い出した。

「ああ。思い出したよ・・・大事な人たちを守るため、人々の大切にしたいという世界を守るため私は力を使っていたことを。私自身の魂に誓うことで、曇りなき心で戦いに身を投じていたことを。私の命を削る覚悟だ。アックスオーガ・・・力を貸してくれ。人々とその世界を守る力を。」

すると、金太郎のその要求にアックスオーガは勿論とばかりにこう返してくる。

「・・・私はお前の力だ。お前は自分の力を・・私（アックスオーガ）を信じろ。」

アックスオーガの言葉を聞くと、金太郎も安堵の表情を浮かべて首を縦に振るう。

「分かった。」

二人の精神世界での対話をそこで切れ、金太郎は再び現実世界と戻ってきた。

「！？」

その瞬間、銀太郎の目の前にはいつの間にか自分の手元に戻したアックスオーガを持つ金太郎が立っていたのだから。

「あなた、何をしたんです!?」

すると、金太郎は覚悟の籠った瞳でアックスオーガにブラッドカートリッジを三発ロードさせ一気に魔力値を最大にさせる。

「・・・行きますぞ。これが私の覚悟です!!アックスオーガ!!」

〈Ｆｕｌｌ　ｄｒｉｖｅ〉

ブラッドカートリッジの三発ロードにより、金太郎の周囲に発生する卍時のような疾風怒涛の魔力嵐が銀太郎を戦かせる。

フルドライブを発動した金太郎を吹き荒れる魔力嵐を手でガードしながら、銀太郎はしまったとばかりに見つめる。

「ちっ!」

そして、魔力嵐が晴れた瞬間・・・・・金太郎は破損した仮面と甲冑部分を修復させ、フルドライブ状態のアックスオーガの名を口にする。

「“アックスフォーム・ダイナミックハデス”」

アックスオーガのフルドライブ、アックフォーム・ダイナミックハデスの形状は通常時のそれを大きく上回るほど巨大で勝つ装甲の追加されたものとなり、その破壊能力は全魔導師中最強を誇るものとなる。

この金太郎の発動させたフルドライブを見た銀太郎は、驚愕の表情

を浮かべながら思わず復唱する。

「フルドライブ・・・アックスフォーム・ダイナミックハデスだと！？」

すると、その瞬間・・・金太郎が瞬間転移によって銀太郎の前から姿を消し、銀太郎の背後を奪った。

「！」

銀太郎が対処の為に魔力衝撃を発生させたが、金太郎はフルドライブ状態のアックスオーガの一振りを浴びせて、銀太郎を吹き飛ばした。

一気に形勢が金太郎に傾いたのを見て、扉の制御をしていたオーリーの不安が募り銀太郎の名を叫ぶ。

「銀太郎！！」

すると、動揺するオーリーに対して冷静沈着になれとばかりに瀬間子が叱咤する。

「騒ぐな、オーリー。お前は扉の制御に徹しろ。直に高円寺も来る。」

「く・・・了解した・・・」

瀬間子の言葉を聞いて、歯がゆい気持ちを必死で押さえながらオーリーは言われた通りに扉の制御に戻る。

その間、銀太郎は膝をつきながら右頬から出血してきた血を拭い取り、金太郎の方へと目を向ける。

一方の金太郎はそんな金太郎に挑発的な口調で立ち上がるよう煽り立てる。

「立ち為され。」

銀太郎は素直にその場から立ち上がると、脚力を全開にして一気に金太郎に向かっていきゼロ距離での魔力衝撃を食らわせようとしたが、金太郎はそれをアックスオーガで受け止める。

アックスオーガで魔力衝撃を受け止めた瞬間、あまりの凄まじいエネルギーの大きさに地面がめくりあがる。

その後、二人は高速での戦闘を繰り広げるが金太郎は先ほどとは全く違い銀太郎の攻撃の全てを的確に判断できるようになっており、背後に回ってきた銀太郎に向かって余裕の表情を浮かべこう口にする。

「鈍くなりましたか？」

そう言うと、銀太郎の攻撃よりも前に金太郎は瞬間転移で銀太郎の遥か後ろへと回り込む。

振り返った銀太郎も、空中に足と止める金太郎に狙いを定め・・・二人は一気に加速させて激しいぶつかり合いを続けるのであった。

「「はあああ！！！！」」

そんな激突が繰り広げられている頃、何とか別の道を見つけた恋次と吉良は所々崩れて落ちた瓦礫の道を通りながら、金太郎たちがいる遺跡の最深部へと目指し走り続けていた。

「この先だよ。」

「ああ。急ぐぜ！」

吉良と共に最深部を目指す恋次は、最悪の事態が起きぬことを願って全速力で駆け抜けていく。

「（頼む・・・間に合ってくれ・・・！）」

恋次と吉良が遺跡の最深部へと目指しているその間も、金太郎と銀太郎・・・両者による熾烈な争いはまだまだ収まる気配はなかった。

「はあああああ！！！！」

フルドライブ状態のアックスオーガを渾身の力を込めて銀太郎に振り下ろす金太郎と、それに対抗しようとオプティマスプライムの能力を最大限に発揮させ、それを四肢に集める銀太郎。

アックスオーガと銀太郎の四肢が衝突した瞬間発生する莫大なエネルギー波により、周囲の岩場が自然と崩壊し、天井にぶら下がっていた石英の尖った結晶が崩れ落ち落下する。

二人はその直撃を何とか避けるが、金太郎は直撃を回避した銀太郎の方を振り向くと仮面の下で賞賛の笑みを浮かべこう口にする。

「お見事。直撃を受けていたら、体そのものがどうかしていただろ

う。」

一方の銀太郎も、何処か愉悦で満ち溢れた表情で銀太郎の言葉に返事をする。

「ふふ・・・確かに、言うだけのことはありますね。凄い破壊力だ。」

金太郎はアックスオーガを持ち直すと、銀太郎に勝負の決着を促してきた。

「そろそろこの辺で終わりにしましょう。」

すると、銀太郎もその気になったらしく快く返事をする。

「いいですよ。」

二人は互いに持ちうる魔力を最大にすると、互いにほぼ同時に走り出し最後の攻撃に移ろうとした・・・・・その時。

「「!」」

突如として、最深部へと続く入り口から凄まじい轟音と共に砂埃まで乱入してきたことで二人は思わず攻撃を中断してしまった。

「何ですか・・・!?」

巻き起こる砂埃の中を、金太郎がまじまじと見つめると・・・そこに居たのはユーノと一護・石田の三人を圧倒し変身を解いた高円寺虎彦の姿であった。

高円寺の登場に、金太郎は思わず驚愕の表情となる。

「き、貴様は・・・！！」

「高円寺さん。」

神妙な顔つきの銀太郎であったが、内心は高円寺が戻ってきてくれたことにほっとしていた。

高円寺は軽く服についた砂埃を払いながら銀太郎の元へと歩き出す。

「済まない、少々手こずった。」

徐に銀太郎の方へと歩いてくる高円寺に向かって、金太郎は感情を高ぶらせながらユーノ達のことを尋ねた。

「貴様！！！店長と一護殿達をどうした！！！」

「ああ。あいつらなら、今頃の瓦礫の下で良い夢を見ている頃だ。」

勝ち誇った表情で金太郎の質問に応じる高円寺であったが、その高円寺に打ち負かされてしまったユーノ達はというと、崩落した岩の下敷きのまま動けないでいた。

治療を終えたなのは達が急いで最深部の方へと目指して進んでいると、そこで目のあたりにする凄まじい戦闘の様子が窺える崩落した岩が転がる空間を見て絶句する。

「！これは！？」

「一体何があっていうの!?」

あまりの予想もしない事態にどう対応していいか分からなくなるなのは・フェイト・ルキアの三人であったが・・・その時、崩れ落ちた岩の下から聞きなれた男の声が聞こえてきた。

「う・・・!!」

なのはがその声のする方へ目を向けてみると、岩場が徐にのし上がって緑色の服が見えたのであった。

「あ!」

そして、岩下から出てくる苦悶の表情を浮かべ全身を傷だらけにするユーノとそれに連動するかのように一緒に現れる同じ満身創痍の一護と石田。

「くそ!!」

「く・・・!僕としたことが・・・!」

三人がその場から現れると、なのは達は直ぐにユーノ達の元へと駆け寄った。

「ユーノ君!!」

「一護!!石田も大丈夫か!?」

「ああ・・・あの野郎・・・強すぎる!?本当に人間かよ!!」

「高円寺と言う男・・・あれはどのパトリオットとも次元を異にしている・・・！」

高円寺の次元を異にした信じられないほどの戦闘能力をその身に味わった一護と石田は思わず悔しい表情となった。

一方のユーノは、なのはに抱えられながら頭に受けた傷を手で押さえていた。

「いてて・・・」

「ユーノ君！怪我してる！今、治療を！」

「ごめん、なのは。心配かけて・・・治療もそうだけど・・・今はそれより、早く金太郎のところへ行かないと。何か凄く嫌な予感がする・・・」

「ああ・・・そうだな・・・」

ユーノの言葉を聞いた一護もそれに了承すると、傷ついた体のままなのは達と共に金太郎たちが集う遺跡最深部へと目指し走り出した。

一方その頃、高円寺の登場によって金太郎と銀太郎の勝負が中断されたことにより、銀太郎は金太郎にこう口にしてきた。

「・・・どうやら、勝負は一時お預けですね。オーリー、準備はいいかい？」

銀太郎にそう尋ねられると、オーリーも漸く扉の制御が完了したら

しく、作業が終わると後の処置を東海林に任せた。

「ああ。後は頼むぞ、東海林。」

「よっしゃ！」

オーリーの後を引き継いだ東海林が徐に異世界へと続く扉の前に立つと、両手をつきだしリベル式の魔法陣を浮かび上がらせながら呪文を唱える。

「Ｍａｃｈｅ　ｓｏｇｌｅｉｃｈ　ｄａｓ　ｆｏｒ　ｆｕｅｒ　ｕｎｓｅｒｅ　Ｐａｔｏｒｉｏｔｔ　ａｕｆ（我らパトリオットの為に、門よ開き給え。）」

その奇怪な行動をとる東海林に思わず声が荒げる金太郎。

「貴様！何をする気だ！！」

すると、そんな金太郎に向かって銀太郎の傍に立つ高円寺が一喝する。

「騒ぐな！黙って見ていろ。」

東海林はリベル式の魔法陣を介して、扉にそれを合わせたのち両手で扉を開いた。

扉が開かれたことで、まるで台風のように強い風が金太郎や他のパトリオット達を吸収しようとさえしてきた。

金太郎は扉が開いてしまったことに深い後悔と責任を覚える。

「しまった！扉が開いてしまわれた！！」

その時、その金太郎の言葉を聞いた高円寺が鼻で笑うと直ぐに意外な一言を口にした。

「違うな。まだ完全には開かれてはいない。」

「なぬ！？」

高円寺はそう答えると、まじまじと開かれている筈の扉の方を見つめる銀太郎に向かってこう話しかけてきた。

「最後は、お前自身の手で扉を開けるんだ。銀太郎。」

「・・・はい・・・」

すると、銀太郎はゆっくりとした足取りで扉がある台へと続く階段を上っていき、来ていた学生服のポケットから何かを取り出そうとしていた。

そんな銀太郎の行動を見ていた金太郎は途方もない胸騒ぎを覚える。

「（何だ・・・この違和感は・・・！？）」

その瞬間、銀太郎はポケットの中から金太郎にとっては衝撃的なものを取り出す。

それは、最初に金太郎が襲われた時・・・――田吾作たちが金太郎のアックスオーガから強奪した鍵のような装飾だったのだから。

強奪された装飾品を見た瞬間、金太郎は目を見開いた。

「!!あれは・・・!?」

銀太郎はそんな金太郎を無視して、開かれた扉の中に静かにそれを嵌め込むと、ゆっくりと右回りにそれを回した。

「解・錠」

途端どうだろう。

銀太郎のこの行動を受けた扉の中は眩いばかりの白い光を放ち始めたのではないか。

全員はその光景を見ると、一気に表情が笑顔一色となる。

同じように、高円寺も銀太郎の行動に大いに賞賛の意を示すのであった。

「ふん。よくやったな、銀太郎。これで漸く我らは行ける。」

「な、何を言っておるのだ!?」

高円寺の言葉の意味が理解できない金太郎がそう口にすると、扉の前に立っていた銀太郎が驚愕の事実を話し出す。

「尸魂界への道は、今開かれたということですよ。」

「何ですと!!」

銀太郎の言葉に衝撃を受けていると、その傍で不敵な笑みを浮かべる高円寺が理解できていないままの金太郎に詳細な説明を始める。

「俺が教えてやろう。何故、今迄我々同胞達が何百年・何千年と言う長きに渡り、聖地へと踏み出せなかったその理由を。確かに扉を見つけることは出来た・・・だが、完全に扉を開くための鍵を見つけられなかったのだ。そして、それを開けるのに必要だったのが初代パトリオット、エドワード・コークの持つアックスオーガに組み込まれた解錠キーだったのだ。貴様は普段何気なくそれを使っていたとき不思議に思わなかったか？どうしてこんな役にも立たないただの飾りがプログラムに組み込まれているのだと。」

「！！」

「あれはこの為のものだったのだ。解錠キーは、人間の体を世界に適した物質へと変換させてくれる力を秘めているんだよ。残念ながら、ダイシー派のパトリオットと言えども、体を霊子などと言った異物質に変換するその能力は持ち合わせていなかった。だが、エドワード・コークだけがそれを可能にした力・・・アックスオーガを持っていたのだ。あれは、エドワード・コーク自らが造り出した最初のリベル式デバイスであり、プログラムの一部にロスト・ロギアの力が掛け合わされたものなのだ。」

「ロスト・ロギア・・・だと！？では・・・あの鍵が！」

高円寺の話で漸くすべての合点がいった金太郎が何かに気づいくと、銀太郎が金太郎の察したことを口にしてくる。

「はい。この鍵には、空間と次元を操るロスト・ロギアの力が内包

しています。この鍵を使ったことで、聖地への扉は僕らを魂魄へと変換させる霊子変換ゲートへとなったんです。」

「!!お・・・おのれ!!!」

思わぬ事態に大いに後悔の念を抱く金太郎の胸に様々な感情がこみ上げてくる。

と、その時。

「金太郎!!」

「無事かって・・・これは・・・!?」

漸く遺跡の最深部へと到着したユーノ達が金太郎の姿を確認する。

恋次や吉良、一護と言った死神を始めその存在を知っている石田やユーノは自分たちの目の前に見えているこの聖地への扉の姿に目を見開いた。

「まさか・・・聖地への扉って言うは穿界門のことだったのか!?」

高円寺は意外にも早めに復活した一護達に些か驚きながらも、何処か余裕の表情を見せていた。

「おや?もうお目覚めのようだな・・・まぁ、それも良かろう。銀太郎。」

「はい。オーリー、大丈夫?」

「問題ない。行くぞ、高円寺！」

「どうやら時間のようだ。」

高円寺は全員にそう口にすると、瞬歩のように高速で銀太郎達の元に移動すると驚愕の表情を浮かべるユーノ達に向かって次のように言い残し、扉の中へと消えていくのであった。

「「「あ！」」」

「エドワード・コークの末裔、翡翠の魔導死神、死神代行。そして、時空管理局の魔導師共。追ってくるなら追って来い。向こうで待っていてやる。」

「待て！！」

金太郎が聖地の扉の中へと消えていく七人を追おうとするが、その瞬間扉は七人を完全に別世界へと導いたのち光を失った。

取り逃がした金太郎がその場に拳を固く握りしめていると、あとから来たユーノ達も後悔の念を表情としてあらわした。

「くそ！！逃がしたか！？」

と、その時。

彼らが尸魂界へと向かった直後に、漸く恋次と吉良が合流を果たしてきた。

「一護！！金太郎！！」

「一体何が起きんですか！？」

二人が全員の傍まで走ってきたとき、目の前にある自分たちのよく知るものを見て思わず言葉を失いそうになる。

「これは・・・！！」

「まさか・・・穿界門か・・・！？」

金太郎は何も語らず黙したまま項垂れているが、ユーノはそっと事情を聞きだそうと声をかける。

「金太郎・・・何があったんだい？」

すると、金太郎は悔しさと自責の念を声を押し殺しながら謝罪の言葉として表現する。

「・・・――申し訳ありません！」

深い後悔に打ちひしがれる金太郎のことを、かける言葉も見つからないなのは達であったが、その時・・・・・光を失ったはずの扉の向こう側から奇妙なものが舞い込んできた。

全員がその奇妙なものに気づいて近づいて確認してみると、そこにあったのは高円寺が態と書き残した聖地に関する地図であった。

「！これは・・・！？」

「地図か・・・！？」

「挑発のつもりでしょうか？」

「恐らくね。」

驚愕し、半信半疑でそれを見つめるユーノ達に金太郎が銀太郎から語られた聖地に関する情報を暴露する。

「パトリオットの聖地とは、どうやら尸魂界の何所かにあるそうです・・・面目ありません。見す見す逃がしてしまうとは・・・」

「謝ってる暇はないぜ。俺達も直ぐに追いかけ・・・！？」

と、一護が金太郎にそう語りかけた直後だった。

突然、遺跡全体が揺れ始め天井から落盤が起こり始めた。

「「「「「「「！」」」」」」」

原因はおのずとわかるとおり、遺跡内での激しい衝突が元々古くなっていた遺跡全体の強度の限界を超えてしまい、崩壊を招いてしまったのだ。

ユーノ達の周囲にある岩が崩落し、天井からも石英の結晶が次々と落ちていく。

「マズイ！！崩れ始めてきた！！」

「みんな！！急いで逃げるぞ！！」

ユーノはそう言うと、全員を一カ所に集めると転移魔法を使って即座に遺跡の入り口へと転送させた。

ユーノの転送が完了すると同時に、遺跡の入り口も落盤によって完全に塞がり洞窟には誰も入れなくなってしまった。

「畜生!!扉も何もかもが埋まっちまった!!」

入り口の岩場を拳で叩いて大いに悔しがる恋次。

そんな恋次を横目に一護はこれからの具体策をユーノに尋ねる。

「ユーノ。どうする気だ?」

「ここが破壊されたことで、もうゲートは開きません・・・・・・僕が穿界門を開きます。こうなった以上、機動六課全員で尸魂界に乗り込みましょう。みんな、スクライア商店まで一緒に来て欲しい。」

「え!?ユーノの店に・・・!?」

フェイトやなのはは、ユーノから飛び出す思わぬ言葉に思わず仰天する。

「そうだ。大至急クロノ達に連絡して、松前市にある僕の自宅兼店に集合してくれ。十三隊の死神さん達にも協力を要請して、決着をつけないとならないな。」

「考えようによっては、多分その方がいいかもしれませんね。」

隣に立つ吉良がそう口にすると、ユーノは何処か複雑な表情を浮かべながら自分達魔導師が彼らパトリオットにしてきた仕打ちと、そのパトリオットの期限たるバウントに関してこう口にしてきた。

「元々あのパトリオットは輪廻の過程に変動を起こしたバウントに違いはない。皮肉なことに、バウントは尸魂界が不慮の実験で生み出してしまった人間だ。血を見ようとも傷つこうとも、死神さんも僕ら管理局の魔導師も何らかの責任を取らなくてはならない・・・か・・・」

「ユーノ・・・」

「店長・・・」

ユーノ事の場に思わず声を詰まらせるフェイトや金太郎。

するとその直後、恋次がユーノの話を聞くや否や気を取り直して尸魂界へ向かうことを決意する。

「だったら話は早いぜ。この借りはきっちり向こうで返させてもらうぜ！」

「その前に、兄様に連絡して全員がいけるように許諾を得ねば・・・・・兄様！私です！！」

ルキアはすぐに、義理の兄であり上司の白哉に許諾の連絡を取り始める。

その間に、ユーノは何かを思い出したのか懐からあるものを取り出した。

「あ、そうだ。バウントってので思い出したけど・・・あれを用意しといて良かった。」

「あれって？」

なのはがそう口にすると、ユーノは掌にちょうど収まるぐらいの小さな発信機を人数分取り出し全員にそれを見せる。

「浦原さんの技術を拝借して僕が作った特製のパトリオットセンサーさ。バウントが発する独特の霊圧波長とパトリオットとしての魔力波長を合成して、同じ信号に置き換えることが出来る。最悪の事態も考えておいたが、早速役立ちそうだ。」

「相変わらず抜け目ねぇな、お前・・・感心しちまうぜ。」

用意周到に様々なことを考えているユーノの思慮深さに師匠である一護は驚嘆する。

「は！了解しました。ありがとうございます。」

ルキアの方もどうやら承認の方が下りたらしく、全員に報告する。

「兄様と連絡がついた。承認許諾は兄様がしておくとのことだ。」

「よし。行くぜ、尸魂界へ！」

この時が来ることがまさか訪れようとは・・・――――

時空管理局の歴史において、古くから密かな交流があった同じ世界

を守る魂魄の調整者、死神の住まう世界『尸魂界』へ機動六課前線一同が真っ先に足を踏み入れることとなったのだ。

果たして、この二つの勢力が交わりしとき訪れるものとは何か・・・――パトリオットの聖地とは一体どんなものなのか？

舞台は、いよいよ後半戦・・・――尸魂界へと移される。

一方、聖地への扉を使って既に尸魂界へと侵入したパトリオット達と銀太郎の方はと言うと、初めて体感するすべてが霊子で出来た尸魂界の感触に興奮を覚えていたが、高円寺一人だけは他の六人とは違い、何処か懐かしそうな表情を浮かべ奇妙なことを口にしたそうな。

「・・・久しぶりだな・・・霊子の大気を吸うのは。ふん、これで漸く長きに渡る夢を実現させれるのだな。今こそ、全てを我が手に！」

この意味深長な高円寺の言葉とは一体何か？

続きは尸魂界での決戦で明らかになる事だろう・・・――

教えて、ユーノ先生！

ユ「今回は穿界門についてだ♪」

ユ「穿界門は、現世と尸魂界を繋ぐ門でそれをくぐった先は、現世と尸魂界を繋ぐ通路である断界（後述）という場所へ通じている。ここを安全に通ることができるのは地獄蝶を持つ死神、もしくは断界の壁が技術開発局により固定されているときのみなんだ。」

ユ「一護さんはこの穿界門を通って、尸魂界へと向かっているんだ。」

一「いよいよ、なのは達も尸魂界へと向かうのか。向こうの隊長達はどう見るんだろうな？」

な「う～～ん・・・何だかすごく緊張してきちゃった・・・」

ユ「あっちの隊長さんも濃い人たちが多いですからね・・・特に凶暴な殺人鬼のような人と、スカリエッティに負けず劣らずの凶科学者が・・・」

そう言うと、一護は更木剣八と涅マユリの顔を思い浮かべて顔をひきつる。

一「あいつらか・・・・・・確かに、なのは達にはちょっとキツイよな・・・・・・」

な「（どんな人たちなんだろう・・・・・・）」

魔導師図鑑ハイパー！

六番隊隊長朽木白哉はルキアが留守の間、一人で事務処理をこなしてた。

すると、机の電話が鳴り響いたので白哉は徐に受話器を取る。

白「私だ。」

ル『兄様！私です！！』

白「ルキアか。何の用だ？」

ル『申し訳ございません、兄様！報告にあったパトリオットを追い詰めたのですが、尸魂界に逃がしてしまいました！！』

白「何？」

ル『一護達と機動六課の前線を引き連れてそちらに向かいますので、許可申請のほうをお願いできないでしょうか？』

白「分かった。こちらから手配しておこう。」

ル『ありがとうございます！あ、序に戻った暁には、現地で買ったお土産の方を是非・・・』

白「それは要らぬ。」

あっさり断る白哉であった。

突入、死神の世界・尸魂界！（前書き）

ユ「聖地への扉が開かれ、パトリオット達はとうとう聖地がある尸魂界へと踏み出していった。予期せぬ事態となったが、決着は現地でつけるしかない。」

一「連中にとっては、未だかつて足を踏み入れたことのない未開の地。俺やユーノが案内役として、しっかりとしないといけねぇ。」

ユ「すべての魂魄が死後に導かれる魂の故郷・・・・・・死神はその魂を守り、調整することで世界の崩壊を防いでいる。」

一「時空管理局とは言わば対となすもう一つの巨大組織・・・・・・そんな組織の連中ともう一つの巨大組織が相見えるとき、果たして何が待っているんだ？」

ユ「ユーノ・スクライア外伝　パトリオット篇・・・・・・始まります。」

突入、死神の世界・尸魂界！

＞ｉ１８７５４―７０９＜

パトリオット達が尸魂界へ侵入したことを逸早く捕えた技術開発局の通信研究科は一番隊の山本元柳斎へと伝令を送り、それを受けた

元柳斎は早速隊長陣を招集し緊急隊首会を執り行う。

集められた護廷十三隊の隊長、総勢八人が元柳斎の目の前に横一列で並ぶ。

「これより、臨時隊首会を始める。旅禍の侵入を確認した。下達！一(ひとつ)、各隊は第二級警戒態勢にて封じん。一、事の重要性に鑑み特別措置として六番隊隊長、朽木白哉を旅禍捕捉の責任者とする。」

「は。しかし・・・」

「情報が錯綜しておる。尚且つ、時空管理局の想定しうる事態が予期せぬ事になり始めているやもしれぬ。正しき情報を統括し、各隊に徹底する措置と考えよ。」

「は。」

元柳斎の命令を聞き入れた白哉は表情を一切崩すことなく毅然とした態度で返事をする。

「一、これが最も重要である。」

その瞬間、隊長陣全員が沈黙を保ち・・・・・固唾を飲んで総隊長である元柳斎の話に耳を傾けると、元柳斎は徐に口を開いた。

「旅禍と遭遇した者は・・・速やかにこれを捕縛せよ！万が一、抵抗の意思を見せた場合については、迷わずこれを抹殺せよ！」

「・・・・・・」

元柳斎から突き付けられる言葉に、白哉は些か表情を歪めるがそれもまた仕方ないことだと思いつつ元の毅然とした表情へと戻した。

さて、尸魂界へと侵入した銀太郎達と言うと待機中を滑空しながら重力に従って真下にある霊力を持たない魂魄が住まう町、流魂街の外れへと落下していった。

流魂街の住人達は、その光に気づくと危険を察知して逸早くその場から退散を始める。

「おい！こっち来るぞ！！」

「逃げろ！！！」

流魂街の住人が完全に退散すると、タイミングよく銀太郎達もその場に落下していった。

そして、砂埃が晴れると徐に銀太郎やオーリー達は初めて見る光景に目を奪われた。

さて、銀太郎達が尸魂界へと降り立った頃とほぼ同時刻。

ユーノ達はある程度の治療を済ませると、ユーノに言われた通りにアクトン内部で待機中であったフォワードメンバーと、はやて・クロノなども引き連れて集合場所であるスクライア商店へと向かった。

なのは達機動六課の面々は、恋次達とは違い始めてこの店の外観を見たせいか・・・あまりにギャップのある光景に思わずポカンとなってしまう。

「こ・・・此処が・・・ユーノ君の・・・お店・・・？」

ユーノの店と言うことでもう少し良いものだと期待していたなのはであったが、呆気にもその予想は容易に崩されることとなり、はやてに至ってはあまりのボロボロの外見を見るなりつい失礼な発言をしてしまう。

「何や・・・ただのあばら家・・・ぐっほ！！！」

はやての発言を聞くと、いつの間にか隣に立っていたユーノが杖の一突きではやての腹部に一発入れ込み、はやては痛さのあまり声を失い蹲る。

そんな哀れなはやてを見下ろしながら、一護は織姫とコンと一緒に近くに立ちながらこう口にしてきたのだ。

「余計なことは口にするなよ。つーかお前らも、一体何を期待してたんだよ？」

ユーノは一先ず全員がいることを確認すると、ほっと一息ついてからなのは達を店の中まで案内することにした。

「これで全員集まったね。それじゃあ、早速“穿界門”の準備をしないと♪」

ユーノが店の扉を開き、中に入ってくと恋次と吉良は一番最初にこの店を訪れた時のことを思い出す。

「久しぶりだな。こん中に入るのは。」

「修行のとき依頼だね、僕ら。」

なのは達がが恐る恐る店の中に入っていきながら、陳列してある商品を横目で見ていると、ユーノは畳を一枚めくりあげて秘密の地下訓練場へと続く階段を見せた。

不審に思ったフェイトが全員の気持ちを代弁してユーノに尋ねる。

「ユーノ・・・この下に何があるの？」

「行ってみてのお楽しみ♪ほら、降りるよ♪」

そう言うと、ユーノは地下訓練場に向かうために躊躇なくその穴の中へと飛び込んでいった。

「え！？あっ！！ユーノ君！！」

ユーノが飛び込んだを皮切りに、続けざまに一護・恋次・吉良・ルキア・そして金太郎たちスクライア商店メンバーと白鳥も地下へと飛び込んでいった。

スバル達が底の見えない深く続いた穴の中を恐る恐る覗いてみる。

「この床下って深！！どこまで続いているの？？！！」

そう思っていると、先に地下へと降りて行った白鳥と一護の声が戸惑いを見せているなのは達の耳に入ってくる。

「何をして居るのだ！」

「ぼさっとすんじゃねぇよ！時間が無いんだぜ！」

「あ、はい！」

二人にそう言われると、全員は心の準備を終えてから徐に梯子を伝って地下へと潜っていくが、あまりに深いその穴の底に若干の恐怖を覚えるなのは達機動六課前線部隊。

「店の地下にこんなものがあったなんて・・・」

「何があるんでしょうか・・・！？」

まぁ、この後のなのは達のリアクションがどのようなものであるかは後で語るとして、再び場面を尸魂界の銀太郎達に戻すとしよう。

銀太郎達は、目の前に広がってくる流魂街の街並みや世界観に目を奪われながら抱いていた霊界のイメージとはかけ離れていたことにギャップを感じていた。

「ここがソウル・ソウサエティか・・・」

「思ってたよりも普通なんだな。」

そんなことを白鴎や東海林が口にしていると、高円寺や田吾作は周囲に存在する無数の霊子を肌で感じながら白鴎達に語りかける。

「大気中には、充満した霊子が無数に存在する。俺達にとっては魔法が無くても活動エネルギーには出来るよな。」

「だな。」

すると、銀太郎が高円寺に向かって聖地があるとされる死神が住まう瀞霊廷への侵入方法を尋ねたのだった。

「高円寺さん。聖地の場所は確か、死神達の住む瀞霊廷の奥にあると文献にはあるみたいですけど、どうやって中に入ります？」

「まぁ、容易に入れないのは自明の理だ。あれを見ろ。」

高円寺はそう言うと、銀太郎達全員に巨大な堀がしかれた瀞霊廷の入り口付近を指さしながら丁寧にこの状況を説明する。

「四方には尸魂界全土から集められた豪傑四人がそれぞれの門を守護している。真正面から入るのはまず不可能だろ。おまけに、瀞霊廷をガードしているのは周囲に張り巡らされた瀞霊壁だけではく、そいつは尸魂界でも希少な『殺気石（せっきせき）』と呼ばれる霊力を完全に遮断する鉱石で出来ている。」

「と言うことは、今俺達は霊子に体が変換されてる上、俺達の持つ魔力や霊力でも穴を開けて中に入ることは出来ないってことか？」

「ああ。もともと魔導師の持つ魔力は基本、人間の魂魄の力がリンカーコアと言う別エネルギーとして分離・再構築したものなんだ。それを成し遂げたものが“魔導師”と呼ばれ、リンカーコアを持つが故に元来の霊力資質がまるでゼロな人間はざらにいる。」

尚、あまり知られていない事実であるが・・・・・・霊力も魔力も根本的な発生源はその人の魂魄からであることは間違いないのだ。

それが、ある種の過程を通して魔力資質が高くなるか霊力資質が高くなるかで死神か魔導師とういう二つに大別することが出来る。

基本的に、魔導師はリンカーコアを持つ代わりにその力の全てを魔力生成に充てているため、魂魄の姿を確認できても霊力資質がまるでないために鬼道を使うことは出来ない。

同じように、死神も霊力資質はあってもリンカーコアにエネルギーを分離・再構成する術も持たないが故に魔力を有さず、魔法を行使することは出来ない。

ユーノが以前恋次達に行ったあの修行は、リンカーコアを生成すると言っても完全なものへと分離・再構成するということではなく、一時的な装置としてのものを作り出すという意味でしかない。

その為、強大な魔力を生み出すことは出来ないし・・・魔力がたとえ備わったとしても使える条件は限定的になってしまうのだ。

故に、恋次や吉良・ルキアも魔力をほんの少しばかり持っていても霊力を失わずいられるのはその為であり、“魔導死神”と呼称されない所以でもある。

「だが、稀にその資質を両方兼ね揃えた人間もいる・・・」

高円寺がそう口にすると、銀太郎は眉を顰めながらあの男の通り名を口にした。

「翡翠の魔導死神ユーノ・スクライアさん・・・ですか・・・」

「あれ?それって確か・・・」

田吾作が銀太郎の方を向きながら徐に尋ねると、銀太郎はさらに続ける。

「うん。元無限書庫の司書長で、管理局でも天才と謳われる頭脳の持ち主だよ。あの金太郎さんが今勤める店の店長さんらしい・・・」

「ふ～ん。」

それなりの興味を持ちながら軽く受け流す白鴎であったが、高円寺が話を元に戻してきた。

「さて、話が大分それた。続きを話そう。さっき言った『殺気石』ってやつは厄介なことに切断面からも霊力も元来が霊力であった魔力すらも分解する波動を出している。つまり・・・その波動で瀞霊廷は空の上から土の中まで球体状に障壁が張られているということだ。」

「そ・・・外から地中まで・・・」

「当然そんな所に迂闊に空から飛んで行っても、霊子に身体が変換された俺達は木っ端微塵になってそれでお終いだ。」

「じゃあ、どうする気だよ!?」

不安そうな表情で高円寺に尋ねる東海林であるが、高円寺は冷静に打開策を発表する。

「だからこそ、それを可能とする者の元へこれから挨拶に行くのさ。」

「何？」

「誰なんですか、それは？」

高円寺の言う打開策を有する人物に興味を抱く銀太郎達であったが、高円寺はそんな六人に向かって背中越しに語りかける。

「ついてくれば分かるさ。一先ず、死神に見つからないことだけに注意するんだぞ。」

「あ、はい・・・」

銀太郎は一先ず、言われた通り死神の動きに細心の注意を払いながら高円寺の後姿を白鴎達と一緒に追いかけていくが、その間・・・白鴎はオーリーに向かってこんなにも尸魂界の事情に詳しい高円寺に違和感を覚える。

「オーリー・・・何で高円寺の奴、こんにも尸魂界（ここ）の事に関して詳しいんだ？」

「さぁな。だが、何を企んでいるかは知らぬが・・・・・・高円寺虎彦・・・・・まるで思考が読めぬ。いけ好かぬ男よ・・・」

オーリーは自分達とは全く考え方も思考も異なるパトリオット、高円寺虎彦にだけ強い疑念と敵対意識を抱いていたが、断定できる証拠がない限りは高円寺の行動をじっと観察することを決め込むのであった。

さて、場所は再びスクライア商店の地下訓練場へと戻そう。

案の定、なのは達機動六課の前線一同は眼前に広がってくる周囲が異常に広がっているユーノの創り上げたフィールドに思わず目を疑い、呆気にとられていた。

「「「「「へえ!?」」」」」

「「「「「なっ!?」」」」」

暫くの沈黙ののち、全員の気持ちを表すかのようになのはが織姫以上のオーバーリアクションを披露するのであった。

「・・・え・・・えええええええええ!!!

相も変わらず目から滝のように涙を流す金太郎を横に見ながら、白鳥は徐に尋ねる。

「ゴールデンベアーは泣きすぎだぞ・・・（というか、涙腺が緩すぎなのでは・・・）」

と、そんな事を思っていた白鳥や辺りを見渡していたなのは達の耳元にユーノの声と手を打つ音が聞こえた来た。

「ハイハイ。みんな僕に注目♪」

なのは達がユーノの方へ顔を向けると、ユーノは早速準備の完了した穿界門をお披露目しようと指を鳴らした。

「それじゃあ、お見せしよう♪ほい！」

ユーノが指を鳴らした瞬間――――――空間を割いて現れる死神が現世と尸魂界、二つの世界をつなぐ門。

始めてみる代物に目を奪われる機動六課の前線部隊。

「！これが・・・そうか？」

「そ。これがなのは達にとっては未知である魂魄の世界“尸魂界”へと続く門・・・界を穿つと書いて穿界門（せんかいもん）。いいかい・・・今からこの門の説明を始まるから、よ～～～く聞いて欲しい。」

真剣な表情で自分たちに話しかけてくるユーノを見たなのは達は、同じく真剣なものとなりユーノに説明を求める。

「・・・うん・・・分かったよ。」

なのはにそう促されると、ユーノは門の説明と同時に施行したものに関する説明もまとめするのであった。

「・・・この門は通常の穿界門の上から霊子変換機を重ね、それを結合符で覆って固定しているんだ。」

ティアナは聞きなれない言葉に思わず質問をする。

「霊子変換機？何ですかそれは。」

「いい質問だね、ティアナ。知っての通り、尸魂界とは魂魄の世界・・・そこへ立ち入るには魂魄の姿でないと不可能だ。しかし承知の通り魂魄の姿で移動できるのは死神である一護さんや恋次さん達だけ。なのは達他の皆は体から魂魄を抜いても“因果の鎖”と言うものがついているから尸魂界に行くどころか殆ど移動も出来ない。」

「そ、そんな！」

思わぬ事実を聞かされて声を荒げるなのはであったが、ユーノは冷静に言葉を続ける。

「慌てないの、なのは。そこで霊子変換機さ♪こいつは現世やミッドチルダなどほぼ全ての世界に存在するあらゆるものを構成している『器子（きし）』と呼ばれる物質を、魂魄の主構成物質である『霊子』に変換することが出来るんだ！」

ユーノの話を聞いたシグナムは頭の中で少し考えてからユーノに尋

ねる。

「・・・・・・・・・つまり、魂魄を抜かなくてもこの門を潜れば・・・」

「ピンポーン！そのままの姿で魂魄として尸魂界へ入ることができるって訳！ただ・・・恋次さん達は兎も角として、なのは達魔導師の皆には一つ向こうにおける戦闘での注意事項があるんだけど。」

「私達に・・・ですか！？」

「一体なんでしょうか？」

全員がユーノの言葉に耳を傾けると、ユーノは徐に次のような事を語り出した。

「尸魂界は先程も話したとおり、魂魄の世界。即ち、世界を構成する建物や水や食べ物も全てが霊子だけで出来ているということ。しかし、それは対偶を言えば・・・魔導師の力の根源である魔力素が一切大気中に存在しないということ。リンカーコアの魔力がなくなれば、それだけ皆には無理が生じる。くれぐれも、魔力の浪費は抑えて欲しい・・・いいね。」

「「「「「「「「「「はい！」」」」」」」」」」

素直に自分の話を聞き入れ、肯定の返事をしてきた前線部隊に顔を綻ばせながらユーノは早速穿界門を開く準備に取り掛かることにした。

「それじゃあ用意をして。今からこいつを開けるから。一護さん、

金太郎。先になのは達皆を連れて向こうに行ってて下さい。僕が門を開けているその隙に。」

「分かった。織姫、コン！ちょっくらあっちまで行ってくるからよ、家のほうは任せたぜ！万が一のときは、石田とチャドにも連絡してあるからよ！」

「うん！気をつけてね、あなた。」

「へますんじゃねーぞ！」

二人に留守中のことを頼む案内役の一護と、久々の尸魂界への帰還とあって多少の不安と喜びを胸に抱いている恋次達三人と魔導死神として覚醒した白鳥。

「久々の帰還だな・・・尸魂界へは・・・」

「ああ。」

吉良は徐に斬魄刀を抜き取り、空間に突き刺すと右回りにそれを回す。

「解錠！」

すると、その瞬間死神が通るための専用の穿界門が現れ、門が開くと同時に正式なルートを案内してくれる地獄蝶が三人の元に飛んできた。

「では、我々は一足先に行っておる。断界（だんがい）は何があるか分からぬ。くれぐれも気をつけるのだぞ！」

「分かってるよ！いちいちウルセーな！」

ルキアのお節介な言葉に腹を立てる一護と、いよいよ出発するとなってか何処か緊張した様子のなのは達一行。

そんななのは達に若干の心配を抱きながら、ユーノは特殊な方法で門に霊力を注ぎ込んでいき穿界門を開こうとしていた。

「それじゃ、開くよ。準備のほうはいいかい？」

「「「「「はい！」」」」」

「開くと同時に駆け込め。こいつはあまり長く開いていられねぇからな。」

ユーノの言葉に補足した形で一護がそう言うと、なのはが返事を返す。

「分かりました！」

そして、恋次達が先に正式なルートで尸魂界へと向かったと同時にユーノの力によって穿界門が解放される。

「開きます！！」

「了解！！」

「行くで、みんな！」

「「「「「はい！」」」」」

門が開かれると同時に、はたての掛け声とともに機動六課前線一同・スクライア商店メンバーである鬼太郎・浦太郎・金太郎の三人、そして案内役の一護。

門の内側へと入り込んだ瞬間、防護服を着用したなのは達の目に飛び込んできたのは・・・・・『断界』と呼ばれる尸魂界と現世の狭間に位置する魂魄の動きを鈍らせる気流で満たされた不気味な空間であった。

あまりの突然の光景に思わず目を疑う機動六課前線部隊。

「・・・ここは・・・一体・・・・！？」

すると、そんな呆気にとられている六課メンバーに一護が一喝し、前進することを促す。

「ぼさっとすんじゃねぇ！！さっさと走るぞ！！拘流の壁が追ってくるぞ！！」

「え！？」

その瞬間、後ろにあった『拘流（こうりゅう）』と呼ばれるその気流が虚しく崩れ落ちながらなのは達に迫った来たので、全員は度肝を抜いた。

「わぁ！！壁が追ってきた！！」

「に、逃げるぞ！！」

全員は一護に言われた通りに、走ったり空を飛んで前だけを向いて前進を始め、門の外で全員の心配をしていたユーノは徐に手を門にあてながら自分も準備を始めるのであった。

「・・・さて、無事に辿り着いてくれよ。みんな・・・」

さて、断界の中を走り続ける機動六課のメンバーであったが・・・走り抜けたところから崩壊していく拘流の壁を見ながら冷や汗をかいていた。

「どうなってるのよ!!走り抜けたところから崩れていくわ!?」

「一護さん!ここは一体何なんですか!?」

はやてがそう尋ねると、一護は走りざまに言葉を返す。

「『断界(だんがい)』って言ってな、その名の通り世界から断絶した空間が幾重にも重なった時間の激流で、数字で言うと２０００倍。つまり、外で１年過ぎる間に断界では２０００年が過ぎるんだ!」

「２、２０００年・・・!?」

常識離れした空間の話を聞いた瞬間、フェイトは思わず聞き返してしまう。

「親父から聞いた話じゃ・・・昔、断界は現世への通路であると同時に流刑地でもあったらしい。そのために拘流と拘突つーう霊圧の列車みたいなもんが存在し、拘流に捕われれば断界から抜けられず死に至り、拘突に追われれば断界突入の時間軸から大幅に飛ばされ急激な時間の変化に身体が着いて行けずにやっぱり死んじまうんだ

よ！」

「そんな！て言うか、何で恋次達は私達とは一緒じゃないんだよ！！」

すると、そんな不満げな口調で愚痴を漏らすヴィータに隣を走っていた鬼太郎が割り込んできた。

「そいつは俺が説明するぜ！正式なルートを通れるのは死神だけだ。一人ずつ地獄蝶って言うのがいてな、それを使って現世と尸魂界を行き来するんだ！」

「てか、呑気に話してる暇はないんじゃないの！！」

浦太郎がそう示唆した瞬間、金太郎が更に加速して迫ってくる拘流の壁を見るなり全員に警告を促す。

「き、来ましたぞ！！！」

言われて後に恐る恐る振り返った全員は、あまりの恐怖に思わず声を上げてスピードを上げるのであった。

「「「「「ああああああああああ！！！！！！」」」」」

必死に地上を走り続けるフォワード五人と、空を滑空するなのは達隊長陣や同じく険しい表情で走り続ける一護やスクライア商店メンバー。

その時、リィンがアギトの横で泣きながら死にたくないことを必死で主張する。

「わ、私まだ死にたくはありません！！！」

「私もだよ！！！てか！！空飛んでる奴が何言ってやがんだよ！」

そんなアギトの発言を聞いて、シグナムが真顔で突っ込みを入れる。

「お前もな。アギト・・・」

拘流の壁から逃れるために只管に前だけを走り続けていたなのは達であったが、すると一護が前方に見えてきた一筋の光を見つけ全員に語りかけてきた。

「お！見ろ、お前ら！もうじき出口だ！！」

「みんな！！あと一息だよ！！」

「「「「「はい！！！」」」」」

なのは達は最後の力を振り絞って全速力で出口を目指して前へ進み続け・・・そして、何とか断界を抜けることに成功した全員は西流魂街の方へと流星群のように落下していった。

巻き起こる砂埃の中を覗くと、そこには様々な体制で降り立つスバル達五人と打ち所を間違えてとんでもないことになっている鬼太郎がそこには居た。

「ぷうっ！」

「いてて・・・変な場所打っちゃった・・・」

頭を押さえながら意識を確認するティアナ達に滑空していたなのは達が身を案じてきた。

「ティアナ達も大丈夫!?」

「はい・・・どうにか・・・」

「あ!」

すると、エリオは晴れた砂埃の先に見えてきた未開の地の光景を目の当たりにし、全員も周りの景色を見て言葉を失った。

「こ・・・ここが・・・」

「魂魄の世界・・・尸魂界か・・・?」

「何だか・・・江戸時代の下町って感じにも見えるけど・・・?」

様々な印象を抱くなのは達であったが、一護がそんな全員にこの流魂街についての説明を始めた。

「ああ。ここは“郛外区(ふがいく)”。俗に『流魂街(るこんがい)』と呼ばれる場所だ。尸魂界に導かれた魂が最初に住む処で、死神達が住む『瀞霊廷(せいれいてい)』の外側に位置する場所だ。尸魂界で最も貧しく、最も自由で、尚且つ最も多くの魂魄が住むのがココって訳だ。」

「けど・・・その割には全然人の気配が・・・」

ギンガの言葉を聞いて全員も共通の見解を抱くが、聞いていた一護

は当然とばかりの表情で更に続ける。

「当然だろ。流魂街の連中はみんな俺達が来たから一様に隠れてんだよ。」

「？何故、隠れる必要があるんですか？！」

「本来、現世の魂魄は死神による“魂葬(こんそう)”によって尸魂界(ここ)へと導かれるが・・・俺達みたく死神の導き無しに不正にやって来た魂魄は『旅禍(りょか)』と呼ばれ、尸魂界じゃあらゆる災厄の元凶とされてる。」

「あ、成程。」

納得した様子を見せるはやてであったが、周りを見ていたシグナムがふと一際目立つあるものを見つけ一護に尋ねてきた。

「ん？黒崎、あの巨大な塀のようなものは何だ！？」

シグナムがそう言って尋ねてきたのは、流魂街と瀞霊廷を分断する門と堀であった。

「ああ。不正に瀞霊廷に侵入しようとする奴を遮る東西南北にそれぞれ設置された四大瀞霊門(しだいせいれいもん)の塀だよ。それぞれ、青流門(しょうりゅうもん)、白道門(はくどうもん)、朱雀門(しゅわいもん)、黒隆門(こくりょうもん)のいずれからしか入れなくなるんだ。各門には尸魂界中から選びぬかれた番人が警護している。」

「へえ・・・あ！」

と、一護の話を聞いていた矢先・・・・・自分たちと同じ方法で降ってきた流星群を見つけると、なのは達は直ぐにそれが誰である

かを理解する。

「お！店長も来た様だぜ！」

全員は急いで到着したユーノの元へ急いだ。

ユーノは無事に到着を終えると、杖を持ちながら安堵のため息をつく。

「ふぅ～～～到着っと！」

ユーノの姿を確認すると、真っ先になのはが声をかけてきた。

「ユーノ君！無事だった！？」

「一応ね。それより、状況を見る限り・・・そっちも着いたばかりって感じ？」

「うん。一護さんからこの辺の事とか聞いてたところ。」

「これから如何する気だ？」

クロノにそう尋ねられるユーノは、先ずは恋次達の元に向かうことを提案する。

「一先ず、恋次さん達の所まで行こう。三番隊隊舎はこの辺からだとそんなに遠くないはずだ。」

「よし！じゃあ、俺について来い！」

一護はそう言うと、全員をひきつれて西門である白道門へと向かい始める。

キャロは一応念のためもう一度周りを見渡してみたが、やはりこれて言って入れそうな場所がないことを確認すると、恐る恐る一護に尋ねる。

「あの一護さん・・・見たところ入れるような場所は無いんですが・・・どうやって中に？」

「心配すんな。俺の知り合いが直ぐ近くにいるから、そいつに門を開けてもらうさ。」

「一護さんの知り合い・・・？」

スバル達は尸魂界における一護の知り合いがどんな人物であるか、今の段階では全く分からないでいたが暫く歩いているとユーノはその人物を見つけて全員に声をかける。

「ほら、あれだよ皆♪」

ユーノが指示した方向に目を向けたなのは達はその瞬間、思わず自分の目を疑った。

「なっ！！」

瞳に映ってきたのは、人間のサイズを明らかに超えた山のような巨躯で、手には専用武器である斧が握られていたのだから。

そのあまりの大きさに普段は大したことでは驚かないはずのクロノ

やシグナムも思わず目を見開き声を漏らす。

「・・・で・・・・」

「デカイ・・・!!!!」

そんな驚愕一色のなのは達を余所に、一護はその巨躯の男に声をかけてきた。

「お～い!?丹坊(じだんぼう)!!」

「・・・ん?おお!!おめえは・・・!!!」

一護の声を聞くと、その男・・・?丹坊は徐に振り返ると一護の姿を見た瞬間思わず顔をほころばせる。

「一護でねぇか!!」

「久しぶりだな、?丹坊!相変わらずでけぇ体してんな!」

「そうだべ、そうだべ!お前は相変わらず派手な髪してんな!」

「ウルセーよ。これは地毛なんだよ!」

久しぶりの再会を喜び他愛もない会話を始める一護と?丹坊。

すると、?丹坊はその一護の後ろに立つ見かけない顔を見て思わず数え始める。

「お?見かけねぇ顔が・・・一、二、三、四・・・・・・」

?丹坊を更に間近で見たなのは達は開いた口が塞がらないでいたが、気を取り直したクロノが至って冷静でいるユーノに素性を尋ねる。

「おい、ユーノ。彼は一体何者なんだ・・・？」

「彼の名は？丹坊。流魂街全土から選び抜かれた豪傑の一人で、この四大瀞霊門の西門・・・通称『白道門（はくとうもん）』の番人だよ。」

「番人・・・ってことは・・・中に入るにはあの人を負かさないといけないってことですか？」

不安げな声でユーノに尋ねるエリオであったが、ユーノはその必要はないことを伝える。

「いや、その必要は無いよ。彼は一護さんの知り合いだから、門なら快く開けてくれると思うよ。それに、例え勝負事になったとしても彼は容易には倒せないさ。なにしろ、彼がこの門に就いてから三百年・・・この『白道門』は一護さんと一部のもの以外には一度たりとも破られたことは無いんだよ。」

「そ・・・そんなに強いのかよ！？」

「まぁね。その斧の一振りで３０体の虚を打ち殺したこともある伝説的な強力の持ち主だよ。力だけならヴィータよりも上かもね♪」

そんなユーノの言葉を聞くと、ヴィータは何故か闘争心が燃え上がり密かに勝負がしてみたいと思ったりもした。

「ほう・・・そりゃ面白れー・・・」

一方の一護は、？丹坊に諸々の事情を説明すると門を開けてくれるよう説得する。

「そう言う訳なんだ。何とか此処を開けて貰えねぇか、？丹坊！？」

「ああ、勿論だ！友達の頼みならオラは喜んで此処を開けるど！ちょっと待っでろ。」

「ああ。助かるぜ、？丹坊！」

一護の頼みをユーノの言った通り快く引き受けてくれた？丹坊は、門の下に手を入れると徐に力を入れ始める。

すると、門が少しずつではあるが開き始め・・・見ていたスバル達フォワード五人は驚愕の表情を浮かべていた。

「門が・・・開く！」

「でも、あんなに巨大なもんをどうやって？」

そんなフォワード五人や同じくらい驚いているなのは達に向かって？丹坊が背中越しに語りかけてきた。

「腰抜かすなよ～～～一気にいぐど～～～～～・・・」

？丹坊はそう言うと、全身税例の力を込めて白道門を完全開放しそれを持ち上げたのであった。

「ぬうん！！！」

「「「

それでは此処で、死神の拠点たる瀞霊廷について説明しよう。

尸魂界の要――――静謐(せいひつ)の地“瀞霊廷(せいれいてい)”で居住を許されるのは、死神と極少数存在する“貴族”と呼ばれる者のみである。

ルキアの義兄である白哉が当主を務める朽木家・四楓院家をはじめとする貴族たちはこの瀞霊廷に生まれ、その生を尸魂界の内に全うする。

中の風景は、流魂街とは打って変わって非常に整備されたものとなっており、アジア系の装飾が目立つとても華やかなものとなっている。

そんな死神の住まう町を興味津々に見渡すスバルやなのは達は声を出して感激していた。

「へえ～～～死神ってこんな処に住んでるんだ！」

「見た目はアジア系の装飾が色々と混同した感じの建物ね・・・てか、電柱まで完備されているんだ。」

「洗濯機とかもあるんだぜ。」

一護の何気ない発言を聞くと、なのははユーノの横で苦笑いを浮かべ思わず・・・

「色々と変なところ・・・・・・」

と、口にしてしまったのであった。

暫く歩いていると、一護達は目的の場所である三番隊の隊舎に到着する。

「お！ここだ、此処！」

一護は門番に事情を説明し、中を開けると警護をしている吉良の名前を叫ぶ。

「吉良！いるか！？」

一護の声に気づいた吉良が全員の方に振り向くと、次のように話しかけてきた。

「ああ。君達も無事に辿り着けたようだね。丁度いい・・・これから阿散井君と一緒に一番隊隊舎へ向ってほしい。山本総隊長のほうから直々に話があるそうだから。」

「え？爺さんが・・・」

意外なことを聞いた一護やユーノは思わず顔を見合わせ、対するなのは達は些か驚いた表情で声を漏らした。

「山本さんって・・・ミゼット提督のお知り合いの！？」

「そんな人が私達に・・・！？」

すると、そんななのは達の元に隊舎から出てきた恋次が近づいてきた。

「ま、行けば分かるさ。」

「恋次。」

「兎も角だ。山本総隊長の前で下手な言動は控えろよな。じゃねぇと、霊圧でてめぇらなんかぶっ倒れるぜ。」

恋次の言葉を聞き入れたユーノ達一行は早速、恋次の後に続く形で元柳斎が待ち構えている一番隊隊舎の方へと歩き出した。

その間に、はやてが傍にいた一護に元柳斎の素性について徐に尋ねる。

「あの・・・山本さんってどんな感じの人なんですの？」

「見た目は鬚の長い爺さんだが、もうかれこれ千年以上も総隊長の座に就いてるんだ。」

「そ、そんなに長い間・・・ですか！？」

「その人・・・何歳なんですか！？」

ふと思わった何気ない疑問を口にするなのは達であったが、ユーノが飄々とした様子で全員にこう言って来た。

「少なくとも、僕らの１００００倍以上は年を取ってると思うよ。」

「ま・・・マジかよ・・・！？」

「爺さんが何歳かなんて・・・正直考えたこともねぇよ。」

二人の言葉に呆気にとられる全員であったが、ふとその時・・・一緒に廊下を歩いていた鬼太郎が不満げな様子で愚痴を漏らしてきた。

「つうかよ！何で俺らまで出席しないといけねぇんだよ！？」

「仕方ないじゃないの、先輩。ここは素直に従っておこう。」

「事が事だけに仕方ないというのが現実。」

「大丈夫だよ。変なこと言わなければ何もしないから・・・多分。」

すると、クロノがユーノのあまりに落ち着いた様子に疑問を感じたのかこんな質問をしてみることにした。

「ユーノは随分と落ち着いているようだが、前にも来たことがあるのか？」

「一度だけ、一護さんと一緒に野暮用でね。だから、ある程度隊長の顔と名前ぐらいは知ってる。恋次さん達はそのとき、遠征でいなかったけどね・・・」

「いろんな処に行ってんだな、お前・・・」

改めて様々な場所を訪れているユーノに妙に感心する恋次に、ユーノは扇子を広げ飄々とした態度でこう言って来た。

「だって、僕スクライアですからね♪」

「ま、それもそうだな。」

納得した様子の恋次は、そのまま真っ直ぐ廊下を歩き続け隊長陣が集まる隊首会の部屋まで全員を引き連れて移動し続けるのであった。

恋次達が一番隊隊舎に向かっているその頃、銀太郎達パトリオット達はと言うと・・・瀞霊廷への侵入方法のカギを握るある人物の元に足を運んでいた。

その人物の住まいは閑散とした村はずれにあり、決まって旗持ちオブジェを造るという変った趣味の花火師で、人はその人物のことを空鶴さんと呼んでいる。

「ぐっほ！！」

「ぐあああああ！！！！」

空鶴さんもとい、志波空鶴（シバクウカク）の家へと不法侵入を果たした銀太郎達は、高円寺に言われるがままに行動していたがこの光景には流石に心が痛む。

高円寺は空鶴の守護と家の門番である金彦（こがねひこ）と銀彦（しろがねひこ）を完膚なきまでに痛めつけたのち、主人である空鶴にも酷い仕打ちをして昏倒させようとするが、空鶴も中々気絶には至らずギリギリのところで意識を保っていた。

「て・・・てめぇら・・・何もんだよ・・・！！」

満身創痍の状態となりながら、空鶴がそう尋ねると高円寺は不敵な笑みを浮かべながら最後の一撃を加える。

「ふん。通りすがりの魔法使いとでも言っておこうか。ギガトロン、

眠らせておけ。」

〈Ａｌｌ　ｒｉｇｈｔ〉

高円寺はギガトロンの力を発動させると、魔力衝撃を一発入れて空鶴を完全に昏倒させる。

「ぐあああああああ！！！！！！」

高円寺の荒っぽいやり方によって、空鶴以下三名の住居人は見事に意識を失い倒れ伏してしまった。

「悪いな。この家の設備は有効的に使わせてもらうぞ。」

そんな高円寺のやり方を傍で見ていた銀太郎は恐る恐る尋ねる。

「あの・・・高円寺さん・・・ちょっとやり過ぎなような気もするんですが・・・」

「心配はいらん。この女もあの男達もそう簡単にくたばりはしない。さて、これから瀞霊廷に侵入する唯一の方法を説明しようと思うのだが、その前に・・・もう一人お客さんが来たようだ。」

「「「「「「！」」」」」」

高円寺の言葉を聞いて六人が後ろを振り返ってみると、そこに立っていたのは空鶴の弟で嘗て一護達と一緒にルキア救出の手伝いをした自称“西流魂街一の深紅の弾丸”の志波岩鷲であった。

岩鷲は家に帰るなり眼前に広がってきた予期せぬ光景に目を疑って

いた。

「な・・・何だこりゃ!?姉ちゃん・・・!!金彦(こがねひこ)・・・!!銀彦(しろがねひこ)・・・!!て、てめぇ!!!ウチの連中に何しやがった!?」

岩鷲の登場を目撃した白鴎はその濃い顔の岩鷲に若干顔を引きつりながら高円寺に尋ねる。

「おいおい、何だよこいつは?」

「この女の弟だ。ちょうどいい、貴様も姉貴同様いい夢を見させてやろう。」

「な、何だと!!てめぇ・・・この志波岩鷲(シバガンジュ)様に向って随分な口叩いてくれるじゃねぇか!!」

高円寺の挑発を聞いた瞬間、岩鷲は懐から花火を取り出し着火させる。

「姉ちゃん達の仕返しはたっぷり返させてもらうぜ!ほあああああ!!!!!!!」

岩鷲は高円寺に向かって勢いよく走り出すと、着火した特製の花火を高円寺に向かって投げつけたのであった。

「喰らえ、血涙玉(ちなみだま)!!」

高円寺はそれを簡単に避けるが、次の瞬間花火が爆発を起こし部屋全体に唐辛子を染み込ませた特製の煙が充満し始める。

岩鷲はあらかじめ被害を受けないようにゴーグルとマスクをしていた。

「どうだ！！！これなら目も思うどおりには使えまい！！」

すると、徐々に晴れていく煙の中から高円寺がまるで術の影響を受けてない様子で岩鷲に語りかけてくる。

「それだけか？」

煙が晴れた先に立っている高円寺はと言うと、懐にしまっていたサングラスをかけ口元をギガトロンでふさいだ状態でいたのだ。

「何！？」

用意周到な高円寺と自分の術が聞かなかったことに驚愕する岩鷲であったが、高円寺はそんな岩鷲に非情な一撃を加える。

「ギガトロン。やれ。」

〈Ｉｇｎｏｒａｎｃｅ〉

ギガトロンの能力の一つであるイグノアランスが発動すると、岩鷲はその力によって後方へと思い切り吹き飛ばされてしまった。

「ぐあああああ！！！！」

岩鷲はあっけなく壁に体をめり込ませながら気絶をしてしまうと、そのまま目を回して動けなくなった。

銀太郎達六人は高円寺の実力に改めて驚愕する。

「つ・・・強え・・・・！！」

「ああ・・・ん！？」

と、その時・・・・・・岩鷲の血涙玉の影響が銀太郎達に飛び火したらしく六人は全員目から涙を流しながら激しく咽ばむ。

「げっほ！！げっほ！！何だよコレ！？目が痛いぜチクショウ！！」

「唐辛子が練りこんであるみたいだ・・・！！げっほ！！げっほ！！」

そんな六人のことを哀れに思いながら高円寺は徐にギガトロンを解除して、つけていたサングラスを外した。

「ふう。サングラスを肌身離さず携帯しといてよかった。さ、お前たち。いつまでも咽ばんでいないで、大砲台のある場所に行くぞ。」

「大砲台のある場所？」

言葉の意味の分からないでいる銀太郎達であったが、一先ずこの場から脱出できるなら何でもいいと思い高円寺の後に続いてのその大砲台のある場所へと向かい歩き出した。

途中、廊下が妙に明るいことに不審に思った東海林がこんなことを口にしだした。

「・・・凄げーな・・・地下なのに何で光が・・・こっちには発電

施設なんてもんは見なかったぜ・・・」

すると、そんな東海林の疑問に高円寺が歩きながら答える。

「ホタルカズラってのを飼っているんだ、この家は。天井の穴と両脇の木枠の上にな。」

「ホタルカズラ・・・？尸魂界だけに生えてる植物か何かか？」

と、東海林が高円寺の尋ねた時・・・高円寺はそんな東海林の質問を完全に無視して立ち入り禁止と書かれた扉を見つけ全員に伝える。

「着いたぞ。ここだ。」

「おい！俺の話無視してんじぇねーよ！！」

「東海林・・・・・・あいつは出会った時からああいう奴だっただろ？」

高円寺のぞんざいな態度に思わず憤慨する東海林であったが、隣に立つ田吾作が冷笑を浮かべながら口を挟んできた。

高円寺はその部屋の扉を徐に開けると、銀太郎達を徐に中へ入れた。

部屋の中は薄暗かったが、非常に広大な空間と共に中央には言っていた通りの大砲台が目の前に広がってきたのであった。

「な・・・何だこの大筒は！？」

「言っていた大砲とはこれのことだったんですか、高円寺さん！？」

「ああ。これはあの女、花火師『志波空鶴（シバクウカク）』が作り出した巨大花火台・・・その名も花鶴大砲（かかくたいほう）。こいつで俺達は瀞霊廷の中へと侵入するんだ。」

「侵入って・・・・・・何処から？」

疑問に思った白鴎がそう尋ねると、高円寺は勿論とばかりにこう答える。

「決まってる。空からだよ・・・空。」

「「「「「「空からァ！！？」」」」」」

あまりの頓狂な発言に銀太郎とパトリオット達五人も声を揃えて驚愕した。

「ふん。驚いたか・・・・・・名付けて、『流星大作戦・パトリオットバージョン』だ。」

高円寺虎彦の発案するこの流星計画とは・・・――――

迷走するパトリオット達一行はどんな方法でこの尸魂界に戦乱を巻き起こすのか？

そして、機動六課のメンバーに待ち受けるものとは一体何だ！

突入、死神の世界・尸魂界！（後書き）

教えて、ユーノ先生！

ユ「今日は、後半戦の舞台となる此処尸魂界についだよ♪」

ユ「いわゆる霊界。霊力を持つ貴族や死神達が住む瀞霊廷（せいれいてい）と、その周囲にある死者の魂が住む流魂街（るこんがい）に分かれており、暮らし向きや待遇などが厳然と区別されている。」

ユ「瀞霊廷の周りには通常は何もないが、通行証を持っていない者が不正に侵入しようとすると塀がしかれ、東西南北にそれぞれ設置されている四大瀞霊門（しだいせいれいもん）、通称、青流門（しょうりゅうもん）、白道門（はくとうもん）、朱？門（しゅわいもん）、黒隆門（こくりょうもん）のいずれかからしか入れなくなる。」

ユ「各門には尸魂界中から選び抜かれた番人が警護していて、主に流魂街は日本人が多く住んでいるように思えるが、それがアジア系の人だけなのかは定かではない。」

ヴ「それにしても、あの？丹坊と言う男と一度いいから力勝負してみたくなったぜ。」

な「珍しいね。ヴィータちゃんがそんなこと言うの・・・」

恋「お前にもシグナムのバトルマニア癖が感染したんじゃないのか？」

ヴ「そんなんじゃねぇよ！私はただ純粋にだな・・・・・・」

そう言葉を詰まらせているヴィータをユーノ・なのは・恋次は何処かにやけた表情で無言で見続ける。

ヴ「な、何だよお前らその目は！！！！」

魔導師図鑑ハイパー！

なのは達が尸魂界へと向かったその頃、喫茶翠屋で特製ケーキをご馳走になる織姫・石田・茶渡の三人。

織「あんま～～～い！！やっぱりここのケーキはいつ食べても美味しい！！！」

石「すみませんね。僕らまでご馳走になってしまって。」

美「気にしないで。なのはやユーノがいっつもお世話になってることだし、そのお礼ってことで捕えてくれれば。」

ヴィ「遠慮せずに食べて下さいね。」

すると、そんなヴィヴィオや高町家の前に突如喋る猫が現れる。

夜「なら儂にもこのチーズケーキをくれ。」

あまりの素っ頓狂な出来事に思わず士郎と美由紀は仰天する。

士・美「わあああああああ！！！！！猫が喋った！！！！！！」

茶「夜一さん？何でここに！？」

一方のヴィヴィオと桃子は至って普通であった。

桃「あら！！喋る猫なんて可愛い！！！ユーノ君みたいね！！！」

ヴィ「あの！肉球触ってみてもいいですか！？」

夜「遠慮することはないぞ。好きなだけ触るがいい。」

夜一は二人に肉球を触らせるが、傍で見ていた石田はどこか複雑な表情を浮かべる。

石「（桃子さんもヴィヴィオちゃんも・・・・・井上さんと一緒だ・・・・・・）」

流星大作戦・パトリオットバージョン（前書き）

銀「パトリオットの聖地を求めて、僕らはついに念願だったこの尸魂界へと行くことが出来た。そこで何が待ち受けているかは分からないけど・・・みんなと一緒ならきっと何だって乗り越えられる。」

白「俺達を瀞霊廷に侵入させるために取った方法は何とも大胆かつ壮大なものだ。」

東「だけど、それしかねぇなら俺達はやるしかねぇ！」

ユ「ユーノ・スクライア外伝　パトリオット篇・・・・・・始まります。」

流星大作戦・パトリオットバージョン

＞ｉ１８１８６―７０９＜

ユーノ・スクライア外伝・・・前回の三つの出来事。

一つ：ユーノの穿界門を使って、機動六課前線部隊が尸魂界へと向かう。

二つ：護廷十三隊が、侵入したパトリオットの捕縛の為に行動を開始する。

そして、三つ：銀太郎達は瀞霊廷へと侵入するため、花火師・志波空鶴を強襲する。

田「な・・・何だこの大筒は！？」

高「ああ。これはあの女、花火師『志波空鶴』が作り出した巨大花火台・・・その名も花鶴大砲。こいつで俺達は瀞霊廷の中へと侵入するんだ。」

白「侵入って・・・・・・・何処から？」

高「決まってる。空からだよ・・・空。」

全「「「「「「空からァ！！？」」」」」」

高「ふん。驚いたか・・・・・・名付けて、『流星大作戦・パトリオットバージョン』だ。」

高円寺の放った一言を聞いた一同は、暫くの間を置いてから徐に聞き直した。

「・・・りゅ・・・流星大作戦・・・！？」

「そうだ。」

すると、高円寺は上で待機していたギガトロンの分身に向かって地下から呼びかける。

「ギガトロン。上げてくれ。」

〈Ｌｉｆｔ　ｕｐ〉

ギガトロンは予め待機していた場所に設けられていたハンドルを勢いよく回し始める。

すると、その途端・・・銀太郎達がいる部屋が大きく揺れ始め徐々に上昇していくことが判断できた。

「わぁ・・・ッ！？」

「な・・・何だ！？」

「どうしたんだよ、一体！？」

「ゆ・・・床が・・・上がっている・・・！？」

床の上昇に伴い、外の方でも一見すると巨大な煙突とも捕えられる花鶴大砲のカモフラージュ用の装甲が剥がれ落ち、その真の姿が暴

露される。

そして、上昇を始めてから暫くすると天井が開放されていき外の光が差し込んできた。

「・・・て・・・天井が開くぞ・・・！！」

「マジかよ・・・！！」

呆気にとられる銀太郎達を余所に床は更に上昇を続け、わずか一分も断たぬうちに地下にあった筈のその部屋は完全に外へと突き出す形となった。

「「「「「「！！！！」」」」」」

思わぬカラクリを目の当たりにした六人の口は阿呆のように開かれ、そんな六人を台の上で見ていた高円寺は鼻で笑いながら言葉をかけてきた。

「ふん。ビビったか、お前達？こいつが志波空鶴専用の巨大花火台、花鶴大砲の姿だ。」

外へと突き出された花鶴大砲を凝視する全員であったが、暫くしてから田吾作や瀬間子が高円寺に向かって話しかけてきた。

「うっひゃあ～～～こりゃ冗談キツイぜ～～～！」

「・・・正気か・・・？」

「勿論正気だ。何だオーリー、何か言いたそうな顔だな。」

高円寺は眉間にしわを寄せて自分を見つめるオーリーにそう話しかけると、オーリーは冷笑を浮かべながらこの作戦の無謀性を説き始める。

「当たり前だ。こんな時に何の冗談を言っているのだ、貴様!?花鶴大砲だか何だか知らぬが、そんな大筒で我々全員を打ち上げるなど、どうかしている・・・ぐっほ!!!」

と、その瞬間。

オーリーは勢いよく高円寺から投げつけられた透明上の球体を顔面に直撃し、後ろに倒れこんで鼻血を流す。

「お、オーリー!?」

オーリーのことを心配する銀太郎と、オーリーが受けた球体をキャッチして物珍しげに覗き込む白鴎は徐に尋ねる。

「・・・・・おい・・・・・・何だこれは?」

「『霊珠核(れいしゅかく)』だ。この家の中から戴いてきた。最も、それは俺がちょこっと弄って魔力も砲弾に出来るよう改造したものだがな。」

「?魔力を砲弾・・・!?」

「そうだ。そいつに掌を押し当てて魔力を込めてみろ。それ自体が砲弾となってお前を包み込む。」

「?魔力を込める・・・・・こうか・・・・・うぬぬうううう

うう！！！！！」

いまいち質問の意図を理解できない白鴎であったが、一先ず言われた通りに魔力を込めようと奮闘したが、白鴎はそのとき魔力を込めるということ自体を今までやったことが無いことに気づき高円寺に方法を尋ねてきた。

「・・・って、“魔力を込める”ってどうやりゃいいんだ？」

「何！？」

白鴎の予期せぬ質問を聞いて呆れかえってしまう高円寺は、掌に魔力を集中させて集めた魔力を披露しながら質問を返してきた。

「何言ってるんだよお前！？そんなものはこうやって魔力砲弾を手で撃つのをイメージして手先に力を込めればいいだけの話だろうが。魔力衝撃ぐらい使えるだろ？」

すると、そんな呆れる高円寺に向かって東海林が意外な言葉をかけてきたのだ。

「お前こそ何言ってんだよ、高円寺？白鴎はコンボイとの対人戦闘には特化しているが、遠距離系の魔法はほとんど使えないだろう。撃てたとして自力じゃ絶対無理だ。」

「あ・・・そうだったな・・・」

高円寺は東海林の言葉でその事を思い出すと、思わず頭に手を当ててしまう。

一方の白鴎は未だにどのようにやれば魔力を込めることが出来るのかを自分なりに模索し続けていた。

「ん?!こうか・・・!?」

状況を見た瀬間子が、田吾作に魔力を込める見本を白鴎の代わりに行うよう促した。

「止むを得まい。田吾作、お前がやってみるがいい。」

「分かった。」

田吾作は早速、霊珠核を回している白鴎に手渡すようにと腕を伸ばしてきた。

「ホラ、よこせ!」

しかし、田吾作の行動を見た瞬間白鴎は手渡すことが嫌だったのか、適当に振り回しながら田吾作を翻弄し続ける。

翻弄される田吾作は我慢の限界に達して、怒りの炎を白鴎に向ける。

「てめぇ・・・小僧やる気かぁ・・・!!」

憤怒する田吾作とは違い、白鴎は不敵な笑みを浮かべながら更に挑発的な態度を見せる。

「おォ!取れるもんなら取ってみやがれってんだ!!テメーに教えを乞うくらいなら死んだ方がマシだ、ボケ!!」

そんな何時もの他愛もない喧嘩を始める二人を見ていた銀太郎や瀬間子は完全に呆れかえってしまう。

「また始まったよ・・・」

「何とも見るに堪えん光景だ・・・」

すると、先ほどまで気絶寸前の状態であったオーリーが鼻血を抑えるや否や二人の喧嘩を止めようと怒りの鉄拳を二人に喰らわせノックダウンさせた。

「いい加減にしろ!!」

頭から衝撃のあまり湯気を出す二人は倒れ伏した状態でオーリーに謝る。

「「・・・ご・・・ごめんなさい・・・」」

オーリーは溜息を徐に吐くと、霊珠核を取り上げ銀太郎に手渡した。

「もういい。銀太郎、出来るか?」

「あ、うん。やってみるよ・・・」

霊珠核を受け取った銀太郎は早速、精神を集中させて手に取ったそれに自身の魔力をゆっくりと注ぎ込み始めた。

「はあああああああああっ!」

魔力が込められると、霊珠核は光を放ち始めそれを見ていた全員も

固唾を飲んで銀太郎を見守り、やがて光は銀太郎を球体上に包み込んでしまった。

「な・・・！」

「何だこれは・・・！？」

あまりの光景に驚愕と衝撃を隠し切れないでいる全員に、銀太郎の傍らにいた高円寺が笑みを浮かべながら説明を始める。

「これが“砲弾”だ。」

「これが！？」

「そうだ。この世界に来たときにも説明した通り、瀞霊廷の周りには『殺気石』が張り巡らされている。」

すると、高円寺は徐に懐からたまたま持っていた殺気石の破片を見せて床下に置いた。

「これがその欠片だ。」

そして、徐に床下に霊力を使った衝撃波を送り込むと・・・・・・ものの見事に殺気石を置いた箇所以外のものは崩れ落ち、殺気石を置いた箇所は破壊されずに円周上に周りが崩落していることを露見させた。

「実際に見て判るとおり、俺の言っていた通りに霊力を完全に遮断する。」

「確かに、これじゃ霊力や魔力で壁に穴を開けるなんてのは不可能だな。」

「ああ。」

現物の光景を見ていた六人も納得した表情を浮かべる。

「しかも、もっと厄介なのは・・・・・・」

そう言いながら高円寺が欠片を手に取ると、その瞬間置いていた箇所は崩れ落ちてしまう。

「切断面からも霊力も元来が霊力であった魔力すらも分解する波動を出している。覚えているだろうな？」

「あ・・・ああ・・・」

眉間にしわを寄せながらこの厄介な物質を凝視するオーリー達であったが、そんな五人に高円寺は銀太郎の砲弾に手を当てながら口を開いてくる。

「そこでこいつの出番だ。」

高円寺が説明を始めるのを余所に、魔力をずっと込め続けている銀太郎は消耗限界が訪れてきたのか息を切らし始める。

「はぁ、はぁ、はぁ・・・こ・・・高円寺・・・僕・・・もう疲れ・・・」

「我慢しろ。」

疲労がピークを迎えようとしていた銀太郎が高円寺に止めたいと説得を試みようとするも、高円寺は後ろ越しに厳しい言葉をかけ詳しい説明を始める。

「この改造した霊珠核の正式名称は“特殊硬化霊子魔力隔壁発生装置（とくしゅこうかれいしまりょくかくへきはっせいそうち）”。俺達全員がこの球体に魔力ないしは霊力を込めれば、一時的ではあるが瀞霊壁の障壁を突き破るぐらいの砲弾が作れる。それを田吾作のマインドコントロールの力を使って奴らを意のままに操りこの花鶴大砲を打ち上げれば・・・一気に内部に突入することが可能。やり方はかなり荒っぽいが、他に方法は無い。」

掻い摘んで説明をすればこうだ。

銀太郎達七人がこの霊珠核に魔力を込めることで巨大な砲弾が完成し、それを田吾作の固有スキルである他人の神経を意のままに操るマインドコントロールを気絶している志波空鶴達にかけることで、打ち上げを可能としそのまま瀞霊廷の中へと侵入するというものだ。

「以上だ。何か質問のある者は？」

高円寺の長々とした説明を聞き終えた五人はその場に座りながら質問を考えたが、これと言ったものもなかったのでその旨を伝えた。

「・・・・・・」

「え・・・えーっと・・・」

「無いな・・・」

「無いのなら早速砲弾を作るための練習に取り掛かる！全員が完璧に出来るようになったら作戦開始だ！」

「わ、分かった！」

「よし、じゃあ頑張ろう！」

「おうよ！！」

俄然やる気になった五人は立ち上がると、砲弾を作るための練習場となる地下練習場へと向かい歩き始めた。

すると、そんな彼らの士気に影響を及ぼすような高円寺の思わぬ一言が聞こえてくる。

「しっかり練習すれよ。あ、一つ言い忘れていたが・・・一人でも集中乱したら一気にその場でドカンだぞ。」

「「何！！」」

その言葉を聞いた瞬間、既に遠目で見えなくなりつつあった白鴎や田吾作、東海林の三人が怒りを露わにしてきた。

「てめぇ！！そう言うことは早めに言え！！」

「お前はほんと痛に障る奴だよ！！！！」

「いつか見返してやるからな、チクショー！！！！」

三人は遠距離から高円寺のことを罵るが、当の本人は全く相手などせず鼻で笑うだけであった。

「・・・・・・ふん・・・・・・」

五人が歯科練習場へと向かうのを見送ると、銀太郎は砲弾を作る作業を止めて疲労困憊の様子で沈み込んでいた。

「・・・こ・・・高円寺さん・・・」

「お・ご苦労。お前もそれ持って練習に行って来い。」

すると、銀太郎は立ち上がり不安げな表情を浮かべながら高円寺にこんな事を言って来た。

「・・・・・・あの、高円寺さん・・・・・・・」

「ん？」

「ほんとうに・・・・・・僕らはみんなで聖地に辿り着けるんでしょうか・・・？」

銀太郎の弱腰の発言を聞いた高円寺は、振り返らずに一瞬口をこもらせ聞き返してきた。

「――――――どういう意味だ？」

「僕は正直不安でいっぱいです。いずれ必ず十三隊の死神さんやユーノ・スクライアさん達管理局の魔導師が僕らを追ってやってくる・

・・そうなれば僕らは捕まって永久に牢獄の中だ・・・！高円寺さん・・・僕・・・」

その瞬間、高円寺がそんな銀太郎に向かって一喝する。

「銀太郎。最初に逢った時に言った筈だ。ボスなら堂々とボスらしく構えてろ・ってな。」

「――――し、しかし・・・」

「分かったらさっさと行け。いいか・・・あいつらの前で、絶対にそんな情けないツラを見せるんじゃないぞ。」

「――――――――はい。」

高円寺の言葉を受け入れた銀太郎は、何処かまだ浮かない顔をさせながら白鴎達が向かった練習場へと走っていく。

そんな若干十五歳の少年の後姿を見ながら、高円寺はこう呟いた。

「・・・全く、性根はまだまだ子供だなやっぱり。」

銀太郎達が砲弾作りの練習を始めようとしていたその頃、瀞霊廷内ではパトリオット対策の為にそれなりに慌ただしい動きを見せており、隊舎の警護をしていた吉良も召集がかかり九番隊の副隊長で先輩でも檜佐木修兵（ひさぎしゅうへい）と一緒に二番側臣室へと向かっていた。

「・・・長旅ご苦労だったな、吉良。」

「いえ。まだ任務の全てが完了した訳ではありませんから・・・単

なる一時帰宅ですよ。」

「しかし、阿散井の補佐をする傍ら異文明テクノロジーの発達した魔法の世界で過ごすのはさぞ大変だったろう？」

「はい。やはり、慣れないことばかりですよ。あ、そうだ・・・これ副隊長全員分のお土産です。現地で売ってたものを適当に買ってきました。」

吉良はそう言うと、持っていた包みからミッドチルダで調達してきたお土産の一つを檜佐木に手渡した。

「お・気が利くじゃねぇか。ありがとよ。」

吉良から手渡されたものを受けった檜佐木は吉良にお礼をすると、吉良もそれに軽く微笑み返してきた。

そして、二人が二番側臣室に到着して中に入ると既に一人の副隊長が壁に寄りかかりながら待機していた。

「・・・吉良くん。檜佐木さん。」

二人の目の前にいたのは、吉良と恋次の同期であり吉良が密かに行為を抱く五番隊副隊長の雛森桃（ひなもりもも）の姿であった。

「あれ？まだ雛森君だけかい・・・来てるの？」

「うん・・・そうみたい。」

辺りを見渡した吉良と檜佐木であったが、やはり中にいたのは雛森

ただ一人。

「あ、そうだ。これ、ミッドチルダで買って来たものだけど・・・良かったら貰ってくれるかな・・・？」

吉良は雛森を見るなり若干顔を赤くさせながらちょっと見栄を張って檜佐木よりもいいものを選んで雛森に渡すと、雛森も素直に喜びを表現する。

「ありがとう、吉良くん！態々お土産なんて。」

「いや！別に大したことじゃないから！」

雛森にそう言われると、思わず吉良も照れ笑いを浮かべるのであったが、そんな吉良に向かって後ろから二人の副隊長の声が間に割り込んできた。

「やれやれ、顔の下に隠した下心が見え見えだぞ吉良。」

「！」

「ミッドチルダなんて凄いところ行って来たんだったら、私へのお土産も結構なものなんでしょうね、吉良？」

吉良にそう話しかけてきたのは、副官章を左腕につけたルキアと大胆な着方でその豊満な胸を表現する艶やかな容姿をした金髪の女性、十番隊の松本乱菊（まつもとらんぎく）であった。

二人の登場を目の当たりした吉良は冷や汗をかきながら声をかけた。

「く、朽木さん・・・松本さんもいつの間に・・・！？」

「雛森も気をつけなさいよ。こいつ、幸薄そうな顔に何企んでいるから分かったもんじゃないから。」

「それどう言う意味なんですか、松本さん！？」

乱菊の言葉を聞いた吉良は赤面させながら、突っ込みを入れてしまう。

その間に檜佐木が此処にきていない副隊長たちのことを確認する。

「あと来ていないのは・・・・・射場さん達か。集まるのにはまだ半日ぐらいかかりそうだなこりゃ。」

「十一番隊や十二番隊は期待しない方がいいな。何しろ副隊長が揃いも揃って曲者だからな。」

すると、不意に雛森が吉良に向かって徐にこんなことを尋ねてきた。

「・・・吉良くん・・・」

「何だい？」

「最近、色々と頑張りすぎて身体とか壊したり・・・してない？」

「――――――・・・！」

吉良自身、この一言には結構動揺したらしい。

自分が密かに行為を抱く女性から自分を労う言葉をかけてもらうということは、この上もない幸福であると同時に信じがたいことだったから。

ま、別に雛森は大した意味合いを込めて口にしたわけではないのはこの場にいる全員が分かり切っていることだとは思っているが。

一先ず吉良は平静を装いながら質問を返す。

「ああ・・・心配には及ばないよ。」

「そう・・・？」

神妙な表情で自分を見つめる雛森に更に狼狽した吉良は笑って誤魔化そうとする。

「あはは・・・・・急にどうしたんだい？君からの質問にしてはそう言うのは珍しいほうじゃないか？」

「だって、報告者見たよ。崩玉の欠片が異世界のあちこちに散らばってるんでしょ？管理局の魔導師さんと協力して何とか回収は出来てるようだけど、それでも・・・吉良くんも阿散井くんもどっちも無茶し過ぎるところ、あるから・・・」

「「・・・・・・」」

「だから、ちょっと心配しちゃった。」

雛森の言葉を最後まで聞いた吉良やルキアは思わず口を閉ざしてしまう。

この雛森、実を言えばあの藍染の元部下でありその藍染に心酔していたから特に彼に関する事項・・・即ち崩玉に関しては因縁のようなものを抱いている。

その為、彼女は異世界に散らばってしまった崩玉が再び藍染のような人を生み出したり誰かの人生を狂わせてしまうのではないかと言うことを危惧しているのだ。

すると、そんな雛森の話を聞いていたルキアが笑顔を浮かべながら自信満々にこう話しかけてくる。

「安心してくれ、雛森。この二人のことはこの私がちゃんと見ているからな!大船にのったつもりで任せておけ!」

「そっか!朽木さんがそう言うなら安心だな!」

ルキアの言葉を聞いて雛森も安堵の表情を浮かべるが、傍で聞いていた吉良の心境などうも複雑なものでいっぱいだった。

「あはは・・・・・(やっぱり、ちょっと手厳しいよな・・・朽木さんは・・・)」

と、思いながらも吉良は表情を真剣なものにすると心の中で早く崩玉を見つけるのだという決意を新たに侵入したパトリオットの対処に臨む覚悟を決めるのであった。

「(崩玉もそうだけど・・・パトリオットがこの尸魂界へと侵入してきたことで、一体ここはどうなってしまうのだろう?早いところ、彼らの目指す聖地の場所を特定しないと。)」

一方、そんな吉良の覚悟とは別に地下練習場に集まった銀太郎達六人は早速砲弾を作り出すための練習に取り掛かろうとしていた。

「えっと・・・銀太郎はさっきので綺麗な球が出来ていたからいいとして、俺達はどうだろうな？」

「白鴎は大変そうだなおい？」

鼻で笑いながら田吾作が白鴎を小ばかにすると、当の本人は躍起になる。

「うるせー！！こんなもん直ぐに習得してやるぜ！！」

そう意気込んだ白鴎は霊珠核に掌を載せると、魔力を込め始めようとするのであった。」

「ふんならばあああああああああ！！！！！」

しかし、三十分経過しても一向に出来る気配はなし。

傍で見ていたオーリーや瀬間子は二人がかりで白鴎に喝を入れながらアドバイスを行う。

「違う！！！違うと言っているだろうが、白鴎！」

「そうだ。うおお！ではなく、ぬおお！と叫ぶのだ！！」

「うぬあ！」

「違う！違う！ぬおお！！」

言われた通りに実践する白鴎であったが、あまりに抽象的なやり方に成果が全く見受けられないでいた。

遠目でその光景を見ていた銀太郎、田吾作、東海林の三人は呆然としていた。

「白鴎・・・」

「ぬおお・・・って」

「ぬおお・・・か。」

挙句の果て、白鴎は二人に向かって激怒してしまう。

「く・・・！分かんねーよ！もっと分かりやすく説明しろボケ！！」

「「「・・・はぁ・・・」」」

六人が地下で練習に励んでいる頃、夕陽をその身に浴びながら高円寺は一人花鶴大砲を仰ぎ見、早めの晩酌を取っていた。

「・・・一先ず、この作戦が上手くいけば・・・・・・俺の画策通りに事が全て運ぶはずだ。」

そう口にしながら、高円寺は御猪口に酒を酌むと静かにそれを零さないように手に取った。

「連中には今のうちに最後の交流を楽しんで貰うとするさ。」

徐に酌んだ酒を口に運び、意味深長な独り言を語り続ける高円寺。

「どうせ瀞霊廷に入れば最後、隊長陣の凶刃の前に全員が斬られて終わっちまうんだ。だから、最後くらい・・・家族と一緒にいる時間を作っても悪くねぇよな?」

そして、飲み終えた酒瓶と御猪口を勢いよく後ろに放り投げた高円寺は花鶴大砲の更に真上に浮かぶ茜色の空に向かってこう語りかけたのだ。

「こんなクソ面白くもない杓子定規な世の中にはもうウンザリしてんだ・・・俺は・・・だから、早いところこんな世界は終わらせて何もかもを変えてやるさ・・・」

それからしばらくの時が流れ、地下訓練場で練習に励んでいた五人が一度成果のほどを試そうとしていたのであった。

「よし、早速練習の成果を試してみようぜ。田吾作、やってみろよ。」

「あいよ!」

田吾作は霊珠核に掌を当てると、徐に魔力を注ぎ込んでいき見事な球を張ることに成功し、銀太郎は流石とばかりに褒め称える。

「おお!田吾作、流石!筋が良いね。」

「ははは!!!まぁな!!」

「次、オーリー。」

銀太郎の言葉を聞いたオーリーが霊珠核に魔力を注ぎ込むと、田吾作の綺麗なものとは違い非常に細長い形の膜が出来上がった。

「オーリーは・・・何か凄く細長いね・・・」

そう呟く銀太郎の横で、見ていた田吾作がオーリーの性格の問題を指摘する。

「多分、その細さは性格的な問題なんじゃねぇのか？」

「だ、黙れ！！」

田吾作の言葉を聞いたオーリーは頭に来たらしく、膜を説くとチータスを発動させて田吾作に向かっていった。

「やれやれ。じゃあ、次は東海林だね。」

「おっしゃあ！やってたるぜ。」

東海林も早速練習の成果を発揮するため、砲弾を作り始める。

東海林の作り出した砲弾は不安定ながらもちゃんとした球の形になっていた。

「東海林は不安定ながら実にパワフルだ！！」

「ま、俺はこういうのはそんな得意じゃないからな。多めに見てくれよ。」

「じゃあ、瀬間子は？」

そう言われて瀬間子が作り出した砲弾は、東海林のものを更に上回るほど力強い球体が出来たのであった。

あまりのパワフルさに東海林は思わず声を上げてしまう。

「ぎょえええええ！！！！！！！！！！！！！俺の比じゃねぇだろ！！！！！！！」

「瀬間子、少しパワーを落した方がいいよ。」

「す、すまぬ・・・」

銀太郎の指摘を受けた瀬間子は少し魔力を抑えてみると、先ほどよりも安定した綺麗な砲弾を作ることが出来た。

「じゃあ、最後は白鴎だな。」

問題はこいつである。

あの後何度もトライをしてみた白鴎だったが、結局まともに形なったものは出来なかったのだ。

そんなこれまでのことを踏まえながら全員は不安げな様子で白鴎の挑戦を固唾を飲んで見守る。

「ぬふあああああああ・・・！！」

力を込めて魔力を注ぎ込もうとする白鴎。

だが、白鴎の努力もむなしく注ぎ込んだ魔力の大半は無駄に消費されてしまい膜どころか形にすらなっていないものがほんの少しだけ目に見えるだけであった。

これには銀太郎達もかける言葉を見つからなかった。

「「「「・・・・・・・・・」」」」

すると、そんな酷すぎる白鴎のそれを見た田吾作と東海林がかなり挑発的な口調で白鴎のことを馬鹿にしてきたのだった。

「これはひでー！！」

「いやまったく！」

「白鴎、何だよそれは！？見るに耐えないぜ！」

「どうしちまったんだよ、おい！」

「完全にやる気というより元からこういう事に関しては才能がないとしかいいようがないな！！ひどい！！ひどすぎる！！」

この二人の発言に堪忍袋の緒が切れた白鴎は血管を浮かび上がらせる、東海林に向かって持っていた霊珠核を顔面に直撃させた。

「ぶっ殺す！！！！」

「ゴフッ！！！」

「東海林ィ！！」

白鴎の強行に叫び声を挙げる田吾作であったが、その瞬間白鴎の怒りが飛び火して二人は仕返しを受けることとなった。

「！！！わかるかよ、こんなもん！！もっとこーコツっぽいものとか教えろよ！！バカにする気でいるならな！！チクショー！！！！」

そんな自棄になる白鴎の姿に銀太郎は大きく溜息を吐く。

「はぁ・・・やれやれ・・・」

その後、白鴎だけの練習は夜まで及び全員は空腹を我慢しながら白鴎の練習に付き添っていた。

白鴎はそんな全員に見守られながら全身汗だくの状態で霊珠核を手に取っていた。

「はぁっ、はぁっ、はぁっ、はぁっ、はっ」

「「「「「・・・・・・・」」」」」

すると、その時練習場の襖が開くと高円寺が様子を見にやってきた。

「どうだ？進んでいるか・・・」

「高円寺さん。実はその・・・白鴎がイマイチ・・・」

銀太郎の言葉を聞いた高円寺が白鴎を見ると、その様子が窺える。

「そうか。取り合えず食事でも取ろう。ここの家の住人には暫くの間眠ってもらったから、安心しろ。」

「よそ様の家の台所勝手に使っていいものかね？」

「ま、腹減ってるのは確かだしな。」

「だけど・・・まだ白鴎が・・・」

田吾作がそう口にすると、白鴎はそんな田吾作や全員に向かって先に食事を取るよう促してきた。

「・・・俺はいい。先に喰っててくれ。これが出来たら俺も行くから。」

「そ・・・そうか・・・じゃあ、先に行って飯喰ってるぜ・・・」

「銀太郎も行くだろ？」

そう尋ねる瀬間子であったが、銀太郎はお茶を濁しながら空腹ではないことを主張する。

「あ・・・僕もまだいいよ！白鴎待ってから行くよ！まだ全然おなかも減ってないし・・・」

と、その瞬間・・・練習場に響き渡る何ともべたではあるが分かりやすい銀太郎のおなかの音。

これには思わず銀太郎も顔を赤くしてしまう。

「・・・・・・！」

「「「「「・・・・・・」」」」」

「え・・・えっと今のはウソだから！・・・・・・ちょとしかへってない・・・」

必死で誤魔化す銀太郎であったが、そんなに銀太郎に白鴎が声をかける。

「銀太郎。行ってくれ。俺なら大丈夫だから。」

「ち・・・違うよ！僕ももっと練習したいから！おなかだってホントに大丈夫だから・・・」

すると、白鴎はそんな銀太郎に先ほどよりも低い声で懇願してきた。

「銀太郎・・・頼む。」

白鴎の言葉に思わず声を詰まらせた銀太郎であったが、白鴎の熱意に負けたのか快く了承することとした。

「・・・そっか。うん、わかった！お願いされちゃしょうがないな。じゃあ、僕も御飯食べに行くとするよ。」

銀太郎は白鴎のことを信じることにすると、オーリー達を連れて上の階へと向かうのであった。

「はぁ～～～やっと食事だぜ。」

「つうか高円寺の作ったもんだぜ。美味いのか？」

そんな何気ない会話を聞き流しながら、白鴎は再び魔力を込めるため練習に取り掛かる。

「ふっ、ふっ、ふっ、ふっ、ふっ！！」

必死に練習を続ける白鴎であったが、成果はやはり先ほどと同じ。

中々姿を顕著に現そうとはしないまま。

白鴎のことが気になった東海林が早めに食事を済ませると、そんな必死に練習を続ける白鴎のことを入り口付近で腰を下ろし凝視していた。

自分のことを凝視する東海林に気づいたのか、白鴎は汗だくになりながら徐に尋ねる。

「・・・何見てんだよ、東海林？見るなよ。」

「俺の勝手だろ。」

「邪魔だ。上で大人しく待ってろよ」

「うるせー。」

「・・・ちっ、好きにしろ。」

白鴎は東海林に構うと練習に集中できないと考え、東海林のことは無視して練習を再開する。

「ぐ・・・・・・うぉ・・・・！ほあああああ！！！！はっ！はっ、はっ、はっ！ま・・・まだまだ！！ぬおおおおおおあああああっ・・・・！！」

だが、何故かは知らぬが一生懸命な白鴎を余所に東海林は横で白鴎の練習の妨げになるような行動ばかりを起こし白鴎の怒りのボルテージを上げていく。

そして、ボルテージが限界に達するとついに白鴎も切れてしまい霊珠核を投げつけてきた。

「鬱陶しいわ！！！やっぱりどっか行けテメー！！」

白鴎の一撃を交わした東海林は霊珠核を拾い上げ、指で回しながら徐に声をかける。

「・・・随分必死になってるじゃねぇか。確かに、俺達の役目はダイシーの末裔である銀太郎を守護すること。だが、そんなになってまで頑張る必要あるのか？」

「アホか、てめぇは。」

「何？」

「よこせ。」

「あっ。」

白鴎は東海林の言葉に一蹴すると、霊珠核を取り上げ練習を再開しようとする。

東海林はその白鴎の発言に何か疑問のようなものを感じると、白鴎に続けて質問をする。

「そりゃあ、銀太郎はいい子だし・・・尽くしたくなるのも分かるけどさ・・・」

「その言い方は誤解を招くから止めろ。」

「お前がそこまでして頑張るのはあれか！銀太郎の病を止めてまた長閑に暮らすためだけか？」

「そいつもあるけど、俺達はそれ以前に心に誓ったことがあるじゃねぇかよ！！」

「心に誓ったことだって？な、何だよ一体そりゃ！？他に俺達が誓ったことって何だよ・・・」

白鴎のその言葉を聞いて思わず問い直してしまう東海林であったが、白鴎は真剣な表情で次のような事を返してきた。

「“みんなで幸せになること”だよ。」

「・・・！・・・」

「俺は銀太郎と一緒に居たい。どんな時でも俺達は繋がってるんだ。そして、それが呪いと言うものによって繋がりを無理矢理立たれよ

うとしてやがる・・・銀太郎は俺達にとって初めての真のダイシーに足りうる人間なんだ。そして、俺達はそんなボスの元に集った守護者。どんなときでもあいつは俺達を守ってくれた。だからこそ今度は俺達があいつの幸せを護る番だ。」

「・・・・・・」

「そんで、最後にはみんなで笑って幸せでいたい・・・それが俺達の願いでもあり銀太郎への恩返しなんだよ。」

白鴎の言葉を真摯に聞いていた東海林は、改めて自分達パトリオットがこの聖地のある尸魂界を目指してやってきたのか、本当の意味での目的を思い出しある決断を下した。

「よこせ！」

「あっ！」

東海林は白鴎の手から霊珠核を取り上げ、白鴎は返すよう説得を試みる。

「何すんだよ！返せ！」

「俺も練習すんだよ！文句あっか！！」

「何・・・」

「耳塞いでおけよ！絶対聞くなよ！これから俺が練習で見つけ出したコツを復習するんだからな！」

その東海林の言葉を聞いた白鴎は一瞬驚いた表情を見せるが、そんな白鴎を余所に東海林ははっきりと聞こえる声で復習を始める。

「・・・しょう・・・」

「・・・イメージだ。心の中に円を描く。できるだけ暗くて重そうな色がいい。そしたら、その中心目掛けて体ごと飛び込む自分をイメージをするんだ。」

するとどうだろう・・・・・・イメージをもとに霊力を込めた途端、東海林の体は膜で覆われ砲弾と化したのだ。

これには白鴎も言葉を失って黙って見守るだけであった。

「これが、高円寺曰く全ての鬼道と魔法に通じるイメージの基本だ。」

「・・・・・・」

そう言い終わると、東海林は砲弾が破裂しないように慎重に魔力を抜いて外に出ると余裕の表情を浮かべる。

「は――――――っ！チョ――――――――――ちょれ――――――――――！チョロすぎて泣けてくるぜ！こんなもんコツさえ知れば誰でも出来るっつーの！考えてみれば、俺みたいな天才がわざわざ復習するほどのこともなかったぜ！」

そう口にしながら東海林は霊珠核を白鴎に投げつけると、襖を開き上えと向かっていくのであった。

「ま。せいぜいがんばんな！てめーは才能が無いからやり方知ってても俺様みたいに出来るとはとても思えないけどな！じゃましたな！」

東海林がいなくなった後、急に静まり返る練習場であったが白鴎はそんな粋のある東海林の行動に思わず舌打ちをし、照れた表情を浮かべる。

「ちっ・・・・・・演技が大根役者なんだよ。ボケ！」

素直に喜びを表現できない白鴎であったが、物は試しと東海林から受けたアドバイスをもとにもう一度魔力を霊珠核に込めようとする。

「・・・心の中に円を描く。」

白鴎は受けたアドバイスで本当に砲弾を作り出すことが出来るのであろうか？

その真相は次回に移るとして、場所は変わって一番隊の隊首会が開かれている巨大な門が眼前に広がるユーノ達の視線へと向けよう。

ユーノや一護と言った者はさせておき、なのは達機動六課の全員は巨大な扉の向こうから感じる尋常ならぬ霊圧を感じながら固唾を飲んでその場に立ち尽くしていた。

「こ・・・この扉の向こうに・・・山本総隊長さんが・・・」

「うわぁ～～～何だか緊張して目眩が・・・！」

「す、スバル！？大丈夫！？」

あまりの緊張の所為でスバルは眩暈を起こしギンガの元に倒れ伏してきた。

そんな緊張気味の六課メンバーに向かって、恋次が声をかける。

「中には他の隊長達もいるはずだ。全員心の準備はいいか？」

「「「「はい！」」」」

「よし。それじゃあ・・・三番隊隊長、阿散井恋次です。中に入れてください。」

「入れ。」

その瞬間、奥の方から総隊長である元柳斎の声が聞こえてくると隊首会が開かれている巨大な部屋の扉が徐に開放され始めた。

ついに、異世界の異分野で世界を守護してきた二つの権力組織、護廷十三隊と時空管理局に属する死神と魔導師が相見えることとなった。

果たして、彼らに待ち受けるものとは一体・・・――――！？

流星大作戦・パトリオットバージョン（後書き）

教えて、ユーノ先生！

ユ「今日は、護廷十三隊の仕組みについて話しておこうか♪」

ユ「はっきり言えば実力社会であるここは、年に関係なく才能あれば席官の座が与えられるんだ。」

ユ「隊長・副隊長以下、各隊には第三席から二十席までの席官が任命されるんだ。ちなみに言うと、護廷隊の中には最年少で隊長位に就いた天才君がいるんだけど、誰だか分かるかな？」

ス「えっと・・・確か前に海の家にいましたよね？確か・・・ヒツガ・・・」

テ「ヒツガヤ・・・トウシロウ・・・だったかしら？」

ギ「変わってるわよね、苗字もそうだけど名前も・・・」

ユ「ああ・・・変なことは言わない方がいいよ。氷漬けにされちゃうから。」

ス・テ・ギ「え？」

その瞬間、傍で聞いていた日番谷が三人を案の定氷漬けにしてしまう。

ス・テ・ギ「がああああ！！！」

日「悪かったな。変な苗字と名前で！」

ユ「あちゃ～～～」

死神図鑑ハイパー！

会議を終えた吉良は七番隊の射場鉄左衛門とこんな会話をしていた。

鉄「何じゃと！！！狼の男が・・・向こうの世界におるんか！！！」

吉「は、はい。ザフィーラさんと言うんですが・・・」

鉄「そうか・・・・・これで漸く狛村隊長にも親友と呼べるものが出来たっちゅう訳だな・・・」

吉「あの・・・射場さん・・・・？」

困惑する吉良であったが、その瞬間鉄左衛門は腕を掲げ涙を流しながらこう口にする。

鉄「これで！！！！年々落ち込みつつあった七番隊の人気も上がる筈じゃい！！！そのザフィーラっちゅう奴とウチの狛村隊長が組んでユニットを組めば、間違いなく人気回復じゃい！！！！！」

そんな勝手なことを口にする鉄左衛門を見ながら、吉良は憂鬱になる。

吉「いや・・・ザフィーラさんと狛村隊長が逢うことはまずない気

が・・・」

集結・護廷隊の隊長陣（前書き）

ユ「四年前のことになる・・・僕は一護さんと一緒に尸魂界へと出向いた。その意味は、総隊長である山本さんに二つの組織のことを再確認してもらうということと、僕が魔導死神と呼ばれる異能種として認知してもらう必要があったからだ。」

ユ「そうした経緯があり、僕は管理局の承認を得る以前から魔導死神として活動している訳だが・・・よもやこの事件のお蔭で、再びこの地に訪れることとなるとは・・・思ってもいなかった。」

ユ「ユーノ・スクライア外伝　パトリオット篇・・・・・・始まります。」

集結・護廷隊の隊長陣

＞ｉ１５８９１―７０９＜

ユーノ・スクライア外伝・・・前回の三つの出来事。

一つ：霊珠核に魔力を込める修行を始めるパトリオット。

二つ：コツを掴めないでいる白鴎に東海林が助言をする。

そして、三つ：ついに、機動六課が護廷十三隊の隊長陣と接触する。

恋「中には他の隊長達もいるはずだ。全員心の準備はいいか？」

前「「「「はい！」」」」

恋「よし。それじゃあ・・・三番隊隊長、阿散井恋次です。中に入れてください。」

山「入れ。」

眼前に広がる巨大な扉が開かれ、なのは達はついにこの尸魂界を守

護する隊長陣と初接触することとなる。

扉が完全に開放され、彼らの目に飛び込んでくる自分達とは比べ物にならないくらいの気迫と霊圧を発する互いに向かい合った九人の隊長、そして中央に鎮座する顎鬚を伸ばした他とは明らかに別格の存在たる老人。

なのは達はその時初めて、この老人こそが噂に聞いていた山本総隊長であることを確認し汗を滲ませながらその人物を見つめる。

「あの人が・・・!?」

「ミゼット提督の顔なじみで・・・ここの総隊長さんの・・・!?」

「山本さんか・・・!?」

なのはを始め、フェイトもはやても、フォワードの五人・・・そして、長い時を生きていたシグナムとヴィータですらもただならぬ威圧をその身に感じ思わず握りこぶしに力が入ってる様子であった。

それを横目に見ていたユーノは一人苦笑する。

「（流石に、みんな初めての接触に緊張してるな・・・・・）」

すると、そんな全員に話しかけるよりも先に総隊長である山本は隊首会の席にやってきたその場に膝をつく恋次に向かって今回の事に関する賞賛を称える。

「三番隊隊長、阿散井恋次。件の捜査に関しては時空管理局本局のミゼット・クローベルより報告は受けている。御主らの働き見事で

ある。」

「は！ありがとうございます。」

「何かと、まだ解決していないことも多々残っておるが、このような事態での緊急の帰還、よう戻ってきてくれた。さて・・・・・・」

そう言うと、山本は目線をはやて達の方へと向け全員は思わず後ずさりをしてしまう。

「！」

「お主らが、ミゼットが常々口にしていた時空管理局機動六課の前線部隊じゃな？」

「あ、はい！機動六課部隊長の八神はやて二等陸佐です！」

「機動六課後見人のクロノ・ハラオウン提督です！」

体裁を取り繕うとはやてとクロノは一先ず全体的に力んだ様子で山本に向かって敬礼をするが、山本自体は二人に次のように返答。

「そう肩に力を入れんでもよい。楽に話してくれんかのう？」

だが、山本の請願とは裏腹に尋常ならぬ威圧を浴びせ続けられているはやては表情を強張らせて心の中でこう思う。

「う・・・！（そうは言うても・・・この威圧感を浴びせられたら力が自然と入ってしまいますよ・・・やっぱりこの人、只者やない！！）」

そんなはやて達の強張った様子を窺っていた編み笠を被り女物の派手な着物を羽織った初老の男が山本に向かって口を挟んでくる。

「やれやれ・・・駄目でしょ、山じい・・・女の子の前でそんな叱めっ面しちゃ。折角の美人のお客さんなんだ。もっと和やかにさ♪」

すると、そんな男の話を聞いていた迎えに立つ白髪で長髪の男が呆れた様子でその男の言葉にこたえる。

「あのな京楽・・・何も彼女達は遊びで来ている訳じゃないんだ。そのことは充分に弁えてくれよ。」

「へへ。分かってるよ、浮竹。」

「取りあえず、自己紹介でもしとこうかの・・・」

二人の話が一区切りついたのを見て、山本は閉ざしていた口を再びあけて自分の名前を徐に話し始める。

「一番隊隊長兼護廷十三総隊長、山本元柳斎重國(やまもとげんりゅうさいしげくに)。」

「あ、はい！ご丁寧にどうも！！こちらこそ、よろしくお願いします！」

「「「「「「「「「「よ、よろしくお願いします！！」」」」」」」」」」

「だから、肩に力が入ってるよみんな♪」

ユーノが苦笑しながらそう言うと、なのはが振り返り何処か助けを求めた表情で心中思っていたことを赤裸々に話す。

「だって・・・入らざるを得ない雰囲気なんだもん！」

「ま、気持ちはわからないでもねぇな。ユーノだって最初来たときは同じだったしな！」

「ですね♪」

以前、ユーノが一護とともにこの世界に来た時も状況は今のなのは達と大差はなかった。

ユーノはそんな懐かしい記憶を思い返しながら、何処か和むような雰囲気を醸し出す。

すると、そんなユーノ・・・ではなくなのは達女性陣の姿を見て一番初めに山本に声をかけた編み笠の男が恋次にこう言って来た。

「いやはや～～～可愛い子ばかりがいるじゃないの。羨ましいな、阿散井くん。こんな花園で仕事が出来るなんて～～～♪」

「別にそんな良いもんじゃないっすよ。これで結構大変なんっすから。」

「どう言う意味だそれは？」

恋次の言葉に若干の不満のようなものを感じたシグナムが思わず突っ込みを入れる。

場の雰囲気が一通り和んだのを確認すると、編み笠の男・・・八番隊隊長京楽春水を諫めた同期の十三番隊隊長、浮竹十四郎が一護とユーノに近づき握手を求める。

「一護君もよく来てくれた。それと、久しぶりだねユーノ君。」

「此方こそ。お元気そうで何よりですよ、浮竹さん。」

ユーノは浮竹との再会を噛みしめるために固く握手を握り返す。

そして、状況を見た一護が順に隊長陣の自己紹介をなのは達に始める。

「じゃあ、俺から他の隊長連中の紹介でもしとくかな。爺さんの近いほうから向って一番左側に立つのが、二番隊隊長兼隠密機動総司令官、砕蜂（ソイフォン）。隣が四番隊隊長の卯ノ花烈（うのはなれつ）さん。」

「・・・・・ふん。」

「よろしくお願いしますね、みなさん。」

二番隊隊長兼隠密機動総司令官の砕蜂はその性格と仕事柄ゆえか、あまり人となれ合う事を好まない。

その為、なのは達を見ても非常にそっけない態度を示すだけ。

それに対して四番隊隊長である卯ノ花はとても穏やかな雰囲気と優しさを全体的に滲み出しながらなのは達を見て破顔一笑。

そんな卯ノ花の声を初めて聴いた途端、フェイトとクロノはポカン

とした表情と浮かべ共通の事を感じた。

「「（あの人・・・母さんと声がそっくりだ・・・）」」

その後も一護は隊長陣の説明を続ける。

「それから・・・あの変な髪留めをしてるのが、ルキアの義理の兄貴で六番隊隊長の朽木白哉だ。」

すると、一護の説明に語弊を感じた白哉が表情を崩すことなく静かなる反論をする。

「変な髪留めはない。これは牽星箝（けんせいかん）と言い、上流貴族だけが着用を許された由緒正しきものなのだ。」

なのはは以前からルキアの口よりきかされていた義理の兄の白哉を初めて見た瞬間から、若干の違和感のようなものを感じ、ユーノと念話を行う。

「（あれがルキアさんのお兄さん・・・・・・まるで似ても似つかない性格だね・・・）」

「（彼は四大貴族のうち、最も模範となるべき御家柄の当主だからね・・・性格は結構固いんだよ。）」

「（貴族って言うのも、大変なんだね・・・）」

一先ずユーノの言葉に納得するなのはと、そんな白哉の言葉を受け流す一護。

「はいはい・・・で、白哉の正面に立つ狼顔の人が七番隊隊長の狛村左陣さん。」

「お初にお目にかかる。」

七番隊隊長、狛村左陣はその巨体と様子故に嘗ては疎まれるのを恐れ虚無僧のような笠を被っていたが、今ではすっかりそれもなくなり自分のありのままの姿を見せるようになった。

なのは達は狛村のその姿に戸惑いではなく何故か不思議な懐かしさのようなものを感じ、ヴィータとシグナムは特に自分達と同じヴォルケンリッターである正体が狼のザフィーラに酷似したこの隊長を見て感激をしていた。

「（おお！見ろよ、シグナム！！ザフィーラがここにもいたぞ！！）」

「（ああ・・・ここにザフィーラが来ていれば、あの方といい友になれたかも知れぬな。）」

そんな奇妙な期待を抱く二人を余所に、一護は京楽の事を紹介する。

「そっちの笠被った派手な着物着てるのが、八番隊隊長の京楽春水さん。」

「ふふ・・・仲良くしようね。」

京楽は編み笠を被り直しながら容姿端麗なのは達にさり気無く自分をアピールしようとするが、当のなのは達は全くそれに気づいていない。

「んで、あっちの銀髪は最年少で隊長になった十番隊の日番谷冬獅郎(ひつがやとうしろう)だ。」

一護がそう説明すると、最年少で隊長位に上り詰めた天才児・・・日番谷冬獅郎は顔を歪ませながら自分の事を相も変わらず名指しで呼び続ける一護に不満をぶつける。

「おい。俺は呼び捨てなのか!?」

「細かいことは気にすんなよ。」

実質年齢は兎も角として、日番谷と見た目的には同い年ぐらいであるエリオとキャロはこんな事を話していた。

「（僕らと同い年ぐらいなのに・・・・・隊長になれるんだ・・・）」

「（まさに実力社会だね、ここは・・・）」

と、それまでは順当に説明をしてきた一護であったが・・・何故かその次の隊長の説明をしようとした途端多量の汗をかき始め、恐怖と不安を抱きながら次の隊長の事を話し出す。

「えっと・・・こいつは尸魂界最凶の戦闘狂で十一番隊長の更木剣八(ざらきけんぱち)だ。」

一護がそう言うと、髪の毛を逆立たせ尖端に鈴をつけ右目に眼帯を施している大男である十一番隊隊長、更木剣八は不敵な笑みを浮かべながら一護にこう語りかける。

「へへ。久しぶりじゃねぇか一護。此処へきたってことは、俺と殺(や)り合いに来たってことでいいんだよな？」

「いや・・・えっと・・・！！い、今はその話は勘弁してくれよな！！」

一護はその昔、死神の力の譲渡で処刑されることとなったルキアの救出の為に織姫達と共に尸魂界へと乗り込んでいるが、その衝突で最も一護が苦戦したのがこの更木だ。

何故なら、この男はいくら斬っても斬っても血を流しながら戦いを楽しもうとする気がどうかしていると言われる程の戦闘凶であり、自分の命ですらも戦いを楽しむための代償の一つだと考えているのだ。

そんな危険な雰囲気を見た目からして漂わせる剣八を見ながら、ヴィータはシグナムにこう言って来た。

「（ある意味こいつ、シグナム以上に危険だな・・・）」

「（いや、その言い方は語弊があるぞ。）」

その後剣八に変に絡まれてしまい困り果てている一護を見かねたユーノが、そんな一護に次の隊長の事を説明する。

「あと、あっちの独特のメイクを施しているのがマッドサイエンティストでその節度はスカリエッティよりも酷い。十二番隊長兼技術開発局二代目局長の涅(くろつち)マユリさん。」

ユーノがそう説明をすると、その譬えようのない程にまで顔面を独特のメイクで飾り立てるその男（一応）・・・涅マユリは世にも恐ろしい言葉をなのは達に向かって浴びせる。

「ウフフ・・・随分と面白いお客さんだネ・・・どうだね、君たち・・・一度私の研究室に来て被験体として研究されてみないかね？」

「はい！？」

「安心し給え、薬物投与は一日三回までにしておくし寝るときには衣服もやろう。是非魔導師というものをドロドロになるまで研究を・・・」

「「「「「け、結構です！！」」」」」

マユリの唐突な提案に尋常ならぬ危険を感じた機動六課一同は即座に拒否の言葉をマユリにぶつけ、スカリエッティ以上に危険人物だと感じたフェイトはユーノにそっと尋ねる。

「ユーノ・・・あの人本当に大丈夫なの！？スカリエッティなんかよりもあの人のほうがよっぽど危険なんだけど！？」

すると、そんなユーノよりも先にどうにか解放された一護がこう答える。

「あいつには関わらないほうがいいぜ。何しろ自分の部下に爆弾仕込んで爆殺させるような狂った男なんだからよ。」

「なっ！？そ、そんな人を隊長にしていいんですか！？」

「そのことに触れたらキリがないからね・・・これ以上はやめて頂戴。」

フェイトはその瞬間、部下の命すらも弄ぶこの男にスカリエッティと同じかそれ以上の嫌悪を心の奥底に抱き、傍らで聞いていたクロノは溜息をつきながら嘆かわしい科学者の実態に呆れかえっていた。

「（スカリエッティもそうだが・・・・・もっと真面な思考の科学者はいないのか？）」

「そんで最後の一人が、ルキアの元上官で隊士からの信望も厚い十三番隊隊長の浮竹十四郎（うきたけじゅうしろう）さんだ。」

一護がそう言うと、浮竹は屈託のない笑みを浮かべて部隊長であるはやての方に近づき握手を求めた。

「ああ、よろしく頼むよ。お互い、色々大変だろうが仲良くしよう！」

「は、はい！ありがとうございます！！」

はやては浮竹の行動に胸躍らせ、それと同時に今まで感じた事の無い安心感のようなものを抱いてしまい、思わず頬を赤らめる。

「（何やこの人・・・随分感じのええ人やないの・・・はぁ～～～死神じゃなかったら狙ってても可笑しくはないのにな～～～）」

そんな桃色のオーラを無意識のうちに発するいつもとは違うはやてを横目にフェイトや鬼太郎、浦太郎の三人は怪訝そうに見つめる。

「はやて？」

「お前・・・何考えてんだよ？」

「どうせ無意味な妄想でしょ。」

隊長陣全員の説明がひと段落つくと、不意に京楽がユーノに尋ねる。

「ところでスクライア君、うちの白鳥君のほうはどうだい？ちゃんと仕事やってるかい？」

「ええ。ちゃんと真面目にやっていますよ。実際、かなり助かってますよ・・・白鳥さんには♪」

「ほう・・・あのサボり魔の白鳥君がね・・・人は見かけに寄らないものだね。」

「お前が言うことか、それ？」

普段から仕事そっちのけで徒に時間を過ごす京楽の怠惰を副官である伊勢七緒から聞かされている浮竹は思わず口を挟んでしまう。

一方で一護は周りの隊長を見ながら近くに立つ恋次のそれと比較しながらこう口にした。

「しかし、今こうして見ると恋次の隊長としての威厳がまるで感じられねぇな。」

「う、うるせーよ！！」

一護の言葉に大いに怒りを露わにする恋次であったが、ふと日番谷が冷静な表情で今回此処にやってきたその大きな目的に関する話し合いを始めるよう促す。

「茶番は後にしろよ。時間がねぇ・・・本題に入ろうぜ。」

すると、それに便乗して山本も口を開く。

「日番谷隊長の言う通りじゃ。早速、話を聞かせてもらおうかの・・・八神はやて。」

「はい。了解です！」

はやては、成る丈自分たちが担当している今回の事件について噛み砕いて説明をした。

途中、ユーノも間に入って補足の説明をしたおかげで隊長陣は粗方の事を理解することが出来たのであった。

「・・・と言う訳です。お分かりいただけたでしょうか？」

「うむ・・・」」

話を聞き終えた山本は静かに声を漏らし、京楽も溜息をつきながら編み笠を被り直す。

「しかし・・・また面倒なことになってきたね・・・どうも」

「敵の目的が何なのかはまだはっきりしないが、この尸魂界の何所かに・・・彼らの狙い・・・即ち聖地があるということで間違いは

ないのかい？」

「はい。この地図に書かれた場所こそが何よりの証拠！どうぞご覧下され！」

金太郎はそう言うと、懇切丁寧な態度で山本に以前高円寺が挑発のつもりで自分たちに残した聖地の場所が書かれた地図を取り出し徐に手渡す。

手渡されたのち、山本はそれを凝視。

やがて、しばらくの沈黙を保った後・・・――その書かれた場所の名を口にする。

「・・・“九九琉閑（くくるかん）の池”・・・じゃな。」

「！九九琉閑の池・・・だと！？」

山本の口から聞かされる前代未聞の言葉に大いに驚く隊長陣と、まるで話が読めないでいるユーノやなのは達。

「聞いたことないな。ユーノ、お前は？」

「僕も初めて聞きましたね。あの・・・その九九琉閑の池とは一体？」

ユーノがそう尋ねると、山本の代わりに卯ノ花がその詳細を語ってくれた。

「この尸魂界には、今以て解明されていない未開の地が存在します。

その場所は一度入れば私達隊長陣ですら、二度と帰ってこられないとも言われるほど危険なところで普段は禁踏区域として誰も入ることが出来なくなっています。」

その後、卯ノ花に便乗して日番谷が更に説明をし始める。

「その中の一つに、入れば底なしの池に沈み二度と浮かび上がってこられなくなるという不気味な池が存在する。それこそが、通称“九九琉閑の池”と呼ばれる場所だ。周囲からはまるで鳥がすすり泣くような音がすることからその名がついた。巷間ではそう言うことになっているが、実際のところは何所までが本当なのか俺達でも分からない。前人未踏の場所だぜ。」

「だが、そのパトリオットと呼ばれる連中がそこを目指している可能性が高いということか?」

「恐らく。」

険しい表情となる隊長陣となのは達であったが、敵との戦い以外は全くと言うほど興味を持たない剣八は耳をほじりながらなのは達にとって驚愕の一言を口にする。

「面倒臭せ話はいい。要はそいつらをぶった斬れば済む話だろう?」

「ぶ、ぶった斬るって・・・そんな物騒な!?」

剣八の言葉を聞いた瞬間、なのははそれは流石に駄目だとばかりに反論をしようとしたが直ぐにユーノに口を挟まれてしまう。

「なのは。この人の頭は敵を斬ることしかないんだよ。残念だけど

弁解の余地はない。」

「う・・・！」

そんなユーノから聞かされる思わぬ一言を聞いて、なのはは思わず苦笑し、一護自身もそんな剣八の性格に呆れかえっていた。

「相変わらず剣八は剣八だな・・・」

「まぁ、でも・・・パトリオット達の狙いがそこにある以上、見す見す見逃す手はありません。総隊長さん、何とかそこまで行くことを許可して貰えないでしょうか？禁踏区域だということは重々承知ですので、どうか！」

ユーノはそう言うと、山本に向かって深く頭を下げて禁踏区域に入れるように説得を試みる。

「うむ・・・そうじゃの・・・」

「私達からもお願いします！」

「爺さん！俺からも頼む！」

ユーノに便乗した形で、なのはも一護もそれにこの場にいる機動六課前線一同が一様に深く頭を下げるのであった。

山本はそんな全員の態度を見ながら一人沈黙を続けるのである。

「・・・・・・――――――」

さて、そんな光景が瀞霊廷で繰り広げられているその頃・・・――
―砲弾作りに精を出していた白鴎以外のパトリオット達と銀太郎は
食堂で夕食をいただいていた。

「ごちそうさま。」

瀬間子は一番最後に食事を終えたが、そんな瀬間子の遅い食事を見
ていた田吾作が口を挟んできた。

「・・・瀬間子・・・相変わらずお前、食べる遅いよな・・・」

「べ、別にいいではないか・・・そういう風に育ったのだ。」

と、その時・・・瀬間子は隣に座る銀太郎が食事にほとんど手を付
けないまま食事を済ませている光景が目に入って来た。

「あれ?銀太郎は随分余ってるけど、もういいのか?」

「う・・・うん。もう、僕おなかいっぱい・・・」

そう言って銀太郎は満腹であると豪語するが、実際のところは白鴎
の事が気にかかり全然食事に手を付けられていない状況であった。

その為、銀太郎の腹からは未だ空腹を知らせるばかりに音が鳴り響
く。

その音を耳にした瞬間、銀太郎は咄嗟に音を誤魔化すために自分の
腹を思い切り殴りつけ痛みをこらえながら必死に満腹だと主張する。

「ほら・・・ね・・・おなか・・・いっぱ・・・」

そんな銀太郎の痛々しい光景を見ていたオーリーや田吾作たちは無理をしないようにと銀太郎に言いつける。

「だ・・・大丈夫だ・・・そこまでして止めなくても聞かなかったことにするから・・・」

オーリーがそう言うと、銀太郎は心中思っていたことを徐に話し出す。

「ほ・・・本当はさ・・・白鴎に持ってって上げようと思ったんだ・・・」

「「「「・・・・・・」」」」

銀太郎にそのことを言われて時計を見てみた時には、時刻は既に深夜を回っていた。

「そうか・・・そういえば白鴎の奴まだ・・・」

と、白鴎の修行の心配をしていたその時だった。

銀太郎やオーリー達全員の体から途方もないぐらいの巨大な魔力を感じたのだ。

「！」

「！！」

「「「「！！！」」」」

高円寺自身もこの魔力の大きさに度肝を抜いたらしく、大きさに反発したかのように家全体が多く自身のごとく揺れ始める。

それと同時に、オーリー達はこの不測事態に狼狽する。

「な・・・何だこの魔力は・・・・！？」

銀太郎は最初は戸惑いを見せていたが、魔力を研ぎすませてこれが誰の魔力であるかを突き止める。

「・・・白鴎だ・・・・！」

「行ってみよう！」

「あの野郎・・・一体何してやがんだ！？」

不安に思いながら全員が白鴎の居る訓練場へと向かう。

そこで銀太郎達は信じられないばかりの光景を目の当たりにする。

「白鴎！」

銀太郎が白鴎の名を呼びながら襖から白鴎を覗き込んだ瞬間、あまりの光景に目を疑い言葉すら失う。

オーリー達も全く同様のものとなる。

そして、暫くしてから外の方で酒を飲んでいた高円寺も当直しこの事態について尋ねる。

「何だ!?どうした銀太郎!?何があった!?」

「僕にもさっぱり!?」

すると、そんな銀太郎や全員に向かって壁に背をかけて力の入らない様子の東海林が申し訳なさそうにこう口にしてきた。

「ご・・・ごめん銀太郎・・・お前ら・・・」

「え?」

「俺・・・コツを教えてやっただけなんだ・・・それが・・・こんなことになるなんて・・・思いもしなかったんだ・・・!」

「・・・・・・!!!」

その話を聞いた瞬間、何かを悟った高円寺は勢いよく訓練場の襖を開けてみた。

すると、中にいたのは己の魔力によって創り上げられた規格外な大きなさの砲弾の中心で魔力を込め続ける白鴎の姿であった。

「白鴎!」

「馬鹿野郎!!何してんだお前!!!さっさと魔力を固めろ!!!」

「!」

高円寺が魔力を込める事だけに集中している白鴎に大声でそう口に

すると、白鴎もそれに気づいたらしく魔力を込める作業から魔力を固める作業へと移行する。

その結果、今まで徒に膨張を続けていた砲弾はちょうどいい大きさに収縮を始め、ついに白鴎は念願の砲弾を固めることに成功したのである。

これには白鴎も銀太郎達全員も歓喜の声を上げる。

「・・・で・・・」

「できたっ!!!」

「や・・・やったね、白鴎!!」

「お・・・おオ!!」

と、銀太郎の言葉に返事をしようとした矢先――――――集中を乱したがために白鴎の砲弾に亀裂が入る。

それを見たオーリーが白鴎に向かって一喝。

「白鴎!!馬鹿者!!急に集中を解くなと言われなかったか!!!」

「・・・え?」

その瞬間、完全息を抜いてしまったが故に白鴎の砲弾は破裂し、家全体が大きく振動してしまったのであった。

「ふぎゃあああああああああああ!!!!!!!!!!!!!!!

！！！！！！！！！」

情けない声を上げてしまう白鴎であったが、そんな白鴎に追い打ちとばかりに欠陥を浮かび上がらせた高円寺がボロボロの白鴎を踏みつけ説教を始める。

「話を聞いておかなかったのか、お前は！？『集中乱したらドカン』だと！ああ！？言ってなかったか、俺！？」

「ハイ・・・たしかに、おっしゃってました高円寺さん・・・」

「じゃあ何か？態とやったのか！？」

哀れなる白鴎の姿に呆然と立ち尽くす銀太郎やオーリー達。

「白鴎・・・」

「気の毒な奴だ・・・」

そんな白鴎の姿に鼻をほじくる東海林。

「全く・・・おめーはいつも・・・ガフっ！！」

その瞬間、高円寺の顔面ストレートがめり込む。

「お前も同罪だ、カス！」

「そ・・・そんなぁ！」

「そんなじゃねぇ！！同罪！暫く反省しろ！！」

高円寺の思わぬ言葉に声を上げる東海林と、そんな東海林をあざ笑う白鴎。

「ハハハ！ザマーミロ！」

「おめぇもだよ！！」

「いてて！ごめんなさい、ごめんなさい！！」

結局のところ、白鴎と東海林は高円寺のキツイお説教と制裁を食らってしまった訳だが、そんな白鴎を見て安心したのか、銀太郎はほくそ笑む。

「・・・・・・（何はともあれ、よかったね白鴎。）」

暫くすると、白鴎はすべての魔力を使い果たした成果そのまま深い眠りついてのであった。

「やれやれ・・・こいつ寝てら～～～。」

「心配かけさせやおって。」

「ふふ・・・さて、これで漸く白鴎も無事砲弾を完成させることが出来たわけだし・・・十代目ダイシーである僕からみんなに話がある。そこに腰を下ろしてくれるかい？」

唐突なる銀太郎からの言葉に耳を傾けるオーリー達。

「話？」

「何だ？」

銀太郎はうつ伏せで寝ている白鴎の前に腰を下ろすと、瀞霊廷の侵入に関する心得を皆に話そうとし始める。

「白鴎は寝てるけど、時間がない。瀞霊廷内に侵入したときの心得を話しておくよ。いいかい、ようく聞いて・・・ほぎゃあああああああああああああああああああ！！！！！！！！！！！！！！！！！！！！！」

この銀太郎の奇声の正体はこの後の展開で後々話をするとして、白鴎が熟睡していたために出発の時間は大幅に遅れていた。

だが、その間に高円寺は一人訓練場で未だ眠り続ける白鴎を余所にお経のような書物を見ながら詠唱の復唱をし続けていた。

「・・・三雀の縁・・・四龍の縁・・・五方塞がりて六里還らず・・・天風・猩々・匙・楡の杖・・・え～っと・・・千灰千智・・・白雲の計・・・」

「・・・う・・・う～～～～～ん・・・」

高円寺の横で涎を垂らしながら夢を見続ける白鴎であったが、急にその白鴎の表情が険しくなり始める。

「え～～～・・・太陰に寄りて・・・・・・太陰によりて・・・・・・」

白鴎の事など気にする余地もない高円寺は必死にその詠唱を覚えようと四苦八苦する。

その瞬間、白鴎がようやく目を覚まして第一声を口にする。

「・・・チ・・・チワワッ!?」

一体どんな夢を見ていたのかは定かではないが、白鴎は周りを見渡すと自分がなぜこんな夢を見ていたのかを高円寺に尋ねる。

「は、は、は、は・・・って何の夢見てたんだよ、俺?」

「俺が知るか。」

「あ~~~~~それにしてもよく寝・・・・・・よく寝たのか?何で、俺こんなとこで寝てたんだ?」

「俺にぼこぼこにされてそのまま糸が切れて爆睡したんだよ!!」

「そういえばそんなこと・・・ん?そもそも何してんだ高円寺?」

「お前の知ったことではない。失せろ!」

ただでさえ詠唱を覚えるのに必死になっているのに白鴎のくだらない質問にいちいち応じると高円寺の集中自体が乱れてしまう。

高円寺は早々に白鴎が此処から居なくなる事を強い口調で言いつける。

それに腹を立てた白鴎がコンボイを取り出す。

「何だと!?」

すると、そんな白鴎の様子を見に来たオーリーが襖をあけてきた。

「おっ！目が覚めたのか、白鴎！」

「オーリー。」

「銀太郎達が上で待ってるぞ。そろそろ出発の準備だ。」

「出発？」

「高円寺、お前も早く来い。」

「ああ・・・あとちょっとで終わる。先に行っててくれ。」

白鴎は怪訝そうな表情で高円寺を後にすると、先にオーリーと共に花鶴大砲が用意されている集合場所へと向かった。

白鴎とオーリーが来たことを確認すると、銀太郎や瀬間子達は安心した表情を浮かべる。

「よし。みんな揃ったね。」

「ああ。」

「「おうよ！」」

「問題ない。」

と、全員が返答したとき・・・――白鴎はふと銀太郎のさらさら

した髪の毛がまるで一変してワックスでも付けたかのように逆立っている光景に疑問を持った。

「!?て言うか・・・どうした、銀太郎?髪の毛がスーパーサイヤ人みたいになってんぞ?」

「「「「な!!」」」」

白鴎の言葉を危惧していたオーリー達が全身から冷や汗を流すと、それを聞いた銀太郎自身もこのときばかりは怒りを抑えきれなくなったのか、鋭い視線と粗暴な口調で白鴎に言い返す。

「何か・・・文句でもあんのか?」

その恐れおののくほどの銀太郎の怒りの表情を目の当たりにした瞬間、白鴎自身も多量の汗を流しながら銀太郎に殺される前に取り繕った言葉をかける。

「い・・・いえ・・・いつも通り素敵な髪の毛です・・・」

すると、そんな白鴎にオーリー達が念話で話しかけた来た。

「(馬鹿か、お前は!覚えてないのか!?お前がやったんだぞあの髪の毛!)」

「(え!?俺なの・・・!?)」

「(白鴎は例の砲弾を完成させた後、高円寺のお説教と銀太郎からの突入の心得を聞かされている最中に糸が切れたように眠っちまったんだよ!なぜか銀太郎の髪をわしずかみにしたままで!!)」

その結果、銀太郎の自慢のサラサラヘアーは無残にも荒れ果ててしまい逆立った髪の毛になってしまってのであった。

銀太郎自身もこの髪の毛は自分のトレードマークのようなものだと考えており、それこそ誇りに思っているそれをこんな目になってしまったことに思わず涙目を浮かべる。

「う・・・!!僕の・・・僕の髪が・・・!」

「（俺らが四人がかりで外したはいいけど、髪の毛はあのザマだ。極力触れいない方が賢明だぞ・・・!）」

「（わ・・・わかった・・・）」

と、意気消沈していた銀太郎であったがその時その場にまだ高円寺が来ていないことに気づき白鴎に尋ねる。

「あれ?そう言えば、高円寺さんはまだかい?」

「ああ・・・あいつなら下で何か読んでたけど?」

「待たせたな!」

すると、全員の耳元に例のお経のようなものを手に取った高円寺が走ってきた。

「お!来たぜ。」

「何読んでたんですか?」

「ちょっとな。」

高円寺は銀太郎にそう言うと、その文章を懐に仕舞い込み田吾作に尋ねる。

「で、準備は？」

「言われた通り、マインドコントロールは大丈夫だぜ。」

田吾作がそう口にすると、後方では既に志波空鶴以下三名の者たちが田吾作のマインドコントロールにより完全に操り人形とかして待機していた。

「上出来だ。それじゃあ・・・・・・」

「あ、あの！！！」

「？」

全員が早速打ち上げの儀式に入ろうとした瞬間、唐突に銀太郎が声を出す。

「銀太郎・・・・・・？」

「どうしたんだよ、急に？」

「・・・・・・」

何かをずっと我慢した様子で口を閉ざす銀太郎だが、次の瞬間全員

が思ってもいなかった言葉を口にする。

「本当は僕・・・・・・瀞霊廷に入るのが怖かったんだ！！」

「「「「「！！！！！」」」」」

「！！銀太郎、何を今更・・・！」

高円寺もこのような弱腰の銀太郎に動揺を隠し切れないでいたが、そんな高円寺に向かって銀太郎は覚悟の籠った瞳でこう言った。

「高円寺さんも黙って聞いてくれませんか！！」

「！」

「・・・僕は・・・独りだった・・・」

「「「「「・・・・・・」」」」」

銀太郎の独断が始まるや否や、全員は黙って銀太郎の言葉を聞くことにした。

「小さいころに慮外の事故で両親に早くに死なれ、他に身寄りのなかった僕だったが別に一人でも生活をしていくだけの能力は備わっていた。だから、別段困った事は無かったしほんの少しばかり体が弱いという点を除いては一般人と変わらないと思ってた・・・だけど僕は気が付いてしまったんだ！僕の周りには友達が一人もいないって！！」

「！」

「僕はその時五歳児だったから、本来なら自分の傍には両親がいて友達もそれなりいる生活を送っていたはずだった。だが実際は友達なんてものは一人もいない孤独な日常を送っていた。今にして思えば、あの時の時間は苦痛と恐怖で満ちていた・・・愛する者もいない・・・愛される者もいない・・・背負う苦しみもない・・・背負われる苦しみもない・・・ある種究極の条件の中で僕は独りだったんだ・・・そんな僕の前にみんながやってきた。戸惑いや分からないことは多かったけど、僕はその時初めて“家族”というものに巡り合えたんだ!」

「銀太郎・・・・・・」

神妙な顔つきとなるオーリーや他のパトリオットの全員に、銀太郎は自らの覚悟を赤裸々に告白する。

「僕は覚悟を決めた!こんな自分でも一時でも多く愛する家族と一緒に過ごしたい。そのために、突き進む道に何がこようとも僕は逃げない。ダイシーの呪いが何だ?そんなもの、家族を失う辛さに比べればどうってことない!!」

「!」

「僕たちは何が何でも生き残るんだ!笑って・泣いて・怒って・・・そんな当たり前のようで最高の一時を自らの手で掴み取ろう!僕らは家族だ。家族がそろえばどんな壁にぶち当たろうときっと乗り越えられる。僕らの絆の強さを破る事なんて出来はしない!」

「・・・銀太郎・・・」

銀太郎の言葉を聞き終えた瞬間、全員の瞳に涙がこみ上げてくる。

「うっ・・・感動したぜ・・・・銀太郎・・・!!」

「そこまでして・・・俺らのことを・・・!!」

「流石は・・・俺達のボスだよ・・・立派になりやがって・・・・!!」

すると、その話を涙は流さなかったものの黙って聞いていた高円寺も鼻で笑い口を開いてきた。

「・・・ふん・・・どうやら、覚悟は決まったみたいだな・・・途中でビビって逃げるんじゃないぞ、糞ガキが・・・!」

「はい!!」

と、銀太郎が返事をしたそのとき・・・――唐突に白鴎が銀太郎の肩をたたく。

「!?」

振り返った銀太郎に向かって、白鴎は満面の笑みでこう告げる。

「行こうぜ、銀太郎!」

「・・・うん・・・!」

「用意はいいか!もう待ったはきかねぇぞ、お前達!」

「「「「「ああ！！」」」」」

「行くよ、みんな！！」

と、銀太郎が花鶴大砲に向けて歩き出そうとしたその時・・・白鴎がある事を思い出す。

「あれ？」

「どうした？」

「なあ・・・そういやこれって中に入る全員で魔力込めて砲弾作るんだろ？俺らはそれぞれ必死こいて練習して砲弾作れるようになったけど・・・」

「必死こいて練習してたのはお前だけだろ。」

「高円寺は出来るのか？」

白鴎の言葉に全員が注目する中、当の高円寺は鼻で笑いながら霊珠核を見つめる。

「・・・要らぬ心配だな。どれ、それを俺の掌に置いてみろ。」

白鴎は言われるがままに手に持っていた霊珠核を高円寺の掌に置く。

すると、高円寺の周りには自分たちのそれとは比べ物にならないぐらいの綺麗な砲弾が完成し、全員は驚嘆の表情を浮かべる。

「・・・こんなもの、俺にとっては呼吸に等しく容易いぜ。」

「ガーン！！！！！」

白鴎は高円寺のこの光景がかなりショックを受けたらしく、思わず膝をついて項垂れてしまう。

「悔しいか？悔しいか？自分があれほど苦労して完成させたものを俺がいとも簡単にできてしまったことが悔しくてたまらないんだろう？」

そんな高円寺の態度と悲壮な白鴎を横目に東海林と銀太郎はそれぞれこう思う。

「（鬼だな・・・こいつ・・・）」

「（あはは・・・気の毒に・・・）」

「さ・・・中に入れ、お前達！始めるぞ。」

高円寺はそういうと、表情を一変させて花鶴大砲の内部へと続く穴を開く。

そして、全員が筒の中に入り終えると直ぐにマインドコントロールによって志波空鶴達が打ち上げ式の準備を始めるのであった。

その間、中に入った全員は高円寺の話を真剣な様子で聞いていた。

「直に夜が明ける。それを合図に打ち上げ式が始まる。田吾作、マインドコントロールの方は？」

「順調だ。いつでも大丈夫だぜ。」

「そうか・・・いいか、瀞霊廷に入ったら先ず銀太郎は真っ先に聖地を目指せ。他の連中は銀太郎が聖地へ向かう間に死神と魔導師達の足止めを頼む。隊長各と出会ったらまず逃げろ。交戦は避けろ。」

「僕らの目的はあくまで聖地に行くこと。戦いに来たわけじゃないんだ。絶対に無駄な危険は冒しちゃダメだよ。生きてみんなで合流だ！」

「「「「「ああ！」」」」」

決意を新たにするパトリオット達七人。

やがて、外の方で夜明けの合図を待っているマインドコントロールを施された志波空鶴達であったが、背後にうっすらと日が昇り始めた瞬間・・・――空鶴は腕に携えていた剣を取り出し台の上へと突き刺す詠唱を開始。

「“彼方”！赤銅色の強欲が３６度の支配を欲している”！！」

「始まったぞ！！魔力を込めろ！！」

卯仕上げ式が始まった同時に、高円寺の言葉が飛び交いそれと共に銀太郎達は中央の霊珠核に魔力を注ぎ込み始める。

空鶴と共にその補佐を担当する金彦と銀彦も操られているとはいえ真剣そのもの。

「“７２対の幻”“１３対の角笛”“猿の右手が星を掴む”！！」

空鶴は頭に巻いていた布を左腕に巻きつけると、その腕から炎を発生させそれを墨で書いて線に沿った形で流し込んでいく。

「“２５輪の太陽に抱かれて砂の揺籃は血を流す”」

流れていった炎が導火線に火をつけ、ついにその打ち上げの時となった。

「花鶴射法(かかくしゃほう)二番！！！“拘咲(かぎざき)”！！！」

勢いよく発射される銀太郎達の作り出した砲弾が瀞霊廷を目指して飛んでいく。

彼らが飛んで行った後すぐに田吾作のマインドコントロールの効果が切れ、正気に戻った空鶴達は自分たちのこの状況に驚いていた。

「・・・あれ？何で・・・俺達はこんなことしてるんだ・・・！？」

一方、そんな空鶴達とは裏腹に打ち出された砲弾から真下を覗き込む白鴎や銀太郎達。

「おおオ・・・っ！！」

「な・・・なんか・・・内部は思ったほど衝撃はないんだな・・・」

「馬鹿野郎・・・これからだぞ！」

「え？」

高円寺が全員にそう口にした瞬間、砲弾は方向を一変させて目的地である瀞霊廷の方向目掛けて一気に加速を始める。

「「「「おおおお！！！！！！！！！」」」」

「ひえええええええええ！！！！！！！」

突然の事に狼狽をする銀太郎達であったが、高円寺はと言うと懐から例の文章が書かれたものを取り出してそれを広げる。

「高円寺！？」

「何する気だよ！？」

「『継の口上』だ！花鶴射法・二番は二段詠唱なんだ。打ち上げから方向決定を『先の口上』でその後の加速と軸調整を『継の口上』でコントロールする。そうすることでそれぞれの制度を上げるんだ。」

「それでそのお経みたいなもんをかっぱらって来た訳か・・・」

「まぁ、そういうことだ。さて・・・みんな、聞いてくれ！瀞霊廷に無事に突入するためにはこの砲弾の軸を安定させる必要がある。そのためには全員の魔力の放出量を均一に調節する必要がある。だが、俺はこれから術式に入る。そうなると魔力の放出にあまり気を払えない。そこで、お前達は俺の魔力量に合わせて欲しい！こいつに手を触れていれば周りの奴の魔力量がわかる筈だ。だから、それぞれが調節してくれ。」

「ミスったら終わりってか・・・やるしかねぇか！」

「うん！」

「いくぜ・・・！」

高円寺はそう言うと、拝借した花鶴射法の継の口上が書かれた詠唱文を読み始める。

「花鶴射法二番！！“継の口上”！！！“三雀の縁　四龍の縁　五方塞がりて　六里還らず　”“天風・猩々・匙・楡の杖・・・」

高円寺の魔力放出量に合わせている他の六人であったが、銀太郎は放出量の多い白甥に向かって量を減らすようにと口を出す。

「は・・・白鴎・・・ちょっと・・・多い・・・っ！」

「そ・・・そうか？わ、悪い・・・」

すると、今度はオーリーが量を減らせと口を出す。

「白鴎！もう少し落とせ！」

「わ・・・わかってるよ！これでも結構減らしたんだ！！」

しかし、それでもとばかりに瀬間子が口を出す。

「・・・白鴎・・・」

「わ・・・わかってるってば！！」

「“千灰千智　白雲の計”　・・・」

「・・・おい、白鴎まだ・・・」

「分かってるよ！今減らしてんだ！ちょっと待ってくれ！」

「“太陰に寄りて　緋の影を踏まず”・・・・・・はっ！」

喧しい声が飛び交う中、必死に覚えた詠唱文を唱え続ける高円寺であったが・・・あまりの騒音に集中力が乱れてしまい、せっかく覚えた文章を忘れてしまったのであった。

「白鴎、お前！！！次の詠唱の文が分からなくなったじゃないか！！！」

「何だよちくしょう！それも俺のせいかよ！？」

「お前が耳元でギャーギャーギャーうるさいから、集中乱したんだよ！！」

こんな状態にもかかわらずいがみ合いになってしまう二人であったが、銀太郎やオーリー達が咄嗟に止めようとする。

「やめてよ、白鴎に高円寺さん！そんなことしてる時じゃないでしょ！」

「そうだ、止せ！」

「「く～～～！！」」

それでもやはりにらみ合い続ける二人。

と、その時・・・――瀬間子が外の様子を見てあることに気づく。

「・・・・・・・・・おい・・・・・・外・・・見てくれ・・・」

全員が言われた通り外の景色を見てみると、眼前に広がってくるのは目的地である死神の住む瀞霊廷であった。

「・・・せ・・・瀞霊廷だ・・・!!」

銀太郎達が侵入を試みているその頃、依然総隊長山本はユーノ達の請願に関して口を閉ざしたまま何も語らない。

「・・・・・・」

ユーノ達機動六課の前線メンバーに緊張が走る。

と、その時・・・――

「「「!!」」」

突然、彼らの耳元に警鐘を知らせる音が聞こえてくる。

「何だ・・・この音は!?」

急な事態に戸惑い狼狽するなのは達と、それほどではないが警鐘の音に耳を傾ける隊長陣一同。

『緊急警報!!緊急警報!!瀞霊廷内に侵入者あり!!各隊守護配

置について下さい！！繰り返します！緊急警報！！緊急警報！！瀞霊廷内に侵入者あり！！各隊守護配置について下さい！！』

「何だと！？侵入者・・・！？」

「まさか・・・例のパトリオットの面々か！？」

「しかし、だとしたら変だよ。敵の狙いは九九琉閑の池の筈だ！？なのに何で瀞霊廷内に侵入する！？」

すると、そんなユーノの疑問を聞いた二番隊の砕蜂が思わぬことを口にした。

「言っていなかったが、九九琉閑の池とはこの瀞霊廷の東南東の外れにある森の奥地に存在するのだ。」

「なっ！？何だと・・・！？」

砕蜂の発言を聞いた一護やなのは達は度肝を抜いてしまい、焦燥を見せ始める。

「それじゃあ・・・このままじゃって・・・更木さん！？」

困惑するスバルであったが、その時剣八が一目散に隊首会を飛び出して旅禍の劇劇に向かって走り出した。

「おいっ！？待て剣八！まだ・・・！！」

一護も止めようとしたのだが、剣八の姿は見えなくなってしまっていた。

剣八の行動を呆気にとられながら傍らで拝見していたなのは達六課一同も少々困った表情となる。

「行ってしまいましたね・・・あの眼帯の怖い人・・・」

「ど、どうしましょうか!?」

一方、そんな全員の心配などどこ吹く風とばかりに剣八はただ走り続ける。

すると、そんな剣八の走る姿を屋根の上で見ていた彼の副官がほくそ笑み、勢いよく剣八に向かって飛び込んでくる。

「ふふ。剣ちゃんっ!!」

「やちる!」

やちると呼ばれるその幼稚園児程の背丈の女の子こそ、十一番隊副隊長の草鹿(くさじし)やちるなのである。

頑是ない笑みを浮かべながら剣八の肩と言う特等席に座ると、徐に尋ねる。

「何々?敵?旅禍?斬るの?」

「ああ!旅禍だ!理由はよく分かんねぇが、一護と同等に渡り合ったって奴だ!斬ってみてえっ・・・!!一護との肩鳴らしにはお誂え向きだ!」

この期に及んでも、剣八は執拗に一護との再戦を強く希っている。
剣八はそんな事を考えながら、やちるを肩に乗せたまま舌を舐め回し更に加速していった。

さて、剣八がいなくなったあとの一番隊隊首会室はというと・・・
総隊長山本が険しい表情を浮かべながら緊急事態に対処するため、閉会の宣言を発し指示を送る。

「・・・致し方ないの・・・隊首会はこれにて解散！各隊即時廷内守護配置についてくれ！それと・・・黒崎一護、ユーノ・スクライア。」

「お？」

「はい。」

二人は山本に唐突に自分の名前を尋ねられたことに些か驚くが、そんな二人に山本はこんな事を口にしてきた。

「お主ら二人以外の機動六課の前線部隊はここの地の理に何かと不便じゃろう。勝手な請願ではあると思うが、お主ら二名にはこれより三番隊隊長阿散井恋次と共に旅禍の迎撃を手伝ってもらいたいのじゃが。」

「え？俺らがか・・・！？」

「僕はそれで構いませんけど・・・なのは達は？」

「別命があるまで、六番隊隊舎にて待機。戦力は充分に温存してお

きたいからのう・・・」

すると、そんな山本の話を聞いていた部隊長たるはやてが何か少々の不満のようなものがあったのか間に入って口をはさむ。

「あ、あの！確かにそれはもっとな意見だと思うんですけど・・・しかし、相手は魔導師！しかも常識も全く違う相手です！！出来れば私達も今すぐにでも出動したほうがええと・・・」

はやての言葉を聞いて、フェイトも便乗してくる。

「そ、そうですよ！人数が多いほうが、効率も上がります！！だから私達も・・・」

「ぺいっ！」

すると、その瞬間――――――山本は一喝とばかりの唾を吐き捨て機動六課の前線メンバーを威圧する。

「「「「「「「「「「「「「「「「「「「「」」」」」」」」」」」」」」」」

山本の威圧に反応した前線メンバーは思わず体を硬直させ、多量の汗を流しながら異様な霊圧を浴びせる山本の鋭い眼光を黙って見つめる。

「お主等の考えていることも分からん訳ではない。じゃが、此処にいる以上は儂の指示に従ってもらう。忘れるでない・・・今お主らがいるのは時空管理局ではないのじゃ。護廷十三隊に居る間は儂の指示が絶対じゃ。異議は認めぬ！」

山本の言葉を聞くと、何も言い返せなくなったはやてが肯定の言葉を口にする。

「は・・・はい・・・！」

その間、はやての後ろにいたヴィータやシグナムもさることながら、なのはやフェイト、フォワードの五人もこれほどまでに尋常ならぬ霊圧と威圧を同時に発するこの死神の存在に戦くばかりであった。

「（す、すげー怖えーな・・・あの爺さん・・・！！）」

「（ああ。流石は死神全てを取り仕切る総隊長と言うだけのことはある。気迫だけで圧されるとは思っても居なかった。）」

「（凄い・・・これが歴戦の死神の圧なのか・・・！？）」

「（話を聞いてるだけなのに・・・汗が止まらない・・・！！）」

「（レベルが・・・違いすぎる・・・！！）」

「（身体が・・・動かない・・・！？呼吸するだけでけなのに、こんなにも辛い・・・！！）」

そんな機動六課の面々を横で見ながら、恋次は守護配置に着くためにユーノと一護を引き連れて出発しようと声をかけてくる。

「そう言うわけだ。大人しく、ルキア達と一緒に待ってろよ。一護、ユーノ。俺達は西側の警備だ。急ぐぜ。」

「ああ。分かったよ。」

「じゃあ、僕らはちょっと行ってくるね。何かあったら直ぐに知らせるから！」

ユーノの言葉を聞くと、緊張の糸が解けたのかなのはが額の汗を拭き取りユーノの言葉に反応する。

「あ・・・う、うん！気をつけてね、ユーノ君！無茶しちゃ駄目だからね！！」

「分かってるよ！！大丈夫！！」

「行くぜ！」

ユーノはなのはにそう言うと、一護と恋次と共に会場を後にし警備場所へと走り出していった。

残されたなのは達はかなりの不安が付きまとい、落ち着かない様子であった。

「・・・大丈夫かな・・・」

「やっぱり不安やな・・・」

すると、そんな不安ばかりを募らせるなのは達を見て六番隊隊長、朽木白哉がそっと近付いてきた。

「あ・・・」

気づいた全員が徐に表情一つ崩さないことで有名な白哉の顔を徐に

見ると、白哉はその冷徹ともとれる表情で意外なことを口にしてきた。

「兄(けい)らは黒崎一護とユーノ・スクライアが二度も同じ相手にやられると思うておるのか？」

「え！？いや・・・そんなことはないですけど・・・！！」

「ならば、信じて待つが良い。兄らが本当にあの二人を信頼しているのならば・・・」

白哉はそういうと、徐に隊首会を後にして自分の警備場所へと歩き出していった。

なのは達は白哉の言葉を聞いて、今まで募らせていた不安が急に払拭されると改めてユーノ達が必ずや無事に帰ってくると言う確信を持ちながら、最後まで信じぬこうとする意志を固めたのであった。

「・・・はい・・・！」

さて、恋次と共に廷内守護の手伝いをすることとなった一護とユーノはと言うと、頭上に見えてくる見覚えのあるものに思わず声を上げる。

「お！！恋次、吉良、ユーノ！上見ろ！！」

「な・・・何だあれ・・・？」

怪訝そうにそれを見つめる死神達。

近くを警備していた狛村は危険を感じたか、鉄左衛門に部下をさがらせるよう申し付ける。

「落ちてくるぞ！みなを少し下がらせてくれ、鉄左衛門！」

「了解しやした！」

「こ・・・こっちにくるぞ！！」

「逃げろ！！」

さて、狼狽しているのは何も死神だけではない。

銀太郎達も加速を止めずに瀞霊廷を守る遮魂膜に衝突をしようとするこの現状に大いに狼狽しているのだ。

「ぶつかる・・・っ！！」

「こうなっては仕方ない！！全員でありたっけの霊力と魔力を込めるんだ！！」

「少しでも砲弾を堅くするんだ！！！！」

全員は中央の霊珠核に自分たちの持つありったけの魔力と霊力を込めて砲弾を固くしていく。

そして、砲弾が遮魂膜へと衝突を果たして瞬間・・・――――莫大なエネルギーが反動となって膜の外にある周囲のものを吹き飛ばし、瀞霊廷全体も大きく揺れ始める。

「ぶつかった！！」

「しゃ・・・遮魂膜（しゃこんまく）にぶつかって止まってるぞ！！」

この大胆な侵入方法を依然、自分もしたことがある一護にとってこの光景は何とも驚愕されるものであった。

「おいおい！！まるで、俺達がやったときみたいな侵入法じゃねぇか！？」

「みたいじゃなくてそうなんですよ！あれは間違いなく花鶴大砲です！！」

「だが、どうなってるんだ！？何で志波空鶴の花鶴大砲が！？それに、パトリオットは本来魔導師・・・元がバウントと言ってもまさか・・・遮魂膜に衝突しても消滅しないなんて・・・！？」

「まさか・・・彼らに手を貸している死神でもいるのでしょうか？！」

それぞれに思案し始めるユーノや恋次達であったが、当のパトリオット達は魔力を込めるだけで精一杯の状況。

白鴎は魔力を込めることに全精力を注ぐと、あとは神に祈るばかりであった。

「行ってくれ！！！」

その白鴎や全員の願いが通じたのか、ついに砲弾は遮魂膜を突き破り瀞霊廷内へと侵入することが出来た。

だが、それと同時に砲弾は破裂し全員は空中へと放り出される。

空中へと放り出された全員であったが、何故か地面へと落下する事は無く浮遊し続けてる。

「ど・・・どうなってるんですかこれは!?」

「どうにかシールドは通り抜けたのはいいけど・・・なんで俺達は地面に落ちないんだ!?」

すると、高円寺が事態を恐れて全員に大声でこう口にする。

「離れるなっ!今はシールドにぶつかった砲弾が溶けて一時的に俺達に絡み付いてるだけだ!じきに渦を巻いて破裂し消滅する!その時にはなれていたら衝撃で全員バラバラに飛ばされる・・・」

「な・・・っ」

と、高円寺の話を聞き終えた瞬間――――――恐れていた事態が発生し、全員は渦に飲み込まれようとしていた。

「・・・ち。始まったぞ!!」

「う・・・おおオッ!?」

奇声をあげて渦の中を飛び回る銀太郎達。

「くそがァ!!飛ばされてたまるかよっ!!」

東海林はそう言いながら自力で近くにいた白鴎の元まで泳いで飛んでいくが、白鴎は近づいてくる東海林に大いに驚く。

「おわ――――――ッ！？」

そして、白鴎は東海林を追い払おうと必死に抵抗をする。

「東海林、避けろよテメー！！こっちくんな！！」

「何をしているのだ、お前達は！？」

オーリーはこの状況に呆れながらも一喝するが、今は何より近くにいるものと離れ離れにならないようにするのが賢明だと判断する。

「それぞれ近くにいる奴を掴め！絶対に離れるなよ！！」

「くそッ！！」

「何がクソだコラァ！！」

白鴎はいやいやながらも東海林の服を鷲掴みにしながら離れないようにする。

「わあっ！？」

一方の銀太郎はと言うと、オーリーに逆さに背負われた形で一緒だった。

そんな銀太郎を見ていた白鴎の肩に高円寺が掴まってくる。

「肩を借りるぞ！」

「高円寺！」

「瀬間子っ！！」

オーリーは銀太郎をつかんだまま、残りの瀬間子の手をつかもうと手を伸ばすが渦の勢いに負けてしまい瀬間子は手をつかみ損ねてしまう。

「・・・し・・・まっ・・・・」

瀬間子はそのまま渦の外へと引きずり出される。

「・・・く・・・・！」

オーリーは何としても瀬間子を救い出そうと、銀太郎をその場に残して救出に向かう。

「オーリーッ！？」

膜の外へと放り出された瀬間子であったが、咄嗟にオーリーが手をつかみ難を逃れる。

「！オーリー・・・」

だが、その瞬間オーリーは瀬間子を銀太郎の元へと投げつけ自らは膜の外へと飛び出ししまう。

「！？ッあああああああああわ」

「オーリー！！」

「あ！！」

白鴎達が助けようとしたときには時すでに遅し。

オーリーは流星群のように一人瀞霊廷の何処かへと落下していく。

「オーリー！！！」

「・・・・・・・・・・・・！」

悔しさを滲み出す白鴎に、高円寺が口をはさむ。

「案ずるな！奴なら必ず生き延びる！！それよりも！下で奴を捜したければ、まず自分達の無事を考えろ！！」

「くそ・・・ッ！！」

白鴎は苦渋の決断を下すと、こちらに向かって手を伸ばす銀太郎に同じように手を伸ばす。

「銀太郎！！」

「白鴎！！」

手を伸ばす二人の少年。

しかし、虚しくも渦の勢いがそこでピークに達すると銀太郎達は六

つに分かれて瀞霊廷の何処かへと吹き飛んでしまった。

それを見ていた剣八は一人一番強い者は誰かと不敵な笑みを浮かべていた。

「くそ・・・6つに分かれて吹き飛びやがった・・・!どいつだ・・・!?一番強えェのは・・・どいつなんだ・・・!?」

瀞霊廷内についに侵入を果たしてしまったパトリオットと、迎撃に出向いたユーノ達と十三隊。

次回、激闘の火ぶたが幕を開ける!!!

集結・護廷隊の隊長陣（後書き）

教えて、ユーノ先生！

ユ「今日は、涅マユリさんのお話だよ♪」

ユ「十二番隊の隊長であると同時に、技術開発局二代目局長を務めるマッドサイエンティスト。」

ユ「自分よりも下のものを見下し、あらゆる命を実験のための手段としてしか考えないスカリエッティ顔負けの外道だ♪」

すると、そんな話を聞いていたスカリエッティが不意に現れる。

ス「ふふふ・・・面白いじゃないか？私の更なる研究の為に、私の完璧な研究の為にこのような逸材を招き入れたいものだよ。」

その時、スカリエッティの言葉を聞いてマユリも登場。

マ「完璧な研究だと？貴様は既にそのような頓狂な言葉を口にした瞬間に、科学者として私に敗北しているのだヨ。だが、君そのものには実に興味がある。どうだい・・・私のところで研究されてみないカネ？」

ス「ふふふ・・・私を研究できるものなら是非そうしてもらおうじゃないか、涅マユリ。」

不気味な二人の会話を横で聞いていたユーノや一護、フェイトの三人は冷や汗をかく。

一「あれ止めなくていいのかよ？」

ユ「どうやって止めるんですか・・・」

フ「人の命を何だと思ってるの・・・あの二人は・・・」

マ・ス「玩具だよ（ヨ）」

共通見解を聞いた三人はそれ以上何にも言えなくなってしまう。

魔導師図鑑ハイパー！

機動六課女性前線協会。

それは、機動六課男性待遇改善委員会に対抗して部隊長八神はやてが結成したもう一つの権力組織であり、聖王教会とのコネもある非常に大きな組織である。

そして、今日はその会議がミーティングルームで開かれようとしていた。

ス「へへ。今日は何の話だろうね♪」

テ「仕事の合間に何やってるのかしら・・・私達・・・」

ギ「まぁ、面白いんだからいいんじゃないのかしら？」

フ「言い出したのははやてだしね。」

な「もうそろそろ来ると思うよ。」

他愛もない談笑をしていると、扉が開かれシグナムとはやてが入ってきた。

シ「待たせた。会長が到着された。（女性前線協会副会長）」

は「お待たせな！じゃあ、今日は恋次さん達を思いっきりナメてやろう！！（女性前線協会会長。）」

全面戦争開始！死神＆魔導師ＶＳパトリオット（前書き）

ユ「なのは達を引き連れて、護廷十三隊の隊長達と顔を合わせてみたけどやっぱり歴戦の隊長達の姿にみんなは戸惑いを隠し切れない様子だった。」

な「目と目を合わせるだけなのに、体の奥から何か途轍もない気を感じてくる・・・これが、本当に恋次さんと同じ隊長クラスの死神さんなの・・・！？」

恋「そうこうしている内に、パトリオットの連中が瀞霊廷内に侵入を始めやがった。俺達もいよいよ覚悟を決めて戦わないとならねぇ。」

一「魔導師も死神もパトリオットもみな、覚悟が上でここにいる以上・・・互いに刃を交える運命が待ち受ける。」

ユ「ユーノ・スクライア外伝　パトリオット篇・・・・・・始まります。」

全面戦争開始！死神＆魔導師ＶＳパトリオット

＞ｉ１８７５５―７０９＜

ユーノ・スクライア外伝・・・前回の三つの出来事。

一つ：　コツを掴めないでいる白鴎に東海林が助言をする。

二つ：機動六課が護廷十三隊の隊長陣と接触する。

そして、三つ：ついに、パトリオットが瀞霊廷へと侵入を開始。

ユーノ達が恋次と共に廷内守護に出かけているその頃、六番隊隊舎のほうで現場待機となっているなのは達機動六課前線一同はやはり何処か落ち着かない様子で自分のデバイスを見たりしていた。

すると、そんな折に外から鈍い音が聞こえてきたのを確認する。

「な・・・何だろうこの音・・・・！？」

「外で何が起こってるの！？」

不審に思ったクロノが窓の外へと目を向けてみると、目の前に写ってきたものに衝撃を受けた。

「――――！」

他の全員も同じように外を見てみると、なのは達もクロノ同様驚愕の表情を浮かべ、明らかに異常な雰囲気を漂わせる空を仰ぎ見る。

「あれは・・・一体・・・!?空が光っている・・・?」

時同じくして、死神達も眼前に広がってくるこの光景に目を奪われている。

「ぶつかった!!」

「しゃ・・・遮魂膜(しゃこんまく)にぶつかって止まってるぞ!!」

「おいおい!!まるで、俺達がやったときみたいな侵入法じゃねぇか!?」

「みたいじゃなくてそうなんですよ!あれは間違いなく花鶴大砲です!!」

「だが、どうなってるんだ!?何で志波空鶴の花鶴大砲が!?それに、パトリオットは本来魔導師・・・元がバウントと言ってもまさか・・・遮魂膜に衝突しても消滅しないなんて・・・!?」

パトリオット達の砲弾はシールドを貫き、投入に成功すると同時に砲弾の膜は崩れ、その反動によって発生する渦が彼ら七人を絡め取ろうとする。

「離れるなっ!衝撃で全員バラバラに飛ばされる・・・」

「「「「「「うわあああああああああああ!!!!!!!!!!」」」」」」

「それぞれ近くにいる奴を掴め!絶対に離れるなよ!!」

「くそッ！！」

「何がクソだコラァ！！」

「わあっ！？」

「肩を借りるぞ！」

「高円寺！」

それぞれに相手を掴みあう七人だったが、ここで思わぬ事態が起きてしまう。

「瀬間子っ！！」

「・・・し・・・まっ・・・・」

「・・・く・・・・！」

「オーリーッ！？」

「！オーリー・・・・」

「！？ッあああああああああわ」

「オーリー！！」

瀬間子を助けるために、オーリーは一人瀞霊廷内へと落下していく。

「くそ・・・ッ！！」

「銀太郎！！」

「白鴎！！」

手を取り合おうとする二人であったが、虚しくも渦の勢いに負けてしまい彼らは六つに分かれて瀞霊廷の何処かへと落下していった。

「くそ・・・６つに分かれて吹き飛びやがった・・・！一番強えェのは・・・どいつなんだ・・・！？」

さて、一番初めに落下していったオーリーの方から順に見ていくとしよう。

オーリーは落下しながらもデバイスであるチータスを取り出し、この最悪の事態を打破しようとする。

「・・・・・チータス・・・・・行くぞ！」

また、同じころ銀太郎と一緒に落下している瀬間子はその銀太郎の身の安全を守るために自らが体を張って盾になろうとする。

「つかまってろ、銀太郎！！」

「う・・・うん！！」

瀬間子はダイノボットを取り出し、その力で落下の衝撃に備える。

「ダイノボット、セットアップ！！！」

更に、別なところでは高円寺が一人で地面へと落下を続けているが・・・その様子は他の三人や残りの二人のものと明らかに違っていた。

「・・・・・・・・一人になったか・・・・・・・・・・・だが、これはこれで・・・却って都合が良いかもしれないな・・・・・・ふふ」

そんな高円寺の真意はさておき、衝撃で一緒にいたはずの白鴎とも離れ離れになってしまった東海林は険しい顔を浮かべながら地面に激突するにあって準備を整える。

「くそが!!結局白鴎と離れちまったぜ!!だが、俺がこんなことで死ぬかよ!!」

ライノックスの能力が発動されようとした中、既にエアラザーの力で空を滑空しようとしていた田吾作は。

「エアラザー!飛んで迂回するぜ!!」

〈Ａｌｌ　ｒｉｇｈｔ〉

と、言う風に六人は何とかその状況に合わせて対処しようとしていたが・・・白鴎に関してはあまり上手い対処の仕方とは言えないものがある。

「ちくしょ・・・!!コンボイ!!」

〈Ｅｘｐｌｏｓｉｏｎ〉

何とか魔力上昇によって衝撃に備えようとする白鴎だったが、果たしてうまくいくのやら――――――。

「ぶっはーーーっ!!!」

魔力衝撃による落下で廷内に侵入を果たした白鴎だったが、自分の技によって出来てた砂のクッションによって顔中は砂まみれとなり、おまけに口の中にも入る始末。

「ふう・・・な・・・何とかいい具合に着地することが出来たぜ・・・げっほ!!!げっほ!!やべ・・・気道に砂が入っちまった・・・ぜ・・・げっほ!!!げっほ!!」

すると、そんな思慮に欠ける白鴎の対応にデバイスであるコンボイが口を挟んでくる。

〈Ｗｈｙ　ｄｏ　ｙｏｕ　ｃｏｕｇｈ　ｉｎ　ｔｈｅ　ｔｅｃｈｎｉｑｕｅ　ｆｏｒ　ｂｅｇｉｎｎｉｎｇ　ｆｏｒ　ｍｙｓｅｌｆ？（自分で仕掛けた技で何咽てるんだよ、お前は？）〉

〈Ｔｈｅ　ｏｎｅ　ｃａｎｎｏｔ　ｂｅ　ｓａｉｄ　ｂｙ　ａｍａｚｉｎｇ.（呆れてものも言えませんね。）〉

実はこのコンボイというデバイス、二重人格の側面があり白鴎はこの二人の性格によく振り回されているらしい。

「やかましい！！大体そうならないようにするのがデバイスたるお前の役目だろうが！！」

〈Ｉｔ　ｉｓ　ａｎ　ｉｍｐｏｌｉｔｅ　ｉｍｐｏｌｉｔｅｎｅｓｓ.（それは失敬失敬。）〉

「てめぇ・・・！」

自分のデバイスでありながら、主人に対してあまりにぞんざいな態度を示すコンボイに憤りを感じる白鴎。

だが、そんな憤りよりも白鴎にとって一番重要となっているのは怒りをぶつけることではなく逸れてしまった銀太郎や他の仲間の事。

白鴎は一先ず状況を確認するために辺りを見渡してみる。

「・・・さて、銀太郎達とは大分距離をとったか・・・急いで向か

わないと・・・！？」

と、その時。

白鴎の耳に廷内守護についていた護廷隊の死神達が近づいてくることが足音ではっきりとわかった。

「ち！その前にゴミ掃除をしないとな。行くぜ、コンボイ！」

〈Ｂｌｏｏｄ　ｅｘｐｌｏｓｉｏｎ〉

臨戦態勢に入った白鴎はブラッドカートリッジをロードし、ドラゴンにも似た容姿に変貌すると死神達の迎撃へと向かうのであった。

一方、他の地区を散策していた別の隊の死神達は目の前の光景に度肝を抜いていた。

「な・・・」

「何だこの落下跡は・・・！！どうしたらこんな跡が出来るんだ・・・！？」

彼らの目に飛び込んできたのは、直径一キロにわたるほどの巨大なクレーターであった。

「し・・・死体がないってことはまだ生きてるってことだ！」

「捜すぞ！」

「お・・・おう！」

死神達は消えたパトリオットを捜すために廷内へと散らばっていくが、実はこの落下跡を作ったのは他ならぬオーリーその人であり、オーリーは死神がいなくなったことを確認すると近くの木の上に腰を下ろし安堵のため息をつく。

「ふっ。・・・さて・・・どうするか・・・」

時同じころ、九番隊を取り仕切る副隊長檜佐木修兵は部下たち数名を連れて頭上から降ってくる光球に備えていた。

「こ・・・こっちだ！」

「来るぞっ！！構えろ！！」

檜佐木は部下たちと共に刀を抜くと、光球を迎え撃とうとその場に留まる。

しかし、光球は落ちてきた瞬間・・・――――突然、彼らの目の前から姿を消してしまい檜佐木達は愕然としていた。

「・・・・・・！・・・・な・・・・・・・き・・・消えた・・・！！」

「くそッ！」

「さ・・・捜せ！！」

檜佐木達がその場から立ち去っていく光景を、屋根の上で高円寺が高みの見物とばかりに不敵な表情で眺めていた。

そして、銀太郎と瀬間子の方はどうなったかと言えば――――――。

「・・・太・・・・・・太郎・・・・・・・・・銀太郎。」

瀬間子は気絶している銀太郎を起こそうと耳元で声をかけ続けていた。

すると、気絶していた銀太郎は夢を見ていたらしくその状態のまま次のような事を口にして起き上がる。

「ウチは毎日新聞だって言ってるでしょうが・・・！！」

銀太郎が突拍子もなく起き上がった瞬間、瀬間子の顎に銀太郎の頭が直撃。

「いたたたたっ！？」

「銀太郎っ！大丈夫か、お前！？」

自分の顎も相当に居たいのを我慢している瀬間子は一先ず銀太郎の安否を気遣う。

「あれ？産経新聞の売り込みの人じゃなかったのか・・・良かった、瀬間子で・・・」

「産経新聞って・・・一体何の夢を見ていたんだお前・・・」

「と言うか、ここは何処だろう？」

辺りを見渡し誰もいないことに気づく銀太郎。

「ああ・・・どうやら俺達は運よく・・・誰もいない所に落下できたらしい。」

「へぇっ。それはラッキー・・・うっ！！」

と、銀太郎が手を叩こうとすると右の手の甲に痛みが走る。

銀太郎が不審に思ってみてみると、いつの間にか包帯が巻かれていた。

「あ！気をつけた方がいい。落下の衝撃で怪我をしているのだ。一応、手持ちの医療セットで応急処置はしておいたのだが・・・痛みが抜けるには少し時間がかかる・・・」

「そうなんだ・・・ありがとう・・・ていうかそんなもの持ってたんだね・・・？」

意外なものを持ち合わせていた瀬間子に些か驚く銀太郎だったが、瀬間子本人はと言うと。

「・・・すまない。俺がもっとしっかりしていればお前が怪我を負うこともなかった。俺の不注意だ・・・本当にすまない。」

「二度も言う必要はないよ。それに、僕は結構間抜けなところがあるからどのみち怪我の一つぐらいはしていたと思うな。それで瀬間子がいなかったら応急処置も出来ないから、出血したまま貧血になって今頃その辺で意識失っていたよ、きっと。」

「そうか・・・」

「あ・・・変かな？」

「いや。それより早く移動をしよう。見ての通り派手な落下音もしたからもうじき聞きつけた死神がこの辺りに集まってくる可能性がある。」

「うん。じゃあ、急ごう。」

二人は死神達に見つかる前に、その場から逸早く退避を始め目的たる聖地・九九琉閑の池のある森を目指して前進していった。

そんな彼らパトリオットの廷内侵入に先んじて、今回の一件の責任者に抜擢された六番隊朽木白哉は隊舎の廊下を歩きながら部下に向かって状況の確認を急いでいた。

「現在の状況はどうなっている？」

「は！二番隊、大前田副隊長が隊員数名を引き連れて東南東に落下したと思われる旅禍の迎撃に出撃しております。」

「他の隊はどうだ？」

「七番隊射場副隊長、同じく瀞霊廷東南東に向かいました。」

「よし。その調子で情報を束ねる。各隊からの報告は一つ残らず全て六番隊（ここ）に集める。くれぐれも聞き逃すことの無い様ことに当たれ。」

「はっ！」

逼迫した事態の中、廷内に散らばっていったパトリオット達がどんなことを仕出かすかはこの後で詳しく描写するとして、先ずは東南東の方を現在移動中の銀太郎と瀬間子は嫌に静まり返った光景にしみじみとした感覚になる。

そして、仲間たちと大きく距離を取ってしまっているこの状況に寂しさのようなものを覚える。

「みんなとは随分と離れてしまった・・・」

「そうだね・・・」

「・・・・・静かだな・・・・・・」

「多分、そのうち騒がしくもなるよ。」

と、銀太郎がそう考えていた直後・・・――予感は的中する。

「居たぞ!!」

二人が目の前を見てみると、そこ居たのは部下たち数名を引き連れた二番隊副隊長兼隠密機動第二分隊警邏隊隊長、大前田希千代（おおまえだまれちよ）であった。

大前田は好物の油煎餅を頬張りながら銀太郎と瀬間子を勝ち誇った表情で見つめる。

「一番乗りだぜ!」

「儂じゃ！一番乗りは！」

そう言って大前田の迎え、すなわち銀太郎と瀬間子の後ろに立つのは七番隊副隊長の射場鉄左衛門であった。

開放した独特の形の斬魄刀を構えながら射場は二人に声をかける。

「白昼堂々乗り込んで来くさって、ようやるの！」

そんな射場や大前田の姿を見た銀太郎は、冷笑を浮かべながら挑発にも似た返事をする。

「現れたね。死神・・・・・・」

「銀太郎。ここは俺に任せてくれ。お前に無駄な力は遣わせまい。」

「ああ。ありがとう、瀬間子。」

銀太郎はその場を瀬間子に任せると、邪魔にならない程度に後ろに下がる。

そして、瀬間子は懐から待機状態である自身のデバイス、ダイノボットを構築する。

「ダイノボット、セットアップ。」

〈Ｇｅｔ　ｓｅｔ〉

「のお！？」

大前田と射場の二人が瀬間子のその光景に目を奪わる中・・・その瞬間、待機状態から戦闘モードである装着型の剣へと変貌を遂げる。

「「！」」

二人や他の死神達は初めて見る魔導師の使うデバイスの構築される光景に度肝を抜いていた。

「ふん！！」

「ほう。魔導師っちゅうのは、そげな術を使いおるんかいのう？」

「ふん！こけおどしが。パトリオットだろうが何だろうが、死神相手に調子こくんじゃねぇぞ！」

「大層な自信だな。だが・・・・・・」

〈Ｂｌｏｏｄ　ｃａｒｔｒｉｄｇｅ　ｌｏａｄ〉

瀬間子がお得意のブラッドカートリッジを一発ロードをした瞬間、瀬間子の体はヴェロキラプトルの姿に酷似た凶暴な能力を秘めた姿へと変貌。

このまさかの展開を期待していなかった死神達は更に目を疑っただろう。

「何だ、こいつ！？姿が変りやがった・・・！！」

「何もんじゃい・・・おんどりゃ！？」

「化け物を見るような目で見ないでくれ。これでもれれっきとした人間だ。ただ、普通の人間よりも優れていると言うだけだ。」

「ちっ！やれ！！」

大前田は油煎餅を仕舞い込むと、部下たちに先陣を切らせる。

「殺生はせぬ。しかし、道は開けてさせて貰うぞ。ダイノボット、潰すぞ。」

〈Ｃｏｎｓｅｎｔ．　Ｉｔ　ｄｏｅｓｎ'ｔ　ｐｕｔ　ｉｔ　ｓｏ　ｍｕｃｈ　ａｔ　ｔｉｍｅ　ｔｈｏｕｇｈ　ｉｔ　ｉｓ　ｂａｄ．　Ｓｔｅｐ　ｔａｃｋｌｅ．（了解。悪いがあまり時間はかけさせん。ステップタックル。）〉

瀬間子は強靭な脚力によって生み出される強力なタックルを向かってくる大前田の部下たちに向かって仕掛ける。

「「「「ぐあああああああ！！！」」」」

更に瀬間子は生えた尻尾で後ろから仕掛ける死神に向かって大きくそれを振り回し、ダメージを与える。

「「「「「のあああああああ！！！」」」」」

「おお！？」

「何と！」

この圧倒的な状況を見ていた大前田と射場の二人は言葉すら失いか

ける。

部下の死神は死にはしないものの、その体に大きな傷を負ってしまい全員が戦闘不能となってしまう。

「おい！」

「おどれら・・・――ナメ腐りおって！」

〈Ｎｏｗ ｉｔ ｗｉｌｌ ｂｅ ｙｏｕｒ ｔｕｒｎ ｔｈｉｓ ｔｉｍｅ. Ｇｏｄ ｏｆ ｄｅａｔｈ ・・・ Ｖｉｃｔｏｒｙ ｏｒ ｄｅｆｅａｔ ｉｓ ａｌｒｅａｄｙ ・・・ｂｅｃｏｍｉｎｇ ｉｔ・・ ｅｖｅｎ ｉｆ ｉｔ ｓａｙｓ ｔｈｏｕｇｈ ｄｅｃｉｄｅｓ ａｎｄ.（さぁ、今度は貴様の番だぞ。死神・・・と言っても、既に勝敗は決しているがな。）〉

「野郎・・・あんまし言い気になるんじゃねぇぞ！ぶっ潰せ！！『五形頭（げげつぶり）』ィ！！！」

大前田はダイノボットの言葉に堪忍袋の緒が切れ、自らの刀を抜いてモーニングスター状の形状をした斬魄刀、五形頭（げげつぶり）を解放。

「おりゃあああ！！！これでも喰らいやがれ！！！！」

〈Ｓｋｉｎ ｐｒｏｔｅｃｔｉｏｎ〉

五形頭を勢いよく瀬間子に投げつけた大前田だが、瀬間子はスキンプロテクションの能力でその体の皮膚だけで大前田の攻撃を凌ぎ、まるで効果もない状況。

「何!?」

「ふん。」

この光景を目の当たりにした大前田は急に恐ろしくなったのか、後ずさりをしながら部下がやられたにもかかわらず誰かに縋る。

「ひぃ!!だ、誰か!?俺を助けに来んか!!」

「暫くの間、眠っていてもらう。」

そう言うと、瀬間子は鋭い爪の先から魔力衝撃を連発し、大前田を攻撃する。

「ひい!!く、くんな!!!」

連発される魔力衝撃を適当に刀を振り回して避けようとする何とも情けない姿の大前田。

〈Ｓｔｏｐ ｔｈｅ ｕｓｅｌｅｓｓｎｅｓｓ ｏｆ ｐｈｙｓｉｃａｌ ｓｔｒｅｎｇｔｈ. Ｄｉｅｓｅｌ Ｂｌａｚｅ.（体力の無駄は止めておけ。ディーゼルブレイズ。）〉

ダイノボットはその瞬間、瀬間子とシンクロを果たしたその口から止めの一撃である熱波を発射して、大前田を昏倒させる。

「うおおおおおお!?ぐっほ!!」

全身に熱波を浴び、更には魔力衝撃の嵐に着弾した大前田が射場の目の前に虚しくも写ってくる。

「大前田！野郎・・・何ちゅう出鱈目な力使いよるん！？止むをえん。こうなったら手加減は無しじゃ！！」

そう判断した射場は瞬歩で瀬間子の頭上へと飛び上がり、徐に刀を振り下ろそうとするが・・・その攻撃をあっさり背中越しの瀬間子の指先で受け止められてしまう。

「何じゃと！？」

「ふん！」

〈Ｄｉｅｓｅｌ　Ｂｌａｚｅ〉

瀬間子は射場の体を掴むと、至近距離によるディーゼルブレイズを浴びせる。

「ぐあああああああああ！！！！！！」

至近距離でその技を食らった射場であったが、何とか持ちこたえようとしている。

「う・・・く・・・っ・・・！！」

受けたダメージに耐えながら斬魄刀を拾い上げようとする射場であったが、そんな姿を見た瀬間子が最後の一撃を加える。

「それでも死神か？身の程を・・・知れ！」

瀬間子は射場の体を蹴りの一撃で壁に向かって吹き飛ばした。

「のあああああああ！！！！！！」

蹴り飛ばされた射場は壁を貫くと同時にかなりの距離まで塀と建物を壊してそのまま重傷を負い戦闘不能となる。

瀬間子はブラッド状態解いて、離れてみていた銀太郎に近づく。

「済まぬ。少しやり過ぎたか？」

「いや。これぐらいなら許容範囲だ。死神だってそう簡単にはくたばったりしないよ。」

「そうだな。では、参ろうか。」

二人は二人の副隊長格を撃退すると、再び進路を取って聖地九九琉閑の池へと向かった。

二人が撃破されて間もなくして、パトリオットセンサーを持って廷内散策に乗り出していたユーノ・一護・恋次達三番隊の面々は反応の合った現場へと急行していた。

「奴らの霊圧だ！確かこの辺りから・・・」

そして、現場に到着した四人や三番隊の隊士達の目に飛び込んできたものはあまりに悲惨な光景であった。

「これは・・・！」

「――――――！」

眼前には既に満身創痍の状態となって昏倒された大前田を始め二番隊の面々と、無残にも破壊された壁の奥の方で気絶する射場がそこにはあったのだから。

「オイオイ！こりゃあ・・・」

「お・・・大前田さん！！これはマズイ！！」

「ちっ。救護班を呼べ！他の者は守護配置・被害状況を報告しろ！」

「はっ！」

恋次は直ぐに隊士に指示を出すと、気絶した大前田達の救護に向かう。

「大前田さん！しっかりして下さい！！」

恋次の部下が大前田の意識を確認しようと声をかけるが、一向に意識を取り戻す気配はない。

そんな大きな痛手を負った大前田達を険しい表情で見ていたユーノ達四人に、もう一人の部下が射場を抱えてやってくる。

「阿散井隊長、七番隊の射場副隊長です！」

「そんな・・・射場さんまでもやられるなんて・・・」

先輩である射場がこれほどまでの被害に遭うとは夢に思わず、吉良は驚愕の表情を浮かべていた。

「無事ですか？」

「辛うじて、意識はあります。」

射場の状況を確認すると、ユーノはセンサーの方をもう一度見てみることに。

しかし、センサーには既に反応は消えており銀太郎達が一体何処に行ったのかがまるで分からない状況であった。

「・・・・・・・・・・・・」

苦い顔を浮かべるユーノを見て、一護は吉良に追跡の続行をするかどうか尋ねる。

「・・・連中が逃げたようだな・・・どうする、追うか？」

「いや・・・今は射場さん達の救助を優先させるのが賢明だ。」

と、その直後。

ユーノは自身の霊圧と魔力が不穏な動きを起こしていることに気づき、表情を一変させた。

「！」

「どうした、ユーノ！？」

「どうやら被害は徐々に他の場所でも出始めているようですよ・・・

」

ユーノがそう言ってから、三人も改めて霊圧を研ぎ澄ませてみると・・・確かに各地でもパトリオット達による戦闘行為が続いていることがわかる。

「確かに、この爆発的な魔力の上昇はブラッドカートリッジを使った時と同じだ・・・！」

「連中も本腰を入れて戦争を仕掛けてきたようだな。」

「まぁ、この戦闘は恐らくボスである狼谷銀太郎君を聖地に向かわせるために陽動として行っているものだとは思いますが・・・いずれにしろ彼らの戦闘力は僕らでも手こずるほど強力だ。万が一あの高円寺と鉢合わせてしまった時は最悪ですね。」

「ああ・・・あいつだけはどうも未だ読めねぇ・・・おまけに、戦闘力だって間違いなく最強の部類だろう。」

「パトリオットは元がバウントですから、霊圧を感知するのが難しい。このセンサーでも居場所の特定がはっきりと掴める訳じゃありません。途中で消えたり出たりすることは多々あります。」

「ち！厄介だな・・・」

思っていた以上に捜索が困難であることに思わず舌打ちをする恋次。

「三番隊の各班は引き続きこの辺り一帯の捜索を続けてくれ！」

「「「は！」」」

吉良の命令を受けた隊士達は各班に分かれてパトリオットの捜索へと向かい、ユーノと一護、恋次達四人はこの状況を報告するために山本の元へ急ぐことにした。

「一先ず、総隊長に被害状況を報告しないとな。行くぜ！」

「「「ああ（はい。）」」」

やがて、大前田と射場の二人が戦闘で負傷したことは程なくして各隊に伝達され、七番隊隊舎で待機をしていた狛村も射場が倒されたという事実にかなり驚いていた。

「何だと・・・鉄左衛門が！？」

「はい。大前田副隊長と共に重症です。現在は綜合救護詰所にて治療を受けています。」

「分かった。しかし、鉄左衛門ほどの男を容易く破るとは・・・敵も侮れんな。引き続き、周辺警戒を続けてくれ。儂も直に参ろう。」

「は！」

いつにも増して険しい表情となる狛犬は何事もなかったかのように朝を迎えた青々とした空を見つめる。

また、その頃オーリーの方はと言うと・・・――単身瀞霊廷内に散らばっていた死神達をブラッドカートリッジの力で次々と撃退していた。

「「「「わあああああああああああ！！！！！！！」」」」

「「「「ぐあああああああああああああああ」」」」

オーリーのブラッド状態に完膚なきまでにやられてしまう死神達と、傷一つ負った形跡のない無表情のオーリー。

「・・・・・・・・・・・・」

オーリーは表情を一切変えることなく、感覚を研ぎ澄ませながら周りに隊長格レベルの霊圧をした者がいないことを確認する。

「（こっちのほうは大方潰したが、いずれも三下どまりだ・・・隊長格らしき霊圧は感じれぬ・・・）」

と、その時。

「おい！き、貴様！！」

オーリーの元に応援に駆け付けた八番隊の隊員たちが目の前に立ちふさがる。

「貴様！報告に入ってる旅禍だな！よくもここまでの事を！」

「・・・殺生はなるべく避けている。許容範囲だ。」

「何だと！？言ってくれではないか小童の分際で！」

「ここから先は生かして帰す訳にはいかぬ！直ぐに貴様を片づけてくれよう！」

すると、そんな死神の言葉を聞いたオーリーは。

「・・・・・・・・・・・悪いが、その言葉には間違いがあるぞ・・・」

「き、貴様何を言って・・・・――――」

その瞬間、オーリーはブラッドカートリッジをロードするや否や全身から目で確認できるほどの一際大きな魔力を出しながら徐に死神達と近づいていく。

「片付けられるのは貴様たちの方だ。」

「・・・ひ・・・・!?」

オーリーのあまりにレベルの違い過ぎる殺気と雰囲気に圧倒された死神達は全身を震え上がらせる。

「チータス。やるぞ。」

〈Ｂｌｏｏｄ　ｃａｒｔｒｉｄｇｅ〉

オーリーは更にブラッドカートリッジをロードして、強行突破を試みる。

同じころ、白鴎の方もコンボイの力を存分に発揮させて目の前に現れる死神と言う死神をなぎ倒していった。

「おらおらおらおら!!!!!!」

〈Ａｂｓｏｌｕｔｅ　ｄｉｓｐａｉｒ〉

「「「「がはああ！！！！」」」」

「コンボイ！！！！」

〈Ｂｌｏｏｄ　ｅｘｐｌｏｓｉｏｎ〉

ブラッド状態となった白鴎の猛攻は留まる事を知らず、死神達に攻撃の暇を当たることなく絶対的な力の差で昏倒させていく。

「アルティメットパワーフォース！！！」

「「「「うあああああああああああ！！！！！！！！！」」」」

白鴎の攻撃をまともに食らった死神達は一分も断たないうちに全滅。

戦闘の現場は非情に荒れ果てていた。

「よし。結構片づけたぜ。」

白鴎はブラッド状態を解くと、懐から残りのブラッドカートリッジを取り出す。

「ブラッドカートリッジもまだある・・・これなら余裕だぜ。」

白鴎はブラッドカートリッジを仕舞い込むと、全速力で銀太郎の魔力波長を追って走り出す。

「（待ってろ、銀太郎。直ぐに追いつくからよ！）」

廷内がパトリオットの侵攻により慌ただしい様子を漂わせていることは、六番隊隊舎で待機をしているなのは達にも伝わっていた。

詳しい状況はまだ報告を受けていないが、事態が逼迫した状況であることは間違いなかった。

「何や外が慌ただしいな・・・・・・」

「何かあったんでしょうか？」

「あの子たちも何だかんだ言ってかなり強いからね・・・苦戦を強いられても無理はないよ。」

「確かに、侮れぬところはある。スクライアや黒崎もあの高円寺という男と対峙して圧倒されたという事実もあるしな・・・」

「それでも、俺にはどうも店長が負けたなんて信じ難い話だぜ。」

「店長のチートな戦闘能力はこのメンバーの誰もが認知していることだからね。」

浦太郎の言うことはもっともである。

あらゆる面を考慮しても、ユーノはなのは達とは明らかにずば抜けている。

魔導師が魔法を使う際に必需となっているデバイスを必要としない点においても然り、斬拳走鬼における基本戦術が一通り完成されて

いること、さらには状況に応じた即時攻撃手段を瞬時に見つけ出す頭の構造が備わっているのだから。

「ユーノ君もそうですけど、一護さんだって相当な強さの持ち主ですよ。それは弟子であるユーノ君やここの死神さんが誰よりも分かっていることじゃないですか？」

確かに、なのはの言ってることも周知の事実だ。

一護はルキアから譲渡された死神の力を昇華させて、異常なほどの早い期間でその戦闘法を吸収していきこの尸魂界においてルキア奪還の為に隊長各を次々となぎ倒していったり、並ある死神が数年かかると言われる卍解の到達をわずか三日で習得したりと、戦闘能力の高さはユーノに匹敵かそれ以上の処がある。

「だが、思いのほか状況は悪くなっている一方だぞ・・・この様子を見る限りでは・・・」

と、その時・・・――――そんな不安げな様子の全員の元にルキアが息を切らして走ってきた。

「ルキアさん！」

「どうしたんですか、肩で息して！？」

「みんな！一大事になったぞ！！」

ルキアは一度落ち着いてから先ほど自分も受けた同じ報告の中身を全員に話した。

それを聞いたなのは達は驚愕のあまり狼狽する。

「・・・そ、そんな・・・！」

「こっちの死神さん・・・しかも副隊長二人がいとも簡単に倒されてしもうたなんて・・・！！」

「おまけにパトリオットの侵攻で死神の大多数が重傷を負わされる・・・って！！」

「やはり、侮れんな。」

「・・・一護達が見つけたときには、既に大前田副隊長も射場副隊長も瀕死の状態だったそうだ。幸い、直ぐに四番隊の方に搬送して治療を受けたから、命に別状は無いそうだが・・・戦闘に参加することはまず不可能とのことだ。」

「くそ！！あいつら、いい気になりやがって・・・・・・！？」

と、歯がゆい気持ちを露わにし壁に拳を殴りつける鬼太郎や他の全員の目の前に飛び込んでくる黒いアゲハチョウの姿。

「この黒い蝶は・・・！？」

怪訝そうに見つめるフェイトを余所にその蝶・・・地獄蝶はルキアの指に止まる。

「地獄蝶か・・・“護廷十三隊、各隊長並びに機動六課前線部隊を第一級特例により、緊急召集。これより、隊首会を開く”。繰り返す・・・護廷十三隊、各隊長並びに機動六課前線部隊を第一級特例

により、緊急召集。これより、隊首会を開く。」

「私達も召集ってことは・・・」

「やっぱり、事態は結構深刻なようだね。」

「よし。僕達も直ぐに行こう。」

「「「「「はい！」」」」」

なのは達は早速召集の命を受けて、全員で一番隊舎へと向かって走り出す。

尚、この報せは各所で守護についていた隊長陣にも即座に伝わる。

刑軍を率いる二番隊砕蜂にも連絡が入る。

「“護廷十三隊、各隊長並びに機動六課前線部隊を第一級特例により、緊急召集。これより、隊首会を開く”。繰り返す・・・護廷十三隊、各隊長並びに機動六課前線部隊を第一級特例により、緊急召集。これより、隊首会を開く。」

「く・・・こんな時に・・・！お前達は引き続き担当各地区に散れ。遭遇するまで探索するしかない。発見した場合は直ぐには手を出すな。他藩に連絡して応援を待て。以上だ！」

「「「はっ！」」」

事態が窮を要する事態であることを理解したユーノと一護は山本に向かって禁踏区域となっている聖地、九九琉閑の池への立ち入り許

可を貰おうと説得を試みる。

「逼迫した事態になってきましたね。」

「ああ。爺さん、どうするんだよ?このまま禁踏区域だからって理由で躊躇っていたら、もしかしてあんたらの一番恐れる“世界の崩壊”に繋がるかもしれねぇんだぞ。」

一護がそう言うと、山本は険しい表情を浮かべ苦渋の決断を下す。

「・・・――止むを得まい。こうなった以上こちらも本腰を入れねばならぬ。黒崎一護。ユーノ・スクライア。お主らには先に九九流閑の池へと向かってもらう。行き方に関してはこれの通りに進むがよい。」

山本はそう言うと、九九琉閑の池へと続く道のりが書かれた地図を手渡し行くに当たっての忠告をするのであった。

「くれぐれも道を踏み外さないよう充分に用心せい。お主ら二人が欠ければ、この世界に来た帰りを待つ者が大いに悲しむ。何としても旅禍を生け捕りにして此処へ戻ってくるのじゃ!」

「分かった!行くぜ、ユーノ!」

「はい、一護さん!」

二人は山本から渡された地図を持って、銀太郎達が向かう聖地“九九琉閑の池”へと目指し瞬歩で移動を開始し始める。

二人が聖地へと向かったその頃、二番隊の管轄に入る隠密機動第一

分隊“刑軍”の各班は砕蜂の指示に従い廷内を走り回っていた。

すると、そんな折早速とばかりにパトリオットの一人が徐に現れる。

「「「！」」」

彼らの前に現れたのは、パトリオットの中でトリックスターと恐れられる浦原喜助の強壮結界を破壊した東海林棗であった。

「よう。あんたら、刑軍って奴だろ？」

「貴様！旅禍か！？」

「りょか・・・・・まぁそんなもんだな。それより、あんたら強いんだろうな？」

「「「く！！」」」

年下の東海林の言葉に思わず身構える刑軍。

「何だ、やるのか・・・？」

東海林は臨戦態勢に入った目の前の刑軍を見てほくそ笑むと、それに応えるためにデバイスを取り出し構築を始める。

「へへ・・・暴れようぜ、ライノックス！」

構築を完了したのち、東海林はブラッドカートリッジを使ってトリケラトプスを模した姿の巨大な姿へと変貌を遂げる。

「「「なっ！？」」」

目の前の光景を疑い、後ずさりする刑軍。

「見せてやるぜ。パトリオットのトリックスターと恐れられるこの東海林棗様の実力をな。ライノックス、ブラッドカートリッジロード！」

〈Ｂｌｏｏｄ　ｃａｒｔｒｉｄｇｅ　ｌｏａｄ〉

東海林はブラッドカートリッジを使用すると、先端に生えたつのにエネルギーを集約させて地面に向けてそれを送り込む。

「ブラックブースト！！」

すると、地面へと流れ込んだ東海林の魔力が一気に爆発して地面をめくりあがらせその場にいた刑軍を衝撃で吹き飛ばす。

「「「がああああああ！！！！！」」」

途轍もない力で圧倒され、後方へと吹き飛ぶ刑軍に向かって東海林は更に挑発的な口調で声をかけてくる。

「ははははは！！！！ここまで来て見やがれってんだ！！」

そう言うと、東海林は一度ブラッド状態を解いて駆け足でその場から退避する。

「く、くそ！逃がすな！！」

刑軍はすぐさま逃げて行った東海林を追いかけていく。

そんな状況が廷内で勃発している頃、各隊長が全員召集（剣八以外）を完了すると、山本は状況確認と機動六課の前線メンバーに指示を仰ぐ。

「十一番隊隊長、更木剣八は？」

「恐らく、旅禍の迎撃に向かったまま帰ってこれないでいるのでしょう・・・」

「そうか・・・致し方ないの。」

そう言うと、山本は杖を床について事態の深刻さ伝える。

「――事態は火急である！遂に、護廷十三隊の副官二名を欠く事態となった。これは、想定し得る限りの最悪の事態の一つである！最早、下位の隊員達に任させておけるレベルの話ではなくなった。二番隊隊長！刑軍の展開状況を。」

「はっ！既に全班を瀞霊廷内各所に配置しております。」

「宜しい。迅速な対応である！」

「はっ！」

砕蜂の報告を聞き入れると、山本は後ろの方で横一列となって整列する機動六課の面々に目を向ける。

「さて、事が事だけに今回は特別措置として異世界、ミッドチルダ

からやって来た時空管理局本局の機動六課前線部隊にも各隊同様事態に対処してもらいたい所存である。部隊長、八神はやて。お主の判断で捕縛・または殲滅を決めるものとする。」

「了解！機動六課前線一同、心して事態に当たるものであります！」

山本からの指示を受け、はやては懇切丁寧な態度で敬礼をする。

「うむ。尚、敵の狙いである聖地“九九琉閑の池”には既に、死神代行黒崎一護と翡翠の魔導死神ユーノ・スクライアが向っている。皆はこれより、旅禍の進行を止めるべく全身全霊を賭して鉄壁とせよ。それに基き、副隊長を含む上位席官の廷内での斬魄刀の常時携帯及び戦時前面解放を許可する！」

黙って山本の話を聞いていたなのは達であったが、スバル自身は些か血走った様子を見せる山本の表情を見て呆然としている。

「（うわ～～～何だか眼が血走っちゃてるよ総隊長さん・・・）」

「（こら、スバル！！黙ってなさいよ！！）」

念話越しにスバルに一喝するティアナ。

そして、そうこうしている間に山本の話は終わりを迎えていた。

「報告は随時、迅速に行うように。以上である！！」

この戦時特例が発令されたことにより、隊舎中ではそれぞれ副隊長たちに報告を知らせるために下位の隊員たちが走り回る。

「戦時特令！戦時特令！」

五番隊、雛森桃と十番隊、松本乱菊の元にもこの連絡が入る。

「一、副隊長を含む上位席官の廷内での常時帯刀を許可する。一、また、その戦時全面解放を許可する。以上が一番隊隊長・護廷十三隊総隊長、山本元柳斎重國様よりのお達しです。如何に守りを固めようとも、大前田副隊長と射場副隊長を倒した程の敵。いつ、この各隊舎にも奴等の攻撃が及ぶやも知れませぬ。雛森副隊長も何卒、お気をつけ下さいます様！」

「――分かりました。肝に銘じて置きますので、引き続き警備の強化をお願いします。」

「はっ！」

「物騒な話ね。戦時特令なんて・・・ここ暫く無かったのに。これって何かの因果なのかしら？」

各隊が戦時特例により慌ただしい動きを見せているその頃、六番隊副隊長室に集まったなのは達全員とルキアは廷内の様子が網羅された地図を広げながらチーム編成を行っていた。

「パトリオット共は、六つに分かれて我々の動きを撹乱させ、その隙にボスである狼谷銀太郎を聖地へと向わせようとしている。聖地のほうは一護とユーノ殿の二人に任せて、私達は先にパトリオット達の捕縛を開始しよう。はやて、陣形は？」

「はい。ほんなら・・・スターズ1、スターズ2はルキアさんと一緒に南側を。スターズ3、4、5は八番隊の白鳥さん達と合流し、

捕捉を。ライトニング1、4は六番隊の皆さんと一緒に北側へ。ライトニングの2、3、5は十番隊の日番谷隊長の指示で動いてくれへんか？」

「「「「「はい！」」」」」

「「「「了解！」」」」」

「よし。そして、浦太郎さんと鬼太郎さん、金太郎さんの三人は人手が足りんと要請もあったので、五番隊の雛森副隊長と合流し北東に展開。私とリィン、クロノくんで十三番隊の浮竹隊長の指示で周辺警戒。みんな、心して任務に当たってな！」

「「「「「「「「「はい！」」」」」」」」」

「承知。」

「了解だよ♪」

「ユーノから渡されたこのセンサーの使い方は覚えたか？」

クロノがそう言いながらパトリオットセンサーを取り出すと、全員もそれを取り出し覚えたとばかりの表情を浮かべ返事をする。

「はい！」

「大丈夫です。」

「よし！いっちょ出動だぜ！！」

全員はデバイスを起動させ、バリアジャケットに身を包むと早速それぞれの場所へと別れ行動を開始し始めた。

そうして、六課も本格的に動き出してから程なくして・・・――――最初のパトリオットの脅威が今まさに、迫り来ようとしていた。

瀞霊廷内を色々と動き回っていたバックアップ専門の田吾作が、不敵な笑みを浮かべながら作戦を始めようとしていた。

「ふふふ・・・ふふふ・・・さて・・・死神どもの実力、篤と見せてもらうぞ。」

この田吾作の不穏な動きが明確になろうとしていることなど、全く気づきもしていない他の死神達であったが、いずれも全員が一丸となってパトリオットの捜索に乗り出している。

恋次と吉良の方も、二人で移動をしながら警鐘が鳴り響く廷内をセンサーの指し示す方角を頼りに走り回っていた。

「!反応あったよ、阿散井君!!」

「何、どっちだ!?」

「待ってくれ!いきなり反応が消えた!?」

「!?て、吉良。まさかいい加減なこと言ってるんじゃねぇだろうな?」

「し、失礼なこと言うなよ!僕はちゃんとこのセンサーの指すとおりに言ってるだけだ。」

「くそ！パトリオットめ・・・こそこそしやがって。」

「少人数で大群を相手にするには、ゲリラ戦が効果的だからね。理にかなった動きだ。これは一筋縄じゃいかないよ。」

「ち。兎に角、気配が出た辺りに急ぐぞ。どっちだ？」

「ああ。センサーによれば、その門を右だ。」

「よし！」

そう言うと、恋次は吉良と共に更に角を曲がって走り続けるのであった。

恋次達と同様に、五番隊の雛森と共に探索を続けている鬼太郎、浦太郎、金太郎の三人は出たり消えたりを繰り返すパトリオットにストレスを感じていた。

「ああも！！点いたり消えたりして！！！古くなった蛍光灯かよ、畜生！！！」

「あ、あの・・・鬼太郎さん。少し落ち着いて下さい。」

「雛森副隊長の言うとおりだって。先輩、怒りすぎだよ。もっとテンション抑えて抑えて！」

「ウルセー！！俺はこういうじれったいやり方が一番嫌いなんだよ！！！」

「ん?鬼太郎、人参が一番嫌いではなかったのか?」

「ぐっ・・・そ、その次に嫌いなんだよ!!」

「「「・・・・・・・―――――」」」

鬼太郎のそんな態度を見て、思わず表情を無にする雛森・浦太郎・金太郎の三人であった。

そして、ルキアと共に廷内捜索に乗り出していたなのはとヴィータもセンサーの差す道を頼りに移動を続けている。

「ルキアさん、反応は?」

「うむ・・・出たり消えたりの繰り返しでよく分からぬ。」

「魔力と霊圧を抑えてやがるのか・・・くそ!どっちに行ったのかも分かりやしねぇ!」

「油断せずに追跡を続けよう。こんな戦い・・・早く止めさせないと。」

「「ああ(!)」」

各地ではそれぞれにパトリオットによる戦闘が繰り返され、それを追跡する機動六課と護廷十三隊の死神達がひっきりなしに往来をする。

そんな状況の瀞霊廷であったが、ある場所でパトリオット追跡に乗り出していた九番隊の隊士数名は目の前に広がってきた一人の男の

姿を確認する。

「おい！」

彼らの瞳に映ってくるその男こそ、何やら策を弄しているかのような表情で壁に腰をつけて座っている田吾作であった。

「よ。」

「旅禍だな？」

隊士達は腰の刀に手をかけ、目の前に佇む田吾作と対峙する。

田吾作は不敵な笑みを浮かべたままそんな死神達を凝視する。

「へへへ・・・そんな怖い顔して、どうしたんだ？」

「貴様！」

田吾作の挑発に思わず声を荒げる死神達であったが、そのとき・・・

――田吾作は予てから用意をしていた作戦を決行に移す。

「エアラザー！」

すると、その瞬間死神達の頭上に現れるブラッドカートリッジの力で分裂体を作り出したキツツキの姿をしたエアラザーの大軍。

「ひ、怯むな！」

エアラザーの大軍を見て恐怖に戦く死神達。

そんな死神を見下ろしながらエアラザーが技を仕掛ける。

〈Ｍｉｎｄ　ｃｏｎｔｒｏｌ〉

キツツキの姿に酷似したエアラザーの大軍は、死神の体に穴を開けて田吾作の魔力を送り込んでそのまま気絶させる。

「「「「ぐあああああ！！」」」」

一体これが意味するものは何なのか？

それが分かるのはこれからなのだが、田吾作は死神達を気絶させるとエアラザー達を引き連れ次なる場所へと向かう。

「次ぎ行くぞ、エアラザー。」

〈Ｙｅａｒ〉

そんな田吾作の行動を離れたところで感知する東海林も順調に死神達を退きながら聖地の方角へと足を進める。

「ほう～～～田吾作もよくやってるようだな。さて、こちらも行くとするかな？」

やがて、東海林を追っていた刑軍が偶然にも追跡中に田吾作と遭遇し、その後有耶無耶となった結果が隊舎で待機していた砕蜂の元に届く。

「報告！二班及び三班が旅禍と遭遇した模様。」

「仕留めたのか?」

「情報が錯綜し、結果は不明です。」

「歯痒いな。」

「申し訳ありません!」

部下からの芳しくない報告に苦い顔を浮かべる砕蜂。

「先行しろ。各班を一度瀞霊廷の北の辻に集めるように。私も直ぐに出る。」

「はっ!」

そんなうだつの上がらないでいる刑軍の様子を、建物の物陰に隠れながら静かに窺っていた何かの仕掛けを施している田吾作は一人不気味な笑い声をあげていた。

「へへへ・・・ひひひ・・・ひひひ・・・」

そして、田吾作と遭遇した刑軍の全班が北の辻に集められ隊長である砕蜂に報告を行う。

「二班、及び三班!報告を。」

「二班より報告!捕捉した旅禍に逃げられました。」

「三班より報告!西、五番辻にて旅禍と遭遇。捕捉ならず。」

各班から聞かされるあまりに歯がゆい結果に、砕蜂は一喝。

「何をしている！第一級警戒態勢が発令されている！このような時に、刑軍がまともに機能しなくてどうするのだ？！」

そんな刑軍の様子を陰でずっと見守っていた狡猾な表情の田吾作は、何やら世にも恐ろしいことを始めようとしていた。

「ひひひ・・・ひひひ・・・ちょっとえぐいことになるが、致し方ない。仲間同士で戦ってもらうぞ。そんで隊長さんには動けなくしておくと。エアラザー・・・やってくれ。」

〈Ｙｅａｒ〉

田吾作の行動に未だ気づかないままでいる刑軍と砕蜂はと言うと、陣形を立て直して捜索の範囲を広げようとしていた。

「陣形を立て直す！一班・二班は西の辻に展開。三班・四班は東から迂回しつつ、中央の通りを目指せ！」

「「「「はっ！」」」」

指示を出し終えると、砕蜂は一度場所を移すために後ろを振り向く。

その瞬間を見計らって、田吾作が行動を開始。

「・・・よし、やっちゃいな・・・」

田吾作がエアラザーに指示を出した瞬間、砕蜂の身に異変が起きた。

「ぐっ！？」

突然、左肩に激痛が走り振り返ってみるとそこにはキツツキ状のエアラザーに似た針が突き刺さっていた。

「だ・・・誰だ・・・？」

砕蜂と刑軍の全員が狼狽する中、一人だけおかしな行動をとるものが紛れ込んでいた。

「ぐあああああああ！！！！！！！」

その刑軍の男は奇声を放ちながら暴れ出そうとしていた。

「と、取り押さえろ！！」

「貴様！！」

男の行動を止めようと近くのものが取り押さえ、砕蜂は肩に刺さった針を強引に抜き取るがその瞬間体全体に倦怠感が残り、肩を抑えながらその場に膝をつく。

「ぐっ！！」

「「「隊長！」」」

「「隊長！！」」

砕蜂の異変に刑軍の全員が安否を気遣う。

「何だ・・・何をした・・・・!?」

砕蜂の身に何が起こったのか!?

田吾作は一体何をしようとしているのか・・・・――――!?

それは死神にとっても魔導師にとっても、残酷なものだと言うことはこのとき・・・――――田吾作を除いて誰も知らなかったのだ。

教えて、ユーノ先生！

ユ「今日は狛村隊長についてだよ♪」

ユ「七番隊の隊長を務める彼は、見ての通りの狼男。その昔山本総隊長さんに拾われたその恩義を返すために死神となった忠義に厚い性格。何でも、自分の隊の裏庭でゴロウと言う犬を飼っているそうだよ。」

ザ「我も一度いいからこの方とお会いできればよいのだが・・・」

ユ「きっと会えますよ。同じ狼男同士仲良くやれるはずですから♪」

すると、そんなザフィーラを姿を初めて確認した鉄左衛門が近づき土下座をしてきた。

鉄「あんたがザフィーラっちゅう狼男か！？頼む！！どうか狛村隊長とユニットを組んで、七番隊の人気を上げるのに一役買ってくれんか！？」

ザ「我が・・・あの方とユニットだと・・・？」

一度考えてみるザフィーラ。

勿論ユーノは断ると思っているらしく・・・

ユ「いや・・・・・それは多分無理だと思いますけど・・・・・・

」

だが、ザフィーラの返答は違っていた。

ザ「是非とも協力させてほしい。」

ユ「えええええええ！！！！！！！！！！！！！！！」

魔導師図鑑ハイパー！

シグナムとヴィータは狛村とこんな話をしていた。

狛「？儂に紹介したい者がいると？」

シ「はい。我々ヴォルケンリッターの守りの要を務めるザフィーラなのですが・・・」

ヴィ「あんたと一緒で狼男なんだぜ！」

狛「ほう。それは是非とも遭って見たいものだな・・・」

そして、夢は実現し二人は互いに相見えることに・・・・・・・

であった瞬間、二人は感銘を受け互いに固い握手を交わす。

狛「七番隊、狛村左陣だ。」

ザ「ヴォルケンリッター、盾の守護獣ザフィーラです。私も話を聞いてからずっとお会いできる日を楽しみにしていました。」

狛「ふむ。貴公とは、よき友になれるかもしれぬな。」

ザ「同じ狼同士、仲良くしていきましょう。」

そんな妙な雰囲気を漂わせる二人を見ながらユーノとなのはは微妙な表情をしていた。

ユ・な「（何かすっごく変な光景・・・・・・）」

＞ｉ１６６４３―７０９＜

フェイトｖｓキャロ!?狡猾の田吾作（前書き）

田「銀太郎の身の回りで日常に関わることからあらゆる面でバックアップを担当してきたが、今度の戦いは俺の力が大いに活用されそうだ。」

フェ「蠢き始めた不穏な影に、私たちは立ち向かう。先の見えない不安に心が黒に染まりそうになっていくが、自分自身の手で光を掴み取らないといけない。」

白「誇りの為に・・・我らはぶつかり合い、強い誇りであればあるほど我らの想いはより一層激しくぶつかりあう・・・」

ユ「ユーノ・スクライア外伝　パトリオット篇・・・・・・始まります。」

フェイトｖｓキャロ！？狡猾の田吾作

＞ｉ１８７５６―７０９＜

ユーノ・スクライア外伝・・・前回の三つの出来事。

一つ：　パトリオットが遮魂膜を突き破り瀞霊廷内に侵入・侵攻を開始。

二つ：迎撃の為に、機動六課とユーノ達が別々の行動を起こす。

そして、三つ：二番隊隊長、砕蜂に田吾作の脅威が迫る。

砕「第一級警戒態勢が発令されている！このような時に、刑軍がまともに機能しなくてどうするのだ？！」

田「ひひひ・・・ひひひ・・・ちょっとえぐいことになるが、致し方ない。仲間同士で戦ってもらうぞ。そんで隊長さんには動けなくしておくと。エアラザー・・・やってくれ。」

〈Ｙｅａｒ〉

砕「ぐっ！？」

二番隊隊長に田吾作の狡猾な魔の手が襲いかかる。

砕「だ・・・誰だ・・・？」

砕蜂は何処からともなく飛んできたキツツキ状のものに肩を一突きされ、後ろを振り返るとそこには何かの術にかかった自分の部下が一人暴れ出す。

刑「ぐあああああああ！！！！！！」

刑「と、取り押さえろ！！」

刑「貴様！！」

刑軍の数名が様子の可笑しいその人物を押さえつけるが、砕蜂は全身に奔る猛烈な痛みに苦しみ、その場にしゃがみ込む。

砕「ぐっ！！」

果たして、砕蜂の身に何が起こったのか？！

砕「何だ・・・何をした・・・！？」

「うわえあああ！！！

と、様子の可笑しかったその一人が急に先ほどにもまして苦しみ出したかと思えば糸が切れたかのように突然動きがなくなり、そのまま息をしなくなった。

押さえつけていた他の仲間もこの事態には大いに驚く。

「死んでる!?」

砕蜂はそれを見ると傷口を抑えながら重い体を起き上がらせる。

「「「隊長!」」」

部下たちはふらふらの状態でいる砕蜂の身を気遣うが、砕蜂はそんな部下たちに喝を入れ自分の推測を徐に口にする。

「騒ぐな!確か・・・報告ではパトリオットの中に、補助系の魔法を得意とする能力者がいたはず。恐らく、以前のバウントの様に人を傀儡のごとく操る能力を秘めてるいるやもしれぬ。この状況を見る限り、パトリオットと接触したときに仕掛けられた可能性が高い。」

そう考えた途端、砕蜂は更に最悪の事態もありうると考え目を見開く。

「(だとしたら、他にもまだ・・・)他にパトリオットと接触した者は?!」

「はっ!自分達は東二条付近で・・・・・・」

と、部下の一人が報告をしていたその瞬間、恐れていた事態がとう

とう起きてしまった。

「ぐあああああああ！！！！！！」

唐突にまたしても先ほど同様刑軍の一人が唸り声を上げて腰の肩に手をかけてきたのだ。

「何をする！？」

報告をしたその部下が押さえつけようとするが、体格の差でその者の力に圧倒されてしまう。

「ぐあああ！！！」

その後も、操られたその者は自分の周りにいる仲間を正気を完全に失った状態で躊躇なく攻撃を仕掛ける。

「取り押さえろ！」

「隊長をお護りしろ！！」

負傷した砕蜂の守護を第一に優先するために、部下たちは自分の体で砕蜂の壁とする。

「ぐっは！」

「のあああ！！」

「かっは！！」

仲間内で繰り広げられるこの何とも惨い光景が砕蜂の目に写ってくる。

それは正しく十年前のバウントの一件のそれと非常に酷似していた。

「隊長！ここは我々が！」

「隊長は傷の手当を！」

「一体何人いるんだ・・・ぐっ！！」

と、険しい表情を浮かべていた砕蜂だったが、その瞬間全身にエアラザーの毒が回り意識が朦朧とするとそのまま地面へと倒れこんでしまった。

「！隊長！！しっかりして下さい！！隊長！！」

砕蜂が倒れると、部下たちも直ぐに砕蜂の容体に危機感を覚えるが、目の前で暴れ続ける自分たちの仲間が行動を遮ろうとする。

そんな刑軍たちの戦いをモニターで観察していたのはあの田吾作だった。

今回、田吾作が刑軍に仕掛けたのは自分の固有能力であるマインドコントロールである。

作戦が成功した様子を、彼のデバイスであるエアラザーが報告する。

〈Ｔｈｅ　ｓｔｒａｔｅｇｙ　ｉｓ　ａ　ｓｕｃｃｅｓｓ.　Ｉｔ　ｉｓ　ｓｕｒｅ　ｔｏ　ｇｏ　ａｃｃｏｒｄｉｎｇ　ｔｏ　ｔｈ

ｅ　ｐｌｏｔ．（作戦は成功だ。あとは筋書き通りにいくはずだ。）〉

「オッケイ。流石はエアラザー・・・よく出来た子だよ。」

〈Ｒｅｃｅｎｔｌｙ，　ｉｔ　ｉｓ　ｎａｔｕｒａｌ．（これぐらい当然だ。）〉

その頃、パトリオットセンサーを使って白鳥と共に廷内を移動していたスバル・ティアナ・ギンガのスターズフォワードはセンサーに表示される点滅を繰り返すこの事態に疑問を抱いていた。

「どうなってるのよ！さっきから、パトリオット達の反応が出たり消えたりの繰り返しじゃないの！？」

「何かしているのは明白であるな。」

「あの子達、何してるのかな！？」

「最悪の状況にならなければいいけど・・・ん！？」

と、ギンガが何気なく目の前を見てみると何処からともなく下位の死神達が刀を抜いて自分たちの方へと走ってきたのだ。

「主ら・・・おわ！！」

白鳥が声をかけようとした矢先だった。

突然、その死神達は白鳥やスバル達を狙って刀で斬りかかってきたのだ。

「え!?ちょ、どうしたんですか!?」

「止めてください!!」

ティアナやギンガが攻撃をよけながら説得に応じようとするが、本人たちは全く聞く耳を持たず白鳥も自分に刃を向けてきた下位の死神に憤る。

「何をするのだ、お主ら!?私を誰だと思っておる!?八番隊第三席にして、期待のホープ・・・白鳥礼二であるぞ!」

だが、白鳥の言葉もむなしく死神達は攻撃を止めようとはしない。

すると、センサーを持っていたティアナが何かに気づいたらしく、センサーに表示されるそれを凝視する。

「!これは・・・!?」

「どうした、ティアナ!?」

「・・・白鳥さん・・・微かですけど、この人たちからパトリオットの魔力を感じます。」

「何!?」

「と言うことは、パトリオットの魔法で操られてるって事!?」

「そう言うことになるわね。」

スバルとギンガもティアナの言葉を聞いて、この事態を理解する。

と、その時死神の一人の体を使って田吾作のデバイスであるエアラザーの声が四人の耳に入り込んできた。

〈Ｃｒｕｅｌｔｙ ｄｏｅｓｎ'ｔ ｗａｎｔ ｔｏ ｄｏ ａｓ ｍｕｃｈ ａｓ ｐｏｓｓｉｂｌｅ，ａｎｄ ｏｎｅ ａｎｏｔｈｅｒ ｉｓ ｋｉｌｌｅｄ ｂｙ ｔｈｅ ｃｏｍｐａｎｉｏｎ ｈｅｒｅ ｆｏｒ ｙｏｕ．（殺生はなるべくはしたくないのだが、ここでお前達は仲間同士で殺し合ってもらう。）〉

「ふん。生意気なデバイスであるな・・・」

「「「ほあああああ！！！！」」」

田吾作の魔法に操られた死神達は一斉に四人目掛けて斬りかかってくるが、四人はそれを躱すと白烏とスバル、ギンガの三人が徒手空拳で彼らを気絶させる。

「すまぬが、眠るがよい！」

「すみません！」

「ちょっとだけ、眠ってくださいね！」

死神達の急所に徒手空拳を入れる三人。

やがて、昏倒した死神達を後にした四人は移動をしながらこの状況を整理する。

「厄介な事をしてくれたものだな。この様子だと、まだまだ居るはずだ。」

「急ぎましょう！」

ティアナは白鳥にそう言うと、センサーが指し示す場所を目指してスバルの背中に乗りその場を駆け抜けていく。

一方、田吾作のマインドコントロールによる被害は廷内各所にまで広がり同じように恋次と吉良の二人も周りを魔法で操られた死神達に囲まれていた。

「てめぇら・・・止めねぇか！」

「はあああああ！！！！」

一人の死神が恋次目掛けて言葉虚しく斬りかかってくる。

恋次はそれを険しい表情を浮かべながら吉良と共に捌いていく。

「吉良！まさかこいつら・・・！？」

「ああ！これは・・・パトリオットの魔法で操られているようだね。」

「くそ！」

以前にも、バウントの件でよく似たことを体験している恋次達はまだしも、浮竹の待つ十三番隊舎へと向かっているはやてとクロノ、リィンの三人の前にも死神達が待ち受けていたのだ

「何がどうなってるんや！？」

「傀儡の様に人間を操る魔法だと・・・！？何とも厄介なことをしてくれたものだな！」

「二人とも、来ます！！」

「がああああああああ！！！！！」

身構えるはやてとリィンだったが、それを見たクロノが攻撃を仕掛けてきた死神の動きをバインドで封じると、自分が囮になる事を提言する。

「はやて！ここは僕が食い止める！君とリィンは先に浮竹隊長の元に急いでくれ！」

「了解や！」

「お願いしますね！」

はやてとリィンはクロノにその場を任せると、急いで空を飛んで浮竹の元へと急いだ。

二人が立ち去った後、クロノはＳＵ２を取り出し目の前の死神達と対峙する。

「次元航行部隊の提督を、甘く見ないでくださいよ！」

こうして、瀞霊廷内各所で勃発するこの死神達の悲しき同士討ち。

そんな事態を高い場所で不敵な笑みを浮かべながらじっと見つめる田吾作。

「へへ・・・醜いものだな。だけど、銀太郎の邪魔をさせる訳にはいかないんでね・・・悪いが仲間同士で傷つけ合っててくれよ。へへへ!!」

と、一人不気味に笑っている田吾作だったが、その時田吾作は周囲から感じる強い魔力反応に思わず表情を一変させる。

「!この強い魔力反応・・・しかも!?」

その頃、九番隊の隊長代行を務めて現場指揮を行っていた檜佐木はこの事態を重く受け止め、七番隊の狛村にもその旨を伝えていた。

「何だと!?」

「はい。死神の一部が旅禍の手に堕ち、同士討ちが繰り広げられています。」

「どういう事だ?」

「パトリオットの魔法によって、肉体を操作されています。話によれば、術者は補助系の魔法の使い手の可能性が高いとのことです。ですから、傀儡のごとく体を操ることも容易なものかと・・・」

「ふむ・・・制圧する方法は?」

「体内に侵入した魔法を完全に抜くには、やはり術者を倒すほかな

いでしょう。しかし、思いのほか厳しいかと・・・」

「・・・・・ふむ・・・・・・」

檜佐木の言葉を聞いた狛村もこの事態の深刻さにはいつも以上に顔の皺を深くする。

そんな狛村とは打って変わって、キャロを引き連れてパトリオットの捕縛に乗り出していたライトニング分隊隊長のフェイトも恋次達同様死神達を昏倒させながら追跡を続けていた。

「ごめんなさい！許してください！」

キャロは不本意な気持ちではあるがウィングシューターを命中させ、襲い掛かる死神達を気絶させていく。

こんな悲惨な事態となっている現状にフェイトはただただ険しい表情を浮かべるばかり。

「くっ・・・死神さん達みんなを操って戦わせるなんて、何て卑怯な・・・キャロ、絶対に私から離れないでね。」

「はい！」

キャロはフェイトにそう言うと、フェイト共にセンサーの示す方向を頼りにフリードの背に乗って飛んでいく。

フェイトや恋次達が各地でこのような事態に直面している頃、六番隊パトリオット対策本部となっている隊長室で部下からの報告を真摯に聞き入れる隊長、朽木白哉はと言うと。

「何？」

「隊員の多数が旅禍の術中に陥り、同士討ちを展開させております。このままいけば、隊士のほぼ全てが全滅いたします！」

「分かった。この状況を解決するにはやはり敵を斬るしかないようだな。ならば、私が直接参上する。これ以上、我が隊の隊士と誇りを汚される訳にはいかぬ。留守を頼むぞ。何とか抑え込んでくれ。」

「は！」

白哉は部下にそう頼み込むと、斬魄刀を手に取りこの諸悪の根源を叩くために一人迎撃へと向かうのであった。

白哉が迎撃に向かったほぼ同時刻、パトリオットセンサーを使って辺りを散策していたフェイトとキャロも白い塔が立ち並ぶ近辺で足を止めていた。

「キャロ、反応は？」

「センサーではこの辺りから出ているのですが・・・恐らく、魔力を抑え込んで身を隠してるのだと思います。」

「早いところ見つけないといけないのに・・・」

と、フェイトがそんなことを思っていると、不意に感じてきた妙な殺気にフェイトは直ぐに反応した。

「！誰だ！？そこにいるのは！？」

すると、その声に反応して二人の前に出てきたのは・・・――田吾作であった。

「は！」

「き、君は！」

田吾作の姿を確認した瞬間、一度対戦履歴のあるフェイトと初めて見る田吾作にキャロは大いに目を見開いた。

「へへ・・・強い魔力を感じて来てみれば・・・久しぶりだな、お嬢さん。俺のことを憶えてるか？」

「・・・あの時戦った・・・パトリオット・・・！」

「いかにも。ダイシーを守護する六人の一人、四月一日田吾作（わたぬきたごさく）だ。しかし、態々こんなところまで追ってくるなんてどうかしてるぜ。本当、時空管理局って言うのは実に愚かで相当暇な連中なんだな。」

「一つ聞きたい。死神さん達を操って、仲間内で戦わせているのは君なの？」

「そうだよ。本当はこんなえぐいことなんてやりたくないんだけど、銀太郎を真のダイシーの継承者とするためには、どうしても時間が欲しい。命を奪うことは忍びないが、それでも銀太郎が死ぬほうが俺達には忍びないんだ。」

「！？命が・・・それどういう事！？」

田吾作の言葉を聞いて疑問に感じたフェイトであったが、田吾作はそんなフェイトの言葉を無視して懐から待機状態のエアラザーを取り出す。

「・・・詳しく説明するつもりはない。悪いが、問答はここまで。あんた方管理局の好きな武力行使をさせて貰うぞ。」

〈Ｇｅｔ　ｓｅｔ〉

「エアラザー、セットアップ」

〈Ｂｌｏｏｄ　ｃａｒｔｒｉｄｇｅ　ｌｏａｄ〉

構築同時に、ブラッドカートリッジを使用した瞬間、田吾作の周りには膨大な魔力が渦となって旋風を巻き起こし、二人に襲い掛かる。

「くっ！！！」

「凄い・・・魔力の上昇・・・！？」

そして、渦が止んだ瞬間・・・・・・二人の目に飛び込んでくる田吾作のブラッド状態。

それを見たキャロは思わず言葉を失いかける。

「な・・・何・・・あれ・・・・？」

フェイトは自分の瞳に映ってくる田吾作のブラッド状態を見ながら冷静に尋ねる。

「それが君のブラッド状態って奴だね？」

田吾作のブラッド状態とは、全身が鳥の羽毛で覆われ背中からは鷲のように立派な翼が生えた両手も両足もすべてが鳥の鍵爪に変化したものだ。

「よく知ってるな。そうだ、このエアラザーはパトリオット中最速のスピードを誇る。高速戦闘のアンタにはお誂え向きのデバイスって訳だ。俺も名前を名乗ったんだ。アンタとそこのおチビちゃんの名前も聞いておくぜ。」

「時空管理局本局、機動六課ライトニング１・・・フェイト・Ｔ・ハラオウン。」

「同じく、機動六課ライトニング４・・・キャロ・ル・ルシエ。こっちは使役竜のフリードリヒ！」

「フェイト・Ｔ・ハラオウン・・・キャロ・ル・ルシエにフリードリヒか・・・憶えておくよ。勝負が終わるまでの間は！」

田吾作はそう言うと、更にブラッドカートリッジをロードし魔力を上昇させていく。

「キャロ。ここは私がやるから、下がってて！」

「はい。気をつけて下さい！」

フェイトはキャロとフリードを下がらせ、田吾作との一対一での戦闘を行おうとする。

魔力を上昇させてきた田吾作に倣って、フェイトもカートリッジを多めにロードし魔力を上昇させる。

「バルディッシュ！」

〈Ｙｅｓ　ｓｉｒ〉

「ユーノ。使わせて貰うよ！」

そう言うと、フェイトはユーノから手渡されていた対リベル用の装着具をバルディッシュに取り付け、本来ならばブラッド状態で無効化されるはずのその魔法を維持することが出来たのだ。

〈Ｓｙｓｔｅｍ　ａｌｌ　ｃｌｅａｒ〉

「ほう？リベルの魔法に対抗しようって訳か・・・そいつを使って。確かに凄いもんだな。流石は翡翠の魔導死神の作った逸品というべきか・・・だが、果たして一体いつまでもつかな？」

〈Ｈａｒｋ　ｍｏｖｅ〉

「ちっ！」

〈Ｓｏｎｉｃ　ｍｏｖｅ〉

一瞬のうちに繰り広げられるフェイトと田吾作の高速戦闘。

最早、そのスピードについてこれないでいるキャロは黙ってその戦闘の様子を見守るだけであった。

「はあああああああああああ！！！！！」

隙をついてはフェイトは自身の魔力を最大限にして魔力攻撃を行うが、田吾作もスピードには一切負けてはおらず同じようにフェイトの隙をついて攻撃をしてくる。

しかし、その攻撃はフェイトのやる魔力ダメージのような生易しいものではなく当然のことながらの殺傷設定だった。

「食らえ！！」

自身の鍵爪から圧縮した風を送り込み、敵を斬り刻む田吾作の技を一目で危険だと判断したフェイトはバルディッシュの先端に魔力刃を作り出し田吾作に突進していく。

「はあああああ！！！！！！！！！」

「エアラザー！」

〈Ｐｒｏｔｅｃｔｉｏｎ〉

田吾作がフェイトの攻撃を受け止めると、フェイトは険しい表情で自分の技が届かないことに大いに悔しがる。

「く！」

「ランブルフェザー。一斉射撃！」

〈Ｒａｍｂｌｅ　ｆｅａｔｈｅｒ〉

その瞬間、防御を展開しながら田吾作は背中に生えた翼から銃弾のように羽を打ち出すランブルフェザーを一斉にフェイト目掛けて発射する。

フェイトは高速で打ち出されるそれを同じく高速で回避していくが、とこどころに羽による攻撃を受け元々が薄くできているバリアジャケットが傷ついてく。

「くっ・・・・・・!?」

と、若干痛みを感じていたその時に田吾作が一気にフェイトの背後へと回り込む。

「フェイトさん!!」

キャロは思わずその光景に声を荒げる。

「貰った!!!!」

〈Ｔｈｕｎｄｅｒ　ａｒｍ〉

田吾作の鍵爪がフェイトに直撃しそうになった瞬間、バルディッシュの機転でフェイトの左腕に雷の装甲が追加されるが、それでもフェイトは田吾作の力に思いのほか苦しい表情を浮かべる。

「お・・・重い・・・!!」

「は。いい判断だ。そうこなくっちゃな!」

田吾作はそう言うと、一度フェイトから距離を取って次の攻撃準備

ための体制に入り、フェイトもバルディッシュの形態を変化させ、この目の前で対峙している男の強さに舌打ちをする。

「ち」

そんな二人の激しい戦闘の様子を下の方でずっと見守るキャロはこんなにも苦戦するフェイトを見たことがなかった。

「フェイトさん・・・！（本当に・・・これが私と同い年ぐらいの魔導師・・・なの・・・!?あのフェイトさんがこんなにも苦戦するなんて・・・・・・!?）」

その後も二人は高速戦闘での戦いを繰り広げるが、戦況は田吾作の方に傾いておりフェイトには敗色濃厚の雰囲気が漂い出した。

「どうした、どうした!?あんたのスピードはその程度じゃないだろう!!」

田吾作はフェイトを挑発しながら、ランブルフェザーを斉射していき、フェイトはその軌道を読んで躱し続けるが内心はかなり追いつめられていた。

「（確かに、言うだけのことはある。このスピード・・・並のソニックムーブよりも速い。多分、私の予測が正しければこれは一護さんの天鎖斬月の高速戦闘術と同等か或いは・・・）」

フェイトも一護の卍解、天鎖斬月のスピードをユーノからの話である程度は理解し映像も見たことがある。

だからこそ、今回の相手は非常にフェイトにとっては厳しい。

おまけに自分のリンカーコアからの魔力供給もミッドチルダにいるときに比べると供給速度も燃費も悪いと言うことがすぐに分かった。

そんなフェイトを見ながら構わず攻撃を続ける田吾作はこう語りかける。

「へへ、あんたにとって勝負は長引くと不利か？ま、俺的にはその方が都合がいいんだがな。いずれにしろ、あんたら二人に勝ち目なんかないぜ。結局、魔導師は一人残らず俺達が潰してやるからな！」

「何故・・・そこまでして・・・！？」

「あんた方の知ったことかよ。俺達のことを気にする暇があるならちったあ自分や周りのことを気にしろよ。あんた方が後手に回れば回るだけ、状況はどんどん悪い方へと向かうんだぜ！」

「く・・・！」

フェイトは田吾作の言葉に耳を傾けながら、この魔力消費効率の悪い尸魂界での戦闘を繰り広げ続けるのであった。

一方、その頃檜佐木と共に七番隊の隊員数名を引き連れて、田吾作の魔法で操られた死神達と戦闘を行っていた狛村は戦いのさなかに一つの結論に達した。

「檜佐木(ひさぎ)！」

「はっ！」

「貴公の言う通り、どうやら術者を倒さねば完全には魔法は解けぬようだな。」

「ええ。意識を取り戻せば、また暴れ出すでしょう。」

狛村は昏倒させた死神達を一瞥すると、徐に檜佐木にこう告げる。

「四番隊隊舎に移送しよう。」

「え!?」

「卯ノ花隊長の判断を仰ぎたい。この状態のものを何とか出来るとしたら、あの方以外居られぬ。」

「は!この者達を救護詰所に移送するんだ。」

「「「は!」」」

檜佐木は早速、狛村の指示に従い自分の部下数名に昏倒させた死神達を連れて、卯ノ花が待機する四番隊綜合救護詰所へと向かわせた。

救護詰所へと到着した隊員たちは、卯ノ花に狛村からの直々の要請であるという旨を伝え、魔法に操られている死神達を病床まで運んだ。

「七番隊、狛村隊長からの要請なのですね?」

「は!一先ず昏倒させましたが、どれほどの人数が汚染されているか分からず・・・対処法を教えて欲しいと。」

四番隊の隊員たちは狛村の所から運び込まれてくる者達だけではなく、各所でパトリオットと遭遇しては返り討ちに遭った他の隊員たちの怪我の手当てと、詰所中が喧騒としていた。

各班員に指示を仰ぐ三席の言葉が飛び交う中、卯ノ花は冷静な表情で運び込まれたものの体に手を当ててみる。

「これは・・・？」

「いかがされました？」

副隊長の虎徹勇音が傍らでそう尋ねると、卯ノ花は触れたことから分かったことを懇切丁寧に語り始めた。

「肉体と同時に、精神をも魔法で強力に支配されています。現場での摘出は不可能でしょう。」

「では、どうしたら？」

「兎に角、魔法に操られている方々を搬送してください。動きを封じ込めましょう。」

「はっ！」

卯ノ花の言葉を聞いた檜佐木の部下たちは残りの者を運ぶために急いで詰所の外へと向かう。

その間に、卯ノ花は勇音や他の隊員たちに治療の準備を始めるよう声をかける。

「頼りない方法ですが、最善を尽くすしかありません。用意を。」

「はい！」

勇音は数名を引き連れて早速準備に取り掛かる。

さて、田吾作と戦闘を繰り広げているフェイトの方はどうなったであろうか？

「は、は、は、は、は、は」

フェイトは魔力効率が落ち、バリアジャケットも田吾作の攻撃を受けて大分傷ついていた。

足からは僅かばかりではあるが出血も見受けられる。

そんなフェイトを見ながら、田吾作は不敵な笑みを浮かべる。

「大分、息が上がってきたな。流石のアンタも、尸魂界（ここ）じゃ魔力結合と消耗が思った以上に相当な疲労になってるようだな。その点、俺は元々がバウント。この大気中に存在する無限の霊子を集めて力にすることなんて訳はない！」

「はっ、はっ、はっ。（確かに・・・ここに来てからは魔力結合が思った以上に上手くいかない。おまけに、魔力消費の効率も落ちている。やはり、霊子が充満しているこの世界じゃ私達は不利か・・・）」

「フェイトさん・・・・・・！？」

満身創痍のフェイトを為す術もなく見守るしかないキャロであったが、その瞬間・・・自分の体から感じる違和感に動きを止めてしまう。

「!?キャロ・・・?」

フェイトもキャロの異変に気づき後ろを振り返ってみる。

すると、キャロはフリード共々黙ったまま両手を垂れながら言葉をひところも発していない状況であった。

「キャロ・・・?」

キャロの様子を見て疑問と危惧の念を抱くフェイトであったが、そんなフェイトに田吾作は不敵な笑みであるとんでもないことを語り出す。

「あ、そうだそうだ。あんたに一つ伝え損ねていたことがあったな。あの死神を操る魔法な・・・実は今こうして戦ってる最中にも仕掛けていたんだよ。」

「!」

「ああ、勿論あんたにじゃない。俺が支配したのは“別の対象”だよ・・・・・そう・・・・・・あんたの後ろのね。」

その田吾作が口にした瞬間、無表情となった精神を支配されたキャロが同じく支配されたフリードと一緒にフェイトを見つめてきた。

「!!しまっ・・・」

田吾作の魔法にかかり、自分の部下であり秘蔵っ子のキャロを敵にしてしまったフェイトが行動を起こそうとしたときには時すでに遅し。

「フリード、ブラスレイ。」

「は！！」

田吾作の魔法で精神を完全に操られたキャロはフリードにフェイトを攻撃するよう冷徹な一言を何時ものキャロからは想像もつかない無表情でそう口にする。

この不測の事態で、フェイトは一体どうなってしまうのか！？

さて、フェイトがこのような事態に直面しているその間に、引き続き檜佐木達と共に田吾作の魔法に操られた死神達と戦闘を繰り広げる狛村たち。

「のおおおおおお！！！！！」

「うおおおお！！！」

刀を使えないために、狛村と檜佐木は徒手空拳での戦闘を余儀なくされていたがそこは隊長格だ。

斬魄刀を封じられたからと言って別段問題はない。

狛村は持ち前の怪力を駆使して襲い掛かる死神達を張り手の要領で昏倒させ、檜佐木も軽い身のこなしで死神達の急所を突いていく。

そうして、徐々に数を減らしていく死神達だったが一人の死神が刀を突き立て、狛村の体目掛けて突き刺してきたのだ。

不意打ちを食らい、その死神の攻撃を受けてしまう狛村。

隊士がそれに気づき、狛村の安否を気遣う。

「隊長！」

「構うな！己の敵を倒せ！」

そう言うと、狛村は刺しに来た死神を振り払うとその状態のまま物凄い形相で死神達に向け言葉を投げかける。

「さぁ、来るがよい！！」

狛村たちが必死になって戦ってくれているお蔭で、田吾作に操られた死神達は順当に四番隊の救護詰所に運び込まれていき、隊士たちは怪我人を三席の指示を聞きながら所定の場所へと運んでいく。

「次はこっちのベッドに。ああ！！その患者はそっちの部屋だ！ボヤボヤするな！！」

そんな慌ただしい詰所の中でも、目の色一つ買えずに魔法に操られた死神を鬼道の力で封じ込めようとしている隊長、卯ノ花。

「隊長・・・」

補佐を担当している勇音もこれほどまでに真剣な様子の卯ノ花を見

るのは久しぶりだった。

「・・・・・・――――――」

卯ノ花は勝手の違う魔法と言うものに些かの不安も感じているが、長年隊長位に就いていたことは伊達ではなく、初めての事でも決して動じる様子はなくただただ目の前の患者を助けようとしている。

では、そろそろフェイトとキャロの方はどうなったか見てみよう。

フリードの火炎弾をその身に受け、心の動揺が防御精度を落としてしまった結果、フェイトはバリアジャケットを燃やしてしまい、マントは虚しく焼け焦げてしまった。

「はっ！はっ！はっ！き・・・貴様・・・！！」

田吾作の狡猾な戦法に怒りを覚えるフェイト。

そんな怒りを募らせるフェイトを何時ものように不敵な笑みで見つめる田吾作。

「どうだい？可愛い秘蔵っ子に傷をつけられる感想は？実を言うと、俺もあんたらみたいな強い奴とは正直長丁場にしたくないんだよね。元々が補助専門だから魔力も仲間内じゃ少ないほうだし・・・それに、銀太郎の真の姿もこの目で見ておきたしさ。だから、この辺でいっちょやられてくれよ。」

田吾作はそう口にすると、キャロを意のままに操作し攻撃を続行させる。

「ウィングシューター。」

「キャロ！待っ・・・！！」

キャロの攻撃に判断が遅れたフェイトは直にウィングシューターを食らい、更にダメージを負ってしまう。

「ぐっはっ！！！」

目の前のこの状況にいつも以上に冷静な判断力を失うフェイト。

キャロはフェイトの気持ちに一切構わず攻撃を続ける。

「ブラストフレア。ファイア。」

自動展開した防御で辛うじてキャロの攻撃を受け止めるフェイトであったが、披露した体にそれを維持するだけのものはなく、直ぐに輝が入ってしまい爆発に飲み込まれる。

爆発の中から何とか出てきたフェイトは、頭からも出血し正しくボロボロの状態にまで追い込まれる。

「く、バルディッシュ・・・！」

フェイトはこのままではまずいと思い、攻撃を行おうとしたがその瞬間いつものキャロの顔が思い浮かんでしまい、攻撃をためらう。

〈Ｓｉｒ．　Ｐｌｅａｓｅ　ａｔｔａｃｋ　ｉｔ．〉

バルディッシュもフェイトに攻撃するよう促すが、元々が優しい性

格で子供好きなフェイトにとってこのような真似が出来るはずもなかった。

「駄目だ・・・キャロに攻撃なんて・・・出来ないよ・・・！！」

「ふふ、賢明な判断だ。フェイト・Ｔ・ハラオウン。そのまま動くなよ。」

そう言うと、田吾作はブラッド状態を一度解くとそのままキャロとフェイトを残して一人戦線から離脱をしてしまった。

「しまった！」

フェイトも田吾作を追いかけようとするが、その行く手を阻むのは無表情のキャロ。

「あなたの相手は、この私。」

「なっ！！」

「ＩＰカートリッジ装填」

キャロは動揺するフェイトの目の前でＩＰカートリッジをセットすると、更に強力な威力を秘めたフリードからの攻撃を仕掛ける。

「トルネードブラスト・・・ファイア。」

フリードから放たれる渦を巻いた火炎弾。

フェイトはギリギリでそれを避け、キャロに攻撃を止めるようにと

説得を試みる。

「キャロ!!お願いだから、止めて!!」

「シューティングレイ。」

だが、今のキャロにフェイトの言葉は一切届かない。

今のキャロは完全に田吾作の操られた人形であることに変わりはないのだ。

疲労困憊の状態でついには防御もままならなくなったフェイトはキャロの攻撃を直に受けてしまう。

「ぐっ!!!!(駄目だ・・・・・このままじゃキャロを助ける前に自分が・・・・・!!どうすればいい・・・どうすればキャロの魔法を解くことが出来る!?考えろ・・・考えろ・・・!!)」

と、頭の中で思考を巡らせていた・・・・・その時。

〈Ｓｉｒ!!〉

「!」

唐突にバルディッシュの声が聞こえてきたかと思えば、フェイトの真正面には無表情のキャロがウィングシューターを飛ばしてきたのだ。

その瞬間、至近距離であった所為か衝撃音も反響し、離脱した田吾作の耳にもしっかりと聞こえてきたのだ。

「・・・・・終わりだ・・・・・フェイト・T・ハラオウン・・・・・ふふふふふはははははは」

この衝撃音を何処かで聞いていたなのは・ヴィータ・ルキアの三人は一度立ち止まるとただならぬ不安を感じる。

「おい・・・今の聞いたか?」

「うん・・・フェイトちゃんたちだよね・・・この魔力は・・・!?」

「まさかと思うが・・・急いでパトリオットを捕えねば!」

「「はい(ああ)!」」

三人はそう決め込むと、再びセンサーを頼りにパトリオットの追跡に向かう。

「(フェイトちゃん・・・・・・お願いだから無事でいてね・・・!)」

その頃、そんな惨い戦闘の様子を想像しながら一目のつかない場所で一休みをしていた田吾作はというと、自分の魔法の一部が死神に行き届いていない事実に気づき怪訝そうな表情を浮かべてる。

「何で?俺のマインドコントロールの一部で命令が届かない!?死神どもめ・・・・・俺の魔法で操られた奴らを気絶させていやがるのか?無駄な事を!」

そう言うと、不敵な笑みを浮かべながら待機状態のエアラザーを取り出す田吾作。

「俺のマインドコントロールの支配力はそんじょそこらの奴とは次元が違うんだよ。俺達は生まれつきその特殊な体質を持つが故に、魔力と霊力を同波長のものとして使うことが出来るんだ。つまり・・・この世界に溢れてる霊子を集めて際限なく力を増殖させれば、マインドコントロールの範囲は更に拡大できる。」

田吾作は完全に勝ち誇った瞳を宿し、エアラザーを起動させるとそれを霊子の力を使ってあのキツツキの姿に酷似した形態へと変化させ、それを増殖させる。

「エアラザー。もうひとっ走りしてくれ！」

〈Ｃｏｎｓｅｎｔ（了解した。）〉

田吾作の命を受けると、エアラザーの大軍は新たな標的を目指して廷内を飛び回っていく。

「ちょろいもんだぜ。ははははは・・・・・・・あ！そう言えばさっきの金髪美人・・・フェイト・Ｔ・ハラオウンって魔導師とキャロってチビはどうしたかな？そろそろ良い頃合いの筈だ・・・・・・あいつにもっと絶望を味あわせるのもいいかもな。」

田吾作はそう判断すると、同士討ちを繰り広げている筈のフェイトとキャロの元へと向かう。

さて、田吾作がそんな狡猾で惨いことを考える人間だったかどうかは知らぬが、田吾作の魔法に侵された死神達はその後もなお増殖を

続けていく。

それを各地で対処にあたる死神達と機動六課の全線メンバー。

白鳥と行動を共にしていたスバル・ティアナ・ギンガの三人も非殺傷設定の下、自慢の魔法を駆使して死神達を気絶させていく。

「うらあああああああああ！！！！！」

「はあああああああああ！！！！！」

「クロスファイアー―シュート！」

「「「ぐあああああああ！！！！！」」」

スバルとギンガのリボルバーナックルによる拳打、ティアナの正確無比な魔法射撃が見事に死神達を昏倒させていき、同じように徒手空拳で戦う白鳥も遺憾なく力を発揮していく。

「汚らしい手で我に触れるな！！」

白鳥は自分よりも下の者に対して態度がかなり大きい。

それから、自分の死覇装を汚されることを毛嫌いしているため、死神達にいっぺんに襲い掛かられた時には怒りが一気に爆発する。

こうして、死神達を昏倒させていくのはいいが、流石に数が膨大であることからスバル達の表情も徐々に曇っていく。

「これじゃキリがありませんよ！」

「早く捕縛をせねばな。」

白鳥もこの状況には手を焼いていた。

ま、手を焼いているのは何も白鳥たちだけはない。

操られた死神達に周りをすっかり囲まれてしまっている恋次と吉良も気持ちは同じであった。

すると、恋次は徐に右手を突き出すと縛道の一番を発動させる。

「縛道の一、『塞(さい)』！」

「「「ぐあああああああああ！！！！！」」」

恋次の詠唱破棄による「塞」をその身に受けた死神達は、全員手足を封じられてしまい祖その場に倒れ伏す。

吉良も恋次のこのような場面での鬼道の発動は思っていもなかったらしく、大いに驚愕する。

「やったね、阿散井君！鬼道でも戦えたんだね。」

「ああ！蛇尾丸が使えねぇから鬼道で・・・って、吉良。お前、今さり気なく俺のこと馬鹿にしただろ？」

「さぁ・・・何のことだい？」

恋次の言葉を聞いて一瞬目をそらす吉良だったが、恋次は聞き逃し

てなどおらず、剣幕を浮かべながら吉良に詰め寄った。

「俺が鬼道で戦うのが、そんなに珍しいかってんだ!?俺だって隊長だぜ。大体、向こうにいた時だって割りと使ってること多かっただろ!?」

「す、すまない・・・」

恋次に言い寄られ、軽率な発言だったと謝罪する吉良であった。

それぞれが各地で激戦を強いられる中、フェイトの様子を窺うために移動を続けていた田吾作は屋根の上を飛びながら転々としていた。

「えっと・・・・・お!見いつけた。」

田吾作は漸くうつ伏せとなって倒れているフェイトの事を見つけると、不敵な笑みを浮かべながら徐に近づいて行った。

キャロの攻撃をその身に受け、全く反撃できなかったフェイトは普通では考えられないような負傷をしていることが一目で判った。

何とかキャロからの攻撃を避けるために必死で逃げてきたフェイトだったが、既に精神も体力も限界に達しているというそんな状態であった。

見るに堪えない執務官の姿を黙視する田吾作に気づいたフェイトは険しい表情で田吾作の方を睨み付ける。

「う・・・・・!」

「よ。こんなところに居たんだ。まだ生きてるか？って、もうほとんど死んでるよな・・・・・体の方は兎も角として、精神的な意味で・・・！」

「あ・・・・・・く・・・！」

「あんたがくたばるまで、隠れてようと思ったんだけどな・・・」

「だったら・・・何で出てきた・・・！？」

身体への負荷と精神的な傷から喋ることもままならないフェイトは自分の足元に立ち尽くすこの男の行動の真意が分からずにいた。

「死神どもが、俺のマインドコントロールを次々に封じ込めている気配があったものでさ・・・こっちも少～し強い奴をぶつけてみようかなあと思ったんだよ。」

その言葉を聞いた途端、フェイトも田吾作の真意を理解し更に険しい表情を浮かべる。

「まさか・・・・・・私を・・・・・・！？」

そう、田吾作の狙いは精神的にも肉体的にも弱り切っているフェイトを手にかけて自分の魔法で意のままに操るというものであった。

「俺はよ・・・他人に自分の魔法を抑えられるのが我慢できないんだよ！へへへ・・・何見てるんだ、おい？あのおチビちゃんを傷つけたこの俺が憎いか？俺を殺したいってか？」

「く・・・・・・！」

田吾作の言葉を聞いたフェイトの気持ちは田吾作の言葉通り、あながち間違いではなかった。

母親譲りの感情が高ぶりやすいというものが、今のフェイトの心を大いに乱す。

しかし、自分は仮にも時空管理局の一員・・・しかも執務官という役職であり何よりも命の尊厳を誰よりも理解してることから、高ぶる府の感情に堕ち潰されそうになりがら必死にそれを抑えようとするジレンマに陥っているのが状況だった。

そんな板挟みのフェイトに向かって田吾作は大声で不可能宣言を口にする。

「無理なんだよ！はは！！」

と、その時だった。

「待て！」

「「！？」」

二人の耳に入ってくる聞き覚えのない声。

田吾作がその声のする方向へ顔を向けてみると、そこには砕蜂直属の部下である隠密機動の刑軍数名が屋根の上に立ち尽くしていた。

「刑軍！？」

「あれは・・・・・二番隊の・・・・・」

刑軍は田吾作を発見すると、屋根の上から飛び降りフェイトを守る形で田吾作の事を睨み付ける。

「見つけたぞ！旅禍め！よくも隊長を！！」

「あのご無事ですか！？」

「は・・・はい・・・何とか・・・大丈夫です・・・」

思わぬ救援の登場に一安心のフェイトであったが、一方の田吾作はこの状況でも変わらずの不敵な笑みを浮かべる。

「はは～ん！隊長さんの仕返しに来たって訳ね。つうかまだ残ってたんだ？」

「貴様、許さん！」

「隊長のピンチに必死に駆けつけたのか・・・・・泣かせるね。」

刑軍は倒れたフェイトを徐に担ぎ上げると、その性格上黒いイメージの絶たない刑軍とは思えぬほど温かい言葉を持ちかける。

「ご安心ください。直ぐに救護詰所にお連れ致しますので！」

「あの、もう一人の方はどちらに！？」

その言葉を耳にした途端、フェイトも漸くそのことに気づき狼狽した様子でキャロがその場にいないことに気づく。

「!そう言えば、逃げることに必死になってて・・・キャロの姿がいつの間にか・・・見当たらない!?」

すると、そのフェイトの様子を見ながら田吾作はこう口にする。

「へへ・・・あのおチビちゃんが何処にいるかだって?そいつは此処だよ。」

「!」

と、田吾作の言葉に耳を傾けたフェイトが目の前を見た瞬間、映ってきたのはいつの間にか田吾作の隣に立っている無表情のキャロとフリードだったのだ。

「キャロ!!」

「おっと動くなよ。」

キャロ達を助け出すため動き出そうとすると、そんなフェイトに向かって田吾作は声を荒げりながら無表情のキャロが自分で自分の首筋にエアラザーを突き立てる様子が目に入る。

「な!」

フェイトはそれを見ると、刑軍共々何もすることが出来なくなる。

「俺のマインドコントロールは全身を支配することが出来る。体の機能はもちろん、精神をもな。あんたらに出来ることはない。この子の命が欲しかったら、そこでじっとしていることだな。」

「くっ！！」

「安心しろ。殺しはしない。血を流すことは、俺も銀太郎も好きじゃないんだよ。あとそれから・・・あんたの周りの連中もそろそろいいかな？」

「何？」

田吾作の不審な言動に訝しげな瞳を宿すフェイト。

すると、その瞬間田吾作がエアラザーの名を叫ぶ。

「エアラザー！」

その瞬間、フェイトの味方であった筈の駆けつけてきた刑軍全員がエアラザーのマインドコントロールの対象となってしまい、全員が唸り声を上げ始める。

「ぐ・・・！！ぐあああああ！！！！！」

「「「があああああああああ！！！！！」」」

「な・・・！！そ、そんな！？」

マインドコントロールに完全に操られてしまった刑軍は瞬く間にフェイトの敵へと変貌を遂げてしまった。

「残念だったな！！そいつら全〜部とっくにマインドコントロールで支配されてたんだよ！エアラザーの実効支配で、あんたの周りは

文字通り四面楚歌。可愛い部下もそいつら刑軍もみんな俺とエアラザーのものとなった！」

「き、貴様！！」

フェイトもこれほどまでに狡猾で卑怯な戦法を駆使する田吾作についに感情を爆発させてしまうが、そんなフェイトの怒りなど気にも留めずに田吾作はキャロや刑軍を自在に操作する。

「ふん。やっちゃいな！」

田吾作がそう言うと、刑軍とキャロはフェイトを強い力で押さえつける。

「く！！や、やめて下さい！！キャロもお願いだからやめて！！！」

この最悪の状況に直面したフェイトに、田吾作は不敵な笑みをやめない。

「どうだい？自分の部下と下種な男共に押さえつけられる気分は？」

「下種は貴様の方だろう・・・！」

「やれやれ。もう真面に戦闘もできないくせに、口だけは達者だな。あんたも結局白き魔王と一緒だな。最終的には人の話なんて聞きやしないんだ。そう言う点を言えば、あの翡翠の魔導死神って奴は話の分かりそうな男だぜ。銀太郎もあの男には一目置いてるからな。」

「黙れ！貴様にユーノの何がわかる！？」

「怒るなよ。別に貶してる訳でもないのに何で怒鳴られる必要があるんだよ?あんた可笑しいぜ。へへ・・・あんた、あの男のよき”友人”と宣っているが、本当のところ嫉妬してんじゃねぇの?」

「何だと!?」

「考えてもみろよ。翡翠の魔導死神は見た目もいいし、性格もいい。頭の切れもずば抜けてる。魔法に関する知識と経験はおろかそれ以外の事も様々な分野に渡り学を修めている。おまけに戦闘能力も格段に跳ね上がったことで、それまでは自分の隣にいたはずの親友が急に態度を改めてしまった・・・そんなこと思ってない?」

「!」

この田吾作の言葉にはフェイトの心も大いに動揺する。

確かに、田吾作の察した通りユーノはこの四年の間で大きく変わった。

ユーノが大きな変貌を遂げ、なのは自身も素直な気持ちを曝け出したことで二人の仲は急速に“大切な親友”から“恋人”という風に進展した。

その結果、これまで戦いの中でも日常的な面からもなのはを傍で支え続けていたフェイトの立場が逆転してしまい、今ではユーノがなのはの傍に多くいるようになったのだ。

フェイト自身はそのことを若干寂しいとは思ったこともあるが、なのははそんなフェイトにもこれまでと同じように親しく接し、ユーノも変わらずフェイトのことを信頼しているため、三人の関係は良

好を保っている・・・筈だった。

しかし、内心フェイトは今回の戦いに身を投じてから周りにいる才能あふれる歴戦の戦士たちをその目で見続けてきた。

そんな周りへの嫉妬と自分の非力さが克明に暴露されたことで、何とも思っていないと錯覚していたそんな気持ちがユーノへの嫉妬へとすり替わってしまったのだ。

「図星のようだな。白き魔王を本当の意味で支えられない自分の非力さとそれを可能とするあの男への嫉妬の炎。ははははは!!!!!同性愛者の考えることはほんとウケるぜ!!キモ過ぎだって!!」

「違う!!私は同性愛なんて感情・・・!!それにユーノにもそんな嫉妬だなんてものは!?」

同性愛と揶揄され、必死に否定するフェイトだが田吾作は大笑いをしながらその言葉を真っ向から否定する。

「隠すんじゃねぇよ。あんたも結局は人間の端くれだ。表面上では割り切れても心の中までは割り切れないことが世の中にはわんさかあるのさ。好きなんだろ?白き魔王が大好きなんだよな?チューってしたいと思ってんだろ?」

「く!!貴様・・・!!」

「ふふ・・・さて、長話になっちまったが・・・そろそろあんたの体も戴くぜ。死ぬまでエアラザーの力でこき使ってやる!そのおチビちゃんと竜も一緒にな!」

「き・・・貴様・・・・・・・・！！」

「無駄だよ。へへへ・・・・・・・エアラザー！」

〈Ｃｏｎｓｅｎｔ（了解だ。）〉

エアラザーは田吾作の言葉を聞くと、キツツキ状態となって浮遊し、フェイトに狙いを定めた。

「気の毒だったね。フェイト・Ｔ・ハラオウン。大好きな白き魔王を翡翠の魔導死神に奪われて。」

「・・・お・・・おのれ・・・！！」

「さようなら。あんたとの戦い、それなりに楽しかったよ。」

〈Ｔｈｅｎ，Ｉ ａｍ ａｌｌｏｗｅｄ ｔｏ ｇｏ．（それでは、行かせてもらう。）〉

「・・・く・・・」

エアラザーは標的であるフェイトを凝視し、狙いをこれでもかと慎重に定めると一気にフェイトに向かって突進していく。

その間に、フェイトは目をつむると大好きな自分の友人たちの顔を思い浮かべ謝罪の念を抱くのであった。

「（なのは・・・はやて・・・クロノ・・・ユーノ・・・ごめん・・・）」

と、敗北を決め込み非力な自分を呪うフェイトであったが・・・・・その時、予想外な出来事が突如おこったのだ。

「散れ、『千本桜(せんぼんざくら)』」

何処からともなく現れた無数の桜の花びらがフェイトの目の前に現れたと思ったら、田吾作の魔法に操られている隠密機動の刑軍を一人残らず一掃し、エアラザーの進撃を妨害したのだ。

「「「「ぐあああああああああああああああああ！！！！！！」」」」

「！？」

「な！？」

一瞬の出来事に頭が混乱する田吾作と、それとはまた違いフェイトは周囲から感じる一度はその肌で体感している霊圧に驚愕の表情を浮かべる。

「・・・この技は・・・それに、この霊圧って・・・？」

「何をして居るのだ、フェイト・T・ハラオウン。」

「！あなたは・・・・・・！？」

フェイトが声のする方向へ目を向けてみると、そこには千本桜を元に戻し冷静な態度で自分の名を口にしてきたルキアの義理の兄、朽木白哉が立ち尽くしていたのだ。

田吾作もこの人物の登場には驚きを隠せなかったが、その田吾作よりもフェイトの驚きの方がよっぽど大きかったはずだ。

「朽木・・・白哉さん！？」

「・・・・・・・・」

白哉の突然の登場で、戦局が大きく変化を遂げようとしている。

白哉はフェイトを助け、この田吾作にどう挑むつもりなのか？

そして、フェイトは操られたキャロを救えるのか・・・――――次回を待て！

フェイトｖｓキャロ!?狡猾の田吾作（後書き）

教えて、ユーノ先生！

ユ「今日は朽木白哉さんについてだ♪」

ユ「六番隊の隊長を務める白哉さんは常に怜悧冷徹。誇りを汚されることを誰よりも嫌う四大貴族のうち、最も格式ある朽木家の当主なんだ。」

ユ「斬魂魄刀の名前は『千本桜』。目に見えない程に枝分かれした千本の刃を桜の花びらと化し、敵を斬り刻むんだ♪」

フ「そう言えば、この人も瞬歩が得意だったんだよね？」

ユ「護廷隊の中でもそのレベルはトップクラスの実力だよ。」

すると、その瞬間白哉があらわれる。

白「我が瞬歩は、常人には捕えることは出来ぬ。」

そう言ってまた瞬歩でいなくる。

フ「結構・・・自信家なんだね・・・」

ユ「一護さん曰く、単なる思い上がりの激しい人らしい・・・」

魔導師図鑑ハイパー！

機動六課男性待遇改善委員会に知らせが届く。

恋「何だと!?女性前線協会と合同行事だと!!」

ク「は。本日、はやてから正式に申し込みがありました。」

恋「よっしゃあ!何だかんだ言い争って来たが、漸くこれで俺達男性待遇改善委員会を認めたってことだな!?なら話は早え!!張り切って参加だ、コノヤロー!」

全「押忍!」

意気込んでいた恋次達であったが、実際は悲しいものであった。

恋「てめぇら・・・これは一体どういう・・・ぶっほ!!」

文句を言おうとした矢先、はやてとシグナムのハリセンが飛び交う。

は「このような言葉による脅しには、毅然とした態度で臨むのがベストや!」

恋「くそが!!舐めた真似しやが・・・ぼはあ!!!」

その後も汚い言葉を交わすたびに二人のハリセンが飛び交う。

呆然としながら見守る機動六課全職員の瞳に映ってきたのは、『機動六課女性職員の為の押し売り撃退講座』と書かれた看板であった。

白哉出陣！雷光と奏でる桜の舞（前書き）

白「我が朽木家は、四大貴族の中で最も模範となるべき存在。故にいかなる掟にも心を殺して従順しなければならぬ。だが、時にそれが凡庸なる思いにより揺らぎ・潰されることが稀にある。」

フェ「誇りをかけた譲れぬ戦い。きっとどんな結末が訪れていようとも、私たちは後悔よりも先にもっと違ったものをその心に刻むに違いない。」

ユ「ユーノ・スクライア外伝　パトリオット篇・・・・・・始まります。」

白哉出陣！雷光と奏でる桜の舞

＞ｉ１８７５７―７０９＜

ユーノ・スクライア外伝・・・前回の三つの出来事。

一つ：田吾作のマインドコントロールにより死神が意識を操られる。

二つ：田吾作と対峙したフェイトであったが、キャロが操られるという不測の事態が発生。

そして、三つ：追いつめられたフェイトに白哉が救援に入ってくる。

フェ「・・・お・・・おのれ・・・・！！」

田「さようなら。それなりに楽しかったよ。」

〈Ｔｈｅｎ，Ｉ ａｍ ａｌｌｏｗｅｄ ｔｏ ｇｏ．（それでは、行かせてもらう。）〉

フェ「・・・く・・・・」

己の敗北を決め込み、脳裏に浮かんだ大切な人に向け謝罪するフェイト。

フェ「（なのは・・・はやて・・・クロノ・・・ユーノ・・・ごめん・・・）」

だが、その時思わぬ救援が入る。

白「散れ、『千本桜（せんぼんざくら）』」

刑「「「「ぐあああああああああああああああああ！！！！！！」」」」

フェ「！？」

田「な！？」

操られた隠密機動の刑軍を何処からともなく飛んできた桜の花びらが一掃する。

フェ「・・・この技・・・そして、この霊圧は・・・？」

白「何をして居るのだ、フェイト・T・ハラオウン。」

フェ「！あなたは・・・・・・！？」

現在、満身創痍のフェイトと田吾作の前に現れたも謎の助っ人。
その正体はルキアの義兄であり、恋次が今でも超えたいと願い続けている六番隊隊長の朽木白哉であった。

「朽木・・・白哉さん!?」

白哉の登場に大いに驚き目を見開くフェイトと、その白哉の事を訝しげに見た後納得した様子の田吾作。

「朽木白哉・・・そうか。あんたがかの有名な四大貴族、朽木家の当主であり六番隊隊長の朽木白哉か。これはまた、思わぬところで隊長格がお出ましか・・・」

「・・・――――」

白哉は無言のまま表情一つ変えることなくフェイトの元へと近づい

ていく。

「あの・・・どうして!?」

「兄と対峙している妙な霊圧を感知し、駆けつけてきてみれば・・・あまり良い状況ではないようだな。フェイト・T・ハラオウン、兄は傷を癒して少し休め。あの子供のことを最優先にしろ。」

「あ、はい!ありがとうございます。」

〈Ｓｏｎｉｃ　ｍｏｖｅ〉

白哉からの助言を受けると、フェイトは残っている魔力を使って田吾作の近くにいたキャロとフリードの元へと近づいていった。

「ごめんね・・・キャロ、フリード。」

フェイトは本当ならばこのような真似はしたくはなかったが、止むおえず二人を助けるために首筋に手刀を入れ、両者を昏倒させた。

「ぐ!」

キャロとフリードを昏倒させた、フェイトはバルディッシュを待機状態に戻して両手で二人を抱えると、白哉に向かってエールを送り残り全ての魔力をソニックムーブだけに注いで戦線を離脱する。

「幸運を。」

田吾作も一瞬気を抜いてしまったために、キャロとフリードに注意を払うことが出来ずにそのままフェイトに二人を持って行かれるが

直ぐに集中を白哉の方へと向ける。

「・・・へ。まぁいいさ。今日の俺はどうも高速戦闘が得意な奴相手ばかりと出会うらしい。朽木白哉、お前の速さがどれほどのものか、見せてもらうぜ。」

「・・・愚かな。我が瞬歩は貴様の目で捉えられるものだと思っているのか？」

毅然とした口調でそう言う白哉は得意の瞬歩を使って、刹那のごとくスピードで田吾作の背後を制し、腰の刀を抜こうとしたが・・・その瞬間、突然目の前にいる田吾作と一緒にも一人の田吾作が白哉の背後に現れる。

「！」

「捉えられるさ。」

あまりの一瞬の出来事に度肝を抜いた白哉だが、即時に反応した白哉は背後からの田吾作の攻撃を回避し、距離を取って冷静に見つめる。

「流石、隊長格というだけの事はあってその速さは秀逸。そして反応も見事だ。但し、あくまでも“死神としてのレベル”でと言う話ではあるがな。」

「・・・どういう事だ、それは？」

すると、白哉のその質問に対して二人に分身を果たした田吾作は数を一人に戻しこの技の正体を暴露する。

「『リアル・ファントム』。ミッド式のフェイク・シルエットをリベル式に改良したものだ。ただフェイク・シルエットと違うのは、通常のフェイク・シルエットが単なる幻影に過ぎないものに対し、こいつは一体一体が実体を持っている。何処かの漫画から引用すれば“影分身”と呼ばれる奴だ。」

「・・・――――」

田吾作の言葉を聞き入れると、白哉は眉間に寄せる皺を一層多くする。

「俺のエアラザーはパトリオット中最速を誇り、そこから生み出される虚像を俺の固有スキルで実体化させる。どうだ？意外と魔法って言うのもバカに出来ないものだろ。」

「そうか・・・だが、やはり貴様は愚かだ。私の前で早々に――――手の内を明かしたことをな。」

白哉はそう口にすると、再び瞬歩を使って田吾作の間合いに入り込み田吾作を正面から斬り伏せる。

「ぐっほ！！」

だが、最初に斬り捨てたのは囮であると判断した白哉は背後から襲ってきたも一人の田吾作に即座に反応・同様に斬り捨てる。

「のっへ！！」

血を噴き出し、倒れ行く田吾作二人であったがその瞬間・・・三人

目の田吾作が目の色一つ変えない白哉の死角から現れる。

「残念。フェイク・ファントムは3体までではない！」

「そうだろうな。」

「！」

白哉は羽織の下から田吾作の胸部の中心を狙って詠唱破棄の白雷を撃った。

「破道の四『白雷』」

「がっは！！」

白哉の白雷をその身に受けてしまい、貫通ダメージを食らった田吾作は怜悧冷徹な眼差しでこちらを警戒する白哉を見ながら後ろへ倒れこんでいく。

と、その時。

「！！！」

警戒する白哉の周囲には何と七人で且つそのどれもが実体を持つ田吾作が出現し、目を見開く白哉に向かって勝ち誇った表情を浮かべる。

「フェイク・ファントムの分身数は最大１０体だ。」

そう言い切ると、七人の田吾作たちは一斉に白哉の体に鍵爪を突き

刺したのだ。

一瞬の判断を逃してしまった白哉は囲まれた田吾作たちから逃げられず、虚しくもその七人の攻撃をその身に受け口から血を流す。

「・・・・・・・・・く・・・・・・・・・・」

「・・・俺の勝ちだぜ。・・・さようなら、朽木白哉・・・お前の敗因は、自らの力量を知らぬその傲岸不遜なところだよ。」

しかし、その時・・・実体を解いた田吾作の目に映ってきたのは予想外の光景だった。

「!?」

何と、鍵爪の先端に突き刺さっていたのは白哉の体ではなく白哉が先ほどまで着用していた六番隊の印が入った隊長羽織であった。

これを見た田吾作はあまりの衝撃に頭が真っ白になった。

すると、そんな田吾作の背後から羽織りを身代わりとした白哉がこの術のトリックを明かしてきた。

「隠密歩法“四楓(しほう)”の参『空蝉(うつせみ)』。まさか、再びこの技を使うことになるとは・・・」

「何だと・・・!?」

田吾作もまさかこの様な真似をしてくるとは思い寄らず、事実かなり驚いていた。

そんな驚きを赤裸々に顔で表現する田吾作に向かって、白哉は刀を顔の近くに持っていきながら波紋になぞる様に見ながらこう言い放った。

「傲っているのは貴様だ、パトリオット。だが案ずるな。貴様が敗北するのはその傲りの為ではない。ただ純粋に、格の差だ。」

田吾作対白哉の高速戦闘の行方は一体どんな方向へと傾くのか？

この戦いの行方は一度戦線を離脱し、四番隊隊舎に向かったフェイトと卯ノ花との会話が済んでから見ることにしよう。

フェイトはキャロを搬送したのち、自身も怪我の手当てを済ませ白哉の救援へと直ぐに向かおうとしていた。

そんなフェイトに、隊長の卯ノ花が柔らかい表情を浮かべながら玄関先で見送りの挨拶を行う。

「分かりました。では、彼女とその使役の竜は私達が責任を持ってお預かりいたします。あなたも、くれぐれも無茶をしないよう気をつけてくださいね。フェイトさん。」

「はい。ありがとうございます、卯ノ花隊長。」

そう言って白哉の元に急いで向かおうとしたフェイトだったが、ふと急に立ち止まると後ろに振り返り疑問符を浮かべる卯ノ花に向かって恥ずかしげにこんな事を言って来た。

「・・・あの・・・その・・・卯ノ花隊長・・・」

「?はい、何でしょうか?」

「えっと・・・こんなこと言うと何だか変だと思いますけど・・・卯ノ花隊長とは初対面なのに、何だかずっと前から知っているような気がしてならないんです。」

「え?」

「似ているんですかね・・・私の母さんと・・・何所と無く・・・」

フェイトはそう口にしながら、自身の義理の母親でもあり天涯孤独となっていた自分を養子として迎え入れてくれたクロノの母親、リンディ・ハラオウンの姿を四番隊隊長卯ノ花烈の姿と重ね合わせた。

そんなフェイトの話を聞いていた卯ノ花だったが、それを聞き終えると卯ノ花も破顔一笑し、意外な言葉を口にした。

「うふ。そうですか・・・・・・実は私も同じことを考えていました。」

「え?」

この卯ノ花の言葉にはフェイトも思わず驚きの表情を見せる。

そして、そんなフェイトの顔を見ながら笑顔で卯ノ花は白哉のことをフェイトに委ねる。

「フェイトさん。朽木隊長のサポート、お願いいたしますね。」

それを聞くと、フェイトも同じように笑顔を浮かべ自信に満ちた声で返事をする。

「はい！任せてください。」

卯ノ花の言葉に激励を受けたフェイトは早速白哉の援護に向かうために勢いよく空へと舞い上がっていき、飛んで行ったフェイトの後姿を卯ノ花は温かい表情で見つめていた。

「ふふ。」

では、そろそろ頃合いなので場面を再び田吾作と白哉の戦闘場面に戻すとしよう。

白哉から告げられる自分が驕っていると断言された田吾作は訝しげな表情を浮かべ、白哉に質問し返す。

「傲っている？俺が？」

田吾作はそう言うと、鍵爪に突き刺さっていた白哉の隊長羽織をその辺に捨てると難しい顔でこちらを睨む白哉に言葉を投げかける。

「何故そう思うんだ？お前は敵だが隊長格だ。俺はお前を自分と同等と考え、そのように振舞っているつもりなんだけどな。俺の心に傲りなんか無い。」

田吾作はあくまでも自分と白哉は対等な力を持つ者と考えて今の今まで戦闘を続けていたつもりであったが、言葉を聞かされた当の白哉はというと考え方が全く違っていた。

「・・・旅禍風情が――――――」

「あ？」

「この私と自らを同等と考える・・・それ自体が既に傲りだと言っている。」

白哉は尸魂界でも有名な四大貴族、それも最も模範となるべき家柄の朽木家当主であり幼少の砌より英才教育を受けてきたことから、自分よりも立場や身分がいやしい者や下等なものは全て低俗であると考え、尚且つ誇りと言うものに強いこだわりを持つが故にこのような他人からは反感を受ける言動についついなりがちになる。

田吾作もその例外ではなく、自分以上に高飛車で傲岸不遜が目立つ白哉に頭の血管が切れそうな感覚に陥る。

「・・・・・はっ！どうやら、見た目もさることながら口の利き方も随分デカイ奴だな。決めたよ。無駄な殺しはしないつもりだったが、お前に限ってそれは止めにしよう。俺の全力を以って、その高飛車な性格から何まで捻り潰してやるぜ。行くぞ、エアラザー！」

〈Ｙｅａｒ．ｂｌｏｏｄ　ｅｘｐｌｏｓｉｏｎ〉

田吾作はブラッドカートリッジを三発ロードすると、フェイトと戦った時よりも更に戦闘能力を高めたブラッド状態へと変貌を遂げ、表情一つ変える事の無い白哉の目の前に現れた。

その姿は先ほどのそれよりもより鳥に近いと形で、両翼も二つだったそれが六つにまで増えていたのだ。

「・・・――――」

白哉はルキアの報告から多少なりともブラッド状態に関することは知っていたが、ここまでも姿が変わるものには正直なところかなり驚いていた。

しかし、だからといって冷静さを失わず決して取り乱さないのが朽木白哉の根本的な強さの秘密であった。

「それが報告にあったブラッド状態と言う奴か？」

「オールライト！だが、知ってるからどうしたよ？」

「安心した。思ったほどのものではなさそうだ。」

冷静さと自身の平静を保つためには、口ではそのように口にする白哉。

すると、そんな白哉は田吾作の不審な行動に目がいき警戒を強めた。

「！」

田吾作はその瞬間、フェイトと繰り広げた速力よりも更に錬度を上げたホークムーブの上位魔法、イーグルムーブを使い白哉の背後に回り込む。

「だからそれが傲りだって言ってるだろう。」

背後から白哉の頸動脈を狙って斬りかかる田吾作だが、白哉は本気の瞬歩を使ってギリギリのところで田吾作の一撃を躱した。

「ち。切込みが浅かったか？」

田吾作の攻撃をその身に受けそうになった白哉の首筋からはうっすらと出血が窺える。

「・・・貴様・・・！」

白哉の怒りは徐々に膨れ上がっていく中、田吾作はその後もイーグルムーブを多用して白哉の体に傷を作ろうと追い込みを始める。

白哉は瞬歩で田吾作の攻撃の瞬間を皮一枚の所で回避するが、体のあちこちにはやはり先ほど同様かすり傷のようなものが目立ち始める。

「ふふふ！！！そんなスピードじゃ遅いぜ。この状態になった瞬間、俺のスピードは既に貴様の瞬歩（それ）を遠に超えている！！ちなみに、戦力もさっきまでとは比肩することの出来ないほどに増強している！！さぁ・・・不遜と共に散りとなって消えるがいい！！」

〈Ｒａｍｂｌｅ　ｆｅａｔｈｅｒ〉

田吾作はそう言うと、両翼からフェイトを苦しめたランブルフェザーを一斉に発射して白哉に攻撃を仕掛ける。

それに対して、白哉は斬魄刀「千本桜」を解放する。

「散れ、千本桜」

千本にまで枝分かれした刃と同等の数を誇る田吾作のランブルフェ

ザーが相互にぶつかり合い威力が相殺されていく。

両者の技が相殺され、一度刀身に千本桜を戻す白哉は刹那にまたそれを花弁と化し無防備状態となった田吾作に向かって花弁全てを向けてきた。

しかし、それを見た田吾作は強気な口調でこう言った。

「ふん。見えてるぜ、その花びら。」

〈Ｅａｇｌｅ　ｍｏｖｅ　ｐｌｕｓ〉

「！」

田吾作はブラッドカートリッジの力で更に錬度を上げたイーグルムーブを使って、白哉の千本桜の花びらを綺麗な軌道を描きながら完璧に躱していく。

この田吾作の常軌を逸した速度には流石の白哉も驚かない訳がなかった。

「（何だ・・・この速力は!?千本桜が追い切れぬだと!?）」

その時、田吾作はリアル・ファントムを混ぜた牽制を白哉に仕掛ける。

「！」

自身の周囲に現れる数が一気に１０体にまで増えた高速移動を続ける田吾作が白哉に挑発をしてくる。

「どうした、隊長。ついてこれねぇか？俺的にはまだまだ余裕なんだけどな。」

「・・・余り図に乗るな。小僧！」

白哉はそう言うと、柄を持っている手とは逆の方で千本桜を自分の意思による加速と操作を行い田吾作を捕えようとした。

「（加速しやがったか・・・）」

田吾作は白哉本人の意思によって操られる先ほどよりも切れの良くなった千本桜の動きに的確に判断するために分身を解いて、回避を続ける。

一方で白哉も手を使って意地でも田吾作の動きを捕えようと躍起になっていた。

「（始解の状態ではあるが、手掌で操れば速力は二倍！捕らえきれぬものなど・・・無い！！）」

そう決め込んでいた白哉は田吾作の一瞬の隙をついて、ついに田吾作の正面に千本桜を持っていき動きを捕えることが出来た。

「（捕らえた！！）」

と、その時田吾作は翼を大きく広げると一気に周囲の千本桜に向かって突風を巻き起こしていった。

「はっ！」

〈Ｅａｇｌｅ　ｓｔｏｒｍ〉

田吾作の翼から発生する突風が白哉の千本桜全てを虚しくも地面にたたき落としていく。

この光景を見た白哉はまさか自分の技がこのようなことで圧倒されるとは夢にも思わず、驚愕の表情を浮かべるだけであった。

「（・・・莫迦な・・・千本桜を・・・翼の一振りで叩き落しだと・・・？）」

「図に乗っているのはどっちだよ。俺か、それとも・・・てめぇか？」

「・・・く・・・」

田吾作はイーグルムーブで冷静さを失いかけそうになった白哉に向かって鍵爪を正面から突き刺そうとしてきた。

「くたばれ！！」

だが、白哉本人も負けるわけにはいかなかった。

白哉は詠唱破棄で自分の正面に防壁を展開する。

「縛道の八十一『断空』」

白哉が出現させた断空により攻撃を妨害された田吾作は一度白哉から距離を取る。

そして、未だ闘志を宿し諦めの表情をも見せない白哉を見ながら賞賛の言葉をかける。

「・・・大したものだな。これだけの実力を目の当たりにしても、一歩も下がろうとしないそう言う如何にも隊長らしい振る舞いは。だけど、俺には少々愚かにも見えるがな。」

「・・・・・・貴様・・・・・・・」

「ふん。まだ諦めていない目をしているな？ムカつくぜ・・・そう言う自分の力量も分からないのに自分の勝利しか瞳に映さない自信家の目はよ！！」

田吾作はそう言うと、白哉に止めの一撃を加えるために一番早いイーグルムーブを使用して堂々と正面から回り込んでいく。

「さぁ、消えるがいい！」

田吾作の鍵爪が白哉の心臓目掛けて突き刺さろうとした、その時だった。

「バルディッシュ！」

「！」

〈Ｈａｋｅｎ　Ｓａｂｅｒ〉

田吾作の耳に突如、聞き覚えのある女性の声が入って来たと思えばその女性・・・フェイトはハーケンセイバーを作り出し、それを勢

いよく田吾作目掛けて投げつけた。

「はあああああああ！！！！！」

田吾作はそれを回避するが、この予期せぬフェイトの登場には白哉も驚いていた。

「！兄は・・・！？」

フェイトは一度白哉の隣に降り立ち、通常形態にバルディッシュを戻すと田吾作の方に体を向けて武器を持ち直す。

そんな自分に対して目を向けるフェイトを見ながら、鼻で笑う田吾作。

「へっ！援軍のつもりか！？フェイト・Ｔ・ハラオウンさんよ・・・・・」

驚愕する白哉ではあったが、直ぐに表情を元に戻して白哉。

そんな白哉にフェイトは素直に応援にやって来たということを告げる。

「白哉さん。お手伝いにやって来ました・・・！」

「フェイト・Ｔ・ハラオウン・・・何故戻ってきた？私は休めと言った筈だが。それに、あの子供はどうした？」

「四番隊の卯ノ花隊長に預けました。私も一緒に戦います！」

しかし、あくまでも白哉は自分一人で決着をつけたかったらしいのかそうでないのか、フェイトの行為を真っ向から否定するような信じらない言葉を口にする。

「その必要はない。一緒にいると目障りだ。」

「え!?そ、そんな!!」

予期せぬ白哉の冷徹で非情な言葉を耳にしたフェイトは激しく狼狽する。

「聞こえなかったのか?私に援護は必要ないと言っている。早々に失せて下がっていろ・・・こやつより先に私に斬られたくなければ。」

「・・・・・・・・・(折角援護に入ったのに・・・酷い言い方・・・)」

白哉から向けられた鋭い視線と冷徹な言葉に非常に驚愕し、悲しい想いに陥るフェイト。

すると、そんなフェイトに向かって鼻で笑ってくる田吾作。

「・・・・・は!助けに来てやった援軍に対してその言い方とは・・・中々出来るものじゃないな。そうは思わないか、フェイトさんよ?」

「くっ・・・!」

すると、そんな表情を曇らせるフェイトを一瞥した白哉は自身の霊

圧を放出させながらフェイトに向かって背中越しに下がらせるその真意を口にした。

「・・・フェイト・T・ハラオウン。もう一度言う、早々に失せて下がっていろ。今の私には・・・兄の魔力を温存させておく義務がある。」

その頃、フェイトから預かった田吾作の魔法に陥ったキャロとフリードの治療に当たっていた卯ノ花と勇音は一先ずフェイトとの戦闘で出来た外界の手当てを済ませ、田吾作の魔法を鬼道で抑え込んでいた。

「隊長・・・お二人とも安定してきたようです。一先ずこれなら・・・」

「勇音(いさね)。油断は禁物ですよ。もう少し処置が遅れていたら、危なかったのですから。それに、ここはすべてが霊子で構成された魂魄の世界。フェイトさんも傷が癒えたとは言え、魔力消費の効率はミッドチルダと比較すれば著しく悪化している筈です。何が起こるか慎重に対応しないと。」

「あ、はい！」

卯ノ花の言葉に諌められ、気を引き締めて目の前のフリードの治療に当たる勇音。

するとその時、隊舎の外であるにも関わらず感じてきた朽木白哉の巨大な霊圧に驚愕した。

「！この霊圧・・・朽木隊長の！？」

それを横で見ていた卯ノ花はそんな勇音に向かって更に補足する形でこう言って来た。

「朽木隊長だけではありません。他の隊長達も最初から霊圧を全開にして戦いに身を投じてる筈です。機動六課の魔導師さん達もそれぞれの場所で戦いを始めていますし、黒崎さんとユーノさんも、聖地へと目指して邁進している筈です。」

「はい！」

「戦時特例が発令された時点で、護廷十三隊も管理局のみなさんも全力全開で事に対処しているのです。パトリオットとは・・・そう言う敵なのです。」

「みなさん、大丈夫でしょうか？」

「信じましょう。そして、みなさんが戦いを終えた時・・・その傷を癒して差し上げる。それが私たちの仕事です。」

そんな卯ノ花達の思惑通り、各地では未だに戦闘が続いており田吾作のマインドコントロールの被害を受けた死神達と魔導師達は仲間内で戦いあっていた。

「せやあああああああ！！！！！」

「ほあああああああああ！！！！！」

「ぬおおおおおおおお！！！！！」

五番隊の雛森と共に瀞霊廷内を走り続けていた鬼太郎・浦太郎・金太郎の三人は力加減を間違いないようにそれぞれの武器で死神達を気絶していくが、流石に数で圧倒されそうになっていた。

「まだまだ居るね。」

「くそ！これじゃあこっちの体力がなくなりそうだぜ！」

と、その瞬間死神の一人が気を抜いた鬼太郎に向かって飛びかかってきた。

それを即座に雛森が鬼道で相手の動きを封じる。

「縛道の四“這縄”！」

這縄で体を拘束された死神はその場に倒れこんだ。

そして、雛森は瞬歩を駆使して目の前の死神達に気づかれないように首筋に白伏を発動させていく。

「みんな、ごめんなさい！」

白伏をその身に受けた死神達は全員精神を混濁させると、そのまま気の抜けたかのように倒れこみ動かなくなった。

また一方で、松本乱菊と共にパトリオットの追跡を続けるシグナム・エリオ・アギトの三人はというと――――――

「レバンティン！」

「「「ぐあああ！！！」」」

「サンダーレイジ！」

「「「ぎゃあああああああ！！！！！」」」

「バーニングサラマンダー！」

「「「のあああああ！！！！！」」」

シグナム、エリオ、アギトの怒涛の非殺傷設定魔法攻撃が炸裂し、周囲を囲んでいた死神達全てが昏倒され動かなくなった。

乱菊はこの三人の戦力の高さに驚き尚且つ安心した表情を見せる。

「ちょっとやり過ぎたか！？」

「あんたらの炎で、何人かの頭がアフロになったけど、まぁ何とかなるでしょう。」

「急いでパトリオットの捜索を続けましょう。」

「センサーでは、こちらの方向で間違いはないはずだが。」

「兎に角、急ぎましょう。」

四人はそう判断すると、昏倒した死神達を見送りパトリオットセンサーに従って再び邁進を続けるのであった。

その頃、白哉からの思わぬ言葉を耳にしたフェイトは正直なところかなり驚いていた。

「！白哉さん・・・あなた・・・」

自分が援護に入ろうとして着てきた際には非常に冷たい言葉を投げかけた白哉であったが、実はその裏には自分の魔力を温存させることがあったのだから。

勿論、白哉の発言に驚いているのは何もフェイトだけではない。

対峙していた田吾作の方も意外と言いたげな表情を浮かべていた。

「魔力を温存だと？意外だな・・・お前もうちょっと冷たい自信家だと思っていたんだけどよ、存外・・・優しいところもあるんだな。」

田吾作はそう口にすると、徐に右上を目の前に突き出すとそれを白哉の左足へと向けあの魔法の一端を発動させる。

〈Ｐａｒｔｓ　ｃｏｎｔｒｏｌ〉

田吾作の妙な行動に眉をひそめる白哉だが、一度この魔法の波長を体で覚えていたフェイトは直ぐに危惧の念を抱き白哉に呼びかける。

「白哉さん！！気を付けてください！！」

「！」

だが、フェイトが警告をすると同時に田吾作のマインドコントロー

ルの一種、パーツコントロールが発動してしまい、白哉の左足は田吾作の支配かとなり自由に動かせなくなっていた。

「・・・何だ・・・これは・・・・！？」

自分の意思で足を動かせない白哉がそう尋ねると、田吾作は不敵な笑みで次のように語ってきた。

「俺の自慢がスピードだけだと思ったか？忘れるなよ。俺の本当の自慢は補助系の魔法であり、相手の体と精神を俺の思うがままに操ること。死神の一人や二人操ることなんて訳ないんだぜ。勿論、全身支配から部分支配に至るまでもな。あんたのそれは、俺のパーツコントロールによって、その支配権が俺に移った。よって、その左足は俺のものとなった。」

田吾作はそう言うと、白哉の抵抗を無視してその奪った白哉の左を足を操り自分の所へと持っていった。

「白哉さん！」

「く・・・！」

この事態を前に、どうすることも出来ないでいるフェイトと白哉。

白哉の足は為すがままに田吾作の元へと近づいていく。

「同情するぜ。知恵が浅いと解せないことが多くて辛いからな。ま、解せなくてもその身で味わえば理解できる。ほれ、『左足』。もっと俺の所へ来い。」

田吾作は更に白哉の左を足を自分にひきつけ、白哉も必死で抵抗の姿勢を見せるがやはり効果はなかった。

この恐るべき能力を秘め、それを自在に操る目の前のパトリオットの姿にフェイトは驚愕と同時に恐怖すらも感じた。

「（全身支配の次は肉体の部分支配だなんて・・・・・・！？この子、一体どれほどの補助系魔法を操れるんだ！？）」

表情を曇らせ眉間にしわを寄せる白哉を、田吾作は思いのままに左を足を操る。

「抵抗は無意味だぜ。お前の脳からの指令は左足には届くはずがない。その時点で俺のものとなったんだからな。さぁ、もう一歩――」

と、田吾作が更に左足を自分に近づけようとしたその瞬間、白哉は以前にも破面との戦いで使用したある一つの方法を選択し、それを実行に移した。

「なっ！」

何と、自分の左足の件を自分で斬って物理的に動かすことをできなくすると言うものであった。

この白哉の信じられない行動をその目で確認したフェイトは度肝を抜いた。

自分の体を、あろうことか顔色一つ変えずに非常にも斬り捨てるものなど自分は見たことがなかった。

戦友であるシグナムも嘗てこのような真似をした事は無かった。

だが、この男はそれを普通にやってのけたのだ。

白哉の左足から噴き出る多量の血吹雪に一瞬驚かされる田吾作だが、それと同時にそんな自分に対しても冷徹な白哉に感服の念を抱く。

「・・・わお。お前って奴は行動力があるな。使えないと判断し咄嗟に自分の左足の腱を斬って動けなくするなんて。これじゃあ、物理的に動かすのは不可能だ。ひょっとして、前にも同じ経験があったりとかするのか？」

「・・・・・・・・・・・・・」

田吾作の言葉を聞いてもやはり顔色一つ変えずただその場に立ち尽くす白哉。

そんな白哉に向かってフェイトは足の傷を見ながら白哉に言葉を投げかける。

「白哉さん！！あなた・・・！！」

「黙れ。兄の知ったことではない。私の体のことなど構うな。」

「だけど！その怪我じゃ・・・！」

「構うなと言っている。」

「・・・・・・白哉さん・・・・・・・」

人の命を誰よりも大切に考えているフェイトにとって、自分の命にかかるような大怪我を自分で作っておきながら、あくまでも毅然とした態度で心配をかけまいと言い張る白哉に悲しい表情を浮かべる。

すると、そんな隙を見せたフェイトを見た田吾作がほくそ笑むとフェイトに向かってパーツコントロールを仕掛けに行った。

「おっと！余所見をしてたら危ないよ。」

「！？」

フェイトもそれに気づいて咄嗟に動こうとしたとき、何とそれよりも早く白哉が自分の目の前に現れて自分が受けるはずだった攻撃を身を挺して守ってくれたのだ。

「白哉さん！？」

「ほう。片足だけでそこまで動かせるなんて、流石は隊長各の座だけはある。感慨無量だよ、全く以て。」

白哉はそう口にする田吾作に左手の甲を見せながら険しい表情を見せる。

「・・・・・貴様・・・・・・」

すると、田吾作の技をフェイトの代わりに受けてしまった結果、白哉の左手も田吾作の支配下にはいってしまい、白哉の手が自分の意思とは関係なく動き始める。

「白哉さん！？それは・・・・・・！！」

フェイトもこの光景を見て焦燥を抱くが、田吾作は険しい表情の白哉に構わず卑劣な手段で追い込んでいく。

「腕の支配が効力を発揮したことで、そいつも俺のものとなった。さて、自分の首を自分の手で絞めてもらうか。」

田吾作はその瞬間、パーツコントロールを発動させて白哉の左腕を意のままに操作し、白哉の首元に左手を持っていく。

「！」

「あ！！」

フェイトはこの状況に危機感を覚えたが、白哉はまたしてもフェイトの目の前で操られた対象の左腕の腱を刀の一振りで斬り捨て、動けなくした。

「・・・な・・・！！」

「・・・ひゅ～～～おっかねぇ。」

白哉の猛烈な行動力と尋常ならぬ冷徹さを間近で見ていたフェイトと田吾作は血塗れとなった白哉の腕を凝視。

その後、フェイトはかなり焦った態度で白哉に口を挟む。

「びゃ・・・白哉さん！？何てことを・・・！？」

「何度も言わせるな。兄の知ったことではない。」

フェイトの言葉を一切無視して、自分の体を平気で斬り捨てる白哉の鉄のような意思はある意味一護やユーノ以上のものであった。

「（自分の体を何とも思わず迷いなく斬り捨てるなんて真似・・・普通じゃ絶対できないよ。もしかしたらこの人・・・シグナム以上の剣士かも・・・いや、最初から比べる方が間違てるのかもしれない。シグナムだってこの人の行動を見れば間違いなく驚嘆するに決まってる。だって、この人の覚悟はユーノや一護さんのそれによく似てるから・・・）」

心の中で白哉に関してそのように推察するフェイト。

そして、そんな眼前の敵を徐に見つめながら分析をする田吾作。

「怜悧冷徹な対応・・・見事だよ。左足のみならず左手まで即座に捨てやがったか・・・支配権を奪われた対象を即座に敵と見做して斬り捨てる・・・それがたとえ自分の体であっても。何とも凄まじいね。自らに対して冷徹な迄の決断力。魔導師じゃこんな真似は出来ないよな?だげどその決断・・・俺には些か拙速とか軽断とかに映る。」

「・・・――――」

「白哉さん・・・・・・」

田吾作の言葉に顔色一つ変えない白哉と、それを見つめる事しかできないフェイト。

「お前の四肢で残るのは右手右足のみ。後ろのお嬢ちゃんも傷を癒

したとはいえ疲労困憊であることに変わりはない。パトリオットである俺に対して片手片足で挑むなんてことは、いかにも傲りが過ぎるぜ。そうは思はないか・・・ええ？」

すると、今まで田吾作の話を黙って聞いていた白哉であったが徐に閉ざしていた口を開き自分の考えを赤裸々に暴露する。

「・・・言った筈だ。」

「？」

「私と貴様ではその力の格は天と地程も隔たっている・・・難儀な話だ。左手も捨てた。左足も捨てた。それでも未だ貴様と対等には程遠い。」

白哉がそう言い切るのを聞くと、田吾作は眉間に皺を寄せて静かに怒りを募らせた。

「・・・は！残念だよ。てめぇはどうやら俺の思う以上に自分の力量を理解できていないようだな。そこまで言うなら、今度はチマチマと体を支配するのは止めて、全身ごと支配して後ろのお嬢ちゃんと戦わせてやるよ！」

田吾作はそう言うと、白哉の頭部目掛けて魔法を仕掛けようとしたがそれを見たフェイトはこれ以上の田吾作の行動を許さまいとバルディッシュを第三形態に変化させ一気に仕掛けることにした。

「そうはいかない！行くよ、バルディッシュ！」

〈Ｔｈｉｒｄ　ｆｏｒｍ〉

一護の斬月よりも一回り巨大な形となった刀剣を両手で持つフェイトを見ながら、田吾作は一度魔法を仕掛けるのをやめて、そのフェイトのそれに興味を抱く。

「随分とデカい形になったもんだな。一体それでどれだけの事が出来るかは知らぬが、試させてもらうぜ。」

〈Ｅａｇｌｅ　ｍｏｖｅ〉

イーグルムーブで加速した田吾作の攻撃に耐えながら、フェイトはザンバーを振るい田吾作に必死で抵抗する。

そんな追いつめられがちなフェイトを田吾作は容赦なく襲い掛かる。

「は！！」

「ちっ！バルディッシュ！！」

〈Ｐｒｏｔｅｃｔｉｏｎ〉

田吾作の鍵爪による攻撃を防御でしのぐフェイトは直ぐにソニックムーブで移動し、距離を取ってザンバーを大きく振るう。

「はあああ！！！！！」

しかし、田吾作もそんなフェイトの攻撃パターンを読んでそれを回避することなくザンバーの巨大な刃を両腕で抑え込んだ。

「ふん。甘いぜ！」

だが、フェイトはそんな田吾作のこの行動を好機と判断し、白哉に向かって合図を送る。

「白哉さん！！」

「何！？」

フェイトの言動に一瞬理解が遅れた田吾作。

すると、フェイトはその場から高速で離れると入れ替わりに田吾作の正面に回り込んだ白哉が田吾作に向けて手を向ける。

「その台詞、そっくりそのまま貴様に返してやるぞ、パトリオット。」

白哉は掌に霊力を溜めると、詠唱破棄で一気にそれを解放する。

「破道の三十三」

「！」

「『蒼火墜』」

白哉の手から放たれる蒼火墜は田吾作のみならず周囲の建物をも巻き込む凄まじい破壊力を秘めたものだった。

何とか直撃を回避した田吾作だったが、あまりに威力のある白哉の鬼道に驚愕していた。

「くッ！！！（詠唱破棄か！！言霊の詠唱を無視した中級鬼道で、この威力かよ！！）」

田吾作はその瞬間、ランブルフェザーを周囲に漂う爆風から何までを全て吹き飛ばそうとした。

〈Ｒａｍｂｌｅ　ｆｅａｔｈｅｒ〉

「ええい！！この程度の攻撃で、俺の動きを・・・止められると思ったのか！！！甘いんだよ！！」

ランブルフェザーを乱発させ、周りにあるものすべてを吹き飛ばした田吾作は爆風が晴れると同時に正面で待ち受けていた白哉に向かって一気に駈け出した。

「おおおおおおおお！！！！！！」

だが、その時白哉ばかりに目を向けていた田吾作の死角からフェイトがトライデントスマシャーを仕掛けてきたのだ。

〈Ｔｒｉｄｅｎｔ　Ｓｍａｓｈｅｒ〉

このタイミングでのフェイトの砲撃魔法攻撃を予想していなかった田吾作はまんまと策にはまってしまい、トライデントスマッシャーにクリーンヒットしてしまった。

「ぐっは！！！！」

攻撃をその身に受け、壁に激突した田吾作だったがふとその時何故自分の自慢の速力があのタイミングで発動出来なかったことに疑問

を抱いた。

「・・・な・・・何でだ・・・何で俺のスピードが・・・！？」

すると、そんな訝しげな態度の田吾作の質問に白哉が答える。

「・・・甘いのは貴様だ。私が鬼道を放ったのは目眩ましの為ではない。貴様の動きと魔力結合を乱すためだ。」

「――――――――――！」

「ルキアから報告は受けている。貴様のブラッド状態と呼ばれるものの欠点は、人並みはずれたその力の維持にある。魔導師としての常識を超えた形状と絶大な力故に、その力の全てを完全に維持するためには、一度は形状を元に戻す必要がある。」

その白哉の言葉を後ろの方で聞いていたフェイトも、納得した表情となって目を開いた。

「（そっか・・・白哉さん、そこまで考えて・・・・・・やっぱり、この人は凄い！）」

「パトリオット。貴様の誤りは、私の前でそれを長く使い過ぎた事だ。」

白哉から突き付けられる冷徹なまでに鋭い事実を聞いて、田吾作も一度声を詰まらせたがそれでもそんな田吾作を突き動かす執念の方が強く、再び立ち上がってきた。

「く・・・それがどうした？こっちは、そんなこと分かった上で戦

ってんだよ・・・幸い俺の魔力の消費は他の連中より遅くてな・・・スピードひとつ捕えたぐらいじゃ、何も変らりゃしねえんだよ！！」

田吾作は警告を受けているにもかかわらず白哉に向かって相も変わらず正面からのこっしん攻撃を続けた。

「バルディッシュ！捕まえるよ！！」

〈Ｐｈｏｔｏｎ　Ｌａｎｃｅｒ〉

フェイトはソニックムーブで白哉の正面に回り込むと、至近距離からのフォトンランサーを飛んでくる田吾作に仕掛け、受けた田吾作は体中に奔る電流に悲鳴を上げる。

「ぐあああああ！！！！」

「――――――――縛道の六十一、六杖光牢。」

それをすかさず白哉が続けざまに得意の六杖光牢で田吾作の動きを封じる。

「（！！――――――――しまった・・・！）」

「・・・素直に抵抗を止めていればいいものを。まだ私を倒せる気でいると言う訳か・・・？何とも愚かな事を・・・」

「くっ・・・！！」

白哉はフェイトと共に少し距離を取ると、徐に右手に持っていた斬魄刀の刀身を地面に向ける。

「・・・まさか貴様・・・失念している訳ではあるまいな・・・貴様にブラッド状態という切り札があるように、私には・・・・・・・“卍解”という切り札があるという事を。」

「！！！」

「！そっか！！」

白哉の言葉を聞いて初めてそのことに気づいた田吾作と今の今まで本当に忘れていたフェイトは二人揃って目を開き、白哉の手から放たれ地面に吸い込まれていく斬魄刀を凝視する。

「――――――卍解。」

すると、解放と共に手から放たれたそれは、吸い込まれると同時に白哉の足元から巨大な千本の刀身と化して立ち昇る。

直後それらが一斉に舞い散り、始解時を遙かに上回る数の刃と化し、桜色の濁流とも捉えられるその無数の刃が縦横無尽に田吾作の周囲に現れる。

「『千本桜景厳（せんぼんざくらかげよし）』」

「！これは・・・！？」

初めて見る白哉の想像を絶する卍解の姿に言葉を無くすフェイトと、同じ気持ちである田吾作は更にこの未曾有の力に戦き、焦燥を滲み出していた。

そして、数億の桜の花弁は田吾作の全方位をその花弁で覆い隠し外

へと出られなくする。

「くそ・・・・・・・・・・！こんなもの！！！」

そう言うと、田吾作は鬼道を破って全神経と魔力を翼に集めて数億に及ぶその花弁に向かってランブルフェザーを発動させる。

「俺の全ての両翼の羽で撃ち落してくれるは！！」

「止めておけ。」

「！？」

その時、桜の花弁の外から白哉の姿を確認した田吾作に向かって術者である白哉はやはり顔色一つ変えずに覆すことの出来ない現実を突きつける。

「・・・そんな翼から放たれる羽の一つ一つで私の卍解を如何にかできると思っているのか？貴様の背中に生えている六つの両翼一つに生えている羽の数がおおよそ５０００枚と考えても、その高が３０００の羽で――――――天を覆う億の刃を全て撃ち落せると言うのか？」

「・・・・・・！！・・・・・・」

「・・・良い言葉を教えてやる。この状況において、“所詮何も出来ぬ。抵抗は無意味だ”と言う意味を持つ言葉を・・・何であると思う？『無駄』と言うのだ。」

「く・・・くそおおおおおお！！！！！！」

最早自暴自棄に陥った冷静さを欠いた田吾作は兎に角、自分の持ちうる技の全てを使って白哉の千本桜を振り払おうとする。

「俺の意のままに動きやがれ！！！！！！！はあああああああああああああ！！！！！！俺の意のままに！！！！！！！！！！！！！」

マインドコントロール、パーツコントロール、ランブルフェザーの乱発、ウィングストームの併用、だがどれを使おうが目の前の数億の花弁を如何にかできるほど卍解とは優しくはないのだ。

そして、白哉も頃合いだと判断してのか田吾作を封じ込めた状態で一気に勝負を仕掛ける。

「吭景・千本桜景厳（ごうけい・せんぼんざくらかげよし）」

すると、白哉の声に従い千本桜は田吾作に向かってその数億の数に物を言わせて攻撃を仕掛けていったのだ。

「な・・・何だと・・・・！？」

「こ・・・これは・・・・！！」

「刃の吭に飲まれて消えろ。」

危険だと判断したフェイトが白哉と共に空中に回避した途端だった。

田吾作を覆っていた千本桜は爆発を起こすかのように勢いよく広がり、周囲の建物を巻き込みながら田吾作を飲み込んでいった。

この恋次や一護とはまた違う歴戦の隊長格である白哉の卍解の能力を間近で見ていたフェイトは徐に尋ねた。

「あ・・・あの・・・白哉さん・・・今のは・・・・!?」

「吭景・千本桜景厳。千本桜景厳の億の刃、その全てを球形に敵を覆い全方位から斬殺する・・・」

そんな白哉の卍解の能力の高さを思い知ったフェイトは、これが恋次が日頃から超えたいと望む死神の姿なのかと驚嘆する。

「（凄い・・・これが恋次さんが超えたいと願い続ける人の実力・・・目で追えなかった・・・隊長格でも、ここまで力の差があるなんて・・・・）」

「・・・しぶといな。」

「え!?」

白哉の言葉に疑問を抱いたフェイトだったが、二人が晴れていく花弁の中を覗いてみるとそこにはブラッド状態が解かれ直撃を食らい全身血塗れになっているにも関わらず気絶もしていない田吾作がそこにはあったのだ。

「はっ、はっ、はっ、はっ、はっ・・・・・・・・・・・・・」

この田吾作の生命力の高さには流石のフェイトも目を疑った。

それに対して田吾作は白哉に目を向けるとまだ戦う姿勢を見せてエ

アラザーを取り出す。

「おのれ・・・おのれ・・・おのれ・・・」

だが、その瞬間にフェイトがバインドを発動させて田吾作の体を拘束する。

〈Ｌｉｇｈｔｎｉｎｇ　ｂｉｎｄ〉

「！」

身体を拘束され、完全に身動きの取れなくなった田吾作にフェイトと白哉が近づく。

「止めときなさい。もう君に戦う力は残っていない。大人しく、投降を。」

「はっ・・・！誰が管理局の魔導師に捕まるかよ・・・銀太郎を見捨てて・・・捕まって生き永らえるくらいなら、銀太郎の心の中で・・・生き続けるほうがましだ！！」

すると、田吾作はエアラザーを部分解放するとそのとがった先端を自身の心臓に向けて突き刺したのだった。

「「！！」」

「くっは！！」

田吾作の思わぬ行動に二人は大いに驚き、田吾作は心臓にエアラザーを突き刺すとそのまま意識を朦朧とさせながら静かに後ろへと倒

れこんだ。

「な・・・何てことを!?」

フェイトは直ぐに倒れた田吾作の元へ駆け寄った。

しかし、田吾作は既に助かるような状態ではなかったのだ。

白哉はそんな田吾作の行動を見て、険しい表情でこう呟く。

「・・・愚かな。」

フェイトは既に虫の息となり始めた田吾作を抱きかかえながら、大粒の涙を流し田吾作のこの行動を諌める。

「どうして!?どうしてこんなことを!?君が死んだら、銀太郎君だって悲しむのに!?どうして・・・どうして命を粗末にするような真似をするのさ!!」

生まれ方は特殊であっても、一人の人間として生を受けたフェイトにとってこのような行動は何よりも許しがたいものだったが、生来生まれてからずっと悪魔や魔物と罵られ満足に生きることも死ぬこともできない、元々がバウントである田吾作の考えは違っていた。

「・・・バカヤロー・・・自分の信念を貫いて死ねるなら本望だろう・・・俺は銀太郎と一緒に居れて嬉しかった・・・あいつが俺に居場所を与えてくれたから・・・俺はやっと人間らしく生きていけた・・・あいつが笑いかけてくれたから・・・俺も笑うことが出来たんだ。だから・・・最後ぐらい、俺が我儘を言っても・・・許してくれるさ・・・銀太郎は、そう言う男さ・・・」

「違う！！！君が死んでも・・・それは解決にならない！！！どうして、生きようとすることを望まないの！？どうして・・・死んで終わらせようとするのさ！！！」

「・・・ふん・・・俺達は生まれながらにして死んだも同然だった・・・ただ主に道具のように扱われ・・・変わり栄えの無い日常を年も取らずに無常に過ごしていくだけだった・・・そして、その過程で主が死ねば・・・俺達も自然消滅する・・・肉体の死など何度味わったことか・・・しかし、自らの意志で命を絶つ或いは敵に斃されるとその転生機能も破棄されることになる。だけどな・・・俺はいつまでも生き続けるさ・・・肉体は滅びど、心はずっと銀太郎とともに・・・・・・」

と、まだ何か言いたげな表情を浮かべた田吾作だったが体が光を発すると同時に田吾作は砂となって衣服だけを残してフェイト達の前から姿を消した。

「・・・くっ！！」

「・・・・・・――――――」

田吾作の残した衣類を顔に当てながら、一人の命も救えなかったことに対する後悔を胸に抱きながら大いに涙を流し、声を殺すフェイト。

そのフェイトの傍らで黙して語らず静かに刀を収める白哉。

田吾作が消滅したことで、各地でマインドコントロールにより操られていた死神達の同士討ちがなくなり、操られた死神は全員意識を

取り戻すと直ぐに気絶をしてしまった。

死神達と戦闘を繰り広げていた白鳥やスバル達、恋次達はこの事に驚く。

「何だ!?」

「どうなっているの!?」

「吉良・・・!?」

「急にパトリオットの魔力反応が・・・消えた!?」

同じように、四番隊に搬送された他の死神達もキャロの方も術が解けたことで顔色が元に戻ったのだ。

四番隊第三席の伊江村や、キャロの治療を行っていた卯ノ花も安堵のため息をつく。

「何と!!これは一体どういうことでしょうか!?」

「誰かが、術者を倒したようですね。もう大丈夫です。」

「「「「「!」」」」」

田吾作が自己消滅を果たしたという事実は、直ぐに他のパトリオットや銀太郎の元にも届き全員は険しい表情を浮かべる。

「・・・田吾作の魄動が・・・消えた!?」

「あいつ・・・自らを犠牲に・・・」

銀太郎自身は幼少のころより身の回りを世話してもらってきたこともあり、この事実を知った時には誰よりもショックが大きかったそうだ。

銀太郎は懐から全員で撮った家族写真が収められたロケットを取り出すと、その上に自分の目から零れる涙を落とす。

「田吾作・・・ありがとう・・・お前はよく頑張ったよ・・・！！くっ・・・！！」

そして、戦闘を続けながら銀太郎を目指していた白鴎も何だかんだといいながら田吾作の死には動揺を隠せなかった。

「田吾作。任せておけよ・・・・・・後は俺達でどうにかするからよ！」

白鴎はそう言うとブラッドカートリッジをロードすると一気に強行突破を果たそうとしてさらに前へ前へと突き進んでいくのであった。

その一方で、十番隊副隊長松本乱菊と共にパトリオットの追跡に従事していたシグナム・エリオ・アギトの三人も田吾作の消失をセンサーで確認する。

「これは・・・パトリオットの誰かが消えたようですね・・・」

「場所はテスタロッサ達のところか・・・捕縛は叶わなかったらしい。」

「となると、敵は自ら命を絶ったってことね・・・・・・」

と、その時・・・・・アギトが自分たちの近くから感じる奇妙な気配を察知し、全員に伝える。

「！三人とも、誰かいるぞ！？」

アギトの言葉を聞いた三人が慎重に気配を発する者の近くへ移動してみると、そこにいたのは自分たちが探し求めるパトリオットの一人、東海林であった。

「あれは・・・！？」

「パトリオットですね。」

「何・・・パトリオットって・・・ほんと子供じゃないの？」

乱菊は半信半疑で報告書の内容に目を通していたが、実際目の前で本物のパトリオットの姿を目にした時には大いに驚いた。

「はい。しかし、相手はあの阿散井ですら手こずるほどの相手です。用心はしておいたほうがいいです。」

「そうね。ここは慎重にね・・・なるべく、気配は消して。」

「「「はい！」」」

松本の指示に従い、霊圧と魔力を抑えて東海林に近づこうとした四人だったが、そのとき東海林は業とらしく咳払いをすると直ぐにこう口にしてきた。

「・・・えへん！！気配を隠したって無駄だぜ。お前達の動きなんか、全部お見通しなんだからな。」

「「「「！」」」」

「大人しく、姿見せろよ。こそこそする奴が一番嫌いなんだよ俺は・・・」

東海林の言葉を聞いて、最早隠れても仕方がないと判断した四人は言われた通りにその姿を東海林の前に見せた。

東海林は姿を見せた四人を見ると鼻で笑いながら更に続ける。

「ふん。“女が四人”か・・・俺も随分モテル男になったか？」

「なっ！？女・・・！！！」

エリオは東海林のあまりの言葉にショックを隠し切れなかったのか、そのままトラウマスイッチの入ったユーノの如くその場にしゃがみ込んでしまった。

「あら？やっぱりショックだったのね。」

エリオの事を傍らで心配する乱菊。

一方でシグナムはレバンティンを鞘から抜くと強い口調で東海林に投降を求めた。

「悪いことは言わぬ・・・大人しく、我々に身柄を投降することだ

な。貴様らの仲間もうち一人は消えてしまった。これ以上の無益な争いなど、何も生まぬぞ。」

「確かに。田吾作は消えちまった・・・だけど、俺達だって歩みを止める訳にもいかない。あんたらが俺達の歩みの邪魔をするなら、俺はそれを飛び越えて歩み続けるだけさ。銀太郎を真のダイシーの後継者にするためならな！」

相対してしまった第二のパトリオット東海林棗と、機動六課のシグナム達ライトニング分隊と十番隊副隊長松本。

彼が一体どんな戦いを繰り広げるのか・・・――――

そして、シグナム達はこの男を・・・東海林を説得することが出来るのであろうか！？

第二の戦いの行方は次回へ！

白哉出陣！雷光と奏でる桜の舞（後書き）

教えて、ユーノ先生！

ユ「今日は、田吾作のお話だ♪」

ユ「パトリオットの中でバックアップを担当し、その能力は極めて高い。」

ユ「デバイスの名前はエアラザー。ブラッド状態は大鷲をかたどったものとなり、得意技はリアル・ファントム。フェイク・シルエットのリベル式で、実体を持つ分身体を作り出して敵を翻弄するんだ♪」

田「俺のリアル・ファントムに勝てるものなんか、この世にいねえよ。」

すると、そんな田吾作の傲慢な態度を見て白哉が瞬歩で背後に回り・・・

白「それは傲りだと言った筈だ。」

田「何の！」

そんな白哉に対抗すべく田吾作もリアル・ファントムで背後に回るが、白哉も負けじと瞬歩で背後に回る。

これを二人は延々繰り返し、いつの間にか彼方へと消えていく。

ユ「お～い。あんたら何処まで行くだい？」

魔導師図鑑ハイパー！

田吾作との戦いを終えた直後、白哉の気難しさにフェイトはこれまでに無いぐらい困惑していた。

フェ「（困ったな・・・どうしたら素直に言うこと聞いてくれるかな？あんな怪我じゃ流石にマズイし、かと言って素直に言うこと聞いてくれるような人でもないし・・・もう・・・どうして腕とか平気で斬っちゃうのかな！？）」

色々と思考を張り巡らせた結果、フェイトは一つの結論に達する。

フェ「（こうなったら、力ずくでも四番隊のほうに護送しよう！ソニックフォームで近付けば、流石に気付かれないはず。）」

そう思い、フェイトがソニックフォームでの高速移動を行おうとした矢先・・・・・白哉に後ろを取られてしまう。

フェ「え！？」

白「その程度の速力で、私を捕らえることなど永劫敵わぬ。」

冷徹な事実を突きつけられた瞬間、フェイトは肩を落として落胆する。

フェ「（ダメ・・・・・・この人には敵わない・・・・・・）」

痛みを力に、東海林衆カウントダウン　（前書き）

東「長いこと生きてきたけど、俺はこれほどまでに穏やかな時間を過ごした事は無かった。歴代のダイシー達は皆高圧的な姿勢で俺達を物みたい扱い、人権なんてものは考えてなかった。だけど、銀太郎はそんな俺達を本当の家族と同じぐらいの待遇で迎え入れてくれた。」

シ「同じ想いを持った者同士が対立することはよくあることだが、私も騎士としての誇りの賭けてこの者の目を覚まさてやろう。」

ユ「ユーノ・スクライア外伝　パトリオット篇・・・・・・始まります。」

痛みを力に、東海林棗カウントダウン

＞ｉ１８７５８―７０９＜

ユーノ・スクライア外伝・・・前回の三つの出来事。

一つ：フェイトと白哉が田吾作を倒すために、共闘をする。

二つ：千本桜の攻撃で重傷を負った田吾作は、自らその命を絶つ。

そして、三つ：シグナム達がパトリオット、東海林棗と遭遇する。

東「・・・えへん!!気配を隠したって無駄だぜ。お前達の動きなんか、全部お見通しなんだからな。」

全「「「「!」」」」

東「大人しく、姿見せろよ。こそこそする奴が一番嫌いなんだよ俺は・・・」

四人は東海林の言葉を聞くと、素直に姿を暴露する。

東「ふん。女が四人か・・・俺も随分モテル男になったか?」

エ「なっ!?女・・・!!!」

意外な一言にエリロ・モンディエルは意気消沈。

乱「あら?やっぱりショックだったのね。」

シ「大人しく、我々に身柄を投降することだな。貴様らの仲間も内一人は消えてしまった。これ以上の無益な争いなど、何も生まぬ。」

東「確かに。田吾作は消えちまった・・・だけど、歩みを止める訳にもいかない。あんたらが邪魔をするなら、俺はそれを飛び越えて歩み続けるだけさ。銀太郎を真のダイシーの後継者にするためならな！」

緊迫した雰囲気を漂わせながら武器を手に取って睨みあう東海林と

シグナム達。

そんな重苦しい状況の中、東海林は不敵な笑みを浮かべる。

「へへ。どうやら俺は本当に女にもてる男のようだ。目移りするな・・・こうも美女が多いと・・・」

すると、何気ない気持ちでこの場の指揮を日番谷から任されている松本は徐にこう尋ねる。

「あんたが、パトリオットなんだね？」

「ああ。パトリオット、ダイシーを守護する六人の一人、東海林棗だ。東の海に林と書いて東海林！以後、お見知りおきを。金髪の姉ちゃん。」

「ご丁寧にどうも。護廷十三隊十番隊副隊長、松本乱菊よ」

「乱菊か・・・久々に楽しめそうだ。ライノックス！」

〈Ｂｌｏｏｄ　ｃａｒｔｒｉｄｇｅ　ｌｏａｄ〉

東海林は不敵な笑みを浮かべながら、デバイス「ライノックス」を取り出しブラッドカートリッジを発動させる。

発動と同時に凄まじい勢いで東海林の魔力が解放され、初めてその光景を見た松本はこの尋常ならぬ魔力に思わず困惑する。

「！？何・・・！？」

「ブラッドカートリッジを使うんですよ！」

「それって、恋次から報告があった・・・規格外な力を解放するっていう・・・！？」

「はい。奴とはあまり戦闘になったことがないのですが・・・油断はしないほうがいいです。」

「ええ。」

シグナム達からの助言をもらい、乱菊はいつもの軽い感じの態度を戦闘のそれに切り替え、腰に刺していた自身の斬魄刀に手をやり、徐にそれを抜刀する。

やがて、魔力の渦が弱まっていきブラッドカートリッジを解放した東海林の姿が徐に現れてきた。

その出てきた東海林の姿を見た一同は全員目を見開いた。

中から出てきたのは、トリケラトプスに酷似した今までのそれとはまた違い、細部により凶暴で力強いイメージを醸し出す角や棘が全身から生えていたのだ。

乱菊はそんな東海林の変貌ぶりを見て、徐に思ったことを口にする。

「怪物・・・！？」

「あれがブラッド状態って呼ばれるものです。本来なら、いかなる魔法も発動出来なくなるんですが、僕らにはユーノ先生の作ってくれたこれがあります！」

エリオはそう言いながら、ユーノから渡された対リベル式の装着具を見せ徐にストラーダに装着していく。

松本は四年前に、野望用と銘打って一護と共にこの世界にやって来たユーノとはふとしたことが気かっけで知っており、ユーノが淫獣フェレットもどきと罵られていることや、嘗て管理局無限書庫司書長を務めていた天才考古学者だということも認識していたため、納得した様子を見せる。

「なるほどね。さて、どうでるかしら・・・」

松本を始め、シグナム達は己の武器を握り直して目の前の異形の姿と化した東海林と相対するが、東海林はそんな全員を気に留めながら解放した自分の力をテストするために手を握っては開きを繰り返し、そして何気なく真横にある壁に向かって拳を軽く叩きつけた。

「よっこいしょっと!」

その瞬間、壁はたやすく崩落し最早原形をとどめぬほどにまで粉砕する。

間近でこの凄まじい東海林の力を見ていた松本とシグナム達は度肝を抜いた。

「「「「!」」」」

そして、そんな全員を見ると益々調子に乗ったのか東海林は今度は弾みをつけて空へと飛び上がりそのまま重量に従って降りてくる。

その途端地面は抉れかえり、凄まじい地響きが四人の体へとすたわってくる。

「な・・・・・・！？」

「ちょっと、一体何の冗談なのよ！？」

常識外れ且つ規格外な力で四人を挑発する東海林に、松本は思わず声を上げた。

「どうだ、ちったあ驚いたか？俺のライノックスのパワーと貫通能力は瀬間子のそれとはまた訳が違うんだぜ。少しでも気を抜けば、お陀仏だと思ってくれてもいい。」

「ふん。随分と僭越な言葉を吐く。」

「君は僕たちが止める！」

「シグナム。あんた方の力は恋次と吉良からよく聞いてるわ。何としてもここで食い止めるよ。」

「はい。」

「よっし！行くぜ、旦那！！」

「ああ。ユニゾン・・・イン！」

アギトは気合を入れ直すと、自分のロードでもありよき理解者のシグナムとユニゾンを果たしてシグナムと自分の精神をリンクさせ、魔力を上昇させる。

「行くよ、ストラーダ！」

〈Ｙｅａｈ！〉

四人は臨戦態勢となって構えると、異形の姿と化した東海林と正面から向き合った。

そんな四人を見ると、東海林もつい興奮が沸き起こってしまう。

「準備はいいようだな？」

「ええ。さ、私も久々に本気でいかしてもらうかしらね。」

乱菊はそう口にすると、斬魄刀に軽く手を添えてから解号を唱える。

「唸れ、『灰猫（はいねこ）』！」

その瞬間、刀身が瞬く間に灰と化して東海林の周囲を覆い隠した。

東海林を始め、乱菊と行動を共にしていたシグナム達もこれには目を疑った。

「！」

「（あれが、乱菊さんの斬魄刀解放！？）」

「何なのだ、この灰は？」

死神と対峙し、この尸魂界に来てからは戦闘もそれなりにこなして

きた東海林であったが隊長格レベルの死神と戦うのはこれが初めてであり、その隊長格が解放した斬魄刀の能力にそれなりに戸惑いを見せていた。

「ぐっ・・・ッ!?何だよこりゃ・・・!?」

と、その時。

気づかぬうちに体の一部に付着した灰が一瞬にして東海林の体に切り傷を作っていった。

突然体に奔った痛みに苦い表情を浮かべ、その箇所を手で押さえる東海林。

「ぐ!切り傷が・・・いつの間に!?」

困惑する東海林に向かって、灰の外側から乱菊が能力の詳細な説明をする。

「それが『灰猫』の能力よ。刀身を灰と化し、その灰の降りかかった場所を柄の一振りで斬り刻む。あんたの周りにあるその灰の全てがあたしの剣だと思ってくれていいわ。」

「おいおい、マジかよ!?」

「逃げ場はない」

「!」

乱菊はそう言いながら手を使って灰猫の動きを意のままにコントロ

ールし、東海林を包んでいた灰の動きを速めて、竜巻の中に閉じ込めるかのように封じ込めた。

「気を付けて。高速回転するその灰に触れた先から刻んでいくわよ。」

乱菊の灰猫の能力によって、東海林を封じ込めることに成功すると傍らで見ていたシグナムやエリオも大いに歓喜した。

「よし、これで捕えたも同然です！」

「やりましたね。」

だが、その途端事態は急変する。

「ふん。甘いぜ、乱菊。」

「！」

〈Ｒｏｕｂｌｅ　ｓｔｒｅａｍ〉

東海林は灰猫に封じ込められていながら一切焦る様子など見せず、自身の黒い魔力を全身から生えている角に集束させ、破壊力抜群の直射砲撃を放った。

「食らえ！！！！！！」

一斉に角の先から放たれる漆黒の砲撃魔法、ルーブルストリームを食らった灰猫は容易くその結界を破壊されてしまい、東海林はほとんど無傷の状態で不敵な笑みを浮かべて四人の前に現れた。

「何！？」

「ウソだろ！」

東海林の能力に思わず目を疑い、顔を歪ませるシグナム達と自身の技をこのようにして破ってくる東海林を見て額に汗を流しつつ、若干笑みすら浮かべる松本。

「・・・あらあら・・・どうやら本当に見かけ倒しじゃなさそうね。」

「そう言うことだ。ライノックス、ブラックインパルス！」

〈Ｂｌａｃｋ　ｉｍｐｕｌｓｅ〉

「ほあああああああ！！！！！！！！！」

東海林は松本目掛けて手の甲に圧縮した自身の魔力を直接たたきつけるだけじゃなく、その衝撃を間接的に相手に与えるブラックインパルスを発動。

松本は地面から伝わってきたその攻撃を受けると、衝撃で空へと吹き飛ばされる。

「松本さん！！」

「く・・・『灰猫』ッ！！」

松本は灰猫を操り、先ほど同様東海林の周囲を囲みに行くが流石に

同じ手が二度も通じる訳はなく、直ぐに跳ね返される。

「ははははは！！！ライノックスの精度を舐めるな！！」

〈Ａｕｒａ　ｈｉｔ〉

東海林の全身から発せられる魔力オーラによって、灰猫は東海林に傷一つ負わせることなく全て周囲に散らばってしまい、松本は苦悶の表情となった。

東海林はそのまま空中の松本を掴みかかろうとしたが、その時咄嗟に東海林の死角からシグナムがレバンティンの一撃を仕掛けてきた。

「！？」

「（紫電一閃）！」

二人の魔力が合わさった烈火の炎をその身に受けた瞬間、東海林の体に切り傷と同時に火傷も発生、更にそこに追い打ちをかけてきたエリオの攻撃。

「スピアトルネード！！」

浦太郎より伝授されたスピアトルネードを自分の電気変換資質を駆使して改良を重ねたエリオオリジナルの技が東海林にダメージを与え、全身に奔る強烈な痛みに思わず東海林は後ろに倒れこんだ。

「ぐあああああ！！！！！！！」

東海林が倒れた瞬間巻き起こる多量の砂埃。

松本は咄嗟に自分を助けてくれたシグナムとエリオにお礼の言葉をかける。

「助かったわ。ありがとう。」

「いえ。」

「それより、効果のほどは？」

と、エリオがシグナムとツートップで仕掛けた技の効力がどれほどのものなのかを確かめるため砂埃の中を覗くと、その中から東海林が徐に立ち上がってこう口にしてきた。

「ふふ・・・いい一撃だが、痛いぐらいじゃ意味はないぜ。」

確かに東海林の体には二人の攻撃で受けた傷が痛々しく残っていたが、東海林そのものはその状態でも普通に会話をしてきたため、倒せたことにはなっていない。

「ち・・・やはりこの程度では温いか・・・」

「全く、常識外れにも程があるわね・・・ん？」

と、何気なく東海林の体を見ていた時だった。

松本は東海林の体に先ほどまでなかったある変化を発見した。

「どうしたんですか？」

「あいつ・・・あの子の体の色が変わってる？いや、色もそうだけど・・・・・“魔力値”って奴も上昇している・・・――――！？」

「「「「（え）！？」」」」

松本の言葉を聞いたシグナム達も改めて東海林の体を見てみると、松本の言うとおり体の色――――――正確には両肩に付けられた立派な二本の角に赤いゲージのようなものが溜まっており、それに伴った魔力も先ほど以上に上昇していることが窺われた。

すると、自分の変化に気づいた四人に東海林は次のように語り出す。

「気が付いたようだな。ライノックスは単純に物理破壊能力と貫通能力に秀でたデバイスじゃないんだ。受けた痛みをカウンターとして溜め、その溜めた痛みを最大限にして跳ね返す。俺はパトリオットの六人の中でその役を引き受けたトリックスター。俺の両肩の角色が全て紅く染め上った時、ダメージカウンターのゲージは最大となり、俺のその溜まった魔力と共にこの周辺はもろに吹き飛ぶ！」

「「「「な！！」」」」

その話を耳にした四人は、思わず東海林が言っていた最悪の結果を想像してしまい全身に凍えるような寒気が奔った。

「さっきのダメージはすべて、俺の体の中に吸収された。攻撃をするのは構わないが、その代わりにこの周囲のものはお前達も含めて吹き飛ぶ！それでもいいなら来いよ。」

「く・・・・・！何と厄介なことを・・・！！」

「どうしますか！？」

「受けたダメージを吸収して、自らの起爆剤として使うなんて・・・あんた正気！？」

松本は難しい顔を浮かべながら東海林にそう尋ねるが、東海林の覚悟と決意は一切変わる事は無かった。

「正気も何も、それが俺の能力なんだよ。長年、ダイシーを守るために使われてきたこいつだが、俺はずっと心の中でこんな結末で良かったのかと疑問に思ってた。だけど、今の俺には自信を持って誇れるボスがいる。俺はそいつの幸せの為なら何だってする！たとえ世界の全てが敵に回ったとして、俺達はずっと銀太郎の味方なんだよ！！！！」

その決意の言葉を口にした途端、東海林の魔力が更に上昇を始めその場にいたシグナム達が戦くほどのものとなった。

「う・・・何て魔力の上昇・・・！こいつ、本気の覚悟でここに来てるわ・・・」

「捕縛が第一優先となっているが、どうやらそれは容易には出来ぬことがいまここではっきりと分かった。」

「（倒すしかないのか、騎士として・・・）」

「覚悟を決めましょう。」

シグナム達は当初の目的であった捕縛という命令をこの状況はかなり困難なものであると言うことを悟り、如何にかして東海林を倒す

方法を思案し始めるが下手に手を加えて最悪の自他に発展しては意味がない。

「だけど、この状況で倒すってことは・・・つまり・・・」

エリオがそう言うと、その続きを攻撃準備の整った東海林が高らかに口にする。

「自滅への片道切符だ！」

〈Ｉｎｖｉｓｉｂｌｅ　ｃｒｕｓｈｅｒ〉

東海林はその瞬間、自分の姿を消して松本たちに奇襲を仕掛けようとする。

突然姿を消した東海林に驚きを顔に出しながら、固まって周囲を警戒する四人。

「消えた・・・！？」

「（くせ！あんの野郎、何処に隠れやがった・・・！？）」

と、その時エリオが持っていたパトリオットセンサーが反応を示し、エリオは咄嗟に大声を上げて全員に飛び上がるよう指示を出す。

「みなさん、飛んでください！」

「「「！」」」

三人は言われた通りその場から頭上高くまで飛び上がる。

その瞬間、四人が立っていた場所から東海林が姿を現しその四人よりも高く空へと舞い上がっていった。

「ほあああああああああああ！！！！！！！！！」

仕掛けてきた東海林を確認し、シグナムはレバンティンを鞘に納めてアギトの炎熱加速で強化する。

「アギト、炎熱加速！」

「（おうよ！！）」

カートリッジをロードし、更にユニゾンによる強化で煌々とした炎を刃に纏ったレバンティンをシグナムは蛇腹のように操作する。

「飛竜・・・一閃！！」

東海林はそのシグナム達の攻撃をまともに受けると、苦い顔を浮かべる。

「く・・・だが、これでまたゲージが溜まる！！」

そう言うと、両肩に角のゲージが少しずつ溜まっていく。

そして、ダメージを受けたことで上昇した魔力を使ったルーブルストリームをシグナムに向けて一斉斉射する。

「ルーブルストリーム！」

〈Ｒｏｕｂｌｅ　ｓｔｒｅａｍ〉

全身の角から自分に向けられたルーブルストリームを食らった瞬間、シグナムとアギトの二人はあまりの威力に悲鳴を上げて撃墜していく。

「（ぐあああああああああああ！！！！！）」

「シグナム副隊長！！」

地面に墜落した満身創痍のシグナム達を空で見ながら、松本は眉間に皺をよせエリオに自分の援護を要求する。

「く！エリオ、助けたかったら私の援護に入って！！」

「はい！」

松本は灰猫を解放しない状態で切っ先を真っ直ぐ東海林へと向けて東海林の体に斬りかかる。

「とあああああああああああ！！！！！」

松本の攻撃を躱すどことか待ち構えている東海林は何処か気味が悪かったが、それをさせまいと松本はその状態から瞬歩で移動し、鬼道で東海林の動きを封じる。

「縛道の三十『嘴突三閃』！」

目の前に巨大な3つの嘴を出現させ、敵の両腕と腰部分を壁に固定させるこの縛道に捕えられた東海林は思惑が外れてしまい、苦いか

を浮かべながら拘束を解こうとする。

「ぐっ！こんなもん！」

「今よ！！」

松本はそう言うと、背後で待ち構えていたエリオに攻撃を促す。

「ストラーダ！！」

〈Ｅｘｐｌｏｓｉｏｎ〉

カートリッジをロードしたエリオは、先端に電撃を纏わせながら渾身の一撃を拘束されて動けない東海林に向かって仕掛けていった。

「ルフトメッサー！！」

だが、その時拘束を解いた東海林はエリオの攻撃を受ける直前で自分の姿を隠してしまい、エリオは自分の攻撃に手ごたえを感じなかった。

「手応えがない！？」

すると、満身創痍となって倒れていたシグナムがその状態で立ち上がった時、ただならぬ気配を感じてエリオに向けて叫んだ。

「後ろだ！！」

「な！！」

東海林はブラックインパルスを発動させながら鷹のように鋭い目線でエリオの背後から攻撃を仕掛けに来る。

「しまった・・・！！くそ！！抜けない！！」

東海林の攻撃に備えようとしたエリオだが、勢いよく地面に突き刺さったストラーダが思いのほか抜けず絶体絶命の状態に追い込まれていた。

「チリとなりやがれ！！！」

東海林は容赦のない目でそう言うと、ブラックインパルスをエリオに向けて振り下ろした。

「エリオ！！！」

「（お！？待て、旦那！！）」

エリオを助け出そうとしたシグナムだったが、アギトがある事に気づきシグナムの行動を止めにかかった。

攻撃が当たる寸前、エリオは松本の瞬歩によって難を脱し窮地に一生を得たのだった。

「松本殿・・・」

エリオは安心したのか溜息を吐き、松本も心配した様子でエリオに尋ねる。

「大丈夫！？」

「はい。ありがとうございます！」

「いいこね！お姉さん、ちょっと嬉しいぞ！！」

真摯でかつ見た目もいい年頃のエリオに好感を抱いたのか、松本はその場の状況を忘れて自分の豊満な胸の中にエリオを押しつけた。

「わあああ！！！！ちょ、松本さん！！」

ユーノと同じか女性のそのような大胆な行動に未だに慣れていないエリオは松本の胸の中で顔を始め全身を赤く染め上げながら激しく狼狽していた。

その様子を傍で見ていたシグナムとアギトはそんなエリオを鼻で笑っていた。

「（照れてるな・・・完全に・・・）」

「そうだな・・・・・・」

と、その時東海林が四人の方へと振り返ると不敵な笑みを浮かべながらこう語りかけてきた。

「ふん。命拾いしたな。」

「「「「く・・・・・・」」」」

「良いことを教えてやるよ。あんたらの今までの攻撃を受けたことで、俺のダメージカウンターのゲージは八十パーセントぐらいのと

ころまで溜まった。あと二十パーセントだ！あと二十パーセントの攻撃を加えれば、俺のカウンターのゲージは最大となり一瞬のうちに雌雄は決する。俺と共にお前達は木端微塵に吹き飛ぶのさ。ふふ・・・はははははははは！！！！！！」

「自分の命すらも捧げる覚悟って訳ね・・・・・大した子供ね。」

松本は改めて自分の命をもボスである銀太郎に捧げようとするこの東海林棗の覚悟の大きさに驚きを見せたそうだ。

「ライノックスの能力は今お前達に見せたもので判るとおり、結界を破壊するほどの強力な一撃を敵に加え、勝負をつけるのが本懐。だが、その上俺には固有スキルに自分の体を周囲の空間に溶け込ませる能力を秘めているんだ。」

「だから、急に姿を消せたって訳か・・・」

「ふふ・・・あんたらはどうやらそう簡単には当たってくれないから長丁場になってるが・・・・・まさか忘れたわけじゃあるまい。」

「（あ？何を言ってるんだよ！？）」

アギトは東海林の不審な言動を耳にすると、思わず聞き返した。

「俺達パトリオットの起源は魂魄を吸って永遠を生きるバウント。と言うことはだな・・・・・」

すると、松本はその東海林の言葉を聞いた瞬間十年前に体験したことを思い出し目を見開いて驚愕した。

「は！まさか、あんた！！」

「ご名答。察しがいい女だぜ、乱菊。」

事態を読み込めていないエリオやシグナムは松本に問い質す。

「どういうことですか！？」

「僕達にも分かりやすく教えてください。」

松本は二人に尋ねられると、額に汗を流しながら徐にこう答える。

「あいつは、ここら一体の霊子を吸収して力をさらに増幅させるつもりなのよ！」

「何だって！？」

「そんな！！」

松本からその事実を聞かされた途端、二人は度肝を抜いて東海林の方を凝視するがその東海林はというと気づくのが遅れた二人に向かって不敵な笑みでこう言った。

「今更気づいたところでもう遅い。見せてやるぜ、霊子の隷属による力の増強を。」

東海林はそう言うと、バウント本来の特性を活かして周囲の建物からその主構成物質である霊子を自らの体の中へと吸収し始めていく。

この光景を目撃した四人は大いに驚き、動揺を見せ始める。

「建物から霊子を吸い取ってる！？」

「どうなるというのだ・・・一体！？」

驚愕するシグナム達を余所に東海林はその後も霊子を体の中に吸収し続けていき、力を増幅させていく。

「わあああああああ！！！！！！！！！！！」

そして、極限値まで霊力を増強させ魔力もそれなりに溜まってきたところで東海林はその力を試すためにルーブルストリームを誰もいない場所へと向けて発射。

〈Ｒｏｕｂｌｅ　ｓｔｒｅａｍ〉

ルーブルストリームは真っ直ぐ誰もいない建物に向けられ、着弾すると先ほどまで見てきたどのルーブルストリームとは比較にもならない破壊力を発揮させ、周囲の建物を一瞬にして塵と化した。

「な！」

「これは・・・！！」

「（うそだろ・・・おい！！）」

「バケモノ・・・！！」

四人は塵となって消え失せていった建物の様子をその目で焼き付け

ると、現在自分たちが対峙している東海林の凄まじさ顔を歪める。

「何と言うことだ・・・！？」

「力の差って奴を見せてやるよ。ライノックス！」

東海林は声高らかにそう宣言するが、それに対して松本とシグナム達はこの状況においても諦めるそぶりは一切見せず変わらず武器を持って構える。

「お生憎様。力の差を見せつけられるのはあんたたちの方よ。唸れ、灰猫！」

乱菊は牽制の為に、灰猫を解放して東海林の元へと飛ばした。

「ライノックス！」

〈ＯＫ！〉

ライノックスは飛んできた灰猫に照準を合わせると、胸部に出現したその怪物の如き巨大な口を開いて灰猫そのものを飲み込もうとした。

「！戻れ！！」

それを見て咄嗟に自分の刀を元に戻した松本を見て、エリオは怪訝そうに尋ねる。

「松本さん、何で！？」

「乱菊の判断は実に正しかったぜ。」

「何？」

東海林のその言葉に耳を傾けたシグナム達。

すると、東海林は先ほどまで開いていた胸部の口を閉じて説明を始める。

「あのまま灰を元に戻さなければ、全てをライノックスに飲み込まれ、斬魄刀を失っていただろう。」

「（何だと！？）」

「あの口の中は、異空間にでも繋がってると言うのか？それとも本当に食すつもりで・・・！？」

「折角妖艶の美女の使う斬魄刀を手に入れることが出来ると思ったんだけどな！」

「く・・・・・」

松本は東海林の方を苦い顔で凝視しながら、自分の胸元から通信機を取り出し技術開発局の担当者に次のように要請する。

『松本乱菊様。ご用件をどうぞ。』

「私の周囲、三百圏を空間凍結して。それと、敵の能力が予測を超えて遥かに増大したから、周囲の魂魄保護を最優先にして同様に空間凍結を。」

『了解しました。』

松本は申請を完了させ、通信機をしまうとこの不測の事態をどう対処するかをシグナム達と思案し始める。

「如何なさいましょうか？」

「そうね。ま、どちらにせよ先手必勝で決めないことには変わりないわね。」

「ふふふはははははははは！！！！！！はははははははは！！！！！」

完全に余裕の表情を見せて、甲高い声で笑い声を上げる東海林。

その東海林と対峙しているシグナム達は、松本から次のような言葉を聞かされる。

「今、この辺りから周囲三百圏の空間を技術開発局の力で保護したわ。こっからはもっと派手にやってもいいわよ。」

「そうですか。ならば、こちらも加減は無用！」

「（おうよ！ＩＰカートリッジ、使うとするぜ！）」

〈Ｈｙｐｅｒ　ｅｘｐｌｏｓｉｏｎ〉

「僕もいきます！ストラーダ、ＩＰカートリッジロード！」

〈Ｂｌａｚｅ　ｆｏｒｍ〉

ＩＰカートリッジを使用して、形状を変化させたシグナムとエリオ。

そして、シグナムは目の色を変えて驚く松本に懐からユーノより預かったあるものを取りだし手渡した。

「松本殿も、これをお使いください。」

松本がシグナムから受け取ったものは、恋次達が任務の際に重宝している斬魄刀補助デバイスであった。

「これは？」

「ユーノ・スクライアが考案した、斬魄刀の能力を向上させる器具です。」

「へぇ～～～あのフェレットもどきがねぇ～～～オッケー！じゃあ、早速やるわよ！」

松本は意気揚々と補助デバイスを柄に装着させると、再びシグナム達と共にこの強大な力を内包したパトリオット、東海林棗と相対する。

「行くぞ！はあああ！！！」

一回りも巨大な姿となったレバンティンを掲げて、全速力で東海林に突進していくシグナム。

東海林はシグナムの剣閃を軽く手で受け止めると、力任せにシグナ

ムごと投げ飛ばすが、その背後から松本が鬼道を放つ。

「破道の四『白雷』！」

東海林はそれに素早く反応すると、白雷を回避していてく。

松本はその後も白雷を撃ち続けて攻撃を仕掛けるが、それを東海林は全て器用に軽い身のこなしで躱していく。

「意外と速いですね！僕が行きます！」

「頼むぞ！」

シグナムと松本はエリオにその場を任せ、任せられたエリオはソニックムーブで東海林の懐まで一気に加速する。

「ストラーダ！」

〈Ｓｏｎｉｃ　ｍｏｖｅ〉

ソニックムーブで東海林の懐に忍び込んだエリオは銃口から雷の魔法陣を生成し、東海林の鳩尾目掛けて刃を突き立てる。

「一閃必中！！」

〈Ｌｉｇｈｔｎｉｎｇ　ｂｌａｄｅ〉

「でやあああああああ！！！！！」

そのエリオの攻撃を待ってましたとばかりの表情で東海林は言葉を

発する。

「は！血迷ったか！！攻撃をすればダメージカウンターが溜まるってことは知ってるだろうが！！」

「だったらそのケージが溜まる前に斬り倒すまでだ！」

〈Ｅｘｐｌｏｓｉｏｎ〉

シグナムはエリオの攻撃に負荷する形でレバンティンの剣閃に紅蓮の炎を纏わせると満月を描くように動かして一気に背中から斬りかかった。

「紫電一閃・大円月！！」

「（おおおおおお！！！！！！！！！！）」

エリオとシグナムの剣閃がほぼ同時に仕掛けられ、東海林はその瞬間炎と電撃のダブルパンチを食らい爆発が伴った。

その後、直ぐに爆発から出てきた二人を確認すると補助デバイスを取り付けた松本が灰猫を操作する。

「灰猫・積乱舞（せきらんぶ）！」

勢いを増した高速回転する松本の灰猫が次々に東海林の体を切り刻む。

「く・・・！」

東海林はその攻撃に耐えると、灰を突き破ってエリオの方に攻撃を仕掛ける。

「そっち行ったわよ！」

松本の合図を耳にし、エリオはストラーダの銃口を東海林に合わせるとカートリッジをロードして魔力エネルギーを充填し、砲撃を発射。

「エレクトリックブラスター！」

電撃を纏った魔力砲撃が東海林に向かって飛んでいくが、東海林はそれを見ると高笑いを浮かべた。

「ははは！！貰った！！」

東海林は胸部から例の怪物のような口を出現させると、飛来したエリオのエレクトリックブラスターを全て口の中へと吸収する。

「な！？」

これにはエリオも度肝抜いてしまい、体が一瞬怯んで動けなくなってしまう。

それを見た松本が瞬歩でエリオを助け、逃げ回っていくが東海林は執拗に二人を付け狙って追ってくる。

「しつこい！」

松本もこの東海林の執念には愛想を尽かしていた。
すると、事態を見たシグナムが救援に入る。
「レバンティン！」
〈ｆｏｒｍ〉
「ほあああああああ！！！！」
シグナムは飛竜一閃を東海林の急所に食らわせて、松本とエリオを無事に助ける。
「ぐあああああ！！！！」
東海林は急所を突かれてしまい、空高くから墜落していった。
松本はシグナムの実力を見て、改めてそれが本物であることを確信し素直に褒め称える。
「やるじゃない、あの娘。」
エリオはこのまま徒に戦うよりも何か打開策を見つけ出して戦わいと勝機はないと判断、東海林が動けないでいるうちに別な場所へ移動を進める。
「シグナム副隊長、こっちです！」
「ああ。」

シグナムは一度アギトとユニゾンを解くと、松本・エリオと共に別な場所へと移動を開始。

四人の姿が見えなくなると、東海林は徐に食い込んでいた地面から体を起こして頭を抱える。

「ぐ・・・やってくれるじゃねぇかよ・・・」

東海林はそう言いながら、両肩にもうすぐゲージが満タンに達しようとしているダメージカウンターを一瞥する。

一方、東海林から大幅に距離を取ったシグナム達四人はというと、難しい顔を浮かべがら東海林を攻略するための作戦を練っていた。

「エリオの攻撃を吸い込みやがったな。」

「砲撃による正面からの一撃は無理ですね。」

「だからと言って、打撃攻撃はダメージが蓄積されやすいし・・・どうすればいいのよ？」

「八方ふさがりの状況だな。何とか打開策を見つけなければ・・・」

思いのほか厳しい状況に頭を悩ませる四人は、東海林の攻撃に警戒してその後も話し合いを続ける。

「一応、隊長にはこのこと伝えておいたけど・・・ウチもウチで他のパトリオットの被害で急を要してるから、多分増援は期待できそうにないわね。」

「そうですか・・・」

「くそ！攻撃も満足に打てない！躱すので精いっぱい！！なんてじっれたい戦いしてんだよ、私らは！！！」

「向こうは攻撃を受ければ受けるほど、ダメージは力となり、傷つけても周囲にある霊子を吸収して傷も癒せる。圧倒的にこちらが不利だ。」

「十年前のバウントの事件でもそうだったけど、本当面倒な相手ね・・・」

「兎にも角にも、敵がこちらの方に近づいてくる前に何とか作戦を考えましょう。四人の知恵があればどうにかなりますよ、きっと。」

「ああ。そうだな。」

「前向きな発言でよろしい！」

エリオの言葉を聞かされ、シグナムと松本も表情を和らげる。

「よし！それじゃあ・・・――な！！」

と、アギトが気を取り直して前向きに事に当たろうとした直後。

事態は思わぬものへと変化を遂げる。

何と、東海林がこんなにも早く傷を癒して四人の気配を追ってこの場所を突き止めてしまったのだ。

「「は！」」

「見つけた！！！」

東海林はハイエナのような鋭いまなざしで四人に向かって突進来た。

「ち！」

「逃げるわよ！！」

四人は急いでその場から避難を開始するが、東海林は執拗に四人の後を追っていく。

「逃がすかよ！！！」

東海林の予期せぬ攻撃を躱して、他の場所へと移動を続ける四人だったが状況は明らかにこちらのほうが分が悪い。

松本はこの状況と、執拗に自分達を付け狙ってくる東海林に怒りを募らせる。

「本当、油断も隙もないわね！ある意味修兵の原稿の要求以上ね。」

「たとえがよく分かりませんが、その通りのようですね。」

「シグナム副隊長！松本さん！」

「こっちだ！！」

エリオとアギトは逃げ込めるような空間を見つけると、その場所を

二人に誘導しその後も東海林から逃げ続ける。

「あいつは!?」

「急にいなくなりやがった。後ろにいないが、一体何処に!?」

「何よ、あいつ?あんな巨体なくせに軽やかって感じで飛び回って・・・私らは逃げるだけでも手一杯って状況だっていうのに!?」

すると、愚痴をこぼす松本の言葉を聞いた東海林が返事をしてきた。

「それしか能がないから駄目なんだろう!」

東海林の声を聞いて狼狽する四人。

その時、東海林は巨体に似合わない軽快な身のこなしで四人の正面に何の前触れもなく出現を果たした。

「「「「な!」」」」

この光景を見て、目の色を変えた四人だったが松本は直ぐにそれが特殊な固有スキルによって自分の体を空間に溶け込ませているものだと言うことを見抜いた。

「!空間に・・・自分の体を溶け込ませてたのね!?」

「何と言う卑怯な能力だ・・・!」

「へへ。こういうのは田吾作の専売特許なんだが、俺にも一応出来ると言えば出来るな。本来なら魔力の消費が激しいこの術はそう簡

単にできることじゃねぇ。ただ、霊子に満ちたこの世界においては、苦手なそれでも無限に満ち溢れた霊子のお蔭でそれを補えるって訳だ。」

「何ですって!?」

「自由を愛する俺達パトリオットにはお前達ベルカやミッドの魔導師の力を遥かに凌駕した魔法をいくつも持ってるんだよ。この世において最も強いのは権力でも、暴利な力でもねぇ。仲間を信じ、絆で紡いだ自由の心だ!」

「く!貴様がそれを言うなら、我々とて同じこと!」

「ああ!私たちだって、そんじょそこらの絆で繋がってる訳じゃねぇ!!」

「それを今から証明してみせる!」

シグナム達三人はそう言うと、自分たちの絆を証明するために武器を構え全力でこの東海林と向き合おうとした。

「ふふふはははははは!!!!笑わせやがる!!!管理局って言う組織の枠に囚われたお前たちの絆と、俺達のそれを一緒にするんじゃねぇ。減らず口の減らないお前達は、この俺の手で順番に葬り去ってやるさ!俺と、このライノックスの力でな!!」

「言ってくれるじゃないの。」

「行くぜ、ライノックス!!」

〈Ｙｅｓ！！〉

東海林はそう言うと、胸部に口を出現させて四人を一遍に飲み込もうとし、攻撃に転ずるのであった。

「そうはさせないわよ。唸れ、灰猫！」

松本は何かを狙って灰猫を解放するが、東海林はそんな松本の杓子定規と捕えた戦法に怒りを露わにする。

「同じことを繰り返すんじゃねぇよ！全員喰われやがれ！」

だが、その時松本は不敵な笑みを浮かべると自分とシグナム達の足元に巨大な円を描くように灰猫で斬り刻むと、そのまま地面の中へと潜っていった。

「何！！」

直前で攻撃を躱した松本たちの思わぬ発想に思わず東海林は声を上げる。

「おいおい、んなのありかよ！！」

「そっちが周りに溶け込むって言うなら、こっちは地面にでも潜ってみたけど？」

「て、てめぇ！！」

人の揚げ足を取って挑発する松本に大恥をかかされた東海林。

「それから、頭の上にも気をつけたほうがいいわよ。」

「何!?」

松本にそう忠告されて、ふと頭上の方を見てみると、松本の灰猫によって斬り刻まれた建物の一部が崩落し東海林の上へと落ちてきたのだ。

「うそ!!!!!!!!!!!!!!!!」

東海林はその一撃をその身に直撃してしまい、その間に松本たちは移動を開始。

どうにか生き埋めを免れた東海林は土煙の中から出て来ると、逃げていったシグナム達を捜すために移動をし始める。

「くそ!!!あの野郎・・・女だからって舐めたことしやがって!!」

〈Ｉｔ　ｄｏｅｓｎ'ｔ　ｇｏ　ｔｏ　ｔｈｅ　ｄｉｓｔａｎｃｅ　ｓｏ．（そう遠くへは行っていない。）〉

「追うぞ、ライノックス!」

〈ＯＫ〉

東海林がその場から居なくなったことを確認すると、建物と建物の間に隠れて身をひそめていたシグナム達は安どのため息をつく。

「どうやら行ったみたいですね。」

「ここ本当に安全なのかよ?」

「多分大丈夫なはずよ。いくら空間に溶け込むことが出来たって言っても、自分の体に見合った大きさの空間でないと出るに出られないわ。」

「成程。」

「あの手の奴とは、前にも現世で戦ったことがあるから経験で判るわ。空間に溶け込んで移動する際、膨大なエネルギーを消費するわ。あれは恐らく狭いところじゃ物理的に出現することは不可能ね。」

「ふ~~~ん。」

松本の戦闘経験から推測されるその説明を聞いていたエリオとアギトだったが、その時シグナムが右腕に痛みを感じて苦しみ出した。

「う!」

「どうしたんですか!?」

シグナムの異変を感じて慌てて駆け寄るエリオ達。

「すまぬ。途中で腕を痛めてしまったらしい。大したことではないが・・・恐らく全力で剣を振ることは今は無理だろう。」

「そんな・・・」

「傷は大したことないから、私が治療してあげるわ。あんただって、

このままじゃ終われないでしょ。」

「はい。同じ境遇のあの者達を何としても救ってやりたいが・・・果たして想いが届くかどうか・・・」

シグナムも東海林も、いや・・・ヴォルケンリッターもパトリオットも受けてきた境遇は極めて酷似している。

その為、シグナムは同じ境遇を受けてきたものの先陣として一魔導師としてパトリオットの事を救うたいという気持ちが大きかった。

そんなシグナムの気持ちを汲み取って、エリオとアギトも出来るだけのことを尽くす所存でことに当たる。

「やれるだけのことはやりましょう！」

「ああ！そのための機動六課ライトニング部隊なんだぜ！！」

「・・・ふん。そうだな。」

二人の前向きな発言を聞いて、シグナムも思わず表情を綻ばせる。

「あとは・・・あいつをどうするか・・・ね。」

そう、松本が言うように根本的な問題はまだ解決してなどいないのだ。

「これでは一向に解決の糸口が掴めないままです。」

「あ～～～何かこうもっとばあって解決するてっとり早いやり方は

無いのか！！！」

「てっとり早く解決するね・・・あいつは空間に溶け込んでいる間、その姿を見せない。こちらが出てきた瞬間に姿を現すから・・・その前に奴を見つける方法があれば何とかなりそうだけど。」

「パトリオットセンサーも、微弱な波動では反応しないことがありますからね・・・」

全員は八方ふさがりのまま狭いその場所で唸り声を上げる一方だったが、その時エリオが妙案を思いつき三人に考えを打ち出してきた。

「いや、ちょっと待ってくださいよ！」

「どうしたの、エリオ？」

「前に恋次さんと吉良さん、それにユーノ先生と一緒にサバイバル形式での模擬戦をした時の事なんですけど、あの時僕らの位置を把握するためにユーノ先生は“霊絡”と言うもので僕らの位置を完全に把握して、その後やられちゃったんですけど・・・あれと同じ事がもし出来ればきっと・・・」

過去の模擬戦の経験からそのように提案するエリオだったが、聞いていた松本がばつの悪そうな表情で次のように語る。

「それはそうかもしれないけど、この尸魂界は現世やミッドチルダと違って全てが霊子で充満されてるから霊絡事態を探し出すことが不可能なのよ。あれ・・・でもちょっと待ちなさいよ。仮にパトリオットの霊絡をそのセンサーを使って波長をリンクさせることが出来れば・・・」

松本がエリオの話を元に持っていたパトリオットセンサーを見ると、エリオ以外のシグナムとアギトもその可能性を見出すことが出来た。

「そっか！！」

「成程。悪くない提案だな、エリオ。」

「他に方法はないわ。これでいくわよ。それで、どうすればいいの？」

松本がそう問いかけると、エリオは考えていたプランを次のように話し出す。

「奴に気づかれないように慎重に前に出てきながらセンサーと松本さんの霊圧をリンクさせて、霊絡を作り出します。後は、魔法であのパトリオットそのものを封印すれば捕縛は可能です。」

「よし、囮役は私とアギトでやろう。」

だがその時、そのシグナムの発言に口を挟んだのは松本だった。

「待った！」

「乱菊さん！？」

「囮役は私がやる。あんたらは後方から援護しなさい。」

「しかし、それでは松本殿が・・・！？」

「シグナム！」

「え！」

松本は強い口調でそう言いながら、霊圧を放出させながらこの世のものとは思えない程の形相を浮かべてこう言って来た。

「あんた誰に向かってもの言ってるの！？」

あまりの迫力に恐れを抱いたシグナムを始め、エリオとアギトは素直に従った方が身のためだと判断し、囮役を松本に譲ることにした。

「「（怖い～～～！！）」」

「わ・・・分かりました・・・！」

「よし♪じゃあ、行くわよ！」

その途端、松本は先ほどの形相がまるで嘘のように気分を一変させてのりのりの様子でパトリオットセンサー片手に前へと歩いて行った。

そんな松本の姿を見て、シグナム達は唖然とするばかりだった。

「「「あ・・・・・・」」」

「ほら、三人ともぐずぐずしないでさっさと行くわよ！」

その後、廷内を移動しある程度の広い空間に辿り着いた松本はパト

リオットセンサーのコードを自分の腕に巻きつけると、後方で準備をしているエリオ達に作戦の開始を宣言する。

「それじゃあ、始めるわよ。」

「お願いします。」

松本は真剣な表情となると、早速センサーとリンクさせて霊絡を作り始める。

「頼む・・・上手くいって。」

すると、松本の周囲に徐々に表れる霊子がその形を細長い帯へと変化させていき、松本はその中の一本を手に取ると、東海林の位置を補足する。

「見つけた！」

松本は早速、その場所から出て来ると予想される東海林に向かってこう言った。

「ほら、ガキンちょ！いつまで隠れてるつもり！？さっさと出てきなさいよ！私は此処よ！」

「そうかよ！！！！」

その瞬間、松本の言葉を聞いた東海林が溶け込ませていた体を出現させる。

「来たわね！！」

松本は刀を抜いて東海林に牽制を加えながら、更に挑発を入れる。

「攻撃がパターンなのよ！！」

東海林も自棄になって執拗に松本を狙い続けるが、その背後からシグナムが左腕に持ったレバンティンで斬りかかってくる。

「はあああああ！！！！！」

利き腕でない分、加減をし忘れたシグナムの攻撃は松本にもとばっちりが喰らう。

「く・・・！ちょ、シグナム止めて！あいつの位置が分かんなくなる！」

松本は地面に降り立って砂埃の立ちこめる辺りを見渡すが、東海林の姿はどこにも見当たらない。

と、そんな松本の足元から東海林の腕が伸びてきた。

「しま・・！」

松本は空間に溶け込ませ、部分的に地面の方へと潜り込んでいた東海林の手に引きずり込まれていくと後から出てきた胸部の口に飲み込まれそうになった。

「貰い！！！！！」

「舐めるんじゃないわよ！！」

すると、松本はその口の中に自分の刀をつっかえ棒にして東海林の口を塞いだ。

思わぬ松本の行動に東海林は大いに悔しがる。

「くっ・・・この野郎！！」

「かかったわね！」

それを見たシグナムはアギトとユニゾンして魔力を上昇させると、一気に追い打ちをかける。

「レバンティン！」

〈Ｈｙｐｅｒ　ｅｘｐｌｏｓｉｏｎ〉

シグナムは左腕と言うハンデを抱えながら、九つの頭を持つ竜に見立てた炎の一撃を東海林目掛けて仕掛ける。

「（九頭竜一閃）！！」

シグナムの渾身の左からの一撃を直撃した瞬間、東海林の体を襲う猛烈な熱さと炎。

「ぐっぐうううううう！！！！」

「エリオ、今！！」

炎で体を焼かれ、一時的に閉じ込められている東海林のこの姿を見

て、エリオはストラーダを構えるとユーノから教授された封印魔法を発動する。

「行くよ、ストラーダ！ユーノ先生直伝の封印魔法！」

〈Ｓｅｅｌｉｎｉｇ　ｍｏｄｅ〉

エリオはブレイズフォームの銃口より封印の為の魔力砲をチャージすると、炎の中の東海林に狙いを定めて一気にそれを発射する。

「シールド・グライブ！」

エリオの封印魔法が東海林目掛けて発射され、炎の中でもがき苦しんでいた東海林はそれに着弾するが、なかなか封印される様子を見せない。

「うおおおおおお！！！！！！」

エリオはその後も魔力を上昇させ、コントロールをしながら東海林を特殊な結界に封印するために奮闘し、それに抗う形で東海林も魔力を上げていく。

「ガキが！！！！この力を得るのに、銀太郎の幸せのためにどれほどの時間を費やしてきたと思ってやがる！！！俺様を・・・てめぇ如きの力で抑えられると思ってるのか！！！！！」

「エリオ一人ではない！！！」

「何！？」

その瞬間、エリオの封印をサポートするためにシグナムと松本が二人がかりで攻撃を行い、東海林はそれを回避する事も出来なかった。

「ぐあああああああ！！！！！！」

「封印！！」

シグナムと松本の援助を受けたエリオは最後の力を振り絞って見事東海林を圧倒し、特殊な結界内に東海林を封じ込めることに成功した。

封印処理を完了させると、エリオもストラーダもすっかり参ってしまっていた。

「は、は、は、は！」

シグナムと松本は直ぐにエリオの元に駆け寄った。

「エリオ！」

「大丈夫か！？」

「はい・・・何とか・・・」

「よかった。」

「やれやれ、冷や冷やしたわよ。」

「これで何とか捕縛は完了しました。すぐに他の人たちの援護に・・・」

と、エリオ達が安心しきっていたその時ストラーダが警告を発する。

〈Ｃａｕｔｉｏｎ！！〉

「え！？」

自分のデバイスが警告を発したことに疑問に思ったエリオだったが、その瞬間予期せぬ自互いエリオに襲い掛かった。

ストラーダの中に作られた結界に閉じ込めていた東海林が結界を突き破ろうと魔力を上昇させてきたのだ。

「ぐうううううううううう！！！！！！！これは・・・・・・！！！！！！！」

「どうした、エリオ！？」

「まさか・・・！！」

シグナムと松本もその事に気づくと、顔を歪めながら怪しげに光を発するエリオのストラーダを凝視する。

「封印を・・・・・破ろうとしている！！！」

エリオは一度二人を巻き込まないように離れた場所に移動するが、途端にストラーダの結界を破って東海林が通常空間へと舞い戻ってきた。

衝撃に耐えきれず、エリオはストラーダと共に後方へと吹き飛ばさ

れる。

「ぐあああああ！！！！！！」

「何！？」

「エリオ！！」

松本は急いで瞬歩で飛ばされたエリオとストラーダをギリギリで受け止める。

「しっかりしなさい！」

松本の膝の上で目を瞑っていたエリオだったが、暫くすると満身創痍の体で徐に返事をしてきた。

「う・・・あ・・・大丈夫です。まだ戦えます・・・」

「・・・エリオ・・・」

シグナムはアギトと共にエリオと傷ついたストラーダの様子を見ていると、そんな四人に向かって封印を破って出てきた東海林が徐に近づいてきた。

「「「「！」」」」

「なかなか楽しませてくれたが、俺達を閉じ込めようなんて真似は百年早えんだよ！」

「「「「く・・・！」」」」

「そろそろ終わりにさせてもらおうか？」

〈Ｒｏｕｂｌｅ　ｓｔｒｅａｍ〉

東海林はそう言うと、今まで溜めたエネルギーを全て魔力に変換させ周囲の霊子をも吸収した最強のルーブルストリームを収束させる。

この絶望的な状況に直面した四人はどうすることも出来なかった。

「ここまでなの・・・！？」

そして、東海林のルーブルストリームが四人に放たれようとした。

「終わりだ！！」

だが、神はまだ彼女たちを見放してはいなかった。

「霜天に坐せ・・・・・・」

「！」

「『氷輪丸』！！」

攻撃をしようとした東海林の頭上から、突如として霊圧によって作られた巨大な水と氷の龍が東海林目掛けて降り注いできたのだ。

「「「「！」」」」

四人もこの光景には大いに驚いたが、一番驚いているのはこの竜の

ことを誰よりも理解している副隊長の松本本人であった。

東海林はルーブルストリームをも凍りつかせ、その後氷解させた自分の体に付着したこの攻撃に疑問を抱いた。

「なっ!?何だこの・・・・・・氷は!?」

すると、そんな東海林の目の前に技を発動させた張本人が空から飛び降りてきた。

シグナム達はその人物、十番隊の隊長羽織を纏ったその姿を見ると目を見開いた。

「あの人は確か・・・・!?」

そして、その隊長である日番谷冬獅郎と長年一緒にいる松本は徐に声を発する。

「隊長・・・!」

窮地に立たされていた戦局に日番谷が介入。

東海林はこの日番谷の参戦にどう立ち向かっていくのか?

そして、日番谷たちは東海林に溜まっているダメージカウンターをどうやって克服することが出来るのか?

次回、彼らの運命は如何に!!

痛みを力に、東海林棗カウントダウン　（後書き）

教えて、ユーノ先生！

ユ「今日は東海林の能力についてね♪」

ユ「東海林棗の強さの秘密は、圧倒的な物理破壊能力を秘めた魔法にあるんだ。浦原さんの強壮結界を容易に破壊する彼のデバイス、ライノックスの能力は凄まじい。敵のダメージを吸収して、一気に溜めたものを爆発させることが出来るんだ。」

ユ「ブラッド状態になると体全体がトリケラトプスを模したものへと変化し、通常の攻撃はおろかシグナムさんのレバンティンの一撃も歯が立たない程・・・」

シ「生意気な能力だ。私のレバンティンで斬れぬものなどありはしないと言うのに！」

ア「出鱈目な能力なんだよ！あ～～～くそ！！こんな奴燃やしてやりてぇ！！！」

ユ「それじゃあ一つ、このこんにゃくでも切ってみてくださいよ♪」

そう言ってこんにゃくを取り出した瞬間、シグナムがユーノに怒りを露わにする。

シ「スクライア・・・貴様から先にレバンティンの錆にしてくれようか！？」

ユ「冗談ですってば・・・まったく、真面目すぎるんですよ・・・」

な「にゃはは・・・そう言うユーノ君も真面目だったのにね・・・」

魔導師図鑑ハイパー！

機動六課オフィスに恋次が頼んでいた代物が届けられた。

ユ「恋次さん。注文の品、届きましたよ♪」

恋「おお！！やっと来たか、待ちくたびれたぜ！！」

恋次はユーノから小包を受け取ると、包装紙を豪快に破って中に入っていた新商品のゴーグルを取り出し歓喜の涙を流す。

恋「く～～～！！！やっぱりこの店の商品はいつも出来がいいぜ！！」

すると、そんな恋次になのはが尋ねる。

な「それ、何て店で買ったんですか？」

恋「ああ。ここに店名が書いてあるだろ。」

紙に表記された『眼鏡の銀蜻蛉』の文字を見て読もうとするなのは・・・だが。

な「メガネの・・・『ぎん・・・』」

恋「何だ、読めねえのかよ？理数系は得意でも、文系科目はさっぱ

りか？」

な「待ってくださいね・・・ここしばらく漢字も見てなかったものですから混乱してるだけですよ・・・虫偏ついてるんですから虫の名前ですよね・・・」

頭を抱えて名前を思い出そうとするなのはに、恋次がヒントを出す。

恋「ヒントやろうか？メガネのイメージのある虫だ。」

すると、その瞬間なのはが閃きこう口にする。

な「あ、分かった！「ぎんバエ」！！」

恋「ハエにメガネのイメージ無えだろ！！！大体、んな汚ねえ虫を店の名前にするか！！！」

あまりの阿呆な答えに、恋次思わず激怒。

日番谷参戦！氷結の劇場（前書き）

日「誰かが力を欲している。何の為に力を欲するのか・・・・・・守るためなのか・・・戦うためなのか・・・あるいはそのどちらでもないか・・・」

乱「ただ判っていることがあるとすれば、それはきっと自分の非力さ。非力な自分が嫌だから、何もできないままの自分が不甲斐無いから、私たちは力を欲する。それはきっと自然の摂理に同じだから。」

エ「守り抜く力なのか、それとも破滅をもたらす力なのか・・・それは僕たち自身の覚悟が証明してくれる。」

ユ「ユーノ・スクライア外伝　パトリオット篇・・・・・・始まります。」

日番谷参戦！氷結の劇場

＞ｉ１８７５９―７０９＜

ユーノ・スクライア外伝・・・前回の三つの出来事。

一つ：シグナム達がパトリオット、東海林棗と激突。

二つ：瀬間子が銀太郎と別れ、仲間の援護に向かう。

そして、三つ：霊子を吸収した東海林と激しい衝突を続ける乱菊達。

松本と共にシグナム達が東海林と熾烈な争いを繰り広げている頃、廷内各地に散らばった機動六課前線メンバーにも凄まじい勢いで衝突を起こすその魔力を感じ、思わず振り返る。

「おい、この魔力値と霊圧は・・・！？」

「うん。隊長格の死神の霊圧上昇・・・だね。また誰かがパトリオットとやりあってるみたい。」

「くそ！あのガキどもめ！！」

「急いで残りのパトリオットを捜そう。センサーでは、こっちを示してる。」

「「ああ。」」

なのは達を始め、他のフォワードメンバーも状況から見てもあまり時間はかけれるものではなかった。

また、なのは達とは違い迎撃ではなく聖地九九琉閑の池を目指して兎に角邁進していた一護とユーノの二人も強大な魔力衝突によって起きる地響きに一度足を止めた。

「何だ!?」

「パトリオットの気配がしますね。誰かがパトリオットと戦ってるようですよ。」

「場所は!?」

「ここからだと・・・・・・」

ユーノはそう言うと、現在懺罪宮の近辺で衝突を起こしてるシグナム達の魔力波長を感じ取り顔を向けた。

「懺罪宮(せんざいきゅう)の近辺で衝突が起きています。」

「くっ!(みんな・・・頼む。何とか耐えてくれよな。)」

二人もこの状況に少々の焦りを感じると、再び地図を見ながら九九琉閑の池を目指して移動を続けた。

さて、移動と言えばパトリオットを捜しに行ったきり隊首会にも出席しなかった方向音痴の副隊長を連れた更木剣八はというと――――

「・・・ぐ・・・くそっ・・・！」

肩に乗っている草鹿やちるの言うことに素直に従って移動を続けていたが、結局また道を間違えてしまい息止めに差し掛かってしまっていた。

「・・・・・・・・・・！」

剣八は険しい表情で肩に乗っている能天気なやちるに目を向ける。

「くそっ！！また行き止まりじゃねえか！！」

「剣ちゃん、方向オンチ――――」

「馬鹿野郎！！てめぇの勘とやらを信用したからこうなったんじゃねぇか！！もういい！次ぎ行くぞ！！」

「アイアイサー！！」

剣八は結局やちるに振り回されながらも、パトリオット達と戦いたいが為にその後も出鱈目に廷内を走り回っていった。

剣八が居なくなってから暫くして、その剣八の気配を感じてずっと屋根の上で隠れていた銀太郎と瀬間子はというと、安心した様子で安堵のため息をつく。

「ふう～～～どうやら・・・行ったね。」

「そうだな・・・」

「物凄く強そうな人達だったけど・・・結局こっちには気づかなったね。」

「ああ。恐らくあの手の死神は強い反面、探知能力が低いのであろう・・・さて、とりあえず移動はしたが次はどちらに行ったものか・・・」

「あっちは。ず――――っと遠くに森みたいなものが見えるんだけど、気のせいかな。」

「森？どこだ？」

「ほら、あっち。」

瀬間子は銀太郎が指さす方向に目を向けてみると、遥か前方には言った通りの鬱蒼とした雰囲気の森が目の前に広がってきた。

「確かに、と言うことはあそこが聖地と呼ばれる九九琉閑の池の入り口なのであろう。ならば話は早い。一先ず、あの森を目指して邁進するとしよう。」

「うん。」

二人は早速前方の森を目指して屋根の上から地面に降りようとした――――――その時。

「「！」」

全身から感じ取った巨大な霊圧と魔力の衝突が二人の動きを止めた。

そして、銀太郎は徐に衝突が起きている場所に目をやり不安げな表情を浮かべる。

「――――――あちこちで・・・魔力と霊圧の衝突を感じる・・・」

「・・・一つ・・・二つ・・・三つ・・・」

瀬間子は田吾作が消えてから元気をなくし始めている銀太郎のことも気にかかり、仲間を救出するためにここで銀太郎と別れることを決意する。

「――銀太郎、お前は先に行け。」

「え!?何言ってる――――――」

突然の瀬間子の言葉に驚きを隠し切れない様子の銀太郎だが、瀬間子は毅然とした態度で次のように語った。

「俺も嫌な予感がしてきた。このまま行けば、田吾作と同様仲間が消える可能性もなくはない。俺が奴らの援護に行ってくる。」

「だけど!!それじゃ瀬間子が今度!!」

「案ずるな。お前を真のダイシーにするためには、俺はこの身をささげる覚悟だが・・・決して死ぬという悲惨な結末にはなりはしない。必ず生きて、お前の元に戻って来る。」

「瀬間子・・・――」

「別れよう。俺は近くの死神を倒しながら奴らの援護に行く。お前

は構わず聖地へと向かえ。」

瀬間子はそれだけを言い残すと、銀太郎と別れて他のパトリオットの援護へと向かった。

「――死なないでね、瀬間子・・・・・・みんな・・・・・・絶対に。」

銀太郎も瀬間子の言葉を信じて、自分は九九琉閑の池を目指して進み続けることにしたが、皮肉にもこれが瀬間子との最後の会話になるとは、思っていなかった――――――

その頃、東海林と激闘を続けていた松本とシグナム達の戦闘を少し前から振り返る事にしよう。

エリオの封印魔法を突き破ってストラーダの中から通常空間に戻ってきた東海林と、満身創痍となって倒れるエリオ。

「しっかりしなさい！」

松本の声を聞くと、エリオは徐に目を開けて声を発する。

「う・・・あ・・・大丈夫です。まだ戦えます・・・」

「・・・エリオ・・・」

安堵の表情を浮かべて安心するシグナム達だったが、そんな四人に徐に近づく東海林。

「「「「！」」」」

「なかなか楽しませてくれたが、俺達を閉じ込めようなんて真似は百年早えんだよ！」

「「「「く・・・！」」」」

「そろそろ終わりにさせてもらおうか？」

〈Ｒｏｕｂｌｅ　ｓｔｒｅａｍ〉

東海林は止めを刺すために最強のルーブルストリームで仕掛けようとする。

「ここまでなの・・・！？」

「終わりだ！！」

四人が諦めかけたその時、頭上より救世主が現れる。

「霜天に坐せ・・・・・・」

「！」

「『氷輪丸』！！」

「「「「！」」」」

東海林の攻撃を妨害した水と氷の竜に、東海林は目を丸くする。

「なっ！？何だこの・・・・・・氷は！？」

そして、自分たちの前に降り立つ十番隊の隊長羽織を纏った銀髪の少年。

「あの人は確か・・・・！？」

松本は目を見開きながら自分の隊の隊長、日番谷冬獅郎の名を口にする。

「隊長・・・・！」

日番谷は東海林の方を睨み付けながら、後ろの方で固まっている四人を見ながら先ず自分の部下の怪我の具合を確かめる。

「松本・・・無事か？」

「はい。申し訳ありません。隊長の手を煩わせることになるとは・・・」

「気にすることは無え。それより、そっちの二人はどうなんだ？」

日番谷がそう尋ねられると、シグナム達も取りあえず大事には至っていたという事実を口にする。

「・・・ああ。一先ず無事だ。名前は・・・日番谷だったか？」

「その通りだ。阿散井からの報告によれば、てめぇはシグナムだったな。で、そっちのガキがエリオ・モンディエルでよかったのか？」

「はい。ありがとうございます、助けていただいて！」

そんな中、東海林は自分のルーブルストリームと全身を凍り付かせたこの小さな隊長を前にして、怒りを募らせながら名前を問いただした。

「くっ・・・！！氷雪の斬魄刀を操る死神・・・てめぇ何者だ！？」

「・・・十番隊隊長、日番谷冬獅郎（ひつがやとうしろう）だ。随分、派手にやってくれたな・・・」

日番谷はそう言うと、自分の身の丈よりも長い刀を両手で持ち東海林と向かい合った。

「こっちも窮を要する事態なんでね。仲間も一人死んじまった今、弔い合戦なんてガラじゃないんだが・・・そうも言ってられない。貰うぞ・・・その命！！」

東海林はそう口にした途端、勢いよく日番谷に向かって突っ込んでいった。

日番谷はそれを回避すると、屋根の上へと降り立つ。

「隊長！」

「来るぞ！松本、援護しろ！」

「はい！」

松本は日番谷の援護に回るため、その場から離れシグナム達もボロボロの体ではあったが何も出来ないまま終わるのは嫌だったため、松本同様援護に回ることにした。

「我々も参るぞ。」

「はい！」

「（負けてたまるかよ！！）」

シグナムとエリオは松本の後ろの方で、東海林と牽制をしている日番谷の戦闘を見ながら援護の機会を窺う。

一方の日番谷は東海林と激しい攻防を続けていた。

「このおおおお！！！！！」

東海林は小さい体でエリオ以上に切れのある動きで自分を翻弄する日番谷に躍起になりながらも力任せに拳を振るうが一発も当らない。

そんな冷静さを欠いた東海林の懐から日番谷は刃を地面に突き立てながら全身を凍り付かせる氷雪奥義を発動させる。

「“流氷雪破閃（りゅうひょうせっぱせん）”！！」

その瞬間、日番谷の刀から放たれた冷気によって東海林の全身は一瞬にして凍り付いていく。

「何！？これじゃあ動けない！！」

身体が凍ってしまって身動きが取れないでいるところに、松本やシグナム達が援護に入る。

「唸れ、灰猫！！」

「のあああああ！！！」

身体を凍り付かせた状態からの松本の攻撃は今の東海林にはかなり効果があり、それに加えてシグナムとエリオの炎と電撃が追い打ちをかける。

「（飛竜・・・一閃）！」

「ルフトメッサー！」

「ぐううう！！！！」

そして、三人のダメージを受けたところで詠唱を完了させた日番谷の縛道が天より注がれる。

「縛道の七十五『五柱鉄貫』！」

「な！！」

東海林が上を見上げると、その頭上から五つの巨大な鉄の柱が重力に従って自分の体に降り注ぐ。

東海林は五柱鉄貫を食らってそのまま動けなくなると、エリオとシグナムの傷の深さを一目で判断した日番谷は二人を休ませるためにその場から離れることを提案する。

「今のうちに逃げるぞ！」

「はい！」

松本はやせ我慢をして辛そうにしていたエリオを背中に抱えると、シグナムと共に日番谷の指示で移動を開始しようとしたがその途端。

「な！駄目だ！！」

「「！」」

全員が後ろを振り返ってみると、ダメージカウンターを更に溜めた東海林が全身の力を使って日番谷の鬼道を粉々に破壊して立ち上がってきた。

これを見た日番谷はあまりの凄まじい破壊力と常識はずれな行動に目を疑った。

「七十番台の縛道を・・・力だけだと！？」

驚きを隠し切れないでいる日番谷に、松本は説明を加える。

「奴はここいらの霊子を吸収してさらに力を増しています。」

「ち、厄介だな。」

東海林は日番谷の鬼道を打ち破ると、案の定霊子を吸収して体の傷を癒し始めた。

「ふふ・・・・・ガキが・・・舐めるんじゃねぇぞ・・・」

すると、東海林は松本達と戦っていた時と同じ様に空間に自分の体を溶け込ませて日番谷の前から姿を消した。

「消えた！」

「恐らく、周囲の空間に身を溶かしたんでしょう。」

「見えない敵とどう対峙する？」

「逃がさないって訳ですか・・・」

日番谷とシグナム達は一カ所に固まり、互いに背中を合わせながら何処から仕掛けられるか分からない東海林の反撃に備えた。

その間に日番谷は自分の頭の中でその場をどうやって乗り切るかを思案し始める。

「（瞬歩・・・いや、駄目か。エリオ・モンディエルはさっきのパトリオットの攻撃でかなりのダメージを受けている。シグナムとやらもそれなりの傷を負っている筈だ。松本と二人がかりで移動しようにも、状況はかなり厳しい・・・一体どうする？）」

すると、そんな日番谷を見て松本が意外な言葉を口にする。

「隊長・・・私たちの事は構わず。私たちを置いて打開策を見つけてください。」

「何だと！？」

松本の言葉に驚きを隠せないでいると、そんな松本の言葉に便乗する形でシグナムも口を挟んできた。

「そうだ。私たちを囮に使ってもいい。お前一人だけなら、どうにかできるだろう。」

「莫迦野郎！そんなこと出来る訳ねぇだろう！！下らねえこと言ってねぇで、この場から上手く逃げる方法だけを考えろ！」

「（！おい！）」

日番谷が二人に叱咤した途端、アギトは周囲から感じる東海林のただならぬ気配を感知して全員に警戒を呼び掛ける。

「ち・・・松本！奴が攻撃してきたら、厳しいかもしれねぇが俺とお前の瞬歩で少しでも遠くへ走るぞ！」

「分かりました！」

日番谷たちはそのようにして手を打つことにしたが、東海林は未だ姿を隠したまま日番谷たちの元に姿を現そうとしない状況。

これには日番谷たちもイライラを募らせながら、額に汗を浮かばせる。

「くそ・・・！」

「何処からくる・・・！？」

気の遠くなるような時間が流れ、日番谷達の緊張がピークを迎えようとした・・・まさにその時、アギトが東海林の気配を感じとって声を張り上げる。

「下だ！！！」

全員はその瞬間、足元より現れる東海林から逃れるために空高くに

舞い上がったがその東海林は出て来るや否や姿そのものを消滅させた。

「な！」

一瞬、目の前の状況を整理できていない全員だったがその背後より本物の東海林が牙をむいて襲い掛かってくる。

「そいつはシルエットだ！！！」

「しまった！」

日番谷は東海林の攻撃を退けるために、空中に浮かび上がった状態から氷輪丸を解放する。

「く！氷輪丸！！！！」

「何！！！」

氷輪丸は東海林を飲み込み、一時的に動きを封じ込めることに成功する。

「今だ！！」

「はい！！」

日番谷はその隙に松本とシグナム達を連れて凍って動けない東海林を後にし、何処か一目のつかないような安全な場所へと逃げていった。

東海林から如何にかして逃れることが出来た日番谷達は、一先ず全員がいることを確かめると今後の事を話し合う。

「どうにか撒けたな。」

「ああ。氷輪丸の力で一時的ではあるが氷結させることが出来た。今のうちに、エリオ・モンディエルの治療を済ませておこう。」

「ありがとう・・・ございます。」

日番谷は松本に治療を任せると、腕組みをしながら険しい表情を浮かべ続ける。

「少しは時間を稼げましたが、追いつかれるのは時間の問題ですね。」

「ああ・・・早く手を打たないとな。」

「この瀞霊廷のあちこちで激突している霊圧と魔力は・・・多分、機動六課と他の隊長陣のものだと思うけど・・・そこからもかなり離れたところに来ちゃったし・・・上手く奴らに誘導されたみたい。」

松本はそう言いながら、現在治療を施しているエリオと傷ついたエリオのストラーダ、そしてエリオほどではないがそれなりのダメージを負っているシグナム達を見て、この痛い状況に顔を歪ませる。

シグナムも自分たちの状態を考慮すると、封印による捕縛は無理であると判断せざるを得なくなった。

「この状態では、私たちの力で奴を封じ込めることは無理そうだな。」

「残された手段は・・・――――あれしかないようですね。」

エリオはそう言いながら、予てよりあった方法論の一つであり自分たちが絶対に使いたくと思っていた殲滅と言う言葉を思い出し、苦い顔となる。

日番谷も割り切った態度で東海林を倒すことを覚悟する。

「あのパトリオットと戦って、勝利するしか道はねぇ・・・か。」

すると、その日番谷の言葉を聞いたアギトが口を挟んだ。

「簡単に言うなよ！センサーと乱菊さんの霊絡で辛うじて奴の出現のタイミングは掴めるが、それを無しでも奴はダメージを受ければ受けるだけカウンターを一つ溜めていく。ゲージが溜まって大爆発でも起こせば、それこそ！」

「分かっている。確かに、あれではギリギリ躱すのが精いっぱいだ。七十番台の縛道ですら力でねじ伏せる野郎だ。下手な戦法は奴に効果はない。」

「く・・・何ということですかね・・・」

一行に八方ふさがりな状況に直面してる中、シグナム達の顔が益々渋いものへと変貌していく。

「闇雲に攻撃するだけじゃ、ダメージは与えられないわ。せめても

う少しだけ、出現のタイミングを早くキャッチできれば・・・だけど、それでも。」

すると、その松本の言葉を聞いて日番谷が戦闘中に気づいたある事実を話し出す。

「いや、勝機がない訳じゃない。奴はダメージを受ければその分体の中にエネルギーが溜まる。だが、俺の氷輪丸の攻撃を受けた時は違っていた。どうやら奴は、物理攻撃や砲撃と言ったものに対する態勢はあるが、封じたり動けなくしたりするものに関してはゲージは溜まんないのかもしれない。」

「もしそれが本当だとすれば、日番谷の能力をフルに使えば・・・」

「勝機が見えて来る・・・！」

シグナムや聞いていたアギトとエリオはその事に僅かばかりの希望を抱き始めた。

「俺の憶測だからな。完全にそうとは言い切れないが、やってみる価値はある。」

「取りあえず、いつまでも此処にいるのは危ないわ。移動するわよ」

「はい。」

「そうだな。立てるか？」

日番谷はそう言いながら、松本の治療を受けたばかりのエリオに声をかける。

「はい。お蔭様で、どうにか。」

「よし。少しキツイかもしれないが、頑張れ。奴を見つけ出すのは容易な事じゃねぇが、松本。お前にも頑張ってもらうぞ。」

「はい！」

その後、エリオの治療を済ませた松本は直ぐにシグナムの治療の手当ても済ませる。

シグナムは治ったばかりの腕を軽く動かしながら、戦闘に支障が出ないかどうかを確か大丈夫であることを実感する。

「よし・・・これで一先ずは大丈夫だろう。」

「あんまし無理するなよ、旦那！それでもダメージは残ってるんだからな。」

「問題ない。ベルカの騎士はこの程度のことで如何にか成程、軟じゃないことは知っている筈だ。」

「だけど・・・！」

シグナムをロードとして認め、常に行動を共にするアギトはシグナムがやせ我慢をしているのではないか、まだ怪我が治りきっていないのではと心配ばかりが膨らむ一方だったが、日番谷はそんなアギトに向かってシグナムを信じるようにと伝える。

「信じてやれ。そいつがそこまで言うのなら、俺達はお前を信じる。

」

「日番谷・・・済まぬ。」

シグナムも日番谷の粋な発言を聞いて、素直に感謝の気持ちを露わにしその後深々と頭を下げた。

エリオもそんな自分以上に大人で、実力のある日番谷を見ながらいつか自分も日番谷やユーノ達と肩を並べるぐらいにまで成長したいと強く願うのであった。

すると、不意に松本があることを思い出し日番谷に申し付けてきた。

「隊長。実はさっき思い出したことがあるのですが・・・」

「何だ?」

「十年前、バウントの事件の時に現世へ派遣された際・・・今戦っている奴と似たような能力を使うものがいたのを覚えていますか?」

「ああ。あのクジラみたいなドールを使うバウントか・・・」

十年前、松本乱菊は空座町で出現したバウントの制圧の為に日番谷の命令で現世へと派遣され、空間を自在に操るドール「バウラ」を従える沢渡と対峙した当時の事を思い出しながら更に続ける。

「あの時、私の力と改造魂魄の之芭(ノバ)の力を使って、異空間に姿を消したドールの出現場所を突き止めた事があります。」

「?」

松本の行っている意味が今一理解できないでいる日番谷だが、松本はその直後決定的な一言を口にした。

「それと同じように、私の鬼道とユーノ・スクライアが開発したこのパトリオットセンサーをリンクさせれば・・・奴が現れるその瞬間を霊絡よりも早く感知できるはずです。」

「何だと!?」

「本当ですか!?」

この松本の発言を聞いた全員は大いに驚くと同時に、希望を決して捨てなかった自分たちに神がチャンスを与えてくれたとさえ思った。

「ええ。但し、それには私の残りの霊力全て使うかもしれないけどね。外したら、そこで終わりよ。」

「・・・・・・――――――」

日番谷は松本の妙案を聞くと、黙り込んだまま腕組みをし続ける。

「それ以外に、方法はないのですか?」

「この状況で他に策が出るとは思ってねぇよ。」

「そうですね・・・この事件で管理局の魔導師を始め、ここの死神さん達も多くが被害に遭っている。僕たちの出来ることをやりましょう!」

シグナム達の決意の籠った言葉を聞いて、日番谷もその案で事に臨むことを決め込む。

「分かった。松本、やれるか？」

「はい。チャンスは一度・・・私がセンサーとリンクさせて鬼道を使って奴を引きずり出します。その間は攻撃できないから、シグナムとエリオ達が奴を誘導して、隊長の力で封じ込めましょう。」

「はい！」

「分かりました。」

「やってやろうじゃねぇか！」

「松本。頼んだぞ。」

「はい！」

日番谷達は松本の妙案のもと、東海林棗との決着をつけるために作戦を開始。

果たして、この作戦は上手くいくのであろうか？

その頃、日番谷の氷輪丸の能力で氷漬けとなっていた東海林は自力で氷を溶かすと姿を隠した日番谷達を追って辺りを飛び回っていた。

「死にぞこないが・・・・・何か企んでるかもしれないが、既にゲージは九十パーセントに達している。残り十パーセント・・・これで全てが終わる。ふふふふ・・・はははははははははははあはは

あ！！！！！ここが奴らの墓場だ！！！！！行くぜ、ライノックス！」

東海林は両肩に残り僅かでゲージが満タンとなるダメージカウンターを一瞥すると、日番谷達を追ってその後も移動を続けていった。

一方で、日番谷達は適当な空間に到着すると東海林棗を誘い出すために松本の考えた作戦を実行に移そうとしていた。

「ここにしましょう。」

「ああ。」

日番谷は松本に心の準備が出来たかどうかを尋ねる。

「準備はいいか？」

「はい。」

松本は懐から取り出した鬼道の道具と、持っていたパトリオットセンサーを取り出し、パトリオットセンサーのコードだけを腕に付けると、自分の霊圧と同調させ始める。

「私の霊圧と同調させる・・・・・・」

松本が目を瞑って霊圧とセンサーの機能をリンクさせ始める姿を、シグナム達は神妙な表情でじっと見つめる。

「さっきと同じみたいに、上手くいってくれよ！」

松本が鬼道の力でリンクを開始した直後、松本の霊圧が帯状となって溢れだしていくが発動している本人は思った以上に体にかかる負荷に厳しい顔色となっていた。

「う・・・・・・・キツイ・・・・・・・！」

「松本・・・・・・・」

「松本殿・・・・・・・！」

その松本の様子を見ていた日番谷とシグナム達は心配そうに見つめる。

「う・・・・・・大丈夫です・・・・・・これくらい・・・！！」

松本はその後も体にかかる負荷に必死に耐えながら、センサーと自分の霊力をリンクさせる作業を続け、その後しばらくするとその作業が成功し鬼道とセンサーから発する波長が共鳴しシンクロ状態となった。

それを間近で見ていたシグナム達は驚愕の顔となる。

「！これは・・・！？」

「何が起こったんだ！？」

「どうやら松本の霊圧とセンサーの機能がシンクロしたらしい・・・」

松本は何とか第一段階となるその作業を成功させると、この機を逃

す訳にはいかないと思い至り取り出していた鬼道の道具を使って地面に文字を書き始める。

「！“南の心臓　北の瞳　西の指先　東の踵　風持ちて集い　雨払いて散れ”　縛道の五十八・・・―――」

文字を書き終えた瞬間、松本は探索型の縛道である五十八番の捕趾追雀を発動させる。

「“捕趾追雀”　！！」

発動と同時に、描いた円の中心を漢数字の羅列が飛び交う。

それを目で追いながら東海林の居場所を特定しようとする松本。

「５７・・・―――８９・・・―――９５・・・１０３・・・１２２・・・１３６・・・１８４・・・１９０・・・２０２・・・――くっ！！」

「乱菊さん！」

「・・・見つからない・・・さっきみたいに上手くいかいない・・・霊圧と魔力が混同してるから勝手が違うって言うの！？いや、そんな筈はない。さっきはちゃんと探し出せた。もっと力を入れないとダメって訳ね！」

そう判断すると、松本は更に神経と霊圧を注ぎ込んで東海林の居場所を突き止めることに全身全霊を注いだ。

日番谷はいつもは仕事も碌にしないでサボってばかりの松本を叱責

するだけだが、そんな松本を誰よりも信頼していることには変わらずこうして捜索に尽力してくれている松本を真剣な表情でじっと見つめる。

「松本・・・・・・」

シグナム達も日番谷と同じように黙って松本の様子を窺っていた。

「う・・・!!!くう・・・・・・!!!」

松本は全員の期待に応えるためにも、これ以上の被害を出さないためにも自分の力で何とか東海林を見つけ出そうと全霊力を注いで探索を続けた。

すると、今まで漢数字の羅列が飛び交うだけで一向に反応のなかった中央の画面に波紋が見え始めた。

「見えた!捕捉成功!!」

「本当ですか!?」

「よくやった、松本!」

日番谷達は松本が東海林の捕捉に成功したことに歓喜し、難しかった表情を和らげる。

松本は中央に映し出された東海林の姿を確認すると全員に呼びかける。

「向こうは気づいていない。来るわよ!!」

「よし。俺は仕込みに入る。引付は任せるぞ。」

「はい！」

「（ああ）！」

日番谷はそう言うと、シグナム達に引付を任せて距離を取ると自らの斬魄刀の能力を最大限にまで解放する。

「卍解！」

その瞬間解放と同時に、刀を持った腕から連なる巨大な翼を持つ西洋風の氷の龍、及び三つの巨大な花のような氷の結晶・氷輪丸の本体を日番谷自身にまとわせたような形態へと変化し、持っていた刀の鍔が微妙に変化したものへと変化する。

「『大紅蓮氷輪丸（だいぐれんひょうりんまる）』！！」

その一方で、シグナム達はこの機を逃すまいと自分の相棒であるデバイスをしっかりと握りしめ、この一撃で決着をつけると強く決意する

「（松本殿が作ってくれたこのチャンス・・・・・・無駄には出来ない！）」

「（必ずここで！！）」

「！上よ！！」

松本がその言葉を発すると、シグナム達は揃って上を振り向いた。

すると、その瞬間に空中に身を溶け込ませていた東海林が全員には気づかれていないと高をくくって奇襲を仕掛けようとしていた。

「よもや上からの攻撃とは流石に奴らも気づかないだろう・・・ん！！」

その時、東海林は自分の方を狙って待ち構えていたシグナム達を見て驚愕した。

「何故、こっちの位置を！？」

「行くぞ、エリオ！！」

「はい！」

二人は東海林に向かって勢いよく舞い上がると、自分の渾身の一撃を秘めた最強の紫電一閃をほぼ同時に仕掛けていった。

「「紫電一閃！！！」」

二人の息の合った攻撃が仕掛けられた途端、東海林は体にめり込んだ炎と雷の一撃に悲鳴を上げて苦しんだ。

「のあああああああああああああ！！！！！！！！！！」

「まだまだ！！！」

「はあああああああ！！！！！！！」

その後も二人は撃墜させた東海林を残りの魔力全てを使って攻撃を加えていった。

「ぐあああああああああああああああああ！！！！！！！！！」

東海林は二人の魔力全てをかけた攻撃をまともに食らうと、反撃もする暇もなく後方へと飛ばされていき、壁に激突した。

シグナムとエリオは東海林に自分の全てをぶつけると、その場に膝をついて肩で息をする。

「「は、は、は、は、は、は！！」」

そして、暫くすると東海林が砂埃の中から現れるとダメージカウンターを両肩に付けたままブラッド状態を解いてシグナム達の前に現れた。

「ち・・・・・ちくしょう・・・・・・！」

「！姿が戻ったわ！？」

「ブラッド状態が解けたんです。」

東海林は二人の攻撃を受け、満身創痍な状態でありながらもまだ諦めていない表情でこう口にしてきた。

「へへへ・・・やってくれるな・・・お前ら・・・！だけどお蔭でダメージカウンターのゲージが今まさに百パーセントに達した！こ

れでお前達は終わりだ！！」

松本は鬼道を解くと、あまりに自分勝手な事を行ってきた東海林を一喝する。

「！！勝手な事言ってるんじゃないわよ！！」

「勝手で結構だ！食らいやがれ・・・・・俺の痛みの大きさを！！！！」

東海林はそう言うと、今まで喰らった全ての痛みを一気に解放するためにダメージカウンターを自らの手で破壊しようとした・・・――その時。

その東海林の行動を止めたのは背後から仕掛けられた氷の蔓であった。

おまけにダメージカウンターそのものもその氷によって固く凍結され、自力では破壊することが出来なくなってしまっていた。

東海林はその光景を見ながら仰天する。

「――――――な・・・何だよ・・・・・・これ・・・！？」

「・・・勝利を確信して、目の前の敵ばかりに気を取られ過ぎなんだよ、お前は。『油断大敵』って言葉、知らねぇのか？」

すると、驚きを隠せない東海林に耳元に卍解状態の日番谷が現れる。

「お前・・・一体何しやがったんだ！？」

「氷漬けにして、てめぇのその爆発とやらを封じさせてもらった。どうやら、俺の憶測は間違ってはいなかったらしいな。」

「この野郎！！！こいつを溶かしやがれ！！！」

「そいつは無理な話だ。氷輪丸は氷雪系最強。そんじょそこらの氷とは訳が違うんだよ。」

「くそっ・・・！！」

東海林は何とかその氷を溶かそうと試行錯誤を試すが、日番谷の言っていた通り氷輪丸の氷は頑丈にできており、全く溶ける様子は窺えなかった。

「止せ。もうお前に勝ち目は無え。こいつらが時間を作ってくれたおかげで仕込む時間を確保することが出来た。お前の能力は確かに常人を遥かに逸している。だがな・・・俺達死神の力もお前ら人間のそれを遥かに逸してるってことを、忘れてるんじゃねぇよ。」

そう言うと、日番谷がそんな東海林に向かって刀を前に突きだすと、その東海林を覆い隠すように氷柱を大量に発生させた。

「！こ・・・これは・・・！？」

「何だ・・・この氷は・・・！？」

「（何時の間に現れたんだよ！）」

日番谷の技をその目で見た瞬間、東海林を始めシグナムやエリオ達

も大いに驚いた。

「俺は周囲の水を己の武器とすることが出来る。お前の武器がそのデバイスって言うなら、俺の武器は――――――この大気に在る全ての水だ。」

「・・・な・・・」

「終わりだ・・・パトリオット。」」

東海林は自分を殺す覚悟で眼差しを向けてくる日番谷に恐怖を覚え、それと同時にこの状況を解決使用する気力がその恐怖によって何処かに吹っ飛んでしまったのだ。

「や・・・止めろ・・・止めろ・・・止めろ!!!!!!!!」

日番谷は氷のように冷たい表情で、握っていた刀を鍵を回す要領で動かした。

「『千年氷牢(せんねんひょうろう)』」

その瞬間、東海林を囲んでいた大量の氷柱は一気に東海林を封じ込め、それと同時に永遠の眠りを与えるのであった。

「ぎあああああああああああああああああ!!!!!!!」

東海林は悲鳴を上げながら、己の命をその氷塊内で迎え暫くすると氷塊は砕け散り跡も形も残さず東海林は消滅していった。

止めを加えた日番谷は卍解を解くと、影も形を残さず消えた東海林

に最後の言葉をかける。

「・・・悪いな。仲間の仇は討たせてやれねえ。」

日番谷の発動させた千年氷牢を廷内のある場所で見ていた浮竹や、合流を果たしたはやて達はというと、魔法の世界では珍しいと言われる氷雪系の技を自在に操る日番谷の能力の一端を見て驚愕していた。

「!あれは・・・」

「確か、日番谷隊長の大紅蓮氷輪丸の千年氷牢じゃないか!?」

「初めて見たが・・・全く恐ろしい技だな・・・」

「リィンやはやてちゃんのそれとは、桁違いです・・・!」

また、田吾作に引き続き東海林の気配も消えたことで仲間のパトリオット達にもそのことが伝わってきた。

「!これは・・・・・東海林!!」

銀太郎はあまりのショックに一度その場に膝をつくと、大粒の涙を流しながら声が張り裂けるほど泣いたそうな。

「そんな・・・――――東海林も・・・・・・・う・・・わあああああああああああああああああ!!!

不敵な笑みを浮かべる。

「――――――また一人、消えたか・・・・・・まぁ、それも予測通りだ。さて、このまま全員が消えてくれれば幸いだな。」

この高円寺の言葉の真意はのちに判明することだが、今は取りあえず伏せておくことにしよう。

そして、最後に東海林の消滅を確認した同じく単独で戦いを続けていたパトリオットの将、オーリー・エンダは銀太郎と全員で撮った写真が収められたロケットに涙を落としながら次のように言葉を発する。

「田吾作・・・東海林・・・よく戦ったな。あとの事は私たちに任せろ。だが、その前に私にはやらねばならぬことがある。」

オーリーはそう言うと、モニター画面に映し出された浦太郎のこれまでの戦闘データなどを映しながら、最後の決戦に挑もうとしていた。

「決着を・・・――着けねばならぬ。亀井浦太郎――――――」

消えていったパトリオット。

それぞれの思いが交錯する中、オーリーはいよいよ浦太郎との最後の決戦に挑む。

果たして、この先に待ち受ける運命とは何なのか！？

日番谷参戦！氷結の劇場（後書き）

教えて、ユーノ先生！

ユ「今日は日番谷隊長についてだ♪」

ユ「十番隊隊長の日番谷冬獅郎君は流魂街の出身でありながら、最年少で隊長に上り詰めた天才児だ。性格は氷のように冷たいと言われるけど本当は仲間想いな真面目で優しい性格。」

ユ「斬魄刀は氷雪系最強の『氷輪丸』。水と氷の巨大な竜を生み出し、天候をも支配する能力を備えている。卍解は『大紅蓮氷輪丸』。その破壊力は絶大で、背後に浮かぶ氷華が卍解が解けるまでのカウントダウンとなっているんだ♪」

乱「でも、普段は氷を出す以外に大した使い道のないのが玉に傷よね・・・ウチの隊長の斬魄刀って本当悲しいわ・・・」

日「悲しくもねぇし！そう思ってるのはお前だけだ！！」

乱「えへへへへ！！！」

魔導師図鑑ハイパー！

いまだ答えに悩み続けるなのはと呆れる恋次の前にはやてが通りかかる。

は「何やってるんや、なのはちゃん。恋次さん？」

恋「はやてか・・・なのはがこの漢字、読めねんだよ。」

そう言って恋次ははやてに例の店の名前の漢字を見せると、はやては自信満々な表情を浮かべる。

は「なるほど・・・任せとき、なのはちゃん。私、こう見えても本はたくさん読んどるから漢字には強いんよ・・・答えは・・・」

次の瞬間、はやてが口にした答えとは。

は「『ぎんゴキブリ』や！」

聞いた瞬間、恋次全否定。

恋「だから、店の名前にゴキブリなんてありえねぇだろうが！！！てめーも、ナルホドそれか！！みたいな顔してんじゃねぇ！！！」

恋次ははやてに叱咤しながら、納得した表情のなのはにも一喝する。

は「じゃあ、『ぎんバエ』かな。」

な「あ・それ私も言った。」

恋「ハエでかぶんなよ！！！」

その後も、この終わりなき二人の珍解答は続いた。

は「『ぎんオオヤママユガ』！」

恋「ゴロ悪いわ！！」

な「『ぎんユーノ君』♪」

恋「ユーノ関係ねえだろ!!オマエら、国語勉強し直せ!!!」

そんな三人を見ながら、ティアナがユーノに正しい読みを訪ねる。

テ「それで・・・結局何て読むんですか?」

ユ「はぁ～～『ぎんとんぼ』だよ・・・」

宣伝

ユ「ユーノ・スクライア外伝のスピンオフ作品、高町ヴィヴィオ外伝がスタートしたよ♪」

な「詳しくは高町ヴィヴィオ外伝と検索!」

一「ヴィヴィオとそこから始まるクロスオーバーな展開が期待されるこの小説、見逃すんじゃねぇぞ!」

ヴィ「是非、読んでみてくださいね!」

オーリー、死を賭けた想い（前書き）

オ「ダイシーを守護する我らパトリオット・・・・・・私たちは今までなら、管理局がその管理・保管を徹底するロスト・ロギアと同じく単なる兵器でしかなかったのだろう。銀太郎が私たちに生きる意味を与え、ごく平凡な時間を過ごして一緒に生活をしてきて・・・いつの間にか十年・・・・・・大切な思い出が随分と増えたものだ。」

オ「銀太郎と・・・仲間たちと・・・永遠の繁栄を願って・・・誇りをかけて取り戻さなければならないものがある。だから、戦うのだ。」

ユ「ユーノ・スクライア外伝　パトリオット篇・・・・・・始まります。」

オーリー、死を賭けた想い

＞ｉ１８７６０―７０９＜

ユーノ・スクライア外伝・・・前回の三つの出来事。

一つ：苦戦を強いられる四人の前に日番谷が登場。

二つ：連係プレーの末、東海林を凍結させ撃退。

そして、三つ：高円寺が不穏な動きを起こし始める。

尸魂界全土で繰り広げられるパトリオット対死神・魔導師の激戦。

隊長格の死神達が参入することで、四月一日田吾作と東海林棗は敗北。

その結果に関しては、機動六課の全線メンバーの誰もが納得するものではなかった。

本来ならば人を生かすために戦いそれを守ることを主体としている時空管理局にとって、このような死という結末で終わる戦いは望んでなどいなかった。

だが、昔から言われている言葉にこんなのがある。

――――――世界はいつも、こんな筈じゃないことばかり

我々は生きている限り、その厳しい現実に直面し、それと正面から向き合っていかなければいけないのだ。

さて、動乱が徐々に鎮静化の方向に傾き始めたころ、高円寺虎彦は死神の網を掻い潜って単独で聖地九九琉閑の池へと向かっていたが、その一方で消えていくパトリオットの霊圧を研ぎ澄ませ、不敵な笑みを浮かべる。

「・・・田吾作も東海林も消えた・・・か・・・」

そう口にすると、高円寺は廷内に散らばった残りのパトリオットの霊圧を確認すると呟くようにまた言葉を発する。

「これで残ったパトリオットは“三人”・・・・・・このまま同士討ちでも何でもいいが、順当に奴らが消えていけば、俺の計画も予定通りに事が運ぶ。」

しかし、この不可解な思考を張り巡らせる高円寺にもある一つの悩みの種がある。

それは、高円寺にとっても最も警戒すべきパトリオットの将・・・――――オーリー・エンダである。

高円寺はこのオーリーに存在を、疎ましく思っており自らの手で消したいと常々思っていた――――――ある計画の実行の為に。

「だが、その計画の成功の為にはどうしても俺の手で・・・パトリオットの将であるオーリーを始末しておかなければな。もっとも、それは容易なことではないのだが・・・――――!?」

と、些か頭を悩ませていた高円寺だったがふとその時、オーリーがある場所に向かって移動し、そのオーリーと同じように共通の場所へと向かっている一度自分が戦闘不能の状態にまで追い込んだあの男の魔力を感知。

「この魔力反応は・・・・・ふん。面白い。暫く観察させて貰うとしよう。あの二人の戦いは少々長引くだろうと思うが、いい退屈しのぎにはなる。それと、いいデコイにもなる・・・ふふ・・・」

さて、高円寺の思考を出会った時から警戒していたパトリオットの将であるオーリーはというと、死神達を昏倒させていき浦太郎との本当の意味での決着をつけるために広い場所へと移動した。

オーリーは浦太郎にも分かるように自分の魔力波長を顕著にあからさまに発しながら、懐から嘗て自分が使えた今の銀太郎の内側の性格を表に出していた初代ダイシーの形見――既に壊れて時間の止まった懐中時計を握りしめながら物思いにふけっていた。

「・・・壊れた時計は修理することで、止まっていた時間も再び動き始める・・・か・・・」

そう呟いたオーリーの顔は、いつもの眉間に皺を寄せた力強いもの

とは違い、何処か複雑なこの気持ちを素直にみんなの前で暴露したいと、そう言いたげな表情となっていた。

「・・・我々パトリオット、もといバウントの時間は初めから止まったまま・・・歯車を回しても、ネジを巻いても動く事は無い」

オーリーは虚ろにもうっすらと自分の顔を映す懐中時計を見つめながら、その止まった長針に手を当てる。

「時と共に生きる人間たちは、皆一人の例外もなくバウントを拒絶する・・・ただ、そこに存在するというそれだけの理由で・・・決して流れることのない時間を抱え、バウント共は人間たちに蔑まれながら生きてきた・・・」

オーリーは自分がバウントであることに誇りなど持っていない。

自分はバウントでありながら、今はダイシーに仕える自由の戦士パトリオット。

彼女にとっての誇りとは、そのパトリオットの将として自らが敬愛しただ一人仕えると信じたダイシー、狼谷銀太郎と最後まで心と体も共にあると言う事であったから。

「狩谷というバウントは、そんな流れぬ時を自ら動かし浄界章（じょうかいしょう）の力でこの尸魂界ごとすべてを無に帰そうとし、結果自らの存在が滅んで行った・・・・・・」

何処か決意のような眼差しを宿し、時計の針を一回りさせたオーリーは徐にその場から立ち上がると、浦太郎の到着を待ってデバイス「チータス」を取り出す。

「私たちも・・・運命を自らの手で変える。そのために――――――」

一方で、雛森と金太郎達と共に瀞霊廷内を爆走していた浦太郎その人とはと言うと、オーリーが自分に向けてきていると思われる魔力を感じ取り、救護人の搬送で現在一息ついている今を見計らって、自分も覚悟を決めてオーリーとの最後の決戦に臨もうとしていた。

浦太郎は誰にも気づかれないように辺りを警戒しながら、静かにその場から立ち去ろうとしていたが――――――

「何処行くんだよ?」

「!」

そんな浦太郎の行動にいち早く気付いたのは、同い年で同じ従業員でもある桃谷鬼太郎であった。

「先輩・・・・・・・」

「こそこそしやがって。ま、亀の考えてることなんて大体見当はつくがな・・・」

「・・・・・・」

「ま、俺には関係ねぇことだろうけど。」

浦太郎の気持ちを汲み取って、敢えて止めようともしない素振りの鬼太郎。

すると、浦太郎は珍しく顔を伏せながら鬼太郎にこんな頼みごとをしてきた。

「・・・先輩・・・上手く金ちゃんと雛森副隊長には誤魔化しといてくれる？僕はこれからオーリーと決着をつけに行ってくるよ。ただし、あくまでも僕一人でね。」

「・・・手出しは無用って訳か・・・それも偶にいいかもな・・・分かった。熊達には適当に言っておく。もっとも、俺だってあの髭クソ男との勝負もついてねぇし・・・貸のつもりで引き受けてやる。」

「ありがとう・・・先輩・・・」

浦太郎は鬼太郎にお礼の言葉をかけると、フィッシャーマンを取り出し利き手の中に握った。

〈Ｄｏ　ｙｏｕ　ｇｏ　ｆｏｒ　ｃｏｎｃｌｕｄｉｎｇ？（決着をつけに行きましょうか？）〉

「うん。これがオーリーとの・・・本当に最後の戦いだ。」

浦太郎はそう言葉を発すると、フィッシャーマンの甲冑モード機能を起動させ、それと同時にその場ではあまり不釣り合いであるシュールなサウンドミュージックが流れてきた。

〈Ｒｏｄ　ｆｏｒｍ〉

「変身！」

浦太郎は専用の青を基調とした特製の甲冑に身を包んで、フィッシャーマンを構築させるとその握ったフィッシャーマンにも言葉を投げかける。

「フィッシャーマン。準備の方はいいかい？」

〈Ｔｈｅｒｅ ｉｓ ａｌｗａｙｓ ｍｙ ｍｉｎｄ ｗｉｔｈ ｙｏｕ. Ｃｏｍｅ, ａｎｄ ｔｏ ｔｈｅ ｌａｓｔ ｃｏｎｃｌｕｓｉｏｎ ｒｅａｌｌｙ.（私の心は常に、あなたと共にあります。参りましょう、本当に最後の決着に。）〉

「よし・・・あとは店長から渡されたこのセンサーを追っていけばいいか・・・先輩！」

「あ？」

「・・・行ってくるよ・・・」

「・・・ああ・・・」

浦太郎は鬼太郎に後の処理を任せると、オーリーとの最後の決戦に向かうためにソニックムーブに匹敵するほどの速力で反応が感知された場所へと移動を開始。

そんな消えていく浦太郎の事を、鬼太郎は黙って見送るのであった。

そして、オーリーが目を瞑りながら対戦相手が現れるのをじっと待ち望んでいると、数分のうちに幾度となく武器を交えてきたあの男がついにその姿を現した。

「・・・来たか・・・」

浦太郎は仮面越しにオーリーの方を凝視しながら、徐に言葉を発する。

「・・・やぁ。随分待たせたね。」

オーリーは浦太郎のその言葉を聞くと、改めて本気で自分と決着をつけるつもりなのかその真意を問いただす。

「――本気なのか？」

「何がだい？」

そう口にしながら、浦太郎は一歩前に足を進める。

「本気でこの私を相手に、一人でやる気なのかと聞いている。」

「何を今更。その為に僕は先輩に言伝を頼んで、金ちゃんたちを出し抜いて君と決着をつけに来たんじゃないの？」

「成程・・・――いいだろう。この勝負でケリをつけるぞ。」

二人はそう言うと、それから暫くの間一歩もその場から動かず長い長い沈黙を保ち続けるのであった。

さて、雛森の指示に従い怪我人の搬送を手伝っていた金太郎の方はというと、壁に背をかけながら一息ついている最中であった。

すると、金太郎は周囲を見渡した時に本来この場にいるはずの人影が見当たらないことに気づき不審に思っていた。

「ぬ？」

「あの、どうかしましたか？」

同じくお茶を飲んで一息ついていた雛森がそう尋ねると、金太郎はもう一度辺りを見渡しながら次のように言葉を口にする。

「妙ですな・・・・・・浦太郎の気配が遠のいていっている・・・」

「え？あ・・・・・・そう言えば浦太郎さんの姿が見えませんね・・・・・」

金太郎に言われた雛森も辺りを見渡してみるが、確かにそこに浦太郎の姿はない。

ま、オーリーとの決着の為に戦闘に向かったのだから居なくて当然なのだが。

そんな訝しげに表情を曇らせる二人を見て、その浦太郎を戦闘に向かわせた鬼太郎はいつも雰囲気を乱さないように適当に言い訳を取り繕う。

「熊の気の所為だろ？魂詰めてるから余計そう思ってるだけだよ。」

「・・・そうだろうか・・・」

鬼太郎の言葉を耳にしても、金太郎の不安は拭えない。

鬼太郎はばつの悪そうな顔を浮かべながら、オーリーの元に向かった浦太郎の事をその場で気にかけていた。

そして、浦太郎本人はというと長い沈黙を破ってオーリーと今まさに最後の戦いを勃発させようとしていたのだ。

「いいだろう。ここでお前との勝負も終わりにさせてもらう。一対一、正々堂々と全力でぶつからせてもらう。」

「お手柔らかにね。」

オーリーは武器を構えた浦太郎から少し距離を取ると、チータスを取り出し構築と同時にブラッドカートリッジを使用する。

「チータス、セットアップ！」

〈Ｂｌｏｏｄ　ｃａｒｔｒｉｄｇｅ　ｌｏａｄ〉

オーリーがブラッドカートリッジを使用すると、一番最初に浦太郎と正面からぶつかり合った時と同じ、ライオンの姿を模したブラッド状態へと変貌を遂げ莫大な魔力を放出させてきた。

「その姿は何時見ても魅力的だね。ラインが実にセクシーだ。さて、僕も行かせて貰うよ。」

〈Ｇｏｉｎｇ ｂｙ ｉｔ ｉｆ ｉｔ ｆｉｇｈｔｓ ｉｓ ｐｒｏｐｒｉｅｔｙ ｔｈｏｕｇｈ ｏｎｅ'ｓ ｂｅｓｔ ｏｐｅｎｉｎｇ ｏｆ ｔｈｅ ｗｏｒｄ ｃｏｍｐｌｅｔｅｌｙ ｉｓ ｈａｔｅｄ. Ｐｌｅａｓｅ ｌｅｔ ｍｅ ｇｏ.（全力全開という言葉は嫌いですが、戦うのならそれでいくのが礼儀。行かせてもらいます。）〉

浦太郎もフィッシャーマンも覚悟を決めると、オーリーに負けず劣らずの膨大な魔力を解放してお互いに牽制し始める。

「どちらが勝っても遺憾なし。これが私とお前の最後の戦いとなろう。お互い、悔いの残らないものとしよう。」

「ああ。是非そうしたいところだよ。」

「行くぞ。リベルのパトリオット、アルバート・ヴェン・ダイシーの守護者にしてパトリオットの将、オーリー・エンダ！」

「スクライア商店従業員兼、機動六課嘱託魔導師、亀井浦太郎！」

お互いが自分の素性を堂々と名乗り明かし、雌雄を決する勝負のゴングが鳴り響く。

「「参る！」」

二人はその瞬間、ほぼ同時に動き出すと自分の相棒をぶつかり合わせて熾烈な戦闘を繰り広げるのであった。

デバイス同士がぶつかった瞬間、二人の魔力が同調してやがて波紋となって廷内に散らばっていた残りのパトリオット達の元へと伝わ

った。

白鴎や瀬間子の二人にも、オーリーが浦太郎と衝突を始めたことがその波長から直に伝わってきた。

「これは・・・・・・!?」

「オーリーか・・・戦っているのは、亀井浦太郎とか言う翡翠の魔導死神に使える手練れの男か・・・」

同じように、オーリーの存在を疎ましく思いこの中では一番思考の読めないでいる高円寺の元にも波長が伝わってくる。

「・・・始まったか・・・どれ、俺ももっと近くに行ってみるとしよう。」

高円寺はそのように口にすると、屋根の上を伝ってオーリーと浦太郎が戦いを繰り広げている戦場へと向かっていった。

浦太郎とオーリーの最後の全力全開の戦いはその間に熱を増し、まさに辺りは戦禍に包まれていた。

「うおおおおおおおおお!!!!!!」

〈Ｄｏｌｐｈｉｎ　ｄｒｉｖｅ〉

浦太郎はこれまで以上に精度を上げ、切れのある動きのドルフィンドライブの嵐でオーリーを翻弄し、徐々にダメージを与えていく。

「く!!!!!」

〈Ｌｉｏ　ｂｌａｄｅ〉

オーリーもその攻撃に耐えながら尖端の角に魔法刃を作り出し、巨大化したそれで一斉に向かって来た浦太郎のドルフィンドライブを吹き飛ばす。

「せいや！！！！！」

ライオブレイドの勢いに押され、浦太郎は装甲を傷つけら後方へと飛ばされる。

「のああ！！！」

「チータス！」

〈Ｂｌｏｏｄ　ｅｘｐｌｏｓｉｏｎ〉

オーリーはブラッドカートリッジを使い、体を蜃気楼の如く分身させるとその状態から一気に電光石火の如く駆け抜けていく。

「スタースストライクファントム！」

「！！」

浦太郎はギリギリのところで体制を立て直すと、防御を展開させてオーリーのスタースストライクファントムを凌ぎ切った。

「危ないじゃないか！？そんな悪い子には、キツメのお仕置きだ！」

〈Ｒｏｄ　Ｓｐｅａｒ　Ａｑｕａｒｉｕｍ〉

浦太郎はスピアトルネード時よりも巨大で大威力の水流の竜巻を発生させ、対象物を水の圧力で押し潰すこの魔法を発動させる。

「ロッドスピア・アクアリウム！！」

オーリーはこの戦いにおいて更に威力と錬度を上げてきた浦太郎の攻撃を回避すると、思わず興奮を覚えた。

「この期に及んで、まだ錬度を上げてきたか！流石だな！！」

「それはそっちだって同じじゃないの！」

「ふん」

浦太郎の言葉にこの上もないぐらいの喜びを感じるオーリーは、鼻で笑ってその感情を表現しながら再び浦太郎と衝突を繰り返すのであった。

「「はあああああああああああ！！！！！！！！」」

そんな最終決戦に臨んでいる浦太郎のことが気にかかり、何も知らないでいた金太郎が鬼太郎に何とか問い質すことに成功し、その事を聞かされるとかなり焦った様子で鬼太郎の肩を持ちながら鬼太郎に言葉をぶつける。

「何ですと！？何故それを早く言わないのだ！！」

「口止めされてたんだよ！！男と男の譲れない約束なんだ、これは

！！」

「そんなもの！！命に比べれば大した事は無い！！」

金太郎は不貞腐れた様子の鬼太郎の肩をさらに激しく揺するが、状況を見ていた雛森がすぐに止めにかかる。

「あ、あの・・・落ち着いてください金太郎さん！」

「雛森副隊長・・・ですが！」

「状況は理解できました。直ぐに追えば間に合うはずです。幸いにも、センサーはあなた方個人がそれぞれに所有していますし、浦太郎さんの残存霊子を辿ればどうってことありません。」

「分かりました。では急ぎましょう！」

金太郎は早速浦太郎を追いかけるために、雛森と鬼太郎と共に移動を開始しようとした――――――まさにその時だった。

「！！雛森副隊長！！」

部下の一人が別班からの緊急の連絡が入ったことを慌てた様子で伝えてきたのだ。

「どうしました！？」

「五班から連絡がありました！パトリオットと思わしき少年と交戦・・・全員敗北したとの報告です・・・！」

「何ですって！？」

突然の不測の事態に表情を一変させる雛森だったが、少年という言葉を聞いた瞬間、金太郎と鬼太郎は顔を見合わせ特徴を尋ねる。

「おい！その少年の特徴って・・・！？」

「報告によれば、少年は鍵爪のようなものを武器にしたやや小柄の背丈をしてるとのことです・・・」

金太郎はその言葉で、少年が白鴎恭一郎であると直感する。

「！！白鴎・・・！」

「やっぱりそうか・・・・・・なぁ、雛森ちゃんよ。」

「はい。」

「亀を追いかけるのは俺達でやろう。熊には白鴎の所へ向かってもらうぜ。その方が都合がよさそうだからな。」

雛森は鬼太郎の提案を聞いて、いつも以上に顔を歪める金太郎を見て悟りそれを受理することとした。

「・・・分かりました。では、金太郎さん。お願いできますか？」

「・・・承知！」

金太郎は雛森の言葉を聞くと、鬼太郎と雛森に浦太郎のことを任せて自分は白鴎の元へ向かうため、アックスオーガを取り出した。

金太郎は何を思って白鴎と正面からぶつかり合うのであろうか。

その頃、浦太郎とオーリーの決戦は熾烈を極め終盤へと向かいつつあった。

「おおおお！！！！！！！！」

「はあああ！！！！！！！！」

お互いの全力全開で己の魔法をぶつけあい、いつ誰が倒れても可笑しくないと言う傷と疲労を体に溜めながら、二人は向き合い息を上げる。

「は、は、は、は、は」

「は、は、は、は、は」

オーリーも浦太郎も全力全開でぶつかり合っていた結果、浦太郎自慢の甲冑にもあの時以上に皹が入り、オーリーもブラッド状態が解けかけようとしていた。

「ブラッド状態も・・・そろそろ限界を迎えてきてるよ・・・」

「そちらも・・・甲冑の至る所がひび割れているのではないか・・・」

「まぁ、どちらにしても・・・」

「次が最後の一撃・・・だね・・・」

二人は同じ結論に達すると、最後の一撃で全てを終わらせるために武器と取って最大出力の魔力をチャージする。

「チータス。ブラッドカートリッジロード！」

〈Ｂｌｏｏｄ　ｌｏａｄ〉

「こっちだって！フィッシャーマン、カートリッジロード！」

〈Ｌｏａｄ　ｃａｒｔｒｉｄｇｅ〉

オーリーは残っていた全てのブラッドカートリッジをロードし、浦太郎も合計八発のカートリッジを一度に消費する。

すると、オーリーの背後に現れる巨大なライオンを模した魔力の塊。

それに対して浦太郎は全身を覆い隠すほどの青い魔力光から創り出された身の丈を容易に超す巨大な海の神、ポセイドン。

「僕自身の最強技で、君に打ち込み決着をつける！」

「私も・・・この一撃で全てを終わらせよう！」

両者はそれを決め込むと、双方ともその状態から更に魔力を上げると聞き足を前に出して踏ん張りをつけると、徐に技の名前を口にしだす。

「ポセイドン・・・・・・」

浦太郎は自身が創り出し体に纏わせていたポセイドンが持つ右手の三叉矛を操り、ポセイドンはオーリー目掛けてそれを投げるように構える。

「シューティングスター・・・・・・」

一方でオーリーは背後のライオンを無数に分裂させると、数に物を言わせ更に一撃必殺の破壊力を持ったその技を浦太郎に向ける。

「クラッシュ！！！！！」

「ブラスト！！！！！」

両者の技が同時に発動し、浦太郎の最強技であるポセイドンクラッシュの三叉矛とオーリーのシューティングスターブラストが発動し、両者の技がお互いにぶつかり合おうとしたその時、思わぬ事態が起こった。

〈Ｄｅｎｙ〉

「「！」」

二つの技の間に入って、両者の最強技を造作もなく消し去ったその魔法。

オーリーはその魔法を使うものの正体を知っており、同時に彼女が最も警戒する人物の技でもあったから、目を疑った。

やがて、爆風が晴れたその中から出てきたのは浦太郎が今一番嫌悪するパトリオット、高円寺虎彦と出会った。

「・・・お取込み中失礼する。」

不敵な笑みを浮かべてそのように言葉を発する高円寺。

「お前は・・・高円寺虎彦!?」

「高円寺!チータス!!」

〈Ｙｅｓ!!〉

「え!?」」

高円寺の姿を見て嫌悪感を抱く浦太郎であったが、その瞬間オーリーは突然ブラッド状態のままチータスと共に何の前触れもなく高円寺に向かって攻撃を仕掛けに行ったのだ。

高円寺はオーリーの攻撃を受け流しながら、相も変わらず不敵な笑みを浮かべるがその様子を見ていた浦太郎はオーリーの行動の意図が分からず混乱していた。

「何やってるの!?何で仲間同士で争ってる訳――――――!?」

高円寺は自分に対して牙を向けてきた形相のオーリーを見ながら、確信した表情で呟く。

「やはり、お前は俺自らの手で片づけなければならないようだ。確信だよ。」

オーリーはただならぬ殺気を纏わせながら、高円寺に向かって強い

口調で常々自分が抱いていた高円寺に対する不信感を赤裸々に暴露する。

「高円寺!!お前は何をしようとしている!?」

「何の事だ?」

「何故、銀太郎のことを思ってるのなら・・・田吾作や東海林をみすみす見殺しに出来た!?貴様は・・・銀太郎に何をしようとしているのだ!?」

〈Ｓｔａｒ　ｓｔｒｉｋｅ　ｂｕｒｓｔ〉

オーリーはその瞬間、強い殺意を攻撃に変えて高円寺目掛けて星の形を象った火炎弾を飛ばした。

それを高円寺は得意の否定型魔法イグノアランスを使い軌道を変更させ、撃ったオーリーにそっくりそのままお見舞いする。

「くっ・・・このおおおおお!!!!!!!!!」

オーリーは自分の技が跳ね返され、満身創痍の状態であるにもかかわらず直撃を避けきれなかったことで余計にダメージを蓄積させて行った。

「は、は、は、は、は」

〈Ｍａｓｔｅｒ!〉

心配になったチータスが主人の状態を気遣う。

「大丈夫だチータス・・・私の事は構わず、思う存分やってくれればいい・・・！」

すると、そう口にするオーリーの背後にいつの間にか高円寺が立っていた。

驚愕するオーリーを余所に、高円寺は神妙な表情で次のように質問する。

「何をそんなに死に急ぐ？」

「貴様・・・う！！」

〈Ｍａｓｔｅｒ！〉

「その体で、よくブラッド状態を扱えるものだ。維持するの必要なブラッドカートリッジも先ほどの魔法ですべて使い切ったと言うのに・・・」

「う・・・！」

「我々は、この世界に生まれた魔法という大いなる力をその魔法陣により顕現しコントロールしている。だが、一度バランスを失えば、力は暴走し我々術者に襲い掛かる。そんなボロボロの状態では、ブラッドカートリッジを使うどころか自由に操ることなど出来はしないのだよ。」

「貴様を止め、銀太郎を助けるためなら、私はどうなろうと構いはしない！」

「違うな。やはり、お前は自分自身の存在価値を分かっていない。」

「何!?」

怪訝そうに高円寺の言葉に耳を傾ける満身創痍のオーリーだったが、高円寺はその直後オーリー自身も知らなかったある事実を語り出した。

「お前のデバイス、チータスは勿論、銀太郎自身もお前に主従の関係ではない感情・・・“愛情”を抱いている。」

「愛情・・・だと?」

「それこそ、子孫を残せないダイシーに使える六人のパトリオットにあって、お前が唯一母性の力を有するが故。」

「何・・・どういうことだ!?」

「ふん。」

突然の高円寺からの告白に戸惑いを隠し切れないでいるオーリーと、何か更に言いたげな表情で自分を凝視する高円寺。

すると、そんな高円寺の背後から浦太郎が攻撃を仕掛けてきた。

〈Ｓｏｎｉｃ　Ｓｐｉｒｅ〉

「はあああああああ!!!!!」

高円寺は浦太郎の動きを感知すると、背中越しに声を発する。

「ギガトロン」

〈Ｎｏｔｈｉｎｇｎｅｓｓ　ｂｉｎｄ〉

その瞬間、浦太郎の体に巻きつく全ての魔法を打ち消す高円寺の最強バインド。

「！？このバインドは・・・！？」

バインドに捕えられた浦太郎は地面に激突し、そのバインドによる更なる追い打ちを受けることとなる。

〈Ｎｏｔｈｉｎｇ〉

バインドは浦太郎とフィッシャーマンに強い負の力を流し込み、浦太郎はその力を受けながら悲鳴を上げて苦しんだ。

「ぐあああああああああああ！！！！！」

「亀井浦太郎！！」

オーリーは浦太郎のその様子に耐えきれず、思わず声を張り上げる。

そして、浦太郎は甲冑モードが解かれフィッシャーマン自体も待機状態に戻ってしまうとそのまま険しい表情となって倒れ伏した。

「ぐっ！」

高円寺はそんな浦太郎を一瞥し、不敵な笑みを浮かべながら更にこう口にする。

「どうやら、可哀そうな女が一人で死んでいくのを黙って見ているのが出来なかった・・・違うか？」

「て・・・てめぇ・・・！！オーリーに何をしようと・・・」

「貴様には関係のないことだ。特に、我らパトリオットをあろうことか二人も葬り去り、銀太郎を悲しませた非道な管理局の魔導師になど、教える気にもなれないのだが。」

「く・・・！」

浦太郎はその高円寺の言葉を聞きながら、動けない体で挑発的な口調の高円寺を険しい表情で睨みつける。

「だが折角だ。面白いものを見せてやろう・・・」

すると、高円寺はオーリーの背後に回り込んで強制的に体を拘束すると、徐にオーリーの頭に生えていたチータスに指令を送るコントローラーを握った。

「な・・・何をする・・・気だ・・・！？」

オーリーは突然の高円寺の行動がまるで読めず、浦太郎もそれを見て驚愕する。

「オーリー！」

「ふん。」

高円寺はこの状況において一体何をしようとしているのか？

さて、金太郎と別れて雛森と共に浦太郎の救援に向かっていた鬼太郎の方はというと、漸く浦太郎とオーリーの気配を感知し、急いで瞬歩で駆け抜けていった。

「あそこだ！」

「浦太郎さん！」

雛森と鬼太郎が浦太郎の元にかけようとしたとき、二人の前方に何の前触れもなく道を塞いできた高円寺が創り出したギガトロンの分身体。

「！？こいつらは・・・！」

「何なの・・・一体！？」

すると、ギガトロン分身体である対峙した二体は雛森と鬼太郎に向かって次のように語ってきた。

〈Ｉｔ ｄｏｅｓｎ'ｔ ｐａｓｓ ｉｔ ｈｅｒｅ ｂｙ ａｓ ｍｕｃｈ ａｓ ｏｎｅ ｓｔｅｐ. Ａｎ ｉｍｐｏｒｔａｎｔ ｃｅｒｅｍｏｎｙ ｉｓ．．．ｎｏ ｓｔａｒｔ．．．（ここからは一歩も通さない。大切な儀式が始まるのでな。）〉

「儀式？」

訝しげに復唱する雛森だが、鬼太郎は直ぐに斬魄刀を抜いてギガトロンを攻撃してきた。

「てめぇらの思い通りなんてさせるかよ！熾きやがれ、烈火！！」

鬼太郎たちの霊圧を離れた場所で感じ取っていた高円寺は直ぐに指令を下す。

「（ギガトロン、防げ。）」

〈Ｉｔ ｃｏｎｓｅｎｔｅｄ．Ｉ ｗｉｌｌ ｐｌａｙ ｔｈｏｕｇｈ ｉｔ ｉｓ ｔｒｉｖｉａｌ．（了解した。つまらないが、遊んでやろう。）〉

ギガトロンは烈火の炎を飛ばしてきた鬼太郎の攻撃をイグノアランスで消滅させると、魔力衝撃波を発生させて反撃する。

「てらあああああああああああ！！！！！」

それに対抗する形で鬼太郎は巨大な烈火を器用に回転させて防御する。

「鬼太郎さん！」

鬼太郎の様子を見て、心配になって声をかける雛森だが、その雛森を攻撃するためにもう一体のギガトロンが仕掛けに来る。

「は！」

雛森は咄嗟に刀を抜いて攻撃を受け止め、その状態でギガトロンに

尋ねる。

「儀式とは何のことなの！？」

〈Ｎｅｅｄ　ｎｏｔ　ｔｏ　ｋｎｏｗ！（知る必要はない！）〉

さて、二人がギガトロンと対峙しているその様子を気にかけながら、高円寺はオーリーの動きを封じ、コントローラーの角を握りながら浦太郎の言葉に耳を傾ける。

「高円寺！オーリーに何をするつもりだ！？」

「オーリーには、パトリオットの中で唯一・・・“母性”の力がある。」

「“母性”・・・！？」

「俺は過去の経験や調べた文献より、ダイシーが完全なる継承者となる為にはダイシーの血をその身に宿し、聖地へと足を踏み入れるだけでは駄目だということを知った。そして、様々なことを考慮しながら研究を重ね、完全覚醒に必要な方法を漸く見つけ出した。手順は二つだ。一つ目は、聖地に封印されている力を継承たる本人・・・つまり、銀太郎の体に取り込み馴染ませること。そして、もう一つの手順は・・・この女の力なのだよ！」

「・・・な・・・！」

「ぐ・・・！！」

高円寺の言葉を聞いて、度肝を抜く浦太郎とその高円寺に自由を奪

われ身動きの取れないオーリー本人。

「喜べ、オーリー。これはお前が銀太郎の母になる事と同義なのだよ。そう・・・銀太郎のダイシー完全覚醒への為に命を吹き込むのだよ。」

高円寺はそう言いながら、握っていたオーリーの角をきつく握りしめそのまま粉々にしようとしていた。

浦太郎は咄嗟に声を上げて止めるように説得する。

「止せ!!」

しかし、言葉虚しく高円寺はその場で角を握りつぶし粉々にしてしまった。

その途端、オーリーは叫び声を挙げて身体を襲う激痛に苦しんだ。

「ぐあああああああああああああああああああ!!!!!!!!」

「オーリー!!!」

浦太郎は重い体を何とか起こして近寄ろうとしたが、その瞬間オーリーと融合を遂げていたチータスにも異変が起こり、体中の魔力と生命エネルギーを暴発させ始めた。

この光景には浦太郎も終始驚きを隠し切れないでいた。

「な・・・チータスもだって!?」

〈ＧＡＡＡ

〈ＧＡＡＡ

「おい・・・ウソだろ・・・・！？」

「チータスの捨て身の攻撃を受けて、あの程度しか傷ついていないだと・・・・！！」

高円寺は炎の中で熱さも訴えることなく、自らの周囲に魔力を覆って炎自体から身を護っていた。

だが、それだけが高円寺の力ではないと判断したオーリーは徐に傷を抑えて立ち上がりながら高円寺の最大の強さの秘密に気づいた。

「・・・高円寺は・・・自らの体をデバイスであるギガトロンと常時融合させている・・・！」

「何！？」

浦太郎もオーリーが発したその言葉には耳を疑ったが、高円寺はその通りとばかりの表情で二人を見、周囲の炎を全て振り払った。

「ま、そういうことだ。」

「そう・・・お前は出会ったころから桁違いに強かった・・・そして、それはこれからも・・・私は・・・結局貴様に利用されただけ・・・愚かな女に過ぎない。だけど・・・・・・チータス！！」

〈Ｍａｓｔｅｒ〉

オーリーはそう言いながら、頭上に浮かぶ炎に包まれたチータスに向かって優しく手を差し伸べ、柔らかい表情でこう口にする。

「御免ね・・・」

「一体何を!?」

オーリーの行動の意図が読めない浦太郎だったが、オーリーはそんな浦太郎を余所に頭上のチータスに向かってこう言った。

「やれ!」

〈Ｕｎｄｅｒｓｔｏｏｄ〉

チータスはオーリーからの自分に向けて発した最後の命令を聞き入れると、全身の残っていた力を使い、最後の一撃を加えるために高円寺に突進していく。

高円寺はチータスの最後の一撃を食らう直前にイグノアランスを発動させ、チータスの存在そのものを消し去ってしまう。

「ぐ・・・!!」

高円寺の能力が発動し、存在が消えてしまったチータスだったが主人への想いだけで消えた存在の一部を保つことに成功すると、そのままオーリーの元へと向かった。

浦太郎は強い光を発しているチータスと、そのチータスを迎えるオーリーの姿を捕える。

「あ!あれは・・・!?」

「来るのだ、チータス。」

〈Ｍａｓｔｅｒ・・・〉

「最期まで一緒だ。」

〈Ｙｅａｈ〉

オーリーはそう言うと、まるで子供を温かく迎え入れ優しく包み込む母親のように光のチータスを自分の体の中へと吸収していき、それを包み込んだ。

「オーリーがチータスと・・・・・・！？」

と、その途端凄まじい魔力と生命エネルギーを放出しながらオーリーは光に包まれ上昇していくと、オーリーはチータスとの完全融合によって未だかつて見た事の無い究極のブラッド状態となって高円寺の前に現れた。

それを見た高円寺も多少なりとも興味がわいてきた。

「ほう・・・それがお前の最後の姿と言う訳か・・・」

「行くぞ、チータス！」

オーリーはその姿となり、自身の命が尽きるのを覚悟した上で高円寺との最後の戦いに臨もうとし、勢いよく向かっていった。

高円寺はオーリーの攻撃を受け入れると、そのまま空中へと舞い上がって凄まじい激闘を繰り広げる。

その二人の戦う光景を見ていた雛森と鬼太郎、更にはその二人の相手をしていたギガトロンもオーリーの最後の姿に目を疑った。

「何!?あの姿・・・報告にあったものとは違う!?」

「くそ!何がどうなってやがる!?」

〈・・・ｅｘｈａｕｓｔｉｎｇ ｔｈｅ ｂｌｏｏｄ ｃａｒｔｒｉｄｇｅ，ａｎｄ ｎｏ ｒｅｃｋｌｅｓｓ ｄｒｉｖｉｎｇ ｉｎ ｔｈｅ ｄｅｖｉｃｅ ｔｈｏｕｇｈ ｄｅｓｔｒｏｙｅｄ・・・Ｉｓ ｔｈｉｓ ｍａｇｉｃ ｏｆ ｈｅｒ ｍｏｔｈｅｒｈｏｏｄ？（ブラッドカートリッジを使い果たし、デバイスを破壊されたにもかかわらず暴走しないとは・・・これがオーリーの母性の魔力なのか・・・？）〉

鬼太郎と雛森はこの変わり果てたオーリーを見ながら、頭を抱えそれと同時に目の前の敵と戦い続ける。

「オーリーの野郎・・・・・本当にどうなっちまったんだ!?」

〈Ｔｈｅ ｏｂｓｔｒｕｃｔ ｄｏｅｓｎ'ｔ ｄｏ.（邪魔はさせん！）〉

「破道の五十四『廃炎』！」

雛森は鬼道を使ってギガトロンを攻撃するが、ギガトロンは高笑いを浮かべながら雛森に反撃を仕掛けていく。

〈Ａｎｙｈｏｗ，ｔｈｅ Ｊａｐａｎｅｓｅ ｏａｋ ｉｎｔ

ｈｅ　ｔｅｃｈｎｉｑｕｅ　ｏｆ　ｔｈｅ　ｅｘｔｅｎｔ．　ｕｓｅｌｅｓｓ（ははははは！！！！その程度の鬼道じゃ、どうにもならねぇよ！）〉

「く、飛梅！！」

二人は思った以上に苦戦を強いられるこの敵にどう立ち向かっていくのか？

そんな二人の戦いが泥沼化していった時だった。

オーリーは隙を突かれ、高円寺に首を鷲掴みにされてしまう。

「ぐ！」

「この力こそ銀太郎が求めているもの。そして、この俺自身のためにも必要な力。」

「はっ！！」

オーリーは自身の魔力で高円寺を弾き返して距離を取ると、高円寺も大きく距離を取って最後の攻撃に転じようとした。

「だが、ここで枯れてしまっては困る。」

「高円寺！！」

二人は真っ直ぐ向かっていくと、雌雄を決するためにお互いの最強の一撃を直接たたきこむために正面からぶつかっていった。

「止めろ!!」

浦太郎はそんなオーリーに向かって攻撃を中断するように声を出したが、その瞬間オーリーは高円寺の攻撃を食らい、体に高円寺の手刀が貫通したことでオーリーの最後のブラッド状態が解かれる。

「ぐ・・・・・・は・・・・・・・!!」

「オーリー!!」

オーリーは力なく重力に従って落下していき、地面に撃墜する。

浦太郎はオーリーが撃墜するのを見ると、直ぐに駆け寄り意識を確かめる。

「死ぬな!死んじゃいけない!!」

オーリーはゆっくりと重い瞼を開けると、悲痛な顔で自分を見つめる浦太郎に最後の言葉をかけ始める。

「・・・亀井浦太郎・・・色々済まなかったな・・・これで・・・私はちゃんと死ねるのであろうか?」

「何を言っているんだ?!そんな・・・そんな・・・!!」

「・・・本当は・・・銀太郎の傍で死ぬまで仕えたかった・・・だけど・・・どうやらそれは叶いそうに無い・・・だからせめて・・・銀太郎の生きる糧として・・・命を捧げてやりたい・・・こんな・・・こんな死に方でも・・・私は充分満足だ・・・」

「駄目だ！！」

「・・・亀井浦太郎・・・ありがとう・・・お前は自分が言うほど汚い人間では無いぞ・・・その証拠に・・・その真っ直ぐな目が語りかけてくれた・・・さらばだ・・・誇り高きパトリオットの将として・・・別れの挨拶を言っておくぞ。」

「！！」

その言葉を言い残すと、オーリーの体は全身から光を発するとやがてそれは光子状となってオーリーは浦太郎に最期をみとられ、服だけを残して空へと消えていった。

浦太郎は残ったオーリーの服に顔を鎮めながら、込み上げてくる悲しみと感情を抑えきることが出来ず声を張り上げて泣き叫んだ。

「・・・は・・・う・・・う・・・・・うあああああああああ！！！

「オーリー。お前の命は、銀太郎の完全覚醒の礎として新しく生まれ変わる。」

その様子をギガトロンと戦闘を続けていた鬼太郎たちも確認し、この訳の分からない状況に戸惑いを隠せなかった。

「何!?」

〈Ｍｉｓｓｉｏｎ　ｃｏｍｐｌｅｔｅ〉

ギガトロンは計画が成功を遂げると、鬼太郎との戦闘を中断させて高円寺の元に戻っていった。

「おい、てめぇこら!!」

「鬼太郎さん!!」

雛森も戦闘を突然中断され、困惑した様子で鬼太郎の元に駆け寄っていったが、その時雛森と鬼太郎は魔法陣より出てきた奇妙なものに目を奪われた。

「!おい!!」

「何によ・・・あれ・・・!?」

高円寺の足元の魔法陣より出てきた赤い帯状のものは、出て来ると直ぐに聖地九九琉閑の池へと向かった銀太郎の元へと飛んでいき、それを見た高円寺は大笑いを上げて喜んだ。

「ふふふふふ・・・・ははははははははは!!!!!!!!!

！！！」

術式を完了させた後、高円寺は瞬く間に鬼太郎たちの前から姿を消してしまった。

高円寺が消えたのち、鬼太郎と雛森は飛んで行った帯状のものを見ながら怪訝そうな表情を浮かべる。

「何だったんだ・・・今のは！？」

「どこかへ向かいましけど・・・！？」

「く！亀！！」

鬼太郎たちが当初の目的であった浦太郎の元に急いで向かうと、オーリーの不遇な死に浦太郎はずっと声を押し殺して泣いていた。

オーリーを救えず、結局最後は自分だけが生きながらえてしまった後悔と自責の念を抱えた今の浦太郎の悲壮な表情を鬼太郎と雛森はただ黙って見つめるしかなかった。

そして、それ同時に鬼太郎はこの浦太郎が涙を流す根本的な原因を作った張本人、高円寺虎彦に強い殺意のような怒りを覚え、握り拳を作った。

オーリーが死を迎え、その魂魄が銀太郎の元へ向かっていったほぼ同じころ瀞霊廷の一角で死神たち数人を相手にしながら戦闘を続けている白鴎はという。

「だらしねぇな！もっと歯ごたえのある奴はいねぇのかよ！？」

「くそ・・・やれ！！」

死神達は数人がかりで一斉に白鴎に斬りかかっていくが、白鴎は一切動じることなくコンボイに指示を送る。

「コンボイ！」

〈Ｃｒａｓｈ　ｉｍｐａｃｔ〉

鍵爪から放たれる物理破壊能力に特化した衝撃波が斬りかかってきた死神達を次々に圧倒していき、最後の一人にそれが直撃しようとしていた。

「う・・・あ・・・！！」

死神は恐怖のあまりその場から動くことが出来ず、クラッシュインパクトをその身に受け後方へと吹き飛ばされてしまった。

「へ。ちょろいもんだぜ・・・！？」

と、勝ち誇った様子の白鴎だったがその瞬間、オーリーが消滅を果たしたと言う事実を魄動が消えたことで確認し、思わず険しい表情となる。

「（オーリー・・・・・・まさか・・・・・・・！？）」

すると、そんな白鴎目掛けて何処からともなく魔法攻撃が仕掛けられる。

〈Ｄｙｎａｍｉｃ　ｓｌａｓｈ〉

「！」

自分の元に地面を割って飛んできた衝撃波を回避し、攻撃場所を目で追った白鴎。

すると、その場所に立っていたのはブラッド状態である甲冑に身を包みアックスオーガを解放した金太郎であった。

白鴎は金太郎の姿を確認すると今までの戦闘の記録がよみがえり、眉間に皺を寄せて金太郎の名前を大声で口にした。

「！てめぇは・・・熊谷金〇〇！！」

相変わらず自分の名前を言い間違える白鴎の態度に思わず金太郎は前に倒れそうになるが、すぐに自分の正しい本名を口にする。

「ズコ！金太郎ですぞ！！いい加減そんな卑猥なワード、口にしてはいけませぬ！！！」

オーリーが消えた今、残されたパトリオットはあと三人。

そんな中での白鴎と金太郎の因縁の衝突。

次回、激闘の白鴎と金太郎最終決戦開始！

オーリー、死を賭けた想い（後書き）

教えて、ユーノ先生！

ユ「今日はオーリーの能力についてだ♪」

ユ「オーリーはパトリオットの中で唯一の女性であり、六人のリーダーを務めている。デバイスの名前はチータス。ブラッド状態になるとネコ科の動物に扮した獰猛な獣の姿となり、その最終進化の末ブラッドカートリッジを己の愛情の力で昇華させたのが今回出てきたね♪」

オ「はぁ・・・銀太郎を残して先に死ぬのは忍びないが・・・これも定めというものか。」

銀「オーリー！僕は君まで失うなんて耐えられないよ！！」

オ「銀太郎！！私の事をそんなに！！」

銀「勿論だよ、オーリー！！」

二人は手を取り合いながらお互いに滝のような涙を流す。

銀・オ「わあああああああ！！！！！！！！！！」

ユ「・・・う・・・見るのが辛くなってきた・・・早めにコーナー終わらせよう・・・」

心複雑なユーノであった。

魔導師図鑑ハイパー！

今、ここに奇蹟の共演が果たされていた。

リンディ・ハラオウン統括官と卯ノ花烈による茶会である。

リ「お会いできて光栄ですわ。何だか初めって会ったのに妙な親近感が湧くのは気のせいかしら？」

卯「あら。奇遇ですわね。私もあなたと同じことを思っていましたわ。リンディさん。」

リ「これ、私の好物なんですけど・・・宜しければお飲みなってください。」

そう言って出してきたのは、リンディの好物砂糖たっぷりの抹茶。

影でこれを見ていたユーノや恋次達一同は流石にこれは飲まないとふんでいた。

恋「まさかとは思うが・・・・飲むつもりじゃねぇだろうな！？」

ユ「さ、流石に卯ノ花隊長でもあれを飲むとは・・・」

だが、結果はこうであった。

卯「あら！これ凄く美味しいですわ。」

リ「気にいってもらえてよかったですわ！」

一同、それを聞いて愕然。

全「えええええええ！！！！！！！！！！！！！！！！！！！！！」

衝突！熊谷金太郎ｖｓ白鴎恭一郎（前書き）

金「最初に衝突したその時から、私と白鴎は何処か似たところを抱えていたのかもしれぬ・・・自分にとって守りたい者がいて・・・奪われたくないものがあって・・・」

白「俺達の思考は図らずも似通ってることは認める。だけど、銀太郎の命の危険が迫っている今・・・真のダイシーとなろうとしている今、こんな所でおっさん一人の為に何時までもかかずらっている暇はねぇ！」

金「お互いの誇りをかけて、雌雄を決するときは来たのだ。」

ユ「ユーノ・スクライア外伝　パトリオット篇・・・・・・始まります。」

衝突！熊谷金太郎ｖｓ白鴎恭一郎

＞ｉ１８７６１－７０９＜

ユーノ・スクライア外伝・・・前回の三つの出来事。

一つ：　オーリーと浦太郎の二人が最終決戦を開始。

二つ：そんな二人の前に突如、高円寺が現れる。

そして、三つ：高円寺の圧倒的な力の前に、オーリーも消える。

オーリーが高円寺の策略により、不遇の師を迎えたことを知らぬ銀太郎の方はというと瀬間子と別れてから一人聖地、九九琉閑の池を目指して邁進を続け死神に見つからないようにと厳重に注意を払っていた。

そんな中で、少しずつ消えていくパトリオット達の魄動を感じながら非常に辛い表情を浮かべる。

「（みんなの魄動が少しずつ弱まっていくのを感じる・・・既に田

吾作と東海林は・・・死んでしまった。頼む・・・！これ以上命を粗末にしないでくれ・・・みんな！！）」

と、残りの者の命を考えていたその時だった。

「な！まさか・・・！！」

銀太郎にとっては最も大切な人物でもあり家族の一員でもあったパトリオットの将、オーリー・エンダの消失した魂魄から再構成された赤い帯状のものが銀太郎の中へと吸収され、そのことによって銀太郎も初めてオーリーの死を実感する。

「く・・・・・オーリー・・・！！うおおおおおおおおおおおおおおおお！！！！！！！！！！！！！」

銀太郎はあまりのショックにその場に膝をつくと、オーリーの自分に対して向けてくれた優しい笑顔を思い浮かべながら浦太郎以上に声を押し殺して泣き叫んだ。

一方その頃、聖地九九琉閑の池の入り口近くの警護を担当していたとある隊の部署は背後から聞こえてくる不気味な物音に耳を立てながら、パトリオットの迎撃に備えて周辺警戒を続ける。

「まさか、こんな所まで警備するとはな・・・・・・」

「この辺りは確か禁踏区域だから、その外側しか警備は出来ない。万が一旅禍が此処を目指しているとしても中には俺達だって寒気がするような怖え～もんがあるんだって。」

「成程ね・・・・・お？」

仲間の隊士と談笑をしていた時、警備に当たっていた一人が前方から徐に歩いてくる謎の人影に目をやった。

「誰だ!?」

怪訝そうに眉をひそめてその人物の容姿を確認する隊士。

すると、それは報告にもあった通りの格好で不敵な笑みを浮かべる高円寺虎彦とであった。

「なっ!?旅禍か!」

高円寺が入り口近くまで歩いてくると、隊士達は刀を抜いて高円寺と対峙する。

強張った様子でいる隊士達を前にした高円寺は対照的な態度でこう口にする。

「・・・いい天気だな・・・」

「か、囲め!!」

隊士達は一斉に高円寺を迎撃するために周囲を覆い隠すように高円寺を捕える。

だが、高円寺は逃げ場のないその状況であるにもかからわず全くの余裕の表情。

「ふん。三下が・・・お前達と遊んでる暇は無い。道を退いてもら

うぞ。」

その頃、涙が枯れるほどまで泣き叫んだ銀太郎は九九琉閑の池の入り口から少し離れた森の茂みの中で体育座りをしながらオーリーが写った家族写真を見、未だ涙を浮かべる。

「・・・・・・オーリー・・・・・・・」

すると、そんな銀太郎の耳に突然死神達の奇声が飛んできた。

「「「「「ぐあああああああ!!!!!」」」」」

「!?」

銀太郎はその声に反応すると、感覚を研ぎ澄ませてその奇声が上がる方向へ目を向ける。

銀太郎が目を向けた方角からは自分と同等かそれ以上の強さを内包する魔力を持った者が戦闘を行っていることが窺えた。

「何だ・・・この途轍もない魔力エネルギーを秘めたものは・・・

！？」

その魔力エネルギーを秘めた者、高円寺虎彦の方はというと警護に当たっていた死神達をその強大な力で容易く手にかけ、数を減らしていく。

山本の命で九九琉閑の池の入り口に近くには大目に死神達が駐屯し、警護に当たっていたから数を党員させて高円寺の行動を死守しようとする。

「旅禍が現れたぞ！迎撃に向かえ！！何としてもここで死守するのだ！！」

数に物を言わせて高円寺を圧倒しようとする死神達であったが、高円寺にとっては別段問題にもならなかった。

高円寺は自分の力を使って目の前に広がる邪魔な存在を一気に片づけていく。

「「「おおお！！！！！」」」

「「「ぐあああああああ！！！！！！！」」」

急いで九九琉閑の池の入り口近くまで走ってきた銀太郎もこの凄まじい勢いには思わず険しい表情を見せて巻き起こる突風を手でガードする。

「う・・・！！！！！」

そして、銀太郎の目の前で最後の死神達が一気に魔力衝撃をその身

に受けて吹き飛ばされていく。

「「「のあああああああああああ！！！！！！！」」」

警護に当たっていた死神達全てが高円寺一人に一掃されるのを確認すると、銀太郎もこんな真似が出来るパトリオットを一人だけ思い浮かべる。

「こ・・・こんな真似が出来るのは・・・！？」

と、その時銀太郎の目の前に頭に思い浮かべた高円寺その人が現れる。

「よう。探したぞ・・・」

「やはり・・・高円寺さん！？」

「何をぼさっとしている銀太郎。こっちだ。この先に・・・我らパトリオットの聖地がある。」

「・・・この先に・・・だけど・・・僕は・・・」

銀太郎はこの尸魂界での戦いで最愛の家族の内、既に三人もが命を落としてしまっている現状であるにもかかわらず自分だけが聖地と呼ばれる場所に行って力を手にすることが本当に正しいかどうかが分別できなくなっていた。

そんな意気消沈した雰囲気を醸し出す銀太郎に高円寺は次のように語り出す。

「・・・悲しんでいる暇はないぞ。オーリーや他の連中の為にも、お前が何としても聖地に行かなければ意味がないのだ。さぁ、行くぞ。」

高円寺の言葉を聞くと、銀太郎も今一度オーリー達の言葉を思い出すと覚悟を決めて高円寺と共に九九琉閑の池の入り口へと足を運んで行った。

「・・・はい・・・!」

その頃、懺罪宮の近辺に建てられた白い巨塔の周辺を走り九九琉閑の池へと向かっていた一護とユーノの二人はというと、遠い場所から感じる魔力と霊圧のぶつかり合いに思わず足を止めた。

「!?何だ・・・この霊圧は!?さっきまで感じてたどのパトリオットとも違うぞ!」

「・・・色んな場所で戦闘が激化しているようですから、はっきりとは分かりませんが・・・パトリオットの気配が一つ消えました。ただ・・・これはまた別の・・・そうか。」

「どうした!?」

「パトリオット六人の中で人一倍霊圧濃度が高い・・・おまけにこんな遠くからでも感じる独特の魔力波長と一緒に放出されている殺気は・・・」

「高円寺か?」

「ええ。銀太郎君も一緒です。」

「やっと出てきやがったか・・・ユーノ、どっちだ?」

一護にそう尋ねられると、ユーノは霊圧と魔力波長を研ぎ澄ませて九九琉閑の池近くから感じる高円寺達の反応をキャッチする。

「このまま真っ直ぐです!やはり狙いは九九琉閑の池で間違いないです。」

「よし・・・それじゃあ・・・!?」

と、二人が九九琉閑の池へと向かおうとしたときであった。

二人は白鴎と衝突を果たそうとしている金太郎の魔力を感じ取った。

「これは・・・この魔力波長・・・金太郎か!?」

「あいつもどっかで戦いを始めたようだな。」

「恐らく、対峙しているのは白鴎でしょう。」

「連中の事は一先ずあいつらに任せよう。ユーノ、俺達も俺達で片つけるぞ!」

「はい。」

「よし!急ぐぞ!」

二人は金太郎たちの勝利を信じて今はただ、九九琉閑の池へと足を進めるだけであった。

果たして、二人は銀太郎と高円寺の行動を止めることが出来るのであろうか。

そして、聖地に封印されている凄まじい力の正体とは一体何なんだ!!!

さて、金太郎と白鴎の全面衝突の様子を見る前に先ずは前回のおさらいから。

白鴎は死神達数名と繰り返し戦闘を行っていた。

「だらしねぇな!もっと歯ごたえのある奴はいねぇのかよ!?」

「くそ・・・やれ!!」

「コンボイ!」

〈Ｃｒａｓｈ　ｉｍｐａｃｔ〉

数で勝負を挑もうとする死神達を圧倒的な力でねじ伏せていく白鴎。

「う・・・あ・・・!!」

為す術もなく全滅を果たす死神達だったが、その直後金太郎の魔法が白鴎に飛びかかる。

〈Ｄｙｎａｍｉｃ　ｓｌａｓｈ〉

「!」

攻撃を避けた白鴎は仕掛けた金太郎の姿を確認する。

「！てめぇは・・・熊谷金〇〇！！」

「ズコ！金太郎ですぞ！！いい加減そんな卑猥なワード、口にしてはいけませぬ！！！」

幾度となく衝突を繰り返してきた少年と中年の男だが、最終的な決着はこの尸魂界で造るものだとは一体誰が予想しただろうか？

誰も予想などしていなかった筈だ

暫くの間、両者は互いに睨みあったままどちらも膠着状態を続ける。

すると、先手を切って攻撃を仕掛けたのは金太郎であった。

金太郎はその巨体に似合わないほどの高速移動で一瞬にして白鴎の前から消えると、頭上高くまで飛び上がりダイナミッククラッシュを発動する。

〈Ｄｙｎａｍｉｃ　ｃｒａｓｈ〉

「！！」

金太郎の攻撃に備えようと上を見上げるが、白鴎は金太郎の装甲の色の所為で余計に太陽の光が反射していたがために、視界が狭まり体制が整えられない。

「くっ！！眩しくて・・・姿が見・・・」

「ダイナミッククラッシュ！！」

地面をも容易に抉る圧倒的な破壊力の技が白鴎目掛けて振り下ろされる。

白鴎はぎりぎりのところで金太郎の軌道を読むと、直撃を回避するために周囲に佇む白い巨塔の側面へと飛び上がった。

それを見た金太郎も続けざまに攻撃を仕掛けていき、その都度巨塔は破壊されていく。

「ちっ、相変わらずウザイオヤジだぜ・・・コンボイ！！」

〈Ｍｅｔｅｏ　ｓｔｒｉｋｅ〉

白鴎はブラッドカートリッジの力を両腕の鍵爪に集積させると、熱破壊力を秘めたメテオストライクを金太郎に定めて打ち出す。

金太郎はそれを回避すると、まるで何かを狙っているかのように白鴎から逃げるようにその場から立ち去っていく。

この行動に疑問を感じる白鴎。

「あ？」

白鴎が逃げて行った金太郎を目で追うと、逃げる途中で金太郎が白鴎の元に振り返り白鴎を黙って凝視する。

「・・・・・・――――――」

そして、暫くしたのちに再び屋根の上を飛び回りながら白鴎の傍から逃げていく。

白鴎はその金太郎の行動を見た瞬間、漸く逃げていく意図を読み取り納得する。

「はは～ん。誘ってんだ・・・この俺を。面白いじゃねぇか。」

白鴎はそう言うと、金太郎の誘いに乗って同じように金太郎が辿って行ったルートで金太郎の後ろを追っていく。

やがて、一通り人気のいない場所へとたどり着いた二人は屋根の端の上で向き合う形となって武器を構え、言葉を交わし始める。

最初に言葉を発したのは白鴎だ。

「てめぇも懲りない男だな。いい加減・・・俺達の邪魔するのは止めたらどうなんだよ、ああ？」

「別に邪魔をしている訳ではない。」

「あ？」

「・・・お前達こそ、何故こんな事をする？こんな戦いに・・・意味など無い。」

「意味ならあるさ。銀太郎を真のダイシーの後継者にして、再びこの地にパトリオットの楽園を作り上げ、そこでひっそり静かに暮らす。俺は銀太郎の願いを叶えたい。だから、どんなに進む道にブロ

ック塀が積み立てられていようが、バリケードが造られていようが・・・俺はそれを壊して前に進み続けるだけだ！」

「だからと言って、前だけ進み続けるだけでは一番大事なことを見失うことに何故気付かぬ！？後ろを振り返ることも時には必要なのだ。私はお前達のような可愛そうな子供の姿をこれ以上見るのは忍びない。心が張り裂けそうでならないのだ・・・こんな無意味な戦いに終止符を打ってやりたい。」

「はっ！言ってくれるんじゃねぇかよ・・・熊谷金太郎！」

このとき、漸く白鴎は金太郎のフルネームを正しく口にした。

そんな白鴎を凝視しながら金太郎は自分の思いのたけを正直に表現する。

「・・・私は、この戦いを終わらせる。初代パトリオット・・・エドワード・コークの血を受け継ぐものの責務として。そして、一魔導師の誇りにかけても！」

「ふふふ・・・まぁいいさ。そんなにやられたいんなら好きにするさ。」

白鴎との話が一通り区切りがついた金太郎は、心の中でふと次のような事を思っていた。

「（・・・済まない、みなのもの。これは全員の責務でもあり私の責務でもあるのだ。初代パトリオット、エドワード・コークより脈々と受け継がれてきたこの悲しき連鎖を今此処で断ち切らなければ、再び暴力と悲しみを生み出しまた誰かが哀れな記憶を背負うことに

なる。白鴎達守護者同様に・・・）」

金太郎はそう思うと、自分の手の中に握られている初代パトリオット、エドワード・コークの残した遺産であり自分のデバイスでもあるアックスオーガを見つめ決意を固くする。

「（私は覚悟を決めたのだ・・・何が起ころうが・・・やってやります。白鴎達（このものたち）を・・・放っておくわけにはいけない！）」

覚悟を決めた金太郎にもう迷いはなかった。

白鴎に正面から向き合った金太郎はアックスオーガを強く握りしめ、臨戦態勢に入る。

「行きますぞ！」

「存分に楽しみな！」

白鴎はそう口にすると、両手の鍵爪をなぞる様に上下に動かしながら真っ直ぐ金太郎の元へと駈け出して行った。

「アックスオーガ！」

〈Ｄｙｎａｍｉｃ　ｃｈｏｐ〉

得意のダイナミックチョップで白鴎に迎撃を始める金太郎。

白鴎はダイナミックチョップの攻撃を回避すると、金太郎のとの戦いの為に温存していた最も強い力を有したブラッドカートリッジをロードする。

「コンボイ！とっておき行くぜ。ブラッドカートリッジロード！！」

〈Ｂｌｏｏｄ　ｃａｒｔｒｉｄｇｅ　ｌｏａｄ〉

その瞬間、白鴎の体は幾度となく戦って来た竜を模した姿ではなく幻魔（げんま）と呼ばれるその竜の能力を遥かに上回るものへと変貌を遂げ、それに伴い二重人格の一面を持つコンボイの能力が遺憾なく発揮される姿ともなる。

〈Ｔｈｉｓ　ｉｓ　ｍｙ　ｔｒｕｅ　ｓｔｒｅｎｇｔｈ．（これが俺の本当の力）〉

「今度は手加減しねぇ！！」

白鴎は二重人格の側面の内、攻撃的な面を持つ人格とリンクさせると右腕に魔力を集めて一番初めに金太郎を撃墜させたあの技を使用する。

〈Ａｂｓｏｌｕｔｅ　ｐｏｗｅｒ　ｆｏｒｃｅ〉

「アブソリュート・パワーフォース！！」

通常時の金太郎の防御を紙のように容易く粉砕したその技の威力は今までのそれとは比べ物にならない程にまで威力も精度も強化されており、直撃を食らえばまず命はないと言えるそんな危険な技となっていたのだ。

「くっ！」

金太郎は何とか白鴎のアブソリュート・パワーフォースから逃れると、空中を滑空しながらアックスオーガの振り衝撃波を発生させる。

しかし、この尸魂界においては魔導師は例外なく魔力結合と魔力操作の効率が低下することに加え、金太郎はこれまでの戦いで年不相応な肉的な負担を溜めこんでいたため、技の精度も急激に落ち始めていた。

そのため、白鴎目掛けて放ったはずの衝撃波が突然軌道を変え、真後ろに佇んでいた白い巨塔の方へと衝突してしまったのだ。

それを見た白鴎は挑発的な口調を金太郎に浴びせる。

「はっ！何所狙ってんだよ！！天で駄目じゃんかよ！！」

〈Ｂｅ　ｒｅｌｕｃｔａｎｔ，　ａｎｄ　ｂｅｃａｕｓｅ　ｉｔ　ｉｓ　ｏｌｄ　ｍａｎ.（仕方ないよ、オッサンだから）〉

屋根の上に着地した金太郎は状況を打破しようとするが、その瞬間に頭上から白鴎の強烈な攻撃が仕掛けられる。

「舐めんじゃねぇよ！！」

パワーを重視した圧倒的な破壊能力で金太郎を葬り去ろうとする白鴎。

その後も空中で移動を続けながらの二人の激戦は熾烈を極めていくが、実を言うと金太郎はこの状況に直面してから深刻な表情を仮面の下で浮かべていたのだ。

一先ず、それなりのスピードで白鴎の攻撃を回避し続けその場しのぎをする金太郎。

そして、二人は一度屋根の上でに降り立つと再び正面から向かい合う。

白鴎は膝をついて何かを考えている素振りを見せる金太郎を若干警戒するが、攻撃的な面を持つコンボイの人格は金太郎の速力に驚嘆していた。

〈Ｉｎｄｅｅｄ，Ｔｈｅｒｅ　ｓｅｅｍｓ　ｃｏｎｓｉｄｅｒａｂｌｙ　ｔｏ　ｂｅ　ａ　ｓｐｅｅｄ．（成程。結構スピードあるじゃねぇか？体の割りに。）〉

すると、白鴎は突然一時的に攻撃に際して強化していた右腕のブラッド状態を解いた。

それに関して攻撃の一面を持つ人格は不満げに声を上げる。

〈Ｔｈｅ　ｕｎｉｏｎ　ｉｓ　ｓｏｌｖｅｄ　ｗｉｔｈ　ｗｈａｔ！？（何で合体を解くんだよ！？）〉

「うるせーな。お前とずっと合体してることが生理的にヤダったんだよ！」

そんな白鴎の言葉に便乗して、左腕の方で防御をつかさどるもう一人の人格の面が便乗してくる。

〈Ｔｈｅ　ｆｅｅｌｉｎｇｓ　ａｎｄ　ｕｎｄｅｒｓｔａｎｄｉｎｇ　ｔｈｉｎｋｉｎｇ．（その気持ち、分かる気がします）〉

〈Ｉｔ　ｉｓ　ｃｒｕｅｌ！！！（酷い！！！）〉

そんな普通では考えられないような会話をしている白鴎を見た金太郎は、一度顔を上げるとコンボイのそれに驚愕する。

「なっ！？二種類の人格を持つのか、それは・・・！？」

「ああ。そうだったな・・・オヤジはあんまし知らなかったよな。俺のデバイス、『コンボイ』のこと。生まれつき多重人格を有するデバイスでよ・・・話してるこっちは骨が折れるぜ。性格なんて二人揃って全然違うんだからよ。さて、余談はこの辺にして・・・どうするよ、オヤジ？」

「くっ！（あの攻撃を続けられれば、回避するので精一杯だ。このままでは・・・）」

「来ないならこっちから行くぜ！」

白鴎はそう言うと、今度は自分から金太郎に向かって攻撃を仕掛けに行く。

「ちっ！」

金太郎は一度その状態からダイナミックストームを巻き起こすが、威力が断然に低下していたがために白鴎に軽くはじかれてしまう。

そんな金太郎の攻撃を見て、防御の人格が声を上げる。

〈Ｉｔ　ｉｓ　ａ　ｇｅｎｔｌｅ　ｆａｉｒｌｙ　ａｔｔａｃｋ.

（随分と優しい攻撃ですね）〉

「はっ！」

白鴎の仕掛ける攻撃を疲労困憊且つ魔力操作の低下した金太郎が皮一枚のところで回避するが、金太郎はこの不測の事態に大いに困惑していた。

「（くそ・・・こんなときに・・・・・・今までより威力が落ちてしまった?!）」

「おりゃああ!!」

瓦で出来た屋根を容易に破壊する白鴎の攻撃をかわし続け、隙をついて金太郎はブラッドカートリッジを使用してさらに強い突風を巻き起こす。

「ダイナミックハリケーン!!」

しかし、金太郎が危惧していた通り通常時のダイナミックハリケーンのそれとは明らかに威力も精度も落ちてしまっていたため、技は着弾の前に軌道を変えてしまった。

金太郎はそれを見ながら白鴎から逃げ続ける。

「（やはり先ほど同様威力が不安定だ。これでは、たとえ当てても意味が無い・・・!!）」

「ははははは!!!!」

頭の中で様々な方面から思案する金太郎と、その金太郎に怒涛の攻撃を仕掛ける白鴎。

屋根の上を走りながら、金太郎は疲労や魔力操作が低下したことで威力が落ちてしまった原因以外に考えられる要因をいくつか考えてみた。

「（魔力操作と結合、そして何より私自身の疲労の影響もあるが・・・何よりバージョンアップしたばかりのアックスオーガの剣閃は、御しきるには少し早すぎる面もあるのも事実。二撃目と三撃目の攻撃は、共に力がマイナスに振れた。だからほとんど威力が無かったのだ・・・攻撃をする瞬間、エネルギーがプラスに振れた時、初めて相手を昏倒・もしくは破壊させる威力を得られる。だが・・・）」

金太郎はそう考えながら屋根の上を削りつつ白鴎の方へと振り向き、アックスオーガに力を溜めこんでいく。

「（そのエネルギーがプラス方向に振り切れてしまったとき・・・店長の話では、アックスオーガは力を暴発させてしまい、周囲のものを全て吹き飛ばす。無論、攻撃をした本人も含めて。）」

ユーノから聞かされていたこのアックスオーガ・カタストロフのデメリットとその危険性を考慮し、思うように攻撃をすることが出来ないでいる金太郎に白鴎は言葉を投げかける。

「どうした、熊谷金太郎！仮面被ってるくせに、暗い顔して何考え込んでるんだよ！？」

「（出来るのか！？私に・・・このアックスオーガ・カタストロフを制御することが！？いや・・・やらなくてはいけないのだ！！）」

そう思い立つと、金太郎は今まで溜めこんでいた魔力エネルギーを全てダイナミックハリケーンとして放出させる。

「ふん！！」

金太郎のアックオーガから放たれる先ほどまでとは違う威力も精度も安定したダイナミックハリケーンを見た瞬間、白鴎はその攻撃に備えて左腕に防御を展開する。

「ん！？」

〈Ｍｏｎｓｔｅｒ　ｐｒｏｔｅｃｔｉｏｎ〉

白鴎がその防御を展開すると同時に金太郎のダイナミックハリケーンが着弾する。

着弾して砂埃が巻き起こるのを見た金太郎は自分の放った技の威力に納得する。

「よし、これなら・・・・・」

と、砂埃が晴れていく正面を凝視していた時だった。

「！？」

その砂埃の中から出てきたのは、威力のあるダイナミックハリケーンをものともせずにモンスタープロテクションと呼ばれる左腕に構築された特殊な防御で回避した白鴎の姿であった。

「へへ。」

「な、何!?」

あまりの光景に言葉すらままならなくなる金太郎を見て、左腕に構築された防御に人格が口を出してきた。

〈This is my true appearance. This state boasts of a perfect phylactic power. Your attack is already meaningless.（これが、私の本当の姿。この状態は完璧な防御力を誇ります。最早、貴方の攻撃は無意味です。）〉

「ちっ・・・!!」

幾度となく力と力を交わしてきた金太郎であったが、ここに来てこれほどまでに力を蓄え強化した白鴎を前にして、思わず苦い顔を浮かべる。

そんな金太郎の様子を見て、攻撃の人格が今までの金太郎の攻撃に関して痛い一言を口にする。

〈The power of that impact seems to be apparently various in every case.（どうやらあの衝撃は、威力がそのつどバラバラのようだな。）〉

〈In a word, it is not controlled. However, it was a little d

ａｎｇｅｒｏｕｓ　ｎｏｗ　ｉｆ　Ｉ　ｄｉｄ　ｎｏｔ　ｇｏ　ｏｕｔ．（つまり、制御できて無いってことですね。にしても、今のは私が出て行かなければちょっと危なかったですよ。）〉

「呑気に解説してんじゃねぇよ。」

二つの人格と器用に折り合いをつけて会話をする白鴎と、先ほどの攻撃で白鴎を昏倒させることが出来なかったことに大いに悔しがる金太郎。

「（くそ！折角高出力で攻撃できたのに・・・！！いや、諦めるな。今の感じを忘れずに・・・攻撃し続けるしかない！）」

金太郎はそう思いながら、ブラッドカートリッジをロードし魔力エネルギーをアックスオーガの刃に溜めていく。

「・・・来な・・・」

金太郎の攻撃を促す挑発的な口調の白鴎。

そして、その言葉通り金太郎は大きく構えてから大技を仕掛ける。

〈Ｖｏｌｃａｎｉｃ　Ｂｏｍｂ〉

「喰らえ！！」

アックスオーガに集束した魔力を火山から吹き出る火山弾の如く強力な熱破壊能力を秘めた魔力弾を無数に発射するボルカニックボムがブラッドカートリッジによって一層強化され、それが一直線に白鴎目掛けて飛んでいく。

白鴎はその威力を一度体験しているため、ここは素直に防御を展開させたが、予想に反した大威力に思わず体を空中へと回避する。

一方で金太郎はこの状態でありながら大威力技を撃てたことに安堵する。

「（良いぞ・・・）」

白鴎は防御を解いて、攻撃の為に右腕を構築すると空中からの怒涛の反撃を始める。

「おりゃあああ！！！」

白鴎の凄まじい攻撃を躱し、空中に身を投げた金太郎はバランスを保ちながらダイナミックストームの連発を仕掛ける。

「ふん！！」

白鴎目掛けて乱発に近い形で連発されるダイナミックストームはその多くが白鴎に躱され、更には軌道も着弾の前に変ってしまい結局のところ白鴎に当たる事は無かった。

白鴎はそんな金太郎の攻撃を容易に凌ぎきると、メテオインパクトの嵐を金太郎に発射する。

「いや！！！」

金太郎は体性を立て直して白鴎の攻撃を避けきると、屋根の上を移動していく。

「くそ！」

「ははははははは！！！！！」

制御のままならない今の状況において、金太郎を倒すことはたやすいと判断した白鴎は高笑いを浮かべながら金太郎を追いこんでいく。

金太郎は苦い表情を仮面の下で浮かべながら、アックスオーガを振っては白鴎に攻撃を仕掛ける。

「（当たれ！）」

しかしながら、振れども振れども剣閃は一向に白鴎に当たらず直前に軌道を変更してしまう。

「（当たれ！！当たれ！！！）」

がむしゃらになってアックスオーガを振っていた金太郎だが、その瞬間に白鴎が金太郎の頭上へと現れる。

「！」

「でやあああああ！！！！！！」

〈Ｉｔ　ｓｈａｌｌ　ｎｏｔ　ｂｅ　ａ　ｆｏｏｌｉｓｈ　ｆｅｌｌｏｗ・・・ｄｏｉｎｇ・・ｕｓｅ　ａｒｍｓ　ｔｈａｔ　ｅｖｅｎ　Ｉ　ｃａｎｎｏｔ　ｃｏｎｔｒｏｌ（莫迦な奴だな。自分でも制御できないような武器を使ってさ。）〉

攻撃の人格がそう口にすると、白鴎は金太郎目掛けてアブソリュートパワーフォースを仕掛ける。

「いやあああああああ！！！！！！」

ぎりぎりの所で躱した金太郎だったが、その瞬間に背後に回り込んだ白鴎の姿を確認した。

「なっ！？」

「おらおら！！！！！」

白鴎の渾身の一撃が金太郎に直撃し、金太郎は装甲を破壊されながら数十メートルもの距離まで吹き飛ばされてしまった。

「ぐあああああ！！！！」

不時着の瞬間、金太郎は地面にたたきつけられながら特製のブラッド状態である装甲を見事なまでに傷つけられてしまい、そのまま壁に体をつけて動かなくなった。

そんな金太郎の姿を見に来た白鴎や攻撃の人格が屋根の上からこう呟いた。

「・・・あのさ。マジで戦おうと思ってるんならさ、もうちょっとマシな武器持ってきたら？」

〈Ｉｔ，ｓ　ｉｄｉｏｔ．（ホント、莫迦だよな。）〉

そして、最後に白鴎が動けない金太郎を不満げな表情で見つめながら――――――

「詰めが甘いんだよ。」

その頃、死神達の包囲網を突破して聖地九九琉閑の池の入り口に侵入した銀太郎と高円寺の二人はというと、既に内部の方へと駒を進めていた。

九九琉閑の池――――――

中央地十六室によって、第一級危険区域に指定され護廷十三隊がその管理を任されている瀞霊廷の東南東の外れにある森の奥地に存在する巨大な池。

入れば底なしの池に沈み二度と浮かび上がってこられなくなるという不気味な池と噂され、周囲からはまるで鳥がすすり泣くような音がすることからその名がついた。

そんな不気味な雰囲気を醸し出す九九琉閑の池の奥地へ銀太郎は突き進んでいる訳だが、流石にこのような場所が聖地だとは夢にも思わず、少々恐怖も感じていた。

「この場所が・・・僕らの聖地。」

「そうだ。尸魂界では九九琉閑の池と呼ばれている。」

銀太郎とは対照的に、全く恐怖すら微塵も感じさせない高円寺はそう言うと銀太郎の前を歩きだして池の近くに出来ていた空洞を見つけると、その中に足を踏み入れていった。

「高円寺さん。何所へ行く気ですか?」

「この中の奥に、初代ダイシーが残した封印された“記憶”があるはずだ。」

「記憶？」

「オリジナルの。一番最初にダイシーが生まれてから死ぬまでに記憶したものから全てのダイシー派のパトリオット達のそれも共有した特別な記憶が。そして、それと同時に大いなる力も封印されている。」

「記憶のことは兎も角、もう一つの力と言うのは何なんですか？僕もあまり詳しいことは知りませんが・・・」

「別に、そんなものは見れば分かることだ。さぁ、この先に眠りし大いなるダイシーの記憶を受け継ぐのはお前だ。死神達が追ってくる前に、早いところ取りに行くぞ。」

と、銀太郎を連れて中に入ろうとしたその時だった。

「そんなもん手に入れて、何しようって言うんだよ高円寺、銀太郎？」

二人が驚いた表情で後ろを振り返ってみると、そこには先ほど到着したばかりの一護とユーノが並んで立ち尽くしていたのだ。

「！貴方達は・・・！？」

銀太郎が初めて見るユーノと一護の姿を目で捕えると、金太郎とはまた違う強いオーラを発する二人に思わず汗を流す。

そんな銀太郎に向かってユーノが声をかけてくる。

「お初にお目にかかるね。君が金太郎と一戦交えた、ダイシーの後継者。狼谷銀太郎君だね？」

「そう言う貴方は、翡翠の魔導死神・・・ユーノ・スクライアさんですか。死神代行の黒崎一護さんと一緒と言うことは、此処には二人だけで？」

「ああ。俺達二人だけだ。」

そう言うと、一護は一度斬月をその場に突き刺して銀太郎に向かって質問する。

「銀太郎・・・その記憶ってやつをどうしよって言うんだ？！」

「それは・・・――――！」

渋い顔を浮かべる銀太郎を見て、高円寺は先に奥に入ることを促す。

「お前は先に行け。ダイシーの記憶を取り込むことが出来るのは、後継者である銀太郎・・・お前一人だけなんだ。雑魚の二人は俺が相手をする。」

「分かりました。では・・・頼みます。」

銀太郎は高円寺にその場を任せると、足早に穴の中へと入っていく。

「待て！！」

「銀太郎君！」

銀太郎の行動を止めようとする一護とユーノだが、銀太郎は覚悟の籠った瞳でこう言って穴の中へと消えていくのだった。

「すみません。僕はどうしてもやらねばならないことがあるんです！」

「くそ！」

銀太郎を追いかけようとした二人だが、その途端に高円寺が二人の前に立ちふさがる。

「銀太郎を追いたければ、この俺を倒すことだ。」

〈Ｉｇｎｏｒａｎｃｅ〉

「「くっ・・・！！」」

高円寺はその瞬間、イグノアランスを発動させて二人の視界を衝撃波で遮りその隙に自分も穴の中に消えていく。

「くそ！！」

「逃げられたか！？」

「ユーノ。どっちに行ったか分かるか？」

「・・・二人ともあの穴の中です。地下へと潜ってる様子です・・・

それもかなり深くまで・・・急がないと本当にマズイことになります。」

「よし。それじゃあ、急ぐぜ！」

二人は急いで銀太郎と高円寺の後を追って、二人が侵入したと思われる穴の中へと飛び込んでいった。

一方、先に穴の中へと侵入を果たした銀太郎は高円寺と共に障害物を破壊しながら奥へ奥へと足を進め、最深部らしき場所で立ち止まると目の前の光景に目を奪われた。

言葉ではどう表現していいかは分からぬが、古にこの地にやって来た初代パトリオット達が残したものが壁中に張り巡らされており、その光景は正に壮観なものであった。

と、その時銀太郎の体に異変が起こる。

銀太郎の体に流れるダイシーの血と最深部から発せられる力が共鳴を始めたのだ。

「これは・・・？」

疑問に感じている銀太郎と、それを見て直ぐに状況を理解する高円寺。

「共鳴している・・・この最深部にあるようだな。」

〈Ｄｅｎｙ〉

確信をした高円寺は右手に魔力を集めると、手当たり次第に魔力衝撃でその壁に張り巡らされたものを破壊していった。

「高円寺さん！？」

高円寺の大胆かつ乱暴なやり方に銀太郎は声を上げるが、当の高円寺本人は銀太郎以上に先刻から口にしていた記憶と呼ばれるものを捜すのに一人必死になっていた。

「何所だ！」

高円寺がその広い空間の中を歩きながら注意深く壁の方に目を向けていたその時だった。

「高円寺！！」

二人の後を追って来た一護とユーノが到着し、一護は高円寺の方を見ながら斬月を突きだし卍解を発動させる。

「卍解ィ！！」

一護の卍解の霊圧に負けてしまいそうになった銀太郎は一度高円寺の元まで下がり、漆黒の霊圧から出て来る一護を待ち構える。

「天鎖斬月！」

「ふん。」

一護の卍解を鼻で笑った高円寺は、そのまま一護に向かって攻撃を仕掛けていった。

「ほあああああああ！！！！」

激しくぶつかり合う一護と高円寺だが、何も一護は一人で戦っている訳ではない。

隙を見てはユーノが翡翠斬を撃って援護に入ってくる。

高円寺はユーノの攻撃に反応して回避に成功するが、一護がそれを逃がすまいと高円寺を追い込んでいく。

「銀太郎は何を思ってるか知らねぇが、てめぇの好きにはさせねぇぜ！」

「それは困った。ゆっくり探すためにも、お前達は先に殺っておくしかないか。」

そう言うと、高円寺は一護の前から姿を消した。

それを見たユーノが直ぐに一護に言葉を投げかける。

「！逃げてください、一護さん！！」

すると、驚愕する一護の前に高円寺が突然現れ一護目掛けて強い魔力衝撃がぶつかる。

「ぐっは！！」

高円寺に不意を突かれ後方へと吹き飛ぶ一護。

「一護さん!!」

「・・・高円寺さん・・・!」

傍でその様子を見ていた銀太郎も高円寺のやり方に多少なりとも不安げな声を上げる。

高円寺は一護に一撃を食らわせると、止めを加えるために砂埃が立ち込める一護の元へ飛んでいき手に圧縮した魔力を食らわせようとした瞬間、一護はそれを天鎖斬月の刃で受け止める。

「何!?」

自らの魔法をその刃で受け止めた一護に大いに驚く高円寺。

「何時までもやられてちゃ・・・いねぇんだよ!!!」

一護はそのまま受け止めた高円寺の魔法と一緒に漆黒の月牙を添加して高円寺に向けて放った。

その一撃を高円寺は皮一枚で回避したが、そのあまりの凄まじさに内部は大きく振動しそれと同時に周囲のものが破壊され、ユーノと銀太郎もその威力に一時戦いを止めたほどだ。

「「ぐっ!?」」

やがて、爆風が晴れ周囲の者が視認出来るようになると一護や高円寺、ユーノと銀太郎はその先に見えてきた床にぽっかりとあいた巨大な空洞に目を奪われた。

「「？！」」

「何だあれは！？」

高円寺と銀太郎はその巨大な空洞を凝視するが、その時銀太郎の中に流れるダイシーの血が突然ざわめき始め、銀太郎のその異変に気付く。

「！・・・血が・・・僕の中に流れるダイシーの血がざわめいている・・・！？」

「これは・・・まさかこんな処に・・・」

高円寺は銀太郎の異変を察知し、陥没した空洞の下に広がるあるものを見て確信した。

その近くにあったものとは、巨大なリベル式の魔法陣が描かれた凄まじいエネルギーを内包した古の物質だった。

「こんな処に隠してあったか？！」

高円寺はそれを見てほくそ笑むと、銀太郎の腕を掴んで地面を操作して二人揃ってそのリベル式魔法陣が描かれたそれに向かって潜っていった。

一護とユーノは二人の行動に疑問を抱きつつ、下手に手を出すと何をするか分からなかったために動くに動けずそのまま地下に潜った二人を見つめる。

そして、地下に到着し魔法陣の上に降り立った高円寺と銀太郎はと

いうと、真下に広がる巨大な魔法陣にただただ驚くばかり。

すると、高円寺はその魔法陣が本物であることを今一度確かめて大丈夫であると判断すると不敵な笑みを浮かべながら銀太郎を中央に立たせる。

「ふふ・・・さぁ、銀太郎・・・儀式の始まりだ。」

「わ、っわわわ!!!」

何が何だかわからずただただ高円寺の為すがままに行動する銀太郎は魔法陣の中央に佇みそこでじっとする。

「これこそ、ダイシーの後継者だけが使うことを許された力・・・」

「「!?」」

高円寺の言葉に疑問符を浮かべる一護とユーノだが、高円寺はそんな二人を見上げながら早速銀太郎に施す術式の準備に取り掛かる。

「じっとしていろよ。これから儀式を執り行う。銀太郎、いけるか？」

「・・・はい・・・」

一抹の不安を抱えながら、銀太郎は覚悟を決めると静かに目をつむる。

そして、その銀太郎に向かって高円寺は印を結んでドイツ語に近い言語で呪文を唱え始める。

「Ｍｅｉｎ　Ｗａｐｐｅｎ　ｄａｓｓ　ｕｎｔｅｒ　Ｅｒｄｅ　ｓｃｈｌａｆｔ，ｖｅｒｅｉｎｉｇｅ　ｄｉｃｈ　ｍｉｔ　ｍｉｒ　ｕｎｄ　ｗｅｒｄｅ　ｍｅｉｎｅ　Ｋｒａｆｔ（我、地底の下で眠りし紋章よ、我と結合し我の力となれ。）」

その瞬間、凄まじいエネルギーが銀太郎の体の中へと取り込まれていくと同時に眩いばかりの光が一護達の視界を遮った。

「ぐあああああ！！！！！！」

「「のあああああ！！！」」

悲鳴を上げる銀太郎とエネルギーの巨大さと眩しさに目をやられそうになる一護とユーノ。

やがて、そのエネルギーは上のほうにまで伝わり九九流閑の池全体を大きく振動させた。

エネルギーが徐々におさまり、視界も回復していくとユーノは一護の安否を確認する。

「一護さん！」

どうやら一護も自分同様無事であることは確認できたが、一護はすぐに地下の高円寺に向かって声を張り上げた。

「高円寺！何を・・・？！」

すると、煙が立ち込める地下の中から見えてきたのはその高円寺と

一緒にいた銀太郎が納められた棺桶のようなものであった。

「棺桶!?」

「何がどうなってるんだ・・・!?」

状況を今一理解できていない一護とユーノだったが、その時高円寺が二人に向かって不敵な笑みを見せながらこう話しかけてきた。

「・・・今この瞬間、銀太郎は真のダイシーの後継者となった。」

「何だと!?」

「ダイシーの・・・真の後継者!?」

「長きに渡り、古い記録を調べ研究し、そして・・・聖地“九九琉閑の池”にこれがあると言うことろまでは突き止めた。この初代(オリジナル)のダイシーの記憶のな。全てのパトリオットの力を共有し、パトリオットの頂点に君臨するものの象徴・・・『ダイシー・ネリンネルング』と言う。」

「ダイシー・・・ネリンネルング?!」

「此処は嘗て、初代ダイシーが最期を迎えた、言わばダイシーの墓だ。」

「「何!?」」

高円寺から聞かされた意外な真実に顔を見合わせる一護とユーノ。

だが、これよりも驚くべきことはこの後の高円寺の言葉の中に遭った。

「初代ダイシーは、いずれ次世代のダイシーが魔導師全てを滅ぼすだけの力が必要になったとき、それを後世に残しておく為に、自らの記憶と能力・死んでいったすべてのパトリオット達の途轍もない量の魔力を一つにまとめて、死ぬ間際にそれを紋章として封印した。そして今・・・銀太郎はそのエネルギーと一体になった。それがどういう事か解るか？ミッドチルダや、管理局でのうのうと生きる全ての魔導師など消去することは造作も無いと言うことだ。」

「何！？」

「そんなこと信じられるか！！」

あまりに常識を無視した高円寺の言葉に度肝を抜く二人だったが、二人は当然のことながらそのような事実を真に受けることなどなかった。

「なら勝手にそう思っているがいい。誰も信じろとは言っていない。」

鋭い眼光で自分たちに向けてそう口にする高円寺を見て、ユーノも高円寺の言っていることが眉唾ではないと直感した。

「・・・くっ・・・あの目・・・本気です！」

「ま、マジかよ！？」

「さぁ、どうするのだ？ここで攻撃をするのは結構だが、その瞬間

銀太郎は中に取り込んだ絶大な力を解き放ち、この世界をも吹き飛ばすぞ。」

「「なっ！！」」

「手を出せるものなら出してみるがいい。」

「くっ！！」

高円寺の挑発的な口調と、想定しうる最悪の事態に直面した二人はどうすることもできｈなかった。

そして、そんな二人を仰ぎ見ながら高円寺は徐に銀太郎の納められた棺桶を背中に背負うと最後に次のように言い残した。

「愚かな魔導師と瀞霊廷の死神に伝えろ。一日の猶予をやる。その間、精々銀太郎が完全覚醒するのを震えて待つことだ。」

高円寺はそれだけを伝えると、銀太郎と共に二人の前から一瞬にして立ち去った。

「ま、待て！！」

追いかけようとした一護だったが、それを直ぐにユーノが止める。

「一護さん！」

「ユーノ！？」

「今の話が本当だったら・・・！？」

「・・・ちっ・・・！」

一護は舌打ちをすると、暫くユーノと共にその場を動くことが出来なかった。

そんな事が九九琉閑の池の地下で繰り広げていることなど知りもしない金太郎はというと、既に体力も魔力も限界に達しており、白鴎による一撃を受けて動けない状況となっていた。

その動けないでいる金太郎を見ながら、白鴎のデバイスであるコンボイが声に出す。

〈Ｌａ？Ｈａｖｅ　ｙｏｕ　ｄｉｅｄ！？（おや？死んじまったのかよ！？）〉

〈Ａｈ．　Ａｐｐａｒｅｎｔｌｙ，　ｔｈａｔ．（ああ。どうやらそのようだ。）〉

「ま、あのオヤジのお陰で俺達もこっちに来れた事だし、一応感謝はしといてやるさ。」

白鴎は鼻で笑いながら屋根の上で金太郎を見つめると、もう一度鼻で笑ってその場を立ち去ろうとする。

「へっ！」

と、その時。

「何所へ行く？」

「ん！？」

白鴎が声のする方へ振り返ると、何と意識を取り戻した金太郎がブラッドカートリッジを使用してダイナミックストームを発動させてきたのだ。

〈Ｄｙｎａｍｉｃ　ｓｔｏｒｍ〉

「！！」

ダイナミックストームが白鴎に向けられ、白鴎自身は狼狽する。

白熱した奮戦を繰り広げるこの金太郎と白鴎の戦いではあるが、最終的に勝利を収めるのは果たしてどちらなのか？

そして、銀太郎が取り込んでしまったダイシー・ネリンネルングの力の全容はどれほどのものなのか。

金太郎対白鴎の激闘、次回決着！

衝突！熊谷金太郎ｖｓ白鴎恭一郎（後書き）

教えて、ユーノ先生！

ユ「今日は次回以降のキーワードとなるダイシー・ネリンネルングについて教えちゃうよ♪」

ユ「ネリンネルングとは、ドイツ語の記憶を意味する『エアインネルング』をこの小説的にもじった言葉で、本編でも言っていた通り初代のダイシーの記憶と他のパトリオットの力を共有することが出来るとんでもない力なんだ。」

一「あの野郎・・・高円寺は銀太郎を人形のように操って何を考えてやがる？」

ユ「ま、何か途轍もない邪悪な計略と断言しますけど・・・あいつは結局のところバウントなんでしょうか？それとも他の・・・？」

色々と考える二人であったが、やはり見当がつかない。

すると、その時・・・・・・

白「このオヤジ！！！」

熊「いけませぬぞ！！！！」

まだまだ白熱した戦いを繰り広げる金太郎と白鴎の様子に二人は・・・

一「年の差がかなりあるのに随分と派手にやってるよな・・・」

ユ「何だかんだ言っても金太郎は元気があり余ってますね。とりあえず、がんばりや～～～♪」

魔導師図鑑ハイパー！

消えた銀太郎達を追って技術開発局の近くを通りかかったユーノと一護であったが、そんな二人の前に実験で体中が無惨な姿となったマユリと出くわす。

マ「痛い・・・痛いヨ・・・！」

一「うぇ!?涅マユリじゃねぇか!?どうしたんだ、ボロボロじゃねぇか!!」

マ「癪な話だが、どうやら実験中に何らかのミスをやらかしてしまってネ。済まないが、中に入れてくれ給エ。」

ユ「ここをこう持てば良いですか?」

マ「イタタタタ!!!!こ、こら!!!!腕が千切れるじゃないカ!!!!」

一「じゃ、どうすんだよ!?」

マ「・・・背負ってくれ給エ・・・」

それを聞いた二人は暫くの沈黙の後、互いに向き合い真剣勝負のじゃんけんを始める。

一・ユ「最初はグー！じゃんけんポン！！！あいこでしょ！！あいこでしょ！！あいこでしょ！！あいこでしょ！！あいこでしょ！！」

マ「・・・だから君たち・・・私を背負いたくないのなら素直にイヤだと言い給えヨ・・・！！」

金太郎、限界を超えて振り切れ！（前書き）

ユ「高円寺虎彦・・・・・今以て掴み処のない男だ。銀太郎をまるで傀儡の様に裏から操り、ついには聖地の地の底で封じられていた古代の力までも見つけ出してしまった。」

一「あんなものがもし本当に何もかも吹き飛ばしちまう程の絶大な力だとすれば、それこそ俺達やなのは達・・・そして、銀太郎自身もが身を滅ぼすだろう・・・」

金「高円寺・・・お前の思い通りにはさせない。何が何でもこんな暴挙は許しておくわけにはいかない。私や店長がきっと・・・銀太郎を救い出してみせる！」

ユ「ユーノ・スクライア外伝　パトリオット篇・・・・・始まります。」

金太郎、限界を超えて振り切れ！

＞ｉ１８７６２―７０９＜

ユーノ・スクライア外伝・・・前回の三つの出来事。

一つ：　金太郎が白鴎と激しい攻防を繰り広げる。

二つ：聖地へと向かった銀太郎と高円寺の前に、ユーノ達が現れる。

そして、三つ：その聖地の地下に隠されていたダイシー・ネリンネ

ルングと銀太郎が一つになる。

白「・・・あのさ。マジで戦おうと思ってるんならさ、もうちょっとマシな武器持ってきたら？」

白「詰めが甘いんだよ。」

〈Ｄｙｎａｍｉｃ　ｓｔｏｒｍ〉

「はっ！」

自分に向けて飛んでくるダイナミックストームを確認しした白鴎。

「このオヤジ！！！」

〈Ｍｏｎｓｔｅｒ　ｐｒｏｔｅｃｔｉｏｎ〉

コンボイの防御力を遺憾なく発揮したそれを使い、金太郎の大技の一つであるそれを受け止め難を逃れるが、攻撃を受けたコンボイは未だに諦めない姿勢の金太郎に些か呆れかえっていた。

〈Ｙｏｕ　ｏｎｌｙ　ｈａｖｅ　ｔｏ　ｌｉｅ　ｄｏｗｎ　ｏｂｅｄｉｅｎｔｌｙ　ｏｎ　ｇｒｏｕｎｄ．（大人しく地面に伏していれば良いものを。）〉

白鴎はそのようにして愚痴をこぼすコンボイと共に、屋根の上から飛び降り金太郎と相対する。

そして、金太郎も満身創痍の体を起き上がらせ白鴎と向き合う。

「・・・言ったはずだ。この無意味な戦いを終わらせると。」

〈Ａ　ｓａｕｃｙ　ｔｈｉｎｇ．　Ｄｏ　ｙｏｕ　ｔｈｉｎｋ　ｔｈａｔ　ｉｔ　ｉｓ　ｐｏｓｓｉｂｌｅ　ｔｏ　ｋｎｏｃｋ　ｉｔ　ｄｏｗｎ　ｅｖｅｎ　ｉｆ　ｓｕｃｈ　ａｒｍｓ　ｔｈａｔ　ｃａｎｎｏｔ　ｂｅ　ｍａｓｔｅｒｅｄ　ａｒｅ　ｕｓｅｄ？（生意気なことを。そんな使いこなせない武器を使っても、倒せると思っているのか？）〉

「（力は・・・何とか制御できるようになってきた。あとは正確な狙い。）」

金太郎は白鴎に狙いを定めると、再びダイナミックストームを発動させる。

しかし、疲労困憊に加えて魔力消費の悪いここでの戦いは金太郎の体を徐々に蝕みその正確なコントロールでさえ難しくなる。

そして、案の定先ほどは狙えたはずのダイナミックストームの照準が白鴎に直撃しようとした寸前に軌道を変えてしまう。

「はは。また照準がずれたな！」

「（く！また狙いがズレてしまったか。）」

金太郎はもう一度、ダイナミックストームを発動させたが今度は正確な狙いと引き換えに直撃の寸前で威力が落ちてしまい、結局白鴎に当たる事は無かった。

そんな金太郎の情けない姿を大笑いする白鴎。

「ははははは！！！！！おらおら、どうしたどうした！？」

「（くそ！今度は威力が落ちたか！？）」

「ふん。オヤジは、この無意味な戦いを終わらせるとか言ったけど・・・所詮お前らじゃ俺達を止めることはできないんだよ。死んで行った仲間のためにも、銀太郎の完全覚醒のためにも、俺はここで生

き残らなくちゃいけない！」

「確かに・・・お前の気持ちも解らない訳ではない。だが、それでも私はお前を・・・お前たちパトリオットを救いたい！」

「俺達を・・・救うだ？は！何を虫のいい話をぬかしてやがるんだてめぇは！俺達の受けてきた苦しみなんか、てめぇらミッドとベルカの腐れ魔導師共に解ってたまるかよ！俺達が長きに渡って迫害から逃れ、身を縮こまらせながらの怯えた生活をしてきたのは誰の所為だと思ってる！？都合のいいときだけ甘い言葉で俺達を惑わせ、偽善を繕ってきたのは何所のどいつだ！！銀太郎はお前達の所為で、あんな不自由な想いをしなくちゃいけないんだ！！俺らは・・・てめぇらを・・・魔導師を未来永劫許さない！！」

白鴎は怒り心頭に金太郎にそう投げかけると、金太郎に向かって走り出した。

「はあああああ！！！！」

そして、ブラッド状態を発動させて一段と強化されたその鍵爪で金太郎の装甲に傷をつけていく。

「ぐっは！！！」

左肩の装甲を破壊され、直に自分の肌に痛みが走る金太郎。

「銀太郎にもう不自由な想いはさせねぇ！！何が何でも俺は魔導師を全て叩き潰す！！その手始めが・・・てめぇだ、熊谷金太郎！！！」

そう言うと、白鴎は強い脚力で金太郎の体を蹴り飛ばす。

「のはっ！！！」

「例え初代パトリオットの血を引く奴だろうと容赦はしねぇ！前に立ち塞がるものは総て敵だ！！」

白鴎の目に迷いはなかった。

全ては銀太郎を助けるため、銀太郎とまた一緒に平穏に暮らしたいが故に白鴎は武器を取って立ちふさがる障害に向かっていくのだ。

「おらあああ！！」

「ぐあああああ！！！」

白鴎を突き動かす覚悟の大きさは何度なく武器を交えた金太郎には手に取るようにわかる。

だが、それでも金太郎は一方的に白鴎の攻撃を食らい続け装甲を気づ付けられていく一方であった。

「ぐっ・・・ぐっは・・・！！」

「・・・ふん・・・」

金太郎はもう限界とかそんなレベルの状態ではない。

既にこれ以上戦えば命にかかると言う所まで追い詰められていた。

だが、それでも金太郎は白鴎同様心の中に抱く強い覚悟の元、それだけを糧にして戦いに身を投じ、立ち上がってきたのだ。

「はっ、はっ、はっ、はっ、はっ、はっ！」

白鴎も後ろを振り返り、ふらふらになりながらも立ち上がる金太郎に興奮を覚える。

「あれだけ攻撃を受けてるのに、よく立ったな。伊達に体は頑丈に出来てるって訳だ。いいね・・・ぞくぞくするぜ。」

「はっ、はっ、はっ、はっ、はっ、はっ！」

「じゃあ、その意気に免じて・・・そろそろ止めを刺してやるよ。」

〈Ｂｌｏｏｄ　ｃａｒｔｒｉｄｇｅ　ｌｏａｄ〉

戦いは間もなく終焉を迎えようとしていた。

金太郎、白鴎・・・――――どちらが勝利をつかむのか！？

さて、その頃金太郎と白鴎が白熱した激闘を繰り広げている中、総隊長山本は卯ノ花・京楽・狛村の三人の隊長陣を呼び出すとこれまでに受けた被害状況とその後の調査結果を聞きだしていた。

「各隊への被害が拡大しておる。二番隊隊長・六番隊隊長及び刑軍の様子はどうじゃ？」

「はい。回復傾向にはありますが、ほとんどのものが消耗しきっており、動ける状態にはありません。」

「うむ・・・仕方ないことじゃな。八番隊隊長、京楽春水。」

「は。」

「調査団よりの報告の真偽は？」

「はぁ・・・厄介なことですよ。九九琉閑の池の地下深くに巨大な閉鎖施設を確認してきました。」

「何！？」

卯ノ花の横でその事実を耳にした狛村は驚愕の表情を浮かべ、総隊長山本もこれにはいつも以上に渋い顔となる。

「看過できぬものじゃな。我々さえ知らぬ封印されし力・・・“ダイシー・ネリンネルング”が強奪され、旅禍の手に堕ちたとは。」

その後も、京楽は一護とユーノ達の報告も交えながら更に詳細な説明を始める。

「現場で戦闘に入った死神代行、黒崎一護と翡翠の魔導死神、ユーノ・スクライアによれば・・・ダイシー・ネリンネルングとは過去に聖地で死んでいったダイシー派のパトリオット達全てと初代ダイシー自身の記憶と魔力を封じ込めたもので、これをダイシーの後継者が体に取り込んで完全に馴染ませると・・・その力によって強大な力が蘇り、死神や魔導師も容易に全滅することが出来る・・・と言う話です。」

すると、説明をし終えたその京楽の言葉に些か疑問に思う狛村は自

分の考えを提示する。

「しかし、そのダイシー・ネリンネルングが封印されたのは、九九琉閑の池が禁踏区域となる遥か数百年も前の話だ。聖地を築き上げ、パトリオット達を統率した指導者のダイシーの事にしても然り、何所までが事実なのか今の情報だけでは・・・」

「確かに。じゃが、理由はどうあれ・・・当時のダイシーとその一派が秘密裏にそれを完全封印し、存在自体を時期が来るまで抹消していたのは事実。旅禍の語った凄まじい力もあながち眉唾とは言えん。いずれにせよ、全力を挙げ旅禍の追跡をするよう各所に伝達して欲しい。」

「「「は（はい）！」」」

その頃、銀太郎が納められた棺桶を背中に乗せて移動を続けていた高円寺は偶然にも遭遇を果たした瀬間子にダイシー・ネリンネルングの詳細を伝えた。

「ダイシー・ネリンネルング?!」

「そうだ。」

「そんなものがあったとは・・・・・・」

「・・・ああ。これで全ての準備が整った。あと一日で全てが決着する。」

高円寺はそう言うと、棺桶を背負いながら何気なく建物の間を流れる雲も見上げる。

「いい気分だよ。」

だがしかし、銀太郎の身の上を一番に考えている瀬間子にとってこの高円寺の行動は度が過ぎているのではないとさえ感じていた。

「高円寺。何もそこまでする必要はないのでは?それに、銀太郎は本当にそれを望んでいるのか?」

「心配してくれてるのか?なに・・・銀太郎だってこれ以上家族を失うのは耐え切れないだろう。この力を使えば一気に何もかもを吹き飛ばせるのだぞ。」

「それはそうかもしれぬが・・・万が一、覚醒前に死神や魔導師が銀太郎に手を出したりでもしたら・・・どうなる?その棺桶の中から無理やり銀太郎を引きずり出したら・・・!?」

「そうだな。下手に手を出せば・・・銀太郎諸共膨大なエネルギーが一気に暴発し、それこそ銀太郎もこの瀞霊廷も灰燼に帰すだろう。」

「なっ!!」

高円寺は簡単にもそのような危険な言葉を口にするが、聞いていた瀬間子本人は驚きを隠し切れない様子であった。

「どの道、銀太郎が完全覚醒させすれば・・・それこそ絶対的な力を有し、全ての魔導師達を消し去り、そして邪魔な死神共もこの世界から始末することも出来るのだ。この大いなる力を以ってしてな・・・」

「・・・高円寺・・・・・・銀太郎は大丈夫なんだろうな・・・・・・」

「本当によく心配してくれてるな?だが、安心しろ。今の銀太郎には連中であってもそう簡単には近づけんし、死にもしない。」

「違う!暴挙だと言っているのだ!既に何人もの仲間の魄動が消えている。もういいだろ。それだけの力があるのなら、それを以ってパトリオット達の楽園を新たに創り上げれば・・・!」

「駄目だ。」

「何故だ!?確かに・・・銀太郎を真のダイシーの後継者にすることが我らの目的だが、だからと言ってパトリオットの楽園を気付き上げる前に、何の罪も無いものを殺して何の意味がある!?無益な殺戮をすることを、銀太郎は望んでいなかったはずだ!どんな意味が・・・!!」

熱弁に高円寺に訴えかける瀬間子だったが、それを聞くと高円寺は背中越しに瀬間子の予想に反した言葉を口にする。

「ふん。それでいいんだ・・・」

「!!高円寺・・・まさか・・・!?」

「・・・・・・――――――」

高円寺のその言葉を聞いて、漸く高円寺の真意を知ってしまった瀬間子はため息をつくとそんな高円寺に向かって次のように語り出す。

「・・・初めてお前に出合ったときから思っていた。お前は制御の利かない刃だと。辛酸を舐めた俺達パトリオットや銀太郎は、お前のその勢いに乗り・・・今日に至ってきた。だから、俺も今日まで着いてきた。だが、それはあくまで銀太郎の為であって・・・お前の為ではない。お前の言う通り、もしそれが一族の力の源なら・・・偉大なるダイシーの記憶なら、武器になんかして良いものじゃない！」

「お前のそう言う生真面目なところは・・・好きだよ、瀬間子。」

「く！おりゃあああああああ！！！！！」

瀬間子は溢れる感情を抑えきれなくなると、高円寺の両肩を掴み銀太郎の棺桶を避けると掴んだ高円寺を壁に食い込ませて怒り心頭な表情でこう言って来た。

「高円寺・・・止めておけ。銀太郎はお前の玩具じゃないんだぞ！」

だが、その瞬間高円寺はギガトロンの力を発動させ不意を突いて瀬間子の腹部に衝撃波を食らわせた。

「！！」

瀬間子はその衝撃波を直に食らうと、出血を起こして徐に険しい顔でその場に倒れ伏す。

「・・・ぐっ・・・！！」

血を流してその場に倒れた瀬間子を見ながら、高円寺は棺桶を担ぎ

直して別れの言葉を口にして立ち去っていく。

「長い間、世話になったな。お前とは、もっと色んな話をしたかったよ。」

瀬間子は立ち行く高円寺を仰向けになりながら、出血カ所を抑え為す術もなく見る事しかできなかった。

「こう・・・え・・・ん・・・じ・・・ぎん・・・た・・・ろ・・・う・・・」

さて、二人の間にそんな事が起こったことなど一切知らないでいる最終局面を迎えようとしていた白鴎と金太郎の戦いはというと、お互いに武器を構えながら膠着状態を続けていたが、金太郎は満身創痍の状態から魔力を無理やり上昇させてアックスオーガにブラッドカートリッジを上昇させていく。

〈Ｂｌｏｏｄ　ｃａｒｔｒｉｄｇｅ　ｌｏａｄ〉

そんな金太郎の様子を見て、攻撃の人格が今までの金太郎を小ばかにした態度から一変して敬意を表する。

〈Ｌａ?・・・　Ｉｔ　・・ｓａｙｉｎｇ　ｒｅｓｐｅｃｔ・・・ｃｏｎｓｉｄｅｒａｂｌｙ　ｔａｋｅｓ　ａ　ｓｔａｎｃｅ.（おや?ただの太ったオッサンだとばかり思っていたが・・・結構言い面構えしてるじゃねぇか。）〉

「・・・・・・（父上・・・・・・）」

金太郎はふらふらの体を持ちこたえ、アックスオーガをしっかり握

ると嘗ての遠い記憶――――

幼いころに魔法を教えてくれた師匠でもあり、実の父・欽之助との修行の時に口にしていたある言葉を思い返していた。

〈アックスオーガは、私の先代からずっと受け継がれてきた由緒ある古のデバイスだ。使用者の心に反応し、絶大な力を発する。〉

〈心・・・？〉

「・・・・・父上・・・・・・・」

当時の金太郎にはその言葉の意味は今一分からなかったが、年を重ね管理局に入局してユーノと出会ってから、金太郎は自ずとその言葉の意味がよく分かるようになっていった。

〈今教えたこと以外は、難しいことは何も無い。そこから先は、“心”なんだ。〉

〈そう・・・なんですか？〉

〈いいか、金太郎。斧とは、決して振るものではないのだ。それはアックスオーガとて同じこと。斧を使うことにおいて、心で斧を振り切る。〉

遠い記憶に残されていた父からの言葉をこの極限の戦いの中で思い出した金太郎は、誓いを胸に今一度心で斧を振り切るという信念のもとで白鴎と対峙することにした。

「・・・・・父上・・・・・・やってみます。心で・・・斧を振

り切る！」

〈Ｄｙｎａｍｉｃ　ｓｌａｓｈ〉

「はあああああ！！！！」

金太郎はその瞬間、その信念の名のもとに振り切ったダイナミックスラッシュを白鴎目掛けて飛ばしていった。

「おりゃあああああ！！！！」

白鴎は飛んできたそれを攻撃する側の手で振り払うが、これまでの単なる力による一撃ではなく強い信念の名のもとに振り切られたそれに思わず手が小刻みに震え、肩で息をする。

「は、は、は、は。くそ・・・！」

〈・・・ｗｏｎｄｅｒｆｕｌ・・・　ｄｏ　ｎｏｔ　ｍａｓｓａｇｅ　ｉｔ．　Ｐｏｗｅｒ'ｓ　ｃｏｍｉｎｇ　ｈｅｒｅ　ａｎｄ　ｇｏｉｎｇ　ｕｐ!?（大したもんだな。ここに来て力が上がるなんて！？）〉

白鴎もデバイスも素直に金太郎の力の上昇に驚くが、当の金太郎には余裕と言うものが全くなく、アックスオーガそのものも湯気を上げて限界領域に達しようとしていた。

〈Ｈｏｗｅｖｅｒ，　ｄｏ　ｎｏｔ　ｙｏｕ　ａｐｐｒｏａｃｈ　ｔｈｅ　ｌｉｍｉｔ　ｓｌｏｗｌｙ?（でも、そろそろ限界に近付いてるんじゃないのか？）〉

金太郎は魔力を溜めながらアックスオーガに向かって戦いが終わるまで持ちこたえるようにと切に願った。

「（頼む・・・アックスオーガ・・・この戦いが終わるまで、もってくれ！）」

「ふふふふふ！！」

白鴎はそんな金太郎を様子を窺うと、攻撃モードから防御モードへと変更し、金太郎の攻撃に備えて盾を張る。

〈Ｔｈｉｓ　ｉｓ　ｍｙ　ｔｕｒｎ！（今度は私だ！）〉

金太郎は体にかかる様々な負担をアックスオーガと共に耐えながら、渾身の一撃を秘めたダイナミックスラッシュを振り切った。

「ダイナミックスラッシュ！」

が、その時金太郎の目の前で思わぬ事態が起こった。

「何！？」

振り切ったダイナミックスラッシュは白鴎に着弾する直前でエネルギーが拡散してしまい、防御を張る必要もない程に威力が落ちてしまったのであった。

「ははははは！！！！どうした！？」

白鴎はそんな金太郎の攻撃を笑いながら勝利を確信して不用意に防御を解いてしまった。

すると、そんな白鴎の目の前でまたしても予期せぬことが起こった。

「な！？」

振り切ったアックスオーガの刃から何もしていないのにもう一発のダイナミックスラッシュが勝手に発動し、白鴎めがけて飛んできたのだ。

白鴎はそれをギリギリのところで回避するが、防御の人格に何故動かなかったと焦った様子で尋ねた。

「何やってるんだよ！？」

〈Ｉｔ ｉｓ ｂｅｃａｕｓｅ ｙｏｕ ｒｅｔｕｒｎ ｃａｒｅｌｅｓｓｌｙ. Ｉｔ ｉｓ ｎｏｔ ｍｙ ｅｆｆｅｃｔ.（お前が不用意に戻るからだ。私の所為ではない。）〉

「ち！」

白鴎は険しい顔を浮かべながら金太郎の方を振り向いて、今の攻撃に関して質問する。

「今のは何だよ！？」

そんな白鴎の質問を耳にしながら、先ほどの白鴎の攻防の切り替えに関して金太郎はある一つの仮説を立てた。

「はっ、はっ、はっ、はっ、はっ、はっ・・・もしかして・・・！？」

「は！態とやった訳じゃないみたいだな。暴発か？」

白鴎の言葉を真摯に受け入れたのち、金太郎は手の中にあるアックスオーガを凝視、今一度強く握り直すと最後の機会と思いブラッドカートリッジをロードする。

「・・・・・・――――――（ならば・・・頼む。もってくれ！）」

〈Ｂｌｏｏｄ　ｃａｒｔｒｉｄｇｅ　ｌｏａｄ〉

金太郎の最後の一撃となる魔力がアックスオーガに集積され、金太郎は攻撃を続行しようとするがそんなボロボロの状態である金太郎に白鴎は――――――

「は！お前はもう限界なんだよ！熊谷金太郎！！」

白鴎は防御モードを発動すると、飛んできた金太郎の一撃をものの見事に防御する。

〈Ｄｏ　ｎｏｔ　ｙｏｕ　ｕｎｄｅｒｓｔａｎｄ　ｔｈａｔ　ｍｙ　ｄｅｆｅｎｓｅ　ｉｓ　ｉｍｐｒｅｇｎａｂｌｅ　ｄｅｆｅｎｓｅｓ？（私の防御は鉄壁だと分からないのか？）〉

白鴎は金太郎の攻撃を凌ぎきると、砂埃の中から空高くへと飛び上がり防御を解除して止めの攻撃の為に攻撃モードに移行しようとした。

「これで終わり・・・」

だが、その機会を待ち望んでいた金太郎は高速で空中に飛び上がると白鴎の前に現れる。

「！！」

そして、そのまま至近距離からの最後の斧の一振りを驚愕する白鴎の体目掛けて仕掛け、見事に白鴎を切り伏せた。

「ぎゃあああああああああ！！！！！」

二人はほぼ同時に不時着すると、叩きつけられた体を徐に起こす。

「はっ、はっ、はっ、はっ、はっ、はっ！」

「・・・ぐっ・・・何でだ！？」

正面から金太郎の一撃を食らい、多量の血を流す白鴎がそう尋ねると金太郎は徐に自分の立てた仮説から導き出した一つの結論を口にする。

「・・・お前がそのブラッド状態にあるとき、そのデバイスは自ら判断して行動する。だから、パトリオットの中でも高い戦闘能力を手に入れることが出来た。だが、変身を解くときは違う。防御しているときは攻撃が出来ず、攻撃しているときは防御が出来ない。だから、お前はその形状を変えるとき、一度自分の意思で元の状態に戻らなくてはいけないのだ。さっき、ダイナミックスラッシュの斬撃が暴発したとき、勝ちを確信したお前は不用意に一体化を解こうとした。そして、その瞬間出現した二撃目の斬撃には全く反応できなかった。つまり、そこに僅かなタイムラグが出来る。そして、お前の・・・白鴎恭一郎の唯一、最大の弱点なのだ。」

その金太郎の言葉を聞きながら、血塗れとなった体を何とか立たせた白鴎はブラッド状態を解くと顔から汗を流しもう一度問い直す。

「はっ、はっ、はっ、はっ、はっ、はっ・・・だ、だけど今・・・お前・・・どうやって二発目を・・・！？」

「・・・父上が私に教えてくださった。斧は振るものではない。振る切るものだと。そして、アックスオーガの真の力はその時、術者の心に反応し絶大な力を発揮するのだ。」

「俺の負け・・・だな・・・銀太郎・・・ごめ・・・ん・・・」

白鴎は力なき声で銀太郎に謝罪の言葉を発すると、そのまま正面へと倒れこんでいき金太郎に見守られながら服だけを残し、砂と化して風と共に消えていった。

金太郎は戦いの中で最後の最後で白鴎を救えなかったことに深く後悔し、顔を歪めた。

「・・・・・・――――――――ぐっ！！（結局私は、白鴎を救えなかった・・・）」

そして、全ての限界に達した瞬間金太郎もその場に膝をついてブラッド状態を解いた。

白鴎の魄動が消失したことは瀬間子を振り切った高円寺にも直ぐ伝わり、瀞霊廷に残り一人となった瀬間子の動きを気にしつつ、高円寺は不敵な笑みを浮かべる。

「・・・・・白鴎も消えたか・・・・・・・敵もなかなかやるじゃないか。」

こうして、熊谷金太郎と白鴎恭一郎の因縁の対決は熊谷金太郎の方に勝利の女神は微笑んだ。

だがしかし、白鴎を救うと言っていたにもかかわらず自分の力の未熟さゆえに結局は自分の手で殺めてしまったことを、金太郎は一生後悔することとなった。

そんな激戦が一つ終了したところで、別な視点に目を向けてみよう。

八番隊隊長、京楽春水は副隊長の伊勢七緒と共に十年前にバウントの資料が発見されたここ瀞霊廷中央図書館の方でパトリオットに関する資料もあるのではないかと思案し、二人がかりで調査を続けていた。

京楽は山本の元から戻ると、七緒に山本に伝えたことと同じ内容のものを報せようとしたが、ふと何気なく取った本を払った瞬間かぶっていた埃が器官に入り思わず咽てしまった。

「げっほげほ!!げっほげほ!!」

京楽が咽ている中、七緒は一人本棚の方を向きながら資料を黙々と読み漁る。

「ふう〜〜〜全く・・・ここの本棚の埃は酷いものだよ。誇りで目の方も痛くなってきちゃった。」

「隊長。文句を言う暇があるのなら、まずは手を動かしてください

ね。」

「ふふふ。分かってるよ、七緒ちゃん。で、そっちは何か見つかったのかい？」

「はい。多少は・・・・・しかし、予想に反して資料が膨大でして・・・あ、そう言えば、敵方は何と仰ってきたのですか？」

「一日の猶予を切ってきた。明日になったら・・・銀太郎君がボーン！かも・・・」

「そうですか・・・・・隊長、ちょっとこれを見てください。」

「ふむ。」

七緒はそう言うと、京楽に自身がバウントの資料が保管されていた本棚を散策していた時に偶然にも発見したとある一冊の本を見せた。

「ダイシー・ネリンネルングの概要が書かれています。著者は、初代ダイシー。」

「何でこんなものが？」

「ダイシーと言うのは、相当に頭が回る人物だったようです。人は秘密を知りたがります。それがありそうな場所には特に入りたがる。そう言う場合、最も狙われ易いのは正規の情報保管施設です。しかし、直接文書化して大量の資料の中にもぐりこませれば、案外見つかりません。」

「成程。」

「前にもバウントの一件で、この近辺からデータが消えたのを確認したことがあります。それと同じように、こっちの方にパトリオットに関する大事な何かがあるのではないのかと・・・・・どうやら、幸いにもダイシー・ネリンネルングの書物が埃を被って埋もれていました。」

「ほう・・・それで？」

「そのダイシー・ネリンネルングの書物を見つけたのは偶然です。しかし、他にも何かがあるようです。」

「他に？」

七緒から聞かされた意外な言葉に訝しげな表情を浮かべる京楽。

「最終ページに書かれて居るはずの肝心な中身が、書いていないのです。恐らくその著者は情報を幾つか書物に分散して書き、この膨大な書物の中に紛れ込ませています。」

「あ、ええ！？こ、これ・・・全部探すのかい！？」

周りにある本棚に納められた膨大な書物を見渡し、京楽は思わず声を上げてしまうが七緒はそんな京楽に向かって毅然とした言葉で更に続ける。

「明日まで、まだ時間は在りますからね。隊長も協力お願いしますよ。」

「はは・・・やれやれ・・・相変わらず厳しい一言だね、七緒ちゃ

ん。」

「無駄口はいいですから、探してください。」

「はいはい・・・」

京楽は隊長であるにも関わらず、相変わらず七緒には頭が上がらないらしく笠を被り直して適当に本棚の中から資料の調査を続けるのであった。

やがて、時は過ぎていき辺りはすっかり夕方を迎え太陽の色も茜色に輝いていた。

瀞霊廷も漸く騒乱の方も鎮静化していき、静けさを取り戻しつつある中金太郎は体中から血を流し、ふらふらになりながら塀を伝って道を歩いていた。

「はっ、はっ、はっ、はっ、はっ、はっ！」

意識も朦朧としていく中、金太郎は前方から突如として現れる懐かしい人影を見て思わず驚きの表情を見せる。

「・・・父上・・・！？」

金太郎の前に現れたのは、今は故人となっている熊谷金太郎の実の父親である熊谷欽之助の若かりし姿であった。

欽之助は優しい顔つきで銀太郎を見ると、手を差し伸べてるかのように突き出してきた。

「頑張ったな、金太郎・・・」

「父上・・・だが、どうして!?」

この思わぬ光景に狼狽を隠し切れない金太郎。

欽之助はそんな金太郎に近づいていくと、実体を持たないにもかかわらず金太郎の腕を徐に握ってきたのだ。

「お前はもう、充分に戦った。アックスオーガもお前の心に反応し見事な一撃を放った。」

「そんな・・・私は未だ!!」

「人にはその時々の限界が存在する。今のお前はその限界まで戦った・・・もうよい。此処から先は、よく休むことだ。真の敵との最終決戦に備えるためにも。」

「真の敵・・・!?銀太郎以外に、真の敵が存在するというのですか!?」

「あの子は自らの意思で人に迷惑をかけるような愚かな少年ではない。彼とパトリオット達を動かした張本人は、別にいる。それが誰なのかはお前には自ずと分かるはずだ。」

「はっ!まさか・・・・・・!?」

欽之助の言葉で、金太郎は漸く本当の敵が誰であるかを理解する。

それこそが、あのオーリーをも手にかけ銀太郎を意のままに操る謎

のパトリオット高円寺虎彦であるのだから。

金太郎は込み上げる怒りを必死に抑え込もうと拳を強く握るが、それを見た欽之助は金太郎に毅然とした口調でこう語る。

「金太郎・・・怒りに固執するな。確かに、復讐心は人の心を強固にする。だが、時にそれは固執するあまり却って自らの刃を鈍らせることもある。そのことを充分に弁えることだ。」

欽之助はそれだけを言い残すと、金太郎の前から煙のように姿を消していき金太郎はそんな父の姿を名残惜しそうな顔で見送った。

「父上・・・・・・?!」

と、その時・・・――金太郎の耳元に聞きなれた声が飛び込んできた。

「金太郎!」

金太郎が声のする方へ顔を向けると、そこには眉間に皺を寄せて九九琉閑の池から戻ってきた一護とユーノが立っていた。

二人の姿を確認すると、金太郎は緊張の糸のようなものが切れたかのようにバランスを崩し倒れそうになったが、直ぐにユーノが支えてくれた。

「金太郎。パトリオットと戦ったようだね?」

「はい・・・何とか、退けましたが・・・白鴎はもう・・・」

「そうか・・・」

ユーノと一護はその言葉を聞いて苦い顔を浮かべる。

「店長、一護殿・・・そちらは!?」

「ああ。高円寺が・・・あいつ、明日には銀太郎君に馴染ませたダイシー・ネリンネルングが完全覚醒を遂げ、その絶大な力を以ってして、僕ら魔導師達や死神達を滅ぼしかねない。」

「何ですと!?ぐっ!!」

高円寺という言葉だけでも今の金太郎には刺激的な言葉にもかかわらず、その上のこのようなバカげた事実を聞かされては黙っている訳には行かなった。

金太郎は満身創痍の体の事など一切気にせず、高円寺と銀太郎を止めに行こうとするがそんなことはやはり出来ずユーノと一護に支えられたまま動けなくなる。

「たく、無茶するんじゃねぇよ。」

一護もユーノやなのはに違わず責任感が強く、無茶をする金太郎に呆れかえってしまう。

「銀太郎を・・・助けなければ・・・そして、高円寺の邪なる計画を止めなければ。私も行きますぞ!」

「分かってるよ。でもその前に、お前とアックスオーガの手当てが先だ。」

金太郎は二人の肩に掴まりながら、ゆっくりと治療できる場所を探して歩き始めた。

「（高円寺・・・お前の好きにはさせぬ！絶対に、銀太郎は私たちが助ける！！）」

その頃、高円寺を止めようとして返り討ちに遭ってしまった瀬間子はというと、周囲に漂う霊子をかき集めて傷を癒すと、徐に立ち上がり行動を起こし始めるのであった。

「高円寺・・・銀太郎に手出しはするな！関係ないものまで消す必要は無い。それに、銀太郎はお前の玩具なのではない。銀太郎の未来を守るために・・・俺は・・・お前を止める・・・高円寺！」

瀬間子は独り言のようにそう口にしながら、一人消えていった仲間たちのことと銀太郎のことを思いながら沈んでいく夕陽を背に足を進めるのであった。

その後、すっかり月光が輝く夜の世界へと変貌を遂げたとき――――

「お！」

「いたぞ！！」

「止まれ！」

浮竹が隊長を務める十三番隊の隊員たちが周辺警護を実施していると、行動を起こし始めていた瀬間子と遭遇を遂げ、全員は刀を抜い

た。

瀬間子は目の前に立ちふさがる隊士たちに向かって決意の籠った目でこう言った。

「退け。俺には行くところがある。」

隊士の一人が別の隊の者に瀬間子を補足したことを伝える。

「旅禍を捕捉！これより攻撃します！」

この情報は直ぐに浮竹・はやて・クロノ・そしてリィンの元にまで伝えられる。

「別班が旅禍を発見しました、隊長！！」

「手を出すなと伝えろ。俺達が合流するまで待て！」

浮竹は早速はやて達三人を引き連れて補足場所へと向かって走り出した。

その間に瀬間子は目の前の隊士達を格闘技を駆使して豪快に投げ飛ばしたり、蹴りを入れたりとしながら前に進もうとしていた。

「怯むな！」

「ほおおおお！！！！」

だが、隊士達はその後も浮竹の命令を無視して瀬間子を生け捕りにするために真っ向から勝負を仕掛けていく。

それを瀬間子は的確な動きと攻撃で捌いていくと、徐にデバイスであるダイノボットを取り出して構築と同時にブラッドカートリッジを発動する。

「ダイノボット、セットアップ！」

〈Ｂｌｏｏｄ　ｃａｒｔｒｉｄｇｅ　ｌｏａｄ〉

その瞬間、ブラッドカートリッジをロードした瀬間子はヴェロキラプトルを模した凶暴な姿へと変貌を遂げ、始めたその瀬間子の姿に隊士達は恐怖に戦く。

〈Ｉ　ｃａｎ　ｆｉｇｈｔ　ｔｈｅｍ，ｒｉｇｈｔ？（本当にやっていいのか？）〉

「仕方あるまい。」

瀬間子はダイノボットと共に覚悟を決めると、そのまま隊士達に向かって突っ込んでいった。

「「「ぎゃあああああ！！！」」」

隊士達の悲鳴が移動中の浮竹達の元に届き、声を聞いたはやては思わず応答を要求する。

「何があったんですか！？応答してください！！みなさん！！」

「悲鳴の後、急に応答が途絶えたです！」

「くそ！」

「兎に角追うぞ。」

舌打ちをするクロノや不安げな表情のはやてとリィンに指示を仰ぐ浮竹。

その間に、隊士達を瞬殺の言葉通りに一瞬で昏倒させた瀬間子はブラッド状態を解き、一言謝罪の言葉をかける。

「・・・・・・許せ。」

そんな瀬間子の事を追って、はやてとクロノは危惧の念を抱きつつ走り続けるのであった。

「最悪の事態にならねばええけど。」

「間に合ってくれ！」

残り二人となってしまったパトリオット。

瀬間子は高円寺の行動を止めるために孤軍奮闘する中、はやてとクロノ、浮竹達十三番隊の面々は最後の最後で瀬間子を救うことが出来るのか?!

次回、瀬間子の運命や如何に!?

金太郎、限界を超えて振り切れ！（後書き）

教えて、ユーノ先生！

ユ「今日は浮竹さんのお話だ♪」

ユ「寛厚かつ人望のある十三番隊隊長、浮竹十四郎さんは幼いころからの病の所為で髪の毛が白くなってしまっているのが特徴だ。持論に二つの戦い・・・命を守るための戦いと誇りを守るための戦いを見極めるというのがあり、京楽隊長と並ぶ古参の隊長だ。」

ユ「斬魂魄刀の名は『双魚理（そうぎょのことわり）』。尸魂界に二つしかない二刀一対の斬魂魄刀の一つで、水流を巻き上げ攻撃・防御を可能にし敵の攻撃を吸収して威力を変化させて相手に弾き返すと言ったことも出来るんだ♪」

浮「いや～～～懇切丁寧な説明どうもありがとう、ユーノ君。このコーナーはいつも拝見しているよ。」

ユ「本当ですか♪それは嬉しいですね！！」

浮「あ、そうだ！これよかったらどうだい？今度瀞霊廷通信に載せるコラムなんだが、是非『翡翠の魔導死神が語る死神道と魔導師の両立』というものを出してみたいのだが、どうだろう？」

ユ「成程。分かりました♪僕で良ければ協力させてください！」

浮「そうか！いや、助かるよ。ははははは！！！！」

すっかり意気投合する浮竹とユーノを横目に見ていた一護となのはと言うと・・・

な「世界の枠を超えてユーノ君有名人ですね・・・」

一「どうでもいいけど、変なことは書かないでくれよ頼むから・・・」

ちょっとの不安を抱える様子であった、とさ。

魔導師図鑑ハイパー！

機動六課男性待遇改善委員会会長、阿散井恋次は一人トイレの中で座り込みながら困り果てていた。

恋「くそ・・・・・一体どうしたらいいんだよ・・・！？」

これまでの流れからして、はやてがまた自分たちの事を馬鹿にしてくるということを恥ずかしながら恐れる恋次。

すると、そこに副会長であるクロノが入って来る。

ク「どうしたんですか、阿散井会長？」

恋「ああ・・・実ははやて達機動六課女性前線協会に舐められなくても済むように誰か大物の奴を迎え入れられないかと考えているんだが・・・なかなかな・・・」

ク「成程・・・・・僕から当たってみましょうか？」

恋「本当か！？」

そうして、クロノが当たってみたのは悪友であるユーノ。

ク「と言う訳で、お前にも理事になって欲しいんだ。」

軽い気持ちでメンバーカードと恋次と同じ手ぬぐいを渡そうとするが、あっさりとユーノは不機嫌そうな表情で・・・

ユ「断る！」

白熱！ＳＳＳの三人（前書き）

は「右も左もよく分からない前人未踏の世界で繰り広げられる死神さん達を巻き込んでの今回の事件・・・年端もいかない子供たちが起こしたこの事件において、私たちは誰も救えていないのが現状・・・」

ク「世界はいつだってこんな筈じゃないことばかりが待ち受けている。表面上では割り切れているつもりでも、心の中まではそう割り切れるものじゃない・・・」

浮「俺達も出来るだけ彼らを救ってあげたい。だが、現実は俺達にとって残酷に・・・そして、悲しい結末としてやってくる。それでも、俺達は覚悟を決めて向かっていかないとならないのだ。」

ユ「ユーノ・スクライア外伝　パトリオット篇・・・・・・始まります。」

白熱！ＳＳＳの三人

＞ｉ１８７６３―７０９＜

ユーノ・スクライア外伝・・・前回の三つの出来事。

一つ：激闘の末、金太郎が白鴎を撃破する。

二つ：高円寺の野望を危惧した瀬間子が行動を起こし始める。

そして、三つ：浮竹と共にはやてとクロノが瀬間子の行方を追う。

隊「く・・・怯むな！」

瀬「ほおおおお！！！！」

十三番隊の隊士達を相手に、瀬間子はやむを得ず力を発動する。

瀬「ダイノボット、セットアップ！」

〈Ｂｌｏｏｄ　ｃａｒｔｒｉｄｇｅ　ｌｏａｄ〉

ブラッドカートリッジを使い、ヴェロキラプトルの姿に酷似した姿へと変貌を遂げる瀬間子。

〈Ｉ　ｃａｎ　ｆｉｇｈｔ　ｔｈｅｍ，　ｒｉｇｈｔ？〉

瀬「仕方がない」

そして、瀬間子は隊士達に向かって突進していった。

隊「「「ぎゃあああああ！！！」」」

浮竹と共に現場に急いでいたはやて達は突然の悲鳴に狼狽する。

は「何があったんですか！？応答してください！！みなさん！！」

ク「くそ！」

浮「兎に角追うぞ。」

全「「「了解です！」」」

動き出すはやて達。

果たして、瀬間子は高円寺の計画を阻止し、銀太郎救い出せるのか？

それとも、はやて達に身柄を降伏することとなるのか！？

現場に急行する浮竹を始めとする数名の各班員と、はやて・クロノ・リィンの三人は無線から聞こえてくる雑音に戸惑いを感じていた。

「何があったんですか!?応答してください!」

はやての呼びかけにもかかわらず、何の応答もよこさない隊士達。

「待てと言ったんだがな・・・気が忙いだか。一先ず現場に急行するぞ。」

「「「はい!」」」

浮竹は三人にそう言うと、急いで隊士たちとはやて達を連れて被害

に遭った場所へと向かっていく。

数分後、現場に到着した浮竹達の目の前に飛び込んできたのは何とも惨い光景であった。

「「「「な！」」」」

自分の隊の隊士達が見るに堪えない程に傷つき、辛うじて息はしてあるがとても戦える状態ではなかったということははっきりしていたのだから。

浮竹は直ぐに倒れた隊士達の元に駆け寄った。

「大丈夫か！？」

「おい！しっかりしろ、お前ら！！」

浮竹の補佐を務める三席の小椿仙太郎もこの有様にはかなり焦りを見せていた。

すると、浮竹に抱えられながら一人の隊士が意識を取り戻し満身創痍の状態で弱弱しくこう語りかけてきた。

「も、申し訳ありません・・・何とか・・・捕獲しようとしたのですが・・・ぐっ！！りょ、旅禍が・・・突然異形の姿へと変り・・・」

その話を傍らで聞いたはやて達がそれがブラッド状態であることを悟った。

「ブラッドカートリッジを使用したみたいですね。」

「そのようだな。ありがとう、君達はよく頑張った。直ぐに救護班を呼ぶからな。仙太郎、清音(きよね)！手配を！」

「「はっ！了解しました！！」」

浮竹は直ぐに、仙太郎と同じく三席の虎徹清音に指示をだし、四番隊の救護班に連絡を回させ、他の隊員たちとはやてやクロノに向かって厳戒態勢でことに当たる事を口にする。

「敵はまだ近くにいる。この戦い方だ・・・恐らく、現世でユーノ君のところの鬼太郎君が三度交戦した瀬間子と言うパトリオットだろう。かなりの兵であることは間違いないだろう。八神君、クロノ君。ユーノ君から例のものはちゃんと渡されているのか？」

「はい。時間制限がありますが、ブラッド状態になってもこれがあれば戦えます。」

クロノはそう言うと、バリアジャケットの中からユーノが作製した対リベル式の装着具を取り出した。

「大丈夫ですよ、浮竹さん。私らも一部隊を任されてる上位席官ですから！」

「機動六課の戦力を舐めてもらっちゃ困りますーーー！」

はやてとリィンの自信に満ちた表情を見ると、浮竹も柔らかい表情となって安心する。

「そうか。それを聞いて、俺も少し安心したよ。」

と、その時だった。

浮竹達の元にパトリオットセンサーの反応を追って走ってきた恋次と吉良がやって来た。

「浮竹隊長！クロノ、はやて！」

「恋次さん！？それに、吉良さんまで！？」

恋次と吉良の思わぬ登場にはやて達は大いに驚いた。

「三人が一緒と言うことは・・・浮竹隊長と一緒に行動中と言うことだね？」

「はいですー！今正に、パトリオットの瀬間子を追跡中です！」

「それより、阿散井君はどうしてここに？」

浮竹がふと思ったことを尋ねると、恋次はパトリオットセンサーを取り出して説明を始めた。

「パトリオットの霊圧を追ってきたんです。」

「パトリオットの霊圧・・・？」

「ああ・・・そうや！恋次さんや私達、ユーノくんに何やこれと同じ機械渡されてましたわ！」

「どう言う事だい？」

疑問符を浮かべる浮竹だったが、吉良が丁寧にパトリオットに関する詳細な情報を提供する。

「そう言えば、浮竹隊長にはまだ話してなかったですよね。実は、パトリオットとは元は旧暦の時代に初代ダイシーが改造したバウントなんですよ。」

「バウントだと！？」

浮竹は意外な事実を聞かされ、終始驚きを隠し切れない様子であったがその後も吉良による説明は続く。

「はい。だから、ユーノさんは彼らパトリオット達が発する独特な霊圧と固有の魔力波長に反応するセンサーを持たせてくれたんです。これが、そのセンサーです。」

吉良は恋次からセンサーを受け取ると、はやて達が持っていたセンサーと見比べそれば全く同一のものであることを確認し、納得の表情となる。

「成程。そう言うことだったのか・・・確かに、ここら一帯には妙な霊圧の粒子残留が漂っているが、まさかバウントのものと一緒だったとはな。」

すると、徐にクロノが腕組みをしながらこの機会に関して些か不安のようなものが過り思わず恋次にこう言って来た。

「しかし、ユーノが造ったものとは言え・・・本当に大丈夫なんで

すかね、これ？」

「そりゃあ不安が全く無かったとは言えないけどな・・・」

それを聞くと、浮竹は少し考えてから徐に恋次に持っているセンサーを自分にも持たせてほしいと言うことを要求する。

「分かった。済まないが阿散井君、ちょっとそれを俺にも貸してくれないか？」

「え？」

「浮竹隊長が持つんですか？」

浮竹の言葉に聞いていた恋次も吉良もかなり驚いていたが、浮竹はユーノの作ったものだと言うことを聞いて安堵の表情を見せていた。

「そうだ。ユーノ君の造ったものなら、心配は無いだろう。彼の高い技術力は常々一護君からも聞いているしな。万が一、はやて君とクロノ君のそれが反応しなかった時のことも考慮してな。この通り頼む。」

「あの・・・貸すのはいいっすけど・・・俺達は何を？」

「済まないが、負傷した隊員達を四番隊まで運んで欲しい。何しろ、数が多い。救護班の到着を待っている間に事態が悪化しても大変だからな。」

浮竹からの言葉を聞いて、恋次と吉良は顔を見合わせ合意に至る。

「分かりました。」

「了解です。俺と吉良が責任を持って、こいつらを運んでおきます。」

恋次と吉良が隊員たちのことを運んでくれるのを聞くと、はやては再び瀬間子の追跡の為に追跡続行の合図を出す。

「よし。ほんなら、早速追跡開始や！」

夜独特の静謐な雰囲気と不気味な物音が辺りに徐々に広がっていく中、それぞれにパトリオットセンサーを手にした浮竹・はやて・クロノとリィンの四人は一度廷内を一通り見渡せる場所までやってくると、屋根の上に降り立った。

「こっちで良いんですよね？」

「ああ。間違いない。」

はやては自分に指し示す方向と浮竹の方向に誤りがないかどうかを確認する。

そして、それが間違いではないことを証明するとクロノは徐にどのようにして動くかを現場指揮の浮竹に尋ねる。

「どうしますか？」

「囲もう。彼らがこの尸魂界のことをどれほど調べているのかは分からぬが、少なくとも地形は此方のほうが詳しい。」

「「了解！」」

浮竹は早速、数十羽の地獄蝶を廷内各所に飛ばすと無線を使って四方に散らばっている自分の隊の隊士達に命令を送る。

「十三番隊、各班へ告ぐ。十三番隊、各班へ告ぐ。」

浮竹の放った地獄蝶は各班の隊員の元へ飛んでいくと、それを通して浮竹の指示が飛び隊員たちは移動しながら耳を傾ける。

『追跡中のパトリオットの現在位置は、南二区中央二番通り。目標は北上中。一班・二班は転進し、東六区より回りこめ。三班・四班は迂回。各路地を封鎖。その他各班は南三区から目標の後方へ急げ。』

そして、浮竹は隊士達全員に包囲戦の開始を宣言する。

「全体、包囲戦開始！」

浮竹の指示に従って隊士達が包囲網を徐々に狭めていくと、隠れながら移動を続けていた瀬間子にも影響が出始める。

瀬間子は包囲網が狭まっているこの状を見て、思わず舌打ちをする。

「ち。包囲網が狭まってきている・・・」

〈Ｗｈａｔ　ａｒｅ　ｙｏｕ　ｄｏｉｎｇ？（どうするんだ？）〉

「・・・・・・――――――」

ダイノボットの言葉に対して、瀬間子は考え込むように口を閉ざす。

やがて、包囲網が敷かれ隊士達からの報告を待ちながら、屋根の上から全体を指揮していた浮竹とはやて達の元に、突然パトリオットセンサーが奇妙なものを映し出した。

「！これは・・・」

「どうしたんですか？」

「霊圧が・・・急に弱くなった。」

「何ですって！？その地点は何所なんですか？」

クロノが慌てた様子でそう尋ねると、浮竹はセンサーを見ながら詳しい場所を口にする。

「このセンサーによれば・・・東七区のほうだ。」

すると、何かに勘付いたはやてがもう一度浮竹に質問をし直す。

「浮竹さん。霊圧は消えたわけでは無いんですよね？」

「ああ。弱くなっただけで、移動しているだけだよ。」

はやては改めてその事を聞かされると、徐に手を顎に当てながら何かを考え始める

「？はやてちゃん・・・？」

そんなはやての様子を訝しげに見つめるリィンだったが、はやてはその時一つの可能性に至った。

「ひょっとすると・・・」

このとき、はやてが考えたのは瀬間子は霊圧が反応しにくい地下に逃げた可能性が高いと言うものであった。

そして、案の定瀬間子は偶然にも発見した地下水脈への入り口の中へと入り込み、その中での移動を続けていたのであった。

地下水脈を伝うパイプの中を照らす赤い光に照らされながら、瀬間子は前へ前へと足を進めていく中で、待機状態のダイノボットが愚痴をこぼす。

〈Ｓｈｏｕｌｄ Ｉ ｍｏｖｅ ｓｕｃｈ ａ ｄａｒｋ ｐｏｉｎｔ ｂｙ ｗｈａｔ? Ｗｉｔｈ ｔｈｉｓ ･･ ｔｈｅ ｆｌｏａｔａｇｅ･･･, ｆｅｅｌｉｎｇｓ.（何でこんな暗いところを移動せなばならんのだ? 気分が浮いてこないな、これでは。）〉

「・・・地形に感謝せねばな。これで少しは時間が稼げる。」

〈Ｉ ｄｏ ｎｏｔ ｗａｎｔ ｍｕｓｔ ｔｏ ｒａｇｅ ｍｏｒｅ. Ｉｔ ｗｉｌｌ ｂｅ ｎｏｔ ｓａｔｉｓｆａｃｔｏｒｙ ｉｎ ａ ｃｏｍｂａｔ ａ ｌｉｔｔｌｅ ｗｈｉｌｅ ａｇｏ ａｌｏｎｅ.（もっと暴れたいものだな。先程の戦闘だけでは物足りないぞ。）〉

「あれでいい、ダイノボット。今は・・・銀太郎を探し出し、高円寺を止めるのが先だ。放っておく訳にはいかんからな。」

すると、主人の傍で日常から戦闘まで一番近くで瀬間子を支え続けているデバイス「ダイノボット」がそんな瀬間子の何気ない一言に心境の変化を捕える。

〈Ｎｏ　ｏｎｅ　ｕｎｕｓｕａｌ　ｆｏｒ　ｍａｓｔｅｒｉｎｇ.（マスターにしては、珍しいものだな）〉

「何がだ?」

〈Ｉｔ　ｉｓ　ａｗｆｕｌｌｙ　ｅｍｏｔｉｏｎａｌ　ｔｈｉｓ　ｔｉｍｅ.（今回はやけに感情的だな。）〉

「そう言うときもある。」

〈Ｉｓ　ｉｔ　ａ　ｑｕａｒｒｅｌ?（諍いか?）〉

「そんな単純なものではない。」

〈Ｔｈｅｎ，ｗｈａｔ　ｉｓ　ｉｔ?（では、何ですか?）〉

「・・・生き方の違いさ・・・!」

〈Ｉｔ　ｉｓ　ａｓ　ｓｕｃｈ?（そういうものかね・・・?）〉

長い間瀬間子の傍に居続けてきたダイノボットも、これほどまでに深くそして神妙な様子の瀬間子を見るのは初めてであった。

と、その時瀬間子は水脈の中から聞こえてきた別の足音に反応した。

「！マズイ、隠れるぞ！」

瀬間子は死神達の追っ手に見つからないように黒がりの方へと身を隠し、水脈の中を走っていく死神の姿に苦悶の表情を浮かべる。

「くっ！ここまで手が回ったか・・・」

〈Ｈｏｗ　ｄｏ　ｙｏｕ　ｄｏ？Ｄｏ　ｙｏｕ　ｓｔｉｌｌ　ｒｕｎ　ａｂｏｕｔ　ｔｒｙｉｎｇ　ｔｏ　ｅｓｃａｐｅ？（どうするのだ？まだ逃げ回るか？）〉

「いや。何としても突破する。その為に仕掛けるぞ。」

瀬間子はそう思い立つと、死神達には気づかれないように地下の出口の方へと向かっていく。

一方、そんな瀬間子の行動に目を付けたはやては浮竹達の協力を仰ぎ、瀬間子が地上に出て来るのを待っていた。

「どうですか？」

「地下道を進んでいる気配はあるそうだ。それにしても、よく気付いたね。俺もそこまでは目が回らなかったのに、若いのに凄いな！！」

「流石、機動六課部隊長のはやてちゃんです！！」

浮竹とリィンからの褒め言葉に思わずはやては満更でもない笑顔を浮かべる。

「いやは♪浮竹さんにそう言ってもらえると結構照れますな・・・！！」

「気付かれたら、また地上に出てくるだろう。何とか地下道で捕捉出来ると良いんだが・・・」

クロノがそう言うと、浮竹も地獄蝶を通して隊員たちに指示を入れる。

「西地区を捜索中の班は、地下道へ応援に回れ。」

しばらくして、浮竹の元に地獄蝶を伝っての各班からの連絡が飛び交う。

「こちら三班！西北区の路地を挺進中。応援に回ります！」

と、三班が移動をしていたその時。

不意を突いて瀬間子が地面の下からブラッド状態となって三班の前に出現する。

「ぐあああああああああああ！！！！！！！！」

「！旅禍の姿を発見！！」

『場所は！？』

『西六区、三番通り。北方向から三つ目の路地です。』

「よし。広い通りに目標を誘導し、応援を待て！」

浮竹は無線を切ると、はやてとクロノ、リィンを連れて早速目標場所まで移動を開始。

「三人とも、行くぞ！」

「「「了解！」」」

三人は急いで目標へと向かっていったが、その間に瀬間子は三班の隊員全員を誘導の前に昏倒させてしまっていた。

「「「「ぐあああああああああああ！！！！！！！！」」」」

昏倒された無様な姿の隊員たちの姿を見ながら、ダイノボットは少々つまらなそうな態度でこう言った。

〈Ｗｅｌｌ，ｉｔ ｉｓ ｌｉｋｅ ａ ｇｏｏｄ－ｆｏｒ－ｎｏｔｈｉｎｇ ｍａｓｔｅｒｉｎｇ ｉｓ ａ ｍｏｔｉｖａｔｉｏｎ ｗｉｔｈ ｍｕｃｈ ｔｒｏｕｂｌｅ．（やれやれ、マスターが折角やる気になっているというのにまるで役立たずだな。）〉

と、そんなダイノボットを余所に瀬間子の方はというと自分の頭上に浮かんで飛行を続ける死神特有の連絡手段である地獄蝶を凝視し、難しい顔を浮かべる。

「・・・・・・――――――」

一方、目標地点に辿り着く前に三班からの連絡が途絶えるとはやては直ぐに無線で応答を入れて現状を確認しようとする。

「三班、誰か応答してください！」

クロノはこの状況に関して、難しい顔を浮かべながら厳しい一言を告げる。

「また霊圧が消えたか。どうやら戦闘は終わったようだ・・・こちらの敗北で。」

「そんな！」

浮竹は地獄蝶に向かって隊員たちに無理をしないようと伝える。

「全体、無理をするな。目標と遭遇したら牽制だ。必ず応援が来るまで待つことだ！」

浮竹はそう言うと、はやて達と共に反応があった地点まで急いで屋根の上を飛んで行った。

その頃、目標の位置を補足した六班の隊員が連絡を入れてきた。

「こちら六班！北地区四番通りに到着。」

『旅禍の気配は？』

「いえ。」

と、その時。

リィンははやてが持っていたパトリオットセンサーが激しく反応し

ていることを確認した。

「浮竹さん！！出ましたです！！パトリオットの霊圧をキャッチです！！」

「どっちの方角だい？」

「えっと・・・多分・・・あっちのほうですね。北地区四番通りと言う辺りですかね・・・」

「何だと！？はやて、そこは今浮竹さんが通信中の場所だぞ！」

「な、何やて！？」

浮竹は険しい表情を浮かべると、通信を行ってる場所の隊員に警戒を厳重にする旨を伝える。

『六班へ。目標捕捉！その近辺にいるぞ！』

「了解！」

「この近くだ、油断するな！」

「北地区四番通りに応援頼む！」

浮竹からの指示を受けた六班は別班に応援を要請すると、瀬間子が出て来るのを警戒して腰の刀に手をかけて周辺に気を配っていた。

そんな六班の死神の様子を見つからないように窺っていたブラッド状態を解いた瀬間子は、死神達が連絡を取り合っている通信手段の

地獄蝶を警戒し、これを全て破壊しようと思案する。

「あの蝶は、一つのチームに一匹ずついるようだ。ダイノボット、あの蝶を全て潰したい。一気に全部だ。」

〈Ｉｔ　ｉｓ　ｑｕｉｔｅ　ｃｒｕｅｌ．　Ｈｏｗｅｖｅｒ，ｉｔ　ｍｉｇｈｔ　ｂｅ　ｇｏｏｄ．．．．ｔｈｅ　ｐｕｒｐｏｓｅ　ｉｓ　ｔｏ　ｍａｓｔｅｒ．．（中々残酷だな。でも良いだろう。マスターのためなら。）〉

ダイノボットはそう言うと、通常構築を果たしたのち誘導型射撃魔法の一つである、ダイナソー・クラスターを空に向けて発射する。

〈Ｄｉｎｏｓａｕｒ　ｃｌｕｓｔｅｒ〉

ダイナソー・クラスターが空へと発射された瞬間、廷内各地に散らばっていた十三番隊の連絡手段であった地獄蝶が一気に潰され、同時に浮竹達の元にもあった地獄蝶でさえその対象となってしまい、はやてとクロノは突然の出来事に驚愕する。

「「！」」

リィンは直ぐに、前を向いて事態に気づいていない浮竹にこの事を伝える。

「浮竹隊長！！地獄蝶が・・・！？」

「何！？」

『こちら七班！地獄蝶が突然・・・・・』

通信機を耳に当てていた浮竹だったが、地獄蝶が潰されたことで隊員たちからの報告が途中で途切れてしまった。

「何と・・・これは僕らの通信網が見破られたと言うことですか。」

「各班との連絡網・・・完全に途絶えました。」

「くっ。やられたか・・・」

瀬間子の巧妙な作戦に関して、瀬間子の実力と計画性を些か甘く捕えていた浮竹とはやて達はこの不測の事態に表情を曇らせる。

その間、連絡が取れなくなってしまった隊員たちの胸に焦りと瀬間子に対しての恐怖心が芽生え始めていた。

「応答願います!隊長!!」

すると、その時隊員たちの前にブラッド状態と化した瀬間子が現れる。

「「「!?」」」

瀬間子の登場に隊員たちは狼狽し、瀬間子はそのまま次のように語ってきた。

「此処は通してもらうぞ。俺にはやらえばならぬことがあるのだ。ダイノボット!」

〈Ｄｉｎｏｓａｕｒ　ｔａｃｋｌｅ〉

十三番隊の隊士達を襲ったこの強襲。

浮竹達は出来るだけ早く瀬間子の反応があった場所へと向かって飛んで行ったが、四人が隊員たちの元に駆け付けた時には既に状況は終了していた。

瀬間子の攻撃を受けてしまった隊員たちは全員、その場に満身創痍の状態で倒れこみ見るも無残なものへと変わり果てていた。

この光景には流石の浮竹やはやて達も言葉を失った。

「これは・・・！？」

「何と言うことでしょう・・・！！」

浮竹は直ぐに怪我の具合を見るために、一人の隊士の元へ駆け寄った。

「おい！大丈夫か！？」

はやてとクロノも他の隊員たちの容体を確認する。

どうやら、幸いにも怪我が酷いぐらいで息の根は止められてはいなかった様子であった。

「まだ息はあります！」

「こちらも同じです。取り合えず、止めは刺されていないようですが・・・何ででしょうか？」

浮竹はその事を二人の口から確認すると、四番隊隊舎へと向かっていた仙太郎と清音の二人に連絡を入れ、再び隊員たちの搬送を指示する。

「仙太郎、清音。大至急こちらの負傷者の搬送を頼む。」

『『了解しました！』』

通信を切り、恋次から借りたパトリオットセンサーの反応を確認するとは、浮竹はやて達からも同様に反応場所が同じであるかを確認する。

「八神君、クロノ君。パトリオットの霊圧は？」

「はい。この先に向っています。」

「そうか。ならいい。」

「浮竹隊長、どうするおつもりですか？」

「向こうは俺達が組織で動いていると言うことを察知していた。だから待っているんだろう。部下を全部倒した後、指揮官である俺達が出てくるのを。」

「敵の誘いに乗ると言っているんですか？」

「そうだ。二人とも、乗ってくれるか？」

二人は顔を見合わせると、浮竹の言葉を受け入れ共に瀬間子の元へ

向かうことを決意する。

「・・・分かりました。僕達もお供します。」

「決着は・・・ちゃんと着けんといけませんしね。」

「レッツゴーです！」

「よし、では行こう。」

四人は早速、瀬間子の反応が確認された場所を目指して移動を開始した。

そして、暫くしてから南方の方へと歩いていた瀬間子の目の前に浮竹・はやて・クロノ・リィンの四人が到着した。

瀬間子は四人の姿を確認すると、徐に尋ねる。

「機動六課の魔導師・・・それに、お前が死神の隊長か？」

「ああ。十三番隊隊長、浮竹十四郎だ。」

「機動六課部隊長、八神はやて！」

「後見人兼監査役のクロノ・ハラオウン提督だ。随分とやってくれたな。」

「手加減はした。無益な殺生をすることは元来嫌いなのでな。」

「一応礼は言っておこうか。だが、こちらは手加減をするつもりは

無い。行くぞ。」

「・・・仕方ない・・・ダイノボット、セットアップ。」

〈Ｓｅｔ　ｕｐ.　Ｂｌｏｏｄ　ｃａｒｔｒｉｄｇｅ　ｌｏａｄ〉

瀬間子は武器とってかまえた四人を見ると、即座にブラッドカートリッジを使用してヴェロキラプトルの姿へと変貌する。

「（来るか・・・）」

浮竹は斬魄刀を手に取りながら猛烈な勢いで魔力を上昇させていく瀬間子を前に、自身も霊圧を上げていった。

一方ではやてはリィンとユニゾンを完了させると、クロノと共にジブンノストレージデバイスにユーノから渡された対リベル式の装着具を取り付けて臨戦態勢となる。

「浮竹隊長。ここは僕から行きます。」

「頼む。」

クロノは浮竹にそう言うと、ＳＵ2を瀬間子に向けて構え先制攻撃を仕掛ける。

「行くぞ!」

〈Ｂｌａｚｅ　ｃａｎｎｏｎ〉

クロノは瀬間子目掛けて牽制のつもりでブレイズキャノンを発射す

る。

瀬間子は飛んできたブレイズキャノンをヴェロキラプトル顔負けの素早い動きと身のこなしで警戒に回避していき、クロノに攻撃を仕掛け屋根の上に飛び移る。

クロノは防御を発動させて攻撃を凌ぐと、その瀬間子の動きと力を観察しながら次の手を考える。

「（速いな・・・おまけにパワーも並のものとは桁が違うか・・・ならば！）」

〈Ｓｔｉｎｇｅｒ　Ｓｎｉｐｅ〉

魔力光弾のスティンガーをコントロールし、一発の射撃で複数の対象を殲滅する誘導制御型射撃魔法であるこの技で瀬間子の動きを確実に捕えようとするクロノ。

そんなクロノの狙いを回避するために、瀬間子は兎に角動き回って狙わせまいとするがその瀬間子の動きを逆手に取ったクロノは、隙をついて瀬間子の正面に現れブレイクインパルスを仕掛ける。

「はあああああ！！！！」

「く！！！！」

回避が間に合わなかった瀬間子はブレイクインパルスの直撃を受け、その場で爆発を起こす。

爆発から出てきた瀬間子だったが、固いダイナソースキルに守られ

大した傷は目立っていなかった。

「成程・・・時空管理局の提督というだけあって・・・いい腕をしている・・・だが！」

〈Ｊｕｒａｓｓｉｃ　ｂｒｅａｔｈ〉

瀬間子は向かって来るクロノ目掛けて口腔内より生成した隕石のような形の魔力砲弾を勢いよく斉射する。

「はあああああ！！！！！」

クロノは咄嗟にラウンドシールドを展開して攻撃を凌ごうとするが、想像以上に高位力のその技を受け思わず苦い表情となる。

「ぐっ！」

「クロノくん！」

「危ないです！！」

すると、クロノを助けるために浮竹は自身の斬魄刀の解号を口にする。

「波悉く我が盾となれ。雷悉く我が刃となれ。」

「「「！」」」

そして、能力解放に伴い、刀身が逆十手型の二刀一対型になった浮竹の斬魄刀が出現する。

「『双魚理（そうぎょのことわり）』」

浮竹が刀を解放したことで、瀬間子はこれには警戒を強める。

「！（二刀流か・・・・・・）」

「『水珠（みなたま）』」

浮竹はそう口にすると、双魚理を前方につきだし前方にゆっくり移動する水の珠を作って相手を束縛する水珠を発動させ、クロノの方に気を取られがちだった瀬間子を包み込む。

「くっ・・・・・・！？」

思わぬ浮竹の介入に寄り、泡の中へと閉じ込められ呼吸が思うようにいかない瀬間子は急いで空間から逃げ出そうとした。

その途端、これを好機と見たクロノがブレイクインパルスを頭上から仕掛けてきた。

〈Ｂｒｅａｋ　ｉｍｐｕｌｓｅ〉

その瞬間、瀬間子を包み込んでいた泡が破裂し中に束縛されていた瀬間子は多少なりともダメージを受けて脱出を果たす。

「ちっ！」

すると、脱出した瀬間子を待ち構えていたはやてがリィンの力を借りて凍結型の捕縛場法を発動させる。

「まだ私がいるよ！」

「（捕えよ、凍てつく足枷！フリーレンフェッセルン）」

対象周辺の水分を瞬時凍結させ、目標をその中に閉じこめて捕獲するこの魔法は、凍結させるための水分が多い場所では発動速度が極めて早くなり、強度も増す。

はやては瞬時に浮竹の水珠の弾けた後にこれを使用したことで、より強度のある凍結を可能とし瀬間子を封じ込めることに成功する。

クロノと浮竹は一度はやての元に駆け寄ると、瀬間子の動きを警戒する。

「どうだい？」

「恐らくは、この程度ではさほど効果はないでしょう。」

「直ぐに、出てきますよ・・・」

すると、はやてとクロノ思惑通り瀬間子はブラッドカートリッジと自身が生まれながらにして持つ力によって氷の膜を突き破って現れる。

「ぐおおおおお！！！！！！」

そして、出てきた瞬間に瀬間子はダイナソー・タックルを仕掛けてきた。

三人は一度散開して攻撃から逃れると、浮竹が頭上に向けて刀を掲げると刀の先端から光線のようなものを発射する。

「『水垂（みなだらし）』！」

すると、頭上に向けて放たれたそれは屈折するかのように軌道を変更すると真っ直ぐ瀬間子目掛けて放たれる。

「！」

驚愕する瀬間子はダイナソースキンで防御に入るが、勝手の違う斬魄刀の威力に体が削られ、ダメージが徐々に蓄積していく。

そんな苦い顔の瀬間子に更に浮竹は気づかれないように設置して仕掛けた水の玉を瀬間子の背後で爆発させる。

「『水屈（みなかがみ）』！」

「な！！」

その事に気づいた瞬間、瀬間子は元もにそれを回避することが出来ずそのまま着弾してしまう。

屋根の上を転がりながら体制を持ち直した瀬間子はそんな浮竹に向かってダイナソータックルで仕掛ける。

「ダイノボット！！」

〈Ｄｉｎｏｓａｕｒ　ｔａｃｋｌｅ〉

「でいやあああああああああ！！！！！」

二本の刀を使って瀬間子の攻撃を受け止め、後方へと下がり続ける浮竹だったが顔色は徐々に歪んでいく。

「ぐっ！！！！！！！！」

すると、浮竹を攻撃することに集中していた瀬間子の頭上からクロノがＳＵ２を振り下ろしていた。

「は！」

「ブレイクインパルス！」

間一髪のところでブレイクインパルスを躱すことが出来た瀬間子。

「ちっ！」

すると、そんな瀬間子に狙いを定めていたはやてが詠唱を完了させるとシュベルトクロイツを前に出して、魔力砲撃を発動させようとしていた。

「リィン！！行くで！」

「（はいです！）」

それに気づいた瀬間子は、今からはやてが撃ちだそうとしている技の規模がどれほどのものかを直感し、思わず目を見開き驚いた。

「な！！」

「クラウ・ソラス　！！」

その瞬間放たれるはやてが使う、高威力の直射型砲撃魔法。

これは溜めると、命中後に球状の衝撃波が展開し、追い討ちをかけ魔法同士が相殺されても衝撃波が発生するという特徴を持つ。

瀬間子はそのクラウ・ソラスに着弾すると、勢いよくはるか後方へと吹き飛ばされていった。

「ぐあああああああああああああ！！！！！！！！！！」

浮竹はこのはやての魔法に大いに驚き、率直な感想を述べる。

「すごい威力だな・・・驚嘆するよ。」

「多少やり過ぎな気もしますが・・・」

「へへ。だけど、まだ早いですよ！」

「（来ます！）」

そう言うと、案の定瀬間子は煙の上がる場所から一気に駆け抜けて来ると満身創痍の状態にもかかわらず自分の体を燃やして敵に大ダメージを与える捨て身の攻撃に打って出てきた。

「「「！」」」

「ジェノサイドバズーカ！！」

〈Ｂｒｅａｋ！〉

「「く！」」

瀬間子の技を前にして、防御の構えを取るはやてとクロノ。

すると、そんな二人の前に出て瀬間子の攻撃に対抗しようと浮竹が大技を発動させる。

「ここは俺が防ぐ！」

浮竹は双魚理をその場に突き刺すと、詠唱を唱え始める。

「“波よ、我が盾となれ。波濤よ、悉く天地鳴動に響き渡れ”」

その瞬間、前方斜め上に星の形をしたビームを放ち相手を浮かせてからの追撃や、対空技として使用するこの技を使用する。

「“大瀑布陣（だいばくふじん）・叩魚（たたきうお）”！！」

「な！」

浮竹のその技の範囲に足を踏み入れた瀬間子は、進路変更をすることが出来ずにそれを直撃してしまいそのまま波濤と共に流されてしまった。

「ぐあああああああああ！！！！！！！」

瀬間子が浮竹の技に飲み込まれていくのを、傍らで見ていたはやて

とクロノ、リィンの三人は驚愕の表情を浮かべて見ていた。

「す・・・凄い・・・」

「これが隊長各の実力かいな・・・！」

「（まさに一撃必殺です！）」

浮竹の一撃必殺に近い技をその身に受けたのち、ブラッド状態が解かれた瀬間子は全身を水浸しにしながら立ち上がり、四人の方を睨み付けてくる。

「げっほ！げっほ！！」

「！あの攻撃をまともに食らっても・・・まだ立ち上がるか・・・」

「何と言う生命力の高さだ・・・！」

「ブラッド状態も解けた。既に勝敗は決した・・・これ以上の交戦は無意味だ・・・」

浮竹は毅然とした態度そう瀬間子に言うが、瀬間子本人は肩で息をしたまま返事をしようとしなかった。

「は、は、は、は、は」

それと同時に、はやてはこのブラッドカートリッジを使っている瀬間子が何故倒れるそぶりすら見せないかに疑問を抱いていた。

「ブラッドカートリッジを使ってもいるにも関わらず、何で倒れな

いんや?あれは使用者に尋常やない程の負荷がかかる筈やで!?」

すると、そんなはやての疑問を聞いた瞬間、瀬間子は突然鼻で笑い次のように語り出す。

「・・・ふん・・・」

「(何がおかしいんですか?)」

「・・・パトリオットの中には、様々な役割があった・・・俺の役目は代々使えるパトリオットのボス、即ちダイシーの傍らを守護しつつ一人前のボスとして鍛えることだった・・・育った者もいれば、そうでなかった者もいる。その昔思い出した・・・・・・」

「急にどうした?それに・・・こちらの質問の答えになっていない!」

クロノが強い口調でそう言い返すと、瀬間子は徐に何故自分がブラッドカートリッジを使っても倒れないか、その理由を語り出す。

「そうだったな・・・何故俺が倒れないか。その訳は・・・俺のブラッド状態はオーリー達とは違うからだ!」

「(え!?)」

「「何だと!?」」

瀬間子のあまりの意外な発言に驚愕の表情を浮かべる四人だったが、瀬間子はその瞬間ブラッドカートリッジを使用するに至り、この村中瀬間子だけが辿りつけた究極の力の姿を四人に見せる。

〈Ｆｉｎａｌ　ｂｌｏｏｄ　ｌｏａｄ〉

「「「？！」」」

瀬間子の体は使用されたブラッドカートリッジの元となった素材を、遥かに上回る姿と力を内包した究極の姿へと変貌を遂げ、それを見ていた四人は一度頭でそれを整理することが出来なくなった。

「ふん！」

ティラノサウルスのような巨大で更に凶暴さを模した姿へと変貌を遂げた瀬間子にはやては全員の気持ちを代弁して尋ねる。

「それは・・・！？」

「ブラッド状態、最終鬼畜形態（ファイナル・デーモンスタイル）。俺だけが唯一使うことを許された、ブラッド状態の究極の姿だ。」

「「「・・・・・・」」」

瀬間子の言葉を耳にし、一同は揃って声を詰まらせる。

そして、瀬間子はその状態で三人の実力に関して素直に褒め称える。

「元来褒めるつもりは無かったが、ここでは素直に褒めておくぞ機動六課の魔導師。そして、流石は護廷十三隊の隊長だな！全力を尽くさねば、先には進めないようだ。俺はどうしてもやらねばならないことがある。お前達が立ち塞がるというのなら、排除させてもらう。」

「それは君の理屈や！」

はやてはそう言うと、浮竹・クロノと共に武器を持ち直して巨大な姿となった瀬間子と対峙する。

三人を目の前にしながら、瀬間子はこの形態を維持することが難しいという事実を赤裸々に暴露した上で戦いに臨んでいく。

「この状態はもって三分ほどしか活動できない。変身が解ける前に、俺の全ての魔力と霊圧を注いで、貴様らに打ち込む。行くぞ、ダイノボット！」

〈Ｄｅｍｏｎ　ｂｌｏｏｄ　ｌｏａｄ〉

瀬間子はその瞬間、全てのブラッドカートリッジ計十発を一気にロードするとそのままその巨大な体に魔力を極限まで上昇させていく。

「はあああああああああああああ！！！！！！！！！」

そして、それと併用してバウントの能力を使い周囲の建物から霊子を奪っていき自身の霊圧そのものを上昇させていくという離れ業をやってのけた。

「こ・・・これは・・・！？」

「のあああああああああああああああ！！！！！！！！！」

浮竹は直ぐに周囲の霊子を吸収して霊圧を高めているということを理解すると、両手の刀を持ち直し、はやてとクロノもそんな呆れる

くらいの無茶をする瀬間子に驚愕する。

「周囲の霊子を・・・吸収しているのか・・・！？」

「全く・・・呆れるほどの無茶をするよ・・・しかし、これはとんでもない魔力と霊圧や・・・簡単にはいきませんね・・・」

「だが、だからといって恐れたままでは何も解決しない。俺たち三人の全力で、ここで何としても食い止めるぞ。」

「「（はい！）」」

はやてとクロノは懐から、前々から渡されてはいたが一度も使った事の無いユーノのＩＰカートリッジシステムを取り出し、凝視する。

「本気で立ち向かうなら、こちらも使うしかないようだな。」

「そやね。私も使うのは初めてやけど・・・やってみる価値はありそうやな。」

「（はいです！やりましょう、はやてちゃん。クロノ提督！）」

「ああ・・・ユーノには色々と感謝しないとな！」

普段は淫獣フェレットもどきと罵るクロノだが、彼にとっては最も親しき友人であることには変わりはなく、ユーノの高い能力を男友達として幼少の頃より理解しているのは確かだった。

そして、クロノはそんなユーノの作ってくれたカートリッジを徐にストレージデバイスであるＳＵ２へと装着する。

「ＩＰカートリッジ、セット！」

〈Ｓｅｔ　ｕｐ　Ｂｕｒｓｔ　ｍｏｄｅ〉

「いくで、リィン！ＩＰマスター・・・」

「〈ドライブイグニッション！〉」

二人がそれぞれにＩＰカートリッジを装着した瞬間、クロノのＳＵ２は形状をよキャノン砲を搭載した刀剣の姿へと変貌し、シュベルトクロイツに装着されたはやてのＩＰカートリッジは杖そのものに変化は見られないが、ユニゾンを果たしているリィン共々甲冑の細部にイメージから作られた装飾が追加され、能力も格段に上昇する。

「お・・・！」

「これは・・・！」

二人の変化を間近で見ていた浮竹と、目の前で対峙している瀬間子もかなり驚いていた。

二人は瀬間子のそれに対抗するために、リンカーコアから能力限定を解いた時と同じかそれ以上の魔力を解放し始めた。

その姿に瀬間子も素直に感服した。

「それが貴様らの奥の手と言う奴か・・・流石に凄い魔力だ・・・だが・・・」

瀬間子はその瞬間、一気に叩き潰すために三人目掛けて駆け抜けていった。

「俺はまだ負けるわけにはいかない！」

浮竹も覚悟を決めると、はやてとクロノと共に瀬間子に突撃していった。

「いくぞ、八神君！クロノ君！」

「「はい！」」

浮竹は双魚理を握りながら自分なりの誇りを胸に瀬間子に向かっていく。

「俺は・・・俺の誇りに賭けて、君を倒す！」

三人の霊圧と魔力が瀬間子と同じぐらいにまで高められ、ついに戦いはクライマックスを迎えようとしていた。

「はあああああああ！！！！！！」

「「「はあああああああ！！！！！！」」」

三人の息の合った攻撃と瀬間子の攻撃が衝突を果たした瞬間――――一四人の力が共鳴したことで魔力と霊圧が爆発的に溢れだし、周囲の空間をも巻き込んでいく。

爆発が収まると、クロノは空へと舞い上がると照準を定めてＳＵ２の先端からブレイズキャノンの発展系であるブレイズバスターを発

射する。

「ブレイズバスター！」

なのはのエクセリオンバスターに匹敵する破壊力を秘めた直射型の砲撃魔法が瀬間子の巨体に直撃し、本来ならば滅多な事では傷つく事の無い最終鬼畜形態の瀬間子の体に傷をつける。

「くっ！」

そして、そのクロノの砲撃に続く形で詠唱を完了させたはやてがブラッディーダガーの発展系となる魔法を頭上より降り注ぐ。

「ブラッディーダガー・エクスキューション！」

クロノのスティンガーブレイド・エクスキューションシフトに酷似したブラッディーダガーの大軍が勢いよく瀬間子に降り注がれていき、更に傷を作っていく。

「ぐっ！！！！！」

二人の攻撃をまともに食らった瀬間子がその場に膝をついた途端、待ち構えていた浮竹の水流攻撃が襲い掛かる。

「全力でいかせてもらう。」

浮竹は覚悟の籠った瞳でそう口にすると、双魚理を天に掲げて霊圧から創り出した波濤の龍で敵を圧倒する超大技を発動させる。

「『水龍神（すいりゅうじん）』！！」

水龍神は浮竹の背後から現れると、巨体の瀬間子を波濤によって圧し返そうとする。

至近距離からの水龍神をその身に受けた瀬間子はその巨体にもかかわらず勢い余って遥か後ろへと飛ばされていく。

「のあああ！！！！！！！」

周囲の建物に激突し、かなりのダメージを負ったのにもかかわらず未だ立ち上がる姿勢を見せる瀬間子。

「ま・・・まだだ！！」

そんな瀬間子に追い打ちをかけるため、はやては一気に氷結系の魔法を発動させる。

「来よ、氷結の息吹・アーテム・デス・アイセス！」

術者の周辺に発生した４個の立方体から氷結効果を放つ広域凍結魔法であるこれは、ＩＰカートリッジにより強化され、日番谷の持つ氷輪丸に匹敵するだけの瞬時空間凍結能力を秘めるに至っている。

「ぐあああああああああああ！！！！！！！！」

瀬間子ははやての氷結魔法をその身に喰らうと、そのままはやての魔法の中へと見込まれていった。

やがて、周囲が完全にはやての魔法で氷つき冷気が昇り始めると、氷塊内に閉じ込められていた瀬間子が変身の解けていない状態で力

づくで打ち破り中から出てきた。

「ぐ・・・！！」

三人の息の合った攻撃をまともに食らい、既に戦える状態ではない瀬間子だがそれでも彼を突き動かすのは銀太郎を救いたいと言う思いと高円寺を止めたいと言う信念だった。

そんな降伏の姿勢を見せない瀬間子に向かって、クロノは言葉をかける。

「まだやる気なのか？」

「俺は・・・どうしても高円寺を追わねばならない・・・銀太郎を・・・助けるために・・・！」

そう言うと、険しい表情のまま瀬間子は周りの霊子を吸収して枯渇した魔力を補おうとし始めた。

「はあああああああああああ！！！！！」

しかし、まともに戦える状態でないにもかかわらずそのような事をしたことで却って瀬間子の体には負担が生じてしまい、集めた霊子に耐えきれないでいる様子が火を見るよりも明らかだった。

その証拠に、瀬間子の体は小刻みに震えながらふらふらの状態となっていたのだ。

浮竹やはやてはこれ以上の戦いは無意味だと悟り、降伏をするように申し付ける。

「集めた霊子に己の身体が・・・耐え切れなくなっている・・・限界を迎えているぞ。」

「もう止めや！これ以上の無茶は自分の身を滅ぼすで！」

「はやての言うとおりだ。もう、止めろ。」

「ならば、砕ける前に決着をつけるだけだ。行くぞ、ダイノボット！」

〈Ｙｅｓ！〉

そう言うと、瀬間子は最後の一撃を秘めた突進で何もかもを破壊するつもりで浮竹達目掛けて攻撃を仕掛ける。

「ぐあああああああああああ！！！！！」

「ちっ・・・！？」

瀬間子のこの行動に思わず舌打ちをし、ＳＵ２とシュベルトクロイツを構えるクロノとはやてだったが、そんな二人の行動を止めて一人前に出る浮竹。

「浮竹さん！？」

浮竹のこの行動に疑問を抱く二人だが、浮竹は低い声で次のように呟く。

「覚悟を・・・決めるしかないようだ。」

浮竹はその瞬間、自身の霊圧を最大限にまで上昇させると渾身の一撃を放つために全てを自分の刀へと注ぎ込んだ。

「のあああああああああああ！！！！！」

そして、向かって来た瀬間子の体目掛けて浮竹は刀を振り切った。

「『双魚理』」

「「な！」」

浮竹の行動をようやく理解した二人は止めにかかろうとしたが、既に浮竹は瀬間子を斬ってしまっていたため、結局のところ遅すぎたのだ。

浮竹が瀬間子を斬り伏せた瞬間、溢れ出た霊圧によりアーテム・デス・アイセスにより凍り付いていたものは崩壊を始め、それに伴って地響きと霊圧が廷内へと広がっていった。

それを離れた場所で十三番隊の隊士を搬送していた恋次と吉良も確かに感じ取っていた。

「！この霊圧は・・・」

「浮竹隊長達か・・・！？」

雌雄が決し、浮竹は静かに刀を鞘に戻す。

それと同時に斬り伏せられた瀬間子もブラッド状態を解き、汗だく

の顔で自分の敗北を悟るのであった。

「・・・ここまでか・・・」

はやてはリィンとユニゾンを解除し、クロノと共に浮竹の元に近づくと背中越しの瀬間子の方を難しい表情で凝視する。

「俺の負けだ。」

はやては暫くの間を置いた後、瀬間子に向かってこう質問してきた。

「・・・高円寺・・・いや、銀太郎君を追って・・・どないするつもりだったんや?」

「・・・俺には・・・どうすることも出来なかったよ・・・どちらにしても、それは俺と銀太郎の問題だ。」

そんな瀬間子の答えの後に、浮竹が更に尋ねる。

「君は銀太郎君と一緒に、何所へ行こうとしていたんだい?」

すると、浮竹の質問を聞いた瀬間子は鼻で笑いながら最後の言葉を口にする。

「・・・ふん・・・争いの無い未来へだ・・・――」

「「「・・・・・・――――――」」」

思わずその答えに黙り込んでしまった三人。

瀬間子はそんな三人の方にふらふらの体で振り返ると、敗北したにもかかわらず全く悔しさを滲み出さない表情を浮かべながら、静かに重力に身を任せるように仰向けに倒れていく。

瀬間子が倒れていくと同時に後ろの氷塊もバランスを崩して一斉に瀬間子の上へと降り注いでいった。

「はっ！！」

それを見て急いで止めにかかろうとするはやてであったが、浮竹とクロノの二人が肩に手当ててはやての行動を止める。

「止すんだ。」

「無茶をするな。」

「・・・浮竹さん・・・クロノくん・・・せやけど！！」

はやてはこんな形で戦いを終えることに納得などしてないかったが、浮竹とクロノはそんな納得のいかない様子のはやてに厳しくも現実的な言葉を口にする。

「既に手遅れだ。俺達が助けたところで、彼はもう・・・・・・」

「・・・結局、僕らはまた、一人の命も・・・救えなかったか・・・」

はやてはそう聞かされると、膝をついてその場に顔を伏せてすすり泣き始める。

それを同じ気持ちとなって傍らで見つめるリィン。

「はやてちゃん・・・」

はやては部隊長として、一人の人間として、大人として事件の根幹を担った当事者の子供を自らの手で救えなかったことを深く後悔し、同時に自分の非力さを酷く呪った。

「・・・くっ!!何でや・・・何で・・・世界はいつも・・・・・・こんな事に・・・なるんや!!!!!!!!!!!!!!!」

夜の尸魂界に響き渡る、２３歳のとある部隊長の叫び声。

月光はそんな部隊長の事をいつものように照らしているだけ。

こうして、また一人――――――――尊い命の炎が消えてしまった――――――

白熱！ＳＳＳの三人（後書き）

教えて、ユーノ先生！

ユ「今日は、瀬間子の能力についてだ♪」

ユ「鬼太郎曰く髭クソ男と罵られる彼の自慢は、誰にも負けない打たれ強さにある。常に表情一つ変えない寡黙な性格の彼はパトリオット中最高の硬度を誇る肉体と、デバイスであるダイノボットから繰り出される強力な物理破壊技が武器となる。」

ユ「ブラッド状態では、パトリオットの中で唯一最終鬼畜形態に辿り着けた。それによって単純な攻撃能力では銀太郎のそれを遥かに上回るというから驚きだ♪」

ク「あれには僕らも大分手こずったからな・・・」

リ「と言うか、何で“最終鬼畜形態”と書いてファイナル・デーモンコマンドって読むんでしょうか？」

は「そう言う点で言えば、まだまだ中二病やな彼も。」

ユ「君もいくつになっても標準語の話せないところと人の色恋沙汰に首を突っ込むという点で言えばまだまだ真の上級キャリア組とは言えないね。」

は「ええやんか！二人の恋の行方は私も気になるんよ！？」

ユ「僕となのはのことよりクロノの方に首を突っ込んでくれ。」

ク「それはもっと駄目だ！！」

魔導師図鑑ハイパー！

現在、機動六課女性前線協会と男性待遇改善委員会で激しい口論が勃発していた。

恋「ふざけんじゃねえ！！！毎度毎度俺達の事ぞんざいな扱いしやがって！！いくら前線だからっていい気になってんじぇねぇぞ！！」

鬼「そうだ、そうだ！！俺の格好いい活躍をもっと増やせ！！」

は「冗談やないよ！！こっちはただでさえ出番減らされた上、男ばかりが優遇されるこの小説に文句の一つもあるんやで！！」

フェ「私なんか・・・主題歌すら起用して貰えないって状況なんですよ！！クロノだって、毎度毎度酷い目にあってるし・・・気持ちわかってよ！」

ク「う！だが・・・ここは男としてのプライドが・・・！」

な「プライドなんてもの、私のスターライトでぶち壊してあげるよ！！」

とまあ・・・自分たちの日頃の不満をぶつけあう両組合であるが、そんな間に入ってあの男が形相で割り込んできた。

ユ「おい・・・てめぇら・・・！！」

全「ひ！！」

ユ「下らないこと言ってねぇで・・・・・・さっさと仕事に戻れ！！！！」

全「はい！！！！！！！！」

ユーノに怒られた全員は一目散に逃げ出していった。

ユ「全く・・・毎度のことながら仕方のないみんな・・・」

白「私はあのような下等な組合に入らなくて良かったぞよ」

金「やはり、我らの存在はあって正解でしたね。」

ユ「そうかもしれない・・・（ユーノ・スクライア仲裁委員会会長）」

仲裁委員会とは、この二つの組合が職務を放棄して抗争を勃発させた場合に斡旋・調停・仲裁の手順で両者を言いくるめる為に設けられたストッパーである。

ちなみに、理事を務めるのは金太郎と白鳥の二人である。

ユ「て言うか、まるで労働委員会みたいな説明は止めてくれる？」

見えぬ真意・星と鉄槌と氷雪、砕ける！？（前書き）

な「救えるはずの命と・・・それを救えなかったときの後悔・・・私たちの力はいつだってこんな悲しい運命を打ち抜くためにある筈なのに・・・後悔ばかりが私たちの胸に刻まれる・・・」

ヴィ「手が届くのに、救えなかった時が一番後悔する。だからそうならないように私たちは手を伸ばす。後悔なんて二度としないためにも！」

ル「残り僅かとったパトリオット・・・誰一人として勝者など居はしない。救えるのなら救いたい・・・だが、それ以前に私たちの知らない所で何か巨大な陰謀がその姿を現し始めている・・・そんな気がする・・・」

ユ「ユーノ・スクライア外伝　パトリオット篇・・・・・・始まります。」

見えぬ真意・星と鉄槌と氷雪、砕ける！？

＞ｉ１８７６４―７０９＜

ユーノ・スクライア外伝・・・これまでのハイライト。

瀞霊廷内に侵入したパトリオットのうち、隊長各との共闘によりどうにかして五人を倒すことが出来た機動六課。

そして、聖地で戦闘になったユーノ達を驚愕させた謎の力・・・ダイシー・ネリンネルングが銀太郎の体に取り込まれ一体化する。

果たして、これから先待ち受けるものとは何か！？

十三番隊・隊舎門前。

日が暮れ夜の世界となったそこを警備する浮竹の部下たち数名が、はやて達の帰還を待って篝火に火を灯し、厳戒態勢の下警備にあたっていると。

「おう！？」

「おい！」

隊員の数名が前方から現れる見慣れた白髪の人影と、その横で一緒になって歩く二人の男女の姿、そしてその女性の傍らで宙に浮く小人のようなものを確認する。

「おお！！隊長だ！！」

「八神殿とクロノ殿も一緒だ！！」

「隊長が戻られたぞ！！」

「隊長！」

隊員たちは直ぐに浮竹とはやて達の元へと駆け寄り、無事に帰還したことに安堵した。

しかし、浮竹を始めはやてとクロノ、リィンの表情は浮かないものであった。

不審に思った隊員の誰かが浮竹に尋ねる。

「あの、隊長。如何なさいましたか？顔色が浮かびませんけど？」

「ああ・・・大丈夫だ。一先ず、パトリオットは倒した。」

浮竹のその言葉を聞いた途端、隊員たちは大いにそのことに喜び安堵の表情を浮かべる。

「北地区一帯が八神君の氷結魔法で凍り漬いている。間も無く溶けるだろうと思うから、パトリオットを回収しといてくれないか？」

「まだ・・・生きているのですか？」

「いや。身体が残っているかどうかは分からぬが、放っておくわけにもいかない。何れ何所かに葬ってやらねばな・・・それが、俺たちの出来るせめてもの罪滅ぼしだ。」

「はっ！」

「「「・・・・・・・――――――」」」

恐らく、はやてやクロノ、リィンも浮竹も罪滅ぼしなどと言う言葉では納得などしていないだろうと思う。

結局のところ、自分達大人がもっとしっかりしていればこのような事にならなかったのである、そう言いたげな表情を終始していたのだから。

浮竹はそんな三人の気持ちも汲み取り、それを噛みしめた上で今後のことに当たることを決意し、三席の小椿仙太郎に留守中での出来事を問いただす。

「仙太郎、何か変わったことは無かったか？」

「は！先程、三番隊の阿散井隊長と吉良副隊長が尋ねてまいりました。負傷した隊員達の治療の手配の方を！それと・・・もう一つ。」

「何だ？」

「死神代行と翡翠の魔導死神の皆さんも、こちらに。」

「何？」

「「「え！？」」」

仙太郎から聞かされた意外な言葉に些か驚く四人。

浮竹は早速はやて達を連れて、執務室の方で負傷した金太郎と共に待機しているユーノと一護の元へと向かった。

浮竹が徐に引き戸を開けてみると、目の前には負傷した金太郎が横になっておりその怪我の具合を確認するユーノや吉良と傍らにあるイスなどに腰を掛ける一護と恋次の姿があった。

吉良は浮竹がはやて達を連れて戻って来るのを確認すると、軽く会釈をした。

「浮竹隊長。使わせてもらっています。」

「すみません、浮竹隊長。何分急を要するものだったので。」

恋次も吉良に便乗して浮竹に言葉を投げかけると、浮竹は穏やかな様子で返事をする。

「何、構わんさ。」

すると、そんな浮竹に向かって今度は一護とユーノが話しかけてくる。

「浮竹さん・・・色々お疲れさん。」

「無事でよかったです。」

「ああ。どうやら、一護君もユーノ君も無事なようだな。何はともあれ、安心したよ。」

お互いに浮竹の言葉に柔らかい笑みを浮かべる一護とユーノだが、ユーノは直ぐに浮竹の後ろで立ち尽くすあまり元気のないはやて達に向かって言葉を投げかける。

「・・・はやて。クロノ。パトリオットは?」

「何とかな・・・だが・・・」

「結局、私らは・・・あの子を救うことが出来んかった・・・」

「機動六課としてあるまじき失態です・・・」

三人の絞り出すかのような後悔に満ちた言葉を聞いたユーノは、顔を歪めて自分の言動を恥じる。

「・・・そうか・・・ごめん。自重すべきだった。」

そんなユーノの言葉に、クロノは浮かない顔でこんな事を口にする。

「いいさ。現実とは僕らが思ってる以上に残酷なものだということなど、遠の昔に割り切ってる。」

「“世界は、こんな筈じゃない事ばかり”か？」

「・・・ああ・・・」

クロノも悪友からの言葉に眉間にしわを寄せると、自分が常に心の中に留めているその言葉の裏に隠された遣る瀬無さや切なさを改めて実感する。

全体的に重苦しい雰囲気で充満する中、恋次は一度これまでの戦いで消えていったパトリオットの数を確認する。

「これで消えちまったパトリオット達は五人。あと残っているのは――――――」

「高円寺ただ一人だけか・・・――――」

一護はそう答えると、二度にも渡って逃走を許してしまった高円寺に対する強い後悔を覚え拳に力を込めた。

一護のその様子を見ながら、浮竹は根本的に何故ユーノ達がこの隊舎にいるのかそれを確かめる。

「そう言えば一護君。どうして君達が此処に？」

「高円寺を追ってる途中で、偶然恋次達と会ったんすよ。」

「そうなんです。金太郎も怪我していることですし、何所か休めるところを探していましたからちょうど良かったんですよ。いきなりのことで、本当にすみません。いずれにしろ、僕らには決まった拠

点もありませんでしたから・・・」

「と、言う訳だからさ。悪いけど、暫く此処で休ませてくれないか浮竹さん。」

「ああ。そう言うことなら全然問題ないさ。ここで良ければ、好きなだけ使ってくれ。」

快く二人の要求を受け入れてくれた浮竹に、一護とユーノは申し訳ないと言う気持ちを交えつつ寛大な浮竹に感謝の念を抱く。

すると、そんな中負傷して床に横たわっていた金太郎が痛みを訴えかけるかのうように声を上げてきた。

「うっ・・・!」

「金太郎さん!」

「大丈夫ですか?」

はやてやクロノ達も直ぐに金太郎の傍まで駆け寄り、金太郎に声をかける。

「いえ・・・問題はありません。」

そんな金太郎の上司であるユーノは今の状態を金太郎本人から聞きだす。

「痛むか?」

「パトリオットを・・・高円寺達をこちらの世界に連れてきてしまったのは・・・少なからず私の所為です。たとえ、どんな傷を負おうとも・・・責任は必ず取るつもりです・・・」

「・・・・・・――――――」

現状での金太郎の傷を治療するにあたって、ユーノ本人でも治癒は可能だが、一護と共に数時間以上も高円寺の追跡とその戦いで多量の霊力と魔力を消費している現時点では、満足な治癒は出来ないと判断している。

そして、そんな自分の遣る瀬無さを強く呪いながら自分に負けず責任感の強い金太郎のその言葉を聞き、ユーノは思わず苦い顔を浮かべ一護はその場にはいない現世の織姫の力を切に望んだ。

「くそ。こんな傷、織姫の力があれば・・・」

一護の言葉を聞いた吉良は、仕方ないと言う事実を素直に言葉にするしかない。

「仕方ないよ、一護君。彼女は現世にいるんだ。無いものを言っても意味が無い。」

「パトリオットの侵攻で、瀞霊廷中怪我人だらけで・・・四番隊も大忙しだしな。ま、連絡はしてあるから、そのうち誰か来てくれるだろう。」

恋次の言葉を聞いて、念のため浮竹も金太郎の容体を確認する。

「大丈夫だ。まだ戦える状態では無いが、命に別状はなさそうだ。」

「それでは困ります！私は・・・・・・彼らを止めるために此処に来たのですぞ。」

焦燥だけが顔に出る金太郎だが、ユーノがすぐにそれを諌める。

「焦るな、金太郎。」

「そうだ。白哉と日番谷隊長がそれぞれに六課のメンバーと共闘して、それぞれ一人ずつパトリオットを倒したとの報告が入っている。俺達とあなたが倒したのも含めて五人。阿散井君の言う通り、残りは一人だが・・・」

「流石は浮竹隊長と部隊長二人組みですね。あの鬼太郎さんでさえ散々手こずった相手を簡単に倒すとは。」

浮竹達の実力に驚嘆の声を上げる吉良だが、当の本人たちの見解は違っていた。

「無論、簡単ではなかったですが。」

「それと、戦闘中あのパトリオットの様子は明らかにおかしかったです。死神さん達への攻撃も手加減していましたし・・・銀太郎君とか言うパトリオットのボスに何が起こったんや、ユーノくん？」

「あの子は・・・銀太郎君は高円寺の手によって、聖地に封印されていた得体の知れない力を手に入れてしまったらしい・・・」

「確か・・・ダイシー・ネリンネルングだったか？」

「その力で、魔導師と死神全部を消滅させるとか言ってたな。」

一護の言葉に些か信じられないとばかりの表情を浮かべる浮竹やはやて達だが、浮竹は直ぐに言葉を投げかける。

「高円寺の行動は、あのパトリオットにとっても予想外だったのか？！」

「あそこで僕らが止めていることが出来ていれば・・・」

「終わったことを言っても仕方ねぇさ、ユーノ。」

師弟だけあって、考え方もにかよるユーノと一護。

一護自身も勿論後悔をしていないと言えば嘘になるが、自分で口にした通り終わってしまったことをいつまでも気にしていても仕方ないことなのだ。

「そう言えば、ユーノ。なのはからの連絡はあったのか？」

「いや。なのはからもヴィータとルキアさんからもまだ連絡はなし。多分、追跡を続けているはずだよ。」

と、クロノの質問に答えるユーノだが、その時不意に聞こえてくる床を駆け足で走る奇妙な音に全員は耳をそばだてた。

「「「「「「「「「？」」」」」」」」」

全員が扉の方に視点を集中させると、そこから入って来たのは恋次からの要請を受けて駆け付けていた四番隊第六席に昇進した山田花

太郎であった。

「お待たせしました!!」

「花太郎!お前が来てくれたのか!?」

一護は久々に再会を果たす嘗て、自分の怪我を真摯になって治療してくれた友人の姿に喜びを感じる。

「はい。阿散井隊長の連絡を受けて、僕が治療にやって来ました。四番隊隊舎に搬送される皆さんの手当てもありますので、すぐに戻らないといけませんが・・・」

「悪りーな・・・」

「早速ですみませんが、後を任せてもいいですか?」

「はい。分かりました。」

花太郎は早速、ユーノからの要請を受けて金太郎の処置に当たろうとするが、金太郎はそんな花太郎に向かって予想外な言葉をかける。

「山田六席・・・ありがとうございます。完全に回復しなくてもよろしいですから、急いで・・・頼みます・・・」

「ちょっと待てよ!」

「一護さん?」

突然の一護の甲高い声に思わず反応するユーノや金太郎達。

「金太郎、お前今までの話聞いてなかったのかよ!?焦る気持ちも分かるけど、今は落ち着け。」

「そうだぜ。焦りは実力を半減させるぞ。」

「ああ、戦いには休息も必要だ。大体俺達は昨日の晩からずっと動きっぱなしだ。流石に参ってしまうぞ。」

「そう言えば、そうですね・・・」

「何があれば、直ぐに連絡が来るぜ。」

「慌てていても仕方ないです。」

全員から向けられる温かくも状況を読んだ冷静な言葉に金太郎も素直に聞き入れる。

「・・・・・はい・・・・・」

金太郎は目をつむると、花太郎による治療を受けることとした。

金太郎が治療に専念しているのを一瞥し、浮竹は吉良に現在の護廷隊の動きを確認する。

「それで、今は何所が動いているんだい?」

「はい。十一番隊が主です。十一番隊は隊長と副隊長がパトリオットを追って何所かに行ってしまった為、指令が行き届いてなかったのです。」

「直接昼の混乱に関与していなかったから、一番元気って訳か。」

「そう言えば白哉も俺も、十一番隊には何の指示も出していなかったな・・・更木も更木で何処に行ったか分からんし。」

そんな話題の中心となっている隊長・副隊長不在の十一番隊の方は現在どうなっているのか見てみよう。

隊長代行を務める三席の斑目一角と五席の綾瀬川弓親両名の指示に従い、隊士達は夜の瀞霊廷の中を駆け足で走り回っていた。

一角と弓親の二人は一人となってしまったパトリオットに関して、自分たちも戦いたかったという想いを赤裸々に悔しさとして表現する。

「くそ！俺もパトリオットって奴と戦ってみたかったのに・・・残ってるのはあと一人だけって話じゃねぇかよ！？」

「僕だって、どれほどの相手か自分の力を試してみたいと思っていたところなのに。」

「隊長は隊長で、何所か行ったきり戻ってこねぇしよ・・・」

「隊長のことだから、どうせ副隊長に振り回されてそこらじゅうウロウロして帰ってこれなくなってるんだるよきっと。」

「ま、それもそうだな。副隊長の方向音痴は今に始まったことじゃないしな。こりゃ朝方まで戻らねぇぜ。」

「兎に角、残っているのはかなりの大物らしいから、そのどちらかは必ず僕がこの手で見つけ出してみせるよ。」

すると、一角と弓親の二人の元に隊員が現状報告にやってくる。

「報告！瀞霊廷南地区、各班供に異常は見当たりません！」

「他の隊は昼間の戦闘で疲れ切ってる。今、見つけたら俺達の好きに出来るんだ。念入りに探せ！」

一角は引き続き徹底的に捜索を続けると言う旨を隊士に伝え、自らも弓親と共にパトリオット高円寺虎彦と狼谷銀太郎の捜索の為に廷内を移動する。

一方、総隊長山本の元に八番隊京楽春水からの報告を受けて戻ってきた副隊長、雀部長次郎はというと。

「八番隊、京楽隊長。及び同隊伊勢七緒副隊長からの急ぎのご報告です。」

「二人は今何所に居る？」

「は！パトリオットの資料を探すため、現在中央図書館に居られます。」

「ふむ・・・まぁ良い。して、急ぎの報告とは何か？」

「初代ダイシーが残した資料を発見致しました。その中に、ダイシー・ネリンネルングに封じられた爆発的な力が記されており・・・」

「成程。高円寺とか言う男の言葉・・・はったりではなかったと言うことか。」

「資料によりますと、ダイシー・ネリンネルングの力を完全に引き出すためにはダイシー・ネリンネルングを器であるダイシーの体に取り込まさせ、発動させてから暫く時間が必要と記されております。」

「“暫く”とはどのくらいじゃ？」

「・・・一日ほど。」

「・・・高円寺の言っていた一日の猶予とはそのための時間という訳か？」

「はい。」

「ふむ・・・まだ年端も行かぬ子供をそれすら駆け引きの道具とするとは・・・油断できぬ相手じゃの！速やかに高円寺と器たる狼谷銀太郎の身柄を確保せねばならぬ！各隊への通達はこちらで行おう。最早隊首会を開くほどの猶予も残されていないようじゃ。」

「はっ！」

「京楽隊長達は引き続き、資料の調査を続けるようにと伝えて欲しい。」

「了解しました。」

雀部は山本からの命を受けると、瞬歩を使って京楽たちが立て籠も

る中央図書館へと向かい、山本は椅子に座りながらふと高円寺に関する奇妙な気持ちが湧いていた。

「（しかし・・・――――高円寺とは嘗て何所かで聞いたことがある様な名じゃな・・・高円寺・・・高円寺・・・ぬ！！まさか！？）」

山本はその時、あるとんでもないことに気づいてしまいもしそれが本当ならばこの事件は非常に恐ろしい方向に傾くのではないかとさえ思ってしまい、思わず瞳孔を開いてしまった。

その頃、浮竹の計らいに寄り体を休ませてもらえることとなったユーノ達は一度、中庭に集まり隊士たちが用意してくれた炊き出しをいただいていた。

ユーノ達が食事にありつき憩いのひと時を過ごしているを横目に、四番隊副隊長の虎徹勇音からの報告を真摯に聞く浮竹。

「砕蜂隊長と朽木隊長は、体力の回復が思わしくなく隊舎で待機となりました。フェイト執務官とキャロ・ル・ルシエ二等陸士もご一緒です。」

「そうか。」

「日番谷隊長は大したほどではないのですが、シグナム一等空尉やエリオ・モンディル一等陸士に関しては戦線に復帰するのはまだ時間がかかるとのことです。京楽隊長と伊勢副隊長は情報収集のために中央図書館に籠もっておられます。」

「狛村隊長は？」

「山本総隊長殿の警護です。」

「分かった。状況は了解したよ。君もご苦労だったな。」

「いえ。それでは・・・」

と、報告を終えた勇音が隊舎に帰ろうとしたところ。

「姉さ～ん！」

「わ！清音（きよね）！？」

勇音の妹で仙太郎と同じく十三番隊第三席の虎徹清音が抱き着いてきたのだ。

「姉さんもう十三（ウチ）番隊の炊き出し食べていきなよ！八神さんの作った飛び切り美味しい料理もあるし！」

「え・・・だけど、私はまだ仕事中だし・・・」

「え！！ウチと八神さんの炊き出しが食べられないっていうの！？」

「いや・・・そういう訳じゃないけど・・・！？」

無理やりな感じだが、逆らうことの出来ない勇音はそのまま妹の手にひかれ炊き出しを頂いてくこととなった。

その間に、十三番隊隊舎の台所を借りて自慢の料理を披露したはやては隊士達からの熱い期待に応えて料理を振るっていた。

「ささ！！八神はやて特性の炊き出しはどうですか！？美味しいですよ！！」

「八神さん！俺にも一つ！！」

「すみません！！俺にも！！」

「はいはい！！順番にお願いしますよ！！」

八神はやての作った炊き出しは飛ぶようにしてなくなり、これには流石のユーノ達も驚きを隠せなかったそうだ。

そんな和やかな雰囲気を醸し出す隊士やはやて達の様子を温かく見守りながら、浮竹はふと夜空に輝く月光を見上げたそうだ。

「・・・・・・」

やがて、数時間が経過して尸魂界に再び朝を迎えようとしていた。

朝陽が徐々に昇っていき、今まで闇で覆われていた瀞霊廷が光に照らされていく。

そんな瀞霊廷の一角で一人、懺罪宮の方を不敵な笑みを浮かべ背中に銀太郎が納められた棺桶を背負う高円寺の姿がそこにはあった。

「ふふ・・・・・・・」

一体高円寺は何を考えているのだろうか・・・それは現時点では定かではないが、そんな高円寺の後ろから不意に物音が聞こえてきた。

「ん！？誰だ！」

高円寺が後ろを振り返り、立ち上る朝陽に照らされる三人の人影を見つけた。

そこに居たのは、今までセンサーの指し示す反応を頼りに根気よく追跡を続けていたなのは・ヴィータ・ルキアの三人であった。

「・・・・・やっと・・・・・・見つけた。」

「貴様ら・・・」

高円寺は顔がはっきりとわかるようになると、徐に三人の名前を口にする。

「高町なのは・・・鉄槌の騎士ヴィータと・・・朽木ルキアか。」

と、その途端なのははエクシードモード且つユーノから渡された装着具をセットした状態のレイジングハートの先端に魔力をチャージする。

〈Ｄｉｖｉｎｅ　Ｂｕｓｔｅｒ〉

「な！」

「シュート！！」

驚愕する高円寺に向かってなのはは一切構わず砲撃を仕掛ける。

なのはの砲撃を回避した高円寺は、直ぐにこの攻撃がブラッド状態

にも耐えうるものにバージョンアップしていることに気づく。

「ブラッド状態にも耐えうる魔法装備か！？」

屋根の上を走り、砲撃を躱す高円寺。

すると、なのはの砲撃に続く形でルキアが鬼道を放ちヴィータがグラーフアイゼンで迎撃してくる。

「破道の三十一、赤火砲！」

避けきれず鬼道を左手に受けてしまい、傷を負う高円寺。

「ち！」

その瞬間、背後へと回り込んだヴィータが容赦ない攻撃を仕掛ける。

「ラケーテン・・・ハンマー！！！」

ヴィータの鉄槌をその身に受け、勢いよく瓦の屋根に身をぶつける高円寺。

高円寺は銀太郎の棺桶に傷がついていないことを確かめると、徐に立ち上がりなのは達に問いただした。

「どうして此処が分かった？パトリオットセンサーか！？」

「ああ。ユーノ殿から渡されたものを使ってな。漸く突き止めたというわけだ。」

ルキアはそう言うと、懐からパトリオットセンサーを取り出しそれを見せる。

なのはは毅然とした態度で高円寺に投降を求める。

「大人しくそこでじっとしなさい。抵抗するなら、次は容赦しないから。」

高円寺はなのはのレイジングハートに装着してある装着具を一瞥すると、鼻で笑い言葉を投げかける。

「ふん。面白いものを造ったものだな・・・流石は翡翠の魔導死神というところか。だが、その程度の武装では俺は倒せぬ。」

あくまで強気な態度で三人を挑発する高円寺。

と、その時ルキアは高円寺が背中に背負っているものに目をやるとその棺桶から僅かばかりに姿を見せる銀太郎を確認し、驚愕の声を上げる。

「!?なのは!ヴィータ!奴の背負ってるものを見ろ!」

「「え!?」」

ルキアの言葉を聞いて高円寺の背後のものに目をやる二人も、この衝撃的な光景には言葉を失いかけた。

「それは・・・・・・!?」

「銀太郎君・・・!?」

「何で棺桶に入ってるんだよ・・・！？」

予想外な銀太郎の姿に戸惑いと驚きを隠し切れない三人を余所に、それを背負う高円寺は相も変わらず不敵な笑みを浮かべる。

「ふふ・・・」

その一方で、未だ眠り続ける棺桶の中の銀太郎本人は現在嘗てのダイシーが残した記憶を夢として見ていた。

「・・・・・・・・・・・・」

それではここからはそんな銀太郎が見ているダイシーの記憶をダイジェストで見ていこう。

遠い昔・・・――――初代ダイシーから受け継がれる銀太郎の頭に生まれながらにして焼きつき、ダイシー・ネリンネルングの力で克明に蘇ってきた初代ダイシーの記憶・・・――――

今からおよそ数千年のもの昔、魔法文明の発祥と同時に術式に関して二大勢力が生まれた。

対人戦闘に特化し、多少の遠距離攻撃を無視したベルカ式とそれとは逆に遠近両方の攻撃にも特化したオールランド型のミッドチルダ式。

旧暦の時代、管理局がまだその形すらも出来上がっていない頃から、両者の魔法は事あるごとに衝突を繰り返していった。

両者が激しくぶつかり合えば必ず、その齎す被害は極めて甚大であり、魔法を扱うすべを持たぬ者にとっては迷惑極まりないものであった。

やがて、そんな衝突を繰り返す両者の魔法によって被害を受け始めるものが現れた。

愛するものを失った遺族は、そのことに大いに悲しみそれと同時にこんな悲劇を生みだした二つの魔法とそれを使う魔導師に強い憎しみと怒りを持つ者が結集し、独自に対抗手段を研究し始めた。

それがリベルのパトリオットの起源とされている。

パトリオット達は、死んでいった仲間の未練を果たそうと穴倉に閉じこもり日々ミッドとベルカの魔法に怯えながらも研究することをやめなかった。

そして、長きにわたる研究の結果・・・彼らはついに退魔の魔法・・・リベル式を完成させたのであった。

だが、その頃からだっただろうか――――――同じパトリオット同士で考え方の全く違う両者がはっきりと別れ、軋轢を生んでいくようになったのは。

「何!?今何と言った・・・!?」

当時のリベルの主導者の一人であり、金太郎の祖先でもある初代パトリオット・・・エドワード・コークは親友でもあり志を同じくする初代アルバート・ヴェン・ダイシーの言葉に驚きを隠せなかった。

「聞いていなかったのか?我々のこの力で、奴らを・・・――ミッドとベルカの魔導師すべてを殲滅する。」

「正気か?それは・・・・・・」

「勿論正気だ。お前は悔しくはないのか?愛する家族を失い・・・・・日々怯えながらもこんな穴倉で隠れ住むことにお前は悔しさを覚えんのか!?」

「それは・・・・・・」

声を詰まらせるエドワード。

そんなエドワードの肩を軽く叩くダイシー。

「エドワード。いい加減目を覚ませ。所詮、ミッドとベルカの魔導師は我らにとってはただの悪魔だ。いい奴だろうとそうでなかろうと関係ない。悪魔は・・・殲滅せねばならぬのだ!」

「しかし!それでは、向こう側の家族だって俺達と同じ苦しみを味わうことになるのだぞ!あんな惨劇を、俺達と同じ悲しみを何の関係もない人々に味あわせるなど・・・俺にはできない!!」

「ち、だからお前は甘いと言っているのだ!」

「お前こそ、バカな考えは止めろ!ダイシー!!」

穏健派の代表であったエドワード・コークと、急進派の代表アルバート・ヴェン・ダイシーの意見は真っ向から対立し、お互いの主張は平行線をたどっていた。

そんなある時、生じていた軋轢を決定的なものとする悲惨な出来事が起こった。

あろうことか、些細な諍いから取っ組み合いになった穏健派と急進派のパトリオットの中で、穏健派のパトリオットが誤って急進派のパトリオットを殺害してしまったのだ。

当時、仲間殺しはパトリオット達にとって重罪であり一触即発状態にあった両者はこの事件を側きりについに全面衝突を起こしてしまった。

「全員出撃！！！一人残らず首を打ち取れ！！」

「ぎゃあああああ！！！！！！」

「「「「のあああああああ！！！！！！！」」」」

次々と互いに傷つけ合い、目の前で死んでいくパトリオットを見てエドワードはどんなッ気持ちになったのであろうか。

その真意は定かではないが、いずれにしろこの騒動を止めなくては何もならんと思い至ったエドワードは自分の守護者六人を引き連れてダイシー達の暴走を止めようとした。

激しい激闘の末、軍配は初代パトリオットであるエドワードに上がった・・・だが、その為に彼は、よき理解者であると同時に志同じくしたあろう筈の親友ダイシーを自らが生み出した魔法によって手にかけてしまった。

既に息を引き取ってしまったダイシーの姿をその目に焼き付けたエドワードはその場に膝をつき、自分がしてしまった事と今までの行いを振り返り絶望した。

「俺は・・・・・俺たちのしてきたことは・・・・・何だったんだ!!こんな力・・・・・初めから持たなければ良かったんだ・・・!!」

友を殺めた贖罪と自責の念が彼の心を追い詰めた。

それから数年の月日が流れ、８０歳を迎えようとしていたエドワードは病床に倒れ守護者に見送られながら旅立ちを迎えようとしていた。

「・・・済まないが、俺が死んだあと・・・このアックスオーガのリベル封印を施してくれ。代わりに、ミッド式とベルカ式の武装を・・・」

エドワードはそう言うと、自分の手の中にある待機状態のアックスオーガを守護者に差し出す。

「ですが!それでは!!」

「いいんだ・・・元々が復讐のために生み出されたこんな魔法など、最初からあってはいけなかったのだ。俺はミッドとベルカの魔法に希望をすべて託すよ。だが、万が一俺たちの子孫が・・・ダイシーの血を受け継ぐ者が過ちを犯してしまうことがあるかもしれん。その時は・・・俺の血をアックスオーガに組み込んでくれ。そうすれば、リベルの魔法を再び使うことが出来る。」

「・・・本当に・・・それで宜しいのですか？」

「ああ・・・・・・俺たちの望みは・・・・・・最初から争うことではない・・・・・・平和に・・・和やかに暮らしたかっただけだろ・・・・・・」

それが、エドワード・コークの遺言でもあった。

彼の死後、従者たちは遺言通りアックスオーガのリベル魔法機能を封印し、ダイシーが健在だった頃、彼が密かに創り上げた聖地と呼ばれる場所へ行くための鍵と採取していたエドワードの血を小瓶に詰めたものを何世代にも渡って継承していった。

それから、およそ数百年後・・・――――エドワード・コークが恐れていた事態が起きた。

十代目アルバート・ヴェン・ダイシーとその守護者達が、エドワード・コークの末裔たる熊谷金太郎を襲い、聖地への扉の鍵を強奪。

ついには聖地への扉を見つけてこの尸魂界へとやってきた。

そして、聖地に封じられていたダイシーの遺産たるダイシー・ネリンネルングが銀太郎の体の中へと吸収されてしまった。

大まかにダイジェストを送ってきたが、そろそろ元の時間に戻ろう。

ヴィータは不敵な笑みでこちらを見る高円寺に向かって即座に銀太郎の即時解放を要求する。

「てめぇ！そのガキを私らに渡せ！！」

「藪から棒に何を言い出すかと思えば・・・・・やはり威圧か。貴様らにはどうやら話し合うという概念自体ないのであろう。」

「うるせー!!お前の知ったことじゃねぇよ!!」

すっかり興奮状態で冷静さを失いかけているヴィータだったが、流石にまずいと判断したなのはが口を挟んできた。

「待って、ヴィータちゃん!少し冷静になろう。」

「だけどよ!!」

「なのはの言うとおりだ。ここは慎重にいかねば・・・あやつのことだ。何をするか分からりかねぬ。」

ルキアは一度深呼吸をすると、袖白雪を持ち直して高円寺に再度質問をぶつける。

「高円寺・・・・・貴様や銀太郎は、なぜそこまでして魔導師を憎む!?何がお前達をそこまで歪ませた!?銀太郎は・・・本当に魔導師を心の底から憎んでおるのか!?」

「ふん。何を今更。」

「同じ魔導師同士、戦う理由なんて者はない筈だよ。これ以上の闘争は私たちもあなた方パトリオットだって傷つくだけだよ!銀太郎君だって、本当は悲しんでいる筈だよ。その証拠に・・・その桶の無から見える銀太郎君の目から涙が零れ落ちてる。」

なのはに言われて、高円寺も背中の銀太郎に目を向けると確かに目からは涙がうっすらと零れ落ちていた。

「・・・・・・」

「もう争うことはねえだろ！銀太郎は仲間が死んで、心から悲しく泣いてるんだ！お前はそんな銀太郎の悲しみが分からない訳ねぇだろ！！それとも、銀太郎はそこまでして魔導師を滅ぼさないといけないって思ってるのかよ！！どうなんだよ、高円寺！！」

「・・・・・・」

ヴィータやなのはの必死に訴えかけにもかかわらず、高円寺は無言で立ち尽くすだけ。

「何とか言ったらどうなのだ！？一護達からは報告は受けている。聖地に封印されていたダイシー・ネリンネルングの力を・・・――」

「ダイシー・ネリンネルング？それなら既に銀太郎の体の中に取り込んだ。」

「何ですって！？」

なのは・ヴィータ・ルキアの三人はこの高円寺から告げられた驚きの事実に動揺を隠し切れなかった。

「その力を使って魔導師全てを滅ぼすためにな。」

「あなたは・・・本気でそんなことを思ってるの！？」

顔を歪めたなのはが高円寺に真意を尋ねるが、高円寺はただ不敵な笑みを浮かべるだけでそれ以上は何も言わなかった。

その頃、十三番隊隊舎を一時拠点として現在睡眠をとっている一護やユーノ達はというと、この事態にはまた気づいておらず夢の中にいた。

「か～～～～～～！！！」

「ぐがあ～～～～～～！！！」

「・・・・・・――――――」

鼾をかいて横になって眠る一護や恋次と、壁に止しかかって杖を抱えて静かに眠るユーノなど寝方は様々であったが、ただ一人だけ金太郎の姿がそこには見えなかった。

金太郎はユーノ達が起きる前に支度を済ませると、アックスオーガを手に取り高円寺を捜すために一足先に外へと出ていたのだ。

すると、金太郎は周囲から感じる高円寺となのは達の魔力波長を捕える。

「（この霊圧と魔力反応は・・・・・・なのは殿達の・・・？！戦っているのか？残っているパトリオットは高円寺ただ一人だけ。そして、銀太郎も一緒に・・・なのは殿達がいる所に、必ずいるはずだ・・・）」

金太郎はブラッドカートリッジの補給を済ませると、足早に高円寺

と対峙しているなのは達の元へと向かった。

その頃、そのなのは達はというと高円寺の言葉に耳を方無ている最中だった。

「貴様らがどんな行動を取ろうともう遅すぎたのだ。既にパトリオットはこの俺一人となり、銀太郎はダイシー・ネリンネルングを取り込んだ事で完全覚醒へと近付いている。銀太郎は真のダイシーへと変貌し、貴様ら魔導師とそれに与した死神は滅びの運命を迎えるのだ。」

「私達はどんなことがあってもあなた達を救ってみせる。そして、これ以上の悲劇は繰り返させない！」

すると、そんななのはの言葉に否定的な言葉で反論する高円寺。

「馬鹿が！翡翠の魔導死神に出会わなければ何所にでも居る平凡で無能な女に過ぎなかったお前が、よくも知ったような口で語りかける。お前は気付いているのか？お前や貴様らの魔法は何も救わない。悲劇を生むだけの殺戮の道具に過ぎないのだ。質量兵器を禁じたところで、やってきたことは何も変らない。」

「う・・・それは確かに一理それっぽいところもあるけど・・・・・・だけど！」

「だけど何だ？貴様はその手の魔法で一体何を救ってきたというのだ？その一つ覚えの砲撃で、何千・何万と言う命は救えても・・・お前を導いてくれた男一人・・・貴様は救えなかったはずだ。」

「な！」

「「！！」」

高円寺が口にした最後の方の言葉を耳にした瞬間、なのはは目を見開き動揺を隠し切れない様子となる。

なのはにとっては禁句のような言葉であるそれを傍らで聞いていたヴィータとルキアもこの言葉を聞いたなのはがどんな状態になるかは容易に見当がついていたので、焦燥を感じた。

そんな三人、特になのはに向かって高円寺は更に不敵な笑みを浮かべながら更に続ける。

「貴様は結局のところ、誰も救えてなどいないのだ。貴様の手にした魔法は、一人の男を孤独と絶望へと追いやり、自らは仲間たちと共に甘い汁を吸い続ける。その間にあの男の心は次第に弱り切り・暗く塞ぎこんだ。そして、誰からの評価も受けることなく文句の一つも言わずに書庫を這いずり回っていた・・・誰かの役に立ちたい・・・貴様と言う存在とどんな形でもいいから繋がっていたいと切に願って・・・だが、貴様はそんな男の事など気にも留めず、自分や仕事、近くの仲間ばかりに目を向けあの男の事を利用するだけ利用し、都合のいい時だけ友達と豪語した・・・何と虫のいい話だ・・・だからこそ貴様は魔王と罵られるのだよ。」

「・・・止めて・・・止めてよ・・・！！」

高円寺の言葉を狼狽した様子で聞いていたなのはだったが、言葉一つ一つで確実に精神は追い込まれていき、握っているレイジングハートが小刻みに震えだした。

「ユーノ・スクライアはどう思ってるいるかは知らぬが、心の中では貴様のことを殺したいほど恨んでいるのだ。」

「止めてよ!!!!」

なのはは高円寺の言葉にとうとう感情を抑えきれなくなり、涙を流しながらエクセリオンバスターを一発高円寺に向けて発射する。

それを高円寺は容易に回避するが、もしも直撃を受けていたら恐らく無事では済まなかったとばかりの破壊力が窺えるこの一撃。

「なのは!!」

「おい!なのは!!」

感情が高ぶり涙を流すなのはに向かってヴィータとルキアが言葉を持ちかけるが、なのはは一度屋根の上に膝をつくとすすり泣く声でこう呟いた。

「お願いだから・・・・・・それ以上は止めてよ・・・!!お願いだから・・・・・・それ以上何も言わないで・・・!!」

「なのは・・・」

高町なのはにとって、今なお抱え続ける贖罪――――――ユーノ・スクライアという男を本当の意味で理解できなかった自分への罰。

幼少の頃に抱えていた行き場のない想いと寂しさから解き放ってくれた優しい青年をいつの間にか自分と同じ目に遭わせ、挙句過去の時間に置き去りにしたという罪。

それらが今のなのはにとって、どれだけ重くそしてなのはの精神を追い詰めるのにどれだけのものなのか・・・――自ずと見当がつくだろう。

高円寺の言葉によってこれほどまでに追い込まれたなのはを見るのはルキアも初めてであったが、かける言葉も見つからなかった。

ヴィータはそんな傷つけられた涙目のなのはを見ながら、高円寺に怒りの牙をむける。

「てめぇ!!!変なこと言ってんじゃねぇよ!!」

「変なことではない。紛れもない事実だ。貴様たちの魔法は、人を絶望へと追いやるためのこの世で最も卑怯で残酷且つ話し合いを介することも否定した史上最低の“兵器”なのだ。」

すると、そんな高円寺の言葉を聞いてルキアも我慢が出来なくなり自分の思っているなのは達の魔法に関する見解を述べる。

「違う!!そんなことはない!少なくとも、なのは達の魔法は無闇な争いを止めるため・・・何かを守り抜くため・・・想いのすべてを伝えるために在るのだ!断じて殺戮の手段や最低な兵器ではない!!!!」

「!ルキアさん・・・」

「ルキア・・・お前・・・」

ルキアの言葉を聞いた途端、涙を流していたなのはも横で聞いてい

たヴィータも驚きの表情を浮かべた。

「愚かな。貴様らには、魔導師としての責務を負って自分達のしたことを後悔させ、銀太郎の力によって滅ぼされてもらおうと思ったが・・・その必要もないな。貴様らには今此処で死んでもらうことにする。俺の力によって！」

「「「は！！！」」」

高円寺の攻撃がなのは達に直撃する。

なのはは、ヴィータは、そしてルキアはこのまま本当に高円寺の手にかかり倒されてしまうのか！？

その間に、銀太郎は真の覚醒を迎えてしまうのか！？

真相は次回！！

教えて、ユーノ先生！

ユ「今日は、総隊長山本元柳斎重國さんの紹介だ♪」

一「爺さんのか？あんましねぇと思うけど・・・・・・」

恋「馬鹿野郎！！総隊長のプロフィールに限って、んなことあるかってんだ！！」

ユ「へへ・・・とまぁ、色々とありますけど早速いきましょう♪」

ユ「一番隊隊長と護廷十三隊の総隊長を務める山本さんは１０００年以上の長い間その座をキープし続け、あらゆる面においてどの死神よりも強い能力を秘めている。」

ユ「斬魄刀は炎熱系最強最古の『流刃若火（りゅうじんじゃっか）』。刀身から解放されたその炎の一振りであらゆるものを灰燼に帰す能力を秘めているんだ♪」

一「そう言えば、斬魄刀異聞篇じゃあ雑用が嫌になって実体化したんだったよな？」

恋「まぁ・・・気持ちは分からんでもないがな・・・」

そう話しながら、三人は話に聞いた雑用を頭に思い浮かべ些か呆れてしまうのであった。

八神はやては十三番隊隊舎にて自分の作った炊き出しを振舞っていた。

は「ささ！！八神はやてちゃん特性炊き出しはこちらですよ！！どんどん食べちゃって下さい！！」

浮「ほう！これは凄い。君は料理が美味いんだな、八神君。」

浮竹の言葉に思わず頬を赤らめるはやて。

は「浮竹さんも沢山食べてくださいね！リクエストに答えて、おはぎ料理も沢山作っておきましたよ！！」

浮「いや～～～それはありがたいな！！」

しかし、あまりに作りすぎたため何でもかんでもおはぎが料理に乗っかっていたためにユーノや一護達は思わず青ざめる。

すると、そんな食べるのを躊躇する全員にクロノが一喝。

ク「こら！何をしているのだ、君たち！早く自分の分を取れ！ぼーとっするな！！」

浮「何でクロノ君が？」

は「この中では一番暇そうだったので手伝いお願いしたんですよ！」

それを聞いた瞬間、クロノはショックで青ざめる。

一「いいように使われるだけじゃねぇかよ！？」

ユ「あはははははははは！！！！！！！間抜けなクロノ！！！！！！！」

命と奮戦！　金太郎、究極の選択（前書き）

金「私はその手で一体何を救えただろう・・・・・・白鴎を自らの手にかけてしまったことはもう取り返しのつかない・・・・・・いつだって私は遅すぎるのだ。だから、せめてそんな自分に出来るせめても償いがある筈だ。高円寺虎彦・・・・・・貴様は私が止めてみせる。銀太郎は私の手で救ってみせる！」

ユ「ユーノ・スクライア外伝　パトリオット篇・・・・・・始まります。」

命と奮戦！　金太郎、究極の選択

＞ｉ１８７６５―７０９＜

ユーノ・スクライア外伝・・・前回の三つの出来事。

一つ：　ユーノ達が瀬間子を撃退したはやて達と合流を果たす。

二つ：高円寺を見つけたなのは達が戦闘を開始。

そして、三つ：傷を癒したばかりの金太郎が一人、高円寺の元へと

向かう。

高「貴様らがどんな行動を取ろうともう遅すぎたのだ。」

な「私達はどんなことがあってもあなた達を救ってみせる。」

高「貴様らには今此処で死んでもらうことにする。俺の力によって！」

全「「「は！！」」」

鬼「俺の必殺技・・・！」

高「！」

鬼「尸魂界バージョン！」

高円寺の攻撃が三人に向けて放たれた瞬間、その三人に向かって飛んでくるそれを見慣れた炎がぶつかってくる。

ル「あれは・・・！？」

ヴィ「まさか・・・！」

驚愕する三人であったが、粉じんを切り裂いてなのは達の前に現れたのは烈火を解放して肩に乗せた鬼太郎であった。

高「ち・・・」

鬼太郎は高円寺の方を鋭い目線で睨みつけながら、なのは達の前に出てきて烈火を構え直した。

「何とか間に合ったか・・・」

「お前は・・・」

「鬼太郎！」

「鬼太郎さん！」

三人はこの予期せぬ助っ人の登場に目を見開いた。

「大丈夫か？」

「ああ・・・それより、浦太郎はどうした？」

ルキアのその言葉を聞いた瞬間、鬼太郎の表情が曇り、暫くの間を置くと徐に答える。

「・・・オーリーの野郎の弔いだ。亀があんなに辛い顔を見せたのは久しぶりだ・・・・・それもこれも・・・」

「ふん・・・」

鬼太郎はそう言いながら、自分の事を馬鹿にしたかのような目で見

つめる高円寺に目をやり込み上げてくる怒りに身を任せる。

「全部全部目の前にいるこのクソ男の所為なんだよ!!烈火!!!」

鬼太郎は怒髪天を衝くという言葉どおり、髪を逆立たせながら烈火の刀身に霊圧を注ぎ込んで炎を滾らせ、勢いよく高円寺に向かって突っ込んで行った。

「てやあああああああ!!!!」

「鬼太郎さん!!」

なのはは鬼太郎の事を止めようとしたが、鬼太郎はなのはの言葉を無視してただ只管に怒りに我を任せて高円寺に斬りかかり、高円寺はその鬼太郎の攻撃を造作もなく読み取り躱していく。

そして、ある程度の距離を取った鬼太郎は烈火の切っ先を向けながらこう語ってきた。

「てめぇの所為でな、オーリーは死んだんだ!!銀太郎のことをあんなに慕っていたオーリーはな・・・てめぇのその訳のわからねぇ野心のために、てめぇの手前勝手な欲望のために死んだんだよ!!!」

「ふん・・・感情的だな・・・」

「何が可笑しいんだよ、てめぇは!!!」

鬼太郎はこれほどまでに自分の感情を抑えきれなくなったのは久々であった。

鬼太郎は烈火の持ち手を強く握りながら、浦太郎があの時どれほど悲しんだのかを思い出しそれを赤裸々に高円寺にぶつける。

「俺は・・・・・亀があそこまで泣き叫んだ姿を見て心が痛くなった・・・!!俺はあいつの傍に居ながら、結局掛ける言葉すら見つからなかった・・・!!それが悔しくてならねぇ・・・!!そんで、亀をあんなに泣かせたてめぇを・・・・・オーリーや銀太郎を利用し、自らの訳の分からねぇ目的のために利用したてめぇを・・・・・絶対に許さないぜ!」

鬼太郎はそう言うと、霊圧を全開して灼熱の炎を全身から噴出させながら斬魄刀の奥義、卍解を発動させる。

「卍解!!」

鬼太郎が卍解を発動させると、凄まじい勢いでなのは達や高円寺の元に飛び火する鬼太郎の烈火の炎。

なのは達三人はその炎を手で防ぎながら感情を高ぶらせ、高円寺に対して強い憎悪を抱く今の鬼太郎を心配していた。

「鬼太郎・・・」

「鬼太郎さん・・・あそこまで・・・」

「あいつ・・・」

そして、全身を包み込んでいた炎から解放された鬼太郎は両手に持った炎で出来た刀剣と背中から生やした翼を露わにして、高円寺を

睨みつけてこう言った。

「鳳仙烈火!!」

爆発的に上昇した鬼太郎の霊圧を前にしても、高円寺は不敵な笑みでそれを見続けるだけで動揺するそぶりすら見せない。

「ほう・・・・・大した霊圧だ。だが、何をそんなに舞い上がる？その程度の力で、俺を打ち負かせると思っているのか？」

「鬼太郎さん！一人じゃ無茶ですよ!!」

なのはは高円寺の実力の高さを恐れ、鬼太郎に一人で戦わないように警告するが、鬼太郎は怒りに固執して、なのはの話に耳を傾けようとしない。

「うるせー！無茶だろうが何だろうがな、こいつだけは俺が斬る!」

「やれるのか？」

「やるかやらねぇかじゃねぇさ・・・するかしないかの問題だ!!」

鬼太郎はその瞬間、霊圧を最大にまで上昇させると鳳仙烈火の炎を最大出力にして高円寺を威嚇するが、高円寺はまるで恐怖する様子も見せず逆になのは達が狼狽するほどであった。

「「「う!!」」」

鬼太郎は背中に生えた翼を広げると、勢いよく空へと舞い上がり空中からの攻撃に転じた。

「せやあああああ！！！！！」

高円寺は銀太郎の納められた棺桶を肩に背負い直すと、鬼太郎の攻撃を避けきり自らも空に浮かぶと鬼太郎と熾烈な戦いを繰り広げる。

鬼太郎は只管に怒りを力に変えて、燃え滾る炎で高円寺を攻撃してくるが、高円寺は感情的になっていた鬼太郎の動きを的確に読むと冷静にアドバイスすら出してきた。

「肩に力が入り過ぎているぞ。そんな力任せの攻撃など、届くはずもない。」

「うっせんだよ、てめぇは！！」

鬼太郎はそう言うと、両手に持っていた烈火の剣より肉食動物のようなものを象った火炎攻撃技を発動。

「烈火嵐空牙（れっからんくうが）！」

その瞬間、高円寺に向かって放たれる凶暴な肉食動物のように牙をむいた炎の一撃。

高円寺はそれを見ると、イグノアランスを右手に圧縮させて鬼太郎の攻撃そのものを無に帰してしまう。

「く・・・！」

鬼太郎は容易に自分の技を消し去った高円寺の出鱈目な力に怒りを募らせながら、大幅に距離を取ってから一気に突進していった。

「この！！！！！！！」

「甘いな。」

〈Ｄｅｎｙ〉

高円寺は向かって来た鬼太郎にデナイを仕掛けると、その力で鬼太郎の行動そのものを否定し、対象となった自分に向けられたその攻撃を鬼太郎に跳ね返した。

「な！」

鬼太郎は跳ね返された自分の技をもろに自分自身に喰らうと、そのまま爆発を伴って撃墜していった。

「のあああああ！！！！！」

「鬼太郎！」

「まだだ！！」

鬼太郎は相当なるダメージを負いながらも、何とか空中で体制を整えようとする。

「俺の怒りの炎は・・・・・・こんな傷で鎮められるかよ！！！」

そして、地面に激突するすれすれのところで体を起き上がらせた鬼太郎はその瞬間、自分の背中の翼に炎を集めて、巨大化したそれから無数の火の粉を高円寺にぶつける。

「“鳳仙火(ほうせんか)”」

炎の翼より降り注がれる無数の火の粉が高円寺を襲い、高円寺はそのまま爆発に飲み込まれる。

鬼太郎は満身創痍となりながら、覚えたての技を使ったことによりすっかり息を上げてしまっていた。

「は、は、は、は・・・・・・どうだ・・・・・・これなら・・・・・」

だが、爆発の中から出てきたその姿を見た鬼太郎やなのは達全員は目を疑った。

「何!?」

「うそ・・・!」

「そんな!」

「莫迦な・・・!!」

四人が目にしたのは、焼け焦げ一つ負った形跡のない所謂無傷という状態の高円寺であった。

「なかなかいい攻撃だったぞ・・・だが・・・予測の範囲内だ。」

「てめえ・・・・・チートにも程があるぞ・・・・・・!」

「ふん。ギガトロン」

〈Ｉｇｎｏｒａｎｃｅ〉

高円寺は両手からフルパワーのイグノアランスを生成すると、それをそのまま空中に浮かぶ鬼太郎目掛けて投げつける。

「消えろ・・・――」

高円寺から放たれた超高速のイグノアランスを躱すことが出来なかった鬼太郎はその直撃を受けてしまい、そのまま卍解を解いて地面に落下していった。

「ぐっは！！」

なのは達は鬼太郎がこれほどまでに容易くやられてしまうこの現状に目を疑っていた。

「そ・・・そんな・・・！？」

「鬼太郎が・・・・・・！」

鬼太郎は地面に激突すると、満身創痍の体をゆっくりと回転させながら痛みが激しい肋骨を手で押さえ、降りてきた高円寺を険しい顔で睨みつける。

「ぐああ！！く・・・この野郎・・・！！」

「肋骨に皹が入った筈だ。あまり動かない方がいい。」

すると、その時高円寺の背後からなのは達が攻撃を仕掛ける。

「ギガトンシュラーク！！！」

「完全氷白」

「エクセリオンバスター！！」

高円寺は三人の攻撃に気づくと、警戒に飛びまわりながら全て躱し切り、屋根の上に降り立つと自分の方に武器を向けるなのは達を見下ろし、鬼太郎は目の前のなのは達の行動に驚いていた。

「お前ら・・・！？」

「済まぬ、鬼太郎。虫の居所が悪いのは何もお前だけではない。」

「一人で背負うな、厚かましい。」

「これは私達機動六課と護廷十三隊全員の戦いです。」

「・・・・・・」

三人の言葉を聞いて、鬼太郎はそれ以上は何も言えなくなってしまう。

三人は高円寺を自慢の連係で取り囲んで牽制を始めるが、高円寺はそんな三人を見ながら不敵な笑みでこう口にする。

「成程・・・多対一なら囲むのが定石。連携に関しては申し分なしと言ったところか。」

その瞬間、高円寺は三人が全く気付かないうちに二重のバインドを仕掛けて完全に自分となのは達の状況を逆転させる。

「「「なっ！？」」」

なのは達はもがきながら拘束を解こうと努力するが、その固さは下手をすればユーノ以上に固いものであったのだ。

「しかしながら、攻撃の精度から言えばまだ足りぬ！」

〈Ｄｅｎｙ〉

高円寺は動けなくなった三人を一遍に撃墜させるために、デナイを使用する。

「「「のあああああああああ！！！！」」」

「なのは！ヴィータ！ルキア！」

高円寺はなのは達三人を常識では想像もつかないような圧倒的な力で吹き飛ばすと、地面に倒れる満身創痍のなのは達に向かってゆっくりと近づきこう語った。

「・・・我々に永遠の絶望と苦痛を与えたてきた時空管理局の魔導師よ・・・その身を以って報いを受けるがいい。これが我らパトリオットの受けてきた苦しみだ・・・」

そんな高円寺の言葉を聞きながら、なのはやヴィータとルキアなその状態から起き上がろうと武器を手に取ろうとするが思いのほか痛

みで満足に動かすことが出来ない。

「くっ・・・・・・・!!」

「くそ・・・!!」

「身体が・・・動かぬ・・・」

鬼太郎は三人を何とか助け出そうとしたが、自身も高円寺の攻撃をその身に受けてしまいその受けた痛みに負け体を動かせない状況だった。

「お前ら!!ぐっ!!（くそ!肋骨に皹がはいちまったか・・・身体が・・・痛てえ・・・!）」

高円寺は目をつむりながら最後の最後までなのは達に対しては徹底的に報復の姿勢を見せる。

「もう終わりにしよう。お前達魔導師の非道な行動によって空しく死んでいったパトリオット達も・・・その魔導師と結託し、あろうことか銀太郎の家族をも奪った死神も・・・それを奪ったもの・・・お前達を・・・俺は・・・俺は決して許さない!」

「く・・・そ・・・!!」

「良いように世界や魂魄を管理するなどと妄言を吐く貴様らには、最も無様な死に方を選ばせてやる。さぁ・・・無に帰るがいい!」

高円寺はそう言うと、怒りの籠った魔力を両手に圧縮させそれを強い魔力衝撃としてなのは達三人目掛けて放った。

「「「はっ！」」」

このとき、三人はもう駄目かとばかり思っていた。

だが、実際の所はそんな三人の予想を大きく覆す出来事が起こったのだ。

「!?」

自分の技が当たる寸前で何者かにそれを妨害され、なのは達三人を鬼太郎の元まで高速移動で運んだ者、それは高円寺の気配を追ってやって来た金太郎であった。

「・・・・・・――――――」

金太郎はブラッド状態を発動させており、なのは達三人を下ろすと静かに鬼太郎の元まで下がらせる。

一方で金太郎の突然の登場に驚愕するなのは達と鬼太郎。

「き、金太郎さん・・・?!」

「何で・・・熊が此処に・・・!?」

金太郎はそんな四人の言葉を聞き流すと、仮面の下で鋭い目線を高円寺に向けると徐にこう口にする。

「高円寺。お前の相手はこの私だ。」

すると、高円寺はその言葉を聞いて思わず鼻で笑ってしまう。

「ふん。ふふふ・・・・・・熊谷金太郎、今更何を？」

と、その瞬間。

金太郎はアックスオーガを振り切り、ダイナミックスラッシュを高円寺に向かって放った。

高円寺は造作もなくそれを回避するが、間髪入れずに二発目のダイナミックスラッシュが高円寺の背後、しかも遥か頭上から仕掛けられた。

「！何！？」

これには流石の高円寺も焦りを覚え、間一髪のところで金太郎の一撃を回避することが出来た。

二人は向かい合ってそのまま牽制を続けるが、なのは達四人はこの短期間で制御の困難と言われているリベル式に改良されたアックスオーガを完璧に使いこなしてる姿の金太郎を見て、大いに驚いていた。

「（凄げえ。金太郎の奴、あの制御が難しいリベル式として生まれ変わったアックスオーガの力を完璧に使いこなしている！）」

金太郎の使いこなしている姿を実際にその目で確認した高円寺は怪訝そうな表情で徐に尋ねる。

「どう言う事だ？白鴎との戦いでは、まだそれを使いこなせていな

かったはずだが！？」

すると、金太郎は白鴎との極限の戦いの中で見出した一つの答えを導きだし徐に語り出した。

「この古のデバイス、アックスオーガは魔力が生まれつき弱い者でも能力を行使可能にする為、魔力を強制的にデバイス自身が作り出し増幅するもの。つまり、使用者本人が何もしなくても勝手に魔力を作り出してくれる。今迄私は、御し易いという利点からその質力調整だけ行い攻撃をしてきた。ブラッドカートリッジを使うときも同じように。しかしながら、それでは使い過ぎた際に、アックスオーガそのものが負荷に耐え切れず、何れ限界を迎えてしまい暴発してしまう。だが、賢い方法がもう一つあったのだ。アックスオーガはあくまで増幅器として使い、魔力の生成・コントロールは私自身の力で行えばいい。そうすれば、アックスオーガにかかる負担は大幅に減り、力を存分に発揮出来るのだ。パトリオットとの極限の戦いを経験することで、私は漸くそのことに気付いたのだ。」

その金太郎の話を聞いていたルキアは心中、金太郎の確かな才能に驚愕しつつそんな金太郎を今まで支えてきたアックスオーガと言うデバイスそのものにも驚いていた。

「（金太郎殿は、あれでもまだ自分の力を御しきれていなかったというのか・・・自分自身の手で！？それを今迄の戦闘で金太郎殿の力を制御してきたあのアックスオーガとは、一体どれほどの力をもったデバイスなのだ・・・！？そして、金太郎殿の才能は、どれ程のものなのだ・・・やはり、金太郎殿も間違いなく“天才”の領域か・・・）」

「ふふ・・・ふふふふはははははは！！！！」

高円寺はそんな金太郎の話を聞き終えると、不敵な笑みと共に不気味な笑いを漏らし始めた。

「何が可笑しい？」

金太郎はこの突然の高円寺の笑いの理由が分からず、思わず聞き返した。

「ふふ。貴様、それだけの力を持ちながら何故魔導師の味方をする？同じパトリオットの末裔ならば分かるはずだ。パトリオットにとって魔導師は敵ではないのか？」

「勘違いするな。私は魔導師の味方ではなく、彼女達・・・店長の大切な友の味方だ。そして、この無意味な戦いを終わらせる。」

「ふん。大層な口を聞く。」

「私の父が言っていた。この争いと悲劇を齎しているのは銀太郎や白鴎達パトリオットの意思なのではない。その陰で操るもう一人の男だと。それは高円寺・・・貴様だ！」

「ほう・・・」

「お前は年端も行かぬあんな幼い子供を使って、魔導師達を殲滅にかかろうとした。その為に、家族同然であった銀太郎を慕うパトリオット達の命を目的のための用途とした。オーリーとてそうだ。勿論、止めようとしたものもいた。だが、結局誰もお前や銀太郎の覚醒を止めることはできなかった。もう全てが遅いのかも知れぬが、私はお前を止めてみせる。」

「貴様に出来るかな？」

「やってみせる！」

強い覚悟と口調で高円寺にそう宣言した金太郎。

高円寺もそんな金太郎を迎え撃つために両手に魔力を圧縮させると、衝撃波として放った。

「は！」

金太郎は即座にその魔力衝撃を相殺させるために、ダイナミックストームをぶつける。

ぶつかった瞬間、ダイナミックストームの威力が勝ったのかそのまま高円寺目掛けて飛んで行った。

「！」

高円寺はそれを見ると、回避の為に空中へと舞い上がるが、その直後に金太郎がフェイト並の高速移動を駆使してダイナミックスラッシュの嵐を高円寺に仕掛ける。

自身の魔力を体に纏い、それに耐えようとする高円寺だったがあまりの数と威力に圧倒されてしまい体の至る所に傷を作ってそのまま地面へと落下する。

「ぐあああ！！」

土煙が立ち込める中、金太郎は止めの一撃を加えるためにアックスオーガを大きく振りかぶった。

「終わりだ！！」

すると、その言葉を聞いた高円寺が煙の中より反撃を加える。

「舐めるな！」

煙の中より飛んできた高円寺の魔力衝撃波を間一髪で回避した金太郎。

すると、その背後より魔力を上昇させた高円寺が攻撃を仕掛ける。

「はああ！！！」

金太郎はその攻撃もどうにか回避することが出来、一度地面に降り立って高円寺と向かい合うが、高円寺は自身の魔力を使って金太郎の攻撃で出来てしまった傷を高速で治癒していった。

「俺のデバイス、ギガトロンは再生能力に長けている。リンカーコアから生成される魔力を細胞構築に当てることが可能なのだ。お前の攻撃など、いくら受けたところで無意味なのだ。」

「ち！」

この高円寺の規格外な能力には金太郎も舌打ちをし、後ろの方で満身創痍の状態で見ていたなのは達も困惑した。

「金太郎さん！」

「金太郎！」

「熊！」

「あやつ、何という反則技を！」

金太郎はブラッドカートリッジを装填し、次の攻撃に備えようとするがその時、完全には治りきっていない状態の体で戦闘を行っていた所為で、このタイミングで反動が発生してしまい思わず足がふらついた。

それを屋根の上で見ていた高円寺は不敵な笑みを浮かべこう言って来た。

「どうやら、お前の傷もまだ完全には塞がっていないようだな。」

「問題ない。この身体が砕ける前にお前を倒せば済む話だ。」

「出来るのか？俺は死んでいったオーリー達他のパトリオット達とは格が違うのだぞ。それに、俺を倒してもその先には完全覚醒を遂げた銀太郎が待っている。勝機は無い。」

「勝機は、己が手で掴むもの。店長や一護殿は何時だってそうしてきた！自分の守りたいものの為に、目の前で苦しむ人を助けるために！アックスオーガ、ブラッドカートリッジロード！！」

〈Ｂｌｏｏｄ　ｅｘｐｌｏｓｉｏｎ〉

金太郎はアックスオーガにブラッドカートリッジを三発ロードする

と、アックスオーガを大きく振りかぶってダイナミックストームの発展系の技である大威力攻撃技であるダイナミックサイクロンを発動。

「ダイナミックサイクロン！」

金太郎がアックスオーガを振り切った瞬間巻き起こる凄まじい衝撃波は高円寺を飲み込み、周囲に遭ったものを悉く粉砕していった。

「のあ！？」

ダイナミックサイクロンに直撃した高円寺だったが、即座に傷を癒すと渦の中から脱出して体制を持ち直す。

金太郎はその高円寺に向かって更に頭上からダイナミックストームの連射を仕掛け、追い込みを見せる。

しかし高円寺もそう簡単に倒せるような相手ではないことは分かっていることだ。

高円寺は飛んでくるダイナミックストームにイグノアランスをぶつけに来た。

「はあああ！！！」

イグノアランスとダイナミックストームの連弾が対消滅を果たすと、二人は再び向かい合って牽制をする。

「威力のある一撃を撃つ為には、ある程度の溜めが必要なようだ。逆に、それ以外の攻撃に大した力は無い。それに、ブラッド状態に

かかる負荷も、傷の癒えていない今のお前では通常のそれを遥かに超える速度で進行している筈だ。」

「く・・・！」

高円寺の言ってることは間違いではなかった。

傷の癒えていない金太郎の体はブラッド状態にかかる負担が尋常ではなく、それは噛み砕いていえば嘗てなのはがカートリッジシステムを手に入れた時に、エクセリオンモードを使い過ぎた結果体に溜まってしまった負担と大差はないと言うことなのだ。

そんな若干配色を漂わせ始めた金太郎を見ていたなのは達は、何とか打開策を見つけ出そうとしていた。

「（このままじゃ・・・金太郎さんが・・・）」

「（何とかしねぇとな・・・おい、やれるか？）」

「（ああ。熊一人に負担は背負わせねぇ。）」

「（私達で金太郎殿の援護に回るぞ！）」

四人は金太郎の援護に回ることを決め込むと、高円寺には気づかれないように一度散開してその機会を窺いはじめた。

その間に、高円寺はイグノアランスを使って手当たり次第に周囲の者を破壊しながら金太郎にもダメージを与えようとしていた。

「くっ！」

金太郎は疲労困憊の体を宙に浮かせると、その状態からのダイナミックスラッシュの連発を高円寺に仕掛けるが、負荷が思いのほか体を蝕んでいた所為か一向に高円寺に当たらないままであった。

「どうした!?攻撃が雑になっているぞ!」

高円寺はそう言うと、デナイを発動させて空中の金太郎に攻撃を仕掛ける。

金太郎はそれを回避しながらブラッドカートリッジを使ってボルカニックボムを使おうとしたが、その瞬間に背後に回り込んだ高円寺の動きに反応が遅れ攻撃を許してしまう。

「は!」

「でやあああああ!!!!!」

「ぐあああああ!!!!」

高円寺は両手両足に圧縮した魔力で金太郎の体に負荷を与えると、そのまま力で圧倒し金太郎を撃墜させる。

撃墜した金太郎の装甲には皹が入り、それを見た高円寺も止めを刺そうと最後の攻撃を仕掛けに行った。

「ここまでだ、熊谷金太郎!」

「くっ!!」

と、金太郎が一瞬敗北を悟ったその時。

「俺の必殺技、パート６！！」

「エクセリオンバスター！！」

「何！？」

高円寺の攻撃を妨害してきたのは機会を窺っていたなのはと鬼太郎であった。

「鬼太郎！なのは殿！」

鬼太郎の火達磨蛍となのはのエクセリオンバスターが高円寺に向けて発射され、高円寺は金太郎に止めを加えることが出来なくなってしまう。

「くっ！小癪な真似を・・・！」

高円寺は攻撃を仕掛けてきた二人を先に撃ち落すためにイグノアランスを発動させるが、その瞬間別な場所で待機していたルキアとヴィータが更に追い打ちをかけてきた。

「私らを・・・忘れてんじゃねぇ！！」

「何！？」

〈Ｅｘｐｌｏｓｉｏｎ〉

ヴィータはカートリッジを二発ロードし、グラーフアイゼンの先端

をドリルのように変化させると先端に込められた魔力と回転機構で内部のものを一気に拡散・破壊するギガトンシュラークの発展系、シェアシューテルングスハンマーを発動させる。

「シェアシューテルングスハンマー！！！」

高円寺はその攻撃をまともに食らうと、衝撃と共に遥か後方へと吹き飛ばされる。

そして、その高円寺が飛ばされた方向で待ち構えていたルキアによって氷漬けにあってしまう。

「次の舞・白漣」

刀身から解放された冷気をその身に受けた瞬間、高円寺の体は一気に氷塊の中へと飲み込まれるがしばらくすると何事もなかったかのように氷を割って出て来る。

「くそ！！」

しかし、高円寺が出てきたところを待ち構えていた鬼太郎となのはがそれぞれに体を拘束する。

「縛道の六十三　鎖条鎖縛！」

先ずは鬼太郎の鎖条鎖縛により体を文字通り縛られる高円寺。

更に、なのはがその状態の高円寺をきつく縛り上げるために砲撃よりも初めに習得し、その後精度を上げた集束系の最強拘束魔法を発動する。

「レイジングハート！」

〈Ｒｅｓｔｒｉｃｔ　ｒｏｃｋ〉

光の束が無数に広がり高円寺の体をこれでもかと言うぐらいに拘束し、動きを封じ込める。

「ぐっ！」

何とか拘束を解こうと抵抗の姿勢を見せる高円寺だが、その隙になのはが金太郎に向かってハデスの一振りを発動することを促す。

「今です、金太郎さん！早くハデスの一振りで攻撃してください！」

「熊！ぼさっとするな！！」

「早くしろ！これ以上、こいつの所為で銀太郎達に無実の罪を重ねさせるつもりか！？」

「！」

三人の言葉を聞いた瞬間、金太郎は思い悩むようにアックスオーガを見つめる。

「金太郎殿！ご決断を！！」

四人の言葉が金太郎に向けて飛び交い、金太郎は最後の最後まで悩んだが銀太郎を救いたい、高円寺の野望を止めたいと言う強い想いが金太郎を突き動かした。

「・・・アックスオーガ・・・行くぞ！」

〈Ｂｌｏｏｄ　ｅｘｐｌｏｓｉｏｎ〉

金太郎はその瞬間、高円寺を倒すために自身の最強最後の切り札を発動させるために大きくアックスオーガを振りかぶり、それと同時にブラッドカートリッジを四発もロードし、魔力を極限までに上昇させていく。

やがて、魔力が先端部分に集積され最終準備が整った金太郎。

「くそ！こんなもの・・・・・・はっ！！」

何とか拘束を解いた高円寺だったが、その瞬間自分の目の前に飛び込んできた金太郎のアックスオーガに溜められた強大な魔力刃が、拘束を解いたと同時に飛んできたのだった。

〈Ｔｈｅ　Ｓｗｅｅｐ　ｏｆ　Ｈａｄｅｓ〉

「ハデスの・・・一振り！！！」

金太郎の渾身の思いで振り切られた最強最後の必殺技、ハデスの一振りが高円寺に着弾する。

着弾と同時に、周囲はあまりの破壊力と魔力の大きさゆえに土煙を火山が噴火したかのように巻き上げてなのは達は思わず目をつむってしまう。

高円寺の姿も何もかもが見えなくなると、金太郎はその場に膝をつ

いて息を上げる。

「は、は、は、は、は」

なのは達は直ぐに金太郎の元へと駆け寄り、体を気遣った。

「金太郎さん！」

「熊！野郎は・・・！？」

「・・・まだ生きている・・・だが・・・私も一度体力と魔力の回復を図らねば・・・」

「此処にいては危険だ。一先ず一護達の元に戻ろう。」

ルキアはそう思い立つと、四人がかりで重い金太郎の体を担ごうとした・・・その時。

「逃げられると思うのか？」

「「「「「！」」」」」

土煙の中より聞こえてきた最も恐れていた男の声。

高円寺は血塗れとなった体で立ち上がり、自身の魔力で傷を高速治癒させるとこの世のものとは思えぬほどの形相を浮かべて金太郎たちを睨んだ。

「どうやらお前は、俺を倒す最大のチャンスを失ったようだな。」

「馬鹿な・・・・！？」

「あの攻撃で・・・・・・・無傷だなんて・・・・！！」

あまりに他を逸した強さと身体能力を持つ高円寺に驚愕を飛び越え、恐怖を感じる金太郎となのは達。

「・・・よくもこの俺にこれだけの深手を負わせてくれたな、熊谷金太郎・・・それと時空管理局の魔導師共。折角拾った命だったかが、それもここで終わりだ。」

そう言うと、高円寺は利き手に魔力を圧縮させると四人をまとめて葬り去るために一気にそれを巨大化させて衝撃波を放った。

「死ね！！」

四人は為す術もないまま、この高円寺の攻撃で本当に人生の終わりを迎えてしまうかと思った。

だが、その時思わぬことが空よりやってきたのだ。

「「「「「「！！」」」」」」

高円寺の衝撃波目掛けて放たれた、四人にとっては見慣れた翡翠の斬撃と青白い斬撃が同時に降り注ぎ、凄まじい破壊力で高円寺の技を相殺させ砂埃を巻き起こらせた。

一瞬の出来事に高円寺と四人は目を疑ったが、砂埃が晴れた瞬間・・・――――なのは達の目に飛び込んできた二人組。

「へ。圧されてんな。」

「仕方ないですよ。傷が未だ塞がってないのに、勝手に飛び出して行ったのは金太郎ですから。」

そう、このピンチに駆けつけてきたのは翡翠の魔導死神ユーノ・スクライアとその師匠で伝説の死神代行と謳われる黒崎一護であった。

「ユーノ君!!一護さんも!!」

「おお!!店長!!」

ユーノと一護の登場に、なのはや金太郎は大いに喜ぶ。

それに対して高円寺は鋭い目線で二人の方を睨み付ける。

「ちっ!翡翠の魔導死神・・・それに死神代行・・・」

ユーノと一護は師弟揃って同じような鋭い視線で高円寺の方を睨み付ける。

この二人の登場で、いよいよ戦いは終盤を迎えようとしていた。

そして、高円寺との戦いをきっかけに棺桶の中の銀太郎がそろそろ覚醒を迎えようとしていた。

次回、銀太郎がついにその時を迎える!!

命と奮戦！　金太郎、究極の選択（後書き）

教えて、ユーノ先生！

ユ「今日は更木剣八さんの紹介だよ♪」

ユ「十一番隊隊長で尸魂界最凶の戦闘凶であるこの人は、戦いの為なら自分の命をもその代償として考えるまさしく無頼漢。」

ユ「殊斬魄刀戦術に関して一護さんのそれを容易に凌ぎ、うたれ強さは不死身と言われる程とんでもない頑丈な人なんだ。」

一「あいつとは顔合わせるたびに面倒なことになるからな・・・・・・参るぜ。」

剣「何が参るんだよ、一護？」

一「げ！！剣八！？」

突然の剣八の登場に恐怖に戦く一護。

剣「へへ・・・やっと見つけたぜ、一護。ちょいと・・・俺と殺り合おうじゃねぇか！！」

剣八は不敵な笑みを浮かべて一護向けて剣を振り下ろし、ギリギリのところで回避した一護はそのまま全速力で疾走。

一「勘弁しろよ！！！誰がてめぇとんなことするかよ！！！！」

剣「一護!!!待て、コラ!!!!」

直ぐに一護を追いかける剣八。

恋「あいつはいつまで更木隊長に狙われ続けるんだろうな?」

ユ「ご愁傷様・・・・・・一護さん・・・・・・」

一「勝手に殺すなよ!!!」

魔導師図鑑ハイパー!

機動六課特別エグゼクティブアドバイザー、ユーノ・スクライア。

司書長時代のだらしない生活を見直すため、日頃から炊事・洗濯は勿論・・・部屋の掃除も徹底し、日課のジョギングもかかさず行う真面目な性格。

ユ「アイナさん♪染みのついたトレーナーの汚れを落とすには何を使えばいいですからね?」

こう言ったことに関してはあまり知識を有していないため、分からないことがあれば機動六課の寮母であるアイナ・トライトンの元を訪れる。

ア「そうね・・・・・・この手の染みは大根を摩り下ろしたのを歯ブラシで叩きながら軽くこすればよく汚れが落ちるわ。」

ユ「へぇ〜〜〜そうなんだ。助かりますよ、アイナさん♪」

ア「ユーノ先生も毎度のことながら真面目ですね。感心感心！」

一方、それに引き替え恋次の使う部屋はゴミや日常品が散乱し見るに堪えない有様と化している。

その光景に思わず吉良が口にしたこの言葉。

吉「君は少し掃除ぐらいしたらどうなんだい？」

恋「い、今からやろうと思ってたんだよ！！」

進化!?最後のダイシーの脅威!（前書き）

銀「一人だ・・・・・人間は生まれながらにして一人だ・・・・・・そして、肉体が朽ち果てて、誰の記憶からも自分の存在が忘れ去られたとき、人は本当の意味で独りとなる。」

銀「僕は結局、一人ぼっちに逆戻り・・・・・だけど、オーリー達と一緒にいた時間はみんな僕の心に刻み込まれ、それが僕の生きる糧となる。いかなる事がこの先待ち受けていようとも、僕は生きて証明するんだ。この大地に僕らが生きた証と失ったパトリオットの誇りを・・・！」

ユ「ユーノ・スクライア外伝　パトリオット篇・・・・・・始まります。」

進化！？最後のダイシーの脅威！

＞ｉ１８７６６―７０９＜

ユーノ・スクライア外伝・・・前回の三つの出来事。

一つ：　追いつめられるなのは達の前に鬼太郎が現れる。

二つ：圧倒的な状況に更に介入してくる金太郎。

そして、三つ：高円寺が反撃をしようとした矢先、ユーノと一護がなのは達を助ける。

金「・・・アックスオーガ・・・」

〈Ｔｈｅ　ｓｗｅｅｐ　ｏｆ　Ｈａｄｅｓ〉

高「くそ！こんなもの・・・・・・はっ！！」

なのは達のバインドに体を拘束され動けないでいる高円寺に金太郎がハデスの一振りを発動させる。

金「ハデスの・・・一振り！！！」

ハデスの一振りの絶大な威力をその身に受けた高円寺は攻撃を受けると周囲の建物に激突する。

な「金太郎さん！」

鬼「熊！野郎は・・・！？」

金「・・・まだ生きている・・・だが・・・私も一度体力の回復を図らねば・・・」

ル「此処にいては危険だ。一先ず一護達の下に戻ろう。」

ルキア達は一度十三番隊隊舎で待機している一護とユーノ達の元に急ごおうとするが、その時高円寺が復活を果たす。

高「逃げられると思うのか？」

全「「「「「！」」」」」

高「・・・よくもこの俺にこれだけの深手を負わせてくれたな、熊谷金太郎。折角拾った命だったかが、それもここで終わりだ。」

高円寺はものすごい剣幕で金太郎たちを睨み付けると、右腕に魔力を収束させて衝撃波を放つのだった。

高「死ね！！」

逃げ場のない絶体絶命のなのは達。

その時、その魔力衝撃の上より見慣れた青白い斬撃と翡翠の斬撃が勢いよく降り注ぎ、建物に鋭い跡を残した。

全「「「「「！！」」」」」

砂埃が晴れ、目をつむっていた全員の瞳に映ってきたのは――――――

一「へ。圧されてんな。」

ユ「仕方ないですよ。傷が未だ塞がってないのに、勝手に飛び出して行ったのは金太郎ですから。」

斬月を肩に乗せる一護と、同じく晩翠を手に取るユーノであった。

な「ユーノ君！！一護さんも！！」

金「おお！！店長！！」

高「ちっ！翡翠の魔導死神・・・それに死神代行・・・」

二人の登場に一層剣幕を鋭くする高円寺と、そんな高円寺を師弟同士同じ瞳で睨みつける一護とユーノ。

間もなく、この戦いも最終局面を迎えようとしている。

ユーノは高円寺を睨み付けながら、後ろで膝をつくなのはや金太郎に声をかける。

「・・・なのは・・・金太郎・・・大丈夫かい？」

すると、なのはも金太郎もユーノの大きな背中を見つめながら安心した様子で返事をする。

「うん。金太郎さんに比べれば、私の怪我なんて大したこと無いから。ありがとう・・・心配してくれて。」

「この金太郎、店長のような方と出会えたこと・・・深く感服いたします！」

そんななのはや金太郎の言葉を聞いて、若干照れた様子のユーノ。

一方で一護もルキアやヴィータ達の状態も尋ねる。

「ルキア。ヴィータ。鬼太郎も大丈夫か？」

「ああ・・・貴様に心配されずとも平気だ・・・」

「あたしをあんまし見くびんなよな・・・」

「け！オレンジ頭に心配されるようじゃ、俺も焼きが回ったな！」

一護の言葉にはあまり素直な気持ちを表現できないこの三人だが、一護もそんな三人の気持ちを分かってか鼻で笑う。

「そうか・・・直ぐに終わらせて、怪我の手当てをするからよ。」

「なのは達は一度金太郎を連れてここから離れるんだ。」

「悪りーがここから先、高円寺の相手は俺とユーノでするからよ。」

なのは達もユーノと一護の言葉を聞くと、同じ結論に居たり代表してルキアが返事をする。

「どうやら、それしか選択肢はないようだな。」

「ああ。」

一護はそう言うと、勢いよく自身の霊圧を放出させ卍解のポーズをとる。

「卍・解!!!」

その瞬間巻き起こる一護から流れ出る漆黒の霊圧の嵐が高円寺やなのは達の体にもひしひしと伝わってくる。

高円寺は一度空中にその身を預けると、一護が渦の中から出て来るのを静かに見守った。

そして、漸く一護が天鎖斬月を持って渦の中から出て来る。

「・・・行くぜ、ユーノ!!」

「了解!」

ユーノは一護と共に空中に足を止める高円寺向かって突進していく。

高円寺は二人の剣戟を巧みに躱すと、そのまま二人を誘導するかのように銀太郎の入った棺桶を背に移動を開始する。

「待て！」

「逃がすか！」

二人も高円寺を逃がさないように全身全霊で追跡を始める。

高円寺は廷内を無重力の中を疾走するかのように警戒に飛び回りながら一護とユーノを誘い、二人も高円寺に追いつくとすかさず攻撃を加える。

「てやあああ！！！！」

高円寺は一護の斬撃を手の甲に圧縮した魔力で防御し、その技と技がぶつかりあうことで廷内のとある場所で爆発が巻き起こる。

爆風が晴れ、二人がかりで高円寺に向かっていく一護とユーノ。

高円寺はそんな二人に魔力衝撃をぶつける。

「はっ！！！」

高円寺の放つ魔力衝撃を真正面から食らった二人は廷内に設けられた塔を貫通しながらまた別の塔の壁に激しく体を衝突させる。

「くっ！！」

「やったな！」

二人は壁の中から出て来ると、刀身に霊力を注ぎ込んで得意の斬撃を高円寺に向けて放つ。

「月牙天衝！」

「翡翠斬・八千刀！！」

「なっ！」

高円寺に向かって放たれる漆黒の斬撃と翡翠に輝く八千本の刃。

直撃を受けては流石にまずいと思った高円寺はどうにかその斬撃をぎりぎりの所で躱しきるが、それ以外の建物や周囲に佇むものすべてが二人の斬撃による崩れ落ちてしまった。

その後も、二人は逃げる高円寺を追跡しながら攻撃を続けていく。

「「てりゃあああああ！！！！」」

高円寺も二人の攻撃に直撃しないことに気を付けながら、銀太郎の棺桶を背負い直し剣幕を浮かべる二人の顔を凝視し、不敵な笑みを浮かべる。

「ふん。」

「「・・・・・・――――――」」

その頃、なのは達は移動をしながらの治癒をなるべく済ませるとユ

ーノと一護に言われた通りに金太郎を連れて十三番隊隊舎へと向かっていた。

想像以上に重い金太郎を四人がかりで運ぶなのは達は金太郎の容体を気遣う。

「大丈夫ですか!?」

「はい・・・申し訳ありません・・・」

すると、そんな四人の霊圧を察知して恋次が走ってきたのだ。

「ルキア!それにお前らも!?」

「恋次。ちょうど良かった。肩を貸してくれ、私やヴィータでは届かぬ。」

「ああ。」

恋次は早速鬼太郎と一緒に金太郎の肩を担ぎにかかる。

と、そこへ恋次の後を追って走っていた吉良や浦太郎、さらにははやてを始めとするフォワードメンバー全員がその場に集合した。

「なのは!ヴィータ!よかった、無事で!」

「フェイトちゃん!フェイトちゃんも怪我はもういいの?」

「うん。もう大丈夫。卯ノ花隊長に治療してもらったから、いつでも戦えるよ。」

なのはもその事を聞いて安堵の表情を浮かべる。

他のフォワードたちも目立った怪我は一切しておらず、シグナム達もなんとか戦いに間に合えるだけの怪我は治癒されていたようだった。

すると、浦太郎はその場にいないユーノと一護の事を金太郎に尋ねる。

「金ちゃん・・・店長と一護さんは？」

「先程から、高円寺と激しい戦いを繰り広げて居るはずだ。」

「高円寺・・・・・・」

全員は高円寺という言葉を聞くと、眉間にしわを寄せるのであった。

「それにしてもかなりの怪我やな・・・なのはちゃんも大丈夫なん！？」

「私は平気。途中で粗方直したつもりだから・・・それより、先に金太郎さんの処置をお願い。まだ塞ぎ切っていない体だから。」

「了解や。吉良さん、手伝ってもらえます。」

「ああ。勿論だ。」

はやては吉良と共に移動をしながらの治癒を行おうとしたが、その瞬間鬼太郎は担いでいた金太郎の肩をぽっと離す。

「おい、熊!!」

そして、激戦によって満身創痍の筈の金太郎の顔面に右ストレートで渾身の拳を加え、金太郎を殴り倒した。

「ぶっ!」

「先輩!」

「ちょ、鬼太郎さん!いきなり何を!?」

全員もこの鬼太郎の行動には度肝を抜いたが、その一方で鬼太郎は次のように語りかけた。

「てめぇな・・・勝手に出て行きやがって・・・その上こんな怪我までしやがって。俺やこいつらがどんだけ心配したか、分かってんのかよ!!!」

金太郎はその言葉を聞くと、思わず胸が張り裂けそうな思いとなり自分をこんなにも心配してくれる鬼太郎や他の仲間の優しさに思わず涙を流す。

「き・・・鬼太郎・・・みなさん・・・本当に・・・申し訳ありません!!そして・・・ありがとう・・・!!」

なのは達もそんな金太郎の言葉に破顔一笑する。

と、そこへ遅れて到着してきたのは浮竹であった。

「おお、居たか！」

「浮竹隊長！」

「一護君とユーノ君は・・・高円寺と戦ってるようだね。」

「はい・・・・・・！」

すると、なのは達の耳元に激しい戦闘を繰り広げるユーノ達の戦闘の様子が聞こえてくる。

「ユーノ君・・・一護さん・・・」

不安げな表情で崩れゆく建物を目にするなのは達。

「一護君たちばかりに負担をかけさせれるのは不本意だが、今は取りあえず高円寺は二人に任せるしかあるまい。俺達は、一刻も早く銀太郎君を救い出すしかない。」

「ダイシー・ネリンネルングが暴走する前にあれを何とかせねば・・・ん？」

と、ルキアが言いかけた時だった。

全員の元に京楽からの伝令を受けた地獄蝶がルキアの手に止まった。

「地獄蝶・・・八番隊、京楽隊長からの緊急伝令です。」

「京楽から！？」

浮竹は京楽からのこの急ぎの伝令に何かただならぬものを感じていたが、その真意が何なのかは分からないままであった。

「浮竹隊長へ・・・大至急、瀞霊廷中央図書館に来て欲しい。パトリオットに関する文献を読み漁っていたら、あるとんでもない事実が判明したとのことです。」

「とんでもない・・・事実だと・・・！？」

事態を重く見た恋次も直ぐに浮竹に中央図書館に向かうように諭した。

「浮竹隊長。銀太郎のことは俺らが何とかします。浮竹隊長は、早く中央図書館に行ってください。」

「ああ、そうだな。では、後のことは頼んだよ。」

「「「

中々にしぶとい高円寺と戦いを繰り広げる二人は肩で息をしながら高円寺と対峙し続ける。

同じように高円寺も二人の攻撃を所々受けた形跡を見せながら肩に抱える銀太郎の棺桶を担ぎ直す。

「ここまで俺についてこれるとは、褒めてやってもいい。」

「高円寺。銀太郎君をお前はどうするつもりだ?」

「さぁな。」

「てめぇ・・・あくまで知らない振りをするって言うのかよ。胸糞悪りー!」

「そんなに俺が銀太郎をどうしたいかが知りたいのか?」

「当たり前だよ。銀太郎君の中にあるダイシー・ネリンネルングを如何にかしない限り、根本的な解決にはならない。何としても銀太郎君を解放して貰うぞ。」

「ふん。ならば力ずくでやってみろ。」

「言われなくても、そのつもりだ!!」

二人はその瞬間、霊圧を一気に上昇させ周囲に垂れ流しに近い状態まで持ってくると、刀を構え直して同じように魔力を上昇させる高円寺に向かっていった。

「「ほあああああああああ!!!!!!」」

「せやあああああああああ！！！！！！！！」

三人が激しくぶつかり合う瞬間、凄まじい霊圧と魔力が一気に放出され双極の丘の上より天を劈く勢いで三人の力が舞い上がっていく。

その頃、京楽からの連絡を受け急いで中央図書館へと向かった浮竹はと言うと。

「どういう事なんだ、京楽？お前の言っている、あるとんでもない事実とは・・・」

「うん・・・七緒ちゃんと一緒にパトリオットの資料を読み漁っていたらさ、ダイシー・ネリンネルングのことと一緒にもう一つ別の力の存在も確認したんだ。」

「別の力の存在だと？」

怪訝そうな表情を浮かべる浮竹。

七緒はそんな浮竹にこの図書館で見つけたその存在に関する詳細な事を述べる。

「はい。見つけ出した資料によれば、それは嘗ての初代ダイシーとその一派が創り上げたもので間違いないのですが・・・その力は、ダイシー・ネリンネルングとは明らかに他を逸したものなんです。」

「何？」

「力の発動条件は、ダイシー・ネリンネルングが発動しダイシーの

後継者がダイシー・ネリンネルングを完全に馴染ませた一日の猶予を以ってして、力の余波が周囲の空間に流れ出ることを条件に、異空間より出現すると記されています。」

「異空間より出現！？」

「・・・どうやらあの高円寺とか言う男、相当パトリオットについて調べてあるね。それに浮竹、僕も今まですっかり忘れてたんだけど・・・あの高円寺、こんな事言うのも何だけど・・・実はずっと前に僕らは面識があるんだよ。」

「何！？そんな・・・だって奴はパトリオットの一人で・・・！？」

京楽の言葉に全く身に覚えのない様子の浮竹であったが、そんなとき浮竹はユーノ達から聞かされていた高円寺の特徴と彼が使うデバイスの名前を思い出した。

〈ギガトロン、セットアップ！〉

「ギガトロン・・・・・・はっ！まさか・・・そんな莫迦な・・・！」

浮竹はその瞬間、遠い記憶に忘れてしまっていた一つの重大な事実に気づき、京楽も編み笠を被り直しながら神妙な表情でこう続けた。

「・・・漸く気がついたみたいだね。そう・・・これは単なるパトリオット騒動なんかじゃない。もっとこの世界の存亡に深く関わった・・・大層な話だったんだよ・・・」

京楽が意味するその言葉には何が隠されているのか！？

それを知ることになるのはこの戦いの終盤となるのだが、今は一先ずそんな謎お置き存在である高円寺虎彦と戦いを繰り広げる一護とユーノに視点を戻そう。

「ほあああああああ！！！！！」

「「はあああああああ！！！！」」

両者の霊圧と魔力がぶつかり合うことで幾度となく発生する強い衝撃と轟音。

一護とユーノは距離を取ると、再び高円寺を睨みながら刀を構え直し高円寺も些か二人の実力のほどを甘く見ていたらしく表情が曇ってきた。

「ちっ！中々しぶとい奴等だな。」

「まだまだ。俺らの力を舐めんじゃねぇぞ！」

「そろそろお前との勝負も決着をつけないとな。」

そう言うと、三人は再び霊圧と魔力を上昇させると勝負に決着をつけるためにこの一撃で片づける覚悟で攻撃に転じようとした――――その時。

高円寺の肩に担いでいた銀太郎の棺桶が突然光を放ちだしたのだ。

「「「！！」」」

光は徐々に大きくそして輝きを増していき、高円寺はそれを見ると不敵な笑みを浮かべる。

一方の一護とユーノは不測のこの事態に少々驚いていた。

「これは・・・！？」

「この光は・・・・・・一体！？」

「・・・来たか。ついに銀太郎の体にダイシー・ネリンネルングの力が完全に馴染んだようだ・・・」

「「何！？」」

驚愕の表情を浮かべる二人。

すると、そこへ時同じくして双極の丘へとたどり着いた恋次・なのは・フェイト・シグナム・ヴィータ・アギト・浦太郎・鬼太郎、そして金太郎の九人がユーノ達に駆け寄り事態の重さを受け止める。

「しまった！」

「遅かったか！」

「なのは！みんなも！」

「ふん。どうやら主役がお目覚めして役者も揃ったことだし、端役の俺はそろそろここいらで退場させて貰うとしよう。せいぜい銀太郎の怒りにその身を焼かれるがよい。ははははははははあ！！！！！！」

高円寺はそう言うと、棺桶をその場に残して一瞬のうちにユーノ達の前から姿を消し去ってしまった。

「なっ！また逃げやがって！！！高円寺、戻ってこいコラ！！」

「一護！そんなこと言ってる場合じゃねぇぞ、こりゃ・・・」

「来る・・・！」

全員は一度棺桶の方に目を向け、その光輝く棺桶から出て来るであろう銀太郎のことを警戒し武器を手に取った。

そして、光の大きさが最高潮に達し瞬間に棺桶は破壊され凄まじい魔力が溢れ出てきた。

魔力の大きさに全員は後ずさりをしたが、その魔力が弱まり改めて前を見てみると。

「あ・・・・・・」

そこに立っていたのは見た目は全く変わらないが、漂わせる雰囲気と尋常ならぬほど巨大な魔力を手に入れた真のダイシーとして覚醒した、狼谷銀太郎がそこに居たのだから。

「銀太郎・・・・・・」

金太郎は仮面越しに再び相見えることとなった銀太郎の姿をその目に焼き付け、銀太郎本人を初めて見る恋次達はその子供とは思えぬほど強い力を有したその姿に驚愕していた。

「あれが・・・そうなのか・・・」

「本当に・・・まだ子供じゃないの・・・・！？」

「だけど・・・この力は子供のそれとは思えぬ・・・・！！」

銀太郎の力に脅威を感じるユーノ達だったが、目覚めた銀太郎の方は目に涙を浮かべながら次のように語り出す。

「御免ね・・・みんな・・・本当に御免ね・・・僕がボスとして弱かったばっかりに・・・辛い思いをさせちゃったね。みんなの想いは決して無駄にはしない。あとは、僕に任せてゆっくりとお休み。」

死んでいったパトリオットたちの分までこの戦いに何としても勝利することを誓った銀太郎は徐に一歩一歩一護達の方へと近づき、全員は武器を構え直して身構えた。

「ついに大将のお出ましか。」

「気をつけろ。この尋常ならぬ殺気と魔力・・・呑まれたら即死だ。」

「・・・く・・・ん！？」

自分の魔力を遥かに凌駕する目の前の少年に若干恐怖も感じているなのは達であったが、すると突然ユーノが刀を一度収めると銀太郎に向かって歩み出していったではないか。

「ユーノ？」

行動の真意が読めない一護達であったが、当のユーノは向かい合った銀太郎を凝視するとため息交じりにこう質問してきた。

「・・・ふう。君は、本当に銀太郎君かい？」

「はい。間違いなく狼谷銀太郎ですよ・・・元無限書庫初代永久名誉司書長・・・それで、今は翡翠の魔導死神のユーノ・スクライアさん。」

「ちょっと見ないうちに、随分と凄い力を手に入れたようだね。」

「何事も力を得る過程と言うのは凄まじいものですよ。あなただってそうだって筈ですよ？」

「・・・まぁ、それもそうだけどさ・・・本当に、ダイシー・ネリンネルングと・・・融合してしまったんだね。」

「“融合”とはちょっと違いますよ。“所有化”と言って貰いたいですね。今までのダイシーが嘗て見つけられるず御することも恐らくままらなかったダイシー・ネリンネルングをね。」

そんな傲慢とも捕えられる銀太郎の言葉に顔をゆがめるユーノは銀太郎にこう返した。

「・・・御することもままならなかったか・・・・・・確かに言うだけはあるね。ただ、それは些か君の“不遜”にも聞こえるけどね。」

「“不遜”ですか？実にあなたらしい皮肉の籠った負け惜しみだ。

いや、それが負け惜しみとかどうかすら既にどうでも良い事だ。なぜなら・・・――」

その瞬間、銀太郎はユーノの目の前に瞬間移動し・・・――ユーノの体に手刀の一撃を加え、体を貫く。

「・・・ぐ・・・」

「！ユーノ君！！！」

ユーノの無残な姿に声を張り上げるなのはを余所に、銀太郎は冷笑を浮かべながらユーノに更に続ける。

「なぜならあなたはこのダイシー・ネリンネルングを所有化した僕を止める機会を永遠に失っているのですから。」

だが、その時――――――ユーノの体は唐突に風船のように膨れ上がりそのまま破裂する。

「！」

これには銀太郎も目を見開き、またなのは達は以前にも見たことのあるユーノの芸当に驚いていた。

「あれは・・・！？」

そして、銀太郎が気づいた時にはユーノは銀太郎の背後に回り込んで軽く手を当てバインドを仕掛ける。

「“チェーンバインド×１０”」

すると、銀太郎の体をユーノの強固なチェーンバインドの束が拘束する。

銀太郎は体を拘束されていながらも、余裕の表情を浮かべユーノにこう口にしてくる。

「そう言えば、あなたの師匠は黒崎一護さんだけじゃなかったんでしたね。技術開発と鬼道の師である浦原喜助と白打と瞬歩の師である四楓院夜一の二名。今の技も、元を正せば浦原喜助の作り出した携帯用の義骸だ。この展開でそんな小細工を使うまいと油断してましたよ。」

「・・・それは残念だったね・・・」

「それで、この程度のバインドで僕を縛ってどうするつもりです？」

銀太郎のその言葉を聞いたユーノであったが、少しの間を置いたのち次のように返す。

「“この程度のバインド”？どこ迄が“この程度”なんだい？」

ユーノはそう言うと、チェーンバインドに重ねてストラグルバインドを仕掛ける。

「“ストラグルバインド×２０”！！」

ユーノの背後から現れるストラグルバインドの束が銀太郎の体を巻き取り、強化魔法の一切を使用できなくする。

「“レストリクトロック”！！」

更に、ユーノはその瞬間なのはが嘗て一番最初に覚えた集束型の高速最強魔法であるレストリクトロックを当然のことながらデバイスなしで発動させ、銀太郎を縛り付ける。

銀太郎を絡め取る光の輪が敢えて動かないでいる銀太郎を縛り付け、銀太郎自身はユーノが発動したこの技の脅威をよく知っていた。

「（これは・・・集束系の最強拘束魔法・・・それをデバイスなしでこんな一瞬で・・・）」

すると、ユーノはそんな銀太郎が動けないでいる今のうちに九十番台の鬼道による攻撃をするために詠唱を始める。

「滲み出す混濁の紋章　不遜なる狂気の器　湧きあがり・否定し痺れ・瞬き　眠りを妨げる」

「！」

「爬行する鉄の王女　絶えず自壊する泥の人形　結合せよ　反発せよ　地に満ち己の無力を知れ」

銀太郎はこの鬼道の能力を直感で理解し、ユーノ自身は自分の指先に黒い霊圧のエネルギー体を発生させている。

「そんな鬼道を使わせると思いますか？こんなもの・・・」

「遅い！破道の九十『黒棺』！！」

黒い直方体のようなもので対象を囲い、無数の刺し傷を負わせるこの黒棺によって銀太郎は完全に覆い隠されその後跡形もなくなる。

そんなユーノの発動した黒棺を目の当たりにした恋次やなのは達は言葉すらも失いかけていた。

「・・・・・・あんな鬼道・・・・・・ありかよ・・・・・・」

「・・・・・・完全詠唱でこの威力か・・・・・・正しくとんでもねぇな・・・・・・」

「やっぱり、ユーノ君は凄いよ・・・・・・！」

黒棺を発動したのち、跡形もなくなった箇所を見ながらユーノは呟く。

「・・・銀太郎君・・・君はどうやら本当に・・・ダイシー・ネリンネルングを取り込んだ事で油断していたみたいだね・・・」

「その通りですよ。」

「な！」

その瞬間、ユーノの背後にいつの間にか回り込んでいた冷笑な表情を浮かべる銀太郎。

ユーノは咄嗟に振り返ろうとした瞬間、銀田等の手刀がユーノの体を切り裂く。

「遅い。」

手刀を食らったユーノは胸から血をふきだす。

「か・・・・・・」

「まさか・・・!?」

「そんな!!」

「油断もしますよ。警戒する必要が最早無いんですから。感じるんですよ。ダイシー・ネリンネルングを取り込んだ僕の体はかつてダイシーに於いて比肩するものの無かった能力の全てを遥かに凌駕し始めています。死神の九十番台の鬼道ですら最早躱すに値しません！」

「・・・それは違うよ。」

「？」

「鬼道を躱さなかった事が油断だと言ってるんじゃない。ダイシー・ネリンネルングを取り込む前の君なら、何の考慮もなく僕に二度も触れる事などあり得なかったよ。」

すると、その瞬間・・・――銀太郎の胸部突如現れる翡翠色の光が銀太郎の体の自由を奪い、銀太郎自身は驚愕の表情を浮かべる。

「！これは・・・・・」

「何!?あの技・・・・・・！」

見たこともない技に驚きを隠せないなのは達。

すると、ユーノが徐に帽子をかぶりながらその技の名を口にする。

「・・・“コンカーバインド”って言ってね、僕が四年の間に新しく創り出した相手のリンカーコアを名の通り征服して、魔力による自滅を誘う封殺型の魔法さ・・・」

「なっ・・・！」

「・・・君は自分自身のリンカーコアから発せられる魔力で内側から焼き尽くされるから、ご注意を。」

すると、銀太郎の胸に現れていた翡翠の光がやがて銀太郎を包み込んでいくとそのまま巨大な爆発を発生させて銀太郎を飲み込んでいった。

全員はその技の威力と壮大さに目を奪われ、唖然としていた。

「！・・・・・・」

「こりゃ・・・・・・」

「相変わらずウチの店長は怖いね・・・・・・・・」

「だが、あれで銀太郎が本当に・・・・・・・・！？」

不安げな表情を浮かべるなのは達。

ユーノは一度その場から離れると、静かになのは達の元に歩いてき

た。

なのはは恐る恐る銀太郎の事を尋ねる。

「・・・ユーノ君・・・銀太郎君は・・・」

「まだだよ。」

「え・・・・・・」

冷静沈着な様子でそう答えると、ユーノは更に続けてきた。

「殺す訳ないよ。ただ、あんなもんでお終いならカワイイものだよ。ただのチートで済むんだからね。すぐに、出て来るさ。」

そうユーノが口にした瞬間、轟音を響かせ目の間に広がっていた翡翠の光の中から体全体をダイシー・ネリンネルングの力によって守られた無傷の銀太郎が徐に登場する。

これには恋次や鬼太郎、なのは達も苦い表情を浮かべる。

「げ！」

「おいおい・・・冗談きついぜ・・・！」

「あの攻撃でほとんど・・・いや、全くの無傷なんて・・・」

度肝を抜き若干後ずさり気味のなのは達を頭上から仰ぎ見ながら、銀太郎はユーノの攻撃の展開に対する評価を述べる。

「九十番台の鬼道を囮に僕の攻撃を誘い・・・自らが開発した魔法で内部から焼く・・・・・流石は“天才”と謳われる魔導死神だ。こんな出会いでなければ、もっと違う形で仲良くしたかったですよ。」

「・・・ありがとう・・・」

銀太郎からの評価と意外な言葉を聞き入れたユーノは帽子をかぶり直しながら一応の言葉を返す。

「しかし残念ながら、聖地の地下で封じられていたダイシー・ネリンネルングはあなたの理解を超えています。四年の間に創り上げたこの封殺魔法も僕に届く事は無いんですよ。」

「・・・・・」

銀太郎の言葉を沈黙を以て聞き入れるユーノの姿と相変わらずの冷笑を浮かべる規格外な能力を発揮している銀太郎を見ながら金太郎は仮面越しに険しい表情を浮かべる。

「銀太郎・・・・・何ということか・・・・・」

他の全員の心境も金太郎と同じようなものだった。

そして、全員を見下ろしながら銀太郎はついに自身の力を解放しようと懐に手を伸ばす。

「・・・思いの丈を通すために・・・誇りを取り戻すためには・・・言葉だけじゃ足りないのは分かっていた。だから、自分の思いは自分の力であなた方に分からせる。ダイシーの血を受け継ぐものとし

て、あなた方ミッドとベルカの魔導師に。」

「面白いね・・・やってみなよ！」

銀太郎の言葉になのはも思わずレイジングハートを握る力を強める。

「いきますよ。」

銀太郎はそう言うと、懐から自身のデバイス『オプティマスプライム』を取り出し十三枚のカードを空中に展開させた。

「？カード・・・！？」

「何をする気だろう・・・？！」

怪訝そうに銀太郎の正面で時計回りに動く十三枚のカード。

銀太郎は少しの間を置くと、徐に構築の口上を唱える。

「オプティマスプライム、セットアップ。」

〈Ｓｅｔ　ｕｐ〉

すると、口上を唱えるや否やカードたちは高速回転を始めそれと同時に金色に輝く凄まじい魔力が爆発的に広がり、ユーノ達はその魔力に思わず身構える。

「くっ！！な、何だ・・・この魔力は！！」

その様子は双極の丘の下からでも窺え、ティアナやスバル達フォワ

ードメンバーとはやて達残りの隊長陣も眼前の常軌を逸した出来事に目を奪われていた。

「あれは！？」

「すっごい風・・・それに、銀太郎って子の魔力がどんどん上がってるのを感じる！」

「急ぐわよ！」

フォワードメンバーとはやて達は急いでなのは達の元に駆け寄るため、全速力で瀞霊廷を爆走する。

そんな中、未だ金色の魔力光で視界が晴れない双極の丘で、一護達はそれぞれの武器を取りながら銀太郎の登場に神経を研ぎ澄ませていた。

「くそ！！何が出てくるんだ・・・！？」

「構築するだけでこの魔力量ってことは・・・半端じゃねぇぞ！」

「銀太郎君・・・」

するとその時、ユーノは光の中から現れる人影に気づき全員に促す。

「出てきたよ、みんな。」

光の中から現れるその銀太郎の姿を目撃した瞬間、全員は思わず目を疑う。

「・・・・・な・・・何ですか・・・・・・・・・あれ・・・・・・・」

全員の目の前に現れた銀太郎の姿はあまりに違っていた。

身体全体を纏う鎧の基本カラーはディアマンテゴールで、左右の肩・上腕部・太腿・膝・脚部および右下腕部の１１箇所にそれぞれに模様の異なる紋章〈ダイシークレスト〉、胸部にオプティマスプライムの紋章〈プライムシンボル〉が追加された非常に重厚感の溢れる形態がそこにはあった。

そして、そんな重厚感ある鎧と仮面に覆われた銀太郎の右手には重醒剣と呼ばれる武器へと姿を変えた武器が握られていた。

全く見当が射な姿へと変貌を遂げた銀太郎の容姿を凝視するなのはやフェイトは先ずその特徴たる金色の鎧に目を奪われる。

「甲冑・・・？」

「なのかな・・・？」

対するユーノの方は、銀太郎が身にまとっているこの金色の鎧を見てある一つの仮説を立てていた。

「（十三枚のカードを同時に融合させたのか?!）」

「へ！何だか知らねぇが随分仰々しいな。だが、ここで負けるかよ！」

と、鬼太郎が意気込んだ瞬間だった。

銀太郎はユーノ達全員に気配を感じさせぬまま近づいていき、静かにその場に降り立った。

「「「!!!」」」

「「「え!?」」」

自分たちですら何が起こったかどうか分からないでいる中、銀太郎は仮面越しに自身のデバイスに関するご高説を行う。

「ダイシーの後継者が長きに渡って身に纏ってきた甲冑と、僕のリベル式インテリジェントデバイス『オプティマスプライム』。残念ながら、真のダイシーの後継者となり力を蓄えたこの姿の僕を、倒すことは不可能です。もし、相手が僕で無ければ――――――勝利はあなた方のものだったでしょう。」

「この!!!舐めた口の利き方しやがって!!」

傲岸不遜な銀太郎の物言いに怒りを露わにする鬼太郎をなだめる浦太郎。

「先輩、挑発に乗っちゃ駄目だよ!」

「挑発かどうかは、一度武器を交えてから口にする事ですよ。」

銀太郎がそう言うと、ユーノは銀太郎の言葉に応えるために仕込み杖を取り出し晩翠を解放する。

「・・・そうかい。じゃあ・・・君のお望みどおりのやり方で質疑応答といこうか・・・」

「それが、あなたの斬魄刀ですか。いいでしょう・・・力の差を見せてあげます。」

ユーノの刀を拝見すると、銀太郎は右手に持っていた重醒剣を構え直してユーノと向かい合う。

両者が沈黙を以て向かい合う中、なのははただならぬものを感じ不意にユーノへの不安を感じてしまう。

「・・・ユーノ君・・・」

「くっ！」

と、その時。

そんな沈黙した空気を打ち破るかのように一護が天鎖斬月を手に取り銀太郎に向かっていった。

「でああああ！！！！」

斬月を振り切り銀太郎に斬りかかる一護だが、それを読んでいた銀太郎は体勢を低くすると片足だけの力で一護の刃を食い止めた。

「！」

驚愕し目を見開く一護。

すると、今度はユーノが隙を見て銀太郎に斬りかかろうとする。

「はっ！！」

だが、銀太郎はユーノの行動を見るや否や一護の刀を止めていた足で蹴り上げると体制を元に戻してユーノの斬撃を止めにかかる。

「くっ！！」

険しい表情を浮かべるユーノだが、更に銀太郎は器用に先ほどとは違う足でそのまま後ろの一護に蹴りを加えようとする。

一護は左腕でそれを受け止めるが、年相応とは思わぬほどの力に力が入る。

そして、銀太郎はそんな二人をものともせずに力だけで吹き飛ばす。

「「ぐ！！」」

「ユーノ君！」

「一護！！」

思わぬ光景になのはと恋次は声を上げるが、吹き飛ばされながらユーノと一護は阿吽の呼吸の様にタイミングを合わせると袖口から霊子で出来た鎖を取り出し銀太郎の片足と利き腕を縛り付ける。

奇妙な体制となって二人に手足を縛り付けられる銀太郎は思わず尋ねる。

「何の真似です？こんな――――――」

と、その時。

二人の行動を好機としてとらえた金太郎がフルドライブ状態で銀太郎の頭上からアックスオーガを振り下ろす。

「ふんっ！！！」

その瞬間、巻き起こる凄まじい地響きと粉々に吹き飛ぶ抉れた地面。

「金ちゃん！」

金太郎の行動に刺激を受けたフェイトもシグナムとヴィータと共に反撃に移る。

「シグナム！ヴィータ！行くよ！！」

「ああ。」

「おう！」

三人は空中で狙いを定めると、カートリッジをロードしてそれぞれの必殺技を繰り出す。

「（紫電一閃）！！」

「ギガトンシュラーク！！」

〈Ｊｅｔ　ｚａｍｂｅｒ〉

「はあああああ！！！！！」

煌々と燃え上がる炎の斬撃、建物を跡形もなく粉砕する破壊の鉄槌、そして激しい一撃を秘めた雷神が砂埃が立ち上る中へと降り注ぐ。

だが、機動六課の攻撃はこれだけでは終わらない。

鬼太郎と浦太郎が更なる攻撃を仕掛けるのである。

「まだだぜ！俺の必殺技・・・パート2！！！」

「アクアマインド！」

霊圧を最大にした鬼太郎の熾烈波と浦太郎のフィッシャーマンから飛び出す水流魔法、アクアマインドが練り合わさり強力な一撃となって銀太郎に襲い掛かる。

この六人の攻撃だけでも途轍もない威力を秘めているのだが、そんな全員の攻撃の締めとして、最後になのはが空中から砲撃を加える。

「虐待してるみたいで申し訳ないけど、これで終わって！」

なのははＡＲカートリッジを装填し、マキシマム・ブレイド状態のレイジングハートから魔力を集め射程距離を測って止めの一撃を発射する。

「エクセリオン・・・バスター！！！」

なのはのエクセリオンが発射されると、恋次が卍解状態で念のためと言わんばかりに狒骨大砲を発射する。

「狒骨大砲！！」

二つの砲撃が同時に銀太郎に炸裂すると、その瞬間双極の丘は果然の噴火が起こったかのように勢いよく天に砂が舞い上がり、そのあまりに度を越した技の破壊力を物語る。

一護とユーノはその威力に飲み込まれぬように鬼道で身を守りながら鎖を掴み続け、全員の攻撃が完了したのを確認すると徐に銀太郎の手足から鎖を緩め取った。

地面に体が食い込み動く気配のない銀太郎にそっと近付き意識を確認するヴィータとシグナム。

「・・・どうだ。これで少しは――――――」

だが、その時ユーノは全身から感じたただならぬ悪寒に身を震わせ声を張り上げる。

「！ヴィータ！！シグナムさん！！避けて下さい！！！」

「「！」」

ユーノの声に反応した二人がその場から離れようとした途端、銀太郎の体から尋常ならぬほどの強大な魔力が溢れだし二人の足を守っていたユーノの作った対リベル式の甲冑が脆くも崩れていった。

「くそッ」

「（ちッ）」

何とか被害を足の甲冑だけで済ませ危機を脱した二人であったが、そんな全員をあざ笑うかのように銀太郎は強大な魔力を発しながら徐に立ち上がる。

「・・・どうしたんです。もう終わりじゃないでしょ？」

「「な！」」

「うそ・・・！？」

「まさか・・・！」

なのは達はあれだけの攻撃を受けながら全くの無傷と言えるほどにまで攻撃を食らった形勢すら感じさせぬ銀太郎の能力の高さに絶句していた。

「早く次の手を打ってください。最後の一つが潰えるまで、一つずつ微に砕いていきますよ。僕を倒すために練り上げた手段の数は、あなた方の努力と力の証です。そして、それはそのまま・・・あなた方の持つ希望の数でもある。ならば僕の為すべきことは、その全てを打ち砕くこと。さぁ、次の手を打ってきてください。ユーノ・スクライアさん。熊谷金太郎さん。黒崎一護さん。護廷十三隊の死神・・・そして、時空管理局の魔導師。」

ユーノは銀太郎の状態を目で確認してから、隣のシグナムとヴィータの破壊された自分が作り上げた甲冑を見、思わず声を漏らした。

「いや～～～～・・・マイったですねえ・・・・・・・・・対リベル用に作った特性の甲冑だったんですけどねぇ・・・まさか、こんな簡単に壊されるとは・・・」

そんなユーノの妙に癇に障る言い方に癇癪を抱くヴィータとシグナム。

「んん？何だ、私やヴィータのせいみたいな言い方だなそれは」

「いやぁ、そんなつもりで言ったんじゃないですよ。」

「言ったじゃねぇか。私やシグナムが気を抜いたせいだって言いたいんだろう、ああ？」

「いいか？そもそもスクライア、お前の作り込みが甘かったんだぞ。作る段階でお前が気を抜いていたのがそもそもの原因なんだ！」

「（そうだよ、そうだよ！少しは反省しろ）」

シグナムとユニゾンを果たしていたアギトも便乗してユーノに叱咤し、ユーノも三人がかりで攻め立てられると素直に降伏するばかりだった。

「わかった、わかった、わかりました！！」

と、そんな三人の様子を凝視ていた銀太郎は徐に次のように語る。

「――――――成程。僕の一撃で腕が無事と言うことは、確かに特別なもののようですね。」

「「私の腕がな」」

声を揃えて銀太郎に言葉をかけるヴィータとシグナムだが、それを

横目にユーノは扇子を口元にあてて薄ら笑いを浮かべる。

「・・・・・・――――――」

すると、ヴィータはそのユーノの態度が気に入らなかったのかシグナムと二人がかりで報復する。

「何だよ、そのカオは！」

「ごっほ！」

「貴様・・・騎士を侮辱するか！」

「鼻が痛い！！」

この二人の行動を見ていたなのはとフェイトは直ぐに二人を止めにかかる。

「ああ！！ヴィータちゃん！！ユーノ君に乱暴しないで！！」

「シグナム！！！それぐらいにしましょう！！」

一護と恋次はこのユーノ達の行動にかなり呆れかえっていた。

「・・・お前ら・・・緊張感ってもんがねぇのかよ・・・」

と、その時銀太郎が再び動きを見せ始め全員はそれを見ると眼差しを真剣なものへと変える。

「騒ぐ事はないですよ。何が特別などと論じることに意味などない

んですから。一振りで一つ消えるなら、あと十度剣を振れば、その特別も消え失せる。」

ユーノは二人に殴られた鼻をこすると、隣のシグナムとヴィータに向かって声をかける。

「――――――来ますよ。」

「分かってる。」

「いけますか？」

「誰に向ってものを言っておるのだ？我らヴォルケンリッターの力の底はこんなものではない。」

「甲冑が壊れたって、どうってことないんだよ！」

だが、ユーノにそう言うヴィータであったがその瞬間自分とシグナムの間に現れる銀太郎を確認した瞬間、目を疑った。

「「！」」

銀太郎は二人が動き始める前に間髪入れずに剣の一振りで二人を空中へと投げ飛ばす。

「「ぐっは！」」

「ヴィータちゃん！」

「シグナム！」

二人の傷つく姿に思わず声を上げてしまうなのはとフェイト。
同じようにユーノもこの光景には些か信じられないとばかりの表情を浮かべる。

「シグナムさん！ヴィータ！はっ！！」

と、隙を作った瞬間に銀太郎が攻撃を仕掛けてきた。

ユーノは咄嗟に晩翠で銀太郎の剣を受け止めるが、両手を使っているにも関わらずその力の強さに表情が険しくなる。

「くっ！」

防戦一方のユーノだが、一護がユーノを助けようと銀太郎の背後から斬りかかる。

「はあああああ！！！！！」

銀太郎は一護に気づくと、右足でユーノを蹴り飛ばすと後ろに振り返り一護の斬撃をいとも容易く捌いてしまう。

一方で、空中へと飛ばされたヴィータはグラーフアイゼンを手に取り、違う場所で攻撃の隙を待っていた金太郎が同時に銀太郎に向かっていく。

「グラーフアイゼン！！」

「アックスオーガ！」

銀太郎は二人の一撃を躱すが、続けざまに金太郎はユーノ・一護と一緒に銀太郎に一斉攻撃を仕掛ける。

「「「はあああああ！！！！」」」

三人の攻撃が銀太郎にぶつかり巻き起こる凄まじい霊圧と魔力の衝突。

だが、その魔力と霊圧のぶつかり合いの果てに待っていたのは銀太郎の攻撃を受け後方へと飛ばされるユーノ達の姿であった。

「「「ぐはっ！！」」」

三人の姿に表情を歪めつつも、なのは・フェイト・シグナムが離れた場所から強化砲撃とそれに匹敵する剣閃を仕掛ける。

「エクセリオン・・・バスター！！！」

「トライデントスマッシャー！！」

「（火龍一閃）！！」

同時に仕掛けられたその攻撃であったが、銀太郎は何と避けるそぶりも見せずにそのまま剣の一振りで三つの攻撃を無効化してしまったのである。

「「「な！」」」

自身が放つ必殺の威力を有した魔法が年端もいかぬ子供の力に圧倒

されたことに衝撃を受ける中、銀太郎はそんな三人に向かって反撃をする。

「無駄です。」

銀太郎は全身から伝わってくる魔力を剣に集中させると、その剣から魔力衝撃を発生させなのは達をユーノ達同様吹き飛ばしてしまう。

「「「（ぐあああ!!!）」」」

そんな常軌を逸した銀太郎の力を見ても、決して屈しようとはしない恋次と鬼太郎、浦太郎の三人。

「狒狒王蛇尾丸!!」

「烈火!!」

「フィッシャーマン!!」

三方向からの攻撃に転じようとするも、全て銀太郎が身にまとう甲冑の効果により寸でのことろで受け止められてしまう。

「だから無駄ですよ。」

そう言うと、銀太郎はバリアブーストを発動させて魔力衝撃により恋次達を弾き飛ばす。

「「「のあああああ!!!!!」」」

と、その時。

復活を遂げた金太郎が再度銀太郎に向かってアックスオーガを振り下ろそうとして来る。

身構える銀太郎であったが、その途端に右腕を鎖で拘束される。

「！？」

鎖を操っていたのは金太郎同様復活を遂げたばかりのユーノ。

「くっ！」

険しい表情を浮かべながらも必死に腕を縛り付けるユーノ。

そんなユーノの行為を無駄にしないためにも金太郎は渾身の一撃を加えようとする。

「はあああああああ！！！！！」

アックスオーガを力いっぱい振り下ろしたつもりの金太郎だが、そんなアックスオーガの先端を左手で受け止める銀太郎。

「諄（くど）いですよ。」

銀太郎によって止められたアックスオーガはまるでびくともしない。

「く・・・なんて・・・力だ・・・！！」

と、金太郎がその力に抵抗を続け空中に滞空していると、一護が金太郎の背後に隠れた状態で銀太郎に攻撃を仕掛けてきた。

「はあああああ！！！！！」

「諦めの悪い人たちだ。」

そう口にすると、銀太郎はユーノの鎖を容易に千切り捨て剣の一振りで二人を一度に攻撃する。

「「ぐあ！！」」

攻撃を食らい再び吹き飛ばされる一護と金太郎。

その後もユーノ達は何度も攻撃を受けたは立ち上がり、銀太郎に向かっていくが銀太郎の強さの度合いは全員の理解を凌駕しているものであった。

エースオブエースと謳われるなのはも、伝説の死神代行と謳われる一護も、翡翠の魔導死神と謳われるユーノもまるで歯が立たないのだ。

だが、決して彼らは諦めたりはしていない。

最後の希望が潰えるその瞬間など、彼らは考えていないからだ。

胸に希望を抱きながら、銀太郎を止めるべくエドワード・コークの末裔たる金太郎とユーノと一護は自分の武器を手に取り銀太郎に向かい続けるのであった。

「ふあああああああ！！！！！」

「はあああああ！！！！！」

「うおおおおお！！！！！」

この勝負の行方はどうなる・・・――――？

彼らはこの少年に本当に倒されてしまうのか？

それとも、彼らが少年を止めるのか？

次回に持ち越し！

進化!?最後のダイシーの脅威!（後書き）

教えて、ユーノ先生!

ユ「今日は銀太郎君についてだよ♪」

ユ「一護さんと同じ空座町の馬芝中学に在学する中学三年生である彼こそ、ダイシーの血を受け継ぐ正当後継者。病弱な体ではあるが、非常に頭がよくとても仲間の事を大切にする万能人だ。」

ユ「デバイスはダイシーの正当後継者が使うことを許されたオプティマスプライム。十三枚のカードと融合することで黄金の甲冑となり、更には聖地で死んでいったダイシー波の魂魄を自由に操ることが出来るんだ♪」

金「一つ気になる事があるのですが・・・銀太郎のあの甲冑は以前何処かでお見かけしたような気がしてならないのですが?」

ユ「ああ・・・そう言えばこれ、金太郎のそれと同じ系統のデザインだよね?えっと、これは確か・・・・・・」

銀「えっへん!お願いですからそれ以上は何も語らないでください。一応多重クロスオーバー作品の引用って形で片づけて欲しいものです。」

ユ「上手いぐらいに言いくるめられたね・・・」

金「全くですな・・・・・・」

魔導師図鑑ハイパー！

ユ「しかし、今にして思うと・・・僕が本当に主人公で良かったんですかね？」

一「急にどうしたんだよ？」

ユ「いえ・・・今までリリカルなのはって題名がついてなのはブランドとして世間に定着してきたんですから、ユーノ・スクライア外伝って題名で作品を作り上げていくのもどうかと思って・・・それに、元々が淫獣フェレットもどきってネット上で叩かれ、存在すら忘れられている僕ですからね・・・・・・」

自分で自分の首を絞め深く落ち込むユーノ。

な「そ、そんなことないって！ユーノ君がいたから私が成り立つのに、そんな言い方で自分を責めたら駄目だよ！ね、フェイトちゃん！？」

フェ「そ、そうだよ！みんなユーノがいたからリリカルなのはの物語はブランドとして世間一般に公表出来ているんだよ。」

一「けどよ、事実あの話って百合路線が強すぎる面もあるし・・・何より水樹奈々だってインタビューで『ユーノになのはは渡しません！』って豪語してたじゃねぇかよ？」

ユ「フェイト！！！てめいい加減なこといいやがって！！！」

ユーノをたぶらかすフェイトの言葉に怒りのボルテージをマックスにするユーノ。

フェ「だから誤解だって!!!なのは、何とかしてよ!!」

な「ごめん、フェイトちゃん・・・私、ユーノ君にはガツンと言えないから・・・」

この後、フェイトはユーノによるフルボッコを受けたそうだ・・・

その他の尸魂界関係者

？丹坊

声　一　長嶝高士

身長９８８ｃｍ　体重９９９ｋｇ　1月10日生まれ

西・白道門(はくとうもん)門番。流魂街出身。山のような巨躯。巨大な二本の斧を振るい、一振りで虚(ホロウ)三十匹を屠った事がある程の豪傑。一護と日番谷の友人であり、性根の優しい人物。

志波岩鷲

声　一　高木渉

身長１８２ｃｍ　体重１０６ｋｇ　１０月１５日生まれ

海燕・空鶴の弟。ごつい体格で大雑把な性格。主な攻撃方法は体術・花火・血涙玉。高円寺の手にかかりあっという間に気絶させられてしまう。

志波空鶴

声　一　平松晶子

身長１７０ｃｍ　体重５８ｋｇ　１０月１日生まれ

流魂街に暮らす女花火師。岩鷲の姉で海燕の妹。夜一、浦原とは昔馴染。織姫以上に巨乳で容姿端麗。しかし性格は豪快で荒々しい言葉遣いをし、言葉より先に手が出る。姉御肌で、一人称は「おれ」。独自の霊術「花鶴射法」と攻撃系の鬼道を使用する。

金彦、銀彦

声　一　松本大（金彦）、三宅健太（銀彦）

空鶴の家の門番。ゴツイ体格で中国服のようなものを着ている。双子で見た目はかなり似ている。顔が四角でケツアゴなのが弟銀彦、アゴが細く全体的に面長なのが兄金彦という違いがある。

銀太郎、たった独りの戦い（前書き）

ユ「僕らにとって、最も怖いこと・・・・・・それは、魑魅魍魎の類でもなければ、凶悪な犯罪との闘いでもない。一人・・・孤独になる事だ。一人は・・・・・とても辛い。人間は必ず最後は一人で死んでいく。死ねば一人だ・・・どんな絆の糸も届かない・・・」

な「一人ぼっちの寂しさも、苦しみも分かっていたはずなのに・・・自分がそういう状況でないとき、周りに仲間がいるときにはその苦しみを忘れてしまう。だから、私は二度とあんな辛い想いをさせたくない。私を救ってくれた大切な人を今度は私が救う番だから・・・」

ユ「ユーノ・スクライア外伝　パトリオット篇・・・・・・始まります。」

銀太郎、たった独りの戦い

＞ｉ１８７６７－７０９＜

ユーノ・スクライア外伝・・・前回の三つの出来事。

一つ：　狼谷銀太郎がダイシー・ネリンネルングの力で覚醒する。

二つ：オプティマスプライムと融合を果たし、真の力を解放する。

そして、三つ：ユーノ達全員が総力を持って銀太郎と対峙する。

銀「・・・どうしたんです。もう終わりじゃないでしょ？早く次の手を打ってください。最後の一つが潰えるまで、一つずつ微に砕いていきますよ。」

銀「僕を倒すために練り上げた手段の数は、あなた方の努力と力の証です。そして、それはそのまま・・・あなた方の持つ希望の数でもある。ならば僕の為すべきことは、その全てを打ち砕くこと。さぁ、次の手を打ってきてください。」

銀「何が特別などと論じることに意味などないんですから。一振りで一つ消えるなら、あと十度剣を振れば、その特別も消え失せる。」

シ・ヴィ「！」

銀太郎の一瞬の動きについてこれなかった二人は銀太郎の攻撃に直撃する。

シ・ヴィ「ぐっは！」

ユ「シグナムさん！ヴィータ！はっ！！」

銀太郎はその後、容赦なくユーノ達に牙をむける。

ユ「くっ！」

一「はあああああ！！！！！」

ヴィ「グラーフアイゼン！！」

金「アックスオーガ！」

連係プレーによる攻撃で銀太郎にダメージを負わせようとするユーノ達。

ユ・一・金「「「はあああああ！！！！！」」」

しかし、銀太郎の強さは彼らの常識を超えていた。

ユ・一・金「「「ぐはっ！！」」」

な「エクセリオン・・・バスター！！！」

フェ「トライデントスマッシャー！！」

シ「（火龍一閃）！！」

三人の攻撃を前にしても、銀太郎は全くあせるそぶりすらも見せずついにはその攻撃をも無効化してしまうほど。

な・フェ・シ「「「な！」」」

銀「無駄です。」

な・フェ・シ「「「ぐあああ！！！」」」

恋「狒狒王蛇尾丸！！」

鬼「烈火！！」

浦「フィッシャーマン！！」

なのは達に後に続き恋次達も必死の攻防を仕掛けるが、結果は同じだった。

銀「だから無駄ですよ。」

恋・鬼・浦「「「のあああああ！！！！」」」

こうして繰り広げられる銀太郎とユーノ達機動六課最強隊長陣によ

る熾烈なぶつかり合いは未だ決着を見せる事は無かった。

一「ふあああああああ！！！！！！」

ユ「はあああああああ！！！！！！」

金「うおおおおおお！！！！！！」

果たして、勝負の行方はどうなってしまうのか――――――――!?

「ほあああああああ！！！」

「はあああ！！！！」

未だ激闘続く中で、一護とユーノの同時攻撃が銀太郎に仕掛けられるが銀太郎は両手で二人の斬撃を受け止める。

「動く必要もないって具合ですかね？」

「舐められたもんだな！」

二人は瞬歩で一度銀太郎から離れると、ヴィータとシグナムに攻撃に転じる合図を出す。

「ギガトンシュラーク！！！！」

「（火龍一閃）！！！」

二人のフルパワーによる一撃が銀太郎に向けられるが、銀太郎は二人の攻撃を障壁も使わずに受け止める。

「く！」

「何という力だ・・・！」

自慢の攻撃がこうも容易く受け止められては、流石に百戦錬磨のヴォルケンリッターも険しい表情を浮かべてしまう。

「いいんですか？」

「「！」」

その瞬間、咄嗟に攻撃を中止した二人であったが一瞬の判断が遅れてしまいまたしても右腕の甲冑が破壊されしまう。

「ちっ」

「おのれ！」

二人は一度散開して銀太郎の反撃に備える。

「残念でしたね。決定打を打ち損ねて。」

銀太郎の言葉に神妙な表情で聞き入れるユーノやなのは達。

「もっとも・・・あなた方の決定的な一撃と言うのが、僕に致命傷を与えられればの話ですが」

「「（く！）」」

あまりに天狗な発言に堪忍袋が切れそうになるヴィータシグナム、アギト。

「・・・・・・」

そんな若干の冷静さを失いかけている三人にユーノが声をかける。

「・・・大丈夫かい？」

「だから誰にモノ言ってんだよ！鉄槌の騎士ヴィータと鉄の伯爵グラーフアイゼンがあんな攻撃でどうにかなるかよ。自分の身ぐらいは自分で守れる。普通に躱して無傷だっ！」

「スクライア。あまり我らの力を見くびって貰っては困る。」

二人の言葉を聞いたユーノはほっとしたのか、安堵の表情を浮かべて二人に謝罪する。

「・・・そいつは無駄な心配してスミマセン。」

だが、現状は一向に良くなろうとしていない。

恋次は念話を使いながら全員にこの事態の深刻さとそれに向けた打開策を検討する。

「（にしても、奴の能力は厄介だぜ。限定解除状態の俺達の能力を上回ってやがる・・・）」

「（ここで何か良い作戦があれば、いいんだけど・・・流石に相手が相手だけに・・・）」

「（ああ。今のところ、全く攻略法が皆無・・・くそ！一体如何すれば・・・）」

と、一護が悔しい思いをしているとそんな一護や全員に向かってユ

ーノが念話で自身が常々思っていた仮説を元にした一つの作戦を提案してきた。

「（みんな、ちょっと僕の話を聞いてくれるかな？）」

「（え！？何、ユーノ君？！）」

「（作戦でもあるとでも言うのですか？）」

「（マジっすかそれ！！）」

この絶望的な状況でユーノが口にしてきたということは、なのは達全員にとってはまさしく希望の象徴であり、同時にユーノの頭脳明晰さを物語るものでもあるのだ。

「（あるにはある。銀太郎君のあの鎧をよく見てみて。あれは１３枚のカードと融合することによって出来た特殊な鎧だ。左右の肩・上腕部・太腿・膝・脚部および右下腕部の１１箇所、胸部と頭部に紋章としてその力が封印されている。恐らくそれは・・・元来カードに封印されていたパトリオットの魂が宿った特殊なもの。あの１３枚が拮抗して力を発動している間は僕達の如何なる攻撃も通じない。ならば・・・――）」

その時、ユーノの言葉の意味に気づいた全員が同様の結論に達する。

「（その１３枚の力のバランスを崩せば、奴は無敵じゃなくなる！）」

「（だとしたら、話は簡単だぜ！）」

「（はい。みなさん、一つずつ鎧に描かれた紋章を潰していきますぞ！）」

「「（はい！）」」

「「「（ああ）」」」

「（おうよ！）」

事態を打破できるかもしれぬという希望を手に入れたユーノ達は武器を構え直し、銀太郎を睨み付ける。

そんな注目の視線を一身に集める銀太郎はユーノに話しかける。

「話は終わりましたか？」

「話も何も、僕らは何も考えてはいないよ。君みたいな強い奴を相手にどうやって渡り合うかなんてことはね。」

「・・・・・・」

だが、そんな嘘で固められたユーノの言葉を聞いて銀太郎が急に口を閉ざすとそのままユーノの顔を黙って凝視する。

流石に変だと思ったユーノが銀太郎に尋ねる。

「何を見てるんだい？」

「あなたのことです。あなたの言葉には嘘がある。無闇に此方から仕掛ければ、例え僕でもそれなりの負傷を負わされると・・・」

「意外だね。警戒はしてないんじゃないかと思っていたのに。」

「それはどうも。あなたは優秀な魔導師でありながら、他の魔導師とは違う何かを持っている。勿論死神のそれとはまた違う何かですけど。それに、あなたの頭脳明晰さは管理局随一。色々と調べてよく知っている。警戒に越したことはありませんからね。」

そんな銀太郎の言葉を聞き入れ、ユーノは帽子をかぶり直す。

「・・・買い被り過ぎだよ。今の僕は只の・・・しがない駄菓子屋だよ。」

その瞬間、ユーノは左手の親指と中指を使って弾き飛ばす要領で光弾を銀太郎目掛けて発射する。

「破道の十　“光凛響（こうりんきょう）”！！」

光弾が銀太郎の目の前で破裂すると、その瞬間目を開けていられない程の強い光が視界を遮る。

「・・・十番台の鬼道など、只の目暗ましにしか使えない事など最初から分かっている筈です。それを遣うと言う事は――――――」

そうして銀太郎が剣を一振りし、視界を遮っていた光を払うとその先に見えてきたのは補助デバイスにより強化された恋次の蛇尾丸の頭部であった。

「・・・そう言うことでしょうね。」

「せやあああああああ！！！！！」

恋次は蛇尾丸の攻撃で銀太郎を圧しにかかる。

「はあああああああああ！！！！！」

銀太郎はその一撃を受け止めてるが、その間に背後に回り込んだヴィータがＩＰカートリッジを取り付けた状態でグラーフアイゼンの力を解放する。

「グラーフアイゼン！！」

〈Ｈｙｐｅｒ　ｅｘｐｌｏｓｉｏｎ〉

力が解き放たれ、グラーフアイゼンは最強形態であるクラッシャーモードへと移行し、その状態で以て銀太郎に振り下ろされる。

「クラッシャーシュラーク！！！！！」

「ふん・・・・・？！」

ヴィータの攻撃を予期した銀太郎が蛇尾丸の攻撃を跳ね飛ばしてヴィータの方を振り向くが、その瞬間に真下からシグナムとアギトによる攻撃が待ち構える。

「（へ！そうはさせるかよ！！）」

アギトはそう言うと、自身の魔力とシグナムの魔力を同調させて燃え滾る炎をレバンティンに纏わせる。

〈剣閃烈火(けんせんれっか)！〉

レバンティンに灯った炎がその姿をより巨大なものへと変えると、シグナムは九個の頭を持つ竜の姿を象った一撃を加える。

「九頭竜一閃(くずりゅういっせん)！！」

ヴィータとシグナムの最強最大の攻撃が同時仕掛けられ、反応が些か遅れてしまった銀太郎は鎧の力を完全に行使することが出来ず、運悪く鎧に描かれた紋章の幾つかが破壊される。

「・・・・・・く・・・・・・！」

と、壊れた紋章を見ながら仮面の下で表情を歪める銀太郎の視界にフェイトの魔力光が飛び込んできた。

〈Ｇｅｔ　ｓｅｔ〉

「オーバードライブ。真・ソニックフォーム」

〈Ｓｏｎｉｃ　ｄｒｉｖｅ.　Ｒｉｏｔ　ｚａｍｂｅｒ〉

フェイトはオーバードライブを発動させ、その薄い装甲の反面スピードに絶対のものを誇る真・ソニックフォームで銀太郎に飛びかかっていく。

「くっ！」

フェイトの目にも止まらぬ高速戦闘術に思わず焦燥を滲み出す銀太郎。

「装甲が随分と薄い・・・当たれば落ちるぞ！」

「はあああああ！！！！！」

フェイトはそんな銀太郎の言葉に構うことなく、ザンバーフォームで銀太郎の紋章を破壊しようと試み、フェイトの攻撃をさばいて銀太郎も薄々このフェイトの行動に関して疑問を抱き始める。

すると、フェイトの行動に目を奪われていたことにより周りを疎かにしていた銀太郎の死角から烈火を手に取った鬼太郎と浦太郎が攻撃に転じてきた。

「はっ！」

「誰がフェイトちゃんだけだって言ったのかな？先輩！」

「おっしゃ！！いくぜ・・・俺の必殺技・・・限界ギリギリバージョン！！」

「大物いただき！！」

〈Ｄｏｌｐｈｉｎ　ｄｉｖｅ〉

二人の攻撃が凄まじい勢いで銀太郎に仕掛けられ、その結果銀太郎の鎧に描かれていた紋章が先ほどのも合わせて四つも削られたのだ。

爆発の中で明らかに紋章を狙って攻撃してくる彼らの行動に確信を抱いた銀太郎は直ぐにユーノの提案だということを察する。

「！（この人たち・・・さっきから紋章ばかりを狙って・・・と言うことはユーノ・スクライアさん・・・僕の鎧の秘密に勘付き彼らに・・・！？）」

と、銀太郎が爆発の中から出て来ると待ち構えていたなのはが集束砲をお見舞いしようとカートリッジを三発ロードする。

〈Ｌｏａｄ　Ｃａｒｔｒｉｄｇｅ〉

「一気に行くよ。」

レイジングハートの先端に集められた桜色の魔力が徐々に大きさを増していき、エネルギーが１００パーセントに達するとなのはは拡散型の新砲撃魔法をお見舞いする。

「スターダスト・シューター！！」

スターダスト・シューターは高威力を維持したまま四方に散らばる敵を撃ち落すことが出来るかなりの難易度を極めた集束砲なのだが、それは日頃のなのはの魔力運用の上手さと天賦の才能に寄り可能となったものだということは自ずとわかるだろう。

全方位から飛び込んできたなのはの強大な魔力砲撃をもろに喰らった銀太郎はバランスの崩れ始めた鎧では完全に防ぎきることは出来ず、更に5個の紋章を破壊される。

「・・・ええい！何てバカ魔力だ！？紋章が既に9個も破壊されてしまったか・・・」

と、銀太郎が横を振り向いた瞬間に今度はフルドライブ状態を維持

し続けている金太郎が攻撃を仕掛ける。

「おおおおオオオオ！！！！！」

「だが、これ以上思い通りにされてたまるか。」

〈Ｐｒｏｔｅｃｔｉｏｎ〉

金太郎から繰り出される何もかも破壊しつくしてしまいそうな途轍もない一撃を一つずつオプティマスプライムの力で防御していく銀太郎。

「理解できないのですか？いくらアックスオーガとて、あなたの打撃など何千打とうと僕を倒すことは出来ないんですよ。」

そう言われながらも金太郎は打撃を撃つことを止めず、距離を取るとブラッドカートリッジをロードして一番初めの襲撃の時に結界を破壊した自身の必殺技を発動させる。

「“ハデスの一振り”」

発動の瞬間、鼓膜が破れるくらいの轟音と衝撃が空中に広がり銀太郎の鎧に描かれた紋章が更にひとつ破壊され地面へと落下する。

銀太郎が落下すると直ぐに金太郎は更なる攻撃に転じるために銀太郎の元へと飛んでいき、土煙が晴れると銀太郎が立ち上がって待ち構えていた。

「はあああああ！！！！」

銀太郎は向かってくる金太郎のアックスオーガを手で掴んで仮面越しに強気な姿勢でこう応える。

「それでも、倒せないと言った筈ですよ。」

「何を・・・！」

と、金太郎のアックスオーガの先を掴んでいたその瞬間――――――頭上からユーノの晩翠による能力が解放される。

「“闇影晩翠（やみかげばんすい）”」

刀身から発せられる黒い渦が銀太郎に向けてかぶせられると、銀太郎の体はその渦によって完全に動きを封じられ、銀太郎の影自体を縛り付ける。

「こんなもので僕を縛れると――――――」

銀太郎がそう口にすると、ユーノは切っ先を闇影晩翠の黒い渦の先へと突き刺し自身の霊圧を注ぎ込んでいく。

「“悪辣晩翠（あくらつばんすい）　月下終焉（げっかしゅうえん）”」

すると、晩翠の先から不気味な声と共に怨霊のようなものが闇影晩翠を伝って流れ込んでいき、銀太郎の元へ達するとその瞬間・・・黒い月の形となって大爆発を起こす。

爆発の影響で、残り僅かとなった紋章を破壊された銀太郎であったが未だ余裕を見せている。

「・・・・・くっ。笑わせるな。こんなものが奥の手ですか？こんなもので――――――」

だが、その時銀太郎の眼前には一護が霊圧をためて構えており、一瞬の隙をついて一護が銀太郎の胸部を守る最後の紋章に向かって黒い月牙を仕掛ける。

「・・・月牙――――天衝！！！」

一護の月牙天衝が決まり、周囲には一護の黒い霊圧の衝撃で凄まじい奔流が巻き起こる。

ユーノは奔流が落ち着くのを見計らって、一護へと近づく。

「・・・どうですか？」

「・・・ああ・・・多分無事ではないだろうぜ。１３枚の紋章のうち、頭部以外のものは全部俺達で破壊した・・・力が働かなければ奴も俺達と大差ねぇはずだ・・・所詮は年端も碌にいかない子供であることに変わりねぇんだからよ。」

そして、漸く月牙天衝による奔流がその姿を消すと、中にいたのは仮面すらも剥がれ落ち満身創痍となって衝撃で出来たクレータの中に膝をつく銀太郎の姿であった。

「はっ・・・はっ・・・はっ・・・よく、気付きましたね。そうです・・・僕のこの鎧には聖地で死んでいったパトリオット達の血・・・魂が宿っている。それが僕に無限の力を与えてくれる。しかし、拮抗する力が一度バランスを崩せば僕も無敵ではなくなる。それをこんな短時間で見破るとは・・・――――やはり、ユーノ・スクライ

アさん。あなたは実に恐ろしい。」

銀太郎が改めてユーノのずば抜けた洞察力に驚愕していると、ユーノは静かに自分が立てた仮説を説明していく。

「・・・最初にデバイスを発動させた君を見たときから頭に引っかかっていたんだ。君の魔力も普通のパトリオットと比肩すれば尋常じゃないものだってことは分かっていた。しかし、鎧が構築されると同時にそれは一魔導師の範疇を遠に超えていた。しかも、君の魔力発動のほとんどは鎧に描かれた紋章そのものが働かせているようにも見えた。そこで一つの仮説を立てた・・・君のその鎧そのものが意思と魔力を持っていて、それが君を守っているのではないかと？だから、紋章一つずつを破壊すればきっと攻略の足がかりが見えてくると信じて。」

「而して、ユーノ君の読みは当たっていたようだね。」

なのははそっとユーノの隣に降り立つと、銀太郎の攻撃があるかもしれないとばかりにレイジングハートを構える。

「・・・流石ですね・・・僕もこれ程までに傷を負わされるとは思っていませんでしたから・・・かなり驚いています。だけど、鎧を壊したからと言って僕を倒せるとは話が違いますよ。」

すると、銀太郎はそう言った瞬間、瞬歩の如く速さで全員の前から姿を消した。

「消えた！」

「野郎、気配を消しやがったか！？」

「奇襲を狙っているのかもしれません。油断せずにいこう。」

ユーノ達は一度武器を持ち直し、銀太郎が再び現れるのを神経を研ぎ澄ませながら待ち続ける。

一方その頃、ユーノ達の連係プレーによる怒涛の攻撃を食らい紋章のほとんどを破壊された銀太郎は多量の汗を流しながら双極の丘の影で傷を癒しながら弱音を吐いていた。

「・・・はっ、はっ、はっ、はっ・・・やっぱり、いくら能力が強くなったと言っても、弔い合戦みたいな真似は出来ないようだ。それに、あの人たちの絆の強さもみれば一目で判る・・・結局・・・僕は独りじゃ何もできないのか・・・」

そう思うと、銀太郎の目に涙がこもる。

愛する者達を一遍に無くした銀太郎にとって、この戦いは一人でやるには非常に荷が重い者なのだ。

既に、銀太郎の精神も体も限界を迎えようとしていた――――――その時だった。

「（銀太郎。銀太郎！）」

「！この声は・・・・・・まさか！？」

銀太郎は一瞬幻聴かとも思った。

だが、よく耳を澄ませて自分の中に流れるダイシー・ネリンネルン

グの力の鼓動を確かめてみると、その行動を通してあの五人の声がはっきりと聞こえてきたのだ。

「（私はここいるぞ、銀太郎。）」

「オーリー・・・!?オーリーなのかい!?」

こんな予想外の出来事に銀太郎は嬉しさと同時に驚きで混乱しそうになる。

「（どうやら、ダイシー・ネリンネルングの力によって私達の魂はお前の魂と定着したらしい。肉体は滅びど、心は常に一緒だと以前話したことがある筈だ。）」

「（銀太郎!負けんじゃねぇ!!）」

「白鴎!」

「（お前には俺達がついてる!まだまだこれからだ!）」

「（落ち着いて自分の力を出せば、倒せないなんてことはねぇ!）」

「（我らを信じろ。そして、自分の力を信じるのだ。）」

「田吾作・・・東海林・・・瀬間子・・・!」

「（さぁ、共に行こう。我らはずっとお前の力であり味方だ。思う存分に暴れようぞ。）」

オーリー達の自分に向けられる温かい言葉に勇気をもらった銀太郎

は一度深呼吸をすると覚悟の籠った瞳を写し、線上に戻ることを決意する。

「・・・うん。僕、やってみるよ！」

銀太郎がオーリー達に励まされ、戦うことを決めているその頃・・・ユーノ達はなかなか動き気配を見せないでいる銀太郎を待ち続けている。

「なかなか動きませんね？」

「ああ。動く気配がまるでないって感じだ。鎧が壊されたことで想定外の事が起きた。作戦でも練ってるのか、様子を見ているのか・・・どっちにしろ奴が出てこない分には仕掛けられないさ。」

「け！今度出てきたときには、俺様の超ハイパーな大技でぶちのめしてやるぜ！！」

「先輩・・・超もハイパーも意味は同じじゃないの？」

「相変わらず言葉の意味を全く考えない使い方をする・・・」

言葉の雰囲気だけに捕らわれ、用途を全く考えないことが多い鬼太郎の言動に呆れかえってしまう浦太郎と金太郎。

「ウルセーな！格好いいなら意味なんてどうでもいいんだよ！」

「あの・・・今はそれどころじゃない筈ですけど！？」

「フェイトちゃんの言うとおりですよ。もっと真剣に！」

フェイトとなのはの言葉に諫められた鬼太郎は何処か納得のいかない様子で仕方なくその場を取り繕った様子で返事をする。

「わ、分かったよ！」

全員が再び銀太郎の動きに神経を研ぎ澄ませながらその場を動かずにいると、不意に頭上から銀太郎の斬撃が降り注いできた。

「！出てきたよ。」

頭上を見上げると、そこには先ほどまでとは違う甲冑に身を包み仮面を取った銀太郎の姿がそこにはあった。

銀太郎は剣先に魔力を溜めると、鋭い斬撃を乱発していく。

「あそこだ！」

「来やがったか！！」

「ちまちましやがって・・・つうか何処狙ってやがる！？」

実はこの斬撃、今は銀太郎の意思で撃っている訳ではない。

銀太郎の魂とシンクロした白鴎の意思により発動しているのだ。

だが、普段物理攻撃が主体の白鴎にとってこのような技はコントロールが全くと言う程なく、あまり意味を持ったものになっていないのだ。

そんな白鴎の出鱈目なやり方にオーリーが一喝する。

「（白鴎！もう少し正確に狙え！）」

「（悪かったな！それより、来るぞ銀太郎！）」

「挑発したのはそっちじゃないの？」

白鴎の言葉に少々呆れながらも銀太郎は向かって来る鬼太郎に目を向ける。

「俺から行くぜ！！」

鬼太郎は烈火に炎を灯すと、渾身の力で銀太郎に振りかざす。

「おらあああああああああ！！！！！」

銀太郎は自分の武器である剣で鬼太郎の斬撃を受け止める。

「随分待たせるじゃねぇか？」

「（別に待たせた訳じゃねぇよ！）」

「！？何だ？」

鬼太郎は銀太郎の剣から聞こえてくる聞き覚えのある声に首をかしげる。

「（銀太郎が動けなかったのは、全てはてめぇらがあの甲冑を壊して魔力消費を著しく悪くしたせいだからだろうが、ボケ！！）」

「あ?その声は確か白鴎じゃねぇか!?何だっててめぇの剣からそいつの声が聞こえるんだ、ええ?」

すると、そんな疑問に思う鬼太郎に向かって瀬間子が返事をしてくる。

「（お前には関係のないことだ。痛い目に遭いたくなければ、早々に去るがいい。）」

「な!今度は髭クソ男じゃねぇか!!」

黙って聞いていた銀太郎であったが、自分の家族であり守護者でもある瀬間子のことをそのように蔑称する鬼太郎のものいいにはかなりイラついていた。

「髭クソ男なんて言い方は止して下さいよ。ちゃんと彼には瀬間子って名前があるんですから、それで呼んでくださいよ!」

〈Ｐｒｉｍｅ　ｍｉｎｉｓｔｅｒ〉

銀太郎はその瞬間、自分の意思で魔力を剣先に集めると先ほどよりも威力のある剣閃で鬼太郎をはじき出す。

「瀬間子!」

「（ああ!）」

そう言うと、瀬間子は魂を共鳴させて自分の使う固有魔法を銀太郎の体を通りして発動させ鬼太郎の動きを翻弄する。

瞬歩で銀太郎の攻撃を避け続ける鬼太郎だが、今まで自分が衝突してきた因縁のパトリオットの使う魔法を銀太郎が使える事には大いに驚いていた。

「！（こいつは、髭クソ男の魔法じゃねぇか！？）」

同じように、下で様子を垣間見ていたなのは達も驚愕の表情を浮かべる。

「あの魔法って・・・確か瀬間子ってパトリオットのものと一緒！」

「どうやら・・・ダイシー・ネリンネルングを取り込んだ事でパトリオットの魔法を自由に使えるようだね。」

「また面倒なことになったな、おい。」

状況を見ていた恋次が鬼太郎の加勢に入ると、補助デバイスで強化した鋼鉄狒骨大砲を銀太郎に向けてお見舞いする。

「鋼鉄狒骨大砲！！」

「オーリー！」

「（シューティングスターソニック！）」

恋次の攻撃に気づくや否や、銀太郎はオーリーの魂と共鳴させ剣先よりオーリーが使う最強攻撃魔法のうちの一つ、シューティングスターソニックを発動させ砲撃を相殺させる。

「何！」

「オーリーの魔法まで操るなんて・・・どこまでもズルいんじゃないの！？」

そう口にしながら、浦太郎は恋次の後に続く形で攻撃に転じる。

「ズルいのはお互い様ですよ。」

そう言うと、銀太郎は背後から仕掛けてくる金太郎に目を向ける。

「ダイナミックハリケーン！」

金太郎が浦太郎の攻撃に手一杯の状態の銀太郎に止めの一撃を加えようとするも、危険を感知した白鴎が空いている銀太郎のもう一つの手から自分の魔法を発動する。

「（させるか！！！アルティメットパワーフォース！）」

咄嗟に白鴎がパワーフォースを使ったことで、金太郎のダイナミックハリケーンはものの見事に相殺され、浦太郎と金太郎は目を見開く。

「これは・・・白鴎の！？」

何とか二人の攻撃を捌ききった銀太郎・・・しかし、その後間髪入れずに真・ソニックフォームのフェイトの攻撃が仕掛けられる。

「バルディッシュ！」

〈Ｚａｍｂｅｒ　Ｂｒｅａｋｅｒ〉

「うおおおおおおおおお！！！！」

加速に乗じて一気に畳み掛けようとするフェイト。

すると、フェイトの行動を感知した田吾作の魂が共鳴する。

「（スピードなら俺だ！）」

その瞬間、銀太郎はフェイトの視界から一瞬にして消え去り背後へと回り込んだ。

「！！まさか・・・！！」

「（ザッツライト！俺だよ、フェイトさんよ！！）」

銀太郎の高速の剣閃をどうにかして躱したフェイトは直ぐにこれが田吾作によりものだと判断する。

「（そんな・・・田吾作のまで！？）」

狼狽を隠し切れないでいるフェイトに隙を見た銀太郎が田吾作の力で後ろに回り込むが、それを離れた場所で見ていたなのはがディバインバスターで銀太郎を退ける。

〈Ｄｉｖｉｎｅ　Ｂｕｓｔｅｒ〉

「シュート！！」

「！」

なのはの砲撃に気づき、銀太郎は一度フェイトの元から離れる。
フェイトは自分の身を守ってくれたなのはに近づきお礼の言葉をかける。
「ありがとう、なのは。」
「どういたしまして。」
油断をしていた銀太郎は苦い表情を見せるが、その途端にユーノが翡翠斬・八千刀のコンボで頭上から攻撃を仕掛ける。
「翡翠斬・八千刀！」
〈Ｐｒｏｔｅｃｔｉｏｎ　Ｐｏｗｅｒｅｄ〉
降り注ぐユーノの激しい斬撃を防御する銀太郎だが、鎧が一度壊されたことでその制度もパワーも著しく低下していることに変わりはない。
「く・・・鎧がなくなった分、結構きついな・・・」
「俺達を忘れてんじゃねぇ！」
「なっ！！」
銀太郎がユーノの事に気を取られ、周りを疎かにしていると好機と見た一護とシグナム、ヴィータの三人が総攻撃を仕掛ける。

「火龍一閃！」

「ブリットハンマー！！」

「月牙天衝！！」

銀太郎に三人の攻撃が直撃し、空中では凄まじい爆発が起こる。

爆風から出てきた銀太郎は多少の傷を受けながらヴィータと対峙している。

「やっぱり鎧がない分動きが鈍くなってるんじゃねぇのか！？」

「確かにそれはありますけど、それでも僕にはまだみんなの力を共有することが出来る。対等に渡り合うには十分ですよ。」

「言うじゃねぇかよ。まだ人生経験も碌に積んだ事のねぇガギがよ！！！」

〈Ｅｘｐｌｏｓｉｏｎ〉

ヴィータはドリルのような先端が特徴的なグラーフアイゼンで銀太郎を撃墜させようとして突進していく。

「ぶち抜け！！！！！」

銀太郎は回避に遅れてしまいヴィータの一撃を受け、地面に落下していく。

「（銀太郎！あの赤髪のガキんちょ・・・！！よくも銀太郎を！！）

」

白鴎は銀太郎を撃墜させてきたヴィータにひどく殺意を覚える。

「気にする事は無いよ。僕の油断が招いた結果さ。」

銀太郎は沈着冷静にそう答えると、何とかその場に耐性を持ち直して空中に足を止める。

すると、今度はシグナムが銀太郎の正面に現れレバンティンを構える。

「どうした?ヴィータの一撃で既にどうにかなってしまったか?先ほどまでの強気な態度と自信は一体何処へ行ってしまったのだ?」

「よく言いますよ。そっちだって僕が無敵じゃないとわかったら途端に自信に満ち溢れちゃって。あなた方のそういうところ、結構引きますよ。」

「それは済まなかったな。だが、私たちも“負け”という言葉は正直言うと嫌いなのでな・・・」

〈Ｅｘｐｌｏｓｉｏｎ〉

レバンティンにカートリッジを三発ロードし、更にアギトの力で炎熱能力を爆発的に高めるシグナム。

「（燃やし尽くすぜ、勝利の為に!!）」

「火炎閻魔!」

レバンティンの切っ先から放たれる大規模な炎の奔流が銀太郎に向かって来る。

東海林はこの技の大きさとシグナムの強さを熟知していたため、銀太郎に魂をシンクロするように促す。

「（あの女の炎は頗る強え！まともに食らう前にこっちから反撃だ！！）」

〈Ｂｌａｃｋ　Ｂｕｒｓｔ〉

「はあああ！！！！」

銀太郎の剣先から東海林の貫通破壊に秀でたブラックバーストが放たれる。

両者の技は互いに対消滅を起こし後かともなく消え去ると、東海林は銀太郎に指示を仰ぐ。

「（今だ！）」

「オプティマスプライム！」

〈Ｇｉｇａ　Ｄｅａｔｈ〉

銀太郎は魔力を極限まで集束させると、一護の月牙天衝にも似た黄金に輝く斬撃を剣の先から放出する。

「ギガ・デス！」

斬撃は真っ直ぐにシグナムに向けて放たれるが、そんな銀太郎の攻撃を遮ったのは金太郎の大技であった。

「ダイナミックボマー！！！」

「！」

金太郎の大技、ダイナミックボマーによって銀太郎のギガ・デスはその場で爆発を起こしシグナムに被害が及ぶことはなかった。

「（く・・・！熊谷金太郎め！！）」

金太郎はシグナムの元へと近づき安否を確認する。

「大丈夫ですかな？」

「はい。助かりました。」

「（遅いぜ！タイミングが合わなかったら結構危なかったんだぞ！）」

「いやいや！これは済まぬことをした。」

「そう怒るでない、アギト。」

「（分かってるけど、ムカついたんだよ！）」

銀太郎はそんな他愛もない仲間の会話黙って聞いていたが、内心はこの一人である状況に途方もない寂しさと孤独を感じていたのだ。

だから、金太郎やユーノ達の協力している光景に銀太郎は羨望を感じていた。

そして、そんな自分の心の弱さと今の状況見ながら深い溜息を吐く。

「はぁ～～～今更こんなこと言うのもどうかしてるけど・・・・・・多対一ってこんなにも不利だったんだね。」

「（銀太郎・・・・・・！？来るぞ！！）」

「今更気づいても遅せよ。咆えろ、蛇尾丸！！」

銀太郎の発言に耳を傾けていた恋次は、即座に蛇尾丸を延ばしてきた。

「つらあああああああああああ！！！」

狒狒王蛇尾丸の攻撃が銀太郎に向かって来る。

「（避けろ、銀太郎！）」

「分かってるよ！」

白鴎に忠告され咄嗟に躱す銀太郎だが、恋次はそんな銀太郎を逃がすまいと執拗に蛇尾丸を延ばす。

「それぐらいじゃ避けたって言わないぜ！！」

「ち。」

〈Ｓｈｏｏｔｉｎｇ　ｓｔａｒ〉

銀太郎はオーリーのシューティングスターを剣先から放出すると、蛇尾丸の頭部を攻撃する。

だが、爆発が起こる中蛇尾丸を操っている恋次当人は不敵な笑みを浮かべながら銀太郎にこう口にする。

「その程度で俺の蛇尾丸を落とせるわけねぇだろ。」

爆発が晴れた瞬間、元々鈍感且つ図太い精神を持つ蛇尾丸が攻撃を直撃してもなお平気な様子で銀太郎に向かって来る。

「何!?」

銀太郎は蛇尾丸の打たれ強さに驚きながら何とかそれを回避するが、それが結果的に命取りとなる。

「ナイスだ、恋次!」

「!!」

銀太郎が頭上を見上げると、そこには既にユーノと一護、なのはの三人が待ち構えていた。

「一気に片を付けるぜ。ユーノ、なのは!」

「「はい!」」

一護とユーノは刀に霊力を、なのははレイジングハートに魔力を集める。

「俺達も加勢だ！」

「終わらせよう。」

三人に刺激を受けた鬼太郎と浦太郎も加勢に入り、五人同時の攻撃が仕掛けられる。

「月牙天衝！！」

「輝け、晩翠！！」

「エクセリオンバスター！！」

「烈火大炎乱！！」

「ドルフィンドライブ！」

五人の武器から繰り出される漆黒と翡翠の斬撃、桜色の砲撃にイルカを模した水流魔法と灼熱の業火が一度に銀太郎の頭上から降り注ぎ、銀太郎は大きなダメージを負って地面へと激突していく。

「のっは・・・！」

その頃、ユーノ達と一段激しさを増す銀太郎の戦いを何処か遠いところでモニター越しに見ていた高円寺は溜息を吐くと、奇妙な言葉を漏らした。

「はぁ・・・・・銀太郎がかなり苦戦しているな・・・まぁ、無理もないか。いかにダイシー・ネリンネルングを取り込んだと言っても、器たるそのダイシーが年端もいかぬ子供であることに変わりはないか・・・」

そう言うと、高円寺はモニター画面を消して密かに計画していた邪なる計画を実行しようと動きを見せ始める。

「連中といい具合にやり合い、銀太郎の魔力が枯渇寸前にまで消費され、ダイシー・ネリンネルングの力の余波が空間一体に溶け込んだそのときこそが・・・・・潮時だな。」

高円寺の言葉が何を指すのか!?

現時点ではまだ話さないでおくとして、一方のスバル達フォワードの五人やあとから合流してきたはやてとクロノ達はルキアの案内で双極の丘までたどり着くと、そこで戦闘を繰り広げるなのは達を目撃する。

「間に合った!!」

「!見て下さい、あれ!!」

キャロの言葉を聞いて全員が一様に同じ方向へ向くと、そこにはなのは達の攻撃を食らい宙へと舞い上がる齢十五の少年の姿が瞳に映ってくる。

金太郎からの証言を聞いていたスバル達も些か信じられずいたが、実際にその姿を目にしてようやく納得した様子となる。

「なのはさん達が戦ってる子が・・・ひょっとして、ボスであるダイシー！？」

「あんな子供がパトリオットのボスだなんて・・・！？」

「兎に角、援護に入るで！」

「ああ！」

「はいです！」

はやて達はなのは達の援護に入るためにバリアジャケットを着用すると直ぐに戦場に足を踏み入れようとするが、その瞬間はやて達は銀太郎の力によって出来た結界で中への侵入を阻まれてしまう。

「これは・・・！？」

「結界！？」

「しかも・・・これはかなりのものだ・・・！これでは容易に中には入れないぞ。」

「く・・・！！」

はやて達は一先ず結界を破壊することを主眼に置いて、行動を起こし始めるがその間にその凄まじい戦況を目の当たりにしながらキャロは心より全員の無事と銀太郎の安否を気遣った。

「みなさん・・・負けないで・・・！」

その頃、ユーノ達の攻撃をまともに食らってしまった銀太郎は一人巻き起こる炎の中で未だ動きを見せないままだった。

そんな炎の中を覗きこみながら一護やユーノはやり過ぎたとばかりに若干心配そうな表情を浮かべる。

「派手にやり過ぎたか？」

「どうでしょうか。」

そんな一護達の心配をよそに、炎の中にいる銀太郎は重い体を徐に起こす。

「う・・・・・・！」

「（大丈夫か、銀太郎！？）」

オーリーが魂を共鳴させて銀太郎の安否を気遣ってくる。

「あ・・・あんまし・・・大丈夫とも言わないかな・・・ねぇ、みんな・・・・・・僕はやっぱり無理だよ。勝てっこないってあんな強い人たちに・・・・・・」

「（銀太郎！今更何だその弱音は！？）」

「仕方ないよ。あの人たち・・・とんでもない絶妙なコンビネーションで一切の隙を作らせない。それだけでも厄介なのに、個人の能力だってまさしくチートだって。みんなでやってるのと一人でやってるのじゃ、雲泥の差だって。」

銀太郎はもはや諦めモード全開であった。

元来が一人である銀太郎にとって、このような状況では流石の銀太郎の心がすぐに折れてしまうだが、そんな銀太郎の言葉を聞いたオーリーが意外な言葉を持ちかける。

「（・・・言っただろ。お前は一人じゃない。）」

「オーリー・・・？」

すると、オーリーの言葉に便乗して白鴎や田吾作たちも銀太郎を元気づけようと更に言葉を持ちかけてくる。

「（そうだぜ。一人じゃないからここまで来れたんだろ？昔は一人でもさ・・・あの時から、ずっと俺達は一緒だよ。）」

「・・・白鴎・・・」

「（ああ。俺達で戦えば相手が何人だって勝てる！その為の俺達パトリオットなんだ！ボスならもっと自信を持てよ！）」

その励ましの言葉を聞いた銀太郎の脳裏に一つのビジョンが浮かんできた。

それは幼いころから寝食を共にしてきた、オーリー達パトリオットと過ごした楽しく・悲しく・怒ったり・笑いあったこの上もないぐらいに幸せだった生活の日々。

それを思い出すと、銀太郎は漸く元気を取り戻してもう一度戦う覚悟を決める。

「・・・ああ。分かったよ、白鴎。みんな・・・分かってる・・・」

「（銀太郎。）」

「・・・じゃあ、みんな。僕と最後まで付き合ってくれるかい？」

「「「「「（ああ。）」」」」」

銀太郎は全員の魂と自分の魂を共鳴させると、手に持っていた剣を分解してすべて自分の中へ取り込み何かの技を発動させようとしていた。

そんな変わり始めた銀太郎の様子に気づいた金太郎が全員に忠告をする。

「！・・・魔力が多少・・・変わり始めました・・・」

「くそ・・・どこだ・・・？」

躍起になって銀太郎を捜す恋次だったが、その時一護が頭上に浮かぶ銀太郎を発見する。

「上だ、恋次っ！！」

「！」

一護に言われ頭上を見上げてみると、恋次やユーノ達全員の瞳に飛び込んできたものは全く想定外のものであった。

「・・・・・何だ、ありゃあ・・・・・・・・!?」

「あれは一体・・・!?」

そう言う全員の頭上で浮かぶ銀太郎の周りをよく見てみると、銀太郎が纏う甲冑から彼自身の魔力と魂が合わさったものから生み出されたそれこそゴーストと思えるような半透明な生き物が、無限に出現していているのだ。

そんな気味の悪いゴーストたちを見ながら一護達は唖然としていた。

「何がどうなってるんだよ!?」

すると、なのははふと銀太郎の手にあった筈の剣が消えていることに気づいた。

「・・・ユーノ君・・・あの子・・・」

「うん。丸腰になってるね。」

「あの剣は!?」

「分からぬ。私達も舐められたものだな。武器は要らないというわけか。」

「けっ!上等だぜ!!」

「ほんと。人を見下す奴って最低だね。」

銀太郎の態度に即発された鬼太郎や浦太郎は武器を手に取ると、銀

太郎の攻撃に備え他の者も同様に力を入れて待ち構える。

そして、全ての準備が整うと銀太郎は生み出したゴーストたちに向けて一斉に指令を送る。

「いくよ、みんな」

銀太郎の掛け声とともに、ゴースト達は一斉に不気味な声を上げながらユーノ達に向けて飛びかかっていくのであった。

「来るぞ!!」

「わかってるさ!!」

全員は向かってくるゴーストを迎撃するために、それぞれの必殺技で対処にあたる。

「グラーフアイゼン!!!」

「――――――月牙・・・・・天衝!!!」

「咆えろ、蛇尾丸!!」

「レバンティン!!」

「熾きやがれ、烈火!!」

「フィッシャーマン!!」

「サンダーブレイド!」

「ディバインバスター！」

「獅子翡翠群！」

双極の丘で飛び交う雷や砲撃、炎と水、巨大な斬撃に蛇の攻撃と翡翠に輝く流星群がゴースト達を消滅させていくが、その直後にゴースト達は再生機能により復活していく。

「！これは・・・・・・」

ゴースト一体が再生をすると同じように他のゴースト達も数を減らすことなく元の数にまで完全再生を果たしてしまう。

「奴ら無限に再生してやがる！これじゃキリが無えぜ！」

「たくっ！こんな魔法ありかよ！？俺はな・・・魔法って奴は見慣れた今でもあんまし好きになれねぇんだよ！！」

一護はそんな愚痴をこぼしながら、補助デバイスを柄頭に取り付け鎖を長くするとそれを勢いよく振り回しながら霊圧を溜めていく。

「月牙天嵐――――――“衝覇乱流（しょうはらんりゅう）”！！」

一護は極限まで溜めた霊圧により衝撃波を一気に解放させると、その力で目の前に浮かんでいた全てのゴースト達たちを大爆発を起こしながら消し去っていく。

そんな一護の度肝を抜いた技を見ていたなのはも思わずこんな質問をしてしまう。

「い・・・一護さんの技も見方によっては魔法にも見えるんですけど！？」

「うるせーな！ボカスカ砲撃撃つお前にんな事言われたくねぇよ！」

なのはの言葉で機嫌を悪くする一護であったが、その横でユーノもなのはが日頃から砲撃をボカスカ撃ちまくっている事実に苦笑いを浮かべる。

「確かに・・・ボカスカ撃ってるね・・・」

「ゆ、ユーノ君まで！！」

ユーノの言葉を聞いて、なのはは恥ずかしくなったのか顔を真っ赤にしてしまうがその直後に地面の下から先ほど一掃したゴースト達がユーノ達の前に現れる。

「ちッ！」

舌打ちをしながら反撃に移ろうとする恋次であったが、その時狒狒王蛇尾丸の操作が思うようにいかないことに気づき、振り返ってみると・・・ゴースト達が蛇尾丸の体を押さえつけているではないか。

「！」

他の者も同様に自身の武器をゴースト達に押さえられ、思うように使うことが出来ない。

そんな状態の中で一体のゴーストが一護の足元に絡まりつく。

「く・・・面倒くさい技だ！一気に叩き潰すぜ！！」

一護がそう言いながら刀を振り上げた直後、そのゴーストは眩いばかりの光を発しながら何かを起こそうとしていた。

「！？」

他の者も同様の現象が起こり始め、十秒も経たないうちにゴーストは一斉に大爆発を起こして天を劈くばかりの勢いのある爆風を舞い上がらせる。

たまたま自分の所でゴーストが爆発をしなかったユーノはこの状況に息をのんだ。

「なのは！！フェイト！！一護さん！！みんな！！」

丘から立ち上る巨大な爆風の中から肌を若干焦がした一護や恋次、なのは達が出て来ると一護はあることに気づいたのか全員に警告を促す。

「げほ、げほ。おい！！恋次！！みんな！！聞こえるか！？」

「何だよ！？」

「わかったぞ！奴ら魔力弾とかそんな甘いもんじゃねぇ！〝魂魄〟だ！！」

「魂魄ですか！？」

「あの亡霊みたいな連中、銀太郎の弾倉から出てきた！一体一体があいつが生み出し撃ってきた魂魄のカタマリだ！！接近戦での爆発はヤベえ・・・」

と、一護がそう口にしていた瞬間・・・もっとも恐れていた事態がすぐに襲ってきた。

「「「「！！」」」」

「「なっ！」」

「ヤベえ・・・！！」

空中に回避していた一護やなのは達を取り囲む夥しい数のゴースト達。

「く・・・そ・・・ッ」

一護達は回避もままならぬままゴースト達の爆発に巻き込まれてしまい、地面でそれを見ていたユーノは空中で広がる爆発の光景に思わず声を張り上げる。

「なのは！！！！！！」

爆発の様子を別な場所でじっと見ていた銀太郎はこの技の効力について徐に話し出した。

「・・・どう？これがダイシーを受け継ぐものの覚悟だよ。今のは、僕の中に取り込まれた全てのパトリオットの魂と僕の魔力を練り合わせて創り出した取って置きの技だ。自らとパトリオットの魂と魔

力を極限まで上昇させ、あらゆるものを破壊し無に帰す禁忌の魔法・・・そしてそれは、ミッドとベルカの魔導師を恨み・独自に研究を重ねた初代ダイシーが使うことを許されたリベルの最大奥義。それがアルバート・ヴェン・ダイシー十代目、狼谷銀太郎の能力。」

説明が終わると同時に爆風が晴れ、中から出て来る無残にも焼け焦げたバリアジャケットと死覇装に身を包んだ一護となのは達。

「「「「「「はあっ、はあっ、はっ」」」」」」

息を切らしながら所々から血を出す一護達を確認すると、オーリーが銀太郎に向けて・・・

「（銀太郎。）」

「何、オーリー？」

「（奴ら全然対応が出来ていない。）」

「そうだね。」

「（一気に勝負をかけるぞ。）」

「うん。わかってる・・・」

オーリーの言葉を聞き入れると、銀太郎は再び無数のゴースト達を生み出しそれをすかさず一護たちの元へと向かわせる。

「ちっ！」

「くっ！」

悲鳴にも似たゴースト達の唸り声を聞き、対処しようとするも受けたダメージの大きさの為に思い通りに動かせない一護達はそのまま浮遊していることでやっとの状態だった。

「「「「「「（行こう。）」」」」」」

ゴースト達は一護達を取り囲むと、先ほどよりも更に強力な爆発で一護達を一気に追いつめる。

「なのは！！！！この！！！！ちょこまかと！！！！」

ユーノはなのは達を助け出そうとするも、周囲を取り囲み体をゴーストの魂に扮した瀬間子達によって全く動くことの出来ない。

「（貴様の存在が一番我々にとっては不利なのだ。動かす訳にはいかぬ！）」

「く・・・！！」

やがて、爆発が収まると一護達全員は力なく空中から地面へと落下していく。

ユーノはなのはが空から落ちる光景に胸が張り裂けそうなくらいに居たくなるのを感じたが、全く動けないままでいる今の状況に激しい憤りを感じていた。

「「「「「「「「は、は、は、は」」」」」」」」

何とかその場に膝をついて立とうとするも満身創痍の状態に陥り、すっかりバリアジャケットと死覇装を焦げ付かせてしまう一護やなのは達。

そんな一護達に向かって頭上から銀太郎が声をかけてくる。

「・・・勝負はあったでしょ。僕だって人の子だ。無駄な血は流したくない・・・逃げれば見逃すけど？」

すると、一護は徐に立ち上がると口から血を唾のごとく吐き出し鋭くも未だ諦めていない瞳で返事をする。

「ぺっ・・・舐めんじゃねえよ・・・」

「・・・そうですか・・・仕方ない。止めって言う言葉は好きじゃないんだけど、止めと行きますよ。」

そう呟きながら、銀太郎が静かに地面に足をつけた――――――その瞬間だった。

銀太郎は突然腹部から言い表せないぐらいの強烈な痛みを感じた。

「が！」

「「！！」」

「何！？」

「「「な！」」」

「「「え!?」」」

「「「「「「（銀太郎!?）」」」」」」

銀太郎の起こった状況に一瞬、頭が付いていけないでいるユーノやなのは達。

そして、銀太郎の魂とシンクロを果たしているパトリオット五人。

銀太郎が険しい表情で腹部に刺さったものを見てみると、それは斬魄刀と思われるものであった。

「・・・な・・・こ・・・これは・・・!?」

腹から流れ落ちる生々しい自分の血を見ながらゆっくりと後ろに振り返ってみると、銀太郎はそこで信じられないものを目撃した。

何と、銀太郎の背中から刀を一突きしてきたのはギガトロンの力で鎧を構築させていたあの高円寺であった。

「高円寺さん・・・何で・・・!?」

高円寺の行動に全く理解できないままの銀太郎であったが、一方の高円寺は非常に冷たい目線を浴びせながらギガトロンを解除して毅然とした態度でこう口にした。

「ご苦労だったな、銀太郎。お前の役目は終わった・・・もうお前に用はない。」

一体、何が起こってしまったのだ!?

高円寺の突然の行動は果たして・・・！！

驚愕の真実は次回だ！！！！

教えて、ユーノ先生！

ユ「今日は四楓院夜一さんについてだよ♪」

ユ「僕の白打と瞬歩の師匠であり、元二番隊隊長兼隠密機動総司令官を務めた歴戦の兵。高貴にして華麗・その恐ろしいまでの強さから砕蜂隊長は夜一さんを崇拝している。」

ユ「普段は黒猫の格好でのほほんと過ごしてることが多いかな。」

一「黒猫で思い出したけど、よく夜一さんは抵抗なく近づけたよなお前？だって苦手だろ、猫？」

ユ「ま・・・声も男のそれと似てましたし・・・だけど、いきなり女性に変身したときのあの姿には・・・流石に死にかけましたけど・・・（ユーノはそのときの事を思い出しそうになり、顔が赤くなる）」

一「俺だってびっくりしたよ、最初は。ん？なぁ、お前はなのはに初めてフェレットから人間に戻った時もそれなりにびっくりされたよな？今にして思えば、リリカルなのはって結構ＢＬＥＡＣＨのそれとかぶってるところあるよな？」

な「あの・・・ユーノ君は人間に戻っても全裸でなかったですよ・・・！」

ユ「そんなことしてたら本当に淫獣だよ！！」

魔導師図鑑ハイパー！

とある一室で、恋次とクロノは正座をして黙っていた。

そこは山本総隊長が自らお茶をたてて持て成す茶の会であった。

他の参加者と一緒に静かに黙っている二人だが、実際かなり気が重かった。

恋「（何で俺とクロノも一緒なんだよ・・・・・・はぁ・・・・・・気が重いぜ。）」

ク「（恋次さん。僕だって同じ気持ちなんですから、少しは我慢してくださいよ。）」

恋「（いや、けどよ・・・・・・）」

すると、そこへ扉を開けて十一番隊副隊長の草鹿やちるが入ってくる。

や「お菓子、食べに来たよ！！」

そう言って、山本が立てたお茶と駄菓子を一気に平らげその場から立ち去る。

や「ごちそうさま！！」

やちるがいなくなった後、山本は和やかな表情で・・・・・・

山「また来るがいい。」

それを聞いた瞬間、二人は心の中で叫んだ。

恋・ク「（えええええええええええ！！！！！！！！！！！！！）」

短編小説　その一

浦「今日は、ちょっと短編小説的に僕が店長をネタにしたネガティブ小説的なものを書いてみました♪」

一「ほう・・・お前がユーノのね・・・つうか大丈夫なのか？」

浦「大丈夫ですよ。こう見えて、文才には自信がありますから♪」

ユ「じゃあ、早速読んでいこうかな。」

払拭する過去と今の居場所

僕は――――――独りだった。

六年前、僕は無限書庫司書長として手腕を振るっていた。
仕事は膨大で大変だったけど、やり甲斐のある仕事だし誇りも持っていた。
僕は一見順風満帆な人生を送っているかに思えていた。

だけど、本当は順風満帆なんて言葉――――――使うようなものじゃなかったんだ。
何故なら、僕は結局のところ一人・・・孤独だったんだから。

そう感じるようになったのは、きっと僕の幼馴染と道を分かったあ

の瞬間からだ。

高町なのは――――――――僕の最初で最後の初恋の女性。

出会いは偶然だった。

偶然に出会った僕と彼女は、魔法と言う一種の接着剤のようなものでその後の人生が大きく変わっていった。

彼女は魔法と出会い、それによって得たかけがえのない親友に支えながら、あのあどけなくも優しかった少女は今では「エースオブエース」と謳われ、強く凛々しくそして華麗な容姿を兼ね揃えた女性に変貌を遂げた。

互いに道を分かち、それぞれの職場で忙しい毎日を送るようになった中で次第に僕と彼女の距離は大きく開いていった。

嘗てはその背中を守ってあげることが出来た彼女だが、今ではその必要はなくなった。

戦闘魔導師と非戦闘魔導師とでは、住む世界が違い過ぎる。

彼女は天才だから、凡人の僕が彼女に追いつくことなど出来はしない。

若干天才過ぎる彼女の才能に嫉妬し、自分の非力さを呪っていた――――――

そんな天才の彼女も、一時は生命の危機に瀕したこともある。

度重なった疲労と無茶が彼女の体を蝕み・・・・・落ちた。

一時は飛ぶことも歩くことも出来なくなるかもと囁かれ、彼女はきっと絶望した。

だけどそれでも彼女は諦めなかった。

持ち前の強い心で、彼女はその絶望的な状況を打破して再び空へと舞い戻っていった。
僕はそんな彼女の傍で何もすることが出来なかった。
彼女を巻き込んだのは他ならぬ僕の所為なのに、その僕には彼女の支えになる事が出来なかった。

だからこそ、僕は決めたんだ。
こんな僕が彼女のことを好きなってはならないのだと――――――
そんな権利、この僕にはない。

僕は自然となのはと一定以上の線を越えぬ程度に無意識のうちに“壁”を作った。
少しでも彼女と自分の距離を離すために。

僕は彼女を幸せにするためなら、自分の身を捨てる覚悟だった。
彼女の幸せが、僕の全てだった――――――

しかし、その気持ちが次第に変わり始めていったのは何時からだったのだろうか。

無限書庫での膨大は資料との格闘に加えて、遺跡発掘の仕事などの悩殺した毎日を過ごしていく中、僕が彼女を気に留めなくなったのではなく・・・彼女は僕の事を気に留めなくなっていた。

彼女は最愛のパートナーとつい最近養子にしたばかりの娘と一緒に毎日幸せに過ごしている。
友達や後輩にも恵まれ、彼女は正しく順風満帆な人生を送っていた。
この間、娘であるヴィヴィオの誕生日が開かれなのはに縁のあるメンバー全員が出席したようだ。
勿論クロノも中に入っていたらしい――――――

らしいとは、誰かが抜けているように聞こえる。
呼ばれなかったのだ――――――この僕だけが。
僕がその事を知ったのは、誕生日会から数日過ぎたときのクロノからの資料請求の時だった。
なのは達は何故来なかったのかと怒っていたようだが、知りもしないのに何故来なかったと言われなければならないのか？

その時、僕の心の中に“孤独”と“寂寥”が生じてしまったのだ。
その後もふとした小さな隔たりや何気ないことにも関わらず、僕の負の感情は日増しに大きくなっていった。

最近一番寂しかったのは、本が好きなヴィヴィオが強くなりたいと言う理由からストライクアーツというミッドでは稀な格闘術を習うために、無限書庫に訪れる回数がめっきり減ってしまった事だ。

僕も彼女の事は自分の娘のように可愛がっていたから大いにショックだった。
思い返してみれば、ヴィヴィオやなのは達と直接敵に最後に遭ったのは何時だっただろう――――――
酷く昔のように感じられた――――――

僕が想いを寄せた彼女は、もう僕の手の届かない場所へと行ってしまった。
嘗てはパートナーとして、魔法の師として教えられたことも今では何も残っていない。
パートナーなら、僕なんかよりずっといいかけがえのない親友のフェイトがいる。
同性愛と噂されるなのはとフェイトだが、僕や傍から見ても二人はお似合いだ。

日常でも、戦闘でも、常に傍らでなのはの事を支えられるのはフェイトしかいない。

僕はなのはのことを全てフェイトに任せ、自身は身を引くことにしたがそれでも、捨て去った筈のなのはへの寂寥の念が完全に消えることはまずなかった。

その後もこの譬えようのない酷く澱んだ負の感情は次第に僕の心を純粋に締め付ける。

お前は無力だ、お前には何もできはしない、誰も認めてくれるものなど居ないのだと、心の中で誰かがそう言っている気がした。

事実、今の僕には仕事にも趣味の発掘にも、輝きを見いだせずにいた。

いや――――――生きることそのものに輝きを見いだせなくなっていたのだ。

初恋の女性からも、友達からもその存在を忘れ去られ孤独と寂寥・絶望という負の感情に締め付けられるこんな人生に、輝きなど見出せるはずもない。

僕はこんな人生ならばいっそのころ終わらせる方が幸せなのかもしれないと思い、自殺を試みたが・・・臆病な自分にそんな真似が出来る訳もなかった。

結局僕は自分の意思さえも貫き通せぬただの臆病者。

だからこそ、僕は無限書庫の司書長という椅子を降りて世界に向けて逃げ出した。

宛てもなく、虚ろな瞳で世界を渡り歩くそんな毎日。

愛されず、人から褒められることもなく認められることもなく。
ただ、自分の存在理由を只管に求めることに執着して――――――

そんな心が擦り切れていく日常の中で、僕に大きな変化が訪れた。

黒崎一護・・・――僕の世界と人生を変えてくれた恩人の名だ。

僕はひょんなことからとある遺跡調査に乗り出していた。
一応、その日を過ごすための食費代ぐらいは稼がなければいけないから、僕は依頼された遺跡の調査をしてそれに見合った報酬で生活していた。
その遺跡調査の過程で、あるロス・ロギアを発見しその力の影響で僕は魔力とは対の力を持った“霊力”と呼ばれる力を手に入れた。

ロスロ・ロギアが暴発したことで僕は大けがを負ったが、そんな僕をも一護さんは救ってくれた。
彼もまた、僕が手に入れた力・・・霊力を持つ死神代行であった。
彼は僕と違って強く・逞しく・人望ある男性だった。
凄く輝いて見えた・・・――あの時の僕には。

その輝きはなのはのそれと似ていたけど、彼にはなのはにはないものを持っていた。
それが何なのかはよく分からないが、彼は人生に絶望し全てを投げ出そうと言う所まで追い込まれていた僕に向かって言った。

「全部一人で何もかも背負い込んでるんじゃねぇよ！てめえの痛みも、苦しみも、俺達に分けてくれよ！！お前が辛くて苦しんでいるのに、俺達がそれを黙って見過ごすなんて出来やしねぇんだ！！だ

から、一人でそんな寂しい顔するなよ・・・俺達は・・・どんなことがあってもお前の味方でいる。俺達は・・・“仲間”だろ・・・！」

その言葉で、僕がどれほどまでに救われたかあなたは知っているだろうか。

僕にとって、一護さん・・・・・・あなたは僕の人生の救世主だったんです。

心に生じた負の感情は、邪な方へ心を侵食していった僕にとって、あなたの言葉一語一語が僕の黒く澱んだ感情を浄化していった・・・それは漂白剤の如く白く。

孤独を受け入れられず、孤独である事を人の所為にしていた。

人から拒絶されることを恐れ自分から拒絶ていた。

傷つくのを恐れ、孤独な好きな芝居をしていた。

それが自然と心に壁を作る結果となっていた。

そして、自分の存在価値というものに輝きを見いだせずにいた。

いつの間にか忘れていた――――――僕が本当に欲しかったもの。

地位や名誉、武功でも才能でも自分を認めてくれる理解者でもない。

僕はただ――――――誰か隣に居て欲しかった――――――

ただ、誰かに見て欲しかった――――――

ただ、一人が嫌だった――――――！

「ユーノ！こっち来いよ！」

正面から受け止めてくれる仲間――――――

「「「店長！行きましょう！」」」

正面から僕を見、ぶつかってくる奴――――――

ただ、仲間が欲しかった――――――

僕の欲しかったものは、もう――――――とっくの昔にここにあった。

「ユーノ。どんなことがあっても俺達はお前の味方だ。俺とお前が師弟とかなんてもんは関係ねぇ。俺はお前の護りたいものを守る。何か困ったことがあったら遠慮なく俺やツナ達に遠慮なく相談してくれ。そのための“仲間”だろ？」

形は違えども、僕の周りにはいつの間にか仲間がいっぱいだった。死神であったり、イタリアのマフィアであったりと様々な角度から僕の身の回りには仲間が・・・友達が溢れかえっていた。

嬉しかった。

僕が輝きを見いだせていなかった根本的な負の感情が一気に消えていった。

僕はこれで漸く、過去の自分をリセットできる。

もう、過去は振り返らない。

これからは、僕のこの力は自分を救ってくれたこの人たちのために使う。

僕を“仲間”だと言ってくれた一護さんやツナ君たちの為に僕は使う。

彼らが護りたいものを、僕は護ってみせる。

「翡翠の魔導死神ユーノ・スクライア」は、もう逃げも隠れもしない。

「行くぜ、ユーノ！」

「はい、一護さん！」

僕の欲しかった“絆”はもう――――――――ずっと前から繋がっていた。

紡いだ絆の糸は、何処までも伸びていく・・・・・・これからもずっと――――――

そんな事を思いながら、僕ユーノ・スクライアは今日も日がな一日をかけがえのない従業員三人と共に過ごすのだ。

「ふぁ～～～いい天気だよ、全く以て。こんな日は、弁当でも持ってピクニックにでも行きたいものだな。」

一度断たれた絆は、形を変えて今の僕たちの絆を紡いでいく。

きっと、僕は心の中でまだ払拭できていないところもあるのかもしれない。

だけど、今の自分にとって大切なこの居場所こそが――――――僕の帰る場所。

さようなら――――――僕の最初で最後の初恋の人。

今僕は、君に忘れ去られて幸せです――――――

浦「ううううう！！！！！！！！！傑作だよ！！！！！！全く以ていい話だよ！！！！！」

一「そうか・・・？」

ユ「浦太郎・・・ごめん・・・これ結構自分でも思ってところが赤裸々に表現してあったから滅茶苦茶感動しちゃった・・・！！いや、良かった！！すっごく良かった！！！みんな、浦太郎に拍手！！！」

全「おおおお

数百年の渇望・高円寺虎彦（前書き）

高「俺の牙はやがてすべてのものを食い尽くすために存在している。欲しいものは奪う主義さ・・・飽き飽きだぜ・・・時なんか、喰われて無くなれ・・・！」

高「乾いた牙が求める絶対的な力が神のエリアにあるなら、今すぐ奪いに行く。転げ落ちろ時の狭間へ・・・二つの欲望叶う時、俺だけが神に代わる。支配と死・・・・・・今、最後の晩餐が始まる・・・」

ユ「ユーノ・スクライア外伝　パトリオット篇・・・・・・始まります。」

数百年の渇望・高円寺虎彦

＞ｉ１８７６８―７０９＜

ユーノ・スクライア外伝・・・前回の三つの出来事。

一つ：　完全覚醒を遂げた銀太郎がユーノ達に襲い掛かる。

二つ：鎧を砕かれた銀太郎が死んでしまった白鴎たちの力を借りて圧倒的なパワーを発揮させる。

そして、三つ：止めを差そうとした銀太郎に高円寺が背中から一突き。

銀「いくよ、みんな」

銀太郎が仕掛ける最後の奥義。

一「来るぞ！！」

恋「わかってるさ！！」

自分たちに向かって牙を向けてくる銀太郎が召喚した謎の亡霊。

ヴィ「グラーフアイゼン！！！」

一「――――――月牙・・・・・天衝！！！」

各種、己の得意技で迎撃する一護たちだが、亡霊は攻撃を受けてもなお無限に再生を続ける。

恋「無限に再生してやがる！これじゃキリが無えぜ！」

金「！」

隙を突かれ、身動きを封じられてしまう金太郎達。

一「く・・・面倒くさい技だ！一気に叩き潰すぜ！！」

と、攻撃を加えようとした瞬間。

一「！？」

一護達の周囲で亡霊が大爆発を起こし始める。

一「げほ、げほ。おい！！恋次！！みんな！！聞こえるか！？」

恋「何だよ！？」

一「わかったぞ！奴ら魔力弾とかそんな甘いもんじゃねぇ！魂魄だ！！接近戦での爆発はヤベえ・・・」

だが、そんな一護の言葉もむなしく亡霊たちは一護達の周りを完全に包囲する。

全「「「「！！」」」」

一「く・・・そ・・・ッ」

逃げ場のなくなった一護達を亡霊の大爆発が襲う。

銀「・・・どう？これがダイシーを受け継ぐものの覚悟だよ。今のは、僕の中に取り込まれた全てのパトリオットの魂と僕の魔力を練り合わせて創り出した取って置きの技だ。自らとパトリオットの魂と魔力を極限まで上昇させ、あらゆるものを破壊し無に帰す禁忌の魔法・・・そしてそれは、ミッドとベルカの魔導師を恨み・独自に研究を重ねた初代ダイシーが使うことを許されたリベルの最大奥義。それがアルバート・ヴェン・ダイシー十代目、狼谷銀太郎の能力。」

大ダメージをその見受け、満身創痍の一護達。

オ「（一気に勝負をかけるぞ。）」

銀「うん。わかってる・・・」

銀太郎は勝負出、一護やなのは達を空から撃墜してしまう。

ユ「なのは！！！！」

亡霊たちに自分の身を封じられ身動きの聞かないユーノはただただ声を張り上げるしかできなかった。

銀「・・・勝負はあったでしょ。僕だって人の子だ。無駄な血は流したくない・・・逃げれば見逃すけど？」

しかし、それでも一護達は諦めようとはしなかった。

一「ぺっ・・・舐めんじゃねえよ・・・」

銀「・・・そうですか・・・仕方ない。止めって言う言葉は好きじゃないんだけど、止めと行くよ。」

銀太郎が地面に着地を果たした瞬間、事態は急変してしまう。

銀「がっ！」

全「「「！？」」」

パ「「「「「（銀太郎！？）」」」」」

突然、背後から銀太郎は刀による一撃を受けてしまう。

銀「・・・な・・・こ・・・これは・・・！？」

そして、後ろへ振り返ってみるとそこ居たのはあの高円寺虎彦。

銀「高円寺さん・・・何で・・・！？」

高「ご苦労だったな、銀太郎。お前の役目は終わった・・・もう用はない。」

時は戻り、数百年前の瀞霊廷。

ここに、一人の死神がいた。

これは、その死神が常々思っていた不毛な毎日と飽き飽きしていた時間の繰り返しが原因で今回の事件の全貌として現れた記憶のダイジェストである。

その男、六番隊第三席の高円寺虎彦は勤務中であるにもかかわらずお気に入りの場所で大あくびを掻きながら昼寝を堪能していた。

「はぁ～～～～～眠み～～～～～～い」

当時の高円寺にとっては、これは日常茶飯事の出来事であった。

高円寺は、何よりも自分の生きているこの世界や時間と言うものに関して非常にひねくれた考え方をしており、いつも過ぎ行く時間に虚しさばかりを募らせていた。

そんな高円寺にも、友人の一つは居たらしい。

「・・・こんな処にいたのか？そろそろ隊首試験が始まる時間ではないのか・・・虎彦。」

高円寺が声のする方へ振り向くと、そこに立っていたのは同じ隊の副隊長でありあの朽木白哉の実の父親である親友の朽木蒼純であった。

「あ？何だ、もうそんな時間かよ。てか、態々報せに来てくれたのかよ・・・蒼純（そうじゅん）」

「あのな・・・隊長選任のこの大事な時にその実力を父上から買われ、推挙を受けたのはお前だろう？もっと自分のことなんだから重みを実感したらどうなんだ。」

「はいはい・・・分かりましたよ。次期朽家当主様がそう言うことだし素直に行くとしますかな。で、試験って何所でやるんだっけ？」

「はぁ～～～お前と言う奴は・・・・・・一番隊隊舎の東側にある部屋に、総隊長殿と父上殿がお待ちだ。早く行け。」

「ああ・・・あんがとよ。」

高円寺は蒼純に試験会場を聞くと、急いで瞬歩を使って一番隊隊舎へと向かった。

蒼純はそんな高円寺の思考の読めぬ正確に些か呆れかえっていた。

「・・・やれやれ・・・あいつは一体何を考えているんだ・・・」

試験開始時間、残り僅かとなったところで高円寺はぎりぎりのタイミングで間に合い廊下を走って総隊長や二人の隊長が待つ部屋へと入り、膝をついて頭を下げた。

「高円寺虎彦。ただ今参りました。」

山本は高円寺の姿を確認すると、徐に試験開始の旨を伝える。

「・・・六番隊隊長、朽木銀嶺が推挙の力量の程・・・早速見せてもらおうか。」

「は！」

高円寺はこの後、一時間程度に渡り隊首試験を受け試験終了と同時に足早に自分の隊へと帰っていったそうだ。

六番隊隊舎の執務室の方でお茶を啜りながら高円寺の帰りを待つ蒼純。

「・・・・・・」

自分の事ではないにしろ、やはり自分のこと以上に心配な様子で書類整理もままならいそんな様子でいると、徐に帰還した高円寺が執務室の扉を開けたのだった。

「お。虎彦、どうだった？」

「さぁな・・・・・・まぁやるだけはやったんじゃないのか？」

「自分の事であろう。」

「知るか。」

妙に不貞腐れた様子の高円寺はソファーの上に座ると、テーブルに置かれてある煎餅を徐に手に取ってかじり出す。

一方の蒼純はというと、普段通りの様子を醸し出し特に落ち込んだ様子も見せていない高円寺の姿に一安心したようだった。

「ま、結果はどうあれ一先ずお疲れと言っておくか。そう言えば虎彦。隊首試験が終わった後でと何だが、例の案件の方・・・・・・そっちの方はどうなっている？」

「ああ。何とか外堀は埋めた。どうにかなるだろう・・・」

「そうか・・・頼もしいな。任せていいか、“部隊長”？」

「へいへい。仰せのままにしますよ・・・“蒼純副隊長殿”」

やがて、高円寺は嫌々ながらも事務仕事を済ませると一度自分の部

屋へと戻っていった。

「ただいま。」

自分の部屋、とは言っても厳密には部隊長であるそこには高円寺に心酔する部下の一人がお茶を淹れて帰りを待ち望んでいた。

「おかえりなさいませ、虎彦殿！」

「ああ・・・」

「お茶の用意が出来てますが、いかがなさいます？」

「そうだな。貰うとするか。」

「はい。」

高円寺は中央に置かれた専用のチャアーに腰を下ろし、部下から出されたお茶を啜りながら隊首試験を受けたことを伝えた。

「え？隊首試験をお受けになられたのですか！？」

「まぁな・・・」

「それで、どうでしたか試験のほどは！？」

「う～～～ん・・・難しかったんじゃないの？俺はいつも通りだ。それで落ちたとしても、後悔なんてしてねぇし・・・朽木隊長の買い被りってことで丸く収めるさ。」

「買い被りなどはありませんよ。虎彦殿の才は誰が見ても分かります！！」

と、部下の方は高円寺の能力を過大評価するが一方で高円寺は眉間にしわを寄せながら不機嫌そうな声で次のように語り出す。

「け。才能なんてくっだらねえ～～～。俺はそれよりももっと大事なもんがあるように思えるけどな。」

「と、仰いますよと？」

「一言で言えば・・・――“満足”だな。」

「満足・・・？」

高円寺の言葉に疑問符を浮かべる今一ピンと来ていない部下だったが、高円寺は更に続けて語り出す。

「人にはそれぞれ満足の度合いが違ってくる。ちょっとのことで満足する者も居れば、なかなか満足できないものもいる。俺の場合は後者だ。今の目の前に写っているこの世界には、何も満足できるようなものはないんだよ。」

「・・・はぁ・・・」

「たく・・・つまんねぇな・・・・・・・」

これが、高円寺虎彦の抱える人生における最大の悩みの種であった。

彼が今も昔も追い求めていたのは、根本的なところ――――――「

満足」であったのだ。

高円寺がそう思うようになったのは何時だったか迄は分からぬが、それを自覚するようになってから高円寺は今まで以上に満足に固執していき、それを求めたが結局高円寺の満足に応えられるようなものは何一つ現れなかったのだ。

そうしていくうちに、高円寺の心に出来始める枯渇された満足感。

日増しに大きくなっていく中、日常そのものにも冷ややかな目で見るようになっていく高円寺。

そして、最終的に高円寺はこの繰り返される時間にさえうんざりするようになっていったのだ。

隊首試験から数日は過ぎようとしていた頃、執務室で仕事に励んでいた蒼純の元に、あの高円寺の部下が尋ねてきたのだ。

「失礼します！副隊長殿はこちらにおられますでしょうか？」

「ああ。入りなさい。」

「は！失礼いたします。」

懇切丁寧な態度で蒼純の前に現れる隊士に、副隊長である蒼純は徐に尋ねる。

「どうした？君は確か虎彦の所の部隊員じゃないか。私に何か用か？」

「失礼ですが副隊長。一つお聞きしたいことがあるのですが？」

「何だ？」

「部隊長・・・・・虎彦殿は一体何を思って護廷十三隊におられるのでしょうか？」

「急にどうした？藪から棒に訳の分からない質問だな。」

「いえ・・・自分にも、虎彦殿の考えがよく分からなくなってきまして・・・元々考えていることが分からない人で罷り通っていたのですが、ここ最近はそれもより一層強まり・・・まるで、虎彦殿の存在を見失ってしまいそうになるようで・・・」

すると、そんな意外な事を聞かされる蒼純も実は同じ見解に至っており高円寺の部下に向かってこう返してきた。

「そうか。君も同じことを思っていたのか？」

「え？じゃあ、副隊長も！？」

「私も近頃、あいつと一緒にいるときもあいつの存在を認知することが出来ないような錯覚に陥る。何故だか分からぬが、虎彦は私達とは違う何かを内包していて・・・虎彦自身も何かにもがき苦しみ消化しようとしているのかもしれぬ。」

「あ、そう言えば・・・虎彦殿は先刻、『この世界には自分の満足できるものが何もない』と仰っていました。」

「満足できるものがないだと？」

「はい。これは一体何を差しているのでしょうか？」

「・・・さぁな。あいつの言葉にも私達の理解の枠を超えた、計り知れない何かがあるのかもしれぬな。」

二人は自分の傍にいるはずでありながらまるで遠く離れていく高円寺の存在に惜別の念のようなものを覚えながら、一緒に流れゆく雲を目で追っていく。

そして、部下が蒼純に向かって寂しい目でこう語ってきた。

「副隊長・・・・・・彦殿は・・・・・・何処へ行こうとしているのでしょうか・・・・・・」

「残念ながらそれは私にも分からぬ。ただ、このままあいつのことを黙って見ていても始まらん。少し、もっとあいつの日常を見直すべき時期かもしれぬ。」

「そうですか。では、これから虎彦殿の日常を私が見つめなおして参ります。」

「ああ。そうして来てくれ。」

部下は早速高円寺の日常を改めて見つめ直すために、行動を起こし始める。

先ず、部下が行ったのは基本的に高円寺のは見つからないように高円寺の一日の過ごし方を観察すると言うものであった。

高円寺のことを背後から観察する部下であったが、今にして思うと高円寺は本当にだらしない性格の男であると実感する節が目に見えていた。

「（相も変わらず今日も廷内をふらふらか・・・・・今に始まったことじゃないが・・・・・部隊長としてどうかと思うのもまた事実・・・・・・）」

高円寺の一日の過ごし方はまず廷内を当てもなくふらつくことが始まる。

「ふぁ～～～～～」

その後は、仕事も碌にしないで昼間からお気に入りの場所で昼寝をするというもの。

すっかり熟睡をしている高円寺のことを見ながらそのことも紙に記録していく部下はというと、こんな気持であった。

「才能があるにも関わらず昼間から大あくびに加えて爆睡・・・おまけに職務も放棄している・・・本当にそれでいいのですか、虎彦殿。」

心酔する上官の怠惰なところに疑いの心を持ち始める。

「これ、全部くれ。」

やがて、昼寝が終わると今度は近くの店に行くと六番隊の経費を勝手に持ち出しそれで酒を購入すると言う有様。

影で見ていた部下もこの行動には頭を抱えてしまう。

「あちゃ～～～経費乱用だ～～～！」

そして、極めつけは酒場に溜まって昼間から友人と飲み倒すと言うものであった。

「酒場に溜まって飲んだくれ・・・・・・これじゃあダメ人間の境地ではないか・・・・・・（いま改めて虎彦殿の実情をこの目で見てみたが、これは予想以上のダメさ加減ぶりだ。本当に、虎彦殿は何を考えておられるのだ？）」

そんな高円寺への軽蔑の念も抱きそうになった部下であったが、後日一先ず書き留めたことをまとめた書類を副隊長の蒼純の元へと報告し、報告書を見た蒼純もこれには顔を歪めた。

「な・・・・・・！」

ばつの悪そうな顔で部下は重い口を明けてこう口にする。

「以上が・・・・・・虎彦殿の日常をまとめた書類です・・・・・・！」

ばつが悪そうな顔をしたのは他にも理由があった。

それはその報告を見ている蒼純の横で不貞腐れた様子で煎餅をむさぼりつくす当の本人である高円寺が傍にいたからだ。

そんな高円寺に対して、蒼純は完全に呆れた様子でこう言った。

「はぁ～～～虎彦お前と言う奴は・・・」

「それはどうもすみませんでした。」

「反省の色がまるでないな。それでよく父上殿がお前を推挙されたことか。」

「ふん。やっぱり買い被りだったんだろう。」

「全く。能力がありながら普段がこれでは・・・先が思いやられるな。」

「うるさい。」

高円寺は蒼純に何を言われも反省の色など全く見せず、不貞腐れた様子のままであった。

「ははは・・・何か弁明などはありませぬか、虎彦殿?」

「弁明も何も、その通りだよ。凄いだろ!」

部下に対しては自分を凄いと言い張る高円寺だが、蒼純はそのようなことは毛ほども思っていなかっただろう。

「褒めているのではない。三席ともあろう者が、いや・・・隊首試験を既に受けて合格通知も届いているというのに、何たる体たらくだ。」

そう、高円寺は既に隊首試験を見事合格していたのだ。

周りは高円寺の隊首試験合格に非常に喜んでいたが、当の本人は対して喜びもしなかったそうだ。

「体たらくで結構だよ・・・・・・お？」

と、投げやりな態度で言葉を交わしていたその時だった。

高円寺が指揮する部隊の隊員が以前から調査を行っていた案件に関しての報告をしにやって来たのだ。

「失礼します、部隊長！」

「あ、見つけたか。」

「は！」

蒼純と一番の部下もそのことに気づくと、表情を真剣なものへと変貌させる。

「まさか、例の件か？」

「ああ。どうやら俺が懸想していた相手が見つかったらしい。直ぐに向かう。行くぞ。」

「あ、はい！ただいま！！」

一番の部下は準備を済ませると、早速高円寺と共に任務に出向いていく。

任務に出向こうとする高円寺に蒼純は副隊長としての最後の言葉を

かけるのであった。

「気を引き締めて参れ、“高円寺三席”。これは、お前にとって六番隊での最後の仕事だ。」

「了解した。では、行って参る。」

高円寺にとって六番隊第三席としての最後の職務内容。

それは、脱獄した囚人が立て籠もっている流魂街のとある住居に潜入して脱獄者を一人残らず捕縛すると言うものであった。

先に近くで待機していた部下たち数名の元に高円寺と一番の部下も到着し、現状を尋ねる。

「どうなってる?」

「中に・・・ただ、こちらの気配も気づかれていると思います。」

「仕方ないな。承知の上だ・・・・・・恐らく向こうもこちらの動きを図ってるんだ。いつ痺れを切らすか・・・根競べという訳だ。」

「・・・・・・どういうことですか、虎彦殿!?」

一番の部下の方は高円寺に関することはまめであるが、肝心の任務に関しては今一理解しておらずこのように疑問符を浮かべてしまうほどだった。

「お前、聞いてなかったのか今回の任務の内容。脱走者だ。地下牢獄“衆合(しゅうごう)”のな。多分、瀞霊廷の空気と合わなかったんだろうぜ。」

と、その時だった。

脱走者が立て籠もっている住居から尋常ではない程巨大な霊圧が放出され、高円寺達を威嚇してきた。

「凄い霊圧ですね・・・これが本当に・・・！？」

「まだ威嚇程度だぜ、こんなの。このまま素直に出て来るとは思えないな。」

「どうすると仰られるのですか？」

「部隊長らしく、俺が行く。最後の仕事のケリは自分でつけたいしな。」

そう言うと、高円寺は一人斬魄刀も持たずに茂みの外へと飛び出し脱走者が立て籠もるその住居へと向かうが――――――

「ま、待ってください！これほどの霊圧を前にして虎彦殿一人では！！」

「大丈夫だって。下がっていろよ。すぐに終わる。」

高円寺は自信に満ちた声でそう言うと、一人徐に住居の方へと向かっていく。

扉をけって中へと侵入する高円寺であったが、その途端に先ほどよりもずっと巨大な霊圧が部下たちの元へと流れ込んできた。

「「「「う！！！！！！」」」」

最初は凄まじい霊圧が流れ込んできたが、徐々に小さくなってついには全く感じなくなると部下達も怪訝そうな表情を浮かべる。

「ど・・・どうなったのだ！？」

「虎彦殿・・・」

一番の部下は直ぐに高円寺の身を案じて建物の中へと入り込んだ。

すると、その中で見た光景は衝撃的なものであった。

「！！」

何と、あれほどの霊圧の中であるにも関わらず高円寺本人は一切傷はおろか汗ひとつすら書いておらず当初の目的通り脱走者の全てを昏倒させ立ち尽くしていたのだから。

「す・・・凄い・・・！」

「さ、あとのことは下に任せて俺達は帰ろうぜ。最後の晩餐ぐらいしないと、あいつに申し訳ないような気がするしな。」

「は・・・はい！」

これが、六番隊第三席高円寺虎彦の六番隊での最後の任務となった。

それから暫くして、高円寺は空席であった十番隊の隊長として迎え入れられることとなり、隊長場織に身を包み一番隊首会の席に足を

運ぶため廊下を歩いていた。

そんな才能あふれる高円寺の噂はたちまち十番隊を始め様々なところで広がっていく。

「聞いたか、お前？」

「何だ？」

「ほら・・・新しく俺達の隊にやってくる新隊長の噂。」

「ああ・・・聞いた聞いた！何でも、六番隊の朽木銀嶺隊長の推挙で隊首試験に合格したって言うかなりのやり手だろ？一体どんな人なんだろう！？」

「でも不安だな。俺、新隊長の下で上手くやってく自信ねぇよ。」

「はじめは誰でもそうであろう？一先ず、前隊長が殉職して長年空白だったウチの隊長のイスも漸く埋まることだし、いい事としようぜ。」

そして、一番隊に集められた隊長達は新しく入ってくる高円寺虎彦を待ちながら総隊長山本の話に耳を傾けていた。

「諸君らも既に承知の通り現在、二番・三番・十番隊においては隊長不在であり、護廷十三隊としてはこれを何時までも放置しておくわけにもいかぬ状況である。よって、一週間前六番隊隊長、朽木銀嶺の推挙により同隊三位の席官を召還した。そしてこの山本、並びに二名の隊長列席の下隊首試験にて隊長資格を検分。申し分無し、と決した。よってここに、元・六番隊第三席を十番隊新隊長として

諸君に引き合わせる所存である。」

山本は概ねの事を集まった隊長陣に伝えると、扉の向こうで待機している高円寺を扉の中へと迎え入れる。

「護廷十三隊、十番隊新隊長・・・高円寺虎彦、中へ。」

特徴的な巨大な一番隊の印が書かれた扉を開けると、完全には着こなせていない隊長羽織に身を包んだ初々しい姿の高円寺が徐に中へと入って来た。

「あ、どうも。よろしくお願いします。」

初めての隊長達とのご対面であるにもかかわらず、高円寺の態度は実にそっけないものであった。

その後、元上官の朽木銀嶺に色々注意を受けた高円寺は真っ直ぐ自分の隊である十番隊へと向かい、そこで隊士たちとの面会を済ませる。

「・・・えっと・・・今日から新しく此処の隊長に拝命した、高円寺虎彦。ま、適当に頑張っていこうや。ははは!!!」

新しく入って来た高円寺の態度に思わず不信感を募らせる隊士達だったが、高円寺の方はそんな隊士達の態度など、初めからどうでもいいことだと考えていた。

夜になり、一人格子に手を当てながら月を見ながら酒を飲む高円寺。

「・・・・・・」

隊長になったからと言って、別段何かが変わったということはなかった。

あるとすれば自分の所属するところと、隊長羽織というものが増えたことぐらい。

その顔は以前と同じで浮かないものであった。

すると、そんな高円寺の事を気遣ってかあの男が徐に近づいてきたのだ。

「今日は、色々大変だったね・・・高円寺隊長。」

高円寺が声のする方へ顔を向けると、歩いてきたのは高円寺よりも先に空席だった五番隊の隊長として就任して、のちに黒崎一護の手にかかり倒された藍染惣右介であった。

「・・・藍染隊長。」

「公式の場じゃないんだ。此処では砕けて読んでも良いよ。同じ隊長格同士なんだ。」

「それもそっか・・・あんたも大変だよな。平子隊長が急にいなくなって早々に副隊長から隊長になったんだからな。」

「平子隊長も色々大変だったんだよ。僕は四十六室の判断には未だ疑念があるが、一度受理された決定は隊長格と言えど覆せない。僕がもっとしっかりしていれば、平子隊長を救うことが出来たのかもしれないのに・・・」

「・・・・・・――――――」

「そう言えば、高円寺君は十三隊に入ってからどれくらい経つんだい？」

「え？んっと・・・・・・もうかれこれ２００年以上だな・・・・・・考えてみれば、時間が流れるのって早いもんだよな。てか、何でそんなこと急に？」

「いや。何となくね・・・聞いてみたいと思っただけだよ。それに、まだ日は短いとは言え先に隊長を務めている者の意見としてこれだけは言っておくよ。“最後の最後は、自分の心の声に従って行動せよ”。僕が隊士達にも言い聞かせている言葉だよ。迷ったり、戸惑ったり、そして悩んだりしたときはこれを思い出してみるといい。随分と気持ちが楽になると思うよ。」

高円寺はそんな藍染の言葉をどう受け止めていたのか、このときの藍染に何を感じていたのか・・・――――

「おっと。ちょっと独断が過ぎたかな？」

「あ、いや別に・・・」

「色々と形式張ったことも多いとは思うが、やっていくうちに慣れてくるよ。何かあったときは、何時でも相談に乗るよ。その為の隊長だからね、僕は。」

「ああ・・・あんがとさん。」

「それじゃ、今日はもう遅いから僕はこの辺で失礼するよ。」

「分かった。夜道は危ないから注意しろよ、おやすみ。」

「ああ。お休み。」

藍染は高円寺に別れのあいさつを済ませると、徐に来た道を戻っていった。

そんな藍染の後姿を見つめながら、高円寺は決して表には出さない藍染の心境を読み取っていた。

「（野心の塊か・・・・・・あいつは・・・・・・）」

こう見えて、高円寺は人の心を読むことに長けており、藍染が常々心の中で肥大化さえていた後の崩玉の強奪から破面製造に関わるところまでを、高円寺はある程度知ってしまったのだ。

そんな野心を抱く藍染を軽蔑に近い目で見ていた高円寺だが、ふと自分にはそれが無いことに気づき羨まし気持ちにもなった。

「（いや・・・野心はおろか・・・心の満足すらも持ててない俺よりは、遥かにマシか・・・）」

隊長就任から一体何年、何十年と経ったことか。

あれから高円寺は何を思って剣を振るい、時間を過ごしていったのであろうか？

「擂り潰せ、『幻翼魔（ギガトロン）』」

遠征先でのとある戦局の場面で、斬魄刀を解放し見事勝利を収める高円寺。

「やりましたな、隊長！！」

「素晴らしい働きでした！！」

「ふん。あんがとよ。」

だが、いくら人に褒められようが本人は一向に満足感を覚えなかった。

別に、人が嫌いだとか・・・世の中が嫌いとか・・・そんなもんはないが・・・

しっくりこないんだ――――――この世界は。

毎日毎日、同じことが繰り返されるこの世界は・・・俺にはどうもしっくりこない。

飽和された世界は、俺には窮屈で仕方ない。

分からないんだよ・・・――俺のこの渇いた心を満たす“満足”って奴がな・・・

そんなしっくりこない満足の分からない日常が俺の心を、魂を日を追うごとに擦り減らしていく。

堪えられなかった。

こんな窮屈な日常が・・・世界の全てが・・・俺には堪えられなかった!!

そんな時、瀞霊廷図書館で見つけたあの本が俺に僅かな光を与えてくれた。

「・・・え!?これは・・・!?」

たまたま中央図書館で何とく本をあさっていた高円寺だったが、そこで偶然に発見したのがあの初代ダイシーが書き残したパトリオットに関する資料と聖地に封印されたダイシー・ネリンネルングの記録だったのだ。

「?どうかしたのですか、隊長?」

「え?ああ・・・いや、何でもねぇよ。」

高円寺のいつもらしからぬ様子に疑問に感じた隊士だったが、あくまでも高円寺は平静を装う。

そして、一人静かな場所へと移動するとその書物に書かれている自分が初めて抱いた感情を湧き立てるその中身を読み始める。

「(パトリオット・・・・・・嘗て、この尸魂界にやって来た旅禍であると同時に、人智を越えた力を聖地と呼ばれる場所に封印した未知なる力を持った集団。そして、その封印されし力の正体は・・・!?)」

最初は興味本位だったが、その時俺は初めて自分の胸がこれ程まで

に心躍る感覚に陥った。

そして、確信した――――――これが俺の求めていた“満足”なんじゃないかって。

俺は何とか、瀞霊廷図書館の古い文献を調べつくしたがそれでも足りず、生れて始めて芽生えた欲求と満足感を満たすためだけに、俺は自力で大霊書回廊の奥の院に忍び込むことに成功する。

そして、そこで更に詳しく数百年前に訪れたパトリオットについて徹底的な調査を行った。

当時のパトリオットの族長である初代ダイシーのこと、聖地と呼ばれた場所のこと、封印された人知を超えた力を解くために必要なこと、何から何まで徹底的に。

この力を手に入れれば、俺のこんなしっくりこない飽き飽きした時間を、世界をひっくり返すほどの凄い満足が得られるかもしれない、このうんざりな日常をぶっ壊すことができるかもしれない！！

俺はその後も隊長としての仕事をこなす傍ら、パトリオットについての調査を続けた。

そして、全ての準備が整い俺はある計画を実行することにした。

それこそ、俺自身がそのパトリオットとなる事だ。

本来、魔導師と死神は相対する力を持った異能種。

同時に霊力と魔力を所有することは容易な事ではない・・・・・・

だが、どうやら俺にはその素質的なものが生まれながらに備わっていることが、文献の調査とパトリオットのリベル式魔法の独学研究での成果で理解した。

この実験に成功すれば、俺は死神でありながら魔力を手にすることが出来る。

そうすれば、もうこんな世界からもオサラバすることが出来る・・・あとは俺の欲望を実現させるための駒であるダイシーの子孫を確保できれば・・・封じられた力を解放することが出来る。

湧き上がる期待と些かの不安を胸に抱きながら、俺は早速自分の体の構造を変化させる特製の配合薬を口に入れた。

「ヴ！！！！」

飲んだ瞬間、俺の体は口では表現できない程の激痛に襲われ部屋中にあるあらゆるものを手当たり次第に壊していった。

痛みは意識すらも乗っ取り、このまま自分が壊れていくのではないかとさえ思った。

だけど、俺はそれに負ける訳にいかなかった・・・こんな所でこの程度の痛みに負けては俺の中に出来た満足を満たすことは出来なくなってしまう。

耐えた・・・とにかく耐えて耐えて耐え抜いた。

「は！！は！！は！！は！！」

そして、俺はついにリベルの魔法をこの身に手に入れることが出来た。

リベルの魔法を手に入れたことで、俺の斬魄刀も対応したデバイスの形へと変化した。

俺は自分の中に溢れてくる凄まじい力にこの上もなく高揚した。

「ふふ・・・これで・・・これなら・・・なんでも出来そうだ・・・・・・ふふふっははははははあははははは!!!!!!!」

それから月日が流れ、俺は用途のなくなった護廷十三隊を出奔し現世へと逃れた。

俺の存在を明るみにされては計画が頓挫してしまう可能性もあったので、予め俺に関わった全ての死神の記憶から高円寺虎彦の記憶を俺の魔法で消し去った。

出奔して計画を進めるにあたって、俺は時空管理局と言うもう一つのデカい組織に今後の動きを悟られないように慎重に事を運んだ。

まず、現在のダイシーの子孫がどの場所にいるのか、またそれがどんな人物であるかを探る必要があった。

幸か不幸か、現在のダイシーである銀太郎は両親を早くに事故で亡くした孤独な少年。

俺は本来はダイシーを守護する六人と呼ばれるものの一人をこの手にかけ葬り、六人の記憶の一部をギガトロンの能力で改変しあたかもその最後の一人がこの俺であることを錯覚させた。

そして、時期を見計らって俺は銀太郎のダイシーの血の呪いがピークに達するときにその姿を現しオーリー達を誑かして、計画を実行させ今に至るのであった。

「ぐっ！」

銀太郎は高円寺の奇襲を受け、口と腹からは傷を流していた。

「「「「「（銀太郎！！！！）」」」」」

一護達もこの銀太郎の突然の急変に疑問を感じていたが、背後に隠れていた高円寺の姿を発揮と確認すると大いに驚いた。

「「「「「「「「「「はっ！！」」」」」」」」」」

「な・・・てめぇは！！」

高円寺はユーノ達の前に姿を現すと、不敵な笑みを浮かべる。

そして、金太郎は銀太郎を差した高円寺に怒りを露わにして突っ込んでいく。

「き・・・貴様！！！！！」

だが、そんな金太郎の攻撃を容易に受け止めた高円寺はギガトロンの力を使い金太郎を数十メートル後ろへ吹き飛ばす。

「のあああ！！！」

「金太郎！！！」

ユーノ達は直ぐに金太郎の安否を確かめに後ろへと下がった。

その間に、結界魔法の破壊に尽力していたはやて達はと言うと――――――

「クロノ提督、まだですか！！」

焦燥を募らせるスバル達フォワード五人だったが、如何にかしてクロノは結界に輝を淹れ至近距離でのブレイズキャノンをぶつけることで結界を破壊することに成功した。

「よし！結界が破れたぞ！！」

はやて達は急いでユーノ達の応援の為に武器を手に取り駆け足で走った。

「なのはさん！！」

「ユーノさん！！阿散井君！！！」

だが、そこで見たものは――――――

「なっ！？何・・・この状況！？」

「どうなってるの、一体！？」

駆けつけてきたルキアやはやて達もこの意外過ぎる状況には直ぐには理解できなかった。

一方で銀太郎は、出血をしながら地面に倒れ伏しその状態で自分を踏みつける高円寺に向かって言葉を投げかける。

「何で・・・どうして・・・すべて・・・あなたの言う通りにしたのに・・・何で・・・僕は・・・！？」

その銀太郎の言葉を耳にした瞬間、ルキア達は漸く事の真相を理解した。

「！まさか・・・！？」

「こやつとパトリオットは、奴に唆されていたというのか！？」

「今更気づいたところで、もう遅い。」

高円寺はそう言うと、踏みつけていた銀太郎を無理やり立たせる。

「ぐっ！！！」

痛みとショックで肉体的にも精神的にも限界に達している銀太郎を掴みながら、高円寺は次のように語り出す。

「無駄な手間かけさせるなよ。どの道結果は一緒なんだ。」

「どう言う意味だ？」

訝しげに金太郎の近くに立っていたユーノがそう尋ねると、高円寺は不敵な笑みを浮かべる。

「ふふ・・・始めからこう言う筋書きだったんだよ。もうじき、“時を超える力”が・・・俺のものになる。」

「！？時を超える力・・・！？」

「やはり、狙いはそれじゃったか・・・」

「え？」

ふと後ろから聞こえてきた声に一護達が振り返ると、そこには既に山本を始めとする護廷隊の隊長陣一同が駆けつけてきていたのだ。

「山本元柳斎重國総隊長殿！」

「ふん。」

高円寺は数百年ぶりに顔を合わせる山本や他の隊長陣に目を向けると、相変わらずの不敵な笑みを浮かべる。

そして、同じように高円寺を凝視しながら山本は重い口を明ける。

「久しく見ない顔じゃの。まさかこのような形で再び顔を合わせることとなるとは・・・のう、“高円寺虎彦”・・・」

「なっ！？あいつのこと知ってるのかよ！？」

「どう言うことですか、一体！？」

「奴は数百年前、当時の護廷十三隊十番隊隊長を務めていた男じゃ。」

「「「うそ！？」」」

「おいおい・・・マジかよ！？」

「しかし、奴は自ら隊長の座を降りた。そして、その後尸魂界から現世へと出奔し、行方を完全に眩ましていたんだが・・・あろうことかパトリオットを利用して再び此処に現れるとは。しかも、俺達の記憶までも消去した上でな――――――」

「旅禍をいいように利用し、この地に現れたということは・・・高円寺虎彦・・・貴様は！？」

「ああ。貴様の思ったとおりだ、山本総隊長。俺はこのパトリオットの聖地に眠っている力が欲しかっただけだ。そして、それを呼び起こせるのは初代パトリオットの血を引くこいつと、その器たるこいつの体に取り込まれたダイシー・ネリンネルングの力だけだった。銀太郎の命とか、失ったパトリオットの誇りなんぞ俺には知ったことか。」

「てめぇ！！ふざけたことぬかしやがって！！」

高円寺のあまりに身が勝手且つ人道外れた言動に大いに怒る鬼太郎。

「ふん。この先に・・・あの力を作り出した時間がある。」

「あの力を作り出した・・・時間!?」

「来るぞ。唯一時を支配できる力が・・・」

すると、双極の丘の空間が突然歪みを生じ始め空間そのものが亀裂を作り出し徐々にそれは巨大な穴となっていく。

この光景を目の当たりにした一護達は何が起こるのとばかりにそれを見つめるが、一方で状況を知っていた山本たちは渋い顔を浮かべる。

「そ、総隊長さん!何がどうなってるんですの!?」

「調査の結果・・・古の尸魂界において、嘗てのダイシー派のパトリオットによって創られた大いなる遺産があった・・・そして、それは・・・あまりの力故に一度たりとも使われたことのない危険な力・・・時空間を操り、全ての時間を破壊し、自らの思うがままに支配できる人智を遥かに超えた神の造物・・・――その名も、『王濫(おうらん)』!」

「王濫・・・!?」

山本から聞かされるその力の正体にただならぬものを感じるユーノ達。

そして、歪曲した空間から聞こえてくる不気味な音がそれを助長させる。

「ふん。」

「ぐ・・・・・・！」

高円寺に体を掴まれたまま身動き取れないままの銀太郎は、良いように自分たちがりよい卯されたことに深い後悔を覚える。

「てめぇ・・・最初からこいつが狙いだったのかよ！？」

「それで一体、何をするつもりだ！？」

「手始めに、旧暦の時代にでも行って・・・その時代に生きる全部の魔導師を消してしまおうと思ってな。」

「「「「「なっ！？」」」」」

「そんな！」

「この野郎・・・正気か！？」

「勿論正気だ。短い間だったが・・・銀太郎には世話になったよ。あとは大人しくみんなと仲良くあの世で暮らすことだな。」

そう言うと、高円寺はそう状態で非情にも銀太郎の体に斬魄刀を突き刺しとどめの一撃を加えた。

「ぐあああ！！！！」

銀太郎は腹部と口から多量の血を噴き出すと、その場に倒れこみそのまま動かなくなった。

傍らで見ていた金太郎が叫びを上げ、その残酷な光景に泣き叫ぶキャロ。

「ぎ、銀太郎！！」

「いやあああああああ！！！！！！」

「（高円寺、貴様！！！！！！！！）」

銀太郎の魂とシンクロを果たしていたオーリー達全員も最後の力を振り絞って銀太郎の敵を討とうと実体化を果たすが、高円寺は顔色一つ変えずに五人を始末する。

「お前達にも用はない。消えろ。」

〈Ｄｅｎｙ〉

「「「「「（ぐあああああああああああああああああああああ！！！！！！！！！！！！！）」」」」」

高円寺の魔法を受けた五人は一瞬にして、存在そのものを否定されこの世界から完全に消滅を果たしてしまい、その分身体とも入れる亡霊たちも一遍に消えていった。

「み・・・・・・みんな・・・・・・・かっは！」

オーリー達が完全に消されてしまったことで、辛うじて息をしていた銀太郎も力尽きてしまい本当の意味で思ってしまう。

「銀太郎君！！！！！！」

「てめぇ！！！おっ！？」

高円寺の非情なやり方に大いに怒る一護であったが、その瞬間歪曲した空間から聞こえてくる不気味な音がはっきりと分かるぐらいに大きくなると、その瞬間空間からサイドに松明を灯した線路が出現し金色に輝く鰐の姿を象った列車が全員の前に出現した。

「なっ！王濫って・・・列車のことだったのかよ！？」

予想外なものが出てきたことに一護達は大いに驚愕する中で、高円寺は自分の方へ呼び出した王濫を操作すると、早速王濫の操縦席へと乗り込み旧暦の時代へと続く次元ルートを呼び出す。

「あばよ。」

次元ルートを確保すると、王濫を乗っ取った高円寺はレールに乗って旧暦の時代へとタイムワープを開始する。

「待て！」

状況を見ていた鬼太郎が咄嗟に王濫の最後尾に手を握ると、そのまま高円寺の操作する王濫に振り落されないように過去の時間へと向かっていく。

「この！！！！！」

「鬼太郎！！何やってるの！？」

「先輩、やり過ぎ！死ぬって！」

鬼太郎の行動を見ていたユーノや浦太郎も急いで追いかけようとするが、王濫は既に彼らが追い付けぬ場所まで移動を続けており、頭部についている鰐を象ったものは時間を移動しながら激しい唸り声を上げていく。

「手慣らしといくか。」

高円寺は王濫を操作を自由にする中、当中に現れる過去の事象と言う事象を王濫の力によって次々に破壊していった。

「きゃあああ!!!!!」

「何だありゃあ!?」

「逃げろ!!!!!」

過去の時間で王濫により被害を受けるその時代の人々は為す術もなく逃げ割りながら自身の存在を喰われていく。

「くそ!!追跡は!?」

「駄目です!レーダー、全く通用しません!」

「本当に・・・時を超えると言うのか!?」

「信じられない・・・!」

全員が王濫の力に未だ信じられないとばかりの表情を浮かべる中、鬼太郎ただ一人だけが王濫に掴まり振り落されるか否かの瀬戸際で

追跡を続けていた。

「うおおおおお！！！！！！」

一護達は一度四番隊の治療を受けてから、この中では一番精神的にも肉体的にもダメージを負っている銀太郎と金太郎の両名を最優先に考え、今後の事を考えていた。

「ほら、休め。」

金太郎はブラッド状態を解くと、ベッドに横たわり花太郎の処置を受ける。

その間に、一護やユーノ達は高円寺の予想外の行動に動揺を隠し切れないようであった。

「爺さん。これからどうするんだよ！？奴はあの列車で過去に遡った・・・それってつまり、旧暦の時代に行って魔導師達を全滅させるってことだろ！？」

「・・・・・・――――――」

「魔導師を全滅させるってことは・・・・・・」

なのはがそう口にすると、顔を歪めたユーノが最悪の結末を述べる。

「ミッドチルダにいる僕達の祖先が殺されれば、僕や他の皆は勿論・・・管理局の魔導師を含めた多くの人間の存在が消えてなくなるだろうね。」

「「「「「なっ！？」」」」」

「そんな！！」

「おい！一体どうするんだよ！？過去に遡ることが出来ない以上・・・このままじゃどうにもならないだろうが！？」

一護がそう山本に問い詰めると、山本は芯のしっかりした声で一つの希望を口にする。

「うろたえるでない、黒崎一護。未だ誰も・・・方法が無いとは言っておらんじゃろ。」

「え！？あんのか、方法が！？」

一護達全員もこの山本の言葉には大いに驚いた。

すると、その具体的な方法と成功する確率を日番谷が口にする。

「ああ。かなり危険な方法だが、上手くいけば過去の時間に道を繋げることが出来るかもしれねぇ。」

「まぁ、それでも成功率は3割以下ってところだけどね・・・」

京楽が日番谷の言葉に補足を入れる。

それでもこの非常事態において、方法があると分かった時点ではやては既に考えを決めていた。

「3割以下・・・・・それでも、無いよりはましや！教えて下さ

い、その方法を!!」

「お願いします、山本総隊長さん!」

全員は山本に向かって必死に頭を下げる。

すると、山本はそんな全員の姿を一瞥し気持ちを汲み取ると次のように語り出す。

「・・・王濫は“時の運行を変える”のではなく、“時間そのものを消し去る”力を秘めている。その力を使えば、旧暦の時代で生きているミッドチルダの魔導師は全て世界から消え失せるじゃろう。じゃが、王濫を破壊すれば・・・削り取られた時間を元に戻すことが出来るやもしれぬ。」

山本はその場に集まった隊長陣に目を合わせると、持っていた杖を地面にたたき最終作戦結構に取り掛かるのであった。

「各隊長位に通達する。鬼道砲(きどうほう)の限定解除を命ずる!」

「「「「「「「「「はっ!」」」」」」」」」

鬼道砲の限定解除とは一体何か?!

機動六課はこの不測の事態を本当に乗り越えられるのか!?

そして、高円寺の破壊活動を阻止できるのか――――――

次回、いよいよ最終決戦!!

数百年の渇望・高円寺虎彦（後書き）

教えて、ユーノ先生！

ユ「ついにその本性を現した黒幕高円寺虎彦。今日はその徹底分析だ！」

ユ「元護廷十三隊の十番隊隊長を務めていたことあって戦闘能力は極めて高い。自身の斬魂魄刀をもリベル式の魔法に改造するという高い技術力を有しており、味方にすらその本性を探らせないという思考の読みにくいのが難点だ。」

ユ「そして、リベル式のデバイスとして生まれ変わったギガトロンの能力は・・・高円寺の意のままに姿と能力を変化させるという極めて強い力のあるものだ！」

一「またチートな能力使いやがって・・・あの野郎、絶対に止めないとな！」

金「店長、こうしてはおられません！早く、高円寺の野望を止めねばなりませぬ！！」

ユ「ああ。という訳で、次回はいよいよパトリオット篇最終決戦・・・乞うご期待だよ！」

魔導師図鑑ハイパー！

廷内を歩いてたスバルとティアナとギンガ、そして白鳥の四人であったが途中スバルがお腹をすかして音を立ててきた。

ス「えへへ・・・！！お腹空いてきちゃった。」

テ「あんたはもう・・・・・緊張感のない奴よね・・・・・・・」

ギ「どこかでご飯にしましょうか？」

白「それなら、“ただ”で美味な食事が出来るところがあるぞよ。」

ス「本当ですか！」

期待を膨らますスバルであったが、辿り着いたのは二番隊副隊長大前田希千代の自宅。

テ「あの・・・ここって・・・・」

白「まぁ、入るがよい。」

中に入った余人を待ち構えている大前田。

大「何だ？また遊びに来たのか・・・ちょうどいい。昼飯の残り喰うか？」

白「忝い！」

白鳥はそう言うと、テーブルの上に置かれてある料理を手に取りむさぼり始める。」

一方のティアナやスバル、ギンガは流石に手を付けられないでいた。

ス「残りって・・・・・・」

白「ただで、豪勢な料理が食べ放題なのだぞ！」

テ「プライドってものは無いんですか・・・」

ギ「普段そう言うのにはうるさいのにね・・・」

短編小説　その二

浦「今回はなのはちゃんを軸にしたネガティブ小説を書いてみました♪」

一「また性懲りもなく・・・暇な奴だな・・・」

ユ「なのはのネガティブ小説か・・・一体どんな内容なんですかね？」

一「取りあえず、仕方ねぇから見てみるか・・・」

解けた絆の糸・この心が張り裂けるように・・・

“世界はいつも、こんな筈じゃないことばかり”とは・・・よく言ったものだ。

神様はいつだって、私たちにどうしようもない取り返しのつかないいじわるばかりを一方的に押し付けて来るんだから・・・

初めてあの人にあったのは、九歳の頃。
自分の抱く漠然とした将来に不安を感じていたあの幼き自分を、あなたはこの世界に導いてくれた。
“魔法”を手にしたその時から、私とあなたは特別な絆（いと）で結ばれていた。

ユーノ・スクライア――――――私の世界を変えてくれた、最初で最後の私の一番大切な人の名前。

あなたが私を導いてくれたから、あなたが魔法を教えてくれたから、今の私は此処にいる。

だけど、その魔法が結果的に埋めようのない隔たりを生んでしまったのかもしれない――――――

私は手にしたその魔法で、沢山のものを手にしてきた。
正面からぶつかり合って、心を交わすことの出来た私の大切な親友のフェイトちゃん。
闇の書事件では何度も守護騎士たちと対峙したけど、最後には絆を紡ぐことが出来たはやてちゃん。
機動六課では、スバル達フォワード四人と一緒に汗を流して教導に励み、ＪＳ事件で私が救い出したヴィヴィオも、私の人生にはなくてはならない大切な存在。
私は本当に幸せだった――――――
友達にも囲まれて、愛する娘や傍らで私の事を真摯に心配してくれる親友とずっと一緒に居られたから、私はちっとも不幸じゃなかった。

そう――――――不幸じゃなかった・・・筈だった。

私はとんでもない勘違いをしていた。
私がここまで来れたのは、私一人の力じゃないと・・・――――
人は支えがあって、初めて前に進むことが出来る。
それを痛い程痛感することになる。

ユーノ君が音沙汰もなく私たちの前から姿を消した。

最初に異変に気付いたのはクロノ君だった。
無限書庫にいつものように資料請求をしようとユーノ君に連絡を入れたところ、その時すでにユーノ君は司書長としての椅子を降り、失踪していた。
ユーノ君が居なくなったことで、無限書庫の稼働効率は大幅に低下しクロノ君の資料請求など受理されるはずもなかった。
今までユーノ君の能力に依存した管理局にとって、ユーノ君の損失はそれほどのものであった。

自業自得だと言っているユーノ君を慕っていた司書たち。
確かに、その通りだった。

だけど、私はユーノ君の異変に気づくことが出来なかった。
ユーノ君の事を一番理解している筈のこの私が、その事を知ったのは教導の仕事から帰って、差し入れを持って無限書庫に立ち寄った時だった。

今まではアポなしで入れてくれた無限書庫も、ユーノ君が居なくなってからはそれも出来なくなりそれどころから私の事を冷ややかな目線で司書たちは睨んでいたのを覚えてる。

私はいてもたってもいられず、ユーノ君の自宅に直行した。
扉を開けると、そこにはまるで人の住んでる気配すら微塵も感じさせぬほどに殺風景な景色だけが虚しく広がっていた。
言葉が出なかった――――――
全身から力が抜けていった――――――
辺りを見渡しても、そこには思い出になるようなものは何一つ残されていなかったのだ。

あったのは、埃を被った私とフェイトちゃんが昔プレゼントしたいつもユーノ君がかけていた丸い眼鏡と、私と同じ色の髪留めのリボン・・・――――

絶望した――――――
私はこれを直視することが出来なかった――――――

昔、ユーノ君から教えてもらった言葉にこんなのがある。

「人の一生は、重き荷を負うて遠き道を行くが如し」と――――――

何でも、その昔徳川家康が生前に口にした言葉らしい。
深い言葉だったと思いながら、何となく聞いて記憶はあるが・・・
それをこのとき私は痛く痛感した。

荷物って言い方は嫌だけど、最初は誰でも大事なものを抱えているもの。

だけど、抱えている間はなかなかその重さには気づかない。
その重さに気づくのは、それが全部手元から滑り落ちた時。

失ってから人は本当にその重さに気づく・・・・・私とて例外ではなかった。

ユーノ君という私にとっての支えを、私は失った。

涙が止まらなかった。
私がここまで進んで来れたのは、あの時ユーノ君が魔法を私に教えて傍に居てくれたからなのに――――――こんな形でお別れするなんて、酷いよ。

だけど、私は今にして思い返せば非があったのはユーノ君じゃなくて、私だったのかもしれない。

なぜなら、ユーノ君の事を理解しているつもりで理解できていなかったのはこの私を置いて他ならないから。

私はユーノ君に支えられてばかりで、ユーノ君の支えになれなかった。
何も救ってあげれなかった。
きっと、口にも表情にも全然出さなかったけど・・・――――ユーノ君はずっと一人で苦しんでいた。
“孤独”な日々を、ずっと送っていた。

一人ぼっちの辛さは私もよく知っているのに、私は自分や近くの事ばかりに目を向けていたから、その事に気づくことが出来なった。

私はユーノ君がどれだけ献身的で自分を顧みない人かを良く知っている。
自分の無茶の所為で、空から落ちた日・・・――――みんなの前では平気な顔をしていたけど、ユーノ君一人だけはそんな私を優しく包み込んでくれた。
だから、私は溜まっていた何もかもをユーノ君に吐きだせた。
それでユーノ君に八つ当たりをしたこともある・・・――――だけど、ユーノ君は何も言わずに私の事を優しく包み込んでくれた。

嬉しかった――――――
昔から両親からも酷く大人びていると言われてきた私が、何の遠慮もなく自分の感情を素直に曝け出せたのは、この時が初めて・・・ユーノ君の前だけだった。
だから、私はユーノ君のそんな優しさに心のどこかで言葉では表せないそんな絶対的な安心感を抱いていたんだと思う。

出会ったころから、人一倍責任感が強くて、優しくて頭のいい少年は年を重ねて容姿端麗な青年となっても、私の前では昔と変わらず接してくれた。

私もそれが凄く嬉しくて仕方なかった。
フェイトちゃんとも、はやてちゃんとも違うユーノ君だけが持つ優しさ。
たとえ、道が違っても私とユーノ君の絆はずっと繋がっていた。
私の背中は何時だって温かいから――――――

だけど、それも昔の話。
ユーノ君を失ったその時から、私の背中はずっと冷え切ったまま。

そして、いつからか私はユーノ君を一人ぼっちにしてしまっていた。
多分、私一人で歩いた気でいたから・・・ユーノ君を無限書庫という場所に置き去りにしてきたから、神様が罰を与えたんだ。

傲慢なこの私に――――――

ユーノ君を蔑ろにして前だけを歩み続けたこの私に――――――

正面からぶつかり合ってきて、友達を得てきた私にとってぶつかり合わずに仲良くなれたのはユーノ君が初めてだった。

だからこそ、私は“友達”というものの捉え方を錯覚していた。
ぶつかり合って得るものだけが、友達じゃないのに・・・・・・私は――――――

辛い目に遭わせていた。
結局、私は手にしたこの魔法の力で一番大切な人を救うことが出来なかった。
ユーノ君はきっと、心の底で私の事を恨んでる。
だって、そうでなければ眼鏡も・・・リボンも・・・置いていくはずないもの！

どうして、気づいた時には遅いんだろう。

何故、傍に居たいのにあなたはもう居ないの――――――
何故、一緒に笑いたいのに悲しい顔ばかりを見せるの――――――
何故、漸く気づいたのに――――――あなたは何も言わずに一人で

行ってしまうの――――――

私をどうして、置いていくの――――――

私はあなたが居なかったら、何にも出来ないよ!!
あなたという支えが無かったら、安心して空を飛んでいられないんだよ!!

あなたを失ったら・・・・・臆病な私に一体何が出来ると言うの!?

一人は、嫌だよ――――――
一人ぼっちは嫌だよ――――――
一人は、寂しいよ――――――
どんなに高く飛んでも、どんなに手を伸ばしてもあなたには届かないよ。
もう・・・・・一人は嫌だよ――――――!!

嘗てのパートナーは、いつの間にか私自身が追いつめていた。
いや、嘗て何て言い方は不適切だ。
私とユーノ君はずっと背中を合わせられる最初で最後の最高のパートナーだから。
だけど、それを私が自分で壊した。

この手の魔法は、打ち抜く力――――――

涙も痛みも、打ち抜く力の筈だった――――――

結局、私の魔法はユーノ君の苦しみを増すだけのものに過ぎなかった。

ユーノ君――――――

あなたはまるで、夢のような人でした。
それ故に、夢のように消えていった。
私は夢で終わらせたくなかった――――――

この私の想いは、どうすればいいの？
止めることの出来ないあなたへの想いは、溢れるこの気持ちはどうすればいいの？

愛さなくていいから、私の傍に居て欲しかった。
強がってるんだ・・・でも、あなたと繋がっていたかった――――

私はあなたがずっと好きだから――――――

もっと泣けばよかった――――――
もっと笑えばよかった――――――

馬鹿だなって言ってもいい・・・何を言ってもいい・・・

私はただ、あなたにただ逢いたい。

これまでの日々、間違ってないと思えたのは初めてだった。
あなたのその笑顔は、私の生きる道を照らしてくれた。
心の中に降りしきる雨に、傘をくれたのはあなただけだった。

あなたが居てくれなければ、私は心の底から笑えないよ。
私の中の雨は、ずっと止まないよ。

神様――――――お願いだから、ユーノ君を返して。

ユー君を返してよ――――――!
私のユー君を返してよ――――――!!

ユーノ君を――――――返して!!!!!!

あなたがいないこの世界で、私はどうすれば笑うことが出来るの?
どうすれば、私の孤独は消えるの?

ユーノ君。
今私は、あなたに忘れられて不幸です――――――

浦「う～～～～～～～！！！！！！！我ながら何とも悲しき小説～～～～！！！！！！！」

一「や・・・べ・・・俺も何か涙が出てきそうになった～～～～！！」

ユ「メガネが涙で曇って全然見えないよ～～～～！！」

浦「じ、次回も～～～また機会があったら書かせてくださいね～～～！！それではまた今度～～～～！！！！うわあああああああああああああああああ～～～～～～～～～！！！！！！！！」

忘れたくない時間と飽き飽きした時間（前書き）

金「それは、管理局を下野しただ一人仕える店長の元で訪れた因縁の出来事・・・信じたのは涙をぬぐう優しさ。手にしたのは運命を変えるための力。」

な「思いが壊れても、願いが遠くても、ずっと・・・傍に遭った優しと紡いだ時間を忘れないで・・・」

一「人の記憶は一つながりとなって俺達の心で繋がっている。俺達が出会ったこの瞬間より、俺達の時間は形作られていくんだ。」

ユ「過去を壊すことなど誰にも許されない。時間に飽き飽きしていようと、悲しい事が起こっても時間は刻々と刻まれていく。その中で、僕らは何が出来るのか・・・色んな出会いを繰り返すからこそ僕らの時間は尊く、儚く、価値あるものとなっていくのだ。」

ユ「ユーノ・スクライア外伝　パトリオット篇・・・・・・始まります。」

忘れたくない時間と飽き飽きした時間

＞ｉ１８７６９―７０９＜

ユーノ・スクライア外伝・・・前回の三つの出来事。

一つ：　元十番隊隊長、高円寺虎彦が本性を現す。

二つ：銀太郎を手にかけた高円寺が異空間より時を破壊する列車『王濫』を呼び起こす。

そして、三つ：総隊長が鬼道砲の限定解除を決意する。

ユ「銀太郎君！！！！！！」

一「てめぇ！！！おっ！？」

高円寺の攻撃でついに倒れ伏してしまう銀太郎と、高円寺に怒りを露わにするユーノ達だったが、その時歪曲された空間より時を破壊する遺産「王濫」が現れる。

一「なっ！王濫って・・・列車のことだったのかよ！？」

高円寺は王濫を強奪すると、全ての時間を破壊するためにその手始めとして旧暦のミッドチルダに向かう。

鬼「待て！」

咄嗟に鬼太郎が王濫にしがみついて高円寺の後を追う。

鬼「この！！！！！」

ユ「鬼太郎！！何やってるの！？」

浦「先輩、やり過ぎ！死ぬって！」

高「手慣らしといくか。」

時を越え、世界の時間全てを破壊しようともくろむ高円寺の野望を前にした一護やなのは達機動六課・・・そして、護廷十三隊。

一「おい！一体どうするんだよ！？過去に遡ることが出来ない以上・・・このままじゃどうにもならないだろうが！？」

山「うろたえるでない、黒崎一護。未だ誰も・・・方法が無いとは言っておらんじゃろ。」

一「え!?あんのか、方法が!?」

山「・・・王濫は時の運行を変えるのではなく、時間そのものを消し去る力を秘めている。その力を使えば、旧暦の時代で生きているミッドチルダの魔導師は全て世界から消え失せるじゃろう。じゃが、王濫を破壊すれば・・・削り取られた時間を元に戻すことが出来る。」

そして、山本が出した結論は・・・――

山「各隊長位に通達する。鬼道砲(きどうほう)の限定解除を命ずる!」

全隊長「「「「「「「「「「はっ!」」」」」」」」」」

山本の命を受けた護廷十三隊の隊長陣と同様に非常事態に基づき双極の丘に集められる総勢８００人にも上る鬼道のエキスパート部隊、その名も『鬼道衆』は自分たちの霊力をしめ縄のようなもので頑丈に固定された大砲に霊力を注ぎ込みながら黙々と同じ詠唱を唱えていた。

そして、代表者がおおむねの準備が整ったことを総隊長である山本に報告する。

「第三詠唱、完了いたしました！」

「こちらも同じく、第四詠唱による封印開放の準備完了いたしました。」

「ご苦労。」

何時にもまして大がかりな事を行おうとしている十三隊の行動に終始戸惑いを見せる一護やユーノ達。

「何なんだよ、爺さん！鬼道砲の限定解除って！？」

「詳しく教えてください！総隊長！！」

恋次も隊長になって未だ日が浅いこともあってか、こういったことはあまり存じていない。

山本はそんな恋次や戸惑いの表情を浮かべるなのは達に次のように語り出す。

「そうじゃったな。鬼道砲には通例その強大な力を抑えるために、四重にも及ぶ厳重封印が施されておる。本来、空間ごと消滅させるそれを解放するときは鬼道衆による封印解除が定石となっている。だが、過去の時空と繋がる道を開くとなればまた話が別じゃ。前例は存在せぬが、その事象を為すために必要な条件があるとすればそれははただ一つ、全隊長格の強大な霊圧による空間への一撃が必要なのじゃ。さすれば、その力で時空間を一時的ではあるが湾曲させ操ることが可能。」

「そんなことが・・・！？」

山本の話を聞き終えた一護や恋次、ユーノの三人は目の色を変えて驚くが一方で鬼道砲というもの事態を知らないなのは達はいまひとつ分かっていない様子なのでユーノに説明を求めた。

「あの、鬼道砲って・・・！？」

「え・・・ああ。次元航行船で言うところのアルカンシェルみたいなものだよ。線状の火が一つにまとまり火の鳥となり発射され、空間を消滅させるほどの破壊力を持つ絶大な兵器だよ。」

「一応、こっちにも管理局に負けず劣らずの超兵器の一つや二つぐらいあるんだよ。」

なのは達はユーノや恋次の咀嚼された説明を聞き、自分たちが周知であるアルカンシャルのようなものだということで大ざっぱではあるが解釈することが出来た。

そして、概ねの準備が整い鬼道砲に霊力が充填されつつあるのを見計らって、総隊長山本が剣八以外の隊長陣全員を鬼道砲を囲むように集める。

「各隊長陣、用意はできているかの？」

「「「「「「「はっ！」」」」」」」

「あの、総隊長・・・更木隊長がおられませんが？」

恋次はその場にいない剣八の事を山本に伝える。

「構わん。あやつの分の霊圧は儂が補おう。阿散井恋次・・・お主も機動六課の諸君と共に高円寺の追跡に同行せい。儂らでお主の分まで霊圧を注ぎ込んで抑えよう。」

「は！」

「よし・・・では・・・始めるぞ。」

山本はそう言うと、自身がいつも使っている木の杖を取り出しその中に封じ込まれている本来の姿である斬魄刀を露わにする。

それを見ると、ユーノは一護と共になのは達を今いるところよりも更に後ろに下がらせることを促す。

「みんな、少し下がってたほうがいい。山本総隊長さんの斬魄刀解放は半端じゃないから。」

「え？」

なのはもこのユーノの言葉にはきょとんした様子であったが、その瞬間山本が解号と共に自身の相棒の名前を張り上げるのであった。

「万象一切灰燼と為せ『流刃若火（りゅうじんじゃっか）』！！」

その瞬間、解放と共に斬魄刀全体から巨大な炎が発せられ、全斬魄刀中最高と言われるほどの高い攻撃力を発揮する？熱系最強にして最古の斬魄刀である流刃若火を発動させた。

「「「「「「「「「「「「「わあああああああああああ！！！！！！！！！！！！！」」」」」」」」」」」」」

一護から粗方の話を聞いていたユーノもいざ実物を見ると流石に自分に降りかかる凄まじい炎に若干顔をしかめるが、なのは達に至っては既にパニックを起こしかねなかった。

自分たちの常識の範疇を既に超えているこの山本の斬魄刀の炎に当てられ自分の方がどうにかしてしまいそうな、そんな感覚に陥りつつ飛び火を回避しているのだから。

「な、何ツーーバカみたいな火力だよ・・・！！」

「流石は総隊長殿だ。私とアギトの火力とでは比較にもならんな・・・！！」

「これが・・・歴戦の勇士の実力・・・！」

素直に山本の力に感服するシグナムやフェイト。

ただただ巨大すぎる炎と熱さに身を焼かれそうな思いになるフォワード一同。

そして、そんななのは達を余所に山本は炎熱系の技を発動させる。

「先ずは儂からじゃ！『炎熱大乱』！！」

そう言って、鬼道砲へと繋がる導火線に贈られる流刃若火の炎が鬼道砲に溜められている霊圧を今まで以上に上昇させる。

その直後に、二番隊の砕蜂が山本に続く形で力を解放する。

「次は私だ！卍解！」

卍解を発動させた砕蜂が霊圧の突風から出て来ると、彼女の右腕にはハチの下腹部を模したような金色の照準器付きの砲台が装備されていた。

「『雀蜂雷公鞭（じゃくほうらいこうべん）』！」

照準を鬼道砲の中枢に合わせると、砕蜂は金色の蜂の針状の砲撃をミサイルのように放つ。

「食らえ！」

姿が巨大であり重すぎて動く事もままならないため、砕蜂自身は隠

密機動の矜持に反するとしてあまり使用を好んでいないが、一発による破壊力は本人曰く「暗殺と呼ぶには派手すぎる」と、着弾点に巨大な爆風を撒き散らすため、暗殺よりも殲滅戦に向いているほど強力なのがこの卍解の特徴だ。

ミサイルが命中すると、流刃若火の炎に上乗せられる形で更に霊圧が上昇しオーバーヒートを起こしかねない状況だった。

そこに、すかさずフォローに回る卯ノ花。

「お行きなさい、『肉雫唼(みなづき)』」

普通の刀よりもかなり曲がった刀身の斬魄刀から出て来る巨大なエイにも似た生物が溢れ出てくる霊圧の量をその能力で抑え込み、調整を行う。

その間に、白哉も千本桜を解放して卯ノ花のフォローに加わる。

「散れ、千本桜景厳」

数億の桜の刃が肉雫唼?では抑えきれない分のエネルギーを自身の卍解による能力と霊圧で相殺していき、上手い具合に折り合いをつける。

そして、霊圧のエネルギーのレベルが安定地に達すると今度は狛村が若干弱まった霊圧を上げるために渾身の一撃を入れるのだ。

「卍解!『黒縄天譴明王(こくじょうてんげんみょうおう)』!!!」

自身の動きに連動して動く鎧兜を身に纏った山のような巨人を召喚

すると、自分の動きに連動させて霊圧による一振りを鬼道砲に注ぎ込んでいく。

「はあああああ！！！」

狛犬から注ぎ込まれた強大な霊圧が鬼道砲に達すると、再び霊圧エネルギー値は上昇始めまたもやオーバーヒートに達しようとしている。

それをさせまいと、京楽・日番谷・涅の三人が微調整に入る。

「花風紊(みだ)れて花神啼き　天風紊れて天魔嗤(わら)う『花天狂骨(かてんきょうこつ)』」

浮竹の斬魄刀と共に尸魂界でただ二組しか存在しない二本一対の斬魄刀を持つ京楽の花天狂骨は全斬魄刀の中で唯一封印時から二本一対で普段は大小として携帯されており、能力解放と共に青龍刀のような形状に変化する。

「無精独楽(ぶしょうごま)！」

京楽は斬魄刀を両手に一本ずつ持ち、回転することで風を起こし、相手の行動を阻害するのが目的の無精独楽を使い熱の籠った鬼道砲にぶつける。

京楽の直後に、今度は日番谷が卍解を発動させる。

「卍解。『大紅蓮氷輪丸』！！」

大紅蓮氷輪丸を解放した日番谷は鬼道砲に狙いを定めると、一気に飛び上がり突撃していく。

「竜霰架（りゅうせんか）！」

この技は刀で貫いた相手を十字架型の氷塊に閉じこめ、砕くのが本来だが今回に限っては無精独楽に続く形で熱を下げるために使用される。

日番谷のお蔭で、熱は下がったが冷却し過ぎたことでパワーが落ち始めるとマユリが致し方ないとばかりの表情で刀を鞘から抜き、卍解を発動させる。

「卍解。『金色疋殺地蔵（こんじきあしそぎじぞう）』」

マユリの鞘から出てきたイモ虫のような身体に赤子のような頭を持つ巨大な姿のそれはなのは達の誰もが不気味過ぎ来て恐怖を感じてしまうほどだった。

「行け！！」

金色疋殺地蔵に命令を出したマユリ。

マユリの指示を聞いた途端、鬼道砲に胸部から生やした数百の刃を鬼道砲に注ぐ金色疋殺地蔵。

すると、パワーが再び安定地を超えギリギリのレベルで圧縮された高霊圧エネルギーを保っている状態にまで持ってくることに成功。

そして、最後の仕上げは浮竹によるものだ。

「波悉く我が盾となれ　雷悉く我が刃となれ『双魚理』！」

双魚理を解放した浮竹は自身の霊圧を全て注ぎ込むと両方の刃から雷と水を同時に解放させてそれを地面へと突き刺した。

「『雷電水宝（らいでんすいほう）』！」

地面を通して鬼道砲に流れ込まれる二つの力が鬼道砲にちょうどいい加減で霊圧を安定させついに鬼道は究極までに高められた霊圧を一気に発射するものへと変貌を遂げるのだ。

今までの隊長陣の斬魄刀の能力を直にその目で焼き付けたなのは達は驚きを通り越して感服の念を抱いていた。

「す・・・凄い・・・！」

「流石に壮観なり。」

「今じゃ！鬼道砲を発射せよ！！」

山本は高円寺が残した王濫の痕跡を目印に鬼道砲を発射させる。

発射の瞬間、ユーノの説明した通りに線状の火が一つにまとまり火の鳥となり発射されるがその大きさと言い姿と言いそれは今までの記録でも見たことがないほどに美しく巨大なものであったことは自ずとわかるだろう。

そのあまりの美しさと言葉に出来ない光景に驚嘆の声を漏らす機動六課の面々。

「「「「「「「「「「「「おおおお！！！！！」」」」」」」」」」」

」」」」

鬼道砲が空間を貫通すると、その瞬間に空間は歪曲を始め高円寺が向かったとされる旧暦のミッドチルダの様子が全員の目に克明に映し出されたのだ。

「空間が・・・過去の世界と繋がった・・・！」

「よし、これなら！」

全員はどうにかして過去の世界に繋げられたことに安堵の表情を見せるが、すかさず山本がそんな全員に指示を出す。

「この空間も長くはもたぬ。過去の世界と繋がっている今が機会じゃ！機動六課前線諸君、早よう行け！」

「分かりました！行くよ、みんな！」

「ああ！」

「うん！」

「「「「「はい！」」」」」

ユーノの言葉をきっかけに、ルキア・吉良を含めた機動六課の全員と一護・恋次は飛べないものも含めてそれを可能とする者の背中に乗って歪曲されたその空間の中へと自分の体を飛びこませていった。

そして、ユーノ達全員が過去の空間へと向かったことを確認すると、山本は静かに刀を鞘に納めて作戦の成功と全員の帰還を信じて祈る

ばかりであった。

「幸運を・・・祈るぞ・・・」

その頃、時空管理局が創設されていない旧暦時代のミッドチルダへと向かった高円寺はというと、王濫の力に寄り時を越えついに目的の旧暦１５０年へとたどり着く。

王濫はその時代に辿り着くや否や、圧倒的な破壊力で次から次へと事象を食らい世界に存在する人から建物まで何もかもを灰と化していき、そこは最早無法地帯となり果ててしまった。

王濫が急停車すると、今まで掴まっていた鬼太郎はその勢いで振り落され瓦礫の中へ身を投げる。

「のあああああ！！！！！！！痛て！！！！！」

身を投げ出された鬼太郎に徐に近づいてくる高円寺。

「終わりだな。そこでこの時間が消えるを黙って見物でもしてろ。」

「じ・・・時間を消すだ・・・！？どういう事だ！？」

「全て消える。此処は、時の流れと言う何も無い姿へと変貌する。」

「何！！」

鬼太郎が驚愕するのも無理はない。

今、高円寺がやろうとしているのは時間を消すと言う神の定めた事

象を壊すと言う行為に等しきことなのだ。

時間とは本来、人と人が巡り合い、それ以外にも何かが触れ合った時に生まれる記憶の紡ぎ合いとも呼べる代物だ。

高円寺が王濫の力でこの時間を破壊すれば何が起こるか――――――この時間で生きるこミッドチルダの人間を始めさまざまな記憶の紡ぎ合いが解かれ、紡ぎ合いそのものがなかったこととなり時間がすっぽりと抜け落ち無に帰るのだ。

こうしている内にも、時間の侵食は進んでいき旧暦１５０年のこの世界の事情がさらに灰と化していくのだ。

「たったそれだけのことで、ミッドチルダからこの時間がすっぽりと抜け落ちる。当然、この世界のこの時間に生まれた多くの魔導師達が消えれば、未来に生まれるお前の店長や管理局の魔導師達の存在も・・・ふふ・・・き・え・る♪」

「んだと!?何でてめぇは時間を消すなんてバカなこと!!!」

そう言いながら高円寺に向かっていこうとするも、鬼太郎はギガトロンの力に阻まれ後ろに吹き飛ばされてしまう。

「ぬあああ!!」

すると、鬼太郎の言葉を聞くと高円寺はこれまでの自分の人生を振り返りながら次のように語ってきた。

「俺はな・・・こんな変わり栄えの無い時間に飽き飽きしてるんだよ!周りを見渡してみろ。魔導師やそうでない連中が徒に争い、自

分の欲求の為に世界を破壊していく。偽善で世界を護るだとぬかす管理局や聖王教会、護廷十三隊も・・・・・毎日のように繰り返される杓子定規な日々も・・・・・俺はうんざりなんだよ！」

「てめぇ・・・！」

「リベルの魔法を証明するだの、誇りを取り戻すなど・・・そんなものどうだっていい。今はただ、この変わり栄えの無い飽き飽きした時間を消し去り、何も無い状態に俺の手で戻してやるのさ。ははははははは！！！！」

高説を語り終え、消え行く時間の中で高笑いを上げる高円寺。

すると、そんな高円寺の言葉に反論する声が聞こえてきた。

「違う！そんなことない！！」

「！？」

「な、この声！？」

鬼太郎と高円寺が声のする方へ目を向けてみると、そこには護廷隊の隊長陣達の力を借りてこの時間までさかのぼることに成功したユーノ達機動六課前線メンバー全員が揃っていたのだ。

「店長・・・！！お前らも・・・・！！」

驚愕する鬼太郎と無表情の高円寺。

そして、そんな高円寺に向かってユーノは更に続ける。

「・・・途方も無い時間の中でも・・・たった一日だけでも・・・その人にとっては忘れたくない時間が世の中にはあるんだ！無くしたくない時間が！」

ユーノの言うなくしたくない時間・・・・・それはやはり、ユーノにとっては子供のころ自分を助けてくれた当時は少女だった大切な幼馴染で恋人のなのはとの出会い。

そして、時が経ち魔導死神として目覚めた時に自分を鍛え上げあらゆるノウハウを叩き込んでくれた人生の師である一護との出会い。

そんなユーノの言葉に便乗して、隣に立つなのはも続けざまに語り出す。

「そう。過程はどうあれ、消し去っていい時間なんてものはないよ！それも全部ひっくるめて・・・私達の時間なんだから！」

その二人の言葉を聞いて思わず感銘を受ける鬼太郎。

「く～～～泣かせるぜ、お前ら！！！！よっしゃ！！！役者が揃ったぜ・・・おっ！！痛い！！！！」

立ち上がろうとした矢先、高円寺がたまたま握っていた何かを投げつけられ悶絶する鬼太郎。

「俺は大人しく待ってろと言ったはずだ。何なんだお前らは？こんな下らない時間の中で生きていて、何が楽しい？」

高円寺はユーノ達に向かってそう言うと、それを聞いた一護や恋次・

吉良・ルキアが答える。

「ふん。全部が楽しくねえからいいんだろうが！祭りが永遠に続いてたら、それこそ流石に飽きちまうからな。」

「ああ。時間を消したところでお前は何も救わやしねぇ！ただ自分を更に苦しめるだけに過ぎねぇ筈だ！」

「いい事も悪い事もあるからこそ、時間は尊いものなんだ。」

「それに、たった一人でも覚えていれば・・・時間は何時でも存在する。“人の記憶こそが時間”とはよく言ったものだ。」

ルキアがそう言い終わると、聞いていた他のメンバーも自然と頷きさらに一歩足を延ばし、締めの言葉をユーノが口にする。

「悪いけど、時間は消させない。今此処で何もかもが消えたら・・・この時代に生きる人の時間も・・・僕達の大切な今迄の時間が・・・全て消えるんだからね。」

全員のその態度を見て、高円寺は深いため息をつくとギガトロンを取り出す。

「そうか・・・綺麗に消えるより、苦しんで死ぬほうが好みなら・・・面倒みてやるよ。」

〈Ｓｔａｎｄ　ｂｙ　ｒｅａｄｙ?〉

「ギガトロン・・・セットアップ。」

〈Ｓｅｔ　ｕｐ〉

高円寺はあの時一護とユーノを圧倒したときの姿に構築させると、ギガトロンの力を再断言に発動させてこの時間の中で魔導師達によって殺されていったリベルの亡霊数千体という数を召喚した。

「なっ！？」

「この人たちは・・・！？」

夥しい数の亡霊を目のあたりにして、一瞬目を疑うなのは達。

「死んでしまったリベル式魔導師達の亡霊か・・・！？」

「まぁ、こういう展開になることは何となくは思ってたけど・・・勝てばいい話だしね。」

「然様。全ては私達の頑張りにかかっていますぞ！」

「ふむ。ここからが面白いところである・・・我々もさっさと甲冑モードでいくとしようぞ。」

白鳥がそう言うと、浦太郎・金太郎の二人はデバイスを取り出しロッドフォームとアックスフォームの甲冑とブラッド状態へと変身する。

「変身♪」

〈Ｒｏｄ　ｆｏｒｍ〉

「変身！！」

〈Ａｘｅ　ｆｏｒｍ〉

二人がそれぞれの鎧に身に纏うと、白鳥も懐からデバイス「ジーク」を取り出し、ユーノに新たに装備をして貰った自分の甲冑を構築する。

「変身！」

〈Ｗｉｎｇ　ｆｏｒｍ〉

新たにバリアジャケットを改造した結果、白鳥が身に纏うその甲冑のデザインは基本カラーが白で、ウイングバックルの色は水色。変身直後に一瞬だけメカニカルなフォルムの翼が開き、仮面は白鳥のような形状で、首を折りたたむように変形して装着される。

白鳥の新たな姿を見た途端、スバルは興奮を覚えティアナは何でもありかよとばかりに些か苦笑を浮かべる。

「スゴイー！！！あんなのもあるんだ！！」

「何だか最早何でもありって感じよね・・・・・・」

すると、三人の変身に嫉妬を覚えた鬼太郎が激しく羨望の気持ちを強調する。

「あっ！！！てめぇらばっかりし変身なんてズルいぞ！！！」

そんな鬼太郎の言葉を聞いた瞬間、ユーノは鬼太郎に向かって何か

を放り投げ受け取った鬼太郎は怪訝そうな表情でユーノを凝視する。

「店長・・・こいつは!?」

鬼太郎が手に持っているのは付属のパスをかざして着者のチャクラを利用して実体化する変身ベルトであった。

「鬼太郎がそう言うと思って・・・そんなの造ってみたよ♪バリアジャケットの数十倍の強度を誇る特殊アーマーを身に纏うために必要な変身ベルト。お前の好みに合わせて造ってみたから。」

ユーノの思わぬ計らいを耳にした鬼太郎は思わず滝のような涙を流すと同時に、この上もないぐらいの喜びを覚えた。

「く～～～～!!!!!ありがとうございます、店長!!よっしゃ!!!!!早速真打の変身を見せてやるぜ!!!!!」

鬼太郎はそう言うと、早速渡された変身ベルトを装着するや否やベルトについている赤いボタンを押してミュージックが鳴り響くと同時にパスをかざした。

「変身!!!」

〈Ｓｗｏｒｄ　ｆｏｒｍ〉

その瞬間鬼太郎のオーラをフリーエネルギーに変換され、鬼太郎は基本カラーが赤で仮面は桃のレリーフが顔のレールを伝わって眼前に収まり、中央から割れた状態で固定され、葉の部分はチークガードのように移動するオーラアーマーが桃太郎の着ている陣羽織をモチーフとする甲冑に身を包み、自分なりにかっこいいと思うポーズ

を決める。

「へへ！！俺、参上！！！」

鬼太郎がそう口にすると、浦太郎達も前に出てきて武器を構えながらお決まりの台詞を口にする。

「お前達、僕に釣られてみる？」

「私の強さに、あなたが泣いた！」

「光臨、満を持して。」

四人の言葉を聞いて思わずほくそ笑むなのは達。

「うふ。よし、じゃあ・・・みんなも行くよ！」

「うん！」

「せやな。」

「ああ。」

なのはを中心にして、フェイト・はやて・クロノ・そして残りの前線メンバー一同が前に出て来るとデバイスを取り出しバリアジャケットを構築する。

「「「「「「「「「「セットアップ！」」」」」」」」」」

それぞれの魔力光の中から出て来ると、全員はスクライア商店メン

バーの横に並び、一護や恋次、ユーノ達はそれぞれの斬魄刀の力を解放し同じように前へ出て来る。

「「卍解！」」

「舞え、袖白雪！」

「面を上げろ、侘助！」

「月光せよ、晩翠！」

総勢たる顔ぶれがその場に揃うと、鎧を身に纏った鬼太郎が全員の言葉を代弁して高円寺に烈火を突き付けながら宣戦布告をする。

「今日は全員まとめてクライマックスだぜ！！」

そんな鬼太郎の言葉と武器を手に取るユーノ達を見ながら高円寺はため息交じりに哀れだとばかりにこんな言葉をかけてくる。

「あ～あ・・・バカの揃い組みだな。いいぜ・・・全員俺が食ってやる。」

「上等だよ！こんな美人を食べられるものなら、食べてみなよ！」

高円寺の言葉を聞き、モチベーションが上がるなのは。

それをユーノがこんな言葉で返す。

「おっと、なのはを食べるのは僕のほうだよ♪」

「にゃはは♪うん！そうだね！！」

ユーノの言葉に思わずだらしない顔となるが、直ぐに気持ちを切り替えるなのは。

そして、全員が臨戦態勢に入った瞬間――――――高円寺が召喚したリベルの亡霊たち数百体に一斉攻撃を命じる。

「ふん、行け。」

高円寺の命を受けるとすぐに一斉にユーノ達に向かう亡霊たち。

それを見た一護も全員に迎撃を促す。

「行くぜ、みんな！」

「「「

「ほんなら、私達はあっちのほうを止めようか？」

「ああ。」

「はいですー！」

三人がそう言って目を向けたのは、未だ暴走を続けている高円寺が乗ってきた時を破壊する禁忌の遺産「王濫」である。

「「ユニゾン・イン！」」

はやてはリィンとユニゾンを果たすと、ＳＵ２とデュランダルを両手に持つクロノと共に暴走を食い止めようと動き出す。

「行こうか、クロノくん。」

「これ以上の暴走は許さん！」

宙へと舞い上がる二人と、亡霊たちと激しい戦闘を繰り広げるなのは達。

そのあまりにごちゃごちゃした戦況の為か、甲冑に身を包んだ白鳥は思わず目の前の状況に溜息をつく。

「何たる混沌。私には似つかわしくない戦いだな。」

そんな愚痴をこぼしながらも、白鳥は琴線斬を手に取りながら亡霊たちを切り刻み、音色を奏でていく。

一方で鎧のデザインが気に入りテンションが最高潮に達した鬼太郎

はいつも以上に烈火を大きく振り回しながら向かって来る亡霊と言う亡霊を切り捨て、なぎ倒していく。

「へへ・・・退治てくれようモモタロス・・・って間違った！おりゃあああ！！」

一時のテンションに任せて、自分の名前すら間違えてしまう鬼太郎だがその強さに勝るものなど亡霊の中には何処にもいないことは確かだった。

鬼太郎だけでなくそれぞれが自分の持ちうる全力で亡霊たちと戦っている中、金太郎は自分にのしかかってきた亡霊を力で吹き飛ばすと、ブラッドカートリッジをロードしてアックスオーガに魔力を集める。

〈Ｆｕｌｌ　Ｃｈａｒｇｅ〉

「行きますぞ！」

その瞬間、金太郎は大きく体を回転させながらアックスオーガを振り回し周りにいた全ての敵を一掃する。

「ダイナミックチョップ！！！私の強さにあなたが泣いた！！！」

と、その時・・・――――金太郎の背後から高円寺の牙が襲いかかる。

「ぐおおお！！！！」

高円寺の奇襲を受け、思わずその場に倒れこむ金太郎だが直ぐに立ち上がり攻撃を仕掛けてきた高円寺に真っ向勝負を挑む。

「やってくれるではないですか・・・久々に燃えてきましたぞ！！」

「俺は全然だ。もっと楽しませろよ。」

「ふん。傲岸不遜も大概にしなされ！！！」

その場から移動を開始し、高円寺と一対一の対決に持ち込む金太郎。

その間で、鬼太郎は腰のベルトにカードをパスをかざすと烈火に自身のフリーエネルギーを収束していった。

〈Ｆｕｌｌ　ｃｈａｒｇｅ〉

「行くぜ。俺の超必殺技・・・！！」

その必殺技は、烈火の剣先を霊圧とフリーエネルギーによって生み出される炎でコーティング・強化したもので敵を一刀両断する「エクストリームスラッシュ」である。

「てやあああああ！！！！！！！」

地面をも割る豪快且つ破壊力の技により、周囲にいた亡霊がものの見事に倒されていった。

「へ！決まったぜ！！」

鬼太郎が亡霊を一掃し終えると、同じように背中合わせになって戦っていたティアナとなのはが集束系最強のスターライトブレイカーを発動するためにチャージをしていた。

「ティアナ！行くよ！！」

「はい、なのはさん！」

その間にも亡霊たちは容赦なく二人の目の前から攻撃を仕掛けて来るが、二人は一切躊躇も恐怖も感じず自分の全力全開の大威力砲撃を放つ。

「「全力全開、スターライトブレイカー！！！」」

桜色と橙色のスターライトが亡霊たちに直撃すると、亡霊たちは悲鳴を上げながらその砲撃に飲み込まれ跡形もなくすべて消えていった。

では、その他の戦況の様子も実況していこう。

「狒牙絶鉄！！！」

恋次は補助デバイスで強化した狒牙絶咬の進化系である狒牙絶鉄を発動し、周囲の亡霊たち数百体の動きを一瞬で封じ、その隙にヴィータがＩＰカートリッジの力で強化したグラーフアイゼンで攻撃を仕掛ける。

「クラッシャー・・・ハンマー！！」

ヴィータのクラッシャーハンマーをもろに喰らった亡霊たちは全て光子となって消滅し、敵を倒した二人は歓喜の笑みを浮かべる。

次にシグナムとアギトの方はいつものように息の合ったコンビネー

ションで火力を強化し、その火力から創り出した陣で亡霊を囲んでいた。

「火龍烈火陣！！」

囲まれた亡霊たちは二人の炎の壁から出られず、徐々に迫ってくるそれに体を焼かれ文字通り灰となってしまった。

同じようにコンビネーションプレーなら、エリオとキャロも負けてはいない。

「いくよ、キャロ！」

「うん！」

キャロのブーストにより強化されたＩＰカートリッジを装備したストラーダにフリードから放たれる火炎が合わさった電気と炎の竜が亡霊たちに放射される。

「「ドラゴニック・ライトニング！！」」

超絶なる破壊力を秘めたその技を直撃した亡霊たちは一瞬のうちに二人の前の前から姿を消していく。

二人組と言えば、ルキアと吉良も得意の氷雪系と重力計の能力をふんだんにつかって亡霊たちを確実に倒していく。

「初の舞・月白！」

「面を上げろ、侘助！」

侘助の能力で体を重くされたのち、ルキアの袖白雪の力で亡霊の全てが物の見事に氷ついては跡形もなく氷解していく。

そして、スバルとギンガの格闘姉妹の方も長年の息の合った連係プレーで亡霊たちをナックルで攻撃してはシューティングアーツ独特の動きで蹴り倒してく。

「はあああああ!!!!!」

ギンガは最後の方に残った一際頑丈な亡霊の攻撃を防御すると、後ろのスバルに止めの一撃を加えるよう促す。

「スバル!!今!!」

「一撃・・・必倒・・・!!!!」

スバルはギアエクセリオンの状態でカートリッジをロードし、リボルバーナックルに魔力を集積させると渾身の一撃を込めたなのはの十八番を発動する。

「ディバイン・・・バスター!!!!」

至近距離からのスバルの放ったディバインバスターは頑丈な亡霊の体を見事に貫通し、亡霊は悲鳴を上げながらその姿を消滅させ昇天していった。

さて、残すはこの面子だ。

「当たりも弱ってきたし、そろそろ釣り上げ時かな?」

数百の亡霊を一人で対峙していた浦太郎がそう確信すると、腰元のベルトにカードをかざす。

〈Ｆｕｌｌ　ｃｈａｒｇｅ〉

浦太郎はフィッシャーマンの先端にエネルギーを集め、それを光弾として放つ「ソリッドアタック」を巧みな技術で操り、背後の敵すべてを薙ぎ払う。

「はあああああ！！！」

背後の敵を片づけると直ぐに正面からくる亡霊に向かってフィッシャーマンを投げつけ、敵の動きを封じると同時に舞い上がり、飛び蹴りで決着をつける。

「いやあああああ！！！！」

浦太郎は一騎当千の実力を発揮させ、僅か数分のうちに三十体近くにも渡る亡霊たちを見事に圧倒する。

そして、別な場所で亡霊と対峙している白鳥も最後の仕上げに入ろうとベルトにカードをかざした。

〈Ｆｕｌｌ　ｃｈａｒｇｅ〉

「終曲はこれだ。我が音色の前に平伏せ。」

そう言うと、白鳥はチャージしたエネルギーを全て琴線斬に集め全物質の固有分子結合を内側から破壊する「神殺し」の名を持つ音色

を浴びせる。

「琴線斬第百章・秘曲『ＤＥＩＣＩＤＥ（ディーサイド）』」

弦がなびき、音色が奏でられると同時に白鳥と対峙していた全ての亡霊が悲鳴を上げながらその姿を消滅させていった。

「遠き地にて、闇に沈め。」

「デアボリックエミッション！！」

〈Ｂｌａｚｅ　ｃａｎｎｏｎ〉

「止まれ！！」

自信の持てる技を最大限に駆使して時間を食らい続ける王濫を止めようとするはやてとクロノ。

その甲斐があってか、何とかその暴走を止めることに成功し王濫はその場に停車する。

そして、残り僅かとなったリベルの亡霊を一掃するために師弟・一護とユーノが得意の漆黒と翡翠の斬撃を喰わえる。

「月牙天衝！！」

「輝け、晩翠！！」

二人の放つ最後の一撃を食らった亡霊たちは奇声を上げながら一人残らず名の二十歳の前から完全に姿を消していき、残すは高円寺一

人となった。

全員は敵を倒すと一度集まり、高円寺の捜そうとするが・・・――

「やりましたね。」

「ああ。残ってるのは・・・・・・」

その瞬間、高円寺と一対一で勝負をしていた金太郎が高円寺の力に圧されてその場に集まった全員の目の前に吹き飛ばされてきた。

「のあああああ!!!!!」

ブラッド状態の鎧にも関わらず、所々高円寺の攻撃によって亀裂の入る金太郎の満身創痍な姿を見たユーノ達は驚愕の表情を浮かべる。

「金太郎!」

「熊!」

「くっ・・・!!お・・・おのれ・・・!!」

金太郎はアックスオーガを杖替わりにしながら立ち上がろうとするも、そんな金太郎に向かってニヒルな表情を浮かべ近付いてくる高円寺。

「そんなんじゃ、喰い足りないな・・・」

「野郎・・・咆えろ、蛇尾丸!!!」

狒狒王蛇尾丸の刃節を延ばして高円寺に攻撃を仕掛ける恋次だが、高円寺はそれを左で受け止めると容易に蛇尾丸を力だけで捌いてしまう。

「何！！」

この光景に一瞬、目を疑ってしまう恋次や六課のメンバー。

そして、阿呆のごとく目を見開くユーノ達に高円寺は瞬歩で近づき嘗て隊長だった頃にいかんなく発揮していた剣捌きと一騎当千の実力で一護達にダメージを加えていく。

「「「「「のあああああああ！！！！」」」」」

「「「「ぐあああああ！！！！！」」」」

高円寺の刃をその身に受け、バリアジャケットを着ているにもかかわらずそれが意味を持たなくなってしまう前線メンバーと同じ死神だった者の実力の違いに改めて驚く一護やユーノ。

「つ、強い・・・！？」

「半端じゃないわね・・・この強さ・・・！」

「そうだね・・・」

「確かに・・・強い・・・！」

〈くっそーーー！！負けたくないぜ、私は！！！〉

「当たり前だよ。負ける訳・・・ないだろうが！」

ユーノはそう言って、自力で立ち上がり晩翠を手に取るがその瞬間・・・――――高円寺は自分の持つ刀にブラッドカートリッジを一気に九発もロードする。

「負けじゃない・・・“死”だ。」

〈Ｂｌｏｏｄ　ｅｘｐｌｏｓｉｏｎ〉

「はっ！」

「ヤバ！」

高円寺のやろうとしていることに誰もが危機感を覚えると、その場から離れて攻撃を回避しようとするが、高円寺はそんな事はさせまいとギガトロンの能力を限界まで引出し刀の一振りでユーノ達に大ダメージを負わせる。

「「「「「「ああああああ！！！！！！！」」」」」」

「「「「「「

瓦礫の中で体を動かすことの出来ない機動六課の面々を確認すると、高円寺はまた深い溜息を吐きながらその場から立ち去っていく。

「つまらん。お前達も・・・時と共に消えてしまえ。」

最早、この絶望的な状況は覆すことは出来ないのか？

不屈のエースオブエースと呼ばれるなのはも、伝説の死神代行の一護もこの高円寺の力には手も足も出ないのか？

希望はここで断たれるのか・・・――――いや、まだだ。

この状況においても、まだ立ち上がるものの名を知っている。

それこそが、不屈のエースオブエースを育て上げ伝説の死神代行によって育て上げられた翡翠の魔導死神ユーノ・スクライアという男なのだから。

ユーノはその場に倒れながらもなんとか意識を取り戻すと、思念通話で金太郎にメッセージを送った。

「（金太郎・・・立つよ・・・負ける訳にはいかないから・・・）」

すると、ユーノの念話を聞き入れた同じく意識を取り戻した金太郎が仰向けの状態で返事をする。

「分かってますとも・・・少し昼寝をしていただけです・・・」

金太郎はアックスオーガを手に取ると、徐にその状態から立ち上が

りユーノも晩翠を握りしめるとボロボロの服についた誇りを払って高円寺の背後に回り込む。

「あ？」

高円寺が後ろの気配に気づくと、そこには諦めた雰囲気など全く漂わせていない肩で息をするユーノと同じように高円寺の正面に回り込んだ金太郎が立っていたのだ。

「そう言うの・・・往生際が悪いって言うんだが・・・知ってるか？」

ユーノに向かってそう言う高円寺だが、聞かれたユーノの方はと言うと不敵な笑みを浮かべながら次のように返してきた。

「ああ。知ってるさ・・・“最後まで諦めない”って意味だろ？」

「その通りですぞ！」

ユーノの言葉に便乗した金太郎はその瞬間、ダイナミックハデスの状態からブラッドカートリッジをロードする。

〈Ｂｌｏｏｄ　ｅｘｐｌｏｓｉｏｎ〉

「店長！」

「オッケー。許可する！」

「承知！」

ユーノからの承認許可を受諾すると、金太郎はその状態から更にブラッドカートリッジをロードし魔力をこれでもかとばかりに巨大にしていく。

〈Ｂｌｏｏｄ　ｅｘｐｌｏｓｉｏｎ〉

金太郎の行動と同じ要領で、ユーノも全身に伝わる霊力と魔力の全てを晩翠の刀身だけに集中させると、二つの力で作り出す巨大な翡翠の斬撃を出現させる。

「行くぞ、高円寺・・・・・・これが僕らの全力全開！！」

「面白い・・・クライマックスって奴を味わうがいい。」

そう言うと、高円寺は囮役であるユーノから先に片付けようとユーノと同時に走り出していく。

「「はあああああああ！！！！！！！！」」

二人の攻撃がほぼ同時に入ると、巨大な霊圧と魔力が溶け合い突風を巻き起こす。

その勝負の行方は・・・・・・ギリギリのところで刃を躱されてしまったユーノとユーノの腹部に一撃を入れた高円寺の姿がそこにはあった。

「これが本当のクライマックスって奴だ。」

「・・・・・・」

黙して何も語らずのユーノ。

やがて、ユーノの霊圧と魔力を感じて目を覚ましたなのはや一護達が二人の方を向く。

「「「はっ！」」」

「ユーノ君！！」

なのははこの状況を見た瞬間、思わず声を張り上げてユーノの名を口にする。

高円寺はユーノから腹に食い込んでいるであろう自分の刀を取り出そうとする。

「・・・ふん・・・」

だが、その時――――――ユーノは顔を伏せている状態で待ってましたとばかりに笑みを浮かべると高円寺の刀を左手で鷲掴みにして取らせないようにしたのだ。

「！？」

「全力全開だって言っただろうが。今だ、金太郎！！」

そう、初めからユーノの狙いはこれだったのだ。

ユーノの言葉を聞いた瞬間に金太郎が極限まで魔力を圧縮したダイナミックハデスで高円寺に向かって背後から斬りかかってきたのだ。

「ぬおおおおおおお！！！！！！」

金太郎は一瞬の隙をついて高円寺にアックスオーガによる一撃をクリーンヒットで食らわせることに成功すると、高円寺はその圧倒的な破壊力により吹き飛ばされてしまい身に纏っていた甲冑にも大きな傷が入り足も千鳥足となっていた。

「ぐっ・・・！！ウンザリなんだよ・・・こんな時間も・・・全部」

そう言いながら、高円寺ははやて達が必死で止めた王濫に乗り込むとそのままこの時間からの退却を決め込んだ。

「あかん！逃げてしもう！！」

「逃がしてたまるかよ！」

高円寺の行動を食い止めるため、、飛行能力のあるものは空へと舞い上がりそれぞれの技を王濫に向けてぶつけていくが、高円寺も捕まるまいと必死で逃げ続けていた。

「捕まるものか！」

地上で佇む前線フォワードもそこから王濫目掛けて上のなのはやユーノ達と共に攻撃を仕掛け、鬼太郎も卍解を発動させると翼を広げて烈火の炎を叩き込む。

「ぶち込め！！」

機動六課と死神によるチーム一丸とって繰り広げられる激しい攻防。

高円寺もそんな六課の面々を撃ち落すために王濫から攻撃を開始。

「喰らえ！」

凄まじい破壊力を持った攻撃技がなのは達を襲うが、それでも彼らは決して諦めることなく一気に勝負をつけるためにユーノが一斉攻撃を促す。

「みんな！全員の力を一つに結集させるんだ！」

「「「「「はい！！」」」」」

地上でもそれを聞いていたフォワードメンバーもユーノの言葉を聞き入れると、ＩＰカートリッジを取り出しデバイスに装着。

なのはや他の隊長陣、一護達もＡＲカートリッジと補助デバイスを取り付けて自身の持ちうる全力全開の攻撃で王濫を撃ち落そうとする。

「行くぜ！」

そう一護が口にした瞬間、一護は最大霊圧による最大規模の月牙天衝を王濫に向けて放つ。

「月牙天衝！！！」

一護に続く形で、恋次達もそれぞれの最強の一撃を加える。

「鋼鉄狒骨大砲！！」

「侘助！大切断！！」

「完全氷白！！」

「マリアズ・アフェクト！」

「エル・レランパーゴ・デル・ファン！」

「響け、終焉の笛！ラグラノク！！」

「ブレイズキャノン・エクステンション！」

「（エキゾースト・フェニックス）！」

「クラッシャーシュラーク！！」

「「リボルバー・・・デストロイアー！！！」」

「メガトニック・・・シュート！！！！」

「プラズマ・ブラスター・・・雷光弾！！」

「フリード、デスペラードレイ！！」

「『烈火鳳翼状（れっかおおとりよくじょう）』！！」

「ポセイドンクラッシュ！！」

「ハデスの・・・一振り！！！」

「琴線斬奏曲、『鼓瓜田』！！」

「翡翠斬・八千刀！」

さまざまな色を輝かせ、王濫に降り注がれる機動六課の全戦力の結晶。

その決勝に直撃をした瞬間、王濫はそのあまりの威力に強度がついていかずついには機体そのものが破壊され大爆発を起こしてしまった。

「うわあああ！！！！」

爆発の衝撃で地面へと吹き飛ばされた高円寺は金太郎に喰らった傷を抑えながら何とかその場から立ち上がり息を切らす。

「はっ！はっ！はっ！はっ！」

王濫を破壊し、高円寺が現れるとユーノと金太郎は地面に着地。

高円寺と向かい合う。

「これが・・・本当に最後の最後だ。」

「くっ！！」

険しい表情を浮かべ汗を流す高円寺と仮面越しに黙って見つめる金太郎。

すると、ユーノは金太郎に最後の決着をつけることを促した。

「・・・行きなよ・・・金太郎。」

金太郎もユーノの言葉を素直に受け入れると、アックスオーガを通常時の姿に戻すと高円寺と向かい合う。

「くっ・・・き・・・貴様ら・・・消えろ！」

「・・・終わりにしましょう・・・何もかも・・・リベルも時間の因縁から全て・・・」

「・・・いいだろう・・・時間に食われて消えるがいい・・・」

高円寺も金太郎と最後の決着をつけるために刀を握りしめその場で構えを取る。

「行くぞ、アックスオーガ。」

金太郎はアックスオーガにそう言うと、自身の残りの魔力を刃に集める。

〈Ｆｕｌｌ　ｃｈａｒｇｅ〉

高円寺も同じように、残り僅かの魔力の全てを刀に集める。

〈Ｆｕｌｌ　ｃｈａｒｇｅ〉

そして、大きく構えを取った二人が暫くの沈黙を保ったのち・・・・・全力疾走で最後の攻撃に転じるのであった。

「「ほおおお

「！景色が・・・！？」

「戻っていく・・・！？」

「完全に消え去る前で助かったぜ。だけど・・・」

一護はそう言うと、高円寺を打ち破りその後膝をついて銀太郎を救えなかった後悔の念を抱く金太郎を苦い顔で見つめる。

金太郎自身は仮面の下で涙を流しながら銀太郎のことを思い浮かべていた。

「・・・・・銀太郎・・・・・・」

やがて、過去の世界の時間の事象がすべて元通りに復元されるとなのは達は一度深いため息を吐いて今回の事件の経過と結末を噛みしめる。

「・・・終わったな・・・」

「・・・そのようですね・・・」

「あまり、いい終わり方じゃなかったけどな・・・」

「汚点だらけで事件はこういう結末を迎えてしもうたな・・・」

はやては苦い顔を浮かべながらこのような結末で終えてしまったことに部隊長としての責任を感じるが、そんなはやてにクロノがこう語りかけた。

「世界とはこんな筈じゃないことばかりだと、前にも言っただろ。僕達管理局は決して神じゃないんだ。手を伸ばしても救えない命もあれば、届かない思いもある。」

「うん・・・そうだね・・・」

クロノの言葉を聞いて静かに首肯し、共感するフェイトや他のフォワード陣。

一護達も一度斬魄刀を地面に突き刺しながら青々と広がるこの時間に存在する空を見上げてみたそうだ。

そして、ユーノとなのはの二人は金太郎の方に目を向けながら消えていったパトリオットや銀太郎についてこう話していた。

「ユーノ君・・・今頃、銀太郎君やあのパトリオット達はこんな青々とした空の上で・・・一緒にいられているのかな・・・――」

「ああ・・・きっとそうだよ。」

ユーノ達は高円寺のとの戦いに勝利し、無事に王濫を破壊することで世界の時間の破壊を阻止することに成功すると、急いで山本たちが待つ尸魂界へと歪曲空間を通って帰還する。

その頃、ユーノ達の帰りを待つ山本たちの方はずっと歪曲空間の方をじっとみつめるばかりだったが、暫くすると京楽が目的の人物の姿を確認する。

「お、帰ってきたようだね。」

ユーノを始めとする機動六課の前線一同の無事な姿を確認すると尸魂界を守護する護廷十三隊の死神達全てから歓声が舞い上がり、ユーノ達の功績を祝福する。

死神達の歓声をその身に受けながら、全員は地上に降り立ちため息をついた。

「ほ・・・・・生きて帰ってこれた。」

「ふう～～何はともあれ、全員無事で良かった。」

「私もうくたくた・・・」

「僕もですよ・・・」

フォワードの五人はすっかり全身の疲れが抜け出てしまい、腰をついてしまう。

なのは達隊長陣も気持ちはスバル達と同じであったが、そこは隊長らしく体裁を取り繕うことにするのであった。

山本たち護廷隊の隊長陣も無事に帰還した全員に祝福の言葉をかける。

「たく、手間かけさせやがって。」

「・・・ふん・・・」

日番谷と白哉は素直な性格ではないからこのような素っ気ない言葉

であるが、心の中では他の隊長陣同様感謝の気持ちでいっぱいなのだ。

その証拠に、二人の表情も若干ほころんでいるのだから。

「よくぞ、無事に帰還してくれた。」

「ああ。」

「何とかやりました。」

「黒崎さん、ユーノさん、機動六課のみなさん。本当によく頑張りましたね。」

「へへ！！どうも、どうも！」

卯ノ花の言葉に思わず反応するスバルだが、それを見たティアナが横で突っ込みを入れる。

「スバル・・・あんた一人に言ってるんじゃないからね言っとくけど。」

「・・・これでこの事件も・・・終わりを迎える――――――――！！」

と、言いかけた金太郎だったがその瞬間・・・――――金太郎は突然何の前触れもなくその場に倒れこんでしまった。

「「「！！」」」

「「「え！？」」」

疑問に思ったユーノ達が金太郎を目の当たりにした直後、金太郎は体に奔る突然の激痛に苦しみ大声を上げるのであった。

「のあああああああああああああああああああああ！！！

忘れたくない時間と飽き飽きした時間（後書き）

教えて、ユーノ先生！

ユ「今日は、王濫についてだ♪」

ユ「嘗てのダイシー派のパトリオット達が密かに建造し、その後異空間へと封印されたこの力は時間そのものを消し去る能力を秘めている。」

ユ「モチーフは鰐で、その強力な力で時間そのものを食らいつくすと言う恐るべき力を持った列車なんだ。」

な「あの時は本当にもう駄目かと思ったけど、何とか修復できてよかったね。」

ユ「全くだよ。あれで本当に時間が喰われてたらどうなっていたことか・・・」

な「それにしても、あの時のユーノ君の言葉じんときたな。思わずどきっとしちゃった♪」

ユ「そ、そうかな・・・（ユーノ思わず照れる）」

ク「ま、フェレットもどきにしてはなかなか味ある台詞だったな。」

その言葉を聞いた瞬間、ユーノの血管が切れる。

ユ「気分を壊すんじゃねぇ！！」

ユーノは鬼道を使い、クロノを退ける。

ク「あああああ！！！！！！！！（クロノご臨終）」

魔導師図鑑ハイパー！

尸魂界見物の為に廷内を歩いていたフォワード五人。

ス「それにしても本当瀞霊廷の外と中じゃ雰囲気が全然違うよね。」

ティ「そうね。ま、一応護廷十三隊も高尚な組織だから待遇はこれぐらいじゃないと可笑しいのかもね。」

ギ「私たちも死んだらこっちに来るのかしら？」

エ「そうなると、先ずは流魂街に住むことになりますね。」

キャ「聞いた話じゃ、死んだ順番に整理券が配られるようで、それに書かれた地区に割り振られるようになってるんですって。」

ティ「そんな事務的なんだ・・・」

ス「えへへ・・・ちょっと意外・・・」

護廷十三隊副隊長陣紹介

雀部長次郎

声　一　山口太郎

身長１７９ｃｍ　体重６６ｋｇ　１１月４日生まれ

護廷十三隊一番隊副隊長。銀髪、口ひげで見た目は西洋人のような男。普段は無口で、作中でも会話場面は僅かにしか存在しない。隊長にしか許されないはずの白羽織を身に付けているように見えるが、これは羽織ではなく自作した洋風マントである。特技がフェンシング、休日には洋風文化の取り入れに勤しむなど、洋風のものを好んでおり、和食が嫌い。現世に行った際に見た英国紳士に憧れ、以来現世に訪れるたびに紅茶のリーフを持ち帰り育てているが、うまくいかない。

斬魄刀：『厳霊丸（ごんりょうまる）』

能力解放と共に鍔が変形し刀身がレイピア状になる。能力不明。解号は「穿て『厳霊丸』（うがて『～』）」。

大前田希千代

声　一　樫井笙人

身長２１０ｃｍ　体重１５１ｋｇ　５月５日生まれ　好きなもの・油せんべい、肉　嫌いなもの・魚

護廷十三隊二番隊副隊長・隠密機動第二分隊「警邏隊」隊長・男性死神協会理事。でっぷりとした太めの体格（本人曰く「ふくよか」）をしており、常に油煎餅を抱えている。名前は通常「大前田希千代」で通っているが正式には「大前田　日光太郎右衛門　美菖蒲介　希千代」（おおまえだ　にっこうたろうえもん　よしあやめのすけまれちよ）という。金持ちのボンボンで、自身も大前田宝石貴金属工場の社長も兼任している。家族構成は、父：希ノ進、母：希華、

長女：希美、長男：希千代、次男：希次郎三郎、次女：希代（声　一　藤田咲）の6人。末妹だけ美人（大前田家ではそう思われていない）だが、それ以外は同じような顔をしている。趣味はブレスレットの制作で、休日には庶民を自邸に招待して過ごしている。一見すると体型から鈍重そうに見えるが隠密機動ということもありスピードは速い。逆に鬼道は不得手と本人は言っており、二十番台の鬼道を詠唱破棄で発動しようとして暴発してしまったこともある。

斬魄刀：『五形頭（げげつぶり）』

能力解放と共に刀身が柄部分と鎖で繋がれた棘付き鉄球状（モーニングスター）に変化する。解号は「打っ潰せ『五形頭』（ぶっつぶせ『～』）」

虎徹勇音

声　一　ゆかな

身長１８７ｃｍ　体重７０ｋｇ　8月2日生まれ　嫌いなもの・かまぼこ

護廷十三隊四番隊副隊長・女性死神協会理事。救護隊副官であるため主官の卯ノ花同様余り戦線には出ない。十三番隊第三席・虎徹清音の姉。女性キャラクターの中でもかなりの長身で、優男風の体格容姿だが、優柔不断な性格でかなりの怖がり。捕捉・伝達系の鬼道（縛道）・「天挺空羅（てんていくうら）」を使用し、各死神達に藍染達の叛逆を即刻伝えるといった鬼道の能力もみせる。好きなものは栄養が無く身長が伸びなさそうだからという理由でおかゆ（本人はこれ以上身長を伸ばしたくないと思っている）で、三食おかゆでも良いらしい。趣味は生け花で特技は裁縫。休日は妹に会いに行って過ごしている。

斬魄刀：『凍雲（いてぐも）』

封印時から雪の結晶のような形をした鍔を持ち、能力解放と共に刀身が三本に分かれた形状に変形する。能力は不明。解号は「奔れ『凍雲』（はしれ『〜』）」

山田花太郎

声　－　宮田幸季

身長１５３ｃｍ　体重４５ｋｇ　４月１日生まれ

護廷十三隊四番隊第六席・第十四上級救護班班長。鬼道を治癒に使える。真面目な性格だが、天然でヘタレ気味。先輩がいたずらで渡した小麦粉玉を、隊支給の薬だと思い込んで携帯している。またよく叱られてもいるようで、席官としての威厳は皆無。

斬魄刀：『瓠丸（ひさごまる）』

斬りつけた相手の傷を取り込み癒す能力を持つ。だが、取り込まれたダメージが一定量に達すると、メス型の攻撃形態「朱色瓠丸（あけいろひさごまる）」へと変形し、取り込んだダメージ分全てを敵にぶつけることができる。最大出力での攻撃力は更木剣八が一目置くほど。ギリアン級大虚にも大きなダメージを与えた。ダメージ蓄積量は、後述の龍紋鬼灯丸（斑目一角の斬魄刀の卍解）同様、赤い色のゲージで判別できる。ゲージ蓄積量が一定量より少なくても「満たせ『瓠丸』（みたせ『〜』）」の掛け声で解放（始解）できるが、この場合、相手に与えられるダメージは極めて少ない。

雛森桃

声　－　佐久間紅美

身長１５１ｃｍ　体重３９ｋｇ　６月３日生まれ　好きなもの・桃

嫌いなもの・すももも

護廷十三隊五番隊副隊長。西流魂街一地区「潤林安」出身。恋次・吉良とは同期で、檜佐木は先輩。十番隊隊長の日番谷冬獅郎とは幼馴染で、ともに潤林安で血の繋がらないおばあちゃんと一緒に住んでいた。かつては彼を「シロちゃん」と呼び、隊長・副隊長の間柄になった現在でも、日番谷に隊長と呼ぶよう注意されても「日番谷くん」と呼び続ける。鬼道の達人であり、独自で組み合わせた鬼道を使ったりする。可憐な容貌から他隊隊士からも人気が高い。現在はシニヨン（いわゆるお団子頭）を布と紐でまとめているが、流魂街にいた頃から霊術院時代の途中までは短く二つ結びで、霊術院に入ってから5年後には一つ結びだった。酒には相当弱い。八番隊副隊長の伊勢七緒とは読書友達であり、一冊の本について熱く語り合う仲。特技は絵を描くことで、瀞霊廷通信の挿絵制作も担当している。四番隊で行われている生け花教室にも参加している。休日は流魂街のおばあちゃん家に行ったり、図書館で読書したりしている。

斬魄刀：『飛梅（とびうめ）』

鬼道系斬魄刀。能力解放と共に七支刀の様になり、火の玉を放つ。解号は「弾け『飛梅』（はじけ『～』）」

破道の三十一「赤火砲」

射場鉄左衛門

声　一　西凛太朗

身長１８２ｃｍ　体重６８ｋｇ　7月18日生まれ

護廷十三隊七番隊副隊長・男性死神協会会長。元十一番隊隊員で、一角や弓親、恋次などの先輩にあたる。戦闘は器用で「斬」「拳」「走」「鬼」をバランス良く鍛え、使いこなす（本人曰く、バランスよく能力を鍛えると副隊長に推薦されやすいらしい）。広島弁で

いかつい容貌だが、実際は母親思いで仁義に厚い。十一番隊を抜けたのも、病気の母親の治療費のためであると一角は語っている。また一角は、十一番隊では副隊長になれないから抜けたとも指摘している。振る舞いは穏やかだが、元十一番隊隊員らしく強い相手を求める好戦的なところもある。また、一角が卍解を習得していることを知っている。意外に絵心があり、可愛らしい狛村のイラストを描いている。また、松本乱菊のことが好き。広島風お好み焼きを好み（大阪風は嫌い）自費で「広島弁講座塾」を開くほどの根っからの広島好き（その後生徒が集まらず閉校）。趣味はサングラスの収集で休日には恋次同様、眼鏡の銀蜻蛉の新作をチェックしている。

斬魄刀

封印時は匕首状で、能力解放と共に鍔が無く広い刀身の中ほどに枝の様な刃が付いた形状に変形。名前・解号・能力、全て不明。

伊勢七緒

声　一　生天目仁美

身長１６４ｃｍ　体重４８ｋｇ　7月7日生まれ　好きなもの・羊羹　嫌いなもの・抹茶

護廷十三隊八番隊副隊長・女性死神協会副会長。眼鏡をかけた生真面目な女性で、普段は京楽の秘書のように振舞う。ふらふらしている隊長に憤りを感じていることも多く（あまりにも仕事をしない京楽を椅子に縛り付けていたりもしている）、素気ない態度が目立つ。その一方で「数歩下がってついていく」という発言や、元柳斎との対決に際して彼の身を案じるなど、敬慕する面が垣間見える。戦闘においては冷徹な一面も持つ。女性死神協会での活動では会長のやちるに代わって会員達を仕切っているが、彼女らの行動に悩まされることも。

檜佐木修兵

声　－　小西克幸

身長１８１ｃｍ　体重６７ｋｇ　８月１４日生まれ　好きなもの・ウインナー　嫌いなもの・ウニ

護廷十三隊九番隊副隊長（東仙謀反後は隊長業務を兼任（劇場版２では隊長権限代行と呼ばれた））・男性死神協会理事・瀞霊廷通信編集長代理。左頬に「６９」の刺青を彫っており、ノースリーブの死覇装を着ている（アニメより前代隊長の六車拳西への憧れと見受けられる）。首と両上腕部にある黒い模様は刺青ではなく、首輪と腕輪（取り外して相手に投げることで目くらましの効果のある爆竹のようなものになっている）。顔の右側、額から顎にかけて三本筋の傷跡を持つ（学生時代に藍染により生み出された巨大虚（ヒュージ・ホロウ）につけられたもの）。真央霊術院の入試には2回落ちているが、在学中にはすでに護廷十三隊への入隊が内定しており、その当時から席官入り確実といわれた優等生だった。恋次・吉良・雛森の先輩。なお、今は学生時代より短髪で、鼻に灰色のテープのような物を貼っている。上官の東仙の事を敬慕しており、“自分の剣に怯えぬ者に剣を握る資格は無い”など東仙からの教えを戦士としての矜持として胸に秘めている。また席官時代は、学生時代の巨大虚に襲われた経験から戦いへの恐怖を抱いていたが、当時の東仙の前述の言葉を胸に刻んだことにより、現在まで及ぶ。普段はクールでどっしりした硬派で誠実なキャラだが、『カラブリ＋』や単行本のおまけページなどでは想い人である乱菊のことで卑猥な妄想を膨らませて鼻血を噴き出すなど、軟派で助平な一面もある。

斬魄刀：『風死（かぜしに）』

解放すると一対の鎖で繋がった特殊な刃の形をした鎌になる。鎖の

部分を持ち武器本体を回転させ敵に投げることで、相手に動きが読まれにくい攻撃をすることが可能。檜佐木本人は風死の形が「命を刈り奪る形をしている」ため、風死を気に入っていないと述べている。解号は「刈れ『風死』（かれ『～』）」

松本乱菊

声　一　松谷彼哉

身長１７２ｃｍ　体重５７ｋｇ　９月２９日生まれ

護廷十三隊十番隊副隊長・女性死神協会理事。金髪で巨乳の色香漂うグラマラスな美女で、いつも死覇装の胸元が大きく開いている。また、首にアクセサリーをしている。マイペースでサバけており、お洒落な性格である。普段は明るく振舞っているが、市丸ギン絡みのことだと珍しくもの思いにふけっている描写が多々ある。酒豪であり、八番隊隊長の京楽と九番隊副隊長の檜佐木とは呑み友達。高い戦闘力を有し、自隊長である日番谷に絶大な信頼を寄せていて日番谷との連携にも優れているが、デスクワークに関してはサボりがち。仕事をサボる度に日番谷からいつも叱られているが、本人は反省していない。当時の階級は不明だが、かつて幼い日番谷と出会い、日番谷の霊力に気づき死神になることを勧めている。休日は暇人と呑みに行くか呉服屋に行って過ごしている。平時と非常時の緩急が激しく気分屋な言動が目立つ一方で、ルキアへの嫉妬に苦しむ織姫を優しく諭す姉御肌な一面も持ち合わせている。趣味は昼寝で特技は日本舞踊。作中で数度披露された豊満な制服姿は浅野啓吾・コン曰く「刃」「凶器」。よく現世で買い物を楽しんでいる。

斬魄刀：『灰猫（はいねこ）』

斬魄刀解放と共に刀身が灰状に変形、柄を振ることで灰となった刀身を操り敵を斬る。アニメでは見せ場が増えており、この解放状態

の刀でコンクリートや鉄筋を切断してみせた。色々な使い方ができ、相手を囲い切り刻んでいったり相手の攻撃を防いだりできる。本体の性格は本人曰く「ワガママで気分屋でぐうたらでバカ」で「ソリが合わない」らしいが、弓親には「（乱菊に）ソックリ」と評されている。解号は「唸れ『灰猫』（うなれ『～』）」

草鹿やちる

声　一　望月久代

身長１０９ｃｍ　体重１５．５ｋｇ　2月12日生まれ

護廷十三隊十一番隊副隊長・女性死神協会会長。北流魂街７９地区「草鹿」出身。赤子（捨て子）の頃に更木剣八に拾われた。剣八同様出身地を姓とし、名は剣八がこうありたいと願う人物「八千流（やちる）」の名前からつけられた。自身の生まれ故郷が常に殺し合いの場だったため、血以外の色を見たことがない。そのせいか、剣八に会ったときから、剣についた血を怖がりもせず触って喜んでいた。髪はピンク色で、ショートヘア。十三隊隊員中最小最軽量の体格で、外見・言動共に完全に幼児だが入隊試験を受けずいきなり副隊長の地位に就くほどの実力を持っている。常に剣八と行動を共にし、移動時は常に剣八の背中に張り付いている。剣八を「剣ちゃん」と慕い、剣八の言うことしかきかない。また、倒れた剣八を軽々と持ち上げて建物の屋上へ飛んで運ぶなど、外見に見合わず卓越した身体能力をもつ。しかし自分が戦うよりも剣八が戦う姿を見る方が好きなため、作中では未だ戦闘場面が無い。特に剣八が戦いを楽しんでいるときは、やちるも楽しんでいる。剣八と同じく霊圧を感知する能力に乏しい上に方向音痴であり、尸魂界篇では彼女に頼って強い敵（一護）を探していた剣八は、付かず離れずの距離を延々と彷徨っていた。無邪気で人懐っこい性格で、副隊長で唯一上官に敬語を使わず、他の隊に迷惑をかけてもいるがその性分から涅マユリなどの一部の例外を除いて他の隊長達から可愛がられている。他人にあだ名をつけ

て呼ぶ（例えば一護の場合は「いっちー」、織姫の場合は「プルルン」、白哉の場合は「びゃっくん」など）が、つけたあだ名を忘れることも。非常に足が速く、率先して事を成し遂げようと迅速な行動をとるが、それをすぐに忘れてしまう気楽な性分である。お菓子を食べるのが趣味で、好物は金平糖。大量に与えると流し込むようにして食べる。

斬魄刀

腰には差さず下げ緒を手に持って引きずっている（一角に無理を言って車輪をつけてもらった）。

斑目一角

声　一　檜山修之

身長１８２ｃｍ　体重７６ｋｇ　１１月９日生まれ

護廷十三隊十一番隊第三席・副官補佐。十一番隊の気風を体現するかのような好戦的な性格の死神。“勝つための戦い”ではなく“楽しむための戦い”を好む。坊主頭で足袋を履かず、刀と鞘を使った独特のスタイルで戦うため刀を腰に差さず常に持ち歩いている。鬼道の心得は全く無いが、白兵戦に関しては七番隊副隊長・射場と対等に渡り合うなど、副隊長クラスに匹敵する強さを持つ（弓親曰く「十一番隊で2番目に強い男」）。また、恋次が十一番隊にいた頃には戦い方を指南したことがある。手先が器用でやちるの鞘の車輪も一角がつけてやった。坊主頭について言及されることを嫌っており、やちるに「ぱちんこ玉」「つるりん」などと言われるたびに怒っている。現世にいるときは木刀を腰ひもに差している。意外と律儀な性格で、砂に嵌って動けなかった一護が闘いの態勢が整うまで待ったり、現世派遣での居候先の浅野みず穂が用意した信じられないセンス（弓親の評）の服を文句も言わずに着たりしている。死神

になる前のとある戦闘以来、心の中で剣八に絶対的な忠誠を誓い、現在も「死ぬなら剣八の下で戦って死ぬ」ことを最大の目標として戦っており、隊長や副隊長になれる実力があるにもかかわらず、そのつもりはないと明言している。人に戦い方を教える際、最後に「殺す相手には名前を名乗れ」と教えている。これは彼の流儀でもある。「ツイている」と思ったときには「ツキツキの舞」という変な踊りをしながら喜びを表現する。隊長・副隊長以外の死神で唯一卍解を習得しているものの、上記の理由により隊長に推薦されるのを嫌い弓親と恋次にしか教えていない。そのため戦闘では、人目に触れない状況でない限りはピンチに陥っても卍解を使わないという意地を見せている。だが射場にはそのことを知られており、後に狛村もその事実を知り黙認する

斬魄刀：『鬼灯丸（ほおずきまる）』

直接攻撃系の斬魄刀。能力解放と共に柄と鞘が繋がり菊池槍（穂先が片刃の短刀状の槍）へ変化、さらに、柄を分割し三節棍へ変形する。強度には難点があるものの、攻撃形態は変幻自在。柄に血止め薬が入っている。因みに恋次が副隊長になる前は柄と鞘を繋げずに解放している。解号は「延びろ『鬼灯丸』（のびろ『～』）」で槍に変形、「裂けろ『鬼灯丸』（さけろ『～』）」で三節棍になる。

【卍解】：『龍紋鬼灯丸（りゅうもんほおずきまる）』

解放と同時に、左右で形状の異なる二本の巨大な刃物、及びそれぞれの柄尻と鎖で繋がれた巨大な斧刃を持つ特殊な形態の武器に変形。敵の破壊のみに特化し、凄まじい破壊力を誇る反面、耐久力は卍解としては極めて低い部類に入る。解放直後、霊圧は抑えられた状態にあるが、相手を攻撃、もしくは攻撃を防御するなど、斬魄刀に衝撃を与えることで、斧に彫られた龍の文様が徐々に赤く染まってゆ

き、斬魄刀の霊圧が上昇。龍の文様が紅く染まりきったとき、霊圧・破壊力共に最大になる。

綾瀬川弓親

声　－　福山潤

身長１６９ｃｍ　体重５６ｋｇ（『カラブリ＋』では５９ｋｇ）

９月１９日生まれ

護廷十三隊十一番隊第五席。かなりのナルシストで美しいものを好むが、本当に美しいものを見ると嫉妬する。一角とは古くからの友人で共に行動することが多い。「三」の字に美しさを感じているが、一角が第三席であるためにあえて「三」に似た「五」の席に甘んじている。一角と違い鬼道の心得はある様子。死神になる前、剣八に会った頃はおかっぱではなく、長い髪を後ろで結わえており、現在右の睫毛と眉毛につけている派手なエクステも無かった。尸魂界救出篇で九番隊副隊長の檜佐木修兵と戦い、真の能力を解放して彼に勝利を収めており、副隊長クラスの実力を持っているが、十一番隊の風潮のため、ひた隠しにしている。

斬魄刀：『藤孔雀（ふじくじゃく）』

能力解放と共に４枚の刀身を持つショーテル状の武器に変形、これは始解の途中の状態である。乱菊の「灰猫」同様、「具象化」「屈服」させられておらず、卍解の一歩手前の様子。性格は弓親によると「高飛車で偉そうで自分のことを世界一の美形だと思っている」らしい。それ故に弓親のカンに触り、対話した直後思わず刀を折ろうとしたほどだが、それを聞いた乱菊は「あんたにそっくり」と評した。解号は「咲け『藤孔雀』（さけ『～』）」。なお藤孔雀は弓親がつけたあだ名である。

『瑠璃色孔雀（るりいろくじゃく）』

藤孔雀の本来の名称であり、真の能力でもある。能力解放と共に無数の箇所に蕾を付けた蔦状に変化し敵に絡み付いて霊圧をことごとく吸収する能力を持つ鬼道系の斬魄刀（その時に蕾から百合に似た花を咲かせる）。前述の暗黙がある故に十一番隊の隊士とりわけ剣八や一角に知られるのを嫌うため、他の者にはこの能力はひた隠しにしている。尚、その花を口にくわえる事で、吸い取った霊力は自分の力として体に蓄えることができる。解号は「裂き狂え『瑠璃色孔雀』（さきくるえ『～』）」。本人曰くこの斬魄刀は色の好みがあり、瑠璃色は斬魄刀の好きな色であり、藤色は斬魄刀の嫌いな色で、藤孔雀と呼ぶことで拗ねて力が制限されるという。

涅ネム

声　－　釘宮理恵

身長１６７ｃｍ　体重５２ｋｇ　３月３０日生まれ　好きなもの・秋刀魚　嫌いなもの・ネギ

護廷十三隊十二番隊副隊長・女性死神協会副会長代理（七緒の不在時）。寡黙で無表情、常にマユリの後ろに付き添う黒髪の女性。死覇装は今のところ唯一のミニスカート丈。その実態は涅マユリが己の義骸技術・義魂技術の粋を集めて作られた最高傑作の人造死神にして涅マユリの娘。彼に毎回理不尽に虐げられているが（一応彼なりの特殊な愛情表現だという）、決して逆らわず、絶対的忠誠を貫いている。従来の常識ならコン及び他の義魂達と同じく死神扱いはされない筈だが、誕生時にマユリの遺伝子情報（血液）を元に血肉が生成されており、魂も独特のカスタマイズ（ゆえに趣味・思考が似ている）がされている上、マユリ自身が「私の娘」と公言していることからマユリの血縁者として認知されている。体はあくまで義骸であるためか華奢な外見に反して片手で瓦礫を持ち上げるなど身体能力が高く、生命力を奪われ干乾びてもマユリなら元に戻すこと

が可能（作中では石田曰く「描写できないこと」をされることで生き返っている）。同じ血液なので疋殺地蔵の毒は効かない。副官章の裏には疋殺地蔵用の解毒薬を持っており、毒に冒された他者に渡す事が出来る（毒の成分は定期的に変更される為、常に最新の物を渡されていると思われる）。女性死神協会の「副会長代理」として活動している際は、マユリよりもむしろ、会長のやちるのほうに傾いている模様。斬魄刀は名前・能力共に不明。

小椿仙太郎

声　―　遠近孝一

身長１８３ｃｍ　体重７５ｋｇ　９月２２日生まれ

十三番隊第三席・副隊長代理（その１）。流魂街出身。ガサツな性格で声が大きく、白い綱を襷、捻り鉢巻にしている。浮竹に心服しており、いかなる時でも傍にいる。同じく浮竹を尊敬している清音と張り合っている。

虎徹清音

声　―　西村ちなみ

身長１５４ｃｍ　体重４３ｋｇ　９月２２日生まれ

十三番隊第三席・副隊長代理（その２）女性死神協会理事。四番隊副隊長・虎徹勇音の妹。姉とは対照的に金髪のショートヘアで明るく押しの強い性格。洋風の（１５世紀のスペイン人のような）シャツを着用し、白手袋をしている。浮竹に心酔しており、いかなる時でも傍にいる。同じく浮竹を尊敬している仙太郎と張り合っている。

終章・パトリオット篇（前書き）

ユ「それは、貪欲なる欲望と絡み合った悲しき子供の挑戦でした。」

な「涙は血と共に流れ落ち、一人の欲望の為に虚しく散っていった・・・」

一「何もかもが運命とか、因縁ばかりじゃねぇ。あいつらだって・・・一緒に居たいという気持ちだけは本物だった筈だ。」

金「全てを終わらせよう・・・こんな結末など誰も望んでなどいなかったが、もう・・・逃げも隠れもしない。正面からぶつかろう！」

ユ「ユーノ・スクライア外伝　パトリオット篇最終回・・・・・・始まります。」

終章・パトリオット篇

＞ｉ１７５２０―７０９＜

パトリオットの襲撃・及び高円寺虎彦の叛乱から一週間。

ユーノとなのは達は受けた傷が思わしくなく、大事を取ってこの尸魂界で治療をするため現在も滞在していた。

今回起きてしまったこの一連の事件の全容を、総隊長山本は時空管

理局本幕僚長のミゼット・クローベルへと報告。

報告を受けたミゼットも若干渋い顔をしていたようだったが、何はともあれ事件が無事に解決できたことにほっとしていた。

『そう・・・分かったわ。今回はあなた方のお蔭で事件を解決できたことを私から時空管理局の代表としてお礼を言っておくわ。ありがとう。』

「儂らは何もしておらんよ。全てはあの者たちの努力の結果じゃ・・・ま、それでもその結果に納得するかどうかは話は別じゃがな。」

『そうね・・・・・・』

そう、結果は非常に最悪とも呼べるものだったのだ。

確かに、世界の時間が崩壊するなどという大それた事態には発展しなかったが、その一方でこの事件の根幹を担い、そして無残にも死んでいった銀太郎以下七人の子供たちの命を機動六課は救えなかったのだ。

彼らにとって、当初の目的がパトリオット全員の保護というもの大前提だったが、この戦いでは誰一人それを成し遂げられたものなど居ないのだ。

そんな苦い思いを十分に噛みしめながら、翡翠の魔導死神ユーノ・スクライアは今どこで何をしているのだろうか？

ユーノは澄み切った尸魂界の空をなんとなく見上げながら、今回の事件を自分なりに振り返り、今後のアンゴルモア捜査に関する事を

考えていた。

「・・・・・・」

「こんなところで、また日向ごっこか？」

すると、そんな縁側で空を見上げるユーノに近づいてきたのは同じく傷の手当の為に滞在していたユーノの師、黒崎一護だ。

「・・・一護さん・・・」

ユーノは一護の方を向くと、柔らかい表情で言葉を投げかける。

「ええ。縁側で日向に当たっていると、何だか心が落ち着くものですから・・・」

「そうだな。いいもんだな・・・こう言うのも。」

一護も柔らかい表情でそう答えると、徐にユーノの隣へ腰を下ろす。

なお、長期滞在とは言え医者としての業務を放棄する訳にはいかないと判断した一護が事前に織姫に連絡し、ユーノが留守中に使っているコピーロボットを使って自分の代わりに医師としての業務をそれで全うすることを頼み、今に至っている。

だから、ユーノもこうして一護と普通に話をしている訳だが、ふとユーノは大概は一緒にいるはずの恋次がその場にいないことに気づく。

「恋次さん達はどうしたんです？」

「多分、今回の一件の後始末だよ。それにあいつらにはこいつが片付いてもまだミッド駐在の任務が残ってる。数カ月の間に溜まった一通りの書類整理とかで数日前から徹夜だろうぜきっと。」

「ま、それもそうですね。」

「なのはとは一緒じゃねぇのか？来るときは全然見かけなかったけど。」

「四番隊の方で治療を受けている金太郎達のお見舞いに行ってますよ。今回の戦いで、金太郎には正直かなりの負荷が体に残ってしまいました。」

そう、今回の戦いにおいて最も受けた傷も負担がかかったのも金太郎なのだ。

短期間で行われた壮絶なる激闘と同じリベルの血を受け継ぐ齢十五の少年を救えなかったという思いが金太郎にかなりの負荷となってしまった。

現在、高円寺の激闘の後で激痛を伴い気絶した金太郎は直ぐに卯ノ花の治療を受けたのち綜合救護詰所にて療養中である。

一護もそのことに関しては、苦い顔を浮かべていた。

「確かに、リベル式の魔法は扱うだけでも相当難しいものなのにあいつはこんな短期間で、しかもあそこまの実戦で使い続けたら、体もガタガタになるよな。」

「暫くは、ゆっくりと静養させてあげないといけませんね。」

「そうだな・・・」

二人は一度話を区切ると、再び澄み切った空をなんとなく見上げてみたりしたそうだ。

やがて、暫くの時が流れたのちユーノが徐に杖を持って立ち上がると一護に声をかけて一度外の空気を吸いにいかないかと要求する。

「ちょっと、外の空気でも吸ってきましょうか?」

「ああ。序に、連中のところにも顔出してくるか。」

「ですね。」

二人は気分転換と恋次達の様子を見に、一度外へと足を運んだ。

パトリオットの一件で瀞霊廷内各地では全体総出で建物の修理が行われ、二人もそんな光景を見ながら受けた傷跡が決して小さいものではなかったという事実を噛みしめる。

しばらくその辺を歩いていると、一護は前方で腕を組みながら修復されつつある建物を眺める恋次の姿を発見し、声をかける。

「お、恋次。」

「一護・・・ユーノも一緒か。」

二人に気づいた恋次も徐に近づき、そこで立ち話を始める。

「仕事は？」

「粗方片付けたつもりだ。眠くて仕方ねぇよ。どうやら、あっちで事務処理の仕事してるうちに、そっちの方も手早く出来るようになったらしい。」

「それは良かったじゃないですか♪」

「で、それ以外の後始末の方は終わったのか？」

「まぁな・・・壊れた建物の修理・・・怪我人の治療・・・まだまだ傷は残っちまっているが、取り合えず一区切りはついたみてぇだ。」

「そうですか。」

ユーノもそのことを聞くと、先ほどまで寄せていた眉間の皺を若干緩める。

「瀞霊廷と時空管理局は、パトリオットの存在と発生理由を正式に認めたんだよな？」

「・・・ああ。」

「高円寺は、自らの不毛な人生に絶望していたとき、それを覆す好機として銀太郎君達パトリオットを利用して挙句強大な力を呼び覚ましてしまった・・・」

「過去の存在を抹消するのが野郎の目的みたいだったけど、自分の

存在自体もあいつは消したかったのかもしれねぇな。ま、逆に強く残っちまったみたいだけど・・・」

「け。相変わらず知ったような口を・・・」

「何だと!?」

恋次の自分に向けて放ったその言葉に苛立ちを覚える一護。

「大体な、おめぇらが高円寺達をこっちによこしたからこんな事になっちまったんだぜ。」

「何!?おめぇだってあの時あそこにいただろう!」

「俺は・・・!!あの時、高円寺の野郎にちょっと油断しただけで・・・それで吉良も俺もだな・・・」

「それって弱いってことじゃねぇのか?」

小ばかにした言い方で恋次を挑発する一護。

すると、その言葉に癇癪を起こした一護が我慢できなくなり思わず胸蔵を掴む。

「!!な、何だと!?」

「んな怒るなよ。ついホントのことを。」

恋次の形相に若干引き気味の一護であったが、恋次の怒りは収まらないままだ。

「つい何だと・・・？てめぇ、昔藍染に勝ったからって調子に乗りやがって・・・大体てめぇはあくまで代行で、正式な死神とは違うんだからな！調子に乗ってんじゃねぇぞ、コラ！！」

「だから悪いって謝っただろうが！？」

「いいや、許せねぇな。」

「るっせーな。こっちは疲れてんだよ！」

「！その妙に投げた態度がもっと許せねえ！！」

一護の投げやりな言葉に更に怒りを募らせ、このままでは斬魄刀を使いかねない状況になってしまうのではないかと判断したユーノは間に入って二人の喧嘩を止めようとする。

「ハイハイ、恋次さんも一護さんもブレイクブレイク♪怒ると血圧も霊圧も上がりますよ。」

「う、うるせー！てめぇもちったあ場の空気ぐらい察しろよ！！」

「場の空気一番読まない男がそれを言うか？」

「僕、機動六課一の場の空気を読む男なんですけどね。」

「何所がだ！！」

ユーノに茶化されたことで、恋次の怒りは矛先を変えてユーノに向けられてしまう。

それを今度は一護が止めにかかると言う鼬ごっこのようなことが暫くの間続き、漸く怒りの静まった恋次はすっかり疲れた様子でいたそうな。

その後、三人はその辺りに置かれていたベンチに腰を下ろすと戦いが終わり元の平穏な雰囲気を取り戻しつつある尸魂界での時間を和やかに過ごしてた。

三人はどこか柔らかい表情を浮かべると、そのまま流れゆく雲を目で追いユーノが一言言葉を発するのであった。

「・・・穏やかですね。」

「ああ。」

「そうだな。」

すると、その言葉を口にした直後に恋次が次のように語ってきた。

「しっかし、まさか任務の途中とはいえ・・・こっちに戻って来ることになるとは思ってもいなかったぜ。」

「それはきっとルキア達も同じだぜ。なのは達も、まだ足を踏み入れた事の無い未開の地で戦いづけの連続だったからな。おちおち見物も出来やしなかったな。」

「だけど、戦って勝ち取ったものがあったとは思えませんがね・・・」

意味深なユーノの言葉を聞いた二人は思わず顔を歪めてしまうが、一護はそのユーノの言葉の意味を理解し何も言わなかったが、恋次は何処か納得のいかない様子であった。

「！な、何言ってんだよ！？あのまま高円寺の野郎に負けてたら、それこそ俺たちだってどうなってたか分かったもんじゃなかっただろうが。」

「勝ち負けの問題じゃないですよ・・・これは・・・」

「・・・・・・――――――」

ユーノの放つ言葉を聞いた途端、恋次もそれには何も言い返せなくなってしまう。

その後、一護は神妙な顔つきのままパトリオット騒動の反省と残ってしまった奇妙な気持ちを言葉に表し始めた。

「パトリオットはもう誰も残っちゃいねぇ。譬えようのない苦さだけが残る。そんな戦いだったな。まるで、十年前のバウントの時と同じようにな・・・――」

「ああ・・・」

「高円寺は、自らの生きるこの世界に絶望しそれを壊そうとしていた・・・恐らく、変化の感じない同じことの繰り返しに耐えられなかったんでしょう。」

「繰り返しか・・・」

ユーノのその言葉を聞いて、相槌を入れる恋次。

「ええ。バウントであったパトリオットにも当てはまる事ですけど、ずっと生きてるってことは決して楽じゃない。千年の間に、ちっともよくならない悲惨な現実とパトリオットの歴史を何度も見てきたはずだ。高円寺もきっとそんな時間と人生に鬱蒼としていた・・・きっと、高円寺にとっても銀太郎君と出会う前のパトリオット達にとっても歴史は前に延びた線じゃなくて、円になってループしていたんですよ。それを断ち切ろうとしていたんですよ・・・きっと。」

それを聞くと、一護も嘗て自分がバウントの一件でルキア達に語った言葉と同じものを感じ、共感するのであった。

「そうだな・・・――俺もそう思った。」

そして、そんな事を語ったユーノ本人はというと、ふと何気なく管理局を辞め、一護達と出会ってから過ごした四年の出来事の一部を思い出し物思いにふけっていた。

廻転している――――――

ユーノ・スクライア、２１歳のある年のある晴れた日。

浦原商店にて――――――

「死神合宿・・・・・ですか！？」

「いはあ♪そんな大層なもんじゃないっすよ、スクライアさん♪あんまし堅苦しく考えないでくださいよ。戦い方を覚えつつあるスクライアさんにも休養が必要です。なので、私と黒崎さんで慰安旅行

を計画してみたんすよ！」

唐突に喜助から聞かされたその言葉に疑問符を浮かべるユーノと、飄々とした態度で説明を行う喜助。

どうやら、日頃から修行に明け暮れ塞ぎこんでばかりでいたユーノに気分転換のつもりで旅行を進めてきたようだ。

「・・・慰安旅行・・・浦原さんが・・・ですか？」

喜助からの提案と言うこともあり、かなり疑った目で見つめるユーノを傍にいた一護がやはりとばかりの表情でこう口にする。

「ほら見ろよ。やっぱりアンタの言うことは今一信用出来てねぇだろ。」

「酷いっすよ、黒崎さん♪アタシはそんなに信用ならない大人に見えますか？」

「俺から言わせれば、十分信用ならない顔してるけどな。」

すると、そんな一護の言葉に追い打ちをかけるかのように猫の姿の夜一が便乗してくる。

「ふむ・・・喜助。人に信用されたいとおものなら、先ずは包み隠さず全てをさらけ出すのが肝心じゃぞ。見ろ、儂なんか包み隠さず自分をさらけ出しているのではないか。」

その言葉を聞いた途端、一護は曝け出すという言葉に過剰に反応し顔を赤く染め上げながら夜一に反論する。

「あんたは色んな意味でさらけ出し過ぎなんだよ！！ある種危険だ！！」

と、そんな一護の言葉を聞いて何処からともなくコンと共に昼食用の弁当を持参して茶の間の引き戸を開ける織姫が口を挟んできた。

「・・・まぁでも、ユーノさんも偶には休養も必要なのは確かですよ。戦ってばかりいると、ユーノさん本来の実力がいざって言う時に発揮できないですから。旦那も浦原さんも夜一さんもああ言ってることだし、悪い話じゃないと思うんですけど・・・」

「全く、おめぇは堅物なんだよ。遠慮も多すぎるだ！」

「織姫さん。コンさんまで！」

「おや♪こっちに来てたんすか、お二人とも。」

「へへ、どうもどうも♪これ、差し入れね。」

織姫は喜助と夜一に軽く挨拶をすると、持っていた弁当の包みを一護に手渡す。

「悪いな、織姫。折角だしこのまま昼食しながら考えようぜ。」

「ただいま、お茶を淹れて参ります。」

鉄斎はそう言うと、人数分のお茶を淹れに席を立った。

「頼みます♪」

やがて、弁当箱を開けた一護達はその中にぎっしりと敷き詰められた豪勢な料理に目を奪われ、夜一自身も向上した織姫の料理の腕を素直に褒め称える。

「ほう～～～実にうまそうじゃ。また料理のレパートリーが増えたのう、織姫。」

「えへん！こう見えても料理には自信がありますからね！あ、それとこっちのシフォンケーキは桃子さんから教えていただいたものなんです。上手くできたかどうか分からないけど、食べてみてください。」

「じゃ、戴くとするぜ。」

「一護、全部喰うなよ！俺様の分喰ったらまじぶっ殺すからな！！」

「お前じゃあるまいし、そんな食い意地はらねぇよ。」

談笑を交えながらの楽しい昼食のひと時を堪能する一護達であったが、ユーノは織姫が口にした桃子という言葉に反応すると何処か浮かない表情となってしまった。

「・・・・・・」

「？どうした、ユーノ。顔が浮かないぜ・・・」

「・・・あ・・・――――――いえ・・・さっき織姫さんが桃子さんから教えていただいたって聞いてつい・・・・・・彼女の事を思い出しちゃいまして・・・彼女の傍にいることも出来なかった足手

纏いな僕が今更こんなこと思うのも女々しいとは思ってるんですけど・・・それでも・・・やっぱり彼女に必要とされていたいと思う矛盾・・・」

そのユーノの言葉を聞いて、織姫はついやってしまっと言わんばかりの申し訳なさそうな表情になるが、一護・喜助・夜一の師匠三人組はユーノの言葉を真摯に受け止めると、本当の意味での師である一護がユーノに優しくこう語りかけてきた。

「・・・そうか。やっぱりお前はなのはの事が大事なんだな。だけど、お前は一つ勘違いをしてるぜ。お前は自分の事を足手纏いだと言ったが、本当に足手纏いなのは、“力の無い奴”じゃねぇんだ。」

「え?じゃあ・・・一体・・・」

“覚悟の無い奴”だよ。」

「覚悟・・・!?」

ユーノはこれまでの人生を振り返り、色々と思考を巡らせながら本当の意味での足手纏いとは何なのかをなのは達と出会ってから真剣に考えてきたが、この一護の言葉のような答えをユーノは人生で一度も辿り着いた事は無かった。

そんな呆然とするユーノに更に喜助と夜一、織姫が便乗する。

「黒崎さんの言うとおりっすよ。スクライアさんは決して足手纏いじゃないんです。なぜなら、あなたには既にその人のことを強く守りたいと願い、その為の覚悟を身に付けいるんですから。」

「そうじゃ。力の大きさでは覚悟の大きさは図れぬ。儂らはそれを誰よりも知っているつもりじゃ。でなくば、此処にいる一護も織姫も尸魂界での戦いに立ち向かってなどいけぬかった。」

「ですね。今にして思えばいい思い出のようなそうでないような・・・」

「少なくとも、心に残るものであったことは間違いないだろうぜ。」

コンはそんな一護の気障とも捕えられなくもない言葉に舌打ちをする。

「け！分かったような口を叩きやがるぜ、おめぇは。」

「お前に言われたくねぇんだよ！」

一護は癇癪を起すと、毎度のことながらコン目掛けて捌きの一撃を加え、コンもそんな一護に対抗しようと必死に抵抗の姿勢を見せたのであった。

すると、そんな一護や喜助たちの言葉にエールを貰ったユーノは何だか自分自身を縛り付けていた何かが解放されたかのような、そんな気持ちになり心が穏やかになるのを感じた。

そして、一護達に向かって感謝の言葉を投げかけた。

「・・・ありがとうございます・・・みなさん・・・！」

それが、ユーノ・スクライアにとって始まりのきっかけでもあり新たな道を歩むための小さな出来事でもあったのだ。

そんな昔の出来事を懐かしくも新鮮な気持ちで振り返りながら、隣に座る自分の人生におけるターニングポイントをもたらしてくれた師・一護のことを一瞥する。

「（そうだ・・・――あれが全ての始まりだったんだ・・・――僕が一護さんと出会わなければ、きっといつまでも昔のことに固執して、ただただ自分の非力を呪い、なのはも何も護れないままで終わっていたはずだ・・・・・・）」

廻転している――――――

運命が歯車だと言うのなら、僕たちはそれを廻す理。

無欠であると信じて、進むしかない――――――

噛み合う力の行く先へ。

そして、刃は振り下ろされたのだ――――――

さて、その頃四番隊綜合救護詰所で療養中の今回の功労者である熊谷金太郎はというと、あの戦いの直後からずっと眠り続けたまま一度も目を覚まさずにいたが、この日漸く意識を取り戻したのだった。

「・・・・・・ん・・・・・・」

徐に目を開けてみる金太郎。

自分の目の前に見慣れぬ天井がそこにはあり、周りには薬棚や精密

機器が散在し、そして枕元にはなのは達からのメッセージが何枚か置いてあったのだ。

「ここは・・・・・・？」

「お気づきになられましたか？」

金太郎が声のする方向へ振り向いてみると、扉の横にはいつもの和やかな雰囲気を醸し出す四番隊隊長の卯ノ花が立っていた。

「あなたは・・・――――」

「四番隊隊長、卯ノ花烈です。金太郎さん、あなたは今回の度重なる戦いで溜まった疲労と過度な魔力の使用により、体には酷いダメージを負ってしまい、此処に戻ってきた途端急に倒れたんですよ。かれこれ三日・・・眠り続けていました。」

「そうですか・・・・・・」

卯ノ花の言葉を聞いて、金太郎も自分が倒れた直前の記憶を思い出し、浮かない表情で返事をする。

「傷の手当はしましたし、戦いもないようですから・・・しばらくは体を安静にしてくださいね。兎に角に、面会の人がお待ちかねのようですから私はこれで。」

「面会・・・？」

怪訝そうな表情を浮かべる金太郎であったが、卯ノ花は破顔一笑をして扉を開けるとその瞬間スバル達前線メンバー一同とスクライア

商店の面々がお見舞いにやって来たのだ。

「金太郎さん！」

「よう、熊！！くたばってなかったようだな？」

「先輩、言い方悪すぎだって。大丈夫かい、金ちゃん？」

「鬼太郎・・・浦太郎・・・スバル殿達も・・・」

スバル達はお見舞いの花束を金太郎に渡すと、その場で金太郎と話をしだす。

「まる一週間、眠り続けていたんですよ。死んでるじゃないかってぐらい・・・」

「フェイト。そいつはおかしな話だぜ。熊に限って死になんてことはねぇよ！」

「あの、それじゃ金太郎さんは妖怪になっちゃいますよ・・・」

「死神よりも嫌よね・・・気持ち的には・・・」

鬼太郎の言葉に思わず苦笑いを浮かべるキャロやティアナであったが、金太郎は目を覚まして暫くするとふと銀太郎の事が気にかかり徐に尋ねた。

「！・・・銀太郎は・・・銀太郎はどうなったのですか！？」

その言葉を聞くと、全員は暗い表情を浮かべて残酷な現実を閉じて

いた重い口で語り出す。

「・・・残念ながら、既に亡くなられました。何とか四番隊の人たちも頑張ったんですけど、手術は無駄でした。」

「・・・そうですか・・・くっ！！」

金太郎はその事実を聞かされると、自分の歯がゆさを悔やみ拳に力を入れる。

すると、そんな金太郎の気持ちをくみ取ったクロノが口を挟んできた。

「悔しい気持ちは分かります。僕らだって、あなたと同じ気持ちですから。」

「ああ。ガキの命も救えなかったことは確かに私らにとっての汚点だ。だけど、だからって何時までもしょげてたって何も始まらないぜ。」

「ヴィータの言うとおりだ。我らに出来ることは一通りやりました。せめて、銀太郎の安らかな眠りを祈り、弔ってあげてください。」

「・・・分かりました・・・」

シグナムからの言葉を聞き入れた金太郎は、徐にベッドから出ると自分の枕元に置いてあった銀太郎の遺留品の一つである学ランについていた三学年を示すバッチを手に取った。

そんな金太郎をじっと見つめていた前線メンバーであったが、スバ

ルはふとそこに居るはずのなのはの姿がないことに気づく。

「あれ？そう言えば、なのはさんは？」

スバルの言葉を聞いて、はやても不審そうにあたりを見渡すがやはりなのはの姿を確認できない。

「変やな・・・ついさっきまで一緒やったのに？」

「なのはならさっき、ちょっと風に当たってくるって言って何処かに行ったぞ。」

「ま、穿界門の開く準備が始まっているから直ぐに帰ってくるとは思うがな。」

その頃、当の本人であるなのはその人はというと・・・・・・レイジングハートを携えて一人双極の丘まで歩いてくると、向かい風に当たりながらなびく自分の髪を軽く押さえていた。

「・・・管理局に入って、いろんな世界を見てきたけど・・・ここもまた同じような風が吹くね、レイジングハート。」

〈Ｙｅｓ〉

なのはは風に髪を煽られながら、眼前に広がる尸魂界の風景を見ながらふとこんなことをレイジングハートに尋ねてきた。

「・・・ねぇ、レイジングハート。もし・・・私たちにもっと力があれば、今回みたいな悲劇は起きなかったのか？」

〈Ｗｅｌｌ　Ｉ　ｄｏｎ’ｔ　ｋｎｏｗ.（どうでしょうか。）〉

「（高円寺は――――――うんうん・・・・・あの子たちはみんな、強い力を手に入れてしまったから、結局最後は自分を葬るしかなかったのかな?銀太郎君やパトリオットの子達が求めたのは、誇りを取り戻す力・・・高円寺が求めたのは、運命を変える力・・・私が求めたのは・・・――――）」

そう考えていると、なのはもユーノ同様何気なく昔の自分の記憶を辿り、ユーノと出会う直前の出来事を思い返してみた。

廻転している――――――

高町なのは、小学三年生９歳の春先の昼食の時の出来事。

聖祥台小学校屋上にて――――――

「将来か・・・」

このとき、なのはは弁当箱のウィンナーを一つ取り出しながらふと自分の将来に関する事を親友のアリサ・すずかの三人で話していた。

「ありさちゃんとすずかちゃんは、もう結構決まってるんだよね?」

「ウチは、お父さんもお母さんも会社経営だし・・・いっぱい勉強してちゃんと後を継がなきゃ、ぐらいだけど。」

「私は機械系が好きだから、工学系で専門職がいいなって思ってるけど。」

「そっか・・・二人とも凄いよね・・・」

二人のはっきりとした将来のビジョンを聞いて、なのはは自分のしたいことが見つからないでいると言う不安と焦燥に胸を痛める。

ただ回るだけじゃない。

廻転し、太陽と月に触れるたび――世界は常にその新たなものへと変えてゆく。

「でも、なのはは喫茶翠屋の二代目じゃないの？」

「うん・・・それも将来のビジョンの一つではあるんだけど、やりたいことが何かあるような気もするんだけど、まだそれが何なのかはっきりしないんだ・・・私、特技も取り柄も特にないし・・・」

なのはは子供のころから常に何処か大人臭い言葉を口にしていた。

理由は恐らく、幼少期に過ごした父・士郎の大怪我の為に家族が店の経営で忙しく、一人ぼっちでなのはが家で過ごしていたことが原因の一つであると考えられる。

そんななのはの周りには自分の将来に明確なビジョンを抱き、それに邁進しようとする友達がいた。

自分を卑下し、取り柄の無いと豪語する寂しい目をしたなのはだったが、それを聞いた途端アリサが喝を入れてきた。

「バカチン！！」

「！？」

「自分からそういうこと言うんじゃないの！」

「そうだよ。なのはちゃんにしか出来ないこと、きっとあるよ。」

「大体あんた、理数の成績はこの私よりもいいじゃないの！？それで取り柄がないとはどの口よ！！」

「いたたたあた！！！だって、なのは文系苦手だし体育も苦手だし！！！」

アリサは自分自身を卑下し、悲しい表情を浮かべるなのはの顔を容赦なく引っ張っり叱咤激励をする。

それが彼女なりのなのはへの優しさの表れだったからだ。

変わらないものがあるとすれば、それはきっと――――――私の無力。

「（自分に出来る事・・・自分にしかできないこと・・・か。）」

そんな事を考えながら、なのははいつも通り三人で下校する。

「ねぇ、今日のすずか。ドッジボール凄かったよね！？」

「うん！格好良かったよね！」

「そんなことないよ。」

自分にしか出来なこと、自分に出来ることが何なのか――――――
それがよく分からなくて、あったのはきっともどかしくてちょっと
寂しい想いだけだった幼いころの自分。

そんな私に、神様は予期せぬ出来事をプレゼントしてくれた。

「なのは？」

「どうしたの？」

「え！？あ・・・うんうん！ごめんごめん。何でもない！」

「大丈夫？」

「うん。」

「じゃあ行くわよ。」

行き場のない寂しさと、そんな迷ってばかりな自分・・・――――周
りを見れば、私なんかよりも将来を見据えた子がいっぱい。

時々その子たちを見て嫉妬した自分がいた。

何の取り柄もない自分が・・・一体この先何をすることが出来るの
だろう？

先の見えない不安ばかりが、日に日に大きくなっていく。

昔から酷く大人びた考え方をしていると言われた。

いくら大人みたいに平気と言って周りを誤魔化しても、一人になるとやっぱりどうしてもはけ口がなくなって自分で自分を苦しめちゃう。

それを思う時、私の心は刃に似るんだ。

「なのは、見られてる。」

「え・・・う・・・うん・・・えっと・・・」

なのはは、運命的な出会いを果たした傷だらけのフェレット、ユーノにそっと手を向けるとユーノはなのはの指を軽く嘗めてきた。

「はあああ！！！」

「暫く安静にした方がよさそうだから、取りあえず明日まで預かっておこうか？」

「「「はい、お願いします！」」」

「じゃあ、また明日様子を見に来てくれるかな？」

「「「分かりました。」」」

それを切欠にして、私はユーノ君と出会って・・・魔法と出会って・・・そこから始まる私たちの運命。

ぶつかり合ったり、辛いこと・悲しいことも沢山あったけど、私は全部自分で決めて今ここにいる。

廻転している――――――――

運命が歯車と言うのなら、私たちはその間で引き砕かれる砂――――――

――――――為す術はない。

ただ、力が欲しい。

手を伸ばして守れないなら、その先に握る力が欲しい・・・――――

運命を砕く力はきっと、振り下ろされる刃に似ている。

これにて、なのはの回想シーンは終わる。

「（私たちの力は運命を砕く力なのか・・・・・・高円寺のように力に飲み込まれるのか・・・・・本当に、私のこの魔法は・・・・・・高円寺の言う殺戮と不幸を生み出す暴挙なのかな・・・・・・）」

そんな事を一人考えながら、一人双極の丘の上で風に当たり続けるなのは。

「結局・・・・・この手の魔法は――――――」

と、いつものなのはらしからぬ言葉を口にするかのような表情をしていると、唐突に後ろから自分にとって最も信頼おける人物の声が聞こえてきたのだ。

「その手の魔法はみんなを守るための力だ。それでいいんじゃない

のかな、なのは。」

その声に気づいたなのはが後ろを振り返ると、いつも通りの柔らかい表情を浮かべて立ち尽くすユーノがいたのだ。

「あ、ユーノ君。」

ユーノは穿界門の準備がそろそろ出来たのではないとか思い、一護達よりも先に一足早くこの場に足を運んだが、そこにはなのはが居て神妙な雰囲気で立ち尽くしていたため中々話を持ちかけられなかったのだ。

「何をぼんやりとして考え込んでいるんだい？なのはらしくないな。」

「うん・・・・・銀太郎君や高円寺は何のために力を手に入れたのかなって？」

「ああ・・・銀太郎君は誇りと家族との時間を取り戻すために・・・高円寺は時間を繋がった輪廻の円・・・メビウスの輪のように捕えそれを力で無理やりねじ切ろうとしたんだろう。その是非は分からない・・・ただ、たとえ同じことの繰り返しだったとしても・・・――」

「そこにみんなが居れば悪くない・・・ってことかな？」

「はは。ま、そう簡単に答えが出るものじゃないかな・・・これは。」

「・・・うん。きっとそうだね。」

ユーノとなのははその後、二人揃って丘の上からこの広い尸魂界という世界を見下ろし、なのはは心の中でふとこんな事も考えていた。

「（私とユーノ君の場合、魔法なんてものは無くてもきっと最初から通じ合っていたのかもしれない・・・そうだ・・・きっと四年前までの私たちの関係は、仮初のものだったんだ。離れ離れになって、お互いに真の意味で重さを理解して、力じゃなくて言葉で分かち合えると信じてたから、私たちの絆は本当の意味で強く紡がれた。私たちの始まりは――――――ユーノ君からだから。）」

そんな事を考えるなのはは、ユーノの横で今一度尸魂界の情景をしっかりと目に焼き付けようとするのであった。

一方で、身支度を終え四番隊隊舎から出てきた金太郎は卯ノ花達に挨拶を済ませ双極へと向かうが、その移動のさなかで歴史というものに関して自分なりに思考を巡らせる。

「（歴史は輪廻のごとく廻るものなのか？果ては先に延びていくものなのか？仮に廻るものだとして、その輪を打ち破るべきか？甘んじるべきなのか？）」

と、立ち止まって考えにふける金太郎だったが、後ろから不意に一護が声をかけてきた。

「何ぼーっと黙り込んでるんだよ、金太郎。」

「一護殿。」

「そろそろ行くぜ。出発の準備は整ったのか？」

「承知。」

金太郎はそう答えると、一護と共にユーノ達が待つ双極の丘へと向かった。

双極の丘で他のメンバーが来るのを待っていたユーノ・なのは・一護・金太郎の四人であったが、暫くしてはやてや達の残りのメンバーも身支度を済ませて集まってきた。

「お、全員そろったようだね。」

四人が後ろを振り返ると、手を上げ満面の笑みを浮かべて返事をしてきた。

「なのはさん！ユーノ先生！」

「悪い！遅くなった！！」

前線メンバー一同がこれで漸く集まり、ユーノ達はとうとうこの尸魂界を立ち去る事となる。

「あ～～～あ・・・折角来た未知なる世界、尸魂界・・・！！実に名残惜しいけどそろそろお別れの時間や～～～」

そんな名残惜しい顔を浮かべるはやてに、クロノが口を挟む。

「なら、残りたければ残ればいい。」

「またクロノくんはそんな意地悪を！！」

「恋次さん達は？」

ユーノがそう口にすると、恋次達死神前線部隊の面々がトランクに荷物を敷き詰めてユーノ達の元に走ってきた。

「ちょっと待ってくれ！！」

「お、間に合ったようだな。」

「てか、何だあのトランクは！？」

大荷物を抱える恋次達を見て、一護は若干呆れた様子であった。

恋次達は息を切らしてその場に立ち止り、安堵のため息を吐く。

「ふ～～～何とか間に合ったな！！」

「ああ。流石にこれだけの荷物は持ち運びには少々手間がかかるがな。」

ルキアはそう言うと、自分がミッドチルダに持っていく衣類から日常生活にかかわるものからおおよそ関係のないものが多く積まれたトランクを確認する。

それを見たエリオやキャロは流石の多すぎる量に驚愕していた。

「そ、そんなに持っていくんですか？」

「ちょっと多すぎな気もしますが・・・」

「大体、何で枕まで入ってるんだよ！？」

一護が何気なく開いていた恋次のトランクの中の枕を見てそう尋ねると、恋次は何処から誇らしげな表情で返事をした。

「やっぱ、自分の寝巻と枕じゃないとなかなか寝付けないからな！」

そんな恋次の言葉に若干冷ややかな目で中身を見つめる吉良。

「着替えぐらいで十分だと思うけどね・・・」

「いいじゃんかよ、これぐらい！」

「ははは・・・・・さて、僕たちの帰る場所に帰るかな――みんな。」

「「「うん。」」」

「「「ああ。」」」

「「「「「はい！」」」」」

「そうだな。」

「ザフィーラに狛村隊長のこと教えてやろうっと！」

「帰ったら先ず書類整理が待ち受けているのかな・・・僕ら。」

「おいおい、俺達疲れるのに勘弁してくれよ。」

「致し方ないことですぞ。」

「とりあえず、ピーチの煩い鼾を聞かぬよう気をつけねばな。」

「何だと！！」

それぞれが談笑で盛り上がる中、一護は早速双極の丘に設けられた穿界門を開放する。

「よし！それじゃ穿界門を開くぜ。」

穿界門が開かれると、全員は初めて来たときと同じようにバリアジャケットに身を包み一人ずつ確かな足取りで光の中へと身を投じていく。

彼らが帰っていく様子を、尸魂界の死神達は各地の様々な場所で見守っていたそうな。

彼らが無事に帰還を遂げ、機動六課に戻ってきて数日が経った頃――――――金太郎は地球の空座町のとある墓場に埋葬された銀太郎以下五人のパトリオットの墓の前で一人手を合わせながらまた物思いにふけっていた。

「（廻転する・・・・・・か・・・・・・・）」

そして、墓石に刻まれた銀太郎達の名前と残された銀太郎の遺留品を見つめながら呟くように語りかける金太郎。

「銀太郎・・・・・結局私はお前も白鴎も・・・何も救えなかっ

たな・・・・・・」

「確かに、僕らは銀太郎君たちを救えなかったね。」

と、その時・・・金太郎の後ろから徐に歩み寄ってきたお参りの花束を抱えたユーノ。

「・・・店長・・・」

ユーノは墓石にそっとその花束を供え、静かに帽子を脱ぐと墓石に向かってこう語りかけた。

「・・・リベルの魔導師よ・・・僕達ミッドとベルカの魔導師が犯した数々の過ち・・・許して欲しいとは言いません。ただ、遠い彼方で見定めてください・・・これからの魔法を・・・ミッドとベルカの魔法の行く末を・・・」

そんなユーノの姿を傍らで見ながら、金太郎は重い口を開く。

「・・・店長・・・私たちは・・・・――――」

「そう思いつめるな。今回の事件は決していい結果とは言えないけどさ・・・・・・少なくとも、銀太郎君や他のパトリオット達は金太郎のその気持ちは分かってくれたと思うよ。」

「・・・・・・――――――――」

「生きてれば、誰にでも納得のいかないことがある。だけど、それに抗うか逃避するかは自分の意思で決めることさ。銀太郎君は、全てが高円寺の言いなりじゃなく・・・みんなと一緒に居たいと言う

想いだけは本心だった筈さ。人に決められた勝負じゃなく、自分自身で勝負を挑んできた。自分の想いを通すことって・・・そう言うものだと僕は思う。ま、お蔭でこっちは滅茶苦茶になっちゃったけど。」

「・・・ふ・・・そうですな・・・」

ユーノの言葉を聞いて、気持ちが軽くなった金太郎は思わず鼻で笑う。

そんな笑顔を見せた金太郎を見て、安心したユーノも帽子をかぶり直すと元来た道を戻って機動六課へと帰還していくのであった。

「戻ろうよ、金太郎。僕達の居るべき場所へ――――――」

「はい。」

二人は一歩一歩新たなる想いを胸にし、今の自分達の居るべき場所へと戻っていくのであった――――――

事件は・・・決していい解決法はしなかったが、今回の犠牲者である狼谷銀太郎以下五名のパトリオット達は、もう二度と離れ離れになることなく空の上でずっと一緒に居られるはずだと思う。

そして、帰り際に金太郎は優しい表情で銀太郎君の名前を口にしたんだ。

「・・・安らかに眠りなさい・・・銀太郎・・・」

狼谷銀太郎以下、自由を愛する五人のパトリオット達はは・・・今

此処に、本当の意味での自由を手に入れた――――――――

「高円寺虎彦事件」、または「パトリオット事件」・・・――この事件がこう命名されて後世に語られるようになるのはもう少し時が過ぎたころになるが、機動六課が事件を解決させた直後、再び忘れかけていたあの禁忌の欠片が活動を再開し始める。

人の心は謀らずも極めて大きな欲望を裡に欲している。

アンゴルモアはそれを読み取り、具現化する――――――――いま、と

あるアンゴルモアの力が発動したことにより、事件は彼らの想定外なものへと発展していく。

機動六課モニター画面上に映し出される残り十三個となった筈のアンゴルモアが、突如数を一気に増やし――当初の三十一を優に超えた四十九となって映し出される。

そして、四十九個となったことで次なるアンゴルモア騒動の幕が切って落とされようとしている。

真夜中のとある場所で、強い力に引き寄せられた何者かが月光をその身に受けながら邪な気配を漂わせていた。

「・・・か・・・感じる・・・・・・・強い・・・・・・・強いライフエナジーの力を・・・・・・・！！！！！！！」

この邪な気配を漂わせるものの正体は何なのか！？

それはこの後に待ち受ける奇跡的な出会いが引き寄せてしまう邪悪な存在。

「我は・・・――――我は死なぬ！！！貴様に・・・・・・・貴様を葬り去るためならば・・・――――！！！！！」

邪の根源たるそれは、背中の翼を広げると大きく舞い上がり月光に向かってある人物の名を吠えるかのように叫ぶのであった。

「待っていろ・・・――――！！！ユーノ・スクライア！！！！！！！」

そう叫ぶ邪な存在の手には、あのアンゴルモアの欠片が握られてい

た。

刃は再び振り落される――――――妖艶な欠片の手により。

終章・パトリオット篇（後書き）

次回予告

一「意外と長かったな、パトリオット篇。」

ユ「でも、結構楽しめましたし、作者だって元ネタのストックも溜めれたようですよ♪さて、次回からはまたアンゴルモア篇が再開する訳だけども・・・」

な「訳だけども・・・何、ユーノ君？」

ユ「えっと・・・気のせいかな・・・僕がもう一人居るんだけど・・・」

一「何！？」

別ユ「どうも♪僕はユーノ・スクライア。次回は、もう一人の僕が大活躍するユーノ・キバ篇からスタートだよ。お楽しみに！」

一・な「えええええええええ！！！！！！！！！」

魔導師図鑑ハイパー！

突然の次回予告の内容に驚く二人。

な「何で！？何でユーノ君が二人も出てくるの！？」

一「どういうことか説明しろよ！！」

ユ「いや・・・どうもこうも・・・前からこの話は書こうと思っていたらしくてですね・・・この小説の作者・・・区切りがついたことだし、アンゴルモア篇に戻るんだから一発目にはちょうどいいと。」

別ユ「そういう訳なので、次回からよろしくお願いします。」

な「で、でも・・・!!二人もユーノ君がいたら・・・私、どうかしちゃうよ!!あ～ああ!!!どうしようどうしよう!!??」

すっかりパニックに陥るなのはであったが、そんななのはを余所に一護達は呆然としていた。

一「いちいちお前はユーノのことで興奮し過ぎなんだよ!」

ユ「ははは・・・大丈夫、なのは!?」

別ユ「別の世界でも、なのははやっぱりなのはだな。」

パトリオット紹介

パトリオット

リベル式魔法を扱う者の中でも、特に優れた術者が冠する種名。リベル式魔法を用いて戦う者すべてが「パトリオット」と呼ばれる訳

ではなく、パトリオットを束ねる役目の銀太郎はボスの称号であるダイシーを冠する。高円寺を除くオーリー達パトリオット五人は嘗て初代ダイシーによって改造されたバウントとであり、自身の分身体であるドールを持たない代わりにデバイスを所持している。ダイシーを守護することをその根本的な活動目的に添えており、ダイシーが死ねば自身も消滅する仕組みになっておりその時代のダイシーに仕え続ける形で転生を繰り返す。また、自らの意思によって命を絶った場合転生機能は働かず、それこそ真の消滅を意味する。メンバーの内、オーリーは高円寺に殺され、残りの四人も金太郎や、護廷十三隊の隊長・副隊長らの活躍により全員が死亡したため、現世からは絶滅した。

用語

リベル式魔法

『パトリオット篇』で登場した、キーワードの一つ。「退魔の魔法」と言われ、嘗てミッド式とベルカ式の魔法を操る二つの対立する魔導師達によって被害を受け、命を落とした者達を偲び、両者を決して許さないという人々が集まり二つの魔法を消し去る力を研究し始めたのがその始まりと言われ、その研究の末に辿り着いた全く違う魔法形態。対人戦闘を前提とした瞬発力に重点を置いたベルカ式の長所と効果範囲と汎用性に重点を置いたミッド式の長所を両方兼ね揃えた仕様となっている。リベル式ブラッドカートリッジシステムは両者の魔法を打ち消し報復させる為に開発された。その多くは肉体そのものを変化させ、規格外な魔法破壊能力を手に入れることで非常に高い戦闘能力を有する。リベル式の魔法陣は六芒星を模した形をしている。

リベル式ブラッドカートリッジシステム

リベル式魔法の最大の特色で、ベルカ式のカートリッジシステムに倣って独自に作られたもの。優秀な魔導師や強力な力を持つ魔導生物から採取した血液を儀式で圧縮した弾丸と一緒にデバイスに組み込む込みカートリッジ（弾丸型）をロードする事によって、半永久的に規格外な魔法破壊能力を得る。部品「ＣＶＫ－０００」を含むシステムが組み込まれている。熊谷金太郎は主に鎧の構築や「魔力」の底上げに使用するが、白鴎達は容姿の変貌や魔法発動の補助として用いる為、魔力消費自体は使用者本人のもの。但し、カートリッジに込める魔力は必ずしも使用する術者本人のものである必要はない模様（『パトリオット篇』劇中では、白鴎やオーリー達が使用するカートリッジへの魔力注入だけは田吾作が全て担当していた）。使いこなせば有効なシステムだが、尋常ならぬ破壊力故に身体にかかる負荷が大きく、長期戦での使用は困難。そのため、一度は形状を元に戻す必要が伴ってくる。

ブラッド状態

ブラッドカートリッジシステムを使ったときの容姿の変貌・及びその能力の総称。ブラッドカートリッジを使用している間、ミッド式の魔法もベルカ式の魔法も打ち消す特性を有する。ユーノはそれに対抗する為に、対リベル式の装着具を作り上げてなのは達に渡している。

ダイシーの血

銀太郎がラボラトリーＧＸから強奪した初代ダイシーが残した覚醒に必要なもの。それを体に流し込むことにより、ダイシーの呪いから逃れることが出来る。しかし、体が未成熟な場合、術者の体を徐々に蝕んでしまう事もある。

エドワード・コークの血

初代パトリオット、エドワード・コークの残したものでアックスオーガに封印したリベル式機能を覚醒させるのに必要なもの。ユーノはこれを金太郎の父である欽之助の墓より見つけ出し、ブラッドカートリッジシステムと共にアックスオーガに組み込んだ。

九九琉閑の池

初代ダイシーとその一派が築き上げたパトリオットの聖地。尸魂界は禁踏区域として立ち入ることを禁じている。周囲からはまるで鳥がすすり泣くような音がすることからその名がついた。

ダイシー・ネリンネルング

ダイシー完全覚醒の際に必要な、九九琉閑の池の地下にあった初代ダイシーが、自らの記憶と能力・聖地で死んでいったすべてのパトリオット達の魔力を一つにまとめて、死ぬ間際に封印したオリジナルのパトリオットの紋章。ドイツ語で記憶を意味する『エアインネルング』をオリジナルの言葉。暴発すれば、管理局や瀞霊廷を吹き飛ばすほどの力を有していると言われる程強大な代物。

王濫（おうらん）

電車型のタイムマシンで、高円寺は「時を支配する力」と呼称した。全ての時間を支配することが可能な特別な力で、ダイシー・ネリンネルングを取り込んだダイシーが活動し始めてその力の余波が流れ出すことによって異空間より出現する。山本によると嘗てのダイシー派のパトリオットにより作られたが、あまりにも強大な力を持つ

ために1度も使われる事は無かった。高円寺の最大の目的であり、彼はこれを手に入れる為に今回の行動（銀太郎にダイシー・ネリンネルングを取り込む）を起こす。モチーフはワニで、基本カラーは銅。バトルモード時は巨大なワニのような外見となり、物質や時間を喰い尽くし消す他、ワニの口にあたる部分からフリーエネルギーの破壊光線を発射したり、上に付いている鰭をミサイルとして飛ばすことが可能。過去の時間を「変える」のではなく「消す」ため、非常に危険な力である。

メンバー

狼谷銀太郎（おおかみだにぎんたろう）

声　一　緑川光

１５歳。魔法術式・ダイシー派リベル式／魔導師ランク・総合ＳＳＳ。パトリオットを束ねるアルバート・ヴェン・ダイシーの十代目でパトリオット五人が敬愛する空座町馬芝中学に通う三年。幼いころに身寄りを無くし、身体に原因不明の障害を抱えながらも「父の友人」を名乗る人物（高円寺虎彦）の庇護を受けながら5歳の頃から1人で生活していた。通院時における彼の主治医は石田竜弦。のちに石田雨竜となっている。ユーノと同じように年に不相応な博学で、洞察力が鋭い。誰よりもオーリー達家族の事を最優先に考える。不遇な境遇に置かれながらも前向きで、優しい心を持った強い少年。しかし、なのはやフェイト同様、辛いことや悲しいことを一人で抱え込む癖があり、オーリー達がそれを心配する場面もあった。一人称は『僕』。オーリー達と共にラボラトリーＧＸを襲撃し、そこに保管されていた「ダイシーの血」を強奪する。後述するデバイス『オプティマス』の力に加え、金太郎の『アックスオーガ』をバリアジャケットなしに腕一本で受け止め、ユーノや一護達も驚愕するほどの超越した戦闘能力を有し、その実力たるや計り知れない。また、

戦闘能力だけでなく話術にも長けており、教唆や挑発によって相手の精神に揺さぶりをかけることも多い。ユーノの事に関しては、「管理局随一の天才」と評して一目置いており、同時に最も警戒している。尸魂界に入って、聖地九九琉閑の池で初代ダイシーとダイシー派の全ての魔力と記憶が封印されたダイシー・ネリンネルングを体に取り込み、棺桶の中での熟成の後、ダイシーとしての力が完全に覚醒する。その後双？の丘でユーノ達と対峙し、パトリオット達の力を借りて、窮地を一護やなのは達を追い詰めるが、その場に現れた高円寺の攻撃により倒され死亡する。

デバイス：『オプティマスプライム』

声　一　緑川光

初代ダイシーの代より受け継がれてきた古の甲冑機能と搭載した銀太郎のリベル式インテリジェントデバイス。待機状態はカードデッキ型。構築すると、組み込まれている１３枚のカードと融合を果たして重厚な金色の鎧を身に纏う。左右の肩・上腕部・太腿・膝・脚部および右下腕部の１１箇所にそれぞれに模様の異なる紋章〈ダイシークレスト〉、胸部にオプティマスプライムの紋章〈プライムシンボル〉が追加された非常に重厚感の溢れる形態。最強の戦闘能力と防御力を有するが、それは構築された紋章が拮抗して魔力を作り出しているため、一度そのバランスが崩れると無敵ではなくなる。ダイシー・ネリンネルングを取り込んだ事で、消滅したパトリオット達の魔法を自在に操れる。

ツール：『重醒剣』

甲冑の構築と共に出現する巨大剣。銀太郎の武器であり、一護の天鎖斬月やユーノの晩翠に匹敵する強い力を持ったもの。

オーリー・エンダ

声　一　高山みなみ

「パトリオット」の将。ダイシーを守護する六人のリーダー格で、実際に「リーダー」と呼ばれている場面もある。生真面目で実直、騎士道精神を持つ武人。家族として接する銀太郎の優しさに安らぎを得ているのは他のパトリオットと同様。凛々しい風貌の、外見年齢２０歳前後の美人で、手料理、入浴が好き。男勝りな口調とは裏腹に巨乳であるがために、周囲からはいがわしい目で見られることがある模様。戦闘面では接近戦のスペシャリストとして非常に高い戦闘能力を持っており、浦太郎との初戦では彼女に圧勝。浦太郎との幾多の戦いにおいて、好敵手として認める。また、オーリーの魔法は炎や熱破壊能力に特化したものが多い。魔力光は橙。パトリオット編中盤で高円寺の不穏な動きにいち早く勘付き、密かに対抗策を講じる中、田吾作と東海林の消滅を確認し浦太郎との最終決戦に持ち込む。その最中、乱入してきた高円寺を見るなり目の色を変えて向かっていき高円寺と対決するが返り討ちにされ、浦太郎に看取られながら消滅。死後彼女の魂魄は銀太郎の力を引き出す起爆剤の根源となった。

デバイス：『チータス』

声　一　高山みなみ

待機状態はネックレスの姿。通常時は銃と剣を併用した姿だが、ブラッドカートリッジを使うことでライオンを模した獰猛な獣の姿に変貌し、更にその上を行くキマイラの姿にもなれる。熱破壊能力と流れ星にも似た名前の技を多用し、敵を圧倒する。高円寺曰く、主人に対して主従以外に愛情という感情を抱いている。オーリーが高円寺と対決した際にはオーリーと融合し、金色の炎に包まれた究極のブラッド状態となっ高円寺と闘った。

白鴎恭一郎（はくおう　きょういちろう）

声　一　大谷育江

端正な顔立ちに水浅葱色の髪をした不良風の男だが背丈は銀太郎よりも低い。常に勝気で自由奔放に振舞うが、芯は強く根は優しいパトリオット。外見年齢が近いこともあってか、銀太郎は実の弟のように可愛がっており、彼もまた「優しい銀太郎」を強く慕っている。金太郎との戦いでお気に入りの飾りが撃ち飛ばされた際に激怒、ブラッド状態に変貌してエクストリーム・クリムゾン・フォースでアックスオーガを大破させて一時的に金太郎を戦闘不能状態にまで追い込んだ。戦闘スタイルは遠近両用に防御をも兼ね備えたオールラウンダーで、オーリー同様に非常に高い戦闘能力を持っている。特に防御は、完全に徹すればオーリーを上回る。しかし本人は射撃戦よりも近接戦を好む傾向があり、中距離から飛び込んで一撃の破壊力で勝負するタイプ。特にヴィータ同様「防御を突き破っての破壊」にかけては逸品である。魔力光は藍色。瀞霊廷ではだらしない死神に呆れつつも金太郎と対峙するが、金太郎にコンボイによる戦い方の隙を見破られたことにより敗北し、銀太郎に対して惜別と後悔の念を抱きながら灰になって消えた。

デバイス：『コンボイ』

声　一　大谷育江

普段の姿は腕輪。構築することで鋭い鍵爪の姿に変化する。デバイスの中でも二重人格を有する大変珍しいものでそれぞれに意志があり、微妙に性格が違っている模様。白鴎はこの二つの性格を相手にするのが面倒だと愚痴をこぼしている。ブラッドカートリッジを使うことで幻想的なドラゴンのような姿に変貌し、圧倒的な破壊能力を手に入れる。また、金太郎のとの最終決着の際には二重人格のコ

ンボイとしての能力を最大限に発揮する幻魔と呼ばれる姿へと変貌し、絶大な攻撃と防御で金太郎を追い詰める。但し、攻撃の時には防御が、防御の時には攻撃がそれぞれ出来ず、切り替えの際タイムラグが発生することが唯一最大の弱点。ちなみ、白鴎は融合を生理的に受け付けられないとのこと。

四月一日田吾作（わたぬきたごさく）

声　一　岩永哲哉

金髪のおっとりした優しげな美人。外見年齢は銀太郎と同い年ぐらいだが守護者の中では年長に見え、本人も白鴎や銀太郎の前ではしっかり者の兄のつもりだがドジで少々頼りない面が目立ち、オーリーや白鴎に比べ、顔立ちや性格などどこか幼い感じがある。（オーリーや白鴎も彼のドジにはいつも呆れ返られている）六人すべての各種補助とバックアップで他のパトリオット達やダイシー達を支えていた。ちなみにかなりの筋肉質で、白鴎からは無駄に鍛えていると揶揄される。直接的な戦闘能力と魔力は仲間内では低いが、各種サポートに非常に秀でており、魔導師の探索や結界形成、パトリオットたちのダメージの回復など縁の下の力持ちとしてなくてはならない存在。固有能力に敵の精神と身体を遭う奴るマインドコントロールがあり、リアル・ファントムという魔法で実体を持った分身体を作り出す。魔力光は黄色。志波空鶴をマインドコントロールで操り、瀞霊廷侵入後も死神達を操作し混乱を招く。その後フェイトとキャロと対峙し、ブラッドカートリッジを発動させ、更にエアラザーを使ってキャロや援護に来た隠密機動達を操り、一時は優勢を取るが、白哉が介入したことで戦局は覆され千本桜景厳の一撃を食らい瀕死の重傷を負う。最期は自らその命を絶ち、フェイトに見守られながらそのまま灰となって消えた。

デバイス：『エアラザー』

声　一　岩永哲哉

普段の姿は羽根型のペンダント。構築すると扇子の姿になるが、本編では明確な病死者はない。ブラッドカートリッジにより強化された姿は田吾作を大鷲を象った鳥人のような容姿に変貌させる。スピードに関してはフェイトのそれを圧倒する。また、キツツキ状の複数の分身を作り出し、遠隔操作でその攻撃を受けた対象の全身や部分支配をすることが可能。主人に対して非常に忠実な性格。

村中瀬間子（むらなかせまし）

声　一　小山力也

外見年齢はメンバーの中でも年長の２０代半ばの筋骨隆々とした男の容貌。鬼太郎からはその容姿故に「髭クソ男」と呼ばれていた。寡黙な性格で、常に仲間たちから一歩引いた冷静な目線で全体を把握している。そのため、浦太郎との初戦でオーリーが手傷を負っていることを１人見抜いていた。一方で「パトリオット」であることに高いプライドを持っており、自分のボスである銀太郎に高い敬意を抱く。戦闘での役割やスタイルも白鴎に酷似しているが、彼はより防御面に特化しており、フェイトの襲撃を受けた際は白鴎の盾となり、その奇襲をほとんど完全に防いだ。また状況を見極める力が高く、戦局不利と見て後方に控える田吾作に指示を飛ばす場面もあった。魔力光は深緑。尸魂界で高円寺の行動に疑問を持ち、彼を止めようとするが返り討ちに遭う。その後、高円寺を追う途中ではやて・浮竹達と対峙するも、最後は敗れ去った。

デバイス：『ダイノボット』

声　一　小山力也

普段の姿は爪で引っ掻いたような痕があるキーホルダー。戦闘時に

は装着型の剣になる。ブラッドカートリッジを使用することで、瀬間子をヴェロキラプトルの姿に変貌させてその強靭な脚力と身のこなし・強力な物理破壊技で敵を倒す。また、パトリオット中唯一“最終鬼畜形態（ファイナル・デーモンコマンド）”と呼ばれる究極のブラッド状態を手にしており、その破壊力は通常時の銀太郎のそれを上回ると言われている。

東海林棗（しょうじ　なつめ）

声　一　浅沼晋太郎

逆立った髪の毛が特徴の外見年齢１７歳前後の少年。パトリオット篇ではあまりはっきりとは確認されないが頭の回転が速く、売られた喧嘩は律儀に必ず買う血気溢れる性格。また家族への想いを大切にする銀太郎の言動には情に脆い一面がある。魔力光は黒。魔力攻撃による物理破壊能力と貫通能力はトップクラスの実力を誇り、地球では浦原が創り出した強壮結界をブラッドカートリッジの力によって破壊している。尸魂界へと渡り、霊珠核の生成に悪戦苦闘していた白鴎に助言をするなどの優しも見せている。瀞霊廷内ではシグナム達と対峙し、一時は翻弄するが、救援に来た日番谷の千年氷牢の能力の前に敗れ、氷塊の中でその命を落とす。

デバイス：『ライノックス』

声　一　浅沼晋太郎

待機状態は携帯電話の姿。ブラッド状態はトリケラトプスの姿に酷似したパワーを重視したもので、シグナム達との戦闘では能力は格段に上昇しているものの細部に角がつけられるなどで基本の姿はあまり変わらない。受けたダメージをその身に吸収して、両肩にあるダメージカウンターに溜めていき、全てが紅く染まり１００パーセントに達することでそれを全て爆発させることで周囲のものを壊滅させる恐るべき能力を秘めている。胸部には異空間へと繋がる口が

ある。また、周囲の豊富な霊子を使うことで自身の体を州の空間に溶け込ませ身を隠すことが出来る。

高円寺虎彦（こうえんじ　とらひこ）

声　一　渡辺裕之

パトリオット中最年長の男で、パトリオット篇における黒幕。見た目は３０代から４０代前後の男の姿をしており、革ジャンを羽織ってサングラスを常に携帯させている。数百年前に護廷十三隊十番隊隊長を務めていたことあって戦闘能力は極めて高い。自身の斬魂魄刀をもリベル式の魔法に改造するという高い技術力を有しており、味方にすらその本性を探らせないという思考の読みにくい性格で、銀太郎達を陰で操っていた。計画が頓挫しないために予め彼に関わった全ての死神の記憶から高円寺虎彦の記憶を消去し、あらゆる面に慎重になりながらダイシーを守護する六人の一人をその手にかけ葬り、六人の記憶の一部をギガトロンの能力で改変しあたかもその最後の一人が自分であることを錯覚させ仲間に成りすましていた。本性は実に豪胆にして狡猾、野性的である。戦闘スタイルも獣のように荒々しいのが特徴。変わり映えの無い時間に鬱蒼としていた時、パトリオットに関する資料を見つけそれに興味を抱き研究を積み重ねてきた。３大欲求の一つ「喰らう」ことに貪欲で、時間をも喰おうと画策。全ての時間を支配できる王濫を求め、銀太郎を手玉にとってダイシー・ネリンネルングの力でそれを呼び起こし、用済みとなった銀太郎を始末する。王濫を手に入れた後、魔導師を消すために旧暦のミッドチルダ１５０年にタイムスリップしその時間の消滅を図る。その後、金太郎とユーノ達機動六課前線メンバー全員と戦闘を行った後、王濫でユーノ達と戦ったが、王濫を破壊されてしまう。最期は金太郎との一騎打ちの末、砂と化して消滅した。

デバイス：『ギガトロン』

声　一　渡辺裕之

元は高円寺の斬魄刀『幻翼魔』であったが、独自の研究によってリベル式のデバイスとして生まれ変わった。高円寺は常時ギガトロンと融合を果てしている。その能力は高円寺の意のままに姿と能力を変化させるという極めて強い力のあるもので、洞窟内に侵入してきた一護達を迎え撃つ際はカードによって操られ、また自らが融合することにより規格外な戦闘力を手にする。否定・無知などといった名称の魔法攻撃がほとんどで、大概の物ならばこの攻撃によって全て倒せる。再生能力に長け、金太郎の攻撃をを受けてなお、傷を高速治癒することが出来ていた模様。

関連キャラクター

エドワード・コーク

声　一　井上和彦

初代パトリオットにして、金太郎の祖先にあたる人物。アックスオーガは、当時彼が使っていた最初のリベル式のデバイス。当時、パトリオット達の間では両者の魔法に妥協しようとする穏健派と徹底的にそれらを排除しようとする急進派の二者達の間で内乱が勃発していており、エドワードは穏健派の代表として親友であるダイシーに説得を応じてみたが、聞き入れてもらえず、ある時起こった諍いを切欠にダイシー派と対立し、自らの手でダイシーを手にかけてしまう。その結果、自らの作り出した魔法が何れ破滅を齎すものと考え、力の根絶を決意し、その死後アックオーガのリベル式機能を封印しミッドとベルカの混合型に改造したのち、万が一の事も考慮し自分の血を後世に残した。

アルバート・ヴェン・ダイシー

声　一　江原正士

初代パトリオット、エドワード・コークの親友であり急進派の代表。彼の名前は構成ではそのまま称号として受け継がれ、銀太郎はその十代目に当たる。ミッドとベルカの魔法を操る魔導師に憎悪を抱いており、徹底した抗戦姿勢を見せていた。しかし、エドワードとの激突によりその命を落とすが、命を落とす直前で自らの魂を依然訪れた尸魂界に建造した聖地九九琉閑の池に定着させ、強大なエネルギー体として眠りについていた。

熊谷欽之助（くまがいきんのすけ）

声　一　田中秀幸

金太郎の実父であり、金太郎の魔導師としての師匠。自分の死後も余計な心配をさせまいと、アックスオーガと血縁関係を金太郎に内緒にしてきた。パトリオット編では白鴎との戦いを終えた金太郎の前に霊体として現れ、真の黒幕が高円寺であるという事実を言い残した。

朽木蒼純（くちきそうじゅん）

声　一　遠近孝一

１１０年前の護廷十三隊六番隊副隊長。銀嶺の息子で白哉の父。優しく大人しい性格。才能はあったが、体が弱かったことから戦闘向きのタイプではなかったという。次期朽木家当主になるよう銀嶺が気に掛け、副隊長に取り立てられるが現在は戦死している。高円寺の無二の親友で、思考の読めない高円寺に何かしらの疑問を感じていた模様。

音色は響く、二人の自分（前書き）

ユ「今回のお話はユーノ君大好きっ子さんが開設する『翠桜のふれあい』に登場するキバユーノとのコラボです。許可は取ってあります♪」

ユ「楽しんでいただけると幸いです。それでは、ユーノ・スクライア外伝　ユーノキバ篇・・・・・始まります♪」

音色は響く、二人の自分

＞i16331—709＜

この世界は、人間の常識では解明できない事象が無数に存在するらしい。

すべてが客観的に判断出来たり、論理的な思考で物事を解き明かしていくことが出来ないような事が目の前で起きたら、僕たちはどんな対応を取るだろう？

今回の事件もそんな摩訶不思議で常識では想像もつかなかった一つの事象に過ぎないが、そこにあるのは世界の枠を飛び越えた、“絆と絆”の物語――――――――

“翡翠の魔導死神ユーノ・スクライア”という男が存在するこの世界とは別に、違った形でもユーノ・スクライアという人間は存在している。

仮定によってその存在の幅は無数に広がり、そこに並行世界・・・――――パラレルワールドというものを形成し、物語をはぐくんでいく。

その過程の中の一つに、“キバ”と呼ばれる強い力を有したユーノ・スクライアがいるらしい。

そのキバのユーノもまた、無限書庫と言う場所で信頼における司書たちと一緒に寝食を忘れて無限の本の巣穴の中で缶詰め状態となっていた。

毎日のことながら、無限書庫の職務環境と勤労時間は目に余るものがある。

徹夜仕事が当たり前で自宅に戻るのが数日後というものが当たり前という状況の中、この世界の司書ファルコは山積みの本片手に仲間の司書と共に愚痴をこぼしていた

「はぁ～～～。たく、俺達もう何日徹夜してんだ？」

「かれこれ・・・・・三日ぐらいじゃないか？」

「くそ～～～！！それもこれもみんなあの腹黒のおっさんが毎日毎日ハゲんじゃねぇかってぐらい資料を請求してくるのが悪い！！」

腹黒と言う言葉で判るとおり、この世界でもクロノは無限書庫の司書からは冷たい目で見られ害虫のように煙たがれている。

そんなファルコの言葉を聞いていた同僚が相槌を打ってくる。

「おいおい・・・一応提督ってポストなんだし、腹黒のおっさんはちょっと・・・」

「いいんだよ！！どうせ聞こえてないし、俺あのおっさんだけは絶

対提督だなんて思わないぜ！！」

このファルコが抱くクロノへの不満は年々酷くなっていくようで、周りで大量の資料と格闘していた他の司書もファルコの言葉に思わず苦笑を浮かべるあまりだ。

「やれやれ・・・ファルコにも困ったものですね・・・」

「ま、気持ちは分からんでもないがな・・・お？」

すると、唐突に無限書庫の広大な空間より聞こえてくる聞くものすべてを優しく包み込んでしまい、更には疲労困憊な精神をも癒してくれるこの書庫を治めるものが奏でるバイオリンの音色。

それを聞いていた司書達全員が耳を傾け、目を瞑りながら心地よさそうに聞く。

「このストラディバリウスの鮮やかな音色は・・・！？」

「間違いない。こんな癒しの音を奏でられるのは無限書庫では一人しかいない。」

確信した様子で全員が顔をほころばせると、ファルコが皆の気持ちを代弁して音色を奏でるものの呼び名を口にする。

「おやっさんのバイオリンだ！あ～～～やっぱいつ聞いても癒されるぜ～～～！！」

ファルコからおやっさんと敬称される無限書庫を治める若き青年、ユーノ・スクライアはこの書庫内、ひいては管理局内においては神

にも等しい存在であった。

類稀なる頭脳と魔導師全ての魔力を遥かに凌駕する力、「魔皇力（まおうりょく）」と呼ばれるものを宿す歴代最高のキバと称される。

そんなユーノだが、現在は前線から退き無限書庫での内勤組として裏で貢献をしている。

ユーノは現在希少価値が極めて高いストラヴィバリウスのバイオリンを肩に乗せ、お気に入りの曲を奏でていた。

そして、演奏を終えたユーノの元に飛んでくる機械仕掛けのような不思議な蝙蝠の生き物が徐に声をかけてくる。

「お？何だ、何だ。一人でバイオリンなんて、珍しいじゃねぇかユーノ？」

蝙蝠の名はキバットバット三世。

ユーノをキバとして覚醒させるための変身アイテムのようなものであり、同時にユーノとにとっての大切なパートナーである。

「キバット。仕事の休憩がてら、気分転換にはいいと思ってね。ほら、最近此処が重要視されるようになってからは毎日が大変でしょ？体の疲れは兎も角、心の疲れは眠るだけじゃとれないからね。」

「それでバイオリンを弾いて、心のリフレッシュか・・・俺は良いと思うぜ、そういうところ。」

「ありがとう、キバット・・・お？」

そんな他愛のない会話を堪能していた二人の元に、悪友であり書庫においての最大の天敵であるクロノから追加の依頼が届き、折り合いの悪いキバットは不満を口にする。

「どうやら、また腹黒提督からの依頼が来たようだぜ。全く、あれはユーノ達のことを何だと思ってやがる！？便利屋じゃねえんだぞ！！」

「そう怒らないの、キバット。仕事は仕事できっちり片付けるさ。さぁ、みんな！馬鹿提督の依頼だ。頑張っていこう！」

「「「「了解！」」」」

ユーノは司書達全員の指揮を仰ぐために激励の言葉を送り、それに反応するファルコを含めた数十名の司書達。

彼ともう一人の彼に待ち受ける物語はここから始まるのだった――――

物語の次なる展開はこのようになっている。

とある世界でアンゴルモアを手にした未確認生命体が人々を無差別に襲い、ライフエナジーと呼ばれる生命の源を根こそぎ奪っていくという事件が勃発。

「ぐっはっ！！！」

「のあああ！！！」

エネルギーを奪い取られたものは一人残らず色を失い、息絶える。

このライフエナジーを好んで食す種族はキバの世界のユーノならば熟知しているが、それを知らないものにとっては正しく吸血鬼と表現する他ないだろう。

この吸血鬼のような行為を繰り返すＡＭ体は、肩で息をしながらその場に膝をついてこうう呟き始める。

「は、は、は・・・足りない・・・もっとだ・・・もっと・・・魂を・・・ライフエネジーが・・・足りないんだよ！！！！！！」

ＡＭ体の手の中には確かに崩玉の欠片であるアンゴルモアが握られており、不気味な妖気を漂わせながらキバの世界のユーノが持つ力と同じ、魔皇力を発していた。

そんな中、静まり返った翡翠の魔導死神ユーノ・スクライアが滞在する深夜の機動六課の方では、険しい表情を浮かべながらユーノは一人自室の部屋の窓を凝視し、考え事をしていた。

それは勿論、突如としてその数を増やしたアンゴルモアに関する懸念だ。

「（それにしても参ったな。まさか、パトリオットの件が片付いて帰ってきてみればアンゴルモアが予想外にも偽物も含めた四十九個にまで増殖してしまうなんて・・・考えが甘かったか・・・これは、今まで以上に本腰を入れないといけないな。）」

ため息交じりに窓の外を眺めるユーノはふと、自分の力の根源でもある満月を見て徐に声を漏らす。

「・・・――月が、綺麗だな。」

と、その時。

突如としてユーノの背後に現れる灰色のオーロラのようなカーテン。

「おや？」

この現象に気づいたユーノが後ろに振り返り、中央を凝視すると中から出てきたのはユーノの知り合いでもあり、以前の任務ではやて達を助けてくれた仮面ライダーディケイドに変身する青年、門矢士であった。

「よう。暫くだな。」

「士さん。どうしたんですか、急に？」

ここしばらく全く顔を合わせることも連絡をすることもなかったユーノにとって、このサプライズはかなり驚いたことだろう。

「何・・・気分転換がてら、寄り道しただけだ。」

「そうですか。で、また新しい世界に行って来たんですか？」

「まぁな。今回行った世界のライダーは、高校生のガキだったが宇宙にも飛び出して変身するフォーゼって奴だった。」

「へぇ・・・宇宙に飛び出して変身ですか・・・それはまた変わったタイプですね。」

「他にもＵＳＢメモリみたいなので変身するＷ（ダブル）って奴もいたが、俺が今まで出会ったライダーの中で一番驚いたのは、キバの方だ。」

「キバって・・・確か、Ｋｉｎｇ　ｏｆ　ｖａｍｐｉｒｅの略の・・・？」

「ああ・・・何が一番驚いたかっていうと・・・それはだな・・・」

「はい・・・」

士はそう言うと、ユーノにある意外な事実を口にする。

「・・・――――てな訳だ。」

「え！？そ、それ・・・本当なんですか！？」

聞かされたユーノ自身もこれには相当驚いていた。

この士から聞かされた話によって、翡翠の魔導死神ユーノ・スクライアと機動六課の面々はこの後待ち受ける彼の存在を黙認することになるのだ。

後日、司令室に集まった前線メンバー全員が今回反応が現れたアンゴルモアの動きを確認しながら神妙な表情を浮かべていた。

「増殖した現状で、世界各地を移動するＡＭ体か・・・」

「それもかなりの速いスピードでね。おまけに、性質の悪いことに・・・人間を始めとする意思を持った生命体から命を奪い、それを活

動エネルギーとしていることも分かった。」

「吸血鬼みたいな奴だな。」

「正しく現代のドラキュラというところか・・・」

「それで、今はどの辺りに居るんですか・・・ユーノ先生？」

スバルがそう尋ねると、ユーノは早速モニター画面に出現場所となる世界の詳細な情報を映し出す。

「非管理指定世界『ヴォルドー』。」

「非管理指定世界・・・！？聞いた事ないな・・・」

これまで幾多に渡るアンゴルモア捜査において、異世界を巡ってきた恋次やルキア達にとっても初耳の情報。

怪訝そうに浮かべる恋次達を見かねて、フェイトやはやてが説明を加える。

「管理局が創設されて以来、ある特別な理由から干渉そのものから外れた世界の事で、他にもいつくか存在するんです。そして、それら全てを総称して“非管理指定世界”と呼称しています。」

「噛み砕いて言えば、管理外世界よりも干渉を必要としていない世界・・・やね。」

「ふ～ん・・・で、その世界に今回のＡＭ体が出没したって訳か。」

「はい。今回はこの世界を中心に捕食活動を展開させていくつもりでしょうね。現地には既に、ティアナとキャロ、それに教会本部から別件の捜査の帰りにこちらに協力してくれると言って来たシスター・シャッハも応援に来ています。」

非管理指定世界ヴォルドー

管理局からの干渉を排除されたこの世界には基本的に人間は確認されていないが、それ故に強い力を持った古代の生き物がそのままの姿で残っており、緑が広がる世界となっている。

そのヴォルドーを訪れたティアナとキャロ、シャッハ・ヌエラの三人はバリアジャケットに身を包みながら細心の注意を払いつつ、アンゴルモアを捜すために密林の奥へと向かっていた。

「自然が多い豊かな土地ですね。前に行ったポップスターと何所か凄く似てるけど、また全然違う雰囲気が漂ってきますね。」

自然保護隊から出向してきているキャロにとって、自然は正しく生命の息吹を直に感じさせる場所に変わりはない。

「そうね。干渉そのものを必要としていない非管理指定の世界の一つ・・・『ヴォルドー』。ユーノ先生からの話じゃ此処は原種生物ですら強い魔力を有した世界でね、大きさも相当なもので太古のままに生きているって話よ。」

「付け加えるのならば、それ以外にもこの世界では魔力を遥かに凌ぐ力を有した存在も現存しているとも聞きます。」

「魔力を遥かに凌ぐ力・・・？それって一体！？」

シャッハの言葉に訝しげな表情を浮かべるティアナとキャロ。

「私も教会や無限書庫の文献でしか見たことは無いんですけど、ある特定の種族だけが使うことを許された魔力を凌駕する上位の力で・・・確か名前は・・・“魔皇力（まおうりょく）”と言っていたかしら・・・」

「「魔皇力・・・？」」

聞きなれない言葉に口をそろえて言葉を漏らす二人であったが、するとその時ケリュケイオンがアンゴルモアの力を感知し、警告を促す。

〈Ｍａｓｔｅｒ！〉

「！みなさん、反応です！！この先の近く・・・いや、此方に接近しています！！」

「何ですって！？八神部隊長、聞こえますか！？」

ティアナは急いで司令室のはやてに連絡を入れる。

「全部聞こえてたで。気をつけてな・・・どんなバケモノが飛び出してくるか分からんからな。シスター・シャッハも用心してください。」

『了解です！』

三人は早速デバイスを装備すると、反応があった場所へと向かい走

り出す。

同じころ、並行世界から特別な方法でこの世界に足を踏み入れていたキバのユーノもアンゴルモアの力を確認し、キバットを連れて現場に向かおうとしていた。

「ユーノ。間違いない、ここからだぜ！」

「よし、僕達も急ごう。」

二人が現場に急行している間に、ティアナ達も全速力で反応場所まで走っていく。

「反応が大きくなっていきます・・・凄いスピード・・・！！」

ティアナ達はある程度の場所まで近づくと、木の陰などに隠れながらＡＭ体が出没するのを待っていた。

「さて、戦闘準備は完了。いつでも来てみなさいよ！」

「来ます！お二方とも！！」

シャッハがその言葉をかけた途端、全身を漆黒に染め上げた蛆虫のようなものを全身に纏わせる奇怪な生き物が三人の前に出現。

モニターでそれを見ていたなのは達も思わず目を開いて驚愕する。

「何だ、あれは！？」

「どっかの映画で見たことあるようなりだな・・・！？」

ユーノはその奇妙な生き物を見ながら、データ解析を始めその結果導き出した一つの結論を口にする。

「アンゴルモアの反応から推測すると、あれは本体から分裂したＡＭ体だ。奴が本体じゃない！」

「何だって！？キャロ、ティアナ、シスター！そいつは本体じゃありません！」

『そうみたいですね・・・けど、どうやら簡単には逃がしてはくれないようですよ。』

シャッハはそう伝えると、ヴィンデルシャフトを構えながら不気味な方向を上げるその分裂体を凝視し、ティアナ達も戦闘体となる。

「Ｇｈｏｏｏ

「ヴィンデルシャフト！！」

魔力による銃撃と疾風が同時に着弾し、砂埃を上げる中出て来る全くダメージを負った形跡すら見せない分裂体の姿。

「まるで効いてないわ。どうなってるの！？」

「どうしますか？」

「構ってたら徒に魔力を消費するだけです。ここは一旦撤くしか・・・！！」

すると、分裂体が隙をついてシャッハの背後から伸ばしてきた触手で攻撃を仕掛ける。

「しまっ！！」

シャッハが気づいた瞬間には、触手は真っ直ぐシャッハに向かって仕掛けられ攻撃を受けたシャッハは勢いのまま後ろに飛ばされ地面に激突。

「シスター・シャッハ！！」

シャッハの元に駆け寄ろうとしたキャロだったが、その途端分裂体の触手が今度は標的をキャロに変更させて牙を向けてくる。

「キャロ！！」

ティアナはすぐさま銃弾を発射してギリギリのところで触手を撃ち落すが、その瞬間に触手は別な場所からティアナの背後を狙ってく

る。

「ティア！！後ろ！！」

モニター越しにそれを見ていたスバルはティアナにそれを伝え、言われたティアナが後ろに振り向いた瞬間には触手は鋭い棘となってティアナに向かって来たのだ。

「は！！」

絶体絶命のこの状況を現場で見ていたシャッハとキャロだったが、その時思いもよらぬものが乱入してきた。

「とあああ！！！」

触手に向かって飛んできた蝙蝠が強力な翼の攻撃で、触手を切り落としティアナを助けてくれたのだ。

「「「！？」」」

一瞬、目の前に現れたこの蝙蝠・・・キバットに関して思考が追い付かないでいる三人。

そんな三人を余所にキバットは安堵のため息を吐く。

「ふう～～～やべぇやべぇ。危機一髪だったぜ。」

「そうだね。けど、こんな所で違う形であれ顔見知りに遭うとは思ってもいなかったよ。」

キバットの言葉に合いの手を入れ来るその人物の声を耳にした三人や司令室のメンバーが驚愕の表情を浮かべながらその声のする方へと目を向けてみると、立っていたのは自分たちがよく知る青年と全く容姿も同じユーノ・スクライアその人であったのだから。

現場にやって来た黄緑色の私服に身を包んだユーノを目撃したティアナ達は度肝を抜いた。

「あれって・・・・・!?」

「ま、まさか・・・・!?」

「ユーノ先生!?」

ティアナ達と同様に、モニターで実際にもう一人のユーノを見ながら今のこの事実に目を疑うなのはや恋次達。

「な・・・何!?」

「ど・・・どう言うこと!?何でユーノ君があそこに・・・・!?だってユーノ君は此処に居るはずだよ!!」

「何が何だか訳わからねえよ!!」

激しく狼狽する一同に対して、翡翠の魔導死神ユーノ・スクライアの方は至って冷静な表情を浮かべて一つの答えに辿り着いていた。

「・・・あれは・・・ひょっとして・・・・?」

一同がそれぞれの反応を見せる中、もう一人のユーノはキバットを

自分の元に戻すと分裂体に向かって歩き出す。

「やはりこの世界にまで影響が出ていたようだね。性質の悪い奴だよ本当に・・・だけど、もう逃がさないよ・・・キバット！」

「よっしゃあ！！キバっていくぜ！！」

キバットは意気揚々としながら、ユーノの右手の甲に齧り付く。

「ガブっ！」

その瞬間、キバットによって魔皇力が注入されユーノの顔と腕にはステンドグラスのような文様が出現し、同時に腰元には鎖によって出現する止まり木を模したベルト。

ユーノはキバットを手に取ると、徐に言葉を発する。

「変身！」

キバットをベルトに装着すると、その途端ユーノは力の一端であるキバの姿へと変貌を遂げる。

変身したこの姿はキバフォームと呼ばれ、拘束具を取り付け、真の力を制御したものだ。

基本カラーは赤、複眼にあたる部分は黄色。

武器は使わず、素手での格闘を中心とした戦闘スタイルを取る。

目の前でユーノが変身したことに大いに驚く三人や機動六課のメン

バー。

「「なっ！？」」

「ゆ、ユーノが・・・！？」

「変身しおった・・・！？」

「・・・・・・――――――」

もう一人の自分の変わり果てた姿をその目で確認しながら、士から聞かされた情報と照らし合わせる沈黙のユーノ。

そして、変身を遂げたユーノは早速分裂体に向かって突進する。

「は！！」

格闘戦術を駆使したその攻撃によって、分裂体が仕掛ける触手や爆弾を回避しながら急所に的確に攻撃を加えるキバユーノ。

キバットはユーノの攻撃により防戦一方の分裂体に向かって高飛車な様子でこう語りかける。

「そんな攻撃、屁じゃねえんだよ！」

その後もキバユーノは攻撃を加え続け、圧倒的な力の差を見せつける。

ティアナ達はこの圧倒的戦力を有するキバユーノにただただ目を奪われるばかりだ。

「凄い・・・！」

「これは夢なの・・・！？」

「いえ、紛れもなく現実のようです・・・」

分裂体がかなり弱まった様子を見たキバユーノは頃合いだと判断し、キバットも合図を出した。

「止めだ。」

ユーノは腰元のベルトの右側に納められていたフエッスルと呼ばれるものを一つ取り出し、徐にそれをキバットに吹かせる。

「よし・・・行くぜ・・・Ｗａｋｅ　ｕｐ！」

キバットはそう言いながら腰のベルトから離れると、キバユーノの周囲は三日月が浮かぶ夜となりユーノも力を込めようとした。

「はあああ・・・・・・」

「！景色が急に夜に・・・！？」

キバの力に翻弄されながら目まぐるしい状況の変化に混乱してしまいそうになる三人だが、そんな三人に構わずユーノは勢いよく右脚を天に翳すように突き上げる。

「はっ！」

キバットは突き上げた右脚を拘束しているカテナと呼ばれる拘束具を解放し、力が解放されたユーノはそのまま上空へと飛び上がり満月を背にしながら分裂体目掛けて飛び下痢を発動する。

これが、キバフォームにおける必殺技「ダークネスムーンブレイク」である。

「はあああ！！！！」

ダークネスムーンブレイクが分裂体に直撃した分裂体は地面に突き刺さるかのように動かなくなり、キック後に地面に刻まれるキバの紋章。

そして、分裂体は鏡が割れるかのようにして全員の目の前から消滅を果たして消えていった。

キバユーノの活躍によって窮地に一生を得た三人は、この目の前のユーノがまだ別人であると言うことだとは気付いておらず、感嘆の声を上げていた。

「す・・・凄い・・・！」

「ユーノ先生って・・・こんなことも出来たんですね・・・」

『いや、それは僕じゃないよ。』

その途端、司令室から飛んでくるもう一人のユーノの声。

「え！？す、スクライア司書長！！そ、それじゃあ・・・今我々の目の前にいるのは・・・！？」

モニターに映し出されたよく知った顔の方のユーノを見て、目の前のユーノとを見比べてしまう狼狽した様子の三人。

その時、見かねたキバユーノが変身を解いてから声をかけてきた。

「彼の言う通りだよ。」

「「「!?」」」

「僕は“ユーノ・スクライア”であってそうでない。つまり、あなた方の知ってる“翡翠の魔導死神ユーノ・スクライア”が住む世界とは違う世界からやって来たのが、僕と言う訳。」

「違う世界からやって来た・・・ユーノ先生!?」

「何が何だか・・・私にはさっぱり・・・!?」

意外にも頭が混乱してしまいキバユーノの言葉を理解できていない様子の三人を見て、困惑した様子でキバユーノは次のような提案をする。

「え～と・・・と、取り合えず僕をもう一人の僕のところまで連れて行ってくれないかな?そうすれば、もう一人の僕から詳しい話を聞けると思うから。」

三人はそう提案されると、はやてとユーノの許諾を貰い早速キバユーノを六課に連れて帰ることにした。

帰ってきた三人とキバユーノを出迎えるはやて達だったが、内心は

かなり動揺していた。

「お帰りな、三人とも。え～と・・・・・・何やろうな、この微妙な空気と言うか何と言うか・・・！？」

「にゃははは・・・そ、そりゃあ目の前にユーノ君がもう一人居るんだから、仕方ないよ・・・」

「こっちのユーノのほうは・・・割と普通の格好だな・・・」

各々が独自の心境を抱き、苦笑する中キバユーノは徐に甚平姿のユーノに近づきお互いに顔を綻ばせながら挨拶を交わす。

「初めまして、と言えばいいのかな？」

「どうだろうね。君は僕であって僕じゃない。何せ、君はこの世界の僕とは明らかに違う異質な力を持っているからね。そう・・・“キバの力”というものを。」

「？キバの力・・・！？」

「流石、よく分かっているね。ひょっとして、君も士さん、もとい仮面ライダーディケイドの知り合いで？」

「まぁね。キバの力を所持しているのがもう一人の僕だと言うことは聞いていたけど、実際に目の前で見るとちょっと不思議な感じだよ。」

すると、ユーノが仮面ライダーディケイドという名前を口にした途端以前彼に命を救われたはやてとクロノ、戦闘に参加したシグナム

達は驚愕した。

「え!?仮面ライダーディケイドって・・・ユーノくん!?あの人のこと知ってたんか?」

「えへへ♪彼とはちょっとした関係(なか)でね、ライダーのことも彼からある程度聞いていたんだ。そして、そのライダーの中にキバの鎧と言うファンガイア一族が開発した特殊な鎧を身に纏い戦うライダーの存在を士さんから聞いた。そして、それを使いこなすものこそが・・・」

「もう一人のユーノ殿と言う訳ですか?」

ルキアの言葉を耳にした一同は一応納得の表情を浮かべる。

その後、話題は再び魔導死神ユーノが発したあの言葉になる。

「ところで、さっき口にしたファンガイアと言うのは何なんですか?」

エリオがそう尋ねると、この事に関しては一番詳しいキバユーノが説明を始める。

「それは僕から説明をするよ。ファンガイアとは、人間の姿を借り、人間の生命エネルギー・ライフエナジーを糧として生きるモンスター種族の一種のこと。空中に2本の巨大な牙のような物体『吸命牙』を召喚し、それを人間の首に突き刺すことによってライフエナジーを一気に吸収する。ここ最近、世界各地で起こっている謎の襲撃者の正体がファンガイアだよ。」

「成程。それで、ユーノ・・・と言っては区別が付かないからキバのユーノと呼称させてもらうが、君はそのファンガイアを追ってあの世界に居たと言うことか？」

「そうだよ。しかも、君達が探している第一級指定のロスト・ロギア・・・アンゴルモアも恐らくは僕が追っているファンガイアが所持しているはずだ。」

「何！」

「そ、そんな！？」

「また、面倒なことになってきたなおい・・・」

キバユーノの言葉を聞いた一同は険しい表情を浮かべる。

そんな全員の前に、キバユーノの上着のポケットからキバットが飛び出してきた。

「でだ。俺とユーノはそいつを見つけ出して根絶やしにするために態々並行世界を移動して探し回っていたら、お前らと遭遇したってことだ。」

「わあああ！？こ、蝙蝠が喋った！！」

なのはは前触れもなく飛び出してきたキバットの外見に驚く。

すると、蝙蝠と呼ばれたことでキバットの怒りの炎が燃え上がる。

「なっ！？お、おい！！誰が蝙蝠だ、誰が！！」

「誰って・・・あなたのことじゃないの？」

フェイトが恐る恐るそう問い直すと、キバットは真っ向から否定し始める。

「これの何所が蝙蝠だよ！！！俺様にはキバットバット？世という立派な名前があるんだよ！！！何だよ、お前ら・・・向こうの世界のなのはとフェイトはもっと俺様に優しくしてくれたぞ！」

「あはは・・・まぁ、キバット。少し抑えて。どの世界でも皆同じなわけじゃないでしょ。現にこの世界の僕は僕とはかなり似て非なる人みたいだしね・・・」

キバユーノはそう言いながら格好からしてまず自分とは異質な魔導死神ユーノを凝視し、そんなキバユーノの言葉を聞いた魔導死神ユーノも扇子を広げて思わず笑ってしまう。

「あはは♪こりゃあ参ったな～～まさか君にそんなこと言われるとは思ってもなかったよ♪」

この二人の実に奇妙なコミュニケーションを傍で見ていた白鳥やスクライア商店の従業員はかなり複雑な心境だった。

「き、奇妙な光景であるな・・・」

「本当・・・店長が二人居るって・・・ドッペルゲンガー見てるみたいだよ・・・」

「でも、れっきとした独立した存在なのであろう？」

「う～ん・・・俺にはどうもついていけねえよ・・・」

魔導死神ユーノは扇子を懐にしまうと、真剣な表情となって話を元に戻す。

「それで、もう一人の僕。本体であるファンガイア・・・こっちはＡＭ体と呼称してるけど、そいつの居所と正体は分かってるの？」

「ああ・・・詳しい居所まではまだだけど、正体は掴んでいるよ。恐らく奴は、僕の父・・・つまり先代のキバの兄・・・ヴォルドの筈だ。」

「ヴォルド？てか、先代のキバってどういう事です？」

何気ない言葉に疑問を感じたスバルにキバットは懇切丁寧な解説を始める。

「キバって言うのは、元々はファンガイアが生み出した鎧のことで・・・ユーノの装着するキバの鎧よりも前に造られた鎧があり、俺達はそれを“闇のキバ”の鎧と呼んでいる。」

「嘗て、僕の父・・・シルバは歴代最強と謳われた闇のキバで、この世界では大きく違ってくるけど、僕らの世界ではクロノとフェイトの母、リンディ・ハラオウンとその夫であるクライド・ハラオウンと死闘を繰り広げたことがあるんだ。」

「え？母さんと・・・クロノのお父さんが！？」

「別の世界の話とはいえ、あまり聞いていて気分のよいものではな

いな・・・」

並行世界の身内の話に驚きを隠せないフェイトとクロノ。

「確かに、クロノの言う通り父さんは二人とは悪い意味での因縁で結ばれていてね・・・子供の頃、僕はそれでクロノに酷い恨みを買ったからね。」

「酷でー奴だな・・・相変わらず・・・」

「冷酷無比。心も体も冷え切ってるってか？」

冷たい目線でクロノのことを見る恋次や鬼太郎だが、クロノはそんな二人に全否定の姿勢で構える。

「おい！それは向こうの世界の僕だろ！！ちゃんと人間としての感情もある！！」

キバットはそんなクロノの言葉に疑問の念を抱きながら、彼ら以上に冷たい視線で見つめる。

「どうだかな・・・おっと、ユーノ。今日は此処までだ。あんまり遅くなると、なのはの奴が心配するぞ。」

「え？あ、本当だ。そろそろ一時帰宅しないと・・・ごめん、もう一人の僕。一度自分の世界に戻らないといけないんだ。話は帰ってから通信で話すよ。」

「分かった。じゃあ、行きなよ。向こうのなのはが帰りを待ってるんでしょ。」

「ありがとう、もう一人の僕。」

キバユーノはお礼の言葉を口にすると、士と同じように灰色のカーテンをその場に出現させて元の世界へと戻っていくのであった。

「行っちまったな・・・あいつ・・・」

「もう一人のなのはが帰りを待っているって口にしたと言うことは・・・ひょっとして？」

フェイトやはやて達はそう言いながら徐になのはに顔を合わせるが、なのはは赤面しながら手をぶんぶんと振って恥ずかしげにこう言って来た。

「ふぇ、フェイトちゃん！！それに皆も何でそんな目で私を見るの！！！べ、別に向こうの世界の私がユーノ君と結婚していようが何しようが関係ないでしょ！！私はこの世界のユーノ君が好きなんだから！！！！」

そんな率直過ぎるなのはの言葉に内心かなりドキドキの魔導死神ユーノ。

「（なのは・・・そう言うことはあまり堂々と言わないで欲しいんだけどな・・・）」

さて、元の世界に戻ったキバユーノは妻・なのはが待つ高級住宅を思わせる庭付きの家へと足を運び玄関のドアを開ける。

「ただいま。」

「あ、お帰りなさいユーノ君！」

なのははエプロン姿でユーノを出迎えてきた。

「ただいま、なのは。ヴィヴィオは？」

「まだ無限書庫で検索中かな？一応あの子も立派な司書だからね。」

「ははは。やり過ぎないように気をつけるんだよって言っとかないと僕みたいに倒れちゃうからね。」

「にゃはは・・・ところで、ヴォルドのほうは見つかったの？」

「いや、まだだよ。ただ、向こうの世界でもう一人の僕となのは達に接触したよ。」

「もう一人の私やユーノ君と！？」

驚きの声色のなのはに、上着のポケットから出て来るキバットが補足説明を加える。

「ああ。あっちの世界のユーノはどうも魔導死神ってもんになってぜ。能力も非常に高いと見た。それこそ、こっちのユーノに匹敵かそれ以上のな。」

「そうなんだ。あ、そうだ！キバットさん、はいこれ！」

なのははそう言いながら徐に背中に隠していた一枚の絵画を取り出し、キバットに見せた。

その絵画はキバットがこよなく愛してやまない２０世紀のフランス・パリを拠点に活躍した画家、アメデオ・モディリアーニの描いた首の異様に長いジャンヌ・ダルクの肖像画だった。

「おお！！モディリアーニの描いた肖像じゃねぇか！？何所で手に入れてきたんだよ、なのは！？」

興奮を抑えきれないキバット。

「前に地球でオークションの開催があったでしょ。そこで偶然手に入れたんだよ。」

「サンキュウー！俺一生宝物にするぜ！！」

キバットはなのはから絵画を受け取ると、それを持って自室の方へと上機嫌な様子で飛んでいく。

ユーノはキバットの後姿を見送りながらなのはと会話を続ける。

「ほんと好きだよね・・・モディリアーニ。」

「にゃはは。変ってるよね、つくづくキバットさんも♪」

すると、唐突にユーノはなのはの方を凝視しながら躊躇った様子を見せ始める。

「なのは・・・えっと・・・その・・・」

「ん？」

「お腹の子のことだけど・・・・・・」

ユーノの視線がエプロン姿のなのはの腹部に集中し、それを見たなのはは笑顔でこう言って来た。

「うふ。大丈夫・・・無茶はしないよ。それに私だって一応妊婦な訳だし・・・ユーノ君やヴィヴィオ、キバットさんや次郎さん達の悲しむ顔は見せないよ。ちょうど明日から産休だし、思いっきり家事に専念しようと思ってる。アイナさんだってついているしね。」

「わかったよ。それなら安心したかな。」

「心配性だな、ユーノ君は。」

「それはなのはがいっつも無茶ばっかりやるから・・・」

「そう言うユーノ君だって人のこと言えないでしょ。一応前線からは一戦を引いた身なんだし、キバの力はあんまり使って欲しくないんだ。だから、この事件が解決したら・・・戦いなんてもうしなくてもいいからね。」

「・・・うん・・・分かったよ。この戦いで、決着つけるよ。」

愛妻との堅い約束を交わしたユーノはこの戦いで全ての決着をつけることを改めて決意し、なのはを徐に自分の元に抱き寄せるのであった。

その頃、魔導死神ユーノのいる世界の方の様子はどうだろう？

ちょうど夕食時だったため、なのははユーノとヴィヴィオとにテーブルで食事をとっていたがなのはは未だに昼間の出来事に何処か感慨に耽ったかのような様子でいた。

「キバの世界のユーノ君か・・・・・・」

「ん？どうかしたの、なのは。」

「うん。実際、パラレルワールドって言う考え方があるのは知っていたけど、実際にそのパラレルワールドを渡ってこの世界にまでやって来たということは、少なからず向こうのユーノ君も真面目なんだよね。」

「分かるの、一度遭っただけで？」

「分かるよ・・・ユーノ君であることには変わりないもん♪」

「（ドキ！）そ、そうだね・・・」

なのはの何気ない笑顔につい赤面してしまうユーノ。

すると、そんなユーノに茶々を入れてきたのはやてであった。

「おや？ユーノくん、顔が赤いで♪」

「ちょ、ちょっと熱っぽいだけだよ！！」

「（照れちゃってるところ見ると、案外可愛いもんやな・・・なのはちゃん）」

「（はやてちゃん、あまりからかったらユーノ君に悪いよ。）」

「ユーノパパもどんまいだよ♪」

「あはは・・・・・お！？」

若干疲れた様子のユーノであったが、その時並行世界のキバユーノから特殊な通信が届きモニターだ出現する。

『やあ、待たせたね。』

「もう一人のユーノ君！」

「これが・・・もう一人のユーノパパ！？」

ヴィヴィオも隣に座る魔導死神ユーノとモニター画面のキバユーノをまじまじと見つめる。

そんな中、魔導死神ユーノはモニターに映し出されたキバユーノの背後の様子を見て思わず尋ねる。

「あれ？君が居るのってひょっとして無限書庫かい・・・なのはは如何したの？」

『あ、それがだね・・・』

キバユーノがそう口にしようとした瞬間、かなりご立腹の様子でキバットが口を挟んできた。

『あの馬鹿提督が家で夕飯を食いながらなのはとヴィヴィオ達と一

緒の憩いの時間を過ごしていた処を邪魔しやがったんだよ！で、急いで資料探索してる最中って訳だ！』

「ふ～ん。やっぱりクロノはそっちでも人間以下だったか・・・」

魔導死神ユーノのさり気無い冒涜を横で聞いていたクロノは思わず文句を口にする。

「コラ！聞こえてるぞ！！」

と、その時キバットの背後から現れるやたらとテンションが高い黄金に輝く竜が間に入って来た。

『じゃじゃ～ん！！そうかりかりしてると、血圧上がりますよ。キバットさんもクロノさんも！』

「わぁ！！また変なのが出てきた！！」

「もう一人の僕、そっちは？」

『キバットと同じ僕のパートナーのタツロット。キバの鎧の真の力を引き出す重要な存在なんだ。』

『よろしくですよ！！向こうの世界のユーノさん！！！』

「うん、よろしく♪」

「ところで、さっきから気になってたんだけど・・・何だか書庫の司書さん達がかなり多いような気がするんだけど？」

「あ、それは私も思ったところや！」

モニター越しから窺えるこちらの世界よりも圧倒的に数が多いキバユーノの世界の無限書庫の様子にこぞって二人が疑問を投げかける。

「人員増加でもしたのかい？あの頭の堅い上層部がよく許可したね。」

『いや。此処の書庫の司書達はみんな僕の“家族”だよ。』

「「「か、家族！？」」」

キバユーノの言葉に耳を疑う三人。

「正確に言えば、“家族みたいなもの”だけどな・・・」

すると、その三人の話を聞いていたユーノの右腕と呼ぶべきハードボイルドな雰囲気を醸し出すミドルな男が話に入り込んできた。

キバユーノはその男の声に反応すると、嬉々とした表情で名前を口にする。

「ロイドさん！」

「ああ。今帰ったぜ、ユーノ。」

「？ねぇ、その人は・・・！？」

『紹介するよ。無限書庫の“司書長”で僕が最も信頼するロイドさん。』

「司書長って・・・それってユーノ君のポストじゃないの？」

『世界が違えば役職も違うよ。此処では僕の役職は『無限書庫書庫長』。結果的にここの最高責任者なんだけどね。』

「俺はその書庫長さんを補佐する司書長で、ユーノの右腕だ。此処はな、他の部署で“落ちこぼれ”や“役立たず”と言われた連中の集まりなんだ。最初は嫌々で働いていた司書や局員達も多かったが、ユーノが１５歳で司書長となった時点でそれも無くなっている。」

ロイドの口から語られる無限書庫の実態に関して、キバットとタツロットも補足の説明を加えていく。

「それと、無限書庫で働いている連中は全員ユーノがキバであることを知っている。勿論、なのは達もな。採用条件としてユーノがキバであることを気にしない。他人に言わないことが挙げられる。」

「もし、護れないと採用試験の段階で言った場合、キバに関する記憶をユーノさんが消去するんですよ。今では他の部署からの評判は高く新人の局員でも自ら無限書庫で働きたいと志願するほどなんです！」

「それでも、地上部隊からの評価は低いけどね・・・」

「そうなんだ。頑張ってるんだね、もう一人の僕も♪」

「流石はユーノ君♪それで、昼間の続きなんだけど・・・？」

『ああ、そうだったね。じゃあ昼間の続きを話すから、全員を呼んできてよ。』

キバユーノはモニター画面を通して司令室に集まった全員を集めると徐に、今回のＡＭ体であるヴォルドーに関する詳細を語り出す。

全員は真摯な態度でキバユーノの言葉にを耳を傾ける。

『ヴォルドは、僕が歴代最高にして最強のキバであると言われ始めてから僕に嫉妬心を覚え、３年前に大規模な戦争を仕掛けてきたんだ。一度は死に掛けた僕だったけど、無限書庫やキバットたちお陰で何とか一命は取りとめ、壊滅寸前までに追い込まれた機動六課に援護に向い、どうにかヴォルドを退けた。』

ユーノがそう話すと、今度はロイドが苦い表情で補足を加える。

『だが、奴は完全にはくたばらずにエネルギーを蓄えて反撃の機会を窺っていたんだ。』

「それで人間のライフエナジーを・・・」

『ファンガイアはより上質なライフエナジーを好む。人間のライフエナジーは特に純度が高く、上質な代物なんだ。』

「怖いわね・・・・・・」

「対抗策は何かあるのか？」

『生憎これといって弱点が無いのも事実。何か根底から覆そうにも、ヴォルドに関する資料はほとんど消失しているんだ。自力で倒すしかないね。』

「ＡＭ体とこれまで幾度となく戦って来たが・・・今までの中で一番骨の折れる相手になりそうだな、こりゃ。」

「でも、いくらキバの力が備わっているからと言って・・・君一人で戦うのは無謀じゃないのかい？」

『勿論、一人では奴を倒せない。犬死するだけよ・・・だけど、僕には家族やみんながいる。ロイドさんや無限書庫の司書たち。なのはやキバット・・・それに、君達もね。』

キバユーノのその言葉を耳にした一同は、目を見開いて驚いていた。強力な力を有しているにもかかわらず自分たちの事を何の疑いもなく信じてくれるキバユーノの言葉が嬉しくてたまらず、恋次は思わず鼻で笑う。

「・・・ふん、そうだな。」

「もう一人の僕、共通の敵を前にした以上共に手を取って戦おう。正義なんて安いもののために戦うなんて考えなくて言い。自分の信念を貫き通すために戦う。共闘の理由に、細かいことは関係ないからね♪」

『・・・うん。それもそうだね。ありがとう、もう一人の僕。』

キバユーノも魔導死神ユーノの言葉につい嬉しくなり、傍らで聞いていたロイドやキバット達もこの機動六課の姿勢には素直に喜びを感じるのであった。

その後、キバユーノは出来るだけの情報提供を約束し全面的に協力

する姿勢の元魔導死神ユーノ達と共に敵ヴォルドを倒すべく全力で事にあたることになったのだ。

キバユーノは無限書庫での仕事の傍ら、ヴォルドの足取りを掴むために躍起になっていたがやはり簡単にはいかなかった。

だが、彼は決して諦めてなどいなかった。

なぜなら彼は一人ではないのだから。

彼を愛する者や、敬愛するものが周りには沢山いるのだから――――

特に、疲れ切った彼にとって愛妻であるなのはとの夫婦の時間は貴重且つ癒しの時間でもあったのだ。

自宅に戻ったユーノはなのはと一緒にベッドにもぐりこむと、両者は生まれた時と同じ姿となって互いに抱き合い語り合う。

ここからは読者の想像力に任せて台詞を中心にするとしよう。

「君も好きだな・・・子供がお腹にいるって言うのに・・・」

「にゃはは・・・だって・・・したかったんだもん・・・それともユーノ君は嫌だった？」

「嫌じゃないよ。君が望むなら僕も喜んで受け入れるよ。だって僕らは夫婦だろ？」

「うん。ありがとう・・・ユーノ君。」

なのははそう言いながら、筋肉のついたユーノの胸板に顔を沈める。

「ユーノ君の体って・・・凄く男らしくて素敵だよ・・・」

「なのはだって、言葉じゃ足りないぐらい綺麗だし・・・すべすべだし・・・髪の毛も艶があっていい匂いがするし・・・僕は好きだよ。」

「ユーノ君にそう言ってもらえると・・・嬉しいな・・・」

「なのは・・・愛してるよ・・・」

「私もだよ・・・ユーノ君・・・」

二人はそう言うと、唇を合わせ夢の世界へと堕ちていくのであった。

妖艶の欠片がもたらしたこの奇妙な出会い。

そこで紡がれる絆とはどういったものとなるのであろうか？

ウェイクアップ！

運命（さだめ）の鎖を解き放て！！

音色は響く、二人の自分（後書き）

教えて、ユーノ先生！

ユ「今回は予てより企画していたキバユーノとのコラボとのことで、特別にもう一人の僕とキバットにご高説をお願いするよ♪」

別ユ「はい。では、今回は僕が変身するキバについて教えちゃいます。」

キ「キバって聞いてくれよ！」

別ユ「元ネタは２００８年に地球で放映された『仮面ライダーキバ』。ファンガイアと人間とハーフとして生まれた青年、紅渡と父・音也が織り成す親子のきずなを描いた作品だ。」

キ「この俺様の声を務めた杉田智一を始め、石田彰など豪華声優陣も多数出演だ！」

キ「あ！そう言えば声で思い出したが・・・あの腹黒の声も俺と一緒なんだよな。」

ユ「また気の毒だね。」

ク「何が気の毒だ。僕が何をしたというのだ？」

魔導師図鑑ハイパー！

キバのユーノが帰った後、恋次と吉良はクロノと談笑をしながら食

事をとっていた。

恋「キバットって蝙蝠もどきが散々お前のこと罵ってたぜ。相変わらずの嫌われ者だな。」

吉「ある意味僕以上に可哀そうですよね、クロノ提督は。」

ク「たく。みんなして僕の事を冷酷だとか腹黒とか好き勝手に言うが、大体僕の何処が冷酷だって言うんだ?何所が腹黒なんだ?」

文句を言いながらスパゲティを口に入れるクロノ。

すると、そんなクロノにユーノが横から口を挟み。

ユ「よく言うよ。人の事を人として見ずに書類請求をしてきた分際で。」

ク「仕事だったんだから仕方ないだろう!」

ユ「そうかな?その割には資料の中に『夫婦間のトラブルを解決する方法』なんてものも紛れていたけど。」

ク「ぎく!!」

フェ「クロノそんなものまで頼んでたんだ・・・」

は「夫婦関係あかんようやな・・・」

予告

その王（ロード）が目覚める時、人類は滅亡する

ユーノ・スクライア外伝　魔導界の王

ラ「多分このままだと、人類は滅ぶだろうね。」

ロ「奴らは、杉村をロードと呼んでいた。」

次「・・・人類滅亡のカウントダウンが、始まったことに・・・なる。」

別ユ「もしかして、本当に？」

ユ「じゃあ、ここが・・・！？」

主題歌：Ｃｉｒｃｌｅ　ｏｆ　Ｌｉｆｅ　－　Ｃｒｉｍｓｏｎ－Ｆａｎｇ

時空を超え、自分ともう一人の自分が出会った時・・・人類存亡を賭けた最終決戦へと向かう。

ヴォ「嘗てこの俺を封印したキバ・・・待ち望んでいた・・・」

キ「キバって、行くぜ！」

今、外伝史上初のユーノとユーノによる超高速空中バトルが展開さ

れる。

劇場版ユーノ・スクライア外伝　魔導界の王

ユ「よし♪なかなかの出来栄え！」

一「だから映画じゃねぇだろ。こんな広告いらねぇよ。」

恋「つうか、俺達ちゃんと見せ場あるんだろうな？」

迫りくる邪悪な影・レジェンドルガ（前書き）

キバットリビア

キ「サン・バルテルミの虐殺とは、ユグノー戦争の時期、１５７２年８月２４日にカトリック側が改革派を大量虐殺した事件である。悪名を残すこととなったカテリーナ・ディ・メディチは猟奇的な女性で、風呂のお湯は処刑した人間の生血でその浴槽につかりながらワインを飲んだという逸話があるほどだ。」

迫りくる邪悪な影・レジェンドルガ

＞ｉ１８１８７―７０９＜

キバユーノと魔導死神ユーノが接触したことによって明かされる今回のＡＭ体、キバユーノの伯父であるヴォルド。

そのヴォルドは未だ手にしたアンゴルモアの力を完全に成業することは出来ず、世界各地でライフエナジーを吸収し続けながらキバユーノへの復讐を胸に、夜の世界に生きていた。

「・・・はっ！はっ！はっ！はっ・・・もう少しだ・・・もう少しライフエナジーが集まれば・・・奴を・・・ユーノからキングの座を・・・奪え・・・る・・・！！っぐ！！！！」

不安定な体に溜まったライフエナジーとアンゴルモアの力がヴォルドに身体的負荷を与え続ける中、そのヴォルドはそんなことなどお構いなしにライフエナジーの吸収を止めようとはしない。

「はっ！はっ！はっ！はっ！急がねば・・・！！」

すると、そのヴォルドに向かって一人の男が背後から声をかけてきた。

「ヴォルド様。」

声のする方へと振り向いたヴォルドが目線をその男に合わせる。

「・・・お前達か・・・」

闇の中に姿を溶け込ませながら、その男を含めた四人の人間がヴォルドの前に現れる。

この四人はファンガイア最強と呼ばれるにふさわしい四人の実力者達の集まりであり、ヴォルドに付き従える反ユーノ派である「チェックメイトフォー」である。

その中心人物であるキングはヴォルドに向かって更に声を発する。

「はい。我ら『チェイックメイトフォー』・・・ただ今全員揃いました。ご命令があれば、何なりとお申し付けくださいませ。」

「・・・そうか・・・では少し頼みがある・・・この体ではいずれライフエナジーとこアンゴルモアの負荷に耐え切れず体そのものが原形を保っていられないやもしれん・・・そうなる前に、この俺の体に適合する強い力を持った器が必要だ・・・」

それを聞くと、参謀役である眼鏡の男「ビショップ」が次のように提案をしてきた。

「成程。それでしたら、私目にいい考えがあります。ヴォルド様の器たる人間は、ヴォルド様に相応の力を持った者でなくてはなりません。必ずや、その器たる人間をここに連れて来てみせます・・・」

「頼りにしているぞ・・・ビショップ・・・では、行け！」

「は。仰せのままに。我が王（ロード）」

四人はヴォルドの命を受けると、その器たる存在を求めて夜の世界へと向かって飛び出していった。

そんな彼らのやり取りがその後、世界にどう影響を与えのか？

ヴォルドがその後もなおライフエナジーを世界各地で吸収し続けたことで、被害者は著しく増え続け六課はこれまでの被害状況を確認しながら重い腰を上げていた。

「とうとう被害者数は３００人を超えたか・・・これだけの数の人間を襲っていながら、何故一向に足取りが掴めない・・・！？」

すると、クロノの言葉を聞いたユーノが次のように推測してきた。

「それはきっと、母体そのものを分裂させて自分の分身を作り出しているからだよ。あれはライフエナジーを回収しさえすれば、自然と母体に帰る仕組みだからね。」

「一刻も早い解決をせねばな。先発隊はどうなってる？」

「恋次さん、フェイト、応答して。」

ユーノが通信を入れると、反応ポイント近くで空中からの捜索を続けるフェイトとビルを駆け抜けながら吉良とルキアを連れて捜索中の恋次が答える。

『こちらライトニング1、こっちも現在探索の範囲を広げているけど・・・それらしきものは見つからない。』

「こっちも同じだ。お前は向こうのユーノから連絡はあったのか？」

「どうやら、ヴォルドの周りには常に犬が張っているようです。“チェックメイトフォー”と呼ばれる嘗て先代のキングに従えたファンガイアを管理・統括する最強の四人。ヴォルドが力を取り戻すまでの間、奴らがヴォルドの身を守っているという訳です。」

「チェックメイトフォーか・・・ん！？」

と、その時。

恋次とフェイト達が持っている端末、更には六課の司令室のセンサ

ーに強い魔力反応が確認される。

「センサーに反応です！」

「ＡＭ体と思わしきものが、ミッド市街地郊外に出現！住民を襲っています！」

「画像出します！」

管制担当のシャーリーたちが映像を司令室に贈ると、そこに映し出されるティアナ達が対峙した時と同じ姿のＡＭ体の分裂体。

「あ！！この前の奴と同じ！！」

「はやて、現場に一番近いのは！？」

「確か、フェイトちゃん達のはずや！ライトニング、直ちにポイント８７に急行！襲われてる人々を守るんや！」

「「「「「了解」」」」」

ライトニングは早速全員でポイント８７へと向かい、人々の救助へと向かう。

「きゃあああ！！！！！」

その頃、現場近くの人々は分裂体に襲われては次々とライフエナジーを吸収されていき、小さな女の子がその標的となっていた。

偶然にも現場近くに居合わせていたシャッハはそれを見ると、デバ

イスを取り出す。

「いけない！逆巻け、ヴィンデルシャフト！！」

触手が女の子に襲い掛かろうとした瞬間、得意の移動系の魔法で女の子を救助し安全な場所まで待機させるシャッハ。

「もう大丈夫よ。」

「ありがとう・・・お姉ちゃん・・・！！」

「さ、今のうちに逃げて。」

「うん！！」

シャッハにお礼を言うと、女の子は一目散にその場から逃げ出す。

逃げたことを確認すると、シャッハはヴィンデルシャフトを構え触手を伸ばして襲い掛かってくる分裂体に向かって攻撃を加える。

「同じ攻撃は二度も通じないわよ。ヴィンデルシャフト！」

カートリッジをロードすると、魔法陣を展開させて強い突風を身に纏わせた攻撃を仕掛ける。

「烈風一陣！！」

シャッハはその一撃を見事なまでに分裂体の急所に加え、分裂体はそのままガラスが砕け散るように消滅していった。

モニター画面でそれを見ていた六課のメンバーはシャッハの実力に流石とばかりの表情で賞賛するのであった。

「凄い！！」

「流石はシスター・シャッハですね！」

すると、その時ユーノがモニター画面の奥から現れる何かに気づく。

「ん！？待って！！」

「！」

シャッハもそれに気づき徐に後ろに振り返ると、そこから唐突に現れるただならぬ殺気を醸し出す左手を皮の手袋で覆った男。

男は分裂体を消滅させたシャッハを睨み付けながらこう口にする。

「・・・ヴォルド様の捕食の時間を邪魔するものよ・・・王の判決を言い渡す。」

「え！？」

驚きの表情を見せるシャッハに向かって、男は左の手袋を外し掌と後ろの甲に刻まれたチャックメイトフォー・キングの証である紋章を見せこう宣言する。

「・・・“死”だ・・・」

ユーノはそれを見た瞬間、キバユーノから報告を受けていた情報か

らその青年がキングであると言うことを判断する。

「まずい！！！シスター・シャッハ！！！逃げてください！！！そいつはチャックメイトフォーのキングです！！！」

「な、何ですって！？」

「サガーク。」

シャッハが気づいた時には既にキングは何処からともなく飛んできたファンガイアの王を守護する為に作られた、ヘビ型人工モンスター・サガークと合体し、ジャコーダーと言うサガークにインサートすることで変身の意思を伝える変身用キーにして、サガ専用のリコーダー型汎用武器を装填する。

「ヘ・ン・シ・ン」

その瞬間、キングの容姿は基本カラーが銀、複眼部分は青である嘗ての他の種族への侵攻で使用され、種族の恐怖の象徴となっていた仮面ライダーサガへと変貌する。

「あ・・・あれは・・・！？」

サガのその姿を確認した瞬間、シャッハや六課の面々は言い知れぬ恐怖を覚えた。

「く！ヴィンデルシャ・・・・・・」

シャッハは勝てぬつもりなど最初からないと内心思っていながらも、戦う意志を貫き攻撃に転じようとした。

だが、その攻撃の瞬間にサガは武器であるジャコーダーを扱いそれを鞭のようにして振るいシャッハの腕に絡み付かせる。

「!?」

驚くシャッハを余所に、サガはそのまま圧倒する戦闘能力を発揮させシャッハに攻撃を与える隙も見せずに追いつめていく。

「ぐっは!」

抵抗する暇さえ与えないサガの強さに圧され、満身創痍となるシャッハ。

すると、サガはそんなシャッハを見ながらサガが持つ唯一の白いウェイクアップフエッスルを取り出し、サガークに吹かせる。

「ウェイクアップ!」

必殺技が発動すると周囲はキバユーノの必殺技同様夜となり、青い三日月が浮かぶ。

狼狽するシャッハを見ながら、サガは上空に皇帝の紋章を出現させ、それにビュートを通して縛った敵を宙吊りにする方式と、貫いた標的をそのまま背負って締め上げる方式の2パターンが存在する「スネーキングデスブレイク」を仕掛ける。

「ふん!」

全ての準備が整うと、サガはジャコーダーを真っ直ぐシャッハに向

かって刺し貫き標的を確保する。

「ぐあああ！！！！」

「「「シスター・シャッハ！！！」」」

シャッハがサガの標的となった光景を見ながら、声を張り上げることしかできない司令室の前線メンバー。

「ぐっ！！！！ぐあああああ！！！！！！」

サガの攻撃にもがき苦しみ今にも息絶えようとしているシャッハをサガはキバの紋章に体を通してから地面に着地し、止めを加えようとしていた。

「終わりだ・・・哀れなる人間よ・・・貴様もヴォルド様の餌となれ・・・」

サガはそう言うと、ジャコーダーを伝って直接自分の魔皇力を送り込もうとした・・・その時だった。

〈Ｔｒｉｄｅｎｔ　ｓｍａｓｈｅｒ〉

「！」

止めを入れようとしたサガに向かって空中からフェイトの直射攻撃魔法が飛来し、サガの必殺技は不発に終わる。

駆けつけてきたフェイトを含むライトニング全員は直ぐに重傷を負ったシャッハに駆け寄り、安否を気遣う。

「大丈夫ですか、シスター・シャッハ！？」

「・・・き、騎士シグナム・・・フェイト執務官も・・・！？」

虚ろな表情で自分を助けてくれたフェイト達に声をかけるシャッハ。

フェイトはシャッハの容体が深刻であることを確かめると、シグナム達を下がらせてエリオと一緒にサガと戦うことを決意する。

「シグナム、アギト。シスター・シャッハを連れて下がって。こいつは、私達で止める。」

「おうよ！」

「ああ。阿散井達も直に応援に駆けつける。くれぐれも無茶はするなよ。」

「了解！」

シグナムとアギトはそのままシャッハを聖王教会付属の病院へと連れて行こうとする。

フェイトとエリオは武器を構えると、鋭い目線を浮かべサガと対峙し一方でサガは臨戦態勢となった二人に哀れみを感じていた。

「ふん・・・愚かなる人間どもよ。その命、惜しくは無いのか？」

「問答無用！」

フェイトはそう言うと、エリオと共にソニックムーブを使ってサガに使って攻撃を仕掛けていった。

サガは二人の目にも止まらぬ攻撃を躱しながら、二人の調子を狂わせていく。

「ストラーダ！！」

〈Ｅｘｐｌｏｓｉｏｎ〉

エリオは距離を取ってカートリッジを使用すると、サンダークラッシュで一気にサガにダメージを与えようとする。

「でやあああああああ！！！！！！」

「ふん！」

だが、サガはそんなエリオの魔法を魔力を上回る力である魔皇力の力で容易に受け止めてしまい、逆にエリオのストラーダを素手で掴むほどだ。

「なっ！？」

そして、驚愕するエリオに向かってサガは至近距離からのジャコーダーによる鞭の攻撃を仕掛ける。

「ぐっ！！！！！があああああああ！！！！！！！」

「「エリオ（君）！！」」

傷つくエリオを見ながらフェイトとキャロは声を張り上げた。

「所詮人間など、ファンガイアの足元にも及ばぬ。さぁ、王の判決を受けるがいい。」

「貴様！！！！」

フェイトはエリオに深手を負わせたサガに強い怒りを覚えると、最高速度のソニックムーブでサガに攻撃を仕掛けに行き、キャロはそれを止めることもままならなかった。

「フェイトさん！！！」

「はあああああ！！！！！」

フェイトのザンバーをジャコーダーで受け止めるサガは、目を血走らせる形相のフェイトに向かってこう口にする。

「ほう・・・大したものだな。この私に・・・キングに楯突こうと言う訳か？」

「お前は倒す・・・エリオを・・・人々を危険にさらした、お前達を！！」

〈Ｒｉｏｔ　Ｂｌａｄｅ〉

フェイトはライオットブレイドを解放すると、怒涛の連撃を加えながらサガを徐々に後ずさりさせて追い込んでいく。

「はあああああ！！！！！」

「・・・甘いな・・・」

すると、サガは片方のに手に魔皇力を収束させるとフェイトのライオットブレイドを受け止めそれを消滅させる。

「「「なっ!?」」」

目の前の光景に目を奪われ、衝撃を覚えるフェイト達三人。

「ファンガイアの能力を侮っていたのが、貴様の運の尽きだったな。」

サガはそのままフェイトの体をジャコーダーで縛り上げ、再び上空にキングの紋章を出現させて宙づりの状態にしていく。

「この・・・!!!離れろ!!!!」

魔力でジャコーダーを解こうとするも、魔皇力で出てきたジャコーダーの拘束からは逃れることが出来ず、徒に魔力を消費していくのみ。

「無駄だ。魔力如き下等な力で、魔皇力で出来たそれを外すことはできない。仕舞いだ・・・」

サガはそう言うと、シャッハの時には不発に終わったスネーキングデスブレイクを発動しようとフェイトを追い詰める。

「「フェイトさん!!」」

「「フェイトちゃん！！」」

自分達ではどうする事も出来ず、声を上げるしかない状況のエリオ達と六課のなのは達。

「（くっ・・・！！此処までか・・・！？）」

すると、諦めかけたフェイトの背後から何処からともなく衝撃波が放たれサガはそれを食らって再び技を不発に終わらせ後退してしまう。

「のあ！！！」

突然の出来事によって必殺技を食らうことなく拘束から逃れることが出来たフェイト。

「「「！？」」」

不審に思い、後ろに振り返ってみた三人だが、そこに立っていたのはキバユーノの右腕であり戦闘司書でもあるロイドが非人型小型ロボットでもある電磁ナックルウェポン、イクサナックルを持って現れたのだ。

「・・・ふう、どうにか間に合ったようだ。大事な仕事で動けないユーノの代わりに俺が来てみれば、こんな奴まで出てくるとな。助けに来たぜ、フェイト執務官。」

「あなたは・・・ロイドさん！？」

「くっ・・・キバの仲間か・・・！？」

驚愕する様子でロイドを見つめるフェイト達と、対照的に険しい表のサガ。

「ま、そう言うことだ。つー訳でキング・・・その命、神に返しな。」

ロイドはそう言うと、変身するためのイクサベルトを腰に装着させ、持っていたイクサナックルに手を当て、装着者であることを機械に認証させる。

〈Ｒｅａｄｙ〉

「変身！」

〈Ｆｉｓｔ　ｏｎ〉

ロイドは自分なりの変身ポーズを決めると、イクサナックルをベルトに装着させ変身を完了させる。

変身するとロイドの容姿は基本カラーが白で、「Ｉｎｔｅｒｃｅｐｔ　Ｘ　Ａｔｔａｃｋｅｒ（未知なる驚異＝ファンガイアに対する迎撃戦士）」の略称を持つ仮面ライダーイクサと変貌する。

今回ロイドが身に纏っているのは初めからイクサの力を１００％稼動させるバーストモードと呼ばれる形態である。

変身と同時に風圧が発生し、近くの敵を吹き飛ばす事もある。

ロイドの変わり果てた姿を見ると、その場に居合わせたサガやフェ

イト達、六課の全線メンバーを目を奪われる。

「「「おお！！」」」

「あれって！？」

「もう一人の僕の話によれば、嘗て向こうのクロノがキバの力と戦うために使っていたというＩＸ（イクサ）Ａシステムと言う白い鎧だよ。」

「行くぜ。はっ！！」

ロイドはイクサの力をその身に纏うと、サガに負けず劣らずの勢いで攻撃を仕掛け、サガもフェイト達と戦うときよりも苦戦を強いられている模様。

「小癪な！」

形勢を逆転させようと奮闘するサガだが、ロイドはイクサカリバーと呼ばれる専用の武器を取り出しそれを刀剣状に変形させてサガの攻撃を受け止め、切り返してくる。

「は！」

「のあああああ！！！！！」

ロイドの斬撃をその身に受けたサガはそのまま地面に転がり、フェイト達は圧倒的力を見せつけるロイドの力に驚愕するあまりだった。

「凄い・・・あのキング相手に圧倒してる・・・！？」

「何なんですか、あの鎧は・・・！？」

サガは傷ついた体を手で押さえながら徐に立ち上がり、怒りを募らせる。

「くっ・・・イクサ如きに・・・！！」

そんなサガの言葉を受け流しながら、ロイドはこう口にする。

「こいつを使っていたのが馬鹿提督なら勝てたかもしれない。だが、今は俺がイクサだ。」

ロイドはベルトの右に納められている金色のフエッスルを取り出すと、イクサベルトに装填させ必殺技である「イクサ・ジャッジメント」を仕掛けようとする。

〈Ｉｘａ　ｃａｌｉｂｕｒ　ｒｉｓｅ　ｕｐ〉

発動すると、イクサカリバーに集束されるロイドの魔力が純粋な破壊エネルギーを秘めた光へと変換され、イクサシステムもそれに合わせて照準を目の前のサガに集中させる。

「ふっ～～～～はあああ！！！」

「ぐあああああああ！！！！！！」

エネルギーを全て溜めこんだ渾身の一振りを、ロイドはサガに向かって振り下ろし直撃を受けたサガは声を上げて変身を解除した。

「ち！浅かったか・・・」

今の攻撃で止めを刺せなかったことに悔しがるロイド。

「おのれ・・・・・イクサ・・・・・・次は必ずやその息の根止めてやろう！」

キングはそう言い残すと、傷口を押さえながらそのまま一瞬のうちに姿を消していった。

「ま、待て！！」

逃走したキングの足取りを追おうとしたフェイトだったが、ロイドがすかさず止めに入り変身を解いて説き伏せる。

「深追いはするな。あんただって相当疲労してるはずだ。」

「それはそうですけど・・・！」

「今は体を休ませろ。どうせ奴らとは、いやでも決着つけなきゃいけないんでな。」

そうロイドが口にしたその時、漸く現場に駆けつけてきた恋次・吉良・ルキアの死神部隊三人。

「フェイト！！！！エリオ、キャロ！！！！」

「遅くなった・・・って！？君は！」

「ユーノの右腕、ロイドだ。遅すぎだろ、あんたら。」

「済まぬ。移動中に我々も分裂体と遭遇していてな・・・救助が遅れた。」

「状況は！？」

「シスター・シャッハが重傷を負いました。シグナムとアギトが、聖王教会附属病院まで護送中です。」

「くそ！！ヴォルドめ！！好き勝手やってくれるぜ！！！」

ヴォルドの傍若無人なやり方に怒りを覚える恋次。

「取り合えず、帰還しよう。ほら、フェイト執務官の肩持つの手伝え。」

ロイドはそう促すと恋次は早速負傷したフェイトのもう一方の肩を持ち六課に帰還しようとした。

すると、機動六課の管制室が市街地付近より未確認の魔力反応を確認する。

「！何だ・・・この反応！？」

「市街地Ｓ２０９で分裂体と同質の高魔力反応！？」

「現場の映像、出します！」

司令室のモニター画面に映し出されたのは、港付近の海上で古代の物質の博覧会が開かれようとしていた会場から人間のライフエナジーを吸収しているファンガイアの映像であった。

「！これは・・・！」

「まさかもう一人の店長が言ってたファンガイアって奴か！？」

「外見も能力もＡＭ体とはまた違う様だ・・・急いで向かわないと。クロノ！僕が行く。」

「分かった。承認許諾を出そう。」

魔導死神ユーノは直ぐに晩翠片手に現場へ急行しようとしたが、その時なのはも一緒に現場に向かいたいと宣言してきたのだ。

「待って、クロノ君！私も出るよ！」

「なのは。」

なのはからの意外な言葉に思わず振り返る魔導死神ユーノだが、そんなユーノになのははいつもの笑顔で次のように言ってきた。

「一人より二人の方がいいでしょ。それに、ユーノ君の事だからまた無茶したら大変だもん。」

「ははは♪参ったな・・・」

自分の事ではあったが魔導死神ユーノは改めてなのはが自分の事をどれ程心配しているのかがよく分かったそうだ。

「いいだろう。なのはも迎撃に出てくれ。」

「気を付けてな、なのはちゃん。」

「了解。さ、行こうユーノ君。」

「ああ。」

魔導死神ユーノとなのはは早速、それぞれの武器を手に取ると武装を完了させてファンガイアが出現した場所へと急行。

二人が向かったと言う報せは、ロイドと恋次達の方にも直ぐに伝わる。

「何だって、本当かそれは？」

『はい。今、ユーノ先生となのはさんが迎撃に出てます。』

「嫌な予感がしてきた。俺はこのまま現場に向かう。お前達も来てくれ。」

「ああ。分かった。ルキア、フェイト達の護りを頼むぜ。」

「案ずるな。問題ない。」

「吉良、行くぜ。」

「ああ。」

恋次はルキアにフェイト達の護衛を任せると、吉良とロイドと共にユーノ達が向かった場所へと急行し、二人が向かったとほぼ同じときにユーノとなのはは現場に到着、ファンガイアを確認する。

「あれか・・・なのはは一先ず牽制を頼む。隙が出来たら一気に叩くよ。」

「了解。」

なのははユーノの指示に従うと、気づかれないようにファンガイアに近づくとアクセルシューターを発射してファンガイアの注意をひきつける。

「そこまでよ、ファンガイア。」

〈Ａｘｅｌ　ｓｈｏｏｔｅｒ〉

無数のアクセルシュータでファンガイアの体にダメージを負わせ、人々からファンガイアの注意を自分の方へと向けるなのははそのまま外へと誘導する。

「こっちだよ。」

ファンガイアはなのはの誘いに乗ると、そのまま外へと向かってなのはと交戦状態となった。

ファンガイアは一度受けたなのはのアクセルシューターの威力を覚えると、魔皇力を高めて防御性能を上げると攻撃力そのものを増強させて逆になのはを追い込んでいく。

「く！」

自身の防御が徐々に力に圧されて罅割れていくが、ふとその時魔導

死神ユーノがなのはの方だけに気を取られていたファンガイアの死角より斬撃を加える。

ユーノはファンガイアからなのはを退かせ、更なる斬撃でファンガイアを追い詰めていく。

そして、一度なのはの元へと下がり何時もの温かい笑顔を見せる。

それを見たなのはも絶対的な安心感を覚える。

「ありがとう、ユーノ君。」

「君のことは僕が護るよ。だから、なのははいつも通り全力でぶっ飛ばせばいいよ。」

「ユーノ君・・・うん！」

ユーノからのその言葉を待っていましたとばかりに、なのはの胸の鼓動は大きく高鳴り始め、なのはは一気に勝負をつけるためにエクシードモードを発動させる。

二人の戦闘が苛烈を極める中、その様子を建物の中で見守る人々。

だが、このときその建物の中である異変が起きてしまっていた。

展示されていた巨大な顔面のレリーフがと唐突に破壊され、そこからミイラを模した正体不明の怪物が復活を果たしたのだ。

「ぐうううう！！！！！！」

怪物は全身についていたミイラのような仮面を無数に発現させると、建物の中の人々に向かってそれを飛ばしていった。

「「「「ぎゃあああああああ！！！！！！」」」」

訳が分からない人々は仮面の餌食となると、怪物に引き寄せられその怪物の体の一部となってしまう。

「止めて！！！！」

抵抗することもむなしく、怪物の一部と化してしまう人々。

そして、その怪物の方はというとふとこんなことを呟く。

「・・・俺が蘇ったということは、あのお方が覚醒しつつあるということか・・・」

その頃、ファンガイアとの戦いも終局を迎えようとしておりユーノとなのははは二人がかりで一気に止めを加えようとした。

「私の後ろには、いつだってユーノ君が護ってくれる。だから安心して全力全開で攻撃が出来る！」

なのははそう言うと、杖の先端をファンガイアに向けるとカートリッジをロードして魔力を収束させ、魔導死神ユーノも晩翠を構えて霊力を刀身に集める。

「エクセリオンバスター！」

「輝け、晩翠！」

二人の攻撃が同時に放たれると、ファンガイアはその直撃を受けそのまま地面に倒れこんでしまった。

と、その時先ほどレリーフの中から蘇ったあの怪物が徐に二人の元に近づいてきた。

「「!?」」

見たこともない怪物の容姿とただならぬ雰囲気に顔を歪める二人。

「何・・・!?」

「ファンガイア・・・それとも・・・AM体?!」

「ファンガイア・・・?違うな。そんな奴らと一緒にするな。」

怪物はファンガイアをまるで下等だと言うかのような口調でそう答えると、二人が倒したファンガイアの元へと近づき自身の仮面を倒れていたファンガイアの顔に装着させる。

「俺の僕(しもべ)になるがいい。」

すると、倒れていたそのファンガイアは見事なまでに復活し再び二人の脅威となって怪物と共に襲い掛かってきたのであった。

「!離れて、なのは!!」

ユーノは一度なのはをその場から退避させると、ラウンドシールドと断空を同時展開させて両者の攻撃を受け止めるが、怪物の攻撃力

はユーノが思っていた以上に強い力を持っていたことがすぐに分かった。

「く！」

苦い表情となるユーノを見ていたなのはは直ぐにその怪物目掛けて砲撃を放つ。

「エクセリオンバスター！」

だが、そのとき怪物は下僕と化したファンガイアを自身の盾として使いなのはのエクセリオンバスターを防ぎ切ったのであった。

これにはなのはやユーノも目を疑う。

「ファンガイアを盾に使うなんて・・・！？」

「成程。容赦は無用だな。」

ユーノはそう判断すると、抑えていた霊圧を上昇させると一気に瞬歩で怪物の死角へと回り込み怒涛の斬撃を加える。

「は！」

「ぐあああああ！！！！」

目にも止まらぬ魔導死神ユーノの斬撃に目を奪われるなのはを余所に、大きな傷を負った怪物は異常なまでに戦闘能力の高いユーノの方を凝視する。

「！貴様・・・・・その姿・・・さてはキバか？」

「キバ？違うな・・・生憎僕は君たちの知ってる”キバのユーノ・スクライア”じゃない。今の僕は、”翡翠の魔導死神ユーノ・スクライア”だ。」

そう言うと、ユーノは翡翠斬を放ち怪物にさらなるダメージを負わせる。

「ぐあああ！！！！」

怪物がかなりのところまで追いつめられると、なのははレストリクトロックを発動させて怪物の動きを完全に封じる。

〈Ｒｅｓｔｒｉｃｔ　ｒｏｃｋ〉

光の輪によって動きを封じられた怪物は弱り切ったからで必死に抵抗する姿勢を見せる。

「く！！小生意気な小娘め！！」

だが、そんな怪物に向かってなのははそのまま容赦のないエクセリオンを発動させて一気に勝負を仕掛けるのであった。

「エクセリオンバスター！」

なのはの強力な破壊力を秘めた魔力砲撃が怪物に向かって真っすぐ放たれると、怪物はそのまま砲撃に飲み込まれていった。

「！！なあああああああああ！！！！！」

怪物がエクセリオンバスターによって完全に消滅を果たすと、ユーノはなのはの元に近づき、なのははそんなユーノと軽いハイタッチを交わす。

「やったね♪」

「ああ。ありがとう、なのは。流石は管理局のエースオブエース。」

「にゃはは。ユーノ君こそ、翡翠の魔導死神でしょ♪」

勝利を勝ち取った二人はその後恋次達と合流を果たし、そのまま六課の方へと戻っていった。

そんなユーノとなのはの戦いの様子を、キャッスルドランと呼ばれる居城型の竜の内部でキバユーノを守護する六人のアームズモンスター、次郎・ラモン・力(りき)・鉄斎・クリス・ライガがカード越しにそれを窺っていた。

ガルダー族の最後の生き残りであるメイド服姿の女性の姿のクリスが戦いが無事に終わるのを見ると、安どのため息を漏らす。

「ふう～～～一時はどうなるかと思いましたわ。」

「ユーノ達もそうだけど、さっきの強え～～～・・・！！ねぇ、ねぇ。何者、あいつら？」

セーラー服を纏った少年姿のラモンはユーノ達が対峙した謎の怪物に興味を示し、次郎達に向かって質問をすると何かに気づいた様子の白髭を生やした老人の姿をした執事の鉄裁と燕尾服を纏った大柄

の男、力が声を上げる。

「まさか・・・!?」

「あやつら!!」

「ん?力様。鉄斎様?」

二人の様子に困惑する様子のクリスだが、傍で聞いていた最強の実力を保持する茶色の長髪で首の後ろで髪を結んだ瞳の色がカーマインの青年姿をしたライガが舌打ちをする。

「ちっ!ヴォルドの奴・・・よりにも寄ってまた面倒な奴らを!」

ライガの発した言葉を受けて、纏め役でありユーノからの信頼を一番受けるタキシードを着崩した次郎が徐にカードに描かれた模様を見ながらこう呟いた。

「ああ。もし、そうなら・・・“人類滅亡のカウントダウン”が、始まったことに・・・なる。」

次郎が口にした言葉が何を意味するのか?

この話の詳細はもう少しストーリーを見て生きながら徐々に説明をしていくとしよう。

高町ヴィヴィオは夏休みを楽しく過ごし終え、数日前から再び楽しい学校生活を送っている最中、ホームルームに担任のノアから教育実習生の紹介が始まる。

「はい、今日はみなさんに教育実習に来て下さった先生を紹介します。さ、自己紹介して。」

「は、はい・・・」

そう言われて、生徒たちの方に目を合わせてきたのは・・・キバユーノの世界で司書として働くファルコの姿であった。

緊張した様子でネクタイを締め直し、挨拶を始めるファルコ。

「今日から三週間。このクラスでノア先生やみんなと一緒に勉強することになりました・・・ファルコです。よろしく、お願いします。」

ファルコは挨拶を済ませ、全員に頭を下げると生徒たちはこぞって同じように挨拶をして頭を下げる。

「ファルコ先生は以前無限書庫に勤めていた凄く頭のいい先生です。分からないことがありましたら、私よりもファルコ先生に聞くようにしてくださいね♪」

「の、ノア先生！酷いですよ！」

「冗談だって♪さて、それじゃ取りあえず後ろの方で授業の様子を見ててくれるかしら？クラスの雰囲気とか先ず掴んでほしいし。」

「は、はい。」

ファルコはノアの指示を受けると、そのままヴィヴィオの真後ろに方へと向かい授業の様子を窺うことにした。

すると、いつも通り授業に集中していたヴィヴィオの頭に突如ファルコが念話を送ってきたのだ。

「（君、高町ヴィヴィオでしょ？こっちの世界の・・・）」

「（え！？何で私の事を！あなた一体・・・！？）」

「（聞いてないかな？別の世界からもう一人のユーノ・スクライアが来たって君のご両親から。）」

「（あ、そう言えば・・・実際に見ましたし。じゃあ、もしかしてあなたも！）」

「（そ。詳しいことは休み時間になってから話すよ。）」

やがて、休み時間がやってくるとファルコは廊下を歩きながら諸々の事情をヴィヴィオに話した。

ファルコがこの世界に訪れた訳、それは多忙なユーノに代わって自分がこの世界で起きている不可解な現象の調査とヴィヴィオの護衛を兼ねての事であった。

「それでこっちの世界に来たってことですか・・・」

「おやっさん・・・ああ、書庫長は書庫長で多忙だからって、司書長のロイドと一緒に来た訳。でもあいつはいいよ、直接六課に協力する形だから。俺なんか見ての通り教育実習生だぞ。ふざけんなよ、たく！」

「ははは・・・まぁ、でも私たちの事を心配してあっちの世界のユーノパパが対策を打ってくれたってことは凄く嬉しいですよ。」

「そうか・・・なら良いけど。ほんと、ヴィヴィオはこっちの世界でも滅茶苦茶いい子だよな～～～」

「え、そうですか?私は言う程いい子でもないと思いますけど。」

「その謙虚さがおやっさんとなのは姉さんにそっくりだって。」

ファルコはそんなヴィヴィオと共に教育実習生という形でヴォルドやチェックメイトフォーの動向に気を配りながら、調査の方を進めていくこととなったのだ。

ユーノ達が謎の怪物と対峙した三日後、今回の事件において重要な鍵となる一人の男が真夜中にミッドチルダ西部刑務所から脱走を試みようとしていた。

「居たぞ!!」

「待て!!」

脱走を測ろうとしているのは２２年前に投獄された死刑囚の杉村隆という男で、性根は非常に憶病な男である。

警報ベルが響き渡る中、杉村を追い詰めるために警備員は銃砲を逃走中の杉村に向かって発砲。

「ほえええええええええ!!!!!!!」

銃声に驚き、腰の抜けた杉村はその場に倒れると警備員に囲まれながら徐々に壁の方へと追いつめられていく。

「逃がさないぞ、杉村！」

「無駄だ！大人しくしろ！！」

警備員は一斉に壁を乗り越えようとする杉村を取り押さえようとし、杉村は必死に抵抗の姿勢を見せる。

「つ・・・捕まって・・・たまるか！！！！！！！！！」

杉村がそう声を張り上げたその瞬間、突然杉村の全身から途轍もない力が解放され取り押さえようとしていた警備員全員を吹き飛ばしてそのまま気絶させてしまった。

杉村自身は今のこの光景に目を疑いながら、これが自分がしたという事実に驚愕する。

「・・・何だ、これは・・・！？」

杉村は自分の力に疑問を感じながらも、警備員たちの目を掻い潜り刑務所内からの脱走に成功し、その杉村の事はロイドの口からユーノ達機動六課の耳にも伝わり、説明を受けているところでもあった。

「・・・杉村隆（すぎむらたかし）・・・ですか？」

「それって、僕らがそれぞれにＡＭ体とファンガイア、それにあの正体不明のバケモノと戦ったその三日後にミッドチルダ西部刑務所から脱獄したっていう囚人ですよね？それが何か・・・」

「ちょっと俺が持ってきたこの資料を見てくれ。」

ロイドはそう言うと、持ってきた杉村隆に関する資料をユーノに見せ、なのは達他のメンバーもユーノが持つその資料に目を向ける。

「この男、人間でない可能性が高い。上が２２年前に撮られ杉村の逮捕当時の写真だ。下が現在の杉村。」

「これは・・・？」

「まさか・・・！？」

二つの写真を見比べたなのは達であったが、杉村の容姿は２２年の歳月を感じさせないほど若く全く変わった形跡すら見せないものであった。

「全く年を取っていない。」

ロイドの言葉で全員の表情が一気に凍りつき、暫くの沈黙が流れると恋次が不意にこんな事を言ってきたのだ。

「なのはの母ちゃんみたいだな。」

「ぐ！れ、恋次さん！」

思わず自分の母親のことを言われて赤面するなのはであったが、ロイドは杉村に関する更なる情報を口にする。

「しかも、この男は既に死刑執行されてる筈だが・・・何故か生き

てる・・・」

「と言うことは、ファンガイアの可能性が高いと？」

「調査してみる必要がありそうやな。」

はやては顎に手を当てながら調査の必要性があると判断し、ロイドと恋次の二人をそのメンバーに抜擢して調査に向かわせた。

その頃、刑務所から脱走を果たした杉村はゴミ捨て場に置かれたゴミ袋に体を預けながら盗んできたパンを口にし、乾いた相貌でじっと虚空を見つめていた。

「・・・は～～～」

すると、その杉村の横から不意に調査で周囲を散策していたロイドと恋次に発見される。

「・・・杉村隆・・・だな？」

「！」

二人の姿を見ると、杉村は虚ろな表情を一変させて二人から逃れるために抵抗する姿勢を見せ、一瞬の隙をついてその場から全速力で逃走。

「待て！！」

杉村を追っていく二人だが、その時恋次は杉村が向かった方角に違和感を感じてしまう。

「おい！こっちの方角って確か・・・！」

恋次が危惧したのは、その方角にあるのがヴィヴィオの通う学校であったことだった。

ヴィヴィオは杉村が自分の学校に向かって走っているとは夢に思わず、ファルコや他の生徒たちと同様休み時間を堪能していた。

「人間のライフエナジーを吸って生き永らえるなんて・・・怖い話ですね・・・」

中央の階段を降りながらファルコの話を真摯に聞くヴィヴィオにファルコはキバユーノが試みようとしていることについて語り出す。

「おやっさんは常々、そう言ったファンガイアと人間の間に生まれる相違と価値観の違いに苦しんで生きていた。そして、二度と軋轢が生じないようにファンガイアと人間が共存できる世界を目指して今なお奮闘してるんだ。無限書庫の業務と並行してな。」

「そうなんですか・・・ん？」

と、その時だった。

「きゃあ！！！」

生徒の一人が突然悲鳴を上げたかと思えば、学校の玄関から何の前触れもなく入り込んできたのは脱走者の杉村だった。

「うおおお！！！おらあああああ！！！ひえええ！！！」

奇声を発しながらその場にあった置き傘を振り回し生徒たちを恐怖させる杉村。

そんな杉村を後ろから追って来たロイドと恋次。

「杉村！！」

「待て！！！」

「ロイド！？」

「恋次さんも！」

二人の登場に驚愕するヴィヴィオとファルコだが、杉村は二人が追って来るのを見るとそのまま中へと進み階段近くに立っていたファルコを殴りつけ、ヴィヴィオを人質に取った。

「ぐああ！！」

「きゃあ！！」

「近寄るな！！こいつがどうなってもいいのか！？」

杉村はヴィヴィオを人質にとり、持っていた傘を突き付けながら恋次とロイド、他の生徒たちを動けなくした。

「ヴィヴィオ！」

「このカスが！！」

恋次は我慢できなくなると、そのまま杉村に向かって飛び出し顔面を殴りつける。

唇を切った杉村は手で血を拭いながら憤慨し傘を突き上げた。

「！き、貴様！！」

「いやあ！！」

恐怖に怯えてしまうヴィヴィオだったが、その瞬間ファルコが消火器を持って杉村に向かって煙を発射する。

「おやっさんの大事な娘に手を出すんじゃねぇ！！！」

「ぐあああ！！！」

「ナイスだ、ファルコ！」

怯んだ杉村を見たロイドと恋次はそのまま二人がかりで杉村を抑えつけ、ファルコは解放されたヴィヴィオの安否を気遣う。

「大丈夫か！？」

「は、はい！」

その後、駆けつけた地上部隊の車に乗せられ恋次とロイドの間で萎縮した様子で連行されていく杉村。

「全く。これだから脱獄囚は・・・」

呆れかえった様子で恋次がそう口にした時、思わぬ事態が発生する。
何の前触れもなく、走行する自分たちの車目掛けて火炎弾が仕掛けられたのだ。

「「!?」」

突然の事に大いに驚く三人だったが、そんな三人の目の前・・・車のフロントガラスに下りてきた謎の怪物。

「うわ!!」

運転手はいきなりの登場に恐怖を覚えてしまうが、その後ろのガラスにも同じような姿の怪物が下りてきたのだ。

「「「!」」」

怪物二体は車を上手い具合に工場のような場所に誘い込むと、そのまま車を強制的に停車させるのであった。

危険だと感じた恋次とロイドは杉村を連れてその場から離れることとした。

「危ない!出るぞ、杉村!」

「はい!」

すると、車の外から出て途端襲撃してきた謎の怪物が目の前に現れたのだ。

恋次達はその怪物の姿を凝視しながら、声を漏らす。

「こいつは・・・ユーノ達が言ってたバケモノにそっくりだぜ・・・」

「同種か・・・？」

怪物二体は驚愕する恋次達を余所に、その場に片膝をつくと仰々しい姿勢で杉村に向かってこう言って来たのだ。

「お迎えに上がりました。」

「我らが王（ロード）。」

「「何！？」」

「何だこいつら！？」

怪物の言葉に耳を疑う恋次とロイド、恐怖に満ちた表情を浮かべる杉村だったが、杉村以上に恐怖を抱いた車に乗っていた地上部隊の局員二人が怪物の一体に向かって魔力弾を発砲する。

「うわああ！！」

局員の攻撃を受けた怪物は怒りを募らせると、頭部の蛇による噛み付きで、攻撃してきた局員二名を攻撃し、咬みつかれた二名はそのまま頭部を抑えてもだえ苦しむ。

「「ぐあああ！！！！」」

怪物は杉村に向かって直進をしてくる中、恋次とロイドは杉村を後ろに後退させる。

「うわあああああああ！！！」

杉村はその場に腰を下ろすとあまりの恐怖で失禁してしまう。

「行くぜ。」

恋次は斬魄刀を取り出し、ロイドもイクサナックルを取り出しイクサへと変身する。

〈Ｒｅａｄｙ〉

「変身！」

〈Ｆｉｓｔ　ｏｎ〉

「ふん！」

ロイドはイクサカリバーをガンモードにして、そのまま勢いよく銃弾を発射するが怪物は姿を消すとロイドの真横に唐突に現れ攻撃を仕掛ける。

「ぐあああ！！」

「この！蛇尾丸！！」

恋次はロイドを助けるために攻撃を仕掛けてきた怪物目掛けて蛇尾

丸を延ばすが、その途端再び怪物の姿が消えてしまう。

「何！」

すると、驚く恋次の背後よりもう一体の怪物が猛烈な勢いを持った攻撃を仕掛け、恋次はそれに直撃してしまう。

「のあああ！！」

二人が怪物によって窮地に立たされている頃、ファルコより連絡を受けたキバユーノはキバットから与えられたキバ専用モーターサイクル、マシンキバーを走らせロイドたちの元へと急行していた。

「ファルコから要請があって、急いで駆け付けてみたけど・・・この世界のもう一人の僕の仲間やロイドさんが危ない！キバット！」

「よっしゃあ！！キバっていく・・・ていけね！」

キバットは飛び回りながらユーノが着けていた手袋を外すと、咬みつき魔皇力を注入。

「ガブっ！」

「変身」

キバユーノはそのままキバへと変身し、バイクを加速させて現場へと向かう。

「「ぐっ！！」」

その間に追い詰められた二人は満身創痍の状態となっており、状況は切迫していた。

「ふふ・・・お!?」

止めを加えようとしたとき、怪物の背後からマシンキバーに乗ったユーノが勢いよくバイクを走らせてきたのだ。

「貴様、キバか!?」

「も、もう一人のユーノか!?」

キバユーノはバイクの勢いを利用し、パワーがあると思われる怪物の体を吹き飛ばした。

「ぐあああ!!」

キバユーノはそのままその怪物と対峙し、ロイドと恋次は満身創痍の状態でも戦う姿勢を見せ人格が女と思われる蛇の頭で攻撃を仕掛ける相手と交戦を続ける。

しかし、指折りの実力を有する三人を相手に怪物はその三人を凌駕する凄まじい戦闘能力を発揮させ逆に三人を追い込んでいく。

「「「ぐあああ!!」」」

思った以上の強敵を前に、救援に着たキバユーノでさえも追いつめられてしまう程のこの状況に恋次は思わず苦い表情となる。

「くそ!このままじゃ・・・!」

だが、そんな時だった。

近付いてくる怪物たちの背後からキバットに非常によく似た姿の白い蝙蝠が怪物たちを襲ってきたのは。

「てやあああ！！！」

「「「！？」」」

怪物たちもこれには驚き、後ろを振り返ってみるとそこに居たのはヴォルドに仕えるチャックメイトフォーの一人である、参謀ヴィショップであった。

ヴィショップの事を知らない恋次はきょとんとした様子でそれを見つめる。

「何だ・・・あの男は・・・？」

一方でヴィショップの正体を知っているユーノやロイドは驚愕の表情を浮かべる。

「あれは！」

ヴィショップは怪物たちを目にしながら深い溜息を吐く。

「・・・何とも哀れで脆い連中だ。だが、貴様たちはこの程度の相手に何故手を焼いている。その事の方が・・・私には愚かと映る。私が直接手を下そう。キバ・・・そして、その仲間達よ。レイキバット」

「行こうか。華麗に激しく！」

ヴィショップはそう言うと、飛んでいた白い蝙蝠であるレイキバットを呼び寄せ装着変身を行う。

「変身。」

「ヘンシン！」

レイキバットが腰のベルトに装着されると、ヴィショップの容姿はモチーフがイエティであり基本カラーが白の仮面ライダーレイへと変貌する。

「なっ！？一体どうなってるんだ！」

「は！」

驚くばかりの恋次達を余所に、レイは何故か怯えている怪物に向かって腕部の鋭い爪による攻撃を仕掛け、圧倒的な戦闘能力を披露する。

「「ぐあああ！！」」

その様子を離れたところで見ていた杉村は思わず素直な感想を呟いた。

「すげえ・・・！」

「どうか・・・お許しを！！」

怪物の一体が冷徹な眼差しで自分を粛清しようとするレイに許しを請おうとする中、レイの言葉は何もなく、そのまま零ケルビンにも匹敵するほどの冷気で凍りつかせる。

「ひやあああ！！！」

「な・・・ふご！？ごあああああ！！」

粛清される様子を見ていた杉村が驚いていると、背後から粛清から逃れたもう一体の怪物が杉村の口を押えてそのまま杉村を連れて逃走する。

怪物が杉村を連れてその場から居なくなったことを確認すると、レイは鼻で笑う。

「ふん。悪運の強い奴らめ・・・」

「おい・・・！」

すると、そんなレイに向かって恋次が声をかけてくる。

「おや？まだ息があったのか・・・しぶといものだ。」

「てめぇ！！！名前ぐらい名乗りやがれ！！」

「私はヴォルド様に使えるチェックメイトフォーの一人・・・ビショップ。又の名を、氷結の戦士、レイ。」

「ビショップ・・・貴様までもが・・・！？」

「く！」

歯がゆい思いでヴィショップの登場に危惧の念を覚えるキバユーノとロイド。

「キバ。今度会う時は貴様の息根を止めていよう。それまで体を凍えながら縮ませているがいい。」

その瞬間、レイは絶対零度の冷気を発生させるとその場から闘争を果たす。

冷気を受けた三人が目を開けたときには、ヴィショップの姿はなかった。

「ち、逃がしたか・・・！」

「どうやらそうらしい・・・は、は、ハクション！」

恋次は冷気を受けたことで急激に体が冷えてしまい、思わずくしゃみをしてしまう。

ビショップから逃げられた三人は傷の手当と状況報告の為に六課へと帰還するが、恋次の容体は悪化し完全に冬のような体制となっていたのだ。

「ハクション！全く！酷い目に遭ったぜ・・・は、は、ハクション！！！」

「すみません。僕がもっと早く駆けつけていたら、こんな事には。」

キバユーノは責任を感じてしまい、項垂れてしまうがそれを傍で見ていた魔導死神ユーノとキバットが声をかける。

「君が謝る必要は無いさ。そう気を落とさないで。」

「もう一人のユーノもそう言ってることだし、この件はもう無しだぜ。」

「うん・・・」

「それにしても、キングに続いてビショップか・・・難儀な敵がぎょうさん出て来おったな・・・」

「あと、ロイドさんと恋次さんを襲ってきた店長達が対峙した奴と同種だって推測するあれは何だったんだろう？」

「もう一人の僕。あれのことは分かるかい？」

「ああ、あれは“レジェンドルガ”だよ。」

「レジェンドルガ？」

訝しげな様子のなのは達に、キバットは更に続ける。

「ある意味ファンガイアよりもずっと恐ろしい存在だ。でも俺にも分からない・・・レジェンドルガは、嘗てキバの力によって封印されたはずなんだがな・・・」

彼らはどの種族とも違う形態と種族間の統一性のない外見を持ち世

界中に残る様々なモンスター伝承を残す異形の種族。

他の種族を洗脳、奴隷化して同族へ転化させて数を増やす特性を持ち、ファンガイア族よりも更に高次の存在だと自負し、この世の支配者となろうと目論んで太古の昔にファンガイアと大戦争を繰り広げたが、最後にはダークキバの手によりほぼ全滅した。

ティアナはキバユーノにレジェンドルガに関する詳しい説明を要求する。

「もう少し、詳しく教えてくれませんか。レジェンドルガについて。」

その頃、杉村隆を連れ去ったレジェンドルガの一人、メデューサレジェンドルガは仲間のレジェンドルガと共に不気味な居城の中である儀式を開いていた。

「ロード・・・覚醒する・・・」

レジェンドルガの王である杉村を宙に浮かび上がらせた状態で、魔皇力を注入していく彼ら。

そして、最後の注入が完了すると杉村は完全に覚醒しかけていた眼鏡を投げ捨てて、全身から強大な魔皇力を発してレジェンドルガ達を跪かせるのであった。

「・・・――――」

同じとき、魔導死神ユーノ達六課の一同はキバユーノからレジェンドルガが何故復活を果たしてのかその理由を聞かされていた。

「レジェンドルガ復活のキーマンは、あの脱獄した死刑囚・・・杉村だ。」

「どう言うことです?」

その時、キャロの言葉の後にロイドが対峙した時のレジャンドルガの言葉を思い出し徐にこう口にした。

「奴らは、杉村を“ロード”と呼んでいた。」

「そしてこれが、杉村が収監されていた刑務所のデータファイルだよ。」

キバユーノはそう言うと、全員にそのデータファイルを公開し六課の面々はその中に書かれていることを凝視し、キバユーノの話は更に続いた。

「それによると、杉村は２２年前・・・刑務所に慰問ライブに訪れていたトア・サカキバラなる音楽家を人質にとり、脱走を図っている。そしてその騒動の最中・・・刑務所の地下から古代遺跡が発見されたらしい。」

「古代遺跡!?まさかそれが・・・!」

「多分、レジェンドルガの封印架が収められていたんだろうね。」

「でも、そこに何があったとしても・・・もうどうしようも無いじゃないですか!?結局は２２年も前・・・過去の出来事なんですから。」

ティアナの考えは常識に即したもっともな正論に違いはなかったが、キバユーノはそんな正論を聞くとある驚くべきことを口にしようとした。

「確かに、ティアナの言ってることは間違いじゃない。一般的にはそうとしか言いようが無いからね。」

「？もう一人の僕・・・ひょっとして何か隠してるでしょ？」

「御名答。みんな、ちょっと僕に着いて来て。案内したい場所があるんだ。」

キバユーノはそう言うと、全員を並行世界から連れてきたキャッスルドランの中へと案内し胸の高鳴りが抑えられないでいる全員を余所に奥へと進み、広い空間へと連れてくるとそこで衝撃的な事を口にする。

「過去に行けるって・・・そんなまさか！？」

「バカ！本気（マジ）だ、本気！」

「その通りだ。」

すると、半信半疑の全員の元にユーノを守護する六体のアームズモンスター達が人間体として現れ、次郎が声をかけてきた。

「次郎・・・鉄斎達も・・・」

「このキャッスルドランには時空を行き来できる扉がある。」

「然様でございます」

「レジェンドルガの力は・・・恐ろしい！！」

「そうそう。多分、このままだとヴォルドの思惑通り、人類は滅ぶだろうね。」

「「「そ、そんな！？」」」

「ま、俺としてはどちらでも良いがな・・・」

「ちょ、ライガ様！不謹慎なことは言わないで下さい！」

ライガの爆弾発言に思わず口を挟むクリスであった。

「どうする、お前ら？行くか・・・２２年前の世界に？」

キバットがそう促すと、全員の気持ちは既に決まっていた。

「・・・ふん。そんなもの、態々尋ねることもねえだろ。」

「行って解決すれば済む話なら、行くしかねえだろ！！」

「「「「「おお！！！」」」」」

なのは達の決意の表れを確認すると、キバユーノは魔導死神ユーノに目を合わせる。

「決まりだね。」

「そうだね♪」

次郎達は早速特別な鍵を持ってくると、タイムスリップが可能な「時の扉」にそれを差し込み徐に扉を開く。

「頑張ってね、ユーノ♪それから、もう一人のユーノやみんなも♪」

「ご健闘を祈りますよ！」

扉が開かれたその瞬間、全員は白い光の中へと吸い込まれあまりの眩しさに目を瞑ってしまう羽目となった。

「「「「「「「う！！！！！！！なあああああ！！！！！」」」」」」」

そして、キバユーノ・魔導死神ユーノ・なのは・恋次の四人が一緒になって辿り着いた場所とは――――――

「わあ！！」

「痛い！！」

四人が辺りを見渡してみるとそこは非常に狭い空間であり、それと同時に用を足す際の独特のにおいが充満する場所、即ちトイレに来ていたのであった。

「おい・・・ここってトイレじゃないのか？」

「しかも男子トイレ・・・！！いやだあ～～～！！」

なのはは思わず悲しくなってしまい、声を上げて嘆く。

「取りあえず、外に出ましょう・・・」

人目を気にしながら外に出ることに成功した四人は直ぐに一緒に来ていたスバル達を捜すために周囲を見渡す。

「スバル達もちゃんと来てるかな？」

暫く辺りを見回していると、スバル達の方が先になのは達を発見し駆け寄ってきた。

「あ、なのはさん！ユーノ先生！」

スバル達全員も無事に過去の時間に来ていたことに安堵のため息を吐いた四人であったが、ギンガはその四人にたまたま見つけた新聞の一部を見せてきた。

「これを見てください！」

四人がそれを手に取って年数を確認すると、そこには確かに２２年である新暦５７年と表記されたものがあった。

「新暦５７年・・・」

「本当に来たんだね、過去の世界に。」

「そうみたいだな・・・」

キバユーノ以外の三人はいまだに信じられない様子であったが、周

りの景色を見渡してみると嫌でも納得するしかなった。

「これからどうするんですか？」

「そうだな・・・なのは達は一先ずこのトアさんを捜すのに尽力してほしい。」

魔導死神ユーノは懐から慰問ライブに訪れる予定であるトアに関する資料を手渡す。

「ユーノ君たちは？」

「違う方面からアプローチしてみる。刑務所に慰問ライブに来るんなら、やっぱあの方法だろ。」

「おい・・・まさか・・・ひょっとして・・・！？」

恋次は嫌な予感でいっぱいだった。

そして、その予感は見事なまでに的中し恋次・キバユーノ・魔導死神ユーノ（変装）は潜入捜査という形でオレンジ色の囚人服に身を包み、刑務所内に入っていくのであった。

「ほら、歩け。」

刑務所の中へと連れて行かれる恋次達一行であったが、毎度のことながら貧乏くじを行く自分たち周りに不安を感じる恋次。

「（やっぱこう言うことかよ！）」

「（潜入捜査の念も入れとくのは当然ですよ、恋次さん♪）」

「（何でお前はやけに楽しそうなんだよ。）」

「（気のせいですって♪）」

三人は一先ず刑務所内に潜入して調査の方を進めることとなったが、果たしてうまくいくのかどうか――

その頃、慰問ライブに訪れる予定である音楽家トア・サカギバラを捜索するため町中に展開する六課の全線メンバー。

スバルとティアナは限られた時間の中で何としても見つけ出そうと躍起になっていた。

「見つからないな～～どうしよう！？」

「見つけないといけないんだから、頑張りなさいよ。」

「でもさ・・・・・あれ？」

すると、愚痴をこぼしかけたその瞬間スバルの目に飛び込んできたバイオリンのケースを抱えた女性の姿。

スバルとティアナはその女性を見ると、直ぐに手元の資料を確認してそれがトア・サカキバラであると判断し行動に移る。

「あの！トア・サカキバラさん・・・ですよね・・・？」

「どちらさまですか？」

「すみません・・・お願いがあるんです！」

「お願い？」

スバルは改まった様子でサカキバラの手を引っ張ると、困惑する彼女に向かってこのように要求してきた。

「あの・・・あなたはもう直ぐミッドチルダ西部刑務所に慰問ライブに行きますよね？勝手な事ではありますけど・・・それを中止してください！！」

「は！？何なのいきなり・・・失礼しちゃうわ！！」

あまりの唐突且つ無礼な物言いに癇癪を起したサカキバラはそのままスバルの前から立ち去っていく。

「ああ！！トアさん！！」

「スバル待ちなさい！！あの人の言う通りよ！ストレートに何でも話せばいいってものじゃないでしょ！！」

スバルの大胆なやり方に呆れながらも客観的な観点からそう口にするティアナ。

「だけど！！時間があまりないし・・・あ！！待ってください！！」

スバルはティアナの話を無視ししてサカキバラの後を追いかけ、執拗にその後も慰問ライブの中止を要求する。

「お願いです！話を聞いて下さい！あなたが刑務所に行くと、とんでもないことが起こるんです！」

「ちょっといい加減にしてよ！何なの一体！あなた何・・・！？」

「何訳の分からないこと言ってるの！言っとくけど私は音楽家よ！音楽は、傷ついた人たちを癒すためにある。私はそのために生きてるの！刑務所の人達だって例外じゃないわ！」

「！」

真摯な眼差しで自分の仕事を誇りに思っているトアを見て、それ以上何も言えなくなってしまったスバルは他に言い返す言葉が見つからず結局彼女を見逃してしまう事となった。

そして、あとでティアナからとびっきりのお仕置きを受ける羽目となったのだ。

一方その頃、刑務所内に潜入していたユーノ達三人は同じ牢屋の中で残り僅かとなりつつあった時間を気にしつつ、これからのことを話していた。

「で、入ったはいいが俺達ずっとこのままかよ！？」

「焦らないでください。チャンスを待つんです。」

「そうですよ。大体、こうやって変装して入れるどうかも危うかったんですから、まだいい方ですよ。」

「そりゃそうだけどよ。何で俺ばっかりが貧乏くじ引くんだよ？」

「そう言う役回りだからですよ♪」

「飄々とした態度で言うんじゃねぇ！」

魔導死神ユーノの軽い口調に思わず癇癪を起す恋次であったが、その時キバユーノは刑務所内から鳴り響いてきたバイオリンの音に耳を傾ける。

「ん！？し、静かに！」

二人もその音色に耳を傾けると、それが直ぐにトアが奏でるバイオリンの音色であると言うことを悟る。

「このバイオリンの音色は？」

「そっか、今日なんだ！トアさんが刑務所に慰問ライブにやってきて、バイオリンの演奏を聞かせるのは。」

「と言うことは、この後に杉村がそいつを人質にとってその後で古代遺跡が見つかるんだよな・・・」

「なのは達。間に合ってくれるかな！？」

なのは達の到着を心待ちにしながら、徒に過ぎていく時間に内心焦燥を抱いていた三人。

するとその時、最も三人が訪れていた事態が起こってしまう。

「きゃあああ！！！！」

慰問ライブに訪れていたトアの演奏の途中で、杉村がホールのブレーカーを落とすと暗がりの中でトアを人質に取ったのだ。

「近寄るな！！」

「待て！！」

警備員の甲高い声を耳にした瞬間、三人は檻の外でトアを人質に取ってガラスの破片を持った杉村を目撃する。

「おい！」

「しまった遅かったか！」

警備員の一人が興奮した様子の杉村に向かって声をかえる。

「無駄な真似は止めろ、杉村！！」

「うるせえ！！こんな所で死んでたまっか！こっから出せ！！さもないとこの女の命は・・・」

武装した警備員が杉村の周りを囲み、檻の中でそれを見ていたユーノ達は手を伸ばしてトアを救出しようとするのであった。

「トアさん！！」

「止めろ！カス！！」

「邪魔だ！！」

興奮した杉村はそう言うと、ガラスの破片で魔導死神ユーノの手を斬り裂きその痛みで魔導死神ユーノは声を上げて苦しむ。

「ぐあああ！！！」

「ユーノ！」

「もう一人の僕！」

この様子を見た途端、警備員の一人が檻の鍵を開けるとキバユーノと恋次を押しのけ一目散にユーノの怪我を心配する。

「おい、大丈夫か！？」

「あなた、名前は？」

「俺？三条。」

「三条さん、ごめん！」

「うわあ！！」

魔導死神ユーノはそう言うと、目の前の三条をトイレの中に突っ込みそのまま恋次達を連れてトアを救出しようとした。

三人は警備員の被っていた帽子を取り上げるとそれを杉村に向けて投げて隙を作り、警備員と協力する形でトアの救出に成功する。

キバユーノはトアの救出に成功すると、トアの安否を確認する。

「大丈夫ですか?」

「あ、はい・・・ありがとう。」

杉村は警備員全員に取り押さえられるとそのまま何処かに連れていかれようとしていた・・・だが、その時不測事態が発生する。

ユーノ達の入って檻から奇声を放った三条がまるで人が変わったかのようにその場から出て来ると、化けの皮を剥いでゼブラファンガイアとなって現れる。

「三条さん!」

「ち。よりによってファンガイアか。」

ゼブラファンガイアは武装した刑務官たちの攻撃をものともせずに次々となぎ倒していく中で、トアのライフエナジーを奪うために牙を向けてくる。

「!きゃあ!!」

「トアさん!」

「野郎!」

魔導死神ユーノと恋次はゼブラファンガイアの強行を止めるために素手で立ち向かっていくが、武器の無いこの状況かつ力を極端に制限した今の状態では無謀に近く、二人はゼブラファンガイの足で踏みつけられる形となった。

「「ぐっ！！！くる・・・しい！！！！」」

「武器は持ってないし・・・どうすれば・・・！？」

困惑した様子でどうすることも出来ないでいるキバユーノだったが、その時漸くなのは達が騒ぎを駆けつけてその場に到着する。

「ユーノ君！」

「「！？」」

「リボルバーシュート！」

スバルはリボルバーシュートを使い、ゼブラファンガイの背中を攻撃する。

二人は足の下から出て来ると、直ぐになのは達の元に駆け寄った。

「へ。遅いんだよ！」

「ごめんなさい。ユーノ君。恋次さん。これを受け取って！」

なのははそう言うと、階段の上から預かっていた魔導死神ユーノの仕込み杖と恋次の斬魄刀を二人に投げつける。

「ありがとう、なのは♪」

二人は早速刀を抜くと、ゼブラファンガイアに向かって反撃を開始。

「もう一人の僕。なのは達と一緒にトアさんを頼むよ。」

「分かった。さ、こっちに。」

「はい！」

トアはキバユーノとなのは達と共にその場から退避する。

その間に、魔導死神ユーノと恋次は斬魄刀による怒涛の攻撃を加え続ける。

「一気にいきましょう、恋次さん。」

「おう！」

二人の行動に触発された刑務官が武器を手にして攻撃してくると、ゼブラファンガイアはそんな刑務官に向かって衝撃波を発射する。

「「「「ぐあああああ！！」」」」

「ひいい！！！」

その場に座り腰の抜けていた杉村が恐怖のあまり手で頭を押さえていると、壊れた壁の向こうから奇矯な空間が広がってきた。

「・・・何だこれは・・・！？」

恐る恐るその中に入っていく杉村だったが、それこそユーノ達が止めようとしていた邪悪なるレジェンドルガの王の力が眠る古代遺跡だったのだ。

杉村はその中央にある棺らしきものにそっと手を触れると、棺に描かれた紋章が光り出した。

「うわああ！！！」

驚くばかりの杉村だったが、その瞬間棺の箱が開かれると中から封印されたレジェンドルガの王の魂が出現し、杉村の体の中へと入り込んでいった。

「うわあああああああああああ！！！！！！！」

そんなことなど知る由もなかった二人はゼブラファンガイとの戦いに終止符を打つために、斬魄刀を突き刺して体を突き刺す。

「これで終わりだ。」

二人は狙いを定めると、掌から詠唱破棄で赤火砲を発動する。

「「破道の三十一　赤火砲！」」

二人の破道に直撃した瞬間、ゼブラファンガイアは粉々に砕け散っていった。

「良かった。これでレジェンドルガ復活は阻止されましたよ・・・！」

「あとはヴォルドの方を捕まえるだけだな。」

「急いで帰りましょう。」

魔導死神ユーノはそう言うと、気絶している刑務官に気づかれないように恋次を連れてその場から退散する。

それが結果的に、大きな過ちを導いてしまう事になるとは思ってもいなかったのだ。

レジェンドルガの王の魂に憑依された杉村は遺跡の中で気を失っていたが、その杉村の元に歪められた時空の穴を掻い潜って現れるヴォルド。

「ふふ・・・成程・・・これはちょうどいい身体を見つけた。」

ヴォルドはそう言うと、そのまま気絶している杉村の体に入り込んで憑依していたレジェンドルガの王の魂さえも取り込み己の力としてしまったのだ。

そして、目を覚ますとヴォルドは杉村の体を借りて甲高い声で不敵な笑みを浮かべる。

「ふふふふはははははは！！！！！！」

このヴォルドの行動によって、歴史の流れは大きく変わってしまい更に入り組んだ複雑な事態へと事件は発展していく。

この先、一体ユーノ達の身に待ち受けるものとは何か！？

ウェイクアップ！

運命の鎖を、解き放て！！

迫りくる邪悪な影・レジェンドルガ（後書き）

教えて、ユーノ先生！

ユ「今日はもう一人の僕が務める無限書庫の詳細を教えるよ♪じゃ、もう一人の僕・・・お願いね。」

別ユ「はいはい。では、無限書庫で働く僕の家族たち主要メンバーをご紹介するよ。司書長のロイドさんは嘗て地上部隊最強の魔導剣士と呼ばれ、模擬戦ではゼストやなのはにも辛くも勝利するほど。とある事情から地上部隊を辞め、無限書庫に勤務している司書の中では一番の古参の一人だ。」

別ユ「ファルコは司書だが、実はファンガイアとガルーダ族のハーフ。両親はファンガイアに殺され、逃げていたが人間の研究員につかまり、人工的にフェニックスを生み出す実験台にされていた。その過程で再生能力を持つモンスター態が炎を纏った形態、不死鳥モードを手にして、そこを僕が助けてそれ以来僕の事を仕事柄は書庫長と呼ぶけど、プライベートで敬意を込めて「おやっさん」と呼んでいる。」

キ「もっと詳しいことを知りたい奴は、ユーノ君大好きっ子さんの『翠桜のふれあい』にアクセスだ！キバって見ようぜ！」

ク「相変わらずこの声は妙に腹が立つな・・・」

キ「それは俺の台詞だ、ボケ！！」

魔導師図鑑ハイパー！

別ユ「へぇ～～～じゃあ、君の知り合いにも変身する人がいるんだ。」

ユ「うん♪夜一さんって言ってね、僕の瞬歩の師匠なんだ。普段は男みたいな声の黒猫なんだけど・・・変身を解くとそれはえらいことになるんだ。」

キ「えらいことってなんなんだよ?」

すると、実際にルキアと恋次が夜一本人を連れてくる。

恋「ほれ。実際に連れてきたぞ。」

夜「見るがいい。儂の真の姿を・・・・・・」

そして、夜一の真の姿を目撃した瞬間・・・別ユーノとキバットは揃って鼻血を出して昏倒する。

影で見ないようにしていていたユーノ達はというと・・・

ル「やはりあれは刺激が強すぎたのではないか?」

ユ「せめて変身を解いても服ぐらいは着ていて欲しいですよね。」

恋「全くだ・・・」

魔導界の王（前書き）

キバットリビア

キ「『刎頸の交わり』とは、頸を刎ねられても悔いない親密な交友という意で、生死をともにする親しい間柄をいう。中国、戦国時代の趙の武将廉頗は、藺相如が秦との外交交渉に成功を収めて帰国し、自分より上位の上卿になったのを怒って、彼を路上で辱めようとしたが、藺はこれをよく忍んで逃げ隠れ、「両虎相争い国家を危うくする」と語った。のちにこれを伝え聞いた廉は大いに恥じ、藺の門に至って謝罪し、「卒に相与に驩して、刎頸の交をなす」と伝える『史記』「廉頗藺相如伝」の故事による。」

キ「みんなも、そんな親友を作れたら人生がきっと楽しいぞ！」

魔導界の王

＞ｉ１８１８８―７０９＜

ヴォルドの介入によって過去が大きく変わってしまい、その後の未来に恐るべき事態が待ち受けていることなど知る由もない機動六課

一同はキバユーノと共に無事に元の時間に戻ることが出来た。

「痛い！！」

着地場所が良くなったのか、打ち身を作ってしまったなのはであったが直ぐに魔導死神ユーノの手を借りてその場から立ち上がり、スバル達と共に辺りを見渡す。

「ほ。どうやら元の世界に戻ってきたようだ。」

「割と世界も平和そうですね。」

「そうね・・・あら？」

と、ギンガが辺りを見渡した時だった。

頭上に浮かぶ奇妙な月の形に目を奪われ、怪訝そうな表情を浮かべていると偶然にも通りかかった人間の一人が目を不気味に輝かせると、何の前触れもなく自分の手を蛇のように伸ばしていきユーノ達を襲って来たのだ。

「！逃げて！！！」

突然のこの事態に一同は大いに驚くばかりであった。

ビルの陰に隠れて攻撃から逃れたなのはやユーノ達は過去の事件は修正されたとばかり思っていたのでこのサプライズは全く期待していなかった。

「そんな！？」

「ど、どう言う事!?過去は修正されたはずなのに・・・何でこんな有り様に!?」

「どうやら、何所かでとんだ誤算が発生したようだ・・・ね!」

魔導死神ユーノはそう言うと、向かって来た触手を晩翠で斬りおとしてそのままバインドで襲撃してきた人間の体を抑えつける。

「ぐあああああああ!!!!!」

襲撃者がユーノの固いバインドに締め付けられるのを見、なのはは全員に呼びかけて機動六課に帰還することを促す。

「みんな、一度六課に戻るよ!!!」

「「「「「はい!」」」」」

また、同じころヴィヴィオの学校でも同様の事態が起こってしまい生徒たちは変貌した教師たちから逃げ惑っていた。

「きゃああ!!!」

「早く、逃げるのよ!!」

「くそ!最悪だ!!」

ファルコはヴィヴィオの手を引くと、そのまま騒動に紛れる形でなのは達が待つ機動六課に連れて帰ることにした。

「ヴィヴィオ、六課の方が安全だ！友達もそこに連れて行くぞ」

「は、はい！」

ファルコとヴィヴィオは出来るだけ助けられる友達を連れて機動六課の隊舎目指して全力疾走で駈け出していった。

ミッドチルダに訪れる人類最悪の出来事。

多くのものがレジェンドルガの術中に陥り、自我を失い怪物と化して無作為に人々を襲い恐怖のどん底に突き落としていく。

「きゃあああああああ！！！！！」

「あああああああ！！！！！」

そんな人々の叫び声をレジェンドルガの王の魂さえも己のものとしてしまったＡＭ体、ヴォルドーは凄まじい力を手にしたことで、チェックメイトフォーと共に全てのレジェンドルガの頂点にも立ち、居城の中で無数の楽器から伝わる人間の叫び声を堪能していた。

「う～ん。いつ聞いてもいいものだな。人間どもの悲鳴は・・・」

「あれは我々の音楽だもの。」

「あとはキバを倒すだけだ。嘗てこの俺を寸での所まで追い込み、アークを封印したキバ・・・今キバに選ばれしものを倒す。ユーノ・スクライア・・・・・それが俺の復讐だ。」

ヴォルドはそう口にすると、徐にトランペットを手に取り息を吹き

込むとトランペットの音は人間の叫び気が混じった音となり、飾られていた絵画をも歪ませる。

「きゃあああああ！！！！！」

居城が聳え立つその上空には不気味な黒い瞳を浮かべた月が世界を照らし、なおも人間たちを恐怖のどん底に陥れようとしていたのだ。

さて、何とかレジャンドルカから逃げてきたなのは達一向は司令室に集まると困り果てた様子でこの不測の事態に関する解決方法を模索していた。

「はぁ～～～何がどうなってるんだよもう～～～」

ヴィヴィオを連れて帰ってきたファルコは思わずロイドに愚痴をこぼす。

「俺に聞くな。確かに過去は修正された筈だが・・・何処かで筋道が間違ったか・・・」

「どうなっちゃうんですかね、私たちの世界・・・」

「ごめん・・・僕の所為だ・・・」

キバユーノはまたしても自分の所為だと思い込んでしまい、重い表情を浮かべその場に手をついて土下座をして謝ってきたのだ。

それを見た途端、魔導死神ユーノはキバユーノに向かって次のように声をかける。

「あ・また言ってるよ。君はそうやって何でもかんでも一人で背負い込まないの。僕も人の事言えないけど。」

「そうだよ。責任は私達にもある。だから、一人で背負わないで、もう一人のユーノ君。」

なのはも魔導死神ユーノと共にキバユーノを優しい言葉で慰める。

二人の言葉を聞くと、キバユーノも少し気持ちが楽になった。

「ありがとう・・・二人とも。少し外の様子が気になる。ちょっとパトロールに行って来るよ。」

「あ、だったら僕も行きます。」

「お願いするよ、エリオ。」

キバユーノはエリオを連れて、その後の町の様子がどうなったのかを確かめるためにパトロールへと出かけた。

二人はある程度のパトロールを行うと、一度公園の方で休憩することにした。

「今のところレジェンドルガらしきものの気配はしないな。」

「ですね・・・・・飲みますか?」

「ありがとう。頂くよ。」

ユーノはエリオが買って来たオロナミンCを受け取ると、徐にそれ

を口の中へと流し込んでいった。

ドリンクを流し込んだキバユーノが顔を上げた時、その目に飛び込んでくる不気味な瞳を宿した月の姿にユーノは険しい表情を浮かべる。

「あの月・・・？」

「ユーノ先生！」

その時、エリオが何かに気づいた様子でキバユーノに声をかけてきた。

キバユーノは表情を一変させるエリオを疑問に感じながら目の前を見てみると、そこに居たのは頭上の月に向かって祈るかけるように両膝を衝く人々の集まりであった。

「これは！？」

「・・・キバ・・・キバ・・・キバ・・・」

キバと口にしながら人々はその後も祈りを続けるが、額には既にレジャンドルガによって浸食された証が顕著に表れていた。

「まさか・・・ここまで侵食されてたなんて・・・！？」

事態の深刻さに言葉を失う二人に、侵食された人々は蛇の触手を伸ばしてキバユーノとエリオを襲撃してきた。

二人をそれを回避すると、直ぐにこの場から離れるために走り出す。

「こっちだ！」

キバユーノはエリオを連れてビルの屋上の方へと逃げ込んでいったが、バケモノと化した人々は執拗に不確定要素である二人を排除しようと付け狙って来た。

「く！」

キバユーノは目の前に逃げ込めるような場所がなくなると、咄嗟にフローターを利用してエリオと共に上の方へと回避することにした。

「エリオ、上だ！」

「はい！」

二人はフローターを利用して何とか人々の追っ手から逃れることが出来たが、逃げる途中レジェンドルガによる奇襲を受けてしまい、エリオは足場を踏み外してしまう。

「わああ！！」

「は！」

キバユーノはギリギリの所でエリオの手を掴むことが出来たが、高さは数十メートルはある高層ビルの屋上であったため、手を離せばエリオの命はないことは確実であった。

「エリオ・・・！」

キバユーノはその手を絶対に離さないと心に誓いながら、苦しい体制のままエリオの手を握り続けるがそんなキバユーノに向かってレジェンドルガが近づき、キバユーノの背中に足を乗せて身体を圧迫していった。

「ぐ・・・！！」

「ユーノ先生！」

レジェンドルガはその後も容赦なくユーノの体に負荷をかけていく。

「キバット！」

だが、キバユーノがその名を呼んでも直ぐには駆けつけてくることは出来ないキバット。

やがて、ユーノの力が徐々に抜けていきエリオはこのままいけば地上数十メートルから落下しそうになろうとしていた。

「もう駄目だ！！！！」

キバユーノは絶望に陥り、為す術もないと諦めかけていた時。

希望の光が二人の前に現れたのだ。

その人物はレジェンドルガを後ろから突き落とすと、落ちかけそうになっていたエリオの手をしっかりと握りしめてきたのだ。

「「！？」」

二人がその人物の方に目を向ける。
そこに居たのは救援に駆け付け来た魔導死神のユーノ・スクライアであった。

「もう一人の僕・・・！」

「ごめん♪遅くなった。」

魔導死神ユーノは笑顔でそう言うと、エリオの手を握りしめたままエリオの体を釣り上げて無事に球場を完了させた。

その時ちょうど、キバットも現場に駆けつけて飛んできた。

「ユーノ！ふう～～～間に合ってよかったぜ！」

魔導死神ユーノは二人を助けると、侵食が行き届いていない場所まで二人を連れていくと腹ごなしの為にレストランに立ち寄った。

そこで両者のユーノとエリオは料理を口にしながら会話を続ける。

「やれやれ、混迷してきた・・・この世界も。」

「だけどお蔭で助かりました。」

「ああ。よくさっきの場所が分かったね、もう一人の僕。」

「シャマルさんがこんなこともあろうかと、パトロールに出かけた時からずっと監視してくれてたんだよ。」

「ははは。それはまた。」

「しかし何で僕がまたこの姿にならないといけないんだい？」

魔導死神ユーノがそう言う理由は他でもない。

自分一人だけが魔力消費を抑えるために子供の頃地球で過ごしていた時の姿且つ、今ではすっかり淫獣フェレットもどきと揶揄される動物形態となっていたのだ。

「同じ人間が二人もいたら怪しまれるよ。暫くの間我慢して。」

「はいはい。」

魔導死神ユーノは一応納得した様子で、皿の上に盛り付けてあった果物を適当に一つとって口の中へと持っていく。

と、その時三人に見知らぬ男が話しかけてきた。

「随分と余裕のようだな・・・」

「「「？」」」

振り返ってみると、男は不敵な笑みを浮かべながら次のように呟く。

「キバも貴様ら人間ももうじき滅ぶこととなる。」

「え？」

「何だって？」

魔導死神ユーノとキバユーノはこの男の発言に疑問を抱き、険しい表情となるが男はそんな二人を余所に大盛りの料理を貪り喰らう若い女性の元へと近づき、こんな事を尋ねる。

「ふふ・・・お前の一番好きな音楽は何だ？」

すると、女性はフォークを垂直に突き刺し食べるのを止めると徐に答える。

「私の一番好きな音楽を教えてやろう。」

女性は立ち上がると、人間の姿からキバユーノが対峙したあの女の人格を有したメデューサファンガイアの姿へと変貌し、ユーノ達と一緒にいたエリオを襲い始めた。

「人間の悲鳴だ！」

「ぐあああ！！」

「エリオ！」

「レジェンドルガか！」

エリオはメデューサレジェンドルガに襲撃されると、そのまま人気のないビルの駐車場まで連れて行かれ、抵抗する暇もなく一方的に攻撃を受け続けていた。

「ぐっ！！！くそ！！」

「ふふ・・・ふふ・・・」

満身創痍のエリオに向かってメデューサレジェンドルガは不気味な笑みを浮かべながら一歩一歩近づいていく。

すると、エリオを追って先に到着したキバユーノがその光景を目撃するとキバットを召喚して救護に入る。

「キバット！」

「よっしゃあ！！！キバって、いくぜ！！」

キバユーノは全速力で走りながらキバットと変身を果たし、そのままメデューサレジェンドルガの頭上目掛けて飛び蹴りを加える。

「はっ！」

メデューサレジェンドルガはその攻撃を食らうと、その場に倒れこみその隙にキバユーノはエリオの元に近づき安否を気遣う。

「大丈夫かい、エリオ？」

「は、はい！助かりました！」

キバユーノはエリオの事を庇うように若干後ろの方へと下がらながら、メデューサレジェンドルガと参入してきた計五体のレジェンドルガを目の前に険しい表情を浮かべる。

「ぞろぞろ出やがって・・・こうなったら！」

キバットがそう口にすると、キバユーノは右の腰元から金色のフエッスルを取り出しそれをキバットに吹かせる。

「ブロンブースター！」

すると、その音に反応してマシンキバーと合体して爆発的な推進力により、地形を問わない高速走行も可能とし強固な装甲をほこるブロンブースターを呼び出す。

「はっ！！」

キバユーノはそれに乗り込むと、ウィーリー走行によって六体のレジェンドルガを吹き飛ばした。

そして、一体のレジェンドルガが周囲に樹の蔦を発生させてそれを伝って逃走を試みるがキバユーノは推進力を駆使し蔦を伝りながらそのレジェンドルガと対峙し、見事葬り去ることが出来た。

「凄い・・・あんなものまであるんだ！」

エリオは常識では考えられないような技と巧みな技能を備えたキバユーノの実力に改めて感服するあまりであった。

と、その時隙を見たレジェンドルガの一体がエリオを襲撃し、エリオはその攻撃を受けてしまった。

「ぐあああああ！！」

「！エリオ！！」

キバユーノは急いでエリオの元に向かおうとするが、メデューサレジェンドルガを含めた残りの四体がそれをさせまいとキバユーノの前に立ちはだかり、キバユーノとエリオ両名にダメージを与えていく。

「「のあああああああ！！！」」

絶体絶命の二人であったが、その時魔導死神ユーノはキャッスルドランで待機をしていたアームズモンスター全員を引っ張り出し、一緒に走って来たではないか。

「もう一人の僕！！」

「若様！！！」

「今、お助けに参ります！！」

魔導死神ユーノはキバユーノとエリオを襲っていたレジェンドルガを退けると、アームズモンスター六体と一緒に並び全員での戦闘を始めようとしていた。

「久しぶりに暴れるぜ！！！」

アームズモンスター六体はそれぞれのポーズを取ると、全身に流れる魔皇力を全開にして本来の姿へと戻っていく。

「「「「「「ほおおおおお！！！！！！」」」」」」

次郎は本来の姿である青い狼男、ラモンは緑色の半漁人、力は紫色のフランケンシュタイン、鉄斎は灰色の巨人、クリスは茶色のガー

ゴイル、そしてライガは黒色の竜人の姿へと変貌。

そして、変身を遂げた彼らと共にキバユーノ達は一斉にレジェンドルガ達に向かって総攻撃を開始する。

その最中、キバユーノはガルル・バッシャー・ドッガの三体を巧みに使い分けながらそれぞれの攻撃モードでの戦闘を駆使して、レジェンドルガを翻弄し、魔導死神ユーノもエリオや鉄斎たちと協力をしながらレジェンドルガを追い詰めていく。

そして、彼ら全員のコウビネーションプレイに圧倒されたレジェンドルガは傷を癒すためにその場から退散していく。

次郎達アームズモンスター六体は逃げていくレジェンドルガを追ってその場から立ち去っていった。

二人のユーノとエリオは一先ず事態を打破することが出来たことで安堵のため息をつくが、するとその時レイキバットが突如としてキバユーノに向かって攻撃を仕掛けてきた。

「てや！てや！！」

「がああ！！」

「もう一人の僕！」

魔導死神ユーノとエリオはレイキバットを追い払おうと武器を振るい、ある程度の攻撃を済ませるとレイキバットは主人である男の元へと戻っていく。

三人の目の前に立っていたのは、先ほどレストランでユーノ達に向かって奇妙な事を口にしてきた男であった。

「お、お前は・・・！？」

すると、男は不敵な笑みを浮かべながら本来の擬態の人間の姿へと戻って、再びユーノ達に不敵な笑みを浮かべるのであった。

その男こそ、仮面ライダーレイへと変身するチェックメイトフォーの一人、ビショップであった。

「ビショップ・・・！」

「やっぱりお前の仕業だったのか・・・！」

「・・・困るんですよね・・・何度も何度も我々の邪魔をしてくれるのは。目障りだ・・・見も心も凍りつかせてやる。変身。」

「ヘンシン！」

ビショップはレイキバットをベルトに装着すると、仮面ライダーレイの姿へと変貌を遂げそれと同時にウェイクアップフエッスルを取り出し、それをレイキバットに吹かせる。

「Ｗａｋｅ　ｕｐ！」

ベルトに装着されたレイキバットがウェイクアップフエッスルを吹くことで、普段両腕に過剰に巻かれた封印鎖＝カテナが開放され、巨大な人造魔皇石を３つを仕込んだ巨大な鉤爪ギガンティック・クローが出現する。

そして、レイはその鋭い鉤爪を使ってキバユーノの装甲を何度を斬り裂き傷つけていくのであった。

「ぐあああああああ！！！！！」

「もう一人の僕！」

「ユーノ先生！！」

レイはキバユーノの変身を強制的に解かせ、キバユーノに相当なダメージを与え魔導死神ユーノとエリオはそんな傷ついたキバユーノを守るために自らが前に出て武器を構える。

すると、その時徐に近づいてくるレイの体に魔力弾が放たれる。

三人が撃たれた方向を見ると、駆けつけてきたティアナ達フォワード四名が立っていたのであった。

「エリオ！ユーノ先生！」

「遅くなりました！」

ティアナはカートリッジをロードすると、クロスミラージュから魔力を弾を発射し、キャロは覚醒状態のフリードより火炎弾を発射。

「シュート！！」

「フリード！！」

二人の攻撃をその身に受け、それなりのダメージを受けるレイ。

すると、今度はスバルとギンガがローラーブレードにより一気に加速していくとカートリッジをロードし、強力な拳の一撃を同時に加える。

「「リボルバー・・・シュート!!」」

二人の息の合った一撃をその身に受けたレイは勢いよく後ろに吹き飛ばされると、変身を解除し負け犬の遠吠えにも似た台詞を吐き捨てる。

「く・・・今日のところは見逃してあげますよ。ですが、この次は命を貰っていきます・・・覚悟しといて下さい。」

ビショップはそう言うと、瞬く間にその姿を消していき傷を負ったキバユーノは険しい表情を浮かべながら自分の力が及ばなかったことに憤りを覚える。

「くっ・・・くそ!!」

負傷したキバユーノを護送したのち、魔導死神ユーノ達機動六課の全線一同は司令室に集まり回復したキバユーノやロイドも交えて過去の世界で起きた筋道の違いについて検証をしていた。

「どうやら過去に行った際、俺達が未来に戻るとほぼ同時に遺跡が見つかって・・・そこで杉村が古代の力を取り込んだ。ここまでならこれまでの歴史の奔流に過ぎなかったが・・・話はもっと入り組んでしまった。」

「と言うと？」

「ヴォルドの奴が・・・過去の杉村の体を奪って自らの復活のための手段としたんだ。」

「と言うことは、アンゴルモアと同時にその古代の力すらも自分のものにして・・・チェックメイトフォート、それにレジェンドルガを従えたってことか！？」

「ち。相当厄介な状況だぜ・・・こりゃ・・・！」

「どうするよ・・・」

これまでにないぐらいに深刻な事態に発展したこの状況において、機動六課の面々とキバユーノ達は苦い顔を浮かべながら事態をどのように解決するかに関して頭を悩ませていた。

するとその時、調査に出ていたファルコが肩で息を切らした状態で六課の司令室へと走りこんできた。

「おやっさん！！」

「ファルコ！どうしたんだい、肩で息して！？」

キバユーノが尋常ではないファルコの様子を見てそう尋ねると、ファルコは今のこの場にいる全員にとっては一筋の光明ともいえる情報を口にしたのだ。

「は、は、は、は。漸く掴めました。ヴォルドが潜伏している場所が！」

「本当!?それで、何所なの!?」

全員が注目する中、ファルコは司令室のシステムを借りてその場所をモニター画面に映し出す。

「この前、ティアナ達が調査に向った非管理指定世界『ヴォルドー』の僻地にある誰も足を踏み入れたことのない樹海の奥深くにある古城・・・此処こそが、奴の拠点です。」

「アンゴルモアにライフエナジーを充分に蓄え、チェックメイトフォーとレジェンドルガを従えたヴォルドは、恐らく遅かれ早かれ僕らに総攻撃を仕掛けてくる。」

「その前に、ここで潰さないといけないって訳か。面白れー!同じ轍は二度も踏まねえぜ!!」

「よし、ではこれより機動六課フォワードメンバー全員、標的ＡＭ１９が潜伏していると思われる古城に向けて緊急出動!各自、抜かりの無いよう心していくこと!」

「「「「「了解!」」」」」

「うん!」

「借りは何倍にもして返す!」

クロノの言葉のに促され、全員は士気を高めながらヴォルド達との最終決戦に備えるのであった。

そして、魔導死神ユーノは傷が治ったばかりのキバユーノに向かって心と体の準備がしっかり整っているかどうかを尋ねる。

「もう一人の僕、準備は？」

「いつでも、大丈夫！」

「よっしゃ！！全員キバっていくぜ！！」

「「「「おおおお！！！！！」」」」

こうして、ユーノ達一向は最後の戦いの為に非管理指定世界「ヴォルドー」の樹海の奥地にあると言われる居城を目指して次元転送を行う。

途中、様々なトラップや自然の妨害に遭いながら六課の面々はひるむことなく全員で目的の居城目指して邁進を続け、そしてついに彼らはいかにもそれらしい雰囲気を醸し出す薄気味の悪い居城を発見する。

「あれだな・・・」

「いかにも何か居ますって感じの古い城だね・・・」

「それじゃあ、此処からは手筈通りに・・・みんな、くれぐれも油断はしないように。」

「「「「「「了解！」」」」」」

ユーノ達は行く前に組んでいた手筈をもう一度確認すると、それぞ

れの分隊ごとに分かれて四方からの突入を試みることとなった。

恋次達死神部隊と、魔導死神ユーノを除くスクライア商店メンバーは真正面からの突入を試みるために巨大な扉がある門へと向かっていた。

すると、そんな恋次達の前に門番と思われる革ジャンを羽織った男が現れる。

「「「「「「「「「!」」」」」」」」」

恋次達がその男の注目する中、男は自信に満ちた笑みを浮かべながら恋次達に向かって自分の名前を口にしてきた。

「待っていたぞ、キバの関係者。俺はチャックメイトフォーの一人、“ルーク”！此処から先を通りたくば、俺と・・・こいつらを倒してからにするんだな！！」

ルークはそう言うと、本来の姿であるライオンファンガイアの姿となると自分の部下である下級ファンガイアとレジェンドルガ数十体を従え、恋次達の前へと立ちはだかる。

「出やがったか。いよいよ、全面戦争の始まりだぜ！」

「へっ！てめぇらこそ、俺の強さを見誤るなよ！俺の格好いい戦い方、見せてやるからよく見ておけ！」

「行くぞ！」

恋次達はそれぞれの武器を取り出すと、ルークとファンガイアとレ

ジェンドルガの混成部隊に向かって駈け出していったのであった。

その頃、裏側出口から侵入を試み見事成功を果たしたなのは達スターズ分隊は、狭くて長い薄暗い廊下を進みながら、奥へと向かっていく。

「この先の廊下を真っ直ぐ抜ければ、最深部へと辿り着けるはずです！」

「よし！一気に駆け抜けるぞ！」

「はい！」

ヴィータの言葉を聞いたスバルはそう言うと、マッハキャリバーの機動力を駆使して狭い通路を壁を伝りながらなのは達よりも先に前に突き進んでいった。

「あ！スバル！！」

「スバル！先行しすぎない！」

若干呆れかえってしまう姉のギンガと相棒のティアナであった。

「仕方ないね。こういう場所はスバルやギンガの方が速いからね。」

「壁にぶつかるんじゃねえぞ！」

ヴィータの注意を耳に入れながら、スバルは薄暗い廊下を全速力で駆け抜けて行きある程度の距離を進んだところでスバルは出口へとたどり着き、中央の広間と思われる場所へとたどり着いた。

「あ！」

そして、そこでスバルや追いついてきたなのは達が目にしたもの・・・それは。

「「「「なっ！？」」」」

「・・・いらっしゃい・・・キバのご関係者さん・・・」

なのは達が一瞬言葉を失ってしまうほどの美貌を持った妖艶な女性が、フード付きの黒いゴシックなファッションに身を包み床に座っていたのだ。

「あなたは・・・！？」

「チェックメイトフォー・・・“クイーン”。この前はキングがお世話になったようね。と言っても、戦ったのはあなた方じゃないから何とも言えないけど・・・キバもつくづく可笑しな人よね。」

「！？もう一人のユーノ君の何所が可笑しいって言うの？」

違う存在ではあると言え、自分にとってこの世で一番大切な人が小馬鹿にされるのはなのはも好きではなく、些か怒りを覚える。

そんななのはやスバル達四人に向かってクイーンは次のように語り出す。

「・・・この際だから良いこと教えておくわ。ファンガイアにはある掟が存在するの・・・その掟を破ったファンガイアはこの私、ク

イーンが直々に執行人（パニッシャー）として制裁を下すの。」

「ファンガイアの・・・掟だと!?何だよ、そいつは!!」

「・・・“人間と結ばれてはならない”・・・」

「「「「「!」」」」」

「並行世界のユーノ・スクライア・・・つまり、キバの実の父は嘗て冷酷非道といわれたファンガイアの模範となる存在だった。だけど、キバの母親・・・エリカ・スクライアに誑かされた先代のキバは、彼女と結ばれ子供を授かる・・・」

「まさか・・・それがキバのユーノ先生!?」

「そう。そして、彼自身も・・・素晴らしい才能を持っているのにも拘らず・・・“高町なのは”。あのような人間と結ばれることとなった・・・」

「!」

自分の名前を口にされたことで、なのはは一瞬目を見開いてしまう。

「だが!そんなことどうってことないだろ!!ファンガイアだろうが、人間だろうが、好きな奴と結ばれるのがどうしてそんなにいけないんだよ!!!」

そのようにしてヴィータはクイーンの言葉に反論するが、クイーンは毅然とした表情を崩さず自分の考えを述べていく。

「ファンガイアは全ての種族の中で最高位に位置する存在。それに引き換え人間は全ての種族の最下位に位置する存在。誇りも捨てて、何故下等な人間と結ばれねばならないの？あんな弱くて・嘘を平気でつき・人を騙し・そして己の自己満足のために他人を使う種族と・・・」

すると、ティアナやスバルはあまりに人間を低劣なものとしかみなさず罵詈雑言を浴びせるクイーンの言動に我慢が出来なくなってしまう。

「あんた！！さっきから言いたい放題言ってくれるじゃないの！！」

「酷いよ！！どうしてあなたは人間をそこまで蔑むの！！！確かにあなたの言ってることは間違いじゃない・・・人間は嘘つきで、弱くて・・・人を平気で騙すような一面もある。だけど・・・それだけが人間の本性だって言い切れるの！？人間のこともよく知らない奴が、人間を不容易に侮辱するのは止めて！」

二人の言葉を聞いて触発されたたギンガも横から口を挟む。

「そうね。少なくとも、人間って言うのは悪い一面を直そうとする意思だってちゃんと在るわ。下等なんて言葉は、それを見てから口にしなさい。」

「負け惜しみにしか聞こえないわね。だったら何？人間って言うのがファンガイアよりも勝ってるって証拠・・・見せてくれるわけ？」

クイーンがその様に尋ねると、なのはは全員の気持ちを代弁して自らの考え方を素直に言葉に表現する。

「劣ってるとか、勝ってるとか・・・そんなことは関係ない。人間もファンガイアも、同じこの世界に生きる命には変わりない。衝突することもよくある・・・それでも、私達は歩みを止める訳にはいかない。言葉だけじゃ分からないから、私達は自分の思いの丈を全力でぶつけないと通じ合えない。不器用だからこそ・・・そこに輝きを見出せる！」

そんななのはの言葉に納得した表情で、スバルやヴィータ達は実にすがすがしい表情となってクイーンの方へと目をやった。

「・・・へぇ・・・それが・・・あなたの考えって訳ね・・・大した弁舌だけど、それを証明するだけの力が果たして本当にあるのやら。良いわよ・・・」

クイーンはそう言うと、本来の姿であるパールシェルファンガイアの姿となると、待機させていたファンガイア達とレジェンドルガをその場に召喚すると、なのは達と対峙する姿勢を見せる。

「貴方達の思いの丈とやら、この私に全てぶつけてみなさい。その考えが如何に愚かだったと後悔しないことを祈るわ。」

クイーンはそう言うと、ファンガイアとレジェンドルガを指示を仰ぎ、なのは達を迎え撃ちなのはもエクシードモードに換装すると、スバル達と共に戦闘の開始を促す。

「いくよ、みんな！」

「「「「はい（おお）！」」」」

なのは達がクイーンとの本格戦闘を始めようとしていた頃、左側か

ら侵入を果たそうとしていたライトニング分隊はファンガイアとレジャンドルガの混成部隊と戦闘を始め、右側から侵入を試みた魔導死神ユーノとキバユーノ、そしてロイドの三人はヴォルドが待つ最深部へと目指し走り続けていた。

「間も無く、最深部に到着する！」

すると、そんな突き進んでいた三人の目の前にまたしてもレジェンドルガとファンガイアが出現し道を阻んできた。

「ちっ・・・邪魔な奴らだ。」

〈Ｒｅａｄｙ〉

ロイドはそう言うと、イクサナックルを取り出しイクサへと変身する。

「変身！」

〈Ｆｉｓｔ　ｏｎ〉

イクサカリバーを手に取ったロイドは二人のユーノに向かって先に進むことを促した。

「ユーノ、こいつらの遊び相手は俺が引き受ける。お前は早くヴォルドの処まで行け。」

「分かりました。気をつけて、ロイドさん！」

キバユーノはそう言うと、そのままロイドの行為に甘えてヴォルド

が待つ最深部へと向かうが、魔導死神ユーノだけはロイドの言葉は聞かず一緒に残ってしまった。

「あ？何でお前は行かないんだよ！？」

「一人よりも二人のほうが早く片付くでしょ？それに、ヴォルドとの因縁は彼一人で決着を付けさせないと・・・」

「・・・まっ、それもそうだ。」

魔導死神ユーノの言葉を聞いて、納得した様子のロイドは魔導死神ユーノと共に目の前のレジェンドルガとファンガイアの群れ目掛けて斬りかかっていくのであった。

「「はあああああ！！！！！」」

この二人がレジェンドルガ達の相手をしている間に、キバユーノはとうとうヴォルドの元へ辿り着き、変身も何もしないまま中央の椅子で坐している杉村の体を乗っ取ったヴォルドへ鋭い視線を浴びせながら言葉を持ちかける。

「・・・ヴォルド・・・いい加減、この因縁にも終止符を打たないとね。」

「待ち望んでいたぞ・・・キバ・・・長～い間この時を・・・」

「！？」

「嘗て俺を滅ぼしたキバの力・・・俺のものにしてやる・・・！」

キバユーノは自分が知っているヴォルドの人格とはまた違う今のヴォルドの言動と雰囲気に戸惑いを見せながら、その原因がアンゴルモアとレジェンドルガの王の力が関係していることを理解する。

「（ヴォルドの奴・・・異質な二つの力を手にしたことで、本来の自我を失ってるのか！？）キバット！」

キバユーノの言葉を待っていたキバットはガラスを突き破って中へと入って来た。

「よっしゃあ！キバって・・・ぬお！？」

キバットがキバユーノの手に齧り付こうとした矢先、今まで跪いていたレジェンドルガの一体がキバットの体を拘束し、そのままキバットを昏倒させてしまう。

「キバット！」

キバユーノは直ぐに倒れたキバットの元へと駆け寄ろうとしたが、その瞬間坐していたヴォルドが力を解放してファンガイアが人間のライフエナジーを吸収する時に用いる二本のキバに酷似したものをキバユーノの体に突き刺した。

「ぐっ！ぐ・・・あああああ・・・・あああああ！！！！！！」

キバユーノは全身から流れ込んでくるヴォルドの力に侵食され、全身にはその影響を受けた痣が出現し始める。

と、その時ロイドと一緒にレジェンドルガ達の相手をしていた魔導死神ユーノが先兵を退けたのちロイドとは分かれてキバユーノの元

に駆けつけてきた。

魔導死神ユーノはヴォルドに何らかのことをされたキバユーノの様子を見ながら、ヴォルドに向かって怒りを露わにする。

「はっ!?貴様!!!もう一人の僕に何をした!?」

だが、その途端キバユーノはレジェンドルガの鮮麗によって感情が高ぶった時に見せるキバの最強の形態の一つである飛翔態（エンペラーバット）へと変貌する。

「ぐあああああああ!!!!!!!!!でやあああああああああ!!!!!!!!!」

この変貌を目撃した魔導死神ユーノは思わず絶句し目を疑う。

「・・・もう一人の僕・・・！」

すると、ヴォルドは暴走したキバユーノに向かって命令を下す。

「やれ。」

暴走したキバユーノはロイドの言葉を聞くと、そのまま魔導死神ユーノに向かって攻撃を仕掛け、魔導死神ユーノはこの事態に体が上手く反応できずにキバユーノの鋭い攻撃を受けてしまう。

「ぐっ!!ぐあああああ!!!!」

飛翔態となったことでより速度と凶暴性を増したキバユーノの力は絶大であり、魔導死神ユーノはどうすることも出来ずに徒に攻撃を

受け続け、反撃することもままならなかった。

「止めろ、もう一人の僕！！」

魔導死神ユーノがそう訴えかける中、ヴォルドはそんな魔導死神ユーノに向かって次のように語る。

「無駄だ。レジェンドルガの洗礼によって・・・そやつは生まれ変わった・・・我が僕として！！」

暴走したキバユーノはそんなヴォルドの元へと飛んでいき、オーラとして出現したレジェンドルガの王の左腕に止まり魔導死神ユーノを見下ろした。

「キバの系譜が・・・今、終わる・・・」

ヴォルドの手に堕ちたキバユーノはこのまま本当に魔導死神ユーノをその手にかけてしまうのか？

一方その頃ルークとレジェンドルガ達と戦いを繰り広げていた恋次達死神部隊とスクライア商店メンバーはというと、ルークの力に圧倒されながらも持ち前の根性と熱い魂が士気を高め、決して屈することなく向かっていきレジェンドルガ達を全滅させ、ルークに止めを加えようとしていた。

「ぐあああああ！！！」

恋次達の攻撃を受け、満身創痍のルーク。

そして、ルキアや浦太郎達の鬼道とバインドで体を拘束されたのち

恋次と鬼太郎がそれぞれの全力全開で止めの一撃を加える。

「「負けっぱなしは趣味じゃないんだよ！！！」」

放たれた狒骨大砲と火炎油田をその身に受け、ルークは跡形もなく姿を消していったのであった。

「ぐあああああああ！！！！！ヴォルド様！！！！！！！！！」

ルークを倒した恋次達は正面玄関を突破すると、そのままユーノ達が目指した最深部へと向かっていった。

一方その頃、満身創痍の状態でありながらその場にいたレジェンドルガ達を一人で戦闘を繰り広げていた魔導死神ユーノはというと、キバユーノを何とか助け出そうと色々と思案をするが全くという程上手い方法が思いつかないでいた。」

そして、ヴォルドはそんな疲労困憊で満身創痍の虫の息に近かった魔導死神ユーノの止めを刺すために腕に乗せていたキバユーノに向かって命令を届ける。

「・・・ユーノ・・・やれ！」

キバユーノは飛翔態のままヴォルドの命を受けると、勢いよく頭上高くへと飛び上がり加速をつけるとそのまま魔導死神ユーノ目掛けて突進していく。

すると、それを見た魔導死神ユーノは最大霊圧でレジェンドルガを吹き飛ばすと態とぶつかりに行くようにキバユーノの前へと立ちふさがり、全身で暴走したキバユーノの攻撃をその身に受け、血を吐

いてその場に倒れこんだ。

「ぐっ！！！」

この行動には見ていたヴォルドやレジェンドルガ達も理解に苦しんだが、魔導死神ユーノは傷ついた体を徐に起こすと、怪訝そうに自分を見つめるキバユーノに向かってこう語りかける。

「・・・もう一人の僕・・・確かに君は僕であって僕じゃない・・・君は僕とは能力も生きてきた経緯も違う・・・だけど、同じように・・・帰りを待つ大切な人が居るはずだ・・・！！君の帰りを待つ大切な存在が・・・この世に一人だけの大切な人が・・・！！目を覚ますんだ・・・君を心から愛する彼女が・・・君の帰りを待ってるんだよ！！！」

キバユーノにとっても、魔導死神ユーノにとっても心の中に抱く大切な存在は高町なのはであり、そのことを分かっているからこそ魔導死神ユーノはキバユーノのことを放ってはおけず、そして何よりその幸せをヴォルドによって奪われたくないと考えていた。

「目を覚ませ、もう一人の僕！！！！！」

魔導死神ユーノはそう言うと、動かないでいた飛翔体のキバユーノの体を力いっぱい抱きしめた。

すると、そんな魔導死神ユーノの気持ちに応えるかのようにキバユーノのも飛翔態の翼で魔導死神ユーノの体を包み込むと、悲鳴にも似た声を上げながら突然全身を輝かせ始めた。

これには見ていたヴォルドやレジェンドルガ達も大いに目を疑った。

「何！？」

光は徐々に大きくなっていくと、それに反比例するかのように体は元の人間の姿へと戻っていき、キバユーノはレジェンドルガの鮮麗から逃れて本来のキバユーノの姿へと戻り、自分を抱きしめる魔導死神ユーノの姿を見つめる。

「・・・もう一人の・・・僕・・・？」

「戻ったんだね・・・よかった！！本当によかった！！」

魔導死神ユーノはこの以上の喜びはないくらいの気持ちを表現すると、キバユーノの手をしっかりと握りしめる。

一方でヴォルドはレジェンドルガの鮮麗から逃れたキバユーノに驚きを隠せないでいた。

「莫迦な・・・我が一族の洗礼を・・・！？」

キバユーノは魔導死神ユーノに感謝をしながら、手を握り返してこう答える。

「・・・ありがとう・・・君の言葉で僕は自分を取り戻せた・・・感謝するよ。」

「いいんだ。お互い・・・同じユーノなんだ。為すべきことをしたまでさ。」

二人は破顔一笑し、その場には和やかな雰囲気が流れたがそんな二

人を見て怒りを募らせたヴォルドは途轍もない殺気と一緒に強大な魔皇力を解放しながら椅子から降りてきた。

「「！」」

「・・・斃す・・・この手で・・・貴様も・・・もう一人の貴様も！！！」

そんなヴォルドの殺気に勘付いた昏倒していたキバットは復活を果たすと、キバユーノの元へと近づき声をかけてきた。

「ユーノ！これからが本番だぜ！」

「ああ！」

キバユーノはそう言うと、早速キバットを手に取り腕に咬みつかせる。

「ガブっ！」

キバットが魔皇力をキバユーノに流し込むと、キバユーノは構えを取ってキバへと変身する。

「変身！」

キバユーノが変身すると、魔導死神ユーノも霊圧と魔力を研ぎ澄ませながら持っていた仕込み杖の封印を解いて、晩翠を解放する。

「僕もやるよ・・・月光せよ、『晩翠』！」

二人のユーノが臨戦態勢となると、ヴォルドはキバットに酷似したレジェンドルガの王が身に纏う鎧を構築するアークキバットを召喚する。

「・・・変身・・・」

「じゃあ、行きますか～～～ドロン～～～ドロ～ン」

アークキバットがヴォルドの腰のベルトに装着すると、ヴォルドの体は浮き上がり鎧が構築されていく。

「へ・ん・し・ん！」

鎧が構築されると、ヴォルドの体はレジェンドルガの王が身に纏ったバフォメットのような頭部が特徴で、基本カラーが黒の全長は３．２メートルもの巨大な戦士、仮面ライダーアークへと変貌する。

その巨体の姿に威圧感を与えられた二人であったが、魔導死神ユーノはキバユーノに向かって次のように語りかける。

「もう一人の僕・・・こいつは・・・！」

「初代キングが滅ぼし、この世から根絶した最凶最悪の魔族として他の魔族からも恐れられる種族、レジェンドルガの王だけが纏うことを許された鎧・・・アーク！」

「アークだと・・・！？」

身構える二人に向かって、アークはその巨体を動かし先ずはキバユーノに向かって圧倒的な破壊力を秘めた蹴りとパンチを入れてキバ

ユーノを吹き飛ばす。

「ぐあああああ！！」

「もう一人の僕・・・はっ！？」

キバユーノの援護に入ろうとしたとき、魔導死神ユーノを狙って先にその場にいたレジェンドルガが牙をむいて襲って来た。

「そうだったな。先ずはこいつらから倒さないとね！」

魔導死神ユーノはそう言うと、晩翠を手にしっかりと握りしめてから残っていた全てのレジェンドルガに向かって猛烈な勢いで攻撃を開始する。

さて、その頃居城の左側の出入り口付近でライトニング分隊は先ほどから依然としてファンガイアとレジェンドルガとの激しい戦闘を繰り広げているが、何とかフェイト達はチームプレーにより残り僅かと言うところまで数を減らすことに成功していた。

すると、そんなフェイト達を付け狙ってビショップが背後から奇襲を仕掛ける。

「変身。」

「ヘンシン、Ｗａｋｅ　ｕｐ!」

レイに変身を遂げたビショップはウェイクアップフエッスルによって鉤爪を解放すると、戦っているフェイト達に向かって冷気を発射する。

冷気をその身に受けたフェイト達と残り一体となったレジェンドルガはこの事態に狼狽する。

「この冷気は・・・！？」

すると、レイは鉤爪を研ぎながらフェイト達の元へと飛んで来、必殺技のブリザードクロー・エクスキュージョンを発動する。

「ふん！！！」

それを見た瞬間、アギトとシグナムは自分の火力でどうにか冷気を解凍するとフェイト達三人のも溶いて一時その場から避難をする。

その結果、レジェンドルガ一体がその攻撃を直接的に受けてしまう事となった。

「ぐあああああ！！！！！び、ビショップ・・・貴様！！！！」

「邪魔です。消えろ！」

冷淡にもそう口にすると、レイは鉤爪によるもう一撃を急所に加えるとそのまま従えていたレジェンドルガを消滅させたのであった。

そんな身も心も氷のように冷たく、非情な性格のレイの姿を見ながらフェイト達はＩＰカートリッジを取り出し装填すると、五人でレイへと向かっていくのであった。

「行くよ、みんな！」

「「はい！」」

「「ああ（おうよ）！」」

レイとフェイト達がその後激しい戦闘を勃発させているのを見ていたキングの方はというと、木の影からその様子をじっと窺っているばかりであった。

するとその時、森の中からもの音が聞こえてきた。

「！？」

森の中から出てきたのはイクサの鎧に身を包んだロイドであった。

「決着を付けに来たぜ。キング・・・」

「ふん・・・良いだろう。哀れな人間よ・・・王の前に平伏すがいい。」

キングはロイドに向かってそう口にすると、サガークを召喚してサガへと変身する。

それを見てロイドはこの前の失敗を挽回する為に取って置きを発動することを決意する。

「そうは問屋が・・・降ろすかよ！！」

ロイドはイクサの口部分から強化変身アイテムキーであるイクサライザーを取り出すと、コンソールのキーを「1↓9↓3」の順に押し、その後の電子コールが発声する。

〈Ｒｉｓｉｎｇ〉

そして、通話ボタンを押すと共にイクサの装甲が弾け飛び、胸部の装甲を展開し、システムのプロテクトを解除することで常に１００％の出力で稼働することが可能となったイクサシステム最強形態のライジングイクサへと変貌を遂げる。

ロイドはライジングイクサに変身すると、イクサライザーを変形させて専用の銃へと変形させてイクサカリバーと共にキングに向かっていくのであった。

さて、レイと対峙していたフェイト達の戦いも雌雄が決する時がやって来たようだ。

「はあああああ！！！！！！」

「ぐっ！がああああ！！！！！！」

「フリード、ブラストトルネード！」

「サンダーレイジ！！」

「（九頭龍一閃）！！」

ライトニング分隊の総力を結集させたその攻撃を受けた瞬間、レイの体からか火花が飛び散り始め限界を迎えたレイは抵抗することもなくその場に力なく倒れこんでいく。

「ぐあああああああ！！！！！！ぐっ！！お、おのれ！！！！！」

そして、レイは爆発を伴ってフェイト達の前から消滅していくのであった。

ライトニング分隊がチームプレイを駆使した技の多用によってレイを見事に粉砕したように、なのは達スターズ分隊も同様のチームプレイでクイーンとレジェンドルガとファンガイアの混成部隊を圧倒していくのであった。

これには流石のクイーンも驚きを隠せなかった。

「ぐっ!!そ、そんな・・・!!馬鹿な!!!」

「これが私たちの全力全開だって言ったでしょ。さぁ、受けてみて・・・私達スターズ分隊の思いの丈を!!」

なのははそう言うと、スバル達共に必殺技の発動を試みるために距離を取った。

そして、一斉にそれぞれの必殺技が発動される。

「マリアズ・アフェクト!!!」

「リボルバーデストロイアー!!!」

「スターライトブレイカー!!!」

「クラッシャーシュラーク!!!」

「ガトリングデストロイアー!!」

スターズ最強の必殺技がクイーンと残り全てのレジェンドルガ達に向けられると、クイーンとレジェンドルガ達は強い魔力の光に飲み込まれていきながら消滅を果たす。

「ぐあああああああああああああああ！！！！！！！！！おのれ！！！！！！！！！！！」

クイーンは悔しい想いだけを残して、なのは達の前から姿を消していき、消えたクイーンが身に着けていたネックレスだけがその場に残されたそうな。

さて、最深部でレジェンド数体を一人で相手している魔導死神ユーノはというと、晩翠を巧みな体捌きと霊力制御によって自在に操り、今までやられていた分を取り返すように刀を振り続けていた。

「ふん！」

「のあああああああ！！！！！！」

そして、魔導死神ユーノは攻撃を食らってフラフラの状態であったレジェンドルガの数体に向かって翡翠斬を放つ。

「輝け、晩翠！」

それぞれの場所でレジェンドルガと人間による熾烈な争いが繰り広げられている中、そのレジェンドルガの王の力を手にしたヴォルドとファンガイアと人間の王とも言うべきキバユーノの戦いも熾烈を極めていた。

キバユーノはウェイクアップフエッスルの力で右脚のカテナを解放すると、ダークネスムーンブレイクを発動し、アークに仕掛けるがアークは拳の一撃でそれすらも容易に防ぎ逆にキバユーノを吹き飛ばしてしまう程だった。

「ぐあああああ！！！！」

壁に激突し、更にはそこからヴォルドの踵落しをその身に受けたキバユーノは窮地に追いやられていた。

「ヤベーぞ、こいつは！！」

キバットはヴォルドの攻撃からキバユーノを守ろうと自力でキバユーノの体を動かし、一先ず岩場に身を隠すと、キバの真の力を解放するためもう一人の相棒であるタツロットを呼び出す。

「タっちゃん・・・行くぜ！」

キバットが専用のフエッスルを吹くと、その音に呼ばれて魔皇龍タツロットが何処からともなくキバユーノの元へと飛んでくる。

「びゅんびゅーん♪ドラマチックに行きましょう♪」

キバユーノはタツロットが来ると、左腕を突き上げてタツロットを装着しファイナルウェイクアップを発動する。

「変身！」

それを見たヴォルドは咄嗟に巨大な岩を持ち上げて光り出したユーノの体を押し潰そうとしたが、岩を押し付けたその途端にそれが粉

々に砕け散り中から出てきたのは基本カラーが金と赤へと変色し、背中にはマントが追加されたキバの最強形態であるエンペラーフォームであった。

ついに、キバユーノの全力全開が今まさに解放されたのであった。

このキバユーノの力の解放と共に、魔導死神ユーノも止めの一撃を残りのレジェンドルガ全体に加えようとしていた。

「ふふふふふ・・・冥土の土産は何がいい？」

魔導死神ユーノはそう言うと、晩翠を円形状に動かして陣の内部のものを爆殺させるグラトニー・ガルバとの戦闘でしようした技を発動する。

「“深緑月華”！」

その結果、閉じ込められたレジェンドルガ全体はその中で見事なまでに爆発を果たすと跡形もなくその場から消え去ったのであった。

魔導死神ユーノがレジェンドルガとの決着が完了するとほぼ同じころ、ロイドとキングの勝負も雌雄が決しようとしていた。

「ば・・・莫迦な・・・！？キングが・・・私が人間如きに・・・！？」

サガの状態であるキングはライジングイクサの力に圧倒され、ロイドはそんな圧倒された状態のキングに向かってこう言って来た。

「悪いな。こう見えて人間もやるときにはやる種族なんだよ。お前

の敗因は、人間を見下していたことだ。さぁ、その命・・・神に返しな！」

ロイドはそう言うと、イクサライザーのグリップからライザーフエッスルを取り外し、イクサベルトに読み込むことで発動する必殺技、「ファイナルライジングブラスト」を仕掛ける。

「はあああ！！！！」

「ぐあああああああ！！！！！！！！」

此れ迄の2種類の技に加えて、最大稼働したエネルギーをイクサライザーへと集中させ、通常の数十倍もの威力を誇る強力なエネルギー波を直撃したことで、キングは致命傷を作る事となったのだ。

「私・・・は・・・死にたく・・・ない・・・！」

ロイドは倒れ伏すキングを一瞥するとそのまま背を向けて立ち去っていき、それと同時にキングは爆発を起こして消滅を果たしていったのであった。

そして、エンペラーフォームの力を解放したキバユーノは宙ぶらりの状態からヴォルドの巨大な拳を受け止めると、魔皇力を爆発させてヴォルドの巨体を吹き飛ばす。

「はっ！」

「ぐあああああ！！！！」

その後もキバユーノは最強の姿で同じく最強のヴォルドと激しい戦

闘を続けているが、流石にアンゴルモアの力すらも取り込んでいるヴォルドの前に一人ではどうしようもないとさえ感じてしまうものであったが、そんな時に駆けつけてきた魔導死神ユーノが援護に入って来たのだ。

「もう一人の僕！」

「手伝いに来たよ。やれるかい？」

「うん！」

「よし・・・行くよ！」

二人のユーノはそう言うと、光線を撃ってくるヴォルドに向かって全速力で駈け出していく。

「「はあああああああああああああ！！！！！！」」

そして、豪快にその場から飛び上がると二人のユーノは渾身の一撃を秘めた拳をヴォルドの顔面目掛けて殴りつけ、その力に圧倒されたヴォルドはそのまま後ろへと倒れこんでいった。

「ぐあああああああああ！！！！！！！！」

二人のユーノが渾身の一撃を見事に決めると、後からなのは達他の前線部隊全員もその場に駆けつけてきたのであった。

「ユーノ君！！！」

「ユーノ！！！おお、こいつは！？」

恋次やスクライア商店メンバーは目の前に倒れ伏す巨大なヴォルドの姿に思わず目を疑った。

「やったんですか!?」

「いや、完全には倒せては居ない・・・最後の攻撃が来るよ。」

キバユーノがそう答えると、案の定ヴォルドは未だに生きており、立ち上がって頭上に浮かぶ黒い瞳を宿した月を仰ぎ見ながらアークキバットにウェイクアップフエッスルを吹かせる。

「Ｗａｋｅ　ｕｐ!」

「おおおお!!!!!!我が一族に・・・最後の力を!!!!」

ヴォルドは胸部のカテナを外すと、空中へと浮かび上がって周囲にあるあらゆるものを恐怖させるそんな雰囲気を醸し出しながら頭上の月を引き寄せその眼の力を取り込もうとしていた。

「「くっ・・・!!」」

その結果、暗黒と化した周囲にただ一つだけ光を放つその月の眼がヴォルドの体に吸い寄せられることでまるで月が落ちるようにも見えた。

劇中では月の眼の力を取り込んで、レジェンドアークへの覚醒の為に使用。この時、アークキバットの仮面が外れて本来の姿のメカキバットになり「Ｇｏ　ｔｏ　ｈｅｌｌ!」の合図を出す。

「月が・・・落ちる!?」

「うおおお

「く、くそ・・・・・！！」

魔導死神ユーノはその圧倒的な攻撃力を前にしても、決して倒れる姿勢など見せずに最後まで戦うことを貫き通す覚悟で頭上から見下ろすヴォルドを見上げ、ヴォルドは魔導死神ユーノに向かって胸部から巨大な火球を放った。

それを見たキバユーノは魔導死神ユーノを助けるためにタツロットのレバーを引きながら全速力で駈け出していった。

「キバット・タツロット！魔皇力、全開だ！！！」

「「おう（了解です）！」」

キバユーノはエンペラーフォームの状態から全身に流れる最大出力の魔皇力をキバットとタツロットの力を借りて全開放すると、その魔皇力を体に纏わせ飛んできた火球を魔導死神ユーノの代わりに受け止める。

「ほおおおおおおおおおおおおおおお！！！！！！！！！！」

そして、キバユーノはそのまま火球を打ち消すとレジェンドルガの鮮麗ではなく自分の意思によって飛翔態の姿へと変貌する。

それを見た魔導死神ユーノとなのは達一同はそのキバユーノの姿に大いに驚いた。

「「「

「もう一人の・・・僕？」

またも暴走をしてしまったのではないかと半信半疑の魔導死神ユーノであったが、そんな魔導死神ユーノに向かって念話でキバユーノはこう言ってきた。

「（一緒に戦おう・・・もう一人の僕。）」

その言葉を聞くと、魔導死神ユーノは自信と決意に満ちた表情で公的の言葉をかける。

「・・・ああ！」

飛翔態のキバユーノは魔導死神ユーノを背中に乗せると大きく飛び上がって、ヴォルドへと向かって大空中戦を勃発させる。

地上でその光景を見ていたなのは達は思わず声を荒げる。

「ユーノ君！！」

「空中戦に持ち込むつもりか！？」

満月を背景にして繰り広げられる人知を遥かに逸した王と王との大激突。

魔導死神ユーノはキバユーノの背中に乗りながら翡翠斬を放ち、キバユーノは口から「ブラッディストライク」と呼ばれる放つ金色の光線を放つ。

その二人の攻撃を受けていながらも、ヴォルドは高い防御力により防ぎきると二人に向かって反撃をし、若干二人が押され気味となっていたがその時そんな二人に救援が駆けつけてきた。

それは、キャッスルドランを操りヴォルドの体に火球を放ってきた鉄斎達アームズモンスターであった。

「若様たちは絶対にお守りしますぞ！！！！！撃て！！！！！」

キャッスルドランの怒涛の攻撃をその身に受け、傷つくヴォルドを見て反撃の機を逃すまいとキバユーノは高く飛び上がり魔導死神ユーノに攻撃を促す。

「（もう一人の僕！）」

「ああ。夜の世界は僕のテリトリーだ。今こそ、晩翠の真の力の一端・・・見せてやる。喰らえ・・・これがもう一つの翡翠斬。『闇天斬』！！」

ユーノが放ったこの技は翡翠斬とは対照的に斬撃の色は黒一色で純粋な霊力で出来たものとなっていた。

ヴォルドはその攻撃を受けたことにより、絶対的な強度を持つその鎧に見事なまでに傷がついてしまった。

「ぐあああああああああああ！！！！！」

その後、ユーノは目の前の満月の力を借りるとヴォルドの周りに無数の闇天斬を出現させて更なるコンボ攻撃を発動させる。

「“闇天斬・凶火仙気（きょうかせんき）”！」

無数の闇天斬をその身に受けた瞬間、ヴォルドの体に先ほど以上のダメージが蓄積されていき、鎧には既に亀裂が生じ始めていた。

「止めを刺すんだ、もう一人の僕！」

魔導死神ユーノはそう言うと、一度キバユーノの背中から離れる。

そして、魔導死神ユーノがその場から離れるとキバユーノは飛んでいたキャッスルドランと一体化して巨大なエンペラーフォームの姿で飛び蹴りを放つ必殺技「ジャイアントムーンブレイク」を発動する。

「はっあああああ！！！！！！！」

キバユーノの最強の一撃が放たれ、ヴォルドはその力に圧される形で背後に浮かぶ満月に向かっていくのであった。

「ぐあああああああああああああああああああああああああ！！！！！！！！！」

「はあああああああああああああああああ！！！！！！！！！！」

そして、キバユーノはヴォルドを月面に叩きつけてそれにより巨大なキバの紋章を満月に浮かび上がらせたのであった。

地上でそれを見ていたなのは達にもその光景を窺うことが出来た。

「「「「「あ！」」」」」

「月面に・・・キバの紋章が！？」

キバユーノと魔導死神ユーノは地上に戻って来ると、なのは達の元へと降り立った。

必殺技が決まったことで、月は元の大きさへと戻っていき辺りの景色も暗黒の世界から昼の世界へと戻っていったのであった。

「やった、やった♪月が元に戻ったよ♪」

「おお！やっぱ、タッちゃんいないと駄目だわ！」

「やっぱり？」

「喜ぶのは未だ早いよ二人とも・・・ヴォルドはしぶといよ・・・ほら。」

キバユーノがそう言うと、変身が解かれたヴォルドは勢いよく地面に落下していくと分離したアンゴルモアを手に取りながらその場にひれ伏した状態でユーノ達を睨み付けてきた。

「くっ・・・！！私は・・・復讐のためなら・・・この命・・・悪魔にでも売るつもりなのに・・・！！なのに・・・どうして・・・！？」

そんな哀れなる男の姿を見ながら、全員は一つの決断を下した。

「ユーノ君。」

「ん？」

「二人で一緒に、本当に終わらせよう。」

「頼みましたよ、店長。」

「ユーノ、行けよ。」

なのはや恋次、金太郎達に促された二人のユーノは顔を見合わせると徐に首を縦に振って次のように言って来た。

「・・・わかった。行くよ、“翡翠の魔導死神ユーノ・スクライア”。」

「はいよ♪“歴代最高にして最強のキバ、ユーノ・スクライア”。」

キバユーノは魔導死神ユーノの形に合わせるように、タツロットの口の中からファンガイアの王だけが持つことを許された最強の剣、魔皇剣バットソードを取り出す。

「ザンバット！」

ザンバットソードを取り出ししっかりと握りしめると、キバユーノはその力を制御してくれるザンバットバットからフエッスルを抜き取り、キバットに吹かせる。

「Ｗａｋｅ　ｕｐ！」

そして、同じように魔導死神ユーノも印を結んで斬魄刀晩翠に自身の魔力と霊力を同時に送り込んでいく。

「“妙なる響き、闇となれ。我が魂より造られし刀に、正しき闇を与えたまえ。”」

二人の持つ刀を染め上げる赤と黒の光。

そして、二人は息を合わせると勢いよく走り出し、その状態から止めの一撃であるファイナルザンバット斬と闇天斬・魔断（まだん）を発動する。

「「はあああああああああ！！！！！！！！」」

「ぐあああああああああああ！！！！！！！！！」

二人の攻撃がほぼ同時に仕掛けられ、見事その直撃を受けた瞬間ヴォルドは悲鳴を上げながらアンゴルモアだけを残してガラスのように砕け散っていったのであった。

魔導死神ユーノは素早く残ったアンゴルモアに封印処理を済ませると、なのは達の元へと戻り、戦いが終わったということを噛みしめる。

「・・・終わったな・・・」

「ああ・・・漸く終わったんだ・・・」

こうして、ヴォルドとの戦いは無事に機動六課とキバユーノ達の活躍で勝利を収める形となり、レジェンドルガ化した人々も全員が元に戻っていったのであった。

そして、任務を終えたのちキバユーノ達の送別の為に機動六課では

パーティーが開かれていた。

そのパーティーの催し物の一環で、キバユーノは捜査に協力してくれた魔導死神ユーノ達に向けて最高のバイオリンの演奏を聞かせ、演奏を聞き終えた瞬間拍手喝さいが贈られるのであった。

「ブラボー！！！！！！！！」

魔導死神ユーノや恋次、なのはは演奏を終えたキバユーノの元へと近づき固い握手を交わした。

「いいバイオリンだったぜ！！！こっちのユーノにも見習わせたいぐらいだぜ！！！！！」

「れ、恋次さん！！！！その言い方はユーノ君に対して失礼ですよ！」

恋人を侮辱した発言に聞こえたなのはは恋次に文句を言い、その後恋次は冗談だと言ってお茶を濁したそうだ。

「素晴らしい演奏だったよ。素敵な音楽を有難う・・・もう一人の僕。」

「いいや、お礼を言うのは僕のほうさ。君達が居てくれたから、ヴォルドやレジェンドルガを倒すことが出来た。世界も・・・救われた。本当に・・・有難う。」

「よし！そんじゃ、最後は俺達からお返しと言っちゃなんだが・・・プレゼントを贈るぜ！」

鬼太郎はそう言うと、浦太郎達スクライア商店と白鳥を連れて特設ステージへと向かった。

「え、何のこと・・・？」

事情を知らないキバユーノは一体何をしようとしているのかが全く分からなかった。

「君のバイオリンほどじゃないけど、音楽には音楽でお返ししようと思ってね♪スクライア商店メンバー、用意！」

「「「「おお！！」」」」

魔導死神ユーノはそう言うと、一瞬のうちに服装を軽音楽風の格好に変化させると鬼太郎たちスクライア商店メンバーが待つ特設ステージへと向かい、自分の演奏する楽器の前に座った。

「それじゃあ、聞かせてあげましょう♪最高のクライマックスを！」

「準備はいいか、野郎共！！！」

「「「おお！！！」」」

「それじゃ、なのは！ボーカルは任せたよ！」

「うん！了解です♪」

魔導死神ユーノにそう言われると、なのはもバリアジャケットで出来た軽音楽風の格好に変化するとスタンドマイクの前に立って歌の準備を始める。

「それでは、もう一人のユーノ君たちに送ります♪ボーカルは、この私・・・高町なのは一等空尉が務めさせていただきます。ベースは、ユーノ君♪ドラムは金太郎さん。ギターは鬼太郎さんと白鳥さん。そして、キーボードは浦太郎さんです。」

キバユーノ達は暖かな目線でそれを見ながら、拍手喝采でなのは達の歌を心待ちにしたのであった。

「なのはさん！頑張ってください！！」

「なのはママ！！ユーノパパ！！ファイト！！」

それでは最後の締めになのは以下スクライア商店メンバーが音楽を届けます。

曲は、『Ｃｉｒｃｌｅ　ｏｆ　ｌｉｆｅ』です。

「“（著作権上の問題の為削除させていただきます）”」

魔導界の王（後書き）

教えて、ユーノ先生！

ユ「今日はエンペラーフォームについて教えるよ♪じゃ、お願いね。」

別ユ「はい。キバの最強形態であるエンペラーフォームはタツロットによって僕の鎧の鎖、カテナが解放され始めて使用できるキバ本来の姿だ。全身金色の重厚感あふれる鎧とマントを羽織っているのが特徴だね。」

キ「エンペラーフォームの解放により、戦闘能力は飛躍的に上昇し世界一つを破壊するとさえ言われる。また、ユーノの感情が高ぶった場合や魔皇力を全開にすることで飛翔体と呼ばれる強化形態にも姿を変えれるんだぜ！」

ユ「いや～～～短い間ながらも君と過ごせた時間は楽しかったよ♪またどこかで会おうね。」

別ユ「僕こそ、コラボレーションありがとう。こっちの世界のなのはの事しっかり守ってあげるんだよ。」

ユ「ああ。勿論だよ！」

二人はまた会えることを願って、固い握手を交わすのであった。

魔導師図鑑ハイパー！

もう一人のユーノが元の世界に戻って暫くして、元の世界から機動六課宛てで小包が届く。

ユ「みんな、もう一人の僕から小包だよ♪」

な「早く開けてみようよ！」

全員は興奮を抑えながら小包の中のものを拝見する。

そして、中から出てきたものは――――――

恋「ほう。こいつはまた随分洒落たもん送って来たな。」

ル「ああ。向こうのなのはが手作りした私達全員分の手編みの衣類だ。」

六課一同はそれを受け取ると大いに喜んだ。

ス「凄い！！冬になったら絶対着なくちゃ！！」

ティ「その前になくさないように気をつけなさいよ、あんたは♪」

は「私たちはほんま幸せもんやな・・・お？写真も一緒に入ってるで。」

フェ「向こうのユーノ達全員で撮った家族写真だね。みんないい顔・・・あれ？」

その時、フェイトはユーノの隣で満面の笑みを浮かべるなのはのお腹にふくらみがある事に気づく。

フェ「これって・・・まさか！！」

ユ「！！も、もう一人の僕・・・やってしまったか・・・」

な「ふぇ！！え、えっと・・・！！！自然の摂理だよねきっと！！！」

赤面して恥ずかしがるユーノとなのはであった。

ユーノキバ篇

登場人物

ユーノ・スクライア　／　仮面ライダーキバ

声　ー　水橋かおり

「異世界関係／ユーノの関係者」を参照

高町なのは（たかまち　ー　）

声　ー　田村ゆかり

２３歳。別世界に存在するキバのユーノの妻。経緯は若干異なるが、魔法やユーノと出会ったのは同じ9歳の頃で、その頃からずっとキ

バとして自分を守ってくれたユーノに恋心を抱いていた。現在はユーノと結婚して、子供を身ごもっており産休に入っている。キバット達とは仲が良い。

ロイド／　仮面ライダーイクサ

声　　堀内賢雄

２９歳。無限書庫司書長。嘗て地上部隊最強の魔導剣士と呼ばれ、模擬戦ではなのはにも辛くも勝利するほど。とある事情から地上部隊を辞め、無限書庫に勤務している。司書の中では最古参の一人である。魔法体系はミッドチルダ式。一人称は「俺」。ちなみに大の酒好きでいつもウイスキーの入ってるボトルを持っている。また洞察力や判断力に優れており、要所要所でユーノやなのは達を助けている。武器は剣であり、これはデバイスではなくて実剣である。物腰柔らかな人物で色んな人から慕われている。辺境世界に恋人（内縁の妻）がいるらしい。クロノからイクサシステムを継承し、本編ではイクサとなってユーノ達と共に戦う。

ファルコ

声　　桐山漣

２０歳。無限書庫司書。一人称は「俺」。ファンガイアとガルーダ族のハーフ。両親はファンガイアに殺され、逃げていたが人間の研究員につかまり、人工的にフェニックスを生み出す実験台にされていた。その過程で再生能力を持つモンスター態が炎を纏った形態、不死鳥モードを手にする。そんな時に自分を救ってくれたユーノに恩を抱く。以降彼の傍で、彼を支えるために司書になる。ユーノのことを敬意を込めて「おやっさん」と呼ぶが仕事上では「書庫長」と呼称し使い分けている。ロイドと共にユーノ達と合流し、教育実習生と言う形で密かにヴィヴィオの護衛を任される。

ヴォルドー↓杉村隆／仮面ライダーアーク／ＡＭ１９

声　一　　中村秀利

キバの世界のユーノの実父シルバ・スクライアの兄。ユーノが歴代最高にして最強のキバであると評されるようになった頃から密かにそれを嫉妬し、且つ人間とファンガイアが共生できる社会を目指していることに反感を持ち、嘗てミッドチルダに総攻撃を仕掛けたが敗北。人間のライフエナジーを吸収しながら反撃の機会を窺っていたおり、アンゴルモアも手に入れ更なる力を獲得する為に、過去の世界で王の魂に憑依されたばかりの杉村とアークの力も乗っ取った。そして、キバのユーノを洗脳して仲間内で戦わせようとするも魔導死神のユーノにそれを阻止される。自らの手で二人のユーノを葬るためにアークに変身。圧倒的な力でユーノ達を追い詰めるも、二人のユーノのコンビネーション技によって最後は斬り伏せられ消滅する。

キバットバットＩＩＩ世（一さんせい）

声　一　杉田智和

キバット族の名門・キバットバット家の三代目を名乗るコウモリのモンスター。通称キバット。基本カラーは金。渡に噛みつくことでキバに変身する力を与える。普段はバイオリン型の巣箱の中に居る。「キバっていくぜ！」が決め台詞。人の頭程度のサイズだが、アームズモンスターには「闇の盟約」を結ばせて封じ込め、巨大なドラン族モンスターを封印の呪術で使役するなどその力は未知数。戦闘時にはアームズモンスターや渡自身の活性化した魔皇力の暴走を防ぐため、キバットベルトから魔皇力の制御を行う役割を果たす。また猛スピードと鋭い爪を活かして白兵戦もこなし、時にはベルトから離れて自らファンガイアに戦いを挑む。さらにフエッスルを吹き

鳴らしたり武器に噛みついたりするなど、キバの戦闘においてはなくてはならない存在。気取り屋だが悪い性格ではなく、基本的に軽妙な語り口で場を和ませる。ユーノやなのは、ヴィヴィオのことは大好きだが、性格的な問題や声色が似ているクロノの事は嫌悪している。

魔皇龍タツロット（まおうりゅう―）

声　―　石田彰

小型のドラン族モンスター「ゴルディ・ワイバーン」をベースにした、黄金色の龍の改造モンスター。キバの鎧を拘束する全ての封印の鎖・カテナを解き放ち、キバをエンペラーフォームへとファイナルウェイクアップ（究極覚醒）させる禁断のキーとしての役割を果たす。タツロットフエッスルによって召喚することができるが、タツロット本人の意思で勝手に出てくることが多い。よってアームズモンスターと違いキバとキバットがフエッスルを吹けない状況でも駆けつける事が出来る。「びゅんびゅーん！」または「テンション、フォルテッシモ！」が決め台詞。戦闘時はエンペラーフォームとなったキバの左腕に出現した真紅の止まり木・パワールーストに止まっているが、尾部のアームズコネクターによって武器形態のアームズモンスターにコネクトすることも可能。背中には特殊な回転盤・インペリアルスロットが装備されており、キバが頭部の角・ホーントリガーを引くことでスロットを回転、出現した図柄によってキバやモンスターアームズのいずれかに増幅魔皇力を注入し、強化必殺技のフィーバー技を発動させることが可能。他者に対しては常に丁寧語で話すが、常にやたらとハイテンションなお調子者。

杉村（すぎむら）　隆（たかし）→ヴォルド／仮面ライダーアーク

声　―　堀内健

刑務所に収容されている受刑者だが、２２年間全く容姿が変わらず、何度も執行された死刑でも生存している。その理由はレジェンドルガの王＝ロードであるアークが憑依したためであり、人間の時でも複数の警官を吹き飛ばす衝撃波を放てる。ただし杉村本人の性格は犯罪者ながら臆病であり、レジェンドルガに遭遇して失禁してしまう場面もあった。

トア・サカキバラ

声　一　杏さゆり

新暦５７年のバイオリン演奏者。彼女が２２年前に刑務所で慰安ライブを行ったことが、レジェンドルガ事件の発端となる。

三条刑務官　／　ゼブラファンガイア

声　一　関俊彦

２２年前、ユーノ達が潜入した刑務所の刑務官。だがその正体はゼブラファンガイア。

アームズモンスター

キバに使役される６体のモンスター。全員がファンガイアとは異なる種族で、キバットと異なり普段はそれぞれ固有の人間態をとっている。元々はファンガイア同様人間のライフエナジーを糧とするモンスターだが、それぞれの種族はファンガイアによって滅ぼされており、彼らが最後の生き残りである。平常時はエネルギー蓄積兼防御形態である彫像態、武器形態の２つに変身する能力を半強制的に付加される「闇の盟約」をキバットと結び、それに従ってそれぞれに対応したフエッスルで召喚された者のみがキバの戦力として外出することを許されている（但し、鉄斎・クリス・ライガに関しては

例外的に外に出ることが出来る模様）。召喚された際は彫像態でドランから射出され、武器形態へとメタモルフォーゼすることでキバをフォームチェンジさせる。

次狼（じろう）

声　一　松田賢二

ルーク＝ライオンファンガイアによって滅ぼされたウルフェン族最強の戦士にして最後の生き残りで、６体のリーダー的存在。普段はワイルドな風貌の青年の外見をとっている。タキシードを着崩しキャッスルドランに幽閉され、他の５体とともに延々と暇潰しのゲームに興じている。幽閉されている立場であるが、「時の扉」を独断で使用するなどある程度の権限はもっている模様。また、一時的に外の世界に出て干渉する事も可能。人間より嗅覚が発達しており、遠く離れた特定の人間の匂いも嗅ぎ分けてしまう。基本的に態度や口調はクールだが、気に入らない相手には口より先に手が出るタイプ。コーヒーが大好物で並々ならぬこだわりを持っており、口に合わないコーヒーには決して金を払おうとしないが、認めたコーヒーには高い金を平気で支払う。ユーノのよき理解者であり、兄貴分的存在。

ガルル

次狼の本来の姿である青い狼男。鋭い爪と牙を武器とし、手の爪には引き裂いた人間からライフエナジーを分離させる効果がある。月の満ち欠けにより微妙に力の増減があるらしく、満月の時に最大となる。

ラモン

声　一　小越勇輝

マーマン族の最後の生き残り。普段はあどけない少年の外見をとっている。平時はセーラー服を纏いキャッスルドランに幽閉されている。無邪気で人懐っこい性格で「ねえねえ」が口癖。しかし頭の回転が早い野心家であり、他の2体の前やバッシャーフォームでの戦闘中では余裕にあふれた態度をとる。ユーノが偶にキャッスルドランに遊びに来るとこの上もなく喜び、最高級の待遇でもてなす。

バッシャー

ラモンの本来の姿である緑色の半魚人。炸裂水弾を風船ガムのように膨らませて放つ能力を持つ。また赤い目は、暗闇でも標的を逃さない暗視ゴーグルとなっている。

力（リキ）

声　一　滝川英治

フランケン族の最後の生き残り。普段は屈強な大男の外見をとっている。燕尾服を纏いキャッスルドランに幽閉されている。ラモンと行動を共にすることが多い。他の2体に比べて人間社会に適応出来ておらず、人間の言葉をあまり覚えられていないためほとんど話さない（たまに喋っても片言）。しかし性格は純粋で表情は豊か。ユーノやなのはなど、一度親交を深めた人間には絶対に手は出さないという律義な一面がある。また怪力を有しており、本来の姿に戻らずとも素手でチェスの駒を握りつぶすことが可能。首を傾けて音を鳴らす癖がある。

ドッガ

力の本来の姿である紫色のフランケンシュタイン。特別な武器・能

力は持たないが、頑丈なボディとかなりの怪力を持っている。

鉄斎（てっさい）

声　一　堀勝之祐

ギガント族の最後の生き残りでシュテンクラスに呼ばれる種類に属する。普段は白い髭を生やした好々爺の外見を取っている。タキシードをきっちりと着こなしキャッスルドラン内では執事を担当している。特殊な生命活動として『休眠』というものがあり、数年の間は不眠不休で働くことができる。だが、生命である以上日疲労はある。そのため体力が少なくなると一時的に眠りにつき、消耗した体力を回復させる習慣がある。ユーノの事を「若様」と言って幼少の砌よりの先代のシルバとの約束を固く守り続けている。

テッサイ

鉄斎の本来の姿である灰色の巨人。力同様特別な武器・能力は持たないが、巨体を活かしたドッガ以上の頑丈なボディと圧倒的な破壊力を持っている。

クリス

声　一　芳賀優里亜

ガルーダ族の最後の生き残り。普段は１８～２１歳程度で、茶髪で腰まで伸びている髪の女の外見を取っている。ゴスロリチックなメイド服を着てキャッスルドランの城内でメイドを担当している。ユーノの事を「ご主人様」ないしが「ユーノ様」と呼称し、なのはに対しては「奥方様」と言って常にアドバイスをしている。次郎に淹れるコーヒーは彼女以外に代役がいないと言われる程絶品。

クリステラ

クリスの本来の姿である茶色のガーゴイル。背中に生えた翼から無数の羽を銃弾のように放つ能力を持つ。また非常に高い視力を持ち、数百メートル先のものまで見通す。

ライガ

声　一　高橋広樹

ドラグーン一族の最後の生き残り。普段は見た目が２０代前半で、茶色の長髪で首の後ろで髪を結んだ瞳の色がカーマインの青年の外見を取っている。次郎達他の五体とは異なり強力な力が暴走しないために一人異空間に繋がっている、特殊な部屋に封印されている。放浪癖があるため、あまり顔を見せる事は無い。キャッスルドランの住人の中で最強の実力を持っている。口調は粗悪で五体の事をそれぞれ「野良狼／次郎」「魚小僧／ラモン」「デクノ坊／力」「ジジイ／鉄斎」「鳥女／クリス」と呼んでいる。ラモンからは逆に「ライちゃん」と呼ばれている模様。

ライガ

ライガの本来の姿である黒色の竜人。アームズモンスター中最強の攻撃力と機動力を誇り、キバでさえそのコントロールが難解とされるほどの絶大な力を有する。

チェックメイトフォー

ファンガイア最強と呼ばれるにふさわしい四人の実力者達の名称。名前の由来はチェスによる詰め「チェックメイト」から。それぞれ役割を持ち、その地位を永遠に継承していく。地位の上下関係は「

キング」を頂点に同位置に「クイーン」、その下には側近の参謀である「ビショップ」と護衛の「ルーク」は同じ地位にある。メンバーの共通点として、人間態の時は手のどこかに自身の称号となる紋章が薔薇に飾られたデザインで刻まれており、怪人態では、石膏像が体の一部になっている。彼らに秘められた力は先天的なものであり、持ち主が死んでも転生し別の存在に引き継がれる（継承条件は称号によって異なり、キングは正統なる血縁で左手の表裏にキングの紋章が発現された者が継承するが、他の称号は無作為に選ばれ、掌か手の甲に現れることが多い）。継承の紋章を発現した者は、それを運命として本人の意思に関係なく、その地位を継承しなければならない。一族最高位にして大変に名誉ある神聖な称号である故、拒絶することはほぼ死を意味し、一族の手によって処刑される運命をたどる。本編ではヴォルドに仕える形でユーノ達と敵対する。

キング／　仮面ライダーサガ

声　ー　山本匠馬

「キング」の力と称号、そしてサガの鎧を受け継ぎ、歴代最高峰のキングとして祭り上げられる見た目２２から２３歳の青年。紋章は左手の甲と掌に２つあり、普段は黒い革手袋でそれを隠している。ファンガイア態は不明で本編でも登場しなかった。基本的にその任務は配下のファンガイアに任せるが、対象がファンガイアもしくはユーノに与する者である場合のみサガに変身して粛清する。ヴォルド同様人間は家畜・食料としか見ておらず、人間との共存の提案を拒否している。シャッハを粛清しようとしたところをロイドに妨害され断念。その後、再びロイドと対戦するがライジングイクサとなったロイドの一撃を受け消滅する。変身時の台詞は「（貴様に）王の判決を言い渡す。死だ！」。

ビショップ／　仮面ライダーレイ

声　一　村田充

「ビショップ」の名と称号を持つ、黒いロングコートを着用する長身痩躯で眼鏡の男。紋章は左手の甲にあり、そこから発する光で物質を消滅させる。「全てのファンガイアの在り方の管理」が使命で、クイーンやキングの補佐を中心に様々な活動を行う。知略に長けた策略家であり、普段は飄々としているが、その本性は目的に利用できるものは全て利用しようとする傲慢な性格。立場上、一族に伝わるファンガイア復活などの知識や魔術を多く修得している。過去編では真夜の代わりに太牙の教育係をしていたが、多忙のためいなくなることが多かった。戦闘力も高く、レジェンドルガすらも恐怖させ凍り付かせるほど。最終局面においてフェイト達と交戦。フェイト達のコンビネーションの前に敗北。

ルーク

声一　高原知秀

「ルーク」の名と称号を持つ、筋骨隆々とした肉体の男。紋章は右手の甲にあり、同じ刺繍がされた革ジャンを着ている。チェックメイトフォーとしての使命は不明だが、時折ビショップと接触して彼から一族の情報を提供されている。城門では門番として機動六課を迎え撃つ。最期は恋次や鬼太郎の攻撃をその身に受け、倒された。

ライオンファンガイア

ルークの本来の姿であり、ビーストクラスに属するライオンを彷彿させるファンガイア。名の通り城壁を模した鎧のような皮膚と重戦車のようなパワーを持ち、広範囲に射出することができる指先のロケットクローを武器に戦う。他のファンガイアとはまさに次元が違うほどの実力を持つ。

クイーン

声　一　加賀美早紀

「クイーン」の名と称号を持っていた妖艶な女性。フード付きの黒いゴシックなファッションに身を包む。なのは達が一瞬言葉を失ってしまうほどの美貌の持ち主。「人間と結ばれてはならない」というファンガイアの掟を破る者を抹殺する使命を持つ死刑執行人（パニッシャー）。紋章は左の掌にあり、そこから発する「制裁の雷」と呼ばれる光で相手を消失させる。これを使用する際には周囲が闇に包まれて夜になり、赤い月が出るという特徴がある。ルークが一歩引いた対応をする程の実力の持ち主で、人間態のままでも瞬間移動や傷を一瞬で治すなどの能力を有しており、一族の間では「輝ける闇」と呼ばれ、畏怖されている。温厚かつ奔放な性格だが危機を目の前にしても一歩も退かず、冷静に自分の考えを話す芯の強さを併せ持つ。口八丁な言動で場内に進入してきたなのは達を翻弄しつつ、強い力で追いつめるもなのはの強い想いの籠った一斉攻撃の前に敗れ去る。

パールシェルファンガイア

真夜の本来の姿であり、アクアクラスに属する真珠貝を彷彿させるファンガイア。深央の変身する個体よりもやや大型で、体色はピンクで背中から生えている翼の色は黄金という外観上の差異がある。他のファンガイアと比べるとやや小型だが、その能力には計り知れないものがある。女性型でありながら、重戦車を片手で持ち上げるほどのパワーと戦闘機をも凌ぐスピードを誇る。身体前部から真珠型の弾丸「パールバレット」を無数に打ち出す事が可能で、さらに真珠型の炸裂弾を頭上に王冠状に展開し標的の周囲を覆い、一斉射出して弾丸を炸裂させることで標的を一撃で粉砕する「クイーンズ・デスパール」という技を使用する。

ファンガイア

ファンガイア族は人間のライフエナジーを「最高の食料」と称して捕食することで生きる種族である。

アントライオンファンガイア　↓　アントライオンレジェンドルガ

ミッドチルダに出現したファンガイア。アリジゴクを彷彿させるインセクトクラス。魔導死神ユーノとなのはの攻撃を受け敗北した後に、マミーによってレジェンドルガ化する。

ゼブラファンガイア

過去の世界に出現したファンガイア。シマウマを彷彿させるビーストクラス。口から衝撃波を放つ。人間態は三条という名の刑務官。皮肉にもこのファンガイアの出現で、結局修正されるはずの歴史が、変わらなくなってしまった。

レジェンドルガ

最凶最悪の魔族として他の魔族からも恐れられる種族。人間の恐怖の悲鳴をなにごとに代えがたい「最高の音楽」と称して嗜好し聴くことを最高の快楽とする。その姿は種族間の統一性がなく様々な個々の姿を有し世界各国の伝説に登場する様々なモンスターに酷似し、１３魔族の中でその大半の伝説の起源を占めている。遥かな昔に世界の覇権をめぐってファンガイアと熾烈な戦争を繰り広げ、ファンガイア軍を窮地に陥れる。しかし完成間も無いダークキバを纏ったキング（過去編）によって戦局は一変、対レジェンドルガ用のシー

ルフエッスルによりアークは封印され、ウェイクアップ3「キングスワールドエンド」によりほぼ全てのレジェンドルガが殲滅された。ファンガイアは戦争に勝利するも多くの同胞を失いほぼ痛み分けの勝利であった。最大の特徴は襲った対象者（人やファンガイア）をレジェンドルガ化・洗脳する能力を持ち、同族を増やす能力を有する。マミー以外の怪人が洗脳能力を持っているのかは不明だが、レジェンドルガ化した人間は、掌から蛇や包帯を出現させ、触手のように操る能力を得、他の人間を襲う。一部のレジェンドルガには、植物の様な意匠が見られる。　また、レジェンドルガ化された人間は本体であるレジェンドルガが死亡すると元の人間に戻る模様。

マミーレジェンドルガ

声　―　大川透

ミイラ男の伝説の元となった怪人。博物館の展示物から復活した。全身のコントロールデスマスクを付けた標的を、同族にする能力を持つ。パワーに長けており、体の包帯で拘束した相手を叩きつける豪快な攻撃のほか、顔面から衝撃波を放つ。各デスマスクの頭髪は青い薔薇状になっている。魔導死神ユーノとなのはの手にかかり、倒される。

メデューサレジェンドルガ

声　―　篠原恵美

メデューサの伝説の元となった怪人で一族の紅一点。若い女性のような人間態を持つが、本性は凶悪、残虐である。大食漢であり、頭部の蛇による噛み付きで、相手を攻撃する。胸元や肩に葉っぱ状の意匠が見られる。

マンドレイクレジェンドルガ

声　一　塩野勝美

マンドレイクの伝説の元となった怪人。唯一言語能力を持たない。体から蔦を伸ばして相手を窒息させるほか、瞬時に植物を張り巡らし自身に有効な戦場に変える能力を持つ。

ガーゴイルレジェンドルガ

声　一　藤田圭宣

ガーゴイルの伝説の元となった怪人。スピードファイターで、その防御力とスピードから自ら前線で仲間の盾になる。体の各部に紅葉が張り巡らされている。

魔皇力（まおうりょく）

魔力の上位種。同じ魔法を使ったとしても魔力で放ったものよりも、魔皇力で放った方が威力が高いなどの現象が起こる。元々はファンガイアのチェックメイトフォークラスの者たちが使う力であり、キバユーノが持つ強い力でもある。

仮面ライダー

仮面ライダーキバ

ユーノ・スクライアがキバの鎧を纏った姿。モチーフはヴァンパイア、頭部はジャック・オ・ランタンをモチーフにしている。キバットバットⅢ世が渡の腕を噛むことで魔皇力と呼ばれる力を注入し、変身する。ダークキバに次いでファンガイアが開発した2着目のキバの鎧であり、真の姿であるエンペラーフォームの外観から、「黄金のキバ」とも呼ばれる。ダークキバの強大すぎる戦闘力が暴

発の危険を秘めていたことを踏まえ、カテナという拘束具でパワーを適宜抑制できる設計となっている。戦略によって安全性がコントロールされるが、ダークキバ程の危険性はないとはいえ、着用するには相応の資質が必要。

フォーム

フエッスルで召喚した武器形態のモンスターを使い、フォームチェンジを行う。フォームチェンジすると、モンスターの力によってユーノの性格や声色に変化が起こるが、人格自体はユーノのままで変わらない。

キバフォーム

キバの基本形態で、エンペラーフォームに拘束具を取り付け、その力を制御した形態。基本カラーは赤、複眼にあたる部分は黄色。武器は使わず、素手での格闘を中心とした戦闘スタイルを取る。また吸血鬼をモチーフとしているためか、逆さ吊りになっての奇襲攻撃も得意とする。

必殺技：「ダークネスムーンブレイク」

右脚の拘束を開放し、上空に飛び上がり繰り出す飛び蹴り。キバットが「ウェイクアップ！」のコールと共にウェイクアップフエッスルを吹くことで発動する。発動すると周囲は三日月が浮かぶ夜になり、キック後は周囲の壁や地面にキバの紋章が刻まれる。

ガルルフォーム

キバットが「ガルルセイバー！」のコールと共にガルルフエッスル

を吹き、ガルルが変化した刀魔獣剣ガルルセイバーを召喚することによって変身する形態。左肩が青い狼の毛がたった様な外見になる。基本カラーは青。キック力・走力といった脚力に優れる。ガルルセイバーによる剣術を中心とした、野生的な近接戦闘を得意とする。

必殺技：「ガルル・ハウリングスラッシュ」

ガルルセイバーを口に銜えて飛び掛かり、敵を一刀両断にする。キバットが「ガルルバイト！」のコールと共に、ガルルセイバーに噛みつくことで発動する。発動すると周囲は満月が浮かぶ夜になり、敵は一刀両断にされた直後にガルルの顔の輪郭が光る。

バッシャーフォーム

キバットが「バッシャーマグナム！」のコールと共にバッシャーフエッスルを吹き、バッシャーが変化した銃魔海銃バッシャーマグナムを召喚することによって変身する形態。右腕が半漁人の魚になっている。基本カラーは緑。視力などの身体感覚が向上し、更に水中での無限活動が可能となる。バッシャーマグナムによる銃撃戦に加え、水のない空間にも疑似水中環境・アクアフィールドを生成し、得意な水中戦に持ち込める。

必殺技：「バッシャー・アクアトルネード」

アクアフィールドから竜巻を起こし、その中に撃ち込んでパワーアップさせた弾丸により敵を撃ち抜く。キバットが「バッシャーバイト！」のコールと共に、バッシャーマグナムに噛みつくことで発動する。発動すると周囲は半月が浮かぶ夜になり、敵は撃ち抜かれた直後にバッシャーの顔の輪郭が光る。

ドッガフォーム

キバットが「ドッガハンマー！」のコールと共にドッガフエッスルを吹き、ドッガが変化した槌魔鉄槌ドッガハンマーを召喚することによって変身する形態。胴体と両腕が頑丈な鎧になっている。基本カラーは紫。機動力は減退するが、腕力と防御力が大きく向上する。相手の攻撃を正面から受け止め、一撃必殺で仕留める近接戦を得意とする。

必殺技：「ドッガ・サンダースラップ」

ドッガハンマーの魔皇力で標的を拘束し、ハンマーから放つ拳型のオーラで粉砕する。キバットが「ドッガバイト！」のコールと共に、ドッガハンマーに噛みつくことで発動する。発動すると周囲は朧月が浮かぶ夜となり、敵は粉砕された直後ドッガの顔の輪郭が光る。

エンペラーフォーム

タツロットの力で拘束を解き放ち、「ファイナルウェイクアップ」して変身したキバの本来の形態で、キバの最強形態の一つ。基本カラーは金と赤へと変色、背中にはマントが追加される。通常のキックでもダークネスムーンブレイクを超える威力を持ち、強い攻撃力、防御力を獲得している。圧倒的なパワーを秘め装着者の資質しだいでは一人で国を滅ぼすことも可能とされる。キバへの変身時にタツロットを加えることで、キバフォームを介せず直接エンペラーフォームへ変身することも可能。

必殺技：「エンペラームーンブレイク」

タツロットの能力により、既存の４フォームの物をパワーアップさ

せた「フィーバー技」を使用可能。劇中ではダークネスムーンブレイクのフィーバー技で、両足に赤いキバの紋章を模したエネルギーを纏い跳び蹴り、もしくは回し蹴り・跳び回し蹴りを放つ。

必殺技：「ファイナルザンバット斬」

ファンガイアのキングに代々伝わる魔剣・魔皇剣ザンバットソードを用いて放つ最強の技。キバットが「ウェイクアップ！」のコールとともにザンバットのウェイクアップフエッスルを吹くことで発動、ザンバットの牙で研いだ赤く輝く刀身で一度に複数の敵を一刀両断にする。

飛翔態（エンペラーバット）

ユーノの「想い」や「魔皇力」が最大限に高ぶることで、エンペラーフォームに次ぐ更なる覚醒を遂げた、巨大なコウモリ（翼竜）型の形態でキバの最強形態の一つ。基本カラーは金と赤。ファンガイアと他種族との混血種でなければ変身できない。

必殺技：「ブラッディストライク」

口から放つ金色の光線。

必殺技：「ジャイアントムーンブレイク」

劇中で放った、キャッスルドランと一体化して巨大なエンペラーフォームの姿となって跳び蹴りを放つ。

仮面ライダーイクサ

「時空管理局本局技術部」が開発した、対ファンガイア兼キバ用パワードスーツを装着した戦士。モチーフは聖職者の法衣。基本カラーは白。適合者がベルト型ツール・イクサベルトにイクサナックル(フィストオン)を装着することで変身が完了する。ＩＸＡの名は、「Ｉｎｔｅｒｃｅｐｔ　Ｘ　Ａｔｔａｃｋｅｒ（未知なる驚異＝ファンガイアやキバに対する迎撃戦士）」の略称。劇中では、イクサシステムと通称される。キバユーノが9歳の頃、ジュエルシードの捜索の途中で当時のクロノが使用したのがこの力であり、現在はユーノやファンガイアとの戦闘で得たデータによって改良された「Ｖｅｒ．ＸＩ」として登場し、司書長のロイドが受け継いでいる。フエッスル、イクサカリバー、バーストモードへの変形などの武装も充実。また「Ｖｅｒ．ＸＩ」以降はライジングイクサへの強化変身を実現しており、それに伴い口部分が携帯電話型アームズ・イクサライザーへと換装されている。ツールによる変身システムのため、キバやサガとは異なり、ある程度の戦闘能力を持つ者ならば誰でも変身可能。

バーストモード

シールドを開き１００％の力で稼動する第2形態。通常時はセーブモードにより力を抑制しているが、このモードにチェンジする際風圧が発生し、近くの敵を吹き飛ばす事もある。システムの全機能を発揮できるが、負荷は大きい。

必殺技：「イクサ・ジャッジメント」

光を纏ったイクサカリバーで敵を一刀両断する。イクサベルトにカリバーフエッスルを読み込むことで、「イ・ク・サ・カ・リ・バ・ー・ラ・イ・ズ・アッ・プ」の電子コールと共に発動する。発動時、背景には燃え盛る太陽が輝く。

ライジングイクサ

イクサシステムが「Ｖｅｒ．ＸＩ」に移行することで変身可能となった、イクサの強化形態で、イクサの最強形態。基本カラーは青。イクサの口部分からイクサライザーを取り外し、コンソールのキーを「１→９→３」の順に押すことで「ラ・イ・ジ・ン・グ」の電子コールが発声、通話ボタンを押すと共にイクサの装甲が弾け飛び、変身が完了する。胸部の装甲を展開し、システムのプロテクトを解除することで常に１００％の出力で稼働することが可能となり、以前のイクサを遥かに超える戦闘能力を発揮する。イクサライザーを専用武器として使う他、此れ迄の武器であるイクサカリバーやイクサナックルも使用可能。

必殺技：「ファイナルライジングブラスト」

此れ迄の2種類の技に加えて、最大稼働したエネルギーをイクサライザーへと集中させ、通常の数十倍もの威力を誇る強力なエネルギー波を発射する。イクサライザーのグリップからライザーフエッスルを取り外し、イクサベルトに読み込むことで発動する。威力と共に反動も極めて強いが、それを利用して飛び蹴りでトドメを刺すこともある。

仮面ライダーサガ

チャックメイトフォー・キングが「運命の鎧」の別名を持つサガの鎧を纏った姿。モチーフはヘビで、基本カラーは銀、複眼部分は青。サガークが太牙の腰に取り付いてバックルとなり、ジャコーダーをバックルに挿入することで変身する。キバの鎧以前に開発された、最初期型の鎧。故に専用武器はジャコーダー1つ、所持するフエッスルも1つだけと武装は必要最低限のみだが、キバエンペラーフォ

ームに匹敵する潜在能力を持つ。希少な黒い魔皇石が使用されている。剣の形のジャコーダーロッドによるスピーディーなフェンシングスタイルと、鞭の形のジャコーダービュートで標的を捕縛し叩きつけるパワフルな戦法を使い分け戦う。嘗ての他の種族への侵攻で使用され、サガの鎧を身に装着した当代のキングの力は絶大であり全ての種族の恐怖の象徴となっていた。

必殺技：「スネーキングデスブレイク」

ジャコーダービュートで刺し貫いた標的を吊るし、魔皇力を直接送り込み粉砕する。サガークが「ウェイクアップ」のコールとともにウェイクアップフエッスルを吹くことで発動する。上空に皇帝の紋章を出現させ、それにビュートを通して縛った敵を宙吊りにする方式と、貫いた標的をそのまま背負って締め上げる方式の2パターンが存在する。また、敵に巻きつけるだけでも魔皇力の注入は可能である。発動すると周囲は夜になり、青い三日月が浮かぶ。

仮面ライダーレイ

チェックメイトフォー・ビショップが、キバの特性を研究して開発したライダーシステムを装着した戦士。モチーフはイエティ。基本カラーは白。レイキバットがビショップの腰に出現したベルトに取り付くことで、システムが装着され変身が完了する。内部は同じく人造ライダーシステムであるイクサ同様、テクノロジーが結集されたメカニカルスーツであるが、基本構造はベルトのレイキバットがエネルギーを循環・管理し、身体の各部に装着されたパワージェネレーター・人造魔皇石で増幅するという、キバの鎧と同様のものであり、外見もイクサと比較してより生物的なものとなっている。キバとともにファンガイアをはじめとしたモンスターの力もフィードバックされており、このレイには冷気属性が備わっているため、掌

からは零下２００℃の冷気を発射することも可能。

必殺技：「ブリザードクロー・エクスキュージョン」

ベルトに装着されたレイキバットがウェイクアップフエッスルを吹くことで、普段両腕に過剰に巻かれた封印鎖＝カテナを開放し、巨大な人造魔皇石を３つ仕込んだ巨大な鉤爪ギガンティック・クローが出現し、標的を冷気で氷結させた上でクローによって何度も切り裂く。

仮面ライダーアーク

杉村隆＝ヴォルドがレジェンドルガの王の鎧を纏って変身した姿。バフォメットのような頭部が特徴。基本カラーは黒。アークキバットが杉村の腰に出現したベルトに取り付くことで、システムが装着され変身が完了する。過去に行われたファンガイアとレジェンドルガとの戦争で、ダークキバに敗北し封印されていたが、過去編にて封印が解かれ王（ロード）の魂に憑依された杉村に継承された。変身時に即座に巨大化する全長は３．２メートルあり、その巨体は同族を初め、あらゆる者に威圧感を与える。アークトライデントという三叉槍を武器に持つ模様。また、アークキバットがウェイクアップフエッスルを吹くことによって、胸部のカテナを外し、体内のブラックホールに相手を葬る事も可能。劇中では月の眼の力を取り込んで、レジェンドアークへの覚醒の為に使用。この時、アークキバットの仮面が外れて本来の姿のメカキバットになり「Ｇｏ　ｔｏ　ｈｅｌｌ！」の合図を出す。

レジェンドアーク

アークが月の眼の力を取り込んで強化した姿。蔦状の物体が巨大な

翼（蔦と蔦の隙間からは炎が出ている）となり、そして蔦状の物体からなる巨大な腕を持つ（通常の腕と巨大な腕を合わせて計４本腕を持つ。）。また、胸の中心に巨大な一つ目が存在する。攻撃方法は肩部から火球を放つほか、蔦からなる巨大な拳で力任せに殴り戦う。

必殺技：「ウルティマデッドエンド」

巨大な光球を胸部の月の眼から放ち、敵を消滅させる。

キバのアイテム

魔皇剣ザンバットソード

ファンガイアの王のために創られた、この世で最強と言われる魔皇剣。ライフエナジーに過剰に反応する「命吸う魔剣」で、剣自身が認める者以外が持つと、暴走してしまう。当初、手にしたユーノは力に飲み込まれ暴走してしまったため、アームズモンスター３体が一時的に合体することでライフエナジーと思念が合わさって誕生した幻影怪物・ザンバットバットが剣の刀身・インペリアルブレードに取り憑きその力を抑制。キバ・エンペラーフォームの専用剣となった。それ以後、普段はタツロットの体内に保管され、エンペラーフォームが使用する際にタツロットの口から取り出す。ザンバットバットをキバの手でスライドさせてインペリアルブレードを研ぎ澄ませることで、魔皇力と切れ味を制御することが可能。

マシンキバー

全長：２５１０ｍｍ
全幅：９４０ｍｍ

全高：１０９０ｍｍ
装備重量：２２０ｋｇ
走行速度：５２０ｋｍ／ｈ
最大出力：３６７．５ｋｗ／８５００ｒｐｍ
ベース車種：ホンダ・Ｓｈａｄｏｗ＞７５０＜

キバットから与えられたキバ専用モーターサイクル。別名「真紅の鉄馬」の通り、車体前部に馬のモンスターの脳が埋め込まれている。如何なる悪路も走行し、キバと超音波で交信して無人走行も可能。

ブロン

身長：２１０ｃｍ
体重：５４０ｋｇ
最高飛行時速：６５０ｋｍ

キャッスルドランの奥深くに眠るモアイのような黄金の魔像。「ブロンブースター！」のコールとともに、ブロンフェッスルで呼び出すことができる。様々な物質に融合することができ、秘められた魔皇力によって融合した物の性能を向上させる能力を持つ。

ブロンブースター

全長：４３６０ｍｍ
全幅：１２２５ｍｍ
全高：１０９０ｍｍ
装備重量：７６０ｋｇ
走行速度：１５５０ｋｍ／ｈ
最大出力：４２６３．５ｋｗ／１２０００ｒｐｍ（フルブースト時）

マシンキバーにブロンが融合した姿。通常時はウィリー走行だが、その爆発的な推進力により、地形を問わない高速走行も可能となっている。又、強固な装甲をほこる。

キバの使役モンスター

キャッスルドラン

全長：４１ｍ
体高：３２ｍ
体重：１８０００ｔ
最高歩行速度：時速８０ｋｍ
最高飛行速度：時速１２０ｋｍ

ファンガイアのライフエナジーを捕食する、ドラン族最強の怪物グレートワイバーンを改造した巨大モンスター。巨大な西洋風の城からドラゴンの頭、尾、四肢が伸びたような外見をしている。年齢は３２０歳（人間換算で３２歳）。普段はキバがファンガイアを倒すと自動的に出現するが、キバットが「キャッスルドラン！」のコールと共に、ドランフエッスルで呼び出すこともできる。城の内部は居住空間となっている。シュードランなど、他のドラン族と合身することで戦闘を行うことが可能（キャッスルドランにとっての「ウエイクアップ」）。武器は城左右に装備されているミサイルと、口から放つエネルギー光弾。時空にある程度干渉する能力を持っており、内部にはタイムスリップが可能な「時の扉」があるが、通常開くことは許されていない。シュードラン以外での共同戦線も可能であり、劇中ではキバ飛翔態と合体した。現在は次狼らの制御の下、キバに従えられるモンスターとしてキバットの支配下にある。

集団転校生で潜入せよ！（前書き）

更新がだいぶ遅れました。

扉絵の色塗りに大分時間を喰いました。

今回は前々から要望のあった虚空さんのリクエストを参考に集団転校生として捜査に乗り出します。

途中、要望が難しかったので僕なりにアレンジを加えました。

では、どうぞ。

集団転校生で潜入せよ！

＞ｉ１８８７１―７０９＜

ある日の機動六課医務室でのシャマルとなのはのやり取り。

長年、なのはの主治医として体調の具合を見てきたシャマルは今日もなのはのメディカルチェックを丹念に行っていた。

「う・・・！く・・・！！シャマル先生・・・まだちょっと痛いです・・・！」

「ふう・・・やっぱり。」

シャマルはこれまでユーノ同様無茶癖の多いなのはの体調管理を気を配ってきているが、ＪＳ事件以降の体へのダメージの回復の遅さは今もなおなのはの体を苦しめていることに顔色を歪め、データを打ち直す。

「あれから四年・・・やっぱりブラスターの反動の方は今でもなのはちゃんの負担になってることは間違いないようね。」

「ですね・・・」

「今後もアンゴルモア捜査が続く中、戦いはどうしても避けられないから私も細心の注意をしているつもりだけど、なのはちゃんもあんまり無茶して自分の体を酷使しないように気を付けないとね。」

「はい。大丈夫ですよ。私、元気で頑丈が取り柄な女ですから。」

「またそんなこと言って・・・医者としてはそう言った曖昧な言葉は見過ごせないわね。」

「う・・・はい・・・気をつけます。」

シャマルの言葉に項垂れたなのはであったが、その後シャマルの話

に耳を傾ける。

「まぁでも、以前のなのはちゃんから見ればかなり魔力消費の幅がかなり抑えられているわね。現状では今の最大魔力値を維持することが先決ね。でも私も正直驚いてるわ。これまでの激戦の中で、こんなにも魔力値が安定した数値を保っていられるなんて・・・それも多分、ユーノ君が作ってくれたそれのお蔭ね。」

「ですね♪」

なのはは笑顔を向けながらシャマルと同じ見解に達すると、自分の手の中に収められているユーノが作ったＡＲカートリッジを強く握り、ふとシャマルに向かってなのはが言葉を発する。

「堕ちないと思いながらも、心のどこかでいつ堕ちるかもしれないって思うと、今でもぞっとするんですけど・・・ユーノ君の作ってくれたこのカートリッジシステムがあれば何時だって安心して戦っていけるんです。心の傷も漸く塞がってきました。やっぱり、私にはユーノ君がいないとダメなんです・・・」

「なのはちゃん・・・」

神妙な顔つきを浮かべ、なのはに相槌を入れるシャマル。

実際、シャマルもユーノが居なくなった時の悲痛なのはの心の傷をどうにか出来なかった時は非常に心が痛み、それと同時に医者としての自分の非力さを呪ったほどであった。

「安心して背中を合わせられる人がいるから、私は全力で戦える。たとえどんなことがあっても、私は一人じゃありません。優秀で自

慢できる生徒たちや私の事を思ってくる大切な友達、それに、こんな私を一番理解してくれる世界で一番大切な人が傍にいます。だから、私・・・今が凄く幸せなんです。」

「・・・そう。それならよかった。」

「え？」

シャマルの何気ない言葉に疑問を感じたなのはであったが、シャマルはスクリーンを消すとそんななのはに向かって優しい表情で次のように語る。

「前のなのはちゃんに比べれば、体も心も断然に良くなってるから安心したわ。医者としては、心身両方の傷を治せられれば一番いいんだけど、生憎そう上手くいかないのが現実よね。だって、なのはちゃんの心の傷は、“ユーノ君”にしか直せないもの。」

「シャマル先生・・・」

思わず言葉を詰まらせてしまうなのは。

すると、シャマルはなのはの両肩に手を添えると最後にこう言って来た。

「なのはちゃん。あなたがユーノ君の事を必要としているように、ユーノ君もあなたを必要としているの。だから、一番近くにいるあなたがユーノ君の事を支えてあげてね。彼が無茶なんてしなくてもいいように、あなたも無茶なんてしなくていいように・・・ね♪」

「・・・シャマル先生・・・はい。勿論です！」

シャマルの言葉で決意を新たにしたなのはは笑顔でそう返事をした。

そんな医務室での二人のやり取りを陰でずっと聞いていたユーノの方は、何処か複雑な表情ではあったが若干表情が綻んでいたらしく、話を聞き終えるとそのままある場所へと向かっていったそうな。

そのある場所とは、室内に設けられた日本式の剣道場と同じ造りの専用訓練スペースであった。

ユーノは一度服を着替えると、木刀を持ち目の前にある藁の束を見ながら静かに目を閉じる。

そして、暫くの沈黙の後目を開くと同時にその藁の束を全て綺麗に斬りおとす。

斬られた藁の束の切断面を見たユーノはまだ何か不満そうな表情を浮かべている。

「やはりまだまだ荒いな。一護さんのそれと比べれば・・・――――」

それと言うとは、一体何なのか？

少し前の出来事をフェイドバックしてみよう。

ユーノがキバの世界のユーノと共にヴォルドーを倒してから暫く立ったのち、地球の一護がユーノを突然呼び出し知り合いの剣術道場に向かった時の事であった。

一護はそこでユーノにある意外な事を口にしたのだ。

「え!?何ですって・・・・・・!?」

「聞こえなかったのか?今、言ったろ・・・・・・お前に“月牙天衝の極意”を教えるって」

「月牙天衝の極意って・・・どういう事です?!」

月牙天衝とは、一護が唯一仕える能力であり斬撃の瞬間に一護自身の霊圧を食らい刃先から超高密度の斬撃を放出する技であるが、それは一護と父である一心にしか使えない固有のスキルの事だ。

それをユーノに教えるとは一体どういう事なのであろうか?

「分からないって顔してるな。無理もねぇ・・・月牙天衝を使えるのは俺と親父だけと考えてるようだからな。だけどいいこと教えてやるぜ。“月牙”って言うのは、本来斬魄刀の名前に『月』がつくものと、力の根源が『月』にあるものが使うことを許された技なんだぜ。」

「な!?」

ユーノはこれまでそんな事実を聞かされていなかったため、この衝撃的な一護の発言に思わず言葉を失った。

「俺もつい最近まで知らなかったんだが、俺も親父からそいつを聞かされた。お前の斬魄刀の晩翠の力の根源は月だろ?だったら、俺と同じことが出来るはずだ。」

ユーノは一護の言葉を聞きながら、手に持つ晩翠を握りながらじっと凝視する。

すると、一護は改まった表情でユーノに向かってこう語る。

「お前には、俺がこの十年の内に極めた月牙の極意を教えるつもりだ。俺は知ってのとおり、使えるのは月牙天衝ただ一つ。だからこそ、俺はそれを徹底的に磨き上げる必要があった。仲間を守るために・・・大切なものを守るために・・・」

「一護さん・・・あなた・・・」

「そして、独自の研究と修行を重ね俺が編み出した月牙の極み・・・・・その名を、『月牙八式兵法』。」

「月牙・・・八式・・・兵法・・・！？」

この月牙八式兵法と呼ばれるものの正体はどのようなものなのか？

詳細は今回の事件の中で明らかになる。

さて、数日が経過した機動六課の方はというと、引き続きアンゴルモアの反応を警戒しながらそれまでは平時の通りそれぞれの役所に分かれて仕事を担当し、前線は訓練に汗を流していた。

そして、お昼休みになると浦太郎は毎日欠かさず記録している日記帳にスクライア商店日誌と呼ばれるものを綴りだす。

「『スクライア商店日誌　亀井浦太郎　９月１日　今日も麗しのなのはちゃんは気高く凛々しく美しい。あの一件以来、何処か表情が

柔らかくなった。これはやはり店長の存在が大きかろう。あんな騒動があったにもかかわらず、変わらずなのはちゃんと親交を交わす店長の懐の深さには心底感服する。妙齢の若い男女が仲睦ましく接する光景は実に微笑ましい。やはりなのはちゃんは女の子だ。色々と遠回りをしてしまったが、やはりなのはちゃんには店長の傍で店長と一緒の幸せを掴んでほしい。』」

その後も浦太郎の日誌の内容は次のように続く。

「『9月2日　軽いジャブとして、なのはちゃん達の部屋にゴスロリ衣装を置いておく。（店長に）燃やされる。』」

「『9月4日　ハーゲンダッツのバニラ味がなくなっていたのでボクレンまで買い物に出かける。』」

「『9月7日　機は熟した！ゴスロリ衣装を・・・・・・（店長に）爆破される。』」

「『9月10日　ハーゲンダッツの抹茶味があれだったのでボクレンに行く。』」

「『9月12日　なのはちゃんにナース服を・・・・・・（店長に）爆破される。』」

「『9月14日　ハーゲン・・・・・・（店長に）爆破される・・・・・この日誌を今読んでいるものへ。今、あなたが読んでいるということは恐らく僕もうこの世にいないだろう。しかし、僕の店長となのはちゃんへの想いは重々分かってくれたことと思う。頼む・・・どうか僕の遺志を継ぎ、二人を・・・二人をこのまま立派な夫婦に・・・！』」

「『9月15日　ハーゲンダッツのチョコ味がやっぱりあれだったのでボクレンへ・・・・・・』」

すると、その内容をずっと聞いていた恋次・鬼太郎・更にはルキアは我慢の限界に達したのかそのまま浦太郎の顔面に鉄拳を食らわせる。

「「「いい加減にしろ!!!!!!」」」

「ぐっは!!!!!」

その後、顔面に痛々しい痣を作った浦太郎は三人のキツイお説教を受けていた。

「何だよこりゃ!?スクライア商店日誌って・・・!?」

「貴様はどれだけ暇なのだ?なのはとユーノ殿への嫌がらせに、ボクレンの往復しかしていないではないか?その前に、よくあんな高級なアイスをしょっちゅう購入できるものだな。」

「いや。他にも『機動六課の月に一度の焼肉ロワイヤル』とか色々あったんですが、取り立てて日誌に書くほどでもないかなぁ～～～と思ってね」

「ハーゲンダッツの方がいらねぇだろ、馬鹿亀!!!」

「何言ってるの先輩。僕は幼少のころから、ハーゲンダッツ一筋で生きてきたんだよ。一日一回あれを食べないと禁断症状が起きて自分が自分でいられなくなるんだよ。ドラえもんのどら焼き然り。し

ずかちゃんの入浴然り。デスノートのリューク然り。」

「それは分かったから、もっちっとましな内容を日誌に書け。つうかユーノの怒りを買ってるにもかかわらずよく今まで生きてこられたものだな。そっちのほうが凄いぜ・・・」

「同感だな・・・」

恋次とルキアが呆れかえった表情でそんなことを思っていると、金太郎やなのは達前線一同が箱いっぱいに抱えた手紙の山を持って四人の元にやって来た。

「おう、いたいた！お前らも手伝ってくれよ。この手紙の処理。」

「私達だけじゃ手におえないぐらいの量なんですよ。」

「おう。分かったよ。」

四人は早速席を立つと、なのは達が持ってきた手紙の入った箱を順番に振り分け、誰に何が贈られてきているのかを手作業で判断していく。

そんな中で、恋次は何故か異常に数の多い白鳥宛ての手紙に不満を抱いていた。

「白鳥礼二様・・・ミスター・レイジ・シラトリ・・・・・・・け！どいつもこいつも白鳥ばっかりだぜ！」

恋次がそう言うと、同じ気持ちを抱いていた鬼太郎が便乗してくる。

「どうせほとんどがファンレターだろうぜ。こんな焼き鳥の何処が良いのかが未だに俺には分からねぇよ！」

眉間に皺を寄せながら白鳥を睨み付ける鬼太郎だが、白鳥はそんな鬼太郎の態度を無視して自分に送られてきたファンレターだけを寄せ集める。

なのは達はこの様子を見ながら苦笑いを浮かべつつ、それ以外の手紙の整理を続けるが白鳥に次いで多かったのはユーノ宛ての手紙であった。

「後はユーノくん宛てのものが多いな。考古学会からものから管理局上層部からのものまで多種多様や。」

「ファンレターも多いですよ。ほら、これなんか週刊フライデーの読者からのものですよ。」

「不定期で発売しているにも関わらず、発売初日であっという間に完売するそうですよ・・・この前朝のニュースの特集でやっていました。」

「あいつって色んなところに顔が利くんだよな・・・」

「にゃはは。まぁ、ユーノ君はもともと万能人だから。当然と言えば当然じゃないのかな・・・・・それにしても、雑誌の出版社もいい加減にユーノ君への取材の依頼は諦めればいいのに・・・・・・あれ？」

すると、なのははその大量の手紙の中からユーノ宛てではあったが地球の外国語で書かれた一通の手紙を発見する。

「地球の手紙・・・誰だろう?」

全員が注目する中、裏側を返してみると差出しの名前には何故かそこだけ日本語で『柊沢エリオル』と表記されていた。

「柊沢エリオル・・・?それってひょっとしてさくらさんが言っていた!?」

なのはやフェイト達が驚く中、金太郎は首を縦に振る。

「然様。更に言えば、店長がイギリスに発掘旅行に行った際に援助をしてくださった方です。」

「確か、クロウ・リードって魔法使いの生まれ変わりでもなかったか?」

「さくらさん・・・あの後どうしてるかな。」

なのははあの事件以来、ユーノが小狼と連絡を取り合うようになっていたことを聞かされていたため、出身世界である地球の友達がその後どうなったのかが気になっていた。

フェイトもあの時、アルフと共に命を救われた恩があるためさくらやその仲間たちには深い感謝の念を抱いていた。

すると、恋次はなのはが持っていた手紙を取り上げユーノがその場にいないにもかかわらず封を破り始める。

「あ!恋次さん、駄目ですよ!勝手に開けちゃ!」

「どうせ暑中見舞い的なことが書いてんだろう。親展って書いてる訳でもねぇしいいだろう。」

「全く。貴様という奴は・・・・・・」

呆れかえるルキア達を余所に、中身を取り出した恋次だったが英語で内容が書かれていたために全く理解が出来ずその手紙を横の浦太郎に手渡す。

「すまねぇ・・・代わりに読んでくれ・・・」

「はいはい・・・えっと・・・『謹啓　突然、お手紙を差し上げます。御無礼をお許しください。あなたやそのご友人の異世界でのご活躍は、かねがねさくらさんの言葉を通じてお伺いしております。その後の体調は如何でしょうか?誠に恐縮ではございますが、あまり無理をなさらないように気を付けてくださいね・・・』」

「ぷっ!言われてやんの」

「ヴィータちゃん!」

手紙の内容に思わず笑ってしまいそうになるヴィータに、なのはが横から注意を促す。

「『あなたが今、非常に多忙であられることは重々承知しておりますが、もし御時間があられましたら一度お話をお伺いしたい所存であります。つきましては、来る9月29日、火曜日。午後3時半から拙宅で開かれるアフタヌーンティーのガーデンパーティーに御招待致したくここにご案内申し上げる次第です。　敬具　P・S　な

お、今回のパーティーには私のご友人でもありあなた方の古い知り合いでもある“ギル・グレアム”氏もご参加いたします。』」

「「「「え！！」」」」

その追伸の中身を聞いた途端、はやて達ヴォルケンリッターの一同やなのは達は表情を一変させた。

「グレアムおじさんが・・・！？」

「マジかよ・・・！！」

「まさかこんな所であの方の名前が出て来るとは思ってもいなかった・・・！」

驚愕するはやて達を見ながら、浦太郎は手紙と一緒に同封されていた招待状と柊沢エリオルと追われる眼鏡の青年と一緒に写っているギル・グレアムの写真を取り出し、はやて達に渡す。

「どうやら、グレアム提督も使い魔の二人も健全なようだね。」

はやては久しぶりに見たグレアムの綻んだ表情を凝視すると、思わず涙が零れそうになる。

「よかった・・・ほんまによかった。グレアムおじさんもロッテ達も元気そうや・・・何かほっとしたな・・・」

「だね。」

「うん。」

その場にいた全員の表情が安堵に満ち溢れる中、鬼太郎は招待状の中身を確認すると、こんな生きのいい一言を持ちかける。

「おい。同伴者歓迎って書いてるぜ。時間作って店長と一緒にグレアムおじさんとやらに遭ってきたらどうだ、はやて？」

「え！ほんまにええんですか、鬼太郎さん！？」

「それぐらいいいだろう。なぁ、腹黒。」

鬼太郎にそうおちょくなられたクロノであったが、そこは怒りを我慢して咳払いをしてから次のように語る。

「ああ。そうしてくるといい。グレアム提督も、久々の君との話を楽しみにしている筈だ。六課の事は僕らに任せて、その日はシグナム達を連れて行ってくるといい。」

「ありがとうな、クロノくん・・・！じゃあ、早速予定を開けておかんとな！シグナム、ヴィータ、シャマル！その日は絶対仕事入れたらあかんよ！」

「「「はい！！」」」

はやて達四人の嬉しそうな顔を見たなのは達も同じように嬉々とした表情を浮かべる。

「あ、そうだ。これユーノ君に届けないと。今何処にいるんだろう？」

と、なのはがそう口にするとそのなのはの疑問に答えたのは意外な人物であった。

「ユーノさんなら室内道場にいると思いますよ。」

「「え?!」」

聞き覚えのある声に反応したなのはとルキアが振り返ってみると、そこにはコンを抱えた織姫が立っていた。

「やっほ!元気でした!?」

「井上・・・!来てたのか!」

「織姫さん!元気でしたか!」

全員は織姫の元まで駆けより、コンも早速ルキアに飛びつこうとする。

「姐~~~さ~~~っご!!」

しかし、相変わらずルキアに一瞬され踏み台となる。

「ふふ。相変わらず貴様は馬鹿だな、コン」

「そう言う君も相変わらず酷いよね・・・」

ふとコンに対する扱いに関して吉良がそう口にする中、フェイトが先ほどの織姫の言葉に話を戻す。

「それより、ユーノが室内道場にいるって・・・何かしてるんですか？」

「そうなんですよ。多分旦那と一緒に稽古でもしてるんだと思いますよ。」

「ほう。スクライアが剣の稽古とは珍しいな・・・手紙を届ける傍らちょっと拝見してみないか？」

「いいんですか、許可なくそんなことして？」

「大丈夫だろう。どうせ見てところで真似するようなもんじゃねぇし。」

「じゃあ、みんなで行ってみようか。」

なのは達は早速自分たちは滅多なことでは使わない室内訓練場へと足を運び、使用中と書かれた部屋のドアが開くと、中には更に障子で締め切った空間が存在し、二人の靴も置いてあった。

「この中だな。」

「いきなりばっって開けたら流石に迷惑だから、出来るだけ静かに開けようね・・・」

細心の注意を払いながら、障子に手をかけたなのは達は恐る恐る中の様子を拝見してみると、その目に映ってきたのは普段着ている甚平ではなく和服にを見包んだユーノが木刀を振り回しながら周囲の藁を切り崩している光景であった。

鋭い表情で黙々と藁を斬り続けるユーノの姿に唖然とする全員であったが、その時一護の低い声が聞こえてきた。

「次、七式。」

一護の言葉に呼応するかのように、ユーノは七式と呼ばれる剣技を振るいその直後に一護が再び指示を出す。

「次、八式。」

ユーノはそれを聞くとすかさずその八式と呼ばれるものをやってのけ、ものの見事に周囲の藁の束を粉微塵に切り倒す。

その光景は最早見事としか言いようのないものであった。

言葉すら失うなのは達を余所に、木刀をそっと腰元に収めたユーノに向かって一護は次のように語りかける。

「終わりだ。教えることは何もねぇ。」

そのあまりに突拍子もない一護の発言にユーノは思わず声を上げる。

「ちょ！待ってくださいよ、一護さん！終わったって・・・たったの一・二回一護さんの型を見様見真似にやってみただけですよ！？」

「勘違いするんじゃねぇぞ、ユーノ。俺が教えられるのは飽く迄“気構え”と“入り方”だ。ここから先は俺が口を出す訳にはいかねぇえんだ。」

「（え・・・？）」

一護の言葉、特に気構えというものに不審に思ったユーノであったがその後直ぐに一護が何を言いたいのかを理解し、表情をはっとさせる。

「一護さん・・・まさか・・・」

「気が付いたみたいだな。流石は頭の切れが違うな。ユーノ・・・お前にこの型を物にしたい真剣さと気迫があるのなら、自ずと答えは見えてるはずだ。」

「一護さん・・・それもそうですね。それじゃ、ここからは僕なりにやらせてもらいます。」

「おうよ。八つの型の中に、技の極意が全て詰まってる。お前の晩翠同様、弛まぬ鍛錬があれば窮地の時必ず答えてくれるはずだ。」

「はい。そう言えば一護さん・・・どうしてまた急に僕にこの型を教えようと思ったんですか?何か言いましたっけ?僕には全然心当たりが見当たらないのですが?」

「似てるんだよ・・・ガキの頃からの俺とお前のそれがな。何か大切なものを護るために力を必要とするものに、俺はいくらでも力を貸すぜ。つうかあんましこういう事言わせるなよ。結構恥ずかしいんだぜ。」

ほくそ笑みながらそう答える一護。

そして、そんな一護に向かってユーノは頭を深々と下げて感謝の言葉をかける。

「一護さん・・・ありがとうございました！」

「おうよ！あとはお前次第だ。頑張んな。」

「はい！」

溌剌とした返事で一護を見つめるユーノと、そんな愛弟子を誇りに思う一護。

すると、一護は鼻で笑いながら先ほどから隠れてこそこそこちらの様子を窺っていたなのは達に向かってこう口にする。

「で、お前らはいつまでそこでこそこそ見てるつもりだ？」

「「！」」

「なのは達も人が悪いな。別に堂々と障子を開けて聞いてても良かったのに。」

ユーノはそう言うと、障子を徐に開けてなのは達全員を室内へと誘う。

なのはや他のメンバーは申し訳ないという思いから若干頬を赤らめながら笑って誤魔化そうとしていたのであった。

「にゃはは・・・ごめんごめん。何か二人に悪いな～～～って思ったから。あ、そうだ。ユーノ君、これ。柊沢さんからのお手紙。ガーデンパーティーの招待状も入ってたよ。」

「柊沢さんから？そうか・・・久しぶりだな♪あの人から手紙をもらうのは。」

ユーノはいつもの甚平服に着替えると、なのはからその手紙を受け取り中身を確認する。

「それよりも、一護。貴様はユーノ殿に何を教えていたのだ？」

「ああ、ちょっとな。別にそんな大したものじゃねぇさ。俺が教えたかったから教えただけって考えてくれて十分だぜ。」

「何だよ、一体？勿体ぶった言い方しやがる。」

「ま、そのうち分かるさ。」

一護のお茶を濁した発言に終始何処か不満げな表情を浮かべる恋次とルキアであったが、その一方でなのは達はユーノの先ほどの見事なまでの剣捌きに関して賞賛を称える。

「それにしてもすごかったですね、ユーノ先生！木刀でもあんなに華麗な動きが出来るなんて！」

「ああ。私から見てもあれは見事だった。しかし、本当に今のが見様見真似のものだったとは些か信じがたいが？」

「見様見真似ですよ♪大体、一護さんの教え方って全てそうですから。剣術に関してなんか、全部殺し合いの果てに身につけたものですから♪」

「え！？そうなの・・・！？」

なのはや他のメンバーはユーノの口から語られた意外な真実に驚愕するが、ユーノはその後さらに修行を積んでいた頃の思い出を飄々とした態度で語り出す。

「僕がなのはに魔法を教えたそのやり方は全く違ってたからな。基本すらも実戦の中で磨き上げられたものだよ。一護さん曰く、『手取り足取りで教えられた技は身につかない。一度喰らってそこから学び取った技こそいざって時に役に立つ』。いや～～～よく生き延びたもんだな♪あの頃はどんだけ死ぬ思いしたものか～～～♪」

ユーノ本人は飽く迄も懐かしい気持ちで修行の時代を思い返していたが、なのは達はそんなユーノとは裏腹に自分たちが普段どれだけ恵まれた環境の中で訓練に当たっているのか、更にはユーノという自分たちが知る中でも最高峰の指導者が六課にいて、彼の直接のアドバイスを受けられていることに改めて痛感する。

「あはは・・・私達・・・ほんとに恵まれた環境に居たんだね、ギン姉・・・」

「そ、そうね・・・・・・というか、殺し合いを想定した修行を平気でやってのけるユーノ先生って・・・」

「一護さんも一護さんで結構サディストだよね・・・」

「うるせーよ！ま、ユーノがこんなに逞しく成長したのは、ひとえに俺の巧みな力加減のお蔭だな。」

「それは自意識過剰というのだぞ、一護。」

「まぁまぁ、朽木さん。そこは抑えて抑えて。」

と、そんな談笑をしていたその時だった。

六課の隊舎全体からアンゴルモアの反応を捕えた第一級警戒警報が発令される。

全員はその音を聞くと、表情を一変させてその警報に耳を傾ける。

「「「！」」」

「これは・・・！？」

「アンゴルモアが発動したみたいですね・・・！」

「よし。急いで司令室に向かうぞ。」

「「「「はい！」」」」

駆け足で司令室に戻った前線一同は、モニター画面に表示される新たなるアンゴルモアの反応が確認された場所とその詳細なデータを確認しながら、ユーノの話を心して聞いていた。

「今回もまた微弱な反応ではあるが、恐らくこの世界で間違いはないだろう。」

そう言うと、ユーノはモニターに反応があった世界の情報を映し出す。

「第１９６管理外世界『スクール』。そこの都市部にある高校で反

応が確認された。反応の大きさから推測すると、きっと加工された形で生徒の誰かの手に渡っている筈だ。」

「そうなると、また結構メンドクサイことになるな。」

「しかもまた学校かよ・・・まさか女子高じゃねぇだろうな?」

険しい表情でそう口にする恋次だったが、ユーノは直ぐにこう告げる。

「その心配はありません。今回は男女共学のようですから。ただ、学校・・・しかも時期が学園祭と重なっているようなんです。一般人として入り込んで雑踏の中を探し回るのは却って不審に思われます。ここはやはり、また生徒に化けて校内に紛れ込む必要がありそうですね。」

「やっぱそうなるのかよ・・・で、はやて。誰が行くんだよ今回?」

「そうやね。今度のところは共学やから、出来れば集団で潜り込めば捜査範囲を伸ばせる。直ぐに見つければそれでしまいや。」

「じゃあ、集団転校生って形で捜査するってことでいいの?」

「そうや。あとはメンバーをどうするかやけど・・・――」

はやてが選出メンバーを誰にするか悩んでいると、顔を見合わせた一護と織姫が共通の見解に達すると次のように語ってきた。

「はやて。だったら俺達も手伝ってやろうか?」

「え、一護さん達がですか？」

「やれるのかよ、お前に・・・」

恋次が馬鹿にした様子でそう口にした途端、静かなる怒りを覚える一護は次のように返す。

「お前に言われたくねぇよ！心配するな。織姫も一緒についてきてくれるし、自分の身は自分で守れるよ。それに、日頃お前らの捜査に仕事の関係上あんまし協力できていないことも多々あるしな。」

その言葉を聞いて、ユーノやなのは達も嬉しくなったのか顔を綻ばせ感謝の言葉をかける。

「すみませんね、一護さん。」

「別にいいさ。そうだろ、織姫。」

「うん！困ったときはお互い様ですよ。」

「俺様に任せれば怖いもんなしだぜ！」

「おい、お前は来るなよ。」

「何でだよ！！」

当然の如く一護から一蹴されるコンは納得のいかない様子で一護に文句を口にし、その様子をスバル達は苦笑いを浮かべながら黙って見る事しか出来なかった。

「じゃあ、二人も捜査に加わるとしてあとは妥当なメンバーを選出するだけやな。」

「だけど、この中から妥当なメンバーを選りすぐるのは大変だよ・・・」

フェイトがそう口にするのも無理はない。

一度判断を誤れば、捜査は先手にも後手にも回ってしまうのだ。

だが、だからと言って慎重になり過ぎると却ってよくない結果を招いてしまう事もある。

頭を悩ますはやて達だったが、そんな時ユーノは一つの方法を考え付いた。

「仕方ない。こうなったらこれ使うかな。」

全員がユーノに注目する中、ユーノが机の下から取り出したのは・・・以前訪れたサムライ・ドラの世界でサムライ・ドラが当番を決めるのに使っていた割りばしくじであった。

これを見た恋次やクロノは呆然とした表情となった。

「おい、割りばしくじって・・・本気かよ?」

「偶にはこういうやり方も悪くはないんじゃないですか?運を神に委ねることも必要だと♪」

「お前は・・・――――頭がいいのかそうでないのか分かったものじ

ゃないな・・・」

「おっさんの脳みそよりは遥かに出来がいいから心配無用。」

「誰がおっさんだ、誰が！！！！」

「まぁまぁ、落ち着こうよ。」

ユーノの毒舌につい癇癪を起してしまうクロノだったが、義理の妹であるフェイトに宥められて一先ず落ち着くことにした。

勿論は納得などはしていなかったが。

すると、なのはもユーノの考えに関して少し悩んだ後それも悪くないと判断して次のように言葉を告げる。

「いいんじゃないのかな。みんなレベルは一様に高いんだし。誰がなったとしても問題なくこなせるって。」

「じゃあ、早速やってみましょう！」

「ちょっと、ドキドキするわね。」

「私当たるのかしら・・・」

恐る恐るその場にいた前線一同が一様に一本ずつユーノの手元に収められている割りばしを取っていき、全員が引き終わった後に当たりと書かれた割りばしかどうかを確認する。

その結果はと言うと――――――

「ち。何で俺が一護と一緒に任務に参加しないとなんないんだよ！？」

「こっちの台詞だ、ボケ！」

険悪な雰囲気となり互いに睨み合い火花を散らす一護と恋次。

そんな二人を見ながら苦笑するなのは達。

ルキアは呆れながらも当たりと書かれた割りばしを持つメンバーを確認し始める。

「メンバーはつまるところ、恋次に一護・ユーノ殿になのは。フェイト、井上にエリオとキャロも含めた八人で行くことになったか。」

スバルやティアナはこの組まれた編成に関して、ふとこんな事を思った。

「何かある意味この編成って無敵を通り越してる・・・！？」

「まぁ、大抵の事なら容易に解決できるのは自明の理ね・・・」

「下手な軍隊よりも危険かもな。」

「危険なのは、白き魔王のほうだろ？」

「れ、恋次さん！やめて下さいよ！人をバケモノみたいな言い方は！」

恥ずかしさと怒りを同時に抱いたなのははは赤面をしながら恋次の言葉に口を挟む。

「まぁ、落ち着こうやなのはちゃん。取りあえずまた学校に潜入するってことやし全員の制服が必要やな。今すぐに発注させあかんから、みんなのサイズ測らせてな。」

はやてはそう言うと、早速全員の現在の体のサイズなどを丁寧に測り始めるが、そんな中で織姫の脅威を測っている最中、つい遊び心に火がついたのか・・・思わず悪い癖が出てしまう。

「にや♪」

はやてはどさくさに紛れて後ろから織姫の豊満な胸を揉んできた。

「いっただきます!!!!!!織姫さん!!!!!!!」

「にゃあ!?」

はやての突然の行動に思わず顔を赤くする織姫だったが、その途端一護の怒りの足蹴りがはやての顔面に直撃し、はやては鼻血を出してその場に倒れる。

「ぶっほ!」

一護は殺気を全身から漂わせながら爆発寸前の形相を浮かべながらはやてに言葉をかける。

「おい・・・どさくさに紛れて何セクハラ行為に移ってんだよ、てめぇは・・・!ああ?」

あまりの形相に恐怖を覚えたはやては、思わず表情を凍りつかせる。

「あ・・・はい・・・あの・・・すみませんでした・・・！」

はやてのいつもながらの呆れた行動に言葉をかける事すら面倒となったなのは達は苦笑いを浮かべるしかなかった。

「たく・・・相変わらずはやてもはやてで盛りっぱなしだぜ。」

すると、その瞬間はやてが鼻血を拭くことすら忘れながら次のように堂々と親指を立ててこう宣言。

「イエス♪アイドゥ――――！！エヴリシーズンアイウォナバスト！！！」

「ハナヂふけよ。つうか、その台詞どっかで聞いたことあるぞ・・・」

ふとそんな事を思った一護であった。

そして、漸く八人全員分のサイズを測り終えたのち制服を大急ぎで発注する機動六課。

「よし。こんなものだろうな。制服の方はもうじき届く。届き次第それに着替えて任務にあたってくれ。」

すると、鬼太郎がクロノの言葉を聞いてふとある事に気づく。

「ん？おい、と言うことは店長も着るってことか？」

「あ、そう言えばそうだね。」

「当たり前じゃないですか。だからさっきまでサイズを測っていたんじゃないですか。」

呆れかえった様子でクロノがそう返す中、ユーノが制服を着ると言うことに関してなのはは以上に興奮を覚えていた。

「！ユーノ君が制服を着る・・・――――」

今まで出会ってから仕事でもプライベートでも制服というものを着てこなかったユーノ。

その為、なのはは今回恋人の初めての学校制服を見るのに内心わくわくを覚え、またそれを想像するだけで思わず涎と鼻血が噴き出てしまうのであった。

「にゃはは・・・♪」

それを見て、一護は顔を引きつりながら言葉を投げかける。

「おい・・・鼻血も涎もたれてんぞ。」

「相変わらず妄想癖のある人だよね・・・君は・・・」

吉良の突込みを横で聞きながら、ユーノは恥ずかしげに帽子を被り直すと暫く口を閉ざして黙っていたそうな。

数時間後、発注していた制服が機動六課へと届き一護達はそれぞれ

に届いたばかりの制服に身を包み始めていた。

「やれやれ。制服か・・・ここしばらく他の服を着た覚えがないから妙な気分だ。」

甚平を脱ぎ、制服にを身を包み始める神妙な気分のユーノ。

「偶にはいいだろう。俺だって制服なんて十年ぶりだぜ。しっかし、空座高校とはまた違う形の奴だな。中々いいじゃねぇか。」

「たかが制服だろう・・・」

飽く迄も恋次はそう言い張るが、傍らで見ていたルキアは次のように反論する。

「戯け！たかが制服・・・されど制服！衣装と言うものは、着る物の外見もそうだが心までも綺麗に着飾るものなのだ。」

「そんなもんかよ・・・」

そして、制服に綺麗に身を包んだユーノ・一護・恋次・エリオの四人は早速等身大の鏡の前に立って服の大きさを確かめ、身だしなみを整える。

「どうでしょうか、一護さん？」

「いいんじゃねぇのか。よく似合ってるぜ。」

「はい。お似合いですよ、ユーノ先生。」

「馬子にも衣装ってか・・・ぐっほ！」

素直に褒め称える一護とエリオに対して、小ばかにした恋次の発言にユーノは怒りを覚え飄々とした態度のまま恋次の腹部に杖の先端を突き付ける。

その時、部屋のドアをノックする音が響く。

「ユーノ君。入ってもいいかな？」

「なのはかい？ああ、いいよ♪」

ユーノがそう口にすると、同じく潜入する学校の制服に身を包んだ美女四人が彼らの前に姿を現す。

その姿を見た四人以外の全線メンバーとバックヤードの男性職員は思わず目を奪われ、目線が嫌らしい方向へと向く。

制服を着こなす四人の中でも、特に織姫のバストが強調されていたことで多くの男性局員はそっちに目が行ってしまい、コンも思わず鼻血を出しながら飛びついていく。

「織姫さん！！！！！！！やっぱ俺も一緒に連れって・・・っぐほ！！」

だが、抱き着こうとした直前に一護の無情な踵落しを食らい撃沈する。

「だ・か・ら・・・てめぇは駄目だっつたろ。」

「う・・・て・・・てめぇ・・・・」

キャロはエリオに詰め寄り、顔を赤くしながら似合っているかどうかを尋ねるとエリオは恥ずかしげに目線をずらしながら素直に似合っていると答え、なのはも同じように恐る恐るユーノに詰め寄って同じ質問をする。

「あ・・・あの・・・その・・・どうかな今回のは・・・変・・・？」

すると、ユーノもそんな綺麗に着こなすなのはに照れながら素直な感想を口にする。

「いや・・・凄く似合っているよ。僕の方こそ、どうだろう？普段こう言う格好はしないから正直自信なんてないんだけど・・・」

「そ、そんなことないよ！凄く似合っててカッコいいよ。」

「ほ、ほんとに？」

「うん♪」

この瞬間、二人の周囲には甘すぎるピンクのオーラが散布され、他の場所までそれが充満し始めようとしていた。

その瞬間、恋次は青ざめた表情で口を押える。

「おえ！！やべ・・・気持ち悪くなってきたぞ・・・！」

「貴様ここで吐くなよ！吐くならトイレで吐け！」

「何なら、バケツ持ってくるかい阿散井君？」

織姫はそんな恋次の様子を心配しながら、一護の足元で倒れるコンを抱きかかえながら持ってきたデジカメを取り出す。

「ねぇ。折角だから写真撮ろうよ。制服着る機会なんかもう二度とないかもしれないし♪」

「写真か？俺はどうもな・・・・・・」

写真に写る事が今一好きではない一護は頭を掻くが、それを聞いていたはやては手を叩くと織姫の提案に乗ってくる。

「ええじゃないですか、それ。ほんなら八人とも列に並んで。一旦集合写真を撮るで！」

「いや、俺はだな・・・っておい！よしてくれよ！！」

「貴様も諦めが悪いぞ。」

抵抗の意思を見せる一護も、このメンバーの前ではどうすることも出来ずユーノの隣に立つと言われ通り八人全員で集合写真を撮る羽目になった。

「それじゃいくよ。ああ・・・一護さんもそんな仏頂面は止して下さい。スマイル、スマイル♪」

「うるせーよ。」

浦太郎にそう促された一護は精一杯の笑みを浮かべると、我慢して写真に撮られる。

その後は撮りたい者同士が自由なポーズで写真に写るが、なのははユーノの腕に抱きつくと赤面するユーノと一緒に写真に写り、一護も織姫と似たようなことをして顔中苺みたいに赤く染め上げた。

やがて、準備が整った八人は転送ポートを使って目的の世界である『スクール』の地へと降り立ち、人気のない場所まで移動すると一度学校に行くまで捜査手順を確認する。

「さて、もう一度確認をしよう。一先ず集団転校生って形で僕らは三学年に配属される。僕らは男性陣はA組。なのは達女性陣はB組だ。反応が微弱なうえ、今は学園祭の時期と重なっていて準備で慌ただしい。なるべく穏便且つ慎重に事を運ぶように心がけてほしい。」

「分かった。」

「うん。それで、今日の所はどうするの？」

「捜査の傍ら、高校生らしく学園生活を送る事にしよう。万が一長引いた時の為に宿は既に確保している。つまり、学生らしく勉強しろってことだよ♪」

「う・・・！やっぱし・・・！」

「俺・・・正直高校の勉強内容、あんまし覚えてねぇよ・・・」

「私となのはは・・・中卒なんだけどな・・・」

「僕らに至っては、学校すら行ってませんしね・・・」

「だよね・・・」

それぞれがどんよりとした雰囲気を醸し出し、意気消沈としてしまう中、ユーノと織姫は苦笑いを浮かべながら励ましの言葉を投げかける。

「まぁ、なる様になるから！大丈夫だよ！！」

「そうですよ。大人の力を見せつけましょうよ♪」

「エリオとキャロはまだ子供だよ。」

「ま、沈んでいても仕方ねぇ。行くぜ！」

覚悟を決めると、一護は用意された鞄を学生時代を思い出しながら肩で背負うと通学中の生徒に混じってユーノ達を引き連れ高校へと向かっていく。

ユーノ達も一護の後ろに付いて行きながら、緊張した表情を終始浮かべながら沢山の生徒が行きかう通学路を歩いて行き、やや急勾配な坂の上を上っていく。

「たく・・・何処まで登れば着くんだよ。」

「結構きついですね、この坂。」

「僕らがこれから行く『陵高校（みささぎ）』は通称地獄坂と呼ばれるこの坂の

上にある歴史ある高校で、特に陵祭と呼ばれる学校祭は毎年大勢の人たちがやってくる学校でもあるんです。」

「へぇ。そんなに凄い高校なんだ。前に行った聖ルチアーノ女学院とはまた違った校風だけど、何だか楽しみだね。」

「そうだね。男女共学って言うのがまたいいよね。」

「喜んでる場合かよ?見ろよ、俺達・・・絶対周りからは凄い目で見られてるぜ・・・」

一護がなのはとフェイトにそう言うと、なのは達も周りを見渡してみる。

学校に向かう生徒たちの多くは自分達とは明らかに大人びた雰囲気、いや実際は大人なのだが、それを醸し出す一護達を不審そうな目で凝視していた。

「た、確かにそうですね・・・」

「大丈夫・・・だよね?」

「ま、僕とキャロは兎も角・・・恋次さんと一護さんは結構目立っているかと・・・」

「恋次さん。その刺青は大丈夫なんですか?」

キャロが心配そうにそう尋ねると、恋次は次のように答える。

「心配するな。前にも一護の学校に忍び込んだ時も堂々とこの格好

で入っていったさ。大体、俺のこの刺青を気にする前に、髪の色を気にしろよ。一護なんかオレンジ一色に染めてるじゃねぇか？」

「おい！これは地毛だって何遍も言ってんだろうが！！」

「まぁまぁ。一護さんもブレイク、ブレイク。心配ありません。髪の色に関する校則はありませんから。勿論刺青も。」

ユーノがそう答えると、一護達も一安心。

「そうか？ならいいか。」

「あ、見えて来た。あれじゃない？」

織姫がそう口にしながら指さす方向に見えてくるのは、陵高校の校門。

一護達は安どのため息をつくと、ラストスパートをかけ駆け足で昇っていき無事に陵高校の校舎内へと潜入を果たす。

校内に入り、校長室へと向かったユーノ達は自分たちの素性を隠すために「御門学園高校からの集団転校生」と言う旨を伝え、教師たちを説き伏せ信じ込ませると自分たちが編入するクラスへと向かっていった。

「じゃあ、僕らはこっちだから。なのは達も十分に注意を払うように心がけてね。」

「オッケイ。ユーノ君たちも頑張ってね♪」

「うん。じゃ、行きましょうか一護さん。」

「ああ。織姫、あとでな。」

「は～い！」

四人はそれぞれのクラスへと向かうため、背を向けて廊下を左右に歩いて行った。

そして、朝のショートホームルームが始まろうとしていた頃慌ただしいA組の教室の担任の教師が入ってくると、集団転校生が編入してくると言う生徒たちに伝える。

「え～～～突然ですが、今日はこの学校に集団転校生がやってくることになりました。」

「集団転校生・・・？」

訝しげな表情を浮かべる生徒たち。

教師は更に詳しい話を続ける。

「現地の学校が大地震に見舞われ、学校が半壊してしまったためにうちの学校で迎えることになりました。ちなみに、このクラスには四人入ってくることになった。」

「へぇ、四人も。」

「どんな奴だろうな？」

「かわいい子が来ればいいけど！」

「出来れば馬鹿には来てほしくないな。それと、欲を言えばイケメンが・・・！！」

生徒達はそれぞれの期待と不安を抱きながら再び慌ただしく騒ぎ出す。

「期待に胸ふくらませているところで何だか、早速紹介したいと思う。入りたまえ。」

「「はい。」」

「「へ～い」」

きりっとした返事をする好青年二人と、だらしない返事をする頭髪が目立つがたいのしっかりした男二人が教室の中へと入ってくると、生徒達全員はあまりにレベルの高いその四人の容姿と姿に目を奪われる。

「お・・・・・あれが集団転校生か・・・・・・」

「思ってたよりも凄いのか来たな。」

「あら！予想以上のイケメンじゃないの。特に、オレンジ色の彼は好みかも♪」

一人の女子生徒が一護に好意を抱き、獲物を睨み付けるかのような視線を向けると思わず一護は寒気を感じた。

「（！何だ・・・この寒気は・・・！？）」

「御門学園高校から来た四人の転校生だ。では、一人ずつ自己紹介の方を頼むよ。」

教師がそう言うと、ユーノから順に自己紹介が始まる。

「はい。御門学園高校三年のユーノ・スクライアです。趣味は読書と発掘作業です。よろしくお願いします。」

「エリオ・モンディエルです。不束者ですが、どうぞよろしくお願いします！」

「阿散井恋次だ。言っとくけど、見た目ほど悪じゃねぇからよ」

「黒崎一護だ。一応１８歳だ。よろしく。」

多少不貞腐れた様子の一護の発言を聞くと、ユーノは念話で次のように口にする。

「（本当は２５歳ですけど♪）」

「（それを言うなよ、ボケ。）」

ユーノ達が自己紹介をしていたほぼ同じころ、なのは達四人もクラスメイトの視線、特に思春期真っ盛りな男子に注目の視線を浴びながらたどたどしく挨拶を済ませる。

「た、高町なのはです。好きな言葉は全力全開です！よろしくお願いします。」

「えっと、キャロ・ル・ルシエといいます！よろしくお願いします！」

「あ・・・その・・・フェイト・T・ハラオウンです。よろしく・・・お願いします。」

「どうも！井上織姫１８歳です！趣味は料理とお笑い芸人さんのＤＶＤを見る事です！どうぞ、よろしく！」

たどたどしい三人を余所に持ち前の華やか且つ大胆な気風から挨拶をする織姫の姿に、男性陣のハートは射ぬかれる。

「わああ！！！超美人なんですけど！！」

「おいおい。いきなり一目ぼれかよ？」

「それよりも四人そろって大玉だよな・・・俺的にはやっぱ井上さんが好み？」

「俺はどっちかって言うとフェイトさんだな。胸でかいし、美人だし・・・」

「キャロちゃんも捨てがただろ？可愛い顔してんじゃん！」

「ばっか野郎！天真爛漫・全力全開のなのはちゃんの方がいい！」

最早クラスの全男性人の話題はなのは達四人の事でいっぱい。

女子たちはそんな愚の骨頂男子に呆れ返りながらも、自分たちの目

指す抜群のスタイルと容姿を兼ね揃えた四人にコンプレックスを感じ、なのは達は心の中でこんなことを感じていた。

「（う・・・何だか凄く嫌らしい目線でばっか見られてる気が・・・！）」

「（どうしよう・・・無暗に魔法なんてつかって追い払ったら、後でクロノにたっぷり叱られるし・・・）」

「（エリオ君・・・どうすればいいんだろう？）」

「（ほほ～～ん・・・やっぱり男の子って言うのは何処の世界でも思春期は爆走するんだよね。うん！健全でよろしい！）」

一人だけ考えていることが違う織姫だった。

さて、陵高校に集団転校生として潜入を果たしたユーノ達だったが、この先待ち受けるものとは何なのか？

集団転校生で潜入せよ！（後書き）

教えて、ユーノ先生！

ユ「今日は、グレアム提督についてだ♪」

ユ「グレアム提督は、闇の書事件のではやての生活を援助してくれた人でもあり、クロノの師匠的存在なんだ。」

ユ「猫の使い魔である双子のリーゼさんとロッテさんがいるけど、僕にとってはあんまりいい思い出の無い人たちだ・・・」

は「しっかしほんま驚いたわ。まさかグレアムおじさんが柊沢さんとお友達やったとは。」

シ「ガーデンパーティーの席では、楽しく語らいたいものですね。」

は「そうやな。」

ユ「君はいいよ。期待に胸を膨らませて・・・僕はまたあの二人に食われそうになったらどうするのさ・・・」

トラウマスイッチが入り、全身が小刻みに震えだす。

は「だ、大丈夫やって・・・多分・・・」

若干不安げな様子のはやてであった。

魔導師図鑑ハイパー！

医者は医者でも一護とシャマルの考え方は全く違うもの。

故に、遭うたびに口論を繰り返すことがある。

シャ「ですから、あんまりユーノ君に負担をかけるのはよくないんですよ。無茶をして取り返しのつかないことになったらどうするつもりですか？」

一「俺が知るかよ。大体、そんなもんはユーノの自己責任だろが！俺やお前がどうこう言たって仕方ないだろ。元々俺は放任主義なんだ。」

シャ「そんな適当な考え方で、医者としてやっていけるんですか？軽蔑しますわ！」

一「何だと！？てめぇこそ過保護すぎるんだよ！それに医者の考え方なんて人それぞれだろうが！？」

その後も一護とシャマルのプロとしての意見の食い違いは続く。

そんな二人を見ながら、ルキアとはやては・・・

ル「シャマル殿と一護は随分と反りが合わぬようだな。」

は「ま、一護さんとシャマルじゃ信じてるもんも何もかもが真逆やからな・・・」

バンデット・ハンター（前書き）

今回はＲＥＢＯＲＮに出て来るあのキャラクターにそっくり・・・
いや、正直全く同じな敵が登場です。

いろいろ悩んで悩んで描いたもので良ければどうぞ。

虚空さん・・・内容が要望通りに行かなくて本当にすみませんでした！！

バンデット・ハンター

＞i18944—709＜

前回のあらすじ。

新たなるアンゴルモアの反応を捕えた機動六課は、『スクール』において反応が確認された陵高校の内部へと潜入する為に、ユーノを始め最強を通り過ぎた無敵のメンバー八人を生徒に紛れ込ませる。

一体、この八人に元に一体どんな苦難と試練が待ち受けるのであろうか？

それでは、中編を始めよう。

朝のショートホームルームが終わり、生徒たちの様々な反応と注目を一身に受けた一際目立つユーノ達四人は何とかその場を乗り切り、短い休み時間を確保する為に廊下の方へと出て、なのは達が来るのを待っていた。

その間に、四人は他愛もない談笑を始める。

「たく、相変わらず窮屈なものだな・・・学校の制服ってのは。」

「あんまり胸元開けると、却って刺青が目立ちますよ恋次さん。」

「しっかし、キャラが濃すぎるっていうのも結構大変だよな・・・」

「なのは達はどうしてるかな?」

すると、そんな四人の耳元に聞こえてくる隣のB組から上がる歓声にも似た黄色い声。

思わず四人は耳をそばだて人だかりができているB組の方へと目を向ける。

「何だよ、この黄色い声は?」

「大体見当はつきますけどね。」

そう思いながら生徒たちの視線をじっと見てみると、やはり四人が検討していた通り注目の視線を一身に浴びるなのは達四人が困惑した様子で立っていたのだ。

四人は些かこうなることは割り切っていたつもりであったが、流石に対応能力も下手な織姫以外の三人に若干呆れた様子でもあった。

なのは達は血気盛んな男たちの群れの中からようやく解放されると、壁に背をかけていた一護達の元に近づき、恥ずかしげな表情でこう口にしてきた。

「にゃはは・・・いや~~~いきなりもみくちゃにされちゃったよ。」

「あの感覚、結構久しぶりだったかな。」

「緊張しちゃいましたよ、私。」

「そう?私は全然♪というより、あれくらいで動揺してたら駄目ですよ。なのはさんもフェイトさんもキャロちゃんも。」

「流石は織姫・・・変なところはビシッとしてるよな。」

「あ、変なところは余計だって!」

呆然とした様子の一護の言葉に思わず頬を膨れ上がらせながら反論する織姫だったが、これが黒崎夫妻のいつもの光景でもあったため、ユーノとなのはやここにいた全員にとっては微笑ましい光景にも見えたのだ。

「取りあえず、アンゴルモアが動き出さないことには本格的な捜査は難しい。今日は学校内の中を散策しつつ、最初に言った通り普通に学校生活を送りましょう。」

「やっぱりそうなるのか。たく・・・ノートを取るなんて随分懐かしいなおい・・・」

「また昼休みに集まりましょう。おっと、そろそろ一時間目が始まりますよ。」

エリオがそう言うと、ちょうど一限目を報せるチャイムが校内に鳴り響き、四人は再び元のクラスに戻ろうとする。

「おっと、チャイムが鳴ったか・・・じゃあ、僕達はこっちだから。

」

「みんなで頑張ろう。」

「よし。はりきって授業するか。」

「オッケイ!ユーノ君たちも頑張ってね♪」

「ああ。なのはも授業しっかり受けるんだよ♪」

互いに挨拶を済ませて教室へと向かった四人。

A組へと戻ったユーノ達であったが、恋次と一護は午前の部の最初の授業の内容を聞かされ思わず憂鬱な表情を浮かべてしまう。

その内容とは――――――

「て、一限目から数学かよ・・・」

「しかも対数とは・・・舐めた真似してくれるじゃねぇか・・・」

十年以上もの昔に、自分が高校生だった頃の記憶を思い返しながら若干引きつった表情で対数と言うものに臨もうとする一護と、地球の教育自体それほどまでに知らない恋次は最早絶望的な様子で机に突っ伏していた。

そんな二人の様子を隣の席で見ていたユーノとエリオは困惑した様子で尋ねる。

「あの・・・大丈夫ですか?」

すると、それを聞いた瞬間一護は焦燥感丸出しの表情で返事をする。

「ば、莫迦言ってんじゃねぇ！対数の一つや二つぐらい出来ないで、医大なんか行けねぇよ！」

「それもそうですけど・・・高校の授業内容ってものは半分以上の大人が忘れるものですよ。」

「ユーノ先生、僕も正直数学はそこまで得意じゃありませんよ。」

不安な言葉を漏らすエリオ。

まぁ、ユーノの言うことも一理ある。

青春を謳歌することに熱意を傾け、学校の授業内容を真剣に聞いていない一般人の大半はある種大人の常識とも言われるレベルともいえる高校の授業内容などそのほとんどを人生においては役に立たないものと言って脳内から抹消するケースが多い。

特に、専門的な職業に就く人間にとってその職種に直接関係のない知識など持っていてもかえって邪魔なだけだと考え、斬り捨てる場合がある。

今回の一護もそれ例外ではなかったが、幸いにも理数系のコースを昔取っていたため、数学に関する知識は少しばかりではあるが残っている模様であった・・・多分。

「ふん！ビビってんじゃねぇよ。男ならドンと構えればいいんだよ！！」

不安げな様子のエリオに向かって胸を立ててそう答える恋次であったが、このとき恋次は気づいていなかった。

既に数学の授業は始まっており、生徒のほとんどが黒板に書かれてある数式を板書する中で、恋次は一人ノートに何も書き取らず一際目立つ様子を見せていたのだ。

すると、教師もそんな恋次の様子を見て指名をする。

「じゃあ、この計算を・・・――阿散井。やってみろ。」

「何!?俺・・・!?」

狼狽した恋次は思わず冷や汗をかきながら周りの様子を確認するが、やはりあてられたのは自分で間違いないことを理解し、顔を引きつってしまい、困惑した様子のまま黒板の方へと歩き出す。

そんな恋次の様子を見ていた一護やエリオはそれぞれに言葉をかける。

「ドンと構えるんじゃなかったのかよ?」

「ファイトですよ、恋次さん!」

「く・・・・・は、はい・・・・・・」

恋次は二人の言葉を聞き流し、黒板の方へと歩いて行き教師からチョークを渡され耐水の足し算に目を向けるが、頭が真っ白になってしまったことで・・・いや、元から理解などしていなかったために

手が一切動かなかった。

「（ダメだ・・・あいつらにはああ言ったが、全然わからねぇ・・・！！）」

「どうした、阿散井。答えられないのか？」

「（だが、ここで何も書かないってのも負け犬みたいで悔しいし・・・！！どうすればいい・・・！！）」

絶望的な雰囲気を醸し出す恋次。

すると、見かねたユーノは念話を使ってこっそり解放を恋次に教える。

「（ログの計算は至って簡単ですよ。ほら、そこに“真数”ってものがあるでしょ？）」

「（し、真数・・・？）」

「（ログって書かれた文字のすぐ下にある奴です。）」

「（ああ・・・これだな。）」

恋次は真数と呼ばれるものを見つけると、そのままユーノの説明を聞き続ける。

「（その真数が同じであれば、今回の場合は足し算ですから・・・後ろの5と3をかけて計算すれば答えはログ3の何か分かりますから。）」

「こ、こうか・・・・・・」

恋次は言われた通りに真数の後ろに書かれてある5と3を掛けて、ログ15と言う答えを導き出し黒板に板書する。

「お、正解だ。ちゃんとやれるじゃないか。」

「あ・・・どうも・・・」

教師も正しく計算できた恋次を褒めると、そのまま恋次を自分の席へと戻らせ次の問題を解凍させるために別の生徒を指名する。

席に戻った恋次は安どのため息をつくと、隣の席のユーノに小声でお礼を言う。

「ふう～～～！助かったぜ、ユーノ・・・マジ焦った。」

「次からはちゃんと自分でやれるようにしてくださいよ♪」

と、その時だ。

ユーノの頭の中に恋次以上に困惑、と言うか泣き叫んでいるなのはの念話が入って来た。

「（わあああああ！！！ユーノ君！！！助けて！！！）」

「（！？なのは・・・どうしたの？）」

ただ事ではないと感じたユーノに、なのはは次のように説明する。

「（こっちは古文の授業なんだけど・・・全然訳せなくて困ってるの！！）」

昔から、なのはは理数系の科目は得意であったがユーノとは対照的に文系科目と体育の成績は悪い。

なのは曰く、古典などの文章は文字を見るだけで頭に熱が回って意識が遠のいてしまうものらしい。

そんななのはの性格を知ってか、ユーノは呆然と頭を抱える。

「（当たったんだね、君も・・・・・・相変わらず文系科目は壊滅的か・・・で、本文は何て書いてるの？）」

「（えっと・・・――“憂きことのなおこの上につもれかし限りある身の力ためさん”って書いてあるけど・・・）」

「（ふんふん。まぁ、つまりこうだ。“悩み事よやってこい。自分の力には限りがあるが精いっぱい頑張るぞ”って意味だよ。）」

「（凄い！！！一回聞いただけなのに何で分かるの！？）」

「（一応考古学者だし、地球の古典と文学は粗方本で読んだ。さ、早く応えなよ。）」

「（うん♪ありがとう、ユーノ君！）」

ユーノからの答えを聞きだしたなのはは早速を答えを言うために念話を切った。

ユーノはそんななのはの弱点をよく理解しているため、白き魔王やエースオブエースと言われる彼女も立派な不完全な人間であると言う事実を噛みしめ、再び自分の受けている授業に集中するのであった。

そして、授業開始から４５分が立ったところで終了を告げるチャイムが鳴り響き、数学担当の教師は挨拶を済ませるとそそくさと教室を後にし、一護達も肩の力を抜いた。

「ふう！！数学は乗り越えたぜ！！」

「結構大変でしたね。」

「ログの計算なんて、懐かしくて涙出てきたぜ全く。」

「次は体育ですね。これなら気楽に行けそうだ。」

ユーノはそう言いながら、別鞄にしまっていた学校指定のジャージを取り出しクラス内に残っていた男子たちと一緒に着替えはじめる。

「よし！さっきみたいな恥ずかし目には合わないぜ！ドンと来て見やがれ！」

「調子のいい野郎だ。」

恋次の発言を聞いていた一護は呆れかえり、エリオもただ苦笑いを浮かべるしかなかった。

二限目はA組とB組の生徒が合同で行う体育である。

勿論男女は分かれてそれぞれの種目を行うが、今回ユーノ達男子は屋外でバスケットの試合を、なのは達女子はマラソンということになっていた。

体育教師は準備体操を行った後、男子を整列させると今日の内容を説明する。

「では、これより試合を開始する。各班に分かれて勝ち抜き形式で行ってもらう。」

細かくチームに分かれたのち、一護達は自信に満ちた表情で試合に臨む。

「行くぜ！」

「「はい！」」

「おおよ！！」

その頃、なのは達は言われた通りに校内のグランドを4周するという形でマラソンを行っていたが、古典に続き体育という苦手科目が連続したなのはにとっては正に地獄であった。

暗い表情のなのはは、一緒に隣を走ってくれるフェイト・織姫・キャロの四人と次のような会話をしていた。

「ふう・・・マラソンなんて、私たちもあんまり運がよくないですね・・・」

「私にとっては苦手科目の連続は勘弁してほしいよ・・・」

「なのは、昔から文系と体育は成績悪かったからね・・・」

「う・・・こんなことなら文系科目ぐらい真面目にユーノ君に教えてもらえばよかったかな・・・」

今更後悔したところで何も始まらないなのはは、息をあがらせくたくたになりつつ基本的に少ない体力を振り絞って何とか三人と一緒に目標の四周を終えると、他の女子生徒と同じく地面に腰を下ろして荒い息を立てる。

「は、は、は、は！やっと・・・終わった・・・！！」

「お疲れ、なのはさん。はい、タオルどうぞ♪」

「ありがとうございます、織姫さん。」

なのはは織姫からタオルを受け取ると、首筋から垂れる汗を拭きながら改めて前の捜査でドラが言っていた自分の体力の無さに痛感するのであった。

まぁそれでも一応教導官なのだから、ある程度の訓練をこなす上で基礎体力は必要なだから、そこまで言うほど無いわけでもないのだが・・・何処までが本当の事なのだろうか。

と、その時女子生徒たちが一様に黄色い声を上げ始めたのでキャロがその様子を見てみると、視線の先にはちょうどバスケの試合を始めようとするエリオ達の姿が映ってきた。

「あれ?あれってエリオ君たちですかね?」

「え?あ、本当だ。バスケの試合やってるんだね。」

「チーム戦か・・・何だか四人とも楽しそうですね♪」

「うふふ。いいね、男の子は元気で。」

なのは達も女子生徒と一緒にバスケットの試合の方を覗かせてもらうと、今まさにエリオと同じチームとなっている恋次達の試合が開始されようとしていた。

「あ、始まったよ。」

フェイトがそう言うと、全員はエリオと恋次達の試合に注目する。

今回、エリオと恋次達のチームの対戦相手はバスケ部出身の男子が固まった強力チームだ。

ジャンプボールの後にボールを手に取ったエリオは、得意の速力を活かして攻撃的な姿勢で向かっていく。

「行きます!」

バスケ部出身の兵相手にもかかわらず、ボールの軌道すら読ませない素早い動きで敵方の男子を驚かせるエリオ。

「何だこの速さは!?」

「本当に人間かよ！？」

そんなエリオを見て頬を赤らめながら、キャロは応援の言葉をかける。

「エリオ君！！頑張って！！」

エリオは速さを活かした動きで一気にゴールを目指すが、バスケ部出身の男子たちが意地を見せてエリオの前に立ちふさがる。

「そうはさせるかよ！！」

その瞬間、エリオは僅かな隙間から恋次目掛けてパスを回す。

「恋次さん！！」

「おっしゃあ！」

恋次はエリオからパスを貰うと、ドリブルをつきながらゴール目指して前進する。

「阿散井をブロックしろ！！」

危機感を覚えたバスケ部出身の男子たちは一斉に恋次周囲に現れるが、恋次はそれを見ると声を上げた。

「舐めんじゃねぇよ！！」

次の瞬間、恋次は勢いをつけるとその場から飛び上がり、その状態からのシュートを試みる。

「つらあああああああ！！！」

一か八かの方法でボールを籠の中へと投げつけた恋次。

その結果、ボールは見事籠の中へとおさまりエリオ達のチームに点数が加算される。

「何！！」

「ゴール！！！」

この光景を目撃したバスケ部出身の男子たちは目を疑ってしまう。

「よっしゃあ！！」

「ナイスです、恋次さん！」

「てめぇもな。」

二人はゴールを決めると、手をたたきお互いの絆を深める。

同じチームのメンバーも二人の活躍を褒め称え、見物をしていた女子生徒たちは歓声を上げる。

「きゃあああ！！！！格好いい！！！！」

「相手、バスケ部所属が多いのに凄いね！」

そんな最初から全力全開の二人を見ていた一護とユーノは鼻で笑っ

ていた。

「ふん。手加減なしだな。」

「いいじゃないですか。スポーツは全力でないと面白くないですから♪」

女子生徒と一緒に二人のコンビネーションを見物していたなのは達も素直に二人の息の良さを褒め称えていた。

「凄いよ、二人とも！」

「なかなかのコンビネーションだね。」

「息もぴったりですね。エリオ君と恋次さん。」

「惚れ直した、エリオ君の事？」

「え！？お、織姫さん！！」

「にゃはは。照れてるねキャロ。」

「ほんと、キャロは可愛いんだから。」

「フェイトさんもなのはさんもズルいですよ！」

キャロはなのはと織姫、フェイトの三人に茶化されると、思わず茹蛸のように顔を真っ赤に染め上げる。

「お、今度は旦那とユーノさんだね。」

織姫がそう言うと、なのはは先ほどの試合以上に食い入るようにユーノと一護の試合を観戦する。

一護とユーノは靴ひもをきつく結び直すと、互いを信頼した瞳を宿しながら自分たちの試合に挑むのであった。

「さて、おっぱじめるか。」

「はい。」

「次はそうはいかねぇぜ!!」

二人の相手もまたバスケ部の主力メンバーで構成されたチームであったため、雪辱を晴らすつもりでユーノ達を睨み付ける。

「お、敵も本気ですね。」

「面白いじゃねぇか。見せつけてやるぜ、俺達の実力をな!」

一護はそう言うと、ジャンプボールを制した相手のチームからボールを奪い取ると、実戦の中で鍛え上げた軽やかな動きで敵の攻めを制しつつ、籠に向かって突進する。

「あなた!!ファイトファイト!!」

織姫もそんな一護にエールを送る。

ユーノは相手の動きを正確に読みながらパスルートを計算していると、なのはから自分に向けた言葉が飛び交ってくる。

「頑張って、ユーノ君！」

「（！なのはの声・・・・・・ようし！！！）」

ユーノはなのはの事を聞いた途端、更に熱を込めると勝利のためのパスルートを導きだし、一護に向かって声をかける。

「一護さん！」

「おお！」

一護はユーノから指示を受けると、手首を器用に操りバスケ部出身者を翻弄しながらユーノへ的確なパスを回した。

「何！？」

驚愕するバスケ部を余所に、ユーノは軽やかな動きとドリブルを遺憾なく発揮させると恋次同様高く飛び上がると、バスケットに向かってダンクシュートを決めようとした。

「貰ったあ！！！」

ユーノはその瞬間、見事バスケットの中へとボールを入れ点数を獲得し、傍で見ていた他の男子や女子たちはあまりの凄い光景に目を奪われ、その後一様に歓声を上げる。

「「「「きゃあああああ！！！！凄い！！！！！」」」」

「スクライア君って、勉強もできる上に、運動神経も良かったんだ

！！」

「格好いい！！」

A組の女子たちは先ほど、自分たちがいくら考えても解けなかった数学の問題をユーノが赤子を捻るかのように簡単に解いたことに驚愕を覚えただけではなく、並外れた身体能力を持つユーノの姿にほれぼれとしていた。

そんな女子生徒からの反応を気にしていないユーノはダンクシュートを決めると、一護と共に強いタッチを交わす。

「ナイスゴール、ユーノ！」

「一護さんのパスが最高だったからですよ♪」

これが、お互いに信頼した二人だからこそできるコンビネーションなのである。

そんな一護とユーノのコンビネーションの良さを歓声を上げる女生徒たちと見ていた織姫達は改めて驚愕するのであった。

「お見事御見事♪やっぱり息ぴったりだよね、旦那とユーノさん。」

「これが師弟の絆というものですね。」

「そうだね・・・――――って、なのは！？」

フェイトがそう口にした時、横に立っていた筈のなのはは今にも昇天しそうなこの上もない笑顔を浮かべつつ、鼻血を出しながらその

場に倒れていた。

「なのは！大丈夫！？」

「にゃはは・・・・・・」

なのはは、先ほどのユーノのダンクシュートを目撃したことであまりの格好よさに興奮を抑えきれなくなってしまいこのような事態となってしまったのであった。

「大変だよ！ユーノさんのダンクシュート見て興奮して鼻血出しちゃってるなのはさん！」

「取りあえず、保健室に連れて行きましょう！」

「なのは！しっかりして。駄目だよ、なのは！ユーノのあれで昇天したりしたら・・・！」

呆れながらフェイトや織姫、キャロの三人は鼻血を出した状態のなのはをそのまま抱えると、教師に許可を貰ってそのまま保健室へと連れて行くこととなった。

全く、これでよく一流の魔導師と言えるものだ――――――

やがて、午後のお昼を済ませた八人は午後からの陵祭の準備の為にそれぞれの部署に分かれて準備を手伝う傍ら、人目を見てはアンゴルモアの反応を探索していた。

エリオはキャロと共に校内を歩きながらアンゴルモアが少しでも反応を起こしていないかを念入りにセンサーを吟味していた。

「校内からは反応が感じられない・・・ひょっとして、屋外の方に出てるのかも？」

「じゃあ、ひょっとしたら買い出しにでも出てるってことかな？」

「多分ね・・・・・（ユーノ先生。みなさん。校内を一通り探索してみましたが、藩王はありませんでした。恐らく、屋外の方に出てるのかもしれません。）」

エリオからの報告を受けた六人は、看板などの色塗りをする傍ら真剣な表情で二人に指示を仰ぐ。

「（分かった。じゃあ、二人も一旦こっちに合流して買い出しに行く序に分かれて探すことにしよう。幸いにも、アンゴルモアは暴走を始めていないようだし・・・穏便に片を付けられそうだから。）」

「（了解です。いま、そっちに行きます。）」

念話を切ったエリオはユーノ達の元へと戻り、全員が合流を果たすと円になりながら屋外での捜索に関して話を始める。

「さて、校舎内にアンゴルモアの反応が検出されなかった以上・・・対象は間違いなく屋外にいる。これから二人ずつに分かれて探しに行くけど、くれぐれも持ち主を刺激するような真似は控える事。単独での接触も厳禁。必ず全員が揃ってから持ち主と事情を話し、交渉を試みる。いいね？」

「「うん！」」

「「「はい！」」」

「「おうよ！」」」

ユーノの説明に納得した様子の七人は文句の一つも言わずに肯定の返事をする。

「よし。じゃあ、これから外に・・・――ん？」

と、言いかけたユーノの耳にふと奇妙な音が聞こえてきた。

一護達他の七人の耳にも同じ音が聞こえてくる。

「おい、何の音だ？」

物音がする方へと八人や他の生徒たちが見たとき、事態は思わぬものへと発展する。

何の前触れもなく、突然校舎の一部が爆発を起こし轟音が鳴り響いたのだ。

「え？」

「な、何だ！爆発したぞ！？」

唐突なるこの緊急事態に唖然となるユーノ達。

すると、織姫は爆発の規模を増す校舎を見ていると、頭上から降ってくる何かを目撃し全員に知らせる。

「あ！あなた、みんな！あれ見て！！」

織姫の言葉を聞き、頭上を見上げた七人。

すると、その七人の元に振ってくるこの学校の制服に身を包んだ一人の女子生徒。

「「「「な！？」」」」

「「「人！？」」」

女子生徒は満身創痍の状態で軌道を変更することも出来ないまま力なく一護の元へと降り注ぐ。

これには流石の一護も目を見開いて焦燥を露わにする。

「え！？おい・・・ちょっと待てよおい・・・！！」

だが、一護の言葉もむなしく少女はそのまま一護の前へと落ち、一護はその衝撃で地面に背中を強打する。

砂埃が晴れると、落ちてきた女子生徒はぼろぼろの体を自力で起こすと強打した部分を手で押さえながら後ろの一護の方を向き謝る。

「す、すみません・・・！」

「いってえ～～～！！何なんだよたく・・・！」

「一護さん！」

「大丈夫ですか!?」

ユーノ達は直ぐに倒れた一護へ駆け寄った。

「あなた、大丈夫!?」

「あ～～何とかな・・・」

一護の体を心配する織姫。

と、その時爆風を上げる校舎の欄干より甲高い声を上げる黒い挑発に黒い外套を身に纏った左腕に剣を装備した凶悪そうな男が声を発してきた。

「ははははははあ!!!!!」

男の声を耳にした瞬間、女子生徒は振り返り表情を一変させ、ユーノ達もその男の顔を訝しげな表情で凝視する。

「あ!」

「「「「「「「「!?」」」」」」」」

「何だ!?外野がぞろぞろと!邪魔するカスはたたっ斬るぞ!!」

「あ?」

「あいつは?!」

「な、何なの一体!?」

「嵐の予感だね。」

突然現れた凶悪な雰囲気を醸し出すその男にユーノ達はそれぞれ警戒心を強めるが、その一方で男の姿を目撃した生徒たちは恐怖に帯びながら次のように口にする。

「おい！みんな逃げろ！！バンデット・ハンターのジョーズだ！！」

「逃げないと殺される！！！」

校舎内にいた生徒たちはジョーズと呼ばれる男を見るなり、一目散に逃げ出していった。

「バンデット・ハンター？何だそりゃ！？」

「俺が知るかよ！」

事情を知らない恋次と一護は益々訳が分からないでいた。

と、その時ジョーズは左腕をかざすように振り上げるとそこから剣による衝撃波を放つ。

「失せろ！！」

衝撃波は周囲のものを巻き込み爆発を起こし、ユーノ達も思わず目を瞑る。

「「「「「「「「「うわあああああ！！！！」」」」」」」」」

ジョーズは周りの迷惑を一切考えずに形振り構わず衝撃波を連続発射し、ユーノ達を巻き込んでいく。

ユーノ達は無茶苦茶な方法で一方的に攻撃されてきたことに非常に迷惑を感じていた。

「何なんですか、あの人!?」

「マズイな。このままじゃ学校も生徒もただじゃすまない。封時結界、展開!!」

ユーノはそう言うと、印を無んで学校全体を覆い隠すように封時結界を発動させる。

それにより、学校の外と内部の時間経過がずれ自分たち以外の生徒たち全てが結界の外へと押し出される。

「結界で時間をずらした。今のうちに!」

「うん!」

一護は満身創痍の女子生徒を肩に担ぎながら、移動を始める。

そんな一護に向かって女子生徒は申し訳なさそうな表情でこう告げる。

「あの!すみません!!迷惑巻き込んじゃって!」

「この際仕方ねぇよ。つうか何なんだよ、お前は!?あいつとどういう関係だよ!」

「詳しく話せば長くなります。一先ず、安全な場所まで行って説明します！」

女子生徒はそう言うと、一護の肩に掴まりながら移動を始めようとするがそんなユーノ達の移動をジョーズが阻む。

ジョーズは衝撃波を放って、先導するなのは達三人を攻撃してくる。

「「「「きゃああ！！！」」」」

「織姫！」

「なのは！」

その時、衝撃波を放ったジョーズが後ろから剣を垂れ下げながら獰猛な目つきで女子生徒に話しかけてくる。

「おおい！！！もう鬼ごっこは終わりにしようや！」

「くそ！しつこいな！」

女子生徒は執拗に自分を付け狙うジョーズを見ながら眉間に皺を寄せると、自分の腕に巻かれた左腕のアクセサリーを強く握りしめる。

すると、そのアクセサリーからフェイトはアンゴルモアの反応をキャッチする。

「（！みんな、この子のアクセサリーからアンゴルモアの反応が！）」

「（え!?じゃあ、この子がＡＭ体!?でもまさか・・・そんな・・・!?）」

なのははアンゴルモアを所持しているにもかかわらず、姿形は普通の人間の姿をしたその生徒に驚いていたが、ユーノがそんななのはに次のように語る。

「（ＡＭ体にはまだなっていないよ。この子からはまるで欲望というものを感じない。単なるアクセサリーとしてつけているんだよきっと。）」

「（そんな人間がいるのかよ!?）」

若干信じられないでいる一護達だったが、ジョーズは鋭い視線をユーノ達に見せながら剣を突き付けこう口にする。

「で、何なんだそのカスどもは!?」

「あ?何だとてめぇ!!」

「待て恋次!挑発に乗るな!」

「誰もでもいいがよ、速いところそいつを渡してもらおうか!!」

ジョーズはそう言うと、もうスピードで女子生徒に向かって突進していく。

「きゃあああ!!!」

〈Ｓｏｎｉｃ　ｍｏｖｅ〉

「！」

その瞬間、エリオはソニックムーブで女子生徒を抱えたまま反対方向へと移動する。

これにはジョーズも一瞬目を疑った。

「エリオ君！」

エリオのソニックムーブを見て、驚いた表情の女子生徒だったがエリオは紳士的な態度で女子生徒の体を気遣う。

「大丈夫ですか？」

「あ、はい・・・ありがとう・・・」

「何だと・・・！？」

ジョーズはエリオの技を見て信じられない表情を浮かべるが、隙を見せたその瞬間に背後から一護の声が聞こえてきた。

「よそ見してんじゃねぇ！！」

ジョーズが振り返った瞬間、一護は右ストレートでジョーズの顔面を殴りかかろうとした。

「つらあああ！！！」

皮一枚のところで一護の拳を回避したジョーズはそのまま一護の方を睨み付ける。

一護もジョーズの方を睨み付けながら制服のネクタイを緩める。

「喧嘩なら、相手になってやるぜ！ユーノ、真剣貸せ！」

「はい！」

ユーノは一護の言葉を聞くと、魔法収納スペースより晩翠とはまた違う日本刀を取り出し鞘に収まった状態で一護の手元に投げつける。

受け取った一護は鞘から刀を取り出し、無形の位で構える。

戦う姿勢を見せる一護を見たジョーズは自分の剣を構えながら一護に問い質す。

「おおい！！！何なんだよてめぇは！？よくわかんねぇが、一つだけ確かなことを教えてやんぜ。俺に楯突くと、死ぬぞ！」

「その言葉、そのまま返すぜ！」

一護は刀を構えると、嘗てユーノにも教えた尋常ならない闘気を全身から発する。

すると、傍らで見ていた女子生徒はそんな一護に向かってこう言った。

「やめて下さい！あなた方の敵うような相手ではありません！相手が悪すぎます！」

「は！後悔しても遅せえ！！」

「行くぜ！」

一護とジョーズは勢いよく突進していくと、そのまま熾烈な剣戟による戦いを始める。

「一護さん！」

「一護！」

一護の戦いを見ていていたなのはや恋次は思わず声を上げる。

二人はほぼ互角と言っていいほどの凄まじい剣戟をぶつけあいながら、高い身体能力を発揮させた迫力ある争いを繰り広げる。

「（このオレンジ頭・・・ただのバカじゃねぇな。一流の剣士としての腕を持っていやがる・・・）」

「（こいつ・・・何て鋭い剣戟なんだ・・・一撃一撃が重い・・・）」

そんな中で、互いの剣を合わせるうちにジョーズと一護は共通の考えに至る。

「「（出来る！）」」

ジョーズは一護の剣の腕を認めると、一護から大幅に距離を取ると戦いを中断させ高笑いいを上げながらこう口にする。

「ははははは！！！！！面白いぞ、オレンジ頭！！！今回は貴様の実力に免じてそいつらの命とカスのアクセサリーは預けておく！だが、次に会う時は貴様も・・・そのアクセサリーも戴いていく！！あばよ！！！！」

ジョーズはそう言うと、封時結界を力だけで打ち破って校舎の屋根を追いかけながら一護達の前から姿を消していった。

「ま、待て！！」

逃げて行ったジョーズを追いかけようとするフェイトだが、直ぐにユーノに止められる。

「追わなくていいよ、フェイト。今はこの子の身の上確保が最優先だ。」

「ユーノ君の言うとおりだよ、フェイトちゃん。取りあえず、私たちが泊まる寮に案内してから詳しく事情を聞こう。」

「う、うん。分かった。」

一護達は女子生徒を保護すると、そのまま学校の外へと向かい、自分たちが滞在する場所である下宿の寮のような場所へと向かい、その生徒の傷を癒してから詳しい話を聞きだすことにした。

辺りはすっかり茜色に染まる夕暮れ時となっていた。

「で、何なんだよあのロン毛は？何でお前が狙われてたんだ？何であいつはお前が身に着けてるそのアクセサリーを狙ってるんだ？」

一護がそのように尋ねると、全員が注目する中・・・その生徒、時空管理局の嘱託魔導師の桂言葉（かつらことのは）はジョーズの正体と事の経緯を説明し始める。

「・・・・・あいつは、バンデット・ハンターのジョーズというものです。」

「バンデット・ハンター？」

「確か生徒たちも同じことを言って一様に逃げていたけど・・・」

「はい。ジョーズは、その名の通り獰猛な鮫のように血の匂いと気に入った獲物を求めて異世界中を飛び回る危険な剣士で、その類稀なる剣技と凶悪さ・更には仕事上ついたあだ名がバンデット・・・文字通り山賊ですよ。」

「山賊って言う割には危険すぎるだろう。」

「で、何故あなたを狙って？」

「ジョーズは、より希少価値の高いお宝を求めてる習性があります。特に奴が好むのは・・・ロスト・ロギア。」

「「「「「「「「！」」」」」」」」

「私も何気なくこのアクセサリーをこの世界の違う高校の文化祭で購入して、装飾品として持ち歩いていたんですが、のちにこれがロスト・ロギアを加工したものだと言うことが分かり管理局に持っていこうとした矢先これです。あの、あなた方は少なからずロスト・

ロギアについては詳しいはずです。教えてください、これが何というロスト・ロギアなのか？」

桂がそう尋ねて来たので、ユーノ達も説明をすることにし、真剣な表情で話し出す。

「・・・それは、アンゴルモアと言って全部で三十一個で構成される途轍もない力を秘めた危険なロスト・ロギアの破片だよ。」

「私達機動六課は、そのアンゴルモアの回収の為に現在異世界の各地で捜索に当たっていて、今回もその一件でこの世界にやって来たと言う訳。」

「そうでしたか・・・あなた方があの機動六課の全線メンバーで・・・あの！これ、私が持っているよりも本来然るべき場所に保管する方が絶対いいはずです。どうか、お納めください！」

桂はそう言うと、つけていたアクセサリーを直ぐに取り外してなのは達に手渡そうとした。

全員は潔い態度の桂に驚愕しつつも、素直に受け取った方がトラブルも回避できると考え一先ずそれを収めることとした。

「そうか。じゃあ、こいつが俺達が責任を持って預かるぞ。」

一護がそう言って桂からアクセサリーを受け取ろうとした矢先、突然それが姿を消してしまったのだ。

「「「「「「「「「「！」」」」」」」」」」

驚くユーノ達であったが、直ぐに消えた原因が判明する。

「ははははは！！！！！こいつは俺が貰っていくぜ、カスども！！！」

そこに居たのは先ほど追い払った筈のバンデット・ハンター、ジョーズであった。

「てめぇは、ジョーズ！何でここに！？」

「は！昼間の仕返しにやってきてやったぞ！ただアクセサリーだけを貰ってもつまらないんでな！！！ここで三枚に下ろしてやる！死ね、カス共！！！！！」

ジョーズはそう言うと、至近距離り剣戟による衝撃波を放ち寮の中にいたユーノ達全員を殺そうとしてきた。

ユーノの強固な防御でその場を凌いだ全員はバリアジャケットや死覇装に身を包むと、ジョーズの追っ手から逃れるために移動を始める。

「逃がすか！！！」

ジョーズも屋根の上を飛び回りながら、空を滑空するユーノ達の後を追っていく。

「くそ！形振り構わないってか！？」

「住宅地での戦闘は避けたい。何処か広い場所へ誘き出そう。」

ユーノは全員にそう言うと、ジョーズを誘き出すために広い敷地へと移動を開始するが、その時桂が移動中に足を滑らせてしまい屋根の上から落ちてしまった。

「きゃああ!!!」

「!桂!!」

一護はそれを見ると、桂を助けようと一目散に向かっていった。

「一護!」

「あなた!!」

地面に激突する寸前で、桂をキャッチした一護はゆっくりと地面に足をつけるとそのまま慎重に桂を下ろしてあげる。

「あ、ありがとうございます・・・一護さん。」

「気にすんなよ。それより、行けるか?」

「はい。何とか・・・・・・って!!」

「!」

と、その時。

ジョーズが二人に向かって獰猛な目つきのまま剣を構え、飛びかかるように斬りかかっていった。

「この俺様から逃げられると思ったのかカス共！！！」

「くそ！逃げろ、桂！！」

「だけど、一護さん！」

「いいから！！早くしろ！！」

と、その瞬間ジョーズの剣が一護の斬撃とぶつかり合い、凄まじい殺気と闘気が混ざり合って周囲に広がった。

「ははははは！！！オレンジ頭！！益々気に入ったぞ！！！この俺様の剣技を前に、逃げるどころが向かって来るとは随分な肝のようだ！！だが、だらだらと勝負をつけるのは俺の趣味じゃねぇ。さっさとかっさばいてやるぜ！！！」

「ち！血生臭い野郎だ！！」

一護は斬月を大きく振るうと、ジョーズと距離を取った。

ジョーズは左腕の愛刀の波紋を舌で嘗めながら、一護の方を睨み付ける。

一護も斬月を持ちながらそんなジョーズと向かい合う。

桂は二人の凄まじい気迫に圧倒されながら地面に腰を下ろしていると、戦いの様子を見て駆け付けたユーノ達が舞い降りてきた。

「一護さん！」

「一護、無茶するな！そいつ、マジでやべぇぜ・・・！」

恋次の言葉を耳にすると、一護も背中越しに応える。

「ああ。分かってる・・・・・だけど、ここで見逃してくれるような聞こえのいい野郎じゃねぇのは見たら分かるだろう。」

一護の言葉を聞くと、ユーノ達全員も貪欲な眼差しで殺戮衝動に駆られるその危険な男の目線に思わず寒気すら感じた。

そして、ジョーズは夕陽を背中に受けながら一護目掛けて攻撃を始めようとした。

「行くぜ、カス！！」

だが、その時突然何者かによって勝負は中断されることとなる。

「お待ちください！」

「その勝負、我々があずからせていただきます！」

「「？」」

声のする方へ一護とジョーズ、ユーノ達が振り返ってみると忽然と姿を現したのはアイマスクのような仮面を纏った双子の女性であった。

そして、いつの間にか女性の片方の手にジョーズが奪った筈のアクセサリーが握りしめ荒れていたのでジョーズは大いに焦った。

「何だと!?」

一方で恋次達は突然乱入してきたこの女性二人を見ながら困惑した表情を浮かべる。

「また変なのが出て来たぞ。何だあいつら!?」

すると、ユーノはその独特の雰囲気を醸し出すその女性をの姿を見て神妙な表情となった。

「あいつらは・・・」

「ユーノ、知ってるの?」

「異世界の各地に現れる正体不明のジャッチャー、チェルベッロだよ。何らかの重要な争奪戦において、公正な判断と勝負によってジャッジを行うんだ。ただ、何の目的でそんなことをしているのかは明確ではないけど・・・いけ好かない連中なのは、確か・・・」

チェルベッロと呼ばれるその双子の女性は、感情を一切表に出さない毅然とした表情を崩さずその場にいる全員に向かって次のように語り出す。

「今回のロスト・ロギア、アンゴルモア争奪戦においては我々がジャッジを務めさせていただきます。」

「何だと!?」

「理由はどうあれ、あらゆる争奪戦においては公正なるジャッジが必要です。あなたがた方がそれぞれの目的の為に欲しているこのア

ンゴルモアを加工したペンダントは、勝負が決するその時まで我々が一時的に保管いたします。」

「保管って!?何を勝手な事を・・・!」

突拍子もないチェルベッロ二人の話に異議申し立てをするなのはだが、チェルベッロは飽く迄毅然とした態度で更に続ける。

「異議は認められません。我々の決定においては如何なる者も決定を変えられることは出来ません。あなたの力の及ぶ存在ではない。」

チェルベッロの話を聞いたユーノも仕方ないとばかりの声色でなのはに補足する。

「あいつらの言うとおりだよ。事実、奴らが現れた勝負ごとにおいて、奴らが下したその裁定を覆した者は誰ひとりいない。」

「そんな・・・」

「マジかよ・・・」

「ご理解いただけたでしょうか?真にアンゴルモアに相応しいのはどちらなのか――」

「命を懸けて証明して貰います。」

「命って!?」

「そんな無茶苦茶な!」

「場所は深夜の陵高校。詳しくは追って説明します。」

「それでは、今晩十一時・・・陵高校でお待ちしております。」

チェルベッロはそう言うと、別れの挨拶だけを済ませてアンゴルモアのアクセサリーを持ったまま何処へなりとも姿を消した。

「「さようなら」」

二人が居なくなった後、一護は声を荒げる。

「ちょ、ちょっと待てよお前ら!!勝手に決めてんじゃ!!つうか、アンゴルモア返せ!!!」

すると、チェルベッロの話を聞いて興味を抱いたジョーズは不敵な笑みを浮かべるとそのまま高笑いを上げる。

「ふ、はははは!!!!!面白れじゃねぇか!!この勝負、乗ってやるぜ!」

「!」

「オレンジ頭、首を洗って待っていろ!ズタズタに引き裂いてやるぞ!」

ジョーズはそう言い残すと、一護に決闘を申し込んでチェルベッロ同様一護達の前から颯爽と立ち去っていった。

後に残った一護達はこの異例の事態にどうすればいいのか、大いに

困惑していた。

一護は斬月を背中に収めると、一先ず地面に腰を抜けたままの桂に優しく手を差し伸べてあげる。

「立てるか？」

「あ、はい・・・・・・」

桂は一護の手を借りて起き上がると、自分の醜態に悔し覚えながら少なからず厄介ごとに巻き込んでしまった事に情けなさを感じてしまう。

そんな想いを抱きながら、桂はお礼がしたいと言ってユーノ達を自宅へと招き入れた。

桂の両親は共に海外の方で仕事をしているため、桂一人で生活を送っていることになる。

桂は冷蔵庫にあった有り合わせの食材で夕飯を作ると、ユーノ達に御馳走し恋次は桂の料理を貪り食い尽くしていた。

「ぷっは！！うめぇぜこれ！お前、料理の才能あるぜ！」

「そ、そうですか・・・それなら良かったです・・・！」

「でも御免ね。何だか悪い気がするよ。」

「本当によかったの、桂？」

フェイトがそう尋ねると、桂は申し訳なさそうな表情で首を横に振り更に続ける。

「もともとが私の不注意と洞察力の無さで招いてしまったことなんですから、これぐらいは・・・それに嘱託魔導師の私が管理局の正規魔導師さんに出来る事なんてこんなことぐらいしかありませんから・・・」

寂しげな表情でそう答える桂に思わずユーノ達の心が痛めつけられる。

すると、織姫が優しい眼差しを浮かべて桂に向かってこう言って来た。

「桂ちゃん・・・自分一人で責任を抱え込むのはちょっとズルいよ。桂ちゃんは自分一人で何でもかんでも背負いきれるほど大きくもないし、そんな年でもないよ」

「織姫・・・さん・・・」

意外そうな表情で織姫の言葉に耳を傾ける桂。

すると、今度は一護が織姫の言葉に便乗してこう語りかける。

「ああ。お前一人で何もかも背負い込もうとするんじゃねぇ。責任は一人で抱えるな。これはお前一人の問題じゃねぇんだ。俺達みんなの問題なんだ。」

一護がそう口にすると、ユーノもなのは達もみな一様に真剣な表情で首を縦に振るう。

そして、桂はそんな一護達の態度を目の当たりにした途端、今まで我慢していた何かが一気に爆発し、嬉しさのあまり大粒の涙を流し始め、床に足をついた。

「う・・・!!ひ・・・!!ありがとう・・・ございます・・・!!みなさん・・・!!」

なのははそっと桂に近づき、持っていたハンカチで桂の顔に付着した涙を拭き取り、優しい言葉をかける。

「桂ちゃん。もう、何も怖くないよ。何も心配はいらないよ。全部背負い込む必要なんて初めからないんだよ。この責任はみんなで背負い込むものだから。けじめは、私たちみんなでつけよう。だから、もう寂しくないからね。」

「なのはさん・・・・・・はい・・・・・!ありがとうございます!!本当に、あり・・・がとう・・・ございます!!」

「うふ。」

元気を取り戻し、肩の荷から解放された桂の表情は先ほどとは違って何処か軽い表情となっていた。

これを見たユーノ達も安心した様子となる。

すると、キャロはあのジョーズの事を不意に思い出すと、一護に向かって次のように口にする。

「それより一護さん。まさかとは思いますけど、本当に一人であの

ジョーズって人と一対一で勝負をするつもりなんですか？」

「ああ。そのつもりだ。それに、これは多分お前らが手を出せるような戦いじゃねぇはずだ。多分、あのチェルベッロって奴らが一枚咬んでそうでならねぇ。」

「あのいかさま審判か・・・なぁ、ユーノ。本当に手を出したら駄目なのか？」

「ええ。万が一僕らが一護さんとジョーズのサシの勝負に手を出せば、その瞬間に勝負は無効となり、アンゴルモアは永久に奴らの手中に収まるかあるいはその場で破棄されるか・・・」

「それは何としても避けたいですね。」

すると、織姫は心配そうな表情で一護の元に近づきこう口にする。

「あなた。くれぐれも、無茶だけはしないで・・・私・・・あなたには出来るだけ傷ついて欲しくない・・・！怪我もしてほしくない・・・！だから・・・！！」

涙交じりの織姫の言葉を聞いた一護は、和やかな表情を浮かべながら織姫の頭に手を乗せこう言って来た。

「心配するなよ。俺があんな無茶苦茶なロン毛にどうにかなると思ってるのかよ？俺は勝さ。何としても・・・――ここにいる俺達全員の力で、アンゴルモアを取り返すために・・・！」

決意を込めた一護はそう口にすると、ジョーズとの決闘の時間になるまで桂の家の庭先で斬月をいつも以上に丹念に整え、何百回も素

振りをして士気を高める。

そんな一護の姿を見ていたユーノ達は、黙ったまま一護の勝利を切に祈るばかりであった。

そして、約束の夜十一時がやって来ると一護は死覇装に身を包み斬月を背負うといつも以上に鋭い瞳を宿しながら陵高校の方へと向かって歩きだし、ユーノ達と桂も一緒に後ろに続く。

一護達が校舎内に入り込むと、当たり前のようだが後者は静まり返って人の気配など微塵も感じさせなかった。

辺りを見回した一護は訝しげな様子でこう口にする。

「まだ誰も来てねぇか？」

と、その時。

「ははははははは！！！！」

一護達の耳元に聞こえてくるジョーズの独特の高笑い。

ジョーズは後ろから飛んでくると、校舎の屋根の上に降り立ち一護を睨み付ける。

「よく逃げださなかったな、オレンジ頭！生け作りにしてやるぜ！！」

「出た！バンデット・ハンター、ジョーズ！」

「凄い殺気だ・・・」

「は！舐められたもんだな。」

「お？」

一護の言葉を聞いて疑問に感じるジョーズを余所に、一護は背中の斬魄刀『斬月』と取り出し鋭い波紋を見せながらこう言った。

「生け作りになるのはてめぇのほうだ。俺がてめぇを倒してそれで終わりだ。この『斬月』と俺の『月牙八式兵法』でな！」

「ほう・・・身の丈ほどの刀だな。それが貴様の斬魄刀か？」

様々な異世界を渡り歩いてきたジョーズは、死神とも幾度となく剣を交えて来ているために別段斬魄刀というものに関しても驚く様子は見せない。

「あいつ、斬魄刀のことまで知っているのか・・・！？」

「それよりも、一護。何なんだよその『月牙八式兵法』ってのは？」

「見てれば分かるさ、恋次。俺が不器用ながらに磨き上げた月牙の全てでこいつをぶちのめしてやるぜ！」

「ぶちのめすだ？はっ！俺はそう言う身の程知らずの馬鹿を何百と葬って来たんだぞ！」

「何百と！？」

「やっぱり一護さん一人じゃ危ないですよ！」

フェイトは心配になってそう語りかけるが、一護はそんなフェイトの言葉を聞いても一切覚悟を揺るがさずに更に続ける。

「ほんと、危ない連中ばっかだぜ。まぁでも・・・俺はそんな危ない連中を尸魂界や虚圏で腐るほど見て、おめぇら以上に命懸けで戦って来たんだよ。」

「え？一護さん・・・」

「何なの・・・あの自信にあふれた態度？」

なのはもフェイトもこの一護の言葉から感じる自信の大きさには正直意外そうな表情を浮かべるが、そんな中恋次はその一護の言葉を聞いて思わず頭を掻き始める。

「あ。け・・・そうだった。俺もすっかり忘れてたぜ。」

「恋次さん？」

恋次はふと思い出した表情で舌打ちをしながらそう口にし、なのは達がきょとんとした表情を浮かべる中腕組みをしながらユーノは誇らしげな表情で一護に関して次のように語る。

「そうですよ♪恋次さんや僕、それにここにいるみんなにだってわかる筈だよ。一護さんはなのは同様戦いの中で凄まじい進化を遂げる天才型の死神。そして、大切なものを護る為という覚悟のもとならば、あらゆる苦難も乗り越える死神代行なのさ！」

一護を戦いと人生の師と仰ぐユーノ。

アンゴルモアを賭けた一護との死闘が始まろうとしていた。

一護はこの凶悪な相手を前に、どのようにして立ち向かうのか？

そして、月牙八式兵法の正体とは？

バンデット・ハンター（後書き）

教えて、ユーノ先生！

ユ「今日は、ヴィヴィオの友達について教えよう♪」

ユ「初等科一年の時から付き合いのお嬢様、コロナちゃん。三年生から一緒になったリボンを髪に結んだリオちゃん。」

ユ「それから、とある事件をきっかけに分かり合ったヴィヴィオと似た経緯を抱える覇王インクヴァルトの末裔、アインハルトさん。」

ユ「この他にもヴィヴィオのクラスメイトは個性豊かでみな一様にいい子たちだ♪うんうん！いつか、管理局を担う立派な魔導師になってほしいものだ。」

恋「魔導師として育てるのはいいが、全部が全部凄い奴になるとは限らねぇだろ？」

ユ「そんなことないですよ♪子供の可能性って言うのは大人の常識では考えつかないような凄いものなんです。そして、子供というものは大人以上に大人なんですよ・・・」

何か心当たりがあるような言い方のユーノ。

それを聞いていた恋次やなのは達は思わず深いと感じてしまった。

全「（深い言葉・・・かも・・・）」

魔導師図鑑ハイパー！

今日は月に一度の機動六課焼肉ロワイヤルが開催される日。

全員はテーブルに置かれたコンロの上で獰猛な獣のように焼肉に手を付け始める。

恋「そこの肉は俺のもんだ！！！！」

ル「戯け！！！そのカルビは私が戴く！！」

ヴィ「シグナムてめぇ！！育ちざかりな私にそのロースよこしたらどうなんだよ！！」

シ「馬鹿を言うな！お前はそれ以上食べたところで成長などせん！！」

ク「コラ！！肉ばかり食べないで野菜を食したらどうなんだ！！」

鬼「け！もやしみたいな野郎にんなこと言われたくねぇよ！てめぇは一生ピーマンでも喰ってろ！！」

焼肉は人を獰猛な性格に変えてしまう非常に危険な食べ物である。

ユーノやなのは、ヴィヴィオ達はそんな光景を遠くの方で見ながら自分たちはあのような事態にならないように仲良く肉を分け合うことにした。

ユ「はぁ～～～これだから焼肉は怖い・・・」

な「だね・・・・・・」

＞i190220—709＜

月牙八式兵法

＞i19694—709＜

前回のあらすじ。

潜入捜査でやって来たユーノ達八名だったが、学校祭の準備の間際に突然何者かに襲撃を受けた桂言葉という陵高の女子生徒が上から降ってきた。

そして、それに呼応するかように彼らの前に現れた獰猛かつ残虐なバンデット・ハンター、ジョーズ。

奴は桂が所持するアンゴルモアを加工したアクセサリーを付け狙って、ユーノ達までも襲って来たが、その騒動の最中一護はジョーズに剣の腕を魅入られチェルベッロのジャッジの元、一対一の真剣勝負をすることとなってしまった。

そして、今まさにそれが始まろうとしていた。

深夜の陵高校に集まった一護達とジョーズ。

ジョーズは不敵な笑みを浮かべ、一護の事を見下ろす。

「ふん」

それと同じように、一護も勝利に満ち溢れた眼でジョーズの事を凝

視する。

「へ」

「「「「「「「「「・・・・・・」」」」」」」」」

二人の睨み合いを後ろの方でじっと見つめる桂を含めたユーノ達八人だったが、不意にエリオが後ろから感じる人の気配に声を上げた。

「あ、誰か来ました！」

後ろを振り返った全員の前に飛んできたのは夕方、突然自分たちの目の前に現れたアンゴルモアアクセサリーを持っていったチェルベッロの二人であった。

チェルベッロはジョーズの近くに下りると、一護達の方を見る。

「お待たせいたしました。それでは早速対戦フィールドの方へとご案内いたします。」

すると、恋次は険しい表情を浮かべながら次のように尋ねる。

「おい！てめぇら、ちゃんとアンゴルモアは持ってきたんだろうな！？」

「勿論です。勝者の品なら、ちゃんと我々が保管しています。」

チェルベッロの一人がそう言うと、懐から持っていったアンゴルモアアクセサリーを取り出し、それを徐に見せる。

その後、戦闘フィールドの場所を伝える。

「今宵の対決フィールドは、校舎南棟になります。」

「南棟にお越しください。」

「校舎に？」

「一体何があるんでしょうか？」

それぞれに疑問符を浮かべるなのは達。

ジョーズは声高らかに校舎の場所を尋ねる。

「は！それは何処だ？」

「こちらです。」

「オレンジ頭！待ってるぞ！！」

ジョーズはそう言うと、チェルベッロの後に続く形で素早くその場から立ち去っていった。

三人が立ち去っていくと、織姫は一護に移動の催促をする。

「あなた。私達も行こう。」

「ああ。」

九人は取りあえず、言われた通りに陵高校の校舎南棟の方を目指し

て桂に案内されながら歩いて行った。

しばらく歩いていると、目的の校舎南棟の姿が見えて来たが恋次は見えて来た南棟の様子が普通とは明らかに違うと言うことに気づく。

「あ？おい・・・あれ見ろよ。」

全員が南棟を見てみると、南棟全体の窓ガラスが強固な防弾ガラスのようなもので完全に塞がれ、更には中に入るための入り口も鉄格子で固定されていたのだ。

「窓が塞がれてる？」

「入り口もだ。」

「どうなってるの、これ？」

普通では考えられないような事態に困惑するなのは達。

すると、ユーノはその塞がれた状態の建物の中で唯一の出入り口を見つけ出す。

「ここから入れるみたいだよ。」

ユーノの言葉を聞くと、一護は恐る恐る扉を開けてなのは達と一緒に中に入ろうとした。

その時、扉を開けると直ぐに奇妙な物音が聞こえてきた。

「ん？何の音だ・・・」

そして、中に入った一同が目にしたのは衝撃的な光景だった。

南棟の建物の内部は壁が付き抜かれ、あちこちに壁の残骸があたりに転がっており、さらには貫かれた天井の至る所から滝のように勢いのある水が流れ落ちていたのだ。

一護達を始め、この学校の生徒である桂が一番驚いていた。

「何これ!?」

「酷い・・・校舎の原型を留めていないよ!」

「これが、今宵の勝負における戦闘フィールド・・・『アクアリウム』。」

その時、一護達の耳にチェルベッロの声が入ってくる。

「チェルベッロ!」

「あなたたち、学校でなんてことしてるの!?」

思わず声を荒げるなのはだが、チェルベッロは一切動じた雰囲気すら見せずに次のように返答する。

「ご安心ください。壊れた校舎の修復は、我々チェルベッロが責任を持って完全に修復いたします。ですから、ご心配には及びません。」

「いや、そういう問題じゃないから!」

チェルベッロの言葉に今一納得のいかないなのはだったが、ユーノやフェイトにこれ以上何を言っても無駄だと諭されこの場は仕方なく引き下がる事とした。

「では、これより戦闘フィールドの説明を始めます。特徴は立体的な構造。そして、閉ざされた空間に止めどなく流れ落ちる大量の水です。屋上のタンクより散布される水は一階より溜まり、勝負が続く限り水位は上がり続けます。」

「まるで沈没船の中ですね・・・」

「徐々に足場の確保が難しくなっていくね。」

「なお、溜まった水は特殊装置により海水と同じ成分とされ、特定の水位に達したところで獰猛な海洋生物が放たれます。」

「え!?獰猛な生物・・・!?」

予想外の一言に大いに驚くキャロ。

と、その時二階付近で話を聞いていたジョーズが声を上げてきた。

「ははははは!!面白そうじゃねぇか!」

声を聞いた瞬間、一護は不敵な笑みで上から自分を見つめるジョーズを睨み付ける。

「ジョーズ、てめぇ・・・!」

「はは。負ければ死・あるのみ！命を懸けたやり取りには御誂え向きだぜ！！」

「・・・――――」

口をこもらせ険しい表情を見せる一護。

そんな一護とジョーズのやり取りを、じっと見つめるユーノ達八人。

「ジョーズの奴・・・本気ですね・・・」

「あんまり勝負前に驚かすのはやめて下さいよ、ユーノさん。一護さん・・・あの！」

「お？」

桂が何か言いたそうな口調で一護にそう語りかけると、一護は一度振り返り桂の方を凝視する。

そして、桂は暫くの間を置いたところでこう言った。

「あなたの勝負・・・・・・見届けさせてください！」

「桂・・・・・ああ！」

一護は桂の言葉を聞くと、自信に満ちた表情で受け答えをする。

すると、その時ユーノが真顔を浮かべながら次のように語り出す。

「ジョーズの戦闘能力は、恐らく管理局のエース級魔導師でも一筋

縄じゃいかないことは間違いないでしょう。仮にシグナムさんとやりあって、どちらが勝っても可笑しくはない。」

「確かに、それは言えるかも・・・」

「一護。本当に勝てるのか？」

「勝たなきゃならねぇから戦うんだろうが。心配するなよ。俺、こう見えても剣八には殺されそうになり、白哉とも殺されそうになって生き残って来たんだからよ！」

それを聞いた瞬間、なのはやフェイトは真顔でそう口にする一護の話に寒気を感じた。

「何平気で怖いこと語ってるんですか、一護さん・・・」

「あの・・・あんまり無理はしないでくださいね・・・」

「大丈夫ですよ、二人とも♪旦那の生命力の高さは随一なんだから。そう簡単にはくたばらないって。ねぇ、あなた？」

「そう言う事。」

二人の話を聞いて、一先ず納得することにした二人。

するとその時、士気を高めることと一護へのゲン担ぎの為にユーノがこんな提案をしてきた。

「あ、そうだ。折角の大人数なんだし・・・ちょっと円陣でもして一護さんの勝利を祈ろうよ♪」

「げ！ユーノ、やめてくれそんな真似！俺、恥ずかしいぜ！！」

恥ずかしがった様子で抵抗意識を見せる一護だったが、ユーノの提案を聞いたなのはやエリオは賛成の意向を示す。

「あ！それいいかも！！やりましょうよ！」

「僕も賛成です！」

二人がそう口にすると、フェイトも織姫も賛成の言葉を持ちかける。

「私も一度やってみたいと思っていたんですよ。スポーツを見ているとちょっと憧れてたもので。」

「やろうよ、あなた！円陣は絶対いいって！」

「いやだけど・・・な・・・！」

「恥ずかしがるんじゃねぇよ。お前の頭の方がよっぽど恥ずかしいんだからよ！」

「んだと！！！」

恋次の言葉を聞いた瞬間、殺気を溢れさせながら背中の斬月に手をかざす一護。

それを見たユーノが宥めつつ、更にこう続けた。

「まぁまぁ。どうだろう、桂ちゃんも一緒に円陣に加えてみない？」

「え？いいんですか！？」

桂がきょとんした表情で尋ねると、なのは達も快くそれをよしとする。

「ユーノ君が良いって言うんだし、私は全然構わないよ。」

「運命共同体って奴ですよ。」

「通訳だ。一護も腹決めろ。」

「はぁ～～～分かったよ。よし、肩組むぞ。」

一護はその場にいた全員と肩を組み、綺麗な円陣を作り上げる。

そして、ユーノの掛け声とともに全員が声を出す。

「よし。一護さん！！！！ファイ！！！！」

「「「「「「「「「「オーーー！！！！」」」」」」」」」」

一護も最初は抵抗の姿勢を見せていたが、満更嫌という訳でもなく最終的にはこの中で一番大きい声を上げて士気を高めたのであった。

「では、対戦相手の二人は中央にお集まりください。」

「なお、今回は水没するため観覧席は校舎の外となっており・・・・・」

チェルベッロがそう言うと、校舎に設置された巨大スクリーンに音声と映像が流れ出る。

『勝負の様子は、壁に設置された巨大スクリーンに映し出されます。対戦者以外は速やかに退出してください』

「じゃ、しっかり頼みましたよ一護さん。」

「御武運を。」

「負けんじゃねぇぞ、一護。」

「分かってるさ。」

「じゃあ、頑張ってください。」

「おう。後でな！」

桂は一護にそう言って見送ると、自分はユーノ達と共に外の方へと向かって歩いていくが、桂は最後に斬月を背負って反対側へと向かっていく一護を一瞥しながら心の中でこう言った。

「・・・・・・――――――――（一護さん・・・気を付けてくださいね。）」

退出したユーノ達が早速スクリーンで一護達の様子を見守る中、チェルベッロのアナウンスが聞こえてくる。

『なお、今回のバトル。時間は無制限です。』

『どちらが戦闘不能・あるいは死亡が確認された時点で勝負は終了。商品のアンゴルモアは勝者の手に渡されます。』

一護が中央まで歩いてくると、頭上から降りてきたジョーズは一護の経歴を口にしながら自信に満ちた表情で剣を向けてきた。

「ははははは！死神代行だか何だかしらねぇが・・・逃げださなかったことをリグレットさせてやるぜ！！」

「ふん。やってみなきゃ分かんねぇぜ。」

両者が互いに中央に集まり、向かい合った状態となるとチェルベッロの二人は戦闘開始の合図を出す。

「それでは、アンゴルモア争奪戦。マーダー・ジョーズＶＳ黒崎一護・・・・・・」

「バトル開始！」

ジョーズはバトルの開始と同時に血気盛んな様子で一護目掛けて剣を構え突進してきた。

「飛ばすぜ！！」

「（来るか！）」

一護は素早く剣の軌道を読み取ると、ジョーズの剣を躱してジョーズの元から回避するが、その瞬間ジョーズは予想外の攻撃を仕掛ける。

「へ！」

ジョーズは左腕の剣先から仕込み火薬を発射し、それをスクリーンで見ていた恋次やなのは達は目を疑った。

「な！？あの野郎・・・刀の先から！？」

「仕込み火薬・・・！」

一護もそれに気づくと、弾道軌道を読み取り素早い判断でそれを躱す。

火薬はそのまま水の中に飛び込むと、勢いよく爆発を起こし水がはじけ飛ぶ。

ジョーズは自分の奇襲攻撃を回避した一護の反射神経に感心していた。

「ほう。避けたか。」

「たく・・・変なもん仕込みやがって・・・剣八ならこんな小細工見たら、まず下らねぇって言うに決まってるな。」

「下らねぇだ？カスが・・・！だったらこいつも下らねぇって言えるか！？」

ジョーズはそう言うと、突進すると見せかけて忽然と一護の前から姿を消した。

一護は急に姿をくらまし、気配すらも感じさせないジョーズに驚愕

していた。

「消えたか・・・」

と、その時。

「！」

ジョーズは一護の背後から殺気を纏わせながら唐突に現れ剣を振りかざし、一護は背中の斬月に手をかけ巨大なその刃で防御する。

観戦中のなのは達はジョーズの並外れた速力に目を疑った。

「何、今の！？」

「速い！」

「見くびって貰っては困るな！！こう見えても俺は、名のある剣客という剣客を完膚なきまでに斬り殺してきた無敗の剣士なんだよ！！！」

そう言うと、ジョーズは至近距離からの仕込み火薬を一護目掛けて発射した。

「！！」

「あの距離では！？」

表情を一変させたなのは達の声もむなしく、一護は至近距離よりその攻撃をその身に受けるや否や水による爆風で姿を見えなくしてし

まう。

「一護さん!!」

「あなた!!」

声を上げて一護の名前を叫ぶ恋次と織姫。

ジョーズは攻撃を食らわせた一護の方を見ながら自分の勝利をほぼ確証していた。

「は・・・何!?」

だがその時、ジョーズの目の前に一護を覆い隠す水が突然積乱雲のような形となって見るものすべてを驚愕させる。

外で観戦していたなのは達はこの突然の事態に目を疑った。

「え?な、何・・・あの雲の形・・・?!」

すると、驚愕するなのはの横でユーノがほくそ笑みながら次のように語り出す。

「一護さん・・・ついに発動したな。」

「発動?何をなの・・・」

「これが、戦う前に一護さんが言っていた月牙八式兵法・・・七式の守り。」

ユーノがそう言おうとすると、一護も水の中から出て来ると、斬月を左手に持ちながら刃先から月牙天衝を発動したと思われる青白い霊圧を漏らして立っていた。

「“風切月牙・雲壌（かぜきりげつが・うんじょう）”」

「風切・・・」

「月牙・・・!?」

名前を聞いて驚くなのは達もそうだが、何よりも驚いているのは一護と今まさに戦っているジョーズその人であった。

「何だと!?」

一護は驚愕するジョーズを余所に、左手の斬月の持ち手を右へと持ち替え、勢いよく刃を振って水を切る。

そんな一護をスクリーンで見ながら、織姫は思わず声を上げて頬を赤くする。

「す・・・凄い!あのジョーズの爆風を躱した!やっぱ旦那は最高だよ!!」

「あれが、一護が言っていた月牙八式兵法って奴か・・・!だが、あいつは確か月牙天衝以外の技は使えねぇ筈だが・・・」

「え、そうなんですか?」

エリオが意外そうな表情でそう口にする中、そんなエリオや同じ疑

問を抱くなのは達に向かって説明をしだす。

「恋次さんの言うとおりだよ。だからこそ、一護さんは徹底的その月牙を様々な形で使いこなす必要があったんだ。己の得意技を絶対の必殺技にまで昇華させ、用途に応じて型を変化させることより小技を必要としなくなる。死神の力を手にしてから十年・・・一護さんは独自の研究と血生臭い実戦を繰り返す中でその戦闘センスから導きだし、体得したのがあの月牙八式兵法。死神という魔導師とは次元も全く異なる絶対的に死を付き纏う死闘の中で、その才能を開花させた一護さんは、言ってみれば・・・男版“高町なのは”なのさ。」

「う・・・何かその言い方もちょっと微妙な気がするんだけどユーノ君・・・」

最後に自分の名前を口された瞬間、苦い表情を浮かべてしまうなのは。

「ま、どっちにしたって・・・その一護さんの才能を遺憾なく開花させた浦原さんが一番凄いんじゃないかな?」

「って、そこで浦原さんかよ!?」

意外なところで浦原の名前を口にしたユーノに恋次が突っ込んだ。

だが、ジョーズは一護の使った風切月牙を目のあたりにしても動じるどころか逆に迫る姿勢を崩さず再びもうスピードで向かっていった。

「ははははあ!!!!!図に乗るなよ、死神風情が!!!」

ジョーズはそう言いながら、仕込み火薬を一護の足元に発射して一護の周囲に多量の水を巻き上げ逃げられないようにした。

「くそ！塞がれたか！」

「斬る！！」

「だが、俺の力も舐めてもらっては困るんだよ！こんな時は・・・・・・こいつだ！」

そう言うと、一護は月牙天衝を刃に留めた状態から勢いよく足元の水を柱のように巻き上げ、それを繰り返していき自分の周りを水柱と月牙による防御壁を完成される。

「あ！」

「こいつは！」

「な、何！？」

驚くなのは達や桂を横で、技の詳細を知る弟子のユーノはその名を口にする。

「月牙八式兵法、四式の守り――――――」

「ちいい！！」

ジョーズはそれを力で切り伏せようとしたが、切った瞬間手ごたえはなく中には身を低くした一護が斬月を持った状態でそこにいた。

「“城郭月牙・要塞”」

この一護の技の機転には、エリオ達も感服するばかりだ。

「月牙の威力と水の壁で姿をくらませた上に、身を低くして防御・・・あれでは当たりません！」

「これなら大丈夫。大丈夫だよ！」

「はい！本当にこれならジョーズを・・・」

そう確信した様子の織姫や桂だったが、その二人の横で腕組みをしながら観戦していた恋次の顔は浮かないものであった。

そして、不意にこう呟いた。

「だと良いんだがな。」

「え？恋次さん。」

「何でだ・・・ジョーズの野郎が・・・喜んでいるようにも見えるぜ。」

恋次はスクリーン越しに不敵な笑みを浮かべるジョーズに不信感を募らせる中、そのジョーズはというと一護に向かって疑問に思ったことを尋ねてきた。

「おい、オレンジ頭！何故防御の後撃ち込んでこなかった！？」

「何？」

「愚かなアホが！俺に唯一傷をつけることが出来た最後のチャンスを潰したんだぞ！」

「ふん。」

鼻で笑いながらジョーズの言葉に受け答えする一護だったが、スクリーンでその様子を見ていたなのは達は怪訝そうな表情を見せる。

「え？」

「最後のチャンス？」

「負け惜しみを言ってるの。はったりに決まってますよ。」

ジョーズの言葉を負け惜しみと捕える桂。

すると、一護も鼻で笑いながらそんな言葉を投げかけるジョーズに更に続ける。

「は！最後って、随分言ってくれるじゃねぇか。言っとくけど月牙八式兵法は・・・これだけじゃないんだぜ。」

聞いていたユーノもその通りとばかりの表情で不安げなのは達にこう告げる。

「その通り。月牙八式兵法は、ディバインバスター同様バリエーションが豊富なんだ。守形と攻形を自在に使い分けられるのが特徴で、その名の通り状況に応じた八つの型が存在する一護さんだけの剣技

だからね。」

そう説明を終えた時だった。

一護は斬月の持ち手を両手でしっかりと握りしめると、鋭い視線を浮かべ霊圧を研ぎ澄ませると、ジョーズに向かってこの戦いにおいて初めて前に飛び出す。

「「「あ！」」」

「旦那が・・・初めて前に出た！」

一護の攻撃に備えるジョーズ。

だが、一護の突進は瞬歩を利用したものとなっていたためフェイトやユーノのようなものでなければそう簡単に回避できるものではなかったのだ。

「これは・・・！」

「速い！！」

「月牙八式兵法、一式――――――」

一護は突進力を活かした月牙で相手を切り伏せる一番最初に完成させた月牙八式兵法をこの戦いで披露する。その名も――――――

“電光月牙石化（でんこうげつがせっか）”」

月牙を刃に止め放つその技の威力によって、ジョーズは手加減され

たとはいえ衝撃には耐えられずそのまま後ろの方へと吹き飛んでいった。

食い入る様に見ていたなのは達はあまりの一瞬の出来事に呆然としていた。

「「「「「「・・・・――――！」」」」」」

「い、今のは・・・・――」

桂がそう口にすると、ユーノは不敵な笑みで技の説明をする。

「『電光月牙石化』。瞬歩を活かした最高速における状態での突進から、刃に留めた月牙を至近距離から一瞬のうちに繰り出す一撃必殺に近い技さ。」

「や、やるじゃねぇかよ・・・あの野郎。」

「凄い・・・！これなら！」

なのは達も改めて黒崎一護の実力に感服し、この勝負もきっと一護が勝利を収めるという期待を抱きながらスクリーンを覗いた時、予想外な事が起きてしまう。

「ははははははは！！！！！」

「！？」

何と、一護の攻撃をまともに受けたはずのジョーズが水の中から現れるとほとんど無傷の状態で一護にこう言って来た。

「利かねぇぞ。」

「何!?」

技を仕掛けた一護本人はおろか、観戦していたなのは達もこれには驚きを隠せなかった。

「あの野郎は無傷だ・・・!」

「何で・・・!?間違いなく当たっていたのに!?」

「一瞬だ。一護の斬撃の直前に一瞬身を引いたんだ・・・!あいつはやられて倒れたんじゃない。自ら後ろに飛んだんだ・・・!」

「そ、そんなことって!?」

「奴に動きを読まれていたとしか考えられないね。」

「ですが、僕が見る限り一護さんが斬撃を放つモーションに何の不自然さも見当たりませんでしたよ!」

「じゃ、じゃあ・・・どうして!?」

狼狽するなのは達だったが、ジョーズは不敵な笑みを浮かべながら険しい表情を見せる一護に更に続ける。

「ははははは!お前の使う月牙なんたらとやらはこんな程度か?」

「・・・・・」

ユーノは苦い顔の一護をスクリーンで見ながら、一抹の不安を感じ始める。

「（まずいな。一護さんの月牙八式兵法があの男には利いていない・・・！）」

「ははははははは！！！！舐めているのはそっちのほうだカス！！！！まだ自分の置かれた状況が分かっていないようだな！！その生意気な口を利けなくしてやる！！！」

ジョーズはそう言いながら一護目掛けて斬りかかってくる。

一護は防御の姿勢を見せるために月牙とともに水柱を作り出す。

だがそのとき、ジョーズは一護の水柱に向かって自分も斬撃による水柱を作り出し一護の水柱目掛けてぶつけてきたのだ。

「「「！」」」

このジョーズの行動には、当事者である一護や愛弟子のユーノも驚きを隠せなかった。

「あ、あいつも・・・！」

「同時に斬撃による水柱を！」

「これではお互いに視界が・・・！」

「先に見つけた方が勝ちだな。」

水柱によって視界を封じられた一護はジョーズの気配を追うが、その瞬間一護の死角よりジョーズが刃を立てて出現する。

「！」

「ははははは！！！」

ジョーズはその瞬間、水のドームを一護と共に切り伏せる。

「あなた！！！」

水のドームが斬られた瞬間、一護の体もジョーズの斬撃によって見事に斬られ、死覇装から血を噴き出した。

「！」

「「「「「「「「！」」」」」」」」

想像もしていなかった光景を目の当たりにし、衝撃を受ける九人。

「どうだ、痛いか・・・？最後に絶望的なバッドニュースを教えてやる。貴様の技は既に見切ってるぜ！」

「何！」

「なぜなら、その月牙とやらは・・・昔戦った死神と一緒に捻り潰した技だからな！」

「！？」

一護はそれを聞くと、斬られた箇所を押さえながら後ずさりし、思わず水の中に腰を下ろしてしまう。

その一方で、不敵な笑みを浮かべるジョーズの先ほどの言葉に耳を疑う恋次。

「ど、どういうことだよ・・・月牙天衝を昔潰しただと・・・!?あれは、一護の斬月の固有スキルの筈だぜ!?」

「それは違いますよ、恋次さん。」

「何?」

「ユーノ君。どういう事?」

「月牙天衝は、本来斬魄刀の名前に『月』と名につくものと、力の根源を月に依存しているものが使うことを許された技なんだ。事実、一護さんのお父さんの黒崎一心さんの持つ『?月(えんげつ)』にも同様のことが出来る。」

「ま、マジかよ・・・!」

恋次は自分ですら知らなかった驚くべき事実に一瞬耳を疑い、なのは達もユーノから明かされる衝撃な言葉を素直には信じられずにいた。

そして、一護に一太刀を浴びせたジョーズは険しい表情で汗を流す一護に過去の話を持ち出した。

「昔、あらゆる異世界で俺は名のある剣客を倒す旅をしていた。倒すたびに自分の力量がどれほどまでに優れているのかを試していた。そんな折、貴様と同じ死覇装に身を包んだ死神が、絶対の技を使うと言う噂を嗅ぎ付けた。それが、月牙天衝！見つけたぜ・・・その使い手の死神をな。貴様と同じ刃先から斬撃を放出し、八つの型で攻撃してきやがった。」

一護はその話をただただ黙って聞いていたが、ジョーズはそんな一護にこう言った。

「だが！所詮は鈍重極まる大技の亜流！全ての型を受け、見切り、切り刻んでやったぞ！」

スクリーンでその話を聞いていたなのは達も正直信じたくはなかった。

「そ、そんなことって！？」

「恐らく、本当の話だろうね。あいつの技の見切りは反射レベルよりもうワンランク速い。」

「そんな・・・！」

「何て奴だ。一護さんの月牙天衝までも・・・」

「（マーダー・ジョーズ・・・こいつは伊達じゃねぇ・・・！）」

「じゃ、じゃあ・・・旦那の技はもう全部効かないってこと・・・！？」

恐る恐るそう口にした織姫だったが、その時今まで沈黙していた筈の一護が次のように口にしてきた。

「は。んなこと知るかよ・・・」

「あ？」

「あなた！」

「一護さん・・・」

心配するなのは達を余所に、一護は水の中から徐に立ち上がると出血カ所を押さえながら苦い表情でこう言った。

「・・・俺が斬月から教えてもらったこの月牙天衝は、誰にも負けねぇ俺の唯一の技なんでよ・・・！！」

「飽く迄一護さんは、月牙天衝で戦うつもりです！」

「いけない！」

「ははははっは！！！！莫迦か貴様！？」

「やってみなきゃ分かんねぇって言ってるだろ！」

「へへ、もう手加減はしないぜ！」

ジョーズはそう言うと、左手の剣を構え一護に向かって牙を向け走り出す。

「行くぜ！」

一護もそんなジョーズに対抗する為に、斬月を持ちながら全速力で走り出す。

ジョーズは走りながら仕込み火薬を発射し、水によって視界を塞ぐと同時に一護の目を潰すために柱を切ってその破片を飛ばしてきた。

「ぐあ！」

切り傷を受けた一護はそれに反応することが出来ず、破片が左目に直撃する。

「あ！」

「柱の破片が！」

「汚ねぇ野郎！」

「動き出したら止まらねぇぞ！！」

「く！」

水に沈みかけた一護は向かって来たジョーズに攻撃を仕掛けるため、斬月の刃に月牙を留めながら勢いよく水を巻き上げる。

「あの技は・・・！」

「攻めで行くか・・・」

一護の狙いを読み取ったユーノの表情は何処か複雑だった。

一護は左手で月牙八式兵法、四式の攻めを発動する。

「“城郭月牙・爆心（ばくしん）”！」

「へ！」

だが、その瞬間不敵な笑みを浮かべながらジョーズは渾身の一振りを斬月に振り下ろし、技の発動の際に細工を行った。

「な！」

一護はジョーズの攻撃をその身に受けた途端、全身の感覚が痺れるような感覚に陥りその場から動くことが出来なくなった。

「一護さん・・・！？」

「あなた・・・！どうして動かないの！？」

「こ・・・これは・・・！」

硬直した一護の様子をスクリーンで見ていたなのは達は焦りを見せ、ユーノはジョーズが発動したこの技の効力がどういったものなのかを理解する。

「ははははは！！！どうした！？」

「（やべ！）」

「死ね！」

ジョーズが一護目掛けて剣を振り下ろそうとした瞬間、一護は咄嗟に自分の左腕を強く殴打して全身の硬直を解くと、皮一枚のところでジョーズの斬撃を回避した。

「く！」

後ろの方へと飛ばされ、水の中に沈む一護。

「一護さん！」

「ははははは！！！！！」

その後もジョーズは突然糸が切れたかのように動きが著しく鈍くなった防戦一方の一護に容赦ない攻撃を仕掛け続ける。

そんな一護の尋常ならぬ様子に違和感を覚えるなのは達。

「一護さんの様子が変じゃない？」

「一瞬、動きが止まったように見えたけど・・・」

すると、怪訝そうな表情を浮かべるなのは達にユーノがジョーズの技の効力を語り出した。

「多分・・・さっきの攻撃の瞬間、ジョーズは渾身の一振りを強力な振動波に変え、それによって一護さんの神経を麻痺させたんだ！」

「それでか・・・だが、あいつも咄嗟に自分の腕を強く打って硬直

を解くなんて・・・あいつもまだまだ諦めちゃいねぇぜ。」

しかし、一護も一護でこの状況はかなりつらいものであった。

左手の感覚は凍傷と同じように痛みもかゆみも何も感じない状態に陥り、体はすっかり満身創痍の状態であった。

ジョーズは息を切らした状態で立ち続ける一護にこう語ってきた。

「どうだ!?俺のこの技は素手をバッドで殴られるよりも強い!!その左腕は使い物にならねぇぞおい!!」

「は、は、は、は。くそ・・・!」

「どうした!!顔色が悪いぞ!?」

ジョーズはそう言うと、剣を構えて一護目掛けて飛び出していく。

一護は咄嗟に周りを見渡すと、貫かれた天井の下に転がる岩を伝って上の階に回避する事言う選択を取る。

「ここは一旦回避か・・・」

「ははは!!!逃がすか!」

一護は岩を伝って上の階へと逃れ、痺れによって感覚がまるで感じない左腕を見ながら険しい表情を浮かべる。

「(腕が痺れて感覚がねぇみてぇだ・・・)」

すると、その時自分の足場から唐突に轟音が聞こえてくると、そのまま一護の足元が豪快に崩れ落ちる。

「！」

「はははははははは！！！！！」

「な！」

何と、ジョーズは剣による超高速で繰り出される突き攻撃によって、一護の足場を砕きそのまま落ちてくる一護に連続攻撃を仕掛ける。

「死ね！」

最後の一突きを受けた一護は、全身から血を噴き出しながらそのまま抵抗する事も出来ずに水の中へと墜落していった。

スクリーンで見ていた恋次や織姫、なのは達はこの一方的且つ残虐なジョーズの攻撃に言葉すらも失いかけた。

「い、一護・・・」

「あなた・・・！」

「な、何て剣戟だ・・・突く、刺すと言うより・・・空間を齧る様な・・・！」

ジョーズの凄まじい剣戟を見ていたフェイトは、戦友であり自分の隊の副隊長のシグナムに同じ真似が出来るのかとさえ思ったほどだった。

それほどまでに、この男の剣術は恐るべき実力を秘めているのだ。

「さぁ、オレンジ頭！止めを刺してやるぞ。」

ジョーズの言葉を聞きながら、斬月に掴まりながら起き上った血まみれの一護は肩で息をしながら自分の力不足に憤りを感じる。

「ちくしょう・・・・・俺がこうも一方的かよ・・・！これじゃユーノの前で格好つかねぇじゃねえかよ・・・ボケ・・・！」

「はははは！！！！まだやるか！？得意の月牙天衝で！どうしたオレンジ頭！？俺の戦った死神は八つの型全ての月牙を見せてくれたぜ。最後の八式、『月牙天嵐』を放って無残に散ったがな！」

「！（八式・・・月牙天嵐・・・何言ってやがる？月牙天嵐は二式の技だぜ・・・）」

一護は自分の使う月牙八式兵法とジョーズの口にする月牙天嵐と言う言葉に疑問を感じた。

何故なら、月牙天嵐は一護の月牙八式兵法においては二番目の技に当たるものである断じて八番目の技ではないのだ。

と、その時一護は一筋の光明を見つけ出し笑みを浮かべた。

「！そうか・・・成程な。どうやら勝機はまだあったぜ。」

そんな一護の様子に気づいていないスクリーンで観戦を続けるなのは達は一護の事が心配で名前を上げ続けている。

「一護さん！」

「一護！」

すると、スクリーンを通してジョーズがなのは達にこう宣言する。

『ははははは！！！！魔導師共！オレンジ頭の無様な最後をよく見ておけ！』

「く・・・！」

だが、その時ユーノは顔を伏せた状態から低い声でこう口にした。

「は。何言ってるの？お前。」

「あ？」

ユーノの言葉に疑問を抱くジョーズ。

と、その時そんなジョーズの目の前に倒れていた一護が背を向けた状態で斬月を右手に持ちながら徐に立ち上がってきた。

「おいおい。寝ていろ！そのまま三枚に下ろしてやるぞ！」

すると、一護はジョーズに向かってこう断言する。

「そうはいかねぇよ・・・――俺の月牙天衝は、てめぇなんかに破られるようなそんな陳腐な代物じゃねぇんだよ。」

「・・・――は。強情な奴だ。強がりを言ったところで、その体で何が出来る?ああ!」

この一護の状態を見ていた桂や恋次は動揺を隠し切れなかった。

「一護さん・・・・」

「あいつ、ふらふらじゃねぇか!」

「カスが!先ずはその減らず口から切り下してやる!」

ジョーズはそう言いながら、剣戟による衝撃波を一護目掛けて連発し、一護にダメージを与えようとする中、一護はそんな凄まじい攻撃を走りながら回避を続ける。

そして、一護は満身創痍の状態にありながら自力でジョーズの元まで駆け上がり、その背後へと着地した。

「・・・行くぜ。」

「ははは!!何しに来た?」

「――月牙八式兵法・・・」

そう言うと、一護は月牙八式兵法の最後の型の構えを取った。

見ていたなのは達は思わず声を上げる。

「一護さん!」

「あいつ、まだ・・・！」

「駄目です！ジョーズには通じません！」

「おいおい。脳細胞がねぇらしいな。」

呆れて言い返すジョーズを余所に、一護は全速力でジョーズの元へと駈け出していった。

「その構えは知っているぞ！さぁ、撃て月牙天嵐を！」

ジョーズは嘗て見た覚えのあるその一護の構えを見ながら、勝利を確信した表情を浮かべながら一護に向かっていった。

「（終わりだ！）」

「（月牙八式兵法、八式――――――）」

一護は斬月に自身の残っている霊圧を全て刃に留めると、それによって出来た渾身の一撃をジョーズの体に叩きこみ、ジョーズを切り伏せる。

「ぐっは！！」

宙を舞い、血を流すジョーズを余所に一護は最後の八式の名を口にする。

「“一刀月牙（いっとうげつが）”」

「な・・・に・・・！」

自分の予想に反した攻撃を仕掛けた一護に驚愕しながら、後方へ飛ばされたジョーズ。

スクリーンでこれを見ていたなのは達も攻撃がクリーンヒットしたことに大いに驚く。

そんな中、一護は次のように口を漏らす。

「は。やっぱりな。」

深手を負い、剣すらも折れたジョーズは血を流しながら自ら出て来ると険しい表情で一護に尋ねる。

「き、貴様・・・！月牙天衝以外の技を使えるのか！？」

「あ・・・いいや。今のも月牙天衝だぜ。」

「何！？」

「八式、一刀月牙は俺がウルキオラとの戦いのときに編み出した技だ。」

「え？ウルキオラって・・・」

事情を全く知らないキャロやなのは達がそう漏らすと、一護の過去を聞かされていたユーノがその詳細を語る。

「虚の住む世界、虚圏（ウェコムンド）で一護さんが戦った破面の頭目、十刃の一人さ。嘗て、織姫さんは藍染の計略によって、そのウルキオラに拉致

され、織姫さんを助けるために一護さんやルキアさん達は虚圏に乗り込んだ。傷つくことを畏れず・仲間である織姫さんを救いたいが為に・・・」

「そんなことがあったんですか・・・」

「うん・・・旦那はいつもそうだから。一度護ると誓ったものは、どんなことがあっても護りぬく。それが旦那の誇りだから――――――」

長年、一護の傍で一護の姿を見てきた織姫は分かり切った表情でそう口にした。

聞いていた恋次も愛弟子であるユーノも、そのことを理解していた。

一刀月牙を放ち、最後の力を振り絞った一護はその場に膝をつくと体力の限界に達したのか斬月を持ちつつ肩で息を切らす。

「は、は、は、は・・・」

同じように、一護に付けられた深い切り傷によって一護以上に多量の汗と息を切らす剣を折られたジョーズは水の中に伏せたまま動くことが出来なかった。

するとそのとき、そんな状況を確認したチェルベッロの二人が現れ戦闘不能となったジョーズの敗北を宣言し、ギリギリの所で一護は勝利を収めることとなった。

「ただ今の勝負・・・マーダー・ジョーズが戦闘不能の状態となったために、今回のアンゴルモア争奪戦の勝者は、黒崎一護に決定い

たします。」

それを聞いた瞬間、ユーノ達は歓声を上げて喜んだ。

「や、やった！！」

「よくやったぜ一護！！」

「ま、一護さんが負けるはずはないと思ってましたけどね。」

だが、ジョーズはこのチェルベッロの判定に納得がいかず文句をつけ始める。

「おおおおい！！！！！！まだ終わっちゃいねぇぞ、俺は！！！！！！俺がこんなカスに・・・！！！負ける訳ねぇんだよ！！！！！！」

「強がりを言ったところで、あなたは既に出血多量な上、武器を折られ闘える状態にはありませぬ故。」

「貴様ら・・・！！俺を馬鹿にしてるのか！！！！！！」

ジョーズはそう言うと、血塗れの体を無理やり起こすとその状態にもかかわらずチェルベッロの二人に迫り持っていたアンゴルモアアクセサリーを強奪する。

「な！？何をするのですか！」

「るっせーぞ、カスが！！！！！」

ジョーズはそう言うと、チェルベッロを蹴り倒して無理やりアクセ

サリーを自分の手元に居れた。

「ジョーズ！！てめぇ！！！」

「おおおいい！！！！俺がこんなところでくたばってたまるかよ！！！！俺様の野望は・・・俺様の剣が貴様ら如きに折られる訳がねぇんだよ！！！！！！！！！！」

その瞬間、ジョーズの怒りに反応したアンゴルモアが発動し、ジョーズは紫色の光に飲み込まれると規定水深に達したことで放たれた海洋生物と融合を果たし、武装を施した巨大なホオジロザメとなって一護の前に出現する。

「な！」

「あれは！！」

「ＡＭ体になっちゃった！！」

焦燥を見せるなのは達を余所に、ＡＭ２０は一護目掛けて口から凄まじい衝撃波を放ち、そのまま一護を建物の外へと吹き飛ばした。

「ぐあああああああああああああ！！！！！！！」

窓ガラスを突き破って出てきた一護は、地面に激突すると知真美となったその体を動かすことが出来なくなった。

「ぐ・・・ぐあああ・・・！！」

ＡＭ２０は空中に浮遊した状態で一護に狙いを定めると、そのまま

一護目掛けて突っ込んで行く。

するとその時、織姫が血塗れとなって倒れる一護の前に現れ三天結盾を張った。

「ぐ！」

「織姫！！やめろ！無茶すんな！！」

「これ以上・・・あなたの怪我するところ・・・見てるのは辛いよ！あなたはいつだって護るためなら無茶も顧みない性格なんだから！だからせめて、私に出来るのは・・・そんな夫のことを一番近くで守ってあげることだから！！」

「織姫・・・お前・・・・！」

織姫の言葉を聞いた一護は、思わず言葉を失ってしまう。

そんな時、ＡＭ２０の隙を見たエリオと恋次が背後から攻撃を仕掛ける。

「行くぜ！！咆えろ、蛇尾丸！！！」

「サンダーレイジ！！」

二人の攻撃をまともに受けたＡＭ２０は声を上げてもがき苦しみ、すかさずそこへ嘱託魔導師の桂がストラグルバインドで動けなくすると、キャロがフリードによる火炎弾を発射する。

「ブラストレイ！ファイア！！」

徐々にダメージを蓄積させるＡＭ２０を見ながら、待機していたフエイトとなのはが更なる追い打ちをかける。

「サンダースマッシャー！！」

「エクセリオンバスター！！」

二人の強力な一撃をその身に受けたＡＭ２０はグランドの方へと吹き飛ばされ、体を地面に強打してのた打ち回る。

そして、最後にユーノが晩翠を持ちながら一護より教えを受けた月牙八式兵法の構えを取って狙いを定める。

「――――――月牙八式兵法。五式！」

ユーノは一気に助走をつけてその場から駈け出すと、地面に倒れるＡＭ２０の全身を目にも止まらぬ速さで刃に留めた月牙の乱撃を食らわした。

その名を――――――

「“阿修羅月牙（あしゅらげつが）”！！」

このユーノの攻撃が決め手となり、ＡＭ２０は爆発を起こして元の満身創痍のジョーズとアンゴルモアへと分離し、織姫がアンゴルモアをキャッチする。

その後、織姫は一護と共に同じく重症のジョーズの怪我の治療を行った。

双天帰盾による治療を受けながら、ジョーズは横にいる一護にこう尋ねる。

「おおい・・・！剣士としての俺の誇りを汚すんじゃねぇぞ・・・オレンジ頭・・・誰が助けてくれなんて頼んだ・・・！？」

「ふん・・・てめぇの誇りなんか知ったことかよ・・・！俺は助けたいから助けたんだ・・・！それに、お前をこのまま殺すのは惜しい気もするんだよ・・・」

一護の言葉を聞いたジョーズは、一瞬神妙な表情を浮かべたが直ぐに舌打ちをしながらこう言った。

「ち！これだから・・・甘ちゃんはよ・・・！」

二人の会話を聞いていたユーノ達も、似たり寄ったりな性格の二人の姿が何だか微笑ましくも思えて来たらしく、思わず破顔一笑する。

「何はともあれ、これでよかったんですかね？」

「どうだろうな。」

「織姫さん。アンゴルモアの封印を行いますので、それをこちらに」

「はいはい♪」

と、織姫がアンゴルモアをなのはに手渡そうとしたその時だった。

アンゴルモアが突然、粉々となってその場から跡形もなく消えて行

ってしまったのだ。

これにはこの場にいた全員も目を疑うばかりであった。

「な、どういうことだよ!?」

「アンゴルモアが砕けたぞ!!」

「これって一体・・・!?」

ユーノは砕け散ったアンゴルモアを見ながら、それが“もどき”・・・即ちアンゴルモアの形を象った偽物だということを理解する。

「“アンゴルモアもどき”と言ったところか・・・」

「アンゴルモアもどき?」

「恐らく、何かの拍子にアンゴルモアの力に影響されて周囲にあったただの石とかに力の余波が宿り、暴走させる力だけを内包した全くの偽物だよ。」

「くそ!折角苦労して手に入れたと思ったらこれかよ・・・!」

「仕方ないですよ。まぁでも、今回は外れだったけど、被害が最小限で済んでよかった。」

「そうだな。今はそれで良しとするか。」

「帰って、報告書作らないとね。」

「そうだね。」

その後、朝を迎え管理局に拘束され連行されていくジョーズを見送ったユーノ達は最初に来た時と同じく制服に身を包むと、桂と最後のお別れの挨拶を済ませる。

「色々助かったぜ。ありがとな。」

「いえ。こちらこそ、ご迷惑をかけてしまい本当に申し訳ありませんでした。嘱託魔導師としてもまだまだ力が及ばないと痛い程感じました。これからは、もっと自分の力を磨くために頑張りします！そして、いつかあなた方のような凄い魔導師になって、目の前で苦しんでる人を助けたいです！」

その言葉を聞いたユーノ達全員は、思わず表情を和ませる。

「そっか。じゃあ、今度管理局に用事があるときは一度六課に遊びに来てごらんよ。私が直々に教導をしてあげるから♪」

「本当ですか！？ありがとうございます！！」

嬉々とした態度でなのはにお礼の言葉を告げる桂だったが、なのはの話を聞いていたユーノは悪ふざけのつもりでこう言って来た。

「間違っても桂ちゃんを再起不能したら駄目だよ、高町教導官♪」

「ゆ、ユーノ君酷いよ！私そんなに厳しくしないもん！！」

「ふん。どうかな？」

ユーノに便乗するかのように、一護も意地悪そうな表情でそう口にする。

「一護さんも酷いですよ！！ああああも！！！！！みんなしてそんな意地悪言わないでよもう！！！！！」

なのはの恥ずかしい声がその場に響くと同時に、陵高校の始業ベルが校舎内に鳴り響くのであった。

月牙八式兵法（後書き）

教えて、ユーノ先生！

ユ「今日は、月牙八式兵法についてだ♪」

ユ「月牙という技そのものが、名前に月とつくもの若しくは力の根源が月に由来するものが使うことが出来る技で、一護さんはこの月牙を十年間の間に用途ごとに使い分けれるようにした。それが月牙八式兵法だ。」

ユ「刃に月牙を留めた状態の一刀月牙。月牙によって周囲にバリケードを作る城郭月牙など、実にバリエーションに富んだ代物となっている♪」

恋「け！一護の癖につける名前がどれも格好いいのが妙にムカつくぜ！」

一「何だと！？てめぇにんなこと言われたかねぇよ！！」

恋「大体、何が月牙八式兵法なんだよ・・・！今すぐ改名しろ！！」

一「言ったな！！この赤パイン！！」

二人は口論を始めると直ぐに殴り合いの喧嘩を始める。

それを見ていたフェイトとキャロが止めに入る。

フェ「ふ、二人共やめて下さいよ・・・！」

キャ「あの！喧嘩は駄目ですよ・・・！」

そんな困惑気味の二人を見ながら、ユーノ・なのは・エリオ・織姫の四人はやれやれとばかりの表情を浮かべる。

ユ「ほんと、あの二人は仲がいいのか悪いのか・・・」

織「多分・・・仲良しなんだとは思いますけどね♪」

一・恋「仲良しなんかじゃねぇ！！」

魔導師図鑑ハイパー！

一護達が帰ってきて、名残惜しくも家に戻る事となったコンはある日ユーノから借りたとあるＤＶＤを食い入るように見ていた。

コ「す・・・すげえ・・・！！」

忘れ物を取りに来た一護がＤＶＤに夢中になっているコンに話しかける。

一「何見てんだよ、お前？」

コ「おう！ユーノの野郎から借りた超メベーもんなんだよ！！おめぇもこれ見て見ろ！！この頃はあどけないながらもめちゃくちゃカワイイんだぜ！！」

一「？あどけない・・・カワイイ・・・？」

意味がよくわからなかったので、取りあえず映像を見てみることにした一護だったが、それを見た瞬間思わず目を開いて呆然としてしまう。

コ「やべええよ！！！フェイトさん、滅茶苦茶やべえよ！！！！」

そして、一護が机に置かれたＤＶＤのケースを手に取ってみたところそこにはこう書かれてあった。

『魔法少女リリカルなのは　ＴＨＥ　ＭＯＶＥ　ＦＩＲＳＴ』と。

一「何でこんなもんがあるんだよ普通に・・・」

集団転校生篇

登場人物

桂言葉（かつら　ことのは）

声　一　明坂聡美

『スクール』の世界の住民であり、陵高校三年の時空管理局嘱託魔導師。普段は高校生として生活を送っているが、依頼があれば嘱託魔導師として任務に携わっている。家族構成は父と母の三人家族。

両親はともに海外での仕事が忙しく、一人で生活を送っている。一護達が潜入捜査で陵高校に忍び込んだその日の午後に、ジョーズに偶然手にしたアンゴルモアのアクセサリーを付け狙われてしまった。

マーダー・ジョーズ／ＡＭ２０

声　一　高橋広樹

気に入った獲物を見つけては強奪する噂のバンデット・ハンターで、好戦的な性格の長い黒髪の剣士。火薬仕込みの剣を使う。年齢は２２歳。好きな言葉は「誇り」と「強奪」。好物はマグロのカルパッチョ。嫌いなものは甘いもの全般。好きな動物は鮫。趣味は剣の手入れ。「ははははは！」が口癖で、常時けたたましくしゃべる。かつて異世界での戦闘で月牙天衝を操る死神との戦いで、その死神を撃破し一護の月牙天衝すらも見切っていた素振りを見せたが、八式の技の相違の前に一護の一刀月牙を受け敗北するが、アンゴルモアの力でＡＭ２０となって再び一護を窮地に追い詰める。しかし、ユーノ達の活躍もあって最後もまた月牙をその身に受けアンゴルモアと分離。その後織姫の治療を受けて管理局に逮捕されることとなった。

技：『ショック・ザ・ジョーズ』

渾身の斬撃を相手に受けさせることで、剣から発する振動波を剣を通して相手に伝え、相手の神経を麻痺させる技。その衝撃波は素手をバットで殴られるより強力。

技：『ファング・ザ・ジョーズ』

剣による超高速で繰り出される突き攻撃。その斬撃は空間を噛り付くかの如く。

技：『グランド・ザ・ジョーズ』

ＡＭ体での戦闘の際に使用。口腔内より凄まじい衝撃波を放ち、対象物を一瞬のうちに切り刻む。連射も可能となっている。

チェルベッロ

声　一　庄子裕衣

異世界各地に神出鬼没に現れる謎の審判者。『スクール』でのアンゴルモア争奪戦においてその一切を取り仕切る。行動目的すべてが謎に包まれている。ピンク色の長髪で、褐色の肌に覆面を着けた同じような容姿の女性二人（服装や髪型には若干の違いがある）。その裁定にはいかなるものも覆すことは出来ないとされている。

用語解説

陵高等学校（みささぎこうとうがっこう）

『スクール』に存在する公立の高校。週５日、４５分を１時間として７時間授業を行っている。２年次から文系・理系・医進類型の３つに分かれたカリキュラムが組まれている。「文武両道」を重要な校訓のひとつとする陵では体育も重視されている。週３時間のうち１時間は、男子では柔道、女子ではテニス（夏のみ）に充てられている。かつては男女とも、１年次にオリジナル体操「陵体操」が取り上げられた。また地元の進学校であるため、学校説明会などでは「試験が多い」と説明されることがある。定期考査（数日間）は年５回、また長期休み明けには必ず校内実力考査（主要教科のみ、２日間）がある。９月の第３週の週末あたりに開催される最大の行事である『陵祭』の期間は３日間で、準備期間も含めて期間中はそれ

ぞれのクラスがまとまり、学校全体が活気に満ちあふれる。期間中はクラスTシャツや陵祭オリジナルTシャツを着ている生徒が多く見られる。

アンゴルモアもどき

アンゴルモアとは似て非なる全くの偽物。アンゴルモアが眠っていた際、周辺のただの石などがその影響を受け、アンゴルモアに近い能力を持ったものである。物体をＡＭ化させる能力はあるものの、願いを叶える能力はなく、また、途中で力が消え砕け散るという特徴がある。

技

月牙八式兵法（げつがはちしきへいほう）

十年間の間に一護が自らの唯一の技である月牙天衝を用途に分けて徹底的に極めた八段階のレパートリーに分かれた月牙の形態。本来、月牙天衝とは斬魄刀の名前に「月」がある、ないしは力の根源が月に依存している斬魄刀にのみその発動を許されたものであるため、弟子であり月の力を源にする晩翠を所持するユーノにも月牙を使用することが可能。

月牙天衝（げつがてんしょう）

自らの霊力を刀に喰わせて、刃先から超高密度の霊圧を放出し斬撃を巨大化させて飛ばす斬月の能力であり唯一の技。威力、射程距離共に強力で、対象との距離が近ければ近いほど命中した時の威力は高くなる。浦原商店地下の勉強部屋での浦原との対戦時、始解を会得した直後に始めて放った。その後しばらくは一護自身の意思で撃

つことはできず、卍解会得のための修行を通じて自在に使用できるに至った。卍解時に放たれた月牙天衝は色が黒く、卍解によって斬月自体の攻撃力も向上しているために桁外れの破壊力を発揮する。この黒い月牙は内なる虚が意識の表面に現れたときに最初に使用した技であり、虚化習得前は使えば内なる虚が出てくるのを早めたため、連続での使用は不可能だった。尚、黒い月牙は解放状態の十刃の虚閃・黒虚閃に似ているとウルキオラに指摘されている。

電光月牙石火（でんこうげつがせっか）

一式。刀を両手で持ち、瞬歩を最大限に発揮させた状態で突進し相手に月牙を加える。

月牙天嵐（げつがてんらん）

二式。持ち手の巻布を振り回してその状態から月牙天衝を放出する。パトリオット篇ではそれをより許可した“月牙天嵐・衝覇乱流”を発動させている。

月牙幻視（げつがげんし）

三式。瞬歩を使って分身体を作り出し、それによって相手を惑わせ分身体全てより月牙を一斉に放つ。奇襲技。

城郭月牙（じょうかくげつが）

四式。月牙を刃に留め、その状態から周囲のものを巻き上げ防御壁を作り上げる。ジョーズとの戦闘では水を巻き上げて姿を隠し、体をかがめることにより攻撃をかわす“要塞”と、攻撃用の“爆心”を使い分けた。

阿修羅月牙（あしゅらげつが）

五色。目にも止まらぬ斬撃の連続によって、対象を斬り刻む七式の風切月牙よりも物理破壊能力に富んだもの。ユーノがこれを使用している。

陥落月牙（かんらくげつが）

六式。斬魄刀の刃を地面に突き刺し、刃先より直接月牙を送り込むことで間接的に月牙天衝の威力を相手に伝えることが出来る。

風切月牙（かぜきりげつが）

七式。月牙天衝によって空間を抉るように周囲にあるものすべてを切り刻む。ジョーズとの戦闘では、月牙で水を回転するように巻き上げ攻撃を防ぐ“風切月牙・雲壌”を発動している。

一刀月牙（いっとうげつが）

八式。黒崎一護が嘗て、破面ウルキオラとの戦いにおいて実戦の中で作り上げた月牙。月牙天衝そのものを刃に留め、威力を保持したまま相手に強力な一太刀を加える。ジョーズとパトリオット篇で覚醒状態の銀太郎に使ったのがこの技。

番外編・ヴィヴィオの授業参観（前書き）

今回は番外編、ヴィヴィオの授業参観です。学校という舞台でユーノが父親としてどう向き合っていくのか？そして、学校という場所だから起こる諸問題を取り上げて二話構成でお楽しみください。

ヴィ「では、ユーノ・スクライア外伝　授業参観編・・・・・・始まります！」

番外編・ヴィヴィオの授業参観

＞i19257―709＜

集団転校任務から無事に戻ってきたユーノ達一向はその後しばらくの休息を満喫したのち、平時の通りの任務を今日も送っていた。

そんな平時の任務を送る一日の中で、ユーノは自分に送られてきた大量の手紙を確認していく作業の最中、木之本桜より届いた手紙を取り出し中身を確認していた。

女性らしい丁寧な字で書かれたさくらからの手紙は以下のような内容だった。

「『拝啓　ユーノ・スクライア様・機動六課の皆さん。お元気ですか？こっちは毎日家事や仕事と大変ですけど楽しく過ごしています。あの時は私も小狼君もあなたやなのはさん達に助けられて、本当に何とお礼を言っていいかどうか。改めてお礼の言葉を言わせてください。ありがとうございます。』」

さくらの手紙の内容に思わず柔らかい笑みを浮かべるユーノ。

「はは♪さくらさんはほんと礼儀正しいな。僕らは別段大したことはしてないんだけど、感謝されるのは悪くないな。」

ユーノはそう言いながら、再び日本語で書かれたさくらの手紙に手を通す。

「『そうそう。エリオル君のご自宅の方で今度ガーデンパーティーに参加すると聞きました。実は、私たち夫婦も知世ちゃんも招待を受けていますので、もしかしたらまたお会いできるかもしれませんね。それから、この前小狼君がユーノさんの書いた考古学の論文を読んで凄く感動していました。今度一緒に、古代エジプトのミイラと墓守の一族の謎・・・について語り合おうと言っていました。私

には正直よくわかりませんけど・・・体には気を付けてください。
敬具　木之本桜』」

読み終えたユーノは手紙と一緒に同封されていたさくらと小狼、知世と手の中に収められた状態で写真に写るケルベロスたちの笑顔を見て、自分も思わず笑顔を浮かべた。

「嬉しいな♪同じ魔法に携わり、その上考古学の事で語り合える友人がいるって言うのは・・・――やっぱいいものだな。“友達”ってのは。」

生まれたときからどうしても他人に遠慮する傾向があるユーノにとって、気兼ねなく接することが出来る友達がいるということはこの上もなく嬉しいことであった。

そんな大切な友達の事を考えながら、ユーノ・スクライアは今日も機動六課の裏方の仕事に従事するのであった。

さて、その頃ヴィヴィオが通学しているＳｔ．ヒルデ魔法学院（ザンクト）の初等科四年のクラスでは今まさに、帰りのホームルームが終わりを告げようとしていた。

ヴィヴィオのクラスでは、担任のノア・ギミエットから明日の授業参観についての最終報告が生徒たちに話されていた。

「それでは、明日は前にも言っていた通りみなさんのお父さんを対象とした授業参観日です。今日お配りしたものを必ずお父さん方に渡してくださいね。みなさんの授業の取り組む姿勢を見せる機会ですが、決して緊張などせず普段通りの姿を見せましょう。」

「「「「「はい！」」」」」

「では、ホームルームを終わります。明日も元気で登校してくださいね。」

「「「「「御機嫌よう、先生」」」」」

担任に挨拶を済ませると、生徒は教室から出るとそれぞれの友達と一緒に寄り道などせずに真っ直ぐに帰路へと向かった。

ヴィヴィオは親友のコロナ、リオを始めとする仲良し四人組と一緒に明日の授業参観についての話をしながら下校をしていた。

「いよいよ授業参観の時がやってきましたわね。」

「そうだね。私は別にいいけど、コロナの所は大変だよね。何せコロナのパパ・・・娘の授業参観だってだけで娘以上に気合入れてくるから。」

「へへ。明日はコロナのパパどんな格好で来るのかな？」

「ヴィヴィオもリオもやめてくださいよ！他人事だと思って軽いことを！」

コロナは顔を真っ赤に染め上げながら、からかう二人に向かって文句を言うが横でそれを聞いていたコロナのライバル、ミツオ・スドウは小馬鹿にした口調でこう言って来た。

「所詮君の家庭の事情など僕らには他人事じゃないか・・・ぐっほ！！」

コロナはミツオの言葉に苛立ちを覚えると、顔には似合わないような鋭い拳をミツオの腹部へと入れ悶絶させ、それを誤魔化すようにお嬢様特有の笑い方をみせる。

「ほほほ！！！何を言っていますの、スドウ君。あなたもお父様の参観だからいいとして、お母様の参観でしたら緊張して石になっていましたわね。」

「コロナ！！恥ずかしいことを思い出させるな！！！」

コロナとミツオはお互いに目くそ鼻くそと言ってもいいような下らない言い争いを勃発させ、挙句の果てにデバイスを使った本格戦闘まで勃発させてしまったのだ。

この二人の様子を離れたところで窺っていた体格の大きいバウラ・ウシヤマとヴィヴィオ、リオの三人は呆然と立ち尽くしていた。

「あいつら意外と仲良いよな。」

「本当だね。」

「てかいいの、バウラ。コロナたち止めなくて・・・？」

「どうせ四・五分もしないうちにやめるって。」

「ま、それもそうだね。」

やがて、バウラの言っていた通り四・五分もしないうちにコロナの勝利で喧嘩を終了させて二人はヴィヴィオ達の元に近づいていくと、

ふと思い出したかのようにボロボロのミツオがこんなことを言って来た。

「そう言えば、お父さん対象の授業参観ってことは・・・・・」

「あ、そうか。ヴィヴィオのパパも来るんだよね。」

「うん！なのはママと同じぐらい、私には楽しみでしかたないの！！」

現在、高町ヴィヴィオの父親と呼べるべき人間は高町なのはの恋人でもあるユーノ・スクライアその人だけである。

元々ヴィヴィオも初めて会った時からよくなついていたこともあり、なのはとも非常に良好な関係を気づきあげるユーノが自分の授業参観に来てくれることは楽しみで仕方なかった。

すると、バウラはヴィヴィオの父親がユーノであることを知らずふとこんなことを口にしてきた。

「お？何だ。ヴィヴィオの父ちゃんってそんなにすごい人なのか！？」

そんなバウラの言葉を耳にしたリオ達は呆れかえりながら説明を始める。

「バウラ、あんた知らないの！？今、管理局でその人のこと知らない人はいないってぐらい知名度のある人なんだから。」

「マジかよ！？」

「無限書庫の永久名誉司書長で、翡翠の魔導死神ユーノ・スクライアって言えば、ヴィヴィオのママの実の魔法の先生でもあるって、この前ヴィヴィオのママのインタビィー記事に書いてあったよ。」

「先生の先生とはよく言ったものですわね♪」

「当然！ユーノパパの教え方はなのはママ絶賛の最上級の物なんだから。」

ヴィヴィオも自分の父親であるユーノの教え方がなのは以上に凄いものだと言うことを認識したうえで、そんな両親を持てることに誇りを抱いていた。

そして、暫くの談笑を楽しんだのち五人はそれぞれの分かれ道に差し掛かるとそのまま家路へと直行するのであった。

「じゃ、明日の授業参観は楽しみにしてるぜ！俺はこっちだから。明日学校でな！」

「「「「バイバイ（御機嫌よう）！」」」」

ヴィヴィオは快速レールウェーを乗り継ぎ、現在の自宅である機動六課隊舎へと帰宅すると真っ先にユーノの元へと向かっていった。

「ただいま！」

「お、おかえりなヴィヴィオ。」

隊舎に入ると真っ先に迎えてくれたのは資料を賭けたはやてであっ

た。

「ただいま帰りました！あの、はやてさん。ユーノパパは今どちらに？」

「ああ。ユーノくんなら今ちょうど恋次さんと吉良さん連れて、１０８部隊の人達の教導に出かけておるよ。」

「そうですか。」

「何か大事な用事でもあったん？」

「はい。実は――――――これを渡さないといけなくて。」

ヴィヴィオはそう言うと、鞄の中から担任より渡された授業参観のお知らせと書かれたプリントを取り出し、はやてに見せた。

「授業参観のお知らせ・・・お父様対象・・・あ、なるほどな～～」

納得した表情を見せるはやて。

その頃、当のユーノ・スクライアはというと、恋次と吉良を引き連れてゲンヤ・ナカジマが部隊長を務める陸士１０８部隊の陸戦魔導師の教導に出向いていた。

死神という魔導師とは勝手の違うものが介入することにより、彼らの戦力がどれ程までに向上するかという試験的な意味合いを込めた今回の強化訓練は滞りなく受理され、恋次と吉良はそれぞれのやり方で己の経験と技術を存分に発揮させながら教導に取り組んでいた。

「次、来い！」

「はい！」

「おおおお！！！！！」

陸戦魔導師が魔力弾を撃って恋次を攻撃するが、流石に隊長格であり普段の色濃い訓練に慣れているせいか恋次には容易く回避されるが、そこは決して罵倒せずに冷静な見解を口にしてきた。

「悪かねぇな。だが・・・――――」

恋次はそう言いながら徐に刀を解放して刃節を延ばしていった。

「詰めが甘めぇ！」

「「うわあああ！！！」」

陸戦魔導師は蛇尾丸の一撃を食らうと、どのまま威力に圧倒されて後方へと吹き飛ばされる。

そんな容赦のない攻撃を仕掛けた恋次は蛇尾丸を戻すと、激励の言葉をかける。

「ヴィータの訓練には耐えられても、俺の攻撃の前にはさっぱりか！まだまだ食い足りねぇぞ。俺を超えるつもりで来い！」

「「はい！」」

陸戦魔導師はその後も恋次の熱意の籠った訓練に身を投じていくこととなる。

一方で吉良は恋次とは対照的に理論に元ずいた近距離戦術に関して陸戦魔導師数名に抗議をしている真っ最中だった。

「近距離戦においては、いかに相手の懐に入って確実に相手の攻めを制すかが戦局のカギを握る。これから僕がその基本と応用を使い分けて戦うから、じっくり見て欲しい。」

「「「はい！よろしくお願いします。」」」

吉良の指示を仰ぐ陸戦魔導師は早速吉良と共に理論に基づいた近距離戦闘法をしっかりと学んでいくこととなった。

そんな二人の死神に戦闘の指南を受ける１０８部隊の魔導師達の様子を一人離れたところで見物をするのは講師力では管理局随一と言っても過言ではない筈のユーノ・スクライアであった。

何故教導に出向いたはず彼が訓練に直接参加せずにこうして二人の教導を見ながらじっと観察を続けるのかはこれから明かされるが、ともかくユーノ自身は教導に熱心な二人の姿を微笑ましく見ていたそうな。

「二人とも、張り切ってるな♪」

すると、そんなユーノの元に部隊長のゲンヤ・ナカジマが徐に近づいてきた。

「おう。精が出るな。」

「ゲンヤさん。」

ゲンヤはユーノの隣に立つと、ユーノと一緒に訓練の様子を窺いながら次のように言って来た。

「態々悪いな。お前さんとしては、こういう野暮用はあんまり乗り気じゃないとは思ってたんだが。」

「そんなことないですよ。困ったときはお互い様。持ちつ持たれずって奴ですよ♪」

「それもそうだな。ところで、スクライアの司書長さんはここで突っ立ってるだけでいいのか？阿散井と吉良の二人に任せきりで？」

「はは・・・生憎僕はもう、“戦闘”に関しては何も教えられません。」

「謙遜するね。お前さんの実力の高さは、管理局や次元世界でも知れ渡ってるじゃねぇか？」

「それは飽く迄も“殺す”戦い方だからですよ。」

「ん？意味がわからねぇな。どういう事った？」

すると、ユーノは少し寂しそうな表情を浮かべながら次のような事を語り出す。

「魔導師と死神の戦い方は、“真逆”なんです。人を活かす戦い方

をする魔導師と違って、虚の昇華・滅却を中心とする敵を排除する方針の殺す戦い方をする死神。僕はその死神の戦いを知ってしまった。そして、それと同時に非情な面も備え持ってしまった。現に、僕はこの四年間で多くの命を奪って来た。そんな男に、人を活かす戦いを教えられる自信はありません。僕はもう・・・・・・なのはのように“人にものを教える側の人間”じゃないんですよ。」

「寂しいこと言うなよ。たとえお前さんの言うことが事実だとしても、それがそのまま真実の形になるとは思えねぇよ。前にスバルとギンガがな、高町嬢ちゃんの教育方針について聞いたことがあって、そしたら高町嬢ちゃん・・・何て言ったと思う?」

ゲンヤはそう言うと、スバル達の口から聞いたなのはの教育方針をユーノに向かって話してきた。

当時、なのははこう語っていたらしい。

『私の今の教育方針は、子供の頃にユーノ君が魔法の基礎と運用をしっかりと叩き込んでくれたことに由来するんだよ。基本を着実にしっかりと教えられてこそ、その後のステップを滑りなく進んでいける。だから、私は基本をまず大事にするんだ。そして、私もいつか――――――』

「『ユーノ君みたいな凄い先生になりたいんだ』って、言ってたんだぜ。」

「なのはが・・・そんなことを・・・」

ゲンヤの口から初めて聞かされるなのはの意外な言葉に思わず言葉を失うユーノを余所に、ゲンヤはその後もこう続けてくる。

「なかなかいないぜ。世の中に素直に生徒から絶賛される先生って言うのは。高町嬢ちゃんは今も昔も、司書長さんのことを“世界一の先生”って自慢してるんだぜ。」

ゲンヤの言葉を聞くと、ユーノは暫くの間を置いたのちに返事をする。

「そうですか・・・・・・（僕は、もう君の先生と呼ばれるような資格はないのに・・・君は今でも僕を“先生”と呼んでくれるのか・・・・・・）」

今も昔も自分の事を先生として慕うなのはの一面を再認識したユーノであったが、その表情は浮かないものであった。

「湿気た面するなよ。折角の端正な容姿がもったいないぜ。たく、俺としては実に羨ましい限りだ・・・！」

「え？その言い方・・・もしかして嫉妬してるんですか？」

「あ～あ～～～たく。俺ももう少し若かったらな～～～」

そんなことを口にするゲンヤにユーノはおかしくなったのか、思わずはにかんだ表情でゲンヤの言葉を耳に入れその後の訓練の様子を静かに窺っていた。

やがて日が暮れはじめたころに訓練も無事に終わり、六課隊舎と戻っていた恋次と吉良、ユーノの三人は疲労に満ちた様子であった。

「いや～～～疲れましたね♪」

「結構僕らも新鮮でしたね。」

「まぁな。俺は腹が鳴り過ぎてどうかしそうだ。早く飯にしたいぜ。」

そんな談笑をしている内に隊舎の中に入る三人。

「ただいま♪」

「よう、いま帰ったぞ。」

すると、待ってましたとばかりに声を聞いた瞬間ヴィヴィオがユーノのお出迎えをしてきたのであった。

「あ！おかえりなさい、ユーノパパ！！」

ユーノは愛娘の頭を優しく撫でてやると、ヴィヴィオの話に耳を傾ける。

「やぁ、ただいまヴィヴィオ♪どうしたの、何か僕に用事？」

「うん！実はこれを見てもらいたくて♪」

ヴィヴィオはそう言うと、懐から一枚のプリントを取り出しユーノはそれを手に取った。

「何だ？テストの答案用紙か？」

「お、これは・・・」

恋次と吉良もそのプリントの書いてある事が気になり中を覗いてみると、それは昼間はやてが見たものと一緒で授業参観に関することが書かれたプリントであった。

「授業参観・・・お父さん対象・・・！？」

「えへへ♪是非ともユーノパパに来てもらいたくて・・・ダメかな？」

「いや♪娘の授業参観があるって言うのに行かない父親が何処にいるのさ。明日必ず出席させてもらうとするよ♪」

「わっは！ありがとう、ユーノパパ！！」

傍らで聞いていたなのはも笑顔を浮かべながらヴィヴィオに近づく。

「よかったね、ヴィヴィオ。ユーノ君来てくれて。」

「うん！」

と、その時ユーノの格好を見てふと思ったことを口する。

「あれ？でも待ってよ。まさかとは思うけど、ユーノ君授業参観にその格好でいくつもりじゃ・・・」

「あ。それもそうか。流石にこの格好じゃ目立ちすぎるな・・・・・・明日着る別な服を用意しないとな・・・」

「お前・・・それ以外に服持ってたのか？」

聞いていた恋次はこの服以外にユーノが別な服を持っているとは思わず多少馬鹿にした言い方でそう口にする。

「失敬だな、恋次さん。ありますよ、洋服の一つや二つ。ただ、最近はこれに着慣れていた所為で他の服を着るのが面倒だっただけですよ！」

「その服の選択も間違ってるとは思いますけどね・・・」

「吉良さんまでそんな・・・二人とも酷い！」

二人に小馬鹿されたユーノであったが、夕飯を済ませると直ぐに残っていた書類整理を済ませると寮へ戻り、クローゼットにしまっていた真空パックに包まれた司書長時代に頻繁に着ていた緑色のスーツなどを数着の洋服を取り出し、床に並べながら真剣な表情で吟味し始める。

「さて、どの服を着ればいいんだろう？やっぱり、司書長時代によく着ていたこっちの服かな？それともオークションとか学会の時に着ていたこっちかな？ああもう・・・！何で僕が今更服でこんなに悩まないといけないんだ！！」

そんな大いに服装に関して悩んでいた時だった。

不意に通信が入ると思いきや通信画面に顔を出してきたのは自宅に帰宅した私服姿の悪友のクロノであった。

クロノは服装に関して悩み苦しむ悪友を見て、小馬鹿にした口調でこう切り出した。

『服如きで悩むとは、お前もやきが回ったんじゃないか？』

その言葉に腹を立てたユーノは、怒りを我慢しながら自分なりの皮肉を込めた言い方で返事する。

「何のようだよ、シスコン。今忙しいんだ、後にしてくれ！つうか声も聞きたくない！」

『つくづく癇に障るな・・・！大体僕はシスコンでもない！』

ユーノの痛い一言に思わず頭に血を上らせたクロノ。

「で、用件は何なの？無限書庫ブラックリストナンバーワンのクロノ・ハラオウン提督殿。」

『おま・・・！！え、へん！実はだな、一つ気になる事があってな。忠告をしに来たんだ？』

「忠告？」

『お前は意識してるかどうかは知らないが、一応世間一般的に“元無限書庫司書長で、魔導虚事件からそれ以外での諸々のアンゴルモア関連の事件を解決してきた翡翠の魔導死神ユーノ・スクライア”の評判は高い。だがそれ故、上層部や一般人の者の中にはお前のその強い力を危険視するものもざらにいる。くれぐれも軽はずみな行動は慎むことだな。』

「はいはい、分かってますよ。用事が済んだのなら、早く通信を切ってよ。フェレットもどきと話をする暇があるなら、一分一秒でも

愛妻と子供たちとの家族サービスに従事てください。“クロノ・ハラオウン提督殿”」

殴勲無礼な言葉を耳にしたクロノは、血管を浮かび上がらせながら同じように殴勲無礼な言葉で通信を切り終えるのであった。

『ああ！言われなくてもそのつもりですよ、管理局随一の頭脳で容姿端麗・おまけに初心で奥手な翡翠の魔導死神“ユーノ・スクライア永久名誉司書長殿”！』

クロノとの通信を終えると、ユーノはその後も明日の授業参観に来ていく服装を深夜にも渡り吟味することとなったらしい。

そして、授業参観当日の朝がやって来るとユーノは吟味の末着る事とした服装でデスクワークに従事するなのは達の前に現れる。

「おはよう、みんな。」

「あ、おはようユーノ君・・・！？」

「あれ？ユーノ先生・・・その格好は！？」

全員がユーノが着ている格好に唖然とする。

「司書長時代によく着ていたものをチョイスしたんだ。これが一番しっくりくるかと思って・・・ま、やっぱり和服に慣れてたせいか結構窮屈に感じるよ・・・その・・・変かな？」

今回ユーノが着ているのは、司書長時代に好んで着ていた黄緑色のシャツとエメラルドグリーンのスーツであった。

いや、それ以前に彼がこのような服装をすること自体今では稀有な事となっていたため局員たちは食い入るように洋服を着こなすユーノを凝視するのであった。

すると、はにかんだ表情のユーノに向かってなのはが顔を赤く染め上げながら首を横に振りながら素直な感想を述べる。

「うんうん!!全然変じゃないよ!!わっは!!やっぱりそれが一番ユーノ君には似合ってるよ!!うんうん!!スーツ姿も格好いい!!」

「え、そうかな・・・!なら良かった。」

なのはに褒められたことで思わず照れた表情となるユーノとは裏腹に、恋次や吉良たちは和服姿で初めて会った所為か、洋服を着こなすユーノに強い抵抗感を覚えた。

「何でだ・・・俺には凄くお前のその格好に違和感を感じるのは!?」

「普段の格好に見慣れてるせいですよ、きっと」

「不思議な感覚ですね。こうしてきちっとした服に身を包むだけで、第一印象が１８０度変わってしまうんですね。何より、ユーノさんってかなりスリムな体型だったんですね・・・」

「そうですか?」

すると、そんなユーノの鈍感な一言を聞いて思わずはやてがこんな

事を言って来た。

「あ～もうユーノくんはほんま自分の事に関してはなのはちゃん以上に鈍感なんやから！ユーノくんもあかんよ！そんな好印象を与える容姿・言葉・体系を武器にして色んなところ引っ掻き回すことだけは。」

「いや、引っ掻き回したつもりはないんだけどね・・・って、もうこんな時間だ。じゃあ、そろそろ授業参観に行ってくるよ。」

「うん♪ヴィヴィオの成長、しっかり見届けて来てねユーノ君♪」

「はいはい♪あ、フェイト。ビデオの方は撮っておくかい？」

「勿論！絶対ベストポジションでお願い！」

「はいはい。じゃ、行ってきます。」

「「「「「行ってらっしゃい。」」」」」

ユーノは全員に挨拶を済ませると、店から持ってきた愛車グリーンラベルに乗って、ヴィヴィオが通学するＳｔ．ヒルデ魔法学院へと向かい、バイクを走らせていった。

三十分が過ぎたころ、無事に学校の方へと到着したユーノはバイクを師弟の駐車場へと止め、鍵をかけたのち校門前へとたどり着く。

そして、渡された授業参観のプリントに書かれた授業内容とその場所を確認し始める。

「えっと、今日の授業参観の授業内容は体育か。男子女子混じっての格闘対決とは・・・いかにもシグナムさんやフェイトが興奮しそうな内容だな・・・」

そんなことを思いながら時計を見ると、授業開始時刻にはまだ若干の余裕があった。

「ちょっと早かったかな？」

するとその時、偶然にも学校の方へやってきた聖王教会のシャッハ・ヌエラがユーノの姿を目撃し声をかけてきた。

「あ、スクライア司書長！」

「お、シスター・シャッハ。これはどうも♪体の方はもう大丈夫ですか？」

「ええ。この通り全快いたしました。」

ユーノはレジェンドルガ事件の時に、サガの力で重傷を負ったシャッハの体を心配したが、シャッハの体は無事に回復を果たした様子を見せたことでユーノも一安心となる。

「それはよかったです。シスターにもしものことがあったら、騎士カリムやアコース査察官に何と言って謝ればいいかと思い悩んでいたものですよ。」

「ふふふ。ありがとうございます。大丈夫ですよ。カリムやロッサの二人を守るのがこの私の役目ですから、そう簡単にはくたばりませんよ。ささ、どうぞ校内へ。ヴィヴィオのところの学年は体育館

となっていますから、ご案内いたします。」

「色々とすみません。では、お言葉に甘えますね。」

ユーノはシャッハに案内される形で、授業の開始時間になるまでの間校内を適当に案内されていた。

格式ある聖王教会系列の学院の様子をまじまじと見物しながら、ユーノは素直に思ったことを口にする。

「流石は伝統ある聖王教会系列の魔法学院ですね。相変わらず格式高い校舎で♪」

「はは。スクライア司書長の口からお褒めの言葉を貰うとは光栄ですわ。」

「止して下さい。今は司書長でもありませんし、平時は単なる甚平服の変態ですから。」

「そんなことありませんよ。無限書庫での功績がなければ、今の管理局はこんなにも効率よく動いていませんし、あなたの提供した資料だけで何千・何万という命が救われたことか。だから、謙遜なんてしないでください。」

「ちょっと大げさなようにも聞こえますが・・・ここは素直に受け取っておきますね。」

「うふふ。そうそう、最近ヴィヴィオが益々ストライクアーツの腕が上達したんですよ。そちらのほうはご存じで？」

「あ、いえ。初耳ですね。そうですか・・・それは良かったですね♪子供の成長はやっぱり早いものですね。そうやって、僕らが知らない間にどんどん大人になっていくのかと思えば、何だかちょっと切ないような気持ちがこみ上げてきます。」

「あはは。大人という生き物は、子供の事を見れてるようで案外全然見れていないものですからね。あ、ヴィヴィオのクラスが模擬形式での格闘戦をやるという事に関して直接的な内容のものではないんですが、私からスクライア司書長にお尋ねしたいことがありまして。」

「はい。何でしょうか?」

「騎士シグナムから聞かされた話では、あなたは剣技だけでなく身体能力も六課のメンバーの中では随一だそうですが、一体どちらに鍛えられたのですか?それと、どんな格闘術を心得ておられますの?」

「随一って言い方はどうも釈然と来ませんけど、僕が使ってる徒手空拳の技はほぼ全て“白打(はくだ)”と呼ばれる部類のものです。」

「白打・・・ですか?」

「体術には変わりないんですけど、主に暗殺を目的に組まれたものでして・・・」

「暗殺って!?何でそんなものを・・・!?」

「ははは・・・僕の体術戦闘の師匠である四楓院夜一さんから叩き込まれたんですよ。ものすごく強い人でしてね、しょっちゅう痛い

目に遭ったものです・・・」

「スクライア司書長を痛い目に遭わせるほどの手練れですか・・・私も一度お手合わせしたいものですわ！」

「（ま、夜一さんと一度戦って気が済めばいいけど・・・）」

夜一の強さを一護と共に嫌という程身に染みて理解しているユーノに取って、このシャッハの軽はずみな言動は少々滑稽に思えたそうだった。

そして、程なくして授業の始業ベルが鳴り響き生徒たちが一斉にそれぞれの教室に入ってくとユーノも時同じくしてシャッハに連れられてヴィヴィオ達のクラスが授業を行う体育館へとやって来た。

「こちらになります。」

「ありがとうございます。シスター・シャッハ。」

ユーノが中に入ると、既にヴィヴィオ以外のクラスメイトが男子と女子が入り混じった形で互いにデバイスを発動させながら格闘戦を始めていた。

「お、ちょうど始まったところだな。」

ユーノはその格闘戦の様子を見ながら、他の子供の父親たちの方に気を配りながら道をかき分けていくと、適当な場所でカメラの機動スイッチを押してヴィヴィオの姿を撮影し始める。

「えっと・・・この辺りでビデオに撮っておかないとあとでフェイ

トが文句言いそうだしな・・・」

すると、暫くしてからそんなユーノの元に一人の男性が声をかけてきた。

「隣、宜しいでしょうか？」

「え？あ、はい。どうぞ。」

「失礼します。」

男性はユーノの隣に立ち、暫く自分の子供の事を見ていたが再びユーノの容姿を見た瞬間男性は驚いた表情でこう言って来た。

「おや？あなたもしかして、ユーノ・スクライアさんでしょうか？」

「あ、はい。そうですけど・・・」

「そうですか、あなたがあの無限書庫の永久名誉司書長！もっと老けているという噂でしたが、実に若々しいですな。」

「はは。まぁ、一応２３歳ですから。」

「今日は、ヴィヴィオちゃんの参観にわざわざ？」

「はい。えっと・・・ヴィヴィオを知っているということはもしかしてあなたは？」

「ご察しの通り。私、コロナの父でエルザ・ティミルと申します。」

「コロナちゃんのお父さんですか!?ああ・・・確かに雰囲気は似てますね・・・しかし、その格好はどうしたんですか?」

ユーノがそう言う格好とは、授業参観に来る格好とは決して思えないようなまるで格式ある城に使える兵士が着ていそうな西洋風の恰好であったのだ。

「いやいや。お恥ずかしいながら、娘の授業参観ということで気合を入れてオーダーメイドの特注品を仕立てたんですが、少々懲りすぎましたかな。はははははは!!!!」

ユーノは高笑いを上げるエルザを見ながら内心こう思った。

「(凝り過ぎと言う前に、ＴＰＯを無視してるだけだと思うんですけど・・・)」

すると、そんなユーノやエルザの元に二人の男が近づいてきた。

「おや?ティミルさんは、相変わらず派手な服装だね。」

「全くだ。少しは場所というものを弁えたらどうなんだ?」

「お、これはこれは。ウェズリーさん。スドウさんもご一緒で。」

エルザが話しかけてきた二人の方に振り返ると、そこに居たのはリオ・ウェズリーの父親で春光拳の達人、トーマス・ウェズリーとミツオ・スドウの父親である黒ずくめの外套を着たカゲミツ・スドウであった。

「おや?そちらの方は確か・・・――――」

トーマスがそう口にすると、ユーノは懇切丁寧な口調で二人に挨拶を済ませる。

「初めまして。高町ヴィヴィオの父親で、ユーノ・スクライアと言うものです。」

「ユーノ・スクライア？あの翡翠の魔導死神と謳歌される、無限書庫の永久名誉司書長の男か！ほほう・・・まさかこんな所で噂の凄い人物にお会いできるとは光栄だな。」

二人はユーノに近づくと軽く握手を交わした。

「いえ・・・僕は別に大したほどのものじゃ・・・」

「謙遜するね。それも君らしい人間性なのかもしれぬが。私はカゲミツ・スドウというものです。聖王教会中央病院の外科医を務めている。」

「スドウさんは、次元世界でも名の通った天才外科医なんですよ！」

「へぇ、凄いですね！」

「別に天才じゃないよ私は。あんたのそれと比べればね。」

「そちらこそ、謙遜しなくても。取りあえず、色々とお話しを窺ってもよろしいでしょうか？」

「ああ、構わんよ。」

意気投合を果たしたユーノとスドウ達三人はその後子供たちの様子を窺いながら父親として普段何気なく感じていることや、その辺の諸々の事情を赤裸々に告白しながら盛り上がりを見せていた。

「ウェズリーさんのご実家は確か、「春光拳（しゅんこうけん）」と言う格闘技を教えているとヴィヴィオから聞いたのですが、流石にリオさんも逞しいですね・・・あの様子を見る限り。」

「おらああ！！」

「うわああ！！」

ユーノはそう言うと、模擬格闘戦で一瞬のうちに男子を春光拳で吹き飛ばすリオの姿に思わず苦笑いを浮かべる。

泣きじゃくる男子生徒を余所に、リオはヴィヴィオとコロナの二人にハイタッチを求める。

「やった！！いえい！」

「おめでとう、リオ！」

「少しは手加減したらどうですの？」

そんな娘の姿をユーノの隣で見ていたトーマスは思わず顔を赤くして筈が死がってしまうのであった。

「やはや・・・元気があり過ぎるのが珠に傷ですが、健康に育ってくれたことがなによりですはい。あれでもう少し御淑やかになってくれればいいのですが・・・」

「女の子はあれぐらいがいいですよ。コロナにも見習わせてほしいものですから。ははははは！！！」

「あんたはその格好で何か言える口なのかい？」

「お！スドウさん！これはまた！一本取られましたな！！ははははは！！！！」

一人で勝手に盛り上がりを見せるエルザを傍で見ながら苦笑いを浮かべるしかないユーノであった。

「ははは・・・面白い人ですね・・・ティミルさんは・・・」

「人からよく言われますよ！ははははははは！！！！！」

その後もエルザはなりふり構わず至る場面で底抜けな笑い声を上げるが、それはしっかりと娘のコロナにも届いており、父のあまりの恥ずかしい光景にコロナは穴があったら入りたい気分であった。

「お父様ったら・・・見てるこちらの方が恥ずかしいですから弁えて欲しいですわ・・・」

「でも、コロナのお父さん凄くいい人だよ。大目に見てやったら。」

「それより、ヴィヴィオの父ちゃんはどいつだよ？」

「えっとね・・・ほら！あのメガネかけた緑色のスーツの人！」

バウラの質問を聞いたヴィヴィオがユーノの姿を見つけると、気づ

いたユーノも和やかな雰囲気を醸し出しながらユーノに手を振り、ヴィヴィオはそれを満面の笑みで返した。

「へへへ♪」

バウラは初めてお目にかかったユーノの容姿に思わず拍子抜けてしまう。

「あれがヴィヴィオの父ちゃん!?思ってたより随分ほっせー体してんな。あれが本当に管理局最強って言われてる翡翠の魔導死神!?」

「見た目は華奢だけど、すっごい筋肉質な体してるんだよ。」

「へぇ～～～見てみたいですわね。」

「しかしこうして見ると、ヴィヴィオのお父さんが一番容姿端麗じゃない?一瞬女の人かと錯覚するぐらい・・・!」

「ユーノパパは昔から容姿端麗だったよ。メガネかけてないときの表情なんて、もっとそれらしく見えるから、女性人気が高いんだ。」

「いいよな～～～ヴィヴィオの両親は揃って凄い人で!母ちゃんは美人のエースオブエースで、父ちゃんは頭脳明晰の魔導死神・・・うちの親父なんて・・・あれだぜ。」

バウラがそう口にすると、その父親である寿司屋を営むツヨシ・ウシヤマは店で働いている姿と同じ服装で江戸っ子的な口調で応援をしてきた。

「バウラ！頑張るんだぞ！！勝った暁には、今日の夕飯は寿司だ！！負けんじゃねぇぞ！！ははははは！！！！！」

そんな実の父親の事を些かうざいと感じていたバウラは冷めた様子でヴィヴィオ達の方を振り返った。

「ほらな。」

「・・・相変わらずバウラのお父さんは元気いいよね・・・」

「だね・・・あ、次私だ！」

そうこうしているうちに次の対戦カードが発表され、ヴィヴィオがついに戦う番となった。

相手はミツオ・スドウであった。

「本当ですわね。ヴィヴィオ、しっかり戦ってくださいね。」

「うん！よし、ユーノパパにいいところ見せるぞ！！」

「ふふ。パパの前でいいところ見せるのは僕の方さ！」

二人は張り切った様子でフィールドの方へと向かっていく。

そんな光景を離れた場所で見ていたユーノとスドウはというと。

「お・次はうちの息子とお宅の娘さんの番じゃないのか？」

「ですね。妙に張り切ってるけど、いつも通りやれば大丈夫なのに

な・・・」

「あの年頃の娘というのは、父親の前ではいい格好を見せたいものですよ。特に、あなたの前なら尚更ですな！ははははは！！」

同じ娘を持つエルザがそう口にすると、思わずユーノははにかんでしまう。

「はは・・・僕としては少し照れくさいですけど・・・」

「お、始まりましたよ。」

ユーノ達父親とクラスメイトが見守る中、ついに始まる高町ヴィヴィオ対ミツオ・スドウによる真剣勝負。

ヴィヴィオとミツオはお互いに向かい合って構えを取ると、それぞれのデバイスを取り出すとコンパクトモードで起動させる。

「いっくよ、クリス！コンタクトモード、セットアップ！」

〈Ｓｅｔ　ｕｐ　ｃｏｎｔａｃｔ　ｍｏｄｅ〉

このコンタクトモードは起動させることで大人モードになることなく元の体系を維持したまま大人モードと同じだけの戦闘能力で闘うことが出来る。

ミツオはコンタクトモードに設定すると、不敵な笑みを浮かべながらヴィヴィオを牽制する。

「相手がヴィヴィオだからって、僕は手加減しないけどね！」

「それはお互い様だって、ミツオ！」

ヴィヴィオはそう言うと、先制攻撃を仕掛けるために一気に駆け出していき利き腕の方に魔力を圧縮させ始める。

「アクセル――」

「お、行くか。」

ユーノが娘の戦う様子を拝見しながら、ヴィヴィオは圧縮した魔力衝撃を右拳に乗せてストレートにミツオに繰り出した。

「スマッシュ！」

ミツオはそれを両腕でガードすると、その状態からヴィヴィオに話しかける。

「やるね。だけど、僕だって！」

そう言うと、ミツオはヴィヴィオの攻撃を防ぎきると大幅に距離を取ってから助走をつけて突進していき猛烈な乱打によって相手をノックダウン出せるガトリングフィストを発動させる。

「ガトリングフィスト！」

「クリス！防御を！！」

ヴィヴィオはミツオのガトリングフィストを両腕でカードしながら何とかしのぎ切っていると、唐突にクリスの警告が耳に入ってくる。

〈Ｍａｓｔｅｒｉｎｇ ａｎｄ ｔｈｅ ａｔｔａｃｋ ｆｒｏｍ ｌｏｗｅｒ ｒｉｇｈｔ ａｒｅ ｎｏｔｅｄ.（マスター、右下からの攻撃に注意。）〉

「！」

その瞬間、ヴィヴィオの右下より狙って攻撃を仕掛けてきたミツオが右アッパーでヴィヴィオを襲ってくる。

「隙あり！」

「なんの！」

ヴィヴィオは咄嗟に体を捻ってミツオの右アッパーを回避すると、その状態から更に器用に体を捻って蹴りの一撃をミツオに喰らわせ、その後二人は中々にいい勝負を繰り広げる。

そんな愛娘の戦う様子をじっと見ていたユーノは内心呆れかえりながらも次のような一言を口にした。

「派手ですね・・・今の子供の戦いは・・・」

「いや全くだ。ミツオも女の子を相手にしているのだからあまり本気で撃ちこむものじゃない。そうは思わないかい、スクライアさん？」

「ははは。子供って言うのは、率直な生き物なんですよ。僕ら大人は、いつの間にかああいう率直さをなくしかけてる。僕は決してあれが悪いとは思いませんけど・・・全力全開で闘えるのは羨ましい

限りです。」

「流石はスクライアさん。言うことが違いますな！」

「いや全く。感服いたしました、私！」

「幸せだろうね、ヴィヴィオちゃん。あなたのような父親を持てて。」

スドウがその様に口にする中、ユーノの表情はあまり浮かない。

「僕的には、父親らしいことなんて何一つしてあげた覚えがありません。元々、僕自身が両親の顔も愛情も知らない。だから、父親として何をしてあげられるのか・・・それがよくわからないんですよ。」

すると、そんなユーノの話を聞いていたスドウはしばらく考え込んだ後こんな風に口にしてユーノを励ましてきた。

「そんなことないんじゃないのかい？まぁ、確かに・・・母親のそれと比べれば父親なんて出来ることは限りなく少ないし、いずれ子供に煙たがられるのがおちさ。だけど、それでも私達父親っていうのは、それを覚悟の上で正面から子供とぶつかっていかなくちゃいけない。孤独な生き物であろうと、私はそれを快く受け入れる。」

「スドウさん・・・・・はは、そうですね。いずれその時が来ても、ヴィヴィオが一人前になるまで見守るのが僕らの責務ですから。どんなになったって、『子を憎みたい親』なんて・・・いませんからね。」

ユーノのもっともらしい言葉を聞いた瞬間、エルザとトーマスの顔もこのときばかりは真面目な父親の表情となる。

「そうですな。」

「はい。お互い、頑張りましょう。」

そんな話をしている最中に、ヴィヴィオとミツオの勝負もおおず目を迎えようとしていた。

「そろそろこの勝負にも決着をつけようよ。」

「望むところ！一気に行かせてもらうよ、ミツオ！」

〈Ａｘｅｌ　ｓｍａｓｈ　ｆｕｌｌ　ｐｏｗｅｒ〉

ヴィヴィオは自らの魔力の全てを利き腕一本に集中させると、今まで撃ちこんだどのアクセルスマッシュよりも威力の大きい最後の一撃をミツオにぶつけようとしていた。

「受けてみて。これが私の・・・――――全力全開！！」

「こっちだって・・・――――！！」

〈Ｇａｔｌｉｎｇ　ｋｎｕｃｋｌｅ　ｆｕｌｌ　ｂｕｒｓｔ〉

ミツオ自身も自身の魔力の全てを拳に集中させると、渾身の一撃でヴィヴィオに仕掛けようとしていた。

そして、両者が準備を終えた瞬間二人は一気に助走をつけて最後の

攻撃へと転じるのであった。

「「はあああああああああ！！！！！」」

だがその時、勝負の様子を窺っていたスドウが冷静に二人の技の威力を分析しながら焦りを見せた表情で次のように口にした。

「！おい、あのパワーじゃ相殺しきれずに、二人とも大怪我するぞ！」

「ミツオ君！！ヴィヴィオちゃんも止すんだ！！」

「「え！？」」

だが、二人が気づいた時にすでに遅かった。

加速した勢いは誰にも留めることが出来ず、二人はそのまま為す術もなく自らの攻撃の反動をその身に受けてしまうと言う恐怖に身を奮い立たせた。

「（しまった！これじゃ防御が間に合わない！）」

「（うわあああ！！！パパ！！！！）」

果たして二人の運命はどうなってしまうのか！？

一方その頃、デスクワークを終えて休憩に入っていたなのははコーヒーを入れようと席を立った時、無造作にソファーの上に置かれていたユーノがいつも着用している深緑の羽織に目をやった。

「あれ？」

「どうしたの。」

「ユーノ君、こんなところに羽織置き忘れちゃってる。あとで部屋に届けておかないと。あ、その前にちょっと着てみようかな♪」

「あ。駄目だよ、なのは。勝手に着たら。」

「大丈夫、フェイトちゃん♪ちょっとだけだから。それに私・・・ユーノ君の匂いが好きなんだもん♪」

「もうしょうがないな、なのはも♪」

「えへへ♪じゃあ、ちょっと失礼。」

そんな軽い気持ちでソファーの上の羽織に手をかけ、持ち上げようとした瞬間・・・なのははその羽織が自分の力じゃびくともしない事実に思わず仰天する。

「う！！あれ！？う！！！！！！！」

「なのは？」

なのはの様子を窺っていたフィイトが突然妙な行動をとり始めたなのはに疑問を感じ始めると、なのははそんなフェイトの横でユーノの羽織が全く持ちあがらないことに戸惑いを見せていた。

「何・・・これ・・・重い・・・！！！」

「え、重いって・・・」

フェイとも恐る恐る手に取って持ち上げようとすると、なのは同様自分の力だけでは一切持ちあがらないのであった。

「ふん！！！！！！！ほ、ほんと・・・重い！」

「どうなってるの！？」

するとそこへちょうど同じように休憩に入っていたスバル達全員が近づいてきた。

「なのはさん。何してるんですか？」

「あ、スバル。ちょうど良かった。これ持ってみて。」

「あれ？これユーノ先生の羽織じゃ。」

なのはに言われた通り、ユーノの羽織に手をかけて持ち上げようとしたスバルであったがスバルもあまりの重さ故に全くお手上げの状態であった。

「ふん！！！！！！！え！？何これ！！！凄く重い！！！」

「ま、まさか！？だってただの羽織じゃないの。」

ティアナもスバルの言葉に疑問を感じて羽織に手をかけるが、実際に持ってみることでその事実を認識する。

「ぬぬぬぬぬぬぬ！！！！！！！駄目！！！重すぎて持てない！

！！」

「貸してみろ。俺が持ってやるよ！」

「お願いします！」

ティアナは見かねた恋次に羽織を手渡し、恋次は初めて持つユーノの羽織の重さに思わず腕がつってしまいそうになった。

「ぬおおおおお！！！！！確かに・・・重めええ！！！！！！！」

だが、それでも恋次は諦めずに羽織を持ち上げひっくり返して床に投げつけた。

「どりゃあああああ！！！」

その瞬間、全員の目に飛び込んできたのは羽織の下に仕込まれた非常に重そうな肩当とバネのようなものであった。

「「「な！？」」」

「な、何だこりゃあ！？」

初めてお目にかかるユーノの羽織の下の秘密に衝撃を受けるなのは達。

するとそこへスクライア商店メンバーが近づき、ユーノの羽織を一瞥すると些か呆れかえった様子でこう言って来た。

「あ～あ。店長ったらまたこんなところに置いてたんだ。」

「致し方ないですな。」

「つうか、こんなもんいつも来てよく平気だよな店長も」

「あの、金太郎さん。浦太郎さん。鬼太郎さん。何なんですか、この羽織！？」

疑問に思ったなのはがそう尋ねると、浦太郎は衝撃的な内容を口にする。

「それ？浦原さんが店長の力を平時極端に抑えるために作った枷だよ。重さ二十貫の肩当と筋肉を逆さに反るバネが仕込まれてるんだよ♪同じ物を店長は毎日ローテンションで着てるんだよ。」

「え・・・ちょっと待ってください。ということは、普段ユーノはこんな重たいものを着て普通に生活をして・・・普通に戦闘を行っていたってことですか？」

「そう言うことになるよな。自然と。」

「ま・・・マジかよ・・・」

「じゃあ、これを取ったユーノ君の強さって・・・一体・・・！？」

「少なくとも、卍解した一護殿の戦闘能力に匹敵するでしょうな。」

「喧嘩にでもなったら、それこそ店長の完封勝利だよ♪」

その事実を聞かされた瞬間、全員は今の今まで羽織を着用した状態で普通に戦闘を続けてきたユーノの驚異的な身体能力に驚愕を通り越し、恐怖すらも感じていた。

そんなのは達とは打って変わって授業参観に来ていたユーノの方はというと――

「う・・・あ、あれ？」

「何ともない・・・！」

ヴィヴィオとミツオは自分たちの技の威力で大怪我をするのではないかとばかり思っていた為、この光景には驚きを隠し切れないでいた。

「一体何が・・・ん！？」

「「あ！」」

「「「何と！？」」」

と、その時その場にいたクラスメイト全員と担当教師、そしてスドウ達父親達は衝撃的な光景を目の当たりにする。

それは、ヴィヴィオとミツオの全力全開の拳を間に入って平気で受け止めるユーノの姿がそこにはあったのだから。

ユーノは二人の拳をその場に下ろすと、穏やかな表情でこう言って来た。

「怪我はないかい？二人とも。」

「ユーノ・・・パパ！」

「た、助かった・・・わあああああパパ！！！！」

ミツオは泣きながら自分の父の元へと駆け出していき、離れたところでこの光景を見ていたバウラやコロナ、リオはこの常軌を逸した光景に目を疑っていた。

「おい・・・今の見たか！？」

「ええ・・・二人の全力全開の攻撃を・・・――――魔法も何も使わないで素手で受け止めましたわ――――！」

「しかも、あの距離からどうやって移動したの！？」

同じように、スドウ達もユーノの実力の一端を見せつけられ思わず驚愕する。

「いはや・・・噂は本当だったらしいですな、ウェズリーさん。」

「はい。成程、これは確かに敵には回したくないですね。翡翠の魔導死神・・・ユーノ・スクライアは・・・」

ヴィヴィオは自分の不注意で危うく大怪我寸前のところにまで追い込もうとしたことと、途中で止めてくれたユーノとミツオの父であるカゲミツに向かって頭を下げて謝った。

「あの・・・本当にごめんなさい！！」

「気にする事は無い。うちの息子にも非はある。ほら、ミツオ。男のくせにいつまでも泣いてるんじゃない。」

「だ、だって・・・！！！うわあああああああ！！！！死ぬかと思ったんだもん！！！！！」

「やれやれ・・・ああ、スクライアさん。すまんね。助けてもらって。」

「いえいえ。子供達に何かあったら大変ですから。取りあえずヴィヴィオにもミツオ君にも怪我がなくてよかった。だけど、勝負に夢中になるあまり加減を忘れるとは・・・まだまだ危険だね。そこのところは十分に反省するんだよ。」

「「はい・・・すみませんでした。」」

二人は冷静な口調でユーノに諌められると、素直に反省の言葉を口にし、その直後に担任のノアがユーノに向かって近づいてくる。

「あ、スクライアさん！あなた御怪我は？！」

「ノア先生。大丈夫です。僕はこのとおり♪授業を続けてください。」

「そうですか・・・すみませんね。あとで何かお礼させてください。さぁ、みなさん。授業を続けますよ。」

「ほら、早く戻るんだ。」

「ううう！！は、はい～～～！！」

カゲミツに説得され、泣きながら授業へと戻っていくミツオ。

「ありがとう、ユーノパパ。本当にごめんなさい！」

「いいって、もう。さ、行っておいで♪」

「うん。じゃあ、行ってきます！」

ヴィヴィオはユーノの広い心に感謝しながらミツオと共に授業に戻っていった。

そんな中、スドウ達はユーノの両手を気にし始める。

「手は本当にいいんですか？」

「これでも結構鍛えてますから。それに、あの瞬間掌に魔力を圧縮させて技の衝撃を掻き消しました。それでも、二人の全力全開の攻撃はそれなりに強かったですけど♪」

「デバイスなしでそこまで出来るとは、やっぱり頭の構造が違うね。」

「ははは。スドウさんに言われると、ちょっと照れくさいですね♪」

と、その時だった。

学校を巡回していたシャッハが息を切らした状態で体育館の中へと入って来た。

「すみません！授業中に申し訳ありません！！」

「？シスター・シャッハ・・・」

「シャッハ先生。どうなさったんですか？」

不審に思ったノアが一旦授業を中断させてシャッハに事情を聞きだす。

「それが、一年生の教室で突然男の子が苦しみ出して・・・！！あの、スドウさんはここにいますか！？」

ただ事ではないと判断したスドウは直ぐにシャッハの前に現れる。

「私ならここだ。」

「よかった・・・！あの、直ぐに着てください！！急患なんです！！」

「スドウさん！お願いできますか！？」

ノアがそう言うと、スドウは直ぐに毅然とした表情で返事をする。

「いいだろう。スクライアさん。私一人では何だ。あなたにもちょっと見て欲しいんだが・・・」

「はい、分かりました。」

ユーノはそう言うと、スドウと一緒にシャッハの話を伺う。

「患者の容体は？」

「危険な状態です！」

「みなさんはここでお待ちください。ヴィヴィオ、ちょっと行って来るね。」

ユーノは近づいてきた不安げな表情のヴィヴィオにそう言い残す。

「うん。お願いするよ。」

同じようにミツオもカゲミツの方をじっと不安げな表情で見つめる。

「パパ――――――」

「案ずるな。必ず助ける。」

「こちらになります！」

シャッハは急いで二人を急患の元まで連れて行き、ノアは混乱を避けるために騒がしくなっているその場の雰囲気を沈めるために冷静に対処する。

「さぁ、みなさん！このまま授業を続けますので、騒がないでくださいね！」

そして、シャッハに連れて行かれた二人は保健室のベッドで横になり多量の発汗を起こして悶え苦しむ一年生の男の子の様子を見ながら、シャッハに患者の事を詳しく尋ねる。

「既往症は？」

「五歳の頃、腹膜炎の手術を」

モニターに映し出されるレントゲンの写真を見ると、ユーノは直ぐに病名を口にする。

「“投薬性遺留巣（とうやくせいいりゅうす）”で間違いないでしょうね。」

「そのようだな。一刻を争う。麻酔の準備を。開腹だ！」

スドウは救急車を呼ぶ暇はないと判断し、持ち合わせていた自前の手術機材を保健室運んでくると保健室の出入りを禁じてユーノとシャッハ達と共に開腹手術に当たる事となった。

そんな二人の様子を心配しながらも授業を続けるヴィヴィオ達。

「ユーノパパ、大丈夫かな！？」

「パパがついてるから、大丈夫なはずだけど・・・」

と、その時リオが突然聞こえてくる奇妙な音に耳を傾けた。

「ねぇ・・・何の音！？」

その直後、突然覆面で顔を隠した授業参観に来たとは思えない怪しげな五人組が体育館の中に土足で入り込んでくると、いきなりの事にノアはその五人に注意をした。

「ちょっと、何なんですかあなた達!?今は授業中なんですよ!勝手に土足で入り込まないでください!!」

すると、その言葉を聞いた中央に立つ男が次のように口にする。

「あ?“学校”って言うのはいつもこうだな。」

「!?」

と、その瞬間彼ら五人は覆面をはがすと隠し持っていた質量平気である銃を取り出し体育館にいた全員に銃を突き付けてきた。

「あ!」

「動くな!この学校は我々が占拠した。全員、手を挙げて中央に集まれ!」

この思いもよらぬ突然の事態にヴィヴィオ達は驚愕するばかりであった。

「え!えええええ!!!!!嘘!!!!!!!」

穏やかに終わる筈だった授業参観がまさかの展開を迎えてしまった。

一体ヴィヴィオ達はどうなってしまうのか!?

次回に続く!

番外編・ヴィヴィオの授業参観（後書き）

教えて、ユーノ先生！

ユ「今日はこんな質問が届いているからそれに応えるよ。ペンネーム、『同性愛なんてクソくらえー！！』さんからの質問。『ユーノ先生はいつもあの甚平服を着ていますけど、いつからあの服を着ているんですか、教えてください』。はい、ズバリお答えしましょう♪」

ユ「僕があの服を着始めたのはちょうど空白の四年間のうち、浦原さんと本格的な鬼道の修行を積んでいた時だったな。もともと緑色が好きだったし、何かよくわからないけど浦原さんの格好を見て、異常なまで着てみたいと思うようになって着てみたら・・・すっごく居心地がよくてそれ以降好んで着用するようになったんだ。」

ユ「ちなみに羽織には本編でも言っていたように、非常に重たい肩当とバネが仕込まれいます。だから、当初はこれを着るだけて疲労困憊になったものだよ♪という訳で、クロノ！『同性愛なんてクソくらえー！！』さんの代わりに、廊下に立ってなさい！」

ク「何で僕がそんなことしないといけないんだ！！」

魔導師図鑑ハイパー！

とある日の夜。

ここは冴えない男たちが愚痴をこぼしに集まる屋台のおでん屋。

そんな場所で、今宵もクロノ・ハラオウンは愚痴をこぼす。

ク「ちくしょーーー・・・どうせ僕なんて幸薄いままユーノに良い格好されたまま一生を過ごすんだ!!バケヤロー・・・!!」

すっかり泥酔したクロノは取り留めのない臍を咬む。

一「まぁまぁ、そう気にするなよ。ほら、もっと飲めよ。」

ク「ぐっす!すみません、一護さん・・・!」

クロノは一護に酒を注いでもらうと、そのまま一気に飲み干す。

恋「お前、ほんとにそんなキャラだったか?前半戦はもうちっとましな立ち回りだったんだがな・・・・・」

吉「でも元よりクロノ提督自体、ファン層自体大していませんからね。」

浦「そうそう♪やっぱり、声質が似てるなら銀さんの方がダントツ人気だね!クロノ・ハラオウンのままじゃ一生人気何て出ないよ。」

それを聞いたクロノは、更に意気消沈しついには悔し涙を流す。

ク「ちくしょーーー!!!ユーノのバカヤロー!!!!」

クロノ・ハラオウンは、このままで終わるのだろうか?

解決策を待て!!

番外編・子への想いと父の尊厳

＞i１９４０３―７０９＜

「？今のは――――！？」

学校の保健室を借りて行われる緊急手術に従事していたスドウ達一行の耳にも、聞きなれる音が入ってくる。

疑問に思ったシャッハが様子を見に外へ出ようとした。

「見てきます。」

すると、その瞬間保健室のドアが開くと同時に銃を持った男が入り込んできた。

「!?」

「この学校は我々が乗っ取った。全員手を挙げて外へ出ろ!」

この異例の事態を前にした瞬間、ユーノ達は目を見開き動揺する。

「何!」

「学校ジャックだと・・・!?」

衝撃的なこの状況を前にした一同は思わず口を閉ざしてしまい、千葉楽の沈黙を続けるがしびれを切らしたその男が銃を突きつけながら外に出ることを強要する。

「はやくしねぇか!」

すると、毅然とした態度で執刀中のスドウはマスクをとって拒否の姿勢を見せる。

「断る。」

「何だと!?」

「この患者は今手術しなければ死ぬ。手術を中止する訳にはいかない。」

「そうだ。」

「く・・・!」

スドウの言葉を聞いたユーノや他の者も手術を止めないと言う意志をしっかりと男に示し、男はそんなユーノ達の姿勢にどう対処したらいいか分からなくなっていた。

と、そこへ様子を見に来た犯人グループのボスであるホウスイ・テゼマがやって来る。

「何ぐずぐずしてんだ!」

「あ、こいつらが手術を止めないと――」

「何だと!?お前が執刀医か?」

「そうだ。」

ホウスイは銃を突きつけながらスドウに話しかけ、飽く迄も注視する姿勢を一切崩さないスドウに向かって次のように語りかける。

「どういう立場かわかってるのか?お前らも人質だ!つべこべぬか

すと、すぐにあの患者を殺す！」

「・・・・・・」

「分かったらすぐに外に出ろ。」

苦渋の決断を迫られたユーノ達は、患者の命を最優先に考えると一度犯人の言うとおりに大人しく手を挙げてその場から立ち去る事にした。

スドウはそれでもなお中々動こうとはしなかった、最初に入って来た男に銃を突き付けられるとやむを得ないと判断し、ユーノ達の後ろに付いて行った。

ホウスイは最初に入って来た男、ケンに向かって指示を出す。

「ゴリをよこせ。教師と大人たちは縛り上げて閉じ込めておけ。」

やがて、別室に移されたユーノ達はケンによる身体チェックをされていた。

すると、身体チャックの最中にケンはスドウの手術衣のしたから出て来たメスを持ちながらスドウに迫る。

「!?これは何の真似だ!?」

「医者がメスを持ってて可笑しいか?」

不敵な笑みを浮かべながらスドウがそう答えると、思わずケンは声を荒げる。

「舐めんなよ！」

ケンはそのままスドウの顔面を強く殴ってスドウを殴り倒した。

「あ！」

「スドウさん！」

バインドによって腕を拘束されたユーノやシャッハたちが直ぐにスドウの元へと駆け寄る。

「下手な真似すんなよ！」

ケンはそう言い残すと、自分の持ち場へと戻っていく部屋の鍵を閉めた。

一方で体育館の方では同じようにヴィヴィオを始めとするクラスメイトと教師、更には授業参観に来ていた父親達がバインドで拘束されて動けない状態となっていた。

ヴィヴィオやコロナたちは思わずユーノ達のことを心配する。

「（ユーノパパ達、大丈夫なのかな！？）」

「（白昼堂々学校を占拠するとは、正気の沙汰じゃありませんよ。）」

「（取りあえず、先ずは犯人たちの言うとおりにしてないと私達殺されるかも・・・！）」

「（わあああああああ！！！！僕はまだ死にたくない！！！！ママ！！！！！！パパ！！！！！！！！）」

「（ミツオ！頼むから念話で泣くのはやめろ！！）」

そんなヴィヴィオ達や捕まったユーノ達を余所に、ホウスイは学校の放送室へと向かい、施設の機能を拝借すると、時空管理局地上部隊の全てに犯行声明を読み上げる。

『時空管理局の者に告ぐ。Ｓｔ．ヒルデ魔法学院だ。今言うことをよく聞け。この学校は我々がジャックした。学校内のすべての人間が人質だ。我々は身代金として、学校に１０億を要求する。逃走用のバンを二台用意しろ。下手に攻撃を仕掛ければ報復として、無差別に子供を処刑し、それを校門の前に放り出す。更には、現在手術中の重症患者に関して・・・配電室の電源を破壊し、自家発電装置も壊せばどうなるかは分かるよな？』

緊迫した様子でホウスイの犯行性を聞いていたユーノ達は思わず耳を疑った。

「子供を無差別に処刑！？」

「その上電源を破壊だと！？」

「なんてことを！」

「そんなことをすれば、ギリギリ生命維持装置で命をつないでいるあの患者が死んでしまう！」

「――――――」

ユーノはホウスイたちの犯行声明を聞き終えると、徐にその場から立ち上がると全身に力を入れ始め、見ていたスドウ達は訝しげな表情を浮かべる。

「スクライアさん！？」

「ほあああああああああ！！！！！」

「！？」

突然声を出し始めたユーノに驚きを隠し切れないスドウ達だったが、その瞬間ユーノは魔法も何も使わずに腕の力だけで拘束していたバインドを破壊した。

「よし。」

この光景を見ていたエルザやトーマスは思わず目を瞬きさせた。

「スクライアさん――――――この固いバインドを腕力だけで解くなんて？！」

「普段からの鍛錬が役に立ちましたよ。それに、バインドそのものにも多少荒っぽいところはありましたしね。」

ユーノはそう答えると、早速シャッハを始めとする大人たちのバインドを解いてあげると、大人達は安どのため息をつく。

「助かった。今のうちに地下の非常口から脱出しよう。あそこなら

奴らも気づきまい！」

「ですな。さぁ、逃げましょう。」

シャッハがそう促した時だった。

ユーノはその言葉とは全く逆のことを言い出した。

「僕はここに残ります。このまま残りの子供たちの救出に向かいます。」

「スクライア司書長!?」

思わず声を出して驚くシャッハだったが、そんなユーノと同じようにスドウまでもが学校内に残る意思を見せた。

「私も残る。あの患者の手術が残っているからな。」

「スドウさんまで!?」

「冗談じゃない！見つかったら、ただじゃすまないぞ。私は行く！」

「私も死にたくないからな！」

話を聞いていた他の教師陣は恐れをなして我が身かわいさのあまりユーノ達を老いて一目散にその場から立ち去った。

残ったのはユーノ・スドウ・シャッハ・エルザ・トーマス・そしてこの学校の学院長だけとなってしまった。

シャッハは出て行った教師たちの行動と先ほどの自分の言葉に恥ずかしさを感じてしまい、思わず項垂れてしまう。

「恥ずかしいです。患者の事を忘れていました。私も残ります！幸い、医務官資格はありますから、お手伝いをいたします。」

「構わん。」

「儂も残ろう。」

シャッハと学院長、エルザとトーマスは共にスドウと一緒に校内に留まる意思を決意し、ユーノもそんな四人に患者の事を任せることにした。

「では、そちらの方は任せます。」

「ああ。あなたもしっかり頼む。息子たちのこと、助けてやってくれ。」

「はい。」

スドウの言葉を聞いて、ユーノが肯定の返事をする。

ユーノは部屋を出る前に、戸棚に置かれていた瓶を一本凝視すると何かを考え始める。

「――――――」

やがて、閉められた部屋の扉を突き破って外へと脱出したユーノ達は犯人たちに気づかれないように保健室へと向かい、見張りで辺り

をうろついていた銃を持った男の注意を引くために、ユーノが先ほどの部屋から持ってきた例の瓶を地面に転がす。

瓶が床を転がる音に気付いた男が訝しげにその転がっていた瓶を拾い上げると、その瞬間ユーノの手刀が男の首筋に綺麗に入る。

「う！！」

男はそのまま床に倒れて気絶し、トーマスとユーノは男を抱えると先ほどの部屋と向かいスドウ達に保健室に向かうようにと促す。

「今です。」

「助かります！」

「御武運を。」

保健室へと入っていった四人を見送ると、男の事をトーマスに任せたユーノは保険の周囲に強壮結界を施す。

「（念のため、強壮結界を施しておこう。）」

結界を施したのち、犯人を最初に部屋に閉じ込めたユーノとトーマスはそれぞれの持ち場に分かれて行動を開始する。

「第二フロア、異常なし。」

ユーノは見張り役に気づかれないように、注意深く廊下の陰に隠れながら移動を続ける。

一方その頃、保健室へと戻ったスドウ達の目に映ってきたのはショック症状を引き起こし更に深刻な状態となってしまっている子供の姿だった。

「ショック状態です！」

「学院長はバイタルチェックを。シスター・シャッハ、オペの準備を。ティミルさん。あなたは助手を頼む。」

スドウは的確な指示を三人出すと、マスクをつけて再び患者に目を向ける。

シャッハは脈拍計が示す脈拍数の上昇に危惧を覚える。

「脈拍数、上昇しています！」

スドウは険しい表情を浮かべながら開腹する決断を下す。

「（一刻の猶予もない。開腹だ！）」

その頃、時空管理局地上部隊を始めとするミッドに拠点を置く全ての管理局部隊の者がこの衝撃的なニュースに耳を傾け、なのは達も対応に苦慮していた。

『Ｓｔ．ヒルデ魔法学院から中継です。学校がジャックされると言う大変な事件が発生しました――――――』

「ヴィヴィオ！ユーノ君！早くしないと！」

「落ち着け、なのは。お前が動揺しても状況は一向に解決せん。先

ずは、チャンスを待て。」

「心配はするな。ユーノやヴィヴィオはこんなことじゃ屈しないさ。君の娘と恋人のことは、君が一番知ってるはずだろ？」

「クロノ君・・・・うん。分かった。」

「早いところ、打開策を考えよう。」

「せやな。状況確認を急いで！犯人の人数と経歴を探り出す！」

機動六課の全線メンバーは一丸となってこの事件の解決の為にどの部隊よりも早く解決策を講じ、行動を起こしていた。

さて、そんな六課の対応を余所に体育館で未だ拘束された状態のヴィヴィオ達はどうにかしてこの強固なバインドを解く手段はないかと探っていた。

「（何とかなのはママ達に連絡してどうにかしないと。だけど、このバインドを何としない分には・・・――――）」

ヴィヴィオは必死に自分の魔力でそのバインドを解こうと試行錯誤するが、一子供の力ではそのバインドを解くことは敵わず思わず苦い顔となる。

「（く！固すぎて、私の力だけじゃ解けない！）」

そんなヴィヴィオ達の浅はかな行動をずっと放送室のモニターで監視をしていたホウスイは不敵な笑みを浮かべながらこう呟く。

「ふふ・・・俺のバインドはそんじょそこらのバインドの固さとは訳が違うんだ。子供の力で如何にかなるほど、軟じゃない。」

と、そこへ息を切らした状態のケンが中に入って来た。

「ボス！」

「どうした？」

「マサの応答がない！？」

マサとは、先ほどユーノが気絶させたあの男の事だ。

ホウスイはケンの言葉に不安を感じ、そのまま様子を見に行かせる。

「見て来い」

ケンがホウスイの指示に従ってマサを捜しに出ると、ケンはもしやと思いユーノ達を閉じ込めた最初の部屋に行ってみると、案の定部屋には誰一人いなかったのだ。

「あいつら――――――！？」

すると、そんな時部屋の奥から物音が聞こえ近づいてみると、部屋の奥にいたのはユーノのバインドで拘束されたマサの姿であった。

ケンはマサのバインドを急いで解くと、ユーノ達が何処へ行ったのかを問い質す。

「おい！あいつら何処に行ったんだ！？」

ケンはマサから概ねの事情を聞くと、放送室で待機するホウスイに連絡を入れる。

「何!?教師が消えただと?」

ホウスイはケンを連れて消えたユーノ達を探すために学校内を散開し始めた。

その頃、保健室で手術を続けるスドウ達五人は腹の中を開いた患者の内蔵の状態を皆ながら深刻そうな表情を浮かべる。

「壊死を起こしている。腸管切除に切り替える。鉗子(カンシ)!鉗子!」

スドウはそう言うと、助手を務めるエルザと途中からやって来たトーマスに鉗子を自分に手渡すようにと指示を出す。

「あ、すいません!」

「今渡しますので!」

シャッハは動揺する二人を冷静な口調で宥める。

「御ふたかとも、落ち着いて下さい。」

そんな緊迫した手術を続ける最中、保健室の前にやって来たホウスイとケンは外側に施されているユーノの強固な結界を破るのに手こずっていた。

「くそ!なんて固い結界だ!!びくともしねぇぜ!」

「退け！俺が破壊する！！」

ホウスイはそう言うと、銃弾に魔力と別な力を一緒に乗せた銃弾を発射して、管理局でも一、二を争う強固な結界魔法を破壊し、保健室へと侵入する。

一方で、ユーノは子供たちを救助する最中自分の強壮結界が破壊されたことに気づく。

「！（僕の強壮結界が・・・破壊された！？）」

保健室へと入って来たホウスイ達は剣幕を浮かべながら手術中のスドウ達に向かって声をかけてきた。

「お前ら、どういうつもりだ！？」

「あ！」

シャッハたちはホウスイ達に気が付き動揺を見せ始める中、執刀医のスドウはただ一人黙々と手術を続ける。

「く！」

そんなスドウの姿を見ていたホウスイは思わず痺れを切らして銃弾を天井に向けて連発する。

銃声を耳にすると、一度スドウも手を止めてマスクをずらす。

「他の教師は何処に行った？」

「彼らはもうこの学校内にはいない！」

「ち！」

舌打ちをしたホウスイはその場にあった医療器械を蹴り倒すと、執刀医のスドウの胸ぐらをつかんできた。

「随分と舐めた真似してくれるじゃねぇか！ん！？お前・・・この学校の教師じゃないな！？」

「スドウさんは、授業参観に来ていただいたが、手術の助っ人で今は――――！」

「スドウ？聞いたことがある。確か、“天才外科医”って噂の医者だったな。俺はな、あんたみたいな医者や教師が大嫌いなんだ！」

スドウに向かって怒鳴り声を上げるホウスイをスドウは黙った様子で聞き流す。

「ボス、今はこいつらに構ってる場合じゃない！早く体育館に戻らないと。」

ケンの言葉を聞いてから、ホウスイは昏睡状態の子供の様子を窺うと不敵な笑みを浮かべながらある事を思いつく。

「へへ――――ケン。いいこと思いついたぜ。」

「え？」

「おいスドウ。この患者はどれくらいもつんだ?」

「このままでは敗血症を起こし、一時間以内に――――死ぬ。」

スドウからその事実を聞かされると、ホウスイは不敵な笑みを浮かべてから持っていた携帯を使って管理局に電話をつなぐ。

「管理局か?俺だ。教師と授業参観に来てた医者が勝手なことをやりやがって、ガキの手術を始めちまった。」

「おい、ボス!何を言うんだ!?」

「手術は中止させた。患者の腹は開いたままだ。あと一時間もすれば死ぬそうだ。ふふふはははは。」

そんな時、手術に立ち会っていたシャッハと同じく医務官資格もちの学院長がホウスイの顔を見てふとこんな事を思った。

「!(この男、前に何処かで――――――――!?)」

ホウスイはその後も地上の管理局部隊の者に向かって次のように言って来た。

『金を用意したら手術をさせてやる。駄目なときは――――執刀医諸共あの世行きだ。ふふふはははははは!!くれぐれも言っておくが、変な考えを起こすと――――――――』

そう言うと、聞いていたなのは達の耳に音声で銃声が鳴り響いてきた。

「は！！」

顔色を一変させるなのは達。

ホウスイは銃声を聞かせた後、衝撃的な言葉を残して話を終える。

「電源装置を破壊し、この重症患者とガキ共を殺す！」

携帯を切り終えると、ホウスイは無表情のスドウや唖然となるシャッハたちに不敵な笑みでこう口にした。

「そういう訳だ。」

このホウスイの言動を聞いていたケンは流石に焦りを見せた。

「ボス！何を勝手な事を！？俺達の目的は金だ！態々管理局の気持ちを逆撫でしなくてもいいじゃねぇかよ！」

「黙れ！俺は此処にいる。お前は地下の出口の見張りに回れ。」

「体育館はゴリ一人になる！」

ケンが危惧する中、体育館の見張りを任されているゴリの方はというと、くしゃみをしながら眠そうな表情を浮かべていた。

「ふっはくしょん！誰か俺の噂してのか？」

それでも、ホウスイはケンに自分の命令を強要する。

「つべこべ言うな！さっさと行け！」

渋々ホウスイの言葉を聞き入れたケンは言われた通り地下の出口へと向かった。

一方その頃、フェレットの姿になって校内に残された人質の救出を続けていたユーノの方はというと、既に半分近くのもののバインドを解いて救出を成功させる。

「さ、今のうちに早く。」

「ありがとうございます！」

救出を終えたユーノは保健室のスドウ達の様子が気がかりとなり、複雑な表情を浮かべる。

「スドウさん達・・・・・大丈夫だろうか？」

そんなユーノの心配とは裏腹に、保健室の方では手術を中止させられたスドウ達五人が刻々と過ぎていく時間を気にしながらホウスイに説得を講じる。

「頼む！手術をさせてくれ！」

「そうだ！子供が死んでしまう！」

「騒ぐんじゃねぇ！！」

ホウスイは銃を突き付けて大人たちを脅しにかかり、これには流石の大人たちもどうすることが出来なくなる。

シャッハは密かにスドウの横でじっと黙して語らないスドウに話しかける。

「スドウさん、どうしましょう！？このままじゃ――――」

「――――――」

同じころ、体育館の方で未だ人質となったままのヴィヴィオ達もこれ以上はどうする事も出来ずに絶望的な状況を見せていた。

「（このままじゃ本当に――――――）」

「ぐっほ！！」

「！？」

と、その時全員の目に飛び込んでくる突然糸が切れたかのようにその場に倒れこむゴリの姿。

不審に思ったヴィヴィオ達だったが、ゴリの足元から出てきたのはフェレットモードのユーノの姿であった。

「ユーノパパ！」

これにはヴィヴィオも他の生徒たちも大いに歓喜する。

「助けに来たよ、ヴィヴィオ。今バインドを解くから。その隙に全員で逃げるんだ。なのは達に早くこのことを伝えて。」

「うん！わかったよ！」

ユーノはヴィヴィオの背中に回ると、腕を拘束しているバインドの術式を解除する。

「解！」

さて、ユーノやスドウ達がそれぞれに奮闘しているころ、機動六課の方では事態を聞きつけたあの重症患者の母親が悲痛な想いを露わにしながらなのは達に切望してきた。

「私の息子を助けてください！」

思わずその悲痛な声に心が締め付けられるなのは達。

クロノは一向にうまい作戦がないこの事態に苛立ちを感じ始める。

「く！助ける方法はないのか！？」

だが、その時シャーリーは無事に脱出を果たしたヴィヴィオからの入電をなのは達に報せる。

「みなさん！ヴィヴィオから緊急の入電です！」

「え！？」

「ヴィヴィオから！」

思わぬ朗報に驚きを隠せないなのは達は早速、通信をつないでヴィヴィオからの報告を聞き入れる。

『なのはママ！』

「ヴィヴィオ！よかった、無事だったんだ！ねぇ、ユーノ君は！？」

なのはは通信画面上に最愛の人であるユーノがいないことに気づく。

『それが、全校生徒の救出の為にまだ中に！』

「何だと！？」

「あいつ・・・また性懲りもなく無茶な事を――――！こうなったら強行突破しかない。幸か不幸か見張りは残り少ない。フォワード陣営は武装局員数名と共に突入の準備をしろ！」

「「「「了解！」」」」

「それから、手術中の重症患者もおるさかい、大至急生命維持装置を積んだ救急車の手配も頼むよ！」

「よし！強行突破だ！」

機動六課の方針が強行突破という形に固まると、前線一同は戦闘準備を整えるとヴィヴィオ達が待つ学校へと向けて出発する。

さて、残り僅かとなった時間を報せる時計を見ながらふと保健室で呟くホウスイ。

「あと二十分か――――――」

そんなホウスイを見ながら、学院長やエルザ達は考えを改めるようにもう一度説得に応じてみる。

「あんた、こんなことして無事に逃げられると思うのか？」

「そ、そうですよ！このまま子供が死んだらそれこそ重罪ですよ！」

「黙れ！つべこべ言うな！あんたはすっかり大人しくなったな。びびってるのか、ああ？スドウ先生よ？」

ホウスイは小馬鹿にした口調ですっかり黙り込んでしまったスドウに顔を近づける。

と、その時はやて達の要請を受けた他の地上部隊からホウスイの元に金が用意できたという嘘の電話が入り、ホウスイはそれを本当の事だと信じ込む。

「よし！金の用意が出来たか。」

嘘の情報とは知らないシャッハたちは若干の喜びを醸し出す。

「喜ぶのはまだ早い。手術は金を受け取ってからにしてもらおう。」

「それじゃあ間に合わない！スドウさん何とか言ってください！諦めちゃったんですか！？どうしちゃったんですか！？」

シャッハの言葉にまるで反応を見せないスドウはその後もじっと沈黙を続けたままある一点だけを見つめ続けるが、これが後に奇跡をもたらすこととなる。

スドウの行動の真意を何も知らないホウスイはスドウに向かってこう言った。

「ふふ・・・先生は自分の身が心配で患者どころじゃないんだよ。」

そして、その直後再び携帯が鳴り響き電話に出るホウスイ。

「よし、要求が通った。まだ油断するな。サブは電源室に待機だ。俺の指示を待て。ケン、こっちに来い」

スドウが黙り込んだその理由とは何なのか?

そして、この重症患者はこのまま虚しく若い人生を終えてしまう事になってしまうのであろうか?

やがて、ホウスイに呼び出しを受けたケンが保健室の中に入ってくるとホウスイは次のような指示を出す。

「ケン。お前は玄関に行って金を受け取れ。」

「!?」

「俺はこの始末をつけてから合流する。」

「ボス!俺には無理だ。受け取りはあんたがやってくれ!」

「俺の命令が聞けねぇってのか!!」

「あ、あんた何故教師にこだわる!?金が目的じゃなかったのか!?まるで、学校を憎んで復讐してるみてえじゃねぇか!?」

「余計なこと、言うんじゃねぇ！！！」

怒鳴り声を上げてケンの言葉に狼狽を見せ始めるホウスイを見て、学院長は更に疑問の表情を浮かべた。

と、その時学校の外で突然轟音が鳴り響いてきた。

「！？」

それは、機動六課の全線メンバーを始めとする武装局員数名が一斉に学校内へと強硬突発を仕掛けてきたのだ。

気絶していたゴリもその物音に気付くと、直ぐに携帯でホウスイにこの緊急事態を報せる。

「！ぼ、ボス！！」

「何だって――機動隊が！？いいか、ゴリ！子供を人質に取れ！」

「オッケイ！子供ねって・・・い、いねぇ！！！！！」

ゴリは先ほどまでいた筈の子供の姿がまるで見えない事態を目の当たりにした途端、思わず声を上げて驚き知らせを受けたホウスイも焦りを見せた。

「何だと！？子供が全員消えた！！？？」

と、その直後体育の中へと入り込んできたスバルを始めとするフォワード一同がゴリの目の前に現れた。

「管理局です！大人しく投稿してもらいます！」

「く！！！この！！！！！！！！！！」

ゴリが自棄になったのか、その巨体と人相でスバル達を追い返そうと迫ってくる。

「「「「「く！」」」」」

スバル達もゴリの行動を見て思わず身構えるのだが、暫くするとゴリはその巨体と人相からは想像もつかないような弱弱しい声を上げながら涙を流し始めた。

「ご、ごめんなさい～～～！！」

「あれ？」

「意外と情けないわね・・・」

スバルとティアナは呆気なく降伏を認めたゴリの姿に思わず唖然としてしまった。

「ゴリ！応答しろ！！――――――――くそ！サブっ、電源を破壊しろ！」

ホウスイの指示を受けたサブと呼ばれる男は、学校に完備された配電室へと向かい電源装置の破壊を試みる。

「教師たちを人質にして脱出だ！」

ホウスイがそう決め込んで脱出を図ろうとしたとき、我慢の限界を迎えたケンがホウスイに向かってこう言ってきた。

「もうあんたにはこりごりだ！」

「なんだと！？」

「あんた、俺らを利用したんだ！金が手に入ると上手いこと言ってほんとは自分の為じゃねぇか！馬鹿にしやがって！！」

ケンはそう言うと、自分の怒りを拳に乗せてホウスイの顔面を勢いよく殴りつけ、殴りつけられたホウスイもケンの腹部に拳を食らわせ、ケンはそのまま保健室を飛び出していった。

「くそ！！」

「は、は、は、は」

肩で息を上げるホウスイを見ていたシャッハたちはこれを好機と判断し、後ろからホウスイの頭部を殴りつける。

「ぐっほ！」

そして、そのままバインドで身体を拘束し動けなくする。

「スドウさん！早く手術を――――！？」

と、シャッハが促したその瞬間サブによって電源装置が破壊され部屋全体の照明が全て切れ、当然のことながら医療機器もすべて機能

を停止させてしまう。

「電源が落ちた。爆破されたんだ！」

「シスター・シャッハ、ドアは？」

「開きません！」

シャッハやトーマスが必死に開けようとしても、ドアは一向に開く気配を見せない。

「電源が落ちて、開閉装置が壊れたんだ。」

「誰か！ライトは持ってないのか！？」

「局員がドアを開けてくれれば？！」

「そんな余裕はもうない！」

学院長はこの絶望的な状況の中で、こんな事になってしまった最大の原因であるホウスイに向かって声を荒げる。

「なんてことをしてくれたんだ！もう、オペは不可能だ」

「こんな結果になって、本当に残念です――――！」

誰もが暗がりの中で無念な気持ちを露わにする中、自らを嘲るかのような笑い方をするホウスイ。

「ふふふふふふ」

するとその時、絶望に打ちひしがれる全員の耳にスドウの思わぬ言葉が聞こえてくる。

「いや、オペは続ける。」

「！？」

ホウスイもそのスドウの言葉に思わず耳を疑い、シャッハたちはどのような手段でオペを続けるのかを尋ねる。

「しかし、この暗闇の中じゃ――」

「手探りで、私に器具を渡せ。」

「え！？」

あまりの衝撃的な言葉を耳にした瞬間、エルザは思わず声を荒げる。

「手探りでオペなんて無茶だ！」

だが、スドウは飽く迄も冷静かつ毅然とした態度で監視を手渡すように指示を仰ぐ。

「鉗子を。手探りでわかるだろ。」

「無茶だ！ミスったら大失血ですよ！」

シャッハもこのスドウのやり方は無謀だと言って説得を試みるが、スドウはそんなシャッハたちに向かって驚くべき言葉を口にした。

「こうなるのを予測して、患者の患部をずっと見て覚えてたんだ。真っ暗でも手術できるようにな。」

「しかし！」

と、そんなスドウの腕前を知っていたトーマスはスドウの技術を信じることにして暗闇の中から鉗子を探し出し、それを手渡す。

「スドウさん、鉗子です！」

「テェミルさん。あんたは、患者の脈を手で測れ。」

「はい」

決して諦めずに患者の手術に取り込む彼らの姿勢を目の当たりにしていたホウスイには全く以て理解することが出来なかった。

「何故だ！？何故そこまでやるんだ！？」

すると、スドウはそんなホウスイに向かって背中越しに一言だけ口にする。

「“私が医者だからだ”」

「！」

ホウスイはその言葉一つに途轍もない重さを感じ取ってしまい、その後一切の口を閉ざして黙り込んでしまった。

「脈は？」

「大丈夫です。」

「ガーゼを」

「はい」

そして、残り僅かとなったタイムリミットの中でスドウは天才的な腕前を遺憾なく発揮させると、無事に腸管の切除を完了させる。

「間に合った。」

すると、その直後に非常用の電源が復旧し部屋の明かりがついた。

「着いた」

「やった」

「患者は！？」

全員が患者の容体を確認すると、患者のバイタルはすっかり安定を見せ始めていた。

「ミスはなかったと思うが、確かめてみてくれ。」

「まるで神業だ・・・完全です！」

学院長はあの暗がりの中で完全な手術を成し遂げたスドウの腕に感服するばかりであった。

「みんなの協力に感謝する。」

スドウはそう言うと、マスクを外し協力してくれたその場にいたシャッハたちの手を取って喜びを分かち合った。

ホウスイはこの予期せぬ事態を目の当たりにし、顔を舌に向けた状態で舌打ちをしてしまう。

「・・・く!!!」

その時、保健室のドアが開くと患者の母親である女性が飛び込んできた。

「ケンタ!ケンタ!」

母親は縫合が済み、安心した様子で眠りにつく我が子の姿を見て思わず涙を流し名がｒ歓喜の声を上げた。

「よかった、ケンタ!本当によかった――――!!」

「く!くそ!!!!!!!!!」

ホウスイはこのあまりにも自分にとっては面白くない光景に我慢が出来なくなったのか、武装局員を自力で振り払うとバインドを解いて学校の外へと逃亡する。

「俺はまだ何も成し遂げいねぇ!!!!!!」

「待て!!」

シャッハが逃亡するホウスイを追おとしたとき、ホウスイは自身の魔力を最大限にまで上昇させると魔力砲撃を作り出して校舎の中を破壊する。

学校の外で救出された子供たちの安否を確認していたなのは達の耳にも、その轟音がしっかりと耳に入り込んできた。

「何!?今の音・・・――――!?」

すると、ホウスイは飛行魔法でその場から勢いよく飛び上がるとグランドの方へと飛んでいき、ホウスイの姿を確認したなのは達やスドウ達が近くまで駆け寄ると、ホウスイは声を上げながら魔力と共に体に宿した別の力をも解放し始める。

「ぐあああああああああああああ!!!!!!!!!!!!」

ホウスイの体から滲み出す別の力の姿を見て、思わず苦い表情となる機動六課メンバー。

「あれは!」

「何だよ一体!?」

「この魔力量・・・推定ＳＳランク・・・！いや、それだけじゃありません!奴は、何か別な力をも取り込んでいます!」

「別な力・・・!?」

「どいつもこいつも舐めやがって!!俺は復讐してやるぞ!!俺の

息子を殺した・・・俺からジュンイチを奪ったお前達学校を！！！」

すると、そのホウスイの言葉を耳にした瞬間学院長は暫くの間を置いてから嘗ての忌まわしき事件の日の記憶と共にこの男の事を思い出す。

「復讐――――――思い出したぞ！あの時の！！」

「学院長！？何か知っているんですか、あの男の事を！？」

「十年程前の話だ・・・――――当時、この学校でいじめ問題が発生していたのだ。」

「いじめ！？」

「この学校で・・・ですか！？」

シャッハを始めとする学校関係者や、更には生徒であるヴィヴィオや保護者の人たちはそんな悲惨な出来事がこの学校であったと言う事実を聞かされ大いに衝撃を受けた。

「もっとも、当時の学院長や私を含めた教師たちはみなその事実が表に明るみに出ないように事実そのものを隠蔽したんだがな・・・・・」

「「「え！」」」

それでは、この学校で嘗て起きてしまった忌まわしきいじめによって被害を受けた生徒とその子の親であったこのホウスイ・テゼマの事をフェードバックしてみよう。

十年前、当時学校内で深刻化していたいじめは一人の生徒を自殺へと追い込むという異例の事態にまで発展を遂げてしまう。

生徒の名はジュンイチ・テゼマ。

時空管理局本局に努めるストライカー級魔導師のホウスイ・テゼマの一人息子だった。

明るく人の良かった彼が、ある日を境にいじめのターゲットとなってしまい、凄惨ないじめに耐え切れなくなりついには学校の窓から飛び降り自殺を図ったのだ。

直ぐに救急車で運ばれた彼であったが、既に手の施しようのない状態になっていた。

「ジュンイチ!!おい、目を開けてくれ、ジュンイチ!!」

そんな息子の姿に涙を流しながら、ホウスイは医者に息子の命を救ってほしいと請願する。

「頼む!俺の息子を助けてくれ!!金なら・・・一生かけてでも払う!!だから!!!」

「お気持ちは分かりますが、もう・・・――――手の施しようがありません。」

「!」

医者は無念の気持ちを抱えながら、呆然とするホウスイの前から静

かに立ち去る。

そして、残された当時の副院長（現、学院長）とジュンイチの担任の教師は悲痛な想いを抱きながらホウスイにあるものを手渡す。

「テザマさん。こんなこと言うのも何なんですが、これ・・・――ジュンイチ君の机の中から見つかったものです。」

担任教師が手渡したのはジュンイチが自殺をする前に書き残した遺書と思われる手紙だった。

直ぐに中身を確認するホウスイ。

そこに書かれていた内容を目にした瞬間、ホウスイは愕然とする。

「こ、これは・・・！！」

「『お父さんへ。僕はもう・・・――こんな辛い想いをするのは沢山です。みんな、僕の事をいじめてきます。誰も味方なんていません。友達だったはずの子まで、いじめをする側に回っています。先立つ不孝をお許しください・・・――僕は、生きることに疲れました。』」

そして、読み終えると同時にジュンイチも静かに息を引き取り脈拍計の虚しい音だけが部屋の中で反響する。

泣き崩れるホウスイは何も言えないままの教師たちに向かってこう言った。

「く！！！恨んでやる――――――お前ら学校を一生恨んでやる！

！」

学校はこの事件を明るみにすれば、学校の評価が下がり運営そのものが危うくなるのではないかと考え、都合の悪い事実を秘密裏に闇へと葬り去った。

それを知ったホウスイは湧き上がる憤りを胸に抱き、学校に復讐を果たすべく自ら管理局を辞職したのち異世界を渡って復讐のための力を身に着け、この日に臨んだのであった。

「そうさ！この学校の教師どもはいじめがあったにも関わらず、その事実を断固認めなかった。そして挙句、俺の息子を死に追いやった。だから俺は――――！」

「確かに、当時はその事実を隠蔽してしまった！！決して許されざることでは無いと思っている！！だが、だからと言ってあなたの行動も許されるものではない！！」

学院長はいじめ問題の事実を隠蔽したことを認めつつも、今回のホウスイの行動も決して許されるものではないと客観的な口調でそう言うが、当の本人は怒りに我を忘れ聞く耳を持たない。

「うるせー！あんたらは息子の事なんて最初（はな）から見ようとせず、何もしなかったじゃねぇか！ジュンイチは・・・――ずっと苦しんでいたんだ！！あんたらはいじめられたことがねぇから、そんな他人事のような顔してられんだ！！ふざけんじゃねぇぞ！！あんたにも分からせてやる！！俺のこの力で、何もかも・・・この学校も全て消し去ってやる！！！！」

すると、更に怒りを募らせたホウスイは自身の体に宿らせている鬼

神と呼ばれるもう一つの力を発動させると、グランドの下から凶悪な姿をした鬼神を呼び出したのだ。

この突然の事態に、その場にいた者全員が大きく狼狽する。

「な!?鬼だ!!鬼が現れたぞ!!」

「わあああああん!!!!!殺される!!!」

「逃げろ!!」

全員は鬼の姿を見るや否や一目散にその場から退散しようと走り出すが、ホウスイはそんな逃げ惑う人々をも殺す覚悟で鬼神に全てを破壊する処置を下す。

「全て壊れて消えろ!!!」

と、その瞬間だ。

「!」

学校全体とその場にいた人間すべての周囲に現れる翡翠に輝く広域結界魔法が張られ、普段見慣れているその魔法を見た瞬間、なのはやヴィヴィオ達の表情が一変する。

「この結界は・・・――――!」

「ユーノパパの!?」

広域結界が張られ、結界の外へと追い出されたなのは達と中に閉じ

込められたホウスイ。

ホウスイがその結界内で誰がこの結界を発動させたのか疑問に感じていると、そんなホウスイの目の前に校舎の中から徐に歩いてくるユーノの声が聞こえてきた。

「――――――呆れた奴だな。」

「！」

ホウスイが声のする方へ目を向けると、ユーノは沈黙した状態のままホウスイの元へと前進していく。

「ユーノ君！」

「おい・・・アイツの眼見ろ！」

ヴィータがユーノの様子に違和感を感じて全員にそう呼びかけると、ユーノの瞳は普段の温和な雰囲気を一切廃した非常に鋭いものとなっていたのだ。

スバルはこれを見た瞬間、背筋が凍りつく。

「目が据わってる・・・ユーノ先生が怒ってる！」

ユーノは鋭い表情を浮かべた状態で、ホウスイに近づいてくると徐に着ていた上着を投げ捨てながら怒りの籠った声色でこう話しかけてきた。

「こんなバカげたことをして、ただで済むと思ってるのか？よくも

娘の授業参観をこんなに滅茶苦茶にしやがって・・・・・・僕は許さない！」

ユーノは据わった瞳を目の前のホウスイと巨大な鬼神へと向けると、徐に両手を鳴らし始め闘う姿勢を現す。

これを見て、スドウ達は焦りを感じた。

「スクライアさん・・・まさかあの化け物と一人で！？」

「無茶です！危険です、スクライア司書長！！」

シャッハは説得を試みるが、当のユーノは退く様子など見せない。

そんなユーノを目の当たりにしたホウスイはあまりの滑稽な様子に思わず高笑いを上げる。

「ははははは！！！！！血迷ったか、貴様！こんな学校なんぞの為に、最後の一平をも他者の為に使い捨てると言うのか！？デバイスを持たない魔導師など、剣を持たない剣士と同じだ！丸腰でこの鬼神の力に勝てると思うてか！！」

その瞬間、ホウスイが召喚した凶悪な鬼神が自分の身の丈に匹敵する巨大な刀を振り下ろし、ユーノの姿を砂埃で見えなくする。

「ユーノ君！！」

「スクライアさん！！」

砂埃で見えなくなった状態を結界の外でなのはやスドウ達ギャラリ

ー全員が声を上げてユーノの安否を気遣うが、その時巻き上がる埃の中よりユーノの静かなる怒りの声が聞こえてきた。

「・・・――――恥ずかしくないのか？」

「！？」

「どうやら子供の気持ちを分かっていないのは、お前の方だよ。」

「何？」

疑問の声を上げながら、ユーノが無事であることに内心驚きを隠し切れないホウスイであったが、その直後誇りが晴れていく中でホウスイは更に驚くべき光景を目の当たりにする。

「子供のため・・・子供のため・・・そうやって都合のいい言い訳ばかりを並べて、本当は自分の自己満足の為に行き場のなくなった袋小路のその気持ちを、関係ない人にぶつけようとしただけだろう。」

何と、埃が晴れた先に映ってきたのはユーノの頭上から振り下ろした鬼神が操る身の丈以上の刀の刀身を左手の力だけで受け止め、尚且つ刃に輝を入れたユーノの姿であった。

この信じがたい光景を見た瞬間、誰しもが言葉を失いかけた。

「莫迦な！？鬼神の一撃を生身で・・・！！ん！？あ、あれは――――――！」

真似をすることの出来ないユーノの芸当に驚く中、ホウスイはその

時ユーノの周囲から放出される翡翠に輝く二つの強い力をその身に感じ始める。

「こやつの魔力が・・・急激に増大していく・・・!?いや、魔力だけじゃない・・・俺のこの鬼神の力に匹敵するほどの何か別の力も上昇している・・・!」

すると、ユーノは力を上昇させていく過程で左手で押さえていた鬼神の刀を刀身から力を注ぎ込むと同時に一瞬にして粉砕させる。

それを見たホウスイは確信した様子で驚愕の表情を浮かべる。

「まさか!?ひょっとして貴様は!!」

一方で、ホウスイが驚愕する中結界の外でユーノの言葉で表現できないような途轍もない力を肌に感じていたコロナやリオたちは体を手で押さえながら自分達と同じく険しい表情を浮かべるヴィヴィオに尋ねる。

「これは――――!何なの、この背筋が凍りつくような強い力は!?」

「ヴィヴィオ・・・!これがそうなのですか!?」

「そう・・・!これがユーノパパが持つ魔導師の力とは全く違う、死神と一部の能力者だけが持つことを許された魔力の祖となった根源的な魂の力・・・霊力!!」

「霊力!?」

ホウスイは信じられないとばかりの口調でユーノにこう尋ねる。

「貴様！！まさか次元世界最強と恐れられる・・・――――翡翠の魔導死神ユーノ・スクライアなのか！？」

「そんな大層なもんじゃないよ。僕はただの授業参観に来た高町ヴィヴィオの父親さ。父親としての尊厳を無くした今のお前を、僕は絶対に父親とは名乗らせない。」

ユーノはそう言うと、翡翠に輝く霊圧色と魔力光を纏わせながら頭上に円とその中に月を模した独特の文様を描き、描き終えた瞬間それを鬼神に目掛けて撃ちこんだ。

「“闇天月芒陣（あんてんげつぼうじん）”」

技が発動すると同時に、鬼神は直撃を受けて吹き飛ばされるや否や跡形もなく消滅する。

「「「わあああああ！！！！！」」」

「ぐ！！！」

そして、結界の外のなのは達やユーノと対峙するホウスイはその技の余波を体に受け思わず体を身構えた。

「・・・な・・・！」

やがて、土煙が晴れ抉られた地面を見たホウスイは唖然とした表情で静かなる怒りを込めた表情のユーノの言葉を聞き入れる。

「莫迦親父、来るがいい！高町ヴィヴィオの父親、ユーノ・スクラ

イアが父親としての尊厳を取り戻させてやろう！」

ユーノの霊力と魔力を合わせた特殊な術によって、鬼神は一瞬にして灰溶かしてその場から消え去り、その光景を目の当たりにしていた術者本人であるホウスイ、そして結界の外のギャラリー一同は目を疑った。

「な・・・何という力だ・・・！あの鬼を・・・己の魔力と霊力を使って一瞬にして消し炭にするとは・・・・！？」

「次元が・・・違い過ぎる・・・・！」

ユーノの力の一端を見て、率直にそう感じたスドウを始めとする大人のものたち、更にはその子供達。

すると、ホウスイはユーノの実力を見て暫くすると不敵な笑みと同時に甲高い声を上げて笑い声をあげる。

「ふふふはははははは！！！！！面白い！！その力、俺がこの手で捻り潰して見せよう！！！！」

「やられるものならやってみろ！莫迦親父！！！！！」

両者はそう言いながら、己の体に流れる強大な力を放出させながら強力な術を発動する為に互いに超高速で異なる印を結び始める。

ホウスイの場合は、八方音（はっぽうおん）と呼ばれる中国に由来する五行思想にのっとった呪文であった。

「坎（かん）・離（り）・兌（だ）・震（しん）・乾（けん）・巽（そん）・坤（こん）・艮（ごん）！」

八方音の詠唱を唱えながら、その指し示す方角に印を結ぶホウスイと、沈黙した状態で満月の中に参画を象った文様を描くユーノ。

そして、二人の術者が印を結び終わると同時に技が発動する。

「鬼神呪法、“凶闘気無限暗黒（きょうとうきむげんあんこく）”！」

「霊魔秘法、“天輝銀月華（てんきぎんげっか）”！」

両者が放った漆黒の波導と翡翠色と銀色が混じった波導が衝突することによって発生するエネルギーの余波は結界の外にまで広がり、そのあまりの威力故にギャラリーは思わず圧倒されてしまう。

「「「「「うわあああああ！！！！」」」」」

両者の技の威力に驚愕する中で、クロノはユーノが施した結界が技の威力に耐え切れずに亀裂を生じ始めていることに気づく。

「何という撃ち合いだ・・・！結界が耐え切れないでいる・・・一体どれほどの威力でぶつかり合っている！！」

そんな中で、ユーノとホウスイの波導は暫時拮抗状態を保ち続けているが、ホウスイの表情は焦燥でいっぱいだった。

「く！！！！ユーノ・スクライア・・・負けん！！！俺は負けんぞ！！！」

そのホウスイとは対照的に、ユーノ自身は冷静さを維持した状態で

次のように口にする。

「無駄だ、莫迦親父。復讐心に捕らわれ父親の尊厳を失ったお前では・・・僕には勝てない！」

ユーノはその瞬間、波導の威力を最大限に発揮させてホウスイが撃ってきた凶闘気無限暗黒を跳ね返し、ホウスイを後ろに吹き飛ばす。

「うおおお！！！！」

技の威力に圧倒され、後ろに吹き飛んだホウスイはそれでも戦う姿勢を見せ体制を整えると、再び八方音を口にしながら印を結びだす。

「く！！！離・坎・震・震・離・坎・震・震・離・坎・震・震！！！」

結界の外でホウスイの様子を窺っていた恋次と吉良は額に汗を流す。

「あいつも負けじと何か詠唱を唱えてるぜ！」

「呪文を聞く限り、あれは八卦(はっけ)の音(おん)だ！」

そんな焦りを見せ始めているホウスイを見ながら、ユーノは無表情に近い静かなる怒りを内包した顔で次のように口にする。

「興奮して周りが見えなくなってるな。大の大人が情けないよ。今その目、覚まさせてやる。」

「黙れ！！！“邪五行滅衰(じゃごぎょうめっすい)”！！」

その瞬間、ホウスイの周囲に現れる紅蓮の炎で燃え盛る覆い隠すほどの五行符と呼ばれる札。

それにより、ホウスイは鬼神呪法の奥義を発動させた。

見ていたなのは達はその光景に思わず目を見開く。

「あれは！」

「五行符を横に並べ、それを塔のように浮遊させているだと！？」

「これが奴の言っていた鬼神呪法なのか・・・！？」

「だとすれば、何と恐ろしい奴よ・・・！」

鬼神呪法の奥義であるこの技を体現させた瞬間、ホウスイは勝ち誇った様子でこう口にする。

「ははははは！！！！ユーノ・スクライア。無数の五行の焔（ほのお）に焼かれて・・・灰になるがいい！！！！」

「莫迦親父――――」

だが、その瞬間ユーノの言葉が飛び交い、目の前を見たホウスイとなのは達の目の前に信じがたい光景が広がってくる。

「な！」

彼らの瞳に映ってきたのは、ホウスイの紅蓮の焔すらも飲み込んで

しまうかのような巨大な漆黒の焔を背後に出現させ、それを操る無表情のユーノであった。

「サバを読むな。五行符百三枚は四捨五入しても無数には程遠い。ちなみに、煌々と燃え上がる紅蓮(あか)い焔なんかよりも、僕のどす黒い焔の方が威力は大きい。」

恋次や大人たちはこの常識の範疇を超えた衝撃的な光景に、思わず口を明けてその状態のまま目を見開くばかりであった。

「な、何だあの技は!!!!」

「あれだけの芸当を・・・たった一人で全て操ってるなんて!?」

「信じられない・・・!一体どうなってるのだ、あれは・・・!?まるで、焔で出来た巨大な壁だ・・・!!」

ホウスイ自身も、このユーノの技を前にして思わず冷や汗が流れ出ると同時に、自身の焔が漆黒の焔に威嚇されたかのように委縮していくのを感じた。

「そ・・・そんな・・・こんな・・・!」

そして、ユーノはその炎を操りながらホウスイに向かってこう言った。

「莫迦親父。これ以上、父親としての醜態を・・・――――見せるな!“激昂黒焔(げっこうくろほむら)”!!」

ユーノが右手を振り下ろした瞬間、巨大な漆黒の焔が一斉にホウス

イに向かって飛んでいき、焔はそのままホウスイの焔すらも容易に飲み込みながらホウスイの体を灼熱地獄へと追いやっていく。

「ぐあああああああああああ！！！！！！」

ユーノの技が着弾した様子を見ていた大人たちは、思わず声を上げる。」

「おお！！圧倒的だ！！スクライアさんの力を前にして、全く太刀打ちできてないぞあの男！」

「これが、翡翠の魔導死神・・・ユーノ・スクライアなのか・・・！」

「うおおおおおおおお！！！！！！」

激昂黒焔に飲み込まれ、体中を焼かれるホウスイ。

この光景を目の当たりにして、誰もがユーノの勝利を確信する。

「巨大な漆黒の焔に呑まれてあいつの体が焔に焼かれていく。勝負あったか？」

そんな中、焔に体を焼かれていくホウスイ自身は抵抗することも敵わずユーノの技を受け続けるうちに、ふと自らの脳裏に息子、純一との思い出がよみがえってきた。

「（――――――ジュンイチ。）」

ホウスイの頭に鮮明に蘇ってくる、幼いころの息子と一緒に楽しく戯れる己自身の姿。

ジュンイチは初めて撃つことが出来た魔力弾に興奮を覚え、その喜びを父・ホウスイへと伝える。

「お父さん。ほら見て！魔力弾が撃てた！」

「ほう。上手いものだな、ジュンイチ。やっぱりお前は才能にあふれてるぞ。」

ホウスイはジュンイチを素直に褒め称えると、頭を優しくなでる。

ジュンイチもその行為を受けると、満面の笑みを見せる。

「へへ！」

「！おい、見ろあれ！！」

「あの男に刻まれた刻印が体中に・・・！？」

「お父さん。僕ね・・・――――いつか立派な魔導師になって、お父さんのように沢山の人を魔法で救いんだ！だから、僕いっぱい勉強して魔法を覚えるんだ！お父さんは、ちゃんと僕の事を見ててね！」

「ああ。勿論だよ。頑張るだぞ、ジュンイチ――――――」

息子との楽しかった日々を思い返しながらも、ホウスイ自身は黒焔の中で焼かれた全身の至る所に奇怪な文様を浮かび上がらせ、全身へと拡大させていく。

ホウスイのただならぬ様子を窺った瞬間、全員の表情が一気に凍りつく。

「こ、これは・・・――――!!」

すると、ホウスイの体が文様の広がりを見せると同時に体までもが著しく変化を見せ始め、ホウスイの頭から角が生え、体の中からはホウスイ自身が宿らせていた鬼の声が耳に入ってくる。

「（ホウスイ・・・我に身を委ねよ。奴らは主から大切なものをこの世から奪った憎むべき相手・・・滅すべき相手・・・何を迷う・・・何を戸惑う・・・主の憎しみを糧に、我に身を委ねればいいのだ!!よりよこせ!お前の奥底に眠る憎しみのマグマを!!」

鬼の声を聞き入れたホウスイは、それに呼応するかのように憎しみの炎を一気に爆発させる。

「そうだ!!ジュンイチは何も悪くなんかない――――――悪いのは、悪いのは――――――この学校なんだよ!!!!!」

「!!」

すると、ホウスイを包み込んでいたユーノの黒焔はホウスイ自身が発する悪鬼の力に圧倒され、ホウスイ自身は大きな変貌を遂げようとしていた。

「今度は何!?」

凄まじい爆風が発生し、ユーノ達が身構えホウスイの方へと目を向

けた瞬間・・・対峙していたユーノやなのは達の目に飛び込んできたのは恐るべき光景だった。

「は！」

瞳に映ってきたのは、全身を褐色色に染め上げ頭部の表と裏に顔があるまさしく鬼の姿がそこにあったのだ。

鬼神はその姿をこの世に顕現させると、言葉でどう表現したらいいかさえ分からなくなるほどの形相でユーノを凝視しながら次のように口にする。

「お前から全てを奪った連中を許すな！どうせ手に入らぬなら、全て壊してしまえ！！闇に染まれ！！」

鬼神はそう言うと、口からユーノやなのは達ですら全身を振りあがらせるほどの非常に強い邪気を発し、己の憎しみを放出する。

ルキアは全身から感じ取れるこの鬼神の邪気に何とか耐えながら、険しい表情を浮かべる。

「何だ・・・！！この邪気は・・・！？」

「何ということだ・・・――――こんなことが・・・！」

鬼神は邪気を発しながら、自らの真の名前を口にする。

「我が名は、鬼神宿儺（きしんすくな）！！！！」

「鬼神・・・宿儺！？」

鬼神宿儺とは嘗て、宿儺山と呼ばれる山で暴れていたところを全身をバラバラにすることで封印された邪鬼そのものである。

蘇った鬼神宿儺を目の当たりしたスドウは冷や汗をかきながら、険しい表情で次のように口にした。

「く！寄生主の憎悪・悲しみのあまり、鬼神の力が暴走を起こしたか。もはやあれは人間ではない。ただの――――――怪物だ！」

スドウと同じように、目の前で鬼神と対峙するユーノも同様の結論に達し、顔を歪めた。

「負の情念に捕らわれるあまり・・・外法の鬼の力までも呼び起こし、自らの体に宿らせた。そして、莫迦親父の心の闇を憑代とすることで・・・――――鬼神が覚醒した。」

「ははははははははは！！！！！！！」

鬼神はそんなユーノの心情とは裏腹に、大地が震え上がるかのような甲高い笑い声を上げる。

「く！莫迦親父、何て真似を・・・！」

と、その時鬼神は全身から特殊な邪鬼を放出させ、ユーノの結界を飲み込んでいった。

「ほおおおおおおお！！！！！！！」

ユーノの結界が鬼神の邪鬼によって効力を失うと、それまで自分達

を覆いこんでいた結界が鬼神が創り出す闇の結界へと変貌を遂げる。
そして、同時にユーノの体にもある異変が起こり始める。
「！この感覚は！？」
ユーノが自らの体に起こった異変に気付いた瞬間、丸腰にユーノ目掛けて鬼神が巨大な日本刀を振り下ろしてきた。
「ほおおおおお！！！！！！！」
鬼神の攻撃に直撃した瞬間巻き上がる凄まじい突風と轟音。
結界の外で見ていたなのはやヴィヴィオは声を上げる。
「ユーノ君！！」
「ユーノパパ！」
砂埃が晴れると、中から出てきたのは鬼神の攻撃を皮一枚のところで躱した顔中血まみれとなったユーノ。
ユーノはその後も鬼神の攻撃をギリギリのところで躱し続けるが、ユーノはこの状況において一切の魔法・霊力を使っていない様子であった。
疑問に感じた恋次が戦闘の様子を見ながら声を漏らす。
「あいつ、何で防御を使わないんだ！？」

するとその時、同じ疑問に感じていたルキアが衝撃的な事実に気づく。

「違う。ユーノ殿は防御すら使えないのだ！」

ルキアの言葉を耳にした吉良も、その言葉から次のような結論を導き出す。

「まさか、あの鬼神の力で魔法も霊力も一切が使えないのか！？」

「そ、そんな！！」

鬼神はユーノに容赦ない攻撃を仕掛け続け、満身創痍の状態にまで追い込めると天に向かって自らの憑代であるホウスイが生み出した憎しみの籠った闇を口から放出させ、天候さえも暗雲一色に染め上げる。

この恐怖に満ちたおぞましい光景を目の当たりにしていたコロナの父、エルザは表情を凍りつかせながらこう口にした。

「闇・・・――――スクライアさんの二つの力すらも打ち消す圧倒的な闇の力！！憑代の負の情念を食らうことで、更に力を増している・・・！これは、我々が止められるものではないぞ！」

「全てを闇で飲み込むまで、あの暴走は止まらない！！」

リオの父、トーマスもエルザの言葉に便乗しそのように口にする。

鬼神はその闇の力を糧にして、ユーノに飛び切りの上玉を食らわせ、ユーノを絶望へと追いやろうとする。

爆風が上がり、ユーノを完全に葬り去ったと確信した様子で砂埃の中を見つめる鬼神宿儺。

「ふふふふふ・・・・何!?」

だが、鬼神の期待とは裏腹に目の前に映ってきたのは忍び込ませていた解放不可能となった仕込み杖状態の晩翠を手に取り、肩で息をする満身創痍のユーノであった。

「は、は、は、は、は」

「ユーノ!」

「ユーノ君!!」

魔法も霊力も使えない状態でありながら、それでも決して屈する姿勢すら見せずにその場に立ち尽くすユーノを目にして思わず声を上げるなのは達。

ユーノは険しい表情を浮かべながら、唾を吐くように血を吐きだす。

「ぺっ!」

鬼神も己の攻撃をもろに喰らいながら倒れるそぶりすら見せないユーノの生命力の高さには心底感服していた。

「大した生命力と言いたいところだが、既に何もかもが遅すぎたのだ。我に呑まれた彼奴(きゃつ)には、最早誰の声も届かぬ。己が闇に捕らわれた殺灰(そはい)めが、我が力使いこなそうなどとは笑わせる!だがこやつ

の負の情念・・・実にいい憑代となった！ありがたく頂戴するぞ！
だが、これしきの闇で満足するには程遠い。貴様の闇も――――
――我に食させよ！！」

鬼神はそう言うと、満身創痍のユーノ目掛けて自分の首をろくろ首のように伸ばして凶悪な表情を浮かび上がらせながらユーノの中の心の闇を糧にしようとしてきた。

「スクライアさん！！」

「ユーノパパ！」

どうすることも出来ないでいるヴィヴィオやスドウ達が声を上げると、ユーノは鋭い表情を浮かび上がらせながら体の奥底に封印している忌まわしき力の一端を放出する。

「く・・・はあああああああ！！！！！！！！」

すると、その放出されてきたユーノの忌まわしき力を前にした鬼神は、そのあまりの忌まわしき力の大きさとユーノの闇の深さに食すことを止めてしまう。

「な！！」

「「！？」」

突然、鬼神の行動が止まったことで疑問に感じるなのは達だったが、当の鬼神はというとユーノの背後に自分だけが見ることが出来る人間の持つ闇とは思えぬ者の姿に絶句する。

「（何だ・・・こやつの闇・・・いや、本当にこれが人間の闇なのか！？次元が違うぞ・・・これは最早人間の闇のレベルではない・・・まるで・・・何か別の・・・！人間の範疇を遥かに超えた凄まじきもの・・・！！こやつは一体！？）」

すると、そんなユーノの闇に逆に恐怖を感じ始めていた鬼神にユーノはその闇を纏わせながら鬼神に次のように語りかける。

「・・・悪いけど、僕の闇はお前が食えるような生易しいものじゃないんだ。僕の闇は、人間の恨み・妬み・憎しみの果てにある滅茶苦茶性質の悪いものなんだ！」

「く！ええい！！！小生意気な！！！！！」

鬼神はそのユーノの言葉に若干の焦りを見せ始めると、それを誤魔化すように二つの顔を交互に使い分けながら口から火を吐き、刀で攻撃を続ける。

「はあああああ！！」

ユーノはその怒涛のような攻撃を満身創痍の状態でありながら、厳しい訓練の末に身に着けた高い身体能力と生命力で補いながら、攻撃を回避していく。

「く！！！！おおおおおお！！！！！」

そして、晩翠の力を解放できない状態でありらながら仕込み杖の形状でユーノは鬼神の体を斬りつけていく。

そんな攻防の切り返しをユーノと鬼神は続けていく。

なのはや恋次達はこの光景を結界の外で黙って見守る事しかできないでいた。

「霊力も魔力も使えない状態で、あの怪物の攻撃を身体の力だけで耐え抜いている！」

「だが、それではいずれスクライアの体がもたん！」

「早く！この結界を破らないと！！ユーノ君が・・・ユーノ君が！！！」

自分たちの魔法すらも打ち消すこの闇の結界の強度を前に、為す術もないなのはは声を荒げて目に涙を宿すばかりだった。

と、その時そんな絶望的ななのは達の眼に衝撃的な光景が写っていた。

「ええい！！」

「「！？」」

何と、結界の強度に屈していたなのは達の横でセイクリッドハートを起動させ、大人モードとなったヴィヴィオが自らの拳で結界の破壊を試みていたのだ。

「ヴィヴィオ！」

「何をしてる！」

ヴィヴィオの行動を見ていたなのはやクロノが思わず声を上げる中、ヴィヴィオは胸中自分が常々思っていたことを赤裸々に吐き出す。

「このまま黙って見てるなんて真似、私には出来ない！私が強くなりたいのは・・・誰も傷つけたくないから・・・なくしたくないから・・・だから私は強くなりたい！もし、ここでユーノパパがいなくなったりしたら・・・私も・・・なのはママも不幸になるから！！！！」

「ヴィヴィオ・・・！」

「だから、絶対にこの結界を破ってユーノパパを助ける！！！クリス！！」

〈Ａｘｅｌ　ｓｍａｓｈｅｒ　Ｆｕｌｌ　Ｐｏｗｅｒ〉

ヴィヴィオはその後も自分が持ちうる全力全開の力を拳に乗せて、鬼神が創り出した闇の結界を破壊しようと攻撃を続ける。

と、その時そんなヴィヴィオの行動に触発されたコロナ・リオの二人も大人モードとなってそれぞれの得意技であるゴーレムと春光拳を使いながら、驚きを隠し切れないでいるヴィヴィオにこう言った。

「私達も協力しますわ！」

「うん！ヴィヴィオのお父さんが頑張ってるのに、私達だけが黙ってるだけなんてやっぱり出来ないもんね！」

「コロナ！リオ！」

そんな三人の姿を見た瞬間、クロノと恋次は顔を見合わせほくそ笑むとデバイスと斬魄刀を取り出し力を解放させると、それぞれこう言った。

「子供があそこまで頑張ってるんだ。大人の僕らが頑張らないでどうする？」

「そうだな。」

そんな二人の言葉を聞くと、なのは達の表情も次第に希望を取り戻し始め再びデバイスを手に取るとヴィヴィオ達と共に結界の破壊を試み始める。

「うん。私達も手伝うよ。みんな、全力全開でこの結界を破ろう！」

「「「「「はい！」」」」」

なのは達を始め、結界の外でユーノが一人で懸命に父の尊厳を守るため、父の尊厳を失い鬼に飲み込まれたホウスイを救うために体を張って闘い続ける姿を見ていた全校生徒や大人たちの全員がユーノを助けたいと言う一心で、それぞれが持つ魔法や技で結界の破壊を試みる。

そんな思いがけない光景を目の当たりにしながら、ユーノは内心非常に心強いと感じていたが、戦局はいずれもユーノに敗色濃厚な状況で変わりはなかった。

「は、は、は、は、は、は」

残り僅かとなり始めた体力で鬼神と戦い続けていたユーノを、鬼神

は勝ち誇った表情を見せながらこう口にする。

「ふん。最早風前の灯。彼奴と共に我が闇の憑代なって消えるがいい！」

鬼神は最後の止めをユーノに加えるために、利き手の刀を勢いよく振り下ろすがユーノはそれを何とか回避し、心中この場を乗り切るための打開策を講じ続ける。

「（どうする・・・魔法も霊力も使えないこの空間で、これ以上力を増幅させるこの悪鬼と対抗する手段は残されていない！他にないのか！？魔法でも何でもいいから、鬼神に取り込まれた莫迦親父を救い出し、こいつを倒す方法は・・・――）」

と、その時だった。

ユーノの脳裏に突然ある人物の顔が浮かび上がり、その人物によって以前教えてもらった取って置きの技がこの絶望的な状況を打破する可能性を持っているということに気が付く。

「（！いや、まだある。“魔法”の力で奴に対抗する手段が・・・！）」

「ほおあああああああ！！！！！！！！！死ね！！！！！！！！」

鬼神はしぶとく攻撃を躱すユーノを見て、更に怒りを募らせながら身の丈以上の刀を振り下ろしてはユーノを追い詰めていく。

そんな中、ユーノはこの戦局を覆す唯一の魔法を発動するために必要なある禁忌の事を頭に浮かび上がらせ、思わず険しい表情となる。

「（だがそのためには、この闇の結界空間で一時的ではあるがあれを使わないと魔法の発動は不可能だ。あれを使うのは、正直言うと嫌だけど・・・――――やむを得ないか！）」

ユーノは苦渋の決断を下すこととなった。

鬼神の攻撃を躱しきり、地面に着地するとユーノは自分の首筋に徐に手を当てるとその状態から自身の中に封じていた禁忌の力を一時的に部分解放する。

「はあああああああああああ！！！！！！」

すると、ユーノの首筋に現れる黒い痣のような文様がユーノの体に途轍もない負荷を与え始める。

「！！！（やっぱ、こいつはキツイ！！！だけど！！！！）」

ユーノはその負荷に耐え切ると、結界を破る事に必死になっているなのは達に気づかれないように首筋に現れた痣を元に戻すと、封じられていた全ての魔力を解放する。

「これならいける！！！」

鬼神はユーノの全身から込み上げてくる翡翠に輝く魔力光を目の当たりにし、驚愕の表情を浮かべる。

「何だと！？我のこの空間の中で、魔法を行使するつもりか！？貴様一体何をした！いや、それ以前に貴様たちの魔法など、我の前には通じぬ！！！全てを闇に消し去ってやろう！！」

「僕は、最後まで父の尊厳をお前の中の莫迦親父に伝える為に戦い抜く！思い出させてやる。嘗ての莫迦親父にもあった父親としての尊厳を！」

そう言うと、ユーノは懐から嘗て自分がアンゴルモアの回収の際に助けた木之本桜の夫である、李小狼より伝授された魔法を発動する為に、五枚の札を取り出した。

「（小狼さん。あなたから教えていただいたこの魔法で、あいつに撃ちこみます！）」

ユーノが取り出したものを結界の外で見ていたなのはやフェイトは驚きの表情を見せ始める。

「札！？」

「何をする気なの！？」

ユーノが今からしようとしている行動の意図を全く知らないでいるなのは達を余所に、ユーノは取り出した札全てを空中に浮かび上がらせる。

「は！」

そして、自分の頭上に浮かぶ札の力を引き出すために仕込み杖を垂直に持って目を閉じながら中国語の詠唱を唱え始める。

「玉帝有勅　（ぎょくていゆうちょく）　神硯四方　（しんけんしほう）　金木水火土　（きんもくすいかど）　雷風　雷電神勅

（らいふう　らいでんしんちょく）　軽磨霹靂　電光転　（けいまへきれき　でんこうてん）　急々如律令　（きゅうきゅうにょりつりょう）！」

その瞬間、ユーノの足元に浮かび上がる李小狼が使うものと全くプログラム方式のミッド式とベルカ式の魔法陣とは全く異なる、自然のエネルギーを魔法に変換した中国式の魔法陣。

この光景を目の当たりにした途端、鬼神やなのは達と言った結界を破壊しようと奮闘していた者たちは大いに驚いた。

「！何！？」

「あの魔法陣は・・・！？」

「ミッドともベルカとのも違う・・・！一体あれは！？」

すると、なのはは逸早くユーノの魔法陣が小狼の使う中国式の魔法陣であると言う事実に気づき、表情を一変させる。

「あれって、確かさくらさんの夫の小狼さんが使う中国式の東洋魔法陣じゃ！」

「まさか、ユーノが！？」

驚愕するなのは達と、その後も中国式魔法陣を展開させ、頭上の札に魔力を送り込むユーノ。

「土珠（つちだま）（土）・火神（火）・風華・雷帝（木）・水龍（水）招来！五つの力よ、我が剣に集結せよ！」

五行思想にのっとったそれぞれに力を宿した札から現れる土の人形・火の神・風の華・雷の帝・水の龍がユーノが持つ金を司る刀に憑依し、仕込み杖の形状を大きく変化させる。

「あ！」

著しく形が変わったユーノの刀を見た一同は目を見開いた。

その形は、解放した晩翠のそれとは大きく異なり刀身全体に施された五行石と呼ばれる特殊な石の力で強化されたその刀は、見るものすべてを圧巻させる。

「形が変わった！？」

「あれは！？」

全員がその剣に注目する中、ユーノはその剣を両手で握りしめた状態で動揺する鬼神を余所に大きく飛び上がると、剣を構えて声を上げる。

「はあああああああ！！！！！必殺！！！！！！！！！」

「この魔法は・・・！！」

するとその瞬間、鬼神の頭上に飛び上がったユーノが持つ剣の先が伸長し、飛躍的に長さを増したその状態からユーノが技名を口にする。

「“五行奉神剣（ごぎょうほうしんけん）”」

ユーノは全ての魔力と想いの全てをその刃に乗せると、渾身の一撃を鬼神目掛けて振り下ろしたのであった。

「でらあああああああああ！！！！！！！！！」

飛躍的に長さを増したユーノの剣、五行奉神剣の斬撃が鬼神の体を切り付け、一太刀を食らった瞬間に鬼神は絶叫する。

「だあああああああああああ！！！！！！！！！！！！！」

「目を覚ませ！！！！！お父さん！！！！！！！！！！！！」

声を上げながら残っていた全ての一点に集中させるユーノの剣が、鬼神の厚い皮膚を斬り裂き最後には鬼神の体を見事なまでに一刀両断する。

「ば、バカな・・・！！！！我が闇が！！！！！！！！ぬあああああああああああああああああああああ！！！！！！！！！！！！！」

鬼神が五行奉神剣の一太刀をその身に受け、一刀両断されたことにより鬼神は憑代としていたホウスイと分離し、そのまま暗雲と共に跡形もなく消滅を果たす。

そして、鬼神と分離を果たし満身創痍となっているホウスイは消えていく暗雲の中に見え始めた太陽の光を仰ぎ見ながら心の中でこう呟いていた。

「（ああ・・・漸く思い出した・・・ずっと見たかった。ずっと見ていたかった。でもそれは手繰り寄せれば手繰り寄せるほどに、見

えなくなる・・・俺の隣にいた――――）」

自分の大きな過ちを深く悔いるホウスイはその太陽にも似た笑顔で嘗て自分を慕ってくれた息子、ジュンイチの笑顔と照らし出し思わず目に涙を浮かべる。

「（ジュンイチ・・・――――お父さん・・・・・・大きく道を間違えちゃったよ。お前のためといいながら、自分の為に関係ないものばかりを巻き込んでしまった。こんな駄目な父親だけど、お前は天の上でも何処でもいいから――――――――笑って見守ってくれるかい？）」

すると、そのホウスイの心の呟きに応えるかのようにホウスイの眼に決して姿を見せない筈の死んだ息子の笑顔が浮かんできた。

「勿論だよ、お父さん・・・――――」

ホウスイはそんなジュンイチの笑顔に思わず目を見開いて驚くが、その直後再び目に涙を宿らせた。

「（ああ・・・昔と変わらない・・・ずっと見ていたかった輝かしい・・・いい笑顔だ。）」

そして、ホウスイはユーノのフローターフィールドの上に徐に落下すると、太陽にも似た笑顔を見せてくれた天国の息子に向かってこう口にする。

「・・・――――ありがとう。ジュンイチ――――――――それから、ごめんな。」

鬼神を倒し、ホウスイを分離させることに成功したユーノは予め放り投げていた上着を拾い上げ、血塗れとなった表情のまま黙して立ち尽くしていると、解けた結界の外から元の姿に戻ったヴィヴィオが声をかけてきた。

「ユーノパパ・・・」

「？ヴィヴィオ。」

ヴィヴィオの声に反応したユーノが振り返ってみると、ヴィヴィオは今にも泣きだしそうな表情を浮かべると、そのままユーノの元へと飛び込みずっと我慢していた想いを涙と一緒に流し始める。

「う～～～～～うわあ～～～！！！！怖かったよ！！」

強くなるという目標を掲げ、極力泣くことの少なくなったヴィヴィオのこの光景を目の当たりにして思わず複雑な顔を浮かべたユーノだが、直ぐにそんな大事な娘を優しく抱きしめるといつもの優しい笑顔でこう語りかける。

「ほらほら、泣くんじゃないよ。それでも高町なのはの娘かい？強くなりたいって言ってなかったかい？」

「ぐっふ！だって・・・・・・だって・・・！！でも、ユーノパパが無事でよかった・・・！！」

そんな二人の様子を見ながら、クロノとなのはは二人に近づきユーノの状態を見てクロノがふと鼻で笑いながらこう言った。

「全く。相変わらずやることが派手だな。」

「なのは、クロノも。」

「だけど、凄かったよユーノ君。お疲れ様。」

「ああ。ところで、あの子供は？」

ユーノはふと、スドウ達に任せた重症患者の子供の事について尋ねると、なのはは笑顔を浮かべながらオペが無事に済んだという事実を伝える。

「大丈夫。スドウさんがオペを済ませたよ。」

「そっか。」

と、その時。

局員に連行されていくホウスイの姿を目撃したユーノだったが、そんなユーノを見たホウスイは柔らかくも非常に残念な気持ちを内包した表情で去り際にユーノにこう言い残した。

「もっと早く、あんたに逢いたかったぜ――――――」

「・・・――」

何も言い返すことなくユーノやなのは達は連れて行かれるホウスイの後姿を見つめるばかりであったが、ユーノ・スクライアはこの事件を通してホウスイ・テゼマが失っていた父の尊厳を取り戻したのだから――――――

番外編・子への想いと父の尊厳（後書き）

教えて、ユーノ先生！

ユ「今日は五行思想について教えよう♪」

一「五行思想って・・・随分小難しいこと説明できるのか？」

ユ「そう言うと思って、専門家を呼んできました♪小狼さん、お願いします！」

ユーノはそう言うと、五行思想に詳しい専門家の小狼を呼び出す。

小「よ、よろしく頼みます・・・！」

一「いいのかよ、勝手に連れて来て！？」

小「問題ない・・・！では説明しよう。五行思想は古代中国に端を発する自然哲学の思想で、万物は木・火・土・金・水の５種類の元素からなるという説だ。五行の互いの関係には、「相生」「相剋（相克）」「比和」「相乗」「相侮」という性質が付与されていて、これらによって自然界のバランスは保たれている。」

ユ「ちなみに言うと、さくらさんの使う西洋魔術と小狼さんの使う中国魔術はこの五行思想のバランスを上手く利用したプログラム方式である僕らの魔法とはまた勝手の違うものなんだ♪」

一「ふ～ん。で、何でお前はそんな勝手の違う魔法を仕えたんだよ？」

ユ「調べて判ったんですが、中国魔術というものは死神の鬼道の特性に非常によく似た性質を持っているんです。どうですか一護さんも死神代行から魔術師に転向してみては？」

一「結構だよ！大体俺はそんなに魔法というものが好きじゃねぇ！」

魔導師図鑑ハイパー！

クロノの気持ちを汲んだ一護と恋次は石田に連絡をつけると、クロノの為に格好いい服装を作って欲しいと要求する。

恋「と言う訳で石田。クロノがユーノに負けないようなカッコいい服装を考えてほしいんだが？」

ク「頼みます！！この通り！！」

石「何で僕が・・・大体、あなたも年下の僕にそんなみっともないこと頼まないでくださいよ。」

一「この際んな細かいこと気にするなよ、石田。あまりにクロノが悲しすぎてこっちが泣けて来るぜ。」

吉「ある意味では、コン君よりもいたいよね・・・」

石「しょうがないな・・・そうとなれば、僕だけの力で何とか出来るかどうか分からないから助っ人を呼ぶとしよう。」

一「助っ人？誰だよ。」

不思議がる一護達を余所に、石田が連れてきた強力な助っ人とは・・・さくらの親友であるカリスマファッションデザイナーの大道寺知世であった。

石「僕の友人でカリスマファッションデザイナーの大道寺さんだ！」

知「おほほほ。よろしくお願いしますねみなさん。」

恋「て、てめぇは・・・まさか木之本の！？」

一「何でコーナーが二つも続いてさくら関連なんだよ！？」

ク「あの！！よろしくお願いします！！」

知「お任せください。超絶素晴らしい服をデザインしますわ。」

石「頑張りましょう、知世さん！」

一「これでいいのか？」

クロノは、二人の手にかかってどうなるのか！？

続くのか・・・？

授業参観編

登場人物

ヴィヴィオのクラスメイト・教師陣

ミツオ・スドウ

声　―　柏倉つとむ
ヴィヴィオのクラスメイトで、小学生には似つかわしくない高価なものを持ち歩き、やたらと見せびらかして自慢することが多い。そのたびにコロナに言い負かされている。父親とは似ても似つかぬ虚弱な性格ゆえ、直ぐに泣いてしまう。

バウラ・ウシヤマ

声　―　石川ひろあき
ヴィヴィオのクラスメイト。将来の夢は本局武装隊のエースオブエース。体が大きく、力持ち。スポーツが好きだが、魔力運用と操作は苦手。

ノア・ギミエット

声　―　立野香菜子
ヴィヴィオのクラスを受け持つ担任教師。担当は現代魔法文。基本的に生徒の自主自発性をもっとうとする教育方針故に、放任主義的な性格の持ち主。

学院長

声　―　沼田祐介
Ｓｔ．ヒルデ魔法学院の学院長。十年前、ホウスイとは直接的では

ないが面識はある模様。いじめ問題を隠蔽した当時の決定に関して、今でも複雑な思いを抱く。

父親達

カゲミツ・スドウ

声　一　大塚明夫

ヴィヴィオの級友、ミツオ・スドウの父親。聖王教会付属の中央病院の敏腕外科医で、その腕前は「天才」と称される程。医師としての専門は外科だが、一般外科だけでなく特別な知識と技術の必要な心臓外科や脳外科もこなせる。外科以外にも、内科や眼科、薬学、果ては獣医学までも含めて医療全般に造詣が深くそれら専門外の治療も行うことができる。また、本編では暗闇の中での手術を成功させている。

エルザ・ティミル

声　一　神谷明

コロナ・ティミルの父親。ミッド上場株式市場を管理・統括する重役に着く反面、娘のコロナに対しては親バカ心丸出し。授業参観時の服装もＴＰＯを完全に無視したものであった。

トーマス・ウェズリー

声　一　下山吉光

リオ・ウェズリーの父親。格闘における戦闘能力に関してはエース級魔導師と比肩を取らないほどの腕前で、『春光拳』を自在に操る。トーマスとエルザとよく一緒に行動する模様。

ツヨシ・ウシヤマ

声　一　松山タカシ

バウラ・ウシヤマの父親で、寿司屋を経営する板前。威勢と気風と気前のいい江戸っ子調人物だが、息子・武に対しては少々親馬鹿気味。バウラからは少々「バカ親父」と言われる。

犯人グループ

ホウスイ・テゼマ

声　一　屋良有作

St.（ザンクト）ヒルデ魔法学院をジャックした犯人グループのボス。表面上は学校を占拠した上での身代金目的の犯行と追われていたが、実際はいじめが原因で死亡した息子の仇討ちだった。鬼神宿儺と呼ばれる邪悪なる力を体に宿し、その力で学校自体を破壊しようとしたところに、ユーノが現れ鬼神の力でユーノを倒そうとするが、逆に鬼神宿儺に体を乗っ取られてしまう。その後、五行奉神剣を受け、鬼神宿儺から解放され、管理局員に連れ去られていく中でユーノに「もっと早く、あんたに逢いたかったぜ」と言い残している。

技

凶闘気無限暗黒（きょうとうきむげんあんこく）

鬼神呪法と呼ばれる技の一つで、自らの肉体に宿らせた鬼神の力で己の邪気を呼び覚まし、それを波導に変換して撃ちこむ。

邪五行滅衰（じゃごぎょうめっすい）

五行符を横に並べ、灼熱の紅蓮の焔で全てを焼き尽くす。ユーノの激昂黒焔の前に呆気なく飲み込まれてしまい不発に終わる。

ケン

声　一　檜山修之

ホウスイと共に学校をジャックした犯人グループの一人。ホウスイの真の目的を知り、愛想を尽かして逃亡を果たす。

ゴリ

声　一　中井和

犯人グループの一人。体格と鼻の穴が大きいのが特徴。体育館でヴィヴィオ達の監視を任されていたが、隙をついたところをユーノに気絶され、乗り込んできたスバル達機動隊の前に泣きながら投降する。

マサ

声　一　石井真

犯人グループの一人。警備中の所をユーノの手刀を受け、気絶してしまう。

その他

鬼神宿儺（きしんすくな）

声　一　石川和之

頭部の表と裏に顔がある鬼。その昔、宿那山と呼ばれるとある次元

世界にある山の一帯で暴れていたが退治され、体をバラバラにされて宿那山に封じられていた。前の口から火を噴き、後ろの口からは突風や煙を出す。息子の仇を討たんとするホウスイの手で封印を解かれ、ユーノとの戦闘の最中にホウスイの体を乗っ取り、全てを闇に飲み込み破壊の限りを尽くそうとするが、最後は五行奉神剣を発動したユーノによって倒された。

ジュンイチ・テゼマ

声　一　佐藤ゆうこ

ホウスイの一人息子で、いじめが原因で死亡したＳｔ（ザンクト）．ヒルデ魔法学院の生徒。将来の夢は、父のような偉大な魔導師になって苦しむ人々を助ける事だった。過ちを犯し、自責の念に駆られるホウスイの心の中で笑顔を浮かべ許している。

昆虫が人間を喰らう

＞i19424―709＜

増殖したアンゴルモアによって新たに発見されたアンゴルモアもどきなる全くの偽物によって、今まで以上に捜査が難解となる中、今回も今回で機動六課はそれを踏まえてのアンゴルモア捜査の為に、訓練と捜索範囲を延ばしながら探索を続ける毎日を送っていた。

そんなある日、新たなるアンゴルモアの反応が確認され、詳しく調べてみたところ、今回のアンゴルモアの対象であるＡＭ体は体長三メートルを超える巨大な怪鳥であった。

怪鳥はアンゴルモアを体内に取り込むと、異世界各地を転々と渡りながらあろうことかミッドチルダへと侵入し、現在スターズ１・２、ライトニング１が猛スピードで飛行移動するＡＭ２１を追跡していた。

ＡＭ２１は巨体とスピードを活かしてミッドチルダの街を滑空するがあまりすぽいーどが速すぎるために衝撃が起こり風圧で辺りの物が抉りかえってしまう。

そんな現状を見ながら、なのは達は苦い顔を浮かべる。

「何てスピードだろう・・・！」

「たく。あんな化け鳥初めて見るぜ・・・どうする？」

「兎に角、あの鳥の体の中にアンゴルモアがあることは間違いないから何としてもここで食い止めないと。」

三人は怪鳥のスピードに負けじと、飛行速度を上げて怪鳥の後ろを追っていく。

すると、怪鳥は三人の気配を感じると一度旋回してから助走をつけると、一気に加速してなのは達三人の方へと突進してきたのだ。

「「「な！」」」

突然の方向転換とスピードの速さに咄嗟の回避が間に合わなかった三人は怪鳥の突進のをその身に受けて地面の方へと落下していく。

「「「ぐあああああ！！！！！」」」

三人が堕ちてくる様子を地上の方で待機していたユーノ達が直ぐに回収に向かい、鬼太郎・浦太郎・白鳥の三人が飛んできた怪鳥の方へと向かっていく。

「野郎！！」

「先輩！白鳥さん！行くよ！」

「「おう（了解である）！」」

三人は怪鳥の方へと視線を向けると、それぞれの武器を取り出し渾身の一撃を怪鳥の体目掛けて放った。

「琴線斬、鼓瓜田！」

「俺の必殺技パート2！」

「ウォーターホイッパー！」

音撃による衝撃波と霊力の火炎弾、更には魔力による高圧水流の鞭が一斉に怪鳥の正面へと放たれた。

しかし、怪鳥は三人の攻撃を巨体であるそれを無視した華麗な動きで容易に躱すと構うことなく三人の方へと突進していく。

「「「の！？」」」

怪鳥が突進してくると、三人は避けようとするのだが怪鳥の動きの方が一枚も二枚も上手であり、なのは達同様後ろの方へと吹き飛ばされてしまう。

「「「うおおおお！！！！！」」」

「浦太郎教官！」

「白鳥さん！鬼太郎さん！」

飛ばされてきた三人を見かけたスバルやティアナ達フォワードが直ぐに駆け寄り、三人の傷を確認する。

幸いにも、傷はそこまで深くはなかった模様だが六課の全線メンバーはＡＭ２１逃走を許してしまう事となった。

鬼太郎は怪鳥を逃がしてしまった事に舌打ちをして悔しがる。

「くそ！」

「逃げられたぞよ。」

ティアナ達は飛んで行った怪鳥の後姿を見ながら、冷静にこう語り出す。

「相手が巨体な上に、速すぎますよ・・・！」

「ここは体勢を立て直しましょう。」

「仕方ねぇ。なのは達は無事か？」

その場にいた恋次がそう言うと、ちょうどスクリーンに映し出されるユーノや金太郎に助けられたなのは達の姿。

『はい。こっちは大したことありません。』

『私たちの方も不覚だったぜ。』

なのは達の無事な姿を見て一安心したフォワード一同。

そして、ルキアは全員に隊舎に戻る事を促す。

「取りあえず、戻って作戦会議だ。」

全線一同はこれからの作戦を練り直すため、一度その場から退き機動六課隊舎へと向かった。

だが、このとき彼らは知らなかった。

この怪鳥の出現が単なる地獄絵図のような出来事の単なる序章に過ぎなかったと言うことを――――――

その日の午後。

学校を終えたヴィヴィオは級友であるリオ・ヴィズリーと中等部に所属するヴィヴィオにとっての掛け替えのない親友で同じ虹彩色の眼を持つ「覇王イングヴァルト」の末裔、アインハルト・ストラトス、本名ハイディ・Ｅ・Ｓ（アインハルト・ストラトスの略）・イングヴァルトと共に現在の自宅でもある六課隊舎へと向かい歩いていた。

ヴィヴィオはリオに奇妙なものが入っていると思わしき段ボール箱を持たされ、少々不機嫌そうな表情でリオにこう言った。

「ちょっと、人に荷物運びまでさせて・・・何が入ってるかぐらい教えなさいよ。」

「いいから、いいから♪それは後のお楽しみ♪」

不機嫌なヴィヴィオとは裏腹に終始笑顔のリオ。

そんな中、アインハルトはヴィヴィオに向かって恐る恐るこう尋ねる。

「それにしても、ヴィヴィオさん。本当にお邪魔してもよろしいのですか？」

「大丈夫ですよ♪なのはママもユーノパパもそうですし、六課の人達はみなさんいい人ばっかりですから。」

先ほどまで不機嫌な態度のヴィヴィオも、アインハルトの前では態度を一変させて満面の笑みでそう答え、それに便乗してリオも六課の隊舎に向かうことを促す。

「そう言う事。さ、レッツゴー！」

リオがヴィヴィオに持たせた段ボール箱には一体何が入っているのか？

だがしかし、この段ボールからあの世にも恐ろしい事態が引き起こされようとはこのときユーノ達も、そしてこの三人も思ってもいなかっただろう。

その頃、隊舎の司令室の方では前線メンバー一同が集まり昼間ミッドに出現した謎の怪鳥、ＡＭ２１が何の目的で異世界をあちこち移動しているのか、またその移動速度がどれほどのものなのかをじっくりと検討していた。

鬼太郎はモニターに映し出される怪鳥の姿を見ながら全員に尋ねる。

「結局、この鶏ガラ野郎の目的は何だったんだ？」

「まるで見当がつかなぬ。」

腕組みをしながらそう答えるルキア。

他のメンバーもつまるところこれといった理由も分からずルキアと同じように腕組みをしながら頭を抱えるばかりだ。

そんな中、なのははユーノにあのＡＭ２１のスピードがどれ程のものなのかを尋ねる。

「ねぇ。あの鳥のスピードは正直言うとどれぐらいなの、ユーノ君？」

「計測してみたところ、あの怪鳥の飛行速度はマッハ８、つまりは時速９７９２キロ。もしくはそれ以上だよ。」

このスピードがどれほどのものなのか？

具体的な例を取って説明すると、地球でアメリカ軍が極秘に開発したと噂されるオーロラ　と呼ばれる戦闘機体の最大速度がマッハ５以上での極超音速飛行であることから、あの怪鳥はステルス機並みの音速で滑空することが出来ると言う事である。

その事実を聞いた恋次や吉良は思わず苦い顔を浮かべてしまう。

「おいおい・・・音速を超えてるってのかよあいつは・・・」

「これは捕まえるのは至難の業だね。」

手で覆い隠すように顔に手を当てる恋次や鬼太郎。

すると、その時司令室のドアが唐突に開くや否やダンボール箱をその手に抱えたヴィヴィオがリオとアインハルトを連れてなのは達の元へとやって来た。

「ただいま。」

「あ、ヴィヴィオおかえり♪」

「お邪魔します。」

「どうも♪」

ヴィヴィオの後に続く形ではにかんだ表情でアインハルトが礼儀正しく挨拶を済ませ、リオは軽い感じで返事をする。

ヴィヴィオがアインハルトを連れてきたと言うことに関して、意外そうな顔を浮かべるユーノや他のメンバー。

「何だ。アインハルトさんもご一緒だったんだ。」

「元気そうだね、アインハルトさん。ヴィヴィオがいつもお世話になってます。」

なのははアインハルトの元へと近づき、屈託のない笑みでそう言葉を口にするとアインハルトは照れた様子で返事をする。

「あ、いえ・・・どうも。こちらこそ・・・！」

ヴィヴィオは重い段ボール箱を適当な場所へと置き、深いため息をつく。

鬼太郎はその箱を見ながら何気ない気持ちでヴィヴィオに尋ねる。

「おい、その箱はどうした？」

「実は、ユーノパパにちょっと見てもらいたいものが入ってるらしくて、この箱に。」

「僕に見てもらいたいもの？」

訝しげな表情でそう口にするユーノ。

そんなユーノにリオは手を合わせながらユーノに要求する。

「お願いします。博学のユーノ先生なら、これのことも分かるんじゃないかと思いまして。いいですか？」

「構わないよ。僕で分かるものならいいけど。」

柔らかない表情でリオの要求を飲んだユーノは早速段ボール箱の方へと近づき、他のメンバーも気になったのか一度会議を中断させてその箱の方へと近づく。

「で、何処で見つけてきたのこれ？」

「公園で見つけて来たんですよ。」

「どうせ碌なもんじゃねぇだろ？」

「失礼なこと言わないでくださいよ。」

鬼太郎の言葉に些か頭に来たリオは、そう言いながら徐に箱の中を開ける。

そして、一同がその箱の中身を見た途端、真っ先に絶叫したのはフェイトであった。

「ひ！ひゃあああああああああああ！！！！！！！！！！」

フェイトはこの世のものとは思えない不気味なものを見たかのようなリアクションを取ると、そのまま後ろへと体を縮みこませながらひっくり返り、危ないと感じたクロノが咄嗟にフェイトの後頭部をかけて床への直撃を避ける。

「ふぇ、フェイト！？大丈夫か！？」

その一方で、ユーノやなのは、恋次達はフェイト程ではないがあまりに常軌を逸した箱の中の生き物に驚愕していた。

「何だ、これは！？」

「うえええ！！！キモ！！！」

「色んな意味で凄いよ、これは・・・！」

無限書庫や様々な異世界で遺跡発掘をしてきた博学で知られるユーノもリオが持ってきた箱の中の生き物は見たことがなく、興味津々にそれを覗いていたがそのユーノ以上にその生き物を凝視して、驚嘆と同時に歓声を上げたのは白鳥であった。

「素晴らしいぞよ！」

「「「「「え！？」」」」」

「「「「「「「「「うそ！」」」」」」」」」

白鳥が放ったその言葉を聞いた一同は思わず耳を疑った。

白鳥の性格から考えると、絶対箱の中の生き物は白鳥が褒めるような姿の生き物ではないと確信していたからだ。

だが、白鳥はそんな全員の予想に反してすばらしいと口にした。

それで、その白鳥が称賛したその生き物とは・・・三つの赤い目を持ったエメラルドグリーンに体を染める何本もの角が体に生えた芋虫であった。

勿論こんな姿の芋虫はミッドチルダでも見たことがない。

白鳥はその芋虫を拾って来たリオに向かってこう言った。

「この色、この体、本当に素晴らしいぞよ！！リオ！！」

「へへへ！喜んでもらえてよかったです！」

「何処かだよ！？」

思わず突っ込みを入れてしまう恋次。

スバルとティアナは初めて見せる白鳥の違った一面に困惑する。

「ティア・・・白鳥さんって、こんなキャラだったっけ？」

「私に聞かないでよ・・・」

白鳥が芋虫に興味を示し、褒め称える中フェイトはそのまま目を回した状態で身体を硬直させて動けなくなっていた。

心配になったヴィヴィオがフェイトに声をかける。

「フェイトママ・・・大丈夫？」

しかし、一向にフェイトは目を覚ます気配は見せない。

ため息をつきながらはやてとシグナムは同じ結論に達する。

「これは当分目を覚ましそうにあらへんな。」

「仕方ない。シャマルの所にでも連れて行くとしよう。エリオ、すまないが手伝ってくれぬか？」

「あ、はい！」

シグナムと一緒にエリオは目を回した状態のフェイトの肩を担ぐと、そのまま医務室で仕事をしているシャマルの元へと運んで行った。

その間に、恋次は白鳥の可笑しな考え方に疑問を投げかける。

「おい、白鳥。お前どういう神経してるんだよ！？こんな気色悪い

もの、何で賞賛できるんだよ!?俺には到底理解できねぇ・・・!」

「気持ち悪いから早いところ捨てろよ!私はそんなと一緒に仕事するの嫌だぞ!」

「賛成!」

「うん!」

ヴィータのその言葉を皮切りに、浦太郎やクロノも便乗してくるが白鳥は断固捨てるという考え方を示す他のメンバーと反対の姿勢を見せる。

「何を言っておるのだ、お主ら!捨てるなどとはとんでもない。これは、人類学史上世紀の大発見であるぞよ。そうであるな、ユーノ店長?」

「え?そこで僕に振るんですか?!」

思わぬ白鳥の無茶ぶりに、どう返事をしていいか分からなくなるユーノ。

そんなユーノを余所に、白鳥は弁解を続ける。

「考えてもみるがいい。未知の新種か、環境破壊がもたらしたゴジラのような突然変異か?兎に角、じっくりと調べてみる必要がありそうだ。これは私が責任を持って預かる。無論仕事場には持ってこない。それならいいであろう?」

「いや・・・確かにそれならええですけど・・・せやけどな・・・」

白鳥は迷惑をかけないということを前提に自分が芋虫の管理を行うと言ってきたが、それでもなお、はやてや他のメンバーの心境は複雑だった。

すると、白鳥はこの芋虫を研究してみないかとスバルやティアナに尋ねてきた。

「どうである？スバルやティアナも私と一緒に研究でもしてみぬか？」

「い、いや・・・！私は結構です・・・！」

「同じくです！」

「では、ギンガ・・・」

「私もやめておきます！」

即答で遠慮の姿勢を見せるスターズの三人であった。

その時、恋次がある提案を持ちかける。

「それよかよ、ペットショップにでも買い取ってもらった方がいいんじゃねぇのか？」

「成程。その方が経済的且つ専門の業者に任せておけるか。」

「恋次しにてはいい考えだ！俺も賛成！」

「私も右に同じだ。」

恋次の考えに乗った吉良・鬼太郎・ルキアの三人であったが、白鳥は深いため息をつきながらスケールの小さい恋次達に向かってこう語る。

「お主らは・・・何ともスケールの小さいことよ・・・小市民には分からないかもしれぬが、これは男の浪漫(ロマン)なのだぞ！博士号だって、夢ではないのだぞ！」

「博士号を取るつもりなんですか、白鳥さん。」

意外過ぎる白鳥の野望に思わず呆然としてしまうなのは。

「凄いですね・・・ねぇ、ユーノパパも協力してあげたら？博士号ひょっとしたら一緒に取れるかもしれないよ♪」

ヴィヴィオも白鳥に協力するようユーノに提案するが、ユーノは苦笑いを浮かべながらある意外な事実を口にする。

「いや・・・生憎“博士号”なら既に2・3個は持ってるんだよね・・・」

「「何！！！！！」」

その場にいたクロノと白鳥がユーノの仰天発言に度肝を抜いてしまう。

ちなみに、ユーノが取得している博士号とは無限書庫司書長としてのものと、ミッドチルダ考古学会のもの、そしてミッドチルダでも

一番の学力を有するものが通う最高学府のものの三つである。

芋虫の話で盛り上がった後、外回りに出かけた鬼太郎と浦太郎は白鳥の常軌を逸した自分達には全く理解できない範疇の話に呆れかえっていた。

「全く！鳥には付き合いきれねぇぜ！！」

「芋虫と一緒に謳歌する青春なんて、僕には想像もつかないよ・・・・・お！」

その時、浦太郎の目つきが急に鋭くなった。

「あ？どうしたよ。」

気になった鬼太郎が浦太郎にそう尋ねると、二人の目の前に映ってくる大学生ぐらいだと思われる容姿端麗な二人の女性。

「宿題終わったら、遊びに来ない？」

女性の一人がそう尋ねていると、浦太郎は自分の本能を抑えきれなくなると鬼太郎に外回りを任せてナンパを決行することにした。

「じゃあ、先輩♪僕は女の子と青春を謳歌するから♪僕に釣られてみる、そこの子猫ちゃん～～～♪」

浦太郎の相変わらずの悪い癖に白鳥の今回の行動と同じぐらいに呆れかえってしまう鬼太郎は頭を抱える。

「はぁ～～～エロ亀にも付き合い切れるか。さっさと外回り終わら

せておやつのプリン食ようっと・・・」

鬼太郎は浦太郎を置いていくと、真っ直ぐ外回りを終わらせるために前進していった。

しかしながらこのとき既に、鬼太郎や人々の知らない所でＡＭ２１による恐るべき恐怖の侵攻が着実に芽を出そうとしていた。

町中の至る所に巣を張った奇妙且つ不気味な薄い褐色色の卵。

その卵の殻を破り、昼間リオたちがが六課へと持ち込んだあの芋虫と全く同じものが小さい姿で出てきたのだ。

管理局や町中に住む人々はこの事実に未だ気づいてはない。

果たして、この現象が指し示すものとは何なのか？

その日の夜、白鳥は芋虫を寮の自分の部屋へと持ち帰ると、芋虫を透明なケースの中へと入れ、棒でつっつきながら愛らしく芋虫と戯れていた。

時折見せる可愛らしい動きに思わず破顔一笑する白鳥。

「ふふ。可愛いものだな。」

白鳥は今日の観察データを事細かくコンピューターに打ち込むと、芋虫を別室に移してから部屋の電気を消し、御休みの挨拶をすませる。

「じゃあ、また明日会おう。」

ドアを閉め、寝室へと向かった白鳥だったが、芋虫は真っ暗なその部屋のケースの中で赤い目を光らせると、白鳥や他の局員に一切気づかれることなくある行動を起こし始めるのであった。

時折、夜中に聞こえてくるバリバリという音が全てを物語っていた。

翌日、いつも通りに朝練に向かうスバル達六人のフォワード陣の何気ない談笑から今日も一日が始まる。

「おはようございます！」

「おはよう！今日も元気にやるぞ！！」

「スバル、寝癖がまだ直ってないわよ。」

「あ、いっけな～い！」

フォワード陣はいつも通りの朝を迎えていたが、白鳥ただ一人だけは朝起きて芋虫の置かれた部屋へ向かうと、そこで衝撃的な光景を目の当たりにする。

「な！居ない！居なくなってるぞよ！！」

芋虫は忽然と白鳥の前から姿を消していた。

それだけならまだしも、何よりも衝撃的だったのは芋虫が入っていたケースを始め周囲の机から床まで、至る所が何者かに抉り取られたかのように喰われていたのであった。

「何だこれは・・・なぜこのような事態に・・・・！？」

白鳥はこの状況を見て、直ぐにあの芋虫に原因があるではないかという判断に達する。

「これは・・・まさかとは思うが、あいつの仕業なのか？」

すると、その時偶々白鳥を呼びに来た鬼太郎が部屋に入ってくる。

「鳥！」

「ピーチ！大変である！あいつが・・・あの芋虫が、居なくなってしまった！」

鬼太郎も白鳥の部屋の有様を見て思わず目を疑った。

「何だこいつは！？泥棒がやったって言うにはあまりに下手すぎるしな・・・本当にあの芋虫がやったのか？」

「恐らくな・・・」

と、その時。

「やっぱりそうか。」

「「！？」」

二人の元に気配すら感じさせることなく忽然と姿を見せた神妙な表情のユーノ。

「店長！それって一体！？」

すると、ユーノは鬼太郎と白鳥に大至急司令室に集まると言う旨を伝える。

「ちょっと、二人とも急いで司令室に来てほしい。」

「何？」

「いいから、早く！」

いまいち状況が掴めないでいる二人であったが、一先ず急いで司令室の方へと向かったのであった。

その頃、司令室の方では朝練を終えたばかりのなのは達全員が既に結集しており、そこで彼らはスクリーンに映し出されるある映像に目を疑っていた。

暫くして、ユーノと共に白鳥と鬼太郎が司令室の中へと入ってくる。

クロノは白鳥たちが来たことに気づく。

「お、来たか。」

突然呼び出された白鳥は事情の説明を要求する。

「何の騒ぎであるか？」

「これを見てください。今日、リアルタイムで流れた町の異変です。」

ユーノはそう言うと、タッチパネルを操作して今朝方のニュースで流れたとある映像をクローズアップした。

その映像を見た瞬間、白鳥と鬼太郎は目を見開いた。

「「な！」」

モニターに映し出されたのは、ミッドチルダにあるとある学校内に建てられた記念の銅像が抉られたかのように無残に喰われた光景であった。

「これは・・・」

「どう思います？」

ユーノがそう尋ねると、白鳥はその映像と自分の部屋の有様を比較して、確信した表情を見せ断言する。

「間違いない。あいつの仕業であろう。」

「じゃあ、本当にあの芋虫が？」

話を聞いていた他のメンバーも些か信じられないではいたが、この映像を見る限り信じるほかなかったのであった。

キャロは食べられた銅像を見ながら、ふとこう呟く。

「それにしても、こんな銅像まで食べるなんて・・・凄いですね・・・」

「感心してる場合か。それよりも、白鳥。貴様がちゃんと管理をしなかったからこのような忌々しき事態を招いてしまったのだぞ！」

白鳥の管理責任能力の甘さに怒りを露わにするルキア。

吉良はそんなルキアを宥めながら冷静な口調でこう語る。

「まぁ、朽木さんも落ち着こう。兎に角、僕らで手分してあいつを探し出そう。これ以上被害が拡大する前に。」

「せやな。六課前線メンバーは各部隊に分かれて、消えたあの芋虫の捜査に乗り出してほしい。万が一あの芋虫が襲って来た場合は、止むを得ない。殺処分の方向で事態に当たって欲しい。」

「「「「了解。」」」」

「「「「「はい！」」」」」

なのは達は早速デバイスを持つと、それぞれの分隊ごとに分かれてミッドチルダを広範囲を虱潰しに当たりながら消えた芋虫の捜索を開始。

浦太郎・鬼太郎・白鳥の三人は初めて被害が確認されたとある学校の周辺を念入りに捜索していた。

「くそ！あの野郎、何処に行きやがった！？」

「何故このような事態になってしまったのだ？」

「他人事みたいな言い方するんじゃねぇよ！元はと言えば鳥の管理責任が杜撰だからって言ってるだろうが！！」

「先輩、少し抑えてよ。怒っても仕方ないって！」

「けどよ！」

と、その時。

校舎の方に設けられた女子テニス部の敷地から部員らしき女子生徒の叫び声が三人の耳元に聞こえてきた。

「「「きゃあああああああ！！！！！！」」」

「「「！？」」」

叫び声が聞こえてきた方向に目を向ける三人。

「この声は・・・！？」

「あっちだ！」

三人は急いであの芋虫と何らかの関係があるのではないかと思い声のする女子テニス部の敷地へと向かって走り出す。

その中で、女子テニス部の部員数名は着替えている最中であったらしく下着を見られないよう隠しながら部室から逃げて生きながら声を上げ続ける。

「きゃあああ！！！誰か！！！！！！！」

ただ事ではないと感じた浦太郎達三人が女子生徒の元に駆け寄ると、直ぐに事情を聞きだす。

「どうした?」

「着替えてたら、いきなり・・・!」

「痴漢か!?」

鬼太郎がそう聞くと、女子生徒は首を横に振りながら次のように口にする。

「うんうん!ば、化け物が・・・!!」

「「「化け物!?」」」

口をそろえてその言葉に耳を疑う三人。

三人は女子生徒の話を信じることにすると、その化け物が現れたらしい女子テニス部の部室へと向かい、厳戒態勢のもと恐る恐る部室の中へと侵入する。

そこで彼らが目撃したのは、化け物・・・もとい芋虫によって壁からロッカーやらありとあらゆるものを食し、抉り取られた無残な光景であった。

「この食欲・・・・・・奴め・・・・・・どんな胃袋をしてるのさ!?」

浦太郎が目の前の光景と芋虫の食欲に険しい表情を浮かべていると、白鳥が物質の中である痕跡を発見する。

「浦太郎。これを見て欲しい！」

「ん、それは！？」

白鳥が手に取ったのは芋虫の抜け殻らしき巨大な皮であった。

「キャストオフの痕のようだ・・・」

「キャストオフ！？脱皮だって・・・だけど、その大きさは・・・」

「おお・・・！」

その時、鬼太郎も部室の中で何かを発見し声を上げる。

「先輩！？」

「この大きさは・・・！」

恐る恐る鬼太郎が手に取るもの・・・それは恥ずかしいことながら偶々部室の中に置き忘れられていた女子テニス部員のブラジャーであった。

それを見た瞬間、白鳥は鬼太郎の頭に手刀を入れる。

「バカモン！」

「いってええ～～～！！！鳥、何するんだよ！」

「この非常時に何をふしだらな。」

白鳥が真面目な表情でそう口にする中、浦太郎はその白鳥の横でとんでもないことを口にする。

「先輩、そう言う羨ましいことを一人でやらないでよ。」

浦太郎の言葉を聞いた瞬間、白鳥は鬼太郎と同じく浦太郎にも手刀を食らわす。

「お前も何を言っとるか！」

「痛い！」

思わず撃たれた箇所を手で押さえる浦太郎。

するとその時、部室の天井から奇妙な音が聞こえてきた。

「「「？」」」

三人がその物音に耳を澄ませていると、天井から聞こえてきた音は徐々にはっきりと大きくなっていく、更には削られた天井の破片までもが降り注いできた。

嫌な予感を感じ始める三人。

と、その時。

三人に嫌な予感が的中し、部室の天井が一気に崩れ落ちてきた。

「「「うわあああああああ!!!!!」」」

間一髪のところで部室から逃げ出すことが出来た三人。

「一体何だって言うんだよ!?」

「あ、あれを!」

白鳥が驚愕の表情で部室の上の方を指さすと、浦太郎と鬼太郎が煙の晴れた先に見たのは昨日六課に運ばれてきたあの芋虫ではあったが、その大きさは既に建物と同じかそれ以上にまで成長していた。

この光景には鬼太郎も浦太郎も信じたくなかった。

「ま、マジかよ・・・!!」

「たった一晩で・・・こんなに!?」

芋虫は三人に威嚇をするかのように不気味な鳴き声を上げ牙をむく。

「行くよ!先輩、白鳥さん!」

「おう!」

浦太郎はそう言うと、フィッシャーマンを取り出し鬼太郎も烈火を取り出す。

だが白鳥だけは未だ躊躇した様子でこう言った。

「ま、待ってほしい！」

「ああ？何でだよ！」

「白鳥さん、あなたね！」

「これは、天然記念物と同じく貴重な生物なのだ！それに、何故こんなに早く・・・しかもこんな巨大に成長したのか・・・・・・もっと詳しく調べねば！」

「無茶苦茶言わないでくださいよ！あいつはただの人食い芋虫なんですってば！」

「そうだ！そこを退け、鳥！！」

「嫌である！」

真っ向から意見が食い違う白鳥と浦太郎達は互いに睨みあったまま膠着状態を続ける。

すると、そんな三人を見ていた巨大芋虫は部室の天井を食べるのを止めると、標的を浦太郎達三人に変更して襲い掛かってくる。

「「お！！」」

「あ！」

巨大となったその体と凶暴さを増したその口を大きく開けて浦太郎達を丸呑みにしようとする芋虫。

「「「わあああああ！！！！！」」」

絶体絶命の三人。

だがその時、気配を感じて逸早く瞬歩で駆けつけてきたユーノは三人の目の前に現れると杖から晩翠を引き出す。

「何してるの、三人とも！」

晩翠を解放すると、ユーノは芋虫の体目掛けて翡翠斬を放つ。

「輝け、晩翠！」

翡翠斬を直撃すると、芋虫は首を落とされそのまま動かくなった。

目を瞑っていた三人が徐に目を開けると、そこには既に息絶えた芋虫の首が転がっていただけ。

「「「あ！」」」

そして何よりも、ユーノがその場にいたことに驚愕する。

「て、店長！」

「先に行くよ！」

ユーノはそう言うと、それだけを言い残すと瞬歩で町の方へと向かった。

ユーノが居なくなった後、鬼太郎は白鳥の胸ぐらをつかみながら文句をぶつける。

「このタコ！！！俺達を餌にするつもりかよ！？」

「しかしであるな・・・！」

「おーい！」

いがみ合う二人であったが、その時向こうの方から恋次・ルキア・吉良の三人が浦太郎達の元へと駆け寄ってきた。

「何やってるんだよ、こんな所で！？」

「いや、僕らはその・・・色々あってですね・・・」

「色々って、ここ明らかに女子テニス部の更衣室前だよな・・・？」

「ば、馬鹿野郎！そんないやらしい目的で来たんじゃねぇよ！！」

「ふん。どうだかな！」

恋次はどうも信じられないとばかりの表情で三人を見つめるが、その時ルキアが間に入り込むとあることを語り出す。

「それよりも、大変だ。出たのだ！あの芋虫の化け物が！」

「ああ・・・それなら、たったいまここで・・・」

些か悲しそうな表情で答えようとする白鳥だったが、吉良がその後

すぐに信じられない言葉を発する。

「違うよ。町に出たんだ！しかも、何十匹もうじゃうじゃと！」

「「「何！？」」」

三人はその言葉を聞いた瞬間、目の色を変えた。

その頃、町に出現した巨大芋虫の大軍はミッドチルダに車から電柱と言ったありとあらゆるものを食らいながら凄まじい速度で成長を続けていく。

この忌々しき事態を六課の司令室のモニターで見ていたはやてとクロノは重い腰を上げる。

「何ということだ・・・！」

「まさかこんなことになるなんて・・・！」

管制室のシャーリーはその映像を見ながら、被害によりもたらされる最悪の顛末を口にする。

「推定、巨大芋虫の数は百体を超えています・・・！このまま被害が広がれば首都は全て芋虫に食されて跡形もなくなってしまいます！！」

事態を重く見たはやては隣のクロノにこう告げる。

「クロノくん。第一級警戒レベルを発令するで！」

「ああ。」

はやては首都全域に広がる前線メンバー全員に指令を送る。

『機動六課前線メンバー各位に次ぐ。現在ミッドチルダ首都全域に出現した巨大芋虫は町中のありとあらゆるものを貪り食い尽くしている。このまま被害が拡大すれば、間違いなく首都は壊滅。そうなる前に、何としてもここで食い止めるんや。隊長陣のリミッターは常時解放する。全力全開で死守するんや！』

「「「了解！」」」

「おう！」

「行くよ、みんな！」

「「「はい！」」」

「準備はいい？」

「「「はい！」」」

なのは達はデバイスを取り出すと、芋虫の駆除に当たるためにそれぞれの相棒の力を解放する。

「セットアップ！」

こうして始まる地獄絵図にも似た芋虫対人間による熾烈な争い。

その様子を一目のつかない所でアンゴルモアの力を押さえながら高

いところで見守る怪鳥、ＡＭ２１。

一体、この怪鳥が狙う真の目的とは何なのか?!

では、芋虫退治の様子を適当にクローズアップしながら見ていくことにしよう。

まず一匹の芋虫が環状線の線路上に現れ、走行してくる列車の目の前で口を明けながら列車ごと飲み込もうとしていた。

機関士はその光景に恐怖を覚え、急いでブレーキを踏もうとするがスピードがスピードだけに急には止められない。

「うわあああああああ!!!!」

最早絶望的だと思われたその時、芋虫を追って来た鬼太郎が烈火を振るい芋虫目掛けて攻撃を仕掛ける。

「させるか!!俺の必殺技パート５!」

間一髪のところで芋虫を焼き尽くすことが出来た鬼太郎。

列車は芋虫の被害を受けることなくそのまま前を通り過ぎて行った。

また、別な場所では浦太郎が大量に現れた芋虫の大軍を前にカートリッジをロードし、槍の先から巻き起こす波濤で芋虫たちを一掃する。

「ウェーブ・コンサバティズム!」

それにより、一気に芋虫たちが波濤に飲み込まれていく。

一方で白鳥も白鳥で車を食する芋虫の元に現れると、解放した琴線斬の音色を奏でる。

「『滅亡輪廻』！」

その音色を耳にした瞬間、芋虫は体を破裂させて青い血を流す。

その他の場所でも依然芋虫の侵攻は続いており、商業施設の屋上へと逃げ込んできた人々は後ろから追いかけてくる芋虫の恐怖におびえていた。

「きゃあああ！！！助けて！！！！！」

容赦なく人々の元へと近づいてくる芋虫の前に、金太郎が現れブラッドカートリッジを使用してからダイナミックハリケーンを発動させる。

「ダイナミックハリケーン！！」

凄まじい突風によって、芋虫たちは切り刻まれバラバラとなる。

そして、昨日芋虫を見つけ出し六課へと持ち込んできたリオ・ヴィズリーもまた巨大な芋虫が口から出す糸に絡め取られ動けなくなっていた。

「うわあああ！！！！た、助けて！！！！」

すると、その時ユーノがリオを助けるために翡翠斬・八千刀を芋虫

の背後より仕掛ける。

「翡翠斬・八千刀！！」

ユーノの斬撃をもろに喰らった芋虫は斬り裂かれ、動かくなるとリオを絡め取っていた夷とも解け、リオは目の前にいるユーノの姿に驚愕する。

「うわあ！？ヴぃ、ヴィヴィォのお父さん・・・！？」

「大丈夫かい？」

「は、はい。何とか。」

ユーノはリオの手を優しく握りながらその場に立たせると、安全な場所へ避難するようにと告げる。

「ここは危険だ。あっちのほうが安全だから、早く逃げるんだ。」

「はい！ありがとうございます！」

リオは言われた通りに安全な場所へと一目散に逃げ出していき、ユーノはそのまま次の芋虫を駆除する為に飛び去っていく。

その後も各地で繰り広げられる前線メンバーによる芋虫退治。

「リボルバーシュート！！」

「蛇尾丸！！！」

「ブラストレイ！」

「次の舞・白漣！」

「エクセリオンバスター！」

各々がそれぞれの得意技を駆使しながら町中に散布された芋虫の大軍を相手にするが、数が圧倒的であったために斃しても倒してもキリがないと言う状況であった。

そんな先の見えない戦局に四苦八苦しながら集まった全員は互いに背中を合わせながら周りに現れた芋虫の大軍を見て、険しい表情を浮かべる。

「これじゃキリが無いですよ！」

「一体どこから湧いて出たんでしょうか？」

すると、白鳥はそんな困惑した様子の全員に向かって次のような推論を口にする。

「ゴジラ同様環境破壊が生み出した、突然変異・・・きっとこれは、文明に頼り過ぎ進化を止めようとしなかったこの世界を始めとする人類に対する大自然からの警告に違いない！だとしたら、この問題を解決する方法はただ一つだ！」

「それは一体！？」

ギンガがそう口にすると、白鳥は衝撃的な言葉を発する。

「あいつらを捕獲して、原因を究明するしかない！」

「な！捕獲だと！？」

その場にいた全員が驚愕する中、この期に及んでこのようなことを口にする頭に来た鬼太郎と浦太郎は白鳥に詰め寄る。

「てめぇ！！まだ懲りてないのか！？」

「奴らは警告どころか、人類にとっての脅威・・・いや、天敵なんですよ！！」

「し、しかし・・・！」

と、その時吉良が空中の方で何かを目撃する。

「！？見ろ！」

全員が空を見上げてみると、目の前に映ってきたのはあからさまな形をした飛行物体、即ち円盤であった。

「あの円盤は・・・！？」

「おいおい！芋虫の次は宇宙人まで出やがったぞ！どうなってるんだ一体！？」

だがその時、ユーノはその現れた円盤が何やら奇妙な行動をとり始めていることに気づく。

「あれ？何だ・・・様子がおかしいぞ。」

何と、その忽然と出現した円盤は光線のようなものを芋虫に向かって降り注ぐと、そのまま貪り食い尽くしている芋虫を自身の円盤へと回収していったのだ。

「何！？」

「芋虫を捕獲している！？」

「どうなってるの！？」

円盤の行動に訝しげな様子となる一同。

すると、なのはは新たに現れる円盤に気づく。

「！また来たよ！」

数を増やして出現する円盤だったが、やはり目的は最初の円盤同様芋虫を回収する事であり、なのは達は益々頭を悩ますばかりであった。

「一体・・・何の目的で・・・――――！？」

と、そんな時芋虫が乗った幼稚園バスが操縦のコントロールを失うと、泣き叫ぶ園児たちが乗った幼稚園バスを食らいはじめようとしていた。

「「「「うわあああああああああ！！！！！」」」」

スバル達はその光景に目を向けると、直ぐに助け出そうと動き出す。

「子供達が！！」

「いけない！！」

「クソ！！！」

急いで幼稚園バスへと向かう前線一同。

白鳥は子供たちを守るために自らが一番最初に芋虫に向かって飛びかかっていった。

「させるか！！」

芋虫に飛びかかり、行動を止めようとした矢先だった。

円盤はその芋虫と一緒に白鳥をも回収しようと光をおろし、白鳥は呆気なくその日ｔ仮に吸い込まれる形で釣り上げられていくのであった。

「うわあああああああ！！！！！！」

「白鳥さん！！！」

釣り上げられ、円盤の中へと吸い込まれていく白鳥を見て、鬼太郎は烈火に炎を灯すと円盤を撃ち落すつもりで攻撃を仕掛ける。

「野郎！烈火！！」

円盤に向かって仕掛けた炎熱攻撃であったが、円盤にはまるで効果

がなく逆に攻撃を仕掛けたことで反撃をしてきてしまい、全員はそれを一先ず避けるしかなかった。

そして、円盤は芋虫と白鳥を乗せたまま次元空間の中へと消え去っていったのであった。

「くっそーーー！！」

「逃がすか！」

「僕と先輩で、白鳥さんを追います！店長となのはちゃん達は町を頼みます。」

「分かった。」

「じゃあ、お願いします。スバル、みんな、行くよ！」

「「「「「はい！」」」」」

「恋次さん。あなた方は向こうの方を。僕と金太郎でこっちをやります。」

「ああ。」

「浦太郎。鬼太郎。白鳥の事を頼むぞ。」

「任せておいて♪」

「よし、行くぜ亀！」

鬼太郎と浦太郎は後の処置を任せると、円盤が逃げて行った足跡をたどる形で逃走経路を割り出しユーノから持たされた簡易次元転送ポートによって異世界へと移動を開始する。

その頃、ミッドチルダを離れ円盤の中で芋虫と一緒に閉じ込められた白鳥はというと、第５６３管理外世界『ガラバード』の上空を浮遊していた。

「何処に向かっているのだ・・・・・・」

円盤の行先に戸惑いを見せる白鳥。

すると、一匹の芋虫が白鳥に興味を示し顔を近づけて来ると、思わず白鳥も苦笑いを浮かべて返事をする。

「お・・・！？い、いやあ・・・・・・」

そして、ガラバードに次元転送してきた浦太郎と鬼太郎は空中を滑空しながら目の前を飛んでいる円盤数機を追いかけていく。

「逃がさないよ・・・・・・う！！」

その時、浦太郎の後ろより猛烈な突風が吹き荒れ何事かと思い後ろを振り返ってみると、そこに居たのはＡＭ２１である怪鳥であった。

「げ・・・！？」

「ち！あんときの鶏ガラ野郎！！」

鬼太郎はこの前の借りを返すために、烈火を強く握りしめ炎を刀身

に灯すが、その瞬間怪鳥は浦太郎を強靭なつま先で掴むと同時に、鬼太郎の元へと投げ飛ばして二人をそのまま海へと撃墜させる。

「「うわあああああああ!!!!」」

二人を撃墜させた後、怪鳥は目的地へと向かう。

撃墜された二人は果たして無事なのであろうか？

そんな二人の心配もそうだが、白鳥を乗せた円盤の方はというと目的地である火山が噴き出る無人島へとたどり着くと、火口付近に降り立ちドームを開く。

「ここは何処だ？」

白鳥は当たりの様子を見ながら円盤から降りる。

すると、その時白鳥はあるものを発見する。

「は！あれは・・・・――――」

白鳥が発見したのは、同じ円盤の中にぎっしり納められた芋虫を生み出す夥しい数の卵。

「卵か・・・・・・ん！？」

その時、そんな白鳥の前に浦太郎達を撃墜させたあの怪鳥が姿を現し連れ帰ってきた芋虫たちの前に降り立った。

白鳥は岩場に隠れながら怪鳥の行動をじっと窺う。

「あいつ・・・！あの化け鳥が何故・・・！？」

怪訝そうな様子の白鳥だったが、怪鳥はそんな白鳥の目の前で驚愕的な行動をとり始める。

頭の方についていた角のような突起を変化させると、変化させたそれで芋虫を掴みそれを徐に食し始めたのだ。

「何！」

目を疑う白鳥を余所に、次に次に突起を使い芋虫を口に運んでいく怪鳥。

「あの芋虫は大自然からの警告なんかじゃない・・・・・・あいつの・・・・・化け鳥の食糧（エサ）だったのか・・・！！」

確信した様子で怪鳥の食事を凝視する白鳥。

怪鳥は芋虫を食べれば食べた分だけ逞しく体を成長させ、より巨大な体となっていく。

そしてその時漸く白鳥はこの怪鳥の真の狙いに気づく。

「アンゴルモアによって手にした増殖能力により、あの芋虫を作り出し・・・そして、奴の最大の目的は・・・――――次元世界全てを牧場にすることだったんだ・・・！でもそうはさせるか！」

白鳥はそう口にすると、琴線斬を取り出し解号を口にする。

「天地に奏じよ、琴線斬！」

琴線斬を解放すると、音色辞書に搭載された音波をフルに発動させてその場にあった全ての円盤の中の卵を破壊し、それに気づいた怪鳥は食事を止めると白鳥目掛けて口から液体を吐いて攻撃する。

攻撃を避けながら怪鳥が吐き出す液体の正体を突き止める白鳥。

「これは濃硫酸か・・・！？」

怪鳥は怒りを表しながら白鳥に濃硫酸を吐き続け、ほんの一瞬隙を見せた瞬間白鳥の体を例の突起を使って体を捕える。

「ぐあああ！！！し、しまった！！」

突起に捕えられた白鳥は怪鳥の目の前に連れて行かれると、そのまま強く体を締め付けられる。

「ぐ、ぐあああああああ！！！！！」

窮地に陥る白鳥だったが、その時頭上から救援による攻撃が降り注ぐ。

白鳥と怪鳥が目を向けると、火口付近に立っていたのは甲冑に身を包んだ浦太郎と鬼太郎であった。

「鳥！無事か！？」

「ふ、二人とも・・・！」

怪鳥はそれを目撃すると、一段と逞しくなった身体を浮き上がらせると突風を巻き上げ、白鳥を人質にして浦太郎達の前へと現れる。

浦太郎は先ほどとは別人に様に成長した怪鳥の姿に度肝を抜いた。

「ず、随分と逞しくなったもんだよ・・・！」

「だがな、そっちの鳥は返してもらうぜ鶏ガラ野郎！」

鬼太郎はそう言いながら、ソードアーマーの力と自身の霊力を急上昇させてから灼熱の業火を怪鳥目掛けて放つ。

「烈火斬大斬撃！！」

怪鳥は大威力を誇る鬼太郎の炎を受け流すと、圧倒的なスピードを発揮させて二人に向かって突進し、そのまま力で押し通す。

「「ぐあああああ！！！」」

真面に受けた二人は甲冑モードであったも相当なダメージを受けてしまう。

「は、速い！」

「強えぜこいつ！」

怪鳥は大きく羽ばたき旋回すると、再び浦太郎達目掛けて攻撃を仕掛ける。

「来るよ！」

今度は何とか皮一枚のところで避けきることが出来た二人だが、この速力に対抗できる力を自分たちは持ち合わせていなかった。

そんな状況の中で、浦太郎は一つの可能性を見出す。

「く・・・！あいつのスピードに対抗できるのは、白鳥さんのウィングフォームしかない！」

そう考えた浦太郎は甲冑モードにより力を引き出したフィッシャーマンの先端からウォーターホイッパーを生成し、白鳥を掴んでいる突起目掛けてそれを放つ。

「ウォーターホイッパー！」

浦太郎の放った技は見事突起を切り落とし、白鳥を怪鳥から分離させる。

「うわあ！」

「白鳥さん！うわあああああ！！！」

浦太郎は怪鳥の攻撃を受けてしまい、そのまま吹き飛ばされる。

「浦太郎！！」

「鳥！ぼさっとするな！！さっさとセットアップしやがれ！！」

「りょ、了解である！」

ジークは死覇装の懐からジークを取り出すと、甲冑フォームであるウィングフォームを発動させる。

「ジーク、セットアップ！」

〈Ｓｅｔ　ｕｐ.　Ｗｉｎｇ　ｆｏｒｍ〉

白い魔力光に包まれたのち姿を現す甲冑に身を包んだ白鳥は背中の翼を広げると、浦太郎を救出してから怪鳥と一騎打ちを申し込む。

「行くであるぞ！」

白鳥対怪鳥、ＡＭ２１との空中決戦。

濃硫酸を飛ばして白鳥を翻弄する怪鳥に対して、白鳥は右腕の武器で攻撃を仕掛ける。

「ウィングカッター！」

その攻撃を躱す怪鳥はその後も白鳥と空中戦を続け、その戦闘の様子を火口付近で応援する鬼太郎たち。

「鳥、負けるな！」

「こうなったら、一か八かだ！」

白鳥はそう言うと、ウィングフォーム時における最高速度で怪鳥に突っ込んで行くとギャンブルに近い行動へと持ち込む。

「ほおおおおお！！！！」

ギリギリのところで怪鳥の軌道を読み取りそれを躱した白鳥は背中の翼を硬化させ、ウィングエッジと呼ばれる状態へと変化させると怪鳥の左の翼を斬り裂きそれを見事に斬りおとす。

翼を切り落とされた怪鳥はそのまま火口の中へと落下していく。

「やったよ！」

「今である！」

「「おう！」」

勝機と見た浦太郎と鬼太郎は最後の攻撃を仕掛けるために魔力と霊力を全開にする。

「アクアマインド！」

浦太郎は先ず傷ついた怪鳥を純粋な水流によりダメージを増やし、鬼太郎がその後に続く。

「続けて俺の必殺技パート2！」

鬼太郎の熾烈波をその身に受け、更に叫び声を上げる怪鳥。

そこへ白翼の魔導死神白鳥礼二による攻撃が待ち受ける。

「ウィングトルネード！」

ウィングトルネードを食らい、満身創痍となった怪鳥。

鬼太郎をそれを見ると止めの攻撃を促す。

「一気に決めようぜ！」

「オッケイ！」

「我が力の前にひれ伏せ！」

三人は専用パスとカードを取り出すと、エネルギーをチャージさせ必殺技を発動させようとする。

〈〈〈Ｆｕｌｌ　Ｃｈａｒｇｅ〉〉〉

一気に上昇した魔力と霊力がそれぞれの武器に集まると、三人は同時に各々の必殺技を発動させる。

「「「はあああああああ！！！」」」

三人の攻撃をその身に受けた怪鳥は爆発を起こして消滅を果たすと、体内に吸収していたアンゴルモアを分離させた。

浦太郎はそれを素早くキャッチし、その場を離れる。

白鳥は夕陽をその背中に受けながら自分を助けに来てくれた二人にお礼を言った。

「浦太郎、ピーチ・・・ありがとう・・・」

そんな白鳥の言葉を聞いた二人は鼻で笑いながら、次のように返す。

「次から次へと心配掛けやがって。この貸はきっちり返してもらうからな！」

「だが、化け鳥の計画は阻止することが出来た。アンゴルモアも回収したしね♪」

浦太郎がそう言った時、手に持っていたアンゴルモアはその中で粉々に砕け散って跡形もなく消えていった。

「あ！砕け散りやがった！！」

「アンゴルモアもどきであったか・・・」

本物ではなかったことに悔しがる二人であったが、浦太郎は潔く諦める。

「仕方ないか。取りあえず、怪我の功名ってことでいいとするかな♪」

「であるな。だが、一つだけ気がかりなことがある。」

「「お？」」

訝しげな表情の二人であったが、白鳥はそんな二人にとんでもないことを口にする。

「あの芋虫、あのまま成長を続けたら・・・一体どんな成虫になったのであろうな？」

あまりに悪ふざけの度を過ぎた発言にかっとなった鬼太郎は怒りを露わにしながら白鳥の首をきつく締め上げる。

「て、てめぇ！！！全然懲りてねぇじゃねぇかよ！！！！！」

「いたたたた！！！！止めるである！！！！野蛮人が！！！！」

「やれやれ・・・・・」

呆れてものも言えない浦太郎だったが、その時ユーノとなのはからの通信が浦太郎に届く。

「あれ？店長となのはちゃんからだ。」

浦太郎が通信と同時にスクリーンを開くと、ユーノとなのはは三人に向かって衝撃的な言葉を発する。

『浦太郎、鬼太郎、白鳥さん。早く戻ってきてくれ！芋虫はまだうじゃうじゃ残ってるんだ！』

『今すぐ超特急で戻ってこないと、町がどうなるか分かったものじゃないですよ！』

「「「え～～～！！！」」」

二人の言葉を聞いた三人は悲痛な声を上げながら、甲冑に身を包むとそのままミッドチルダを目指して芋虫退治に戻るのであった。

「また芋虫退治かよ！！」

「今晩は徹夜だよ・・・」

「そうか。それなら、これで未知の昆虫の標本が作れるぞよ！」

「「お前な！」」

最後まで、この件に関して全く懲りていない白鳥なのであった。

昆虫が人間を喰らう（後書き）

教えて、ユーノ先生！

ユ「今日は、トマス・モアについて教えちゃうよ♪」

ユ「イギリス・ルネサンス期の法律家、思想家である彼は、カトリック教会と聖公会で聖人を務め、政治・社会を風刺した『ユートピア』の著述で知られる。」

ユ「当時のイギリスはテューダー朝のヘンリ8世が納めていた時代で、その頃は地主や長老がフランドルとの羊毛取引のために農場を囲い込むインクロージャー、囲い込みというものを行っていた。羊を飼い、村落共同体を破壊し、農民たちを放逐する現状を深く慨嘆し、彼は著書ユーノトピアの第一巻に「羊はおとなしい動物だが（イギリスでは）人間を食べつくしてしまう」という意味の言葉を残している。今回のサブタイトルがそれをもじったものだね♪」

浦「いや～～～実際どうなるかと思いました。というか、白鳥さんってあんな性格してましたっけ？」

鬼「全く、つくづく傍迷惑な焼き鳥だぜ！」

白「ふん。凡人には男の浪漫など分かるまいよ。」

ユ「浪漫ね・・・・・・」

白鳥の抱く浪漫というものに若干の違和感を感じるユーノであった。

魔導師図鑑ハイパー！

徹夜で芋虫を対峙した六課前線メンバーは既にくたくたの状態であった。

全員がロビーで腰を下ろし疲労困憊の表情を見せる中、白鳥は持ち帰ってきた芋虫の死体を手に取りながら標本を作り始めていた。

白「ふふふ・・・これで博士号はわが手に！！なはっははははははあ！！！！！！！！」

そんな野望を抱く白鳥を見ながら苦笑いを浮かべる前線一同。

な「よくあんな気持ち悪い虫を前にしても平気で標本に出来るんだろう・・・」

フェ「駄目・・・私やっぱり生き物でも虫だけはどうしても・・・！！」

青ざめた表情となるフェイト。

するとその時、そのフェイトの前に一日のゴキブリが通る。

フェ「！あああああああああああああ！！！！！」

語義振りの姿を見た途端、フェイトは絶叫しそのまま後ろにひっくり返る。

な「ふぇ、フェイトちゃん！？」

キャ「フェイトさん！しっかりしてください！！」

目を回すフェイトは既に限界を迎えていたそうな。

フェ「もう・・・虫は嫌だ・・・！」

昆虫パニック篇

巨大怪鳥／ＡＭ２１

身長：５７メートル。体重：４万６０００トン。ミッドチルダに現れた巨大な翼を持った怪鳥でありＡＭ体。目から出す怪光線と両腕の鋏、鋭い嘴が武器で、あらゆるものを斬り裂き粉々とする。空をマッハ８の高速で飛び回って浦太郎達を翻弄するも、白鳥との空中戦においては左の翼を切り落とされ、最後は三人の必殺技を食らって消滅する。また、巨大芋虫を頭に生えた突起を使い食すことで、急速に成長して力を増幅させることが出来る。

巨大芋虫

リオが拾って来た緑色を基調とした謎の芋虫。紅い三つ目と角のような突起が特徴で、白鳥は大いに興味を抱いた。しかし、その実態はＡＭ２１の食糧であり周囲にあるあらゆるものを貪り食い尽くすことで急速な成長を促し、その後も際限なく食べ続ければ一夜にし

て町一つをも食らい尽くすほど。

次回予告

な「ヴァイス君が妹さんを連れて兄弟水入らずの休暇に。」

ユ「そんな時、子供の体を使って繁殖するＡＭ体が出現。遊園地に集まる子供たちが危ない！」

ティ「ヴァイス陸曹長とラグナちゃんの運命は！？」

ユ「次回、ユーノ・スクライア外伝　『閉ざされた遊園地』。お楽しみに♪」

閉ざされた遊園地（前書き）

ネットがつながらなくて更新が遅れました。

今回は予告にも合った通り、ヴァイス君のお話です。

元ネタは、知ってる人は知っているあれです。

それでは、どうぞ。

閉ざされた遊園地

＞i20179―709＜

新暦７９年　秋初頭。

永久不滅と思われていた魔法絶対主義・管理局システムは瀕死の状態に陥っていた。

立て続けに頻発した凄惨なるロスト・ロギア関連の事件により、管理局は自らを擦り剥かせる為に、表面上では魔法絶対主義という言葉を使う一方で、質量兵器と呼ばれる自らが禁じてきたものに頼らざるを得なくなっていた。

そして、対管理局に対する諸世界の反管理局側の勢力も力をつけ、魔導師が保有する魔力を打ち消す戦法を多くとるといった戦い方になりつつある中、魔導虚事件というとある広域次元犯罪者が起こした二度目のテロ事件を切っ掛けに、管理局はそこで死神という魔力とは別個の霊力と呼ばれる力を持った存在を黙認する。

更に、ロスト・ロギアを切っ掛けに魔導師と死神という相反する存在――この中間に立つとんでもない力を秘めた人間がこの世界に誕生した。

たとえば、この翡翠の魔導死神ユーノ・スクライアの文字に「正義」と「強くなりたい」という言葉と願望はない。

己の守りたいものを守る為に、嘱託勤務という形で自らを奮い立たせ、その天才と評価される頭脳と人間離れした超人的な能力を使いただ只管に戦い潰けの毎日を送るスーパー魔導死神だ。

だが、なぜ彼が翡翠の魔導死神として覚醒したのかは――――――定かではない。

そんな翡翠の魔導死神ユーノ・スクライアは何をしているのかというと、勤務時間を終了し前線部隊の教導を終えた恋人のなのはの肩を丁寧に揉んでいる最中であった

なのははユーノの肩揉みの心地よさに顔が綻んでいた。

「結構凝ってるね、なのは。」

「へへ。こう見えても戦技教導一筋で朝から晩までスバル達とつきっきりだから♪あ、もっと強くてもいいかな？」

「はいはい♪痛かったら痛いって言っていいから♪」

「大丈夫。ユーノ君が痛くしないのは知ってるもん♪」

「へへ。そう言ってもらえるとうれしいよ。」

相変わらずの仲良し振りと絶対的な信頼を寄せるユーノとなのは。

ユーノはそんな深いきずなで結ばれた恋人の肩を先ほどよりも強く、だが決して強すぎない程度の絶妙な加減で揉み続ける。

「あ～～～あ～～～いい気持ち～～～全身の疲れがとれていく～～～」

「それは何よりです♪」

ユーノはなのはの肩もみを終え、軽く肩を肘で二回叩いてマッサージを完了する。

「はい、終了！」

「ありがとう、ユーノ君♪凄く楽になったよ。じゃあ、代わりに今度はユーノ君の肩揉んであげるよ。」

「でも、悪いよ。」

「いいの、いいの♪ユーノ君だって毎日デスクワークとかで肩凝ってるでしょう？いつも私を守ってくれるお礼にこれぐらいはしないと。ね？」

「ははは♪分かった――――――」

なのはの言葉にはにかんだユーノだったが、そんなのはの何気ない言葉の裏に秘められた優しさに触れると、ユーノも嬉しくなり素直にその言葉に従うことにした

ユーノはなのはに肩をもんでもらうために、重さ二十貫を誇る肩当とバネが仕込まれた羽織を脱いで無造作にソファーの上へと放り投げる。

すると、それを見てなのははこう言った。

「そう言えば、肩凝りの原因ってこんな重たい羽織を着てる所為なんじゃないの？」

「そうかな？慣れちゃうとどうってことないけど♪」

「どうってことないって・・・だってそれ私やフェイトちゃんでも普通にやっても持てないのに・・・！？大体、あんな重いのを何着

も毎日着こなすユーノ君が異常だって・・・」

「確かに、僕は異常だよ。だけど近頃そんな異常な事に慣れてしまった所為か、この程度の異常がどうってことなくなってしまったのも事実。」

「ははは。それもそうだね。」

割る切った様子を見せたなのはは、そのまま見かけは華奢だがしっかりと鍛え上げられたユーノのなで肩を女性特有の柔かい手で揉み始め、思わずユーノも柔かい表情を浮かべながら――――――

「は～～～なのはの手は優しいな～～～♪」

「もう、ユーノ君ったら♪」

思わず頬を赤くしてしまうなのは。

「もっと右の方いいかな？」

「はい、ただいま。」

その後もなのはは、自分がこの世で最も大切な幼馴染であり自分の魔法の師・恋人のユーノの肩を絶妙な加減で揉んでいく。

すると、ふとなのははこんなことをユーノに尋ねてきた。

「ねぇ、ユーノ君。私ずっと思ってたんだけど・・・一護さんは昔からあんなに強かったの？」

「急にどうしたの？」

「いや、ほら。フェイトちゃんやシグナムさんも一護さんが偶にこっちに来たときはよく模擬戦してるけど、スピードに関しては文句なしにフェイトちゃん以上に速いし太刀筋も反射神経もどれをとっても超一級。限定解除状態の恋次さんや白哉さんとも互角に渡り合える実力の死神・・・そんな凄い人がユーノ君に戦い方を教えたって言うならさ。」

「成程ね。確かに強いことは間違いない。そりゃ、普段はぶっきら棒で無愛想で派手な髪の毛はしてるけど僕の師匠には変わりはないからね・・・」

「確か、生まれた時からもう高い霊力を持ってたんだっけ？」

「そうだよ。少なくとも、高1の時にルキアさんから死神の力を譲り受け、その後真の覚醒を迎えて半年近くの間壮絶な死闘を繰り広げてきたことは事実。何せ、一護さん達の戦いはそれこそこっちで言うＪＳ事件レベルの熾烈なものだったって話だ。」

「そうなんだ・・・だけど、管理局はそのこと知らなかったんでしょ？」

「当然だよ。元より管理局は死神という存在の認知すらその時は全く確認できてなかったんだ。山本総隊長とミゼット提督が知り合ったのはＪＳ事件のちょっと後さ。」

「へぇ～～それって意外だね～～～」

そんな話しをしていた時、ユーノは神妙な顔つきとなると一護との

出会いが自分をどのように変え、そしていまだ自分が超えることのできない存在の大きさに感服する。

「でも、一護さんとの出会いが僕の人生を大きく変えたことは間違いないかな。あの人は僕が人生で初めて認める師匠で、尚且つ一生超えられないたった一人の男さ――――――」

神妙な顔つきのユーノを横で見ながら肩を揉んでは叩くを繰り返すなのはも思わず神妙な顔つきとなって暫くの間を置いてしまう。

「ユーノ君が一生かかっても超えられないか・・・――――やっぱり凄いんだね、一護さんって――――――」

「凄くて当然♪あの人、たった三日で卍解を会得した天才だよ！」

「へぇ、三日で・・・――――み、三日！！！！そんなんで卍解って覚えられるの！？」

ユーノの発言に思わず耳を疑い、狼狽を隠し切れないなのは。

そんななのはにユーノは飄々とした様子であっさりこう言った。

「普通は無理だね♪」

さて、そんなやり取りがあったその翌日の昼過ぎ、ユーノは毎日欠かさず行っている自身が手掛けたハイパーマシーンの整備の傍ら、新しく開発した新型マシーンの現物を手伝ってくれている恋次に初披露していた。

「どうですかこの完成度。結構頑張ったんですよ♪」

ユーノが新しく開発したハイパーマシーンは、外見はジェット機を模したような高性能のステルス能力を搭載したものだった。

完成度の高さに思わず声を漏らしながらマシーンを見上げる恋次。

「ほう～～～こいつはすげぇな！よくここまでのもんを毎度のことながら造ってみせるよなお前は。というか、何処にこれを造るだけの金があったんだ！？」

「実は何度か本局と地上部隊に貸しているうちに、かなりの高評価がついてしまってですね、ばらまき予算というかなんというかおこずかいをくれたんですよ。両方から♪」

「それでか・・・・・あのお堅い上層部がよく許可したものだな。」

ユーノ・スクライアの開発したハイパーマシーンの評価は本局、地上本部双方から絶大な評価を受けている。

管理局技術開発部のスタッフ一同は独学でこれだけのものを造り上げるユーノの頭脳に大いに驚愕する一方で、ハイパーマシーンの技術を学び取った新たなる技術開発の為に日々精進をするようになっていた。

「あ、そうだ。貰った予算の中からあまりがかなりあるので恋次さんのパワーアップツールでも考案しようと思い、デザインの途中なんですけど・・・こんなのはどうでしょう？」

ユーノはそういうと、机の上に転がっていたデザインが描かれたス

ケッチブックを取出し一枚めくりあげると、恋次に見せた。

「どれどれ・・・――ほう。結構うまく描けてるじゃねぇか。悪くないと思うぜ。」

「そうですか。じゃあ、もうちょっとデフォルメを加えてより機能性を重視して――」

ユーノは恋次の要望を聞き入れながらそのデザインに修正を描き加えながら、最終的なデザインを完成させようとしていた。

するとその時、そんなユーノの元にはやて達を外回りまで送って帰還したばかりのヴァイスが駆け寄ってきたのだ。

「お、いたいた。ユーノ先生!ちょっといいっすか?」

「?ヴァイス君。」

ヴァイスが近づいてくると、ユーノも一度手を止め恋次は徐に尋ねる。

「なんだ?ユーノに用事か。」

「ええ。お時間よろしいっすか?」

「構わないよ。なんだい?」

「実はっすね――――――」

ヴァイスは早速自分の要件をユーノに話すが、その中身を聞いたユ

ーノや恋次には実に意外なものであった。

「え？休みが欲しい・・・」

「珍しいじゃねぇか。お前が休暇を欲しがるってことは――――――さては、これか？」

恋次な悪戯っぽく小指を立ててそう尋ねると、ヴァイスは思わず笑ってしまう。

「ははははは。女には違いないっすけど、生憎俺にはユーノ先生と違って、なのはさんみたいな極上な彼女はいないっすよ。」

「ははは♪ということは、妹さんかい？」

「流石っすね。ええ、ラグナが久しぶりに兄弟水入らずに遊園地にでも行かないかって？管理世界の中に凄い人気のアトラクション施設が豊富なところがありまして。」

ヴァイスはそういうと、妹ラグナ・グランセニックからあらかじめ渡されていた管理世界でもかなりの規模と人気を誇るアトラクション施設のパンフレットを見せた。

二人はその中身を凝視する。

「第５６管理世界『ワンパーク』に建造されたハナヤシキ・アミューズは、毎年年間来場者数５００万人を超える超人気アミューズメントテーマパーク。是非ともご家族やご友人・恋人との思い出づくりにどうぞ・・・か。へぇ～～～そうなんだ。今度なのは達を連れて一緒に行きたいな♪」

「何とかスケジュールを開けてもらえないっすかね、ユーノ先生。」

「大丈夫だよ、ヴァイス君。ゆっくり妹さんと家族サービスを満喫してきなって♪はやてとクロノにも一応報告はしておくから、休暇申請の方は僕に出しておいてね。」

「ありがとうございます！じゃ、早速ラグナに連絡して時間作ります！」

ヴァイスは休暇申請を受理してもらうと、普段とはまた違う上機嫌な様子で二人の前から立ち去っていく。

そんなヴァイスの後姿を見ながら恋次はふとこんなことを言ってきた。

「兄貴って言うのは、色んな意味で大変だよな。」

「でも、兄弟がいる家庭が僕には羨ましいですよ。」

「いたらいたで鬱陶しいんじゃねぇか？」

「鬱陶しいと思えることが、どれほど幸せですか♪」

ユーノには生まれた時から親兄弟もいな。

根っからの孤児であるがゆえに、兄弟のいる家庭・・・一護やなのはのような家庭が非常に羨ましく思ってしまうのだ。

恋次もそんなユーノの気持ちと言葉をくみ取り、一度鼻で笑うとユ

ーノの言葉に同意する。

「ま、お前の言ってることは正論だな。」

そして、二・三日が経過してヴァイスは妹ラグナとともに第５６管理世界「ワンパーク」へと兄弟水入らずの時間を過ごすために休暇に赴いていた。

ヴァイスと妹ラグナはとある事件が切っ掛けで一度は疎遠な状態にまで陥っていたが、現在は関係は修復されつつあり、今までのような仲睦ましい兄弟関係を築き上げるようになっていた。

暫く園内の人気アトラクションを堪能した二人は、雑誌でも取り上げた超弩級の怖さを誇るお化け屋敷の中へと足を踏み入れていた。

恐怖で身が凍りつくような独特の雰囲気とビージーエムにへっぴり腰になっていると、唐突にお化け屋敷の仕掛けが妹以上に怖がるヴァイスの背後から仕掛けられる。

「うわあああああ！！！！」

ティアナたちの前では男気あふれる兄貴分的な性格のヴァイスでも、こう言ったものに関してはあまり免疫がないらしく、次々に仕掛けられる作り物のお化けと脅かし役のスタッフに腰が抜けてしまう。

「だあああああ！！！な、何だよチクショー！！！」

お化け屋敷から無事に出ることができたヴァイスは既にぐったりとした様子でベンチの上に腰かけていたが、ラグナ自身は滅多に見ることのできない実の兄の情けない姿に思わず笑ってしまう。

「ははははははは！！！！」

妹に笑われ、兄貴のメンツを潰されるヴァイスは雪辱な思いとなった。

「そ、そんなに笑うなよ・・・！」

「だって、こんな顔して・・・うわあああああ！！！ってへっぴり腰になってさ！機動六課のヘリパイロットの名が泣くよ♪」

「う、うるさいなお前は！あれはだな・・・！！」

「ムキにならないの♪」

「ち！休暇一日損した気分だ。それにしても、態々自分の兄貴にその年で遊園地に連れてけって言うか？」

「何言ってるのさ。恋人もいないくなくて、偶の休みだって部屋でぐうたらしてるかヘリの整備で油まみれになるくらいの情けない実のお兄ちゃんを誘ってあげてるんじゃない。」

「おいおい。そいつは自分に彼氏の一人もいないから、その代わり兄貴の俺を引っ張り出してるんじゃねぇかよ。」

「へへ♪」

はにかんだ様子のラグナはそんな兄の隣に腰かけると、施設内で購入したジュースをストローで吸い込んでいく。

すると、少し間を置いてからヴァイスはふとラグナに向かって何気ないことを訪ねる。

「ラグナ・・・最近、何か変わったことあったか？」

「えっとね・・・この前友達がさ、魔法音楽コンクールで最優秀賞取ったんだよ。」

「ほう、そいつはすげぇな！」

「みんな春先の魔導虚事件を切っ掛けに一生懸命魔法に取り組んでいるんだよ。私だって、もっと頑張って魔法練習すればきっとお兄ちゃんみたいな凄い魔導師になれると思うんだ。」

「おいおい、俺はお前が思ってるほどの凄い魔導師じゃねぇよ。どうせ目指すなら、うちのなのはさんやシグナム姉さんみたいなのになりな。」

「またまた謙遜しちゃって♪」

「んなんじゃねぇさ。ま、上手くやれよ。」

「ありがと」

ヴァイスに頭を撫でられ、満更でもない表情を浮かべるラグナ。

この二人の兄弟関係は以前の様な疎遠という言葉はなくっているようで、安心した。

すると、そんな二人の耳元にふと子供の声が聞こえてきた。

「何泣いてんだよ。」

「おばけ屋敷ぐらいで泣いてやんの！」

「ホントにハルキと一緒だと恥ずかしいよな。情けねぇよな、あんな大声で悲鳴あげてよ。」

「やめてよ！」

気になった二人が声のする方向へ目を向けてみると、瞳に映ってきたのは真ん中で項垂れた様子で立ち尽くすあまり気の強そうではない少年とそんな少年をからかう同い年の少年二人、そして少年を庇おうとする妹の姿であった。

ヴァイスとラグナはそんな様子をあまり心地のいいものではないと感じながら、暫く様子をうかがっていた。

「おい、ジェットコースター乗りにいこうぜ。」

「おう！」

「アツコも乗りたい。」

その場から立ち去ろうとする二人にアツコがそういうと、二人は振り返りアツコの兄を罵倒する。

「お前の兄ちゃんが乗れないってさ！」

「高いところに行くとおしっこ漏らしちゃうってさ。」

「お兄ちゃん・・・」

「・・・・・・」

アツコの兄、ハルキは何も言えずにただじっとうなだれたままの状態。

そんなハルキを見て、二人の少年・・・ワタルとジュンイチは更にからかおうと突っかかっていく。

「ジェットコースター乗りにいこうぜ！」

「そうだよ、行こうぜ！」

「お兄ちゃんのことといじめないでよ！やめてよ！！」

アツコは必死になってハルキのことを庇おうとするが二人はそんなアツコの言葉を無視してハルキのことをからかい続ける。

「おい！」

すると、そんな様子を見ていて我慢が出来なくなったヴァイスはいじめる二人に向かってちゅいを促す。

「お前ら・・・いい年した男がする事かよ！」

「やべ！行こうぜ！」

「ああ！」

ヴァイスの一喝を受けると、二人は急いでその場から走り去っていった。

二人が足し去った後、残されたアツコは未だ項垂れたままのハルキに向かって言葉を投げかける。

「お兄ちゃん、大丈夫？」

「・・・・・・」

ヴァイスとラグナはハルキとアツコから事情を聴くことにして、一度ベンチの上にハルキを座らせた。

ハルキは啜り泣きながらヴァイスの隣で先ほどのことを話してくれた。

「あいつら・・・僕が高いところが苦手なのを知ってて・・・妹の前で恥をかかそうと思って・・・！」

妹のハンカチで鼻水と涙をふくハルキの姿を見ていたヴァイスは、何か思いついた表情を浮かべると立ったまま一緒に話を聞いていたラグナに向かってこんな提案をしてきた。

「ラグナ。アツコちゃんを連れて、お前と二人で観覧車にでも乗ってこいよ。」

「え？」

「少し男同士で話をしてみるからよ。な！」

「成程。アツコちゃん、観覧車乗りにいこうか？」

「でも・・・・・・」

ためらった様子のアツコだったが、ハルキは涙をふき取ると観覧車に行くことを進める。

「いいよ。行って来いよ。」

「うん。」

「さ、行こう。」

ラグナはアツコの手を引いて、目的の観覧車へと向かって歩き出していった。

ヴァイスは二人の後姿を見送ると、一度ため息をついてから隣に座る何処か不安げな様子のハルキと話をし始める。

その頃、ハルキたちを置いてジェットコースターに向かったワタルとジュンイチの二人はというと、自分たちの残金を確認していた。

「おまえあといくらぐらい残ってる？」

「えっとあと・・・１０００円ぐらい。」

「俺・・・８００円・・・止めようか？」

「そうだね。」

残金が残りわずかということもあって、二人は潔くジェットコースターに乗ることを諦めることにしたが、その時二人の目の前に奇妙なものが出現してきた。

「あれ？」

二人の目の前の地面から何の前触れもなく地面の下から巨大な角のようなものが生えてきたのだ。

「何だこれ？」

一体これが何を示唆するのかは現時点では不明だが、結果としてこれから起こる新たなるアンゴルモア事件の幕が開かれることになるのだ。

その頃、ヴァイス達が遊園地での休暇を楽しんでいる頃、平時の機動六課ではいつもと変わらない喧騒な毎日が送られている。

ティアナはいつものハードトレーニングと事件捜査の報告書の作成を一通り終わらせると、自分が密かに憧れなのか好意なのかあまりはっきりとはしないが、これまで陰ながらサポートをしてくれているヴァイスに感謝の気持ちを伝えるために、お手製のクッキーを持って六課の格納庫へと向かった。

「あんまりうまくできた自信はないけど・・・・・・まぁ、何とかなるわよね・・・！ヴァイス陸曹長、喜んでくれるかしら・・・」

不安と若干の期待を抱きながら、格納庫に足を踏み入れるティアナ。

「ヴァイス陸曹長。いらっしゃいますか・・・って、あれ？いない。」

格納庫を見ると、いつもなら油まみれになって六課自慢のヘリの整備をしているはずのヴァイスの姿がそこにはない。

いたのはヴァイスのアシストをしている他の整備員の人間だけだった。

「留守なのかしら・・・？」

訝しげな表情を浮かべるティアナ。

と、そこへ偶然にもヴァイスとは付き合いの長いアルトがティアナに声をかけてきた。

「あれ？ティアナ。どうしたの？ヴァイス先輩なら休暇でいないけど。」

「休暇？ヴァイス陸曹長が・・・」

「うん。妹のラグナちゃんと一緒に遊園地に行ったって話だよ。それにしてもティアナ、そのクッキー・・・されはヴァイス先輩へ♪」

「べ、別にそんな大したものじゃないですって！普通の差し入れですよ、差し入れ！」

「またムキになっちゃって♪私知ってるんだから、ティアナがヴァイス先輩のことを・・・」

「ああも！アルトさんもスバルもうっさいわね！！！」

アルトの発言に業を煮やしたティアナは茹蛸の様に顔を赤くすると、持っていたクッキーの籠を強引にアルトの手の中に収めると、そのまま癇癪を起こしたまま隊舎のほうへと歩いて行った。

「ああ！ティアナ！！待ってよ、どうするのこれ！？」

手渡されたクッキーをどう対処していいかわからなくなるアルト。

仕方なくアルトは考えた末、一枚は自分の腹の中に収めることにした。

「うん。普通においしいや。」

一方その頃、ヴァイス本人はというと妹たちを見送ってからずっと今に至るまでハルキと男同士話しをし続けていた。

「俺はこう見えても中身は結構屁たれでな・・・失敗を引きずる性分なんだ。随分前の話だ――――――あるとき妹のラグナが・・・さっきの姉ちゃんなんだけとさ。人質になったところを助けようとして、間違ってあいつの左目を撃っちまったんだ。」

「本当！？」

「それからそのトラウマから抜け出せずにずっと武装免許を返納したままだったんだ。だけど、ラグナと色々話して四苦八苦して・・・漸くそのトラウマから脱出した。もう一度武装免許も取得して、今は機動六課の方で働いてる。ま、俺は専らヘリパイロットだけどな！」

「・・・・・・」

ヴァイスの過去を聞かされ、声を詰まらせてしまうハルキ。

そんなハルキを横で見ながら、ヴァイスはハルキの肩に手を置き次のように語る。

「男はな、自分が怖いと思うものに立ち向かわなくちゃいけない時が必ず来るもんだ。それに、兄貴って言うのはどんな時でも妹を守ってやらないとダメなんだぜ。」

ヴァイスのそんな言葉を聞いて、改めて自分というものを見つめなおしヴァイスの言葉に強い共感を覚えたハルキは、決意の表れを示すために黙したまま首を縦に振るい、それを見たヴァイスも納得した様子で頭を軽くたたく。

「おうし！」

二人の話し合いがほどなくして終わったその頃、ワタルとジュンイチの二人は突如として地面から生えてきた謎の角の様な突起物に恐る恐る近づいていき、勇気を振り絞ってワタルが突起物に手を触れようとしていた。

「止せよ。気味悪いよ・・・」

「何だよ、お前も意気地なしになったのか？」

弱腰のジュンイチにそう言うと、ワタルはそんなジュンイチの目の前で特勤物に徐に手を触れてみせる。

そして、暫く触ってなんともないと判断すると軽く足で突起物を蹴ってみせた。

「何ともないじゃん。」

と、そう思いかけていたその時――事態は急変する。

唐突に角が生えてきた地面が大きく揺らぎだしたかと思いきや、角は徐に発光を始めると、驚愕する二人をよそに光を天高くに向かって勢いよく放出させる。

「「！」」

思わず腰が抜けてしまった二人はその様子を見つめるばかり。

この光景は園内にいた全ての人間の目にも確認され、ハルキと一緒にいたヴァイスも突如として起こった謎の現象に目を奪われる。

「何だあいつは・・・！？」

光は遊園地全体をまるで覆い隠すように拡大していくと、何事もなかったかのように光は消え再び遊園地内は平時の雰囲気を取り戻す。

ヴァイスは腑に落ちない表情で先ほどの不可解な現象に危惧の念を覚える。

「何だったんだ今のは・・・――」

と、その時。

「わあ！」

「！」

突然ヴァイスの目の前で自転車に乗っていた男が何にもないところで横転してしまう。

「いてて・・・！」

ヴァイスは横転した男に近づき、体を起こしてあげる。

「大丈夫か？」

「あ、はい。自転車で走ってたら何かにぶつかって・・・何だろう？」

「何かにぶつかった・・・！？」

しかしヴァイスが見る限り周りには障害物となるようなものは何もない。

一先ず原因を突き止めるためにあたりを散策しようと動き出したヴァイス。

だがその瞬間、ヴァイスは何もないはずのところで頭を強く打ったような感覚に陥り、そのまま後ろへと倒れてしまう。

「ぐっは！」

「どうしたの！？」

「いててて！！！」

ハルキがおでこを押さえ涙目になるヴァイスを心配しつつ、ふと目の前に手を当てた時だった。

ハルキは目を見開き自分たちの前に見えない壁がその場にあるということを突き止める。

「壁だ・・・！壁があるよ！！」

「壁・・・！？」

ハルキの言葉に耳を疑いつつも、手を目の前に翳したヴァイスだったが、それが本当だということを肌で感じ取ると、驚愕の表情を浮かべながら言葉を漏らす。

「マジかよ・・・見えない壁だ・・・！」

ハルキの言葉を切っ掛けに、他の来場者もこの見えない壁に非常に困惑した様子を見せ始める。

「これな～に？」

「何だろうね！？」

壁の中に閉じ込められた来場者の多くは壁を突き破ろうと何度も手で壁を叩いてみるが、一向に壁は壊れる気配はない。

ヴァイスはこの不可解な現象を目の当たりにすると、一度機動六課ロングアーチに連絡を入れることにした。

「取りあえず連絡付ける必要がありそうだな。」

ヴァイスは懐から待機状態のストームレイダーを取り出し、司令室全体に緊急回線をつなぐ。

「機動六課ロングアーチ。こちら、ヴァイス。こちらヴァイス。」

ヴァイスから連絡を受け、一通りの事情を聞き入れると、ユーノは司令室で他のメンバーとともにモニター画面のヴァイスに向かって指示を仰ぐ。

「休暇中の時にすまないね、ヴァイス君。実は君がいる近辺でアンゴルモアと思われる反応を確認した。」

『本当っすか!?』

「詳しいことが分かり次第、報告するよ。君は取りあえず今はもう少し付近の調査をしてほしい。僕たちの方でその見えない壁から脱出する方法をさぐってみるから。」

『了解。頼みますよ。』

通信を切り終えたヴァイスは、早速付近の捜査に乗り出そうとした。

するとその時、ハルキが通信を終えたばかりのヴァイスに向かってワタル達からの連絡を受けふとこう言ってきた。

「お兄ちゃん。ちょっと来て！」

「お？」

ハルキはヴァイスをワタルから連絡を受けた場所までつれ行く。

ヴァイスが到着した場所にはすでに多くのギャラリーができており、その中央にはあの謎の突起物があった。

ヴァイスもその突起物を見ながらワタル達に向かって尋ねる。

「何だこれは？」

「地面から突然伸びて来たんだ」

「突然伸びてきた？」

一先ずヴァイスはその場にしゃがみ込んでから、その突起物の調査を始めようとする。

だがその時、地面が大きく揺らぎ始めるや否や突起物が沈み始め、あたりの地面もそれに伴って陥没を始める。

「みんな！離れろ！！」

危険を感じ、すぐに子供たちを後ろに下がらせるヴァイス。

その後も地面は陥没を続け、大きな穴を造り始めと不意に地面の下から巨大な蔓上のものが伸び、ワタルの足を絡み取った。

「わ！！」

ワタルは蔓に足をから回れると、そのまま陥没した地面の中へと引きずり込まれていく。

「助けて！！助けて！！」

ヴァイスやハルキたちはワタルを助けるために三人がかりで必死にしがみつくワタルの腕を掴み、上へと引っ張り上げようとする。

「助けて！！助けて！！」

「ワタル！」

「待ってろ！！」

「頑張れ！！もっと足引っ張れ！！」

ヴァイス達はその後も必死に蔓の力に負けじとワタルの腕を引っ張り続けるが、不意に地面からもう一本の蔓が地中から生えてくるとその蔓がヴァイスの頭に直撃する。

「ぐああ！！」

ヴァイスが蔓の直撃を受け、力が抜けてしまったことでワタルはハルキたちの力もむなしく地面の下へと引きづりこまれていった。

「ワタル！！」

「うわあああああああ！！！」

地面の下へと消えていったワタルに言葉を失うヴァイス達。

「こいつはやべえ・・・・・・！！」

ヴァイスはこの非常事態を報せるために再びストームレイダーを取り出す。

『ロングアーチ、緊急事態発生！緊急事態発生！B地区遊園地内に謎の突起物と触手が出現。触手の一つが、子供を地中へと引きづり込みました！』

司令室でその報せを受けたはやて達は耳を疑った。

「なんやて・・・！？」

「そんなことが・・・！」

「AM体の仕業と見て間違いなさそうだね。」

「ユーノ。解析結果は！？」

「今映すよ・・・――よし。」

クロノの言葉を受け、解析を済ませたユーノはメインスクリーンに解析結果となる画像を映し出す。

「赤外線に反応して、漸く姿を見せたよ。見えない壁は遊園地全体をすっぽり覆っている。更に――――――」

ユーノはそういうと、タッチパネルを操作して突起物が出現したあたりの地下深くで藩王を示す今回のＡＭ体の反応を補足する。

「これは生物反応？」

「ああ。それもかなり大きな・・・！」

「また随分と巨大なＡＭ体ですね・・・！」

「壁と一緒で突起物も触手もＡＭ体のもので間違いなさそうですね！」

「直ぐに現場へ急行して貰うで。スターズ３と４、５は前衛を。それからヴィータ副隊長とシグナム副隊長は後方から援護を。」

「「「「了解！」」」」

はやての指示を受けた五人は戦闘準備を整えると、転送ポートを使ってヴァイス達のいる「ワンパーク」へと向かって急行する。

ティアナたちが現場へ急行したその頃、遊園地内に閉じ込められた来場者たちは地中から出現した謎の触手から逃げ惑っていた。

恐怖におびえ、只管に逃げ続ける中で触手は子供ばかりを狙って執拗に体の自由を奪い抵抗のきかない彼らを次々に地中へと引きずり込んでいく。

「ぐあああああ！！！！」

「なあああ！！！」

ハルキたちを連れて一緒に逃げていたヴァイスはその光景に苦い顔を浮かべる。

「くそ！子供ばっかり狙ってやがる！」

と、ヴァイスが隙を見せた瞬間ハルキとともに逃げていたジュンイチの足にＡＭ体の足が絡み付いてきた。

「あああ！！！！」

「ジュンイチ！」

二人の救助もままならないうちにジュンイチは触手によって地中へと引きずり込まれていき、二人はその光景に言葉すらも出なかった。

さて、この緊急事態に関してティアナたちが現場へ向かっている頃、司令室のユーノたちのほうはというと、今回のＡＭ体の目的に関して思案をし続けていた。

「だけどＡＭ体は何のために子供ばかり・・・！？」

「考えられるとしたら子供の持つ成長ホルモンを狙ってると言う事か・・・」

「それでは、子供たちがＡＭ体の餌に！？」

『しかし、このＡＭ体が出現した穴に人間の子供のものと思われる生命反応があります。直接食糧としていると言う訳ではありません

ね。』

すると、管制室からのグリフィスの連絡を受けた瞬間、ユーノの頭脳にあることが思い浮かぶ。

「ちょっと待てよ！だとしたら・・・――シャーリー。超音波を使って詳しくデータを解析してくれないか？」

『了解しました。』

ユーノからの指示を受けたシャーリーは超音波を使って地下に潜んだＡＭ体の様子を詳しく調べ始め、その結果探り出した解析結果を司令室のモニターに映し出す。

ユーノ達が注目する中、モニター画面に映ってきたのは何とも奇怪な動きを見せる何かの物体と思わしきものだった。

それを見た瞬間、なのは達は表情を曇らせる。

「何、これ！？」

すると、ユーノはその物体を見ると確信した様子でこう述べた。

「卵だ。」

「卵！？」

「ＡＭ体は子供たちを拉致して体の中に繁殖のための卵を産み付ける気だ・・・！」

その言葉を耳にした途端、全員の背筋が一気に凍りつく。

ＡＭ体の目的が子供の中に卵を産み付けることだとが判明したその頃、いまだに壁の中に閉じ込められた人々は壁を壊そうと必死になって試行錯誤を加えながら壁をたたき続ける。

「助けて！！」

「こっから出してくれ！！」

殴ったり、椅子などを使って壁をたたき続けるパニック状態の人々を見ながら、ハルキだけを守り抜くことに成功したヴァイスは険しい表情を浮かべる。

「くそ・・・！俺達はこいつの巣の中にいるのかよ！」

「ねぇどうしよう！」

と、その時だった。

再び地面が大きく揺れ始めると陥没した地面の下からＡＭ体と思わしき体長６０メートルを越えるほどの巨大な蔓と角を生やした生き物が出現。

ハルキやヴァイスはこの巨大な生き物を目の当たりにした瞬間、目を疑った。

「か、怪獣！！」

「逃げろ！！」

ヴァイスはハルキを連れてＡＭ体の前から逃げていく。

さて、ＡＭ体が地中より姿を出現させた直後漸く現場へと到着を果たしたティアナたちスターズのフォワード三名と副隊長二人は、その巨大なＡＭ体の姿を確認する。

「こちらスターズ２。Ｂ地区遊園地内にＡＭ体と思わしき巨大生物を確認。」

「よし。スバル達は足元より攻撃を仕掛けろ。私とヴィータで頭上から前を攻める。」

「「「了解！」」」

シグナムの命令を聞き入れると、ティアナたちは早速足元からの攻撃に乗り出す。

「バリアブルシュート！」

「「リボルバーシュート！」」

同じように、シグナムとヴィータも頭上からの攻撃に乗り出す。

「咆えろ、グラーフアイゼン！」

「滾れ、レバンティン！」

五人の攻撃が一斉にＡＭ２２へ仕掛けられるが、遊園地内をすっぽり覆っている特注の見えない壁に阻まれ、誤認の攻撃が全くＡＭ体

に届かない。

「駄目です。見えない壁の所為で、攻撃が全て弾き返されます！」

シグナムとヴィータはその後も色々と試行錯誤を繰り返して攻撃を続けるが、一向に壁は破壊できずに攻撃のすべてが無駄になってしまうばかりであった。

「駄目か。これでは無駄に魔力を浪費する・・・何とか打開策を考えねば。」

「一端引くしかねぇか。」

二人は共通の結論に達すると、攻撃を注して迂回しながらこのことを六課に知らせるためにスバルたちとともにその場を離れていき、園内で頭上のシグナムたちの姿を見ていたヴァイスはこの手詰まりな様子に舌打ちをしてしまう。

「くそ・・・！空からも駄目なのか。」

ＡＭ体はシグナムたちがその場を引くと、遊園地にあるものを手当たり次第に壊しながら、直進方向である場所を目指していく。

ヴァイスがＡＭ体の方向に目を向けると、映ってきたのは観覧車。

その瞬間、ヴァイスはあることを思い出す。

「！」

そう、観覧車の中にはラグナとハルキの妹であるアツコがまだ中に

いるのであった。

「しまった！ラグナ！！」

「待って、お兄ちゃん！」

観覧車に向かって全速力で駆け抜けていくヴァイスの後に続く形でハルキが逃げ惑う人々をかき分けながら走り出す。

さて、その観覧車に取り残されたままのラグナとアツコはというと、真っ直ぐに向かってくるＡＭ体の姿を目撃した途端、アツコは今日のあまりラグナにしがみつく。

「きゃあああ！！」

ラグナは恐怖におびえるアツコを守ろうと、怖いのを堪えて必死にアツコの体を抱き寄せる。

ＡＭ体はその後もまっすぐ観覧車に向かって歩みを止めとしない。

果たして、ラグナたちはどうなってしまう！？

この事態を深刻にとらえながら、シグナム達が送ってきたデータを解析にかけたシャーリーが早速その解析結果をユーノの元に転送する。

『ユーノ先生。先発隊から送られてきた見えない壁の分析結果が出ました！』

送らてきた結果がユーノの机のディプレイに表示されると、見えな

い壁の成分を見ていたユーノは険しい表情を浮かべる。

「これは明らかに地上にはない物質だな・・・」

ユーノの言葉を聞いた瞬間、全員は驚き鬼太郎が尋ねる。

「つうことは、宇宙から来たってことっすか!?」

「恐らくずっと前に地上に飛来して、地中で眠っていたのかもしれない。それがアンゴルモアの影響で覚醒した・・・そう考えるべきだろう。」

「く!厄介な相手だな・・・」

思わぬ事情を聞かされ、顔をゆがめるクロノ。

その後もユーノはディスプレイに映し出される壁の成分を吟味する。

「かなりの硬度を持ち、更に光の屈折を利用して魔力弾やヴィータ達の攻撃を弾いてしまう。」

「ユーノ君、何か対策は無いの!?」

「う〜〜ん・・・・・強いて言えば水素と似た物質を大量に含んでいるな。」

「水素だと?」

と、その瞬間だ。

ユーノの頭脳が閃き、この問題を解決するための一つの妙案が浮かんできた。

「そうだ。あくまで仮説の段階だけど、デュランダルと袖白雪の氷結能力で瞬間的に冷凍すれば、分子が暴れ出して勝手に崩壊するかもしれない。」

「成程。よし、早速試してみよう。クロノくん、ルキアさん。準備を！」

「「ああ。」」

クロノとルキアはデュランダルと袖白雪を携帯すると、転送ポートを使って現場へと急行。

はやてはモニター画面に映し出されるＡＭ体を凝視しながらふと呟く。

「こんな凶悪な奴に、繁殖されちゃたまらんわ・・・！」

さて、打開策が見え始めていたその頃、ヴァイスはＡＭ体の注意を自分に引き付けるために観覧車の付近で大声を上げていた。

「うおおおいいい！！そこのデカいの！！！！こっちだ！！！こっち来い！！！！」

だが、ＡＭ体はヴァイスの言葉など無視して変わらず観覧車を目指して歩きつづけ、ヴァイスは悔しい思いを叫び声としてあげる。

「くそ！！！」

ヴァイスは一先ず観覧車から降りてきたひとびとをいそいで避難させるために誘導を行っていた。

「さぁ！早く逃げろ！！」

誘導の傍ら、ヴァイスは頭上のほうで下に降りてくるにはまだ時間がかかると思われるラグナたちの乗った機体を見上げながら、藁にもすがる思いでＡＭ体の注意をひきつけようとしていた。

「おおい！！！こっちだ！！！俺を捕まえて見ろ！！！」

そんなヴァイスの様子を離れたところで見ていたハルキの脳裏に、自分を励ましてくれたヴァイスの言葉がよみがえる。

「（男はな、自分が怖いと思うものに立ち向かわなくちゃいけない時が必ず来るもんだ。）」

ハルキは言葉を思い返しながらＡＭ体の姿を見上げる。

観覧車の中に閉じ込められたままのラグナはＡＭ体に見つからないようにアツコを抱きしめながら席の下のほうへと隠れる。

「隠れよう！」

ヴァイスは兎に角ラグナたちを助けたいと思う一心で、かれそうな声を上げ続ける。

「おおい！！！！こっちだ！！！！こっちに来い！！！！」

すると、そんなヴァイスの声に反応した観覧車間際まで近づいていたＡＭ体は左足を上げるとヴァイスの体めがけて踏みかかっていった。

「げ！やべ！！」

ヴァイスは何とかＡＭ体の行動から身を躱し、ハルキの心に一つの決心が生まれようとしていた。

「（兄貴って言うのはどんな時でも妹を守ってやらないとダメなんだぜ。）」

「ようし・・・！」

ハルキはあたりを見渡すと、カバーで覆い隠されていたゴーカートに搭乗し、それを走らせると呪文のようにこう口ずさむ。

「怖くない・・・怖くない・・・怖くないぞ！！！」

ヴァイスもそう様子に気づき、思わず目を見開く。

「ハルキ！」

「怪獣！！こっちだぞ！！こっち！！」

ＡＭ体はハルキのゴーカートに注意をひかれると、そのまま観覧車からハルキのほうへと歩き始め、隠れていたラグナたちもこれには驚きを隠せなかった。

「ハルキ！止せ！危ない！！」

ヴァイスはハルキの行動を止めようとそのままハルキを追いかけ、ハルキはゴーカートを走らせながらＡＭ体を誘導し続ける。

「こっちだ、こっち！！」

ＡＭ体は腕の触手を鞭のように振るい、ハルキを攻撃するがハルキはギリギリのところでそれを躱しその後もゴーカートを走らせる。

「捕まえて見ろ！！お前なんかに捕まるか、バーカ！！」

「ハルキ！無茶すんじゃねぇよ！」

追いついたヴァイスはハルキにそう言いながら、ハルキと運転を代って自分がゴーカートを運転し始める。

そんなヴァイスに向かってハルキはこう言ってきた。

「だってお兄ちゃんさっき言ったじゃないか。兄貴は妹を守らなきゃならないって！」

「お、そうだな。お前も男になったな・・・ようし！このまま怪獣を誘導するぞ！」

「うん！怪獣！！こっちだ！！こっちだぞ！！」

ヴァイスとハルキはゴーカートを走らせ、ＡＭ体を誘導し続けていく。

ＡＭ体もそんな二人の行動の甲斐あってか、完全に観覧車から注意

を外してヴァイス達のゴーカートを追いかけていく。
これを見ていたラグナとアツコは大いに驚いていた。
「お兄ちゃんだ・・・！お兄ちゃんが怪獣を連れてってくれたんだ！」
「うん。私のお兄ちゃんも一緒。」
ヴァイスはゴーカートを爆走させ、園内の外側のほうへとＡＭ体を誘導させていく。
頑張れ、ヴァイス。
負けるな、ヴァイス・グランセニック！
男を見せろ！！
一方、ユーノ・スクライアの立てた作戦を実行するため、クロノ・ハラオウンと朽木ルキアは氷結の杖デュランダルと袖白雪を把持してＢ地区に向かって急行していた。
移動中の二人に向かってギンガとヴィータは次のように言葉をかける。
「遊園地の裏手の方に移動中です。」
「今がチャンスだぜ、二人とも。」
「よし。ルキアさん。同時に行きますよ。」

「了解。」

クロノとルキアは準備を整えると、それぞれ武器を取り出し氷結系の魔法と技を発動させる。

「凍てつけ！」

「白霜雨！」

頭上から降り注ぐ白霜雨と杖の先端から放出された冷凍光線が見えない壁に衝突すると、ユーノが立てた仮説通りに勝手に崩壊が起こり、見事見えない壁は崩壊を果たした。

「「「やった！」」」

「成功だ！」

司令室でその光景を見ていたはやて達も大いに喜び、なのはは思わずユーノの首抱き着き成功を喜んだ。

「おっしゃあ！！」

「やったよ、ユーノ君！！」

「流石は店長！」

「へへ♪よし、これならいける。前線一同総攻撃開始！」

見えない壁が崩壊したことで心置きなく戦えるようになると、クロ

ノ・ルキアも交えた七人で一斉に攻撃を始める前線一同。
前線の攻撃を生身で受け、思わず足元を踏み外したＡＭ体は巨体を後ろにひっくり返らせる。
クロノは下のほうで攻撃を加えるスバルとギンガに向かって次のように指示を出す。
「スバルとギンガは地上で人命の救護を優先してくれ。」
「了解。行こう、ギン姉！」
「ええ！」
二人はマッハキャリバーとブリッツキャリバーを加速させると、園内に取り残された人々の救護へと向かい、残ったティアナは降りてきたヴィータとともに攻撃を続ける。
「ティアナ。あの触手に気をつけろよ。当たったらただじゃすまねぇぞ！」
「了解！」
ティアナはカートリッジをロードし、得意のクロスファイアーシュートを連発してＡＭ体の体に傷をつけていく。
攻撃を受けたＡＭ体は前線メンバーに向かって抵抗の姿勢を見せ、腕の蔓を伸ばして乱れ内を繰り出していく。
そのうちの一つが、ゴーカートで園内を走っていたヴァイス達の元

に当たりそうになり、ハルキは思わず声を上げてしまう。

「うわああ！！！おっかねぇ！！」

その後もＡＭ体の蔓は攻撃を受けるたびに乱れ飛び、ヴァイス達に襲い掛かる。

「来るぞ！」

そして、蔓を躱したヴァイスだったが躱すのが若干遅れてしまい運転操作を誤ってしまいそのままコーンに向かって突っ込んで行ってしまった。

「「わあああああ！！！」」

コーンに激突したヴァイス達はゴーカートから投げ出される

「ぐあああああ・・・・！！！く、くそ！！！」

ヴァイスは険しい表情を浮かべながらハルキの元へと急いだ。

「ハルキ！大丈夫か！？」

「うん！」

「行くぞ！！」

そう言ってヴァイスがハルキとともに逃げ出そうとしたとき、ヴァイスは先ほどの衝撃で足を痛めてしまい声を上げた。

「ぐあああ！！！」

「どうしたの！？」

ティアナは遠く離れた場所でありながらそのヴァイスの悲鳴がしっかりと耳に届き、思わずヴァイスの安否を心配する。

「ヴァイス陸曹長！」

すると、ＡＭ体は動けないヴァイス達に狙いを変更するとそのまま足を上げて二人の体を踏み潰そうとしてきた。

「「うわあああ！！！」」

だが、その瞬間駆けつけてきたスバルとギンガが二人をギリギリのところで救出することに成功する。

「間に合いました！」

「大丈夫ですか、ヴァイス陸曹長！？」

「お前ら・・・ふう。助かったぜ。」

安どのため息をつく二人。

ヴァイス達を一度安全なところにまで避難をさせると、二人はＡＭ体に向かってウィングロードを走り抜け、攻撃を仕掛ける。

二人に触発されたティアナやクロノ達も引き続き攻撃を仕掛けるが、中々の硬度を持ったＡＭ体の皮膚と両腕の触手に翻弄され、決定打

を食らわせられない状況に四苦八苦する。

司令室で現場の様子を見ていたフェイトやはやて達は苦い顔を浮かべる。

「クロノ達もあの蔓には相当苦労してる・・・」

「先ずはあの厄介な蔓を何とかせなあかんな。」

すると、ユーノはタッチパネルを操作しながら格納庫にある開発したばかりの機体と二期のハイパーマシーンを発進させようとしていた。

「こういう時こそ、ハイパーマシーンを大いに活用する番だ。ちょうどいい三機をそっちに送るから、待ってろ。」

ユーノは準備を完了させると、高速転送システムを使って三機のハイパーマシーン、ジャベリン、マッコーリフ、そして新たに開発したジェット機ファルコンを発進させた。

現場に到着した三機のハイパーマシンを目撃したクロノ達は一度ＡＭ体から目をそらしてハイパーマシンに注目する。

「ユーノ殿のハイパーマシーンだ。」

「助かった。しかし、あの三機を一体どうするつもりだ?」

シグナム達が怪訝そうな表情を浮かべる中、ユーノはタッチパネルを操作するとほくそ笑みながらプログラムコードを入力する。

「見せてやろう。三機のハイパーマシーンの真の力を。電神合体！」

ユーノが起動ボタンを押すと、三機のハイパーマシーンはそれぞれのプログラムに従って動きを見せ始める。

マッコーリフはシステムを変形させてロボットの脚部となり、ジャベリンは変形したマッコーリフと合体し胴体となると、残っていたファルコンが合体してロボットの体を形作り、電神ゴッドゼノンが完成する。

三機のハイパーマシーンが合体を果たすと、それを間近で見ていたクロノやティアナたちは度胆を抜いた。

「な！」

「合体した・・・！！」

言葉にすらできな様な驚きを見せるティアナたちと同じように、司令室のなのは達も絶句していた。

「ま・・・まさかユーノ・・・お前が造ったあれはこのためのものだったのか！？」

「はい♪あれの名は電神ゴッドゼノン。ジャベリン・マッコーリフ・新型のファルコンの三機が合体することによって完成する対巨大ＡＭ体に造ったものです。これで奴の触手を何とかするから、弱ったところを一気にみんなが叩いてくれ！」

「「「「「「了解！」」」」」」

ユーノは前線部隊にそう言うと、コントローラーを取り出しゴッドゼノンの体を操りＡＭ２２に向かって攻撃を仕掛ける。

「先ずはこれだ。ゴッドパンチ！」

ユーノはそういうと、ゴッドゼノンの両手を飛ばしてＡＭ２２に向かってダメージを負わせると、その直後に懐に忍び込ませて次なる技を繰り出す。

「行くぜ。ゴッドブレイカー！」

ゴッドゼノンの右腕から繰り出されるゴッドブレイカーに直撃すると、ＡＭ２２は大きなダメージを受け吹き飛ばされる。

そして、弱ってきたＡＭ２２の両腕についている触手をゴッドゼノンは自慢の怪力で引きちぎり、触手を落とされたＡＭ２２は頭の上の角から光線を放射し、ゴッドゼノンを苦しめるがゴッドゼノンはその攻撃に耐えると、光線を繰り出してきたＡＭ２２の角をゴッドブレイカーでそぎ落とした。

「今だ、みんな！」

「「「「はい！」」」」

「「「ああ！」」」

ティアナたちは返事をすると、それぞれＡＲカートリッジと補助デバイスを装着して強化させると一気に畳み掛ける。

「受けてみなさい、ＡＭ２２。ヴァイス陸曹長への報い・・・私が

晴らしくれる！！！」

ティアナは照準を定めると、ＡＲカートリッジを使った状態でのスターライトブレイカー・ファランクスシストを発動させる。

「スターライトブレイカー・ファランクスシスト！！」

ティアナの攻撃と同時に、他のメンバーも自身の必殺技を発動する。

「翔けよ、隼！」

「クラッシャーシュラーク！！」

「完全氷白！！」

「ブレイズバースト！！」

「「リボルバーデストロイヤー！！」」

七人の一撃必殺の攻撃が通ると、ＡＭ２２は力尽きて後ろに倒れると大爆発を起こして消滅を果たした。

ヴァイスとハルキは七人とゴッドゼノンによって倒されたＡＭ２２を見ると、歓喜の声を上げた。

「やった！！」

「よっしゃあ！」

クロノは炎の中から飛び出してきたアンゴルモアを素早く確認し、

それが間違いなく本物であるということを知り、手早く封印処理を済ませた。

ＡＭ２２を倒した前線一同は、地中に引きずり込まれた子供たちの救出に取り掛かり、ヴァイスとハルキも一緒になって繭に覆われた子供たちの救助にあたっていた。

「大丈夫!?しっかり!!」

「大丈夫か!」

「ワタル!」

ヴァイスとハルキよって繭の中から出てくる無事な様子のワタル。

他のメンバーたちもそれぞれ繭の中の子供たちを次々に救出していき、被害状況を確認してきたスバルがクロノに報告する。

「ここ以外に被害は出ていません。」

「ご苦労。立てるか?」

クロノはそういうと、救出した子供に向かってそう言った。

そして、ハルキのほうも汗だくとなっているワタルに向かって言葉を投げかける。

「ワタル大丈夫か!?」

「怖かった・・・死ぬかと思った・・・あ!」

ワタルはふと又のほうが冷たいことに気づき、思わず手を当てるとそれを見ていたジュンイチが失禁したワタルに向かってこう言った。

「何だ漏らしちゃったのか?偉そうなこと言ってるくせにだらしねぇな!」

すると、それを聞いたハルキがワタルを馬鹿にしてきたジュンイチに向かって強い口調で反論してきた。

「止めろよ。」

「何だよ?」

「人が失敗しちゃったときに笑うなんて最低だぞ。」

ハルキから飛び出す思わぬ言葉に声を詰まらせてしまうジュンイチ。

すると、ハルキの言葉に便乗してラグナやアツコもこう言ってきた。

「そう。ハルキ君の言う通り、最低だよ。」

「お兄ちゃん凄いんだ。怪獣から私達を助けてくれたんだよ!」

「ハルキが・・・!?」

信じられないといった表情を見せるジュンイチだったが、ヴァイスは肩を軽き叩いてから本当だということを伝える。

「本当だぜ。今度ゴーカートで対決してみろよ。嘘じゃないことが

分かるぞ。」

するとそのとき、項垂れていたワタルが今までの自分の行いを反省するとハルキに向かって謝罪の言葉をかけてきた。

「今までごめんよ。みんなには内緒にしてくれよ。」

「当たり前だろ。友達じゃないか！」

「な！」

「・・・うん！」

三人は手を取り合って本当の意味での友情を確認し合った。

そんな和やかな光景を見ていたスバルたちの心も自然と和やかとなった。

「みんな、仲良しだね！」

「そうね。それよりヴァイス陸曹長は足の怪我は！？」

「大したこたあねぇよ。態々心配してくれるのか、ティアナ。あんがとよ！」

「あ！い、いえ・・・！その・・・ヴァイス陸曹長が無事で何よりです！」

若干顔を赤くして照れた様子となるティアナにスバルが悪戯っぽい表情で茶々を入れてきた。

「ティア、顔赤くなってるよ♪」

「う、うっさいわねアンタは！！」

スバルの言葉に反応した激情したティアナは我を忘れた様子でスバルの顔面を強くひっぱって恥ずかしさをごまかそうとした。

「いったたた！！！ティアやめて！！！」

この二人の様子を見ていたヴァイスやラグナ、他のメンバーは思わず笑い声を上げたのであった。

とにもかくにも、今回のＡＭ体は無事にヴァイスやティアナたちの活躍、更には新登場した電神ゴッドゼノンによって事件は解決した。

彼らの戦いはこれからも続く。

閉ざされた遊園地（後書き）

教えて、ユーノ先生！

ユ「今日はゴッドゼノンについてだ♪」

ユ「三機のハイパーマシーン、ジャベリン・マッコーリフ・ファルコンが電神合体することによって誕生する巨大ロボットだ。」

ユ「得意技はパンチを飛ばして攻撃を加える『ゴッドパンチ』。必殺技は右腕から繰り出す破壊力抜群のゴッドブレイカーだ♪」

恋「巨大な怪物には巨大メカで対抗とは・・・ある意味ではお約束だな。」

は「せやけど、実にわかりやすいという利点もありますよ。」

ユ「ま、そうしょっちゅう使うものではないとは思うが・・・これからもこういう時のためのメカは作って置く予定だから、楽しみにしてなよ♪」

恋「つくづくお前の頭の中は一体どんな構造になってるだろうな・・・」

は「私らにはとてもついていけぬ領域であることは間違いなさそうやね・・・」

魔導師図鑑ハイパー！

柊沢エリオルが拙宅で開くガーデンパーティーに招待されたユーノと、同伴のはやて達は久しぶりに再会を果たすギル・グレアムやさくら達とともに会話を弾ませていた。

は「グレアムおじさんもほんま元気そうでなりやりやわ。」

グ「ははは。君も、暫く見ないうちに随分と綺麗なったものだ。私なんかこの通りすっかり老いぼれてしまったよ。」

ユ「そんなことありませんよ。まだまだ提督殿は若いですから。」

エ「そうですね。あまり自分のことを低く見立てることはありません。」

グ「ありがとう。そう言われるとこっちも元気が出てきたよ。」

和やかな雰囲気を醸し出すユーノ達。

するとそのとき、見慣れぬ恰好をした不審な男が近づいてきた。

？「お久しぶりです、グレアム提督。」

グ「おや？君は――――――」

グレアムや聞き覚えのある声に反応したユーノ達が振り返ってみると、そこに立っていたのは紛れもなく知世と石田によってデザインされた服に身を包んだクロノであった。

知「あら、クロノさん。お似合いですわ♪」

さ「え、ええ！！！これがクロノさん！！！」

小「おい、ユーノ！？一体これはどういうことだ？」

ユ「ぼ、僕にもさっぱり・・・ていうかこんなデザインを考えたのってまさか知世さん！？」

知「はい。あと、石田さんにもご協力いただきました。素敵ですわよね？」

この知世の笑顔とクロノの着ている服を見た瞬間、一同は思わず絶句した。

グ「クロノ・・・・・・十年のうちに何があったというのだ・・・」

あまりの光景に、ギル・グレアムはショックを隠し切れない様子であった。

一「ダメだこりゃ。」

ヴァイス奮闘篇

ラグナ・グランセニック

声：中原麻衣

ヴァイスの妹。仲の良い兄妹であったが、ある日を境に疎遠になってしまう。ラグナは昔のような兄妹関係にもどることを望んでいるが、ヴァイスが事件のことにこだわっているので仲がこじれたままとなっていたが、ＪＳ事件後は関係が修復されたようである。ヴァ

イスとともに遊園地で休暇を楽しんでいたが、観覧車内にアツコとともに閉じ込められＡＭ２２に標的にされるが、ヴァイス達の誘導によってそれを逃れる。

ハルキ

声：竹内順子

遊園地に来ていた子供。弱気な性格でいつもいじめられている。ヴァイスとの出会いにより、兄としての役目に自覚を覚えると自らの危険も顧みずに果敢にＡＭ２２に向かって立ち舞う勇気を見せた。

アツコ

声：あおきさやか

ハルキの妹。いつもいじられてばかりのハルキをいじめっ子から庇っている。

ワタルとジュンイチ

声：樋口智透／箭内仁

ハルキをいじめる二人の少年。ＡＭ２２によって地面の中へと引きずり込まれるが、その後救出され、今までいじめてきたハルキと仲直りして本当の友達となる。

バリアー超獣ガギ／ＡＭ２３

身長：６４メートル。体重：６万９０００トン。

土中に巨大な蟻地獄のような巣を作るＡＭ体。元々は宇宙怪獣で、少し前にワンパークに飛来し、地中に姿を隠していた。地上に来た目的は繁殖のためで、成長ホルモンを持つ子どもを触手で捕らえ、

卵を産みつけようとした。ハナヤシキ・アミューズを子どもたちを捕らえる場所として、周りを見えないバリアーフィールドで覆って子ども達が逃げられないようにした。ゴーカートで囮になったハルキとヴァイスによってある程度誘導された後、バリアーフィールドをクロノとルキアの氷結攻撃で破壊され、その後前線部隊と戦った。武器は角から出す赤色光線とハサミ状の両手にある長い触手と二股に分かれたハサミ状の尻尾を使った攻撃で、それらを駆使して前線部隊を翻弄するがユーノの開発したゴッドゼノンとの戦い触手を引きちぎられてしまい、さらに角を折られ、ボロボロになったところを七人の一斉攻撃で倒された。

次回予告

一「日々の激務と封じられた呪印の影響で疲労困憊のユーノ。なのは達は自分の力の及ばない状況に苦い顔を浮かべる」

ル「そんな日常で、また新たなるアンゴルモアの反応が。」

鬼「だが、今回のアンゴルモアの反応があったのは今まではまた違う・・・常識はずれな世界だった・・・！」

ユ「次回、ユーノ・スクライア外伝　『不動遊星とファイブディーズ』」

遊「集いし絆が、新たな出会いと奇跡を導き出す！」

不動遊星とファイブディーズ（前書き）

お待たせいたしました。

遊戯王　５Ｄ'ｓ篇の完成です。

色々悩んで書き上げましたが、結構長いです。

上手くかけたつもりは毛頭ありませんが、楽しんでくれれば幸いです。

では、どうぞ。

不動遊星とファイブディーズ

＞i２００６３―７０９＜

機動六課の午後の昼下がり。

若干仕事をさぼり気味、いや明らかにサボっている様子の鬼太郎と浦太郎は店から持ってきた携帯テレビの画面に広がってくるあるアニメを見ていた。

そのアニメの名は、『遊☆戯☆王　５Ｄ，ｓ』。

十年以上に及ぶ長い歴史を持ち、その人気から派生したカードゲームが世界的に大流行し、一時代を築き上げた少年漫画の最新作である。

鬼太郎自身も遊戯王というアニメそのものは子供のころより拝見していたが、今回のモチーフであるバイクを使ったカードバトル、ライディングデュエル形式を見たときには流石に度胆抜いていた。

「へぇ～～～今の遊戯王はここまで進化してたのか・・だけどバイクに乗ってまでデュエルする必要はないと俺は思うがな・・・」

「そうだね。ていうかどうして毎回主人公の性格がこうもカードに対して異常なまでに熱血漢な訳？」

「アホだな。主人公がカードに対して熱血漢じゃなかったら、この番組自体成立しなくなるだろ？」

「あ、それもそっか♪」

鬼太郎と同じくこういうことに関しては妙に興味を抱く浦太郎も、

この鬼太郎の説明に納得の表情を浮かべる。

「しかしまぁ・・・カード如きで世界が崩壊するのはどうかと俺は思うが、最近はそういうのも起こりかねないことばっかだから、無いとも限らないな。」

「だね♪」

そう、遊戯王の設定には色んな意味で壮大なものがある。

先ほど鬼太郎が言ったように、世界の明暗をカードバトル、デュエルによって決するのがこの漫画・アニメの持ち味となっているためかなり誇張して描かれていることが多い。

そんな描写をあまり好ましく思わない大人も大勢いるが、基本子供はそんなことはあまり気にしない。

大事なのは如何に主人公がカードに対して熱血漢で、また熱いバトルを展開するかが重要なのだ。

そう言ったことを理解した上でこのアニメを見ていた鬼太郎と浦太郎は思わず爆笑する。

「「ははははははははははは！！！！！」」

だが、そんな二人の後ろから監視役の金太郎が近づき裁きの鉄拳を二人の頭上から入れると、あまりの痛さに悶絶する二人に向かって注意を促す。

「油を売っている暇があるなら、仕事をしてくだされ二人とも。」

「「す・・・すみませんでした・・・・！」」

だが、この時二人は予想だにしていなかった。

まさか今回のアンゴルモア事件で、このアニメの主人公・・・不動遊星とその仲間たちと一緒に戦うことになろうとは夢にも思っていなかったのだ。

その頃、とある事情で浦原商店へと足を運んでいたユーノ・スクライアはと言うと、店の奥で悲鳴を上げながら尋常ならない苦しみに耐えていた。

「う・・・！ぐ・・・ぐあああ・・・・！！」

ユーノは上着を脱ぎ、上半身裸の状態でうつ伏せになっていると、その横で真剣な様子で鬼道を施す浦原と鉄斎。

そして、そんなユーノのことを気がかりに思う一護・織姫・コンの三人が様子を窺っていた。

浦原はユーノの背中に痛々しく刻まれた謎の呪印に手を当てると、痛みに耐えながら険しい表情を浮かべるユーノに声をかける。

「もう少しっすからね。我慢してくださいよ。」

「す、すみません・・・浦原さん・・・ぐううううう！！！」

ユーノは全身を走る焼けるような痛みに耐えながら、二人の処置を受けていた。

一護や織姫はそんな痛々しい姿のユーノの気持ちを汲み取りながら、悔しい思いを抱きながら励ましの言葉をかける。

「頑張れ、ユーノ。あとちょっとだ。」

「ユーノさん。気を確かにしてくださいね。」

何故、ユーノがこんなことをしているのかと言えば、先日の授業参観の際に魔力を使用するためとは言え、不用意に己に課せられた呪印の力を一時的とはいえ解放したことがそもそもの原因にある。

この呪印は、一時的とはいえ力を解き放つとユーノ本人に途轍もない痛みと苦しみを当てるもので、ユーノはあの時の夜より一人この呪印の痛みに苦しみ続けていた。

そして、その痛みを和らげる・・・即ち解放された呪印の力を完全ではないが押さえる方法を知っているのは浦原喜助ただ一人だけだった。

だからユーノは今、こうして浦原の処置を受けている。

やがて、その処置が完了すると浦原と鉄斎は静かに鬼道を解き、ユーノに声をかける。

「ふう。どうにか終わりましたっすよ。」

ユーノは多量の汗を流し、徐々に引いていく呪印の痛みを感じると、静かにその場に座り込み上着を着ながら浦原にお礼の言葉をかける。

「ありがとうございます・・・少し楽になりました・・・」

傍でそれを見ていた一護や織姫、コンも安どの表情を浮かべる。

「一先ず安心だな。」

「ああ。」

コンは徐にユーノに近づくと、服の上に隠れて今は見えなくなっている背中全体に広がった呪印の箇所を手で触る。

「しっかし、相変わらずおめぇの背中の呪印は・・・――――何ていうか悍ましいの一言だよな・・・・・・」

「まぁ、無理もねぇ。ユーノの呪印はそんじょそこらの呪いとは訳が違うんだ。大体、こんなことになっちまったお前も大変だよな・・・」

「仕方ないですよ、一護さん。これは僕が死ぬまで背負い続けなければならない責苦であり力の代償なんですから。それに、こんな呪いなのはの後遺症に比べれば僕のなんか・・・――――」

飽く迄自分の呪いは大したことではないと言い張ろうとしたユーノだったが、その瞬間一護の一喝が飛び交う。

「馬鹿野郎!てめぇのそれとなのはの後遺症を一緒にすんじゃねぇよ!確かに、なのはも昔と比べれば魔力値だって若干落ちてるし、体にだって負担は残っちまった。けど、お前の呪いは一度暴走すれば俺の完全虚化同様どうなるか分かんねぇんだぞ!!」

「あなた・・・」

「一護・・・」

張り裂けるような思いでユーノの身を案じる一護の姿に、織姫とコンは思わず声を詰まらせ、話を聞いていた浦原もこう補足していた。

「黒崎サンの言う通りっすよ、スクライアさん。不用意に呪印の力を解けば、たちまち奴らの呪いが体中を侵食し、次は今回のようにはいかないかもしれないっす。くれぐれも、今後は不用意に封印を解かないように気を付けてください。私達もまだあなたの呪印の対処法を完全に理解できてる訳ではありませんから・・・」

「はい・・・すみません・・・以後、気を付けます。」

暗い表情を浮かべ、項垂れた様子のユーノ。

一護はそんなユーノの顔を見ながら、心配した様子でこう言って来た。

「・・・なぁ、ユーノ。あんまし一人で何もかも背負い込んでるじゃねぇぞ。お前は昔から人に迷惑をかけたがらない性分だから、もしものときは――――――」

「大丈夫ですよ、一護さん。」

「？」

「本当に困ったときは一護さんの力を必要としますから。僕にとって、気兼ねなく背中を預けられる人は、あなただけなんですから一

護さん♪」

和やかな表情で一護にそう口にしたユーノ。

これを聞いた瞬間、一護は思わず呆然とするが直ぐに鼻で笑った。

「・・・ユーノ・・・ふん。そうか・・・」

ユーノは一護にその言葉を言うと、羽織を着こなし帽子を被り直すとその場にいる全員に挨拶を済ませて六課へ戻ろうとした。

「それじゃあ、浦原さん。一護さん。今日は態々すみませんでした。」

「いえいえ。アタシは全然いいっすから♪」

「ユーノさん。体にだけは気を付けてくださいね。あんまり無茶し過ぎると、またシャマルさんやなのはさんに叱られちゃいますからね。」

「そうだぜ！おめぇはほんとに一人で無茶ばかりしやがって！」

織姫やコンからの痛い一言を聞くと、ユーノ自身も思わず苦笑いを浮かべる。

「あはは・・・いや、そのことは何とも言い返す言葉がありません・・・分かりました。出来るだけ、無茶はしないように頑張りますね♪」

「そうするよう心掛けろな、ユーノ。またシャマルの奴に文句言わ

れるのはたまったもんじゃないからな、俺。」

「はい。じゃあ、僕は戻りますね。」

ユーノは一護にそう言うと、次元転送魔法を使って一護達の前から姿を消し、ミッドチルダの機動六課へ戻っていった。

ユーノが帰った後、浦原は少しの前を置いてから一護にこんなことを言って来た。

「・・・黒崎サン」

「何だよ?」

「奴らの呪いは――――――私達が思ってる以上に凄まじいものっす。気を抜けばスクライアさんは忽ち奴らに魂を喰われ、スクライアさんは自分を失くします。あれだけの強い呪いだ・・・――――並の精神力の強さじゃ耐えられない。だが彼は――――――」

「ああ。本当にあいつは恐ろしいぐらい精神の強すぎる男だよ。一体どうしたらあんな強すぎる精神が養われるんだろうな?」

一護や浦原がそう口にすると、話を聞いていた織姫が便乗し自分の考えを提示する。

「きっと多分・・・いつも他人に遠慮して、自分一人で何もかも背負い込んで決断してきたからじゃないかな?」

「・・・そうかもな。あいつは昔の俺と同じで、人に頼れない性格なんだ・・・局勤めから今に至るまであいつは孤独に戦い続けてき

た・・・それが却って、あそこまで熟し過ぎた精神にしちまったんだ。」

「人は環境によって著しい変化を見出します。彼の場合は非常に珍しいケースっす。子供時代ですら、全くと言うほど子供らしいことを経験してこなかったことと、管理局という組織のしがらみに捕らわれ、“大人”として扱われてきたことが・・・スクライアさんをあんなにも熟れさせた・・・」

「ある意味で、可哀そうな奴だな・・・」

コンがユーノのそんな性格と境遇を哀れに思いそう口にすると、一護も暗い表情で同じことを思ってしまった。

「ああ・・・俺もそう思う・・・」

この一連のやり取りは兎も角として、ユーノ・スクライア自身に課せられた謎の呪印の正体はこれから少しずつ明かされていくことになる。

だがそれを知ったとき、誰もがその壮絶なユーノの戦いの日々を哀れに思うのは間違いないだろう――――――

さて、そんなやり取りがあって数日が経過がした頃、なのはは通信でとある部署と今後の打ち合わせをしていた。

「では、そういう方向でよろしくお願い致します。」

なのはが通信をしていたのは、同じロスト・ロギア関連の仕事を担当している機動一課の前線部隊の隊長だった。

今回、今後のスキルアップと訓練のマンネリ化を防ぐという目的でユーノが考案したのが始まりで、ユーノが最初に説得に応じた結果滞りなく明後日行われる六課との模擬戦が受理されたのだった。

なのはが通信を切り終えると、傍でその様子を聞いていたヴィータやリィンが尋ねる。

「機動一課の連中、何だって？」

「うん。予定通り、明後日の模擬戦を楽しみにしてるって。」

「よかったです。しかしユーノさんが上手く取り計らってくれて助かりました。」

「ああ。まさか私らと向こうのスキルアップの為に、態々対抗試合を申し込んでくれるとは・・・私らもびっくりだぜ。」

「あはは。日頃の訓練だけじゃ補えないことも多いし、私達全員にとっていい刺激になるよね、きっと♪」

「明後日が楽しみですね～～～♪」

そんな事を話しながら廊下を歩いていると、ヴィータは目の前に広がってくる見慣れた二人の姿を発見する。

「ん？あれ、はやてとフェイトじゃねぇか？」

「ほんとだ。みんな揃って何してるのかな？」

不思議に思った三人がフォワードや恋次たちが固まっている場所に向かい、その中心で何故か座ったままじっとしているはやてとフェイトを見ながらおもむろに尋ねる。

「何やってるの一体？」

「あ、なのはさん。今ルキアさんと鬼太郎さんの二人が八神部隊長とフェイトさんをモデルにスケッチ対決の真っ最中なんです。」

「何か妙に二人とも気合入っちゃって・・・仕方なくというか・・・」

ティアナがそう言うと、なのは達ははやてとフェイトをモデルにしてベレー帽を被りスケッチブックに途轍もない速さでスケッチをしていくルキアと鬼太郎の対決の様子を窺う。

「ふ～ん・・・で、二人的にはどうなんだよ？」

ヴィータがそう尋ねると、割と上機嫌な様子ではやては言葉を返す。

「私は全然かまへんで。どうせ描いてもらうならもう少し化粧した方がよかったと思ってるぐらいやから♪」

一方で、その隣ではフェイトが恥ずかしそうにこう言う。

「あ・・・私はその・・・モデルって言うのはちょっと自信なくて・・・」

すると、キャロは首を横に振りながら素直な言葉をかける。

「そんなことありませんよ。フェイトさん、モデルの素質凄くありますって！」

「あ、ありがとう・・・キャロ♪」

思わず頬を赤くしてしまったフェイト

と、その時鬼太郎とルキアの二人がスケッチをし終え満足のいく絵が完成する。

「よっしゃあ！！ついに出来た！」

「私も出来たぞ！自分でも驚嘆するほどの画力だ・・・！見ていてほれぼれする。」

「じゃあ、一斉に開けてみてよ。」

吉良がそういうと、二人は自信に満ちた表情で自分がスケッチした絵を同時に開いた。

「「どうだ！」」

二人の絵を見た瞬間、観戦していたなのは達全員とモデルとなっていたはやてとフェイトは思わず言葉を失った。

「「「「「が・・・――――！！！！」」」」」

「「（ウソ！！！！！！！！！）」」

二人の描いた絵は、最早絵と言うよりも単なる落書きに近いもので

あり、あまりの下手くそさになのは達はかける言葉すら思いつかなかったのだ。

だが、一方でルキアや鬼太郎は自分の書いた絵に誇りを持っている様子だった。

「ふふふ！どうだ私の模写は？パブロ・ピカソもぶっ魂消るほどの力作になったぞ！」

ルキアの自惚れを聞くと、恋次は全員の気持ちを代弁し思ったことを口にした。

「何処がだよ！二人してガキの落書きじゃねぇか！！」

「何だと！！俺達の芸術センスを罵るつもりかてめぇら！！」

「いや、そういうつもりじゃなくてだね・・・」

とってつけた言い訳すら思いつかない様子の吉良や他のメンバに―に、ルキアは更に強い言葉で言い寄った。

「ではどういうつもりなのだ！？芸術も碌に知らぬくせに上から目線に何を言うか貴様ら！」

すると、そんな二人の雰囲気に圧倒されたティアナはこの場を何とか収拾するために何とか上手い言葉で誤魔化し二人の機嫌を直そうとした。

「い、いえその・・・二人とも個性的でとても芸術的な作品だと思いますはい・・・！」

「流石はティアナだ！お前と井上だけだぞ、私の芸術センスを理解してくれるのは。」

「じゃあ、ここは引き分けってことでいいとするか！なははははははは！！！」

鬼太郎とルキアはティアナの言葉で機嫌を直すと、互いに満足の笑みを浮かべる。

そんな様子を見て一安心の様子のなのはは、ティアナの起点に感謝の念を覚える。

「（助かったよ。それにしても上手い具合にまとめたね、ティアナ・・・）」

「（いえ・・・ああでも言わないと収拾がつきませんでしたから・・・）」

「（それよりもはやてちゃんとフェイトさんが化石になっちゃいましたけど・・・！）」

リィンが念話でそう言うと、二人の絵の出来の悪さにかなりのショックを受けた二人は椅子に座ったまま化石となって動かなくなっていた。

全員はこの光景を見て、哀れに思う。

「（余程ショックだったんだな。ていうか二人もよくあそこまで下手くそな絵が描けるよな、本当・・・）」

「（アギト。これ以上この話はしないことにしておこう。今晩の夢にあの絵が出てきそうで怖い・・・）」

全員はただ、今夜の夢の中に二人の下手くそな絵が出てこないことを願うばかりであった。

さて、そんなやり取りが行われている頃、一人司令室の方で今後のアンゴルモアの反応を確認しながら、特別エグゼクティブアドバイザーのユーノは一人黙々と事務処理に思われていたが、その表情は過度の疲労によって浮かない様子であった。

「ふう～～～」

一通りの書類が片付き、思わず深いため息をつきながら背もたれに深く腰掛けるユーノ。

すると、そんなユーノを心配してザフィーラが徐に言葉を投げかけてきた。

「――――疲労が溜まってるようだな。」

「ザフィーラさん。大したほどじゃないですよ。」

「無理はせぬ方がいい。目の下に濃い隈が出来ている。」

「・・・・・・」

昔から、寡黙であるが状況判断能力に優れ他人の状態を見抜くことに長けているザフィーラの言葉を聞くと、ユーノも思わず目の下の

隈にてを触れる。

「お前は人よりも頑張り過ぎだ。この前の怪我だって、まだ完全には癒えていないだろう。その仕事が終わったのなら、ゆっくり休んだ方がいい。」

「ザフィーラさん・・・――ありがとうございます。じゃあ、ちょっとだけ休ませていただきます。」

「ああ。夕餉の時刻になったら起こしてやろう。」

「お願いします・・・――」

ユーノはそう言うと、帽子を被って顔を隠すとそのまま背もたれに寄しかかったまま、余程の疲れがたまっていたのかそのまま深い眠りへと落ちていった。

そんな疲労困憊のユーノの様子をザフィーラが心配そうに見ていると、ユーノの仕込み杖が光り出し、その中より具象化した晩翠が現れザフィーラに向かってこう言って来た。

「すまないな。ザフィーラ。」

「晩翠殿。」

「全く。こいつは人の親切を中々聞かぬ性格だ。余程の事でない限り素直に聞き入れぬのだがな――――――」

晩翠はそう言いながら、眠りにつくユーノの肩を軽く触れる。

「気にする必要はありません。同じ守護を司るもの同士、心が通じ合ったのでしょう。もっとも、スクライアの場合は私のそれとは勝手が違いますが。」

「そうだな・・・ザフィーラ。私からもユーノのことを頼む。内側の調整は出来ても、外側までは手が回らない。お前達が頼りだ。」

「承知した。スクライアの事は、我々がしっかりと守ります。」

晩翠とザフィーラは男同士の約束を交わし、このユーノ・スクライアの身を必ず護るという決意の元、静かに時が流れていくのを体感した。

そして、それから更に一日が過ぎ、夕方の訓練が終わるとなのはフォワード五人を集めて訓練終了の言葉を口にする。

「さて、今日の訓練はこれで終了です。」

「明日はいよいよ機動一課との対抗試合だから、しっかりご飯食べて、よく睡眠をとるようにね。」

「「「「「はい！」」」」」

「じゃ、お疲れ様です。」

「「「「「お疲れ様でした！」」」」」

訓練が終わり、隊舎の道を歩いていると恋次はなのはやフェイトに向かって一課の強さがどれほどなのか気になりふと尋ねてみた。

「なぁ、一課の連中って強いのか？」

「かなりの腕の者がいると聞いていますよ。」

「亀は前に教導で行ったことがあるんだろ？」

「まぁね。多分戦力的には申し分ないと思うけど・・・用心はしといたほうがいいかな♪」

「けどワクワクしてきました！どんな人と闘うかと思うと興奮が止まりません！」

「アンタだけでしょ。少しは平常心を保ちなさい。」

「どんな強い人が相手になろうと、全力で臨むだけね。」

「ですね。」

そんなそれぞれの思いを抱くなのは達とフォワードメンバーだったが、隊舎に戻り廊下を歩いていると吉良は不意に飛び込んできたある人物に目を奪われる。

「あ。」

「どうした吉良？」

「ユーノさん・・・座ったまま眠ってる。ほら――――――」

吉良がそう言ってなのは達全員が注目すると、目の前にいたのはロビーのソファーの上で腕組みをしながら深い眠りに入っていたユー

ノの姿だった。

「ほんとだ。どうせ寝るなら横になった方がいいよ。起こしてあげないと。」

そう思い、なのははそっとユーノに近づこうとしたときだった。

「いや、今はそうっとしておけ。」

ザフィーラが不意になのはの前に現れ行動を止めてきた。

「え、ザフィーラ!?」

なのはも他のメンバーもこのザフィーラの言葉に少々困惑した。

「しかし、その体制では・・・――」

すると、ルキアの言葉を聞いてザフィーラが低い声でこう言って来た。

「お前たちは見て判らぬのか。スクライアの表情を――――――」

「え?」

ザフィーラの言葉が気がかりとなり、全員がユーノの表情を見てみるとその言葉の意味がよくわかった。

「あ!」

なのは達がユーノの表情を見てみると、眠っているにも関わらず何

故か眉間に皺をよせ、疲労困憊の様子がうかがえる表情をしたまま、ユーノは眠りについていたのだ。

これを見た一同は、思わず複雑な表情となる。

「ユーノ先生・・・顔が険しい・・・」

「安眠・・・って訳じゃなさそうだな。」

「そう言えばユーノ。こころのところずっと顔色が優れてないような・・・」

「うん・・・何だか仕事してるときもずっと疲れた様子だったし・・・変にユーノ君がらみの戦いが多いからかなりの疲労が溜まってるんだよ・・・」

暗い表情でユーノの身を案じるなのはの横で、ユーノは不意に寝言を上げるがその様子は決していいものではなかった。

「う・・・・・・」

そんな一人苦しむ様子のユーノを見ると、なのはは自分の不甲斐なさと力の無さに憤りを覚える。

「・・・私がもっとしっかりしてれば、ユーノ君も無理しなくて済むのに・・・」

「なのは・・・」

なのはの言葉を真摯に聞き入れていたフェイトやスバル達の胸にそ

の言葉が突き刺さる中、そんななのはに向かって恋次がこう言って来た。

「お前だけが責任を感じることはねぇ。俺達だって同じだ。こいつが居なかったら、今頃この世界も尸魂界も、どうなってたかしらねぇんだ・・・」

恋次の言葉を隣で聞いていた吉良やルキアも同じ思いとなる。

「・・・そうだね。」

「一護達が普段近くに居ない分、我々がユーノ殿を守っていかなくてはな――――――」

ルキアがそう口にすると、スバル達やスクライア商店メンバー、そしてなのはを始めとする幼馴染の面々は普段自分を顧みることもなく誰かを救うために戦い続けるユーノのことを自分たちが護っていこうという確かな決意を抱く。

そして、なのは自信はそんな一人辛い境遇に立たされているユーノの元にそっと近づき、涙を浮かべながらユーノに向かってこう呟いた。

「ユーノ君・・・・・ごめんね。私達、頼りなくて。」

だが、そう呟いた直後異変は起きた。

そう、新たなるアンゴルモアの反応が確認され隊舎中の警報が鳴り響いたのだ。

「「「！」」」

「これは！まさか――――！！」

「！」

全員がその音を聞き、警戒を強める中ユーノもその音を耳にすると深い眠りから目を覚ましその場から立ち上がる。

「・・・発動したか。」

「うわ！ユーノ君！！」

唐突にその場から立ち上がってユーノに驚きを隠せないなのはだったが、直ぐにユーノの隊長を案じたヴィータがこう言って来た。

「おい、ユーノ。寝てなくていいのかよ！？」

「こんなときにおちおち寝てられるか。みんな、司令室に行くよ。」

「あ、うん！」

ユーノは全員にそう言うと、真っ先に司令室へと向かった。

そして、司令室に着くや否やユーノは画面を切り替え問題となっている異世界の現状をモニターへと映し出す。

全員は映し出された今回の世界の様子を見ると、言葉を失う。

映し出された世界の街並みは廃墟と化しており、人の気配がみじん

も感じられないような荒れた光景だったからだ。

「酷い有様やな・・・何があったんや!?」

ユーノが詳しく調べていくと、この世界が何故このような悲惨な時代となったのかその元凶が明らかとなる。

「これは・・・!」

「何か分かったのか?」

「これは自然災害によるものじゃない。人為的に引き起こされた人災だよ。」

「人災だと!?だが、この規模は流石に――――――!」

ユーノの言葉に信じられない様子の全員だったが、ギンガはそんな全員に詳しく説明するために今回の世界の概要を説明し始める。

「第5管理外世界『D』。ミッドと文化レベル的には変りありませんが、この世界ではあるものが爆発的に流行して、それが原因で発生した事故は後を絶ちません。」

「あるもの?一体それは。」

すると、ギンガの後に続く形でティアナが躊躇った様子でこう言って来た。

「えっと・・・正直信じがたい話なんですが、カードゲームなんです。」

「「カードゲーム!?」」

思わず顔を見合わせた鬼太郎と浦太郎だったが、徐に浦太郎がこう尋ねてきた。

「まさかとは思うけどティアナ・・・それって、『遊戯王カード』とかに部類するトレーディングカード?」

「え!?何で知ってるんですか、この世界のカードゲームの事!」

「何!?冗談じゃねぇのかよ!」

浦太郎の冗談気味な言葉にティアナが真面目に返答してきたことは予想外であった。

なのはは近くにいた金太郎に浦太郎が口にした『遊戯王』のカードについて詳しい説明を求めた。

「あの、金太郎さん。その遊戯王カードって言うのは一体?」

「十年程前より根強く子供や大人の間で支持を集めるトレーディングカードバトルです。最近ではその人気からアニメ化もされており、規模は世界大会が開かれる程にまで拡大しています。」

すると、なのははその話を聞くとふと小学校時代の記憶を振り返り、クラスの男子たちが夢中になっていたことを思い出す。

「そう言えば、小学校のときに男の子たちそんなカードのことで結構騒いでたっけ・・・!」

「じゃあ、ほんまに・・・!?せやけど、カードで何で事故が起きるん?」

はやてが訝しげな様子でそう口にすると、ユーノはこの現況について書かれた記事を発見し、それを読み始める。

「何々・・・『第5管理外世界「D」ではデュエルモンスターズの人気は大人子供を巻き込んだ熱狂的なものであり、それを使ったデュエルではインダストリアル・イリュージョン社と海馬コーポレーションが共同開発したソリッドビジョンシステムにより、実体験できるデュエルを可能としたが、あるときよりそのシステムが暴走を始め、人間に危害を及ぼすようになった』って書いてあるね。」

「システムの暴走か・・・・・・アンゴルモアの仕業と見て間違いなさそうだな。」

「恐らくな。」

「よし。では早速先発メンバーを発表するよ。鬼太郎さんと浦太郎さんはこのことに詳しようやから、フォワード陣を引き連れて任務に当たってくれへんかな?」

「おうし!任せておけ!」

「浦太郎やティアナ達は兎も角、ピーチはお荷物になるのではないか?」

「んだと!!」

白鳥の言葉に思わず癇癪を起す鬼太郎だったが、ユーノがすぐに仲裁に入る。

「まぁまぁ。何かあったらすぐに連絡するんだよ。こちらもなるべく早く事故原因の究明を急ぐから。」

「頼みます、ユーノ先生！」

「ほんなら、フォワード一同出動や！」

はやては早速、今回の任務先の世界『D』にフォワード陣五人と亀井浦浦太郎・桃谷鬼太郎の計七名を向かわせ調査及び回収に向かわせた。

全員がたどり着いたのは、ネオ童実野シティと呼ばれる本当ならば高層ビル群が立ち並ぶ大都市なのだが、そこはすっかり人の気配を一切感じさせない荒廃した光景だけが目の前に寒々と広がっていた。

これにはスバル達も目を疑った。

「うわ～～～！」

「ここまで荒廃するなんて・・・一体何があったというの？」

七人は荒廃した街並みを見ながら、適当に歩いてみるがやはり人の気配を一向に感じなかった。

「人の気配がまるでないですね・・・」

「なぁ、亀。これって５ｄ，ｓの世界観と酷似してるよな・・・」

「そうだね。でも僕は未だにカード如きで世界が崩壊するとは考えられないけどね・・・」

「それは私達も同じですよ、浦太郎教官。兎に角、先ずは誰か一人でも生存者がいないかどうかを確かめないことには――――――ん！」

「スバル、どうかした？」

ギンガが怪訝そうに表情を一変させるスバルに尋ねると、スバルは空の方を指さした。

「ねぇ・・・・・あれなんだろう！？」

「え？」

スバルの言葉を聞き、空を見上げてみると全員は驚くべき光景を目の当たりにした。

何と、この世界を荒廃させた災厄の元凶と言うべき実体化し暴走を果たしたデュエルモンスターズの大軍が飛来してきたのだ。

「な！何だありゃ！！」

「あれって、もしかして実体化したデュエルモンスターズじゃ！！」

「う、うそでしょう！」

「みなさん、逃げましょう！」

キャロがそう言った直後、彼ら七人の気配を感じ取った一体の機械族モンスターが攻撃を仕掛けてくる。

全員はその攻撃を何とか躱したが、その後も立て続けにモンスターたちが容赦なく七人に襲い掛かってくる。

攻撃を回避しながら只管に走り続けるスバルたちは非常に切羽詰っていた。

「どういうことかしら!?デュエルモンスターズが、人を襲うなんて!」

「しかも、この攻撃は実際にダメージが発生するものです。ソリッドビジョンじゃありません!」

「おいおい!これじゃアニメと全く同じじゃねぇかよ!」

「勘弁してよ!カード如きで死ぬなんて真似絶対やだよ僕!」

「一先ず、あそこに隠れましょう!」

エリオはそういうと、崩れ落ちたビルの隙間を見付けると、モンスターの攻撃を一次的に凌ぐために七人全員を誘導し、攻撃を回避する。

以前自分たちを殲滅するために頭上を徘徊するモンスターの様子を警戒しながら、浦太郎は鬼太郎にこう言った。

「どうする、先輩。ここはやっぱり戦う?」

「仕方ねぇ。こうなったら実力行使であのモンスターを撃ち落す！」

「分かりました。行くわよ、みんな！」

「「おう（ええ）！」」

「「はい！」」

鬼太郎達はそれぞれの武器を持ち、バリアジャケットに身を包むと隠れていた場所から飛び出しモンスターの大軍を相手にするのだった。

「行くぜ行くぜ行くぜ！」

「スバル！クロスシフトB、行くわよ！」

「おう！！」

「エリオ君たちは、私のフォローをお願いね！」

「了解です！」

「頑張ります！」

「派手に行こうか！」

七人はそれぞれのポジションに分かれて、己の持ちうる技量を駆使して大量のモンスター軍団に向かっていくのであった。

「俺の必殺技、パート5！」

「バリアブルシュート！」

「リボルバーキャノン！」

「ストムーナックル！」

「ルフトメッサー！」

「ブラストレイ！ファイア！！」

「ソニックスピア！」

七人の実力を考えれば、たとえ大軍のモンスターたちと言えども決して倒せない敵ではなかった。

七人は順調に抜群のコンビネーションと鍛え上げられた己の技でモンスターたちを殲滅していった。

と、その時ウィングロードで移動していたスバルの瞳にある光景が映った。

「！ティア！あれ！！」

「え！」

「あんなところに子供が！」

スバルがそう言うと、ティアナたちは泣きながら辺りを徘徊してい

た小さな子供の姿を発見し、危機感を覚えた。

だが、危機感を覚えた直後モンスターの一体が標的を変更して無防備な子供目掛けて突進していった。

「まずい！勘付かれた！！」

「くっ！！間に合え！！！！！！！」

子供を助けたいという一心でウィングロードの上を突っ走るスバルだが、とても今の状態では子供を助けることは不可能だった。

だが、その瞬間スバルの目の前を突然謎の赤い影が横切り、気が付いた時には目の前の子どもがいなくなっていた。

「え！？」

「何、今の！？」

ティアナたちもスバルと同じ光景を目撃したが、その時鬼太郎は衝撃的な人物の姿を発見する。

「おい！亀、あれ見ろ！！」

浦太郎が鬼太郎の言葉に反応し、指差す方向を見ると浦太郎も思わず目を疑った。

「ま、まさか・・・！！」

そう・・・――――彼ら二人の瞳に飛び込んできたのは、以前携帯テ

レビで偶々見ていたアニメ、『遊戯王５Ｄ，ｓ』に登場する赤いディーホイールを乗りこなすデュエリスト、不動遊星だったのだ。

遊星に救われた少年は、彼の手に抱えられながらまるで希望の星に出くわしたかのように表情を一変させ、安どの声を上げる。

「遊星・・・！」

すると、そんな少年に向かって遊星自身も優しい表情で答える。

「もう安心しろ。俺が必ず君を守り抜く。しっかり捕まっていろよ！」

「うん！」

遊星は少年を後ろに乗せると、その状態でディーホイールを走らせ、自分に向かって攻撃を仕掛けてくるモンスターの攻撃を軽快に躱していく。

そんな中、未だ呆然とその光景を見つめる鬼太郎や浦太郎に向かってスバルが尋ねる。

「浦太郎教官、あの人のこと知ってるんですか！？」

「え！？いや、知ってるというかなんというか・・・」

「あ！あの人、バイクでモンスターに向かっていくわよ！」

「危険だわ！無茶はしないで！！」

ティアナやギンガがモンスターの群れにディーホイールだけで向かっていく遊星に忠告する中、遊星はそんな言葉を無視して加速していくと自分のカードデッキから一枚のカードを力強くドローする。

「行くぞ、クリアマインド！」

その言葉と同時に、白を基調とした何も書かれていなかったカードにドラゴンの絵が映し出され、遊星はそのカードを手に掲げながらそのモンスターを召喚する。

「生来せよ、『シューティング・スター・ドラゴン』！」

すると、その瞬間遊星の頭上に現れる星の輝きを纏った巨大な竜。

間近でそれを目撃していたスバル達や、同じ竜を操るキャロは衝撃を受けた。

「「な！」」

「りゅ、竜だわ！」

「フリードよりも大きい！」

「一体あれは！？」

驚愕するスバルたちを余所に、遊星は召喚したシューティング・スター・ドラゴンで目の前のモンスター軍団に向かって攻撃を仕掛ける。

「シューティング・スター・ドラゴンの攻撃。スターダストミラー

ジュ！！」

すると、シューティング・スター・ドラゴンまるで蜃気楼のように複数に分裂を果たし、一斉に目の前のモンスターたちに向かって突進していった。

モンスターたちはシューティング・スター・ドラゴンの攻撃を受けると、瞬く間に消滅を果たしていき、スバル達もこの光景には目を疑った。

「すごい！！」

「一気にモンスターを全滅させたわ！」

遊星はシューティング・スター・ドラゴンをカードの中に戻すと、少年を安全な場所まで誘導させてから帰宅しようとした。

すると、そんな遊星の前に事情を詳しく聞くためにスバルたちが現れる。

「！？」

遊星は見慣れぬ格好で、しかもカードも何も使わずにモンスターたちと戦う力を持ったスバルたちのことを警戒した。

「お前達は一体・・・・・なぜカードも何も使わずに戦える？それに、その格好と武器は？！」

「えっと、僕たちは時空管理局の魔導師です。訳あってこの世界に紛れ込んだロスト・ロギアの回収にやってきました。」

「時空管理局だと?そんな組織は聞いたことがない。」

「知らなくても無理はないさ。そのことは後できっちり話す。それより、名前くらい名乗ってくれてもいいんじゃないのか?」

鬼太郎がそう尋ねると、遊星も少し間を置いてから律儀に名前を名乗った。

「そうだな。俺は不動遊星(ふどうゆうせい)。このネオ童実野シティの住人だ。」

「・・・やっぱりな。」

「?何がやっぱりなんだ?」

「いや、こっちのこと。

遊星の言葉に鬼太郎はぞんざいな態度でそう答える中、遊星は若干の疑問を抱きながら彼ら七人の安全を確保するために自分のアジトに招き入れることにした。

「取りあえずここは危険だ。近くに俺たちのアジトがある。一先ずそこに案内する。ついてきてくれ。」

「分かりました。では、アジトに着きましたら私達のことも話しますね。」

「ああ。そうしてくれるとありがたい。」

遊星は七人を自分のアジトに案内するために、一度ディーホイール

から降りると自分の手でディーホイールを押して行きながら黙って七人を案内する。

そんな中、浦太郎や鬼太郎の先ほどの遊星を見たときのリアクションに関してずっと疑問に思っていたギンガが念話でこう尋ねてきた。

「（浦太郎さん、鬼太郎さん。あの人こと・・・知ってるようにも見えるんですけど、お知り合いですか？）」

「（いや、僕と先輩の知り合いじゃないよ。ただ、あの不動遊星って言うのは実は地球で今やってるアニメ、『遊戯王５ｄ，ｓ』に出てくる主人公と同じなんだよね・・・）」

「（ほ、ほんとですかそれ・・・！？）」

「（それじゃあ、前のパズーさん達みたいなと一緒と考えた方がいいんですかね？）」

「（その方が分かりやすい。しかし、実際に目の前で見てみると、この男・・・只ならぬものを感じるぜ。）」

鬼太郎がそう口にすると、全員も改めてこの不動遊星から感じる只ならぬ気配に緊張が走った。

「（確かにそうですね。まるで、ユーノ先生や一護さんが持つのと同じような・・・）」

「（いずれにせよ、立場的には私たちはまるっきり部外者なわけだし、下手な言葉で立場を悪くしては元も子もないわ。油断せず、慎重に対処しましょう。）」

「（うん！）」

すると、そんなティアナたちの心情とは裏腹に遊星はずっと黙り込んだままの彼らの様子が気がかりとなり、ふとこう尋ねてきた。

「さっきからどうしたんだ？すっかり黙り込んでいるようだが・・・気分でも悪いのか？」

「い、いえ！何でもありません！ご心配おかけいたしました。」

「本当に大丈夫ですから、私たちは！ははははは！！！」

スバル達は適当な言葉で遊星を誤魔化し、納得した様子ではなかったが遊星もこれ以上の詮索は得策ではないと考え、それ以上は何も尋ねようとはしなかった。

「そうか。ならいいが・・・――」

そんな遊星の対応一つに思わず神経を張りつめるスバルは深い溜息を吐く。

「（ふう～～～なんか神経使うな・・・）」

「（ま、お前普段神経使うよなことしないからな。）」

「（ひ、酷いですよ鬼太郎さん！その言い方！）」

念話で鬼太郎に反論するスバルだったが、傍で聞いていたティアナやギンガも内心笑っていたようだった。

「着いたぞ。ここが俺たちのアジトだ。」

やがて、数分歩いたところに遊星や仲間たちが使っている秘密のアジトが佇んでおり、遊星はディーホイールを止め、カバーをかぶせると七人をアジトの中へと案内する。

「少し散らかっているが、まぁ楽にしてくれ。」

アジトの中に入った七人は、機械の工具や日用品が散らかっている内部を見渡したのち、人の気配がないことに気づき遊星に尋ねる。

「遊星。他には誰もいないの？」

「あと5人ほど残っているが、今はおそらく俺と同じくモンスターから逃げ遅れた人々を助けているところだろう。」

「あの、どうしてこんなことに？」

「ああ。話せば長くなるのだが――――――？」

と、遊星がこの経緯をスバル達に語り始めようとしたその時だった。

突然、ディーホイールが激突したような音が聞こえ、全員が外に飛び出してみるとそこ居たのは白い服に身を包んだ傷だらけの男と、黒いディーホイールから降りて直後倒れる満身創痍の男だった。

そのうちの一人、白い服に身を包んだ男・・・ジャック・アトラスは驚く遊星を見上げながら声をかけようとしてきた。

「ゆ、遊星・・・！！」

「ジャック！クロウ！」

遊星はジャックと、もう一人の男・・・クロウ・ホーガンの元へと駆け寄り、その後ろから事態を読んだスバル達がも近寄る。

「た、大変！すごい怪我だわ！」

「おい、しっかりしろ！！」

鬼太郎が満身創痍のクロウの体を揺すると、クロウは虚ろな表情で鬼太郎の顔を見、遊星に徐に尋ねる。

「遊星・・・そいつらは誰だ？」

「実は、訳合ってこの世界にやってきた魔導師というものだ。」

「魔導師・・・だと・・・！？」

「詳しいことは後だ。それよりこの怪我はどうした！？」

「ああ・・・す、済まぬ遊星・・・俺達は・・・取り返しのつかないことをしてしまった・・・！」

「取り返しのつかないことだと？一体何があったというのだ！？」

すると、ジャックとクロウは暗い表情を浮かべながら遊星にこう言った。

「遊星・・・落ち着いて聞いてくれよ・・・アキと龍亜（ルア）と龍可（ルカ）が・・・奴らに拉致された・・・！」

「！」

遊星はそれを聞いた途端、思わず耳を疑い一方のティアナたちは訝しげな表情となる。

「？その人たちってまさか遊星さんの・・・！？」

「確か、ファイブディーズのメンバーだったな。」

と、鬼太郎がアニメで見た知識よりそう口にした瞬間、遊星は突然自分の手を床に叩きつけ、一筋の涙をこぼした。

「「「「「「「！」」」」」」」

遊星のこの態度に驚くスバル達。

そんなスバル達の余所に、遊星は悔しさとでいっぱいだった。

「何ということだ！！アキ達までもが、奴らの手に落ちてしまったというのか・・・！！俺たちは、一体何のためにここまでやってきたというのだ！！」

「遊星・・・う！！」

「ぐああ！！」

遊星の言葉に言い返す言葉もないジャックとクロウだったが、その

途端二人は受けた傷のダメージによって、気を失ってしまった。

「！ジャック！！クロウ！！」

遊星やスバル達が声をかけても二人は険しい表情のまま目を覚まそうとしなかった。

「マズイわね。かなりの深手よ、これ。キャロ、急いで治癒魔法の方をお願いね。」

「はい。あの、ちょっといいですか？」

「何をする気だ？」

「これから魔法を使ってこの二人を治療します。ケリュケイオン、いけるね？」

〈Ｏｆｆ　ｃｏｕｒｓｅ〉

困惑の表情を浮かべる遊星を余所に、キャロは魔法陣を展開し、ケリュケイオンの力を借りて治癒魔法を発動するための詠唱を始める。

「“我が乞うは、癒しの光。彼のものを包み込め。慈悲の音を聞かせよ。”」

〈Ｂｏｏｓｔ　Ｕｐ　Ｐｈｙｓｉｃａｌ　Ｈｅａｌ〉

キャロがそのように詠唱を唱えると、ジャックとクロウは優しい桃色の光に包まれると受けた傷がみるみるうちに治っていくのが見て取れた。

「これは・・・・・・！」

遊星は間近でこの光景を見ると、信じられないとばかりの表情を浮かべるが直ぐにそれが魔法であるということを実感する。

「傷がみるみる塞がっていく・・・・・これが魔法なのか！？」

「はい。少し経てば、元気な姿で活動できますので、ご安心ください。」

「すまないな。お前たちには、なんと感謝をすればいいか・・・」

「気にしないでくださいね。困ったときはお互い様とはよくいいます。これぐらい普通です。」

「はい！」

スバル達の言葉を聞くと、遊星も心が穏やかとなり二人のけがを治療してくれたことにお礼の言葉をかける。

「ありがとう、みんな。」

やがて、ジャックとクロウの二人をアジトの中へと運び込んだ七人はベッドに二人を寝かせたのち、遊星に自分の素性を赤裸々に話し、遊星もそれを聞くとおおむね理解の態度を示してくれた様子だった。

「大体事情は読み込めた。俺たちの知らないところで、まさかそんな大きな事件や出来事が起こっているとは、思いもしなかった。」

「ははは。ま、普通誰だってこの手の話を聞いても簡単には信じないからね。特に大人は。」

「だけど、遊星さんは割と直ぐに順応しましたね。どうしてです？」

「ああ。こっちの世界でも、似たような事件が起きてな・・・最もあれはまさしく命を懸けた本気のデュエルだった。ネオ童実野シティと未来のネオ童実野シティ、どちらが滅ぶかという深刻な事態に直面していたんだ。」

遊星の話を聞いていた鬼太郎と浦太郎はこの話から直ぐにそれが未来人、ゾーンによって引き起こされた一連の事件であると理解する。

「「（アーククレイドルでの一戦のことか・・・）」」

一方で、遊星の話を聞いたスバル達は複雑な表情を浮かべながら徐に口を開く。

「なんかそちらも大変だってんですね・・・あ、大変なのは今も同じですよね。あの、いまこの世界で何が起こっているのか、詳しく聞かせてもらえませんか？」

「そうだな。お前たちのことを聞いておきながら、こちらが何も語らない訳にはいかないな。では話そう――――――数週間前のことだ。」

「「「「「「「――――――」」」」」」」

全員は真剣な表情となり、遊星が語り出すことの経緯を耳に入れ始める。

「未来人Ｚ－ＯＮＥとの決戦が終わり、ネオ童実野シティの危機は去り平和が戻りつつあるときだった。デュエルモンスターズを生み出した『インダストリアム・イデュージョン社』が管理・統括するソリッドビジョンシステムが突然、暴走を始めモンスターが実体化し人々を襲いだしたんだ。」

「はい。」

「事態解明に乗り出した治安維持局だったが、凶暴化したモンスターたちの猛攻の前にそのほとんどが全滅。残った僅かな局員は住民の安全確保の為に連日慌ただしい動きを見せている。俺の知り合いもそうだ。」

「なるほど。では、さっきのお二人とアキさんと言うのは？」

「ジャックとクロウは、俺のかけがえのない仲間だ。二人のほかに、十六夜アキ・龍亜・龍可の三人がいる。俺たちはこの六人揃って『チーム５Ｄ’ｓ』なんだ。」

「ファイブディーズ・・・？」

「俺たちはある種の運命で巡り合ったものだ。俺たちを引き合わせたのは六人の腕に刻まれたこの赤き竜の痣だ。」

遊星はそう言うと、自分の右腕を捲りあげそこに刻まれたドラゴンヘッドの赤い痣を全員に見せ、鬼太郎と浦太郎以外の五人は目を見開いて驚いた。

「これは・・・！？」

「ほう。これが赤き竜の痣ね・・・・・・」

「赤き竜は、５０００年の一度出現しその痣を刻んだもの達はシグナ―と呼ばれる。シグナ―となったものは、必然的にこの世界に起きる危機に直面することとなる。これまでにも、先ほどの一見の他に、ダークシグナ―との決戦・地縛神との死闘・イリアステルと戦い潰けの日々を送ってきた。」

「そ、そんなに・・・しかも全部デュエルモンスーズでですよね？」

ティアナは改めてそれらの戦いがカードバトルによって成立しているということに驚愕を隠し切れなかったが、その時鬼太郎がふと話を聞いていて疑問に思ったことを口にする。

「そう言えば、モンスターが暴走を始めたって言うのに何でお前のモンスターは言うことを聞いてたんだ？」

「飽く迄推測にすぎぬが、シグナ―である俺たちに限ってモンスターは凶暴化しないのだろう。だから俺たちは、その力を有効に使って逃げ遅れた人々を助ける手伝いをしていたんだ・・・だが、その結果アキ達が奴らに・・・・・！！」

「奴ら？」

「奴らとは一体――――――」

七人が若干落ち込んだ様子の遊星にその奴らは誰なのかを尋ねようとした、その時だった。

遊星たちの耳に、外から唐突に激しい爆発音が聞こえてきた。

「「「「「え！」」」」」

「なんだ、この音！？」

戸惑いを隠せない様子の七人だったが、遊星はその男を聞くと悪寒が奔った。

「まさかこれは！」

「う！」

と、その時爆発音を耳にした眠っていたジャックとクロウが目をさまし、遊星たちはそんな二人を見て驚いた。

「ジャック！クロウ！まだ起きてはダメだ！」

しかし、遊星の忠告を無視してクロウは病み上がりな体でこう言い返した。

「そんな悠長なこと言ってる場合かよ、この音聞いても・・・！」

「心配はいらん。そこの魔導師とやらに治してもらったおかげで、もうほとんど動ける状態だ。それより、外の様子が気になる。一端出るぞ。」

「ああ。みんなも、来てくれ！」

「あ、はい！」

「外で何が起こってるというの？」

一先ず、外の様子を確かめるために遊星たちと共に外の方へと走り出したフォワード部隊だったが、その時彼ら全員が外で見たのは信じられない光景だった。

「な！これは！！」

何と、自分たちの住む廃墟寸前となりかけているネオ童実野シティが再び暴走したモンスターたちの攻撃によって、更に破壊の限りを尽くされようとしていたのだ。

「ネオ童実野シティが・・・！！」

「くそ！！俺たちの街が！！」

「ひどい・・・だけど何で・・・！？」

「あ！みなさん、空を見てください！！」

キャロがそう口にすると、全員は言われた通り空を見上げてみた。

するとその瞬間、曇天の空の真ん中から風穴の様なものが開くや否なその中より人物の様な顔が映し出され、顔は遊星たちを見ると不敵な笑みを浮かべながら話しかけてきた。

『ふふふ・・・・・・御機嫌よう、不動遊星。否、赤き竜に導かれしシグナ―達よ・・・』

「なんだあいつは!?」

鬼太郎が思わずそう口すると、顔を見た瞬間に遊星が声を荒げりながらその顔に向かってこう言って来た。

「やはりこれもお前の仕業だったのか!アポカリプス!!」

「アポカリプス!?誰だそいつは?」

「奴こそが、このネオ童実野シティを破壊し、デュエルモンスターズを暴走させた張本人だ!」

「あいつの所為で、アキ達が・・・!!」

「あいつが!?」

ジャックやクロウが憎悪の念を抱きながら、拳を強く握りしめ頭上に浮かぶアポカリプスのことを仰ぎ見る中、ティアナ達はそのアポカリプスより感じるただならぬ気配に思わず額に汗流す。

「ティア。もしかしたらこの世界の災厄の元凶があいつなら、アンゴルモアもきっと。」

「ええ。その可能性は高いわ。」

と、そんな時遊星は怒りの感情を爆発させながらアポカリプスに向かって声を荒げる。

「アポカリプス!!何故こんなことをする!?デュエルモンスターズを操り、ネオ童実野シティを滅茶苦茶にして何が面白い!?」

すると、その遊星の言葉を聞いたアポカリプスは徐にこう口にしてきた。

『ふふふ。我はこんな陳腐な街ごとき破壊するだけの器の小さき男ではない。』

「なんだと!?」

「じゃあ、何が目的なわけ!?」

『我は貴様たち人間の欲望より生まれいでし存在・・・貴様たちがデュエルモンスターズを作り出した時から心の中に眠っていた欲望を具現化した存在・・それが我アポカリプス。』

「俺達人間の欲望が具現化した・・・だと!?」

「だとしたら、その欲望は何を欲してるって言うんだよ!」

『貴様たち人間が求めたのはデュエルモンスターズによる世界の統率。すなわち、デュエルモンスターズが人間を、世界を支配すること!』

「馬鹿な!デュエルモンスターが人間を支配するだと!?」

「そんなバカげた話信じられるかよ!」

ジャックや鬼太郎を始めとするここにいるメンバー全員がこのアポカリプスの言葉に耳を疑うが、当の本人は更にこう続けてきた。

『嘘ではない。現に貴様たち人間はその欲望の為に一体どれだけの血を流し、デュエルによって物事を決めてきた?全ては欲望が望んだ人間の末路・・それがこの結果よ。』

アポカリプスはそう言うと、荒廃したネオ童実野シティの現状を遊星たちに突きつけるが、遊星は歯を噛みしめながら反論の意を表する。

「く!俺はそんなこと認めない!!たとえ人間の欲望が悪しき方向に目を向けてしまっても、間違いを乗り越えてその先にある正しき道を進んでいける存在だと信じている!そして、それを可能にするものこそ、仲間たちとの“絆”だ!!」

遊星の言葉を聞いていたスバル達は思わず絆と言う言葉に反応し、驚嘆してしまう。

「絆・・・!」

「遊星さん・・・!」

すると、遊星の言葉に便乗してジャックやクロウも言い返してくる。

「遊星の言うとおりだ!俺たちの絆がある限り、俺たちは何度間違えようと必ず修正して見せるぜ!」

「貴様などに俺達人間の絆を壊すことなど出来はしない!さぁ、くだらん戯言はもう聞き飽きた!さっさとアキ達を返してもらおう!」

『ふん。威勢がいいな・・・そんなに気になるなら、声ぐらいは聴かせてやろう。』

アポカリプスはそう言うと、空のスクリーンに現在身柄を拘束されているチーム５Ｄ’ｓの残りのメンバー、十六夜アキ・龍亜・龍可の三人の様子を映し出し、鎖で繋がれた三人は遊星達の名前を声に出す。

『遊星！！』

『ジャック！』

『クロウ！』

「アキ！龍亜！龍可！」

「あれが５Ｄ’ｓの残りの三人・・・！」

「その人たちを解放しなさい、アポカリプス！」

ティアナがそう口にすると、その瞬間アポカリプスは目から光線を放った。

『部外者は引っ込んでいろ。』

その光線がティアナたちの方に向けられると、反射的に遊星の体が動いた。

「危ない！」

遊星はティアナたちの前に出てくると、代わりにその光線の被害を受けてしまい満身創痍となって後ろに飛ばされる。

「ぐあああああああ！！」

「「「「遊星！！」」」」

「「「「「遊星さん！！」」」」」

『『『遊星！！』』』

ファイブディーズのメンバーとスバル達七人が身を挺して攻撃を受けた遊星の名前を上げ、ジャックたちは直ぐに攻撃を受けた遊星の元へと近づいて行った。

「ぐ・・・ぐう・・・！！」

そんな身を挺して自分の攻撃を受けた遊星を見ながら、アポカリプスはこう言った。

『ふふふ。流石は不動遊星。だが、生身の体で実際に発生するダメージを受け止めるのは軽率だったな。なぜ部外者の命ですら、その一平を賭して守り抜こうとする？』

「彼らは部外者ではない・・・！確かに、この世界の人間でないことは間違いない・・・だが、それでも彼らは見ず知らずの俺の仲間や人々を守るために命を懸けて戦ってくれた！俺はその恩に報いたい！今この瞬間に、彼らも俺たちの仲間だ！！」

「遊星さん・・・あなた・・・！」

「僕たちを仲間と呼んでいる・・・！」

「か、かっこいい・・・！！」

遊星の言葉に胸打たれたスバル達。

だが、アポカリプスはそんな遊星たちを見下してくる。

『ふん。群れを成す蟻が。小さき命の一つや二つ潰えたところで大したことはない。』

「ふざけるな！！！貴様などに何が分かる！！遊星はどんなときでも見ず知らずのものでも、自分の命を賭して守り抜こうとしてきた！！人をゴミ同然としか捕えぬ貴様などに、遊星は死なせはしない！！！」

「ジャック・・・！」

『ふう～～～全くもってめでたい連中だ。まぁいい・・・・・・いずれ貴様たちシグナーとは決着をつけなくてはならぬと思っていた。どうだ、ここは一つデュエルで勝負をつけよう。』

「デュエルだと？」

「望むところだ！貴様の相手など、このジャック・アトラスで十分！！！」

「いや、この鉄砲玉のクロウ様が相手だ！！」

アポカリプスの挑発に乗った二人がそう口にする中、不敵な笑みを浮かべたままアポカリプスはさらに続ける。

『ふふ・・・そう慌てるな。その台詞は無事に我のところまでたどり着けたときに言ってもらおう。貴様たちが勝てばこの世界は救われるが、我が勝てばこの世界はすべてデュエルモンスターズにより支配される。どちらが待っているのだろうな？ふふふ・・・』

「貴様・・・！」

『我の要塞、アーマゲドンにて待っているぞ。不動遊星・・・チーム５Ｄ’ｓ』

そう言い残すと、アポカリプスは忽然と姿を消し、空のモニターに映っていたアキ達の姿も見えなくなっていった。

『『『遊星！！！』』』

「アキ！！みんな！！！！！」

完全に三人の姿が見えなくなり、スバル達はすぐに消えた反応をとらえようとするが時すでに遅し。

「ギン姉、反応は！？」

「ダメだわ。反応ロスト！サーチャーから完全に消えたわ！」

「だが、奴は俺たちに挑戦状を叩きつけてきたんだ。全員で乗り込んで迎え撃つのみ！」

「おう！面白くなってきたじゃねぇか！」

「だけど、行き方は知ってるんですか？」

「そうだよ。行き方も知らないのにそんな簡単に口にするものじゃないよ。」

客観的な態度でエリオと浦太郎がそう口にした時だった。

突然、遊星・ジャック・クロウの右腕に刻まれた赤き竜の痣が光り出したのだ。

「「「！」」」

全員が突然光を放ってきたその痣に注目する。

「これは！」

「痣が光ってる・・・！？」

「おい！」

と、その時ジャックがあるものの姿を捕え全員がジャックの目線に合わせてみると、彼らの瞳に衝撃的な光景が映ってきた。

「「「「「あ！」」」」」

「まさかあれが・・・！」

彼らの瞳に映ってきたのは、シグナー達を導き時として彼らを守ってきた伝説の赤き竜であった。

炎のように赤く燃え上がるかのようなその姿はとても幻想的で、スバル達は思わず目を奪われた。

「あれが、赤き竜！？」

すると、唐突に出現した赤き竜は遊星たちをまるで要塞まで導いてくれるかのようにネオ童実野シティの空に要塞アーマゲドンへと続く道を作り出したのだ。

「赤き竜が・・・俺たちに道順を教えてくれているのか？」

「なら話は簡単だ！この道を進めば、奴が待つアーマゲドンにたどり着ける。何としてもここでアポカリプスを倒さねば、俺たちすべての人間の未来が失われる！アーククレイドルと同様に！」

「ああ！遊星、さっさとディーホイールで行くぜ！」

「ジャック・・・クロウ・・・」

ジャックとクロウの言葉を聞いて、思わず声を詰まらせる遊星。

すると、話を聞いていたスバル達も協力の姿勢を見せてきた。

「私達管理局もお手伝いします！」

「足手まといにはなりません。絆を信じて、全員の力で未来を守り抜きましょう！」

「スバル・・・エリオ・・・みんな・・・ああ、そうだな。俺たちの未来は俺たち全員の力で守り抜いて見せる！そして必ず、囚われ

たアキ達を必ず助け出す！」

「よっしゃ！！そうと決まれば出動・・・」

と、早速出発の準備をしようとした矢先だった。

「う！」

「「「「「「「「「！」」」」」」」」」

遊星が突然、気を失ってその場に倒れこんでしまったのだ。

「遊星！！」

「遊星さん！！」

遊星は先ほどのアポカリプスの攻撃を受けて、体にかなりのダメージを負ってしまった。

遊星の安否はいかに！？

その頃、任務に向かったきり一切連絡が来ない状況に機動六課のなのは達はスバル達のみを案じていた。

「スバルたち・・・連絡がないけど、大丈夫かな？」

「浦太郎と鬼太郎がついておるから、大丈夫だとは思うが・・・もうかれこれ３時間も連絡がつかぬ。妨害電波でも出ているのか？」

「シャーリー、その辺はどうなってるの？」

フェイトがそう言った後、詳しく解析をしてみるとルキアの言った通りのことが起きていた。

『ルキアさんの言った通り、先ほどからそれらしき電波が発生してスバルたちとの連絡が取れない状況です。回復には時間がかかりますね。』

「そうか。一先ず解決策を検討せなあかんな。シャーリーたちはこのまま妨害電波の解析を頼むよ。私たちは別な打開策を考えてみるさかい。」

『了解です。』

「さて、どうしたものか。」

「あいつらの身にもしものことがあってもなんだが、迂闊に救援に行っていいものかどうか・・・それが問題だ。」

「そうだね。ユーノさんはどう判断しますか・・・あれ?」

と、ユーノの判断を仰ごうとした吉良だったがその時異変に気付いた。

「吉良さん?」

「どうしたんですか?」

「ユーノさんが見当たらない!?」

「え？」

全員がその言葉を聞くと、確かにに司令室にはユーノの姿が何処にも見えずなのはを始め、隊長陣全員は大いに驚愕していた。

「あれ！？本当だ！ユーノ君！！どこ行ったの！？」

「トイレじゃねぇのか？」

「それでしたら一声かけるはずですが？」

確かに、金太郎の言うことはもっともだ。

だが、その時ザフィーラはユーノのデスクを見渡した時あるものを発見する。

「ん！おい、これを見ろ！」

「ザフィーラ、何か見つけたのか？」

「スクライアの書き置きだ。」

「ユーノの！？」

「どういうこと！？」

訝しげな表情を浮かべながらユーノのデスクに置かれたユーノの書き置きを読んでみるなのは達。

そこには次のようなことが書かれていた。

「『勝手な事とは重々承知しています。処罰ならあとで甘んじて受け入れます。これから僕が直接スバルたちの様子を見に行ってきます。必ず戻ってくるから、ここで待っていてください。　ユーノ』」

「な、何だと!!」

「あの野郎!!まさか私たちに黙って行きやがったのか!!」

「シャマル!お前は何故気づかなかった!?」

「ごめんなさい!ユーノ君、霊力で自身の気配を完全に消していたから私全然気づかなくて!!」

シャマルは両手で顔を押さえながら涙を流す中、書き置きを手に持っていたなのはの手が小刻みに震えだし、言いようのないほどの不安がなのはに襲ってきた。

「そ、そんな!!ユーノ君!!!!」

なのははユーノがまた自分の元からいなくなってしまうということに強い恐怖を抱いている。

そのため、ユーノを失うことを最も恐れているのが現状。

だが、そのユーノが今再び書き置きを残したとはいえなのはの前から姿を消してしまった。

果たして、ユーノは一体どうしているのだろうか!?

さて、騒動が起こってしまったその頃、『D』の世界でも一騒動が起こり、今回の宿敵であるアポカリプスの攻撃を受け重傷を負った不動遊星はと言うと、全員に見守られながらキャロの懸命な治療のお蔭で九死に一生を得る。

「・・・星・・・遊星・・・遊星!!」

ジャックの呼びかけを耳にすると、遊星は徐に目を開ける。

「う・・・ジャック・・・みんな・・・」

遊星が目を覚ますと、ジャックやクロウ、スバル達の安堵の表情となる。

「気が付きやがったか!心配掛けやがって!!」

「俺はあの後・・・一体」

全身に受けた傷が治っていることに気づき、あの時のことを思い出そうとする遊星にティアナが答える。

「私たちを守ろうとして、アポカリプスの攻撃を受けたんです。本当に、何とお礼を言ったらいいか。」

「そうか。だが、スバルたちに怪我がなくてよかった。」

だが、その遊星の言葉を聞くとジャックが真剣な表情で遊星に喝を入れてきた。

「いいものか!!貴様がその代わりに重傷を負っては意味がないだ

ろう！！」

このジャックの言葉を聞いた遊星も、思わず胸が締め付けられる。

「ジャック・・・・・・すまない・・・・・・・」

「怪我の治癒は私の力で何とか完了しました。これで楽に動けます。」

「助かる、キャロ。」

キャロに一言礼を言うと、遊星は上着をとって身に纏うと出発の準備をしだした。

「遊星・・・まさか病み上がりなその体で行くつもりじゃ！？」

「決まっている。俺は仲間を・・・アキ達を助け出さなくてはならい。」

「だが、貴様一人では！？」

すると、そんなジャックやクロノの言葉を耳にした遊星は鼻で笑うと、直ぐにこう言い返してきた。

「誰も一人で行くとは言ってないさ。そのための仲間が、ここには沢山いるだろ？」

遊星の言葉を聞いた一同は思わず歓喜の表情となる。

「遊星さん・・・」

「遊星・・・」

「こいつ、格好いいことをぬかしやがる。」

「ふん、そうだな。貴様一人に荷を担がせるわけにはいかぬ。俺たち全員の力で浚われた三人を救いだし、アポカリプスを倒す！」

「「「「「はい！」」」」」

遊星たちは共通の思いと確かな覚悟を胸に抱き、準備を整えると赤き竜の導きによってその場に現れた道の先にある、異空間要塞アーマゲドンへと進行しようとしていた。

遊星やジャック、クロノの三人はディーホイールに搭乗し、ティアナやエリオたちを後ろに乗せると、改めて遊星が確認をする。

「赤き竜の導きに従い、この道を突き進めば要塞アーマゲドンにたどり着くはずだ。みんな、準備はいいか？」

「ああ。ここにいる時点で、とっくに覚悟は決まっているぜ！」

「行きましょう、遊星さん！みんなも、いいわね！」

「「「「「はい！」」」」」

「何としても、三人を助け出してアンゴルモアを回収するぜ。」

「そうだね。」

全員の言葉を聞き入れた遊星の表情は和やかになり、改めてお礼を言った。

「みんな・・・・・ありがとう。では、早速出発だ！」

遊星はそう言うと、エンジンをかけ直しヘルメットを装着すると目の前に広がってくる赤き竜が作り出した道の奥に佇む要塞アーマゲドンを凝視する。

「このレールを伝っていけば、アキ達のところに・・・――」

すると、神妙な顔つきとなっている遊星にジャックが出発を促す。

「遊星。」

「ああ。行こう。俺たちの手で、この世界を・・・アキ達を救い出すんだ！」

「「「「おお！」」」」

「「「「「はい！」」」」」

全員は大きく返事をすると、赤き竜の作り出したレールを伝って遥か上空の割れた異空間に佇むアポカリプスの要塞目掛けてディーホイールを走らせていった。

天へと続くその道を伝う光景は、まるで遊星たちが少し前に解決した未来人、Ｚ－ＯＮＥが潜む居城アーククレイドルに行くときの光景と酷似していた。

そんな光景を遠く離れたところから見つめていた男が一人、この世界にやってきていた。

男は遊星たちの走りゆく姿を見ながら、自分もアーマゲドンへと向かおうとしていた。

「――――――（みんな・・・・・僕も行くよ。）」

男はヘルメットをかぶると、緑色が基調のディーホイールを走らせ遊星たちに気づかれないように道を伝っていった。

その頃、そんな男のことなど全く気付いていない遊星たちはただ只管に赤き竜の作り出したその道を全速力で突き進んでいた。

「このまま全速力で突き進むぞ！」

「ああ！」

スバルは遊星のディーホイールの後ろに搭乗しながら、ふと何気なく真下に佇む廃墟になりかけているこのネオ童実野シティの様子を窺いながら、心の中でこんな決意をする。

「（これ以上・・・この世界も人々も死なせるわけにはいかない。絶対、私たちの力で守り抜く！！そのための魔法と絆が、私達にはある！）」

「みんな、もう少しだ！」

遊星は全員にそう言うと、自身のディーホイールのモーメントエネルギーを最大にして、仲間たちと共に最後の追い込みをかける。

やがて、突き進んでいた遊星たちの眼前に異空間の中に佇むアポカリプスの要塞アーマゲドンが広がってきた。

「見えたぞ！あれが奴の要塞か！？」

「でかいな・・・！」

「正に居城だわ・・・！」

そんな感想を各々抱きながら、ついに遊星たちは赤き竜の道を伝って異空間の中へと侵入し、要塞アーマゲドンへと到着した。

到着を果たすと、遊星はディーホイールを止め全員の安否を確かめる。

「みんな、怪我はないか？」

遊星のその言葉を聞くと、ティアナが代弁した。

「はい。私たちは大丈夫です。」

「！おい、道が！？」

クロウはその時、自分たちが通ってきた赤き竜が作り出した道が消えていく様を見、全員もこの光景には驚きを隠せなかった。

「消えていく・・・」

「だが、赤き竜の力のおかげで俺たちはここまでたどり着けた。感

謝しないとな！」

「時間がありません！行きましょう。」

「ああ。行くぞみんな。目指すはアーマゲドンの中心部、そこに捕まったアキ達とアポカリプスがいる筈だ。」

「「「「ああ。」」」」

「「「「「はい！」」」」」

遊星たちは早速要塞アーマゲドンの中心部を目指してディーホイールを走らせ、走らせていく途中で全員は中心部と思わしき巨大な円盤状のドームを発見する。

「――――あれが中心部か！？」

全員はその円盤状のドームを目指して只管に突き進んでいく。

そして、彼ら全員が無事に中心部へとたどり着くと遊星は眼前に広がるその光景に意外そうな表情を浮かべた。

「アーマゲドンの中心部・・・・・どうやらアーククレイドルと同じく、モーメントエネルギーで動いているのか？」

「みてぇだな。」

「で、こっからどうする？」

遊星たちは中心部にたどり着くと、どうやって内部へと侵入するか

を思案し始めるが、その様子を内部でずっと監視をしていた要塞の主、アポカリプスは不敵な笑みを浮かべる。

「来たか。不動遊星・・・チーム５Ｄ’ｓ。部外者のものも何故かいるようだが、この際いいとしよう。では歓迎しよう・・・我が要塞、アーマゲドンへ・・・」

アポカリプスはそういうと、要塞の仕掛けを起動させて遊星たちが今いる場所の床を消滅させ、ディーホイールごと全員を落下させていった。

「何！」

「う、うそ！」

全員は突然の事態に大いに戸惑いながら、為す術もなく重力に従って暗く何処までも続いていくアーマゲドンの内部へと落下していった。

「「「「「「「「「「うわあああああああああああああ！！！！！」」」」」」」」」」

アポカリプスの陰謀を阻止・仲間の救出の為にアーマゲドンへと侵入した遊星たちの今後の運命はどうなってしまうのか！？

アポカリプスの目的は、一体何なのか！？

そして、あの謎の男の正体とは誰なのか！！

不動遊星とファイブディーズ（後書き）

教えて、ユーノ先生！

ユ「今日は遊☆戯☆王について教えるよ♪」

ユ「遊☆戯☆王はもともと『週刊少年ジャンプ』で１９９６年４２号から２００４年１５号まで連載された漫画で、「マジック＆ａｍｐ；ウィザーズ」という架空のトレーディングカードゲームが大きな反響を呼び、結果としてカードゲーム専従の物語が展開するようになっていったんだ♪」

ユ「その突出した人気から、キャラクターグッズの一環で１９９８年にバンダイより『遊☆戯☆王カードダス』として、１９９９年にはコナミより『遊☆戯☆王オフィシャルカードゲーム　デュエルモンスターズ』（遊戯王ＯＣＧ）として二度実商品化されている。特にコナミから発売された遊戯王ＯＣＧは単なるキャラクターグッズの枠を超えた人気となり、テレビゲームをはじめとした関連商品も数多く発売され一時代を築くにいたる♪」

ティ「カードゲームで何でそこまで夢中になるのか、私にはどうもよくわかりませんけど・・・少なくとも、男の人は結構はまりやすいものなんですかね・・・」

ティアナはそう言いながら、向こうの方でカードバトルに夢中になるエリオや鬼太郎、恋次たちの光景を呆然ととらえていた。

ス「でも、結構やってみたら面白いよティア！ねぇ、一緒にやろうよ！」

ティ「子供じゃあるまいし、私はいいわよ・・・」

ギ「でも、聞いた話じゃヴァイス陸曹長もやってるみたいよ。」

その言葉を聞いた途端、ティアナの雰囲気が一変する。

ティ「！スバル！ぼさっとしないで、カード買いに行くわよ！！」

ス「え！？ちょ、ティア・・・！？」

手を引っ張られるスバルを見送りながら、ギンガとユーノは顔を見合わせる。

ユ・ギ「あははは・・・・・」

もう、苦笑いを浮かべるしかなかった。

魔導師図鑑ハイパー！

ある日の浦原商店に集まる一護達死神代行組。

浦「いや～～～♪実はみなさんに集まってもらったのはですね、どうやったらアタシたちの出番を増やせるかというものか意見を聞きたくてですね♪」

一「何でそんな面倒なことに付き合わされなきゃならねぇんだよ？大体、出番なんてもんは作者が適当に決めてんだから仕方ねぇだろ。」

石「君はいいさ。ここぞというときには必ずユーノ君からの要請があるんだからね！僕なんか、同じメガネキャラなのに圧倒的に出番が少ないんだぞ！茶渡君だって、パトリオット篇でちょこっと出たぐらいだろ！？」

茶「いや・・・俺はどっちでもいいんだが・・・な・・・」

夜「いずれにせよ、男女比率の問題や出現頻度から見ても一護以外のわし等は明に冷遇されておる。このままではいかんぞ！何としても、わし等の出番を増やす機会を作らねば！！」

夜一以下多くのＢＬＥＡＣＨキャラは炎を燃やすのであった。

一「たく・・・あいつらときたら・・・」

織「ああなっちゃたら止められないよ、私達・・・」

一「作者・・・何でもいいからあいつらにもうちっと出番増やしてくれよ・・・」

陳情する一護であった。

次回予告

遊「アポカリプスが待つ要塞、アマーゲドンに潜入した俺達。だが、そこで待ち受けるモンスターの傀儡兵が俺たちの道をことごとく阻んでくる。」

ス「時間が刻々と削られていく中、人質となったアキさんたちの元にもう一人の遊星さんが現れるけど・・・まさか・・・まさかあの

人は！？」

ジャ「次回、ユーノ・スクライア外伝　『アポカリプスの魔の手』」

エ「どうして・・・どうしてあなたがここにいるんですか！？どうして・・・！！」

次回のキーカード『星光の殲滅者　シュテル・ザ・デストラクター』

アポカリプスの魔の手

＞i22143―709＜

前回のあらすじ。

『D』の世界で反応が確認されたアンゴルモアの回収のため派遣されたスバル達七人は、暴走したデュエルモンスターズの大軍と戦闘、その最中不動遊星以下チーム５Ｄ，ｓのメンバーと巡り合う。

そして、遊星たちと共に浚われた仲間を救うため、事件の元凶であるアポカリプスを倒すため、赤き竜の導きにより作られた道を伝って要塞アーマゲンへとたどり着いた彼らだが、その直後彼ら全員は要塞の仕掛けによりアーマゲンの中へと落下していった。

「「「「「「「「「「うわあああああああああああ！！！！！」」」」」」」」」」

重力に逆らうことも出来ずにただ暗い内部の中を落下していく遊星達だったが、遊星は何とか体制を立て直しながらライトを点灯させ足場を確認しようとした。

「く！」

すると、暗いながらも足場を確認できた遊星たちはディーホイールを巧みに操り何とか床下に着地した。

遊星は直ぐに全員の安否を確かめるべく声を上げた。

「みんな！大丈夫か！？」

と、その時ジャックのディーホイール、「ホイール・オブ・フォーチュン」に登場していたキャロとエリオだったが、バランスを崩したキャロが今にも暗い底に落ちそうになっており、それを助けようとエリオとジャックが手を伸ばしていた。

「う・・・！！きゃ、キャロ・・・！！」

「エリオ君・・・！！」

「頑張れ！！手を離すな！！」

「ジャック！」

「みんな！」

スバル達もエリオとキャロの様子を心配し声を上げる。

そして、ジャックは渾身の力を込めてエリオとキャロの体を持ち上げた。

「おおおお！！！！！」

キャロは何とか九死に一生を得ると、ジャックとエリオにお礼の言葉をかけ、遊星の近くにいた浦太郎が全員の無事を確認する。

「どうやら、全員無事なようだね。」

「だが、これでは――――――」

ジャックはそういうと、今自分たちが置かれている現状を深刻な表情で捉えていた。

その現状とは、全員が均一な人数で寸断され仲間の元に近づけないほどの巨大な裂け目が自分たちと仲間を遮っていたのだ。

「みんなで一緒に進むことは不可能だね。」

「なんてこったあ！」

「どうすりゃいいんだよ！？」

思わず声を荒げる鬼太郎やジャック。

すると、ティアナが冷静にあたりを見渡しながらクロスミラージュの機能を活用し始める。

「待ってください。みなさん、ちょっとこれを見てください。」

ティアナはそういうと、クロスミラージュにアーマゲドンの内部をスキャンした画像を全員のデバイス、ディーホイールへと転送する。

「これは？」

『アーマゲドンの内部をスキャンしたものです。いま、私たちが立つ三本の通路はそれぞれが中央にある巨大な歯車を取り巻く三つの

小さな歯車につながっているようです。』

遊星はその歯車と言う言葉とスキャンされた画像を見ながらそれが自分たちのよく知るものと同じであることに気づく。

「おそらく、中心部にあるのがモーメントエネルギーの中枢である太陽ギア。残り三つはそれを動かす遊星ギアだろう。」

その後もティアナの話を続く。

『先ずは、私達でこの三つの遊星ギアを止めなくてはその中心部にある太陽ギアまでたどり着くことはできません。』

「遊星。時間がないよ！急がないと、あのアポカリプスのことだ・・・人質の三人を無事にする保証もなければ、この世界の崩壊も止められない。」

「うん。みんな、聞いてくれ。ここから先はこの三組に分かれてそれぞれのギアに向かうことにする。」

真摯に遊星の話をスバル達が聞く中、遊星は最後にこう言って来た。

「俺はみんなを信じている。必ず太陽ギアで合流することができると！」

「うん！」

ジャックは遊星の言葉を聞き入れると、早速出発の準備に取り掛かり、エリオとキャロは不安げな表情を浮かべる。

「ジャックさん・・・」

「遊星の言葉が聞こえなかったのか？俺たちは使命を果たさねばならぬ。世界が崩壊するかしないかの瀬戸際なのだ！」

「ジャックさん・・・！」

「はい！」

「行くぞ！」

遊星の掛け声を聞くと、全員もお互いに仲間のことを信じることにしてそれぞれの道を突き進むことにした。

「「「「「はい！」」」」」

そんな中、クロウは出発前に遊星に向かってこんなことを言って来た。

「遊星！気をつけろよ！前みたいなことになるのは、俺は嫌だからな！絶対に死ぬんじゃねぇぞ！！」

「クロウ・・・」

クロウはそれだけを言うと、スバル・ティアナ・ギンガを引き連れて奥へと突き進んでいこうとした。

「太陽ギアで待ってるぜ！」

「行こう、ティア！ギン姉！」

「「ええ！」」

クロウがディーホイール、ブラックバードを走らせるとそのあとに続く形でスバルの背中にティアナが乗って、スバルとギンガも走り出す。

「頼んだぞ、みんな！」

遊星も自分の仲間の武運を祈ることにして、鬼太郎と浦太郎を引き連れて自分たちが突き進むべき道を走って行った。

そんな遊星たちの行動を中心部で監視していた、アポカリプスは不敵な笑みを浮かべながら人質のアキ達に向かってかけていた。

「ふふふ・・・分散などすれば勝率が下がることは自明の理というもの・・・何と愚かなことよ・・・そうは思わないか？」

アポカリプスに身柄を捕えられ、動くことも出来ないアキ・龍亜・龍可の三人は歯がゆい思いを抱きながら遊星たちの姿をモニターで見つめるばかり。

「・・・遊星・・・」

「く！！この！！！」

龍亜は必死に抵抗して自分を縛り付ける鎖をほどこうとするが、やはり鎖は外れない。

龍可はそんな情けない自分たちの姿に思わず涙を浮かべた。

「遊星・・・私たちが不甲斐ないばかりに・・・く！！」

そんな三人の姿と、モニター画面に映る遊星たちの姿を見ながらアポカリプスは不気味に笑みを浮かべる一方であった。

「ふふふ・・・さぁ、ショータイムの始まりだ！」

さて、分散された遊星たちは絆を信じてそれぞれの遊星ギアを止めるべく、ディーホイールを走らせ、クロウはスバル達と一緒に遊星ギアのある空間を目指して暗い道を突き進んでいると、目標物があると思われる空間を発見する。

「見えてきたぞ！」

「はい！」

四人がその広大な空間に到着し、辺りを見渡してみるとそこに佇む巨大な柱の様な機会と真下の歯車に驚いた。

「これが遊星ギア・・・ですか・・・」

「思った以上に大きいわね・・・」

と、その時眼前に広がってきた遊星ギアを制御する柱の陰よりこの柱を守護していると思われる強力なモンスター部隊が姿を現した。

「「「！」」」

驚愕するクロウ達を余所に、モンスター達は武器を構えてスバル達

に牙を向けていた。

スバル達は直ぐにデバイスを構えて迎撃に移ろうとする。

「こいつらは・・・！？」

「私たちを阻むためのモンスターのようね・・・」

「だけど、ここは絶対に通してもらう！絶対にアキさんたちを助けるんだから。行くよ、マッハキャリバー！」

〈Ａ・Ｃ・Ｓ　ｓｔａｎｄ　ｂｙ〉

スバルはフルドライブを発動させると、マッハキャリバーになのはより受け継いだエクセリオンモードを発動させる。

「フルドライブ！ギア・エクセリオン！！」

「ギンガさん、クロウさん！私たち全員の力でこいつらを倒しましょう！」

「ええ！」

「おうよ！だったら見せてやるぜ、この鉄砲玉のクロウ様の実力を！」

クロウはそう言うと、デュエルディスクを起動させ徐にカードを五枚引くと、自身が使うブラックフェザーデッキの真髄を披露する。

「相手フィールドのみモンスターが存在するとき、このカードをリ

リースなしで召喚できる。俺は『ＢＦ（ブラックフェザー）　暁のシロッコ』を召喚！！」

クロウはそういうと、モンスター効果によって多くの仲間を呼び力を発揮するブラックフェザーデッキの中の一枚、レベル５の暁のシロッコをその場に召喚した。

「そして、俺のフィールドにブラックフェザーが存在するとき、チューナーモンスター、『ＢＦ　疾風のゲイル』を特殊召喚する！」

ブラックフェザーの効果を有効に活用し、クロウはシンクロ召喚と呼ばれる召喚に必要なチューナーモンスターをその場に呼び出すことに成功する。

「レベル５の『ＢＦ（ブラックフェザー）　暁のシロッコ』と、レベル３の『ＢＦ　疾風のゲイル』をチューニング！黒き疾風よ！秘めたる想いをその翼に現出せよ！シンクロ召喚！舞い上がれ、『ブラックフェザー・ドラゴン』！」

シンクロ召喚に成功した瞬間、ティアナたちの頭上に現れるクロウのエースモンスターでありシグナーの竜、ブラックフェザー・ドラゴン。

スバル達はそのブラックフェザー・ドラゴンの迫力に圧倒される。

「これが・・・！」

「クロウさんの使役竜・・・ブラックフェザー・ドラゴン・・・！」

「行くぜ、お前ら！俺たち四人の力でこいつらをぶちのめすぜ！！」

「「はい！」」

「行け、ブラックフェザー・ドラゴン！！モンスターを蹴散らせ！ノーブル・ストリーム！！」

クロウはブラックフェザー・ドラゴンに指示を出すと、目の前のモンスター目掛けて口から紅色と黒が混じったような光線を発射し、モンスターの軍勢を破壊していく。

それに刺激を受けたティアナ達も攻撃を加え始める。

「クロスミラージュ、私たちも行くわよ！」

〈Ｙｅｓ　ｓｉｒ．　Ｌｏａｄ　ｃａｒｔｒｉｄｇｅ〉

ティアナはカートリッジを多めにロードすると、得意のクロスファイアーシュートでモンスターの軍勢に立ち向かう。

「クロスファイアーシュート！」

一方でスバルとギンガもモンスター目掛けて駆け出していく。

「ブリッツキャリバー、駆け抜けるわよ。」

〈Ａｌｌ　ｒｉｇｈｔ〉

「ストームシュート・エクステンション！」

ギンガのストームシュート・エクステンションがモンスターたちを吹き飛ばし、爆発を起こしていく中スバルもギア・エクセリオンの

力をフルに使った攻撃に乗り出す。

「一撃・・・必倒！！！」

スバルは一際大きいモンスターに近寄ると、ゼロ距離からのディバインダスターを仕掛ける。

「ディバイン・・・バスター！！」

凄まじい轟音が部屋全体に広がり爆発が発生する中、その音は振動としてアーマゲドン各所と伝わりディーホイールを走らせていたジャックや遊星たちの元にも伝わった。

「今の衝撃は・・・まさか・・・！？」

「スバルさん達の方向からです！」

「よし、僕らも急ぎましょう！」

ジャックは二人の言葉を聞くと、ホイール・オブ・フォーチンのスピードを加速させ遊星ギアがある空間を目指して駆け抜けていく。

同じころ、遊星も浦太郎と鬼太郎と共に暗い道を走り続けていた。

「クロウ、スバル、ティアナ、ギンガ。既に戦いが始まっているようだ。」

「僕らも負けちゃいられないね。」

「よし！俺達も早く遊星ギアに急ごうぜ！」

「ああ！」

遊星は飛んでいる二人の言葉を聞くと、速度を増して暗い空間の内部を張りしぬけていった。

そして、先に遊星ギアがある広い空間へとたどり着いたジャック・エリオ・キャロの三人はホイール・オブ・フォーチュンから降車すると、辺りを見渡し確認する。

「着きましたね。」

ジャックは目の前に広がってくる巨大な柱と、床下の葉グルを見ると確信した表情でこう断言する。

「間違いない。このモーメントの光は・・・紛れもなく遊星ギアだ。」

「！二人とも、あれを！！」

キャロがそう口にすると、三人の目の前に現れるクロウ達の前に現れたモンスターとはまた違う遊星ギアを守護するモンスターの軍勢。

「何だこいつらは！？」

「かなりの数・・・しかもどれも強力な力を感じます・・・！」

「面白い！このジャック・アトラスを蹴散らせるものなら蹴散らしてみろ！行くぞ、エリオ！キャロ！」

「「はい！」」

ジャックの言葉に刺激を受けたエリオ、キャロの二人はデバイスを起動させ、キャロはフリードの竜召喚を完了させると火炎弾でモンスターを焼き尽くそうとする。

「フリード、ブラストレイ。ファイア！」

フリードの口から発射される火炎弾がモンスターを攻撃するが、モンスターは高い防御力を活かしてフリードの攻撃を受け止め、そのまま弾き返してしまう。

「「「く！」」」

キャロは咄嗟にラウンドシールドを展開して跳ね返ってきた炎を防御し、２人のみの安全を確保するが、この状況を目の当たりにすると顔色が曇る。

「火力が・・・足りない！」

「ならば、火力を増せばいいだけのこと！」

ジャックはそう言うと、デュエルディスクを起動させて山札からカードを取り出すと、モンスターを召喚する。

「相手フィールドにだけモンスターが存在するとき、『ビックピースゴーレム』をリリースなしで召喚する！」

ジャックがディスクにカードをセットした瞬間現れるレベル５の巨大な岩石の様な体が特徴の『ビックピースゴーレム』。

「更に手札から、チューナーモンスター『ダークリゾネーター』を召喚！」

ジャックは通常召喚によってチューナーモンスター、『ダークリゾネーター』を召喚するとそのままシンクロ召喚を行う。

「レベル５の『ビックピースゴーレム』とレベル３の『ダークリゾネーター』をチューニング！王者の鼓動、今ここに列をなす。天地鳴動の力を見るがいい！シンクロ召喚！我が魂、『レッド・デーモンズ・ドラゴン』！」

その瞬間、ジャックの背後に現れる赤と黒を基調としたジャックのエースモンスターでありシグナーの竜、レッド・デーモンズ・ドラゴン。

レッド・デーモンズ・ドラゴンの王者にふさわしい迫力に圧倒されたエリオとキャロは思わず口を開けてしまう。

「す・・・すごい！」

「大きい・・・！」

「『レッド・デーモンズ・ドラゴン』でモンスターを攻撃！アブソリュート・パワーフォース！！」

レッド・デーモンズ・ドラゴンの右手より放たれる炎を纏った強力な一撃がフリードの炎を防いだモンスターを焼き尽くし、その光景を見ていたエリオとキャロはあまりの凄さに言葉すら失いかけるが直ぐに気持ちを切り替え対処に当たる。

「すごい・・・！だけど僕たちも負けていられない。キャロ！援護お願い！」

「はい！」

「ストラーダ、ＩＰカートリッジロード！」

〈Ｈｙｐｅｒ　Ｅｘｐｌｏｓｉｏｎ〉

「ケリュケイオン、エリオ君のブーストアップ、お願い！」

〈Ｂｏｏｓｔ　ｕｐ　ｓｔｒｉｋｅ　ｐｏｗｅｒ〉

ＩＰカートリッジを使用し、形の変わったストラーダにキャロの補助魔法が送られ更に強化されるエリオの力。

それを横目で見ながらジャックは圧倒的なパワーを武器にして、一気に畳み掛けようとする。

「俺たち三人の前に敵はない！レッド・デーモンズ・ドラゴン！圧倒的な力の差を見せつけてやれ！」

ジャック・エリオ・キャロの三人が共闘によってモンスター軍団と対峙しているその頃、同じように遊星達三人も遊星ギアで待ち構えていたまた違うモンスター軍団と熾烈な争いを繰り広げていた。

「熾きやがれ、烈火！！」

「フィッシャーマン、釣り上げるよ！」

鬼太郎と浦太郎はある程度の数のモンスターを相棒の力で蹴散らせた後、遊星に攻撃を促す。

「遊星！見せてやれ、お前の絆の力を！」

「ああ！俺は手札の『ボルトヘッジホッグ』を墓地に送る！」

ディエルディスクを起動させた遊星は早速手札のボルトが体に突き刺さったモンスターの『ボルトヘッジホッグ』を墓地へと送り、その後ガンマンのようなモンスターを手札から取り出す。

「『クイック・シンクロン』は、手札のモンスター一体を墓地に送ることで特殊召喚できる！」

遊星はそう言うと、レベル５のチューナーモンスター、『クイック・シンクロン』を特殊召喚する。

「フィールドにチューナーが現れたことにより、墓地に送った『ボルトヘッジホッグ』を特殊召喚！」

その瞬間、一度墓地へと送った『ボルトヘッジホッグ』が復活する。

「更に、『ニードルガンナー』を通常召喚！」

遊星は怒涛の勢いで三体目のモンスターを通常召喚すると、その三体を使ってシンクロ召喚を行う。

「レベル１、『ニードルガンナー』とレベル２『ボルトヘッジホッグ』に、レベル５『クイイク・シンクロン』をチューニング！集い

し願いが新たに輝く星となる。光さす道となれ！シンクロ召喚！飛翔せよ、『スターダスト・ドラゴン』！」「

シンク召喚に成功した瞬間、遊星の頭上に浮かぶ不動遊星の分身ともいえる希望の光を宿した星屑の名を持つエースカードにしてシグナーの竜、『スターダスト・ドラゴン』。

アニメでその姿を何度か見ている鬼太郎と浦太郎も間近で見る、本物の姿には流石に目を見開いて驚いていた。

「『スターダスト・ドラゴン』で、モンスターを攻撃！！シューティング・ソニック！！」

遊星はスターダストに命令を下すと、スターダストは口から星屑に輝く光線を放ち、モンスターの軍勢を一蹴した。

「へ！近くで見ると壮観だな！」

「だね。ようし、僕らももっと派手に行こう！」

遊星のスターダストの攻撃を見て、触発された鬼太郎と浦太郎は甲冑モードに切り替えるとその状態から怒涛の攻撃に乗り出していった。

「俺の必殺技パート１！」

「ソニックスピア！」

二人の攻撃によって、一気に数をモンスターの数を減らすと遊星は勝負に出ることにした。

「よし！このまま一気に畳み掛けるぞ！」

「「おう！」」

遊星はそういうと、スターダスト・ドラゴンを操り鬼太郎、浦太郎と共に残りわずかとなったモンスターの殲滅に取り掛かった。

その戦いの様子は、要塞の中心部・・・アーマゲドンの太陽ギアを守っているアポカリプスの元まで振動として伝わり、アポカリプスは不気味な雰囲気を醸し出す太陽ギアの中心に立ち尽くしながら、人質のアキ達を連れていた。

アキ達は遊星たちが必死に自分たちを救出するために命懸けで戦っているこの現像に心打たれそうになった。

「遊星たちが・・・戦っているわ・・・」

「「遊星・・・」」

すると、そんな三人の横で不敵な笑みを浮かべながら要塞の主であるアポカリプスはこう呟いてきた。

「ふふふ・・・不動遊星といえど、この要塞を守るモンスターの大軍を相手にそう簡単に近づけるとは思わぬがな・・・」

アポカリプスがそう口にすると、聞いていたアキ達は反論する。

「遊星たちは絶対に助けに来るわ！私たちはそう信じてる！」

「そうだよ！誰がお前なんかの言葉に騙されるかよ！」

「私たちのことを軽視しているのは、あなたの方じゃないの！？」

「そうかな・・・自分の命欲しさに臆病風に吹かれるということもよくある話だ。」

「遊星はそんな人じゃないわ！私たちは知ってる。遊星がいかに強い意志と勇気を持った絆を大切にする人なのかを！」

「アキ姉ちゃんの言うとおりだ！遊星は逃げたりなんかしない！」

「どうだか・・・・・・お？」

と、その時アポカリプスは目の前から歩いてくる陰に気づき、アキ達三人も目の前を見てみると瞳に映ってきたのは――――――

「あれは・・・！」

「遊星！」

そう、不動遊星で間違いはなかった。

だが不思議なことに、一緒にいる筈の浦太郎と鬼太郎がそこにはおらず、遊星自身も無言のままヘルメットをかぶり、何故か手には木刀を所持していた。

そして、ある程度の距離まで近づき木刀を突き刺すとヘルメット越しにアポカリプスに話しかけてきた。

「アポカリプス！アキ達に手は出していないだろうな！」

アキは妙な違和感を感じながらも、自分たちの無事を遊星に伝える。

「あ・・・大丈夫よ、遊星。私たちはこの通り無事よ。」

「ふふふ・・・不動遊星。よくぞここまでたどり着いた。あれだけのモンスターを前にして、よくぞこの中心部にやってこれたな。この太陽ギアは我と直結しておる。故に我が死ねば要塞諸共ここは破壊される。」

「――――――」

遊星はアポカリプスの言葉を聞き、黙したまま何も語らずヘルメットをとる素振りすら見せない。

そんな遊星の姿を見ていたアキや龍亜と龍可もこの遊星には違和感を感じざるを得なかった。

「遊星？」

「なんだか、変な感じ・・・」

「（おかしい・・・まるでいつもの遊星に見えない・・・いや、遊星に見えないんじゃなくて、遊星ではないみたい・・・！？）」

アキが心の中でそんなことを思っていると、唐突に今まで黙り込んでいた遊星がアポカリプスに向かって言葉を投げかける。

「アポカリス、お前の目的はなんだ！？」

「ふふふ・・・それを知りたければ我と戦うしかないぞ。デュエルだけが我の目的を知る唯一の方法！」

「デュエルで・・・か・・・」

「さぁ、もうお喋りはおしまいだ。さっさとこの世界の命運をかけたデュエルを始めようじゃないか。不動遊星！」

「デュエルの前に、アキ達を解放しろ！」

「いいだろう。この者たちには滅び行くこの世界の希望の最期をじっくりと観戦してもらうとしよう。」

「遊星！」

「「遊星！！」」

「ふふふ・・・さぁ、望み通り人質を解放しよう。」

アポカリプスはそう言うと、アキ達を縛り付けていた鎖を解放して体の自由を利くようにすると、アキ達の背中をそっと押して徐に遊星の元へ行くよう指示を出す。

アポカリプスの動きを警戒しつつ、アキは龍亜と龍可を連れて徐に遊星の元へと歩き出していった。

だが、その直後アポカリプスは不敵な笑みを浮かべると聞き手に剣を生成し、それを徐に握りしめる。

遊星はそれを見た直後、危機感を覚え声を上げた。

「！アキ！龍亜！龍可！走れ！！」

「「「え！？」」」

遊星の言葉を三人が聞いた瞬間、アポカリプスは生成した剣を握りしめながら大きく振り上げてアキ達に向かって斬りかかっていった。

「はあああああああ！！！！」

遊星も咄嗟に持ってきた木刀を持ってアキ達を守ろうと走り出す。

「ぬあああああああ！！！！」

遊星はギリギリのところでアキ達からアポカリプスの攻撃から身を守り抜くと、アポカリプスの剣を捌いた。

「く！」

「何のつもりなの！？」

「デュエルで決着つけるんじゃないの！？」

アキや龍可がアポカリプスにそう尋ねると、アポカリプスは次のように答えた。

「そのつもりだ。だが、デュエルの前に幾度の奇跡を起こしてきた英雄、不動遊星の実力をこの手で試したくなっただけのこと。」

「く！逃げるぞ、みんな！」

「う、うん！」

遊星は三人を手を引きながらその場から脱出を果たそうとするが、その途端要塞に施された仕掛けが発動し、デュエルを行わずして戦線離脱をしようとする遊星たちの動きをとらえてしまう。

「「「「！」」」」

「ふふ・・・言ったはずだ。デュエルの決着を見届けてもらうと。何もせずに貴様たちをここから帰すわけにはいかぬ！」

「ならば俺一人だけでいいはずだ！アキ達は関係ない！」

「駄目だ。貴様たちだけはこの我の手で葬らねばならぬ！」

「く！」

「はあああああ！！」

アポカリプスは再び剣を構えてデュエルを強制するために遊星に向かって執拗に剣で攻撃を仕掛け続け、遊星も木刀で何とか対抗しようとする。

「「「遊星！！」」」

アキ達三人はこの劣勢の淵に立たされている遊星の身を案じるが、その頃この遊星の元に遊星ギアを守るモンスターたちを殲滅し、合流を果たした本物のユーノ達が太陽ギア目掛けて走り出していた。

「この先だ！」

「急ごう！！」

そして、本物の遊星が太陽ギアにたどり着くと、アキ達の名前を呼んだ。

「アキ！龍亜！龍可！」

アキ達もその声に驚き振り返ってみると、アキ達の目の前にもう一人の遊星が現れる。

「ジャック！クロウ！それに・・・え、遊星！？」

「ど、どういうこと！？」

すると、クロウやスバル達も自分たちの目の前に広がってくるもう一人の遊星に目を奪われ驚愕する。

「おい！何で遊星があそこにもいるんだ！？」

「どうなってるの！？」

その時、鬼太郎はアポカリプスと戦っているもう一人の遊星からよく知る人物と全く同じ霊圧を感じ眼を見開いた。

「！（この霊圧・・・まさか！？）」

龍亜はアポカリプスに向かって今戦っている人物が本物の遊星では

ないということを主張した。

「止めて！その人、遊星じゃない！！」

「何！？」

「アポカリプス！それは俺じゃない！！本物の不動遊星はこの俺だ！！」

「ええい！！ならば貴様は何者！！！」

アポカリプスはそう言いながら渾身の一撃をふるい、木刀ごともう一人の遊星が被っていたヘルメットを吹き飛ばした。

するとその瞬間、スバル達はヘルメットの下から現れたクリーム色に輝く長い髪の人物の姿に目を疑った。

「「「な・・・！」」」

「「「「「「「あ！」」」」」」」

アポカリプスは全く関係のない人物が紛れ込んでいたことに大いに驚きながら、徐にその人物に向かって名前を尋ねた。

「だ・・・誰だ・・・誰なのだ、貴様は！？」

すると、その人物は声色を元に戻してから自分の名前を口にした。

「――――ユーノ・スクライア。ただのしがない考古学者で駄菓子屋さ。」

「何！！」

遊星達は見知らぬ男、ユーノ・スクライアの登場に目を見開いて驚いているが、遊星たち以上に驚愕の表情を浮かべていたのはスバル達の方だった。

「ゆ、ユーノ先生！！」

「店長・・・！なんでまた！？」

「お前たちの知り合いか！？」

「知り合いっていうか、あの人こそ次元世界最強と言われる『翡翠の魔導死神ユーノ・スクライア』その人さ。」

「翡翠の・・・魔導死神・・・！？」

ユーノの通り名を聞き、思わず復唱をした遊星。

そんな中、ユーノは額に汗をにじませながらアキ達を後ろに下がらせる。

アキ達は態々遊星に化けてまで自分たちを助け出そうとしたユーノの行動にかなり驚いていた。

「あなた・・・どうして遊星なんかに化けて！？」

「敵を欺くにはまず見方からって言うしね。さ、今のうちに本物の方へ。」

「あ、うん！ありがとう。」

アキ達はユーノの言葉を聞き入れると、直ぐに遊星たちの元へと駆け出した。

「みんな！」

「遊星！！」

龍亜は泣きながら遊星の元に飛び込んでいくと、遊星もそんな龍亜を優しく抱きしめてあげた。

「龍亜。龍可。アキも無事でよかった。」

「ええ。彼に助けられたわ。」

その一方で、浦太郎達はこんな時でも自分たちの元に駆けつけてくれるユーノの性格と人の好さに心底感動していた。

「ほんと、店長はどんなときでも駆けつけてくれるんだから。」

「ですね。なのはさんがよく言ってますもんね・・・『背中いつもあったかい』って。それは私たちも同様ですね。」

「ほんとに・・・ずっと・・・」

だが、そんな喜んでいるのもつかの間。

アポカリプス本人は自分を欺いてきたユーノに強い憤りを覚えた。

「くそ。我を欺くとは、許せん！」

「く！」

ユーノは向かって来たアポカリプスの剣を躱しながら、スバル達の前に立って険しい表情を浮かべながら遊星達だけを逃がす方法を思案し始める。

「（何とかスバルたちと遊星たちを逃がして、こいつから引き離したいものだが・・・日頃の疲労のお蔭で、体がだるい・・・――――ぬああ！！！）」

その瞬間、ユーノは突如体に走る焼けるような痛みに襲われ思わず首筋を押さえた。

「ユーノ先生！？」

「何があった！？」

気がかりになった遊星たちがユーノの様子を心配するが、当のユーノの体がかなり深刻な問題に直面していた。

それは、疲労困憊な状態であるにもかかわらず無理に変身魔法などで力を使っていたユーノの体に刻まれた呪印の力が漏れだそうとしていたのだ。

「くっ！！（くそ・・・！こんなときに、何でタイミング悪く・・・奴らの呪いが・・・！！体が・・・灼けるように・・・熱い・・・！！！）」

「店長！どうしたんっすか！？」

「明らかにユーノ先生の状態がよくありません！もしかして、体にたまった負荷がユーノ先生の体を蝕んでいるんじゃ！？」

そんなエリオの言葉を聞きながら、ユーノは多量の汗をかき険しい表情を浮かべながら心の中でこう語った。

「（そんなもんなら可愛いものだよ、エリオ・・・この呪いは・・・負荷なんかて比べ物にならないぐらいにキツイものなんだ・・・そう・・・あの時、なのはが空から墜ちたときの傷よりもずっと酷い・・・だけどこれぐらいで・・・どうにかなるかよ！！！）」

ユーノは漏れ出した呪印の力を自力で制御するために、自身の中の霊圧と魔力を全開放して呪いに打ち勝とうとした。

「ほおおお

今の時点では名前を明かすことはできないが、少なくともユーノ自身がいま、相当な無茶をしているということは火を見るより明らかでった。

スバル達は深刻そうな表情で今のユーノの状態を心配そうに見つめる。

「ユーノ先生・・・絶対無茶してる・・・！」

「あの男、一体何ものなのだ！？何故あんな状態でありながら自分の仲間でもない、ましてや面識もない俺達のことまで守ろうとする！？」

すると、そんなジャックの言葉に浦太郎と鬼太郎が答える。

「それが店長なんだって。店長は、目の前で苦しんでいる人を放っておくなんて真似は出来ないんだよ。だから、自分の身を削る覚悟で己の魂に誓ってでも、守り抜くつもりなんだ。」

「己の魂に誓ってでも・・・！」

「ああ。嘗て店長に技と力を叩きこんだオレンジ頭からの教えさ。店長は逐一、そのオレンジ頭の言葉を記憶し、それを戦いにおける原動力にしている。」

ユーノの力に驚愕しながらも、アポカリプスはユーノと向かい合い次のように言葉を投げかけてきた。

「貴様・・・どうやって忍び込んだのか知らぬが、我を欺くとはいい度胸だ。不動遊星をデュエルで葬るはずだったが、気分が変わっ

た。ユーノ・スクライアとか言ったか・・・貴様をデュエルで葬ってやろう！！」

「望むところだよ。その方が、僕的にも都合がいい。」

ユーノがそう口にすると、聞いていた遊星やスバル達は大いに驚く。

「なんだと！？」

「ユーノ先生！無茶です！」

「そうっすよ、店長！大体、店長、デュエルモンスターズなんてやったことあるんすか！？」

「店自体で商品は扱ってるけど、カードゲームそのものをやったことはない。」

「そ、そんな！」

「だけど、ルールの方はマニュアルを一回を読んで一通り記憶した。デッキも用意してきた。多分、大丈夫だ。」

ユーノはそう言いながら持ってきた特製のデッキとデュエルディスクを遊星たちに見せ、それを左腕に装着するが、ジャック自身はこの軽はずみなユーノの態度に怒りを露わにする。

「たった一回読んだだけだと！？ふざけるな！貴様、そんな即席でデュエルはできるものではないぞ！」

「こいつは遊びのデュエルとは訳が違うんだ！下手したらお前の命

はなくなるんだぞ！生半可な覚悟で挑むのはやめろ！」

すると、そんなクロノの言葉を聞いた直後はユーノはこう言った。

「生半可じゃないよ。」

「「「「！？」」」」

遊星達六人がその言葉に何かを感じると、ユーノは振り返り強い意志と覚悟のこもった瞳で遊星たちにこう言って来た。

「生半可な覚悟じゃ、“翡翠の魔導死神”はやっていけないんだよ。」

そんなユーノの言葉を聞くと、遊星や他のものも思わず声を詰まらせて何も言い返せなくなってしまった。

「ユーノ先生・・・」

「（あの男の眼・・・本物だ。俺達にもよくわからぬが・・・確かなことは、あの男の眼に宿る曇り気のない澄んだ覚悟が宿っている・・・）」

そんなユーノの確かな覚悟を感じ取ると、遊星はユーノに向かってこう言って来た。

「わかった！ユーノ！俺はお前の言葉を信じる！」

「遊星！？」

「遊星、どうして！？」

遊星の言葉に耳を疑うジャックやアキだったが、遊星はそれでもユーノのことを信じると言い張った。

「信じるんだ。俺達がユーノを信じれば、ユーノは必ずその期待に応えてくれる。ユーノのデュエルと覚悟を俺達はしかと見届けるんだ。そして、ユーノは必ずアポカリスに勝つ！俺はそう信じる！」

「遊星・・・・・・ええ。分かったわ。遊星がそこまで言うなら、私もユーノを信じるわ！」

「おうよ！この勝負、ユーノの覚悟を信じるぜ！」

「うん！私たちもユーノ先生のことを応援する！」

「「ユーノ先生！勝ってください！」」

全員はユーノがデュエルで勝つことを祈って、ユーノのことを応援する。

ユーノもそんな全員の励ましの言葉に思わず顔が綻ぶ。

「みんな・・・ああ！僕はこいつに勝つ！」

「ふふふ・・・ではさっそく準備に取り掛かろう。」

アポカリプスはそういうと、要塞の仕掛けを発動させて奥より奇妙な装置を取り出すとそれをユーノと自分自身の腕に装着する。

「!?」

装着された瞬間、ユーノは訝しげな表情を浮かべる。

ジャックたちもこのアポカリプスの行動に違和感を覚える。

「何だあれは!」

「く!!どういうつもりだ!!デュエルをするんじゃなかったのか!?」

「勿論そのつもりだ。但し、これはこの世界の明暗をかけた真剣勝負・・・ゆえに、命懸け手のデュエルとなるのだ!」

「命懸けの・・・デュエル!?」

アポカリプスがそう口にすると、遊星はユーノに取り付けられた装置が何の目的のために使う装置なのかを判断する。

「そうか。あの装置はダメージを数値化して実際の衝撃を与えるためのものか?!」

「と言うことは、ライフポイントがゼロになって負ければ死ぬってこと!」

「そう通りだ。貴様たちが本当にこの世界を救いたいというのなら我を倒すしかない。だが、デュエルをするのは貴様らではなくこの男。貴様らはそこでじっとデュエルの行く末を見ているがいい!」

「なんだと!?そんなものは無効だ!今すぐユーノを解放しろ!勝

負なら俺としろ、アポカリプス！」

「いや！俺とだ！！」

ジャックやクロウはこの卑劣な手段で勝負を挑もうとするアポカリプスのやり方に不服があったが、アポカリプスが二人の言葉に耳を貸そうともしない。

「駄目だ。ここにいる貴様らに発言権も拒否権も与えられていない。この男が勝てばすべて元に戻るが、負ければこの男の死と共に世界は終わる。」

「ユーノ！」

「さぁ、世界の運命をかけた記念すべき一戦の始まりだ！！」

アポカリプスはそういうと、手からビールを発射し遊星たちが入ってきた出口の扉をふさぐために天井を崩落させた。

「しまった！出口が！！」

ユーノ自身もこの戦法を取ってくるアポカリプスには激しく憤りを感じていた。

「みんな！くそ・・・卑怯だぞ！」

「ふん。ほざくがいい。」

「ユーノ！」

遊星がユーノの名を口にした直後、アポカリプスは戦闘フィールドを生成するために要塞の仕掛けを発動させた。

「ふん！」

その瞬間、要塞の仕掛けが起動し遊星たちが立っていた階段が突如崩壊を始め、同時にユーノとアポカリプスの足場も大きく崩れ始めた。

「ぐあああ！」

遊星は思わず足場を崩して底の見えない暗闇の中に落ちそうになった。

「「「「「「「「「遊星！」」」」」」」」」

「「「「「遊星さん！」」」」」

遊星はジャックたちの手を借り、何とかその場から這い上がるがユーノ自身はこの光景を目の当たりにすると更にアポカリプスに対する怒りを募らせた。

「アポカリス！！貴様、遊星に何て事を！」

「ふふふ・・・いいぞ、その闘争心。温厚なる姿に隠された猛々しい魂の鼓動・・・これは、ある意味不動遊星のそれよりも上玉かもしれんな。貴様が勝てば世界は救われる。だが、我が勝てば世界は崩壊し、貴様の魂は我の目的のための憑代となる。光栄だと思え。ふふふふ・・・！」

「奪えるものなら、奪ってみろ！この僕の魂を！」

「ユーノ先生！」

心配になったスバルが声を上げると、ユーノは決意のこもった表情で傍で見守る全員にこう言って来た。

「大丈夫。待っていろ、みんな。さっさとこいつを片付けてやる。」

「ふふふ・・・ならば、早速はじめようぞ。命を懸けた世界の明暗を分けしデュエルを！」

アポカリプスはそういうと、ユーノと共に所持していた特注のデュエルディスクを利き腕に装着し、デッキをセットする。

そして、準備が整った瞬間ユーノはアポカリプスと向かい合いデュエル開始を宣言する。

「行くぞ！」

「「決闘（デュエル）！」」

それでは、簡単にルールを説明しよう。

デュエルは１対１で対戦するが主流であり、各プレイヤーは任意に組み合わせた４０～６０枚のカード「メインデッキ」を用意し、さらに必要であれば１５枚以下の予備カード「サイドデッキ」と、融合モンスター及びシンクロモンスターの使用に必要な１５枚以下の「エクストラデッキ」を用意する。

同名カードはメイン、サイド、エクストラの各デッキに合わせて計３枚まで使用可能で、制限カードは計1枚、準制限カードは計2枚まで使用可能で、禁止カードは一切使用できないが、今回はそう言ったことは無視される。
プレイヤーの耐久力はライフポイントと呼ばれる数値で表される。数値は４，０００で、ゲーム中増減し、下限の０となったら負けとなる。

また、メインデッキが0枚になり、さらにカードをドローする時にカードを引けないプレイヤーは、「デッキ切れ」となりデュエルに敗北する。

このほかに特殊な勝利条件を成立させた場合も勝敗が決着する。

これらを踏まえた上で先行のアポカリプスのターンから見ていくことにしよう。

「先行は我が貰う。我のターン、ドロー！」

アポカリプスはデッキの一番上からカードを引くと、不敵な笑みを浮かべながら六枚となっている手札から一枚を取出し茶色を基調とした特殊効果を持ったモンスターカード一枚を召喚する。

「我は『星光の殲滅者　シュテル・ザ・デストラクター』を召喚する！」

アポカリプスが召喚してきたのは、姿かたちは若干の違いはあるがそれは紛れもなくユーノやスバルたちがよく知るなのはの子供時代を象ったものだった。

「な！なのは！？」

ユーノは目の前に映ってきた自分の最愛の人物を象ったモンスターに狼狽する。

「どういう事！？何でなのはさんが！！」

「正確に言えば、あれは子供のころのなのはちゃんだけど・・・色が真っ黒だよ・・・！」

浦太郎が言うとおり、モンスターとして召喚されたなのはのバリアジャケットは黒を基調としている。

困惑の表情を浮かび上がらせるユーノだったが、そんなユーノにアポカリプスは不敵な笑みを浮かべながらこう口にしてきた。

「ふふふ。我のデッキのカードはすべて、戦うものの心の中にいる最も深い思い入れのあるものの記憶を形にしたもの。故に、これから貴様が戦う相手は貴様の幼馴染に同じだ！」

アポカリプスがそう口にすると、スバルたちと共にユーノのデュエルを観戦していたクロウとジャックが悔しそうな表情を浮かべながらこう呟いた。

「そうだ・・・！あの野郎は俺達のときにも同じ戦術をとってきやがった！！」

「あんなまやかし如きで、翻弄されるとは・・・俺達は実に情けない！！」

「ジャック・・・クロウ・・・」

傍で歯がゆい思いとなり悔し涙を浮かべる二人に思わず言葉を詰まらせる遊星と、卑劣な戦略を前に怒り心頭のユーノ。

「く！！おのれ外道が・・・！」

「ふふふ。カードを一枚伏せてターンエンドだ！さぁ、来るがいい！」

デュエルの進行は順に、ドローフェイズで自分のメインデッキよりカードを1枚ドローし、スタンバイフェイズで次の「メインフェイズ1」に移行するまでの移行段階を踏み、メインフェイズ1でモンスターの通常召喚（1自ターンに1度）及び表示形式の変更、カードのセットなどを行え、バトルフェイズによってモンスターによる戦闘を行う。

モンスターが存在していなくてもバトルフェイズに突入することはでき、先攻プレイヤーの第1ターンのみ、バトルフェイズは存在しない。

このフェイズ中自軍の表側攻撃表示モンスターの数だけ以下の各ステップを行うことができ、全ての処理が終了すればバトルフェイズの終了を宣言・エンドフェイズで自ターンの終了を宣言し、終了宣言と同時に「優先権」（後述）は相手に移る。

そうしルールの元始まった今回のユーノ対アポカリプスのデュエルを観戦する機動六かフォワード部隊とチーム５Ｄ，ｓのメンバーの表情は複雑だった。

「始まってしまいましたね・・・この世界の明暗を分けた命懸けのデュエルが・・・！」

「何ということなの・・・！」

「遊星・・・！あの人大丈夫なの！？」

動揺を隠し切れない不安げな龍亜がそう言うと、飽く迄も遊星は落ち着いた様子で返事をする。

「ここはあいつを信じるしかない。スバルや浦太郎達が信頼を置く、翡翠の魔導死神ユーノ・スクライアのことを・・・――」

遊星をそう口にすると、静かに背中越しに何かを語りかけてきそうなユーノをじっと見つめるのであった。

「たとえなのはの姿で僕の心を惑わそうとも、僕が愛した高町なのはは世界でただ一人！不屈のエースオブエースと似て非なる偽物なんかに負けるものか！僕のターン、ドロー！！」

ユーノは勢いよく山札からカードを引くと、それを手札に加え一枚の魔法カードを発動する。

「僕は手札から魔法（マジック）カード、『斯くて刃は振り下ろされた』を発動！」

ユーノが手札から発動したこのカードの効果以下の通りだ。

「このカードはデッキ、または手札からレベル５以下のシンクロ素材となるモンスター一体を特殊召喚することが出来る。そして、召

喚したターンの終わりにデッキをシャッフルする。僕は、レベル４の『黒崎一護』をデッキから特殊召喚する。」

ユーノはカードを効果を使って、自分のデッキの中から通常モンスター『黒崎一護』を自分の場に特殊召喚した。

モンスターが召喚された直後、スバル達は思わず唖然とし鬼太郎は突っ込みを入れる。

「って！何でオレンジ頭がモンスター扱いなんだよ！？」

「これも店長のセレクトだからね・・・」

冷静な様子で鬼太郎の言葉に対応する浦太郎。

その後、モンスターの召喚に成功したユーノは手札から一枚のモンスターカードを取り出す。

「更に、チューナーモンスター『朽木ルキア』を手札から通常召喚！」

ユーノがディスクにカードをセットすると、ユーノの場には一護ともに死覇装に身を包んだルキアが召喚される。

「今度はルキアさんが出てきた！」

目を見開き驚くフォワードを余所に、未知のデッキを操るユーノのモンスターカードをまじまじと見つめるジャックや遊星。

「あれが奴のチューナーモンスターか・・・」

そして、そんな全員のリアクションを余所にユーノは二体のモンスターをシンクロさせる。

「レベル４の『黒崎一護』とレベル３の『朽木ルキア』をチューニング！」

『朽木ルキア』が３つの輪となり『黒崎一護』がその中を通ると、『黒崎一護』の身体が透き通り２つの光なる。

そんな様子を見ながら、ユーノは召喚の際の言葉を口にする。

「“刃振り下されし時、出逢いは絆を紡ぎ少年は守り抜く力を手にする！”シンクロ召喚！覚醒（ブラスト・ソウル）！『死神代行　黒崎一護』！」

シンクロ召喚によって光の中から現れたのは死覇装に身を纏い始解状態である斬月を利き手に持った『死神代行　黒崎一護』の姿だった。

遊星たちは傍でシンクロ召喚をしてきたユーノのモンスターに驚くばかり。

「シンクロ召喚をしてきたぞ！」

「一体どんな能力を持って居やがるんだ！？」

「『死神代行　黒崎一護』の効果発動。このモンスターの召喚に成功したとき、一ターンに一度相手のマジック・トラップ・モンスター効果を無効にして相手プレイヤーにダイレクトアタックをすることができる。『死神代行　黒崎一護』でアポカリプス、お前を攻撃

！魂の斬撃、月牙天衝！」

『死神代行　黒崎一護』の攻撃が発動し、直接ダメージを受けたアポカリスは尋常ならぬ痛みに苦しみ、ライフポイントを一気に２００ポイント奪われる。

「ぐあああああああああああああ！！」

「カードを一枚伏せ、ターンエンド！」

ユーノのターンが終了し、毅然とした表情を浮かべるユーノを見ながら、遊星たちは素人であるはずのユーノのカードタクティクスに驚愕する。

「凄い・・・！たった一回ルールを見ただけなのにいきなりライフを大幅に削った！」

「何という奴だ・・・！」

「店長はね、管理局一の天才的な頭脳の持ち主なの。まぁ、これぐらいは。」

ダメージを大幅に受け、全身から湯気を吹き出すアポカリスは徐に立ち上がると不敵な笑みを浮かべながらユーノを凝視する。

「くｔ！！ふふ。なかなか楽しませてくれる。我のターン！『星光の殲滅者　シュテル・ザ・デストラクター』のモンスター効果発動！このモンスターが表側表示でフィールに存在するとき、デッキ・または手札から『雷刃の襲撃者　レヴィ・ザ・スラッシャー』をフィールドに呼び出すことが出来る。我はデッキから『雷刃の襲撃者

レヴィ・ザ・スラッシャー』を特殊召喚！」

特殊効果を発動させたアポカリプスはデッキの中から、そのモンスターを召喚する。

モンスター、『雷刃の襲撃者　レヴィ・ザ・スラッシャー』の姿は青を基調としたバリアジャケットに身を包んだ幼き頃のフェイトの姿と酷似していた。

「今度はフェイトさんまで・・・！あいつ、とことん嫌な性格！」

相も変わらず卑劣な戦法で対戦相手のユーノの心を惑わすアポカリプスのデュエルに、憤りを感じるフォワードや遊星たち。

「そして、『闇統べる王　ロード・ディアーチェ』を手札から召喚する。」

アポカリプスは自分の手札から最後の一体である、はやての姿に酷似したモンスターカードを召喚し、いまここに管理局最恐と言われる三人娘を呼び出すことに成功する。

「なのはにフェイト・・・おまけにはやてまで召喚して、最恐の三人が揃っちまった！」

「どうするの店長・・・！？」

戦うユーノのことを不安げな様子で見つめる浦太郎達と、未だ嘗てこれほどまでに自分の心が動揺する戦いを経験してこなかったユーノの表情は険しかった。

「（こいつ・・・つくづく人の心を取り乱すようなカードばかりを召喚してくる・・・！しかも召喚するカードはすべて子供時代のなのは達の姿・・・いけ好かない野郎だ！）」

そんなユーノを楽しそうに見つめながら、アポカリプスは伏せていたカードをオープンする。

「ふふふ。更に永続魔法『絶対魔力障壁』を発動！自分フィールド上に表側表示で存在する『星光の殲滅者　シュテル・ザ・デストラクター』・『雷刃の襲撃者　レヴィ・ザ・スラッシャー』・『闇統べる王　ロード・ディアーチェ』がある限り、相手プレイヤーは我のモンスターに攻撃することもダイレクトアタックをすることも出来ず、攻撃を行ったそのモンスターの攻撃を無効にし破壊する。」

「何！」

「ユーノのシンクロモンスターの能力とモンスターへの攻撃を封じてきただと！？」

遊星たちはこの魔法カードの効果を耳にすると、ユーノ達以上に焦りの表情を浮かべる。

「そして、もう一つの効果。相手のシンクロモンスター一体につき８００ポイントのダメージを与える！」

カード効果によって、『絶対魔力障壁』の中より飛んできた光線がユーノに着弾すると、ユーノは実際に発生するそのダメージに声を上げて苦しんだ。

「ぐ！！ぐあああああ！！！」

「ユーノ先生！」

「今のは、本当の衝撃！？」

ティアナやスバルは目の前で起こっているこのあり得ないような現実の光景に戸惑いを隠し切れずにいた。

そして、あまりの痛さに膝をついた湯気を吹き出すユーノを見ながら不敵な笑みでアポカリプスは言葉を投げかける。

「ふふ。かけがえのない幼馴染より与えられる絶望の痛みはどうだ？」

「く・・・か、カスが・・・！」

アポカリプスの言葉に思わず自分でも言わないような罵声が飛びだすユーノ。

「ふふふ。カードを一枚伏せて、我はこれでターンエンド。」

この命懸けのデュエルを断絶された場所より観戦するフォワードや遊星たちの心は今にも張り裂けそうだった。

いま自分たちの命とこの世界の人々の命と未来を守るために、この翡翠の魔導死神ユーノ・スクライアは身を挺して戦いに臨んでいるのだ。

これまでも、ユーノと同じかあるいはそれ以上とも言える命懸けのデュエルを行いそして世界を救ってきた遊星にもこのユーノの戦う

光景は痛ましく思えてならなかった。

そんな中で、遊星は険しい表情を浮かべるユーノを見ながらふと思った。

「（ユーノの心を惑わすモンスターの召喚を繰り返し、永続魔法『絶対魔力障壁』の効果によりダイレクトアタックさえも封じられた・・・戦局は圧倒的にユーノに分が悪い。どうする、ユーノ・・・！）」

遊星がそう思っている間に、ユーノは肩で息を上げながら立ち上がり険しい表情を浮かべたまま多量の汗にまみれ顔で山札を引こうとする。

「は、は、は、は！！くそ、胸糞悪い・・・！！さっさとそんなモンスターなど蹴散らしてやる。所詮そいつらはただのまやかしだ。僕のターン！！」

ユーノはカードを引くと、自分の手札から新たなモンスターを召喚する。

「手札から、『阿散井恋次』を召喚！」

ユーノが召喚したのは、今の恋次とは違い副隊長自体の隊長羽織を着用していないレベル４の『阿散井恋次』だった。

召喚に成功したユーノは、目の前に映ってくるアポカリプスの永続魔法を凝視する。

「（兎にも角にも、先ずは厄介なあのカードを・・・破壊しなくて

は・・・！）」

ユーノはそう思い立つと、召喚したばかりの『阿散井恋次』で攻撃を仕掛ける。

「『阿散井恋次』で、『星光の殲滅者　シュテル・ザ・デストラクター』を攻撃！」

このユーノの軽率とも取れる行動にジャックや他の観戦者は驚くばかりだった。

「何故だ！？永続魔法によって、ダイレクトアタックは阻まれているというのに！」

だが、遊星だけは何かしらの狙いがあるのではないかと言う視線でその光景を見守る。

「・・・・・・」

ユーノは攻撃対象を『星光の殲滅者　シュテル・ザ・デストラクター』に選択すると、『阿散井恋次』で攻撃を仕掛ける。

「咆えろ、蛇尾丸！」

「何を血迷ったか！永続魔法『絶対魔力障壁』の効果により直接攻撃は無効となり、モンスターは破壊されるのだぞ。」

アポカリプスはそう口にすると、永続魔法『絶対魔力障壁』の効果を発動させ、『星光の殲滅者　シュテル・ザ・デストラクター』に向かってきた『阿散井恋次』の前に設置し、『阿散井恋次』を粉砕

する。

すると、これを待っていたとばかりにユーノはモンスター効果を発動させる。

「だが、『阿散井恋次』は破壊されたとき、相手フィールドの表側表示のマジック・トラップカード一枚を破壊する。『絶対魔力障壁』を破壊！！」

効果を発動させた瞬間、『絶対魔力障壁』は破壊され墓地へと送られる。

「ふふふ・・・」

マジックを破壊されたことにも一切動じず、不敵な笑みを浮かべるアポカリプス。

「これで邪魔なトラップはなくなり、『死神代行　黒崎一護』で思う存分攻撃ができる。『死神代行　黒崎一護』で『星光の殲滅者　シュテル・ザ・デストラクター』を攻撃！魂の斬撃、月牙天衝！」

ユーノは反撃の好機と見て、『死神代行　黒崎一護』で『星光の殲滅者　シュテル・ザ・デストラクター』に攻撃を仕掛けるが、すかさずアポカリプスは伏せカードをオープンする。

「させるか！リバーストラップ『夜天の守護騎士プログラム』を発動！このカードは相手モンスターが我のモンスターに対して攻撃を仕掛けてきたとき、ダメージをゼロにしてバトルフェイズを強制的に終了させる。」

トラップカードに描かれた黒に変色されたヴォルケンリッター四人が出現すると、ユーノのモンスターの攻撃を無効化し、バトルフェイズを強制終了させる。

この結果を見ていた龍可やエリオなどは悔しそうな表情を見せる。

「あああ！惜しい！！」

「奴はどんな手を使ってでも、モンスターを温存させる気か。」

「ち！カードを一枚伏せてターンエンド！」

エリオ達以上に悔しそうな表情を浮かべながら舌打ちをしたユーノはそのまま手札のカードを一枚伏せてターンを終了させた。

「我のターン！おっと、既にやることがなくなったようだ・・・ターンを終了。ふふふ。」

全ての準備を整えた様子のアポカリプスはまるでユーノの戦法を嘲笑うかのようにカードを手札に加え、そのままターンを終了させた。

「こいつ・・・！」

自分のことを嘲笑うアポカリスの態度に憤りを覚えるユーノ。

だが、その時崩れた床下の底から何やら不気味な影が浮かび上がってきた。

「！？」

ユーノや上の方で観戦していた遊星たちが同じものを見ると、全員只ならぬ悪寒を感じ、思わず後ずさりをしてしまう。

「なんだ、今のは！」

「あのどす黒い姿はなんだ・・・！」

すると、警戒する全員の眼に映ってくる漆黒に染まりし謎の黒い影がユーノの頭上を飛び越えていき、ユーノはそれを見ると目を見開き汗を浮かばせた。

「一体何が居やがるんだ、ここには！？」

と、そのときまるで待ち望んでいたとばかりの言葉をアポカリプスは口にしてきた。

「ふふふ・・・どうやらもうじきこの世界の終焉も近いようだな・・・」

「何！？」

「どういう事よ、それ！？」

アキが冷静にそう尋ねると、アポカリプスは不敵な笑みを浮かばせながらこう言って来た。

「ふふふ・・・貴様たちにも見えるだろう。あの“邪心”の姿が。あれこそ、人間の欲望から生まれし邪悪なる魂が具現化したもの・・・かの地縛神や時械神の力をも凌駕する究極のモンスター・・・・・“ヒューマン・ディザイヤー”！！」

「ヒューマン・ディザイヤー・・・！？」

「人間の欲望だと！？」

アポカリプスから告げられるその黒い影の正体を耳にした直後、ユーノの頭にアポカリプスの真の目的が何なのかが浮かび上がった。

「まさか、貴様の目的は！」

「そう。我の目的はこのヒューマン・ディザイヤーの出現によってこの世界も、そして全ての次元世界にある欲望という欲望を食らい・貪り尽くし、そして粛清する。それこそが我の念願の野望であり、全世界の秩序統制なのだ！ははははははは！！！！！」

その瞬間、ユーノの全身に伝わってくるヒューマン・ディザイヤーが無意識のうちに発する黒く染まった人間の欲望。

肌で感じ取ったユーノはそのあまりの黒さに困惑の表情を浮かべた。

「（なんだ・・・この肌に伝わってくるあまりに黒過ぎる欲望は・・・！？これが人間の欲望なのか・・・！）」

「ふふははは！！分かるであろう、貴様にも！これこそが、貴様ら人間が心の裡に抱くどす黒い欲望の姿そのもの！もうすぐ、その姿は究極のモンスターとなり貴様も、赤き竜に導かれしシグナーも何もかもが飲み込まれるであろう！」

アポカリプスの言葉を聞き入れ、未だ信じられないとばかりの表情を浮かべる全員の前に徐々に覚醒の時を迎えようとしている究極の

モンスター、ヒューマン・ディザイヤーの輪郭が映し出され、遊星たちは思わず顔を強張らせた。

「これが・・・！」

「ヒューマン・ディザイヤー・・・！？」

言葉では表現しかねるそのモンスターの姿に、恐怖と共に言いようのない欲望に言葉を失う全員。

このヒューマン・ディザイヤーの覚醒が促されたことにより、廃墟寸前にまで追い込まれていたネオ童実野シティにも異変が起こりつつあった。

突然大地震が発生し、建物が崩落・自然の天候が乱れ始め人々の心は更に追い詰められていく。

果たして、ネオ童実野シティは・・・この世界の明暗はどうなってしまうのか！？

ユーノ・スクライアよ、何としてもこのデュエルに勝利してくれ！！

アポカリプスの魔の手（後書き）

教えて、ユーノ先生！

ユ「今日は５Ｄ，ｓのメンバーが操るドラゴンについてだ♪」

ユ「遊星はスターダスト・ドラゴン。ジャックは圧倒的パワーのレッド・デーモンズ・ドラゴン。クロウは痛みを力に変えるブラックフェザー・ドラゴン。アキはブラックローズ・ドラゴン。龍可は精霊の力を秘めたエンシェント・フェアリー・ドラゴン。龍亜が機械の体でできたパワーツール・ドラゴンと、その真の姿であるライフ・ストリーム・ドラゴン。」

ユ「そして、これら六体の竜を束ねるのが赤き竜と言うわけだね♪」

ジャ「だが、何を置いても俺のレッドデーモンズが何と言っても一番だな！まさしく、王者にふさわしい俺だけのドラゴンだ！」

ク「お前はそうやって直ぐに自信過剰に陥りやがって！俺のブラックフェザーだって負けちゃいないぜ！」

ジャ「いいや！レッド・デーモンズが一番だ！！」

ク「いいや！！ブラックフェザーの方が何倍もいい！！」

ジャックとクロウは互いに自分のドラゴンが一番だと言い争いを繰り広げ、最早誰にも止められなくなると場の雰囲気を見ていたユーノは遊星に尋ねた。

ユ「ねぇ・・・あの二人はいつもあんな感じなの？」

遊「ああ。暫く経てば直に落ち着くと思うが・・・相変わらず困った二人だ・・・」

アキ「これで少しも懲りないから性質が悪いのよね・・・」

あきれ返る遊星とアキ、そして他のファイブディーズメンバーであった。

ユ「ま、自慢合戦もほどほどにね・・・・・・」

魔導師図鑑ハイパー！

久々の休暇を利用して恋次・吉良・ルキアの三人は市内の映画館へとやってきた。

恋「たまには映画を見てのんびり過ごすのも悪くねぇな。」

吉「そうだね。えっと、今は何をやってるのかな？」

ル「お！あれなど面白そうではないか？」

ルキアがそう言って指を差したのは、どう見ても１８歳以上のものは見てはいけないことになっている性描写の多い映画だった。

思わず二人をこれを見て顔を赤くし、抗議する。

恋「ば、馬鹿野郎！んなもん以外にも見るものならあるだろうが！！」

吉「朽木さん、考え直そうよ！ね！」

ル「何を言っておるのだ貴様ら。これしきのことでビビりおって。さぁ、今どきの若者の性を探求しようぞ！」

ルキアはそう言って、２人を強引に館内へと連れ込んでいき、結局その映画を最後まで観賞してしまったのであった。

六課に戻ってきた恋次と吉良は鼻血の出血多量でシャマルの元へと運ばれた。

シャ「二人とも、一体何をしたらそうなるの？」

疑問に思うシャマルの言葉に、二人は口を揃えて答える。

恋・吉「映画を見たらこうなった・・・！」

シャ「映画？」

最後まで言葉の真意が分からないシャマルであった。

次回予告

敵「ユーノ・スクライア。貴様がどう戦おうと、この状況下の中でこの我に勝てはしないのだ！貴様は貴様らしいデュエルを見せ、そしてヒューマン・ディザイヤーに飲み込まれればいいのだ。」

ユ「ふざけるな！！宣言する！貴様の思い通りにはならんと！！」

ユ「次回、ユーノ・スクライア外伝　『赤い竜の導き、超進化!!
スカルクラッド一護』

ユ「僕は負けない!貴様に見せてやろう、我が魂の師匠の奴らより
与えられた究極の姿!!」

次回のキーカード　『スカルクラッド一護』

赤き竜の導き、超進化！！スカルクラッド一護

＞ｉ２０１８０－７０９＜

ユーノ・スクライア対アポカリプスの命を懸けたデュエルの最中、

徐に明かされたアポカリプスの真の目的、人間の欲望より生まれし究極のモンスター・・・ヒューマン・ディザイヤーを覚醒させ、その力で世界を粛正する事。

そして、その覚醒を迎えつつあるヒューマン・ディザイヤーの輪郭が全員の目の前に姿を現し、遊星たちは思わず声を漏らした。

「・・・これが！」

「人間の欲望より生まれしモンスター・・・・・・ヒューマン・ディザイヤー・・・！」

あまりの姿に唾を飲む遊星たちと、一番近くでその光景を目の当たりにしているユーノの眼にもはっきりとその光景が浮かんで来る。

「ヒューマン・ディザイヤー・・・・・・だが、僕のこの魂・・・差し出すつもりは毛頭ない！！僕のターン！！」

ユーノは強い口調でそう言いながら、山札からカードを引きマジックカードを発動する。

「僕は手札からマジックカード、『魂の卍解』を発動！自分フィールドに存在する『死神代行　黒崎一護』と、デッキ・手札から任意にレベルを変更したシンクロモンスターを選択して新たにシンクロ召喚を行う。僕は『魂の卍解』の効果によりレベル１に変更した手札のレベル６のチューナーモンスター、『斬月』を召喚！」

ユーノはそう言うと、手札にあったロングコートに身を包んだ姿の一護の斬魄刀の本体、『斬月』のカードを取出し、レベル変更ののちに特殊召喚する。

遊星たちは新たにユーノがチューナーモンスターを召喚したことに驚愕する。

「チューナーモンスター！？」

「新たにシンクロモンスターを召喚する気か、あいつ！？」

「一護さんと斬月ってことは・・・ひょっとして！」

ユーノのフィールドに居合わせた一護と斬月の二体を見て、ある程度の予想を立てたスバルたちの目の前で、ユーノは二体のモンスターをシンクロ召喚させる。

「レベル7の『死神代行　黒崎一護』とレベル1となった『斬月』をチューニング！」

最初のシンクロ召喚同様、今回は『斬月』が3つの輪となり『死神代行　黒崎一護』がその中を通ると、『死神代行　黒崎一護』の身体が透き通り2つの光なる。

「“魂の奥底に眠りし裡なる力、今ここに顕現せよ！答えよ、魂の刃！たどり着く境地の名のもとに！”シンクロ召喚！ブラックムーンライジング、『天鎖斬月　黒崎一護』！」

光から解き放たれ、姿を現したのは卍解状態で漆黒の斬魄刀、天鎖斬月を所持した『天鎖斬月　黒崎一護』であった。

アポカリプスは新たにシンクロ召喚されたユーノのモンスターを目の当たりにすると、思わずこう口にした。

「ふふふはははは！！なるほど、それが貴様のエースモンスターと言うわけか！自らの戦いの師をエースとするところを見るに、余程の思い入れがあるようだな・・・」

「『天鎖斬月　黒崎一護』のモンスター効果。相手フィールドに存在するモンスターの数×５００ポイントのダメージを相手に与える！」

「上手い！これが通れば、一気にライフポイントを削り、アポカリプスを倒せる！」

「行け！！ユーノ！！」

ユーノの召喚したモンスター効果を聞き、ガッツポーズを浮かべたクロウや鬼太郎達はユーノにエールを送り、ユーノもそれに応えるかのように『天鎖斬月　黒崎一護』で攻撃を仕掛ける。

「漆黒の月牙天衝！」

天鎖斬月から放たれる漆黒の月牙天衝が直接アポカリプスに向かうが、アポカリプスはそれを見ても動揺するそぶりは見せず、やはり不敵な笑みを浮かべるばかりだった。

「ふふふ・・・何度でも諦めぬその精神は立派だ！だが、そう都合よく我にダメージを与えられると思いか！？我は墓地にある『絶対魔力障壁』を除外して、手札から速攻魔法『魔王の配下・フォワード』を発動！」

アポカリプスは手札から黒く染まったフォワードの五人が描かれた速攻魔法を発動させ、その効果を説明する。

「このカードが発動されたターン、相手のバトルフェイズを強制終了しダメージカウンターをゼロにする。」

カードの中より現れる五人のフォワードが漆黒の月牙天衝を受け止め、バトルフェイズを終了させる姿を見ながら、スバル達の表情は苦いものとなる。

「私たちのカードを使って、ユーノ先生の攻撃を跳ね返しちゃった!?」

「実に不愉快な相手ね・・・!」

「く!ターンエンド!」

バトルフェイズを終了させられたユーノは舌打ちをしながら、この思わぬ戦法をとってきたアポカリプスに怒りを募らせる。

その一方で、観戦していた遊星たちは冷静にこのアポカリプスの戦法を分析し始める。

「フィールドに存在する幼馴染の姿を象ったモンスターで心を動揺させておき、墓地のカードを使ってデッキからマジックカードを発動させ、その上でユーノの攻撃を翻弄する。」

「ユーノのライフは徐々に追い詰められていってる。次のターン、奴がどんな戦術で攻めてくるかによって、この勝負に雌雄が決するやもしれない。」

ジャックの言葉を横で聞くと、鬼太郎や浦太郎達の表情が曇る。

「店長・・・」

この状況下の中で、一体ユーノはどんな戦術を使ってアポカリプスを倒すというのか？

全ては、ユーノの中に眠るカードによって決まる。

そして、再びデュエルはアポカリプスのターンへと順番が回る。

「我のターン。またまたこれにてターンを終了。なんせやることがないものでな・・・」

「く！僕のターン！」

ユーノは力強く山札のカードを一枚引き、引いたカードを確認すると思わぬカードが来たことに一瞬鳩が豆鉄砲を食らったかのような表情を浮かべる。

「！？」

そのユーノの様子を見ていた遊星たちも不思議そうな表情を浮かべる。

「？」

「ユーノ先生・・・？」

「店長・・・何を引いたんだろう？」

ユーノは引いたカードを徐に手札に加えると、その直後『天鎖斬月　黒崎一護』で

「僕は、『天鎖斬月　黒崎一護』で『星光の殲滅者　シュテル・ザ・デストラクター』に攻撃！」

この軽はずみな言葉を口にしたユーノを見ながら、龍亜やスバルたちは困惑の表情を見せる。

「ユーノ、どうして!?迂闊に攻撃を仕掛けるのは危ないって！」

「ユーノ先生！」

だが、そんな全員の反応を余所にユーノはバトルフェイズを宣言する。

「漆黒の月牙天衝！！」

「面白い！！何処までも付き合ってやろう。相手モンスターの攻撃宣言時に、墓地にある『魔王の配下・フォワード』の効果により手札のマジックカード『怒り鉄槌の騎士』を除外して効果を発動。このカードが除外されたときその効果によって、相手に２０００ポイントのダメージを与える。」

「いかん！」

「ユーノ！！」

遊星たちがこのいかさま的な効果を持つアポカリプスのカード効果に危機感を覚え、焦燥感丸出しの表情でユーノに向かって飛んでくる漆黒のヴィータの攻撃を見つめる中、ユーノは冷静な表情で先ほど引いたばかりのカードを手札から発動させる。

「バトルフェイズ中に、相手プレイヤーがマジック・モンスターによる特殊攻撃を仕掛けてきたとき、手札から『井上織姫』を特殊召喚することが出来る。」

ユーノはそう口にすると、そのカードをディスクにセットして自分フィールドに若かりし頃の井上織姫を召喚する。

「！」

目を見開き驚愕する遊星と、召喚されたユーノのモンスターを雑魚と呼び罵倒するアポカリプス。

「ふふふははは！！そんな雑魚モンスターが出てきたところでなんのその。最早貴様には手など残されてはいない！さぁ、２０００ポイントのダメージを受けてもらおう！」

アポカリプスはそう言いながら攻撃を続行するが、その瞬間ユーノは召喚した『井上織姫』のモンスター効果を発揮した。

「『井上織姫』の効果発動。このターン、僕が受ける相手の効果ダメージは貴様が受ける！」

「何と！！」

『井上織姫』は三天結盾を張ると、飛んできた効果ダメージを跳ね

返しそのままアポカリプスへ直撃させた。

「うわあああああ！！！！！」

アポカリプスは跳ね返ってきた８００ポイント分のダメージを受け、全身から血を流す。

「カードを一枚伏せて、ターンエンドだ！エンドフェイズにこのターン、特殊召喚された攻撃宣言をしていない『井上織姫』は破壊される。」

そう言うと、『井上織姫』は隣の『天鎖斬月　黒崎一護』に後は任せたとばかりの表情を浮かべると、そのまま破壊され墓地へと送られる。

そんなユーノのデュエルを観戦しながら、全く先の見えない展開に全員は手に汗握る。

「店長のこのデュエル・・・先が全く読めないぜ・・・！」

「俺達もこんなに先の読めないデュエルを見るのは初めてだ・・・ユーノは巧みにカードを操り、その上で相手の力に翻弄すると見せかけてダメージを与えている・・・！」

「戦い方を・・・まるで決めていない・・・！？」

そんなことをジャックや龍可が口にし、ユーノがそれを耳に入れながら沈黙を守っているとダメージを受け血を流した状態のアポカリプスが残念そうな声色でこう言って来た。

「おやおや・・・藁にもすがる思いとはこのことか・・・ここまで師匠の力をフルに使って戦ってきておきながらそれはないな。それに貴様には欲望という文字が全く見えてこないのは何故だろうな・・・これでは、ヒューマン・ディザイヤーも流石に憤ってしまう。」

すると、アポカリプスの言葉に反応して覚醒の時を迎えようとしているヒューマン・ディザイヤーがその姿を現し、欲望というものをまるで抱いていないユーノの周囲を取り囲み、怒りを露わにしてきた。

「ユーノ・スクライア。貴様がどう戦おうと、この状況下の中でこの我に勝てはしないのだ！貴様は貴様らしいデュエルを見せ、そしてヒューマン・ディザイヤーに飲み込まれればいいのだ。」

だが、その言葉を聞いたユーノは何時もの温和な雰囲気とは一変して非常に鋭い表情で怒りの声を上げてきた。

「ふざけるな！！宣言する！貴様の思い通りにはならんと！！」

「ふふふ・・・・・ならば知らんぞ我は。」

すると、その瞬間覚醒を迎えつつあるヒューマン・ディザイヤーの怒りのエネルギーが放出し、あまりの強さに圧倒されたユーノは足元より転落しそうになった。

「う！！！ぐあああああああ！！！！！！」

「「「「「ユーノ先生！」」」」」

何とか岩場に手をかけ、落下を免れたユーノだったが傷ついたその

体の傷の所為でユーノの全身からは多量の汗が流れ落ちていた。

「ぐ・・・・・・！！！」

「ふふふはははは！！！デュエルの最中に命を落としても、勝負は貴様の敗北となりその魂はニューマン・ディザイヤ―に提供され、世界は粛清される。気を付けることだな。ははははは！！！！！」

「「店長！」」

「「「「「ユーノ先生！」」」」」

「「「「「「ユーノ！」」」」」」

ユーノの危機を目の当たりにし、声をかけずにはいられなくなるフォワードや遊星たち。

すると、ユーノはそんな全員に向かって岩場に手をかけたままこう返事をしてきた。

「大丈夫だ、みんな。僕がみんなを救ってやる！こんなところで、くたばる僕じゃない！」

「ユーノ・・・」

「ユーノ先生・・・！」

そのユーノの言葉を聞き、思わず言葉を詰まらせる遊星たちを余所に、ユーノは何とか岩場から這い上がり、立っていた床の上に上っ

てくると周囲のヒューマン・ディザイヤーと目の前のアポカリプスに向かって力強くこう口にした。

「負けない・・・！一護さんより受け継いだこの僕の守護の魂が尽きぬ限り、僕は戦う！あらゆる手を使ってでも、僕の魂に誓って必ず護り抜いてみせる！！」

「己の魂に誓ってでも護り抜く・・・！」

「あの人・・・俺達が思っている以上のとんでもない覚悟の持ち主だ！！」

単純な言葉ではあるが、ユーノの言葉一言一句から伝わってくるその言葉と覚悟に思わず心打たれてしまう遊星たち。

「あの男・・・一見すると温厚な男にしか見えぬが、心の中に何事にも決して屈しない荒ぶる強い魂を持っている・・・！まるでそれは、俺の持つ荒ぶる魂・・・バーニングソウルと同じか・・・あるいは・・・！？」

「ジャックの言うとおりだ。ユーノは、たとえ己の身がどうなろうとも、最後までここにいる俺たち全員とこの世界の人々の命を救うために、戦い抜くつもりだ。これが・・・次元世界最強と言われる・・・翡翠の魔導死神・・・ユーノ・スクライアなのか・・・！？」

遊星やジャックがそんなことを思いながらユーノを凝視していると、ユーノは自分の人差し指をアポカリプスに向けながら大声で名前を呼び捨てにする。

「来い！アポカリプス！！ヒューマン・ディザイヤー！！」

アポカリプスもこのユーノの勢いには心底感服する。

「その意気はよし。ぶつかって来るがいい。だがな、まだまだ貴様がヒューマン・ディザイヤーと我の敵ではないのだよ。我のターン！カードを一枚伏せて、ターンを終了する。」

アポカリプスはユーノにそう言いながら一枚カードを伏せてターンを終了させた。

「僕のターン！」

ユーノがカードを引いた瞬間、アポカリプスは伏せていたトラップカードを発動させた。

「トラップカード、オープン。『トリプルブレイカー』。自分フィールド上に『星光の殲滅者』・『雷刃の襲撃者』・『闇統べる王』が存在するとき、相手プレイヤーにこの三体のモンスターの攻撃力の合計分のダメージを与える。」

「何だと!?奴のモンスター三体の攻撃力の合計は全部で５０００!!」

「この攻撃が通れば、ユーノのライフはゼロになるわ！」

「ユーノ先生!!」

全員がこのカード効果を前に、ユーノの敗北を危惧する中ユーノ本人は鼻で笑いながら手札のモンスターカードの効果を発動させる。

「ふん。甘い！僕は手札の『改造魂魄　コン』の効果を発動。このカードを墓地に送ることで、相手の効果ダメージをゼロにする。」

ユーノは手札にあった『改造魂魄　コン』を墓地へと送り、トラップカードの効果を無効化してダメージをゼロにする。

遊星たちもこれを見て安堵のため息をなでおろす。

「ほう・・・」

「よし、攻撃を躱した！」

「これしきの事で僕は屈しない。『天鎖斬月　黒崎一護』がフィールド上に存在するとき手札から、『内なる虚　黒崎一護』を特殊召喚する！」

ユーノはそう言うと、自分のフィールドに一護の魂の奥底に封じられている内なる虚の力でありもう一人の一護である白い死覇装に身を包んだ一護を特殊召喚した。

不気味な笑みを浮かべるその白い一護の姿を目にしたスバルたちは目を見開いた。

「白い死覇装の一護さん！？」

「『内なる虚　黒崎一護』の効果発動！シンクロモンスター一体を除外して、６００ポイントのダメージを与える。『天鎖斬月　黒崎一護』を除外！」

ユーノは『内なる虚　黒崎一護』の効果を発動させると、『天鎖斬

月　黒崎一護』を一時的にフィールドから除外すると、『内なる虚
黒崎一護』が持つ白い斬月より、攻撃を仕掛ける。

「一護さんの魂の一撃を受けてみろ！」

白い斬月から放たれる純白の月牙天衝を受けた瞬間、アポカリプス
は全身に走るその痛烈な痛みに耐えかね、声を上げる。

「うおおおおおおおお！！！！！」

「そしてこの効果を使ったターン、バトルフェイズはスキップされ
る。更に、除外されたモンスターは次の僕のスタンバイフェイズに
戻ってくる！」

「よくも・・・よくも！！！」

攻撃を受け、満身創痍のアポカリプスは怒りの感情を露わにし、ジ
ャックやティアナは改めて素人であるはずのユーノのタクティクス
に驚くばかりであった。

「たった一度のデュエル・・・しかも、己の命すら落としかねない
この極限の状況下で、あれだけのカードタクティクスをやってのけ
るとは！？」」

「ユーノ先生は、あらゆる手を使って戦い抜くつもりです・・・！」

そんなティアナたちの言葉を耳に入れながら、心の中でユーノはこ
う思っていた。

「（ああ・・・必ず護ってみせるさ・・・あらゆる手を尽くしてで

も、戦い抜いて見せる・・・僕の・・・魂に誓ってでも！）」

すると、ユーノは自分の場に伏せていたトラップカードを発動する。

「トラップカードオープン。『晩翠の恐怖』。僕のフィールドの『内なる虚　黒崎一護』をリリースして、お前のフィールドにお前の場のモンスターの数だけ晩翠トークンを攻撃表示で特殊召喚する。お前の場には三体のモンスターがいる。よって、晩翠トークン三体を特殊召喚！」

『晩翠の恐怖』が発動されると同時にアポカリプスのフィールドに特殊召喚されるユーノの魂の相棒、晩翠を象ったトークン三体。

「！」

驚くアポカリプスを前に、ユーノはそのカード効果をさらに語り続ける。

「相手フィールドに晩翠トークンが特殊召喚された時、コントローラーはその効果によって自分フィールド上の全てのモンスターを破壊し、破壊したモンスター一体につき２００ポイントのダメージを受ける！」

「な、何だと！！我のフィールドには、六体のモンスターが・・・！」

「そうだったな。だが、いい加減幼馴染の姿をかたどったモンスターを見るのは目障りなんだよ。さっさと消えてしまえ、まやかしが！！！」

ユーノは憤りの表情でそう口にすると、カード効果を発動させアポカリプスの場に召喚された晩翠トークンと共に、『星光の殲滅者　シュテル・ザ・デストラクター』・『雷刃の襲撃者　レヴィ・ザ・スラッシャー』・『闇統べる王　ロード・ディアーチェ』も全て破壊し、一気に１２００ポイントのダメージを与えた。

「のあああああああ！！！！！！！！」

ユーノの戦術を目の当たりにし、ライフポイントが残りわずかとなったアポカリプスを見ながら思わず驚愕の表情を見せるスバルたち。

「敵のライフを、２００にまで追い詰めた！」

「そうか！最初からこれが狙いだったんだ！」

「流石はユーノ先生！」

「ユーノ！」

遊星やスバルたちがユーノの戦略に称賛する一方で、ユーノはいまだ警戒を怠る様子を見せずに一護譲りの険しい表情を浮かび上がらせ満身創痍のアポカリプスを見つめていると、アポカリプスはとうとう憤慨した。

「・・・これ以上・・・我とヒューマン・ディザイヤーに逆らうことは許されぬ！！！怒りは欲望・邪念となり、貴様らを食らい尽すであろう！！」

アポカリプスの憤りと共に、覚醒間近となっていたヒューマン・ディザイヤーがその邪気を大量に放出させ、ユーノにぶつけるとユー

ノもあまりの邪気の大きさに圧倒されそうになる。

「う！！！うおおおおお！！！！！！」

何とか耐えしのぎ、アポカリプスと対峙するユーノだが、アポカリプスはこの自分のターンに自身のデッキの切り札となるカードを召喚しようとしていた。

「我のターン！！！！！！墓地にいる『星光の殲滅者　シュテル・ザ・デストラクター』・『雷刃の襲撃者　レヴィ・ザ・スラッシャー』・『闇統べる王　ロード・ディアーチェ』一体ずつを除外して・・・『魔導覇神　リーガルディオス・ディ・マギアマクト』を特殊召喚する！！」

墓地の三体が除外されると、アポカリプスのフィールドに三人の格好を合わせたかのような堕天使と言うべき女性の姿を象ったモンスターが特殊召喚された。

これこそ、アポカリプスの切り札『魔導覇神　リーガルディオス・ディ・マギアマクト』である。

「この世界は欲望の名のもと・・・ヒューマン・ディザイヤー・・・ヒューマン・ディザイヤー―によって粛清されるのだ！！！！！！」

すると、その瞬間先ほどよりも更に強い邪気が放出され、ユーノはそれに圧し負けそうになってしまう。

「ぐうううう！！！！！ぐあああああああ！！！！！」

「ユーノ！！！」

遊星がユーノの身を案じて声を上げたとき、恐怖におびえた様子で龍亜が遊星の服を引っ張りながら目の前を向くよう促す。

「ゆ、遊星・・・みんな・・・あれ！！」

「「「「「「「「「「「「「「「「！！」」」」」」」」」」」」」」」」

その瞬間、全員の目の前に飛び込んできたのは覚醒を迎えその真の姿をはっきりと現わそうとしている人間の欲望の名を持つ究極のモンスター、ヒューマン・ディザイヤーであった。

「ふふふはははは！！今まさに、ヒューマン・ディザイヤーが真の姿を現そうとしている！！！はははははは！！！！『魔導覇神　リーガルディオス・ディ・マギアマクト』でユーノ・スクライアにダイレクトアタック！バニシングブレイカー！！」

アポカリプスは『魔導覇神　リーガルディオス・ディ・マギアマクト』の直接攻撃でユーノにとどめを加えようとするが、ユーノはすかさず伏せていたトラップを使用する。

「トラップカード、オープン！『卍禁大封（ばんきんたいほう）』。攻撃力２０００以上のモンスターは、攻撃できない！」

「ならば！『魔導覇神　リーガルディオス・ディ・マギアマクト』の効果を発動！一ターンに一度、相手の表側表示で存在するカードを破壊し、２０００ポイントのダメージを与える！我は『卍禁大封』を破壊する！」

『魔導覇神　リーガルディオス・ディ・マギアマクト』の効果を発

動させた瞬間、ユーノのトラップカードは破壊され、その途端ユーノの体に襲い掛かる２０００ポイントのダメージがユーノの体に尋常ならぬ激痛を奔らせる。

「ぐううう！！ぐあああああああああああああああああああああああああああああああああああああ！！！

「く！！」

「ははっははは！！！同じ名のモンスターカードを墓地に送るぞ。」

アポカリプスは手札にあった同名カード三枚を見せると、それを墓地に送るが見ていたジャックとクロウはそのカードを見た瞬間目の色を変えた。

「あのカードは、俺たちを襲ったものと同じ！！やはりすべては奴が仕組んだものか！」

「畜生！！あの野郎！！！」

「ターンを終了！ふふふ・・・ヒューマン・ディザイヤーの力が増大している。もうじきこの世界は自ら生み出した欲望によって飲みつくされるのだ！！」

と、その時。

フィールド全体に広がってくるヒューマン・ディザイヤーが発する邪気がユーノや遊星たちの全身を凍えつかせる。

「「「「「う！！！！！！！！」」」」」

「くっ！！！」

「これこそ、人間の欲望より生まれし究極のモンスター・・・ヒューマン・ディザイヤー！！！」

アポカリプスがそう口にすると、背後よりその完全なる姿を現す漆

黒の全身と共に貪欲によって満たされた邪神の姿。

遊星たちはその光景を目の当たりにしながら、思わず唾を飲んだ。

「これが、ニューマン・ディザイヤー・・・人間の欲望・・・！！」

「ヒューマン・ディザイヤーは言っている。“ユーノ・スクライア、お前の手札とデッキには私を倒すカードはない”と！！ははははは！！！！！」

アポカリプスが背後に出現したヒューマン・ディザイヤーの言葉を代弁してそう口にすると、天井の壁が崩落し始めスバルたちの元へと落下してきたのだ。

「うわあああああ！！！！」

「一度上にあがるぞ！！」

フォワード七人と遊星たちは身の上の安全確保の為に崩落してくる天井の岩を避けながら、同じく崩れゆく足場から踏み外さないために上の階へと避難する。

「遊星！スバル！みんな！！」

この危険な状況を目にして声を荒げるユーノ。

「ふふふははははは！！！どうせ彼奴等の運命も貴様に同じ！その断末魔の悲鳴でクライマックスを飾ってもらおう！！！」

すると、そのアポカリプスの言葉を耳にした瞬間ユーノの魂に怒り

の炎が灯ろうとしていた。

「おのれ・・・！！！！させるか！！！！大切な教え子・かけがえのない従業員・この世界を救うための希望の星たち！たとえこの体が・・・この魂が闇に染まろうとも、絶対に護り抜く！！」

「ユーノ・・・」

「店長・・・」

「ユーノ先生・・・」

ユーノの決意のこもった言葉にそれ以上の言葉が出ない全員。

「何を言う！勝負は決した！！人間の運命も、お前の魂も、ヒューマン・ディザイヤーにすべて飲み込まれるのがオチ！勝機はない！！！！」

「僕の魂が、そうはさせない！！！」

「く！」

決して屈しようとしない様子のユーノの姿に些か焦りを感じ始めるアポカリス。

そんなアポカリスに向かってユーノは眉間に皺を寄せながらこう言って来た。

「忘れているぞ。僕の魂の師が、もうすぐ戻って来ることを。」

「ふん・・・天鎖斬月　黒崎一護は奴のスタンバイフェイズに現れるか・・・」

「『天鎖斬月　黒崎一護』が、僕の魂に真の力を与える！！」

ユーノがそう口にすると、力強く握られ心臓部分に当てられていた右腕から翡翠の輝く光が漏れだしてきた。

それでも、アポカリプスはそんなユーノの態度に負けず劣らずの様子で言葉を返す。

「『天鎖斬月　黒崎一護』如きがヒューマン・ディザイヤーに楯突くことなど許されぬ！！」

「感じるぞ・・・・・・荒ぶる魂の鼓動を！！！」

その時、翡翠の光を発するユーノの右腕から更に強い光が漏れだす。

これを見たアポカリプスも思わず目を疑った。

「な、何！？」

「闇があるところに光はある！！希望の光を作り出すのは、人々の紡いだ“絆”だ！！」

光は徐々に輝くばかりに強さを増していき、上の階に避難をしてその光景を見ていた遊星やスバルたちもこの現状には戸惑いの表情を浮かべる。

「一体何が起こったと言うのだ！？」

「ユーノ先生の心臓部分から、煌々と輝く光が・・・！！」

そんな訳の分からない今の状況の中で、ユーノは光り輝くその右手より新たなカードを引こうと山札に手を伸ばした。

「僕のターン！！！！」

これを見ていたアポカリプスは危機感を感じ、背後のヒューマン・ディザイヤーの力で妨害工作をしようとする。

「させぬぞ・・・！させぬぞ！！！！！！！」

ヒューマン・ディザイヤーの力で、天井を崩落させたアポカリプスはユーノ目掛けて落下してくる岩を激突させようとした。

「ユーノ！！！」

遊星はこの事態を見、声を上げてユーノの身を案じた。

と、その時思わぬ時代た遊星たちシグナ―の六人に起こった。

突然、遊星たちの腕に刻まれたシグナ―の痣が光り出し始めたのだ。

「「「「「「これは！？」」」」」」

そして、その痣は光り出したかと思えば突然姿を消し、その途端に崩落してきた岩をシグナ―達を守る謎多き存在、煌々と赤く輝く龍がユーノの頭上に出現し、ユーノの身を守ったのだ。

現れた赤き竜の姿を目にした一同は大いに驚き、それと同時にユーノの背中に刻まれた六つに集まった竜の紋章を見て言葉を失った。

「赤き竜!?それに、紋章がユーノの背中に!?」

「何故奴が・・・!」

「ユーノ先生に何が起こるって言うの!?」

戸惑いばかりが顔に浮かぶスバルたちを余所に、ユーノは自分のスタンバイフェイズを宣言する。

「『内なる虚　黒崎一護』によって除外された『天鎖斬月　黒崎一護』は、このスタンバイフェイズに復活!」

ユーノがそう言うと、除外されていた『天鎖斬月　黒崎一護』がユーノのフィールドへと戻ってきた。

「僕のフィールドに、シンクロモンスター『天鎖斬月　黒崎一護』が存在するとき手札の『クシャナーダの賜杯』を墓地に送り、ヘルチューナーモンスター『地獄の番人クシャナーダ』を特殊召喚する!」

「ヘルチューナーモンスターだと!?」

遊星たちは今まで聞いたこともないチューナーモンスターの耳にし、更に狼狽する中、ユーノは手札のマジックカード『クシャナーダの賜杯』を墓地へと送りデッキから『地獄の番人クシャナーダ』を特殊召喚した。

「現れよ、『地獄の番人クシャナーダ』！！」

ユーノが自分のフィールドにそのモンスターを召喚すると、対峙していたアポカリプスや一同は思わず言葉を失った。

「な・・・！」

そのモンスターの姿は、数十mの巨大な体を持ち、咎人を喰らって責苦（死）を与え続ける地獄の番人『クシャナーダ』と全く同じ姿をした怪物だったのだから。

ジャックはあまりの悍ましい姿のクシャナーダを見ると、思わず声を漏らす。

「何だ・・・あのおぞましいモンスターは！？」

「『地獄の番人クシャナーダ』は、自分フィール上に存在するとき任意のレベルに設定してヘル・シンクロ召喚に使用することが出来る。僕は、レベル８の『天鎖斬月　黒崎一護』にレベル４となった『地獄の番人クシャナーダ』をヘル・チューニング！」

「ヘル・チューニング！？」

「そんなシンクロがあるのか・・・！」

驚愕の表情でユーノが口にしたヘル・シンクロというものに目を奪われる中、ユーノの場にいた『地獄の番人クシャナーダ』が３つの輪となり金色の光を放ちながら『天鎖斬月　黒崎一護』がその中を通っていく。

龍亜は思わずこの光景を目のあたりにしながら、思ったことを口した。

「すごい・・・！レベル１２のシンクロモンスターなんて、ジャックのスカーレッド・ノバ・ドラゴンと同じ・・・！」

「しかも、ユーノがやろうとしているのは私たちでも知らない未知なるシンクロ・・・ヘル・シンクロ！」

「だけどそんなものどうやって・・・！？」

「・・・翡翠の魔導死神ユーノ・スクライアの未知なる力は、赤き竜の力を得て奇跡を起こそうと言うのか・・・！」

遊星がそう口にすると、ユーノの背後に浮かぶ赤き竜はユーノにシグナ―としての力を与えながらユーノに究極の力を齎す。

齎された力はユーノの全身を駆け巡り、ユーノの瞳は翡翠の色に輝き始める。

「赤き竜よ、人間の欲望より生まれし怪物をその力によりて封印せよ！！」

すると、ユーノが右手を上げると同時に忽然と姿を現す何も書かれていない金色のカード。

「な、何！？どういうことだ一体！！！」

動揺を隠し切れないでいるアポカリプスだったが、その瞬間背後にいたヒューマン・ディザイヤーの様子が一変し、ユーノが手に持つ

カードに吸い寄せられようとしていた。

「ま、まさか・・・まさか・・・貴様！！！」

ユーノは狼狽するアポカリプスを余所に持っていたカードの中に人間の欲望より生まれしの悪しき魂を憑代として、ヘル・シンクロ召喚を行おうとしていた。

「ヒューマン・ディザイヤーよ！お前の力を、すべてヘル・シンクロの憑代にしてやる！“地獄の力よ、いまここに死神と交わる！縋りつけ、クシャナーダ！我ら最後の希望はここにあり！！”ヘル・シンクロ召喚！！究極降誕、『スカルクラッド一護』！！」

ヒューマン・ディザイヤーの力を憑代にして、力を蓄えたユーノの二枚のカードはこの世界の人間でも知らない未知なるシンクロ召喚、ヘル・シンクロによって新たなモンスターへと姿を変える。

そして、ヘル・シンクロによって誕生したのは嘗て一護が地獄での激闘の中でクシャナーダより与えられたもう一つの進化の姿、スカルクラッド一護であった。

左半身が髑髏の甲冑に覆われその形態から金色の霊圧を纏った一護の出現と共にユーノの手に収められたカードに『スカルクラッド一護』の絵が収められる。

アポカリプスはヒューマン・ディザイヤーの力を奪い取り、ヘル・シンクロ召喚されたこのスカルクラッド一護の姿とユーノの力に恐怖を覚えた。

「あ、あり得ん・・・！！人間の欲望を・・・・・全て根こそぎ

奪い取って制御したというのか・・・！？な・・・何だ・・・その姿は！？」

一方でスバルや遊星たちはヘル・シンクロ召喚によって出現したスカルクラッド一護の姿を見ると、思わずその姿に目を輝かせた。

「す・・・凄い！」

「ユーノ先生・・・！！」

「あの一護さんは一体・・・！？」

初めて見る一護の姿に驚くばかりのフォワード人を余所に、浦太郎は以前ユーノから聞かされた話を思い出していた。

「（昔、店長から聞いた話じゃ・・・嘗て一護さんは地獄の咎人と激闘を繰り広げた際に、クシャナーダの力を借りて究極の姿に進化を遂げたという・・・あれが、その時の姿・・・スカルクラッド一護・・・！」

遊星たちはシグナーでもないユーノが赤き竜の力によって究極の力を発動したことに信じられないとばかりの表情を見せていた

「シグナーでもない人間が、赤き竜の力を得て究極のシンクロ召喚を成し遂げた・・・・・・ユーノ・スクライア・・・何という男だ・・・！」

ユーノは黄金色に輝く『スカルクラッド一護』をディスクにセットすると、そのモンスター効果を発動させる。

「『スカルクラッド一護』の効果発動！僕の墓地のモンスターカード一枚につき、１０００ポイント攻撃力をアップする！」

「な！！」

「僕の墓地のモンスターカードは１０枚。よって、スカルクラッド一護の攻撃力は１００００ポイントアップし、１４０００となる！！」

ユーノの墓地に眠る１０体のモンスターカードが『スカルクラッド一護』の攻撃力に加算されると、『スカルクラッド一護』はその力を得て圧倒的なオーラを発する。

「攻撃力１万４千だと！！」

「圧倒的だ！」

これにはパワー戦術を得意とするジャックや他のフォワード陣も驚きを隠し切れずにはいられなかった。

「ば、バカな・・・！！こんなことが・・・！！」

戦局が逆転し、ヒューマン・ディザイヤーすら失ってしまったアポカリプスの姿は実に情けないものだった。

「アポカリプス！貴様は地獄に堕ちるに値する！仲間を危険に追いやり、モンスターを操り罪もなき多くの人々を死に追いやった貴様に永遠の責め苦を与えてやる！バトル！『スカルクラッド一護』で『魔導覇神　リーガルディオス・ディ・マギアマクト』を攻撃！！金色月牙天衝！！！」

その瞬間、『スカルクラッド一護』が手に持つ黄金に輝く天鎖斬月の刀身から放たれる同じく黄金色の月牙天衝が『魔導覇神　リーガルディオス・ディ・マギアマクト』の体を一刀両断し、その瞬間大爆発が起こる。

「ぐあああああ！！！！！！！！」

『魔導覇神　リーガルディオス・ディ・マギアマクト』が破壊されたことにより、アポカリプスのライフはゼロとなり、アポカリプスは徐々に灰となって消滅していく。

「ば、馬鹿な！！我が・・・倒されるなど！！！！！！！！ぐあああああああああああああああああ！！！！！！！！！！！！！！」

灰となって消えてゆくアポカリプスの中より出てくる使い古された一枚のカードと、そのカードに宿る怨念を具現化させた悪しき結晶、アンゴルモア。

だがしかし、アンゴルモアは分裂を果たすと同時に砕け散り、今回も結局もどきという形で締めくくられることとなった。

けれども、結果的にユーノがデュエルに勝利したことでネオ童実野シティの平和や、この世界に住まう全人類の命が救われることとなり、ここにいる遊星たちの命も助かったのだ。

「やったぞ！！」

「ユーノ先生が勝った！！」

大いに喜ぶのもつかの間だった。

アポカリプスが斃されたことで、要塞を動かす太陽ギアのモーメントが停止し、要塞アーマゲドンが崩壊を始めたのだ。

「！いかん、要塞が崩れるぞ！！」

ジャックが危機を感じて全員を直ちに避難させようと先導しようとするが、その途端に周りにあるものすべてが崩壊を始め、スバルたちの乗っていた階段も足場を崩す。

「「「「「うわあああああ！！！！！」」」」」

「「のあああ！！！！！」」

「「「「「わあああああああ！！！！！」」」」」

底の見えないまるで虚数空間のような地面の下へと落下していく遊星たちと、バトルの終了と共に膝をつき動けなくなるユーノも同様だった。

「ぐ！（参ったな・・・力が・・・出ない・・・）」

ユーノは崩れゆく足場の上で飛行魔法も使えぬ状態となっており、そのまま力尽きるや否や重力に従って誰よりも早く見えない底へと落下していく。

「ユーノ先生！！」

「「店長！」」

「このまま死なせてたまるか！みんな！俺達シグナーの力を一つに結集させるんだ！」

「「「「「「おう！」」」」」」

遊星は自分たちの命を必死になって守ってくれたユーノやスバル達の命を今度は自分たちの力で救うために、赤き竜の力を借りて自分たちの従える竜を召喚する。

「現れよ、スターダスト・ドラゴン！」

「我が魂、レッド・デーモンズ・ドラゴン！」

「舞い上がれ、ブラックフェザー・ドラゴン！」

「開け漆黒の花、ブラックローズ・ドラゴン！」

「みんなを守って、エンシェント・フェアリー・ドラゴン！」

「勇気と力をレヴォリューション！ライフ・ストリーム・ドラゴン！」

痣が光ると同時に赤き竜の周囲に出現する光り輝く六つの竜、スターダスト、レッド・デーモンズ、ブラックフェザー、ブラックローズ、エンシェント・フェアリー、ライフ・ストリームドラゴンの六体。

それぞれの竜が近くの人間を担ぎ上げると、遊星が従えるスターダ

ストだけが落下していくユーノの元へと飛んでいき、ユーノは虚ろな目でぼんやりと見えるスターダストの光を見つめるのであった。

「（この・・・光は・・・・！？）」

そして、全員が気を失い気が付いた時のこと。

スバル達を始めとする六課メンバーと遊星たち５Ｄ’ｓのメンバー全員、そして満身創痍ではあるがユーノも無事な様子でネオ童実野シティへと帰還したのだ。

「いててて・・・た、助かった・・・！」

「みんな、怪我はない！？」

「はい・・・何とか・・・」

アキの言葉を聞いてエリオがそう答えると、ギンガは今回一番怪我が酷いはずのユーノの安否が気がかりとなった。

「あ！ユーノ先生は！！」

ギンガの言葉に反応して全員がユーノの元に駆け寄り、ユーノは道路の上に傷だらけとなった状態で横たわり、気を失っていた。

「おい、しっかりしろ！」

「ユーノ！」

ジャックやクロウが目を覚まさないでいるユーノのことを心配して

体を揺すり、全員も不安げな表情でユーノを見つめていると、ユーノは徐に目を開けた。

「う・・・！僕は・・・」

「気が付いたか・・・！」

「どうやら無事なようね。」

ユーノが無事に目を覚ましたことに安堵のため息をつく遊星たち。

すると、鬼太郎はあまりの嬉しさに涙が出、思わず満身創痍のユーノの体を抱きしめた。

「ううう！！店長！！！よかった！！ほんとよかった！！」

普段人前ではめったなことで涙を見せないなのは並みに気丈な鬼太郎が泣く光景にはフォワードの五人もたじろいでいたが、ユーノ自身はそんな鬼太郎の頭を優しくなでてあげた。

「鬼太郎・・・ごめん。心配かけちゃって・・・」

号泣する鬼太郎とは違い、冷静な様子ではあるがユーノの身を鬼太郎と同じかそれ以上に案じている浦太郎はユーノに近づきこう言った。

「店長、あまり無理はしないでよ。店長にもしものことがあったら、僕らなのはちゃん達に何て謝ったらいいのさ！？」

「浦太郎・・・うん、そうだね・・・スバルたちも遊星たちも兎に

角無事でよかった。」

すると、そんなユーノに遊星が徐に近づき目線を合わせて感謝の意を表した。

「ユーノ・・・本当にありがとう。お前のお蔭で、この世界は救われた。俺達チーム５Ｄ’ｓから心より感謝の意を表する。」

「遊星の言う通りだ。貴様の熱き魂、しかと見せてもらったぞ！今度遭うことがあれば、このジャック・アトラスと勝負してくれ！」

「遊星・・・ジャック・・・みんな・・・」

ユーノは二人の言葉を始め、他のメンバーも曇り気のない眼で自分に感謝の意を表する５Ｄ’ｓのメンバーを見ると、思わず顔を和ませた。

するとその時、龍亜が街の様子の変化に気が付く。

「あ！遊星！街が・・・――」

遊星やユーノ達が街の様子を見てみると、モンスターの攻撃で廃墟寸前の状態にまで陥っていたネオ童実野シティの街並みが、破壊される前の状態へと復興していき、元の景観を取り戻そうとしていた。

「元に戻っていくぞ！」

「デュエルモンスターズによって破壊されたネオ童実野シティが破壊される前に修復されていく。アポカリプスを倒したことで、全てが元通りになった。」

「ああ・・・これで、この戦いも終わる。」

遊星の言葉を聞いて、ユーノ自身も戦いが無事に決着がついたことを悟り曇り空だったものから快晴へと変わっていくこの世界の空を遊星やここにいる全員と気持ちよく仰ぎ見たのだった。

その後、フォワードメンバーに担がれた状態で帰還したユーノは直ぐに待ち構えていた涙で顔がびっしょりのなのはの一声を耳にするのだった。

「ユーノ君!!!

なのははそうユーノに口にすると、困惑する全員を無視してユーノの胸の中で声を押し殺しながら号泣し、ユーノ自身もどうしていいか分からず戸惑いの表情を見せていると、徐になのはがこう呟いてきた。

「私は・・・もうあなたを失いたくないの・・・！あなたが私の前からいなくなったりしたら、私はもう二度と立ち上がることも出来ないよ・・・空を飛ぶことなんか・・・できないよ！！ユーノ君がいないこの世界でどうやったら生きていけるの！！」

「なのは・・・！！」

涙を流すなのはの赤裸々な告白に思わず胸を締め付けられるユーノ。

「だから・・・・・・もう一人で行かないで・・・！私にも・・・その荷を・・・遠慮なく分けてほしいよ・・・あたなと一緒の苦しみなら、きっと私も前を向いて歩いて行けるから・・・！」

その言葉を聞いた瞬間、ユーノはこの上もなく嬉しくなり人目を憚らずに涙を流しながらなのはのことをきつく抱きしめ、なのはに向かってこう言った。

「・・・ああ・・・そうだね・・・分かったよ、なのは。君を一人にはしない・・・無茶もなるべく控える・・・だけどそれは君も同じだ。二人で一緒に、荷を分け合って歩いて行こう。」

「・・・うん・・・！」

二人は固い絆を今改めて結びなおすと、お互いに素直な気持ちを共有し、純粋な思いのまま手を回して抱きしめあった。

この光景を傍で見ていたフェイト達隊長陣やフォワードは感動のあまり、涙を流さざるを得ない状況だった。

赤き竜の導き、超進化！！スカルクラッド一護（後書き）

教えて、ユーノ先生！

ユ「今日はスカルクラッド一護について教えるね♪」

ユ「『劇場版ＢＬＥＡＣＨ　地獄篇』にて、一護さんが咎人黒刀（コクトー）との最終決戦の時に地獄の番人クシャナーダが一護さんに力を与えたものだ。」

ユ「左半身が髑髏の甲冑に覆われていて、体を覆う甲冑は細かいパーツ構成であり、動きに干渉しない造りになっている。その形態から金色の霊圧を纏い、さらに金色の月牙天衝を放つ。」

ユ「ちなみに、スカルクラッドとは、髑髏＋異なる複数の材を張り合わせた素材という意味で、原作者の久保帯人先生が考案したものなんだよ♪」

一「地獄篇の収録は大変だったぜ。何せ映像が早すぎて全然ついてこれなくてよ、目が回るかと思ったぜ。」

ユ「早くＤＶＤが発売されるといいですね♪」

一「そう言えば、今度なのはの第二期の映画が公開されるんだよな？またお前は結構ぞんざいな扱いになるじゃねぇのか？」

ユ「ですね・・・・・はぁ～～～どうせ僕なんか・・・・・・なのは達が目立つための単なる踏み台にすぎませんから・・・」

ユーノは激しく落ち込む。

それを見た一護はかける言葉も思い浮かばなかった。

一「と、と言うわけでなのは劇場版第二弾も・・・よ、よろしくな。ま、負けんじゃねぇぞユーノ！！ゲームでは結構いい見せ場があるかもな・・・！！」

必死に励まそうとする一護であった。

魔導師図鑑ハイパー！

流行と言うのは恐ろしいものだ。

流行は瞬く間に人々の心をとらえ、やがて虜にし財布のひもを緩め金をばらまかせる。

ミッドチルダ全員は現在何故だかは原因ははっきりしないが、遊戯王デュエルモンスターズが老若男女問わず大流行し、大会まで開かれる始末だった。

そういった流行には実に疎いエグゼクティブアドバイザー、ユーノは六課隊舎で暇さえあればデッキを組み直し、デュエルを行う局員たちの現状に呆然としていた。

ユ「う・・・どこに行ってもデュエルばっかり・・・はぁ～～～みんな好きだよね・・・」

するとその時、なのはがデッキを組んでユーノにこんなことを尋ねてきた。

な「ユーノ君♪折角の休憩時間だし、私と対戦しようよ！」

ユ「え！？なのはもやってる訳！そういうこと興味なさそうなのに！？」

な「にゃはは♪場の成り行きと言うかなんと言うか、フェイトちゃんやはやてちゃんもやってることだし、私もどうかなって～～～そしたら結構はまっちゃって♪」

ユ「他人指向型だね・・・君も・・・」

な「ねぇ～～～いいでしょう～～～やろうよデュエル～～～」

ユ「はぁ。仕方ないな・・・・・じゃあ一回だけ。」

な「やったあ！！私、負けないよ！こう見えても前線メンバーの中じゃ一番強いんだから！」

と、自信満々のなのはだったが、明らかにカードタクティクスにおいてはユーノよりも劣っており、巧みなカードテクニックでなのはを１０勝０敗にまで追い込み、なのははあまりの自分の弱さに涙を浮かべた。

な「う～～～～～また負けた～～～～～～！！！ユーノ君、少しは手加減してよ～～～！！」

ユ「全力全開で勝負してきていいよって言ったのはなのはだよ・・・・・」

この光景を見ていた前線メンバーは、改めてユーノの恐ろしさをカードバトルにおいても思い知ったのだった。

次回予告

圓丈「どうも！！！みなさん！！ついについに、あのカクレンジャーが帰ってきましたよ！！ひょんなことから、サスケを助けてしまったフェイトちゃん！ぶっきらぼうなサスケの優しさにフェイトちゃんの心はどき！！」

圓丈「ユーノ・スクライア外伝　『忍者に恋す！？』」

遊☆戯☆王５Ｄ'ｓ篇

登場人物

チーム５Ｄ'ｓ

不動（ふどう）　遊星（ゆうせい）

声：宮下雄也（ＲＵＮ&ａｍｐ;ＧＵＮ）

チーム５Ｄ'ｓのリーダー。１９歳。シグナーの１人で、初めは竜の尾の痣を持っていたが、現在はドラゴンヘッド（竜の頭の痣）を受け継いだ。デッキは低レベルの戦士族と機械族を中心とし、多彩なシンクロモンスターを切り札とするジャンクデッキを使用する。エースカードは「スターダスト・ドラゴン」。仲間達の集めたジャンクパーツを組み上げ製作した、二輪の赤いハイブリッドタイプのＤ・ホイール「ボルガニック・遊星号」を搭乗している。マーカーのＩＤ番号はＧ２ＭＡ２－８８。頭脳明晰で手先が器用であり、機械やコンピュータに関する高い技術を持つ。その技術はセキュリテ

ィの鑑識より優秀と評されるほどである。身体能力も高く、喧嘩も強い。普段は冷静沈着で寡黙な青年だが、その胸の奥には熱い心を秘めている。また、この世に存在する全ての人間やカードには価値があり、不要なものなど一切無いという信念を抱いている。その熱い心は人を惹きつけ、彼の周囲には常に絆で結ばれた仲間が集結している。

ジャック・アトラス

声：星野貴紀

チーム５Ｄ’ｓのメンバー。遊星の友であり、ライバルでもあるデュエリスト。２０歳。シグナーの１人で、生まれながらに竜の翼の痣を持つ。低レベルの悪魔族と高攻撃力のドラゴン族を中心としたパワー重視のデッキを使う。エースカードは「レッド・デーモンズ・ドラゴン」。モノサイクル（一輪）タイプの白いハイブリッドタイプのＤ・ホイール「ボルガニック・ホイール・オブ・フォーチュン」に搭乗している。かつてはデュエルキングとして君臨していた。性格はプライドが高く傲慢で、自信家かつ野心家。協調性に欠け、キングとしては成功していたが社会適応性も著しく低い。また金銭感覚に疎く浪費癖がある。好物は一杯３０００円の高級コーヒー「ブルーアイズ・マウンテン」と、幼少期に仲間と分け合って食べたカップラーメン。

クロウ・ホーガン

声：浅沼晋太郎

チーム５Ｄ’ｓのメンバー。遊星やジャックの古くからの友人で「鉄砲玉クロウ」の異名を持つ。「ＢＦ（ブラックフェザー）」と呼ばれる鳥獣族モンスターを操り、モンスターを大量展開させるデュエルを得意とする。エースカードは「ブラックフェザー・ドラゴン」。恩人であるピアス

ンから受け継いだD・ホイールを「ボルガニック・ブラック・バード」へと強化させている。この機体は両脇に翼を広げる「フライングモード」に変形することで、通常よりジャンプ時の飛距離を伸ばすことができる。通常のD・ホイールより出力が高く、行動範囲を広げる事を前提とした作りとなっている。頭の回転が速く、売られた喧嘩は律儀に必ず買う血気溢れる性格。また自分にはない家族への想いを大切にする相手にはわざと負けたりと、情に脆い一面がある。何度もセキュリティ押収物保管所への不法侵入しているため、額と両頬にそれぞれ特徴的なマーカーをつけられている。また仲間である遊星やジャックと比べると身長が低く、本人も気にしている。

十六夜　アキ（いざよい　あき）

声：木下あゆ美

チーム５Ｄ’ｓのメンバーで紅一点。１７歳。シグナーの１人で、竜の足の痣を持つ。植物族デッキを使用する。エースカードは「ブラック・ローズ・ドラゴン」。デュエルでの行為を現実世界に具現化する超能力を持つサイコデュエリストだったが、現在はその力を失っている。過去に「黒薔薇の魔女」と恐れられ、他人と孤立し深い悲しみを抱いていたが遊星とのデュエルで、遊星の言葉によって断絶状態だった両親への想いを自覚すると共に初めて自身の力（サイコパワー）の制御に成功し、両親と和解する。また、これ以降遊星に好意を持つようになる。所有するD・ホイールは遊星、ジャック、クロウの３人がジャンクパーツを材料に作り上げ独自のカスタムを施した「ブラッディー・キッス」。

龍亞（るあ）

声：洞内愛

チーム５Ｄ’ｓのメンバーで龍可の双子の兄。１２歳。５人だった

シグナーに竜の心臓の痣が浮かび上がったことで覚醒した6人目のシグナー。表示形式によって異なる効果を得られる「D（ディフォーマー）」デッキを操る。エースカードは「パワー・ツール・ドラゴン」とシグナー覚醒後に手に入れた「ライフ・ストリーム・ドラゴン」。仕事に多忙な両親は家に帰ってくる事はほとんどなく、トップスに龍可と2人で住んでいる。明るく活発な性格で裏表が無く正直者だが、少々自分勝手で間の抜けた面がある。3歳の頃に龍可が精霊世界を守る使命を帯びた事がきっかけで、自分が強くなって龍可を守らなければいけないという気持ちを抱くようになった。

龍可（るか）

声：寺崎裕香

チーム5D’ｓのメンバーで龍亞の双子の妹。12歳。シグナーの1人で、竜の手の痣を持つ。妖精デッキを使う。エースカードは「エンシェント・フェアリー・ドラゴン」。幼くしてハイレベルな実力を持つ天才少女。トップスに龍亞と2人で住んでいる。落ち着いた性格のしっかり者で、龍亞のドジにも呆れながらよく突っ込みを入れているが、龍亞のことは「自分を守ってくれる存在」として信頼している。3才の頃に出場したデュエルキッズ大会決勝で突如昏睡状態に陥り、デュエルモンスターズの精霊世界を訪れ、一ヶ月をそこで過ごす。

その他

アポカリプス／ＡＭ２４

声：武虎

デュエルモンスターズを操り、ネオ童実野シティを崩壊寸前にまで追い込んだ本編の最大の宿敵。手から衝撃波を出したりなど特殊な

力を持つ。他人の心の中に潜む最も思い入れのある人物を象ったデッキを操り、相手の心を乱したうえで追い打ちをかける戦略を得意としている。彼の真の目的は、人間の欲望より生まれし究極のモンスター、ヒューマン・ディザイヤーを誕生させることでありその力を使って全次元世界転覆を謀っていたが、「スカルクラッド一護」の攻撃により消滅。その正体は嘗て使い古され捨てられたカードの怨念がアンゴルモアによって具現化したもの。

赤き竜（あかきりゅう）

３０００年前に当時の星竜王が邪悪な戦乱を治めるべく竜の星に祈りを捧げた時、竜の星が応えた結果として召喚された神の化身。矢薙やゴドウィンによれば、赤き竜は５０００年前の邪神をナスカに封印した後、頭・翼・手・足・尻尾の５つに分かれて竜の痣となって人間界に封印されたらしい。ナスカの地においては守り神ケッツァコアトルとして崇められている。シグナーの戦いに呼応する形で姿を現し、そのたびにシグナーに力を貸したり、危機を救ったりしている。本編ではユーノに力を与え、ヘル・シンクロ召喚を誕生させた。

ヒューマン・ディザイヤー

人間の欲望より誕生した究極のモンスター。アポカリプス曰く、地縛神や時械神の力すらも遥かに凌駕するとのこと。ユーノとアポカリプスとのデュエルで実体化しかけるが直後にユーノの「スカルクラッド一護」に依り代として丸ごと吸収されてしまった。

ユーノが召喚したシンクロモンスター

死神代行　黒崎一護

レベル７　属性／地　死神族・シンクロ　攻撃力／２０００　守備力／１５００
ユーノ・スクライアの使うオリジナルのシンクロモンスターカード。このモンスターの召喚に成功したとき、一ターンに一度相手のマジック・トラップ・モンスター効果を無効にして相手プレイヤーにダイレクトアタックをすることができる。シンクロ召喚の際の台詞は「刃振り下され時、出逢いは絆を紡ぎ少年は守り抜く力を手にする！シンクロ召喚！覚醒（ブラスト・ソウル）、『死神代行　黒崎一護』！」。攻撃名は「魂の斬撃、月牙天衝」。

天鎖斬月　黒崎一護

レベル８　属性／地　死神族・シンクロ　攻撃力／２８００　守備力／２０００
ユーノ・スクライアのエースカード。相手フィールドに存在するモンスターの数×５００ポイントのダメージを相手に与える。シンクロ召喚の際の台詞は「魂の奥底に眠りし裡なる力、今ここに顕現せよ！答えよ、魂の刃！たどり着く境地の名のもとに！シンクロ召喚！ブラックムーンライジング、『天鎖斬月　黒崎一護』！」。攻撃名は「漆黒の月牙天衝」。

スカルクラッド一護

レベル１２　属性／神　死神族・シンクロ　攻撃力／４０００　守備力／３５００
「天鎖斬月　黒崎一護」に「地獄の番人クシャナーダ」の力が加わったモンスター。ヘル・チューナーモンスターであるクシャナーダ一体と悪しき魂を生け贄にして「天鎖斬月　黒崎一護」にヘル・チューニングすることでヘル・シンクロ召喚される。墓地のモンスタ

ー1体につき、攻撃力を１０００ポイント上げる効果を持つ。ヘル・シンクロ召喚の際の台詞は「地獄の力よ、いまここに死神と交わる！縋りつけ、クシャナーダ！我ら最後の希望はここにあり。ヘル・シンクロ召喚！究極降誕、『スカルクラッド一護』！」。攻撃名は「金色月牙天衝」。

その他のカード

黒崎一護

レベル４　属性／地　人間族　攻撃力／１５００　守備力／１２００
通常モンスター。シンクロ召喚の際にユーノが必ず使うと言ってもいいカード。

朽木ルキア

レベル３　属性／地　死神族・チューナー　攻撃力／１２００　守備力／１３００
このカードが召喚に成功した時、自分の墓地に存在するレベル３以下のモンスター1体を表側守備表示で特殊召喚する事ができる。この効果で特殊召喚した効果モンスターの効果は無効化される。

阿散井恋次

レベル４　属性／地　死神族　攻撃力／２０００　守備力／０
このカードが破壊され墓地に送られた場合、フィールド上に表側表示で存在する魔法・罠カードを一枚破壊することが出来る。攻撃名は「咆えろ、蛇尾丸」。

井上織姫

レベル３　属性／光　人間族・チューナー　攻撃力／９００　守備力／１６００
バトルフェイズ中に相手がマジック・モンスターによる特殊攻撃を仕掛けてきた場合、手札のこのカードを自分フィールド上に特殊召喚する事が出来る。この効果で特殊召喚に成功したターン、相手のカードの効果によって発生する自分への効果ダメージは代わりに相手が受ける。エンドフェイズに、特殊召喚され攻撃宣言をしていない場合、このカードは破壊される。

改造魂魄　コン

レベル１　属性／地　魂魄族　攻撃力／１００　守備力／１００
このカードを墓地に送ることで、相手の効果ダメージをゼロにする。

斬月

レベル６　属性／闇　斬魄刀族・チューナー　攻撃力／２１００　守備力／２０００
シンクロチューナー。このカードがシンクロ召喚に成功した時、自分のデッキからカードを１枚ドローする事ができる。また、相手のメインフェイズ時、自分フィールド上に表側表示で存在するこのカードをシンクロ素材としてシンクロ召喚をする事ができる。

内なる虚　黒崎一護

レベル８　属性／闇　虚族　攻撃力／３０００　守備力／０
『天鎖斬月　黒崎一護』がフィールド上に存在するとき手札から、このカードを特殊召喚する事が出来る。また、自分フィール上に存在するシンクロモンスター一体を除外して、６００ポイントのダメ

ージを与える。

地獄の番人クシャナーダ

レベル１０　属性／闇　地獄族・チューナー　攻撃力／３８００
守備力／０
このカードは通常召喚する事は出来ない。自分フィールド上に、シンクロモンスター『天鎖斬月　黒崎一護』が存在するとき手札の『クシャナーダの賜杯』を墓地に送り、このカードを特殊召喚する。特殊召喚後、自分のエンドフェイズに１０００ポイントのダメージを受ける。

魔法・罠カード

斯くて刃は振り下ろされた

このカードはデッキ、または手札からレベル5以下のシンクロ素材となるモンスターを特殊召喚することが出来る。そして、召喚したターンの終わりにデッキをシャッフルする。

魂の卍解

通常魔法。自分フィールドに存在する『死神代行　黒崎一護』と、デッキ・手札から任意にレベルを変更したシンクロモンスターを選択して新たにシンクロ召喚を行う。

晩翠の恐怖

通常罠。自分フィールド上に存在する表側表示のモンスター一体をリリースして、相手フィールドに相手プレイヤーが召喚しているモ

ンスターの数だけ晩翠トークンを攻撃表示で特殊召喚する。その後、相手フィールドに晩翠トークンが召喚された時、コントローラーはその効果によってフィールド上の全てのモンスターを破壊し、破壊したモンスター一体につき２００ポイントのダメージを受ける。

卍禁大封

永続罠。このカードがフィールド上に表側表示で存在する限り、攻撃力２０００以上のモンスターは攻撃宣言をする事が出来ない。

クシャナーダの賜杯

通常魔法。このカードは特殊な方法でのみ発動することが出来る。自分フィールド上に、シンクロモンスター『天鎖斬月　黒崎一護』が存在するとき手札のこのカードを墓地に送り、このカードを発動することが出来る。そして、発動後デッキ・手札から「地獄の番人クシャナーダ」を特殊召喚する。
アポカリプスが召喚したモンスター

星光の殲滅者　シュテル・ザ・デストラクター

レベル４　属性／闇　堕天使族　攻撃力／１８００　守備力／１５００
アポカリプスが作り出したユーノの記憶の中に存在する子供時代のなのはの姿を象ったもの。髪型はなのはとは違いショートカットで、黒を基調としたバリアジャケットを着込んでいる。このモンスターが表側表示でフィールドに存在するとき、デッキ・または手札から『雷刃の襲撃者　レヴィ・ザ・スラッシャー』をフィールドに呼び出すことが出来る。

雷刃の襲撃者　レヴィ・ザ・スラッシャー

レベル４　属性／闇　堕天使族　攻撃力／１７００　守備力／１１００
アポカリプスが作り出したユーノの記憶の中に存在する子供時代のフェイトの姿を象ったもの。青い髪（先の方は黒みを帯びている）で、青を基調としたバリアジャケットを着ている。『星光の殲滅者　シュテル・ザ・デストラクター』『闇統べる王　ロード・ディアーチェ』と共に強力な効果を発する。

闇統べる王　ロード・ディアーチェ

レベル４　属性／闇　堕天使族　攻撃力／１５００　守備力／１９００
アポカリプスが作り出したユーノの記憶の中に存在する子供時代のはやての姿を象ったもの。着ている服ははやての騎士服と似ているが、帽子はかぶっていない。『星光の殲滅者　シュテル・ザ・デストラクター』『雷刃の襲撃者　レヴィ・ザ・スラッシャー』と共に強力な効果を発する。

魔導覇神　リーガルディオス・ディ・マギアマクト

レベル１１　属性／闇　堕天使族　攻撃力／４２００　守備力／０
このカードは通常召喚できない。自分の墓地に存在する「星光の殲滅者　シュテル・ザ・デストラクター」「雷刃の襲撃者　レヴィ・ザ・スラッシャー」「闇統べる王　ロード・ディアーチェ」をそれぞれ一体ずつゲームから除外する事でのみ特殊召喚する事が出来る。一ターンに一度、相手フィールド上に表側表示で存在するカード一枚を破壊し相手ライフに２０００ポイントダメージを与えることが出来る。攻撃名は「バニシングブレイカー」。

魔法・罠カード

絶対魔力障壁

永続魔法。自分フィールド上に表側表示で存在する『星光の殲滅者　シュテル・ザ・デストラクター』・『雷刃の襲撃者　レヴィ・ザ・スラッシャー』・『闇統べる王　ロード・ディアーチェ』がある限り自分のモンスター、または直接攻撃が宣言された時、その戦闘を無効にして相手モンスターを破壊する。そして、相手のシンクロモンスター一体につき８００ポイントのダメージを与える。

夜天の守護騎士プログラム

通常罠。相手モンスターが自分フィールド上のモンスターに対して攻撃を仕掛けてきたとき、自分が受けるダメージをゼロにして相手のバトルフェイズを強制的に終了させる。発動後、このカードは破壊される。

魔王の配下・フォワード

速攻魔法。このカードが発動されたターン、相手のバトルフェイズを強制終了しダメージカウンターをゼロにする。

怒る鉄槌の騎士

通常魔法。相手モンスターの攻撃宣言時に、墓地にある『魔王の配下・フォワード』の効果により手札のこのカードを除外して効果を発動。このカードが除外されたときその効果によって、相手に２００ポイントのダメージを与える。

トリプルブレイカー

通常罠。自分のフィールド上に『星光の殲滅者』・『雷刃の襲撃者』・『闇統べる王』が存在するとき発動することが出来る。相手プレイヤーは『星光の殲滅者』・『雷刃の襲撃者』・『闇統べる王』三体のモンスターの攻撃力の合計分のダメージを受ける。

魔導戒厳令

永続魔法。手札から同名モンスター三体を墓地に送る事で、次の自分のエンドフェイズ時まで、相手プレイヤーは魔法カードを発動することが出来ない。

忍者に恋す！？（前書き）

どうも、みなさん。

戦隊シリーズとのクロス。

今回は僕が子供のころ大好きだった、今でも好きなカクレンジャーとのコラボです。

あの戦隊は僕にとっては神です。

サスケとフェイトの妙な展開にご注目！

それでは、始まります！

忍者に恋す！？

＞i２２１４４―７０９＜

本編の前に、前説役の人から今回の話の中心人物に関することを説明してもらいます。

前説は落語家、三遊亭圓丈となります。

「ささ、皆さん！！突然ですが・・・カクレンジャーというのをご存知でしょうか！？戦国時代、忍者達は妖怪達と激しい戦いを繰り広げておりました。戦いの末、鶴姫を筆頭とする５人の忍者たちが総大将ヌラリヒョンと妖怪たちのエネルギーを無敵将軍ら三神将より与えられた『封印の扉』の中に閉じ込めることに成功したのでありますが、それから４００年。５人の忍者の末裔・・・猿飛佐助の子孫・サスケと霧隠才蔵の子孫・サイゾウは、エネルギーを失い人間社会に溶け込んでいた妖怪の一人・カッパに騙されて、東京湾にあった「封印の扉」を開けてしまう訳であります。先祖代々『封印の扉』を見守ってきた鶴姫の末裔、２４代目鶴姫は気配を察知し、封印を解いてしまったサスケとサイゾウ、三好晴海入道の子孫・セイカイ、児雷也の子孫・ジライヤと共に『カクレンジャー』として妖怪封印を行う事を決意するのであります。そして、妖怪達を執りまとめておりました大魔王を自らの変身能力を失うことを代償に、再度封印の扉に閉じ込めたのであります！！これが、皆さんの世界で放映された『忍者戦隊カクレンジャー』の結末であります。」

すると、圓丈は一度扇子で机を軽くたたくとさらに続ける。

「ところが、今回・・・そのカクレンジャーが違う形で全く新たな展開を見せていくのであります！！さて、そのカクレンジャーと今回協力するのが・・・この小説ではすっかりお馴染みの魔導師サン達！！」

圓丈はテンポよく扇子を軽快に叩きつつ口を動かしていく。

「決して交えることの無かった両者が交わりし時、果たしてカクレ

ンジャーと魔導師サン達に一体何が起こるのでしょうか!?それでは、本編・・・開始です!!!!!」

圓丈の前説が終わり漸く本編へと突入する訳だが、果たして一体どんな展開となっていくのであろうか?

秋の気配も徐々に色づき始め、各地では秋をテーマにしたイベントや記念フェアが開催されスーパーなどではすっかり秋を代表する食材が多く陳列するようになっていた。

ここ、機動六課のほうでも秋一色に染まった庭先に咲いた紅の葉を見ながら、ユーノとなのはは二人穏やかな雰囲気を醸し出しながらティータイムを堪能していた。

「もうすっかり秋だな・・・紅葉も色づいて綺麗だな・・・」

「今度、みんなで紅葉狩りにでも行きたいね。」

「そうだね♪出来れば大勢のほうが良いからな・・・一護さんやアリサたちも誘えたら誘ってみようか?」

「うん♪アリサちゃん達、きっと喜ぶよ♪」

そんな何気ない会話をしながら仲良く紅茶を啜る二人。

すると、ちょうどそのとき学校から帰宅したヴィヴィオが駆け寄ってきた。

「ただいま!!なのはママ!ユーノパパ!」

「あ、おかえりヴィヴィオ！」

「おかえり・・・って・・・？」

ヴィヴィオにお帰りと返事をしようとしたユーノだったが、振り返ってみた瞬間飛び込んできたのは桃色の忍び装束に身を包んだヴィヴィオの姿であった。

「どうしたのその格好！？」

思わずユーノが尋ねると、若干照れた様子でヴィヴィオは返事をする。

「へへ♪どう似合うかな？今度保育所のみんなに見せる劇で使う衣装なの！」

「忍者の格好だね。よく似合ってるよ。」

ヴィヴィオの格好を素直にほめる母親のなのは。

「ありがと、なのはママ♪ユーノパパは似合ってると思う？」

「ああ。可愛いいくノ一さんだよ♪」

「？くノ一・・・？」

ユーノの口にした言葉に思わず疑問符を浮かべるヴィヴィオ。

なのははそんなヴィヴィオに次のように説明をする。

「女の人の忍者のことを『くノ一』って言うんだよ。ほら、漢字で女って言う字はく・ノ・一って風に書くでしょ？」

「ああ！成程。」

以前、地球に遊びに行った際になのはを始め士郎たちなどから日本語のことに関してもある程度のことを教えられたヴィヴィオは、女という漢字の書き順を思い返しながら納得した様子となる。

「そう言えば、前に雑誌かテレビの特集でやったけど・・・今ミッドは密かな忍者ブームらしいね。」

「そうみたいだね。何でも、忍者にあやかった喫茶店とか忍者体験ツアーとか漫画本とかが凄く売れ行きを伸ばしてるみたい。局の方でも最近、忍者式ダイエットなんて流行ってるぐらい。」

「忍者式ダイエットね・・・それじゃ、ヴィヴィオのクラスも今の忍者ブームに乗っ取って・・・」

「そ♪発案したのはバウラだけどね。えっと確か劇の題名がね・・・・・『忍者戦隊カクレンジャー』だったかな？」

「「忍者戦隊カクレンジャー？」」

どこかで聞き覚えのあるようなそうでないような名前に思わず口をそろえる二人であったが、この忍者戦隊カクレンジャーが本当に存在するとは思いもしてなかったであろう。

その頃、本物の忍者戦隊カクレンジャー一向はというと――――――

「びはははははははあ！！！！」

「待ちやがれ、この妖怪！！！」

とある異世界のほうで悪行の限りを尽くす妖怪を退治するために独自に行動を起こし始めていたのだ。

カクレンジャーの実質的なリーダーとも言えるニンジャレッド、サスケは通常の忍び装束に身を包んだ状態で真夜中の街を徘徊する妖怪を追っている最中だった。

妖怪は追いかけてくるサスケのほうを振り返っては小ばかにした言動でサスケを挑発してくる。

「へへ～～ん！！ここまでおいで！！！」

「くそ！！舐めやがって！！！！スーパー変化！」

サスケは業を煮やすと、忍び装束を脱ぎ捨ててスーパー変化と呼ばれる方法で特製のパワードスーツに身を包むと専用武器のレッドスライサーを妖怪に向かって投げつけた。

「レッドスライサー！」

妖怪はレッドスライサーの機動を読んでそれを躱すと、サスケに向かって妖術を発動させた。

「怨（おん）！」

その瞬間、サスケの周りで大爆発が起こりサスケは威力に圧倒され

てそのまま夜の街の中へと飛んで行ってしまった。

「ぐあああああああああ！！！！！」

サスケを撃退した妖怪は、残りのカクレンジャー達に追いつかれないようにそそくさとその場から逃げだしていったのであった。

妖怪が立ち去ってから暫くして、漸くサスケの後を追ってきた忍び装束の鶴姫を始めとする四人が到着し、先に戦っていたはずのサスケの名前を叫ぶ。

「サスケ！サスケ！！」

「あいつ、一体何所いったんだよ！？」

「手分けして探しましょ！」

「ジライヤ、俺達は向こうだ！」

「オーライ！」

鶴姫・サイゾウ・セイカイ・ジライヤの四人は消えていったサスケを捜すために二手に分かれて夜の街の中を探索しに行った。

そんな四人の行動を離れた場所で見ていたサスケを追い払った妖怪は、不敵な笑みを浮かべていた。

「ふふふ・・・間抜けなカクレンジャーどもめ・・・っふふふふふ・・・おや？」

その時、妖怪は茂みの奥で光る奇妙な光に目を奪われそっと近づいていくと、草をかき分けた先に転がり込んできたのは青紫色に輝く不気味な欠片であった。

「何だ・・・こりゃ？」

妖怪はそれがロスト・ロギア、アンゴルモアということなどは一切知らずに興味本位でそれに触れた瞬間、アンゴルモアが妖怪の心を読み取り発動してしまったのであった。

「ぎぇえええええええええええええ！！！！！！！」

妖怪はアンゴルモアと一体化することによってとてつもない力を手にしてしまうわけだが、その全容がはっきりするのは夜が明けてからになる。

さて、カクレンジャーの一人、ニンジャレッドことサスケは謎の妖怪の攻撃によって彼方へと飛ばされてしまい、鶴姫達残りのメンバーは行方不明となったサスケを探すため各所に散らばっていた。

やがて夜が明け、サスケは変身を解いた状態で木の上で気絶をしていたが、アサヒが目に入ったことで目を覚ました。

「う・・・・・お・・・・ココは？」

目が覚めたサスケが徐に木の上を降りて、あたりを見渡してみると広がってきたのは通勤時間の為に人の気配をあまり感じられない近所の森林公園であった。

「くそ。あの妖怪め！次ぎ会ったら絶対に容赦しねえ！！」

妖怪へとの怒りを露わにして拳を強くたたきつけるサスケだったが、その時不意にサスケの腹が大きく鳴り響いた。

「と・・・その前に腹減ったな・・・昨日から碌に食べてねェから力が出ない・・・」

サスケは空腹の状態を何とかするために、腹ごしらえの為の方法を考え始めるが、あいにく手持ちの残金は少なく、とって食べれそうなものもなく途方に暮れるばかりであった。

一方、その頃・・・第２４０管理外世界『シノビ』からアンゴルモアの反応を確認した機動六課は、現場調査の為にライトニング隊長のフェイト一人を現地に向わせていた。

フェイトはバリアジャケットに身を包むと、反応が確認されたあたりの近辺の空を飛んでいたが、それらしき反応はセンサーに確認されないままであった。

「・・・今のところ、特に変った様子はなさそうだけど・・・」

司令室の方でも反応が起きていないということに、ユーノ達も警戒はしつつ手詰まりの状態に陥っていた。

「フェイトさんが飛んでる周囲からもアンゴルモアらしき反応は見受けられませんね。」

「誤認探知じゃなかったのか？」

「ひょっとして、またアンゴルモアもどきということも？」

「う～ん・・・明確な発動をしないと限り何ともいえないのが今のアンゴルモアだからな・・・」

「困りましたね。」

ユーノを始め、前線部隊の全員が顔を渋らせ困惑する。

はやてはもう暫くフェイト一人に現場での調査を指示する。

「フェイト隊長、もう暫く現場での調査お願いや！」

『了解。詳しいことが判り次第、折り入って連絡する。』

通信を切り終えると、フェイトは一度地面へと着地してから周辺に危険な反応がないことを確認してからバルディッシュにこう尋ねる。

「周囲には特に危険物もないようだし・・・バリアジャケットは解除しても良さそうかな？」

〈Ｍａｙｂｅ　ａｌｌ　ｒｉｇｈｔ〉

「そう。」

バルディッシュの同意をもらったフェイトは一度バリアジャケットを解除すると、制服に身を包んで市街地のほうへと向かった。

市街地方でも特にこれといって危険なものの反応は見受けられないまま、ただ悪戯に時間だけが過ぎていく中、フェイトはふとこんなことを思っていた。

「それにしても・・・この世界に来てからずっと思ったけど・・・さっきから感じるこの変な気配は何だろう?魔力とも霊力とも違うようだし。」

フェイトは知らないようだが、彼女が感じているこの変な気配こそ妖怪の多くが発する妖気と呼ばれるものなのだ。

のちに彼女はこの妖気を発する強力な力を持った妖怪と戦いを繰り広げるのだが、それはもうちょっと先になる。

とりあえずあまり気にしすぎないこととして、フェイトはその後も周辺の調査を続けるが、そんな時ふと目の前にネコのバスを改造した珍しい形のクレープ屋の姿を発見する。

「クレープ、如何ですか?」

「美味しいですよ!」

「食べていってください!」

「あ・・・」

活気あふれる雰囲気とその珍しいバスの形に思わず目を奪われるフェイトは、子供のころ金曜ロードショーで見たことがあるとあるアニメ映画のことを思い出した。

「珍しいな・・・あんなバスはじめて見た。ネコのバス・・・か・・・ふふ。何だか『となりのトトロ』見てるみたいで懐かしいな。」

優しい気持ちになったフェイトはクレープを食べたいという気持ちを押さえて、ここは真面目に調査を続けることにした。

一方その頃サスケは、通信妨害かその他の原因で印籠型の変身アイテムかつ通信手段でもあるドレンチャンジャーから聞こえる雑音に顔色を歪ませる一方だった。

「鶴姫、サイゾウ、セイカイ、ジライヤ！駄目だ・・・全然連絡がつかねぇ。故障しちまったのか？」

仲間との連絡も取れず、いまだ食べ物にすらありつけていないサスケの体力は限界を迎えようとしていた。

「あ～～～もう駄目～～～腹減って死にそう～～～」

サスケはあまりの空腹についに体が耐え切れなくなると、そのまま誰もいない道の真ん中で一人空しくうつ伏せとなって倒れるのであった。

そんなサスケのほうに向かって偶然にも近くを通りかかっていたフェイトは、難航を極める調査に思わず腕組みをしていた。

「この近辺を取り合えず、隈なく捜査してみたけど・・・それらしいもの、見たって人も居なかったし・・・完全に詰まっちゃったな。」

〈Ｓｉｒ〉

待機状態のバルディッシュが心配した様子で声をかけてくると、フェイトは優しい表情で返事をする。

「大丈夫。きっと見つかるよ。さて、もうお昼だし午後の捜索は一先ず昼食を取ってからにして・・・ん？」

と、その時フェイトは前方のほうであからさまに唸り声をあげながら倒れるサスケを発見するのであった。

「だ・・・だ・・・だれ・・・か・・・」

「あ！人が倒れてる！？」

フェイトは急いで倒れているサスケのほうへと駆け寄ると、徐に体を起こして意識を確認する。

「あ、あの。大丈夫ですか！？何所か怪我でも！？」

すると、そんな心配げなフェイトに向かって目をつむりながらサスケは実によわよわしい声でこう言ってきた。

「は・・・腹が・・・腹が減って・・・死に・・・そう・・・」

「え？」

意外な言葉に思わず唖然としてしまうフェイトだったが、取りあえず飢えに苦しむサスケを放っておけなくなると、フェイトは適当に食料を調達してくるとそれを直ぐにサスケに分け与え、サスケはフェイトが買ってきた食料を貪り食いつくしていた。

公園のベンチに座りながら自分も昼食をとるフェイトだったが、サスケの食いっぷりには目を見開き驚くばかりであった。

そして、買ってきた食べきれないとばかりの量の弁当をあっという間に平らげてしまうとサスケは満足げな表情を浮かべる。

「ぷっは!!!いや～～助かったよ、マジで!あのまま俺干物になって死んじまうかと思ったからさ!助けてくれてありがとな!」

「あ、いえいえ。倒れてる人を見過ごすなんて真似出来ませんから。相当お腹がすいていたようですが、何時から食べてないんです?」

「えっと・・・確か昨日の昼からだからな・・・そりゃもう空き過ぎてどうにかなりそうだったぜ。」

「はは。そうなんですか・・・でも、駄目ですよ。ちゃんと御飯ぐらい食べないと。」

「ははは!悪かった、悪かった。助けられた上に説教喰らうか。俺もまだまだだな。」

「あ!いや、その・・・そう言うつもりじゃなかったんです。あの・・・その・・・御免なさい!」

フェイトは思わず自分の言動に矛盾点があったことを後悔しながら、サスケに謝罪の言葉をかけるがサスケ自身はなぜ謝られるかが分からなかった。

「お?何であんたが謝るんだ?可笑しな奴だな・・・」

「え!?あ・・・あはは・・・」

「はははははは！！！」

サスケの言葉を聞くと、フェイトも何故だかは知らぬが自分が謝ったことに関して急にばからしく思ってしまうと恥ずかしさをごまかすように笑い出すと、サスケもそれにつられて屈託のない笑みで笑いかけてきた。

「そう言えば、名前言ってなかったな。俺はサスケ！あんたは？」

「フェイト・T・ハラオウンです。」

「へぇ～～～いい名前じゃねぇか！フェイトって」

「え！？ほ、褒めてくれるんですか！？」

「何だ？褒めちゃ悪いのか・・・？」

「いえ！その・・・名前で男の人に褒められたことがあまりないものでつい・・・」

「そうなのか。俺はいいと思うぜ。あんたにピッタリないい名前だと思ってる。」

「！」

フェイトはサスケにそのように褒められると、今まで抱いたことのない胸が熱くなるような感覚に陥り、思わず顔を赤くする。

すると、サスケは殻となった弁当箱をすべて綺麗に処分すると、フェイトに向かって別れの挨拶を済ませる

「さて、昼飯ご馳走さん！俺、そろそろ行くわ！」

サスケはそう言って立ち去ろうとしたが、不意にフェイトが慌てた様子で引き留めてきた。

「あ、あの！！待ってください！！」

「？」

サスケは振り返り、尋常じゃない様子のフェイトの様子をうかがう中、フェイトはかなりの取り乱した状態でこう言ってきた。

「そ・・・その・・・今度また何所かで会ったときはその・・・“呼び捨て”・・・で、呼んでも構いませんから・・・！！」

フェイトからのその意外な言葉を聞かされたサスケは一瞬きょとんとなってしまったが、すぐに和やかな笑みを浮かべると、肯定の言葉を返す

「・・・ああ。分かった！じゃあ、お前も俺のこと“サスケ”って呼び捨てで良いからよ。」

「！！」

「んじゃな！」

サスケはフェイトにそういうと、風のようにフェイトの前から姿を消していったのだった。

フェイトはサスケがいなくなった後に、いまだ高鳴りを続ける自分の胸の鼓動に困惑しながら、これが一体何なのかを一生懸命考えていたが、結局それを見付けられずに午後の捜査を終わらせて機動六課のほうへと帰還していった。

そう・・・――フェイトはこの時、完全にサスケという異性に明らかに恋というものを覚えていたのだが、フェイト自身はこのことに気づいていない。

なぜなら、彼女はもとより同性愛者と陰でささやかれるように彼女が好意を抱いているのはなのはの方だと勘違いしていたからだ。

しかしそれが今回大きく揺らぎ始めている。

果たして、彼女は噂通りの同性愛者なのか？

それとも本当は普通に恋する女性の姿に変わりないのだろうか？

そんな自分でもどうすることも出来ない不思議な気持ちをずっと抱えたまま、フェイトは帰還後六課の食堂の方で注文した料理に手を付けずにずっとさすけのことばかりを考えていた。

「・・・・・・（サスケ・・・か・・・）」

頭の中はサスケの顔ばかりが浮かんで来、フェイトの心もすっかりサスケ一色に染まりあがる一方であった。

「はぁ～～～～～」

この整理のつかない複雑な感情に大いに悩まされながら、フェイト

は大きくため息をつくばかり。

そんな中、このいつもとは明らかに様子のおかしいフェイトのことを陰からずっと伺うなのは達前線メンバー一同。

恋次はふとフェイトのただならぬ様子を見るとユーノに思わず尋ねた。

「おい。フェイトの奴、何かあったのか？」

「僕が知るわけありませんよ。なのはは心当たりある？」

「私も全然。なんか、フェイトちゃん帰ってからずっとあ～して一人物思いに溜め息ばかりついてるの。」

「何かあったんでしょうか、フェイトさん？」

秘蔵っ子でもありフェイトの直属の部下であるエリオとキャロは大いに心配していたが、鬼太郎は実にデリカシーのない発言を口にした。

「体重が増えたから気にしてんじゃねぇか？」

これには思わず全員がこけそうになったらしい。

「デリカシーの無い発言はやめてよ、先輩。」

と、その時。

「あ！！フェイトさん！！」

キャロがフェイトの様子をうかがっているととんでもない光景を目の当たりにする。

「「「げっ！！」」」

キャロにつられて全員がフェイトのほうへ目を向けてみると、そこで一同はケチャップをボトルごと飲み干そうとしている衝撃的なフェイトの姿を目撃した。

「ケチャップをボトルごとそのまま飲んでいる！？」

これには流石のなのは達も言葉を失ってしまう。

「あ・・・・・・・」

「これは・・・・・・・」

「異常だな・・・・・・・」

「テスタロッサ・・・・・・一体何があったというのだ？」

すると、その時そんなシグナムの言葉に対してはやてが何処からともなく現れ不敵な笑みで答えた。

「“恋”をしたんよ、フェイトちゃんは。」

全員は突然現れたはやてに心臓が止まりそうになった。

「わああ！！！や、八神部隊長！！」

「何時からそこに！」

「そ、それより恋って！？」

「どういう事だ？」

ヴィータがそう尋ねると、相変わらずはやては不敵な笑みを浮かべたまま自分の立てた仮説を徐に語り出す。

「ふふ・・・フェイトちゃんも一端の女の子には間違いあらへんよ。あの物思いにふけった顔・うつろな目・そして何度も口にする男の人の名前・・・あれは紛れも無く恋煩いや！」

「「「「「恋煩い！？」」」」」

全員はこのまさかの発言を耳にした瞬間、あのフェイトが同性愛路線ではなく本物の異性に対して好意を抱くとは俄かに信じられずにいた。

「ま、まさか！？フェイトちゃんが恋だなんて・・・！？」

「そ、そうだよ・・・はやて。同性愛路線でなのはにぞっこんなら兎も角、フェイトがクロノ以外の男性に好意を持つなんてそんなこと・・・」

ユーノがそういった瞬間、隣で聞いていた恋次は妙に驚きを隠し切れずにいた。

「えええ！！！！フェイトが好意抱いてるのはクロノなのか！！！

！！」

「阿散井君。リアクションが大きすぎるよ・・・」

吉良は間近で大声を上げる恋次を軽く諫めながら、思わず耳をふさぐ。

「アホやな、みんな。クロノくんはあくまでお兄ちゃんとしてや！本物の異性に対する好意はまた違うんよ。」

「でもよ、はやて。そうだとしたらフェイトは誰を好きになったって言うんだよ？」

「可能性があるのはそやな・・・今日の任務先で助けたって言う男性かな？」

「そう言えばそんなこと報告書に書いていたかな。」

と、その時。

そんな全員の元に今度はクロノ・ハラオウンがはやてと同じ様に唐突にその場に出現した。

「哀れなる我が義妹よ。恋などするものではないとあれほど教えただろうに。」

「うわああ！！！！お前もどっから出てきてんだよ！？」

「違いますよ、恋次さん♪存在感が無いから気付かなかったんですよ。」

「どういう意味だ！！！！！」

クロノは笑顔で罵倒してくるユーノに怒りを露わにするが、先ほどのクロノの発言がいけなかったのか、すぐに抗議の声が殺到する。

「それよりも何ですか、クロノ殿今の発言は！？恋をすることの何所が悪いと言うのですか！？」

「そうだよ！恋をしちゃいけないって法律はどこにもないよ！もし恋をしたら厳罰が課せられるなんてことになったら、私のユーノ君に対するこの想いはどうするの！？」

「なのはの言う通りだ。僕となのはの恋をお前のような小市民駄目亭主に否定される筋合いはない。と言う訳で、お前はさっさと仕事して寝ろ。そして、二度と僕らの前に現れるな。」

「言いすぎだろ！！僕がそこまでのことを言ったのか！？それに！！僕のことを小市民駄目亭主呼ばわりするのは止めてくれ！！」

クロノは全員からの抗議の声に猛反発の姿勢を見せたが、そんなクロノの発言を聞いていた恋次はふとこんなことも言ってきた。

「ほう～～～やけにむきになってるな。ひょっとして、エミィと子供達とは上手くいってないのか？」

「そう言えばこの前エミィさんがクロノ提督の愚痴を零していたな。なんでも、結婚記念日のことを忘れかけていたとか・・・」

「なっ！？」

クロノは吉良が口にした自分の中では大いに気にしていたことを口にされ、思わず絶句。

それと同時に前線部隊の全員、当然のことながらフォワードの五人からも非常に冷ややかな目線で見られてしまった。

「「「「「え～～～」」」」」

「クロノ君。それは流石に旦那さんとして最低だよ！」

「出合ったときから最低な奴だとは思っていたけど、ここまで腐っていたとな。訂正するクロノ。お前は早く地獄に堕ちろ。そして、クシャナーダに食われて二度と蘇るな。」

「違う！！！！！僕は別に忘れていたわけじゃない！！！！！頼む、お願いだからそんな軽蔑な目で見るのは止めてくれ！！！！！頼むよ！！！！！３００円上げるから！！！！」

「３００円で誰が動くか！！！」

クロノ・ハラオウンはすっかり四面楚歌・孤立無援の状況に陥ってしまい、誰もがクロノのことを冷たい目線で見る一方で、やはりフェイト・Ｔ・ハラオウンは一人物思いにふけった様子でただただ、あのサスケの名前を口にするばかりであった。

「はぁ～～～～～～（サスケ・・・か・・・）」

その頃、『シノビ』の世界ではとある異変が起こり始めていた。

アンゴルモアを手に入れたあの妖怪が、ありとあらゆるところで人々を襲っては無差別に手にかけているという何とも凄惨な事件が多発していたのだ。

「ふふふふふふ・・・・ははははははははははははは！！！！！！！」

妖怪は手にした力を遺憾なく発揮させては非常に惨いやり方で人々を手にかけていく。

「きゃあああああ！！！！！！」

「のあああああああ！！！！！！」

人間の返り血を浴びてもなお、顔色一つ変えずに手当たり次第に人間を襲っていくこの妖怪だが、果たしてその目的はなんなのか？

カクレンジャーや機動六課の面々はこのことに気づいているのか！？

「ふふふふふ！！！カクレンジャーめ・・・これで最早貴様らに勝機は無い！！！今度会うときこそが、貴様らの最期よ！！！ははははははははは！！！！！！！」

妖怪はそう言いながら膨大な量の妖気を発して、周囲の人間たちを一気に腐らせていき生命エネルギーを奪い取っていく。

何でもいいから、早く気づけよカクレンジャーも機動六課も！

そんな異変起こり始めている中、一夜明けた今日もオフィスでは一人フェイトは昨日と同じようにサスケのことばかりを思い出して物

思いにふけっていた。

「はぁ～～～」

仕事も手につかず、ため息ばかりをつくフェイトにエリオが徐に声をかけてきた。

「あの・・・フェイトさん・・・」

しかし、一回の呼び掛けには反応を示さなかったためエリオはもう一度声をかける。

「フェイトさん。大丈夫ですか？」

「え!?あ、ごめんエリオ。何？」

「本当に大丈夫ですか？昨日からずっとその調子ですけど・・・？」

「ああ・・・心配かけて御免ね。本当になんでもないから・・・それよりさ・・・」

フェイトはそういうと、まるで魂が抜けたかのような精気のこもっていない抜け殻のような様子のクロノを見て、思わず尋ねる。

「クロノはどうかしたの？朝からずっとあの調子だけど・・・？」

すると、シグナムはいつものように毅然とした態度で答える。

「気にするな、テスタロッサ。ちょっと訳があっただけだ。」

「はぁ・・・そうですか・・・」

義理の兄とはいえ、やはり心配性なフェイトにとってあまり見過ごせるわけではなかったので仕事がひと段落ついたら事情を聴くことにして残っていた書類整理を片付け始めていた、その時。

唐突に六課の警報が隊舎中に響き始めた。

「「「!」」」

これを聞いた瞬間、仕事をしていた全局員や先ほどまで抜け殻のような姿のクロノも反応し、目の色を変えた。

「この警報・・・!?」

「アンゴルモアが発動した!」

前線メンバーが急いで司令室に戻ってモニター画面に注目する中、ユーノはタッチパネルを高速で捜査して反応が確認された場所の映像を映し出す。

「発動が確認されたのはフェイトが昨日行ったシノビで間違いは無い。今、画像を出すよ。」

ユーノがモニターに現場の映像を映し出した瞬間、その映像を見た一同は思わず絶句した。

「何!?あれ・・・!」

映し出されてきたのは、自分たちが今まで見たこともないような異

形の姿をした化け物であり、その化け物の周辺には血塗れとなって倒れる大勢の人々や白骨化した遺体、更には崩落した建物がそこかしこに散らばっていた。

「それに・・・一体これ・・・どういう状況!?」

「酷い・・・・・人ももがこんな目に遭うなんて・・・・!?」

フェイトやなのは達はこのあまりのおぞましい光景に思わず目をそらしてしまいそうになった。

「これも全部奴の仕業か!?」

「アンゴルモアの波導もあの化け物から感じ取れる。」

ユーノがそう言うと、誰よりも命という尊厳を大切に思うフェイトの心に火が付き、先崎自分から志願をしてきた。

「だとしたら、これ以上被害を出すわけにはいかない!はやて、私に行かせて!」

「了解。それじゃあ、ライトニング全員であの化け物を退治。その後、アンゴルモアの回収をお願いや!」

「「「「「了解!」」」」」

ライトニングは早速転送ポートに乗ってシノビに移動を開始。

フェイト達が向かったその瞬間も、謎の妖怪は人間の精気を吸っては力を蓄え、次に次に人間たちが気づきあげた文明の決勝を手当た

り次第に破壊し、人々を恐怖に陥れていく。

「ははははははははは！！！！！俺を虚仮にした人間社会なんかみんなぶっ壊れちまえ！！！人間と言う人間はすべて俺が始末してやる！！！！はははあはははあはははは！！！！！」

と、その時現場に駆け付けたバリアジャケット姿のフェイトが空中からフォトンランサーを発射してきた。

「そんなことさせない！」

「あ？」

〈Ｐｈｏｔｏｎ　ｌａｎｃｅｒ〉

妖怪はフェイトのフォトンランサーを回避すると、その場に現れたフェイトを始めとするライトニング部隊の精鋭人を睨み付ける。

「何だ・・・お前達は？」

「いくよ、みんな！」

「「「「はい！」」」」

フェイトの掛け声とともに全員は散開して四方からの攻撃に転じると、初めにフェイトが妖怪の頭上からサンダースマッシャーを仕掛ける。

〈Ｔｈｕｎｄｅｒ　Ｓｍａｓｈｅｒ〉

「ファイア！」

頭上から降り注ぐ怒涛の電撃魔法を回避する妖怪に、その後も容赦なく仕掛けられる状況に妖怪は苦い顔を浮かべる。

「くっ！何なんだ一体・・・こいつらは！？」

と、ほんの一瞬隙を見せた途端に妖怪の死角よりシグナムが剣を構えてきた。

「！」

「紫電一閃！」

シグナムの炎の剣戟が直撃した瞬間、妖怪は炎に飲み込まれてその場では爆発が起こる。

そして、火力が弱まったその瞬間にエリオ・アギト・キャロの三人が妖怪に向かって一斉攻撃を加える。

「サンダーレイジ！」

「フレアバーニング！」

「フリード、ブラストフレア！」

三人の攻撃が炎に飲み込まれている妖怪の元に届くと、炎は更に威力を増大させてすさまじい爆発が起こり、最後のとどめを刺すためにフェイトがザンバーフォームからジェットザンバーを炎に向かって叩きつける。

〈Ｊｅｔ　Ｚａｍｂｅｒ〉

「はあああああああ！！！！！」

フェイトの一撃必殺の威力を秘めたそれが貫通すると、炎の中の妖怪は悲鳴を上げる間もなく爆発に飲み込まれて、一気にその場が静まり返った。

「やった！」

「へ！ちょろいもんだぜ！！」

キャロやアギトなどは自分たちの勝利で終わったと思い込んでいたが、晴れていく爆発を凝視していたシグナムは何かに気づき全員に警告する。

「！？待て！！」

すると、晴れていく爆発の中から聞こえてくるのはあの妖怪の声。

「・・・面白いものを持ってんじゃねぇかよ・・・ええ？」

そして、全員が注目する中炎の中から出てきたのは間違いなく全員の攻撃を直撃したはずの無傷のままの妖怪であった。

これにはフェイトや他の四人も目を開いて驚くばかりだった。

「「「「「なっ！？」」」」」

言葉を失ってしまう五人を余所に、妖怪は肩についた焦げを軽く手で払っていく。

自分たちの全力に近い攻撃を食らってもなお、平然としている様子の妖怪にエリオやキャロは絶望にも近い表情を浮かべた。

「そんな・・・！」

「全く効いてないなんて！？」

「くっ！一体何者なんだ、お前は！？」

シグナムは歯を噛みしめながら目の前の妖怪に尋ねるが、妖怪はそんなシグナムの質問に答える素振りは一切見せない。

「答える必要なんかねぇよ。死ぬ輩に名乗ったところで、誰が覚えてるんだよ！！」

妖怪はそう言うと、シグナムとアギト目掛けて吸い取った人間の精気と妖気を合わせた波導を発射し、二人を吹き飛ばした。

「「うわあああああ！！！」」

二人は後方に勢いよく吹き飛ばされると、ビルの残骸に叩きつけられ吐血を吐いた。

「シグナム！アギト！！」

「この！！一閃必中！！」

エリオはカートリッジを三発ロードすると、ストラーダの先端に魔力エネルギーを凝縮させて巨大な魔法刃を生成し、加速と同時に一気に妖怪を切りつけようとした。

「でやあああああああ！！！！！」

「ふん。」

だが、その瞬間突っ込んできたエリオの渾身の一撃を妖怪は造作もなく人差し指一本で受け止めてしまう。

「な！？」

あまりの衝撃的な光景に思わず目を疑うエリオ。

すると、妖怪はその状態から逆にエリオ目掛けて魔法刃のエネルギーを逆流させて凄まじい威力の電撃を流し込んだ。

「ぐあああああああ！！！！！」

「エリオ君！！」

キャロの叫び声もむなしく、自分の自慢の電撃をその身に受け、黒焦げとなって気絶寸前にまで追い詰められたエリオ。

そんなエリオの姿を見た瞬間、フェイトの怒りの炎が燃え盛る。

「おのれ！！！！」

〈Ｒｉｏｔ　ｆｏｒｍ〉

ライオットブレードを装備したフェイトは最高速で一気に妖怪の元まで飛んでいくと、怒りに我を忘れたかのような出鱈目な太刀筋の攻撃を妖怪に仕掛ける。

「はあああああああ！！！！」

高速の剣戟が妖怪に仕掛けられ、そのすべてを防御していく妖怪にフェイトは更に苛立ちと焦りの表情を浮かび上がらせる中、妖怪は疲れた表情でこう言ってきた。

「・・・ふん。女のクセに生意気な奴。そんなしかめっ面して疲れない？」

「黙れ。貴様・・・何故こんなことをする！？何故こんなにも多くの命を奪った！？答えろ！！！」

「だ・か・ら・・・知る必要なんてないって言ってんだろうが！！！！」

妖怪はそう言うと、フェイトのライオットブレードを握りしめたまま自由を効かなくするとフェイトの腹部目掛けて思い拳を食らわせる。

「ぐっは！！」

フェイトはその一撃を受けると、内臓の一部が破損し口から吐血を吐いた。

それを見ていた負傷した三人の手当てに当たっていたキャロやシグ

ナム達は声を上げた。

「「フェイトさん！」」

「テスタロッサ！」

そして、妖怪は更にその状態から容赦なく怒涛の乱撃を加えて先ほどとは逆にフェイトが一方的に攻撃を受けるという状況に陥ってしまった。

妖怪の攻撃を受け続けて、満身創痍となった元々が軽装のフェイトは大きな損傷を受けてしまい、バルディッシュを握りしめたまま地面に沈み込むと虚ろな目で妖怪を睨み付ける。

「くっ・・・お・・・の・・・れ・・・」

「何か面白い力持ってるようだが、ここまでだぜ。お前元がいいから手始めにお前から喰ってやるか？さぞかし美味いんだろうな・・・金髪の巨乳美女は？」

妖怪はそういうと、動くこともままならないフェイトの胸ぐらを持つと、口を大きく開いてそこからフェイトの生命エネルギーを奪おうとする。

これを見た瞬間、シグナム達は声を荒げりながら妖怪に止めるようにと口を揃えた。

「「「「止めろ（止めて）！！」」」」

同じ光景をモニターで見ていたなのはも声を荒げりながら、自分の

親友が妖怪に殺されそうになるシーンに胸が張り裂けそうになっていた。

「フェイトちゃん！」

「まずいぞこれは！！」

「くそ！！俺達も直ぐに応援に・・・」

と、恋次が斬魄刀を持って転送ポートに移動しようとしたその時、突然ユーノが声を上げて何かに気づいた。

「待ってください、恋次さん！あれを！！」

「何！？」

恋次がユーノの言葉に反応してモニターを見てみると、そこで恋次やなのは達は衝撃的な光景を目の当たりにした。

一体何が起ころうとしているかなど知る由もない妖怪は口を開くと、フェイトの生命エネルギーを根こそぎ食らうために捕食を始めようとしていた。

「頂きます！！」

「くっ！！」

フェイトも自分の死期を悟り、ここまでだと諦めかけたとき・・・そんなフェイトを救ってくれたのは意外な人物だった。

「せや！！」

「！？」

聞き覚えのある声に反応したフェイトの前に現れた人影が、捕食されそうになっているこの状況を救い出し、妖怪の頭を強く飛び蹴りをしてきたのだ。

「ぐあああああ！！」

妖怪はその人物に蹴られると、そのまま後ろに吹き飛びフェイトを手から放してしまう。

何が何だか分からないままのフェイトだったが、その瞬間自分の前に立つ男の姿を見た瞬間、驚きを隠せずにいた。

そこにいたのは昨日、自分が助けなおかつずっと心の中で思いつめる男、サスケだったのだ。

サスケは振り返りながら目を見開くフェイトにこう言った。

「よう。助けに来たぜ。て言うか、お前ひょっとしてフェイトか？」

「え！？」

「・・・やっぱりそうだ！また、会ったな！」

「さ・・・サスケ・・・！？」

フェイトがそう口にすると、後ろの方でそれを聞いていたシグナム

達も意外そうな声を上げた。

「サスケって・・・？」

「確か、テスタロッサが昨日助けたという男の名前か？」

すると、サスケに頭を強く蹴られその場に倒れていた妖怪が徐に起き上がり始める。

「いててて・・・何しやがんだよてめぇ！！」

「それはこっちの台詞だ！やいやい、妖怪！白昼堂々大量殺戮とは外道なことしてくれるじゃねぇか！！！」

「よ、妖怪！？」

フェイトがサスケが口にした予想外の言葉に驚いていると、エリオがサスケの背後から走ってくる四人の人影をとらえる。

「あ、誰か来ました！」

走ってきたのは一緒に行動を共にする鶴姫・サイゾウ・セイカイ・ジライヤの四人の若者たちだった。

「サスケ！」

「待たせたな。」

四人が到着すると、そのうちの一人サイゾウがサスケの傍らや後ろの方で自分たちを見つめるシグナム達を見て、思わず仰天する。

「うわ!?何だよ、こりゃ!?つーか、この金髪の別嬪さんはなんだ!?」

「ひょっとして、サスケの恋人!?」

セイカイがそう口にすると、サスケは別段照れる様子もなく否定の言葉を口にする。

「違うよ。昨日助けてもらった人だよ。フェイト、もう安心しろ。ここからは俺達が何とかするからよ。」

「え!?でも・・・サスケ!?一体どうするつもり!?」

「ま、黙ってみてれば分かるぜ。行くぜ、みんな!」

サスケがそう言うと、全員は一斉に懐から印籠型変身ツール『ドロンチェンジャー』を取出し、独特の構えを取りながら鶴姫の掛け声とともに変身する。

「スーパー変化(へんげ)!」

「「「「「ドロンチェンジャー!」」」」」

「「「「「え!?」」」」」

すると、その瞬間印を結んだ五人はドロンチェンジャーを使うことによってそれぞれ、赤・白・青・黄色・黒の五色が特徴のパワードスーツに身を包んだ姿となった。

間近でこの光景を見ていたフェイト達は度胆をぬいた。

「う、嘘！？」

そして、そんなフェイトや妖怪の前でサスケから順に名前を名乗っていく。

「ニンジャレッド、サスケ！」

「ニンジャホワイト、鶴姫！」

「ニンジャブルー、サイゾウ！」

「ニンジャイエロー、セイカイ！」

「ニンジャブラック、ジライヤ！」

五人が名乗り終えると、サスケがポーズをとりながらその場を取り仕切る。

「人に隠れて悪を斬る。忍者戦隊・・・」

「「「「「カクレンジャー見参！」」」」」

背中に携えた剣を持ち、決めポーズをとった五人に唖然となるフェイト達。

同じように、司令室でもなのは達は口をあんぐりと開けたままその光景を見つめるばかりであった。

「な・・・何なんだあいつらは・・・・！？」

「忍者戦隊カクレンジャー！？」

「それって、ヴィヴィオが言ってた劇の名前と一緒じゃ・・・・！？」

「何がどうなってるんだ、こりゃ？」

カクレンジャーがその場に現れると、妖怪はこの状況においても顔色一つ変えずに逆に不敵な笑みを浮かべたままこう言ってきた。

「へへ。のこのこ出てきやがったなカクレンジャー。だが、今までの俺だと思ったら大間違いだ。この間の借りはたっぷり返してやる。ドロドロ！！」

妖怪がそう口すると、何処からともなく数百にも達するムンクの叫びの様な顔をした下っ端妖怪、ドロドロが忽然と姿を現す。

「な！？どっから湧いて出やがった！？」

「サスケ！」

フェイトは心配になってサスケにそう口にするが、サスケはそんなフェイトに向かって自信に満ちた声でこう言った。

「大丈夫！カクレンジャーを信じろ！行くぜ！！」

サスケがそういうと、五人は親指を下に向けた状態で掛け声をあげる。

「「「「「成敗！」」」」」

掛け声とともに一斉に五人はドロドロ目掛けて走り出し、背中に差した秘剣カクレマルを抜刀、怒涛の攻撃へと転じる。

「せいや！！せいや！！」

ニンジャレッドこと、サスケは多彩な忍術と剣術を得意としておりその技能を活かした戦術でドロドロを次々に切り伏せていく。

「おりゃあ！！おりゃああ！！！もう一丁！！」

ニンジャイエロー、セイカイは祖先が三好青海入道であったことから、細身の体にいあわない怪力と大胆な戦法を使ったダイナミックな戦闘を得意としている。

「カクレイザー！」

ニンジャブラック、ジヤイヤは腰に差したカクレイザーを使ってイオンビームを撃ち出し、ドロドロを殲滅させる。

彼の得意とする戦闘方法は、強靭な脚力と頑丈な肉体を駆使した近接戦闘である。

「『忍法花吹雪（にんぽうはなふぶき）』」

カクレンジャーのリーダー、ニンジャホワイトの鶴姫は固有忍術の「忍法花吹雪」によってドロドロに無数の花びらをまき散らし、触れたものから爆発させていく。

「ブルーショット！！」

ニンジャブルー、サイゾウは固有武器「ブルーショット」の槍の先より勢いよく水を噴射し、命中したドロドロを３０ｍも跳ね飛ばしてしまう。

彼もまた、サスケ同様剣術を得意としており、目隠しをしたまま裁縫が出来るなど忍者としての素質はあり、更には水遁の術を自在に操ることが可能。

カクレンジャーの活躍でドロドロ達が圧倒され、倒されていく光景を目の当たりにしながらフェイトやシグナム達は素直にカクレンジャーの強さに驚いていた。

「つ・・・強い・・・！」

「何者なのだ、あの連中は！？」

「それにあの術も・・・まるで見たことが無い・・・忍者と言うことは・・・あれが本当に忍術！？」

ドロドロ達が五分も経たないうちにカクレンジャー達に全滅させられると、傍でそれを見ていた妖怪がしびれを切らす。

「ふん、猪口才な。いいだろう・・・俺がまとめて潰す。」

妖怪はそう言ってカクレンジャーに向かおうとすると、妖怪の強さを嫌というほど思い知らされたフェイトはサスケに忠告をする。

「サスケ！そいつはアンゴルモアの影響でかなり凶暴になってる！

油断しないで！」

「？アンゴルモア・・・！？」

「何だ、それ！？」

聞きなれぬ言葉に思わず首をかしげるカクレンジャー達。

その瞬間、妖怪が前方より突進してきた。

「行くぜ！！」

突進力は圧倒的で、よける暇もなくカクレンジャーのうちの鶴姫・セイカイ・ジライヤの三人は妖怪の攻撃を受けて吹き飛ばされる。

「ぐあああああ！！」

「ああ！！」

「のあああああ！！」

「鶴姫！セイカイ！ジライヤ！！」

仲間を気づつけられたことで感情を高ぶらせたサスケは、特定の印を結ぶと妖怪に向かって火炎忍術を発動させる。

「オン・サル・ニン　火炎つむじの術」

炎を発生させて敵を焼き尽くす火炎つむじの術を発動させ、勢いよく妖怪へとぶつけようとするサスケ。

「はあああああああ！！！！！」

だが、その時妖怪は向けられたサスケの忍術をあろうことか自身の体の中へとすべて吸収をしてしまったのだ。

「何！？」

「吸収した！」

驚きを隠せないサスケをよそに、妖怪は口からサスケの火炎つむじの術をそっくりそのまま跳ね返した。

「秘儀・鸚鵡（おうむ）返し」

自分の放った火炎つむじに直撃した瞬間、サスケは体を炎に焼かれ大きなダメージを追ってしまった。

「ぐあああああああ！！！！！」

サスケはダメージを受けると、そのままスーツから湯気を出しながら前へと倒れこみ、見ていた鶴姫とフェイトは声を荒げる。

「「サスケ！！！」」

「ははははは！！！！！脆い、脆いぞカクレンジャー！！今の俺の力はあの時とは比べ物にならないぐらい強さを増しておるのだ。さて・・・仕上げと行こうか。」

妖怪はそういうと、サスケを始め残りのカクレンジャーすべてを対

象として自分の掌の中から黄色に輝く波導を生成し始める。

それを見た瞬間、シグナムとフェイトは驚きを隠し切れない様子であった。

「！テスタロッサ！！あれは・・・！？」

「ま、まさか・・・！！」

その一方で地面に倒れ伏すサスケはその黄色の光に危惧の念を抱きながら妖怪が放とうとする技が妖術ではないことを悟る。

「何だ・・・あの黄色い光は・・・！？」

「避けて、サスケ！皆さん！！」

フェイトが声を上げてそう警告するも、妖怪はその瞬間に一度自分が受けたフェイト達の魔法のうち、フェイトが使うサンダースマッシャーをカクレンジャー目掛けて発射する。

「喰らえ！！！！！！」

サンダースマッシャーが妖怪よりはなたれ、避けきることのできなかった五人は全員爆風に飲み込まれ空高く上昇する。

「「「「「ぐあああああああああああ！！！！！！！」」」」」

「サスケ！！！！！！！！！」

五人は殺傷設定のサンダースマッシャーをまともに受けたことで強

制的に変身が解かれてしまい、満身創痍の状態で地面に転がり込んでいた。

「ははははははははは！！！！！カクレンジャーよ！！！恐れるに足らず！！！！」

この圧倒的な力を持つ妖怪を前にして、サスケ達は険しい表情を浮かべながら妖怪を睨み付ける。

「ぐっ・・・つ・・・強すぎる・・・！」

「これが一妖怪の力なのか・・・！？」

「レベルが違いすぎよ！」

傷の手当てを終えたばかりのフェイト達はすぐにサスケたちの元に近づくと、血塗れとなっている全員の安否を気遣う。

「おい、大丈夫か！？」

「しっかりして下さい！」

「ユー達は・・・！？」

日本語があまり達者ではないメンバーの中で唯一の外人、ジライヤがそう言うとフェイトが懇切丁寧に説明をする。

「私達は、時空管理局機動六課ライトニング分隊です。訳あってあの妖怪の中に取り込まれている第一級指定のロスト・ロギアを回収しに来たんです。」

「時空管理局・・・！？何だそりゃ！？」

「フェイト・・・どういう事だ・・・」

「御免。あとで説明するから、今はあまり喋ったら駄目。」

フェイトがサスケに向かってそう言うと、そんなサスケや残りのカクレンジャー四人をこれほどまでに傷つけた妖怪を殺気のこもった瞳で睨み付ける。

「まだ動けたのか？ほんと往生際の悪い奴等だ。」

妖怪がフェイト達を見ながらそう言うと、シグナムはアギトに向かって声をかける。

「アギト。まだ動けるな？」

「おうよ！」

「テスタロッサ。ここは私とアギトでどうにかする。お前達はその者たちを安全な場所まで連れて急いで手当てに回れ。」

「はい。お願いします。」

「行くぞ。新コンビネーション技で片をつける。」

「おっしゃ！！！」

シグナムはそう言うと、アギトともにレバンティンの剣先から燃え

滾るような炎を放出させそれを組み合わせてから一気に先端より炎による光線を発射する。

「「“烈火閃・炎流撃”！！」」

二人のコンビネーション技が勢いよく放たれ、妖怪に直撃した瞬間・・・あたり一面で大爆発が起き炎が周囲に飛び火する。

これにはカクレンジャー達も大いに驚く。

「おお！！」

「スゲエ！！！」

「何なんだよ、一体全体！？」

攻撃をクリーンヒットさせた体力が完全には回復していないシグナムとアギトは肩で息をしながら妖怪の様子をうかがう。

「は、は、は。これで少しは効いたか。」

だが、その時。

炎の中から出てきた妖怪の姿に二人は思わず目を疑った。

「「な！」」

中から出てきたのは、無傷ではなかったが左腕に多少の火傷を負っただけの妖怪の姿だったのだ。

「へへへ・・・大したもんだぜ。この俺に火傷を負わせたまでは褒めてやろう。だが、所詮その程度だ！」

「火傷だけだと！？」

「こいつどうなってんだよ！」

シグナムもアギトも、自分たちのコンビネーション技を受けてもこの程度の傷しか負わせることができないこの妖怪の強さにただただ驚くばかり。

「貴様らの技・・・何倍にもして返してやるぜ。」

妖怪はそう言うと、先ほど受けたシグナム達の攻撃と自分の妖術を練った灼熱の炎を頭上に出現させると、それをそのまま二人に目掛けて解き放った。

「“こむら返り”」

プロミネンスにも似た姿の灼熱の炎によって、シグナムとアギトは体に強い火傷を受けてしまい、そのまま出血も流しながら炎に焼かれてしまった。

「「ぐあああああああああ！！！！」」

「「シグナム副隊長！！アギトさん！！」」

「くそ・・・俺達の力が及ばないばかりに・・・！！」

サスケは自分たちカクレンジャーの非力さに歯がゆい思いとなった。

やがて、妖怪の技をその身に受け瀕死の重傷を負ったシグナムとアギトはその場に倒れ伏した。

「シグナム！アギト！！」

すると、シグナムとアギトはそんな状態にもかかわらず決して諦めの姿勢を見せずに何とかその場に立ち上がろうとしていた。

「くっ・・・何の・・・これしき・・・」

「ああ・・・舐めんじゃねぇよ・・・」

だが、やはりそれでもダメージの大きさには体がついていけず結局そのまま立つことも出来ないままともに動くことも出来なかったのだ。

「ふふふ。さて、いい加減お遊びも飽きてきた。そろそろ仕舞いにしようや。」

妖怪はそう言うと、手のひらに妖気を圧縮した波導を生成してこの場にいる全員をまとめて始末しようとした。

「くっ・・・！どうする・・・どうすれば・・・！？」

危うし、カクレンジャーとライトニング。

この絶体絶命的な状況に直面し今、もはや打つ手は残されていないのか！？

次回、後半戦だよ～～～ん！！

忍者に恋す！？（後書き）

教えて、ユーノ先生！

ユ「今回はカクレンジャーについて教えるよ♪」

ユ「忍者戦隊カクレンジャーは、１９９４年（平成６年）２月１８日から１９９５年（平成７年）２月２４日までテレビ朝日系列で毎週金曜１７：３０－１７：５５（ＪＳＴ）に全５３話が放送された、東映制作の特撮テレビドラマ、および作中で主人公たちが変身するヒーローの名称。「スーパー戦隊シリーズ」第１８作目にあたる。」

ユ「シリーズ中初めてレッド以外のメンバーにリーダーのポジションが与えられており、その後同様にレッド以外のメンバーがリーダーを務める作品の先鞭をつける形となっている。ただし、性格付けとしてはサスケも豪放磊落なリーダータイプのキャラクターであり、物語後半にて鶴姫と父とのドラマがクローズアップされるにつれて、当初鶴姫の補佐役的立場にあったレッド＝サスケが従来と同様にリーダーに近い役割を果たすことが多くなったんだ。」

一「俺もこの戦隊シリーズは大好きだったんぜ！ガキの頃は毎週楽しみで、ビデオに録画して何度も見たものだ。」

ユ「へ～～～そんな好きだったんですか♪」

な「聞いた話じゃ、作者もカクレンジャー好きで、この小説を書いていく中でどうしても出したかったコラボの中にこれがあったみたいだよ。」

フェ「魔法と忍者って、案外コラボすると面白いものだよね♪」

一「莫迦に上機嫌じゃねぇかよ。どうやら本当に同性愛を払拭したみたいだな。」

フェ「い、いや！！そ、それとこれとはまた話が違いますよ・・・！！」

赤面して手を横に振るフェイトを見ながら、三人は呆然としてそれを見つめるのであった。

魔導師図鑑ハイパー！

恋次とルキアはロビーにて、派手な忍術を駆使してストーリーを展開させていく某少年漫画を二人揃って読み漁っていた。

恋「最近の漫画って言うのは結構侮れないものだな。クオリティーが高い・・・！」

ル「ああ。ストーリーの展開も従来の漫画という概念を払拭するような丁寧な作りになっている。友情・努力・勝利・・・うん・・・何という素晴らしい響きだ！」

恋「俺も『千鳥』とか、『螺旋丸』とか使ってみたいぜ・・・ちくしょう。」

すると、そんな二人を見た吉良が横から口を挟んでくる。

吉「死神にだって忍術じゃないけど、似たようなものあるじゃない

か。鬼道って言うものが・・・」

恋「まぁ、そうなんだけどさ・・・いや、待てよ。ひょっとしたら出来るかもしれねぇぞ・・・ルキア！吉良！ちょっと付き合え！！」

恋次は訓練場に二人を連れていくと、鬼道を工夫してそれらしき技の開発を試みる。

ル「何をしておる！もっと錬度を上げるのだ！！」

恋「こうか！？」

吉「もっと回転数を上げるんだよ。あとは、質量調整だ！」

そんな三人を離れたところで見ていたなのはとユーノ。

な「ねぇ、あれって何やってるのかな？」

ユ「螺旋丸を作ろうとしてるみたいだよ・・・・・・」

次回予告

圓丈「大ピ～～～ンチ！！カクレンジャーも魔導師サンもボッロボロ！かろうじて助かったサスケ達は、一体どうするのか！？そして、妖怪人形神を相手にカクレンジャーと魔導師サンはどう戦うか！？乞うご期待！」

圓丈「ユーノ・スクライア外伝　『ぶっ飛ばせ腐れ外道』」

ぶっ飛ばせ腐れ外道

＞ｉ２２１４５―７０９＜

前回のあらすじ。

第２４０管理外世界『シノビ』にて、アンゴルモアの反応を確認した機動六課はフェイトを派遣し調査に向かわせた。

そこで彼女は偶然にも忍者戦隊カクレンジャーの一人、ニンジャレッドサスケを助け出し、なぜだかは知らぬがそのサスケの不思議な魅力に堕ち、恋心を抱くようになってしまった。

その後、妖怪がアンゴルモアを手に入れ人間たちを襲いだし始めたことを機に立ち上がるライトニングとカクレンジャーだが、圧倒的な妖怪の力の前に絶体絶命の危機に陥っていた。

では、本編スタート！

「ふふふ。さて、いい加減お遊びも飽きてきた。そろそろ仕舞いにしようや。」

「くっ・・・！どうする・・・どうすれば・・・！？」

シグナムとアギトの攻撃ももものともせず、常識はずれな戦闘能力を発揮する謎の妖怪を前に、フェイト達とカクレンジャー五人は手も足も出ない状況だった。

このまま自分たちは何の抵抗も出来ずにこの妖怪に斃されてしまうのかと、一瞬諦めかけていた時だった。

神様はまだ彼女たちを見捨ててなどいなかった。

〈Ａｘｅｌ　ｓｈｏｏｔｅｒ〉

「！？」

唐突に妖怪の頭上から降り注ぐ加速性のある何十発もの魔力弾。

妖怪がそれを避けると、間近でそれを見ていたフェイト達は目を丸くして驚いた。

「あれは・・・！」

と、その直後。

アクセルシューターを避けた妖怪の背後より無数の楔が降り注がれる。

「“楔晩翠（くさびばんすい）”」

無数の楔に体を固定されたことで、身動きが取れなくなる妖怪は困惑の表情を浮かべるばかりだった。

「な・・・何だこりゃ！？体が急に・・・！」

すると、そんな妖怪を見つめるフェイト達の前にエクシードモードで武装したなのはといつも通りの羽織と甚平に身を包んだユーノがそらから降りてきた。

「助けに来たよ、フェイトちゃん。」

「遅くなってごめん。」

「なのは。ユーノも。」

フェイトやシグナム達はこの二人の登場に安どの表情を浮かべ、二人のことを知らぬサスケは全員の気持ちを代表して徐にフェイトに尋ねる。

「お前の仲間か？」

「うん。頼りになるね。」

と、その時。

妖怪が身の毛も凍るような膨大な量の妖気を発しながらこう言ってきた。、

「くっ・・・こんなもんで俺を縛ったつもりか？甘いわ！！」

妖気を放出させながら、妖怪は翡翠の魔導死神ユーノ・スクライアが放った楔晩翠を自力で吹き飛ばし、体の自由を取り戻した。

これにはなのはやフェイト達もかなり驚いていた。

「！ユーノ君の拘束技を自力で解くなんて！？」

「少々甘く見ていたか。ならば・・・――――」

ユーノはそう言うと、晩翠を徐に両手で固く握りしめると、自分の霊力を刀身に凝縮させて強力な一撃を秘めた斬撃を作り出す。

「この一撃で終わらせる。」

ユーノの霊圧色と同じ翡翠色の斬撃はまるで周囲のものを跪かせるかのような高圧的な雰囲気を醸し出していく。

「行くぞ。一護さん秘伝の斬撃――――――」

ユーノは妖怪に向かって突進していくと、頭上高く飛び上がると同時に刀身に溜めた霊圧を一気に妖怪の体めがけて降り注いだ。

“月牙天衝”！」

斬撃が妖怪に直撃した瞬間、凄まじい破壊力によって周囲のものが捲りあがり超高密度に圧縮された霊圧が放出し、何もかもを吹き飛ばしていった。

これを見ていたカクレンジャー五人や、なのは達は思わず目を見開きながらその技の威力に圧倒していた。

「「「おおお！！！」」」

「イッツグレイト！」

「あれが、一護さんの月牙天衝をユーノ先生なりに磨き上げたものか！」

「だがしかし、なぜスクライアが奴と同じ技を？」

「ユーノ君が前に言ってたんです。月牙天衝とは、名前に月がつくものか力の根源が月に由来するものが使うことができる技だって。」

以前の任務やそれ以外のところでこの事実を知らなかったシグナム

に、なのはがそう説明すると技を発動した直後のユーノは黙したまま晴れていく砂埃の中を一寸の警戒も解かずにじっと見つめていた。

「・・・・・・――――――」

そして、砂埃が完全に晴れると中に残っていたのは月牙天衝をまともにくらい、かなりの深手を負った血塗れの妖怪の姿だった。

全員はこの光景に思わず歓喜の表情を見せる。

「おお！かなりの深手を負わせたぞ！！」

「やるな、あいつ！」

カクレンジャーがユーノの実力を称賛する中、息を切らしながら妖怪は毅然とした表情で自分を見つめるユーノに向かってこう言った。

「はっ、はっ、はっ。この技・・・そしてこの力・・・何者だ・・・貴様・・・！？」

「機動六課特別エグゼクティブアドバイザー兼、翡翠の魔導死神ユーノ・スクライア。尊敬する人は、我が師一護さんと浦原喜助さんなど。」

「翡翠の魔導死神・・・だと！？仲間内からそんな名前を聞いたことがあるような・・・やってくれたな・・・・・・この借りいずれ返させてもらう・・・」

妖怪はそう言うと、残っていた力をすべて使ってユーノから逃げることだけに全力を注ぎ、その場から跡形もなく消え去っていった。

「ま、待て！ぐっ！！」

「サスケ！！」

妖怪が消え、直ぐに後を追おうとしたサスケだったがかなりの傷を負ってしまったことが原因で状態は非常に深刻だった。

フェイトや鶴姫たちはサスケの身を案じ、不安げな表情でサスケを見つめていると、ユーノやなのはもその怪我の程度を見て直ぐに対処に当たる。

「こりゃ酷いな。なのは、君はフェイトやシグナムさん達を頼む。僕がこの人たちを運ぶから。」

「了解！」

ユーノとなのはは早速、負傷したカクレンジャー五人と大火傷を負ったシグナム達を後から来たヴァイスのヘリに乗せて機動六課まで護送することにした。

護送されたのち、シャマルとユーノなどによって適切な処置を受けた彼らの傷は数時間で治るまでに至り、あれだけの深手を受けたシグナムとアギトもそれを全く感じさせぬほどにまで回復していた。

「はい、これで一先ず大丈夫よ。」

シャマルは道具をしまい、処置が済んだ鶴姫やサイゾウ達に向かってそう言うと、鶴姫が代表してお礼の言葉を述べる。

「ありがとうございます。助かりました。」

同じように、でこに包帯を巻いたエリオが険しい表情を浮かべながら浮かない顔のサスケの隣で座るフェイトに怪我の具合を尋ねる。

「フェイトさん・・・大丈夫ですか？」

「私は大丈夫だよ。この通りね。」

フェイトはそう言うと、一応受けた大きな傷はシャマルによって治癒されたこともあり特に目立った外傷もない様子をエリオやキャロに見せた。

すると、そんなフェイトに向かって先ほどまで浮かない顔をしていたサスケがこう言ってきた。

「やせ我慢はあまりするなよ。顔が渋いぜ。」

思わぬ言葉をサスケから口されると、フェイトは顔を赤く染めながらこう言い返した。

「な！？さ、サスケだって人のこと言えないくせに！」

「お！それもそうか！！ははははは！！！」

「もう！！」

フェイト頬を膨らませて起こった様子を見せるのに対して、サスケは一人甲高い声で底ぬけた笑い声をあげる。

その後、二人は何気ない会話をしながら次第に心を打ち解けていった。

そんな二人の様子を傍で見ていた恋次や他の前線一同はこの奇妙な光景に目を丸くしていた。

「何だよ・・・あの二人・・・やけに馬が合ってるじゃねぇか？」

「ほんとだね。フェイトさんも、男性と話すだけであんな風に笑うなんて・・・」

と、その時場の雰囲気を見た瞬間はやてが不敵な笑みを浮かべてこんなことを口にしてきた。

「はは～～ん。させては、あれがフェイトちゃんの初恋の人やな？」

「「何!?」」

「え!?じゃ・・・フェイトさんの恋煩いって言うのは・・・」

「本当だったんですか!?」

「嘘みたい・・・」

はやての言葉に半信半疑の表情を浮かべる一同だったが、少なくともフェイトがこのサスケという男と一緒に話をしているだけでここまで楽しそうな顔を浮かべる光景を見ては、納得せざるを得ないというものもあった。

一先ず、全員はそういうことにして胸の中にしまいこむことにした。

その後、場の雰囲気がある程度和んできたところで機動六課一同はサスケ達忍者戦隊カクレンジャーからことの経緯とあの謎の妖怪についての情報を聞き出すことにした。

その上で、機動六課の方も自分たちの正体に関して出来るだけ簡潔した内容で説明をしていった。

「兎に角、事情は大体読み込めました。あなた方が妖怪退治を専門に扱うカクレンジャーで、その為に各地を旅してるのも分かりました。」

「俺達も、あんたらのことは大体分かったけどよ・・・魔法って言うのはどうもな。第一、想像していた魔法とは全然違うんだけどな・・・」

すると、死神であるが現在は特製の義骸を着ている恋次がこう言った。

「俺達だって初めて見たときは同じ気持ちだったよ。つうかよ、妖怪退治を専門に扱ってるなら、あの妖怪のことも詳しく知ってんじゃねぇのか?あいつは何モンだ?」

「サスケ。教えてくれる?」

隣りにいたフェイトがそう尋ねると、サスケは徐にあの妖怪の名前を口してきた。

「・・・あいつは妖怪“人形神(ひんながみ)”だ。」

「ヒンナガミ?」

首をかしげる一同だったが、博学のユーノはその名前を聞くと暫く考え込んだのちとある民俗学者のい著書の中に出てくるその妖怪に関しての情報を口にしだす。

「聞いたことがある。確か・・・墓場にある土で作った人形を指して、それを祀ると、どんな願い事でも叶い、欲しい物がすぐ手に入るという富山の憑き物妖怪ですねよ?」

「博識だな。そうだ・・・だけどその反面、人間の欲望で作られた故か一度でもこれを祀ると、人形神は祀った者に強力に取り憑き、決して離れることはないとされる。そのために祀った者が死ぬ際には非常に苦しみを味わうことになり、その上に死後も人形神が離れることはなく、ついには地獄へ堕ちちまう。」

「そんな妖怪が、何で現代に蘇ったんだ?」

妖怪の様な名前の鬼太郎がそう言うと、サスケは更に話を掘り下げる。

「数週間前のことだ。墓石に貼られていた封印の札がなんかの拍子で取れて、あいつが出てきたんだ。最初はなんら変哲も無いただの妖怪だったが・・・・・今日はまるで強さが別物だった。」

「恐らく、あなた方の集めてるアンゴルモアって奴の影響ね。」

「あの妖怪が何所でアンゴルモアを手に入れたかは知らないが、放っておけばまた破壊と虐殺を繰り返すに違いない。そもそも、奴は

どうしてそこまでして人間を殺すんですか？」

ユーノがそう尋ねると、サスケは人形神が執拗に人間に対して憎悪の感情を抱くのかを赤裸々に語り出す。

「奴は数百年前、欲望で目が眩んだ莫迦な人間どもに酷い仕打ちにあってな、未だにそいつを根に持ってんだ。今の奴は、人間を残らず殺すことで自分の復讐を成し遂げようとしている。」

そんなサスケの話を聞き終えると、全員は黙り込んでしまい、暫くの間を置いてから恋次が徐に舌打ちをしながらこう呟いた。

「外道だな。」

「妖怪の大概は外道じゃねえのか？」

すると、フェイトはこれからの方針についてサスケに尋ねる。

「サスケ。これからどうするの？」

「決まってる。奴を倒しに行くんだ。」

「でも！その傷じゃまだ・・・！」

なのは達がある程度の治癒は済んだといっても、それでもまだ全力で戦えるとは到底思えないサスケの身を案じるが、サスケの決心は固かった。

「ここで動かなかったら、あんなクソヤローに罪もない人達が殺されていくんだ。俺はそんな事絶対に許さない。悪人だろうと何だろ

うと、苦しむ人を放っておけないんだ！」

「！」

「サスケ・・・」

サスケの言葉に思わず胸打たれるフェイトと、そんなサスケの言葉を傍で真摯に聞きとめる鶴姫。

「たとえ“刺し違えてでも”、俺はあいつを止めてみせる！」

サスケの言葉が司令室に響き渡り、その後沈黙が流れる。

すると、黙って話を聞いていたユーノが息を吐きながらふとこう言ってきた。

「・・・・・ふう～～～“刺し違えてでも”・・・ですか。」

「？ユーノ君・・・」

「気持ちは分からなくはないですよ、サスケさん。確かに、正義気感の強い貴方ならそう言うのも可笑しくは無い。だけど・・・・・・甘ったれてんじゃねぇ！」

「！」

ユーノは声を凄ませサスケに向かってそう言うと、サスケや周りでそれを聞いていたフェイト、前線メンバーの全員が驚きを隠しきれなかった。

「ユーノ・・・！」

「ユーノ先生・・・」

隣りで凄んだユーノの声を聴いていたなのはも、身の毛が縮こまるような感覚に陥るが、勘違いしないでほしい。

ユーノは何も怒っているのではなく、あくまでもサスケの口にした言葉、刺し違えるというものに対して、反論の姿勢を見せているのだ。

そして、ユーノは驚きを隠せないでいるサスケに向かって次のように語り出す。

「“戦いに美学を求めるな。死に美徳を求めるな。己一人の命と思うな。本当に護りたいものを護りたければ背中から斬れ。”ただの死神でさえ、霊術院でそう習うんだ。特に、自分一人の命と思うな・・・ここは最も大事なところです。」

「自分一人の命と思うな・・・」

このユーノが口にした言葉に、思わず復唱するサスケ。

そんなサスケに、ユーノは更にこう言ってきた。

「あなたがここで奴と心中しても、それは貴方にとっても仲間の皆さんにとっても決して報われる話ではない。あんな外道と一緒に死ぬなんて、僕は馬鹿げてると思う。あなたが一人死ねば、カクレンジャーのメンバーも・・・そこにいるフェイトも・・・確実に不幸

になる。」

「な・・・！」

その瞬間、サスケの心に衝撃が奔った。

そして、一度周りにいる浮かない顔を浮かべた仲間と寂しい瞳で自分を見つめるフェイトの顔を見た瞬間、サスケは目を見開いた。

「サスケ・・・」

「フェイト・・・」

サスケは、そんなフェイトや仲間たちの顔を見ると、自分の考え方がいかに愚かで要地であったたということを悟り、思わず拳を強く握りしめる。

「俺は・・・・・大切なことを忘れてだぜ・・・！」

サスケの言葉を聞いた一同は、漸くそのことに気づいてもらったことに安堵の表情を見せ、恋次はそんなサスケを諫めたユーノの言葉に感服し、思わず拍手をする。

「へ！流石はユーノ大先生だ。言うことが違うぜ。確かに、俺だってあんなクソヤローとてめぇが心中するなんて真似は許せる話じゃねぇな。何もてめぇらだけで戦わせるだなんて言ってねぇさ。俺達も力を貸すぜ。クソヤローを倒して、てめぇらは生きる。それで決まりだ！」

「ああ。君たちの足手纏いにはならないつもりだ。僕たちも協力さ

せて欲しい。」

「大量虐殺など、この世で最も許しがたい大罪だ。」

「みんな・・・・・・」

恋次・吉良・ルキアの言葉を聞き意表を突かれたかのような表情を浮かべるサスケ

すると、鶴姫が不意にサスケの肩をたたいてきた。

「サスケ。」

「鶴姫。」

「みなさんのご好意に、甘えさせてもらいましょう。良いわよね、みんなも！」

「ああ！」

「もっちろん！」

「ザッツオーケー！」

鶴姫の言葉に賛同して、サイゾウ・セイカイ・ジライヤの三人が潔い返事をすると、サスケも決意のこもった表情でその場にいる全員に向かってこう言ってきた。

「・・・よし。それじゃ、頼んだぜ機動六課！俺達に力を貸してくれ！」

「「「「「はい！」」」」」

フォワード一同が実に清々しい返事をすると、フェイトもバルディッシュを握りしめながらサスケに語りかける。

「サスケ。私も何が出来るか分からないけど、協力させてくれる？」

「当然だ。お前には借りがあるからな。俺と一緒に戦って欲しい。」

「うん！」

「ほんま、みんないい人たちやな。そうと決まったら、早速現地に向ってもらわんとな。」

と、はやてがそう言った直後。

待ち侘びていたとばかりに妖怪人形神がアンゴルモアの力を暴走させ始め様子がモニターに映ってきた。

「アンゴルモア反応！」

「動き出したようだよ。」

「よし。では、今回はライトニング全員と死神部隊の混成チームがカクレンジャーのサポートに回って欲しい。万が一のことも考えて、ユーノ・なのは。君たち二人も手伝って欲しい。」

「ああ。」

「了解。」

「よし！それじゃあ、行くぜみんな！！」

サスケはそう言うと、カクレンジャーとフェイト達、更にはユーノとなのはも引き連れてシノビの世界で性懲りもなく人間を無差別に虐殺する妖怪人形神の暴走を止めるべく、現地へと急行する。

その頃、現地の方では人形神の力の前に人々は悲鳴を上げながら逃げ回るばかりであった。

「助けて！！！！！！」

「きゃあああああ！！！！」

人形神は人間が築き上げた文明の結晶を破壊しては、無差別に人間の精気を吸って力を蓄え、密かにカクレンジャー達との再戦を心待ちにしていた。

「へへへへはははははは！！！！！苦しめ苦しめ！！！俺の受けてきた苦しみを、同じだけ・・・いや、もっともっと苦しんで死んでもらう！！！ははははははは！！！！！」

と、その時。

「破道の三十三『蒼火墜』！」

不意にルキアの放った蒼火墜が人形神に放たれる。

「！」

蒼火墜を躱した人形神は、いつの間にか自分が人気のない採掘現場の様な場所に立っていることに気づくと、その前方の崖の上にたたずむサスケを始めとするカクレンジャー五人とその後ろのフェイト達の姿に気づく。

「ち・・・性懲りも無く。また貴様らか・・・まぁ密かにぶっ斃したいとは思っていたんだがな。今度は違う観客も増えてるようだ。」

「やいやい、妖怪人形神！さっきはよくも俺達やフェイト達を散々甚振ってくれたな！今度は俺達がお前を甚振ってやる！覚悟しろ！！」

「みんな、行くわよ！」

鶴姫がそう言うと、サスケ達はドロンチェンジャーを取出し変身ポーズをとった。

「スーパー変化！」

「「「「「ドロンチェンジャー！」」」」」

変身を完了させた五人は、自己紹介を省略して決め台詞を口にする。

「人に隠れて悪を斬る。忍者戦隊・・・」

「「「「「カクレンジャー見参！」」」」」

「ふん。ドロドロ、こいつらと遊んでやれ！」

人形神はドロドロの大軍を呼び出すと、一斉にカクレンジャー達の元へと向かわせた。

サスケやフェイトが向かってくるドロドロを見てカクレマルとバルディッシュを構える中、他のカクレンジャーや恋次・ユーノ達が前に出てくると武器を取り出しこう言った。

「雑魚は俺達がなんとかする。サスケ、フェイト。二人はあのクソヤローと！」

「早く、行け！」

「すまねぇ、みんな。行くぜ、フェイト！」

「うん！」

サスケとフェイトは全員にお礼の言葉をかけると、早速妖怪人形神に向かって走り出していった。

「さて・・・派手にやらかしてやるぜ！」

セイカイがそういうと、その言葉を皮切りに残りのメンバーが向かってくるドロドロを殲滅するために一気に総攻撃を仕掛けに行く。

「咆えろ、蛇尾丸！！！」

恋次と共にドロドロを相手にするジライヤはまず、蛇尾丸である程度の数のドロドロを殲滅させるとすぐに、特定の印を結んで忍術を発動させる。

「オン・ガマ・ニン　岩地獄の術」

ジライヤはその瞬間、崖周辺に転がっていた大きな岩を次々とドロドロめがけて飛ばしていき、蛇尾丸の攻撃で残り少なくなったドロドロ達もまたその術の手にかかり無残に倒されていく。

恋次はほくそ笑むと、ジヤイヤの肩をたたき実力を称賛する。

「やるじゃねぇか、お前！」

「センキュー、レンジ？」

疑問形のごとく語尾を上げるジライヤの発音に思わずこけそうになる恋次。

「語尾を上げるなよ。」

その頃、水辺周辺でドロドロと対峙していたサイゾウ・ルキアの二人はと言うと、まずドロドロの注意を引くためにサイゾウが水の上を走り抜ける得意技で別名「水渡りの術」の異名を持つ忍術を発動。

「忍法水走り」

サイゾウの後に続く形でドロドロが数に物を言わせて水の中からサイゾウを追いかけるが、その瞬間サイゾウは水の上に足を止めると振り返り、ドロドロ目掛けて巨大な津波を発生させる。

「隠流・ビッグウェイブ！」

ビックウェイブに飲み込まれ、大きなダメージを負ったドロドロを

見て、サイゾウは別の場所で待ち構えていたルキアに合図を送る。

「今だ、ルキア！」

「次の舞・『白漣』！」

ルキアは白漣を使ってドロドロを一斉に氷結させていき、その後氷解させた。

「やったぜ！ナイスだ！！」

「ああ。貴様も中々だった。」

二人はお互いにタッチを躱し、即席のコンビネーションに満足する。

また、セイカイと共に戦いを繰り広げる吉良の方も恋次やルキアに負けず劣らずの即席コンビネーションを披露していた。

「とう！！！おりゃあああ！！！！」

セイカイは吉良の援護を受けつつ、ダイナミックな戦法でドロドロをカクレマルで切り伏せ、岩でも深く突き刺さり、真っ二つに割ってしまうニンジャイエロー専用の手裏剣を投げつける。

「熊手裏剣！」

熊手裏剣に当たったドロドロはものの見事に切り裂かれ、その多くが殲滅されていく。

セイカイと比べれば決して派手ではないが、吉良も己の斬魄刀を解

放して一気にドロドロを畳み掛けていく。

「面を上げろ、侘助！」

吉良の侘助の斬撃を受けたドロドロは重さに耐えかね地面に倒れていく。

「やる！！それじゃあ俺も・・・！」

と、吉良を見てさらに鼓舞した瞬間、隙を見せたセイカイは一人のドロドロに切り伏せられる。

「うわあああ！！！」

「セイカイ！」

吉良が声を上げてセイカイの安否を気遣った直後、セイカイはスーツだけを残してドロドロと吉良の前から姿を消していた。

「！？抜け殻・・・って！！」

と、吉良が不審に思った直後目の前に現れたのは巨大な自分の幻を作り出して敵を攻撃しようとしていたセイカイだった。

「ははははははははは！！！！！！巨大あやかしの術。とりゃあああああ！！！！」

セイカイは巨大な姿からカクレマルを振りおろし、その一撃でドロドロを殲滅させ、元の大きさへと戻ると唖然とする吉良に向かってこう言った。

「どう？」

「あ・・・ああ・・・凄いと思うけど・・・」

「だろ！やっぱ俺って凄い！」

吉良は自信過剰なセイカイのリアクションを見て、ため息を漏らす。

死神部隊が順当にドロドロを殲滅させた頃、鶴姫とライトニングフォワード組は共闘してドロドロと戦闘を繰り広げていた。

「折り鶴の舞」

鶴姫は7つの折り鶴を操ってドロドロを爆発させて数を減らす中、その隙にキャロが詠唱を行いエリオのスピードを強化させようとする。

「我が乞うは疾風の風。若き槍騎士に駆け抜ける力を。」

〈Ｂｏｏｓｔ　Ｕｐ　Ａｃｃｅｌｅｒａｔｉｏｎ〉

キャロの支援を受けたエリオのストラーダは何時もの黄色の魔力光と一緒に桃色の魔力光が混じり合わさる。

「行って、エリオ君！」

「了解！行くよ、ストラーダ！」

〈Ｙｅｓ　ｓｉｒ〉

エリオはドロドロに狙いを定めると、速度強化されたストラーダを持って突っ込んでいった。

「でやあああああああ！！！！！」

加速によって貫通力を増したエリオの槍撃を受けると、ドロドロは一人残らず撃破される

それを見ていたキャロや鶴姫は歓喜の声を上げ、互いに笑みを浮かべる。

「やった！」

「やるじゃない、君たち！」

「はい！ありがとうございます。」

エリオとキャロが鶴姫とともにドロドロを見事撃退させたその頃、アギトとユニ損を果たしたシグナムは自慢の火炎の剣戟でドロドロを切り伏せていく。

「「火龍一閃！！」」

火龍一閃の攻撃を受けたドロドロは灰となって消えていく。

「ふん。所詮我らの敵ではないな。」

〈おうよ・・・って、まだまだ来やがってぜ！〉

アギトがそういうと、前方よりさらに数に物を祝えたドロドロの大軍が押し寄せる。

シグナムはそれを見ながらカートリッジを補充させ、不敵な笑みを浮かべる。

「何、全て叩き潰せばいいだけだ。お前はこの私と何年いると思ってるんだ？」

〈へ！それもそうだった！！〉

アギトはそう答えると、シグナムとのユニゾン率を先ほどよりも上昇させると炎熱加速によってレバンティンの刀身の炎を強化させ、一気に攻撃を仕掛ける。

「はあああああ！！！！」

シグナムとアギトも抜群のコンビネーションでドロドロの大軍を圧倒しているその頃、その二人に負けず劣らずのコンビネーションで互いに背中を合わせながらドロドロを殲滅していくユーノとなのは。

「はっ！」

「ふん！」

得意の砲撃と斬魄刀戦術で数を減らす中、二人をあざ笑うかのようにドロドロは無尽蔵に数を増やしていく。

なのははそんな光景を目の当たりにしながら、一瞬顔を歪ませてしまう。

「数が多い・・・」

「ギブアップかい？」

「まさか♪」

なのはは悪戯っぽくユーノにそう返事を返すと、それを聞いたユーノも安心した様子でさらに続ける。

「よし。それでそエースオブエースだ。こっちの方は僕が一掃する。なのははそっちに専念して！」

「うん。何時もどおりだよね♪」

「え？」

「小さい頃にも言ったよね。ユーノ君、何時も私と一緒に居てくれて・・・護っててくれたよね？」

なのはは笑顔でそういうと、ユーノに背中を案した様子で任せながらエクシードモードのレイジングハートの先端からストライクフレームを生成する。

〈Ａ・Ｃ・Ｓ　ｓｔａｎｄ　ｂｙ〉

そして、そんな自分のことを真摯に護ってくれるユーノに子供のころに行った時と同じ科白を口にする。

「だから安心して戦えるんだよ。背中が何時も、暖かいから。」

「・・・そうだね。でも、それは僕も同じさ。君の笑顔で僕は何時だって戦っていけるんだ。君が僕に勇気をくれるからね。」

「ユーノ君。」

なのはもそんなユーノの言葉を聞くと、思わず頬を赤くしてしまう。

ユーノは昔と同じようになのはの背中をしっかりと支えながら、晩翠を光らせ前方から向かってくるドロドロを見武器を構える。

「行くよ、なのは！」

「うん！」

二人はそういうと、同時にドロドロに向かって飛び出していくとなのははまずストライクフレームで一気にドロドロの殲滅に取り掛かる。

「Ａ・Ｃ・Ｓドライバー！！」

〈Ｃｈａｒｇｅ〉

高速で駆け抜けるなのはの攻撃を受けた直後、次々と爆発を起こして消滅するドロドロの大軍。

同じころ、ユーノは一度数に物を言わせて襲撃してくるドロドロの前に翡翠の殻を発生させると防御を敗れないでいるドロドロに向かって不敵な笑みでこう言ってきた。

「翡翠の魔導死神ユーノ・スクライアの鉄壁の防御を破ろうろなんて、愚の骨頂だ。」

そう言うと、ユーノは地面に晩翠を突き刺しそこから翡翠斬を流し込むという離れ業をやってのけた。

「輝け、晩翠！」

地面へと流し込まれた翡翠斬によってドロドロの大軍が間接的にその衝撃を受けてしまい瞬く間にユーノの前から姿を消していった。

こうして有象無象ともいえるドロドロの大群を殲滅させたユーノ達。

そして、残す敵は妖怪人形神だけとなり高速移動を駆使して翻弄するフェイトとサスケが今まさに熾烈な争いを繰り広げていた。

「はあああああああ！！！！」

「せいや！！！！！」

サスケのカクレマル、フェイトのザンザーをその身に受け劣勢に立たされる人形神の顔がゆがみ始める。

「ぐっ！！小癪な！！」

人形神はそう言うと、妖気を圧縮させた光線をフェイト目掛けて放った。

身構えるフェイトだったが、サスケが前に出るとフェイトの身代わりとなってその攻撃を受けてしまう。

「うわあああ！！！」

「サスケ！！」

だが、サスケもただ黙ってその攻撃を受けたのではなかった。

攻撃を受けると同時に最大８人に分身して攻撃するニンジャレッドの得意技、分け身のっ術を発動させた。

「分け身の術」

「な・・・何！？」

「分身術・・・！」

サスケの術に思わず困惑する人形神と、目を開いて驚愕するフェイト。

「ささささ。どれが本物か分かるかな！？」

挑発した口調で八人となったサスケが人形神の周りを囲んでくる。

「ええい！！忌々しい猿が！！」

人形神はサスケの挑発に憤り、サスケ目掛けて攻撃を仕掛けようとした途端、サスケばかりに気を取られていた人形神は背後からバインドを仕掛けるフェイトに気づかなかった。

〈Ｌｉｇｈｔｎｉｎｇ　Ｂｉｎｄ〉

「!?」

両腕を固定され、身動きが出来なくなった人形神にフェイトはこう言った。

「サスケ一人じゃないんだ。私のことも、忘れるな。」

「ナイスだ、フェイト!」

サスケはフェイトの援護に感謝しつつ、八人全員で人形神へと近づき周囲を回って撹乱してから一斉にジャンプし、本体だけが人形神目掛けてニンジャレッドの必殺剣を浴びせる。

「行くぜ、隠流・満月斬り」

サスケはカクレマルで円を描き、そこから一気に斬る必殺剣技「満月斬り」を発動、人形神目掛けて刀を振り下した。

「ていや!!」

「ぐっ!!」

サスケの攻撃をまともに受け、切り付けられた場所を苦い顔を浮かべながら押さえる人形神。

「どうだ!?分身一体剣の斬れ味は?」

「く・・・おのれ・・・!!」

サスケの攻撃を受け、相当なダメージを受けた人形神。

仲間たちもドロドロを殲滅させ、サスケとフェイトの元に近づく。

「サスケ！」

「大丈夫か！？」

「フェイトさんも、無事で！」

「うん。」

「さて、みんなが揃ったところで・・・一気にクライマックスと行こうか！」

すると、カクレンジャーにリーダー、鶴姫は真っ白にデザインされたラグビーボール、通称カクレンジャーボールを取り出しチーム技を発動しようとしていた。

「カクレンジャーボール！」

「「「「「レディ、ゴー！！」」」」」

その掛け声とともに、サスケ以下男四人はその場から四方へと駆け出し、鶴姫を起点としてジヤイヤ・セイカイ・サイゾウとボールが色を変えながら渡っていく。

「ジライヤ！」

「セイカイ！」

「サイゾウ！」

そして、サイゾウがカクレンジャーボールを握りしめて最後のサスケを待ち構える。

「サスケ！」

サスケは勢いよく走ってくると、サイゾウが手にしたカクレンジャーボールに向かって強力な蹴りを入れる。

「カクレシュート！」

サスケの放ったカクレンジャーボールが真っ直ぐ人形神の元へと飛んでいき、疲労困憊で避けることができなった人形神はその一撃を受け、後ろの方へと吹き飛ばされる。

「のあああ！！！」

これを間近で見ていたフェイト達はカクレンジャーの連係プレーに思わず驚愕する。

「凄い！何て連係プレーだ！」

「よし♪それじゃ僕達もカクレンジャーに倣って・・・」

ユーノはそう言うと、魔力と霊力を圧縮させて作ったカクレンジャーボールと酷似した特注品の球を手に持った。

「即席、機動六課ボール！」

一同は最初戸惑いの表情も見せていたが、直ぐに戦士としての心に火がつくとそれを実行に移すことにした。

「面白れー！」

「上手く出来るかどうか分からないけど、やってみよう。」

「大丈夫です。きっと上手くいきます！」

「そうだな。」

ユーノは全員の言葉を聞き入れると、アギトにそれを渡してカクレンジャー同様それぞれの場所に立って掛け声をかける、。

「それじゃあ・・・レディー、ゴー！」

四方に散らばったユーノ達。

アギトはキャロから順にボールを手渡していく。

「キャロ！」

「エリオ君！」

「シグナム副隊長！」

「朽木！」

「吉良！」

「阿散井君！」

「ユーノ！」

「なのは！」

ユーノがなのはにボールを手渡すと、なのははそれをしっかりと両手で握りながら一番最後となったフェイトの攻撃を待つ。

「最後、フェイトちゃん！」

フェイトが自分の元へザンバーフォームで突っ込んでくると、なのははタイミングを見計らってボールを手放し、フェイトは絶妙のタイミングでホームランを撃ち込んだ。

「ホームランシュート！！」

フェイトのホームランシュートが曲線を描きながら人形神に向かうと、人形神は見事にmその一撃を受けて更にダメージを負って吹き飛んだ。

「ぐあああああああ！！！！！！！」

即席の技であるにも関わらずこれだけの連係プレーを発揮させる機動六課のメンバーを見て、カクレンジャー達も大いに驚愕していた。

「すげー！」

「あれが即席かよ！？」

「流石ね。」

「グレイトスピリッツ！」

人形神は両チームによる連係技をその身に受け、体中から湯気が湧き出ていた。

「ぐ・・・こ・・・この・・・！！」

全員はそんな人形神を見ながら、暫く警戒していると不意にフェイトがサスケに向かってとどめの一撃を加えるようにと提案してきた。

「サスケ。今がチャンスだよ。止めを。」

「ああ。だが、俺一人じゃ心細い。一緒に行こうぜ、フェイト。」

サスケの意外な言葉を聞いて思わず目を丸くするフェイトだが、直ぐに清々しい表情で返事を返した。

「・・・うん！」

サスケとフェイトは人形神に向かい合うと、それぞれの最強の必殺技でとどめを加えようとしていた。

「雷鳴剣ヒカリマル！」

サスケはそう言うと、三神将「ツバサマル」より与えられた稲妻を呼ぶ剣、ヒカリマルを取出しカクレマルと併用させる。

一方でフェイトは換装形態である真・ソニックフォームで一気に勝

負をつけようとする。

「真・ソニックフォーム。」

〈Ｓｏｎｉｃ　ｆｏｒｍ〉

二人の準備が整うと、体をつらつかせる人形神目掛けて二人は飛び出していく。

「「はあああああああああ！！！！」」

飛び出して行った二人は容赦のない斬撃を弱りつつある人形神に仕掛け続け、一瞬のすきを見せた瞬間にフェイトがカートリッジをロードし、プラズマザンバーを浴びせる。

◇

「雷光一閃！プラズマザンバー！！」

プラズマザンバーが放たれた途端、人形神の体に流れ込んでくる激しい電撃が弱り切った人形神を追い詰める。

「のあああああああ！！！」

「サスケ、今！！」

サスケはフェイトの言葉を聞き入れると、カクレマルとヒカリマルを合体し二本の刀のエネルギーをスパークして、稲妻を呼び起こす必殺技を発動する。

「隠流・雷鳴斬（らいめいざん）・・・・・・せいや！！」

「ぐっは！！！」

サスケの雷鳴斬が決定打となると、人形神は火花を散らしてその場に倒れこんだ。

「よっしゃあ！！」

「やった！」

二人のとどめの一撃を受けた妖怪人形神だったが、それでもなおしぶとく立ち上がると、最後の手段に打って出る。

「く・・・カクレンジャー・・・よくもよくも・・・だが、俺は終わってなどいないぞ。こうなったら巨大化して復讐を遂げてやる。」

すると、その瞬間頭上から唐突に雷が降り注ぎそれに直撃すると人形神の体は巨大化する。

「ほおおおおおおおおおお！！！！！」

人形神が巨大化するとはさすがに想定していなかったユーノ達は目を丸くして驚いた。

「な！？巨大化なんてありかよ！！」

「く・・・！一体どうすれば！！」

と、苦い顔を浮かべていたその時。

「待った、待った、待った！！」

そんな全員の耳に男性と思われる声が聞こえてくるかと思いきや、空を見上げた瞬間全員の瞳に映ってきたのは筋斗雲に乗った青一色の巨大な忍者であった。

「俺様を忘れるんじゃねぇ！！」

「何！？あの大きな忍者は・・・！？」

「ニンジャマン！」

「「まんまだね。」」

ジライヤがそう言うと、ユーノと吉良は真顔でそう呟いた。

「助けに来てやったぜ、カクレンジャー！」

ニンジャマンは筋斗雲から飛び降り、人形神に対峙する。

「何だ貴様は？」

「俺を知らないとは三流もいいところだな。このニンジャマン、妖怪なんぞに後れは取らん！」

ニンジャマンはそう言うと、背中のニンジャソードを取り出し巨大化した人形神に向かって突進し、体を切りつけようとする。

だがしかし、人形神はそんなニンジャマンの動きを容易に見切ると圧倒的な力を前にニンジャマンを逆に跪かせる。

「ぐっ！何だこいつ・・・！？ただの妖怪じゃねぇ！！」

ニンジャマンは妖怪の常軌を逸した人形神の力の前に、思わず困惑する。

「ははははは！！！どうした、その程度か？」

人形神はそういうと、その後も容赦ない攻撃を仕掛け続けてニンジャマンを甚振っていく。

「ぐあああああ！！！」

強力な妖術を前に為す術もなく傷つくニンジャマンを見ながら、声を荒げるサイゾウ。

「ニンジャマン！」

「マズイ。俺達も行くぜ！」

「行くって、あんな大きいの相手にどうやってです！？」

すると、そんなキャロの言葉を聞いてセイカイは自信に満ちた様子でこう答える。

「カクレンジャーを舐めてもらっては困るよ、機動六課さん。」

「巨大化には巨大化さ。」

そう言うと、サスケを始めとするカクレンジャー五人は忍之巻（しのびのまき）と呼

ばれる隠流忍術の極意が記された巻物を取り出し、それを使って三神将の一人、「技」を司る隠大将軍の分身体を呼び出す。

「隠流超忍獣の術。ゴッドサルダー！」

「ゴッドカーク。」

「ゴッドクマード」

「ゴッドロウガン」

「ゴッドガンマー」

五人が巻物を開いた瞬間、紙に書かれた「忍」の文字が浮かび上がり実体化すると、そこからそれぞれが司る超忍獣が姿を現し、五人と融合を果たす。

「「「「「おおお！！！！！」」」」」

全員はカクレンジャー達のつか秘術を前に感服するばかりであった。

「あんな術まで使えたのかよ！？」

「流石は忍者戦隊カクレンジャー♪」

「行くぜ、みんな！合体だ！！」

サスケがそういうと、全員は融合を果たしたゴッドサルダー、ゴッドカーク、ゴッドロウガン、ゴッドクマード、ゴッドガンマーの五体を五神合体させる。

「「「「「五神合体！」」」」」

五体のうち、ゴッドサルダーとゴットロウガンが右腕・左腕となり、ゴッドクマードはボディ、ゴッドガンマーは下半身、ゴッドカークは顔となってそれぞれが合体し、巨大な合体ロボ、隠大将軍へと変貌する。

「「「「「隠大将軍（かくれだいしょうぐん）　推参」」」」」

ユーノ達は合体したその姿を目の当たりにし、目を広げて驚愕するばかりだった。

「すげー！！」

「これが話していた三神将の一人と言う訳か。」

そんな中、ニンジャマンは一人人形神の攻撃を受け続け、その場に跪いてしまう。

「ぐっ！」

満身創痍となったニンジャマンの前に合体した隠大将軍が姿を現す。

「ニンジャマン！しっかりしろ！！」

すると、そんな実に情けない姿のニンジャマンを見て、大笑いをしながら人形神は言ってはならないフレーズを口にしてしまう。

「ははははは！！！！青二才が、大層な口を利くからそうなるんだ

よ！」

その瞬間、青二才という言葉に反応したニンジャマンの心に怒りの炎が燃え上がる。

「・・・青二才・・・青二才って言ったなお前・・・・・・それを言っちゃ～おしめぇよ。俺はな、その言葉が一番嫌いなんだよ！！！！！！！！！！おおおお

を開始。

「サムライジャベリン！」

だが、その時人形神は不敵な笑みを浮かべるとサムライジャベリンを躱すそぶりを一切見せずに易々と受け止めた。

「「！」」

驚愕する二体を前に、人形神はこう言ってきた。

「許さない？貴様らに許されようがそうでなかろうが・・・知った事ではない！！！」

サムライジャベリンを手で放した人形神は、その瞬間目から光線を放ち二体に目掛けて攻撃を仕掛ける。

「「ぐあああああああ！！！！」」

不意を突かれ大きなダメージを負ってしまった二体はその場に倒れ、全身から白い湯気を上げた。

「ははははは！！！！カクレンジャー。今度こそ本当のサヨナラだ。」

「ぐっ・・・！！」

隠大将軍は傷口を押さながら何とかその場に立ち上がるが、受けたダメージの大きさで体が思うように動かずサムライマンと共に絶体絶命のピンチに陥っていた。

「さらばだ！」

そう言って人形神がとどめの攻撃を加えようとした、その時。

〈Ｌｉｇｈｔｎｉｎｇ　Ｂｉｎｄ　Ｅｘｐａｎｄ〉

「！？」

人形神の体が突如、強化されたフェイトのライトニングバインドによって自由を奪われ、その背後から卍解状態の恋次とルキア、吉良の三段攻撃が仕掛けられた。

「鋼鉄狒骨大砲！！」

「完全氷白」

「比重王斬！」

恋次とルキアの攻撃である程度のダメージを負った直後に人形神の体は侘助の攻撃によって一気に重さで沈み込む。

「ぐっ！！何だ・・・身体が重い！！」

「カクレンジャーだけに目を捉われてんじゃねぇよ。俺達だって居ること忘れてるんじゃねぇ。」

「みんな！」

カクレンジャーとサムライマンは地獄で仏とばかりに窮地を助けられると、そんな恋次たちの言葉に感動する。

〈Ｈｙｐｅｒ　Ｅｘｐｌｏｓｉｏｎ〉

と、その瞬間動けない人形神目掛けてＩＰカートリッジを使ったエリオとキャロ、ユニゾン状態のシグナム・アギトが更なる攻撃に打って出る。

「サンダーブレイド！」

「フリード、ブラストバーニング！」

「「火龍一閃！」」

四人の凄まじい一撃を受け、険しい表情となる人形神。

「ぐっ！！！き、貴様ら！！」

すると、その四人の後ろから空中でエネルギーをため込んでいたなのはとフェイトの二人が強力な一撃を放つ。

「スターダストブレイカー！」

「トライデントスマッシャー！！！」

二人の桃色と金色に輝く魔力砲撃に飲み込まれ、人形神はあまりの威力に声を上げる。

「ぐあああああ！！！何だ・・・！！！この力は！！」

「フェイト！」

サスケはフェイトの攻撃を目の当たりにし、思わず声を上げた。

「サスケ。一人で戦ってるんじゃないんだよ。みんなで一緒に・・・戦っているんだ。」

「・・・ああ。そう言えばそうだったな。」

フェイトからその言葉を聞かされると、サスケも思わず納得した様子を見せ再び人形神に構え、サムライマンも徐に立ち上がる。

「何だか知らないが、助かったぜ。よっしゃあ!!最後は決めるぜ!」

サムライマンはそう言うと、掌に気を溜めると魔力砲撃に飲まれている人形神に向かって必殺技を放つ。

「サムライ激怒ボンバー!」

サムライマンの放ったその技が着弾し、人形神は徐々に追い詰められていく。

「ぐっは!!」

やがて、魔力砲撃から解放されボロボロの状態となった人形神が出てくると、待っていたとばかりにユーノが死角よりチェーンバインドを発動させ、人形神の体を完全に捕える。

「う!!」

「拘束術に関しては淫獣と呼ばれてきた頃からの僕の十八番さ。さ、こいつでも喰らいな。」

そう言うと、ユーノを伝って灼熱の業火を人形神に与える。

「“晩翠月光歌・隠者の呪縛”」

鎖を通じて全身へと伝わってきた灼熱の業火に焼かれ、悲鳴を上げる人形神。

「ぎゃあああああああああああああああああ！！！！！」

「今だ、カクレンジャー！」

ユーノはカクレンジャーに合図を送り、カクレンジャーもそれに応えるように三神将、ツバサマルと強化合体を果たす。

「「「「「翼合体」」」」」

隠大将軍はツバサマルを背中に装着すると、空中飛行を可能としたスーパー隠大将軍へと変貌する。

「「「「「スーパー隠大将軍、推参！」」」」」

合体を果たすと、スーパー隠大将軍は急降下しながら左手の「ゴッドバーストチョップ」と右手の「ゴッドハンマーパンチ」を連続して放つ鉄拳ゴッドフィニッシュを強化したものを放つ。

「「「「「鉄拳フライングフィニッシュ！」」」」」

スーパー隠大将軍の技が人形神へと直撃すると、人形神は大きく吹っ飛んだ。

「のあああああああああああ！！！！！！！！！」

そして、最後の攻撃が決定打となると人形神は全身から火花を散らし最期の時を迎える。

「ば・・・莫迦な・・・この俺が・・・これしきのことで・・・倒されるなんて・・・人間たちに・・・苦しみを・・・・・・俺の憎しみを！！！！！！！！！！」

そして、人形神はその場に倒れ伏すと爆発を果たして煙となって消えていった。

「やったか。」

人形神を倒し、分離したアンゴルモアを回収しようとした矢先、アンゴルモアは一瞬にして砕け散り、ユーノ達はそれがもどきであると判断した。

「結局、アンゴルモアはアンゴルモアもどきだったけど・・・取り合えず一件落着だね」

「うん。」

本物のアンゴルモアではなかったものの、妖怪人形神を見事撃退することができたカクレンジャーと機動六課は戦いを終えると、そのまま帰路へと向かった。

後日、お礼という名目のもとカクレンジャー達はヴィヴィオが参加する保育所の地域イベントで自慢のクレープを販売していた。

「クレープ、いかがですか?美味しいですよ!」

鶴姫は保育所にやってきた大人や子供たちを次々に呼び込み、自慢のクレープを購入させていく一方で、恋次やアギトは屋台となっている猫バスのことをじっと凝視する。

「このバス一体どういう仕組みになってるんだ?」

「でも結構可愛いぜ、これ。」

アギトがそう口にすると、猫バスはアギトに足してお礼の返事をしてきた。

鶴姫が客を呼び込み注文を聞き入れたのを、サイゾウとセイカイがウェイターとして客に配っていく。

「はい、お待ちどうさま!」

「ジライヤ、あと五つ追加ね!」

「オーケー」

ジライヤはセイカイの言葉を聞き入れると、自慢の手先の良さで卵をパックに入った状態で綺麗に切断し、瞬く間にクレープ生地を焼いていく。

その頃、カクレンジャーの中で唯一クレープ販売に携わっていないサスケは何をしているのかというと、フェイトと一緒にあることをしていた。

それは、ヴィヴィオが現在出演中の劇『忍者戦隊カクレンジャー』の手伝いであった。

ヴィヴィオは桃色の忍び装束を着こなし、敵役の男子を次々に小道具の刀で切り倒していく。

「とあああああ！！！」

「ぐあああああ！！！」

ヴィヴィオの様になった演出に、劇を見ていた保育所の子供たちや大人までもがその演技のとりことなって歓声を上げる。

「見たか！これがニンジャピンクの実力よ！！」

そんな我が子の様子を後ろの方で二人暖かく見守るなのはとユーノ。

「にゃはは。ヴィヴィオったらすっかり様になってる。」

「こりゃ、将来大物女優になるかもね。」

「そう言えば、フェイトちゃんとサスケさんは？」

「ほら、あそこだよ。」

ユーノがそう言って舞台の方を指さすと、なのははそこでフェイトとサスケの姿を発見する。

「あ！」

なのはが見つけた二人はというと、より演出をリアルにするために陰でヴィヴィオ達を支える黒子の役として頑張っていたが、サスケとしては少々疑問にも感じていた。

「なぁ？何で俺らがこんな役やらんといけねぇんだ？」

「仕方ないよ。これも子供達のためだと思って・・・ね。」

フェイトはそう言って説得を試みるが、不意に上目づかいで自分を見てくることにサスケの理性が可笑しくなりかける。

「そ、そんな上目遣いで見るなって！」

後ろの方でこの仲睦ましい光景の二人を見ていたなのはとユーノも、思わず自然と笑みを浮かべる。

「「ははははは♪」」

やがて、忍者戦隊カクレンジャーの舞台は大成功の元無事に終了を果たすと、本物のカクレンジャー五人も猫バスに乗って機動六課の面々と惜別の挨拶を果たす。

「それじゃ、俺達はそろそろ行くぜ。」

「色々、お世話になりました。」

「あ、いえいえ。こちらこそ！」

鶴姫が頭を下げてくると、部隊長のはやてが代表して頭を下げる。

すると、後ろの方に立っていたフェイトが前に出てくると恥ずかしがった様子でサスケに声をかけてきた。

そんなフェイトの様子を見ていたサスケも、言いたいことを読み取り柔かい表情でこう返事をする。

「ああ。また会えるさ。その時は、もっとゆっくり色々と話そうぜ。」

これを聞いたフェイトは、思わず嬉しくなり満面の笑みを浮かべる。

「・・・うん・・・！そうだね。」

「サスケ！鶴姫！早くしないと置いてくぞ！」

「ああ。分かった。」

サイゾウにそう言われると、サスケと鶴姫はもう一度機動六課の面々に頭を下げるとバスへと向かって走り出す。

「じゃあな、機動六課のみんな！」

「本当にお世話になりました。それじゃあ！」

と、その時。

フェイトはバスへと向かって走り出すサスケの腕を掴む。

「待って、サスケ！」

「？」

まだ何か言いたげな様子のフェイトの言葉を聞き入れようと後ろを振り返ったサスケだったが、その瞬間サスケの方にフェイトの唇が不意に接する。

「・・・！！・・・・」

思わぬことに顔を真っ赤にするサスケと、その様子を見ていたカクレンジャーの四人、更には機動六課の面々は目を丸くして驚いた。

「「「「「ああああああああああああ！！！！！！」」」」」

「「「「「「ふぇ、フェイトさん！！！」」」」」」

「うそー！！！！！！」

「おやおや・・・青春だね。」

好きになった男性に生まれて初めてのファーストキスを果たしたフェイトは、いまだ顔を赤くしたままのサスケに向かってウィンクをしたのちこう言った。

「また何時か・・・ね♪」

「・・・ああ！」

恥ずかしがっていたサスケだったが、最後はしっかりとした表情で返事をし、フェイトに別れを告げようとしたその時、そんな二人の耳元に何故かシャッター音が聞こえてきた。

恐る恐る二人が振り返ってみると、そこには野次馬前回の八神はやてその人だった。

「よっしゃあ！！！！バッチリカメラに収めたで！！！！！」

「は、はやて！！！」

予想外なことにフェイトはサスケ以上に顔を赤くし、鶴姫たち四人も今回のサスケの行動には腹の虫がおさまらずに、思わず怒りをぶつけに来た。

「サスケ！！！！あんたって人はもう！！！！！」

鶴姫は嫉妬心の様なものを抱きながらサスケの髪や顔を強く引っ張る。

「や、止めてくれ鶴姫！！！！お願いだから・・・ぎゃあああああ！！！！！」

その直後、鶴姫の後に続く形でジェラシーむき出しのサイゾウ・セイカイ・ジライヤが加勢に加わる。

「サスケ！！！！羨ましすぎるぞ、チキショー！！」

「何でお前ばっかり良い思いするんだ！！！！」

「オーマイゴッド！！」

「いたたたたた！！！！！もう勘弁してくれよ！！！！！」

四人からこっ酷く仕打ちを受ける哀れなサスケと、はやての持ったカメラを取り返そうと全力疾走で駆けるフェイト。

「はやて！！！！！それ渡してってば！！！！」

「ほほほほほほ！！！！！これははやてちゃん秘蔵写真コレクションの一つとしてしっかり保存させてもらうからね、フェイトちゃん♪気が向いたらリンディ提督にも送っておくから！」

「そ、それは駄目だってば！！！」

あまりの恥ずかしさとはやての達の悪い行動に危惧の念を覚えたフェイトはソニックムーブなみにこういう時に限って逃げ足の速いはやての後を必死になって追いかけていく。

そんなはやての行動を見ていたヴィータやシグナムは呆然としていた。

「鬼だな・・・完全に・・・」

「主はやてもそうだが、テスタロッサもよくやるものだ・・・」

「でもまさかキスまでするとは・・・・・・」

フェイトの今回の行動をいまだ信じ切れずにいるエリオだが、ルキアに関してはさも当たり前の様なリアクションを取りながらこう言ってきた。

「何、エリオ。接吻など大したことではない。今の若者の性は戦国乱世並みに乱れて居るのだからな。」

「何で君はそんなこと知ってるのかな？」

ふと、そんなことを横で立ち尽くす吉良は思ったそうな。

そして、中でも驚きを隠せなかったのはなのはやユーノといった幼馴染の二人やクロノのほうだったが、クロノは偶然にもこの場にはいなかったのだ。

「にゃははは♪やっぱり、フェイトちゃんサスケさんのこと好きだったんだ。」

「フェイトママもれっきとした女の子だもん。恋の一つや二つぐらいするって♪」

「そうだね。ね、ユーノ君はどう思う？」

「ま、フェイトが男性に恋をすることは正直ないと思っていたけど・・・どうやらそれも嘘でよかったと思うよ。やっぱり、異性に対する恋愛って言うのは凄く大事なことだからね♪」

「うん♪」

ユーノがそういうと、なのはも改めてそう感じると笑顔で返事し、

間でそれを聞いていたヴィヴィオも笑顔を浮かべながらフェイトの新たる門出を心の中で応援をすることにした。

そして、なのはは自分の恋人ユーノの口にジャイヤ特製の甘い甘いチョコレートクレープを徐に口に運んだ。

「じゃ、ユーノ君もこれ・・・あ～～～ん？」

「はいよ♪あ～～～ん・・・・・・う～～～ん、美味い！！」

なのはから運ばれたクレープを口に入れ、唇にクリームをつけたユーノ。

かくして、妖怪人形神は見事カクレンジャーと魔導師さん達の活躍によって撃退され、サスケも新たなる進展を迎えたわけであります。

またいつか、この二人が再開できることを願って――――――本日はここまで！

以上、語りはこの私・・・三遊亭圓丈が務めさせていただきました。

では、御機嫌よう！！！

ぶっ飛ばせ腐れ外道（後書き）

教えて、ユーノ先生！

フェ「今日は私がユーノに代わってサスケについて教えるね♪」

ユ「また人のコーナーを勝手に・・・ま、偶にはいいか。早く説明してくれるかい。」

フェ「はいはい♪サスケは忍者戦隊カクレンジャーの実質リーダー的存在。猿飛佐助の子孫でメンバー最年長。カッパに騙され、妖怪のエネルギーを閉じ込めていた「封印の扉」を開けてしまった責任からカクレンジャーの一員となり、サイゾウさんとはカクレンジャー結成前からの付き合い。」

フェ「スケベで猪突猛進気味な面があるが、戦いの際には冷静沈着さを見せる。メンバーが妖怪の罠に落ちてたった一人になっても諦めない不屈の闘志で、メンバーのピンチを救うのはいつも彼の役割である。」

フェ「敵の罠を見抜く鋭い勘の持ち主で、第2部「青春激闘編」からは自分を見失った鶴姫を殴りつけるなど、鶴姫の良き理解者的な存在になっていった。メンバーの中でも特に潜在能力が高く、寝る間も惜しんで厳しい修行を行っている。」

フェ「多彩な忍術・剣術を使いこなし、特に「分身（わけみ）の術」を得意とする。シリーズ初の「リーダーではないレッド」であるが、その性格から仲間を引っ張っていく役割を果たす事が・・・」

恋「説明が長すぎるだろう！どんだけサスケの事好きなんだよ！！」

な「まぁまぁ、恋次さんも落ち着きましょう。」

なのはとユーノが長すぎる説明に癇癪を抱く恋次をなだめる。

ユ「いいじゃないですか♪あんなに男の事を好きになったってことは、フェイトも漸く異性を好意対象として認めたってことじゃないですか。これで、長年ファン層の間で定着してきたなのフェ同性愛路線が払拭できますよ。」

恋「そうか！？」

な「ははは・・・まぁ、仲がいいのは結構ですけど、同性愛なんて囁かれると・・・ねぇ・・・」

ユ「いつから世の中はこんなにもそういう観点でばかりで物を見るようになったんだろうね。」

魔導師図鑑ハイパー！

機動六課の厨房。

ユーノはカクレンジャーのジライヤから教えてもらった美味しいクレープの作り方を参考にして、新しいクレープの開発を試みていた。

傍らには、なのはとヴィヴィオがサポートについていた。

ユ「よし♪外側の皮は上手くできた。あとは具材を何にするかだ♪」

な「ヴィヴィオは何か入れたいものとかある？」

ヴィ「う～んとそうだな・・・・・今までに食べたことがないようなものを食べてみたいから、納豆とか入れてみようよ！」

な「な、納豆！？」

ユ「あはは・・・よし。やってみよう・・・」

二人は娘の言葉に顔色を悪くしながらも、納豆を用意する。

ユ「ちょっと納豆だけだと匂いがあるな。」

な「匂い消しにマヨネーズでも入れてみる？」

ヴィ「あと序に、風味を加えるために青のりも入れてみようよ。」

試行錯誤の結果、ついに出来た納豆クレープ。

ユ「何とか出来たけど、果たして旨いのかどうか・・・」

な「食べてみないことには何とも・・・」

すると、躊躇していた三人よりも先に料理においては正しく救いようのないシャマルがそれに興味を抱く。

シャ「あ、このクレープ美味しそう！味見してみてもいい？」

な「あ、シャマル先生・・・本当に食べる気で・・・！？」

なのはの言葉を余所に、シャマルはそれを一口。

その瞬間、シャマルは自分で作った料理を自分で食べた時のようにひっくり返る。

ヴィ「シャマル先生！！！！」

ユ「まずいことになったぞ・・・！！」

三人は一先ずシャマルを医務室に連れて行くことにした。

ユ・な・ヴィ「（やっちゃったよ・・・・・・どうしよう・・・・・・）」

カクレンジャー篇

登場人物

忍者戦隊カクレンジャー

戦国時代に誕生した、退魔を専門とする忍者集団「隠流」の使い手と末裔達。鶴姫とジライヤのみ忍者としての正規訓練を受けていたが、サスケ・サイゾウ・セイカイは子孫であるというだけで、元は一般人だった。カクレンジャーは旅をするキャラクターであるためか、『西遊記』の登場人物を基に性格付けがなされている。登場名乗りは「人に隠れて悪を斬る、忍者戦隊カクレンジャー見参！」。

サスケ　／　ニンジャレッド

声　ー小川輝晃

猿飛佐助の子孫。メンバー最年長。カッパに騙され、妖怪のエネルギーを閉じ込めていた「封印の扉」を開けてしまった責任からカクレンジャーの一員となる。サイゾウとはカクレンジャー結成前からの付き合い。スケベで猪突猛進気味な面があるが、戦いの際には冷静沈着さを見せる。メンバーが妖怪の罠に落ちてたった一人になっても諦めない不屈の闘志で、メンバーのピンチを救うのはいつも彼の役割である。敵の罠を見抜く鋭い勘の持ち主。メンバーの中でも特に潜在能力が高く、寝る間も惜しんで厳しい修行を行っている。多彩な忍術・剣術を使いこなし、特に「分身（わけみ）の術」を得意とする。シリーズ初の「リーダーではないレッド」であるが、その性格から仲間を引っ張っていく役割を果たす事が多かった。本編では空腹になって倒れていたところをフェイトに助けられ、その後ピンチに陥っていたライトニングを救出し人形神に立ち向かっていった。別れ際、フェイトにキスをされる。個人のマークは丸。『西遊記』の孫悟空に相当する。

個人武器・技

レッドスライサー

十字手裏剣を模したサスケ専用の大型ブーメラン。1秒間に300回転しながら飛んで行き、直径5cmの鉄の杭30本を斬ることが出来る。槍としても使える。また、回転させれば盾にもなる。

雷鳴剣ヒカリマル

三神将の1人であるツバサマルから授かった、稲妻を呼ぶ剣。カクレマルを合体させれば、二本の刀のエネルギーがスパークして、稲妻を呼び起こす。

隠流・雷鳴斬

カクレマルとヒカリマルを柄の部分で接続して稲妻を呼び、そのエネルギーを加えた2本の剣で敵を斬る必殺技。

隠流・満月斬り

カクレマルで円を描き、そこから一気に斬る必殺剣技。満月斬りの直後に、さらに十字に敵集団を斬り裂く「隠流　満月十文字斬り」という技もある。モチーフは眠狂四郎の得意剣術である「円月殺法」。

オン・サル・ニン　火炎つむじの術

炎を発生させて敵を焼き尽くす忍法。

分け身の術

最大8人に分身して攻撃するニンジャレッドの得意技。敵の周囲を回って撹乱してから一斉にジャンプし、本体だけが敵に隠流満月斬りを浴びせる「分身一体剣」という技がある。

鶴姫（つるひめ）　／　ニンジャホワイト

声　－広瀬仁美

隠流鶴姫家の２４代目総領にして5人のリーダー。封印の扉を開けて窮地に陥ったサスケとサイゾウを救い、カクレンジャー招集を決意する。メンバー最年少の１５歳（途中で１６歳になる）。男勝りで勝気な紅一点。仲間への慈愛も深く、傷ついた仲間を見捨てる事は、たとえ人形であっても出来ない。フェイトにキスをされたサス

ケに嫉妬心が芽生えたのか、ムキになって叱りつけた。個人のマークはつぼきり型。『西遊記』の三蔵法師に相当する。

個人武器・技

忍法花吹雪

無数の花びらをまき散らす。花びらに触れると爆発する。

折り鶴の舞

7つの折り鶴を操って爆発攻撃する。

サイゾウ　／　ニンジャブルー

声　一土田大

霧隠才蔵の子孫。古くからの付き合いであるサスケと同様の理由でカクレンジャーの一員となる。女と金に目がないが、情にもろくて困った人に対しては損得勘定抜きで助けずにはいられないので、子供達からも慕われる。しかしその情にもろい性格が災いし、妖怪の策略によくハマってしまい、メンバー中でも特に不遇さが目立つ。また、言葉遣いが妙にオカマ臭い時がある。水遁の術とサスケ同様剣術を得意としており、目隠しをしたまま裁縫が出来るなど忍者としての素質はある。剣の持ち方は逆手。特にセイカイと行動をともにすることが多い。個人のマークは四角。『西遊記』の沙悟浄に相当する。

個人武器・技

ブルーショット

タンクに１００リットルの水が加圧されて入っており、槍の先より勢いよく水を噴射するサイゾウ専用の水流銃。敵を３０ｍも跳ね飛ばす威力を持つ。

忍法水走り

水の上を走り抜けるニンジャブルーの得意技。別名「水渡りの術」。

隠流・ビッグウェイブ

巨大な津波を発生させて敵を攻撃する。

セイカイ　／　ニンジャイエロー

声　一河合秀

三好清海入道の子孫。鶴姫に招集された４人目のカクレンジャー。ゲーセン通いをしている「現代っ子」で、軽い性格のため争い事を好んでいなかったが、妖怪ロクロクビが子供達を襲うのを目の当たりにして封魔の戦いに身を投じる。争いごとを好まないのは、やや気が弱くお人よしな面もあるからだが、自ら認めるようにここ一番には強い。体格は大柄ではないが、先祖が三好清海入道であるためか怪力の持ち主である。食べることと女性には目がなく、かつて鶴姫に告白をしたこともあるが特に進展はない。忍之巻を手に入れるための試練の旅を始めて以降、サイゾウと行動をともにすることが多いが２人でピンチになってしまうことも多い。個人のマークは三角。『西遊記』の猪八戒に相当する。

個人武器・技

熊手裏剣

セイカイ専用の手裏剣。三角形で、「M」のマークがついている。岩でも深く突き刺さり、真っ二つに割ってしまう。

巨大あやかしの術

巨大な自分の幻を作り出して敵を攻撃する。

ジライヤ　／　ニンジャブラック

声　一ケイン・コスギ

児雷也の子孫。５人目のカクレンジャー。彼の一族は家伝の巻物を奪ったアズキアライを追ってアメリカに渡っていたが、アズキアライが日本に向かった事を知り帰国、鶴姫達に合流する。強靭な脚力を持ち近接戦闘を得意とする。その格闘技術は生身でも妖怪を倒すほど。特技はローラースケートと射撃で、何度かウエスタンスタイルを披露した。アメリカ出身のためか日本語が得意でなく一見寡黙な性格に見えるが、テレビ番組のヒーローにのめり込むなど素はノリやすい性格。１０歳のとき何者かに父親が目の前で惨殺され、その真犯人である育ての親・ガリ（ヌエに操られていた）を自らが倒すなど、誰よりも苦難多き人生を歩んでいる。個人のマークは五角形。『西遊記』の玉龍に相当する。

個人武器・技

オン・ガマ・ニン　岩地獄の術

大きな岩を次々と敵めがけて飛ばす。

ニンジャマン　／　サムライマン

声　一矢尾一樹

シリーズ初、人間体を持たない６人目の戦士で三神将の弟子。師匠達と同様の理由で外見は人でないが、寒い所ではクシャミをするなど、公式に「人」として設定されている。伸縮自在で親指大から巨大ロボサイズまで変化できる。武器は背中に負った忍者刀ニンジャソード。１０００年前に老婆に化けた妖怪大魔王に騙されて大勢の人たちを傷つけてしまい、その罰として壺に閉じ込められ宇宙に追放されていた（壺を壊せる金槌は一緒についているが。それをはずせるのは初代鶴姫の子孫のみ）。かなり単純で熱くなりやすく、クリスマスプレゼント欲しさにオオムカデが化けた偽サンタに騙されるなどおっちょこちょいな面が目立つが、大の妖怪嫌いであると同時に正義を重んじており、一度も悪に寝返ったことはない。また子供が大好きで、気は優しくて力持ち。「青二才」と言われるのが大嫌い。

個人武器・技

筋斗雲

忍法で雲を練成し、その雲に乗って空を飛ぶ。

忍者刀ニンジャソード

ニンジャマンの使う専用の刀。普段の戦闘ではこの刀を使う。

サムライジャベリン

サムライマンに変身した時に使うニンジャソードの柄に鞘を合体さ

せたもの。

サムライ激怒ボンバー

手のひらに気を溜めて放つ。

サムライ激怒斬り

怒涛の斬撃を浴びせる。上記の技と同じで三神将がとどめを刺す前の繋ぎ技として使用されることが多い。

妖怪

日本に古来より伝わる異形の者たち。その実態は、人の心に潜む怒りや憎しみの情念が生み出した姿である。２０００年前に本格化した人間と妖怪の戦い、それは、三賢人と妖怪大魔王の闘争でもあった。これは、三賢人をリーダーとする人間側の勝利に終わり、大魔王と彼に協力した妖怪たちは、地底界に追放された。だが、妖怪は滅ぶことなく、時代の節々でその姿は散見された。戦国時代においても、ヌラリヒョン率いる妖怪忍者が大魔王復活のため暗躍していたが、先代カクレンジャーがヌラリヒョンを地底界に続く封印の扉に閉じ込めたことで妖怪のエネルギーが封印され、各地に散らばっていた妖怪たちは人間の姿で４００年もの長きに渡り暮らしてきた。そんな中妖怪カッパに騙されたサスケとサイゾウが封印の扉を開いてしまい、封印されていた妖怪たちが力を取り戻してしまった。本編でもその影響を受けた妖怪、人形神が現代に蘇った。

人形神（ひんながみ）／ＡＭ２５

声　一　塩屋浩三

人形（ひんな）とは表記の通り人形（にんぎょう）のことで、3年間で3千人の人々に踏まれた墓地の土で作られた人形をいう。念の入ったものだと、7つの村の7つの墓地から取ってきた土を人の血で捏ね、自分の信じる神の形とし、さらに人のよく通るところに置いて千人の人々に踏ませる。別の伝承では、3寸（約9センチメートル）ほどの大きさの人形を千個作って鍋で煮ると、1個だけ浮かび上がってくるものがある。これが千の霊がこもった人形神とされ、コチョボともいう。どんな願い事でも叶い、欲しい物がすぐ手に入るので、財産ができて家が裕福になる。そのために急に裕福になった家は、人形神を祀っているのだと噂されていた。ただし何か用事を言いつけておかないと「今度は何だ」と催促するという。こうした人形神の働きは、式神に近いものとも解釈されている。また、人形神には大変な代償が伴う。人間の欲望で作られたゆえか一度でもこれを祀ると、人形神は祀った者に強力に取り憑き、決して離れることはないとされる。そのために祀った者が死ぬ際には非常に苦しみを味わうことになる。本編では墓場に封印されていたが、何らかの拍子に封印が解かれ、現代に蘇った。その後、偶然にも手にしたアンゴルモアの力で都市一つを壊滅させるほどの異常な戦闘能力を手にし、カクレンジャーや機動六課を追い詰めた。

技

秘儀・鸚鵡（おうむ）返し

相手の技を吸収して、そのまま跳ね返す。

こむら返り

鸚鵡返しの強化版で、吸収またはその身に受けた技の威力を上げて跳ね返す。本編では、シグナム達の技と、フェイトの魔法を披露し

た。

ドロドロ

最下級の妖怪で、妖怪の戦闘員的な存在。剣と槍が武器で、一応人間らしい感情も持っている。人語を話し、人間に変身する能力も持つ。頭にリボンを付けた女性のドロドロも存在する。ヌラリヒョン配下の忍者の格好をした部隊やアズキアライ配下の警察官の格好をした部隊、オオニュウドウ配下のTシャツを着て自転車に乗った部隊やテング配下のピエロの格好をした部隊などが登場した。その顔はムンクの名作「叫び」をモチーフにしている。

その他

講釈師

声：三遊亭圓丈

テレビ版「忍者戦隊カクレンジャー」の当初進行役で登場していたが第2部からいなくなった。これについて、最初は「好き勝手に講釈してもよい」と言われやっていたそうだが、スポンサーのバンダイ側から「あんな進行役が目立ってもうちの商品は売れない」とクレームがつき、降板させられたという旨を後に述懐している。本編では何故か登場している。

変身アイテム

ドロンチェンジャー

カクレンジャーの5人が装備している印籠型の変身アイテム。ドロンチェンジャーを胸の前にセットして「スーパー変化（へんげ）」の発声の後、

「ドロンチェンジャー！」と言って印を結び、ドロンチェンジャーのスイッチを入れることにより、『忍』と書かれたエンブレムがシャッターのように開き、メダルが出現し変身する（緊急時は「スーパー変化」の発声のみで衣服を脱ぎそのまま変身する）。

共通装備・技

秘剣カクレマル（ひけん　―　）

背中に背負っている忍者刀。元はカクレンジャーの先祖の武器で、妖怪を封印するために地面に突き刺した後、カクレンジャーの素質がある者のみが抜くことができた。そのため忍装束の際の武器であり、変化すると同時に刀も変化する。刀身には「忍者戦隊」の文字が刻まれており、鞘から引き抜く際に独特の効果音が鳴る。鎧を真っ二つにする切れ味を誇り、エネルギーを集中させれば戦車も切り裂く。５人のカクレマルをクロスさせて強力な閃光を放つ「カクレマル雷光波」という技がある。

カクレイザー

厚さ５ｍの石垣を貫通できるイオンビームを発射する光線銃。銃身部を引き抜くと、コンクリートの壁もくりぬくレーザーナイフになる。

忍装束

変身前に、索敵・諜報行動時に着用する忍者装束。マフラー、帯の色は変身後のスーツと同じ色。ただし兜などは各人で形状が異なり、装束の色も男性陣は黒なのに対して鶴姫は白（鶴姫は白づくめでジライヤは黒づくめ）。普段着を脱ぎ捨てると同時にこの姿になるが、

半袖やタンクトップ姿などの薄着の状態からも一瞬で姿が変わるため、普段着の下に着込んでいるというわけではないようである。

忍之巻（しのびのまき）

隠流超忍獣の術を使用する際に用いる巻物。隠流忍術の極意が記されており、５人はそれぞれの試練を乗り越えて手に入れた。

抜け身の術

敵にやられたように見せかけ、スーツだけ残して脱出する技。そこから奇襲攻撃を仕掛けることが多い。普段着や忍装束を残す事も可能。本編でドロドロの攻撃を受けたセイカイが使ったのがこれである。

合体技・必殺技

カクレンジャーボール

ラグビーボール型爆弾。「カクレンジャーボール！　レディ、ゴー！！」の合図で散開、パスしながらパワーをため、「カクレシュート！」の発声とともに敵に向かってキックする。パスする順番は統一されておらず変身前でも使用可能で、その状態でも灯篭を粉砕する威力がある。本編ではユーノ達によって即席機動六課ボールと言うものも披露している。

メカニック

ネコマル

カクレンジャーの基地に相当する猫バス。妖怪車両なので自分の意思を持ち、猫の鳴き声を上げるし、排気ガスは出さない。前面の口で噛みついたり、飛行能力やテレポート能力、透明化能力も持つ。リモコン操作により、屋根から大砲を出す。普段はクレープショップとして機能している。

三神将

無敵将軍、ツバサマル、そして隠大将軍からなる（心・技・体）を司る巨大神。彼らは機械のロボットではなく生命体にあたる。元々は人間の賢者として、２０００年前の妖怪と戦っていた。物語後半の司令官のポジションであり、またニンジャマンの師匠でもある。本編では無敵将軍だけは登場していない。

無敵将軍

全高：５８ｍ
重量：７３００ｔ
要塞城郭・風雲幻城（ふううんまぼろしじょう）から変形する三神将の１人。「三神将」はメカではなく、２０００年前に妖怪と戦った賢人達の魂から生まれた存在で、自分の意志を持っている。無敵将軍は隠流忍術極意・心技体の「体」を司り、三神将で最も強力なパワーをもち、それ故パワー系戦法を得意とする。五獣将が「忍者合体　無敵将軍」の掛け声で合体。「無敵将軍　参上」の発声で戦闘開始。

必殺技

火炎将軍剣

シャチホコ型の柄から伸びる炎の刃で敵を切り裂く。

隠大将軍

全高：５８．５ｍ
重量：７２００ｔ
超忍獣が合体した三神将の１人。「五神合体」の掛け声で合体し、合体した後は「隠大将軍　推参（すいさん）」の発声で戦闘開始。基本はカクレンジャーの操縦に任せているが、自分の意思で行動する事もある。無敵将軍よりパワーは劣るが、スピードと技では無敵将軍を上回る。隠流忍術極意・心技体の「技」を司り、格闘戦を得意とする。ゴッドロウガンを分離させて敵にぶつける「ロウガンアタック」という戦法もある。

必殺技

鉄拳ゴッドフィニッシュ

左手の「ゴッドバーストチョップ」と右手の「ゴッドハンマーパンチ」を連続して放つ。

スーパー隠大将軍

隠大将軍と聖忍獣ツバサマルが「翼合体」すると空を飛べる姿となる。目から破壊光線を放つ他、空中で繰り出す連続回し蹴りの「フライングキック」が使える。

必殺技

鉄拳フライングフィニッシュ

飛行しながら（というか急降下しながら）強化された鉄拳ゴッドフィニッシュを放つ。この技には、右拳のゴッドサルダーだけで3回殴る「鉄拳フライングフィニッシュ・サルダースペシャル」というバリエーションもある。

聖忍獣ツバサマル

全長：４３ｍ
全翼長：８５．６ｍ
ハヤブサに似た白い巨鳥。三神将の一人で、隠流忍術極意・心技体の「心」を司る。両翼に備わった8連装のキャノン砲からエネルギー弾を発射する他、他の2体と合体してパワーアップさせることもできる。

次回予告

ユ「僕を育ててくれた最強の三人、一護さん・浦原さん・夜一さん。」

な「何と、その三人が機動六課に勢揃い！？そして、隊長陣との壮絶な模擬戦が始まる」

一「次回、ユーノ・スクライア外伝　『伝説の師匠たち』」

夜「儂の真の姿をしかと見ておくがいいぞ。」

浦「次回もこの浦原商店の提供でお送りいたしますね♪」

ユ・一・な「浦原商店が提供だったの、これ！！」

伝説の師匠たち（前書き）

ユ「翡翠の魔導死神・・・・・・この僕がそう呼ばれるようになって大分経ったけど、そんな僕に技術と力、そして護ることの意味を教えてくれた師匠たち。」

ユ「僕が気兼ねなく頼れる真の師匠、一護さん。その一護さんの事実上の師匠で天才的な頭脳の浦原さん。隠密起動総司令官を務めた瞬神夜一さん。」

ユ「今、ここに最強の三人が勢ぞろいする。」

ユ・一・浦・夜「ユーノ・スクライア外伝・・・・・・始まります（ぜ）（っすよ♪）（ぞ）」

伝説の師匠たち

＞i22146―709＜

それは、ハロウィンも間近となったある夜のこと。

定期連絡の為にユーノは地球の一護とテレビ通信を行っていたが、一護本人は非常に罰の悪そうな表情を浮かべながらユーノにこんなことを言って来た。

聞いた瞬間、ユーノの表情も困惑一色となる。

「え～～～～～」

『いや・・・・・その・・・悪りぃ。どうしてもって言うんだよあの二人が・・・』

「浦原さんと夜一さんが機動六課(ここ)に遊びに来るんですか？参ったなこれは・・・」

そう、その内容とはユーノの鬼道の師匠である浦原喜助と瞬歩と白打の師匠の四楓院夜一が機動六課に遊びに来るというものだった。

ユーノは思わず深いため息をつくと、肩に奇妙な重さがのしかかる。

そんなユーノに手を合わせながら、一護は謝罪の言葉を投げかける。

『ほんと、悪いユーノ！あの二人にはキャラが濃いからなるべくいかないようにと忠告はしてきたんだが、夜一さんが『それじゃ儂のセクシーなボディーを待ってるエロいファンは喜ばんぞ』とか訳わかんねぇことぬかしやがるし・・・それで・・・つい・・・』

突然一護の顔が赤く染まりだし、それを見た瞬間ユーノは何故こんな表情となったのか大体の予想がついてしまう。

「色仕掛けにあったって訳ですか・・・」

『・・・お恥ずかしいことながら・・・！！』

あきれた様子でそう口にすると、一護は茹蛸のように真っ赤となり湯気を出しながら口を漏らす。

「はぁ。ま、いずれは紹介しようとは思っていたところですし、この際しょうがないですね。僕からみんなに言っときますので、一護さんはあの二人を連れて来てくださいね。」

『分かった。じゃあ、三日後の午後に来るぜ。織姫とコンも一緒に連れてくるし、お前の体の方も気になるしさ。』

「はい♪じゃ、その時になったら連絡してくださいね。」

ユーノは一護との通信を終えると、腰かけていた椅子に深々と座り、思わず腕組みをしながら三日後のことを考えていた。

「さて、どうしたものか。」

と、ちょうどその時隊舎寮へ戻ろうとする恋次・ルキア・吉良の三人が複雑な表情を浮かべているユーノを見かけ、徐に話しかけてきた。

「なんだ一護と話してたのか、ユーノ？」

「恋次さん。いや、ちょっと面倒なことになりましたよ。」

「面倒なことですか？」

「一体それは？」

ルキアと吉良がそう尋ねると、これまた罰の悪そうな表情を浮かべながらユーノは少しの間を置いてからこう言った。

「実は・・・・・浦原さんと夜一さんがここに遊びに来るそうです、三日後に。」

その言葉を耳にした瞬間、三人の表情は一気に引きつった。

「な、何だと！？」

「あの二人が・・・六課に！」

「はぁ～～とうとうこの日がやってきてしまったか。どうするのですか、ユーノ殿。浦原は見たままの変態ですし、夜一殿に至っては普段が猫の姿故、変身した際の後始末が大変ですぞ。」

「はい・・・男みたいな口調と声色で錯覚させ、しまいにはとんでもないものを露出するあの人の始末が一番大変です。僕も一護さんも何度鼻血を吹いたことか・・・」

ユーノはルキアにそう語りながら、嘗て一護と一緒に夜一の全裸を見せられた時のことを思い返しながら、複雑な顔を浮かべる。

「取りあえず、はやて達には報告するんだろ？」

「ええ。こうなったら為るがままです。夜一さんにだけ気を付けるようにしましょう。」

「「「うん！」」」

ユーノの言葉を聞き、真摯にその言葉を聞き固い決意をする三人だった。

そして、光陰矢のごとし・・・時間は瞬く間に過ぎていきハロウィン当日の１０月１日。

ここミッドチルダでは地球の風習とは違い、日にちが１日となっている。

町全体がハロウィン一色に染まり、ここ機動六課の方もこの日のための飾りつけで隊舎が彩られる中、なのは達前線メンバーは訓練場スペースの方で目的の人物が到着するのを心待ちにしていた。

「楽しみですね。一護さんがユーノ先生のお師匠さん二名を連れてくるなんて！」

「ははは。ユーノ君から話はそれなりに聞いていたけど、実際どんな人なんだろうね？」

「あの、ユーノ先生。何をそんなにそわそわしてるんですか？恋次さん達も挙動不審ですけど・・・」

ティアナが尋常ではない様子の四人にそう尋ねると、三日前からこんな感じであった四人は次のように答えた。

「色々と複雑なんだよ、俺達も・・・」

「一護さんだって同じ気持ちだよ、きっと・・・」

と、その時。

隊舎の方で事務仕事に従事していたグリフィスが一護達の到着を確認し、はやてに連絡を入れてきた。

『失礼します、八神部隊長。一護さん達がご到着されました。』

「「「「（き、来た・・・！！）」」」」

グリフィスの言葉を聞き、内心同じ思いとなるユーノたち四人。

そんな四人の心情など全く知らないはやては上機嫌な態度で一護達を迎えるようにとグリフィスに指示を仰ぐ。

「オッケイ。じゃ、さっとくご案内してな♪」

『了解です。』

フォワードメンバーも、待ち侘びた未知なる来客にドキドキが止まらなかった。

「いよいよですね！」

「楽しみです。」

その一方で、別な意味で楽しみにしているのは言わずと知れたバトルマニアこと、シグナムその人だった。

「兵であることを祈るばかりだ。」

シグナムの相変わらずの言葉に、ヴィータは呆れながらも突っ込みを入れる。

「お前はそればっかかよ！？」

そして、各々が様々な期待と不安を抱く中最も不安と言うものを抱いているのはユーノ本人である。

「（・・・何事もなければいいけど・・・・・・はぁ～～～～～）」

ユーノの悩みの種は尽きることはなかった。

さて、その頃機動六課へと到着した一護と織姫・コンの三人は現在その後ろから周囲を物珍しげに観察する浦原と黒猫姿の夜一をユーノ達の元まで案内していた。

疲れ切った表情で黙々と前進する一護と違い、浦原自身は飄々とした様子で夜一と一緒に初めて訪れたミッドチルダの風景に興奮していた。

「いや～～～ここが噂の異世界ミッドチルダで機動六課っすか。思ってたよりも大きいっすね♪」

「うむ。異世界に足を踏み入れるのは初めてじゃが、なかなかよいではないか？」

「黒崎サンは羨ましいっすね！こんな面白いところにしょっちゅう

来れるんですから♪」

「別に言うほど来てねぇから。俺だって平日は通常勤務とか学会の出席で忙しい身なんだぞ。そこ分かってるのかよ、アンタら・・・」

「へへ。ま、いいじゃないのあなた。ユーノさんやなのはさんもきっと二人に会いたがってるよ。」

「あ～～～俺も早く愛しの姐さんにパフパフされてぇ～～～～～～姐さ～～～ん！！！！！！！！」

疲れ切った一護の横で、妻の織姫とその織姫の腕の中でルキアとの再会を心待ちにしているコン。

そんな四人のことを見ながら、溜息交じりに一護は頭を掻き始める。

「たく、揃いも揃って人の気も知らないで・・・」

そして、およそ2・3分が経過したのち、徐に歩いてきた一護達を目撃した浦太郎は全員の注意を促す。

「お、来たよ。」

「マジで！？」

「あの人たちと顔を合わせるのは初めてか・・・」

鬼太郎や白鳥がそんな言葉を漏らす中、ユーノや恋次たちは若干顔を引きつりながらこの時が来てしまったことに内心後悔の念を覚えた。

「来ちゃったよ・・・とうとう・・・」

「頼むから変なこと起こさないでくれよ・・・」

一護は一先ず態度を改めると、直立不動で自分たちに敬礼をするなのは達に挨拶を済ませた。

「おう、悪いなお前ら！」

「いえ。ようこそいらっしゃいました、一護さん。織姫さんとコンさんも態々どうも。」

「えっと、その人が言っていたユーノのお師匠さんで・・・？」

フェイトが恐る恐る尋ねると、一護は顔を引きつりながら浦原の顔を見、浦原は飄々とした態度で扇子を広げながら自己紹介を始める。

「どうも初めまして、みなさん♪スクライアさんと黒崎サンからのお話はよく聞いております。自分が浦原喜助っす♪浦原商店でしがない駄菓子屋の店主やっております。よろしければ、以後お見知り置きを♪」

「あ、はい。どうも・・・・・」

初めて浦原と言葉を交わしたフェイトもそうだが、周りにいた全員も掴みどころのない浦原の態度にどうリアクションを取っていいか迷っていたが、一つだけ取れるとすれば格好が正にユーノと瓜二つだったことだ。

「この人が浦原さん・・・・・・格好がユーノ君とそっくりだね。」

「と言うより、僕があの人の真似をしたんだけど・・・」

「しかし、何や妙な雰囲気を醸し出すさかいいまいち掴みどころが分からへん・・・」

「浦原は見て通り変態だ。突然襲ってくることもあり得ぬ話ではない。肝に銘じておけ。」

「そ、そんな危険な奴なのかよ!?」

「少なくとも、そいつよりも遥かに危ないぜあの人・・・」

ルキアの言葉を聞き、思わず警戒心を抱くヴィータに恋次が言葉を投げかけると、一同はルキアの足で踏みつけられている窒息寸前のコンを見つめる。

「ふごごごごごごっぐがが!!!!!!!!!!」

と、その時ギンガがもう一人の人物、夜一の姿が何処にも見受けられないことに疑問を感じた。

「あれ、そう言えばもう一人の・・・夜一さんという方はどちらにいらっしゃるのでしょうか?」

「そう言えば姿が見えませんね?」

全員が辺りを見渡しても夜一の影も形も見当たらない。」

いや、その言い方には語弊があった。

夜一はこの時はまだ、人間の姿ではなく猫の姿だったためなのは達はそのことに気づいていなかったのだ。

そんなあたりを兎に角見渡すなのは達に徐に猫の姿の夜一が声をかけてきた。

「儂はここじゃ。」

なのは達は目を見開きながら、眼前で平然と人間の言葉を話すこの摩訶不思議な光景に驚きを隠せなかった。

「「「「「へ!!」」」」」

「ね、猫が・・・!!」

「喋った!!!」

「ま、まさかあなたが夜一さんなん!?」

「いかにも。四楓院夜一。そこの初心なオレンジ頭と淫獣フェレットもどきの知り合いで、喜助の友じゃ。」

夜一が悪戯っぽくそう言うと、一護は思わず拳に力を籠め怒りを露わにし、ユーノ自身も顔を赤くしながらこう言ってきた。

「だから僕のことをその名で言うのは勘弁してくださいよ!あなただって人のこと言えないくせして・・・!」

「え?それってどういう・・・」

ユーノの言葉に思わず首を傾げるなのは達。

すると、夜一が目を細めながらこう口にしてきた。

「まさかお主等、この姿が儂の本当の姿と確信している訳ではあるまいな。」

「そ、そうなんですか?」

「この際お主等にも見せてやろう。儂の姿を・・・――」

夜一はそう言うと、徐になのは達から距離を取って気を集中させると全身から光を発し、自身の真の姿に戻り始める。

なのは達はこの光景に大いに驚く。

「「「な!」」」

「光り出した!」

「これって、もしかして変身術だったの!?」

「どんな姿なんでしょうか!?」

「声からすると、かなりの男だと推測するが。腕は以下ほどのものか・・・ん?」

すると、そんな中恥ずかしげに夜一から目をそらすユーノ・一護・

恋次たちを見たなのは達は徐にその理由を尋ねる。

「ユーノ君？一護さんや恋次さん達もどうして目をそらしてるんですか？」

「「「「「「「・・・・・・！！」」」」」」」

彼らはそんななのは達の言葉を聞いても、顔を赤く染め上げながら黙って目をそらし続ける一方。

「変な奴ら？」

すると、そんな一護達の気持ちを知ってか浦原が飄々とした様子でこう口にする。

「ふふ♪その理由は直ぐに分かるっすよ♪」

そして、期待と不安を抱きながら夜一の真の姿を心待ちにしていたなのは達の眼前の白い煙がはれ、姿を現した夜一。

それを見た瞬間、なのは達女性陣は大いに驚きながら顔を赤く染め上げ、エリオとクロノハはあまりに刺激的な光景に鼻血を出して倒れこんだ。

「「「「「「「「な・・・あ・・・・・・ああ・・・！！」」」」」」」」

「「ぐっは！！」」

その猟奇的な二人の光景を余所に、と言うか気になどで気になど出

来ないぐらいに赤面したなのは達は夜一の褐色の肌をした巨乳でグラマラスな姿を指さすばかり。

「う・・・うそ!!」

「夜一さんって・・・女・・・!?」

夜一は阿呆のように自分の姿に驚く一同に鼻で笑いながら腕を組む。

「フ・・・どうやら相当に驚いてるようじゃの・・・大方お主等は儂の声色と言葉遣いだけで男だと判断しておったようじゃからな。青い、青いぞ!」

「だ、だってさっきまで猫だったんじゃ・・・!?」

「猫が喋るわけなかとう。常識じゃ。ユーノだって同じようなものじゃろ。いやしかしこうして正体を明かすのは何度味わってもいいものじゃの。何せ全員、阿呆のように驚いた顔で儂を見るのじゃからの!」

「へ・・・へ・・・へえええええ!!!!」

驚き・唖然・恥ずかしさなど様々な気持ちがこみ上げる一同は平然と目の前で全裸のまま会話をする夜一の姿を恥ずかしげに凝視する。

「さて・・・自己紹介も済んだことだし、そろそろお前たちの訓練とやらを見せて――――――」

と、その直後なのは達はこれ以上の不埒な姿を暴露する夜一に向かって声を上げた。

「それよりもまず！！！！！」

「服着てくださいよ！！！何で全裸なんですか！！！！！」

「序に胸揉ませてくださいよ！！！！！」

「「「突っ込むところが違うわ！！！！！」」」

はやてのとんでもない発言を聞いた瞬間、ユーノ・一護・恋次の三人は夜一の姿を目にしないようにはやての顔面を殴りつける。

「ぐっほ！！！！」

そんなやり取りがあったのち、浦原が持ってきた服に着替え始める夜一は未だに顔を赤くしたままのなのは達に謝罪の言葉を口にしてきた。

「いや～～～すまん、すまん。この姿になってるときはついそのことを忘れてしまうのじゃ。何せ、儂はそこの淫獣と違って元の姿に戻るときに服は着れぬじゃ。」

「ま、まさかユーノ君も夜一さんの裸を！！」

なのはが若干の怒りのこもった表情でそう尋ねる中、必死にユーノは弁解の言葉を発する。

「僕だって見たくて見たんじゃないよ！！誤解しないで！！」

その一方で、フェイトとキャロはティッシュを鼻に詰め、顔を赤く

したエリオとクロノの安否を気遣う。

「エリオ君、大丈夫!?」

「だ・・・大丈夫・・・多分・・・!」

「クロノも出血多量だよ?」

「あ、ああ・・・・・・久々にこんな大胆な光景を見てつい・・・な・・・!」

「しかし、お主等揃いも揃って初心じゃの。男は兎も角として、なのは達はなんじゃ?女子が女子の肌を見てなぜ顔を赤くする?それとも、儂のあまりのプロポーションの良さにコンプレックスでも感じておるのか?」

「そ・・・それは・・・その・・・!!」

恥ずかしげな様子でフェイトが言葉を投げかける一方、女性陣一同は夜一から言われた一言を気にして、思わず自分の体系を見直したりする。

すると直後、なのはは恥ずかしげに念話でユーノにこんなことを話してきた。

「(ねぇ・・・ユーノ君・・・)」

「(な、何?)」

「(ユーノ君はやっぱり・・・夜一さんみたいなナイスバディ―な

女の人が好きなの・・・？）」

「（な・・・何言ってるの、急に！？まさか本当にコンプレックス感じちゃってる訳！？）」

驚くユーノだったが、その一方ではやては密かにこのとんでもないプロポーションをした夜一の胸をどうやって揉み倒すのかを密かに模索していた。

「（これは相当な上玉や・・・！絶対に織姫さんと一緒にサンドイッチにして揉み倒さなあかんわ！！）」

「（いや、はやて。そういうこじゃないから・・・多分・・・）」

冷静に突っ込みを入れるヴィータなのであった。

すると、一護は夜一の突然の行動に関して厳重に注意を促した。

「たく。人の忠告無視して勝手に変身しやがって！」

「まぁよいではないか。刺激がない世の中は生きていてもつまらぬぞ。」

「刺激ありすぎだろあんたは！」

そんな一護の言葉を聞いた直後、女好きで知られる浦太郎は卑猥な眼つきで夜一の体をまじまじと見つめながら――――――

「僕的には大物なんだけどな、夜一さんは♪」

「エロ亀は黙ってろ、ボケ！」

「痛い！」

その横に立っていた鬼太郎の鉄拳を勢いよく受ける浦太郎だった。

すると、夜一はそんな殴られた浦太郎の発言に好印象を抱く。

「いやいや、大いに発情結構じゃ。いいのかお主等？こんなぴちぴちの女子の肌、ここじゃ滅多に見せてくれるものではないじゃろ？思う存分、儂を堪能――――――」

「その発言は危険だろうが！！大体、何でいつも下から履かないんだよアンタ！！」

「お願いですから早く履いてください！僕達が晩生なのは知ってるでしょ！！」

顔を赤くしながら一護とユーノがそう口にすると、浦原は扇子を広げながら二人の間に入ってくる。

「落ち着いてくださいよ、お二人とも♪夜一さんがこんなに大胆なこと言ってるんですし、見ておきましょうよ♪例えばこの――――――ぶっほ！」」

と、浦原が夜一の隠れた個所を捲ろうとした瞬間、我慢の限界に達したルキアの制裁を受け思わず悶絶する。

「浦原！！それ以上の発言と行動は控えろ！！」

「ひ、酷いっすよ朽木さん！！」

「戯け！完全に方向がずれてるだろう！！」

「な、何でもいいから早く話戻しましょうよ！」

ティアナの言葉を聞き、これ以上このことに付き合っていたら事態が収拾出来ないと判断した隊長陣は夜一が着替え終わるのを待ってから戦闘訓練に取り掛かることにした。

そして、漸く夜一が気が終わると隊長陣はフォワードを集めて後ろの夜一達を気にしながら訓練を始めるのであった。

「さ、さて・・・！今日はスクライアアドバイザーのお師匠さん三人が来ていますが、何も焦らず今日も訓練頑張りましょう・・・！！」

「「「「「は、はい！！」」」」」

「では、本日は条件付きの模擬戦を行います。フォワードチーム五人はリミッターを２つつけた状態で、スクライア商店メンバー三人を相手に頑張って戦ってみましょう。」

「よし！加減はしないから気をつけろよ！」

「僕達を相手にリミッターをかけてどこまでついていけるかな？」

「ご武運を祈っておりますぞ。」

「「「「「はい！」」」」」

本日の訓練メニューはスクライア商店が誇る戦闘能力を有した、浦太郎・鬼太郎・金太郎の三人を相手にフォワードメンバー五人がリミッターをつけた状態で本気の模擬戦を行うというものであった。

模擬戦が始まると、鬼太郎は真っ向勝負でスバルの拳を烈火で受け止める。

「おりゃあああああ！！！！」

「うりゃあああああ！！！！」

二人の武器と武器は互いに火花を散らしながらぶつかり合い、その後距離を取る。

その一方でエリオは同じ槍使いの浦太郎の攻撃を互角と言っていいほどの実力で捌いていく。

「いい線いってるね、成長したもんだ！」

「はい！ありがとうございます！」

ティアナ・ギンガ・キャロの三人も商店メンバー屈指の実力を持つ、パトリオット事件で新たな力を手にした金太郎と非常にいい勝負を繰り広げていた。

「それでは、こちらも少々本気で行かせてもらいますぞ！！」

「「「お願いします！！」」」

そんな活気と自信に満ち溢れるフォワード五人の姿を離れたところでなのは達と一緒に観戦していた夜一は隣の浦原に向かって素直に思った感想を口にする。

「ふむ。中々逞しい精鋭たちじゃの喜助。」

「そっすね。これも日頃高町さん達が熱心に教導をしてる甲斐があってのことですかね。」

「ははは。私は教導官として、為すべきことをしてるだけですよ。それに、元々あの子たちが才能に満ち溢れた優秀な生徒ですから。本当なら、私もユーノ君のようにもっと上手く教られれば一番いいんですけど、私不器用ですから・・・」

「僕だってそんなに器用じゃないよ。それに、戦闘に関しての教導は僕じゃ教えられない。教えること自体、僕にはもう無理だ。」

「そんなことないって。ユーノ君から教えてほしいことといっぱいあるんだよ。スバル達や私だって気持ちは一緒だもん。ねぇ、先生駄目かな？」

なのはが切に思ったことをユーノにぶつける中、ユーノは非常に寂しそうな表情でなのは達に持論をぶつける。

「君やスバル達に教えることなんて何もない。僕はアドバイスはしても、そこから先は生徒を信じて見守るだけ。だから、先生なんて呼ばないでほしいよ・・・・・・」

「ユーノ君・・・」

思わず胸が締め上げられるなのは。

ヴィータや浦原はそんな自分をいつまでも卑下する性分のユーノに言葉を投げかける。

「寂しいこと言うなよ。聞いてるこっちが暗くなるぜ。」

「仕方ないっすね、スクライアさんも。しかし、こうして見ると非常に逞しいですね彼女たちも。ストライカーとはよく言ったものです――――――」

「実際、任務やその他の事件を通して私たち自身も驚くほどに成長してる姿を見ると、凄く嬉しくなります。一流のストライカーになってくれて、本当に良かったです。」

「だけどまぁ、教官って言うのは因果な役職ですけどね・・・」

なのはが少し寂しそうな顔でそう口にすると、腕組みをしながら一護も同じことを思った。

「それもそうだよな。教える側っていうのは色々と複雑な気持ちでいっぱいになるしな。」

「実際、ユーノさんに戦いを教えてるあなたの姿って新鮮だったよ。」

「一護がユーノ殿に教導をするとは・・・逆ではないのか井上?」

「何だよその言い方!何が言いてぇんだよてめぇは!」

ルキアの発言に癇癪を起す一護に、恋次が更に馬鹿にしたようにこう言って来た。

「ま、お前がユーノに教えられることなんて一つ覚えの斬撃ぐらいなもんだろ？」

「んだと！！」

「まぁまぁ一護さん。恋次さんもその言い方は失礼ですよ。一護さんが僕に教えてくれたのは戦い方だけじゃありません。もっとずっと大切な・・・本当の意味で“護る”とはどういうことなのか・・・それを教えてもらったんですから。」

「ユーノ・・・」

ユーノの真っ正直な言葉を聞き、思わず和やかな気持ちとなる一護やなのは達。

すると、浦原がそんなユーノの言葉を聞いて扇子を広げる。

「いや～～～相変わらずスクライアは言うことが違いますね♪黒崎サンも妙に照れちゃって♪」

「て、照れてねぇよ！」

「隠さんでもよいぞ、一護。これはこれで結構愉快じゃ。」

「勝手にあんたらで楽しむなよ！！ああも！！俺のコツコツ作り上げてきたキャラづくりがパーになるからやめろ！！」

「まだキャラ作ってたのか、貴様は・・・」

「変なところは拘るんすよ、こいつ・・・」

あきれた様子のルキアにコンがそう言うと、なのはが徐に浦原と夜一にこう尋ねてきた。

「キャラづくりの話はいいとして、私から浦原さんと夜一さんに色々とお尋ねしたいことがあるんですけど、宜しいですか？」

「はい。アタシは大いに構いませんよ。」

「儂らで良ければ遠慮なく話してみろ。」

「そうですか。じゃあ、早速・・・お二人は一護さんと一緒にユーノ君に戦い方を教えてきたんですよね？実際、ユーノ君は修行の間どんな感じでしたか？」

「な、なのは。その辺はあまり聞かないでほしいんだけど・・・！」

「ええ～～～いいじゃい。本人でも言えないようなことを知ってる人がここに三人もいる訳だし～～～」

「そうだよ、ユーノ。私達もどんな修行をしてきたのか知りたいから。」

「そうだな。スクライアのしてきた死神の修業が、如何様なものだったかはあまり知らない。お二人はどうでしょうか？話してもらえれば有難いのですが。」

すると、夜一は勿論と言った表情でこう言って来た。

「なんじゃそんなことか。よいぞ・・・・・・儂らの口から淫獣フェレットのへたれた修行の日々を赤裸々に語ってやろう！」

「だ・か・ら！淫獣フェレットって言い方は止めてください！」

「ユーノ。何をいまさら言っている。光栄なことだぞ。」

クロノが夜一の言葉に便乗してそう口にすると、ユーノの血管が唐突に切れる音が聞こえた。

「あ？」

そして、血管が切れると同時にユーノはクロノに手酷い仕打ちを施す。

「ぐっほ！！」

顔中晴れ上がったクロノを見ながら、ユーノは鬼のような形相でこう言った。

「侮辱だ、ボケ！！てめぇはそこでくたばってろ！！」

普段のユーノからとても想像がつかないほどの形相と態度の変化に素直に恐怖を覚えるなのは達だった。

「こ・・・コエ～～～！！」

「あ、あの・・・ユーノ君がこんな乱暴な一面が備わったのはひょ

っとして・・・」

なのはが恐る恐る尋ねると、飄々とした様子で浦原はこう言った。

「はい。黒崎サンがスクライアさんをこんな性格にしちゃったんですよ、間違いなく♪」

「俺に罪をなすりつけな！おめぇだって言えるところあるだろう！！」

「ははははは♪アタシは何をやってませんよ♪」

「野郎・・・！」

飽く迄自分には非はないと言い張る猫を被った浦原の態度にご立腹の一護。

そして、その直後夜一がユーノの修業の日々を語り出す。

「では、早速ユーノの修業の日々を語ってやろう。そうじゃの・・・まぁなんじゃ。こやつは元々覚えがよかった。鬼道なんぞ、喜助が教えれば教えるだけスポンジのように吸収していきよった。一護とは大違いじゃ！」

「う、ウルセーよ！」

「実際、アタシ自身もスクライアさんの才能には心底驚きました。もしかしたらこれは、黒崎サン以上に化けるのではないかと・・・」

「そしたら、案の定化けやがったよ。全く、末恐ろしい奴が誕生し

ちまったと常々思ってる。」

「そうなんですか。やっぱり、ユーノ君は万能だね♪」

「万能じゃないよ。万能な人間なんてこの世界には一人たりとも居やしない。必ず欠点があるんだ。現に僕は相変わらず攻撃魔法なんてほとんど使えないし、万が一僕が万能だったならば・・・・・・“ジュエルシード事件”なんてものは起きなかったはずだ・・・」

「あ・・・」

「ユーノ・・・」

ユーノは幼いころ、自分が見つけばら撒いてしまったことで起こってしまった、なのはを魔法の世界に引き込む切っ掛けを作ったジュエルシード事件のことをいつまでも根に持っている。

はやてが闇の書事件に対して罪の意識がなかなか消えないように、間接的とはいえ事件の根本的な要因を齎したユーノ自身もそれと非常によく似たものを抱いている。

そんなユーノの言葉に思わず口をこもらせるなのは達一同。

すると、直後ユーノはそんな全員のリアクションを見るなり飄々とした様子で自分の気持ちを誤魔化してきた。

「あ、ごめん。自分で何言ってるんだろう♪ははははは!!!は、話を戻してくださいよ夜一さん♪」

「そ、そうじゃの。まぁ鬼道の才能・頭の良さは感服するばかりだ

が、体力づくりとその他の身体能力のスペックを上げるのは並み一通りにはいかなかったの。」

「はい。アタシ達でよくスクライアさんをいじめましたっけ♪」

「いじめって言うより、嬲り殺しに近かったけどな・・・あれ。」

あの頃のユーノのことを思い出しながら、自分たちがしてきたことを懐かしむ一護達の一方で、ユーノやなのは達は複雑な心境だった。

「そんなにキツイ修行を受けて、お前よく耐えられたな?」

「堪えないといつまでたっても僕は昔のままだったからね。」

「だけど、怪我とかもよくしたんだよね・・・それだと・・・」

不安げな表情でなのはがそう口にすると、ユーノは肯定の返事をした。

「したさ。時には血塗れになって動けなかったこともある。無茶なんて当たり前のようにやってた。ま、今もその辺はあまり変わってないけど・・・」

「何故、そこまでのことを?」

シグナムが訝しげな様子でそう尋ねると、ユーノは今にも泣き出しそうな瞳を宿しながらこう呟いた。

「・・・寂しかったんですよ。」

「寂しい・・だと?」

言葉の意味を理解しかねる一同。

ユーノはそんな一同にさらに続けてきた。

「あの頃の僕は、なのはやみんなと戦うための力がずっと欲しかった。僕の周りには、自然戦うための力を持った凄い人がいっぱいだった。攻撃魔法の使えない自分がなのは達のサポートに回りたくても、ザフィーラさんの様な強固な盾を張ることも、シャマルさんの様なバックアップのスペシャリストでもない。だから、そんな中途半端な力しか持たない自分が許せなかった・・・友達の隣で一緒に戦えないことがこの上もなく寂しかった。」

「「「「「・・・・・・」」」」」

「だから、偶然とはいえ手にした死神の力でもう一度みんなと一緒に戦いたかったから・・・僕は辛い修行に堪えた。」

ユーノがそう話し終えると、真面目な表情で一護や浦原・夜一がこう補足をしてきた。

「あの頃からこいつの覚悟は相当に強かったぜ。お前らにだって分かるだろう?」

「一つ覚えておくといいですよ。“覚悟の大きさは、即ち真の強さの証明”。“想う気持ち力は鉄よりも強い”。これ、結構本当なんっすよ。」

「覚悟の・・・大きさ・・・」

「そうじゃ。覚悟のないものは戦いでは生き残ることは不可能。戦場において最も足手纏いとなる。ユーノの場合、自分ではそう言っておるが・・・儂らから見れば十分お主たちの力にはなっていたはずじゃがな。」

「確かに、情報は最大の武器とも云えますが・・・それでも僕は・・・傲慢なんです。」

「ユーノ君・・・・・・」

ユーノが内心そのようなことを思っていたとは薄々感じてはいたが、今改めてそのことを聞かされるとなのはは自分の気持ちがあふれそうになってきた。

そして、自嘲した様子で目をつむるユーノを見て、なのはは徐にユーノの手を取って優しく握りしめる。

「？なのは・・・」

予期せぬなのはの行動に思わず目を開くユーノ。

すると、なのはは次のように語ってきた。

「私、言っとくけど私やみんなも誰もユーノ君のこと足手纏いとか、役立たずなんて思ったことないからね！ユーノ君にしかできないこと、沢山あること私は知ってるから！」

「なのは・・・」

「あまり自分のことを悪く言わないで。誰もあなたのことを責める人なんかいないから。」

そのようになのはが言った直後、一護や他のメンバーも同じ思いとなると次のように便乗してきた。

「そうだぜ、ユーノ。卑下するのはもうそれぐらいにしとけ。何かあったら俺たちがお前を護ってやるからよ！」

「そうだよ。ユーノが私たちのこと命懸けで護ってくれるから、私たちは明日を向いていける。だから私達も、そんなユーノのことを命懸けで護る。ね♪」

「一護さん・・・みんなも・・・ありがとう。」

自分のことをこれほどまでに気遣ってくれるなのは達の態度を見て、嬉しくなったユーノはなのはが一番見たかった自然な笑みを浮かべる。

それを見たなのはも、漸く安どの表情となった。

「ふふ。やっと笑ってくれた。」

なのはがそう言うと、ユーノはその場で昔のように優しく・暖かい笑みを浮かべるのであった。

「ははは♪」

それにつられる形で、その場にいた一同も思わず笑みを浮かべた。

「「「「「「「「「「「「はははははははははははは。」」」」」」」」」」」」

そして、無事にフォワードメンバーとスクライア商店との模擬戦も終了し、惜しくも敗北に喫したフォワードメンバーを見ながら、なのはが集合の掛け声をかける。

「はーい、集合！」

「「「「「「はい！」」」」」」

浦太郎や鬼太郎は自分の武器を収めながら五人にこう言った。

「惜しいところまで追い詰めたけど、残念だったね♪」

スバルやティアナなどは悔しげな表情でその場に腰を下ろした。

「あ～～～さっきのシフトの切り替えさえうまくいけば逆転できたのに～～～」

「う～～～悔しい～～～」

「けど、リミッターをつけた状態でここまでやれるとは正直思ってなかったぜ。確実に高いレベルへと成長してやがる。言っとくがこれは褒め言葉だから！」

「は、はい！ありがとうございます鬼太郎さん！」

「人をけなすピーチが人を褒めるとは・・・明日はスイカでも降ってくるのではないか？」

「何だその譬え!!降るわけねぇだろんなもん!!!」

「まぁまぁそう怒るでない。」

「け!」

白鳥が鬼太郎をけなし、金太郎が宥める様子を傍で見ていたなのは達は苦笑いを浮かべるばかりだった。

「あはは・・・あれ?シグナムさん、何をしてるんですか?」

すると、その時なのはは唐突に自分のデバイスを起動させるシグナムを凝視し、徐に尋ねる。

「ん?折角だ。私も先ほどから戦いたくてうずうずしておるのだ。どうでしょうか、浦原殿?夜一殿?私と一手しおうと貰えないでしょうか。」

「アタシ達がっすか?」

「ほう、面白そうじゃの。しかしお主一人だけとは不公平ではないか?どうじゃ、どうせやるならチーム形式で行おうぞ。」

「え?それってひょっとして・・・!?」

「はい♪高町さん達機動六課の前線隊長Ｖｓ――――――」

その直後、ユーノと一護の周りに集まる浦原と夜一。

「儂らスクライア&師匠最恐四人チームじゃ。」

「「「「！」」」」

「「「「「お！」」」」」

この夜一の言葉を聞いた直後、全員の視線が四人に集中する。

「ま、マジかよ！？」

「これは見ものだよ・・・！」

恋次たちが驚愕と期待を抱きながら四人に注目す一方で、勝手なことを言って来た二人に一護とユーノが反論してきた。

「おいおい！何勝手に決めてんだよあんたら二人で！？」

「そ、そうですよ。大体、なのは達だってまだ何も言ってませんし・・・」

するとその瞬間、ちょっと考えた様子だったなのはがあっさりとこう言って来た。

「いいんじゃないかな、ユーノ君。私は構わないよ。」

「うん。私も知りたいから、ユーノの師匠たちの実力。」

「私もいいぜ。一度はグラーフアイゼンでぶっ叩いてみたいと思ってた。」

「一対一を望んでいたが、それも悪くない。騎士として全力で行かせてもらう。」

この好戦的な四人の発言に、元来望まない戦いをしない性格の一護とユーノの顔が引きつった。

「おいおい・・・何でここにいる連中は揃いも揃って戦い好きなんだよ・・・」

「こうなったら・・・もう誰が言ったって止められませんよ・・・」

「いいではないか、一護。ユーノ。こやつらの全力全開の力とやらを見てみたい。それで儂らを討てるか、儂らが討つか、勝負によって白黒着く。」

「そう言うわけですから、お願いします♪」

「たく・・・分かったよ。ユーノ、やるぞ。」

「は～～～い。」

一護の言葉を聞いて、ユーノ自身あまり乗り気ではなかったが仕方ないとばかりに返事をし、晩翠を取り出したのであった。

「じゃ、早速前線隊長四人チーム対スクライア&師匠最恐四人チームで全力全開の模擬戦、始めましょう！」

なのはがそう言うと、前線隊長チームはデバイスを取り出し準備に取り掛かる。

その様子を見ていたフォワードメンバーは内心興奮が収まらなかった。

「わあ～～！！ティア！ギン姉！これかなり凄くない！？」

「そうね。なのはさん達の全力全開なんてそう見られないからね。それにあの人たちの力もこの戦いでじっくり見られると思うし、いい機会ね。」

「ええ。みんなでしっかりこの戦いを見定めましょう。」

「「はい！」」

そんな中、死神化した一護に向かって恋次やルキアがこう言って来た。

「一護。本当に大丈夫なのかよ？」

「ユーノ殿と違って、貴様は加減を知らんだろう？」

「大丈夫だよ！そこまで馬鹿じゃねぇし。大体、俺は来るたびにそこの金髪とバトルマニアと毎回模擬戦やってるんだ。」

「その通りだ。だが、今回はこの前のようにはいかぬぞ。」

「今度は私たち四人の力であなた達を倒します。」

「ああ。おめぇらも覚悟しといたほうがいいぜ。」

「私たちの全力全開、舐めてかかったら痛い思いをしますからね！」

と、その時。

なのはの最後の方の言葉を聞いた夜一や浦原は不敵な笑みを浮かべ、こんなことを言って来た。

「ほう・・・痛い思いか・・・」

「？」

「甘いっすね、考え方が。アタシ達と戦うことがどういうことなのか今一分かってないようですから教えておきましょう。」

二人のその言葉を聞くと、同じように一護とユーノも不敵な笑みを浮かべながら言葉を投げかける。

「この戦い・・・痛い思いで済むなら勝負は既に見えてる。勝つつもりでいるなら・・・」

「そう。勝つつもりなら僕ら四人を・・・――――」

直後、ユーノたち四人は声を揃え凄まじい殺気を発しながらなのは達にこう言った。

「「「「殺す気で来い。」」」」

「「「「う！！！」」」」

なのはを始め、殺気と言うものにあまり慣れていないフォワード五人やそれなりの修羅場を乗り越えてきたシグナム・ヴィータの二人

も四人から押し寄せる途轍もない殺気に思わず全身が凍りつく。

「す・・・凄い殺気・・・!!」

「ユーノ君・・・あの笑顔の下にこんな殺気をいつも潜めてるなんて・・・正直怖い・・・!」

「だが、ここで引き下がる訳にはいかぬ・・・!」

「ああ・・・!勝つぜ!!」

四人は何としても勝つという決意の元、リミッターを解除した状態でバリアジャケットを着用する。

「覚悟は・・・・・・決まったようですね。」

「そうですね。さて、こちらも本気で行きましょうか。」

「久々に血が騒ぐの・・・・・・お主はどうじゃ、一護?」

「そうだな。本音を言えばこう言う勝負はあまり好きじゃねぇが、偶にはいいかもな。」

ユーノたち四人もそれぞれ戦闘態勢となると、額に汗を浮かべるなのは達四人を不敵な笑みで凝視する。

そして、はやてとクロノは両チームの間に入って模擬戦の審判を務める。

「両チーム、準備の方はよろしいですか?」

「いつでも。」

「行けるよ。」

離れた場所では向かい合った両チームの個人個人に向かって織姫やフォワードメンバーたちが応援の言葉を投げかける。

「あなた、ユーノさん、夜一さん達もファイト！なのはさん達もガンバ！！」

「言っとくが、殺すんじゃねぇぜおめぇら！」

「なのはさん！頑張ってください！」

「フェイトさんもシグナム副隊長もご武運を祈ります！」

「店長！やっちゃっていいですから！」

「一護！井上の前だからと言って格好つけるなよ！」

『しねーよ、そんなこと！！早くはじめろ！』

恥ずかしげな様子でルキアにそう返事をする一護。

「それでは――――――」

クロノが真剣な表情でそう口にすると、一同の様子も真剣そのものになり暫くの間を置いた直後、はやてが戦闘の合図を出した。

「レディー・・・・・・ゴー！！」

「三人とも、飛べ！」

一護がそう言うと、ユーノ達三人は一斉に空中へと回避。

その直後、一護は天鎖斬月を地面に突き刺す。

「「「「！？」」」」

警戒するなのは達。

すると、一護は地面に向かって自身の霊圧を注ぎ込み技名を口にする。

「月牙八式兵法――――――六式。“陥落月牙”」

直後、地面に送り込んだ霊圧が月牙天衝と化し、その威力によって地面は大きくえぐりかえり間接的に月牙がなのは達の元へ流れ込んできた。

「！みんな避けて！！」

なのはが危機感を覚え、後ろの三人に声をかけるとなのはを含めた四人は月牙を皮一枚で避け空中へと飛び上がる。

シグナムは頭上から見下ろすあまりに凄まじい威力を秘めたこの技の光景に思わず目を疑った。

「地面に月牙を送り込んでえぐり返すとは・・・何とも恐ろしい奴

だ・・・」

と、その瞬間不敵な笑みを浮かべながらシグナムの背後に近づいた浦原が声をかけてきた。

「いいんですか、後ろ見ないで？」

「な！」

気配すら感じさせることなく自分へと近づいてきた浦原に驚愕と恐怖を同時に感じるシグナムが後ろに振り返った直後、浦原は仕込み杖の刀身の表面から鬼道を放出する。

「破道の三十二『黄火閃』！」

刀身から光線のように放たれる黄火閃に直撃したシグナム。

空中で爆音と同時にその光景を目撃したなのは達は声を荒げる。

「「シグナム！」」

「シグナムさん！」

と、その直後ユーノ達の声が聞こえてきた。

「余所見をするなって言われてばかりだよ。」

なのは達がその声に反応し振り返った直後、刀を解放したユーノ・一護・そして徒手空拳の夜一が襲い掛かってくる。

「く！アイゼン！叩き潰すぞ！！」

〈Ｃｏｎｓｅｎｔ．　Ｔｈｅ　ｓｅｃｏｎｄ　ｆｏｒｍ　ａｎｄ　ｍｏｖｅｍｅｎｔ．〉

「バルディッシュ。行くよ。」

〈Ｙｅｓ　ｓｉｒ〉

三人はそれぞれの戦いやすい相手を選択すると、自分の技と力を信じて目の前に立ち塞がる強者を相手にするのであった。

では順に見ていくとしよう。

先ずは真・ソニックフォームでライオットブレードで初速からエリオたちですら残像のように映るフェイトが同じく残像のように映る夜一と激闘を繰り広げていた。

「はぁあああああああ！！！」

「のあああああああああ！！！」

夜一は強力な打撃でフェイトのバルディッシュに対抗し、一線から退いていたということなど微塵も感じさせぬほどの動きでフェイトを翻弄し、その後二人は距離を取った。

フェイトはその軽装故、一度攻撃を受ければ命取りともなる夜一の白打を肩に一発くらってしまい、若干の息を上げていた。

すると、夜一は腕組みをしながらフェイトの速さをほめたたえる。

「・・・なるほど。噂通り高速戦術では屈指の実力のようじゃの。」

「あなたに褒められると、光栄です。」

「フ。じゃが、まだ甘いの。」

するとその直後、夜一はフェイトが感じられないほどの瞬歩で頭上へと出現し、足を振り下そうとしていた。

「！」

「その程度のソニックムーブでこの儂、“瞬神夜一”を捕えたつもりか？」

不敵な笑みを浮かべながら強力な踵落としを仕掛ける夜一。

フェイトは咄嗟にバルディッシュの刀身でそれを受け止めたが、顔は非常に険しいものとなっていた。

そして、何とかそれを捌き切ったフェイトは距離を取るためにソニックフォームで回避し、同時に夜一の速さに驚いていた。

「く！（速い・・・！一瞬の間に気配すら感じさせることなく頭上から近づいてきた・・・！これが瞬神夜一・・・迷ってたら、やられる！）」

そう判断したフェイトは、夜一の動きを警戒しながらバルディッシュに言葉を投げかける。

「バルディッシュ、速攻で行くよ。」

〈Ｙｅｓ　ｓｉｒ　ｔｈｕｎｄｅｒ　ｓｍａｓｈｅｒ〉

フェイトは夜一の周囲に無数の魔法陣を出現させると、サンダースマッシャーを変則かつ不規則に仕掛ける。

「ファイア！」

夜一はそれを見ると、笑みを浮かべながら華麗で無駄のない瞬歩を駆使してフェイトの攻撃を次々に避けていく。

フェイトはこの夜一を見ながら、思わず仰天する。

「（あれだけの数を・・・初めて見たのに掠ることなく躱していくなんて・・・！？）」

「妙な気分じゃ・・・」

と、そう口にした直後夜一がフェイトの背後に近づきいつの間にフェイトの右肩にてを触れていたのでフェイトは度胆をぬいた。

「え！（嘘！！）」

「何故じゃろうな。お主のそれより、砕蜂や白哉坊の瞬歩の方が速いように見えるのは。」

「く！まだだ！！」

フェイトは咄嗟に夜一から距離を取り、サンダースマッシャーで動

きを翻弄させながら一気に近づきザンバーで殴り掛かる。

すると、それを待ち望んでいたとばかりに夜一は殴りかかってきたフェイトの手に足をかける。

「ふん！」

「！？」

その行動に思わず目を奪われるフェイト。

直後、夜一の足が絡まりフェイトは強力な足蹴りを体に食らう。

「はっ！」

「ぐあああああああああ！！！！！！！」

ビルの中へと叩き込まれるフェイト。

砂埃が晴れ、中から出てくる満身創痍のフェイトに向かって夜一が自信に満ちた様子でこう言って来た。

「軽はずみな攻撃は命取りになるぞ、フェイト。まだまだ詰めが甘いの～～～」

「つ・・・強い・・・！」

フェイトは素直に夜一の強さを確信し、圧倒されっぱなしのフェイトを見ていたエリオやキャロは先ほどの夜一の技についてルキアに尋ねる。

「フェイトさんが圧倒されてる・・・！」

「今のは一体・・・！？」

「あれは“吊柿（つりがき）”と言ってな、敵の放った拳や蹴りに手足をかけて攻撃とする技で、夜一殿が編み出したものだ。」

「相変わらず、その実力は健在・・・か・・・」

「ユーノさんもユーノさんで非常に恵まれた環境で育ったものだよ。」

吉良はそんなことを呟きながら、他の対戦を観察する。

お次はシグナムに不意打ちをかけてきた浦原の戦いを見てみよう。

シグナムは飄々とした態度で自分の剣を捌く浦原に先ほどから真っ直ぐな瞳を宿しながら斬りかかってくる。

「はあああああ！！！」

浦原は仕込み刀でそれを受け流すようにシグナムの剣を捌いていき、ある程度の距離を取ると帽子を被り直しこう言った。

「いや～～～♪随分とお熱いお方なんですね、シグナムさんは♪」

「私は騎士としての誇りにかけて、自分の持ちうる全ての力をあなたに叩きこむつもりです。気を抜けば、斬ります。」

「いいっすね、その覚悟。死神のそれにそっくりだ・・・」

若干低い声でそういうと、浦原は持っていた仕込み杖を解放する。

「起きろ、『紅姫』」

解号を唱えた直後、仕込み杖は形状をユーノの晩翠に酷似した鍔のない直刀へと変化させる。

シグナムは初めてお目にかかる浦原の斬魄刀を警戒し、剣を構える。

「（あれが浦原殿の斬魄刀か・・・・・形的にはスクライアの晩翠に酷似してるが、能力は一体どんなものがあるのだ・・・！？）」

すると、その直後浦原は紅姫を構えながら剣先より紅い斬撃を放つ。

「啼け、『紅姫』！」

紅極破（こうきょくは）と呼ばれるこの技の威力は浦原によって加減可能だが、その威力は一護の月牙天衝・ユーノの翡翠斬に匹敵するほど強力なものとなっている。

シグナムは不規則に撃たれる浦原の斬撃を躱しながら、推測を立てる。

「（紅い斬撃を飛ばす技か・・・威力は自分で加減できると見た・・・ならば！）レバンティン！！」

〈Ｓｃｈｌａｎｇｅｆｏｒｍ〉

シグナムは直後、カートリッジをロードするや否やシュラゲンフォルムへと変化させ、魔力を解放しながら浦原に向かって飛竜一閃をぶつける。

「飛竜一閃！！」

浦原は冷静な様子でシグナムの飛竜一閃の軌道を読み、皮一枚のところで躱していく。

「なかなか凄い技を持ってますね。それでは、アタシも本気で行きますか。」

浦原はそう言いながら、再び自分の正面から襲ってくるシグナムの飛竜一閃を見ると、刀を前に突出し『血霞（ちがすみ）の盾』と言う鞘から血を出し、敵の攻撃を防ぐ防壁を張り、攻撃を受け止め後ろに下がり続ける。

そして、不意にその血霞の盾より無数の刃を連続で発射する。

「『切り裂き紅姫』」

予期せぬ攻撃を目の当たりにしたシグナムは目を見開く。

「何！！」

無数に飛んでくる刃に防御もままならないシグナムは険しい表情を浮かべながらその攻撃を受け続ける一方だった。

「ぐぐぐぐ！！！！！！！！」

全身に切り傷が目立ち、ダメージを確実に蓄えていくシグナム。

すると、その時背後より浦原が近づき紅姫の剣先から黒紐の網を出現させる。

「“縛り紅姫”！」

黒紐の網がシグナムの全身を捕え、シグナムは完全に身動きが出来なくなる。

「しまった・・・！くそ！体が思うように動かぬ！」

その直後、浦原は「縛り紅姫」の網の繋ぎ目から霊圧を注ぎ込む。

「“火遊紅姫（ひあそびべにひめ）　数珠繋（じゅずつなぎ）”」

すると、霊圧は火の玉のように繋ぎ目からシグナムに向かっていくと、シグナムに到達した直後に一気に爆発を起こす。

「な！！」

爆発の瞬間、空中に舞い上がるかのように巨大な火の塔が出現し、その塔の中より全身を黒焦げにしたシグナムが力なく地面へと落下していった。

「シグナムの旦那！！」

シグナムをロードとするアギトはこの光景に思わず叫び、観戦していたはやて達もこの光景には流石に唖然となった。

「あちゃ～～～浦原さんも容赦ないわ～～～」

「これが、元十二番体隊長の実力・・・！」

「僕的には、あの涅マユリと同じ隊だったとは正直考えにくいのだが・・・」

「まぁ、涅隊長を見ればそう思うわな・・・」

恋次がクロノにそう返すと、ギンガは目の前に映ってきたヴィータと激戦を繰り広げる一護の戦闘を指さす。

「あ！一護さんとヴィータ副隊長もヒートアップしてますよ。」

夜一・浦原の二人がライトニングの隊長陣を圧倒し、シグナムが戦闘不能となったその頃、ギガトンハンマーを振り回しながら、ヴィータは一護に突進していく。

「ギガトンシュラーク！！」

一護は天鎖斬月の刃でその重くのしかかるヴィータのハンマーヘッドを必死に抑え込みながら、険しい表情でそれを何とか捌いた。

「ぐ！このおおおお！！！！！！」

グラフ―アイゼンを捌き切った一護は瞬歩でヴィータと距離を置き、刀を構え直す。

ヴィータは常人では決して担ぐことのできない巨大な相棒を肩に乗せながら一護の実力に驚嘆していた。

「そんな小せえ刀で、グラーフアイゼンを受け止めるな・・・大したもんだぜ。」

「へ。伊達に恋次の狒狒王蛇尾丸の攻撃を受けてきたことはあるぜ。おめぇこそ、そんな小せぇ体で、んなデカイハンマー持てるもんだ。」

「ふん。褒めても何もでねぇぜ。行くぞ、アイゼン！」

〈Ｈｙｐｅｒ　ｅｘｐｌｏｓｉｏｎ　ｃｒａｓｈｅｒ　ｆｏｒｍ〉

ＩＰカートリッジを使用し、自身の武器の最強形態であるクラッシャーモードを発動させると、ヴィータはそれを思い切り振り上げなあら魔法陣を展開し、力を増幅させる。

「こいつで一気にぶっ叩いてやる、黒崎一護！！」

一護はその光景を目の当たりにしながら、流石にこのままではまずいと判断し、複雑な思いを抱えながら一つの決心をする。

「来るか・・・・・あれを卍解状態だけで受け止めるのは流石に無理そうだな・・・仕方ねぇ。久々にあれ使うか。」

一護はそう呟くと、徐に右手を顔に近づけそれを翳した。

その一方で、魔法の師弟関係を築き上げる普段ならば惚気モード全開のなのはとユーノは現在、お互いに砲撃と斬撃を飛ばしあっていた。

「エクセリオンバスター！」

「輝け、晩翠！」

両者の技は同時に放たれ、直撃するや否や技の威力が消され対消滅を起こす。

このいたちごっこの様な光景がしばらく続いていると、二人の目の前にヴィータが振り上げた巨大なクラッシャーハンマーが飛び込んできた。

「「！」」

なのははその光景を見ながら、目の前のユーノにこう言って来た。

「ヴィータちゃんが本気を出してる。行かなくていいの、ユーノ君？あのままだと卍解した一護さんでも流石に撃墜されちゃうよ？」

すると、ユーノは鼻で笑いながらこう返事をする。

「必要ないよ。あの人がヴィータの攻撃で堕ちるとは考えられない。何故なら一護さんには、“卍解以外の奥の手”があるからね。」

「え？」

ユーノの言葉に思わずきょとんとなるなのな。

すると、その直後十分にエネルギーをためたヴィータがクラッシャーハンマーを一護目掛けて振り下してきた。

「クラッシャーシュラーク！！」

自分に向けて振り下される巨大なハンマーにこのままでは普通に直撃し、撃墜されることは自明の理となっている一護だったが、何故か一護本人は不敵な笑みを浮かべたままだった。

「ふん。」

そして、直撃と共に凄まじい轟音と砂埃が発生し、観戦していたはやて達の元にもその余波が飛来、全員が飛んでくる砂を入れないようしながら決定打となったヴィータの攻撃にスバル達が歓喜の声を上げる。

「決まった！」

「直撃！」

だが、直後ギンガは徐々に晴れていく光景に違和感を感じた。

「いえ・・・・・違うわ。」

「え？」

「あれを見て・・・・・・！」

ギンガがそう言った後、不意に全身から感じてきた独特の霊圧に覚えのある恋次やルキア達は困惑した表情となる。

「この霊圧・・・・・一護め。まさか・・・――――！」

「あの野郎、とうとう使っちまったのかよ。」

やがて、完全に砂埃が晴れた瞬間――――――フォワードの一同やなのは・フェイト、そして目の前で対峙していたヴィータは驚愕の表情を浮かべる。

「な！！う、ウソだろ・・・！何で私のあの攻撃を耐えてるんだよ・・・それに・・・その仮面はなんだよ！！」

ヴィータがそう言うと、一護は咄嗟に出現させた縦じま2本の模様が入ったどくろ上の仮面を装着していた。

なのは達はこれまで一度も見たことのないこの一護の容姿と、周囲から感じ取れる禍々しい霊圧に背筋が凍りつく。

「あの仮面は・・・一体！？」

すると、徐に見ていた浦原が深々と帽子を被りながらその状態の名を口にする。

「『虚化（ホロウか）』しましたか、黒崎サン・・・」

「虚化！？」

共通の疑問を感じていたスバル達も訝しげにそう尋ねると、ルキアや恋次たちが虚化についての説明を始める。

「虚化とは、一護と一部の者だけが持つ『虚』の力を得ることによって爆発的に霊圧を上昇させる方法だ。確かに、あれならばヴィータの攻撃を受け止めることも出来よう。だが、一護自身もあの力は

危険だと悟っていたはずだがな・・・」

「まぁ、最近は使うこともほとんどなかったし・・・一回くらいは大丈夫じゃないかな？」

「やる過ぎなければいいっすけど・・・」

織姫やコンが言う通り、最近の一護はこの虚化を使う機会は滅多になかった。

それだけ実力をつけたということもあるが、何よりも体的な負担を考慮してのことだった。

そんな会話を余所に、一護はグラーフアイゼンを捌き若干籠ったような声で仮面越しにヴィータに言葉を投げかける。

「どうした、ヴィータ？俺が怖いか・・・・・・」

すると、ヴィータは今にも振りえあがりそうな声色で返事をしてきた。

「・・・く！怖くなんか・・・・・・ねぇ！！！！」

〈Ｅｘｐｌｏｓｉｏｎ〉

ヴィータはクラッシャーシュラークにシェアシューテルングスハンマーを追加してきた。

「クラッシャーシュラーク・シェアシューテルングスハンマー！！！」

これほどまでの力を解放したヴィータをフォワードメンバーは見たことがなかった。

恋次たちもまじまじとそれを見つめるが、それでも彼らは虚化の力の大きさの方が危険だと思っているほどだった。

「最大戦力で一気に勝負をつける気か、あいつ。」

「だけど、虚化の力は魔法のそれを超越したとんでもない力だってことは・・・目に見えてるけどね・・・」

一護も虚化状態を保持した状態で一気に勝負をつけようと思い立っていた。

「行くぜ。」

ヴィータの最強最大の攻撃が一護に振り下される瞬間、一護は最大最強の虚化によって爆発的に高められた漆黒の月牙天衝をお見舞いした。

「月牙――――――天衝!!!!!!!!」

クラッシャーハンマーと同じぐらいに巨大化した一護の斬撃が、ヴィータのグラーフアイゼンを圧していき、ヴィータは自分に向かって来た一護の月牙をその身に受けると爆発が収まると同時に地面へと落下していった。

「ぐあああああああああ!!!!!」

「「ヴィータ（ちゃん）！」」

なのはとフェイトはシグナムに続いてヴィータまでもが撃墜された光景に目を疑うばかりだった。

一護はヴィータを撃墜させると、すかさず虚化を解除する。

「よし、一丁上がり！」

そんな圧倒的な一護の力を遠く離れた場所で見ていたフォワード五人やはやて達は口を開いて呆然としていた。

「な・・・うそ・・・でしょ・・・・！」

「何あの力・・・！あんなのありなの！？」

その一方で、ルキアはこの一護の行動にあきれ返っていた。

「全く、あいつと来たら・・・」

これで早くも副隊長二名が撃墜され、残すはそれなり疲労したなのは・フェイトの隊長二名と、目立った外傷も見受けられないユーノ達四人であった。

なのはとフェイトはこの異常なほどに強い四人の実力を目の当たりにし、額に汗を浮かべる。

「こんなにも早く、シグナムさんとヴィータちゃんが撃墜されるなんて・・・」

「こっちは二人。向こうはほぼ無傷の四人――――――」

そして、改めて二人は不敵な笑みでこちらを見つめる四人を見てこう思った。

「「（強い・・・間違いなく・・・！）」」

すると、徐に浦原が帽子を直しながら言葉を投げかける。

「どうしますか、お二人さん？」

「儂らは逃げも隠れもせんぞ。」

「どうせ来るなら、おめぇらの全力で撃ち込んで来いよ！」

「それで僕たちを一気に撃墜出来るならね♪」

それを聞くと、二人は顔を見合わせ笑みを浮かべる。

「・・・なるほど。面白いね、フェイトちゃん。」

「うん。二人の為にも、ここで一気に決めようなのは。」

「そうと決まれば、やるべきことは勿論全力全開フルパワーで勝負！」

なのははそう言うと、ＡＲカートリッジを取り出しレイジングハートに装備する。

〈Ｍａｘｉｍｕｍ　Ｂｌａｄｅ〉

「こうならったら、やるしかない！」

フェイト自身も、ＩＰカートリッジを取り出しバルデッィシュに装備。

〈Ｊｕｐｉｔｅｒ　ｆｏｒｍ〉

マキシマム・ブレイド、ジュピターフォームが露わになり、己の魔力を先端に集めながら周囲の魔法粒子をもかき集めるなのはとフェイトは大幅に距離を取る。

そして、最強の一撃の準備が整った直後、なのはとフェイトが声を上げる。

「受けてみて・・・これが私たちの・・・」

「全力全開。手加減なしのフルパワー！！」

二人のこれでもかとばかりの巨大な砲撃を目のあたりにした直後、一護や浦原の表情が硬くなる。

「来るか・・・」

「さて、どうしたものですかね・・・」

すると、そんな二人や夜一に向かってユーノがこう言って来た。

「任せてください、三人とも。防御は僕がやります。昔から、それが僕の役目です！」

「「「ああ（はい）」」」

三人はユーノのことを信頼して、防御をユーノに委ねることにした。

ユーノはそんな三人の信頼を受けながら、懐からあるものを取り出す。

その直後、なのはとフェイトの超特大集束砲が発射された。

「スターライト・・・・・ブレイカー！！！！！！！」

「ライジングライトニック・・・・・ブレイカー！！！！！！！！」

二人の全力全開の特大集束砲が四人に向かって放たれた直後、ユーノはその砲撃を見ながら不敵な笑みを浮かべた。

そして、辺りが桃色と金色の砲撃で飲み込まれた瞬間あまりの威力と眩しさにはやて達やフォワードの五人は目をつむった。

「「「「「ぐうううう！！！！！」」」」」

「こ、こいつは半端ねぇぜ・・・！！！」

「あいつら、人の迷惑ぐらい考えろ・・・！！」

そんな事を口にしながら全員は光に飲み込まれたユーノ達の安否を確認しようと目の前の光景に目を向けた。

なのはとフェイトは空中に膝をつきながら、肩で息をしていた。

「「は、は、は、は、は、は」」

なのははレイジングハートを元の形状に戻すと、フェイトと共に砲撃に飲みこまれたであろうユーノ達の方に目を向ける。

「や・・・やった・・・やったよ・・・！」

「うん・・・流石に・・・このパワーなら・・・ユーノたちも無事に済む訳ない・・・・・・！？」

と、フェイトが晴れていく光景をまじまじと見ていた直後、二人の眼に衝撃的な光景が映ってきた。

「え！？」

なのはもその光景には思わず目を疑いたくなった。

「――――――無事じゃないって、誰が？」

なんと、二人の目に映ってきたのは特大サイズの翡翠の殻を展開させ、自分と後ろの三人を包み込んだユーノの姿だったのだ。

「「ウソ！！」」

「ユーノ先生・・・まさか二人のあの集束砲を・・・！」

「受け止めた！！」

「そんなチートなことがあるのかよ！？」

フォワード五人や恋次たち、スクライア商店の四人もなのは達と同じかそれ以上にこの目の前の光景に目を疑い、当の二人は恐怖に怯えた表情で言葉を発する。

「そ・・・そんな・・・うそ・・・でしょ！？」

「ユーノ・・・・・・なんで・・・・・・・！？」

「通常状態の翡翠の殻だけじゃ不安だったんでね・・・・・・対抗策は打っておいてよかった。」

すると、ユーノは翡翠の殻を解くと柄頭に装着されている見覚えのあるものを二人に見せた。

そう、それは恋次たちが強敵を前にした時に使うユーノ・スクライアその人が開発した斬魄刀補助デバイスであった。

「補助デバイス！？」

「まさか、この為に態々！？」

「そういうこと。ささ、魔力もほとんど使い尽くした二人を倒すのは実に簡単だ。止めはは四人で一気に行かせてもらうよ。」

不敵な笑みでユーノがそう口にすると、三人も不敵な笑みを浮かべる。

そして、夜一は高濃度に圧縮した鬼道を両肩と背に纏い、それを炸

裂させることで鬼道を己の手足へと叩き込んで戦う白打の最高術、『瞬閧』を発動させ、一護・浦原・ユーノの三人は斬魄刀に霊圧を集めて斬撃を放とうとしていた。

この光景を目の当たりにした二人は直ぐに逃げようとした。

「マズイ！」

「逃げなきゃ・・・って！？」

だが、その直後二人の体は唐突に現れたバインドによって拘束される。

「これは・・・！？」

「ディレイドバインド！」

勿論、仕掛けたのはユーノその人である。

「バインドだって、こうやって決定打を撃つときに使えば攻撃魔法の派手さには劣るが実に恐ろしいものになるんだよ・・・」

「終わりじゃ。」

「いきますか。」

「ああ。俺達四人の・・・――――」

「全力全開！」

四人が二人に向かって攻撃の態勢を見せると、二人はこの世の終わりの様な顔つきとなり、顔中から汗を流した。

「「あ・・・あああ・・・あああああ！！！！！」」

そして、四人の強力な一撃が一斉に放たれる。

「“瞬閧（しゅんこう）”！」

「啼け、紅姫！」

「月牙天衝！」

「輝け、晩翠！」

「「いやあああああああああああああああ！！！！！！！！！！！！！」」

二人は何も出来ぬまま、四人の攻撃を受けてしまい呆気なく撃墜されその後しばらく目を回した状態で動けなくなったという。

完封勝利に近い形で機動六課の前線隊長四人を圧倒したユーノ・一護・浦原・夜一の四人はお互いにこの勝利を祝いながら、最後ぐらいはボロボロの四人を医務室へと運んでいくという行動を見せ、その日一日を終了させたのであった。

教えて、ユーノ先生！

ユ「今日は一護さんのお父さんについてだよ♪」

一「いや、親父のことは言わなくていいって！ウザいだけだから！」

ユ「だけど、尺はまだ余ってますし特別この話で紹介するようなものもありませんでしたし、いいんじゃないですか？」

一「いやだけどな・・・」

と、その時。

突然何処からともなく一護の父・一心が参上する。

心「ふふ・・・我が息子よ。そんなに恥ずかしがることはない。お父さんは常にお前のことを温かく見守っておるのだからな！」

一「げ！来ちまったよこいつ！何でもいいからさっさと帰れ！！ここはムサい髭おやじが来るような場所じゃねぇ！」

心「ムサい髭をなめるな！大体、それが父親に対していう息子のセリフか！？」

一「ウルセー！てめぇこそ散々人のこと蹴り飛ばしたりしてきたじゃねぇかよ！」

心「愛情あってのことだろうが！お父さんの愛だあれは！」

一「嫌がらせの間違いだろうが！！」

そうやって二人は尺が埋まる前での間、ずっと親子喧嘩をし続ける羽目となった。

ユ「あ～～～あ、紹介することもなく終わってしまった・・・また今度改めて紹介することにするから、楽しみにね♪」

心「ドクター・一心のハードボイルド診療所、次回よりスター・・・ごっほ！！」

一「しねぇよ！！」

最後に父親の頭を踏みつける息子、一護であった。

魔導師図鑑ハイパー！

ハロウィンの夜。

機動六課にはそれぞれに仮装をしたメンバーが勢ぞろい。

ヴィ「トリックアトリート！」

ス「お菓子をくれないと悪戯しちゃうぞ！」

ヴィヴィオやスバルなどはそれぞれの個性に見合った格好で大いに騒ぎ、ティアナたちは個性の強すぎる格好をしたはやてに若干顔を引きつり、なのはやフェイト、織姫などはその体系を活かして天使

と悪魔の格好でお菓子を配っていた。

そんな様子を吸血鬼の格好をしたユーノとフランケンシュタインの一護、ミイラ男の恋次が固まって見守っていた。

ユ「楽しそうですね♪」

一「何で俺がまた格好で参加しないとなんないんだよ!?」

恋「俺に至っては呼吸することも難しいぜ。」

恋次はそう言いながら口元の包帯を緩め、ため息を吐き出す。

ユ「まぁ、今夜は盛り上がりましょう♪さて僕もなのはからお菓子をもらってこようかな♪」

ユーノはなのはの元へと近づき、お菓子の所望をする。

ユ「美しい天使よ。トリックアトリート♪お菓子をくれないと、いたずらしちゃうぞ。」

と、ちょっとカッコよくその台詞を口にすると頬を赤くしたなのはが笑顔でこう言った。

な「じゃあ、トリック（性的な意味のイタズラ）で♪」

ユ「え!?」

思わず絶句するユーノだった。

特報・及び次回予告

新「銀さん、銀さん！ちょっとこれ、何すか？！僕たち文字だけになってるんすけど？」

銀「そうだよ。だって俺たち今回はテレビじゃなくて小説だもん。しかもクロスオーバー。」

神「アニメも四月から再開する暁に、今流行のクロスオーバーでさらに知名度上げようってテレ東の策略ね。」

新「テレ東がんなことするかよ！大体、著作権とかの問題でそんな真似できるわけないでしょうが！つうか、僕ら一体何の小説とコラボするんですか？」

銀「何でもいいだろう。コラボどころかこっちは色々と拙いこと平気でやってきてるんだからよ。今更クロスオーバーもくそもねぇだろ。」

新「何ぶっちゃけトークかましちゃってるのあんた！？真面目にやらないとこの小説の主人公に怒られますよ！」

銀「しょうがねぇな・・・仕方ねぇ。真っ黒クロノ君と同じ扱いされたくないから真面目に予告やるか。」

新「いや誰だよ！その真っ黒クロノ君って！？」

宇宙人に支配された「江戸」の街――――――

そこに侍の魂を持った男がひとり――――――

銀「ぎゃあぎゃあ、喧しいんだよ。発情期ですか、コノヤロー！」

その名は、坂田銀時

ユーノ・スクライア外伝　アンゴルモア・銀魂篇

あるとき、ひょんなことから平賀源外の作ったマシーンで何処へとも飛ばされてしまった銀時たち。

しかし、たどり着いたのは魔法の世界――「ミッドチルダ」

銀「なんだよそりゃ！？何で江戸の街からいきなり魔法の世界になってる訳！？」

ユ「とにかく、帰るための手段はこちらで考えますから、暫くはこの機動六課で生活をしていただきたいです。」

そして、事件は静かに幕を開ける。

な「ミッドチルダの各地で、漫画の人物たちが実体化して暴走を果たしてるの！」

新「まさか、僕らにもその影響が！？」

漫画の破壊者――カトゥーンによる漫画破壊計画が実施される。

改作：重要大事（小説を読もう：にじファンにて連載）

カ「そろそろ人間たちに漫画を粗末にすることの愚かさを知ってもらおうと思ってね。邪魔するものは――――――消し屑とする。」

秩序が破壊された漫画から飛び出す漫画の主人公たちが銀時たちに襲いかかる。

土「こいつはクロスオーバーどころの話じゃねぇぞ。このままじゃ俺たちもお前らも、全部まとめて漫画とともに消え失せる。」

近「ユーノ先生、最早猶予は残されていないぞ。」

立ち上がる機動六課・万事屋・真選組

銀「俺は必ず守り抜いて見せる・・・！何が何でも必ず・・・・・・新八を守り抜いてやらあ！！」

ユ「行きますよ、銀さん！！」

立ち上がれ、不屈の侍魂を持った二人の男よ！！

ユーノ・スクライア外伝　アンゴルモア・銀魂篇

新「うわあ～～～結構様になってますね！更新が待ち遠しいな！」

銀「でも俺と声がダブってる奴がいんだぞ。二役も演じるなんてメンドクさくて仕方ねぇよ。」

神「私だってアリサ・バニングスと声全く一緒ね。どうしてくれんだよ、チクショー」

新「コラー！！何経理関係を危うくすること言ってんだよてめぇら！！つうか、僕だけなのはと全く縁ねぇし！！」

声の出演

ユーノ・スクライア：水橋かおり　坂田銀時：　杉田智和　高町なのは：田村ゆかり
志村新八：　阪口大助　神楽：釘宮理恵　近藤勲：千葉進歩　土方十四郎：中井和哉
沖田総悟：鈴村健一　阿散井恋次：伊藤健太郎　他

次回より、更新！！

銀「次回、『クロスオーバーだからって調子に乗るんじゃねぇ！！』」

クロスオーバーだからって調子に乗るんじゃねぇ！！（前書き）

新「そんなこんなで、いよいよ始まります『ユーノ・スクライア外伝　アンゴルモア・銀魂篇』。第一回は僕がミッドチルダに迷い込むところからスタートです。」

ユ「新八君が迷い込んだことで僕らの世界にどのような変化が齎されるのか楽しみだね♪では、ユーノ・スクライア外伝　アンゴルモア・銀魂篇・・・・・・始まります。」

クロスオーバーだからって調子に乗るんじゃねぇ！！

＞ｉ２０４１６―７０９＜

侍の国――――――

僕らの国がそう呼ばれたのは、今は昔の話。

嘗て侍たちが仰ぎ、夢を馳せた青い空には異境の船が飛び交い――――――

嘗て侍たちが肩で風を切り、歩いた街には今は異人がふんぞり返って歩く――――――

それが僕らの世界、それが僕らの街――――――「江戸」。

二十年前、突如江戸に舞い降りた異人「天人（あまんと）」。

彼らの台頭により、侍は弱体化の一途をたどる。

剣も地位も？ぎ取られ、誇りも何もかも僕らは捨て去った――――――

だが、そんな時代でも決して折れない侍魂を持った男がいた。

人はその人を、こう呼ぶ。

“万事屋（よろずや）・坂田銀時”と。

これは、そんな僕ら万事屋一向が遭遇した摩訶不思議な物語と事件。

天人によって支配された街「江戸」。

その江戸に歌舞伎町と言う街がある。

情も不情も何もかもが入り混じった無茶苦茶な街だが、みんなこの街が好きだ。

そんな歌舞伎町の一角にぽつりと立たずむ江戸一のカラクリ技師の店。

平賀源外（ひらがげんがい）、彼が今回僕らをあの魔法の世界へと誘う原因を造った男となる。

僕ら万事屋三人は源外さんの依頼を受け、ある装置の開発の手伝いをすることとなった。

万事屋オーナーの坂田銀時こと、銀さんは先に源外さんのところへと赴き、しぶしぶながらその手伝いをさせられていた。

「たく、めんどくせーな。何で俺らが態々こんなことの為に駆り出されねぇとなんない訳？」

銀時はそう呟きながら、銀髪の頭を掻き毟り隣に座る源外に工具を手渡す。

「金払ってるんだからギャーギャー文句言うんじゃねぇ！てめぇはさっさと手を動かしやがれ！」

源外は銀時に喝を入れると、そのまま受け取った工具を手に装置を造り上げていく。

「へいへい・・・・・で、何でジーさんがこんなモンを造ってる訳？そもそもこれなんなの？」

「あれだ、ほら。ターミナルが最近原因不明の事故でしょっちゅう運航できないなんてニュース見ただろ?幕府としても、外交的な面からみても自国の信用を失うような真似は避けてぇの訳だ。そんなこんなの経緯があって、急きょ俺に個人だけで遠方の地まで移動できる装置を作ってくれと依頼されたわけだ。」

「あんた指名手配されてた筈だろ?上の連中は何を考えてんだろうな?こんな薄汚いジジイに縋り付くようじゃ、もうじき江戸は本当に終わりだ。」

「人の傷口ほじくったり愚痴を零す暇があんなら手を動かせってんだ!ほら、そこのペンチ取ってくれ。」

「はいよ・・・」

銀時はしぶしぶとばかりに気だるそうな声で返事をし、ペンチを渡す。

その時、道具の買い出しに行っていたメガネの少年、志村新八と中国服に身を包んだ少女、神楽(かぐら)が合流する。

「銀さん!道具買ってきました。」

「おうし、そこ置いとけ。」

新八は適当な場所に買ってきたものを置くと、目の前に広がる荘厳かつ巨大な装置に神楽と一緒に目を光らせた。

「おお!ジジイ、何か凄いアルな!お前結構凄かったアルな!!」

「当たりめーよ！俺を誰だと思ってる？」

「「指名手配犯」」

銀時と神楽が無表情にそう口にすると、源外は思わず声を荒げる。

「だから二人そろって人の傷口ほじくってんじゃねぇよ！！」

「源外さん。あとはこの部品をつければ完成ですか？」

「おうよ！いや～しかしこいつを造るのは骨が折れたぜ。う～～～自分でもよく頑張ったと涙が出てきたぜ～～～！！」

源外は新八たちが買って来た工具を使い、最後の調整を完了させるとネジをしっかり固定し、依頼された瞬間移動装置を完成させた。

「よし！完成だ！！」

完成した瞬間移動装置の見た目は見るからに無骨なエレベーターのように見えた。

三人はそんな装置の外見をまじまじと見つめる。

「おいおい。俺にはただのエレベーターのようにしか見えねぇがな・・・」

「見た目は無骨だが、中身は本モンだ。何せ、俺が作ったんだからな！」

「ジーさんの作るものは碌なもんがねぇからな。今一信用できねぇ。」

「何だとてめぇ！俺のこと馬鹿にしてんのか！？」

銀時の発言に癇癪を起す源外。

新八は銀時に向かって注意を促す。

「ちょっと銀さん。その言い方は失礼ですよ。」

「メガネの言う通りだ！そんなに言うなら、この装置の試運転に付き合ってもらうぞ。と言うわけでメガネ、頑張れ。」

「ちょっと待て！！！流れ的におかしいだろ！！そこは銀さんがやるべきじゃないの！！」

新八は源外の予想外な発言に思わず豪快にツッコミを入れる。

ちなみに彼はこの世界でも非常に貴重なツッコミの担当を任されたポジションの人間なのだ。

「新八、よかったアルな。美味しいところは独り占めね！」

神楽は新八に向かって親指を立てて、歯を光らせる。

「美味しくねぇよ！！何その親指！？絶対悪ふざけにしか見えねぇんだけど！！」

「心配するな。中はちゃんと安全に造ってあるはずだからよ・・・」

「筈って何ですか!?僕の命を動物のように扱うのは止めてくださいよ!!!」

開発者源外のいい加減な発言にさらに感情を高ぶらせる新八。

「安心しろ新八。お妙には俺からしっかり言っておくからな。まぁ、成仏してくれ。」

「おい!成仏しろって言ったか!!てめぇら!!!!!完全に人を殺すつもりなのかよ!!!!!」

あまりに無茶苦茶な発言を連発する銀時たちに新八の怒りは頂点に達しようとしていた。

「で、銀の字。試しに何所行かせる?」

「ちょっと!!!!だからやめてってば!!!!」

「がたがた言ってねぇでさっさと入るね、ダメガネ!」

新八は半ば強制的な形で、神楽の力で装置の中に押し込まれそのままガラス張りの様な蓋で閉められた。

その間、銀時は源外と行く場所を決めていた。

「そうだな・・・新八には新八らしくメガネのメガネによるメガネのための国なんてどうだ?」

「んな国あるかよ!!!!ほんとてめぇらいい加減にしろボケ!!!!

！」

「ま、よくわかんねぇが適当に押しときゃ何とかなるだろ。」

「投げやりになってんじゃねぇよ！これ作ったのアンタだろ！！」

装置の中に押し込まれた新八が蓋を叩きながら猛烈なツッコミを入れる中、源外は徐に装置の機動スイッチを押し、座標軸の固定を完了させる。

「じゃあな、新八。帰ってきたら超進化人類らしくメガネ技の一つぐらい見せてくれよな。」

「ついでにメガネで卵割りも出来るようになってくるネ！」

ふてぶてしい笑みを浮かべる銀時と神楽を見て、新八は爆発寸前だった。

「出来るか！！！！！何だよメガネ技って！！僕は人間だ！！！！！」

と、その直後源外が座標軸の場所へ向けて新八を瞬間移動させる。

「よし！そんじゃ行くぜ！！」

「え！？う、うそ！！！！！やだ！！！！！！僕未だ死にたく！！！！！」

そう言おうとした直後、新八は光に飲み込まれて何処へともなく姿を消したのだった。

「行っちゃったアルな。」

「ま、あいつのことだ・・・少しは真面になって帰ってくるだろ・・・」

非常にアバウトなことを口にする銀時たちだったが、その直後源外はとんでもない事実に気づいてしまった。

「お！？」

「どうした、ジーさん？」

「いけねぇ！動力装置にトラブルが起きてやがる！座軸が大幅にずれやがった！！」

その言葉を聞いた瞬間、銀時と神楽は顔をゆがめ、いなくなった新八のことを考えながら徐に手を合わせた。

「・・・新八君・・・どうか成仏してくださいね・・・」

「・・今までの行いをどうか許してください神様・・・」

いや、あんたら少しは心配ってもんしろよ！！

その頃、その新八はと言うと――――――

まるでドラえもんに出てきそうな超空間と呼ばれるところで空間の流れに逆らうことも出来ずに下へ下へと流されていった。

「うわあああああああああ！！！！！」

僕は、この時・・・・・・走馬灯のように自分が生まれたときの記憶と一緒にこれまでの辛くも、そして楽しい思い出の数々が頭の中を過ぎった。

銀さん・・・神楽ちゃん・・・最後の最後にこんなこと言うのなんだけど・・・やっぱりこれだけは言わせて欲しい。

二人とも・・・・・・僕は・・・・・・そんな二人が・・・・・・

「大嫌いじゃあああああああああああ！！！

ユーノ・スクライア外伝　アンゴルモア・銀魂篇

始まります。

新八が超空間の中で大変なことが起こっている間、ここ機動六課隊

舎では非常ににぎやかなことが行われていた。

それは、なのはの友人であるアリサ・バニングスの会社が開発したテレビゲームの試作品をゲームには縁のない六課の前線メンバーが行うというものであった。

午後6時を回ったところで始まったゲーム大会は予想以上に盛り上がりを見せ、対戦者の吉良・ティアナ・鬼太郎・ヴィータをスバル達が応援する中、後ろの方では大人であるユーノやなのは、恋次たちがこんな会話を話していた。

「へぇ～～最近のテレビゲームってのはよく出来てるな。てかどうしたんだよ、これ？」

「アリサちゃんの会社が新しく作ったゲームを、是非私達に体験してもらって感想を聞かせて欲しいって言って来たんですよ。」

「それでか。しかし、アリサは相変わらず対戦モノが好きだよね。」

「にゃはは。ま、アリサちゃんも私もこの手のゲームが一番やりやすからいいかなって♪」

「なのは、昔から対戦ゲーム強いもんね。」

「えへん！伊達にエースオブエースとは言われてますから！」

「いや、あまりそれは関係ないと思うぞ。」

そんな談笑をしている間も、ゲームを行っている当事者たちは本物の戦闘のように神経を集中させ、画面越しに映る自分のキャラを操

作していた。

スバル達はその後ろからさまざまなことを言って来た。

「ティア、もっと左だよ！」

「わ、分かってるわよ！慣れないから仕方ないでしょ！！」

「行け、コノヤロー！ぶちのめせ！！」

「大人気ねぇかもしれないが、ここは私が頂くぜ！」

「何をしておるのだ吉良！もっとそこ攻めるのだ！」

「いや、これでも結構攻めてる方なんだけど・・・！」

ルキアに諌められ、戸惑いを見せながらコントローラを操る吉良だが実際のところ彼はこういうゲームは得意ではない。

このままでは間違いなく一番に負けてしまうのは自明の理と言う状況だった。

吉良はこの状況に焦りを感じ、一つの決断を行う。

「ま、マズイ！ええ～い、こうなったら・・・――適当に押しちゃえ！」

コントローラの操作ボタンを無造作に押しまくる吉良。

すると、直後吉良の使うキャラクターが必殺技を発動し三人のキャ

ラを一瞬にして戦闘不能と化した。
その光景に、思わず三人は固まりユーノは呆気にとられた様子で呟く。
「あ、勝った。」
直後、三人はあまりの光景に同じ言葉を吐いた。
「「「ウソ!!!!!」」」
「吉良さんの勝ちですね♪」
「ぼ、僕が勝ったの!?」
吉良は未だに信じられないとばかりの表情で自分の勝利を疑う。
「見れば分かるだろう?でも、見直したぜ吉良。」
恋次は肩を組みながら吉良の勝利を褒め称えるが、その一方で負けた三人の機嫌が収まることはなかった。
「くそ!!何したんだよお前!?」
「地味キャラは主役キャラに勝っちゃダメなんだよ!」
「いや、この小説の主役は君じゃないだろ!?」
「兎に角、もう一回勝負しましょう!」

「ティアさん。何だかんだ言って結構楽しんでますね・・・」

「流石はツンデレの代名詞であるな。」

「ちょ、白鳥さん！変な言い方は止してください！」

「ま、楽しければいいんじゃない♪」

「同感♪」

こうして、機動六課での夜は騒々しくも瞬く間に流れていくのであった。

そして、一夜明けて太陽が昇り始める午前5時。

ユーノは事実のベッドから起き上がると、まず大きく伸びをする。

「ふわぁ～～～～～」

そして、顔を洗い歯磨きを済ませると日課の気の引き締めと早朝ランニングを済ませ、甚平と帽子を着用する。

着用すると、ユーノは外に青々とした空を見上げながら首を鳴らした。

「うん♪今日も実にいい天気だ。こんな日は、何かいいことでも舞い込んできそうだな♪」

と、そんなことを言っていたが、実際のところこの後ここ機動六課に舞い込んできたのはとんでもない事件であった。

さて、一方その頃瞬間移動装置に誤作動によって未開の地へと飛ばされてしまった数奇な少年、志村新八の方はと言うと、あの後通常空間から出た途端気を失い気が付いた時には辺りには彼の知らないものばかりが広がっていた。

「う・・・・・ここは・・・・・・僕はどうなったんだ？」

目が覚めた新八は落ちていたメガネをかけ直し、徐に立ち上がって辺りを見渡すが、眼前に広がってくる未知なる風景に驚くばかりだった。

「あれ？何処だここ・・・江戸にあんなビルなんか立ってたかな！？本当に・・・僕は何処に飛ばされてきたんだ？」

新八はあたりをうろつき始めた。

しかし、いくらあるけど広がってくるのは自分の知らない建物と風景のみ。

そんな光景に言い知らぬ不安と恐怖を抱きながら、そもそもの何故自分がこんなことになってしまったのかその根本的な原因を考えはじめ、浮かんできたのがあの二人だった。

「銀さんも神楽ちゃんも酷すぎるよ！いや、もうあんな奴らのことなんてどうでもいい。チクショー！！！ホントここは何処なんだよ！！！誰でもいいから教えろボケ！！！！！」

行き場のない怒りを街中で発散する新八の光景は周りの人間からは

明らかに異様だった。

新八はこのままどうなってしまうのか？

その頃、午前の訓練を終えた前線メンバーは全員一様に食堂で朝食をとっていた。

そんな中、恋次は昨日夜遅くに確認された小規模次元震の話を切り出した。

「聞いたか？昨日遅くに、小規模ではあるが同時多発的に次元震が確認されたんだってよ？」

「ああ、それ私も聞きました。ミッドチルダでもあったみたいですね。」

「ひょっとして、これもアンゴルモアの影響なんでしょうか？」

「まだ断定は出来ねぇさ。ひょっとしたら別のロスト・ロギアって可能性もあるしな・・・・・て言うか熊・・・・・お前マヨネーズかけ過ぎじゃねぇ？」

鬼太郎はエリオたちの言葉を返した後、自分の目の前のテーブルで他人が思わず吐きそうになってしまうほどの大量のマヨネーズをかける金太郎にそう口にする。

「知らんのか？マヨネーズは何にでも合うように作られておりますことを。」

金太郎はそう言いながら全てのボトルのマヨネーズを使い切るが、

鬼太郎は湧き上がる怒りを抑えながら冷静に注意を促す。

「胸糞悪くなる、止めろ。」

「私はそれよか、お前の馬鹿面を見ている方が気分が悪くなりますぞ。」

「何だと！？」

真顔の金太郎に罵倒された鬼太郎は思わず声を荒げる。

するとその直後白鳥が鬼太郎に話しかけてきた。

「止めぬか、ピーチ。ゴールデンベアー。全く、お主たちは幼稚だ。」

そう言う白鳥は徐に目の前のオムライスを口に運ぶ。

鬼太郎はその光景に声を上げる。

「いい年して朝からオムライス食ってる奴に言われたくねぇよ！！」

「黙るがよい、顔面ピーチ！」

「だから人の事をピーチって言うなって何遍言えば分んだよてめぇは！！つうかどの辺顔面ピーチだ！！」

二人はにらみ合い、一触即発の状態となる。

「ちょ、落ち着いてください二人とも！」

「白鳥さんもみっともないですよ！」

ティアナやスバルがこの二人の喧嘩を止めようと仲裁に入るが、この二人の場合聞く耳を持たないことは分かっている。

するとその時、浦太郎が横から冷静に注意を促した。

「やめなさい。」

「浦太郎教官。」

「先輩も白鳥さんも、食べ物くらいで浅ましいよ。」

浦太郎はそう言うと、持っていた生卵に皹を入れ、特盛のご飯の上に乗せるために上へと持っていきながらさらに呟く。

「しかし次元震とは――――――警戒に越したことはないけど、何か不吉なことの前兆とも捕えられるから怖いものだ・・・・・・」

そして、浦太郎は言い終わると同時に卵をご飯の上に乗せた。

だが、生卵は直後黄身が崩れる。

しばしの沈黙が流れ、辺りが静まり返った途端浦太郎の性格が豹変する。

「チクショー！！！！！！」

「う、浦太郎さん！？」

浦太郎は机ごとご飯をひっくり返し、怒りを露わにする。

フェイト達はあまりの迫力にはたじろいでしまった。

「食堂の親父の野郎！新鮮な卵仕入れとけって言っただろうが！！また黄身が崩れたぞ！！ちょっとスーパー行ってくる！」

「落ち着いてください、浦太郎さん！食べ物くらいで・・・！」

フェイトやスバル達は興奮して暴れ出そうとする浦太郎の腕を掴み、必死に宥めようとするがその直後、興奮状態の浦太郎はフェイトに向かって暴言を吐いた。

「ウルセー！！“なのはぞっこん同性愛女”！」

「なのはぞっこん！・・・は否定しませんけど、私は断じて同性愛じゃありません！この前異性を好きになったばかりですよ！！」

「つうか、お前は最初の発言の方を否定しろよ！！」

と、そんなやり取りが行われていたその時、ギンガやティアナはこの世で最も怖いものでも見たかのような眼つきになると、恐る恐る浦太郎にこう言って来た。

「あ、あの・・・浦太郎さん・・・」

「あ！？何だよ！！俺は今むしゃくしゃし・・・――」

と、浦太郎が怒鳴りながら食堂にいる全員が顔をそらす方向へ目を

向けてみると、そこには自分が放り投げたご飯を頭に乗せ、顔面に卵がかかった無表情のユーノが立っていた。

「・・・――――」

その瞬間、浦太郎は人生の終わりを確信した。

「（あああああああああ！！！！！！！！）」

人生の終わりを確信した浦太郎だったが、それでも未練がましく生き延びようとユーノの元へ近づき卵で汚れた顔や帽子を綺麗にし始める。

「や、やあこれは店長・・・！！今日もいい天気ですね・・・！！ははははは！！！！！！」

すると、その時ユーノは凄んだ声で浦太郎の右腕をぎっしりと握る。

「おい。」

「は、はい！！！！！！！」

「食べ物を粗末にしてんじゃねぇ！！！！！！！」

ユーノはその瞬間、浦太郎を片腕だけで投げ飛ばした。

「ぎゃあああああああああああ！！！！！！！」

浦太郎はユーノに投げられると、誰もいないテーブルの上に叩きつけられ、辺りは土煙で覆われた。

この光景を間近で見ていたアギトやはやて達は自分たちに藪蛇がこないように知らないふりをしてやり過ごすことにした。

「こ・・・コエ～～～～～！！！！！」

「他人のふり、他人のふり・・・・・・！」

そして、クロノ自身もそんなユーノの怖さを理解した上で新聞を広げながらこう呟いた。

「ああ・・・どこか遠い世界へ行きたい・・・それがダメならせめて新聞ぐらい静かに読ませてほしいものだ・・・」

「ごめんなさい！！！！許して店長・・・ぐっほ！！！！！ぎゃあああ！！！」

浦太郎は必死にユーノに謝罪の言葉を投げかけるが、怒りが頂点に達したユーノを止められるものなどここにはいない。

「人の顔面に卵なんかかけやがって！！！大体！！！ちょっと黄身が崩れるぐらいで簡単にご飯を放り投げてんじゃねぇ！！！！」

「あああああああああ！！！！！！ごめん！！！！なさい！！！！！！」

浦太郎はその後もこの世のものとは思えないような手酷い制裁をその身に受け、傍から見ればまさに地獄の光景そのものだったと言われるのであった。

一方、見知らぬ地へと飛ばされてきた新八はと言うと、当てもなく空腹に苦しみながらも何らかの帰る手立てを見付けるために歩きつづけていたが、既に体力も限界に達していた。

「あ～～～お腹空いたな～～～そう言えば今朝も碌に食べてなかったんだっけ僕～～～」

新八は徐に頭上で燦々と輝く太陽を仰ぎ見ると、虚ろな目でこう呟く。

「太陽が・・・・・眩しいや・・・・・・」

そして、その直後新八は空腹に耐えかね力なくその場に倒れ伏してしまう。

新八はその時、心の中でなんだかんだ言っても自分が大好きな銀時たちの顔が思い浮かんだ。

「（銀さん・・・神楽ちゃん・・・姉上・・・みんな・・・僕、やっぱりみんなことが大好きです・・・・・・先立つ不孝をお許しください・・・・・・・）」

新八はそんなことを思いながら、静かに瞼を閉じてしまう。

さて、ユーノにぼこぼこにされ生き地獄を味わった傷だらけの浦太郎はというと、全員に怪我の具合を心配されながら、包帯でまかれた顔の怪我をひどく気にした。

なのは達も思わず気がかりとなってしまう。

「だ、大丈夫ですか浦太郎さん！？」

「いててて・・・・・生き地獄を味わったよ・・・・・・！」

浦太郎の瞳に宿る切実な涙。

余程怖い思いをしたようだ。

「ユーノって、普段怒んないから切れた時のギャップが凄いよな。」

「あ、うん・・・・・私も一回怒られたことあるけど、正直あの時は人生が終わったかのような錯覚に陥ったもん・・・・・・」

というなのはは何で怒られたか？

思い出してもらう――――――パトリオット篇の番外編で淫獣フェレットの汚名でユーノを下着泥棒扱いしたことにより、逆にユーノにこっ酷く罵倒されたことだ。

「そう言えばお前あいつにぼろ糞言われてたもんな。砲撃魔王って。」

「まぁ、間違ってはいないからね。」

「れ、恋次さんも吉良さんも酷いですよ！！私そんなにボカスカ撃ってませんって！」

「いや、一日に１０発ぐらいは撃っているぞ。」

「えええ！！！ルキアさん数えてたんですか！！！」

真顔のルキアに予想外なことを口され、かなりの動揺を見せるなのはだった。

フォワードメンバーはそんななのはの言われように苦笑いを浮かべるしかなかった。

「あはは・・・・・あら？」

と、その時ギンガが不意に外の方を見た瞬間何かを発見する。

「どうしたの、ギン姉？」

「何か見つけたんですか？」

「あれ。あの人・・・」

ギンガの言葉を耳にし、全員が指し示す場所に目を向けた。

すると、彼らの眼に映ってきたのはミッドチルダでは非常に珍しい地球の衣装、いわゆる和服に身を包んだ１６歳前後の少年が隊舎のそばに倒れていたのだ。

「あ！人が！！」

「大変！！直ぐに助けなきゃ！」

なのは達は急いで少年が倒れている場所まで駆けより、意識を確認し始める。

「あの！しっかりしてください！大丈夫ですか！？」

もうお分かりだと思うが、実はこの少年こそ瞬間移動装置でこのミッドチルダへと飛ばされてきてしまった志村新八その人だったのだ。

ギンガの呼びかけを聞いた新八、力なく声を上げる。

「う・・・・・」

「よかった。息してます！」

スバル達は新八が息をしていることに安堵のため息をつく。

「かなり歩き回ってきたようだね。シャマルさんのところに連れて行こう。」

「では、私が連れて行きましょう。」

「はい。お願いします。」

金太郎は早速背中に気絶したままの新八を背中に乗せると、そのまま医務室のシャマルの元まで運んで行った。

運ばれていく新八の容姿を見ていたなのは達はふとこんなことを話していた。

「それにしてもあの人・・・見慣れない格好でしたね？」

「うん。今どき和服って・・・もしかして地球の出身の人ですかね？」

「だけど、それにしたってね・・・」

謎が謎を呼ぶ今回の来客、志村新八。

そして、ここから始まるハチャメチャでとんでもない事件――――――

気を失ったままの新八だったが、ふとこんなことを思っていた。

「（ん・・・あれ――――――・・・僕、死んでない・・・？あれ・・・何で真っ暗なんだ・・・あれ・・・真っ暗なのは僕のほうか・・・・・・あれ・・・こんな展開・・・前にもどこかで・・・暖かいな・・・）」

自分の体が心地よい暖かに包まれ、今にも天国に上りそうな気分となっている新八だったが、目を覚ました直後その気分は逆転し地獄そのものと化す。

徐に瞼を開けると、新八の目に飛び込んできたのは今にも触れるか否かの距離で自分を見つめる金太郎の顔面であった。

「むっ！？」

新八はその金太郎の課を目にした途端、あまりの恐怖に悲鳴を上げる。

「おあああああああああああああああ！！！！！！！！！」

「おお！素晴らしい反応！良いですな！」

何と金太郎はあろうことか新八が眠っているベッドの中に潜り込んでいたのだ。

だからお前は変態と勘違いされる・・・いや、既に変態だったのだ。

「ちょ・・・近い近い近いっ！！あんた誰だよ！！」

「店長！目を覚ましましたぞ、店長！！」

「人の話し聞けよ！！！ていうか・・・あんた一体何者んだよ！！！言っとくけど僕にそんな趣味はないからな！！！」

怒りに我を忘れ、興奮状態の新八だったが、その直後自分の目の前の風景に思わずきょとんとなった。

「・・・あれ？」

新八はメガネをかけ直し、もう一度辺りを見渡してみたがそこはやはり自分が知らない場所であることに変わりなかった。

「（――ちょっと待てよ・・・ここ一体何処なんだ？あのあと、僕は何処に飛ばされたんだろう？見たところ医務室って感じだけど、だとしたら誰が僕を助けたんだ・・・？僕は本当に一体どうなってしまったと言うんだ・・・？）」

頭の中がぐちゃぐちゃになる新八だったが、その時医務室の扉が開き中に入ってきたのはあの男だった。

「ホラホラ、ダメでしょ少年君。」

「!?」

「もう少し眠ってないとまた倒れちゃうよん♪」

新八が声のする方へ目を向けると、立っていたのは甚平と帽子、扇子片手に飄々とした態度で話しかける、そうユーノ・スクライアだった。

新八はその独特のつかみどころのないユーノの雰囲気にたじろぎながら、彼に尋ねた。

「・・・あなたが・・・助けたんですか・・・?!」

「正確には助けたのはここの医務室のシャマル先生と第一発見者のギンガ・ナカジマ陸曹ね。ちなみに運んできたのは、そこの金太郎。」

「あ、あの・・・!」

「ん?僕に何か質問かな?」

「・・・つかぬ事をお尋ねしますが、ここは一体何所なんですか?」

「ここかい?ここはね・・・ミッドチルダにある特定遺失物管理部機動六課の隊舎♪」

「!(機動六課・・・!?つうか、ミッドチルダって何だ!?)」

新八は自分の知らない地名を聞かされて、漸く自分が全く見当違いな場所に飛ばされてきたということを実感した。

「君は一体何所から来たのかな?見たところ、次元漂流者の可能性が高いけど・・・」

「あ、えっと!!その・・・あなたは、あなたは一体何者なんですか?」

困惑したままの新八だったが、一先ず自分のことを聞いてくるユーノに名前を聞くことにした。

「僕はユーノ・スクライア。ここの機動六課の特別エグゼクティブアドバイザーで、しがない考古学者兼駄菓子屋かな♪」

「どういうことだ一体!?一体僕は何がどうなってるんだ!?何をどう間違えてこんな訳の分からない場所に!!」

新八は頭を抱えながら、自分がなぜこのような場所に来てしまったのか、また帰る方法はあるかを考え始めるが、同様の方が大きすぎて冷静な判断が出来ない様子だった。

そんな新八の状態を見ていたユーノは冷静にこう話しかける。

「まぁまぁ。一先ず落ち着きなよ。まず、君の詳しい素性を知りたいからさ、話してごらんよ。悪いようにはしないからさ。」

ユーノがそう口にすると、新八も一先ず落ち着くことにし素直に自分の素性といきさつを語ることにした。

「は、はい・・・（僕は、この謎の男・・・ユーノ・スクライアさんやここ機動六課に勤務する前線メンバー全員にこれまでの事を全て赤裸々に話した。ユーノさんは直ぐに順応するほどの頭の柔らかい人且つ、頭脳明晰な人であったために僕の話に何の疑いも無く理解してくれた。）」

新八の話を聞き終えると、集まっていた前線メンバー全員も大体のことを理解した上でユーノが最後にこれまでの話を整理することにした。

横には図解役のルキアがスケッチブックを持っていた。

「じゃあ話を整理しよう。君は宇宙人、『天人（あまんと）』によって支配された江戸の街の住人で、依頼された仕事は何でも受ける万事屋銀ちゃんの下で働いていて、あるとき平賀源外という発明家が作った瞬間移動装置の誤作動でこの世界に来てしまった・・・そうなった原因は、自分にも発明した源外さん本人もよく分かっていない可能性がある・・・と、これでいいのかな？」

「はい。完璧です。」

新八が真剣な表情でそう言うと、全員はここまで綺麗に話をまとめたユーノの処理能力に改めて感動し、思わず拍手を送った。

「おおお！！！！流石はユーノ先生！！」

「ユーノ君凄い！！！」

「いはや・・・ちょっと照れるな。」

褒め称えられ、思わず表情を赤くするユーノ。

「あの！僕はこれからどうなるんでしょうか！？元の世界に戻れるのでしょうか！？」

「そうやね・・・一応こちらで元の世界に戻る方法を考えてみるさかい、取り敢えず身元保護の為に暫くは六課の方で預からせてもらうよ。新八くんやったっけ？何も心配せいへんでも直ぐに帰れるようにしてあげるさかい、ここを我が家のように使ってよろしいからな。」

「はい・・・ありがとうございます、八神さん。」

畏まったように新八がそう言うと、はやては手を横に振りながら笑顔でこう言った。

「いいよ、そんな堅苦しい呼び方は！はやてちゃんでもはやてさんでもええって！」

「はい・・・じゃあ、お言葉に甘えさせて抱きます、はやてさん。」

「はあい♪おおきにな。」

すると、新八の話を聞いていた恋次は話の過程で出てきた自分や一護の活躍が週刊誌の漫画で描かれているという事実を聞かされ、思わずこう呟いた。

「それにしても、俺たちの活躍がお前の言うように週刊誌の漫画で連載されてるとは、今一信じがたい話だがな・・・」

「僕だって最初あなた方を見たときはびっくりしましたよ。いっつも銀さんが家で寝転がりながら読んでるジャンプの中に、あなた方が出てきたのを知っていましたからもしかしてとは思ったんですが・・・」

「？銀さんとは誰のことだ？」

「ああ・・・万事屋銀ちゃんのオーナーですよ。年がら年中甘いものばかり食べて、仕事も碌にしないでふらふらと遊び歩いてるダメ人間ですよ。」

「そ、そんなダメ人間の元で何で君は働いてるんだい？」

苦笑いを浮かべながら吉良がそう尋ねると、新八はほくそ笑みながらこう語り出した。

「あはは・・・自分でもよく分からないんですけど、銀さんは確かにちゃらんぽらんで、ハチャメチャでいい加減な人間（ヒト）けど、一緒にいると何かこう明るくなれるんです。そりゃ、あの人の所為で結構怖い思いもしたことはあるけど、銀さんは絶対に僕らのことを見捨てない。いざという時には、死んだ魚みたいな目から急に輝きを持った真っ直ぐな眼になるんです。」

新八の話を真摯に聞いていた一同は思わず口を籠らせたが、それは決して悪い意味ではなく寧ろ心温かくなるほうの意味であった。

すると、徐になのはは笑みを浮かべると新八にこう言った。

「ふふ。随分慕ってるんだね、その人のこと。」

「あはは。慕ってるって言い方はちょっと照れくさいですが、やっぱり僕はあの人のことが大好きなんですよ。」

新八が照れた様子でこう口にすると、ユーノはそんな新八の願いをいち早くかなえてやろうと思い至った。

「成程。よし分かった！こうなったら僕が何とか帰る方法を見つけ出してあげるよ！そして、君の大切な人達に遭わせてあげる♪」

「ユーノさん・・・・・・ありがとうございます！」

ユーノ言葉を聞き、安どの気持ちとなった新八は深々と頭を下げて感謝の意を表した。

「えへ♪」

「もう安心ですぞ。店長ならば必ずや瓦解策を見つけ出します故、あなたも決し希望を捨ててはなりません。」

金太郎がそう言うと、新八は雰囲気を豹変させて先ほどのことを責めたてた。

「お前は僕に希望どころか絶望を与えてきたじゃねぇか！！！！」

「まぁまぁ・・・――――！？」

と、新八をなだめようとした直後、はやての元にグリフィスからの連絡が入った。

『八神部隊長。１０８部隊のゲンヤ・ナカジマ三佐より通信が入っ

ています。』

「ナカジマ三佐から？うん、いいよ。直ぐにつないで。」

グリフィスは回線を切り替え、１０８部隊部隊長のゲンヤ・ナカジマへと通信をつなぎ、繋ぎ終えるとディスプレイにはゲンヤ・ナカジマが映ってきた。

『よう、八神。調子はどうだ？』

「ナカジマ三佐。お陰様で良好ですよ。それより、今日はまた突然どないしたんです？」

『ああ・・・実は昨日の夜遅くに、次元漂流者らしき二人を保護したんだけどな・・・何ツウか変わった二人組でな・・・』

「（二人組！？）」

「特徴は？」

『一人は銀髪の天然パーマの男で、もう一人は中国服の小娘なんだけどよ・・・どうもダメガネって野郎を捜してるらしいんだが・・・よく分かんなくてよ・・・』

「！！」

新八はダメガネというフレーズ、更には最初の分かりやすい特徴を現した言葉を耳にした途端、仰天した。

『それで、うちは今別件の捜査の方で手一杯だし天然パーマにした

って小娘にしたって傍若無人だからよ、ほとほと困り果てる。お前のところでこいつら何とかして欲しいと思ってな・・・頼むぜほんと・・・』

困り果てた様子でゲンヤが陳情すると、新八は確信した。

「（銀さん！神楽ちゃん！！）」

新八はその二人組が銀時と神楽であると確信するや否や、前に乗り出しディスプレイのゲンヤに向かって尋ねてきた。

「うわ！」

「その二人！！！天然パーマの男は死んだ魚の目をしてませんでしたか！！！その女の子って、大食いで毒舌とかはいてませんか！！」

『え！？な、何だよ急に・・・！？お前さんは一体』

「いいから、答えてください！！！」

『えっと・・・！！た、確かにそう言えば天然パーマは死んだ魚の目をしていたし、小娘の方は食堂でとんでもない量の食事をたいらげてるが・・・』

「間違いない！！銀さんと神楽ちゃんだ！！」

「え？それって本当かい！？」

「僕、ちょっと行ってきます！！」

新八はいても経ってもいられず、一目散に外へと向かって走り出す。

「ちょ！！新八君！！待ちなってっば！」

ユーノは早とちりな行動を起こす新八を直ぐに止めようとする。

そんな中、ゲンヤははやてに新八のことを尋ねる。

『おい、八神？あの小僧は何だ？』

「実はその・・・かくかく云々と。」

『ほう。天然パーマのなぁ～～～これはとんだ偶然だ。』

「新八君、待ちなってば。」

ユーノは外に出ようとする新八の肩を押さえた。

「しかしユーノさん！」

「落ち着きなよ。行くにしたって、君ここの地理全然知らないでしょ？」

「あ・・・そうだった・・・」

興奮のあまり冷静さを欠いていた新八はユーノの言葉を聞き、漸く冷静になる。

「二人のところには僕が案内するからさ。安心しなって♪はやて、車借りるよ♪」

「分かったよ。念のため、もう一人ぐらい同行させておくよ。」

「では、私が一緒に行きます。」

「お願いするよ、ギンガ。」

ユーノははやてから車の鍵を借り、ギンガと新八を連れて１０８部隊へと直行する。

車を走らせる最中、ユーノはこう呟いてきた。

「だけど驚いたな。まさか万事屋三人が揃ってこの世界に迷い込んでくるとは・・・」

「しかも保護してくれたのが父さんのところでよかったですね。新八さん、大丈夫ですよ。父さん、ちょっと照れ屋だけど根はすごく優しい人ですから。」

「そ、そうですか。ま、あの二人のキャラが濃すぎるから逆にハタハタ迷惑してるとは思いますけど・・・・・・」

「確かに、君の話を聞く限りでは相当に破天荒な性格のようだね・・・ツッコミを入れるのは大変でしょう・・・」

「いえ・・・もう慣れましたから・・・」

新八のその疲れ切った声色を耳にすると、ユーノとギンガは苦笑いを浮かべるしかなかった。

その頃、１０８部隊の食堂では保護された銀時と神楽が傍若無人な態度で局員たちを困らせているところだった。

「だ・か・ら・・・チョコレートパフェはねぇのかって聞いてんだろうが!?大体何だよ、てめぇら!?何でここはチョコレートパフェの一つも真面に出せねぇんだよ!意味わかんねぇよ!殺すぞ!」

「あ、いえ。そう言われましてもですね・・・」

銀時の無茶苦茶な言い分にどう言葉を返していいか分からないでいる局員の横で、神楽がその容姿に似合わないほどの食欲を発揮させ、隊舎中の食料を今にも平らげようとする勢いだった。

「おい、お代わりアル!さっさともってこいよ。グズが。」

「はい!ただ今!!」

「何ツー胃袋してんだよ、こいつは?」

「うちの食料全部食わるぞ、このままじゃ・・・」

ゲンヤは疲労困憊の様子で頭を抱え、深いため息をついてしまう。

「はぁ～～またこれかよ。いい加減勘弁してくれ・・・」

と、その時局員の一人がユーノ達が到着したことを報告してきた。

「ナカジマ三佐。ギンガ・ナカジマ陸曹とスクライア司書長がご到着致しました。」

「お、本当か?助かった・・・直ぐに通してくれ。」

そして、間もなくしてユーノ達三人が食堂の方へとやってきた。

「失礼します。」

「父さん、大丈夫?」

「この顔を見て大丈夫なように見えるか?俺はもう疲れた・・・頼む・・・あとはお前たちで何とかしてくれ・・・」

「あはは・・・わ、分かりました。」

と、その時ギンガは横で言葉を失っている新八の顔を見つめる。

「?新八さん・・・」

すると、新八は額に汗を流しながら銀時と神楽に向かって一声を発した。

「銀さん!神楽ちゃん!」

「「お?」」

二人の方も聞きなれたその声に反応し、振り返ってみると焦燥と不安を抱き自分たちを見つめる新八が確かに立っていた。

「ほんとに・・・ほんとに銀さんと神楽ちゃんだよね・・・!?」

「お前・・・新八か!?」

「おお！！新八アルか。元気だったかアルか？こちとらどんだけ心配して・・・」

と、神楽がそう言おうとした瞬間、新八は湧き上がる怒りを爆発させ銀時と神楽の顔面を思い切りなぐりつけた。

「ふざけんのも大概にしやがれ！！！！！！」

「「ぐほおおおおおお！！！！」」

ユーノやここの局員一同はこの新八の豹変ぶりに言葉を失った。

「何が心配だ、コラ！ああ！？何が新八だ！？てめぇらの所為でな・・・僕がどんだけ怖い目にあったのか、わかってんのか！？ああ！！！」

粗暴な口調で二人を叱りつける新八。

銀時と神楽は鼻血を押さえながら必死に弁解の言葉を投げかける。

「ま、待て待て！！落ち着けって！！俺らは本気で君の事をだね・・・」

「してねぇだろうが！！！！！さっきまでチョコレートパフェ頼もうとしてたくせに！！！！」

「新八そうかっかするとメガネによくないアル。これ以上陰湿で最低になったら次回の人気投票はランク外に落ちるネ。」

「陰湿で最低なてめぇらに言われたくねぇよ!!!大体、おめぇら今回の章始まってから人のメガネのことしか触れてねぇだろ!!」

「馬鹿野郎。お前の９５パーセントはメガネで出来るってことは、周知の事実だろう?今更気にする事じゃねぇだろ?」

「そうネ。別にメガネ以外の場所が傷つこうがどうなろうと問題ないネ。」

「てめぇら・・・・・本気で殺すぞ!!!!!」

新八は我慢の限界に達すると、自分のトレードマークのメガネを放り投げると二人に向かって報復を実行しようとしたが、これ以上は危険だと判断したユーノとギンガがすかさず止めにかかった。

「お、落ち着いてください!新八さん!!」

「そ、そうだよ新八君!ブレイクブレイク!!」

「離せコラ!!一発こいつらぶん殴らせろ!!脳髄に俺の恐怖を叩きこんでやるよチクショー!!!!」

大暴れ寸前の新八と、そんな新八の豹変ぶりにたじろぐ銀時たち。

そして、最早空気と化してしまっている１０８部隊の局員。

ゲンヤは腕を組み、遠目から心の中でこう思った。

「（何でもいいから早く静かになってほしいものだ・・・）」

そして、そんなやりとりがあり何とか新八を宥めた二人は銀時と神楽を六課へと連れ帰り、新八同様この世界の事情を説明した上で、彼ら二人からも何故この世界にやってきたのかを問いただした。

どうやら、あの後源外の計らいで自分たちが責任を持って新八の救助に向かうことになった訳だが、やはりそこでもトラブルが発生してしまい座軸はあっていたもののついた場所が１０８部隊の隊舎裏であったこともあり、先ほどの様なことが起きていたのだ。

銀時は気だるそうにユーノ達の話を聞いていたが、新八はそんな銀時の態度を見ると、保護者同然のように態度を正させた。

そして、漸く話が終わりユーノが銀時に理解したかどうかを聞いた。

「と、言うわけです。大体分かっていただきました？」

「なんだよそりゃ！？何で江戸の街からいきなり魔法の世界になってる訳！？それに、これの何処が魔法なの？まるっきりただのＳＦ映画じゃねぇか！？」

「大体、さっきからここにいる連中は異様ネ。赤パインがいきなり三番隊の隊長になれるはずが無いネ」

「ああ。それは私も思っていた。」

神楽とルキアがそう口にすると、聞いていた恋次は怒りを露わにする。

「二人して殺すぞ！！！」

「とにかく、帰るための手段はこちらで考えますから、暫くはこの機動六課で生活をしていただきたいです。」

「そうは言われてもよ、何もすることなくこんな訳の分かんないところで居ろって言われてもよ・・・・・・」

「いや。あんただって普段から何もしてないでしょうが。」

銀時の何気ない言葉に思わず真顔でツッコム新八。

すると、話を聞いていたなのはがふとこんな提案をしてきた。

「そんなに何かすることが欲しいなら、どうです？もしよければこの訓練に参加してみません？」

「お？訓練だぁ？」

「はい。この部署は危険なロスト・ロギア・・・つまり、古代の遺産を回収し、それを然るべき場所に保管するのが目的で、そのための戦闘が常に想定されます。ですから毎日戦闘訓練を行ってるんですが、何せ色んな戦闘が想定されますからたくさんの経験が必要なんです。」

「そこで、もしよろしければ銀さんにも訓練に参加していただければ嬉しいのですが？」

「訓練ね・・・・・俺はどうもそういう面倒臭せ～のは苦手だ。どうせなら新八に頼めよ。」

「いや、何で僕なの！？何処まで僕に擦り付ければ気が済むんだよ

！！」

「勿論、ただでとは言いませんよ♪訓練に参加してくれる暁には・・・――――」

「お？」

ユーノはそう言うと、徐に何処からともなく用意していたボードを取出し、そこに書かれた喫茶店のメニューにありそうな様々なチョコレートパフェのラインナップを銀時に見せる。

「美味しい美味しいチョコレートパフェをご馳走します。無論、好きなだけ♪」

すると、その瞬間銀時の態度が一気に豹変しやる気モード全開となった。

「よっしゃああ！！！！てめぇら！！！何ぐずぐずしてんだ！！！さっさと訓練始めんぞ！！！！！」

「私は卵かけごはんお腹いっぱい食べるね！！！」

「お前らどんだけ現金な性格してんだよおい！！！」

この万事屋トリオのボケとツッコミを傍で見ていた前線メンバーは呆然とそのやり取りを見守るしかなかった。

「・・・な・・・なんていうか・・・この三人って・・・・」

「揃ってキャラが濃いわね・・・」

「それよりも僕は個人的に銀さんと声が非常に似ているのが気がかりなのだが・・・」

そう言うクロノだったが、直後ユーノは冷たい表情でこう言った。

「お前がぱくっただけだろ？」

「違うわ！！！！」

「では、早速訓練場に案内しよう。銀時、私が直々に相手を――――」

と、シグナムがレバンティンを取出し銀時と模擬戦をするつもりでいたとき、横からユーノのあきれ返った言葉が入ってきた。

「しなくていいですよ」

「な！スクライア！？何を！！」

「全く・・・あなたのバトルマニア癖はつくづく呆れてものも言えません。いきなり魔法も知らない人にハンデが大きすぎます。先ずはその魔法を見てから話を進めることにしましょう。」

「それもそうですね。銀さん、先ずは何より見ることから始めるべきです。」

「分かった。だが、チョコレートパフェは絶対におごってもらうからな。」

「どんだけ喰いたいんだよおめぇは！！」

飽く迄もチョコレートパフェの為に戦うと言い張る銀時に新八は再びツッコんだ。

そして、三人は早速午後の訓練が行われる機動六課の訓練スペースへとやってくると、なのは達の指導の下、汗を流し戦闘訓練を行うフォワード達五人をビルの上で見守る銀時たち。

恐らくさまざまな思いを抱いている銀時たちにユーノが横から尋ねた。

「どうですか？あれが僕らの魔法です。」

「銀さん。何か言ってくださいよ。」

すると、銀時は新八の言葉を聞いた後目を丸くしながら徐に呟く。

「いや・・・これ、魔法でも何でもなくね。ただの対戦アクションゲームじゃん。」

「でもチョー格好いいネ！！私も戦いたくてウズウズしてきたネ！」

「まぁ、確かに僕らが思っていたような魔法とは大分違いますけど・・・バリアと張れるところ見る限りあれは魔法で間違いなさそうですね。」

「て言うか、俺あんなんと一緒に訓練に参加する訳？無理じゃねぇ？」

「そんなことないですよ♪恋次さん達だって魔法とは縁もゆかりもない死神ですけど、普通に訓練に参加してますから♪」

「あいつらは死神だから有りなんだろう？普通の人間じゃ勝てっこないっつうの！」

「私はあんなもんに負ける気毛頭ないネ！どっからでもかかってくるね！」

否定的な銀時とは対照的に、元が宇宙最恐と言われる四大傭兵民族『夜兎（やと）』に部類される神楽は自信に満ち溢れていた様子だった。

「あの、ユーノさん。ところで僕らは最初何をすればいいんですか？」

「基本的な戦闘データを取りたいから、三人は最初シャーリーと僕らで用意した疑似戦闘システムを使って出てくる標的を倒してもらいます。早く倒せば、それだけパフェが早く食べれますし、お代わりも自由です♪」

ユーノがそう口にすると、銀時と神楽はまるで希望に満ち溢れた生徒のようにユーノの手を握りしめながら輝くような表情でこう言って来た。

「ユーノ先生！俺、頑張ります！」

「序に卵かけごはんも用意して欲しいネ！」

そんな二人の様子を見ながら、新八は真顔でこう呟いた。

「・・・完全にあの二人ユーノさんの手の上だよ・・・て言うか、あの人もあの人で凄い人だ・・・」

しばらくすると、なのは達の訓練が終了しついに銀時たちの番となった。

「は～い。じゃあ、交代。次は銀さん達万事屋メンバーの番ね。」

「銀時。お前の剣腕、しかと見させてもらうぞ。」

シグナムがそう言うと、訓練場に降り立った銀時は鼻で笑いながらこう言った。

「ふん、上等だ。なんなら、一分で終わらせてやらぁあ。」

「ほう、随分な自信だな。」

「おめぇらもよく見ておけよ。死神もぶっ魂消るような絶技、篤と見せてやる。」

銀時はそう言いながら、腰元に差していた木刀『洞爺湖（とうやこ）』に手をかけ、戦うための眼付となる。

新八は緊張した様子で小刻みに震える手を凝視する。

「あ・・・なんか緊張してきた・・・！」

「絶対に卵かけごはんはゲットね！」

その一方で神楽は卵かけご飯の為に俄然やる気を見せていた。

「卵かけご飯に拘り過ぎだろう・・・」

ふとそう呟いた恋次だった。

ユーノ達は一度ビルの上に向かい、三人の元から離れる。

そして、なのはが三人に向かって最終準備が整ったかどうかを尋ねる。

『三人とも、準備はよろしいですか？』

「おう。」

「オッケイアルね！」

「いつでも行けますよ。」

『それじゃ、早速第一回万事屋戦闘訓練を開始します。今回、三人が戦ってもらうのは・・・・・・これ♪』

「動作レベルB。戦闘能力Cってところですかね？」

シャーリーは早速ユーノと一緒に用意した特殊戦闘訓練装置を起動させ、疑似戦闘員の召喚を行う。

すると、銀時たちの前に現れる魔法陣より出現する今回の標的。

その姿はユーノが普段より酷い扱いをしている悪友であり腐れ縁の男友達、クロノ・ハラオウンに酷似した２８体のロボットだった。

『今回三人が戦うのは、無限書庫ブラックリストナンバーワン、腹黒シスコン提督ロボ２８体です♪』

「おい！！！！！何で僕がターゲットになってるんだよ！！！と言うより、本人がいる前で何やってるんだよお前！！！！」

目を丸くし、思わず声を上げてユーノに詰め寄るクロノだが、ユーノは悪意に満ちた清々しい笑顔でこう言い返した。

「え？だってそのほうが面白そうじゃん、僕が♪」

「お前が面白いからやってるんじゃないんだよ！！！今すぐ変更しろ！！！」

と、その時銀時はそんな狼狽するクロノに向かってこう言って来た。

「まぁまぁいいじゃねぇの。同じ声色した奴をぶん殴るなんて、そう滅多にあるもんじゃねぇぜクルクル黒河童君。」

『クロノです！！態と間違えてるでしょ、あなた！！』

「銀さん、いいでんすか本当に？」

「大丈夫だって。パフェの為ならこんなやつの四・五人。殴ろうが蹴ろうがどつこうが問題ないだろ？」

「そうね。掻き毟り・引きちぎってそのあとボイルしても誰も文句言う奴なんて居ないネ」

『おい！！！！！アンタら怖いわ！！！』

二人の発言を聞き、思わず本音に近いツッコミを入れるクロノ。

なのは達は苦笑いを浮かべる一方だった。

「あ・・・ははは・・・そ、それじゃあ模擬戦訓練始めちゃって・・・いいのかな？」

「勿論♪銀さん、新八君、神楽ちゃん。もうぼっこぼこのぐっちゃぐっちゃにしていいから、頑張って全体破壊してね♪」

「「おう！」」

「あ、はい。」

「ちょっと待て！！！やめて！！！僕を傷つけないでお願いだから！！！！頼む！！！！３００円上げるから！！！！」

クロノが必死な様子で銀時たちに陳情しようとすると、クロノが口にしたギャグを聞いていた銀時は何故か必死な様子でこんなことを言った。

「おい！！！！！それは俺のギャグだろうが！！！！！何パクってんのお前！！？？」

「銀ちゃん、何してるね！来たヨ！」

「！」

神楽の言葉を聞くと、銀時は前を振り返り向かってくるクロノ２８体を一瞥し、木刀を構えて三人揃って走り出す。

「ふん。行くぞ、てめぇら！！」

「「はい（おう）！」」

「てやあああああああ！！！！」

銀時は洞爺湖木刀を横なぎに振るい、鬼神のごとく勢いでクロノ達を目にも止まらぬ剣筋で粉砕させていく。

スバル達はその異常とも取れる銀時の動きと剣筋に目を開いた。

「速い！？」

「しかも、一気に５体も！」

それもその筈。

彼は嘗て攘夷戦争と呼ばれる天人との戦争において、白夜叉と恐れられたほどの手練れであり、並みのものではこの男には勝てない。

「わちょおおおおおお！！！！」

一方で神楽の方も得意の体術戦闘と日よけに使っている傘を振りまわりし、傘の先端の銃を乱発させながらクロノを撃破していく。

恋次たちは銀時の戦闘能力もそうだが、あの容姿に似合わぬほどの凄まじい怪力を見せつける神楽に驚いていた。

「あの神楽ってガキも何つー怪力してんだ!?ホントに人間か!?」

「遅いぜ、コノヤロー!!」

銀時はその後も木刀を振り回し、クロノを完膚なきまでに破壊していく。

ユーノはそんな銀時に向かって応援の言葉を投げかける。

「いいぞ、銀さん♪もっとぐしゃぐしゃにしちゃえ♪」

「お前!!本人がいる前でよくも飄々と!!」

既にクロノ・ハラオウンの性格は昔のそれとは似ても似つかぬようなものへと変貌してしまっているが、それは飽く迄もユーノの前だからである。

さて、銀時や神楽ほどの戦闘力はないにせよ新八も剣術道場の息子と言うだけはあり、確かな剣腕を発揮させ、木刀でクロノを破壊していく。

「いやあああああああ!!!」

スバル達はそんな新八の見かけによらない実力にかなり驚いていた。

「新八さんもなかなかやりますね。」

「うん。銀時ほどではないが、いい腕をしている。」

そして、残り一体となったクロノを見ると銀時は鼻で笑いながら走り出し木刀を構えた。

「これで――――――終わりじゃああ！！！！」

銀時は飛び上がり、最後のクロノ・ハラオウンの頭を渾身の力を込めて振りおろし、撃破した。

「あああああ！！！クロノ・ハラオウン提督殿！！！！！」

クロノは悲痛な叫び声をあげながら自分の壊れゆくさまを見つめるのであった。

「はい、そこまで！」

浦太郎がなのはの言葉を聞き、タイムを計測すると驚くべきものであった。

「わお。これはホントぶっ魂消た！殲滅時間僅か５８秒だって。」

「ほ、本当にかい！？」

「ちょっと、レベル低く設定しすぎたかな？」

「だけど、あれってガジェットよりも性能は上だよ。それをこの時間で全体倒しちゃうなんて・・・」

「うん。しかも剣一本――――――」

ユーノやなのは、フェイト・恋次はそう口にしながら改めて訓練場

に佇む上機嫌な様子の万事屋トリオを見つめながら、素直にこう思った。

「とんでもない奴らがやってきたもんだぜ・・・」

すると、その時銀時は木刀を肩に乗せながら振り返りユーノに向かってこう言った。

「よう、ユーノ。約束通り、パフェは頼むわ。」

「はい、約束は守ります♪」

新八は疲れ切った様子でその場に腰を下ろし一息ついていると、タオルを持ってきたフォワードメンバーが新八にそっとタオルと飲み物を手渡した。

「お疲れ様です、新八さん。これどうぞ。」

「あ、ありがとうございます。すみません態々。」

すると、ギンガは新八の顔にメガネがかかっていないことに気が付く。

「あ、新八さん。メガネがありませんよ?」

「え?あ、本当だ。どっかで落としちゃった。」

と、新八がメガネのほうを探していると不意に銀時と神楽が自分のことを褒めている声が聞こえてくる。

「だが、よく頑張ったぜ新八。やっぱやるときは違うな。」

「そうネ。ちょっとだけだけど見直したネ」

そう言って銀時たちは傍に落ちていた新八のメガネに向かって褒め称えていた。

「ちょっと!!!!!新八こっちなんですけど!!!!つうかホントお前らそのネタからいい加減離れろ!!!!!!」

新八は本気で自分の存在を疑いたくなった。

そんな様子を、なのはとユーノは呆然と見つめていたそうな。

「にゃはは・・・本当に大変になりそうだね・・・」

「あはは・・・ゲンヤさんの気持ちがよく分かるよ・・・全く・・・」

さてその頃、ミッドチルダ北部にある聖王教会「大聖堂」の方ではある異変が起きていた。

原因ははっきりとしないが、昨日の小規模次元震の影響でワームホールの様なものが一時的に発生したらしい。

そして、そのワームホールを取って銀時たち同様この世界へと飛ばされてきた三人組がいた。

人は彼らのことをこう呼んだ。

“泣く子も黙る天下の武装警察・真選組”と――――――

「いてて・・・ここは何処なんだ？」

聖王教会の裏庭に落ちた変態ゴリラストーカー男こと真選組の局長、近藤勲（こんどういさお）は強打した頭を押さえながらそう口にすると、それを聞いていたマヨラーで鬼の副長の土方十四郎（ひじかたとうしろう）が煙草を咥えながらこう言った。

「近藤さん。どうやら俺達はまた見当違いな場所に流れ着いちまったようだぜ。」

そんな土方の言葉を聞き、真選組一番隊隊長で、どエスな美少年、沖田総悟が周りの景色を見渡しながらこう言う。

「少なくとも、地球の景色ではないことは確かですかね・・・」

「そ、そんな！く・・・厄介だな。本当にここは何処なんだ！？俺たちがこんなことをしている間に――――――」

険しい表情となり、額に汗を浮かばせる近藤はその直後こう叫んだ。

「お妙さんが他の男に誘惑されちゃったらどうしよう！！！！！」

「そっちの心配かよ！？」

土方は思わず近藤の的外れな発言に盛大にツッコミをいれるのであった。

ちなみにお妙とは、新八の実の姉のことである。

クロスオーバーだからって調子に乗るんじゃねぇ！！（後書き）

教えて、ユーノ先生！

ユ「今日は『銀魂』について教えるよ♪」

ユ「『週刊少年ジャンプ』にて２００３年１２月より連載中。　テレビアニメ作品『銀魂』が放送。スピンオフ作品として小説『３年Ｚ組銀八先生』も出版された。また２０１０年４月２４日にはアニメーション映画『劇場版　銀魂　新訳紅桜篇』が公開され２０１１年４月４日にアニメ再開が決定している。」

ユ「作者空知英秋の初連載となるＳＦ時代劇の体裁をとった人情コメディ漫画。話数カウントは「第〇訓」（〇には漢数字が入る）となっており、各話のサブタイトルは本編の内容を意識した教訓的なものや作者の素朴な疑問やツッコミ等が付けられている。」

ユ「主人公が周囲の面々と繰り広げるドタバタギャグコメディがストーリーの基本路線ではあるが、感動を誘う人情話やバトルなどシリアスな展開になることも多い。独特の巧緻かつ長大ながらテンポのいい台詞回しが特徴で、ギャグはマニアックなパロディ、ハードな下ネタ、業界の内輪ネタ、本作品の自虐ネタが主だ♪」

新「それにしても、まさか魔法少女ものとコラボするとは思っていませんでした。て言うか、この作品自体ＢＬＥＡＣＨともコラボしてるんですよね？」

銀「つうことはだ。もしかしたら俺も前の火曜イーじゃんてきなノリで一護と共演することがあるって訳だな。」

新「いや、流石にそうしょっちゅう出れないでしょあの人。一応医者って設定なんですから・・・」

ユ「ま、作者の気が向いたら出てくるかもしれませんけど、基本銀魂路線で今回はギャグを大目に取り入れていきたいですかね♪」

銀「だとしたらツッコミのポジションは大変だな。という訳で新八、そこんところよろしく。」

銀時はそういいながら新八のメガネをとってメガネに向かってそう言った。

新「てお い！！！！！！！いつまでそのネタ引っ張ってるんだよ！！！！」

魔導師図鑑ハイパー！

チョコレートパフェも見事にゲットした銀時だったが、ふと彼は新八とユーノのことをみながらふと思った。

銀「そういや、お前ら二人ってどっちもメガネだったな。だがどうしてだ？俺にはどうも二人が兄弟のように見える。」

神「というより、ホントは元々一人だったのが二人に分裂したアルよ。」

ユ・新「んな訳ねぇだろ！！お前らぶん殴られたいの！？」

銀「ツッコミの切れもほぼ互角。これはキャラが被っていかんぞ。」

恋「どっちか紛らわしいからメガネとったらいいんじゃねぇの？」

恋次がそう言うと、二人は顔を見合わせ徐にメガネを取った。

すると、その瞬間なのはがユーノに向かって飛びついてきた。

な「ユーノ君頂ます！！！！」

ユ「ぐっほ！！」

アメフト選手並みのタックルを食らい、腰を強打したユーノ。

それを傍で見ていた新八はそっとメガネをかけ直した。

次回予告

新「どうも、僕志村新八です。僕ら万事屋はこの機動六課で保護されることになりましたが、数日もしないうちにまさかあの三人組までやってくるとは・・・そして、アンゴルモアが齎す嘗てない出来事が静かに幕を開ける・・・」

新「次回『ハチャメチャな出逢いは厄介ごとを舞い込む』」

ハチャメチャな出逢いは厄介ごとを舞い込む（前書き）

僕、志村新八は平賀源外が発明した瞬間移動装置の誤作動によって何故かこの魔法の世界、ミッドチルダへと迷い込んでしまった。

しかも、迷い込んだのは僕だけではなく銀さんと神楽ちゃんも含めたまさかの万事屋トリオ三人だった。

そして、僕らは現在次元漂流者扱いでここ機動六課の方で保護されています。

果たして、この先何が待ち受けているのか・・・――僕らは本当に元の世界へ戻ることが出来るのだろうか？

先行きが心配で仕方ありません。

ハチャメチャな出逢いは厄介ごとを舞い込む

＞ｉ２２６０７―７０９＜

万事屋三人が正式に機動六課で保護されることとなったその日の夜、銀時と新八は恋次に案内され機動六課男性隊舎寮の中を歩いていた。

「悪りぃな。態々部屋まで案内してくれるたぁ、お前結構優しいとこあんじゃねぇか。」

「へ。俺様にだって情の一つぐらい持ち合わせてるんだよ。ま、なんだ。ここは見ての通り男女比率が偏り過ぎてる。少しぐらいムサイ男が増えて助かるぜ。」

「確かに、ここは女性陣が凄いですもんね。揃い揃ってみんな化け物みたいに強いですから・・・・・・」

新八はそう口にしながら、昼間の模擬戦でなのは達が行っていた訓練を思い返し一瞬背筋を凍らせた。

「大体、あんなんで『私、魔法少女です！』なんて言ったら流石に引くわ～～～ギリギリキャロやヴィータの背丈なら誤魔化せるかもしれぇけど、なのは達はまず無理だぜ。」

銀時が思わず本音を赤裸々に口にすると、聞いていた恋次も思わず大笑い。

「あはははは！！！！ちげーねー！おっと、あんまり大声で言うと砲撃が飛んで来そうだ。これぐらいにしとこうぜ。命が幾らあってもタリネェ。」

「「賛成～～～」」

確かに、三人が言う通りここでは軽はずみな行動をすれば命が幾らあっても足りない。

何故、こんな偏った具合に恐ろしいほど強い女性陣が集まったの定かではないが、何よりも機動六課では男女比率の問題から、男の発言力が弱いままなのであった。

さぁ、次の日の朝。

フォワード達が朝練に精を出す中、銀時はいまだ起きる気配すら感じさせず寝間着から臍を出し涎を垂らしながら熟睡を続けていた。

「かぁ～～～かぁ～～～かぁ～～～」

と、その直後だった。

朝陽が差し込むその銀時のあてがわれた部屋のドアを開けて金太郎が入ってきた。

「銀時殿！！いつまで寝ておやりか！！」

金太郎は大声で銀時にそう言いながら、強引に掛布団を取り上げる。

「ほら、起きなされ！朝食の用意はとっくに出来ておりますぞ。」

銀時はいやいや目を覚ますと、耳を押さえながら寝起きの声でこう言った。

「あ～～～もういいって。いらねぇって。朝苦手なんだって～～～」

「何を言っておるか！朝食は一日の頭のエネルギーの元となるのですぞ！店長も常々言っております故！」

金太郎は銀時の事情など一切無視した上で大声でそう言うと、そのまま強引に銀時の足を引っ張り部屋の外へと連れ出した。

「ぐああ！」

銀時は抵抗することも出来ずに寝間着のままズリズリと廊下を引きずられていく。

「あ～～～もう勘弁して～～～二日酔いなんだって～～～」

「いい歳した男がそんなになるまで飲むものではない！しゃっきとしてくだされ！日頃のだらけ切った性格習慣をこの世界にいる間に改善する必要がありそうですな。」

金太郎はそう思い立つと、寝起き最悪な銀時を洗面台へと連れて行き鏡を見ながら銀時の顔を勢いよくたまった水の中に突っ込む。

「先ずは顔を洗うことから始めますぞ。はい！」

「ぐっほ！」

半ば強制的に顔を突っ込まれた銀時は数十秒の間何もできずに溺れそうになった。

顔を洗い終えたあとは、金太郎はいまだ恍けた顔をしている銀時を見ながら手に歯ブラシを持たせ、力強く歯を磨かせる。

「次は歯磨きですぞ。」

「ぐあはははははは！！！！」

摩擦熱により歯の中がいつも以上に厚く、そして血塗れとなる銀時は目が覚める以前に精神的にくたばりそうになっていた。

「さぁ、目覚めもすっきりしたところでしょう！」

上機嫌な金太郎とは裏腹に、銀時はこの世界に来て最も悪い寝起きを体験したのであった。

すると、その時ちょうど服に着替え歯を磨きに来た新八が二人を見かける。

「おはようございます。あれ？銀さん、どうしたんですかその顔？」

「～～～なんでもねぇ～～～」

疲れ切った様子で新八の質問にそう答える銀時であった。

その後、朝食をとるために食堂へと向かった二人は朝練を終えたフォワード陣や神楽も入れて賑やかな朝食をいただくこととなったが、銀時がこれから食べようとしているものに食堂にいた万事屋以外の面々が目を見開いた。

「あ・・・あの・・・銀さん・・・何を食べてらっしゃるのでしょうか？」

スバルが恐る恐る銀時が特盛のご飯にかける小豆を見ながらそう尋ねると、銀時は真顔で平然と答える。

「『宇治銀時丼』。どうだ、お前らも食うか？」

「「「「「け、結構です！！」」」」」

フォワードメンバーは躊躇うことなく銀時の勧めを断った。

その横で、呆れた様子で新八や神楽はこう言って来た。

「銀さん・・・流石にそれはマズイですよ。見てくださいよ、ギンガさん達ドン引きじゃないですか！？」

「もともと銀ちゃんの食べるものはどれもドン引きものネ。だから朝は卵かけご飯にしろって何回言ったあるか？」

「何言ってんだよ。どこかのマヨラーが食う犬の餌に比べれば、俺の宇治金時丼の方が何百倍もいいつうの！大体、ご飯にマヨネーズかける奴の気持ちがし・・・れえええええ！！！！！！！！！！」

と、自分の世界でマヨネーズをご飯にかけて食べる男のことを思い返しながらそう口居した直後、銀時や新八と神楽は目の前の光景に目を疑った。

そう、この世界にも銀時が口したようにマヨネーズをご飯にかけて食べる男、熊谷金太郎がいたのだ。

度胆をぬく三人を見ると、金太郎はマヨネーズをかけるのを一度止める。

「ん？何でしょうか、銀時殿？」

「いたんですけど！！！！この世界にも同じことしてる奴がいたん

ですけど！！！」

新八のツッコミが食堂中に響き渡る中、家族三人朝食をとっていたユーノ・なのは・ヴィヴィオの心境は複雑であり、特にユーノは頭を抱えてあきれ返っていた。

「はぁ～～～何度言っても全然やめないんだよあいつは～～～」

「にゃはは・・・ユーノ君、ドンマイ・・・」

「でも、銀さんの宇治金時丼なら私食べてみたいかも！」

ヴィヴィオが何気なくそう口にすると、二人はかなり焦った様子で止めにかかる。

「「ヴぃ、ヴィヴィオ！？お願いだからそれはやめとこう！」」

「んだとてめぇら！！俺の宇治金時丼舐めんじゃねぇぞ！！」

二人の発言に機嫌を損ねた銀時が宇治金時丼片手にそう口にすると、すかさず新八が横からこうツッコンだ。

「あんなこそ！少しは世界観考えてからボケるようにしろ！！！」

傍で呆然とそのやり取りを見ていたはやてはふとこんな事を呟く。

「ほんま、朝から賑やかでええな。これは関西人の血が騒ぐで。」

「君は関西人じゃないだろ・・・・・・」

クロノは冷静に横からツッコムのであった。

朝食を済ませ、それぞれの部署が自分たちの仕事を済ませている中、訓練場の方では現在ヴィータと神楽が戦闘訓練を行っていた。

「うらあああああ！！！！！」

「わちょおおおおお！！！！！」

グラーフアイゼンと神楽の傘が激しくぶつかり合い、お互いに凌ぎを削る中二人は互いをライバル関係と捕え始める。

「やるな！」

「ヴィータの方こそやるネ！」

そんな二人の白熱した戦闘を見ながら、新八とギンガは地面に腰を下ろし長閑な雰囲気を醸し出しながら会話をしていた。

「いや～～～神楽ちゃんもヴィータちゃんも元気ですね。」

「ほんと。まるであの二人を見てると、歳がちょっと離れた姉妹を見てるみたいだわ」

「そう言えば、ギンガさんとスバルさんも姉妹なんですよね？」

「はい。新八さんはご兄弟とかはいらっしゃいますの？」

「姉上が一人います。ま、怒らせるととんでもなく怖いですけど・・・」

新八はそう言うと、頭の中に浮かぶ怒らせた時の実の姉、お妙の形相を思い浮かべ思わず身震いをした。

「あははは。そうですか・・・・・・でもいいものですよね、兄弟って言うのも。」

「はい――――――」

二人はそう言うと、お互いに顔を見合わせ純粋な気持ちで微笑み合った。

「「あはははははは」」

そんな二人の様子を陰でずっと見ていた銀時やスバル、ティアナは自分の眼を一瞬疑いたくなる気持ちでいっぱいだった。

「なにあれ?何で妙にいい感じになってる訳、あの二人?」

「ギン姉って・・・新八さんみたいなタイプの人が好みだったのかな・・・?」

「これはこれでかなり意外よね・・・」

そんなことが起きていた時、同じころ事務仕事に従事していたユーノの元にはやてが徐に声をかけてきた。

「ユーノくん。ちょっといいかな?」

「?何だい。」

はやてに声をかけられたユーノは一度仕事を中断すると部隊長室まで移動し、はやての話を真摯に聞いた。

「騎士カリムが？」

「せや。実は聖王教会の方で追っている別件の捜査の中でアンゴルモアと思わしきロスト・ロギアが確認されてな、そしてそれに付随したちっちゃな事件が次元世界の各地で起きてるさかい、直接会って意見を窺いたいのことや。」

「そうか。分かった、直ぐに支度するよ。」

ユーノはそう言うと、一度室内から出て自分の机に戻ろうとしたとき、たまたま通りかかった銀時とばったり顔を合わせた。

「お？何だ、出かけるのかおい？」

「銀さん。ええ、これからちょっと聖王教会の方に向かうんです♪」

「聖王教会・・・？何か偉く荘厳な名前だな・・・」

「古代ベルカの貴重な遺産などを保守管理する歴史あふれる場所ですから。何なら、行ってみますか？万事屋三人も連れて。」

「いいのかよ、部外者の俺達が行っても？」

銀時がそう口にした直後、唐突にはやてがユーノの背後より顔を出す。

「私は別にかまへんよ。」

「どああ！！びっくりしたなテメェ！」

銀時は何の前触れもなく飛び出してきたはやてに度胆をぬく中、ユーノは呆然としながらはやてを諫める。

「はやて・・・出てくるなら唐突はよくないよ。」

「あはは、ごめんなぁ。安心してな。カリムは私の個人的な友人でもあるさかい、事情は昨日話してある。序にカリム本人も一度遭ってみたいって言っておった。」

「すべてが上手くお前の掌の上で動かされた気でいるのは、俺だけか？」

銀時が顔を引きつりながらそう口にすると、ユーノは徐に銀時の耳元に向かって小声でこう言った。

「気を付けた方がいいですよ、銀さん。この娘、根っからのタヌキですから、突然濁酒とか持った人形みたいになります。」

「マジでか？！」

悪ふざけのようにそう銀時が驚くのを見ると、はやてはかなり焦った様子で弁解する。

「違うよ！！私は正真正銘純然たる女の子！！」

そんなやり取りがあったのち、はやてとユーノは銀時たち万事屋ト

リオを引き連れヴァイスのヘリで後見人カリム・グラシアが根を張るミッドチルダ北部にある聖王教会大聖堂へと向かった。

到着したユーノ達だったが、銀時たち万事屋トリオは目の前に広がる歴史あふれる重厚感漂う荘厳な大聖堂の造りに目を開いた。

「うわ・・・！近くで見るとほんと荘厳ですね・・・！！」

「ターミナルみたいにでっかいネ！」

「ターミナルはもうちっと細長げえだろ？それに、ターミナルとこれとじゃ話が全然違うっつーの。」

「外観はこんな感じや。取りあえず、カリムのところに挨拶に行こうか。」

「へいへい。」

銀時はやる気なさ気にそう口にしながら、新八たちを引き連れて教会の中へと入っていく。

すると、直後ユーノは周囲から漂ってくるあり得ない臭いを感知し、訝しげな表情を浮かべる。

「あれ？」

「ユーノさん。どうかしたんですか？」

「いや・・・何でだろう・・・何か一瞬タバコ臭い臭いがしたような気が・・・」

ユーノがそう口にすると、はやては冗談とばかりの表情を浮かべながら手を横に振る。

「あはは。それはあらへんってユーノくん。ここは全域禁煙の筈やで？」

「・・・それもそうか。」

ユーノもはやての言葉を聞くと、自分の思い過ごしだと判断しそのまま聖王教会の中へと入っていったが、実はこれが思い過ごしなどではなかったのだ。

さて、はやてとユーノ達が教会に到着した報せは直ぐに部屋で事務仕事をしていたカリムの元まで届き、通信でシャッハが報告する。

『騎士カリム。騎士はやてとスクライア司書長、それと例の次元漂流者三名がいらっしゃいました。』

「そう。早かったのね。私の部屋に来てもらってちょうだい。」

『はい。お茶のほうは如何なさいましょうか？』

「そうね・・・今日摘んだばかりの新種があるから、それをお出しして。勿論、ミルクと砂糖付きでね。」

『畏まりました。』

通信を切り、今やっていた事務処理を終え羽ペンを定位置に戻したカリムは机の上を綺麗にし、迎え入れる準備を整える。

「よしっと・・・・・・」

その直後、カリムの目の前のドアから音が鳴る。

「どうぞ。」

カリムの許しを受けると、はやてを始めユーノ・銀時・新八・神楽の三人が揃って部屋の中へと入ってきた。

「カリム！」

「失礼します。」

「いらっしゃい、はやて。スクライア司書長も態々すみませんね。」

「あ、いえ。お世話になってるはこちらの方ですし、クロノがいつもご迷惑をかけて申し訳ありません。」

「そんなご迷惑だなんて、思ってませんよ。そう言えば、先日は学校の兼・・・大変でしたよね。あの時は本当になんとお礼を言ったらよいか？」

「いいですよ、そんな。大したことはしてません。それより、こちらの三人なんですが――――――」

「はい。はやてから聞いています。確か、坂田銀時さんでしたか？」

カリムがそう尋ねると、銀時はやる気のない態度で適当に挨拶を済ませる。

「どうも～～～坂田銀時です～～～趣味は糖分接種です～～～」

この余りに失礼な銀時の態度に思わず恥ずかしくなった新八は銀時の代わりに謝罪の言葉をかける。

「ちょ、銀さん！それ人に向かって挨拶する態度じゃないですよ！！すみませんホント・・・ダメ人間なものでして・・・僕は志村新八です。」

「私は神楽アル！よろしくネ！」

カリムはそんな個性豊かな三人に一瞬きょとんとしてしまうが、直ぐに微笑み返し三人を含めてはやて達を円卓の方へと案内した。

「あははは。すごく賑やかなお三方なようね。ささ、お座りになって。」

五人は円卓の前に座ると、用意された茶菓子や紅茶を適当に啜りながら談笑を始める。

「ごめんなカリム。ここんところ忙しくてすっかりご無沙汰してしもうて。」

「気にしないで。お互い忙しい身なんだし、ね♪」

「あはは、そやな。それにしてもこの前の事故がウソみたいに元通りになったもんやな。」

「え？事後でもあったんですか？」

新八がはやての何気ない言葉に疑問を感じると、カリムが答える。

「そうなんですよ。そのお蔭で大聖堂の五割ほどが半壊してしまいましたが、この通り今ではすっかり以前と同じように復旧しました。」

「色々大変だった訳ね、あんたらも。」

そう言いながら、銀時は折角出された紅茶に失礼を承知で大量の砂糖を無造作に入れていき、それを見ていたカリムは一瞬ショックを受け、新八はその表情を見るなり銀時の手を止めようとした。

「ちょ、ちょっと銀さん！止めてくださいよ、そんなに砂糖入れるの！？カリムさんに失礼でしょ！！てか！あんたホント糖尿病になりますよ！？」

「こちとら糖分取らないとやってらんねぇんだよ。」

平然とそう言いかえす銀時の様子を、ユーノやはやては唖然としながら見つめていた。

「ぎ・・・銀さん・・・」

「ほ・・・ほんまごめんなカリム・・・！折角のお茶やのに・・・！」

「き・・・気にしなくていいから・・・ほんと・・・」

カリムの表情がとてもじゃないが気にして内容には見えなかった。

神楽もそんなカリムの様子を見ながら出された茶菓子を貪り尽くす。

「内心絶対傷ついてるネ。あん！」

「おめぇも少しは遠慮ってもんを覚えろ！」

新八が怒り心頭にそうツッコンだ直後、ユーノは話の話題を変えようと咳払いをした。

「えへん！と、ところで騎士カリム。僕に遭って話したいことがあったんですよね・・・！」

「そ、そうでしたわ・・・！ちょっと、これを見て頂きたいんです。」

カリムはそう言うと、一度部屋のカーテンを閉め真っ暗な状態にするとディプレイを操作し、ユーノ達五人にあるものの影像を見せた。

「何だこいつは？」

訝しげにユーノがそう言うと、ユーノは真剣な表情で映し出されたものの名を口にする。

「アンゴルモアです。」

「餡子もんじゃ焼き？」

「神楽ちゃんは黙って。」

神楽がそう言うと、新八は真顔でそう言った。

「昨日話しましたよね。僕らが回収を試みてるロスト・ロギア、失われた３１個の崩玉の欠片・・・それがアンゴルモです。」

「そう言えば恋次たちが険しい顔でそんなこと言ってたな。」

「それが今回ユーノさんを呼んだ理由ですか？」

「ええ。ただ、今回の場合は今までとはケースが違うんです。そう、明らかにこのアンゴルモアに限ってはスカリエッティ以外に第三者が目をつけているということ。」

「スカリエッティ以外の第三者？！」

「本当ですか、それ？」

はやてとユーノがカリムの言葉に一瞬耳を疑う中、カリムは複雑な表情で更に続ける。

「確証はありませんが、おそらく。一応教会の方で事前に調査を進めたんですが、現在最も怪しいのがこの男――――――」

そう言ってパネルを操作したカリム。

すると、ディスプレイに映し出される一人の男の素顔。

銀時たちはその男の顔をまじまじと見つめる。

その時、ユーノは誰よりも険しい表情でその男のことを凝視する。

「こいつは・・・！」

「ご存知でしたか？」

「ええ、まあ。」

「ユーノくん。この人なんやの？」

「本当の名前は知られてないけど、コードネームは『カトゥーン』。」

「カトゥーンって、あのアイドルグループのカトゥーンアルか？」

「んな訳ねぇだろ。大体、あれは英語表記で『ＫＡＴ－ＴＵＮ』だろ？」

神楽の間違いを銀時が訂正する。

「あの、具体的にこの人はどんな人物なんですか？」

新八がそう尋ねると、ユーノは腕組みをしながら説明を始めた。

「一言でいえば研究者だよ。ただ、あちこちの次元世界に神出鬼没に現れては危険な実験ばかりを繰り返し、挙句ロスト・ロギアの力にさえ触れ、広域指名手配されている次元犯罪者。思想も所在も一切不明。」

「だけど、そんな次元犯罪者が今回アンゴルモアに目をつけてきたんやろ？と言うことは、近いうちに六課とぶつかる可能性が高いい

うことや。」

「そうね。ただ、アンゴルモアそのものが他のどのロスト・ロギアとも違う異質で強力な力を秘めたもの故、仮に見つけてもそれを制御するなんてことは並み一通りではないわ。」

「況してや増殖し、もどきといったものも現れてる具合ですからね。」

険しい表情を浮かべるユーノ・はやて・カリムの三人だったが、銀時はそんな三人とは違い、一人関係のないような物言いをする。

「ふ～～ん。ま、俺達にはあんまし関係ねぇ話だな・・・」

すると、その時聞いていた新八と神楽が反論してきた。

「何言ってるんですか、銀さん。こんな状況だからこそみんなで助け合うのが筋ってもんですよ！」

「新八の言う通りネ。そうやって面倒なことから直ぐ逃げ出そうなんて最低ネ！男の風上にも置けないアル！」

「何言ってんだよ。俺達は次元漂流者、保護されて身なんだぞ？何でそんな立場の人間がんなドロドロの事件に首つっこまねぇといけねぇんだよ？馬鹿かてめぇらは。」

口論を始める三人を見ると、先ほどまで険しい顔を浮かべていたカリムも一度表情を和らげ、仲裁に入る。

「まぁまぁ、それぐらいにしましょうよ三人とも。」

「あ。す、すみません。ほんと、僕ら五月蠅くて申し訳ありません。ほら、銀さんも頭下げる！」

「どうもすみませ～～～ん」

新八に強制され、謝罪の言葉を口にする銀時だったがその声色からは全く気持ちというものが伝わってこなかった。

この銀時の態度には三人も苦笑いを浮かべるばかりだった。

「「「あははは・・・・・・」」」

と、その時徐に部屋のドアがノックされ太い男の声が聞こえてきた。

「失礼する！」

「はい、どうぞ。」

新八はどこかで聞いたことのある声に一瞬耳を疑い、徐にドアの方へと目を向けた。

「あれ？この声どっかで聞いた・・・・・・って！！」

「「な！」」

三人はドアから入ってくる男の姿に度胆をぬいた。

何と、部屋に入ってきたのはあてがわれた教会の服に身を包み紅茶を持った自分たちと同じ世界の住人、真選組局長の近藤勲だった。

「カリム殿。お茶のお代わり・・・・・・てあああああ！！！！」

「「「え？」」」

近藤は何事もなかったかのように紅茶のお代わりを持って部屋に入ってきたが、自分の目の前にいる見慣れた人物を見た瞬間、声を上げて驚いた。

ユーノ達はこの銀時たちと近藤の驚き方に疑問を抱いた。

「し、新八君！！！それに万事屋も！！！！」

「こ、近藤さん！！！！何であんたがここにいるの！！！」

「いや、俺達はだな・・・！」

と、その時近藤の後ろから部下の二人、土方と沖田が入ってくる。

「近藤さん。何もたもたして・・・・・・な！」

「あ！てめぇ！！！」

銀時は土方同様お互いに姿を確認すると、目を見開いた。

「どういうことだ！？何でおめぇらがこっちの世界にいるんだよ！？」

予想外の出来事に驚くばかりの土方。

その一方で沖田は特に驚いたリアクションも見せずに銀時たちに声をかける。

「あれ?旦那もまさかこっちに来てたんですか?」

「土方さん!それに沖田さんも!!何で三人揃って!!?」

新八が声を荒げりそう口にした途端、近藤は後ずさり気味にこう口にした。

「バ・・・バカな・・・まさか俺達以外にも・・・“アニメ『銀魂』再開を記念して、真選組キャスト総出でインタビィーに答えるためにテレ東に向かってたら、変な光に吸い込まれて気が付いたらこの世界にたどり着いてた”人がいたなんてエエエエエエ!!!!!!」

「「違うんですけど!!なんかあんた等だけ、ザ・フライ的な別件に巻き込まれてるんですけど!!!」」

ユーノと新八は声を揃えて息の合った同じツッコミを入れるのであった。

呆然とするカリムやはやては徐に神楽に尋ねた。

「あの、知り合いですか?」

「知り合いも何も、あいつら私達と同じ世界の人間ね!」

「ほ、ほんまかいな!?カリム、あの三人はどうしたん?」

「実は昨日、庭先で声を上げてる三人を見付けて保護したのがそうなんだけど、帰る方法が見つかるまでここで働きたいって言うから・・・ね。」

若干戸惑いを見せた表情で近藤たちに向かってそう言うと、近藤は胸を張りながらこう返事をしてきた。

「ああ。カリム殿には助けてもらったしな。侍は受けた恩は決して仇で返すわけにはいかん！これぐらいは当然だ！」

「ま、俺はあんまり乗り気じゃねぇけどな。」

気だるそうにそう言うと、土方は全域禁煙、しかも来客中であるにも関わらず懐から煙草を取り出し火をつけた。

カリムは困惑した表情で土方に注意を促す。

「あ、あのここは禁煙になってるんだすけど・・・！」

「んな固いこと言うなよ。こちとらニコチン取らないとやってられねぇんだ。」

カリムの言葉にも一切動じない土方を見た新八は真顔でこう呟いた。

「不良だ。この人絶対不良だ。」

だが、そんな土方に向かって一人銀時は怒り心頭な様子で突っかかっていった。

「ああ！？何だてめぇ！！こんな部屋ん中でタバコ吸われちゃな、折角出された上手い紅茶がニコチンで毒されるんだよ！！公共のルールぐらい守りやがれ、ニコラー！」

「誰がニコラーだ！てめぇこそ紅茶に大量の砂糖なんて入れやがって！そっちこそ人の行為を踏みにじるような真似は控えろ、ああ！？」

「んだとやんのか、ああ！！」

「上等だ！喧嘩なら負けねぇぞ！」

二人はお互いに犬猿の仲、またはそれ以上のものだった。

火花を散らし、険悪なムードとなる二人は腰元の武器に手を伸ばし一触即発の状態となる。

それを見た近藤はそんな二人の喧嘩を止めようと仲裁に入る。

「トシ！万事屋！止めぬかみっともない！」

すると、直後総悟はこんな事を近藤に呟く。

「近藤さん。今更この二人を止めるなんて真似、できませんよ。こうなったら盛り上げるだけ盛り上げて世界観も何もかもぶっ壊しちまった方が早え。」

「アンタ何とんでもないこと言ってんの！！！！」

沖田の相変わらずサディスティックな発言を耳にし、新八は声高に

そうツッコンだとき、事態は思わぬ方法で収拾された。

「「ぐっほ！」」

「「「「え！？」」」」

二人は突然頭を強打されると、そのまま気を失いその場に倒れこみ何が何だか分かっていない一同であったが、この二人の喧嘩を止めに入ったのは呆れた様子のユーノだった。

「全く。少し落ち着きなさいよ、いい大人二人が。」

ユーノは二人の頭に拳骨を食らわせると、徐に少し晴れ上がった手に息を吹きかけた。

「ユーノさん・・・あなた・・・」

思わぬユーノの咄嗟の起点の良さに呆然とする新八や神楽たち。

一方ではやてやカリムは安どの表情を見せユーノを褒め称える。

「さっすがはユーノくん！こういう時にほんま頼りになるよ！」

「ありがとうございます、スクライア司書長。部屋が煙草臭くなったらどうしようかと思っていたところですから。」

「いや、ツッコムところそこじゃないからねアンタ！」

カリムの言葉を耳にし、思わずそうツッコム新八だった。

近藤は気絶した土方を呆れながら見下ろし、直後直ぐにユーノに向かって頭を下げて謝罪する。

「取りあえずうちの者が無礼を働いた。本当にすまなかった！」

「あ、いえ。あなたがそこまで頭を下げる必要はありませんよ。それより、あなた方は何者ですか？銀さん達と同じ世界の人間であるようですが・・・」

「おほん！よくぞ聞いてくれた。俺達は・・・――――泣く子も黙る・・・――――！！」

と、近藤がちょっと気合を入れて格好よく自分たちのことを名乗ろうとした瞬間、真顔で沖田が勝手に横からこう言って来た。

「サディスティックマニアで～～～す」

「真選組だから！！違うから何それ！！」

近藤は沖田の言葉を聞き、必死に違うと言い張る中で、はやてとユーノは以前地球でも同じ名前を持つ歴史上の部隊のことを思い返していた。

「真選組って・・・地球にも確か歴史上に同じ名前のものが出てきたような・・・」

「あっちの新撰組とは大分違うようだけどね。」

近藤率いる真選組も集まり、銀時と土方も目を覚ましたところでお互いに顔を合わせた一同は自分たちの今回の事態と境遇について大

体のことを話し終え、一息ついていた。

その間、土方は沖田の手により強制的に禁煙されていたため今にも血管が破れそうな非常に不機嫌な表情を浮かべていたそうな。

「成程。それで新八君たちもこの世界に飛ばされてきたと。」

「はい。まぁ、僕らはホント運が良かったみたいです。お互いに保護された場所がユーノさん達の知り合いのところで。」

「うん！これは何かの因果かもしれなんな。だっははは！！」

「うっせー、ゴリラ！無駄に出番を増やすような行動してんじゃねぇ！！」

一人大笑いする近藤に腹を立てた銀時や、その隣で言い争いを始めるこれまた仲の悪い神楽と沖田を見ながら、ユーノ達魔導師組はかける言葉すらなかった。

「う・・・ほ、ほんま賑やかで楽しいもんやな・・・あはは・・・」

「そ、そうね・・・あはは・・・」

はやてとカリムがあからさまな作り笑いを浮かべていると、新八とユーノは小声でこう言って来た。

「無理してるよね。絶対二人とも無理してるよね。」

「ええ。明らかに顔引きつってますもの。」

ユーノはその後、目の前に出された紅茶を飲み干したのちはやてにこんなことを提案してきた。

「はやて。銀さん達を保護してるのはこっちな訳だし、近藤さん達からも色々話を伺いたいから六課に連れて行った方がいいんじゃないかな？」

「そうやな。カリムはどうやろ？」

「そうしてもらえると、嬉しいわ。近藤さん達もここにいるより実働部隊の方にいるほうが性に合ってると思うし。」

三人は互いに意見が一致し、そう言う方針で話が進む中聞いていた銀時や神楽、土方はかなり焦った様子で文句を言って来た。

「な！冗談じゃねぇぞ！俺はごめんだぜ！こんなニコラーとゴリラが一緒なんて！！」

「そうネ！私もドエスと帰るの嫌ね！！」

「それはこっちの台詞だ！俺達真選組もこんな奴らと一緒の寝床で過ごすのだけは御免被る！」

すると、土方のその言葉を聞いた瞬間銀時の怒りが頂点に達し、再び一触即発の状態に陥る。

「上等だああ！！何ならここで白黒つけてもいいんだぞ！！」

「面白しれー！聖王教会が血の教会になってもいいって言うんなら相手になってやる！！」

この二人の行動を見たはやてと新八、更には近藤がすかさず喧嘩の仲裁に入る。

「「ちょっと!!二人とも止めてくださいよ!!」」

「トシ!!お願いだから面倒事は起こさないで!!!総悟も何そこでバトル始めちゃってるの!!!」

近藤がそう言う間にも、神楽と沖田は狭い部屋の中で格闘戦を勃発させ、既に無茶苦茶な混沌状態と化していた。

呆然とし言葉を失うカリムの横で、ユーノは深いため息をつき帽子を被り直す。

「はぁ〜〜〜〜〜つくづく止めるのも一苦労だ・・・・・・お?」

と、何気なくユーノが窓の外に目を向けた時。

予想外な出来事が起こった。

「え!」

何と自分たちが今いる部屋目掛けて唐突に小型のミサイルが降り注いできたのだ。

ユーノはそれを見るなり声を上げて全員に警告した。

「みんな!離れて!!」

「「「

撃を回避するために裏口から脱出を試みた。

だが、ミサイルは容赦なく逃げ回るユーノ達を付け狙い、折角修復されたばかりの聖王教会はミサイル爆撃により再び崩壊を始めた。

裏口から逃げていたユーノ達は石の螺旋階段を下りながら外へと向かっていると、カリムの身を案じて上ってきたシャッハと合流した。

「騎士カリム！みなさん！よかった！早くこちらへ！」

「シャッハ！参拝者たちの避難は！？」

「はい！全員完了させました。あとは我々だけです。」

そんな中、銀時は一人今回の不幸な事態に関して全ての原因を何の根拠もないにもかかわらず土方に押しつけた。

「何なんだよたく！！こっちの世界に来てから碌なことねぇじゃねぇか！お前が不幸を呼び込んだからだろ！？ああ！！」

「ふざけんな！それはてめぇのほうだろう！」

二人は互いに首筋を持つと、いがみ合いを始めるが直ぐに新八が止めにかかる。

「あんたらこんな非常に喧嘩なんかしてる場合か！？」

「一先ず安全な場所まで逃げなあかん！このまま直進や！」

階段から降りた一同は教会の外へ退避するために全力疾走で駆け抜

ける。

だが、その直後予期せぬことが起こった。

「「「「「「「「「「!?」」」」」」」」」」

脱出する寸前に聖王教会全体を青い半透明な物質が覆い囲み、銀時たちはその謎の物質の中に完全に閉じ込められてしまったのだ。

「な、何だこのプルプルしたものは!?」

「結界魔法にこんなものはないぞ・・・!」

不審に思ったユーノだったが、直後徐にそのプルプルした物体の一部を手に取り口に入れた神楽がその正体を突き止める。

「銀ちゃん!これ・・・心太(ところてん)ネ!」

「ところてんだと!?」

「んなアホな!何でところてんが・・・しかもこんな巨大なドームのように!?」

この常識はずれなふざけた光景にはやてがそう呟いた直後だった。

何処からともなく彼らに向かって何者かが声をかけてきた。

「あはははは!!!教えてやろうか?」

「!」

ユーノや銀時たちが徐に声のする方へ顔を上げてみると、空中に浮かんでいたのはミサイル弾頭片手に不敵な笑い声をあげる奇妙な姿の物体だった。

「な・・・！あれは！！」

「あはははは！！！どうだ、驚いたか貴様ら！」

その物体の容姿は、多少角ばったところが伺えるが明らかに青い半透明な色をしたところてんそのものだった。

ユーノと新八はそれを見た瞬間、声を揃えてツッコンだ。

「「と、ところてんがしゃべった！！」」

あまりの衝撃的な光景に二人の背後に雷が落ちたことは言うまでもない。

シャッハは怒り心頭な様子でこのところてんに向かって尋ねる。

「あなたなの！いきなり攻撃を仕掛けてきたのか！？」

「てめぇ・・・名前ぐらい名乗ったどうなんだ？」

「ふふふ。俺の名は『ところ天の助』。」

「「「ところ天の助！？」」」

名前を聞いた瞬間、一同はあまりのふざけた名前に耳を疑ったが、

銀時ただ一人はこのところ天の助のことを以前ジャンプを読んでいるときに知っていたらしく、そういう意味では誰よりも驚いていた。

「おい！それってまさか昔ジャンプで連載されてた『ボボボーボ・ボーボボ』に出てきたあれじゃねぇだろうな！？」

「漫画の住人がこっちの世界に殴りこんできたって言うのかよ？け、くだらねぇ！おいそこの・・・ところ天の助！俺達をここに閉じ込めてどうするつもりだ？」

土方が煙草をふかしながらそう尋ねると、不敵な笑みを浮かべながら天の助はこう言った。

「ふふ。俺はさるお方の命を受け、お前たちを消しに来た。何でも次元世界最強と言われる男を真っ先に消せと言われていたが、俺個人的にはまず――――――」

天の助はそう言うと、徐に銀時に目を向ける。

「あ？」

訝しげに天の助の視線に目を合わせる銀時だったが、その直後天の助は態度を一変させて銀時目掛けて突進していった。

「先ずはてめぇから始末してやる銀髪！！！」

「ち！」

銀時は咄嗟に腰の木刀に手をかけると、天の助の攻撃に備えた。

天の助は勢いよく銀時に突っ込むと、そのまま土煙を起こして銀時の姿を隠す。

「「銀さん!!」」

「銀ちゃん!!」

「あかん!何でこんなことに!?」

銀時は木刀で天の助のところてんで出来た剣を振り払い、仕舞にはミサイルまで撃ってくる異常なまでに自分に執念を抱く天の助の攻撃を上手く避けながらこう尋ねる。

「く!おい天の助!!俺はお前に恨み買う理由は何処にもねぇぞ!一体何なんだよてめぇはよ!!」

「ムカつくんだよ!!お前の声の所為でな、俺が昔どんだけ怖い思いしたか知らないだろう!!」

「知るか!!んなもん!!!俺の声がお前の人生にどんな影響を及ぼしたかなんてことはなあ!!!」

銀時は理不尽な理由で自分に攻撃を仕掛ける天の助に苛立ちを覚えると、飛んできたミサイルを木刀で一刀両断し、天の助と距離を取る。

すると、天の助はそんな銀時を睨み付けながら更にこう言って来た。

「そうやってお前は俺達ギャグ漫画キャラの立ち位置でありながら、何気にシリアスっぽいキャラとして振る舞い、常に上位の人気を博

してきやがって。ならば仕方あるまい・・・・・俺のこの“プルプル真拳”で嫌と言うほど恐怖を味あわせてやる！！」

天の助はそう言うと、その場から勢いよく飛び上がり銀時に狙いを定める。

銀時もその天の助の行動に気構えし、ユーノ達は頭上に高く浮かび上がる天の助の行動を警戒した。

「何をするつもりだあいつ！？」

すると、頭上高く飛び上がった天の助はその瞬間、プルプル真拳と呼ばれる体がプルプルしたものだけが使うことが出来る技を発動する。

「行くぞ・・・――――！」

天の助はその瞬間、全体の９５パーセントを占めるところてんをアメーバのように展開させると、その広げた体で銀時を飲み込もうとした。

「な！」

「食らえ！プルプル真拳奥義『アメーバ空域』！！！！！」

「く！何だこいつは！？身動きがとれねぇ・・・！」

見事なまでにところてんに体の自由を奪われた銀時は必死に抵抗しようとするが、まるで身動きが取れなかった。

それを見た天の助は体の一部を分裂させて、自分の分身を作り出すと銀時の隙を突いて攻撃を仕掛ける。

「隙あり！！」

「しまっ！！」

「プルプル真拳奥義『ところてんマグナム』！！！！」

天の助はそう言うと、自分の体をちぎっては銀時に連続して投げて攻撃を加える。

銀時は怒涛のように降り注がれる天の助の連続攻撃に直撃する。

「ぐっは！」

「「「「銀さん（ちゃん）！」」」」

「「「「万事屋（旦那）（銀時さん）！」」」」

銀時はそのままところてんに包まれた状態で地面へと落下し、土煙が上がる中で天の助は声高々にこう言った。

「ははははははは！！！！どうだ！俺様の怒りの一撃は！思い知った・・・」

と、天の助が言いかけたその瞬間土煙の中から出てきた銀時の木刀が顔面に直撃する。

「て！！全部ところてんじゃねぇかよ！！」

「ぐっへ！！」

木刀の一撃を受け、勢いよく飛ばされた天の助を哀れに思うユーノ達。

そして、銀時は嘗てないほどの形相を浮かばせながら天の助にこう言った。

「舐めた真似してくれるじゃねぇか、ああ！！細切れにしてやる！切り刻んでやるぞ、天の助！！」

「が・・・・・・！！」

その瞬間、天の助の顔が劇画のように豹変すると、脳裏に嘗て銀時と同じ声色で同じセリフを口した敵のことを思い出す。

〈細切れにしてやる！切り刻んでやるぞ、天の助！！〉

その敵の台詞と形相を再び思い出した天の助は全身を振るいあがらせ、怒り心頭の銀時を指さしながら涙ながらにこう言って来た。

「ほら！！それ！！！その声！！！やっぱりアニメの時と一緒じゃん！！杉田智和じゃん！！」

「問答無用だ、コノヤロー！！」

銀時はそう言うと、形相を浮かべたまま木刀を振り回し一目散に天の助へと向かって走り出し、天の助は自分に向かってくる銀時を激しく拒絶する。

「いやあああ！！！こっちこないで！！！！」

泣き叫び、戦意喪失の天の助に向かって銀時は突っ込んでいき勢いよく木刀を回転させ、天の助の体を細切れにする。

「極悪斬血真拳奥義『カボス』！！！」

「いや！！！それ漫画の内容違うからね！！！」

銀時の場違いな技を見て新八が思わずツッコンだ。

「声優つながりでとどめ差される自分って何なの！！！！！」

天の助は銀時の怒りに触れたことにより、全身を細かく切り刻まれ、無残にも細かく分けられたところてんの体が地面へと落下した。

ユーノや近藤たちは惨めな姿となった天の助を凝視する。

「おう！見事なまでに細切れだな！」

「やりましたね、旦那。」

「何だったんだ、今のは・・・・――――」

「さぁ・・・――――何やったんやろうな？」

ユーノとはやてが苦笑いを浮かべながらそう口にした途端、シャッハは天の助の体に異変が起きていることに気づく。

「あれ？見てくださいこれを！」

全員が天の助に注目すると、細切れになった天の助の体は湯気を上げて蒸発していき、そのまま姿を消していき、後に残ったのは人の形に切られた紙屑だけだった。

訝しげな瞳で全員が残された紙を見つめる中、ユーノは徐にその紙を拾い上げると目をつむり、紙から感じ取れるあるものの気配に目を見開いた。

「これは・・・――――」

「何だ？」

「おそらくさっきの奴の正体はこの紙です。そして、この感覚――――」

「ひょっとして、アンゴルモア！？」

「間違いないよ。」

「ま、マジですかそれ！？だけど何で漫画のキャラクターがいきな僕らに襲い掛かってきたんですか！？」

「うむ。まるで見当がつかぬな。」

ユーノ達全員は何故突然このような最も予期せぬ不可解なことが起きてしまったことに関して大いに頭を悩ませていた、その時だった。

ユーノの元に機動六課のなのはから連絡が届く。

「ん？六課から緊急通信。」

ユーノが急いで画面を表示すると、切羽詰った様子のなのはが言葉を投げかけてきた。

『ユーノ君！はやてちゃん！大変なの！』

「なのは。何があったんだい？」

「一体どうしたん？そんな血相変えたりして・・・」

『うん。こんなこと・・・私達も初めてなんだけど、落ち着いてよく聞いてね。ミッドチルダの各地で、漫画の人物たちが実体化して暴走を果たしてるの！』

「「な！」」

「「「「「何だって・・・！！」」」」」

一同は先ほどのことも踏まえて、なのはが口にした言葉に目を見開いて驚いた。

「ま、まさかそんなことが・・・！？」

『本当だよ！兎に角直ぐに戻ってきて。フォワード五人と恋次さん達は既に迎撃に出てるけど、あまりに数が多いから手におえそうに無いよ！ユーノ君、銀さん達も力を貸して！』

「分かった。そういうことならこっちも急いで戻るよ。」

ユーノは一度なのはと通信を切り終えると、銀時たちの元へ振り返った。

「お話は耳にしたと思います。」

「銀さん。みんな、そういう訳やからお願い！協力してな！！」

はやてが手を合わせて協力の要請を依頼すると、銀時達は一度顔を見合わせてから工程の言葉を口にする。

「はい！僕らで良ければ喜んで。」

「私たちの力で止めて見せるネ！」

「たく。面倒事は御免だけどよ、こうなった以上仕方ねぇか。万事屋は依頼された仕事は何でもこなす職業だからよ。いっちょ派手に暴れようや。」

「「おう！」」

すると、その時そんな銀時たちの言葉を聞いた近藤率いる真選組がこう言ってきた。

「待て万事屋！俺たちのことを忘れてもらっては困る。俺達もこの世界に流れ着いた以上、この世界で起きている危機を放っておく訳にもいかん。俺達真選組も協力するぞ！」

「近藤さん・・・あなた・・・」

近藤の意外な言葉に驚くばかりのユーノだが、今度はユーノにほくそ笑むと更に続ける。

「水臭いことはなしだぜ、ユーノ先生。困ったときは好いやつだろうが悪い奴だろうが手差し伸べる。それが人間ってもんだ。そうだろ、トシ！総悟！」

「俺はあんたみたいに綺麗ごとを言う気にはなれねぇが、派手な喧嘩が楽しめるならこの際関係ねぇ。俺達も参加させてもらう。」

土方が煙草を吹かしながらそう答えると、聞いていた銀時はそんな土方に詰め寄り文句を言い始める。

「ああ？お前が参加したらこっちの士気が下がるつーの！おめぇはその辺で黙って縮こまってろボケ！」

「てめぇ・・・！！言いたい放題言ってくれるじゃねぇかよ・・・！！」

二人は今回三度目となる一触即発状態となってしまうが、見ていたはやてがそんな二人を忌めようとした。

「ちょ、ちょっと！！二人ともいい加減にしてや！！！」

「近藤さん。急いだ方がいいですぜ。じゃねぇと、美味しいところみんな持ってかれちまう。」

「うん！よし、みんな急いで出動だ！」

「はい。と言うわけで騎士カリム。シスター・シャッハ。僕らはこ

れで。ご迷惑をおかけしてしまい申し訳ありません。」

「あ、いえとんでもないです。命が助かったのはあなたが逸早く気づいてくれたおかげですから。」

「ええ。ですから、謝ることはありません。それより、早く現場へ。」

「ほんま、二人ともおおきにな。」

「行くぜ、てめぇら！！」

「「「「「おう！」」」」」

「「はい！」」

銀時の掛け声とともに、ユーノ・はやてを始め万事屋メンバー、そして真選組の三人も含めた八人は全速力で現場へと急行し、聖王教会を後にする。

そして、いまここに始まる壮大かつあまりにふざけた今回のアンゴルモア事件が静かに幕を開けることとなる――――――

ハチャメチャな出逢いは厄介ごとを舞い込む（後書き）

教えて、ユーノ先生！

ユ「今日は真選組についてね♪」

ユ「真選組は江戸の治安を守る特殊警察で局長の近藤勲・副長の土方十四郎・一番隊隊長の沖田総悟を中心に数十人で形成している。全十隊が存在し、一つの隊には十人前後が所属している。」

ユ「たまに武州などで行われる新隊士の募兵で人数を増やしていて、幕府に属していることから攘夷浪士達には「幕府の犬」、銀さん達からは「税金泥棒」と呼ばれているが、実力・実績・権力はある。」

ユ「だが、必ずしも幕府には忠誠を誓っておらず、幕府に関係がある重要人物であろうと悪事を働く者には情けはかけない。また，隊士の殆どが幕府よりもむしろ局長の近藤さんを慕っている。」

近「ついに真選組が参戦したか。これでお妙さんともコラボできれば一番よかったんだけどな！そうすれば、俺とお妙さん、新八君の兄弟出演が実現できたのに！！」

新「すいません！！誰かこの人の頭なんとかしてください！！」

銀「無理だな。ここは諦めてもう弟になっちまったほうがはえぇよ新八」

すると、近藤は徐に新八の肩を叩きこう言った。

近「よろしくな、弟よ。」

新「誰が弟だあああああ！！！！！」

ユ「はぁ～～～君もつくづく大変だね・・・・・・」

改めて、新八の大変さを感じるユーノであった。

魔導師図鑑ハイパー！

聖王教会でのやりとり。

全域禁煙であるにも関わらず煙草を吸い続け土方。

すると、そんな土方に総悟が横から口を挟んできた。

沖「土方さん。駄目ですぜ～～～教会内は全部禁煙ですよ。」

土「いいんだよ、どうせ人に見つからなきゃちょっとぐらい吸ったって・・・」

と、土方が前を向いた瞬間、シャッハのヴィンデルシャフトが牙をむく。

シャ「ヴィンデルシャフト！！」

土「のあああああ！！！！！

ギリギリのところで躱した土方だが、煙草は真っ二つに折れていた。

土「あ、あぶねぇ・・・！てめぇ！！俺を殺す気か！？」

シャ「ここは全域禁煙です。余所で吸ってください土方さん！」

土「て、てめぇ・・・言ってくれるじゃねぇか・・・上等だ。俺と差しで勝負しやがれ！！」

そうして始まるシャッハ対土方の真剣勝負。

その様子を面白がりながらビデオを回す沖田だった。

沖「次回より、『土方十四郎ＶＳ聖王教会』がスタート。みんな、絶対見てくれよ。」

土「始まらんわんなもん！！！」

次回予告

ミッドチルダに現れる漫画の人物たち。

予期せぬ事態に戸惑うばかりのなのは達。

そして、万事屋・真選組を交えた三つ巴の壮絶バトル。

神「次回『仮想現実ばっかり目を向けやがって・・・偶にはパソコンのディスプレイじゃなくて真正面から現実とぶつかりやがれ！』」

魔法の世界、ミッドチルダへと流されてきた僕たちはユーノさんとはやてさんに連れられ、聖王教会カリム・グラシアさんの元を訪れた。

そして、そこで思わぬ人物たちと再会を果たす――――――

だが、そんな矢先・・・僕らは謎の襲撃を受けてしまう。

襲ってきたのはまさかの漫画キャラクター、『ボボボーボ・ボーボボ』に出てくる全身ところてんで出来たところ天の助だった。

銀さんは図らずも天の助と交戦し、完膚なきまでに粉みじんにして圧倒。

だが、問題はこれだけは終わらなかった。

僕達が襲撃を受けたほぼ同じころ、ミッドチルダ全域でも漫画キャラクターたちによる反乱が勃発。

いま、混沌とした漫画キャラクターと僕ら人間との熾烈な戦争が幕を開けることとなる。

仮想現実ばっかり目を向けやがって・・・偶にはパソコンのディスプレイじゃなくて

＞ｉ２２６０８―７０９＜

聖王教会を後にし、市街地付近へと出てきたユーノ達。

真選組もいつもの制服に着替え、準備を整えるとはやては真剣な表情で次のように指示を出した。

「よし。私はこのまま六課の方に戻って現状を確認する。ユーノくんはそのまま銀さん達と一緒に街に出現した漫画キャラ達の殲滅の方を頼むよ。」

「分かった。恐らく今回現れた漫画キャラはすべてさっきのところ天の助同様アンゴルモアによって実体化した紙の操り人形だ。」

「つうことはだ・・・俺達が幾らぶった斬ろうが何しようが罪にはならねぇって訳だ。」

「だったら話は簡単ですせ。一番強えー奴を一匹調教して手なずけましょう。そうすれば、雑魚連中どもの掃除は簡単に出来ます。」

「この期に及んで何どエス心全開なのアンタ!!」

沖田の相も変わらずのサディスティックな発言を耳にし、慌てた様子でツッコミを入れる新八。

「つべこべ言ってる暇はねぇぜ。ユーノ、急ぐぞ。」

「はい。ちょっと待ってください・・・今、車を呼びますから。」

ユーノはそう言うと、端末を使い格納庫にしまっている改造車二台を緊急手配し、2・3分が経過すると呼び出した車二台が銀時たちの前に現れた。

ユーノは緑色の車に乗り込むと、銀時や真選組の三人を搭乗させる。

「さぁ、乗ってください！」

車に搭乗した六人は車のディスプレイに表示されるミッドチルダ全域の地図を凝視し、赤い点滅で示された箇所を頼りに移動を開始しようとする。

「よし。俺達真選組はこのまま南東の方を目指す。万事屋とユーノ先生は北西の奴らを潰してくれ！」

「ま、手が空いたらすぐに追いかけて来てやる。」

土方が上から目線にそう言うと、銀時は思わず癇癪を起す。

「んだと！！誰がてめぇらの手なんか借りるかよ！！」

「銀さん、喧嘩なんてしてる場合じゃありませんよ！」

「新八君の言う通り。さ、行きますよ！」

「よっしゃあ！！キバっていくぜ！！」

「「おう！！」」

ユーノはそう言うと、真選組メンバーと別れて北西部に現れた漫画キャラクターたちの殲滅の為に全速力で車を走らせる。

さて、ユーノ達がポイント付近を目指して爆走しているその頃、フォワード五人を乗せたヴァイスのヘリは突如空から現れた謎の飛行物体、無論空を飛ぶ夥しい数の漫画キャラクターたちに追われてい

る最中だった。

「「「「「うわわわあああああ！！」」」」」

激しく揺れるヘリの中で、スバル達の体がふら付きヴァイスは険しい顔を浮かべながら後ろから攻撃を仕掛ける漫画キャラクターたちから逃げ回り続ける。

「くそ、何なんだよありゃ・・・！お前ら、この先揺れるが振り下されるなよ！」

ヴァイスはそう言うと、ハンドルを巧みに操り漫画キャラの攻撃を躱しつづけ、ビルとビルとの細い隙間を通り過ぎていく。

そんなアクロバティックなヴァイスのヘリの中で、スバル達五人は必死に手すりなどにつかまり体制を維持しようと努める。

「ううううう！！！」

「「わわあああああ！！！」」

「「ぐあああああ！！！」」

と、その直後だった。

背後から仕掛ける敵ともう一つの編隊が突如ヴァイスの操縦するヘリの前方へと現れる。

「なに！」

唐突な敵の登場に目を見開くヴァイス。

敵はそんなヴァイスに構うことなく前方より攻撃を仕掛けるが、ヴァイスはギリギリのところでその攻撃を避ける。

「舐めるな！！」

ヴァイスは前方の敵を振り切ると、そのまま速度を上げながら漫画キャラの軍勢より逃げ続ける。

ヘリの様子を真下の方からサンルーフ越しに見つめる銀時たちの顔が険しかった。

「ギンガさん達が危ない！」

「どうするんだオイ！」

動揺する新八と焦りがうかがえる銀時の声を耳に入れながら、ユーノはハンドル片手にもう片方の手で端末をものすごい速度で操作する。

「何とか間に合ってくれよ・・・！」

すると、その時空を見上げていた神楽の瞳に見慣れぬ飛行物体が映ってきた。

「お！銀ちゃん！何か来たね！」

「間に合った！」

ユーノが嬉々とした声でそう言うと、頭上に現れたついこの間ユーノ・スクライアが開発した新型のジェット機、ファルコンであった。

銀時たちはその巨大なジェット機の姿に思わず驚嘆し、まじまじと見つめながらユーノに確認する。

「凄い・・・！」

「お前の策か？！」

「はい♪」

銀時たちと同じように、ヘリの中でその様子を窺っていたスバル達も驚愕と嬉々とした表情を浮かべる。

「ティア！あれって・・・！」

「ユーノ先生のだわ！」

自動操縦でヴァイスのヘリの隣に現れたファルコンは、旋回するとそのまま装備されたミサイルを発射し、襲い掛かってきた漫画キャラの編隊全てを撃ち落とした。

「助かります、ユーノ先生！今度何かおごります！ようし、行くぞお前ら！」

「「「「「はい！」」」」」

ヴァイスは操縦席で親指を立て、ユーノに感謝の意を表すると増援が来ないうちにスバル達五人を降下地点まで送り届けることに、全

力疾走で駆け抜けていった。

その様子を車の中で窺っていた四人も安どの表情を浮かべると、銀時は真面目な顔でこう呟いてきた。

「新八、神楽。俺とユーノでここを目指す。お前らはスバル達の援護に回れ。」

「はい！」

「わかったネ！」

銀時は分散してそれぞれの地点まで急ぐことにし、車を走らせていく。

そして、ユーノは徐に新八たちを下車させる地点が間もなく近づいてきたことを報せる。

「もうすぐつきますよ。」

銀時達、そしてその真逆方向を目指して驀進する近藤率いる真選組は無事に目標地点まで辿り着くことが出来るのであろうか？

果たして、この事態を機動六課はどう対処するのであろうか！？

さて、各地で漫画キャラによる反乱が相次いで起こり始めている頃、全体指揮と監視を続けている機動六課ロングアーチの方では、管制室のシャーリーたちによる声が飛び交っていた。

『問題の漫画キャラクターの軍勢、依然速度を維持し市街地方面を

進行中！』

『首都方面への突破はまだされてないようですが・・・・・・』

「時間の問題か・・・」

司令室の方で腕組みをしながらメインモニターを確認するクロノと、その傍らで様子を窺うザフィーラやシャマル、リィンの三人。

と、その時徐に司令室の扉が開き中に入ってきたのははやてであった。

「ごめんな、お待たせ。」

「はやてちゃん！無事だったんですね！？」

リィンやクロノ達は比較的異常のなさそうなはやてを確認すると、表情を綻ばせる。

「どうやら問題はなさそうでなによりだ。」

「銀さんがカッコよく追っ払ってくれたお蔭や。で、状況はどないなっとるの？」

「正直なところ、あまりよくない。これを見てくれ。」

クロノはそう言うと、タッチパネルを操りミッドチルダ全域に出現した複数の漫画キャラ達を指示した赤い点滅を拡大表示する。

「各部署もこの異例の事態を前に、総動員して収拾にあたっている

が相手の戦闘力がまるで未知数なうえに数も多い。一先ず市街地と海岸線の部隊には連絡がつけているが、どこまでもつか・・・はやて、君たちを襲った漫画キャラクターから何か分かったことはあるか？」

「ユーノくんの話では、ミッド全域に現れた漫画キャラは全てアンゴルモアによって生み出された正体は単なる紙きれ。魔法でも何でも攻撃が通れば倒すことは出来る。ただ、それは飽く迄戦闘力を抜いた話・・・こちらが手こずる相手が出ないことを祈るしかないよ。」

「ああ。」

はやての言葉を聞き、思わず渋い顔となるクロノやシャマルたち。

そして、そんな渋い顔をはやて本人も浮かべながら徐に呟く。

「奥の手を出さなあかんかもしれへんな・・・」

「そうならないことにこしたことはないのだがな・・・」

漫画キャラクターたちによる進行は依然拡大傾向にあった。

市街地各地では人々が管理局員たちによる誘導によって避難を始め、公共施設などは案内放送が飛び交い、ひっきりなしに人と言う人が行きかっていた。

『ミッドチルダ、東部方面より突如現れた謎の集団はいまだミッドチルダ全域に拡大を見せ、付近の魔導師部隊との激しい攻防戦が繰り広げられています。周辺各地には避難勧告が出されています。市

民の皆さんは、案内放送と管理局員の誘導に従い落ち着いて行動してください。』

そんな人々やミッドチルダの平和を守るため、機動六課の魔導師部隊は勿論のこと、現在嘱託局員として捜査協力をしている死神部隊とスクライア商店メンバーも事態に対処していた。

恋次はルキア・吉良を引き連れて北北西に出現した漫画キャラの軍勢を相手に奮闘していた。

「つらあああああああ！！！！！」

「破道の五十八『?嵐』！」

「面を上げろ、侘助！」

蛇尾丸を極限まで伸ばし、鬼道を駆使したりしながら恋次・ルキア・吉良の三人は着実に数を減らしていく。

同じように、スクライア商店メンバーの鬼太郎・金太郎・浦太郎、自称白翼の魔導死神白鳥礼二も己の力を遺憾なく発揮させ、漫画キャラの殲滅を続けていた。

「熾きやがれ、烈火！！」

「アックスオーガ、ブラッドカートリッジロード！」

「スピアグレネード！」

「天地に奏じよ、琴線斬！」

普通に考えれば間違いなく一騎当千の実力者である四人だが、そんな四人をあざ笑うかのように漫画キャラは叩けば叩くだけ、数にを増やして鬼太郎達の体力を消耗させていく。

「くそ！減ってる気がしねぇぜ。」

「こういうのって、よくあるよね。」

「私は混沌とした風景が一番嫌いなのだがな・・・」

「しかしやらねばこちらがやられます故。いきますぞ！！」

四人は武器を構え直すと、互いに目の前に現れる漫画キャラの増援部隊を制圧するために勢いよく駆け出して行った。

その頃、海上方面に現れた東南東の漫画キャラ達の殲滅に向かったなのはとフェイトも誘導弾や魔力砲撃を駆使して、能力も全くもって未知数な敵を撃墜させていた。

「は！」

「ファイア！」

フォトンランサーとアクセルシューターが飛び交い、撃墜していく漫画キャラ達だったが、陸で戦っている他の箇所同様やはり数に物を言わせて二人の魔力を消耗させようとしていた。

二人は互いに背中を合わせながらこの異例の敵に苦戦していた。

「一体この子たちは・・・！」

「これだけの数、流石にキリがない・・・」

「況してこの子たちはみんな実体・・・しかも個別ごとに能力も何もかもが違う・・・」

「く。どうすれば・・・――」

思わず苦い表情を浮かべるフェイトだったが、直後はやてからの直接通信が入った。

『割り込み失礼。』

「はやてちゃん！」

「はやて！？」

『見たとこ苦戦してるみたいやな。取りあえず現状で分かってることを伝えるよ。二人が見てるのも、いま前線メンバー全員が戦ってるのもみんなただの人形。正体はただの紙切れや。』

「紙切れ！？」

「おい、それ本当かよ！？」

なのは達同様はやての話を聞いていた恋次や鬼太郎達も思わず耳を疑うが、はやてはその後も話を続ける。

「私もユーノくん達も同じ奴に襲われた。ま、敵は銀さんが倒した

んやけどな。どうやら漫画キャラを操ってるのは紛れもなくアンゴルモアを手にした次元犯罪者である可能性が高い。」

「やっぱり、これもアンゴルモアの仕業か・・・」

「おいちょっと待てよ?相手が紙切れだって分かったるなら――――」

と、恋次がそう口にするとはやて同様割り込みと言う形で銀時と一緒に漫画キャラの殲滅を続けていたユーノがディスプレイに表示され、こう言って来た。

『そういうこと。どんな方法でもいい。思い切り自分の持てる力でぶっ飛ばして。全力全開・・・手加減なしで!!』

それを聞くと、なのはやフェイト、更には前線メンバー全員の表情が綻んだ。

「了解。そう言うことなら――――――」

「私たちの専売特許だもん!」

ユーノからの激励の言葉を聞くと、各隊長陣・フォワード一同はＩＰカートリッジや補助デバイスなどを取出し文字通り全力全開で事態に当たることとなった。

〈ＩＰ　ｃａｒｔｒｉｄｇｅ　ｌｏａｄ〉

〈ＡＲ　ｃａｒｔｒｉｄｇｅ　ｌｏａｄ〉

それぞれの最強形態へと変化させたなのはとフェイトは、お互いに信頼した表情を浮かべると目の前を一掃するための合図を出した。

「行こう、フェイトちゃん！」

「うん、なのは！」

そして、ついに本気のなのは達による殲滅作戦が本格的に始まった。

フォワード陣も持てる力全てを発揮させながら、今まで戦ったことのない漫画キャラ達を制圧していき、他の部署でも全員一丸となってこの未曾有の事態に臨んでいた。

各地で轟音と爆発が飛び交う中、市街地方面で漫画キャラの進行を阻止すべく対処に当たっていた１０８部隊のゲンヤ・ナカジマは、護送車の陰に隠れながらはやて達と通信を子なっていた。

「ああ。市街地戦の防衛ラインはなんとか持ち堪えてる。そっちの阿散井と吉良が鍛えてくれたうちの連中と、航空隊の高町嬢ちゃんと赤毛の教え子達が最前線を張ってる。だが、現状でギリギリ。見ての通りの防戦一方だ。しかし、あれは一体何なんだ?」

『おそらく、アンゴルモアの力で実体化した漫画キャラです。』

「おいおい・・・今日びはまたとんでもないことになってきたな・・・」

ゲンヤはこれまでの人生の中で一度たりともこんなふざけた事態に直面したことがなかったため、どうリアクションを取っていいのか若干分からなくなっていた。

「ぐっは！」

と、直後自分の部隊の隊士達が敵の発砲を受けてしまい、その衝撃で防衛ラインが崩れかけようとしていた。

「ナカジマ三佐！防衛ラインが突破されます！」

「くそ！何て間が悪い・・・！」

漫画キャラは数に物を言わせて次々に隙のできた１０８部隊と航空隊の魔導師たちを撃退していき、市街地方面に間もなく突入しようとしていたところだった。

「こ、これまでです！！」

「寝言言ってるんじゃねぇ！絶対に市街地の中に入れるんじゃ・・・！」

と、ゲンヤが弱音を吐く局員に向かって喝を入れようとした直後、局員の一人が後ろから近づいてくる謎の物体を発見し、声をかけた。

「ナカジマ三佐！後ろから何か来ます！」

「なに？」

ゲンヤや局員達が徐に後ろの方へと振り返ってみると、封鎖されていた道路を突っ切って爆走してくるサイレンを響かせる一台のパトカーが目に映ってきた。

「あれは・・・!!」

「パトカーです!」

「何だと・・・!?何でこんなところにパトカーが?」

と、ゲンヤ達が訝しげな表情でそのパトカーの方を見ていると、徐に助手席の方から沖田総悟が顔をだし、バズーカ片手にゲンヤ達にこう言って来た。

「そこ。退いた退いた。早くどかないと・・・死ぬぜ。」

真顔でそう口にした直後、総悟は徐にトリガーを引いてバズーカを発射する。

バズーカは漫画キャラ達にぶつかると、爆発を起こし近くにいた局員たち数名がその爆発の威力に圧倒され、ギャグ漫画のキャラみたいに黒焦げとなって後ろへ飛んで行った。

「「「ひゃあああああ!!!!!」」」

ゲンヤは皮一枚のところでその爆発から逃れることが出来たが、あまりに無茶苦茶なことを平気な表情で実行する沖田の性格に肝が縮こまった。

「あ、あぶねぇ・・・!!何だよあいつら!?」

やがて、腰が抜け冷や汗を浮かべるゲンヤの前にパトカーが勢いよく停車すると、中から出て来た近藤、土方、沖田の三人は刀を抜いて目の前の漫画キャラに向かって自分たちのことを名乗った。

「御用改めである！！」

「真選組だ！！」

ゲンヤ達はこの三人の異様な光景を見るなり呆然とした表情となった。

「し・・・真選組・・・・！？」

「また変なのが出てきやがったなオイ・・・これ以上は付き合い切れんぞ・・・」

ゲンヤは先の銀時の件もあってか、このキャラの濃い人物たちの対応に非常に苦慮していたそうな。

沖田は一度バズーカを地面に下すと、眼前に広がってくる夥しい数の漫画キャラを前にそこまで驚いた様子も見せずに何となくこう言った。

「ほう～～～こいつはまたすげぇのが出てきたぜ。」

「何でもいいさ。派手に喧嘩おっぱじめようぜ。行くぞ！！！」

「「おお！！」」

土方の掛け声を聞くと、近藤と沖田は刀片手に走り出すと漫画キャラクターたちに向かって攻撃を仕掛けていった。

「たあああああ！！！！」

近藤は刀を振り上げると、自分よりも一回りも巨大な漫画キャラを一刀両断し、その後も大型のキャラを斬り倒していった。

「おらあああああ！！！！」

土方は並みはずれた身体能力と反射神経を駆使して、類まれなる剣術を披露しながら圧倒的な数を誇る漫画キャラを次々に斬り伏せる。

沖田も無言のまま目にも止まらぬ動きで漫画キャラの急所を突き、正体である紙くずと化していきながら数を一気に減らした。

この三人の驚くべき戦闘力を前に、言葉すら失いかけるゲンヤ達。

「な・・・こいつらは・・・！？」

と、その直後はやてがディスプレイ越しに笑顔でこう言って来た。

『安心してください。その人たち、銀さん達のお友達です！』

「あ？あの銀髪野郎のか！？」

すると、その時土方が後ろに振り返り唖然としたまま動かない様子の魔導師たちに向かって言葉を投げかけてきた。

「ぼっさとしてんじゃねぇ！てめぇらも男なら根性見せて戦え！！」

「じゃねぇと、美味しいところは全部俺達が持っていくぜ。」

「俺達に後れを取るな！時空管理局の魔導師なら、絶対にこの街を

護りぬいてみせろ！！！！」

近藤が最後にそう口にすると、聞いていたゲンヤは思わず鼻で笑った。

「・・・ふん。言ってくれるじぇねぇか。今の聞いたろ。次元漂流者に後れを取るなよ」

「「「はい！」」」

他の魔導師たちも漸く自分たちの為すべきことを思い出すと、再び杖を手に取って真選組に負けないように攻撃を再開するのであった。

「「「行くぜ！！！！」」」

真選組も参加し、更に戦いはヒートアップを見せる中、恋次たちも補助デバイスの力を活用しながら先ほどよりも威力が強化された攻撃を仕掛けていた。

「鋼鉄狒骨大砲！！」

「次の舞・白漣！」

「佗助、肩透かし！」

鋼鉄狒骨大砲に通常時の5倍近くの威力と氷雪量を誇るルキアの白漣、佗助の肩透かしが漫画キャラ達を圧倒していく。

しかし、漫画キャラ達はそれでも倒した傍から更なる増援を作り出して恋次たちに向かっていく。

「一体どれだけいるのだ！？」

「くそ！舐めてくれじゃねぇかよ・・・」

「だが、何としてもここで食い止めてみせる。行くぞ！」

「「ああ！」」

三人はそう決意すると、ミッドチルダの平和と人々の安全を守り抜くために命を賭してこの漫画キャラ達の大軍へと向かっていった。

「「「たあああああああ！！！」」」

頑張れ、死神部隊。

この世界の明暗は君たちや魔導師たちの頑張り次第でどうにかなってしまうのだから――――――

おっと、勿論戦っているのは彼らだけではない。

スクライア商店メンバーも怒涛の様な戦局を展開させていた。

「鳳仙烈火！！」

「ソニック・スピア！」

「琴線斬第三章　十九節『隔壁の丞相（じょうしょう）』！！」

「ダイナミックストーム！」

卍解を発動させ灼熱の炎を飛び交わせるソードアーマーを装着した鬼太郎に、ブラッド状態となった金太郎、甲冑モードの浦太郎と白鳥それぞれの最強技が発動する中、漫画キャラ達は紙くずとなった傍からまるで蛆虫のように何処からともなく湧いて出て来た。

「こいつら、蛆虫みたいにわんさか出てくるよ！」

「くそ！虫はこの間の件でもうたくさんだ！！」

「私個人的にはこれはこれで面白いと思うがな。」

「け！ごちゃごちゃ考えるのは時間の無駄だ！まとめて潰せばいいだけのことだ！！」

鬼太郎はそう言うと、鳳仙烈火の炎の翼で飛びながら両手の剣に霊力を込めると一気に自分の全ての必殺技を発動させた。

「俺の必殺技、フルコース！！」

合計5発の必殺技が同時に仕掛けられると、辺りは地獄の業火のように燃え上がり漫画キャラ達はその炎に飲み込まれ瞬く間に消し炭と化していった。

そんな各地で繰り広げられている戦闘の様子を確認しながら、管制室のシャーリーたちは司令室のはやてやクロノに報告する。

『スターズ1、ライトニング1、フォワード部隊・死神部隊・スクライア商店ともに2グループ目を撃破。順調です！』

「よし。」

『スターズ2とライトニング2、5も1グループ目、撃破です！』

「このまま何事もなく潰せればいいのだが・・・」

クロノはそう呟きながら、ぞのままじっとメインスクリーンの映像を見続けた。

さて、なのは達とは別に同じ航空戦力の殲滅に取り掛かっていたヴィータ、シグナム、アギトの三人は順調に漫画キャラを撃墜させていた。

「おし！いい感じだ。」

「このままのペースなら、問題なくいけそうだ。」

「ガンガンいこうぜ！さっさと片つけて他のフォローに回らねぇと。」

「ああ。お？」

と、その直後シグナムは前方から飛んでくる奇妙な物体に思わず目を細める。

「どうした？」

不審に思ったヴィータとアギトがシグナムにそう尋ねた後、徐にシグナムが目を向けている方へ振り向くと、二人は飛来してくる夥しい数の怪鳥の姿に思わず驚愕した。

「何だよ・・・ありゃ・・・！？」

「か、怪物！？」

「しかもこの数は・・・！！」

三人はその何とも夥しい数の怪鳥、ギャオスと呼ばれるコウモリを模した前足が翼となっている怪鳥に圧倒される中、そのギャオスの群れの中で対峙しているなのはとフェイトは背中を預けあいながら未知なる敵の強襲に困惑していた。

「この反応・・・」

「まさか、これが全てＡＭ体・・・！」

三人以上に圧倒される二人であったが、このギャオスを大量に投入させそれを操る人間が彼女たちの上空よりも更に上の方にいた。

術者、というよりもギャオスの世話を任された長い金髪と金色の瞳が特徴の赤いローブをまとった少年はため息交じりに空中に胡坐をかいていた。

「たく。鳥の世話を任されるのも楽じゃねぇな・・・・・ま、いいや。どうせこれも単なる実験の第１段階にすぎねぇし。遊びだと思えば――――――」

少年は言いながら徐に腰に下げていた国家錬金術師の資格たる銀時計をまじまじと見つめるのであった。

さて、この事態にいち早く気づいた機動六課ロングアーチでは、海上方面より出現するこのギャオスの大軍の反応に仰天していた。

「航空反応増大・・・！これ・・・ウソでしょう！？」

「何だ・・・これは・・・！？」

「波形チャック！誤認じゃないのか！？」

クロノが慌てた様子でそう口にすると、管制室で波形を調べていたシャーリー達はそれが誤認ではないという事実を直ぐに報せた。

『問題・・・でません！どのチャックも実体としか！』

『なのはさん達も目視で確認できますと！』

すると、直後はやては席を立つとシュベルトクロイツ片手にリィンを連れて部屋を出ようとした。

「クロノくん！あとのこと、任せてもええ？」

「ああ。限定解除の方は心配するな。」

クロノはそう答えると、はやてとリィンを出撃させその後モニター画面を険しい表情で見つめるのであった。

ギャオスはなのは達の前に現ると、不規則に口から超音波メスと呼ばれる高威力の光線を二人に発射し、なのはが防御に徹する。

そして、その隙にフェイトがギャオスを撃ち落とそうとするがギャオスは早い速力を活かしてフェイトの攻撃を軽快に躱していき、フ

ェイトはそんなギャオスを見ながら一つの結論に達する。

「あの動きと言い、攻撃と言い、幻影じゃなさそう・・・紛れもなく全部実体!?」

「防衛ラインを破られない自信はあるけど、ちょっとキリがないね。」

なのははそう呟きながら、フェイトの背中にぎっしりと張りつきながらその後も防御を展開してギャオスの超音波メスを防ぎ続ける。

「一体何のためにこんな派手なことを・・・」

「目的はまだ分からないけど、早く叩かないと市街地の方に危険が・・・」

「なのは。私が残ってここをおさえるから、シグナム達と一緒に。」

「フェイトちゃん!?」

フェイトの言葉を耳にした途端、思わずなのはは声を上げて驚いた。

「コンビでも普通に空戦してたら、時間がかかりすぎる・・・」

そうフェイトが言った直後、一斉にギャオスの超音波メスが飛び交い、なのはとフェイトはその攻撃を防ぎながら話を続ける。

「一刻の猶予もない。広域殲滅でまとめて墜とす。」

「だけど、それだとフェイトちゃんが――――――」

「嫌な予感がするんだ。早く、なのは。」

「けど、それでもフェイトちゃん――――――」

フェイトの提案に躊躇をしているなのはだったが、その時二人の話を聞いていたはやてが通信を入れてきた。

『ちょっと待ってな二人とも。空のお掃除なら私とリィンにお任せや。』

「「はやて（ちゃん）！？」」

驚く二人を余所に、はやては限定解除許可を済ませ騎士甲冑を身に纏うと、リィンとユニ損を果たし髪の毛は白髪と化していた。

「安心して二人とも。限定解除許可は既にクロノくんが出してくれた。広域殲滅は私の専門や。二人はスターズ2とライトニング2、5と合流して市街地の敵を一掃や。」

『だけど、はやて。本当にいいの？』

「これぐらい構へんって。考えてもみい・・・今地上の方ではフォワード陣を始め、ユーノくんや銀さん達が死に物狂いで戦って最前線を張ってる。ただでさえ、うちには危なっかしい子がわんさかおるんや。あんまり負担をかけさせる訳にもあかん。」

「了解。」

「うん。じゃ、任せる。」

「ほんなら、びっしと決めようや！」

はやての命令を聞き入れると、二人はその場から離脱して急いでシグナム達の元へと急行した。

はやては二人が向かったのを確認すると、空高く舞い上がり雲を突き抜けると自分デバイスであるシュベルトクロイツ片手に夜天の魔導書を取出し準備に取り掛かった。

「よし。それじゃあ早速、気持ち悪い鳥さんのお掃除といこうか！」

〈久しぶりに頑張るです！！〉

さて、はやてとリィンが空へと上がりギャオスの殲滅の為の準備に取り掛かっている間、地上の方でいまだ戦いを繰り広げていたスバル達五人は空の様子を変貌に気づき、それなりに気にしていた。

「空の上は、なんだか大変みたいね。」

「こっちもこっちで結構な数だしね。」

スバルはそう言いながら、ティアナとのコンビプレーを発揮させながら漫画キャラ達を一掃する。

すると、その瞬間スバルの死角より不意に現れる漫画キャラの一体が襲い掛かってきた。

「！」

「スバル、危ない！」

スバルを助けようとしたギンガはブリッツキャリバーを走らせ、ウィングロードで移動しながらスバルを救出するが、直後現れた漫画キャラはギンガに標的を変更させ一斉に襲撃を仕掛けた。

「ギン姉！！」

「「「ギンガさん！」」」

「く！」

思わず険しい表情で身構えるギンガ。

「たあああああ！！！」

するとその時、ギンガの危機に駆けつけてダメメガネこと、志村新八が拝借してきた日本刀で漫画キャラを一刀両断する。

「え！？」

思わず目の前で起こったことにきょとんとなるギンガやスバル達だったが、土煙が晴れると新八がメガネの位置を直しながら神楽と共に五人の前に現れた。

「ふう～～～間に合いましたよ。」

「助けに来たアルよ、お前ら！」

「「「「新八さん！神楽ちゃんも！」」」」

「新八さん、どうしてここに？」

「銀さんとユーノさんからの指示ですよ。それより、怪我はないですか？」

「はい。お蔭で助かりました。」

新八がそう言うと、ギンガも柔かい笑みを浮かべながらそう答える。

「！新八、お前ら！ぞろぞろ出てきたネ！」

神楽はそう言うと、全員に新たに出現してきた漫画キャラに向かって武器である傘を手に取り構える。

新八も目の前の漫画キャラを見るなり、いつもの眼とはまた違う戦う男の眼となりギンガの隣に立った。

「腕がなるな。久しぶりに暴れてみるとしましょう。僕だって、単なるツッコミ駄目メガネキャラで終わるつもりはないですから！」

「心強い言葉ですね！行くわよ、みんな！」

「「「「はい！」」」」

「ぶちのめしてやるネ！！わちゃあああああああ！！！」

七人は一斉に漫画キャラ達に向かっていくと、持ち前の度胸と戦闘能力を発揮させ一気に殲滅に取り掛かっていった。

新八と神楽が五人と合流を果たした頃、リィンとユニゾンを果たしていたはやては前方に見えてくるギャオスの群れを視認しながらリィンと打ち合わせをしていた。

「リィン。査定距離は？」

〈目標２００メートル付近より接近。サイティングサポート完了です！シュベルトクロイツとのシンクロ誤差も問題ありません！〉

「おし。では、八神はやてとリィンフォース？による長距離遠距離魔法、見せたるよ！」

はやてはそう言うと、リィンと一緒に夜天の魔導書に記された広域遠距離魔法の詠唱を始めた。

「〈来よ、白銀の風、天よりそそぐ矢羽となれ〉」

直後、はやての目の前に出現する白色の魔法陣。

はやての技が発動する寸前、なのはとフェイトは雲の中をかき分けシグナム達が待つ地点まで回避すると、それを確認したシャーリーがはやてに報告する。

「スターズ１、ライトニング１、ともにスターズ２、ライトニング２、５と合流。安全域に退避。着弾地点の安全を確認」

「おっし。第一波、行くよ！！」

はやては全ての準備が整うと、魔法陣から複数の弾を一気に発射させ、着弾（目標）地点から周囲を巻き込んで炸裂、一定範囲を「制

圧」する広域遠距離魔法、フレースヴェルグを発動させた。

「『“フレースヴェルグ”』！！」

フレースヴェルグが発射され、着弾地点にたどり着くや否やギャオスの群れはその餌食と化していき、次々が炸裂を起こして消滅していった。

「グループE、消滅！続いてB、着弾！消滅！」

ロングアーチでフレースヴェルグの発動を確認する管制スタッフ一同と、地上の方で戦いを繰り広げていた近藤率いる真選組の三人は頭上に浮かんできた白い閃光と凄まじい爆発に思わず目を奪われた。

「トシ！総悟！何だあれは！？」

「こいつは驚いたな・・・どうやらこの世界の魔法ってのはあんなことまで出来るのか？」

「俺達その点でいえば剣だけでっせ。」

「いや、それでこそ俺達侍のやり方！魔法なんてものがなくとも、俺達には刀（こいつ）がある！そうやって、俺達はいつだって道を切り開いてきたんだからな！」

「「ああ！」」

近藤のその言葉を聞くと、二人も思わず清々しい表情で返事をする。

「行くぞ！！」

「てめぇら全員叩っ斬ってやらあああ！！」

真選組は更に士気を高めると、魔導師部隊と協力しながら最後に追い上げを見せ始める。

同じころ、新八・神楽が加わったフォワード五人の方も残りわずかとなってきた漫画キャラ達の殲滅を続けていた。

「「「「はあああああ！！！」」」」

「くたばれ、漫画キャラ共！！」

スバル達四人と神楽が前方の細かいのを潰し終えると、新八とギンガが前に出る。

「新八さん！一撃で決めれます？」

「はい！男新八、この剣で一刀両断にします！」

「了解。じゃ、ツートップで行きましょう！」

ギンガは新八の言葉を信用すると、前へと飛び出しブリッツキャリバーを走らせながら目の前から飛んでくる漫画キャラの攻撃を防ぐ。

「トライシールド！」

トライシールドで攻撃を防いだギンガはその後リボルバーナックルの高速スピナーを回転させ、敵の動きを完全に封じるとその機会を伺っていた新八がギンガの背後から飛び上がり刀を振り上げた。

「おんどらあああああ！！！！ツッコミ舐めんじゃねぇぞ！！！！！」

新八は思い切り刀を振り下すと、最後の一体をものの見事に一刀両断し漫画キャラ全てを殲滅することに成功した。

「やりました！」

「はい！」

ギンガは新八との即席コンビネーションプレーが上手くいったことに大いに喜び、新八も思わず照れた表情を浮かべ、その後二人は笑いあった。

その様子を傍で見ていたスバル達はこの二人の息のよさもさることながら、また違うところに驚いていた。

「・・・す・・・すごい・・・！」

「ギンガさんと新八さん・・・ほんと息ピッタリよね・・・」

「あれ？こんな展開ってありアルか？」

神楽はそう口にしながら妙に悔しそうな表情を浮かべていたそうな。

フォワード陣が漫画キャラの殲滅を完了させた頃、恋次たち死神部隊となのは達隊長陣も自分たちの持ち場の敵を一掃させた。

しかし、それでも未だ残っている個所があった。

一騎当千の実力者ぞろいのなのは達とは違い、並みの魔力しか保有していない地上部隊にとって、今回の敵は非常に分が悪かった。

「くそ！！増援はまだか！？」

「敵の数が多すぎて、何処も手こずってます！！」

「く！何とかならんのか・・・――」

と、地上部隊の魔導師達が険しい表情でそう口していた直後だった。

「おい、あれ見ろを！」

「！」

突如、前方の漫画キャラを始めその他週に散らばっていた漫画キャラの反応が突然糸の切れたように次々と消滅を果たしていった。

これには流石に地上部隊の魔導師も目を疑ってしまう。

「一体誰が！？」

と、近隣部隊の局員がそう思っていた時、鬼神の如く勢いでこの漫画キャラクターたちを圧倒する二人の男が現れた。

「「ほおおお！！！！！」」

凄まじい気迫と夜叉と言っても過言ではない戦闘力を発揮させ、総勢数百体を越える漫画キャラクターたちを切り捨て土煙の中より現れたのは、洞爺湖木刀片手に余裕の表情を浮かべる銀時と、同じく

晩翠片手に不敵な笑みを浮かべるユーノだった。

「何だおい？こんなもんなのか？」

「所詮、僕らの敵じゃないってことです。」

間近で満身創痍になりながらこの二人の光景を見ていた局員たちは目を疑ってしまった。

「ば、馬鹿な！？」

「たった二人で・・・あれだけの数を！！」

「あ、あなた達は一体・・・！？」

局員の一人がそう尋ねると、二人は不敵な笑みでこう答える。

「は！俺達はな――――――」

「ただの通りすがりの――――――」

その瞬間、二人は残りの漫画キャラクターたちの元へと走り出し口を揃えてこう言った。

「「侍じゃ！！！」」

二人は同じく自分たちの元へと走ってくる漫画キャラクターたちを次々に愛刀で斬り捨てては紙くずと化していき、敵の圧倒的な数を前にしても決してひるまない処か逆に怯ませるほどの気迫・戦闘能力・即座の反射神経と対応力、そのどれもが他を明らかに逸してい

た。

銀時は白夜叉と言われたこともありその類まれなる凄まじい戦闘力を遺憾なく発揮させ、若干の愉悦感に浸りながら木刀で大立ち回り。

「圧すぜ、圧すぜコノヤロー！！」

その傍らで、ユーノは戦いの眼差しを崩さず晩翠で普通に斬ったりしては敵の攻撃の軌道を読み、隙を見付けるや否や刀を地面に突き刺し――――――

「“針山晩翠（はりやまばんすい）”！」

地面から生えてくる無数の針の山を漫画キャラクターに仕掛けて一気に数を減らし、それでもなお増え続ける漫画キャラクターを見ると、二人は増殖に負けぬように更なる気迫と戦闘力で立ち向かっていく。

「でらあああああ！！！！」

「獅子翡翠群！」

二人の戦闘力はもはや一個人や一魔導師が太刀打ちできるといったレベルのものではなかった。

これほどまでに強い人間を時空管理局を始め恐らくこの世界の人間や今対峙している漫画キャラクターたちは見たことがないだろう。

漫画キャラを始め、味方であるはずの管理局員たちも戸惑いの表情を見せる中銀時は戦いながらユーノに声高にこう言って来た。

「ユーノ！！」

「はい！！」

「お前、見かけによらず結構ワンパクなんだなオイ！てっきり、新八と同じ地味キャラの部類だと思ってたのによ！！」

「人を勝手に地味キャラ扱いしないでください！！確かに、一期・二期・三期は空気でしたけど、今の僕はなのは達のそれより目立ってるつもりです！！！」

「は！言うじゃねぇかよ！！淫獣フェレットが！！」

「誰が淫獣フェレットですか！！斬り殺しますよ！！」

銀時とそのような会話を戦いの間際していたユーノは、残りわずかとなった漫画キャラの一体が自分に向けて接近戦を持ちかけてくると、一度態度を改めて目の前の敵の攻撃を的確によけながら、その敵の持っていた武器を足で吹き飛ばし、驚愕する敵に向かってとどめの一撃を加える。

「輝け、晩翠！」

翡翠斬を至近距離で食らった敵はそのまま紙くずとなって空へと消えていき、銀時自身も白夜叉としての実力を発揮させ、目の前の敵を薙ぎ払っていく。

「ほおおお！！！！！」

そして、最後五体ほどとなった漫画キャラクターを目にした二人は、そのまま勢いよく駆け出していき、二人揃って剣を横なぎに振るって一気に全体を消滅させる。

「「おんどらああ！！！舐めんじゃねぇぞ！！！！！」」

二人の止めの一撃を受けた瞬間、、ここに数百体いたはずの漫画キャラクターたちすべてがたった二人の、しかも一人は普通の人間の手によって五分も経たないうちに全滅したのであった。

この光景を目の当たりにしていた他の局員たちはもう言葉が出ない状況だった。

二人が徐に愛刀を所定の場所へと戻し、徐にほくそ笑んでいると、各地で戦闘を繰り広げていたなのは達や真選組の一同が二人の元へと駆けつけてきた。

「銀さん！」

「銀ちゃん！！」

「万事屋！」

「ユーノ！」

「ユーノ君！」

なのは達は駆けつけてきた直後、目の前に寒々と広がる大量の紙屑の山と驚きのあまり腰ぬけてしまった魔導師たちを見ると、思わず言葉を失った。

「な！これは・・・まさか・・・！？」

「よう、てめぇら。遅かったじゃねぇか？」

「折角来たところ悪いけど、銀さんと一緒にもうここいらの敵は全部叩いたよ。」

ユーノと銀時がそう言いながら木刀と晩翠を肩に乗せると、なのは達は顔を引きつりながら二人の圧倒的な戦闘力に驚愕したそうな。

「お・・・おう、そうか・・・」

「しかし二人揃って恐ろしいですね・・・」

「馬鹿言ってんじゃねぇよ。俺なんかよりもこいつの方がどうかしてるっつーの！」

銀時は新八の言葉を聞くなり、自分の隣に立ち尽くすユーノに向かって指を突き立てた。

「あははは♪確かに、どうかしてますね僕♪」

「認めてどうするんだよ・・・」

飄々とした様子でそう答えるユーノだったが、直後自分の目の前にいる筈のかけがえのない従業一同がまだこの場に来ていないことに疑問を抱いた。

「それより、金太郎たちはどうしたんだい？」

「ああ。恐らくまだ潰してる最中なんだとは思うが、それにしては遅いな。」

「あいつらの実力は総じて高いはずだしな・・・私ら以上に手こずるとは考え・・・」

と、ヴィータがそう呟いた直後。

ユーノの元に浦太郎達からの直接通信が届いた。

「おや？噂をすれば――――――」

ユーノが何気ない気持ちで通信画面を開いた時、浦太郎や鬼太郎は血相を変えてユーノにこう言って来た。

『店長！！大変だよ！！！』

「どうしたの、一体？」

『ご、ご、ゴジラが現れた！！！』

「ゴジラ・・・？」

二人の言っていることに思わずきょとんとしてしまうユーノだったが、その直後突然地響きのような揺れが起こり全員が身構える中、空気がまるで張り裂けるような轟音が耳に入り、全員が恐る恐る振り向いた瞬間、前方のビルの前に現れたのは日本が誇る大怪獣ゴジラそのものだった。

「「「「え！？」」」」

思わず地球出身のなのはや店を構えるユーノ、更には銀時や近藤たちはそのあまりの巨体と風格を醸し出す大怪獣を前にし、目を見開いて驚いた。

「う、うそ！！！！！！」

「おい！！！！！！あんなのありかよ！！！」

「銀さん！！！これ真面目にやばいじゃんないですか！！！」

なのは達以外の他の局員たちはゴジラの姿を見るなり一目散に逃げ出してしまった。

ゴジラは鼓膜が突き破れるぐらいの鳴き声を上げながら、背中の突起にエネルギーを溜めてたまったエネルギーを一気に解放しようと口に光を収束させた。

近藤はそれを見るなり、直ぐに危険だと判断し全員にその場から離れることを指示した。

「万事屋！！ユーノ先生！！！みんな！！早くこの場から逃げるぞ！！！！！」

その直後、ゴジラが口腔内より放射熱線を発射させ、ユーノ達に襲い掛かった。

「「「「のあああああああ！！！！」」」」

銀時・新八・神楽はユーノやなのは達に抱えられ、一時的に空へと回避すると、ゴジラと大幅に距離を取りながらゴジラの攻撃を警戒した。

「あんな怪獣まで出てくるなんて・・・どうなってるネ！」

「多分あれもアンゴルモアの仕業なんですよね？」

「ああ。多分そうだとは思うが、いくら何でもあれはないよ！」

この異例過ぎる事態に、流石のユーノ・スクライアも頭を悩ませた。

銀時たちはビルの屋上に全員で避難を完了させると、目の前のゴジラにどう立ち向かうかについて話し合っていた。

「どうすんだよオイ！？俺たち人間がどう足掻いたってあいつには勝てねぇぞ！」

「こうなったら、土方さんを囮にしてその隙に一斉に逃げましょう。」

「ちょっと待て！！！何で俺が囮なんだよ！！！しかも逃げるって、ふざけんなてめぇ！！！」

総悟の発言を聞いた土方はあまりに理不尽な内容に激怒してしまう。

「これだけの大きさ・・・それに凶暴性を考えると・・・」

「私たちの力だけじゃ無理だね。」

そう結論付けた直後、ユーノは徐にキャロに向かってこう言って来た。

「キャロ。久々にあれ使ってみるかい？」

「はい。頑張ります！」

「何だ？一体どうするんだ？」

「まぁ見ててください。」

訝しげな様子の銀時たちを余所に、キャロは全員が見守る中召喚魔方陣を出現させ、フリードと同じ自分が使役する竜騎ヴォルテールを呼び出そうとしていた。

「“天地貫く業火の咆哮、遥けき大地の永遠（とわ）の護り手、我が元に来よ、黒き炎の大地の守護者”」

その瞬間、目の前の地面から召喚魔方陣と共に炎の柱が上がり、銀時たちは動揺する。

「お・・・！何だ一体！？」

「何が出てくるんですかい？」

「竜騎招来、天地轟鳴（てんちごうめい）、来よ・・・ヴォルテール！！！」

キャロが声高にそう口にすると、直後炎の柱の中より現れるアルザスの守護を司るキャロが従える最強の竜騎ヴォルテール。

仁王立ちをしながら目の前から突如現れたこの巨大な竜を見た瞬間、新八はあまりの巨体と雰囲気に圧倒され、レンズにひびが入った。

「なななな！！！！なんじゃこりゃああ！！！」

「おい！！！！これ最早ＦＦじゃねぇか！？」

銀時は思わずそうツッコんでしまったそうな。

ちなみに言うと、作者はＦＦに関する知識が全くと言うほど持っていない。

そのため、このツッコミが果たして正確なものなのかどうか定かではない。

「大地の咆哮、ギオ・エルガ！」

キャロの指示に従い、ヴォルテールは周辺大地の魔力を吸収し、炎熱を伴った巨大砲撃で相手を殲滅させる砲吼する炎の意味を持つギオ・エルガをゴジラ目掛けて発射する。

すると、ヴォルテールの攻撃と同時にゴジラも更に威力を上げた放射熱線をぶつけ、ヴォルテールのギオ・エルガと対消滅させた。

凄まじい爆風が広がる中、キャロや他のメンバーはこのゴジラの強さに驚愕する。

「あ、相打ち！？」

「マジかよ・・・！」

「流石はゴジラ。一筋縄じゃいかないって訳か・・・」

「だったら・・・ケリュケイオン！」

〈Ｄｒａｇｏｎ　ｆｕｓｉｏｎ〉

キャロはＩＰカートリッジを装着させると、更に魔力を上昇させ以前一度だけ任務で使用したっきり使っていなかった最後の切り札の力をここに発動させる。

「“相異なる二つの力、竜の眼は剣に、竜の鎧は盾に、交わりし魂が一つとなりしその時、今覚醒する聖なる竜騎士”！」

その瞬間、召喚されたヴォルテールとフリードが融合を始め、眩いばかりの光を発しながらその融合した真の姿を露わにする。

「竜騎融合、天地降誕、出でよ・・・竜騎士ジークフリート！！」

光が徐に晴れると、二体の竜は融合し白い鎧で我が身を纏った竜騎士ジークフリートへと変貌を遂げ、このジークフリートの迫力に銀時たちは素直に声を上げていた。

「「「「「「おおお！！！」」」」」」

「凄い・・・！２体の竜が融合した！」

「デジモンに出てなかった？これデジモンに出てなかった？」

またしてもそのようなツッコミを入れてしまう銀時だった。

ジークフリートが再びゴジラと対峙すると、シグナムとヴィータ、アギトは顔を見合わせジークフリートの傍らに浮上し、キャロに向かってこう言って来た。

「キャロ。私とアギト、ヴィータで援護する。お前は術式に専念しろ。」

「はい！」

「レバンティン！」

〈剣閃烈火！！〉

アギトとユニゾンを果たしたシグナムは一気に炎熱能力を上げると、レバンティンの刃節を伸ばしてゴジラの体を斬りつけようとした。

「〈火龍一閃〉！！」

同じように、ＩＰカートリッジを使いクラッシャーモードに移行したグラーフアイゼンを持ったヴィータはそれに続く形で攻撃を仕掛ける。

「クラッシャーシュラーク！！」

ゴジラは三人の攻撃をその身に受け、若干のダメージを受けて後退する。

三人がゴジラの注意をひきつけている内に、キャロは詠唱に専念する。

「全てを初期化する聖剣よ、我が竜騎士ジークフリードに天の御心を宿し給え。」

すると、ジークフリートの右手に現れるアルザスの古い言葉で書かれた聖なる剣。

それを手に取り、ジークフリートはゴジラに向かって攻撃を行う。

「パラディンソード！！」

パラディンソードの剣戟がゴジラに向かって仕掛けられ、ゴジラは一瞬の隙を見せてしまいその剣戟を受けると、威力に圧し負け大きく後ろへと吹っ飛んで行った。

この光景を見ていたユーノ達全員は嬉々とした表情となる。

「よし！これならゴジラだろうがなんだろうが倒せ・・・――――」

と、近藤がそう口にした直後。

ユーノは背後から近づいてくる別の気配を感じとり、声を上げた。

「！近藤さん！後ろ！！」

「え？」

すると、その瞬間近藤の背後より現れる白バイに乗った一昔前の暴走族にでもいそうな形相を浮かべた警察官が近藤を狙って来た。

「おらららっら！！！退いた退いた！！」

近藤は白バイ警官が走らせるバイクの前輪に頭をぶつけると、その瞬間地上数十メートルはあるビルの下へと落下していった。

「ぎゃあああ！！！」

「「近藤さん！！！」」

「ゴリラ！！！」

ユーノ達が直ぐに落下する近藤を抱きかかえ、安全に地上へと下したが近藤は湯気が上がる自分の後頭部を必死に抑えながら転がりまわっていた。

「あああああ！！！！いてえええええ！！！！頭が禿げた！！！！」

突然のことに大いに戸惑うなのは達だったが、直後近藤に攻撃を仕掛けてきた白バイ警官がビルの上からバイクごと飛び降りると、驚くべきバイクテクニックを披露させ地面へとちゃちした。

「邪魔だ邪魔だ！！！交機の本田様がお通りだって言ってんだよ！！！」

「あれは！」

「白バイ警官！？」

「あれも漫画キャラだよね・・・けど、これってもしかして！？」

なのはが多少躊躇った様子でそう口にすると、ユーノは苦い表情を浮かべながらこの白バイ警官の正体を暴露する。

「紛れもない・・・『こち亀』に出てくる本田速人だ！」

「本田だけじゃないぞ。」

「へ！」

すると、低い声が耳元に入り込んできたかと思えばフードを身に纏いながら日本刀片手になのはの首筋目掛けて斬りかかってくる男が乱入してきた。

「死ね！！！」

「なのは！！」

ユーノは咄嗟に晩翠で斬りつけて来た男の刀を防ぎ、なのはは冷や汗をかきながら険しい表情を浮かべるユーノを心配した。

「ユーノ君！！」

ユーノは抑え難い怒りを募らせながら、粗悪な口調で日本刀を持ったこの男、ミフネに向かってこう言って来た。

「てめぇ・・・よくもなのはに手を挙げたな・・・許さねぇ！！！」

ユーノは怒りを爆発させると、晩翠でミフネの刀を振り払い、ミフネもそんなユーノと大きく距離を取って構え直す。

「俺の初撃を見切り、それを捌くか・・・なかなかに手練れた相手なようだ。」

「黙れ。俺は今虫の居所が悪い。だらだらと腐れ外道なてめぇと喋るつもりはねぇ。」

「それもそうか・・・所詮俺達は刀(こいつ)で語るしかないな・・・」

「行くぞ。」

二人は互いににらみ合いながら、全力疾走でぶつかり合っていった。

「「はあああああ!!!」」

二人は激しい衝突を起こしながら、なのは達の前から姿を消していった。

「ユーノ君!!!」

そんな中、ユーノの隠れた意外な一面を目の当たりにしていた銀時や新八は唖然としていた。

「おいおい・・・あいつってあんなキャラだったわけ?」

「全然想像つかないんですけど・・・」

その間に、真選組の三人やフォワード陣はいまだ転がりまわる近藤の無事を確かめようとした。

「近藤さん。しっかりしろ！」

「あああああ！！！！お妙さん！！！！！俺はもう駄目です！！！！！」

すると、直後本田はエンジンを全開して再びバイクを走らそうとしていた。

「おらあああ！！どんどん行くぜ！！！」

だが、その瞬間本田速人は目にも止まらぬ速さで移動してきた沖田総悟の剣戟を受け、バイクから放り出されてしまう。

「ぐっほ！」

「ウチの大将を傷つけた野郎は、何人たりとも・・・――――俺が粛清する。」

「沖田さん！」

普段あまり見せない沖田の怒りに触れた本田は出血箇所を抑えながら再びバイクにまたがり、沖田に向かってこう言った。

「てて・・・てめぇ本田速人の神速を舐めやがって！ひき殺してやらああ！！！！」

「心配するなよ。俺はてめぇなんかで殺さることはねぇ。ほら、自信あんだろ？さっさとかかってきな。」

「ほざくな！！！！」

本田はそう言うと、能面のような形相で沖田に向かって突っ込んでいく。

「ほおおお！！！！！」

だが、そんな本田のいびりと勢いもむなしく再び総悟の一撃を受けバイクから跳ね上がる本田速人。

「ぐっは！！」

すると、総悟は清々しいほどの笑顔を浮かべながら本田に向かってこう言ってきた。

「俺はてめぇら倒しに来たんじゃ――――――てめぇらの鼻へし折りに来たんだ♪」

総悟はそう言うと、空中に舞い上がった本田の体を容赦なくあえて峰家で打撃を加えていく。

そして、最後の一撃を受けた本田は満身創痍の状態で朦朧とする意識の中総悟の凄まじさに恐怖を覚える。

「（ば、馬鹿な・・・この男バカ強い・・・！！しかも！！）」

総悟はその場に血塗れで倒れるヘルメットの脱げた本田のリーゼントを鷲掴みにしながらサド心丸出しの笑みでこう言って来た。

「おっと、ヘルメットの下はリーゼントだったのか。つうかバイク降りた途端に内股とは情けねぇな・・・さぁて・・・次はどうやって甚振ったら面白れーかな？」

「（ちょーこの人どエスなんですけど！！！）」

本田はその後総悟のサドの餌食になってしまい、ぼろぼろの紙切れになるまで叩かれ続けられることになってしまった。

そんな光景を間近で見ていたフォワード五人やなのは達はどう言葉を発したらいいか分からず、苦い表情を浮かべた。

「う・・・凄い・・・・！」

「と言うか酷い・・・・！」

と、その時ちょうどゴジラの攻撃から何とか逃げ切ってきた鬼太郎達が恋次たちの元に駆けつけてきた。

「お～い！！何があった！！」

「鬼太郎！お前らも無事か？」

「何とかね。それより、何なのこの状況！？」

「見て通り。もう無茶苦茶のぐっちゃぐっちゃ状態。漫画のキャラが更に濃いメンツを揃えて俺達人間に戦争を仕掛けてきやがったぜ。」

「くそ！こいつらを操ってる犯人は何処にいるんだ！？」

思わず舌打ちをしてしまう恋次だったが、その直後吉良は地下から感じ取れる言い知れぬ気配に思わず目を見開く。

「！地下から何か来るぞ！！」

地下から聞こえてくる聞きなれぬ物音に耳を澄ます全員。

「この音は・・・」

「一体・・・」

その直後、ルキアは敵の気配を明確に感じ取ると全員にその場から飛び上がることを促す。

「は！みんな、飛ぶのだ！！」

全員がルキアの言葉を聞き、飛び上がった瞬間足場が崩落し、地底より現れたのは緑色の全身で背中にスコップを抱えたモグラのようなロボットだった。

「こいつは・・・」

「モグラ？」

このロボット、モグラッキーはゴーグル越しに映ってきた目の前のなのは達を確認すると、迷わず攻撃態勢となる。

「目標補足。殲滅します。」

モグラッキーはそう言うと、ジシャクチェンジと呼ばれる方法で体のパーツを分裂させ、それを組み替えてスペシャルモードへと移行する。

「ジー・シャック！」

モグラッキーの姿が先ほどとは全く違う姿に変貌すると、土方は思わず加えていた煙草を地面に落とした。

「変形しやがった！？」

「円らな瞳でボンジュール。フランス帰りの名刑事・モグラッキー」

。

「て！！！さっき殲滅って言ったよね！？全然刑事の言う台詞じゃないからねソレ！！」

新八がモグラッキーに向かってツッコミを入れるや否や、モグラッキーは右腕に装備したラッキードリルを高速回転させ、攻撃を仕掛けてきた。

「ラッキードリル！」

「ち！」

その場にいた全員はモグラッキーが飛ばしてきたドリルを回避すると、武器を構えて土方を先頭に順に攻撃を仕掛けていく。

「どいつもこいつも、ふざけた真似ぬかしやがる！！うらあああああ！！！」

土方は刀を横なぎに振るい、モグラッキーに攻撃を仕掛けるが装甲が硬いモグラッキーの体の前では全くと言うほど効果を発揮せず、

それを見ていたスバルとギンガがリボルバーナックルで攻撃を仕掛ける。

「「はあああああ!!!」」

だが、直後モグラッキーの背後より現れた謎の狐の妨害によって二人の攻撃は幅回れることとなった。

「ふん。貰った!!!」

二人はその狐、スターフォックスシーリズの主人公フォックス・マクラウドの蹴りを食らうと、豪快に後ろへと吹き飛んだ。

「「ぐあああああ!!!」」

「スバル!ギンガ!!」

「ギンガさん!!」

「な・・・!次から次へと何だこいつら!?」

「おのれ、よくも純然たる魔法少女を!!!」

近藤は怒り心頭な様子で、刀を持つと勢いよくフォックスの元へと走り出しフォックスの体めがけて刀を振り下す。

「ほおおお!!!ゴリラパワー舐めんなよ!!!」

だが、直後近藤は再び背後から忍び寄ってきたもう一人の襲撃者の攻撃を体に受けてしまう。

「十字架ノ墓（クロス・グレイヴ）」

「ぎゃあああああ！！！」

近藤は豪快にその攻撃を受けると、そのまま前方へと吹っ飛ばされる。

「「近藤さん！」」

声を荒げる真選組の二人。

すると、近藤を襲撃してきた独特の衣装に身を包んだ白髪と左眼上の逆さペンタクルが特徴の青年、エクソシスト『アレン・ウォーカー』は神ノ道化（クラウン・クラウン）と呼ばれる自分のイノセンスを操りながら、こう言って来た。

「困るんですよね、管理局の魔導師さんとそこの次元漂流者さん。僕らもあまり時間をかけるわけにはいきません。大人しく、降伏してもらいます。」

「く！また新手！」

「しかもあれは、漫画『Ｄ．Ｇｒａｙ－ｍａｎ』に出てくるエクソシスト、アレン・ウォーカー！」

「は！ジャンプでの週刊連載が難しくなって、ジャンプスクエアーに転属した野郎が俺達に喧嘩売りに来たって訳かよ。」

銀時はそう口にしながら若干アレンのことを馬鹿にした。

「言ってる場合じゃないです。クロスファイアー・・・！」

と、ティアナがアレン目掛けて銃弾を発射しようとした瞬間、何処からともなく飛んできた実弾がティアナの腕をかすめる。

「！」

「ティアナ！」

ティアナが出血した箇所を抑えながら多量の汗をかいていると、ハードボイルドな雰囲気を醸し出す顎鬚を生やした帽子を深々と被った男がコンバットマグナム片手にこう言って来た。

「お嬢ちゃん。銃って言うのは、こういう風に使うもんだぜ。」

なのは達や新八はその男の姿を見るなり目を見開いた。

「あれは！まさか『ルパン三世』の・・・！！」

「次元大介ネ！！」

「う・・・！！」

「ティアナ！大丈夫！？」

なのはやフェイト達が負傷したティアナの元へと近づく。

「はい・・・大丈夫です・・・骨は砕かれてません・・・！ただ・・・う！！」

「これじゃ戦闘は無理だ。吉良、ティアナの治癒を頼む。」

「わかった。」

ルキアの要請を聞くと、吉良は急いでティアナを連れて離れた場所まで移動し、治療を始める。

全員が武器を構えてこの場に現れた兵の漫画キャラクターを前にすると、この中のリーダー役であるアレンがクラウン・クラウンを構えながらこう言った。

「さぁ、かかってくるがいい！！」

いまここに、漫画キャラクター随一の実力を誇る四人が彼らの前に立ち塞がる。

教えて、ユーノ先生！

ユ「今日は本編には全然関係ないけど長谷川さんについてね♪」

ユ「かつては幕府の入国管理局局長だったけど、警護対象者のハタ皇子を殴るという不祥事を起こしクビにされた上、妻のハツさんにも逃げられ、その後も様々な職を転々とするが、トラブルなどが原因で悉くクビになっている。」

ユ「今や住む家さえなく（家賃滞納の常習犯で歌舞伎町界のブラックリストに載っているため）、路上生活をしている。「まるでダメなオッさん（もしくは、夫）」略して「マダオ」と呼ばれている。」

銀「やっぱ銀魂には長谷川さんがいないとイマイチ盛り上がらねぇよ。あれはあれでいい味出してるしな～～～」

ユ「でもよく考えてみたら、あの人の声って立木さんですよね？ＢＬＥＡＣＨで言えばあの人更木剣八さんですから・・・――」

そう言うと、二人は長谷川さんと剣八の二人のことを思い浮かべながら、凄まじいギャップに思わず身震いする。

銀「あ～～～よかったわ～～～長谷川さんが剣八君じゃなくて～～～！」

ユ「もし剣八さんだったら怖いことになってますよ～～～！」

長「おおい！！！つうか、俺の話そんなことで終わりかよ！！！というか、一体俺って何時になったら仕事見つかる訳！！！空知！！！」

号泣する悲痛な長谷川泰三だった。

魔導師図鑑ハイパー！

黒崎一護と黒崎織姫の解説銀魂篇！！

織「どうも！みなさん、アンゴルモア・銀魂篇が始まりましたが、今回はいつにもましてハチャメチャな展開となってきましたね？」

一「はちゃめちゃと言うよりは無茶苦茶じゃねぇのか？つうか、ユーノも銀さん達も今回の敵にはてんやわんやだよな。」

織「そうなんですよはい！！今回の敵は、あろうことか漫画キャラクター！まさか、まさかの展開となってきました！！そして、彼ら漫画キャラクターを操る巨大な黒幕とはどんな人物なんでしょうか！？」

一「今後も目が離せなくなってきたぜ！ま、俺は多分忙しいから出ないかもしれねぇけどな・・・」

織「次回も、このチャンネルに・・・――ズーム・イン！！」

一「いや・・・それ違うだろ・・・」

次回予告

現れた、漫画キャラの精鋭たち。

混沌するこの世界に何が起ころうとしているのか？

そして、この事件の黒幕とは誰か――――――

近「次回『漫画もいいけど、新聞の社説も読んでおこう』」

漫画もいいけど、新聞の社説も読んでおこう（前書き）

新「魔法の世界、ミッドチルダへと飛ばされてきた僕達万事屋・真選組の六人は、突如現れた謎の漫画キャラクターたちの襲撃を受け、ユーノさん達機動六課の魔導師と共に漫画キャラクターに立ち向かった。」

新「しかし、漫画キャラクターたちはさらに強力な戦闘員を増強させ僕たちをあしらうかのように立ち塞がってくる。そして、次元世界を舞台に漫画キャラクター対時空管理局による壮絶な戦いが幕を開けることとなった。」

漫画もいいけど、新聞の社説も読んでおこう

＞i22609―709＜

キャロ達がゴジラとの戦闘を繰り広げる一方で、前線メンバーは強

力な力を有した幹部漫画キャラとの熾烈な争いを繰り広げていた。

神楽はモグラッキーの不意打ちを受け、勢いよく顔面を叩きつけられ後方へと飛ばされる。

「ぶっふ！！」

「ち。仕損じましたか・・・だが！」

モグラッキーがそう口にした直後、クラウン・クラウンを操るアレンはクロス・グライブで神楽に更なるダメージを負わせる。

「僕達の連続技からは逃れられませんよ！」

神楽はアレンの攻撃を受け、頭上高く舞い上がる。

そして、直後待ち構えていたフォックスが止めの一撃を加えようとする。

「ふん！これで・・・！」

「おい。」

と、その時徐に総悟の声が聞こえるかと思いきや、総悟は峰打ちで刀をフォックスへと振りおろし、後頭部を強打させた。

「その娘やんのは俺だい！」

「ぐっほ！」

フォックスは総悟の一撃を受けると、勢いよく地面に叩きつけられる。

「フォックス！は！！」

フォックスの安否を気遣うモグラッキーだが、その直後背後から土方の一撃が仕掛けられ、モグラッキーは衝撃で吹き飛ばされる。

「ぐっは！！」

土煙の中より出て来た土方は、多少傷ついた状態で煙草を吹かしながらこう言って来た。

「・・・ふう・・・舐めてんじゃねぇぞ、漫画キャラ共・・・」

すると、最後に残っていたアレン目掛けて距離を取っていたなのはとスバルの同時魔力砲撃が仕掛けられる。

「エクセリオン・・・！」

「ディバイン・・・！」

「「「！」」」

「「バスター！！！」」

アレンは傷ついた仲間を拾い上げると、クラウン・クラウンの能力を発動させて二人の魔力砲撃を何とか防ぐことに成功する。

煙が晴れ、辺りの景色が見えるようになるとフォックスは血塗れと

なった顔面を上げながらアレンに向かってこう言って来た。

「いてて・・・おい、アレン。俺今どんな面してる？」

「スネ夫君のような面だね。」

「・・・怪我の具合だよ・・・！」

「血塗れだ。こっ酷くジャイアンに殴られたんだね。」

「だから何でスネ夫なんだよ！！」

アレンのボケに思わずそのようにツッコミを入れるフォックスだが、その後そんな自分の姿を確認するために携帯を取出しほれぼれとした表情を浮かべる。

「ほう・・・やっぱいい男は血ぃ流しても様になるな。おいモグラッキー。お前もこっちに来て一緒に写真に映れ。」

フォックスがそう言うと、土方の一撃を受け倒れていたモグラッキーは徐に立ち上がり、首を鳴らしながらフォックスの元へと近づいていく。

「全くあなたは・・・・・・また幼稚ですよ・・・・・・」

「記念だよ。俺達が怪我負わされるなんてそうねぇぞ。つうか、これカッコよくねぇ？血、カッコよくねぇ！？」

フォックスは自慢げな口調でそう言うと、アレンとモグラッキーと一緒に写メを取り始めるが、シャッターが切れる直前、アレンとモ

グラッキーはフォックスを押しのけてメインで映ってきた。

「なかなか面白い戦いになりそうですね。」

「いや、まったく。」

自分たちの勇姿を確認する二人とは裏腹に、フォックスは一人怒っていた。

「何メインで映ってんだよお前ら!!」

そんな勝手な行動を起こす三人の様子を離れた場所で見守っていた銀時達はあきれ返っていた。

「全然聞いてねぇよ。漫画のキャラのくせに、現実世界の人間無視して勝手に談義始めちゃってるネ。」

「ねぇ・・・これってどうする?」

「どうするもこうするも、倒すしかねぇだろ・・・」

「何か、急にモチベーションが下がったよな。」

「「「「「うんうん。」」」」」

すっかりモチベーションの下がってしまっている六課の前線メンバーを見ていた次元は、口論をやめようとしないアレン達に向かって大声で注意を促す。

「てお前ら!!!何んなところで口喧嘩おっぱじめてるんだよ!!

ったく、これだから三流どもは！！」

「私達完全に舐められてるネ・・・その間に私ヴィータの方手伝ってくるネ！」

「おい、待て！あんまし勝手に動くんじゃ――――――」

と、土方が神楽の行動を止めにかかろうとした瞬間、口喧嘩を終了させたモグラッキーが神楽の前に巨大な瓦礫を投げつけてきた。

「まぁ、お待ちください御嬢さん。どのみち全員打ち取られるんだ。助けに行こうと同じことで――――――ぐっほ！！」

だが、その瞬間にモグラッキーの投げた瓦礫が神楽の怪力によって自分の元へと降りかかってきた。

神楽は瓦礫の上に立ちながら、下敷きとなっているモグラッキーに向かってこう言った。

「おいそこのモグラ・・・邪魔すんじゃねぇよ・・・ヴィータは私の友達ネ。おめぇの相手は歌舞伎町の女王たるこの私ネ。狐と白髪はとっとと帰んな・・・」

すると、そんな神楽の言葉を聞いたモグラッキーは神楽に負けず劣らずの怪力によって瓦礫を粉々に粉砕し、こう言って来た。

「気に入りました！！その鬼神の如く力！！あなたの相手、このモグラッキーが務めさせていただきます！！」

神楽とモグラッキーが相対することになった直後、射撃型のなのは

は早撃ちの名手である次元大介と激しい攻防を繰り広げる。

「アクセル！」

〈Ｓｎｉｐ　Ｓｈｏｔ〉

なのはの得意とする複数の誘導弾が一斉に次元の元に向けられる。

「け！何て数だ・・・」

次元は皮一枚のところでなのはの攻撃を躱し、隙を突いてはマグナムの弾丸をなのは目掛けて発射する。

なのはも早すぎる次元の銃弾に被弾しないように、日ごろから鍛え上げられた動体視力と防御で回避していくが、それでも次元の早撃ちに恐れおののく。

「く！何て早撃ちなの！？」

一方、フォックスと対峙していた恋次とルキアはまじまじとフォックスの姿を見ながらこんなことを呟いていた。

「おい、見ろよルキア。狐だぜ。」

「気に食わぬな。二度とあやつの顔は見ないと思っていたが・・・――――」

「ああ・・・俺もそう思ってたところだぜ。」

二人はフォックスから連想される嘗ての吉良の上司で三番隊隊長か

つ、自分たちが最も嫌いな性格の男、市丸ギンのことを思い浮かべながらフォックスと相対する。

「ふん。誰のことを言ってるのか知らないが、まとめてかかってこい！」

フォックスは挑発的な口調で二人の攻撃を誘うと、二人もその誘いに乗って一斉に攻撃を仕掛けに行くのであった。

さて、残りのアレン・ウォーカーの方はと言うと、銀時や残りの前線メンバー一同を前にしながら不敵な笑みを浮かべる。

銀時は木刀片手にアレンに向かって言葉を投げかける。

「この大人数相手に、一人で相手をするつもりかてめぇ？」

「ご心配には及びません。僕らは、あなた方と違って――――――強いですから」

すると、そんなアレンの言葉を聞くとフェイト達は思わず面白いとばかりの表情となり、全員の気持ちを代弁してこう銀時はこう答えた。

「・・・は、上等じゃねぇかよ。なら俺らも手加減なんてもんはしねぇよ・・・・・ジャップ正当キャラと月刊ジャンプキャラの実力差、てめぇの脳髄に叩きこんでやるぜコノヤロー！！！」

銀時はそう言うと、先陣を切ってアレン目掛けて横なぎの攻撃を仕掛ける。

アレンはそれを軽快な動きで回避するが、直後背後に回り込んだ金太郎・浦太郎・鬼太郎の三人の攻撃が仕掛けられる。

「ダイナミックハリケーン！！」

「スピアトルネード！！」

「烈火斬・炎熱嵐！！」

飛来した三人の攻撃の軌道を読みながら、アレンは鬼太郎目掛けて技を仕掛ける。

「十字架ノ墓！」

鬼太郎は躱し、三人は一度距離を取って離れた。

すると、立て続けに今度はフェイトがザンバーフォームでアレンに攻撃を仕掛ける。

〈Ｚａｍｂｅｒ　ｓｌａｓｈ〉

「はあああああ！！！」

「道化ノ帯（クラウン・ベルト）」

アレンはフェイトの攻撃に対抗するため、マントからくもの糸のような糸を出し、バルディッシュを絡め取る。

バルディッシュを絡め取ると、アレンはその状態を維持したまま左手の爪から指輪に似た王冠を大量に放ち鞭のように振るう。

「爪ノ王輪（クラウン・エッジ）！」

〈Ｐｒｏｔｅｃｔｉｏｎ〉

次々に仕掛けられるアレンの予測不可能な攻撃に苦慮しながら、フェイトは防御壁を展開し、攻撃を防ぐ。

そして、フェイトに気を取られ拮抗状態のアレン目掛けて銀時・新八・近藤・土方・スバル・エリオ・ギンガの七人が一斉に攻撃を仕掛ける。

「「「「「てやあああああ！！！」」」」」

「「「「ほおおおおお！！！」」」」

すると、アレンは不敵な笑みを浮かべ徐に左腕を掲げる

「神ノ道化！！」

アレンの言葉に反応し、イノセンスが眩いばかりの光を左腕から発すると、あまりの眩しさに銀時達は攻撃を中断し、着地する。

「野郎・・・！」

「多人数相手に、ここまでやれるとは・・・！」

「だから言ったはずですよ。僕らは強いと。」

「んなもん知るかってんだ！！！」

銀時はそう言うと、アレン目掛けて勢いよく突っ込んでいく。
銀時の木刀を左腕で防ぎながらアレンが言葉を口にする。
「相変わらず一辺倒な剣筋・・・・・馬鹿の一つ覚えですね。」
すると、そのアレンの言葉を聞いた銀時は鼻で笑いこう言い返す。
「は、馬鹿の一つ覚えは――――――」
「！」
直後、アレンの背後に現れる真剣を握りしめた新八。
「おまえじゃあああ！！！」
新八は勢いよくアレンの体めがけて刀を振りおろし、アレンはその攻撃を食らうと肩に深手を負って倒れてしまう。
「ぐっは！！」
肩に傷を受けたアレン。
そんなアレン目掛けて容赦なくフェイトがサンダースマッシャーを放つ。
「ファイア！」
「く！破滅ノ爪（エッジ・エンド）！！」

咄嗟にアレンはまばゆい光を伴った巨大化させた左手の爪でフェイトのサンダースマッシャーを引き裂いた。

その後もアレンと銀時たちの戦いは激しさを増すばかりであった。

さて、次元と射撃対決を繰り広げていたなのはであったが、次元は相も変わらずの早撃ちでなのはを翻弄し、なのは自身も披露の様子を見せ始めていた。

「く！これじゃキリがない・・・！」

と、その直後一瞬の隙を突いた次元がなのはの死角より現れマグナムを構えた。

「は！」

「貰ったああ！！！」

勝利を確信し、なのはに銃弾を発射しようとした瞬間、何処からともなくオレンジ色の魔力弾が発射された。

「バリアブルシュート！」

「！？」

次元は引き金を引く直前に撃たれたオレンジ色の魔力弾を確認すると、一度なのはから距離を取って放たれた方向に目を向けると、撃ってきたのは治療を終えたばかりの若干意気の上がったティアナだった。

「ティア！」

スバルは復活したティアナの様子を見るなり声を上げて驚き、なのはもティアナの元へと近づくと心配そうな様子で声をかける。

「ティアナ・・・まだ無理しちゃ・・・！？」

「大丈夫です・・・！吉良さんの治療で粗方治りましたから・・・射撃型が相手なら、私も出るべきです・・・！」

「ほう・・・いい根性してんな。気に入ったぜ。」

ティアナの態度を見ていた次元は肝の据わった彼女に脅威を抱いた。そして、ティアナは苦い表情を浮かべながら徐にクロスミラージュを構える。

「行くわよ、ダンディーなお髭のおじさん！」

ティアナは銃口に魔力を圧縮させると、それを次元目掛けて発射する。

「シュート！！」

「この俺と早撃ちで勝負する気か！？面白い！！」

次元はティアナの魔力弾を回避しながらアクロバティックな動きを含みながら、目にも止まらぬ早撃ちを披露し、なのはは素早くそれを防御しティアナを護る。

ティアナはこれほどまでに早い射撃を見たことがなかった。

「く！（ほんと何て早撃ちなんだろう・・・バレットの展開が間に合わない・・・！）」

彼らのそれぞれの戦いはこうして激しさを増していくばかりであった。

その頃、ギャオス撃退に専念していた部隊長はやてとリィンのほうはと言うと、若干の息を切らしながら殲滅を続けていた。

「は、は、は、は、は。さぁ、あと何体や？」

〈9編隊・・・いや、8編隊に減ったです！〉

「よし、何とかなるな。さぁ、ガンガン行くよ！照準よろしくな、リィン！」

〈はいです！〉

はやてとリィンもまたなのは達同様自分の戦場で戦いを続けるのであった。

さて、もう一人――――――ユーノ・スクライアの方はどうなっているのかと言うと、キープアウトと書かれた黄色のテープで覆われた数百本の日本刀が散らばるフィールドで、剣神ミフネとの激闘を続けていた。

「はあああああ！！！！」

「ふん！」

周囲に散らばる日本刀と身体能力を駆使してユーノに攻撃を仕掛けるミフネと、負けず劣らずの身体能力と魔法・死神の技術で対抗するユーノ。

「チェーンバインド！」

「なんの！」

ミフネはユーノのチェーンバインドを断ち切ると、廃墟ビルに突き刺さっていた三本の日本刀を抜き取り徐にそれを地面に向かって投げた。

「！？」

「『三道射（さんどううち）』！」

ミフネは投げつけた三本の刀の柄頭を伝って移動してくると横なぎの攻撃を加える。

「は！」

「く！」

ユーノはミフネの攻撃の軌道を読み、それを躱すと透かさずミフネは地面に刺さった複数の刀を同時に上に打ち払ってユーノを斬りつけて来た。

「『刀牙（とうが）』！」

そんなミフネの攻撃に倣ってユーノも晩翠から翡翠斬を放つ。

「翡翠斬・八千刀！」

両者の技が拮抗し、ぶつかり合う。

土煙が晴れ、ユーノが鋭い視線でミフネを睨み付ける中、ミフネはそんなユーノに向かってこう言った。

「・・・なるほど。噂に聞くだけあっていい腕をしている。翡翠の魔導死神ユーノ・スクライア。」

「男に褒められてもあまり嬉しくないよ。」

ユーノはそう言うと、頭上高く飛び上がり晩翠を振りかざした。

「輝け、晩翠！」

ミフネは翡翠斬を回避すると、そんなユーノに向かって更に言葉を投げかける。

「だが、その力を持ってしても貴様には何も護れなどしない。」

「ぬかせ！！！」

ミフネの言葉に思わず感情が溢れかえるユーノ。

ミフネはそんなユーノのことを見ながら、無数の刀を縦にまっすぐ

浮かせてそこから攻撃を派生させる無限一刀流の技を発動。

「無限一刀流、『垂直の並（ならび）』」

ユーノはそれを軽快な瞬歩で避けながら、再び翡翠斬を連発するがミフネ自身も負けず劣らずの体捌きで攻撃を回避しい、今度は周りの刀を舞い上げ様々な攻撃を派生させる並びを仕掛ける。

「『乱立の並（ならび）』！」

変幻自在の無限一刀流の攻撃を躱し続ける傍ら、ユーノはミフネの実力が本物であることを認めたうえで、技の特性を熟知する。

「（こいつ・・・複数の日本刀を自在に操る無限一刀流の使い手か・・・これだけの数の刀を容易く、しかも顔色一つ変えないとは・・・何て図太い神経してるんだ・・・！？剣神（けんしん）とは、よく言ったものか・・・）」

「まだだ。こんなものでは食い足りぬ。貴様の本気とやら、そろそろ見てもらおう。翡翠の魔導死神・・・ユーノ・スクライア」

「・・・は。言うじゃないの・・・――」

思わず鼻で笑うユーノ。

そして、二人の剣客は再び刀を握りしめると噛み付くような瞳でお互いを見合い、そして真っ直ぐ突っ込んでいった。

さて、ユーノとミフネとの激闘が苛烈を極める中、ゴジラと壮絶な巨大バトルを繰り広げていたキャロ・シグナム・ヴィータの三人は

追い上げを見せていた。

キャロはジークフリートを操る傍ら、ゴジラの動きを封じるためにさらに仕掛ける。

「我が求めるは、戒める物。捕える物。言の葉に答えよ。鋼鉄の縛鎖。錬鉄召喚、アルケミックチェーン！！」

ゴジラの足元に現われしキャロの得意とする鋼鉄の鎖がゴジラの全身に絡み付き、ゴジラは身動きを封じられる。

「よし！今だ！！」

「〈ああ〉！」

好機と見たヴィータ、シグナムとアギトは一気に畳み掛けようと懐からＩＰカートリッジを取出し装填する。

「グラーフアイゼン！！」

「レバンティン！！」

〈〈ＩＰ　ｃａｒｔｒｉｄｇｅ　ｌｏａｄ〉〉

ヴィータは以前、一護との模擬戦では負けたがそれ以外では負けなしと言われる最強の一撃をゴジラ目掛けて振り下す。

「クラッシャーシュラーク・シェアシューテルングスハンマー！！」

そして、シグナムとアギトもユニゾンした状態でレバンティンを全

てが炎で構成された巨大な弓の形に変化させ、さくら篇で使用したフェニックス・ファルケンを発動する。

「〈翔けよ、不死鳥〉！」

〈Ｐｈｏｅｎｉｘ　ｆａｌｋｅｎ〉

二人の一撃必殺の攻撃を受け、ゴジラは悲鳴を上げながら満身創痍の状態へと追い込まれ、体勢を崩してその場に倒れこんだ。

「今だ、キャロ！」

「はい！」

シグナムの言葉を聞き、チャンスと判断したキャロはジークフリートに向かって命令を送り、最後の一撃をゴジラに仕掛ける。

「一閃制裁、ダ・カーポ！！！」

ジークフリートが振り上げる全てを初期化する剣、パラディンソードの一太刀が見事なまでにゴジラに決まると、ゴジラは体を分子のようにさせながら消滅していき、その場に残ったのは巨大な紙切れだけとなった。

「おっし！」

「やったぜ！」

「はい。」

勝利を喜び、嬉々とした表情となる三人。

すると、その瞬間三人の耳に轟音が聞こえ、振り返るや否や前線メンバーが幹部漫画キャラに圧されている光景が目に映ってきた。

「あ！みなさん！！」

キャロ達が地上の方で幹部漫画キャラ達と熾烈な争いを繰り広げている仲間の様子を見てみると、モグラッキーの攻撃を受けた神楽と総悟が大きく後ろに飛ばされる。

「「ぐっほ！！」」

「チャイナ娘！総悟！」

近藤が攻撃を受けた二人の安否を気遣う中、モグラッキーは感情のないロボットの表情で二人にこう言った。

「何度やっても無駄だというのが分からないのですか？私の体は鉄よりも固い。あなたがたの剣やデバイスでは砕くことは不可能。」

そんなモグラッキーの言葉を耳に入れながら、総悟は強打した箇所を抑えながら神楽に向かって言葉を投げかける。

「いてて・・・何してんだよてめぇは。あんなのにやられる魂かよ、おい？」

「うるさいアル・・・！何か調子悪いアル・・・！」

総悟の言葉に苛立ちを覚える神楽だったが、何故か顔色が優れなか

った。

それもその筈、神楽はモグラッキーの攻撃受けて利き腕の骨に皹が入っていたのだ。

「おい、お前その手・・・」

神楽の右腕は青く腫れ上がり、戦うことはほぼ不可能に近い状態だった。

事態に気づいた銀時や新八たちが急いで神楽の元へと近寄った。

「神楽ちゃん！」

「やべぇな。腕の骨がいかれちまってるぜこりゃ。」

「ふん。どうやら利き腕を痛めたらしいですね。これで勝ち目はなくなりました。」

神楽の様子を窺っていたモグラッキーがそう口にすると、悔しそうな表情を神楽は浮かべた。

「待ってて。直ぐに治療を・・・」

と、吉良がそう言って神楽の右腕の応急処置に入ろうとすると、総悟が徐にこんなことを言って来た。

「待ちな。こういうは案外反対に捻れば治るもんでっせ。」

そのとんでもない発言を耳にした直後、敵であるはずのモグラッキ

ーも思わず声をかけてきた。

「ちょっと！！あんまりいじくんないほうがいいんじゃ・・・！」

しかし、モグラッキーの忠告もむなしく総悟は神楽の利き腕を強引に反対方向へと捻り、そのまま本当に神楽の骨を折ってしまった。

「なあああああああ！！！！！！！！！！！！！！！」

あまりの激痛に思わず絶叫し涙を流す神楽を前に、総悟は無表情に呟く。

「あれ？方向間違ったか？」

「おい！！！！！！！！てめぇうちの子に何しちゃってくれてんの！！！！！！！」

「怪我直すどころか、悪化させてどうすんのどエス！！！！！」

傍で見ていた銀時と新八が総悟の行動に抗議をしていると、神楽はそんな総悟の右足に向かって思い切り蹴りを入れてきた。

「この・・・・！！！！！何すんだ糞ガキ！！！！！！！！！」

神楽の渾身の蹴りが総悟の右足に入ると、総悟の足の骨に見事なまでに皹が入り、あまりの痛さに総悟ものた打ち回った。

「ぐおあああああああああ！！！！！！！！折れた！！！！！！いまボキっていった！！！！！」

「総悟！！！！！ちょっと、お前もお前で何やってるの！！！！」

負傷した総悟を目の当たりにしながら、近藤は神楽を責め立てる。

「やられたら倍返しするって銀ちゃんが言ってたネ！そうアルな銀ちゃん！」

「万事屋！！！何とんでもないこと教えてんの！！！」

「うっせーゴリラ！！！俺の所為か！！！つうかそれどころじゃねぇだろ！！！」

いがみ合う二人。

すると、事態に気づいたルキアが銀時たちの元に駆け寄り戦いをほったらかしにして勝手に騒ぎ立てる銀時達を諌めてきた。

「何をしておるのだ戯けども！！全く状況をよく考えぬか！！」

「まぁ、お互い自業自得だな。よかったな総悟。当分の間事務仕事だぜ。」

煙草を吹かしながら激痛で苦しむ総悟に向かって土方がそう口にすると、総悟は思わず本音が暴露する。

「土方・・・てめぇ覚えてろよ・・・！！！」

「ふふ。最早これまでですね。」

「「「「「「「！」」」」」」」

銀時たちが声に反応してその場から振り返ると、不敵な身を浮かべながらモグラッキーを始め、フォックス、次元、アレンがこう言って来た。

「仲間割れで勝機を失うなど、愚の骨頂。」

「大人しく降伏してもらうぜ。」

「諦めちゃったほうがいいって。」

「人間社会はすべて、我ら漫画キャラによって支配されるのです。」

「んだとふざけんなよ!!何だその似非人類補完計画的なノリは!?猪狩指令は認めても、俺は絶対に認めねぇぞ!!」

「私達だって、こんなところでまだやられる訳にはいかないもの!!」

駆けつけてきたなのはがそう口にすると、頭上からヴィータの声が聞こえてきた。

「なのはの言う通りだぜ!」

「ヴィータちゃん!」

ヴィータが目の前に舞い降りると、続けざまにシグナム、アギトとフリードの背中に乗っていたキャロが地面に降り立った。

「シグナム!キャロも・・・あの怪獣は?」

「何とか倒しました。あの、怪我見せてください。」

キャロがそう言うと、未だ絶叫する神楽は救援を求めた。

「あおおおお！！！！早くキャロ！！！プリーズヘルプミー！！！」

「やれやれ、また派手にやりましたな。」

「う、うるせーやい！早く直してくれ！」

総悟は金太郎にそう言うと、金太郎と傍にいた吉良はため息交じりに治療に専念することとなった。

シグナムとヴィータはカートリッジをロードすると、徐に眉間に皺を寄せながら武器を構える四人にこう言って来た。

「どうやら貴様らは、我々がいるのを忘れはいないか？」

「おうよ！てめぇらまとめて消し屑みたいに燃やしてやる！」

「グラーフアイゼンのしつこい汚れになっても知らねぇぞ。」

「やれやれ・・・本当に人間とは往生際の悪い・・・――――」

と、アレンが溜息をつきながら抵抗の姿勢を崩さないシグナム達に呆れかえっていたその時だった。

「ぐっは！！」

「「「「！」」」」

当然、アレン達四人の横を満身創痍のミフネが通り過ぎ、ミフネは廃墟と化したビルに激突すると、そのまま紙切れとなって消滅した。

その一方で、なのは達は一瞬この光景が何なのか疑問に思った。

「な、何!?」

「何が起きた・・・！」

と、その時。

土煙が上がる中から晩翠片手にユーノ・スクライアが登場する。

「・・・生憎、往生際が悪くて結構なんなんだよね、人間は。」

アレン達はユーノの声のする方向へを目を向けると、思わず仰天してしまう。

「お・・・お前は・・・!!」

仰天するアレン達を余所に、ユーノは首筋に手を当てながら首を鳴らした。

「あ～～～首痛い～～～」

「ユーノ君!!」

「すごい・・・！ユーノさん、あんなに強かったんだ！！」

「け！いいとこ持っていきやがるぜ。」

嬉々とした表情でユーノを見つめるなのはや、知られざるユーノの実力に驚きを隠せない新八、それに舌打ちをして若干悔しがる恋次。

その一方で、次元はユーノの状態を見ながら額に汗をかきつつこう言った。

「おいおいマジかよ・・・・・・ミフネは俺達の中でも随一の戦闘力を持った野郎だぜ・・・それを返り討ち・・・しかも無傷でだと・・・！？」

次元が示唆したように、ユーノの外見からは目立った傷がまるで見受けられなかった。

これにはアレンやフォックスも驚きを隠せない様子だった。

「確かに、目立った外傷などは一切見受けられない・・・！」

その一方で、ユーノのことをあまりと言うか全くと言っていいほど知らないでいる真選組の三人もまた、このユーノの強さには驚かざるを得なかった。

「何ツー出鱈目な・・・あの野郎、何もんだよ！？」

すると、その直後聞いていた浦太郎が疑問符を浮かべる三人に向かってこう説明した。

「翡翠の魔導死神ユーノ・スクライアって言えば、管理局やこの世界を始めとする次元世界じゃすっかり知られた通り名だよ。」

「翡翠の魔導死神・・・？」

「そう言えば、あいつ確か、一護の弟子だったんだな・・・すっかり忘れてたわ。」

浦太郎の話を聞いたのち、銀時はあったその日の夜に恋次から聞かされたユーノが一護の弟子であるという一つの事実を思い出し、頭を掻きはじめた。

「く！猪口才な！！」

「ミフネさんの敵は僕たちがとります！！」

興奮した二人は武器を持つと、勢いに任せて不用意にユーノの元へと走り出していった。

「待て！モグラッキー！フォックス！迂闊に近づくな！！」

次元が声を上げて二人の行動を止めようとするも、そんなことなどお構いなしに二人は駆け足で近づいていき、ほぼ同時に攻撃を仕掛けた。

「「はあああ！！！！」」

だが、その瞬間二人の動きを読むと華麗に舞いあがり距離を取る。

「「！？」」

そして、頭上に気を取られる二人に向かって予め仕掛けていたディレイドバインドを発動させる。

「は！」

すると、フォックスとモグラッキーの両足はディレイドバインドの餌食となり、二人はその場から動くことが出来なくなった。

「な！」

「何ですか、これは！？」

そんな動けない二人を頭上から窺いながら、ユーノはホイップバインドを作り出すと綴雷電を組み合わせたスピードオブライトテンの応用技をフォックスに向かって仕掛ける。

「“スピード・オブ・ライト・テン・ライトニングホイップ”！！」

フォックスは高速で襲い掛かる電撃を帯びたユーノのホイップバインドをその身に受けると、唸り声をあげながら苦しみだす。

「ぐあああああ！！！！」

なのは達は咄嗟にこのような事をやってのけるユーノの才覚に改めて感服していた。

「綴雷電を混ぜて、威力を強化したか！」

「流石であるな。」

やがて、フォックスは黒こげになるまで鞭に撃たれつづけ、その場に倒れるとそのまま紙切れとなって消滅した。

「フォックス！！」

声を上げて仲間の敗北に驚きを隠せないモグラッキー。

と、その直後モグラッキーの背後にいつの間にか降り立ったユーノは一瞬の隙を突いてストラグルバインドで拘束する。

「ストラグルバインド！」

モグラッキーの全身はストラグルバインドで完全に拘束され、まるで抜け出せるような状態ではなかった。

「しまった！！」

焦燥を顔に見せるモグラッキー。

ユーノはそんなモグラッキーを眉間に皺をよせながら見つめると、徐に晩翠を振り上げ刀身に霊力を圧縮させていく。

「月牙八式兵法、八式――――――！」

そして、十分に霊力が圧縮され蓄えられるや否やユーノは渾身の一撃をモグラッキーの脳天目掛けて振り下した。

「一刀月牙！！！」

モグラッキーはゼロ距離から受けるユーノの月牙天衝を受けると、悲鳴を上げながら紙くずとなって消えていった。

「うわあああああ！！！！無念です！！！！！！」

「モグラッキー！！」

立て続けに二人の同胞が倒されたことに大いに動揺する次元大介。

すると、そんな次元の背中にクロスミラージュの銃口が付きつけられる。

「！」

思わず体を硬直させる次元に向かって、ティアナは冷淡な言葉をぶつける。

「一流のガンマンにしては・・・迂闊な最期だったわね。」

「こ、小娘！！！！！」

ティアナの言葉を聞き、急いでマグナムを取出し振り返ろうとした次元だったが、直後ティアナのバリアブルバレットが次元の体を貫通する。

「シュート！！」

「ぐっは！」

次元は体を貫かれると、勢いよく後ろへと吹き飛び孔の空いた紙切

れとなって消滅する。

「次元！！！！」

次元までもが倒され、最後に残ったのはエクソシストのアレン・ウォーカーだけとなった。

アレンは一度ユーノ達から距離を取って焦燥がにじみ出た表情で睨み付けるが、ユーノやなのは達はそんなアレンに向かって武器を構え、徐にユーノがこう言って来た。

「さてと、残すは君だけか・・・・・・ジャンプスクエアのアレン・ウォーカー君・・・」

「く！神ノ道化（クラウン・クラウン）、臨界点突破！」

アレンはそう言うと、イノセンスを１００パーセントシンクロさせ臨界点を突破し、左腕を巨大な刀剣へと変化させた。

「僕は彼らのようには行きませんよ。こうなれば僕一人でもあなた方に打ち勝って見せます！！」

すると、そんなアレンの言葉を聞いた銀時が小ばかにした表情でこう言った。

「は！言ってくれるじゃねぇかよ・・・わからねぇの？俺達・・・いや、このフェレット君はお前の想像以上に強いんですよ？」

「それでも・・・――――」

アレンはそう言いながら、変化させた刀剣・・・退魔ノ剣（たいまのけん）を持ちながらユーノへと突っ込んでいく。

「僕が勝つ！！」

「みんなには手は出させない！」

ユーノはなのはを含め、ここにいる全員を護るために一人アレンに向かって突進し、強引にアレンを圧しながら先ほど自分がミフネと戦闘を繰り広げた場所まで連れて行き、晩翠と併用して残された日本刀を駆使してアレンと戦闘を始める。

「ミフネさんの残した刀を使う気ですか！？」

「落ちてるものは友好的に使わないと――――――ね！」

ユーノは地面に突き刺さったミフネの刀を拾っては晩翠と一緒にアレンに攻撃を仕掛け、アレンはそれを退魔ノ剣で防ぎながら、ユーノにこう言った。

「く！いい気にならない方がいいですよ。」

退魔ノ剣をかかげ、アレンはそこから衝撃波を放ちユーノとなのは達の周囲を攻撃し始める。

「破壊咆哮（デス・ボール）！！！！」

ユーノはそれを防御で防ぎながら、絶大なその威力に思わず身を構える。

「う・・・！！」

同じように、離れたところでその影響を受けていたなのは達も体を身構えていた。

「ゆ、ユーノ君・・・！」

「くそ！これでは全く視界が見えんぞ・・・！」

アレンは息切れを起こしながら、この攻撃ならばユーノにダメージを負わせられると確信し、目の前の土煙の中を凝視する。

「は、は、は、は、は。どうですか？これならば流石にあなたも無事ではすみま・・・――――」

と、言いかけた直後・・・土煙の中から出て来たのは翡翠の殻でダメージを軽減させた無傷のままのユーノだった。

「ふん。」

「な！馬鹿な！！」

銀時達もこのユーノの常軌を逸した強さと能力の高さにはあきれ返るほどだった。

「オイオイ・・・あんなどチートありかよ・・・」

「どエスに比べれば全然ましアルよ・・・！」

アレンは歯を食いしばりながら湧き上がる悔しさに腹を立てる。

「この！！！！！ほあああああああああ！！！！！」

アレンは我を忘れると、連発は不可能なはずのデス・ボールを自分の命を削る覚悟で発動してきた。

「野郎！！！あの技を連発する気か！！！」

「あれって、設定では連発できないはずですよ確か！！！！！」

「ほあああああああああ！！！！！！のあああああああああ！！！！」

ユーノは降り注ぐデス・ボールを翡翠の殻で防ぎながら、若干凄んだ声でアレンにこう言った。

「・・・・・こんなものか・・・・・エクソシスト！」

ユーノはそう言うと、アレンの攻撃を回避しながら前へと飛び出す。

アレンはこの捨て身の攻撃とも取れるデス・ボールを躱したユーノに目を疑う。

「躱した！？」

直後、ユーノは一度晩翠を手放しミフネとの戦闘で残されていた百本の刀のうちの一本を手に取りアレンに向かって無限一刀流の技を発動させた。

「・・・無限一刀流・・・加法・・・一本！！」

ユーノはアレンが持つ退魔ノ剣にミフネの日本刀を勢いよくぶつけ、一瞬の隙を見せるとすかさず別の刀を拾い続けざまにアレンの体を刀で重ね動きを封じていく。

「二本！三！四本！五本！！六本！！七本！！！八！九！十！十一・・・・・・！！」

ユーノは刀で身動きを封じられ、完全に目を白くするアレンに十二本目の刀を思い切り腹部へ打ち込む。

「十二本！！」

そして、動きを封じ込めたユーノは再び晩翠を手に取りそれを振り上げると刀で動きを封じられたアレンに向かって打ち込んだ。

「乗法（じょうほう）・・・――――」

加法で重ねた十二本の刀をさらに打って十二本全ての刀で斬る技・乗法・二十四本が的確にアレンの体に打ち込まれ、それを離れたところから窺っていたなのは達全員はその光景にくぎ付けとなっていた。

「周りの刀を打っているの！？」

そして、全ての刀に晩翠の打ち込みが入り終わるとユーノは決め台詞と共に晩翠を仕込み杖に収める。

「二十四本！！！」

攻撃が終わると、十二本の刀と周りに散らばっていたミフネの刀は

すべて消滅し、それと同時にアレンも力なくその場に倒れこんでいった。

「ぐっは・・・!!そ・・・そんな・・・!」

アレンを倒し、しばしの沈黙が流れるとなのは達は唖然とした表情から歓喜のものへと変貌させた。

「や・・・やった!!」

「凄い!!!」

「ユーノ君!!!カッコいい!!」

新八やスバル、なのはなどは素直にユーノのことを褒め称えるが、その一方でユーノの隠された実力を目の当たりにした土方や銀時などは目を丸くしていた。

「は。化け物かよ、あいつは・・・」

「ふん、化け物だろ。」

こうして、ユーノ達は見事漫画キャラクター幹部たちを撃退し、ミッドチルダに訪れた未曽有の危機はどうにか回避された。

しかし、これは単なる序章に過ぎなかった。

何故なら、彼らを操って策を張り巡らしているのはもっと別の巨大な存在だったのだ――――――

更には、その巨大な黒幕が従える最強の四人が今現在、ミッドチルダ廃棄区画の片隅に姿らを現していた――――――

澄んだ青空の下、ビルの一角に腰を下ろす金髪と青い瞳を持つ名前が非常にいい加減な男、うずまきナルトはその横で準備体操をしているオレンジ色の胴着に身を包んだ明るく能天気な性格の格闘家、孫悟空に話しかける。

「・・・――悟空、ちゃんと見えてるか?」

「おお!よく見えるぞ。オラ、目はすげぇえいいんだ!それにしてもまさかあいつら全員やられちまうなんて、オラもビックリだ!!」

「ああ。だけど、お蔭でいいデータ収集になったよ。ま、俺個人的にはユーノ・スクライアもいいが、あの銀髪野郎とも戦ってみたいがな。」

「そうか?オラはやっぱし一番強え奴とじゃないと面白みがねぇよ。」

「はいはい。で、用意は出来てるのかよ?」

「おう!オラ、いつでも撃てるぞ!!」

悟空はナルトに元気よくそう答えると、それを尋ねたナルト本人も自分の瞳に映ってくる景色を見ながら自分でも確認する。

「遮蔽物もない・・・空気も澄んでる・・・絶好のかめはめ波日和だな。」

すると、悟空が何か考え込んだ表情でナルトにこんなことを尋ねてきた。

「なぁ、ナルト。いくら命令とは言えほんとに撃っちまっていいのか？オラ加減なんてもんは出来ないぞ？もしかしたら、あいつらみんな死んじまうかもしれねぇぞ？」

「ふん・・・カトゥーン様と斎藤曰く、例のマテリアルが当たりなら・・・本当に器たる存在なら、かめはめ波ぐらいじゃ死なねぇから大丈夫だってばよ。」

「・・・ふ～～～ん。そっか。」

悟空はナルトから大丈夫たということを聞くと、一度手の力が入りすぎないように軽く振った後、所定の位置まで下がり徐に構えを取る。

「お？エドから・・・」

すると、その時悟空の様子を窺うナルトの元にギャオスを大量に投入した仲間のえどーワード・エルリックから通信が入る。

『おい、ナルト。俺に面倒事押し付けて勝手に二人でどっかいくなよ！』

「大丈夫だってばよ。俺達は俺たちなりに頭使って行動してるんだって」

『は！頭空っぽのくせによく言うぜ。』

「んだと!!!おめぇこそ背俺より小せえくせに!!」

『てめぇ!!人の背丈のこと馬鹿にしやがって!!!』

二人は互いに罵り合い、口喧嘩を始めてしまった。

すると、直後そんな二人の口論に割り込む形で煙草を吹かせた簾頭の男が通信に入ってきた。

『止めんか、阿呆共。』

「『んだとこの陰険!!!』」

二人はこの男、斎藤一に罵られると声を揃えて怒りを露わにした。

しかし、斎藤はそんな二人の言葉に一切動じず自分の話を一方的に進めてきた。

『目的は飽く迄もマテリアルと奴らの戦闘能力調査。どちらにしろ、さっさと終わらせて帰るぞ。おい、天然猿。ぼさっとしてねぇで早く撃っちまえ。』

斎藤が冷淡な口調でそう言うと、それを聞いた悟空は特に気にした様子も見せずに能天気な態度で肯定の言葉を発する。

「おう!ようし・・・デッカイの撃つぞ!!!」

その後、斎藤は離れたところから感じてくる最早風前の灯と化してきているアレンの息を感じ取ると、煙草を吹かせたままこんな事を口にする。

『さて、アレンはまだ消えていないようだな・・・それならば、一つあいつ等に警告でもしておくか・・・』

一方その頃、斎藤が何を考えているのかははっきりしないが、ユーノ・スクライアの手によって完膚なきまでに叩きのめされたアレン・ウォーカー本人は、銀時たちの報復を食らいながらうつ伏せとなって倒れていた

すると、そんな時斎藤からの思念通話が聞こえてきた。

「（アレン。まだ生きてるか？）」

「（！斎藤さん・・・！）」

「（今から指示を出す。お前は俺の言う通りにしろ。そんな無様な死に方で終わらせたくないのならな・・・・・・）」

「（は・・・はい・・・分かりました。）」

アレンは素直に斎藤の言葉を聞き入れると、暫く何も語らず口を閉ざした。

その一方で、銀時達万事屋トリオは相も変わらずアレンへの報復を続けていた。

「てんめ！！！よくもジャンプスクエアの分際でジャンプ正当キャラの俺達を弄んでくれたな！！」

「おんどらああ！！！ギンガさん達になんてことしたくれたんだよ

！！！」

「街中滅茶苦茶ね！！修理費とか結構高くついたらどうするネ！！」

それぞれがそれぞれの怒りを露わにしながらアレンを足蹴りをする中、その様子を見ていたなのは達はどうして良いかわからず、非常に困惑した様子だった。

「あ・・・あの・・・銀さん・・・二人とも・・・！？」

フェイトがおどおどした様子で三人に話しかけようとしても、三人は全くフェイトの話など聞こえていなかった。

「駄目だ。完全に聞こえてない・・・」

「あはは・・・どうします？」

「知るか。もう何でもいいよ。」

土方は呆れた様子でそう口にすると、懐からマヨネーズ型のライターを取出し煙草に火をつけるが、それを横で見ていた総悟は強引に煙草を取り上げこう言った。

「土方さん。仮にもここは魔法少女の世界でっせ。煙草はよくねぇよ。」

「だあ～～～お前までそれ言うかよ！！ふざけんなって！！！」

「まぁ、まぁ落ち着けトシ。」

近藤は二人の喧嘩を宥めようと間に入り、それを傍で見ていたユーノやなのは達はこの銀魂キャラの濃さに圧倒され、リアクションすら取れなくなっていた。

すると、そんな中口を閉ざしていたアレンは再び念話で斎藤と会話を始める。

「（斎藤さん・・・僕は具体的に何をすればいいんですか？）」

「（なに、簡単な話だ。これから俺の言う言葉を素直に復唱すればいい・・・阿呆でもできることさ。）」

「（そうですか・・・じゃあ、やってみます。）」

果たして、斎藤はアレンに一体何をさせようとしているのか？

そして、これから彼らに待ち受けるとてつもない危機とは――――――

一方その頃、ギャオス全体の殲滅に成功した部隊長八神はやてとリィンフォース？はユニゾンを解除すると、急いでなのは達の元へと向かっていた。

「ふ～～～何とか全匹倒せた～～～流石に苦労したよ。」

「急いでみんなのところに向かいましょう、はやてちゃん！」

「うん――――――――ん！？」

と、その瞬間はやては市街地付近より確認される巨大なエネルギー

反応に危惧の念を覚え、同時に機動六課ロングアーチでもはやてが感じたものと全く同じ反応が確認された。

「市街地にエネルギー反応!!なにこれ・・・・・・大きすぎ!!!」

「そんな・・・まさか・・・!!」

管制室で反応を確認したシャーリーやルキノ達はあまりに他を逸脱した巨大なエネルギー反応に驚愕し、司令室の方でもクロノやシャマルたちの表情が一変する。

「く!ユーノ!なのは!みんな!急いで逃げろ!!」

「はやてちゃん!なのはちゃん!みんな!!」

クロノ達からの緊急通信を拾ったなのは達は二人の言葉の意味がよく分からないでいた。

「え!?何、どういうこと!?」

「逃げろって・・・一体どうして?」

と、直後ユーノは真後ろから感じ取れる尋常ならないほど巨大な反応に思わず表情を一変させ、後ろを振り返った。

「!この反応・・・――――!!」

ロングアーチスタッフ一同は砲撃の反応を確認し、すかさず解析を実行するがそれはあまりに信じられないものだった。

『砲撃のチャージ確認！物理破壊型、推定ＳＳＳ・・・！いや、それ以上です！！！』

さて、その砲撃をチャージしている本人、もとい体内の潜在エネルギーを凝縮させて一気に放出させる技、かめはめ波を撃とうとしている悟空はと言うと、徐に両手首を合わせて手を開き、体の前方に構え始める。

「行くぞ・・・オラの必殺の一撃・・・・・・止められるものなら止めてみろ！」

そして、悟空がかめはめ波を撃とうとしている最中、陰険な性格の斎藤はアレンに自分の言うことを復唱するようにと指示を仰ぐ。

「（僕たちを倒すのはいいが――――――）」

斎藤の言葉を聞いた直後、アレンは銀時たちに弱々しい声ではあるが徐にこう言い始めた。

「僕たちを・・・倒すのは・・・いいが――――――」

「あ？」

銀時達は唐突に口を開いてきたアレンの言葉に耳を傾ける。

そして、そんな全員の態度を離れた場所で確認しながら斎藤は更に続ける。

「（大事な自分の命が吹っ飛んでも知らないぞ。）」

「大事な・・・自分の命が吹っ飛んでも・・・知らないぞ・・・」

「何？」

「何言ってるアルかこいつ？」

銀時たちは益々アレンの言葉の意味に頭を悩ませ、困り果てている間、悟空は潜在エネルギーのすべてを両手に圧縮させかめはめ波を撃とうとしていた。

「か～～～～め～～～～～～は～～～～～～め～～～～～～！！！！！！」

悟空の様子を窺いながら、ナルトは若干顔を引きつりながら斎藤の行動に関してひとりこう呟いた。

「斎藤の野郎・・・また懲りずに部下に陰険な事言わせてるな・・・たく。ほんと口喧嘩じゃあいつには勝てねってばよ・・・」

そんな事をナルトが呟いている間、斎藤は最後に不敵な笑みを浮かべながらアレンにこの言葉を残すようにと指示を出す。

「（ふん。そうだ、アレン。もう一言追加してもいいか？）」

斎藤の指示を聞くと、アレンは最後の力を振り絞りながら銀時たちに向かってこう言った。

「（お前たちは・・・――――）」

「お前たちは・・・――――結局、何も護れないで終わる。」

「「「「！」」」」

「「「「え！」」」」

アレンの意味深な言葉を聞いた一同は思わず表情をこわばらせた。

直後、アレンは力尽き紙切れとなると同時に悟空の渾身のかめはめ波がユーノ達目掛けて発射される。

「波！！！

「ん?何だ・・・・・・この音・・・――――」

気になった新八が徐に後ろを振り返ると、その瞬間言葉を失いながらも無表情に銀時に向かってこう言って来た。

「ぎ・・・銀さん・・・みんな・・・あれ・・・」

新八の言葉を聞き、後ろを振り返った全員が目にしたのは悟空の掌から放たれた何もかもを抉り返してしまうほど高威力のかめはめ波だった。

ユーノ達はそれを目の当たりにした瞬間、背筋を凍らせた。

「「「「「「は!」」」」」」

「う、ウソだろ!!!」

「やべぇぞ!!!」

全員はその場から回避しようとしたが、気づいた時にはもう遅かった。

前線メンバー全員と銀時たちはものの見事にかめはめ波に着弾し、その瞬間周囲には大爆発が発生し、ロングアーチスタッフも思わず唖然としてしまう。

「・・・砲撃・・・前線メンバー全員に直撃・・・・・・・!?いやそんな筈ない!状況確認!」

「ジャミングが酷い・・・!データ効きません!!」

シャーリー達は急いで解析に専念し、なのは達全員の無事を祈りながらタッチパネルを操作するが、その一方で司令室でこのあまりに衝撃的な映像を目の当たりにしたクロノ・シャマル・ザフィーラの三人は言葉を失っていた。

「・・・・・・あ・・・・・・・・！」

「そ、そんな・・・！」

「まさか・・・・・・スクライア達が・・・・・・・・！？」

「く！！！」

直後、クロノ・ハラオウンはあまりの悔しさと自分の不甲斐なさに腹を立て、拳を強く握りしめながらデスクを叩いた。

「僕は何をしてきたんだ！！！結局いつも逃げてばかりで・・・・・・肝心な時に何一つ大切なものを護れなかった！！！！！」

クロノの眼から零れ落ちる悔し涙の滴。

シャマルとザフィーラは興奮し、冷静さを失っているクロノのことを必死に宥めようとした。

「く、クロノ提督！落ち着いてくださいよ！」

「これが落ち着いていられますか！！仲間の危機に・・・僕はここでふんぞり返ってただけなんですよ！！！くそ！！！僕はほんとに・・・ほんとに・・・ダメな腹黒男だった・・・！！！！」

「落ち着け！こんな時に冷静さを失ってはいかん。スクライアやあいつらがこの程度のことで死ぬような者だと考えているのか？！」

「！」

ザフィーラの言葉を耳にした瞬間、クロノは思わずはっとして我に返る。

その後、シャマルがそんなクロノの肩に手を触れながら優しくこう言った。

「まだ希望は捨てないでください。きっと、必ず大丈夫ですから・・・」

「シャマル・・・ザフィーラ・・・すまない・・・僕としたことがつい・・・」

「落ち着きを取り戻したようだな。」

「ああ・・・シャーリー。すぐにユーノ達の安否を確認してくれ！」

『はい！』

クロノは一度深呼吸をした後、いつもの落ち着きを取り戻しユーノ達全員の安否を確認するためにシャーリーに指示を送った。

その頃、渾身のかめはめ波を撃つことに成功した悟空と間近で見ていたナルトの方はと言うと――――――

「よっしゃあああ！！！！！こりゃデカイの撃てたぞ！！！！！」

「相変わらずとんでもねぇ技だな・・・・・・お前のそれ・・・・・・」

「そうか？オラは別に大したほどじゃねぇけど。」

悟空は自分の技に関して好感触を覚える中、ナルトや二人に合流してきたエドと斎藤の心境は複雑なものだった。

すると、斎藤は一度煙草をその場に捨て足で火を消すと冷淡な口調で隣のエドに向かってこう切り出した。

「どちらにせよ、まずは状況確認だ。おい、チビ。まだ命中確認は済んでないのか？」

「誰がチビだって言ってんだよ陰険！！ちょっと待て！いま見える・・・――――ん！？」

斎藤の言葉に腹を立てながらもスコープで着弾地点の様子を窺っていたエドだったが、直後煙が徐々に晴れようとしている中、奇妙なものを発見してしまう。

「どうした？」

「あいつら・・・まだ形が残ってる？」

「何だと？」

エドの言葉を聞いた瞬間、斎藤やナルトは思わず耳を疑った。

と、その時エドはスコープから見えてくるある光景に思わず声を漏らす。

「お？」

煙が晴れ、スコープに見えてきたのは彼らにとっては信じられないものであった。

「・・・――――ふう～～～危なかった。」

「「「「！」」」」

何と、煙が晴れた先にいたのは全員を護るために結界を施し、更にはかめはめ波の直撃に対して一回りも大きめのラウンドシールドを展開させ、防御に徹していたユーノ・スクライアだったのだから。

ユーノはかめはめ波の余波がなくなるのを確認すると、ラウンドシールドとなのは達に施した結界を解除して不敵な笑みでこう呟いた。

「誰だか知らないけど、僕の防御力の硬さを甘く見ては困るな。一応防御力に限っては、昔からずば抜けて高かったつもりだから。」

ロングアーチでその映像を見ていたシャーリー達管制人を始め、クロノやシャマルたちは何よりも全員の無事を喜んでいた。

「ゆ、ユーノ・・・！」

「はぁ～～～危なかった～～～でもホント相変わらず防御力に関しては昔からずば抜けてるわね、ユーノ君は。」

「全くだ。あれで我に勝てないなどとはよく言えたものだな。」

その一方で、ユーノが悟空のかめはめ波を防いでしまったことに大いに驚くナルトやエド。

斎藤は二人ほどではないが、それなりに驚いている模様だった。

「おいおい・・・防いじまったぜおい・・・!?」

「悟空、感想は?」

「オラのかめはめ波が破られるなんてことは今までなかったけどよ、まさかこんなこともあるもんなんだな～～～」

「ふん。少々甘く見ていたか・・・――――?」

と、斎藤が皮肉交じりに鼻で笑った直後、斎藤は頭上から降り注ぐ氷のダガーナイフに素早く反応し、斎藤が反応したあとに残りの三人もそれに気づく。

「「「!」」」

四人は高く飛び上がってその攻撃を回避し、他のビルに飛び撃った直後、リィンが四人の前に現れた。

「見つけたです!」

「げ!やば!!」

「見つかっちまったぜ、おい。」

「ふん。」

四人はリィンの姿を目で捉えると、素早くビルの間を飛び回りながら逃走を始め、リィンは四人を逃がさないようにと後ろから追っていく。

「止まりなさい！市街地での危険魔法使用・及び殺人未遂の現行犯で・・・逮捕するです！！」

「は！どチビに捕まってたまるかよ！！」

エドが自分よりも身長もその他すべてが小さいリィンに向かって挑発的な口調でそう言うと、ナルトが不意に印を結んで自分たちの姿を大量の木の葉で隠していった。

「木の葉隠れの術！」

四人の姿が木の葉に隠れ、その場から姿を消すとリィンは別な場所で待機しているはやてに向かって指示を仰ぐ。

「！はやてちゃん！」

リィンの言葉を聞くと、待機していたはやてはロングアーチスタッフの協力を仰ぎながら精密コントロールと詠唱を済ませ、広域空間攻撃の準備を済ませていた。

「位置確認。詠唱完了！発動まで、あと４秒！」

「了解！」

リィンは素早くその場から離れていった。

その様子を木の葉隠れの術でリィンの前から忽然と姿を消していたナルト達が確認すると、思わず疑問に感じてしまう。

「おい、あのちっこいの離れていったぞ？」

「何でだってばよ！？」

すると、その直後斎藤はその意図に気づき徐に空を見上げながらこう呟いた。

「ふん・・・成程。あれの為か？」

「「「え、まさか！？」」」

恐る恐る三人が空を見上げてみると、そこに浮かんでいたのははやての魔法によって作り出された重力を帯びたかのようなバリア発生阻害能力がある球形の純粋魔力攻撃だった。

「広域空間攻撃・・・！」

「マジ！！」

「ほう～～～デカイな～～～！！」

「阿呆が・・・」

苦い表情となるナルトやエドとは違い、一人全く的外れなリアクションを見せる悟空に思わずあきれ返ってしまう斎藤。

そして、はやてはそんな四人の元目掛けてデアボリック・エミッションを発動させる。

「遠き地にて、闇に沈め――――――デアボリック・エミッション！」

直後、スフィアを中心として広範囲に渡って魔力攻撃がはやての資質である「遠隔発生」により、ナルト達の元へと飛来し、ナルト達はその魔力攻撃から逃れようと全速力で走り出した。

「「「うわあああああああ！！！！」」」

斎藤以外の三人が悲鳴を上げる中、四人は魔力攻撃の速力には勝てずに空しくもその中へと飲み込まれてしまった。

そして、何とか斎藤の力で脱出した四人であったが斎藤はデアボリック・エミッションの影響で右肩を痛めてしまった。

「ち・・・！？」

その直後、斎藤と三人の目の前に映ってきたんは自分たちの四方を多い囲む六課の前線隊長、なのは・フェイト・恋次・ユーノの四人だった。

〈Intention none of surrender.
It is about struggle dangerous and recognition.（投降の意思なし・・・闘

争の危険ありと認定。）〉

バルディッシュの無機質な音声が聞こえた直後、フェイトは魔法陣を展開させて砲撃のチャージに入った。

「「「あ！」」」

三人が声を上げて状況が最悪であることを確認すると、卍解した恋次は四人に向かってこう言った。

「へ！もう逃がさねぇぜ！」

恋次は狒狒王蛇尾丸を構え、その隣でなのはがエクセリオンバスターの体制となって照準を定めていた。

〈Ｋｎｏｃｋ　ｏｕｔ　ｂｙ　ｂｕｓｔｅｒ．Ａｎｄ　ａｒｒｅｓｔ．（砲撃で昏倒させて捕らえます。）〉

そして、その隣には徐に利き手を前に出して霊力を溜めているユーノの姿が映った。

「さて、観念してもらうよ。」

「「「ヤバい！」」」

三人が絶体絶命とばかりの表情を見せる中、斎藤だけは煙草を取出し徐にそれを吹かしながらこう呟いた。

「ふう～～～全く、これだから阿呆は嫌になる・・・――」

斎藤の言葉の真意は定かではないが、四人は攻撃態勢が整うと一斉に一撃必殺の威力を持った砲撃を四に向かって発射した。

「トライデント――――――――スマッシャー！！！」

「狒骨大砲！！！！」

「エクセリオン――――――――バスター！！！！！」

「破道の八十八『飛竜撃賊震天雷炮』！！！！」

四人の砲撃がほぼ同時にぶつかり合うと、凄まじい轟音と爆発が発生しシャーリー達は嬉々とした表情となった。

「びんご！！」

「よし！」

だがしかし、直後なのはから思いもよらぬ言葉が入ってくる。

『じゃない！避けられた！』

「え！？」

『直撃の瞬間、救援が入った！』

『アルト、急いで後を追ってくれ！』

「はい！」

アルトは恋次の言葉を聞くと、急いで消えた四人の追跡を始める。

その一方で、徐々に晴れていく爆風を一瞥しながらユーノは神妙な表情であの四人のことを思い返す。

「（僕たち四人の攻撃を躱すか・・・――――どうやら既に成体と思わしきものは出来上がってるみたいだな――――――）」

さて、四人の攻撃を何とか躱すことに成功した斎藤たちはと言うと、斎藤があらかじめ用意していた逃走用のギャオスに乗って難を逃れていたのだ。

ナルトやエドは冷や汗をかきながら自分が無事であることを確認する。

「ふう～～～た、助かったぜ～～～！」

「死ぬかと思った～～～！！」

すると、そんな二人とは違い悟空ただ一人だけはむしろあの状況に関してこのような感想を述べてきた。

「いや～～～すんごっかったなさっきの！オラ、目ん玉飛び出しそうになったぞ！！」

「って！呑気に言ってる場合かよ！？もう少しで俺達粉々に吹き飛ぶところだったんだぞ！！」

「馬鹿だろ！！お前やっぱ馬鹿だろ！！」

ナルトとエドは悟空の発言を聞くなりそのように罵倒するが、直後ギャオスの先頭に立って煙草を吹かしていた斎藤は三人に向かってこう言って来た。

「後先考えずに行動するからこんな事態になるのだ。俺が緊急の手配をしていたから命が助かったんだ。感謝しろ、阿呆共が。」

「「け！」」

「お！ありがとな！！」

斎藤の言葉を聞き、思わず舌打ちをするナルトとエド。

悟空は一人素直に斎藤に対して感謝の意を唱える。

そして、斎藤は徐に煙を口から履きながら自分の下調べの甘さに関してひとりこう呟いた。

「全く・・・――俺もまだまだ甘いな。兎に角、差しあったっての任務は完了した。さっさとアジトに戻るぞ。」

斎藤は三人にそう言うと、異空間を突き抜けギャオスと共にミッドチルダから反応を焼失させ、ロングアーチスタッフも忽然と姿を消した彼ら四人の反応に唖然とした。

「反応・・・・・ロスト・・・・・！」

「異常反応も消滅・・・！」

はやては犯人グループ四人を取り逃がしてしまったことに、思わず

爪を噛みそうになる。

「う・・・逃がしたか！」

ユーノ達四人は一度銀時たちの元に戻り、状況を確認するとフォワード一同とその他のメンバーに目立った外傷などは見受けられなかったが、銀時たちは先ほどのあまりの出来事に未だに腰が抜けている様子だった。

「た・・・助かった・・・！！」

「マジ死ぬかと思ったアルよ・・・・・・！」

すると、不意に銀時が目を見開きながら先ほどの砲撃に関してこう呟いた。

「お・・・い・・・まさかさっきの技って・・・・・・かめはめ波とかじゃねぇだろな・・・？」

「ば、馬鹿言ってんじゃねぇよ・・・んなもんこの世界にあってたまるかよ・・・なぁ、近藤さん・・・お？」

と、近藤に言葉を投げかけた土方だったが、その時土方は近藤の異変に気付いた。

「近藤さん？」

近藤は他の誰とも様子が違っており、一人不自然に崩れ落ちたビルの残骸の上に座りながら誰とも目を合わせようとはしてなかったのだ。

「あれ?座高が高くなっているような・・・――」

全員もこの近藤の奇妙な様子に疑問を浮かべていると、近藤は目線を逸らし徐に瞳から涙を流し出す。

「・・・トシ・・・みんな・・・誰にも言うなでございまする・・・――」

「?」

一瞬何のことか分からなくなる全員だったが、その直後近藤はあまりに衝撃的な言葉を口にするのであった。

「俺・・・――ちょっと・・・・・・漏らしちゃった・・・」

近藤の言葉を聞くや否や、全員の頭に雷が落ちた。

「「「「「(がああああああああああ!!!

さて、ミッドチルダからかなり離れた異世界のとある場所に位置する空間と空間のはざまに位置する謎のアジト、『カトゥーンキャッスル』。

そこにあの斎藤を始めとする四人が帰還し、疲労困憊な様子で廊下を歩いていた。

「はぁ～～やっと戻ってこれた。」

「オラ腹減って仕方ねぇよ。あとでがっつり食うぞ！！！！」

「お前はホントお気楽でいいよな・・・・・俺も何でもいいからラーメン食べてってばよ・・・・・・」

「俺はどちらかと言えばかけそばだがな。」

「その性格でかけそばとは・・・――似合わねぇなおい・・・」

「ふん。何とでも言え。」

四人はそんな談笑をしながら、建物の奥へと進んでいくのであった。

一方その頃、脱糞してしまった近藤の言葉を聞いた直後、新八や銀時は近藤に詰め寄りあまりに場の雰囲気を崩壊させるこの状況に関して激しく抗議をしてきた。

「ちょっと！！！！！！アンタ何やってるの！！！！！！この世界に来て、しかもこんな大人数の前で何恥ずかしいこと暴露してんの！！！！！！」

「お前！！！！！ほんと何なんだよゴリラ！！！！！！」

そんな二人の言葉を聞いた直後、大人であるはずの近藤が泣きべそをかきながらこう言い返してきた。

「だって！！！！！怖かったんだもん！！！！！いきなりあんな攻撃されちゃ、誰だって漏らしちゃうよ！！！！！失禁したって仕方ないもん！！！！！！」

「失禁どころかアンタの場合ケツから汚いものが飛び出しちゃってるでしょ！！！！！流石に魔法少女ものの『う○○』はマズイだろ！！！！！」

「これで読者から苦情来たらどうしてくれんだよ、ああ！？もう終わりだよ！！銀魂篇まだ四話しかやってないのに即打ち切りだよ！！！！！」

その後も銀時たちの話はエスカレートを増し、当分の間彼らの話材は近藤の脱糞問題のことで大いにもめていた。

そんな銀時たちの様子を窺いながら、ツッコム余裕すらなくなりかけている苦い表情を浮かべた恋次やなのは達は次のように話し合っていた。

「・・・ど・・・どうするぜおい？」

「まぁ、漏らしてしまったものは仕方ありません。取りあえず、あまり触れないで上げましょう。なんだか近藤さんがあまりに不憫過ぎます・・・」

「うん・・・そうだね・・・」

「あははは・・・・・・ホント・・・・・・・大丈夫ですねよ・・・・・・？」

「これは全員、一端話の終わりに謝罪した方がいいかもな。」

「さ、賛成！！」

「俺もその方がいいと思うぜ・・・！！」

と言うわけで皆さん、先ほど読者の方々に大変不快な想いをさせてしまったことを大いに反省しております。

誠に申し訳ありませんでした。

機動六課一同、並びに作者重要大事から深くお詫びいたします。

「ま、全員無事だったわけだし・・・任務はこれにて終了。今後のことは帰ってから話し合うとしよう。」

「じゃあ、みんな機動六課に戻るよ。」

全員はユーノとなのはの言葉を聞くと、脱糞した近藤の始末と受けた傷をいやすために機動六課へと帰還することにしたのであった。

彼らが機動六課に戻ってから暫く時が過ぎた『カトゥーンキャッスル』内部に設けられた食堂の方では、四人が自分の好きなメニューを注文して夕食にありついていた。

そんな中、ナルトは一楽のラーメンを啜りながら一人掛蕎麦を啜る斎藤に向かってこう口にしてきた。

「てか、斎藤。あのマテリアルって管理局（あいつら）に渡したままで言い訳？その辺ずっと気になってたんだけど？」

「構わん。時期が来る時までマテリアルそのものに何の価値もない。早い話が、殺してもよかったと俺は思ってるぐらいだ。」

「お前・・・ほんと嫌な性格してんな、オイ・・・」

斎藤の非情な発言に思わず顔をゆがめるナルト。

その横では、呆れかえるエドの隣で悟空が一体どこに収まるのかと言わんばかりの大量の食糧を腹の中へと入れていた。

「うめえ！！！！一仕事したあとのメシは最高だな！！！！」

「こいつはこいつでバカだし・・・・・・」

「間の俺達が一番疲れるよな・・・マジで・・・」

エドとナルトは極端に性格の歪んだ斎藤と極端に能天気な性格の二人に挟まれながら、自分たちの苦労を身に染みて感じていた。

するとその時、四人の目の前に一人の男がやってきた。

「食事中、失礼するよ。“テトラカトゥーン”の諸君。」

「お？カトゥーン様。」

ナルトがそう口にした時、目の前に映ってきたのは――――――このキャッスルカトゥーンの主にして、聖王教会が調査を進めていた時に浮上してきた広域次元犯罪者、カトゥーン本人であった。

と、カトゥーンの話の前に帰還したユーノ達の方を先に見ておこう。

ユーノはソファーの上に座りながら右手を首筋に当てながら、骨を鳴らしていた。

「ああ～～ほんと首痛い。あのミフネって奴・・・・・・手加減なんてしないから参ったよ。」

「首が痛いだけでよくすんだな・・・どうなってるんだお前の体？」

恋次や銀時たちは、若干顔を引きつりながらユーノに向かってそう尋ねる。

「さぁ。もとより、今回は運が良かったですよ。いつもなら、血塗れになって帰ってくるのに、今回は珍しく無傷ですから。」

「ま、それもそっすね！」

全員がユーノの言葉に思わず鼻で笑うと、ユーノは徐にソファーの上から立ち上がり司令室の方へと向かおうとした。

「さて、報告書書かなきゃ。」

「おいおい・・・あんな戦いがあった後に報告書書く訳？」

「事務処理なんて、殺し合いに比べれば簡単もいいところですって♪」

飄々とした態度で銀時にそう言った後、ユーノは徐に司令室に向かって歩いて行った。

そんなユーノの背中をじっと見つめながら新八はこう呟いた。

「銀さん。ユーノさんって・・・ほんとに何者なんでしょうかね？」

「くるくる黒河童の話では、淫獣フェレットもどきって聞いてたけどよ・・・・・あれはあれで掴みどころがねぇな。」

「旦那。妙な気分ですぜ・・・・・野郎の背後をじっと見ていると、本当に面影が――――――近藤さんや黒崎一護のそれとそっくりですさぁ。」

総悟がそんな事を口にすると、聞いていた銀時や土方はユーノの背中から一瞬見えてくる近藤の様な面影が頭によぎった。

土方自身、こんなことがあるのかとばかりの表情で驚いていたが、直ぐに何かの気のせいだろう決めつけ、煙草を取り出しながらこう切り出した。

「近藤さんは兎も角・・・総悟。お前、黒崎一護見たことあるのかよ？」

「つうか、俺はどうも一護とユーノが似てるとは到底思えねぇけどな・・・」

恋次が一護とユーノの対照的な性格を考えながらそう口にすると、聞いていた浦太郎や金太郎はこう答えてきた。

「そうかな。あの二人、結構あれはあれで似た者同士だよ。」

「何処かだよ？」

「いずれ分かる時が来ます。店長と一護殿・・・――――その似てるところが何なのか。」

神妙な表情でその話を聞いていた新八。

だが、直後新八は先ほどからずっと用意された別の服に着替えたまま塞ぎ込んだ状態の近藤の方に目を向けた。

「て言うか近藤さん・・・いい加減立ち直ってくださいよ・・・」

「ぐっす！俺なんか・・・俺なんか・・・！！」

人前、しかも女性が大勢いる場所で男として恥ずべき失態を見せてしまった近藤の落ち込み方は想像を絶するものであった。

近藤の哀れな姿を見ながら、全員は思わずため息をついた。

さて、テトラカトゥーンと呼ばれる斎藤たちの前に姿を見せた主カトゥーンの方はと言うと、今回の四人の働きに関する評価を口にしていた。

「今回はわざわざこんな派手な引付で、君たちの手を煩わせてしま

ったことは申し訳ないと思ってるよ。だけど、お蔭でいいデータが取れた。」

「ふん。次からはもう少しマシなやり方で頼むぞ。俺は疲れたから、寝る」

斎藤はひねくれた様子でそう言うと、一人席を立ち自室の方へと戻っていった。

「て！斎藤！！お前な！！！」

「相も変わらずあいつは人の言うことまるで聞きやしないんだから・・・困るわ。」

ナルトとエドは独りよがりな性格の斎藤に困り果てていたが、カトゥーン本人はそんな斎藤に関してこう口にした。

「あはは。斎藤はあれでいいんだよ。『悪・即・斬』と言うただの一つの正義の為だけに剣を振るい、その為に邪魔な奴は排除する。新撰組三番隊組長、壬生狼（みぶろ）とはよくいったものだ。それにしても――――――」

カトゥーンはそう言うと、徐にナルト達が持ち帰ってきた今回の機動六課の戦闘データのすべてを映し出すと、不敵な笑みを浮かべた。

「この案件は実にいいよ。予定通りだ。そろそろ人間たちに漫画を粗末にすることの愚かさを知ってもらおうと思ってね。邪魔するものは――――――消し屑とする。」

「その為に、俺達はあなたによって作られました。ご命令があれば、

何なりとお申し付けください、カトゥーン様。」

ナルトを始め、エドも悟空もカトゥーンに向かって忠誠の姿勢を見せ膝をついた。

「頼もしい限りだね。さて――――――」

すると、カトゥーンは採取した戦闘データのうち、ユーノと銀時の映像をクローズアップしながら再び不敵な笑みを浮かべる。

「噂には聞いていたけど、この二人はホントに化け物だよ。嘗て白夜叉と呼ばれ、鬼神の如く戦闘力で攘夷戦争を暴れまわった侍、坂田銀時。次元世界最強と言われる無限書庫の元司書長にして、今や翡翠の魔導死神のユーノ・スクライア。やっぱこの二人を何とかしないと、マテリアルを手に入れるのは難しいかな？」

カトゥーンはその後、二人の映像を展開しながらある一人の少年の映像を一瞥し、何処か不気味な顔つきとなり、徐にこう言った。

「ふふ・・・君はもうすぐ、僕のものになるんだ。そのためにも、必ずや成し遂げてみせる。我々の不遇の時は終焉の時を迎えようとしている――――――」

カトゥーンが狙っているマテリアルの正体は兎も角として、何の為に彼がこのようなことをしでかしたのか、そして目的は何なのか？

それを知るのは申し時間がたってからとなる。

「墜としてやろう――――――坂田銀時。ユーノ・スクライア。」

事件の歯車は――――――いま、本格的に動き始まる。

漫画もいいけど、新聞の社説も読んでおこう（後書き）

教えて、ユーノ先生！

ユ「今日は新八君のお姉さん、お妙さんについてだ♪」

ユ「キャバクラで働くしっかりもののお姉さんで、常日頃新八のことを見守り続ける優しくも芯の強い女性だ。」

ユ「バーゲンダッシュアイスが好物で、得意料理は卵焼きだそうだよ♪」

近「お妙さん！！！！！！早くあなたに遭いたいです！！！！遭ってあなたの笑顔をもう一度！！！！！あなたに顔面を踏んでもらいたいです！！！！」

号泣しながらお妙の画像を食い入るように見る近藤。

すると、その直後お妙が現れ近藤を見事なまで踏み倒す（笑顔で）。

妙「あら、近藤さん。こんなところにいたんですか？」

ユ「こ・・・こえ・・・！！」

身震いするユーノだったが、そのときお妙が得意料理の卵焼きを取り出す。

妙「ユーノさん。これ、宜しかったら食べてくださいな？」

ユーノは目の前のダークマター、もとい黒焦げの卵焼きを見るなり血の気が引いてしまったが、食べないと逆に殺されそうになってしまうと考え恐る恐る口の中に放り込んだ。

直後、異変は起きた。

ユ「ぐっは！！」

ユーノはそのまま血を吐き、倒れこんでしまった。

な「ゆ、ユーノ君！！！！大変！！！早く医務室に連れてかないと！！！！」

新「姉上！！！なにとんでもないことしてくれたんですか！！！！」

妙「あら？ちょっと火加減を間違えたかしら？」

銀「火加減どころの話じゃねぇよ！！！殺人現場かここか！？」

魔導師図鑑ハイパー！」

あの後、適切な処置を受け一命を取り留めたユーノだったが、やはり顔色は優れなかった。

寧ろ、その表情は今まで見た中で最も悪いものであった。

ユ「あ～～～～～～」

そんなユーノのことを心配して、なのは達が声をかけてくる。

な「ゆ、ユーノ君。無理しなくていいからね?苦しかったら遠慮なく言っていいから・・・」

ス「そ、そうですよ!何かあったら私達に何でも言ってくださいよ!!」

新「本当にすみませんでした!弟の僕の不注意でこんなことに!!」

土下座して謝る新八。

と、その時シャマルがニコニコとした表情で料理を運んできた。

シャ「気分がすぐれないユーノ君に、私から栄養満点の料理を作ってきたわ!ささ、遠慮せずに食べてね♪」

シャマルはそう言うと、ユーノの前に自作の料理を前に出す。

直後、ユーノはそれを見るなり口から吐血を出す。

ユ「!ぐっは!!!」

恋「ゆ、ユーノ!!しっかりしろ!!」

ユーノの容体が悪化したことを受けて、なのはやフェイト達が黒いオーラを発する。

は「・・・シャマル・・・ちょっと・・・」

な「・・・頭冷やしましょうか・・・」

シャ「いや！！！何でそんな目で私を見るの！！はやてちゃんもなのはちゃん達もデバイスなんて持たなくていいから！！」

な「スターライトブレイカー！！！！」

なのはのスターライトの影響で、シャマルは全治三か月の大怪我を負ったそうな。

シャ「だ・か・ら！！何で私ばっかりこんな役なの！！！！」

次回予告

漫画キャラクターたちの襲撃から一夜明け、機動六課へと戻ってきた万事屋と新しく保護されることとなった真選組は、この事件に対処するために六課に協力することとなったが――――――沖田総悟、彼がとんでもないことをしでかす。

土「次回『人は堕ちるところまで堕ちたらどうなるかって？多分それはなってからじゃないと分からない』」

漫画戦闘員

ところ天の助

声　一　園部啓一

『ボボボーボ・ボーボボ』のサブキャラクター。「ぬ」の文字が入ったハンカチを愛用していて、かなりの「ぬ」マニア。防御するときはいつも「ぬ」のハンカチガード（破れるたびに直して使いまわししている）、効果があるときと無いときがあり、ぬのハンカチが役に立たなくても、ダメージを受けているはずなのに痛み一つ感じなかったりする。嫌いな物は「ね」。尊敬する人は自分自身。実は身体の９５％がところてん、残り５％はゼリーでできている。プルプル真拳の使い手で、戦闘力はそれ相応にある。声優つながりから、嘗て自分を切り刻んだ男と同じ声の銀時に真っ先に攻撃していったが、逆に返り討ちを食らう。

ギャオス

『ガメラ』シリーズに登場する怪獣。ギャオスはコウモリをモチーフにしたものと思われ、直立歩行可能で、前足が翼となっている。翼はコウモリのように数本の指の骨に支えられ、その間を皮膜がつないだ構造に見えるが、コウモリならば親指一本が遊離している位置に、自由に動かすことのできる指が3本ばかりある。頭部を上面から見ると、初心者マークを思わせる歪んだ六角形になっており、鼻先、後頭部両側後方が尖っている。血液は紫色。。口からは、何でも切断する３００万サイクルの「超音波メス」を発射する。超音波メスは音叉の役割をする二股の首の骨から発振される構造となっており、それゆえギャオスは首を回して後ろを向く事が出来ない。食性は肉食で、人間の肉や血液を好む。

ゴジラ

日本が生んだ大怪獣、『ゴジラ』の主役。１９５４年１１月3日、同年3月1日にビキニ島の核実験によって起きた第五福竜丸事件を

きっかけに製作された、第1作“水爆大怪獣映画”『ゴジラ』が公開される。身長５０メートルの怪獣ゴジラは人間にとっての恐怖の対象であると同時に、「核の落とし子」「人間が生み出した恐怖の象徴」として描かれた。また核兵器という人間が生み出したものによって現れた怪獣が、人間の手で葬られるという人間の身勝手さを表現した作品となった。技は口から吹き出す放射熱線。

幹部戦闘員

アレン・ウォーカー

声：小林沙苗

『Ｄ．Ｇｒａｙ－ｍａｎ』の主人公。世界の終焉を阻止するためヴァチカンの命によって設立された直属の対ＡＫＵＭＡ軍事機関、黒の教団に所属するエクソシストの一人である少年。対アクマ武器は寄生型の「神ノ道化（クラウン・クラウン）」。白髪と左眼上の逆さペンタクルが特徴。一人称は「僕」。瞳の色は銀灰色。

技

十字架ノ墓（クロス・グレイヴ）

十字架が印された盾を作り出す技。単体攻撃技ではあるがその威力はＡＫＵＭＡ（Ｌｖ３）をも一撃で破壊可能なほど強力である。退魔ノ剣時にも使用可能。因みに、攻撃時と防御時では十字架のデザインが異なる。

道化ノ帯（クラウン・ベルト）

右腕やマントからくもの糸のような糸を出す。物を巻き取ったり、

鞭のように打ちのめしたり、先端で刺し貫く、移動手段としても転用可能なので多用される事となる。威力も十字架ノ墓程ではないが、Ｌｖ３のＡＫＵＭＡ相手でも十分に通用する攻撃力を有している。退魔ノ剣時にも使用できる。

爪ノ王輪（クラウン・エッジ）

左手の爪から指輪に似た王冠を大量に放ち鞭のように振るう。遠距離攻撃技だが、当然、退魔ノ剣時は使用できない。

破滅ノ爪（エッジ・エンド）

まばゆい光を伴った巨大化させた左手の爪で敵を引き裂く。当然、退魔ノ剣に転換中（コンバート）は左手そのものが無いため使用出来ない。比較的小型で扱いやすいが、何十倍にも巨大化させたり伸ばしたりする事は出来ない。しかし、その攻撃力は高い。

退魔ノ剣（たいまのけん）

アレンがシンクロ率１００％を越えた（＝臨界者となった）ことによりイノセンスが剣に変化した姿。「退魔」の力を持ち、ノアの一族の中に宿る「ノア」やＡＫＵＭＡを破壊できる。攻撃力は高く、エネルギー波を放つことも出来る。

破壊咆哮（デス・ボール）

退魔ノ剣をかかげ、衝撃波を放ち周囲を攻撃する。威力は絶大だが消耗が激しく、連発は不可。

次元大介

声：小林清志

『ルパン三世』の登場人物。拳銃の名手。顎髭を生やし、主に紺系のダークスーツとソフト帽を常に着用している。頻繁に使うのはリボルバー系統のもの。次元は拳銃使用の際にホルスターを使わず、ズボンとシャツの間に挟んで持ち歩く。超一流のガンマンであるため、その腕を買われることもしばしばある。ルパンと組む前は、南アフリカの王家の用心棒だったり、ニューヨークマフィアのガルベス一家の用心棒でもあった。また、アラスカで列車強盗をしていた過去もあり、アメリカ軍の給料輸送車を襲ったことがある。拳銃以外にも、狙撃銃や対戦車ライフルなど、あらゆる兵器を使いこなす。

モグラッキー

声：三田ゆう子

『テツワン探偵ロボタック』のサブキャラクター。フランス・パリを介して夢が丘にランドツールを追ってやって来たモグラ型ロボット。メインカラーは緑。正義感が人一倍強く、「フランス帰り」なのか、どこかの外国人風の口調が特徴。ワインが大好物だがビールは苦手。地中活動型のため、強烈な光に対してセンサーが拒絶反応を起こすという難点を持つ。登場時、及びSモードの決め台詞は「円らな瞳でボンジュール。フランス帰りの名刑事・モグラッキー」。武器は両肩の「ラッキードリル」と、背に負った「ラッキーピッケル」。

本田速人

声：家中宏

『こちら葛飾区亀有公園前派出所』のサブキャラクター。交機隊に所属。主人公両津を「先輩」と慕い、よく行動を共にする事が多い

が、そのたびに様々な事件に巻き込まれている。普段は気弱で頼りないが、バイクに乗ると顔付きが劇的に変わり、凄まじい運転技術を披露するが、口調や行動が荒っぽくなる。実家はカワサキ専門のバイク屋「本田輪業」で、本田自身もバイクのメンテナンスや自作が出来る。

フォックス・マクラウド

声：里内信夫

『スターフォックス』シリーズ、及びそのチームのリーダーとして登場する、キツネの姿をしたキャラクター。基本的には緑色をした上下一体型のパイロットスーツの上に白地のジャケット、頭に通信用のヘルメット、そして首にスカーフという、戦闘機のパイロットを思わせる服装をしている。

ミフネ

声　一　津田健次郎

『ソウルイーター』のサブキャラクター。多数の日本刀を駆使する流派「無限一刀流」の使い手である用心棒。相当の子供好き。彼の強靭な魂は普通の人の９９個分にあたり、「剣神」と称されている。武器職人の軍隊を一人で壊滅状態に追い込み、銃撃をもあっさり見切るなど、恐るべき実力を持つ。

技

三道射

剣を三本投げてそれを利用して移動したりする。

刀牙

地面に刺さった複数の刀を同時に上に打ちはらって斬りつける技。

垂直の並

刀を縦にまっすぐ浮かせそこから攻撃を派生させる並び。

刀牙からこれに繋げることができる。

乱立の並

周りの刀を舞い上げ様々な攻撃を派生させる並び。

人は堕ちるところまで堕ちたらどうなるかって？多分それはなってからじゃない

本編の前に皆様へのお願い。

ユ「喫煙は、あなたにとって心筋梗塞の危険性を高めます。疫学的な推計によると、喫煙者は心筋梗塞により死亡する危険性が非喫煙者に比べて約１．７倍高くなります。喫煙は、あなたにとって脳卒中の危険性を高めます。疫学的な推計によると、喫煙者は脳卒中により死亡する危険性が非喫煙者に比べて約１．７倍高くなります。喫煙はあなたにとって肺気腫を悪化させる危険性を高めます。また、未成年者の喫煙は健康に対する悪影響やタバコへの依存をより強めるので法律で固く禁じられています。未成年者は、周りの人から勧められても決して吸ってはいけません。」

ユ「分かりましたか？」

人は堕ちるところまで堕ちたらどうなるかって？多分それはなってからじゃないと

＞i22610―709＜

漫画キャラによる襲撃から二日経ったある朝の会議。

機動六課前線メンバー全員と銀時を始め次元漂流者の六人は会議室に集まり、あることに関する議案について真剣に話し合っていた。

そして今、その議案についての是非が決定される――――――

「賛成27人。反対1人。土方さん以外全員賛成と言うことで、この議案は可決されました。」

今回この議案を発案したアドバイザー、ユーノ・スクライアがそう言うと全員は何処か緊張の糸が解け安どの表情を浮かべるが、その一方で一人険悪な雰囲気を醸し出し手にタバコを持った土方がいた。

そう、今回の議案とは土方の煙草についてのものであった。

ユーノは目に映る不服そうに眼光を開く土方を一瞥し、徐に手の中のものを読み上げる。

「機動六課隊舎・及び隊舎寮は今日から全域に渡り禁煙となります。」

すると、直後土方は狼狽した様子でユーノに弁解を申し立ててきた。

「って、おい・・・全域はやりすぎだろ!?て言うか寮でも吸うなってか!?まるで喫煙者を締め出さんばかりの勢いじゃねぇか・・・!せめて喫煙所を設けるぐらいの配慮があっても・・・!」

だがしかし、土方のそんな言葉を一蹴するぐらいの冷たい言葉をユーノは徐に口にする。

「何言ってるんですか、土方さん。酒は百薬の長とは言っても煙草は百害あって一利なし。法律で禁止されていないってだけで、実害は麻薬ですよ・・・麻薬。毎日吸って吐いて吸って吐いて、完全にニコチン中毒・・・依存症ですよホント・・・」

「だから何だっつうんだ!?」

「自分のことだからと言って論法で逃げようなんて思わないことですね。喫煙者の周りにいる人間、つまりは僕たち全員があなたのその煙草の所為で無理やり受動喫煙をさせられてるんです。知ってますか?本人が吸う主流煙よりも、煙として出される副流煙の方が有害物質を多く含んでいるんです。医学的な観点から言えば、主に急性影響によって、目のかゆみ、目の痛み、涙、瞬目、くしゃみ、鼻閉、かゆみ、鼻汁、のどの痛み、頭痛、吐き気、咳、喘鳴、呼吸抑制、指先の血管収縮、心拍増加、皮膚温低下を引き起こす。更には慢性影響により、がん、心臓疾患及び呼吸器系疾患などの様々な疾病の危険が高まる・・・つまりは最悪の一言ですはい・・・」

ユーノが長々ではあるが懇切丁寧にタバコの害についての説明をしている間に、全員はそんなユーノの言葉に便乗するようにその都度首肯し、話が終わるや否や総悟と銀時のダブルパンチが襲い掛かる。

「それに、異世界に来てまで煙草を吸い続ける土方さんの神経もどうかしてまっせ。」

「ああ。お、そうだ。この際煙草と一緒におめぇも別の世界に放り出してやろうか？」

「な、てめぇらよくも・・・！」

二人の言葉に思わず反応し身を乗り出そうとする土方。

そんな土方に向かって、クロノを始めとする前線メンバーは更にこう言ってきた。

「禁煙所を設ける？生憎そんなことの為に割く時間も予算もありませんよ。」

「曲がりなりにも真選組の副長と言う身の上だろ？周りの人間のことも考えろ！」

「そうそう。もし真選組の副長が禁煙も出来ないニコ中状態ってことは、市民を取り締まる真選組として示しがつかないよ。」

浦太郎から痛い言葉を言われてしまい、思わず何も言い返すことの出来なくなる土方だったが、彼はそれでも必死に抵抗の意思を見せる。

「く・・・・・お。なぁ、阿散井。お前だってほんとは隠れて吸ってんだろ？いいのか禁煙で？」

「ばぁか。誰がてめぇみたいにんな煙草吸うかよ。俺だって、こう見えて三番隊の隊長って身の上だぜ。」

呆れかえった様子で恋次が冷たく突き放すと、隣に座っていた吉良が態とらしく咳をしながらルキアと一緒にこう言った。

「げっほ！何でもいいから早くその煙を消してくれないか？」

「私たちの健康な肺を貴様と同じ真っ黒にされたくはない。」

「ぐ・・・！！そうかよ・・・だがなそれを言うなら先ずは発案者のユーノ！てめぇも人のこと言えねぇ筈だ！てめぇだって煙草吸ってるだろ！昨日夜遅くに一人外で煙管咥えてたの見たぞ！！」

土方はそう言って、ユーノが懐に入れている煙管について言及してきたが、ユーノ自身はそんな土方の言葉を聞くと、飄々とした様子でこう言い返す。

「あはは♪やだなぁ、土方さん。これ煙管なんかじゃありませんよ♪」

すると、ユーノは持っていた煙管を徐に口に咥えると、管の中に息を吹き込みパイプの先端から膨らましたシャボン玉を外に飛ばした。

「ほおら。見ての通りシャボン玉です♪」

「ま・・・紛らわしいもん持ちやがって・・・！！！」

土方は飄々として、尚且つ掴みどころのないユーノの態度に腹を立てる。

直後、抵抗し様にも言及するものがなくなった土方を見た銀時と神楽、総悟の三人は悪意に満ちた表情を浮かべながら、土方の持っていた煙草と灰皿、ライターなどを取り上げゴミ箱に放り投げる。

「兎に角・・・もう決まっちまったことだからよ・・・」

「諦めて禁煙しやしょうぜ・・・土方さん・・・」

こうして、今回の重要な会議は無事に幕を閉じ会議が終わるや否や前線メンバーは満足した様子で会議室から退室していく。

「いやぁ、流石はユーノ先生！実に有意義な会議でしたね！！」

「私も正直あの煙には困ってたんよ。カリムがあの襲撃の日の夜に通信で言ってたんよ。部屋が煙草臭いうえに教会のあちこちにに吸い殻まで転がっておったそうや。」

「俺も結構服とか臭くなって迷惑してたんだよ。」

「ねぇ、ユーノ君。私とヴィヴィオの服煙草臭くないかな？」

「大丈夫♪予め臭いがつかないようにファブリーズ撒いといたから♪」

「ふう。よかった♪」

「やはり、同じ武道を嗜むものとしてタバコなど御法度だな。」

「全くだぜ。」

各々が土方の煙草に関して非情な言葉を口にしながら退室していく光景を、力の無くなった土方、そしてそんな土方を両側に挟みながら新八と近藤が肩を叩く。

「・・・土方さん・・・」

「・・・トシ・・・諦めろ・・・」

「く!!!!!!!!!!」

こうして、鬼の副長と恐れられる土方十四郎はたった一人の発案者によって煙草と言うライフエナジーを奪われ、尚且つ生きる希望すら失うこととなったのだ。

その日の午前の訓練、土方は煙草を吸えない怒りと絶望など負の感情全てを自分の刀に乗せてシグナムと模擬戦を行っていた。

「のらあああああああああああああ!!!!!!」

シグナムは土方の剣筋を見切り、それを避けると土方に反撃を仕掛けるが土方もそんなシグナムの剣戟を避けると、禁断症状向きだの様子で刀を振り下す。

「け、煙を吸わせろ!!!!!!!!!!!!!!!!!!」

「紫電一閃!!!!!」

両者の凄まじい剣戟がぶつかり合い、小規模ながら爆発が起こり、爆発から出て来た土方はユーノに対する怒りを露わにしながら更に

フラストレーションを上げていく。

「あのフェレット野郎！！！！！！！！！！俺を殺したいのか！！！！！！！！！！！！！！！」

それに対して、シグナムは純粋に土方との戦いを楽しんでいた。

「まだ足りぬ！貴様の剣はその程度か、土方！」

「おめぇもおめぇで人のことおちょくってんじゃねぇよ！！！！！！！！！！！！！」

土方は理性も何もかも吹っ飛んだ様子でシグナムに向かって岩をも砕く一撃を入れ、シグナムはそれをギリギリのところで躱すと一人嬉々とした表情となる。

「あははは！！！いいぞ、その調子だ！！！」

そんな二人の模擬戦の様子を放たれたところで見守っていたスバル・鬼太郎・ヴィータ・金太郎・新八の五人は完全にあきれ返っている様子だった。

「うわぁ・・・完全に荒れちゃってる・・・」

「と言うより人格変わってねぇか？」

「タバコ如きであんなになるとは・・・・・・つうかシグナムもシグナムで何やってるんだか・・・・・・」

「何事も、過ぎた行いは身を滅ぼします。みなさんも十分にそのこ

とは注意したほうがいいでしょうな。」

「いや・・・あそこまで切れる人も珍しいですけどね・・・」

そんな五人の感想はさておき、二人はその後も激しい攻防を繰り広げるが、傍から見ればかなり異様なものであった。

「のらあああああああああああああ!!!!!!!煙吸わせろ!!!!!!!!!!!!!!!!」

「飛竜一閃!!!」

銀時やユーノ達もそんな五人よりも少し離れたところで顔を引きつりながら模擬戦を観察していたが、その直後不意に全員の耳に気味の悪い唸り声が隊舎の中より聞こえてきた。

「!?おい・・・何だこの声・・・・!?」

「銀ちゃん!何アルか・・・!!」

「気味の悪い・・・・・・・誰かの唸り声か?」

なのはも流石に恐ろしくなったのか、ユーノにしがみ付きながら徐に尋ねる。

「ねぇ、ユーノ君・・・何の声だろう?」

「う〜〜〜ん、トイレから聞こえてくる。おそらく浦太郎だろう。」

「何で浦太郎がんな気色の悪い声でトイレで唸ってる訳?おかしく

ねぇ？」

銀時が怪訝そうな様子でユーノに尋ねると、ユーノは腕組みをしながら自分の推測を口にする。

「原因はきっと、彼が今朝食べた朝食にあると思いますけど・・・」

ちなみに、浦太郎が今朝朝食としていただいたのは例によって卵かけご飯だった。

最近は浦太郎の中ではちょっとしたマイブームであるらしいが、不幸なことにその卵と言うものが劣化しており、食べ終わった数時間後に腹痛として浦太郎に襲い掛かってきたのだ。

そのため、現在浦太郎はトイレの方で格闘中だった。

「ほおおおおお！！！！！！！！しょ、食堂の親父の野郎・・・！！！やっぱ今朝の卵も傷んでやがった！！！！ぬおあああああああ！！！！！！！」

亀井浦太郎、２５歳。

その若くして生き地獄を味わうこととなった――――――

さて、そんな浦太郎のことなど知る由もない真選組一番隊隊長、沖田総悟は一人アイマスクをつけながら日当たりのいい場所で惰眠を貪っていた。

「かぁ～～～～～」

すると、そんな眠っている総悟の元に恐る恐る近づいてくる陰があった。

「あの、沖田さん？」

総悟もその声に反応し、徐にアイマスクを取ってみた。

「お？おめぇは確か・・・――」

総悟が視線を上げた先に立っていたのは、ティアナであった。

「はい、ティアナ・ランスター執務官です。あの・・・ちょっとお願いがありまして・・・」

「俺にか？金ならねぇぞ。」

「あいえ、違いますよ。実はですね・・・私、射撃の扱いは慣れてるんですが、どうも剣とかに関する扱いはまだまだ不慣れでして・・・それで・・・よろしければ、沖田さん。私に剣の使い方を教えてもらえないでしょうか？」

総悟は予想だにしてなかった言葉を聞かされ、ポカンとした様子となる。

「何で態々俺なんでい？俺じゃなくても、近藤さんや旦那・・・それにユーノ先生だっているだろ？」

「ああ・・・近藤さんやと銀さんだとどうもそう言うことは頼みづらいというか何というか・・・シグナム副隊長も人に教える性質ではないと言っていますし、かと言ってユーノ先生もこういう事に関

しては多分いくら説得しようとしても聞かないと思うんですよねよ。」

「あの温厚そうな人柄でか?それはねぇだろ・・・」

「本当なんですよ。ユーノ先生・・・常々言ってるんです。自分には戦い方なんて教えられない。人を活かす戦い方をする私達と、殺す戦い方をする自分とじゃ話が違いすぎると。そうやって・・・いつも寂しそうな目でそう語りかけて、結局自分から何かを教えようとはしないんです。アドバイスに関してはきっちりしてくれるんですが・・・それ以外はなのはさん達に任せきりで。」

話しているティアナ自身も何故か何処か寂しそうな表情で相互に語りかける。

総悟はティアナの話を聞き終えると、不思議そうにユーノの人柄などを思い返しながら徐に呟く。

「ふ~~ん・・・あのどチートな強さを持ってる人がね~~~」

すると、その直後ティアナは総悟の横に座りながら総悟の実力に関して素直に評価をしてきた。

「沖田さんは凄いですよね。そんな若いのに、真選組の一番隊隊長で剣の扱いも超一流で・・・私、今よりももっと自分を磨きたいと思っているのに、中々これが上手くいかないものでして。」

「・・・おめぇは何のために強くなりたいんだよ?」

総悟が間を置いたのちにそう尋ねると、ティアナは少し考えてから

徐に言葉を発する。

「私は――――――自分にとって大切な人を傷つけたくないから・・・失って悲しい思いをしたくないから――――――それと。」

「お？」

そう言うと、ティアナはその場から不意に立ち上がり更にこう続けた。

「“こんな凡人でどうしようもない甘ったれな私に正面からぶつかって、大事な事を教えてくれたなのはさんが今、やっと手にした本当の幸せを護りたい”・・・ですかね？」

「・・・・・・」

総悟はティアナのその言葉を聞くと、自分も似たような想いを自分の大将である近藤に抱いているの想いだし、何故だか知らないがティアナのことをこのまま放っておけないようと思うになった。

総悟は徐に刀を持ってその場から立ち上がると、不意にティアナに言葉を発した。

「おい。」

「はい？」

「着いてきな。俺がおめぇにみっちり叩きこんでやるぜ。本物の剣の使い方ってやつをな――――――」

ティアナはこの総悟の言葉を聞くと、一瞬驚いた様子だったが直ぐに嬉々とした表情へと変化させる。

「沖田さん――――――はい！よろしくお願いします！」

こうして、ティアナは総悟の導きの元新たな戦い方を覚えるために剣の修行へと入り込んでいくこととなるが、これが思わぬ事態を引き起こしてしまうのであった――――――

その頃、事務処理に専念していたユーノは午前中に与えられた大量の書類整理を造作もなく終了させ、全員を驚愕させる中無限書庫にいる筈のフェイトの使い魔で戦友のアルフに通信を入れようとしていた。

「アルフ、居るかな？」

期待と不安を抱きながら、通信画面を開くとユーノの目の前に現れる子供姿のアルフが映つり、ユーノも一安心した。

「やぁ、アルフ。元気してたかい？」

『おう、ユーノか。久しぶりだね。今日はどうした？何か頼みごとかい？』

「察しがいいね。ああ。実はちょっと調べてほしいことがあってさ。情報に関しては無限書庫が専門だからね♪」

『まぁな。て言うか無限書庫の主だったあんたがそう言うのは何だか新鮮に聞こえるね。』

「あははは。で、忙しくなかったら引き受けてもらえるかな？」

『おう、心配すんな！伝説の司書長の頼みごとって聞けば、ここの奴らみんな他の仕事そっちのけであんたの依頼を優先するさ！』

「それもそれで困ったもんだけど・・・・・取りあえず要件を言うよ。“広域次元犯罪者、通称カトゥーン”に関するデータ、生い立ちから経歴など、その他何でもいい。出来るだけたくさんの情報を調べてほしい。」

真面目な表情で要件を口にしたユーノを見ると、アルフも眉間に皺を寄せながら徐にこう問い直した。

『カトゥーンって・・・まさか聖王教会が独自に追跡していたっていうあの・・・！？』

「うん。飽く迄もこれは僕の憶測にすぎないが、今回の異例の事件・・・情報が少ない以上断言することは難しいが、僕は聖王教会と同じく奴の犯行であると睨んでいる。」

真剣な眼差しでそう語りかけるユーノを見ると、アルフもこれは手を抜けないと思うに至る。

『・・・分かった。じゃあ、早速調べてみるよ。夕方ぐらいにはデータを送れるようにするから、それまで待ってなよ。』

「ありがとう、アルフ。無限書庫の司書達にも後でお礼を言っておいて。近いうちに、顔出してそっちの手伝いにでも行くよ。」

『あはは。相変わらず律儀な性格だね。手伝いなんてそこまでして

くれなくてもいいのに。まぁでも、あんたが顔出せばあいつらも喜ぶ筈だからさ、楽しみにしてるよ！』

「あはは。じゃ、頼んだよ。」

『おう！任せておきな！』

実に清々しい返事をしたアルフはユーノと通信を切り、ユーノも通信を終えると安どの表情を浮かべながら椅子に深々と腰を掛けた。

「よし。これでこの辺の問題は大丈夫だろう。」

すると、ちょうどその時１２時を報せる時報が鳴り響いた。

「お昼の時間か・・・――――さて、僕も何か食べよう。」

ユーノは徐に椅子から立ち上がり、食堂の方に向かおうとした時だった。

そんなユーノに満面の笑みを浮かべたなのはが近づいてきた。

「ユーノ君♪」

「ん？なのは。」

なのははユーノに笑みを浮かべたまま、手に何かを抱えていた。

「お昼まだなんでしょ？」

「うん。て言うか、その弁当箱は？」

そう・・・なのはが抱えていたのは少し大きめの袋に包まれたユーノの為に造った弁当であった。

なのはは頬を赤くしながら恥ずかしそうにこう口にする。

「にゃはは♪いつもよりも早起きして作ってみました♪ユーノ君へのお弁当♪」

「え？僕に・・・！？」

「うん♪いつも頑張ってる私の大切な人への感謝をこめて・・・外も晴れてることだし、一緒に食べよう。」

なのはが自分の為にそんなことをしてくれるとは夢にも思っていなかったユーノは一瞬驚いた様子だったが、直ぐに柔らかな笑みで返事をした。

「・・・なのは・・・うん。ありがとう。じゃあ、折角だから頂きますか♪」

「はい♪」

二人は笑顔でそう言い合うと、仲良く手を繋ぎながら外の方へと歩き出した。

そんな二人の様子を離れたところで見かけた新八を始めとするティアナを除いた前線四人と銀時、神楽、恋次はと言うと――――――

「あれ？」

「あの、新八さん。どうかしましたか？」

「あれって・・・ユーノさんとなのはさん・・・ですよね？」

「何アルか？二人して手なんか繋いで何処に行く気ね？！」

「はは～～ん、成程。あいつらそう言う仲だった訳ね？」

「あれ？知らなかったんですか銀さん？」

「他人の色濃いほど興味のねぇもんはねぇさ。だが、淫獣フェレット君と魔王様の恋路には多少興味もわいてくる。」

「銀さん・・・それ二人に聞こえたら真面目に殺されますよ・・・」

「絶対に本人たちの前では言えねぇな・・・」

顔を引きつりながらそう口にする新八と恋次。

すると、明らかに悪だくみをしている人の様な笑みを浮かべた神楽は徐にこう口にしてきた。

「ふふふ！！おめぇら何もたくさしてるネ。ここは陰湿に二人の様子を窺うネ！」

「か、神楽ちゃん！流石にマズイってそれは！」

全員が驚きを隠せない中、新八が慌てた様子で止めようとするも神楽はそんな新派氏に罵声を浴びせる。

「うっさいアルよ、ダメガネ。碌に色恋もしたことのない餓鬼が偉そうに私に命令するんじゃねぇよ。」

「おめぇだって色恋の一つもしたことのねぇ餓鬼だろうが！！」

新八は神楽の言葉に過剰反応をお越し、思わず声を荒げる。

それを見ていた銀時はあきれ返り、ギンガはそんな新八と神楽の口喧嘩を止めようとする。

「し、新八さん。神楽ちゃんも落ち着きましょうよ、ね？」

「ったく・・・お前らは・・・」

とは言いつつも、銀時もここにいるメンバーも二人の恋路にはかなり興味があるのは確かだった。

全員は心を一つにすると、意を決して二人の後を追跡していくのであった。

二人の後を追っていった銀時達は草陰に身を隠しながら、腰を下ろし昼食をいただこうとしているユーノとなのはの様子を窺っていた。

「さ、ユーノ君。た～んと召し上がれ♪」

なのはは笑顔でそう言うと、袋の中に収められた重箱の蓋を取り、朝４時起きで作った愛情がたっぷり籠ったユーノへの弁当を披露する。

ユーノは箱ぎっしりにおさめられた圧倒するほどの量のおかずに思わず呆然とする。

「う、うん。それにしても随分作ったね・・・」

「にゃはは♪ちょっと作りすぎちゃったかな?あ、何なら無理してひとりで食べなくても全然いいから。」

「だけどそれだと折角のなのはの行為が無駄になっちゃうよ。大丈夫。結構僕の腹は大きい方だから。残さず全部いただきます。」

「ふふ。ありがとう・・・じゃあ、あ~~~んして♪」

「うん。あ~~~ん♪」

なのはが早速と言わんばかりに、適当につまんだおかずをユーノの口の中へと入れておき、二人の実に甘い甘い昼食が始まった。

そんな光景を見ながら、恋次は凄まじい吐き気に見舞われ、銀時の怒りのボルテージは上昇していく。

「おえええ!!!久々に見たけどやっぱりこいつは体に悪いぜ~~~」

「ねぇ新八君。あいつら二人ともぶん殴ってもいい?ぶん殴ってもいいかな?」

「ちょ、銀さん落ち着いてくださいよ!自分があいうことされたことないからって僻むのはよくありませんよ!」

「新八さんの言う通りですよ。落ち着いてください！」

「うっせー！何で俺ばっかりもてねぇんだよ畜生！！！人気順位はトップなのに何で誰も俺の魅力に気が付かねぇんだよ！！！」

飛び出そうとする銀時を必死に抑える新八やギンガ達を余所に、恋次はとうとう我慢できずにその場でゲロを吐いてしまい、神楽は優しく背中をさすっていた。

そして、ユーノは本当に一人でなのはの作った料理を平らげしてまい、二人の甘々な昼食タイムは終わった。

ちなみに、大体察しがついているとは思うが昼食の間はずっと二人はあの行為を繰り返していた。

二人は昼食を終えると、和やかな雰囲気を醸し出しながら日向ぼっこを堪能していた。

「偶にはいいものだね。こうしてのんびり二人でお昼を過ごすって言うのも・・・」

「うん。日当たりもいいし・・・絶好の日向ぼっこ日和だね。」

「こうしている分には平和だけど、僕達の目に見えないところでは血塗れの戦いが起きているのかもしれない――――――」

ユーノが徐にそう呟くと、なのはもそんな言葉を受け入れながら複雑そうな表情でこう口にする。

「出来ることなら、争いなんてものはないに越したことはないのに

ね・・・――」

「だけど皮肉なことに、僕らは争いを止めるための手立てが戦うってことしかないんだよね。いつから僕らは言葉ではなく力によってこんなにも血で血を争うようになったのかな――――――」

「そう言われると、私もちょっと反省しちゃうな。何かを護るためにずっと戦い続けて来てるけど、それで私は本当の意味で何かを護れてきたのか・・・何の為に自分は今こうして戦っているのか・・・時々疑問に感じちゃう。」

すると、そんな自分自身に疑問を感じていたなのはを横で見ていたユーノは間を置いてから徐にこう語りかけてきた。

「・・・なのは・・・」

「ん？」

「君はいつでも素のままのいいんだよ。君がやりたいと思う通りにやればいいさ。全力全開が君のもっとうなら、僕はその為に全力全開を貫き通せるようにサポートをする。こんな僕で何ができるかは知らないけど・・・――」

「・・・ありがとう・・・でも、私のこともそうだけど、ユーノ君には前にも言ったけど・・・もっと自分のことに関して目を向けるべきだよ。ユーノ君・・・ずっと私や他人のことばかりで、自分のことなんて二の次の次ぐらいにしか考えてないでしょ？それで、無理して大怪我とかして傷ついた姿で戻ってくるのは――――――正直私にはもう耐えられないよ。」

「あ・・・・・・」

なのはが何かを堪えたように表情をゆがめると、ユーノは思わず何も言えなくなり、そんなユーノに向かってなのはは更に言葉を並べる。

「ユーノ君。私ね・・・ユーノ君みたいに器用でもないし、気配りとかも上手じゃないし、頭だってそんな回らないし、魔法で戦うことぐらいしか取り柄がないのかもしれない。だから、せめて戦いの中やこうして一緒にユーノ君と居られるときは出来るだけ支えになってあげたいの。だから、無理して自分一人で背負い込もうとしたりしないでいいから・・・！もっと・・・私やみんなこと・・・頼っていいから・・・！」

「・・・――――」

ユーノはなのはの言葉を聞くと、思わず何処か困った表情を作ってしまう。

すると、なのはは先ほどよりも悲痛な表情を浮かべながらこう発言してきた。

「そんな困ったような顔はしないでよ。私はユーノ君には笑ってほしいんだよ。」

「（・・・！）」

「初めて出会った時からずっとそうだった。私がどんなにきつい状況でも、どんなに追い詰められた時でも、私はあなたの支えがあってここまでやってきた。一緒に笑って、色々と語り合った。だけど、

あの事故以来・・・私が墜ちた時から・・・ずっとユーノ君・・・まるで取り繕った感じで無理して笑顔を見せて来ているような気がする。今だってそう感じちゃった。」

「僕は――――――」

何か言い返そうとするユーノだったが、この時は何故か言葉が上手く思いつかなかった。

なのはは困惑した様子のユーノを横に見ながら、更に続ける。

「私は知ってるよ。ユーノ君の笑顔はそんなんじゃない。もっと包み込むように優しくて、すっごく暖かいものだもん。私はその笑顔でどれだけ救われたか知れない。だから私はもう一度取り戻したい。昔のように、今のユーノ君がしてる無理して取り繕った笑顔じゃない・・・本当の・・・優しかったあの笑顔が見たい・・・！」

「なのは・・・・・・く！」

なのはが正面から自分に向かって思いのたけをぶつけてくると、ユーノは思わずそんななのはのことを引き寄せきつく抱きしめる。

突然のユーノの行動に思わず顔を赤くするなのは。

「ユーノ君・・・？」

すると、戸惑いを見せるなのはに向かってユーノは声を殺したかのようにこう言って来た。

「ごめん、なのは。本当は僕だって昔みたいに素直に君と向き合っ

て一緒に笑いたいんだ。だけど、心の中にまだ捨てきれていないものが邪魔をして、どうしても君と真正面から向き合って・・・純粋な気持ちで笑えないんだ・・・」

「・・・・・・」

「全く・・・自分でも嫌になるよ・・・折角こうして君が全力全開で僕と向き合おうとしてるのに、僕は何一つ変われてなんかいないんだ。」

「ユーノ君・・・そんな・・・そんなこと！」

「でも、一瞬でも言葉一つで・・・切っ掛け一つで変わることが出来る。」

「え？」

直前のユーノの言葉に思わず疑問符を浮かべるなのは。

すると、ユーノは徐になのはを解放し柔かい表情で感謝の言葉を並べる。

「ありがとう、なのは。僕は・・・君の言葉で変われそうだ。また一緒に、本当の笑顔で笑いあえる時が来るように、僕は必ず変わってみせる。」

決意のこもった昔と全く変わらない瞳をまじまじと見つめながらなのはは安堵の笑みを浮かべる。

「ユーノ君・・・・・うん。応援してるよ・・・――――きっと、

ユーノ君なら大丈夫。だって、ユーノ君は私の自慢の先生で、一番大切な人だから。」

「なのは・・・――」

「ユーノ君・・・――」

二人は頬を赤く染めながらいい感じに見つめ合うと、徐に顔を近づけお互いの唇を触れ合わせ、そのままユーノはなのはを押し倒し、恋人になって初めてのディープキスを始めた。

その様子を窺っていた新八たちは思わず本人以上に赤面する。

「「「「あ・・・！！！！」」」」

「おいおい・・・マジかよ・・・！！」

「うっほお！！！あのフェレットもどきやるアルな！！」

「い、いいのかな・・・僕らこんな光景普通に見てて・・・あれ？銀さん・・・」

若干の罪悪を抱きつつもその光景を目の当たりにしていた新八だったが、不意に横の印時の様子が可笑しいことに気づき、徐に目を向けてみると銀時は怒りのボルテージを上昇させながら黒いオーラを発していた。

「・・・気に食わねぇ・・・気に食わねぇ・・・！！！」

「ぎ、銀さん・・・・・・！」

顔を引きつりながら銀時の様子を気にしていた新八たちだったが、直後銀時の怒りが爆発し、声を荒げた。

「何で淫獣がいい感じに進展してるのに俺にはまともな恋愛の一つや二つ、入ってこないんだよ！！！！空知！！！！てめぇ殺すぞ！！！！！」

「あんた！！何ぶっちゃけたこと言ってるの！！！！！つうか、声デカいわ！！！！二人に聞こえちゃいますよ！！！！！！」

慌てた様子で荒れ狂う銀時を止めようとした新八たちだったが、その瞬間彼らの様子に気づいたユーノとなのはが黒いオーラと殺気に身を包みながら、笑顔で言葉を発してきた。

「もう聞こえてるよ、みんな♪」

「「「「「「は！」」」」」」

前線四人と神楽は逸早く危機を感じ取ると、脱兎のごとく勢いでその場から逃走する。

「「「「「あ、あとはよろしくお願いします！！」」」」」

置いてけぼりを食らってしまった新八・銀時・恋次の三人は必死に逃げていく五人を引き留めようとした。

「ちょっと！！！！！あんたら何そそくさとんずらしてんの！！！！ギンガさんも僕ら見捨てないで下さいよ！！！！」

「神楽！！！！何お前までそっちの方についてるの！！！！！」

「ていうかお前ら！！！！！俺達も逃げ・・・！！」

と、恋次がそう言おうとした直後ユーノが飄々とした様子でチェーンバインドを放つ。

「チェーンバインド♪」

「「「！」」」

三人の体はユーノの強固なチェーンバインドに絡めとられ、身動き一つ出来なくなる。

そんな三人を見ながらなのははレイジングハート片手に、黒いオーラを発しながら笑顔でこう言って来た。

「にゃはは♪大丈夫だよ、三人とも・・・・・ちょっと、頭冷やすだからね♪」

なのはの言葉に便乗して、ユーノも晩翠を解放する。

「そうそう♪歯医者さんの治療よりもずっと痛くないから・・・ね♪」

「「「な・・・・・・！！」」」

三人は迫りくる死への恐怖におびえながら全身から滝の様な汗を流す。

「「さぁ・・・お話聞かせてもらおうかな♪」」

三人は抵抗することもむなしく、恐怖の制裁をその身に受け、機動六課隊舎中に悲鳴が響いたのは言うまでもなかった。

「「「ああああああああああああ！！！！！！！！！！！！！」」」

そんな悲鳴を耳にしながら食堂の方で昼食をとっていた土方は思わずきょとんとする。

「お？何の音だこいつは？」

「今日はやけに声が反響しますな。」

金太郎はそう返すと、徐にマイマヨネーズを取出し丼の上へと豪快にかけ始める。

すると、それを見た瞬間土方の眼が光り輝く。

「！お前・・・それは！！」

「ぬ！土方殿・・・！まさかお主も！！！」

金太郎が驚いた様子でそう尋ねると、土方も懐からマイマヨネーズを取出しこう言った。

「そうか・・・お前もマヨネーズを愛するものだったか・・・実は俺もだ。」

金太郎は初めて気の合う人物、土方を見付けると感動のあまり涙を流し土方の手を握りしめる。

「す、素晴らしいことです!!!この金太郎、同じ趣味を共有するものと初めてお逢いできました!!!」

「俺もだ。なぁ、金太郎。聞くが、お前コーヒーにもマヨネーズは入れるか?」

「勿論でございます!コーヒーに限らず、全ての食材にマヨネーズは合うと自負しております。」

「気に入ったぜ。どうやら俺達は親友になれそうだな。今度マヨネーズで上手い酒を酌み交わそうぜ。」

「はい!!!是非ともよろしくお願いいたします!!!」

奇妙な関係を築き上げる傍から見れば気色の悪い二人をまじまじと見ながら、フェイトと近藤はこう言い合った。

「近藤さん・・・あれ止めなくてもいいんですか?」

「フェイトさん・・・あれを止めるなどと言う考えは起こさぬ方がいい・・・」

そして、二人の横でクロノは今にも吐きそうな表情でこう言いくるめた。

「どうでもいいが、自分の不養生を周りに見せつけるのは止めてください。」

やがて、時が過ぎあっと言う間に夕餉の時刻が近づいてきた。
銀時と新八は魔法と魔導死神によってこっ酷く絞られ、その後数時間もの間気絶していたらしく、起きた時には医務室のベッドだったそうな。

二人はまだ治りきっていない顔の傷を抑えながらロビーの方に向かって歩いていた。

「いてて・・・マジ死ぬかと思ったぜ・・・」

「ホント・・・僕らよく生きてますね・・・」

「新八君・・・あの二人の前でバカやったりすると殺されるから気を付けよう・・・」

「はい・・・」

二人は固く固くそのような決心をすると、疲れ切った様子でソファーの上に腰を下ろし深い溜息を吐いた。

と、そんな時二人の目の前にティアナを探して歩き回るスバルが通りかかった。

「ティア。何処にいるの?ティアってば・・・」

気がかりに思った二人は徐に尋ねてみた。

「あのスバルさん、どうかしたんですか?」

「あ。実はティアが朝食の後から全然姿を見せてないんですよ・・・今日はティアオフだったんですけど、この時間になってもまだ帰ってきてないんです。」

「そう言えば銀さん。ティアナさんもそうですが・・・沖田さんもあの後全く姿を見かけてませんよ・・・」

すると、そんな新八の言葉を聞いた瞬間銀時に悪寒が奔った。

「おい新八君・・・今沖田君もいないって言ったよな・・・それとティアナの消息不明・・・も・・・もしや・・・!?」

「ま・・・まさか・・・!?」

銀時の言葉を聞き、改めて考え直してみた新八にも銀時が想定した最悪の事態が頭によぎる。

顔を引きつる二人を見た瞬間、スバルは焦りを感じ始める。

「あの・・・その表情を見るからに、相当マズイって感じですか?」

「お、おう・・・あの野郎の性格は俺達でどうこう出来るって訳じゃねぇからなおい・・・もしかしたらティアナの身に危険が及んでるかも・・・」

「え!そ、そんな!!ティアに何があったっていうんですか!!!言ってくださいよ、銀さん!!!」

スバルは動揺を隠し切れない様子で銀時と言いながら何故か新八の

首筋を掴みながら激しく揺さぶりをかける。

「ちょっと!!!僕新八なんですけどスバルさん!!!!」

「落ち着け、スバル!!!!銀さんこっちだからね!!!メガネかけてない方だからね!!!!」

銀時はスバルの動揺を抑えようと試行錯誤するが、一向にスバルはそれを止めようとはせず寧ろエスカレートしていくばかり。

そんな三人の様子を偶々通りかかったユーノが目撃し、声をかけてきた。

「な、何やってるんですか一体?」

「おお!ユーノ大先生!!ちょうどいいところに!!こいつ何とか止めてくれよ!!」

銀時の頼みを聞き入れ、仲裁に入ったユーノは落ち着いた様子で真逆のスバルに向かって声をかける。

「スバル。取りあえず落ち着こうか。」

「あ!す、すみません!勝手に興奮しちゃって!」

スバルは謝りながら新八を突き放し、新八は絶命寸前の様子で床に倒れ伏していた。

「大丈夫かい、新八君?」

「ち・・・窒息するかと思った・・・」

すると、その時ユーノの元に誰かからの通信が入った。

「お?通信だぜ。」

徐にディスプレイに表示されたのは沖田とミッド語で表記されたものだった。

「沖田さんからですね、これ。」

「あの野郎、んな時間までどこほっつき歩いてるんだ・・・もしかしたらティアナも一緒もかもしれねぇ。」

「一応聞いてみますか?」

ユーノはそう言うと、直ぐに通信を繋ぎ画面に映ってくる沖田と話を始める。

『やぁ。万事屋の旦那。ユーノ先生もどうも。』

「どうもじゃねぇよ。んな時間まで何処ほっつき歩いてたんだよてめぇは!」

勝手な行動ばかり起こす総悟に一喝する銀時。

すると、総悟は徐に一日のことを語り出す。

『いや、実はティアナの野郎が俺に剣を学びたいって言うもんですから、その訓練に付き合ってたんでさぁ。』

「ふう。よかった・・・何だそんなことだったんですか。」

スバルは安心した様子でため息をつくが、銀時と新八だけは嫌な予感を感じていた。

「ホントにそんなことでいいのかな?何か物凄く嫌な予感がするんですけど・・・」

ユーノも若干の心配を抱きながら、総悟に更にこう尋ねる。

「ちなみに沖田さん。今、ティアナは一緒ですか?」

『ええ。俺がみっちり剣の極意を叩き込んだ後、何だか意気投合しちやいましてね・・・色々と街の方を案内してもらいやした。ちょっとしたデート感覚ですさぁ。』

「沖田さんとティアナさんがデートって・・・全然想像がつかないんですけど・・・」

「つうか、あの野郎にデートなんか出来るのか?って、言ってる場合か!沖田君、頼むから何もしてねぇだろうな!ティアナに何かしたらマジぶっ殺すぞ!」

『心配ありませんぜ旦那。何もしちゃいません。紳士的にエスコートしているところですさぁ。今六課に戻ってるところです。なかなかに面白い一日でした。』

「そうか。それならいいんだ。そのまま何もすることなく紳士的にエスコートして六課に戻って・・・――ん?」

と、銀時がそう言いながら徐に外の方に目を向けてみると、沖田は鎖を手に取りながら首庭をつけられ、鎖につながれた沈黙した様子のティアナを引っ張っていた。

「おお・・・もたもたしねぇで歩け。」

「「「どんなエスコート!!!!!!」」」

衝撃的な光景を目の当たりにした瞬間、ユーノ・銀時・新八の三人は声を揃えて驚いた。

「え、エスコートじゃねぇだろ!!どエスコートだろうが!!!!!」

総悟は三人の反応など全く気にしない様子で鎖につながれたティアナに話しかける。

「六課の近くに上手い飯屋があってな、行くかい?」

「何で普通に喋ってるの!?何で恥ずかしくないの!?て言うか沖田さん、ここの地理何時調べ上げたんだよ!!」

ふとそうツッコミを入れる新八。

総悟はティアナをその飯屋に案内するが、それは明らかに六課の食堂のおじさんが趣味で絵付けをしている野良猫の餌場だった。

「ああ、あったあった。飯屋。」

「飯屋じゃないよそれ!!それ食堂のオジサンが趣味で飼い慣らし

てる野良猫の食事だよ!!」

「参ったな満席だ。お、一席空いてるか。ティアナ、食べていきなよ。俺のことは構わねぇでいいからさ。」

「これ何ファースト!?レディーファーストじゃないよね!絶対違うよね!!」

総悟はティアナを猫の群れの中に放り込み、そのまま野放し状態にすると食堂のおじさんの隣に座り談笑し始める。

「いやぁ、今日も疲れましたな。」

「ツッコめよ、食堂の親父!!何で普通に談笑してんだよ!!」

思わず声を荒げる銀時。

しかし、総悟は気にせずあからさまに会話を続ける。

「ホントっすね。もう秋だ。日が暮れるも早えぜ。」

「今の凄い分かりやすい間違い探しだったよね!?」

と、その時食堂のおじさんは違和感を感じる。

「あれ?沖田さん・・・あんた・・・あれ?何か変じゃねぇ?」

「「「そうそうそれ!!」」」

「え?何々?何かあった?」

「「早く言えよ食堂の親父!!正解だよそれ!!!言っちゃえよ!!!」」

口を揃えて食堂のおじさんに催促を促す三人。

直後、食堂のおじさんは総悟のおでこにできたにきびを凝視し、こう言った。

「おでこに新しいニキビ、出来てねぇ?なかったよねソレ?」

「ってどんだけ繊細な事に気づいてんの!?恋人だってそんなこと気づかないぞ!!もっとあんだろうが!て言うか、あんた知り合ってからまだ二日しか経ってないだろうが!!」

すると、総悟もそんなおじさんに向かって気づいたことを口にする。

「親父こそひょっとして・・・・・ファンデーション変えた?」

「何で食堂のおじさんファンデーションつけてんだよ!!お前らどういう関係性だ!!」

この二人の会話と猫と喧嘩を始めたティアナの変わり振りを見ていたスバルは瞳に涙を浮かべる。

「ひ・・・酷い・・・ティ・・・ティアが・・・ティア!!」

「銀さん!ユーノさん!これはああだこうだ言ってる場合じゃありませんよ!沖田さんをぶっ潰してティアナさんを救い出すべきです!」

新八はそう言うと、居ても経ってもいられずティアナに向かって走り出す。

「あ！新八さん、早まらないでください！」

「「新八（君）、止せ！！」」

三人は新八の行動を止めようと声を上げる。

「ティアナさん！！」

と、その瞬間新八が近づいてくるや否やティアナは目を光らせ猫の様な動きで新八の下あご目掛けて蹴りを食わらせた。

「にゃ！」

「ごっほ！！」

ティアナは新八を圧倒すると、総悟の元に近づき嬉しそうに下顎を撫でてもらい、総悟はサディスティックな笑みを浮かべていた。

銀時やユーノはこの光景を見るや否や思わず言葉を失った。

「こ・・・！これは・・・！！完全に調教されている～～～～～！！！完全に服従してるよ！！！つうかこの一日でティアナに何したんだ！！！！！」

「く・・・銀さん！スバル！ちょっと手伝って！」

「え!?あ、はい!」

「よっしゃ!」

ユーノは二人にそう言うと、ティアナの勝機を取り戻すために一つの芝居を打つ。

それは、スバルが人質役となって悪漢に変装した銀時とフェレットに変身したユーノの二人によって責め立てられるというものだった。

「助けて!!ティア!!!」

「だははははは!!!!これは中々にいい生娘ではないか!!!!これは淫獣フェレット君もさぞかし喜ぶだろう!!そうであろう、淫獣フェレット君?」

「きゅう、きゅう!」

「このまま淫獣フェレット君を胸の中に収めてやろうか!!」

「きゃあああ!!!ティア助けて!!!」

すると、スバルの叫び声を聞いた直後ティアナが振り返り真顔で見つめてきた。

「見た!こっち見たぞ!」

「やっぱ相棒の危機は流石に放っておける訳・・・」

と、思っていた銀時とユーノだったがティアナはあろうことか食堂

のおじさんが指摘した
総悟のにきびのことを気にしていた。

「にきび！にきび！」

「「またにきびかい！！！！おめぇらどんだけにきび気になってるんだよ！！！」」

銀時は怒りを露わにしながらティアナの人格を豹変させた総悟に向かって言葉を投げかける。

「お前！何してくれてんだ！！何もするなって言ってただろうが！！異世界に来てまで何人の人格変えちまってんだよ！！！」

「すいやせん。思った以上に覚醒しちゃいまして。ティアナの野郎、俺が見込みをつけたとおり自尊心の塊でしたから、完膚なきまでにへし折ってやりました。」

「あんた！！！今さり気に何とんでもないこと口にしてんだ！！！これ一応純然たる魔法少女ものとのコラボなんだよ！！！どうしてくれてんだ！！！」

「大丈夫ですさぁ。俺が元に戻れと言えば元に戻ります。マゾになれと言えばそうなります。」

「てぃ、ティアはマゾじゃダメなんです！！ツンデレじゃないとティアじゃないんです！！」

「ツッコムところが違うからね、スバル！！！」

銀時は絶望した様子で沈み込むと、頭を抱えながらこう呟き始める。

「どうするんだよオイ!!!!このままじゃ俺達魔王様の報復を食らうのがオチだぜ!!!!!」

「マズイですよこれは!!!!!!キャラの性格改変しちゃったなんて知られたら、マジで地獄行きは決定ですよ!!!!」

銀時に便乗して新八もそう口にする。

すると、二人の言葉を耳にしとくにあるフレーズに過剰に反応したユーノは二人以上に絶望的な様子となりこう言った。

「嫌だ!!!!そんなの嫌だ!!!!あんなところに行くのなんてまっぴら御免だ!!!!もう二度とあいつらなんかに食われたくないわ!!!!!」

「「「!?」」」

思わずユーノの言葉に反応する銀時達と、言ってはいけないことを言ってしまったユーノははっとした表情を浮かべる。

「あ。」

「おい・・・お前今何つった?」

「あいつらに食われるとか・・・そうでないとか・・・?」

銀時と新八が訝しげな様子で尋ねるが、ユーノは慌てふためきながら先ほどの言葉を真っ向から否定する。

「な、何のことかな!?そ、そんな訳ないでしょう!空耳ですよ空耳!!」

「そ、そうか・・・」

「それより今はティアナの方が先決です!早いところ元の人格に戻さないと!」

「あ、ああそうだな。と、取り敢えずどっかに連れて行くか・・・おい沖田!てめぇも責任とってもらうぞこっちこい!!」

「マジですか・・・しょうがねぇや。ほら、ティアナ。もたくさしてねぇで行くぞ。」

「だから先ずはそこから違ってるでしょ!!ぶっ殺すよホント!!」

「ティア!!待っててね!直ぐに元に戻してあげるから!!」

銀時達は原因を作った総悟も引き連れてなのは達がいない場所へとティアナを連れて行く。

その連れて行く中、ユーノは先ほどの軽はずみな言葉を深く反省し、深いため息をつきながら自分の重要な秘密がばれなかったに安心する。

「(ふう〜〜〜危なかった〜〜〜みんなには知られたくないからな・・・・・軽はずみな言動は細心の注意を払わないと・・・――――)」

どうにかして、銀時達は苦労の末ティアナの人格を元に戻すことに成功し、総悟に手酷くお仕置きを施した銀時とユーノはその後真っ暗な司令室の中で疲労困憊の様子で座り込んでいた。

「ほ。何とか最悪の事態は免れたなオイ・・・」

「ほんと・・・間一髪って感じでしたよ・・・」

「取りあえずお疲れさん。色々と迷惑かけちまったな。」

「気にしないでくださいよ、銀さん。あのまま放っておくほうがもっとまずいことになってましたし。」

「これからはあのどエスの行動には目を光らせねぇとならねぇな。」

「そうですね。」

すると、その時ユーノのデスクの方にアルフからの直接通信が入る。

「おい、ユーノ？通信が来てるぜ。」

「本当だ。多分アルフからですかね。」

ユーノはそう言うと、通信画面を開き出て来たのは案の定無限書庫で調べものに専念していたアルフだった。

『おう！待ったか！』

「いや、大丈夫だよ。それよりどうだった？」

『一応片っ端から調べてみたが、まぁ何だ・・・結構胡散臭いことばかりが載ってたよ。いま、そっちにデータを送るよ。』

すると、徐に銀時はアルフの容姿を見るや否やこう口にする。

「おいおい、なんだこいつは？髪の毛から耳が生えてるぞ・・・もしかして、キャサリンの同類か？」

『ん？ユーノ、その銀髪は何だい？』

アルフは初めてお目にかかる銀時の姿に訝しげな表情を浮かべる。

「ああ。こちら次元漂流者の坂田銀時さん。現在六課で保護してる身なんだ。」

『ほう。成程ね。』

「銀さん。彼女はフェイトの使い魔でアルフ。無限書庫で僕の手伝いをよくしてくれてたんですよ。」

「ふ～～～ん。ところでお前、ひょっとしてあれか・・・耳から生えてるの、それって猫耳とかそんな系？」

『ふふ、残念。私のは猫なんてもんじゃないさ！こう見えて狼なんだよ！』

誇らしげな様子でそう言葉を発するアルフだが、銀時は真顔でこう言い返す。

「子犬の間違いじゃねぇのか？」

『ち、違うよ！狼！！狼だってば！！』

かなり動揺した様子でそう言い返すアルフだが、飄々とした様子でユーノも面白がって更に便乗してきた。

「その割にはドックフードいっつも食べてるよね？フェイトだってよく言ってるよ。」

『ちょ！あんたもあんたで酷いよ！！！』

「へへ♪それよりもアルフ。データ、データ♪」

『たくもう。ほら、今送ったよ。』

アルフはそう言うと、通信画面を切って調べ上げたデータ全てをユーノの元へと送り届けた。

「お、来た来た。」

送られてきたデータを確認するユーノだったが、銀時は画面に映し出されたとある男の顔写真を見るなり顔色を歪めた。

「おいユーノ・・・こいつは確か・・・！？」

そう、画面に映っていた男の顔写真とは以前銀時が新八たちと一緒に聖王教会でカリムに見せてもらったカトゥーンのものであった。

「はい。聖王教会で騎士カリムが見せてくれた広域次元犯罪者カトゥーン。これはその詳細データという訳です。生い立ちから経歴・

更には趣味に至るまで・・・あらゆる方面に関して。」

「ユーノ。ひょっとしてあの事件のことで、何か引っかかってるのか？」

「ええ。漫画のキャラクターが実体化するなんてことは、今まで担当してきたどのアンゴルモア事件でもなかったですから。それに、仮にカトゥーンがアンゴルモアを手にしていたとしても、どうやってそれを操りこのような事を起こしたのか・・・それを根本から調べる上で先ずは何よりも奴に関するデータが必要だったんですよ。」

「成程ね～～～用意周到なこって。ルパンかお前は？」

「ルパンじゃない、ユーノです。」

「へいへい。で、送られてきたデータにはなんて書いてあるんだ？」

「どうやらカトゥーンとは、幼少の頃よりあることに関する研究に打ち込んでいて、その研究過程の中で実現の為に必要な高いエネルギー開発、早い話がロスト・ロギア関連の危険な研究に手を出していったんです。」

「あることに関する研究？」

「ええ。その内容とは、“漫画のキャラクターの実体化・及び実用法”です。」

「何だと？」

知らされる意外な事実に思わず耳を疑う銀時。

ユーノはその後もデータを見ながら話を続ける。

「カトゥーンは、両親からネグレクトを受け、友達も碌におらず、寂しい人生の中で唯一の趣味で友達だったのが漫画と言うものでした。彼は、人生のほとんどを漫画に没頭しそれに陶酔することで心の苦しみから逃れようとした。そして、何時しか彼は漫画以外のものに心を開かなくなっていった・・・と書いてあります。」

「漫画以外のものに心を開かないね・・・・・・何とも哀れなことだな。」

「ええ。その後彼は歳を重ねることでやがて自分が大好きな漫画のキャラクターを自分の世界に実体化する方法を模索し始めるようになった。あらゆる方面からアプローチをし、様々な実験を繰り返していったが、失敗だけが結果として現れた。だけど彼の漫画への執念は諦めを知らなかった。危険なものだとわかっていながら、彼は異世界で見つかったロスト・ロギアというロスト・ロギアを片っ端から研究・実験を繰り返し・・・――そして今では広域指名手配される次元犯罪者となった。」

「ロスト・ロギアって奴の力がどれほどかは知らねぇが、つくづく救えねぇ野郎だ。自分の孤独と絶望に、関係のねぇ人間まで巻き込むなっつーの！」

「いずれにせよ、早くこいつを捕まえるのに全力を注ぐしかないですね。」

「どうするんだ一体？」

「一先ずアルフから送られてきたデータをまとめて、朝一で隊長達を集めて緊急会議を開くつもりです。銀さん、元の世界に帰る方法は必ず見つけますから、あなた方も今回のこの事件解決のため・・・協力してくれませんか？」

「う～～ん・・・まぁ、俺らはお前には色々と世話になってるし、借りもあるしな・・・俺達で良かったらいつでも協力するぜ。」

「ありがとうございます。銀さん――――――」

ユーノは銀時の言葉にすなおに喜びを感じると、手早くデータをまとめてあげるのであった。

その頃、ユーノほどではないが大量の書類整理に追われていた部隊長のはやては部隊長室で最後のデータをまとめ上げ、大きく伸びをしていた。

「よしと。本日の業務、終了っと！」

と、その時部隊長室の呼び鈴が鳴り響く。

「どうぞ。」

扉が開くと、中に入ってきたんはデータをまとめ上げたばかりのユーノだった。

「はやて。ちょっと話があるんだ。」

「何やユーノくん。そんな神妙な顔して？私に話したいことって言うのは。」

「ああ。実は、この間の事件に関して調査を進めていたんだけど、無限書庫から興味深いデータが見つかった。」

「何やて？ユーノくん、それもうちょっと詳しく聞こうか――――――」

はやては真剣な眼差しでユーノの言葉に耳を傾けると、徐に語られるユーノの話を真摯に聞き始めた。

概ねの話を聞き終えると、はやてはこう尋ね返してきた。

「カトゥーンって・・・カリムが言ってた広域指名手配犯の？」

「ああ。今回の一連の事件、ほぼ間違いなくその男が関わってると言ってもいい筈だよ。多分、アンゴルモアを手にして、その力を使ってあの漫画キャラクターを送り込んできたんだ。それに、前に取り逃がした四人組・・・波長を計測するに、あれは他の漫画キャラとは次元の違う・・・濁りのない成体の漫画キャラだった。」

「でもユーノくん。何でカトゥーンがアンゴルモアでこんなことを・・・大体、目的は何なんやろう？」

「あの男は、自分の幼少時代の孤独を今なお引きずっていて、それが歪み歪んだ結果漫画のキャラクターを実現化させる異常なまでの情熱と技術を持つに至った。そんな男が、あれだけの漫画キャラクターを大量に投入して、人間に戦争を仕掛けるってことは――――――」

「まさか・・・――――！」

はやてが何を危惧したようにそう口にすると、ユーノは徐に自分の推論を口にする。

「恐らく、カトゥーンは“漫画キャラによる人間社会への報復”を狙っている可能性が高い――――――」

その頃、ユーノ達が危惧する謎多き広域次元犯罪者、カトゥーンが潜伏する世界の狭間、つまりは次元空間に浮かぶ城、カトゥーンキャッスル内部を移動していたカトゥーンは周囲にあるビンの中に収められた漫画キャラクターたちを一瞥しながら、中央のラボへと向かっていた。

ラボに到着すると、通信画面に映ってくるテトラカトゥーンの一人、エドワード・エルリックが次のような報告をしてきた。

『明神弥彦（みょうじんやひこ）とピカチュウ。活動を始めました。』

「うん。予てよりこっちの世界に呼び出していた僕の可愛い人形が、漸く本格的に動き出したか。」

『しかし、良いんですか？あいつらはあいつらでかなり勝手な性格ですから・・・下手に動き回られて管理局を刺激しなければいいのですが。それに・・・例のマテリアルのこともありますし・・・」

「心配はないよ。僕はそこまでのことをあの二人に求めてるわけではないから。彼らがどんな行動を起こして、そして管理局や機動六課がどう対応を取るのかじっくりと観察させてもらうよ。あの二人もまた、マテリアルを回収するための貴重で大切な実験対象の一つなんだから――――――」

その明神弥彦とピカチュウと言うのがどんなのかと言うと、明神弥彦は銀時達とよく似た格好をした刃と峰が逆に作られた特殊な刀、逆刃刀（さかばとう）を携え、電気ネズミの愛称で知られるポケットモンスター、縮めてポケモンと呼ばれる存在だ。

彼らは夜の街を徘徊しながら、何かを探し求めて歩きつづけている様子だった。

ピカチュウは弥彦の肩に乗りながら不安げな声で弥彦に声をかける。

「ピカ～～～」

「ああ。もうすぐだよ・・・――――もうすぐ、見つかるはずさ。」

「ピカ・・・」

ピカチュウはそう言うと、そのまま肩に乗りながら嘗ての主人のことを思い返しながら深い眠りへとつき、弥彦はピカチュウのことを気にしながら徐に懐から少し皺の入った写真を一枚取り出し、そこに映った自分の幼馴染の少女を凝視し、顔をゆがめる。

「（・・・燕・・・必ず俺は帰るからよ――――――――）」

弥彦はそう誓いを立てると、写真を仕舞い込み夜の街を歩きつづけていった。

その頃、はやてと話を終えたユーノは一人頭上に浮かぶ星明りを眺めながら物思いに今日の昼間になのはに言われたことを思い返していた。

「・・・――」

〈無理して自分一人で背負い込もうとしたりしないでいいから・・・！もっと・・・私やみんなこと・・・頼っていいから・・・！〉

「・・・やれやれ・・・ほんとになのはは・・・僕には勿体ぐらい、素晴らしい女性だよ。その点と僕と言えば――」

と、自分を卑下しようとするユーノだったが、直後晩翠が具象化し、その後の言葉を遮るかのようにこう言って来た。

「あまり、自分を責めるなと言われなかったか？」

「晩翠。お前まで人の話盗み聞きしてたの？」

「盗み聞きとは失敬だな。堂々と聞いておったわ。」

「尚の事悪いだろう！全く、どいつもこいつも・・・」

「あははは。悔しかったら人に聞かれぬよう努力することだ。」

「く！」

ユーノは晩翠にからかわれ、若干悔しがった様子で顔色を歪めるが、その後不意にユーノは不意に自分の首筋に手を当てる。

晩翠はユーノのその行動を目の当たりにしながらこう尋ねる。

「痛みむのか？」

「大したほどじゃないさ。お前がいつも庇ってくれるおかげで、さほど気にするようものじゃない。だけど、気を抜けないのも確かさ。」

「何故こんなことになってしまったのか――――――何故お前だけが苦しむ必要がある？」

「依り代ではなく、贖罪者として僕は奴らに選ばれてしまったけど・・・僕の事で・・・卍解のことでなのは達に重荷を背負わせるわけにはいかない。」

「・・・相変わらずの意固地な性格だ。お前のそれは一生治らないだろうな。」

「知ったこと。だけど、その所為でなのはが笑わないとなれば、話は別さ。なのはがもう一度昔の僕の笑顔を求めているのなら、僕は変わってみせる。もう二度と・・・あんな辛い顔のなのはを見ないためにも――――――」

「やれるさ、お前なら。」

「ありがとう――――――晩翠。」

変わることを誓ったユーノと、それを陰ながら支える晩翠。

彼らの絆は魂が消えることのない限りずっと強く、誰よりも固く結ばれていくであろう――――――

人は堕ちるところまで堕ちたらどうなるかって？多分それはなってからじゃな

教えて、ユーノ先生！

ユ「今日は桂小太郎さんについてね♪」

その途端、桂小太郎が登場。

桂「とお！と言うわけで、今回は俺自らが俺の凄いところを紹介するぞ。」

銀「どっから来たんだよ、てめぇは？つうか、どうせまた下らないことしかいわねぇだろ？」

桂「何を言っておるのだ貴様は。狂乱の貴公子と言われ、攘夷活動に人生のすべてをなげうってきたこの俺が説明するのだぞ！その説明の中に下らないものなどありはしない。では、時間がないので早速本題に入ろう。俺の名は桂小太郎。革命家をやっている。現在はエリザベスと共に真選組の動きに目を光らせながら言論による革命を試みているが、これが中々に難儀している。基本的に年中忙しいが、夜の８時以降はフリータイムだ。ラーメンよりも蕎麦の方が好きだ。趣味は攘夷活動。座右の銘は日本の夜明けは近いだ。ちなみに最近はまってることは――――――」

ユ・銀「説明がだらだらと長いんじゃ！！！！」

二人は桂の顔面に怒りの鉄拳を加える。

桂「ぐっほ！！！」

堅物くそ真面目キャラ、桂小太郎。

今日も今日で大変な一日を送っているのであった。

魔導師図鑑ハイパー！

ここに隠れジャンプマニアがいた。

そう、ユーノ・スクライアだった。

ユ「いや～～～相変わらずワンピースは凄いよな～～～2億冊なんてなかなかいける数字じゃないよ～～～」

その隣で、銀時もジャンプを読み漁っていた。

銀「そうだな。ナルトも1億冊突破してるし、この分だと次に来るのはＢＬＥＡＣＨか銀魂だろ？」

ユ「僕的には一護さんの活躍が早く1億突破してもらいたいですけど、銀魂と違ってＢＬＥＡＣＨは好みが凄く分かれてますからね。」

銀「まぁな。だけど俺はＢＬＥＡＣＨ好きだぜ。だって卍解とかかっこいいじゃん。つうか空知も何だかんだ言って結構ＢＬＥＡＣＨのパクリ多いだろ？」

すると、その時何処からともなく一護が現れる。

一「よし銀さん！だったら久しぶり火曜いージャンの時のオープニングの時のようにやってみるか？」

銀「お、いいねそれ！おっしゃ！じゃあ早速おらあああ！！！！」

一「のあああああ！！！！」

銀「ふんならばあああああ！！！！」

一「おらあああああああ！！！！」

二人は意味もなく何をしたいのか分からない行動をとり始め、ユーノは一人呆然とその光景を見つめるのであった。

ユ「で、結局二人とも何をしたい訳？」

次回予告

少しずつ動き出した事件の全容。

機動六課に与えられた異世界オークションの警備と護衛。

謎の取引指定ロスト・ロギア、『カオスブック』とは何なのか？

そして、それを狙って再び漫画キャラクターの魔の手が忍び寄る。

沖「次回『ジャンプもいいけど、漫画アクションの漫画もなかなかに馬鹿に出来ない
』」

ジャンプもいいけど、漫画アクションの漫画もなかなかに馬鹿に出来ない

＞ｉ２２６１１―７０９＜

ユーノ・スクライア――――――

翡翠の魔導死神として覚醒、幾多の視線を潜り抜け人間離れした能力を手にすることとなったが、その過程には知るものしか知らない余りに壮絶な過去が隠されていた。

これはそのダイジェストである。

ユーノは一人、身体に繋がれた鎖を引きずりながら、赤色をイメージさせる現実世界とは全く異なる場所で、独り彼は当てもなく何かに抗うかのように歩きつづけていた。

「う・・・!!く・・・くそ・・・!!こんなところで・・・こんなところで・・・!!わあ!」

ユーノは全身の疲労がピークに達すると、思わずその場に倒れこんでしまう。

周囲から漂う瘴気(しょうき)と呼ばれるもの当てられ全身から頭まで何もかもが可笑しくなりそうな状況で、ユーノはそれでも立ち上がろうとしていた。

「・・・く・・・!!なのは・・・一護さん・・・僕は・・・何も護れないまま、ここで終わってしまうのか?いや・・・そんなの絶対にあってたまるか・・・!絶対に・・・僕が二人を・・・みんなを護るんだ・・・!!」

そう決意し、もう一度立ち上がって歩きはじめようとした矢先だった。

〈無駄な足掻きは止めるのがいい。〉

「！」

何処からともなく、ユーノの耳に聞こえてきたのは彼が今最も恐れる存在の声。

声はユーノの耳に届くと、更にユーノの心を乱そうとしてくる。

〈どうせ貴様には何も護れない・・・貴様の護るべきものなど、遠の昔にありはせぬ。〉

すると、ユーノはそんな聞こえてくる声に反論する形でこう言い返す。

「言ってくれじゃないかよ・・・だけどそんなもの、お前なんかに決められてたまるかよ！僕は絶対に諦めない！お前の責苦に打ち勝って・・・僕は帰ってみせる！！」

ユーノはそう言うと、再び前に向かって歩こうとするが声の主は非情な言葉を浴びせ続ける。

〈それが無駄だというのだ。所詮、貴様に何かを護るなどと言うこと自体、出来はせぬ。今まで一度だって大切なものを守り切れたことなどあったか？目の前の人間に迷惑をかけてかけてかけ続けて、それで恩の一つでも返せたか？何も返せてはいない。ただの自責の念と後悔ばかりが残っただろう？貴様は無力だ。いっそ全てを捨てて、楽に我に食われるのが適作・・・〉

と、そう言い終えた直後ユーノの周囲に数十ｍの巨大な体を持った化け物が現れる。

「な！」

ユーノは思わぬ光景に目を疑うが、化け物たちはそんなユーノに向かって各々がこう言って来た。

〈お前に守れるものなんて何もねぇんだ！！〉

〈そうさ！だから俺達に食われちまえよ！！〉

〈魂食わせろ！！！〉

ユーノは化け物の一人に全身を鷲掴みにされると、そのまま口元へと引きずり込まれていく。

「・・・やめろ・・・やめろ・・・やめろ！！！

全身汗だくとなって苦しんでいた。

すると、そんなユーノの事が心配になって身に来た娘のヴィヴィオがユーノの体を揺さぶった。

「ユーノパパ！起きて、ユーノパパってば！！」

「は！」

ユーノはヴィヴィオの声を聞くと、悪夢から覚めベッドから勢いよく起き上がってきた。

「は、は、は、は、は、は・・・ヴィヴィオ・・・！」

「大丈夫、ユーノパパ？汗びっしょりだよ。」

傍らで自分のことを心配そうに見つめる愛娘の姿を見たユーノは、先ほどの出来事が夢であったことに安堵のため息が漏れる。

「あ、ああ・・・大丈夫だよ。単なる寝汗だから。」

心配かけまいと意地を張るユーノだったが、内心はかなり心乱れる夢であったことは間違いなかったのだ。

「そう。あんまり遅いから心配になって見に来たんだよ。随分魘されてたようだけど、何か怖い夢でも見たの？」

「まぁ・・・・だけど、ヴィヴィオが気にするようなものじゃないから。心配しないで。」

無理して笑顔を作って誤魔化すユーノにヴィヴィオはなのはと同じように何処か寂しそうな眼差しで見つめたが、そこは悟られないようにしようと思い平常心を取り繕いながら次のように返した。

「う、うん。分かった・・・だけど一人で苦しまないでよ。パパが一人で苦しんだり悲しむ姿を見たら、なのはママも私も悲しくなっちゃうから。」

「うん・・・分かってるよ・・・ごめんね、ヴィヴィオ。」

ユーノは申し訳なさそうにそう言うと、ヴィヴィオの頭を優しくなでてあげた。

何時もなら満面の笑みを浮かべるヴィヴィオだが、この時のユーノのことが心配で素直に喜ぶことが出来なかった。

それでも、自分も父親に心配かけまいとして今自分が出来る最高の笑顔を向けながら部屋を後にしていった。

「じゃあ・・・朝ごはん出来てるから、早く来てね！」

部屋の中から出て行ったヴィヴィオを取り繕った笑顔で見送ったユーノは徐に右手を顔に翳しながら心の中でこう呟いた。

「（柄にもなく昔の夢を見るとはな――――――）」

ユーノ・スクライアの過去に一体何があったというのか？

その真相はもう少し後になってから明かされることとなる――――

そして、それから間もなくしてとある異世界でまたしても漫画キャラクターによる事件が勃発する。

とある異世界、そこにある貴重な遺失物を保守管理する施設で事件は起こった。

唐突に、施設中の警報が鳴り響き警備員たちは一斉に懐中電灯片手に走り出した。

「何があったんだ!?」

「特別保管庫だ!」

異常が起こったと思われる特別保管庫へと向かった警備員がそこに到着して、中の様子を確かめているとそこに保管されている筈のロスト・ロギアがいつの間にか紛失している事実に驚かされた。

「あ!ロスト・ロギア、『フェイスブック』が!!」

「やられた!!!」

もぬけの殻となった保管庫の中に残されていたのは、そのロスト・ロギアを盗んだと思われるとある大泥棒が残したイラスト入りカードだけであった。

そこにはこう書かれていた。

〈特別保管ロスト・ロギア、“フェイスブック”はいただいたぜ。
ルパン三世〉

「“怪盗ルパン三世”だ！！」

ルパン三世の登場、そして小さなロスト・ロギア強奪事件よりこのアンゴルモア事件は思わぬ方向へと動き出す――――――

その後もルパンは異世界の各地で同様の窃盗を繰り返し、機動六課の方でも彼の悪名高い盗難事件に関する情報は逸早く入ってきており、新聞を見ながら吉良は徐に呟いた。

「また出ましたね。怪盗ルパン三世・・・！」

「これで今月だけで四件目ですよ。漫画キャラクターの中でもまさかルパンまで出てくるとは、思いませんでしたけど・・・」

「次元が出てきてルパンが出てこないのも変だろ？にしても、ルパンがロスト・ロギアに興味があったとは妙な話だ。」

銀時がそう言うと、話を聞いていたユーノは徐にこう言った。

「ルパンがそんなものに興味があるとは思えませんけど。」

「では、ユーノ殿は奴が何のためにロスト・ロギアを？」

「推測するに、ルパンは操り人が探しているそれを送り届けるためにこうした犯行を繰り返しているんですよ。」

すると、銀時は目を細めながら例の男の名前を口にする。

「例のカトゥーンか？」

「ええ。しかし、アンゴルモアを持っている筈の奴が何でまたそれ以外のロスト・ロギアを必要としているのかは甚だ疑問に感じてますけど。」

ユーノがそう言うと、全員も同様の疑問を感じ困惑した表情で腕組みを組んだ。

するとその時、はやてが全員の前に現れ徐に話しかけてきた。

「みんな、ちょうどええとこに居った。実は教会の方からうちに依頼が来た。」

「聖王教会から？」

「何でえそれは？」

「これから説明するさかい、一旦司令室に集まろうか？」

はやてはそう言うと、前線メンバー総勢２８名を司令室へと集め今回の聖王教会からの依頼内容を説明した上で、広域次元犯罪者カトゥーンに関することもユーノと一緒に説明。

全員が真摯な様子で耳を傾ける中、はやては先ほど話したことについておさらいをしていた。

「ほんなら改めて、ここまでの流れと今日の任務のおさらいや。これまで謎やった、漫画キャラクター軍勢の製作者、及び現在次なるアンゴルモアを所持していると思われ、異世界の各地でルパン三世を使い、保管されてるロスト・ロギアを盗み出させているのは――

――――現状ではこの男。」

はやてはそう言うと、カトゥーンに関する情報が掲示された顔写真を映し出す。

「違法研究で広域指名手配されてる次元犯罪者、通称カトゥーンの線を中心に捜査を進めていく。」

「こっちの捜査は、主に僕やフェイト達が中心になって進めるけど、みんなも一応憶えておいて。」

「「「「「はい。」」」」」

ユーノがそう話し終えると、今度はリィンがはやての前に現れカトゥーンの映像を切り替えて今日の任務先の建物の映像を映し出す。

「で、今日これから向かう先はここ。第１８管理世界『アクアビレッジ』に新しく修築されたアクアタワービル・セントラルホール。」

「その？落しとして、会場では大勢のディーラーが集まって骨董品を始めとした美術品オークションが開催される。」

ユーノがそう補足すると、銀時は腕組みをしながら徐にこう言った。

「つまりは、オークション会場の警備と人員警護が俺達の仕事って訳だな？」

「はいです。取引許可の出ているロスト・ロギアがいくつも出品されるので、その反応を捕えて怪盗ルパン三世がやってくる可能性が高い、と言うことで私たちが警備に呼ばれたです。」

話しを聞いていると、土方は鋭い目線を宿しながら徐にこんな事を言って来た。

「この手の大型オークションともなれば、密輸やらその他色んなところで犯罪者どもの裏取引には絶好の隠れ蓑と言える場所だな。」

「流石は真選組の副長。よく分かってらっしゃる。現場には昨夜から既にシスター・シャッハ、アコース査察官他、数名の教会騎士団の騎士が張ってくれてる。」

「機動六課前線はこれより現場に向かってもらう。オークションの開始時刻が１８時の為、フォワードは隊長陣よりも先に外の方を固めてほしい。建物の警備は隊長陣に当ってもらう。」

「「「「「はい」」」」」

クロノの話が終わると、ユーノは銀時を始め真選組の三人にも協力の要請を依頼する。

「銀さんと真選組の三人も、隊長達と一緒に中の警備の方をお願いします。」

「了解だ。真選組の威信にかけて全力で阻止してみせるぞ！」

「ま、偶にはいいかこう言うのも。」

「土方さん。建物の中は当然禁煙でっせ。間違ってもタバコなんて持っていかねぇでっください。」

「う、うるせーなてめぇは！！分かってるよそんな事！！！」

総悟の言葉に過剰に反応した土方は、思わず怒鳴り声をあげた。

全員が一瞬笑みを浮かべると、見ていたシャマルは徐に隊長達に向かって笑顔でこう言って来た。

「じゃあ、ちょっと隊長陣と銀さん達は用意があるから私のとこまで来てね♪」

「あ？用意・・・？」

シャマルの言葉の意味に些か不審げな表情を浮かべる銀時だったが、この意味は直ぐに分かることとなる。

時が過ぎ、隊長陣以外の前線メンバーが先に警護に向かった後、準備を整えたユーノ達隊長陣は第１８管理世界『アクアビレッジ』に建造されたアクアタワービル・セントラルホールへと向かった。

オークション開催を2時間前に控えた会場内は大勢の来客で賑わっていた。

「いらっしゃいませ。ようこそ。」

係員が受付に専念していると、とある男が管理局員の証である証明書を徐に見せてくると、それを見た受け付けは目を見開いた。

「あ！」

受付の目の前に立っていたのは、黒いスーツを見事に着こなすユー

ノ・恋次・銀時の三人のナイスガイな男たちであった。

「こんにちは、機動六課です。」

ユーノ達は受付に事情を説明すると、ある程度会場内を見渡したのち外の方でなのは達が到着するのをじっと待っていた。

銀時はその間に、着慣れないスーツに違和感を感じながら愚痴を零していた。

「たくよ・・・何でこんな俺らがんな堅苦しい格好しないとならない訳？」

「僕だってホントは嫌ですよ。まぁでも、黒いスーツを着る機会なんてものはそうないですから。僕はどちらかと言えば、緑色の方が好きなんで♪」

「そう言えば、授業参観の時も普段着も緑色の服だったからな。それより、なのは達はまだ来ないのかよ？」

「もうすぐ到着しますよ――――――ほら、来ました。」

ユーノがそう言うと、三人の目の前に現れたのは何とも立派な高級車、リムジンである。

運転手が出てきて、後部座席のドアを開くと中から出て来たのはシャマルが天死したドレスに身を包んだ容姿端麗ななのは達三人娘であった。

三人は周りの視線を一身に浴びながら、ハイヒールでレッドカーペ

ットの上に降り立つ。

「よいしょっと。」

「リムジンに乗って移動なんて、何だかアリサちゃんみたいだね。」

「うん。こういうものも悪くないかもね。」

以前なのは達はホテル・アグスタの兼で似たようなことを経験しているが、今回はまた違った状況だったので内心かなり興奮していた。

と、その直後なのはに向かってユーノが紳士的な口調で話しかけてきた。

「お待ちしておりました。高町なのは様。」

「あ！」

なのはは目の前のユーノの姿を見た瞬間、思わず頬を赤らめ体を硬直させる。

ユーノは何時もの和やかな雰囲気とはまた別のそれこどジェントルマンと呼ぶにふさわしい紳士的な態度でなのはの事をエスコートしてきたのだ。

「私が建物の中にご案内いたします。煩わしいとは思いますがどうか、ご容赦を。」

「は、はい――――――お願いいたします♪」

なのはは満面の笑顔でそう返すと、差し出されたユーノの左腕に自分の右腕を絡めて見ていて誰もが羨むような雰囲気を醸し出しながら、レッドカーペットの上を歩いていく。

その様子を窺っていた恋次や銀時、フェイトとはやては思わずこう呟いた。

「け！なのはの前では紳士面こきやがって。」

「ギャップが激しいよなフェレット君は・・・」

「ま、ええやないですか。こう言う二人の光景を見るのも実は楽しみにしてたんですよ私。」

「完全に野次馬じゃねぇかよ。」

「う！！ユーノ・・・・・なのはをエスコートしてる姿が実に羨ましい・・・！！」

「おめぇもおめぇで全然懲りてねぇじゃねぇかよ、たく・・・」

フェイトの発言を聞いて、思わず恋次は呆れながらそう呟いた。

一方その頃、同じように黒いスーツに身を包んだ真選組の三人はオークション会場を見渡しながら色々と打ち合わせをしていた。

「うむ。会場内の警備は流石に厳重だな。」

「一般的なトラブルには十分対応出来そうでっせ。」

「外は前線が固めている。万が一の時の為に、入り口には防災用の非常シャッターもある。ルパンはこれぐらいのセキュリティーなど造作もないと思っているが、そこは俺達真選組の出番だ。」

「近藤さん。一先ずキナ臭い奴見つけたら即職務質問にかけろ。そいつがルパンだったら変装で誤魔化してる可能性が高い。」

「分かった。よし。それじゃあ早速気合入れて警備に当たるぞ！」

真選組は気合を入れ直すと、一度それぞれに分かれて会場内の警備に入っていった。

その頃、銀時と共に会場内を歩いていたユーノはと言うと――――――

「僕たちの出番は本当の非常事態だけですから、それ以外は前線を信じて会場内の警備に集中しましょう。」

「そうだな――――――」

と、銀時がそう口した直後ユーノの耳元にとある男の声が聞こえてきた。

「先生、いらっしゃいましたか。」

「お？」

二人が振り返ると、その男・・・カリム・グラシアの義理の弟で査察官のヴェロッサ・アコースはユーノの元へと駆け寄り、挨拶をしてきた。

「お久しぶりです、先生。」

「アコース査察官。これはどうも。ご無沙汰しています。」

ユーノは久しぶりに会ったヴェロッサに懇切丁寧にお辞儀をする。

「魔導虚事件の時以来ですかね？カリムやシャッハから話は聞いています。色々と大変でしたね。おや、そちらの方は？」

ヴェロッサがそう言うと、ユーノの隣に立っていた銀時がいつもの気だるそうな声色であいさつを済ませてきた。

「どうも、坂田銀時で～す。」

「アコース査察官。彼は次元漂流者の坂田銀時さんです。六課の方で身柄を保護していまして・・・序に今回の事件の捜査にも加わってもらっているんです。」

「そうでしたか。それにしても、声色がクロノ君とよく似ていますね？」

ヴェロッサがふと思ったことを口にすると、銀時は手を振りながら真っ向ら否定する。

「おいおい、止してくれや。あんなクルクル黒河童と一緒にされてたまるかよ。」

すると、そんな銀時の発言を聞いていたクロノ・ハラオウン本人が後ろから血管を浮き上がらせながら声をかけてきた。

「ク・ロ・ノですよ、銀さん！態と間違えないで下さいって何度も言ってるでしょう！」

「何だ。お前もやっぱりいたのか？」

「悪かったな、隊舎にいなくて！！」

ユーノの何気ない発言に更に怒りを募らせるクロノだが、ヴェロッサがそんな二人の間に入って仲裁をする。

「あははは。クロノ君もそう怒らないの。ほらほら、ここは穏便にいこうよ。」

「アコース査察官もそう言ってるんだ。今日ぐらい、喧嘩はなしにしようよ“クロノ提督”。」

「く。そうだな・・・今日ぐらいは喧嘩をしないでおくとしよう、“ユーノアドバイザー”。」

お互いに慇懃無礼な態度で休戦協定を結ぶ二人を見て、銀時はヴェロッサに向かってこう言った。

「あいつら、仲悪いって言う割には結構息合ってるよな？」

「そうでしょう。実はあれはあれで仲良しなんですよこの二人。」

直後、二人はヴェロッサの言葉を聞くなり口を揃えて真っ向から否定する。

「「それは絶対ない（ありません）！」」

「あはは！！ほうら、やっぱり仲良しだ。」

息の合った二人に思わずヴェロッサは笑顔を浮かべる。

「悪友っても悪かねぇか――――――新八。神楽。そっちの方はどうなってるよ？オヴァ。」

銀時は徐にトランシーバーを取出し、外の警備を担当している新八と神楽に連絡を入れる。

『はい。こっちは今んとこ問題なさそうです。僕らは二人ずつに分かれて警護に当たってます。』

『オヴァ。オールグリーン、危険物はありません。万全の警備であります、オヴァ！』

「無意味に無線を取り合う必要はないと思いますけど・・・」

銀時たちのやり取りを聞いていたクロノが横からツッコミを入れると、銀時は更に無線でこう連絡した。

「黒河童。呆れながら突っ込みを入れました、オヴァ。」

「銀さん・・・僕もそろそろ切れてもいいんですよ・・・！！」

クロノは腕を鳴らしながら怒り心頭な様子で銀時に鋭い視線を送ると、無線でクロノの声色を聞いていた新八が状況を読んでこう言って来た。

『じゃ、じゃあ取り敢えず引き続き警護に当たるとしましょう。銀さん達も気をつけてください。』

新八は無線を切ると、大きくため息をつく。

一緒に警備当たっていたギンガが新八の様子を見て話しかけてくる。

「緊張してますか、新八さん？」

「ええ、まあ・・・よく依頼で用人警護って言うのはあるんですけど、ここまで規模が大きいと流石に。」

「そうですよね。でも、前線全員が出て来ていますし、万が一何かあったときでも大丈夫です。新八さんだって、それを乗り越える強さと度胸はお持ちの筈ですよ。」

「はは。ありがとうございます、ギンガさん。さて、頑張って警護しましょうか。」

「はい。」

笑顔でそう言うと、新八はギンガと一緒に警護に当たり始めるが、警備の傍ら新八はふと機動六課の戦力に関して改めて分析をし始める。

「（それにしても――――――今にして思えば、確かに機動六課の戦力は無敵も異常も通り越してどうかしてる気がする。なのはさん達隊長全員がオーバーSランク。副隊長達でもニアSランク。恋次さん達死神メンバーも原作では兵の部類だし、ギンガさん達フォワ

ードメンバー五人も最高クラスのストライカー。そして、何より特質すべきはやはりユーノさんだ。翡翠の魔導死神と呼ばれ、次元世界最強と恐れられるだけの巧みな戦術パターンを兼ね揃え、尋常ならない頭の良さと銀さんや真選組の三人ですら圧倒する剣腕を持っている。この面子が揃っていれば、大概の事なら問題なく対処できるだろう・・・・・しかし、何なんだろう?さっきから感じるこの途方もならない悪寒は――――――)」

新八の悪寒とは一体何なのか?

そして、その悪寒はもうすぐはっきりとしたもので現れることになる。

さて、機動六課の前線が総出で会場内の警備当たっている頃、会場から数キロ離れた先の森の奥から建物の様子を窺うもの達がいた。

目的は定かではないが、何かを探し求めて旅を続ける明神弥彦とピカチュウの二人組だった。

弥彦はピカチュウを肩に乗せながら徐に尋ねる。

「あそこか?」

「ピカ・・・・・」

「お前の探し物はここにはないのだろう?」

寂しげな表情で弥彦の言葉に反応するピカチュウだったが、その直後ピカチュウは何かの気配を感じとり、態度を一変させる。

「ピカ！」

「何？カトゥーンの手下どもが近づいて来てるって・・・？！」

弥彦はピカチュウからそう聞かされると、徐に周囲から感じ取れる気配に身構えした。

その頃、そのカトゥーンの手下でテトラカトゥーンと呼ばれる成体の漫画キャラ、斎藤一は部下たちを引き連れてアクアタワーの外観を見ながら今日も煙草を吹かしていた。

「ふう。あそこだ。」

そんな斎藤の煙草の煙に困惑しながら、特高隊長の一人である中国服に身を包んだ王（ワン）ドラと呼ばれるネコ型ロボットは呆れながらこう呟いてきた。

「全く・・・年がら年中煙草ばかり吸って、灰が真っ黒になりますよ。」

「ほざけ。禁煙をするぐらいなら肺癌にでもなって死ぬ方が本望と言うもの。」

「はいはい。じゃ、私たちは出ますけど、本当にあなたは出ないんですか？」

「気が向いたら、顔ぐらい出してやる。とっと行け。」

王ドラは一度深いため息をつくと、もう一人の特高隊長で悪友のエル・マタドーラと一緒に有象無象とも言えるほどの漫画キャラ軍勢

を率いてアクアタワーの方へと向かった。

漫画キャラ軍勢が会場内に向かっていることは、直ぐに建物の外で警護に当たっていたシャマルにも直ぐに分かった。

指輪型のアームドデバイス、クラールヴィントが突如輝きを見せる。

「！クラールヴィントとのセンサーに反応・・・――――シャーリー！」

「はい――――――来た来た。来ましたよ！」

シャマルからの要請を受け、六課の管制室の方で波形をチャックしていたシャーリー達は周囲から現れる漫画キャラ達の反応を捕える。

「漫画キャラクター陸戦型。気鋭３０！３５！」

「陸戦型第二陣。２０、２５、４０！！いや、もっとです！！」

地下駐車場の方で警備当たっていたスクライア商店メンバーと白鳥はお互いに役割分担をする。

「出てきやがったか。亀、俺達も外に出るぞ！」

「了解。白鳥さんは金ちゃんと上のシスター・シャッハと一緒に南側の奴を潰して。」

「了解である。行くぞ、ゴールデンベアー。」

「承知。」

同じように、彼らとは別の駐車場で警護に当たっていたルキア、吉良の死神部隊二人はライトニングのエリオとキャロ、万事屋の神楽に指示を仰ぐ。

「エリオ、キャロ。二人は一先ずスバル達と合流しろ。ティアナの指揮で防衛ラインの設置をする。私と吉良はヴィータ達の方に回る。」

「「はい！」」

「神楽ちゃんは、同じく前線と一緒に守りを固めるんだ。」

「おお！気合十分ネ！」

全員がそれぞれに行動を開始した直後、シャマルが現場指揮となって前線一同に指示を送る。

「前線各員へ。状況は広域防御線です。ロングアーチ1の総合管制も合わせて、私・・・シャマルが現場指揮を行います。」

「スターズF、了解！」

「ライトニングF、了解！」

「死神部隊、了解！」

「スクライア商店、了解！」

最後に鬼太郎がそう言うと、鬼太郎と一緒に上へと向かっていた浦太郎がシャマルに向かってこう言って来た。

「シャマルさん。現場の状況を確認したいからさ、モニターこっちに回してほしいんだけど？」

「了解。フィッシャーマンに直結します。クラールヴィント、お願いね。」

〈Ｙｅａｒ〉

シャマルはクラールヴィントに軽くキスをすると、騎士甲冑を身に纏い思念通話を入れてきた。

「（みんな、準備はいい？）」

シャマルの言葉を聞くと、ヴォルケンリッターのヴィータやアギトが返事をしてきた。

「いつでも、こっちはオッケイだ！」

「漫画キャラ風情に遅れは取るかってんだ！」

前線が迎撃に向かい始める直前、管制室のシャーリーは出撃するシグナム達のデバイスのロックを解除する。

「デバイス、ロック解除。グラーフアイゼン、レヴァンティン、フィッシャーマン、アックスオーガ、レベル３起動承認。」

「「「「セットアップ！」」」」

四人が一斉に構築を完了させると、それぞれが四方に出現した漫画

キャラクター軍勢の殲滅の為に迎撃へと向かう。

空を駆け抜ける魔力光とルキア達の様子を窺いながら、フォワード五人や神楽と一緒に防衛ラインの設置をしていた新八は何処か顔色が強張っていた。

「いよいよ本格的に戦いが始まるようだね。」

「いくら束になってかかって来たって全部ぶちのめせばいい話ネ！新八、ギンガの前だからっていい格好見せんじゃねぇぞ。」

すると、神楽の思わぬ言葉を耳にした瞬間新八は顔を赤くしながら慌てふためく様子でツッコミを入れてきた。

「え！何でそう言う話なる訳！！別にギンガさんと僕そう言う関係じゃないから！！」

傍でその言葉を聞いていたギンガもティアナたちが唖然とするほど顔を赤くした。

外の方で戦いが始ま等としているその頃、徐々に慌ただしい雰囲気を醸し出してきた会場内の警備を続けていたなのはは別の場所で警備当たっているユーノに念話で尋ねてきた。

「（ユーノ君。主催者さんは何だって？）」

「（外の状況は伝えたけど、お客の避難やオークションの中止は困るから、少し開始時間を遅らせてから様子を見るそうだよ。）」

「（そう・・・）」

さて、迎撃に向かった前線メンバー副隊長組の方はと言うと、目の前に映ってくる数に物を言わせたこの間同様の漫画キャラ軍勢を見下ろしていた。

「ぞろぞろ出てきやがったぜ。」

「僕が細かいのを潰すから、先輩は大型を叩いて。」

「よし！」

鬼太郎はそう言うと、一度地上へと降り立った。

その一方で浦太郎は木の上へと足をつけ、フィッシャーマンに向かって戦闘の合図を促す。

「行くよ、フィッシャーマン。」

〈Ｌｏａｄ　ｃａｒｔｒｉｄｇｅ〉

カートリッジを一発ロードすると、浦太郎はフィッシャーマンの先端に網目状に張り巡らされた水流魔法を発動させ、それを向かってくる漫画キャラ軍勢へと放り投げた。

「ウォーターネットサーフィン！」

放り投げた網目状の水流魔法は漫画軍勢を捕獲すると、絡め取られた敵は身動きが出来ず、その瞬間起こった水の流れによって押し流され元の紙切れへと戻ってしまった。

浦太郎が敵を造作もなく一掃する中、鬼太郎も烈火を解放して大型の漫画キャラの殲滅に取り掛かる。

「行くぜ行くぜ行くぜ！」

烈火の刀身に煌々と燃え上がる炎を点らせた鬼太郎は、その瞬間大型の漫画キャラを灼熱の炎で焼き尽くす。

「俺の必殺技・・・パート５！」

炎に焼かれ、爆発を伴うと漫画キャラは紙切れとなって目の前から姿を消していく。

二人が順調に敵を倒していく中、四方に分かれたシグナム達の方も一騎当千の実力で敵戦力を圧倒していく。

「初の舞・月白！」

「面を上げろ、侘助！」

吉良は侘助を解放すると、徐に崖に刀身をぶつける。

「つらあああああ！！！」

すると、重さが倍になった崖は足場を崩して一気に崩落、向かってきた漫画キャラを次々に圧し潰していった。

「行くぞ、アイゼン！」

〈Ｙｅａｈ〉

ヴィータはいくつもの鉄球を出現させ、一気にそれを飛ばしていった。

「ぶち抜け！！！」

撃った鉄球が見事に漫画キャラを貫くと、漫画キャラは爆発を起こして紙切れとなる。

金太郎と白鳥、シャッハの方も漫画キャラを相手に奮戦していた。

「ダイナミッククロス！」

「琴線斬、鼓瓜田！」

「烈風一陣！」

三人の怒涛の攻撃が漫画キャラを一掃し、敵の数が大幅に減少。

「紫電一閃！」

「スターレンゲホイル！！」

シグナムとアギトも次々現れる漫画キャラを前にしても怯む事すらなく得意の炎熱魔法で灰と化していく。

そして、忘れてはならないユーノが尊敬する鉄壁の防御で知られる盾の守護獣ザフィーラもまた漫画キャラの攻撃を受け止めながら防御に徹していた。

「ここは通さん！ぬらあああああ！！！！！」

ザフィーラは雄たけびを上げながら地面の下より鋼の軛を出現させ、漫画キャラ達の動きを封じた上で体を串刺しにし、殲滅を行っていく。

その前線の様子をモニターを見ていたフォワード五人と新八、神楽の二人は圧倒的な戦力差に素直に驚嘆していた。

「凄い！流石は機動六課の精鋭ですね！」

「はい。ほんと、ここの部隊はある意味常識はずれですね。」

新八の言葉を聞いて、そう返したギンガも今改めて自分がどれほどまでに凄い部隊に出向しているのかと言うことに内心かなり驚いていた。

一方で各地で爆発が起こり、黒い煙が上がる光景を離れた森の奥で見守っていた弥彦とピカチュウはと言うと――――――

「ピカ・・・」

不安げな声を上げて弥彦にそう話しかけるピカチュウ。

弥彦もまた、戦闘の被害を受けるのはあまり得策ではないと判断しこの場から少し遠ざかろうとしていた。

「あんましこの辺にいると、巻き添えをくっちまいそうだな。少し離れたところで見守るとする・・・――――」

と、その直後・・・弥彦の耳にあの男の声が聞こえてきた。

「ふん。暫く顔を見ないと思っていたが、ネズミを連れて一人旅か？」

弥彦が驚きながら後ろを振り返ってみると、そこに立っていたのは弥彦と同じ漫画出身で今回の戦闘を指揮しているテトラカトゥーン、斎藤一だった。

弥彦は不敵な笑みで自分を見つめる斎藤を凝視しながら、噛み付くような視線でこう言って来た。

「・・・斎藤・・・何でお前がここにいる？」

「仕事だよ。このオークションにカトゥーンが探してるロスト・ロギアが潜り込んでいるとの情報があってな、ルパンの奴が先に駆けつけているとは思うが何分あいつは計画性に欠ける。だから、俺達が奴の仕事をスムーズにしてあげようと、こうして派手に陽動を仕掛けているってことだ。」

斎藤がそう言いながら徐に近づいてくると、警戒心むき出しのピカチュウが地面に降り立ち、威嚇のつもりでほっぺに電気を発生させる。

「ピカ・・・！！」

「止せ、ピカチュウ。こいつに喧嘩売っても碌なことにならねぇ。怪我するのがオチだ。」

弥彦は冷静にピカチュウにそう言うと、ピカチュウはしぶしぶその

言葉に納得し、斎藤本人は煙草を吹かしながら弥彦の意外な言動に驚いていた。

「ほう・・・どうなら昔に比べれば、随分頭の方も賢くなったみたいだな。」

「頭だけじゃねぇさ。」

「？」

弥彦はそう言うと、腰に携えていた逆刃刀に手をかけながら鋭い目線でこう言って来た。

「斎藤・・・いつまでも好き勝手な事言っていられると思ったら大間違えだぜ。剣心から受け継いだこの逆刃刀（さかばとう）・真打（しんうち）で何時かお前のその減らず口を利けなくしてやる。」

弥彦の言葉を聞き、思わず口を黙らせる斎藤だったが、暫くすると鼻で笑い煙草を地面に捨てて足の下で火を消した。

「ふん。成程・・・それはそれで楽しみにしてるぜ。」

斎藤は弥彦と話を終えると、その場を後に二人の前から姿を消していった。

ピカチュウは斎藤が居なくなると、心配そうに弥彦に向かって声をかける。

「ピカ～～」

「大丈夫だ。何も心配することはねぇさ。さ、急ぐぜ。」

弥彦はそう言うと、ピカチュウを連れて被害を受けないようにその場から離れていった。

その頃、会場内で警備を続けていたユーノ達隊長陣であったが、不意にユーノがなのはとの念話でこんな事を言って来た。

「（しかし、それにしても一つ気がかりなことがあるんだよね？）」

「（気がかりって・・・何が？）」

「（うん。これまでルパンが盗み出したロスト・ロギアに関して、データを見直してみたんだけど・・・どうも妙なんだ。盗まれた４つの物全てが書物・・・本ばっかりなんだよ。）」

「（本？）」

「（最初の一軒目に盗まれた『ハートブック』。その次の『リムズブック（四肢のこと）』。そして、『ボディーブック』、『フェイスブック』と立て続けに体に関する名前の本ばかりを狙ってルパンは盗みにかかっている。）」

「（確かに、偶然にしてはちょっと出来過ぎてるね・・・）」

「（これらの本の名前からして、恐らく体の部位に合わせて力を発揮するロスト・ロギアなんだろうとは思うが、カトゥーンはこんなものを盗ませて一体何を――――――）」

ユーノがカトゥーンとルパンの狙いに疑問を募らせる中、ふとなの

はは今日のオークションの出品物に関して徐に訪ねてきた。

「（ユーノ君。ちょっと聞くけど、今回のオークションの品物にそれっぽい本のロスト・ロギアとかはあるの？）」

「（うん。一応カタログはすべて見てみたからね。そしたら、『カオスブック』と呼ばれる取引指定のロスト・ロギアが含まれていた。）」

「（そっか。）」

「（なのは。ルパンの事だからきっとこの会場内に既に潜り込んでいると思う。僕はこれから銀さん達と一緒にルパンの捜索に当たる。なのは達もそれらしき人を見付けたらすぐに連絡して。）」

「（了解。気を付けてね。）」

二人は念話を切り終えると、ルパン捜索に取り掛かるために会場内を移動し始める。

丁度その頃、前線によって次々に圧倒されていく自分たちが送り込んだ漫画キャラクター軍勢を目の当たりにしながら、特高隊長王ドラとエル・マタドーラは深いため息をついていた。

「王（ワン）ドラ。このままじゃ五分もしないうちにあいつら全滅しちまうぜ。どうすんだよオイ？」

「弱りましたね。やはりミッドチルダ産の漫画ではイマイチ画力と強さに欠けますね。やはり、地球産・・・それも日本の漫画が一番ですかね。」

王ドラはそう言うと、徐に服の中に色んなものが収容できる四次元袖に仕舞い込んでいたあるものを取出す。

横でそれを見ていたエル・マタドーラはその瞬間、顔を引きつって驚いた。

「な！お前・・・まさかそれ使う気じゃ・・・！？」

驚きながらエル・マタドーラがそう言うと、王ドラは悪意に満ちた笑みでこう言って来た。

「うししし。人間たちに恐怖と絶望と言うものを味あわせるにはもってこいの物ですよ・・・と言うわけで・・・」

王ドラは更に四次元袖の中を漁ると、徐に奇妙な形の懐中電灯を取出し某ネコ型ロボットのように名前を口にした。

「『二次元実体化灯（にじげんじったいかとう）』！で、実体化しちゃって下さい。」

「うわぁ～～～お前って何時からそんな陰湿になったんだよ～～～」

王ドラは顔を引きつるエル・マタドーラを余所に、取り出した懐中電灯の光を最初に取り出したバイオハザートと書かれたゲームソフトのラベルに当てると、当てられたバイオハザートのラベルから次々に実体化したゲーム内のゾンビが無数に出現してきた。

その不測の事態をいち早く感じ取ったキャロは思わずはっとして驚いた。

「！」

「ん？キャロ・・・どうしたの？」

「近くで、誰かが召喚を使ってる。」

キャロがそう口にすると、現場指揮に当たっていたシャマルや六課のシャーリーも同様の藩王を確認した。

『クラールヴィントのセンサーにも反応。だけど、この反応って一体・・・！』

「な、なにこれ・・・！数が多すぎ・・・！！」

シャーリー達はあまりの数の多さに思わずそう口にする。

そして、大量のゾンビをゲーム内から出現させた王ドラはゾンビたちを従えるが、その一方でエル・マタドーラは目の前の光景に思わず叫び声をあげてしまう。

「あああああ！！！！やっぱ俺ダメ！！！！」

王ドラの背中に隠れて全身を震え上がらせるエル・マタドーラに王ドラは呆れかえってしまう。

「だらしないですね。確かに見た目はちょっとあれですが、慣れればどうってことありませんって。」

「慣れる慣れないの問題じゃねぇよ！！気持ち悪いんだよ！！」

「全く、エル・マタドーラは腰抜けですね。ようし、いい子ですよ。あなた達に命令を下さします。第一陣と二陣がもうちょっとで陥落しそうなので、今すぐ援軍として出動。邪魔な魔導師を一人残らず埋葬してあげましょう――――――」

悪意に満ちた笑顔で王ドラがそう言うと、ゾンビどもは一斉にその場から退散し、陥落寸前の漫画キャラ軍勢に向かって走り出していった。

さて、そんなことなど露知らぬ前線の方はと言うと、残りわずかとなったワンがキャラにとどめの一撃を加えようとしていた。

「これで、終わり――――――！」

と、その瞬間鬼太郎の目の前に突如として例のゾンビが現れる。

「何だ!?こいつら・・・！」

シグナムは現れたゾンビに向かって剣を振りかざし、斬りかかろうとする。

「はあああ!!」

すると、ゾンビは徐に近くにいた漫画キャラの一体に憑りつき体のコントロールを奪うとシグナムの太刀筋を軽く受け止めた。

「これは・・・！」

驚きを隠せないシグナム。

ヴィータや他のメンバーもそれぞれの攻撃でゾンビに向かって攻撃を仕掛ける。

「でらあああ！！！」

「「「はあああああ！！！」」」

しかし、ゾンビは攻撃に当たる直前で漫画キャラに憑依し、その攻撃を躱した。

「憑りつきやがった！」

「こいつら・・・ひょっとして寄生型のゾンビか！？」

「ええ！！！バイオハザートの奴まで出てくるの！！」

「明らかに動きがよくなっている・・・先ほどとは段違いだ・・・！」

『それが、さっきの召喚師の術？！』

「みんな、気を付けて！どんな攻撃をしてくるか分からないわ！」

シャマルが全員にそう言うと、シグナムは合流したルキア達に向かって指示を仰いだ。

「朽木、吉良。二人はヴィータと共にラインまで下がれ。向こうに術者がいるならば、前線の方に回り込まれる可能性がある。ここは私達で食い止める。」

「はい。」

「分かりました。」

「おうよ！」

三人はシグナムの指示を聞き入れると、急いで防衛ラインのフォワード達の元へと急ぎ、シグナム・アギト・シャッハ・金太郎・鬼太郎・浦太郎・白鳥の七人はゾンビ漫画キャラ達と戦闘を繰り広げようとしていた。

「（ザフィーラ、シグナム達と合流して。）」

「（心得た。）」

シャマルは急いでザフィーラを呼び戻して、シグナム達の元へ向かわせた。

そんな前線の様子を離れた場所で見守っていた斎藤はと言うと、不敵な笑みを浮かべながらあることを思いつき、それを実行に移す。

「ふむ・・・・・ゾンビを召喚し、それを憑りつかせるとは・・・王ドラもなかなかに陰湿極まりないぜ。よし、俺からも一つあいつらに餞別と行くか。」

斎藤は指を軽く鳴らすと、漫画キャラに憑りついたゾンビたちを無差別に選出して防衛ランを張っているスバル達の元へと転送した。

「遠隔召喚、来ます！」

キャロがそう口にすると、斎藤が送り込んできた漫画ゾンビが空間の裂け目から次々に出現してきた。

「召喚魔方陣もなしに、異空間から現れた！」

「しかもあれって・・・ひょっとしてぞぞぞぞぞゾンビ！！！！」

間近で見るゾンビに思わずこえを震え上がらせるスバルに、ティアナが冷静に喝を入れる。

「ビビってる暇ないわよ、スバル。」

「そうネ！ゾンビだろうが何だろうが私たちの手で捻りつぶすネ！！」

「迎撃行くわよ、みんな！」

「はい！」

新八は返事をすると、徐に握っていた刀に目を落としながら心の中で次の様な決意をする。

「（今ここで僕達が何とかしないと、銀さん達に負担をかけることになる。会場内には一歩たりとも侵入させたりは・・・しない！）」

今ここに、フォワードメンバー七人による漫画ゾンビとの熾烈な戦いが切って落とされようとしていた。

そんな慌ただしい様子の外の状況を機にかけながら、会場内に潜入していると思われるルパン三世の捜索を続けていた真選組を除いた

ユーノ達男性陣は一度その場に集まった。

「外の方は、随分騒がしくなってきてやがるな。」

「敵も敵なりに本気って訳ですかね・・・――」

「しかし、ユーノ。この広い会場内でルパンを探すって言っても、一体どうやって？」

すると、少し考え込んだ後にクロノがヴェロッサに向かってこう言って来た。

「ロッサ。君の能力で何とかならないのか？」

ヴェロッサの能力、無限の猟犬（ウンエントリヒ・ヤークト）はやてと同じ古代ベルカの希少なレアスキルであり、査察官としての仕事にはもってこいのものとなっている。

「そうしたいのは山々だけど、ルパンに関するデータが少ない以上、僕もそう簡単に特定することは難しいよ。それに、会場内は知っての通り魔法を行使することは禁じられてる。下手に使えば、即シャッハのお仕置きが待ってるよ。」

「あはは・・・な、成程・・・」

ユーノはヴェロッサの言葉を聞くと思わず怒り心頭なシャッハの事を容易に想像し、苦笑いを浮かべる。

「おい、真選組。何か手がかりは見つかったのか？」

銀時が無線で真選組の三人に連絡をつけると、沖田が反応してきた。

『お・・・ちょうどいい時に連絡してきましたぜ、旦那。実は今それらしき人影を見たとの情報が入りやした。真っ直ぐトイレの方に向かったのことです。』

「よし、急ごう。」

ユーノ達は真選組の話を聞き終えると、急いで会場内にあるトイレの方へと走り出した。

こうしている間にも時間は刻々と過ぎていき、セントラルホール全7会場同時に開かれている骨董品オークションは盛り上がりを見せていた。

「２０万グランが出ました。」

バイヤーたちが札を上げて欲しい品物を高値で落札しようとしている中、会場内に案の定忍び込んでいた天下の大泥棒ルパン三世はトイレから出てくると変装を済ませて自分が目指す会場へと歩き出した。

「ぬふふふ・・・さて・・・こっちも仕事と行きますかな・・・」

ルパンが堂々とその会場に足を踏み入れると、ちょうど品物の落札が終わったところであった。

「３０万グランにて落札です！」

そして、そんなルパンとは一足違いにトイレの方に向かっていたユ

ーノ達はと言うと、腕組みをしながら待っていた近藤たちと合流を果たす。

「お！万事屋、ユーノ先生！こっちだ。」

「ルパンを見かけたという人は？」

「ああ。ちょっとこいつを見てみろ。」

土方はそう言うので、ユーノ達五人がトイレの中を覗いてみると、そこにいたのは驚くべきものだった。

「「「「な！」」」」

「どうやら、一足違いだったみたいだね。既にやられちゃってる。」

ヴェロッサがそう口にしたように、ルパンを見かけた局員は既にルパンによって呆気なく気絶させられており、口にはルパンが残した名前の書いたカードが張ってあった。

「く！直ぐに会場に向かいましょう！」

ユーノ達はなのは達にも連絡入れ、ルパンが向かったとされる会場へと急行する。

さて、ルパンが向かった会場の方ではユーノが警戒していたカオスブックの競売が始まろうとしていた。

「では、次の品はカタログナンバー２７番・・・・・ん！？ちょっと！」

進行役が競売を始めようとしたが、直後あまりに場に似合わないような品物に目を疑い、一度助手を呼び止めた。

「おい、何でこのちんけな品が？ガレージセールじゃないんだぞ！？」

「しかし、ちゃんとカタログに載ってますし。」

「全く。早く目玉に行きたいのにのう・・・・・・では、カタログナンバー２７番。取引指定ロスト・ロギア『カオスブック』です。先ず、１万から始めます。１万グランないか、１万グラン・・・・・・」

進行役がそう言っても、誰一人この古びた余りに不釣り合いな品物に札を上げる者はいなかった。

「いる筈ねぇよ。」

助手も呆れかえりながら会場内を見渡す。

「１万ないか・・・？」

と、その直後一人のジェントルマンが徐に札を上げたが、そこに書かれていたのはその三十倍の金額であった。

これには会場内の人間も騒然とし、進行役と助手の二人も目を見開いた。

「ええ！３０万！！」

すると、ジェントルマンが札を上げるや否や電話がかかって来、受話器を取った助手が話を聞いた瞬間、思わず声を上げて驚いた。

「えええ!!よ、４０万!!」

「何!!」

会場内はこの予想外の出来事に大いに騒然とし、その後もこの謎のジャントルマンと電話の者との競り合いが激化していくのであった。

その頃、潜入したルパンを追って捜索範囲を広げていたユーノ達はなのは達と合流を果たすと、階段を上がったりしながら走り続けていた。

「くそ・・・どの会場に行きやがった?」

「何でオークションの開催が7ホール全部で行われてんだよ!?」

「つべこべ言ってる暇ねぇぞ。次はこっちだ!」

土方はそう言うと、ユーノ・銀時・恋次・ヴェロッサ・真選組の二人を引き連れてなのは達とは分かれて別の会場へと向かった。

その間に、カオスブックの競売は益々ヒートアップを見せ、最初に３０万グランで落札しようとしてきたジェントルマンは更に金額を釣り上げる。

「７０万!!」

「８、８０万グラン！」

進行役は電話の者も負けじと根を釣り上げていくことに興奮を覚えていた。

ユーノ達はそんなカオスブックの競売が行われている会場内を目指して、エレベーターで移動を開始していた。

「先生。先生の推測ではルパンはカオスブックと呼ばれるロスト・ロギアの競売に参加している可能性が高いと言うことですが、その競売がたった今始まったばかりだそうです。」

「だとしたら、必ずその会場内に潜り込んでいるはずですよ・・・ルパンはね。」

そして、ヒートアップを見せたカオスブックの競売はついにクライマックスを迎えようとしていた。

「９、９０万！！」

ジャントルマンが９０万の札を上げるや否や、オークションを取り仕切る支配人が助手に向かって陰から指示を仰ぎ、助手は進行役に耳打ちをする。

「あ、あの！早く切り上げろと、支配人が・・・！」

「わ、分かった・・・！」

そして、その直後その会場内に到着したユーノ達は扉を開けると、暗い会場内を見渡した。

「くそ・・・どこにいやがるんだ一体・・・」

「お。あいつは・・・――――」

と、その時恋次がふと目の前に映ってくる一人だけ札を上げるジェントルマンに不信感を覚え、それを見ていた総悟も眉間に皺を寄せる。

「近藤さん。俺は奴の臭いが他とは違う気がしますぜ。」

「トシ。頼む。」

「ああ。」

総悟の言葉を聞き、近藤はすぐに土方に様子を見に行かせた。

そして、その直後土方が近づいて来ていることを知らないジェントルマンはこの場で最高額の１００万グランの札を上げ、誰もがその金額に目をやった。

「じぇ、ジェントルマンが１００万グラン！！それでは、ナンバー２７の本は１００万・・・！！」

と、小槌を持って落札を結成しようとした直後助手が耳打ちをし、意外な事を口にしてきた。

「１００万飛んで、１グランにて電話のジェントルマンに決定です。」

その言葉を聞くや否や、会場にいたジェントルマンは立ち上がり猛抗議をしてきた。

「それはないだろう！私はまだ競りを止めておらんぞ！」

「申し訳ありません、ジェントルマン。後のスケジュールが押しておりまして。」

「後も先もあるか！兎に角私はその本が！！」

と、更に抗議の言葉を口にしようとした瞬間、ジャントルマンの右腕に土方の手錠がかかり、ジェントルマンは大いに驚いた。

「！」

「下手な芝居は止せよ。んな変装なんかしてねぇでさっさと本物の面出しやがれ！！猿まね野郎！！」

土方は鋭い視線を浴びせながら、徐にジェントルマンの頭を引っ張る。

「いててて！！！！」

すると、土方が顔を引っ張るとジェントルマンの変装が解けてルパン三世の素顔が暴露させれる。

「ぬはははは。どうして分っちゃったのかな、俺の変装？！何処の誰かは知らないが、いい勘してるぜ・・・だけど、俺を捕まえようなんざとっつあん以外の人間にはちぃと無理な話だぜ。」

「あ？」

ルパンはそう言うと、徐にゴーグルを着用し、呆然とする土方が手に持っていた偽りの顔を見てみると、顔は仕掛けによって下の方から着火し、思わず土方は上に放り投げた。

「のあああああああ！！！！！」

その瞬間、顔は爆発を起こすや否や会場内に催涙ガスをまき散らし、辺りが何も見えなくなる。

「げっほ！！げっほ！！くそ、催涙ガスだ！！」

「これじゃ何も見えねぇ！！」

ユーノ達は思わず涙を流しながらむせ返り、土方は煙で何も見えなくなった周囲を見渡しながら、口を押えてルパンの影を追っていく。

「あの野郎！！ふざけた真似しやがって・・・！！出てきやがれルパン！！大人しくお縄を頂戴しやがれ！！」

すると、その時土方はルパンと思わしき影を見付ける。

「ルパン！！！何！？」

だが、煙が晴れた先に映っていたのはルパンなのではなくルパンのカードを口に張られた普通の警備員の姿であった。

「げ！」

思わず顔を引きつる土方だが、その直後会場内を見渡してみると目の前に広がってきたのは来客全てがルパンの顔となった異様な光景だった。

「ど、どうなってるんだよこりゃ・・・いたるところルパンだらけじゃねぇか・・・!?」

と、その時進行役の叫び声が聞こえた。

「あああああ!!!!!ほ、本が!!!!!」

進行役は先ほどまであったはずの本がいつの間にかルパンによって盗まれてしまっていることに大いに驚いた。

「しまった!!逃がすか、追うぞ!!」

土方がそう言うと、ユーノ・恋次・銀時の三人はそんな土方に向かって後ろから勢いよくけりを入れてきた。

「「「てめぇが逃がしたんだろうが!!」」」

「ぐっほ!!」

土方が三人の仕打ちを受けている隙に、警備員に変装したルパンは上手いこと敵の眼を欺くと、独特の笑いを浮かべる。

「ぬふふふ。」

そして、地下駐車場に止めてある自分の車に向かって奪ったカオスブック片手に上機嫌な様子で歩いていた。

「あ、そうだ。失業したらハリウッドに行って特殊メイクアーティストにでもなってオスカーでも狙ってみようかな♪」

と、その時。

突如ルパンのおでこに前方から赤外線照準ポインターが当てられる。

「ん？」

不審に思うルパンだったが、そんなルパンに向かって前方から足音が聞こえてきた。

「誰だ？」

「その本をこちらに渡して貰おうか？」

「ボロ雑巾みたいに汚ねぇ糞の役にも立たない古びた本だぜ。」

「そんなもの、天下のルパン三世様が欲しがってるのは・・・何故かな？」

そう言いながらルパンの前に現れたのは、青いトリガー銃片手に小銃を合わせ続ける２０歳前後の青年だった。

「いや悪いけどさ。ほんとに価値ねぇぜ。俺はな・・・あるお姐ちゃんのハートをものにしたくて欲しかっただけなんだよ。そう言う契約だったものでよ。」

「そんな手に僕が騙されるとでも思っているのかい？」

青年とルパンはお互いに譲れない様子で言葉を交わし、いがみ合いを続けるが不意にルパンが折れた様子でこう言って来た。

「とは言っても、命あっての物種だよな。」

「そう言うことだ。」

「ほれ。」

ルパンはそう言うと、徐に地面の下に奪ったカオスブックを置き、青年はそれを手に取ろうと照準をルパンから外したその瞬間だった。

「なんてな！」

「！」

ルパンは咄嗟に靴底に仕掛けられていたジェットエンジンを添加させて一度手放したカオスブックを再び手に取り、青年の前から走り出し逃走する。

「まだまだ詰めが甘いようだな。あ～ばよ！」

「く！僕のお宝、絶対に逃がさないよ。」

青年は逃げていくルパンを追ってその場から走り出していく。

そんなやり取りが起こっているその頃、激化するゾンビ漫画キャラとの熾烈な争いを観察していた王ドラとエル・マタドーラも自ら進んで出陣しようとしていた。

「さて、いい感じにあっちも苦戦してきましたね。」

「そうだな。よし、いよいよ俺達も出撃と行こうぜ。」

「はい。うししし・・・見ていてくださいよ、哀れな魔導師達・・・うししし！！」

エル・マタドーラは相も変わらずこの不気味な笑みを浮かべる王ドラに呆然としていた。

「お前・・・ホント性格歪んじまったなよな・・・」

さて、防衛ラインを張って漫画ゾンビと激闘を繰り広げているスバル達フォワードメンバーはと言うと――――――

「わちょおおおお！！！！！」

「でらあああああ！！！！！」

「シュート！！」

神楽やエリオ、ティアナがそれぞれの得意技で漫画ゾンビを相手に奮戦するも、漫画ゾンビには全く効果がなかった。

「く！攻撃が全く効いてない！」

「ゾンビだから不死身って訳？そんな理由で、納得なんてしないわよ！」

すると、今度はスバルとギンガのツートップがウィングロードで走り抜けながら漫画ゾンビに攻撃を仕掛ける。

「うりゃあああああ！！！」

「はあああああ！！！」

漫画ゾンビは二人の攻撃を食らうと、ダメージは負わないもののその場から勢いよく後ろへと吹っ飛んだ。

と、その直後ギンガの背後に空間の裂け目から漫画ゾンビが一体現れる。

「！ギンガさん！」

「は！」

漫画ゾンビは隙を突いてギンガの背後から牙をむいて襲い掛かってくる。

「あ、危ない！！」

新八はいても経ってもいられず、ギンガを護ろうと前に出てきて漫画ゾンビの鋭い爪に夜攻撃を全身で受けてしまった。

「ぐっは！！」

「「「「あ！」」」」

「新八！」

「新八さん！！」

新八は全身から血を吹き出してその場に倒れると、出血箇所を抑えながら多量の汗をかき始めた。

「ぐっほ！！」

ギンガやスバル達は直ぐに負傷した新八の元に駆け寄った。

「新八さん、しっかり！！新八さん！！」

神楽は持っていたトランシーバーで銀時にこのことを連絡する。

「銀ちゃん、緊急事態発生ネ！新八がギンガを庇って重傷を負ったネ！」

神楽からの知らせを受けた途端、銀時やユーノ達は思わず顔色を歪めた。

「何だと！？あいつ・・・無茶しやがって・・・！」

「新八君と前線の様子が気になる。俺達も合流する方がよさそうだ。」

「分かりました。ユーノ、もしもの為だ。近藤さん達と一緒に行ってくれ。」

「ああ。」

ユーノはクロノの指示を聞き入れ、銀時・近藤・恋次を引き連れて新八の元へと急いだ。

「よし。僕達は僕達で白黒つけましょう。」

「ああ。何が何でもルパンの奴をとっ捕まえてやらあ！」

屈辱的な失敗をした土方はルパンに対する怒りを露わにしながら、クロノ・ヴェロッサ・総悟・なのは・フェイトを連れてルパンの元へと急いだ。

果たして、彼らはルパンによって盗まれたものを取り返すことが出来るのであろうか？

そして、新八たちの運命はいかに！？

ジャンプもいいけど、漫画アクションの漫画もなかなかに馬鹿に出来ない（後書）

教えて、ユーノ先生！

ユ「今日はルパン三世についてだ♪」

ユ「１９６７年『漫画アクション』８月１０日号（創刊号）から１９６９年５月２２日号まで連載され全９４話あるＭｏｒｔ　Ｄｒｕｃｋｅｒ（ｅｎ：Ｍｏｒｔ　Ｄｒｕｃｋｅｒ）の影響を色濃く残す、ひょろりとした線で描かれる長身の登場人物。最後の最後まで読者の裏をかくストーリー展開（例外あり）が見どころだ。」

ユ「本作はナンセンス、コメディー、スラップスティックの要素を多分に含んだアクション漫画で、主人公・ルパン三世は、モーリス・ルブランの小説『怪盗ルパン』に着想を得て造形された。物語は、彼の悪漢としての活動を中心に描かれる。」

ル「ぬふふ・・・次元は呆気なくやられちまったが、俺様はそう簡単にはいかねぇぜ。なぁところでよ・・・あの変な兄ちゃんは何もんだよ一体？」

ユ「ああ・・・あれは次回で正体が判明しますから、少し待っててください。」

ル「何だよ勿体つけやがって・・・まぁいいさ。その間に俺が不二子ちゃんとパフパフしちゃってるもんね！！」

ふしだらな事を一人考えるルパンを見ながら、ユーノはなのはと一緒にこんなこgとを話していた。

ユ「泥棒としては一流だけど、私生活とかに関しては全くもって駄目だよねあの人・・・」

な「と言うか、ルパンが出て来たってことはまさか五右衛門さんも出てくるのかな？」

一「おう。今度の台本に五右衛門の台詞があったぜ。シグナムと対戦するそうだ。」

ユ「シグナムさん、斬鉄剣に勝てるのかな？」

な「どうだろうね？」

一「いずれにしろ、次回も見逃せないぜ！」

魔導師図鑑ハイパー！

警備の最中、ユーノとアコース査察官はこんな話をしていた。

ヴェ「あ、そうだ先生。今度クロノ君も誘って食事でも行きませんか？行きつけのレストランを紹介します。」

ユ「嬉しいですね。そう言えば、この三人で食事と言うのも随分懐かしく思えます。」

ヴェ「先生は日頃、はやて達の方で頑張っていますし、クロノ君もクロノ君で忙しい身ですから、仕方ありません。」

ク「その点で言えば君は相も変わらずサボってばかりだそうじゃな

いか？」

ヴェ「失敬だな。こう見えても、仕事はきっちりしてるつもりさ。」

ユ「そうだぞ、クロノ。アコース査察官はお前のように普段尻に敷かれる典型的な甚振りキャラとは次元を異にしている。軽はずみな発言は控えろ。」

ク「おい・・・今さり気に僕に喧嘩売ったよな・・・！！」

クロノ、血管を浮き上がらせてユーノに殺意をむき出しにする。

それを見て、慌てた様子で宥めようとするアコース査察官だった。

次回予告

ルパンＶＳ謎の青年　ＶＳ機動六課隊長陣

王ドラ＆エル・マタドーラＶＳヴィータ・ルキア・吉良

前線メンバーＶＳ漫画ゾンビ

三つ巴の壮絶な争いが繰り広げられる。

ユ「次回『煙草の吸殻はその辺に放り投げないで自分で持ち帰ろう』」

煙草の吸殻はその辺に放り投げないで自分で持ち帰ろう（前書き）

ホテルの会場警備と人員警護に呼ばれた機動六課と僕ら異世界漂流者だったが、オークションに出品される取引指定ロスト・ロギア、カオスブックを狙って怪盗ルパン三世が現れる。

そして、それと時期同じくして漫画キャラ軍勢が攻めてきた。

迎撃に向かった僕らだったが、敵はゾンビの力を使って更に力を増して襲い掛かってきた。

一体この先、一体何が待ち受けているのか！？

煙草の吸殻はその辺に放り投げないで自分で持ち帰ろう

＞ｉ２４９４４―７０９＜

漫画ゾンビを相手に、悪戦苦闘の戦闘を続けていたフォワードメンバーは、負傷をして血塗れとなった新八の治療をキャロに任せて、ユーノ達が到着するまでの間必死に防衛ラインを保ったいた。

「く！」

〈Ｄａｇｇｅｒ　ｍｏｄｅ〉

ティアナはダガーモードに切り返すと、漫画ゾンビの刃を受け止め徐にこう言った。

「沖田さんに教え貰った剣の極意を・・・舐めないで欲しいわね！」

ティアナは敵の剣を捌くと、高く飛び上がりクロスミラージュで漫画ゾンビを斬りつける。

「でやああ！」

すると、漫画ゾンビはティアナの剣筋を脳天に受け、ものの見事に切り伏せられそのまま動かなくなった。

スバルやエリオはいつの間にか力をつけたティアナの姿に驚かされた。

「凄い、ティア！」

「感心するのは後！早いとこ片付けないと新八さんがもたないわ！どうやら脳天が弱点のようね。キャロ、もうちょっとだけ頑張って！」

「は、はい！」

キャロはティアナの指示を受けると、フィジカルヒールを使い必死に新八の傷をいやそうとしていた。

ギンガは負傷した新八の手を握りながら涙目で語りかける。

「新八さん・・・ごめんなさい・・・！私を庇って・・・・！」

「いい・・んですよ・・・この程度の傷・・・大したことじゃ・・・う！」

「新八さん！」

「新八！」

途切れ途切れでギンガの言葉に返事をする新八だが、そこはやはり怪我の具合があまりよくないことに変わりはなく、思わず傷口を手で押さえて苦い顔を浮かべる。

ギンガと神楽は心配そうな眼差しを浮かべながら徐にこう言った。

「新八さん・・・今は何もしゃべらなくていいですから。」

「新八！無理することないネ！大人しくしてなきゃダメあるヨ。」

「ごめん・・・ギンガさん・・・神楽ちゃん・・・」

新八はギンガト神楽に諌められ、その後口を閉ざしてキャロの治療を大人しく受けるのであった。

さて、フォワードメンバーが苦戦を強いられる中ルパンを追って執拗にカオスブックを付け狙う謎の青年はと言うと、ルパンを追い詰めトリガーを引いて銃弾を発射し、ルパンはそんな青年の銃弾を躱しながら対峙する。

「ホントに御兄ちゃんもしつこいぜ。そこまでしてこいつが欲しいのか？」

「君と同じさ。狙った獲物は逃がさないのが、僕のポリシーなんでね。ちょっと手荒な方法にはなるけど、そいつは僕が頂く。」

青年はそう言いながら銃を回転させると、徐に左手にライダーカードを持つとそれを手に持った銃、ディエンドライバー銃身側面中央部に設けられたカード挿入口にライダーカードを装填し、銃身をポンプアクションの要領で前にスライドさせる。

〈ＫＡＭＥＮＲＩＤＥ〉

そのカードの種類が発声されて待機音が鳴り始めると、青年はディエンドライバーを天に翳し徐にその引き金を引いた。

「変身！」

〈ＤＩＥＮＤ〉

すると、トリガーを引くことでそのカードの能力名などが発声された後、カードの裏面に描かれたライダーの紋章の投影図が発射されて効果を発揮し、青年は基本カラーがシアンで、仮面ライダーディケイド同様、各世界の行き来が可能対を成す存在、仮面ライダーデ

ィエンドへと変貌を遂げる。

ルパンは目の前の青年が突如異形の姿に変わり果てたことに思わず仰天する。

「な！おいおい！変身なんてズルいぜ！！」

「は！」

青年はそんなルパンのことなど気にも留めず、ディエンドライバーの引き金を引いて容赦なくルパンを攻撃する。

ルパンは素早い動きでディエンドの銃弾を回避すると、草陰に隠れながら愛銃ワルサーＰ３８を取出しディエンドに対抗する。

「くそ・・・全くこんなことになるとは思ってもなかった・・・ぜ！」

ルパンはワルサーの銃弾を発射し、ディエンドとお宝をかけた熾烈な銃撃戦を勃発させる。

その二人の様子はすぐになのは達にも伝わり、なのは直ぐに通信でユーノに連絡を入れた。

『ユーノ君！大変！ルパンの反応を追っていたんだけど、たった今何者かとルパンが交戦状態に入ってる！』

「何だって？」

「おい、それはどう言うことだ？」

『今、そっちに現場の映像を送ります。』

フェイトが恋次にそう言うと、通信画面に映ってきたのはルパンとディエンドとの戦闘の様子であり、ディエンドの姿を目撃した瞬間ユーノは思わず目を疑った。

「な！あれは・・・海東さん！！」

「海東！？」

「何だ。あいつの事知ってるのか？」

走りながら銀時がそう言うと、ユーノは罰の悪そうな顔でこう言って来た。

「海東さんは僕の知り合いで仮面ライダーの門矢士さんの悪友で、異世界を旅するトレジャーハンター。そして、ディケイドと対を成す力を持った仮面ライダー、ディエンドに変身する。」

「ディエンド・・・あの姿がそうか・・・」

「ディエンドは銃型のディエンドドライバーを使い、自由に異世界のライダーを呼び出すことが出来るです。」

ユーノがそう言った直後、モニター画面に映っていたディエンドはディエンドとは別のライダーカードを二枚取出し、返信時と同様カード挿入口にライダーカードを装填し、銃身それをスライドさせる。

「スペシャル大サービス。」

〈ＫＡＭＥＮ　ＲＩＤＥ　ＡＣＣＥＬ、ＢＩＲＴＨ〉

待機音が鳴り始め、カメンライドによりカードに刻まれた仮面ライダーの情報を読み取ると、ディンエンド・・・海東大樹は読み込んだ情報を実体化かせその場に二体のライダーを召喚させる。

その場に召喚されたのは、全身赤一色の『アクセル』のガイアメモリで変身した仮面ライダーアクセルと、セルメダルの力を借りて変身した仮面ライダーバースであった。

アクセルとバースは召喚されると、お互いに次のような一言を発する。

「振り切るぜ！」

「お仕事開始しますか！」

海東は二人の召喚に成功すると、一斉にルパン目掛けて攻撃を仕掛ける。

「行け。」

ルパンは向かってくる二人の仮面ライダーを前にしても怯む姿勢も見せずに逆に不敵な笑みを浮かべる。

「面白い手品使うじゃねぇか・・・だが！」

そう言うと、ルパンは懐から粘着溶液がぎっしりと詰まったボールを取出し、それを使って二人のライダーの足場を固定し動けなくし

た。

「手品なら俺だって負けちゃいねぇぞ！」

そんなルパンの姑息な手を間近で見ながら、海東は徐に口にする。

「ふん。小生意気な。」

二人の泥棒の戦いはさらにエスカレートを増していく。

その頃、負傷した新八の件もあって急いでフォワードメンバーの元へと急ぐヴィータ・ルキア・吉良の三人はと言うと先ほどから嫌な予感と不安でいっぱいだった。

「あいつら、無事だろうな？」

「スバル達がそう簡単にへばる訳はないと思うが、嫌な予感がする。」

「そうだね・・・・・見えた！」

吉良がそう言うと、二人は何とかしのぎ切っているフォワード達の様子にひとまず安どの表情を浮かべる。

「よし、何とか間に合った――――――――！！」

と、その直後予期せぬ奇襲が仕掛けられる。

「わちょおおお！！！」

「ぐっは！」

ヴィータは背中に強烈な一撃を受け、頭上高くから突き落とされた。

「！ヴィータ！」

ヴィータの一大事に声を荒げるルキアだったが、その時吉良はルキアへと近づいてくる不審な影に目をやった。

「朽木さん、上だ！」

ルキアが上を見上げた瞬間、頭に日本の角を生やしたネコ型ロボットが勢いよく突進してきたのだ。

「落ちろ！！」

「のああ！！」

ルキアは回避することもままならずヴィータに続いて勢いよく頭上高くから撃墜する。

「朽木さん！」

「余所見をしてはいけませんよ！」

「せらあああ！」

二体のネコ型ロボットは隙を見せた吉良に同時に攻撃を仕掛けると、吉良は強烈な打撃を体に受け口から体液を吐いた。

「がっは！」

吉良もまた勢いよく地面に撃墜されると、その場に倒れていたヴィータとルキアと共に虚ろな目で頭上の二人を見つめた。

「な・・・何だよ・・・あいつら・・・・！？」

「漫画キャラに違いはなさそうだが・・・」

「君たちは何者だ・・・！？」

吉良がそう言うと、頭上に浮かんでいた二体のネコ型ロボットは各々に挨拶をしてきた。

「私たちはテトラカトゥーン、斎藤一に仕える漫画キャラ特高部隊隊長、王ドラと！」

「エル・マタドーラ様だ！」

「テトラ・・・カトゥーン・・・だと！？」

「やっぱり・・・そいつが今回の黒幕って訳か・・・・！？」

ヴィータ達が二人が口にしたカトゥーンと言う言葉に反応し、徐に体を起こすと王ドラは不敵な笑みを浮かべながら三人に向かってこう言った。

「ふふふ・・・・あなた方には大変恐縮ではありますが、ここで息の根止めさていただきます！」

その頃、漫画ゾンビの弱点に気づき一気に形勢を逆転させたティアナはスバルとエリオと共に怒涛の攻撃を浴びせ続ける。

「クロスファイアーシュート！！」

「リボルバーキャノン！！」

「サンダーブレイク！」

三人の攻撃が漫画ゾンビの脳天を直撃すると、漫画ゾンビは奇声を放ちながら消滅していき、現場に残ったのはただの紙切れだけとなった。

「やったよ、ティア！」

「ええ。流石にてこずったわね・・・ん？」

と、その時だった。

ティアナは森の奥から近づいてくる物音に耳を澄ませる。

「ティアさん・・・あの、どうかしたんですか？」

「し、エリオ静かに！まだ何かこっちに近づいてるわ！」

「「え！」」

ティアナの言葉に警戒の構えを取るスバルとエリオ、そしてギンガと神楽は新八と治療に専念するキャロを護ろうとする。

緊張が走る中、彼らの元に近づいてきたのは――――――

「へ。上手そうな匂いを嗅いで来てみれば、中々に上物が揃ってるぜおい・・・」

一人は赤い衣に身を纏った見た目１５歳前後の犬の耳を生やした少年。

「ふん。子供を甚振るのは俺としてはあまり心地のいいものではないのだが・・・致し方ないというわけか・・・」

一人は整った顔立ちで左手に黒い皮の手袋を嵌めた男性。

「だらだらと喋るのは止せよ。どうせ俺達のやることはただ一つ・・・そう・・・目の前の餓鬼を・・・」

そして、もう一人は鋭い目付きと棚引く長髪の、〈畏(おそれ)〉と書かれた陣羽織に身を包んだ妖艶な雰囲気を醸し出す長身の青年だった。

その妖艶な雰囲気の青年は二人の男と一緒にティアナたちの前に現れると、長ドス片手にこう口にしてきた。

「全員殺すことなんだからな。」

「な・・・何・・・何なのこいつら・・・！？」

「ティア・・・何だかよく分からないけど、こいつら・・・相当強いよ・・・！」

「全身が震えでどうにかなりそうです・・・！」

明らかに自分たちに敵をむき出しにするこの尋常ならぬ殺気と強い覇気を発する男たちを前に、スバル達フォワード陣や神楽・新八でさえ恐怖に戦き額に汗を流した。

「（ヤバい・・・こいつら・・・まじヤバいアル・・・！スバルや私達でどうにかできる相手じゃないね・・・！銀ちゃん・・・早く・・・早く来るアルよ・・・！）」

神楽は震える思いで銀時たちの到着を待ち望む中、ティアナは拳を強く握りしめ名がｒ徐に赤い衣を着た男に尋ねる。

「あ、あんた達も・・・漫画キャラって訳ね・・・！？」

「あんましそう言う言い方は好きじゃねぇけどな。取りあえず自己紹介だ。俺様の名は犬夜叉（いぬやしゃ）。左にいるが奴良組の三代目組長候補、奴良（ぬら）リクオ。そんで、右側が鵺野鳴介（ぬえのめいすけ）だ。」

犬夜叉が自分たちの自己紹介を終えると、リクオは不敵な笑みを浮かべつつ持っていた長ドス、祢々切丸（ねねきりまる）の柄に手をかざす。

「ふふ・・・今宵は、良い月見になりそうだぜ・・・さぁ、派手に暴れようじゃねぇか。」

リクオの抜いた刀の刀身が背後に浮かぶ月光によって不気味な光を放ち、実際色とは異なりティアナたちの眼には血のように真っ赤に染まる月が見えたそうな。

「く！スバル！エリオ！絶対に新八さんと会場内の人たちは護るわよ！何が何でも、ここを通すわけにはいかないわ！」

「おう！」

「はい！」

ティアナたちは防衛ラインの死守を貫き通す構えで、自分の武器であるデバイスと勇気を信じてこの強者たちに立ち向かおうとする姿勢を見せた。

「ふん。デバイスか・・・んなもんが無ければお前たち魔導師なんてただの人間もいいところ・・・いや、或いはそれ以下かもしれねぇな。」

「ぬーべー。頼む。」

犬夜叉がそう言うと、徐に鵺野鳴介、通称ぬーべーは前に出てくるなり懐から携帯していた専用の念珠を取出し、それを両手に持ちながら力を入れる。

「ふん！」

「な、何・・・！？」

「何をする気なの？」

ぬーべーの行動の意図が全く読めないでいるティアナたちが警戒を強める中、ぬーべーは徐に特殊な経典を唱え始める。

「宇宙天地與我力量降伏群魔迎来曙光吾人左手所封百鬼尊我号令只在此刻天地混沌乾坤蒼茫人世蒙塵　鬼怪猩狂！！」

聞いているだけで頭が可笑しくなりそうなその経典に息をのむフォワード達。

空は不気味に紅色に色づき、妖気と言うものを醸し出すような天候へと変化させた直後、スバル達のデバイスに異変が生じた。

〈〈〈〈〈Ｓｙｓｔｅｍ　ａｌｌ　ｄｏｗｎ〉〉〉〉〉

「「「「「え！」」」」」

何と、所持していた自分のデバイスの機能が突如全機停止し、待機状態へと戻ってしまったのだ。

その事によって、新八の怪我を治療していたキャロの魔法もケリュケイオンが機能を手視させると同時に魔法が発動しなくなった。

「う・・・うそ・・・！？」

「ど、どういうこと・・・デバイスが・・・魔法が全然発動しない・・・！？」

「マッハキャリバー！何か答えて！！マッハキャリバー！！」

声を上げ、必死に自分の相棒の名前を呼ぶ続けるスバルの努力もむなしく、マッハキャリバーは一切スバルの言葉に応答しなかった。

すると、そんな狼狽を隠し切れない様子のスバル達を見て、冷静な口調でこの異変を起こした術者、ぬーべーがこう言って来た。

「無駄だ。君たちの魔法は俺の呪詛によって封じさせてもらった。どう足掻こうと、俺が自らの意思で呪文を解かない、または俺を倒さない限り君たちの自慢の魔法は使い物にならない。その証拠に、デバイスの機能は封じられた。」

「そんな・・・！」

「こんなことって・・・！？」

「これじゃ、新八さんが・・・！！」

「う・・・くそ・・このままじゃ・・・！」

新八はこの絶望的な光景を目の当たりにすると、治り切っていない体にも関わらずその場から立ち上がろうとする。

「新八さん！駄目ですよ、動いちゃ！」

「新八！駄目アルよ！！」

ギンガと神楽が新八の無茶な行動を急いで止めにかかるが、新八は険しい顔で傍らの剣を持ち、徐にこう口にする。

「僕は・・・このまま何もできずにただ黙って誰かの背中に隠れて守られるのは御免だ・・・！だから今度は、僕が誰かを護るんだ・・・銀さんが僕にそうしてくれたように・・・僕にだって・・・ぐう！！」

「「新八〈（さん）〉！」」

新八は立ち上がろうとするも、治り切っていない傷の痛みに負け握っていた刀を再び落としてしまう。

そんな新八の姿を見ていたリクオはふてぶてしい態度でこう言って来た。

「無理をするな。どのみちその怪我では俺達に太刀打ちすることは出来ねぇ。いいか・・・所詮弱い人間など、生きているだけ無駄と言うものだ。」

「！」

非情なまでに自分に突きつけられるリクオの言葉に思わず表情を凍らせる新八。

だがそんな新八とは裏腹に、傍らで聞いていたギンガが真っ向から否定する。

「違うわ！新八さんは弱くない！彼は自分の命を顧みずに、この私を護ってくれた！だから、新八さんは決して弱くない！彼は・・・・・本当は誰よりも強い魂（こころ）の持ち主だってこと・・・私は知ってるから！」

「ギン姉・・・！」

「ギンガさん・・・！」

いつも以上に感情的かつ、熱い言葉にスバルも新八も驚きを隠せなかった。

いや、スバルや新八だけじゃない。

ここにいる全員がギンガのギンガらしからぬ台詞に鳩が豆鉄砲を食らったかのような表情になっていただろう。

だがしかし、犬夜叉はそんなギンガの言葉を軽く受け流すと、徐に腰に差しているボロボロの刀の柄に手をやった。

「ふん。御託はいくら吐いても構わねぇけどよ・・・・・・そろそろおっ始めてもいいかおい！」

犬夜叉が抜刀するや否や、彼の刀である鉄砕牙はただの錆び刀から、犬夜叉の妖力によって巨大な牙のような刀へと変化する。

「刀が・・・！」

「大きくなった！」

一瞬にして形を変えた犬夜叉の刀に思わず目を奪われるスバル達。

犬夜叉は手にした鉄砕牙の刀身を軽く舐めると、徐にこう口にする。

「安心しろ。楽にあの世に送ってやるさ。この鉄砕牙（てっさいが）がお前らの脳髄も綺麗さっぱり食いちぎってやるぜ！！！」

「は！」

犬夜叉が勢いよく目の前のスバル達の元へと走り出すと、ティアナは最後まで気丈な態度をふるまいデバイスが使えない状況の中、身体を縦にして守り抜こうとする。

「く！たとえここで死んでもあなた達を絶対に通すわけにはいかない！最後の最後まで守り抜いて見せる！！」

「「「「「「おう！」」」」」」

ティアナの言葉に呼応したスバル達残りの四人や、神楽・新八も両手を広げてティアナと一緒に目の前に立ち塞がる。

「気取ってんじゃねぇ！！！死ね！！！！！！！」

犬夜叉は高く飛び上がり鉄砕牙の一太刀で七人まとめて切り伏せようとしていた。

新八たちは自分の死を覚悟して思わず目を瞑った。

と、その時何処からともなくあの男の声が聞こえてくるや否や犬夜叉の顔面に一撃を食らわせる。

「気取ってんのは・・・おめぇだ！！」

「ぐっほ！！」

「「「「「「「！？」」」」」」」

犬夜叉は思い切り殴られると、その場に叩き伏せられ聞き覚えのある声に反応した七人が徐に振り返ってみると、そこにいたのは何時もの格好に身を包み己の武器を携えた四人御侍、ユーノ・銀時・恋次・近藤が立っていたのだ。

銀時は呆然とする七人に向かって木刀片手にほくそ笑む。

「ようてめぇら・・・待たせたな。」

「新八君！無事か！？」

「銀さん・・・近藤さん・・・みんな・・・！」

「ユーノ先生・・・よかった・・・助かったよ・・・！」

「ホント。いっつも思うけど、この人たちはいい時に駆けつけてくれるわね。」

待ち望んでいた増援がいいタイミングで来たことに心の底から喜ぶフォワード陣。

四人は直ぐにフォワードの元へと駆け寄り、目の前の敵を凝視する。

そして、新たにこの場に現れた四人を見ながらリクオはぬーべーに尋ねる。

「新手か？」

「ああ。しかも、あれはただの人間じゃない。二人は非常に澄んだ魂を持った侍。もう二人は俺と同じ強い霊力を持った死神。」

ぬーべーがそう呟く中、恋次は舌打ちをしながらこう口にする。

「け。ぞろぞろ出てきやがって。ユーノ、どうやらこの状況を見る限り魔法は使えないようだが、どうするよ？」

「大丈夫ですよ、恋次さん。魔法は確かに封じられてますが、幸い霊力の方は使えるようです。それに・・・・・魔法なんて甘ヌルいものでこいつらを退けるのは、些か難しいでしょう。」

すると、銀時の一撃を食らい赤く腫れ上がった方を押さえながら犬夜叉は四人に向かって声を荒げりながら尋ねる。

「く・・・!いてぇな・・・・・・!誰だ・・・おめぇら!?」

銀時は犬夜叉の杓子定規な台詞を耳にすると、挑発的な口調と小馬鹿にした表情でこう言い返した。

「へへ。馬鹿で無鉄砲なガキの保護者だよ、“ワンちゃん”。」

「な!!!て、てめぇ!!!よくも俺の事“犬”って言いやがったな!!!」

銀時の言ってはいけない一言に堪忍袋の緒が切れた犬夜叉は標的を銀時に定めて飛びかかってきた。

「ユーノ!新八の事、頼むぜ!」

「分かりました。」

銀時は新八の処置をユーノに委ねると、怒髪天を衝くと言わんばかりに怒り心頭の犬夜叉目掛けて走り出し、空中での剣戟を披露する。

「「ほおおおおおお!!!!!!!」」

二人の男は互いに猛烈な勢いと気迫を飛ばしながら常人の眼では捕えるのが困難な神速の剣を躱しつづけ、傍でその光景を見ていたリクオも驚いていた。

「ふん。犬夜叉相手になかなかやりやがるな・・・・・・（坂田銀時・・・白夜叉と言われるだけあってその戦闘力は並み一通りではないな・・・・・・・）」

と、銀時の戦う光景に目を奪われていたリクオだったが、直後近藤が刀を抜いてリクオに近づいてきた。

「何処を見ている！貴様の相手は、この俺だ！！」

近藤はリクオ目掛けて勢いよく刃を振りおろし、リクオは岩をも砕く近藤の渾身の一太刀を躱すと、鼻で笑いながらこう言った。

「ふん。ゴリラが相手だと？俺も甘く見られたものだな。どうせ相手になるなら、もうちょっと骨のある奴がよかったのによ。」

「甘く見ているのは貴様だ。確かに俺はゴリラでケツ毛ぼうぼうのオッサンかもしれねぇ。だがよ・・・真選組の局長として、”新八君の兄”として――――――」

近藤はその瞬間、刀を両手でしっかりと握りしめた状態で勢いよく走り出す。

「譲れぬものはあるんだよ！！！」

だが、近藤のそんな真面目な雰囲気とは別に新八は少し前に近藤が口にした“兄”と言う言葉に過剰に反応し、怪我をした身の上であ

りながらツッコミを披露する。

「ちょっと！！！！だから兄じゃねぇし！！！いつから僕あんたの弟になったのさ！！！認めねぇぞ！！！僕は絶対弟になんかならねぇからな！！」

ティアナたちはこのような状況においても自分の役割を忘れない新八の態度に関心の眼差し、いやもっと違う様子で見つめていた。

「これだけの傷を受けておきながら、実に見事なツッコミですね新八さん・・・」

「さ、流石ですね・・・」

ユーノは顔の引きつった様子のティアナに徐に呟く。

「顔が引きつってるよ、ティアナ。さて、キャロ、あとは僕に任せていいから。少し休んでいて。」

「はい・・・あの・・・すみませんユーノ先生。私、何とか新八さんの傷を治そうと一生懸命やったんですけど、完全に治すことは出来ませんでした・・・！ごめんなさい！」

キャロは自分の及ばない力に後悔の念を抱くが、新八は慌てた様子でそんなキャロに対して優しく言葉を投げかける

「そ、そんなことないよキャロちゃん。君の治療のお陰で、さっきよりも大分痛みも引いたよ。」

「新八君の言う通りだ。これなら直ぐに治せそうだ。ここまであり

がとう、キャロ。流石はなのはが育て上げた最高のストライカーだ。」

ユーノは徐に笑顔を浮かべながらキャロの頭を優しくなでてあげた。

キャロは思わず恥ずかしさとそれ以上の嬉しさが湧き上がり、頬を赤くしながら感謝の言葉を口にする。

「ユーノ先生・・・ありがとうございます・・・！」

「よかったね、キャロ。」

「うん！」

エリオからも笑顔でそのように言われると、キャロの機嫌は益々よくなった。

「ユーノ先生。魔法が使えないこの状況で、どうやって治療を？」

「吉良さんやルキアさんにだって鬼道による治療は可能でしょ？だから、僕もそっちの方で新八君を治療する。あまりやったことはないけどね。」

ユーノは自信なさ気にそう口にはしたが、徐に新八の傷口に手をかざすと浦原から教えを乞うた鬼道による物理治療を始めた。

すると、新八の傷が見る見るうちに塞がっていき、間近で見ていた神楽は傷の治りの速さに興奮を覚えた。

「うっほ！傷が物凄い速さで癒えていくネ！凄いアル！！」

ティアナもこの光景には素直に驚いていたが、それ以上に彼女はユーノ・スクライアという人間そのものの能力に驚かさせていた。

「（凄い・・・いつも思ってたけど、ユーノ先生ってほんととんでもないわ・・・元々魔力運用に関しては私やなのはさんの数十倍の効率の良さがあるし、それをデバイスなしでやってることだけでも凄いのに・・・真逆の特性を秘めた霊力をこんなに造作もなく操るなんて・・・この人は本当に・・・どれだけの才能を持っているの・・・！？）」

そんなユーノに驚いているティアナを余所に、恋次は一人残っていたぬーべーと対峙する。

「どうやら、てめぇの相手は俺みたいだな。」

「そのようだ。見たところお前も俺と同じかそれ以上の霊力（ちから）を持っているようだ。ここは、本気で行かせてもらうぞ！」

すると、瞳の色が赤く染まる否やぬーべーは自分の左手に手をかざし呪文を唱える。

「宇宙天地（うちゅうてんち）　與我力量降伏群魔（よがりきりょうこうふくぐんま）　迎来曙光吾人左手（ごうらいしょこうごじんさしゅ）　所封百鬼（しょほうひゃっき）。我が左手に封じられし鬼よ！今こそその力を示せ！」

ぬーべーは徐に皮手袋を取って自分の左腕に封じられた力の姿を恋次の前に披露する。

恋次はぬーべーの左腕から感じてくる自身でも圧倒するほどの強い霊気に思わず眉をひそめた。

「な・・・何だ・・・この強烈な霊気は・・・！？」

「昔、俺は子供に憑いた鬼と戦ったことがある。だが、その鬼があまりに強力な力を持っていたため、止むを得ず俺はその鬼を自分の左手に封印した。そしてこれがその、鬼の力を封じ込めた鬼の手だ！」

強烈な光が晴れた先に恋次の目に映ってきたのは、左腕が鬼と手と呼ばれるように明らかに異形の姿に変化したぬーべーの左腕だった。

「これが・・・鬼の・・・手・・・！？」

「死神よ。我が鬼の手の前にひれ伏せ！」

ぬーべーが力強く恋次に向かってそう言うと、恋次は刀を握り直し、そんな大口を叩くぬーべーに対して言葉を返す。

「は。言うじゃねぇかよ。だがよ・・・・・護廷十三隊三番隊隊長、阿散井恋次の力にひれ伏すのはてめぇだ！！！」

直後、恋次は蛇尾丸を解放するや否やぬーべーに向かって突っ込んでいく。

「ほおおおおお！！！！」

同じように、ぬーべーも鬼の手を恋次に向けながら勢いよく前に出る。

「はあああああああ！！！！」

この二人の男の勝負も銀時や近藤たち同様、中々に見ものなものになりそうだ――――――

さて、銀時達が犬夜叉たちと対峙しているその頃、王ドラ、エル・マタドーラに急襲を受けたヴィータ、ルキア、吉良の三人の戦いも列戦となっていた。

「グラーフアイゼン！！」

〈Ｅｘｐｌｏｓｉｏｎ〉

ヴィータはカートリッジをロードすると、形状を巨大ハンマーであるギガトンフォームへと変化させ、王ドラを潰しにかかる。

「ギガトンシュラーク！！」

王ドラはヴィータの攻撃を目撃すると、四次元袖からギガトンハンマーに匹敵するほど巨大な武器を取り出す。

「『巨大ヌンチャク』！」

袖の中より現れるその名の通り巨大なヌンチャクがギガトンハンマーのヘッドとぶつかり合い、技の威力が相殺されると二人は距離を取って巨大武器対決を激化させる。

そして、そんな二人と別にルキアと吉良は協力してエル・マタドーラと戦っていた。

「破道の三十一『赤火砲』！」

「ヒラリ！」

ルキアの放った赤火砲をエル・マタドーラは自分の十八番の秘密道具でありあらゆるものを回避する『ヒラリマント』で見事なまでに軌道をずらす。

すると、一瞬を隙を突いた吉良がエル・マタドーラの体に鬼道を仕掛ける。

「縛道の六十一『六杖光牢』！」

「！」

その瞬間、エル・マタドーラが気づいた瞬間に六つの光が体を拘束し、エル・マタドーラの自由を奪う。

「これで終わりだ！！」

ルキアは勝機と見ると、斬魄刀を振りかざしエル・マタドーラ目掛けて刃を振り下そうとした。

しかし、その時エル・マタドーラは動けない状態であるにもかかわらず自分のマン力を駆使して鬼道を破ろうとした。

「残念だったな・・・俺様はドラえもんズ一の力持ちなんだよ！！！」

エル・マタドーラは全身の力を両腕に集中させると、吉良の放った縛道を自力で破ったのであった。

「！馬鹿な！？」

「六十番台の鬼道を腕力だけで破っただと！？」

目の前の光景に驚きを隠せないルキア達。

エル・マタドーラはそんな二人に向かって反撃を仕掛ける。

「舐めてかかると痛い目見るぜ！！」

果たして、この勝負・・・一体どちらに軍配が上がるのであろうか？！

同じころ、漫画ゾンビの制圧に時間を取られたシグナム達七人は弱点を見つけるや否や一気に大技でゾンビたちを一掃し、辺りには無数の紙切れが散らばっていた。

「ふう・・・何とか制圧できたな。」

「だけど、お蔭で時間を食っちまった。」

「ヴィータ達の様子も気になるしな。」

「急いで前線メンバーと合流しましょう。この時間です。暗がりでの戦闘は危険極まりありません。」

「はい。では、急ぎましょう。」

シャッハの言葉に返事をし、シグナム達は急いでティアナの元へ急

行しようとした直後、アギトは何か不審な気配を感じとって声を上げた。

「！シグナムの旦那、待って！」

「？」

シグナムがアギトの言葉に耳を傾けたその時だった。

「てや！」

「「「「「な！」」」」」

暗闇の中より人影が現れるや否や、影はスクライア商店メンバー四人とザフィーラを、一瞬のうちに斬り捨てこのような捨て台詞を吐いた。

「また、つまらぬ物を斬ってしまったか。」

刀が収められる音がすると、鬼太郎達はその場に倒れ伏し気を失ってしまった。

「な！これは一体・・・！？」

シグナムやシャッハが目の前の光景に目を疑う中、四人を気絶させた影はシャッハの背後へと現れる。

「！」

「笑止！」

シャッハは首筋に強打を当てられると四人と同じように気を失いその場に倒れこんだ。

「ぐっ！」

「ザフィーラ！シスター・シャッハ！浦太郎！鬼太郎！金太郎殿！白鳥！」

「ど、どうなってるんだよ一体！？」

狼狽する二人だったが、シグナムは周囲の草陰から聞こえてくる物音に耳を澄ませ、声を上げて尋ねた。

「！誰だ、そこにいるのは！？出てこい！」

すると、草陰に隠れていた人影は徐に飛び出してくると月明かりに顔を映しながら鋭い目線でシグナムに話しかけてきた。

「・・・ヴォルケンリッター・・・烈火の騎士シグナム殿と烈火の剣精アギト殿とお見受けする。」

「お前は？」

すると、その人物は徐にかぶっていた傘を投げ捨て鍔のない白鞘の日本刀を見せながら自分の名を口にする。

「十三代目石川五ェ門！」

「石川・・・！？」

「五ェ門・・・!?」

「私怨はないが、お主達には拙者のこの斬鉄剣の餌食となってもらおう。」

非常に鋭い目線でそう口にすると、五ェ門は斬鉄剣の刃を二人に見せて威嚇する。

シグナムとアギトも状況を理解すると、五ェ門と戦う姿勢を向ける。

「なるほど・・・そう言うわけか。」

「望むところだ!シグナム、行くぜ!!」

「ああ。ユニゾン、イン!」

今まさに、最強の剣士の称号をかけた史上稀にみる対決の火蓋が切って落とされようとしていた。

そんな五ェ門の気配を感じとりながら、仮面ライダーディエンドこと海東大樹とカオスブックをかけて戦い続けていたルパン三世の方はと言うと、上手いこと海東から撒くことに成功すると、草陰に隠れていた。

「ふう~~~五エ門の奴も派手におっぱじめてるみたいだな。他の連中もあっちこっちで戦ってやがるようだ・・・ホントみんな好きだよな。」

と、その時。

不意にディエンドの姿のままの海東がルパンの前に姿を現した。
思わずルパンはこの突然の出来事に声を上げた。
「うわあああああああ！！！！」
「見つけたよ。いい加減僕のお宝を渡し給え。」
海東がルパンに銃弾を発射すると、ルパンは巧みな動きでそれを開始ワルサーの銃弾を同じように発射する。
そして、木の陰に隠れながら銃を構えたルパンは海東にこう言った。
「は！天下の大泥棒、ルパン三世がそう簡単にお宝をひょいと渡す訳ねぇだろ？」
「ならば、力づくでも奪い取る！」
海東はカードホルダーからアタックライドカードを取出し、ディエンドライバーに装填する。
〈ＡＴＴＡＣＫ　ＲＩＤＥ　ＢＬＡＳＴ〉
その瞬間、ディエンドライバーの銃口より放たれる高速連射と分裂弾の嵐がルパンを襲う。
ルパンはその銃弾に被弾しないように鼠のように逃げ回るが、怪盗はそんなルパンを追いかけながら再びカードを取出し装填する。

「すばしっこいのが君の専売特許のようだけど、僕の前では何の意味を持たない。」

〈ＡＴＴＡＣＫ　ＲＩＤＥ　ＩＬＵＳＩＯＮ〉

すると、海東はカードの力によって自分の分身体を作り出し、逃げるルパンの周囲を囲んだ。

「！分身しやがった・・・これじゃ逃げれねぇ・・・」

「これで君の逃げ場はなくなった。大人しくそれをこっちに渡し給え。素直にお宝を渡せば、命までは取らない。」

「は。言ってくれじゃねぇかよ・・・」

海東の挑発的な言葉に思わずルパンも感情が高ぶる。

と、その時そんなお宝を巡って争いを続ける二人の男の元に何処からともなく別の男の声が聞こえてきた。

「残念だけど、君たちも逃げ場はないよ。」

「「！」」

二人が男の声に驚いたその直後、緑色のバインドが二人の体を拘束し身動きを取れなくした。

「なななな！おいおいおい！！何だよこりゃ！！動けねぇぞおい！！」

「く！これは・・・バインドか！？」

あからさまに動揺するルパンとは対照的に、魔法の存在と技に関して熟知していた海東は冷静にバインドに目を向けていると、そんな二人の前に無限の猟犬を引き連れてヴェロッサが現れる。

「見つけたよ。君たちのことはずっと僕の猟犬が追っかけていたんだ。大人しく、お縄を頂戴してもらうよ。」

すると、暫くしてからバリアジャケットに身を包んだなのは・フェイト・はやて・クロノの四人と真選組の土方、沖田が現れる。

ルパンはこの状況を目の当たりにすると、浸りに汗を流した。

「はは・・・こりゃまた、美人のカワイ子ちゃんがご一緒で。」

フェイトはバルディッシュを向けながら毅然とした口調でこう言った。

「窃盗及び付近での危険魔法使用の現行犯で、あなた方二人を逮捕します。」

「大人しく騒乱の停止と、武装の解除を。」

なのはがそう言った直後、不機嫌そうな表情で土方はルパンを睨み付けながら持っていた刀を抜き始める。

「何なら、手中ひきっ回しの上打ち首獄門って言うのもいいんだぜ・・・」

「土方さん。完全目が血走ってまっせ。」

真顔でツッコミを入れる総悟。

と、そんな時海東はなのは達の姿を見るや否や意外な言葉を口にしてきた。

「おやおや。誰かと思えば、君たちは確かフェレット君の友人だったかな？」

「！あなた、ユーノ君の事知ってるんですか！？」

「勿論だとも。士と同じで何度か彼に遭ってるからね。あ、そうだ。一つフェレット君に伝えてくれ給え。“君たちの傍にあるマテリアルを決してカトゥーンに渡しては駄目だ”とね。」

「！？」

「マテリアル・・・！？」

海東の口にした言葉に怪訝そうな表情を浮かべるなのは達。

「あの・・・！それどういう意味・・・！」

と、なのはが問い直そうとした直後海東は飄々とした口調でホルダーから戦線離脱用のカードを一枚取出しディエンドライバーに装填する。

「それじゃ、僕はこの辺で♪」

〈ＡＴＴＡＣＫ　ＲＩＤＥ　ＩＮＶＩＳＩＢＬＥ〉

すると、その瞬間バインドで拘束されていた海東が突如として姿を消してしまった。

「き、消えた！」

「どういう事や！？」

なのは達の前から忽然と姿を消してしまった海東。

だが、姿を消したのは何も海東だけではなかった。

「ん？のあ！おい！！奴も消えちまってるぞ！！」

「「「う、ウソ！！」」」

なのは達が土方の言葉に反応し、目を向けてみるとルパンの方も彼女たちの眼を掻い潜って忽然と姿を消してしまったのだ。

土方はもぬけの殻となったバインドを見ながら脱出したルパンに関してこう呟いた。

「どう言う関節してんでしょうね、あいつ？」

「って！言ってる場合か！！！まだこの近くにいる筈だ！！！探すぞ！！」

土方は焦りと怒り両方を抱きながら、消えたルパンとカオスブックを捜索するために一人森の奥へ走り出す。

「って！待った下さい土方さん！一人で行くのは危険です！！」

「はやて。ここは僕が追いかけるよ。みんなは、先生たちの方に合流して。」

「分かった。ロッサ、頼むぞ。」

クロノはヴェロッサにこの案件を任せると、なのは達と共にユーノ達の元へと直行した。

さて、なのは達が向かったその頃いまだ銀時と犬夜叉による剣と剣による工房を続いていた。

「銀髪！！！！！」

執拗に銀時の息の根を止めようと、刀を大立ち回りで振るう犬夜叉。

銀時はそんな犬夜叉の攻撃を躱しながら言葉を投げかける。

「は。そう怒るなよ、ワンちゃん。カルシウム足んねぇじゃねぇか？」

「舐めてるのかテメェ・・・さっきから俺様の事犬扱いしやがって・・・！俺はな・・・昔っから俺の事舐めた目で見る奴と臭いのきつい奴・・・・・そして何より俺を犬扱いする奴が一番・・・・・・！！」

犬夜叉は飛び上がると、鉄砕牙に妖力を溜めると一気にそれを斬撃として飛ばした。

「嫌いなんだよ！！！！！」

銀時はその凄まじい威力を秘めた犬夜叉の斬撃を見切り、皮一枚のところで回避することに成功するとほくそ笑みながらこう言って来た。

「そうか！だったら序に、俺の嫌いな奴三つも教えてやろうか！一つ！」

銀時はその瞬間、犬夜叉の腹部に木刀の一撃を加える。

「“学園祭準備にはしゃぐ女子”！」

「ぐっほ！」

「二つ！！」

更に銀時は犬夜叉の顔面に木刀を叩きつける。

「“それに便乗して、無理にテンションあげる愚の骨頂男子”！！」

「がっは！」

「三つ！！！」

そして、最後に銀時は利き足で犬夜叉を蹴り倒す。

「“それらすべてを包容し、優しく微笑む教師”」

銀時の怒涛の攻撃を受け、それなりに傷ついた犬夜叉は咳払いをしながら服の汚れを拭き取り、鉄砕牙を持ち直してこう言い返す。

「げっほ、げっほ！ふん・・・要するに、単に学園祭が嫌いなだけじゃねぇかよ。余程暗い青春を送ったようだな。ちまちましたことしやがって・・・人間如きが俺様に勝てると思ってるのか！！！」

犬夜叉は鉄砕牙を天に翳すように高く上げると、その直後鉄砕牙そのものが脈を打ち、鼓動となって銀時の元へと伝わってくる。

「！」

「俺の鉄砕牙がお前を斬りたいとさっきから言っていやがる！お前のその血が欲しいと、ほざいていやがるぜ！！！」

すると、犬夜叉は鉄砕牙を大きく振りかざし、銀時目掛けて強力な一太刀を浴びせ、後方へと吹き飛ばす。

「ぐっは！」

「銀さん！」

「「「「「「「銀さん（ちゃん）！」」」」」」」

吹き飛ばされ土煙が上がる様子を見ていたユーノ達は声を荒げり、犬夜叉はそんな銀時を見ながら高笑いをする。

「ぬはははは！！！！どうだ！？鉄砕牙で斬られたその感触は？痛いか！？あはははは！！！！！」

と、その時土煙の無から銀時の低い声が聞こえてきた。

「・・・馬鹿言ってんじゃねぇよ。」

「あ?」

「こんな痛み・・・毛ほども痛くねぇさ・・・こんな痛み・・・新八の受けた傷に比べれば、痛くも痒くもねぇさ・・・」

銀時は血塗れになった顔面で犬夜叉の前に姿を現すと、自分の命を救ってくれた木刀「洞爺湖」に感謝の意を表しながら、鋭い視線で犬夜叉を凝視する。

「足りねぇよ、こんなもんじゃ。こんなもんじゃ・・・俺の魂に傷をつけることは出来やしねぇ!」

ユーノ達は満身創痍になりながらもなのはやユーノなみに強い精神力を持つ銀時の姿に思わず驚嘆した。

「銀さん・・・!」

「あんな深手を負っても・・・まだ立ち上がるなんて・・・あの人も・・・ホントに一体何者なの?!」

「強がるねぇ・・・だが深手には違いないさ。いいぜ・・・お前の魂とやらにこの俺の剣を突き刺してやるぜ!!」

犬夜叉対白夜叉の対決。

若干犬夜叉の方に軍配が上がっているようだが、白夜叉は・・・い

や坂田銀時はこの状況をどう解決するのか！？

そんな銀時たちの戦いの間際に、近藤勲対奴良リクオの対決も白熱していた。

「く！！」

リクオは近藤が仕掛ける非常に重たく太刀筋がしっかりとした剣に苦戦を強いられながらも、そこは距離を取って近藤の動きを把握しようとする。

「ゴリラのくせに中々いい腕をしているな。少し見誤っていたようだ・・・」

「言ったはずだ・・・俺にだって譲れないものがあると・・・！たとえゴリラと罵られようと、たとえ恥辱にまみれようと、俺は俺の護りたいものを護る！！！」

ゴリラ、あ間違えた近藤はそのような台詞を口にすると真選組の局長としての誇りと自分の侍魂に誓ってこの戦いはどうしても譲れなかった。

そのため、近藤は普段ではあまり見せることのない総悟や土方に匹敵かそれ以上の気迫と剣腕でリクオに肉薄し、追い詰めていく。

リクオは祢々切丸で防御をしながら、近藤の底知れぬ力に驚愕した。

「く！（こいつ・・・どこにこんな力が・・・！？）」

「ゴリラパワー全開！！！！」

そう言うと、近藤はもはや自分のことをゴリラと認めた上でリクオの刀を吹き飛ばし、リクオの体を愛刀虎鉄で貫こうとした。

「貰った！！！」

リクオは咄嗟に隠し持っていた苦無に妖術を仕込ませ近藤を返り討ちにしようとしたが、その直後近藤の刃が体を貫通する。

「ぐあああああ！！！！」

だが、リクオは最後の力を振り絞って近藤の体に苦無を突き刺し妖術を送り込む。

「のあああああ！！！」

全身に流れ込んでくる強烈な力を持ったリクオの妖術に近藤は思わず声を上げる。

「「近藤さん！」」

「ゴリラ！！！！！！！！」

だが、近藤はリクオの体に突き刺さった刀から手は離さず自分の体に突き刺さった苦無を無理矢理抜き取り、それをそのままリクオの体に突き刺そうと手を振りかざした。

「き、貴様！！！！そんなことをして、死ぬ気か！？」

リクオが近藤の行為に目を疑い言葉を投げかける中、近藤は汗だく

の表情でこう言った。

「剣に行き、剣に死ねるなら・・・本望さ。」

そして、近藤は渾身の勢いでリクオの心臓部分に苦無を突き刺した。

「ぐあああああああああ!!!!」

リクオは声を上げながら自分の妖術に体を侵され、そのまま紫色の光を放ちながら抱く初を起こして消滅した。

近藤は爆発の衝撃に巻き込まれ、大きく宙を舞いあがる。

「近藤さん!!!!」

「縛道の四、這縄!」

ユーノは咄嗟に縛道で近藤の体を確保する。

満身創痍となり、気絶しかけていた近藤を見るなり全員が心配そうに声をかけてきた。

「近藤さん、しっかり!」

治療を終え、怪我の癒えたばかりの新八が真っ先に近藤に言葉を投げかけると、新八の声を聞いて安心したのか近藤が徐に瞼を開けた。

「し・・・新八君・・・どうやら・・・無事なようだな・・・」

「近藤さん・・・アンタなんて無茶な真似を・・・!?」

「すまねぇ、新八君・・・ユーノ先生も・・・俺の力が及ばないばかりに、アンタやみんなに迷惑かけちまった・・・俺はもう・・・」

と、そんな弱々しい近藤の言葉を聞くと、新八の感情が一気に爆発する。

「何言ってるんだよ!!!何弱気なこと言ってんだよ!!あんた、それでも真選組の局長ですか!!こんなところで死ぬんじゃねぇよ!!!あんたがここで死んだら、もう姉上のことストーカーすることも、真選組のみんなと一緒に居ることも戦かうことも出来ないんですよ!!!僕は認めないぞ・・・こんな見知らぬ世界で死ぬのなんか、絶対に認めない・・・!!だからそんな弱気なこと言ってんじゃねぇよ!!!」

ギンガやスバル達はこんなにも近藤の事に関して自分のこと以上に感情的になれる新八の姿に驚愕していた。

「新八さん・・・」

近藤もそんな新八の言葉を聞くと、間を置いたのちにこう言い返した。

「・・・ああ・・・そうだな・・・すまねぇな・・・やっぱり・・・俺はまだ死ぬ訳にはいかねぇよ・・・」

「近藤さん・・・ああ、そうさ。あなたはまだ生きなきゃならない!何があってもこんなところで死ぬな!ユーノさん!急いで近藤さんを!」

「わかった。」

ユーノは新八の言葉を聞き入れると、刺し違える覚悟でリクオを倒した近藤の怪我の治療に取り掛かった。

近藤の患部にユーノの手が翳され、鬼道による治療が始まるとちょうどその瞬間、激突を繰り返す恋次とぬーべーの戦う姿が目に入ってきた。

「蛇尾丸!!!!」

「ほおおおお!!!!」

刃節を極限まで伸ばした恋次はぬーべーを力で圧倒するが、ぬーべーはそれを鬼の手で抑え込みながら恋次の攻撃を防ぎ続ける。

一度、恋次は蛇尾丸の形状を元に戻すと、頭上高く飛び上がると再び同時に刃を伸ばす。

「つらあああああ!!!」

しかし、ぬーべーは力で押す姿勢を崩さない恋次の攻撃を確かな動きで見切ると、徐に念珠を取出し声を発する。

「怨!」

すると、ぬーべーの言霊に反応して恋次の体は突如として自由を奪われ、思う道理に動かすことが出来なくなった。

「!何だ!?体が・・・急に言うことを・・・はっ!」

と、恋次が前を振り向いた瞬間、反撃の機会を得たぬーベーは鬼の手を向けたまま恋次に向かって突進してきた。

「はあああああ!!!無に帰れ!!!!!!」

鬼の手による渾身の一撃が恋次の体にクリーンヒットし、恋次は勢い余って後方へと大きく飛ばされる。

「ぐあああああああ!!!」

森の木々をなぎ倒しながら後ろに飛ばされていく恋次の姿を見ながら言葉を失うユーノ達と、鋭い目線を浮かべたまま恋次のことを警戒するぬーベー。

「・・・・・・」

と、その直後。

土煙が上がる森の奥から赤い霊圧が光となってぬーベーの目に飛び込んできた。

「!」

「卍解!狒狒王蛇尾丸!!」

すると、土煙の中から現れたのは卍解した恋次の狒狒王蛇尾丸の姿だった。

「何!?」

恋次の卍解を前にして言葉すら失うぬーべー。

恋次はそんなぬーべーの一瞬の隙を見計らうと、一気に霊圧を上昇させて狒狒王蛇尾丸の口腔内より狒骨大砲を発射する。

「狒骨大砲！！！」

巨大なレーザーのように真っ直ぐぬーべーへと直進する恋次の大技。

ぬーべーは何とかそれを鬼の手で凌ごうとするも、先ほどとはあまりに威力が桁違いであったため、その不可に耐えきることが出来ず無残にも狒骨大砲の餌食となった。

「ぐあああああああああああ！！！！！」

狒骨大砲に飲み込まれ、身体を焼かれていくぬーべー。

そんなぬーべーの脳裏に、嘗ての自分の姿とそんな自分の傍で言葉で表現で黄なほどのかけがえのない日々を過ごしてきた生徒たちの顔がうっすらと浮かんで来る。

そして、ぬーべーはそんな生徒たちのことを思い返しながら徐に目を閉じ、一筋の涙を流した。

「（みんな・・・俺もやっと・・・みんなの所へ帰れそうだ・・・！）」

狒骨大砲が収まり、飲み込まれていたぬーべーはそのまま紙切れとなって消滅する。

立て続けに二人の仲間が近藤と恋次の手にかかって消滅していったことに、銀時と激戦を繰り広げていた犬夜叉も流石に目を疑った。

「な！ぬーべーの奴もやられちまいやがった・・・くそ！」

「何処見てやがる、この野郎！！！！」

銀時は視線をずらし、隙を見せた犬夜叉に木刀で殴り掛かる。

犬夜叉は銀時の一太刀を鉄砕牙の刃で受け止めると、鍔迫り合いの中でこう語る。

「どいつもこいつもやられちまいやがって！まぁいいさ・・・俺がまとめてみんな殺せばいい話だからな！！」

犬夜叉はそう言うと、銀時の足を蹴って体制を崩すと一気に勝負を仕掛けるのであった。

「これで仕舞だ！！！死ね！！！！銀髪！！！！」

「銀さん！」

「「「「「「「銀さん（ちゃん）！」」」」」」」

銀時もこの時ばかりはやられると心のどこかで思っていただろう。

だが、そんな銀時の危機に意外な救援が入ってきた。

〈Ｒｅｓｔｒｉｃｔ　ｒｏｃｋ〉

突如犬夜叉の体と振り上げた鉄砕牙は無数の光の束によって固定され、動けなくなった。

「な・・・何！」

「これは・・・！」

驚きを隠せない銀時やユーノの元に、そらから白い天使たちが舞い降りる。

そう、駆けつけてきたのはなのは・はやて・クロノ・沖田の四人だったのだ。

「ごめん、遅くなっちゃった。」

「みんな、怪我はしてないか？」

「なのはさん！」

「八神部隊長！クロノ提督も・・・！」

「ふぅ～～～間に合ったようだね。」

ユーノもこの四人の到着には安どのため息をつき、沖田は直ぐに満身創痍の状態の近藤元へと駆け寄り心配そうな声色で声をかけてきた。

「近藤さん！しっかり！近藤さん！」

「そ・・・総悟・・・お前は無事か？」

「俺の事より、近藤さんが・・・！」

「酷い怪我・・・一体何があったの！？」

「さっきまで、かなり強い力を持った漫画キャラがいたんだけど、近藤さんと恋次さんのお蔭でどうにか二人は撃退できた。」

ユーノがなのは達に事情を説明している間も、犬夜叉はなのはの仕掛けたレストリクトロックに四苦八苦していた。

「く・・・！！この・・・離れやがれ！！！！！」

「そう言えばなのは。フェイトは？」

「うん。それならきっとシグナムさん達の方に。」

その頃、シグナムとアギトの方はと言うと、魔力自体も漫画ゾンビとの戦いでかなり消費して折りに居合いと剣術における達人である五ェ門を相手にし、ついには愛刀のレバンティンでさえ折れてしまう始末であった。

「ぐあ！！」

シグナムはアギトとのユニゾンを保ちながら、気丈な態度を崩すことなく一切の隙を見せない剣豪石川五ェ門の前に防戦一方だった。

「く・・・くそ・・・！」

〈この男・・・まじとんでもねぇぐらい強い・・・！〉

シグナムは一度自分の手の中に収められた真っ二つに折れたレバンティンを一瞥し、再び険しい表情で五ェ門を凝視する。

「（レヴァンティンを折るとは・・・これが斬鉄剣か・・・！？）」

「覚悟され！」

五ェ門は止めを加えようと斬鉄剣を逆手に持った。

「バルディッシュ！」

〈Ｊｅｔ　Ｚａｍｂｅｒ〉

と、その瞬間シグナム達の危機に駆けつけてフェイトが頭上からジェットザンバーを振り下してきた。

「！」

「ほあああああ！！！」

五ェ門はフェイトのジェットザンバーを斬鉄剣で受け止めると、険しい表情でそれを何とか耐えしのいでいた。

「ぐ！！！」

そして、耐えしのいだ五ェ門は距離を取ってフェイトに言葉を投げかける。

「何奴!?」

「機動六課ライトニング分隊隊長、フェイト・T・ハラオウン。」

シグナムはユニゾンを解くと、目の前に現れたフェイトに向かって訝しげにここに来た理由を尋ねる。

「テスタロッサ・・・何故お前が?ルパンはどうした!?」

「すみません。取り逃がしちゃいました。ただ、土方さんとアコース査察がルパンを追って・・・」

「何だと!?それなら早く戻れ!私のことは構うな!!」

「そう言うわけにもいきません。二人の事、放っておけませんから。」

「「・・・・・・」」

フェイトの言葉に思わず声を詰まらせる二人。

と、その時五ェ門は徐に斬鉄剣を鞘に納めて戦闘態勢を解除した。

「!?」

この意外な行動にはフェイトやシグナムもきょとんとした。

「どういうつもりだ貴様?」

「興が醒めた。これ以上の闘争は無意味。御免!」

五ェ門はそう言うと、月明かりに身を照らしながら暗闇の森の奥へと姿を消していった。

「待て！」

直ぐに追いかけようとするフェイトだったが、五ェ門はまるで忍者の様な軽快な身のこなしであっという間に距離を離し、行方をくらませてしまったのだから。

「くそ・・・逃がしたか・・・」

「すみません・・・」

「構わん。どのみちお前が来てくれなければ、私達はあの男に斬られていただろう。」

「くそ！今度会ったらギッタンギッタンにしてやる！！」

シグナムとアギトは今回の戦いで五ェ門がいかに強い剣客であることを身をもって理解し、それと同時に自分たちの未熟さを痛感することとなった。

また、シグナム達の戦いに決着がついたころ、ヴィータとルキア、吉良の三人も満身創痍の状態になりながら王ドラとエル・マタドーラの二人を倒すことに成功した。

「「ぐっほ！」」

二人は目を回しながらその場に倒れ、ヴィータ達は肩で息をしなが

らこう呟いた。

「は、は、は、は、は。舐めんじゃねぇぞ・・・私達を・・・！」

「は、は、は、は。手間を取らせおって・・・」

「は、は、は、は。これで・・・終わりだ・・・！」

そして、残す戦いは白夜叉こと坂田銀時と半妖の犬夜叉の一騎打ちだけとなった。

「つらあああああ！！！！！」

銀時は顔中が血まみれになりながらも、それでも決して屈することなく木刀一本で戦いつづけ、犬夜叉の顔に怒涛の斬撃を浴びせ続ける。

「ぐっふ！！」

「ほおおおお！！！！！」

銀時は最後の一撃は今まで以上に威力のある打撃で犬夜叉を殴り飛ばすが、犬夜叉も銀時に勝るとも言われる高い生命力から起き上がり、鉄砕牙を手に取り銀時に斬りかかる。

「つらあああああ！！！」

銀時が木刀を両手で持って身構える中、ユーノが咄嗟に自分の武器である晩翠を銀時に向けて投げつけた。

「銀さん！僕のも使ってください！」

「すまねぇ、ユーノ！！」

銀時はユーノが投げつけた晩翠を受け取ると、木刀と晩翠の二刀流を披露する。

「急繕いの二刀流で俺が倒せるかよ！！！」

強い口調でそう言う犬夜叉だが、銀時は低い声で二本の刀を持ちながらこう言った。

「は。倒すさ・・・俺が・・・いや、俺達がな！」

銀時はその直後に振り下されてきた犬夜叉の鉄砕牙をユーノの晩翠で受け止めたのち、利き手に握られた木刀で隙だらけとなった犬夜叉の腹部に渾身の刺突を加える。

「くたばれ・・・ワン公！！！！」

銀時が放つ魂の一突きが犬夜叉の体に負荷を与え、犬夜叉は声を上げて苦しんだ。

「がああああああああああ！！！！！！」

「ほおおおおおおおおおお！！！！！！！」

「そ・・・そんな・・・俺が・・・俺が死んでたまるか！！！！！！！！」

犬夜叉はそう言い残すと、銀時の一撃が決定打となり紙切れとなって消滅した。

全員はその光景を見ると、間を置いてから銀時の勝利を喜んだ。

「や、やったぞ！」

「銀ちゃんの勝ちネ！！！」

全員は銀時の元へと駆け寄り、銀時は疲労困憊の様子でユーノの体に倒れこむ。

そんな銀時にユーノは柔かい笑みを浮かべ、銀時もまんざらではない表情を浮かべると、治療を終えた近藤が銀時にこう話しかける。

「万事屋！やったな！」

「あんましデケー声だすんじゃねぇよゴリラ・・・てめぇだって相当無理しやがったくせしてよ・・・」

すると、相変わらず素直な言葉で言い返せない銀時に今度は新八はまじまじとした表情で話しかけてきた。

「銀さん！本当に大丈夫ですか！？」

「は・・・こんなもん・・・かすり傷だ・・・」

「銀さん・・・」

銀時は新八の顔を見ると、清々しい表情で新八の今回のギンガへの

行動に関してこう締めくくった。

「新八・・・無茶はしやがったが・・・最後までよく護り切ったな・・・」

「・・・銀さん・・・ありがとうございます!!」

新八は銀時の言葉に深い感動を覚えると、深々と銀時に頭を下げた。

と、その時近藤はこの場にいる筈の土方の姿が見えないことに気づいた。

「ん?おい、そう言えば総悟。トシはどうした?姿が見えんぞ!?」

「ああ。そう言えば土方さん一人でルパンの野郎を追っていきましたが・・・」

「何!そんな一人でなど無茶な!」

「大丈夫ですよ、近藤さん。アコース査察官が追跡をしてますし・・・それよりユーノ君。さっきあのディエンドって人がユーノ君に対して言ってたことがあるんだけど・・・」

「海東さんが・・・なんて!?」

「うん・・・“君たちの傍にあるマテリアルを決してカトゥーンに渡しては駄目だ”って。」

「何だって・・・?」

なのはから言伝として伝わった海東の意味深な言葉にユーノは思わず訝しげな表情となった。

この言葉が一体何を意味するのか？

その頃、ルパンを追って一人追跡を続けていた真選組副長、土方十四郎はと言うと、会場からかなり離れたところまで彼を追っていたらしく、草木をかき分けながら辺りをさまよっていた。

「くそ！あの野郎・・・何処行きやがった・・・見つけ次第叩っ斬ってやる！この俺に恥をかかせたことを後悔させたやるぜ。」

と、その時徐に自分に向かって怪獣電灯の光が当てられる。

「あの、すみません。」

「あ？」

土方が懐中電灯の光の方に目を向けると、立っていたのは警備員と思われる細い眼つきの男であった。

「この辺は何かと物騒ですから、お一人での外出は控えた方がいいですよ。」

飄々とした様子で自分に話しかけてくる警備員に土方は思わず名前を尋ねる。

「何だお前？」

「“藤田五郎”。見ての通りただの警備員ですよ。」

「・・・――――」

土方は警備員の掴みどころのない飄々とした態度を前に、いつも以上に鋭い目つきで睨み付け、警備員はそんな土方の様子にたじろぐ。

「あの、何か？」

「おいお前・・・随分細せー目してるな。」

「ハハ。この目は生まれつきなもんで。」

「そうかよ。じゃあ――――――」

土方はそう言うと、唐突に警備員の片方の手を握りしめ、掌に出来たいくつもの肉刺を見ながらこう尋ねた。

「警備員には全然似合わねぇこの竹刀ダコ。これは生まれつきじゃねぇよな。てめぇ何者だ？」

「・・・・・なかなか鋭いですね。流石真選組の鬼の副長、土方十四郎。」

「何！！」

突然態度を一変させ、狼のような眼つきで自分を睨み付けてくる警備員に土方は思わず距離を取って刀を抜いた。

すると、警備員は警戒する土方に対して更にこう述べた。

「フフ・・・そうか。翡翠の魔導死神も白夜叉もここには来ていないのか。それじゃあ――――――」

警備員はそう言いながら、背中から仕込み杖を取出し徐に抜刀する。

「置き土産をしないとな。」

土方は自分に敵意を見せてきたこの謎の警備員の様子を凝視し警戒を強める中、内心自分の感情が高ぶるのを感じた。

「（仕込み杖か・・・しかもこいつの狙いはあの野郎とユーノだって言うのか・・・何の目的か知らねぇが、キナ臭せ・・・）ほう。面白いじゃねぇか。最近は色々と緩み過ぎていたからな、こういう血生臭い戦いがしたくてうずうずしてたぜ。上等だ。てめぇが誰だ知らないが、俺は容赦しねぇぞ！」

土方はそう言うと、その直後持っていた刀を強く握りしめ勢いよく警備員に向かって突進した。

「おらあああ！！！」

土方の渾身の一人振りが警備員に仕掛けられ、凄まじい轟音と共に周囲が土煙で覆われた。

土方は鼻で笑いながら仕留めたと確信している警備員に向かってこう呟いた。

「へ。悪いな、本気出しちまったぜ・・・」

だが、土煙が晴れた瞬間土方の目に飛び込んできたのは驚くべき光

景だった。

「ふん。」

晴れた先にいたのは、自分の太刀筋を避ける間もなく受けたと確信していたあの警備員だった。

「な！（全く斬れてねぇだと!?あの一瞬で、俺の太刀筋を見切ったっていうのかよ・・・!!）」

土方はこれまでに数々の修羅場で兵と評するほどの剣客を沢山見てきたが、この男以上に思考と読みの速さ、更には瞬発力に長けたものはそうはいなかった。

そんな驚きを隠せない土方に向かって、警備員は不敵な笑みでこう口にする。

「成程。流石は鬼の副長と恐れられる土方十四郎だけはある。中々に良い剣腕を持っている。」

「（この男・・・何者だ・・・!?）」

「だが、所詮貴様は似非真選組の人間に代わりはない。本物の新撰組の前では貴様の剣など全く通用しない。」

警備員はそう言うと、左手で刀を持ち地面に水平な状態で刃を向け目にも止まらぬ突進力を駆使して土方に向かって牙を突き立ててきた。

「!!!（速え!!）」

あまりの突進力の速さに驚嘆する土方。

そして、直後躱すこともままならない土方の右肩に警備員の放った刃が突き刺さる。

「ぐ・・・は・・・・！」

土方は攻撃を食らうとそのまま力に押され周囲の建物の壁を突き破ってしまう。

その直後、警備員の仕込み杖が折れ、土方は刃が突き刺さった状態で床に転がり落ちた。

警備員は折れた仕込み杖をその辺に投げ捨てると、倒れ伏す土方を一瞥し、こう呟いた。

「やれやれ。銀魂だか何だか知らんが、基本路線がギャグ漫画のキャラクターの分際で、本物の新撰組の人間相手に大口を叩くからそうなる。お前は運がなかったよ・・・相手が俺でなければ長生きできただろうな――――――」

警備員はそう言うと、冷淡な表情で土方を見送りその場から立ち去ろうとする。

だがその時、徐に土方が手を動かす音が耳に入ってくる。

「ん？」

警備員が振り返ると、土方は右肩から大量の血を流しつつ、それで

もなお刀を持って戦う姿勢を見せていた。

「どこを向いてやがる細目野郎・・・まだ終わっちゃいねーぞ・・・ハァ、ハァ」

肩で息をし、満身創痍の土方を一瞥し警備員は不敵な笑みでこう口にする。

「威勢がいいな。幕府の犬と罵られながらも、武士道精神は立派なもんだ。だが大人しく寝ていた方が身の為だったな。致命傷に至らなかったとは言え深手なんだ。」

「ぬかせ!深手は負ったがてめぇの刀も砕けた!真選組が敵を前にしておめおめ引き下がる訳いかねぇんだよ!!」

土方はそう言うと、血をぼたぼたと流しながら警備員目掛けて刀を振り上げて斬りかかってきた。

しかし、警備員は冷笑を浮かべながら土方の太刀筋を見切ると右肩に突き刺さった折れた刃を土方の肩の奥へと押し込んだ。

「が・・・!」

強烈な痛みに動きを硬直させ悶絶する土方。

「寝ろ。」

その直後、警備員は土方の顔面を押さえつけ勢いよく地面へと叩きつける。

「ぐっは！」

最後の一撃が決定打となり、土方は為す術もなく力尽き握っていた刀を床に落とした。

警備員は土方を圧倒すると、徐に懐から煙草を取出しマッチの火で着火させると、煙を吹かしなが土方に対してこう言った。

「ふん。その威勢・気構え・覚悟・・・気に入ったぞ・・・お前は殺すにはまだ惜しい男だ。次に会う時までに俺を倒せるようになってこい。俺は逃げも隠れもしない。」

警備員はそう言うと、吸い始めたばかりの煙草を床に投げ捨てると、足で火を消し土方の前から姿を消そうとする。

と、その時土方は朦朧とする意識の中で立ち去っていく警備員に向かって名前を尋ねた。

「ま・・・待ちやが・・・れ・・・てめぇ・・・名前・・・ぐらい・・・言っていき・・・やがれ・・・！」

「――――テトラカトゥーンの一人。新撰組三番隊組長、斎藤一。」

「し・・・しんせん・・・ぐみ・・・だ・・・と・・・」

土方は仰天した様子でそう言い残すと、そこで完全に意識を失った。

一方その頃、土方とルパンを追ってそれぞれの戦場から帰還したユーノ達機動六課一同はヴェロッサと合流を果たし、土方の行方を追っていた。

「ロッサ！土方さんは！？」

「この辺の筈なんだけど・・・何だかさっきから嫌な予感がする。」

「土方さん・・・一体どこに！？」

はやてを始め、この場にいた全員が突如として姿を眩ませた土方の安否を気遣う。

と、その時近藤は暗闇の中目を光らせていると目の前に広がってきた異様な光景に思わず声を上げた。

「！おい、あれを見ろ！」

全員が近藤の言葉に耳を傾け、目を向けてみると目の前に広がってきたのは先ほど土方と斎藤が戦闘を繰り広げた場所であり、近くに建っていた建物の壁がものの見事に破壊されていた光景にはユーノ達一同は目を疑った。

「何これ・・・」

「一体何があったんだよ！」

と、その時ユーノは建物の中から漂ってくる血の匂いに顔をゆがめた。

「（血の匂い・・・！？）」

急いでユーノ達が建物の中に足を踏み入れてみると、その中にいた

のは力尽き右肩ら大量の血を流して倒れる土方の哀れな姿であった。

これを見た瞬間、ユーノや近藤は思わず声を上げた。

「土方さん!!」

「トシ!!!」

ユーノ達は直ぐに土方の元へと駆け寄った。

この緊急の事態に、彼らはどう対応を取るのか!?

そして、カトゥーンが推し進める目的とは何なのか!?

謎が謎を呼ぶこの事件、一体どうなるの!!

煙草の吸殻はその辺に放り投げないで自分で持ち帰ろう（後書き）

教えて、ユーノ先生！

ユ「今日は士さんの悪友、海東大樹さんのことを教えるよ♪」

ユ「自称、通りすがりの仮面ライダー。世界各地を単独で移動し、目ぼしいお宝を見付けては何処からともなく現れる。」

ユ「彼の変身する仮面ライダーディエンドは、ディケイドとは対をなす力で、仮面ライダーカードに封印されたライダーたちを自在に召喚する事が出来るんだ。」

士「まさか、海東まで現れるとはな・・・しかもよりによってルパンと対決か。」

ユ「何だかこの先大変になってきましたね。」

士「海東の事だ。迷惑しかかけないと思うが、その点は俺から謝罪しておく。」

海「ほう。随分な物言いだね、士。君だって散々僕の邪魔ばかりしてきただろう？」

士「あれはお前がちょっかい出してきたからだろうが。とっとと帰れ、このコソ泥！」

海「コソ泥ではない。僕はそんな安っぽい男ではないのだよ。」

二人はその後も目くそ鼻くその様なつまらない張り合いを続けるのであった。

魔導師図鑑ハイパー！

シグナムと戦いを終えた石川五エ門は一人、滝に打たれながらあることに関する邪念を振り張ろうとしていた。

五「・・・――――！」

それは、戦闘中のシグナムのちょっとアグレッシブルなバリアジャケットと、剣を振るうを度に揺れる豊満な胸であった。

何度も剣を交えるたびにその光景が目に焼き付き、思わず赤面しそうになった五エ門。

そして、今もなおその事を思い返しながら滝に打たれ赤面する五エ門。

五「！」

そして、月夜に向かって五エ門は声を上げる。

五「喝！！！

中、土方は斎藤一に対抗すべく、新たな剣技を身に着けようと模索し始め、同時にユーノはシグナムと唐突な対戦を始める。

一「次回『男は牙を抜かれた時が本当の負け。剣士は剣を折られた時が本当の死』」

斎藤特高部隊

ルパン三世

声　一　栗田貫一

「ルパン三世」の主人公。「アルセーヌ・ルパン」の孫であり、怪盗。祖父と同様、卓越した技量を持った大泥棒であり、宝をコレクションにすることよりも、鮮やかな手口で盗み出すこと自体に生き甲斐を感じている。そのため宝に対する執着は低い。身体は長身痩躯かつ軟体。蟹股歩きが特徴。両手足の関節も器用であり（足で頭が掻ける程）、多少だが身長を偽装できる。短髪で額が狭く、長いもみ上げを生やし、服装はロングジャケットにネクタイが定番。細さとは裏腹に腕力も強く、素手で相手を倒すこともできる。射撃能力についてはあまり語られないが、自分の真後ろにいる相手に、見ずに命中させることもできるなどかなりの実力を持つ。女たらしで三枚目。愛嬌たっぷりの憎めない性格だが、抜け目のない狡知も持っている。普段は義賊のように振る舞い、弱い立場にいる人間の金には手をつけず、基本的には不必要な暴力及び殺人を避ける。普段は女性や警官は殺さないが、たとえ女や警察であっても非道な相手や自分の命を狙う者に対しては容赦はしないという非情な面も持ち合わせている。

石川五ェ門

声　一　井上真樹夫

「ルパン三世」に出てくるサブキャラクターでルパンの仲間。普段着は着物に袴、さらしを巻いて前を大きくはだけている。足下は素足に雪駄（せった）である。なお、この服装は南極・北極といった極寒地でもあまり変わることがない。改まった場では紋付きを着ることもある。なお、愛用の下着はふんどし（越中）である。白鞘の日本刀「斬鉄剣」を所持しており、この斬鉄剣を使った居合いの斬撃が主な戦闘手段である。斬鉄剣で様々なものを斬った後の「また、つまらぬ物を斬ってしまった」いう趣旨の台詞を頻繁に使う。彼の居合の腕前は、常人ではまずなしえないほどに高い。また徒手格闘においても示刀流空手免許皆伝の腕前を持っている。太刀筋がとても正確で、相手の着ている物を、相手の肉体を傷つけずに切り落とすこともできる。また宝石のカッティングなども見事にこなす。振りがとても速く太刀筋の正確さもあるが、飛んでくる弾丸を（たとえそれがマシンガンから放たれたものでも）一つ残らず切り落とすことができる。そして、どんなに鋭い刃物でも切るのに大きな力が必要なもの（たとえば自動車など）もみごとに切ってみせる。

王ドラ（ワンドラ）

声　一　林原めぐみ

「ドラえもん」に出てくるザ・ドラえもんズの一人。一人称　は「わたし」、「わたくし」。オレンジ色の体で別名『中国四千究極のカンフー』。真面目で礼儀正しい性格だが、照れ屋な純情家。特に女性に対しては非常にあがり症。道具は着用している拳法着の「四次元袖」に収納している。常に丁寧語で喋るが些か慇懃無礼な態度をとることもある。エル・マタドーラとはライバルであり、たびた

び張り合っている。

エル・マタドーラ

声　一　中尾隆聖

「ドラえもん」に出てくるザ・ドラえもんズの一人。一人称　は「オレ」、「オレ様」。赤色の体で別名『スペインは赤き情熱の闘牛士』または『スペインの怪力男』。キザでプレイボーイな性格であり、美女に目がないが情に厚い熱血漢。特技は専用のヒラリマントを用いた闘牛。弱点は　シェスタ（昼寝）をしないとパワーが出ない。蛇のようなひょろひょろと細長い物や、女装した男が嫌い。

犬夜叉（いぬやしゃ）

声　一　山口勝平

「犬夜叉」主人公。人間の母（十六夜）と、妖怪の父（闘牙王）の間に生まれた半妖。年齢は人間換算で１５歳。口調はきつく暴れん坊な反面、根は優しい。半分化け犬妖怪なので犬耳を持ち、犬らしい仕草もするが、犬扱いされると怒る。鼻がよく利き、地面の臭いを嗅いで物を探す事が得意。臭いの強いものは苦手。普段纏っている赤い衣と袴は、火鼠の毛を織ったもので、火や毒を防ぐ強力な鎧となる。また犬夜叉自身が頑健な肉体のため普通の人間なら首が吹っ飛ぶほどの圧力にも耐える。父親の血故か、馬力においても並みの妖怪を遥かに凌いでいる。父が遺した妖刀鉄砕牙（てっさいが）を主な武器とするほか、犬型の半妖ならではの武器である爪を用いた技を使う。

鵺野鳴介（ぬえのめいすけ）

声　一　置鮎龍太郎

「地獄先生ぬ～べ～」の主人公。通称ぬ～べ～。日本で唯一の霊能力教師で、左手に鬼の力を封じ込めた鬼の手を持ち、普段は黒の皮手袋を嵌めて隠している。鬼の手は彼自身のシンボルとして、悪霊や妖怪を倒す必殺の武器となる他、霊の心を読み取ったり、気を送り込んで霊や妖怪の傷を癒やすなど、様々な能力を持っている。他に白衣観音経（経文）や霊水晶、念珠を携帯しており、鬼の手と共に彼を印象付ける道具となっている。責任感が強く、奉仕・慈悲の精神に溢れ、整った顔立ちの二枚目だが、その反面、ドジ、間抜け、スケベ等とズッコケ三枚目を演じることも多い。作中で村山元首相と喩えられる眉毛が特徴的。

奴良　リクオ（ぬら　リクオ）

声　一　福山潤

「ぬらりひょんの孫」の主人公。ぬらりひょんの血を4分の1引いている孫で、人間と妖怪のクオーター（混血）である。極道一家「奴良組」三代目候補（若頭）であり、覚醒時は、妖怪の血によって姿形、性格がガラリと変わる。覚醒すると、鋭い目付きと棚引く長髪の、若かりし頃のぬらりひょんとよく似た容姿をした長身の青年へと変貌。口調も少々荒くなり、性格も覚醒前と比べるとかなり大胆になる。まさに極道の親分と言える頼れる存在で、その姿に畏怖する者は組の中にも多数存在する。また一般人に危害を加える妖怪は勿論だが、無害な妖怪のことを悪く言いふらし、誇りを汚すような存在はたとえ人間であっても容赦しない。武器は四国戦でぬらりひょんから譲り受けた長ドス、祢々切丸（ねねきりまる）。

仮面ライダーディエンド

海東大樹が変身する仮面ライダー。基本カラーはシアン。鳴滝はい

ずれディケイドとディエンドは互いに滅ぼし合うと発言している。ディケイド同様、各世界の行き来が可能。カメンライドによりカードに刻まれた仮面ライダーの情報を実体化し召喚する能力を持ち、ファイナルフォームライドやそれに応じたコンビネーション技はディケイド同様に使える。身軽な動きと銃撃を活かしたヒット&アウェイ戦法を行う。アタックライドにより、ディエンドライバーの高速連射や分裂弾で攻撃する「ディエンドブラスト」や、身体を透明化させて姿を消し、主に戦線離脱に使う「ディエンドインビジブル」、呼び出したライダーの必殺技によるフォーメーション「クロスアタック」を発動する。その際、召喚されたライダーたちも還元され、エネルギーの一部となる。　鳴滝からもたらされた専用のパワーアップカードによって、自身の分身を生成する「ディエンドイリュージョン」等の新たな技が追加された。

必殺技：「ディメンションシュート」

ファイナルアタックライド（ディエンド）により、ライダーの図柄が描かれた半透明のカードが照準となって標的を補足、カードのエネルギーを込めた巨大なビームを発射する。その際、召喚されたライダーたちも還元され、エネルギーの一部となる。

コンプリートフォーム

ディエンドが強化変身した本作品オリジナルフォームでディエンドの最強形態。胸部のヒストリーオメントには、平成仮面ライダーシリーズの劇場版で初登場したライダー8体のカードが並ぶ。「アタックライド・劇場版（ＧＥＫＩＪＹＯＵＢＡＮ）」により、８人同時に召喚され一斉に必殺技を発動することができる。

専用ツール

ディエンドライバー

ディエンドへの変身にも使う５０口径の銃型専用武器。変身前・後を問わず、高威力のエネルギー弾を放つ2連式の銃として使える。銃身側面中央部に設けられたカード挿入口にライダーカードを装填し、銃身をポンプアクションの要領で前にスライドさせることで、そのカードの種類が発声されて待機音が鳴り始め、トリガーを引くことでそのカードの能力名などが発声された後、カードの裏面に描かれたライダーの紋章の投影図が発射されて効果を発揮する。ライダーカードを複数枚同時に使うことも可能。音声はディケイドライバーとほぼ同様。

ライダーカード

普段は左腰に携行される。内部がクラインの壺へと通じるライダーカードホルダーに収納されており、ディエンドライバーに装填することで封じられたエネルギーを解放し、各々の効果を発揮することができる。カードのカテゴリーはディケイドのものと同等だが、変身に用いるディエンド以外のカメンライドは、描かれたライダーを実体のある幻として召喚する効果を持つ。

男は牙を抜かれた時が本当の負け。剣士は剣を折られた時が本当の死

＞ｉ２４９４５―７０９＜

これまでの、ユーノ・スクライア外伝は――――――

謎の広域次元犯罪者、通称カトゥーンはアンゴルモアの力を使い、架空の存在である漫画キャラクターを現実世界へと出現させ、各世界で騒動を起こしていた。

機動六課を始め、ユーノ達はその侵攻阻止と謎の解明に向けて動き出していたが、そんな事件の過程でカトゥーンは怪盗ルパン三世を遣い、ロスト・ロギアの窃盗を試みていた。

ルパン三世の犯行を危惧したユーノ達は聖王教会の依頼の元、現地に乗り出すが、テトラカトゥーンの一人、斎藤一の牙が土方を襲い、重傷を負わせてしまった。

海東との対決の末、どうにかなのは達を巻いてオークションから盗み出した取引指定ロスト・ロギア、『カオスブック』を持って、ルパンは頼まれ主であるこの事件の黒幕、カトゥーンの元へと訪れていた。

「ほら、言われた通りに持ってきたぜ。例の物だ。」

誇らしげな表情で自分の盗み出してきたロストロギアをカトゥーンに手渡すルパン。

カトゥーンも満足そうな表情でそれを徐に受け取った。

「ご苦労だったね。流石は天下のルパン三世というだけはあるよ。

実にいい仕事をしてくれた。」

「そんな大したほどじゃねぇ・・・ってあるよな！なはははははは！！！！約束は果たしたんだ。さ、早いところ不二子ちゃんとのもう口では言えないうっふっであっはんなことさせてくれよ♪」

「そうだね。でも僕のことは兎も角、彼女がそれを許可してくれるかが問題だよ。」

すると、徐にカトゥーンの隣にディスプレイが表示され、そこに映ってきたのはルパンにとっては何よりも愛おしく、時には裏切ったり結託したりを繰り返す謎の美女、峰不二子であった。

不二子は目の色を変えたルパンに向かって艶やかなる雰囲気を醸し出しながら話しかける。

『あら、ルパン。お久しぶり。』

「不二子～～！僕ちゃん、不二子ちゃんの為に頑張ってきたんだよ♪だからさ、俺に不二子ちゃんの身も心も・・・盗まれてみない～～～♪」

ルパンはそう言うと、鼻の下を伸ばしながらディスプレイ越しにもかかわらず不二子に向かって熱烈な態度で飛びかかっていった。

しかし、その直後不二子の声に合わせてカトゥーンが持っていた鈍器でルパンの股間を叩きつけた。

『えい！』

「ぐっほ！！」

ルパンは自分の急所を押えながら、激しく悶え、声を発することもままならない状況と追い詰められた。

「あ・・・あ・・・あ・・・！！」

そんな哀れなルパンの様子を心配、なのかははっきりしないが不二子はこう言って来た。

『ルパン。勘違いしないでよね。確かにあたなの力でこれまでに五つのお宝を手に入れて来たわ。だけど、それだけじゃ、私達が本当に欲している凄いお宝には到底たどり着けないわ。私が欲しかったら、この後に抱える大仕事をこなしてからにしなさい。じゃあね♪』

不二子は悪戯っぽい笑顔でそう言うと、用が済んだかのように一方的にルパンと通信を切ってしまったのだ。

「ふ・・・不二子ちゃん・・・それはないぜ・・・！！」

不二子のあまりにそっけない態度にルパンの心は大きく傷つく。

カトゥーンはそんなルパンを横に見ながらカオスブックの中身を確認する。

「君も実に可愛そうな男だね。折角頑張ったのに、不二子君の方があれではね。」

「るっせなー！俺だってこんな筈じゃなかったんだよ！！大体、お前がいつまでも胡散臭いことばかりぬかすのがそもそもいけねぇん

だぞ、カトゥーン。」

「あはははは。それは失敬失敬。まぁでも・・・不二子君が言った通り、これを盗み出してきただけでは本当のお宝にはたどり着けないよ。ルパン君・・・君が不二子君のハートを・・・真のお宝をモノにしたいのなら、ここは一つ最後の大仕事を成し遂げてもらえないか？」

「それが無事に済めば、不二子は約束通り俺の好きにしていいんだよな？」

「勿論だとも。僕は大いに期待しているよ・・・――だから、頼むよ。怪盗ルパン三世。」

カトゥーンがそう口にすると、ルパンの中に流れる嘗ての大泥棒としての血が騒ぎだし、不敵な笑みを浮かべてこう言った。

「・・・いいぜ。ここまで来たんだ。俺も最後まで大泥棒の名に恥じねぇよう、大仕事はきっちりやらせて貰うさ。」

ルパンはカトゥーンとの話を終えると、猫背で歩きながら自分の自室へと戻っていった。

そんな去りゆくルパンの後姿を見ながらカトゥーンは不敵な表情を浮かべつつ、徐にルパンに対する評価を独り言として呟く。

「・・・やはりあの男を召喚したのは正解だったな。まさかこうも容易く、欲しかったロスト・ロギア五つもが手に入れられたんだ。アルセーヌ・ルパンの三代目として天下にその名を轟かせ、どんな困難な防御壁も乗り越える盗みの技量。彼を除いて、この手の任務

を任せられる漫画キャラはまずそう居ないだろう・・・」

「解せぬな。」

と、その時不意にカトゥーンの真意に関して一人疑問を抱いているルパン側の漫画キャラである石川五ェ門は斬鉄剣を肩に乗せながら床に座ってそう話しかけてきた。

「君もいたんだね。仕留められたと思ってたんだが、女性だから油断でもしたのかな？」

「拙者のことなどどうでもいい。お主は我々をこの現実世界に送り出し、心を操る術を把持しているが、それで一体何を楽しんでいる？一体こんなことの何が面白いというのだ？」

「それは違うよ、五ェ門君。僕が求めてる本当の楽しみはまだ始まってもいない。漸くそのためのレールに乗った段階に過ぎない。楽しみと言うのは、これがなかなかに難しいものさ。中途半端な楽しみ方をすれば、いずれやってくる虚無感に苛まれ自分自身を傷つける。僕は自分を傷つけるような楽しみ方はしたくないんだよ。確実に、だけど決して自分を傷つけることのない最高の嗜好を堪能したいのさ。その為に、君たちには最高級の条件の元働いてもらいたい。」

「・・・――――」

カトゥーンの意味深長な言葉にそれ以上何を言っていいか分からず言葉を詰まらせる五ェ門。

そして、そんな五ェ門の様子を窺いながらカトゥーンは不敵な笑み

を浮かべる。

「ふふふ・・・・・楽しみは、待ち続ける方が何倍も膨れ上がっていいものさ・・・」

一方その頃、ルパンを取り逃がしてしまった機動六課一同は現場の後始末の為に事後処理の方を各小隊ごとに担当していた。

部隊長の八神はやては、後見人であり依頼先でもある聖王教会の教会騎士、カリム・グラシアに任務の結果を報告していた。

『どうにか漫画キャラは撃退出来たけど・・・ほんまごめんなカリム。取引指定ロスト・ロギアの一つ、カオスブックはルパンに持っていかれてしもうた・・・』

「そう。仕方ないわね。品物は持っていかれたけど、一先ず会場の人達が無事だったことだし。ここは良いことにしましょう。」

『近隣の観測隊に通達はしてあるから、移動ルートぐらいは掴めると思うけど・・・それ以前に、こっちは深刻な事態に直面しとる・・・』

顔を渋ってはやてがそう口にすると、カリムも険しい様子で尋ね返す。

「土方さんが・・・敵にやられたって言うのは本当のようね・・・」

『うん。それも右肩にかなりの傷・・・・・ロッサや私達が駆けつけた時には既に重傷やった。今、シャマルが治療に当たってる。』

そう・・・真選組副長こと、土方十四郎はテトラ・カトゥーン、新撰組三番隊組長斎藤一の手にかかり、右肩に深手の傷を負ってしまったのだ。

重傷の状態で発見された土方は直ぐにシャマルによる適切な救済措置を施されていた。

意識を失う土方を見ながら、近藤は込みあがる気持ちを押さえながら切に願った様子でシャマルに言葉を投げかける。

「シャマル殿！頼む！！トシを・・・トシを助けてくれ！」

「はい！分かってます！暗くて傷口がよく見えないわ・・・おまけに傷口の裂け方が酷い・・・クラールヴィント、サポートお願い！」

〈Ｙｅａｈ〉

シャマルはクラールヴィントのサポートを借りながら、持てる技術を投入して土方の救済措置に当たり始める。

心配そうな表情で近藤や沖田、更には現場検証にあたっていた他のフォワードメンバーが見守る中、ユーノは銀時、新八と共に土方が発見された場所の状況を確認していた。

現場に残されていたのは斎藤が使った仕込み杖の折れた切っ先。

ユーノは徐にそれを持ちながら凝視する。

「（傷口に水平に突き刺さった折れた刀・・・）」

ユーノが切っ先をまじまじと見つめる最中、新八は破壊された建物の壁穴を見て、思わず表情を凍らせる。

「建物の壁さえ壊しちゃうなんて・・・一体・・・どんな技を使ったらこんなことが?!」

「ユーノ。お前、何か分かるか?」

銀時がそう尋ねると、ユーノは徐に検証によって得られた事実を語り出す。

「土方さんの傷口と残されていちゃ証拠を見るに、水平に突き刺さった刀傷であることは間違いありません。」

「刀傷って・・・だけど、いくら何でもこの破壊力は異常ですよ・・・!?」

新八はユーノが口にした言葉に思わず半信半疑な言葉を投げかけてしまう。

それもそうだ。

いくら自分たちが日常的に刀や剣に携わる侍とは言え、純粋な刀だけでこれほどまでの破壊力を秘めた斬撃を繰り出させるものなど周りにはそういない。

ユーノ自身も、今回の件に関しては思った以上に困惑していた。

「(これは僕でもよく分からないな・・・・・ここはあの人に聞いてみるかな。)」

ユーノが相談しようとしているあの人とは一体誰なのであろうか？
詳細はこの後、土方を搬送して全員が機動六課に戻ってから明らかになる。

土方の搬送を終えた局員スタッフは応急処置を済ませた土方を医務室へと運び、シャマルによる再手術を完了させると、薬が効いたのかぐっすりと眠りについた。

「ふう。どうやら眠ったようね――――――」

シャマルの言葉を聞くと、付き添っていた近藤や沖田、ヴィータも安どのため息をつき、徐にヴィータが容体を尋ねる。

「シャマル。土方の具合はどうなんだ？」

「命に別状はないわ。でもしばらくは絶対安静ね。本当に、ユーノ君といい土方さんと言い、これだけの大怪我をしながらなんて生命力の強さなのかしら・・・」

これまでなのはやユーノを始め、無茶癖の多い人間を多く治療してきたシャマルだが、診てきた人間のほとんどがこうした非常に生命力の高い人間であった。

彼らは時として、医学では到底解明できないような生命の奇跡を容易にやってのけるのだ。

まぁ、そんなことはいいとして取り敢えず土方が助かったことに近藤は父親が息子を心配するかのような表情で眠りにつく土方を見つ

める。

「トシ・・・ホントによかった・・・！」

「ま、土方さんがそう簡単にくたばる訳ありませんぜ。」

わりとそっけない様子でそう口にする沖田だが、内心は土方の事をかなり心配していることは言うまでもなかった。

「だが、トシにここまでの深手を負わせるとは・・・一体何者なんだ?誰がこんなことを!?」

「今、ユーノとなのはが調べにかかっている。カトゥーンに漫画キャラ・・・そしてその配下と思われる謎の集団・・・こいつは私達が思ってる以上にやべぇ相手かもな・・・」

ヴィータがそう口にすると、その場にいた三人も思わず顔を渋った。

その頃、ユーノはなのはと一緒に今回の事に関して詳しい調査を進めるために司令室の方に残っていたが、ユーノは異世界に住むある人物に向けて土方襲撃の犯人と思わしき手がかりに関する参考意見を聞くために連絡を取っていた。

「ユーノ君。誰に連絡してるの?」

「参考意見を聞こうと思ってね。前に異世界で知り合った人にちょっと。なのはも知ってる人だよ。」

「え?私が・・・一体誰だろう?」

訝しげな表情を浮かべて頭の中にこれまで関わってきた人の顔を思い浮かべるなのは。

「出てくれるかな・・・――」

そんななのはとは別にタッチパネルを操作しながら連絡を試みていたユーノ。

やがて、砂嵐で表示されていディスプレイが徐々に鮮明な映像へと変わっていき、二人の目の前に映ってきたのは、ユーノやなのは達がアンゴルモア操作の過程で一時お世話になった第２９管理外世界『ＥＡＲＴＨ』の住人で、人と言うよりもドラえもんと言ったほうが正確なネコ型ロボット、サムライ・ドラであった。

『やぁ、ユーノさん。お久しぶりです！』

ユーノとの通信が繋がると、ドラは事実のパソコン画面に映ってくるユーノに向かって笑顔で言葉を投げかけた。

「よかった、繋がった。ご無沙汰です、ドラさん。」

ユーノがそう言った直後、なのははドラの顔を見るなり声を上げて驚いた。

「あああ！！！ど、ドラさん！！！」

『よう、なのは。相も変わらずあからさまに驚いてるな。て言うか、人の事何かにおびえたように見るのやめてくれない。』

「だ、だってドラさん・・・あの時はかなりこっ酷く扱いたもので

すから・・・！無意識のうちに体が震えて・・・・！！」

なのはがそう言うのも、無理はない。

普段管理局内において白き魔王と揶揄されるなのはにおいても、ドラの扱き方は理不尽且つあまりに一方的であったため、なのは自身もドラに対して恐怖を感じざるを得ないという状況だったのだ。

しかしドラ自信とユーノの場合、そんななのは達とは裏腹に非常に良好な関係を気づきあげている友人であり、こうした非常時やそうでないときも時折連絡を取り合っているのである。

それはさておき、ドラは挙動不審なのはの様子を見ると、思わずあきれ返ってしまう。

『ああ・・・そうかい。それは悪かったよ。つうかどんだけだよ・・・・それで、ユーノさん。今日オイラに唐突に連絡をよこしてきたのはどうして・・・と言うべきなんでしょうが、顔色窺うに何かオイラに重要な話があるようですね。』

「流石ですね。実は――――――」

ユーノは真剣な様子でドラにこれまでの事件の流れと土方が負った刀傷に関する情報をこと細かく丁寧に説明すると、ドラは腕組みをしながら話を理解し、おもむろにこう語り出した。

『成程。概ね話の筋は見えました。ユーノさんの話を聞く分に、それは多分“平刺突（ひらづき）”であると思われます。』

「平刺突？」

「江戸末期、京都の治安維持に命を賭した通称“壬生狼(みぶろ)”と恐れられた剣客集団『新撰組』の隊士が使用した水平に刀を構えて繰り出す独特の刺突のことです。戦術の鬼才、土方歳三が考案したもので、尋常ならぬ破壊力を持つという話からそれが出来るのはほぼ間違いなくあの男で決まりです。」

「あの男・・・誰なんですかそれは!?」

なのはがそう尋ねると、ドラは少しの間を置いてから徐に語り出す。

「・・・新撰組最強と言われた一番隊組長、沖田総司よりも強いとされ、その後の戊辰戦争を掻い潜り、唯一不死身とされた藤田五郎と言う名の男・・・その正体こそ、新撰組三番隊組長――――――それが、斎藤一だ。」

「斎藤・・・」

「一・・・!」

『どんな状況においてもその掴みどころのないしたたかさを持ち合わせ、冷笑を浮かべながら悪・即・斬の元に敵を斬り捨てる。そして、自分の得意技である左片手平刺突、通称“牙突(がとつ)”を絶対の技として幾千もの命を刈り取ってきた・・・』

「そんな人が・・・土方さんにあれだけの傷を・・・!?」

「・・・――――」

動揺を顕著に顔に出すなのはと顔を渋り声を黙らせるユーノ。

そして、話を終えるとドラは徐に手元から一冊の漫画を取出し最後にこう語った。

『ちなみに、そいつに関する参考資料は漫画『るろうに剣心』から拝借しています。』

「「ぐっふ！」」

締めくくりのドラの言葉と漫画を目の当たりにし、二人はその場にこけてしまった。

襲撃から一夜明け、あれから終日看病に当たっていたシャマルと付き添いの真選組一同は特に何も語ることなく沈黙を保ちつづけ、刻々と過ぎ去る時間の中でシャマルは徐に土方の額に乗っていたタオルを退いて熱を確かめる。

「熱は下がったみたいね・・・」

「トシ・・・」

近藤は未だ目を覚まさない様子の土方の容体を自分の体以上に気にしつづけ、沖田はそんな近藤の横で眠ったままの土方を黙って見つめる。

すると、シャマルは徐に立ち上がり替えの水を取りに行こうとする。

「すみません。ちょっと水を変えてきますね。」

シャマルがそう言うと、総悟がそんなシャマルの代わりをかって来

た。

「だったら、俺がいきやす。」

「はい。じゃあ、お願いしますね。」

「すまない・・・総悟。」

近藤は総悟にお礼の言葉をかけ、その言葉を聞いた後総悟は徐にボウル片手に部屋の外へと歩き出していった。

総悟が廊下を歩いていると、医務室近くの長椅子に座って土方の容体をずっと気にかけていたユーノとその隣でジャンプを顔に乗せ、熟睡中の銀時が目に飛び込んできた。

ユーノは険しい表情で総悟に向かって話しかける。

「・・・沖田さん・・・土方さんの容体はどうです?」

「熱も下がったことだし、あとは安静にしてれば問題ないとのことでさぁ。」

「そうですか。大事に至らなくてよかった。」

ユーノも総悟の言葉を聞くと、どうにか一安心することが出来た。

総悟は直ぐに水を取り替えて医務室へと戻ろうとする中、今度はユーノに向かって質問をしてきた。

「しかしユーノ先生・・・土方さんをあんなにメタメタに出来る人

間なんて、万事屋の旦那かユーノ先生以外にそうざらには居ない筈でさぁ・・・」

「――――・・・」

「あんたの知らべじゃ、斎藤一とかって言いましたっけ？俺達と同じ新撰組を名乗るインチキ野郎は・・・・・・・」

「沖田さん・・・あなた・・・」

「俺はこれで失礼します。」

ユーノが言葉を投げかける前に総悟はその場を後にした。

去りゆく総悟の後姿を凝視しながら、ユーノは今の総悟の心情を悟った。

「（沖田さん、普段は普段で土方さんと喧嘩ばかりしてるけど・・・内心は・・・あまり穏やかじゃないんだろうな・・・）」

すると、今まで横になって熟睡していた筈の銀時が目を覚ますと、こんなことを口にした。

「俺達を根絶やしにするのが目的なら、もっと確実な方法があったんじゃねぇのか？何でカトゥーンはこんなまどろっこしいことをしやがる？」

「はい・・僕が考えるに、奴には何かもっと他に目的があるのではないでしょうか？」

「他に？」

「それが何なのかは調べてみない分にはわかりません。ですが、今度いつ漫画キャラが攻めてくるかは想定できません。出来るだけ、万全の対策で迎え撃つ必要があります。」

「・・・そうだな・・・」

銀時はユーノの言葉を聞き入れると、再びジャンプを顔に乗せてそのまま静かになった。

ここからは新八の語りです。

シャマルさんの治療の甲斐あって、土方さんは一命を取り留めた。

シャマルさんが言うには「傷自体は深かったけど、他の大事な組織や器官に損傷がなかったのが幸いした」と言っていた。

だけど、三日経った今も土方さんの意識は戻っていない・・・

土方は新八の語りの通り、襲撃から三日経った今でも眠り続けている。

六回一同はそれぞれ交代で土方の様子の番にあたっていた。

午後8時を過ぎた時点で現在番にあたっていたのは神楽だった。

退屈そうに欠伸をかく神楽だったが、その時不意にドアが開くと風呂から上がったばかりの様子のキャロが部屋へと入ってきた。

「あの、神楽さん。お風呂空きましたから入ってください。交代ですから土方さんの事は私が看ています。」

「そうアルな。じゃあ、私もゆっくり疲れを取るとするネ。」

キャロの言葉を素直に聞き入れると、神楽は一度大きく伸びをした。

「容体はどうですか？」

「相変わらず眠ったままネ。普段のマヨネーズとタバコ臭いのがウソみたいネ。」

「そうですか・・・」

「ま。このマヨラーの生命力はゴキブリ並みネ。銀ちゃんもユーノも大丈夫って言ってたし、くたばるにはまだ早いネ。おら、マヨラー。さっさと起きないとマヨネーズで埋め尽くされた棺桶の中にぶち込んでやろうか？ああ？」

普段が普段の毒舌女王神楽の表情と声色に思わずたじろいだ様子となるキャロはふとこんなことを心の中で思った。

「（やっぱり神楽さんには適いそうもないかな・・・）」

「ところでキャロ。新八はまた道場あるか？」

「はい。あの襲撃以来、新八さん・・・急に稽古に励むようになりまして・・・」

そう。

新八は土方の襲撃を機に、六課の室内訓練場で黙々と稽古に励むようになっていた。

大方の検討はつくが、神楽はそんな新八の心境の変化をこう分析する。

「・・・ギンガか・・・」

「え？ギンガさんが何かありました？」

「キャロ。お前もまだまだおこちゃまネ。男心は色々と複雑あるヨ・・・」

「？」

神楽の言葉の意味を深く読み取っていないキャロは頭に？マークを浮かべるばかりだった。

その頃、機動六課室内訓練場に設けられた剣術道場の方では一人竹刀を振りながら、新八が汗をかきながらめきめきと稽古に励んでいた。

稽古に励む中、新八はひとり言のようにこんなことを呟いた。

「は、は、は、は、は。このままじゃダメなんだ・・・僕がもっとしっかりしていれば、僕がもっと強かったら、銀さんや近藤さん・・・土方さんだってあんな怪我などしなくてすんだ筈だ。」

今の新八の心境は行ってみれば焦りと不安でいっぱいだった。

まるでその光景は嘗てのティアナやエリオを見ているかのような。

息を切らしながら竹刀を握る力を強くすると、新八は目の前に敵がいることを想定しながら竹刀を振り、更にこう呟いた。

「僕に出来ることは限られてるけど、それでも・・・せめて目の前にいる大切な人達を護りたい！この世界に来てギンガさんは僕が弱くないと言ってくれた。ギンガさんだけが、沈みかけた僕を励ましてくれた。だったら僕は、この世界にいる間は何が何でもギンガさんを護ってみせる！剣しか能のない僕でも、目の前の女性を護ってあげることぐらいは出来るんだ！！」

新八がそんなギンガへの決意を確かなものとして稽古に励んでいると、そんな新八の元に意外な来客が入ってきた。

「精が出るな、志村。」

「！？あなたは・・・――――」

新八が振り返ってみると、そこに立っていたのは胴着に身を包んだ竹刀片手のシグナムだった。

「シグナムさん・・・！」

「うむ。銀時や近藤局長にはまだ遠いが、なかなかにいい剣筋だ。」

「ありがとうございます。こんな時間にどうしたんですか？仕事はとっくに片付けた筈じゃ・・・」

「なに。私も久しぶりに静かに剣の稽古をしてみたくなっただけのこと。ここはスクライアが偶に使ってる場所でな、時々だが私も使わせてもらっている。どうだ志村？一人よりも二人の方が稽古もはかどるだろう？手合せ、願えないか？」

「はい。あの・・・よろしくお願います！」

「ああ。騎士として、全力で行かせてもらうぞ。」

二人は竹刀を持って向かい合うと、礼儀正しくお辞儀をしてから全力全開で向かっていった。

道場に響く竹刀と竹刀による激しい打ち合いをこっそりと窺っていたギンガは新八のひたむきな姿に思わず見入ってしまう。

「新八さん・・・――」

そして、ギンガとは別に道場の方へと足を運んでいたユーノは別な意味でシグナムの事をずっと観察していた。

そして、このことがその後のやり取りに意味を持つようになってくる――――――

襲撃から四日。

朝を迎えると近藤とフェイトは土方の朝食を持って土方の自室の方へと向かっていた。

「土方さん・・・目を覚ましましたでしょうか？」

「うむ。そろそろ起きてもいいころだとは思うが、何分あの怪我では当分戦うことは出来ん。酷な話、戦力には入れられんな。」

「もし起きていたら、私的にはちょっとあれだけど・・・金太郎さん特製のマヨネーズで作った朝食を食べてもらいましょう。」

「そうだな。しかし・・・こんなものを食べる奴の気持ちが知れんな・・・」

近藤はそう言うと、フェイトの手に抱えられたマヨネーズがふんだんに盛られてそれが果たして食べ物と言っていいものかわからない代物に思わず青ざめた表情を浮かべる。

「私も同感です・・・はい・・・」

フェイト自身も、この悪趣味な朝食には流石に引いていた。

やがて、二人は土方の自室へとたどり着くと一度ノックをしてから部屋に入ることにした。

「土方さん。フェイト・T・ハラオウンです。朝食の用意が出来ました。」

「トシ。今日は特別だ。金太郎殿がお前の為にマヨネーズ尽くしの朝食を用意してくださった。タンと食っていいぞ。」

二人がそう呼びかけても、返事がないのできっとまだ眠っているのだと思い二人は何の躊躇いもなく部屋の中へと入っていった。

「あの、入りますね。」

フェイトがそう言って近藤と共に部屋へと入った瞬間、二人は予想外の光景を目の当たりにする。

「「な！」」

部屋の中には土方の姿が何処にも見当たらず、目の前に広がってきたのはもぬけの殻となったベッドと開けられた窓ガラスだった。

「ひ、土方さん！！」

「トシ！どういうことだこれは！？いなくなってる！！」

二人は慌てた様子で部屋中の中を探索するが、土方の姿はやはり見当たらず不意にフェイトは冷たくなった土方のベッドを手で触る。

「布団が・・・冷たくなってる・・・」

「は！まさかトシ・・・蒸発か！？」

近藤はそう言った直後、頭の中にコートに身を包んで自分たちの前から姿を消そうとする海辺を歩く土方の姿が浮かんできた。

フェイトもこの近藤の言葉を聞くと、半信半疑な様子で相槌を打つ。

「ま・・・まさか・・・――――――！」

と、その時フェイトは部屋の外から聞こえてくる素振りをしてるような物音に違和感を感じた。

「どうしたフェイトさん!?」

「し。外で何か物音が聞こえます。」

「何?」

近藤もその物音をはっきり聞き取り、フェイトと一緒に窓の外を覗いてみるとそこにいたのは全身を包帯で巻かれ、絶対安静と言われていたにもかかわらず真剣での素振りを行る土方であった。

この光景を見た瞬間、二人は声を上げて驚いた。

「な!土方さん!!」

「トシ!何をやっとるのだ!?」

二人の声を聞くと、土方は一度素振りを中断する。

「おお・・・どうやら俺は随分と眠ってたらしいな。近藤さん、心配すんなよ。俺の怪我ならもうとっくに良くなってるぜ。心配かけちまったな。」

「馬鹿を言うな!シャマル殿の話では、その状態では当分戦うこともままならんのだぞ!無茶をする出ないトシ!」

「そうですよ!無茶してそれこそ怪我が悪化したら、大変なことに――――!」

すると、土方は自分の怪我を心配する近藤とフェイトに向かって舌打ちをしながらこんなことを口にしてきた。

「俺はな、あんな屈辱を味わったのは初めてなんだよ。」

「「？」」

「あの細目野郎・・・俺の太刀筋をまるで赤子を捻るかのように容易く見切った上、あんな常識はずれな技を持って居やがった・・・俺の真選組としての誇りを・・・軽々しく踏みにじりやがった・・・！」

「トシ・・・お前・・・」

土方は込み上げてくる斎藤への怒りと嫉妬心に思わず拳を強く握り更に続ける。

「それだけでも十分気に食わねぇのに・・・奴は最後に俺の目の前で・・・煙草を吹かせて吸い殻を捨てていきやがった・・・！」

「え？」

「俺が今どれだけ煙草を吸いたいか分かっていたのか・・・そうでないにしろ、胸糞悪いったらありゃしねぇ・・・！！！チクショー！！！！！！！！！！煙草吸わせろ！！！！！！！！！！！！！！ニコチン接種しねぇとこっちは力なんか出ねんだよ！！！！！！！！！！お蔭で傷の治りも遅いんだよ！！！！！！！！！」

そう断言する土方とは違い、近藤とフェイトは口を揃えて思わず突っ込みを入れる。

「「違う違う違う！！問題はそこじゃないから！ていうか、ニコチ

ンを取っても傷の治りがよくなるわけないから!!寧ろ肺に影響が出るから」」

「兎に角、野郎は今度会ったら何が何でも俺の手で仕留めてやる。おちおち眠ってる暇なんざぁ俺にはねぇんだよ!」

土方はそう言うと、二人に背を向け再び黙々と剣を振り始める。

「土方さん・・・」

「トシ・・・・・・」

頑固一徹でプライドを何よりも大切にする土方の行動を止めるに止められない二人だった。

土方は二人に見られながら、心の中で斎藤へとの対抗策を講じ始めていた。

「(くそ・・・!早いところ本調子を出せるまでに回復しねぇと・・・奴とは・・・斎藤一とは全力で戦えねぇ!それ以前、奴のあの刺突を何とかしねぇ分にはこの間の二の舞だ・・・先ずはあれを破る方法から模索してみねぇとな・・・)」

土方は新八とはまた違う焦りと不安を抱きながら打倒斎藤を胸に剣を振り続けるのであった。

そして、そんな不安を抱えていたのは何も新八や土方だけではなかった。

もう一人、烈火の剣士ヴォルケンリッターの将であるシグナムにも

密かな焦りと不安があった。

原因はあの襲撃の日に対峙した五ェ門との対決だった。

見事なまでに愛刀であるレヴァンティンを折られたのが今のシグナムにとっては何よりも焦りを顕著に示すものだったのだ。

「紫電一閃！！」

シグナムはいつにもまして気合を入れた紫電一閃をシミュレーションシステムが作り出した敵に向けて振りおろし、粉砕していく。

「ふう。」

そんなシグナムの様子を傍で見守っていたヴィータやアギト、フォワードメンバーなどは共通の意見を提示する。

「シグナムの野郎・・・何時にも況してすげえ気迫だな・・・」

「暑苦しいったらありゃしねぇなおい・・・あの野郎基本戦うこと以外に楽しみない訳？」

「一応お風呂好きなはずなんだけどな・・・どうもそっちの印象は最早薄くなってきた感じだぜ。」

「だけどシグナムの奴、俺が見る限り五ェ門に負けてから若干焦ってるようにも見えるぜ。」

「焦ってるんじゃなくて、実際そうなんだよきっと。何せシグナムさんはヴォルケンリッターの将にして、何千年という時の中で剣一

筋で生きてきた誇り高きベルカの騎士。その相棒であるレヴァンティンを斬鉄剣に見事なまでに折られたんだ。己の力量の甘さを痛感したんだねきっと・・・」

「ですが、僕はあまりこんなシグナムさんを見ているのは心なしか辛いくなってくるのはどうしてだろう・・・」

「私とて同じだ。シグナム殿・・・・・・・」

「シグナムの旦那・・・・・・・」

全員はシグナムのシグナムらしからぬ焦りと不安が漂う姿に顔色を歪めた。

そんなシグナムの様子を気にしながら、ユーノは一人何か考え事をしていた様子であった。

そして、それから更に二日経過したある昼下がり。

シャマルの警告を無視して土方は治り切っていない体のまま自滅覚悟の稽古を続けていた。

「おらあああああああ!!!」

土方は利き腕が上手く使えないため、左腕を使って目の前の丸太を切断していく。

「このおおおおおお!!!」

利き腕でないにも関わらず、そこは流石長年の努力が実って造作も

なく丸太を切り倒していく土方だが、ところどころ丸太の表面に荒い箇所が目立っているのも事実だった。

「ち・・・やっぱ利き腕じゃねぇと上手くいかねぇか・・・――で、おめぇはさっきから何人の稽古じろじろ見てるんだよ?」

土方はそう言うと、先ほどから何故かまじまじと稽古を観察している飄々とした様子のユーノに尋ねる。

「いえね。流石は土方さん。左腕だけでも利き手に負けず劣らずの素晴らしい剣筋を見せているなぁ～～と思いましてね♪」

「ふん。何を言ってやがるんだてめぇは。俺は、あの如何様野郎に勝つためには何としても早く回復しねぇとならねぇのに、こうも回復が遅いんじゃ腕が鈍っちまう。だからそうならないようこうして左腕だけでも鍛えようとしてんじゃねぇか。」

「体を痛めつけてまで、剣を振ることだけが果たして本当に修行なんですかね・・・」

「・・・何が言いてぇんだ?」

多少不機嫌そうな表情でそう言葉を発する土方だが、ユーノは物怖じ一つせず冷静にこう尋ね返した。

「そうやって闇雲に剣を振ったところで、あの斎藤一に勝てるとは到底僕は思いませんね。具体的に斎藤の牙突を上回る策でもあるんですか?」

「そ・・・それはだな・・・」

「生憎付け焼刃でどうにかなるほど、牙突って言うのは甘くありませんよ。一度食らって、あの技が本調子でないことも割り切ってるでしょ？」

「――――――」

確かに、ユーノの言う通り・・・今の土方十四郎の実力では斎藤一の牙突を上回ることができるかどうか正直危ういところであった。

思わず言葉を詰まらせ剣を振るのを止めてしまう土方。

すると、ユーノは徐に立ち上がるや否やある場所に向かって歩きながらこう呟いてきた。

「体を鍛えるのも結構ですが、どうでしょう。ここは一つ僕の戦いを見てから考え直しませんか？ちょうど、僕もやらねばならないことがあるものでして――――――」

「あ？お前が戦うって・・・一体誰とだよ？まさか、銀時（やろう）とか！？」

「違いますよ。銀さんはいいんです・・・・・僕が戦わないといけないのは、根本的に今一番まずい状況に陥っている“女性”です。」

「？」

「着いてくれれば分かりますよ。」

ユーノの言葉を聞き、一先ず言われた通りに後についていくことに

した土方。

そして、しばらく歩いて辿り着いたのは何時もなのは達が使っている訓練スペースであった。

現在、ここでは全員が見守る中シグナムとエリオが模擬戦を行っていた。

「でやあああああああああ！！！！！！」

「はあああああああああああ！！！！！！」

互いにぶつかり合う剣と長槍。

二人の切磋琢磨する様子の模擬戦を観察しながら、キャロは呟く。

「エリオ君もシグナム副隊長も、いい感じですね。」

「だけど、やっぱりシグナムの表情がいつもと比べるとやっぱり固い気もする・・・」

「うん・・・いつもなら、もっと純粋に戦いを楽しんでいるはずだからね。」

なのはがそう口にすると、銀時は髪の毛を掻き毟りながらふとこう言葉を漏らす。

「戦いを楽しむか・・・・・・たく。何で俺の周りには剣八みたいなのがごろごろいるんだよ。こんな事なら、長谷川さんもこっちに連れて来ればよかったぜ。」

「いや・・・長谷川さん呼んできたところで別段何も変わんないだろ。ただ余計に人数増えるだけだろ・・・」

と、新八がそうツッコミを入れた直後だった。

互いに距離を取って次の攻めに入ろうとしていたシグナムとエリオの前に不意に瞬歩を使ってきたユーノが乱入してきた。

「御取り込み中、失礼する。」

「「!?」」

ユーノの突然の登場に対戦中の二人やなのは達は思わず表情を一変させる。

「ゆ、ユーノ君・・・?」

「ユーノ先生?」

「スクライアか。どうした?」

シグナムが一度剣を下ろしてユーノにそう尋ねると、ユーノはいつもとはまた違う雰囲気を醸し出しながらシグナムに向かって言葉を投げかける。

「シグナムさん――――――ちょっと、いいですか。」

「何だ。私に話があるのか?手短に頼むぞ。一応まだ戦闘は続けているのだからな。」

「分かりました。では要件を言います。その戦闘が終わり、一休みしたら――――――“この僕と、戦ってください”。」

「「!?」」

「「「え!」」」

「何!?」

「ユーノさん!?」

話しを聞いていた一同はあまりに唐突なユーノの発言に誰もが耳を疑った。

「どういう風の吹き回しだ?お前から私に戦いを挑んでくるなど、余程の事だと思うが・・・」

「ええ・・・余程の事ですよ。但し、僕ではなくあなたがね。」

「?」

言葉の指す意味に思わず取り違えたような表情を見せるシグナム。

「準備をして待ってます。僕は第二フィールドに居ますから、それまでエリオと頑張って“模擬戦”してください。」

「あ・・・ああ・・・」

ユーノはそんなシグナムにこう言い残して瞬歩でその場を後にする。

シグナムとエリオはユーノがいなくなると、戦闘を再開させたが、なのは達全員はユーノの行動に疑問を抱くと、シグナム達の戦いを見るの中断してユーノの元へと向かっていった。

第一フィールドから少し離れたところにある第二フィールドにおいて、ユーノは一人白い装束と袴に着替えると腕まくりをし、落ちないように紐で固定していた。

腰には晩翠とは違う、ごくごく普通の日本刀が携えられていた。

なのは達はそんな不自然なユーノの姿に疑問を抱きながら、徐に尋ねた。

「ねぇ、ユーノ君。急にどうしたの？シグナムさんと模擬戦だなんて・・・普段ならしつこくシグナムさんが言ったところで聞く耳持たないくせに・・・」

「そうっすよ。どういうつもりです一体？」

「大したことじゃないさ。ちょっと気になることがあってね――――」

ユーノはそう言うと、徐に日本刀を取出し波紋をなぞる様に見入った。

「気になることって、シグナムに？」

「ああ。それとなのは・・・――――さっき“模擬戦”って口にしたけど、そいつは間違いだら先に言っておくよ。」

「え？」

「僕は“模擬戦”なんて、生ぬるいものをやるつもりは毛頭ない――――――」

ユーノはそう言うと、刀を静かに鞘に納めてシグナムの到着を待っていた。

なのは達はこのユーノの真意に頭を悩ませる中、土方は噛み付くような視線をユーノに浴びせながら心の中でこう呟いた。

「（何を考えてやがるんだ野郎は・・・――――つうか、対戦する相手はなのはじゃなくてシグナムだったとはな。しかし、何でだ・・・・・あいつのあの眼、あれは単に戦うって奴のものじゃなかった。まるで――――――誰かを“殺す”つもりの奴のものと同じじゃねぇか。）」

土方がそんな事を思っていると、恋次はユーノの今の格好を見るなりこう話しかけてきた。

「それにしてもユーノ。服まで着替えるとは、何時にも況して気合十分じゃねぇか。」

「でもそれってバリアジャケットじゃねぇよな。いいのかよ、着なくて？怪我するぜ。」

そうヴィータが口にすると、ユーノはため息がてら意外な言葉を呟いた。

「今更何を言ってるのヴィータ。僕はこれまでの捜査において、一度だって“バリアジャケット”を着て戦った覚えはないよ。」

「「「「え!?」」」」

「いつも着てるのは至って普通の甚平服と羽織り。銀さん達や恋次さん達と同じで、特別防御力がある訳でもない。」

ユーノの口から語られる事実を聞いた途端、フェイトやなのは達は激しく動揺する。

「え!?じゃ、じゃあ・・・怪我が多かったのは全部それが原因・・・!何で今まで黙ってたの!?バリアジャケットも着ないで戦闘なんてしたら、もしかしたらユーノ死んでたかもしれないことだってあるんだよ!!」

「フェイトちゃんの言う通りだよ!どうして隠してたの!!」

「隠すしてるつもりはなかったけどね。と言うか、君たちは揃い揃って僕が戦闘時バリアジャケットを着てると錯覚してたようだね。」

「「!」」

「だがユーノ先生。何故他の魔導師が防護服を着る中で、あなたは我々と同じ普通の格好のまま戦っているのだ?理由ぐらいは聞かせて欲しいものだ。」

「そうネ。ちゃんと理由ぐらい聞かせろよ。隠し事されるのはアタシ一番嫌いネ。」

近藤や神楽がそう言うので、ユーノは強いて言うところの理由を口にする。

「理由ね・・・・・強いて言えば、“自分の身を護るために防護服を着ることがバカらしくなった”んですよ。」

「馬鹿らしいって・・・そんな理由で!?」

「そんな理由さ。大体考えてもみなよ。たとえバリアジャケットに身を包んでいようと、魔力を無効化する致命傷を食らえば、それは即ち死を意味する。銀さん達や恋次さん達死神は防護服に身を包んで戦ってるかい?そんなものなくたって、常に死線という死線を乗り越えて来てる筈だ。他者を護るために防御を張ることはあっても、自分の身を護るために防御を施すなんて真似、もう僕はバカらしくてやってられないよ。」

「ユーノ先生・・・」

「それに、そんなものがあると・・・却って己の覚悟が鈍る。」

「!己の・・・覚悟・・・!?」

「すまぬ。待たせた。」

と、なのはが驚いたようにそう口にした直後、模擬戦を終えて体力の回復を図ったシグナムがフィールドへと足を運んできた。

「来ましたか。」

ユーノは和やかな表情は見せずに、ただ真剣な様子でシグナムの状

態を確認する。

「多少の疲れはあるが、別段問題はない。さて、さっさと始めようか。騎士として全力を尽くさせてもらうぞ、スクライア。」

シグナムはそう言ってユーノと向かい合い、レヴァンティンを構えて戦闘態勢に入ったが、ユーノはシグナムの左肩についたエリオの一撃を受けたであろう焦げ目を見ると、ため息がてらこう呟いた。

「・・・ふう・・・剣が鈍っていたとは薄々感じてはいましたが、まさかここまで色んな部分が鈍っていたとは正直思っていませんでしたよ。」

「？」

「ユーノ？」

「ユーノ君・・・何を・・・」

全員がユーノの言葉に耳を傾ける中、ユーノは冷笑を浮かべながら更にこう言葉を投げかけた。

「騎士としての全力ですって？馬鹿を言わないで下さい。ヴォルケンリッターの将、シグナムの全力を尽くして、どうして肩に傷を負うんですか？」

「何？」

「おい、ユーノ。そいつはエリオと戦って、エリオが強くなってたからシグナムの旦那も手傷ぐらいおっちまったんだろうが。」

アギトが何を言っているとばかりにユーノに弁解すると、ユーノはこう言った。

「だとしたら尚の事悪い。」

全員は益々意味の分からないとばかりの表情を見せる。

総悟は全員を代表してその理由を尋ねる。

「どういう意味でさぁ、それは？」

ユーノは総悟の言葉を聞くと、同じく訝しげな表情を見せるシグナムに歩み寄りながらシグナム目掛けて言葉を投げかけた。

「百年・・・千年・・・・・・言葉にすれば短いものですが、生きてみれば随分長い時を経たものですね・・・・・・その長い年月の中で、あなたは騎士として“腐ってしまった”ようだが・・・・・・」

「何！」

「おい、ユーノ！てめぇ何言ってやがる！！シグナムが腐るって・・・何を根拠にそんなことを！！」

同じヴォルケンリッターでリーダーでもあるシグナムがユーノに罵倒されることに腹を立てるヴィータ。

なのははそんなヴィータを落ち着かせながらユーノに問い直す。

「ヴぃ、ヴィータちゃん。落ち着いてよ！まだ何か話があるんだよ。ユーノ君・・・もう少し詳しく話してくれる？」

なのはの言葉を聞くと、ユーノは淡々と次のように語り出す。

「昔のあなたは、当初闇の書の防衛プログラムと言う形で確かに敵ではあったものの、いざ闘うとなれば常に正々堂々手加減なしの真っ向勝負を挑んできた。敵であろうと味方であろうと、誇り高きベルカの騎士としての自覚を持ち、剣に宿った澄んだ魂の一太刀で目の前の敵を斬り伏せてきた筈だ。だがしかし、今のあなたはそれさえも危うくなり、あろうことか自分が斬られそうにさえ追い詰められた。」

「・・・！・・・」

「今のあなたはもうフェイトが認め、最後の夜天の書の主八神はやてに仕えるヴォルケンリッターの将、『烈火の騎士シグナム』じゃない！」

「「「「「「」」」」」」

「ゆ、ユーノ君！？」

「ユーノくん・・・それどういうこっちゃ！！場合によっては私だって赦さへんで！！」

聞いていたなのは達もそうだが、はやての方も自分の身内が罵倒され傷つけられたことに大いに怒りと困惑を募らせる中、シグナムは込み上げる様々な気持ちを押さえながら冷静に言い返してきた。

「・・・スクライア・・・先ほどから一体何が言いたい？私を罵倒し、主はやてや仲間の前で恥をかかすことが楽しいか？お前はそんな男だとは思っていなかったのだが・・・とんだ勘違いだったか？」

「言っておきますが、僕はあなたの事を罵倒してるつもりはありません。ただ、厳然たる今現在における事実を赤裸々に述べているだけです。」

「事実？」

「ヴォルケンリッターの将、烈火の騎士シグナムの強さはここにいる者が誰よりも深く分かっている。しかしながら、今のあなたは以前の様な芯のある強さを持ち合わせていない。」

すると、ユーノは徐に溜息を吐きながらこう口にした。

「『半端な戦いの為の覚悟』が明らかにあなたを弱くしたんだ。」

「・・・シグナムが」

「弱い・・・？」

ここにいる全員は少なからシグナムの実力の高さを知っているが、まさかここで嘗ての無限書庫司書長で現翡翠の魔導死神のユーノからこのような言葉を口にされるとは夢にも思わず、一同騒然となった。

シグナムは、そんなユーノの言葉を耳に入れ自分でも薄々そう感じてたこともあると割り切った上でこう言って来た。

「・・・・・スクライア。お前がどう思おうと構わぬが、今の私は己の犯した罪を償う為、主はやてやかけがえのない仲間たちと共に暖かい未来を築くため理不尽な痛みから人々を護り切れるだけの強さがあればそれでいいのだ。以前の様な目的すらなく、ただ目の前の敵を斬ることだけの騎士に成り下がることなど御免被る。」

「シグナム・・・」

シグナムの言葉を聞き、はやてを始めヴォルケンリッターやなのは達全員が顔を綻ばせる。

しかし、ユーノはただ一人毅然とした態度で閉じられていた胸元を少し開けると、シグナムに向かってこう言ったのだ。

「理不尽な痛みから人々を護り切れるだけの強さ・・・ねぇ。だとしたら、今のあなたではその人々ですら護りきることなんて出来ませんよ。」

「!?」

「今のあなたからは以前の様な敵を斬るという覚悟がまるで感じられないんですよ。剣を持つ者にとって、覚悟の籠ってない剣を振ったところで何の意味もありません。いくら振ったところで何も斬れない、何も護れません。非情かもしれませんが、これだけは忘れないでほしいですよ。“剣は凶器・剣術は殺人術”。どんな綺麗ごとやお題目を並べてもそれが真実なんだ。まぁ、これは士郎さんからの受けよりですけどね。」

「!」

ユーノから口にされた厳然たる剣における真実を耳にし、思わずはっとした表情となるシグナムやそれを傍で聞いていた銀時達は真摯に受け入れる。

「今回だけに限ったことじゃありません。ここ最近のあなたはいつだって、騎士としての誇りにかけてと豪語する割には誰一人斬り捨てた覚えがない。長年、捕縛を最優先に考え殺さない方法・・・非殺傷設定でなのは達と一緒に戦ってきたことが、却ってシグナムさん自身の騎士としての、剣士としての覚悟を鈍らせた。」

その言葉を聞いた途端、士方は今回のユーノの行動の真意を自ずと悟った。

「！（まさか野郎は・・・この為に態々・・・しかも、話を聞く限りずっと以前からシグナムの戦いに関する状況を見て来たってことか・・・！）」

ユーノは鋭い目線をシグナムに見せながら腰に差した刀を抜きだし波紋に自分の鋭い視線を反映させた。

「半端な覚悟なら溝に捨ててしまいな。口先だけの似非騎士の言葉なんて、聞いてるこっちの方が胸糞悪くなるだけだ。」

「ヌカセ！てめーにシグナムの旦那の何が分かる！！シグナムの強さも大して知らねぇくせして、大口叩いてんじゃねぇよ！！魔導死神になって強くなったからって、調子こいてんじゃねぇよ！！」

アギトが大声を上げて淡々と語られるユーノの非情な言葉に必死に弁明する中、ユーノはそんなアギトの言葉にも顔色一つ変えようとはしない。

「僕の事をどう言おうがそれこそどうでもいいけど・・・どうやら、恐れていた事態が今顕著に起きてしまったようだ・・・・・・」

ユーノの言葉を聞いた後、はやてやエリオ達は何処か複雑そうな表情を浮かべるシグナムの顔色を窺った。

「シグナム・・・」

「シグナム副隊長・・・」

「誇り高きベルカの騎士が見ていて実に嘆かわしい。非殺傷などと騎士らしからぬ似非正義に溺れおって・・・だから前の戦いで漫画キャラとは言えあの五ェ門の斬鉄剣にレヴァンティンを折られたんだ。剣士が敵を斬らずにどうしてその手に剣を持つ？剣とは本来、敵を斬るためにあるものだ。そして何より、剣士が敵を斬らずにどうして何かを守れる？」

「・・・・・・」

シグナムは剣を語る上で決して間違ってはいない、寧ろ正しいことを語り続けるユーノの言葉に何も言い返すことが出来なかった。

そして、そんな沈黙を続けるシグナムにユーノは間を置いてから次のように語った。

「昔、とある一つの正義を現した言葉がありました。”悪・即・斬”。それが日本の幕末において、新撰組と人斬りがただ一つ共有した正義の形・・・そしてこの言葉は直接僕やあなたと言った剣士の胸にも響くはず。今のあなたをこれ以上見ているのは、最早我慢な

らん。」

剣をなぞる様に構えるユーノの言葉を聞くと、シグナムは躊躇った様子を顕著に表していた。

「・・・私は・・・・・・私は――――――!!」

「シグナム・・・・・・」

「・・・――」

はやてや銀時達が心揺らぐ不安定な剣士、シグナムの様子を心配そうに窺う。

「いまだに不安定な状態で覚悟が揺らいでいるようですね。ならば――――」

そして、ユーノはそんなシグナムを見ながら徐に剣を構える。

「僕があなたに、決して揺らぐことのない芯のある“剣士としての覚悟”・・・それをこれから直接叩きこんであげます。」

「・・・・・・・・」

沈黙が流れ、なのは達の表情に汗が流れる中、銀時はユーノの覚悟の籠った瞳を見ると自ら率先してその場を離れることを決め、全員もそれを促す。

「・・・おめぇら・・・離れるぞ。」

「え!?だけど銀さん・・・!」

「・・・やらせてやれ。こいつは、シグナムの野郎にとってもユーノにとっても、越えなきゃならない事なんだろうよ。」

銀時がそう言うと、近藤や恋次もその事を承諾する。

「・・・そうだな。ここに居ては危険だ。離れて見守るとしよう。」

「近藤さんまで・・・だけど・・・」

近藤たちの言葉を聞いてもやはり何処か割り切れていない様子のなのは達だったが、その直後考え込んでいた様子のはやてが徐にこう言ったのだ。

「ええやろう。好きにしていい。」

「は、はやて!?」

「・・・ホンマは、何かこうなる予感もしてたんよ。あのホテルでの事件の後、シグナムの顔がどうも見ていて心苦しかった。剣を振ってるときも、何や迷みたいなものが伺えた。ユーノくんと戦って、それでシグナムの目が覚めるなら・・・私は止めへん。」

「はやてちゃん・・・」

「シグナム。ユーノくんは強いで。いつまでも迷ってたら、ほんまに殺されるで。そのことだけは、分かってな。」

はやての毅然とした言葉を耳に入れると、シグナムは手に握られた

レヴァンティンを一瞥し、その言葉に応答する。

「・・・・・はい。心得ております。」

はやてはシグナムの言葉を聞き終えると、全員を連れてその場から離れていった。

なのはは離れる途中、自分でも未だに心理と試行の読めない今のユーノに一抹の不安を覚えながら後姿を窺う。

「・・・ユーノ君・・・」

銀時はそんななのはを横に見ながら、いつもの死んだ魚のような目を浮かべながら何処か説得力のある言葉でこう語った。

「大丈夫だ、なのは。あいつは、この戦いを通してあいつに伝えるべきことを伝えようとしてるだけだ。だから怖がるな。この戦いを見定めてやれ。」

「・・・はい・・・」

銀時に説き伏せられ、一先ず戦いを観察することにしたなのはだった。

戦闘を行う当事者以外の人間がその場を離れると、ユーノとシグナムは真剣な眼差しで向かい合うと、徐に剣を構えて言葉を発する。

「・・・――スクライア。お互い、全力を尽くそう。」

「・・・――はい。」

「行くぞ。レヴァンティン！」

〈Ｅｘｐｌｏｓｉｏｎ〉

カートリッジをロードすると、シグナムは剣先に炎を灯してユーノ目掛けて斬りかかっていった。

「はあああああああ！！！！」

ユーノはシグナムの剣閃を見極めると、それを躱して素早く移動するがシグナムは移動するユーノの後を追っていく。

「それで避けたつもりか！見えているぞ、スクライ・・・」

と、シグナムがそう言った直後、ユーノは既にシグナムの背後へと回り込んでいた。

「！」

「「「「「あ！」」」」」

「何時の間に！？」

「一瞬・・・瞬歩なんて使った形跡すらなかったのに・・・！」

なのは達は瞬歩を使って様子さえ見せなかったユーノの速さに畏怖の念を抱き、シグナム自身も焦燥を滲み出していた。

すると、ユーノはシグナムの背後から冷淡に言葉を発する。

「『見えてる』って、僕の残像でも見えましたか？そんなに早く動いたつもりはなかったんですが。」

「く、のうおおおお・・・おおお！！！」

シグナムが威勢の言い声を張り上げ、頭上から攻撃を仕掛ける。

ユーノはシグナムの動きに合わせて高く飛び上がり剣を構えた。

「はあああああああああ！！！！」

空中でお互いに躱されるであろう両者の剣士の剣戟を期待していたなのは達だったが、直後シグナムはユーノより予想だにしない攻撃を仕掛けられる。

ユーノは刀を振りかぶったかと思えばがらがら空きのシグナムの背中に蹴りを喰らわせる。

「が・・・！！」

予想外の攻撃に当事者シグナムとなのは達も大いに驚愕する中、ユーノは鋭い視線を浮かべたままシグナムにこう言った。

「刀を振りかぶったからといって、斬撃が来るとは限らないでしょうが。読みの速さに頼りすぎるからそうなるです・・・」

背中を強く蹴られ、地面に叩き落とされるシグナム。

土煙が上がる中、銀時達はこのいつもとはまた違う強さを発揮する

ユーノに言葉を失っていた。

「・・・おい・・・これってありかよ。」

「まさかあのシグナム副隊長がユーノ先生相手とはいえ、ここまで差が生まれるとは驚きでしたね。」

やがて、土煙が晴れるとシグナムはレヴァンティンを杖代わりにしてその場から立ち上がろうとする。

「く・・・・・・何の・・・これしき・・・！」

そして、背中の痛みを我慢するシグナムが徐に立ち上がると、地面に降りてきたユーノは刀を鞘に納めそれを腰の帯から取り出し、何かの型を行おうとしていた。

シグナムはこれを見た瞬間に、何をしようとしているのかが直ぐに分かった。

「！！（帯から鞘を外しての抜刀・・・これは・・・！？古くから東洋に伝わるとされる古の剣術手段、『居合い』。刃を鞘に収めることで剣速を加速させ一瞬にして相手を切り捨てる諸刃の剣！）」

ユーノの行動を見た途端、シグナム同様それを知っていたなのはやフェイト、さらには銀となどもユーノの行動に驚愕する。

「い、居合い！？」

「まさか・・・居合いまで出来るなんて！？」

「ユーノ・・・凄ごいアル！！」

シグナムは険しい表情を見せてユーノの居合いを防ごうとレヴァンティンを縦に構えて持ってき、ユーノの剣戟を防いだ――――・・・かに思えたが、レヴァンティンに当たったのは納刀された状態のユーノの刀だった。

「！！（何！？一撃目が鞘だと！？そうか・・・これは鞘打ちから剣戟に繋がる二段構えの居合い――――）」

その瞬間、眉間に皺を寄せたユーノが鞘から刀を抜いて、シグナムの左肩に狙いを定めて刀を振り下ろす。

「ぐっは！！」

斬撃を喰らったシグナムは、地面に勢いよく叩きつけられ目を白くして気絶寸前の状態となる。

「どうですか？この技はドラさんから教えて頂いたものでしてね・・・出所は皮肉なことに漫画です。それよりも・・・いつまでもそんな中途半端な覚悟で僕に挑んで来てんじゃねぇよ。この馬鹿騎士が！！！」

ユーノはシグナムに罵声を浴びせると、容赦なくシグナム目掛けて次なる攻撃を仕掛けようと突進してきた。

「は！」

何とか体勢を立て直しユーノの斬撃をレヴァンティンで受け止めたかに思えたシグナムだが、先ほどまでと違って非常に重たくなった

斬撃に受け止めきれなくなっていた。

「！（・・・う・・・ッ・・・受け切れぬ・・・！？）」

ユーノの剣に圧し負けてしまい、そのまま後ろに回避するしかなかったシグナムだが、直後シグナムは目の前から尋常ならない殺気を発してくるユーノを見て、思わず凍りついた。

「（・・・・・凄い・・・！！！これはスクライアが放つ霊圧・・・いや、違う。これは“殺気”か・・・！？確かに、浦原殿達が前に来た時も殺気を出していたが、今回はそれとはまた比較にならぬほど濃く、強大だ・・・大気が灼き切れそうだ・・・！！バケモノかあやつは・・・！レヴァンティンが木の枝に見えてきた・・・！こんなモノで勝てる訳が無い！！！）」

なのは達も正直言うと、これほどの殺気を出してくるユーノに最早いつも抱いている安心感と言うものは全く抱くことが出来なかった。

これこそが、魔導死神として覚醒し数多の死線を潜り抜けてきたユーノ・スクライアが持つすべてを包み込む優しさと対をなす非情な感情というものなのだ。

「どうしたんですか、シグナムさん？ボヤボヤしてると――――――」

すると、ユーノは自分の殺気で動揺を見せるシグナムに狙いを定めながら柄に仕込んでいた鎖を伸ばしてそれを使って刀そのものを回転させながらこう言った。

「殺すぞ。」

「・・・な・・・!?」

「ふん!!」

驚愕するシグナムだったが、その瞬間ユーノの回転を帯びた刀が勢いよく飛んでくる。

シグナムはそれを皮一枚のところで躱すが、刀が激突した箇所は無残に破壊され観戦していたなのはや恋次達、銀時は思わず目を疑った。

「「「・・・あ・・・」」」

「おい・・・・・・何だありゃ・・・・・・・!」

「普通の刀の柄に・・・・・・鎖を仕込んでたのか・・・・・・・!」

シグナム自身はユーノの傍から見れば卑怯ともいえ、場合によっては場数を踏んでいるとも捕えられるこの攻撃を見ると、言葉を失いかける。

「・・・な・・・(柄に仕込んだ鎖で遠心力を増し、刀を飛ばすだと・・・!?何だこの戦い方は!?こんな戦い方・・・あっていいものなのか・・・!)」

そんな事を思いながら、ユーノの不規則に飛んでくるその攻撃を躱しつつ、シグナムはカートリッジを二発ロードする。

「レヴァンティン!!!」

〈Ｓｃｈｌａｎｇｅｆｏｒｍ〉

飛竜一閃の為に刃節を長く伸ばすと、炎を帯びたその一撃を頭上よりユーノ目掛けて攻撃するが、この時シグナムは自分が騎士としての戦い方に大きく反しているとは気づいていなかった。

「はあああああああああ！！！」

飛んでくる炎の刃を一瞥すると、銀時はふとこう呟いた。

「頭上からユーノを狙うとは・・・どうやらシグナムの野郎。焦りのあまりいつの間にか騎士らしからぬ攻撃に移っちまってやがるな。」

「だが、ユーノはこんな攻撃ものともしねぇはずだ。」

恋次が言う通り、ユーノはまるでものともせずに飛竜一閃を構えた刀で受け流し、起動を大幅にずらすと険しい表情を浮かべるシグナム目掛けてこう言った。

「それで、この程度の攻撃を頭上から食らわしてどうにかなるとは思ってたんですか？」

「くッ。どうにかなる等とは始めから思っておらぬ！！！」

シグナムはその後も飛竜一閃でユーノを攻撃し続けるが、ユーノは鋭い視線を浮かべながら半分呆れた様子でこう呟き、左手を前に出した。

「やれやれ。」

すると、その瞬間ユーノは飛んで来たシグナムの刃を左手・・・それも素手の力で受け止める。

シグナムや見ていた恋次たちは思わず驚愕の表情を浮かべる。

「（素手で――――――――！！）」

「うそ！！」

「あんなんありですか！？完璧にＢＬＥＡＣＨ単行本２０巻の藍染と一緒じゃないですか？！」

「俺は見ていて複雑だな・・・・・・」

恋次は十年前、裏切り者の藍染にも似たようなことを体験させられている身であることからユーノとシグナムの戦いは見ていて痛々しかった。

その一方でユーノは受け止めたシグナムの刃を持ちながらこう呟いた。

「やはり、今のあなたの覚悟では護るべきものすら護れないままですよ。シグナムさん。」

そう言うと、ユーノは持っていた刀でレヴァンティンの刃節を斬り落とした。

「な！（刃節を斬られた・・・！）」

と、驚くこともままならなかった直後、シグナムの右肩に激痛が走る。

「が・・っは・・・!!」

右肩に走る激痛に悶絶するシグナムはその場に膝をついた。

そんなシグナムを見下ろしながら、ユーノは目の前で冷淡な表情を浮かべる。

「確信だ。」

「シグナムの旦那!!」

「「シグナム!!」」

声を荒げるアギトやフェイト、はやての三人。

新八もこのユーノのやり方には甚だ疑問にも感じていた。

「銀さん・・・いくら何でもこれはやり過ぎじゃ・・・!」

「黙って見てろ、新八。これはシグナムが越えなきゃならない試練なんだ。ユーノは非情になってまで、シグナムに当初の頃の覚悟を思い出させようとしてやがるんだ。」

銀時がそう呟くと、近藤がその言葉に便乗する。

「確かに、ユーノ先生のやり方は多少・・・いやかなり荒っぽいか

もしれぬが、あれぐらい叩きつけてやらねば、シグナム殿はこの先一生揺らぎ続ける。剣士にとって、戦いにおける覚悟が揺らぐということは、自分の死期を近づけることなんだ。」

右肩を押さえ必死に痛みに耐えるシグナムにユーノは刀を突き付けながらこう語る。

「さっ、どうしました・・・態々峰打ちで済ませたんですよ。だけど、次はこうはいかない――――――」

「う・・・う・・・！！」

「次でこの僕に一撃を加えられないのなら、僕があなたに一撃を入れて終わらせます。そう――――――“死”という形でね。」

「「「「！」」」」

ユーノが最後に発した言葉を聞いた直後、全員の顔が一変しなのは達は声を荒げる。

「ゆ、ユーノ！！！待て！！！何言ってるんだよお前！！！」

「待つアルよ、ユーノ！！！」

「お願いやユーノくん！！！早まらんといてや！！！」

「ユーノ君！！！そんなことしたら駄目！！！」

必死になって全員がその人間としてやってはならないことを止めようとした直後、聞いていたシグナムはほくそ笑みながら徐に立ち上

がり、レヴァンティンを構え直した。

「いい・・・だろう・・・ここまで追い詰められたのは久々だったが・・お蔭で良い眼覚ましにもなった・・・確かに私の覚悟は・・・ここ最近でかなり鈍ってしまったようだ・・・その点で言えばお前は実に澄んだ真っ直ぐな覚悟が宿っている・・・羨ましいな・・・」

「あなたにだってあったはずですよ。僕よりもずっと誠実で濁り気のない“剣士としての覚悟”が・・・――これ以上の討論は無用です。この一撃で全てを終わらせる。覚悟はいいですか？」

「・・・――望むところだ。こうなれば、私も己の命を懸けて、私の全身全霊の一撃でお前に仕掛ける。それは即ち剣士としての誇りを抱いて、死ぬ覚悟だ！」

「行きます・・・」

「ああ・・・」

ユーノとシグナムはお互いに向かい合って呼吸を練ると、頭上高くへと飛び上がり声を上げて止めの一撃に移ろうとした。

「「ほおおおおおおおおおおおおおおおお！！！！！！！！！」」

シグナムはユーノよりも叩く飛び上がると剣先に炎を灯して渾身の一撃を振り下す。

「紫電一閃！！！」

対するユーノはサムライ・ドラから教えを受けた独特の剣術、人侍剣力流の技の一つを発動させる。

「人侍剣力流『天翔絶攻（てんしょうぜっこう）』！！！」

二人の渾身の一撃が激しくぶつかり、一瞬辺りは煙に包まれ何も見えなくなった。

やがて、シグナムが気が付いた時目に飛び込んできたのは――――――

「う・・・う・・・」

「お！気が付いたネ！」

「よかった。目を覚ましましたよ。」

心配そうな眼差しで自分を見つめるはやてを始めとする観戦者一同だった。

「痛っ・・・・・・・・・・・・」

シグナムは徐に起き上がり、頭に受けた衝撃を手で押さえながら状況を確認する。

辺りを見回してみると、全員から少し離れたところに目立った外傷も特に受けた様子も見せないユーノが立っており、それを見るとシグナムは自嘲した様子で笑みを浮かべた。

「志村・・・神楽に・・・主はやてたちも・・・私は・・・どうや

ら負けたようだ・・・完膚なきまでに・・・」

「シグナム副隊長・・・」

「・・・スクライア・・・私は・・・・・・・」

と、シグナムが自分の敗北を悟っていると、ユーノはそんなシグナムに意外な言葉を呟いたのだった。

「今の一撃、見事でしたよ。」

「何？」

「全身全霊で撃ち込むのに意識を集中する余り、着地の際の姿勢制御を疎かにするから脳震盪なんか起こすんですよ。ですが、そうでもしなきゃ・・・僕に一撃当てるなんて半端な覚悟のままじゃいつまで経っても出来なかったでしょうな。」

ユーノはそう言うと、シグナムとなのは達全員にほんの少しだけ血を流した自分の右手の甲の傷を見せた。

「！」

「その覚悟を、これから先もう忘れないで下さいよ。その覚悟さえあれば、もう二度と五ェ門を始めとするいかなる剣士にも後れは取りませんから。」

「スクライア・・・・・・」

ユーノは満足の表情でシグナムにそう言うと、徐に刀を収めて隊舎

の方へと歩いて行った。

「僕はこれで。仕事が溜まっていますもので。」

「あ、ユーノ君！待って！今、怪我の手当てを・・・！」

なのはは慌てた様子でユーノの元へと駆け寄る。

「いいよ。唾つけとけば治るから。」

「もう・・・そんなこと言っても私は許さないよ。いいから腕見せて。」

「君も心配性だな。」

「心配するよ！ユーノ君の事、大事だから・・・――」

そんなのはとのやり取りを見ながら、シグナムはユーノの後姿を凝視しながら誰かの後姿と比較しながら心の中でこう思った。

「（・・・本当に・・・あやつは強くなったな。見も心も・・・――他の誰よりもきっと強く・・・――）」

そして、今まで見ていた新八たちも何処か安心した表情を浮かべながら去り際のユーノに関してこう言った。

「銀さん。ユーノさんって・・・何処までも人の為なんですね。」

「さぁな・・・――」

新八の言葉にそう返した銀時。

しかし、内心はこんなことをユーノに抱いていた。

「（成程。どうやら、一護の魂は今ああやってちゃんとユーノに受け継がれてるらしいな。あれ？てか今回・・・俺の出番全然なくね！？はぁ！！なんじゃこの話！！！！！！！！つうか、作者！！！！俺の出番ぐらいもっとしっかりさせろよ！！！！！！！なんだったんよこれ！！！！俺はヤムチャじゃねぇんだよ！！！！！！！！！！！！）」

ごめん、忘れてました。

あなたの活躍は次回からね♪

教えて、ユーノ先生！

ユ「今日は銀さんの木刀、『洞爺湖』についてだ♪」

ユ「この木刀は一見すると普通の木刀にしか見えないけど、切れ味は実際の刀の何十倍もある業物の木刀だ。」

ユ「辺境の星にある金剛樹という樹齢１万年の大木から作られた妖刀・星砕（ようとう・ほしくだき）の由来を持ち、真剣を上回る強度や硬度を誇りそれを捜し求めて刀狩りを行う者までいたそうだよ♪」

新「ちなみに、現実の洞爺湖町洞爺湖温泉の「越後屋デパート」という土産物店では、この「銀魂」効果で木刀が１日に最高５０本は売れる程の人気商品になり、第３４回主要国首脳会議（北海道洞爺湖サミット）が開催された際には洞爺湖町を訪れた外国人も多数購入しているとのことです。」

銀「銀魂効果万歳だな。このまま俺達海外進出も夢じゃねぇなオイ！」

ユ「興奮してますね♪でもこの木刀って・・・業物って割には通信販売で買えるんですよね・・・・・・」

新「しかも値段は１１７６０円・・・・・年がら年じゅう金欠なくせに何処にそんな金あるんですか？」

銀「そりゃあれだ・・・おめぇらの給料から少しずつ天引きしてだ

な・・・」

新・神「この糞ボケが！！！！！！！！！」

銀「ぐっは！！！」

余計な事を言って、従業員に殴られる銀時を見ながら失笑するユーノだった。

ユ「あ・・・・・・み、みんなも余計なことは言わないよう気を付けてね・・・」

魔導師図鑑ハイパー！

シグナムの渾身の一撃を手に受け、出血箇所の手当てをしているなのはの機嫌は些か悪かった。

な「全く・・・私に怪我しないように無茶は駄目だって言うくせに自分は危ないことばっかりして・・・」

ユ「あはは・・・ホント・・・自分でも嫌になってきたよ。」

な「兎に角、怪我は大したことないけどあんまり傷は作ってほしくないな。だって、私みたいになったユーノ君を見るなんて、耐えられないもん・・・」

顔を沈めるなのはを見て、ユーノは優しくなのはを抱きしめる。

ユ「そうだね。ごめんね、なのは。無鉄砲な事ばかりやって君に心配かけて・・・ダメな彼氏だよ全くもって僕は・・・」

な「そんなことないもん・・・！ユーノ君は私の自慢の彼氏で、カッコよくて頭が良くてちょっと晩生な優しい男性だよ。全然悪くなんかないもん・・・」

ユ「なのは・・・」

な「ユーノ君・・・」

二人は見つめ合い、例の如く顔を近づけようとした途端・・・――――

シャ「なのはちゃん。定期健診のじか・・・・・・は！し、失礼しました！！」

シャマルは慌ててその場から退散し、二人も思わず顔を赤くしてその場から離れたそうな。

次回予告

来たるべく戦いに向けて準備を進める中、聖王教会より新たな任務要請が入る。

またしてもルパンがロスト・ロギアを狙って蠢きだす。

そして、そのロスト・ロギアはあの二人の漫画キャラを引き合わせようとしていた。

な「次回『正反対な人間ほど意外と仲が良い』」

正反対な人間ほど意外と仲が良い

漫画キャラクターを操り、アンゴルモアを始め異世界の各地でロス

ト・ロギアの窃盗を続ける広域次元犯罪者通称カトゥーンが動きを見せ始めて早１０日ほど経とうとしていた頃、機動六課ではそれぞれが今度の戦闘に備えて訓練に勤しんでいた。

訓練場で聞こえてくるなのはやスバル達フォワード陣の戦闘の様子。

それとは別に、真選組の鬼の副長土方十四郎は新撰組三番隊組長斎藤一に対抗すべく、現在文献を読み明後日研究を積んでいた。

「やっぱあれだな・・・ここは三刀流っでことで対抗する方が無難か・・・それともいっそのこと長刀と小刀三本の変則四刀ってのも悪かねぇ。」

すると、そんな土方を見ながら新八は顔を引きつりながらこう口にしてきた。

「あの土方さん・・・研究は熱心で構わないんですけど、何で参考する文献がワンピースとかＲＥＢＯＲＮみたいな漫画なんですか？もっと違うものがあるでしょう・・・」

そう、土方が参考にしていたのは活字がびっしりと書かれた文献ではなく、ジャンプで連載中の漫画の単行本だったのだ。

「馬鹿かてめぇは。漫画キャラに対抗するには漫画じゃねぇとならねぇんだよ。これ相場が決まってるんだ。」

「どんな相場だよそれ・・・・・・もう訳わかんねぇよ。」

「それより、てめぇんとこの大将は相も変わらず昼間からぐうたらしやがって。こうしている間に何時漫画キャラが攻めてくるか分か

ったもんじゃねぇんだぞ。」

土方はそう言うと、向こうの方でジャンプを読みながらケーキを頬張る銀時にあきれ返っていた。

「あ・・・銀さんはいざってときにしか動きませんから。基本怠惰で向上心のかけらもないダメ人間ですよ・・・分かってるでしょうそれぐらい・・・」

さらっととんでもないことを口にした新八。

いや、確かに事実ではあるのだが聞いていた銀時はそれが気に入らなかったのか直ぐに新八の元まで駆け寄った。

「んだと!おい新八てめぇさっきから聞いてればなんだよ!!まるで人が年中ぐうたらでアホで怠け者の超がつくほどの馬鹿野郎って言ってるように聞こえるぞ!!」

すると、憤りを見せる銀時に更に土方が挑発する。

「そう言ってんだろうが。自分の事も分かってねぇくせに何をぬかしやがる。」

「ああ?上等だコラ!!銀さん怒ったもんね!!!!もう止められねぇぞ!!んなら先ずマヨラーのそのマヨラ口から先にボッコボコにしてやらあ!!」

「いい度胸じゃねぇか、ああ!表に出ろコラ!!!てめぇこそ俺の鬼斬りの餌食にしてやろうか!!何なら三千世界もお見舞いしてやらあ!!」

何時もの具合で一触即発状態と化してしまう銀時と土方に新八は動揺する。

「ちょ！銀さんも土方さんも落ち着いてくださいよ！！！誰か！！！この二人を止めてください！！」

そんな二人とは裏腹に、機動六課に設けられた購買部の方に足を運んでいたユーノは毎日欠かさず熟読しているミッドチルダ経済新聞を探していた。

「えっと・・・今日の新聞新聞っと。お、あったあった。残り最後の一部と・・・――」

と、ユーノが最後の一部となっていたミッド経済新聞を手に取ろうとした瞬間、同じようにそれを取ろうとする男の手に気づき、思わず目を合わせた。

「「ん？」」

ユーノが目を合わせると、そこにいたのは悪友のクロノ・ハラオウン提督。

二人は向き合うと新聞を前にしながら指を差しあいこう言って来た。

「え、なに？ミッド経済新聞？」

「ミッド経済新聞。え、ミッド経済新聞？」

「ミッド経済新聞？」

二人は思わずため息を吐いてから更に会話を続ける。

「参ったな。一部しかない。」

「どうしたものかな・・・・・・」

「僕、かれこれコンビニ七・八軒回ったかな?やっぱこれ人気だから即売り切れちゃうみたいだから」

「いや、僕も十軒くらい回ったかな。」

「ん?あれ入れると十五軒は行ってるわ僕。」

すると、クロノは根も葉もない荒唐無稽な嘘の情報を口にし始める。

「いや参ったな・・・実はトモカズの奴が新聞欲しがってて・・・あ、僕の親戚の息子だけど、今年で五歳。」

クロノがそう言うと、ユーノもまたウソの情報で対抗する。

「僕はさぁお父さんが読みたいって・・・ちょっと病気でさぁ目が見えなくなっちゃうんだよね・・・だからどうしても最後ぐらい活字を見たいってね・・・」

「あ。実はトモカズも失明するんだよな。」

「トモカズ失明するの!?」

驚くユーノ。

クロノはそんなユーノの前から新聞をさっととって居なくなろうとした。

「ま、そう言う訳ですまないな・・・――」

「待て待て待て。え?トモカズホントに新聞欲しがってた?ミッド経済新聞最近落ち目だよ。こっちの方がいいって。」

ユーノはそう言うと、成人向けの雑誌を一部とってクロノに手渡し、クロノは思わず苦笑いを浮かべしまう。

「あ、いや・・・トモカズ五歳だから・・・」

と、言いつつクロノは中身を開いて真剣にそれを読み始める。

「いや、トモカズ読むかもしれないしな・・・これ。買ってこうかな・・・だけど僕が読むんじゃないぞトモカズがだぞ・・・」

ユーノはその間にクロノから新聞を取り上げ、レジの方へと向かって会計を済ませようとしていた。

「いらっしゃいませ。」

クロノは大急ぎでレジへと向かい、ユーノの肩を叩いた。

「いや、ちょっとそれはないんじゃないのか!?」

「いやいや。トモカズにミッド経済新聞は早いってそっちの方がいいって・・・」

「こっちの方が早いだろうがフェレットもどき!!!」

クロのはそう言いつつその雑誌をユーノの顔に押し付け、そこから始まる二人の男性の実にしょうもない新聞の奪い合いが始まった。

「て言うかな、トモカズなんてホントはいないんだよ!この世に存在しないだよ、馬鹿め!!」

「馬鹿はてめぇだ!!僕だって死にかけた父ちゃんなんていないもんねバカバカ!!!」

二人は口論をしながら、持っていた小銭を同時にレジの上へと叩きつける。

「「はい金!!」」

キャッシャーは渡された小銭を一枚一枚数えはじめ、その間にも二人は言い争いを続けた。

「てめぇ!!!いい加減にしろよ!!!碌に書いてることも分からないくせに偉そうにコーヒー片手に毎朝新聞なんぞ読みやがって!!どこぞの官僚だ、ああ!!見ててムカつくんだよ!!寒気が走るんだよ!!大体、お前が存在しているそれ時点で僕の怒りのボルテージが上がるんだ!!」

「あの・・・」

怒り心頭なユーノだったが、キャッシャーはそんなユーノ、と言うか二人に声を掛けようとするがまるで聞く耳を持たず、今度はクロ

ノが反論する。

「お前に言われたくないんだよ！！！こっちだってお前のそう言うスカした態度がいちいち鼻につくんだよ淫獣フェレットが！！！」

見かねたキャッシャーは先ほどよりも大きい声で二人を呼び止める。

「あ～の～！」

「「何！」」

思わず振り返る二人。

すると、キャッシャーは真顔で二人に厳しいことを突き付けた。

「すいません。二人ともお金足りないんですけど。」

「「え」」

「いや・・・お金が足りません。」

「「え・・・」」

「二人合わせるとちょうど足りますけど、どうします？」

一瞬の沈黙が流れた購買部。

二人はこのキャッシャーの言葉でどんな判断を下したのだろうか？

さて、そんな二人とは裏腹に六課の屋外訓練場では現在真選組局長

近藤勲と烈火の騎士シグナムによる真剣勝負が行われていた。

「たらあああああ！！！」

「はあああああああ！！！」

二人の剣士は互いに全力全開で向かって行き、その二人の戦いをなのは達全員は食い入るように見守っていた。

鍔迫り合いの最中、近藤はほくそ笑みながらシグナムにこう言った。

「流石はシグナム殿。技の見切りが実に早いものですな。」

「近藤局長こそ、今の一太刀はかなり効きましたよ。感服いたしました。」

「ユーノ先生との戦いで、どうやら騎士としての覚悟を完全に取り戻せたらしいですな。全く、あの人はほんとにとんでもないお方だ。」

「はい。昔からとんでもない奴だと思っていましたが、あそこまでとんでもない奴だとは思いもしませんでした。」

「成程。では、そろそろ勝負をつけさせてもらおうか！」

「望むところです。レヴァンティン、叩っ斬るぞ！！」

〈Ｏｆ　ｃｏｕｒｓｅ！〉

シグナムは距離を取ると、近藤との勝負に決着をつけるために最後

の一撃を仕掛けようとしていた。
近藤もそんなシグナムにこたえるために渾身の一振りを浴びせようとしていた。
そんな二人の真剣勝負、でも何処か楽しそうな戦いを見ながらフェイトはこう呟いた。
「よかった。シグナム、どうにか吹っ切れたみたい。」
「ああ。前とは違って、覚悟の籠った瞳になりやがった。これなら、何時敵が攻めて来ても問題なさそうだな。」
「でもホントユーノ先生って何でもやっちゃんですよね。今にして思えば・・・剣術に格闘技・魔法に無限書庫の司書長、あとは考古学も。」
「二束どころか、何足も草鞋を履いているにもかかわずそれを上手くこなしてるところは私らも見習わないいけないよな。」
「その点で言えばあの二人は駄目駄目ネ。」
神楽はそう言いながら、向こうの方で壮絶な喧嘩を続ける銀時と土方に目を向け、なのははそんな二人を見ながら思わずため息をついた。
「はぁ。しょうがないな・・・私が止めに行ってくるよ。」
すると、なのはのその言葉を耳にした途端、吉良の表情が凍りつく。

「え？君が止めにかかるのかい？」

「そうですけど・・・どうしてそんな怖い顔浮かべてるんですか吉良さん？」

「いや・・・君の性格を考えるとどうせまた頭冷やすとか言って徹底的に撃ちのめすつもりなんだろ・・・？」

「うふ♪もっちろん♪」

なのはは笑顔でそう言いながらレイジングハートを起動させるが、新八はそんな白き魔王の笑顔を見ながら自分の姉を思い返しこうツッコんだ。

「いや。そこ笑顔で言う台詞じゃないからね！ものすごく恐ろしいことさらっと口にしたよ！姉上って呼びたくなるわ！！」

と、その時頭を抱えていたルキアが徐になのはに次のような事を口にした。

「はぁ～～～なのは。私がこんなこと言うのもなんだが・・・あまりそのような叱り方ばかりしてると、いずれユーノ殿から本当に愛想を尽かされるぞ。」

「ふぇ！」

ルキアの言葉を聞いた瞬間、今まで魔王状態と化していたなのはの態度が一変、表情が凍りつき心の中に自分を冷徹に突き放すユーノの姿が浮かんできた。

「（君って奴は何処までも暴力的な女性だってことがよく分かったよ。これじゃあ、もう君とは付き合えないな・・・さようならなのは・・・どこぞの金髪美女と一緒に百合路線で・・・お・し・あ・わ・せ・に。）」

そんなことを思い浮かべた瞬間、なのはは教え子がいる前で人目を憚らず涙を流して声を上げた。

「あああああ！！！！！ユーノ君いかないで！！！！！！お願いだから私を置いていかないでよ！！！！！待って！！！勘違いしないで！！！私フェイトちゃんとそんな関係じゃないの！！！！！本当に違うんだよ！！！私にはユーノ君だけなんだから！！！！」

自分の世界に入り込み、周りが全然見えなくなってしまっているなのはに総悟は思わずこう呟いた。

「何を勝手に騒いでるんでいあいつは？」

すると、なのはを慰めようとする傍らフェイトはこんなことを付加疑問形で尋ねてみた。

「なのは・・・被害妄想激しすぎだよ・・・と言うかやっぱり百合路線は駄目なのかな？」

「おめぇはいい加減にそっちの方から離れろ、ボケ。」

鬼太郎は非常にそのように口にしてフェイトを諫めるが、フェイトはそんな鬼太郎に向かってこう言い返した。

「ひ、酷いですよ鬼太郎さん！別に女が女を好きになっちゃいけな

いなんて法律でもあるんですか！？」

フェイトがそう言うと、聞いていた周りの男たちが便乗してきた。

「法律は確かにないが、お前たちの場合は明らかに度を越している。」

「そうそう。コンプエースの表紙見るたんびに、映ってるのは君となのはちゃんの妙にエロい写真ばっかだし、傾きすぎた設定だけじゃいずれ簡単にほころびを生じるものだよ。」

「何事も男女におけるバランスが大事になってきますぞ。」

「そ、そんな・・・！みんなまで私となのはの愛の路線を邪魔するつもりなんですか！？」

「あのフェイトさん・・・途中から全然話が変わってる気がするんですけど・・・」

挙動不審で話の軸が大きく逸脱したフェイトに思わずそうツッコミを入れるエリオ。

「だ、だってみんなが・・・！ねぇ、クロノも何か言ってよ・・・って・・・そう言えばクロノは何処行ったの？」

「確か新聞買いに行くって言ったきり戻ってきてねぇけど。」

恋次がそう言うと、スバルは向こうの方で新聞を互いに持ちながら言い争いを繰り広げる二人を発見する。

「あれ?あの二人って・・・ひょっとしてユーノ先生とクロノ提督?」

「何やってんだよあいつら・・・」

「言い争ってるようにも見えるが・・・」

訝しげな様子で一同は二人の元まで近づいて行った。

その頃、当のユーノとクロノは結局新聞を二人のお金で購入し、誰が最初に新聞を読むかどうかでもめていた。

「いやだから、僕が今日読んで明日お前に貸すって。」

「貸すって何だ!?僕だって金払って買ったんだぞ!馬鹿野郎、コノヤローめ!大体、“新聞”・“新聞”って何読んでるんだ!?どうせテレビ欄読んでポイだろ。僕は全部読んでるぞ!僕の方が絶対新聞を愛してる!エイミィと子供たちの次に愛してる!」

「何言ってるの?僕なんか政治経済記事だけじゃ飽き足らず、後ろの四コマ漫画も全部読んでるぞ!編集部のどうでもいいコメントも読んでる!」

「僕なんかお前この間のプレゼントの当選者発表のところあるだろ!あれだって全部読んでる!経済平均株価もこと細かくチェックしてる!!」

「甘めーな!!僕は背表紙裏のやや微妙な通販グッツの広告までできっちり目通してる!!しかも時々買ってる!!!」

二人の言い争いは更に苛烈を極め、新聞が避けるか否かの状況に陥っていた。

「おおい・・・！いい加減にしないと新聞裂けるぞヤバいってこれ・・・！ちょ、一端タイムしよう？一端離せって僕絶対に取らないから。」

クロノがそう言いながら新聞を強く握りしめ取り上げようとすると、血管を浮かび上がらせたユーノがクロノにこう言った。

「お前が先に離せ、そしたら僕も離す・・・！」

「お前・・・！！大人になれよ・・・！ここは先ず新聞の安全を考えるのが立派な男なの考えじゃないのか・・・！」

「てめぇが離せば即安全確保だコラ！！」

「分かった、じゃあ同時に離そう。一・二の三で同時に・・・」

「待て、ウェイト。それ三の“さ”で離すのか？“ん”で離すのか？」

「“ん”だろ！“ん”の方が絶対後だからな。」

「“ん”って言った瞬間か？“ん”って言い終わった後か？」

「え！？あ～も訳分かんなくなってきた・・・」

そんな二人の実に下らないかける言葉すらも思いつかないような喧嘩を見ながら、なのは達や模擬戦を終えたシグナムと近藤、更には

銀時と土方もあきれ返っていた。

「・・・け・・・喧嘩ですかね・・・」

「まるで銀さんと土方さん並みに低レベルだ・・・」

「あいつら・・・一応一部門のトップだろが・・・」

「にゃはは・・・ユーノ君もクロノ君も・・・困ったものだね・・・」

すると、その時クロノが横を一瞥し苦笑いを浮かべて立ち尽くしていたフェイトを見てユーノにこう言って来た。

「あ、そうだ。あそこにフェイトがいる。一旦フェイトに渡そう！」

「てめぇこのシスコン腹黒！自分の義妹まで利用しようって魂胆か？とことん腐った野郎だ！！」

「そんな訳ないだろうが！それと僕はシスコンでも腹黒でもない！何処まで疑り深いんだよお前は！！」

しぶしぶユーノはクロノの提案を聞き入れ、困惑するフェイトに向かって新聞を預かってもらうようにと懇願する。

「あのフェイトさ。これちょっと預かってもらえないかな、一旦？」

「え？何で私が・・・？！」

「いや、そう言いたくなるも分かるがお願いしますよ可愛い妹よ。

美人の執務官殿。」

周りを見て、素直に聞き入れるべきだと判断したフェイトは徐に新聞に手を伸ばしてあずかろうとしたのだが、二人は手の力を抜いておらず全く離すつもりなど毛ほども感じられなかった。

「って・・・二人とも離すつもり本当にあるの!?」

「おい、いい加減にしろよユーノ?この期に及んでまだ離さないつもりか?」

「何言ってるの?僕なんかもう虚脱状態だよ?お前じゃないの力入ってるの?」

いがみ合いを続ける二人。

すると、見かねた銀時が困惑するフェイトに近づきこう言って来た。

「たく何やってんだよてめーらは揃いも揃って。ほら、フェイト。こう言うのは俺が。」

銀時はそう言うと、新聞を両手で持って力づくで取り上げようと勢いよく引っ張った。

「ふんならばぁ!!!!!!!!!!!!!!」

銀時の突然の行動にユーノとクロノは大いに驚愕し、目を見開いた。

「ええ!!!ちょ、銀さん止めてくださいよ新聞破けちゃいますって!!!!」

「だったらテメーが離せよ！！！！銀さん！！！止めて！！！新聞が破ける！！！！」

「どらあああああああ！！！！！」

銀時は新聞を二人から奪い取るかと思いきや、力が入りすぎた所為で空中へと放り投げてしまい、新聞はそのまま風に乗って機動六課から飛び去って行った。

「「ああ！！」」

「飛んでっちゃったね、新聞・・・」

「ホント・・・結構飛行距離あるわね・・・」

真顔を浮かべながら飛んで行った新聞を仰ぎ見るなのは達。

その瞬間、二人の男が新聞を追いかけようと猛烈ダッシュで走り出した。

「「くそが！！！！！」」

「え！ちょ、ユーノ君！クロノ君も何処行くの！？」

「「新聞待ちやがれ！！！！！」」

とても常人とは思えないほどの足の速さで新聞を追いかけていく二人を見ながら、なのは立は最早呆れる以外の事をなにも思いつかなかった。

「何なんだよあいつらは?ホントに一部門のトップの人間か?」

「なに。悪友同士っていうのはそんなもんだぞ、トシ。いいじゃないか好きにさせてやれ。あれはあれで結構仲がいいもんだぞ。」

「ホントに仲がいいんですかね・・・あの二人・・・」

一瞬疑問にも感じる新八。

そんな中、ユーノはクロノを突き放して頭上を飛ぶ新聞を追いかけていく。

「待ちやがれ!!!その新聞は僕のだ!!!!」

するとその時、後ろからクロノの声が聞こえてきた。

「違う!!!!あれは提督殿の新聞だ!!!!」

「ああ!!ふざけるなよクルクル黒河童!!!!もうこうなったら手加減なんてしねぇぞコラ!!!」

ユーノはそう言うと、隣を走っていたクロノを更に突き放して更に加速し、クロノやスバル達はそんなユーノの驚異的な身体能力に驚愕した。

「何!!馬鹿な!!何処からそんな加速力が!?淫獣フェレットの体はまさしく化物か・・・!?」

「あ、足速!」

「ユーノさん。完全にキャラが崩壊してるよ・・・完全に銀さんになってるよ。」

「ああ?それどういう意味だよああ!!」

思わず憤りを見せる銀時だった。

そして、ユーノはついに新聞を掴む距離まで手を伸ばすと嬉々とした表情を見せる。

「よっしゃ!もらっ・・・ぐっは!!」

だがしかし、その瞬間クロノのストラグルバインドがユーノの首を絞め、必死にユーノは抵抗しながら地面に落ちた新聞を取ろうとしていた。

「させるか!!お前の様な“根暗・女男・淫獣・フェレット”の負の四大要素が完璧に揃った奴に、新聞を読み資格などない!!!」

「にいいいいい!!!」

クロノはストラグルバインドを後ろに引いてユーノから新聞を突き放すと自分が前に出て新聞を取ろうと動き出す。

「貰った!!」

だがしかし、ユーノは咄嗟に前に出て来たクロノを妨害するために桁繰りを仕掛ける。

「させるか！」

「ぐえええええ！！！」

そして、盛大にずっこけたクロノの首を両腕で閉めながらユーノはそう言い返した。

「“根暗・女男”はまだしも、“淫獣・フェレット”の何処か負の四大要素なんだよ？完全に僕限定だろうが。つうかいつまで僕の事をそう呼んでるんだよお前は！？悲しい奴だ。お前は自分を特徴づけるものがないから僕に嫉妬してるだけなんだ。そうやって罵倒し続けることでしか自分を表現できないからだ。それで周りに慰めてもらおうとしているに過ぎないんだよ！その時点で、お前はユーノ・スクライアに敗北してるんだよ！！！」

「攻撃魔法も使えない分際で、何を偉そうなことを言うんだ！！」

クロノはそう言いながら、ＳＵ２を起動させブレイズキャノンをユーノの顔面目掛けて発射し、ユーノはそれを素早く避けると晩翠を取出し互いに高速でぶつかり距離を取った。

「面白れー。男は一番こいつが早いもんな。後腐れもないし、今日と言う今日こそその鼻っぱしへし折ってラー油にでもつけてやらぁ。」

「ち。僕的には淫獣フェレットとの戦いはあまり乗り気ではなかったんだけどな、確かにお前の言う通り白黒をつけるにはこの方法が一番早いようだ！」

二人は武器を取って構えると、真剣な瞳で自分の名前を口にする。

「ユーノ・スクライア。」

「クロノ・ハラオウン。」

「「参る！」」

だがその瞬間、飛び出して行った二人の間に入った銀時が木刀の一振りを浴びせて二人を吹っ飛ばした。

「いい加減にしろてめぇら！！！」

「「ほげええ！！！」」

銀時の一太刀を浴びた二人は地面に叩きつけられ、恋次はそんな二人の争いの火種となった新聞を取り上げ、赤火砲の火をつけて新聞を燃やしてしまった。

ユーノとクロノは燃えていく新聞を見ながら激しく絶叫する。

「「あああああ！！！！！新聞が！！！！！」」

「馬鹿な喧嘩はそれぐらいにしろよ。いっそのことこうしちまう方が新聞も幸せだろうぜ」

恋次がそう口にすると、二人は一気に全身の力が抜けていき、燃え尽きたような表情を浮かべて動かなくなった。

「そ、そんな・・・！！折角数少ないお小遣いを出して買ったのに・・・！！」

「あ・・・ははは・・・燃えてゆく・・・新聞も・・・僕の頭の中も何もかも・・・」

全身も頭の中も何もかもが真っ白になった二人を見ながら、神楽やヴィータはこう呟いた。

「撃沈したネ、二人して」

「一体何だったんだこのグダグダなやり取り。何がしたかったんだよ一体・・・」

なのはとフェイトは徐に近づき意気消沈する二人に向かって慰めの言葉をかける。

「く、クロノ。そんな気を落とさないで。後で新聞くらい買ってきてあげるから。」

「ゆ、ユーノ君も元気出してよ。ほら、今日のおやつにユーノ君の好きなキャラメルケーキ作ってあげるから。ね？」

「「あ・・・あ・・・ははは・・・ははは・・・」」

もう、笑うしかない二人であったが、丁度その時全員の元に司令室のはやてから通信が入った。

「お？はやてから連絡だ。」

ディスプレイを表示させると、シグナムははやてに用件を尋ねた。

「どうなさいましたか、主はやて？」

『うん。実はまたカリムから六課宛てに依頼が来たんよ。今度はルパンが予告状を直接送りつけて来たらしんよ。』

ルパンと言う言葉を聞くと、今まで燃え尽きた様子のユーノとクロノも反応する。

「「何だと？」」

そして、同時に土方も込み上げてくる怒りが溢れて出そうとしてきた。

「あの野郎・・・性懲りもなくぬけぬけと！」

『ちょっくら、全員司令室の方に集まろうか？』

急いで司令室の方へと戻っていった全員はそこで早速はやてからの説明を受けることになった。

「で、これがその予告状・・・と言うより予告影像かな。今、再生するよ。」

はやてはタッチパネルを操作し、聖王教会宛に送られてきたルパンの予告影像を見せた。

何処か映画の予告のような作り方をしたその映像をまじまじと見つめるユーノ達。

すると、暫くすると椅子に座ったルパンが映し出される。

『ラッセルのお宝は・・・――』

と、言おうとした矢先カメラの位置がずれしまう。

『あれ？』

ルパンはすぐにカメラの位置を直すと椅子に座り台詞を言い直す。

『えっへん！第３９管理外世界『ラッセル』のとある城に眠っているロスト・ロギア、『プリズムシード』は俺様が頂くぜ、魔導師さん達。ロスト・ロギアの保守管理だか知らねぇが、間もなく頂に行くぜこのルパン三世様がな。なははははは！！！！！！！』

そう言った途端、ここで映像は終了し聞いていた土方は刀を抜きながらこう口にする。

「おい・・・こいつマジで斬り殺していいかてめぇら・・・！！」

「トシ。少し落ち着け。第一、その体ではまだ戦闘には無理が生じる。今回は引き下がれ。」

近藤は先日の土方の怪我を考慮し、出動待機から外れるようにと提案するが、土方は引き下がるつもりは毛頭なかった。

「近藤さん、まだそんな悠長なこと言ってやがるのか？俺ならもう大丈夫だ。これぐらいの怪我、どうってこと・・・！」

と、言おうとした矢先、神楽と総悟は同時に土方の負傷した箇所を殴りつけた。

「「とう。」」

「のあああああああああ！！！！！」

激痛のあまりその場に転げまわる土方を見て、神楽と総悟はこう言った。

「全然大丈夫じゃないでっせ土方さん。」

「そうネ。ゴリラの言う通りお前は安静にしてるネ。」

「て・・・てめぇら・・・・・！！」

傍で見ていたフェイトは苦笑しながら総悟にこう言った。

「あ、あの～～～怪我人相手にそれはちょっとやり過ぎな気もするんですけど・・・」

「心配いらねぇさ。これでも全然加減した方だぜ。本調子ならそのまま腕が吹っ飛んでるぜ。」

「どんな技だよそれ！！！俺を殺す気満々じゃねぇか！！」

「まぁまぁ。落ち着きましょうよ、土方さん。」

「これが落ち着いていられるか！」

「全く。つまらぬことで腹を立てておって。まるで恋次が二人になった気分だ。」

ルキアが土方にあきれ返っていると、さりげなく自分の事を取り上げ馬鹿にされた恋次はそんなルキアの方を噛み付きそうな眼つきで睨み付ける。

「てめぇもさり気に人のこと馬鹿にしてんじゃねぇかよ、ああ！」

「朽木さん。聞こえてたよ。」

「おっとすまぬ。口がつい滑った。」

「てめぇ・・・！！」

吉良の耳打ちを聞き、ルキアはちょっと小馬鹿にした口調でそう言い、聞いていた恋次は思わず拳を強く握りしめるのであった。

「喧嘩はその辺にしてや。取りあえず私達がせなあかんのはルパンからそのプリズムシードいうロスト・ロギアを守ることや。」

「そうだな。しかし、そのプリズムシードとは具体的にどんなものなんだ？」

銀時がそう言うと、はやては送られてきたデータの一覧表示し説明をする。

「教会側から送られてきたデータによれば、非常に強いエネルギーを秘めた次元干渉型の高密度結晶体。早い話がジュエルシードみないなもんやな。」

その後、ユーノが補足の説明を加える。

「数は今まで発見されたものも含めると今回で二つ目。そして、一つは既に先日何者かに盗まれている。これはルパンの仕業ではないようだ。」

「成程な。ルパンはここ数日ロスト・ロギアばかりを狙った犯行を繰り返しているが、今回も今回で危ないものを狙って来やがったな。それに第三者の介入も十分に考えられる。」

「二つの目のロスト・ロギアの在り処は予告状にもあった通り第３９管理外世界『ラッセル』にあるどこかの城の中や。何としても先回りしてルパンから取られんようにせなあかん。」

「だとしたら、大人数だと目立ちすぎるな。」

「だね。八神部隊長、私はこの任務・・・遺跡発掘を専門に扱うスクライアアドバイザーが適任ではないかと思いますが。」

なのはがそう言ってユーノを推薦すると、はやても首を縦に振る。

「そうやな。スクライアアドバイザー、高町隊長からの推薦もあるけど、どうやろうか？」

「そうだね。高町隊長が推薦するなら、この任務快く引き受けるよ。」

「にゃは♪」

ユーノもなのはからの推薦を受けると快くそれを受け入れ、なのはも思わず笑みを浮かべる。

「おっし。ほんならロスト・ロギア『プリズムシード』の捜索はスクライアアドバイザーを責任者として、残り数名の前線メンバーがそのサポートに回ってもらう。全員、引き締めていくよ！」

「「「「「「はい！」」」」」」

そして、捜索当日。

ユーノを責任者とするロスト・ロギア、『プリズムシード』捜索班数名は第３９管理外世界『ラッセル』を訪れ、ユーノ・銀時・新八の三人はそのロスト・ロギアが隠されていると思われるこのラッセルの観光名所の一つ、ミルネバ城に潜入していた。

「は～い！着きましたよ。ラッセルの名所、ミルネバ城ですよ！」

観光に訪れてきた人々が観光バスの中から次々に出てきて、一様に場内に向かって歩き出す。

ユーノ達三人もそんな観光客の人ごみに紛れ込みながら城へと潜入し、人目を避けると三人は固まりクルーザーで待機しているヴィータ・ティアナ・ギンガ・吉良、そして神楽の五人に通信を入れる。

「到着したよ。ミルネバ城だ。」

『了解。』

『ルパンの動きはどうだい？』

『今のところ、センサーにそれらしき反応は見受けられません。一

先ず安心ですかね？』

『今何処だい？』

『アルファ通りの西側。ラッセルのど真ん中。運河の上です。』

『ウンガ了解。じゃ、また定刻に連絡するってことで糖分取っとくぜ。』

「ちょっと待つネ銀ちゃん。」

銀時が通信を切ろうとした直後、急に神楽が銀時を呼び止めこんな事を話してきた。

「そう言えば、さっき城の近くに何だか如何にも怪しい黄色い生き物がうろちょろしてたあるヨ。もしかしたら新種の生き物かもしれないから捕まえて来て欲しいネ！私定春がいなくて寂しいアルよ」

すると、神楽の無理難題な要求を聞くと銀時達は呆れかえりながらこう言った。

「おいおい。俺達はお前の代わりのペット探しに来たんじゃなくて、未発見のロスト・ロギアの回収に来たんだろうが。」

「そうだよ。神楽ちゃんも少し状況を考えてよ。」

『酷いアルよ！乙女のいたいけな女心を軽々しく踏みにじるような発言はいただけないネ！ヴィータ、このアホンダラどもに何か言って欲しいアルよ！！』

神楽はヴィータに銀時達を説得するようにと話を振ってきた。

ヴィータは半分涙目の神楽の顔を見ると断ることも出来ず、次のように言って来た。

『お、おう・・・あのさ・・・神楽だってその定春って言うのが居なくて寂しいんだろうぜ。ロスト・ロギアの捜索の序でいいからさ、何か代わりの奴探してやれよ。』

ヴィータがそう言うと、ユーノは暫く考えてから仕方なくその要求を聞き入れることにした。

「・・・あはは。わ、分かったよ。じゃあ、もし余裕があったらね♪」

ユーノが要求を受け入れてくれるや否や、神楽は大いに喜んだ。

『流石ユーノアル！銀ちゃんと新八なんかよりも全然頼りになるネ！』

「悪かったな。俺達信頼できる器じゃなくて。」

若干銀時は神楽の言葉に苛立ちを感じたのであった。

神楽の話が終わると、最後に吉良がこう言って来た。

『それじゃ、僕らはこのままクルーザーで待機していますから、ユーノさん達は捜索の方をお願いしますね。』

「「「了解」」」

通信を切り終えると、ユーノ達三人は早速独自に城内にある展示物の中から問題のロスト・ロギアを見付けるために行動を開始した。

ユーノ達が行動を起こしているその頃、聖王教会より提供された豪勢なクルーザーの上ではティアナたちがこんな談笑をしていた。

「それにしても、随分立派なクルーザーですよね。これも聖王教会が提供してくれたんですから。」

「そうだね。意外とあそこって小金持ちだってことがよく分かったよ。」

「まぁな。て言うかよ・・・・・・」

ヴィータはそう言うと、サングラスをつけてすっかり日向ごっこを満喫している神楽を見ながらこう呟いた。

「神楽。お前寛ぎ過ぎじゃねぇか？」

「私達の出番は当分ないアルよ。面倒事は銀ちゃん達に任せて悠々自適に時間を過ごすのが歌舞伎町の女王たる私の務めネ。」

神楽が大胆にもそう宣言すると、聞いていたティアナやギンガ達の心境は非常に複雑なものであった。

「えっと・・・そう言うものなんでしょうか・・・」

「新八さん達ががんばってるのに、なんだかね・・・・・・」

「つくづく歌舞伎町と言う街が不思議で仕方ないよ。」

さて、クルーザーで待機をしている五人とは裏腹にミルネバ城の方ではツアーガイドの女性がこのミルネバ城に関する詳細な説明を観光客に行っていた。

「このお城は、十年前に亡くなられたナイト氏の邸宅でした。ナイト氏の遺言に基づき、ここに保管されていた古美術品はすべて国に寄贈され、お城は市に買い取られ、観光地として公開されたわけです。」

ツアーガイドは説明を終えると、一番近くで聞いていた少年に理解できたかどうかを笑顔で尋ねてみた。

「分かった、坊や？」

すると、少年はツアーガイドのスカートをめくってパンツを覗き、突然の少年の行動にツアーガイドも他の観光客も度胆をぬいた。

「ひゃ！」

その後、騒然となった観光客をどうにか落ち着かせたガイドは再び先頭に立ってミルネバ城の奥へと観光客を案内していった。

「広いですから迷わないようにね。」

そんな観光客とは違い、ロスト・ロギア捜索の為に派遣されたユーノ・スクライアを筆頭とする捜索班の銀時と新八は展示物をこと細かく見ながら映像のものと比較していた。

現在新八はユーノと一緒に捜索に当たっており、ユーノは遺跡発掘を生業とする一族の習性から何処か嬉々とした表情を浮かべていた。

新八はそんなユーノを見ると何故か自分を嬉しくなった。

「いや～ユーノさん。やっぱり考古学者だけあって表情がいつもよりも輝いてますね。遺跡発掘の仕事の時とかはいつもこうなんですか？」

「そうだね。やっぱりスクライアの血が騒ぐものだから♪それより、銀さんはどうしたのさ？」

「あれ？そう言えば・・・・・全く。あの人はいつも集団ルールを守ろうとしないんだから。」

二人が辺りを見渡すと、そこには銀時の姿がいつの間にか消えていた。

新八は呆れかえって頭を抱えるが、ユーノだけは次のように語った。

「ははは♪銀さんはあれでいいんじゃないかな。僕は銀さんみたいな真っ正直に生きてる人間は嫌いじゃないよ。」

「そう言ってくれるのはユーノさんだけですよ。僕が言うのもなんですが、ユーノさんは近藤さん以上に人が良すぎますって。」

「あはは♪近藤さんには全然適わないって♪だって僕、クロの事死ぬほど嫌いだから♪」

「それ聞いたら本気でクロノさん怒りますよきっと・・・」

「いいの、いいの♪あんな腹黒、怒ったところでさしたる僕の敵じゃないし♪」

そんな談笑をしながら、ユーノと新八はその後も城の中を回ってみたが一般公開されている展示物の中にはそれらしきものは見つからず、二人は非公開となっている上の回へと続く階段を上り始めた。

「一通り探しましたけど、少なくとも一般公開されている骨董品の中にはありませんでしたね。

「そうだね。展示物の中にないとすれば、何処か発見されていない場所にあるはずだ」

「年代物のお城ですからね、秘密の部屋の一つや二つあるとは思うんですけど・・・」

新八はそう言いながらユーノと共に階段を上り続け、やがて行き止まりとなった箇所の傍に遭った扉を開いて中に入ると、薄暗い部屋に佇む仏像と何故か座禅を組む銀時が座っていた。

銀時の姿を発見すると、新八は怒り心頭な様子で近づき激しき諫める。

「おんどらああ!!!ここで何一人サボってるんだよてめぇは!!!何そこでスカした感じで座禅組んでんだよ!!僕ら何の為にこの城の中に忍び込んだのか忘れてんじゃねぇだろうな!!」

「まぁまぁ、新八君そう怒らない怒らない。と言うか銀さん、何でここに?」

すると、銀時は徐に目を開けて仏像を見ながらこう呟いた。

「・・・この仏像・・・何か気に入らねぇな・・・」

「え、仏像？何処が？」

「指が。」

「指？」

訝しげな表情を浮かべる二人に、銀時は問題となっている仏像の指を指さす。

「仏さんの教えにはねぇ形してんじゃねぇかよ。」

銀時がそう言って二人が仏像の指を凝視すると、確かに仏像の指・・・特に何故か小指だけが突き出てると言う奇妙な形をしていた。

ユーノをそれを見ると、思わず自分も小指を突き立てて納得する。

「あ、成程♪」

「気に入らねぇ・・・気に入らねぇ！！」

銀時の怒りのボルテージが最高潮に達すると、銀時は木刀を抜いてその仏像の小指目掛けて大きく木刀を振るった。

「てぇあああああああああ！！！！」

そして、見事仏像の小指を真っ二つに折って銀時は漸く落ち着きを取り戻した。

折られた小指がユーノと新八の前に落ちてくると、徐にユーノはその小指を拾い上げる。

「あ～あ・・・完全に器物破損だよ・・・」

「銀さん。何もここまでしなくても・・・・・・」

と、新八がそう呟いた直後。

唐突に部屋全体が大きく振動を起こし始めた。

「「「!」」」

身構える三人だったが、直後銀時の前に佇んでいた仏像の右耳が上へと動き、更には首が横にスライドすると、仏像全体が大きく動きだし持ち上がったかのように上へと移動すると、ユーノ達の目の前に隠し通路が出現する。

ユーノと新八は隠し通路を見ると、駆け足でその場所に近づき嬉々とした表情を見せる。

「銀さん。帰りにデラックスチョコレートパフェおごってあげますから♪」

ユーノはそう言って新八と共に隠し通路の階段を下っていくと、後から銀時がそのユーノの言葉に反応してこう言って来た。

「いちご牛乳もつけて！！」

三人は薄暗い隠し通路を慎重に進んでいき、着実に奥へと前進していたのだが、途中ユーノ達の目の前に壁が現れ行き止まりとなってしまった。

「ここで行き止まりっていうのも芸がねぇな・・・・・・」

銀時がそう言って鼻の穴をほじくっていると、突然三人の床下の足場が崩れ落ちる。

「「「？」」」

そして、三人はそのまま暗い竪穴を滑り落ちていった。

「「「のあああああああ！！！！」」」

縦穴を滑り落ちていった三人はそのまま下水道と思われる箇所へと落下し、水の中で必死にもがきながら頭上を目指した。

そして、何とか手すりに掴まり梯子を伝ってユーノ達は上へと昇っていく。

銀時は実に古典的な仕掛けが施されたこの城に関して次のようにツッコんだ。

「昔のテーマパークかここは！？」

ユーノは梯子と昇り切ると、両腕が使えないので一先ず口にライトを加えて点灯させると、再び先頭を切って薄暗い通路を歩きはじめ

る。

暫く三人が歩いていると、今度は目の前に左右の赤と青の扉が広がってきた。

銀時はそれを見ながら指を交互に振ってどちらを選択しようか悩んでいた。

「赤開けて。青開けないで、赤閉めると・・・ユーノ先生。どっちでございますかね？」

ユーノに助言を求める銀時。

ユーノは銀時の言葉を聞くと、慎重に赤い扉へと近づき耳をそばだてて安全だということを確認すると二人を誘導する。

「こっちです。」

ユーノの言葉を信用し、徐に赤い扉を開ける銀時と新八。

しかし、扉を開けてみると二人の目の前に広がってきたのはとても安全とは思えないほど恐ろしく白骨化した死体が串刺しとなった光景であった。

「「・・・・・・！」」

二人は思わず息を呑んで恐怖に戦いたが、その直後まるで二人を吸い込まんとばかりの突風が部屋の中から起こり、新八は思わず吸い込まれそうになる。

「ぎゃあああああああああ！！！！」

手すりに掴まり必死に抵抗する新八だが、その瞬間風の力に負けて手が手すりから離れてしまうが、咄嗟に銀時が新八の腕を掴む。

「の・・・野郎！！！！！！！」

銀時は持ち前の力で新八を何とか救い出すと突風が巻き起こるその部屋の扉を何とか占めることに成功する。

が、その直後二人はいい加減な判断を行ったユーノに激しく抗議をする。

「何で赤なんですか！危うく僕らハリネズミになるところでしたよ！！」

「ふん！いい加減・無責任・嘘つき・インチキ・マルチ商法！！」

二人の罵詈雑言を耳元で聞くと、ユーノは溢れるばかりの怒りをこの言葉に凝縮させた。

「カット！！！！！」

驚き返る二人を余所に、ユーノは不機嫌そうな様子で青い扉の方に近づいた。

「こっちです！！」

「もういいって。」

銀時はそう言ってユーノを退かせると、一度新八が扉の前に立って小さい穴に目を向けて中の様子を窺った。

「赤危ないから青覗くと・・・」

そして、新八が中に危険なものがないことを確認すると銀時は徐に扉を開ける。

すると、そこに広がってきたのは先ほどはまるで真逆な針の山も何もない至って普通の部屋であり、奥には金色色に輝く扉が設けられていた。

「お待たせしました。」

銀時はそう言って扉に向かって歩き出そうとした、その直後異変は起こった。

「うわあああ!!!!」

突然、銀時の上のタイルが高速で動きだし戻ろうとする銀時の動きに逆らって銀時を一方的に扉の方へと叩きつける。

「いって!!」

扉に頭を強打する銀時に、新八とユーノは声を上げた。

「銀さん!」

「銀さん!大丈夫ですか!?」

と、二人がそう言った直後、またもや銀時の周りで異変が起きる。

何と、銀時の真後ろの扉が突然開き銀時はそのまま扉の中へ吸い込まれるかのように地面の下へと落ちて行ったのだ。

「のあああああああ！！！！」

「「銀さん！！」」

銀時を助け出そうと駆け足で近づく二人だが、扉は銀時が落ちると同時に閉まり始め、新八が到着した瞬間に扉が閉じられた。

「ぎんさ・・・！！」

何とか開こうとする新八だが、扉はまるでびくともしない。

「この！くそ！！全然開かないぞ！！」

何度も足で扉を蹴って開けようとする新八。

と、その時天井から無数の針がゆっくりと二人目掛けて降りてきた。

「「！？」」

新八は自分たちに向けて降りてくる恐怖の象徴に思わず涙目を浮かべて絶叫する。

「あああああああ！！！！！！」

「新八君！早くこっちに！！」

ユーノは新八を連れて一度部屋の外へと脱出し、何とか被害を免れた二人だが銀時は完全に離れ離れになってしまい、通路もその針で塞がれしまった。

「ここまでですか僕ら!?」

「銀さんを見捨てる訳にはいかない。僕に任せて。」

ユーノはそう言うと、晩翠を取出し無数の針を切って道を切り開くという大胆な方法で強行突破を試みる。

果たして、銀時は無事なのか?

そして問題のロスト・ロギアは発見することが出来るのであろうか?

三人がこのような問題に直面しているその頃、運河の上で待機していたヴィータ達の方はと言うと、現在六課のなのはと定期連絡を行っていた。

『ヴィータちゃん。あれからユーノ君から何か連絡は?』

「定刻に連絡を受けてからそのあとは全くだな。多分、捜索に没頭してるんだろうぜ。」

「結構城の中も複雑かつ未発見の場所も多いと聞きました。ユーノ先生がいるから大丈夫だと思いますが、何だかちょっと心配になってきましたね。」

ティアナが補足でそう説明すると、些かなのはの顔が暗くなる。

『そうだね。一応遺跡発掘専門のユーノ君なんだし、そう簡単に迷ったりはしないと思うけど、やっぱり心配だな。みんなも何かあったらすぐに出れるように準備はしといてね。』

「「了解」」

通信を切り終えると、ちょうど正午を報せる鐘がラッセルの街中に響き渡り、吉良達にもしっかり聞こえてきた。

「お。もうこんな時刻か。一端昼食にしよう。」

「そうアルな。確かクルーザーの中に予備の食料があった筈ネ。」

神楽がそう言うと、ヴィータはクルーザーの中の戸棚に入っていた食料を発見する。

「お、これだな。」

戸棚に入っていたのは何処にでもありそうな保存食とカップめんが中心のラインナップだった。

「やっぱ、携帯保存に便利なものばかりだね。」

「この際文句は言わないさ。ギンガ、ちょっと熱いお湯を持ってきてくれ。」

「はい。」

ヴィータは人数分のカップ麺と飲料水を取り出すと、それをテーブ

ルの上へと運ぶ。

やがて、ギンガが熱湯を持ってくると吉良は嬉々とした表情でカップ麺の蓋を開けて熱湯を注ぎ込む。

「ふふふふ♪」

何時もは余程の事がない限り笑うことのない吉良が嬉々とした表情を見せる異様な光景に、ヴィータ達は若干顔を引きつった。

「何だか妙にうれしそうですね、吉良さん。」

「お前ってそんなカップ麺好きだったのか？」

「え！？あ、いや・・・そんなじゃないけど・・・！」

「の割にはしっかり斬魄刀で蓋押さえしてるアルな。」

神楽がそう言って吉良のカップ麺の状態を指摘すると、吉良は思わず顔を赤く染めながら笑うばかりであった。

「は、はははははは・・・！！」

そして、カップ麺が出来上がると更に上機嫌となった吉良はカップ麺を持って外へと出ると頭上に浮かぶ雲や鳥を見ながらひとり言のようにつぶやき始める。

「飛び交うカモメ～～～デルフィスアーフェンの風～～～」

そう言いながら、吉良は持っていたラーメンを口の中へ啜り更にこ

う言った。

「あ～～～！ラッセルの光る運河を眺めつつ、啜るラーメンがこれまた美味い。何て幸せなんだろうか～～～！」

そんな吉良の様子を中の方で見ながら、ヴィータ達四人は一様にこう思った。

「やっぱカップ麺好きなんじゃねぇかよ。」

「「「うんうん。」」」

アンゴルモア・銀魂篇が始まったことで、ユーノを含め様々なキャラに影響が出始めている今日、吉良イヅルもまたその例外ではなかった。

正反対な人間ほど意外と仲が良い（後書き）

教えて、ユーノ先生！

ユ「今日は新八君の憧れのアイドル、寺門通についての説明を・・・」

と、その瞬間『寺門通親衛隊隊長』と書かれた法被を羽織った新八が現れ強引にコーナーをの取った。」

新「邪魔だボケ！！」

ユ「ふっご！！」

思わぬ攻撃を受け、フレームアウトとなったユーノ。

新八は気合を入れて寺門通の説明を始める。

新「お通ちゃんの事は、僕が語らずして誰が語るんだよ！！！てめぇら！！！ようく聞いていきやがれ！！！これが僕らのアイドル、寺門通のすべてだ！！！」

新八は声高にそう言うと、マイクスタンドを取出しスピーカーを全開にすると寺門通のデビューシングル、『お前のとうちゃん××』を熱唱。

新「ちょめちょめ！！！！！ちょめちょめ！！！！！」

近所迷惑さながらのその歌声を聞き、非常に迷惑な表情を浮かべる

一同。

と、その時ギンガが嫉妬の炎を燃やしながら新八に近づき怒りの鉄拳を食らわせる。

ギ「いい加減にしてください、このアイドルオタク！！！！」

新「ぐっほ！！！！！」

ギンガ、その瞬間から絶対にお通には負けないと心に誓うのであった。

魔導師図鑑ハイパー！

黒崎一護と黒崎織姫の解説銀魂篇！！

織「どうも！みなさん、またまたこのコーナーがやってまいりました！！」

一「だんだん話が進むにつれて面白くなってきやがったな。」

織「だね♪そう言えば、本編の中に出て来た謎の少年剣士、明神弥彦とポケモンのピカチュウの関係って何なのかな？」

一「ああ・・・俺もその辺は気になってたんだけどよ、どうもはっきりしねぇよな。つうか何で連れてるのがピカチュウなんだ？」

織「やっぱりマスコットキャラは必要なんだって！と言うわけで、コン君。最後はびしっと決めちゃってください！」

コ「任せてください、織姫さん！次回からは俺様も加わって熱く語っていくぜ！次回もコン様と一緒に・・・・・・レリー！！！っず！！」

と、言おうとした矢先一護に踏みつけられるコン。

一「だからそれも違うって言ってんだろ！！！ＣＣさくらじゃねぇんだぞ！！！」

次回予告

城の奥へと進む銀時。

そこで発見したプリズムシードを電気ネズミ、ピカチュウに奪い取られ、更にそれを狙って第三者買い介入してきた。

謎のロスト・ロギア『プリズムシード』を巡って三つ巴の争奪戦が始まる。

恋「次回『知恵と勇気と意地は使い様』」

知恵と勇気と意地は使い様

＞i29689―709＜

第３９管理外世界『ラッセル』に隠されたロスト・ロギア、『プリズムシード』を捜索するためミルネバ城を訪れていたユーノ達一行は、そこで待ち受けていた様々な仕掛けに苦労しながら、城の奥へと進んでいた。

だが、そんな時銀時は一人仕掛けにはまって扉の中へと落ちて行った。

銀時を救い出すためユーノは一人無数の針を晩翠を使って斬り続けていた。

「んどらあああああ！！！！」

勢いよく振られるユーノの一太刀であれだけあった針が半分以上の数にまで減少し、その頑張るユーノの姿を見ながら後ろで新八は真顔でこう言って来た。

「頑張ってください・・・もう半分は斬れてます・・・」

「は、は、は、は、は・・・・・・くそがあああああ！！！！！」

ユーノ・スクライアは今日も今日で、色んなものと戦い続けるのであった。

ユーノが無数の針と戦いを繰り広げているその頃、一人扉の中へと落ちて行った銀時はそのまま通路を直進していっていた。

「お？」

暫く歩いていると唐突に銀時の目の前に数字がばらばらに配列されたブッロクが出現する。

「へぇ・・・舐めてんじゃんかよ。」

銀時は気合を入れると、両手両足を巧みに使って1から15まで配列された数字を並び替えていき、それを順番通りに横に配列する。

その作業が完了すると、銀時はため息交じりにこう呟いた。

「ふう。こんなもんだろ。」

銀時がそう言うと、順番に並び替えられた番号が軽快な音を奏でながら順を追って光だし、すべてが光り終えると奥にあったブロッグが前に出て、塞がれていた通路が開閉され一本道が出来上がった。

「ちょろいぜ。」

銀時は開かれた通路をまっすぐ進んでいき、やがて奥の方から一筋の光が見えてきた。

銀時が足早に光に向かって走り出すと、奥の部屋にあったのは問題のロスト・ロギアと非常に酷似したものだった。

「お。」

銀時は一度渡された資料と見比べ、目の前のものがお目当てのロスト・ロギア「プリズムシード」であると確信すると、思わずほくそ笑む。

「あれか・・・何だよ意外と簡単に見つかるもんだな。そんじゃ、お早うさん・・・と。」

そう言ってプリズムシードに近づこうとした銀時だが、その直後銀時はそこであの人物の姿を捕える。

「！」

銀時の目の前に現れたのは、天井から縄を伝ってプリズムシードを回収しようとする天下の大泥棒ルパン三世であった。

ルパンは銀時の存在に気付くと、不敵な笑みを浮かべる。

「ありゃ？もう新手がご到着ってか？」

「てめぇは・・・ルパンか！」

「そう言う銀髪の兄ちゃんは確か、“金時ちゃん”だったかな？」

ふざけた様子で態と銀時の名前を間違えるルパンに、銀時は思わず憤りを感じた。

「んだとてめぇ！！それゼッテー態と間違えてるだろ！！！辰馬って呼ばれてぇのかコノヤロー！！！」

「なははははは。そう怒るなって。血糖値上がってもしらねぇぞ。」

「おめぇに心配される筋合いなんかねぇって！つうか、そいつをこっちに渡せ。そいつはてめぇが盗んだところで然したる意味も持たねぇさ。それこそ宝の持ち腐れだぜ。」

「そうか。じゃあ取ってみろよ。侍なんだろ？」

「言ってくれるじゃねぇか。泥棒の分際で・・・」

二人は互いに不敵な笑みを浮かべながら臨戦状態に入っていった。

と、その時だった。

「ピカ！」

「「！？」」

突然奇妙な鳴き声が聞こえてきたと思いきや、黄色い体の小柄な生き物がルパンが手に持っていたプリズムシードを横から掻っ攫ってしまったのだ。

この生き物、ポケモンのピカチュウはその長い尻尾で器用にプリズムシードを乗っけると、勝ち誇った表情を浮かべる。

一方でルパンは大泥棒の名に恥じるような雪辱に非常に悔しがる。

「なあああ！！！俺のお宝ちゃんが！！」

「な！何だこいつは！？は！黄色のネズミ・・・こいつは・・・ぴ、ピカチュウか！？」

「んだと！？おいこの電気ネズミ！！俺のお宝返しやがれ！！」

ルパンはそう言うと、直ぐにプリズムシードを取り返そうとピカチュウに向かって飛びかかるが、ピカチュウは素早い動きでルパンを避け、ルパンは床に顔面を直撃させる。

「んご！」

「おんどらああ！！」

銀時もまたプリズムシードを奪い取ろうとピカチュウに向かっていくが、ピカチュウはそんな血気盛んな銀時の動きを翻弄し、ルパンと同じ目に合わせる。

「ピカ！」

「ぐっほ！」

真っ赤に腫れ上がった顔を押さえながら二人はほぼ同時にピカチュウに飛びかかっていく。

「「はあああああ！！！」」

しかし、ピカチュウはそんな二人の動きをよく見てから先ほどと同じように二人の行動を逆手にとって痛い目に合わせる。

「「ふっぐ！！」」

そして、悶絶する銀時とルパンに聞こえるように声を上げるピカチュウ。

「ピカピ！」

「「？」」

ピカチュウの声に反応した二人。

すると、ピカチュウは悪意に満ちた笑みを浮かべながら自分のほっぺに電流を溜めこみ、少しずつその力を大きくしていった。

「ピカ・・・」

この後予想される攻撃の大きさに危惧の念を覚えた銀時とルパンは顔を引きつりながら必死でピカチュウに対してそれは止めてとばかりに次のような言葉を連呼する。

「「可愛い顔してる！可愛い顔してる！！可愛い顔してる！！！可愛い顔してる！！！！」」

だが、そんな二人の言葉などピカチュウは一切耳にも入れずピカチュウは得意の１０万ボルトで銀時、ルパンの二人を痺れさせるのであった。

「チュウ！！！！！！！！！！！！」

「「あああああああああああああ！！！！！！！！！！！！」」

二人の悲鳴に城に響き渡ると、銀時を追って移動中だったユーノと新八の耳にもしっかりと行き届いた。

「！？何だ！？今のは・・・！」

「急ぎましょう、ユーノさん！」

ピカチュウの１０万ボルトは一言で言えば強力そのものだった。

至近距離でそれを食らったルパンは全身を真っ黒に染め上げると、目を回して最後にこの言葉を残して紙くずとなっていった。

「ハラホレハラホレ・・・・・・ふ、不二子ちゃん・・・・・俺はもう駄目です・・・・・」

ルパン三世は哀れにも、世界的に有名な電気ネズミの一撃により消滅してしまったのであった。

一方で銀時は同じように電撃を食らい、天然パーマからアフロに変貌しながら痺れきった体を必死に起こしてピカチュウを見上げる。

「く、くそったれが・・・！」

「ピッピカチュウ！」

ピカチュウはそう言うと、プリズムシードを持ってそのまま壁を伝って窓に向かって小走りで上り始めた。

「あ！てめぇ待ちやがれ！！」

銀時はピカチュウを追いかけようと目の前にあったプリズムシードが置かれていた石に乗りかかろうとした、その時だった。

「！！」

乗りかかったかと思えば銀時は光る石の吸引力によってそこから一歩も動けなくなってしまった。

「な、何だこりゃ・・・！！ふご！！！のああ！！この！！！！た、たちゅけて・・・！！」

そんな哀れな銀時の姿を見下ろしながら、ピカチュウは最後にこう

言った。

「ピカピ!!（お元気で、銀髪のお侍さん）」

ピカチュウはプリズムシードをしっかり抱えた状態で塔の上から飛び降りると、屋根を伝って今自分と行動を共にしている人物との待ち合わせ付近の所まで降り立つ。

そして、暫くすると運河を渡って待ち合わせの人物である明神弥彦がクルーザーで迎えに来てくれた。

ピカチュウは素早くそのクルーザーに乗り込むと、手に入れたロスト・ロギアを弥彦に渡して、そのまま運河の上を航行していった。

一方、光る石の所為で体が全く動かせない状態の銀時は一人も誤記苦しんでいた。

「ふご!!!!くそ!!!!ぬおおおお!!!!」

と、その時丁度ユーノと新八が銀時の元に現れた。

「銀さん!」

二人は様子のおかしい銀時の元へと駆け寄った。

「どうしたんですか銀さん!?て言うか、ルパンもいたようですが・・・もう紙切れになってますね。何があったんですか!?」

「電気ネズミに先を越された!!おい、早く助けてくれ!!」

「ユーノさん。お願いします。」

「やれやれ。駄目じゃないですか、そう言うのに安易に触れたら。」

ユーノは若干呆れながらも銀時を助け出すために距離を取って、抜刀術を使って一気に銀時とべったり張り付いている光る石を切り刻み、効力を失った光る石に銀時は安堵の表情を浮かべた。

「やったね・・・・・ふっが！」

破壊された石の上から豪快に転げ落ちる銀時だが、直ぐに我に返るとユーノと新八にこう言って来た。

「こうしちゃいらねぇ！！ユーノ、新八。俺達も出るぞ！」

「「はい」」

ユーノは早速隠し持っていたワイヤーを使って天井まで銀時と新八を運ぶと、銀時は窓の外から見えてくるクルーザーの上で日向ごっこをするピカチュウに向かって声を上げてこう言った。

「ポケモン、ゲットだぜ！！！」

「ピカ！？」

銀時の声に反応したピカチュウが塔の上にいる銀時を確認する。

そして、銀時はそんな驚き返るピカチュウを凝視しながらユーノに向かってこう言った。

「ユーノ。何か飛ぶものはあるか？」

「携帯用のハングライダーならあります。」

「よし、ちょっとそれ貸せ。」

銀時はユーノから携帯用のハングライダーを受け取ると、それを広げてピカチュウのいるクルーザー目掛けて勢いよく飛んで行った。

「行くぜ！とおおお！！！」

銀時がハングライダーで飛んでいくと、ユーノと新八は声を揃えて銀時の名前を叫んだ。

「「銀さん！」」

すると、銀時はそんな二人に向かって飛びながらこう言った。

「ユーノ！新八！ロスト・ロギアはあのクルーザーだ！！」

「了解。」

二人は銀時の言葉を聞き言えると、急いでヴィータ達と合流するために通信を入れて運河の方へと向かった。

さて、銀時の動きを見ていたピカチュウは大急ぎで操舵室へと向かい弥彦にこのことを報告する。

「ピカピ！ピカ！！」

「何、追われてる?仕方ねぇ。スピード上げるか。」

弥彦はピカチュウからの報告を受けると、エンジンレバーを手前に引いて加速する。

一方、その様子を窺いながら相変わらず何を考えてるか分かったものでない今回の事件の黒幕、カトゥーンは斎藤一と一緒にずっとモニターで観察していた。

斎藤は煙草を吹かしながら隣のカトゥーンに向かっておもむろにこう言った。

「ふん。天下の大泥棒が電気ネズミ如きにやられるとは・・・何とも哀れな話だな。で、お前はどうするつもりだ、カトゥーン?」

「少々彼らの存在を軽視し、ルパンの力量を買いかぶりすぎていたのが誤算だったが、粗方こうなるのではないかとも思っていた。既に代わりの尖兵を向かわせている。お宝の回収はそいつに任せるよ。」

「果たして、上手くいくのかどうかな・・・」

斎藤は半信半疑の気持ちを抱きつつ、煙草を吹かすのであった。

さて、ハングライダーでピカチュウの乗るクルーザーを追跡していた銀時の方はと言うと――――――

「よっしゃ!追いついた。このまま飛び降りじゃ・・・あ?」

と、クルーザーに飛び乗ろうとしたその時。

突然銀時の背後に軍用のヘリコプターが飛んできて、銀時に妨害工作をしてきたのだ。

銀時は血相を変えてそのヘリの操縦士に向かって大声を上げた。

「わ！おい、てめぇ近づくんじゃねぇよのやろう！！！」

すると、ヘリの操縦士は不敵な笑みを浮かべるとスピードを上げて銀時のハングライダーをかすめ、その結果ハングライダーはぼろぼろとなってしまい銀時は地上三十メートルほどの高さから運河目掛けて落下した。

「のあああああああああ！！！！！」

銀時は悪運が強かったのか、特に強いうち身をすることもなく水の中へと落下し、九死に一生を得たのであった。

「ぷっは！」

すっかり天然パーマがストレートヘアになってしまったその時、向こうの方からティアナたちのクルーザーが近づいて来、そこに乗っていた新八と神楽が声をかけてきた。

「銀さん！」

「銀ちゃん大丈夫アルか？」

クルーザーは一端銀時の元へと停止する。

「何とかな・・・それよりも早く追いかけねぇとお宝持っていかれるぞ。」

「ユーノ先生。私達はこのまま別ルートで逃げて行ったクルーザーの進行方向に先回りします。ユーノ先生と銀さんはボートで後を追ってください。」

「分かった。銀さん、ボートで追いかけますよ。」

「おっしゃ！」

ユーノは早速クルーザーから付属のボートを取り出すと、運河の上に浮上させエンジンがかかるかどうかを確かめてから水の上の銀時を拾い搭乗させた。

「じゃ、頼んだよみんな。」

「後は任せたぜ！」

ユーノと銀時はそう言うと、後の事をティアナたちに任せて先に逃げて行ったクルーザーの後をボートで追跡を開始するのであった。

「銀さんもユーノさんもご無事で！」

新八の二人を気遣う声が運河に反響した。

そして、ユーノはティアナたちと別れるとボートのスピードを上げながら銀時に逃げて行ったクルーザーの方角を尋ねる。

「クルーザーはどっちです？」

「東南東。街の中心に向かってる！」

「東南東・・・あ、真っ直ぐ！」

ユーノは銀時の言葉を聞くと、更にスピードを上昇させて運河の上を爆走。

巧みなハンドルテクニックで道を駆け抜けていくと、僅か5分も経たないうちに逃げて行ったクルーザーの後姿を捕えることに成功する。

「見つけた！」

ユーノはそのまま銀時と共にクルーザーの後ろについていくのであった。

ピカチュウはその様子を窺うと、再び弥彦にこのことを伝える。

「ピカピカ！！ピカピ！！！ピッカ！」

「速度３３ロッドで接近中か・・・了解。しかし相手は二人掛かり・・・・・何とか振り切らないとな・・・・・・ピカチュウ！時間稼ぎ、頼めるか？」

「ピッカ！ピカチュウ！」

上機嫌な態度で弥彦の頼みを了承すると、ピカチュウは二人を追い払うために船内に備え付けられていた催涙弾を取り出し、弥彦はここでピカチュウとは別のポケモンを呼び出す。

「ニャース！おい、ニャース！」

すると、船室の奥から二本足で立ち人間の言葉を喋る小判をおでこにつけた不思議なポケモン、ニャースがしぶしぶとした様子で弥彦の元にやって来た。

「そんなに大声出さなくても聞こえてるニャー。何の用だニャー？」

「十和田正宗（とわだまさむね）を冷酒（ひや）で頼む。」

すると、ニャースはそれを聞いた途端少々鼻で笑いながら弥彦に聞こえないようにこう呟く。

「・・・・・子供のくせにカッコつけやがって。」

「何だ？」

「別に。」

ニャースは言われた通り酒蔵の中に収められている十和田正宗を取りに向かった。

さて、こうしている間にもクルーザーとボートによる運河での追いかけっこは一層激しさをまし、銀時はトンネルの中に入るとクルーザーから出て来たピカチュウに向かってこう言った。

「おらあああ！！電気ネズミてめぇこの待ちやがれ！！！！俺はなぁ！！今糖分取ってねぇから機嫌が滅茶苦茶悪いんだよ！！！イチゴ牛乳でも飲まねぇとやってられねぇんだよ！！」

「ピカ！」

すると、ピカチュウは口に咥えていた催涙銃の引き金を引いて、ユーノ達のボート目掛けて銃弾を一発発射する。

銃弾が飛んでくると、ユーノは横の銀時に注意をする。

「ちょ！銀さん挑発しないで下さいよ！！」

と、言った直後フロントガラスにピカチュウの撃った銃弾が食い込む。

「「あ」」

そして、その銃弾から紫色の煙が発生しユーノと銀時はその煙の所為で視界を封じられボートのコントロールを失いかけ勢いよく回転を始めた。

「「うわあああああああ！！！！！」」

「ピカ（どんなもんだい・・・・・お）？」

と、勝ち誇った表情で前を見ていたピカチュウだが、その時トンネルから出て来たのはゴーグルとマスクをつけたユーノが運転するボートであり、銀時はむせ返りながら涙を流していた。

「げっほげっほ！！チクチョー！！！何にも見えねぇ！！！！」

「はい、銀さん。これマスクとゴーグルです。」

「早く渡せよそれ!!目が痛くて仕方ねぇんだよげっほげっほ!!」

銀時はユーノの手の中にある自分の分のゴーグルとマスクを受け取ると、それを即座に着用し、ピカチュウはそんなユーノを見ながらこう思った。

「ピカ・・・（へぇ。なかなか切れ者のようだ、あの緑の男）・・・」

そんなことを思いながら、ピカチュウは再び催涙弾を連射し、ユーノはそれを回避しながら追跡を続行する。

彼らのデッドヒートは更に苛烈を極めるのであった。

その頃、ユーノ達とは別に敵のクルーザーの進行方向を計算し、先回りに転じていたヴィータ達の乗るクルーザーはと言うと、吉良の運転の元同じく運河を爆走していた。

「このまま直進だ!」

「はい!」

と、ヴィータの言葉にギンガが反応したその時、操舵主の吉良が目の前に映ってきたある人物の光景に目を丸くした。

「ん!?待て!何かいるぞ!!」

吉良の言葉を聞き、窓の外を見てみるとヴィータ達の前に写ってきたのは屋根の上でいつも通りの着物と袴、そして斬鉄剣を手に取っ

た石川五ェ門であった。

「「「「あれは！！」」」」

「五ェ門ネ！」

危惧の念を抱くヴィータ達。

すると、五ェ門は目を開くとヴィータ地のクルーザー目掛けて飛びかかってきた。

「てやあああああああ！！！」

そして、斬鉄剣の一太刀を浴びせると別な家の屋根に着地し、この台詞を口にする。

「また、つまらぬものを斬ってしまったか・・・」

五ェ門が鞘に剣を収めると、クルーザーはものの見事に真っ二つに切断され、乗っていたヴィータ達全員は目を疑った。

「「「「「うっそ！！！！！」」」」」

ヴィータ達はクルーザーを破壊され、そのまま運河の中に落ちてしまった。

水の中から出てくると、悔しい気持ちを露わにする。

「ぷっは！」

「くそ！こんなオチってありかよ！？」

「五ェ門の存在を軽く見ていたのが迂闊だったか・・・」

「クルーザーが壊された以上、あとは銀さんとユーノさんに任せるしかないですね・・・」

新八はそう言うと、残された希望であるユーノと銀時に一縷の望みを抱き任務の成功を祈るばかりであった。

ヴィータ達のクルーザーが破壊されたその頃、弥彦のクルーザーの方はと言うと、操舵主の弥彦は酒を飲み終えるとニャースにお代わりを要求する。

「ニャース。お代わりだ。」

「はいはい。畏まりましたニャー。」

すると、弥彦の目の前のモニターに次のような文字が表示される。

『電気エネルギー、充填完了。攻撃準備が整いました。』

「よし。ピカチュウ、頼むぜ！！」

「ピカ！」

ピカチュウはそう言うと、催涙銃を投げ捨てるとクルーザーの上へと駆け上っていき、両端に設置された避雷針の様な機械から電気エネルギーの供給を始める。

「「！？」」

ユーノと銀時がその光景を見て警戒を強める中で、ピカチュウは己の電気エネルギーを急激に上昇させていく。

「ピカピカ！！」

そして、電気エネルギーが最高潮に達するのを目撃した二人は苦笑いを浮かべながらふとこう呟くのであった。

「おい・・・あの電気ネズミ・・・何するつもりなんだおい・・・？」

「一応推測するに・・・多分攻撃してくるんでしょうね僕らに・・・」

「ああ・・・それも飛び切りの電撃をな・・・・・・！」

そして、二人の推測はそのまま現実となりピカチュウは爆発的に上昇した電気エネルギーをフルに使って特大サイズの雷で二人を攻撃していった。

「ピ～～～カ～～～チュー！！！！！！！！！！！！！！！」

頭上から降り注ぐ雷を見た二人は一様に声を上げた。

「「のあああああああああ！！！！！！」」

しかし、ユーノはその雷を何とか防ごうと咄嗟にラウンドシールドを展開する。

「く！」

ランウドシールドを展開させ、何とか雷の軌道をずらすことが出来たユーノも流石にこの雷の電圧には自慢の防御も屈しそうになってしまった。

と、その時銀時が苦い顔を浮かべていたユーノにかなり焦った様子でこう言って来た。

「あああああああ！！！！！！！！ユーノ！！！！！！！！前！！！！！前見ろ！！！！！！！」

ユーノが銀時に言われ前を見てみると、進行方向には右側から進んできた別の客船が通り過ぎようとしてきたのだ。

「や、ヤバい！！！！！」

ユーノも流石にこの状況はマズイと言うことを直ぐに理解したが、走り出した車が急には止まれないようにユーノ達のボートも急には止められないのも自明の理だった。

客船の中ではこのままでは衝突を免れないユーノ達のボートを見て全員が騒然と化す。

「「「「きゃあああああああああ！！！！！」」」」

と、ユーノは咄嗟にレバーを内側に引くとエンジン推力を全開にしてその力を利用して何と客船の頭上へと飛び上がり衝突を回避したのであった。

驚き返る客船乗務員だったが、問題は解決したわけではなかった。

ユーノ達の乗るボートは衝突は回避できたもののバランスを崩してそのまま重力に従ってゆっくりと水の中へと落下していくのであった。

「ユーノ・・・やったな・・・・・・」

「銀さん・・・やっちゃいましたね。」

二人はボートごと水の中へと墜落。

ピカチュウたちのクルーザーを完全に見失ってしまったのであった。

ユーノ達を振る切ることに成功すると、ピカチュウはこのことを弥彦に報告し、ニャースに飲み物を注文する。

「ピカ。ピカピカ！」

「はいはい。ピカチュウはオレンジジュースでいいんだニャー？」

「ピッカ♪」

ちょっとかわいい感じでそう言うピカチュウに内心嫉妬するニャースだが、逆らえばこちらが電撃を浴びることは分かり切っているからそこは何も言わず、注文のオレンジジュースを入れてピカチュウに差しだす。

「で、あいつらはどうしたんでニャーか？」

「ピカピカピカ♪」

「魚と遊んでる？もし、魚が退屈してたらの話でニャーが。」

すると、唐突に弥彦がクルーザを操りながらこう言って来た。

「・・・翡翠の魔導死神ユーノ・スクライアに白夜叉坂田銀時か・・・」

「何だ？あの連中の事知ってだニャーか？」

意外そうな様子でニャースがそう言うと、弥彦は当然とばかりの表情でこう言った。

「おいおい。一応調べはとっくについてるんだよこの世界の事の大半はな。“ユーノ・スクライア”に“坂田銀時”。一度は勝負をしてみたかった男たちさ。」

その頃、弥彦が勝負をしてみたいと豪語するユーノ・スクライアと坂田銀時の二人はと言うと、何とか水の中から這い上がり下水道の出口となっている人が入れるほどの穴を見付ける。

「ぷっは！」

「げっほ！」

「銀さん、掴まって。」

「すまねぇな・・・・・・う！」

銀時はユーノの手を借り穴の中に入ると、急に口を押えて何かを吐き出す。

「うぇえ！」

銀時が吐き出したのは文字通り死んだ魚一匹であった。

「ははは・・・何口から出してるんですか・・・う、うえええ！」

と、銀時の出したものを見て思わず笑うユーノだったが、その時自分も口の中から銀時と同じように水の生き物、それも何故か生きた蛸を吐き出した。

「だははははは！！！フェレットがタコ出したぜ！！」

大笑いの銀時にユーノは悔しさのあまり蛸を銀時の頭に投げつける。

「やかましいわ！！！大体、フェレットフェレットって死んだ魚みたいな目した人に言われたくありませんよ！兎に角、今は次の手を打たないと・・・」

ユーノはそう言うと、目の前にディスプレイを表示させる。

「現在地報せよ。こちら、フェレット。こちらフェレット。」

すると、ユーノの元に聞こえてきたのは雑音ばかり。

思わず訝しげな表情を浮かべるユーノ。

と、その時外の方からヘリコプターと思われる物音を耳に入れ、二人が音のする方向へ顔を出すと、案の定頭上には先ほど銀時を妨害してきたヘリコプターが滑空していた。

そして、同時に二人の元にヘリの操縦士と思われる人間の全体通信が聞こえてきた。

『全員に告ぐ。全員に告ぐ。目標はナイゼル運河を西に移動中。マヘラ橋に集結。進路を塞いで包囲しろ！』

操縦士は全体通信を終えると、弥彦達の向かった方向に向けてヘリを飛ばしていった。

「何だったんだ、さっきのは？」

明らかに不自然な動きを見せるヘリの動きに目を光らせるユーノ。

すると、今度は銀時がユーノに向かってこう言って来た。

「おい、ユーノ。何だあれは？」

ユーノはそう言われて銀時が見る方へと目を向けると、二人は水の上を豪快なエンジンを響かせながら爆走してくる集団の姿に驚愕し、思わずこう呟く。

「・・・ユーノ先生・・・水の上にも暴走族ってのがいるのか？」

「さ・・・さぁ・・・」

そんな事を口にしながら、二人は一端首をひっこめ過ぎ去っていく

水上スキーで爆走する軍服に身を纏った恐らく漫画キャラと思われる集団を見送った。

漫画キャラは上からの指示に従い、弥彦達が乗るクルーザーの進行方向へと向けてスキーを爆走させていく。

二人は漫画キャラが居なくなったのを見計らうとすぐに行動を起こし始める。

「こいつはまたメンドクせいことになってきたなおい・・・」

「あのロスト・ロギアを狙っているのはルパンやピカチュウだけじゃなかって訳ですね。急ぎましょう！」

ユーノと銀時は穴の奥へと走っていき、地上へとつながる梯子を見付けると急いで登って行き、最後にふさがれたマンホールの二人を蹴り飛ばして地上に出た二人。

だがしかし、場所が悪かったのか二人が飛び出したのは道路のど真ん中。

車やトラックが一斉に急停車し、ユーノ達を怒鳴りつけて来た。

「コンニャロー！！！あぶねぇじゃねぇか！！お！！」

銀時は兎も角ユーノは申し訳ないという気持ちを抱きながらそこは任務優先の為に駆け足で立ち去って行き、その間に車は衝突を起こして大渋滞と化していた。

二人が走って移動していると、ちょうどその時二人は路地裏で聞こ

えてきたバイクのエンジンにひかれ、足を止めると路地裏には今まさに彼女を連れて出発しようとする男がバイクにまたがっていた。

彼女と思われる女性はヘルメットをかぶり、バイクの上にまたがりねこなで声でこう言った。

「ねぇ♪今日は何処行くの？」

「いつもんとこよ。」

「いやらしい♪」

「嫌か？」

「いっいっ♪」

「ひひ♪この♪」

鼻の下を伸ばし実にだらしのない表情となる男。

すると、そんな男の後ろから声を高くした銀時が女口調でこう言って来た。

「ぬふ♪ほんといやんなっちゃうって感じ♪笑っちゃいや～ん♪」

「え？」

男は後ろに振り返り思わず呆気にとられた声を上げる。

すると、更に驚かされたのは後ろの方で彼女が大量の札束を上機嫌

に数えている光景だった。

事態を理解できていない様子の男に銀時と傍に立っていたユーノはこう言って来た。

「彼女今日は行きたくないだってよ。」

「どうだろ。僕が運転代わってあげるよ。大丈夫、バイクはちゃんと返すからさ♪」

そう言うと、ユーノと銀時は半ば強引に男からバイクを取り上げると、ユーノの運転の元二人は弥彦達のクルーザーを追って走り出す。

男はバイクを取られると、過ぎ去ったユーノ達を見ながら声を上げた。

「ねぇ！あのね！！」

その頃、弥彦達のクルーザの方では、ニャースが窓際から見える水上スキーにまたがった大量の漫画キャラ達を見ながら弥彦に警告を促す。

「何か変なのが来たニャー！？」

「ピカ！！」

弥彦は一度モニターでその様子を確かめると、ここは自分が迎撃に出るのが得策と考え直ぐにニャースに操縦を交代する。

「ニャース、ドライバーチェンジ！」

「了解。」

剣心はニャースと操縦を交代すると、船内にしまわれていた弥彦にとっての人生と剣の師とも言える男から託された逆刃刀を取り出し、決意の籠った瞳を宿しながらこう呟いた。

「剣心。俺は必ずこいつを使いこなして見せるぜ。だから帰ってくるときは燕たちと一緒に首を長くして待ってろよ。」

弥彦は逆刃刀を手に取ると、徐に鞘から抜刀し、クルーザーの外へと出て行った。

体制を低くしながら弥彦は頭上を飛んでいる謎のヘリコプターの操縦士の男に向かって声高にこう叫ぶ。

「誰だてめぇ!!」

すると、その瞬間操縦士は弥彦に照準を合わせるとヘリから銃弾を連射させ、弥彦の周りを打ち抜き、弥彦は腰が抜けてそのまま撃ち抜かれたドアと一緒に後ろに倒れこんだ。

「・・・な・・・!」

「ははははは!」

操縦士は弥彦を脅かすことに成功すると、一度浮上してその場を離れる。

「ピカ!!!」

「大丈夫ニャーか!?」

弥彦の身を案じ心配そうな目で見つめるピカチュウとニャース。

弥彦は頭を押さえながら先ほどの男が何者であったのか頭を悩ませる。

「いててて・・・何なんだよあの野郎・・・!?」

クルーザーはその後も漫画キャラ達を振り切ろうとスピードを上げて運河の上を走り続ける。

その様子をバイクを運転していたユーノ達の目にも止まり、一度バイクを止めたユーノは銀時と共にクルーザーの様子を窺った。

「いましたよ、銀さん。」

「いて張った。」

目標位置を確認すると、ユーノは銀時を振り落さないようにエンジンを全開にしてバイクを走らせた。

「気張っていくぜ!」

「キバットですか、銀さんは!?」

ふとそんなことを呟くユーノ。

言うまでもないが、銀さんとキバットの声優は言わずと知れた杉田

智和である。

さてユーノ達がバイクで追いかけているその頃、水上スキーでクルーザーを追いかけていた漫画キャラ達はクルーザーとの距離を縮めると、一斉に飛び移ってきた。

「でぃ！」

一人の男がクルーザーに飛び移ると、待ち構えていたピカチュウのアイアンテールが炸裂する。

「ピ～カ！」

「ぶっほ！」

ピカチュウだけではない。

弥彦も逆刃刀片手に次々に飛び乗ってきた漫画キャラを前に物怖じ一つせず果敢立ち向かっていく。

「でやあああ！！！」

弥彦は漫画キャラの攻撃を回避しつつ、身軽な動きで飛び上がり足蹴りを食らわせる。

「ふん！」

「ぐ！」

そして、更にナイフを持った漫画キャラが弥彦を突き刺そうとした

前に出て来た瞬間、弥彦はその軌道を読んでナイフを左手で制しつつその刃を破壊する。

「神谷活心流奥義の極(きわみ)・『刃断(はだち)』！」

「な！」

驚愕のあまり言葉すら失う漫画キャラはそのまま弥彦のパンチを食らい、運河へと投げ飛ばされる。

「ぐっほ！」

そして、力尽きようとしていた漫画キャラの一体が弥彦の足首を掴んで抵抗の意思を見せてきたが、弥彦はそんな漫画キャラにとどめの一撃を食わる。

と、弥彦とピカチュウが漫画キャラを撃退していた丁度その時だ。

唐突に頭上からミサイルが飛んで来るかと思えば、クルーザーの進行方向にあった橋へと衝突、橋は破壊されその場には炎が上がる。

「何！？」

弥彦やピカチュウたちはこの意外な敵の行動に一瞬目を疑い、近くを通りかかったユーノと銀時も目を丸くして驚いた。

「ななな何てド派手な・・・！」

進路を封鎖され、クルーザーを止めざるを得なくなった弥彦達。

そんな弥彦達に向かってヘリの操縦士がスピーカーで声をかけてきた。

『明神弥彦に告ぐ。明神弥彦に告ぐ！』

弥彦とピカチュウは直ぐにニャースの元へと走っていき、クルーザーに備え付けられていたマイクを取ってヘリの操縦士に応答する。

『おい！お前！自分が今何をしたかわかってるのか！？お前はこの世界における重要な文化遺産、そのグラウ橋を壊したんだぞ！！つまりだ、こいつは次元世界に住む人間に対する重大な犯罪だ！！』

『ウルセー！黙って聞け弥彦！！俺達はな、世界的何たらをあと十や二十、やれる程のミサイルを持ってるんだよ！！吹っ飛ばされたくなかったらな、プリズムシードを渡せ！黙って大人しくだ！！！』

操縦士は威圧的な態度でそう言いながらヘリの中から数十発のミサイルを取出し、弥彦達もこれを見ると思わず顔を引きつり止むを得ず敵の指示を聞き入れるしかなくなった。

「ち。こいつらも結局カトゥーンの差し金かよ・・・」

そんなことを口にし、舌打ちをする弥彦や不安げな表情を浮かべるピカチュウたちの元に操縦士の部下たち数名が乗り込んできた。

部下たちは三人に銃を突き付けながら包囲すると、徐に弥彦の懐から奪ったプリズムシードを押収し、その上こんな事を言って来た。

『それとな、ポケモンを一匹人質にとる！俺は可愛いのに目がないんでな。』

『え、はい。』

部下はそう言いながら左右のピカチュウとニャースを見渡し、困惑した様子でどちらを取るのかを尋ねる。

『あの、どっちのほうで？』

『馬鹿野郎！！！決まってるだろ！！！世界的に有名な方だ！！』

『了解！』

部下はその言葉を聞くと、真っ先にピカチュウの手を取って強引に外へと連れ出した。

「お前だ、来い！」

ピカチュウが連れ去られていく光景を見ながら、ニャースの嫉妬の炎は爆発しおモズ声を上げてこの場にいるものすべてを驚かせた。

「・・・く！！！！失礼だにゃあああ！！！！」

連行されたピカチュウは電気を通さないロープにきつく縛り上げられると、プリズムシード諸共カトゥーンの送り込んできたこのヘリ操縦士、ゲーリングに奪い取られてしまう。

ピカチュウは悲痛な声を上げながら抵抗することが出来ないように部下たちに押さえつけられている弥彦を見つめる。

「ピカ～～～！！」

「待ってくれ！！ピカチュウを何処に連れてくつもりだ！？くそ、コノヤロウ！！！」

弥彦の必死の抵抗もむなしく、ピカチュウはヘリに連れられ遥か彼方へと消えていく。

「ピカチュウ！！！」

その後、弥彦はゲーリングの部下からの仕置きを受けて力尽きて倒れてしまった。

「ぐっふ！！がっは！！」

ピカチュウはラッセルの上空から街の様子を窺い、不安げな表情を浮かべていた。

そんなピカチュウの様子を真下から覗きながらユーノはバイクを走らせ銀時と将棋盤なしの将棋を行っていた。

「二・三歩なり」

「七・七飛車打つ。」

「四・八角」

「五・金」

「五・飛車」

「五・二金」

「へへ・・・三・三銀ならず」

ユーノは不敵な笑みを浮かべてそう言うと、エンジン質力を更に上昇させて目の前に鉄橋目掛けて走っていく。

鉄橋はちょうど船が通り時刻であったことから、橋は急激に角度を上げて一般の車が通行できないようしたが、そこに敢えてユーノは突っ込んでいき銀時はそれを見ながら自分の駒を宣言する。

「六・一金！」

「二・二角」

「七・三飛車なり」

「五・桂！」

ユーノがそう言うと、完全に銀時は手詰まり状態となってしまう。

「・・・は。参ったぜ。」

「それじゃ、振り切りますよ・・・！」

ユーノはそう言うと、エンジンスロットルを全開にして橋の上へと昇って行き助走をつけるとヘリに届くか否かの距離まで飛び上がって、背中の銀時にすべてを任せた。

「「大手・・・金取り！！！」」

銀時はバイクから飛び上がると更に助走をつけて目の前を飛んでいるヘリに連行されるピカチュウに向かって行った。

「たあああああ！！！！」

銀時はギリギリのところでピカチュウの元へと飛び移ることに成功、突然の銀時の登場にピカチュウは大いに驚く。

「ピカ！」

「は。すんだな。」

銀時はそう言うと、ロープを伝って奪われたプリズムシードを奪い返すためにヘリへの侵入を試みる。

銀時の気配に気づいたゲーリングは自動操縦に切り替えると、椅子を後ろに引いて手袋を嵌めてから銀時の元へと歩いて行った。

そして、銀時がヘリの中に入り込もうと顔を覗かせた瞬間、ゲーリングは強烈な鉄拳を銀時の顔面に叩きつける。

「ぐっほ！」

ゲーリングはそのまま銀時を引きづりあげると、力圧しに銀時を壁に叩きつける。

「かっは！」

そこからは殴る・蹴る・叩くなどやりたい放題の連続。

「うげえ！ぼええ！」

鼻血を出し、満身創痍の状態の銀時はふらふらになりながらゲーリングに近づき胸ぐらをつかみながらこう言った。

「く・・・てめぇ・・・！プリズムシードを渡せ！！」

すると、そんな銀時の言葉を聞いたゲーリングは容赦ない鉄拳を食らわせる。

「ぶっふ！！」

銀時は更にダメージを蓄積させると、再びゲーリングに一方的に叩きのめされる。

「あっは！あっひゃ！うっげ！」

そして、とうとう力尽きた銀時はゲーリングに胸ぐらをつかまれながらそのまま外へと放り出されてしまうのであった。

「へへ。」

「ピッカ！」

銀時が外へと放り出される光景を目撃したピカチュウはこのままでは本当に死んでしまうと思い、咄嗟にアイアンテールで強度を強くして落ちてくる銀時の体を押さえつける。

ピカチュウがどうにか銀時の体を押さえつけることに成功すると、

銀時はピカチュウのしっぽに掴まりながら片方の手で丸めたティッシュを鼻の中に放り込む。

「く～～あの野郎・・・！」

「ピカピ・・・」

「これじゃあ手の打ちようがねぇ・・・一旦逃げて作戦を立て直すか。そんな訳で・・・」

「！？」

銀時はそう言うと、ピカチュウを繋いでいたロープを所持していたナイフで斬り落とし、ピカチュウを連れてその場から豪快に飛び降りていった。

「あああああああ！！！！！」

「ピカアアアアア！！！」

二人が飛び降りていく光景を目撃していたゲーリングは引き返そうとしたが、当初の任務目的の品物をカトゥーンに届けることを優先させ、二人を追わなかった。

二人は運よく運河の水の中に飛び降り、救援を待っているとちょうどその時バイクに乗って現場に駆けつけてきたユーノと別のモーターボートに乗ってきたヴィータ達六人と合流する。

「銀さん！」

「「「「「「銀さん（ちゃん）（銀時）」」」」」」

「ぷっは！おお、ここだおめぇら。」

銀時は駆けつけてきた仲間にそう言うと、一緒に連れてきたピカチュウと一緒に保護されるのであった。

一方、奪ったプリズムシードを届けるためにヘリで移動中だったゲーリングは通信で銀時の事を聞いていた。

「坂田銀時？そうですか。その男が翡翠の魔導死神と結託してると・・・・・え？さっきの男が坂田銀時？そうですか・・・なら、序にマテリアルの方も必ず。」

ゲーリングはそう言うと、通信を切ってヘリを飛ばしていったのであった。

このゲーリングの登場、そして弥彦達の介入が一体今後どのような展開を繰り広げていくことになるのであろうか？！

知恵と勇気と意地は使い様（後書き）

教えて、ユーノ先生！

ユ「今日は山崎さんについてだよ♪」

ユ「真選組密偵で観察の仕事を担当する彼は一言で言えば地味キャラだ。特徴はバドミントンとカバディと最近だとアンパンかな？」

新「そう言えば、この間送られてきた年賀状の後ろ・・・あんぱんって言葉で埋め尽くされてたんですねよ・・・」

銀「ある意味恐怖そのものだったぜ。つうか、何で張り込みのスタイルがあんぱんと牛乳なんだよ。今どきはやらないだろうが。」

近「ザキもザキで色々と苦労してるんだ。そう責めんでやってくれ。」

土「だが、今後また俺の顔面に向けてアンパンを投げつけてくるようなことがあったら、そん時は・・・・・迷わず斬り殺してやるぜ・・・！！」

途轍もない形相を浮かべて刀身を見せる土方に、ユーノ達は冷や汗をかいた。

ユ「あ、あの・・・土方さんもほどほどにしてくださいね・・・」

山「つうか！！！何で俺の話してんのに出番これだけなんだよ！！！俺どんだけ地味なんだよ！！！」

魔導師図鑑ハイパー！

銀時とユーノはふとこんな会話で盛り上がっていた。

銀「そう言えばよ、俺達って結構色んなアニメとかで声優被ってねぇか？」

ユ「ああ・・・言われてみればそうですよね。銀さんはクロノとキバットと被ってるし、神楽ちゃんはアリサ。なのははそっちで言う花野アナウンサーだし、キャロは寺門通でしょ・・・」

新「他にも、ルキアさんは九兵衛さんと被ってますし、夜一さんは僕の姉上とですよ。」

銀「浦原喜助は辰馬じゃなかったか？て言うかよ、こんだけ被ってる連中がいる中、新八やユーノ、それに一護はそれ以外やったことねぇんじゃねぇか？」

新「う・・・本人たちでも気にしていたことを・・・」

ユ「さらっと言わないで下さいよ・・・」

一「どうせ俺達は銀さんとは違ってこう言う役しかできねぇからよ・・・」

三人は激しく落ち込み、膝を抱えて負のオーラを発した。

なのは達はそんな三人を見ながら同慰めの言葉をかけていいかわからなかった。

次回予告

プリズムシードを奪還すべく、作戦を練り直すユーノ達。

その時、再びゲーリングがヘリに乗って現れる。

銀時はユーノと共にヘリに乗り込みプリズムシードを奪い返せるのか？

そして、一緒に居たピカチュウを助けるために明神弥彦が現れた！

吉「次回『力は無暗やたらに誇示するものに非ず』」

力は無暗やたらに誇示するものに非ず

＞ｉ２４９４６―７０９＜

ユーノ・スクライア外伝

前回のあらすじ。

聖王教会より依頼を受け、ロスト・ロギア「プリズムシード」の回収に向かったユーノをリーダーとする捜索班、銀時・新八・神楽・吉良・ヴィータ・ティアナ・ギンガの八人。

ミルネバ城内部で発見したプリズムシードは電気ネズミ、ポケットモンスターのピカチュウに奪われ、ユーノ達はそれを取り戻さんと激しい争奪戦を繰り広げる。

その最中、同じくプリズムシードを狙ってカトゥーンの差し金、ゲーリングが乱入。

プルズムシードを奪われてしまうのであった。

肝心のプリズムシードを奪われ、幸先の良くないユーノ達だったが、同じくプリズムシードを狙って銀時達と争いを繰り広げた謎の電気ネズミこと、ピカチュウの捕縛に成功。

銀時は不貞腐れ、まるで心を開こうとしないピカチュウの態度に苛立ちを覚えながら、用意された車の部屋の一室で質問を続ける。

「でよ電気ネズミ！てめぇ一体何の目的で俺達の邪魔しやがった！？何でロスト・ロギアなんかが欲しいんだ！？」

「ピカ～～～」

相も変わらず不貞腐れたままピカとしか答えようとしないピカチュウに、銀時の怒りのボルテージが最高潮に達した。

「だ・か・ら・・・！！さっきからピカピカしか言ってねぇだろうが！！ああ！！舐めてんのか！！銀さんもな、これ以上は流石に限界だもんね！！あんましピカピカ連呼すっとな、ツルピカハゲ丸くんにでもすっぞ！！」

「ピカ・・・」

すると、その瞬間ピカチュウは電気袋に体内電気を溜めると、銀時の全身に１０万ボルトを流し込み、銀時は某ポケモンの敵キャラの如く悲鳴を上げた。

「あああああ！！！！！！！！！」

まる焦げとなった銀時は黒い煙を口から出して、その場に倒れこんだ。

「ぐっは！」

そんな銀時の様子を窺いながら、新八や神楽は徐にこう言った。

「銀さん駄目ですよ。そんな頭ごなしに尋問しちゃ。」

「そうネ。こんな幼気なポケモンいじめて、いい歳した大人が恥ずかしいアル、最低ネ！」

神楽はそう言うと、銀時とは打って変わってまるで定春を可愛がる時と同じように優しくピカチュウを抱き上げ、頭を撫ではじめた。

ピカチュウは少しは神楽に安心したのか、別段暴れる様子も見せずに大人しくなった。

しかし、問題は解決しておらずユーノや他の面々は頭を抱えた。

「とは言ったものの、人間の言葉を話さない以上どうすることも出

来ないしな。」

「一先ず六課にでも預けるか？」

ヴィータがそう言ったとき、黒焦げだった銀時は勢いよく起き上がると怒り心頭な様子でこう言って来た。

「いや！その必要はねぇよ。何が何でもこの電気ネズミの口割って、二度とその口でピカピカなんて言えなくしてやるぜ！！」

妙な執着心と意地を見せる銀時。

そんな銀時を見て、この場にいたユーノ以下捜索班全員が深いため息をついた。

「「「「「「「「「「はぁ～～～」」」」」」」」」」

その日の夜、ユーノは奪われたプリズムシードの反応がこの世界で確認されたことを突き止めると、自分が造り上げた新幹線型ハイパーマシーン、トワイライトに全員を搭乗させて線路を走っていた。

トワイライト内部では、ユーノを始め全員が集まり話し合いをしていた。

「それでよ～～～何で私らはお前の造った電車に乗って移動してるんだ？」

怪訝そうな様子でヴィータがそう口にすると、ユーノは徐にディスプレイを表示させながら説明を始めた。

「決まってるよ。奪われたプルズムシードを追うんだ。あの時、ヘリに超小型の発信機を仕掛けてきた。ヘリは幸いにもまだこの世界に留まっている。何としてもここで物を取り戻さないといけない。」

いついかなる時も、責任逃れなどと言う卑怯な真似をしないユーノに思わず感動する一同だが、それと同時に頑張りすぎる面も内包するところに若干不安を抱いていた。

「相変わらず責任感の強い奴だ。だから体壊すんだぞ。」

「あはは・・・あんまり頑張りすぎるのもよくないですから、ほどほどにしましょうねユーノ先生。」

すると、ティアナがそう口にした途端、銀時が青ざめた表情を浮かべ、腹の虫を鳴らしながらこう呟く。

「俺はその前に腹ペコで体壊しそうなんだけどよ～～～」

「じゃあ、夕食にしましょうか♪ちょっと待ってください何か食べるもの適当に作りますので。」

ユーノは空腹で可笑しくなっている銀時や全員の為に、厨房に移動すると適当に見繕った材料を使って手早く調理を済ませ、銀時たちの前に料理を運んできた。

「はいはい♪お待ちどうさま。」

一同はテーブルの上に並べられたユーノ・スクライア作の料理に目を向けると、思わず呆気にとられた様子で口を開けた。

ちなみに、ユーノが作ったのは地球で言うところのフランス料理に近いものだった。

新八やギンガは感動のあまりこう呟いた。

「おおお！！なんっすかこれ！！もの凄く美味しそうじゃないですか！？」

「ホントですね・・・！これは何て料理なんですか？」

「地球のフランス料理によく似たミッド北部の伝統野菜とトゥール産の霜降り肉を僕なりに味付けしたドレッシングで和えたサラダとビーフシチューやその他いろいろかな♪まぁ兎に角、味を見て欲しいな。」

「そんじゃ、頂ますと。」

銀時を始め全員が食器に手を付けると、早速と言わんばかりにテーブルに並べられた料理を口に運び、その味を確かめる。

「うめぇ・・・！」

ヴィータは思わずそう口にし、それに続いて神楽もユーノの料理を高く評価する。

「うひょおお！！！これ馬鹿美味ネ！ユーノお前何でも出来るアルな！！」

「あはは♪いや、大したことないけどね・・・」

「そんな顔で謙遜するなよ。逆に私やはやてがムカつくぜ。」

もしここにはやてがいた時の気持ちを考えたヴィータがそう言うと、ユーノは苦笑する。

「あはは・・・はいはい。ささ、どんどん食べて。お代わりもあるから。」

「よっしゃ！久しぶりに食うぞ！！」

銀時はそう言うと、相当空腹だったのか目の前の料理と言う料理を手当たり次第に取っては腹の中へと豪快に流し込んでいき、神楽もそれに刺激を受けた。

「銀ちゃんには負けてられないネ！私もガツガツ食べるネ！！」

そんな二人の食事を見て呆気にとられるギンガ達と、ツッコミ役の新八。

「ちょっと、二人とも。少しは遠慮ってものもしないと・・・・・・あれ？」

と、新八が二人を注意しようとしたときだった。

新八は後ろの方でユーノが出した食事にまるで手を付けずに、未だ不貞腐れた様子で静かにしているピカチュウを見て、隣に座るギンガに耳打ちをした。

「ギンガさん。ピカチュウが全く食事に手を付けてませんけど。」

「ですね。相当な意地っ張りって感じですけど・・・」

二人の話を聞くと、ティアナと吉良も反応する。

「一応あれも動物には代わりありませんから、ちゃんと食べさせた方がいいですかね？」

「仕方ない。僕が行って食べさせてくるよ。」

吉良はそう言うと、自分の食事を中断してピカチュウに近づくと、何処から取り出したのかは知らないがカップ麺を取出し何処か嬉しそうな表情で蓋を開けながらピカチュウにこう言った。

「ほら。君も食べなよ♪これね、結構いけるんだよ。」

吉良の予期せぬ行動を目の当たりにした瞬間、ユーノは思わずツッコんだ。

「あの・・・吉良さん・・・どうしてそこでカップ麺なんですか？てかどっから取り出したんですか！？」

「ピカ・・・・・・」

「何ていうか赤ラベルと青ラベルと言うものがあってね、それはそれで好みが分かれるんだけど、僕はどちらかと言えば赤ラベル党なんだな♪」

ピカチュウは吉良がカップ麺にお湯を注いで目の前に置いても尚、不貞腐れた態度を続けるが、吉良は正直言うとそんなことはほとんどきにしておらず、自分が楽しんでいた。

「はい、どうぞ。」

「ピカ。」

吉良はそっぽを向くピカチュウを一瞥すると、かなり上機嫌な様子で斬魄刀を蓋押さえにしてその場に座り込んだ。

「よいね♪焦らず三分待つんだよ。ここが、美味しいかどうかの勝負なんだ。」

ユーノはこれほどまでに異様で、尚且つ嬉々とした様子の吉良を見たことがなかったため、思わず顔を引きつり、そして同時に隣のティアナに尋ねた。

「ティアナ。吉良さんどうしちゃったの一体?」

「よく分からないんですが、カップ麺に拘ってるようなんです・・・」

銀時はそんな吉良を見ながらふとこう呟いた。

「地味な癖して変なこだわりはあるんだなあいつ・・・」

と、その時だった。

ピカチュウは突然何かに取りつかれたかのように様子を一変させた。

「ピカ!」

ピカチュウは突然声を上げたかと思えば全員の目の前から走り出す。

「「「「「「「「「ああああ！！！」」」」」」」」」

驚き返るユーノ達。

吉良が捕まえようと手を伸ばした瞬間、ピカチュウは自分の尾を振って吉良の顔面を叩きつけ、床に叩きつけた。

「ピッカ！！」

「ぐっふ！！」

そして、ピカチュウはそのまま窓を開けると走行中の列車の外へと飛び出そうとした。

「てめぇ！この待て電気ネズミ！！！」

銀時は逃走を図るピカチュウの体をしっかりと捕まえる。

しかし、直後ピカチュウの１０万ボルトが銀時を襲う。

「ピカチュウ！！」

「ぎゃあああああ！！！！！」

またしても返り討ちを食らった銀時。

ピカチュウは身軽な動きで窓の外に出ると、トワイライトの屋根に飛び移り進行方向とは逆の方へと走り出した。

銀時は起き上がると直ぐにピカチュウを追いかけようと窓の外に乗り出した。

「くそ逃がさねぇぞ！！」

銀時の行動を見ていたユーノ達は銀時の行動を止めようとする。

「銀さん！危ないですから降りて来てくださいよ！」

しかし、銀時はそんな言葉を無視して屋根の上に降り立ち逃げるピカチュウを追いかけた。

「待てピカチュウ！！」

と、ピカチュウを追いかけていた銀時だったが、直後ピカチュウと銀時の頭上から風を切るような物音が聞こえてきた。

「ピカ！」

「あ！？」

勿論、車内にいたユーノ達の耳にもこの物音はしっかりと聞こえてきた。

「何・・・この音・・・！？」

「近いですね・・・」

と、怪訝そうな顔をするティアナ達の横で、ユーノのセンサーが激

しく反応し思わずはっとした表情となるユーノ。

「この反応・・・まさか・・・！！」

すると、その時新八は頭上の方に見えてきた巨大な物体に目を奪われ、思わずその物体を見ながら指を差した。

「あ！あれを！！」

銀時やピカチュウ、ユーノ達がその巨大な物体を目にした時、巨大な物体・・・ゲーリングが操縦するヘリコプターが急接近をしてきた。

「間違いない！あの時のヘリだ！！」

「こっちに来たぞオイ！」

「ピカ！ピカピ！！」

ピカチュウを危機感を感じると、一度逃げるのを止め進行方向と同じ方角へ向かって走り出し、銀時の前を通り過ぎる。

「って、オイ！」

すると、その瞬間ゲーリングはヘリに備え付けられたマシンガンを乱射し、銀時を襲ってきた。

「のあああああああ！！！」

いきなりのゲーリングの行動に恐怖を抱く銀時はゲーリングに弄ば

れるかのように前方方向へと逃げていく。

ゲーリングはそんな銀時の姿を見ながら不敵な笑みを浮かべる。

「へへへへへへ」

ヘリが銀時の元から離れると、銀時は急いで車内へと飛び移ってきた。

「とらあ！」

「銀ちゃん！」

「てめぇら、伏せろ！！」

銀時がそう言うと、ユーノ達は体制を低くしてゲーリングが乱射するマシンガンの攻撃が身を守ろうとした。

「「「「「わあああああああああ！！！！！」」」」」

「「「「ぬうううう！！！！！！！」」」」

理不尽にも自分たちに牙を向けてきたゲーリングの攻撃に頭を抱える中、吉良は逃げて行ったピカチュウの安否を気遣う。

「ピカチュウは！？」

すると、その時ピカチュウもゲーリングの攻撃を恐れて車内へと逃げ込んできた。

「ピッカ！」

ピカチュウは思わず神楽とティアナの傍に近寄って身を低くする。

「怖くなって逃げて来たネ！」

「もう大丈夫よ。ユーノ先生、どうしますか？」

「奴を引きつけるのは僕がやる。ちょうどプリズムシードを取り返すうってつけの機会だしね。」

「そうかい。なら、俺も行くぜ。」

ユーノがそう言うと、銀時は徐に立ち上がって立候補してきたのだ。

銀時の発言を聞き、耳を疑うユーノ。

「銀さん！？」

「野郎には借りがある。そいつを返しに行くだけよ。新八、神楽！てめぇはここで待ってろ！絶対に動くんじゃねぇぞ。」

「銀さん。だけど！」

「そうアルよ！銀ちゃんいくら何でも危険アルよ！」

「二人の言う通りだ。無茶すんじゃねぇよ！」

新八や神楽、ヴィータも銀時の無茶な行動に厳しい指摘をするが、当の銀時はそんなことは承知の上でこう言って来た。

「無茶も抹茶も承知の上だ。なに安心しろ。そうならないように、ここには翡翠の魔導死神淫獣フェレット君がいるんだろう？」

「“ユーノ・スクライア”ですよ・・・銀さん！！」

態と名前を間違える銀時の発言に殺気を漂わせるユーノ。

そして、この時クロノの気持ちが少しだけわかった気がしたのであった。

そんな事を口にしている間にも、ゲーリングがお構いなくマシンガンを乱射し、トワイライトを攻撃し続ける。

銀時達は攻撃を回避しながら出る機会を伺っていた。

「く！！なりふり構わず撃ちやがって・・・行くぜ、ユーノ！」

「了解！」

ユーノはそう言うと、銀時と一緒に列車の屋根に飛び乗りゲーリングのヘリ目掛けて走り出した。

全員は走り去るユーノの姿を見ながら思わず声を上げた。

「「ユーノ先生！」」

「「ユーノ！」」

「「ユーノさん！」」

二人は全速力でトワイライトの屋根の上を駆け抜けていき、ヘリの真下に入り込むとユーノはチェーンバインドを発動させる。

「チェーンバインド！」

チェーンバインドは上手いことヘリの脚部に引っかかり、ユーノはそれをしっかりと固定すると足を浮かせ、銀時の手を取った。

「掴まって、銀さん！」

「おう！」

銀時はユーノの手を取ると、猛烈な勢いで空中を移動するヘリに向かって登り始める。

二人がヘリの急接近してくると、ヘリのセンサーにも反応が現れゲーリングが思わず表情を一変させる。

「ん！？」

『ＣＡＵＴＩＯＮ：ＩＮＴＲＵＤＥＲＳ（侵入者あり。注意せよ。侵入者あり。注意せよ。）』

オートパイロットに切り替え、席を離れたゲーリングは床の脱出口から侵入を果たしてきた不敵な笑みを浮かべる銀時と隣に立つユーノの姿を確認する。

「また貴様か。坂田銀時。それと隣にいるのは翡翠の魔導死神・・・ユーノ・スクライアか。」

すると、銀時は同じ不敵な笑みを浮かべるゲーリングを見ながら徐に右の懐を叩きこう言った。

「悪いけんど、プリズムシードは頂いたぜ。」

「何!?」

銀時の言葉を聞き、思わず焦りを見せをゲーリングは直ぐにヘリに仕舞い込んでいたプリズムシードを取り出し、それがはったりだっと言うことを確認しその証拠であるプリズムシードを掲げた。

「あはははは!!!ウソつけ!プリズムシードはちゃんとここにある!」

すると、その瞬間ユーノが見えないほどに細長いピアノ線を伸ばしてゲーリングが手に持つプリズムシードを奪い取り、飄々とした様子でこう言った。

「ねぇ。ちゃんといただいたでしょ♪」

「き、貴様!!!」

ユーノの行為に怒り狂ったゲーリングはユーノと銀時目掛けて殴り掛かってきた。

二人はゲーリングのパンチを躱すと、二人で動きを翻弄させつつこう言った。

「一度食らったパンチは二度とは食らわない。それがプロフェッシ

ョナル！」

「ですよね♪」

その瞬間、ユーノは必殺のアッパーをゲーリングに向けて放った。

「のあああああ！！！！」

思わず下顎を押さえ悶絶するゲーリング。

そして、銀時は更にそこから中指と人差し指を突き立て攻撃を行う。

「おんどらあああ！！必殺！！！鼻フック！！」

「ぐっふ！！！」

銀時の鼻フックがものの見事にクリーンヒットし、ゲーリングは下顎と一緒に自分の鼻のを押さえ、その隙に銀時とユーノが大柄なゲーリングの背中に飛び乗り殴打を始める。

「「コノコノコノコノコノ！！！！！」」

と、やりたい放題の二人だったがゲーリングは二人を振り払うと、床に落ちた銀時の尻を思い切り蹴り飛ばした。

「ヤメンカ！！」

「あああ！！！」

蹴り飛ばされた銀時は操縦席の方で激しく叩きつけれる。

すると、その弾みでオートパイロットが解除され手動操縦に切り替えられ、それを見ていたユーノとゲーリングは思わず呆気にとられた。

「「あ」」

そして、ヘリは操縦不能になると垂直方向で地上目掛けて落下していった。

「「「あああああああああ！！！！！！！！」」」

悲鳴を上げる三人。

銀時は入ってきた脱出口を開くとユーノと一緒にそそくさと外へ飛び出して行った。

「それじゃあ、お先に！」

「銀さん置いてかないで！」

二人が脱出した後、ゲーリングも二人を追いかけようとしたが、その途端運悪く脱出口の扉が勢いよくしまったことで、ゲーリングは頭を強打し気絶する。

「ぐっほ！！」

ヘリはそのまま森の中へと墜落、爆発し炎上すると中から締め出されたゲーリングは背中に火をつけ、燃え上がる炎に絶叫する。

「あちゃあちゃあちゃちゃちゃちゃあちゃちゃ！！！！いやあああああ！！！！！！！！！」

ゲーリングが走りながら偶然にも近くにあった湖を見付けると、一目散に中へと飛び込んでいった。

新八を始め、捜索班一同はトワイライトから降車すると炎上する森に向かって走り出す。

「銀さん！」

「ユーノ！」

不安げな表情を浮かべ、赤々と燃え滾る森の火事を見つめる一同。

と、その時その炎の森の奥から二人の人影が現れ、全員はその光景を見て驚愕の表情を浮かべた。

森の奥から出て来たのは、全身黒すすだらけとなってはいるが、目立った外傷もなく目的のロスト・ロギア、プリズムシードを手に取ったユーノと銀時だった。

新八たちはこの二人の姿をしっかり目で捉えると、急いで二人の元まで駆け寄った。

「銀さん！！ユーノさん！！」

「お前ら、無事だったんだな！」

全員が駆け寄ってくると、二人は顔を見合わせほくそ笑んでからこ

う言った。

「マジで死ぬかと思ったぜ。一瞬生まれてからの記憶が走馬灯のように駆け巡ったぜ。」

「いや全く♪死ぬ思いは確かにしましたけど、どうにかプリズムシードは取り返すことが出来たさ。」

「そうか・・・・・ホントに、無茶しやがってお前は・・・グラーフアイゼンでぶっ叩くぞ。」

言葉はきついが、内心安どしているヴィータ。

彼女にとっても、ユーノと言う存在は自分の隊の上司でもあり戦友でもあるなのはにとって、かけがえのない人物であることに代わりはなく、同時に自分たちもまたそんな彼をかけがえのない人物と認識しているのだ。

そんなユーノを見るヴィータ達の顔を一瞥し、銀時はユーノにこう言った。

「ユーノ。物は取り返したんだ。そろそろ帰ろうぜ。」

「あ、そうですね。じゃあ、みんな先にトワイライトに戻っていてよ。僕は、ちゃちゃっとこれの封印をしてから戻るから・・・」

と、ユーノがそう口にした直後だった。

「ピカチュウ!!」

「！」

突然、ピカチュウが飛び出してきたかと思いきやユーノが手に持っていたプリズムシードを強奪して逃げて行ったのだ。

「な！」

「「「え！？」」」

「「「何だって！？」」」

「の野郎！！！」

ピカチュウは身軽な動きでプリズムシードを尻尾に乗せて走り回り、銀時はそんな逃げて行ったピカチュウを追っていく。

木刀片手にピカチュウの後ろを追跡していく銀時。

「てあああああ！！！」

銀時はピカチュウの尻尾を掴もうと飛び込んで手を伸ばした瞬間、ピカチュウはそんな銀時の行動をあざ笑うかのように高速移動で回避する。

「ピッカ！」

「ぐっほ！」

地面に叩きつけられる銀時を余所に、ピカチュウは更に高速移動で森の奥へと逃げてゆく。

「高速移動だ！」

「逃がすかよ！」

バリアジャケットを着たヴィータ達とユーノは悶絶する銀時と連れてピカチュウの痕跡をたどっていった。

暫くすると、ピカチュウは森の奥で通せん坊を食らってしまい、やがて追いついてきたユーノ達に完全に包囲されてしまう。

「さぁ、悪いことは言わないから。それを返すんだ。」

「ピカ！」

吉良がそう言うと、ピカチュウは電気袋に電気を溜め、帯電させながら必死にプリズムシードを守ろうとする意志を見せた。

吉良はそれを見ると、一度ため息をついてから強硬手段を行うことにした。

「そうか・・・ならば力づくでいくしかないな。縛道の・・・」

と、吉良が縛道でピカチュウごとプリズムシードを捕獲しようとした直後、森の奥から物陰が飛び出し吉良の顔面に向けて詰めによる攻撃を仕掛けた。

「みだれひっかき！！」

「ぎゃあああ！！」

吉良は突然の事に頭がついていかず、引き裂かれた顔面を手で押さえながらその場に倒れこんだ。

「吉良さん！」

「あの猫は！？」

ピカチュウは自分の側にやってきたニャースの姿を見ると、驚きと喜びの感情を同時に内包した表情で声を発した。

「ピカピ！」

「こんなところで何をしてるんだニャー。ニャー達がどれだけ心配したと思って探してた思ってるんだニャー。」

「ピカピ・・・」

ちょっと申し訳なさそうな顔でニャースの言葉に反応するピカチュウだが、銀時や新八たちは何より目の前で人間の言葉を話す猫の存在に大いに驚いていた。

「おい・・・言葉を話す猫だぜ・・・！」

「あれって・・・確かニャースですよ・・・ロケット団の・・・」

「おいおい・・・ピカチュウが出て来たと思えばニャースも一緒かよ！？」

「何呆気にとられてるんですか。直ぐに取り返さないと・・・・・・

ん！」

と、ユーノが気を引き締めてプリズムシードを取り返そうと動き始めた瞬間、木々を飛び越え自分に向けて刀を下ろしてきた剣士の姿に目を疑った。

「はあああああああ！！！！」

「何！」

その剣士、明神弥彦は逆刃刀を両手でしっかり持ちながら、ユーノに向けて渾身の一撃であるその技を発動する。

「飛天御剣流『龍槌閃（りゅうついせん）』！」

咄嗟にユーノは晩翠を取出し、それを受け止めるがその威力はユーノが驚嘆するほどに強く、そして重い一撃であった。

「く！」

ユーノは唖然とする銀時達の元まで下がって弥彦と距離を取ると、只ならぬ雰囲気を醸し出す弥彦の姿を凝視する。

一方の弥彦は鋭い目線を向けたまま、ピカチュウとニャースの元まで近づき、ピカチュウは駆けつけてきた弥彦を見ると嬉々とした顔になる。

「ピカ！」

「いい感じで登場したニャーするな。」

「すまねぇ。遅くなっちまった。大丈夫か、ピカチュウ？」

「ピッカ！」

ピカチュウは満面の笑みでそう答えるが、ニャースは何処か不満げな様子だった。

「ニャースの心配はしないでニャーすな・・・」

「心配してるよ。それより、ピカチュウ。プルズムシードは？」

「ピッカ！」

ピカチュウはそう言うと、尻尾に乗せていたプリズムシードを弥彦に見せ、弥彦はそれを確認すると徐に懐に収めてピカチュウの頭を撫でた。

「よし。よくやった。」

「ピ！ピッカ！」

満足げな様子のピカチュウと舌打ちをするニャース。

ニャースは状況を察すると、直ぐに二人にこう言った。

「弥彦もピカチュウも再会の喜びはそれぐらいにして、ここはさっさと逃げた方がよさそうだニャー。」

「ああ。そうだな・・・逃げるぞ。」

弥彦はそう言うと、ピカチュウを肩に乗せてニャースと共にユーノ達の前から走り出す。

だが、そんな三人を逃がさないとオプティックハイドで姿を見えなくしていたティアナとヴィータ、ギンガが唐突に目の前に現れた。

「待ちなさい、あなた達！」

「「「！」」」

「それは危険なものなんだぞ。素人が手を出していいものじゃねぇんだよ。」

「無駄な抵抗は止めて、それをこちらに渡して。」

毅然とした態度でプリズムシードの受け渡しを求めるヴィータ達。

ニャースは思わず弥彦に言葉を投げかけた。

「どうするニャーか？」

「・・・こっちだって渡すつもりは毛頭ないさ。女子供相手に暴力を振るうのは好きじゃねぇが・・・この際やむを得ねぇな。」

弥彦は苦渋の決断を下すと、鞘から逆刃刀を抜刀。

鋭い目線を向けてティアナ達に向かって走り出す。

「来るぞ！」

「「はい！」」

ヴィータはグラーフアイゼンを手に取ってティアナとギンガに気を引き締めるようにと声を発し、二人もいつでも迎撃が出来るように武器を構える。

だが、その瞬間弥彦は瞬歩に負けず劣らずの神速を発揮させ、姿を捕え損ねる三人に向かって逆刃の刃を突き立てる。

「飛天御剣流・・・『龍巻閃（りゅうかんせん）』！」

「「「！」」」

回転による遠心力を利用したこの技を体に受けた瞬間、三人は急所を突かれて空中へと舞い上がり、理解することもままならずそのまま地面に叩きつけられ意識を失う。

「「「なっは！！！」」」

傍で見ていた新八と神楽はこの一瞬の出来事に驚きながら、倒れる三人の名前を口にする。

「ギンガさん！」

「ヴィータ！ティアナ！」

銀時と吉良は武器を手に取ると、三人を一瞬で一網打尽にした弥彦目掛けて怒り心頭な様子で走り出した。

「てめぇ！！何しやがるんだ！！」

「ほあああああ！！」

すると、その時二人の目の前にピカチュウが現れる。

「「な！」」

驚く二人を余所に、ピカチュウは体内電気エネルギーを電気袋に凝縮すると、一気にそれを解放し１０万ボルトを食らわせる。

「ピカチュウ！！」

「「あああああああああああああ！！！！」」

二人はピカチュウの電撃を体に浴びると、全身を黒焦げにした状態で気を失ってしまった。

「「銀さん（ちゃん）！！吉良（きら）（さん）！！」」

ヴィータ達に続き、銀時と吉良までもが容易くノックダウンしてしまったことに目を疑う新八と神楽。

「くそ・・・よくもみんなを・・・！」

ユーノは歯がゆい気持ちを表情に出しながら瞬歩で弥彦の懐に移動すると、一瞬の動作で弥彦の中に収められていたプリズムシードを奪い返した。

「！」

「ピカ（ニャ）！」

ユーノの速さと行動力に驚く弥彦達。

ユーノは新八たちの元に戻ると、手早く封印処理を済ませてからプリズムシードを新八の手の中に収め、新八は驚愕の顔を浮かべる。

「ユーノさん！」

「新八君！神楽ちゃん！これを持って急いで六課に戻るんだ！銀さん達も直ぐに転送するから！」

「あ、はい！」

「分かったネ！」

二人はユーノの言葉を聞き入れると、受け取ったプリズムシードを落とさないように森の中から走り出し、降車したトワイライトの元へと向かった。

ユーノは二人が走り去った後、治癒魔法と結界魔法の同時に効果を持つラウンドガーダー・エクステンションを気絶した五人に施すと、直ぐに転移魔法を使って彼らをトワイライトの方へと移動させた。

ニャースはあまりに高度な魔法を容易にやってのけるユーノの技量に目を疑うばかりであった。

「にゃ！何て奴だニャース！？」

すると、そんな驚くばかりのニャースとは違い、ピカチュウはユーノに鋭い目線を向けながら攻撃態勢に入った。

「ピッピカピ！！」

ユーノもそんなピカチュウを心苦しい表情で見つめながら晩翠を構える。

と、その時ピカチュウの前に弥彦が現れ手を出すとばかりの態度を取ってきた。

「ピカチュウ。一度落ち着け。」

「ピカピ・・・」

弥彦の判断とは言え、何処か納得のいかないでいるピカチュウ。

弥彦はピカチュウの気持ちを読み取った上で、先ほどからずっと崩すことのない鋭い視線をユーノに向けてこう言って来た。

「・・・深緑色の羽織に甚平服・・・そしてその帽子にクリーム色の髪・・・お前がうわさに聞くところの翡翠の魔導死神ユーノ・スクライアであることに間違いはなさそうだな。」

弥彦の言葉を真摯に聞きながら、ユーノは弥彦とその側で抵抗する意思を見せるピカチュウとニャースに疑問を感じ始めた。

「（こいつ・・・漫画キャラなのか・・・もしそうだとしても、こいつからもピカチュウとニャースからもアンゴルモアの反応は見受けられない・・・一体何なんだ・・・こいつらは・・・？何であの

プリズムシードを狙ってる？）」

三人の目的と心理がまるで読めないユーノ。

師匠である一護のように深く眉間に皺を寄せるユーノだが、そんなユーノに弥彦は低い声で更にこう言って来た。

「あの一瞬で俺からプリズムシードを奪い取るとは、流石はユーノ・スクライアか・・・あの坂田銀時もそれなりに面倒な野郎だが、幸いにもピカチュウとは相性最悪のようだ。」

「！（こいつ・・・銀さんたちの正体を知っている・・・！？それに・・・――――）」

弥彦が銀時達の事を知っているということだけでも充分に驚かされることだが、ユーノがもう一つ驚いたのは弥彦が先ほどから手に持っている刀の方であった。

そう、刃と峰を逆さにした普通の彼方とは明らかに違う逆刃刀であった。

「（こいつの刀・・・刃と峰を逆にしている・・・逆刃の・・・刀が武器だって！？）」

すると、驚きを顕著に表情に出すユーノに向かって弥彦はふとこう言った。

「だが所詮は殺しの剣を使う外道な輩であることに変わりはない。そんな奴が、剣心の・・・俺の“不殺（ころさず）”の剣に勝てるわけがねぇ・・・申し訳ないが、あのプリズムシードは俺達が頂いていくぜ。」

「そうはいかないよ。一応こっちもこっちで立て込んでるんだ・・・・・どうしても欲しいっていうなら、僕を倒してからにしなよ。」

「・・・いいだろう。不殺の剣の力、篤と見せてやる。」

弥彦はそう口にした瞬間、神速を活かしてユーノに近づきユーノは晩翠で弥彦の剣を受け止め、お互いは木の上に飛び移って互いに距離を取る。

そして、両者は愛刀片手に木から木へと飛び移りながら激しい剣戟を繰り広げる。

「はあああああ!!!」

「おらあああああ!!!」

宛ら、一流の魔導師同士の戦をその目で見ているかのようだが、飽く迄も二人はこの場合は剣を手に取った剣客なのである。

そして、ユーノは弥彦と何度か剣を交えるたびに刀から伝わってくるものに違和感を覚え始め、一度地面に降りたユーノは同じく地面に降り立った弥彦と鍔迫り合いの最中にこう質問をぶつけてみた。

「・・・何で・・・何でだよ・・・何でそんな真っ直ぐな魂を持ってるくせして・・・こんなことをするんだ・・・!?」

「多分・・・答えても・・・意味がねぇ・・・」

「く!」

ユーノと弥彦は鍔迫り合いを終えると、再び距離を取って彼方を構える。

真夜中の森で来る広げられる二人の一流の剣客同士の真剣勝負。

辺りはすっかり静まり返る中、ユーノは複雑な気持ちを抱きながら弥彦の瞳の中に映る自分を見ながら心の中でこう思った。

「（きっと、歳は僕と5歳ぐらいしか違わないと思う・・・剣士として一流の腕を持っていて性根は真っ直ぐなはずなのに・・・今のこいつは酷く歪んでいるように思えてしかない・・・背中に刻まれた悪一文字・・・逆刃の剣・・・そしてプリズムシード・・・一体何がこいつを歪ませたりしたんだ?あの眼はまるで・・・――）」

ユーノはそんな事を考えていると、嘗てなのはと自分が発掘したジュエルシードをめぐって対立していた出逢った当初のフェイトの姿を思い出す。

「（なのはと初めて出逢った時のフェイトの眼にそっくりだ・・・・・）」

様々な思考がユーノの頭を駆け巡る中、弥彦は静まり返ったその沈黙を打ち破る可能様に低い声でこう言った。

「・・・・・・・・すまねぇな・・・・・・・」

その瞬間、弥彦は自分の神速を最大限に活かしてユーノの前から姿を消し、思わずユーノは消えた弥彦の気配を追った。

「！」

だが、気配を追おうとした矢先、ユーノの身体、剣術における斬撃の基本である「唐竹（からたけ）、もしくは切落（きりおろし）」「袈裟斬り（けさぎり）」「右薙（みぎなぎ）、もしくは胴（どう）」「右斬上（みぎきりあげ）」「逆風（さかかぜ）」「左斬上（ひだりきりあげ）」「左薙（ひだりなぎ）、もしくは逆胴（ぎゃくどう）」「逆袈裟（さかげさ）」「刺突（つき）」の場所一度に弥彦の剣技が仕掛けられた。

「飛天御剣流『九頭龍閃（くずりゅうせん）』」

ユーノは一瞬の出来事に微動だにすることも出来ず、九つの場所に同時且つ一撃必殺を秘めたその剣技を狂った途端、口から反吐を出してその場に倒れこんだ。

「っがは・・・！！」

弥彦はユーノを昏倒させると、静まり返った森を見回した後徐に鞘に逆刃刀を収め、茂みに隠れて戦いの様子を窺っていたピカチュウとニャースに言葉を発した。

「・・・・・あいつらは？」

弥彦がそう言うと、二匹は残念そうな表情を浮かべてこう言った。

「ピカ～～～」

「残念ながらもう逃げて行ってしまったニャー」

「・・・・・そうか」

その言葉を聞くと、弥彦の心情も二人と同じで何処か寂しげなものとなった。

「行くぞ。」

「ピカ。」

「まだプリズムシードは一つしか手に入ってないニャー。この先管理局が一層警戒して動きを見せるから、探すのは難航するでニャースな。」

ニャースがそう口にするのを聞き入れながら、弥彦は一度立ち止まって後ろを振り返ると、その場で倒れ伏した気絶するユーノに申し訳なさそうな瞳を向ける。

「・・・――――」

そして、弥彦はその後ピカチュウたちを連れて徐に森の外へと向かってユーノの前を立ち去って行った。

弥彦が立ち去ってから暫くして、森の中を走る物音が聞こえてきた。

目を覚ました銀時達がなのはを連れて森の奥へと走っていたのだ。

「ユーノ君。一人で大丈夫かな!?」

「どうせあいつのことだ。無茶やらかしてるかもしれねぇな・・・」

銀時がそう言いながら弥彦達と対峙した場所までなのはを誘導すると、着いた時には当然のことながら弥彦達はおらず、代わりに地面

の上で横になって倒れるユーノを発見し、なのは達はすぐに駆け寄った。

「ユーノ君!!しっかり!ユーノ君!!」

悲痛な表情で気を失うユーノを抱えるなのは。

なのはと一緒に来ていた恋次は拍動を確かめると、命に別状はないことを告げる。

「大丈夫だ。気を失ってるだけのようだ。だが打ち身が酷いな。急いで連れて帰るぞ。」

「はい!」

恋次はユーノを背中に担ぐと、銀時やなのは達を連れて直ぐに機動六課へと向かった。

午後１１時：機動六課ロングアーチ

ユーノは機動六課の医務室で目を覚まし、側で心配そうにこちらを覗くなのはやヴィヴィオ、それに他の仲間たちの顔を窺った。

ここからはユーノの語りとなる。

「（僕が目を覚ましたのは、ちょうどその日の晩の機動六課の医務室だった。新八君たちが、プリズムシードを届けた後、銀さん達がなのはを連れて倒れていた僕の元まで戻って来たらしい。幸い、銀さんもヴィータ達も打ち身や電撃による一時的な痺れで事無くを得たが、僕はまた・・・なのはやヴィヴィオ、それにみんなに心配を

かけてしまったようだ・・・・・全く・・・・・・何年経っても僕は人様に迷惑をかけることしかできない駄目男のようだ・・・・・・なのは・・・みんな・・・本当にごめんね・・・）」

後悔と自責の念でいっぱいのユーノはその晩、就寝の前に一度外に出ると深いため息をつきながら空に浮かぶ月を見上げた。

「はぁ～～～」

ユーノはプリズムシードを狙って対立してきた今日遭った少年剣士、明神弥彦の事で頭がいっぱいだった。

まだユーノ自身、名前は知らないのだが今のユーノにとっての一番の悩みはそれで間違いはなかった。

すると、そんなユーノの元に銀時がイチゴ牛乳を持って現れた。

「何溜息なんかついてるんだよ。しみったれた時はこれだ。ほれ、飲もうぜイチゴ牛乳。」

「銀さん・・・ありがとうございます・・・いただきます。」

ユーノは銀時が持ってきたイチゴ牛乳を受け取ると、銀時と一緒に空に浮かぶ月を見ながらそれを口の中へと流し込んだ。

ユーノが大いに悩んだ様子で浮かない顔をしていると、銀時は徐にこう言って来た。

「あんま難しいこと考えてると、直ぐに白髪でいっぱいのジジイになるぜ。俺がこんなこと言っても説得力なんかねぇが、てめぇは少

し責任を背負いすぎなんだよ。」

「あはは・・・よく言われますよ、はい。だけど、責任云々よりも先ず、僕はあいつが・・・あの逆刃刀の少年剣士の事がどうも気になってしまって・・・」

「ああ。ピカチュウとニャース連れてたあいつか？ありゃ何もんだ？見たとこ相当な手練れなようだが、あれが何でプリズムシードを欲しがっていやがる？何で俺達と対立しちまってるんだ？」

「あの少年・・・名前はまだ聞いてませんが、恐らく剣を交わしてみて分かった限りでは、彼もまた強い願いを持っているんですよ。」

「剣を交わすことで相手の心理を読めるか・・・一護みたいなこと言うじゃねぇか。」

「一護さんと比べればまだまだですよ。それに、彼のあの時の瞳(め)――――」

そう口にすると、ユーノは再びあの時の弥彦の眼と当初の敵対関係だったフェイトの眼を思い出しながら比較した。

「何だかなのはとぶつかっていた時のフェイトのそれに非常に似ていました。恐らく、プリズムシードを探している限り、今度もまた僕らとぶつかってくるでしょう。」

「――――」

銀時は黙ってユーノの話に耳を傾けると、その後何も語らずただ黙ってユーノの隣に座って頭上に浮かぶ月を仰ぎ見た。

そして、ユーノ本人は宛らフェイトとぶつかり合って感情がこみ上げていた当初のなのはと非常によく似た気持ちで弥彦のことを考えていた。

「（不思議なほどに何処か暖かくて、だけどそれ以上に複雑な・・・そんな気持ちが僕の中を巡っている・・・こんな気持ちになるのは初めてかもしれない。）」

この問題はその後の調査で一体どう絡み合ってくるのか？

その頃、どうにか命からがらカトゥーンの待つ空間と空間の狭間に存在する城塞、カトゥーンキャッスルへと帰還したゲーリングは松葉杖で歩きながら、背中越しのカトゥーンに向けて第一声を発した。

「た、ただいま戻りました！カトゥーン様！！」

カトゥーンはゆっくりと振り返ると、低い声でゲーリングに言葉を向けた。

「・・・お前には目を掛けてきたつもりなんだけどな、ゲーリング・・・」

「は、はい／／／／／／！！！」

「だが、今度のミスはどうにも赦しがたいかな・・・」

カトゥーンは徐にゲーリングに近づいていき、ゲーリングはそんな畏怖の念を抱いてならない今のカトゥーンにどうにか赦してもらおうと言葉を発した。

「お、御赦しを・・・！」

だが、直後ゲーリングはカトゥーンに左足を踏みつけられ、あまりの痛さに言葉を失いかけた。

「ぐ！」

更に、カトゥーンの手刀が腹部にめり込み、ゲーリングは口から反吐を出す。

「どっは！！」

「はあああああ！！！！」

そして、最後にカトゥーンは勢いよくゲーリングの口の中に自分の口を近づけると、ゲーリングの舌をかみちぎるぐらいの強さで引っ張り、ゲーリングは絶叫する。

「あああああああああ！！！！ぐあああああああああああ！！！」

その場に倒れ伏し、生き地獄を味わうゲーリング。

「どほおおおお・・・！！！！！」

カトゥーンはそんなゲーリングに対して次なる指令を下した。

「再び精鋭を選り抜いて奴らを追え。行先は、第３０５管理世界『ワットタイル』。」

「は・・・ひ・・・りょうはい・・・しました・・・」

下の痛みをこらえながら、涙目で返事をするゲーリングであった。

次なる目的地と、謎が深まる今回の事件の全容。

カトゥーンの目的は、そしてユーノと巡り合った少年剣士、明神弥彦達がプリズムシードを狙うのは何故か？

真相は未だ謎に包まれたままであった――――――

力は無暗やたらに誇示するものに非ず（後書き）

教えて、ユーノ先生！

ユ「まるで第一期のなのは的な展開になって来たけど、まぁそれは置いといて、今日は漫画『るろうに剣心』について説明するよ♪」

ユ「正式名称『るろうに剣心　－明治剣客浪漫譚－』は『週刊少年ジャンプ』（集英社）誌上において１９９４年１９号から１９９９年４３号まで連載。単行本はジャンプ・コミックスより全２８巻。また後に完全版が全２２巻で刊行された。タイトルの「るろうに」とは流れ者や放浪者を意味する作者の造語であり、漢字表記は「流浪人」。各話数はそれぞれ「第〇〇幕」という通し番号になっている。」

ユ「１９９６年のテレビアニメ化を最初に映画・ＯＶＡとアニメ化もなされていて、明治時代初期の日本が舞台。登場人物や武術の流派は一部を除いて架空のものだが、赤報隊や新選組、そして明治１１年（１８７８年）５月１４日の大久保利通暗殺事件（紀尾井坂の変）など、物語の転換点では史実を絡ませている。」

ユ「「『ジャンプ』で歴史物は受けない」、「明治時代は漫画にするには難しすぎる」と連載前は編集者に言われたが、その前評判を跳ね返し、人気を博した。単行本第一巻が発売当日に大半の書店で品切れとなり即日重版が掛かったこの大ヒットは、アウトローに憧れる平凡な少年（＝読者）もしくは平凡な日常に生きる読者が憧れるアウトローを主人公とすることの多かったジャンプには珍しい、アウトローであったことを後悔し日常への回帰を夢見る主人公と言うドラマ性が、従来ジャンプを読んでいなかった人々をも読者とし

て獲得したことによるものが大きいかな♪」

一「確かに、不殺を貫く剣心の生き方はなかなか出来るものじゃねぇしな。その上、嘗ては明治を切り開くために人を斬ってきた人斬りの過去を持つんだから、内心はかなり揺れ動いただろうぜ。」

な「そう言えば、主人公の剣心さんを見てると、何だか今のユーノ君によく似てるよね♪」

ユ「そうかな?確かに女みたいな顔で長髪って言うのは分かるけど、僕は彼の様に立派な生き方をしてる訳じゃないからね。」

すると、そんなユーノの前に剣心が現れる。

剣「いやいや。拙者も人に自慢できるような生き方などしてはおらぬよ。拙者はただ、自分の目に映る大切な人々を護りたいがために剣を振り続けてきただけでござるよ、ユーノ殿」

ユ「剣心さん・・・あなたは何て器のデカイ人なんでしょうか・・・」

剣心の言葉と心の広さに思わず心打たれるユーノ達。

すると、剣心はふと思い出したかのようにこう言った。

剣「あ、そうそう。何か弥彦の奴が変なごたごたにから回れているようだが、一体何があったでござるか?」

一「そう言えばユーノ。お前あいつと一期のなのはとフェイトみたいなことになってたよな?」

な「ま、まさかユーノ君もそのノリでゆ、百合路線に!?」

ユ「いやいや!!それは絶対ないからね!」

魔導師図鑑ハイパー!

吉良のカップ麺好きは現在六課の密かな話題となっていた。

恋「聞いたかルキア。吉良のあの話?」

ユ「ああ。ティアナから聞いた。何でも相当カップ麺に拘ってるようだと・・・」

鬼「今まで地味だった奴が、そう言ったことで今回を頭角を現してきたんじゃねぇのか?」

浦「それにしては地味な設定だと思うけどね僕・・・」

沖「地味な上に地味を重ねて来たか・・・山崎の地味さと戦わせたらどっちが勝つんだろうな?」

そんな彼らの話を聞いていた吉良は持っていた割り箸をへし折り、怒鳴りつけて来た。

吉「おおおおおんどらあああああああ!!!!!さっきから地味地味って、僕はそんなに地味だって馬鹿にしたいのか!!!!いいぜ!!!だったら今ここで地味じゃないもの見せてやる!行くぞ、“ガッシュ”!!」

そう言うと、吉良は唐突に現れた金髪の子供を呼び出し赤い本片手に呪文を口にする。

吉「ほおおおおお！！！！“バオウ・ザケルガ”！！！！」

その瞬間、金髪の子供ガッシュの口から雷で出来た龍が出現し、全員はそれに飲み込まれていった。

恋「あああああ！！！！！吉良！！！！！！それ漫画違うだろうが！！！」

鬼「同じ声優つながりで何やってんだよてめーは！！！」

次回予告

プリズムシードが護送中、漫画キャラの襲撃を受け奪われる。

ユーノは自分を責め立て、同じ過ちをしてしまった事に憤る。

私達は一護さんの口から語られるユーノの隠された悲しき過去を訊かされ、彼が何故自分を軽視するのかを知る。

フェ「次回『辛い時、そんな時は横でも見てください』」

辛い時、そんな時は横でも見てください（前書き）

仮面ライダーオーズ　第３２話を見て追加してみたくなったユーノの悲しい過去・・・・・・意外とあってる感があるのは自分だけ？

辛い時、そんな時は横でも見てください

＞ｉ２４９４７―７０９＜

襲撃から一夜明け、ミッドチルダと各地方を結ぶ海底トンネルの中を走るプリズムシードを積んだ八両編成の海底列車の中では、多くの乗客がミッドチルダまでの道のりを悠々自適に寛いでいた。

そんな乗客の中に、ただ一人席にも着けず入り口付近の隅で小さくなり、携帯用のガス本でを使って薬缶のお湯を沸かすロングコート姿でハットをかぶった初老の男がいた。

男はぶつぶつと呟きながらリュックの中からカップ麺を取り出そうとしていた。

「リストラなんて言ったってよ、結局は下の人間（もん）が苦労を背負い込むのよ。よりによって出張経費までカットしやがって！」

男は愚痴を零しながら、取り出したカップ麺のふたを徐に開け、まるで吉良の時と同じような嬉々とした表情を浮かべる。

「へへ♪」

すると、そんな男の不審な行動に気づいた列車の中を巡回していた乗務員の一人が厳しい言葉を突き付ける。

「お客さん。困りますね。車内で火なんて起こされちゃ。」

乗務員の言葉を聞いた途端、男・・・実体化したルパン三世を追って漫画世界から飛び出してきた銭形警部は誇らしげな表情でカップ麺を抱えながらこう言った。

「俺は決して怪しいもんじゃない。ＩＣＰＯにその人ありと言われる、警部銭形だ！」

しかし、そんな銭形の態度にもかかわらず、乗務員は少し声を上げて厳しい指摘をする。

「警部だろうが何だろうが、ダメなもんは駄目だ！！」

「う！さ、三分待ってくれ三分！」

戸惑いながらカップ麺かかえてそう口にする銭形に、乗務員は懐からあるものを取り出す。

「三分待つなら三時間待ちなさいよ！！」

乗務員はミッドチルダと周辺の地域を現した地図を現し、各地を繋ぐ海底トンネルが敷かれてあるグランド海峡を指さしながらこう言った。

「グランド海峡の海底に、このアーバンリニアレールが敷かれたことで、今やミッド地方全域と首都クラナガンまでは三時間で結ばれてるんだから！」

と、その時。

突然列車が急ブレーキをかけてきたため、車内が大きく揺れ動いた。

戸惑いを隠せない銭形や乗務員、更には乗っていた全ての乗客。

するとその時、列車の前方から爆発が起こり、その影響でトンネルが落盤を起こして海底の水が一気に流れ込んで車内にまで浸水してきた。

「「！おおおわあああああああ！！！！」」

銭形と乗務員は窓ガラスを突き破り、侵入してきた水に飲み込まれ、銭形は飲み込まれながらも両手にはしっかりとカップ麺が握られていた。

そして、この大参事とも呼ぶ事件を起こしたのは地上の方で予め準備を整えていたテトラカトゥーンのうずまきナルトとエドワード・エルリックの二人であった。

ナルトとエドはそれぞれ別々のギャオスの背中に乗りながら、炎上する海を見下ろし不敵な笑みを浮かべる。

「ちょっと派手にやりすぎたか？」

「いや。相変わらず見事な錬金術だったってばよ。さ、早いところ物を確保しようぜ。」

「だな。軽く今ので何人死んだだろうな・・・」

「さぁ・・・１００人単位であるのは間違いなさそうだけど。」

ナルトとエドは海の中に潜り込んでいくと、積み荷であるプリズムシードを回収しに行った。

二人が海底の中に潜り込んだ直後、殻のカップめんの蓋を浮き輪代わりにして海上へと浮かんできた疲労困憊の銭形の姿が見て取れた。

「る・・・ルパンは・・・何処だ・・・？」

この大参事は直ぐに中央管理局へとつながれるが、機動六課・・・もとといユーノ・スクライアの元にこの知らせが届くのはそれよりもちょっと後になってからの事である。

さて、大参事が起こって間もないころ、首都クラナガンから距離を置く特定遺失物管理部機動六課総隊舎の様子は至って平穏そのものだ。

中の方では、現在真選組局長近藤勲が至って真面目な表情を浮かべながら鉛筆片手にライトニング隊隊長のフェイト・T・ハラオウンの指導の下、ミッド文字の勉強に励んでいた。

「で、こうなる訳です。分かりましたか？」

「成程。そう言うわけか！いやいや。すまんな！どうも日本語とは全然違う文字故、なかなか慣れんもんでな！」

後頭部に手を添え、笑いながら自分の出来の悪さを言う近藤だが、フェイトの反応は違っていた。

「でも異世界に来てまで何か新しいことを学ぼうという姿勢、私は凄く立派だと思いますよ。だけど本当にいいんですか、保護しているこっちの事務処理まで手伝ってくれて。」

「ああ。機動六課の皆さんには世話をかけっぱなしだからな。これぐらいやらんと割りが合わねぇ。少なくとも、真選組は受けた恩を仇で返したり何もしないでいるくらいなら切腹した方がましだと思ってる。元の世界に戻るまでの間、こう言ったこともしっかりやらせてもらうぞ、フェイトさん。」

「近藤さん・・・・・・ありがとうございます。きっと向こうの世界に戻ったら、あなたの想い人にもその綺麗な想いが伝わると思いますよ。」

和やかな表情でフェイトがそう言うと、近藤は涙を浮かべながら新八の実姉であり想い人のお妙の事を思い出す。

「う・・・!!そうですな・・・!お妙さんにも早く俺のこの気持ちを分かってほしいです・・・!!」

近藤が涙を流しているその頃、外の方では土方十四郎が用意した三本の日本刀を両手と自分の口に咥えながら漫画「ワンピース」をヒントにした対斎藤一対抗策の実演を行っていた。

「鬼斬り!!」

器用に三本の刀を使って目の前の対象物を切り刻む土方。

側でその様子を見ていた鬼太郎も思わず拍手をしてこう言った。

「器用なものだな。ワンピースの絵柄見ただけでホントに真似しちまうなんて。」

「ふん。これぐらいどうってことねぇさ。俺は野郎に勝つためにはどんな手段を使っても上り詰めてやるさ。斎藤一・・・・・・あのスカした細目に目にもん見せてやる。」

そんな思いを込めて、今日も彼は煙草を吸えない怒りをぶつけるかのように鬼斬りの実演を続ける。

ちなみに、中の人の声は「銀魂」「ワンピース」と同じである。

またその頃、スターズ分隊の隊長・副隊長であるなのはとヴィータの二人は資料片手に廊下を歩きながらこんな会話をしていた。

「それにしても、ヴィータちゃん。ホントに何にも見えなかったの？」

二人が話題にしているのは先日プリズムシードを狙って急襲をしてきたユーノを昏倒させた明神弥彦に関してのものだ。

「ああ。私やティアナたちが気付いた時にはもう気絶しちまってた。だが敵も敵で妙だったんだ。刀のくせして、刀身部分が普通の刀とは明らかに違ってた・・・」

「ユーノ君が言ってた、逆刃の刀って奴だね？」

「一体何のためにあんなものを使ってるか知らねぇが、少なくともロスト・ロギアを狙った輩であることに変わりはねぇさ。」

と、その時そんな話をしていた二人の耳にユーノのオフィスから焦燥に満ちたな声が聞こえてきた。

「で！だから――――――何だと！！」

思わず信じられないとばかりに声を上げるユーノ。

なのは達は思わず廊下に足を止めて立ち止まった。

「「！？」」

「そんなことがあってたまるか！！」

ユーノはそう言うと、中央管理局から届いた通信を切ってあまりの悔しさと怒りを滲み出しながら自分の机を力いっぱい叩き、その衝撃で机の上に乗っていた書類やその他のものが吹きとんだ。

ただ事ではないと判断したなのは達はオフィスに入ってくると、直ぐにユーノに尋ねた。

「どうかしたの、ユーノ君！？」

なのはがそう言うと、ユーノは険しい表情を浮かべながら衝撃的な事を語り出す。

「・・・プリズムシードを護送中のアーバンリニアレールが漫画キャラに襲撃！爆発・落盤した・・・！！」

「「え！？」」

思わずユーノ同様衝撃を受ける二人。

ユーノはそんな衝撃を受ける二人に更に詳しいことを語り出す。

「死者８７名・・・行方不明者６９３名・・・！！そして肝心のプリズムシードはその際に強奪されてしまった・・・！！」

「そ、そんなことって・・・ユーノ君！？」

「事実だ！中央管理局は緊急対策会議を招集した・・・！」

「ユーノ君・・・！？」

と、なのはが心配した様子でユーノの名を口にした途端、ユーノは更に怒りと悔しさに満ちた表情を浮かべながら甲高い声でこう言った。

「くそ！！！一体僕は何をやってるんだ！！何が遺跡発掘の専門家だ！？何が翡翠の魔導死神だ！？結局何も護り切れてなんかいない！！また同じ過ちを繰り返す・・・幼稚な子供だ！！！」

自分を卑下し、徹底的に自虐するユーノの姿に大いに戸惑うなのはとヴィータは顔を見合わせた後、小刻みに震えるユーノの背中越しに必死に言葉を投げかけた。

「ゆ、ユーノ・・・何もそこまで！」

「そ、そうだよ。ユーノ君の所為じゃないって！ユーノ君はちゃんとプリズムシードをあの少年剣士やカトゥーンの手下から守り抜いた・・・だからユーノ君は何も悪くなんかないよ！お願いだから、それ以上自分を傷つけるのはやめ・・・」

と、なのはが言おうとしたその時。

悔しさでいっぱいのユーノの口から隊舎全体にまで響き渡る胸が張り裂けるような声が聞こえてきた。

「それ以上、僕に何も言わないでくれ！！！」

「「！」」

一瞬、二人はその反応に体を硬直させ何も言い返すことが出来なくなる。

すると、騒ぎを聞きつけたはやてを含む前線メンバー全員と銀時達が一様にユーノのオフィスに集まってきた。

「ど、どうしたんや一体！？」

「店長！大声出して何が・・・って・・・店長・・・」

浦太郎がユーノの姿を目にした瞬間、ユーノは背中を向けたまま握り拳を作ってその場に立ち尽くしていた。

なのはやヴィータはそんなユーノの背中をじっと見つめながら戸惑いと湧き上がる複雑な思いに駆られながら言葉を発する。

「ゆ・・・ユーノ君・・・」

「ユーノ・・・」

「く・・・！」

泣いているのかとも取れるユーノのただならぬ雰囲気に唖然となる全員。

と、その時ユーノは唐突に全員の元へと振り返ると、意気消沈とした様子で今の自分を見られまいと顔を下に向けながらそそくさとドアの方へと歩きだし、恋次はそんなユーノに向かって声をかける。

「お、おい・・・ユーノ・・・何処行くんだよ・・・!?」

恋次がそう言うと、ユーノは一度立ち止まってから平静を装いながら徐にこう言った。

「・・・すみません・・・ちょっと暫く外に出てきます・・・大丈夫・・・帰ってきたら仕事はきっちり片付けますから・・・だから・・・今は一人にさせてください・・・」

話しを終えると、ユーノはそれ以上は何もつけずにドアの外へと向かって歩き出した。

「あ、ちょっ・・・ユーノ・・・!」

「ユーノ、おい!」

咄嗟にユーノを呼び止めようとしたフェイトやクロノだが、ユーノは一切二人の言葉に耳を貸そうともせず、見ていた新八や他のメンバーも大いに心配した。

「ユーノさん・・・かなり落ち込んでいましたけど、一体何が!?」

「なのはちゃん・・・説明してくれるか?」

はやてがそう言うと、なのはは暗い表情を浮かべながら先ほどの事を皆に話すことにした。

「・・・うん・・・」

なのはが赤裸々にユーノから聞いたことを口にし、真摯にその内容を聞き入れたはやて達の表情は飛翔に重いものであった。

「・・・そっか。プリズムシードが強奪されてしもうて、おまけに犠牲者が多数出てしもうたか・・・」

「酷な話だぜ。だけどそれであいつが何で責任を感じる必要があるんだよ?あいつは昨日、野郎からプリズムシードをきっちり守り抜いたはずだろう?」

「ああ。多少の怪我はあったにせよ、それも命にかかわるものではなかった。ユーノ先生は、やるべきことをやった筈だが。」

銀時や近藤が訝しげな様子でそう口にすると、ユーノの性格をよく知るなのはを始め幼馴染三人は暗い表情を浮かべながらため息をついてこう言った。

「・・・はぁ・・・ユーノくんの悪い癖がまた出てしもうたな。」

「うん」

「だね。」

「あいつの悪い癖?」

「どういう事ですか?」

ユーノの素性をよく知らないでいる銀時達がそう言うと、なのはは徐にユーノの経歴と自分たちが出逢う切っ掛けとなったことを語り出す。

「実はユーノ君、９歳のころからスクライアの一族と一緒に遺跡発掘の責任者として異世界を旅していたんです。私やフェイトちゃんが出逢う切っ掛けとなったロスト・ロギア、『ジュエルシード』も元はと言えばユーノ君が発掘したものなんです。」

「９歳のころから遺跡発掘の責任者って・・・ユーノさんどんだけ凄いん人なんですか！？」

「と言うか完全に大人扱いネ。全然子供のすることじゃないヨ。」

ユーノの経歴を聞かされ、驚きを隠せないでいる新八とそれを越えて完全に唖然とする神楽がふとそう口にすると、直後フェイトが横のなのはと同じ暗い表情を浮かべて更にこう言った。

「そう・・・“大人扱いされてたから”・・・なんだよね。ユーノが発掘したジュエルシード、護送中に何らかの事故で異世界に飛び散っちゃって、それを回収しようと一人でユーノはなのは達の故郷、地球にやって来た。」

「ほう・・・そいつはまたけったいな話だな。」

「何でネ？」

銀時の言葉に疑問符を浮かべる神楽。

すると、そんな神楽を小馬鹿にしながら総悟がこう言った。

「アホか。ジュエルシードが飛び散ったことと、ユーノ先生が発掘したことと別段関係ねぇ。と言うかあの人は何も責任を負うことは

ねぇ筈だぜ。」

「はい。だけど、ユーノ君は同じことを私が言ったら、“ジュエルシードは僕が発見したものだから、全部見つけてちゃんとあるべき場所に返さないとダメだって”。真面目で、責任感が強すぎて、一人で何もかも背負い込んじゃって・・・」

嘗てのユーノの言葉を思い返しながら更に暗い表情となっていくなのはに思わず言葉を詰まらせる銀時たち六人。

「「「「「「・・・・・・」」」」」」

するとその時、ユーノの机のモニター画面に通信が入ってきたという知らせが届き、一同は一端それに目を向けた。

「?通信が入ってるぞ。」

「誰だろう?」

徐に近くにいたなのはが画面を切り替えると、映ってきたのは定期連絡の為に現世から通信を入れてきた白衣姿の一護であった。

『ユーノ・・・ってあれ?あいつ、何処行きやがった?』

「一護さん!」

一瞬驚くなのは達だが、その横で銀時を始めとする六人は本物の黒崎一護の登場に思わず目を疑い、銀時が最も興奮していた。

「え!?ま、マジ!本物の黒崎一護!?」

『？おいお前ら。誰だその銀髪の人は？』

訝しげな表情で通信画面の中で挙動不審な動きをする銀時に目が言った一護。

恋次は徐に銀時の事を説明する。

「ああ。こいつは坂田銀時。十日ほど前に保護した次元漂流者で、後ろの五人も同じ世界出身の連中だ。」

『ああ・・・そう言えばユーノがんなこと言ってたな。』

思い出したかのように声を漏らす一護。

すると、ルキアが通信を入れてきた一護に当然とばかりに質問をぶつける。

「それより貴様こそどうしたのだ？」

『俺は何時もの定期連絡のつもりで連絡してきたんだけど、ユーノの姿が珍しく見えねぇからよ。あいつ何処行ったか分かるか？』

「それが・・・――かくかく云々でして。」

はやてがユーノの身に起こった諸々の事情を説明すると、聞き終えた一護は何処か複雑な心境を抱えてこう言葉を漏らした。

『――――――そうか。また一人で責任感じちまってるのか。たく、何度言っても分かんねぇ野郎だ。少しは周りを頼れって言ってるの

に・・・！』

愛弟子の相変わらずの人に頼れない性格に些か憤りを感じる一護。

ティアナはそんな一護に向かってふとこう言った。

「この分だと当分ユーノ先生は戻ってきませんね。だけど私達、あんなに辛そうな表情のユーノ先生を見たのは正直言うと初めてです。」

『だろうな。あいつは人前で弱みなんて見せる性分じゃねぇし、何より人に迷惑をかけることを一番嫌う。だが逆に却ってそれが周りを悲しませてることにあいつはなかなか気づいていない・・・』

一護がそう言うと、聞いていたなのはや他の面々は思わずその言葉に共感し、ユーノの事を考えながら苦い顔を浮かべた。

「・・・・・・」

「「「「・・・・・・」」」」

すると、一護は通信画面のなのはを見ながらふとユーノが何故極端に人に頼れない性分なのにかについてこう推測を立てる。

『あいつがああなっちまったのは、出生もさることながら他に要因があるんだろうな。』

「と言いますと？」

『知っての通り、あいつは両親の愛情を知らない。故に他人に甘え

られず遠慮し無意識のうちに自分と他人との間に距離を置く。そうして自分が踏み込む隙を与えまいとする。だから周りに頼れないし、頼ることに躊躇する。』

「ああ。全く以てお前の言う通りだぜ一護。」

恋次はそう言いながら一瞬舌打ちをし、なのはもユーノの事を自分かそれ以上に理解している一護に若干悔しさと寂しさを抱きなら素直にこう言った。

「一護さんは、ユーノ君のことよく理解してるんですね・・・」

『お前ほど知っちゃいねぇさ。ただ、師匠として弟子の考えることは自ずと分かる。あと、あいつが周りに頼れない理由があるとすれば、それは多分・・・――“二つの事故”が原因だろうぜ。』

「?二つの事故?」

『一つはなのは、お前が疲労と無茶のし過ぎで大怪我を負ったあの日の事故。』

「!ああ・・・やっぱりそうですよね・・・」

なのはは自分でも気にはしていたユーノが抱える贖罪、即ち自分が12歳の年に空から墜ち、一時は魔法も歩くことさえ危うかったあの日の事故のことをふと思い返し、案の定それかと何処か自嘲したような表情を浮かべると、フェイトやはやて、クロノも暗い表情を浮かべる。

「ユーノが気に病む事じゃないのに・・・ユーノは・・・なのはに

対して、まだ罪悪感を抱えてるんだね。」

「そやな・・・」

「あいつは、ユーノはなのはの事になると過剰になって、自分が見えなくなるからな。」

「だけど、あともう一つの事故って・・・何のことです?」

「それがユーノ先生にどんな事を?」

その日の事件の事だけなら兎も角、あと一つの事件と言うものに関して全く身に覚えのないなのは達全員が一様に顔を見合わせると、一護は間を置いてからこう語り出す。

『・・・こいつはちょうど空白の四年の間に起きた出来事でな、知ってるのは俺や織姫と石田ぐらいだ。』

「石田まで?何なのだそれは?」

「おいオレンジ頭!勿体つけずに教えろよ!店長に何があったんだ!?」

意外な人物でさえ知る自分たちは知らないユーノの秘められた過去に関して大いに気になるルキアが鬼太郎がそう言うと、その他の反応を見ていた一護は一度机の上のコーヒーを飲んで心の準備を整えてからユーノ・スクライアの空白の四年の出来事の一つを語り出す。

『・・・ああ。じゃあ教えてやる。“ユーノ・スクライアが、決定的に周りに頼れず命を顧みず自分を無視するようになった”あの日

の事故を・・・』

一護が過去の出来事を語り出そうとする前に、当のユーノ・スクライア本人はと言うと、一人誰もいない静まり返った海辺の方で重い腰を下ろし、ため息をついていた。

「はぁ・・・・・・・」

未だ収まることを知らない悔しさと自分への怒りにユーノはどうすることも出来ず、次第にそれは空しさへと変わっていく。

「僕は・・・・・・何をしてきたんだ・・・・・・」

ユーノはそう言うと、懐からある色あせた一枚の写真を取出す。

写真に写っていたのはアフリカ系の褐色の肌を持つ小さな女の子とその横で笑顔で映る今よりも少し若い頃のユーノの姿であった。

ユーノはその写真を見ると、頭の中に爆発に飲み込まれ鳴き声を上げるその少女と全身ボロボロの自分の姿がフラッシュバックしてきた。

〈うわあああああああん!!うわあああああん!!〉

〈ぐ・・・!!ゆ・・・ユウ・・・!!〉

手を伸ばそうとするユーノ。

しかし無情にも爆発は少女とユーノを完全に遮断し、ユーノが気づいた時には既に少女は爆発に飲み込まれ跡形もなくなっていた。

ユーノはその光景を見るなり体の底から声を上げて叫ぶのであった。

〈！あああああああああああああああ！！！！！！！！！！！！！〉

そんな昔の事をつい思い出し、苦い表情を浮かべる今のユーノ。

「・・・・・ユウ・・・・・・！」

そしてその時丁度、機動六課のなのは達全員が通信画面の一護よりその時のユーノの身に起こった衝撃的な事件を聞かされるのであった。

『――二年前のことだ。ユーノはその頃、地球のいたるところに赴いて遺跡発掘に精を出していたんだ。イギリスに住む柊沢エリオルと出逢ったのもその時だ。でだ・・・アフリカのルアンダあたり・・・その旅先で小さな村の連中と仲良くなってな・・・何週間かその村の連中と協力して過ごしたそうだ。で、その村人の中でも特にユーノと心を通わせた少女がいたんだが・・・』

「いたんだが・・・・・・ってことは」

スバルがそう言うと、一護は険しい表情を浮かべながら悲しい事実を口にする。

『・・・生憎その少女は既に他界している・・・内戦が勃発してな。』

「内戦・・・！」

聞いていたなのは達全員は思わず表情を一変させる。

一護はそんななのは達の態度を見ながら更に一緒に内戦に巻き込まれたユーノの事を語り出す。

『ユーノもその内戦に巻き込まれてな。爆発の中、ユーノがその少女や村人を命を懸けて救おうとしたんだが・・・運悪くあいつの目の前でその少女は爆発に飲み込まれ、結局助かったのはユーノだけだった・・・』

「そんな・・・！」

「何てヘビーな話だよそれ・・・」

驚愕と衝撃のあまりどうリアクションを取っていいのか分からなくなる一同。

一護は引き続き、その当時のリアルタイムでの出来事を赤裸々に語り続ける。

『俺は織姫と石田と一緒に国際医療ボランティアの一員として、現地に赴いた――――――』

これは黒崎一護が語る二年前のアフリカでの実際の体験だ。

彼は妻の織姫、悪友の石田雨竜と共に内戦に巻き込まれた被災者たちの人命救助と医療支援の為に現地に入り、治療に当たっていた。

〈Ｙｏｕ ｓｈｏｕｌｄ ｂｅ ＯＫ． Ｒｉｇｈｔ ｎｏｗ！（

大丈夫だ。すぐに良くなるからな。）〉

負傷した現地の子供に英語で励ます一護。

するとその時、織姫が外の方から運ばれてくる担架に乗せられた見慣れた人物の姿に思わず声を上げた。

〈！あなた、石田君！あれ！〉

織姫の言葉に反応して、二人が外に目を向けると担架に乗せられていたのは一護の愛弟子であるユーノであった。

〈あれは・・・！〉

〈ユーノ！〉

一護達は直ぐに運ばれてきたユーノの元へと急いでいった。

〈ユーノ君！〉

〈ユーノさん！〉

〈どうしたんだよ、ユーノ！ボロボロじゃねぇか！？〉

三人は爆発に巻き込まれ、全身ボロボロで尚且つ精気すら感じ取れないユーノの様子に驚きを隠せなかった。

〈一体何があったというんだ・・・！？ん・・・ユーノ君？〉

〈ユーノさん・・・〉

〈・・・あ・・・あ・・・・・・〉

三人は虚ろな表情で声を漏らすユーノの姿に戸惑いを隠し切れなくなった。

そして、一度ここで元の時間軸へと戻し一護の語りから再開しよう。

『その時、搬送先の病院に他の患者と混じった満身創痍で、生きてるのか死んでるのかはっきりしない虚ろな目をしたユーノが運ばれてきたんだ。』

一護の話を聞いた後、なのは達は一様に言葉を詰まらせていたが、ふとなのはは何かを思い出したかのようにこう呟いた。

「でも、魔法は使えたはずなのにどうして・・・」

『あとで本人に聞いたら、何故かその時ＡＭＦ、アンチマンギリングフィールドと同じ現象が起こっていて、咄嗟に防御を使うことが出来なかったらしい。それで、ここからが一番の問題だ。そんなユーノの善意に付け込んで、ユーノの命懸けの行動を自分の人気取りの為に利用した“元管理局員”がいたんだ。』

「「「「「え!?」」」」」

「何だと?」

一護の衝撃的な発言に思わず声を上げてしまうなのは達管理局員や銀時。

『そいつの名前までは知らねぇが、兎に角ユーノの素性と来歴、更には無限書庫の司書長だったってことを熟知してた相当根の腐った野郎が、途中で払った多額の身代金でユーノだけを助けた。そして、“その局員、もとい政治家の知り合いの青年が命懸けで村を守った”という実際の話とは全く逆の美談を作って大々的に取り上げ、出身世界である地球での人気を獲得しようとしたんだ。自分が選挙で有利になるために。しかも、ユーノをまるで自分の身内であるような言い方をしてな・・・』

一護はその事を語りながら、再びその日自分たちが目撃した実際の映像を思い返す。

ここでまた過去の出来事にフィードバックする。

一護達三人は治療を終えた項垂れ様子で全く動く気配すらないユーノの事を心配しつつ、そのユーノの元に駆け寄ってきたサングラスをかけたユーノを助けた元管理局員の付き人数名に目を光らせた。

〈あなた。あの人たち・・・――〉

〈あいつらは・・・・・・〉

付き人の一人は実に淡々とした口調で精気を失うユーノに向かってこう言った。

〈スクライアさん。もうすぐ日本に戻れますから。さ。〉

〈う・・・う・・・ううう！！！！！！〉

その話を聞き終え、腹の底から込み上げてくる怒りに我慢できなく

なり、壁を叩きつける鬼太郎。

「んだと!!ふざけんじゃねぇ!!そんな事があってたまるかよ!!店長の善意を何だと思ってやがるんだ!!」

「・・・ユーノの意思は無視って訳か・・・キツイだろうな。俺なら多分――――――」

恋次がユーノの気持ちを考えながら重い顔を浮かべると、モニター画面の一護は次のように口にした。

『怒る奴もいるし、ジメジメ腐る奴もいる。で、性質が悪いのが偶に妙に“乾いちまう”奴もいる――――――ユーノはそれだ。』

「・・・!」

なのははユーノが一護曰く乾いてしまっているという指摘に思わずはっとした表情となる。

『乾いちまって、自分への”欲”がない。いや、変な話・・・最初からなかったのかもしれねぇな。』

一護はそんなことを考えながら、重い瞼を一度閉じ、更にこう言った。

『自分への欲を捨てて、周囲に遠慮して、その背中に背負った”使命感”と“責任感”、そして“罪悪感”だけが今のユーノを突き動かしてやがる・・・!』

一護の話を聞き終えると、全員はあまりに辛すぎるものを一人で背

負い込むユーノに何もできない自分たちの非力さを心底呪いながら発する言葉さえ見つからなかった。

特に、なのはの場合は誰よりもその事を痛く受け止め思わず力が抜けてしまい膝をついてしまう。

「そんな・・・・・どうして・・・・・・！」

銀時はそんななのはの瞳に浮かぶ一滴の涙を一瞥してから壁に寄しかかり、浮かない表情でこう語り出す。

「俺達が理解できるものなのか・・・あいつの苦しみを・・・それとも、それがあいつなりの立ち直り方なんだろうか・・・」

「だとしても辛すぎます・・・」

新八は銀時の言葉に反応し、そう言うと周りもまた新八同様辛い表情を浮かべる。

すると、唐突に鬼太郎が前に出てきてこう言って来た。

「ちょっと言わせてもらってもいいか。」

「？」

「前にテレビの特撮番組で言ってた台詞にこんなのがあってよ。“欲望こそ生きるエネルギー！素晴らしい！”ってな。」

「は、はぁ・・・」

台詞の部分を特に強調させて身振りをつけて表現する鬼太郎になのは達は一瞬戸惑った顔になって呆気にとられる。

鬼太郎はその言葉をこの場にいる全員にしっかりと伝えると、ユーノの思考を自分なりの頭で考えながら思ったことを口にする。

「店長はどう思ってるか知らねぇが、俺から言わしてみれば自分の欲をなくしちまったら、正直生きてるとは言えねぇよ。」

鬼太郎がそんな意味深な言葉を口にすると、近藤も実に複雑な様子で呟いた。

「ユーノ先生の場合、それは“欲望の空白”とでも言うべきか・・・」

今までの話を聞いていたなのはは、今改めて自分が知っているユーノがどんな男なのか、そして彼が出生から今日に至るまで何を背負って来たかをもう一度思い返してみた。

「（ユーノ君・・・いつも誰かのために手を伸ばして・・・銀さん達にも・・・私にも・・・！じゃあ、ユーノ君には誰が！？）」

自分とはまた違う辛い過去を背負って生きるユーノだが、自分とは決定的に違ったのはユーノには誰一人手を差し伸べる人がいないということだ。

そんなことを考え、なのははふと首にぶら下がったユーノと一緒に撮影した写真が収められた例のペンダントに目を向け、思わず一滴の涙を流した。

機動六課でユーノの過去が赤裸々に話されたその頃、ユーノは当てもなくただ一人人気のない道を浮かない表情で歩きつづけていた。

「・・・・・・」

歩きながらユーノはあの日の、内戦で失った少女ユウの事を思い返しなら心の中でこんなことを考えていた。

「（人一人に救える命なんて、たかが知れてる・・・・・誰一人救えないことだって大いにあるけど、それでも僕は苦しんでる人を放っておくことなんて出来ない・・・）」

ユーノは一度足を止めると、目の前に広がってくる街の光景を見ながら更にこう思う。

「（人を助けるときは常に“たまたま”がある・・・・・・失敗して裏目に出ることもよくあった・・・・・だけど僕はもう――――――）」

と、その時だった。

唐突にミッド全域で強い地震が発生し、ユーノやなのは達と言った町の住民たちはその揺れに体勢を崩しかける。

「！な・・・何だ・・・地震か！？」

「きゃ！じ、地震！？」

「それもかなりデカいぞ・・・！」

「みんな!体を低くして何かの下に隠れるんや!」

はやては的確な指示を仰ぎ、機動六課にいた全隊員は机の下などに隠れて落下物に頭をぶつけないように必死で体を縮こませた。

この時確認された最大震度は6、マグニチュードは6．8である。

数分の揺れの後、地震が収まると一同はゆっくりと机の下から出てくると安どの表情を浮かべる。

「・・・収まったか・・・」

「ふう～～～怖かった～～～!」

六課の面々が地震の恐怖に痛感し、命が助かったことに胸撫で下ろすその頃、同じようにユーノも体制を低くして収まるのをじっと待っていた。

「・・・結構強い揺れだったな・・・」

そんな事を思いながら徐に立ち上がった直後、ユーノの目の前に佇む数十メートル先の建物から爆発が起きた。

「!あれは・・・」

ユーノは思わず目を光らせ、急いで爆発のあった現場へ向けて走り出すと進行方向とは逆に大勢の人々がパニックになりながら一様に逃げ出していったのだ。

「早く逃げろ!」

「急げ！！さっきの爆発で建物の崩壊が進んでるぞ！」

ただごとではないと思ったユーノが現場に到着すると、ユーノの目の前に佇んでいた地上８００メートルにも及ぶ巨大なビルから爆発が起き、あっという間に炎がビルに広がっていくという凄惨な光景だった。

ギャラリーもまた大勢集まり騒然となる現場であったが、その時ユーノの近くにいた女性が声を叫んでこう言った。

「マサヨシ！」

子供と思われるその名を口した女性は慌てた様子でビルの中へ戻ろうとするが、直ぐに夫である男に抑えられる。

「止せ！死にたいのか！？」

ユーノは意を決して二人に事情を尋ねてみた。

「どうしたんですか？」

「子供がまだあの中に！」

「何だって！」

「マサヨシ！！！！！ああああああ！！！」

泣きじゃくる母親の姿と燃え上がる炎を見ながらユーノはふと先ほどの内戦の時の映像が鮮明に蘇ってくる。

「く！」

ユーノはその事を思い出すといても経ってもいらず一目散に取り残された子供を救い出すために燃え上がる炎の中へと向かって走り出し、男は思わず声を上げた。

「おい、アンタ！？やめろ！！」

炎の中に飛び込んだユーノは自分に降りかかる炎に抵抗しながら取り残されたその子供を探すためにビルの奥へと進んでいった。

「くそ！何処だ！？何でこの建物全体でこんな高レベルなＡＭＦが発生してるんだ！？おまけに何で霊力も働かない！何故だ・・・おかげで、防御も探索術も使えない・・・！」

不思議なことに魔法と霊力を封じされたユーノは生身の状態で炎の中を突き進んでいくが、炎の勢いは更に威力を増して容赦なくユーノに襲い掛かってくる。

しかしこの時ユーノは気づいていなかった。

魔法と霊力が上手く使えないのが“自分だけ”だという事実に。

「げっほ！げっほ！誰か！誰かいないのか！？」

そのビルの爆発は直ぐに１０８部隊を通して機動六課へと送られた。

『八神部隊長。１０８部隊より緊急の出動要請です。ミッド西部で大規模な火災が発生。周囲は高濃度のＡＭＦが広がっており、魔導

師隊が突入困難な状況とのことです！』

「何やて！？」

「直ぐに向かわないと！」

と、全員が出動の準備をしようとした直後、険しい表情を浮かべながらグリフィスが次のような事を口にした。

『それと、たった今避難住民から局員が聞いた話なのですが・・・建物の中に取り残された子供を救おうと、緑の羽織を着たクリーム色の髪の男性が中に入っていったとのことです！』

「「「！」」」

緑の羽織、クリーム色の髪の毛という言葉に反応したなのは達一同は思わず声を失った。

「ま、まさかそいつって・・・！？」

「店長！」

「八神部隊長！すぐに出動しましょう！」

かなり慌てた様子でなのはがそう言うと、はやては首を縦に振った。

「了解や！機動六課前線メンバー全員は直ちに現場へ急行！中に取り残された子供もその男性も必ず救い出すんや！」

「「「「「はい！」」」」」

機動六課が急いで現場へと向かったその頃も建物内部の炎は勢いを増し、爆発もまた続く中で地上部隊の局員たちは専用の防護服に身を包んで消火作業に当たっていたが、まるで火の気は収まることを知らない。

「うわ！」

「駄目だ駄目だ！これじゃ中に進めん！」

「この先にまだ子供が取り残されてるんだ！何とかならんのか！？」

「さっき、遺失物管理部の機動六課が出動した！もう少しだけ踏ん張れ！」

局員はそう言うと、機動六課の到着までの間懸命に自分たちの出来ることを続けるのであった。

さて、ユーノが救出に向かった少年、マサヨシは今どのような状況に立たされていたかと言うと、炎で視界が全く分からない中涙を流しながら当てもなく歩きつづけていた。

「お父さん・・・お母さん・・・！」

と、その時地響きがなったかと思えばマサヨシのすぐ近くで爆発が起こり、その衝撃で少年は後ろへ吹き飛ばされる。

「わあああ！！」

身体をぶつけ、擦り傷を作ったマサヨシは地面に横たわりながら恐

怖に負けこう言った。

「痛いよ・・・！熱いよ・・・！こんなのヤダよ・・・！帰りたいよ・・・！！」

そんな泣きじゃくるマサヨシの後ろに佇む銅像に亀裂が走る。

「誰か・・・誰か助けてよ・・・！！」

マサヨシが涙ながらに助けを求めて声を上げる。

その瞬間、銅像の亀裂が大きく避けるや否や銅像はバランスを崩してそのままマサヨシに向かって落ちてきた。

「あ！」

影を見てその事に気づいたマサヨシだったが、咄嗟に体を動かすことが出来ず正に絶体絶命の状況だった。

死を覚悟して思わず目を瞑るマサヨシ。

するとその時、落ちてくるはずの銅像が鈍い音を立てて何かに遮られる音が聞こえ、不審に思ったマサヨシが目を開けてみると、衝撃的な光景が広がってきた。

「！」

「は、は、は、は・・・ま、間に合った・・・！」

何と、そこにいたのは銅像を体で押さえつけ頭から血を流す焼け焦

げた羽織と甚平に身を包んだユーノの姿であった。

ユーノは銅像を粉々に破壊すると、唖然とするマサヨシに徐に近づき温和な表情でこう言った。

「よく頑張ってね。偉いよ。」

「・・・！・・・」

「もう大丈夫だ。さ、僕と一緒に逃げよう。」

「う、うん・・・／／／！！」

マサヨシは涙を浮かべながら、自分を助けに来てくれたユーノの姿に喜びを表し、そのままユーノに抱えられるとその大きくと少し焦げ臭い羽織に顔を沈めた。

ユーノはマサヨシをしっかり抱えると、険しい表情を浮かべながら瞬時に移動ルートを導き出す。

「（あまり時間をかける訳にはいかないな・・・・・最短距離で逃げなきゃ。何が何でもこの子供は死なせてたまるか！）」

ユーノは全速力で炎の中から走り出すと、導き出したルートに従って外へと向かって行った。

一方、外の方では応援に駆けつけた機動六課前線メンバー一同が各部署と協力して人命救助に当たっており、はやてもまたリィンと共に部隊指揮に当たっていた。

「２３、４３、東側に展開してください！魔導師陣で防壁張って、燃料タンクの防御を！」

「はやてちゃん、ダメです！ＡＭＦ濃度が高くて、防壁がもちません！」

「そやけど、言ってても何も始まらへん。今は出来るだけの事をして持ち堪えるしかないんよ。頑張ろう。」

「はい！」

はやてはリィンにそう言うと、リィンもまたその言葉にうなずき持ち場へと戻っていく。

そして、そんなはやての頭上ではなのはがバリアジャケットに身を包んで地上本部からの指示を受けていた。

『航空魔導師、機動六課スターズ１、応答願います！』

「こちらスターズ１、高町なのはです。」

『６番ゲート付近に、要救助者の反応が出たんですが、局員が進めないんです。お願いできますか？』

「６番ゲートですね。レイジングハート！」

〈Ｅｘｉｔ　ｒｏｕｔｅ　ｓｅａｒｃｈ．　Ｗｉｌｌ　ａｒｒｉｖｅ　ｗｉｔｈｉｎ　ｔｗｏ　ｍｉｎｕｔｅｓ．（ルート捜索終了。２分以内に到着します。）〉

「直ぐに向かいます。」

なのははルート検索を終えると、ユーノを助けたい一心と局員としての使命感を全うするために最高速で建物内部へと向かって飛んでいく。

はやてはその間に部隊指揮の方を続けていた。、

「そのまま南へ！」

と、その時はやての元に１０８部隊のゲンヤ・ナカジマが駆け寄って来た。

「八神！」

「ナカジマ三佐！」

「すまんな、急に呼び出しちまって。」

「いえ。それより、一体またどうしてこんな？」

はやては訝しげな表情でこの大参事が起こった理由を尋ねる。

「ああ。どうやらこの建物の中に、何だかとんでもなく危険な物質が保管されてたらしくてな、その保管庫のシステムがさっきの地震の影響で異常が起きちまって、一回の爆発があってから誘爆が続いてあっと言う間にこのざまだ。」

「そうですか・・・あの、部隊の現場指揮をお願いできますか？私も空からの消火に参加します。」

「了解だ。だが何分ＡＭＦ濃度がやたら高い。消火作業もそう簡単にはいかんと思うが、何とかやってくれるか？」

「勿論です。いくで、リィン！」

「はいです！」

はやてとリィンは部隊指揮をゲンヤに任せると、ユニゾンをした状態で騎士かっちゅに身を包み空へと駆け抜けていった。

はやてが空へと昇って言ったその頃、マサヨシ以外に建物内部の方で取り残されていた要救助者はバリアを張ってその場をしのいでいたが、それも些か限界に近い状態だった。

「「げっほ！げっほ！」」

と、その時壁を突き破って災害救助のプロフェッショナルであるシルバーのエースこと、機動六課スターズ３のスバル・ナカジマがやって来た。

「管理局です！あの、返事をしてくれませんか！？」

「ここです！」

スバルは声を聞くと、すぐさま要救護者の元へと急いだ。

「もう大丈夫ですから！安全な場所まで一直線です！」

スバルは笑顔でそう言うと、要救護者を抱えて急いで内部から脱出

する。

同じころ、吉良・ルキア・白鳥の死神三人と亀井浦太郎は水流系の鬼道と魔法を発動させて道を作ろうとしていた。

「「「破道の八十二『爆水弾』！」」」

「クラーケントルネード！」

四人の凄まじい勢いを秘めた水が目の前の炎を一瞬で消し去り、突破口が開かれるとルキアは恋次と鬼太郎にこう言った。

「恋次！鬼太郎！今がチャンスだ！」

「急いで中の方に！」

「おし！行くぜ鬼太郎！」

「了解だ！」

恋次と鬼太郎は要救護者の救出の為に四人が作った突破口を潜って中へと突入していった。

なのは達がそれぞれの場所で人命救護に勤しんでいる間、一緒に現場について来ていた銀時達は離れた場所で騒然とする現場の雰囲気の中炎が上がる建物の様子を窺い、新八が不安げな表情でこう言った。

「銀さん！ホントにこの中にユーノさんが！？」

「ユーノ、何でまたこんな無茶を！？」

「あいつ・・・まさかあの時の事故の事を引きずって・・・！」

危惧の念を抱く銀時。

すると、歯がゆい気持ちになった近藤が真選組の二人に次のような指示を仰いだ。

「く！俺達も出来るだけ協力するんだ！トシ、総悟！お前らは局員と協力して避難経路の確保を急げ！逃げ遅れた人々を誘導するんだ！」

「「了解！」」

土方、沖田の二人は近藤の指示に従い逃げ遅れた人々の誘導へと向かった。

一方、その頃建物の中に向かったフェイトは障害物を突破しながら要救護者の反応が確認された場所を目指して前進していた。

「この近くのはずだけど・・・」

周囲を散策するフェイト。

すると、その時目の前の螺旋階段の方で身を小さくするおびえる少女を発見する。

「見つけた。そこの子、じっとしてて！今助けに行くから！」

「た、助かっ・・・！？」

と、少女がフェイトの声を聞いて安どの声を漏らした瞬間、螺旋階段は崩壊し少女は真っ直ぐに地上数百メートルから落下していった。

「きゃあああ！！」

「！」

〈Ｓｏｎｉｃ　ｍｏｖｅ〉

フェイトは咄嗟にソニックムーブを発動させ、ギリギリのところで少女を救いだししっかりと手の中に少女を収めた。

「危なかった・・・ごめんね。遅くなって。もう大丈夫だよ。」

「はい・・・！」

少女はフェイトにそう言うと、安心したのか思わず涙を流した。

フェイトは少女を救出し、外へ向かって飛行していると丁度その時通信画面でヴィータからの連絡が入った。

『こちらスターズ２。北側の要救護者を無事確保。スターズ１、３、４、５、ライトニングのフォワードの方も同様だ』

「うん。こっちも無事に女の子を救助。救護隊の方に引渡して、直ぐに別な箇所に回る。」

すると、そんなフェイトの言葉を聞いた恋次と鬼太郎が別な場所で

発見した要救護者を抱きかかえながらこう言って来た。

『おっと、俺達がいるのを忘れてないか？』

『こっちもこっちで救助は完了したぜ。』

それを聞くと、フェイトも思わず表情を和らげる。

「はい。ありがとうございます、恋次さん。鬼太郎さん。」

前線メンバーの活躍により、着々と人命救護が進む中、部隊長の八神はやては空にあがり夜天の魔導書を広げながら詠唱を唱えていた。

「“仄白き雪の王、銀の翼以て、眼下の大地を白銀に染めよ。”」

詠唱を完了させたはやて。

シグナムは指定ブロックの避難を完了させると側に近寄りこう言った。

「主はやて。指定ブロックの避難が完了しました。いつでもいいです。」

「了解！来よ、氷結の息吹―アーテム・デス・アイセス！」

はやての使う広域凍結魔法、氷結の息吹―アーテム・デス・アイセスは術者の周辺に発生した４個の立方体から氷結効果を放つ消火作業用にはもってこいの魔法だが、リインとユニゾンしていないと微調整が困難なようで、余波を浴びることもざらにある。

今回はその心配はなかったものの、広範囲に広がっていたＡＭＦ濃度の高い全体に降り注いだそれはなかなか広がらず、消火作業が思った以上に難航した。

「やはり、ＡＭＦ濃度が思った以上に高いようですね。」

「そやな。リィンがいての魔法でもこのざま・・・なかなかに手ごわいな。せやけど一度の挑戦で失敗したからと言うて諦める訳にはいかへんよ。二度で駄目なら三度でも、私はやるで！リィン、次行くよ！」

〈はいです！〉

はやてはそう意気込むと、次の発動の為に準備に入った。

その頃、建物内部で未だ移動中の見であったユーノはマサヨシ少年を背中に抱えた状態で肺に入ってくる煙に咽かえりながら必死で走り続けていた。

「げっほ！！げっほ！！くそ・・・！！」

「お兄さん！大丈夫ですか！？」

「これぐらい平気だよ・・・もう少しだけ頑張るよ！」

「は、はい！」

ユーノがそう言うと、マサヨシも頷きそのままユーノと共に脱出を急いだ。

すると、マサヨシは唐突にユーノに向かってこんな言葉をぶつけてきた。

「あの！」

「何だい？」

「お兄さんは、管理局の魔導師さんなんですか？」

マサヨシがそう言うと、ユーノは暫くの間を置いてから徐に返事をする。

「・・・いや。ただの通りすがりの考古学者。」

「え？じゃあ、管理局の人でもないのに何でこんな・・・！？」

不審に思うマサヨシ。

すると、そんなマサヨシに向かってユーノは過去の悲惨な経験から得た一つの決意の表れを口にする。

「・・・“手が届くのに手を伸さなかったら死ぬほど後悔する。それが嫌だから、僕は手を伸ばすんだ”・・・」

「――――――」

意味深なユーノの言葉に思わず目を開くマサヨシ。

そんなマサヨシの心境とは裏腹に、ユーノは目の前の光景に焦りを感じていた。

「くそ・・・！火が思った以上に大きい・・・！これじゃ進むにすすめ・・・！？」

と、その時だった。

突然建物内部で大きな物音が聞こえ、マサヨシやユーノは思わず耳を傾けた。

「え！？何、この音！？」

ユーノも警戒しつつ脱出を急いでいると、その直後燃料タンクが爆発したことで漏れ出した多量の貯水タンクの水が一斉に流れ出してきた。

「は！」

それとほぼ同じころ、要救護者のほぼ全員を無事に救出したなのは達機動六課の面々は救護者リストを確かめていた。

「西側の要救護者を確保！これで全員ですか！？」

「いや、あと一人残ってる！」

局員のその言葉に思わずはっとする前線メンバー。

そう、あと一人ユーノが救出に向かった少年マサヨシが残っていた。

近くにいたマサヨシ少年の母親は思わず声を上げ、父親は救出に向かったユーノの姿も見受けられないことに気づく。

「マサヨシ！！」

「そう言えば、あの緑色の人も中に！」

「！ユーノか！？」

「そ、そんな！！！」

動揺を見せる前線メンバーと銀時達。

なのははかなり焦った様子でユーノ救出の為に飛び出そうとしていた。

「直ぐに私が向かうよ！みんなは、ここで待って・・・」

と、その時そんな全員や現場の人間の元に大きな物音が聞こえてきた。

警戒態勢となる現場の人間。

すると、銀時は目の前の光景を見た瞬間表情を凍りつかせこう言った。

「！おい・・・これちょっとマズいんじゃねぇか・・・！」

「え？」

何と、貯水タンクから漏れ出した大量の水の勢いと爆発によってビ

ルが真っ二つに崩落を始めたのだ。

「く、崩れるぞ！！」

「一旦離れるんや！！」

急いでその場にいたもの達は自分の命を最優先にして崩落するビルから距離を取った。

真っ二つに折れたビルは地響きを鳴らすと海上の方へと倒れ、その衝撃で海の水が津波のように陸へと押し寄せ、多くのものが流されていく。

難を逃れたなのは達であったが、それは同時にユーノと少年マサヨシの安否がほぼ最悪の結果を招くことにつながった。

「そ・・・そんな・・・！」

「ウソだろ・・・！」

「マサヨシ・・・！」

マサヨシの母親は力が抜けてその場に沈み込み、なのはもまたレイジングハート片手に取り残されたユーノの名前を口にする。

「ゆ、ユーノ君！！！！！！！！！！！！！」

なのはの泣き叫ぶ声が現場に響き渡る。

と、その時ヴィータが煙の奥から見えてきた人影に思わず声を上げ

た。

「！おい、あれ見ろ！！」

「「！」」

なのは達が一様にその煙の中の人影に目を向けると、人影は徐々に鮮明にその姿を現し容姿を見せると、全身爆炎で黒に染まった体のまま子供を抱きかかえ走ってくる。

そして、破損したパイプから噴き出る水で汚れを落とすと、現れたのは満身創痍のユーノ・スクライアとその腕に抱えられた少年マサヨシだった。

マサヨシは救出されると、唖然とする目の前の母と父の姿に声を上げた。

「お、お母さん・・・お父さん・・・！」

「マサヨシ・・・マサヨシ！！」

母親は無事な我が子の姿を見ると涙を流しながら駆け寄っていった。

「お母さん！！！お父さん！！！」

マサヨシもまたそんな母親に向かって走り出し、なのは達の方は駆け出していくマサヨシを見ながら何も語る様子のないユーノへと目を向けた。

「ユーノ君！！」

「ユーノ！」

「「「店長！」」」

「「「「「ユーノ先生！！」」」」」

マサヨシはよっぽど嬉しかったのか、大粒の涙を見せながら自分の母親と父親の待つところへ全速力で走りだし、そして飛びついた。

「お母さん！！お父さん！！」

「マサヨシ！！」

母親であるその女性は我が子をもう二度と放さないという思いで固く抱きしめた。

「わあああ！！怖かったよ！！！」

マサヨシは急に襲って来た恐怖に駆られ、思わず涙を流して泣き出した。

「マサヨシ・・・！！よかった！ホントに無事で・・・！」

「ごめんなマサヨシ！一人にしちゃって・・・！」

両親が揃ってマサヨシの無事を確認しつつ、謝罪の言葉をかける。

すると、徐に満身創痍のユーノが近づきこう言った。

「・・・多少の擦り傷はありますが、身体は何処も異常ありませんので。」

「「ありがとう!!ありがとう!!」」

両親は命を懸けてマサヨシを救ってくれたユーノに深く感謝をする。

「ありがとうお兄さん・・・!僕いつかお兄さんみたいな立派な大人になるよ・・・!」

マサヨシもまた助けてくれたユーノに感謝の意を込めそう言葉をかけると、ユーノは自嘲した表情でこう言い返した。

「・・・そうか。だけど僕を見習うのは止めておきなよ。」

「え?どうして・・・」

「・・・“こんな無鉄砲で危険な無茶をして、周りに心配をかける人”を立派とは言わないからだよ”・・・」

ユーノはそう言い残すと、マサヨシたちに背を向け満身創痍の体のまま立ち去っていく。

ユーノがその場を立ち去ろうと歩き出すと、ちょうどその時目の前になのは達が現れ駆け寄って来た。

「ユーノ君!」

「!?なのは・・・」

なのはは肩で息をしながら、目の前でボロボロの姿となっているユーノを見て悲痛な顔を浮かべてこう言った。

「ユーノ君！ああ、こんなにボロボロになって・・・どうして・・・！？そんな火傷まで負って・・・なんで！！」

なのはがそう言うと、浦太郎もまた訝しげな様子でユーノの行動に疑問を抱いた。

「店長・・・何もそこまでして・・・」

そんな事を二人が口にすると、ユーノは毅然とした態度で返事をしてきた。

「・・・目の前で苦しんでる人を放っておけるわけないよ・・・あの子はあのまま中に閉じ込められていれば、間違いなく炎に巻き込まれて二度と家族と会うことは出来なかったはずだ・・・！一人ぼっちがどれだけ苦しいか、寂しいか・・・そんな思いをさせたくなかった・・・家族との時間を奪いたくなかった・・・！」

「「「「「！」」」」」

思わず絶句する前線メンバー一同。

と、そんなユーノの発言を聞いた途端涙ながらに目の前のなのはこう言った。

「・・・傲慢だよ・・・そんなの・・・勝手すぎるよ・・・／／／！！！」

「！」

思わずユーノも目を開いて驚き、なのはは顔を上げるとそんなユーノに向かって声を上げてきた。

「どうして他人の命は救おうとして、自分の命は無視するの！！」

「そんな・・・僕は死ぬつもりだった訳じゃ！」

と、ユーノがそう言った直後唐突に銀時の叫びが聞こえてきた。

「それが軽いんだよ！」

「「！」」

突然の銀時の怒鳴り声にユーノやなのは、更には近くにいた新八たちが驚愕する。

「銀さん・・・」

「死ぬつもりならいいさ。懸ける命の重さを分かってるからな。今のお前は懸けてさえいねぇ。昔はちゃんと懸けてたのに――――――そうだろ？」

「・・・――――」

銀時の意外な発言に言葉を詰まらせるユーノ。

銀時はその後ユーノに向かって徐に一護から聞きされたあの内戦での出来事を語り出す。

「ユーノ・スクライア。ユーノ――――――人一倍献身的で心優しい青年はある時アフリカの内戦に巻き込まれ、その戦火の中で大切な友人を目の前で失い、それ以降自分への欲が乾いちまい、命を顧みなくなっちまった。」

「！銀さん・・・何であなたがそれを！！」

教えたわけでもないのに自分の過去を知る銀時に非常に驚くユーノだが、直ぐにフェイトが申し訳なさそうな表情で説明してきた。

「ごめん、ユーノ。さっき一護さんが通信して来た時に一護さんが私たち全員に話してくれたの。」

「・・・そっか・・・一護さんが・・・」

一護が話してくれたという事実に一瞬驚くユーノだが、それでも納得した様子となって顔を沈めていると、なのはが声を押し殺しながらユーノに言葉を投げかける。

「ユーノ君、どうしてそこまでしないとならないの！？そこまでして人を助けないといけないの！？使命感なら兎も角、ユーノ君がやってるのは単なる“善意”なんだよ！！ユーノ君はいっつもそう・・・他人ばかり気遣って、自分の事は一切顧みない・・・！！私・・・そんなユーノ君を見るのはもう堪えられない・・・！！」

「なのは・・・」

なのはがそう言った直後、聞いていた恋次も便乗して更にこう言った。

「ユーノ。前にサスケの野郎に今と似たようなこと言ったよな。“自分の命を軽く見るな”って。だがそのお前が自分の命を軽く見てどうするんだよ！お前は、この場にいる誰よりも頭が切れる管理局一の頭脳を持った男なんだぞ！そんな奴が、何でこんなバカなことをしやがる！」

「恋次・・・さん・・・」

「ユーノ先生・・・」

「ユーノさん・・・」

この場にいた全員が辛い表情でユーノの方をじっと見つめる中、ユーノはこれまでの事を思い出しながらふとこう語り始めた。

「・・・僕は旅の途中、色んな人の死をその目で目撃してきた。戦争に巻き込まれて死んだ人・・・餓死や伝染病と言ったものもあった。そして、自分自身が敵として斬ってきた命もある・・・」

「！あ・・・」

「ユーノ・・・」

「僕がこの手で掛けた命の重さ・・・それだって馬鹿に出来ない・・・！どんな形であれ、命を奪う以上の罪はこの世界には存在しない！だから自分がいつ奈落に堕ちるかその覚悟は遠の昔に出来ているし・・・命を奪ってる身だからこそそんな自分でも救えるはずの命は出来るだけ救いたい・・・・・・！だけどそれは悉く裏目に出て失敗していく・・・貧しい国に募金をしてたつもりが、悪い連中に

使われちゃってたり・・・酷い時は内戦の資金になってたりしたこともあった・・・」

「！」

驚愕の表情を浮かべるなのは達を余所に、ユーノはあの忌まわしき内戦の日の出来事を思い出す。

「あの日も・・・僕は村の人達と一緒にどうにかしようとした・・・でも・・・でも・・・内戦はどんどん激しくなるし・・・食料もなくなって・・・僕は魔法も使えずボロボロで・・・情けなくて・・・村で一番最初に仲良くなったあの子を・・・ユウを助けられなかった！」

「ユーノ君・・・」

その瞬間、ユーノの眼から一筋の涙がこぼれる。

「・・・手が届くのに伸ばさなかった時が死ぬほど後悔する・・・僕はそれでもう後悔するのは嫌なんだ・・・！たとえそれが間違いだったとしても、僕は・・・目の前で苦しんでる人を放っておくなんてことは絶対に出来ない！！」

これがユーノの見出した一つの答え。

全員はそんなユーノの言葉に黙って耳を傾ける。

と、その時なのはは辛い気持ちをずっと抱えるユーノの手を優しく包み込むように握りしめる。

「？」

なのはの行動に思わず疑問符を浮かべるユーノだが、直後なのはは同じように涙をながらしながらユーノにこう言った。

「だからって、そうやって自分を苦しめ続けてたら、誰かを救う前に・・・その前にこのままじゃユーノ君の方が先に壊れちゃうよ！！」

「！なのは・・・！」

「ユーノ君・・・私・・・ユーノ君の気持ちが分かるなんて言えないけど・・・でも手を伸ばすことは出来ると思う！ユーノ君が辛いときは、私がユーノ君の手を掴む！だからお願い・・・！！これ以上、自分を傷つけないでよ・・・！一人で・・・背負わないでよ・・・！！！」

「・・・！」

ユーノはこれほどまでの涙を流して自分の身を案じるなのはの姿に返す言葉見つからず呆然と立ち尽くす中、そんなユーノの事をなのはと同じ様な気持ちで見つめる前線メンバーと銀時達の姿が映ってきた。

「ユーノ・・・」

「ユーノさん・・・」

「ユーノ先生・・・」

すると、そんなユーノの元に銀時が徐に近づき真顔で肩を叩きながらこう言って来た。

「ユーノ。おめぇが何を抱えて苦しんできたか・・・俺達はユーノ・スクライアじゃねぇからよく分からねぇ。が、“他人に迷惑をかけることは悪いこと”だと決めつけちまうのは些か早とちりじゃねぇのか？」

「え？！」

「悲しい事や辛い事がたくさん起こって、前向きになんてなれないこともある・・・そん時は気負わず横でも向いてみろ。おめぇの周りにはいろんなもんがついてるぜ。なのはも。恋次も。俺も。だから俺達みんなで前に進めばいいじゃんか。一人で歩いていても、つまんないもんだぜ。」

銀時のその言葉を聞き、ユーノは一度自分の周りを確かめてみた。

ユーノの周りには銀時の言う通り、なのはを始めとする面々が自分に向けて挙って目を向け心配した表情を浮かべていた。

ユーノはその光景に思わずうれし涙を流すと、最後にこう言った。

「・・・・・なのは・・・銀さん・・・みんな・・・ありが・・・と・・・・」

と、言いかけた瞬間ユーノは力尽き意識を失い倒れこんだ。

「！ユーノ君！？」

「「ユーノ！！」」

ユーノはその場に倒れこむと、そのまま動かなくなった。

「ユーノ君！しっかりして！しっかりして！！ユーノ君！！」

全員がユーノに駆け寄り、安否の確認を急いだ。

幸いにもユーノは気を失っているだけのようではあったが、この時見ていた銀時は思った。

“こいつは誰よりも幸せな男に違いない”と。

辛い時、そんな時は横でも見てください（後書き）

教えて、ユーノ先生！

ユ「今日は昨今社会問題となっている原子力エネルギーについてのお話だ♪」

ユ「原子力（げんしりょく）は、原子核変換により得られるエネルギー（核エネルギー）のこと、またはそのエネルギーを動力源を指す。核燃料であるプルトニウムなどを利用して比較的低コストでエネルギーを作り出すことから現代では発電所のネルギーとなっているが・・・」

一「ついこの前の大地震の所為で炉心溶融（メルトダウン）が起きちまって・・・大きく揺れ動いているよな。安全性の問題とかで・・・」

石「恐れていたことが起きてしまったようだ。だから日本はいかんのだよ。」

一「つうか、お前がそんなこと言うとちょっとムカつくのはどうしてだ？」

石「な！き、君に言われたくないんだよ！そんな派手な髪した君にね！」

一「んだと！！これは地毛だって何千回言ったら気が済んだよもやしメガネ！」

石「もやしメガネではない！やめてくれないかそのニックネームで呼ぶのは！」

二人はその後も互いの相違を比較しながら罵り合いを続け、その光景を見ていたユーノや銀時達はと言うと。

銀「おいおい。原発についての糞まじめな談義はどうしちまったんだよ？」

ユ「あはは・・・ああなっちゃったらどうしようもありませんね・・・と、兎に角。利益を追求した余り、先に起こる危険性を考慮しなかった原発推進者全員に告げる！今すぐ考え直せ！そして東電！被災者にちゃんと謝れ！！」

魔導師図鑑ハイパー！

アニメ銀魂を再開して、銀魂にゆかりのあるキャストがゲストを交えて楽しく談笑していた。

新「いや～～～アニメ銀魂も再開してこれからますます忙しくなってきそうですね。」

神「油断はできないね。大人は原作のストックなくなったらすぐに休止してくるに決まってるね。」

銀「あ～あんなことになったら流石に俺も引くわ～～その点で言えばＢＬＥＡＣＨはいいですな。原作の進みとアニメじゃ全然違うから。新しく始まった新章で時間稼ぎできるんですから。」

一「いや。実際あれもあれでかなり痛いと俺は思うぜ。純粋に原作と分けて見ればどうってことないけど、スタッフもスタッフでよくやるって感じだ」

ル「とどのつまり、結局利益の為ならテレビスタッフはどんなことでもやるというわけだ。」

ユ「番組が終了しても尚、なのはだったらコンプエースとか娘マガジンの付録にエロいポスターとかつけてマニアの気を引こうっていう魂胆があるくらいですからね。」

土「くだらねぇな。しかも同性愛をはぐらかすその内容に俺は最近嫌気すら感じて来たぜ。断言する。男女の割合が不釣り合いな漫画は必ず破滅する。」

沖「じゃあ、自然そうなる前に俺達がリリカルなのはをぶっ壊しましょう。と言うわけで次回からは『危険青年サディスティック総悟』がスタート。次回のコンプエースの表紙は貰ったぜ。」

な・フェ「そんなものありませんってば！！！！！！」

次回予告

再び別世界でプリズムシードの反応が確認され、ユーノと一緒に選ばれたなのは達は捜索に乗り出す。

そして、プリズムシードを狙ってテトラカトゥーン、うずまきナルトとまたも明神弥彦がユーノ達の前に立ち塞がる。

ル「次回『言葉で語れない魂の叫び』」

言葉で語れない魂の叫び（前書き）

めっちゃ更新遅れました。

ホントすみませんでした・・・・・・！

と言うわけで今日は連続投稿です。

言葉で語れない魂の叫び

これまでのユーノ・スクライア外伝は――――――

次元漂流者、坂田銀時を始めとする六人を保護した機動六課は聖王教会からの指令を受け、プリズムシードの回収に当たり、その過程でユーノは逆刃刀を持つ剣士、明神弥彦と会いまみえ、回収したプリズムシードは護送中漫画キャラによって強奪されてしまう。

そして明かされたユーノの悲しき過去と彼が捨て去った己への欲望。

なのは達は、そんなユーノの過去を知りその辛さを分かち合うためにユーノを自分たちが必ず護るという誓いを固く決心するのであった。

ミッドチルダでの災害救助活動を終えたその日の夜、機動六課へと帰還した前線メンバー一同は報告書作りと事故処理の事で各部署との対応に追われ何とかそれを終わらせた。

処理の後、恋次達死神組の三人は今回の災害に関しての事と、その災害で相も変わらず命を賭し、子供も命を救ったユーノの事を通信で一護に報告していた。

一護は三人からの報告を受けると、何やらいつも以上に眉間に皺をよせ徐に呟く。

『そうか。そんなことがあったのか・・・』

「ああ。今は落ち着いてぐっすり眠ってる。精神的にも、肉体的にも今のあいつはボロボロだ。少しは休ませてあげないと身がもたないぜ。」

この時、そう口にした恋次も一緒に居たルキアと吉良も表情は浮かないものだった。

『すまねぇなお前ら。あいつのこと、任せっきりで。』

「貴様が気に病む事ではない。ユーノ殿は人一倍献身的で、責任感が強すぎる。だから自分を酷使してしまう・・・貴様がそばにいない分、我々がユーノ殿を護っていくさ。あの方は、私達が思っている以上に辛い過去を背負って生きているのだからな・・・――」

『そうだな――――――（尤も、その辛い過去ってものの中に・・・あと一つ、壮絶な苦しみが残ってるんだけどな――――――）』

一護は心の中でそう呟くと、ユーノが背負う最も強い苦しみ、即ち背中に刻まれた呪印の事を気にかけ、一通りの報告を済ませると三人と通信を切った。

三人は一護との通信を終えると、機動六課の前線司令室へ向かって廊下を歩いていた。

「一護も一護であいつのこと心配してるんだよな・・・」

「あんな男でもユーノ殿の師匠には変わりはないからな。弟子の心配をするのは当然とも言える話だ。」

「だけど、このままでいいのかな・・・」

吉良が不安げな表情でユーノの今の現状を指してそう口にすると、すかさず恋次が口をはさんだ。

「いいわけねぇだろ。あいつは俺達が幾ら言ったところで聞く奴じゃねぇんだ。身体が壊れるまであいつは永遠に戦い続けるぜ。そう

――――――ただ只管に目の前で苦しむ奴がいる限りな。」

「あの性格は私達が治せるようなものではないな。」

「ああ。少なくとも、あの頑固さはなのはさん以上だ。」

確かに、吉良が口にしたことはまさしくその通りだ。

今のユーノは目の前で苦しむ誰かを救う為、他人の幸せを守るためならば自分の命すらそのための手段として平気で利用してしまうのだから。

そして何よりも肝心なのは、なのはや他の人間とは違いその己にある力を今の自分を今以上に良くしたり、改善しようとすると言った自己への欲求や執着の為に使うものではないということだ。

「欲を捨ててまで、あいつは誰かを救うために自分を犠牲にしてきた。だが、そんなことを続ければ、本当に――――――」

「そんなことはさせぬさ。我々の力で何ができるかは知れてるが、この機動六課にいる間は我々がユーノ殿を守る。あんな立派で偉大な人間が一人失われれば、多くのものが涙を流す。」

「そうだね・・・・・お？」

と、ルキアの言葉に相槌を打った吉良はその時、司令室の方で今回の災害の事とは別に大量の書類と事務処理に追われる機動六課の前線メンバー一同とその手伝いをしている万事屋と真選組の六人の姿に目がいった。

「お前ら・・・何やってるんだよ!?今日の事故の処理は一通り済ませたんじゃねぇのかよ?」

訝しげな表情を浮かべる恋次達。

そんな三人の声を聞くと一様にその場にいた全員が振り返り、フェイトが書類を抱えながらこう言って来た。

「恋次さん。みなさんも。実はみんなで、今日のユーノの仕事を手分けしてやってるんです。」

「あいつの仕事を?」

「銀さん達も手伝ってくれるというのかい?」

吉良がそう口にして銀時の方を見ると、銀時本人は何やら応援と書かれた団扇とポンポンを持った状態であった。

「俺は生憎事務処理は苦手だ。だからこうして応援することぐらいしか俺には出来ねぇ。」

すると、妙にというか全然応援する様子さえ見せないでいる銀時の怠惰な姿に近くにいた土方の怒りが爆発する。

「だったらもうちっとマシな応援の仕方があるだろうが、あ!」

「んだと!おめーこそもうちっと応援される側なんだからありがとうの一つや二つ言えやコラ!」

「ふざけんな!誰がてめぇなんかに感謝なんかするかってんだ!!」

またしてもつまらぬ言い争いを勃発させた二人。

そんな二人の間に入って近藤と総悟が止めにかかる。

「おいおい、二人とも！何をやってるんだ！これじゃいつまで経っても片付かないぞ！」

「土方さん。俺だって不本意ながらこうしてやってるんでっせ。副長のアンタがそうして子供染みた真似ばかりしちゃいけねぇよ。」

「う、ウルセーよ！俺だって好き好んでこんな奴と喧嘩なんかしたくねぇって！」

「こんな奴とは何だ！ああ！」

その後も二人の喧嘩はエスカレートをしていき、見ている側の前線メンバーは非常にあきれ返っていた。

「やれやれ・・・相変わらずの困った者たちだ。」

「あいつらはほっといてさっさと仕事済まそうぜ。」

「とは言っても・・・流石にこの量はちょっと・・・」

スバルがヴィータの言葉に反応して苦い表情で目の前の一向に終わりそうにない大量の理書類に目を向けると、執務官であり事務処理全般はそつなくこなすはずのティアナや他のフォワード陣も一様に苦い顔となった。

「私も、正直捌ききる自信が湧いてきません・・・」

すると、その時新八は頭から白い湯気のようなものを出しているギンガの事が気にかかり、思わずこう言った。

「あ、あの。ギンガさん大丈夫ですか？」

「は、はい・・・何とか・・・大丈夫です・・・」

スクライア商店メンバーも今改めて、ユーノが普段自分たちの知らないところでこのような苦労と重荷を担いでいるのかを実感する。

「店長、いっつもこんなバカみたいに沢山の仕事量を一人でこなしてたって思うと、ぞっとするよ。」

「と言うより、我々が店長に甘え過ぎていたということもありますな。」

金太郎のその言葉を聞くと、部隊長のはやてやクロノ、フェイトと言った幼馴染の三人は思わず暗い表情となる。

「そうですね。私も部隊長と言う身の上ながら、改めて考え直してみるとそうやったと思います。私らはまた、こうした何気ないところでユーノくんに負担をかけてばっかで、何一つ守れてなかったんよ・・・」

「だけどユーノは辛いとかそう言う感情をまるで顔に出さないから私達も全然気づかないし・・・ユーノ本人も自分の仕事を人に任せるような性格じゃないから。」

「人に頼れないのがあいつの最大の欠点だ。そう言った面では、まだまだ大人とは言えないな。」

「そう言うおめぇが一番大人じゃねぇんじゃねぇの、黒河童君？」

「ク・ロ・ノです！！」

銀時のその指摘を聞いた瞬間、怒りを露わにしながら自分の名前を訂正するクロノ。

そして、リィンはやって来た恋次達にも仕事を手伝ってくれないかと要求した。

「恋次さん達も出来ればこの書類の整理、手伝ってもらえませんか？」

「分かった。ルキア、吉良。三等分して片付けようぜ。」

「「ああ」」

こうして恋次達も含めた総勢３０人近くの前線一同がユーノ・スクライアの今日の残りの仕事を懸命に片付けようとしていたが、その先さえ見えないでいる膨大な仕事量に次々と弱音が飛び交う。

「うえええ～～～！！！駄目！！全然終わらないよ！！！」

「弱音を吐くんじゃないの。半分こっちに渡しなさい。」

「キャロ。頭から湯気が出てるけど、大丈夫？」

「む・・・無理っぽい・・・」

果たして、この仕事は本当に今日中に片付くのか？

その頃、一人だけユーノの看病の為その場を離れていたなのははと言うと、医務室のベッドの中で包帯を巻かれ、あちこちに傷跡や火傷を負ってしまった現在熟睡中のユーノの事を暗い表情で見つめていた。

「・・・――――」

すると、徐に医務室の扉が開き中に入ってきたのは娘のヴィヴィオだった。

「なのはママ・・・」

「ヴィヴィオ。」

ヴィヴィオはなのはの近くに寄ってくると、その隣に座って目の前で眠り続ける自分の父親のユーノの事を気にかけなのはに容体を尋ねる。

「パパの様子、どう？」

「うん・・・火傷とかはあったけど、今は落ち着いてぐっすりしてる。」

「・・・そっか・・・ユーノパパ・・・」

ヴィヴィオはいつものことではあるが、戦うごとに誰かを救うごと

に傷つき、そして倒れるユーノの姿に心が苦しくなるを感じた。

と、その時なのはは声を押し殺した様子で徐に自分の事を罵倒し始める。

「・・・ヴィヴィオ・・・私・・・ダメな彼女だよね？」

「え？」

「・・・私・・・こんな側にいるのに・・・ユーノ君の事・・・ちっとも・・・守れてない・・・！」

その瞬間、なのはの瞳から一筋の涙が流れ落ち、それが力んだなのはの手の甲に零れ落ちる。

ヴィヴィオはそんななのはを横で見ながら悲しい表情を浮かべる。

「ママ・・・」

なのははその後、両手で顔を押さえると自分が常日頃思っていたユーノに対して何もしてあげられない自分への怒りと悲痛な思いを赤裸々に漠とする。

「私・・・自分が悔しい・・・！ユーノ君は自分の体を盾にしてでも私やみんなを守ってくれるけど、私は何一つユーノ君の事、守れた覚えがない！いつもそうだった！お蔭でユーノ君ばっかりが傷ついて、苦しんで・・・こんなになるまでボロボロになって・・・！！」

「・・・・・・」

「もう嫌！私・・・もっと強くなりたい・・・！私が強かったら、ユーノ君の事守れるのに・・・！誰にも負けないぐらいの強さがあれば、ユーノ君が傷つかなくてもいいのに・・・だけど・・・私は・・・！」

そんな心の心境を口に出した直後、唐突になのはの頭の上に何か優しいものが触れてきた。

「！？」

なのはが両手を開いてそれを確かめてみると、頭の上に乗っていたのは愛娘の小さくも非常に優しい掌だった。

「ヴィヴィオ・・・？」

思わず驚くなのは。

そんななのはに向かってヴィヴィオは慈愛に満ちた表情でこう言った。

「泣かないで。そんなに泣いてたらパパだって悲しくて泣いちゃうよ。」

「！」

「私は・・・ママとパパにはずっと笑ってて欲しいんだ。そりゃ、悲しいことが続いて笑えないときだってあるかもしれない。だけど、それでも私は二人に笑っていてもらいたいの！なのはママとユーノパパの笑顔で、少なくともここにいるみんなは一緒に笑顔を浮かべ

てくれるし、幸せにだってなれる。だから・・・もう泣かないで。いい子、いい子。」

ヴィヴィオはそう言いながらなのはの頭を優しく撫ではじめた。

「・・・ヴィヴィオ・・・あ、ありがとう・・・ヴィヴィオ・・・！！」

娘の優しさにこれまで幾度となく救われてきたなのはは、込み上げてくる感謝の念に思わず嬉しさ涙を浮かべヴィヴィオをそっと抱きしめその胸の中で声を押し殺して鳴き声を上げるのであった。

「ううううううう！！！」

ヴィヴィオは目の前の母親が泣きじゃくる姿に少々心が曇り中、今度は自分の父親の姿を目の当たりにすると心の中で次のように語った。

「（私にはこんなことしかできないけど、気持ちはなのはママと一緒だから。ユーノパパ・・・あんまり一人で背負い込んでいると、いつか本当に自分が壊れちゃうよ。そんなことは何が何でもさせない！ユーノパパは・・・私やママたちが必ず守る！）」

今日この日、機動六課にいる誰もが翡翠の魔導死神ユーノ・スクライアを必ず自分たちが護り抜くという固い決心をするのであった。

これはユーノと時間を共にする中で全員の心に芽生えた共通意識であった――――――

その日の事故から二日後、アンゴルモア捜査とカトゥーンに関する

動向を引き続き探り続けていた機動六課であったが、偶には休暇も必要だというクロノの起点によって、はやてを含む前線一同は全体休暇を取ってミッドに新しく建てられた温水プール場へと足を運んでいた。

「こちらがお子様用。これが大人用になります。失くさないよう、腕にお付け下さい。」

新装開店と言うことで大勢の来客が訪れる中、前線メンバーも水着に着替えるとそれぞれ自分の興味のある場所へと向かい、学校が休みだったヴィヴィオは新八・神楽と一緒にウォータースライダーへと向かい、今まさに滑り出そうとしていた。

「じゃ、しっかり掴まるんだよ。」

「はい！」

身体がすっぽりと入る浮き輪の取っ手に掴まり、ヴィヴィオは勢いよく水の滑り台を滑り落ちていく。

「わあああああい！！」

楽しそうに歓声を上げるヴィヴィオ。

その後ろから、神楽と新八が流れ落ちてくる。

滑る途中で自動的に撮影される写真の映像を下の方で見ていたなのはは、そんな愛娘のスナップ写真を透かさず購入する。

「ふふ。ヴィヴィオったら、すっかりはしゃいじゃって。すみませ

ん、この１２８番の写真、お願いします♪」

一方で、そんな楽しそうにはしゃぐヴィヴィオの後ろについて滑り落ちてくる神楽と新八はと言うと、神楽はヴィヴィオと同じく楽しそうに歓声を上げるが、新八だけは涙目になりながら絶叫していた。

「きゃっほおおおい！！！！」

「あああああ！！！！！」

先に滑り降りたヴィヴィオが近くで二人を待っていると、神楽が滑り下りた直後新八がバランスを崩して豪快に水の中に沈み込んだ。

「がっくん！！」

神楽はそんな新八の姿を見て思わず大笑いをする。

「でははははは！！新八何やってるアルか！？」

「大丈夫ですか、新八さん？」

ヴィヴィオが心配そうにそう声をかけると、水の中から新八が浮かび上がる。

「あ、うん・・・一応ね。」

と、その時新八に向かって銀時の声が聞こえてきた。

「お～い新八。そこ退け。」

「え」

直後、銀時がウォータースライダーを滑り落ちて来、新八の後頭部に銀時の両足が直撃する。

「ごっほ！！」

新八は後頭部に強い衝撃を受けると、再び水の中へと沈んでいった。

銀時は悪びれる様子もなく沈んだ新八にこう言った。

「だから退けって言ったろう？」

そんな銀時の言葉を聞き、新八は浮かび上がるや否や文句を言って来た。

「ちょ！酷いっすよ銀さん！！いま絶対狙ってやったでしょう！！」

「狙ってねぇよ。お前が早く退かないからそうなるんだよ。なぁ、お前ら？」

「そうアルよ。だからお前はダメガネなんだよ。」

「えっと・・・新八さん。ドンマイですよ・・・」

「ううううう！！！僕ってホントに不憫／／／／！！」

自分の不遇さに思わず涙を流す新八。

そんな四人の様子を少し離れたところで見守っていたなのはとフェ

イトの二人。

「にゃはは。ヴィヴィオも銀さん達も楽しそうだね。」

「来てみてよかったね。近くに温水プールが出来たからみんなで行って来てリフレッシュでもしろだなんて、クロノも粋な事言って。」

「はやてちゃんも久しぶりに羽を伸ばせて、満足そうだよ。」

なのははそう言うと、部隊長としての顔を捨て素の女の子として前線メンバーと楽しく遊んでいるはやてに目をやった。

「おっしゃ！ヴィータ、そっち行ったで！」

「おうよ！行くぞ恋次！」

「上等だ！ルキア、浦太郎！フォロー頼むぜ！」

「戯け。貴様に言われずともそのつもりだ！」

「僕に任せておけば全ては大丈夫だって。」

現在はやてはヴィータとチームを組んで、恋次・ルキア・浦太郎の三人を相手にビーチバレーを堪能していた。

スバル達は五人の試合を観戦しながら応援の言葉をかける。

「頑張れ、みなさん！」

「八神部隊長、ファイトです！」

銀時達はなのはとフェイトの方に近づいてくると、そんなはやて達の様子を見守り、ほくそ笑んでから銀時は呟いた。

「ま、偶にはいいじゃねぇのかこういうのも。」

「でも僕達までよかったんですかね？」

「いいよ。クロノが許可してくれたし。」

「そう言えば、真選組の三人は何処行ったんだろう？」

「近藤さんは多分沖田さんと一緒に飛び込みの競い合い、土方さんは久しぶりのニコチン接種だってずっと喫煙所ですよ。」

「プールに来てまでニコチン接種とは・・・あれは間違いなく肺はダークマターと化してやがるな。」

銀時が哀れとばかりにそう口にすると、聞いていたなのは達は苦笑いを浮かべた。

「え、えっと・・・それはちょっと言い過ぎなような・・・」

すると、唐突にヴィヴィオがなのは達に向かってこう言って来た。

「なのはママ。フェイトママ。スバルさん達の方に行こうよ。みんなで泳いだりする方がもっと楽しいもん！」

「そうだね。じゃ、行こうか。」

なのは達はヴィヴィオの言葉を聞き入れると、はやて達の集まる場所へと向かいそこで楽しく豪遊を開始。

新八はギンガと白鳥と一緒に素潜り競争を行い、見事新八が勝利を収めた。

「ぷっは！」

「やった！僕が一番だ！」

白鳥はプライドの所為か、新八に負けたことが余程悔しかった様子だ。

「くそ・・・！私が凡人風情に遅れを取るとは・・・何とも屈辱・・・！」

それに対して、ギンガは素直な気持ちで新八の事を褒め称える。

「凄いですね、新八さん。やっぱり鍛え方が違いますね。」

「ははは。そ、そんな・・・！ギンガさん達に比べれば全然♪」

ギンガに褒められ妙に機嫌のよくなった新八。

そんな新八に若干の怒りを覚えた銀時はそんな新八の頭を殴りつける。

「何赤くなってんだよお前は。」

「げっほ！」

一方で、なのはとはやてはスバル達や恋次達に見守られながらこの歳でバタ足の特訓を受けていたのであった。

「なのはさん、頑張ってください！」

「なのはママファイト！はやてさんももう少しです！」

スバルやヴィヴィオ達は決して馬鹿にすることなく純粋な気持ちで二人を応援するのだが、応援される側である現在バタ足もう特訓のなのはとはやては非常に気恥ずかしかった。

「う・・・娘や教え子たちの前で泳ぎの練習とは・・・／／／／」

「こんなことならもうちょっと小学校の水泳教室頑張るべきやったかな／／／」

そんな顔を赤くする二人を陰で笑う恋次や鬼太郎。

「くく・・・面白い光景だぜ。仮にも一部隊の隊長、部隊長が揃って泳げないとはな。」

「ま、泳ぐ機会なんてこのご時世そうないから別段日常生活に然したる意味はねぇしな。」

すると、講師役であるルキアが厳しく二人の足の使い方に喝を入れる。

「戯け二人とも！何だその足の動きは！もっとぴんと伸ばして前後の動きをはっきりさせぬか！」

「「は、はい！！」」

二人は男気あふれるルキアの厳しい指導の下、その後もバタ足の練習を続けるのであった。

すると、銀時は辺りを見渡し一緒に来ているはずのユーノがその場にいないことに気づいた。

「おい。そういやユーノの野郎は何処にいるんだよ？俺達と一緒に来てたはずだろ？」

「元はと言えば、ここに来たのはユーノ店長の心のリフレッシュが第一で我々はその序の様なものだからな。」

白鳥がそう言うと、ユーノの右腕である金太郎が現在ユーノが何処で何をしているのかその胸を伝えた。

「店長ならおそらく、あちらの方でゆっくり寛いでいると思われます。」

その頃、ユーノ・スクライアは何をしているのかと言えば、一人水着に羽織を身に纏いながら持ってきた小説を読みながらゆったりと寛いでいた。

「・・・――――」

ユーノが読書に没頭していたその時、向こうの方からなのは達の声が聞こえてきた。

「ユーノ君♪」

「パパ！」

「ん」

ユーノが声を聞き、目の前を見てみるとなのは達前線メンバーのほとんどがユーノの所に集まってきた。

「こんなところにいたんだ。ユーノ君も一緒に泳げばいいのに♪」

「ユーノパパは泳がないの？」

「僕はいいよ。泳ぐのはあまり得意じゃないから。」

「またまた♪店長ったらウソばっかり。よく一護さんと競泳して張り合ってたの僕ら知ってるんですよ。」

「う・・・バレてか・・・」

「運動神経抜群のくせして、俺達の前では泳がないってか？それとも、恋人の水着姿に興奮して、逆に何もできねぇのか？」

「ぎ、銀さん！」

銀時のおちょっくった発言に思わず顔を赤くするなのはだが、ユーノはそんななのはの水着姿を見ながら若干顔を赤くし徐に呟いた。

「あはは・・・まぁ興奮はしてるにしてますけど・・・／／／」

「ゆ、ユーノ君／／／」

このユーノの言葉にはなのはも流石に茹蛸のように全身を真っ赤にする。

そんななのはや他の前線のことを見ながらユーノは再び本に目を向けると次のように語った。

「どうも最近、体の疲れが溜まってましてね。動くのがちょっと億劫なんですよ。今日はこうして本でも読みながら静養するのが合ってるようなので。」

「そっか。ユーノ君がそうしたいならそれでいいんじゃないかな。ね、ヴィヴィオ？」

「うん。パパもしっかり体休めて、無理せず明日に備えようね♪」

「はぁい♪」

そんな訳で、ユーノは本日はゆっくり本でも読みながらプールサイドでの一日を堪能する・・・筈だったのだが。

「で・・・・・何で・・・・・・これはどういうことなのかな“なのはさん”・・・？」

ユーノはこの時の自分の状況に理性が可笑しくなりそうだった。

何故なら、現在ユーノは水着の恋人の御膝元耳掃除をしてもらっている最中だったからだ。

なのははユーノの耳掃除をする傍ら、きょとんした声色で返事をする。

「え？何って、耳掃除だけど・・・いやだった？」

「あ、あの・・・別に嫌じゃないんだけど・・・すごく周りの視線が痛いんですけど／／／／／」

ユーノはそう言うと、吹っ飛びそうな自分の理性と戦いながら周りから自分に注がれると嫉妬と怒りの目線に必死で耐えていた。

「気にしなくていいよ♪ほら、あまり動かないで♪」

なのははユーノにそう言うと、屈託のない笑顔でユーノを硬直させるとそのままユーノの耳掃除を続行する。

その甘々な光景を見ていた銀時は我慢できなくなり、憤慨してしまう。

「あんの淫獣フェレットが・・・！！！！マジぶっ殺す！！！」

乗り出そうとする銀時を必死で抑える新八・エリオ・ヴィヴィオの三人。

「ちょ！銀さん落ち着いてくださいよ！！！」

「そうですよ！許してあげてくださいよ！！」

「ママとパパの憩いの時間は壊さないで下さい、お願いします！」

「るせー！！！何だあれは！？ああ！！喧嘩売ってるのかコラー！！！」

怒り狂う銀時とは別に、吉良や恋次達の反応は大方こんな感じだった。

「毎度のことながらよくやるよねあの二人・・・」

「ユーノの奴は、かなり恥ずかしがってる様子だがな。」

「ま、格好が格好だけに仕方ねぇだろ。」

「いいな店長。僕もされたいな♪」

非常に羨ましがる浦太郎。

その隣で、野次馬心丸出しのはやてはスナップ写真を撮りまくり、フェイトの嫉妬の炎を肥大化していく。

「うしし！これはこれで高く売れそうわ！もっとバシバシ撮っておかなアカンな！」

「くううう！！！！ユーノ・・・やっぱり羨ましい・・・！！」

本当に、フェイトはどうしてこうも百合路線に走るのだろうか――――

そんな楽しい休暇を送った機動六課だが、彼らの知らないところで密かに動きが見られようとしていた。

明神弥彦――――――以前プリズムシードを狙ってユーと達と対立をした逆刃刀を操る剣士であるが、彼は昔の夢を見ていた。

それは、今も昔も自分の中では日本一、最強と謳う嘗ての逆刃刀の主人、緋村剣心という男の出会いからその後の出来事であった。

〈大丈夫でござるか童(わっぱ)。〉

〈助けろなんて誰が言ったよ。俺は一人でも闘えた！闘えたんだ！！〉

〈・・・そうか。拙者はまた童をみくびっていたでござるか・・・――――〉

〈！〉

これがスリとして働かされていた幼少期の弥彦と緋村剣心との出逢い。

それから四年、逞しく成長した弥彦の腕を試した剣心は携えていた逆刃刀を徐に抜いて弥彦に手渡す。

〈弥彦。元服の祝いだ。受け取れ！！〉

〈ちょっ・・・ちょっと待った。いくらなんでもそれは受け取れねェよ。〉

〈お主の渾身の一撃に魂がしかと有るか、それを見て決めた事。逆刃刀(これ)をお主に託す。〉

受け取った逆刃刀の感触に弥彦はこう思った。

〈（重い・・・・・・）〉

〈暫くはお主に重くのしかかって扱いづらいと思うが、後はお主自身の力で自分の思うように逆刃刀（これ）を使いこなせるようになれ。そしていつか拙者を越えるでござるよ――――――〉

そこでちょうど弥彦の夢は終わりを迎え、弥彦ははっとした様子で目を覚ました。

「！」

弥彦は目を覚ますと、朝陽が昇り切ろうとする中その横で眠り続けている行動を共にするピカチュウとニャースに目をやった。

「・・・――朝か。」

弥彦は朝を迎えたことを認識すると、徐に川の方へと向かって顔を洗い、その後気を引き締めるために逆刃刀を抜いて素振りをする中、先日一戦を交えたユーノから感じた奇妙な感覚に物思いにふけった。

「（あいつ・・・ユーノ・スクライア・・・不思議な男だった。どうしてかは分からないが、あいつは――――――“剣心”と同じものを感じた。）」

緋村剣心と同じものを感じてしまう弥彦。

しかし直後我に返った後首を横に振ってその考え方を改める。

「いや、そんな訳ないよな。剣心とあいつとじゃ、全然違うよな――――――」

弥彦はそう言うと、逆刃刀を納刀しピカチュウたちの方に向かうと目ぼしのついている次なるプリズムシード確保の為に決意を固める。

「次のプリズムシードは、必ず俺達が戴く。」

弥彦がそう決意を固めた三時間後、機動六課は再びプリズムシードの反応を確認した聖王教会からの報告に気を引き締めていた。

「何だって?別なプリズムシードの反応が?!」

「ああ。たった今聖王教会からの捜索願が出された。発見された場所は、第３０５管理世界『ワットタイル』。密林の奥地の方にある古代遺跡でそれらしき反応が確認された。」

「古代遺跡か・・・・・・」

ユーノが現地の公開許可の出ている映像を見てそう口にすると、多少間を開けてからクロノが申し訳なさそうな表情を浮かべてこう言って来た。

「ユーノ。無理を承知でこんな事を頼んで申し訳ないが、大丈夫そうか?」

「・・・ああ。」

以前の調査の事で未だ拭いきれていないユーノが眉間に皺をよせ複雑な気持ちでそう口にするのを聞いて、なのはは心配になったのか

クロノに次のように要求してきた。

「クロノ君。ちょっとお願いがあるんだけどいいかな？」

「何だなのは？」

「出来ればその・・・私も同行させてほしいんだけど。」

それを耳にし、聞いていたユーノは意外そうな表情を見せた。

「なのは・・・」

クロノはなのはの要求を聞き入れると、許諾の返事をする。

「ああ。そうしてやってくれ。ユーノもそれでいいだろ？」

ユーノは柔かい表情となると、なのはに向かって言葉を投げかけた。

「うん。僕も全然オッケイだよ。」

「ユーノ君・・・ありがとう。」

「ほんなら、あと数人ぐらいユーノくんの護衛についてもらうとして、ユーノくんは取り敢えず現地の情勢をもう少し詳しく調べてもらえるかな？」

「了解した。」

ユーノは早速現地の情報を詳しく調べ上げるため自ら無限書庫に赴くと得意の情報検索能力を駆使して、文献をかたっぱしから当たり

始める。

ユーノが調べもので無限書庫に向かっている間に護衛メンバーの選出が決定したが、その選出メンバーの一人である銀時は同じメンバーである土方といがみ合い敵意むき出しでこう言った。

「ひ・じ・か・た君～～～何で君が俺と一緒なんだろうね～～～！！」

「それはこっちの台詞だボケ。何で俺がてめぇと一緒にユーノの護衛に付き合わないとならねぇんだよ・・・！！」

一触即発の二人。

そんな二人の喧嘩を止めようと、同じくメンバーであるキャロが止めようとし、ルキアはため息をついてしまう。

「あ、あの・・・！二人とも落ち着いてくださいよ／／／！」

「全く。相変わらず貴様ら二人は揃って戯けだな。」

「「んだと！！」」

そんな二人のやり取りを見ていた恋次となのはは困惑した表情を浮かべていた。

「こんなんで本当に大丈夫かよ？」

「まぁ、為る様になるなりますって・・・・・・」

と、その時無限書庫から帰還したユーノは迷彩服に身を包んで一通りの準備を済ませると司令室へと現れた。

「お待たせ。」

ユーノが登場すると、銀時は徐に尋ねる。

「守備はどうだ？」

「念入りに調べ上げました。準備は既に完了です♪」

「では、早速出発と行こう」

ユーノは全員に自分が着ているのと同じ迷彩服を手渡すと、護衛メンバーであるなのは・恋次・銀時・土方・ルキア・キャロを引き連れて第３０５管理世界『ワットタイル』へと向かった。

あらかじめ用意していた積み荷のトラックで目的地へと向けて走り続ける中、ユーノは運転中の恋次に向かって道順を指示する。

「次の道を右です。」

恋次は指示を聞くと、言われた通りに右の道を進み、ユーノは安堵の声を漏らす。

「ようし、そのまま三時間は一本道です！」

「はいはい。」

ユーノは久しぶりの冒険に血沸き、肉踊らされながらなのは達の様

子を窺う。

「いや～～～！！久しぶりに血が騒ぐ！冒険こそが男のロマンだからね！ん？何読んでるだい、なのは。もしかして、アガサ・クリスティー？」

「うんうん。ユーノ・スクライア♪」

「そう・・・って、それ僕の本かい！？」

なのはが到着までの間読みふけっている本の著者の名前を聞いて、思わず驚き返るユーノであった。

なのはと同じように運転席の方では銀時が読書に耽っており、一瞥した恋次はその著者を尋ねた。

「夏目漱石か？」

「空知英明。」

そんな会話をしながらも着実に目的の遺跡目掛けてトラックを走らせる二人が、銀時はふとあることを思い出し恋次に尋ねた。

「なぁ。鬼のマヨラーの様子がやけに静かじゃねぇか。どうせタバコが吸えなくてイライラしてるかと思ってたんだがよ・・・」

「ユーノの野郎が、何か一工夫したみたいだぜ。」

恋次がそう言うので銀時は積み荷の所で静かにしている土方の様子を覗いてみると、そこには若干不満げな様子で電子煙草を咥える土

方の姿があった。

「・・・・・・」

土方の心境は実に複雑なものだったが、傍らで見ていたルキアやキャロなどは次のように語ってきた。

「そんな不機嫌そうな顔をするな。ニコチンが摂取できるだけありがたいと思え。」

「いや・・・そりゃそうなんだがよ・・・やっぱイマイチタバコ吸ってる気にならねぇぜ・・・」

「土方さん。煙草もほどほどにしてくださいね。」

「じゃないと、本当に肺癌とか起こして死んじゃいますよ。」

「余計なお世話だってんだ・・・け！」

周りからの声に鬱陶しさを感じる土方。

そんな土方を一瞥したのち、銀時は序にユーノにこう尋ねた。

「行先だがよ、こんなジャングルの奥に本当に遺跡なんかあるのか？」

「あと一時間で検問所ですから、まずはそこを無事突破してからですよ♪」

「へいへい。」

トラックはその後も一本道を突き進み、辺りが茜色に染まる夕方になると漸くユーノが言っていた検問所へと到着する。

複数の警備員が厳戒態勢で警備当たる中、トラックは一端停止し、警備員が銃片手に近づいてくると許可証の提出を求めた。

「通行許可書。」

「ほい来た許可証。」

銀時はユーノが用意した精巧に出来た偽の許可証を見せ、警備員の眼を誤魔化すことに成功する。

その後警備員はトラックの積み荷を確かめようと後ろへと向かい、フードを開けて中を確認した後銀時に尋ねた。

「荷は何だ?」

「第六軍区司令部への届けもんだ。そうだお前にも一本やるか。」

銀時は隠れたなのは達の近くに置いてあった段ボール箱を持ってくると、徐に中身を開いてその中にぎっしり収められていたアダルトDVDの一本を効果音付きで警備員に見せつける。

「パンパカパーン!!パンパンパンパン!!『みだら妻の夜』~~~?」

「うわあああ!!!!しょ、しょ、しょれは／／／!!!!」

興奮した警備員は思わず後ろに吹き飛び、鼻の下を伸ばし銀時は更に一本取出しそれを掲げた。

「『お願い××だけはだめ！』～～～？」

「「「おおお！！！！」」」

他の警備員も刺激を受け、全員が鼻の下を伸ばす。

「日本語版だけんどもよ、部隊長が好きなんだよ。持ってけ泥棒！」

銀時はそう言うと、無造作に箱の中に入っていたＤＶＤをすべて投げつけ、警備員全員は一人の例外もなくそれを血眼になって拾うのであった。

そして、上機嫌となった警備員は特に調べる様子もなく銀時達の通行を許可し敬礼をするのであった。

「「「「「お疲れ様です！！」」」」」

検問所を突破すると、銀時は窓を開いて警備員たちに最後にこう言った。

「昼間っから見るんじゃねぇぞ。」

銀時は作戦の成功を報せるために、後ろの方でフードをかぶって身を隠していたユーノ達にこう言った。

「どうだ俺のこの作戦。大成功だったろ？」

銀時がそう言うと、ユーノやなのは・キャロは顔を赤くし、逆にルキアと土方は呆れた表情を浮かべこう呟く。

「くだらねぇな。」

「実に下劣な作戦だ。」

「ぎ、銀さん・・・そう言うのは教育上よくありませんよ。」

「何言ってんだよ。お蔭で検問所突破できたろ。そうだ。おめぇにも取って置きの一本残してあるぜ。」

銀時はそう言うと、徐に懐からユーノに残していた取って置きのＤＶＤを取り出しその題名を口にする。

「『女先生の夜と夜』～～～？」

ユーノは思わず鼻血を流し、近くで見ていたルキアとなのははは被っていた帽子を銀時に向かって投げつけた。

「戯け！！」

「ユーノ君にそんなもの見せないで下さい！！」

やれやれ・・・銀さんにも困ったものである。

言葉で語れない魂の叫び（後書き）

教えて、ユーノ先生！

特別編：教えて、銀八先生！

銀「はい。そんじゃ今日はユーノ先生の代わりに俺がこのコーナーを仕切らせていただきます。ま、適当に手紙読んでおけばいいよな・・・ペンネーム、『百合路線で何が悪い！（水樹奈々）』さんからの質問。『どうしてこの作者はフェイトの事を毛嫌いするのですか？どうして水樹奈々が主題歌に起用されないのですか？』。」

銀「はい、ずばりお答えしましょう。それは基本的に作者が水樹奈々が嫌いだからです。」

一「あっさりとんでもないこと言っちまったなおい・・・」

ユ「だけどその理由は何なんですか？」

銀「何々・・・この前偶然にも水樹奈々のブログを拝見した作者だったが、あまりに彼女がリリカルなのは、殊になのフェイ路線を推し進めるような記事と発言に嫌気が差したほか、最近では声優雑誌の表紙を飾ることの多い彼女に嫌悪感すら感じているとのことではい。」

一「確かに、水樹奈々は調子こいてるよな。なのは役の田村ゆかりも妙に一緒に写真に写ってるのを見ると虫唾が走るぜ。」

恋「俺達男役の声優が普段どんな思いで仕事してるのか・・・あい

つら絶対分かってねぇぜ。」

ユ「そうそう。声優は基本声優であった、アイドルではないんだ。俳優を兼ねているならまだしも、水樹奈々は完全に声優の路線から脱線している！」

銀「と言うわけで水樹奈々！おめぇ最近調子こいてるから暫く歌手活動禁止！序になのはとイチャイチャするのも禁止な！」

フェ「ちょ、ちょっと！！何もそこまでしなくてもいいじゃ・・・！！」

ユ・一・銀・恋「駄目！」

フェ「ぐっす・・・そんな・・・！」

魔導師図鑑ハイパー！

ある日、死神メンバー四人は外での食事を堪能。

その食事の会計の際の会話。

吉「すみません、領収書をお願いします。」

受「宛名はどうなさいますか？」

受付がそう言うと、白鳥と恋次はそれぞれこう答える。

白「『白鳥礼二様』で頼むぞよ。」

恋「『俺様』だ！」

ル「それじゃ、私はな・・・」

と、ルキアがそう言おうとした直後、恋次と白鳥は揃ってこう言った。

恋・白「背が低いから『お子様』だな（であるな）」

ル「貴様ら！！！！」

思わず憤るルキア。

吉良は収拾がつかないと判断し、賢明な判断を下す。

吉「すみません・・・『上』でいいですから・・・」

次回予告

プリズムシードの回収に向けて作戦を開始するなのは達だが、回収した直後テトラカトゥーン、ナルトが襲撃。

迎撃のなのは達とプリズムシードを守り抜こうとするユーノの前に、再び弥彦が登場。

二人は因縁の再会を果たす。

は「次回『人には言えない秘密がある』」

人には言えない秘密がある

前回のあらすじ。

新たなプリズムシードの反応を確認した機動六課はユーノとなのは達数名の護衛メンバーにその回収を任命し、ユーノ達は目的の遺跡目掛けて猛進していたのであった。

検問所を突破し、ユーノ達一行は目的の遺跡付近まで移動すると一

度トラックから降車し、目的の古代遺跡がある付近の様子をスコープで確かめていた。

銀時はスコープから見えてくる壮大な古代遺跡の数の多さに圧倒される。

「いひょ～～～これじゃまるで遺跡銀座だなおい・・・！」

「何処にあるんだろうな、プリズムシードは？」

銀時の隣で同じくスコープを覗いていた恋次が口にすると、ユーノは次のように語る。

「作戦開始は午前三時。それまでは待機です。」

「しかしまぁ、何だってあんなに兵隊さんがウロウロしてる訳？」

銀時は目的の遺跡付近で厳戒態勢で警備に当たる兵隊の数に疑問を抱いていると、なのはがこう語った。

「最近、世界遺産として指定を受けた途端、盗掘団が横行し始めたんです。」

「それで、軍隊が警備を担当したって訳か。」

納得した様子の土方は徐に煙草を取出し火をつけ一服する。

「兎に角だ。ここから先はもうトラックは使えない。」

ユーノは全員にそう言うと、一度森の奥の方へと向けて歩きはじめ

ると、全員がちょうど収まるほどの大きさがある古代遺跡の住居と思わしき場所へと誘導する。

「この辺にするかな。」

中に入ると薄暗いので早速火をつけ、中の様子が見えるようにしたユーノ。

銀時はこれと言って何もない殺風景な空間を見渡し呟いた。

「ここで待機するのか・・・とは言っても何にもねぇじゃねぇか。」

「食料は持ってきましたから、早めの夕食にでもしましょう。」

作戦の開始に備えて、早めの夕食を取ることにした一同は空腹を満たすように持ってきた食料を綺麗に腹の中に収める。

暫く休憩していると、徐に寝そべっていた銀時が暇つぶしに本を読んでいるユーノに次のように語ってきた。

「なぁユーノ。俺ずーっと気になってたことがあるんだけど、いいか？」

「はい。」

「お前ってさ、一護の弟子なわけじゃんかよ。話を聞く限りじゃお前って相当一護の事尊敬してるみたいだが・・・ぶっちゃけ言うと、一護のどの辺に好かれたわけ？」

「ああ。確かにな・・・お前一護の話するときは妙にウキウキして

るしな。聞かせてくれねぇか、退屈に凌ぎに。」

「いいですね。ユーノ君、お願い♪」

「私も聞きたいです！」

「ユーノ殿。」

「ま、俺はどっちでもいいがな。」

なのは達にそう言われ、思わず悩んでしまうユーノだがそれも悪くはないかと判断すると本にしおりを挟めて一護との出逢いの話をすることにした。

「う～～～ん・・・しょうがないな。退屈凌ぎがてら話して上げてもいいかな。それじゃ、話すよ。僕と一護さんの出逢いからその過程にかかわる今までの事を――――――」

ユーノはそう言うと、魔導死神として覚醒する切っ掛けともなった一護との出逢いから修行に明け暮れた日々のことをダイジェストに話し始めた。

「あれは四年前の夏ごろ。無限書庫を辞め、一人世界を放浪としながら遺跡発掘の旅を続けていた僕だったが、古い遺跡で発見したある物質の影響で僕は魔導死神として覚醒し、僕は時間軸がずれそのまま真冬の北海道へと転移してしまった。」

ユーノは敢えてその物質が崩玉であることは伏せ、一護との出逢いをそのまま話し続けた。

「意識を取り戻した時、僕は一護さん達に助けられ部屋に寝かされていた。そして、僕がこれまでの事を赤裸々に話した直後、あの人は僕に死神の力の使い方を教えてくれた。のちに話を聞くと、一護さんも昔突如として現れた死神から力を託され、死神代行として覚醒したとのこと。そう――――――それこそがルキアさんとの出逢いだった。」

ルキアはユーノがそう言うと、自分も一護と出逢った直後の事を思い出し、今でも繋がる見えない絆を確かめるように胸に手を翳し強く拳を作った。

「出逢った経緯は若干僕となのはのそれに似ていたけど、決定的に違うのは一護さんは僅か半年間と言う短い期間で生死と世界の滅亡を懸けた壮絶な戦いを繰り広げて来、同時に死神の組織である護廷十三隊とは一切独立しているということだ。」

「はっ、くしゅん！」

話しを聞いていた銀時は話の最中でくしゃみをする。

「尸魂界・虚圏・そして地獄――――――生と死を司る世界における命懸けの決戦は聞いているこっちがどうにかなりそうなぐらいのものだったよ。だがあの人は何時だって自分の仲間を守るためならそれこそ命を惜しまず積極的に戦いに挑んでいく、そう言う人なんだ。僕はそんな兎に角真っ直ぐな魂で、素顔に隠れた優しさに非常に惹かれていったんだ。」

「成程・・・・・・」

「よくそれだけの事がさらっと口に出るよな。俺なら毛ほどもんな

話出ねぇぜ。」

「勿論、惹かれたのはそれだけじゃない。あの人は・・・一護さんは見ず知らず、外敵であるかすら分からないこの僕に何のためらいもなく死神の戦い方を教えてくれた。かなり荒っぽいやり方ではあったが、僕はそれでも嬉しかった。この力があれば、もう一度なのは達と一緒に側で戦うことが出来る。なのはやみんなを護ってあげられると考えていたからね。」

「ユーノ君・・・」

なのははそんなユーノの話を聞いて、思わず嬉しさ半分気恥ずかしさ半分の表情を見せた。

「死神代行黒崎一護――――――あんな魅力的な男は未だ嘗て見たことがない――――――」

ユーノがそう話し後、暫くの間を置いてからルキアは徐にこう言って来た。

「ユーノ殿は、それほどまでに一護に敬意を示していたのですね。」

「何か、聞いてるこっちが恥ずかしくなるような気分だけどな・・・」

恋次がそのように口にすると、他の全員も同じような気持ちとなった。

「だが、そんな一護さんも一時期危うい状況に陥ったことがあった。僕が本格的に一護さんや浦原さん達と共に修行に明け暮れていた時、

一護さんの周りで次々と彼に縁のあるものが襲われるという事件が発生した。その事件の中で、一護さんの妻である織姫さんは瀕死の大怪我を負ってしまった――――――」

「え！」

話しの直後、なのはやルキア達は目の色を変えて驚き返った。

「井上が！？そんなこと、我々には一言も！」

「多分、てめぇらに心配を掛けまいと何も語らなかったんだろうな。」

当時の一護や織姫の考えを察してそう口にする銀時。

ユーノはその後次のような事を語った。

「一護さんは妻を守れなかった自分を激しく呪い、暫くは死神としての活動を休止ししていたんだ。僕はそんな一護さんの絶望に満ちた表情を見て胸が痛んだ。そして同時に僕の中に一つの決意が生まれた。“一護さんと一護さんの幸せを守ってあげよう。その為に、僕があの人の笑顔を守るために戦う”と。」

そんなユーノの一護への強い覚悟の表れを表現したその言葉を聞き、しみじみ納得した表情を見せる一同。

「だから、ユーノ先生は一護さんには特別強い思い入れがあるんですね。」

「そう言うこと。」

「「「「「「「―――――・・・」」」」」」」

沈黙する全員。

そんな全員に向かって、ユーノは話し終えた後徐にこう言って来た。

「仮眠を取ろう。三時になったら予定通り作戦を開始する。」

全員はその言葉を聞くと、予定開始時刻になるまで仮眠をとることにしたのであった。

やがて、夜がすっかり更け夜行性の生き物が行動を開始し始める中、ジャングルの奥の方でユーノ達同様プリズムシードを狙って移動中の漫画キャラ三人がいた。

それこそ、テトラカトゥーンの一人であるうずまきナルトとその想い人であり医療忍術に長けるくノ一、春野サクラ、そして以前銀時達からプリズムシードを奪われたゲーリングであった。

「サクラちゃん。本当にこっちでいいの?」

「間違いないわ。この先にある寺院の中にプリズムシードがある。」

「オッケイ。じゃ、後は任せたぜ・・・ゲーリング。」

「は、はい!」

ゲーリングは緊張した様子でナルトの声を聞くと、そのまま寺院目掛けて走り出していった。

そして、作戦開始時刻の午前3時。

仮眠を取ったユーノ達は準備を整えると、ゲーリングが向かった寺院に向かって前進し、その移動中、銀時は大あくびをする。

「ふぁ～～～」

ユーノは先頭に立って寺院の方へと移動し、警備員に見つからない場所付近までやってくると一度立ち止まり、目の前にそびえたつ巨大な石造りの寺院を仰ぎ見、なのは達も挙ってその壮大な寺院の大きさに目を奪われた。

「プリズムシードは、この寺院の最上階『悦楽の間』より反応を確認した。但し、このワットハマアート寺院は第一級最高国宝にして、一切の魔法使用が出来ないよう強力なプロテクトがかかっている。故に転移魔法による移動は不可能。しかも、あの通り特別警備兵が配属され、不法侵入者に対しては厳しい罰則が科せられる。懲役20年以上。器物損害や窃盗が出れば極刑まである。管理局側もロスト・ロギアの回収と言う名目で示談を踏んでいるが、相応の折り合いがつかずに紛糾状態にある。」

銀時はそんなユーノの話を聞きながらスコープで寺院を警備する兵隊の様子を確認する。

「はは～ん・・・捕まれば話だろうが。」

「俺達はこんな安い警備で捕まるほど、間抜けじゃねぇさ。」

「よし。それじゃここは僕が先導して――――――」

と、ユーノが動き出そうとした直後。

「ストップ。」

「え？」

「それはダ～メ♪」

唐突になのはがユーノの行動を止めにかかった。

「な、なのは！？」

「あの、なのはさん。いきなりどうしたんですか？」

「いやダメって。なのは、あのね・・・」

困惑するユーノだったが、なのははそんなユーノに次のように言って言いくるめようとした。

「もう。何の為に私がここにいると思ってるの？ユーノ君が一人で無茶したりしないように監視と護衛も兼ねてここにいるんだよ。ユーノ君はさっきの場所でキャロと恋次さん、ルキアさんと一緒に待ってて。私と銀さん達で中に忍び込んで取ってくるから。」

「だ、だけどそれじゃなのはが・・・！」

「心配性だなユーノ君は。一応本局武装隊のエースオブエースって言われてるんだから、そう簡単に捕まらないよ。ね、銀さん。土方さん。」

「ふん。俺は別にどちらでも構わないけどな。」

「ま、フェレット君は大人しく待っててくれや。」

肩を叩いて銀時がそう言うと、暫く考え込んだ後ため息交じりにユーノは三人の言葉を信じることにした。

「はぁ～～しょうがないな。じゃあ、任せてもいいかい？」

「うん！絶対見つけて無事に帰ってくるから。」

「行くぜ。」

「てめぇが仕切るな。」

銀時・土方・なのはのさんにんはユーノ達と別れると、駆け足で寺院の方に向かって行き、そんな三人に恋次は声をかけた。

「あんまし派手にやるんじゃねぇぞ。」

三人が徐々に見えなくなっていくと、ユーノのなのは達に対する不安は大きくなっていき、表情が曇っていく。

「・・・・・・」

そんなユーノの事を傍らで見ていたルキアはほくそ笑むと、キャロと一緒に次のように言葉を投げかけた。

「大丈夫です。なのはは強い女だ。必ずユーノ殿の元に戻ってきま

す。」

「だからユーノ先生もなのはさん達を信じて待ちましょう。」

「うん。そうだね――――――」

二人の言葉を聞いたユーノは恋次達を連れて、待機所に向かって歩きだし作戦の成功を祈るばかりであった。

その頃、ワットハマアート寺院の入り口付近まで到着したなのは達三人は岩場に隠れ、兵隊に見つからないように小声で話し合っていた。

「近くに来るとかなり緊迫してますね・・・」

「どうするぜ、おい？そう簡単にはこいつは突破出来そうもないな。」

「仕方ねぇ。ここは俺が囮になってやるか。」

土方はそう言うと、徐に煙草に火をつけると芝居の為に飄々とした態度で兵隊数名の前に現れ鼻歌を歌い始める。

「可愛いベビー～～～へいへい～～～可愛いベビー～～～ほいほいと♪よう兄弟！景気はどうだ？」

すると、兵隊は銃を突き付け土方を取り囲む。

「何処の隊だ！ここは立ち入り禁止だ！」

「何処の隊だってベイビー、俺りゃこう見えてもな――――――“おめでたい”の所属よ！」

土方はそう言って手に持っていた煙草を空に向かって放り投げる。

直後、煙草が強い光を発して兵隊たちの眼を眩ませる。

「「「おおお！！！」」」

土方はその隙に車を奪って兵隊目掛けて突進し、兵隊は視界が悪い中銃を乱射し、土方の行く手を阻むが土方は不敵に笑うとそのまま加速していった。

兵隊が土方の行動に目を奪われ、周りの景色が光ではっきり見えないのを好機と判断した銀時はなのはを引き連れて遺跡の内部へと侵入する。

「よし、今だ！」

「はい！」

寺院の内部に侵入するにあたって銀時は壁を伝って一気に最上に目指す方が得策だと考え、すたすたと壁を登っていくが、その後ろでくっついて登っているはずのなのはの悲痛な声が聞こえてきた。

「ぎ、銀さん～～～手貸してください～～～！」

そう、やはりなのはは運動神経がなかった。

その為、魔法なしでは木登りすらできない出逢った。

「たく。これだから運動神経ねぇ奴は・・・」

やがて、土方の煙草の光が消え警戒音が鳴り響き銃声音が飛び交うのを聞いたユーノ達は思わず振り返る。

「お?始まったようだな。」

「お願いだから無事でいてくれ、なのは。」

ユーノは只管なのはの無事を祈るばかりであった。

「「おおおお!!」」

土方を捕えようと数名の兵隊が車に向かって突進する。

すると、土方は徐に手榴弾を取出しピンを抜いて投げつけた。

「「「「わあああああ!!!!」」」」

激しい爆発が起こり、銀時の背中に乗って移動していたなのははその光景を見てこう呟く。

「土方さん、流石ですね。」

「よし、急ぐぜ。」

銀時はなのはを背中に乗せたまま壁を登りつづけたが、流石に最上階までぶっ続けで上るのは体力の消耗が激しいと考え直し、一度中に入れる場所を見付けるとなのはと一緒に中へと侵入。

中から最上階を目指そうと走り出したが、直後待ち構えていた兵隊に見つかってしまう。

「「！」」

引き金を引く兵隊を見た銀時は咄嗟に携帯していた木刀を取り出す。

「ち！」

そして、兵隊を昏倒させるとなのはの手を引いて走り出す。

「「わわわわわわ！！」」

しかし、その後も立て続けに待ち受ける兵隊とトラップに二人は焦り始めていた。

銀時は中での移動はやってみて危険だと判断すると、ユーノから渡された道具を使ってなのはを背中に乗せロープを伝って登り始める。

「やっぱこの手の方が安全かもな。」

銀時の背中に乗せられ落ちないようにしがみ付くなのは。

すると、徐に銀時がセクハラ発言を連発。

「お前って見た目で気づきにくいが胸デカイよな。けっこうぷにょぷにょ・・・ぎゃあああああああ！！！！」

「銀さん・・・頭冷やした方がいいですか？」

笑顔で銀時の首をきつく締める魔王なのはであった。

死ぬ思いを経験した銀時は何とか最上階へとたどり着くと、なのはに悦楽の間の場所を尋ねる。

「悦楽の間ってのは、どっちなんだ？」

「ユーノ君の調査では、この辺りのはずです。」

なのははそう言うと、駆け足で目的の悦楽の間へ向けて走り出し、銀時もその後に続いて走り出すが、直後彼は目に飛び込んできた裸体の女性像に目を奪われ立ち止まってしまう。

「お／／／」

なのはは恥ずかしがりながら銀時の手を引っ張る。

「こっちですよ銀さん／／／！！！」

なのはと銀時は寺院の内部を移動し、漸くその悦楽の間と呼ばれる場所へとたどり着く。

「あれが悦楽の間です。」

「早いとこ、物を見付けてこんな危ないところはお暇しようぜ。」

銀時はそう言って、悦楽の間の扉を徐に開く。

すると、その時二人の目の前に飛び込んできた意外な人物。

それはこれまで捜査の中で幾度となく邪魔をしてきた石川五ェ門が一人、座禅を組んで瞑想にふけっていたのだ。

銀時は徐に近づき敵ではあるが今はそう言ったものを感じ取れない五ェ門に話しかける。

「あのすみません五ェ門ちゃんよ・・・あんた敵だけどこんなところで何してる訳？」

「・・・悦楽と煩悩についての考察と快楽における人間の愚かさとは何か・・それを悟っていた。」

聞いているだけで肩が凝りそうな内容の五ェ門の言葉に銀時は力が抜けてしまう。

「は。苦労性なんだよおめぇは・・・」

「死んだ魚みたいな目をした凡人に言われたくない。」

「つうか、おめぇよく入り込めたなこの寺に・・・」

「ここの高僧とは二十年来の友人だ。」

「あっそ・・・・・・って！おめぇ漫画キャラじゃなかったのかよ！！！」

思わずそうツッコミを入れてしまう銀時であった。

そんな銀時とは別に部屋の中でプリズムシードを探していたなのは

は、ついに目的のものを発見しレイジングハートで安全かどうかを確かめてから徐に手に取り銀時にこう言った。

「見つけましたよ、銀さん！」

「よっしゃ。とっととつらかるぜ！ジャーニー、五ェ門～～～」

銀時はなのはからプリズムシードを預かると、五ェ門に別れの挨拶をしてから急いで寺院の外へ向けて走り出す。

と、その時だった。

銀時の顔面に突然固い拳が直撃し、銀時はその拳を受けると鼻血を流し後ろの方へと倒れこんだ。

「あ・・・あ・・・！」

銀時に拳を直撃させたのは、同じくプリズムシードを狙って侵入してきたゲーリングであった。

「へ。へへへへへ。」

「ぎ・・・銀さん・・・！」

なのはは鼻血を流し意識を失いかけている銀時に駆け寄った。

ゲーリングは手についた銀時の血を舐めると、不敵な笑みを見せて銀時にこう言った。

「そのプリズムシードをこっちに渡せ。」

すると、銀時はゲーリングに向かって挑発的な態度でこう言って来た。

「へへ・・・欲しけりゃ取りに来なって・・・」

「くううううう!!!!!!!」

ゲーリングはその銀時の態度に我慢できなくなり、銀時目掛けて突進する。

銀時は意識をはっきりさせると、なのはにプリズムシードを手渡しなのはは思わず困惑する。

「!え!?」

「俺に構わず逃げろ!」

銀時はそう言うと、木刀を取出しゲーリングに向かって行く。

「くあああああああ!!!!!」

「ほおおおおおお!!!!!」

銀時の木刀とゲーリングの重火器が激しくぶつかり合う。

「ちぇ!」

銀時は木刀で殴りつけながらゲーリングの顔面に飛び蹴りを食らわせる。

「ぐおお！」

しかし、負けじとゲーリングも銀時の顔面・腹部などに激しい殴打を食らわせる。

「がっは！」

ゲーリングの殴打をその身に受け、ボロボロになった銀時は窓際の方へと連れて行かれると、ゲーリングに胸ぐらを掴まれる。

「へへ・・・お前最後は鳥みてぇになりたいだろ？」

ゲーリングはそう言うと、銀時を容赦なく寺院の外へと放り投げた。

「ほらよ」

と、その時。

「ぬ！」

ゲーリングのネクタイに銀時が仕掛けた釣り糸が引っ掛かり、空中を落下しながら銀時はこう言って来た。

「お前もよ、鳥になっちゃえよ」

「うおお！うおおおおおお！！！！！」

重力に逆らうことは出来ず、ゲーリングはそのまま寺院の外へと落下する。

銀時は咄嗟になのはに抱えられて事無くを得、土方を連れて無事にプリズムシードの回収に成功した。

そして、落下したゲーリングは目を回した状態で兵隊たちに発見されると、盗掘団と勘違いされてそのまま逮捕されることとなった。

「こいつもきっと盗掘団の仲間だ！」

「逮捕しろ！逮捕だ！逮捕だ！逮捕だ！」

無事にプリズムシードを回収した三人はユーノ達四人が待機している場所まで急いで戻ると、そこで不安げな様子で待っていたユーノ達と再会を果たす。

「なのは！銀さん達も・・・よかった無事で。」

「あの、銀さん顔が腫れ上がってますけど大丈夫ですか？」

キャロが心配そうにそう尋ねると、銀時はティッシュを鼻に詰めるとこう言った。

「ああ。俺はこの通り平気だ・・・ふう・・・一先ず何とか戻ってこれたぜ。」

「ま、こんなもんだろう。」

銀時の隣に立っていた土方はそう言うと、煙草を取出し火をつけなのははユーノを安心させるためにプリズムシードを差し出し笑顔でこう言った。

「ユーノ君。言った通り、ちゃんと戻ってこれたでしょ♪」

ユーノはそんななのはの笑顔を見ると、若干照れた様子でこう言い返す。

「そうだね。君や銀さん達が無事なら一安心かな・・・兎に角、封印作業をして六課に戻ろう。また誰かが狙ってきたりでもしたら、たまんないからね。」

「ですね・・・・・・!?」

と、その時キャロは頭上から聞こえてくる徐々に大きさを増す物音に危惧の念を抱き、全員にこう言った。

「!みなさん、伏せて!」

全員が言われた通り身を低くすると、突如として火炎弾が降ってくる。

「「「のあああ!!」」」

「きゃあああ!!」

ユーノは咄嗟に防御を展開して全員の無事を確保する。

「この攻撃は・・・何だ!」

すると、その時ユーノ達の前にあの男が現れる。

「ご苦労だったな。人間ども。可愛そうだけど、大人しくそいつをこっちに渡して貰おうか？」

現れたのはテトラカトゥーンの一人にして、九尾の妖狐をその身に宿す少年、うずまきナルトであった。

「てめぇは・・・！」

「テトラカトゥーン、うずまきナルト。」

「そうか・・・てめぇも斎藤一と同種の奴って訳だな。」

「しかも、さっきの野郎をデコイとして使って俺達が回収するのを態々待ってた訳か。実際の漫画とは違って、かなり腐ってやがるな。」

「あなた。プリズムシードをどうするつもりなの？これは凄く危険なものなんだよ！」

なのはがナルトに向かってそう言うと、ナルトは不敵な笑みを浮かべてこう言った。

「さぁな・・・俺は使い道になんか興味はねぇけど、カトゥーン様が欲しがってるんでな。渡さないのなら、こっちもこっちで強硬手段を取らしてもらうってばよ。」

「上等だ。斎藤一の奴を血祭りにしたてあげたがったが、この際我慢するとして・・・」

土方はそう言うと、腰に携えていた自分の刀を抜いて血気盛んな様

子でナルトに突っ込んだ。

「先ずはてめぇからだ！！」

土方がナルトに向かうと、恋次も死神化したのち斬魄刀を抜いて突進する。

「ほおおおおお！！！」

二人がナルトに向かった直後、その瞬間ナルトの背後から影が飛び出す。

「「！」」

飛び出した影は二人に目掛けて強烈な殴打を食らわせる。

「しゃんにゃろおおおお！！！」

「「ぐっほ！」」

あまりの怪力に二人は数メートル先へと吹き飛ばされ、岩場に激突する。

「恋次！」

「「「土方さん！」」」

影の正体はナルトの想い人である春野サクラだった。

「ナイスタイミングだってばよ、サクラちゃん。」

「全く。あんたは一人で勝手に行動しないの。ホント何度言っても馬鹿なんだから。」

「う・・・厳しい一言だってばよ・・・」

サクラの前ではどうしても頭の上がらなくなるナルトはサクラからの痛烈な一言に思わず項垂れてしまう。

「ナルト。さっさと片付けて帰るわよ。夜更かしは美容に悪いんだから。」

「了解。」

ナルトはそう言うと、徐に親指を齧って血を出すと、解く敵の印を結んで地面に向けて手を当てる。

「口寄せの術！」

その瞬間、煙が吹き出し中から出て来たのはナルトと契約を結んだ赤い蝦蟇であった。

銀時達はその光景に目を奪われた。

「蝦蟇だ！でっかい蝦蟇が出て来たぞ！」

「行くってばよ！」

ナルトは出て来た蝦蟇の背中に乗ると、サクラと一緒にユーノが手に持つプリズムシードを強奪するために動き始める。

なのははユーノに向かって飛んで来た蝦蟇からユーノを守るため、レイジングハートを起動させ防御を展開する。

「レイジングハート！」

〈Ｐｒｏｔｅｃｔｉｏｎ〉

なのはの防御でユーノは蝦蟇の攻撃から守られた。

「なのは！」

「ユーノ君！先に行って！私とみんなでここは抑えるから！」

「大丈夫です！私達でもユーノ先生一人とプリズムシードを守ることは出来ます！」

「だから早く行って、ユーノ君！」

なのはやキャロ、他の面々が真剣な眼差しでユーノにそう語りかけると、ユーノはこの場にいるメンバーを信じてプリズムシードを持ってその場を離れることにした。

「分かった。じゃあ、頼んだよ！」

ユーノは全速力でプリズムシード片手に疾走する。

「逃がさないわよ！」

サクラは急いでユーノの後を追おうとするが、銀時が目の前に立ち

塞がる。

「てめぇらには渡さねぇよ」

「退きなさいよ、銀髪！！」

「退かせてぇならやってみろ！！」

こうして勃発する忍者ＶＳ魔法使い＆死神＆侍の熾烈な争い。

結界が張られているため周囲にそのことを悟られることはまずなかった。

ユーノはなのは達を信じて目的のプリズムシードを以て走り続けていた。

と、その時不意に森の中からユーノにとっては今現在最も心動かされる少年剣士、明神弥彦が現れた。

「！」

弥彦の登場に思わず目を奪われるユーノ。

弥彦はユーノの方に振り向くと、徐にこう言った。

「また遭ったな――――・・・」

「お前は・・・！」

「そいつを、渡して貰おうか。」

「く・・・結局これだよ。」

ユーノはこうなるとことは何となくではあるが予想はしていた。

しかし、いざこうして相対すると非常に複雑な思いが湧いてくる。

ユーノはプリズムシードの封印を済ませると、徐に晩翠を取出し弥彦と対峙する。

弥彦は彼方を抜いたユーノを凝視しながらこう尋ねる。

「それで、刀を抜いたはいいが・・・どうする気だ？」

「話し合いでどうにかなるならそれを選ぶし、そうならないなら――――――」

「――――――俺は、ロスト・ロギアを・・・プリズムシードを集めないといけない。何が何でも、誰が目の前に立ち塞がろうとも。そして、管理局が、てめぇが同じ目的の為にこいつを集めているのなら、俺達は互いに戦う宿命にあるはずだ。」

「どこかで聞いたことのある台詞だけど、前にも言ったはずだ。こっちもこっちで立て込んでいるって。皮肉だけど、大人っていうのは何かあると直ぐに汚いやり方で都合の悪いことを処理しようとする。碌に話し合いなんてすることなく・・・」

「ああ・・・俺もそう思うぜ。」

「話し合いでどうにかなるに越したことはないが、それ以上に譲れ

ない願いを持った人間を僕は今まで沢山見てきた。子供のころから・・・なのはと出逢ったあの時から。」

「・・・――――」

その瞬間、空っ風が二人の周囲に漂いしばらくの沈黙が流れた。

そして、ユーノは風が収まると弥彦に向かってこう語った。

「直接言葉を交わすのが無理なら、同じ剣客同士・・・こいつで・・・刀で語るしかなさそうだ。」

「刀で語る・・・か・・・確かにそうかもな。」

弥彦はユーノの言葉に共感すると、自分も鞘から逆刃刀を抜刀しユーノにこう言った。

「じゃあ、俺もお前の好きなやり方で俺の言葉を・・・魂の声を聞かせてやる！」

その直後、弥彦は持ち前の高い身体能力を駆使して勢いよくユーノに突っ込んでいった。

「来る！」

ユーノもそんな弥彦の攻撃に備えて気を引き締め、刀を構えるのであった。

その頃、銀時達の戦いは徐々にエスカレートを増していた。

「“火遁・蝦蟇油炎弾”！」

ナルトは契約した蝦蟇の口から吐き出す蝦蟇の油に自分の口から吐き出す火遁を燃焼させて破壊力を増したもので攻撃を行い、上手く躱した土方と恋次は高く飛び上がり技を披露する。

「鬼斬り！」

「咆えろ、蛇尾丸！」

二人の怒涛の攻撃を躱したナルトは蝦蟇の背中ら降りると、中指と人差し指を交差させ、己の得意技を発動する。

「影分身の術！」

「「！」」

その瞬間、二人の周囲に複数の実態を持つナルトの影分身が現れ、一斉に飛びかかってきた。

「「「「はあああ！！」」」」

「く！」

数の多さに身構える恋次と土方。

その時、ルキアの袖白雪の攻撃が介入する。

「初の舞・月白」

「！」

一瞬にしてナルトの分身体は凍りつき、ナルト自身は大いに驚いていると、恋次達の前にルキアが飛んで来た。

「ルキア！」

「いいタイミングじゃねぇか。」

「これぐらいどうってことない。行くぞ。」

「ち。面倒な奴らだってばよ・・・」

ナルトはそんな事を呟きながら、苦無片手に三人の元へ飛び出した。

また同じころ、なのはとキャロはサクラと対峙していた。

「ウィングシューター！」

「は！」

キャロのウィングシューターとなのはのショートバスターがサクラに命中する。

しかし、サクラは命中と同時に煙と化して木の幹となってしまう。

「変わり身・・・本物は・・・！？」

「なのはさん！」

その直後、なのはの頭上から飛び上がったサクラが殴り掛かってきた。

「はあああああ！！」

しかし、そこは坂田銀時の登場だ。

銀時は飛び上がると木刀でサクラの顔面目掛けて大太刀回り。

「そうは行くか！」

サクラは銀時の木刀の軌道を読むとそれをぎりぎりで回避し、銀時目掛けて渾身の一撃の籠った殴打を仕掛け、銀時を吹き飛ばす。

銀時は地面に激突すると、背中を押さえながら見た目にたがわず怪力を発揮させるサクラに恐怖を感じた。

「くそ。あの女・・・見た目によらず化けもんみたいな力つかいやがって。神楽か！？」

「確かに、あの尋常ならない破壊力は急所で受ければ危険ですね・・・」

なのはがそう言うと、キャロは決意の籠った表情で二人にこう言った。

「兎に角、ここは何としても通すわけにはいきません。全力で阻止しましょう！」

「うん！」

「ああ。」

そうしてこの戦いは更に激しさを増していく。

流石に時間が長引けば長引く分、ナルト達にも疲労の汗が目立ち始める。

ナルトはなかなか倒れない恋次達三人を相手に少々苦戦を強いられていた。

「ち。しぶとい連中だぜ。こうなったら・・・――――」

と、ナルトが必殺技の発動を行おうとした直後、サクラは周囲から感じる奇妙な気配に気づき、声を上げた。

「！ナルト！何か来るわ！」

「！？」

ナルトが周囲を警戒していると、その直後茂みの奥から電撃を纏った電光石火、ボルテッカーと呼ばれる技で突進してきたピカチュウが現れた。

「ピカピ！！！！」

「何！」

驚き返るナルト。

ピカチュウはそんなナルトの腹部に突っ込み、強烈な電撃を浴びせた。

「ぐあああああ！」

黒焦げとなって倒れるナルトにサクラも思わず戦いを中断し、急いで手当てに当たろうとする。

「ナルト！待ってなさい。いま直ぐ治療を・・・」

と、その時そんなサクラの目の前に念入りに詰めを研いだニャースが飛んで来た。

「隙ありニャー！」

ニャースの鋭い爪で顔を引き裂かれたサクラは思わず転げまわる。

「きゃあああああ！！」

一方で恋次達は突然の乱入者に唖然としてしまった。

「おい！あいつらは！？」

「電気ネズミにニャース！」

「サクラちゃん！大丈夫かってばよ！？」

ナルトが心配そうに声をかけると、サクラは完全に堪忍袋の緒が切れてしまい怒りを赤裸々に表現する。

「いったあ・・・／／／！！よくも私の顔に傷つけやがったな・・・！！！！ぶっ殺す！」

サクラはニャースに攻撃を仕掛けようと腕を振り上げた瞬間、ルキアの縛道が一瞬のすきを見せた二人を捕える。

「縛道の六十二『百歩欄干』！」

「「！」」

百歩欄干に捕縛された二人は抵抗しようとするも容易に外すことが出来ない。

「く・・・離せ！離せってばよ！」

「アンタら・・・！！」

直後、なのははレイジングハートの先端を突き付けるとカートリッジを一発消費して魔力を集中させる。

「悪いけど、ユーノ君の所には行かせない！」

〈Ｌｏａｄ　ｃａｒｔｒｉｄｇｅ〉

「ディバイン・・・バスター！」

なのはのディバインバスターが二人に直撃し、二人は強烈な勢いのなのはの砲撃に悲鳴を上げる。

「「ぐあああああ！！」」

周囲の木々さえ吹き飛ばすほどの桃色の砲撃に銀時達は改めて唖然する中、視界が晴れた先にあったのは二人が変わり身として使った木の幹だけだった。

「ち。変わり身の術使いやがった。」

「こっちの方も逃がしたらしいな。」

土方がそう言うと、さっきまでいた筈のピカチュウとニャースがいつの間に消えていることに気づき、全員は驚いた。

「あいつら、何でまた急に・・・・・・ん!?と言うことはまさか！」

「は!まさかユーノ先生のところに!?」

「すぐに行きましょう!」

なのははそう言うと、全員を引き連れてユーノの元へと急いだ。

その頃、ユーノ本人は明神弥彦との激しい剣戟を繰り広げていた。

「「はあああああああ!!!!!!」」

深夜の森の中で響き渡る鋭い金属音。

ユーノは一度弥彦から距離を取ると、木の上に飛び乗り更にそこから跳躍すると以前弥彦がやって来た技を自分も試そうとし、それを見た弥彦は思わず目を疑った。

「！」

「飛天御剣流『龍槌閃』！」

「な！」

ユーノの斬撃の軌道を読み、皮一枚で躱した弥彦は直ぐに質問した。

「お前・・・俺の・・・剣心の技をどうして！？」

「前に君が仕掛けた時、僕なりに理解して真似してみただけさ！」

「く！野郎・・・」

悔しさと怒りの混じった表情でユーノを睨み付ける弥彦は神速を駆使してユーノに近づいていくと、ユーノもまた瞬歩でなく同じく神速を駆使して弥彦に近づき、お互いは同じ技を発動させる。

「「飛天御剣流・・・龍巻閃！！」」

遠心力を利用したその技を発動させた二人は威力が拮抗し、再び距離を置くとユーノは再び走り出していく。

「はあああ！！！」

ユーノは斬撃を弥彦に向かって振り下そうとした直後、弥彦はその斬撃を見切り刀を握りしめた状態でユーノの刃を両手の甲で受け止めた。

「“神谷活心流・奥義の防り・刃止め”！」

「！（手の甲で白刃取り・・・！しかも、その状態から攻撃に転ずる・・・！）」

驚き返るユーノを余所に、弥彦はその状態から手の甲を滑らせ攻撃に転じてきた。

「“奥義の攻め・刃渡り（おうぎのせめ・はわたり）”！！」

「く！おおおおおお！！！」

ユーノは弥彦の奥義をギリギリのところで回避すると、額に汗を浮かべながら弥彦と大きく距離を取り、お互いは睨みを愛を始める。

すると、弥彦は不意に感じた疑問をユーノにぶつけた。

「おい、何で魔法も死神の力も使わない？その力を使えばもっと簡単に俺を倒せるはずだぜ。」

「剣一本の相手に、しかも元の性根が真っ直ぐな奴相手にそんな卑怯な真似、出来る訳ないよ。」

「・・・――」

ユーノと弥彦はお互いに決着をつけるために剣を握りしめて向かい合うと、一気に駆け出して行った。

「「はあああああ！！！！」」

だが、弥彦は向かって来たユーノの懐から咄嗟に手を入れてプリズムシードを取り出しユーノ本人は大いに驚いた。

「な・・・！」

そして、弥彦はユーノからプリズムシードを奪うとこう言った。

「悪いな。こう見えても元スリなんだよ。こいつは貰うぜ。」

弥彦はそう言うとユーノの前から立ち去ろうとする。

「待て！」

咄嗟に呼び止めるユーノ。

弥彦はそんなユーノに次のように言った。

「出来るなら、俺達の前に二度と現れて欲しくねぇな。今度遭ったときは、止められない可能性がある。」

「・・・だったらせめて、名前ぐらい名乗っていったらどうなんだ？」

ユーノがそう言うと、弥彦は自分の名前を口にする。

「弥彦。明神弥彦。」

「明神・・・弥彦・・・」

ユーノがそう呟いた瞬間、弥彦は木の上を伝ってプリズムシードを

奪って逃走する。

ユーノはそんな逃走する弥彦を追うことはなかった。

「・・・――」

と、丁度その時ユーノの元になのは達が駆けつけた。

「ユーノ君！」

「ユーノ！どうした！？」

銀時が話しかけると、ユーノは今一度弥彦の名前を口にする。

「弥彦・・・か・・・」

「弥彦？」

「誰の事だよそりゃ？」

「――――――――」

事情を知らないなのは達はその後ユーノから詳しいことを聞かされることになるが、ユーノはこの弥彦との出逢いで一体何を思うのであろうか？

人には言えない秘密がある（後書き）

教えて、ユーノ先生！

ユ「今日はみんなのアイドルピカチュウについてだ♪」

ユ「通称電気ネズミ。ポケモン図鑑に記録されている標準的な体長は０．４ｍ、体重は６．０ｋｇ。肌は黄色・背に茶色の縞模様があり、耳の先端が黒い。」

ユ「頬には赤斑点に見える『でんきぶくろ』と呼ばれる、電気を生成するための器官が備わっている。戦う時は体当たりをしたり、尻尾を叩きつけたりする他、この「でんきぶくろ」で作られた電気を放出して相手にぶつける「１０まんボルト」や「かみなり」で相手を攻撃するんだ♪」

ユ「ちなみに、尻尾を掴まれることを嫌い、無闇に引っ張る者には噛み付くこともあるという。硬い木の実でも、電撃で焼いて柔らかくしてから食べるという知恵も持っているらしく、また何匹か集団でいるとそこに猛烈な電気がたまり、稲妻が落ちることもあるらしい。」

銀「電気ネズミのくせして、この俺に何度も電撃食らわせやがって！お蔭で俺の自慢の天然パーマがアフロに成り下がっちまったじゃねぇか！」

一「よっぽど銀さんの事嫌ってるらしいなピカチュウは。」

新「何か癇に障るようなことしたんじゃないんですか？」

神「そうアルよ。動物虐待なんて最低ネ！大人としてやることじゃないネ！」

銀「あのな、俺は言っとくが何もしてねぇぞ！一方的にあいつが電撃落としてきただけだからな！大体、何がピカ～♪だ！全然可愛くないんだよ！！」

と、その時銀時の背後にピカチュウが近寄りユーノ達はそれを見た瞬間、目の色を変えて逃げ出した。

ユ「そ、それじゃあ銀さんご、ご臨終！！」

銀「あ？んだよご臨終って？まるで俺が死ぬみたいな・・・」

と、銀時が言おうとした瞬間ピカチュウの怒りの雷が落ちる。

ピ「ピカチュウ！！！！」

銀「あああああああああああ！！！！！！！！！！！！」

魔導師図鑑ハイパー！

近藤はユーノと一緒に酒を酌み交わしながらこんな話をしていた。

近「ちくちょう！！俺が何したって言うんだよ！！何でお妙さんはちっとも俺に振り向いてくれないんだ！！」

ユ「まぁまぁ。近藤さん・・・落ち着いて。取りあえず飲んで忘れましょう。」

近「ぐっす！す、すまねぇユーノ先生／／／」

ユーノは近藤の御猪口に酒を酌むと自分もまた御猪口に酒を酌みそれを口に入れる。

ユ「けどどうしてなんでしょうかね？近藤さん、土方さんや沖田さんの話を聞く限り隊士たちから絶対の信頼を得て慕われているのに恋愛に関してはちっとも当たりが来ないんでしょうか？」

近「全くですよ！俺だってね、こう見えて女性にもてるための努力は日々行ってるつもりなんですよ！なのに世の女性たちは誰一人俺の魅力に気づかない！お妙さんでさえ！」

ユ「一応聞きますけど、たとえばどんなアプローチの仕方を？」

近「よくぞ聞いてくれたユーノ先生！俺はちゃらちゃらしたやり方は大嫌いだからね！いつでも真っ直ぐなやり方で向かって行きますよ！お妙さんの帰宅を見計らって家に入り込んだり、外出を見計らって気づかれないように後ろから見守ったり！」

ユ「あの・・・それってようはストーカーですよね・・・」

近「え！」

次回予告

弥彦との出逢いから心揺れ動くユーノ。

弥彦もまた、ユーノと刀を交えるたびに嘗ての記憶がよみがえる。

そして、プリズムシードを巡ってユーノと弥彦の衝突が勃発する。

ク「次回『譲れぬ願いがある時、人は武力行使に移る』」

譲れぬ願いがある時、人は武力行使に移る（前書き）

銀「それは、平凡なダメ人間だった俺、坂田銀時に訪れた小さい事件・・・手にしたのは魔法の力・・・」

ユ「ちょっと待ってください銀さん！何か下りが違いますよ！なのは1期みたいな言い方は止して下さい。」

銀「んだよ・・・いっつも同じ入り方ばかりで面白みに欠けてるから気分転換がてらやってただけなのによ・・・まいいや。そんな訳で、今回もふわ～っと本編は始まるぞ。」

譲れぬ願いがある時、人は武力行使に移る

＞ｉ２８６７１―７０９＜

明神弥彦との二度目の衝突から一夜明けた午前5時の機動六課隊舎寮。

ユーノはパジャマ姿で洗面所に向かうと、寝起きの表情ではねた寝癖を鏡で見ながら弥彦との衝突以来頭の中を巡る不思議な思考に戸惑いを見せていた。

「（ずっと、考えていた・・・・・）」

ユーノは弥彦のことを考えながら自分の歯ブラシに歯磨き粉をつけ、口の中に放り込み歯磨きを始める。

「（歳はお互いそれなりに離れているけど、性根は真っ直ぐで淀みのない魂を持ったあいつの事を・・・――――）」

ユーノは少し浮かない表情を浮かべると、一端コップの中の水で口の中をすすぎ、歯磨き粉を綺麗に洗い落とし再び鏡を見つめる。

「（遭えばまた、必ずぶつかることになる・・・・・・――――）だけど」

ユーノ・スクライアの思考は明神弥彦の事で頭がいっぱいであった。

それは嘗てなのはが敵同士だったフェイトとぶつかり合っていた時

の心境と同じように――――――

さて、一方諸世界を渡りながらプリズムシードの捜索に精を出していた弥彦達一行はユーノから奪ったプリズムシードと、最初に盗んだものを含めた二個のプリズムシードを所持していることになるのだが、あろうことかユーノから奪ったプリズムシードが何かの拍子で地面に落ち、衝撃粉々に砕け散ってしまった。

「にゃ、ニャンだこりゃ！！！！！」

ニャースは大声を上げて砕け散ったプリズムシードを見つめ、ピカチュウと弥彦もそれを見て暗くなったらりまたは眉間に皺を寄せた表情を浮かべていた。

「ピカ～～～」

「・・・――――」

ニャースは挙動不審になると、砕けたプリズムシードの一欠けらを手に取りこう語り出した。

「どういう事だニャー！何でプリズムシードがこんな簡単に砕けるニャー！？弥彦、説明して欲しいニャー！！」

「・・・恐らく、あいつが・・・――――ユーノ・スクライアの仕業だ。」

「ピカ！？」

「あいつが・・・！」

驚くピカチュウとニャースに弥彦はあの時ユーノからプリズムシードを奪う際のプロセスを今一度思い出してみた。

「一瞬だ。俺が奴の懐からプリズムシードを奪い取ろうとする際、奴は本物のプリズムシードと予めこうなることを予測して用意していた偽物をすり替えやがったんだ。結局、俺はまんまと奴の策に見事なまでに引っかかった訳だ・・・」

「だ、だが！このままじゃ埒があかないニャー！カトゥーンの手下もこれを狙って血眼になって探してる。ニャー達が持ってるプリズムシードも直に狙ってくるニャー。そうなる前に何とかしないと・・・・・ニャー達はずっと“元の世界”に帰れないニャー・・・・・・」

「ピカ・・・・・・」

ニャースの最後の方の言葉を聞き、思わずピカチュウは意気消沈となってしまい、弥彦の方も浮かない表情となった。

「・・・ああ。そうだな。仕方ねぇ。奴らよりも早く、先手を取って動くしかねぇな。」

「どうする気だニャー？」

「・・・――出来れば、逆刃刀で暴力を振るうことは避けたかったが、状況が状況だけにそうも言ってられねぇ。ピカチュウ、ニャース。今からやることは、決して剣客として許されないものだが・・・それでも・・・俺を許してくれるか？」

弥彦が背中越しに二匹にそう語ると、二匹は顔を見合わせほくそ笑むと弥彦に向かって好適の返事をした。

「・・・ピカ！」

「ニャー達は共通の願いを持った一蓮托生の仲ニャー。弥彦がそうしたいって言うなら、ニャー達は止めはしない。ニャー、ピカチュウ？」

「ピッカ！ピカチュウ！」

その言葉を聞き、弥彦も表情を和らげ二人の方に振り返った。

「・・・そうか。ありがとうな。」

弥彦は早速行動を開始するためピカチュウとニャースを連れて移動を始め、弥彦は一度腰に携えた逆刃刀に目をやると申し訳なさそうな顔を浮かべ、心の中で彼方を授けてくれた剣心に謝罪の言葉を呟く。

「（剣心・・・・・・悪りぃ。俺は・・・・・・一度だけ“剣客”を辞める！）」

一体、弥彦はこれから二匹と一緒に何をしようと言うであろうか？

さて、弥彦達が何やら不穏な動きを見せ始めたその頃、夕方近くになってユーノは一人精神統一と剣の稽古の為に室内訓練場へと向かい、剣道着に着替えると木刀片手に目を瞑って立ち尽くしていた。

「――――――」

ユーノの目の前には対象物が五つ置かれており、精神統一が済んだ瞬間ユーノは目を一気に開くや否や超高速の抜刀術でその対象物を綺麗に切断する。

「！」

それはまさに刹那の出来事。

ユーノは斬り終えた対象物の断面を見て、何処か複雑な想いが感じ取れるそんな表情となる。

「――――――」

と、その時ユーノの稽古をこっそり拝見していた銀時の拍手が聞こえ、ユーノは思わず振り返った。

「ん！？」

銀時は拍手を終えると、ユーノに夕食の時間であることを伝える。

「気合入ってるところ申し訳ねぇが、そろそろ晩飯の時間だぜ。」

「銀さん。あ、はい・・・態々どうも。」

「大した太刀筋だな。その細い体の何処にんな力がある訳？」

「ま、細かいことは気にしないで下さいよ♪」

すると、銀時は徐にユーノに近づくと彼が今何を思っているのを察

し、徐にこう言った。

「・・・あいつの事、気にしてるのか？」

銀時の言葉に思わずはっとした表情となるユーノだが、そこは素直に返事をする。

「・・・ええ・・・」

「確かに、野郎はこれまでの漫画キャラとは随分様子が違ってたのは間違いねぇな。連れの電気ネズミにしても、招き猫もどきにしても目を見れば自ずとそれが分かる。」

「・・・銀さん・・・僕は・・・どうすればいいんでしょうか？」

「・・・・・・」

銀時も思わず声を詰まらせる。

すると、ユーノは何時もの服装に着替えながら次のように語ってきた。

「僕はこれまで、大切なものを守り抜くために色々とやってきたつもりです。勿論、行きつくのは結局なのは達になるんですけど・・・だけど・・・今僕の心は嘗ての自分にはなかったものを感じる・・・」

「・・・具体的にそれは何だよ？」

「・・・明神弥彦に対する奇妙な惹かれ・・・とでも言っておきま

しょうか。」

「・・・・・・」

「どうしてかは分からない。だけど、僕はあいつを・・・弥彦を放っておけない。あいつもきっと何かに苦しんでいる・・・それは二度目のぶつかり合いの中で刀を通して感じた。他のみんなからは理解することが出来ない重荷と心の動揺が・・・・・・僕は・・・・・・そんなものを抱く弥彦に何をしてあげられるのか・・・」

そう独り言のように淡々と呟くユーノだったが、話を聞いていた銀時は暫く考えから意外な言葉を持ちかけた。

「・・・何をしてあげられるかじゃなくて、お前が何をしたいのかじゃないのか？」

「え」

「今のお前に欲なるものが無いのは重々承知だ。自分への執着を捨ててまで、徹底して利他的になれるその精神はご立派ご立派。どっかの銀髪にも見習わせたいものだ。だが、それでも人間の欲って言うのはそう簡単に消えるものじゃねぇぜ。きっと今のお前の中にだってまだそれがあるんじゃねぇか？お前があいつと交えることでその欲望とやらが浮き彫りになってるのかもしれねぇ。」

「僕の・・・欲望・・・」

ユーノは二年前の内戦における事故以来、自分への執着即ち自分への欲望が枯渇してしまい、自分が何をしたいと思わなくなってしまった。

しかし、銀時はそれでも欲望は簡単に消えるものではないと豪語する。

ユーノは銀時の言葉を聞くと、今一度自分の欲望とは何なのかを考えてみたが、今はまだそれが何なのかはよく分からないままであった。

「話はこれぐらいにして、さっさと飯にしようぜ。何か今日はすき焼きだってよ。早くしねぇとまた神楽の野郎に全部食われちまう・・・」

銀時はそう言うと、訓練場の外へと歩き出すが直後徐に銀時を呼び止める。

「銀さん・・・ひとついいですか？」

「お？」

「旅の途中、僕が悟ったものであれなんですが・・・・・・“人が人を助けていいのは、自分の手が直接届くまでのところ”じゃないかって。」

「ユーノ・・・」

ユーノの言葉を耳にし、思わずそう神妙な表情となる銀時にユーノは一度自分の両手を大きく開いて自分が届く距離を表現してきた。

「僕は・・・・・・こんぐらい！まぁ、届かないことありますけど・・・・・・欲望だとしても、こんぐらいなら手におえますしね♪」

「・・・そうか。こんぐらいか。」

銀時もユーノに倣って自分の両手を広げてみたのであった。

ユーノはそんな銀時にほくそ笑むと、着替えを済ませ帽子を被りながら外へと向かう。

「さぁ、行きましょう。すき焼き、なくなっちゃ嫌ですしね。」

ユーノがそう言って部屋の外に出ると、銀時も鼻で笑いながら外へと出ていくのであった。

「・・・ふん」

この二人の関係は意外にも絶妙に保たれている。

それは多分、二人が同じ匂いを漂わせるゆえなのかもしれない――

――――

さて、辺りがすっかり夜の景色に染まった午後６時過ぎ、ミッドチルダへと転移してきた弥彦達一行は暗闇に紛れながら都市中央へと向かって移動していた。

「「「・・・・・・」」」

茂みの方で三人が異動した後に発生する物音に耳をそばだてる者もいれば、全く気にしない者もいるが三人にとってはそんなことは大した問題ではない。

何故なら彼らの目的はプリズムシード。

そう、今宵彼らはプリズムシードが保管されている中央管理局の保管施設を襲撃するという大胆な計画を立てていたのだ。

弥彦は中央管理局付近にまで近づいてくると、ピカチュウとニャースに向かってこう言った。

「守備は？」

「上々。」

「ピカ。」

「よし。」

弥彦は襲撃の準備が整ったことを確認すると、中央管理局のセンサーが反応しないぎりぎりの場所へと移動する。

果たして彼らの作戦は上手くいくのであろうか？

そんな三人の壮大な計画など全く知る由もない機動六課では、食堂の方で盛大にすき焼きパーティーが開かれ、局員たちは目の前に出されたすき焼きにくぎ付けだった。

「さぁみんな！今日ははやてちゃん特製の出汁で時間をかけて作った特製のすき焼きやで！遠慮せずにどんどん食べてな！」

割烹着姿のはやては人数分のすき焼き鍋を運んできて、全局員は笑顔を浮かべながらすき焼きにかぶりつき、シャマルやヴィータ、シ

グナムと言ったはやてに使えるヴォルケンリッターの面々は相変わらず絶妙な味付けで自分たちを幸福に導くはやての料理に感服していた。

「う～～ん、このすき焼き本当に良い匂い！」

「相変わらずはやての料理はギガ美味だぜ！！」

「流石ですな。」

「はは。そうやって褒めてもらえると作り甲斐があるもんよ。」

はやては笑顔でそう言うと、他の局員からの暖かい視線を一身に受けるのであった。

ユーノもなのはとヴィヴィオ、スクライア商店の三人に白鳥を含めた七人で円卓に囲みすき焼きをいただいていた。

「ママ、どうかな？」

「うん。オッケイだと思うよ。」

肉と野菜がいい感じに火が通ったことを確認すると、ユーノは手を合わせて、いただきますの号令をする。

「じゃあ、みなさん揃って・・・・・・いただきます！」

「「「「「「いただきます。」」」」」」

全員は礼儀正しく挨拶を完了させると、それぞれの御椀に自分の食

べたいものを運んできて溶き卵の上に乗せて食し始める。

「うっほ！！美味そう！」

鬼太郎は久しぶりの牛肉に頬を赤らめ、豪快に卵につけて口に放り込む。

浦太郎や金太郎、白鳥も今晩のすき焼きは格別だったらしく上機嫌な様子であった。

当然なのは達もなのだが。

「やっぱり大勢で囲んで食べる鍋、特にすき焼きは最高だね♪」

「うん♪こうして見ると、何だか大家族みたいで楽しいね♪」

「まぁ、僕らはもとい店長とは家族みたいなものだからね。」

「我々は何が起こっても一蓮托生。死ぬ時も一緒です。」

「ある意味熊が一緒だと店長もさぞ迷惑じゃねぇのか？」

「それは同感であるな。」

鬼太郎と白鳥の共通見解を聞くと、ユーノとなのは、ヴィヴィオの三人は思わず苦笑いを浮かべるのであった。

「「「あはは・・・・・ちょっとそれはね・・・・・」」」

その後もすき焼きを食べ勧めていくユーノ達。

投入した肉がいい感じに煮えたかどうかをユーノに確認するなのは。

「そろそろいいかな？」

「頃合いだな。よし、食べるぞ・・・って！」

その瞬間、ユーノやなのは、ヴィヴィオが肉を箸で取る前にスクライア商店メンバーと白鳥が根こそぎ奪ってしまい、なのはとヴィヴィオはきょとんする中、ユーノは若干の怒りを表情に見せる。

「あ！お前ら・・・！！」

「う～ん♪この霜降り最高♪」

「あ、店長！豆腐もういいっすよ。」

「うるさいよ！」

鬼太郎はそう言ってユーノを誤魔化そうとするが、逆に怒りを助長させるだけとなった。

そして、そんな中で浦太郎達は肉を食す傍らこう語り出した。

「しかしこうして牛肉食べる機会なんてホント久しぶりだよね？」

「全くですな。普段は倹約の精神を心掛けておる故質素な食事がメインですからな。」

「じゃあ、前に主の出したマヨネーズ特盛もそうだと言うのか？」

「あれはどう考えても熊の趣味を押し付けただけだろうが・・・ぐっほ！」

その瞬間、鬼太郎の頭部に金太郎の鉄拳がクリーンヒットする。

「余計な事は言わぬでいい。ささ、店長もなのは殿達も食事を続けましょう。」

金太郎は笑顔でそう言うのに対し、店長でもあるユーノの機嫌は晴れないものだった。

「さっきからなのはやヴィヴィオに遠慮もせずにガツガツ食べてる奴に言われたくないって。それより、お前らは揃いも揃って肉ばっかり食べやがって、ちょっとはネギや白滝にも手を付けたらどうなんだい！そこの白菜だって煮えてるでしょう！」

鋭い指摘をし、従業員と白鳥に野菜を食すことを促すユーノだが、それを聞いた浦太郎達は頬を赤くし恥ずかしがりながらこう言って来た。

「いや～～～僕、煮えたネギの真ん中のにゅるっとしたところが苦手でして♪」

「俺も白滝のプニュプニュとした触感が気持ち悪くてっすね！」

「私は妙に青臭い春菊がどうも嫌いでして。」

「私は豆腐がどうも熱くて食べにくくて仕方ならん。」

その瞬間、ユーノは思い切りテーブルを叩いて大声を上げてこう言った。

「だったらすき焼き喰うな！！」

「「わ！」」

思わず箸を止めてユーノの形相に恐怖するなのはとヴィヴィオ。

すると、暫くの沈黙が流れたのち何事もなかったかのように浦太郎と鬼太郎はなのはにご飯のお代わりを頼んできた。

「あ、なのはちゃん。ごはんお代わりいいかな？」

「俺、大盛りで頼むぜ！」

「あ、えっと・・・」

全く懲りる気配すらない従業員の態度にユーノはとうとう我慢が出来なくなった。

「ぬぬぬぬぬぬぬ！！！！！！！！お前ら・・・・・・！！！！！！！」

すると、ユーノは立ち上がるや否や鬼太郎達の近くに置いてあった皿に盛られた霜降りの牛肉を取り上げる。

「ぬん！」

「あ！店長、何を！？」

「すき焼きを冒涜する無粋な輩め！」

動揺する鬼太郎達にそう言ったユーノは席に着くと、春菊をすき焼きの上えと乗せ自分たちが食べる分と従業員が食べる分を極端に二等分する線を作り出した。

「いいか。ここが境界線。こっちが僕ら。こっちがお前ら！はみ出すんじゃねぇぞ！」

「「「あ、はい。」」」

唖然となる金太郎や浦太郎、白鳥の三人だが鬼太郎はそれでもユーノの機嫌を取ろうと次のように語る。

「あ、そっちの肉はもういいみた・・・」

がしかし、鬼太郎が口にした直後帰ってユーノの怒りは増すばかりであった。

「分かってるよ！口を出すな！手を出すな！」

「「「「あ、はい！」」」」

従業員一同は店長ユーノ・スクライアの怖さを誰よりも理解しておるため、これ以上の口論は自分の身を滅ぼしかねないと判断した。

ユーノは従業員がようやくその事を理解し、大人しく引き下がるそぶりを見せると何事もなかったかのようになのはにこう言った。

「よし。なのは、肉と春菊もういいよ。」

「う、うん。」

なのはは一瞬戸惑った様子となり、ヴィヴィオは徐に箸を伸ばして椎茸を取ろうとする。

「じゃあ、私は・・・」

その瞬間、大声でユーノがヴィヴィオに注意をする。

「椎茸はまだだからね、ヴィヴィオ！」

「あ、はい！」

これにはヴィヴィオも思わず驚愕してしまうのであった。

なのははそんな感情の起伏が著しい今のユーノに困惑するばかりであった。

「にゃはは・・・まぁユーノ君、落ち着こうよ。」

そんなユーノ達の食事を拝見しながらスバル達フォワード陣は固まってすき焼きを食していた。

「何かあっちはそれなりに騒いでるようだね。」

「そうね。なのはさん達も結構大変そう。」

「やっぱり、肉の事となるとみんな人格が野生化しちゃうのよね♪」

そう言った瞬間、ギンガは一気にすき焼きの肉を箸で無造作に掴んでその顔と体系に似合わないような豪快な食事を披露し、スバル達を圧倒する。

「あ！ギン姉！！いつの間に！」

「うん！美味しい！」

「相変わらずギンガさんの胃袋の大きさには驚かされますね・・・」

「何処にそれだけの量が入るんだろうね？」

ふとそんな事を感じたエリオとキャロであった。

ギンガは肉を飲み込んだ後、新八に食事の様子を窺ってみた。

「新八さん、そっちのお肉はどうですか・・・ってあれ？」

その時、ギンガが新八たちの食事が他とは全く違う雰囲気を漂わせていることに気づいた。

「どうしたのギン姉？」

「何かしら、あのただならぬ雰囲気・・・」

「「「「？」」」」

ギンガの言葉を聞き、フォワードの面々が新八たちの円卓の方に目を向けてみる、銀時・近藤・新八・神楽の四人が静まり返って一向

にすき焼きに手を付けていない状況であった。

「しゃくしゃくしゃく」

最も、神楽本人は白滝を食べるのに夢中になって喋っていないのだが、あとの三人は何処か緊迫した様子で周りを見渡していた。

ちなみに、土方と総悟の二人は現在追加の肉を調達するために買い出しに向かっている最中だった。

するとその瞬間、銀時が徐に咳払いをすると次のように語り出した。

「・・・うぇへん！しゃあねぇな・・・じゃあ食うか。別に俺は食いたくねぇけど、メンドクせぇなおい。けど、俺だけ喰わねぇのも雰囲気悪いしな・・・新八、ゴリラ。お前らも食えよ。」

「あ、はい。僕も別に肉は食いたくないんすっけどね。残すのも勿体ないですからね。僕、そこら辺の躾だけはしっかりしてるんで。」

「さ、流石は新八君。お妙さんの弟だけのことはあるな！そうだな。目の前でこうしてすき焼きが出されてるんだ。食べないと牛さんやお百姓さんに失礼だ。全ての命に感謝し、ありがたく頂戴し様じゃないか。」

表向きではそう語る三人だったが、心の中ではここにいる誰もが想像も付かないような非常にどうでもいい心理戦を勃発させていたのであった。

「（ふん。何とか切り抜けたか。だが、依然として肉に手が出しづらい状況にあるのは間違いない。）」

「（つまらぬ言い争いから、すき焼きを一度否定したことで鍋に手を付けることさえ躊躇われる空気が出来てしまっている。）」

「（ちくしょう・・・何か事態打破の切っ掛けはねぇのか・・・何か・・・！）」

「「「（何か・・・ないか！！）」」」

そんな共通のことを抱える三人を見て、死神組やはやて達は訝しげな表情を浮かべていた。

「あの三人は一体何をしているのだ？」

「そうだね。神楽ちゃん以外の男三人はじっと固まったまま動いていないね。」

すると、はやてはそんな三人を見てふと不敵な笑みを浮かべる。

「ふふ・・・成程。鍋は人生の縮図とはよく言ったものやな。これは相当オモロイことになりそうや。」

一人だけ面白がっているはやてに思わずリィンはこう呟いた。

「何処が面白いんですか一体？」

「何でもいいから早く食えばいいのに。」

そんな事を思いながら、アギトはすき焼きを口の中に入れるのであった。

三人は依然膠着状態を保ったまま、全くと言っていいほど肉はおろか箸にさえ手を付けない状況だった。

そんな沈黙が数分間続いていると、唐突にそんな沈黙を打ち破るものが現れた。

「ふん！」

何と、食堂の天井の上から理由は定かではないが唐突に制服姿のクロノ・ハラオウンが舞い降り、一同はその姿を見て一度箸を止めた。

「危ないところだった・・・どうにかまいたらしいな。」

クロノは周りを確認し、そう口にするがこのクロノの事をまじまじと見つめていた新八は心の中でこう言った。

「（つか何やってんだよこの人？）」

困惑する機動六課全局員だが、フェイトがそんな周りのリアクションを見ると代表してクロノに尋ねた。

「く、クロノ。どういうシチュエーションで登場してる訳？うちに帰ってエイミィたちと一緒に食事してたんじゃないの？」

「そうする筈だったんだが、急にエイミィの親戚のおばさんが倒れてそれどころではなくなった。子供たちは母さんとアルフが面倒を見てくれる。だが僕も僕で別な仕事が残っていたのを思い出してな・・・今日は仕方なくこっちで夕食を取ることにした。」

クロノはそう言うと、銀時達の座っているテーブルに近づきすき焼きを凝視し、そんなクロノに銀時は軽い返事をする。

「ああ、そうなの？（嘘をつけ！銀さんもどき！）」

「悪いが銀さん、僕も食事に混ぜてくれ“卵”。世話“肉”なる“ネギ”・・・悪“糸こんにゃく”感謝“すき焼き”。」

「（何を言ってるんだこの男！！）」

心の中でクロノの突然の来訪と癇に障る言動に非常に怒りを露わにする銀時と近藤の二人であった。

そして、そこから銀時とクロノの心の会話が始まった。

「（やるな、黒河童）」

「（黒河童じゃない、クロノです。）」

「（それはさておき、見え見えのウソだが、登場のインパクトがすべてを吹っ飛ばした。万が一ツッコまれても・・・）」

「（てへ？バレちゃった？）」

「（で、クリアするという最終奥義まで考えてるに違いない。）」

クロノの思考を深読みする銀時だったが、直後新八が八方美人な態度でクロノに対して食事の誘いを言って来た。

「どうぞ、どうぞ。どうせだからみんなで食べましょうよ。」

この言葉には銀時も衝撃を隠せなかった。

「（な、何!?何するんじゃこの八方美人が!!そんなことで人気取ろうなんて甘いんだよ!イチゴ牛乳に餡子投入するくらい甘いぜ!!あれ?ちょっと美味そうじゃん、今度やってみっか・・・じゃなくてさ!）」

「では、ありがたく戴くとしよう。」

クロノは新八から許しをもらうと、懐からマイチョップスティックスを取出し始めからそのつもりとばかりにお椀を以て待機していた。

そしてここでまた、近藤から始まる銀時・新八のすき焼きを巡った心理戦が再開される。

「（言い争いによる手を出しづらい空気はクロノ殿の乱入によっていくらか払拭された・・・・・であれば!）」

「（今この静寂の中で、誰か先端を開き一番に肉を掴むか・・・これが問題だ。）」

「（敢えて意地汚い。食い意地が張っている。などの汚名を引き受ける覚悟を持ち、周囲を牽制しつつ・・・先手を切った者にこそ鍋を支配する権利が与えられる。つまりそれこそが・・・！）」

「「「（鍋将軍!!）」」」

彼らの頭に浮かんできた箸にすき焼きの肉を抱え馬を乗りこなす将軍の図柄。

つまり、彼はこの鍋将軍の地位を手に入れようとしているのだ。

「（この勝負、第一手を！）」

「（制したものが勝つ！）」

「（何が何でも鍋将軍になってみせる！）」

そんな野望を抱く三人だが、ここで近藤は一度状況を整理を行い鍋将軍に一番近い人間は一体誰なのかを考えてみた。

「（今現在、最も鍋将軍に近い存在は奇しくもチャイナ娘だ。まだ鍋そのものに手を付けていないとはいえ、あれを食べ終わった後にごく自然に鍋に箸をつける権利を有している。）」

「（だが、あれを気にする必要はない。あの顔は恐らく、白滝の新触感に捕われている。あの年頃の娘には、肉の様なカロリーの高いものより、白滝食ってる方が何かカッコいいと思ってるバカが多い。）」

銀時はそのように推測し、白滝を食べ続ける神楽の存在を軽視する。

「（あとはクロノさんだが、危険性は極めて低い。何故なら彼は所詮お客さん扱い。いきなり先陣を切って鍋に手をつける可能性はゼロ。二度・三度と進められて漸く遠慮がちに白菜・白滝・ネギ辺りに手を付ける程度だろ・・・）」

しかし、そんな新八の推測とは裏腹に銀時はクロノを警戒していた。

「（いや違うな。黒河童は侮れない。）」

「（黒河童じゃない、クロノです。）」

「（ユーノとは違い場の空気を読まず、さっさと箸をつけてしまう可能性がある。よくそんなんで提督などと言う管理職までのし上がったものだ。所詮は親のコネでのし上がったボンボンに違いないか・・・）」

「（おい、言いすぎですよ！）」

心の中とは言え、銀時の発言には流石のクロノも文句を言いたくもなった。

すると、近藤は状況を見た上でクロノ以上に最大の敵が誰なのかを悟る。

そう・・・近藤や銀時にとっての最大の敵、それは間違いなく新八だ。

「（となると、やはり最大の問題は新八君か・・・チャイナ娘の生態と思考に逸早く気づき、さり気なく白滝を多めに皿によそった。我が弟ながら間違いなくできる！）」

と、その時新八の頭上に雷が落ち彼が見おとした最大の汚点が浮き彫りとなる。

「（しまった！！何故神楽ちゃんによそってあげた後、銀さんや近藤さんにもよそわなかったんだ！気配りキャラを演じつつ、最後に自分の分をよそう。その後鍋のレイアウトを変えるなどして、最も

数多く鍋に触れるという既成事実を作っておけば・・・鍋将軍の地位は僕のものに!!・・・・・待て!神楽ちゃんはもうすぐ食べ終わる。もう一度僕がよそってあげるというのはどうだ?駄目だ、二度目のチャンスはない!何故なら二杯目からは自分で自分の取り分を演出してみたいと思うもの。人によそわれて平気なはずがない!こうなったらもう・・・破れかぶれだ!)」

そう決断すると、新八は唐突に荒唐無稽な話を口にし始めた。

「でもあれですよね?」

「「「?」」」

「友情・努力って言っても、最近の子供たちは友情の儚さも勝利の空しさも知ってる訳で・・・結局、天才しか必要じゃないんだよね・・・」

その瞬間、一瞬の隙を見て新八は自分の箸をすき焼きの肉に向けて急降下させ、目に写ってきた肉に彼は勝利を確信した。

「(取った!)」

だがしかし、そんな彼の目に写ってきた現実は肉ではなくなんと茶碗に盛られたご飯であった。

「な!」

銀時は逸早く新八の行動に気づくと、咄嗟にご飯とすき焼きの位置を入れ替えすき焼きの鍋をガスコンロごと移動させるとさり気なく火の調節をし始める。

「あれ、火が弱くなってねぇ？」

「く！」

「（鍋将軍は・・・・・・俺だ！！！）」

不敵な笑みを浮かべてすき焼きの肉に箸を向けた銀時。

しかしその瞬間、彼の目に写ってきた光景に彼は度胆をぬいた。

何と、隣に座っていた新八が銀時に鍋将軍を奪われまいと握っていた箸を鍋に向けて投げつけてきたのだ。

「（は？！箸！！まさか、あの一瞬で！！）」

「（行っけ！！チョップスティック・スケットミサイル！！）」

新八は自らの魂が宿ったとも言える自分の箸をすき焼きに投げつけ、あと一歩のところですき焼きの肉に箸の先端が触れようとした瞬間、銀時の箸が新八の箸を掴み新八は目を疑った。

「な！！」

「へ・・・な！！」

だが、銀時が不敵な笑みを浮かべていられたのもそこまで。

両サイドから隙を見て近藤とクロノの二人が鍋に箸を伸ばしてきた。

二人は心の中でこう呟いていた。

「（仕覆の日々を送ってきたのは今この時の為！！！）」

「（だっははは！！悪いが鍋将軍は貰ったぞ！！）」

「（しまった！脇ががら空きだ、ゴリラと黒河童の奴！）」

「（黒河童じゃない、クロノだ！）」

「（肉よ！！！！）」

と、二人が肉に箸をつけようとした直後、事態は一変してしまった。

「ぶっはくしょん！！！！！！」

今まで白滝を食べることに夢中になっていた神楽の鼻から豪快に茶色の鼻水が飛び出し、すき焼きの鍋に降りかかると同時に四人の男の箸を床に吹き飛ばしてしまったのだ。

「「「「・・・！」」」」

この一瞬の出来事には男四人も思考がついて行けず、鼻水を啜りながら神楽は四人に向かってこう言った。

「あ～～ごめんアル。私風邪引いたかもしれないヨ。」

「「「「（な、何！？）」」」」

銀時達は偶然とは言え、一発のくしゃみで戦局を一変させたことに

驚きを隠せなかった。

「（手も箸も使わずに、たった一発のくしゃみで・・・！）」

「（第一手を決めただと?!）」

「（こんな先手の決め方が・・・）」

「（あっただと!!!!）」

神楽は度胆をぬく四人を無視して、鼻をかんだ後何事もなかったかのように自分の鼻水でべっとりと彩られたすき焼きから肉を取っていく。

「（いや、事実・・・こんな鍋はもう食べる気がしない。もうこの鍋はこいつにしか食べられなくなった。無邪気・無垢なる心が導いた勝利だとでも・・・・・ん!いや、この女!）」

と、神楽の表情を銀時が見てみると、神楽の表情はさっきまでとは一変して完全に悪意に満ちた欲望むき出しの人間の顔となっていたのだから。

「（ふふ。鍋将軍はアタイだよ。）」

そして、彼らはそんな欲望で浮き彫りとなった神楽に恐怖を覚えた。

「（この女、無垢なんかじゃない!）」

「（このガキ、鼻から白滝が出ている!）」

「（神楽・・・恐ろしい子！）」

「（くそ！謀られたか！！）」

そんな恐怖に戦く四人を見ながら、悪意に満ちた神楽は鍋の取っ手を掴みながら心の中でこう言った。

「（ふふ・・・今頃気づいたのかい坊やたち？腹を鳴らすところから始まり、白滝に夢中になるところまで全てがアタイの芝居。ケツが青い坊やたちを油断させ、鍋将軍になるための布石だったってことに。そこで指を咥えて見てるがいいネ・・・お前たちの愛する牛肉が、小娘に蹂躙される様をネ！）」

神楽はその瞬間、立ち上がると同時に鍋を両手に持って意を決して自分の口の中に豪快にすべての具材を一気に飲み込んでいく。

これには銀時達だけではなく、ユーノ達すべてのものが目を疑い愕然とした。

「「「「「えええええええええ！！！！！！」」」」」

「「「「な！！！！！！」」」」

「「「「「う！！！！！！！！」」」」」

「「「「「「のあ！！！！！！！！！！！！」」」」」」

「（な、何！！！！！！！）」

「（一気飲みだと！！）」

「（夜兎族の胃袋は化け物か！！！！）」

「（チャイナ娘・・・！お前はお妙さん以上に恐ろしい女だったよ！！！！）」

「す・・・凄い・・・！」

「神楽さん・・・何ちゅう女の子や・・・！」

年上のものでさえ、つい敬語を使いかねない状況となってしまったことに誰もが恐れおののく中、ユーノは一人飄々とした態度でプラカード片手にこう言いました。

「よい子は真似しないでね♪」

局員一同が唖然となり、一瞬の沈黙が状況を支配していると、その時丁度スーパーの袋にぎっしりと追加の肉を入れて戻ってきた土方と総悟が戻ってきた。

「近藤さん、肉買って来たっすよ。」

「そ、総悟。トシも。」

「何だよてめぇらもうおっぱじめてやがったのかよ。つれねぇな・・・肉の追加買ってくるまで食わずに待ってろって言ったじゃねぇかよ。」

「近藤さんも旦那もそれはないぜ。俺達が肌寒い中スーパーで仕入

れて来たんすよ。」

そんな今更とばかりに六課に戻ってきた二人の事を神楽は勝ち誇った眼つきで凝視する。

「（ふふ・・・糞ガキども残念だったアルな・・・お目当ての牛肉はもう・・・）」

と、その時土方は空になった鍋に残っていた僅かな肉の一部分を見た瞬間、神楽とクロノにとっては信じられない事実を口にした。

「つか、お前ら何だよこの肉は?また豚肉ですき焼きかよ。」

「！」

この瞬間、聞いていた神楽は食べるのを止め目を見開いた。

「かっ。折角のすき焼きだって言うのに泣けてくるぜ。」

「ま、俺達小市民には豚辺りが一番いいのかもしれやせんぜ。」

二人がそう言った直後、神楽とクロノの身体に痛烈な落雷が降り注いだ。

「「（ぶ、豚肉だと!!!!）」」

そして、実際は焦げてはいないのだが気持ち的には全身黒焦げとなってしまった二人は残りかすが残った鍋を見ながら信じらないとばかりの表情でこう思った。

「（そ、そんなバカことが・・・豚肉だなんて、あり得ない！確かにあれは牛肉の味だった。牛丼とか、牛玉丼とか牛焼肉丼のいつも食べている牛肉の・・・）」

「（そうだ！いつも店の前で嗅ぐ、ドアが開いた一瞬に漂ってくるあの匂いと同じ！！いや、正直あまり食べたことはないが、確かにこれは牛肉の！）」

「退け。ここは俺が座るんだよ。」

土方はそう言うと、買ってきた肉をその辺に置くと銀時から席を取って、銀時は不満げな声を漏らす。

「んだよもう・・・・・ふん・・・」

だが、直後彼は不敵な笑みを神楽とクロノに対して向けた。

「（まさか！！）」

「（まさか銀さん！！）」

危惧の念を抱く二人だったが、銀時はそんな二人に心の中でこう呟いた。

「（その通りさ。お前がいままで牛だと思って食べていた食卓の肉はすべて・・・・・）」

その瞬間、銀時を始め新八・近藤の二人も一緒に悪意に満ちた表情で痛い言葉を口にした。

「「「（安い豚肉さ！）」」」

「「「（なあああああああああああ！！！！！！！！）」」」

それを聞いた途端、二人はまるで氷河期が訪れたかのような錯覚に陥り、全身を震え上がらせた。

「（牛肉などと言う高級な代物が、ウチの貧乏な食卓に並ぶとでも思ったのか小娘?！そんなもん俺が食べたいわ。）」

神楽は銀時のその言葉を耳にし、極寒の寒さに体を凍えさせながらふと呟いた。

「（そ・・・そんな。今まで信じていたものがウソだったなんて・・・私の生活はすべて虚構で固められたフィクションであり、実在の人物・団体とは一切関係ありませんなんて・・・！）」

直後、彼女たちの足元の氷が崩壊する、そんな錯覚に陥った。

「（私はその時、自分の足元が崩れ去るような言い知れぬ不安を感じていた。もう誰も信じない・・・信じられない。）」

神楽とクロノは精神的に決定打となる一撃を受けると、そのまま奈落の底に落ちていく。

「（豚があいつであいつが豚で・・・きゃあああホワイ！！！！！！！）」

「（エイミィ！！！！フェイト！！！！！助けてくれ！！！！）」

「（てめぇら全員足の小指骨折じゃあああああ！！！！！！！）」

そして、神楽はあまりのショックで魂が抜け落ちてしまいそのまま白目を向いて机の上に頭を乗せたまま動かなくなった。

「（一人消えたか・・・）」

神楽がリタイヤとなったことを確認した新八。

そして銀時の方は、神楽とは違い精神的にダメージは受けているが完全には死んでいないクロノの精神力の強さを褒め称える。

「（流石打たれ強いな、黒河童は。）」

「（黒河童じゃない、クロノだ。これしきの傷で死んでたまるか！まだ何もなし遂げてはいないんだ！）」

そう言いながら、白目のクロノは必死で立ち上がろうとしていた。

なのははは心の中でいいセリフを口にしたクロノを褒め、逆にユーノはクロノが死ななかったことに思わず舌打ちをする。

「あ、今いいこと言ったよクロノ君。」

「ち。このまま死んでればいいものを・・・」

そんなやり取りがあったのち、土方は空の鍋に固形油を伸ばしていき、再びすき焼きの調理を始めた。

「偶には美味いもん食わねぇとな。街中のスーパー探し回って奮発

して高級な奴を買ってきたからよ。美味いもん食って、美味いもん呑んでパァと盛り上がろうぜ。」

そう言いながら土方は調理を手早く済ませ、あっという間に特製の出汁で煮込んだ牛肉入りのすき焼きが完成する。

すき焼きが完成すると、喉を鳴らして箸に手を付ける総悟。

「へへ。漸く肉にありつけるぜ。」

「よし。そろそろ食べごろだ。」

そんな土方と総悟を見ながら、銀時と新八はこう呟いた。

「（これからだ・・・灰皿に片足ツッコんだマヨラーと、血の池に片足ツッコんだドエス男。）」

「（生きるって書いて“ダメ亭主”と読む男と、生きるって書いて“ゴリラ”って読むストーカー。）」

「「（ちょろいな。）」」

「（問題は奴だ。）」

「（銀さん、決着つけようじゃないですか。）」

新八はそう思い立つと、神楽にもよそって上げたように土方にも具材をよそおうと気配り作戦を実行する。

「土方さん、よそいましょうか？」

「お？」

勝利を手に入れんとする新八と、危惧の念を抱く銀時。

「（先手必勝！）」

「（奴め、また同じ手を！）」

「（今度こそ、鍋将軍の地位手に入れる！）」

だが、その直後彼らの作戦は呆気なく土方の言葉で一蹴される。

「いいって気遣わなくて。全員自家箸でいいだろ？」

「（不覚！僕としたことが？！これで全員区別なく、鍋に触れることを許してしまった！！）」

「（裏目に出たな。気配り作戦に捕われるあまり、気配り作戦返しの可能性に気づかなかった。己の若さを悔やむがいい！）」

「（新八君も、認めたくないものだな。）」

新八の経験値の乏しさと若さに哀れみを抱く銀時・近藤の年上組二人であった。

「（確かに僕は失敗した、だがまだ敗北した訳ではない！）」

「（そうだな・・・四の五の考察はもういらない！）」

「（同感だな。武士（おとこ）たるもの勝負に背を向ける訳にはいかん！）」

「（何が何でも勝ち残ってみせる！）」

そう思い立ちながら、銀時・新八・近藤・クロノの四人の背後煌々と燃え上がる炎が勝負の熱気を伝わらせる。

そして、四人は只ならぬオーラを出しながら自分の箸を握りしめる。

「（残り時間を考えると、ここで勝負をかけるしかない！）」

「（最初に鍋に手が届いたものが勝つ！鍋将軍は・・・・・・）」

「（俺が！）」

「（僕が！）」

「（俺が！）」

「（僕が！）」

と、四人が鍋将軍の地位を手に入れようと意気込んだその瞬間・・・・・彼ら四人を圧倒する凄まじいオーラが彼らを吹き飛ばす。

「「うわあああ！！！」」

「「のあああああ！！！」」

予期せぬことオーラと事態の急変に頭がついていかない四人。

「（な、何だ!?）」

と、その時新八は目の前に飛び込んできた光景に度胆をぬいた。

「（あ、あれは・・・！）」

新八の言葉を聞き、銀時達が目を向けると映ってきたのは・・・・・・完全に元の人格はかけ離れ、野獣・・・と言うかそれ以上の存在に変貌を遂げた土方と総悟であった。

「（な！）」

「（なんだと!!）」

四人はこの光景に目を疑ったが、土方と総悟はそんな四人や周りの反応を気にせず別の生き物となって肉を食べることに執着し、それを掴んでは口に入れていく。

「だあああ!!」

「は!!!」

「（ば、馬鹿な・・・！）」

「（こんなことが・・・）」

危機感を感じた銀時達は急いで鍋の元に急いだが、彼らは鍋に近づくや否や二人の妨害工作を受け、全くと言うほど鍋に近づくことさえできなかった。

「（肉どころか・・・）」

「（鍋にさえ箸が・・・）」

「（届かない！）」

「（がっは！）」

しかし、それでも彼らは諦めない。

「「「「（だがここで・・・負ける訳には・・・！）」」」」

と、一致団結して鍋に近づこうとする彼ら四人。

だが結果は自ずと分かる様に、二人の攻撃を受け彼らは容赦なく傷ついていった。

「のおお！！」

「うおおお！！」

「あっべし！！」

「ぐっげえ！！」

身も心も傷つき満身創痍となる銀時達は自分たちを圧倒する力を秘めた土方と総悟の二人を見て、確信したかのようにこう思った。

「（こ、こいつは鍋将軍どころじゃねぇ・・・！）」

「「（こいつは・・・・・・“鍋の魔王なべは”だ!!）」」

銀時と新八がそう思うと、彼らの頭の中に白いバリアジャケットに身を包み、レイジングハートの代わりに箸を持ったなのはの姿が浮かんできた。

そんな鍋の魔王と化している二人の攻撃を受け続け、銀時は既に限界寸前だった。

「（桁が違う!鍋が遠い、届かない!つうかこいつら何しに帰ってきたの、嫌がらせ!?）」

「（僕達の今までの戦いは何だったんだ!?所詮井の中の蛙・・・甕で傷つきあった悲しい戦いに何の意味もなかったと言うのか!?）」

そんな事を考えながら、新八は既に敗戦し死んでいった近藤とクロノの事一瞥。

すると、彼と銀時の心に今だ燃え尽きぬ何があった。

「（いや!）」

「（違う!）」

銀時と新八は箸に力を入れると、最後の力を振り絞って土方と総悟の暴走を止めるために立ち上がり、二人の箸を掴んだ。

「何!?」

「何だって！」

予期せぬ銀時と新八の行動に目を疑う土方と総悟。

銀時と新八は満身創痍の状態で、必死で二人の箸を掴みながらこう言った。

「だからこそ！」

「あの戦いを無駄にしないためこそこの勝負・・・！」

そう言うと、二人は土方と総悟を空中へと吹き飛ばす。

「「負ける訳には・・・！！」」

直後、二人の気迫に呼応するかのように気絶していた神楽が凄まじいオーラを出して復活を遂げる。

「！・・・いかねぇんだよ！！！」

「行け、神楽！なべはに・・・」

銀時はそう言うと、最後は新八と口を揃えてこう言った。

「「なれ！！」」

二人がそう言うや否や、神楽は鍋を掴んで先ほどと同じように一気飲みですき焼きのグザイをすべて飲み込み、見ていた土方と総悟はショックのあまり声を上げた。

「「あああ！！！！！」」

神楽はすき焼きの具材を全て飲み干すと、女の子としてははしたい豪快なげっぷをし、何か不満げな表情で呆然とする銀時達にこう言った。

「何か乳臭くてイマイチ。豚の方がいいアル。」

「「「「・・・・・・」」」」

静まり返る銀時達だったが、直後彼らは結局すき焼き全てを神楽に食されたという現実に気づき、我に返って声を上げた。

「って！！！！舐めてんのか！！！！」

「出せや！！！！今の全部、吐き出せや！！！！」

そんな非常に意地汚い言動を取る銀時達に、ユーノは最後冷静にこうツッコンだ。

「つうか、アンタらすき焼きだけでどんだけ無駄な時間と心理戦繰り広げてるんだよ！！！」

その頃、そんな下らないすき焼きバトルとは打って変わって・・・弥彦、ピカチュウ、ニャースの三人は中央管理局保管施設付近まで接近し、準備のほどを済ませるとこれより命懸けのミッションに突入しようとしていた。

「しかし、今回はまたかなりの博打と言うか何というか・・・・・・命懸けのギャンブルに撃って出たニャー。」

「下手な陽動や策を練るより正面を突破して目的の物を奪うのが一番手っ取り早い。中央管理局保管施設の何処かに保管されたプリズムシードを見つけ出し、とっとと逃げる。それが今日の任務内容だ。」

「ニャーは兎も角、ピカチュウには不慣れだと思う気がするニャー。」

「ピカ・・・」

「兎に角、俺達三人の願いをかなえるためにもどうしてもあれが必要なんだ。カトゥーンや斎藤たちよりも早くあれを手にしないと、俺達三人もどうなったものか知らねぇからな。」

「ピカ。」

「そうでニャーすな。」

弥彦の言葉を聞くと、二人の顔も真剣そのものとなり、弥彦が先陣を切ろうとする。

「よし。ここは俺が先に行って・・・」

と、その時そんな弥彦に向かってピカチュウが声を発してきた。

「ピッカ！ピカピ！」

「ん、何だピカチュウ？」

「ピカ！ピカピカピッカ！」

「ほうほう・・・その役は自分が受けるって言ってるでニャースな。」

「大丈夫か？あそこの防衛網は難攻不落と言っても過言じゃねぇぞ。」

「ピカピカピ！」

「ポケモンマスターになる男、サトシのピカチュウを舐めるな・・・か。分かった。じゃあ、頼むぜ。」

「ピカ！」

ピカチュウは笑顔で弥彦にそう言うと、その信頼に応えるべく全神経を集中させて中央管理局保管施設全体の電力供給を遮断させる為、自身の体に施設内の電気を逐電し始める。

このことはすぐに中央管理局のモニターに異常と表示される。

「エネルギー反応！？」

「おい、ウソだろ！」

「本部内の電力供給に異常発生！」

「クラッキング！？侵入されてるのか！？」

中央管理局員一同がこの唐突にやって来た不測の事態に目の色を変

えていると、次々とモニター画面が砂嵐なっていく。

「ピカアアアアアアア！！！！！！！！！！」

その間にピカチュウは自分の体に中央管理局の電気エネルギーを根こそぎ奪って自分の体の中に許容範囲を超えたそれを溜めていく。

苦い表情を浮かべる電気を帯電させるピカチュウを心配そうに見つめる弥彦とニャース。

「中央管理局中の電気と言う電気を片っ端から集めてそれを自らのエネルギーに変換する・・・無謀とも取れるこの方法だが、俺達はピカチュウを信じる。」

「ピカチュウ、あとちょっとニャー。」

「ピカアアアアアア！！！！！！！！」

信頼にこたえるため、ピカチュウは必死で電気を集めていく。

中央管理局管制室ではこの事態を重く見、直ちに対応策を打ち出す。

「緊急防壁展開！予備のサーチシステム、立ち上げ急げ！」

だが、その時丁度ピカチュウの体にほぼすべての電気が逐電され、ニャースは子と愛と判断すると声を上げる。

「今だニャース！」

「特大サイズのお前のかみなり、篤と見せてやれ！」

弥彦がそう言うと、ピカチュウは体中のすべての電気エネルギーを中央管理局すべてを飲み込むほど巨大な雷として落下させる。

「ピカチュウ！！！

「なんだ！」

「？！？」

弥彦はピカチュウとニャースを連れて中に侵入してくると、徐に逆刃刀に手をかけ、局員も杖を以て弥彦を取り囲む。

「貴様！何者だ！」

「捕えろ！」

「邪魔だ。退いてもらうぜ。」

弥彦はそう言うと、身が凍りつくような形相と剣気を漂わせながら神速を駆使して数十人の局員を刀の一振りで気絶させていく。

「「「ぐあああああああ！！！」」」

局員はあまりに速い動きと圧倒的な力を秘めた弥彦の戦闘力に目を疑った。

「は・・・速い！なんだアレは・・・」

「人間か！？」

「オラオラ！余所見しってっと・・・怪我するぞ！！」

弥彦は唖然とする局員にそう言うと、逆刃刀を振り回して容赦なく吹き飛ばしていく。

「「「のあああああ！！」」」

「くそおお！！魔導師隊！撃ち方用――――意ッ！！」

指揮官が魔導師隊を率いて弥彦に杖を向け、魔力弾を発射しようとする。

「撃・・・」

だが、その瞬間ピカチュウとニャースが弥彦を守ろうと飛び出して行く。

「ピカピカ！！」

「ニャースも行くニャー！」

二匹は己の得意技であるでんこうせっかやみだれひっかきを使って局員たちを弥彦ほどではないが翻弄し、ノックダウンさせていく。

「「「「ぎゃあああああ！！」」」」

中央管理局の非常事態はすぐに食事を終え、一休みをしていたユーノ達機動六課の下にも届き、前線一同は司令室へと集まった。

「この警報は！？」

「一体何があったんだ！？」

「グリフィス君、状況は？」

なのはがそう言うと、モニター画面にグリフィスが現れ状況を報告する。

『はい。たった今、中央管理局施設が何者かの侵入を受け混乱状態となっています。』

「侵入者・・・まさか!?」

『俄かには信じがたい話ではありますが、侵入してきたのはたった一人の男と二匹のポケモンだったそうです。』

「!」

「おい、そのポケモンってまさか・・・・・・!?」

と、銀時が口にした瞬間、ユーノは晩翠を持ったまま一目散に司令室を飛び出し一人中央管理局へと向かって飛び出して行った。

「ユーノ君!」

「ユーノパパ!何処に行くの!?」

「ま、待つんやユーノくん!」

「おいユーノ!お前どうするつもりだ!」

なのはや銀時達がユーノを止めようとするも、ユーノの耳には届かず彼は六課から数十キロ離れた場所に佇む襲撃を受けた中央管理局保管施設に向けて空を駆け抜けていった。

「く！」

なのはは外に出ると、姿が遠くなるユーノの名前を叫んだ。

「ユーノ君！！」

「（まさか・・・・・・弥彦・・・・・・！）」

ユーノは一抹の不安を掲げたまま、ただ只管に中央管理局へとめざし飛んで行った。

その頃、襲撃を受けた中央管理局の方では既に弥彦達が最深部まで足を進めていた。

「「「ぐあああああああああ！！」」」

プリズムシードを探し求めて片っ端から施設内を駆け巡っていた弥彦達だったが、その時ピカチュウが目的のプリズムシードが収められたケースを発見し、声を上げた。

「ピカ！」

「おお！見付けでニャース！」

三人はケースを発見すると、弥彦がすぐにケースを破壊し封印処理が施されたプリズムシードを手に取り懐にしまう。

「よし、つらかるぜ！」

弥彦はそう言うって、ピカチュウたちを連れて逃げ出そうとするが、

直後かけつけて来た局員に見つかってしまう。

「しつこい連中だニャー。」

「ピカチュウ、ボルテッカー。」

「ピカピカ！！！！」

弥彦の指示を受けると、ピカチュウは電撃を纏ったでんこうせっかであるボルテッカーを発動させ、局員全員を吹き飛ばした。

「「「おあわあああああああああ！！」」」

そして、弥彦とピカチュウ、ニャースは何とか目的のものを手に入れると、圧倒的に不利と言われる戦局を乗り越え、逃げ出すことに成功した。

彼らは今、警報が鳴り響く中央管理局からは大分離れた場所を歩いていた。

「ピッカ♪」

「どうにかなったニャー。」

「ああ。ちょいと時間を喰っちまったな。やっぱミッドチルダの地理はどうもわかりづらくていけねぇぜ。さて、さっさと残り一つを連中から取り返して俺達の帰るべき世界に戻ると――――――」

と、弥彦が前を向いたその時。

そんな弥彦達の前に息を切らした状態で立ち塞がるユーノの姿が映ってきた。

「ハァ、ハァ、ハァ、ハァ、ハァ、ハァ」

「ピカ！」

「ニャ！」

驚き返るピカチュウとニャース。

そして、間を置いてから冷たい視線を浴びせる弥彦。

「・・・もう二度と姿を見せるなって言ってなかったか・・・・・・翡翠の魔導死神。」

ユーノは呼吸を整えると、そんな弥彦に向かって単刀直入にこう言った。

「それを・・・プリズムシードを大人しく置いていくんだ。」

今ここに、不殺の剣客と翡翠の魔導死神の二人が三度目の再戦を迎えようとしていた。

譲れぬ願いがある時、人は武力行使に移る（後書き）

教えて、ユーノ先生！

ユ「今日は弥彦が狙ってるロスト・ロギア、プリズムシードについてだ♪」

ユ「これはジュエルシードと同じで、次元干渉型の超高密度結晶体だ。数は現在確認されてるだけで3つ。一体何の目的で作られたのか、そしてその用途は何なのかは今もって解明されていない危険な物質だ。」

一「それにしても、お前もとうとうあの弥彦と本気の一戦交えることになっちまったが、果たして今後はどうなることだかな。」

ユ「ええ。色んな意味で複雑ですはい・・・」

剣「拙者がこんな事を云うのも何でござるが、弥彦は見た目とは裏腹にかなりの強敵でござるよ。持ち前の精神力の強さもあるが、何より弥彦には誰にも負けない努力の才が眠っている。気を引き締めた方がいいでござるぞユーノ殿。」

ユ「分かりました。と言うわけで次回、ユーノＶＳ弥彦のバトルが勃発！」

一「ちなみに言っておくが、なのはＶＳフェイト的なことを期待してる奴、それは始めからないつもりだ！」

剣「拙者も陰ながら見定めてもらうでござるよ。」

魔導師図鑑ハイパー！

うらスク商店

題名：〈春巻〉

仲良く外で昼食をいただいているユーノ達スクライア商店メンバー四人。

すると、鬼太郎は徐に口にした特製春巻きに思わず感動。

鬼「やべぇ！」

ユ「？」

鬼「おい、この特製春巻やべぇぞ！食ってみろ！」

鬼太郎は浦太郎に勧め、勧められた浦太郎も徐に口にし同じことを呟く。

浦「お！ホントだやべぇ！」

鬼「な！やべぇべ！！」

ユ「ねぇ、何だいその“やべぇ”って言うのは？」

ユーノの何気ない疑問に金太郎が答える。

金「最近の若者は『美味しい』ことを『やべぇ』と言うらしいです

ぞ。」

それを聞いて、ユーノは呆れ気味にこう言った。

ユ「嘆かわしいね・・・言葉ぐらい正しく使えない訳？」

浦「そう言わないで、店長もこれ食べてみてって♪」

浦太郎に勧められ、ユーノ自身も春巻を手に取り口の中へと放り込み、よく噛んでから間を置いて口にしたのは――――――

ユ「・・・・・・やべぇ。」

聞いていた三人は思わず意外そうな顔を浮かべ思わずこう呟いた。

鬼・浦「ありえねぇ（ない）。」

金「微妙ですな・・・」

次回予告

剣と剣が交わりし時、二人の剣客は何を思うのか？

不殺の心と守護の心。

叶えたい欲望と渇いてしまった欲望

ヴィヴィ「次回『髪の長い優男は意外と熱血漢』」

髪の長い優男は意外と熱血漢

ユーノ・スクライア外伝・・・前回の三つの出来事。

一つ：ユーノは逆刃刀を持つ剣士、明神弥彦に奇妙な惹かれを覚える。

二つ：弥彦はピカチュウたちと共にプリズムシードを強奪するため、中央管理局を襲撃。

そして、三つ：そんな弥彦達の前にユーノが駆けつける。

さて、ユーノが弥彦達の元に向かって間もなくして、なのは達も銀時達を引き連れてヴァイスのヘリに乗って中央管理局へと目指していた。

不安がぬぐいきれない中、恋次は焦燥を滲み出した表情でヴァイスに言った。

「おい、ヴァイス！もっと早く飛ばせねぇのか！」

「これが限界っすよ！勘弁してください！」

「あの野郎・・・急に顔色変えやがって、何があったんだよ！？」

「それを知るためにも兎にも角にも先ずは中央管理局だ。」

「ヴァイス君、なるべく急いで！」

「了解！」

なのはがそう言うと、ヴァイスは出来る限りのスピードで中央管理局の方へとヘリを飛ばし、その間になのははユーノの事を心配した。

「（ユーノ君・・・・・・）」

その頃、三度の遭遇を果たす翡翠の魔導死神ユーノ・スクライアと逆刃刀の使い手、明神弥彦は肌寒い風が吹き抜ける中沈黙を続け、暫くしてから弥彦から口を開いた。

「・・・つくづく、俺とてめぇは巡り合う運命にあるようだ。つうか、あの距離を一体どれほどの速さで移動してきたんだ？顔中汗だくじゃねぇかよ。」

「・・・そんなことはどうだっていいさ。要求を聞いてなかったのかい？大人しく、そのプリズムシードを置いていくんだ。」

「・・・断る。」

毅然とした態度でユーノの要求を拒否する弥彦。

ユーノは困惑した様子で弥彦にこう言った。

「何故だ!?何のために、こんなことまでして・・・!」

「それは・・・――」

と、弥彦が質問に答えるか否か迷っていると、その瞬間ピカチュウが飛び出しユーノに敵を向けてきた。

「ピカ!」

「!」

「ピカチュウ!!!!!!」

ピカチュウは体が雷を放出すると、ユーノに攻撃を仕掛ける。

その雷は直ぐにヘリで移動していたなのは達に見えて来、新八は思わず声を漏らす。

「銀さん!あのかみなりって!」

「間違いねぇ。電気ネズミだ!」

「と言うことは、もう戦いが始まってるの!?」

居ても経ってもいられなくなると、なのははレイジングハートを握りしめてこう言った。

「ヴァイス君！ここでいい。私も空に降りる！」

「うす！なのはさん、気を付けて！」

ヴァイスは親指を立ててそう言うと、ヘリのメインハッチを開いてなのはが外に出られるようにし、なのはは全員にこう言った。

「じゃあみんな、私は先に出るよ。」

「はい。あの、ユーノ先生・・・大丈夫でしょうか？」

スバルが不安げな様子でなのはにそう尋ねると、なのはも顔を渋らせながらこう返事をする。

「多分ユーノ君がやられるなんてことはないと思うけど、拭えない不安があるのも事実。行ってちゃんと確かめてくる。」

「そうだね。なのは、あんまり根詰めるとあれだから、少し落ち着こう。」

「ありがとう、フェイトちゃん。じゃ、行こうか。」

なのははフェイトと共に空に飛びだすと、バリアジャケットに身を包んでユーノの元へと急いで飛んで行った。

その間に、ユーノは現在ピカチュウと交戦状態となっていた。

「ピカピカ！！！！！！」

ピカチュウは自分の疲労を無視して只管に電撃でユーノを攻撃しつづけ、ユーノは苦い顔でそれを躱していく。

これを見て、ニャースと弥彦はピカチュウの行動を止めようとする。

「止すニャー、ピカチュウ！おみゃーは最初の段階でかなり電気エネルギーを使い果たしてる！これ以上は危険ニャー！」

「止めるんだ、ピカチュウ。」

「ピッカピカカカ！！！！！」

しかし、当のピカチュウは止めるつもりなど一切なくそのまま１０万ボルトをユーノに向かって放電した。

「・・・・・・」

ユーノはそんなピカチュウの攻撃を避ける様子も見せずその場に立ち止ると、渋い表情を浮かべた状態で利き手に握られた晩翠を器用に高速旋回させ、ピカチュウの電撃を逸らしていった。

「！（刀を旋回させて疾風の盾を・・・・・・こいつ、益々剣心みたいなことしやがる！）」

ユーノの芸当をその目で見た弥彦は、思わず剣心の姿と照らし合わせてしまう。

やがて、ピカチュウは電気エネルギーを使い果たすと、消耗限界を迎えその場に息を切らして草臥れてしまう。

「ピッカ・・・！」

ユーノは全ての電撃を避けると、悲しみの籠った表情でピカチュウを見つめこう言った。

「君も言われた通り、これ以上は止すんだ。相手をしている僕の方が心苦しい。」

「ピカチュウ！」

弥彦とニャースは直ぐにピカチュウに近づき息を切らした元気のなくなったピカチュウの状態を確認する。

「ピカ・・・・・・」

「だから言わねェこそとじゃねぇ。」

弥彦はそう言うと、一度ユーノの方を一瞥してからニャースにピカチュウの事を任せた。

「ニャース、ピカチュウ連れて下がってろ。」

「どうするつもりニャー？」

「・・・・・俺がこいつを倒す。」

弥彦がそう言うと、ニャースはそれを受け入れユーノの元へと近づいて行った。

ユーノもこうなることを予期して甘んじてこの戦いを受け入れるこ

とにした。

二人の剣客が互いににらみ合いを始めたその直後、ユーノの魔力反応を追って空から駆けつけてきたなのはとフェイトが現場に到着する。

「間に合った！」

「！なのは、あれ！」

「！」

フェイトに言われなのはが目の前を見てみると、なのはの瞳に背中を向けたユーノとそんなユーノと向かい合った弥彦の姿が映ってきた。

「ユーノ君と、あの剣士は・・・・・・」

「ユーノが言ってた、プリズムシードを狙ってる逆刃刀使い、明神弥彦・・・」

二人も初めて目の当たりにする明神弥彦の姿をその目で凝視する。

暫くの時間が過ぎ去ったのち、ヴァイスのヘリが到着し銀時達がなのは達の元に駆け寄って来た。

「おおい！」

「どんな感じだ！？」

銀時がそう言うと、フェイトは緊迫した表情でこう答えた。

「今のところ膠着状態です。ただ、何でしょうか・・・このただならぬ気配は・・・！？」

フェイトがそう言うと、駆けつけてきた全員も膠着状態ではあるが何処か重苦しい雰囲気を醸し出すユーノと弥彦の睨みを愛を凝視し、言葉を発することもままならなかった。

すると、不意になのは達の元に秋風が吹きかう。

「風が――――――」

無数の涸れた木の葉が周囲を飛び交い、それは勿論ユーノと弥彦の下にも届くが、新八はその時二人の周りの木の葉が二人に触れる直前で次々とはじけ飛ぶ光景を目の当たりにした。

「！」

「どうした？」

「銀さん・・・ユーノさんとあの剣士の周りの木の葉が触れる寸前でいくつも弾けたように見えました・・・！」

新八の言葉を聞き、一同は驚き返りキャロは思わずこう言った。

「ま、まさか！？目の錯覚ですよそれは。」

だがその時、新八の話を聞いていた近藤は徐に全員に次のように語ってきた。

「いや、新八君の言ってることは本当だろう。」

「え？」

「どういう事ですか、近藤さん？」

「“剣気（けんき）”と言ってな、一流の剣客だけが発することが出来る裂帛の気合いの事だ。本来ならば剣気と言っても、そう発することの出来るものでもないし、出せたとしてもそれで木の葉が弾けることもごく稀な事。しかし、あれを見る限りでは二人は俺たちの想像を遥かに超えた剣気を持ち合わせている。ユーノ先生もさることながら、あの剣士・・・見た目にたがわずとんでもないものを秘めてる・・・これは俺達が手を出していいような戦いじゃねぇ。」

近藤がそう口にすると、一同は声を詰まらせなのはは心の中でそんな剣気を発し、緊迫状態となっているユーノに不安を感じてしまう。

「（ユーノ君――――・・・）」

そんななのはとはまた違い、ユーノと対峙する弥彦は徐に懐から二枚の写真を取出し、そこに写った自分の最愛の人と敬愛する剣客に目を向ける。

「（剣心――――――・・・燕――――――・・・）」

そして、プリズムシードと一緒にそれらを仕舞い込むと、一度深呼吸をし戦う意思を固める。

「（今は・・・闘おう。この現実からあいつらを、俺自身を生かす

ため・・・・・・）」

また同じように、ユーノもこの戦いを通して弥彦に何をしてあげられるのか、また彼が何を思っているのかを考えていた。

「（弥彦・・・――あいつは一体、この戦いに何を思っているだろうか・・・・・僕に何が出来るのか・・・その答えを知るためにも、ここはやはり戦う道しかなさそうだ・・・・・・）」

この二人の沈黙状態を後ろの方で見守りながら、スバル達はふとこう呟いた。

「・・・何を考えてるんでしょうか」

「さぁ二人して黙り込んじまって何も分からねェ。」

と、直後唐突に弥彦がユーノに向かって声を発してきた。

「俺には――――――何が何でも叶えないといけない願いがある。だからお前と・・・闘って勝ち残る。今一度言うぜ。俺は、てめぇを倒す――――――」

弥彦はそう言うと、徐に腰に差してある愛刀・・・逆刃刀真打を抜刀し、ユーノに見せつけるように掲げ、初めて実物を見たなのは達も意外そうな表情を浮かべる。

「――――あれが報告にもあった峰と刃を逆さにした刀・・・逆刃刀というものね・・・」

「けったいな刀を使いやがる。何だってあんなものを?」

すると、総悟がそう口にした瞬間銀時が徐にこう言葉を吐いた。

「不殺（ころさず）・・・」

「え」

「野郎が・・・弥彦が口にした、剣を振るう身でありながら決して人は殺さないただ一つにして絶対の信念・・・」

「！」

その時、彼らは銀時の言葉を聞いて驚き返ってしまう。

ユーノとて、剣士としての覚悟は持ち合わせている。

なので多少の殺生は止む無しと思いつつなるべくの殺しはしないようにしているのに対し、弥彦の場合は刀が刀だけに峰を返さない限りは絶対に人を殺すことは出来ない。

そんな刀を使う剣客を目の当たりにし、動揺を見せるなのは達。

「でも、そうだとしても・・・」

と、なのはが戸惑いを見せていると後ろの方で煙草を吹かしながら状況を見ていた土方は徐にこう言った。

「いちいちうろたえるんじゃねぇ、鬱陶しい。相手の手の内が見えないコトなんてのは戦いの常だ。要は本人に相手がどんな手の内だろうと叩き潰せる実力があるかどうかだ。」

「・・・・・・そうですね。」

浦太郎がそう言うと、周りは各々ユーノが勝つことを信じてこう口にする。

「奴が化物や魔王とかでない限り、ユーノは負けやしねェ」

「・・・・・・（ユーノ君――――――）」

それでもやはり、なのはの胸には一抹の不安が過るばかりであった。

弥彦は周りは一切気にせず、ただ目の前のユーノだけに集中すると一度逆刃刀を振り回して精神を統一と肩慣らしを行ってから同じく晩翠を抜いたユーノに向かってこう言った。

「何か始める前に言うことはあるか？」

「一応言っておくよ。今、僕の心は非常にもやもやしたもので溢れ返ってる。」

「実は俺もだ。だがそれもこの戦いの中ではっきりするだろうよ。」

弥彦はそう言うと、呼吸を整え開戦の掛け声を発する。

「いくぞ！！」

弥彦は先手を決めるためにユーノに突進し、首筋目掛けて逆刃刀を振りかざし、ユーノはそれを見切ると空中に回避し、その状態から晩翠を弥彦の逆刃刀と交差させる。

「おおおおッ！！」

「はあああ！！」

両者は空気が振動するかのような声を発しながら、凄まじい剣戟を続け、その二人の戦いの余波は離れた場所で見守っていたなのは達の元にしっかりと届き、思わずなのは達は身構える。

「「「

「あの人、十分に一流だわ。」

すると、それを聞いた直後鬼太郎や浦太郎は鼻で笑いながらこう言い返した。

「一流がどーした。店長が超一流だってのは今更言うまでもねェ。」

「そうそう。あの程度じゃ店長には遠く及ばないよ。」

二人の言葉を聞くと、土方も煙草を吹かしながら客観的な事を述べる。

「その点は俺も同感だ。剣才・資質も有る。鍛錬も積んでいる。だがそれだけだ。」

「しかし、さっきから感じるこの妙なものは一体何だろう?あの弥彦って人、何かを僕達に隠してる気が――」

ふとそんな事を感じ始めた新八。

そんな中、ユーノと弥彦は互いに剣を交えながら次のような会話をしていた。

「まだ微温いぜ。俺の心の中を読んでるつもりか?」

「どうかな。」

「そろそろ本気を出してきた方がいいぜ。それとも、先にこっちの技を見せないとやっぱり駄目か?そう言うことなら・・・受けて立つぜ!」

「！」

弥彦はその瞬間、峰を片手で支え、下から飛び上がりつつ、鞘の先端でユーノの鳩尾を突き上げてきた。

この光景を目撃したなのは達一同は思わず目を疑った。

「「「「「え！？」」」」」

「飛天御剣流『龍昇閃（りゅうしょうせん）』！！」

ユーノは驚く暇もままならず鳩尾に弥彦の鞘の先端を受けると、そのまま後方へと飛ばされ勢いよく地面に叩きつけられる。

一瞬の出来事に目を開いて汗を浮かばせる一同。

「「「「「

「だが『飛天御剣流』とは一体何だ!?そんな剣術流派など、聞いたこともない・・・」

シグナムが動揺を隠し切れない様子でそう口にした直後、鳩尾に一撃を食らったユーノは徐に立ち上がり眉間に皺を寄せながら弥彦を見つめる。

「く!」

「ユーノ君!」

ユーノの身を案じるなのは。

「鳩尾へのダメージは普通の人間にしても急所であることは変わりねぇ。ユーノだって今のはかなり効いたはずだぜ。」

銀時がそう口にすると、ユーノに飛天御剣流の技の一端を見せつけた弥彦はユーノに向かって次のように言って来た。

「これが俺が日本一の剣客の技を見様見まねだが、死ぬ気の努力で体現した力・・・不殺を心に誓った大切なものを守り抜くための最強無比の力・・・戦国時代に端を発する一対多数を得意とする神速の古流剣術・・・それが『飛天御剣流』」

「・・・・・・!」

はっとした表情を浮かべるユーノ。

すると、弥彦はこの飛天御剣流にまつわるある一人の男の事を語り出す。

「黒船来航から始まった血塗れの激動の時代、所謂『幕末』の動乱期、殊にその渦中だった京都において『人斬り抜刀斎』と呼ばれる一人の維新志士がいた。超人的な戦闘能力と卓越した剣腕を以て飛天御剣流を操り、修羅さながらに人を斬り、その血刀で新時代『明治』を切り開いたその男は、動乱の終結と共に人々の前から姿を消し、時の流れと共に『最強』という名の伝説と化していった。」

「!?」

話しの見えない一同だったが、その後も弥彦の御高説は続く。

「それから10年余り、最強の剣客は明治の東京にその姿を現し、『緋村剣心』と名を改めて逆刃刀を携え、目の前に映る人々の笑顔を守るために不殺の誓いの元、戦い続けていた。」

「!まさか・・・――――!」

「あの逆刃刀は、そいつの・・・!」

「そして、飛天・・・御剣流・・・」

弥彦の話を聞き、漸く流れを掴んだ一同は表情を一変させ、ユーノ自身も眉間に皺を寄せながら今までの戦いで食らって来た弥彦の飛天御剣流の技の特性に関して鋭い考察を次のように語った。

「剣の速さ・身のこなしの速さ・相手の動きの先を読む速さという3つの速さを最大限に生かし、最小の動きで複数の相手を一瞬で仕

留めることを極意とする、一対多数の戦いを得意とする実戦本位の剣術か・・・」

「ふん。そんな単純なものじゃねぇさ。」

弥彦がそう言うと、土方もまた弥彦と同等の意見を述べる。

「だろうな。並外れた身体能力と技を以てしても、ユーノの奴を初対面でいきなりぶっ倒すなんて真似、そう出来る芸当じゃねぇしな。」

「にしても！あのガキんちょ、どうやってそんなとんでもない剣術を会得したって言う訳！？」

浦太郎は未だにユーノが初戦で容易に弥彦に敗北したという事実に疑問を感じているのであった。

「さぁて、小手調べはこれで終いだ。そろそろお前の血生臭い殺人剣でかかって来たらどうだ？」

「その前に。」

「？」

ユーノの意外な言葉に一瞬訝しげな表情を見せる弥彦。

ユーノはそんな弥彦の大きく胸元が開いた状況を見てふとこう言った。

「少し胸元は閉めておいた方がいいな。一歩間違えれば大怪我につ

ながるし、最悪の場合剣客として再起できなくなるやもしれない。」

「・・・それは俺の事を過小評価しているのか？それとも、自分の事を過大評価しているのか？」

些かの怒りの混じった声色でユーノにそう返す弥彦だが、ユーノは至って真面目な態度でこう言った。

「どちらでもないよ。ただ僕はお前を傷つけるためにではなく、止めるために戦うと言っている。」

「――――――・・・」

一瞬の沈黙が辺りを支配し、秋風が吹き抜けた後弥彦は徐に無形の位となってため息をついてからこう口にする。

「火付きが悪いだけじゃなくて付いたら付いたで今度は炎になるまで随分とかかる様だな。仕方ない。だったらお前が本気になるまでこっちも精々お喋りを交えて気を紛らわすか。」

「何。」

「いくぜ！！」

弥彦はその瞬間、ユーノの懐に自分の刀を突き付け、ユーノは咄嗟に晩翠でそれを回避するが見た目とは裏腹に重量のある一撃に表情を歪める。

「！！ぐっ！！」

その時、弥彦は自分の過去を物語形式で唐突に語り始めた。

「昔々在る処に――――――明治維新の混乱によって孤児となった一人の少年が居ました。」

「!?」

「独りぼっちになった哀れな少年は早くに両親に先立たれ、挙句自分の身を生かす為にヤクザに拾われ、スリとして働かされていました。しかしヤクザの世界は非道にして卑怯・士族としての誇りを大切にしていた少年には辛すぎる現実でした。少年の心は次第に荒み、身も心もボロボロ、骨と皮だけの気分。」

ユーノは唐突に過去を語り出す弥彦の真意がまるでつかめないでいた。

「何が言いたい。自分の過去を僕に語って何の得がある?」

「まだ本気で闘ってないんだろう?だったらこのまま俺の話に黙って耳を傾けていればいい。どうせこっちも片手間の暇つぶしだ。」

弥彦はそう言うと、剣戟を交えながらユーノにその後も自分の過去を語りつづけ、離れた場所で見守っていたなのは達にもその内容が徐々に聞こえてきた。

「オイ。何かぶつぶつ喋ってるぜ。」

「聞こえる?」

「ええ・・・さっきと風向きが変わったから少しは。」

「なのはは聞こえる？」

「うん・・・なんか・・・昔語りみたい。」

なのはがそう言うと、弥彦はユーノに向かって更にその時の自分の状況をこと細かく語り出す。

「惨めな生き方に嫌気を感じていた少年は、とうとうヤクザにも愛想を尽かされボコボコに締め上げられました。」

ここからは当時の明神弥彦１０歳とヤクザ達の会話のダイジェストである。

弥彦はヤクザの若頭に締め上げられながら、その組長である男からこのように言われてしまう。

〈弥彦ォ、てめぇスリやめてどうやって生きるつもりなんでぇ？自分（めぇ）が士族だから何とかなるなんて思っていたら大間違いだぜ。自分（て）が士族だなんて忘れちまいな。弥彦、そんで卑しく生きることを覚えろや。〉

〈何度も言わせるな。俺はもう御免だ。〉

〈てめぇ、両親おっ死んじまったてめぇを拾ってくれた組長になんて態度だ！〉

〈このガキが！いい加減にしやがれってんだ。士族ったって所詮てめぇの親父はたかが三十石二人扶持の貧乏御家人。維新早々官軍に盾ついてブッ殺されたバカ者だろが！母親も遊廓に体売った挙句、

病でポックリ逝っちまったバカ売女（バイタ）ときた！〉

その言葉を聞いた瞬間、弥彦の中で何かが切れた音がした。

〈どっち似か知らねェが、このバカ親にしてこのガキ有りか！！〉

弥彦は自分の事だけならまだしも、自分を懸命に育ててくれた両親の事さえ侮辱するヤクザの態度に我慢が出来なくなった。

〈るせえェエ！！！〉

弥彦はその時、両親を馬鹿にしてきたヤクザの股間を噛み千切り勢いで噛み付き、ヤクザはあまりの痛さに転げまわった。

〈ごあああああッ〉

そして、涙ながらに弥彦はこう反論した。

〈父上は時流に乗って幕府に裏切り官軍に寝返るのを潔しとせず彰義隊（うぎたい）に加わり義に殉じた！母上は俺を育てるために命を削る様に働いて病に倒れたんだ。二人とも、誇りを持って気高く生きたんだ！悪く言う奴ぁこの俺が許さねェ！！〉

「・・・！」

そんな赤裸々と語られる弥彦の悲しき過去を聞かされ、思わず言葉を詰まらせるユーノとなのは達一同。

エリオは弥彦の話を聞いた後、徐にこう口にする。

「・・・あの人・・・何て辛い目に遭って来たんでしょう・・・・」

「僕も似たような想いを抱えているとはいえ、自分の過去を・・・あんなに赤裸々に話せる人はそう居ない・・・！」

新八はそう言ってここまで自分の過去を正直に話す弥彦の姿には正直驚くばかりであった。

弥彦ほどではないが、志村新八もまた早くに両親に先立たれ、実家の剣術道場も潰れかけている不遇な身ではあるが、坂田銀時との出会いによって幾分彼の心にも光が灯ったのだ。

それと同じように、弥彦はこの後語る緋村剣心によってその身を救われることになる。

「そんな時だった――――――何処からともなくその男、左頬に十字傷を刻んだ緋村剣心がやって来たのは。」

再びその時のダイジェストである。

突然、障子の扉が蹴られたかと思えば中に入ってきたのはユーノと同じように中性的な要望で左頬に十字傷を刻んだ伝説の剣客、人斬り抜刀斎・・・もとい緋村剣心であった。

〈な・・・なんだてめえは！！〉

〈流浪人（るろうに）の緋村剣心。童を引き渡してもらおうと参上仕った。〉

彼が弥彦と出逢ったのは日中の事で、偶然にも弥彦は剣心から財布をすろうとしてきたのだが、図らずも連れの女性に見破られてしま

い、失敗してしまったのだ。

そんな経緯があってかどうか別として、剣心が乱入してくるとヤクザ達は敵を露わにする。

〈何が仕っただ！てめぇも士族か！！まとめてブッ殺してや・・・らっ！？〉

と、ヤクザの一人が剣心に攻撃を仕掛けようとした矢先、剣心の目にも止まらぬ剣が逆に飛び交い、ヤクザはそのまま天井に頭を突き刺したまま気絶する。

〈話の途中だ。しばらくそこで黙っていてくれ。〉

弥彦はその時の状況を思い出しながら現実の戦いで更にこう言った。

「疾風怒濤・勇猛果敢・そして目に見えない剣筋。そのどれもがあの頃の俺には眩しく見えた。あいつは・・・剣心は俺を助けてくれただけじゃなく、俺に生きる意味と居場所を与えてくれた。」

剣心は弥彦をヤクザ達から助けると、その当時彼が居候をしていた剣術道場である神谷活心流道場へと連れ帰り、その師範代である女性、神谷薫に弥彦を紹介した。

〈童。神谷活心流師範代で神谷薫殿。今から童の先生でざるよ。〉

〈！！ちょっと待て。おまえ、俺に剣術習えって言うのか！！しかもこのブスから！？〉

〈剣心、先生ってまさかこの子を門弟に―！？〉

剣心の計らいに驚くばかりの弥彦と薫だったが、剣心は弥彦に向かって次のように口にする。

〈折角お膳立てを揃えたんだ。存分に強くなれよ、“弥彦”〉

この時、剣心は初めて少年を弥彦と名前で口にし、少年もまた名前を呼ばれたことでこの男に少なからず何かしらの形で認めてくれたことを確信した。

〈・・・へっ！言われなくたってなってやらあ！〉

これが、少年明神弥彦と剣客緋村剣心との出逢いの話であった。

「それが少年と緋村剣心との出逢い、そして俺の剣客としての始まりだった。俺は活人剣を学びつつ、傍らで最強と謳われた剣客の戦いをその目で刻んできた。そして独学なので多分に我流交じりではあるが、手足の伸びきる頃には少年は日本二の剣客としてその名を轟かせるまでに至った。」

弥彦がそう言うと、ユーノはふと話の中で口にした日本二という言葉が引っ掛かり、思わず質問をぶつけた。

「・・・・・何故“日本一”じゃなくて、“日本二”なんだい・・・？」

「知れたこと。日本一はただ一人、“緋村剣心”を於いて他に居やしねぇからさ！」

弥彦はそう断言すると、再び飛天御剣流の技を使ってユーノに仕掛

ける。

「飛天御剣流　龍巻閃！！」

得意の回転技でユーノの懐に飛び込もうとする弥彦になのは達の表情が一変する。

「動いた！」

「ち」

ユーノは弥彦が龍巻閃を仕掛けてくると、自分もまた体を回転させて弥彦と同じ技を発動する。

「飛天御剣流　龍巻閃！！」

同じ技を発動したことで、見ていたなのはや他の面々は驚きを隠せなかった。

「ユーノ君も同じ技を！」

「あいつは二度奴の剣を受けているからな。技の真似ぐらい造作もねぇさ。」

銀時はそう言って二人の技のぶつかり合いを見ていると、弥彦は同じ龍巻閃を使って来たユーノに対して次のように語った。

「舐めてもらっては困るぜ。少し炎が灯ったところで御剣の剣の理は見えはしねぇし、況して殺人剣のてめぇにはこの技の深さを理解することは一生かかってもムリな話だ！！」

弥彦はユーノの龍巻閃を上手いこと相殺させると、一瞬の隙を突いて怒涛の三連撃を浴びせる。

「龍巻閃・『凩』！」

龍巻閃の派生技である凩をユーノの首筋にぶつけ、その直後に更に一撃。

「龍巻閃・『旋』！！」

そして、最後に空中高く飛び上がり、刀を手前に構え前方宙返りによりユーノの身体を叩きつける。

「龍巻閃・『嵐』！！！」

「ぶっふ！」

ユーノは目にも止まらぬ怒涛の三連撃をもろに体に食らうと、その場に倒れ込みつけていたメガネが吹き飛んだ。

見ていた恋次や新八たちは思わずをユーノの身を案じる。

「ユーノ！」

「ユーノさん！」

「龍巻閃の三連撃！！」

「何ちゅう攻撃だよ・・・！」

「ユーノ君ッ！！」

驚き返る一同と張り裂けそうな思いで傷つくユーノを見ていたなのは。

ユーノはボロボロの体を起き上がらせると自分にとっては心の一部でもある大切なメガネを拾い、それをかけ直すと耳元に飛び込んできた弥彦の話に耳を傾けた。

「ところが、少年は不幸なことにある事故に巻き込まれこんな訳の分からない異世界へと飛ばされ、その上自分の存在がこの世界においては漫画だけのものだということを知って、幻滅しました。」

「！」

「少年はそれが我慢なりませんでした。」

弥彦の現在の境遇を聞き、思わず顔を歪めるユーノは鋭い視線を自分以外の人物にも浴びせる今の弥彦に向かって、こう言った。

「それ以上の話はいい。これはお前と僕の戦い・・・ここより先の他者への干渉は無用・・・お前は必ず僕が止める。」

「ふん。結構だぜ。ではお喋りはここまで。ここからが本番だ」

弥彦はそう言うと、再びユーノと向かい合って剣を構え、ユーノもまた晩翠を構えてお互いに精神統一を始め、その光景を見ていたピカチュウとニャースの額にも汗が浮かんできた。

「ピカ・・・」

「・・・いよいよ・・・勝負でニャースな・・・」

ユーノは晩翠を構えながら心の中で敵対する弥彦に対して次のような事を抱いていた。

「（目的がある以上ぶつかり合うのは必然な事だ。だがそれ以上に、僕はこの男を・・・弥彦の事を知りたい。どうして、真っ直ぐな魂がそんなに歪んでしまったのか・・・弥彦が何の為にプリズムシードを狙うのか・・・そして出来れば僕は・・・弥彦の事を・・・救ってやりたい！）」

自らの欲望が枯れ、手が届く距離ならばどんな者でも救おうとするユーノにとって、弥彦とてその対象となっている。

「（僕の手が届く距離にあるのなら、僕は自分の魂を賭してこの男の事を救ってみせる。勿論、弥彦だけじゃない。ピカチュウもニャースも・・・そして、自分の目に写る自分にとって大切なもの全て・・・・・だから僕は・・・・・・闘うんだ！）」

そんな決意と覚悟の籠ったユーノの姿を見ながら、じっとその様子を見守っていたなのは達。

すると、徐に土方が煙草の煙を吐いてからこう呟いた。

「ふう・・・おい。」

「はい？」

「言っておくが俺達は何があっても野郎には手は貸さねぇぞ。野郎が傷つこうが死のうが俺達には関係ねぇことだからな。」

「ひ、土方さん！それはちょっと言いすぎですよ！」

「そうネ！いくら何でもあんまりネ！」

新八と神楽は非情とも言える土方の発言に思わず声を上げ、スバル達フォワードの面々も鋭い表情で土方を睨み付けるが、その直後なのはの口から意外な言葉が発せられる。

「大丈夫だよ、二人とも。ユーノ君ならきっと大丈夫だから。」

「なのはさん・・・」

「なのは・・・お前・・・」

「なのはは・・・本当にこれでいいと思ってるのか？」

ルキアがそう口にすると、多少不安混じりな表情を浮かべながら徐に次のように語り出す。

「・・・それを言われたらはいとは言えないかもしれないけど・・・今は動けませんよ。これはユーノ君の・・・どんなに辛くても苦しくてもユーノ君自身が選んで臨んだ闘い・・・ユーノ君があの人に何かを伝えようと本気で闘うと決意した今、私が余計な水を差すのは一番嫌ですから。」

それを聞くと、ルキアは納得した表情になるとなのはに向かってこんなことを提案してきた。

「・・・そうだな。だったら、手を出せぬならせめて応援の一つでもしてあげればいい。」

「え」

「ほら。ボンヤリしてる暇があるならさっさと一声かけろ。」

恋次も便乗してなのはにそう言うと、なのはは困惑した様子で周りを見渡し、更には土方の反応を気にしながら首を振り回す。

「えーっと・・・」

困惑したなのはだったが、それを見て土方は煙草を持ったまま徐にこう言う。

「いいじゃなぇのか別に。たかがその程度で水を差される訳でもねェし。つうか、俺を窺うなよ。」

土方がそう言うと、シグナムとフェイトが更にこう言った。

「どうせこのまま放っとけばこのまま睨み合いだ。一つ掛け声できっかけをこしらえてやれ。」

「なのは。やってあげて。」

「・・・・・では。」

なのははそう言うと、多少の恥ずかしさも交えたそんな表情を浮かべながら、深呼吸をするとユーノにはっきりと聞こえる声で応援の

言葉をかけた。

「ユーノ君、頑張れ――――――!!」

その瞬間、二人の睨み合いは終了し一斉に動きを見せた。

凄まじい剣戟が飛び交い、見ていたなのは達は握り拳を作ったりなどして思わず熱いものを感じた。

幾度となく交える剣と剣。

鋭い金属音が秋のミッドチルダに鳴り響き、卓越した剣碗を持つ両者は剣を交えながら徐に話し出す。

「まだまだその程度の技量じゃ本当に本気がどうかとてもとても・・・・・試しに何か技の一つや二つ見せてもらおうか?」

「・・・・・・」

弥彦の言葉に敢えて何も語らないでいるユーノ本人。

そんなユーノに弥彦は再び飛天の剣を仕掛ける。

「飛天御剣流!!」

「来ます!」

キャロがそう言って全員に促すと、全員は食い入るように発動する技をその目に映す。

「龍槌翔閃（りゅうついしょうせん）！」

弥彦は龍槌閃で上段を攻撃した後、龍翔閃で下段を攻撃する連続技である龍槌翔閃を発動させ、龍槌閃を回避したユーノに龍昇閃を仕掛けるが、ユーノはまたしてもそれを躱すと高く飛び上がり、今度は自らが龍槌閃を仕掛ける。

「飛天御剣流　龍槌閃！」

「また剣心の技を無断で。気に食わねぇから先ずはそのマガイもんから叩き潰してやる。」

弥彦はそう言うと、ユーノの龍槌閃を破るため自分もまた高く飛び上がって先手を決めた時の技である龍昇閃を仕掛ける。

「は！飛天御剣流！龍昇閃！！！」

ユーノは弥彦の龍昇閃を龍槌閃の発動の直前で受けると、そのまま空中へと身を投げられる。

「ユーノ先生ッ！！」

声を上げてその光景を見つめるティアナ。

と、その直後ユーノは霊子で足場を固めると体制を立て直して空中に浮遊し、見ていた全員は驚愕の表情を浮かべる。

「「「「あ！」」」」

「「「「「空中に浮遊した状態で体制を！」」」」」

同じように弥彦自身もユーノの行動の切り替えに目を見開いた。

「！？（霊子で足場を固めて体制を返した・・・）」

「この期に及んで相手の本気を見極められない程度の技量ならば、この闘いはここで幕引きだ。」

ユーノはそう言うと、その状態から弥彦目掛けて最初の戦いで自分を昏倒させた飛天御剣流の突進系最強の技を発動する。

「飛天御剣流！！『九頭龍閃』！！！」

弥彦は己が身にユーノが仕掛けてきた峰と柄頭を使った非殺傷の九頭龍閃を受けると、豪快に空中から落下し、身体を地面に叩きつけられる。

「がっは！」

「ピカ！！」

「弥彦！！」

弥彦が落下する光景を目の当たりにしていたピカチュウとニャースは声を上げ、また一方でユーノの仕掛けた一撃必殺の技を見ていたなのは達は度胆をぬいた。

「おい、何だあれは！？」

「恐らく、ユーノが最初に弥彦から食らった技だろうぜ。とはいえ、

一度食らっただけでそいつをあそこまでモノにするとは、やっぱあいつはとんでもない野郎だぜ。」

「これで決まったでしょうか！？」

「九撃全部が的確に入ったからな。普通ならノックダウンだろうぜ。」

「一瞬で形勢逆転ですな。」

その場に立ち尽くすユーノの立ち姿を見て、ひとまず安どの表情を見せるなのは。

「ユーノ君――――――」

だが、喜んでいられたのもそこまで。

あろうことか、ユーノの仕掛けた九頭龍閃を食らい普通なら気絶しても可笑しくはないはずの状況において、弥彦は満身創痍の体を起き上がらせ、息を切らしながら鋭い目つきをユーノに見せた。

「は、は、は、は、は、は」

ユーノやなのは達はこの信じられない光景に目を疑うばかりであった。

「「「「「！」」」」」

「「「「「な！」」」」」

「マジ・・・かよ・・・！」

「・・・・・・」

「・・・効いてねェのか・・・」

ヴィータが半信半疑の気持ちでそう口にすると、隣に立つシグナムもまた半信半疑の気持ちで返答する。

「いや、それはないはずだ。あの傷・・・効いていないはずなどない・・・だが奴はそれすらも己の精神力の強さで感じなくしているのか？」

すると、弥彦は体の痛みを己の精神力と気迫で補いながら技を仕掛けたユーノに対してこう言って来た。

「は、は、は、は・・・随分と言ってくれじぇねぇか・・・幕引きだ？まだまだこんなもんじゃねぇさ。確かに、九つの型に一撃必殺を秘めた斬撃である九頭龍閃を食らったのは少々の誤算だが、この程度傷の痛み・・・それを超える己の気迫と覚悟で耐えればいい・・・闘いの中に身を置く者にすればそんなコトは至極当然・・・」

「弥彦・・・・・・」

見ているだけで痛々しくなる弥彦の姿にユーノの心が痛む。

弥彦はそんなユーノの気持ちとは裏腹に、逆刃刀を強く握りしめながら大声でこう言った。

「俺は負けねぇ！！絶対に負ける訳にはいかねぇ！！」

直後、弥彦は刀を神速で地面をえぐる様に勢いよく振りぬいて土砂を巻き上げユーノにそれをぶつけてきた。

「飛天御剣流『土龍閃』！！」

ユーノは無数に勢いよく飛んでくるその土砂と言う土砂に翻弄され、破片のいくつかがユーノの身体に衝突する。

「ぐ！」

「ユーノ！」

「刀を地面に叩き付け土石を相手にぶつけるタイプの技まであったのか！？」

「ほおおおおおお！！！」

吉良が驚くのもつかの間、弥彦は満身創痍の体であるにも関わらずユーノの懐に飛び込みユーノの顔面を逆刃刀の腹で殴りつける。

「ぶっふ！！ぶっほ！！ぶっへ！！」

強烈な連撃がユーノの顔面が叩きつけられ、ユーノの顔は腫れ上がる。

「おらあああああああ！！！」

と、弥彦が更なる連撃を見せようとした直後、ユーノはそれを潔しとはせず、しゃがみ込むと同時に今度は自分が弥彦に技を仕掛ける。

「！」

「ほあああああああああ！！！」

ユーノが下腹部から仕掛けた技を食らい、空中に飛び上がる弥彦。

「ぐっは！！」

そして、そのままユーノはそこから飛天御剣流を発動しようとする。

「飛天御剣流！！」

だが、直後弥彦は体制を戻して先に自分が技を仕掛ける。

「させるか！！飛天御剣流！！『龍巣閃（りゅうそうせん）』！！」

「なっ！」

弥彦は全身の急所を攻撃する高速乱撃術である龍巣閃をユーノに食らわせ、ユーノはその攻撃を受けるとそのまま後方に飛ばされ、地面に叩きつけられる。

「ユーノ君！！！」

傷つくユーノを見ておきながら手を出してはいけない状況に歯がゆさを感じるなのは。

弥彦は龍巣閃を食らわせると止めの一撃を加えるために倒れたユーノの元へと走り出す。

「止めだ！！！」

「そうくるならこっちだって！」

「何！」

すると、ユーノは体を起こすや否や弥彦と同じではないが同じ高速の乱撃術の類である友人、サムライ・ドラの十八番を発動する。

「人侍剣力流『刹那乱閃』！！」

全身に龍巣閃同様強烈が乱撃が叩きこまれ、弥彦は気絶するか否かの危うい状況にまで追い詰められた。

「の・・・っは！」

一方で見ていたなのは達も大いに驚く。

「あれはドラさんの！」

「同じ乱撃術の類で返してきたか・・・」

弥彦は逆刃刀を杖代わりにして、何とか体を立ち上がらせると、全身から伝わってくる激しい痛みに必死で耐えていた。

「ぐ！」

「ピカピ！！」

「弥彦！！」

弥彦の身を案じ、声を上げるピカチュウとニャース。

「く・・・そ・・・！」

と、その時同じ様に傷ついた体をしながらそれでも戦いを続けるユーノは徐に自分の想いを弥彦にぶつけてきた。

「く！弥彦！！」

「！」

「そこまでして叶えたい願いがあるのは自ずとその剣から伝わってきた！お前や連れのポケモン二匹も共通の願いを抱えて一緒に行動していることもなんとなくだけど分かった！だけど、僕は何よりお前の口から本当の事を語って欲しい！弥彦の口から、お前の本音を僕にぶつけて欲しいんだ！！」

「な！」

この意外と取れるユーノの発言を耳に、呆気にとられるなのは達。

「ユーノ君・・・」

「あいつ・・・」

すると、ユーノは昔の事を思い返しながらさらに続ける。

「ジュエルシードを巡って、なのはとフェイトがぶつかり合ったと

きもなのははは自分の口で語り合うことでフェイトの心と自分の心を通わせた。そうやって、お互いに全力全開でぶつかり合った。だったら僕だって、お前の本音を聞いた上でそのプリズムシードを懸ける！何も語らずしてぶつかり合うのは・・・僕だって好きじゃないんだ！！」

ユーノがそう口にした直後、弥彦は体をふら付かせながら懐のプリズムシードをユーノに見せながら質問をする。

「・・・てめぇは・・・お前は何のためにこいつを懸ける？」

「・・・僕はこれまで、遺跡発掘をしながら様々なロスト・ロギア関連の危険な物質を五萬と見てきた。ジュエルシードの時も、闇の書の時も・・・そして、アンゴルモアや目の前のプリズムシードも。ロスト・ロギアは使い方を間違えれば世界一つを容易に破壊してしまう危険を孕んだ代物。そんな危険なものが万が一暴走し、それこそなのはやこの世界の人達に危害が出たり人生を弄ばれるのは僕はまっぴら御免だ！手が届くのに伸ばさなかった時が死ぬほど後悔する・・・それが嫌だから、僕は手を伸ばす。これが僕の理由だ、弥彦！！」

「！」

その時、弥彦は残像のようにユーノの面影から見えてくる自分が最強と謳う剣客、緋村剣心の姿が映り、思わず目を見開いてしまう。

「（・・・剣心・・・！）」

そんなユーノの真摯な態度と言葉を聞き、弥彦自身も次第に心が揺らぎ始める。

「・・・俺は・・・」

だがその時、ピカチュウとニャースがそんな弥彦に喝を入れてきた。

「ピカピ！！」

「弥彦！答える必要ないニャー！」

「「な！」」

「優しくしてくれる奴が自分の周りにいるくせして、そうやって甘い言葉を振りかけて暴力を振るうような血塗れの男の言葉に耳を貸す必要なんかないニャー！！」

「ピカピ！！」

と、その時なのはがそんな一方的に自分にとって一番大切な人を罵倒するニャースの発言に我慢が出来なくなり、小刻みに体を震わせながら声を上げて反論する。

「違う・・・違うよそれは！！」

「「！」」

「なのは・・・」

見ていたユーノやフェイト達も思わずなのはの方へと振り返る中、なのはは次のように語り出す。

「何も知らないくせに・・・ユーノ君の事断片的にしか見てないような人にそんな風に言われたくない・・・！ユーノ君は何時だって、私やみんなの為に自分の命すら投げ打ってでも守ろうとしてくれる！自分の欲を捨ててまで、責任感ばかりを背中に背負って一人苦しむことになったとしても、それでもユーノ君は何かを守るために戦い続けてきた！その所為で・・・独りぼっちになったり・・・怪我したり・・・血に染まったり・・・・・・だけど！！それでも私は知ってるもん！！ユーノ君が誰よりも優しくて、争い事が嫌いで真っ直ぐな魂を持った人かどうか！！だから・・・そんな風にユーノ君のこと悪く言うのは止めて！！！」

「なのは・・・・・・」

ユーノはまさかこの局面で自分の事をそこまでして擁護してくれるなのはに非常に心が撃たれるばかりだったが、聞いていたニャースとピカチュウは反論を続ける。

「ピカ！！ピカピ！！」

「う、うるさいニャー！！おみゃーらにニャー達の気持ちなんか知りもしないくせに、つべこべ言われる筋合いなんてないニャー！！弥彦、何ぼさっとしてるニャー！ニャー達の最優先事項は、プリズムシードの捕獲ニャー！」

「・・・く。そうだな。」

「ち。」

二人は剣を構えると、再び向かい合った。

「ユーノ！」

「ユーノ君！」

「大丈夫だ。」

ユーノがなのは達にそう言うと、弥彦から勝負に決着をつけるために次のように語り出す。

「・・・もうあまり時間をかける訳にはいかねぇか。仕方ない。お互い、一先ずここで『決着』をつけようじゃねぇか。」

「・・・いいだろう。」

ついに、両者の想いと思いを懸けた戦いに一つの区切りが撃たれようとしていた。

次回、飛天御剣流の奥義が炸裂！！

髪の長い優男は意外と熱血漢（後書き）

教えて、ユーノ先生！

ユ「今日は飛天御剣流のお話だ♪」

ユ「弥彦が操り、更には緋村剣心が振るうこれは「御剣の剣、即ち、時代時代の苦難から弱き人々を守ること」を流派の理としていて、継承者はその理に従って剣を振るっている。」

ユ「また、飛天御剣流の使い手は「陸の黒船」とも喩えられる絶大な力を持つ為、いずれかの権力に荷担した場合、その陣営に必ず勝利をもたらす事から、国家や組織に加わることは禁じられており、飛天御剣流は如何なる権力にも属さぬ「自由の剣」として人々を守ることが望ましいとされている。」

恋「ところで、お前は一度見ただけで結構色んな技を真似してやがるが、どうしたらあそこまでコピーできるよ？」

ク「何か秘策でもあるのか？」

ユ「これと言ってそんなものはないけど、強いて言えば一護さんとの修行が役に立ったからじゃないの？」

一「そう言えば、俺もあんときは散々お前の事苛めてたもんな。」

ユ「お蔭で顔中アンパンマンになったこともありましたよ。あとジャムおじさんとか♪」

銀「笑えねぇだろ、その話・・・」

な「あの・・・ユーノ君も一護さんもなるべくほどほどにしようね。」

魔導師図鑑ハイパー！

ユーノ・スクライア外伝　名作劇場

『かちかち山』

ユ「あるところにそれはとても悪戯好きのタヌキ娘が居ました。悪戯ばかりするので、とうとうタヌキ娘は土方爺さんに縛り上げられました。」

土「てめぇ！今日と言う今日は縛り首だ！」

は「ごめんなさい！！もうしまへんから！！」

ユ「タヌキ娘があまりに不憫であったために、優しい優しいシャマル婆さんはタヌキ娘を離してやることにしました。」

シャ「もう悪さはするんじゃないよ。」

は「ホンマおおきにな。」

ユ「しかし、タヌキ娘はそんなシャマル婆さんの行為を仇で返し、シャマル婆さんに大怪我を負わせてしまいました。」

は「ははん！！ウソだよ！！」

シャ「あれ～～～！！」

ユ「怪我で寝込んでしまったシャマル婆さんと、途方に暮れる土方爺さんにウサギのルキア。」

土「どうしようもねぇタヌキだなあの野郎。」

ル「ならば、私が懲らしめてやろう。」

ユ「そんな訳で、ウサギのルキアはタヌキ娘を呼び出し上手いこと嵌めようと企てました。」

ル「手伝ってくれたら何かするぞ。」

は「ほんまに♪」

ユ「まんまと策にはまったタヌキ娘。藁を運んでいると、後ろからカチカチと言う音が聞こえてきた。」

は「今のカチカチ言う音は何やの？」

ル「ここがカチカチ山だからであろう。」

すると、はやての背中のわらに火がついて・・・

は「あちゃあああああ！！！！！！！！！！」

ユ「大やけどを負ってしまったタヌキ娘。」

は「火傷してしもうた！」

ル「今から薬を塗ってやろう。」

ユ「ルキアはそう言うと、からしたっぷりの塗り薬をタヌキ娘の背中にべっとり。」

は「うぎゃあああああああああ！！！！！！！！」

思わず飛び上がるタヌキ娘だった。

その翌日。

ウサギのルキアはタヌキ娘を呼び出し泥で出来た船と木の船を見せる。

ル「私がこの木の船に乗るから、貴様はこの泥の・・・お？どうした。」

ユ「嫌に機嫌の悪いタヌキ娘。すると、たまっていた我慢が限界に達してついていた耳を地面に叩きつけた。」

は「もう嫌や！何で私ばっかりこんな貧乏くじ引かんといかん！大体・・・タヌキ娘って何やの！もうやってられんわ！！」

ユ「あ～あ～すっかりぐれちゃったよ。」

土・シャ・その他「どうしたどうした？」

ル「はやての奴がタヌキはやりたくないと言うのだ。」

恋「んなこと言っても、ちゃんと配役があるんだぜ。」

リィ「はやてちゃん、機嫌直してくださいよ。」

は「ふんや！タヌキ以外なら変わったる！」

ル「そうか。ならば私と役を代ろう。」

は「ほんまに♪」

ユ「ウサギになれることに大喜びのはやて。しかし、現実は厳しい・・・折角もらえた役なのにウサギの耳が小さすぎて頭に入らない。」

は「ぬぬぬぬぬぬ！！！！！！」

ヴィ「もう止したらいいんじゃねぇ？壊れるぞそれ。」

は「まだまだ！！！！ぬおおおおおおお！！！」

ユ「と、その瞬間案の定耳は壊れ全員は思わず笑ってしまった。」

全「ははははははは！！！！」

は「く～～～～！！！何でや！！！！」

次回予告

どうしようもない運命――――――

待ち受ける戦いの運命――――――

二人の剣客は何を思い、そして何を伝え合うのか？

プリズムシード争奪戦は苛烈する！

織「次回『それはただ願いの為に・・・』」

それはただ願いの為に・・・（前書き）

ユ「人の一生は、重き荷を負うて遠き道を行くが如し・・・そんな昔の言葉をふと思い出した僕だが、僕もいつの間にかたくさんの荷を背負って生きて来たんだな・・・」

ユ「きっとみんなも同じだけ、或いはそれ以上の荷を背負って生きていると思うけど、背負ってるときにはなかなかその重さに人は気づかない。」

ユ「だから、それらが全部手から滑り落ちると、人はこの上もないくらい後悔する。僕も・・・同じだ・・・・・だからそんな後悔をしないためにも、自分にできる精一杯の事をする。」

な「ユーノ・スクライア外伝　アンゴルモア・銀魂篇・・・・・・始まります。」

それはただ願いの為に・・・

前回のおさらい。

プリズムシードを巡って、翡翠の魔導死神ユーノ・スクライアと逆刃刀の使い手明神弥彦は熾烈な争いを繰り広げていた。

お互い満身創痍の状態でそれでもなお、己の誇りと欲望・使命感の為に刀を振り続けていた二人は、ここで一つの区切りを迎えようとしていた。

お互いににらみ合いながら、心の整理をするユーノと弥彦。

そんな二人の光景を離れたところから見守るなのは達一同とピカチュウ、ニャース二匹のポケモン。

すると、弥彦は徐に逆刃刀を鞘に納め口を開いた。

「こいつは生と死のギリギリの状態のその一瞬で放つ飛天御剣流の奥義。俺自身、こいつを実戦で試すのはこれが初めてだが、俺は何としてもお前に勝たないとならない。じゃないと、俺はあいつらを助けてあげられない・・・――」

弥彦はそう言うと、後ろで自分の事を心配そうな表情で見つめるピカチュウとニャースに目を向け、それを聞いた直後ユーノも次のように返した。

「僕だって、出来れば傷つけずにお前の事を助けてあげたかった。だけど、こうするしか他に方法がないから・・・不器用だから僕はこうして剣を交えてる。」

ユーノはそう言うと、自分の刀を両手で持ち直すと脇を締め直して弥彦の技に対抗すべく構えを取った。

構えを取ると、ユーノは弥彦は次のように呟く。

「お互い何があっても遺憾なし。僕の全力全開の力でお前に撃ち込む！」

「望むところだ。見せてやるぜ・・・飛天御剣流奥義にして、最強無敗の伝説の奥義を！」

二人の剣客が全神経を集中させて、渾身の一撃を放つその瞬間辺りに吹き荒れる肌寒い秋風が静寂を一層際立てる。

なのは達はそんな二人の光景をまじまじと見つめながら緊迫した雰囲気を醸し出す二人の体制に関してそれぞれこう呟く。

「刀を・・・収めたか・・・！」

「あの構えは抜刀術か・・・この局面において抜刀術とは一体どんな技なんだ？」

「どんな技だろうが関係ねぇさ。店長は勝つ。何があろうが店長は勝ってみせる！」

「そうだ。店長が負けるはずない！」

「店長・・・ご武運を！」

「ユーノ君・・・――――」

スクライア商店メンバー三人がユーノの勝利を祈る傍ら、ユーノの身を恐らくこの場にいる誰よりも案じているなのは。

そして、暫くの膠着状態が辺りを支配していたまさにその瞬間、二人の剣客が一斉に動きを見せる。

「・・・いくぞ・・・」

「・・・ああ・・・」

二人は一斉に動き出すと、お互いの武器を相手に向けて一撃必殺の威力を秘めた最後の奥義を発動する。

「飛天御剣流奥義！！」

「人侍剣力流極意！！」

弥彦は逆刃刀を目にも映らぬほどの速さで抜刀させ、ユーノを切り伏せようとする中、ユーノは超神速で弥彦の懐に飛び込むと同じように峰を向けた状態で刀を振り払い弥彦に仕掛ける。

それぞれの技の名は以下のとおりである。

「『天翔龍閃（あまかけるりゅうのひらめき）』！！！！！」

「『神速衝閃（しんそくしょうせん）』！！！！！」

両者の技はほぼ同時に放たれたが、どちらとも一撃目は当たることなくお互い一定の距離を保ったまま次の体制へと移り、見ていたなのは達や連れのポケモン二匹の額に汗が浮かぶ。

「（避けた！）」

「（ピカ！）」

「（いや、ここからか。）」

「（ユーノ、油断するなよ。）」

各々が様々な思いを抱きながら、二人の魂の籠った二撃目を待っていると、ユーノと弥彦のこれこそ最強の一振りがほぼ同時に放たれる。

「「おおおお

ユーノは晩翠を杖代わりにして体に走る激痛に耐えながらふらふらの体を起こして立ち上がろうとするが、身体がユーノの思う通りに言うことを聞かない状況であった。

「か・・・は・・・（何だ・・・あの技は・・・左足を前にして抜刀するという抜刀術の常識を逸したあの技は・・・・・・通常、抜刀術は刀を左から抜刀するため、左足を前にすると抜刀時に斬ってしまう危険性がある。そのため普通は右足を軸にする・・・・・・だが、さっきのは抜刀する瞬間に絶妙のタイミングで鞘側の足、つまり左足を踏み出して、その踏み込みによって刀を加速し「神速」の抜刀術を「超神速」にまで昇華させた・・・・・・！）」

ユーノは鋭い洞察力で弥彦の放った飛天御剣流の奥義、天翔龍閃の正体を見破ったが、それ以上にユーノの身体は強い激痛に襲われ体が悲鳴を上げ今にも気絶しそうな状況であった。

「（初撃は躱したけど、その後の超神速の刀が空を切ることで弾かれた空気が敵を打ち据えて行動を阻害し、さらに空気が弾かれてできた真空空間が元に戻ろうとする作用が僕を引き寄せ、回転による遠心力も加えたさらに強力な二撃目で斬る・・・・・・究極の二段構えの抜刀術・・・・・・！これが飛天御剣流奥義、天翔龍閃・・・！あと刹那遅かったら逆刃刀と言えど、どうなっていたか分からない・・・）」

そんな事を頭の中で考えていたユーノであったが、弥彦もまたユーノと同じか場合によってはそれ以上の身体への負荷に必死に耐えながら満身創痍の体を起こそうともがいていた。

「く・・・く・・・そ・・・」

ユーノは敢えて弥彦の攻撃に合わせるため、峰打ちによる攻撃を仕掛けてきた。

その為弥彦自身は刀傷で死ぬことはなかったが、技の威力に圧倒され未完成の天翔龍閃の反動もあってか、かなりのダメージを負うこととなった。

と、その時懐に入っていたプリズムシードが弥彦の側から離れ、そのまま転げ落ちていく。

「！しまった・・・プリズムシードが・・・！」

その事に気づき、慌てて取りに行こうとする弥彦だがまるで体が言うことを聞いてはくれない。

「ピカピ！」

その時、動けない弥彦に変わってピカチュウが転がっていくプリズムシードへ向けて走り出す。

銀時はピカチュウの行動に気づくと、目の色を変えて走り出す。

「野郎！そうはさせるかよ！」

「銀さん！」

「万事屋！」

新八と近藤が呼び止めるを無視して、銀時はピカチュウと並びなが

らプリズムシードを目指して猛ダッシュ。

「ピカピカ！！！！」

「ほおおおおおお！！！！」

だが、二人がプリズムシードに手を伸ばそうとした直後、異変は怒った。

プリズムシードに触れる直前で突如空から爆撃が放たれ、爆発音が辺りに鳴り響く。

「「！」」

「「！？」」

あまりに突然の事に頭が回らないでいる銀時やユーノ達。

なのは達もまた爆発とその爆音を耳にし、周囲を警戒する。

「何だ！？」

「誰がこんな・・・！」

と、その時新八は空の上を見上げて異様なものが浮かんでいることに気づき、驚愕の表情を浮かべながら指を差した。

「あ！あれを！！」

新八の言葉に耳を傾け、夜の空に目を向けたなのは達。

するとそんな機動六課メンバーの目に映ってきたのは、体長二メートル級の巨大な緑色の蜂と何故か空中を浮遊する灰色のステゴサウルスだった。

驚き返るなのは達を余所に、その蜂ワスピーターとステゴサウルスのセイバーバックは次のように語り出す。

「ブーン。僕ちん見つけたもんね。」

「何だこれは?実に美しくない光景だな。寧ろむさ苦しいと言った方がいいものだな。」

ワスピーターとセイバーバックの姿を目の当たりにした瞬間、土方は咥えていた煙草をうっかり地面に落としてしまった。

「何だあいつら!でけー蜂と恐竜が喋ったぞ!」

「まさか、カトゥーンの新手か!」

すると、そんなカトゥーンの手下である二体を険しい表情で睨み付ける全身ボロボロの明神弥彦。

「て・・・てめぇらは・・・!」

弥彦の元に二体が近づくと、それぞれの名前を口にする。

「ワスピーターだもんね。」

「俺様はセイバーバック。明神弥彦、悪いがプリズムシードは俺達

が戴いていくぜ。」

すると、二体はビーストモードと呼ばれる形態から体を変形させてロボット形態と呼ばれるものへと変貌する。

「ワスピーター、変身！」

「セイバーバック、変身！」

ワスピーターとセイバーバックの二体が変身し、武器を手にしたロボットとなるとなのは達は目の色を変えて驚いた。

「変身しやがった！」

セイバーバックは尻尾を武器に変形させると、徐に銀時とピカチュウのもと目掛けてレーザー光線を発射する。

「レーザーバーン！」

レーザー光線が二人の周囲に着弾し、銀時とピカチュウは身動きが出来なくなる。

「く！」

「ピカ！」

銀時の身を案じ声を荒げる新八。

「銀さん！」

その直後、今度はワスピーターのハリ型の銃が飛んでくる。

「どんどんいっちゃうもんね！」

セイバーバックとワスピーターの攻撃を受け、完全に八歩塞がりの状況と化す銀時とピカチュウ。

「「・・・！！」」

そんな一方的な敵の攻撃に焦りを覚えるなのは達。

「なりふり構わず攻撃しやがって！」

「ち。おいメガネ。チャイナ娘連れてさっさと逃げろ。ここは俺達が何とかする。」

「で、でも土方さん！」

「いくら何でも無謀ネ！！」

目を開いて土方の言葉に異を唱えようとする新八と神楽。

しかし土方はそんな二人を一蹴するかのように腰に携えた三本の刀を抜きながらこう言った。

「んな四の五の言ってる場合かよ。今のユーノじゃ満足に戦える状態にないのは目に見えてるだろうが。それに、プリズムシードをカトゥーンの漫画キャラに奪われるのはこっち側にとっては都合のいいものじゃねぇ筈だ。」

土方がそう言うと、シグナムは騎士甲冑を身に纏い、レヴァンティンを起動させると次のように便乗する。

「そうだな。我々全員で、スクライアもあの剣士たちも助けるぞ。」

「了解。みんな、いくよ！」

「「「「「はい！」」」」」

エクシードモードのなのはが合図を懸けると、フォワードの五人と前線隊長陣全員、更には真選組が面々がユーノ達を助けようと迎撃に向かった。

その間に、セイバーバックはふらふらの弥彦容赦ない攻撃を仕掛けていた。

「死ね弥彦！！！！」

セイバーバックの攻撃を皮一枚で躱した弥彦だが、その衝撃で後方へと飛ばされる。

「のあああああああああ！！！」

弥彦はそのまま力なく地面に叩きつけられると、うつ伏せとなったまま動けなくなった。

「弥彦！！！！」

「ピカ！！！！」

ニャースとピカチュウが弥彦の元に近づき意識を確認しようとすると、直後セイバーバックが近づきレーザーを発射しようとする。

「美しくないネズミとネコは黙ってろ！」

顔に突きつけられたレーバーバーンが二匹を消し屑にしようとしている中、二匹は恐怖に戦き強張ってしまい体が動かすことが出来なかった。

「ピッカ！！！」

「ニャー！！」

だが、その直後そんな二匹と弥彦を助けたのはあの男だった。

「ほおおおおお！！！！」

男は猛烈な勢いでセイバーバックの元に近づくと、そのままセイバーバックを刀の一振りで吹き飛ばした。

「ぐあああああああ！！！！」

弥彦と二匹のポケモンが突如現れた救援に目を向けると、立っていたのは満身創痍の状態でありながら自分たちを必死で守ろうとする翡翠の魔導死神ユーノ・スクライアだった。

セイバーバックは殴られた顔を手で抑えながらユーノに向けて怒鳴り声を上げる。

「な、何だ貴様は！俺の美しい顔によくもよくも！！」

その一方で弥彦は驚きに満ちた瞳を向けながらユーノにこう言った。

「お前・・・何で・・・・！」

「言ってる場合じゃないだろ！ピカチュウ連れてとっとと逃げろ。プリズムシードの事は一先ず諦めてな。」

「な、何を言ってやがるてめぇ！！俺は――――――」

と、ユーノにまだ何かを言おうとしたが、直後弥彦はユーノから喝を受ける。

「馬鹿野郎！！！」

「！」

「人の命の方が万倍も大事だろうが！！それとも、お前の敬愛する緋村剣心は目の前の人の命を見捨ててまで、大勢の命を救おうとした安っぽい剣客だったとでも言うのか！！お前が日本一と謳う男はそんなことしない筈だろ！！」

「！」

弥彦はその言葉を聞くと、今一度自分が日本一・最強と謳う緋村剣心がどんな人物であったかを思い出し、そんな剣心とユーノの姿を照らし合わせながら素直に引き下がる決意をするのであった。

「ち・・・この勝負、預けるぜ。ピカチュウ、ニャース、行くぞ！」

「ピカ！？」

「ちょ、ちょっと待つニャー！」

弥彦は全身に残った最後の力を振り絞って、ピカチュウとニャースと共にどさくさに紛れてこの場から戦線離脱を決行。

弥彦達がそのまま逃走すると、ユーノは一度深呼吸をしてから晩翠を解放してセイバーバックと向き合った。

「き、貴様。許せんぞ！！」

セイバーバックは怒り心頭な様子でユーノにレーザーを突き付け攻撃をしようとしたが、その瞬間セイバーバック目掛けて銀時の木刀が頭上より降り注ぐ。

「でやあああああ！！」

「のっは！」

渾身の一撃を秘めた銀時の一振りがセイバーバックの後頭部を直撃。

ユーノはその光景に目を疑った。

「！銀さん！」

銀時は驚き返るユーノに駆け足で近づくと、木刀を向けたまま次のように語った。

「ユーノ！無理すんじゃねぇ！こいつらは俺達が何とかする！てめ

ぇは新八たち連れて離れてろ！」

銀時がそう言うと、レイジングハートの音声が聞こえてくる。

〈Ｄｉｖｉｎｅ　Ｂｕｓｔｅｒ〉

空中より放たれるなのはの砲撃がセイバーバックを直撃。

「のああ！」

セイバーバックはその威力に圧され、後方に吹き飛んだ。

ユーノは隣に舞い降りたなのはに驚きの表情を見せる。

「なのは！」

「ユーノ君、銀さんの言う通りだよ。早く行って。その傷じゃ、戦うのもままならいよ！」

なのはからその言葉を聞かされると、冷静に考え直し二人の事を信じてユーノは戦線から離脱することを決め込んだ。

「・・・分かった。」

ユーノは二人の前から体を引きずりながら走り出し、ユーノの安全を守ろうとする二人は闘う眼つきとなって武器を構える。

そして、そんな二人に土煙の無から出て来たセイバーバックの炎が襲い掛かろうとしていた。

「く・・・どいつもこいつもやってくるな。俺様を舐めやがって！」

怒りに満ちたセイバーバックの姿を目の当たりにした二人は、お互いに顔を見合わせて共同戦線を張ることにした。

「銀さん」

「ああ」

今ここに、白き魔王と白夜叉による最強タッグが結成された。

一方その頃フォワード陣営と隊長陣営はワスピーターと戦闘を激化させていた。

「ぶん！ぶん！ぶん！」

ワスピーターはハリ型の銃を連射し、フォワードメンバーや隊長陣、真選組の三人を翻弄するが、爆音と土煙が晴れた直後ヴィータが煙を突き抜けて攻撃を仕掛ける。

「てらあああああ！！」

ワスピーターは比較的速い動きでヴィータのグラーフアイゼンの一撃を躱す。

しかし、その瞬間今度はティアナとＩＰカートリッジを使用し、マッハキャリバーで空中を滑空するスバルの連係攻撃が襲い掛かる。

「シュート！」

「でああああ！！！」

二人の打撃と射撃が同時にワスピーターの顔面に直撃し、ワスピーターはあたまを３６０度回転させて目を回し、改めて所定の場所に頭を元に戻す。

と、その時土方が隙を見せたワスピーターの背後へと飛び上がり、ワスピーターも思わず振り返り驚愕する。

「ぶん！？」

土方は羽に狙いを定めると、口に咥えた刀と両手の日本の刀を完璧に使いこなして、漫画より体得した三刀流の技を発動する。

「鬼斬り！」

奇しくも、この技の声優と土方は同じであった・・・

ワスピーターは羽を斬られると、地面に向かって急降下していった。

「あああああ！！！やられた！！！」

地面に激突し、土煙が上がるとワスピーターは目を回して正体である紙切れの姿へと変貌を遂げ、見事な連係攻撃で機動六課の面々はワスピーターを撃退。

近藤は土方に近づき、嬉々とした表情で肩を叩いた。

「やったな、トシ！」

「へ。ちょろいもんだ・・・・・あ？」

と、その時土方は真上から聞こえてくる奇妙な落下音と自分と近藤を覆い尽くす陰に疑問を抱き、空を見上げてみた。

すると二人に向かって巨大な亀の様な怪物が重力に従って落ちてきた。

「「のあああああああ！！！！」」

二人は慌ててその下から回避し、難を逃れたが怪物が落ちて来た際の衝撃が六課メンバーの想像を絶するものであった。

煙が晴れ、目の前の怪物に目を向けた六課メンバーは自分たちの身の丈を5倍近く超えるほどの巨躯を持ち、同時に背中に無数のとげを生やした甲羅の怪物、クッパに目を疑った。

「な、何この怪獣！？」

「あれはクッパじゃねぇか。マリオに出てくる。」

「おいおい、任天堂のキャラまで出てくるなんて聞いてねぇぞ！」

「ふん。クッパだかパックンだか知らんが、ゾニー派の俺には関係ない！完膚なきまでに叩き潰してくれる！」

真選組の三人は揃ってゲームの好みが違う。

近藤はゾニー派、土方は根っからの弁天堂派、沖田はシェンマーの

続編を未だ待ち続けるほどのゼガ派・・・ま、今はどうでもいい話だが。

兎にも角にも、六課メンバーは総出でこのクッパに向かって攻撃を開始する。

「烈火！」

「琴線斬！」

「アックスオーガ！」

スクライア商店の鬼太郎と金太郎、白鳥がそれぞれ先手を打ってクッパのたい肥に攻撃を仕掛けるが、クッパは攻撃が飛んでくると口から灼熱の炎を吐きだし三人の攻撃をすべて焼き尽くした。

シグナムはそんなクッパの攻撃を見て徐に呟く。

「炎を吐く攻撃か・・・亀のくせに生意気な。」

「おまけに三人の攻撃がまるで効いてないよ。」

「あの重厚な体にダメージを与えるのは容易では無さそうですね。」

シグナムの後に続いて浦太郎とフェイトがそう口にすると、それを聞いたギンガが全員の士気を煽るようにこう言った。

「では、全員でかかればいいだけですよ！」

ギンガの言葉を耳にすると、スバル達フォワードも隊長陣も俄然や

る気の顔となる。

「うん！」

「はい！」

「よし、行くぞ！！」

全員は武器を構えると、漫画キャラクッパを倒す為の連係攻撃を仕掛けるのであった。

彼らはクッパに勝てるのだろうか？

その頃、一人戦線を離脱し新八と神楽が待機しているヴァイスのヘリに向かって重い体を引きずるように動かすユーノはと言うと――――

「う・・・く・・・」

天翔龍閃をその身に受け、身体には想像を絶する肉体的負荷が襲っており、今にもユーノは気絶しそうなものだったが、あと少しのところでユーノは気を失えずこうして苦しみを体感しているのであった。

ユーノは負荷がある程度の所まで達すると、限界に達しヘリの目前で膝をついた。

それを見ていた新八・神楽・ヴァイスの三人は急いでユーノの元に駆け寄った。

「ユーノさん！」

「ユーノ！！」

「大丈夫っすかユーノ先生！立てますか！？」

ヴァイスが心配した様子でそう尋ねると、ユーノは晩翠を杖代わりにしながら左手のプリズムシードを見せ、虚ろな表情でこう言った。

「う、うん・・・・・・取りあえず、プリズムシードは何とか守り抜いた・・・・・・急いでここから離れるんだ・・・・・・」

「りょ、了解！」

ヴァイスはユーノからの指示を受けると、一度ユーノからプリズムシードを受け取り、新八と神楽は二人掛かりでユーノを運ぼうとした。

「ユーノさん、掴まってください！」

「また無茶したアルな。帰ったらこっ酷く叱ってやるネ！」

「あはは・・・・・それはどうも・・・・・・」

二人はユーノを肩に担ぐと、ヴァイスの誘導に従ってヘリの方まで運んでいく。

「よし。慎重にそのまま・・・――――」

と、ヴァイスが口にした直後、ユーノは不穏な気配をその身に感じ、

目の色を変えると大声を上げた。

「！三人とも、離れるんだ！！」

「「「え」」」

ユーノが声を上げた直後、ヴァイスのヘリに向かって漆黒の球体が降り注ぎ、ヘリはそのまま爆発を起こしてしまい、四人はその衝撃で吹き飛んだ。

「「「「わあああああ！！！」」」」

無残に破壊され、炎上する機動六課自慢のヴァイスのヘリ。

その光景に思わずヴァイスの眼に涙が。

「あああああ！！！俺のヘリが！！！」

「一体何アル！？」

と、神楽が額に汗を浮かばせそう口にした直後、徐に聞き覚えのない声が四人の耳に入ってきた。

「・・・・哀れなる人間たちよ・・・・・・私は誰だ？」

「「「「！」」」」

四人は声が聞こえてきた夜の空に目を向けてみると、月明かりをバックにして紫色の尻尾の様なものを生やし、空中に浮遊するピカチュウと同じポケモンと類するものが現れた。

そのポケモン、ミュウツーは何処か悲しみの籠った鋭い目線を驚愕する四人に向けると、次のように尋ねてきた。

「今一度問おう・・・・・私は誰だ?何故私はここにいる?何故私は・・・何の為に作り出された?」

意味不明な問答をまくし立てるミュウツーに戸惑うばかりの四人。

「何だあいつは・・・」

「言ってることはよく分かりませんが・・・とんでもない力を感じます・・・!」

「あれもピカチュウと同じポケモンなのか・・・・・・」

ユーノがそう口にすると、それがミュウツーの怒りに触れ、四人に敵意を見せてきた。

「ポケモン・・・・・だとしたら、作られた私はポケモンですらない!」

ミュウツーは掌に漆黒の波導弾、シャドーボールを複数作り出すとそれを全て一斉に自分の怒りを助長させたユーノに向けて放った。

ユーノは咄嗟に三人から離れると、ラウンドシールドを展開してミュウツーの攻撃をしのごうとするが、満身創痍で体力の消耗が著しい今のユーノではミュウツーの攻撃はとても凌げる状態ではなかった。

「く！」

ミュウツーはそんなユーノに更に威力のあるシャドーボールを放ち、ユーノのバリアを突き破ってダメージを与える。

「ぐあああ！」

ダメージを受けた中でのミュウツーの攻撃はユーノ荷凄まじい負荷を与え、ユーノは大きく吹き飛んだ。

「ユーノ先生！」

「ユーノさん！」

「ユーノ！！」

すると、ユーノは心配になって自分に声をかけてくるヴァイス達に向かって震えがらせた声でこう言った。

「いいから・・・僕の事は構わず、早く・・・逃げるんだ・・・！」

ユーノの言葉を耳にした瞬間、新八達は声を荒げる。

「そんなことできませんよ！だって、ユーノさんの方がぼろぼろじゃないですか！！」

「だけど、君たちを・・・傷つける訳にはいかない・・・！」

頑なに自分よりも他人を優先させるユーノの言動に、神楽とヴァイ

スが猛反発。

「ふざけるアルよ！！誰がてめぇに守ってくれなんて頼んだアルよ！！独りよがりも大概にするネ。今は、私達がお前を守るネ！」

「そうっすよ。ユーノ先生、大丈夫っす。こう見えても、自分の身とガキと大人一人守れることは出来ますんで。」

二人はそう言うと、唐傘とストームレイダーを取り出し、ユーノの前に立つと新八もまた木刀を取り出して戦う目となってユーノにこう言った。

「ユーノさんに比べれば、僕達が出来ることは少ないですけど、侍は一旦守ると決めたもんは何が何でも守り抜く。なので、今は僕らがあなたを守ります！」

「行くぜ、ストームレイダー！」

〈Ｖａｒｉａｂｌｅ　Ｂａｒｒｅｔ〉

ヴァイスはスコープガン型のストレージデバイス、ストームレイダーの銃口からバリアブルショットを発射し、ヴァイスの銃撃に続けて新八と神楽が動き出す。

「新八！行くネ！」

「おお！」

そんな三人の行動を目にしていたミュウツーは鋭い目線を一切崩さず逆に三人を罵ってきた。

「・・・身の程を知らぬ愚かものよ。ならば容赦はせぬ。私の怒りを・・・裁きをその身に受けるがいい！」

ミュウツーはそう言うと、シャドーボールを作り出し、三人に向かって攻撃を始める。

三人の身は、ユーノの身はどうなってしまうのか！？

そんな戦いを繰り広げられている頃、銀時・なのはの白白無敵コンビはセイバーバックに止めの攻撃を仕掛けるところであった。

「エクセリオンバスター！！」

なのはの放ったエクセリオンバスターが見事セイバーバックに直撃すると、セイバーバックは悲鳴を上げながら桃色の砲撃に飲まれ紙くずとなっていった。

「ぐあああああ！！！」

そんななのはの砲撃を間近で見ていた銀時は呆れ半分怖さ半分と言った表情で呟く。

「相変わらず化物みたいなもん撃ちやがるなてめぇは・・・」

「そ、そんな顔で私の事見ないで下さいよ銀さん！」

銀時の表情に恥ずかしがりながら弁解をするなのは。

と、その直後唐突に二人の元に浦太郎が吹っ飛んできた。

「のっは！」

「「！」」

二人が目の前の状況を確認してみると、映ってきたのはクッパの猛攻に圧されがちな満身創痍の六課メンバーの姿だった。

なのはは思わず声を上げ、銀時は巨大な姿のクッパに目を見開く。

「みんな！」

「こいつはすげえのが出て来たなオイ・・・・・」

「く、くそ・・・！」

フェイトはバルディッシュを突き刺して体制を起こそうとするが、クッパはそんなフェイトや横で倒れている他のメンバーを一変に斃すために口を開き炎を吐き出す。

「！レイジングハート！」

〈Ｗｉｄｅ　ｐｒｏｔｅｃｔｉｏｎ〉

なのはは咄嗟に広域防御を展開させ、フェイト達の身を守ることに成功した。

そんななのはの救援の甲斐あってか、再び立ち上がることの出来たフォワードメンバーや隊長陣は武器を構え直すと、先ほど同様クッパに向かって攻撃を続行する。

「はあああああ！！！」

〈ｔｈｕｎｄｅｒ　ｂｌａｄｅ〉

フェイトはザンバーによる電撃を帯びた刃でクッパの皮膚を斬りつけ、続けざまに今度は沖田と土方の大技が炸裂。

「はあああ！！」

「大仏斬り！！」

沖田の鋭い剣戟と土方の放った巨大な建物すら切り崩す大仏斬りがクッパの体を斬りつけ、クッパは空気を裂くような濁声を響かせる。

そして、更に近藤と金太郎のコンビネーション攻撃とギンガ、スバル姉妹のリボルバーナックルでの攻撃が仕掛けられる。

「「ほおおお！！」」

「「「リボルバー・・・ガトリング！！！」」」

その嵐のような快進撃にクッパは徐々にダメージを蓄積させ、あちこちに傷が目立ち始める。

すると、ソードアーマーにその身を包んで烈火の威力を強化した鬼太郎の炎熱攻撃がクッパに仕掛けられる。

「まだまだ！！烈火嵐空牙！！」

烈火の炎がクッパの顔面に直撃、もだえ苦しむクッパ。

更にそこへ浦太郎、白鳥、キャロ、エリオ、そして銀時の攻撃がほぼ同時に仕掛けられる。

「ウォータースラッシャー！」

「琴線斬第一章　二十二節“巌（いわお）の落石”！」

「フリード！！」

「サンダーウェーブ！」

「でらあああああああああああ！！！！」

それは嵐を通り越し、ある意味ではその区間だけが崩壊するかのような怒涛の攻撃が一瞬のうちに数十発も発動し、クッパはとうとう膝をついて体力の限界を迎えようとしていた。

それをバインドで捉えた隊長陣は最後の一撃をなのはに委ねる。

「なのは！」

「ブチかませ、なのは！」

「うん！」

フェイトやヴィータの言葉に返事をすると、なのはは三発カートリッジをロードし、拘束されたクッパに向けてレイジングハートの先端をしっかり向け、徐に渾身の一撃を発射する。

「エクセリオン・・・バスター！！」

真っ直ぐの軌道でなのはのエクセリオンバスターが放たれ、クッパはその攻撃を受けると先ほどのセイバーバック同様、濁声の悲鳴を上げながらその巨躯に見合った巨大な紙切れとなって消滅し、戦いに勝利した全員は安堵の表情を浮かべた。

「や、やった！」

「は、は、は・・・何とかね・・・」

フォワード陣営もさることながら、隊長陣も傷だらけになりながらもこの巨大な強敵を倒せたことに安堵し、何人かはその場に膝をついた。

「どうにか倒したな・・・・・ん！」

と、銀時が呟いた直後。

ここからそう離れた距離ではないところから爆発音と漆黒の球体が複数見えてきた。

ティアナは徐にその見えた方角に目を向けると、はっとした表情で呟いた。

「あっちは確か、ヴァイス陸曹長のヘリの方角・・・！」

「一体この爆発は・・・！」

訝しげな表情でその光景を見ていた全員だったが、ただ事ではないと判断し急いでヴァイス達の元へ向かって行った。

なのは達が向かった丁度その頃、負傷したユーノの代わりにヴァイス・新八・神楽の三人がミュウツーと戦っていたのだが、あまりに強い力を有するミュウツーの猛攻に彼らは手も足も出なかった。

「ぐっは！」

「「があ！」」

三人は武器と共に地面に叩きつけられ、戦うことも這い上がることもままならない状況へと追い詰められ、そんな三人の光景を同じく動くこともままならないユーノは悲痛な表情を浮かべる。

「ヴァイス君・・・！新八君・・・神楽ちゃん・・・！」

ミュウツーは満身創痍の三人に近づくと、出現時からまるで崩すことのない鋭い視線を三人に向けてこう言った。

「・・・そんなものか？」

ヴァイス達はその言葉に耳を傾けながら、身体を這い上がらせようとする。

「く・・・こいつはマジ半端ねぇぜ・・・！」

「体中が軋んで・・・おかしくなりそうです・・・」

「だけど、こんなんじゃくたばらないネ！おおおおおお！！！」

神楽は二人よりも早く体を起こすと、ボロボロの体を引きづり唐傘を持って走り出すが、それを見たミュウツーは冷徹な眼差しを向ける。

「まだ分からぬか。」

その瞬間、ミュウツーの瞳が青く光るとかと思えば三人は突然彼の放ったサイコキネシスの力によって空中へと浮かび上がる。

「「「！」」」

三人はこの不測の事態に戸惑いを見せる。

「な、何だこりゃ！？」

「体が勝手に！」

「お、下すネ！！」

必死に抵抗する三人の力もむなしく、ミュウツーのサイコキネシスの力はさらに増していき、ミュウツーは非情とも取れる攻撃を仕掛ける。

「ぬん！」

それは、三人の内部器官を圧迫させて内側から殺そうとする攻撃であった。

「「「ぐあああああ！！！」」」

内側の器官がミュウツーによって圧迫され、たとえ様のない今まで味わったことのない激痛に声を上げる三人。

ユーノはその光景を見ながら声を荒げる。

「止めろ！！！」

と、その時三人の危機を救ったのはティアナの攻撃だった。

「クロスファイアーシュート！！」

ミュウツーはクロスファイアーシュートを頭部に受け、集中力が乱れるとサイコキネシスの力も弱まり三人はそのまま地面へと落下。

口から吐血を出して身体のいたるところを押さえるのであった。

「「「げっほ！げっほ！」」」

なのは達は直ぐに負傷した三人の元に近づく。

「ヴァイス陸曹長！」

「新八！神楽！」

ティアナやシグナムはヴァイスの元へと、銀時やギンガは新八と神楽の元に駆け寄った。

「新八さん、お怪我は！？」

「あ、はい。た、助かりました・・・」

「ふう～～～俺もまだまだツイてるぜ。」

命からがら危機を脱したヴァイスは安堵のため息を漏らすのであった。

なのははユーノに駆け寄ると、直ぐに状況を確認する。

「ユーノ君、これは一体！？」

「気を付けるんだ、なのは。あれは相当強いサイコパワーを秘めた漫画キャラだ。サイコキネシスとシャドーボールには用心して。」

ユーノはそう言いながらミュウツーの方へと目を向け、なのは達全員も同じように目を向けると鋭い視線を宿し、自分の仲間を傷つけられたことで銀時達の怒りが爆発する。

「てめぇ・・・よくもやりやがったな。」

「容赦はしないぞ。徹底的に叩き潰す！」

そう言うと、銀時・恋次・近藤・土方の四人が一斉に刀を手に取ってミュウツー目掛けて走り出す。

「「「「ほおおおお！！！」」」」

しかしながら、ミュウツーは向かってくる四人に一切臆することなくこう呟くのみ。

「愚かな！」

ミュウツーはサイコキネシスを発動すると、先ほどのヴァイス達同様銀時達の体を浮かび上がらせ、身体の自由を奪う。

「「「「！」」」」

「眠れし愚者共！」

逆三角形の様な形をした腕を握りしめると、その作用によって四人の体は外側から潰されていき徐々に激痛が全身に走り苦しめられる銀時達。

「「「「「ぐあああああああああ！！！」」」」」

「「「「「あ！」」」」」

「恋次！！」

「阿散井君！！」

「銀さん！近藤さん！！土方さん！！」

声を荒げる新八やルキア、吉良。

これを見たシグナムとアギトは意を決して立ち向かう。

「アギト！」

「おう！」

ユニゾンを完了させると、シグナムはアギトの力とカートリッジの力をレバンティンに宿すと、渾身の一振りをミュウツーに振り下す。

「「紫電一閃！」」

「ふん！」

だが振り下された瞬間、ミュウツーは左手から念力を発し太刀筋そのものを止めてしまった。

「〈何！〉」

目を疑ってしまうシグナムとアギト。

ミュウツーはそんな二人に至近距離からのサイコブーストをお見舞いする。

「塵と消えよ。」

サイコブーストがシグナムの体に直撃し、シグナムとアギトは強制的にユニゾンが解除され地面へと落下していった。

「「ぐあああああ！！」」

「シグナムさん！アギト！」

ユーノや他の面々もここまでの力量差を持った漫画キャラが立て続けに現れるとは夢にも思わず、若干恐怖に戦いた。

「みんな！！」

と、なのはが声を上げた直後ミュウツーは銀時達の攻撃を中断すると、その鋭い視線を今度はなのはに向け、なのはは思わず体を硬直させた。

「！（ゾク・・・この殺気は・・・）」

そんな只ならぬものを感じ、唇が青く変色するなのはだったが、ミュウツーはそんななのはや他の面々に向かって次のように語り出す。

「・・・所詮私の存在が何なのか、何の為に作られ何の為に生きているのかなど、貴様らに問うても意味のないこと。当初の予定はプリズムシードとやらの回収だが、それ以前にカトゥーンからは翡翠の魔導死神の始末を任されている。だが、所詮“死”など一瞬の痛みに過ぎぬ。ならば――――――死の先にある“絶望”に誘いその身を以て永遠の『生き地獄』に堕とす。」

「・・・・・・！」

ミュウツーの言葉を耳にした瞬間、ユーノの中で何かが切れる音がした。

ミュウツーは徐になのはの元へと近づいてくると、なのはは恐怖に戦きレイジングハートを握る手が震え始め、傍らで見ていたフェイトやヴィータ達は同じ感覚に陥りながらもなのはを守ろうと前に出る。

「く！なのはは何としても護る！」

「おうよ！何が何でもんなことさせるかよ！！」

「邪魔だ。高町なのは以外に用はない。今すぐに退け。」

と、そう言った直後。

「待て・・・・・・」

「？」

唐突にユーノが立ちあがり、弱々しくも怒りのこもった声で話しかけてきた。

なのは達はそんなユーノの姿を見ると驚きの声を上げる。

「ユーノ君！駄目だよ、怪我してるのに！？」

「おい、ユーノ！無茶するなって・・・・・・！？」

と、ヴィータがそう言ったとき彼女はユーノから只ならぬ気を感じ、思わず硬直する。

不審に思ったなのはが徐に声をかける。

「ヴィータちゃん？」

「おい・・・・・・何だ・・・・・・あいつの・・・・・・・・この重苦しい気配は・・・・・・・・！」

そんな正体不明のユーノの気に動揺する中で、話しかけられたミュ

ウツーはユーノの方へと振り返り、こう言い返そうとした。

「まだ立てるのか？貴様もつくづくどうかしているな。今はそこで黙ってじっとしていろ。貴様に本当の絶望と地獄を――――――」

だがその瞬間、ミュウツーの顔面にユーノの強烈な殴打が飛び込み、ミュウツーは唐突な事に頭がついて行けず、後方へと吹き飛んだ。

「！？」

ユーノの行動を間近で見ていたなのは達は思わず目を開いた。

「ユーノ君！」

「「「「「ユーノ先生！」」」」」

「「「店長！」」」

ミュウツーは一発の殴打で数メートル先まで飛ばされ、身体を激しく地面に叩きつけられる。

「が！！」

すると、そんなミュウツーにユーノは近づいていくと怒気を孕んだ声で自分の刀を握りしめこう言った。

「・・・それだけは許さないぞ・・・おい・・・！例えこの身が砕け散ろうがどうなろうと構わない！だけどそれだけは・・・僕の一番大切な人を傷つける様な真似だけは絶対に許さないィ！！！」

ユーノはそう言うとミュウツーの身体に強烈な殴打である一骨を叩きこみ、ミュウツーはテレポートを使うよりも早く撃ちだされた一撃に回避することも出来なかった。

「がっ！！！」

ミュウツーは更に距離を伸ばして後ろへと吹き飛ばされ、どうにか空中に浮遊して腹部を押さえていると、ユーノの異常とも言えるほどの力に圧倒された。

「（馬鹿な・・・こやつ・・・あの体の何処にまだこれだけの力が・・・）」

「ミュウツー・・・お前はここで必ずここで倒す。なのはには・・・指一本触れさせない！！」

そう口にするユーノを真正面から凝視するミュウツーはその時、形相を浮かべるユーノの背後から見えてきたこの世のものとは言えない怪物の形に変化した彼の殺気に思わず目を見開き、恐怖を抱いた。

「（何だ・・・これは・・・！？これは人間の放つ殺気ではない・・・まるで何か別の何かか、或いは・・・・・・・・・・・・！まさかこやつ！！）」

と、頭の中で一つの仮説に行きついたミュウツーとは裏腹になのは達もまた全員同じものを見て捕えると、あまりの光景に言葉すら失いかけた。

「な・・・何だよ・・・一体あれは何なんだよ・・・！？」

「ユーノが身に纏ってるあれは何だ・・・！何処かで見たことあるもんにそっくりなような・・・！？」

何気なくそう恋次が口にするのだが、実際に彼は過去にユーノが身に纏っている怪物を見ているのだ。

それが何なのかは、物語の後半で分かることになるのだが、一先ず今はそれは置いておき、怒りに満ちたユーノの反撃を見てみよう。

「闇天斬！！！」

ユーノは月の恩恵を十分に受けると、もう一つの翡翠斬の異名をとる夜の力、闇天斬をミュウツーの体に叩きこみ、ミュウツーは大きな損傷を受けながらユーノに向かって行く。

「お、おのれえええ！！！！」

「はあああああああ！！！！」

二人は互いに空中で大激戦を繰り広げる中、その裂帛さ・怒り・守ることへの執念からユーノの方に戦局が傾き、ミュウツーは先ほどまでとは打って変わって防戦一方と化してしまう。

「っが！！！（こんなバカな！！）」

ミュウツーは怪我の具合から見てもユーノは満足に戦える状態にあるものではないにも関わらず、今まで以上に潜在能力を発揮するユーノに疑問符を浮かべるばかりだった。

「ハァ、ハァ、ハァ、ハァ（あの出血量・・・怪我の具合・・・と

っくに動けなくなってもおかしくはないはずだ・・・明神弥彦の天翔龍閃を相討ちとは言えその身に喰らい、心身ともにボロボロの身体で何故・・・この男・・・！！やはり間違いなく！！）」

ミュウツーは確信した表情を浮かべると、自分の中のサイコパワーを全て解放してユーノの元へと突っ込んでいく。

「のおおお

「は、は、は、は、は！！」

そんなユーノの元になのはや手当てを受けた銀時達が近づいてくる。

「ユーノ君！」

「ユーノ！！」

「おい、大丈夫か！？」

「ハ、ハ、ハ、ハ、ハ、ハ！」

今にも気絶しそうなユーノから若干感じられる怒気と殺気に一瞬たじろってしまうなのは達だが、ユーノの手当てを優先的に考えるとそうも言ってられなかった。

「ユーノ君。直ぐに治療するから横になって。もう敵はいないから。」

なのはがそう言うと、ユーノは低い声で肯定の返事をした。

「・・・ああ。」

どうにかしてプリズムシードを守りきり、漫画キャラと明神弥彦を退けたユーノはアルトのヘリが到着するまでの間、キャロと金太郎による応急手当てを受けることになり、そのまま横になった。

六課に戻った後、ユーノは直ぐに医務室へと直行しシャマルによる本格的な治療を受け無事にその処置も完了した。

「はい。取りあえずこれでおしまい。」

「ありがとうございます、シャマルさん。いつものことながらすみません。」

「もう・・・毎度のことながら派手に怪我して・・・治療するのも楽じゃないんだからね。少しは分かってるのかしら?」

「あ・・・はい・・・面目ありません・・・」

そんな事を口にしながらカルテを作成するシャマルと申し訳なさそうな表情のユーノ。

そんな二人の光景をドアの隙間から銀時達万事屋の三人がこっそりと覗いていた。

「たく・・・あいつにも困ったものだな。自分の事毛ほども感じちゃいねぇ。」

「ユーノさんの場合、やっぱ自分の事は二の次なんですよね・・・」

「二の次って言うよりもまるで意識してないネ。自分よりもずっと他人優先ネ。」

そんな事をぶつぶつ呟きながら再び彼らはドアの向こうの二人の会話と様子を窺う。

シャマルは、カルテの作成の傍ら申し訳なさそうな表情でユーノにこう語ってきた。

「・・・こんなこと言って、不快な思いになったらごめんなさいね。」

「はい・・・何ですか？」

「・・・ユーノ君。医者の観点から見ても、今のあなたは“異常”です。」

「でしょうね。」

「でしょうねじゃなくて・・・！あなた、分かってるならどうして！？」

「・・・・・・」

ユーノは一度口を籠らせ何も語らなくなる。

シャマルはそんなユーノの事を気にしながらこれまでの診断データを引っ張りだし、複雑な心境でこのように語り出す。

「本来ならば、これまでの激戦を考えても普通の人間にかかる体への負担はとてつもなく大きいわ。いつ体が壊れたって、可笑しくはないの。なのに・・・・・・バイタルを見ても、ユーノ君の身体はまるで異常が見当たらない。私から言わせれば異常が見当たらない事の方が異常よ！」

「シャマルさん・・・」

「ユーノ君・・・あなた何か私やなのはちゃん達に隠してることあるでしょう？」

シャマルは徐にそう尋ねると、ユーノは少し間を置いてから顔を逸らしつつしらを切ってきた。

「・・・さぁ。何の事でしょうか？」

「恍けないでちょうだい。何かあるから、こんな異常なデータが出てるの。ユーノ君に何かあるから、こんなに心配してるの！」

「・・・・・・」

「一護さんからはよくユーノ君に関して過保護だって言われるけど、私から言わせればあの人が放任すぎなのよ。自分の弟子の体の事、何とも思っていないのよ！」

そんな一護に対する態度に軽蔑の念と嫌悪感を抱くシャマルの言葉を耳にし、ユーノは思わず声を荒げる。

「止めてください！そんな風に一護さんの事悪く言うのは！これ以上一護さんを侮辱するなら、シャマルさんでも許しません！」

「！あ、その・・・ごめんなさい・・・！」

ユーノの怒りを買ってしまい、シャマルは自分でも軽はずみな言葉を口にしたことを直ぐに謝罪し、ユーノは一先ず収まりきれない何かを抑えながら静かに着席する。

そんな二人の光景に銀時達はこう呟いた。

「何か緊迫してんなおい・・・」

「ですね・・・・・シャマルさんもいつもとは雰囲気違いますし・・・」

「そりゃ、ユーノのことアルからな。心配もする筈ネ。」

三人はそう言うと、また二人の会話を聞きつづける。

シャマルはデータを見ながら暗い表情を浮かべつつこう述べる。

「翡翠の魔導死神として、人間離れした戦闘力と生命力、鍛え上げられた体躯を持っていたとしても、蓄積ダメージは残るはず。徐々にそれはあなたの体を蝕んで、何時かは・・・それこそ戦うことも、立って歩くことさえ出来なくなるやもしれない。ねぇ、ユーノ君。そこまでして戦う必要なんてないんじゃないの!?もうこれ以上、戦うのは止めて少しはなのはちゃん達に任せても・・・」

「大丈夫ですよ。僕は平気ですから。」

「ユーノ君・・・・・」

「なのはやみんなには、出来るだけ負担を掛けさせたくないんです。ただでさえ、なのははこれまでの無茶の所為で肉体に消えようのない後遺症が残ってしまったんだ。もし、捜査の過程でそれこそ再起不能な事態になったりしたら・・・なのはは・・・」

「そこまでして、なのはちゃんの事を・・・そりゃ、あなたがどれだけなのはちゃんの事大切に思ってるかは知ってるけど、それでも自分を痛めつけてまでしてなのはちゃんを守ろうとするのは・・・」

シャマルがこれほどまでになのはを守ろうとすることに執着するユーノに疑問を抱いていると、ユーノは徐にこのような事を口にしてきた。

「・・・僕は・・・自分の事はどうでもいいんです。」

「・・・・！・・・・」

シャマルやその言葉を聞いていた銀時達は思わずはっとした表情を浮かべ、ユーノは更に自分となのはとの出逢いを語りつつ、なのはに抱く切実な思いを赤裸々に話し出した。

「僕はジュエルシードを探し求めて、無茶をした挙句重傷を負い、自分の命惜しさに無関係な彼女を巻き込んだ・・・なのはは僕の声を聞いてくれて、一緒にジュエルシード探しを手伝ってくれて・・・魔法と言うものを通して彼女は生き甲斐を手に入れたんだ。空を飛ぶことを覚えた彼女を見た瞬間、僕はこれほどまで空が似合う女性はいないと確信しました。それで、きっとこれが“高町なのはの天職”だったんだって・・・何となく思ってました。」

「・・・うん・・・」

「事実、なのはは飛ぶのも戦うのも好きなんですよ。その時のなのはが一番笑ってる。一番輝いている。なのに、もしそれが自分の意思とは無関係に奪われたら、なのははどうなるんですか？ボクサーがリングを降りたらボロボロのように、空を飛べなくなった彼女はきっと満身創痍で、心に大きな傷を作ってしまう・・・・・・僕は・・・・・彼女の生き甲斐を奪いたくない。出来ることなら、彼女がその意志で飛ぶのを止める時まで飛んでいてほしいんです。だからその為に、僕がやらなきゃならないんです。」

「それは使命感でものを言ってるの?だとしたらそれは傲慢よ!あなたの独りよがりだわ!」

「分かってますよそんなこと。だけど、“後悔”したくないんです。」

「え・・・」

「あの時ああしてなければとか、あれをやれてたらとか・・・そんなもしもの仮定で現実が見えなくなったり、諦めて取り返しのつかないことになるのは・・・もう嫌なんです。後悔ばかりが溜まって、身動きのできない自分になるのは・・・堪えられません・・・」

「ユーノ君の後悔・・・・・・それってもしかして・・・!?」

シャマルは思い出したかのように表情を一変させると、ユーノは寂しそうな顔でこう語り出した。

「僕は弱い。だから守れなかった。なのはの時も・・・ユウの時も・・・万が一見ない振りや、後ずさりして手が届く距離に手を伸ばさないのは絶対後悔する!人として、僕として・・・そんなみっともない真似だけはしたくありません。だからせめて、目の前で消し去られそうな光があるのなら、この手で守ってやりたい。」

ユーノがそう語り終えると、暫くの沈黙が流れたのちにシャマルはため息がてらこう言った。

「・・・全く・・・なのはちゃんと言い、あなたといい・・・どうしてここの人は酷い患者さんばかりなの!」

「あ、すみません。その・・・出来るだけ死なないように努力しますから。」

「死なないようにじゃなくて、あなたはまだ死んだら駄目なのよ！」

「！」

シャマルの言葉に驚き返るユーノ。

シャマルはそんなユーノに近づきこう言った。

「あなたが死んだら・・・なのはちゃんはどうなるの?!あなたと言う支えがなくなったら、なのはちゃんは本当に駄目になっちゃう！なのはちゃんは・・・四年前、どれだけあなたの事で苦しんで、自分のことを責めてきた分からない訳じゃねいでしょう。たとえあなたがなのはちゃんの事を無実だって言うなら、ユーノ君も自分だけ罪を被るようなことは止めて。だから・・・そんな軽々しく死ぬなんて言葉口にしないで・・・」

「あ、はい・・・分かりました。気を付けます・・・だけど・・・」

「だけど、戦わないで“後悔したくない”訳よね?」

「・・・ダメでしょうか?」

ユーノが修辞疑問形でそう言うと、シャマルは表示していたディスプレイを消して、また深いため息をついてこう言った。

「はぁ・・・ダメって言っても聞かないくせに・・・ユーノ君もな

のはちゃんも・・・」

「う・・・・・・」

思わず言葉を詰まらせるユーノ。

「でも、六課にいる間は私がユーノ君の主治医。それに時折だけど一護さんだっている訳だし、私にも譲れないことはあるわ。」

「・・・・・・」

「たとえ傷ついて帰ってきたとしても、何が何でも治してみせるから・・・だから・・・そんな寂しそうな目で悲しいこと言うのは止めて頂戴。」

「はい・・・・・すみませんでした。心配ばかりかけて、本当に申し訳ありません。」

「うん。」

「本当に・・・・・僕はつくづくいい仲間に巡り合えたものですよ。」

「ふふ。そう言ってもらえると、何よりだわ。」

シャマルはユーノのその言葉を聞くと、嬉々とした表情で笑みを浮かべ、ユーノもまた柔かい笑みを浮かべた。

「あはは。大丈夫ですよ。僕はまだ死にませんから。だって、“なのは”を泣かせるわけにはいきませんから。」

「「「・・・・・・」」」

そんなユーノの言葉を銀時達は実に複雑で今にも何かがこみ上げて爆発しそうな気持ちで聞いていたそうな。

しかし銀時達がこの会話を聞いていたのではなく、隠れたところでなのはもまた同じことを耳にしており、なのははそんなユーノの自分への想いを耳にした途端、力が抜け落ち涙を浮かべながら心の中でこう思った。

「（何で・・・どうして・・・全部私の為・・・私がユーノ君の事、縛りつけてるの!?私の生き甲斐を守りたいから・・・そんなの・・・私は望んでないのに・・・！私は・・・その為にユーノ君がこれ以上傷つくなら、私は魔法を生き甲斐とはもう思わない！飛ぶのも戦うのも止めたっていい・・・！！なのにどうして・・・！！）」

揺らぐなのはの心。

この時初めて彼女は自分の生き甲斐である魔法に関して嫌悪を抱くのであった。

そんな機動六課の光景とはまた場所を変え、カトゥーンキャッスル内部で今回の明神弥彦戦、更にはミュウツーとの戦いを勝ち抜いたユーノのデータを一人ラボで見直す不敵な笑みのカトゥーンはと言うと――――――

「ふふ・・・あの激戦の中でも、これだけの力を使うことが出来るとは、つくづく君はどうかしてるよ、ユーノ・スクライア。」

すると、ラボの扉が開く資料片手に煙草を吹かした斎藤一がやってくる。

「おい、翡翠の魔導死神に関するある重要データが取れたぞ。」

「ご苦労さん。その辺に置いておいてくれ。」

斎藤は言われた通り、無造作に資料を放り投げる。

「中身は？」

「俺は見てない。調べたのは俺の部下どもだ。」

「そうか・・・・・・」

カトゥーンはそう呟くと、斎藤が持ってきたユーノ・スクライアに関する重大な秘密が書かれた資料に目を通し、一通りの中身を確認すると納得の表情を見せる。

「成程。道理で――――――」

「何か興味深いことでも書いてあったのか？」

「まぁね。何故彼があれほどの力を有し、そして何故“卍解を使わない”のか・・・その真の理由がね・・・・・・」

そう言って不敵な表情となるカトゥーン。

斎藤はカトゥーンの真意を探るかのような瞳でそれを凝視するが、唐突に煙草をシガートレーに収めると、ラボから出て行くのであっ

た。

「・・・俺は寝る。」

斎藤がラボから出ていき、一人になるとカトゥーンは何度もユーノのデータを見返しながら次のように独り言を口にする。

「ふふ・・・君も色々と苦労してるようだが、どうやら君は僕ら人間の絶望を超えたものをその身に味わっているようだね。昔も今も――――――そしてこれからも。」

そして、カトゥーンは新たに入手したユーノの重大な秘密に目を向けながら最後こう呟いた。

「一度でいいから見せてもらいたいものだな・・・・・君の“クシャナーダ化”を――――――」

この言葉を意味するものとは何か！

それはただ願いの為に・・・（後書き）

教えて、ユーノ先生！

ユ「今日は人の欲望とは何か考えてみようか♪」

一「欲望って・・・自己欲求の無いお前がそれを言うか？」

銀「そうだな。大体欲望っつっても、お前にあるのはせいぜい淫獣とし・・・ぐっへ！」

銀時はその直後、ユーノの投げた苦無を頭に受け後ろに倒れる。

ユ「そんな欲望僕には毛ほどもありませんよ銀さん♪」

新「そんな爽やかな笑顔で言うのは止めてくださいよ。逆にこっちが怖いですから・・・」

一「とは言え、欲望とは実に難しいテーマだな。大体人間の欲望は大きく分けて、生理的な欲求と社会的な欲求の二つ。そして、さらに細かく分けるなら社会的欲求の中の自己欲求と他者への欲求があるぜ」

な「う～んと、自己欲求が強いと周りの事を全然気にしない傍若無人な人になりがちで、逆に他者への欲求が強いと自分を顧みない性格になっちゃいますしね・・・」

フェ「後者は明らかにユーノだねよ。」

ユ「え。そ、そう？」

恋「そうとしか言いようがねぇだろ。お前、自分の事はどうでもいいってさっきシャマルの野郎に言ってたじゃねぇかよ。」

な「ああ！駄目だよユーノ君そんなこと言っちゃ！自分を大切にしないとダメだって何でも言ってるのにもう！！」

ユ「あ、いや！そ、その・・・ごめん！そんなつもりじゃなくて・・・」

銀「じゃどういうつもりなんだよ！自分も大事にしない奴がこれ以上何を語りやがる！！ああ！ほら言ってみろコラー！」

銀時は苦無の刺さった血塗れの顔でユーノに詰め寄り、脅迫するがそれを見て新八が苦笑いを浮かべツッコむ。

新「ちょ、銀さん！顔中血塗れじゃないですか！？先にそれを何とかしましょうよ！」

銀「るっせー！一回こいつぶん殴らないと気が済まねぇ！！」

ユ「ご、ごめんなさいってば銀さん！いてててて！！！！わ、悪かったですよ！！！」

ユーノ、久しぶりに他人に怒られるのであった。

魔導師図鑑ハイパー！

とある朝の風景。

女子寮のスバル・ティアナ・ギンガ・キャロの四人は仲良く鏡に向かって歯磨き。

ス「ふふふふふ♪」

ティ「ううううう・・・」

ギ「るるるるるる」

キャ「ふんふんふんふんふん♪」

と、それぞれ歯を磨いていると唐突にスバルが歯を磨きながら思いだし笑いを始めた。

ス「ふふふ・・・ふふふふ！！！！！！ほほほっほほほほ！！！！！」

横で見ていた三人はその光景を一瞥し、何事も無かったかのように歯磨きを続行するが、直後スバルはあまりの可笑しさゆえ、誤って歯磨き粉を誤飲する。

ス「ごく！」

その瞬間、三人は口を揃えてこう言った。

ティ・ギ・キャ「飲まない（でください）！」

ス「ご、ごめん！」

次回予告

片意地を張ったあの人――

欲望を失くした大切な人――

そして、もう一つのものも失った彼に、彼らは何をしてあげられるのか？

石「次回『悲しみの連鎖を解き放つものは友情』」

漫画キャラ軍勢第二陣

ゲーリング

声－天田益男

アニメ「ルパン三世　ハリマオの財宝を追え！！」に登場する。カトゥーンの配下でその幹部格。巨漢で乱暴者。銀時と殴り合いの決闘をし、一度は勝利したものの、再度の襲撃時には攻撃を次々と見切られて、返り討ちに遭い、墜落したヘリの爆炎で火達磨にされた。その後、ユーノ達を追って第３０５管理世界『ワットタイル』に向かうが、またしても銀時に敗れてしまい、最終的には盗掘団に間違えられて軍に逮捕される。

春野サクラ

声－中村千絵

漫画「ＮＡＲＵＴＯ－ナルト」に登場する。空手風の衣装を身に纏い、手にグローブを付けるくノ一でナルトが好意を寄せる女性。成績優秀ではあるが、一方で感情的かつ短気な一面があり、怒りなど

の感情を素直に表に出す。その気性の荒さから原作・アニメ共に周りから師匠である四代目火影、綱手に似てきたと発言される事が多い。涙脆いが芯は強く、男気を持ち合わせている。医療忍術と怪力を身に付けており、特殊なチャクラを持っているわけではないが、チャクラのコントロールに優れている。幻術の才能が有り、幻術に掛からず見破ったり、誰に教わるでもなく幻術返しをするなど片鱗は見受けられるが、幻術を使用するシーンは無い。一人称は「私」。気合を入れるときの口癖は「しゃーんなろー！」。好きな言葉は「一生愛の人生よ」。

空中攻撃兵ワスピーター

声ー　加藤賢崇

全長：2．5ｍ　重量：1．3ｔ　飛行最高速度：マッハ5

漫画「ビーストウォーズ　超生命体トランスフォーマー」に登場する。ハチに変身するデストロン軍の空中戦力でサイバトロンに攻撃を仕掛けた。性格はのんびり屋で、一人称は「ぼくちゃん」で「～だブーン」が口癖。あまり戦いに積極的ではない上、戦闘時に身体をバラバラにされてしまうことが多いデストロン陣営のお笑い担当である。メガトロンのことは「いつかギャフンと言わせたい」らしいが、自分がデストロンのリーダーになる気はないらしい。目からのビームや蜂のハリ型の銃が武器。

幻惑兵セイバーバック

声　ー　矢尾一樹

漫画「超生命体トランスフォーマー　ビーストウォーズネオ」に登場する。戦い方や作戦方法に自分なりのこだわりがあるようで、やたらと「美しい」「美しくない」を連発する。武器は「レーザーバーン」。ガイルダートとはソリが合わない。トラップモードと呼ば

れるカモフラージュ形態へも変身。

クッパ

任天堂のマリオシリーズに登場するマリオの宿敵。正式名称は「大魔王クッパ」。「クッパ大王」、「魔王クッパ」とも呼ばれる。怪獣を思わせる姿をした巨大なカメで、黄色と緑色からなる皮膚と赤色のたてがみを持ち、甲羅には１０本のトゲが、頭には鋭い角が付いている。また、側面に棘が付いている黒い腕輪と首輪をはめている。自然界のカメとは異なり、直立2足歩行で歩く。性別はオス。得意技は口から吐く灼熱の炎だが、その他の設定は作品毎に異なっている。

能力

火炎

口から灼熱の炎を吐き出す。作品によって火炎放射であったり火球であったりと描写が異なっている（火炎放射と火球の両方を使う作品もある）。『スーパーマリオ６４』などでは一度上空に炎をばら撒いて「火の粉の雨」を降らせるなどのバリエーションも見せる。炎は口だけではなく手から放つこともある。

巨体や怪力を活かした攻撃

持ち前の巨体から生み出させる怪力やその重量を活かした攻撃。

パンチ

対象へ向かって強烈な拳打を叩き込み、後方へ大きく仰け反らせる。

その破壊力は岩をも粉砕する。

急降下プレス

大ジャンプして、相手を押し潰す攻撃。着地した際の衝撃で、周囲に衝撃波を発生させたり、時には足場を崩すこともある。

爪などを用いた肉弾戦

鋭い爪や牙、角や甲羅のトゲを怪力と組み合わせた肉弾戦「スピニングシェル」という甲羅にこもっての高速移動ワザも使用可能。爪による引き裂きや角を向けた頭突き、甲羅にこもった状態での突進など作品によって様々なバリエーションが存在する。

ミュウツー

声一　市村正親

漫画「ポケットモンスターシリーズ」に登場する。ポケモン遺伝子研究者達が南米の密林地帯で発掘された幻のポケモンミュウのまつ毛から得られた遺伝子を元に人工的に誕生させた「世界最強のポケモン」。攻撃的な面はあるが、凶暴というよりも知的で高度な悩みを抱え自問自答し続ける、どこか哀愁があり虚無的なポケモン。個体の能力として、各種超能力（サイコキネシスやテレパシー、テレポーテイション）を非常に強いレベルで行使でき、テレパシー能力によって人間とコミュニケーションを行ったり、サイコキネシス能力によって天候をも自在に操作できる。また、高い知能ゆえに科学、物理学といった人間が生み出した学問の概念も理解している。シャドーボールなどを得意とする。

峰不二子

声一　増山江威子

漫画「ルパン三世」に登場する。ルパン三世一味の紅一点。ある時はルパンの敵であり、味方であり、時には恋人である（敵として登場することが多い）。誰もが見惚れるグラマーな美女だが、性格は外見に反して金や宝石に目がない悪女。経歴などにおいて不可解な部分が多い。ルパンファミリーでは五ェ門と同じように単独行動または別行動する事が多く、劇場版もしくはテレビスペシャルでは途中でルパンと合流しているケースが多い。愛用の拳銃はＦＮ　ブローニングＭ１９１０。これは、初期シリーズ作画監督の大塚康生が麻薬取締官当時に携帯を許されていた拳銃であるらしい。拳銃以外ではサブマシンガンを好んで使用する。ルパン三世　ワルサーＰ３８ではシグ　Ｐ２３０を使用していた。愛用のタバコはモア・メンソール。但し、ヘビースモーカーのルパンや次元と違い、不二子がタバコを吸う情景は、全作を通して殆ど存在しない。愛用の香水は「シャネルの５番」である。ルパン同様、一応泥棒であるが、時々政府機関や各国政財界の大物から特別な依頼を受けたり（『ルパン三世　ＰａｒｔＩＩＩ』第２０話　他）重機銃を軽々と扱う高度な機械技術、一般女性を遥かに上回る身体能力、色仕掛けを含めた巧みな話術で相手を翻弄する戦術知識を備えている。

悲しみの連鎖を解き放つものは友情（前書き）

な「出逢いはきっと偶然だった――――――だけど、その偶然があったから私はいまここにいる。自分の出来ることに戸惑っていて、先行きが分からないことに寂しかった私にとっての生き甲斐・・・それが魔法。」

な「だけど、私が前に進めば進むだけ・・・側に居る私の一番大切な人が傷ついていく・・・ユーノ君は夢も、自己への執着も、家族さえも失くしてまで戦うことを選んで・・・結局そんなユーノ君を一番苦しめているのは今も昔も私だった――――――」

新「ユーノ・スクライア外伝　アンゴルモア・銀魂篇・・・・・・・始まります」

悲しみの連鎖を解き放つものは友情

＞ｉ２９９５０―７０９＜

ユーノとなのはの間に少しずつすれ違いが起き始めている今日この頃。

ユーノ本人はその事に未だ気づかず、いつも通りの生活を送っていた。

ちなみに彼の午前中のスケジュールは次元漂流者として身元を保護した志村新八との稽古と言うものであった。

虫の鳴き声が機動六課の隊舎に鳴り響く中、新八はしない握り猛烈な気合と勢いでユーノに向かって行く。

「おおおッ」

対照的にユーノは竹刀片手に柔かい表情で新八の一撃を受け止めていく。

「惜しい。もう少し」

「まだまだッ！」

新八は更に気合を入れて額に汗を浮かばせてその後も打撃を加えていく。

「はッ」

新八が打撃を撃ってくると、ユーノは的確な判断で最小限の力でそれを受け止めては受け流していく。

「ふぬ――――ッ！！！！」

新八もここまで来ると何が何でもユーノに一太刀を浴びせたいと思

い、躍起になっていた。

「おおっ。威勢がいいね♪」

それでもユーノは飄々とした様子で平然と打撃を受け続ける。

そんな対照的な二人の様子を気だるそうな様子で見つめる銀時が新八に向かって呟く。

「新八よ・・・お前よくやるよなァ。つうかユーノが六課で稽古をつけるの初めて見たぜ。確か、戦闘に関しては何も教えないんじゃなかったのか？」

すると、ユーノは振り返り笑顔で意外な事を口にする。

「別に。戦闘に関して教えている訳ではありませんから♪」

「えええええええ！！！！！！！」

新八はユーノの言葉を聞いた途端、盛大に驚いた。

当然新八はもう抗議。

「ちょっと！！僕はそのつもりでやってたんですよ！！酷いですよユーノさんッ！！」

「コラコラ。血に染まった人間から教わって強くなろうとするんじゃないの♪新八君にはちゃんとした稽古を積んで強くなってもらいたい。その為に、僕も出来る限りアドバイスと言う形で力になるさ。それじゃ嫌かな？」

ユーノのその言葉を聞いて、少し考え込んでしまった新八。

やがて、ユーノの気持ちと自分への気遣いを理解して考えを改める。

「いえ・・・別に嫌なわけではありません・・・ただ、そこまで考えてくれてたとは思ってもいませんでした・・・何かすみません、ユーノさん。」

銀時もそんな新八を見ると、口元を緩める。

「おめーの負けだな新八。悔しかったら別な方法でユーノを超えてみせるコトだな。」

「いや銀さん。ユーノさんと僕じゃハードル違い過ぎでしょ!?明らかにこの人神じゃないですか!」

「ははは♪神なんて大層なもんじゃないさ♪」

二人の会話を耳にし、思わず笑ってしまうユーノ。

すると銀時は先ほどから気になっていたことをユーノに尋ねてきた。

「そう言えば、今日はやけに静まり返ってるが・・・なのは達はどうしたんだ?」

「ああ。なのはとヴィータは二人揃って教導の件で首都航空基地に。ティアナとフェイトにシャーリーは事件捜査の件で中央に。恋次さん達死神組もクロノと一緒に本局の方へ挨拶回り。はやてにシグナムさんとアギトはオフシフト。真選組の三人と残った前線メンバー

はそれぞれ自主練に励んでいますよ♪」

「となると、結構ムラが出来ちまってやべぇかもな。襲撃されて来たらたまったもんじゃねぇよ。」

「あはは・・・銀さん・・・そんな不吉な・・・」

考えられなくもないことを耳に入れ、思わず苦笑いをする新八。

「まぁ何もないことを祈りましょう。それよりここで稽古するより、スバル達と一緒にやった方がいい練習になるだろうから、移動しようか。」

「はい。」

「そうだな。」

ユーノの提案を聞き入れ、二人は一度スバル達が自主練に励んでいる訓練スペースへと向かって歩き出した。

え～初めから言っておくが、銀時は自主練習など一つもやっていないのでご注意を。

その頃、クロノ達はと言うと――

次元空間内　時空管理局本局

ユーノが説明していた通り、今回はクロノ以下恋次達死神組（白鳥も可）は管理局本局へと出向き、今後の捜査は勿論異なる組織同士その親睦と友好関係の構築の為に朝からずっと上層部の人間の元へ

挨拶回りをしていた。

「それでは、今後ともどうかよろしくお願い足します。」

「「「「失礼しました。」」」」

クロノが上層部局員の一人にそう言うと、恋次達も律儀にお辞儀をしてその場を立ち去っていく。

挨拶回りが一通り済むと、廊下を歩いていた恋次は肩を回しながら精神的に披露した様子でこう呟いた。

「たく。これだからお上の連中との話は嫌なんだ・・・」

「仕方あるまいぞ恋次殿。これも、隊長職という身の上故の苦労と言うもの・・・私だって本当は退屈である。」

「尸魂界はただでさえ、時空管理局とは別に異世界における魂魄の管理を行って来ているのだ。異なる組織同士が協力して事に当たるには、こうした斡旋の場も必要なのだ。」

「それに山本総隊長もミゼット提督との口利きで色々とこちらの事情に関して独自に情報を得ているらしいから、僕らも僕らで頑張らないと。」

白鳥、ルキア、吉良の三人がそれぞれ恋次にそう言うと、恋次も一応割り切った表情を見せる。

「分かってるよ、んな事。おいクロノ。もうこの後は何もないのか？」

「はい。一通りの挨拶は済ませましたので、あとは六課に戻るだけです。」

その言葉を聞くと、四人は肩の荷が下り安どの表情を浮かべる。

「ふう。やっと肩の重荷が下りたぜ。」

「何か甘いものでも食べたい気分であるぞ。」

と、何気なく白鳥がそう呟くと、それを聞いたあの男が後ろから話しかけてきた。

「そう言うことなら、僕がいいものを差し上げましょうか？」

「「「「「お？」」」」」

五人が徐に後ろを振り返ってみると、そこには何時もの白いスーツに身を包んだクロノの親友でもありユーノの友人のヴェロッサ・アコースが立っていた。

「やぁ。クロノ君も恋次さん達も御揃いで。」

「ロッサ。君もこっちに用事が？」

「査察部の方で打ち合わせをしてて、その帰り見かけたって訳。六課に戻るのもいいけど、まだ時間があるんじゃないのクロノ君。よかったら、これでも食べていきなよ。」

アコースはそう言うと、右手に魔法空間から取り出した自作のシュ

ークリームが収められた箱を取り出した。

「自作物のシュークリームだけど、なかなかいい出来だよ。」

シュークリーム、もとい甘いものだということを確認しその上食べてもいいということを聞かされた恋次や白鳥たちは嬉々とした表情になる。

「お！いいじゃねぇか。」

「ありがとうございます。」

「じゃあ戴きますかな。」

「腹黒提督は食べないであろう？」

決まりきったように白鳥がそう言うと、クロノは不満げな顔を浮かべる。

「ちょっと白鳥さん。まだ食べないとは一言も・・・」

「甘いもん嫌いなんだろ？俺が食ってやるよ。」

恋次がそう言ってクロノの肩に手を回すと、クロノはそんな恋次の腕をほどいてほくそ笑みながらこう言った。

「確かに甘いものは苦手ですが、折角のロッサのシュークリームを見す見す食べられるのは癪ですからね。僕もいただきますよ。」

「ち。面倒くせぇ奴。」

食い意地の張った恋次は思わず舌打ちをする。

ヴェロッサはそんなやり取りを見て、思わず微笑んだ。

「あはは。いいじゃないですか、偶には♪大丈夫、クロノ君でも食べられるように甘さ控えめだから。」

「助かるよ、ロッサ。」

と言うわけで、クロノ達はヴェロッサが作ってくれたシュークリームと彼の義理の姉でもあるカリムが摘んだ紅茶を戴くために休憩室へと向かった。

恋次は早速と言わんばかりに豪快にシュークリームを口の中へと放り込んで、嬉々とした表情を浮かべる。

「うめぇ！やっぱ、疲れた時は甘いもんに限るな！」

そんな恋次の態度に呆れながらも代表してルキアがお礼の言葉を入れる。

「アコース査察官。態々ありがとうございます。こんな死神の私達にもご馳走してくれて。」

「いえいえ。恋次さん達は職種と立場は違えど僕達の仲間であることは変わりありませんので。ささ、遠慮せずに食べてください。紅茶もカリムが摘んでくれたものですから是非。」

「そうか。なら遠慮せず御馳走となるぞ。」

白鳥は目の前に出された特製の紅茶を飲み、同じように口にしていた吉良は素直な感想を述べる。

「ああ。確かにこれはいけますね。」

「あはは。そりゃよかった。あとでカリムに伝えておきますね、吉良さん。」

そんな死神組とヴォロッサのやり取りを一瞥し、紅茶を啜っていたクロノだったが、暫くしてからヴェロッサに前々から依頼していた件に関して徐に尋ねた。

「・・・そう言えば、ロッサ。例の件、調べはついているか？」

「あ？例の件。」

恋次達はクロノの言葉に疑問符を浮かべると、ヴェロッサは表情を些か曇らせながら返事をする。

「大体はね。君の依頼通り内密で調べてみたが・・・正直、僕にもよく分からないことが多くてね・・・出来る限りの事はしてみたが・・・・・・」

そう言うと、ヴェロッサは中央にディスプレイを表示させる。

そこに映っていたのは紛れもなくユーノ・スクライアの写真とその詳細データであった。

恋次達はそれを見て思わず目を見開き手を止めた。

「これは・・・」

「ユーノ店長の記録ではないか？」

「何故この様なものを？」

ルキアがそう尋ねると、クロノとヴェロッサは顔を見合わせ次のように口にする。

「僕らとしても、何故ユーノがこの四年の間に劇的に変わってしまったのか色々と気になっていましてね、特に魔導死神として覚醒したあいつの経緯と徹底した利他主義に走る様になったその原因を。」

「本当に・・・先生は大変優秀な人だけど、その分誰よりも多く辛い想いしているようだね、このデータや今までの戦いを見る限りでは。」

ヴェロッサはそう言いながら、改めてユーノの詳細データの方に目を向け、クロノはそんなユーノに関して次のように評価する。

「悪友ではあるが間違いなく有能な男さ。人を惹きつける牽引力と統率力があるに限らず、決して派手ではないが、優れた魔法構築技術・明晰な頭脳と高いバックス能力は勿論、無限書庫を現在に至るまでに稼働させた伝説の司書長と言う肩書。そして忘れてはならない今の翡翠の魔導死神としての実績・・・・・正直万能人過ぎると言うべきだ。」

それを聞くと、ルキア達も素直にそれに納得する。

「確かに、ユーノ殿は他の誰よりも飛び抜けて優れている・・・隊長達にしてもフォワード陣にしても、みながあの方に信頼を置いている。」

「他の部署の上層部局員にしても先生にだけは頭が回らないからね・・・」

すると、そんなヴェロッサの言葉を聞いて恋次は浮かない表情でこう呟く。

「だが、その高い能力と寛厚な性格とは裏腹に、あいつは他人に頼れない・・・」

クロノもまた、そんな恋次の言葉を聞くと胸が締め付けられる。

「ええ。昔から強情な奴なんですよ。他人の為には頑張ろうとはするくせに、いざ自分の事となったら何もしないんですから。ユーノは、いつも周りに遠慮して・・・僕らに頼ろうとはしないんです。」

「しかも、ユーノ店長の場合そんな性格故か局を辞めてからずっと、なのは達に危険が及ばないように裏でずっと害虫となる輩を葬ってきた・・・血刀で自分の手を汚すことに一切の躊躇もなく。」

「中には黒い噂を立てる人もいるけど、僕は先生がそんな人道に外れた事を強制させられてやってるとは思わないですね。寧ろ、先生は僕らみんなの為に自分自身を殺してまでその役を被ってきたんだ・・・」

段々と話の内容が重苦しさを増していく中で、恋次は更にこんな事を言って来た。

「尸魂界は先の魔導虚事件の時も、パトリオット事件の時もユーノの事を高く評価してる。勿論、一護の協力もあってどうにかなったようなもんだけどな。」

「だが問題なのはユーノの評価ではなくユーノ本人の事だ。四年の間に、あいつは色々なものを失ってきた。自分の夢も・・・人が持っていて当然な筈の自己への欲望も・・・」

すると、そのクロノの言葉を聞いてヴェロッサが浮かない表情でこう言った。

「その件に関して補足しておいた方がいいことが一つあるんだけど、いいかな?」

「何だロッサ?」

「実は先生は――――――」

ヴェロッサは内密で調査を進めていく中で掴んでユーノの新たな情報を徐にここにいる全員に話し、全員は大いにその事に驚いたそうだ。

その内容に関しては、この話の後半でスクライア商店の三人から話されることになる。

さて、クロノ達とは打って変わって機動六課訓練スペースでは隊舎で待機となっているスバル達と真選組の三人、神楽と言った面々が自主練習に励んでいた。

「「はあああああ！！！」」

スバル、ギンガの姉妹はウィングロードを駆け抜けお互いに拳をぶつけていく。

その下で、真選組の副長とドエス男はその不仲さから喧嘩を勃発。

「土方死ね！！！」

「お前が死ね！！！」

最早模擬戦とは呼べるものではない二人のやり取りを遠目で見ていたエリオとキャロは不安げな表情を浮かべて近藤に尋ねる。

「あ、あの・・・あれは止めなくてもいいんですか？」

「気にすることはないさ。あの二人にとっては何時もの事だ！あれがあいつらなりの意思疎通の仕方って奴だ！」

「そ、そう言う風には見えないんですけど・・・・・・」

ま、キャロが言うことは間違ってはいない。

そんな二人のやり取りを見ながら、神楽は鼻をほじりながら気だるそうに次のように呟く。

「どっちにしろ、あんなガキんちょの喧嘩に首ツッコむこと自体アホらしくてやってられないネ。」

近藤は女らしさを微塵も感じさせない神楽の態度に少々呆れながら

も諌めてきた。

「つうかチャイナ娘・・・女の子なんだから流石に平然と鼻くそほじるのは止したらどうだ。」

「ウッサイね。私は誰の指図も受けないヨ」

エリオとキャロは自分たちとは器も神経の太さも違う神楽に唖然としてしまう。

「あ、相変わらず凄く神経が太いよね、神楽さんは・・・」

「そ、そうだね・・・」

と、その時。

そんな前線メンバーの元にユーノ、銀時、新八の三人が到着し声をかけてきた。

「よう、やってるな。」

「はかどってるかい？」

一緒に訓練の様子を見守っていた金太郎が銀時とユーノの声を聞くと、振り返り返事をしてきた。

「おお店長。銀時殿に新八殿も。」

新八は目の前で行われているスバルとギンガの模擬戦を見つつ、土方と沖田の喧嘩の方も一瞥し、苦い笑いを浮かべる。

「わぁ・・・ギンガさんとスバルさんはいいとして、土方さんと沖田さんの場合完全に喧嘩ですね。」

「たく。これだからガキは困るぜ。」

銀時は呆れかえった様子で鼻の穴に指を入れ、手の先についた鼻くそをその辺に弾き飛ばした。

「店長たちもこっちで自主練するんですか?」

「僕は新八君の手伝いかな。と言ってもアドバイスに限るけど・・・出来れば金太郎や近藤さんに少し鍛えて貰いたいんだけど、いいかな?」

「私は全然構いませぬぞ。寧ろ大歓迎です。」

「俺も新八君と一度でいいから兄弟同士、やってみたいと思ってたところだ!」

近藤がそんな事を口にすると、新八は当然のことながら猛反論。

「ちょっと!!!まだアンタそんなこと言ってるのか!!絶対僕も姉上も兄だなんて言わせねぇよ!!!」

それを聞くと、近藤はキャラを改変させ女のような態度でこう言った。

「いや~ん?新八君のイケず?」

「何だそのオカマ口調!?気持ち悪いんだよ直ぐにやめろボケ!!」

そんな二人のやり取りを見てユーノ達は苦笑するばかりであったが、その時ユーノが何かを思い出したような表情になると、丁度模擬戦を終えたギンガに向かって声をかけた。

「あ、そうだ。ギンガ、ちょっといいかい?」

「あ、はい!」

ギンガは駆け足でユーノの元へと駆け寄った。

「この前頼まれていた例のもの、完成して調整が済んだから渡しとこうと思って。」

「本当ですか?ありがとうございます!」

報せを受け、ユーノに深くお辞儀をするギンガと何も聞かされていない訝しげな表情のスバル。

「え。ギン姉、ユーノ先生に何か頼んだの?」

「えへ。ちょっとしたものかな♪」

そして、ユーノは懐から徐に何かを取り出しそれをギンガの手の中に収めた。

ギンガや他の全員が手の中のものを凝視すると、そこにあったのは信号機とストップウォッチを模した装飾が施された見慣れないカートリッジシステムだった。

「あの、ユーノ先生？これは一体？」

エリオが代表して尋ねると、ユーノは次のように説明する。

「トライアルカートリッジ。ギンガの戦闘スタイルに合わせて作ってみた強化カートリッジシステムだよ。リボルバーナックルに装備しブリッツキャリバーにコネクトさせれば、全てを振り切る速さを手に入れられる。」

「全てを振り切る・・・何だか凄いねギン姉！」

「ギンガさん、試してみましょうよ！」

「はい。じゃあ、早速。」

スバルと新八に勧められ、ギンガは早速実働テストを試みる。

〈Ｓｔａｎｄ　ｂｙ〉

「ブリッツキャリバー」

〈Ｓｅｔ　ｕｐ〉

構築を完了させると、ギンガはユーノから手渡された新型カートリッジシステム、『トライアルカートリッジ』を変形させ、リボルバーナックルに装備する。

「行きます！」

装備されると、トライアルカートリッジから音声が発せられる。

〈Ｔｒｉａｌ　Ｃａｒｔｒｉｄｇｅ〉

そして、ギンガは装飾されたカートリッジのパワースロットルを捻る。

すると、信号機の色が赤→黄→青の順に変わる通りに、ギンガのバリアジェットもその通りに変化し、見ていた全員は驚いた。

「わ！黄色になりました！」

驚く暇もなく、今度は青へと変化し強化変身完了となる。

「あ！青になった。」

ギンガは一新されたバリアジャケットを見つめながら胸を驚せる。

「これが新しい私の力・・・・・・トライアル！」

これより、ギンガ・ナカジマの新たなる試練が始まるのであった。

さて、そんな彼らとは全然関係のないのだが、漫画キャラでルパンが消滅したのにも限らず未だこの世界に留まり続ける銭形警部はと言うと、密入国者扱いされて現在地上部隊の護送車で他の犯罪者たちと共に移動中だった。

しかし、彼自身は潔白であると必死に言い続ける。

「だから儂は怪しい者(もん)じゃねぇって言ってるだろ！！」

「怪しくねぇって奴が一番怪しい！」

担当の局員が毅然とした様子でそう言うと、銭型は悔しそうな表情を見せる。

「ぬ野郎！」

そして、鉄格子に手を掴みながら外に向かって声高に叫ぶ。

「時空管理局地上本部の長官に会わせろ！！俺はＩＣＰＯの銭形だ！！」

「グランド海峡を泳いで密入国してくるＩＣＰＯが何処にいるんだ、アホ！！」

局員はそんな銭型の言葉に突っ込みを入れながら鉄格子から放そうとしていた。

すると、自棄になった銭形はそこから局員と支離滅裂な罵り合いを始める。

「お前の母ちゃん出べそだ！」

「見のか！コラ！！」

「じゃあ、お前冷え症だ！」

「てめぇの母ちゃんこそすね毛ボウボウだろ！！」

「きちんとやらんか、買い物ぐらい！！」

「多くない！姑イビリ！！」

「それよりルパンは何処だ！！」

そんな二人のしょうもないやり取りを同じ護送車に乗っていた犯罪者たちは呆れるしかなかった。

では、ここで再び六課の訓練スペースの光景へと場面を変えよう。

トライアルバリジャケットに換装し、比較的以前よりも軽装備となったギンガは早速その性能を試すためにテストを行おうとしていた。

ユーノは準備が整ったギンガを見ると、金太郎に指示を送る。

「金太郎。」

「承知！」

金太郎が何かのスイッチらしきものを押すと、突如としてギンガに向かって多数の岩が転がってきた。

スバル達はそれを見て思わず声を上げる。

「わ！」

ギンガは向かって来た岩を見るなり体制を整え、岩へと向かって行く。

「行きます！」

岩へと向かって行ったギンガのスピードは今までとは比べ物にならないほどに上昇しており、初速だけでギンガの姿がまるで映らないというものであった。

「は、速い！ギン姉凄い！！」

「動きが今までとは違う！」

「ギンガさん、凄いですよ！」

これにはスバルや新八、そして他の大人たちも感心するばかりであった。

ギンガは周りの反応を気にせず、目の前から転がってきた岩と言う岩をそのスピードに則り高速で叩き潰していき、小さいものはほぼすべて叩き終えたが、その時大きい岩を壊そうとした時ギンガは違和感を覚えた。

「！？」

ギンガはブリッツキャリバーで大きい岩を破壊できず、そのまま後退。

スバル達もこの事には疑問を抱いた。

「あれ？ギンガさん、どうしたんですかね・・・」

ギンガは何故破壊できなかったのか、それを理解することが出来ず

困惑していた。

「パワーが足りない？」

そう呟くと、すぐにカートリッジシステム開発者のユーノが即答する。

「違うよ。」

「え？」

「戦法を変えるんだよ。トライアルカートリッジ最大の特徴は、その“速さ”。」

「速さ・・・ですか？」

「うん。攻撃を躱し、敵の懐に飛び込み、キックを叩きこむんだ。一発で足りなければ十発。まだ足りなければ百発。相手を、完全に粉砕するまで。ただし・・・」

「成程。じゃあ、やってみます！」

ギンガは最後までユーノの説明を聞かず、早とちりから次の行動へと踏み出してしまい、カートリッジを一度は外し、マキシマムモードへと手動変形させそこについているスイッチを起動させ岩へと突っ込んでいく。

「あ、ギンガ！まだ話の途中アルよ。」

「ギンガさん！」

心配になった新八と神楽だったが、ギンガは既に話を無視して突っ走っていく。

銀時は頭を掻き毟りながら不安げな表情を浮かべる。

「早とちりしやがって・・・どうなっても知らなぇぞ。」

近藤はユーノが最後に言おうとしたことを尋ねる。

「ユーノ先生、言いたかったことは何なのだ?」

「はい。あれはですね・・・・・・」

一方で前進していったギンガだったが、その時全身から強烈な痺れが襲ってきて思わず動きを止めてしまう。

「!う・・・!まるで制御できない!!」

ギンガは制御もままならず、その場にしゃがみ込み起動させたストップタイムの数値がいつの間にか0となってしまい、ギンガは強制的に強化変身が解除される。

「ギン姉!」

「ギンガさん!大丈夫ですか!?」

スバル達は慌ててギンガの元へと駆け寄った。

幸いにもギンガは至って無事な様子だった。

「はい・・・だけど、どうして!?」

「今のが実戦だったら、おめぇは確実にお陀仏だったぜ。」

総悟の厳しい言葉が飛び交う中、ユーノはその原因について以下の通りに述べる。

「トライアルカートリッジは、確かに運動性能の飛躍的な向上と、音速をも超える超高速移動を実現しているが、必殺のマキシマムドライブ発動中は肉体とデバイスシステムに多大な負担が掛かるから制限時間内にカウンターを手動で停止させなければ強制的にシステムが解除され、本人もデバイス相応もダメージを負ってしまう。」

「そ、そんな・・・」

「まさに諸刃の剣ってとこか・・・」

「だが制御さえ出来れば問題はないってことですよね、店長。」

「うん。あそこのコースを見てくれるかい。」

ユーノはそう言うと、いつの間にか用意されていたオフロードバイクと専用のコースをギンガ達に指さしながら、こう言った。

「あのコースを１０秒以内に走り切れば、トライアルカートリッジのマキシマムドライブを使いこなせる。やる?それとも、やらない?」

「勿論、やります!」

「ギン姉。」

「ギンガさん。」

ギンガの熱意とやる気を目の当たりにし、スバルや新八たちは思わず柔かい表情となる。

近藤もまたそんなギンガの反応を見てこう言った。

「うん。この六課のフォワード陣はみんな良い眼をしているな。」

「その点で言えば、てめぇは見る価値もねぇな。」

「ああ？何だとコラ！」

土方の言葉を聞き、銀時の怒りに火が付き、二人はまたしても一触即発状態へと移行する。

何時の間にやら見慣れてしまった二人の光景に、神楽や他の面々はツッコむ気力すら起きなかった。

「また始まったよ・・・」

「もう面倒見切れないネ。」

そして、コースへと移動したギンガは一度ユーノの手本を見てからのスタートと言う形になった。

ユーノはトライアルカートリッジをマシーンに装着すると、バイク

スーツに身を包みヘルメットをかぶる。

「これでこのマシーンは、トライアルカートリッジのマキシマムドライブ発動時のような状態になる。試に僕がやってみるよ。多分ギンガならこれを使いこなせると思うけど。」

「あ、はい！」

「店長、用意はいいっすか！？」

「オーケー。始めてくれ。」

「それじゃあ、スタート！」

浦太郎がそう言うと、ユーノはカートリッジの信号が青に変化したと同時にバイクを発進させる。

マシンから伝わってくる体への負荷に堪えながら、即席で作った足場の非常に悪いコースを爆走するユーノ。

全員はその光景にを目を奪われる。

「「「「おお！！」」」」

「凄い！これなら１０秒の壁を超えられるかも！」

新八がユーノのタイムに期待して、ユーノがゴールをするのを待っていると、ユーノは軽快なハンドル捌きでゴール。

ストップウォッチを止めた金太郎のそのタイムを呼び上げる。

「9，8秒！10秒を超えましたぞ！！」

「よし！」

鬼太郎はその言葉を聞くと、ユーノに代わってガッズポーズをする。

総悟はそんなユーノに感心し、土方は悔しそうな様子でそれを誤魔化すように舌打ちをする。

「流石っすね、ユーノ先生は。」

「け。調子こきやがって・・・」

ユーノはヘルメットを外し、全員の元へと歩み寄った。

「ふう。何とか超えられたか。」

「凄いですよ、ユーノ先生！本当に10秒の壁を超えるなんて！」

「あはは。別に僕がこれを使うわけじゃないからな。どう反応していいか分かんないや・・・さて。次はギンガの番だよ。」

「はい。」

ギンガはユーノと交代すると、スーツに身を包んでヘルメットを装備する。

「10秒を切ればいいんですよね？」

「うん。」

ギンガは一度確認してからバイクに搭乗。

新八や他の面々は応援の言葉をかける。

「ギンガさん、頑張ってくださいね。」

「応援してます！」

「ありがとう。新八さんもありがとうございます。」

新八に向けて笑顔を振りまくギンガと、そんなギンガの笑顔を見て思わず顔を赤くする新八。

「いえ、そんな／／／」

それを見た瞬間、銀時は血管を浮かび上がらせ強烈な殴打を入れる。

「だ・か・ら、何お前は照れてんだよ！」

「痛い！！」

神楽もまた、ここ最近の新八の態度が実に気に入らなかった。

「新八、お前何時の間にアイドルオタクから純情路線に切り替わったアルよ？」

「え！？いや、僕はだね・・・！！」

必至に弁解しようとする新八だったが、二人の前では糠に釘である。
そんな万事屋のやり取りを見て、近藤と土方は――――――
「ま、その方が健全と言えば健全だけどな。」
「俺は別にどうでもいい。」
とそれぞれ意見を述べるのであった。
「それじゃあ始めるよ。」
「はい！」
「用意、スタート！」
ユーノが合図を出すと、ギンガはスロットルを捻ってバイクを加速させる。
足場の悪いコースを爆走しながら、ギンガはバイクから伝わってくる先ほどと同じ感覚に顔を歪める。
「う！確かに・・・さっきと同じ感覚だわ・・・！」
だがそれでもギンガは屈しずエンジンを加速させ、ゴールを目指す。
スバルはそんなギンガの運転と速さを凝視し、期待感に胸ふくらませる。
「よし！イケるイケる！！」

そして、全員の期待にこたえるか否かは別として無事にギンガが一蹴を終えゴール。

バイクを停止させると、ギンガは先ほどのタイムを聞き出す。

「タイムは！」

「１３秒２２。残念ながら失格だ。」

顔を沈めながらそう浦太郎が答えると、ギンガの体に激しい電流が流れる。

「ううううう！！！」

「「「あ！」」」

「ギンガさん！」

思わず声を上げてギンガの体を心配する前線メンバー。

しかしギンガは顔を歪ませながら続行を宣言する。

「大丈夫・・・まだやれるわ。次、お願いします！」

「あんまり無理しないんだよ。」

ユーノはそう忠告をすると、ギンガの熱意を鑑み続行を許諾する。

その後もギンガはバイクを走らせ１０秒の壁を超えようとするが、

現実はなかなかうまくいかない。

「１２秒２８」

「ううう！！！」

「１１秒５７」

「あああああ！！」

「１２秒８２」

「あああああ！！！」

「１２秒４７」

「うわあああああ！！」

１０秒の壁を超えることは、口では大したことでないように思えるが、コロンブスの卵・・・実際に試してみるとその大変さがよく分かる。

ギンガの体に流れ込む激しい電流。

その痛々しい姿のギンガを見ると、全員の表情が歪む。

「ギン姉！！」

「「「ギンガさん！」」」

「もう止すネ！それ以上は体が壊れるヨ！！」

ギンガの体を心配して、張り裂けそうな思いで忠告をする全員とは裏腹に、ギンガはそれでも止める気など毛頭なかった。

「私はまだ・・・まだやれる・・・！！」

そう言うと、ギンガはサドルに跨りバイクを走らせる。

ユーノもギンガの体を気にしながら、それでも彼女の熱意に免じて挑戦を認める。

ギンガは体への負荷に堪えながら、今まで一番速いスピードでコースを駆け抜けていき、見ていたスバル達もこれには大きな期待を抱く。

「今まで一番早い！今度こそいける！」

「ギン姉！！」

だが、その時。

ギンガはバランスを崩してしまい、バイクから放り投げられる。

「ぐあああ！」

「「「「「あ！」」」」」

「「「「「「な！」」」」」」

ギンガはそのままコースに叩きつけられると、顔を歪めたまま動かなくなり、ユーノ達は直ぐにギンガの元へと駆け寄った。

「ギン姉！！！」

「「「ギンガ！！」」」

ギンガは果たして無事なのであろうか？！

その頃、なのはとヴィータのスターズ分隊隊長陣はと言うと、空戦教導の為に首都航空基地へと足を運び、丁度本日の日程が終了したところであった。

「よし！全員集合！」

ヴィータが笛を吹いて生徒たちを呼び集める。

生徒全員がヴィータとその横のなのはの元へと集まり、数を確認した後ヴィータはボードを見ながら今日の教導の評価を述べる。

「今回の所は特に目立ったミスもなく上々だったな。また次回今日やったところのおさらいからやるから、全員今日のを忘れないようにしとけよ。」

「「「「はい！」」」」

「・・・・・」

ヴィータが生徒に対して評価を口にする間、なのはは何故か浮かない顔をするばかり。

普段通りのなのはなら、教導と聞けば嬉々とした顔を浮かべて熱心に取り組むはずなのだが、今日のなのははまるで違っていた。

そんななのはの顔を一瞥したヴィータは徐に声をかける。

「おい、なのは。」

「え。あ、うん。じゃ、今日の教導はここまで。お疲れさまです。」

「「「「お疲れ様です！」」」」

そっけない感じで教導の終了を宣言するなのはに違和感を覚えたのは生徒たちも同じだった。

「なぁ、今日の高町教導官様子が可笑しくなかったか？」

「ああ。いつもなら訓練中も容赦なんてしないのに、今日はまるで拍子抜けって感じだったしな。」

「何か悩みでもあるのかしら？」

「そりゃあるだろ。何せ管理局のエースオブエースともなれば、ストレスからその辺の色恋沙汰とかいろいろ。」

「色子沙汰って言われて思い出したけど・・・もしかして、ユーノ・スクライアさんとの関係で何か？」

「可能性は大だな。ほら、一応幼馴染で公認のバカップルと言われてはいるが、実際こうも事件が続くとなると・・・」

「でもそれでもユーノ先生優しいですよ?」

「いいよな～～俺もあんな人みたくなりてぇよ。」

そんな事を色々と口にしながら生徒たちはその場を立ち去り、なのははディスプレイに今日の詳しいデータを撃ち込みながらユーノの事を考えていた。

「・・・・・・」

昨日のユーノの発言を陰で聞いて以来、自分の中に葛藤が生まれていたなのは。

魔導師を続けるか、それともここで幕を引くべきか。

そんな葛藤が頭を駆け巡る中、ふとヴィータが心配した様子で声をかけてきた。

「なのは。」

「うん?」

「何サッキからボーっとしたり、暗い顔浮かべたりしてんだよ?教導中も時々集中切れたり、模擬戦の時でさえ反応が鈍くなったりとか・・・いつものお前らしくなかったぞ。」

「あ・・・うん・・・ごめんごめん。」

「私に謝ってもな・・・何か悩みでもあるのか?私でよければ相談

に乗るぞ。」

「ありがとう、ヴィータちゃん。だけど本当に何でもないから。そんな大したことじゃないから・・・――」

笑顔で取り繕うなのはだが、ヴィータはそんななのはの笑顔に胸が痛む。

彼女がこんな笑顔をするのはユーノがいなくなった四年前のあの時からだった。

ヴィータはこのなのはの笑顔が嫌いだった。

その為、心配するのは当然と言えば当然だが、それでなのはに何が出来るのかがヴィータにはよく分からなかった。

だからここはなのはの言葉を信じて余計な事はしないことにした。

「・・・そうか。だったら私のお節介だったな。ほら、さっさと着替えて六課に戻るぞ。帰ったら帰ったで私らには仕事があるんだからな。」

「うん。そうだね。」

なのははそう答えると、ディスプレイを消してヴィータの後ろに続いて更衣室へと向かって歩き始めた。

すると、冗談気味にヴィータがなのはの悩んでることに関してこう言った。

「ひょっとしてなのは・・・――――お前、最近太ったと思って悩んでるんじゃ・・・」

「ヴぃ、ヴィータちゃん／／／／！！ち、違うよ！！！そんな事で悩まないよ私／／／／！！」

このヴィータの発言を聞いた時は、なのはも素に戻って顔を赤く染めた。

一方、バイクで転倒して意識不明となっていたギンガは。

「う・・・・・・」

どうにか意識を取り戻し、目を開けると心配そうに自分を見つめるスバルや新八たちの姿が映ってきた。

「よかった・・・起きた！」

「スバル・・・新八さんも・・・私は気を失っての？」

「バイクで転倒したからな。」

銀時がそう答えた後、ユーノはギンガに向かって次のように言った。

「ギンガ。別に焦ることはないと思うよ。あのトライアルカートリッジの制御は僕だって難しいんだ。ゆっくり時間をかけて使いこなせるようにした方が、絶対いいと思うんだ。」

「店長もそう言ってるし、万が一それで体壊したらあとでなのはちゃんに大目玉食らうの僕達もなんだし。」

「ギンガさん。今日はこれぐらいにしましょう。」

浦太郎や新八の言葉を聞くと、ギンガも今回の所は引き下がることにした。

「はい。分かりました。体の為にもそうしておきます。」

「じゃあ、自主練はこれぐらいにして三時のおやつでも食いに行こうぜ。」

鬼太郎がそう言うと、全員は自主練習を終え食堂の方へと向かって歩き出す。

その最中、土方はマヨネーズを出して金太郎にこう言って来た。

「金太郎、どうだ？キューピューで一杯？」

「いいですな。是非とも！」

同じマヨラーである二人のこの異様な光景は周りにいる者達を驚愕させ、銀時と鬼太郎に至っては嫌悪感すら感じていた。

「何あの二人？マヨネーズ交友会でも始めちゃったの！？」

「見てるだけで気色悪い光景だ・・・てか何だあの花柄オーラ！」

食堂に到着すると、金太郎は目の前に出されたショートケーキの上にマヨネーズをふんだんに乗せ、それを間近で見ていたスバルの顔が引いた。

「うわ～～～！！」

そして、コーヒーの上にもマヨネーズをかけた土方と金太郎はお互いに乾杯をする。

「「乾杯！」」

近藤たちはこの二人の光景を見ない方が得策だと考え目をそらす。

「見ない方がいいな・・・！」

「ホント・・・何でケーキにまでマヨネーズつけないとならないんですかね？」

「俺が知るか。」

作者である私も何故こうなったんか、よく分からない・・・・・・

と、そんな時お菓子を頬張る神楽の横で新八がふとギンガにこうな事を言って来た。

「ところでギンガさん。どうしてまたあんな装備をユーノさんに頼んだんですか？」

「はい。この頃漫画キャラとは言え、苦戦を強いられる状況が続いていますし、何より新八さんには以前命の危機を助けてもらって、私はまだ何も恩返しできていませんから。」

「そんな。別に恩返しなんてものはいいんですよ。」

「そうかもしれませんけど、私が納得しないんです。出来れば、あなたには傷ついてほしくありません。だから、今度何かあったときは私が必ず新八さんを守ります。」

「ギンガさん・・・・・そうですか。だけど僕も同じですよ。こっちにいる間は、僕に何とかできる範囲である限り、ギンガさんを守ります。」

「・・・はい・・・／／／」

二人の会話の様子を見守っていた銀時達は妙に桃色のオーラを発する新八とギンガを見て、思わず手を止めてしまい、そのまま二人を凝視する。

「「「「「「「「「「・・・・・・」」」」」」」」」」

と、その時場の雰囲気を変えるためにユーノが新八にこんな話を振ってきた。

「あ、新八君。話は変わるんだけどさ・・・」

「あ、はい！何ですか？」

「長いことこっちの世界に留まってるけど、お姉さん・・・の方は心配にならない？」

「あ。それは――――――」

新八はそう言われると、向こうの世界で自分や他のみんなの事を心

配しているであろうお妙の事が気がかりになり、近藤もまた非常にお妙の事が気がかりとなった。

「お妙さん・・・新八君や俺がいなくなってさぞ悲しんでるだろうな／／／おおおお！！！お妙さん！！！！！」

涙を流しお妙を欲する近藤の横で、ドライな感じで総悟は言った。

「いや、あの女の事だ。近藤さんの場合は寧ろいなくなって清々してるぜきっと。」

ユーノは申し訳なさそうな表情を浮かべて新八に謝罪の言葉をかける。

「新八君・・・ごめんね。」

「え」

「寂しくない？」

「別に。ちっとも寂しくないですよ。姉上のことは確かに気がかりですけど、別段心配することもでもありませんし。銀さん達万事屋も真選組もここには居ますし、何よりユーノさん達だって居てくれる。」

「新八さんはお姉さん以外の家族は？」

エリオが何気なくそう尋ねると、新八は少しさびしげな顔で答える。

「生憎両親は僕と姉上が小っちゃい頃に亡くなっちゃいました。」

「すみません・・・御気にされたら。」

罰の悪そうな顔となって謝るエリオだが、新八は笑って次のように述べる。

「いいんだよ別に。両親は確かにいないけど、家族みたいな人たちが僕の周りには沢山いるから。僕ね・・・両親が残した剣術道場を再興するのが夢なんだけど、いつの間にかそんな設定忘れられてるし、何より銀さん達と一緒にいるうちにそんな事最近じゃどうでもいいとも思い始めるようになってさ・・・」

「新八・・・お前」

一瞬驚いた表情となる銀時だったが、新八はその後も話を続ける。

「万事屋に来る前まで、天人が闊歩するようになって、僕達侍は行き場をなくして、剣しか能のなかった僕もバイトのレジ打ちも碌に出来ずにいっつも怒鳴られてばかりで、周りに誰も自分の味方になってくれる人がいなくてさ・・・正直生きてるのが嫌になってた。だけどそんな僕がこうして今の自分で居られるのは、一重に銀さんと出逢えたからなんですよね。」

「・・・・・」

「「「「「「「「「「・・・・・・・」」」」」」」」」」

真摯に新八の言葉に耳を傾けるユーノや銀時達。

「だから・・・割と最近まで僕は一人だったんです・・・周りに味

方がいないのも、助けてくれる人がいないのにも結構慣れてますし・・・」

「そっか・・・」

ユーノは新八の話を聞き終えると、昔なのはが似たようなことを言っていたことを思い出しどこか切ない気持ちとなってしまう。

するとそんなユーノに今度は新八が尋ねて来た。

「そう言えば、僕達ユーノさんの家族の事あんまり知らないですね。遺跡発掘を生業とする一族出身ってことぐらいと、両親が早くに亡くなられたってことは聞いてますけど・・・」

「ああ・・・新八君の言う通り、僕は元々一人だったよ。でもその代わり部族のみんなに育ててもらったから。だから、スクライアの一族みんなが僕の家族。」

「そうですか。」

「ユーノ先生。偶には部族のみんなにも顔出した方がいいと思いますよ?その方がきっとスクライアのみんなも喜んでくれると思いますし。」

「あはは。そうだね・・・・・・偶に顔出すくらいならね。」

スバルの言葉を聞いて、そう答えるユーノだっがたが、スクライア商店従業員三人はそんなユーノの言葉に偽りがあることを見逃さなかった。

「「「・・・・・・」」」

ユーノは話を終えると、徐に席を立った。

「ちょっと、トイレ行ってくるよ。」

ユーノが席を離れて暫くすると、浦太郎は悲しみに満ちた表情で次のような事を口にした。

「・・・・・・店長のウソばっか。」

「え？」

「あの、それどういう事ですか？」

「何かユーノの話に問題点でもあったか？」

すると、そんな全員の反応に鬼太郎が次のように答える。

「大有りだっつうの。店長、スクライアの連中を家族と言ってるが、本当のこと言うと・・・店長はとっくの昔に“スクライアから絶縁”されてるんだぜ。」

「「「「！！」」」」

「「「「な！」」」」

衝撃的な言葉を聞き、思わず表情を一変させるスバルや銀時達。

「な、何だと！？」

「どういう事ですかそれ！！」

自分の事のように挙動不審なスバル達に対して、鬼太郎と金太郎が顔を沈めながら次のように語り出す。

「長いこと無限書庫に勤務していて音信不通だったってことと、店長が翡翠の魔導死神として異常とも言えるほどの強い力を持ったことが原因か・・・そいつ恐れて、一族の連中が一方的に店長を一族から排除したんだ。それこそ、店長の意思とは無関係にな・・・」

「しかしながら店長はそんなスクライアの一方的な判断に反論を唱えることなく、まるでそうなることを予期していたかのようにそれを甘んじて受け入れたのです。元々、店長のスクライアの立ち位置は最初から微妙なものだったとのことですから・・・」

「そ、そんな！！じゃあ、ユーノさんは部族のみんなからも見捨てられたってことですか！？」

「何処まであいつは・・・・・・辛いものを背負い込んでるんだよ・・・」

訊いていた新八は銀時達は自分の欲すら失くし、使命感や責任感と言ったものに捕われ尚且つ家族からも見放された今のユーノに胸が痛むばかりであった。

「家族同然だった一族のみんなにも捨てられておきながら、ユーノ先生はそれを受け入れて、悲しむ素振りすら見せない・・・！」

「異常なまでに強すぎる精神力は、店長の心にきつく強固な鎧を着

せちまって、脆さをまるで見せつけない・・・店長は・・・色んなものを失った・・・家族も・・・欲望も・・・それでも、あの人が”スクライア”って名乗っているのは、やっぱし・・・それでも育ててくれた一族の連中に敬意と感謝の念を抱いてるからだろうな・・・」

「自分に執着を持たない、自分のやりたいこと、夢と言うビジョンさえ最初から持ちえない店長は、あまりに可愛そうなんだ。あの人は今も昔もずっと独りぼっち・・・・・だけど決して僕らに弱みは見せないし、誰にも縋り付こうとはしない・・・・・そんな店長の境遇を歌にするなら・・・」

ここで浦太郎は突然ユーノの境遇を歌にして歌い始める。

では、しばしの間ご清聴下さい。

Ａｎｙｔｈｉｎｇ　ｇｏｅｓ！　歌：亀井浦太郎

歌詞は直削減の問題解決の為削除させていただきます。

ご了承ください。

その後も歌が続くかに見えたが、聞いていた銀時が浦太郎の顔面を殴りつける。

「って！何がしたいんじゃてめぇは！！」

「ふっご！！」

鼻血を出し、その場に倒れ込む浦太郎を見ながら鬼太郎はため息を

つく。

「たく。いきなり歌唄い出すかと思えば、何だよそれ！もうちっと選曲を考えろ！」

「あはは・・・う、浦太郎教官・・・ドンマイですよ・・・」

苦笑いを浮かべるスバルだったが、その時近くで何かの気配を感じ徐に目を向けてみた。

「？」

しかし、目を向けてもそこには何もなかった。

「どうした？」

「あの、誰かそっちの方にいたような気が・・・」

「気のせいじゃないですか。」

「そうか。」

あまり気にしないことにしたスバルであったが、実際にはいたのだ。

誰がいたのか―――――なのはだった。

なのはは浦太郎達の話をずっと聞いていた。

その為、聞き終えるとなのはは涙を零しユーノの悲しみや辛さに胸が張り裂けそうになってしまう。

「・・・・・・」

そんな話が六課の方で話されている間、本局の方でもクロノと恋次は同じ話題で持ちきりだった。

クロノは暗い顔を浮かべ、紅茶を啜りながら恋次にこう切り出す。

「まさか・・・・・・スクライアからも絶縁されていたとは。正直なところ、僕もそこまでは考えていませんでしたから、予想外です。」

「ああ。何か、日に日にあいつの不幸な境遇ばかりが目立ち始めてるな・・・これって何か不幸の前兆とかじゃねぇだろうな？」

「そう願いたいものですが、ユーノはこの事をどう思ってるんですかね。」

「多分・・・・・・辛いはずとは思うが、そんな弱みを見せればまた俺達に迷惑がかかると思って表情にも出さないんだろうぜ。」

「こうして考えてみると、一番寂しい想いをしているのは紛れもなくユーノ・スクライアその人なんでしょうね。」

「そうだな・・・・・・」

そんな事を考えながら、二人は一度そこで黙り込んでしまった。

その後、ある程度の話が終わるとクロノと死神組はヴェロッサと別れるて機動六課へと戻ることとなる。

「じゃあ、クロノ君。僕から先生に体には十分お気をつけ下さいと伝えてくれるかい？」

「ああ。」

死神組は帰る前にヴェッロさにシュークリームを奢ってくれたことに関してお礼を言う。

「シュークリーム、御馳走になったぞよ。」

「今度僕らも何かおごらせてください。」

「今日は本当にありがとうございます。」

「いえいえ。またいつでもどうぞ。」

「それじゃ、帰りましょうか。」

クロノはそう言って、機動六課に戻ろうと歩きはじめようとしたが、不意にヴェッロがクロノ達を呼び止めた。

「あそうだ。もう一ついいかな？」

「何だ？」

「死神の皆さんから見て、先生はどうですか？」

「え」

一瞬顔を見合わせてしまう恋次達だったが、直ぐにこう返した。

「それは・・・やっぱし優秀な野郎で偶にちょっと鼻につくがそれでも良い奴であることは変わりねぇんじゃねぇのか。」

「そうですか。」

「また急にどうしたんですか？」

吉良がそう言うと、ヴェロッサはふと物思いにふけった様子で次のように話してきた。

「いえ・・・先生とクロノ君・・・１４年前からの友人同士でしてね、クロノ君と僕は同じ少年時代を過ごした仲だし、その縁とは違うけど、僕も先生とは親交があるですけどね。」

「はい。そう言えばユーノさんが言ってましたね。」

「同じ男友達同士・・・何より先生は素晴らしい人だ。優しいし頭も良いしね。」

笑顔でユーノの事を高く評価するヴェッロさの言葉に、クロノも恋次達も表情を和らげる。

「そうであるな。」

「尊敬する友人だと僕は思ってる。だから、色々と心配でね・・・・・」

「はい・・・」

「人並み外れた優れた頭脳や強力な死神の力・高い戦力・・・人を使える権限や権力・・・そして人一倍献身的な性格・・・そう言うものを持ち合わせるってことは、同時に徹底的に孤独になっていくってことでもある。僕はそう思う・・・」

「はい・・・」

「勿論誰からも必要とはされる。頼られもする。だけど、それは人間としてじゃない・・・その人が持ってる力そのものが必要とされてるだけ・・・・・ああ、もちろんこれは極論ですが。」

一瞬驚いた彼らだったが、直ぐにほっとした表情となる。

「ですよね。実際にはそんなにデジタルじゃないですし。」

「何処の世界も同じであるさ。強い力を持つ者はそう言った重圧や寂しさが付き纏うもの。」

「そうそうそれ！まぁ、つまり僕の言わんとしてることは・・・だね・・・魔導死神と死神との間だと、色々と難しいこともあるとは思いますが、“翡翠の魔導死神”ってだけでなく、人間として・・・一人の人物として接してあげてくれませんか？勿論、言われなくてもそうしてくれてるとは思ってますが。」

「ああ。そのつもりでやってるさ。」

「大丈夫ですよ、アコース査察官。我々はあの方をそんな軽い見方をして一緒に居る訳ではないですから。」

「でもその言葉はしっかり胸に留めさせていただきます。」

「我々前線一同心掛ける様務めるぞよ。」

ルキア達はそう言うと、ヴェロッサに向かって敬礼する。

「はい。お願いしますね。」

そんなヴェロッサと死神組のやり取りを見ていたクロノは、ほくそ笑むと死神組に声をかける。

「じゃあ、六課に戻りますか。ロッサ、それじゃ。」

「うん。」

ヴェロッサに別れの挨拶を済ませると、クロノは恋次達と共に機動六課へと帰宅していく。

その帰りの道で、クロノは一度ディスプレイを表示させユーノの身内とその周りを確認してみた。

「改めてユーノの周りを確認してみると、ユーノは身内と友人に恵まれてるな」

「そうですね。アコース査察官の人柄も良かった」

「でも、ユーノさんが抱えるなのはさんへの罪の意識はなかなか消えないんですよね・・・ユーノさんも相変わらず一人で背負い込んでしまう事が多い・・・」

「境遇が境遇だけに、人に頼ることに躊躇してしまうのは分かるが・・・それでもユーノ店長はもっと我々に対して心を許してもいいはずだ。」

「たとえ心を許していたとしても、ユーノの事だ。きっとまた僕らの知らないところで一人で問題を抱え込む・・・なのはや僕ら、一護さん達が見守っているとは言え、やはり心配ではある。出来ることなら、フォローしてやりたいが。」

「その前に、俺達が出来る限りあいつに重荷を掛けないように努力をする必要があるんじゃねぇのか？」

「かもしれないね・・・」

色々と複雑な想いがこみ上げるクロノ達であったが。

この問題は今後どうなっていくのであろうか―――――

夕暮れ時、機動六課の医務室で定期検診を受けていたなのは。

シャマルはなのはの体の状態を丹念に検査しながら、ここ数日で消えることのないと思われていた後遺症が回復傾向に向かっていることに気づき、嬉々とした表情を浮かべていた。

「よし。今日の診察は終了。うん・・・大分痛みも和らいできているようだし、この分ならブラスターの後遺症もだんだん感じなくなるわ。良かったわね、なのはちゃん。」

「はい・・・そうですか・・・・・・」

ところがなのはの方の反応は暗いものであった。

シャマルはそんななのはの反応が不思議で仕方なかった。

「？なのはちゃん、どうしたの。あんまり嬉しそうに聞こえないけど？」

すると、暫くの間黙り込んでいたなのはだったがふと暗い表情を浮かべたままシャマルに自分の胸の内を暴露し始めた。

「・・・・・シャマル先生。私、今凄く悩んでるんです。」

「悩んでるって・・・何に？」

「・・・私・・・“もう飛ばない方がいい”のかなって・・・」

「！」

シャマルはあまり唐突過ぎるこの衝撃的な発言に思わず目を見開いた。

「前に言いましたよね。“きっと元通りに直して、また飛びます！”って。だけど、もしこのまま私が飛び続けて、戦うことになって・・・それで・・・ユーノ君が陰で血に染まってずっと無茶し続けたらって考えると・・・私・・・もしかしたらこのまま魔導師自体止めた方がいいのかなって。」

「！なのはちゃん・・・！もしかして、昨夜の会話・・・訊いていたんじゃ！？」

シャマルが慌てた様子でそう尋ねると、顔を歪ませながらなのははは返事をする。

「はい・・・・・偶々二人の話、聞いちゃいまして。ユーノ君、はっきりと言ってました。“自分の事はどうでもいいから、私の生き甲斐を奪わないためにも自分がやらなきゃならないって”。私・・・・・それ聞いた途端、全身の力が急に抜けちゃって・・・立ち上がれなくて・・・それでふと思ったんです。ユーノ君が執拗に一人で背負い込んで、無茶と分かっていながらもそれでも戦いに身を投じるのは・・・結局私がユーノ君の事をずっと縛りつけてるからなんじゃないかって・・・」

「そ、そんな。それは考え過ぎよ。ユーノ君がそんな事思ってるはずないでしょ！」

「かもしれませんけど・・・正直、私・・・もう嫌なんです。」

「え」

「自分の夢も、生きるための欲望も、更には家族だった一族からも絶縁されて、凄く悲しくて寂しいはずなのに、片意地張って私達に弱みも見せずにずっと傷ついていくばかりのユーノ君を見ているのは・・・・・その原因が他ならぬ私にあって、その所為で満身創痍になるなら、私は・・・もう空を飛ぶことを止めます。」

「なのはちゃん・・・！」

シャマルは決して彼女が言う筈はないと思われた言葉を聞いて、頭が真っ白になる。

そして、なのははは声を震え上がらせ一筋の涙を流しながら更に続ける。

「魔法は確かに、私にとっての生き甲斐です・・・だけど、私が前に進めば進むだけユーノ君が傷ついて、どんどん独りになっていって・・・いつか壊れるとしたら、私は魔法なんていらない！私の魔法で・・・私の力でユーノ君を助けられないなら、初めからこんなものいりません！！そんなの・・・生き甲斐だなんて思いたくもない！！！ううううう・・・！！！！！！！」

「・・・・・・」

「だけど・・・私はそれでも・・・そう思っていながら・・・心のどこかで・・・飛びたいって思っちゃうんです・・・／／／！！！ユーノ君の事、気に留めながらそれでも自分の事ばかり考えちゃんです！！私は・・・私はどうしていつもそうなの！！！！！何処までも卑しいよ！！！！！！」

「なのはちゃん・・・」

そして、なのははそんなシャマルの胸の中に顔を沈め、自分の胸の内のユーノへの想いを涙と叫びにして全て曝け出す。

「あああああああああ！！！！！わあああああああああああああ！！うぇあああああああああああ！！！！！」

医務室全体に響き渡るなのはの涸れるような鳴き声。

これを医務室の外で偶然にも聞いていたユーノは、思わず胸が苦しくなった。

「・・・なのは・・・く！！」

こうして、二人の考えは徐々にすれ違いを顕著にしていく。

二人はどうなってしまうのか？

そんなことが起こり始めている中、別世界の方ではプリズムシードを求めて明神弥彦達が旅を続けていたが、本日彼らは念願だったプリズムシードを発見することに成功した。

「ピカ・・・・・・・」

「弥彦・・・・・・・」

「ああ。」

弥彦は真剣な眼差しでそう言うと、目の前のディスプレイに映ってきたプリズムシードを見ながらこう呟いた。

「いよいよ・・・・・・これが”最後のプリズムシード”だ。」

悲しみの連鎖を解き放つものは友情（後書き）

教えて、ユーノ先生！

ユ「トライアルカートリッジについてだ♪」

ユ「ギンガの為に新しく開発した強化装備で、リボルバーナックルに装備してドライバーのパワースロットルを捻ることでブリッツキャリバートライアルに強化させ、同時にバリアジャケットのカラーも、黄→青の順に変わる。」

ユ「信号機とストップウォッチを模した装飾が施されており、ドライバーに挿入するメモリモードと、必殺のマキシマムドライブを発動するマキシマムモードに変形する。マキシマムドライブは専用ツール（ドライバー）から外し、メモリ単体の状態でマキシマムモードに変形させてスイッチを押すことにより発動し、発動中は秒数を計測するカウンターが起動、もう一度スイッチを押すことにより手動でプログラムを中止する機構となっている。」

ギ「これからの戦いでこの力は絶対に必要になってきますので、私頑張って制御できるようにします！」

ユ「期待しているよ♪」

新「それにしても、今にして思えばギンガさんってスバルさんとは利き手反対だったんですね？」

ギ「はい。私は昔から左利きで。だけど時々腕が凝っちゃうことがあって・・・こうやって回したりして解したりもするんですよ。」

ギンガはそう言いながら、自分の機械の左腕を３６０度高速回転させ、それを間近で見た新八は度胆をぬいた。

新「あああああ！！！！ギンガさん！！！！腕が、腕が！！！！！」

新八は衝撃のあまりその場に倒れ込んだ。

ギ「し、新八さん！！御気を確かに！！」

ユ「ギンガ・・・それは流石に刺激が強いんじゃないかな・・・」

魔導師図鑑ハイパー！

銀「前から今回の章始まったときから思ってたんだけどよ・・・何で新八とギンガが妙にいい感じな訳？」

神「それは私も思ってたアル。新八のくせにいつの間にか真面目に恋愛してるのが腹立つネ！」

近「まぁこれも青春と言う奴だ。大目に見てやろうじゃないか。」

銀「いやいや。銀魂そんな言葉で引き下がるほど軟な漫画じゃないから。何が何でも邪魔してやる！！！」

沖「だったら、俺に良い考えがありますぜ。」

銀「マジでか！？」

土「ちなみに聞くが、総悟。まさかそれは表現することもままならないようなことじゃねぇだろうな？」

土方がそう言うと、沖田はモザイクが沢山かけられたどエスツールを一瞥し、舌打ちをする。

沖「ち。バレちまったか。」

土「おおい！！！！やっぱりそのつもりだったのかよ！！！」

次回予告

すれ違うユーノとなのはの想い。

心の葛藤が二人の心を縛れ合わせる。

だけど、なのははそれでもユーノを、ユーノはなのはと共に――――

そして、弥彦から送られたユーノへの果たし状。

ユーノは自分の信念を貫くため、弥彦とプリズムシードを懸けた最後の決戦に挑んでいく。

コン「次回『後悔なんてしたくない』」

後悔なんてしたくない（前書き）

『Ｒｅｇｒｅｔ　ｎｏｔｈｉｎｇ　ｔｉｇｈｔｅｎ　ｕｐ』と言う歌を聞いていると自分が書いてるユーノのイメージとぴったり合ってくる。

そんな事を思いつつ、本編始まります。

後悔なんてしたくない

＞i２４９４８―７０９＜

明神弥彦、ピカチュウ、そしてニャースの三人は最後のプリズムシードを求めて、現在とある異世界でプリズムシードに意識を乗っ取られ、暴走化したマテリアルとの死闘に身を投じていた。

「ほおおおお！！！」

弥彦は頭上高くからマテリアル目掛けて龍槌閃を仕掛ける。

しかし、その直後暴走したマテリアルは触手を伸ばして弥彦ごと弾き飛ばす。

「ぐっは！」

触手に弾かれた弥彦は地面に叩きつけられる。

ピカチュウはそんな弥彦の仇を取るため一人マテリアルへと走り出し雷を落とす。

「ピカチュウ！！」

マテリアルはピカチュウの雷をその身に受けると、それがかなり効果があったのか激しく苦しみ、雷に続いて今度はニャースが爪を尖らせ攻撃をする。

「みだれひっかき！！」

ニャースのみだれひっかきがクリーンヒット。

マテリアルは更に悲鳴を上げて苦しみを表現する。

「ピカピカピカピカ！！！！」

ピカチュウがそう言うと、弥彦は何とか体を起き上がらせマテリアルに向かって飛んでいき龍槌閃を叩きこむ。

「龍槌閃！」

渾身の勢いで叩きこんだ弥彦の龍槌閃を受けると、マテリアルはそのままバランスを崩して地面に倒れ込む。

ニャースは千載一遇のチャンスを逃さない為に捕縛の準備を行う。

「捕縛用意！」

ニャースはあらかじめ用意していた専用のメカを呼び出し、その起動スイッチを押す。

「ポチっとな」

ニャースが用意したメカから飛び出した鎖が巨大なマテリアルの体を絡め捕れ、マテリアルはそれに巻き取られると完全に身動きが取れなくなる。

「ピカ！！」

「捕まえたニャー、弥彦！」

「よし。」

弥彦は二人が作ってくれたこの機会を逃さないために、この一撃で

止めを加えることにした。

「飛天御剣流、九頭龍閃！！」

神速を最大に活かして弥彦はマテリアルの身体に九つの斬撃を叩きこむ。

そして、それが見事に入るとマテリアルは力尽き中のプリズムシード本体だけが弥彦達の元へと飛んで来た。

弥彦達はどうにかして目的の最後のプリズムシードを手に入れることに成功した。

「ピカピ！！」

「やったでニャース！」

「ああ。」

弥彦は慎重にプリズムシードに手を伸ばすと、異世界を渡り歩き手に入れた封印装置を使ってプリズムシードを厳重に封印。

それを懐の中へと納めた。

「それにしても危なかったニャー。」

「ピカピ。」

ピカチュウが弥彦の傷の具合を心配すると、弥彦はピカチュウの撫でながら大丈夫だとアピールする。

「大丈夫だ。俺の事は。」

弥彦はその後、二匹を連れて一度その場から移動すると、自分たちが現在手にしているプリズムシードを確認し始める。

「最後のプリズムシードを手に入れた今、残り二つのプリズムシードは未だカトゥーンと・・・そして・・・ユーノ・スクライアの手中にある。」

「ピカ・・・」

「弥彦・・・」

現実の非常に厳しい状況に立たされている弥彦達。

眉間に皺を寄せる険しい表情の弥彦を不安げな様子で見守るピカチュウとニャース。

弥彦は二匹の顔を一瞥し、そのまま黙り込んでしまった。

「・・・・・・」

そして、心の中で次のような事を考えていた。

「（願いを・・・俺達三人の願いを叶えるためにはやっぱり最低でもあと一つは必要なんだ。だけど、剣客として・・・男として・・・もう前みたいな恥ずかしい真似はしたくネェ。だったら、最後は正々堂々と奴に挑むしかない！）」

弥彦はそう考えると、懐から和紙と筆を取出し徐に何かを書きはじめた。

これが一体何なのかは、物語の後半で分かる。

一方、場所は変わってここは機動六課の屋外訓練スペース。

いつも通りの前線メンバーの朝練が行われている中、新八は今朝からずっと真選組局長近藤勲と剣の稽古に励んでいた。

「どらあああああ！！！」

近藤の強烈な一撃が新八の木刀に叩きこまれ、流石の新八も顔を歪める。

「く！！」

「ぬらあああああ！！！」

近藤はそんな新八に容赦のない攻撃を仕掛け、新八から一本を取る。

「ぐああ！」

近藤に一本を取られた新八は全身汗でびっしょりとなりながらも、近藤の方へと目を向け、近藤もまたそんな新八を不敵な笑みで見つめこう言った。

「まだまだ甘いぞ新八君。恒道館の跡取りがそんなことではいかんな。ほら、今度は俺に君のその魂の籠ったそれを撃ってこい！」

「は、はい！行きます！」

「うむ」

近藤の言葉に促されると、新八は勢いよく木刀を振りかぶって近藤に突進していく。

「でらあああああ！！！！」

こうして新八と近藤とのやり取りは朝練が終わるころまで続き、近くで見物していた金太郎や残りの真選組の二人もそれなりに楽しんでいた。

「新八殿もなかなかいい出来ですな。」

「近藤さんも何だかんだ言って楽しんでますぜ。」

「ま、偶にはいいんじゃねぇか。元々あの人はこういう事するのが性に合ってるからな。」

そう、近藤もまたユーノと同じで困っている人や直向きに何かを守ろうとする人の為に惜しみなく協力をする心優しい人物なのだ。

だが、その事に気づく人は女性ではあまりいないのもまた事実だ――――――

さて、前線メンバーが朝練に励む中、ユーノ・スクライアはバケツに水を汲んでくると、それを徐に自分の頭にかぶせて水を浴びる。

目覚めがすっきりすると同時にユーノは昨日のなのはの非常に揺れ

動く現在の心境に関して一人考えていた。

「（なのはが僕の為に魔導師を辞めるか否か・・・それで心が揺らいでいるなんて・・・――――だけど・・・・・・）」

と、その時。

丁度朝練が終わって前線メンバーと一緒に隊舎に向かっていたなのはとユーノの目がばったりと見合った。

「「あ」」

一瞬の沈黙が流れたのち、ユーノの前でなのははいつも通りの笑顔をユーノに振りまいた。

「お早う、ユーノ君。」

「あ・・・お早うなのは。」

「どうしたの？何か鳩が豆鉄砲食らったみたいな顔して。朝練が終わったからみんなで朝食食べよう。」

「うん・・・その前にさなのは。実は君にちょっと話があるんだけど――――」

と、ユーノが話を切り出そうとすると、スバル達が二人に声をかけてきた。

「なのはさん、ユーノ先生。」

「何してんだよ？さっさと飯にしようぜ。」

「私もうお腹ペコペコでばててしまいそうネ。」

腹を鳴らして空腹であることをアピールする神楽に向って、未だ眠気の消えない基本無気力で向上心のかけらもない銀時は大欠伸をしながらこう言った。

「ふぁ～～～おめぇは朝からヴィータとはしゃぎ過ぎなんだよ。」

そんな銀時の言葉を聞くと、隣のシグナムが厳しく指摘をする。

「お前に至っては何時もだらけすぎだぞ、銀時。」

「ウルセーよ。いいんだよ、銀さんは。いざとなったらちゃんと輝くから。」

ま、確かに銀さんはそう言う人ではある。

とその事は置いといて、なのははユーノに自分のタオルを手渡してから更に続けた。

「ユーノ君、これタオルね。先に食堂に行ってるから顔拭いたら来てね。ヴィヴィオ達と一緒に待ってるから。」

そう言って、なのはやスバル達はユーノの元から立ち去って行ったが、ユーノはその時なのはの笑顔の裏に隠された自分に対する揺れ動く気持ちを見逃してなどいなかった。

「――――――・・・」

その為、取り繕ったなのはの笑顔を見るのはユーノに取って実に忍び難いものであった。

一方、食堂の方へと向かったはずの前線メンバーであったが、何故か白鳥だけは食堂についてからも金太郎独自の愛のある厳しい筋トレを無理矢理やらされていた。

「ぬぬぬぬうぬぬうおおおお！！！」

白鳥は現在重さ１００キロは超えるバーベルを金太郎の指示の元持たされていたが、流石に腕の力がなくなって来ると直ぐにバーベルを下ろして金太郎に猛抗議。

「だっは！！何故！！！！私がこんなものを！！！！！何なのだ一体！！！！」

「いけませんぞ、白鳥殿。そんなことで根を上げては。これしきの重し、まだまだ序の口なのですから。」

「何故貴様は執拗に私に筋トレを強制させるのだ、ゴールデンベアー！？」

「愛・・・とでも言っておきましょうか。」

金太郎はそう言いながら顔を赤く染める。

それを見た白鳥は新八並みの勢いで激しくツッコむ。

「気持ち悪いのだ！！！！何だその顔は！！！チークをピンクに染

めるな！！！！」

また一方で一人朝練には参加していなかった浦太郎の方はと言うと、食堂の椅子に腰を掛けた状態のまま気持ちよさそうに鼾をかいて眠っていた。

「くかぁ～～～」

大いびきを立てて爆睡をする浦太郎はスバル達にとっては非常に新鮮な光景であった。

「あ、珍しいな。浦太郎教官がこんなところで眠ってるなんて。」

「こいつ夜遅くまで『ドキドキメモリアル』の最新版に没頭してたからな。その所為だろ？」

「全く・・・何をしているのだこやつは？」

鬼太郎の説明を受け、思わず頭に手を添えて呆れ返るルキア。

でも直ぐにキャロが浦太郎を起こしてあげようと言って来た。

「起こしてあげましょうか。」

「そうね。浦太郎さん、起きてください。朝ごはんですよ。」

「ほら、亀！飯だぞ！」

「ぐ～～す～～～へへ・・・沙織ちゃん～～～？」

涎を垂らしながらふしだらな夢を見続ける亀井浦太郎に、銀時達は完全にシラケてしまう。

「駄目だなこりゃ。完全に別世界に行ってっら。」

と、その時ドエス王子こと沖田総悟は真顔でこう言って来た。

「旦那。ここは俺に任せてくれませんか？」

「どうするつもりですか？」

新八がそう言うと、悪意に満ちた表情で総悟は懐からあるものを取り出す。

「へへ。」

総悟が懐から取り出したもの・・・――それはハバネロソース。

「「「「「な！」」」」」

これを見た瞬間、一同は顔をゆがめ恐る恐る尋ねる。

「あの・・・沖田さん・・・何を・・・！」

そう誰かが言うのも気にせず、総悟はそのまま浦太郎の鼻の孔と口の中にハバネロソースを注入し、その直後浦太郎は顔を赤く叫び声をあげた。

「ぎゃあああああああああああああ！！！！！」

昔のギャグ漫画の要領で口から火を噴きだし彼方此方を走り回る浦太郎に全員が哀れみを感じ、暫くしてから浦太郎は床に手を当て悶え苦しみだす。

「げっほげっほげっほ！！！！！！！ぶえあああああああああ！！！！」

「だ、大丈夫ですか浦太郎さん！？」

「誰だァ！今僕の口の中にハバネロそーづ入れた奴ァ！！」

人格崩壊さえ起きかねない現在の浦太郎の身体と精神はボロボロであった。

すると、浦太郎の質問に対して恋次が仕掛け人の総悟を指さす。

「こいつだ。」

「てめぇ！！！！よくもやりやがったな！！！八つ裂きにしてやる！！！！」

浦太郎は完璧な人格崩壊を起こすと、相棒であるデバイス『フィッシャーマン』を起動させ、カートリッジをロードする。

それに対して総悟もまた悪意に満ちた表情を浮かべながら刀を取り出す。

「そいつは済まなかったな。でもまぁ・・・・・・俺的には凄げえ面白かったんだぜ・・・」

「ふざけんじゃねぇぞこのどエス！！！フィッシャーマン！！！滅殺だエ！！！！」

「ちょ！落ち着いてください浦太郎教官！」

「るせー！！！！ディバインバスター！！！！！」

食堂は一時、戦乱の世と化したことは間違いなかった。

そんな慌ただしい食堂の光景を遅れてきたユーノが無言で見つめていた。

「・・・・・・・・・・・・」

そして、漸く時代を収拾させたのち朝食の準備が整うと全員は円卓に座り、朝食を戴こうとしていた。

銀時は未だ煮え切れないでいる浦太郎に向かって自分の体験談を語りながら諫言してきた。

「たくよ、朝から騒々しいことしやがって。ハバネロソース入れられたぐらいで騒いんでじゃねぇよてめぇは。俺なんかこいつにもっとヒデーめに遭わされたことあんだぞ。鼻の中にコーラ入れられたりとかな。」

「コーラならまだいいよ！ハバネロは流石にまずいって！ああもう！！全然喉のひりひりが引かないんだけど！どうしてくれる訳！！！」

「まぁこれもいい思い出の一つとして心に留めてくれやな。」

「なるかボケ！！！！」

まるでこの時の浦太郎の性格は銀魂で言うところの東条歩であった・・・ま、声優も全く同じなのではあるが。

そんな浦太郎と総悟のやり取りを苦笑して見守っていたなのは達だったが、全員が揃ったところでいただきますの掛け声をすることにした。

「ははは。じゃ、みんな揃ったところでいただきます！」

「「「「「いただきます。」」」」」

いただきますの掛け声とともに、空腹であった神楽は猛烈な勢いで山のように盛られたご飯を口の中へ放り込んでいく。

「おおおおおおお！！！！！！」

その食欲っぷりはスバル達も圧倒されるものであり、一分もたたないうちに神楽は一杯目を完食、二杯目を要求する。

「おかわり！おかわり！！！おかわり！！！おが・・・！！！！」

そんな落ち着きのない神楽の顔に銀時の掌が叩きつけられる。

「落ち着けてめぇは。そして食え！」

キャロはそんな神楽の光景を見て思わずフェイトに向かってこう言った。

「・・・あきれた、もとい相変わらずのすごい食欲っぷりですね・・・」

「食は元気の素って言うけど、神楽の場合は何の心配も要らないね。」

「と言うか神楽ちゃんの場合、ココの食料をつい尽くす恐れもありますしね・・・」

新八はそんな懸念を浮かべながら、食事に手を付けるのであった。

そんな賑やかな朝の食事の風景を見渡しながら、ユーノは一度箸をおいて黙り込む。

「（・・・いつも通りの喧騒。変わらぬ生活の香り・・・）」

ユーノが黙り込むと、ヴィヴィオと一緒に食事を戴いていたなのはも不審に思い声をかける。

「ユーノ君？・・・・・・」

なのはがそう尋ねると、ユーノは曖昧な返事をしてきた。

「ん・・・（そうだ・・・今はこうして向き合っていくしかないんだ・・・たとえ何が起ころうと・・・前を見ていくしかないんだ。この現実（いま）と目に映る僕にとっての大切なものを守る。そのために正面から向き合おう。）」

心の中でそのような事を考えるユーノであった。

そして、ユーノとは別に神楽もまた食べることに必死な様子であった。

「おかわりネッ！！」

「あはは、神楽ちゃん。あんまし食べるとお腹壊すよ。」

「いいですね。リィンもあんな風に食べてみたいです。」

神楽の食旺盛な様子を目の当たりにしながら、はやてとリィンはそのように口にし、その隣の円卓に座っていたなのははヴィヴィオにお代わりを尋ねていた。

「ヴィヴィオはお代わりいる？」

「うん！」

笑顔でヴィヴィオがそう答えると、なのははヴィヴィオの茶碗を預かりご飯をよそう。

と、その時そのなのはの隣からユーノの声が聞こえてきた。

「なのは。」

一瞬驚いた様子のなのはに、ユーノはいつも通りの柔かい表情で自分の茶碗をなのはに差しだしこう言った。

「僕にも頼むよ。（この目に映るこの当たり前で、だけど大切な価値ある現在とその向こうにある未来が必ずあると信じて・・・）」

ユーノが茶碗を差し出してくると、なのはは何だか嬉しくなりこの時は純粋な笑顔でユーノの言葉に応え茶碗を手に取った。

「はい。」

と、その横で神楽は七杯目に差しかかろうとしていた。

「おかわり！！」

これには流石の銀時、新八、恋次の三人も止めざるを得なかった。

「「「いーかげんにしろ！！」」」

やがて、朝食を終えると前線は再び訓練場へと向かい、朝の続きの訓練に精を出していた。

「は！は！は！」

新八は木刀を何千回と振り回し汗を流す中、そんな新八に指導をする銀時は拍手をしながら真顔でこう言った。

「よし。じゃあ追加五千な。」

「ちょ銀さん！！何さり気なく回数増やしてんですか！！」

銀時の無茶苦茶なやり方に疑問を感じていた新八は文句を言おうとするが、銀時は右から左へと受け流す。

「つべこべ言ってねぇでとっとやれや。俺だって本当は人に教えん

のとかマジ面倒臭せーし怠いし、やってられねーけど・・・漫画キャラがいつ攻めて来てもおかしくネェ状況だし、しゃあねぇだろ。」

「だったら先ずはアンタが修行に励めばいいだろ。」

「俺がんなことするか。ほら、次やんねぇとその貧相なケツとメガネぶっ叩くぞ。」

「悪かったな、貧相で!!」

銀時の発言に怒りを露わにしながらも、新八はそれでも一重にギンガを守り抜くために直向きに稽古に専念するのであった。

やがて、集合の合図を報せる笛の音が鳴り響く。

「はい、じゃあ集合!」

「「「「「はい!」」」」」

なのはの笛を聞いたフォワード五人は整列すると、これから行う対抗戦の内容と形式を真摯に聞き入れる。

「それでは本日は真選組のみなさんも交えて対抗戦を行います。スターズの三人はルキアさんと吉良さんを入れた五人チーム。ライトニングは真選組と一緒に。双方全員が先に戦闘不能になるまで頑張ること。いいかな?」

「「「「「はい!」」」」」

活気のいい返事をする五人の横では真選組の三人も内心興奮した様

子だった。

「よし。それじゃ俺達も準備をするか？」

「面白いじゃねぇか。あれからまた技数を増やしたからな。存分に見せてやるぜ俺のこの三刀流を。」

「土方さん。でもそれってもとはと言えばワンピースの技のパクリですよね？結局のところ、あんたは何一つ自分の力で強くなってる訳ねぇ。全部ロロノア・ゾロの恩恵ですぜ。」

「う、うるせーよ！！いいんだよ、声優同じなんだし少しぐらい拝借しても！！」

何さり気なくとんでもないこと語ってるんだろうかと、作者重要大事は思うのだが、まぁ別にそれもいいかと割り切ってしまうこともあった。

そんな事を気にしているのは重要大事だけではなく、恋次達他の人員も同じであった。

「少しだけなのかそれ？」

「何でもいいから始めちまえよ。」

鬼太郎がそう言うので、早速模擬戦を開始いたします。

先ずはスターズのフロントアタッカーのスバル・ナカジマがウィングロードを駆け抜けライトニングの二人に向けて突進。

「うりゃあああああ！！！」

〈Ｌｏａｄ　ｃａｒｔｒｉｄｇｅ〉

カートリッジを一発ロードし、スバルはリボルバーナックルから得意技の一つを発動する。

「リボルバー・・・シュート！」

キャロはフリードを目の前に持ってくると透かさずブラストレイを発射させる。

「フリード！」

ブラストレイによってスバルの技がかき消され、スバルはそのまま炎の中に飲み込まれる。

そして、バリアで辛うじて防ぐことに成功したスバル。

だがその時、頭上から三刀流の土方が攻撃を仕掛けてきた。

「！」

「ほおおおお！！」

スバルはこの土方の攻撃に即座に対処する。

「マッハキャリバー！」

〈Ｐｒｏｔｅｃｔｉｏｎ〉

土方はスバルの防御を破壊するために強烈な剣戟を加え、徐々にひび割れが目立ち始めるとスバルも顔色を歪める。

「ぐうう！！！」

すると、その時スバルの危機にルキアが援護に入ってきた。

「破道の三十一　赤火砲！」

土方はルキアの鬼道を食らうと、そのまま地面へと弾き飛ばされる。

「トシ！」

土方の身を案じる局長近藤。

土方は幸いにも多少の火傷とかすり傷を負った程度で、近藤はひとまず安心し、直後後ろの総悟に指示を与える。

「総悟！上がれ！」

「おおおおお！！！！」

総悟は近藤の両手を踏み台にして天高く舞い上がり、ウィングロードで浮遊するスバルを撃ち落とそうとするが、スバルは総悟の攻撃を予想してティアナにこれを任せる。

「ティア！」

「任せなさい！」

スバルの背後から飛び出してきたティアナはクロスミラージュをダガーモードに変形させ、沖田総悟と正面から勝負に出て来た。

総悟もそんなティアナの行動に思わずほくそ笑む。

「ふん。俺と勝負しようってか？」

「負けませんよ、沖田さん。」

良い顔となった二人はお互いの刃を持った武器を振りかざして勢いよく振りかぶった。

「「だあああああ！！！」」

二人の斬撃がほぼ同時に仕掛けられると、空中では衝撃で轟音が響く。

その間に下の方ではライトニングのエリオが近藤と共にスターズに向けて突進していく。

「突撃だ！！」

「はい！」

二人は刀と長槍を手に取り、勢いよく攻撃を仕掛けに行った。

「「でやあああああ！！！」」

そんな二人の攻撃を目の当たりにすると、吉良はすかさず縛道で封

じにかかる。

「縛道の七十三『倒山晶』」

逆三角錐型の結界が二人を多い隠し、身動きの取れなくなると近藤は焦燥を顔に表す。

「！しまった！」

「大丈夫です！ストラーダ！」

〈Ｙｅａｈ〉

エリオはそう言うと、ストラーダのカートリッジを二発ロードし、頭上で高速回転させ、それを勢いよく地面に突き刺し高圧電流を流し込む。

「ボルティングウェーブ！」

エリオの電撃が地面を伝ってスターズの元へと飛来すると、ルキアはすぐにスバル達に回避を促す。

「全員、回避するのだ！」

「「はい！」」

ルキアの指示通り、エリオの攻撃を回避すると吉良は土方に向けて刃を向ける。

「面を上げろ、侘助！」

佗助を解放させ、吉良はそのまま土方目掛けて刀を振り下す。

「はあああああ！！」

そんな吉良の攻撃に対処するため、土方は三刀流の技の一つを披露する。

「行くぜ。“豹琴玉（ひょうきんだま）”！」

極端な前傾姿勢で重心を前に置き、回転しながら豹が狙った獲物を襲うように一気に飛び掛るこの技は、高速回転することにより破壊力は高まり、殺傷力を伴った旋風を巻き起こす。

その技の効果を使って、吉良の目の前に強力な旋風を巻き起こし同時に視界さえも奪った。

「うわあああああ！！」

鎌鼬のように全身を切り刻まれる吉良。

そんな吉良にさらに追い打ちをかけるため、土方は闘牛の牛のように突進し、突きを繰り出してくる。

「序でに、“牛針（うしばり）”！！」

だが、技の直前ルキアの氷雪攻撃が飛び交う。

「次の舞・白漣！」

咄嗟に吉良の前を横切った白漣に邪魔され、土方は牛針を未遂に終わらせる。

「ち。外したか。」

ルキア達は死覇装があちこち擦り切れた吉良の傷を気遣う。

「大丈夫か？」

「まぁね。でも、確かに言うだけのことはあったよ。」

「油断せずに行きましょう。」

「ああ」

「ええ！」

スターズ組は一度気合を入れ直すと、再びライトニングに向かって攻撃を仕掛けにかかっていき、それに触発されてライトニングもまたスターズに向かって突っ込んでいった。

そんな両チームの一進一退の攻防をビルの上から見物していた両分隊の隊長・副隊長人はと言うと、満足げな表情を浮かべていた。

「うむ。なかなかのものだな。」

シグナムがそう言うと、銀時は土方の容赦のない攻撃を見てふと呟く。

「スバル達は兎も角、マヨラー侍はやり過ぎだろ？」

「はは。まぁ大目に見ましょうや。」

新八がそう言うと、その隣ではシューリーがビデオを回しながらウキウキとした気持ちでこう言った。

「いいデータが取れてますよ。何だかウキウキしちゃいます！」

「全体的に士気が上がっていい感じだな。ティアナもダガーモードの方をかなり使いこなしてきてるし、この調子ならきっと――――――」

「いつ漫画キャラが襲って来ても、問題はないかな――――――・・・」

と、教え子たちの確実な成長ぶりを優しく見守るなのはだったが、その時なのはは先ほどまでいた筈のユーノの姿がいつの間にか居なくなっていることに気づく。

辺りを見渡すなのはにフェイトは訝しげな様子で尋ねる。

「なのは。どうかした？」

「あれ？ユーノ君、何処行ったんだろう？」

なのはがそう言うと、全員も辺りを見渡しユーノがいないことに気づく。

「ホントだ。一緒に居たと思ったんだけど・・・」

「ユーノくんがいつの間にかいなくなってるな。あ、そや。なのはちゃん、ちょっと探しに行ってくれへんか？」

はやてがそう言うと、なのはは一瞬戸惑った様子となる。

「え？でも・・・」

「大丈夫。データはちゃんと取っておくし、あとで見せてあげるから。」

「お前はさっさとあいつを探しに行ってこいよ」

「ほら、行け。」

恋次や銀時達がそう促すと、なのはもその言葉に甘えてユーノを探しに行くことにした。

「ありがとう、みんな。じゃあ、ちょっと行ってくるね。」

なのははその場を後にすると、駆け足で一度隊舎の方へと走り出す。

なのはが隊舎の方へと向かって暫くすると、フェイトは徐にはやてになのはの様子が一昨日から不自然だということに関して尋ねてみた。

「・・・はやて。気づいてる？」

「・・・なのはちゃんの事？」

はやてもどうやらフェイト同様何かしらおかしいということに気づ

いており、それに便乗してヴィータもまたこう呟いた。

「あいつ、昨日の教導の時から様子がおかしかったんだ。だからやっぱ心配でよ。」

「それがユーノさんがらみって事は？」

「可能性は大だな。あの年頃の娘って言うのは色々と複雑なんだよ。」

銀時が腕組みをしながら新八の言葉に返事をすると、少し寂しげな表情を浮かべながらフェイトは本音を語り出す。

「私は・・・二人には、なのはとユーノにはやっぱり笑ってて欲しいから・・・仲良しでいてもらいたいから・・・」

そう、彼女は同性愛者などささやかれる一方で本当は誰よりもなのはとユーノの仲を応援している親友であることに変わりはない。

そんな心優しいフェイトの言葉を耳に入れ、その場にいた全員の表情が些か曇り出す。

「そうだな――――――」

「店長も店長で色々と複雑だしね。」

「ああ・・・・・やっぱ俺達とは違って悩める人間ってのは見てる方も辛いぜ。」

鬼太郎はふとそんな事を呟き、二人がこの後どうなっていくのかを

考えたりしてみたそうな――――――

一方で、なのはは隊舎の方へと戻るとユーノが行きそうな場所を手当たり次第に当たってみたが、何処も空振り。

最後に現在最も頻繁に出入りをしているシャマルが待機する医務室の方へと向かい、実際にシャマルにユーノが来ていないかどうかを尋ねた。

「え、ユーノ君？」

「はい。訓練場からフラッといなくなっちゃって・・・他の場所も探したんですけど何処にもいなかったものですからそれで――――」

「医務室に来てるかと思った、と。でも残念。今日はこっちにも来ていないわよ。もしかしたら、外にでも行ってるんじゃないかしら。」

「外か・・・」

なのははシャマルのその言葉を聞くと、一度考えてから実際に外にまで捜索の範囲を広げて行ってみることにした。

一体、ユーノは何処へ行ってしまったのか？

では、そのユーノ本人は今どこにいるのかと言えば、シャマルが言った通り機動六課の外、と言うよりも時空管理局のデータベース、ユーノ・スクライアの名を一躍有名にした嘗てのユーノの職場で永久の城、無限書庫へと足を運んでいたのだ。

ユーノは前々からの約束を果たすためにスケジュールを開けて今回ここを訪れており、司書達の熱いまなざしを一身に受けながら真剣な様子で無限書庫の整理とデータ入力を行っていく。

すると、そこへお手伝いに来ていたアルフが飛んで来た。

「しかし本当にいいのかい、ユーノ？態々手伝いに来てくれても？」

「前に言ったでしょ。今度必ず手伝いに行くって。その約束を忘れないうちに果たそうと思ってね。」

「律儀だね本当・・・て言うかアンタは別に約束破る奴じゃないだろ？」

「はは。さて、どうだろうね？」

と、そう答えるユーノの元に嘗てユーノと一緒に無限書庫開拓に奔走したベテラン司書や若手司書の多くが声をかけてきた。

「でも助かりますよ司書長！やっぱりここには司書長がいないと寂しくて仕方ありません」

「あの時は毎日忙しくて大変でしたけど、司書長と一緒にいられた時間は何よりも大変貴重なものでした。出来れば、私達・・・――――もっとあなたの側で働きたかったです。」

同じ釜の飯を食してきたかつての仲間の言葉にユーノは心打たれる。

「みんな・・・――――ありがとう。僕も同じ気持ちさ。」

アルフもまたそんな寝食を共にしたユーノの言葉に笑顔を浮かべる。

「へへ。さて、お喋りはこのぐらいにして、仕事つづけるよ。ユーノ・・・じゃなかった司書長殿。これはどちらに運びますかい？」

「ははは。それは左の棚に閉まっておいて。あとは全部右上の書簡に収めてくれればいいよ。」

「「「了解です！」」」

司書達は久々のユーノの指示を聞き入れると、一目散に指定の場所へと本をしまいに無重力の空間を移動し始める。

ユーノはそんな風景を懐かしく思いながら物思いにふけっていると、不意にアルフがこんなことを聞いてきた。

「そう言えばユーノ。プリズムシードってロスト・ロギアを狙ってる剣士と何度かぶつかってるそうじゃないか？」

「ああ・・・弥彦の事か。うん・・・・・・その通りだよ。」

「大丈夫なのかい？何かフェイトが言ってたけど、アンタとその弥彦って奴との戦いが昔のなのはと自分のとよく似てたって言うし・・・さ・・・」

「確かにそうかもね。だけど全てが全部同じなわけじゃないし。僕と弥彦の場合、魔法は一切交えず出来る限り剣と剣でぶつかり合ってるからね。」

「また、そいつが現れれば・・・どうするつもりだい？」

「勿論止めるさ。弥彦は本当は誰よりも真っ直ぐな魂を持っていて、そして気は優しい男なんだ。あいつがプリズムシードを集める理由・・・それは恐らく次元干渉を齎すプリズムシードの力を使って、ピカチュウとニャースと共に元いた世界に帰ること。何だかんだ言っても、やっぱり人間は自分のあるべき場所に帰りたいのさ。」

「・・・そうだね・・・」

アルフは一度口を籠らせ、また暫くしてからユーノに対してこう言って来た。

「なぁ・・・・・・ユーノはさ・・・」

「？」

「ユーノにとってのあるべき場所・・・・・・帰る場所ってのは、それは私達と同じ場所なのかい？」

アルフの口から聞かされるとは思っていなかった意外な言葉に一瞬目を開くユーノだが、間を置いたのち少し寂しそうな顔でこう返答した。

「・・・どうだろう・・・時折それが分からなくなる。僕は元々特定の場所に留まるってことがあまりないから、今が凄く特別なだけで・・・本当はあるべき場所もないんだと思う。」

「ユーノ・・・」

「でも、最近こうも考えるようになってさ。“僕にとっての大切な、ごく当たり前のようで凄く貴重で価値ある場所は、目の前に映る僕に笑顔を向けてくれる人たちと同じところ”・・・なんじゃないかって。」

「・・・・・・」

「だから、僕は何があってもそこに帰ろうと思う。自分への執着も、夢も何もかも失くした僕だけど・・・今はそれさえあればあとは何もいらないし、何も求めない。だって、“仲間”の存在が僕にとっては最も価値あるものだから。」

そう言いながら、ユーノは屈託のない笑顔をアルフに見せ、アルフはそんなユーノの顔を見ると自分も嬉しくなり、笑顔で返した。

「・・・うん！」

こうして、ユーノはアルフと共に一定の時間までの間無限書庫で書庫の整理に奮闘したそうな――――――

さて、ユーノを探しに外出許可をもらい街の方まで探しに来ていたなのはの方はと言うと、夕方で人混みが増え始めている市街地で、制服のまま彼方此方を歩いていた。

「少し街の方まで来てみたけど、ホント・・・ユーノ君ったらどこ行っちゃったんだろう？」

と、その時。

「あれ、なのはさん？」

「？」

なのはが誰かに名前を呼ばれ、徐に振り返るとそこにいたのは嘗てのＪＳ事件で主犯ジェイル・スカリエッティによって制作され犯罪行為にも走ったが、のちに更生プログラムを受け社会復帰を果たした、ナンバーズの１０番、ディエチであった。

ディエチはなのはの姿を見かけると、笑顔でなのはに手を振った。

「なのはさん！私です、ディエチです！」

「ディエチ！うわあ、久しぶり！元気だった？」

なのはも久しぶりに対面を果たすディエチの姿に笑顔を浮かべ、駆け足で近づいて行った。

ちなみに、現在ディエチは更生プログラムを受けたのち、ゲンヤ・ナカジマに引き取られ『ディエチ・ナカジマ』として生活を送っている。

なのはともプログラム期間中からそれら以外でも何度か面識があり、何処か通じ合うものを感じているらしい。

「なのはさん。その節はどうも。」

「あはは。うん、そうだね。ディエチは今日はどうしたの？」

「お父さんの所に遊びに行った後、チンク姉とその辺をぶらぶらしてて・・・そのチンク姉が今トイレに行ってるもので。」

「そっか。スバルもギンガも会いたがってたよ。偶には二人に顔出したらどう？いつでも六課の方に遊びに来ていいから。」

「本当ですか？ありがとうございます！そう言えば、なのはさんこそどうしてこんなところに？」

「あ。実はユーノ君を探しに来てて・・・」

なのはが思い出したかのようにユーノの名を口にすると、それを聞いたディエチは一瞬分からなかったが、直ぐに記憶を辿っていきニュースや雑誌などで見たユーノの事に関する情報を引っ張りだし、自信なさ気に尋ねる。

「ユーノって・・・なのはの恋人で翡翠の魔導死神の・・・」

「うん。色々と悩みとか辛いこととかいっぱい背負ってて・・・だけどそれでも私達に心配かけたくないと思ってるから、いつも何処か寂しそうで・・・」

なのはは暗い顔を浮かべながらそう言うと、見ていたディエチも何だか悲しい気持ちとなってくる。

「そう・・・ですか・・・」

「ディエチは見てないかな？」

「すみません。それらしい人は一人も見てません・・・」

「そっか。ごめんねなんか。」

「いえ、こっちこそお役に立てなくて！あの・・・なのはさん！」

「何？」

すると、ディエチは普段寡黙であることからあまり人前で喋ることが苦手だったのか、少し躊躇った様子で間を置いたのち、最後になのはに対してこう言った。

「その・・・ユーノさんと・・・上手くいってください・・・私、応援してますから！」

「！・・・・・うん。ありがとう。」

ディエチの言葉を聞き、なのはは一瞬驚いた顔となるが直ぐに笑顔を浮かべてディエチにお礼の言葉を言ってからその場を後にした。

ディエチはそんなのはの後姿を些か不安げな様子で見つめていると、ちょうどその時用を済ませた同じナンバーズ5番で、ディエチと同じくナカジマ家に引き取られた灰色のコートに身を包み、左目に眼帯をしたチンク・ナンカジマが戻ってきた。

「すまぬ、ディエチ。待たせな。」

「いや、大丈夫だよ。」

と、その時チンクはディエチが見ているものに目が行き、自分の右目にも映ってきたなのはの姿に一瞬驚いていた。

「ん？あれは確か・・・なのはさんか？どうしてここに？」

「うん。色々あってね・・・・・・（なのはさんとユーノさん・・・本当にうまくいくといいな・・・）」

一重にディエチは、なのはと恋人であるユーノの進展を切に望むばかりであった。

その頃、ユーノは無限書庫での手伝いを終えたのち、一人精神統一と気を引き締めるために市街地から少し離れた場所にある竹藪の中へと足を踏み入れていた。

そして、今まさに目を閉じユーノは深く息を吸って気を引き締めようとしていた。

「す――――――――」

秋風が竹藪の中を通り抜け、奇妙な静けさが辺りを支配する。

しかしその直後、その静けさはこの一声で一気に崩壊することになる。

「ユーノ君！」

「！」

訊きなれた声に耳を傾け、一度我に返って声のする方向へ顔を向けてみると、外の方に居たのは自分を探し回って少し息を切らした恋人のなのはの姿であった。

ユーノはなのはの姿を見かけると、意外そうな表情を浮かべた。

「・・・なのは。」

「はぁ、はぁ。やっと見つけた・・・」

ユーノをようやく見つけることが出来、安堵の表情を浮かべるなのはであた。

その後、なのははユーノの精神統一を見守りそれが済んだのちに夕暮れの街を一緒に歩きながら六課の方へと戻っていた。

歩きながらユーノは黙って居なくなったことをなのはに謝罪する。

「ごめんね。ちょっと無限書庫の手伝いに行っててさ、余計な心配かけて悪かったよ。」

「うんうん。こっちこそ御免ね。なんか邪魔しちゃったみたいで。」

「謝ることもないよ。丁度そろそろ帰ろうと思っていたし。」

そう言って、ユーノはなのはよりも先に前の方を歩きつづけるが、そんなユーノの後姿を見ながら、なのはは若干頬を染めながら徐に何かを語り出そうとした。

「・・・・・ねえ、ユーノ君――」

と、なのはが語り出そうとした直後、ユーノは唐突にこう尋ねてきた。

「なのは。あれは――どこの学校の生徒かな?」

「ん？」

ユーノに尋ねられ、なのはは辺りを見渡すと向こう側の方でファーストフード店からハンバーガーを買って出て来たヴィヴィオと同じぐらいの年齢の児童と思われる子供が屯し談笑に夢中になっていた。

「ああ。あの制服はヴィヴィオのところと同じ学区にあるフィラデルグラス魔法学院の生徒さんだよ。半年に一回ぐらいサンクトヒルデも交えて交流会を開いてるの。」

「へぇ。元気があっていいものだね。」

「でも買い食いは良くないかなァ」

基本音が真面目なのははそう言った小さなことでも厳しく指摘するべきだと考えているため、談笑する生徒に対して心を鬼にして大声で注意を促す。

「コラァ。学校帰りの買い食いは駄目だよ――――！！」

なのはの声を聞くと、その瞬間その学校の児童の子が振り返り笑顔を向けた。

「あ、あれってヴィヴィオちゃんのお母さん！」

「高町なのはさんだ！」

「おーい、ヴィヴィオちゃんのお母さん！」

「今度の交流会は是非来てください！先生たちが焦がれて待ってますから！」

生徒たちはなのはに注意されたことなど気にせず、逆になのはに向けて言葉を発し、見ていたなのはは困り果てた様子でため息をつく。

「もう！・・・人の話聞いてるのかな？」

「なのはは何処に行っても人気者だね」

隣りでそう口にするユーノだったが、その時そんなユーノの姿を見たその生徒たちは驚きを隠せない表情となる。

「おい！あれ。隣の緑色の人！」

「あ、あの服装と帽子！」

「クリーム色の髪に優しげな顔――――ってことはもしかして！」

「翡翠の魔導死神ユーノ・スクライア！！」

「ヴィヴィオちゃんのお父さんか！うわー俺、初めて見た！意外と細いんだな！」

ユーノは児童たちの自分に対する好印象な反応に表情をきょとんとさせ、なのははそんなユーノに笑顔を向けた。

「あれま。」

「はは。どっちが？知らなかった？ユーノ君、管理局は問わず巷じ

ゃ凄い人気者なんだよ。」

「僕が？」

「子供達が強い人に憧れるのは世の常だよ。」

「そういうものなのかな・・・」

自分が強いとは自覚したことのない困惑した様子のユーノと、そう言うものだと言いくるめるなのは。

「そうだよ！あの子たちを見ていると、私たち大人は子供に人生を生きていくための『技術』と『力』を教えるだけじゃなくて、『人生の道』ってものを何かに包んだ形で導いていく・・・それが責務なんじゃないかって思ったりもしてさ。そうやってこれからもっともっと平和な未来になって・・・そのうち他の世界も平和になって・・・そしてみんないつまでも一緒に――――――・・・・・そしたらいいよね・・・」

なのはのその言葉を聞くと、ユーノも柔かい笑顔を向ける。

「・・・・・そうだね。だけどやっぱりそれは無理だと思うな」

「え・・・・・」

なのははユーノのその言葉を聞くと、一瞬思考が停止する。

ユーノはその後次のように語りだし前を歩き始めた。

「時代は日々変わっていく。魔法も同じさ。けれど人だけは変わら

ない・・・いや、そんなコトはないんだ。」

「ユーノ君・・・」

すると、一度ユーノは立ち止まり彼が朝に話そうと思っていたことをなのはに語る。

「・・・・・なのは・・・・・話をすり替えるみたいであれだけど、“飛ぶのを辞めた方がいいかもしれない”って思ってるのは本当なのかい？」

「！」

ユーノのその言葉を聞いた瞬間、なのははまさかその話をユーノが聞いているとは夢に思わず表情を一変させたが、直ぐにお茶を濁して誤魔化そうとした。

「え・・・な・・・何言ってるの・・・私がいつそんな――――――」

しかし、そんななのはの言葉を無視してユーノの話は続く。

「僕が傷つくのを見たくないから、僕を縛り付けているのが自分だから、僕を自分の魔法で助けられないくらいなら飛ぶのを辞めたいって、昨日シャマルさんに言っていたよね？」

「・・・・・」

すると、沈黙したなのはに背中越しにユーノははっきりとこう言った。

「だとしたら、そんな選択肢を選ぶのは間違ってる。」

「！」

驚きを隠せないなのはと、そんななのはに優しく語りかけるユーノ。

「君がそんなことを考える必要はない！君は君らしく、自分のしたいように・・・自分の夢に向かって空に羽ばたいて行けばいい。それでいいじゃないか。」

ユーノは飽く迄も自分の事は気にするなと言い切るのだが、聞いていたなのはは自分の手を強く握り小刻みに振るわせながら否定の言葉を口にする。

「・・・・・・それじゃ・・・いやだよ・・・／／／」

「え」

ユーノはその言葉を聞いて耳を疑い、後ろを振り返るがなのはは瞳に涙を宿しながらユーノに向けて自分の想いを赤裸々に口にする。

「私は・・・・・・いつも自分の事ばかりで、目の前で辛い目に遭ってるユーノ君を放っておくなんてこと、もう出来ないよ！！私がこのまま飛び続ければ、ユーノ君がずっと辛い想いをする！傷ついていく！！私は・・・・・・今の私が何より守りたいものは、ユーノ君その人なの！！」

「なのは・・・」

「ユーノ君の事助けられないなら、苦しめるくらいの力なんか・・・魔法なんてもういらない！！戦いなんてもうしたくない！ユーノ君を守れない力なら・・・・・・捨てたっていい！！そんなもの、生き甲斐じゃない・・・！今の私にとっての生き甲斐は・・・・・・・ユーノ君やヴィヴィオやみんなと一緒に居ることだから・・・！」

なのははそう言って、自分の顔を沈めて涙を地面に落す。

そんななのはの姿を目の前で見ていたユーノは一度ため息をついてから、いつも通りの優しい声色でこう言った。

「はぁ。なのは。ちょっと前向いて。」

「？」

なのはがユーノの前を向くと、ユーノは肩に優しく手を乗せこう語り出す。

「よく聞くんだ。君が僕の為を思ってそこまで言ってくれるのは嬉しいよ。だけど、“中途半端な理由で夢を諦めると大変なことになる”んだ。」

「中途半端じゃないよ！私は本当に――――――！」

「だったら尚更だ。僕はその気持ちだけで十分だから。生憎僕は君と違って夢もないし、自分への執着もない。だけど、帰るところはある――――――」

「帰る・・・ところ・・・」

一瞬驚いたなのはだが、ユーノはそんななのはの涙を手で拭い取ったのち、再び後ろに振り返り背中越しに語り出す。

「今は機動六課だけど、事件がすべて片付いていずれみんながみんなまたそれぞれの道を歩んで、それぞれの人生を生きていくことになる。それは別れではなく旅立ち・・・終わりではなく始まり・・・少し寂しいけどそういうもの・・・それでも僕は今帰るべき場所に何が何でも戻ってくる。だから、なのはが自分の夢を僕の為に諦めることはないんだよ。」

「・・・――――」

「だから、その気持ちさえあれば僕は何もいらない。何も求めない。何一つ――――――」

ユーノはそう言うと、少し寂しげな背中を向けながら機動六課へと向けて歩き出そうとする。

するとその時、なのはは頬を赤く染めながら自分が思っていた素直な気持ちをユーノに告白する。

「・・・・・けど――――・・・・・・私はユーノ君と一緒にずっと居たい」

ユーノはそのなのはの言葉を聞いた瞬間、この時最も驚いた表情を浮かべた。

そして、その後カラスの鳴き声や車の通りすぎる音が沈黙したあたりに鳴り響き、なのはは胸の鼓動を強くし、思わず手を当てる。

ユーノはそんななのはの方に目を向け、閉ざされていた口を開けようとする。

「――――――・・・・・僕は」

と、その瞬間なのはは心臓の高鳴りが逆に緊張の糸を解いてしまい、恥ずかしがった様子でユーノにこう言った。

「ご・御免！あっ、ははは！！何か私変なこと言っちゃって！！さっ、早く帰ろ。今頃みんな心配して・・・」

と、脱兎のごとくその場から立ち去ろうとしたなのは。

すると、そんなのはの体を優しく抱き寄せ両腕でなのはを包み込むユーノ。

「！」

なのははユーノの突然の行動に驚きつつ、胸の鼓動を一層昂ぶらせる。

そして、そんなのはにユーノは柔かい表情と優しい声色でこう言って来た。

「・・・覚えているかな。魔導虚事件の時、四年ぶりに遭って涙を流しながらなのはが僕に言った時の言葉。『もう居なくなったりしないで！もう・・・・・私を一人にしないで！！！』と言ったコト・・・」

「あ」

その言葉を思い出し、我に返るなのは。

ユーノはそんななのはに優しくもだけど決意の籠った表情で最後こう言った。

「大丈夫。僕はなのはの側にいる。もう勝手に何処か一人で居なくなったりはしない。だから、僕も同じ気持ちだよ。出来ればなのはと――――――ずっと一緒に居たい。」

その言葉を聞き、なのはは心の底から嬉しくなり頬を染めながらユーノに身を任せる。

「・・・ありがとう。ユーノ君・・・」

暫くの間、ユーノに身を任せた後ユーノ本人は徐になのはの体を解放し、手を差し伸べてこう言った。

「帰ろう・・・みんなが待っているよ。」

「うん・・・」

ユーノが手を差し伸べると、なのはもそれに応えるために手を差し伸べる。

すれ違っていた二人の絆が、今ここにもう一度強く・・・深く結ばれることとなった。

二人は仲良く手を繋いで機動六課へと帰還する。

「ただいま――――――」

と、その時二人の元に息を切らした鬼太郎や他の前線メンバーが走ってきた。

「店長！」

「鬼太郎？」

訝しげな表情を浮かべるユーノと、その隣に立つなのは。

「どうしたんですか、血相変えて？」

「実はさっき、こんなものが店長宛に送られてきたんですが・・・相手は明神弥彦です！」

「！」

「え！」

明神弥彦と言う単語を耳にした瞬間、ユーノもそしてなのはも思わず体を硬直させた。

二人は一度司令室へと向かい、全員が注目する中でユーノは徐に果たし状の中身を確認する。

そこには以下のようなことが書かれていた。

「『果たし状　ユーノ・スクライア、俺は何が何でもプリズムシードを四つ全て集めないとならない。だが、そのうち二つはお前とカ

トゥーン達がそれぞれに所持している。ならば、お互いにこのプリズムシードを懸けよう。俺も全てのプリズムシードを懸ける。俺が勝てばお前からプリズムシードを奪い、お前が勝てば潔く負けを認めプリズムシードを渡す。対戦時間は明晩午前６時。場所は第８２５管理外世界『Ｔ２』。　明神弥彦』・・・・・・」

ユーノは中身を読み終えると、深いため息をつく。

そして、周りにいた前線メンバーも顔を歪める。

「とうとう野郎もそう言う手できやがったか・・・」

「何か、かなり切迫してきましたね・・・！」

「管理外世界『Ｔ２』と言えば・・・・・人間に対する影響がそれこそ倍加されるって言う奇妙な世界ですよね？」

「もしそんな場所で戦闘ともなれば、派手なことになりそうだな。」

「・・・・・・・・」

その話を聞き、黙り込んでしまうユーノ。

そして、そんなユーノを見つめる複雑な心境のなのはとヴィヴィオ。

「ユーノ君・・・――――」

「ユーノパパ・・・」

そんな重い空気が漂う中、恋次は徐にはやてに弥彦の処遇について

尋ねる。

「はやて。本来ならば、弥彦やピカチュウたちはどうなるんだ？」

「間違いなく捕縛され、裁かれるのが普通です。中央管理局を襲ったという事実だけでも、御釣りが来ますからね。だから、特別な命令がない以上私らは明神弥彦も連れのポケモン二匹も、今回の事件の重要人とて逮捕せなあかんのです。」

「・・・――――」

それを聞いて、益々顔を渋めるユーノだが、その時クロノは徐にこんな事を聞いてみた。

「お前はどうしたいんだ・・・・・・ユーノ。」

クロノの言葉を聞き、若干驚いた表情のユーノ。

すると、ユーノは暫くの間を置いてから決意の籠った声ではっきりとこう口にする。

「僕は・・・・・・弥彦を助ける。だからその為に闘う！」

「ユーノさん・・・」

「ユーノ・・・」

闘う意思を明確なものとしたユーノの言葉を聞くと、そうなることを予期していた全員は表情を若干和らげる。

「よく分からないけど、弥彦の・・・今までの戦いを通して見てきたあんな辛そうな顔や剣から伝わってきた煮え切らないでいる想い・・・それを見ていると僕まで心が締め付けられて苦しくなる。譲れない願いある者同士、避けては通れない道になる。それでも僕は・・・出来ることなら僕の力で弥彦を助けてやりたい。弥彦も・・・ピカチュウもニャースも。手が届く範囲にあるなら、そうした方が絶対後悔なんてしない。」

ユーノのその言葉を真摯に聞き入れると、はやては顔を緩めて明神弥彦の全てをユーノに委ねることとした。

「・・・分かったよ。実際、こっちとしてもあの剣客を相手にしてまともにやりあえるのはユーノくんぐらいや。ま、銀さん土方さん恋次さんはいけるかもしれへんけど・・・」

「馬鹿言ってんじゃねぇよ。俺だって嫌だぜ。」

「それに、こいつはユーノと野郎の私闘なんだ。俺達が首を突っ込む訳にはいかねぇ。」

「恋次さん・・・銀さんも・・・」

ユーノは二人の言葉を聞き、安どの表情となる。

「明神弥彦については全部ユーノくんに任せるよ。みんなもそれでええやろ?」

はやてがそう言うと、聞いていたなのは達全員が肯定の返事をする。

「うん。」

「はい。」

「ああ。」

この場にいる全員の心遣いを目の当たりにし、ユーノはとても温かい気持ちとなり全員に感謝の言葉を発した。

「ありがとう・・・――――みんな。」

と、その時徐にヴィヴィオがユーノに向かってこんなことを口にしてきた。

「ねぇ、パパ」

「？何だい、ヴィヴィオ。」

「何か・・・ちょっと、吹っ切れた？」

「え・・・あ・・・えっと・・・どうだろうね？」

ユーノもこのヴィヴィオの意外な発言を聞くと、どう答えればいいか一瞬わからなくなり困惑した表情となるが、ヴィヴィオは少し寂しげな顔で更にこう言って来た。

「パパは・・・ママと一緒でみんなに心配させないようにっ寂しいとかそう言った気持ちは顔に出さないからさ・・・最近、辛いことばっかりでずっと何かに制約されて苦しんでるみたいだった感じだけど・・・それ以前にパパが・・・一人で何もかも背負い込んだまま、私やなのはママの元からまた居なくなっちゃうんじゃないかっ

て・・・そしてそのまま帰ってこないじゃないかって・・・思ったりして・・・そんな目をしたりもしてたから・・・」

「ヴィヴィオ・・・」

娘の言葉を耳に入れ、ユーノも聞いていたなのは達他の面々も胸が締め付けられる、そんな切ない気持ちとなる。

すると、ユーノは一度眼鏡をはずして目元に手を当てるとすすり泣くような声で――――

「・・・いかないさ、何処にも・・・」

「ユーノ。」

「ユーノ先生。」

全員はこんな弱々しい感じで自分を表に出すユーノをあまり見たことがなかった。

ユーノは少し驚いている全員に向かって自分の胸の内を素直に口にした。

「なのはやヴィヴィオ、それに僕の周りにいる大切な仲間を・・・置いて行って一人でどこかに行くようなことはしないさ。だから大丈夫だよ。」

それを聞いて安心したのか、なのは達全員はユーノに返事をする。

「そっか・・・」

「うん。」

「ああ」

ユーノはその言葉を発した直後から明日を迎えるまでの間ずっと心の中でこう思い続けた。

「（そうさ。僕は何処にも行かない。ちゃんとみんなのいるこの場所に帰ってくる。なのはやヴィヴィオ、鬼太郎達がいるこの場所へ。ただ・・・少しだけいつもと違う時を過ごすだけ・・・――それはこの先、自分らしく真っ直ぐいるため。後悔しないようにするための踏み出しの一歩。）」

長い時を仲間と過ごす中で、ユーノに芽生えた新たな気持ち。

そして、決意のもとに身を投じる大切な人を救うための運命の戦い。

それを明日に控え、ユーノは寝る前に室内訓練場へと訪れ、暗い部屋静かに正座をしながら明日の事を考えつつ、目の前の床に置かれた自分の愛刀『晩翠』を凝視していた。

「――――――」

と、その時。

「良い顔してんじゃねぇか？」

「！」

驚いたユーノが声のする方へ振り返ると、様子を見に来た銀時が壁に寄しかかっていた。

「もう迷いはねぇみたいだな。」

「銀さん・・・」

銀時は徐にユーノに近づくと、次のように語り出す。

「明日の早朝、弥彦と最後の決着をつけることになるが、俺達は信じてるぜ。お前の事・・・――」

「はい・・・ありがとうございます。何か銀さん達にまで巻き込んで、色々と突き合わせてしまって申し訳ない気持ちがいっぱいですが・・・」

「謝ってんじゃねぇよ。確かにこの世界に来ちまったのは偶然かもしれねェ。だが、俺達がこっちでお前やなのは達に協力してるのは、俺達が好きでやってることだからよ。何もお前が謝ることはねぇ。ただ、俺はお前が自分のしたいことをして後悔して欲しくはないと思ってる。」

「はい。」

「・・・ユーノ・・・相手は逆刃刀だ。だったら・・・・・これ使えよ。」

銀時はそう言うと、徐に腰に携えていた木刀を取出しそれをユーノに手渡す。

「!銀さん・・・・・・」

驚くユーノを余所に、銀時はこう言った。

「俺の愛刀、『洞爺湖』だ。前にお前は俺に晩翠を貸してくれたしな。今度は俺がお前に借りを返す番だ。そいつでお前が後悔しないよう戦えばいい。」

「・・・はい。ありがとうございます、銀さん。僕、後悔しないためにも全力で戦ってきます。」

「ああ。頑張ってこい、ユーノ。」

ユーノは銀時との約束を守るため、絶対に自分が後悔しないように明日の戦いを全力全開で闘いぬくことを心に決め、その日は床に就いたのであった。

１０月１７日　午前５時２７分：機動六課隊舎

ユーノは目が覚めると、銀時から貸してもらった洞爺湖木刀を腰に携え、全ての準備を整えると、全員が待つ司令室へと向かう。

司令室に入ると、ユーノを迎えるなのは達がユーノを顔を見、金太郎が時計を一瞥。

「時間です店長。」

「パパ・・・」

学校がまだ始まる前であったため、まだ眠気の残るヴィヴィオであ

ったが、ユーノは徐に近づくといつも通り頭を優しく撫で、笑顔を浮かべる。

「大丈夫。必ず勝つ。そして、弥彦達を救う！」

ユーノはそう言うと、なのは達を引き連れ宿命の決着をつけるため、人外の世界『Ｔ２』へと向け出発した。

第８２５管理外世界『Ｔ２』：午前５時５５分

目的の世界へと到着したユーノ達は同封された地図の場所へと向けて歩きだし、松の木が生い茂る砂浜へとやってくる。

ユーノは一人砂浜の上に降り立ち、なのは達他のメンバーは一様に離れてユーノの様子を見守る。

時間が徐々に過ぎ去っていく中で、総悟は徐に呟く。

「本当に野郎は現れるんっすかね？」

「自分から喧嘩吹っかけておいて、おめおめ逃げる様ならこの勝負自体無効な筈だ。プリズムシードを求める以上、奴は必ずここにやってくる。そうだろ？」

土方がそう言うと、聞いていたユーノもまた同じことを口にする。

「ええ。弥彦は逃げも隠れもしない。必ずここに――――――」

と、その時だった。

「！みなさん、来ました！」

ティアナは沖の方を見渡していると、それらしき人物が乗った一層の船を発見した。

ユーノや他の全員がその船の方に目を向けると、ゆっくりではあるが確実に自分たちのいる方に向かって船の先端の方で立ち尽くす逆刃刀・真打を携えた弥彦と船の漕ぎとなっているピカチュウとニャースがそこにいた。

銀時達はそんな弥彦達の姿と状況を見ながらふとこう呟く。

「まるで宮本武蔵と佐々木小次郎のようなシチュエーションだなおい。」

「この雰囲気・・・何だか昔を思い出すね、フェイトちゃん。」

「うん。ジュエルシードを懸けた全力全開の勝負・・・そして今は、同じようにプリズムシードを懸けて行われるユーノと弥彦の勝負・・・」

なのはとフェイトは9歳の頃の事を思い返しながら、その時の自分たちの姿を今のユーノと弥彦と照らし合わせてみた。

「勝つのはユーノさんか？それとも――――」

不安げな表情で吉良が呟くと、スクライア商店従業員一同がユーノの勝利を確信する。

「勝つ！何が何でも店長が勝つ！」

「その通りですぞ。店長は負けませぬ！」

「何って、店長は最強だモン！！」

ユーノはそんな三人の言葉を耳に入れながら、一度深呼吸をし弥彦の到着を待つ。

そして、ついに対戦相手である明神弥彦と連れのポケモン二匹が砂浜に降り立つ。

「ピッカ！」

「ニャーっと！」

「来たぜ。電気ネズミと招き猫も連れてな。」

「弥彦・・・・・・」

ユーノは目の前の弥彦の顔を見ながら様々に湧き起こる感情に胸が締め付けられる。

「待たせたな。ユーノ・スクライア。遅刻しちまったか？」

「いや、三分前行動だ。社会上、これと言って問題はない。」

「そうか。ピカチュウ、ニャース。危ないから下がってろ。」

「ピカ。」

「弥彦・・・・・・」

不安に満ちた表情のピカチュウとニャース。

弥彦は二匹の頭に手を乗せると、柔らかな笑みを浮かべる。

「分かってる。勝ってみせるさ。」

その言葉を聞くと、二匹は顔を見合わせ弥彦の言葉を信じる。

「ピカ！」

「期待してるでニャーす。」

弥彦は二匹を安全な場所まで退がらせると、徐にユーノの方へと目を向け懐に収められたプリズムシードを取り出す。

「・・・――――」

ユーノはそれを見ると、同じように中央管理局から特別の許可の元借りてきたプリズムシードを取り出し、それを見せながら洞爺湖木刀に手をかけこう切り出した。

「・・・ただ捨てればいいって訳じゃない・・・だが逃げればいいって訳じゃもっとない。切っ掛けは多分プリズムシード。お互いに信念の下に相容れぬならば説得は由無し。だったら最初から懸ければいい。僕らの持つプリズムシードと、弥彦達が持つプリズムシード、そして己の信念を全て！」

「ああ・・・」

弥彦はユーノの言葉に首を縦に振るうと、逆刃刀に手をかける。

両者は剣を抜くと、プリズムシードを一度懐に仕舞い込み一定の距離を保ちながら刀を構える。

「それからだ。それからが全てなんだ。なのはとフェイトがそうだったように・・・僕もお前も（・・・僕らの全てはまた始まってもいない・・・だから・・・これから先の本当の自分が踏み出すその瞬間を始めるために・・・）」

そんな事を考えながら、ユーノは弥彦と向かい合いその光景を被害が及ばない場所で見守るなのはもまた昔の事を思い出しながら今のユーノの気持ちを考える。

「（ユーノ君・・・・・・）」

そして、朝陽が昇り切ろうとする午前6時・・・・・・ユーノが戦闘開始を宣言する。

「始めよう、弥彦。洞爺湖木刀と逆刃刀。その刀身が折れるか否かの最初で最後の真剣勝負を！」

ついに、翡翠の魔導死神ユーノ・スクライア対不殺の明神弥彦、最後の戦いの火ぶたが切って下される！！

後悔なんてしたくない（後書き）

教えて、ユーノ先生！

ユ「今日はナンバーズについてね♪」

ユ「ＪＳ事件でその中核を担った戦闘機人１２体を総じてこう呼んでいるのだが、その能力はまさに先天固有。」

ユ「その為、ナンバーズが持つ能力はインフィーレントスキルと言われてるね♪魔導虚篇のちょっと復習になるけど、今回出て来たディエチは他のみんなと一緒に更生プログラムを受けて今はナカジマ家に引き取られている。」

ス「そう言えば、この小説で他のナンバーズが出て来たのって今回が初めてですよね？」

な「作者さんが忘れてたのかな？」

ユ「いや。何でもナンバーズを出すとまたごちゃごちゃして訳分からなくなるから、極力控えてたらしいよ・・・」

一「今でも充分ごちゃごちゃしてるとは思うけどな。」

恋「ああ。しかも迷い込んできたのが天然パーマやら怪力チャイナ娘だしな。毎日のことながら疲れるぜ。」

ユ・な「あはは・・・ま、確かに・・・」

苦笑いを浮かべる二人であった。

魔導師図鑑ハイパー！

黒崎一護と黒崎織姫とコン様の解説銀魂篇！！

織「どうも！みなさん、アンゴルモア・銀魂篇も段々濃い内容になってきましたが、次回はいよいよユーノさんと弥彦君の最終決戦！」

一「いよいよって感じだな。あの二人の事だ、かなり派手な戦いになるとは思うが、俺はユーノを信じてるぜ！」

コン「そういや、あのピカチュウとニャースって結局何であいつと一緒に行動してたんだ？」

一「そう言えばそうだよな・・・案外マスコットキャラとして登場させたとかじゃねぇか？」

織「それならピカチュウだけでいいと思うけどね？」

コン「いやいや織姫さん。昨今電気ネズミだけじゃやっていけないのも事実っすよ。」

一「ぞんざいな扱いばかり受けてるお前が言うとあんまし説得力ネェな。」

コン「ウルセー！ぞんざいな扱いをしてるのはどこのどいつだよ！！」

織「そんな訳で、次回は見逃せません！みんな、ＳＰＹＡＩＲの新

曲でアニメ『銀魂』のエンディングテーマ、『サムライハート』を聞きながら二人の戦いを見てあげてください！」

一「序でに、アニメ『ＢＬＥＡＣＨ』エンディングテーマ、『アオイトリ』もよろしくな！」

コン「俺様にも応援の言葉待ってるぞ！そんじゃ最後は三人で！」

一・織・コン「また（な）ね！！」

次回予告

決意で臨んだ、弥彦との決戦。

そして、その中でつながっていく二人の過去と現在。

迷いも何もかも振り切って――――――

ユーノ・スクライアと明神弥彦の最後の奥義が発動する。

金「次回『困ってる人を見かけたら迷わず手を差し伸べる人になろう』」

キャラクター説明

チンク・ナカジマ

声：井上麻里奈

元ナンバーズの5。灰色のコートを着込んだ、小柄で銀髪の少女。隻眼のため、右目に黒い眼帯をつけている。クローン培養。潜入と

破壊工作に優れ、一時はスカリエッティの元を離れて任務に当たっていた。妹と会話する際に一人称が「姉」になるなど、物言いがやや古風。ナンバーズの中では最も小柄で、自分でも体型のことを少し気にしている。面倒見の良い性格で姉妹達から慕われており、粗暴なノーヴェの世話は特に焼いていた。ＩＳは金属を爆発物に変化させる「ランブルデトネイター」で、普段は投げナイフ型の固有武装「スティンガー」を用いて発動する。右目の眼帯は１２年前のゼストとの戦いで負傷したもので、この時右目と引き換えにＳランク魔導師のゼストを「一対一で」撃破している。ＪＳ事件時の地上本部襲撃時にスバルから受けた振動破砕の影響で最終決戦には参加せず、戦わずに保護された。後に他の妹達と共に海上隔離施設で更生プログラムを受ける。事件への関与度合いが比較的高いため、自由を手にできないことも覚悟していたようであるが、それでも償える罪を償おうと考え、また妹たちを気にかけ、更生の道を歩んだ。後にゲンヤが保護責任者となって「チンク・ナカジマ」となり、ノーヴェ、ディエチ、ウェンディと共にＮ２Ｒというユニット（チンクがリーダー）を結成して行動する。ゲンヤが義父親になってからは、彼を「父上」と呼んでいる。

ディエチ・ナカジマ

声：升望

元ナンバーズの１０。茶色の長髪を薄黄色のリボンで結わえている。純粋培養。また両目に仕込まれた機器によって優れた望遠能力と解析能力を有し、それを併用した狙撃・砲撃による後方支援を役目とする。寡黙で余り感情を表に出さないが、姉妹思いの温厚な性格。基本的に従順だが、根が善良なためＪＳ事件時内心スカリエッティのやり方に疑問を抱いていた。ＩＳは体内で生成したエネルギーを固有武装である大型の狙撃砲「イノーメスカノン」から砲撃として出力する「ヘヴィバレル」。ゆりかご内部での最終決戦ではなのは

と正面からの撃ち合いになるが、ブラスターリミットを解放した彼女に敗れ保護された。後に他の姉妹達と共に海上隔離施設で更生プログラムを受ける。なのはとは何度か面会しており、何処か通じ合うものがある彼女に対して心を開いていた。ゲンヤが保護責任者となって「ディエチ・ナカジマ」となり、チンク、ノーヴェ、ウェンディと共にＮ２Ｒというユニットを結成して行動する。ゲンヤが義父親になってからは「お父さん」と呼んでいる。

困ってる人を見かけたら迷わず手を差し伸べる人になろう（前書き）

ユ「ぶつかり合う魂・・・ぶつかり合う願い・・・そして、誰にも譲れない己の信念。」

ユ「自分で決めた事を、曲げられない気持ち・・・逃げたくない気持ち・・・どんな想いも正面からぶつかっていく。だから闘うんだ・・・最初で最後の真剣勝負・・・自分の剣技の全てを懸けて！」

弥「ユーノ・スクライア外伝　アンゴルモア・銀魂篇・・・・・・始まります」

困ってる人を見かけたら迷わず手を差し伸べる人になろう

＞ｉ２８６７２―７０９＜

宿命の対決。

ユーノ・スクライア対明神弥彦。

お互いの信念と全てのプリズムシードを懸けた最後の戦いが幕を開けようとしているが、その前に一度弥彦の数日前の記憶を遡ってみようと思う。

彼は土砂降りの中、一人誰もいない野道を歩いており、雨宿りが出来るぐらいの気を見付けると駆け足で近づいて行き、雨がやむまでの間一人幹に寄しかかりながらぽつりとしていた。

すると、そんな弥彦の側で悲しそうな様子で呟く生き物の声が聞こえてきた。

〈ピカ・・・〉

弥彦が声に気づき、徐に振り向いてみると、木の根のほうに体長15センチほどの黄色いネズミ、ピカチュウが体を縮めて怯えるように小刻みに震えていた。

弥彦はピカチュウの目線まで体を小さくすると、柔かい声で言葉を発する。

〈・・・お前も・・・一人か・・・〉

〈ピ・・・カ・・・〉

〈俺もだ。〉

〈ピカ・・・・・・〉

弥彦は自分と同じ孤独の境遇に立たされたピカチュウを放っておくことが出来なかった。

ピカチュウを自分の元まで抱き寄せると、そのままピカチュウの頭を撫でてやり、ピカチュウもそんな弥彦の行為に甘えた様子だった。

〈きっとお前も寂しいんだよな。元いたところに帰りたいんだよな。俺に何ができるか分からないが、俺はお前をお前の居場所に帰してやる。だから――――――そんな悲しそうな顔をするのは止めろ。〉

〈ピカ・・・／／／／／／〉

その時、ピカチュウは今まで溜めていた悲しみを涙に変えて全て弥彦に曝け出した。

これがピカチュウと弥彦との出逢いだった――――――

それからまた暫くして、二人はピカチュウと同じ世界からやって来たニャースと出逢い、三人はこうして巡り合い、行動を共にすることとなった。

やがて、三人は旅の中で自分たちが帰る唯一の方法を見つけ出す。

それこそが、プリズムシード――――――

〈これがニャー達が唯一元の世界に帰れる方法でニャース。〉

ニャースはそう言いながらモニターに映されたプリズムシードを凝視し、弥彦とピカチュウも息を呑んでそれを見つめる。

〈ああ。プリズムシード・・・・・・これを集めれば・・・俺たちみんな・・・〉

〈ピカ！〉

三人は元の世界に戻るため、自分を向か入れてくれる暖かい人たちの元に帰るため、この前人未到の異世界に於いて、プリズムシードを探す旅を始めるのであった――――――

そんな数日前のことを振り返りながら、弥彦は目を瞑りながら心の中で呟いた。

「（俺は・・・・・きっとこいつらを元の世界に戻せると信じて・・・そして俺もまたもう一度みんなと、一緒に笑いたいから・・・・・負けられない！）」

弥彦はその瞬間、はっと目を開くと自分の正面に佇む洞爺湖木刀を構えたユーノと睨み合い、お互いに距離を置いていた。

そんな様子を近くで見守るユーノ側のなのは達や、弥彦側のピカチュウとニャース。

同じ様に、機動六課の司令室でモニター越しにそれを見守るはやて・クロノなどの部隊長や他のスタッフ一同。

「いよいよ戦闘開始みたいやな・・・」

「ああ・・・」

奇妙に張りつめた空気が漂う司令室ではやてとクロノがお互いそう口にすると、暫くしてからはやてが更に呟く。

「しかし珍しいもんやな。」

「ん」

「クロノくんがこう言うギャンブルを許可するなんて。」

「まぁ、ユーノが勝つに越したことはないのだが・・・・・あの二人の勝負自体はどちらに転んでもあんまり関係ないからな。」

「ほんまはこう言う事は好きやあらへんけど、ユーノくんがあの剣士と戦闘をして時間を稼いでいる間に帰還先追跡の準備をしておく・・・てね。」

「そう言うわけだ。シャーリー、ルキノ、アルト。頼りにしてるぞ。」

クロノがそう言うと、管制室のシャーリー達はモニター画面に現れ、肯定の返事をする。

『『『了解です!』』』

すると、はやては頭の中に一抹の不安が浮かび上がってくる。

「そやけど、前回が前回だけにまた漫画キャラが介入するなんてことが無いわけじゃあらへんしな・・・」

「心配が拭えないのも事実だ。だが今はそんなことより、この勝負

の行方を見定めることだ。」

クロノはそう返事をし、中央のメインスクリーンの方に近づいていくと、睨みあった状態で緊迫した雰囲気の悪友の姿を見ながら何処か心配した表情でこう言った。

「勝ってくれることに越したことはない・・・僕は悪友として、ユーノを迷わせたくない。」

そう呟くクロノとは別に、最終決戦を迎えようとしている二人の方はと言うと、睨みあいをした状態でお互いの武器に力を込めながら言葉を交わしていた。

最初に話しかけたのは弥彦の方だった。

「翡翠の魔導死神ユーノ・スクライア。前回はあんな中途半端な形で終わっちまったが、今回は正真正銘最後の決戦。この戦いで真の意味で最強はどちらか?そしてプリズムシードを手にするのは誰か?白黒つけるぜ!」

「ああ。僕もそのつもりでここに来た。だから僕は、今ここで弥彦・・・お前と闘う。但しそれは飽く迄も“お前を救う為に”だ!」

「まだそんな甘い言葉を吐きやがるか・・・そんな甘い考えは止めておいた方が身のためだぜ。分かってるだろう、あの時の俺の奥義が完全でなかったことぐらい。」

「完全なものを求めるなら、それこそ僕にはどうでもいい話だ。元々僕は世の中に完全なものがあるとは思っていないし、人間である以上何かしらの欠陥が生じる。僕にだってそれがある様に・・・」

「減らず口を。」

弥彦はそう言うと、ユーノに向けて逆刃刀・真打を向け、ユーノもまた弥彦に銀時から借りた洞爺湖木刀を向け、その様子をなのはや銀時達は額に汗を浮かばせながら静かに見守る。

そして、朝陽が完全に上り切り海が輝きだした瞬間、弥彦とユーノは声を発した。

「行くぞユーノ!!」

「来い弥彦!!」

弥彦は声を発した直後、いきなり逆刃刀を鞘に納めて、体を捻りそれを見ていたピカチュウやスバル達は目を見開いた。

「ピカ!」

「いきなり抜刀術!まさか、天翔龍閃――?」

危惧の念を抱くスバル達だったが、弥彦は周りの反応などお構いなしに飛天御剣流の技の一つを撃ち出す。

「飛天御剣流!」

「!」

「飛龍閃(ひりゅうせん)!!」

弥彦は体を捻って遠心力をつけると、自分の間合いにいるユーノ目掛けて鞘に収まっていちゃ逆刃刀を弾き飛ばし、それを見ていたユーノや真選組の面々は開いた口がふさがらなかった。

「！体を捻って鞘に納刀した状態から逆刃を飛ばしただと――――！！」

ユーノは飛んで来た弥彦の飛龍閃を咄嗟に木刀の一振りで吹き飛ばす。

吹き飛んだ逆刃刀は空中を舞い、弥彦は飛び上がって自分の手の中に収めるとそのまま龍槌閃を繰り出し、ユーノもまたそれに対応。

「は！」

弥彦の龍槌閃を捌き切ったユーノは反撃に移行。

「でらあああああ！！！！！」

弥彦はそんなユーノの攻撃を見切り、逆に逆刃刀による斬撃を仕掛けるがユーノはそれを足の裏で受け止め、弥彦は強引にユーノと距離を置いた。

後退したユーノは足場があまり安定しない砂浜の上に片膝をつき、目の前の弥彦に鋭い目線を向け、そんなユーノを見ながら弥彦は徐に呟く。

「ほう・・・相変わらず想像以上の反応だ。伊達に黒崎一護に鍛え上げられただけのことはあるって訳か。魔導師としても優秀な能力を持ちながら、常人では決して真似できねぇ飛び抜けた身体能力・

反射神経・数多の死線を潜り抜けて培った勘と度胸。実戦剣術とはよく言ったもの・・・そこらの雑魚では敵うまい。」

「どうだかね・・・」

「だが、そんな戦い方が通じるのは三流のみ。達人同士の戦いでは通用しねぇ。」

「お前が達人だって？一護さんやシグナムさん達のそれと戦ったこともない自惚れがよく吠える。活人剣と不殺だけに虫一匹殺したこともないんじゃないの？」

「殺し合いだけが剣術じゃねぇさ。かかってこい！」

弥彦はそう言うと、ユーノの攻撃を誘って胸元を広く開けた。

ユーノはそんな弥彦の行動を見、不敵な笑みを浮かべ真っ直ぐ突進していった。

「馬鹿野郎・・・・・剣術は根本的に“殺し合い”だろうが！」

しかし、ユーノの斬撃を見切った弥彦は大きく飛び上がり刀を振り上げ空中に浮遊した状態でユーノにこう言って来た。

「てめぇの手は読めてるぜ。敢えて大技で隙を作り俺を誘い、撃ち込んできたところをその持前の勘で捕えて捌く。」

「随分な饒舌だ！」

ユーノは些か弥彦の物言いにイラつきを覚えながらも撃ち込んでき

た弥彦に木刀を振り切るが、弥彦はそんなユーノの行動を逆手にとって背後に回り込んだ。

「勘が良すぎるんだよ、お前は。」

そう言ってユーノの背後から斬撃を繰り出そうと刀を振った直後、ユーノは素早くその攻撃に反応すると弥彦の考えを読んで弥彦の肩に手を乗せ宙に背を反らした状態となった。

「！」

突然のユーノの対応に驚く弥彦だが、ユーノはそんな弥彦にこう言った。

「勘が良すぎるなら、それ以外で補えばいいだけさ。」

「なに！？」

ユーノは驚く暇もない弥彦の顔面に強烈な木刀の一撃をクリーンヒットさせた。

「のあああああ！！！！！！」

弥彦は顔面に木刀の一撃を受けると、そのまま前方へと吹き飛び、ピカチュウとニャースは思わず声を上げる。

「ピカ！！」

「弥彦！！」

弥彦は砂浜に叩きつけられ、衝撃で砂が巻き上がる中でユーノは弥彦に向かってこう言った。

「そう言うお前も大した直観力だよ。咄嗟に体を捻って急所への直撃を避けたんだ。ただ、洞察力に関してはまだ詰めが甘いところがあるけどね。」

弥彦は逆刃刀を持ち、腫れ上がった頬に手を軽く触れながらユーノの言葉に剣幕を浮かべる。

「く・・・ボケが・・・！」

その一方で、間近で白熱且つ手に汗握るこの二人の戦いを見物していたなのは達全員はユーノの強さに目を疑うばかりだった。

「つ、強い！やっぱりユーノさん・・・とんでもない人だ！！」

「こいつは驚いた・・・まさか木刀とは言え逆刃刀相手にここまでやるとは・・・」

「ああ。前回の戦いとは打って変わって、今回のユーノ先生は完璧に奴の裏の裏をかいている。恐らく、ユーノ先生の強さの秘密は誰にも読めないその思考と異常なまでに鋭い洞察眼だ。」

「洞察眼！？」

「どういう事ですか？」

近藤の言葉を聞き、誰もが疑問符を浮かべていると、近藤は徐に二人のその後の戦いを見つめながら次のように語り出す。

「俺達真選組の得意とする真剣での截ち合いにおいて、相手の一太刀を受けることは死に直結する。故に俺達に絶対的に求められるのは“危機察知能力”。研ぎ澄まされた直観力で相手の気配を察知し、敵の攻めを制す。俺達の中ではトシが誰よりもその能力に長ける。これまでの戦いを見る限り、ユーノ先生もトシに匹敵かそれ以上のものを持つと見る。だが、問題なのはそこではない。ユーノ先生の最大の強みは、その頭脳から瞬時に導き出す相手の意表を突く戦法とその類稀なる洞察眼で状況を把握するという二重構造。奴のように元々が道場剣術、活人剣を操る意表を突き一本取ることに長ける相手を敵にした場合、前者だけしか持ち合わせていなければその直観力が却って仇となる。」

近藤が一度そこで話を中断すると、弥彦は足場が不安定な砂場から加速してユーノに向かって突進する。

「このおおおおおおお!!!!!」

そしてそのまま九頭龍閃を仕掛ける。

「飛天御剣流　九頭龍閃!!!!」

ユーノはそんな弥彦の九頭龍閃を目の当たりにすると、それら全ての攻撃を綺麗にさばき切り、今度はユーノが高く飛び上がり龍槌閃を仕掛けようとする。

「はあああああああああ!!!!!」

弥彦は急降下してくるユーノの攻撃に備えて刀を構えるが、ユーノは寸前で弥彦には攻撃せずそのまま弥彦の足元にしゃがみ込み、弥

彦は思わず目を疑った。

「！」

「はああッ！！！」

ユーノは弥彦の一瞬を隙を突くと、そのまま木刀で弥彦の顎を打ち上げ、弥彦は空中へと吹き飛んで行った。

「ぐあああああああああ！！！！！」

そんなユーノの攻撃を目の当たりにしながら、近藤は再び驚き返るなのは達に解説を行う。

「だが、ユーノ先生ならばその直観力だけでは越えられない壁を洞察眼と頭脳で補うことが出来る。引くと見せかけ攻め、攻めると見せかけて引く。」

弥彦はユーノの攻撃を受け、何とか空中で体制を持ち直す。

「く！」

その直後、懐に入り込んできたユーノの龍巻閃が発動。

「龍昇閃！！」

弥彦はまともに龍巻閃を体に叩きこまれると、再び後方へと吹き飛ぶ。

「がああああ！！！」

そんな攻防が繰り返される中で、近藤は断言する。

「無数の擬似を、達人が無意識で反応してしまうギリギリのレベルでクリアしてくる。まごうことなき天才・・・！」

「のっは！！」

弥彦はユーノの攻撃を受け、後方に飛ばされるとそのまま海の中へと投げ出され、水しぶきが上がる。

そして、近藤の言葉に便乗して土方もタバコに火をつけこう言った。

「近藤さんの言うとおりだ。奴は人の心を・・・己の心さえも操る道場剣術の特性と俺達の持つ直感と度胸により培われた研ぎ澄まされた実戦剣術の特性・・・その両方を持ち合わせていやがる。」

「そ、そんなことが・・・！？」

些か信じがたい表情のフォワード陣や新八・神楽。

なのはは二人の言葉を聞くと、ふとこう呟いてしまう。

「確かに、ユーノ君はものすごく頭もいいし洞察力も鋭いですが、だけど実戦によって培われる直観力を同時に操るなんて・・・どうかしてますよ！？」

そんななのはの言葉を横で聞くと、銀時も頭を掻きながらこう言った。

「どうかしてやがるなホント・・・だが事実、奴はそれを使いこなしてやがるだろ？一護が一体何を教え込んだのかは知らねぇが、まったとんでもない怪物を生み出しやがったぜ。」

銀時がそう言うと、恋次は腕組みをしながらふと呟く。

「あいつは最初から俺達の手の届くところに立っちゃいねぇのさ。だがそれでも・・・・・・あいつは俺達と一緒に居ることを選んだんだな――――――」

辺りが一度静まり返ると、ユーノは海の中から出てくるであろう弥彦を待ちながら呟く。

「道場試合であれば、もう何本とったことだろうね？」

と、その時海の中から全身水浸しの弥彦が飛び出し逆刃刀片手に睨みを利かせてきた。

「く、まだだ！」

弥彦はユーノに向かって突進し、ユーノもまた呆れ返りながら弥彦へと向かって行く。

「やれやれ。君も僕と同じで、精神力が異常に強いようだ。」

二人の剣客の激しい攻防はその後も続いて行き、一息つくのもままならないそんな空気が漂う中、鍔迫り合いの最中弥彦は次のように語る。

「・・・確かに、道場試合なら俺は何本も取られてるだろうな。い

や、お前の得意とする実戦での殺し合いにおいても、命はないな。だが、俺にだって負けられない理由の一つや二つ、あるんだよ！！」

弥彦はそう言うと、一度距離を置いてから先ほどまでとは別人のような剣気を放ちながらユーノに向かって突進、怒涛の斬撃を繰り出す。

ユーノは急激に上がった弥彦の剣速に驚きを隠し切れないでいた。

「！（剣速が急に鋭くなった！）」

「おらららららっららら！！！！！」

弥彦の怒涛の斬撃がユーノの顔を歪ませる。

「く！！なんだこの異常なまでの気迫は！？」

そんな事を口にしつつ、ユーノと弥彦はお互いに攻防を繰り返す。

「ほおおお！！」

「はあああ！！」

弥彦は剣速を増した九頭龍閃を、ユーノは遠心力を活用した移動攻撃でそれに対応。

「「おおお！！」」

九つの斬撃が同じ威力・同じ速度で交わったのち、二人はあまりの衝撃で吹き飛ばされ砂浜に倒れ伏し、中央には渦潮のような跡が残

り、なのは達はあまりの迫力に圧倒されていた。

「・・・・・・！！」

そして、その直後起こった状況を捕えられなかったスバルは口を開けた状態で尋ねてきた。

「えっ・・・と。全然わかんないですけど・・・」

スバルが誰かにそう尋ねると、近くにいた吉良が冷静に分析し返事をした。

「遠心力を活用し移動攻撃をするユーノさんの連続切りに対して、弥彦も松の木を斬った後の一瞬の間に九頭龍閃による攻撃。お互いに大技を仕掛けながらも絶妙の捌きで共に防御している。」

吉良がそう言った後、驚きながらキャロはエリオに二人の攻防が見えたかを聞いてみた。

「エリオ君、見えた？」

「うん。一応・・・そして最後は二人とも渾身の一撃を撃ってそれによって生じた激しい衝撃で弾け飛んだんだ。」

それを聞いた後、スバルやティアナは唖然としてしまった。

「ひょええ」

「魔導師の戦いなら兎も角、これが本物の一流の剣客同士の戦い・・・また違った意味でハラハラさせられるわ。」

ティアナがそう言った後、何気なくフェイトが弥彦のこれまでの動きを見て、何か引っかかる節を見付けた。

「でも・・・気のせいかもしれないけど、あの弥彦って子。前より一段と強くなってない？」

「この場にある全てのプリズムシードを懸けた白黒はっきりさせる最後の戦いだからな。その差だろ。」

「そうですね・・・」

銀時の言葉に一応納得の表情を浮かべるフェイト。

その後、ユーノに対して絶対の信頼を置くスクライア商店メンバーが言葉を発した。

「けど店長だって負けちゃいねェさ。ただでさえ、何度も剣を交えてぶつかり合っていながら、それでも目の前で苦しむ奴を必死で助けようとしている。」

「身も心も疲労困憊・満身創痍な筈だけどそれを微塵も感じさせない。寧ろ気力だけなら前の戦いのときよりも確実に上回ってるよ。」

二人の言葉を傍で聞きつつ、なのはは心の中でこう思った。

「――――――・・・（ユーノ君はこの闘いの向こうに弥彦を救うという決意を見出すことで、この勝負を受け入れた。私がフェイトちゃんに想いを伝えたくて、全力全開で闘ったときと同じように、あるいはそれ以上のものを抱いて――――――・・・・・もしか

してユーノ君は弥彦と――――――・・・？）」

何か分かったような表情となって、なのははユーノの方へと目を向け、ユーノはそんな仲間の眼差しを背中に乗せながら弥彦と戦いを続けていた。

「「・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・」」

お互い、全身に傷が目立ち始める中で弥彦はユーノの強さをその身を以て味わい、次のような考察を行った。

「（初めて遭ったときは、単に倒さなきゃならない相手でしかなかった。だが今はあの時とは違う――とんでもなく速くて強え！この勝負・・・負けたくないのに、こいつは・・・・・・！だけど、それでも迷ってたらやられる！）」

弥彦はそう思い立つと、徐に口を開いてユーノに語り出す。

「『速さ』じゃ僅かにお前が上。『力』では僅かに俺が上。技はほぼ互角。総じて闘えば結果も互角か。強いて比べるとすれば『高さ』か。」

「「「

その弥彦の言葉を聞き、見守っていたなのは達は一様に驚き表情を一変させる。

「ユーノ先生に――――――・・・」

「高さで勝負を・・・!?」

そして、弥彦はそのような提案をしたのちユーノに是非を求める。

「どうだ?受けるか否か・・・」

「どうするも何も、既にこの私闘自体受けている。お前がどの様に挑もうと、僕はすべて受けて立つ。」

「フン。上等だ。」

弥彦はユーノの受諾を聞き取ると、地面に落ちていた小石を一つ拾い、それを高さ勝負の合図の代わりにした。

「“合図”だ」

徐に空中へと投げ出される小石。

「「行くぞ!」」

小石が太陽光を浴び、砂浜へと落ちた直後二人は天高く飛び上がる。

その結果、僅かな差で弥彦がユーノを上回りルキアは思わず声を荒げる。

「いかん！弥彦の方が上だ！！」

「飛天御剣流――――！」

弥彦は龍槌閃を仕掛けるつもりでユーノに向かうが、ユーノはそんな弥彦を凝視しながら飛び上がった状態から思わぬ行動に走った。

「はあああ！！」

何と、空中に滑空した状態から更に助走をつけて飛び上がってきたのだ。

「な！」

常軌を逸したユーノの行動に目を疑う弥彦。

直後、ユーノの攻撃が繰り出される。

「人侍剣力流　天翔絶攻！！！」

ユーノの木刀が弥彦の右肩へと直撃し、弥彦は顔を歪める。

「くっ！」

また一方で下の方からその光景を見ていた銀時達はユーノの咄嗟の行動に驚き返っていた。

「あの野郎、宙空でもう一度跳ねたぞ・・・！」

「その上で弥彦に向かって突進しやがった！」

「空中疾走か・・・」

「そんな、魔法も何も使わずに無理ですよ！！」

確かに、今回の弥彦との戦いにおいてユーノは公平な条件として魔法も霊力も一切使っていない。

その為このような事が可能かと誰もが目を疑うが、白鳥は冷静に見極め徐にこう説明した。

「いや――――・・・跳躍の力と落下の力が丁度釣り合う最頂点に於いては、上下にかかる力が０になり一瞬だが完全に静止し言わば浮遊状態となる。その一瞬を使ってユーノ店長のしなやかな筋力と荷重のかかる一刀の反動を駆使すれば決して不可能ではない――――・・・」

「そんな事をあの一瞬で・・・！」

「最早俺達には到底無理な話だぜ・・・！」

自分たちとは見ているものも立っている場所も遠くかけ離れているユーノに若干の諦めを見せるなのは達だが、今はそんな事どうでもいい話だった。

弥彦はユーノの攻撃を受けると苦々しい表情を浮かべこう言った。

「くっ！俺は死んだって、てめぇなんかに屈しねぇ！！」

砂浜に着地し、弥彦はすかさず降りてくるユーノの鳩尾に龍昇閃をヒットさせる。

「飛天御剣流　龍昇閃！！」

空中へと突き上げられたユーノ。

しかしそれはユーノにとっての好機でもあった。

「いいのかい？僕を再び宙空に押し上げても。」

「は！」

ユーノの言葉で重大な事に気づいた弥彦だったが、直後ユーノの攻撃が仕掛けられる。

「制空権は貰った！天翔絶攻！！！」

「！！！」

ユーノは天翔絶攻で弥彦を墜落させ、墜落した弥彦は思い切り砂浜に全身を叩きつけられ、衝撃で多量の砂が舞い上がり見ていたなのは達やピカチュウ、ニャースは驚き返る。

「「「

弥彦は砂浜から起き上がると、強打した箇所を手で抑えながら地に降りてきたユーノに向かって龍巻閃を仕掛け、ユーノも同じものを仕掛ける。

「「飛天御剣流、龍巻閃！！」」

ほぼ同時に仕掛けられた龍巻閃だったが、僅かの差で弥彦が競り負ける。

「グッ！！」

「はああッ！！」

そのまま向かってくるユーノ。

弥彦は刀を構えて九頭龍閃を発動させようとした。

「おおお！飛天御剣流　九頭――――」

「遅い！」

ユーノは九頭龍閃が発動する寸前で、弥彦の懐に張り込み木刀の一振りで弥彦を弾き飛ばした。

「ぐあああああ！！」

「「ピカ（ニャー）！！」」

弾き飛ばされ松の木に体を強打する弥彦。

唖然とするなのは達。

そんな圧倒的とも言える状況を見ながら煙草を吹かしていた土方は煙を吐きだしこう呟く。

「底が知れたな。これで野郎の前ではもう九頭龍閃は通用しねぇ。」

「ユーノさん、今です!!」

新八がそう声をかけると、ユーノは天空へと飛び上がり最後の一撃のつもりで弥彦目掛けて龍槌閃を発動させようとした。

「飛天御剣流、龍槌閃!!」

すると、技が仕掛けられる直前で弥彦が体を起き上がらせボロボロとなった体で攻撃を仕掛けてくるユーノに向かってこう言った。

「くっ・・・ユーノ・スクライア。確かにお前の剣の威力と多様性は俺を遥かに上回ってる。もしかしたら剣心以上かもしれない。だが、忘れてる訳じゃねぇだろ?剣は何も威力だけが全てじゃねぇ。不殺の剣がそうであるように・・・剣心が信じ、貫き通そうとした時代時代の苦難から人々を守るこの飛天御剣流に底なんて無ねェ!!!」

弥彦はそう言うと、持っていた刀を逆手に持ち替え体制を低めにしながらユーノが下りてくるのを待っていた。

「飛天御剣流・・・“龍鳴閃(りゅうめいせん)”!!」

「！」

弥彦の技の名を聞いたユーノ、ピカチュウやニャース、更にはなのは達全員は初めて使うその技の効力に危惧と驚愕を抱いた。

「ピカ！？」

「飛天御剣流！！」

「龍鳴閃！？」

「初めての技ニャー！！！」

ユーノはそんなことは分かり切ってはいたものの、攻撃を止める訳にもいかずそのまま龍槌閃で仕掛けにかかった。

「く！飛天御剣流　龍槌閃！！」

弥彦もまた龍鳴閃で勝負にかかる。

「ほおおお！！！飛天御剣流　龍鳴閃！！」

刹那の出来事だった。

弥彦は一瞬のうちに刀を鞘の中へと納めた。

その時、ユーノは弥彦の技の発動と同時に体に奇妙な違和感を覚えた。

またなのは達は先ほどの弥彦の技の後、一体何が起こったのか全く

理解できずに困惑した表情を浮かべていた。

「・・・何？何が起こったって言うの？」

「まさか外した・・・？」

と、その時唐突に神楽が自分の両耳を抑えた。

「あ痛！」

「どうしたんですか？」

「ん、ちょっと・・・なんか急に耳が・・・ま、大したことないネ。」

「耳が？」

疑問符を浮かべるなのは達。

するとその時土方は煙草を咥えながらその言葉からあることに気づく。

「そうか・・・そう言うことかよ。」

「土方さん、何か分かったんですか？」

「恐らく、そいつがあの龍鳴閃とやらの効力だ。野郎を見ろ。」

「あ！」

土方が指を差してユーノの方へと目を向けさせると、全員はそこで信じられない光景を目の当たりにする。

「くっ！」

それは、耳から血を流し膝をついて苦しそうにしているユーノの姿であった。

「ユーノ君！！」

「何があったんですか！？」

焦りと困惑を両方顔に表すなのは達一同。

ユーノは歪んだ顔を浮かべながら弥彦に尋ねる。

「弥彦・・・お前・・・あの技で・・・！」

「ああ。神速の抜刀術の逆回し、つまりは“神速の納刀術”。この時発生する龍の嘶きの如き超音の鍔鳴りをすれ違いざま相手の耳に叩きこむ事で一時的に相手の聴覚神経を強制麻痺の状態に陥れる。これが飛天御剣流“龍鳴閃”――」

「くそ――――――ぐっ！！」

ユーノは木刀を杖代わりにして立ち上がろうとするが、平衡感覚までもが可笑しくなってしまい、立つこともままならない状況だった。

「――だが、この世界の影響下にある俺やお前の場合はそえだけじゃ済まねぇだろ？身体への倍加反応を起こすこの世界に於いて、

お前が受けたこの龍鳴閃の超音は耳の奥にまで進み、効果を及ぼす。」

その弥彦の言葉を聞き、ティアナがはっとした表情となってその影響についてこう分析した。

「！そうか！！通常の龍鳴閃が聴覚神経を強制麻痺させるだけなら兎も角、ユーノ先生の場合はそれを通り越して耳の聴覚器官を突き抜けその奥にある平衡感覚を司る三半規管をも麻痺させたんだわ！」

「う・・・！！耳が・・・！！」

耳の痛みと平衡感覚の狂った体で全身ボロボロとなったユーノを見て、危惧の念を抱く新八。

「マズイ！ユーノさん！！」

「好機。食らえ、飛天御剣流――――――」

弥彦はその瞬間、立つこともままならない今のユーノに向けて得意の龍巻閃を発動させる。

「龍巻閃！！」

「ぐっは！」

ユーノは為す術もなく弥彦の龍巻閃をまともに食らってしまい、そのまま海の中へと弾き飛ばされてしまい、ユーノは海へとダイブする。

「ユーノ君！！！」

「「ユーノ（先生）！！」」

声を荒げるなのは達と、その一方で形勢逆転したことで嬉々となるピカチュウ、ニャースの二匹。

「ピッカ！」

「流石は飛天御剣流。そして明神弥彦。翡翠の魔導死神の力にも決して劣っていないニャー。」

弥彦は先ほどとは逆となったこの状況において、海の中のユーノに向かってこう言った。

「どうだ？これでもまださっきみたいなことを言えるかよ？これで分かったはずだ。プリズムシードは諦めろ。平衡感覚の狂ったその体じゃもたねぇ。真面な攻撃のできない今のお前じゃ防戦一方だ。」

と、その時だった。

刹那の一瞬でユーノが海から出てくると思いきやがら空きとなっている弥彦の背後から子鋭い攻撃を仕掛け、弥彦の右肩の布を斬り裂いた。

「な！」

一瞬の出来事に驚きを隠せない弥彦は目の前を向くと、そこにずぶ濡れとなりふら付きが目立つ異常なまでに強い精神力を持つユーノに唖然としていた。

「お前も往生際が悪いな。まだやんのかよ？」

「一本だ二本だ・・・そんなもん何本取られようが耳が痛くなろうが関係ない。腕一本もげようが、足一本取られようが・・・首繋がってる限り戦わなきゃならないのが真剣勝負ってもんだ。」

「これだから、殺し合いばかりしてきた野蛮な剣客は嫌になる・・・――」

何処かで聞いたことのある台詞に弥彦はため息をつく。

するとその時ユーノが懐から一枚の写真を取出し弥彦にこう言ってきた。

「そう言えばすれ違いざま拾ったもんなんだけどこの写真は君のかい？へぇ～～～随分可愛い女こじゃん。ひょっとして彼女？」

「な！」

ユーノのその言葉を聞いた弥彦は直ぐに懐に目を向けると、そこには大事におさめているはずの自分の最愛の人の写真がなかったことに動揺する。

「（燕の写真・・・！）てめぇ！！一体何時！！！」

と、激しく動揺しながらユーノ目掛けて攻撃を仕掛けようとするが、その時懐から写真が飛び出してきた。

「！？」

弥彦がそれを拾い上げて見てみると、それは自分が大切にしているユーノに取られたとばかり思っていた燕の写真だった。

「（あれ？ある・・・！？）」

その瞬間、弥彦は先ほどのユーノの言葉と写真が嘘であることに気づく。

「あ！（あれは・・・まさかあいつのフェイク！？）」

「残念。こいつは僕の宝物、なのはのセクシー水着写真でした。」

ユーノは気配すら感じさせぬ動きで弥彦の背後に近づくと、水着のなのはが写った写真を徐に公開する。

「な！」

「疑似だか龍鳴閃だか知らないが、頭脳戦なら負けないよ。」

ユーノはその瞬間、最初と同じように弥彦に強烈な木刀の一振りを浴びせ、海の中へと吹き飛ばしていった。

「ぐっは！！！」

海の中へとはじけ飛んだ弥彦を気にしながら、ユーノは思っていたことを口にする。

「不殺を貫き通す君の考え方は立派だ。出来ることなら僕だってそうしたいと思ってる。だけどね、そう思ってるなら何故こんな事を

しでかす?君の言うところの不殺って言うのは人を殺めなければ暴力を振ってもいい凶剣なのかい?来いよ。本物の魂の剣、見せてやる。」

ユーノが挑発的な口調でそう言うと、それを聞いた弥彦は水の中から姿を現し顔を沈めた状態から支離滅裂とも言えるような言葉を発してきた。

「自由だ平等だ・・・理想だ夢だのそんなうざったい戯言を声高に叫び、目の前の現実に目をそらして小さな幸せすら軽んじる輩を俺は沢山見てきた。“我々の真と自由の為に挙国一致で戦わなければならない”。“議会民主主義こそが我らが求める自由と平等・理想”。すべて只の言い訳だ。そんな戯言は、目の前に起きている苦難にも碌に目も向けようとしないヘタレの言いぐさ。もう聞き飽きた・・・どれだけ才能があろうと、どれだけ実戦を踏もうと立ち向かって闘うものには及ばない。その為に努力したものにも当然勝てねぇ。俺はそう思ってる。古い考え方なんて言う野郎もいるけどな」

そう言ってから顔を上げた弥彦の両目は何故か数字の3となっていた。

そんな弥彦の眼を見て、一様になのは達が同じことを思う中で近藤が代弁する。

「（古いよ・・・デフォルメが古い・・・！）」

近藤の心の声を聞き、弥彦はすぐに言い返す。

「今俺の眼を見て古いと思った奴が一番古い。」

「（いや、お前のが古い。）」

また、土方はただ一人違う見解を持つに至った。

「どういうことだあの目は?何でケツがついてんだ?」

「（おめぇは古い以前に馬鹿だろ。）」

心の中でそう呟く銀時であった。

弥彦は目を元のものへと戻すと、ユーノに向かって語り出す。

「お前が喧嘩だ実戦だと闇雲に剣を振り回す間、俺は必死に稽古を積み努力をしてきたんだ。お前は俺に勝てねぇ。」

「いやいや、口喧嘩はなかなかに達者じゃないの。今度はこっちでやろうよ。」

そう言ってユーノは洞爺湖木刀を弥彦に見せる。

「阿呆が。思い知りやがれ!!」

弥彦は逆刃刀を鞘から抜くとユーノに向かって突撃していく。

「「はあああああ!!!」」

両者の剣が激しい勢いでぶつかり合い、思わず疾風が巻き起こる中で弥彦はユーノの今の剣に次のような評価を下す。

「（ふん。平衡感覚が狂いバランスを失ったことで一辺倒な剣筋に

成り下がってる。）」

弥彦はそう判断し、体制を整えながら更に状況把握を続ける。

「（どんなに攻め込んで来ようと、そのバランス感覚を削がれた体である以上、お前は後手に回らざるを得ねぇ。俺が撃ち込む素振りを見せればおめぇは必ず守りに転ずる。たとえそれが俺の疑似だと分かっていても食いついてくる。そこに隙が生まれる。）」

弥彦は不敵な笑みを浮かべると、刀を構える。

「さあ、餌だ。食いつけ！」

そう言いながらユーノの懐へと飛び込んだ弥彦。

「翡翠の魔導死神・・・っぐ！！」

と、刀を振り切ろうとした瞬間逆に待ち構えていたユーノの木刀の一振りが頭上へと振り下された。

「！」

驚きを隠せない弥彦だったが、ユーノはそんな弥彦にこう言って来た。

「安い餌はもう食べ飽きたよ。僕を釣り上げたいのなら、先ず一護さんの放つ虚化つきの月牙天衝を超えてからにしな。」

ユーノは振りかぶると強烈な一振りで弥彦に攻撃を仕掛け、咄嗟に反応した弥彦はそれを防ぎ、その最中ユーノは不敵な笑みを浮かべ

つつこんなことを語ってきた。

「空白の四年で僕があの人にどれだけ痛い目に遭わされたか知らないだろう?でもな、お蔭で土壇場における屈強な精神力、そして何より・・・護るために必要な力は身に付けたつもりだ!さて、四の五の言うのはもう止めだ!もう後手には回らない!!」

ユーノは弥彦を突き放すと、そこから目にも止まらぬ連撃を加え始め、逆刃刀でそれを防ぐ弥彦も顔を歪めてしまう。

「(擬似一本巻き込む連撃!)」

なのははそんなユーノの攻撃に唖然としてしまう。

「な、何て連撃なんだろう・・・ユーノ君・・・!」

「暴行を掻き、余計な小技すら出す暇を与えないつもりか・・・攻撃こそ最大の防御。いいじゃねぇか・・・これこそ俺達が使う実戦剣術の本懐。」

思わずほくそ笑みユーノの戦いを見守る土方。

弥彦はそんなユーノの連撃を何とか受け切り、一瞬の隙が生じた瞬間に鍔迫り合いに持ち込むとその状態で言葉を投げかける。

「一気に片を付けるつもりか?だが、こんな足場で無理に攻勢に出ても動きは制約され体力は消耗されるがオチ。それを分からないでめぇじゃねぇだろ?加えて今のお前では、致命的な弱点がある!」

「ぬかせ!!!」

ユーノは粗悪な口調になりつつも、水辺での攻勢を続け弥彦に連撃を加えていくが、弥彦はそんなユーノの攻撃を受け止めながら更に続ける。

「感情が高ぶり、普段の冷静さと平衡感覚を失ったてめぇの剣筋なんて俺には手に取るようにわかる。勢いに任せるだけで、変化のない単純な剣戟。いくら撃ち込んできたところで、俺に一太刀浴びせるなど不可能な話だ！」

「剣筋は読めても――――」

ユーノは直後、弥彦の足を引っ掛けてバランスを崩しにかかった。

「ぬあ！？」

「水中の足の動きは読めないだろ！」

弥彦は態勢を何とか整え、撃ち込んできたユーノの一太刀を受け止める。

「俺はこれまであらゆる型を幾千・幾万と体に叩きこみ、その対応策も知っている！」

弥彦はそう言った瞬間、海水をユーノの目元へと叩きこみ攪乱させる。

「う！」

「それはお前が頼りにする勘や直感よりも確かなもの。遣り合えば、

そこには一瞬の判断の差が生まれる。」

「やってみなくちゃわからないだろ！」

ユーノは高ぶる感情を顕著に露わにしながら弥彦に向かって剣を振り回すが、弥彦の逆刃の方が先にユーノの頬に擦り傷を作る。

「ち！」

「達人同士の截ち合いにおいて、その差は致命的なものになる。それが今のお前と俺の差・・・・・才能に溺れ、努力を怠ったてめぇの敗因！これがお前が揶揄した、活人剣・・・そして、不殺の剣の力だ！！」

弥彦はそう言うと、渾身の力で龍巻閃を叩きこむ。

「飛天御剣流・・・――――龍巻閃！」

ユーノの身体にものの見事に龍巻閃がクリーンヒットし、ユーノは口から吐血する。

「ぶっほ！！」

そんな弥彦の驚異的な強さを目の当たりにしながら、恋次やなのは達は顔を歪める。

「やばい！野郎、さっきとは別人のように強くなりやがった！」

「このままじゃ、ユーノさんが本当に！！」

「そんなのダメ!!!ユーノ君を、ユーノ君を助けなきゃ・・・!?」

と、なのはがユーノを失いたくない、助けたいという気持ちから戦いに参入しようとしたところ、何も語らず銀時がなのはの前に手を置き行動を止めにかかってきた。

「銀さん・・・!?」

「すまねぇ、なのは。手は出さないでくれねぇか?」

「え!」

驚き返るなのはやフェイト達。

そんななのは達に向かって銀時の言葉に便乗した近藤も言って来た。

「俺からも頼む。次元漂流者の身で言えた義理じゃねぇが、あれは恐らく相当な負けず嫌いだ。手を出せば恋人のあんたも殺されるぞ。」

「負けず嫌いって!?このままじゃユーノ君負けちゃいますよ!!」

不安でいっぱいのなのはがそう言うのに対し、近藤は全く逆のことを言って来た。

「それは多分あり得ん。ユーノ先生ならば勝つ。俺達はそう信じてる。それに、仮にあんたがここで先生に手を貸せば、それはつまり・・・あんたが先生のことを信じないということと同義なんだよ。」

「！」

なのははその言葉を聞いた途端、返す言葉さえ見つからず更に土方からの鋭い指摘を受けることになる。

「ガキの頃から野郎のことを信じてきたのはてめぇなんだろうが。不屈のエースオブエースだが白き魔王だか知らんが、人ひとり信じきれねぇ分際で大層なことぬかんしてじゃねぇよ。奴の目をよく見てみろよ。まだ諦めた訳じゃねぇ・・・」

土方にそう言われ、なのははユーノに目を向けてみると、ユーノの瞳に映った決して濁り気のない澄んだ真っ直ぐな瞳に思わず吸い込まれそうになり、同時に嘗ての自分とフェイトの本気の勝負においてもユーノは決して間に挟まなかったことを思い出す。

「ユーノ君・・・」

そして、ユーノを見ていた金太郎や鬼太郎は次のように語り出した。

「頭脳明晰な我らが店長が、今の状態で満足に戦えないことも喧嘩殺法で勝てるとも思っておりませぬ。そうでありましょう・・・店長・・・」

「――――――昔話を一つしてやろうか。そう、ちょうど店長と俺達が遭ったばかりの頃・・・・・亀と熊は兎も角、当時の俺は今よりも糞ガキでな、自分の力を笠にして気に入らない奴をかたっぱしから叩きのめしてたんだ。時にはヤクザにまで喧嘩売ってよ、そこら中しばき回って一日中暴れてた。そしたら、それが災いして案の定ヤクザどもが俺を血祭りに上げようと片っ端から仲間集めて俺のところに乗り込んできやがった。まだそん時は俺も従業員って立

ち位置が気に食わなくて、一匹狼に近い状態だったから・・・誰の助けも借りずに一人でそいつらに向かっていったんだ。ま、自業自得だった・・・奴ら一対一の精神なんて持ち合わせていねぇからよ、俺はボロ雑巾みたいにけちょんけちょんにやられちまった。そんな時だった――――――何処からともなく木刀片手に店長が助けに来てくれた。虚ろな目でその光景を見た時には度胆をぬいたよ。ヤクザどもがいびり散らすにも関わらず、これがまた太いんだ・・・大人数前にしても物怖じ一つせず、従業員の不始末に侘びいれるどころか――――――たった一人で多勢相手に大立ち回り。ばったばったと敵をなぎ倒し、いや強え～の何の。」

「そんなことが・・・・・・」

「あのユーノ先生が・・・ですか・・・」

語られることのなかった従業員とのエピソードに意外そうな表情を見せるフォワード陣や隊長陣一同。

「ああ。店長は一人でヤクザどもをぶっ倒した後、こんな俺を何も叱ることなく黙って連れて帰って行ったのを覚えてる。俺はあんな人を見たのは初めてだった・・・世の中すべてに反抗してばっかで、自分の為だけに生きてきた俺とは・・・まるで逆だった・・・」

ここからは少し過去のエピソードを語ることにしよう。

スクライア商店が創設された当初、若かりし頃の鬼太郎は庭先で浦太郎と共に金太郎の指導の下棍棒での素振りを行っていた。

「３３３！・・・３３４！・・・ぬのおおおおおお！！！もう・・・無理・・・！！俺限界！！！腕がもげる・・・！！」

根を上げて棍棒を地面につける鬼太郎に金太郎の厳しい言葉が飛び交う。

「弱音を吐いてはなりませぬ！！」

「何だと！？」

「そんなことではいつまでも経っても強くなどならぬぞ！才能に溺れるでない！努力をするのだ！」

「こんな棍棒素振りして意味あんのかよ！！もう手が血豆だらけなんだよ！！俺的にはもっと技数を増やすのが先決なんだよ！！！」

そう言って手にできた血豆を見せる鬼太郎だが、金太郎は熱く語りかける。

「剣術は技数ではない、木組みなのだ！！これだけのものを振っていれば自然筋も違ってくる！根も植えつけられる！小手先で振るうでない。呼吸を練って、手ごと捌くのだ！！」

「そうそう。先輩もぶつぶつ文句ばっか言ってないでさっさとやったほうがいいんじゃないの？」

そう言って快適に寛ぐ若かりし頃の浦太郎に、金太郎の鉄拳が入る。

「お前もそこで呑気に寛がずに素振りをせぬか。」

「痛い！」

「たく！昔気質のうぜえ野郎だ・・・・・・お？」

と、鬼太郎は何気なく後ろを振り返ると、引き戸に背もたれをしながら特に何もすることもなく日向に当たる甚平と帽子を被ったユーノの姿がそこにはあった。

鬼太郎は徐に近づき、ユーノにこの前の事に関して恥ずかしながらもお礼の言葉を口にした。

「・・・あ・・・この前はその・・・あんがとな・・・」

「ん？何がだい。」

「何がって・・・・・・ほら、俺助けてくれたじゃねぇか・・・」

「ああ。別に大したことじゃないよ。」

「んな訳ねぇだろ。大したことがねぇなら、そんな傷負う訳ねぇだろ！？」

鬼太郎はそう言うと、ヤクザとの戦いの際に無理をして体に負った傷を鋭く指摘するが塔のユーノは全く気にしてなかった。

「余計なお世話さ。僕のことはいいから、大人しく金太郎の指示通り棍棒を素振りしてな。」

「け！こんな重てーもの振り回して意味なんかねぇよ！！」

「そうかな？やってればそのうち分かると思うけど・・・まぁいずれにせよ、僕が見る分に、お前には天賦の才がある。」

「ああ？」

「何処で習った訳でもないのに、体捌きと言い起点と言い、並々ならない。」

「ふん。おめぇだって似たようなもんだろ？」

当時の鬼太郎はまだユーノに対して敬語ではなかった。

それでもユーノは一切気にしてなかった。

「ははは。お前のそれと比べるもんじゃないさ、僕のは。言っとくけど才能だけじゃ勝てないよ。その結果がこの前のような始末。早い話、努力してる人間には勝てない。」

「・・・け。興味ねぇな。棍棒振って強くなれるなら訳ねぇよ・・・」

「・・・ま、そのうち判る時が来る。」

鬼太郎はそう言って棍棒を持ったまま再び金太郎たちの元へ戻っていった。

要するにその当時から彼もまた素直ではなかったのだ。

ここで一度現在の鬼太郎の言葉を拾っておこう。

「その癖、店長は俺にそれだけ言うとそこから動かなかった。いつも俺達三人の修行を噛み付きそうな目で見ていた・・・――――だが、

ある時――――――傷も癒えてないっていうのに、店長が突然店から姿を消したんだ。気がかりになって探しに行ったら――――――」

ここでまた過去へとフィードバック。

鬼太郎は心配になって街中走り回ってユーノを探していると、工場跡に集まってユーノを多い囲むヤクザの軍勢が見えてきた。

そう、彼らはこの前鬼太郎をボコボコにしていたあのヤクザであった。

ユーノはそんなヤクザどもに一人で戦いに挑んでいったのだ。

「ああ？またてめぇかボケ！」

「そこ退けコラ！！」

「俺達はこれからあの赤髪の野郎のところに殴り込みに行くんだよ！！！」

「野郎、今度こそは減らず口の聞けねぇよう嬲り殺して吊仕上げてやる！！」

すると、それを聞いたユーノは低い声でこう言って来た。

「悪いけど、その話は聞き捨てならないな・・・・・鬼太郎に手を上げる気なら、先ずは店長である僕に話を通すのが筋ってもんだろ？」

「んだと！！！てめぇ、よくも俺達相手にそんな大口叩きやがる！

！！」

「上等だコラ！！！この前はよくも俺達を甚振ってくれたな！！！赤髪やる前にまずはてめぇからぶちのめしてやろうか、ああ！？」

と、ヤクザの一人がいびり散らしてくると、ユーノは持っていた木刀の柄頭でそのヤクザの顎下を突き上げ空中へと投げ飛ばす。

「え！」

驚き返り、目を見開くヤクザ達にユーノは不敵な笑みを見せてこう言った。

「さっさと来いよ、クソヤローが・・・」

「く！！！！全員でかかれ！！！！」

ヤクザ達は頭に血を登らせると、束となってユーノに向かって行った。

それを見ていた鬼太郎は目の色を変えた。

「な！あいつ・・・！！」

だが、そこで鬼太郎はユーノの強さに違和感を感じた。

それを説明するのは現代の鬼太郎の声としよう。

「店長は俺を助けた時よりも強くなっていた・・・・・怪我が癒えてねぇにも関わらず、その動きには以前とはまた比べ物にならな

いしっかりした骨格が出来ていた。だが、店長の戦いを見ていられたのもそこまで。気が付けば周りは血の海・・・・・・立ってるのは、俺と店長だけだった。」

そして、またまた過去にフィードバック。

ヤクザ達を二人掛かりで殲滅させたユーノと鬼太郎はお互いに背中を預け、息を斬ら脚ながら次のような事を話し出す。

「は、は、は、は。何でいるんだい、鬼太郎?」

「俺の私情の喧嘩に、勝手に介入してもらっちゃ困るんだよ・・・!」

「僕がいつお前の喧嘩に介入したのさ?大体、僕は店に不祥事が出るのが嫌だったんだよ・・・」

「ふん、散々暴れまわってた奴がよく言うぜ!たく、お人好しだか何だかしらねぇが、借りを返す前にまた借り作っちまったぜ・・・!」

「仮なんて思わなくていいよ。僕はただ、目の前で苦しんでる人を放っておけない性分なんだ。」

「それが余計なお節介だって言うんだよ!!」

「お節介で結構!これぱっかりはもう治らないんだ。それより、その掌を見る限りだと、頑張ったようじゃない?」

ユーノはそう言うと、鬼太郎の手にできた努力の結晶とも言える血

豆に目を向けた。

「ふん！あんな意味のねぇことして何の役に立つかってんだ！こいつはあれだ・・・どっかの自動ドアに挟まってだな・・・――――ん！？」

その時、鬼太郎もまたユーノの掌に出来た自分のとは比べ物にならないぐらいの酷い血豆を見て表情を一変させた。

「どうした？僕に何かあるのかい？」

「お前・・・・・その手どうした？血豆だらけじゃねぇかよ！？そんなになるまでまさかあの棍棒素振りしたってのか！？傷の治りが遅いとは思ってたが・・・まさか・・・！？」

「違うよ。これは血豆じゃない――――――」

ユーノはそう言うと、血だらけの顔を見せてこう言った。

「“猫と犬一遍に噛まれて出来た傷さ”」

「・・・――――」

ここで過去の昔語りは終了し、現代の鬼太郎の語りから再開する。

「それが、ユーノ・スクライアという男なんだよ。評価を受けたいとか、強くなりたいとかそんなことの為に店長は動いてもいねぇし闘ってる訳じゃねぇ。人には決して見せねぇ・・・面にも毛ほども見せねぇ。だが、俺達は知ってるよ。店長は今も昔も・・・――――頭には“目の前で苦しんでる人・大切なものを護る”ってことしか

ねぇ。」

鬼太郎はそう言いながら、陰で直向きに刀を振るユーノの姿やそれ以外にも体を鍛え、その上で理論を頭に叩き込むユーノの姿を思い返していた。

そんなユーノはと言うと、弥彦との戦いの中で水中に木刀を隠して弥彦と睨み合いを続けていた。

「（水中に剣を隠して軌道を読ませねぇつもりか・・・）小賢しい！今更そんなものが通じるか！」

そんなユーノを見ながら従業員を代表して浦太郎はこう口にする。

「あの人は誰よりも直向きに努力家なんだ。そう・・・敢えて言うならば、“努力の天才”って奴。」

「努力の・・・！？」

「天才・・・！？」

その言葉を聞き、なのは達は思わずはっとした表情となった。

彼らはいつの間にか天才・天才と豪語される彼へのイメージを間違って捕えていた。

実際はユーノ本人や浦太郎の言う通り、天才と言うよりも直向きな努力であると同時に、その努力が実って今に至っているということなのだ。

「昼夜俺達の見えないところで店長は努力を続けてきた。努力もなしに、あんな高い戦闘力が身につくはずもねぇ。店長が“天才”って言葉を嫌うなら、俺達だって誰にも努力してないとは言わせねぇよ。確かに、奴の華麗な剣に比べれば・・・無骨で歪な野盗のようにも見えるかもしれねぇ・・・だが、研ぎ澄まされた店長の剣は――――“魂”さえも斬り裂く！」

鬼太郎がそう言った直後、ユーノが動いた。

弥彦は水中からの攻撃を防ごうとするが、ユーノの鋭い攻撃が防御を突き破り弥彦を空中へと舞い上がらせる。

「ぐっは！」

それを見ていた一同は目を見開き、ユーノの勝利を確信した様子でこう言った

「や、やった！」

だが銀時だけは直ぐに気づいた。

「いや。まだだ。」

「「「「「あ！」」」」」

弥彦は空中で旋回すると、バランスを立て直して地面へと着地する。

「俺は・・・――――何が何でも帰るんだ！！俺の元いた世界に必ず！！ピカチュウとニャースも俺が必ず帰してやる！！！その為にも絶対に負けられなねぇ！！！」

「ピカ・・・」

「弥彦・・・」

弥彦の強い想いを傍らで聞いていた二匹は思わず名前を口にする。

そして、そんな弥彦の想いを聞いたユーノは目を閉じてこう言った。

「弥彦。だからこそ僕はお前を必ず救ってやる。だがその前に、今のお前に欠けているもの・・・――それを教えてやろう!!!」

ユーノはそう言うと、木刀を抜刀術の構えにして弥彦に向き合い、なのは達はそれを見た途端目の色を変えた。

「あの構えは!」

「まさか・・・――ユーノ君!」

弥彦はユーノの行動を見て一瞬目を見開くが、直ぐに細めると同じく逆刃刀を鞘に納めて奥義の体制へと持っていき、暫くの沈黙が流れたのち二人同時に飛天御剣流の奥義が発動する。

「「いくぞ!!!飛天御剣流奥義!」」

二人は決意と想いの籠った飛天御剣流不敗にして最強の奥義、天翔龍閃をほぼ同時に発動させる。

「「天翔龍閃!!」」

「「「

持していたプリズムシードが弾け飛び、同時に弥彦の身体がぼろぼろになり手に持っていた逆刃刀・真打ももの見事に二つに切断された。

闘いの決着を間近で見ていたなのは達やピカチュウ、ニャースは言葉を失い、機動六課のモニターで同じものを見ていたクロノやはやてもまた驚き返っていた。

「な、何通出鱈目な技を使うんだあいつは!?」

「あらら～～ユーノくんも派手やな。まさかこれほどのものとは・・・!」

弥彦は空中に舞い上がり、暫くしてから砂場へ落下。

折れた逆刃刀も突き刺さり、それを見た新八や他の全員は徐に言葉を発する。

「逆刃刀が・・・――」

「砕けた・・・!」

銀時は安堵のため息をつき、ほくそ笑んでからこう言った。

「勝負有ったな。」

それに便乗して近藤も柔かい表情で――――――

「ああ。ユーノ先生の勝ちだ!」

勝利の蓋文字をその耳に入れると、神楽を始めなのは達全員は暫しの沈黙の後に笑顔を浮かべて甲高い声を上げた。

「や・・・やったネ！！」

「勝った！！！！勝ったぞ！！！！」

全員は駆け足で満身創痍となったユーノの元へと走っていった。

「ふう。疲れた・・・――――」

疲労困憊のユーノは深いため息をつきながら弥彦の懐から飛び出した二つのプリズムシードを回収する。

すると、そこへ早速なのは達の声が飛んでくる。

「ユーノ君！！」

「店長！！」

ユーノは全員が寄ってくると、些か申し訳なさそうな表情でこう言った。

「ごめんみんな。またこんな大怪我しちゃったよ。」

「たく、てめぇはホント、顔に似合わず派手にやらかしたな。どうしたその怪我は？誰にやられたよ？」

銀時がそう言うと、ユーノは深い溜息を吐く。

「はぁ～～～これはやられたんじゃないですよ。」

そして、落ちていた帽子を拾い頭に被ってからこう言った。

「“赤いペンキを間違ってぶち撒いちゃった”んですよ。」

その表情は逞しくも満足のいくものであった。

困ってる人を見かけたら迷わず手を差し伸べる人になろう（後書き）

教えて、ユーノ先生！

ユ「今日は飛天御剣流奥義・天翔龍閃だ♪」

ユ「神速を超えた超神速の抜刀術。それが天翔龍閃。一口で言えばそうなるけど、やってみようとしてもなかなか真似できない。抜刀術では本来、自分の足を斬らないために左足を出すのが定石だが、この技の場合は右足を前に出すことで踏み切る際に力を入れて一気に刀を抜くという性質があるんだ。」

ユ「天を翔る龍の牙を躱しても、その後にくる爪に巻き取られればひとたまりもない。まさに最強無敗の奥義と言って過言ではない。」

一「今回のバトルは正直燃えたぜ。」

銀「ああ。銀さん木刀よくあの技に堪え切れたものだな・・・流石は銀さん木刀だ。」

ユ「かなり自分の武器を自慢してますけど、もともとこの木刀自体もかなり業物な筈でしたが？」

な「まぁまぁいいじゃないの、ユーノ君。何はともあれ勝てたわけだし、一件落着！」

剣「果たして、本当にそうでござろうか？」

ユ・な・一・銀「？」

意味深な言葉を残す剣心であった。

魔導師図鑑ハイパー！

アリサ・バニングスは発売されたばかりのあるゲームに没頭していた。

ア「いけえええ！！！！剣心やっちゃえ！！！！」

『るろうに剣心－明治剣客浪漫譚－　再閃』。

一度はまり出したら止められない。

そんなアリサの話を電話で聞いていたなのは達。

ア『もう最高！剣心の技がどれもこれも魅力的で！！アニメのクオリティーも凄くってね！』

な「そうなんだ。あれ？剣心って確か・・・」

ユ「ああ。弥彦の憧れの剣客だったよね・・・」

二人はこの時、自分の身近にこうも当たり前のように自分たちが密接にかかわっている人物の知り合いがゲーム化、アニメ化されていることに意外そうな顔を浮かべた。

な「何か・・・色々と被ってるよね・・・」

ユ「そうだね・・・」

ア『ん?何かあったの、あんた達?』

ユ・な「色々・・・ね」

次回予告

ついにプリズムシードを巡ってのユーノと弥彦の戦いは終わりを迎えた。

弥彦の口から語られる自分たちの境遇と経緯、そしてカトゥーンの真の目的。

ユーノは弥彦に優しく手を差し伸べようとしたが――――

事態は思わぬ方向に向かって行く。

浦「次回『世界は何時もこんな筈じゃないことばかり起こる』」

弥彦・ピカチュウ・ニャース詳細

明神弥彦

声　一　冨永みーな

漫画「るろうに剣心　－明治剣客浪漫譚－」のサブキャラクター。

東京府士族の少年。常人離れした精神力・身体能力、そして剣才を持つ。プライドが高く一本気な性格であるため、子供扱いされることを嫌い、敵味方を始め年長者に対しても物怖じしない発言をする。

周囲からは生意気と取られている。早く一人前の男になりたいと強く願い、そのためには血の滲むような努力も厭わず、自分より力量

が上の相手に対しても弱者を守るために立ち向かっていく勇気を持っている。日本一と評する剣客、緋村剣心から刃と峰を逆にした刀、逆刃刀と彼の信念「不殺」を受け継ぎ、独学であるが飛天御剣流のほとんどの技を使える。

神谷活心流

奥義の防り・刃止め

手を交差して相手の剣撃を白刃取りする技。両手の甲で受け取るため、剣を持ったままの白刃取りが可能。失敗すると即死もあり得るため、技自体の技術と敵の武器を制する腕力と共に、土壇場での勝負度胸が最も重要となる。

奥義の攻め・刃渡り

刃止めで受け止めた武器を制したまま伝って、柄尻で人体急所（喉元や脇、顎など）に向かってカウンター攻撃を打ち込む神谷活心流・奥義の攻め。刃止めの後に間髪入れず人体急所へ的確に打ち込まねば、相手の攻撃の勢いを利用したカウンター攻撃として成立せず、奥義本来の一撃必倒の威力を発揮しないので、こちらも土壇場での勝負度胸が必須。

奥義の極・刃断

片手で敵の剣を制すると同時に武器破壊を行う、究極の白刃取り。

飛天御剣流

龍槌閃

空高く飛び上がり、自然落下を利用した威力の高い斬撃で一気に斬り裂く。

龍翔閃

峰を片手で支え、下から飛び上がりつつ、刀の腹で斬り上げる。「不殺」を誓って以降の剣心と弥彦は、斬り上げる代わりに、相手の顎を打ち上げる、鞘の先端で鳩尾を突き上げる、等の使い方をしている。

龍槌翔閃

龍槌閃で上段を攻撃した後、龍翔閃で下段を攻撃する連続技。また、逆に龍翔閃からそのまま龍槌閃を繰り出す連続技も。

龍巣閃

全身の急所を攻撃する高速乱撃術。

龍巣閃・咬

龍巣閃の派生技。一部分のみを狙い集中乱撃する。

龍巻閃

回転による遠心力を利用した技。相手の攻撃を真半身でかわし、そのまま回転しながら相手の背後に回り込み、後頭部や背中に打ち込む。先手をとって使うことも可能だが、斎藤曰く、返し技として使って最も威力を発揮する技。

龍巻閃・旋

龍巻閃の派生技。錐揉み状で相手に突進し、斬りつける。

龍巻閃・凩

龍巻閃の派生技。

龍巻閃・嵐

龍巻閃の派生技。空中高く飛び上がり、刀を手前に構え前方宙返りにより相手を切り裂く技。尚、以上三種類の龍巻閃を連撃として使用することも出来る。

土龍閃

刀を神速で地面をえぐる様に勢いよく振りぬいて土砂を巻き上げ相手にぶつけたり浮かせたりするタイプと、刀を地面に叩き付け土石を相手にぶつけるタイプがある。斬撃を直接相手に当てる技ではないので、逆刃刀と関係無く殺傷力は低い。

飛龍閃

飛刀術。大きく身体をひねりながら、鞘に納めた刀の鍔を親指で弾いて刀を相手に飛ばす（故に相手に当たるのは柄尻の部分）。

龍鳴閃

ユーノとの最終決戦で使用した、神速の「納刀術」。逆手に構えた

刀を神速の速さで納刀し、その時に発生する超高周波の鍔鳴りで相手の聴覚を狂わせる（聴覚を鍛えている者なら、数メートル離れていても耳に異常を感じる程）。この技でユーノの三半規管を麻痺させた。

九頭龍閃

奥義・天翔龍閃の伝授の試験のために開発された技。神速を最大に発動させ、剣術の基本である9つの斬撃「壱：唐竹、もしくは切落」「弐：袈裟斬り（けさぎり）」「参：右薙、もしくは胴」「肆：右斬上」「伍：逆風」「陸：左斬上」「漆：左薙、もしくは逆胴」「捌：逆袈裟」「玖：刺突」を同時に繰り出す乱撃術にして突進術の技。ちなみに「不殺」を誓う弥彦は、剣の柄で「刺突」を行っている。同じ乱撃術でも、龍巣閃と違って9つの斬撃それぞれが一撃必殺の威力を持っており、神速の突進で九度同時斬撃という技の性質上、防御・回避ともに不可能とされている。そのため、この技を攻略するには超神速の抜刀術「天翔龍閃」により技の発生よりも早く切り込む必要がある、という理屈である。

天翔龍閃

飛天御剣流奥義。超神速の抜刀術。右足を前にして抜刀するという抜刀術の常識（通常、抜刀術は刀は左から抜刀するため、左足を前にすると抜刀時に斬ってしまう危険性があるため）を覆し、抜刀する瞬間に絶妙のタイミングで鞘側の足、つまり左足を踏み出し、その踏み込みによって刀を加速し「神速」の抜刀術を「超神速」にまで昇華させる。初撃をかわされたとしても、超神速の刀が空を切ることで弾かれた空気が敵を打ち据えて行動を阻害し、さらに空気が弾かれてできた真空空間が元に戻ろうとする作用が相手を引き寄せ、回転による遠心力も加えたさらに強力な二撃目で斬る、二段構えの

抜刀術。

ピカチュウ

声　―　大谷育江

「ポケットモンスター」シーリズ全般に出てくる主人公のパートナーポケモン。元々は野生のポケモンであり、オーキド博士にゲットされ研究所に連れて来られる。サトシが冒険初日に寝坊したために、フシギダネ、ヒトカゲ、ゼニガメは既に他のトレーナーに持って行かれてしまい、その代わりに余っていたポケモンとしてサトシの最初のポケモンとなった。オーキド博士曰く「ちょっと問題がある」というように、最初は気難しさを覗かせ、初対面のサトシに対して電気ショックを浴びせるなど、言うことを聞かず懐こうともしなかった。その後凶暴なオニスズメの大群に襲われた時、サトシが自分を守ろうとする姿を見て心を通わせ、紆余曲折を経てサトシに信頼を寄せるようになる。特性はせいでんき。

使用技

「１０まんボルト」
「でんこうせっか」
「ボルテッカー」
「アイアンテール」
「エレキボール」
「かみなり」

ニャース

声　―　犬山イヌコ

ロケット団に所属するオスのニャース。ムサシとコジロウのパート

ナーで、本来はサトシのピカチュウを捕まえようとしているが訳あって弥彦たちと共に行動している。二足歩行できる、人語を喋るなど、通常のポケモンが持ち得る事のない特徴を有している。一人称は主に「にゃー」であるが、「オレ」「おいら」とも呼ぶ。言葉のところどころに「～ニャ」が混じる。毛糸玉が好きで、肉球が水につかることを嫌がる。言葉を覚えるのに力を使い果たしたため、進化したり新しい技を覚えることが出来なくなった。使用する技は「みだれひっかき」のみ。

緋村剣心

声　一　涼風真世

漫画「るろうに剣心　－明治剣客浪漫譚－」の主人公。かつて幕末において「人斬り抜刀斎」として恐れられた伝説の剣客で、弥彦が「日本一の剣客」と認める人物である。短身痩躯で赤い髪の優男、左頬に大きな十字傷がある。明治維新後は「不殺（ころさず）」を誓い、流浪人（るろうに）として全国を旅していた。生来より争いごとを好まないが、戦国時代に端を発する古流剣術飛天御剣流（ひてんみつるぎりゅう）の使い手で、ひとたび戦いとなれば逆刃刀で人智を越えた剣技を繰り出し、軍の一個大隊（当時の陸軍一個大隊は約１０００～２０００人）をも遥かに超える戦闘能力を発揮する。基本は温和な性格。

世界は何時もこんな筈じゃないことばかり起こる（前書き）

ユ「クロノ奴がよく口癖で言っていた。世界は何時もこんな筈じゃない事ばかりだって――――――」

ユ「友達になれると思って、僕は自分の全てをあいつにぶつけた。なのはがフェイトにそうしたように――――――」

ユ「だけどまさか――――――――――あんなことになるなんて、思ってもいなかった。」

銀「ユーノ・スクライア外伝　アンゴルモア・銀魂篇・・・・・・始まるぜ」

世界は何時もこんな筈じゃないことばかり起こる

これまでのユーノ・スクライア外伝――――――

プリズムシードを懸けて、ユーノと弥彦との最後の私闘が行われ、弥彦はユーノの強い想いの籠った洞爺湖木刀での飛天御剣流奥義、天翔龍閃の前に敗れ去り、戦いは終幕を迎えた。

〈・・・・・・こ。――――――ひこ。――――――弥彦〉

闘いに敗れ去り、弥彦は現在意識を失っている。

その意識がない中で暗闇から聞こえてくる自分を呼ぶ柔かい声。

〈誰だ――――――誰の声だ〉

徐に弥彦が閉ざされていた自分の瞼を開けると、目の前に映ってきたのはおぼろげではあるが、それは間違いなく彼がただ一人憧れる伝説の剣客・・・緋村剣心その人だった。

剣心は穏和な表情で弥彦の名前を口にする。

〈弥彦――――――〉

〈剣心――――――〉

弥彦は剣心の言葉を聞くと、再び瞼を閉じてしまう。

そしてそこで、彼は現実に引き戻されそこでもまた自分の名を呼ぶもう一人の人物の声で目を覚ます。

「弥彦。おい、弥彦。」

満身創痍の弥彦が目を開けると、目の前に映ってきたのは心配そうに顔を覗かせるユーノや仲間のピカチュウやニャース、更にはなのは達全員だった。

「・・・てめぇ・・・・・・ユーノ・・・・・・・・・」

弥彦がユーノの名を口にし、意識が戻ったことを確認するとユーノ達は安堵の表情を浮かべる。

「気が付いたみたいだね、よかった。」

「ピカ・・・」

「思ってたよりも大丈夫そうでなりよりだニャース。」

ピカチュウもニャースも弥彦があれだけの奥義をその身に喰らったとは言え、こうして目を覚ますことが出来たことに胸を撫で下ろしていた。

弥彦は周りの状況を確認し、自分の懐にプリズムシードがなくなっていることに気づくと、目を閉じてからゆっくりと体を起こす。

「ああ・・・・・・だが、あの一撃はまさしくとんでもなかったぜ・・・・・・たった一発俺が以前放った天翔龍閃を俺以上に昇華させ、止めの一撃に使いやがったか・・・・・・つくづくバケモノだよ、てめぇは・・・・・・」

弥彦はそう言ってユーノの実力の高さを素直に評価するが、ユーノはそんな弥彦の言葉に次のように返した。

「別に。僕は四年間そうやって修行を積んできてそこから戦いのイロハを叩き込まれたから、自然とそういう癖が身に付いてただけだよ。だけどやっぱし、あれは体がしっかりとした人間が使わないと、

人体にとてつもない負担が生じる・・・・・・これを機に奥義の発動は止めるべきだ。それと――――――」

ユーノはそう言いながら、申し訳なさそうに傍らに突き刺さった折れた逆刃刀を一瞥し、弥彦もまたそれを見る。

「・・・・・・」

そして、申し訳なそうな声色と表情で――――――

「逆刃刀・・・――――折っちゃってごめんね。」

すると、その言葉を聞くと弥彦は思ったほど怒ってはいなく、寧ろこう返してきた。

「――――――いや、いいさ。俺の未熟さが招いた結果がこれだからな。おめぇの所為にはしねぇ。」

ユーノ達はその言葉を聞くと、一瞬沈黙を保ち、その後ユーノは持っていた銀時の洞爺湖木刀を返還する。

「銀さん。木刀、お返しします。」

「ああ。」

銀時はその手で確かに自分の愛刀をユーノから返され、その後ユーノは若干沈みかけている弥彦を見ながら次のように語り出した。

「なぁ、弥彦・・・お前は幾度となく僕と剣を交わしてぶつかり合うたびに、何が何でも叶える願いがあるから勝たなきゃならないっ

て言っていたけど・・・本当は心の中でずっと、僕やみんなに助けを求めていたんじゃないのか？」

「ユーノ・・・・・・・」

「ユーノ君・・・・・・・」

「・・・――――」

ユーノの言葉を聞いていたなのはやフェイト、更には言葉を向けられた弥彦は一瞬驚いた表情を浮かべ、そんな弥彦にユーノは再び言葉を投げかける。

「今日のお前との戦いで、それがはっきりと剣を通して伝わってきた。どんなに背中に悪一文字を飾っても、目的の為にどれほど人をなぎ倒して行こうとも・・・本性は・・・魂が真っ直ぐなお前には最初からそんな薄汚い真似出来る訳なかった。だから心の中ではずっと、きっと助けを求めていたんだよ。」

「ピカ・・・」

「弥彦・・・」

ピカチュウもニャースも思わず弥彦の方を振り返り、弥彦の反応を待っていると、弥彦は何処かまだ悩んでいるかのような表情を作る。

「・・・俺は――――――」

ユーノは自分の胸に手を当てると、柔らかな表情でこう口にした。

「今迄の僕らの関係は文字通り仮初だった。僕らはいずれ刃を交え――――――こうして、心から解り合う運命だったんだ。」

「（！）」

その言葉を聞いた瞬間、弥彦の魂（こころ）に衝撃が走る。

そして、最後にユーノは自分の思いのたけの全てを口にして弥彦に伝えた。

「怒るなとは言わない。憎むなとも、況して悲しむなとも言わない。ただ、自分を曲げてまで魂に背いてまで自分に嘘をつくことなんてするな。弥彦がこんな見知らぬ世界に飛ばされて、同じ境遇のピカチュウとニャースを助けた時と同じように、僕もまた弥彦を助けたいんだ。」

自分の思いの丈の全てを曝け出し、弥彦とを救いたいという明確な己の欲望を口にしたユーノの言葉を聞いた瞬間、気丈な筈の弥彦の瞳に涙が浮かび、弥彦はそれを流しながらユーノに感謝の言葉を口にする。

「・・・・・・ありがとう・・・ユーノ」

ユーノ達はその弥彦の言葉を聞くと、思わず顔を綻ばせた。

「ピカ・・・」

ピカチュウが弥彦に声をかけてくると、弥彦は申し訳なさそうな顔を浮かべ勝負に負けてしまったことを謝る。

「ごめんな、ピカチュウ・・・・・・負けちまったよ・・・・・・・だけど、何か凄く気持ちい負け方だったかな・・・――約束、叶えられそうにないけど・・・・・・俺を許してくるか？」

弥彦がそう尋ねると、ピカチュウとニャースは顔を見合わせ破顔一笑してから弥彦を許すと威勢のいい声で表現する。

「・・・・・・ピカ！」

「今迄ニャー達は弥彦には世話になりすぎていたニャー。もうこれ以上ニャー達は何も言わない。ありがとう、弥彦。お前みたいな友達に救われてニャー達は幸せニャー。」

二匹の言葉を聞くと、弥彦の瞳に更に涙がたまりそれが一筋の線となって流れ落ちる。

「・・・・・・ああ・・・ありがとう、ニャース・・・ありがとう、ピカチュウ・・・／／」

と、その時話を聞いていたユーノは徐にこう言って来た。

「弥彦。何も心配することはないよ。」

「え？」

「弥彦が叶えられない願いは代わりに僕らが叶えてあげるよ。だから、何も心配することはないし、何も恐れることはない。君たちは死んでも僕らが助ける。」

ユーノがそう宣言すると、なのはに恋次、更には銀時達が肯定の返

事をしてきた。

「うん！」

「ああ。一応これでも隊長って身の上だからな。大船に乗ったつもりで任せろ！」

「ま・俺は次元漂流者だからあんまし関係ねぇけど・・・気持ちくらいは分け合おうぜ。」

弥彦はこの周りにいるユーノ以下全ての人間の心遣いに感謝し、素直な気持ちで感謝の意を表した。

「・・・・・ユーノ・・・・・・みんな・・・・・・本当に、すまねぇ。」

ピカチュウもニャースも弥彦の傍らでユーノ達に頭を下げる。

と、その時戦いの行方を六課の司令室で見守っていたはやてとクロノの外部通信が入ってきた。

『御取り込み中、失礼。』

「八神部隊長。」

『勝負がついたばかりで申し訳ないんやけど、明神弥彦君。機動六課部隊長の八神はやてです。君や連れのポケモン二匹は他の漫画キャラとは随分事情が違うようや。悪いようにはせんから、どうして君らがこの世界に来たのか、何の目的でプリズムシードを集めてたのかを詳しく話してくれへんか？』

「弥彦、どうだろう?」

ユーノがそう言うと、弥彦は暫く考えてからその要求を聞き入れることにした。

「・・・――――分かった。話してやるよ。」

弥彦は全員が話を聞くために静まり返った後、徐に何故自分たちがこの世界に迷い込んできたのか、プリズムシードを集める理由、そして自分たちを送り込んできた張本人であるカトゥーンの真の目的は何なのかを語り出す。

その頃、この世界『T2』の海上ではテトラカトゥーン全員が総勢1000体を超える漫画キャラを動員させた船舶でユーノ達がいる海辺と向かって移動中だった。

巧みに機動六課やユーノ達のセンサーを掻い潜りながら、テトラカトゥーンの一人うずまきナルトが徐に口にする。

「いよいよだな。」

「ああ」

「おい。予定通り、マテリアルの回収もするんでいいんだよな?」

煙草を吹かせながら斎藤一がそう言うと、通信画面のカトゥーンは肯定の言葉を返す。

『ああ。プリズムシードが四つ揃い、尚且つ最も意味を成すマテリ

アルがこの場にある以上、機を逃がす訳にはいかない。これで・・・これで全てが揃う・・・ふふふふ!!!』

カトゥーンの不気味な笑みを窺うと、エドワード・エルリックことエドも何処か表情を綻ばせる。

「楽しそうですね。」

『そりゃ楽しいよ。この手で世界の在り方そのものを変える瞬間に、もうじき立ち会えるとなればね。研究者として・・・技術者として心が沸き立つじゃないか。新世界の神、まさにそれこそが私の全て!』

「フン。下らん。」

率直な感想を述べる斎藤であったが、カトゥーンはそんなことは一切気にせず大仰な手振り身振りで高らかに言葉を並べる。

『ははは!いよいよこの世界の終焉も近い。この手で、世界を私の手中に!もうじき何もかもが漫画によって統一される!!テトラカトゥーン諸君、健闘を祈るよ!』

そう言って、カトゥーンは通信を切った。

果たして、カトゥーンの真の目的は一体何なのであろうか?

ちょうどその頃、テトラカトゥーンが向かっているとも知らないユーノ達は明神弥彦より語られる自分たちがこの世界に迷い込んだ経緯とその目的であるプリズムシード集めに関して赤裸々に語り出す。

「・・・ちょうど１８日ぐらい前。今回の奇怪な事件の首謀者たるカトゥーンはアンゴルモアを手に入れる以前から行っていた次元転送実験において、その段階的な過程から俺やピカチュウ、ニャースの三匹をこの次元世界に召喚した。故に俺達はアンゴルモアによって作られた漫画キャラじゃねぇ。」

「成程。と言うことはこの前の小規模次元震はその時のものだったということだね。」

「ああ。時間的にも同じだからな。」

多くが弥彦の説明に納得の表情を浮かべると、吉良がこう質問してきた。

「しかし、だとしても何故カトゥーンには反駁の姿勢を？」

「アンゴルモアによって作られた一連の漫画キャラは、斎藤みたいな性根の腐った奴もいるが少なからず忠誠心と言うもの抱いている。けど、俺達は条件が全く異なるし、そのまま呼び出されたって訳だから、奴に対する忠誠心なんざ最初（はな）から持ち合わせていねぇ。そして、俺達三人は元の世界に帰るため・・・――高エネルギーで強い次元干渉を引き起こすロスト・ロギア、プリズムシードの存在を知ったんだ。」

「それで、カトゥーンとは独立してプリズムシードを集めて立って訳か・・・」

ユーノ達はその後も弥彦の話を聞かされることになるが、その後予想だにしない展開が待ち受けているなど、誰もが思わなかったであろう――――――

ユーノ達が弥彦から話を聞かされているその頃、徐々にユーノ達へと近づいて何隻もの船舶を走らせていたテトラカトゥーンだが、エドは船頭に立つとカトゥーンが作成したどんな標的でも殺傷能力を与えるライフルをセットしており、ナルトが徐に尋ねた。

「エド。狙いはばっちりか？」

「ああ。こいつをお見舞いすれば、翡翠の魔導死神だろうが何だろうが、一発よ。」

「間違っても無駄弾などにはするなよ。俺以外、ここにいる全員はどいつもこいつも揃って阿呆ばかりだかな・・・」

斎藤がそう口にすると、聞いていたナルトやエドは口を揃えて怒りを露わにする。

「「んだと！！てめぇ斎藤！！！マジぶっ殺すぞ！！」」

「まぁまぁ、落ち着けおめぇら。アイス食うか？」

テトラカトゥーンの一人で、メンバー随一の戦闘力を持つがそれ故空気を読まない孫悟空がアイス片手にそう言うと、二人は更に興奮する。

「「いるか！！てめぇは黙っとけアホ猿！！」」

だが悟空はそれを聞くと前向きな姿勢でこう言った。

「元気があってなによりだっぺ！その調子でガンガン行くぞ！！」

斎藤は横で煙草を吹かせながらあきれ返っていた。

「ふん・・・阿呆が・・・」

そんなやり取りがされている間にも、弥彦とユーノ達の話は続きその核心部分に迫ろうとしていた。

「俺達が掴んだ独自の情報では、２０年前・・・・・・まだ研究者としては名の通ってもいなかったカトゥーンは、あらゆる異世界に存在する特定の粒子成分とロスト・ロギア級の高エネルギー体を瞬間的に衝突させることで、現実世界にほんの僅かばかりの亜空間が発生するという事実を発見した。カトゥーンはその研究結果から更に実験を繰り返し、やがていくつもの世界で危険分子として広域指名手配されるに至り・・・・・・そんな中でも奴は只管に研究・実験の日々を過ごし、そして漸く今回アンゴルモアと言う飛び切りのロスト・ロギアを手に入れ、その力を暴走が起きる寸前ギリギリまで発揮させ、この世界に漫画キャラを転送することに成功したんだ。」

「そして、転送した漫画キャラを紙の人形に転写させ、それを手駒にして不穏な動きを始めた・・・・・・」

ユーノが弥彦の言葉に続いてそう口にすると、聞いていたエリオが眉間に皺を寄せながらカトゥーンの狙いを推測しこう口にする。

「と言うことはやはり、カトゥーンの狙いはユーノ先生が危惧していた通り、漫画キャラによる人間社会への報復“――――――！」

すると、その言葉を聞いた弥彦は首を横に振りこう返してきた。

「その言い方だと“当たらずとも遠からず”だ。奴は単純な世界征服なんぞ、眼中にねぇ。奴の場合は更に性質が悪い・・・・・・本当は、アンゴルモアと今まで集めたロスト・ロギアの力全てを使ってこの現実世界と空想の漫画世界をひっくり返そうとしているんだ。」

「現実世界と漫画世界を・・・ひっくり返す!?」

「ど、どういう事よそれ!?」

拍子抜けなユーノ達だったが、ティアナがそう言うと弥彦は渋い顔を浮かべこう語り出す。

「複数のロスト・ロギアによる同時発動によって、次元世界に大きく干渉し、今まで引っ張り出してきた漫画世界の住人が存在する漫画の世界とこの現実の世界を入れ替える・・・それにより、この世界が空想のものとなり、漫画世界が現実となる・・・プリズムシードは超大規模次元震を起こすのに必要不可欠な代物だからな・・・」

「な!世界の・・・逆転現象!!」

「まさかそんな事が!?」

余りに壮大且つ無謀極まりないカトゥーンの真の目的に驚き返る六課メンバー。

ニャースとピカチュウはそんな六課メンバーに更にこう補足してきた。

「それも阻止するために、ニャー達は必死こいてプリズムシードを集めていたんだニャー。勿論元の世界に帰るのが最優先だけどニャー。」

「ピカピカ！」

かとぅんーの真の目的を聞かされたユーノ達だったが、その間に海辺と近づいていたテトラカトゥーンはと言うと、目の前に迫ってきた陸地を見、エドが徐にライフルに手をかけスコープを覗きながらターゲットを補足する。

「ターゲット、ロックオン！」

彼が狙いを定めたのは言うまでもなく、ユーノであった。

ユーノはその事に未だ気づいておらず、弥彦の話を聞いた後封印処理の掛けられた三つのプリズムシードを手に取り半信半疑な様子で言い返した。

「でも、例えそうだとしても・・・どうしてカトゥーンはそこまでしてこの世界と漫画の世界を入れ替えようとするんだい？」

「どこかの漫画にでもあるだろ？あいつは・・・カトゥーンは自分が新世界の神にでもなるつもりで、こんなバカげたことをしでかしてるんだ。」

それを聞くと、銀時は思わず深いため息をついてからカトゥーンに対する哀れみを抱く。

「『ＤＥＡＴＨ　ＮＯＴＥ』じゃあるまいし、漫画の中に逃げ込む

のはいい加減しなさいってな！中二か、てめぇは！？」

「銀さん、カトゥーンはこの場に居ないんですからあんましそれ意味ないですよ。」

新八の正当なツッコミが銀時に向けられると、通信画面でそれを聞いていたクロノは毅然とした表情で次のように尋ねた。

『話の大筋は分かった。ただ、君は万が一プリズムシードを手に入れることが出来て、それら四つをどうやって発動させるつもりだったんだ？』

「確かに普通の人間、漫画キャラの俺には発動は困難だ。こうやって厳重に封印処理が施されていれば尚更だ。ただ、異世界を歩きわたる中で俺達はあらゆるロスト・ロギアの力が自動解放される奇妙な世界を見付けた。だから、手に入れればそこに行って力を発動させるつもりでいた。」

『そうか・・・せやけどやっぱりそれは同時に無謀でもある。ユーノくんも言ってたけど、性根が真っ直ぐなら態々こんな危険な賭けみたいなことはせえへんでも、管理局に素直に事情を話してくれればどうにかしたと思うのに・・・』

はやてがそう口にすると、聞いていた真選組の土方や近藤はこう言い返した。

「バァカ。こんな事件の最中に何も疑わずに管理局に頼みにでもしてみろ？先ず帰る以前に重要参考人として拘束されたがオチだぜ。兎にも角にも幕府並みに管理局ってのは腐ってるからな・・・」

「トシの言う通りだ。少なくとも、六課のメンバー以外の管理局員はどうにも信用できん。やはり、組織が大きすぎると言うものいかんな。」

訊いていた正規の管理局員のなのは達は思わず失笑する。

「う・・・ひ、酷い言われようですね・・・」

そんな失笑するなのは達にさらに追い打ちをかけるように恋次達死神組が便乗する。

「ま、本当の事だから。俺だって管理局そのものを信じてる訳じゃねぇしな。」

「なのは達には申し訳ないのだが、私や吉良も同じだ。恐らくスクライア商店の三人もな。少なくとも、嘱託で勤務している我々は皆時空管理局に従って動いているのはではなく、一人残らず自らの意思で動いている。それはユーノ殿も同じな筈だが。」

「ユーノ君・・・・・・」

不安げな様子でなのはがユーノに顔を覗くと、ユーノは柔かい笑みを浮かべながらこう言って来た。

「大丈夫だよ。確かに僕もルキアさん達と考えは同じだけど、ココにいる間は僕はずっと“なのは達みんな”の味方だから。」

その言葉を聞くと、この場にいるなのは達旧知の友人やその生徒たちであるフォワード五人、更には管理局とは直接関係ない恋次やスクライア商店、銀時達も安どの表情を浮かべ、なのははそんな言葉

を口にしたユーノに同じように笑顔で言葉を返す。

「・・・ユーノ君・・・ありがとう。」

すると、弥彦はユーノの言葉を聞くとふと剣心の事を思い出し、徐にこう言って来た。

「みんなの味方・・・か・・・何かその台詞を聞いていると、剣心のそれとを重ねちまうぜ。」

「剣心って・・・君の憧れる剣客でその逆刃刀を譲ってくれたって言う・・・」

ユーノが何気なくそう尋ねると、弥彦は眉間のしわを緩めて剣心の事を思い返しながら更に続けた。

「ああ。剣心は何時も誰かの為に剣を振るって生きてきた。自分が犯した人斬りとしての償いの為・・・日本の命運をかける命懸けの死闘にも、復讐の憎悪に燃えた身内との私闘にも決して逃げずに・・・飛天御剣流の技が撃てなくなるまでずっと・・・剣心は逃げずに正面から向かって行った。一重に、その目に映る苦しんだり悲しんで泣いている人々を御剣の理のもと救うために・・・」

「・・・・・そっか。だけど生憎僕は剣心さんのそれとはまた違うし、重ねられるような立派な生き方なんてしてない。寧ろ僕の場合は真っ黒さ・・・」

「ユーノ・・・」

「スクライア・・・」

自嘲した顔を浮かべるユーノの言葉に誰しもが複雑な顔を浮かべる。

そして、そんなユーノを見つめる全員にユーノ本人はこう語り出す。

「剣心さんは昔は人斬りだったのかもしれないけど、明治に入った世では君と同じで逆刃刀を使いその目に映る人々を自分の手が届く範囲ならば助けていた。『不殺』の誓いの元・・・・・だけど僕は違う。僕はこれまで少なからず敵として処理してきた多くの命を刈り取った。金丸のときも・・・・・ムスカのときも・・・・・パトリオット達も。段々自分の肌に血の匂いが染みついて来て、時折目の前が真っ赤になって・・・自分が自分でなくなるんじゃないかとも思う。」

「そ、そんな・・・そんなことないよユーノ君!だってユーノ君は何時も・・・!」

なのはがユーノの言葉を聞き、必死で弁解の言葉を入れようとするがそれでもユーノは自分の事を嘲り続ける。

「悪人だろうと善人だろうと、命を奪ったことに変わりはない。勿論、それで自分だけは生きながらえようとも思ってない。『死』も恐ろしくない・・・・・・・・だがそれで人道に外れた自分の犯した罪が消えるとはどうしても思えない。」

「・・・!」

その言葉を聞いた途端、弥彦は同じ台詞を以前剣心が言っていたことを思い出し、その後のユーノの言葉を食い入るように聞き漏らさないよう耳に入れる。

「ユウを助けられなかった時、いっそ自害してしまおうかとも思った。だけどその時気づいた。命の投げ捨てなんかで罪が償えるとは尚更ないって。自分自身を見つめ直して、漸く得たこたえが今の自分の原動力――――――手が届くのに伸ばさなかった時が死ぬほど後悔する。そんなのが嫌だから手を伸ばす――――――・・・この目に映る人を守りたい・・・苦しんでいる人、悲しんでいる人の力になりたい・・・一人でも多くの笑顔を守りたい・・・」

「ユーノ君・・・」

「ユーノ先生・・・あんた・・・」

思わず感慨耽ったような顔となるユーノに誰もが耳を傾け、ユーノはその後も語り続ける。

「けれどその為に僕は命を殺め・・・そして命を斬り捨てて来た・・・命を奪われた人もまた僕と同じような想いで必死に闘っていただろうことにも気づかず・・・全ては僕自身の過ち・・・だからいかなる罰も受け入れる。しかし今はまだ罪とともに殺めた者達の想いを背負い、僕は生きる。生きてより一人でも多くの笑顔とより一つでも多くの幸せをこの世に灯す為、僕は今迄通り闘い続ける!!その果てに待つ罰が、『死』か?あるいは『別の形』の何かは分からないけど、この身体が砕け散って闘えなくなるその時まで僕は必ず闘い抜く!!」

ユーノはそう言うと、自分の愛刀である晩翠を取り出しそれを強く握りしめながら自分の見出した結論を宣言する。

「『剣と魂を賭して戦いの人生を完遂する!』、ただそれだけだ!」

その決意の表れたるユーノの言葉を聞いた瞬間、なのは達やニャースの目にも涙が灯る。

「ユーノ君――――・・・」

「ユーノさん・・・」

「ニャ～～～／／／何て泣けてくる話ニャース／／／」

「お前らしいな、ユーノ」

「・・・・・フン」

「・・・ある意味死よりも苦しい人生になりますな。」

「だけど、ユーノなら必ずやり遂げるネ！」

「ピカピ！！」

反応はそれぞれ異なっていたが、抱く気持ちは皆同じ。

きっとユーノならば成し遂げると。

すると、そんなユーノの台詞を聞き一瞬驚いた顔を浮かべた弥彦だったが、鼻で笑った後ユーノにこう言って来た。

「・・・ふん。その台詞、同じことを剣心が口にしてぜ。」

「え」

「出来れば、こんな形でなかったら俺とお前はもっと早くに解り合うことが出来ていたんだろうな・・・ちょっと悔しいぜ。」

「・・・そうか。」

弥彦の言葉を耳にし、納得のいく表情となったユーノ。

そして、弥彦自身もまた非常に心地いい気持ちを抱きながら折れた逆刃刀の持ち手を握りしめ心の中でこう呟いた。

「（剣心・・・――俺はこの男に完敗しちまった。だけど不思議と後悔はしてねぇんだ。この男は・・・ユーノはお前と同じで腐ってた俺に喝を入れてくれた俺の大切な“友達”だからよ――――――）」

と、思っていた時。

弥彦は不意に感じた悪寒が背筋に走り、ユーノに脅威が迫っていると感じるや否や体が動く。

「！危ねぇ、ユーノ！！！」

「な！？」

弥彦は突然の事で理解の出来ていないユーノの身体を押してその場から退かせると、握っていた折れた逆刃刀を構える。

「く！！」

だが、その瞬間・・・――――鋭い銃声音がユーノ達の耳に届く。

「！」

「ピカ（ニャー）！」

「「「「「え」」」」」

「「「「「

・・・撃たれたみたいだ・・・・・・・」

「弥彦・・・なんで・・・どうして・・・」

普段余程の事でない限り冷静さを保っていられるユーノも、この時ばかりは取り乱しており、なのは達もあまりの光景に衝撃が走っていた。

弥彦は自分の出血量と薄れかけていく意識の中で涙目のユーノに自分の死期を悟りこう口にする。

「・・・――――どうやら俺は・・・・――――もう駄目みたいだな・・・・・」

「馬鹿言ってるんじゃない!!!お前がここで死んでたまるかよ!!!約束しただろう!!必ず僕やみんなが願いを叶えるって!!じっとしてろ!!!今治療を!!!」

そう言って慌てて治癒魔法を発動させるユーノだが、弥彦は治療をするユーノの手を引き放し、更にこう言った。

「・・・――――いいんだ。お前だって分かるだろ。これはもう致命傷だ。俺は助からねェ・・・・・・・・・」

「ふざけんな!!!勝手に自分を殺すなよ!!!帰りたくないのかよ!?自分の元いた世界に!自分を温かく迎えてくる人たちの元に!!!大好きな人達にただいまって言いたくないのか!!!!!」

ユーノの感情が高ぶった甲高い声が砂場に響き渡る。

そんなユーノの声を耳にしながら体がどんどん冷たくなっていく弥彦は――――――

「――――――出来ればそうしたかったよ・・・だけど、俺は・・・・・」

なのはやフェイト達はこんな展開になるとは夢にも思わず、かける言葉させままならなかった。

「弥彦君・・・！」

「そんな・・・こんな事って・・・！」

「ピカ／／／」

「弥彦！死んだら駄目ニャーす！！」

二匹が大粒の涙を流しながら弥彦に語りかける中、弥彦は血で染まった手をピカチュウとニャースに向け、弱々しい声で謝る。

「・・・・・ごめんな・・・・・・・・・・・・一緒に、帰れそうにねぇよ。」

「ピカ！！！」

「五月蠅いニャー！！大人しくするニャー！！！じゃないと、本当に・・・本当に・・・！！」

二匹の想いは今にも爆発寸前であり、ユーノ自身も頭が真っ白になりかけていた。

すると、死に際を悟った弥彦はその時までずっと離さずにいた右手の折れた逆刃刀を徐にユーノに手渡そうとする。

「・・・・・ユーノ・・・・・・・こ・・・れを・・・」

「え！」

「折れちまってるが・・・・・・受け取ってくれよ・・・・・・・」

弥彦の突然の言葉に更に困惑の表情を浮かべるユーノ。

「な、何言ってるんだよ！！これはお前の大事なものなんだろう・・・！？受け取れる訳ないよ！！」

逆刃刀を受け取ることに断固拒否の姿勢を見せるユーノだが、弥彦の想いは次の通りだった。

「・・・・・いや、だからこそお前にこれを貰ってほしいんだ・・・・・お前は・・・・・・俺に大事なもんを思い出させてくれた・・・・・俺に欠けていた大事なものを与えてくれた・・・・・・取り戻させてくれた・・・・・・」

そう言った後、弥彦は左手をユーノの頬に当て、ユーノはその行動を見るや否や両目に一粒の涙が灯る。

「――――――や・・・ひ・・・こ」

そして、弥彦は最後の力を振り絞って涙を浮かべながらユーノに語りかけた。

「・・・ゆ・・・ユーノ・・・俺・・・もっと前に・・・お前と・・・知り合い・・・たかった・・・ぜ――――・・・・」

弥彦はそう言い終わると、静かにその目を閉じる。

「！」

ユーノやなのは達、そしてピカチュウとニャースの二匹はその光景を目の当たりにした瞬間、言葉を失った。

弥彦は息を引き取る寸前、心の中でこう思っていた。

「（燕・・・・・・剣心・・・ごめん。俺、みんなの所に帰れなかったよ・・・・・・・――――）」

ユーノやピカチュウは息を引き取った弥彦の体を抱えながら、込み上げてくる想いを叫びにして表現する。

「や・・・・ひこ・・・――――――――弥彦ォ！！！

なのは達は顔色を一変させ、正直なところこんなことがあっていいものなのかと世界の在り方について思わず疑ってしまう。

「そ・・・そんな・・・！！」

「こんな事って・・・！！」

「どうして・・・！？何で・・・！！」

なのはやフェイトは同じような出逢い方をして、何度もぶつかり合った末にかけがえのない親友となって今に至るが、ユーノの場合はあまりにも悲しい結末によって絆が断たれてしまったのだ。

ユーノは渇くほどに涙を流しながら血塗れでもう決して動くことのない弥彦の体を強く抱き寄せながら心の中で弥彦を守れなかったことに死ぬほど後悔していた。

「（何でだよ・・・死ぬのは本当なら僕だったはず・・・！なのに何でお前が死ぬんだ！死んでいいはずが無い！くそ・・・僕は――――――また守れなかった！！！）」

そして、ユーノはその後悔を飛び切りの叫び声にして表現する。

「うおおお

「「「「「うわあああ！！！」」」」」

「「「「「

「へへ。ざまぁねぇな弥彦。」

「ピカ！！」

「ニャー！お前ら！！」

驚愕の表情を浮かべるピカチュウとニャース。

そして斎藤の姿を目のあたりにした土方は思わず高い声を上げる。

「テロラカトゥーン、斎藤一！！！」

「何！？あれが・・・！」

近藤や沖田が土方の言葉を聞き、今一度その容姿を確認すると、沖田はその姿を見た瞬間本能的に悪寒を感じた。

「近藤さん、ありゃ土方さん以上にたちの悪そうなニコ中ですぜ」

斎藤は煙草の煙を吐き、不敵な笑みを浮かべながら刀を構える土方を見下ろす。

「久しぶりだな、似非真選組の土方十四郎。」

「てめぇ・・・！ここで会ってからにはただじゃおかねぇ。この前の屈辱、今晴らしてやらあ！！」

土方は感情が高ぶると、三本の刀を持って斎藤の乗る船へと向けて走り出し、新八は慌てて土方を堰き止めようとした。

「待ってください、土方さん！！」

「斎藤！！！！」

しかし土方は新八の言葉を無視して斎藤へと向けて突進する。

と、その時土方の目の前に瞬間移動をしてきたテトラカトゥーン最後の一人、孫悟空が現れ、土方は思わず目を見開く

「！」

「でらあああ！！」

悟空は足を大きく振り上げると、勢いよく土方を蹴り飛ばした。

「のっは！！」

土方は悟空の蹴りを受けると、松の木へと叩きつけらあまりの衝撃で松の木さえ簡単にへし折れる。

「トシ！！！」

「「「「「土方さん！！」」」」」

土方は刀を杖代わりにしてその場から起き上がり目の前に目を向ける。

「く・・・・・な！」

その時土方は、同じ漫画キャラでも特に他とはオーラも思想も一切

異なるジャンプの有名漫画キャラの姿に目を疑った。

「どうした?そんなもんでしめぇか?」

魔の抜けたような声色で土方にそう尋ねる悟空を見て、銀時達も思わず表情を一変させた。

「な!ありゃ・・・ドラゴンボールの・・・!」

「うっそ!!!孫悟空がテトラカトゥーンの一人って訳!?」

「しかももう一人はガンガンのキャラネ。」

「あの異常に小さい野郎か?」

恋次がそう言うと、小さいという言葉に過敏に反応するエドは怒りを露わにする。

「誰が小さいだ!!!ああ!!!」

「ち。漫画キャラ御一行様ご到着って訳か・・・」

そう言って銀時が腰の木刀に手をかけると、今まで口を閉ざして何も語らなかったユーノが弥彦を抱きかかえながらさっきの籠った声でテトラカトゥーンに問答する。

「・・・・お前らか・・・・・・・弥彦を・・・・・・・弥彦を撃ったのは!!!」

そんなユーノの怒号を聞くと、斎藤は鼻で笑いながら肯定の返事を

する。

「ふん、知れたこと。余計な事をこれ以上話されるのもこちらとしては迷惑なんでな。本来ならお前に当たるはずだったが、これはこれで好都合だ。」

「今度こそ、残りのプリズムシードを渡して貰うぜ・・・魔導師ども。」

「おっし！血塗れのパーティーの開始だっぺ！」

テトラカトゥーンはそう言いながら各々が戦闘態勢に入り、なのは達もこのタイミングでのテトラカトゥーンの強襲に非常に困惑しつつも、デバイスを起動させる。

「よりにもよってこんなタイミングで・・・！」

「だけど、戦って勝つ以外にどうすることも出来ませんよ・・・！」

戦う姿勢を見せる両者の間で、ピカチュウとニャースは困惑した様子で尋ねる。

「ピカ・・・！」

「ニャー達は・・・どうすれば！？」

そう言うと、銀時は何時もの怠惰な目を一変、真剣な眼差しでこう語った。

「おめぇらは俺たちの傍を離れるんじゃねぇぞ。弥彦が死んじまっ

た今、何が何でもてめぇらだけは守り抜く。」

「ふん。果たしてそううまくいくかな、白夜叉？」

斎藤が煙草片手にそう言うと、銀時は鋭い目で言い返す。

「黙れや。煙草臭いんだよ、細め野郎。」

「成程・・・いい度胸だ。」

斎藤は銀時の覚悟と気迫を確かに感じ取ると、徐に指を鳴らす。

すると、その瞬間停泊していた夥しい数の船舶が一斉に爆発し、その中からおよそ１０００体を超えるとも言える漫画キャラが飛び出し、あまりの数の多さになのは達は目を疑った。

「「「「な！」」」」

「これは・・・！」

「何て数・・・！今までの比じゃないわ！！」

「本気で私達を始末する気で・・・いるってことだね。」

そんな事を各々が呟く中で、なのはは徐にユーノに近づき言葉をかける

「ユーノ君。大丈夫？」

不安げな表情のなのはだったが、ユーノは顔を沈めながら低い声で

返事をする。

「・・・ああ。」

ユーノは弥彦の側から一度離れると、顔を沈めながら晩翠を解放させ、湧き上がる怒りを猛烈な覇気に乗せてテトラカトゥーンに浴びせる。

「・・・許さねぇ・・・お前らは絶対に許さねぇ！！！！！！」

他を逸した特上の覇気になのは達全員は額に汗を浮かべ、テトラカトゥーンもまた一瞬後ずさりをしてしまうほど。

「く！相変わらずとんでもねぇ覇気だぜ・・・！」

「心地いいもんじゃないか。久しぶりに楽しい殺し合いになりそうだ。」

「呑気に言ってる場合か！こっちもそろそろ時間が無くなってきたんだ。」

「ここで全員皆殺しにしてやる。」

「どいつだ、オラと闘う強え相手は！？」

「阿呆が。とっとと行くぞ。」

「「「おお！」」」

斎藤の言葉を聞いたナルト、エド、悟空の三人は船から飛び降り、

それぞれ配下の漫画キャラ数百体を引き連れてなのは達に向かって行き、なのは達もまた武器を構えて戦闘を始める。

「みんな、気を付けて！」

「「「「「はい！」」」」」

ユーノは一斉に向かって来た漫画キャラの目を攪乱させる為、詠唱破棄で以前パトリオット篇でも披露した鬼道を使用する。

「破道の十　光凛響！」

光凛響が発動され、眩いばかりの光が漫画キャラの進行を妨げると、その隙にユーノ達全員はその場から離れる。

「逃がすな！追え！！！！！！！！！！」

ナルトがそう言うと、漫画キャラは逃げて行ったユーノ達を負って走り出す。

恋次は走りながら後ろの様子を窺い、起点を利かせてこう言った。

「全員、一端分散して回避だ！纏まってたら狙い撃ちにされちまう！」

「了解！前線一同、散開！」

なのはがそう言うと、前線メンバーと銀時達はそれぞれ適当な人数に分かれて漫画キャラ達を分散させ、漫画キャラ達は分かれて行った彼らを追ってぞれぞれ走り続ける。

こうして、機動六課とテトラカトゥーン・漫画キャラによる生き残りをかけたバトルサバイバルが始まるのであった。

始めに戦闘を開始させたのは、恋次・ルキア・スバルの三人。

相手は手と他カトゥーンの一人で「鋼の錬金術師」の異名をとるエドワード・エルリックである。

「咆えろ、蛇尾丸!!!」

「樹白!」

「リボルバーシュート!」

三人は一斉にエドに向かって攻撃を仕掛ける。

「ふん!」

エドは三人に攻撃を華麗な動きで躱すと、両掌を合わせてからそれを地面につける。

「国家錬金術師の力、篤と味あわせてやる!」

すると、その瞬間エドの錬金術によって砂の中に含まれていた無数の砂鉄が錬成させ、強大な鉄柱となって恋次達に向かって迫ってきた。

「「「な!」」」

「死ね！！！」

驚愕する恋次達をそのまま串刺しにしようとするエド。

その時、駆けつけてきた吉良が鉄柱に向かって刀を斬りつける。

「面を上げろ、侘助！」

数十回侘助で斬りつけると、鉄柱は重みに耐えられず真ん中からへし折れる。

「大丈夫かい？」

「助かったぜ、吉良！」

恋次は吉良に感謝すると、今一度目の前の敵の技の特性と強さを確認する。

「錬金術師か・・・思った以上に厄介だ。」

「だけど負けてなんかいられません！」

「ああ。行くぜ！」

四人は武器を構えると、再びエドに向かって突進し、エドもまたそんな四人を倒すために右腕の機械鎧（オートメイル）と呼ばれる義手をパタのような刃物に錬成させ、不敵な笑みを浮かべて向かって行った。

同じころ、真選組副長土方十四郎と新撰組三番隊組長斎藤一の戦いも熾烈を極めていた。

「「はあああああ！！！」」

斎藤の牙突、土方の三刀流がほぼ同時に激突。

凄まじい勢いで衝突するや否や、砂埃が舞い上がり、両者は距離を置く。

そして、斎藤は左足にできた切り傷を見ながら不敵な笑みを浮かべる。

「フン。成程・・・俺にやられた時とは比べるまでもなく力をつけたらしいな。三刀流とは、随分と器用なものだ。」

「俺は何が何でもてめぇに勝ってやる。俺の前で平然と煙草を投げ捨てた事、ここで後悔させてやる。」

「後悔するのは果たしてどちらだろうな？」

斎藤はそう言うと、再び刀を水平に構え牙突の準備をする。

「ぬかせ。行くぜ。」

土方もまた三本の刀を両手に握り、口にしっかり加えると勢いよく飛び出して行く。

「鬼斬り！！」

土方が飛び出すと、斎藤も超人的な脚力を駆使して牙突を仕掛ける。

「俺の牙突に貫けぬものなどない！！」

そんな漫画キャラとの戦いの様子をモニターで窺っていたクロノは席を立つと、バリアジャケットに身を包みはやてにその場を任せる。

「いかん！数が多すぎる・・・はやて、僕も出てくる！アシストを頼むぞ！」

「了解や！」

「頼みます、クロノ提督！」

はやてとリィンはクロノを見送ると、険しい表情を浮かべながらモニター画面の中の激しい戦いの様子を窺うのであった。

その激しい戦いのうち、運悪く一人なってしまったティアナは現在漫画キャラの一人でナルトの部下である重火器・爆薬に長けた女マジシャン、ボンバー・リンダと対戦していた。

「く！」

「ははははは！！ははははあ！！！」

ティアナはリンダが使うマシンガンや手榴弾による攻撃を岩場の陰に隠れながら攻撃の機会を伺うが、まるでその隙を与えようとしない。

「ち！質量兵器まで使ってくるなんて・・・相変わらず卑怯な奴ら！」

爆音が鳴り響く中、ティアナは先ずかな隙を見付けてはクロスミラージュより魔力弾を発射するが、リンダは得意のまじっくを披露しティアナの攻撃を華麗によけ翻弄する。

「ははは!!こっち、こっち!一体どこ狙ってるんだい!?ははは!!!」

リンダはマントで姿を隠しては手榴弾を投げつけ、ティアナはそれを全て撃ち落していく。

だがしかし、一発だけ当たり損ねてしまい手榴弾はティアナの真後ろへと落下。

「!いけな・・・!!」

慌ててティアナは目の前の岩場から飛び降りる。

その直後手榴弾は大爆発。

「うあああああああ!!!」

何とか爆風による被害を免れ地上に降りたティアナだったが、その時重要な事に気づく。

「く・・・な!弾が・・・・・・!!しまった、あの時!」

爆発の瞬間、バリアジャケットにしまっていた予備のカートリッジの弾丸が衝撃で落ちてしまったのだ。

ティアナは思わず顔を歪ませ、岩場に隠れながら苦悩する。

「どうする・・・この状況は流石にまずいわ・・・！」

残り少なくなったカートリッジでティアナはこの状況をどう打破するのか？

さて、金太郎、浦太郎と白鳥、エリオとキャロの計五人はテトラカトゥーン随一の戦闘力を誇るバトルマニア、孫悟空と対戦していた。

「でらあああああ！！」

悟空の怒涛の攻撃が五人に強襲する中、金太郎はブラッド状態となりブラッドカートリッジを消費し、斧の先に魔力を収束させる。

「ダイナミックチョップ！」

金太郎の技に続いて、白鳥の音波攻撃、浦太郎・エリオの高速槍撃術、そしてキャロとフリードによる教化火炎弾が発射される。

「琴線斬、鼓瓜田！！」

「「ソニックスピア！」」

「ウィングシューター・ブラストフレア！」

五人の攻撃が悟空に当たる寸前、悟空はそれら全ての攻撃を受け止め空へと弾き飛ばす。

「うらあああああ！！」

この悟空の圧倒的な力に驚愕の表情を浮かべる五人。
悟空はそんな五人と向き合い更なる攻撃を促す。
「まだまだ！そんなもんじゃ食い足りねぇっぺ！次はオラから行くぞ！」
悟空はその直後瞬間移動で金太郎へと迫り、目にも止まらぬ一瞬の出来事に金太郎は目を疑った。
「はあああ！！」
〈Ｐｒｏｔｅｃｔｉｏｎ〉
アックスオーガの咄嗟の判断で防御を展開したが、悟空の一撃は金太郎の予想にも反して重いものであった。
「く！お・・・重い・・・！！何だこの一撃は！？」
「金ちゃん！」
「「「金太郎さん！」」」
と、その時そんなキンタ路のピンチに雑魚漫画キャラを一掃させたばかりの鬼太郎が駆けつけて来、ソードアーマー状態となるや否や全速力で走ってきた。
「待ってろ熊！今俺が助ける！！」
「ジーク！ピーチに力を与えよ！」

〈Ｗｉｎｇ　ｂｏｏｓｔ〉

白鳥はデバイスのジークに命令を送ると、支援魔法を鬼太郎の烈火に施し、炎熱能力を上げる。

そして、その力で鬼太郎は悟空に攻撃を行う。

「“烈火大斬撃”！」

凄まじい破壊力を持つ鬼太郎の炎熱攻撃が悟空にクリーンヒット。

悟空はそのまま吹き飛ばされる。

「ぬお！」

「どうだ！」

かなりの手応えを感じ、内心勝利すら確信していた鬼太郎。

ところがそんな鬼太郎や警戒を緩めていない金太郎たちの前に、砂埃の中から多少の擦り傷はあるが致命傷には至らなかった悟空が姿を見せる。

「イテテテ・・・いやぁ～～危なかったな。」

「「「「な！」」」」

「うそ・・・あれでほとんど無傷！？」

「強い・・・！」

エリオとキャロは常識はずれな打たれ強さを持つ悟空の能力の高さに絶句する。

「いい一撃だったぞ。よし！今度はオラが特大の奴おめぇらに見せてやる！」

悟空はそう言うと、亀仙人から教えを乞うた己の最も得意とする技を発動させようと独特の形に手を構えた。

「おい！あの構え！」

「いけない！かめはめ波だ！！」

「全員退避ですぞ！！」

金太郎の言葉を聞くと、鬼太郎達は一斉にその場から退避しようとするが、その直後悟空の強烈な一撃がお見舞いされる。

「か・め・は・め・は！！！！！！！！！！！！！！！」

「「「「「「「うわあああ！！」」」」」」」

悟空のかめはめ波は容赦なく六人を飲み込み、皮一枚のところで急所を免れた金太郎たちは全身ボロボロの状態となって砂の上に倒れ込んだ。

「く・・・！」

自力で起き上がろうとする鬼太郎や他の五人だったが、流石に人体に対する影響が大きいこの世界においては今の一撃はかなりの痛手だった。

悟空はそんな満身創痍な六人に止めを加えようと突進していく。

「行くぞ！！」

と、その時。

「させるか！」

〈Ｂｌａｚｅ　ｃａｎｎｏｎ〉

悟空の顔面に鬼太郎達がよく知る処の人物による魔力砲撃が直撃。

「！」

不思議に思い前を向いてみると、バリアジャケットに身を包みＳＵ２をその手に持ったクロノ・ハラオウンが到着する。

「く、クロノ！？」

「遅くなった。僕も参加させてもらうぞ。」

クロノの参戦で少し元気の出た鬼太郎達はその場から立ち上がり、武器を構える。

「へ。足手まといになるなよ、三十路間近。」

「余計な事はいいりませんよ！」

鬼太郎の言葉に少々怒り心頭な様子でツッコミを入れるクロノと、人数が増えたことに喜びを覚える悟空。

「面白れー。数は多いに越したことはないからな。全員オラが相手になるぞ！！」

悟空は構えを取ると、再び起き上がった鬼太郎達と更に熱いバトルを展開させることとなる。

クロノが現場にかけつけたちょうどその時、漫画キャラのうちギャオス・ハイパーと呼ばれる有象無象の群れと空戦を繰り広げるなのは、ヴィータ、そして地上で他の漫画キャラと闘う近藤・新八・神楽・ギンガの四人は――――――

「は！」

「このおおお！！！」

「ち。有象無象に出てきやがる！」

「何とかして、この場を乗り切るには！？」

圧倒的な数の多さに疲労が顕著に見え始める新八や近藤に、空に上がったなのはとヴィータが次のように語る。

「空のギャオスたちは、私となのはでどうにかする。お前らは下の敵だけに専念しろ！」

「ギンガ。近藤さんに新八君、神楽ちゃんの事任せたよ。」

「はい！全力にて守ります！」

「行くぜ、なのは！」

「うん、ヴィータちゃん！」

二人はそれぞれＩＰカートリッジとＡＲカートリッジを取出しデバイスに装備させると、一気にギャオスたちを殲滅させるために攻撃を回避する。

空中で砲撃による爆音と鈍器で殴られたときの鈍い金属音がひっきりなしに鳴り響く中、新八と近藤は向こうの方で起こる爆発に目を向ける。

「向こうの方もかなり激しいですね。」

「そのようだな。」

「！お前ら、来たネ！」

と、その時神楽が新たに進軍を引き連れてやって来たエドの部下である人格が捻じ曲げられたカエルの様な姿をした宇宙忍者、ドロロ兵長を目撃する。

「へへへ・・・殺される覚悟は出来てるんだろうな？」

殺気を出しながらゆっくりと進軍と共に新八たちに近づいてくるドロロに一瞬苦い顔を浮かべてしまう新八。

「く！」

「怯むな、新八君。所詮相手は漫画キャラ。俺達侍の敵ではない！」

「新八、男見せるネ！！」

「新八さん！」

三人が怯んだ新八に喝を入れると、新八は覚悟を決める。

「はい！そうですよね。びびってなんていられない！絶対に負ける訳にはいきません！！」

四人は己の力と勇気、仲間との絆を信じて目の前の敵へと向かって行った。

新八は戦いの間際、この闘いが始まる前から精神共に疲労困憊だったユーノとそのユーノと一緒に行動しているであろう銀時の事を心配した。

「（ユーノさん・・・銀さん・・・）」

では、そのユーノ・銀時の二人はどうしているかと言うと、現在漫画キャラの軍勢に追い回されながら息を引き取った弥彦を担ぎながらピカチュウとニャースを引き連れ逃げ回っていた。

「ピカ！」

「ニャー！！」

逃げるユーノ達を数百と誇る漫画キャラが攻撃を加えながら迫って来、その後を車に乗ったテトラカトゥーンのナルトが追い回す。

「ははははは！！！逃げても無駄だ！！！ははははは！！！！」

「ぐ！悪趣味なことしやがる・・・！」

と、銀時がそうぼやいていたその時、ピカチュウとユーノは抜け道を見付け、銀時とニャースを誘導する。

「ピカピ！」

「早くこっちだ！！」

抜け道を通り抜け、四人はその後も走り続けるが、ニャースはその時不意にユーノに向かって何故自分たちを助けてくれるのかその理由を聞いてみた。

「どうしてニャー達を！？」

「放っておける訳ないでしょ。それに、ついさっき約束したからね。これ以上・・・・・後悔するのは御免だ・・・！」

ユーノはそう言うと、背中に抱えられた息のない血塗れの弥彦を一瞥、見ていたピカチュウとニャースも思わず暗い顔を浮かべる。

と、その時銀時は目の前が行き止まりであることに気づいた。

「！おい、行き止まりだ！」

「しまった！」

ユーノはすぐに後ろへ引き返そうとしたが、その直後ナルトと部下たちが四人を多い囲み武器を構えてきた。

「ははははは！！追い詰めたぜ！」

「く！」

「全員纏めて地獄に送ってやるよ！」

ナルトはそう言って手を上げ部下に攻撃の合図を出そうとする。

ユーノは攻撃の瞬間、晩翠を掲げ獅子翡翠群を発動する。

「獅子翡翠群！」

頭上から降り注ぐ無数の翡翠の斬撃が部下たちを強襲。

一瞬のうちにナルト以外の漫画キャラが殲滅され、ユーノはその隙に銀時達を連れてその場を後にした。

「今のうちです！」

ナルトは四人を逃がすと、無線でサクラと連絡し次の増援を要請する。

その頃、ボンバー・リンダと戦いを続けていたティアナは奥の方まで逃げつづけ、その過程で偶然にも発見した倉庫の中へと入り込み、

息を上げながらクロスミラージュの中のカートリッジを確認する。

「は、は、は、は、は・・・残り一発・・・この一発で仕留めないと本当に・・・」

焦りが顔に映るティアナ。

と、その時ティアナは偶然にも倉庫内の収められていた夥しい数の袋と、手についた白い粉を見てあることに気づいた。

「小麦・・・・・いや小麦粉だわ・・・・・・」

そんな事に気づいた正にその瞬間、ボンバー・リンダの足音が耳に入ってきた。

「！」

ティアナは一度息を潜めると、ゆっくりとこちらに向かって近づいてくるリンダの影を慎重に伺いながら、額に汗を浮かばせつつ最後のカートリッジを使用してリンダに銃弾を発射した。

「貰ったあ！！！！！」

銃口から放たれるスナイプショットがものの見事にリンダにヒット・・・したかに思えたが、リンダは銃弾を頭に受けてなお不敵な笑みを浮かべてその場に立ち尽くしていた。

「・・・ふふふ・・・ふふふ・・・」

そして、その直後リンダの身体は鏡となって粉々に砕け散り、ティ

アナは思わず目の前の光景を疑ってしまう。

「な・・・!!か、鏡・・・!!」

すると、本物のリンダの声が聞こえてきた。

「ははは!!イッツ、マジック!まんまと引っかかったね!もう弾は残ってないんだろ?アンタの負けだよ!」

ティアナは急いで倉庫の中へと隠れ、リンダはマシンガンを抱えながら隠れたティアナを探そうとする。

「あはは!往生際の悪い女だね。覚悟決めて出てきなよ!」

「く・・・!どうすれば・・・本当にこのままじゃ・・・!」

ティアナは確実に迫る死への恐怖に怯えながら、それでも尚生きたいという願いを抱きながらバリアジャケットの中を漁るが、それでもカートリッジの予備など一発も見つからない。

と、その時だった。

「!」

ティアナの頭部にリンダの銃口が付きつけられ、リンダは不敵な笑みを浮かべがらこう口にする。

「ゲームオーバーだよ・・・・・・小娘。」

「(ここまで・・・なの・・・!?)」

絶体絶命のティアナ。

ここで彼の状の命運も尽きてしまうのかと、思っていた矢先だった。

「おい。」

「あ？」

「え！」

唐突に二人の耳に男の声が聞こえて来、一瞬驚くティアナだったが、その直後声の持ち主である男は天井から飛び降り隙を見せたリンダの右手に斬りかかった。

「隙あき空きなんだよてめぇは。」

そう、助けに来たのは沖田総悟であった。

総悟の鋭い一太刀がリンダの右腕を斬り裂き、ダメージが倍加されたことでリンダの右腕は吹き飛び後ろへとはじけ飛んだ。

「ぐあああああああ！！！」

ティアナは目の前に現れた総悟の姿に思わず目を疑うと同時に胸を撫で下ろす。

「沖田さん！！」

「やれやれ。危なかったもんだな。」

総悟はそう言いながら、右腕を切り落とされ出血多量となったリンダの姿を見下ろす。

「は、は、は、は！ぐ・・・！くうう！！！」

激痛に耐えながら無くなった右腕箇所を手で押さえるリンダに総悟は真顔でこう言った。

「勝負あったな。利き腕を斬られちまっちゃ、もう得意のマジックは使えねぇ・・・」

「ま、まだ！」

「！？」

「ひ、左手があるよ！！」

そう言うと、リンダは血で染まった手でマシンガンを拾い、形振り構わず倉庫内でマシンガンを乱射し、二人は身の危険を感じ素早く脱出する。

「「く！」」

リンダは最早思慮分別のつかない状態でマシンガンを乱射し、倉庫内に収めれていた袋から小麦粉が飛び交う。

「おおおおおおお！！！！！！つらあああああああああああああああ！！！！！！！！！！！！！」

と、その時。

マシンガンの火花に引火して充満した小麦粉が連鎖反応如く引火し、リンダは直後発生した粉塵爆発に巻き込まれてしまった。

爆発した小麦粉倉庫の様子を離れたところで見ていた総悟とティアナの反応はと言うと――

「無茶苦茶な野郎だぜ・・・」

「充満した小麦粉に、銃の火花が引火して起きた粉塵爆発・・・・・・重火器を使う相手にしては、迂闊な最期でしたね。」

その頃、ナルトの要請を受けたサクラは直ぐに増援を送り、ナルトは増援が到着すると直ぐにユーノ達を追い詰めるために命令を下す。

「火を放て！焼き尽くして退路を断つんだ！」

ナルトの命令を受けると、部下たちは手当たり次第に火を放ち、森から嘗ての生活の名残が伺える人間の建物を燃やし尽くしていき、まさに光景は地獄のようだった。

「ははははは！！！ははははは！！！出てこい！！隠れても無駄だ！！ははははは！！ははははは！！！」

ナルトは無数の起爆札のついた苦無を投げては爆発をさらに広め、ユーノ達を追い詰めようとする。

そんなナルト達の行動を窺いながら、ピラミットの様な形の建造物の中に隠れた銀時はと言うと――――――

「マズいぜ、ユーノ。」

と、外の様子を窺いながら中のユーノにそう報告する。

それからしばしの沈黙が流れ、ピカチュウとニャースはユーノがずっと背中に抱え来た弥彦の死体を悲しそうな顔で覗き込むと、本当に息をしていないことに涙が止まらなくなった。

「ピカ・・・・・・／／／」

「弥彦・・・・・・・」

銀時はそんな二匹の姿を見ながら、心を落ち着かせるために偶々持っていたチョコレートを口一つ口に入れる。

すると、その時無言のままユーノは顔を下に向けた状態で銀時の持っていたチョコレートを一つ貰い、それを口に放り込んだ。

「ユーノ・・・」

一瞬驚く銀時だったが、十分に彼がこうなってしまう理由をよく理解していたし、実際に弥彦が撃たれて死んでしまう光景を目の当たりにしたのだ。

ユーノはチョコレートを食べ終わると、今にも泣き出してしまいそうな声と暗い表情でこう語り出した。

「・・・・・初めて遭った時から、何処か自分と似たものを感じてたんですよ。瞳には自分とはまた違う真っ直ぐなものが宿って、

逆刃刀の波紋には常にあいつの・・・弥彦の顔が映って、何度も僕にそれを見せてきた。そしてそのうち・・・ぶつかり合う中で本当の“友だち”になれると思ってたんですよ・・・・・・それが何と・・・・あんな形でさよならするなんて、思ってもいませんでした――――――全く、自分がいかに大間抜けだったって、痛感しますよ――――――笑ってください。」

と、自嘲したようにそう口にするユーノだが、その直後銀時は静かに立ち上がり目を瞑りながらこう言った。

「――笑える訳、ねぇじゃねぇか。お前と同じだ。許せねぇよ・・・――絶対に。」

銀時はそう言うと、先ほどの悲惨な光景をもう一度思い返す。

〈弥彦!!!!!!!〉

〈・・・もっと前に・・・知り合い・・・たかった・・・ぜ――――・・・〉

そして、銀時はこの時自分や見ず知らずの命を誰であろうと手が届く限り救い出そうとする心優しい青年の心をズタズタに傷つけた漫画キャラとカトゥーンに深い憤りを覚えた。

ユーノは一度帽子を被り直すと、晩翠を解放させ銀時に向かって言葉を投げかける。

「銀さん。」

「何だ?」

「・・・最後まで、付き合ってくれますか」

「・・・ああ」

銀時はユーノの言葉をしっかりと聞き入れ、肯定の返事をすると自分もまた洞爺湖木刀に手を伸ばし、最上部へ続く階段を見付けるとピカチュウたちを残してそこを上って行った。

「おめぇらはここで待ってろ。」

「ピカ!?」

「ふ、二人はどうするつもりニャー!?」

ニャースがそう尋ねると、背を向けながらユーノは声を押し殺して次のように語った。

「・・・腐れ外道どもを一匹残らず刈り取ってくる。だから少し間、弥彦の側に居てやってほしい――――――」

「ピカ・・・」

「ユーノ・・・」

思わずユーノの言葉に胸打たれるピカチュウとニャース。

銀時はそんなユーノを引き連れ、上へと目指して歩いていく。

「行くぜ。ユーノ」

「はい、銀さん。」

二人はこの時、漫画キャラに対する果てしない怒りを共に抱き、同時に心を完全に鬼と化すのであった。

そんな二人を探して、外の方ではナルトが部下たちと共にピラミッドの周囲を囲んでいた。

「何処に隠れた!?探せ!!探し出して、ぶち殺せ!!」

辺りが徐々に騒々しくなっていく中、ピラミッドの最上階に銀時が現れ、甲高い声で銀時はナルトに声をかけた。

「おおい!」

「!?」

「俺はここだぜ!」

「白夜叉!」

銀時が登場すると、ユーノも登場する。

「僕もここだ!」

ナルトは二人の姿を確認すると、すぐに部下を使って二人を殲滅にかかる。

「撃て!!ぶち殺せ!!」

部下たちは一斉に銃を乱射し、二人に迫っていく。

「「てらあああああああ！！！」」

ユーノと銀時は鋭い目つきとなると、頂上の上で突っ込んできた漫画キャラを容赦なく叩き潰していく。

数で圧倒的に不利な状況にもかかわらず、二人の猛攻は止まらない。

二人は背中合わせになりながら次のように言葉を交わす。

「へぇ～～～まだまだ頑張れそうじゃねぇか。ユーノよ」

「当たり前ですよ。死神代行黒崎一護からの叩きあげを食らった翡翠の魔導死神ユーノ・スクライアを――――――」

ユーノはそう言いながら、晩翠の切っ先を銀時に見せ銀時は思わず表情を凍りつかせる。

「ひ！」

「舐めないで下さい！」

その瞬間、ユーノは銀時を狙って来た敵を翡翠斬で斬り落とす。

「油断しないで下さい、銀さん。」

「へ、へい。御見それしました／／／」

冷や汗をかいた銀時だったが、再びユーノと共に漫画キャラの撃退を続ける。

「「でああああああああ！！！！！」」

ナルトはこの光景を見ると、一瞬目を疑っているがそれは紛れもなく現実の光景であった。

そして、ユーノと銀時は怒り心頭な様子で漫画キャラやナルトに向かって刀を向け、低い声でこう宣言した。

「一匹たりとも、ここから逃げられると思うなよ・・・・・・弥彦の人生を狂わせ、その命を奪ったてめぇら漫画キャラは残らず――――このユーノ・スクライアが滅する！！」

「序でに、万事屋坂田銀時も助太刀だ！」

二人はそう言うと、ピラミッドから飛び降り下の敵に向かって走り出した。

「「たあああああああああ！！！！」」

果たして、この闘いの結末はどうなるのか？

そして次回、ユーノの身にとんでもないことが起こる！！

教えて、ユーノ先生！

ユ「今日は斎藤一についてだ♪」

ユ「実在した新撰組三番隊組長斎藤一は、明治維新以降は『藤田五郎』と名を変え、警視庁の密偵として従事。」

ユ「剣術の腕は新撰組最強の沖田総司よりも強いとされ、るろうに剣心だったら更にキャラがデフォルメされ、陰湿で誰に対してもその一匹狼的な態度から臆することなく自分の思った通りの事を口にしてしまう。」

剣「あやつと話すときは、本当に毎度の事ながら疲れるでござるよ・・・」

土「け！俺が禁煙させられる中で、何でこいつだけ平気な顔で煙草吸ってやがる！？」

斎「フン。なら貴様もどうどうと吸えばいいものを・・・」

土「それが出来ねェから言ってんだよ！！大体、んな性格してっと女なんか誰も寄ってこねぇぞ！！」

ユ「あの土方さん・・・ちょっと言いにくいんですけど・・・」

剣「斎藤は既婚者でござるよ。」

土「えええええええええええええええ！！！

石「へぇじゃない！君みたいな関心の無い人間が多いから、真面目な人がこうして苦労をしているのだ。」

一「だったらお前も不真面目になってみりゃいいだろうが、銀さんみたいに・・・」

石「し、失敬なことをいうな！誰があんな天然パーマになるか！」

銀「おおい！！！あんな天然パーマとは何だ！！！殺すぞ！！！！！」

次回予告

晩「次回、ユーノ・スクライア外伝」

漫画キャラと壮絶な争いを繰り広げる中、新八がナルトにさらわれる。

銀「し・・・新八・・・」

新八を救い出そうとし、隙を突かれ瀕死の重傷を負う銀時。

ユーノはそんな銀時を見た瞬間、感情が爆発・封じられていた禁断の力が解放される。

ユ「あああああああああああああああああああ！！！！！！！！！」

な「ユーノ君！！どうしたの！？」

晩「（ユーノ！！正気を取り戻せ！！奴らに呑まれるな！！！自分を・・・自分を見失っては駄目だ！！！！！！！！）」

なのは達の叫びもむなしく、ユーノは――――――異形の姿へと変貌する。

晩「『一端暴れ出したら止まらない』」

ボンバー・リンダ

声：新井里美

漫画『ルパン三世　天使の策略　～夢のカケラは殺しの香り～』に登場する反米テロ組織集団、ブラッティ・エンジェルズの幹部・ラッキークローバーの１人。２２歳。重火器、爆発物、そしてマジックのプロで、ティアナに近づいて射殺しようとするが、途中ティアナを助けに来た沖田の一太刀で右肩を斬られてしまう。逆上し銃を乱射したが、倉庫内に大量に置かれていた小麦粉が空気中に充満して粉塵爆発を起こし吹き飛ばされ消滅。

ギャオス・ハイパー

体長：８８メートル。翼長：１９０メートル。体重：７８トン

特撮『ガメラ３　邪神覚醒』に登場。レギオン戦でガメラが大量のマナを消費した影響で生まれた、ギャオスの亜種。以前登場したギャオスに比べ、体格はよりシャープかつ動物的なものとなり、体色も黒っぽくなっている。また飛行能力のみならず繁殖力も大幅に増大、翼手の爪に神経毒を分泌する毒腺を持つなど攻撃性が増加している。

ドロロ

声：草尾毅

漫画『ケロロ軍曹』に登場する。ケロン軍の階級は兵長。ケロロ小隊の暗殺兵であり、ケロン軍特殊精鋭部隊「アサシン」のトップである。ニックネームは「トラウマ君」。体色は青色で、目は水色。忍者を意識してか頭巾と口当てをしている。頭巾とおなかにそれぞれ赤と黄色の手裏剣マーク。常に小刀を装備しているが、峰打ちのみで実際に人や動物を斬ったことはない。幼年期は頭巾ではなくケロロ達と同じ黄色の帽子をかぶり、口にはマスクをしていた。心優しい性格だが、カトゥーンの手にかかり人格が歪められ残忍な性格なって敵キャラとして近藤たちの前に立ち塞がる。

一旦暴れ出したら止まらない（前書き）

挿絵のタイトル文字が違う！！

一旦暴れ出したら止まらない

＞ｉ２５１４６―７０９＜

明神弥彦は銃弾に倒れ、ユーノ達の目の前で息を引き取る。

悲しみに暮れるユーノ達だったが、その直後襲来したテトラカトゥーン及び数千の漫画キャラ集団。

ついに激突する機動六課前線メンバーとテトラカトゥーン達による熾烈を極めた争い。

そんな争いの中、シグナムとアギトは目の前の漫画キャラ数百隊を相手に苦戦を強いられていたが、持ち前の力量とコンビネーションでそれを乗り越え、数を一気に減らした。

と、その時アギトは不意に感じた殺気に振り返ってみると、以前相手にした漫画キャラがその場に現れたことに目を疑った。

「！シグナム、あいつ！」

「！？」

シグナムも後ろを振り返ってその漫画キャの姿を目で見てみると、立っていたのは前回と全く同じ隙のない雰囲気でこちらを睨み付ける斬鉄剣の使い手、石川五ェ門だった。

「・・・・・・」

五ェ門は無言のままシグナムの方に目を向ける。

シグナムはそんな五ェ門の姿を見ると、アギトにその場から引き下がるよう説得した。

「アギト・・・」

「ああ。」

アギトが後ろに下がると、シグナムは徐に五ェ門の方へと歩きだし、一定の距離まで近づくと五ェ門の方から口を開いてきた。

「・・・お主とは決着をつけねばならぬと思っていた。」

「同じくだ。」

「覚悟は・・・出来ているか?」

「騎士としての覚悟・・・剣士としての覚悟・・・それらすべて、もう鈍ることなどない。あやつに、スクライアに教えられたからな。私は――――――もう迷わん!」

「・・・いざ。参る!」

五ェ門がそう口にすると、シグナムはレバンティンを鞘から取出し炎を纏わせる。

そして、二人は同時に前に向かって走り出し空中へと舞い上がる。

「「でやあああああ!!」」

一瞬の攻防が展開され、アギトはその光景を見て思わず唾を飲んだ。

やがて、沈黙が辺りを支配していると五ェ門が斬鉄剣を地面に落して膝をつき、弱々しい声でこう言った。

「・・・み・・・見事・・・・・・・ぐっは」

力尽き、元の紙切れとなった五ェ門に背を向けながらシグナムは鞘に剣を収めると最後にこう言ってその場から立ち去って行った。

「・・・お前とは、違う形で相見えたかったぞ、五ェ門――――――」

その頃、ユーノと銀時の二人は引き続きナルトの部下たちの殲滅に力を注いでいた。

「「とりゃああ！！」」

ユーノと銀時は猛烈な勢いで漫画キャラをなぎ倒し、斬り裂いて行き、隙を突いてくる漫画キャラにも二人は屈せず華麗に躱して返り討ちにする。

「「はあああああああああああああ！！！」」

と、残りわずかとなりかけた漫画キャラに鋭い目線を向ける二人の耳に唐突にドロロの声が聞こえてきた。

「そこまでだ。ユーノ・スクライア、坂田銀時！」

「「！」」

二人がドロロの声に反応して後ろを振り返ってみると、ドロロは新八を始めとする近藤・神楽・ギンガの四人を人質にとって二人を脅してきた。

「ははははは!!この者たちの命が惜しかったら、武士らしくその剣で腹を切ってもらおう。」

ドロロはそう言うと、部下たちと共に人質に取った四人に武器を向け、新八たちは思わず二人に向かって声を上げる。

「銀さん!」

「銀ちゃん御免アル!捕まっちゃったネ!」

「新八!神楽!」

「近藤さん!ギンガ!」

予期せぬ事態に顔を歪めるユーノと銀時。

ギンガと近藤は二人に向かって更にこう言って来た。

「ユーノ先生!私には構わないで下さい!だけど新八さん達だけは・・・!」

「万事屋!ユーノ先生!俺達なら大丈夫だ!だからギンガだけでも!!」

「「く・・・」」

苦渋の選択を迫られ、眉間のしわを一層深くする二人にドロロの言葉が投げかけられる。

「さぁ、腹を切ってもらおうか。」

「「銀さん（ちゃん）！！」」

「「ユーノ先生！」」

四人は思わず二人の名前を叫ぶ。

と、その時事態は急変を迎える。

唐突に撃たれた魔力弾がドロロの部下たちを撃ち貫き、それを目の当たりにしたユーノや銀時、ドロロ本人は大いに驚いた。

「「！」」

「何！？」

すると、驚くドロロが持っていた小刀が一瞬の隙に弾け飛ぶ。

「あ！」

「「隙あり！」」

それを見て好機と判断した新八と神楽はドロロの腹部にエルボーを入れ、素早くそのアｂから離脱する。

そして、離脱したギンガは魔力弾を撃ってきた人物の隣に立ち、誇らしげな笑みを浮かべながらこう言った。

「ナイスタイミングだわ。流石は機動六課フォワードのリーダーね。」

「いえ。まだまだ修行が足りないですよ。でも本当何とか間に合ったわ。」

そう、その人物こそティアナであった。

ティアナは落としたカートリッジをどうにか拾い集めると、ギリギリのタイミングでこの場に駆けつけることが出来たのだ。

ユーノや銀時もこれには大いに驚く。

「ティアナ！」

すると、驚く二人の前に更にあの男も駆けつける。

「近藤さん。旦那にユーノ先生も大丈夫ですかい？」

その瞬間ユーノと銀時を多い囲んでいた漫画キャラ達が一瞬のうちに切り伏せられ、紙切れの姿なると、現れたのは沖田総悟だった。

「総悟！！おお！！待っていたぞ！！！」

総悟の登場に大いに喜ぶ近藤だが、その直後総悟は意外な言葉を口にした。

「俺だけじゃないですぜ。」

「「！」」

その時、なのは達を始めとする全員がユーノと銀時の元へと懸けつ

けて来たのだ。

「お待たせ！」

「待ったか？」

「なのは・・・みんなも・・・！」

ユーノはタイミングよくその場に集まった機動六課前線メンバーの姿を見るなり思わず唖然とし、銀時は鼻で笑った。

「ふん。たく・・・もう少し早くこいや。マジで結構危なかったんだぞ俺ら。」

しかしそうは言ってもこの二人の実力からすれば別段問題はないはずだが・・・

「く・・・機動六課前線メンバー一同が一挙集結・・・と言うことは他の連中はみんなやられたのか！？」

腹部を押さえて苦い顔を浮かべるドロロや残りの漫画キャラ達。

ユーノ達機動六課前線メンバー総勢２５人は揃って肩を並べながら武器を構え、漫画キャラ達に狙いを定める。

「よし。これで全員そろったな。」

「ここからはみんなで行こう、ユーノ君！」

「ああ！」

「ええい！！全員纏めて討ち取れ！！！」

自棄になったドロロがそう言うと、漫画キャラ全員は一斉に武器を取ってユーノ達へと突進し、ユーノ達もまた一斉に殲滅にかかった。

「行くぞ！！」

「「「

浦太郎の場合。

「ポセイドンクラッシャー！！」

キャロの場合。

「トルネードフレア！」

シグナムの場合。

「紫電一閃！」

ヴィータの場合。

「ギガトンシュラーク！！」

アギトの場合。

「フレアバーニング！」

近藤・沖田の場合。

「「どらあああああ！！」」

新八・神楽の場合。

「「はあああああ！！」」

白鳥の場合。

「ウィングトルネード！」

恋次の場合。

「鋼鉄狒骨大砲！！」

吉良の場合。

「比重王斬！！」

ルキアの場合。

「次の舞・連番『漣波氷（れんぱひょう）』！！」

フェイトの場合。

「サンダーレイジ！！」

クロノの場合。

「スティンガーブレイド・エクスキューションシフト！」

なのはの場合。

「ハイペリオンスマッシャー！！」

土方の場合。

「三刀流・虎狩り（とらが）！！」

ティアナの場合。

「クロスファイアーシュート！！」

銀時の場合。

「のらあああああああ！！！」

そして、ユーノの場合。

「翡翠斬・八千刀！！！」

皆がそれぞれの技量と特性・相手との相性を的確に見極め使用した結果、漫画キャラとドロロ兵長は一瞬のうちに塵となって消滅し、この勝負が機動六課の圧勝となった。

ユーノ達が息を切らしながら勝負に勝利したのち、救援に駆けつけてきたシャマルとザフィーラが合流する。

「みんな！大丈夫！？」

「どうやら大したことはなさそうだな。」

ユーノ達はその二人の到着を見ると、安どの表情を浮かべながら息を切らしていた。

「は、は、は、は、は。ま、間に合った・・・！」

だがその時、スバルはある重大な事実に気づいた。

「あれ？そう言えばテトラカトゥーンは・・・・・・」

そう、この場にいたはずのテトラカトゥーンのうずまきナルトを始め、残りの三人も戦闘の最中忽然と姿を消してしまっていたのだ。

全員が辺りを散策していると、不意に聞こえてきた二匹のポケモンの叫び声に耳をかけ剥けることになる。

「ピカ！！！！！！！！」

「ニャー！！！」

「！あの声は！！」

全員が振り返って後ろを見ると、ピラミッドの上には斎藤一以下テトラカトゥーン全員が立ち尽くしており、その手にはロープで縛りつけられたピカチュウとニャースがいた。

斎藤はユーノ達を見下ろしながら煙草を吹かせこう言った。

「阿呆共が。周りに気を取られ過ぎなんだよ。」

「ピカチュウ！ニャース！！」

「フン。こいつはすべて俺達が貰っていくぞ。悪く思うな。」

そう言うと、斎藤は懐からいつの間にかユーノの懐に入っていた筈の三つのプリズムシードを強奪し、それを見たユーノ達は目を疑った。

「プリズムシードが全部！！」

「何時の間に！」

「くそ！！！てめぇら降りてこい！！」

土方が怒鳴る中、四人は不敵な笑みを浮かべて一向に降りてくる気配など見せず、掴まったピカチュウとニャースは悲痛な叫び下を上げ続ける。

「ピカピ！！！！」

「助けてくれニャース！！」

「く！待ってろ二人とも！！」

ユーノは弥彦との守れなかった約束を守るため、二匹を助け出そうと矢も盾もたまらず走り出し、咄嗟になのは立が止めにかかった。

「ユーノ！！」

「駄目ユーノ君！！！」

「おおおおおおおおお！！！！」

ユーノが猛烈な勢いでピラミッドを上ってくると、エドは徐にこう言った。

「ナルト。頼むわ。」

「これでも喰らえ！」

ナルトはそう言うと、無数の苦無に取り付けた起爆札をユーノに見せる。

「！（起爆札！？）」

思わずその数に圧倒され、足を止めてしまうユーノにナルトが容赦なくそれを投げつける。

ユーノを始め、銀時達にもそれは飛来し、起爆札は今回の場合爆発はせずに煙幕となって視界を完全に遮った。

「ぐ！！」

「「「

しかし、新八が幾ら呼びかけても銀時達の反応は帰ってこない。

「駄目だ。まるで視界が分からない・・・銀さん達も返事がないし、一体僕はどうなったんだ!?」

と、その時不意に新八の後ろから手が伸びると、その手は新八の口をふさぎ、突然の出来事に新八いは困惑した。

「ぬ!!」

「へへ。悪く思うなってばよ。」

新八の口を塞いできたのは起爆札を投げた張本人のうずまきナルト。

「ちょっとの間我慢しろ。」

ナルトは新八の動きを封じると、腹部に拳を入れ新八を気絶させた。

「がっは!」

新八は薄れゆく意識の中で頭の中に浮かんできた銀時の姿に涙を浮かべた。

「ぎ・・・・ぎんさ・・・ん・・・・・・」

そして、漸く視界が全体の姿が見て捕えられるようになると、銀時達は先ほどまでいたテトラカトゥーンとピカチュウたちの姿がまたしても消えてしまっていることに驚愕する。

「な!連中の姿がねぇ!何処だ!!出てこいコノヤロウ!!!」

するとその時、近藤はもう一人この場にいたはずの人物がいなくなってることに気づいた。

「！おい！！新八君の姿もないぞ！！」

「え！」

「何だと！？」

近藤の言葉を聞き、一瞬耳を疑った銀時達だったが、周りを見渡すと確かに新八の姿は何処にも見受けられなかった。

「新八！！！何処行ったネ！！」

「新八さん！！！」

「一体どういうことだ！？何で新八の姿も居なくなっちまってる！？」

「と、兎に角探しましょう！」

ユーノがそう言うと、銀時達はそれぞれに分かれて森の中へと向けて捜索を開始。

それぞれに声を上げて行方の分からなくなった新八を探しに行った。

「新八さん！！」

「新八君！！！」

「志村！！！何処にいる！！」

「おいメガネ！！てめぇ何処行ったんだよ！返事ぐらいしろ！！」

「新八！！！」

銀時は誰よりも新八の身を案じ、必死になって探し始める。

一体新八は何処へ連れて行かれたのか？

ではその新八の様子を窺って見よう。

気を失っていた新八だったが、丁度その時目を覚まし徐に瞳を開ける。

「う・・・・・・僕は・・・・・・・」

と、はっきりしない意識の新八だったが、その隣で聞き覚えの名ある声が聞こえてきた。

「ピカ・・・」

「！？」

新八が完全に意識を取り戻して横を向いてみると、そこには自分と同じように張りつけにされ身動きの取れなくなっているピカチュウとニャースの姿があったのだ。

「ピカ！」

「目が覚めたでニャースな。」

「ピカチュウ！ニャースも！って！何なのこの状況！」

新八は今一度自分の状況を確認すると、自力で拘束を解こうとするが全く解ける様子はなかった。

「何で僕がこんなことに！？一体何で！！くそ！！！」

「原因はよく分からニャン。だけどどうやらおミャーがニャー達と一緒に捕まってると言うことは確かな事実ニャース。」

「くそ！！！どう言うつもりだ！！何で僕まで！！！」

新八は険しい表情を浮かべながら諦めずに拘束を解こうと動きつづけていると、そんな新八の前にテトラカトゥーンが集まってきた。

「あんまし騒ぐんじゃねぇよ。」

「！」

新八が驚き前を振り向くと、斎藤一を筆頭とするカトゥーンの忠実な部下である四人が不敵な笑みを浮かべて佇んでいた。

「騒いだところで助けになんか来やしねぇよ。」

「お前らは！！」

「カトゥーン様に使える最強の漫画キャラ、テトラカトゥーン。俺

はその一人で鋼の錬金術師エドワード・エルリック。まんまと俺達の策に嵌ってくれてありがとよ。」

「策!?何のことだ!」

「フン。決まっている。残り三つのプリズムシードとお前をこの手で捕縛する事さ。ま、俺としてはどちらでもよかったのだがな・・・」

そう言いながら斎藤はマッチで火をつけ煙草に引火させる。

「僕を・・・捕縛!?」

斎藤の言葉の意味に戸惑いを感じる新八。

すると、ナルトは不敵に笑みを浮かべながら次のように語り出した。

「ああ。カトゥーン様の真の狙いはそこだ。確かに目的遂行の為にアンゴルモアを始め複数のロスト・ロギアが必要だったことは事実。しかし、それだけあったところで意味がない。そのロスト・ロギアを十二分に発揮するための“器(マテリアル)”がないとな・・・・・・」

その最後の言葉を聞いた途端、新八の脳裏に電流が走った。

「!・・・おい・・・・・・まさかそのマテリアルって言うのが・・・・・・!!」

「察しがいいな。ああ――――――――紛れもなくお前だよ、メガネ。」

「な!」

「「ピカ（ニャー）！？」」

斎藤が付きつけたその言葉を聞き、思わず耳を疑う新八とピカチュウ、ニャースの二匹。

呆然となりながら新八は震える思いで問いただしてみた。

「な・・・・・何で・・・・・・何で僕なんだ！？何で僕が器なんだよ！？何で僕が・・・！！！！」

すると、そんな質問に答えたのは珍しくも悟空だった。

「そりゃおめぇが特別だからだろ？オラだってそのくらいの事は分かるっぺ！」

「僕が特別！？」

「詳しい話はおいおい話してやる。さぁ、大人しく俺達と一緒について来てもらおうか。俺達の城――――――『カトゥーンキャッスル』へ。」

斎藤はそう言うと、亜空間から見えてきた自分たちの帰る場所でありカトゥーンの拠点でもあるカトゥーンキャッスルの映像を新八に見せ、新八はそれを見た瞬間先ほどにも増して暴れ出す。

「いやだ！！離せ！！！離せよ！！！絶対に行くもんか！！！！！僕はお前らの言う通りなんかならないぞ！！！！離せボケ！！！！」

「往生際の悪い奴だ。少し頭を冷やしてやるか。」

「任せろ。俺そう言うの得意だから。」

ナルトはそう言うと、徐に新八に近づき拳を鳴らし始める。

「な！」

新八はナルトの行動に目を見開く中、ナルトは一度拳に自分の息を吹きかけると思い切り新八目掛けてストレートパンチを入れてきた。

「歯食いしばれ！！！！」

「ぐっほ！！」

新八はナルトのパンチを受けると、鼻が曲がり多量の鼻血が飛び出す。

横でその残酷な光景を目の当たりにしていた二匹はすぐに止めるように説得を促す。

「ピカ！！」

「止めるニャース！！」

「てめぇらも食いしばれ！！」

ナルトはそう言うと、今度は新八に続いてピカチュウとニャースにも同様の事をし始めた。

「「ピカ（ニャー）！！！」」

「ははは！！！！最高だぜ！！！！」

ナルトは猟奇的な性格となってその後も新八たちを殴って甚振り続ける。

「ぐっほ！！！がっは！！」

新八は殴られながら段々と薄くなっていく意識の中で再び銀時に助けを求めた。

「（ぎ・・・銀さん・・・！！た・・・す・・・助けて・・・！！）」

その頃、新八を探して森中を探し回っていた銀時はと言うと、その時新八捜索の仮定である重大なものを発見した。

「！こいつは・・・！」

銀時が徐に地面に落ちていたそれを拾って確かめてみると、落ちていたのは紛れもなく新八がいつもかけているメガネであった。

銀時はそれを見ると思わず表情を一変させる。

「新八の・・・・・・は！」

銀時はその瞬間、この上もない不安を直感すると、一心不乱に走りだし新八の名を叫びながら森の奥へと入っていった。

「新八！！！！！！！！！！！」

そして、無我夢中で走りつづけ銀時がたどり着いた先に見えてきたもの。

「は、は、は、は、は、は・・・・・・！」

銀時は目の前に映ってきた光景に絶句する。

自分の目の前に映ってきたのは、顔中を殴られ血塗れとなって気を失う新八と同じように殴り倒されたピカチュウとニャースの二匹であった。

「・・・・・・・・」

そんな銀時の姿を目の当たりにしたテトラカトゥーンは不敵な笑みを浮かべながらそれぞれ徐にこう言って来た。

「よう・・・・・白夜叉の坂田銀時か。あれだけの軍勢相手によくやってたよ。ホント魂消たなオイ。噂通りの不死身っぷりだ。」

「オラとしては強いことにこしたことはないけどな！だははははは！！！」

「だが一足遅かったな　。薄汚いガキもそこのポケモン二匹、仲良く俺達が貰っていくぞ。こいつも奇縁ってやつかな・・・・・・白夜叉。確か前にもこんな経験してるんじゃないか？知ってるぞ。小汚い婆に恩があってその縁でその婆の用心棒代わりのことしてたんだってな。だが、結局貴様はその婆もこのガキも・・・何一つ守れてなどいない。所詮抜刀斎と同じで、牙の折れた貴様では何も護れないか・・・」

そう・・・銀時は以前にも同じこれと非常によく似た経験をしている。

その為、銀時は今自分が見ている光景がその時と同じものがフラッシュバックしたかのような錯覚に陥り、言葉すら失いかけていた。

ナルトはそんな銀時に向かって平然と次のように吐いた。

「消えろよ。生憎弱い奴に興味はねぇんだ俺ら。カトゥーン様もきっと同じこと言うと思うから、命だきゃとらないでいて　やる・・・・・」

と口にした直後、銀時は腰の木刀を抜くや否や目にも止まらぬ一太刀でナルトの顔を殴りつけ吹っ飛ばした。

「ぶっふ!!」

ナルトはあまりに突然の出来事に未だ状況が把握できず、殴られた箇所を思わず手で抑える。

「・・・・・いでで何しやがんで・・・」

と、言おうとした矢先銀時は更に鬼のような形相でナルトを始めテトラカトゥーン全員へと向かってくが、斎藤の刀によって銀時の攻撃は止められる　。

「フン。成程・・・どうやら抜刀斎よりはまだ面白そうな奴だ。この俺に剣を抜かせるとは、やるじゃないか白夜叉。」

すると、銀時は斎藤からを距離を取ると我を忘れた状態でただ只管に怒りに身を任せて斎藤に切り込んでいった。

「てあああああああああああ！！！！！」

斎藤は銀時の攻撃を避けながら更に言葉を並べる。

「だがもう何もかも遅すぎたと先刻も口にしたのだがな。」

「つらあああああああああああ！！！！！」

銀時はその後も斎藤に向けて鬼の刃を突き付ける。

そんな銀時の異常な魂魄の揺れ幅と新八の霊圧を感知したユーノはその場に立ち止ると、銀時と交戦しているテトラカトゥーンの気配に顔を歪める。

「！これは・・・・・銀さんと新八君の気配！近くにいるのはテトラカトゥーンか・・・・・マズイ！」

ユーノは急いでその場から駆け出し銀時の救出へと向かう。

「おおおおおおおおおおおお！！！！」

その間にも銀時は怒りと憎しみだけが宿った刃を斎藤に浴びせ続けるが、斎藤は悉く銀時の攻撃を読み取り躱し続けるがそれでも銀時は攻撃の手を休めようとはしなかった。

これには流石の斎藤も呆れ返るのであった。

「フン。聞き分けのない阿呆が。」

斎藤はそう言うと牙突の構えを取り、超高速で銀時に接近し一瞬で牙突の六連撃を繰り出した。

「“牙突・六刃（ろくじん）”！！！」

銀時はその攻撃をその身に受けると、全身から血を吹きだし洞爺湖木刀は後ろへと飛ばされ宙を舞う。

「ぐっはあああああああ！！！」

そんな斎藤の技の凄さを間近で見ていたナルトやエドは思わず顔を引きつった。

「へ。相変わらず怖い技だぜ。」

「身の毛が凍るよな。」

そして斎藤は最後に自分の刀を銀時の肩に食い込ませた。

「死ね、白夜叉！！」

銀時はその攻撃が決定打となり、吐血を出してその場に倒れ伏した。

白夜叉と恐れられる銀時だったが、斎藤一はそんな銀時よりも強く、尚且つ狡猾で冷酷無比な本物の狼なのだ。

斎藤は血塗れとなって倒れ伏す銀時を哀れに思いながら再びタバコに火をつける。

「フン。骨のある魂だったが、所詮はこの程度か・・・・・白夜叉。お前は抜刀斎と違って俺を本気で殺しに来たことは褒めてやる。だが池田屋を始め、戊辰・西南と多くの死地を潜り抜けて来た身――――――新撰組の中では唯一人不死身と呼ばれた男の前には何のことはない。消えろ侍の亡霊。もうここにはお前の護るべき者は何もない。」

斎藤はそう言うと、銀時の前から歩きだしテトラカトゥーンと共に機関の準備を始める。

「・・・・・・・・・新八・・・」

弱々しい声で血塗れとなった体を必死に引きずる銀時だが、その瞬間意識が遠くなり銀時はそのまま目を閉じ気絶する。

その直後、二人の気配を辿ってユーノが現場へと駆けつけた。

「銀さん・・・・・・・!新八君・・・・・・・!」

と、ユーノが目の前に光景を目の当たりにした瞬間、ユーノは思わず目を疑った。

「え・・・」

ユーノの前には血塗れの銀時が倒れ、更にはその前にはテトラカトゥーンの策に嵌り、全身を殴られ同じく血塗れとなった新八とピカチュウ、ニャースが同時に飛び込んできた。

その瞬間、ユーノの頭に忌まわしき過去の記憶が甦る。

十二年前、なのはが空から墜ち瀕死の重傷を負ったあの日の事故、二年前、内戦で巻き込まれた少女ユウが自分の目の前で死んだこと、そして弥彦が自分を庇って銃弾に倒れたこと。

それら全ての後悔と今目の前に映る光景にユーノの感情は最高潮まで達し、ユーノは目を見開きながらついに我慢の限界を迎えてしまう。

「あ・・・あ・・・・・!!あああああああああああああああああああああ!!!!!!!!!!」

その瞬間、ユーノの身体から漆黒の霊圧が溢れ出しユーノは叫び声をあげ、目の前のテトラカトゥーンはあまりの異常な霊圧の濃さ・迫力に思わず後ずさりする。

そして、そのユーノの異常な霊圧を感じたのはなのは達も同様だった。

「「「

「然様。店長の霊圧がこれまで確認した中で最も乱れております！！」

「い、急ぐぞ！」

なのは達は急いで漆黒の霊圧が立ち上るユーノの元へと急いだ。

そんな中、ユーノは完全に自我を失い霊圧をとめどなく放出させ続けていた。

「あああああああああああああああああああああ！！！

「・・・ああ・・・そうらしい。」

と、その時そんなユーノの元になのは達全員が駆けつけてきた。

「ユーノ！銀時！！」

「銀ちゃん！新八！ユーノ！何があっ・・・！！」

「あああああああああああああああ！！！！！！！！！！」

ユーノは仲間が来たことにも構わず黒い霊圧に徐々に飲み込まれながら叫び声を上げ続ける。

「ユーノ君！！どうしたの！？」

なのはは声を上げてユーノに呼びかけるが、まるでユーノは反応せず、それどころから更に霊圧をこれでもかとばかりに上昇させ、首筋には奇妙な黒い痣が広がってくる。

痣が広がり始めると、晩翠は最も危険だと感じ精神世界からユーノに呼びかける。

「（いかん！ユーノ！！正気を取り戻せ！！奴らに呑まれるな！！自分を・・・自分を見失っては駄目だ！！！！！！！！ユーノ！！！！！！！！！！！！！！）」

しかし、晩翠の必死の呼びかけにもユーノは応えることはなく、痣を全身へと拡大していった。

なのは達はその光景に目を疑う中、ギンガは隙を見て銀時の元へと

走り出し、傍らに立っていたナルトを蹴り飛ばす。

「はあああああああ！」

「ぐっふ！」

ナルトから距離を離すと、銀時を素早く抱きかかえ自分たちの元へと持ってきた。

「銀さん・・・しっかり！」

「おい！万事屋！！」

全員が重傷の銀時に必死に呼びかけると、銀時は徐に目を覚まし意識を取り戻した。

「う・・・な・・・！こいつは・・・！？」

銀時は意識を取り戻すと、目の前で自我を失い非常に危険な状態に陥っている黒い霊圧一色のユーノの姿に目を見開き、やがてユーノの身体も声も人間らしさを失っていくのがはっきりと捕えられた。

「ＡＡＡ

「「「「「ユーノ先生！！」」」」」

「「スクライア！！」」

一体ユーノはどうなってしまったのか！？

そんなユーノの異変は直ぐに空座町で平時の通り仕事をしていた一護達の元へとどき、全身に走った悪寒に誰もが手を止めた。

「「「「「「「「！」」」」」」」」

一護はペンをその場に落すと、徐にユーノと一緒に撮影した写真を見ながら、突然鳴り響く警報ベルに織姫と共に耳を疑った。

「・・・まさか・・・ユーノ！！」

一護はいても経ってもいられず、織姫とコンを引き連れ仕事をコピーロボットに任せるや否や直ぐに浦原商店へと向かった。

一護達がユーノの危機を察知し、行動を見せ始めているその頃、機動六課の通信画面で同じ光景を見ていたはやてもまるで頭がついていかなかった。

「な、何がどうなっとるんや！？ユーノくんに何が・・・――――」

「はやてちゃん！ユーノさんが！！」

リィンがそう言うと、モニター画面のユーノは完全に漆黒の霊圧に全身を飲み込まれ、なのは達は凄まじい霊圧を必死に堪えながら目

の前のユーノが姿を現すのを待った。

「ゆ、ユーノ君・・・・・・！」

と、なのはが晴れていく黒い霊圧の渦の中に目を向けると、その中から見えてきたあまりに場違いなものの姿に思わず目を疑い、声を漏らした。

「――――――――・・・・・・・・・・・・え・・・・・・・？」

同じ様に、恋次や銀時達も言葉を失いただただ目の前の光景が現実物なのかを疑うばかりだった。

「・・・ゆ・・・・・・・ノ・・・・？」

「――――――おい・・・何だ。あの姿は！？」

驚愕の銀時がそう口にすると、誰しもが同じことを抱いた。

“こっちが知りたい・・・あれは何の化物だ”と。

霊圧の中から出て来たユーノの姿は最早ユーノではなかった。

それは一言で言えば化物。

だがそれは知る者にとっては最も忌み嫌う存在にして、恐怖の象徴。

細ながめの髑髏に強大な両腕、そして体を繋ぐ肋骨。

その姿とは、地獄の咎人を食らい罪を責め続ける地獄の番人――――

―――

その名はクシャナーダ。

テトラカトゥーンは変貌を遂げたユーノの姿に目を疑いながら、徐に斎藤一が鋭い目つきで尋ねる。

「――――馬鹿な。これが人間だというのか？何だ――――――――その姿は。お前は、誰だ？」

すると、異形の姿へと変貌を遂げたユーノは地面に突き刺さっていた自分の斬魄刀を引き寄せ、手に掴むと黒い霊圧とを放出させながら雄たけびにも似た叫び声をあげる。

「ＡＡＡ

ＡＡＡＡＡＡＡＡ！！！！！！！！！！！！！！！！！！！！！」

しかし、やはりユーノは斎藤の言葉に耳を貸さない。

「どうやら、言葉が通じぬらしいな。」

斎藤はこれ以上の質問は無駄だと判断し、刀を構えると悟空が前に出てきてかめはめ波の構えを取った。

「オラが行くぞ！」

悟空がかめはめ波の構えを取ってエネルギーをチャージし始めると、ユーノはあらゆるものを噛み砕いてしまうかのような鋭い口を徐に開くと、口腔内で漆黒のエネルギーを収束させ、その光景を見ていたテトラカトゥーン全員が目を疑う。

「「「「！」」」」

そして、悟空のかめはめ波が離れた瞬間ユーノの放った漆黒の光線、壊業閃（かいこうせん）も放たれる。

ユーノの放った壊業閃は悟空のかめはめ波を容易にかき消し、そのまま距離を伸ばしていき、たった一発の攻撃でこの世界『Ｔ２』の半分の陸と海が吹き飛び、世界は大きく揺れ動いた。

「「「「

斎藤は一瞬にして火の海と化し何もかもが?ぎ取られた大地と干上がった海を見ながらその威力に驚愕する。

「（馬鹿な・・・今のは紛れもなく魔法でも死神の力でもない・・・！これは一体何の力だ!?あの悟空のかめはめ波を消し飛ばす程の強大な力・・・！いや・・・・・・今の一撃でこの世界の大半の大地と海が弾け飛んだ・・・ある筈が無い。幾ら翡翠の魔導死神と言われるにしても、人間如きがこんな異常な力を使うなど――――――・・・・）」

と、その時。

「・・・返セ・・・・」

「!?」

変声機を使って加工したかのような声でユーノが言葉を発すると、更に黒い霊圧を放出させながら変化のない髑髏の顔で――――――

「新八クンヲ――――――」

「「「「!」」」」

「返セ!!!

咄嗟にナルトはユーノの前に現れると、必殺忍術の螺旋丸を作りだし、ユーノに真っ向から挑んでいく。

「つあああああああ！！！！」

だがユーノは螺旋丸には最初から眼中になく、ただ目の前のナルトよりもその奥の方で血塗れとなって気を失う新八の身を案じこう言った。

「退ケ！！！！

「ＨＡＡＡ

「く・・・そ・・・（何だってばよ・・・！？九尾の力で辛うじて致命傷は防げたが、これは最早人間の範疇じゃねぇ・・・！完全にそれこそ・・・・・・化物だってばよ――――――――！！）」

そんなナルトに向かって、ギャオスに乗って駆け寄って来たエドが声をかける。

「もたくさするな、ナルト。撤退だ！」

「だけど、悟空一人だけじゃ・・・！」

ナルトがそう言うと、悟空は前の前に現れ自信に満ちた表情を浮かべる。

「心配いらねぇぞ、ナルト！スーパーサイヤ人の力で、オラがこいつをぶっ倒す！！！はあああああああああああああああ！！！！！！！！！！！！！！！！！！！！！」

悟空は全身から猛烈な気を発すると同時に、自分の戦闘力を数百倍にまで上昇させた己の切り札とも言える姿、スーパーサイヤ人となってユーノに立ち向かおうとした。

ナルトは髪が逆立ち、全身から金色のオーラを発する悟空とその前に立つ化物の姿のユーノを一瞥し、不安げな表情浮かべその場を離脱する。

「ち。絶対死ぬなってばよ！」

ナルトはギャオスに乗り込み、新八たちを拉致してその場から姿を

消し去る。

「新八さん！！」

新八を拉致され、救出へと向かおうとするギンガだったが、危険を感じたスバルやてぁなたちに止められる。

「駄目です、ギンガさん！」

「ギン姉！！危ない！！」

と、その時ユーノの怒りの咆哮がまたしても辺り一帯に轟いた。

「ＧＡＡＡ

間黒い霊圧を溢れかえらせ周囲の木々や地面を激しく振動させる。

一方のナルトの方はと言えば、戦線を離脱した後受けた傷口を抑えながら別な場所に待機していたサクラと通信を繋ぐ。

「サクラちゃん！急いでそっちに行ってくれってばよ！悟空の奴を助けて欲しい！！」

『分かったわ。直ぐ向かう。悟空の事は私に任せておきなさい。』

サクラはそう言うと、直ぐにユーノと戦闘を繰り広げている悟空の元へと急いだ。

また機動六課ロングアーチにて、この映像を目の当たりにしていた部隊長のはやてと他の局員一同はユーノの変貌ぶりと常識はずれな破壊の映像に思わず絶句する。

「な・・・何や・・・これは・・・たった一発の攻撃で・・・・・・・T2の半分もの陸と海がなくなった・・・！！ユーノくん・・・一体何がどうなってるんや！？その姿は何なんや・・・！！」

頭が混乱し、収拾がつかないでいるはやて。

と、その時そんなはやての元に複数の足音が近づいて来、徐に扉が開くと中に入ってきたのは―ーーーーー

「ユーノ！！」

「最も拙いことになりましたね。」

はやてはその声の方へ振り返ると、その陣部たちの姿に思わず目を丸くした。

「な！あなた達は・・・！」

さて、一方の孫悟空はと言うと――――――

「ＱＡＡＡ

体に大きな負担がかかる諸刃の奥義、界王拳を発動させた。

「“界王拳(かいおうけん)”！」

発動と同時に悟空の全身が赤く発光し、オーラを纏う。

そして、悟空はユーノに狙いを定めると通常よりも少し大きい隙があるかめはめ波の構えを取った。

「近づくな。そこに居ろ。出来ればこいつを、近くで撃ちたくねぇ。」

悟空は超サイヤ人４状態でのみ使えるかめはめ波にして、悟空自身は「オレの最高の技」と発言して超サイヤ人４状態での最強技を放つ。

「じゅうべい・・・か・め・は・め・・・・・・波！！！！！！！！！！」

１０倍かめはめ波が放たれると、ユーノはそれを容易によける。

しかしかめはめ波の飛んで行った先の大地と海はユーノが先に放った壊業閃同様凄まじい破壊力を以てして破壊され、その余波が一気になのは達へと襲いザフィーラとシャマルが咄嗟に防御を張って凌ごうとした。

「「「

だがそれでも技の余波は凄まじく、バリアの中のなのは達も思わず険しい顔となった。

「ち、外したか。やっぱり扱いが難しいぜ。」

舌打ちをしてそう言ったのち、再び１０倍かめはめ波の構えを取って攻撃を加えようとすると、見ていた恋次は思わず驚愕の表情となる。

「・・・あの野郎・・・あんな技を何発も撃てるのか・・・！！」

と、その時だった。

「返セ・・・返セ・・・！！」

悲痛な叫び声を上げながらユーノは突然姿を消し、一瞬のうちにして悟空の背後へと回り込み、思わず悟空は目を疑った。

「！何だと・・・ッ（オレに近づけることさえ感じさせないだと――――――！今のは瞬歩じゃない。こいつは一体！？）」

「ＧＡＡＡＡＡＡＡＡＡＡＡＡ！！！！！！！！！！！！！！」

その直後、ユーノは晩翠の一振りで悟空を彼方へと吹き飛ばし、悟空は唐突の出来事に頭がついて行かずそのまま地面を滑り続けた。

「がっは！！！！」

ユーノは悟空の元へと飛んでいくと、晩翠を構えて容赦なく悟空の首を討ち取ろうとする。

悟空は何とか体制を整え空中へと回避すると、追いかけてきたユーノと空中での大決戦を勃発させ、幾度となく剣と拳が交わり、あまりの速さと凄まじさになのは達全員は唖然とした。

「何なんだよ・・・あの速さ・・・！全然目で追えねぇ・・・！」

「ユーノ君・・・一体どうしちゃったの・・・！？」

頭が混乱し、目の前の光景をただただ信じたくないとばかりの表情を浮かべるなのは。

そんななのはの事などお構いなく、ユーノは悟空と激しい接戦を繰り広げ、地上に降りた悟空に狙いを定めると、ユーノは腕の力だけで直径2キロに相当する巨大な大地を抉り取り、それを掌に乗せると、悟空に向かって投げつけた。

「こんなものでオレが動揺するとでも思ったか。舐めるな！！！！」

悟空はそう言うと、飛んできた巨大な大地を殴りつけ、粉々に砕き切った。

粉塵が辺り一帯に舞い、視界が何も見えなくなるや否やユーノが飛来し、晩翠を構えて悟空の首を狙って来た。

悟空は辛うじてそれを防ぎきると、距離を取って渾身の一撃を拳に乗せてユーノにぶつけようとした。

すると、ユーノは目に見えない速度で移動し悟空のそれこそ大地を割ってしまうほどの威力を秘めた渾身の拳を左手だけで受け止めて

しまい、悟空はその光景に目を疑った。

「！（馬鹿な・・・素手で――――！！）」

「ＯＯＯ

「悟空！春野サクラが到着したわよ！」

「た、助かった・・・！」

サクラは動けなくなった悟空を抱きかかえると、煙玉を用いて姿を眩ませユーノの前から戦線離脱。

悟空がいなくなった後、なのは達ははっとした表情を浮かべる。

「しまった！！」

「くそ！」

と、急いで居なくなった二人を追いかけようとする前線メンバーだったが、その瞬間ユーノの咆哮が一層激しさを増した。

「ＧＡＡＡ

！！！

「お止め下さい、店長！！！どうか正気を！！！！取り戻してくだされ！！私の声を聞いてくだされ！！！」

すると、金太郎の言葉を聞いた瞬間ユーノは瞬間移動を果たし、そんな金太郎の体をブラッド状態の鎧ごと斬り裂く。

「っが・・・！」

金太郎は為す術もなく血を流してその場に倒れると、見ていた浦太郎や鬼太郎も声を上げた。

「「「金ちゃん（熊）！！！」」」

しかしその直後、二人もユーノによって切り伏せられ金太郎の二の舞となった。

「「だあああああああああ！！！！」」

「鬼太郎！浦太郎！！！！！」

次々と倒れていく仲間の姿に目を隠してしまうなのは。

そんななのはの傍らでしゃがんでいたフェイトはバルディッシュを杖代わりにして起き上がると、ユーノに向かって攻撃を仕掛ける。

「ユーノ！！！お願い・・・もう止めて！！」

〈Ｚａｍｂｅｒ　Ｂｒｅａｋｅｒ〉

フェイトは全てのカートリッジを使い切り、ユーノを止めることだ

けに一点集中させたザンバー無頼カーを脳天に叩き込もうとした。

「ほおおおおおおおおおおお！！！！！」

だが、その攻撃はユーノには届かずザンバーブレイカーは刀身ごとユーノの右腕の人差し指一本で受け止められた。

「え――――――！」

疑いたくなる光景に目を見開くフェイトだが、その瞬間フェイトはユーノによって体を斬り裂かれ、多量の血を流してその場に倒れ伏した。

「ぐっは！！」

「フェイトちゃん！！！！！！！！！！！」

なのははかけがえのない親友でさえも平気で切り伏せてしまう今のユーノに怒りを通り越して純粋に恐怖を抱き始めるが、それでもなのはは涙ながらに我を失うユーノを止めようと言葉を投げかける。

「もう止めてユーノ君！！！！！敵はいなくなったのに、どうしてこんなことするの！！！！！目を覚まして、お願いユーノ君！！！みんなを・・・みんなを傷つけないで！！！！！！」

しかしなのはの声など届かず、ユーノは真っ直ぐになのはの元へと向かって行く。

なのはは人間のそれを通り越した恐怖のあまり杖を向けることが出来ず、全身を震え上がらせ硬直する。

すると、そんななのはに代わって攻撃を仕掛けたのが――――――

〈Ｂｌａｚｅ　ｃａｎｎｏｎ〉

「！」

そう、ユーノの悪友であるクロノ・ハラオウンだった。

「クロノ君・・・！」

「黒河童、お前・・・」

唖然とするなのは、銀時、恋次の三人。

クロノは毅然とした様子でユーノの方に杖を向けるが、それでもやはり恐怖を抱いていた為、杖が小刻みに震えていた。

と、その時ユーノは瞬間移動するや否や血塗れとなって倒れるフェイトの元へと現れ、自分が持っていた晩翠の切っ先をフェイトの首筋に突き立てた。

これを見たクロノは驚愕の表情を浮かべ、直ぐにユーノの行動を止めようと高速で移動し、刀を握りしめるユーノの手首を強く握りしめ、こう言った。

「・・・もう止すんだ・・・ユーノ。新八君は連れ去られ、敵もいなくなってしまった。周りを見てみろ。お前の前にいるのはお前の仲間の筈だろ？これ以上の暴走は僕が赦さない。お前の悪友として、お前を止めなくてはならない・・・」

悲痛な気持ちでそう口にするクロノだったが、ユーノはなおも力を緩めず小刻みに手を震わせながらフェイトに切っ先を突き付ける。

「聞こえないのか、ユーノ・・・！止めろと言っている・・・！そんな事をすれば本当に・・・お前は人間じゃなくなる・・・・・・！」

しかしそれでもユーノのやろうとすることに変わりはなく、クロノは声を荒げて必死にユーノを止めようとした。

「止めるんだ、ユーノ！！！」

と、そう言った瞬間。

理性を失ったユーノは晩翠の切っ先をフェイトからクロノに変更すると、そのまま晩翠をクロノの腹部に突き刺し、クロノは突然の出来事に頭が回らなかった。

「！」

「クロノ君！！！！」

「「クロノ（黒河童）！！！！！」」

なのは、銀時、恋人の三人はクロノのその姿に思わず声を荒げる。

するとその時、なのはの耳にユーノの言葉と思わしき加工したかのような声が聞こえてきた。

「・・・ケル・・・助・・・ケル・・・僕・・・ガ・・・助ケル・・・」

なのははその声を耳にした途端、顔色を一変させた。

「！（これは――――――ユーノ君の心の声。まさかユーノ君は、銀さんや新八君を助けようとして、あんな姿になっちゃったの！？ユーノ君は・・・あんな姿になってもまだ新八君の事を助けようとして――――――どうして。どうして私は何もできないの！ユーノ君の力になりたいのに、ユーノ君のことを護りたいのに、ユーノ君が大切だから助けたいのに・・・・・・なのにどうして！！どうして私は最後の最後までユーノ君の事助けてあげられないの！！）」

自分の非力さをこれでもかと痛感したなのははその場に跪き、その瞳から一筋の涙が零れ落ちる。

すると、重い体を起こした恋次と銀時は刀を手に取ると動けないでいるなのはに代わって自分たちがユーノを止めようとして動き出した。

「ゆ・・・ユーノ・・・」

「ほおおおお！！！！！！！！止めやがれ、この野郎！！！」

全速力でユーノに駆け出していく二人。

と、その瞬間またしてもユーノは一瞬のうちに二人の背後へと回り込んだ。

「「！」」

驚き返る二人であったが、ユーノはそんな二人に容赦なく斬撃を浴びせ、二人は血を吹き流して倒れ込んだ。

「「ぐあああああああ！！！」」

なのははその光景を見た瞬間、頭が真っ白なる。

そして、辛うじて息をしている二人にユーノが徐に近づき止めの一撃を加えようとしたので、なのはは泣き叫びながらユーノの事を止めようとした。

「待って！ユーノ君！！！ユーノ君！！！！ユーノ君！！！！！」

ユーノはなのはの言葉などまるで聞こえなどいない。

徐に口を開け漆黒の壊業閃を生成し二人を跡形もなく消し去ろうとした正にその時。

ユーノの背後から仮面を身に纏い、天鎖斬月に霊圧を圧縮させた黒崎一護が現れた。

「「「！」」」

「ほおおおおおおおおおおおおおおお！！！！！！！！！！！！！！！！！ユーノ！！！！！！！！！！！！！！！！！」

一護は虚化状態での月牙天衝を後頭部からお見舞いし、二人をどうにか救い出す。

なのはや銀時、恋次の三人は突如として現れた一護の姿に思わず目を疑った。

「い・・・一護さん!?」

「おいおい・・・マジかよ・・・黒崎一護・・・生で本物・・・!」

銀時は以前通信ではあるが一護の姿を見ていたが、こうして生の一護の姿を見るのはこれが初めてであった。

一護は三人をユーノから距離を離して避難させると、近くに現れ虚化を解除する。

「一護・・・お前、何でここに!?」

恋次がそう尋ねると、険しい表情を見せながら一護が次のように言って来た。

「俺だけじゃねぇさ。全員集結してるぜ。」

「全員・・・!」

と、なのはがそう呟いた直後、後ろの方から五人の人影が現れ、そのうちの四人・・・夜一・茶渡・石田・浦原は己の得意技をユーノに向けて放った。

「はあああああああああ!!!!」

「巨人の一撃!!!」

「光の雨！！」

「啼け、紅姫！」

四人のそれぞれに必殺の威力を秘めた技が直撃すると、ユーノの左腕は引き裂かれその場に腕が落ちる。

そして、最後の一人である織姫がなのは達の元へと駆けつけた。

「なのはさん！みんな！！」

「織姫さん・・・！石田さんに茶渡さん・・・浦原さんに夜一さんまで・・・！」

「壮観だな・・・ＢＬＥＡＣＨファミリー勢揃いかよ・・・」

銀時はこうしてＢＬＥＡＣＨの漫画のキャラを生で見ると、一瞬は感動したのだが直ぐに状況を見て複雑な表情を浮かべる。

一護は織姫が到着すると、天鎖斬月を持って後の処置を織姫に任せた。

「織姫！みんなを護ってくれ。俺は・・・ユーノを助ける！」

「分かった！あなた・・・絶対に死なないで！」

「ああ。行くぜ、みんな！」

「「「「おう！」」」」

一護がそう言うと、ユーノの危機に駆けつけてきた四人は一斉に飛び出し、ユーノの暴走を止めるために命を捨てる覚悟で挑んでいった。

織姫は急いで盾舜六花の能力をフルに発動させると、負傷して動けずにいる全ての前線メンバーを多い隠し、双天帰盾による治療を始める。

「なのはさん。恋次君。それに銀さんでしたっけ。話は概ね聞いてます。今、手当てをしますから。」

「ああ・・・すまねぇ・・・」

「助かったぜ・・・」

「あの、織姫さん・・・!ユーノ君は・・・ユーノ君はどうしちゃってんですか!?なんであんな姿になっちゃったんですか!?」

焦燥を滲み出すなのはがそう尋ねると、織姫は悲痛な想いを顔に出しながらこう返した。

「・・・詳しくはあとで全部話します。兎に角、早いうちに収拾をつけないと取り返しのつかないことになんです。」

「え?」

一瞬の言葉の意味が分からなかったなのは達。

そんななのは達とは別に、一護達はユーノと壮絶な戦いを繰り広げていた。

「ほおおお

霊圧を最大限にまで上昇させると、赤と黒の混じったそれを外へと放出する。

「ほあああああああああああああああああああああああああ！！！！！！！！！！！！！！！」

なのはと銀時は急激な一護の霊圧上昇に戸惑いを見せた。

「な、何!?」

「おいおい!?今度は何があるんだよ・・・！」

そんな二人の横で、恋次は見覚えのある光景に思わず目を疑った。

「この霊圧・・・・・一護まさか！！」

そう口にした間も一護は霊圧の上昇を続け、叫び声を上げながら体の奥に眠る虚の力を呼び覚まそうとしていた。

「アアアアアアアアアアアアアアアアアアアアアア！！！！！！！！！！！！！！」

叫び声をあげる一護の周りを黒と赤の混じった濃い霊圧が包み込み、なのは達が思わず身を構えて霊圧の中の様子を窺うと、そこから見えてきたのはユーノと同じように異形の姿へと変貌を遂げた一護の姿だった。

「え！」

なのはは目の前の一護の姿に目を疑った。

今の一護の容貌は、悪く言えば化物に違いはないが、それは嘗て一護が織姫を守ろうとした際に破面のウルキオラとの戦いで使用したものと全く同一の姿。

外見は2本の角と仮面紋のついた仮面、白い肌、胸の孔と虚の特徴を色濃く残した姿、そして髪も長髪に変化している。

これこそ、一護が長年の修行の末に辛うじて会得することが出来た虚化の極み、完全虚化である。

銀時はその姿の一護の目の当たりにすると、目を見開きながら隣の恋次に尋ねようとした。

「おい！あれってまさか・・・！！」

「ああ・・・完全虚化・・・！」

「完全・・・虚化・・・！？」

何も事情を知らないでいるなのははただただその姿に目を疑うばかりであったが、完全虚化した一護はその瞬間、ユーノと一緒に霊圧を放出させながら方向を上げる。

「「GAAAAAAAAAAAAAAAAAAAAAAAAAAAAAAAAAA！！！！！！！！！！！！！！」」

「「「うわあああああああああ！！！」」」

「「「「「く！！」」」」」

あまりの咆哮の圧に体がどうにかなってしまいそうになるなのは達だが、一護はそれでも必死に理性を保ちながら目の前で苦しんでいるユーノを助けようとした。

「（ユーノ・・・待ってろ。俺達が必ず助ける。だから、ちょっと痛いが我慢しろよ！）」

一護はそう心の中で呟くと、響転（ソニード）と呼ばれる破面特有の高速移動を使ってユーノの背後に回り込むと、ユーノの腕を握りしめ天鎖斬月の刃先より月牙をお見舞いし、大ダメージを与える。

至近距離から体を斬り裂かれ、悶絶するユーノを見て、夜一は好機と判断する。

「今じゃ！」

夜一の合図を聞くと、先ずは石田から動き出す。

石田は先ず所持していた滅却師唯一の刃を持った武器「魂を斬り裂くもの（ゼーレシュナイダー）」を取出し、それを使って描いた滅却印（クインシーツァイヒェン）の陣に悶絶し動けないでいるユーノを閉じ込め、銀筒に集めた霊子をゼーレシュナイダーに流し込むことで陣内で爆発を起こす技、破芒陣（シュプレンガー）を発動する。

「破芒陣」

霊視を注いだ瞬間熾きる大爆発に巻き込まれ、ユーノは更に声を上げて苦しむ。

その後、茶渡が「攻撃の力」を有した左腕を白を基調とした色の腕へと変化させる。

「悪魔の左腕（ブラソ・イスキエルダ・デル・ディアブロ）」

そして、そこから巨人の右腕とは比べ物にならないほど威力が高く、解放状態の破面でさえ一撃で倒したパンチを繰り出す。

「『魔人の一撃（ラ・ムエルテ）』！」

茶渡魔人の一撃を放った直後にその上乗せと言う形で夜一が瞬閧を発動させる。

「瞬閧（しゅんこう）！！」

二人の強力な霊圧に用る攻撃がのた打ち回るユーノにクリーンヒットし、ユーノは更にダメージを蓄積させていく。

そして、二人の攻撃の後に一番最後となった浦原が封殺型の縛道を発動させる。

「縛道の九十九　第二番『卍禁』！」

地面に両指を擦りつけながら浦原は卍禁を順に発動させていく。

「初曲『止綯（しりゅう）』・弐曲『百連閂（ひゃくれんさん）』！」

巨大な布を対象であるユーノに巻き付け、動きを止めるとすかさず数十本の鉄串が突き刺し、ユーノを完全に固定すると、最後に両手を合わせながら浦原は最後の詠唱を口にする。

「終曲『卍禁太封（ばんきんたいほう）』！！」

そう言うと、巻きつけられたユーノの頭上から卍の模様が刻まれた巨大な碑石が降りかかり、そのままユーノを圧し潰した。

そして、卍禁太封から解放された今にも力尽きそうなユーノを見ると、完全虚化した一護は狙いを定めて二本の角より生成した特大の虚閃を浴びせる。

ユーノは超速再生もままならず凄まじい威力を秘めた一護の虚閃をその身に喰らうと、日空距離を伸ばして吹き飛んでいく。

そして、最後に石田が完全虚化状態の一護に向かってこう言った。

「今だ黒崎！！！！！！！！最後はお前の力で、愛弟子のユーノ君の目を、覚まさせろ！！！！！！！！！！！」

石田の言葉を聞くと、一護は首を縦に振ってからユーノの元へと飛んでいき、斬魄刀を掲げると最後の一撃のつもりで全霊圧を注ぎ込んだ特大サイズの月牙天衝をぶつけに行った。

「ユーノ！！！！！！！！！！！

そして、霊圧の嵐が収まり視界が晴れてくると、完全虚化した一護の真正面に佇んでいた化物の姿のユーノはと言うと、化け物の姿がひび割れ始め、完全にそれが割れると中から出て来たのは魂が抜けたかのように白い目と白い肌をした上半身裸のユーノであった。

「・・・ゆ・・・ユーノ・・・君・・・？」

一瞬驚いた顔となるなのはと、その隣に立つ銀時と恋次。

ユーノは徐に目の前に倒れると、かけていたメガネと結っていた緑色のリボンが解ける。

なのはは織姫の治療を終えると、急いで三人と共にユーノの元へと駆け寄っていった。

「！ユーノ君！！」

「「ユーノ！！」」

三人が駆け寄りユーノの意識を確かめるが、ユーノはまるで死人のように体が冷たくなっていた。

「ユーノ君！！ユーノ君！！」

身体を幾ら揺すってもユーノはまるで返事をしない。

それどこから本当にそれが生きているのか分からない状況でもあった。

するとその瞬間、傍らに立っていた完全虚化した一護が膝をつく。

「ぐ！」

「あなた！」

「「「一護！」」」

「「黒崎（さん）！」」

織姫達が駆け寄った瞬間、一護の完全虚化もその場で解け、ユーノ同様一護は上半身裸の状態で息を切らしながら地面に手を当てていた。

「は、は、は、は、は。（くそ・・・やっぱ・・・この歳で完全虚化を維持するのはキツイぜ・・・霊圧もほとんど使い果たしちまったし・・・これ以上は無理だな・・・・・・それにしても――――）」

そう思いながら、一護はなのはの呼びかけにも一切応答しない今のユーノと暴走状態のあの姿を思い返しながら険しい表情を浮かべた。

「（まさかこんなタイミングで呪印が暴走を起こすとは、夢にも思ってなかったぜ――――――）」

と、その時織姫の治療を受け真っ先に目を覚ましたのはルキアだった。

「う・・・私は一体・・・・・・！」

織姫がルキアが目を覚ましたことに気づくと、直ぐにルキアの元へと駆け寄って状態を確かめる。

「朽木さん！よかった、目が覚めたんだね！？」

「井上・・・それに一護に・・・浦原達まで何故ここに！？」

ルキアは前にいる本来ならいる筈のない六人の姿に思わず目を疑っていたが、浦原が険しい表情を浮かべながら次のように語ってきた。

「スクライアさんの異変を感じて、急いで駆け付けて来たんすよ。我々と黒崎さんの力で何とか最悪の事態は回避できましたが――――」

浦原はそう言いながらユーノの方へと目を向け、危惧の念を抱いているとルキアはすぐに一護に事の真相を聞き出そうとしてきた。

「！一護！どういうことだ！？何故ユーノ殿があんな姿に・・・一体お前は何を知っているのだ！？詳しく教えろ！」

「ああ・・・そうだな。実はな――――――」

と、一護が重苦しい表情で今回の異例の事態に関して説明を加えようとした直後だった。

「「「

「へ！？」

突然の事に思わず目を疑うなのは達。

そして、その後ユーノの背中に刻まれた何とも悍ましい呪印の姿を目の当たりにした瞬間、銀時や恋次は思わず絶句しそうになった。

「何だ・・・こいつは・・・！？」

「・・・背中に・・・痣が・・・・・・だがこいつは・・・・・・！？」

恋次がそう言うと、横で同じものを見ていたルキアが目を見開きながら見覚えのある痣の形に思わずこう呟いた。

「地獄――――――・・・・・・“地獄の門”か――――――・・・・！」

「じ、地獄の門・・・だと・・・！？」

地獄と言う言葉を耳にし、思わず耳を疑った銀時。

そして、放心状態のなのは。

「・・・ゆ・・・ユーノ・・・・・・・君・・・？」

「――――――」

なのはがそう口にしても、ユーノの応答はなかった。

なのははそんなユーノの姿を目で捉えた瞬間、堪えきらずに叫び声をあげた。

「ユーノ君！！！

「さぁ・・・いよいよ準備は整った。アンゴルモアに・・・・・・五つの本型ロスト・ロギア・・・・・・・次元干渉を引き起こす四つのプリズムシード・・・・・・そして――――――それら全ての器たるマテリアル・・・――これこそ、私の探し求めていた理想の形！さぁ、計画は最終局面を迎えた！あとは実行あるのみ！！格別の現実世界の終焉と新世界の神の誕生を人類を始めすべての生物は見ることになろう・・・ふふふふははははははは！！！！！！！！！」

研究室全体にカトゥーンの高笑いが響き渡る。

連れ去れた新八。

カトゥーンによる現実世界終焉のシナリオ。

ユーノ・スクライアの変貌と暴走。

事態は大きく急展開を迎える。

一旦暴れ出したら止まらない（後書き）

教えて、銀八先生！

銀「はい・・・今日はユーノ先生がとんでもないことになってしまい、コーナーどころではないので俺が代行します。そんな訳で質問いきます。ペンネーム『ユーノ君大好きです！結婚してください！』さんからの質問・・・・・『世間ではユーノ君に対する評価が著しく低いだけでなく、広く淫獣とか言われて罵られていますけど、ユーノ君はものすごく格好いいんです。どの辺が格好いいって言うと、献身的になのはのことを温かく見守り守っているところかマジ格好いいじゃないですか?それでふと思ったんですが、それなのにどうしてリリカルなのはではユーノ君は格好いい癖に世間一般の認知度は低く、扱いも酷いのですか?』。はい、ズバリお答えしましょう。」

銀八先生は間を置いた後、真顔でこう言い切った。

銀「そりゃやっぱ金にならないからだろ。所詮世の中金だよ。百合路線で金が儲かるなら原作者も大人の連中も何だってやります。そんな訳でコンプエース及び娘マガジン！！いい加減百合路線のイラスト載せるのやめてくんない！！見てて不快になるだけだから！！もっとユーノ出せ！！！」

魔導師図鑑ハイパー！

黒崎一護と黒崎織姫とコン様の解説銀魂篇！！

一「とうとうヤバいことになっちまったなオイ。」

織「ユーノさんの呪印の力が暴走・・・おまけに新八君も連れ去られちゃった・・・！」

コン「事態は切迫しちまってるが、次回からはどんな展開になるんだよオイ！？」

一「取りあえず、ユーノが今後どうなるかによるんじゃねぇか。しかし、本当に大丈夫だろうか・・・」

織「大丈夫だよ、あなた。きっとユーノさんなら大丈夫だから。」

コン「あいつがんな簡単にどうにかなるかってんだ！よし！ここはユーノの無事を祈って願掛けをしようぜ！」

コンはそう言うと、織姫と共に千羽鶴を折り始める。

織「ユーノさんが良くなりますように！ユーノさんが良くなりますように！」

コン「これであいつも元気になるぞ！！」

一「・・・いや・・・あんましそれ意味ねぇと思うけど・・・」

不安一色の一護であった。

次回予告

異形の姿に変貌し、再起不能となったユーノ。

変わり果てたユーノの姿を見て、悲しみに暮れるなのは達。

そして、一護から語られるこれまで謎だったユーノの卍解、そして呪印の謎と秘密――――――

鬼「次回『それでも人には言えないことがある』」

それでも人には言えないことがある（前書き）

ギ「テトラカトゥーンと漫画キャラによる襲撃。３０人にも満たない機動六課前線メンバーに対して、敵の数は１０００人余り・・・分が悪すぎる。」

ギ「漫画キャラ戦で新八さんはさらわれ、襲撃を受けた際ユーノ先生を庇って息を引き取った明神弥彦・・・・・・そして、ユーノ先生は異形の姿となって暴走・・・・・・凄まじい破壊力でこの人外の世界を半分近く壊滅させてしまい、非力な私達は止めることすら出来なかった・・・」

ギ「辛うじて救援に駆けつけてきた一護さん達の協力でユーノ先生は元の姿に戻ったが、その後背中にこの世のものとは思えない悍ましい痣を刻み、全く動かなくなった・・・」

ギ「私達はどうなるの・・・・・・新八さんは・・・・・・そして、ユーノ先生は・・・・・・」

それでも人には言えないことがある

＞i25147―709＜

ユーノ・スクライア外伝　前回の三つの出来事

一つ、漫画キャラが騒動の最中新八を連れ去る。

二つ、新八を助けようとした銀時が重傷を負い、それを目撃したユーノが突然異形の姿へと変貌する。

そして三つ、暴走するユーノを救援に駆け付けた一護達が止める。

一護達の救援によって、ユーノの暴走はどうにかおさまった。

しかし、ユーノは依然白い目を向けたまま血の気の引いた白い肌一色の状態で全く動く気配すら見せなかった。

織姫の治療を受け、傷の癒えたばかりのなのは達全員は担架に乗せられたユーノの姿に絶句し、なのはや一護はそんなユーノに悲痛な想いで必死で呼びかける。

「ユーノ君!!!しっかりして!!!!返事してよ!!!ユーノ君!!!!」

「おいユーノ!!何とか言えよ!!!おい!!!!ユーノ!!!」

「・・・・・」

しかし、二人の呼びかけにも拘らずやはりユーノは一切応答せず、全員の顔が益々歪んでいく。

「まるで返事がない!?」

「パパ!!!!ねぇパパ!!!!お願いだから返事をして!!!!」

「シャマル!どうなっておるのだ!?スクライアの身に何が起きた!」

シグナムがいつも以上に声を荒げりながらシャマルに尋ねると、あ

らゆる魔法を駆使して状態を確認しようとするシャマルがユーノの心臓に聴診器を当てながらかなり困惑した様子で次のように答えた。

「それが・・・全く分からないの!!すべてのセンサーや魔法を駆使して原因を調べようとしても、全部がオーバーロードして止まっちゃうのよ!!まるで、何もかもを拒絶するように・・・――――!!ただ一つだけわかってることとすれば・・・・・・今ユーノ君の心臓が完全に止まってるってこと・・・!」

「「「

界の“魔法”と言う手段ではどうすることも出来ないようになっているんス。」

「え？」

一瞬耳を疑うシャマルやなのは達。

ティアナはすぐさま浦原に聞き直した。

「ど、どういう事ですかそれ！？魔法じゃどうにもならないというのは！？」

「詳細は黒崎サンが話します。一先ず、スクライアさんの処置はアタシ達に任せてもらえませんか？私と夜一サンの鬼道、織姫サンの盾舜六花の力でどうにかします。」

浦原がそう言うと、聞いていた夜一と織姫は顔を見合わせ意思表示を表し、金太郎も最後の頼みの綱を三人に委ねることとした。

「それにしか手がないようですね・・・・・・お三方とも。どうか・・・・・お願いします！！」

「お願いします！！ユーノ君を・・・――――助けてください！！」

なのはも泣きながら織姫に縋りつくと、見ていた織姫や浦原も心が痛む。

「・・・なのはさん・・・」

「はい・・・全力を尽くします。」

「やるぞ、喜助。織姫。」

夜一がそう言うと、三人は担架の上のユーノを出術質へと運ぶと、厳重に鍵をかけたのちに治療を開始し始めた。

手術中のランプが点灯され、沈黙状態が流れる中ユーノに対して何一つ適切な処置をしてあげれなかったシャマルの顔が酷く曇る。

「私は――――――」

すると、自分を責め立てようとするシャマルの肩にシグナムの手が乗せられ、シグナムは優しく次のように言葉を投げかけた。

「無力などとは言うな、シャマル。今はこれしか手がないのであれば、あの三人にスクライアを任せるしかない。こんな症状は今まで見たことのないのだ・・・・・自分を追い詰めるなよ。」

「・・・ええ」

煮え切らない気持ちで一杯のシャマルだったが、シグナムの言ってることも一理あるとし素直にこの場は引き下がり三人に全てを託すことにした。

全員の顔が浮かない中、一護は全員を一度ロビーに集めることにした。

「よし。全員一端ロビーに集まってくれ。俺から詳しく説明するぜ。今ユーノの身に何が起こったのか、あの姿が何だったのか――――――洗いざらいすべて。」

なのは達は一護の言葉を聞くと、はっとした表情となり重苦しい雰囲気を醸し出しながらロビーの方へと集まることにした。

なのは達前線メンバー全員と次元漂流者の銀時達、そしてシャーリー達バックヤードスタッフ一同もロビーに集まり、その中心に座る一護が全員の集合を確認すると徐に口を開く。

「先ずは、何処から話せばいいもんかな。」

「やはり、ユーノが突然変貌した時のあの姿の事でしょうか。」

「出来れば、ここにいる全員の頭でも分かる様に・・・詳しく取りこぼしのないように。」

クロノとフェイトがそう言った後、恋次が単刀直入にユーノの変貌した時の姿の事を聞いてくる。

「それで、一護・・・――――ユーノの野郎のあの姿・・・あれは一体なんだ?」

恋次が尋ねると、一度一護は口を閉じて沈黙を保つ。

なのははそんな一護に呼びかける。

「一護さん――――――」

なのはが呼びかけた後、両隣に座っていた茶渡と石田も一護に呼びかける。

「一護・・・・・・」

「黒崎・・・・・・」

二人の言葉を聞くと、全員が注目する中一護は意を決して今まで話さないでいたユーノの衝撃的な秘密のうち、暴走した時の姿について話し始めた。

「・・・ああ。ユーノのあの姿はな・・・――“クシャナーダ化”って言うんだ。」

その言葉を口にした瞬間、クシャナーダと言う言葉に反応して恋次達死神組、更にはスクライア商店の三人が驚きの表情を浮かべた。

「「「「「「「く、クシャナーダ!!」」」」」」」

驚く七人を余所に、まるでクシャナーダと言うものに関して無知で居るなのは達はきょとんとし、徐にはやてやクロノがその単語について聞いてみた。

「な、何ですかそのクシャナーダって・・・？」

「ユーノのあの姿は、クシャナーダと言うのですか。しかし、一体それは・・・」

すると、二人の質問を聞いたのち、複雑な表情で恋次が徐にクシャナーダの正体を明かす。

「――――――地獄の番人のことだ。」

それを聞いた瞬間、この場にいる機動六課前線メンバーは耳を疑った。

「「「「「え!!」」」」」

「地獄の・・・!?」

「番人!」

衝撃的な内容を聞かされ、全員が挙動不審な態度をとる中で、フェイトが必至に理性を取り繕いながら徐に聞き直した。

「ちょ、ちょっと待ってください・・・!地獄って・・・まさか、あの地獄の事ですか!?よく作り話とか出てくる死んだ後に悪い人が行く・・・!?」

「ああ・・・その地獄の事だよ。」

眉間に皺を寄せながら一護がそう断言すると、なのは達は一様に表情を一変させた。

「「「「「な!」」」」」

「ま・・・まさか・・・そんな・・・」

「信じられない・・・!」

銀時達もなのは達と同じかそれ以上に驚きを隠し切れないでいる中で、なのははふとあることを思い出しはっとした。

「！そう言えば前にユーノ君――――――――！」

なのははそう言うと、以前プリズムシードの回収任務の際にユーノが話してくれた一護との出逢いの中で、次のような台詞があったことと思い出す。

〈尸魂界・虚圏・そして地獄――――――――〉

「地獄って言ってたけど、まさか本当だとは思わなかった・・・！冗談だと思って軽く聞き流してた・・・！」

「じゃあ、本当に地獄が！？」

ヴィータが驚きで満ちた顔で隣に座るルキアにそう尋ねると、ルキアは罰の悪そうな顔でこの場にいる全員に地獄に関する説明を始めた。

「すまぬな。私達もまだ地獄に関しては話していなかったからな。驚くのも無理はない。私から地獄について説明する。本来、この世界に限らず死んだ人間の魂魄は、死神の持つ斬魄刀により魂の故郷である尸魂界へと魂葬される。虚もまた同様に斬魄刀で斬ることで昇華される。だが、全ての魂魄が尸魂界に行ける訳ではないのだ。生前非道な行いをした者の魂・あるいはその虚は地獄に堕とされる――――――」

「「「「「え！」」」」」

ルキアから聞かされる地獄の説明に終始驚き返るなのは達だが、その後すぐに恋次、白鳥、吉良も順に地獄に関する補足説明を始める。

「そして、堕ちた魂は“咎人（とがびと）”と呼ばれ、鎖に繋がれ番人であるクシャナーダによって永久に罪を責め続けられる――――――それが地獄だ。」

「尸魂界は開闢以来、地獄の連中とそう言った契約の元、無数とも言える魂魄の調整を続けているが、基本的に我々死神は地獄への介入は勿論・・・近づくことさえ禁じられている。」

「万が一地獄へ足を踏み入れた場合、地獄に充満している瘴気（しょうき）を誤って吸えば、死に至り、死ねば最後たとえ死神でも咎人となってしまうからね。」

「な・・・そ・・・そんな・・・」

「ウソみたい・・・！」

「地獄が・・・本当にあって、そんな風になってたなんて・・・！」

なのは達は地獄の説明を聞き終わると、ざわめき返りながら複雑な顔を浮かべる一護達の顔をじっと見つめるのであった。

そんなざわめき返る中で、ルキアが一度全員を静まらせると徐に一護にユーノとの関係を尋ねる。

「しかし一護。地獄とユーノ殿のあれが一体どういう関係にあるというのだ？」

「大有りなんだよ。何故ならユーノは、一度“地獄に堕ちてる”からな――――――」

「！」

「「「「「「「「「「な！」」」」」」」」」」

「何！！」

「ユーノ先生が！？」

「地獄に・・・堕ちてる・・・！？」

一護が口にしたあまりに衝撃的な内容は聞いていたなのは達六課メンバー全員と、銀時達の心を激しく動揺させる。

「ど、どういう事ですかそれ！！何でユーノが！？」

フェイトが挙動不審な様子で問い詰めると、瞳と閉じながら一護は静かにユーノ・スクライアが魔導死神として覚醒してからの出来事を語り始めた。

「・・・すべての始まりは四年前、ユーノが魔導死神として覚醒し、その手に斬魄刀を手にしたことが切っ掛けだったのかもしれないな――――――」

今明かされるユーノの重大な秘密と地獄との関係。

そして、彼が依然として卍解を使わないでいるのか――――――その本当の理由を。

一方その頃、そんな一護達とは別に織姫、浦原、そして夜一の三人は自分の持つ力を再現に発動させ目の前で白目を向いたまま動かな

いでいるユーノに霊力による治療を施しているが、織姫は双天帰盾をも拒絶しようとするユーノの呪印の力に顔色が歪む。

「く！！浦原さん・・・夜一さん・・・！」

織姫が苦しそうにそう言うと、同じ心境で居る夜一はこう言った。

「堪えろ、織姫。諦めるな。ここで諦めたら、それでユーノは終いじゃ――――――」

「スクライアさん――――――あなたを死なせはしない。」

浦原はそう口にすると、この二人以上に険しい表情を浮かべながら鬼道によるユーノの治療を続け、織姫もまた気を取り直して治療に集中するが、内心こんな事を思っていた。

「（・・・ものすごい呪いの力がユーノさんの体を隅から隅まで侵食してる・・・あの時見たく、地獄の力が私達の術を悉く拒んでくる・・・・・・拒絶・・・・・・できない――――――・・・）」

織姫、浦原、夜一の三人は果たしてユーノを治すことが出来るのだろうか！？

一方一護の方はと言うと、全員の視線を一身に浴びながら徐に次のような話し方でユーノの事を語り始めた。

「・・・――昔な・・・・・・一人の男がいた。そいつには心から守りたいと願う奴がいたんだが、生憎その男には守れるだけの力がなかった。だから、守れるだけの力をそいつは心の奥底で願っていたんだ。ま、今となってはその欲望すら渇いちまってただの使命

感になっちまったがな――――――」

「！ひょっとして、ユーノ先生の事じゃ！？」

エリオが気づいたようにそう口にすると、一護は静かに首を縦に振り、更に話を続けた。

「・・・俺はあいつと出逢ってすぐに打ち解けて、色々と面倒を見てきたが、俺は単純な理由でユーノに死神の戦い方を教えた訳じゃないんだ。あいつの・・・呆れるくらいに一途で真っ直ぐな魂に共感したから・・・その曇り気のない純粋な心に惹かれたから、俺と似たようなものを感じて、俺の全てを伝授しようと思ったんだ。」

「それがおめぇとユーノの絆って訳か・・・――――」

訊いていた銀時がそう言うと、一護も肯定の返事をする。

「まぁな。俺が言うのも何だが、あいつの天才ぶりには目を疑ったぜ。俺が教えたことを俺以上の速さで吸収していき、ひとつ教えれば十を通り越して百知って、いつの間にやらとんでもない程までに強く、逞しく成長しやがった。」

一護はそう言った後、懐から一枚のデータが収められたディスクを取出し、それを徐に全員に見せた。

「こいつは当時の記録をこと細かく記録したデータだ。コン、再生してくれ。」

「おし！」

コンは一護からデータを受け取ると、それを専用の機械の中に入れ、徐に適当な個所を再生。

なのは達が注目する中、最初に映ってきたのは魔導死神として日も浅く今とは違って普通の日本刀の形をした己の斬魄刀と死覇装を身に纏ったユーノの姿だった。

「死覇装・・・！？」

「初めて見た・・・ユーノが死覇装を着てるの・・・」

「・・・――――」

初めてお目にかかるユーノの死覇装姿に些か驚く隊長・フォワード陣と、それを複雑な表情で見つめるなのは。

「浦原さんも夜一さんも驚いてやがった・・・何があいつを突き動かすのか、どうしてそこまでして力を求めるのか・・・そんなことを語らせる以前にあいつはその天賦の才で死神としての戦い方を学び・大成し・・・初歩の鬼道を、全部持ち前の頭脳で構成を覚え、応用を利かせて九十番台の鬼道すらも容易く使いこなしたんだ。」

一護はそう言って少し早送りをすると、ユーノが鬼道を使うシーンをクローズアップし、映像の中のユーノは目の前の敵に向かって八十八番の鬼道を使用する。

〈破道の八十八、飛竜撃賊震天雷炮！！〉

映像の中で一際巨大な砲撃が放たれた後、驚愕した表情で吉良と恋次が――――――

「あれって!!」

「飛竜撃賊震天雷炮!!鬼道衆の総帥級の術者のみが発動できる上級破道じゃねぇか!?」

「そんなすげー鬼道を・・・まだ魔導死神として日の浅いユーノが・・・!?」

ヴィータやシグナムもこの映像を見た時はさぞかし驚いたことだろう。

すると、一護はその時の情勢を徐に語り出した。

「当時、俺達の周りには変な奴らがうろついててな・・・奴らはユーノや俺みたいな強い連中の力を奪おうとして、俺やあいつの仲間を・・・平気で傷つけに来た。俺はあの時織姫を守れなかった。だが、ユーノは一人、そんな奴らを止めるために真っ向から勝負に挑んでいったんだ。」

一護がそう言った後、コンは早送りをしその時襲って来た敵数十人と対峙する死覇装姿のユーノの姿を映し出し、徐に再生すると音声が聞こえてきた。

〈きゃつらを傷つけた俺達への復讐か?〉

〈一護さん達が僕に託したのは、仇討ちじゃない。お前たちを止めることだ!〉

映像の中のユーノが晩翠の切っ先を向けながらそう言うと、ユーノ

は数で誇る敵の懐へと飛び込み、血塗れになりながらも戦いぬいた。

「激闘の末、あいつは戦いに勝利した。が、あいつの心は晴れてなかった・・・自分が弱いばかりに、俺や仲間が傷ついたことが我慢ならなかったんだろう・・・自分の相棒すらも、大きく傷ついたんだからな・・・あいつは根っからの他人優先主義だからな。」

一護はそう言いながら、映像の中に映ってきた浮かない表情のユーノとそのユーノが手に取る刃こぼれが目立つ晩翠を一瞥。

それを見ていたなのはの顔も暗くなっていく。

「ユーノ君・・・」

「・・・・・・」

なのはとは別に、銀時は真顔のまま黙ってその映像を見つめていた。

そして、一護は再び話を元に戻した。

「だからこそ、ユーノはその時今よりずっと、かけがえのない人を・・・自分を救ってくれた大切な仲間を今度こそ守り切れるだけの力が欲しいと願うようになった・・・そして、あのプロセスを踏むこととした。」

「あのプロセスって・・・・・・・・まさか!?」

気づいたように浦太郎が口にすると、一護は浦太郎が予想した通りの事を口にする。

「ああ・・・死神としての頂点を極めた者のみが使うことを許された、斬魄刀戦術の最終奥義・・・『卍解』の習得だった。」

「早送りするぜ。」

コンは映像を早送りし、ユーノが自分の斬魄刀の本体である晩翠と熾烈を極めた戦いを繰り広げている映像を映し出し、全員がそれに注目する中で一護は語り出す。

「始解に必要なのは、斬魄刀との『対話』と『同調』であるのに対して卍解に必要なのは『具象化』と『屈服』。つまり、俺達の世界に斬魄刀の本体を引っ張り出すってことだ。」

「じゃあ、前に晩翠さんが現れたのが・・・具象化・・・」

キャロがそう口にすると、全員は金丸彦斎が中心となった唐傘事件の時に協力してくれたユーノの斬魄刀の本体が初めて姿を見せた時の事を思い出し、一護もそれに同調する。

「そう。普通具象化ってのも才ある死神でも数十年はかかるんだが、あいつはその時にはもう具象化を習得してたからな、直ぐに卍解会得の為の凄まじい修行に取り掛かったんだ。並ある死神でも十年はかかる卍解の会得だが・・・あいつはまともなやり方で僅か一カ月にも及ぶ戦いの末、それを会得したんだ。」

「一カ月?!」

「そんな・・・あり得ない!!」

誰しもが耳を疑う中、一護の顔は一切崩れない。

「そう思うのは無理もねぇ。この目で見ないと何とも言えなかったが、俺もその目で見たとき言葉すら失ったぜ。俺も人の事言えた口じゃねぇが、卍解の会得はそうなるものじゃねぇ。あんな賭けみたいな方法で三日で力を会得した俺と、まともなやり方で卍解を勝ち取ったあいつとじゃ比較にもねらねぇんだ。」

「ユーノ・・・なんで・・・どうしてそこまで?!」

今迄口を開かなかった神楽もこのユーノの異常とも取れる行動に困惑した様子となると、一護はコンに尋ねる。

「コン。あのときの記録、残ってるか。」

「ああ。確かこの辺だったな・・・・・・お!ここだ。」

コンは映像を早送りして、土壇場にまで追い詰められた血塗れのユーノと晩翠との卍解会得の為の修行の映像を映し出す。

「晩翠殿と・・・スクライアか。」

「何か話してるようですけど・・・・・・」

「よし。ボリューム上げるぞ。」

コンは小さくて聞こえずらい二人の会話がはっきりと聞こえる様ボリュームを上げると、徐に息切れをしてユーノ同様血塗れとなっている晩翠がユーノに言葉を投げかけてきた。

〈は、は、は、は・・・何故・・・・・・そこまでして力を求

める!?ユーノ!!もう止めてくれ!!これ以上の無茶をすれば、お前は本当に死ぬぞ!〉

〈は、は、は、は、は、は・・・その台詞なら・・・もう聞き飽きたよ・・・僕が立ち止まったから・・・力がなかったから・・・僕がもっと傍にいられたら・・・一護さんはあんな顔をしなくて済んだし・・・・・・“なのは”はあんな大怪我をしなくて済んだんだ!!〉

「!」

なのははそのユーノの言葉を聞いた瞬間、言葉すら失った。

なのは程ではないが、同じようにクロノやフェイト達も同様に言葉を詰まらせる。

「あいつ・・・」

〈勝てるとか、無茶をすれば死ぬとか・・・そんなこと関係ない!勝たなきゃいけないから、僕はここでお前と戦ってるんだ・・・!!〉

「・・・ユーノ・・・あいつは――――――」

驚き返る一同に、一護は複雑な気持ちを抱きながら口を開く。

「一途に、なのはを守りたい・・・なのはの笑顔を守りたい・・・なのはの守りたいものを守りたいと言うその思いだけが、あいつの心と体を執拗に動かしたんだ。すべてはなのは・・・お前のことを思ってな。」

「そ・・・そんな・・・！！私の為にって・・・何で・・・！？どうして・・・！！どうして私に拘るの！！！何でユーノ君は自分の為じゃなくて、私の為なの！！！」

なのはは込み上げてくる色々な想いが一気に溢れかえりそうになりながら、瞳に涙をプ壁ながらそれを両手で多い隠し、ヴィヴィオはそんななのはを横で見つめる。

「なのはママ・・・」

近藤はそんなユーノの心境を知った上でこんな風にも言って来た。

「分かり切ってたことだが、ユーノ先生の異常なまでのなのはへの執着は俺達の理解を遠に超えちまってるな――――――」

すると、その話を聞いて浦太郎が暗い顔でこうも言って来た。

「店長にとって、なのはちゃんの存在が如何に眩しくて、そして自分を明るく照らす太陽であったか・・・・・それは店長を見てれば分かるけどね。」

「だが、卍解を会得しちまったことであいつはこの後、死ぬまで一生背負い続けなければならない大きすぎる呪いをその身に受けることとなったんだ。」

「え・・・呪い！？」

「どういうことだよ、一護！？」

恋次がそう言うと、一護は今まで一番暗い表情を浮かべながら地獄がらみとなる衝撃的な事件の事を語り始める。

「事故が起こったのは・・・・・・ユーノが晩翠との激闘の末、晩翠を屈服状態にし正に卍解の修行が終了した直後だった。ユーノの卍解、『月霊晩翠（げつれいばんすい）』の本当の試練は――――――そこから始まった。」

「月霊晩翠・・・・!?」

「それがユーノくんの卍解の名・・・・・・」

初めて聞かされるユーノの卍解の名前に耳を傾けるなのは達だったが、直ぐにスバルが試練と言う単語に疑問を抱きそれを問うた。

「試練・・・と言いますと?」

すると、一護はそれ聞いてすぐに重苦しい表情でこう言った。

「月霊晩翠を使う上での試練・・・・・・それこそが『地獄に堕ちる』こと。」

「「「

「月霊晩翠の能力とは――――――死神の全斬魄刀の中で唯一、『地獄の力を行使することを許された』禁忌の卍解だ。」

「地獄の力を行使・・・するだと・・・!?」

「しかし地獄に堕ちるって・・・そんな・・・!!」

「俺達も俄かには信じられなかったが、事実だ。あいつは晩翠を屈服させた直後、突然背後から現れた地獄の門に体を拘束され、門が開くと同時に現れたクシャナーダに掴まれ、そのまま地獄へ堕ちて行った。俺はそれを止めようとしたが、止めることが出来なかった――――――」

一護はそう言うと、その時の事を思い出しながら喚き声を上げ地獄に引きずり込まれるユーノをあと少しのところで助けられなかったことに憤りと悔しさを感じながら、その拳を強く握りしめる。

そして、なのはは徐に目を見開きながら徐に口を開ける。

「と言うことは・・・・・ユーノ君は地獄に堕ちて、そこで責苦を与えられたってことですか!?その・・・クシャナーダに!」

「その通りだ。」

「「「

「地獄に堕ちたユーノは、何も知らぬまま鎖に繋がれ咎人として半年間も地獄で過ごした。普通の咎人と違って、ユーノは卍解を得る過程の中で堕ちたという事、そしてそれが地獄からの適正試験のようなものであったと言う事・・・・・あいつが地獄の力を行使する卍解である月霊晩翠を使いこなせる器かどうかを確かめるためのな・・・・・・」

「おいおい・・・そんな話聞いたこともねぇぞ!?地獄の連中が直接死神の力に干渉してくるなんてこと・・・！」

正当な意見を述べる恋次の言い分に一護はこう答えた。

「山本総隊長（ジイさん）にも話したけど、そりゃ驚いてたぜ。だけど、そうなっちまったのは恐らくあいつが崩玉によって力を得て、翡翠の魔導死神として覚醒したことが却って正しいプロセスを狂わせたのかもしれない・・・――」

「！崩玉・・・・・ではやはりユーノ殿は崩玉の力で！？」

「あいつの事だ。その辺は濁していた筈だ。」

一護はそう言うと、銀時はなのは達と共にプリズムシード捜索の任務で訪れたワットタイルで確かにユーノが濁した発言をしていたことを思い出す。

「確かに・・・前の任務でユーノは“ある物質”とは口にしたが、崩玉とは一言も言ってなかったしな。」

「浦原さんは自分が創った崩玉でユーノの人生が狂っちまったこと

に責任を感じてる。だけどユーノはそれでもそんな狂った人生に屈することなく、寧ろ積極的に受け止めて立ち向かっていった。地獄の日々も同じように――――――だけど、あそこでの生活は半端じゃなかった筈だ。」

「と言いますと？」

「地獄って言うのは、常に有象無象のクシャナーダが徘徊していて、咎人を見付けてはその身を食らい、『死』と言う責苦を与え続けるんだ。」

「！咎人を食べるんですか！！」

「じゃあ！！ユーノ君も！！！」

衝撃的な発言に身の毛が凍るなのは達は一護は静かにうなずく。

「何度も食われて、死を味わっただろうな。元よりクシャナーダは咎人が心の中で抱える消えることのない罪意識を増幅させ、その隙間に入り込んで動揺させ、そしてその身を食らう・・・・・実に悪趣味な方法（やりかた）で精神を追い詰めるんだ。しかも地獄ではクシャナーダの前に咎人は逆らえない。故にユーノは魔法もそして霊力も全て封じられ、ユーノの心の中の罪意識を糧にされた・・・――――」

「ユーノ先生が抱える罪意識――――――」

誰かがそう言うと、聞いていたなのはは塞ぎ込みながら顔を押さえ、自分の所為だと責め立てる。

「・・・あ・・・あ・・・私だ・・・・・・私の所為だ――――――

―!!!私の所為で、ユーノ君が!!!」

全員はそんななのはを見ながらかける言葉も思いつかず、黙って口を閉ざすばかりであった。

一護も眉間に皺を寄せながら話を続ける。

「・・・兎も角、そんな地獄の日々を送ったユーノも半年後に現世に帰還した。だが、試練はまだ終わりを迎えちゃいなかった。」

「!お、おい・・・この期に及んでまだあるって言うのかよ!?」

これで終わりと思っていた土方がそう尋ねると、一護は返事を返した。

「地獄の力を行使するんだ。こんなもんじゃ終わらねぇよ。帰ってきたユーノに待っていたのは、それこそ“生き地獄”って奴だった。」

「!生き地獄・・・・・・」

「現世に戻ったユーノは地獄の日々がフラッシュバックし、いっそのこと死んじまったほうが楽になれるとも取れる壮絶な苦しみを味わった。生き地獄を味わってるときのユーノの姿を見るのは正直見るに堪えなかった。その時の体って言うのが・・・――――これだ。」

一護はそう言うと、コンからリモコンを取ってその時の映像を再生するが、再生された瞬間一同はあまりの光景に言葉を失った。

「「「「「!」」」」」

「「「「な！」」」」

「「「「う・・・！」」」」

映し出されていたのは、手足・体・顔面までを包帯で覆われまるで動くけける雰囲気など一切醸し出さないでいるユーノの悲惨な姿だった。

それはなのはが以前空から墜ちた時のそれを遥かに凌ぐ・・・いや、それを比較するまでもなく悲惨で残酷な光景だった。

「これって・・・！？」

「そ・・・そんな・・・！！」

「全身が呪いで侵食され、医者の俺や浦原さんでもどうすることも出来ない状態だった。みんな・・・これから見せる映像は真実を写し撮ったものだから、逃げずにちゃんと見て欲しんだ。気分が悪くなるかもしれないが、これはユーノの意思でもある。」

「ユーノの・・・？」

「だからしっかり見てくれよ。ヴィヴィオ、いいか？」

「は、はい！」

一護がそう言うと、ヴィヴィオも逃げずに父親の真実の映像を見ることを決意し、一護はそれを聞くと瞼を閉じ、コンに最も衝撃的な映像が収められた箇所の再生を促す。

「・・・・・分かった。コン」

「・・・再生するぜ。」

コンは珍しく重苦しい表情でそう言うと、自分でも二度と見たくないと思うほどの悲惨で残酷な映像が収められた箇所の再生を行う。

再生ボタンを押した瞬間、機動六課隊舎に響き渡るほどのユーノの張り裂けるような喚き声が聞こえてきた。

『ぐあああああああああああああああああああああああああ!!!

「地獄での日々がフラッシュバックして、あいつは毎日のように全身から血を噴き出した。全身に奔る地獄の苦しみがユーノに永遠の苦痛を与え続けた。呼吸をすれば血が噴き出て、歩くことも喋ることも出来ないとさえ思えた。このまま魔法も霊力も何かも使えないとさえ、浦原さんや俺も思った。そんの時のあいつは、どんな気持ちだったんだろうな・・・！！」

「あ・・・ああ！！！」

なのははその映像をその目で見た途端、自分の昔の大怪我がこのユーノのそれとは違いへのようなものであった、そんな錯覚に陥りながらも叫びつづけ血を吹き出す猟奇的なその映像に目をそらすことが出来ず、銀時達も衝撃のあまり現実の事なのかと疑い始めるのだった。

「ま・・・マジ・・・かよ・・・・！！」

「何で・・・何でこんな・・・！！」

すると、そんな衝撃ばかりを受ける全員に一護の隣の石田がメガネの位置を直してからこう言った。

「だけど、それでもユーノ君は耐え続けた。半年間の常識外れのその苦痛から・・・なのはちゃんへの想いだけで・・・！」

「・・・や・・・やめて・・・」

『ぐあああああああああああああああああああ！！！！！！！！！！！！！！！！！！！！！！！！なのはあああああああああああああああ

あああああああああ！！！！！！！！！！！！！！！！！！！！！！！！！！！』

「ユーノパパ！！！！！！！！！！！！！！！！！！！！！！！！！！！」

「お願い・・・もう止めて・・・よ・・・・！！」

泣き叫ぶ娘の隣でなのはが静かに呟き始める。

『あああああああああ

「甘えるじゃねぇ！！！！！ユーノを支えられるのはお前しかいねぇんだよ！！！！！お前がいないと、あいつはもっとダメになっちまうんだ！！！！！それとも、お前はこれ以上あいつが一人で苦しむ姿を見たいって言うのかよ！！！！！」

「！」

一護のその言葉を聞くと、なのははふと我に返り表情を一変させる。

「なのは。」

興奮が収まりどうにか落ち着いた様子のなのはの体をそっと放してやったフェイトだったが、直後なのははその場に膝をつき悲しみのあまり涙を地面に零す。

「私は・・・・・・私は・・・・・・・！！」

「なのはさん・・・」

「なのは・・・」

フォワード陣や他の隊長陣もこれほどまでに胸が痛む映像となのはの姿にそれ以上の言葉は思いつかなかった。

茶渡はそんな全員に次のように言った。

「どんなに人並み外れた辛い目に遭っても、ユーノのなのはに対する真っ直ぐな想いだけが呪いの苦痛にも決して屈しない原動力だった。そして、三カ月に及ぶ壮絶な生き地獄から解放されたユーノは、正式に地獄から『贖罪者』、もとい『被選出者』として認められ、

自らの背中に呪印と言う形で地獄の呪いを封じ込めることに成功し、今に至る。同時に卍解の力そのものも一緒に封印した。故にあいつは卍解を使わないんじゃない。使えないんだ。」

「・・・あの野郎・・・だから頑なに卍解を使うことも一緒に風呂に入ることも拒んでやがったのか・・・呪印を他の連中に見られないようにするために・・・・！！」

恋次が苦い顔でそう口にすると、聞いていた石田は更にこう補足する。

「どうしても肌を露出するような場所では、カモフラージュまでしてね。ユーノ君はあの時からずっと戦い続けているんだ。」

「だが呪印を背中に刻み込んでその力を封印したとしても、気を抜けば何時だって呪いがまたユーノの体を蝕み、魂を侵食するか分からない。あいつは常に死と隣り合わせでお前達と一緒にいるんだぜ・・・」

「並の覚悟じゃ、半端な覚悟じゃねぇから・・・あいつは今も昔も俺達みんなを守るために、戦っているんだ。例え自分の身がどうなっても構わないと割り切って――――――！！」

一護は悔しそうにそう口にすると、自然と全員の瞳に涙が灯り、シャマルに至ってはそんな主治医でありながらユーノの状態をまるで分っていなかったと言いながら号泣するぐらいだった。

白鳥はそんなシャマルを一瞥して、暗い表情で言葉を発する。

「ユーノ店長は・・・・・そんなことが遭っても、何時自分の魂

が地獄の連中に食われることも覚悟した上で、そんな苦しみに耐え続けていたのか――――自分がいつ奈落に堕ちても構わないと言っていたが・・・実際に堕ちていたではないか!?地獄は怖いとかだと言っていたが、それを一番知っているのはあの方自身ではないか!?」

「どうして・・・!!どうしてユーノ君が・・・!!!」

もう何もかもが信じられないでいる涙一色のなのは。

隣に座るヴィヴィオも同じように涙を流し、そんななのはの胸の中で泣きじゃくる。

「地獄の呪いは更に、本人を簡単に死に至らせないために、異常なまでの高い生命力を与える。毎度ユーノが大怪我をして、それでも僅かな期間で回復したり、バイタルが安定してのも全てそれ・・・その分生き地獄を味合せる為・・・そして今回、恐れていた事態が起きちまった――――――呪印の力がユーノの感情の爆発とともに解放され、制御の利かなくなったあいつの魂は侵食され、その身をクシャナーダと化した。幸いにも、早い段階で止められたからいいもの・・・もし処置が遅れていたら――――――」

「遅れていたら・・・・・・どうなってたんですか?」

シャーリーが恐る恐るそう尋ねると、一護は重い口を開けてこう言った。

「――――――その凄まじい地獄の力で全ての次元世界を破壊し、同時に自分と同種であるクシャナーダが地獄の門から逆流し、俺達のこの世界そのものが――――――地獄となっていただろう。」

「な！！」

「そ、そんな――――――――！！！」

「私らの世界が・・・――――地獄に！」

夢にも思っていなかったこの発言に誰しもが耳を疑い、同時に頭の中で自分たちの住む世界を始め全ての次元世界が地獄と化す悍ましい光景を浮かべてしまい、恐怖のあまり喚きだす者もいた。

「あいつはこれでもかとばかりに色んなもんを失って来た――――――自己への欲求・自分を育ててくれた家族だったはずの一族・そしてあいつ自身の存在意義。残ったのは決して分けることの出来ない地獄の呪いと、捨てることの出来ない奴自身が抱える使命感・責任感・罪悪感・・・――――それらの要素が今のユーノ・スクライアを縛り付け、あいつから夢を、自由を奪った――――――」

「違います・・・・・・」

「！？」

すると、そんな一護の発言を聞いていたなのはが低い声で否定する。

「なのは！？」

フェイトやはやて達も思わずその言葉を耳を疑ったが、なのははヴィヴィオを解放した後罪の意識に捕われた様子でこう言った。

「ユーノ君からあらゆるものを奪ったのは紛れもなく・・・・・・

この私です――――――――！！！」

「！」

「なのは・・・！」

「私が魔法や色んなものを得る代わりに、ユーノ君は自分の全てを奪われた！！！いや！！私が得るためにユーノ君から根こそぎ奪った！！！私が全部ユーノ君から何もかもを・・・・・！！！ううううううう！！！！！」

なのはの予期せぬ言葉に動揺したフェイトやはやては必死に説得を試みる。

「なのは！何言ってるの！？そんな訳ないよ！！」

「せや！ユーノくんからなのはちゃんは何奪った言うんよ！！そんなこと死んでもあるはずない！！」

「あるよ！！！！だって、ユーノ君が執拗に私に執着するのは・・・・・私がユーノ君を永遠に縛りつけているからだよ！！！私はユーノ君を助けるどころか、その手でユーノ君の手から何もかも奪っちゃった！！！ああああああああああああああああ！！！！！！！！！！！！！」

なのははそう言った直後、自分への怒りとユーノを縛りつけて来たことへの罪悪感、そしてそんな縛り上げられるユーノの悲しみを堪えきれなくなり、号泣する。

「――――――――」

銀時はそんななのはの泣き叫ぶ様子を一瞥し、真顔のまま口を閉ざす。

と、その時だった。

ユーノの様子を見に行っていたグリフィスがロビーの方へと走って来、息を切らしながら手術が終わったことを口にした。

「みなさん!!ユーノ先生の手術がたった今終わりました!!」

「「「!!」」」

手術が終わったということを耳にすると、一護やなのは、銀時達の表情が一変する。

「ほ、本当かそれは!?」

「はい!早く、こちらに!!」

「ユーノ君!!!」

「パパ!!」

なのは達は直ぐに手術室の方へと走り出し、手術中のランプが消えていることを確認し、徐に開くドアの方を見つめる。

「開くぞ・・・・・・」

手術室の扉が開くと、真っ先に出て来たのは顔を沈めた状態の織姫

と、その後ろで口を閉ざす浦原、夜一の二人だった。

「織姫！浦原さん！夜一さん！ユーノの容体――――――！」

「・・・めんなさい・・・」

「え」

「ごめんなさい・・・！！ごめんなさい！！あああああああああああ！！！！！！！！！！」

織姫は泣き叫びごめんなさいの単語を連呼しながら、夫である一護の胸の中に抱きつき、織姫の泣き叫ぶ姿に一護やルキア達は非常に動揺する。

「お、織姫！？」

「何があったのだ井上！？」

織姫の尋常ならない様子を見た後、ザフィーラが徐に浦原に尋ねる。

「浦原殿・・・スクライアは？」

すると、浦原は顔を沈めながら小さい声でこう言った。

「・・・・・スミマセン。みなさん。手は尽くしましたが――――」

「は！まさか・・・！！」

一護がそう危惧する中で、暗い表情の浦原は中へと入り、処置の終えたユーノを外へと運び出す。

処置の終わったユーノのその姿を目の当たりにした瞬間、一同は目を疑い絶句する。

「・・・ゆ・・・ユーノ・・・君・・・」

なのはは目の前の光景を見ると、頭が真っ白となってしまう。

ユーノは地獄の呪いで全身が侵食され、三人の力を以てしてもどうすることも出来ず、結果彼はなのは達が先ほど映像で見たばかりの全身全てを包帯で覆われた姿を現実に目の当たりにすることとなった。

ヴィヴィオは息をする気配もないユーノの姿を見ると、懐に近づき泣き叫ぶ。

「パパ・・・・・・パパ!!!!!!」

「「「ユーノ!!!!!」」」

銀時達も思わずそう口にすると、浦原はその場に膝をつき頭を地面につけてなのは達全員に謝罪の言葉を口にする。

「・・・本当に・・・申し訳ございません!!我々の力が及ばず!!!」

「そ、そんな・・・!!」

変わり果てたユーノの姿を見、最悪の結末を決めつけようとしていると夜一が次のように語って来た。

「まだ死んでおらぬ。仮死状態となっているだけじゃが、最悪な事態であることに変わりはない・・・・・儂らも持てる限りの力を尽くして精一杯頑張ったのだが、地獄の力の方が一枚も二枚も上手じゃった・・・・・・」

「・・・スクライアさんは現在(いま)・・・魂の定着によりどうにか生命は維持出来ていますが、非常に不安定な状態にあります・・・それこそ、何時地獄に堕ちても分からないくらい・・・目を覚ましたとしても、全身に地獄の後遺症が残り・・・スクライアさんは二度と魔法も霊力も、立って歩くことや喋ることも出来なくなるかもしれません・・・」

「！」

なのはの頭に衝撃が走るが、その次の浦原の言葉は最も残酷なものだった。

「・・・最悪の場合・・・彼は二度と・・・目を覚まさないことも大いにあります・・・」

「「「

「そ・・・！！」

「そんな・・・！！！」

織姫は一護の胸の中で自分の非力を呪いながら泣き叫ぶばかり。

「ごめんなさい！！！！！私の力で・・・ユーノさん・・・助けられなかったよ！！！！！ごめんなさい！！！！！！あああああああああああああああああああああああああ！！！！！！！！！！！！！！！」

一護はそんな織姫を抱き寄せながら慰めの言葉をかける。

「織姫・・・・・お前はよくやったよ！だからそんなに自分を責めるんじゃねぇよ。」

「一護の言う通りだ。泣くな、井上」

「あああああああああああああああああああああああああああ！！！！！！！！！！！！！！」

二人がそう言ったからと言って、織姫が泣き止むわけではないが、その時なのはが徐に口を開いた。

「や・・・いや・・・嫌だよ・・・！！」

「！？」

一護達がなのはに目を向けると、なのははヴィヴィオと一緒に包帯で隠れたユーノの顔を覗き込みながらすすり泣くような声でこう言

って来た。

「いやだよ・・・そんなの・・・！！どうして・・・どうしてこうなるの・・・！目を開けてよユーノ君・・・！！私のただ一人の先生・・・！！お願いだから・・・目を開けてよ・・・！！私の名前を言って・・・私に微笑みかけて・・・私を諌めて・・・私を一人にしないで・・・・・・お願い・・・お願いだから・・・嘘だって言ってよ・・・・・・・・ユーノ君／／／

「俺はまた守れなかった！！！！俺は・・・ユーノと約束したのに・・・！！俺達を守ってくれるなら、俺も命懸けでユーノを守るって！！！！なのに・・・俺は・・・また守れなかった！！！！！！あああああああああああああ！！！！！！！！！」

「黒崎・・・」

「一護・・・」

一護の心境を察し、思わず胸が痛む茶渡と石田の二人。

その間になのはの泣き叫ぶ声が響き渡る。

「あああああああああああああああああああああああああユーノ君嫌だよ／／／

「これが落ち着けるか！！！！！！！！そもそも、こいつの造った崩玉のお蔭で店長も他の奴らも大いに迷惑してんだよ！！！！！！！！！！こいつが責任逃れしたばっかりに、店長が一人で罪を背負ったようなもんじゃんかよ！！！！！！！！！！！！！！何もしてない店長が何で一方的に重荷を背負う！！！！！！！！！！答えろゲタ帽子！！！！！！！！！！！！！！」

鬼太郎の怒声を浴びると、浦原は低い声でただただ謝罪の言葉をかけるばかり。

「・・・・・その件に関しては――――――謝ることしかできません・・・本当に・・・申し訳ありません！！」

「謝れなんて言ってねぇ・・・！俺は・・・俺は・・・・！！くそがあああああああああああああああ！！！！！！！！！！」

鬼太郎は血が上ると、そのまま拳を立てて浦太郎を殴ろうとしたが、直ぐに夜一が口を挟んできた。

「止めろ！」

「！」

「ここで争っていても何も解決はせぬ。手は尽くしたのじゃ。あとはユーノ自身の気力の問題じゃ。」

「ユーノ自身の・・・！」

「気力！？」

訝しげな表情で涙目のフェイトやはやてがそう言うと、夜一は側でなくなのはとヴィヴィオに掴まれているユーノを一瞥し、こう口にする。

「今迄こやつが地獄の呪いに堪えてこれたのは、異常なまでに太く折れない精神力あっての事じゃ。普通の人間では到底堪えきれぬほどの苦痛を、ユーノは精神力の強さだけで乗り切ってきたのじゃ。じゃから、今の儂らに出来るのは待つことだけじゃ。こやつが・・・・・今一度這い上がるその瞬間(とき)が来るのを――――――」

夜一の言葉を聞くと、全員は黙り込み処置の終えた動かないユーノを全員は専用の部屋へと連れて行き、一護はその部屋に一人残ると目の前の変わり果てた愛弟子に向かって小さい声で謝罪する。

「・・・ごめんな・・・ユーノ・・・俺・・・約束・・・破っちまって・・・」

「・・・・・・・・・」

何も語ることのない深い眠りにつくユーノに、一護は暗い顔でこう言った。

「・・・・・俺は・・・・・お前の師匠失格だな・・・・・・」

すると、不意に部屋の扉が開くと同時に中に入ってきた意外な人物がこう言った。

「そんな事ねぇんじゃねぇか?」

「ん？」

一護が声の方へと振り返ると、後ろに立っていたのはユーノと今までずっと何かしら行動を共にしてきた坂田銀時だった。

「よう。」

「あんた・・・銀さん。」

「ああ。こうして間近で話すのは、初めてか。隣、いいか」

「――――ああ。」

一護の許諾をもらい、銀時は徐にパイプいすを置いて座り込む。

一護はそんな銀時を一瞥して、先ほどの言葉の真意を尋ねてみた。

「なぁ、さっきの言葉の意味だけど・・・どういうことだよ？」

銀時はそれを聞くと、ユーノの顔を凝視しながら真顔で返事をする。

「ユーノはお前の事話すときは、いつもウキウキしてたぜ。何つーか・・・俺達にはそれこそ理解できないような絆を、お前に抱いてな。」

「俺とユーノの絆か・・・・・・」

「世の中には腐るような師弟もざらにいるが、少なくとも俺は一護とユーノの師弟関係は最上級のものだと思うぜ。お互いに信頼し、窮地の時はどんな時でも駆けつけ、そして背中を預けて戦う。遠く

に離れていても、ずっと繋がっていられる絆――――――それがお前とユーノなんだ。」

「銀さん――――――」

銀時はそんな事を口にしながら、ふと頭の中に自分がまだ幼かった頃、手を指し延ばしてくれた師匠、吉田松陽の面影を思い出しながら更に言葉を並べる。

「荷ごと弟子を背負う背中がお前にはちゃんとある。だから、そんな失格だなんて言葉・・・簡単に吐くんじゃねぇよ。ま、俺がこんな事言えた義理じゃねぇがな・・・」

すると、一護はそんな銀時の言葉を聞いた後、自嘲した様子でこう語った。

「別に。俺はまだこいつの荷を背負えた覚えはねぇさ。こいつは、俺に対しても無意識のうちに遠慮してやがるんだ。俺にはそれが一番辛い。出来れば、こいつの苦しみを一緒に担ぎたいが、生憎全部は無理な話さ。だからこそせめて・・・・・ユーノの荷の一つでいいから、背負いたかった――――――」

これが今の一護の心境である。

銀時はそんな一護の言葉を聞くと、真顔のまま口を閉ざす。

「――――――」

そして、部屋を見渡しユーノの枕元に置かれていた弥彦がユーノに託した折れた逆刃刀、少しほつれた緑のリボン、そして常時付けて

いるひび割れたメガネのうち、メガネを手に取るとそれを自分の服で丹念に拭いてから、包帯で目さえ見えていないユーノにそっとかけてっやった。

「お？銀さん――――――」

銀時の行動に些か驚く一護だったが、銀時は徐にユーノに向かってこう言って来た。

「――――――今は何も見えなくていい。何も見なくていい。次目覚ました時は、視界の輝もきっと消えてらあ。」

「銀さん・・・」

「お前があん時、命懸けて新八を助けようとした時の様に、今度目覚ました時は・・・・・新八と一緒に、俺達がお前を必ず助けてやらあ。だから、今は眠ってろ。お前が背負おうとしたもんは代わりに俺達が背負う。その為の・・・・・“仲間”だ。」

銀時はそう言うと、返答のないユーノの側に一護と一緒に居続けるのであった。

また、そんな二人とは違いロビーの方に残っていたスクライア商店メンバーや前線メンバー数人は暗い顔を浮かべたり、悔しい気持ちでいっぱいだった。

「くそ！」

鬼太郎は壁に何度も拳をぶつけては何もできなかった自分に対して憤りを感じる。

「鬼太郎さん・・・」

「どうしてなんだよ・・・どうしていっつもこうなんだよ・・・！」

鬼太郎の目に浮かぶ悔し涙を見ながら、神楽は不安げな表情で口にする。

「ユーノ・・・・・・このまま目覚まさないこと、ないアルよな！？」

「・・・ある訳・・・ねぇって言いたいがな・・・」

総悟も神楽と同じでそうならないで欲しいと切に祈るばかりであった。

そして、そんな総悟の近くでヴィヴィオがフェイトの胸の中でユーノがこのようなことになってしまったことにただただ涙を流すばかりだった。

「うわあああああああ！！ユーノパパが！！！！！うわあああああああ！！！！！」

フェイトはヴィヴィオの体を抱きしめながら目に涙を浮かべ、はやてと共に自分たちの力でユーノを助けられなかったことを謝罪する。

「ヴィヴィオ・・・ごめんね。私達の力が及ばないばっかりに・・・ユーノのこと守りきれなくて・・・！」

「部隊長として・・・一人の友人として・・・私はユーノくんのこ

と・・・何一つ守れなかった・・・新八くんもそうや・・・」

「新八さん・・・私も・・・新八さんを守れなかっ／／／／／／あああああああ！！！」

ギンガはその場にいない連れ去られた新八の事を不意に思い出すと、あの日交わした新八との約束を果たせなかったことに涙する。

「ギン姉・・・」

「ギンガさん・・・」

思わずギンガの涙に心痛むスバル達。

すると、その時はやての元にグリフィスが連絡を入れてきた。

『失礼します。本局と聖王教会から、来客四名が到着しています。』

「来客？」

「誰でしょうか一体？」

訝しげな表情を浮かべるはやて達だったが、その直後駆け足でロビーの方へと走ってきたのは、六課の後見人であるリンディ、カリムを始め、シャッハにヴェロッサ、そしてアルフの五人だった。

「フェイト！！！ユーノは！！！」

「アルフ！？母さんまで・・・！」

「それに、カリムにシスター！ロッサも！！」

驚き返るはやて達だったが、ヴェロッサは息を切らした状態で口にする。

「は、は、は。クロノ君から連絡受けてね、急いでやって来たんだよ・・・！」

「フェイト。それでユーノ君は・・・！？」

「はい・・・・・その・・・・・・仮死状態・・・です・・・！」

「「「「！」」」」

フェイトから聞かされたその言葉を耳にした瞬間、五人の表情が一気に凍りつく。

「そ・・・そんな・・・！何で・・・・／／／」

「スクライア司書長が仮死状態・・・・・・！」

「それでは・・・・・・／／／」

と、その途端突然リィンディが床に力なく膝をついて絶句した。

「！？母さん？」

驚き返るフェイトやクロノ。

リンディはそんな二人やこの場にいる全員に向かって次のように口

にした。

「・・・私は・・・とんでもないことをしてしまったわ・・・／／／」

「え？」

「あの、リンディ提督。何を・・・・・・・」

「どうしてもっと早くに気づかなかったのかしら・・・・・・何故私は疑問に抱かなかったのかしら・・・・・・ユーノ君がずっと抱える孤独・寂寥・苦しみ・・・」

「！母さん・・・」

一瞬その言葉に驚くフェイトだったが、リンディは涙目になりながら自分の罪を洗いざらい話す罪人のようにこう語った。

「思えばユーノ君は元々放浪のスクライア一族・・・・・・それがジュエルシードや闇の書事件を切っ掛けに、この管理局っていう組織に引っ張り込んで縛りつけたのは、他でもなく私だった・・・！無限書庫に勤務し始めるようになって、多忙な日々を送る上でユーノ君はあの広すぎる書庫の中で何を思っていたんでしょうね・・・齢９歳と言う若さで一日のほとんどを無限書庫の中で一人で過ごすのはあまりに寂しすぎるわ・・・だからこそ私がもっとユーノ君に目を向けていればよかったのに・・・・・・なのに、どうしてそこで気づかなかったのかしら！？同じ天涯孤独な筈のユーノ君を・・・どうしてフェイトと同じように手を差し伸べなかったのかしら・・・！！」

「！」

はっとした表情となるフェイト。

確かに、リンディはプレシア・テスタロッサをジュエルシード事件の時に亡くし天涯孤独の身となっていたが、それ以前にユーノは最初から天涯孤独の身であったのだ。

「きっと心の中でユーノ君なら大丈夫だって過信があったのね・・・・・本当、そんな訳ないのに・・・私は何を考えていたのかしら・・・！決して日向に当たることなく、寂しいのも押し殺して私達みんなの為だけに自分を犠牲にしてきたユーノ君・・・・・救う手立てならいくらでもあったはずなのに・・・筈なのに・・・！！！私は・・・・・・／／／／／／／／」

リンディはそんな後悔を赤裸々に表しながら顔に手を当て涙を隠すが、傍らで聞いていたアルフは次のように言って慰めようとした。

「お母さん・・・別にお母さんの所為じゃないよ！私だって似たようなもんさ！あの頃、ユーノの手伝いで一緒に居る時間が多かったのにも拘らず、ユーノの苦しみもそれ以外の事も何一つまともに理解出来てなかった・・・！！助けることが出来なかった・・・！！友人として・・・戦友として・・・情けないッたらありゃしないよ！！！」

「アルフ・・・」

リンディが自分を慰めてくるアルフがそんなことを思っているとは夢にも思わず、一瞬驚いた表情となったが、直後今迄の話を聞いて

いた浦太郎が不意にこう言って来た。

「・・・ねぇ・・・僕思うんだけどさ・・・」

「？浦太郎教官・・・・・・」

「店長があんなふうになったのって、誰か個人の所為じゃなくて・・・・“僕らみんなの所為”なんじゃないんかな？」

「「「「！」」」」

その場居た前線メンバー全員が表情を一変させると、浦太郎は次のように言った。

「僕らや管理局側が善や便益を得る中で、決定的に足りない“必要悪”を補うために店長は一人その“必要悪”を被ったんだよ・・・！あらゆるものを失って、身も心も擦り切れる中で・・・店長は文句なんて一言も零さなかった・・・だから僕らは錯覚した・・・！店長もまたそれが自分の使命だと思って、限りなく・・・いや！絶対的に選択肢を絞られることを余儀なくされた・・・僕らが店長を追い詰めて、搾り取って・・・店長から人間らしさを奪っていった・・・！それで店長はボロボロになって・・・・・・壊れた・・・！」

涙ながらに浦太郎がそう言うと、聞いていた石田はこう便乗する。

「まるで原罪を背負ったイエス＝キリストのような物言いだね。確かに、ユーノ君は浦太郎君の言う通り、隣人愛の思想に則り他者を救おうとしてきた・・・しかし、彼は肝心の自分への愛が無い。自分の事を愛せていないんだ・・・」

「自分への愛が・・・ない・・・・！」

その言葉に驚き返るエリオ。

浦太郎は更に涙ながらにこう語った。

「僕らは・・・店長を神だとでも思ってたのかい！？違うよ！！店長だって人間なんだ！！決して神なんかじゃない！！人間なんだから、もっと自分の執着があってもいいはずだよ！欲望を持つことは何も悪いことじゃないし、それこそが人間らしさなんだ！！だけど・・・あらゆる事柄や境遇、更には僕らが店長に縋ることであの人は人間性を失って、一種の神の様なものになった。」

「・・・浦太郎・・・お前・・・・」

「だけど・・・もうそんなの耐えられない・・・！僕は店長には人間でいて欲しんだ！！欲望を持ってほしいんだ！！僕らに必要以上に執着して、自分を嫌ってほしくないんだ！！もう・・・・・・あんな店長を見るのは・・・辛いから・・・！！」

これほどまでに感情が爆発した浦太郎を見るのはこれが初めてだった。

鬼太郎や金太郎は浦太郎の言葉を聞き終えると、拳を強く握りしめながら更にこう言った。

「ああ・・・・・・俺だってそうさ／／／」

「私達は・・・・・何と愚かな・・・！！罪深い人間なのだ／／／！！」

金太郎の言葉を聞くと、クロノ達隊長陣も同じように拳を握りしめ悔しい気持ちを赤裸々に顔に出した。

「「「「「く・・・！」」」」」

さて、そんな機動六課の重苦しい雰囲気とは別にカトゥーンキャッスルへとどうにか帰還することが出来たテトラカトゥーンの四人のうち、ユーノと対戦した悟空は再生カプセルの中に入れられエドによる適切な治療を施されていた。

傍らではナルトが心配そうに悟空の姿を見つめている。

するとそこへ、悟空を助けたサクラがナルト達の方へと駆け寄って来た。

「やぁ。」

「サクラちゃん。」

「悟空の様子は?」

「外側の傷もそうだけど、内部器官の損傷がかなりひどいって・・・」

「そう・・・」

エドは悟空の処置を行う傍ら変貌した時のユーノの力をこう分析する。

「あいつ・・・翡翠の魔導死神の隠された力、『クシャナーダ化』って、あらゆる次元世界を容易に吹き飛ばしてしまうほどの恐ろしい破壊力を持った力を発動できるんだが、その点自分じゃ制御することが出来ない・・・禁断の能力・・・」

「まともに攻撃を受ければ即死は免れない・・・一つ間違えば世界そのものが破壊され、地獄と化してしまう。」

「ナルトの右腕も結構な手術が必要だな。」

「そっか・・・」

「俺はいいけど、悟空の奴・・・そんな攻撃を何発も・・・」

浮かない顔のナルトを窺いながら、サクラはユーノに関してこう口にする。

「・・・翡翠の魔導死神ユーノ・スクライア・・・昔は単なる遺跡発掘を生業とする攻撃魔法も碌に使えないへなちょこ結界魔導師だったけど、局を辞め直後見つけたアンゴルモアの影響で力を手にし、次元世界最強と言われるだけの力を手にしたが・・・反面失ったものも大きい・・・か」

「そんな。別に奴の事なんて興味もねぇし関係もねェ。悟空をこんなにした翡翠の魔導死神・・・いやあの化物！あいつは絶対ぶっ殺す！！」

ユーノへの強い殺意を露わにするナルトだが、エドは冷静にこう言った。

「難しいんじゃねぇの？何しろ相手は地獄の力を持ってるんだぜ。あそこは、人間の力じゃどうすることも出来ない危険なところなんだ。」

「仮にそうだとしても、あの姿となって元に戻っても浸食の影響で体が一切動かせない状況だと思うしね。」

「ち！」

二人の言葉に思わず舌打ちをするナルト。

と、そんな時テトラカトゥーン筆頭の斎藤一からの通信が入る。

『おい。カトゥーンが招集かけてるぞ。とっとと来い。』

「へいへい。じゃあサクラ、悟空の様子見ててくれよ。」

「分かったわ」

「悟空・・・・・・」

ナルトは浮かない顔を浮かべながら、エドと共に斎藤の元へと向かった。

テトラカトゥーンのやり取りがひと段落ついたところで、再び場所を六課へと戻す。

ヴェロッサやカリム、リンディ達は一度クロノに案内されユーノの状態をその目で確認すると、やはりなのは達同様悲しみくれた様子となり、部隊長のはやてを中心にクロノ、リンディ、カリム、ヴェ

ロッサとシャッハの六人は集まり深刻な顔となる。

「・・・・・酷い有様だった。どうして先生がこんなことに・・・――――」

「地獄の呪い・・・――――私達の知らない危険な場所でスクライア司書長は凄まじい苦しみを味わい続けていたなんて・・・・・」

「イマイチぴんとけぇへんとこもあるけど、一護さんや恋次さん達が言ってたことは間違いなさそうやしな。」

「兎に角、今はユーノが起きるのを祈るしかない――――――」

「そうね・・・・・・」

全員の顔が暗く重苦しい様相を見せる中、不意に六人の耳元に局員の声が聞こえ来た。

「ちょ!ちょっと!!何なんですか一体!?」

「「「「「「?」」」」」」

「あの!!ちょっと話を!!」

と、局員がかなり慌てた様子で何かを堰き止めようとするが、その対象はまるで局員の話に耳を貸さずに前へと進んでいき、はやて達の前に現れると一番前に立っていた頬の扱けた初老の男が帽子を取って挨拶をしてきた。

「突然失礼します。機動六課部隊長八神はやて二等陸佐と、その後

見人の方々。」

はやて達はこの謎の男とその後ろに立つ人物の姿に動揺する。

「！ど、どちら様ですか！？局の制服着てる分に同じ職種のものだとは判断できますが・・・！？」

「これはどうも、申し遅れました。私たちは本局査察部第１級特務班のものです。代表のイージス・トゥールと申します。」

「！第１級特務班！！」

ヴェロッサは聞いたことのある単語を耳にすると、一際驚く。

「ロッサ。知ってるのか？」

「査察部門における、選りすぐりのエキスパート集団・・・ＪＳ事件以後に独自に組織されたものであらゆる不正を摘発したその腕は並外れだよ！」

「！？ちょっと待ってください・・・何故その査察のエキスパートがうちに！？臨時査察を受けるようなことは取り敢えずなかったと思いますが？」

不安げな様子でそう口にするはやてに、代表イーズスは不敵な笑みを浮かべながら衝撃的な言葉を口にする。

「果たしてそうでしょうか。臨時査察を受ける材料など探せばいくらでもありますとも。そう・・・例えばあなた方のご友人の“ユーノ・スクライア”元無限書庫司書長についてなど。」

「「「「「「な！」」」」」」

ユーノが査察の対象とだと気化された途端、全員の顔が凍りつく。

「本日、第８２５管理外世界『Ｔ２』が一瞬にしてその大地と海の五割が崩壊・・・これは予測できる最悪の事態と考えられ、生物生存の可能性は極めて低いと判断され、次元空間にもその影響が垣間見れました。次元断層が起こった訳でもないのに、何故人外であるあのような世界でそのような事が起きたのでしょうかね？」

「！そ、それは・・・」

「聞けば同日、ユーノ・スクライア元無限書庫司書長と謎の未確認体が衝突した際、同じく複数もの未確認体が現れ、その直後にこの異例の事故が起こった・・・ともあれば、原因は自ずと彼に向けられるのが必至かと――――――」

イーズスのその言葉を聞いた瞬間、リンディは全員の気持ちを代表して次のように言葉を返した。

「ちょっと待ってください！！何を言っているのですかあなた達は！彼には何の落ち度も罪もないんですよ！！それなのに何故彼だけを罪に咎めるような言い方をするのですか！？納得がいきません！！」

「ハラオウン統括官は口を挟まないで貰いたい。」

「く！！」

リンディの言葉にイージスはまるで耳を傾けず、彼は不敵な笑みを浮かべたまま更に続ける。

「さて、本人に直接色々と事情をお伺いたいのですが・・・ユーノ・スクライア元無限書庫司書長はどちらに？」

「彼は――――――ユーノは今ベッドで仮死状態と化して、動けない状況です。」

辛い気持ちを押さえクロノが正直にそう口にすると、イージスはまるで信じてないとばかりにこう言い返す。

「仮死状態？それはまた可笑しなことを口にしますな。」

「何！？」

「どういうことですかそれは！？ユーノ先生は本当に今動ける状態ではないんですよ！」

イージスの言葉には同じ査察部に所属するアコースも我慢が出来なかった。

「アコース査察官。我々の査問からそのような言い分で逃れられると思っているのですか？嘘をつくならもう少し信憑性の高いものをお勧めしますが――――――」

すると、まるで信用などしていないイージス以下第１級特務班全員にはやての怒号が向けられた。

「いい加減にしてください！！ユーノくんは・・・ユーノくんはほ

んまに今大変な事態に陥っているんです！！！このまま目を覚まさないかもしれないとも言われて、私らにはどうすることも出来なくて！！！！なのにどうして・・・どうしてあなた方までユーノくんを責め立てる気でいるんですか！！！！」

「はやて・・・」

「はやてさん・・・」

はやての目に浮かぶ涙を一瞥し、思わず胸打たれるカリムやリンディ。

しかしそれでもイージスは引く姿勢を見せない。

「何と言われようと、関係ないことですな。我々はただ真実を追求しそこに正義と悪を見極める。例えそれが無限書庫を開拓しアンゴルモア事件に於いて輝かしい活躍を見せている偉大な翡翠の魔導死神だとしても。さ、早くユーノ・スクライア氏を出してくだされ。」

「嫌や！何が何でもユーノくんに会わせません！」

はやてはそう言うと、梃子でも動かないとばかりにその場に立つと両手を大きく広げ、ユーノとの面会を断固拒否。

それを見て同じことを思っていたクロノやヴェロッサ達も両手を広げて前に立ちはだかる。

「僕も同じです！彼は動けないんです！お引き取りを！！」

「僕からもお願いします！」

「どうか！」

イージスは一人の男の事をこれほどまでに必死で守ろうとする人物を人生において初めて見、彼らの強い想いを察すると不敵な笑みを浮かべ素直に引き下がることにした。

「――――――成程。そうですか。分かりました。では今回は一先ず退かせてもらいましょうか。しかし、彼が目を覚ました暁には必ず真実を聞き出すつもりですのでその時は、よろしくどうぞ。」

「「「「「・・・！」」」」」

納得のいかないでいる六人の前からイージス達はその場から姿を消していった。

その頃、なのはの方は訓練場の近くの海沿いで一人啜り泣きながらユーノの事をずっと考えていた。

「・・・っす・・・ぐっす・・・ユーノ・・・君・・・／／／」

と、その時後ろの方から織姫の声が聞こえてきた。

「なのはさん・・・」

「！織姫さん・・・」

なのはが後ろに振り返ると、織姫は泣かく染まった瞳でなのはにユーノを助けられなかったことを深く謝る。

「なのはさん・・・ごめんなさい・・・・！私がもっとちゃんとしてれば、ユーノさんは・・・／／／」

「いえ。織姫さんのせいじゃありませんよ・・・悪いのは全部私です／／／」

「なのはさん・・・・／／／」

なのははそう言うと、瞳に大粒の涙を浮かべながら織姫に向かってこう言って来た。

「本当に・・・ユーノ君のこと何にも知らないで・・・平気でユーノ君のこと守るとか、助けるとか言ってる自分が・・・本当に情けない！！一人悩んで苦しんでたユーノ君の近くにいた時に救えなかった！！守って上げられなかった！！ユーノ君・・・きっと今も凄い苦しんでる／／／！！！」

これほどまでに悲しみに暮れるなのはを見た途端、織姫は自分の胸の中になのはを収め力強く抱きしめる。

「なのはさん・・・」

なのはは織姫の胸の中で自分の悔しい気持ちやその他色々な感情が溢れ返りながらこう言って来た。

「ユーノ君が一人で苦しんでるとか・・・痛い想いをしてるかもって思うと、身体が震えてどうにかなりそうなんです！！もう、一番大切な人を失う悲しみなんて味わいたくないのにどうして神様はユーノ君にばかり酷いことさせるんですか！！！どうして私じゃなくてユーノ君に罰を当たるんですか！！！受けるならこの私なのに・・・

・なのに・・・・！！」

「・・・――」

「織姫さん・・・私・・・今も昔もユーノ君が大好きなんです・・・！！大好きなユーノ君がいなくなったりするのは私もヴィヴィオも絶対に嫌です！！！世界で一番私が愛してる、私を愛してくれるユーノ君に、もう一度抱きしめてもらいたい！！！微笑んでもらいたい・・・！！！」

なのはが涙ながらにそう訴えかけるように言うと、織姫はなのはの肩を掴んで凛とした眼差しでこう言った。

「大丈夫・・・ユーノさんは絶対大丈夫ですか・・・！！だから信じましょう。ユーノさんが必ず私達の所に戻ってくることを・・・だから諦めないでください！」

「ふ、ふあはあああああああああああああああああああああああああああ／／／

そんななのはの気持ちや再起不能となったユーノとはまた別に、テトラカトゥーンに連れ去れた新八の方はと言うと、カトゥーンキャッスルの一室、仰向けに寝かされ両手両足を頑丈に固定され動かせない状態となっていた。

「は、離せ!!止めろ!!!僕に何するつもりだ!!」

その新八を傍らで見ながら煙草を吹かす斎藤とエド。

「少しは大人しくできないのか?往生際が悪いんだよ。」

「バイタル良好。受け入れ準備完了。移植何時でもできるぜ。」

すると、そこへカトゥーンがルパンが盗み出してきた本型ロスト・ロギア全てと厳重に封印された一つの箱を持って中に入ってきた。

「うん。いいタイミングだね。」

「な!お前は・・・!」

新八が中に入ってきたカトゥーンに目を向けると、不敵な笑みを浮かべながらカトゥーンは新八に挨拶をする。

「実際に遭うのは初めてになるよね?僕がカトゥーンだよ。よろしく、志村新八君。」

「お前・・・何のためにこんなことを・・・!!僕をどうする気だ!!!」

「ふふ。君はこれから新世界の神となる僕の手により特別な存在へ

と進化を遂げるのだよ。さて、手術と行こうか。」

カトゥーンはそう言うと、本型ロスト・ロギア全ての表紙を開き、それを新派氏の真上に浮かび上がらせると、もう一つ厳重に保管されていた漫画キャラを作るのに必須アイテムであったアンゴルモアを取出し、その姿を間近で見た瞬間新八の表情が凍りつく。

「！ま・・・まさか・・・それを！！」

「察しがいいね。苦労した甲斐があったよ。」

新八はカトゥーンの不気味な笑みを浮かべると、先ほどにも増して抵抗の意志を強くする。

「止めろ！！！！！！！！！！離せ！！！！！！！！！！銀さん！！！！！！！！！！ユーノさん！！！！！！！！！！みんな！！！！！！！！！！」

しかし、そんな新八にナルトの非情な言葉を突き付けられる。

「どう叫んだところで誰も助けに何てこねぇよ。覚悟決めろってばよ。」

「さて、始めようか。マテリアルの君に今、五つのロスト・ロギアとアンゴルモアの力を譲り渡そう。ははははははははは！！！！！！！！！今こそ、君はその手でこの世界全てを塗り替える最終兵器に身を変えるんだ！！！！！」

カトゥーンはそう言うと、アンゴルモアを取出しそれを新八の中へと衣装しようと試みる。

その瞬間、新八の叫び声がカトゥーンキャッスル全体に大きく響き渡った。

「銀さん！！！

それでも人には言えないことがある（後書き）

ク「その高校は、リリカル高校と同じ学区にありながら、中学時代名をはせた札付きばかりが集められ、荒れ果てたその外観は“強制収容所”と陰口を叩かれていた。」

――――都立魔吐（まと）工業高校。

ク「これは、伴陽振る男たちが通うその学び舎に現れた一人の男の伝説。」

ユ「殺しちゃうぞ♪」

Ｂ－ＢＯＰユーノ君

１話

一「ええ、今日からこのクラスで勉強することになった転校生のユーノだ。みんな、仲良くするんだぞ」

ユ「ミッドチルダ高校から来たユーノ・スクライアです。強い奴にしか興味ありません。このクラス今日中に占めるんでよろしく♪」

それを聞いた途端、反感の声が飛ぶ。

鬼「んだと！！」

吉「俺らの事舐めやがって！！魔吐高の恐ろしさ、思い知らせてやる！！！」

吉良が殴り掛かろうとした直後、ユーノによって床に体がめり込み一蹴される。

ユ「次邪魔したら・・・殺しちゃうぞ♪」

一「ごらあ!!転校早々何やってんだよ!!」

恋「てめぇ!!!よくも俺の友達(ダチ)を!!」

だが、恋次もまた一護に一蹴され床に食い込む。

一「仲良くしないと・・・殺しちゃうぞ!!」

金「生意気な野郎ですな!」

ヴェ「クロノ!何とかしてくれよ!」

クロノはその言葉を耳に入れながら、ふと黒板に書かれた優乃(ユーノ)と言う字に関して・・・

ク「(あれで・・・ユーノって読むの・・・)」

放課後

クロノはヴェロッサと共にユーノとメンチを斬り合っていた。

ク「おい。おいってんだよ。聞こえてんのか、てめぇの頭の両側についてるのは素敵なドアノブですか、ああ?」

と、馬鹿にした様子でそう言うと、ユーノは不敵な笑みでこう言った。

ユ「勝負、する？」

ク「え？」

ユ「七一が七、七に十二、七三二十一・・・」

九九を唱えるユーノを見たクロノの表情が一変。

ク「！（おまえっ・・・それは！！）」

ユ「七四二十四、七五三十五、七六・・・・・・はい♪」

ク「（九九で、一番ハードルが高い七の段！！）」

クロノは焦燥を顔に表し、両手を使って計算を始める。

ク「え、七が六つで四十五・・・あ、いや違うか！この場合の選択肢は三十八か四十八か・・・ロッサ！！指貸せ！！！」

ヴェロッサは無表情で心の中で呟く。

ヴェ「（転校しよう・・・）」

魔導師図鑑ハイパー！

久しぶりの登場に若干心躍る石田。

石「ふふ。ついに・・・ついに僕も長編に参加することが出来たよ！漸くこれで僕の滅却師としての活躍ぶりを読者に見せることが出来るってことだ♪ね、茶渡君？」

茶「あ・・・ああ。そうだな・・・」

気分上々の石田に戸惑いを隠せない茶渡。

石田は更に花畑オーラを全開にしてクルクル回り始める。

石「どうせなら、ここはいっそ衣装も一新して新しい僕をアピールするのもいいかもしれないな♪あ、そうだ。この前知世さんから頂いたデザインのモデルを参考にして作ってみよう♪序に、茶渡君のバトルコスチュームも考えておくよ！」

そんな独断を続ける石田に面倒が看きれなくなった茶渡は挙句額に汗を浮かばせこう言った。

茶「もう・・・何でもいいよ・・・」

本局査察部第１級特務班

時空管理局本局査察部に設けられている独自部隊の一つ。ＪＳ事件後、レジアス・ゲイズ元中将の癒着を切っ掛けに管理局上層部、またはそれに付随する機関の癒着がないかどうかを査察し、不正を見付け次第査問にかけ場合によっては法的承知を行う。アコース曰く、その手腕は屈指とのこと。

イージス・トゥール

声　一　古川登志夫

時空管理局本局査察部第1級特務班代表・捜査課長。
ユーノの査察の為に本局からやってきた頬の扱けた初老の人物。何処か慇懃無礼な言動で、リンディ達ですら不快に思ってしまうほどの性格の歪んだ男。絶対悪と絶対善という言葉の元、いかなる場合であろうと査察のメスに手を抜かないしたたかさを持つ。

次回予告

全ての準備が整い、カトゥーンは超大型次元震を引き起こそうとする。

漫画と現実世界の逆転現象を狙うカトゥーンを止める為、新八を救い出す為真っ先にカトゥーンキャッスルへと向かう一護・銀時達。

ユーノの味方の一護達と管理局のしがらみの中で揺れ動くなのは達。

そして、再起不能となったユーノは――――――

白「次回『己の魂に素直になれ』」

己の魂に素直になれ（前書き）

更新遅れました。

ホントすみませんでした。

あと、今回から書き方少し変えてみました。

それでは、始まります。

己の魂に素直になれ

これまでのユーノ・スクライア外伝――――――

漫画世界と現実世界の逆転現象を起こそうとしている次元犯罪者カトゥーン。

立ち向かう魔法と死神の力を兼ね揃えた次元世界最強の男、翡翠の魔導死神ユーノ・スクライア。

しかし、感情が爆発した結果封印されていた呪印の力が解放され、自らの意思とは無関係に暴走し、ユーノは地獄の番人クシャナーダへと変貌した。

〈一護Ｓｉｄｅ〉

あの悲惨な出来事から二日経ったとある時間帯。

一護は暗い顔を浮かべながら未だ息を吹き返すことなく死人のように眠り続けるユーノの姿を窺いながら徐に声を発した。

「・・・ユーノ・・・俺の声が聞こえてるかどうか分かんねぇけど、聞いてくれるか。」

一護はそう言うと、返事が返ってくることのない中自分の心境を赤裸々に話し出した。

「俺な・・・・・正直言うとお前の事、見てるようで全然見れちゃいなかって、今回の件で痛く思い知ったよ。俺だけじゃねぇ・・・織姫もコンも石田もチャドも・・・浦原さんに夜一さんも・・・今更お前に謝ったところで、何の意味もねぇんだけどよ・・・それでも俺達は、もうお前が独りで苦しんでる姿なんか見たくねぇんだ。魂が不安定な状態だが、俺はお前が戻ってくることを信じてる。だから・・・・・後の事は何も心配すんな。」

そう言って、一護は部屋を出ていった。

そして、一護以下現世の仲間たち七人はそれぞれの準備を万端に整えると、朝早くから一護の自宅前に集合し、一護も決意の籠った顔を浮かべながら織姫以下六人の顔を見つめ徐にこう言った。

「――――――行くか。お前ら。」

「「「「「ああ（うん）（はい）」」」」」

一護は一度深呼吸をすると、心の中でユーノへの確かな想いを次のようなに考えた。

「（ユーノの師匠として・・・・・一人の男として・・・・・・お前が護ろうとしたものは――――――俺が必ず護る！！）」

そう言って、一護は仲間たちと共に自分の世界から一時離れてユーノやなのは達が待つミッドチルダ、機動六課へと向けて出発する。

◇

〈ユーノＳｉｄｅ〉

今際のユーノ・スクライアは、己の心が生み出した光さえ届かない漆黒の闇の世界において、不安定な魂をその闇の中で浮かばせながら、足元から生えてきた地獄の鎖に体を拘束され、廃人同様の虚ろな目を浮かべながら弥彦から託された折れた逆刃刀を抱え、一人そこにいた。

そんなユーノの精神に誰かの声が話しかけてくる。

〈ん・・・・・ノ・・・・・くん〉

ユーノはその声を聞くと、虚ろな表情を崩さず心の中で声を発する。

「（誰かが・・・僕の名前を呼んでいる・・・）」

声は次第にはっきりと、自分の名を呼ぶものへと変わっていく。

〈・・・・・・・・・ユーノくん〉

ユーノはそんな自分の名を呼ぶ何者かの声に対して、疲れ切った様子で目を閉じこう思った。

「（だけど――――――もういい・・・もう疲れた・・・）」

〈・・・・・・・・ユーノ君／／／

に作業を行っていた。

「よし。こんなもんスかね？あと欲しいものは？」

「いえ。助かります。」

「ほんま、おおきにです浦原さん。」

二人がお礼の言葉をかけると、浦原も微笑し帽子を被り直す。

そんな中、司令室に集まったフォワード陣や銀時達は急遽協力の姿勢を見せこちらに滞在してくれている一護達の事を聞いて些か驚いていた。

「一護さん達が？」

ティアナが五人の気持ちを代表してそう口にすると、なのはは徐にこう言った。

「うん・・・現世での仕事は暫くコピーロボットに任せて、一緒に協力してくれるそうなんだ。動けなくなったユーノ君の護衛も兼ねて・・・」

「あれから一週間・・・・・・ユーノは一向に目を覚まさないね。」

暗い表情のフェイトがそう口にすると、聞いていたなのはの顔まで暗くなる。

「呼吸音さえ聞こえない・・・・・・心臓は止まったまま・・・・・・本当に死人みたいで・・・・・・生き返られないんじゃないとか

思ったりして・・・見てるだけで心が痛くなってくる・・・・・・／／／」

なのははそんなユーノへの強い不安を感じると、思わず一筋の波が浮かびスバルはそんななのはの涙に心が痛む。

「なのはさん・・・」

すると、そこへ銀時と共に歩いてきた一護が話しかけてきた。

「泣いてばっかでもいられねぇだろ。」

「一護さん。銀さん達も・・・！」

「俺らであいつの代わりになるかどうかわからねぇが、大事な愛弟子が傷ついた以上師匠として、一人の男として、こっから先は何が何でもあいつを守って居かねぇとならねぇ。それに、俺はあいつとの約束をまだ果たせてねぇしな。」

「おめぇがそこでメソメソしててもあいつは、ユーノは何も嬉しくネぇさ。ほら、こいつで涙拭け。」

銀時はそう言うと、懐から偶然にも所持していたハンカチをなのはに差出し、なのははこんな自分を気遣ってくれる銀時の優しさに思わず嬉しくなる。

「はい・・・／／／ありがとうございます・・・／／／」

なのははハンカチを受け取ると、涙をぬぐい一護は決意の籠った表情で銀時にこう言う。

「奪われたもんは何が何でも奪い返すさ。そうだろ、銀さん？」

「たりめーだ。誰があんな漫画しか興味のねぇ野郎に新八を好きにさせるかよ。」

銀時の言葉に続いて、些か不安げな様子で神楽や近藤たちが便乗する。

「新八、本当に大丈夫アルかな・・・」

「新八君を拉致してカトゥーンは一体何を企んでいるのだ？」

「いずれにせよ、あまり時間をかけてばかりもいられねぇな。」

「だが、敵の動きが掴みにくい以上救出に向かいたくてもこれじゃ・・・」

それぞれが色々と考えを巡らせていると、司令室のドアが開放され部隊長のはやてとクロノが二人揃って中に入ってきた。

「あ。みんな御揃いやな。」

「はやて。クロノも。」

「ちょうど良かった。たった今、機動六課の今後の方針が決まったところだった。」

「全員着席して聞いてくれるか？」

二人がそう言うと、全員はそれぞれ所定の場所に着席すると、二人の話に真剣な表情で耳を傾ける。

「結論から言えば、3週間前よりカトゥーンによって計画的に進められてきた今回の事件に関しては本局及び地上部隊の対策は残念ながら手詰まり状態だ。と言うのも、神出鬼没に現れる漫画キャラへの対応に始まり、本局上層部は昨日(さくじつ)のユーノの・・・あの暴走で起こってしまった管理外世界半壊の事態を重く捕え、本局所属である機動六課への戦力投球を行うか否か、双方で意見が分かれている。」

「ユーノ・・・――――」

思わずそう口にする一護と、その隣で言葉を詰まらせる銀時。

すると、はやてが全員に向かって次のように語ってきた。

「そやけどな・・・――――私達が追うのは、テロ事件でもその主犯格としてのカトゥーンでもない。」

そう言った後、中央画面に今まで幾度となく見てきた妖艶の欠片、ユーノを魔導死神として覚醒させ人生を狂わせた忌まわしき物質、アンゴルモアの映像が映し出される。

「ロスト・ロギア『アンゴルモア』。その捜査線上に、カトゥーンとその一味がおるだけ・・・そう言う方向や。で、その過程で誘拐された私達が保護した次元漂流者“志村新八君”を捜索救出する。そう言う線で動いていく。何か意見のあるものは?」

話しを聞くと、徐に銀時や一護が言葉を投げかける。

「理想の状況だがよ、随分と無茶してんじゃねぇか？」

「本当に大丈夫かよ？」

「後見人の皆さんの黙認と協力は、ちゃんと固めてあります。大丈夫。何より、こんな時の為の機動六課って、ＪＳ事件の時も言ってるんやから。ここで動けな、部隊を復活させた意味がない。」

その言葉を聞くと、誰もが安心した表情を浮かべ納得のものとなる。

「了解。」

「なら、方針に依存はねぇな。」

近藤が立ち上がってそう言うと、全員も立ち上がる。

「では、捜査出動は本日中の予定だ。万全の態勢で出動態勢を待っていてくれ。」

「「「

「何やら先ほどから、妙な胸騒ぎがしての・・・・・・少しばかり気掛かりでな。」

「考え過ぎだろう。そいつはてめぇの思い過ごしに決まってる。」

鬼太郎がそう言うと、夜一同様に浦原も何処か重い表情を浮かべ便乗する。

「果たして、本当にそう言えるでしょうか・・・――」

「浦原さんまで止しましょうよ。あ、そうだ。少し気分を変えてリラックスしようか。私お茶淹れてくるよ。コン君、手伝って。」

「了解っす！」

「私も手伝おう、井上。」

「ありがとう、朽木さん。」

織姫はコンとルキアを連れて、お茶を入れるために給湯室へと向かった。

他の面々はそれぞれ今後の事を考えながら、自己鍛錬などに励むのであった。

◇

〈沖田Ｓｉｄｅ〉

沖田総悟は自己鍛錬を一通り済ませると、六課の廊下を歩きながら一休みを入れるためにロビーの方へと向かっていた。

するとその時、通りかかった誰もいない部屋から誰かの啜り泣く声が聞こえ思わず立ち止まった。

「お？」

総悟が徐にその部屋のドアに耳を傾け、ゆっくりと中の様子を窺うと、そこにいたのはユーノが仮死状態となってから泣いてばかりで学校さえも休んでいる目のあたりが染まったヴィヴィオの姿だった。

「・・・・・・ぐす／／」

一週間前から泣き止むことのない学校も休み、元気を失くしてしまったヴィヴィオを見ると、総悟はしばらく考えてからため息をつく。

「たく。しゃあねぇな・・・」

そんな総悟の事など気づいてもいないヴィヴィオはまるで何もできない泣くことでしか自分の気持ちを表現できない赤ん坊のように座り込み、部屋に閉じこもっていた。

「・・・・・・パパ・・・・・・／／／」

と、そんな時総悟が部屋の扉を開けて中に入ってきた。

「おい。」

ヴィヴィオは後ろから徐に聞こえてきたその声に反応すると、些か

驚いた表情を浮かべるが直ぐに暗い顔に戻る。

「あ・・・沖田さん・・・何でしょう・・・・・・」

改めてヴィヴィオの赤く痣の様に残った涙がこぼれた個所を目の当たりにして、複雑な想いとなる総悟。

「・・・・・・（やっぱし、まだ１０歳のガキには父親のあんな姿を直視するのは酷だっただろうな。）」

そんな事を心の中で呟きながら、徐にこう語り出す。

「なんだなんだ随分と辛気臭ェ。せっかく外がカランカランに晴れてるのに、これじゃお天道様も喜ばねぇよ。」

「・・・・・・」

声を詰まらせるヴィヴィオ。

すると総悟はそんなヴィヴィオの肩を軽く叩くと意外な事を提案した。

「ちょっくら、俺と外でも行ってみねぇか。」

「え・・・でも。」

「いつまでも部屋に閉じこもって、しゃがみ込んでるよりはマシだろ。ほら、立てよ。」

ヴィヴィオは総悟の提案を半ば無理矢理な気持ちで受け入れると、

二人揃って秋の風が若干冷たい日光が燦々と照りつける外の世界を散歩し始める。

沖田は横を歩く暗い顔のまま何も語ろうとしないヴィヴィオを一瞥。

「・・・・・・・・」

「（ユーノ先生があんなことになって、辛いのはみんな同じだ。なのはの奴、一生分ってぐらいの涙流してたしな・・・ヴィヴィオも母親と同じかあるいは・・・）」

そんな事を考えていると、総悟に向かって口を籠らせていたヴィヴィオが話しかけてきた。

「沖田さん。怪我の方は大丈夫なんですか？この間の傷だって軽くはなかったはずじゃ・・・」

「ん。まぁあんまし大丈夫じゃねぇけど、ジッとしててもしょうがねぇしな。」

「沖田さんは強いですね・・・あんなコトがあっても、ちゃんと立ち上がっていけるんですから・・・」

その言葉を思わず足を止める総悟。

すると突然、ヴィヴィオは大粒の涙を零し始める。

「私は・・・やっぱり弱虫で、自分じゃ立ち上がれなかった・・・／／／強くなるって決めたのに・・・強くなって、なのはママやユーノパパの事守ろうとって思ったのに・・・これじゃ何の意味もな

い・・・／／／」

「お前――――――」

「約束・・・したのに・・・必ずパパがみんなの元に戻ってきて、一緒に笑い合えるって信じてたのに、こんな・・・こんなコトになるなんて・・・」

あまりに残酷な現実に心も何もかもが張り裂けそうなヴィヴィオ。

と、そんな不安でどうにかなりそうなヴィヴィオの頭に優しく沖田が手を当ててきた。

いきなりの事で驚くヴィヴィオに、沖田は真顔でこう言ってきた。

「大丈夫だ。ユーノ先生、お前のパパは約束を必ず守る。俺が言ってもあんまし説得力がねぇけど、大丈夫だとは言わせろ。お前のパパは必ず戻ってきて、お前やなのは達と一緒にまた笑い合える。だから、もう泣くんじゃねぇよ・・・」

普段他人をいたわる素振りすら見せない総悟だが、この時の総悟は作者から見ても、ヴィヴィオから見てもまるで別人のように思えた。

ヴィヴィオは総悟の激励を受けると、今までの悲しみの涙から一変、嬉し涙へと変わった。

◇

「沖田・・・さん・・・／／／ありがとう・・・ございます／／／」

〈銀時Ｓｉｄｅ〉

一方その頃銀時はと言うと、それぞれ自主鍛錬に励む仲間の様子を一通り見終えた後、一人廊下を歩いていた。

「連中は決戦に備えて各々最終調整ってところか・・・・・・お」

とその時、偶然にも汗だくになりながらタオルで顔を吹く近藤と遭遇。

「ん。おう、万事屋。偶然だな。」

「おめぇも人汗かいてきたところか。」

「ああ。新八君を奪還するのだからな。それはいつも以上に念入りにな。」

「そうか。」

二人はそう言うと、隣に立って一緒に歩きはじめる。

すると、徐に近藤が銀時に向かってこう言って来た。

「そう言えば、万事屋。なのはな・・・何でも“ブラスターモード”とかいう切り札があるんだけどな・・・」

「もう二度と使わねぇって話だろ。前にユーノから聞いたよ。」

「そうか、ユーノ先生から。」

意外にもなのはの切り札の事を知っていた銀時の言葉に些か驚く近藤。

そんな近藤に銀時はユーノから聞かされたなのはとユーノとの間の約束を説明する。

「ＡＲカートリッジを渡されてから暫くして、ユーノがなのはに頼んだらしい。“自分の体を無視してまで力を上げるブラスターで飛べる機会を大幅に減らすようなことはして欲しくない。僕がなのはの事を何が何でも守るから、全力全開で闘う時はそれを使え”って。」

「成程。自己ブーストで無理やり力を引き出すそのブラスターモードとやらの反動がたたれば、なのはは早くに空を飛べなくなるやもしれぬと言う事か・・・」

「なのはもそれを聞いて、快く了承したみてぇだ。そんで、『金輪際ブラスターは使わない。どんなにきつい状況でも、本当に困ったときはＡＲカートリッジで乗り切ってみせる』・・・そう固く約束したが・・・そのなのはの心の支えのユーノは今・・・」

銀時はそう言うと、一週間前から虚栄を張って一人無理矢理取り繕った笑顔を浮かべるなのはの、一人になったときに涙を流す光景を思い出し、近藤は間を置いてからこう言った。

「人間なんて、精神がぐらつけば体も一気に崩れる。脆く儚い生き物だな・・・きっと今頃ユーノ先生もそうだが、新八君も一人で苦しんでいるはずだ。必ず俺達の手で救ってやらねば。」

「ああ。きっちり片つけてやる――――――」

銀時はそう言うと、頭の中をよぎるこれまで幾度となく自分と一緒に行動を共にしてきたかけがえのない仲間である新八の事を思い浮かべながら固く決意する。

「（新八・・・・・待ってろよ。俺が・・・・・・てめぇを必ず助けてやらあ。）」

◇

〈三人称Ｓｉｄｅ〉

その頃、機動六課屋外訓練場の一画では、スバル・ナカジマと茶渡泰虎による激しい模擬戦が行われており、見学していた石田や浦原は手に汗握った。

「ぐわあああ！」

スバルは茶渡の攻撃を受けると、後方に吹き飛ばされる。

そんなスバルに向けて巨人の右腕を解放した茶渡は容赦なく攻撃を仕掛ける。

「はあああああああああ！！」

「マッハキャリバー！」

〈Ｐｒｏｔｅｃｔｉｏｎ〉

スバルは防御を展開して茶渡の攻撃を防ごうとすると、茶渡は霊圧

を一気に解放させて強力な一撃を仕掛ける。

「巨人の一撃！」

霊圧を一気に解放して出されるその凄まじい攻撃はスバルの防御を容易に燁を入れる。

「ぐ・・・！！」

苦い顔となるスバルと、燁の入った箇所に集中殴打を行う茶渡。

「ふん！！」

その瞬間、激しい爆発と轟音が響き渡り浦原と石田はそんな二人の戦いを見ながらそれｚれ次のような感想を述べる。

「いや～～～♪相変わらずお二人とも派手ですね♪」

「茶渡君も、かなり本気の様ですしね」

爆発が収まると、煙の中から息を切らしたスバルと呼吸を整えたままの茶渡が現れる。

「は、は、は、は、は」

スバルは年上でもあり強力な拳による攻撃を得意とし極めているとも言える茶渡の実力に内心驚きと興奮を覚えながら、構えを取って向かい合う。

するとその時、模擬戦の終了を知らせる合図が耳に届く。

「む?時間の様だ・・・」

「あ、はい。ありがとうございます!」

「俺に何を教えてやれる訳じゃないが、大丈夫か?」

「大丈夫です!色々盗ませてもらってますから!」

「ふん。生意気な。なのはや他の連中に心配を掛けてもいかん。あんまり無茶はするなよ。」

茶渡はそう言うと、右腕を元の姿に戻してスバルの前から徐に立ち去っていく。

「ありがとうございます、茶渡さん!」

スバルは深く茶渡に向けて頭を下げると、そんなスバルの元に石田と浦原が近づいてくる。

「お疲れ様っす、スバルさん♪」

「茶渡君相手になかなかだったよ。ほら、タオル。」

「ありがとうございます!」

石田からタオルを受け取ると、スバルは早速汗まみれになった顔の汗を拭い始める。

茶渡がスバルの元から離れて隊舎の方へ戻ろうとしていると、偶然

にも通りかかったヴィータと顔を合わせる。

「ようチャド。」

「？お前は・・・ヴィータか。」

「へへ。名前憶えててくれたのか。」

「どうした。俺に何か用か？」

茶渡はヴィータと一緒に歩きながらそのような質問をすると、ヴィータはスバルの相手をしてくれた茶渡に軽くお礼の言葉をかける。

「別に用って訳でもねぇけど、ウチのスバルが世話になってるってお礼にな。」

「ああ。大したことはしてないさ。」

茶渡はその後、少し間を置いてから徐にヴィータに謝罪する。

「すまんな。お前たちの判断を仰がなかった。」

「私は構わねェさ。お前みたいな強い奴と戦った方がスバルの為だからな。それにお前だって自分で決めて自分で受けたもんだろ。」

「む・・・確かにそうだが・・・」

「いずれにしろ、あいつも他の連中も私らが思ってる以上に成長が早い。初めて遭ったころとはまるで別人のように強くなりやがって・・・今じゃ模擬戦でガチンコで勝てるかどうも危うい状況だしな。」

「そうか。」

「それより、スバルの奴成果の方はどうだ？」

「悪くない。と言うか、あの成長速度には驚かされる。数多の激戦を切り抜けてきたことで培った感と度胸は勿論、見切りと覚えの早さが凄まじいな。まるで・・・死神として力をつけた当初の一護やユーノによく似ている。」

「そう言や、お前もユーノの事知ってたんだよな・・・・・・あいつ、本当に大丈夫なんだろうか・・・・・・」

ユーノの事を気にかけ、些か不安げな表情を浮かべるヴィータ。

茶渡は真顔のまま次のように語る。

「俺達は待つだけだ。ユーノはユーノなりに、非常に不安定な状態で孤独に闘い続けている。今も昔も――――――」

茶渡の言葉を聞いたヴィータの心境は実に複雑だった。

そして徐にこんなをことを尋ねる。

「・・・なぁ。なんであいつは、そこまでして“独り”で背負い込んでばっかなんだろうな・・・いくら他人に遠慮するって言っても、自分にできることには限界があるだろうが。」

「・・・一護が何時か言っていた。“ユーノは一度大切なものを失いかけて、それを失うことに強い恐怖を抱いて生きてる。だから、

惨めな思いで大事なものを失わない為に、仲間を傷つけない為に、独りで闘っている”・・・だそうだ。」

「あいつ・・・・・・」

つくづくユーノの他人を優先し、一人で背負い込もうとする態度にヴィータは想いがこみ上げそうになるのであった。

◇

〈三人称Ｓｉｄｅ〉

また、その頃ギンガ・ナカジマはユーノから以前に渡された新型のトライアルカートリッジの制御のための走行訓練を行うために外に出ていた。

ライダースーツを着用し、全ての準備が整うと計測の為に一緒に居た浦太郎、エリオ、キャロ、神楽の四人が声をかける。

「ギンガさん。準備は好いですか？」

「大丈夫。いつでもいけるわ。」

ギンガはそう言うと、ハンドルを握りながら心の中でこう呟く。

「（今度こそ・・・今度こそ私は１０秒を切る・・・そして、果たせなかった約束を果たすために護り切れなかった大切な人を守るために・・・必ずや！）」

「行くよ。」

浦太郎がそう言うと、ギンガの表情が真剣そのものになる。

そして、信号機が青に染まった瞬間、ギンガは一気にバイクを走らせる。

今迄とは決意も覚悟も桁違いなギンガの走行を目の当たりにしながらエリオ達は応援の言葉をかける。

「ギンガさん、頑張れ！！」

「ギンガ、ファイトある！！」

じゃじゃ馬のように制御の難しいそれを操りながら、ギンガは脳裏に浮かんできた新八の事を思いながらバイクを走りらせる。

「（新八さん・・・私が必ず助けます！！）」

そして、ギンガはゴールに到着し浦太郎にタイムを尋ねる。

「タイムは！」

全員が注目する中、浦太郎は徐に先ほどのタイムを口にする。

「・・・９．９秒・・・合格だよ！！」

その言葉を聞いた瞬間、ギンガやエリオ達の表情が嬉しさでいっぱいになる。

「は・・・やった・・・！」

「「「やった（ネ）！！」」」

嬉しさでいっぱいのエリオ達はギンガの元へ駆け寄り成功を祝福する。

「ギンガさん！やりましたよ！」

「ええ！」

「やれやれ。一時はどうなるかと思えたけど、やっぱり何か守るものがあると決意も覚悟もまるで違うね。店長の見込みは、外れてなかったようだ。」

浦太郎はそう言うと、バイクに装着されていたトライアルカートリッジを取り外し、それを徐にギンガに手渡した。

「さぁ、受け取りなギンガ。これは君のものだ。」

「ありがとうございます、浦太郎さん。」

ギンガはそう言うと、浦太郎から新たな力であるトライアルカートリッジを受け取り、それをしっかりと握りしめながら心の中でおこう思った。

「（ユーノ先生から頂いたこの力で・・・・・今度こそ！）」

すると、唐突に神楽が気になったことをキャロに尋ねる。

「そう言えばキャロ。なのはは今どうしてるネ？」

「多分ユーノ先生のところに行ってると思いますが・・・・・ユーノ先生、私達が何度呼びかけても全然目を覚ましませんし・・・・・もしかしたら本当にもう・・・・／／／」

と、一瞬涙ぐむキャロだったがその直後浦太郎が口をはさむ。

「ちょ、ちょっと！店長がこんなことでくたばらないよ！」

「浦太郎さん・・・」

「だって店長、前に言ってたでしょ。“なのはちゃんや周りにいる大切な仲間を置いて一人でどこかに行くようなことはしない”って。」

「浦太郎さん・・・・・そうですよね。ユーノ先生は絶対戻ってきますよね」

「私も銀ちゃん達と一緒に信じてるネ。ユーノが起きて私達の所に帰ってくるの。もしなのはやここにいるみんなをこれ以上泣かせるようなら、そん時は私が容赦しないネ！」

この場にいる全員は早くユーノが目を覚ますことを切に祈るばかりであった。

◇

〈なのはＳｉｄｅ〉

さて、肝心のなのはの方はと言うと、今日もユーノの様子を見に伺

い、目の前で仮死状態と化した最愛の男の姿を痛々しい表情で見つめるのであった。

「・・・・・・ユーノ君・・・・・・・」

「――――――」

いくら呼びかけても決して返ってくることのない返事に益々顔色を暗くし、なのははこれまで幾度となく流した涙を床に零すと、包帯で巻かれたユーノの手を包みながら謝ってきた。

「ごめんね・・・――――私、何にもできなくて――――――――謝ってばかりで・・・・・・・・／／／／」

助けられてばかりで自分は何一つユーノの事を守れなかった。

そんな後悔と悲しみばかりが自分の心を締め付ける中、唐突に部屋の外から一護の声が聞こえてきた。

「なのは。俺だ。入るぞ。」

「え、あ、はい！どうぞ。」

許諾を受けると一護が徐に扉を開けて中に入ってきた。

「一護さん・・・・・・・」

「・・・・・・」

二人は特に何も話すことなく暫く口を籠らせユーノの姿を凝視して

いると、そんな雰囲気の中で一護が口を開いてこう語ってきた。

「正直、俺はまたこいつがこんなことになるとは・・・夢にも思ってなかったよ。俺は何処かでこうなるのを分かっていた筈なのに、無意識のうちにユーノなら大丈夫って過信が、この最悪の事態を招く結果になっちまった・・・――」

「私だって、同じですよ。ユーノ君が、こんなことになるなんて思っていませんでしたし、何より・・・・・ユーノ君の方が肉体的にも精神的にも万倍も苦しいんですから／／／」

「なのは・・・・・」

「思い出すだけで身の毛が凍りました・・・ユーノ君が地獄の呪いで血塗れになって苦しむあの映像が・・・脳裏に焼き付いて・・・自分の昔の怪我がまるで唾でもつけてれば治る程度のものに思えてしかないんです・・・／／／」

「馬鹿野郎・・・自分の怪我の程度を物差しにするんじゃねぇよ。お前のだって、一歩間違えれば本当にどうなってたか分からないものだったんだぜ。」

「そうですけど・・・それでもユーノ君の痛みに比べれば・・・私の何か・・・！！」

「・・・・・・」

完全にユーノと自分のそれを比較して、自分の大怪我をユーノのに比べれば大したことではなかったと言い張るなのはに思わず苦悶する一護。

するとなのははは、ふと一護に向かって次のような事を語り出す。

「一護さん・・・もしかしたらユーノ君から聞いてるんじゃないかと思いますけど、私のお父さん・・・昔は剣の腕を買われて要人警護をしてたんです。だけど、仕事中に大怪我してその所為で家計が苦しくなって、怪我が治ったお父さんはもう危ないことはしないって心に決めて、翠屋の店主に留まった・・・だけど私は違った。同じように大怪我をしても、私だけは前に進んだ・・・自分の夢の為に・・・夢を諦めたくなかったから・・・だからその時まで分からなかった。“守るために歩むことを止めて、立ち止まってしまう人”の気持ちを・・・／／／」

「それがユーノだって言いてぇのか？」

一護がそう言うと、なのははは静かに頷きユーノの手を包みながら悲痛な顔で更に続ける。

「ユーノ君は・・・私やみんなの夢と翼を守るために、独り自分の翼を千切り取ってまでして自分の未来へ歩むことを止めちゃって・・・その癖独りぼっちになって・・・だけど辛いなんて言えなくて・・・いつも無理して笑ってて・・・／／／」

「こいつは本当に、他人の幸せが何よりなんだろうな。だからこそ俺はこいつのことを守ってあげたかった。愛弟子の幸せを自分の手で守りたかった・・・だけど俺は約束を果たせなかった・・・／／／助けられなかった／／／」

一護はそう言いながら悔しさのあまり強く自分の拳を握りしめる。

そんな一護の気持ちを察した上で、なのははこう言って来た。

「一護さん・・・最近になってから私魔導師を続けるか否かでずっと迷ってました／／／この手の魔法でユーノ君を助けられないなら、こんな力始めから持たなければ良かったって・・・魔法があったから、ユーノ君はこうなっちゃったんじゃないかって思ったりして・・・だけどそれでも飛びたいって欲望が心の奥底から湧き上がってきて・・・葛藤がずっと続いてたんです・・・／／／そんな私にユーノ君は言ってくれました・・・“中途半端な理由で夢を諦めると大変なことになる”って。」

「中途半端な理由・・・か。」

「いつもユーノ君は・・・本当は誰よりも不安で、怖くて甘えん坊なこの私を言葉一つで優しく包み込んでくれた・・・闇の書の時も・・・怪我で歩けなくなった時も・・・ヴィヴィオの時も・・・・・・嬉しかった／／／隣に居なくても、背中にいつも温もりを感じてた・・・／／／だから守りたかったのに・・・・・・私は結局・・・・・・／／／」

と、そんな時だった。

〈Ｍａｓｔｅｒ〉

「「！？」」

唐突になのはの首にぶら下がっていた待機状態のレイジングハートが言葉を発し、聞いていたなのはや一護は目を見開く。

「レイジング・・・ハート・・・？」

〈Please hear my story for a little while. Neither sadness nor it alone will ..master yuno.. return to two another degree and your origin more deeply than anyone ..it of you.. if you run away here.（少しの間、私の話を聞いてください。ここであなたが逃げれば、マスターユーノは誰よりもあなたのそれを深く悲しみ、それこそもう二度とあなたの元へは戻ってこないでしょう。）〉

「！」

レイジングハートからの思いもしなかった言葉になのはの表情が一変。

〈Please do not run away. Let's confront it without running away if it thinks master yuno to be a really important. Are not you may no indomitable mind separately? It is the one that decorates, that my name is after all good hearing hoity-toity. It was recalled for looking like when speaking with master yuno to be said and to have become easy fairly before.（逃げないで下さい。マスターユーノを本当に大切に想っているのなら、

逃げずに立ち向かって行っていきましょう。別に不屈の心でなくてもいいじゃないですか。私の名前も所詮聞こえのいい大仰な飾りの様なものです。以前、マスターユーノと話した時に似たようなことを言われて随分楽になったことを思い出しました。）〉

「ユーノ君が・・・」

「あいつ、んなこと言ってたのか・・・」

〈・・・ It despaired honestly. I was not able to defend an important main again ・・・ It was felt that it was even amazed because an indomitable mind heard it ・・・ However, master yuno said the word ahead to such me. That. word. very much. save. certainly. today. master. town. person. irreplaceable. master. change. provide.（あの日、マスターが墜ちたとき・・・正直私は絶望しました。またしても私は、大切な主を守りきれなかった・・・不屈の心が聞いて呆れるとさえ感じました・・・だけどそんな私にマスターユーノは先ほどのような言葉を言ってくれました。あの言葉一つで、私がどれだけ救われたか・・・・・・確かに今の私のマスターは高町なのはその人ですが、彼も私にとってはかけがえのないマスターであることに変わりはありません。）〉

「レイジングハート・・・」

なのはは驚くばかりだった。

まさかレイジングハートがユーノに対してそんなことを思っているとは思いもよらなかった。

と言うのも、レイジングハートがこの十年以上もの間ユーノのことを語る機会など皆無に近かったのだ。

だからこうして長々とユーノのことを語るレイジングハートの姿に正直驚かされていた。

〈I was not able also to save him. It is not a body but it is a mind. His mind was not able to be saved・・・It was mortified for me and there no method. It is same feelings as mastering. Please let me say though it is echoing from mastermaster yuno. It may be・・・”・・・weak. You may leave strongly.”・・・man only in a true thing so that it is possible to live・・・not strong・・・（私も彼を救えませんでした。それは肉体ではなく心の方。彼の心を救ってあげることが出来なかった・・・それが私には悔しくて仕方ありません。マスターと同じ気持ちなのです。マスター・・・マスターユーノからの受け売りですが言わせてください。“弱くてもいいのです。強くなくたっていいのです。本当の事だけで生きていけるほど人間は強くはありません”）〉

最後の方に聞かされた教訓じみた言葉に、なのはの心は溢れかえり

そうになった。

今迄人に心配を掛けまいと強い心でいようとしたなのはを一気に解放してくれのだ。

心が軽くなると、なのはは嬉しさのあまり大粒の涙をユーノの掌に零す。

「ユーノ君・・・／／／」

そして、徐に涙をぬぐうとなのははレイジングハートとユーノに向かってお礼の言葉をかけ、もう二度と逃げないことを固く決意する。

「・・・ありがとう・・・レイジングハート・・・ありがとう・・・ユーノ君・・・／／／最後の最後まで、甘えてばかりで御免さない・・・だけど私はもう逃げないよ・・・ここで逃げたらそれこそまたユーノ君に叱られちゃうし、何よりユーノ君を一生救えない・・・！ユーノ君の想いも背負おうとしたものも全部、私達が代わりに背負うから・・・ユーノ君も負けないで！頑張って！もう一回立ち上がって！私、ずっと待ってるから／／／」

一護はそうやってユーノに言葉を投げかける今までとは雰囲気が変わったなのはの背中を見つめながら心の中でこう思った。

「・・・――――（ユーノ・・・お前は本当にいい女に巡り合えたもんだな・・・――――なのはがこんなになってお前の帰りを待ってるんだ。何が何でも帰ってこい！帰ってきたら、俺も精魂籠ったパンチてめぇにお見舞いしてやるからな！）」

◇

〈三人称Ｓｉｄｅ〉

一方、ここは次元空間の狭間に存在するカトゥーンキャッスル。

内部ではテトラカトゥーンがテレビカメラの準備追われていた。

そして、設置が完了するとナルトが中央の椅子に鎮座するカトゥーンに向かって言葉を投げかける。

「カトゥーン様、テレビ中継の用意完了しました。いつでも発信できます。」

すると、煙草を吹かしながら斎藤はこう呟く。

「ふん。態々敵に向かって攻めてこいなどと中継するとは・・・随分と余裕なんだな。」

斎藤がそう言うと、不敵な笑みを浮かべながらカトゥーンは次のように言って来た。

「ふふふふ・・・それもあるけど、何より管理局を始めとするこの現実世界に生きる全ての人間に我々の新しい歴史の一ページを刻むための瞬間をその目に焼き付けてもらおうと思ってね。テレビ中継を通じて、自分たちの世界が滅び行くその様を見るのは・・・誰だって恐怖するだろう？」

「成程・・・お前にしてはなかなか性質が悪いが、俺は嫌いじゃないぜ。」

「珍しいの。斎藤がカトゥーン様の肩を持つなんてよ。」

「阿呆が。俺はそんなつもりで言ったんじゃない。やるならやるでとっと始めろ。」

「そうだね。では、本番用意。」

カトゥーンがそう言うと、中継カメラを持っていたナルトとエドがカウントを始める。

「「5秒前！4、3、2、1・・・・・・アクション！」」

◇

〈三人称Ｓｉｄｅ〉

カトゥーンがテレビ中継を始めるや否や、ミッドチルダを始めあらゆる次元世界の空に突然巨大なスクリーンが現れ始め、地上の人々はその光景に驚き返る。

「！おい・・・何だありゃ！？」

「何か空に映って来たわ！」

機動六課でも同じ光景が窓越しに映って来、全員がその光景にを目を受けると、砂嵐が晴れて一人の男の姿を映ってきた。

全員はその男の姿を見た瞬間、思わずはっとした表情となる。

「あれは・・・・！」

驚き返る人々に向かって映し出されたのは不敵な笑みを浮かべるカトゥーンの顔。

『ふふふ・・・見えるかい現実世界の人間たちよ。この映像が。管理局や聖王教会の諸君も多くに驚いていることだろうね。』

隊長陣は言葉を発してきたカトゥーンの姿を見た途端、声を荒げる。

「ありゃ!!」

「間違いない・・・カトゥーンです!!」

「何!あいつが・・・!」

一護達は初めて伺うカトゥーンの姿に目を見開き、それを凝視しているとカトゥーンは徐に次のように言って来た。

『聞こえるかな、機動六課の魔導師諸君・・・それと坂田銀時とユーノ・スクライア。とわ言っても、後者は既に動けないでいるとは思うが・・・・・多分この映像を見ているなら分かるだろう。私がこんな大胆に発破をかけるような真似をしてきたということがどういうことなのかを?』

銀時は挑発的な口調で人を小馬鹿にしてくるカトゥーンの態度にはらわたが煮えくり返りそうだった。

「あの野郎・・・!!舐めた真似しやがる!!」

『ふふふ。これが何だか分かるかな?』

すると、カトゥーンは不敵な笑みを浮かべて別の映像を映し出した。
並行して映し出されるその映像に映ってきたのは、特殊な装置の中に収められた強奪された四つのプリズムシードであった。

「あれは！」

「プリズムシード！！」

『超強力な次元干渉を引き起こすロスト・ロギア、プリズムシードが私の手中にある。今から三時間後に私はこれを起動させる。起動したが最後、この世界は勿論・・・現実世界そのものが崩壊し、私が待ち望んでいた漫画世界へと秩序と事象は逆転し、私は新世界の神となる！』

「三時間後にだと・・・！！」

「もしそんなことになれば、本当に私達の世界が・・・終わる！」

『まぁ私の気分次第だが、ミッドチルダと管理局の人間には自分の惨めさと無力さをよく味わってもらうために、壊すのは一番最後にしようとも思ってる。』

「野郎・・・・・ふざけやがって！」

カトゥーンのあまりに傲岸不遜な物言いに六課の面々は怒り心頭な様子であった。

『ではここで、新世界の神となる私の傍らでその世界に新たな命と

恵みを造り出し、創造の王となる私の最高のマテリアルを紹介しよう――――――』

カトゥーンはそう言うと、また別の映像を並行で映し出す。

そして、その映像に映ってきた一人の男の姿に銀時達の表情が一変する。

「は！」

「な・・・！」

「あれは・・・――――！」

映ってきたのは、十字架の様なものに手足を拘束され粗末な衣服を着せられた新八の姿であった。

ギンガは思わずその光景に目を見開いた。

「新八・・・さん・・・！？」

「新八・・・・・新八！！！！！！！！！！」

感情が高ぶり銀時は思わず声を荒げる。

銀時が声を荒げると、それに呼応するかのように新八もまた銀時の名を口にする。

『ぎ・・・・・ぎん・・・・・・さ・・・ん・・・』

「新八！！！」

「新八君！！くそ！！！あの漫画野郎！！！よくもこんな腐った真似を！！！」

近藤が拳を強く握りながらカトゥーンへの怒りを露わにすると、カトゥーンはそんな全員の気持ちを嘲笑うかのように不敵な笑みを浮かべる。

『ふふ。さぞお怒りな事だろうね、坂田銀時・・・いや白夜叉。君と君の仲間にとって大切な存在がこれからどういうことになるのか想像もできないだろうね。彼には漫画世界を受け入れる上での重大な役割が存在し、その役割こそが漫画世界の創造主となることだった。彼は現実世界においては至って平凡な人間のように見えるが、実は漫画世界においてこれほど理想的なマテリアルはいなかったのだよ。彼には今ルパンが盗み出した五つの本型ロスト・ロギアの力と、漫画キャラ作成に必要不可欠だったアンゴルモアが体内に埋め込まれている。』

その衝撃の事実を聞かされた瞬間、全員は思わず表情を凍りつかせる。

「何だと！？」

「アンゴルモアを・・・体内に埋め込むなんて！！」

「カトゥーン・・・てめぇ！！！！！新八に何しやがった！！！！！」

銀時の怒りが頂点に達しても尚、カトゥーンは余裕の笑みを崩さな

い。

『ふふふふ。そう声を荒げるなよ、白夜叉。そんなに私の事が憎いのなら、ここまで来るといいよ。管理局の連中も逮捕したいのならば来るがいい。場所は次元空間の狭間に位置する我が城「カトゥーンキャッスル」。逃げも隠れもしないが、果たして止められるかな？制限時間は三時間・・・それまでに私やテトラカトゥーンを討ち取れなければ、世界は・・・終わるよ。ふふふふふははははははは！！！！！！』

「く・・・！」

「カトゥーン・・・！！」

『それでは、ご到着をお待ちしているよ――――――』

カトゥーンはそう言うと、徐に映像をシャットダウンさせ忽然と姿を消した。

◇

〈機動六課Ｓｉｄｅ〉

機動六課の方では、カトゥーンからの宣戦布告を受けたことで全員の心が大きく動揺し、銀時は思わず壁に向かって足を蹴りつける。

「くそ！胸糞悪い！！」

「敵もとうとう本性出しおったな、クロノ君。向こうの方から私らに挑戦を叩きこんでくるとは、随分な自信の様や。さて、どないし

ようか――――――」

と、はやて達がどう動くかを考えているとグリフィスからの連絡が入る。

『八神部隊長、クロノ提督。本局リンディ・ハラオウン統括官より直通通信です。』

その直後、機動六課後見人の一人で彼らの上官でもあるリンディ・ハラオウン統括官が直接通信を入れてきた。

『はやてさん。クロノ。私よ。本局次元航行部隊の全艦隊はたった今、カトゥーンキャッスルに向かって動き始めたわ。他の部署も協力して事態に当たるわ。機動六課、動けるかしら？』

『大丈夫です。』

『僕らはいつでも動けます。』

「心強いわね。艦隊の到着は、およそ二時間後をめどにしているけど、幾分事態への対応が遅れてるわ。武装局員にしても、漫画キャラとの戦闘には不慣れだし、やはりここは・・・あなた方が中心となって動いてもらうしかないの。ユーノ君の事もあるけど・・・彼が目を覚まさないからと言って、私達はもう彼に甘えてばかりではいけない・・・そうでしょ。」

『はい。私達はみんな揃って、翡翠の魔導死神のユーノくんの力を充てにしすぎました。彼が人一倍多くのものを一人で背負い込んで、苦しんでいるのにも気づかず・・・友達を・・・私たち全員で苦しめてそして壊してしもうた・・・・・ほんま最低ですわ。人間と

して、一人の友人として恥ずかしい限りですわ。』

「私も同じだわ。１４年前、子どもながらに頭がよく回る彼やなのはさんの善意を利用して、この有象無象の権力欲と支配欲で塗れた世界に巻き込んでしまったのは、他ならぬ私だもの。ユーノ君もなのはさんも、管理局へは自分の意志で入ったとは言っても・・・もっと他の選択肢だって多くにあったはずなのに・・・私達と来たら・・・――」

リンディが後悔で溢れ返りそうな顔を浮かべていると、実の息子でもあるクロノが言葉を投げかける。

「今は悔いていても仕方ありません。兎も角、大型の次元震が起きれば次元断層が発生し、旧暦の時代のあの繰り返してはならない悲惨な結末がやってきてしまいます・・・」

クロノがそう言う旧暦の時代の悲劇とは、旧暦４６２年・・・・・・次元断層が起こった際、隣接する並行世界がロスト・ロギアによる誤った起動で幾つも崩壊したという歴史に残る大事故の事だ。

リンディもその事を今一度思い返しながら、クロノの言葉に返事を返す。

『そうね。私達もなるべく敵の本拠地に到着できるよう急ぐわ。機動六課は高速転送ポートでカトゥーンの待つ城へと向かって、先手を切って頂戴。時間がないわ。よろしく頼むわよ。』

「「「「「はい！」」」」」

『坂田さん。こんなことにまで巻き込んでしまって、本当に申し訳

ありません。』

リンディが次元漂流者である銀時にそう謝罪すると、銀時はそんなリンディに次のような事を言って来た。

「誰が謝れなんて言ったよ。誰もてめぇらの指図なんか受けやしねぇ。俺達は仲間を助けに行く。そんだけだ。」

『そうですか・・・・・・では、お互い頑張りましょう。』

リンディはそう言ってから、通信を切り終える。

「シャーリー。カトゥーンキャッスルの正確な位置は？」

『大丈夫です。特定終了。座軸３０００。座標軸の固定オーケー。転送準備、いつでもできます！』

「銀ちゃん。いよいよアルな。」

「ああ。何が何でも新八は助け出してやらあ。」

準備を整え、戦いに向かおうとしている銀時達。

そんな銀時に一護達が近づく。

「俺達も行くぜ。」

「む」

「この人数相手に、カトゥーンやテトラカトゥーンがどう立ち向か

ってくるかははっきりとはしないが、僕ら全員の力で絶対に新八君を取り戻そう。ユーノ君がそうしようとしようように。」

「ああ。俺もあいつとの約束を果たなきゃならねぇしな。」

「あなた・・・」

「一護・・・」

不安げな顔となる妻の織姫と居候のコン。

一護は振り返ると心配げな二人の頭に手を添えてから笑顔を浮かべる。

「心配するな、お前ら。俺は死にはしねぇよ。必ず帰ってくる。だから、ちょっとの間ここの留守を任せるぜ。ユーノの事、護ってあげて欲しい。」

二人はその言葉を聞くと、顔を見合わせ互いに頷く。

「うん！分かった。」

「よし！そう言う事ならお安い御用だ！」

「浦原さんと夜一さんも、こいつらのこと守ってくれるか？」

「お任せください黒崎サン♪」

「儂らの実力をもってすれば、この機動六課を守ることなど造作もない。」

「ああ。頼むぜ。」

「ほんなら、機動六課前線一同出動や！」

「「「

「おい。てめぇどういうつもりだ。何で出動が認められねぇんだよ!?」

一護は先ほど手動が認められないと勝手な事を言って来たイージスに事情の説明を求めると、イージスは不敵な笑みを浮かべながら衝撃的な事を口にしてきた。

「これはこれは・・・生憎たった今よりこの機動六課は本局査察部第1級特務班及び上層部の決定により、“全体査察”の対象となりました。」

「全体・・・!」

「「査察!」」

驚き返る六課メンバー一同。

一護は思わずイージスに詰め寄る。

「な、何を言ってるんだよこんな非常時に・・・!全体査察だと・・・そんなことしてる暇ねぇだろうが!!」

「これは本局上層部による正式な決定ですので。我々はその指示に従っているまでです。査察の対象はこの機動六課全体・・・よって只今より査察を開始いたします。建物から局員全てに関して、これより数時間の移動の一切を禁じさせてもらいます。」

「「「「「な!」」」」」

「そ、そんな！！」

あまりに想定外な事に誰もが言葉を詰まらせていると、部屋の中に続々とイージスの部下が必要なものを持参して中に入ってきた。

「本局査察部第１級特務班です！これより、機動六課全体査察の方を始めさせていただきます。局員は速やかに我々の指示に従ってもらい、前線各位は我々の指示があるまで外へは出ないで貰います。」

「勿論の事ではありますが、転送ポートの使用も禁じさせてもらいます故あしからず。」

イージスはそう言うと、起動していた転送ポートを強制的にシャットダウンさせた。

それを見た瞬間、なのは達は目を疑うばかりだった。

「な！！」

これには一護の堪忍袋も切れ、イージスの胸ぐらを思い切り掴みにかかった。

「おい！！てめぇどういうつもりだよ！！何で俺達を閉じ込めるような真似しやがる！！大体何でこのタイミングなんだよ！！」

「部外者は口を挟まないで貰いますかな。これは管理局内部での問題。管理外世界の出身者の言葉は一切の利く耳を持ちませんので。」

「何だと！！！」

「止せ一護！話したところで、無駄な事だろう。」

夜一がそう言うと、聞いていた一護は収まりきらない想いを必死に抑ええてイージスを解放し、服を整えたイージスは勝ち誇った笑みを浮かべる。

「聡明な判断、誠に感謝いたします。それでは、先ずはバックアップスタッフの方から順に査察を開始し始めるとしましょうか――――」

「く！！」

と、その時我慢の限界に達したはやてが一護の代わってイージスの胸ぐらをつかみにかかり、見ていたなのは達全員は大いに驚いた。

「はやてちゃん！」

「八神部隊長！」

「何をアホなこと言ってますの！！人一人・・・いや、この次元世界に住まう全ての人命がかかってるんですよ！！それなのに動くな！！ふざけんといてください！！手が届く距離にあるのにそれをみすみす見逃すなんて真似、私達にはできません！！」

「感情的になってはいけませんよ、八神はやて二等陸佐。落ち着いてよく見てくだされ、この状況を。今あなた方は我々の管理下に置かれている。我々の許可なく勝手な行動をとれば、それこそどういう処分を食らうかなど分かり切っているでしょう？」

「！」

”処分”と言う言葉に一瞬体が凍りつくはやて。

イージスはそんなはやてや何もできないでいるなのは達管理局所属の人間に投げかける様子でこう言った。

「いくら強い力を持った魔導師が何人集まった部隊と言えども、所詮上の命令に背くことなど出来はしないのですよ。あなた方も立派な組織の人間・・・歯車となった時点でこの組織のしがらみからは一生出られはしない。身も心も組織の渦に毒されて理想も夢も何もかもを失ってしまうがオチなのですから・・・ふふふふ。」

あまりに身勝手で人の理想や夢を軽々しく侮辱するイージスにヴィータもついに動いた。

「て、てめぇえええええええ!!!!!!!」

「ヴィータ副隊長!!」

「やれやれ。仕方のない人達ですね。」

イージスはそう言うと、指を鳴らしてヴィータを始めこの場にいる全員の動きをユーノ並みに頑丈なバインドで捕縛した。

「!バインド!?」

「きゃあ!」

「くそ!」

「悪く思わないで下さいね。五月蠅いようなので、暫くの間彼らを別室に閉じ込めておきましょう。あなた方の“査察”はそれからゆっくりと致しますので。」

イージスがそう言うと、彼の部下は真顔を浮かべながらバインドで拘束されたなのは達や一護達、更には銀時達を別室へと連れて行き始める。

戸惑いを隠し切れないでいるなのは達と、新八を助けに行きたいのにそれをさせてくれないイージス達に怒り心頭な銀時。

「おい!!!てめぇコラ!!!俺達を閉じ込めるだあ!?てめぇら!!俺達を何だと思ってる!!放せ!!!新八を・・・新八を助けに行かせろ!!!!」

◇

このことは三提督の一人で、最も馴染みのあるミゼット・クローベルの口からリンディへと伝えられ、リンディはそれを聞かされると思わず絶句してしまった。

「な・・・何ですって・・・!?」

『ごめんなさいね・・・私達の不手際だったわ。上層部が勝手にこんなことをするなんて、思ってもいなかったわ。』

「しかし、何故こんな事に・・・!?機動六課の存在はこの次元世界の崩壊を防げるたった一つの希望なんですよ!?それをこんな一方的な・・・しかも彼らの意思を無視したやり方など、納得いきません!」

『そうかもしれないけど、上層部の暴走は私達ではどうすることもできないのも事実。今この管理局は内部で激しい権力闘争が勃発している。“三提督”なんて、今じゃホント飾りもいいところ・・・飾りの私達が今の上層部にとやかく言ったところで、彼らは聞く耳も持たないでしょうね・・・』

リンディはそんな言葉を聞かされると、思わず力が抜けてしまい膝をついてしまう。

「何てことなの・・・――――これが上の・・・同じ管理局のすることなの・・・・・・」

『リンディ提督・・・――――』

ミゼットもそんなリンディの気持ちを汲み取った上で、自分の力ではどうすることもできない状況に苛立ちを覚えるのであった。

◇

〈機動六課Ｓｉｄｅ〉

イージス達の策略にはまり、完全に身動きを封じられた機動六課前線メンバーは一護達や銀時達も含め別室に移動させられ、外への移動を禁じられてしまった。

勿論ヴィヴィオもまたなのはと共に同じ部屋にいた。

はやては壁に寄しかかりながら暗い表所を浮かべて口を閉ざし、見ていたティアナは思わず声をかける。

「八神部隊長・・・・・・」

すると、はやては顔を沈めながら今の管理局のやり方に強い憤りを感じ始めた。

「・・・何でや・・・何で上はこんなことを・・・・・・今まさに世界が・・・一人の命が危ぶまれた状況で・・・・・・私達の動きを封じるなんて・・・・・・どうかしてる・・・！！一体、何がしたいんや！！」

すると、そんなはやてやなのは達全員の疑問に徐に浦原と夜一が次のように答えてきた。

「・・・――あの第1級特務班ですがね・・・スクライアさんからの話によれば、彼らは今の管理局を動かす本局の上層部が独自策として造ったモノなのですが、どうやらその上層部と言うのも相当に権力欲に溺れた頭の固い連中の集まりなようでして、それこそ尸魂界で言う四十六室と似たようなもんッス。」

「上層部との癒着が著しく、奴らは言わば上層部の手駒の様なものじゃ。奴らは最初から、儂らの動きを封じるのが目的だったのじゃろう。より正確に言えば、ユーノとその身柄を保護しているこの機動六課そのものをな・・・――」

「！そう言えば、あの人ら初めからユーノくん目当てに査察を・・・！」

「スクライアさんは良くも悪くも管理局では名が知れ渡っていますが、巨大な力と頭脳明晰な彼の能力を恐れた上層部が彼の存在を気

に入らないと思っても不思議ではありません。恐らく、彼を最初から叩くつもりで虎視眈々と機会を伺っていたのでしょう・・・そして、今回のあの事故を切っ掛けに一気に攻めに来た。例え三提督の許しを請わずとも、今の上層部はまるで訊く耳を持ちません。最早三提督の力では・・・――今の管理局の暴走を止められないのですから。」

話しを聞き終えると、なのははヴィヴィオの事を抱きしめながら寄ってたかってユーノの事を責め立てる現状に涙が零れ落ちる。

「何で・・・何でこうなるの・・・！ユーノ君が・・・ユーノ君が何したって言うの!!あんなに苦しんで、目を覚ますかどうも分からないのに・・・“管理局”までユーノ君の事を責めるなんて・・・酷いよ／／／」

「なのはママ・・・どうすればいいんだろう!?」

「ごめんねヴィヴィオ・・・私の力じゃどうすることも出来ないよ・・・／／／」

謝ることしかできないなのははただただ娘を自分の胸の中に抱き寄せ、他の面々もどうすることもできず全く動くことが出来ないでいた。

そして唐突に、エリオやギンガがこんなことを口にする。

「僕らの信じてきた管理局って・・・一体何だったんでしょうか・・・」

「私たち全員・・・・・組織の中で何も知らずに踊らされていた・

・・！」

すると、その時一護が徐にため息をつく。

「・・・ふう。」

そして一護はそのまま部屋の外を見張るイージスの部下の元へと歩き出す。

「一護？」

ルキアは一護の行動の真意に若干の違和感を感じていると、その直後一護は閉ざされた部屋の鍵をドアごと壊し、外で見張っていたイージスの部下たち全員を気絶させる。

「ぐっは！」

「のっは！」

「え！」

全員が驚き返り扉の方を見ると、一護はイージスの部下を倒してから全員向って声をかける。

「戻るぜ。お前ら。」

「一護さん、あなた！」

「生憎俺はここの連中とは何も関係もねェ。どう動こうが何の束縛も受けやしねぇ。さ、戻るぜ。」

「し、しかし・・・――――！」

躊躇いの気持ちが残るフェイトだったが、そんな一護の言葉を聞いて真っ先に動いたのは銀時と神楽だった。

「そうだな。おめぇの言う通りだ。」

「銀ちゃん！行こう！！」

「ぎ、銀さん！神楽ちゃんまで！」

銀時と神楽が動きを見せると、壁に寄しかかっていた夜一や浦原が尋ねる。

「行くのか？」

「行かなきゃ、新八が死ぬネ。」

「敵の頭数は今までの比ではないでしょう。テトラカトゥーンも今回は全員本気で殺り合いに来る。行けば黒崎サンも坂田サン達もどうなるかは、分かってるはずですが。それでも行くつもりで？」

「ちょっくら、仲間取り戻すのと友達（ダチ）の約束果たしに行ってくる。」

「ダチの約束・・・」

「ダチって・・・まさか・・・！」

銀時の言葉に思わず耳を傾ける前線一同。

すると銀時は徐に次のように語り出した。

「あいつの言ってた通り、“独り”ってのは辛いもんだぜ。だがそれはあいつだけじゃなくて、新八も・・・そしてこんなバカげたことをしでかすカトゥーンも同じな筈だ。どんな場所だろうがよ、どんな境遇だろうがよ、友達ってのはいるんだぜ。偶に無性に煙たくなる時もある。もう顔なんて見たくもねェってときもある。だがよ・・・それでも独りで居ることに比べれば、万倍もいいもんだ。重い荷を一緒に背負うもんがあると、自然そいつが一番大事なもんになってくる。人間一人に出来ることは限られる。が、だからこそ友達ってのは必要なんだろう。決して見失っちゃいけねぇ・・・独りにしちゃいけねぇ大事なもん・・・・・・死ぬ最期の一時まで笑っていられるようにな。」

「・・・・・・」

なのははそんな銀時の言葉を一言一句聞き逃さず聞いてしまった。

そして、銀時は木刀を所定の場所に携えると未だ動かずにいる前線メンバーにこう言った。

「しみったれた面した今のてめぇらや管理局の腐った連中には一生分かんねぇさ。てめぇら憶えとけよ。俺達は管理局の味方でも、てめぇら機動六課の味方でもねぇよ。」

「え！」

思わずその言葉に耳を疑うはやて。

銀時はそんなはやてや他の前線メンバーに次のように断言する。

「俺達は、新八と――――――“ユーノの味方だ”」

「！」

その言葉を耳にした瞬間、なのはの中で何かが切れる音が聞こえた。

「銀さんの言う通りだ。俺達も銀さん達と一緒に行ってくる。ユーノが命懸けで助けたかったものを助けに行ってくる。」

「すまねぇな、一護。」

「気にするなよ。立場や境遇は違えど、俺達は“仲間”だ。」

一護がそう言うと、それに刺激を受けた石田や茶渡、更には恋次達死神の面々も一様に動き始めた。

「その通りだ。」

「ま。あまり無茶なことはしないでくれ給えよ。」

「ふん。もやしメガネに言われたくねぇよ。」

「だ、誰がもやしメガネだ!!」

銀時の言葉に思わず声を荒げる石田。

と、その時。

「待てよ。」

「「!?」」

唐突に今度は土方が話しかけてきた。

「・・・てめぇらだけで敵地に乗り込むつもりか?バカも休み休みに言えよな。生憎俺達真選組もガキを見殺しにするこんな腐った連中と一緒にされるのは御免被る。それに、斎藤(やつ)一の首を取れるのは俺だけだ。」

土方の言葉を聞くと、総悟は近藤に向かってこう話しかけた。

「近藤さん・・・俺、良心なんてもんはハナから持ち合わせていやせんが、少なくとも・・・情の一つや二つぐらいは持ってるつもりですさあ。」

「それだけあれば充分だ、総悟。万事屋。黒崎一護。俺達も協力させてもらう。新八君は俺の大事な弟だからな!」

「近藤さん・・・・・・」

「ふん。ま、足手纏いにならいように頼むぜ。」

銀時がそう言うと、当然のことながら土方は怒りを露わにする。

「誰が足で纏いになるかって言うんだよ!!」

「ああ!!!やんのかコラ!!!」

「ち！今回は特別に協力させてやるアル。」

「おめぇに言われる筋合いねぇっつーの。」

神楽と総悟もまた相変わらずの態度を取ってしまうが、何処かそれは仲良しの証にも見て捕えることが出来た。

そして、一護はそんな銀時達や自分の仲間に向かって出発を促す。

「行くぜ。」

「「「

鬼太郎はそう言うと、金太郎と浦太郎の二人に向かってユーノが自分たちを救ってくれた時のあの日の出来事を語り始めた。

「あの頃、学もねぇ居場所もねェ・・・野良犬以下の俺達に優しく手を伸ばしてくれたのは誰か・・・人間としての誇りも失い、人生に絶望して世の中見限ってた俺達に光を与えて決して見捨てなかったのは誰か・・・失くした大事なもんをもう一度取り戻してくれたのは誰か・・・管理局でも、他の誰でもねぇ・・・――俺達の大将はあの頃から店長だけだよ。店長が守るって言ったんなら仕方ねェ。俺はそいつがどんな奴だろうと、守るだけだよ。」

「だね♪」

「その通りである。」

金太郎の言葉を聞くと、二人もそれに同調するかのように自分の武器を手に持ち鬼太郎と共に司令室へと向かって歩きだし、見ていたスバルは思わず声を上げる。

「う、浦太郎教官に金太郎さんまで・・・！！」

「どうして・・・！？」

すると、そんな疑問符を浮かべる前線メンバーに浦太郎は背中越しにこう語る。

「言ったはずだよ。僕らが守りたいのは店長と店長の守りたいものだって。君らや管理局に忠誠を誓ったことだなんて一度もない。新八君を見殺しにする方がよっぽど店長に対する裏切りだからね♪」

「そう言うこった。俺達も勝手にやらせてもらうぜ。」

「行きますぞ。我らが店長の守るべきものを救いに。」

金太郎がそう言うと、スクライア商店従業員一同は揃って転送ポートのある司令室へと向かって歩き出した。

そんなやり取りを見ていたなのははレイジングハートを握りしめがら念話でこう話し出した。

「（レイジングハート・・・）」

〈Ｙｅａｈ〉

「（いつの間にか私は大人になって、一番大事な事を忘れてたね・・・きっと今のこんな私を見たら、ユーノ君・・・絶対私に幻滅するに決まってるよね・・・）」

〈Ｍａｓｔｅｒ〉

「（うん。もう私は迷わないよ。管理局が何だ・・・組織が何だ・・・一番大切な人を救えないのに、エースオブエースなんて調子に乗ってるんじゃないってね♪）」

そして、決意の籠った眼差しとなると、高町なのは一等空尉・・・いや、高町なのはは同じように部屋の外へと向けて飛び出して行き、見ていたフェイト達は思わず目を疑った。

「！なのは！？」

「「なのはさん！」」

「ママ！！」

「君は・・・！」

なのはは後ろを振り返ると、嘗てフェイトを助けに行くためにリンディ達の指示を無視した時と同じ目を向けてこう言った。

「八神部隊長・・・隊長陣一同、フォワードのみんな、本当に申し訳ありません。機動六課スターズ１。高町なのは一等空尉・・・いや、高町なのはは、黒崎一護さん及び坂田銀時さん以下１５名と共に指示を無視して勝手な行動をとります！」

「は！なのはさん！！」

なのはの行動を見ていた織姫は思わず嬉々とした表情となり、浦原や夜一もまた安どの笑顔を浮かべる。

「ママ！待って――――！」

ヴィヴィオは司令室に向かおうとするなのはを引き留めると、なのははそんなヴィヴィオを目線にまでしゃがみ込むと、優しい表情を浮かべてこう言った。

「ヴィヴィオ。ごめんね。なのはママ・・・・・・もう逃げないって決めたの。大丈夫。ママは絶対帰ってくるから。ちゃんと帰ってきて、ヴィヴィオのことうんときつく抱きしめてあげる。そして、ユーノパパも入れて家族三人・・・一緒に笑い合えるから。ね♪」

「なのはママ・・・――――うん！約束・・・守ってよ！絶対に！！」

「うん！絶対絶対守るよ！！」

ヴィヴィオとの約束を胸に、なのははユーノへの想いを胸に抱き駆け足で司令室へと向かって走り出した。

「なのはちゃん！」

「なのは！！君まで・・・何故だ！！」

クロノはなのはがこのような行動をとるとは夢にも思わず苦い顔を浮かべていると、夜一と浦原はそんなクロノにこう言って来た。

「分からいのか、クロノ。なのはの行動の真意が？」

「え？」

「なのははあの時、管理局の命に従ったのではなく・・・己の魂の声に従ったのじゃよ。」

「己の・・・魂の・・・声・・・！！」

「そっス。嘗て彼女がテスタロッサさんを助けたかった時の様に、高町サンはあの時スクライアさんが必死で守ろうとしたものを助けに行ったんス。黒崎サンや坂田サンも同じようにね。」

全員はその言葉を聞くと、一様に沈黙を保った。

◇

〈銀時Ｓｉｄｅ〉

さて、司令室の転送ポートを使い次元空間の狭間にあるカトゥーンキャッスル内部へと侵入を果たすことに成功した銀時や一護を含めた１５名の面々は、眼前に広がってくる夥しい数の漫画キャラを前にして立っていた。

「おうおう。随分派手な出迎えじゃねぇかよ。いや～～～やっぱスターはもてて困るぜ。」

「寝惚けたことぬかしてんじゃねぇよ。誰がスターだよ！てめぇみたいな奴がスターになれる訳ねぇだろが、ボケ！」

「んだとこの野郎！！」

土方の言葉についつい反応してしまう銀時だが、直ぐに一護に諌められる。

「喧嘩してる場合かよ！早速来たぜ。」

一護がそう言うと、番兵と思われる夥しい数の漫画キャラが一斉に一護達目掛けて走り出してきた。

「行くぜ！！」

「「「

ら一護にこう質問した。

「おい一護！聞くがお前、喧嘩はどうやるってユーノに教しえた！？」

「勿論！喧嘩は派手にやるべし・・・だろうが！」

「はっ！上等！！」

そして、ついに始まるカトゥーンキャッスル内部での壮絶な戦い。

全員は各々の武器を手に取ると、鬼神の如く勢いで漫画キャラの一掃を始める。

「てやあああああああああああああ！！！！！」

「はあああああああああ！！！！！」

「「「「「つらあああああああ！！！」」」」」

「「「「うりゃあああああ！！！！！」」」」

「あっちょーーーーーー！！！！！」

「「「「たあああああああああ！！！！！」」」」

死神、侍、滅却師、真選組とあらゆるものがごちゃまぜのこの混沌とした戦場は宛らとあるゲームを思い出すかのようだった。

と、そんな怒涛の攻撃を加え続け漫画キャラを一掃しているところ、

銀時の後ろから不意に攻撃が仕掛けられようとしていた。

「銀さん！後ろです！！！」

「！」

吉良の言葉を聞いて、後ろを振り返った銀時は己を振りかぶって攻撃を加えようとしている巨大ゴーレムの姿に目を見開いた。

「やべ・・・！」

だが、その瞬間ゴーレムに向かって桃色の砲撃が直撃。

ゴーレムはその場に倒れ込んだ。

「「！？」」

一護と銀時達が不思議に思い、辺りを見渡してみるとそこにいたのはエクシードモードとなってゴーレムを撃退したなのはであった。

「お前・・・なのは！」

「なのは・・・何でお前までこんなところに！？」

驚き返る一同の元に徐に近づくと、なのはは次のように語った。

「ユーノ君の助けたかったものを助けに来たんですよ。管理局のしがらみが何ですか、滅俸が降格がクビがなんですか。大事なものを失う事に比べれば、ホント取るに足りない小さなことですよ。ね♪」

「・・・ふん。いいじゃねぇか。そうこなくちゃったな。」

「見直したぜ、泣きべそ女」

鬼太郎が冗談半分にそう言うと、なのはは顔を赤くしながら全否定の様子となる。

「え!?もう!!!酷いですよ!誰が泣きべそ女なんですか!!」

「よっしゃ!役者が揃った。楽しいパーチイの始まりだ。派手におっぱじめようぜ!!」

銀時がそう言うと、各々は必殺技を発動して一気に残りの漫画キャラの一掃に入った。

「月牙天衝!!!」

「「「てらあああああ!!!」」」

「わちょおおお!!」

「虎狩り!!」

「巨人の一撃!!」

「疾っ!!」

「俺の必殺技、パート2!」

「スピアトルネード!!」

「ダイナミックチョップ！」

「咆えろ、蛇尾丸！！」

「「破道の六十三『雷吼炮』！！」

「ディバインバスター！！！」

大切なものを守りに抜くため、彼らは今心を一つに最後の戦いへと身を投じるのであった。

己の魂に素直になれ（後書き）

ク「『先生、勉強する意味が解りません！こんなの社会に出て役に立つんすか？』なんて言う思春期にありがちな疑問をこじらせてしまった僕は、人生の重要な選択肢を誤ること八回・・・そう、この都立魔吐工業高校で八回留年してるのは僕だけ。親戚の勧めた夢戦が怖いから正月の集まりには出ない。絶対出ない！そんな僕の前に一人の男が現れた――」

ユ「殺しちゃうぞ♪」

ＢＯＰユーノ君

2話

ユーノ・クロノ・ヴェロッサの三人は商店街を大手を斬って歩いていた。

そんな三人を凝視する人々や他校の不良たち。

銀「おい、見ろよ。最近調子に乗ってる魔吐高三羽烏の連中だ！」

銀時はそう言うと、順に説明を開始する。

銀「転校してきて初日で三年占めた、ユーノ。現在八留中。魔吐高の古兵、クロノ。特技は遅刻とケーキ作り。緑の・・・・・・誰だっけ？」

新「さぁ・・・」

ヴェロッサの印象だけが薄かったことで、ヴェロッサはそれを聞いて呟く。

ヴェ「（転校しよう・・・）」

魔導師図鑑ハイパー！

ユーノがまだ再起不能となる以前の七月初旬

六課に遊びに来ていた一護のもとに謎のハガキが送られてきた。

ユ「何ですかそれ？」

徐に一護がハガキを捲ると、次の事が書かれていた。

一「ロックミュージカルＢＬＥＡＣＨ・・・黒崎一護役オーディションのお知らせ・・・」

二人はそれを見ると顔を見合わせ呆然とする。

一・「何だ・・・これ・・・」

ユ「あ、あんまり気にしない方がいいんじゃないですかね？」

一「そ、そうだな・・・」

そう言って屑籠にハガキを捨てようとした一護。

と、その時バレリーナ姿のルキアが一護達の前にクルクルと踊りな

がら登場。

ル「御待ちなさいませ～～～」

二人は気恥ずかしそうに見つめるルキアの姿に顔を歪める。

ユ「る、ルキアさん！？」

一「何だよお前・・・！」

すると、そこへ今度は白いスーツに身を包んだ気分上々の恋次とＢＬＥＡＣＨとは一切関係ないクロノが狼の耳をつけて登場。

恋「歌は～～～いいもんだぜ～～～」

ク「熱き魂を見せましょう！」

ユ「お前関係ないだろ！！」

一「ここに来てまで宣伝してんじゃねぇよ！！」

と言うわけで、ＢＬＥＡＣＨ連載１０周年記念公演

ロックミュージカルＢＬＥＡＣＨをよろしく。

次回予告

ついに決戦を迎える機動六課ＶＳ漫画キャラの壮絶な戦い。

傷つきながらも、銀時・一護・なのは達は新八を救い出すために、

ユーノが護ろうとしたものを護るために。

一進一退の攻め際の中、斎藤一の刺客が襲い掛かる――――――

ス「次回『一度した約束は必ず守ろう』」

一度した約束は必ず守ろう

カトゥーンキャッスルへと突入した坂田銀時以下１６名の死神・魔導師・特殊能力を備えた人間など、それは多種多様。

自らの魂の声に従った彼らだったが、その先に待っているのは勝利か、敗北か。

いや、こんなナレーションなどする必要はなかったのだ。

何故なら彼らが信じているのは、その眼に見ているのは仲間を助け出し、友との約束を守るという絶対的な勝利のみだからだ――――――

「ほおおおおおおお！！」

白夜叉と異名をとる坂田銀時の嵐のような攻撃が、有象無象と召喚されるカトゥーンキャッスル内部の漫画キャラを一掃していく。

木刀の一振りは数百の漫画キャラを振り払い、全てを薙ぎ払う。

「コノヤロウ！！！！！！！！」

そんな銀時に負けず劣らずの勢いで翡翠の魔導死神ユーノ・スクライアの実の師であり、伝説の死神代行の異名をとる黒崎一護もまた、愛刀の斬月片手にその一太刀で敵を一掃し切り刻む。

「おおおおおおおおお！！！！！」

刃から放たれる霊圧を圧縮させた飛ばす斬撃、月牙天衝の威力は実

に凄まじい。

一振りで漫画キャラを薙ぎ払うどころか、場内の施設そのものも大きく破壊していくのだ。

だが、破壊と言う点においてはこの女も負けてはいられない。

ユーノ・スクライアの恋人であり魔法の弟子、不屈のエースオブエース、又の名を管理局の白き魔王、高町なのはである。

なのはは眼前の漫画キャラに愛機レイジングハートの先端を突き付けると、カートリッジを数発ロードしてから魔力エネルギーをチャージする。

〈Ｔｈｅ ｆｒａｃｔｕｒｅ ｍｏｄｅ ｔｒａｎｓｉｔｉｏｎ. Ｆｒｏｍ ｔｈｉｓ, ｗｅ ｗｉｌｌ ａｎｎｉｈｉｌａｔｅ ａｌｌ ｔｈｅ ｇａｒｂａｇｅ ｉｎｓｉｄｅ ｕｎｔｉｌ ｙｏｕ ｃａｎ ｎｏｔ ｓｔｏｐ Ｃａｒｔｏｏｎ Ｃａｓｔｌｅ. Ｃｏｏｌ ｄｏｗｎ ｔｉｍｅ.（破壊モードに移行します。これより、カトゥーンキャッスル内部のごみを全て殲滅するまで私達は止まりません。頭を冷やす時間です。）〉

レイジングハートの淡々とした機械音声が発音されると、なのはは数百もの漫画キャラに狙いを定めて桃色の魔力砲撃をお見舞いする。

「エクセリオンバスター！！」

桃色に輝くその砲撃の直撃を受けた漫画キャラは為す術もなく残らず灰と化し、凄まじい轟音が城内に響き渡る。

今の彼女の瞳には迷いも、恐怖もなかった。

それは決意と覚悟に満ちたもの。

たった一人、世界で最も大切な愛する男との約束を守り抜くため、彼女は今戦いに身を投じたのだ。

そんな彼女や先の二人同様、場内で暴れまくる頼もしい仲間たち。

万事屋からは神楽がその持前の怪力を駆使して、戦いを繰り広げていた。

「どぅんだらあああああああああ！！」

神楽は城内に佇んでいた巨大な柱を渾身の力で引き抜き持ち上げることに成功すると、驚愕する漫画キャラに振り下す。

その直撃を受けた漫画キャラはまるでバッティングセンターの野球ボールのように次元空間の中へと飛んで行った。

更には、同じ世界からやってきた真選組の三人も己の剣の上でを信じて目の前の敵を切り倒していく。

「うおおおお！！」

「どりゃあああああ！！」

「鴉魔狩り（からすまがり）！！」

豪快な太刀筋と素早い太刀筋の近藤、総悟の剣にジャンプした状態

で周りにあるものを瞬時に切り裂く土方の三刀流の剣技が漫画キャラを切り崩す。

そんな中、一体の漫画キャラが怒涛の猛攻を続ける彼らの姿に恐れおののき思わず呟く。

「何だこいつら!?まるで――――――怪物だ!!」

漫画キャラが徐々に数を減らし始める中、更に中心核の三人の周りに集まった仲間たちの攻撃が拍車をかける。

「蛇尾丸!!!」

「ダイナミッククロス!!」

「琴線斬“鼓瓜田”」

「破道の四十二『車大鋼(くるまだいこう)』!」

「俺の必殺技、パート4!!」

「ウォーターホイッパー!」

「光の雨!」

「巨人の一撃!」

「肆の舞・白霜雨!」

彼らの攻撃がものの見事に決まると、それまで有象無象と表現して

いた漫画キャラの数が一気に目で数を確認できるほどにまで減少。

一護達は一度一か所に集まるとお互いに肩を並べて武器を構える。

そんな苦戦を強いられる漫画キャラ達の様子を別のモニターで確認していた同じ漫画キャラだが掴みどころのない妖艶の美女、峰不二子は不敵な笑みを浮かべていた。

「ふふ・・・あれだけの数にもかかわず僅か数分でほぼ全てを全滅・・・これも人を集める翡翠の魔導死神の力ってものなのかしら?仕方ないわね。そろそろ本気出しておきましょう」

不二子はそう言うと、徐に目の前にあるスイッチを押した。

するとその時、入り口付近で戦いを繰り広げていた一護達の周りが大きく揺らぎ始める。

「!」

動揺する一護達。

と、その瞬間閉ざされていた入り口が開くや否や、先ほどの漫画キャラとはまた別のしかしながら明らかに戦力は上と思われる巨大な漫画キャラが有象無象と出現し、銀時は思わず目を開く。

「こいつは・・・!」

「んなのありかよ!何だあのデケー連中は!?」

土方がそう呟いた直後、そんな彼らの前に現れたモニター画面から

不二子が顔を出す。

『は～い。お元気？』

軽薄な口調でそう呟く不二子を目の当たりにした途端、全員の視線が不二子に注がれる。

「！てめぇは・・・！」

「確か、峰不二子とか言うルパンの仲間だよ。」

石田がそう言うと、不二子は不敵な笑みを浮かべこんな風に言い返す。

『ルパン？さて、誰の事かしら。死んだ男の事なんてイチイチ憶えてないからわからないわ。うふふ・・・ところで、頑張ってやってるみたいだがけどこの魔神（ましん）相手にするのは骨が折れるんじゃなくて？数では圧倒的にそちらが不利。このまま戦ってもいずれ力は消耗し返り討ちに会うのが自明の理。決して奥まではたどり着くことはで・き・な・い・の・よ？』

「うるせー！ごちゃごちゃ言ってるんじぇねぇよ！俺達は何が何でもここを通るぜ！ユーノとの約束を果たすためにな！！」

「あなたの口車になんか私達は乗りません！悪いけど、全力で行かせてもらう！」

一護となのはがそれぞれそう言うと、全員は覚悟の籠った瞳を浮かべて前方の敵に武器を構え、魔神たちもまた一護達に向けて砲門を向ける。

『うふふ。強がっているようだけど、どこまで持つのかしらね。所詮あなた方はどこかの誰かさんと同じで、孤立無援の独りぼっちなんだから♪』

不二子はそう言って、一方的に通信を切り彼らの前から姿を消す。

その間に魔神は砲門にエネルギーを蓄え、一護達に狙いを定める。

一護達の表情が若干強張りを見せたまさにその時だった。

一体の魔神に向けてオレンジ色に輝く集束砲が放たれ、魔神はその直撃を受けて爆発する。

「!?」

「「な!」」

突然の出来事に思考が回らないでいる銀時達。

と、そんな彼らの耳に非常に聞きなれた女性の声が入ってきた。

「孤立無援の独りぼっち?そんなことないわよ。少なくとも一人・・・ここに繋がってるのが居るわよ。そうですねよ、沖田さん。」

「お前は・・・!」

総悟は自分の名を読んできたその女性の方に目を向ける。

後ろの方に立っていたのは、なのはの部下でありクロスミラージュ

を愛機として戦う六課自慢の射撃手、ティアナ・ランスターであった。

「ティアナ・・・！」

ティアナは沖田の拍子抜けた声を聞くと、ほくそ笑み再び銃口から弾丸を発射し、魔神の一体に攻撃する。

と、その次魔神の後頭部に巨大なハンマーヘッドが打ち付けられ、魔神はモグラたたきの要領で地面に食い込んだ。

目を見開く一同の元に今度は赤紙の少女が参上する。

「弱い鉄だな。そんなものじゃ、こいつらは傷一つつけられはしねぇさ。私が打ち直してやろうか？このグラーフアイゼンで」

神楽は少女の姿を目にすると、嬉しさのあまり声を上げる。

「は！ヴぃ、ヴィータ！！」

ヴィータはグラーフアイゼンを肩に担ぐと、ティアナ同様ほくそ笑んでみせる。

すると、一体の魔神が走りだしヴィータを攻撃しようとしてきた。

が、その途端魔神は炎の剣戟で一刀両断され、真っ二つに分けられる。

真っ二つになったその傍らに、桃色の長髪をなびかせる女性騎士とその相棒たる烈火の剣聖が登場。

「やれやれ。背丈は兎も角として、これでも一応は女なのだ。そう気安く迫まると痛い目に遭うぞ。」

「そう言うこった！」

「シグナム殿！アギト！」

近藤がそう言って歓喜の声を上げると、それにつられるかのように続々と仲間の声が聞こえてきた。

「なのはさん！！」

「遅くなりました！」

なのはの名を叫びながら転送ポートから現れたのはなのはの愛弟子のスバル・ナカジマと、その姉のギンガ・ナカジマだった。

「スバル！ギンガ！」

なのはが二人の登場に大いに喜びを見せていると、今度はその後に続いて愛機ストラーダを手に持つ少年と、彼のパートナーである竜召喚士キャロが駆けつける。

「その人たちを潰させはしない！」

「ユーノ先生の大事な・・・私達の大事な人を傷つけさせたりはしない！」

「エリオ！キャロ！」

一護がそう言って隣に二人の姿に喜びを見せた時だった。

魔神に向けて魔力砲撃が発射され、爆発に伴ってストレージデバイスSU2と氷結の杖デュランダルを手に持ったクロノ・ハラオウンが徐に歩いてきた。

「君たち・・・甚だ勘違いもいいところだ。君たちもユーノも独りなんかじゃないさ。今まで僕達と生き、築いてきた絆がある」

「な！黒河童も登場だぜオイ！」

銀時は内心クロノはこの場には絶対に来ないと思っていたが、その中にも若干の期待が残っていたため今回の事には驚きもそうだが嬉しさの方が大きかった。

「時空管理局から君たちがいなくなったら多くの魔導師たちが泣く。だが、ユーノや新八君がいなくなったら僕達が泣く。全く・・・女子供も問わず僕達をここまで誑し込むとは、罪な淫獣フェレットだ。」

と、クロノがそう言って笑みを浮かべるとその言葉の後に続く形でなのはの目の前に高速の速さを武器とする親友、フェイト・T・ハラオウンが現れた。

「ユーノやなのは達ばかりに荷は負わせないよ。」

「フェイトちゃん！来てくれたの！？」

「なのは。昔なのはが私の事助けようとしてくれた時、なのはは母

さんやクロノの指示を無視して駆けつけて来てくれたよね。だったら、私にだってそうさせて欲しいな。だって、それが“友だち”でしょ？」

「フェイトちゃん・・・」

思わずその言葉に心が打たれるなのは。

そんななのはや全員の耳に届く声でフェイトはバルディッシュを握りながら高らかに語る。

「世界の・・・私達みんなの命運を一身に背負うなんて、水臭いよ。この絆は誰のものでもない。私達・・・――機動六課とユーノ・スクライアのものだ！漫画キャラでもテトラカトゥーンでもまとめてかかって来なさい。私達の本当の怖さ・・・教えてやる！」

フェイトがそう言うと、それに便乗してティアナ・シグナム・ヴィータ・クロノが更に言葉を並べる。

「これ以上ユーノ先生と私達の絆に手出しさせない！あの人は・・・私達の大事なものを一緒に守ってきた大切な人だから！」

「そうだな。久しぶりに見た真の熱き魂・・・強き心・・・正にハードボイルドと言っても過言ではないな、あやつは」

「迷惑ばっかかけて来たのは私らの方だ。恩なんか返せるとは思ってねぇ。ただ、あいつが私らに教えてくれたこと、忘れる訳にはいかねぇ」

「見ていてくれよ、フェレットもどき。僕達は今度こそ自分とお前

の大事なものを自分の手で守り通して見せる。僕たちの絆を・・・僕達の大切な仲間志村新八君と・・・その新八君を守ろうとしたかけがえのない友人・・・ユーノ・スクライアを！」

銀時、一護、なのはを始めこの場に最初から居合わせていたもの達は大いに驚いていたが、直後笑みを浮かべ一護となのははこう言った。

「俺達は、この紡いだ絆であいつと笑って泣いて一緒に生きてきた。だったら、歯食いしばって守るのも一緒だ！」

「ユーノ君を敵に回したのはあなた達の方よ。ユーノ・スクアイアは私達の大切な絆の証なんだから！」

そして、最後の仕上げ手に銀時が木刀を肩に乗せてこう言う。

「ま、そう言うこった。行くぜ！！！」

銀時の掛け声とともに、この場に居合わせたユーノ・スクライアが築いてきた絆、計２６人が魔神に向かって突っ込んだ。

魔神を前にしたフェイトは目にも止まらぬ早業で魔神の体を引き裂き、後ろを捕えるといつもの優しいイメージから一変、まさしく死神の様な表情となった。

「平伏しなさい・・・――――私が閃光の死神フェイト・Ｔ・ハラオウンよ」

心を持たない筈の魔神ですら、何故かその時のフェイトの表情を見ると一瞬動きが鈍くなったそうな。

それから暫くして、フェイトを始めとする機動六課前線メンバー、死神組、そして次元漂流者組の猛攻によって魔神は全機撃退され、彼らは誰一人欠けることなく城内に突入することに成功した。

◇

〈テトラカトゥーンＳｉｄｅ〉

突入を成功させた彼らの姿を別のスクリーンで見ていた孫悟空を除くテトラカトゥーンの三人は不敵な笑みを浮かべていた。

「・・・来たか」

「ああ。思った以上に早かったってばよ。」

「だが数が少ないぜ。どういうことだ？」

「怖気ずいたんじゃねぇのか？」

「どうだろうな・・・」

テトラカトゥーン筆頭、斎藤一はそう言いながら煙草を地面に放り投げナルト、エドの前から立ち去ろうとする。

「あれ？斎藤、何処行くんだよ？」

「俺達と殺り合うのもいいが、先ずはほんの小手調べだ。敵の本山に乗り込んでくるということが図らずもどう言う結果を招くかのか・・・それをあいつらに思い知らせてやる。」

斎藤は如何にも何かを企んでいる表情でそう言うと、二人の前から立ち去り徐にある場所へと向かった。

一体、斎藤は何を企んでいるのであろうか？

◇

〈機動六課Ｓｉｄｅ〉

さて、城内へと侵入し奥の方へと突き進んでいた一行は敵の警備を回避しながら人気のない広い場所へとたどり着く。

そして、全員がその場にいることを確認すると一護は徐に歩みを止め後ろを振り返る。

「ようし、こっから三班に分かれるぞ。このままこんな大人数で固まってたら発見された時、一網打尽にされる。あまり言いたくない台詞だが、誰かがやられたとき残った誰かがカトゥーンと新八の元に行くんだ・・・・・・たとえ一人になろうとも・・・・・・」

「しかし戦力を三分して、この城の警備を乗り越えられるんですか？」

エリオが不安げな様子でそう口にすると、眉間に皺をよせ目を瞑る一護の前に石田が出て来、メガネの位置を直しながらこう言う。

「それを言うならこの人数でもきついよ。僕らは所詮３０人足らず。ここの敵の数は先ほどの戦闘でも分かった通り無尽蔵と言ってもいいだろう・・・三手に分かれた方が攪乱もできる。せめて戦力を均

等に分けよう。」

石田は懐からモノクル（片眼鏡）に似た形をしている奇妙な機会を取出し、それを自分の片耳に取り付け、付属する半透明の小型スクリーンを覗いた。

一護達はそんな石田の奇妙な道具に、一同呆然としどのように突っ込んでいいものか躊躇いを見せていたが、悪友を代表して一護が呆れながらに質問する。

「おい石田・・・何だよそりゃ？どっかの漫画で見たことあるんだけどよ・・・」

「“スマウザー”だ。平たく言えば戦闘能力を図る計測器だ。」

「いやそりゃ“スカウター”だろ！平たく言えば“スカウター”だろ！？」

「違う。“スマウザー”だ。こんな時の為にと浦原さんが作ってくれたものだ。」

「絶対マガイもんだろそれ！！」

一護の怒号がツッコミとして鳴り響く中、石田は飽く迄も冷静な表情を浮かべたままスマウザーを覗いていた。

「これで僕らみんなの戦闘能力を測り、均等に三班に分かれよう。先ずは・・・黒崎からだ。」

「何で俺なんだよ・・・」

何故自分が最初に測られる対象であるのかと思いつつ、一護は真剣な表情を浮かべる石田がつけたスマウザーの青色の小型スクリーンを凝視する。

暫くすると計測が完了し、石田は徐に一護の戦闘能力を告知する。

「３６２K。ほう・・・見た目によらず大した数値だな。僕も正直驚いているぞ。」

「何だよその“K”って?規準が良く分かんねぇよ・・・凄いのか?」

基準値のよく分からないその値に困惑する一護。

石田は徐に真顔を浮かべながらその基準となったKの意味を口にする。

「ようするに君は『かつおぶし３６２個』分の戦闘能力を有するということだ。」

「何でかつおぶしなんだよ!!かつお一個に何の戦闘能力もねぇよ!!」

一護はあまりにふざけたその測り方に大いに怒りを見せる中、石田は更に言葉を並べて一護の怒りのボルテージを上げていく。

「普通の一般人がおよそ３６０Kであたりであるところを考えると、君はかつお2個分
普通の人より凄い。」

「たったの2個分かよ!!!俺の死神代行としての１０年に渡る戦いの日々は何だったんだよ!!!」

納得のいかない一護を余所に、今度は銀時が自ら名乗り出てきた。

「おうもやしメガネ。今度俺を測れや。やっぱ今回の章の主役の戦闘能力は格が違うはずだからな。」

銀時がそう言うので石田は早速スマウザーでの計測を試みる。

その結果、導き出された数値は――――――

「銀さんの戦闘能力は６５４Ｋだな。」

「何でだよ!!!何で俺より銀さんの方が高いんだよ!!!」

死神でありながら倍近くもの数値を叩きだした銀時に一護は更に納得がいかなくなるが、そんな一護を銀時は鼻で笑う。

「ふふ。人は見た目によらないということだよ一護君・・・」

すると、そんな銀時の後ろで神楽が豪快なくしゃみをし、その際神楽の強烈な手刀が銀時の頭を直撃する。

「ふぐ!」

「のおお!!」

銀時はその衝撃で髪の毛が何本か抜けてしまい、その結果スマウザ

ーの数値にも変動が見られる。

「あ・・・髪の毛が減った途端１Ｋになったな・・・」

「何でだよ！！」

これには銀時も当然納得のいかない様子だが、そんな銀時に神楽はさも当たり前の様な口調で言う。

「ああ・・・銀ちゃんの毛髪は一本一本が明日への希望ね。希望の数がなくなったから当然戦力も落ちるネ。」

「いや可笑しいだろ！！何で髪抜けただけで戦闘力落ちるんだよ！！つうか１Ｋって最早人間じゃねぇんか俺！ただの１個のかつおぶしじゃねぇか！！」

銀時は自分が人間でなくなったことに絶望すると、意気消沈しその場にしゃがみ込んでしまう。

不憫に思うなのは達を余所に、石田の計測は続き対象はルキアに向けられた。

「次、朽木さんは・・・――――凄い！７９３００（オー）だ！」

「“Ｏ”って何だよ！？単位変わってんだろうが！」

ルキアの数値を聞いて、またもや不可解な単位が出てくると一護は新八のように的確にツッコミを入れる。

石田は一護の指摘を聞き、真顔で答える。

「女の事の場合だと単位が変わる。ちょっとかわいくなる。」

「ああ。“お花７９３０本”みたいな！」

と、ふと思いついた言葉を口にするスバルだったが、却ってきたのは予想外な答えだった。

「“お尻７９３０個”ぶんだ。」

「全然可愛くネェよ！！それ普通にセクハラだろうが！！」

一護がそう言って石田を諫めるや否や、同じように腹を立てたルキアが恥ずかしそうに顔を赤く染めながら石田の胸ぐらをつかむ。

「貴様！！長い付き合いだからと言ってふしだらな！！」

「ち、違うよ朽木さん！！僕は別にそんな屋らしい気持があった訳じゃ・・・！！」

ルキアの迫力に圧倒される石田に、ルキアの怒りのボルテージは収まることを知らない。

「戯け！！私の穢れのない真っ白なイメージをぶち壊すつもりか！！そこに直れ！！！袖白雪で貴様の白い服を血塗れにしてくれる！！！」

ルキアはそう言って刀を取りだそうとするが、場の雰囲気を見てキャロ・ティアナ・恋次の３人掛かりで押さえつける。

「お、落ち着いてくださいよルキアさん！！」

「止しましょうこんなところで！！」

「ルキア！お前もバカやってんじゃねぇよ！！」

「離せ貴様ら！！私の気が収まらん！！」

「あはは・・・えっと・・・この場合どうリアクションとっていいのかな・・・」

苦笑いのなのはであったが、その時神楽が徐に石田がかけていたスマウザーを強引に取って自分の頭に装着すると、なのはの計測を行おうとした。

「仕方ないアルな。じゃあ、その間に私がなのはのお尻の数測ってあげるネ！」

「え！いや、私はその・・・／／／」

恥ずかしがるなのはを余所に、神楽は早速計測を始めた。

すると、その時小型スクリーンに映ってくる上昇を止めようとしないなのはの戦闘力の数値に神楽は驚きを見せた。

「あれ・・・ちょっと待つネ・・・・・・８０００・・・８５００・・・凄いネ！まだ上がってるヨ！」

「何！？おい、ちょっと貸せ！」

なのはの戦闘力が上がり続けているということを耳にすると、今まで意気消沈していた銀時が復活し、神楽からスマウザーを奪い取ると自分の頭に装着しなのはを凝視する。

「おいおいおい・・・何だよこりゃ最早人間の域じゃねぇよこりゃ・・・!!９０００・・・え!１５００００・・・３００００・・・まだ上がる!!!」

銀時は最早上昇を止めることのないなのはの数値に目を疑うばかりだったが、やがてスクリーンに危険表示が発生すると、限界を超えたスマウザーを爆発を起こし大破する。

「ぶっほ!」

「あ・・・壊れちゃった。」

「こりゃ測定不能だな・・・」

一護は挙動不審のなのはの事を見ながら、思ったことを口にする。

「数値が3万を超えるってどういうことだよ・・・!?俺達全員の戦闘能力の比じゃねぇだろ!?」

「3万か・・・やっぱりこいつは『魔王だから』って理由で片付けるのが一番いいかもな」

「「「うんうん。」」」

銀時がそんな風に口にすると、聞いていたクロノ・シグナム・ヴィータの3人も思わず納得の表情を浮かべるが、それを聞いたなのは

は顔を真っ赤にして怒りを露わにする。

「もう！！！！何ですかその理由！！カトゥーンやっつける前に先にみんなをやっつけるよ！！！！！」

なのはは今にも殺傷設定で攻撃を行おうとする様子であったため、慌てた一護や石田が止めにかかる。

「いや！！それは流石にやめとこうぜ！！！！」

「と、兎に角落ち着こうよなのはちゃん！確かに数値が大きいことに越したことはないが、一方の個人のみが大きすぎても全体的なバランスが取れない。仕方ない。ここは全員で百個ずつかつおぶしを持っていこう。気休めだがないよりはマシだろ。」

「いや無い方がいいだろ！何でかつおぶし持ってったら戦闘力上がるんだよ！お前この十年で頭おかしくなったんじゃねぇのか！！」

「私３００個持つネ！みんなの穴は私が埋めるネ！」

と、石田の発言に新八さながらの勢いで突っ込む一護と話を真に受ける神楽。

するとその時、ルキアの足元に一発の銃弾が直撃し、思わずルキアは後ろを振り返った。

「！あれは・・・！」

ルキアが後ろを向くと、近くの建物から拍子越しに狙撃を行った一体の漫画キャラの姿が確認され、茶渡はその姿を見ると危機感を覚

える。

「マズイ、勘付かれた！狙い撃ちにされるぞ。みんな、散るんだ！」

「「「「「はい！」」」」」

全員は急いで適当な人数で散らばると、三方向に分かれて敵の攻撃を攪乱する。

メンバーは以下の通りだ。

中央方面　一護・銀時・なのは・フェイト・鬼太郎・浦太郎・金太郎の計七名。

右側方面　恋次・吉良・ルキア・神楽・近藤・土方・沖田の計七名。

左側方面　シグナム・ヴィータ・スバル・ティアナ・エリオ・キャロ・ギンガ・白鳥・アギト・クロの計十名。

ルキアと神楽は中央方面から攻める一護達に言葉を投げかける。

「私達はこちらから攻める。」

「銀ちゃん達は別ルートから行くネ！」

「よし！神楽！怪我すんじゃねぇぞ！」

「ルキア、恋次。吉良。頼むぜ！」

「任せときな！」

「行こう。」

恋次達はそう言うと、追っ手が来る前に全速力で駆け出していき、スバル達もまた日狩り方面から城の奥へと進んでいく。

「じゃあ、私達はこちらから行きます！」

「うん。スバル、みんな。絶対に死なないでね！私達と必ず合流するんだよ！」

「了解しました。」

「大丈夫です、なのはさん。新八さんを救出したらすぐに戻ってきますので。」

「一瞬で片付けてお前らの援護に行ってやるよ。」

「そう言うことだ。行くぞ！」

クロノの掛け声を聞くと、スバル達は一斉にその場から走り出していった。

残った一護達と石田、茶渡の前に漫画キャラの追手が近づいて来た。

「追ってだ！」

「黒崎、ここは僕達に任せて行け！」

「石田・・・！チャドも！」

「行けって・・・でもそれだと石田さんが・・・！」

フェイトが不安げな様子でそう言うと、石田と茶渡は自信に満ちた表情を浮かべると徐に前へと向き直り、自分の武器を取り出すと次のように言葉を残した。

「ユーノ君の・・・彼の想いを無駄にしないでくれ。」

「む。一護、みんな。あいつの守ろうとしたものを必ず守り抜いてほしい。」

「石田さん・・・茶渡さん・・・」

その言葉を聞くと、なのはも思わず胸が撃たれる。

そして、巨人の右腕と悪魔の左腕を共に解放した茶渡は銀嶺弧雀に力が入る石田の隣に立ち、石田はそんな茶渡にこう言う。

「茶渡君もやってくれるか。損な役回りをさせてしまってすまないな。」

「ふん。構わないさ。一護達が安心して奥へと向かえるのなら、俺はそれを快く引き受ける。」

「チャド・・・く！絶対死ぬんじゃねぇぞ！！」

「お二人とも、御気を付けて！」

「ありがとよ、もやしメガネ！なんかでっかい人！」

一護達は二人に感謝の言葉をかけると、二人の行為を無駄にしないために全速力で中央方面を駆け抜けていく。

そして、迫ってくる追っ手を目の当たりにすると二人は構えを取って迎撃を始める。

「行くよ、茶渡君！」

「む！」

石田は銀嶺弧雀の霊子弓を引くと、狙いを定めて１２００発の矢を一斉に放つ。

「最後の滅却師、石田雨竜。漫画キャラ如きに殺れると思わないことだ。」

石田がそう言ったその横で、茶渡は巨人の右腕から豪快に霊力で出来たパンチを放つ。

「『巨人の右腕』！」

茶渡の攻撃が放たれた瞬間、轟音と共に凄まじい勢いの爆発が発生。

それを耳にしながら鬼太郎は一護に言葉をぶつける。

「いいのかよ、オレンジ頭!?あいつら二人だけで！」

「俺は信じる。あいつらが、簡単にやられるような奴じゃねぇって！」

「今は前進あるのみです。さぁ、参りますぞ！」

「はい！」

なのははそう言うと、フェイトと共に空中を滑空し、他の五人も全速力で城の奥へと突き進んでいく。

銀時は移動の傍ら頭の中に新八の顔を思い浮かべる。

「（新八・・・今行くからな！！）」

◇

〈ナルト・エドＳｉｄｅ〉

その頃、そんな攪乱目的の為に戦力を三等分した彼らの様子を別室のモニターで見ていたテトラカトゥーン、エドワード・エルリックの元にナルトが訪ねてきた。

「・・・何だ。覗き見かよ。あんましいい趣味じゃねぇってばよ、エド。」

「・・・心外だな。お前も奴らの動きが気にかかったから此処へ観に来た口だろ？ナルト。」

ナルトの言葉に些か不機嫌な表情となるエドと、それを不敵な笑みで返すナルト。

「まぁ。そうなんだけどよ・・・こう言うのって普通斎藤みたいな

性悪男がすることじゃねぇのかなって思っただけだってばよ。」

「斎藤は性悪男なんて言葉で片付けられるほど、性質のいい奴じゃねぇだろ。あんな年がら年中煙草煙みたいにぷかぷか吸って吐いて、人様に副流煙まき散らして自分の正義にしか興味がない簾男なんざと。」

「でも俺達の中じゃ何よりも洞察力に長け、そして尚且つ高い戦力を兼ね揃えたテトラカトゥーンの筆頭であることには変わりねぇからな・・・」

「そう言った意味じゃ益々性質が悪いぜ。そんな事より見てみろ。奴ら、三グループに分かれたぞ。」

エドがそう言うと、ナルトはモニター画面を確認しそれぞれに分かれて移動する一護達の様子を見てとった。

「あらら。マジだってばよ。攪乱のつもりだろうとは思うが、人数が減ったらそれこそ勝率落ちるぜあいつら。自分たちの実力分かってるのかよ」

「・・・分かってるからこそなんだろうな・・・しかもこいつら・・・死神代行黒崎一護以下極力戦闘能力が高いこの七人の近くに、斎藤の気配を感じる。しかも一緒に連れてるのは・・・」

「・・・あァ。“対魔導師及び死神封殺型改造漫画キャラ”だってばよ。」

ナルトはそう言うと、思わず顔の皺を深めてしまう。

その理由は何かと言うと、一護達の様子を近くから窺っていた斎藤の言葉にあるのかもしれない。

「ふん・・・・・分散したがここはここで中々に面白そうだな。ちょうどいい。早速こいつの性能を試してみるとするか――――――“対魔導師及び死神封殺型改造漫画キャラ”ムーさん?号の性能をな――――――」

斎藤はそう言うと、自分の背後に佇む一際巨体な異形の漫画キャラを引き連れ、一護達の進行方向に沿って先回りをする。

一体、ムーさん?号って何なの!?

◇

〈一護チームＳｉｄｅ〉

斎藤の画策など知る由もない一護達はと言うと、どうにか漫画キャラ達の追ってから逃れ一先ず見つからないように通路の死角の方で待機していた。

「ふう・・・何とか巻いたみてぇだな。」

「ああ。しかし、これじゃ迂闊に飛び出せねぇぜ。」

「ここは僕に任せてよ。フィッシャーマン、あれで行くよ。」

〈Ｙｅａｈ〉

浦太郎はそう言うと、フィッシャーマンの機能を使い自分の水流魔

法の一つを発動させて、徐に地面から水を送り込んだ。

すると、その水に触れた途端武器を以て巡回していた漫画キャラが次々と意識を失って行った。

浦太郎は技の発動が上手くいったことを確認すると、思わずガッツポーズ。

「よし、作戦成功♪」

「随分と凄い技ですね・・・浦太郎さん・・・！」

「取りあえず、行くぜ。」

鬼太郎は先に進もうとし足を踏み出したその時、金太郎は近くから只ならぬ気配を察知し、思わず言葉を発する。

「！お待ちくだされ！」

「「「「「「！？」」」」」」

金太郎の言葉に耳を傾ける一同だったが、徐に薄暗い通路から伸びてきた一際巨大で長い腕を目の当たりにした一同は思わず目を疑う。

「え！」

そんな一同に向かって腕の持ち主は片言の言葉で尋ねる。

「何んだァ？オマエラ？」

そして、腕を見せたと持った今度は体を前に出すや否や一護達を襲いにかかろうとしてきた。

「うおおおおおおおおおおおおおおおお！！」

一護達は危険がその身に迫ってくると一目散に前へと突き進む。

「ヤベえ！逃げるぞ！！」

全速力で追いかけてくる化物のようなその謎の襲撃者に恐れおののく一護達。

銀時は思わずこう言って驚きを表現する。

「オイ！何なんだよありゃ！？何でうおおおおとか叫んでるんだよ！！」

「私が聞きたいですよそんなの！兎に角今は逃げないと！！」

すると、鬼太郎は烈火を取り出しながら戦うことを提案する。

「おい！どうせならここで闘って叩いておこうぜ！」

だがしかしその提案は呆気なく従業員や他のメンバーに却下される。

「先輩バカ！？こんな狭い場所で闘うなんてどうかしてるよ！」

「万が一建物が崩れたらどうするつもりなのだ！？」

「別にいいだろ崩れるくらいどうってことねぇ！」

そんな無鉄砲な鬼太郎の言動に一護が一喝する。

「アホ！周りをよく見てみろ！窓が一つもねェ！つうことは俺達は今地下かあるいはもっと危険な場所を移動してるかもしれねぇんだぞ！いずれにしたってここで闘うのは得策じゃねぇ。もっと広い場所に出てからでねぇと――――」

と、その時銀時は前方に見えてきた一筋の光に見つける。

「おい！抜けるぞお前ら！」

一護達はその光に向かって一目散に走りつづけ、光の中に身を投じると眼前に広がってきたのはかなり規模の大きい円状の広間だった。

「広間ですね・・・」

「よォし！ここなら文句ねぇだろオイ！」

「ああ。とっと片付けて次行くぞ！」

鬼太郎と銀時はそう言いながら愛刀に手をかける。

その時、金太郎は背後から走ってきたその襲撃者の足音を耳にし緊張の糸を張りつめる。

「！き、来ましたぞ・・・！」

全員は地面を振動させながら徐に顔を出したその漫画キャラの大きさと容姿に一瞬目を疑った。

それは今まで確認した漫画キャラの中でも特に異質で、尚且つさまざまなものがまるで合わさったかのような非常に粗末な形をしたものだったのだ。

「・・・こいつも漫画キャラか・・・？なんか今までの漫画キャラと比べて随分と・・・何つうかＢＬＥＡＣＨで言うところの虚に近いなオイ・・・」

「そうですね。でも、いずれにしたって倒さないならないなら、倒すまでです。」

フェイトはそう言ってバルディッシュの持ち手の力を強くし、なのはもレイジングハートの先端をその漫画キャラに向ける。

「べらべら喋るのはこれぐらいにしようぜ。こうしてる間に新八の身が危ぶまれてんだ。最初から、全力で行くぜ！」

一護はそう言うと、霊圧を一気に上昇させて卍解を発動させようとした。

「卍解、天鎖・・・！！」

と、漆黒のロングコートの様な独特の死覇装と同じく漆黒の斬魄刀が現れ始めたその瞬間、突然一護の卍解は消滅し、元の姿へと戻ってしまった。

「え！？」

「「「「「な・・・！」」」」」

思わず目を疑うなのは達と卍解を発動しようとした一護。

「・・・・・・何・・・・・・・・・・・・だと・・・・？」

「・・・どういうことだよ・・・何でオレンジ頭の卍解が・・・！？」

すると、その時鬼太郎の言葉を聞いたあの男がモニターに現れ返答する。

『ふん。そう言う風に仕込んであるんだよ、こいつにはな』

「な！その声は！」

銀時達が声の主を耳にし、モニター画面に注目すると映ってきたのはテトラカトゥーン筆頭斎藤一だった。

『ようこそ、侵入者共。』

「斎藤一・・・・！」

「まさか・・・これって・・・・！？」

浦太郎が何かに勘付いたかのようにそう言うと、斎藤は煙草を吹かしながら不敵な笑みを浮かべる。

『ご名答。察した通り、今貴様らが対峙しているのは対魔導師及び死神封殺型改造漫画キャラ、通称ムーさん？号だ。』

「対魔導師及び死神封殺型改造漫画キャラ・・・！？」

その聞きなれない言葉を思わず復唱する一護だったが、その直後斎藤は指を鳴らす。

『そら、魔法も消えるぞ。』

斎藤が指を鳴らした直後、なのは達魔導師組の体に異常が起き、四人の顔が一変する。

「「「「！」」」」

「！？なのは！フェイト！」

「おい、どうした亀！熊！」

危機感を覚えた一護達が尋ねると、なのは達は信じられないとばかりの表情で衝撃的な発言をする。

「魔力が・・・結合できない・・・！」

「デバイスの機能も・・・封じられた・・・！」

「「「何！？」」」

『言ったはずだ。ムーさん？号は対魔導師及び死神封殺型改造漫画キャラ。つまり、“魔導師と死神の力の一切を封じる漫画キャラ”だと。』

「・・・魔導師と死神の力の一切を・・・封じる・・・だと・・・・

・・？」

『・・・ああそうだよ。声に出して確認するのは良いぞ。阿呆にしては上出来だ。お前たちのこれまでの戦闘の記録と情報は形状・能力・霊圧と魔力、更にはその組織組成に至るまで全て『完全な状態』でそのムーさ?号の内部にインプットした。その情報に応じて、このムーさんの周りの半径２０キロ圏内にいる間は、お前たちの力の全てはものの見事にまで封じられる。』

「私達の力の完全な情報って・・・？そんなもの、直に攻撃を受けた人にしかわからない筈じゃ・・・一体どうやって・・・」

フェイトが訝しげな表情でそう口にすると、斎藤は相も変わらず不敵な笑みを崩さず言葉を並べる。

『阿呆が。だから貴様らは詰めが甘いというのだ。俺達テトラカトゥーンの配下は皆、倒されて紙になるのと同時に、その戦闘記録を逐一俺達の元に届けてくれる。つまり、お前らの今までの軽はずみな行動が全て仇となったってことだよ。』

「・・・何！」

「・・・カスだな・・・この細め野郎・・・」

銀時がそう言って斎藤を鋭い目つきで睨み付けると、斎藤は表情崩さず言葉を返す。

『何とでも言うがいいさ。所詮お前らにはどの道遅かれ早かれ「死」が待っていた。それがちょっと早まっただけと言う話だろ?さ、お喋りの時間はもうこれぐらいでいいだろ。早くそいつの遊び相手に

なってやれよ。じゃないと、そいつ機嫌を悪くするからな――――』

するとその直後、ムーさん？号は霊力も魔力も封じられた完全なる普通の人間状態の一護達の鼓膜を突き破るほどの大声を上げて怒りを表現する。

「おおおおおおおおおおおおおおおお！！！！！！！！」

思わず耳を押さえ、圧倒され地面に膝をつくなのはとフェイト。

一護はそれに堪えながら刀を構え、ムーさんの懐に飛び込んで行った。

「「「「「一護（殿）（さん）！！」」」」」

「おい、オレンジ頭！馬鹿何やってんだよお前！？」

なのは達の言葉を無視して一護は駆け足でムーさんの懐に飛び込み斬撃を叩き込もうとする。

「俺の目の前で、あいつの見えないところで誰一人・・・絶対に死なせねェ！！！」

「ごおおおおおおおおおおおおおお

一護達が目の当たりにしたのは、斎藤が独自に改造を施した無限に弾丸を連射することが出来る殺傷能力抜群の質量兵器、グレネードランチャーだった。

ムーさんは怒りに我を任せると改造グレネードを一護に向け、一斉に弾丸を発射する。

「おんどらあああ!!!くたばりやがれ!!!!!!!!」

「避けろてめぇら!!」

一護は大声でそう言うと、自らの高く飛んでその直撃を回避するが、改造グレネードの破壊力は凄まじくなのは達魔導師組の四人に飛び火する。

「「きゃあ!!」」

「「のあああああ!」」

一護と鬼太郎は直ぐに満身創痍のなのは達の元へと駆け寄る。

「大丈夫か!?」

「おい!しっかりしろてめぇら!!」

銀時はこの余りに凄まじい破壊力を持つ敵の武器に恐れながらも自分の大切な仲間を傷つけたことに怒りを露わにする。

「てめぇエエエエエエエエエエエエエ、よくもおおおおお!!

！！！！！！」

銀時は木刀を振り上げて飛び上がるとムーさんに向けて攻撃を仕掛ける。

「銀時殿！」

「駄目です！銀さん！！」

「ほおおおおおおおお！！！！」

銀時の怒りの一太刀がムーさんに振り落とされようとした直後、ムーさんは不敵な笑みを浮かべて左腕を突き出す。

「甘いゼエ！！！！！！！！！」

すると、左手の指先が変化するとそこから砲門が出現し、銀時はそれを見た途端背筋が凍った。

「！？」

「死ネ！！！！！」

ムーさんはその砲門から同じく改造されたガトリング砲を発射し、銀時は皮一枚でその直撃を回避すると、そのまま地面に叩きつけれる。

「銀さん！！」

一護達は銀時の元に駆け寄ると、銀時は先ほどの攻撃を左足に受け

てしまい出血が目立っていた。
そして、銀時は険しい顔を作りながら先ほどの攻撃の正体を見極める。
「ち！グレネードの次はガトリング砲・・・か」
「ああ。グレネードは威力と射程は大砲に劣るが、連射性能が高い。おまけに、対俺達ように特化されたものだ。ガトリング砲にしたって下手に懐に攻め込んだ途端ドカンだぜ。」
「どうする？あんな相手にどう戦うよ、一護さんよ？」
「くそ。こういう時、ユーノがいてくれたら心強いんだがな・・・ない者頼りにしても意味がねぇし、何よりあいつばっかに頼っちゃいけねぇ。」
一護はそう言うと、徐に斬月の持ち手に力を入れムーさんと向き合いながら口にする。
「俺達の力で、こいつをぶっ倒す！」
「それしか手はねぇみてぇだな。なら仕方ねぇ。こういう時は・・・・」
銀時はそう言うと、負傷した左足の怪我もなんのそのとばかりに一護と共に自分たちの身長も体重も遥かに上回る巨躯の化け物に向かって突進。
「『特攻』あるのみじゃあ！！！」

「ほおおおおお！！！！」

「一護さん！！銀さん！！」

「あの馬鹿どもが！あれじゃ奴の弾幕に飛び込んでいくだけだろうが！亀！熊！俺達も行くぞ！」

「オッケイ！僕らは左側から攻める！先輩は右側を任せるよ！！」

「行きますぞ！」

スクライア商店メンバーは二手に分かれると、直進していった一護達のサポートに回るために左右から攻めにかかり、それを見ていたなのはとフェイトは声を上げる。

「鬼太郎さん！！浦太郎さん！！金太郎さん！！」

「そんな・・・！無茶だよ！？魔法も霊力も使えないのにこんな・・・！」

そう言いながら、なのは達は勇ましい姿でかつてないほどの強敵に刀と魔法の使えないデバイスだけで挑んでいく五人の男の光景を見た。

そして、フェイトは暫くしてからなのはにこう言って来た。

「なのは。私達は本当に“魔法”が無いと何もできないんだね・・・・」

「うん。魔法の力でしか戦う術を知らない・・・・・・だからいざって時に戦えない・・・力になれない・・・／／／」

悔しさがにじみ出す管理局のエースオブエースともてはやされるなのは。

「だけどそれを言うなら銀さん達だって同じな筈・・・・・・なのにそれでもあの人たちはあの化物に果敢に向かって行った。」

「もし、ユーノ君が同じ目に遭っていたら・・・・・・ユーノ君はこの絶望的な状況でも、逃げたりするかな？」

なのはがそう言うと、フェイトは徐に首を横に振る。

そして、なのはもフェイトと同様の結論に達すると二人は顔を見合わせ決意の籠った表情を浮かべる。

「私達も行こう、なのは。たとえ魔法が使えなくたって、これでも人並みの戦闘訓練は積んで来ている。何もできない訳じゃない。」

「そうだね。魔法が使えなくても、何とかなる。魔法なしの運動は正直苦手だけど、毎日みんなと一緒に鍛えて来てる！」

「行こう、なのは」

「うん、フェイトちゃん！」

魔法が使えない状況でも逃げずに戦うことを選んだなのはとフェイトは自分の愛機を落とさないようにしっかり握りしめると徐に飛ぶのではなく地面を駆け出して行った。

そう・・・自分の足で。

敵に向かって走り出したなのははは心の中でユーノの事を思いながら固い決意をした。

「（この戦い・・・新八君を助け出す為にも、ユーノ君の想いの為にも絶対に負けられない。だから何が何でも絶対勝つ！）」

◇

〈機動六課ロングアーチＳｉｄｅ〉

その頃、カトゥーンキャッスル内部で争いが激化する中で、部隊長八神はやてを始めとする残りのメンツの方も本局第１級査察班との争いを繰り広げていた。

「貴様ら！！！！こんなことしてただで済むと思ってるのか！！一体何の権利があってこんな仕打ちをする！！！！我々を解放しろ！！！おい！！！聞こえないのか！！！我々を解放し・・・！！」

不意を突かれ部下と共に縛道で固く体を拘束された代表イージス・トゥーンが怒号をまき散らしながらはやて達にそう言うと、夜一はそんなイージスと残りの部下たちすべてを一か所にまとめると別室に閉じ込め頑丈に鍵を閉めた。

「これで一先ずは大人しくなるじゃろ。やれやれ・・・これだから上の立場の人間は嫌になるのう。」

「ありがとうございます。しかしホンマにええんでしょうか？」

若干のためらいが残るはやてであったが、夜一は当然と様な顔でこう言った。

「この非常時において査察などと言うこじ付けで気に食わぬ儂らを動かさず、黙って世界の崩壊を見させるような“うつけ共”の言葉にいつまでも耳を貸す必要など無い。現に、一護や銀時も・・・それになのは達も耳を貸さなかったじゃろ？」

「大事なのは心のありようです。心の命じるままに、行動すればそれでいいんスよ。」

「心の・・・ありよう・・・」

思わずその言葉を反復するはやて。

そんなはやてを見ていたコンを抱いた織姫は徐に近づきこう言った。

「私達はいつだってそうだったはずですよ。はやてさん、自分の本当の気持ちを裏切ろうとはしないで下さい。」

「そうだぜ。あんまし組織組織って気にしてたら、大事なもんを見失っちまうぜ！」

「織姫さん・・・コンくん・・・はい・・・！ホンマに、そうですね。よし、ほんなら今からカトゥーンキャッスル内部の詳細を調べようか。やるでリィン！」

「はいです！！」

「浦原さん、協力お願いできますか？」

「勿論。承りました」

はやて達は早速、今自分たちに出来ることをする為早速カトゥーンキャッスル内部の詳細なデータ解析を始めるのであった。

その傍ら、織姫は夫である一護や仲間たちの事を気にかける。

「あなた・・・朽木さん・・・なのはさん・・・」

◇

〈一護チームＳｉｄｅ〉

その頃、そんな織姫の心配の対象である一護たちはと言うと、魔力も霊力も封じられた状況で敵の火力に圧されながらも必死で抵抗していた。

「燃えてねぇけど燃えやがれ！烈火！！！」

「風切月牙！！！」

一護と鬼太郎は霊圧の籠っていない文字通りただの刀となった斬月と烈火のそれぞれの必殺技を発動させる。

実際に炎も霊圧による斬撃も飛ばせないが、物理的な攻撃力な備わっているため、顔面に直撃を受けたムーさんは痛みを感じる。

「のっは！！」

すると、その直後二人の後ろから銀時が飛び出し木刀を振り上げる。

「銀さん月牙天衝！！」

「がっは！！」

木刀の強烈な一太刀を受け、思わず後ろへとひっくり返るムーさん。

その隙に、なのは・フェイト・浦太郎・金太郎の四人が連続攻撃に移る。

「「はあああああああ！！」」

「ソニックスピア！」

「ダイナミックギロチン！」

四人の連続攻撃がものの見事にムーさんに直撃。

ムーさんは連続攻撃の後、身体に無数の打ち身を作ると重い体を起こして自分を甚振る一護達への怒りが頂点に達した。

「く・・・！！てめぇら・・・！！よくも・・・ヨクモ！！！！！！！！」

「「「「「「「「「う！！」」」」」」」」」

猛烈な気迫がこもったムーさんの怒号を聞くと、一護達は思わず身構えてしまう。

「俺ヲ相手に・・・！！アリンコみたいなテメェらが倒せると思ってるのか！？このカトゥーンキャッスル中の漫画キャラを敵に回してまだ刃向う気か！！！！」

すると、そんなムーさんの問いに対して銀時は木刀を肩に担ぎながら次のように言う。

「漫画キャラ中？笑わせんな。てめぇらみたいな薄汚ねぇ豚足の一匹や二匹、怖くもなんともねぇんだよ。ただの道に転がる犬の糞となんも変わらねぇんだよ。」

「な、何ダト！！！！！！！！！！」

罵倒する銀時に更に怒りのボルテージが上昇するムーさん。

すると銀時の言葉に刺激を受けた一護、なのは、フェイト、鬼太郎はそれぞれこう言う。

「ああ。俺達にとっての大事なもん――――――あいつと交わした一つの約束を守るためなら、どんなに絶望的な状況だろうがチートな敵だろうが関係ねぇ！勝たなきゃならねぇなら勝つだけだ！」

「私達の大切なものを。大切な人を――」

「全部――――――」

「取り返す。」

四人がそう言うと、銀時が締めにこう言いくくる。

「潰せるものなら潰してみろ。何人たりとも、俺達の歩みを止めることは出来やしねぇよ。」

そんな彼らの瞳に籠った確かな覚悟をその目に焼き付けると、対峙しているムーさんもモニター画面で様子を窺っていた斎藤も思わず言葉を詰まらせる。

すると、斎藤は暫くしてから心の中でこう思った。

「（ふん・・・こいつら・・・今までとは眼つきがまるで違うぜ。成程・・・事ここに及んで言葉は無粋って訳か。）」

斎藤はそのような結論に達すると、徐にモニター画面に現れ一護達に向かって言葉を吐いた。

『フン。もう何を言っても無駄と言うのなら、話は簡単だ。お前たちの昂ぶる理由が守ることにあるのなら、俺達はその譲れない大切なものを全て捻りつぶすさ。』

「あなたがそれを言うつもりなの？人様から大切なものを奪ったあなた達漫画キャラが。」

そう言うなのはの言葉に籠った斎藤への強烈な敵意。

ユーノと言う自分にとっての大切なものを精神的に追い込み、挙句再起不能の状態にまで追い詰めた漫画キャラに。

『今更謝るつもりは毛頭ない。俺達も――――――大切な譲れないものの為にこっちについてるものでな。他人の大切なものを奪って

でも、壊してでも、俺は“悪・即・斬”の元に戦うまで。尤も、今お前たちが戦ってるのはこいつだがな。なかなかに面白くなってきた。そろそろ本気でやらせてやるか。』

すると、斎藤は隠しスイッチを取出しそれを起動させると、ムーさんはそれに伴い急激に力を増大させ轟く唸り声を上げる。

「おおおお

「「「「おお（然様）！」」」」

「ふん。来い！！」

「行くぜ！てめぇらあああああ！！！」

銀時が促すと、一護達はムーさんに向かって全力で向かって行くのであった。

この勝負、どちらの方に勝利は傾くのであろうか！？

一度した約束は必ず守ろう（後書き）

ク「なぁ、知ってるか？『ユーノ・スクライア外伝　パトリオット篇』で使われた第７２話のあの絵・・・沢山キャラが出てて僕だけ書くのがメンドクさくなって後ろ向きなんだと。酷いよな――――！！そんな僕の前に一人の男が現れた――――」

ユ「殺しちゃうぞ♪」

ＢＯＰユーノ君

３話

顔が腫れあがり全身ボロボロの身体となったクロノは病院のベッドで横になっていた。

ク「ちっ・・・銀魂高校の奴らめ・・・」

ユ「まぁゆっくり怪我治しなよ。他の事は気にしないで。」

ク「おおい！このすっとこどっこい！お前まさか一人でお礼参りに行くつもりじゃ・・・！んなことは許さないぜ！これは僕のケジメだ！お前には関係のない・・・！」

ユ「また来るよ♪」

ユーノはそう言うとそのまま病室を出ていく。

ク「あ！おい、待てよ！ふざけんなよ！おい、待て！」

呼び止めるクロノだったが、結局ユーノはそのまま居なくなっていった。

ク「ち・・・馬鹿野郎が・・・・・・」

クロノはそう言った後、暫くして甘えた声色でこう口にする。

ク「ママ～～～梨剥いて？」

クロノがそう言うと、付き添いに来ていた母・リンディはリンゴを向きながらふと心の中で呟いた。

リ「（転校させようかしら・・・）」

魔導師図鑑ハイパー！

ロックミュージカルの知らせが入いり、機動六課通信の表紙は男前のポーズをとったクロノであった・・・関係ないのだが・・・

フェ「ロックミュージカル？」

キャ「気になりますね！」

は「いいから早く開けようや！」

そう言って表紙をめくると、ＢＬＥＡＣＨロックミュージカル出演者の顔写真がずらりと並ぶ。

女性陣一同はその顔ぶれに壮観する。

女陣「おおおおお！！！！」

一人一人を見ていくうちに、虜に陥りそうな女性陣。

ス「好感持てますね！」

な「でもユーノ君には勝てないよ♪」

シ「ふむ。なかなかいいキャストではないか。」

ヴィ「ッポ・・・／／／」

男性キャストの一人に顔を染めるヴィータ。

シャ「あ、赤くなってる♪」

ティ「どんな人が好みなんですか？」

ヴィ「ち、ちげーよ！！何でもねぇっってば！！」

と、騒ぎ立てるうちに表紙がちぎれ落ちクロノの顔写真は無造作に踏み倒されていく。

そんな様子を涙を流しながら陰からクロノは窺っていた。

ク「何故だ・・・／／／」

ロックミュージカルブリーチ、詳細はＨＰで！！

次回予告

夢と現と幻に、精神世界のユーノは何を見る。

彼はすべてを失ってしまったのか？

いや、違う。彼には捨てきれないものがある。

ヴィヴィオの懇願が魂に届くとき、奇跡は起こる――――――

ティ「次回『受け継がれる侍魂』」

受け継がれる侍魂

これまでのユーノ・スクライア外伝――――――

カトゥーンキャッスルへと潜入した機動六課前線一同。

三手に分かれて城の奥へと目指す中、一護達は斎藤一が仕掛けた対魔導師及び死神漫画キャラ、ムーさん?号と対峙。

霊力と魔力の全てを封じられ、最悪な方向に向かおうとしていていた。

その間にも、ユーノは目を覚まさずにいた――――――ユーノ、早く目を覚ますんだ！

〈恋次チームＳｉｄｅ〉

三手に別れ、別々の道を伝って城の奥へと目指すうちの恋次達死神チーム七人は現在、追っ手の漫画キャラを倒しながら前へと進んでいた。

「つらあああああ！！」

「侘助！！！」

恋次と吉良が蛇尾丸と佗助の攻撃で残りの漫画キャラに深手を負わせた後、土方が

三本の刀を構え、奥義を放つ体制となる。

「三刀流奥義・・・」

両手の刀を風車のように回転させながら、土方は損傷で体を動かすことのままならない漫画キャラに突進して一気に斬りつける。

「三・千・世・界!!」

三千世界が上手い事決め手となると、全ての漫画キャラは粉砕され、跡形もなく何にもなくなると、土方は刀を納める。

「思ったよりこっちの方は手早く済んだな。」

「ああ。主力のテトラカトゥーンでもなければこの程度であろう。」

「問題はテトラカトゥーンが何時出てくるか、ってことでっせ。」

「ああ。斎藤一・・・・・・今度こそはその息の根仕留めてやる・・・!」

「早く急ぐアル!もう時間がないネ!新八の元へ!」

「「「「「「ああ」」」」」」

神楽の言葉に返事をすると恋次達は一目散に駆け出し、新八救出を

果たすべく全身あるのみであった。

◇

〈シグナムチームＳｉｄｅ〉

一方で、同じようにシグナムやフォワード五名、白鳥とクロノで構成された十名のチームもまた次々と道を遮る様に出現する漫画キャラ達と壮絶な戦いを繰り広げていた。

「レヴァンティン！」

〈Ｅｘｐｌｏｓｉｏｎ〉

『炎熱加速！』

アギトと既にユニゾンを果たしていたシグナムはカートリッジをロードすると、レヴァンティンの炎熱能力を最大にすると、目の前の漫画キャラを二つの火炎の力で以て焼き払う。

「『飛龍一閃！！』」

その傍らで、スバルはマッハキャリバーのＡＣＳシステムを解除する。

「マッハキャリバー、ギアエクセリオン！」

〈ＡＣＳ　Ｓｔａｎｄ　ｂｙ〉

ギアエクセリオンが発動し、マッハキャリバーに青色の翼が生える

と、スバルはカートリッジを多めにロードし、一気にウィングロードを駆け抜けると両手に魔力を圧縮させ、漫画キャラに狙いを定める。

「ディバイン・・・バスター！！」

その瞬間、青色の魔力砲撃が至近距離から放たれ、眼前の漫画キャラは一掃される。

また、ヴィータもギガトンフォルムへとグラーフアイゼンを変形させると、カートリッジを二発ロード、自分の背丈を優に超えた大きさにまで巨大化させると、一気に振り下す。

「ぶち抜け！」

〈Ｇｉｇａｎｔ　ｈｕｍｍｅｒ〉

巨大なハンマーが振り下されると、漫画キャラは押しつぶされ、塵と化して消えていく。

「行くよ、ストラーダ！」

〈Ｔｈｕｎｄｅｒ　Ｒａｇｅ〉

また、エリオもストラーダと共に漫画キャラの殲滅に取り掛かっており、電気に変換した魔力が槍の先端に集約されると、高く飛び上がり地面に向かって電気を流し込む。

「でやあああああああ！」

電気が地面に流され、漫画キャラの元に伝わると漫画キャラはその身におよそ１００万ボルトの電圧をその身に受け、黒焦げとなったのち紙となって消滅する。

その横ではキャロの支援魔法人が展開され、ティアナはクロスミラージュにその恩恵を受ける。

「我が乞うは、閃光の雷。流星の射手の弾丸に、貫通の力を」

〈Ｇｅｔ　ｓｅｔ〉

クロスミラージュがキャロの魔法の受け取りを完了させると、キャロはティアナに攻撃の開始を促す。

「ティアさん！」

「了解！クロスミラージュ、行くわよ！」

〈Ｌｏａｄ　ｃａｒｔｒｉｄｇｅ〉

カートリッジを一発ロードすると、ティアナは銃口からオレンジ色に輝く自分の魔力弾を生成し、目の前の敵に狙いを定めると一気に引き金を引く。

「ダイレクトバレット・・・シュート！！」

二つの魔法の力が合わさった魔力弾は着弾と同時に大爆発を伴い、その衝撃によって他の漫画キャラも余波を受け次々と倒されていく。

そして、白鳥とクロノの方もまた互いに背中を預け合いながら残り

の漫画キャラを一掃しようとしていた。

「我が刃の前に平伏せ！」

「デュランダル、凍てつく牙！」

〈Ｂｌｉｚｚａｒｄ　Ｓｔｉｎｇｅｒ〉

白鳥の琴線斬の音色が変化し鋭い斬撃となった琴線斬・裂音（さきね）とクロノが独自に作り出したスティンガーブレイドにデュランダルの氷結能力を付与したブリザードスティンガーが飛び交い、数秒と間もおかずして敵はその攻撃をその身に受け切り刻まれて消滅した。

最後に、締めを括るのは新八救出に最も命を懸けているギンガであった。

「ナックルバンカー！！」

ギンガは全ての想いと力を左腕に凝縮させた必殺の拳を最後の漫画キャラに直撃させ、直撃を受けると漫画キャラは爆発を伴って消滅。

こうして、全ての漫画キャラが一掃され十人は思わず安どのため息を漏らす。

「ふう。この辺りのはこれで全部叩いたな。」

「ああ。このまま志村の元まで急ごう。」

「そうだな。」

と、全員が移動を開始しようとした直後、徐に頭上に現れたモニター画面に一つの映像が映し出された。

「!何だ、あれは!?」

「!?」

シグナム達と同様に恋次達の目にも同じものが映っており、一同がモニターの中を凝視するとそこに映っていたのは満身創痍になりながらムーさん?号と対峙している一護や銀時、なのは達の姿であった。

全員はその光景を目に焼き付けると、思わず目を見開き驚いてしまう。

「あれは・・・!」

「なのはさん!」

「一護!」

「銀ちゃん!」

「何だあの化物は・・・あれも漫画キャラだというのか!?」

「色んな漫画から適当に集めて固めたって感じにも見えるぞ・・・!」

全員がその映像に目を奪われる中、実は機動六課にも同じ映像が斎藤一によって意図的に流されており、はやてや織姫達大人は圧倒的

な強さのムーさんの力に目を疑い、ヴィヴィオは傷つき倒れているなのは達の姿に涙を浮かべる。

「なのはママ！みんな！！」

「何て大きさ・・・何て無茶苦茶な姿と強さなんでしょう！？」

「こんなんまるでインチキや！どうするつもりなん！？」

「「――――――」」

狼狽し焦燥するはやて達の隣で、浦原と夜一は眉間に皺をよせその映像を凝視する。

◇

〈一護チームＳｉｄｅ〉

一方、注目の的となっている一護達の方はと言うと、圧倒的な攻撃力と通常の攻撃ではびくともしない固い防御性能を兼ね揃えたムーさん？号と熾烈を極めた争いを繰り広げているが、実際のところ一護達はこれまで相手に決定打を与えられずいた。

「のおおおおおおおおおおッ！！！」

「てやぁ！！」

銀時と鬼太郎が同時に刀を振りかぶってムーさんに攻撃を仕掛けようとするも、攻撃はいとも簡単に読まれてしまいムーさんの返り討ちにあう。

「遅いわ！！！！！」

「「ぐっは！」」

平手打ちを食らい、防ぐこともできず後ろへと飛ばされた二人。

ムーさんは二人にグレネードを向けると、砲門から砲弾を連射する。

「喰らえ！！」

二人が攻撃を直撃しようとしたその時、咄嗟にフェイトと浦太郎が飛び上がって銀時と鬼太郎の二人を抱えてどうにか直撃を防いだ。

「大丈夫ですか！？」

「ああ。助かったぜ」

「先輩、しっかりしてよ。」

「分かってるよ！次行くぞ、次！」

鬼太郎がそう言うと、今度は同じく満身創痍の一護が前に飛び出し斬月片手にムーさんに向けて突っ込んだ。

「食らいやがれ！！」

一護は発射された連弾をすべて己の反射神経を研ぎ澄ましながらギリギリのところで回避していき、攻撃のすきを窺う。

「（く！間一髪で全て直撃を回避しやがる。この制約された条件の中で何て敏捷性だ・・・だがしかし・・・・・・）」

ムーさんはそう頭の中で考えながら、動きが一瞬鈍くなった一護の正面に回り込むとグレネードとガトリングの砲門を突き付け、確実に一護を追い詰める。

「（攻めに回らなければ、確実に連射は避けられなくなる――――――）」

動けなくなり標的となってしまった一護を目の当たりにした銀時達は大声を上げる。

「一護！！！！」

「一護さん！！」

「一護殿、避けるのです！！」

と、誰もが一護の心配をしていたその時、当の一護本人は驚くべき言葉を口にする。

「なのはッ！！」

「「「「「え！」」」」」

「何！？」

一護がそう叫んだその直後、ムーさんの背後に回り込んでその背中を伝って空中へと飛んだなのはが魔力も何も宿っていないレイジン

グハートの尖った先端部分をムーさんの右肩部分目掛けて突き刺そうとしてきた。

「はあああああ！！！」

なのはは渾身の想いと力を込めたその一撃をムーさんの比較的肌の薄いその部分に突き刺し、一瞬の動きを奪う。

管理局の魔導師の中でもエースオブエースと呼ばれる華麗で優秀に闘うことですっかり知れ渡っている彼女がこんな大胆かつ荒っぽい戦い方をしたことが他にあったであろうか？

「ぐ・・・！！」

「くっ！」

なのはが必死になってムーさんの動きを押さえているその間に、攻撃する機会を伺っていた一護が高く飛び上がり、霊圧を飛ばすことは出来ないが物理的破壊力ならこの七人の中でもトップ級のものである月牙八式兵法を発動。

「月牙八式兵法八式、一刀月牙！！！！」

一撃必殺の威力を秘めた一刀月牙がムーさんの頭を割るように振り落とされ、ムーさんは強烈な痛みに思わず声を上げる。

「ぐあああああ！！！」

なのはは咄嗟にレイジングハートの先端を抜いて、地面に着地。

銀時達は二人の連係攻撃を見て確信にも似た勝利を一瞬覚える。

「よし！こいつでどうだ！」

だが、そんな銀時達の予想とは裏腹にムーさんは徐に顔を上げると綺麗に入ったはずの頭部からはまるで出血などは見受けられずに、平然と笑みを浮かべていた。

「は。」

「――――って、全然効いてねェッ！」

鬼太郎は思わず仰天し目を疑った。

すると、その時銀時がムーさんの背後から大声を上げて挑発する。

「こっちだ豚足野郎！」

「何を！！！」

ムーさんは銀時の罵声を聞いて怒り狂った表情を浮かべると、体中のありとあらゆる武器を同時に発動させ、一斉に銀時を襲撃する。

銀時はその攻撃を皮一枚のとこで躱しながら目で合図を出した一護と共に左右から回り込み、二人は懐に潜り込むとムーさんの両脇目掛けて刀を振り上げる。

「「のらあああああ！！！」」

ムーさんは人間同様脇下に張り巡らされた神経に直接働きかける二

人の攻撃を受けると、顔色を一変させ声を上げて悶え苦しむ。

「グ・・・ガァ！！！！！！！！！！！！！」

その光景を目の当たりにしていたなのは達は目を見開き驚愕する。

「効・・・効いた！！」

「凄い・・・！」

銀時は体勢を立て直すと、再び一護と共にムーさんに向かって行く。

「行くぜ、一護！」

「おう、銀さん！」

二人は即席ではあるがまるで長年の付き合いであるかのような抜群のコンビネーションを発揮させ、容赦なくムーさんに攻撃を仕掛ける中、鬼太郎は今まで攻撃を受けてもびくともしなかったムーさんが二人のあの攻撃で悶え苦しみだしたのかを尋ねた。

「おい熊、どういうことだよ！？」

「分からぬのか。脇下は人体急所の一つ。神経が複雑に張り巡らされたあのような場所への一撃は倒すことは出来ずとも、少なくとも呼吸がままならなくなる。」

金太郎がそう説明した後、浦太郎も補足をする。

「それに、いくら連射可能な武器を操れると言えど、所詮砲門は一

つ・・・左右同時に攻撃は決して出来ない。一旦懐深くまで飛び込めば相手が大きい分、却って攻めやすくなる！」

「二人はそこまで考えて、この攻撃を行ったんだ。」

なのはが即席でそこまでの事を考えて攻撃を行った一護と銀時のコンビネーションに驚かされるばかりであった。

「「うおおおおお！！！」」

二人の攻撃を様子を窺いながら、フェイトは更にこう呟く。

「一護さんは、右と左の『右』を・・・・・・グレネードのある方を迷う事無く選んで行った・・・そして、銀さんはそんな一護さんの行動を読んで目で合図をだし、懐に飛び込んだ直後に二人で脇下を狙った。」

そう言い終わった後、金太郎と鬼太郎は何かに気づいたかのようにこう言う。

「危険を自ら引き受けるのは・・・『無謀』ではなく『勇気』！」

「そして勝機が見えても危険を恐れるのは『慎重』じゃなくて只の『臆病』！いつかの店長が口にしてたっけな、これ！」

すると、二人の攻撃を受け続けそれなりにダメージが蓄積したムーさんが我を失くして怒りの感情を爆発させる。

「ぐあああああああああ！！」

「「「「「「く！！」」」」」」」

鼓膜を突き破るほどの叫びを声を聞き、思わず体を硬直させたなのは達だが、直ぐに自分たちも二人の援護の為に行動に移る。

「みんな！！」

「うん。一旦散ろう！」

「地の利を活かして、一気に突き抜ければ――――――」

五人がそう思い立ちながら先の一護と銀時と一緒にムーさんの四方を覆い囲むと、文字通りお縄を頂戴することに成功する。

「「「「「（背後は取った！）」」」」」

背後を取り、武器を構えて立ち尽くす五人の勇姿を見て、銀時は木刀片手に鼻で笑う。

「は。多少カッコ悪いが、その意気はよしってな。」

「よし！いくぞ！！」

と、一護が一斉攻撃の合図を出した直後、ムーさんの身体から無数の砲門が出現し、それを見た瞬間一護達の顔色が真っ白になる。

「「「「「「「！」」」」」」」

「侍が・・・侍が・・・侍が舐めた真似を！！！！！！！！！！！！！」

怒りに身を任せ、体中のエネルギーを全て砲撃に転換させたムーさんは何処からでもお構いなく一護達に向かって攻撃を行う。

「！避けろ！！！！」

「くっ！！！」

七人は急いでその場から離れようとしたが、直後一斉にムーさんの全ての砲門から強力な砲撃が発射され、一護達はその容赦のない砲撃をその身に受けると爆風と同時に吹き飛ばれる。

「みんなまとめて死に曝せ！！！！！！！！！！！！！」

「「がああああッ！！！」」

「「「「「ぐあああッ！！！！！！！！」」」」」

この凄まじい攻撃の映像を目の当たりにしていたフォワード達や恋次達、そして機動六課のはやて達は目を疑い大切な人達の名を叫ぶ。

「「「「「「「「「「なのは（ちゃん）（さん）！！フェイト（ちゃん）（さん）（テスタロッサ）！！！」」」」」」」」」」

「「「「「「「「「「あなた（一護）（黒崎サン）！！！」」」」」」」」」」

「「「「「銀ちゃん（万事屋）（旦那）！！！」」」」」

「ママ！！！！！！！！！！！！！」

モニター画面が爆炎で見えなくなってしまうと、ヴィヴィオは力なく床に膝を落として絶望に満ちた表情となって涙を流す。

「（なのはママが・・・みんな死んじゃう・・・・・・・・・）」

◇

〈ムーさんＳｉｄｅ〉

怒りに我を任せ、形振り構わず砲撃を撃った結果、辺りは荒れ果てた原っぱのように跡形もなくなくなった。

ムーさんはそんなあたりの光景を目の当たりにすると、狂気に満ちた表情を浮かべる。

「グ・・・フフフフ。コレデ・・・邪魔者全て消エタ・・・」

だがその時、崩れた建物の瓦礫の下から物音が聞こえ、瓦礫が退かれるとその下から出て来たのは一護であった。

「・・・う・・・」

顔中血塗れとなりながら地面に転がった斬月に手をかける一護。

「く・・・くそが・・・・・・」

一護が斬月を杖代わりにして視界がはっきりしない中必死で立ち上がろうとしていると、それに促されるように地面に無造作に倒れていた銀時、なのは達も意識を取り戻し立ち上がろうとしていた。

「・・・一護・・・さん・・・み・・・んな・・・」

「く・・・こいつは・・・効いたぜ・・・」

顔をゆがめ、体中の痛みに立ち上がりたくてもなかなか立ち上がることの出来ないなのは達。

そんな擦り切れるような彼らの声を聞くと、赤い瞳を宿したムーさんが徐に辺りを見渡し爆炎で見えていない七人を探しにかかる。

「まだ声が聞こえる・・・何処に行った・・・隠れても無駄だ・・・」

金太郎は思わず恐らく一番血を浴び、全身ボロボロであるはずの一護と銀時の名を叫ぶ。

「一護殿――――――ッ!!!銀時殿――――――ッ!!!」

するとその時、二人は爆炎の中から同時に出てくると、血塗れの顔でありながら確かな瞳を宿して全員に言う。

「「大丈夫だ!俺達はまだ死んでネェェッ!!」

「「は!」」

「「「おお!」」」

なのは達は二人の無事とは言い難いが兎に角息のある二人の姿に驚きながら安どの表情を浮かべ、ムーさんはあの攻撃で仕留められな

かったことに非常に悔しがっていた。

「くううう！！！！！（あの砲撃の中、間一髪のところを避けるとは・・・侮りがたし・・・侮りがたし！！！）」

怒りのボルテージを上げ、全身から湯気を発散させるムーさんと対峙しながら、ふらふらの体で一護は銀時の怪我の具合を聞く。

「イテテ・・・銀さん、怪我ねぇか？」

「おいおい・・・これ見てわからねぇ訳じゃねぇだろ？つうか、おめぇも俺と同じ様なもんだろ・・・」

「まぁな。だが、流石にさっきのは一瞬焦ったぜ。万が一あんたやなのは達にもしものことが遭ったら、俺はあいつに会わせる顔がねェ。」

「そうだな。俺もお前にもしものことが遭ったら、ユーノに会わせる顔がねェしな。」

そう言うと、銀時は後ろを振り返り全身ボロボロとなりながら辛うじて意識を保つなのは達五人に声をかける。

「おめぇら、大丈夫か！」

「は、はい！何とか・・・」

「まだ立てるか？」

一護がそう言うと、フェイトは苦笑いを浮かべながら肯定の言葉を

言う。

「これくらい・・・大丈夫です！」

「へ！俺達誰だと思ってる？ユーノ・スクライアを守護する最強の三人だぜ！」

「僕らの力の底なんか、まだまだ見せた憶えないって。」

「行けますぞ。」

二人は彼らのその言葉を聞くと、顔を見合わせ安どの笑みを浮かべる。

「よし・・・そんなら安心だぜ。早いとここいつをぶっ倒して、前に進まなきゃならねぇ。その為に、俺達は最後の一平まで戦い抜く！」

そう言うと、一護は銀時と共にムーさん目掛けて全速力で突進する。

「「てあああああああああああ！！」」

「白夜叉！！！黒崎一護！！！！！何処までも俺様に刃向うか！！！！！！」

ムーさんが犯行の意志を見せてきた二人の態度に怒り狂い、武装された右腕を振り上げ二人を迎え撃とうとした直後、彼の右腕になのは達五人が必死に捕まり動きを封じてきた。

「！？」

「「このおおおお！！！！」」

「「「させるか！！！！」」」

「離せ！！！！！！この！！！！離しやがれ！！！！」

なのは達を振り払おうと激しく腕を動かすムーさんだが、なのは達も意地と譲れぬものがあるため何が何でも動くことはなかった。

「撃たせるか！」

「絶対撃たせない！」

「然様！撃たせはせぬ！」

「僕らが撃たせるか！」

「撃たせて・・・たまるかあ！！」

だがそう言った直後、ムーさんの怒りのエネルギーは最高潮にまで達し、そのエネルギーを以てしてなのは達五人を振り払った。

「邪魔スルナア！！」

「「「「「ぐあああああ！！！」」」」」

一護と銀時は咄嗟にその場に立ち止り、攻撃を中断してなのは達の元へと急ぐ。

「ホオオオオオオオオオオオ！！！！！！！！！」

怒り狂い我を忘れただ只管に唸り声を上げるムーさん。

すると、そんなムーさんの態度を見て銀時が鋭い瞳を宿して徐に近づいていくと、身体をふら付かせながら言葉を発してきた。

「・・・そんなに撃ちたきゃ俺を撃てばいい。」

「！」

ムーさんが目線を合わせると、眼前に立っていたのは確かな覚悟の籠った何時もの怠惰なときのものとは全く異なる坂田銀時だった。

「ハッ・・・てめぇなんぞに撃てるものなら俺の心臓にその鉛色の弾丸を撃ち込んで来い！てめぇ如きでどうにかなるほど、俺の魂は小さかねぇんだよ・・・この距離なら互い外しようが無ェ！勝負だ豚足野郎！！」

「ヌカセ！！！！！！！！！！！！！！！」

銀時の言葉に頭の欠陥が一つ切れたムーさんはグレネードの砲門を銀時に突きつける。

一護達は思わずその光景に目を見開く。

「「「「「「「銀（さん）（時）（殿）！！！！」」」」」」」

果たして、銀時はどうなってしまう！？

◇

〈ヴィヴィオＳｉｄｅ〉

その頃、未だ絶望的な状況に顔色を歪めるはやて達を傍ら、ヴィヴィオは床に膝をついたまま留めなく零れ落ちる涙を流し続けていた。

「（ママ達が・・・死んじゃう・・・なのはママ・・・なのはママ・・・・・・・・・）」

幼き日、聖王の器としてスカリエッティに利用され、操れた自分を命懸けで助けてくれた最愛の母親、なのはを始めフェイトを始めとする自分に優しくしてくれる大切な仲間が傷ついていく姿に堪えられなくなるヴィヴィオ。

「（誰か・・・誰か助けて。ママ達を助けて・・・誰か――――・・・・）」

そんな時、ヴィヴィオの脳裏にこの状況を打破し、ただ一人絶望を希望へと帰ることが出来る一人の男の姿が浮かんできた。

「！」

そう――その男こそ、自分にとっての最愛の父親であり誰からも慕われ、誰よりも心優しく強き魂を兼ね揃えた今は再起不能と化している翡翠の魔導死神ユーノ・スクライアであった。

今でもはっきりと思い出せるこれまで幾度となく見てきた優しく微笑みかけてくる父親の姿に、ヴィヴィオはとうとう賭け事のように彼に縋る以外に方法はないと思い、居ても経ってもいられずその場

から走り出した。

「（ユーノパパ・・・なのはママの一番大切で、私が大好きな世界で一番の優しいユーノパパ・・・）」

大粒の涙を頬に伝わせながらヴィヴィオは一目散にユーノの部屋へと目指す。

「（なのはママを助けて・・・ユーノパパ！！！）」

ヴィヴィオが部屋を飛び出して行くと、その行動に疑問を抱いた織姫が声を漏らす。

「ヴィヴィオちゃん？」

「はて、あの方向は――――――」

「まさか、ユーノくんの部屋――――――」

はやて達はヴィヴィオの行動を確認すると、思わず顔を見合わせる。

その間に、ヴィヴィオはただ只管にユーノの元へと急いだ。

「（・・・ユーノパパ！！！）」

◇

〈カトゥーンＳｉｄｅ〉

さて、一護達の危機的状況を事実のモニターで窺っていたカトゥー

ンは現在、斎藤と共に酒を酌み交わしながら談笑をしていた。

「で。どうだい、彼らは――――――」

カトゥーンはそう言いながら、斎藤の御猪口に酒を酌む。

酒を酌んだ後、斎藤は目を閉じながら何時もの様な不機嫌そうな態度で返事をする。

「ふん。目に見えた結末など、あまり見ていて面白いものでもない。興が醒めだよ」

「そうかな。これはこれでなかなかに面白い見世物じゃないか。」

カトゥーンはそう言いつつも、再びモニターに目を向け銀時とムーさんの光景を一瞥する。

斎藤は酒を一飲みすると、更に言葉を並べる。

「どの道あいつらに勝ち目などないさ。人数の差もそうだが、何より俺達テトラカトゥーンの前に為す術など持ち合わせていない。奴らの主力戦力を削げば、勝機は失われる。」

「そう上手くいくかな?」

「ま、奴ら以外に主力となりうる戦力があれば話は別だが、そんな奴などここにはもういない。白夜叉も、死神代行も、そして白き魔王もみんなここでお陀仏だよ。決して届くことなくあいつらは手を伸ばしたまま大切なものを奪われる。ここに来る事無くな――――――」

すると、そんな斎藤の言葉を聞いた直後不敵な笑みを浮かべたカトゥーンは意外な言葉を口にする。

「いや・・・彼らはここにやってくるよ。もう一人の男ともに・・・」

「ユーノ・スクライアか？あの男は再起不能のはずだったがな――――」

「彼は立ち上がるよ。何故なら彼には守るべきものがあるからね。それに彼は白夜叉と同じ目をしていた。」

「ふん。番犬の鎖など遠の昔に切られた奴と同じだと？」

「それは違うよ、斎藤。ユーノ・スクライアも白夜叉も最初から鎖などに繋がれてなんかいないよ。」

「？」

カトゥーンの不可思議な言葉に一瞬手を止める斎藤。

すると、カトゥーンは間を置いてからこう言う。

「あれが他人の鎖に繋がれる忠犬のそれに見えたかい？君がそんな事を云うとは正直思っていなかったが、あの二匹はある意味壬生の狼よりも強固で孤高だよ。」

「ほう・・・してそれはどういったことでだ？」

「二人の男を縛り付けるものは同じ・・・たった一人の男と交わしたたった一つの約束・・・己が定めた鉄の誓い――――――――“侠(おとこ)の鎖”。彼らは同じ鎖に繋がれた獣なのだよ。だが――――――――“一人は何かを失い、それでも何かを抱えてのた打ち回りながらも一人の男を守ろうとしている”。“もう一人は何かを失い、己の存在意義さえ失いながらも他人の為に戦う。手が届く限りの距離ならどんなものだろうと手を伸ばし守ろうとしている”。端は同じであったはずなのに、その方向性は全く違う。果てさて、何とも哀れなことかな。」

カトゥーンがそのように口にした後、斎藤は徐に腰を上げると愛刀を携え部屋の外へと向かって歩き出す。

「何処へ行くんだい？」

「念のためだ。俺もそろそろ準備に入るとするさ。俺にも、葬らなければならない奴がいる。」

斎藤はそう言うと、同じ真選組でありながら決して相容れることのない狼、土方冬獅郎の事を思い浮かべがらその抹殺の為に動き始める。

カトゥーンは斎藤が居なくなった後、最後にこう呟いた。

「ふふふ。見せてもらうよ。君の貫かんとする“悪・即・斬”の正義を――――――」

◇

〈前線メンバーＳｉｄｅ〉

さてさて、傷つき既に気力も体力も限界に達していた一護やなのは達の様子を気にかけながら城の奥へと進んでいたスバル達であったが、敵を葬るごとにその映像の方へと振り返り彼らの安否を気遣った。

「なのはさん・・・」

「一護・・・・・・」

◇

〈一護チームＳｉｄｅ〉

そして、当の一護達七人の方はと言うと、自分の武器を杖代わりにしながら何とかその場に立ち上がることは出来たが、先ほどのムーさんの攻撃を受けたなのは達のダメージ蓄積は既に限界値を超えており、息をすることもままならないところまで追い詰められていた。

「「「「「「ハァ、ハァ、ハァ、ハァ」」」」」」

「ハァ、ハァ、ハァ、ハァ。銀さん・・・」

フェイトはそう言いながら、ムーさんと向かい合う何も言葉を発しない銀時の後姿を気に懸ける。

「グウウウウ・・・・・！！」

「――――――――――」

鋭いにらみを利かせるムーさんと同じく鋭い表情の白夜叉坂田銀時。
そんな二人の様子を見ながら、浦太郎や金太郎は徐に呟く。

「勝負って・・・・・・」

「確かに、ああ近くては射程距離が合わずグレネードは使えぬ上、互い一撃を入れられる距離だが・・・如何せんその巨躯と力の差が有り過ぎる・・・」

「（勝機なんて・・・あるのかよ?銀さん・・・・・・！）」

一護はそんなことを思いながら銀時の事を気に懸ける。
そんな六人の心配を恐らくようく理解した上で銀時は木刀片手にムーさんと対峙し、頭の中で攻撃の機会を伺っていた。

「（狙うは一点。勝機は一つだ!!だがしくれば――――――）」

思わず最悪の展開を考えてしまう銀時だが、直ぐにそんな考えを吹き飛ばすかのように首を大きく横に振る。

そして、頭の中にこの世界に来てからずっと自分やその仲間のことを命懸けで守ってきた親友であるユーノの事を思い浮かべる。

「（怯むんじゃねぇ!今は前だけを見据えろ!!瞳を閉じれば浮かんできやがる。俺とは違うあの暖かくて、優しいあいつの背中が・・・その背中の暖かさにここにいる誰もが救われてきた。俺だって同じだ。だったら今度は俺がそいつの背中を守る番じゃねぇか!新八も・・・ユーノも・・・必ず守ってみせる!その為の道は前にしか・

・・・・前にしか拓かれねぇんだよ!!）」

銀時は覚悟を決めると、木刀を両手でしっかりと握りしめムーさんに向かって勝負を仕掛ける。

「行くぞ!!」

「がああああっ!!」

ムーさんは唸り声を上げながらグレネードの砲門から弾丸を発射すると見せかけ、大きく振り上げて銀時を叩き潰そうとした。

銀時は一瞬で来た大きな隙を窺うと、懐ぎりぎりまで飛び込みそのまま振り落とされる距離にまで潜り込む。

「銀さん!!

「止めろバカ!!!!」

銀時の不用意な行動を見ていた一護や鬼太郎が思わず声を上げる中、銀時は両手の手の甲を交差させて高らかにこう言う。

「ほおおおお!!!!万事屋坂田銀時!!!!てめぇのその小さい目ん玉の中に、焼きつけやがれ!!!!!!!!!!」

「!あれは・・・手の甲で白刃取り!?」

「無茶だ!無謀すぎる!」

「銀さん!!!!」

と、六人が声を上げてそう言った直後、ムーさんの右腕が銀時の頭上に振り下され、銀時はその一振りを後頭部と背中に強く受けると多量の血が噴水のように吹き出す。

「「「「「「！」」」」」」

一護達はその光景を目の当たりにすると、顔色が真っ青になる。

ムーさんも思わず不敵な笑みを浮かべたが、直後銀時が顔を上げて強い魂を宿したその目でムーさんを威嚇する。

「！」

「お・・・おおおお

指一本動かすことは出来ないですよ♪〉

「ガ・・・・・・」

ユーノの言葉通り、ムーさんはその衝撃により意識を失いかけるが、怒りのパワーが勝ったことにより銀時の体を押し倒して抑えつけて来た。

「白夜叉！！！！！！！！！！！！！」

「「「「「「ああ！！」」」」」」

思わず声を上げる一護達。

坂田銀時、ここで危うしか！！！！！！

◇

〈ヴィヴィオＳｉｄｅ〉

銀時が窮地に追い詰められている中、ヴィヴィオは現在ユーノが眠りについている部屋の扉の前まで来ていた。

「は、は、は、は、は」

息を切らし、込み上げてくる様々な想いを一度胸の中に収めた後、徐にドアの向こうにいるユーノの元に行こうとした直後、それを遮ったのは浦原の掌だった。

「いけませんよ。」

「！」

ヴィヴィオが周りを見渡すと、立っていたのは浦原や夜一、織姫にはやてと言った大人の四人だった。

夜一は困惑した様子で息を漏らし、こう言う。

「なのは達の事が気にかかるのは分かる。じゃが、今のユーノに話しかけたところであやつには聞こえん。」

「ヴィヴィオ。分かってくれへんか？ユーノくんにこれ以上何かをお願いするのは、もう止めた方がええ。勝手な事ばかり言って申し訳ないけど、今はなのはちゃん達を信じるしかないんよ。」

はやての言葉を聞き、一瞬立ち止まってしまうヴィヴィオだが、それでもヴィヴィオは諦めきれないでいた。

「（ユーノパパ・・・ユーノパパ・・・！）」

すると、ヴィヴィオははやて達の忠告を無視して部屋の扉を開いて強引に中へと入る。

「！ヴィヴィオ！駄目やって言ってるのかわからんの！？」

「ヴィヴィオ、駄目ですよ！ヴィヴィオ！！」

はやてとリィンが呼び止めるも、ヴィヴィオは耳を貸さずに全身を包帯で巻かれ身動き一つしない痛々しい自分の父親の前に立ちつくし、涙を床に零す。

「ユーノ・・・パパ・・・」

すると、そんなヴィヴィオの元にぬいぐるみ姿のコンが近寄り声を荒げて言う。

「いい加減にしろよ！お前だって分かってんだろう！今のこいつはほぼ死人みたいなもんなんだよ！！死人に幾ら話しかけたとこで意味なんてねぇ！！ここまでボロボロになっちまったこいつに話しかけてもどうしようもねぇ――――――」

「違うよ！ユーノパパはそんな人じゃない！私の知ってるユーノパパはいつも優しくて強い人なんだよ！！」

コンの言葉に我慢できずに言葉を荒げるヴィヴィオ。

すると、そんなヴィヴィオを抑えつけて来たのは苦い顔を浮かべた夜一だった。

「きゃあ！」

「よ、夜一さん・・・！」

一瞬夜一の行動に驚く織姫達だったが、ヴィヴィオは必死に抵抗して駄々をこねる。

「嫌だ！！離してください！ユーノパパに話をさせてください！」

と、その時。

夜一のもとに近づき、浦原は肩に手を置いてきた。

「喜助・・・」

「浦原・・・さん・・・」

思わずそう言葉を漏らす夜一とヴィヴィオ。

浦原は帽子を深々と被りながら諦めにも似た深いため息をついて言う。

「やれやれ・・・これはアタシらが幾ら言っても聞いてはもらえないようですね・・・」

浦原はそう言うと、目の下に映る横たわるユーノの姿を凝視する。

◇

〈ユーノＳｉｄｅ〉

――手が届くのに伸ばさなかった時が死ぬほど後悔する　僕はそれでもう後悔するのは嫌なんだ――

ここからは暗黒の精神世界の中で全身を鎖に繋がれ折れた逆刃刀を持つユーノが頭の中で一体何を見ているのかをダイジェストにまとめたものである。

なのはとの出逢い

〈（えっと・・・昨夜は巻き込んじゃって、助けてもらって申し訳

なかったけど・・・この後、僕の魔力が戻るまでの間ほんの少し休ませてもらいたいだけなんだ。それまで・・・）〉

〈（戻ったら、どうするの？）〉

〈（また一人でジュエルシードを探しに出るよ。）〉

〈（私、学校と塾と時間は無理だけどそれ以外の時間なら手伝えるから。）〉

〈（だけど、昨日みたいに危ないこともあるんだよ！？）〉

〈（放っとけないよ。ユーノ君、独りぼっちで助けてくれる人、いないんでしょ？独りぼっちは寂しいもん。私にもお手伝いさせて。“困ってる人がいて、助けてあげられる力が自分にあるなら・・・その時は迷っちゃいけない”って、これウチのお父さんの教え。私、頑張るから！）〉

〈（うん・・・ありがとう）〉

ジュエルシード探索

〈（なのは、行って。）〉

〈（ユーノ君！？）〉

〈（僕がゲートを開くから、行ってあの子を）〉

〈（でもユーノ君。私があの子と、フェイトちゃんと話しをしたいのは・・・ユーノ君とは・・・）〉

〈（関係ないかもしれない。だけど僕は・・・なのはが困ってるなら、力になりたい。なのはが僕にそうしてくれたように。）〉

――――――・・・

〈防御は僕がやる。なのはは、封印に集中して！〉

〈うん。いつも通りだよね？〉

〈？〉

〈ユーノ君、いつも私と一緒にいてくれて・・・守っててくれたよね？〉

〈だから戦えるんだよ。背中がいつも、あったかいから！〉

闇の書事件

〈（闇の書の完成後に、管理者が目覚めてる・・・これなら！）なのは！分かりやすく伝えるよ！〉

〈！〉

〈（今から言うことをなのはが出来れば、はやてちゃんもフェイトも外に出られる！）〉

〈うん！〉

〈どんな方法でもいい。目の前の子を魔力ダメージでぶっ飛ばして

！全力全開！手加減なしで！〉

〈！さっすがユーノ君！！分っかりやすい！！〉

なのは撃墜事故

〈わあああああああああ！！！！！怖かった！！！！！！私本当はすっごく怖かった！！！！！！！！！痛くて痛くて！！！！死んじゃうかと思ったよ！！！！！！！もう、みんなやユーノ君に遭えなくなると思ったら凄く怖かった！！！！！！！〉

〈なのはなら絶対に大丈夫だから。きっと元通りに治るよ。今はまだその時期じゃないってだけで、その足も魔法も必ず良くなる。だから、自分を信じて・・・僕や周りの人達を信じて一緒に頑張ろう。〉

黒崎一護との出逢い

〈困ったときはお互い様だろ！何か事情はよく分かんねぇけど、お前にもお前なりに何か守りたいもんがあるんだろう。そう言う事なら俺なんかで良ければいくらでも力を貸すぜ。色々教えてやるからよ、しっかりついて来いよな！〉

〈一護さん・・・はい。よろしくお願いします！〉

・・・一――

〈だけど僕の所為で、一護さんや織姫さんに迷惑が・・・――――！〉

〈馬鹿野郎！！一人で何もかんも背負い込んでじゃねぇよ！てめぇ

のその気持ちも・・・全部俺達に受け止めさせろよ!〉

〈!一護・・・・・・さん・・・・・・・!〉

〈お前のその気持ちも何もかも、全部俺達にぶつけてこい。俺はお前のその気持ちを真正面で受け止める。だから・・・・・・一人で苦しむんじゃねぇよ――――――〉

魔導虚事件

〈私はあれからずっと怖くて怖くて仕方なかった・・・!!大切な人が急に居なくなって・・・初めてその重さに気付かされた・・・!!自分の手の届かない遠いところへいってしまった時の辛さも・・・寂しさもそこで思い知った!寂しい想いが嫌いでそんな想いは誰にもさせたくなかったのに・・・結局最後は自分にしっぺ返しが帰ってきた!〉

〈・・・!〉

〈だから・・・もう居なくなったりしないで!もう・・・・・・私を一人にしないで!!!〉

門矢士との約束

〈今度は何時会えることやらな・・・まぁでも、気が向いたら助けに来てやるからよ!〉

金丸彦斎との戦い

〈後悔しているかい?以前、俺とやり合った時何故殺しておかなか

ったと。剣の折れたアンタはもう魔導師でも死神でも何でもない。惰弱な戦士は、この世界から消えるがいい・・・〉

ラピュタ捜索

〈科学が平和に発達か・・・・・・そもそも科学って、何なんでしょうね？〉

〈パズーの言う通りよ！！あなたにラピュタは応えない！どんなに可愛そうなロボットを操っても、どんなに強力な力を使っても・・・一度土から離れたあなたにラピュタは絶対に応えてくれないわ！！〉

〈ぶっ・・・くっ・・・何故・・・貴様が・・・私と拮抗する力を・・・！？己を捨てることも出来ん連中に・・・己の居場所ほしさに仲間も切れん連中に・・・愛だのそんな妄言を吐く連中に・・・私は・・・全てを捨ててきた・・・！！ラピュタのために・・・ラピュタの科学のために・・・！！なのに、何故・・・何故なんだ！！〉

サムライ・ドラとの出逢い

〈よっしゃあ！！！！行きますよ、ユーノさん！！〉

ゼムナス・フォーラムとの戦い

〈・・・俺の負けだ・・・――――俺は狂気に躍らされ本当の自分を失っていた・・・完敗だ・・・ゼムナス・フォーラムは結界魔導師ユーノ・スクライアに・・・完全に敗北した・・・〉

〈今度は志同じく、再び心を通い合わせることが出来る。お前の隣には・・・僕が立ってあげるよ。〉

〈・・・・・ありがとう・・・・・・・・重ね重ね・・・・・・・すまぬことをした・・・・・・・〉

大和屋雲鶴との対決

〈私と手を組まないか、ユーノ・スクライア。闇の者がいつまでも闇の中で埋もれるのは実に勿体無い。外の世界で、私と一緒に光を浴びてみようぞ！〉

パトリオットとの決戦

〈流石は“天才”と謳われる魔導死神だ。こんな出会いでなければ、もっと違う形で仲良くしたかったですよ。〉

〈あ～あ・・・バカの揃い組みだな。いいぜ・・・全員俺が食ってやる。〉

キバのユーノとの出逢い

〈（一緒に戦おう・・・もう一人の僕。）〉

父親の尊厳を懸けた譲れない私闘

〈うるせー！ジュンイチは・・・――ずっと苦しんでいたんだ！！あんたらはいじめられたことがねぇから、そんな他人事のような顔してられんだ！！ふざけんじゃねぇぞ！！〉

不動遊星とファイブディーズとの出逢い

〈わかった！ユーノ！俺はお前の言葉を信じる！〉

〈たとえこの体が・・・この魂が闇に染まろうとも、絶対に護り抜く！！〉

〈ユーノ・・・本当にありがとう。お前のお蔭で、この世界は救われた。俺達チーム５Ｄ，ｓから心より感謝の意を表する。〉

銀時達との出逢い

〈う～～ん・・・まぁ、俺らはお前には色々と世話になってるし、借りもあるしな・・・俺達で良かったらいつでも協力するぜ。〉

〈あはは。慕ってるって言い方はちょっと照れくさいですが、やっぱり僕はあの人のことが大好きなんですよ。〉

〈独りよがりも大概にするネ。今は、私達がお前を守るネ！〉

〈水臭いことはなしだぜ、ユーノ先生。困ったときは好いやつだろうが悪い奴だろうが手差し伸べる。それが人間ってもんだ。〉

〈派手な喧嘩が楽しめるならこの際関係ねぇ。俺達も参加させてもらう。〉

〈野郎の背後をじっと見ていると、本当に面影が――――――近藤さんや黒崎一護のそれとそっくりですさぁ。〉

そして、弥彦との出逢い

〈・・・ゆ・・・ユーノ・・・俺・・・もっと早く・・・お前と・・・知り合い・・・たかった・・・ぜ――――・・・〉

走馬灯のように思い返し、結局のところ最後の最後で大切なものを守れなかった――そんな事を考えるとユーノは途方もない脱力感に襲われ、何もかもどうでもよくなってしまう。

「（もういい・・・もう疲れ――――――・・・）」

と、徐に瞳を閉じて地獄の鎖にこのまま魂を明け渡そうとした――――直後。

「ユーノパパ！！」

突如として、光さえ届かないこの暗黒の世界に甲高いヴィヴィオの声が反響し、思わずユーノは目を開けてしまう。

「（・・・・・・この声は――――――）」

◇

〈ヴィヴィオＳｉｄｅ〉

ユーノが精神世界の中でヴィヴィオの声を確かに聴いたことなど知る由もないヴィヴィオだったが、ヴィヴィオは涙を浮かべながら目の前のユーノに向かって次のように語り出す。

「・・・この間の戦いで襲って来たテトラカトゥーンの斎藤一の策略で、今なのはママ達が、魔法も霊力も打ち消すとても強くて凶悪な漫画キャラとたった七人で戦っているの・・・辛うじて銀さんや一護さんが中心になって剣で対抗してる・・・ママ達も持ち堪えてるけど、それでも分が悪すぎる・・・武力の差も、体躯の差も、そ

して強さの差も有り過ぎる・・・」

ヴィヴィオはそう言うと、目の前のモニター画面を表示し、血塗れとなってムーさんに落ち潰されている銀時や満身創痍のなのは達の映像を映し出し、すすり泣きながらユーノの名を口にする。

「ユーノ・・・パパ・・・お願い。ママ達を助けて下さい・・・・・・・」

「（――――――――――）」

一瞬精神世界のユーノはその言葉に耳を傾ける。

一方の現実世界では、必死の思いでユーノに懇願するヴィヴィオの姿がはやて達大人には痛々しく見えた。

「・・・ヴィヴィオ・・・」

「・・・・・・スクライアさん・・・・・・」

コンは場の雰囲気を読んでヴィヴィオに近づくと、徐に部屋からの退出を促す。

「さぁ。気が済んだのならさっさと部屋を出る――」

「・・・お願い・・・だから・・・もう一度・・・もう一度立ち上がって・・・」

と、その直後ヴィヴィオは床に膝をついて土下座をし何度も何度もユーノに同じ言葉を連呼する。

「お願いします・・・お願いします・・・お願いします・・・お願い・・・」

「「「「！」」」」

「なのはママ達を・・・助けて・・・」

「（――――――）」

ここまでのことをしてまで、ユーノに必死に呼びかけるヴィヴィオの姿をはやて達は見たことが無かった。

いや、この言い方には語弊があった。

確かにヴィヴィオも体も心も以前とは比べ物にならないぐらい強くなりつつあるが、こんなにも自分の弱さを露呈させながらも人に頼る姿勢を見せたのはいつ以来であるだろうか。

きっとそれは、ゆりかご内部で繰り広げたなのはとの戦いの時以来

――――――

浦原は困惑する織姫達を見ると、徐にヴィヴィオに近づき肩に手を置くと頭を下げ続けるヴィヴィオに言葉をかける。

「もういいッスよ、ヴィヴィオさん。」

「浦原さん・・・」

「夜一サン。八神サン。織姫サン。ヴィヴィオさんを外まで連れて

行きましょう。」

「――――そうじゃの」

「・・・はい」

これ以上こんな姿のヴィヴィオを見ていられなくなった織姫達はヴィヴィオの立ち上がらせると、背中に手を回し外の方へと誘導する。

「さ、ヴィヴィオ。行こうか。」

だが、それでもヴィヴィオは最後までユーノに背を向けながらも懇願するのであった。

「お願い・・・パパ・・・」

◇

〈ユーノＳｉｄｅ〉

〈なのはママ達を・・・助けて――――・・・助けて――――・・・助けて――――・・・〉

ヴィヴィオの声が幾度となくユーノの暗く、そして光さえ届かない精神世界のおいて執拗に木霊していく。

木霊するその声はやがて彼の魂の相棒である晩翠の元にもしっかり届き、晩翠は鎖で繋がれ動く気配のない主の元に徐に近づいていく。

「（・・・ユーノ・・・）」

すると、その時動かずただ黙ったまま折れた逆刃刀を握りしめていたユーノの左手が小刻みに震えだし、声が発せられた。

「（・・・・・どうしてだ・・・・・・）」

「（！？）」

晩翠もこの事には大いに驚いており、そんな晩翠の傍らでユーノは更に言葉を並べる。

「（・・・・・・・・・・もう・・・身体も動かない筈なのに・・・もう疲れたはずなのに・・・・・・はず・・・・・・なのに・・・・・）」

小刻みに震えていた手から順に全身へと伝わり、ユーノの身体全てが小刻みに震えだし始める中、晩翠は徐にユーノに向かってこう言う。

「（・・・・・ここは、このユーノ・スクライアという精神世界はな、見ての通り全てが漆黒の闇で包まれた光さえ届かない暗黒の地。言わばブラックホールのようなもの。しかしその黒く重苦しい色とは裏腹に、本当は何よりも純粋にそして最も優しい空間でもある。私も長いことこの世界に住まうが、お前の心が乱れたり悲しいことが起こるとこの世界にも変動は生じる。哀しい時には激しく震え、嬉しい時には優しく弾む。『失くす』だけで全てを投げ出せるとでも思ったのか？最初に言っておくが、何か一つでも『捨て』切れなければ廃人となる意味がない。その『捨て』切れないものを手に、再び立ち上がる必要がある・・・お前は――――――・・・・・・そうなんだ・・・）」

「（まだ・・・見つかってないんだ・・・僕が犯した罪の・・・なのはをこの世界に巻き込み、守りきれなかったことの答えが・・・どうしても見つからないんだ・・・）」

「（そうかな。）」

「（？）」

「（・・・お前の心の弱々しい迷いとは裏腹に、その手に握った刀を強く握りしめて離さない。そうやって、お前の魂は強く鼓動して必死で立ち上がろうとしている・・・・・・・・・・）」

ユーノはそう口にしながら強くその手に大切な友より譲り受けた逆刃刀を握りしめながら、眉間に皺をよせそれを苛立ちに満ちた表情で凝視する。

晩翠はそんなユーノの事を見て、何処か安心したような表情を浮かべると彼に詰め寄り一瞬驚くユーノにしゃがんでからこう言う。

「（大事なものを失って・・・身も心も疲れ果て・・・けれどそれでも決して捨てることが出来ない想いがあるのならば、誰が何と言おうとそれこそがお前の・・・ユーノ・スクライアだけの真実――――）」

「（真実の――――――・・・）」

晩翠の言葉を聞いた直後、ユーノは頭の中に今まで自分が戦っていくうえで決して曲げることのなかった真実の形の表れを一つ一つ思い返してみた。

〈出来るのは一つ。この目に映る人達の幸せを一つ一つ守ることだけだよ・・・・・・〉

〈“人が人を助けていいのは、自分の手が直接届くまでのところ”じゃないかって。〉

〈たとえそれが間違いだったとしても、僕は・・・目の前で苦しんでる人を放っておくなんてことは絶対に出来ない！！〉

その瞬間、ユーノの逆刃刀を握る力が一層強くなる。

晩翠は立ち直り始めているユーノの心に安堵すると、徐に肩に手を当て最後の後押しをする。

「（さて、そろそろ過去（むかし）を振り返るのはもう十分だろう・・・現在（いま）も・・・そして未来（このさき）も・・・変わらずお前を信じ続ける人達が――――お前の帰りを待ってる！！！）」

その言葉を聞くと、ユーノは地獄の鎖を断ち切り、暗く閉ざされていた精神世界から脱し、現実の世界へと舞い戻る。

現実世界に戻ってきたユーノは包帯で覆われていた目もとから一筋の涙を零し、自分のことをいかなる時も支え、尚且つ帰りを待ってくれている大切な仲間を思いながら独り言のようにつぶやく。

「そうだよな・・・・・！なのはも・・・一護さんも・・・みんなも・・・きっと帰りを待っていてくれてるんだろうな・・・／／／／／／！！」

涙が止まらくなるユーノ。

ユーノの暗く閉ざされた心を解き放った晩翠は具象化すると、ユーノの元に近づき徐に枕元に置かれていた折れた逆刃刀を手に取りユーノを見る。

「ユーノ。」

「晩翠・・・僕も・・・お前も・・・このまま終わるなんて、何もできずに、手を伸ばさずに終わるのは嫌だよな・・・！！」

「ああ。」

晩翠は動けないでいるユーノの身体に優しく手を当てると、次のように言う。

「ユーノ。今のお前は地獄の浸食で立ち上がることもままならない状況だ。ならば、その地獄の浸食はお前の代わりにすべて私が引き受ける。そうすれば、お前はもう一度立ち上がって、みんなと一緒に戦うことが出来る。但し、その代償としてお前の霊力と魔力は完全に封じられる。一回の転移魔法だけがこれから先許された最後の力・・・それでも、構わないか？」

「ああ・・・構わないさ。お前がそこまでしてくれるなら、僕はそれで十分だ。晩翠、お前はいつも僕の事護ってくれたんだよな・・・／／／／／／」

「当たり前だ。私は――――――――お前の斬魄刀で、お前の魂そのものだ。」

「ありがとう・・・晩翠／／／／／／」

自らの魂の相棒に感謝してもしきれないぐらいの気持ちを抱きながら止まらない涙を流すユーノ。

晩翠は最後に優しくユーノに微笑みかけるとユーノの身体の中へと入り込む。

そして、ユーノは晩翠から手渡された折れた弥彦の逆刃刀をしっかりと握りしめながら死んでいった弥彦と、その前にこの刀を使い人々を守り続けてきた剣心の事を思い浮かべながら言う。

「弥彦・・・・・少しだけでいい・・・少しの間だけでいいから、お前と・・・剣心の力を僕に貸してくれ！！！」

そう言った直後、ユーノは光に包まれると同時にベッドから姿を消した。

晩翠は魂の中に戻り地獄の呪いを自分の身に受けると、薄れゆく意識の中でこう思った。

「（そうだ。ユーノにとっての真実はなにも『仇討ち』や『復讐』ではない。どんなに叫んでも声は決して届かない。ユーノの心にまでは届かない・・・・・だが、助けを呼ぶ声ならばどんなに小さくても必ず届く・・・それがユーノの真実だから、ユーノはその声に応えるべく必ず立ち上がる。いかなる呪縛をも断ち切って、ユーノは必ず立ち上がる――）」

◇

〈ヴィヴィオSide〉

その頃、ユーノが復活したことをまだ知らないでいるヴィヴィオは織姫達に付き添われながら一人涙を流し続けていた。

「なのは・・・ママ・・・ユーノ・・・パパ・・・／／／」

「ヴィヴィオちゃん・・・・・・！？」

と、悲しみでいっぱいのヴィヴィオの背中をさすり慰めていた織姫だったが、直後全身から感じた身に覚えのある霊圧に目を見開き、はやてや浦原達も思わず体を硬直させた。

「！この霊圧・・・まさか！！」

「ユーノくん・・・か・・・！？」

すると、はやて達の元に動揺した様子のリィンが駆け寄って来た。

「はやてちゃん！大変です！！ユーノさんの部屋から転移魔法の反応が確認されたです！！」

「な、何だって！？」

はやて達は大急ぎでヴィヴィオを連れてユーノの部屋まで直行する。

部屋を開けると、そこには今の今まで動かず死人のようにベッドに横たわっていたユーノはおらず、彼がいつも身に付けていたメガネも服も、そして折れた逆刃刀、その一切が綺麗に無くなっていた。

「ユーノくんが・・・・・・」

「居なくなってる・・・・・・・！」

「それに、あの逆刃刀も無くなって――――――！」

ヴィヴィオはこの事を目で確認すると、ユーノが復活してなのは達の元に向かったということを察し、悲しみの涙から一変嬉しさの涙へと変わり大いに喜ぶ。

「パパ／／／／／／」

ユーノは大切な仲間を守り抜くため、失われかけそうになっている光を救う為、現地へと急いだ。

◇

〈銀時Ｓｉｄｅ〉

さて、ユーノが復活したなどと言いうことなど一切知る由もない銀時達はと言うと、圧倒的な力の前に全員が満身創痍となって立ち上がることもままならない中、銀時は意地と根性だけで体格差のあるムーさんの掌を血塗れになりながら押さえつけていた。

「おおおおおおおおおおおッ！！」

一護達はその銀時の光景を目の当たりにすると、驚きのあまり言葉すら失い、銀時は最後の力を振り絞ってムーさんの掌を退かす。

「おおお！！！」

「銀さん！」

フェイトは血塗れとなっている限界寸前の銀時の元に駆け寄ろうとするが、彼女もまた怪我の程度がひどく動くこともままならずその場に倒れ伏す。

「ぐ！」

「おいフェイト！自分の怪我も考えろ！」

そう一護に言われ顔色を歪めるフェイト。

一護は徐に銀時の方に目を向けると、血塗れになりながらも木刀を手に取り刃を食いしばり立ち上がろうとする銀時を凝視する。

「ハァ！ハァ！ハァ！」

「！（駄目だ・・・・・もうこれ以上は戦える状態じゃない・・・）」

「クソガア！！！！！！！！！！！！！」

ムーさんは怒り狂い銀時に向かって右腕を振り上げ強引に殴りつける。

「がっは！！！」

銀時はムーさんの一撃を受けると、更に出血し後ろに飛ばされる。

「「ああ！」」

思わず目の前の光景に目を見開き危機感を覚えるスクライア商店従業員。

「白夜叉！！！！！！！！」

ムーさんは我を忘れた状態でグレネードの砲門を倒れ伏す銀時に向け、エネルギーをチャージしようとした。

「まさか、あのまま撃つつもりじゃ！？」

「！」

その時、その光景を目の当たりにしていたなのははそれでも屈しず血塗れになりながらも瞳に宿ったものを失わない銀時の姿を確認する。

「ハァ、ハァ、ハァ」

「銀さん！！！もう止めてッ！！」

ユーノの様に傷つき、自分を酷使してまでそれでも仲間を必死で守り抜こうとする銀時の姿勢に見ていられなくなったなのははレイジングハート片手にその場を飛び出し、彼を助けようとした。

「！なのは！！駄目！！」

咄嗟にフェイトがなのはの事を呼び止めようとするも、なのはには一切聞こえずただ只管に走り続ける。

すると、そんななのはの行動に気づいたムーさんは赤く染まった瞳を向けると、なのはの体めがけてゴミを振り払うように叩きつける。

「ぐあああああああああ！！！」

「「「なのは！！」」」

「「「なのは（ちゃん）（殿）！！」」」

なのははムーさんの一撃を受けると、激しく地面に叩きつけられ血塗れとなって倒れる。

そして、どうにかして手から落ちたレイジングハートを取ろうと真っ赤な視界の中、手を伸ばすなのは。

「う・・・！！く・・・！！」

と、その時ムーさんがなのはの元に近づき、なのはの体を鷲掴みにすると自分の目線まで持ち上げ、グレネードをなのはの顔に付きつける。

「コロス・・・コロス！！！！！！！！！！！！」

「！なのは！！！（もういい・・・やめてくれ！こいつは、なのははユーノの一番大事な奴なんだ！管理局にとっても、ユーノにとってもこいつの存在一つでどれだけ救われるか知らない！今、こんなところで死んでいい女じゃねぇ！！誰か、誰でもいい。コイツを止めてくれ。誰か！！）」

一護が切にそう思っているも、事態は覆ることのないように思えた。

「死ねエエエエエエエエエ！！！！！！！！！！！！！」

ムーさんは砲門を動けないなのはに向け、止めの一撃を加えようとする。

モニター画面でその光景を見ていたなのはの教え子達、ヴィヴィオは声を上げる。

「「「「「なのはさん！！！！！」」」」」

「なのはママ！！！！！！！」

なのはは気の遠くなっていく意識の中で、最後にいつも自分に優しく微笑みかけ、時には厳しく諫め、だけど常に背中を守りつづけ支えてもらっていた世界で最も愛した男の顔を思い浮かべる。

「（ユーノ君・・・！）」

そんな時。

事態は急変した――――――

「飛天御剣流、九頭龍閃！！」

それは一瞬の出来事だった。

突然仕掛けられたその技によって、ムーさんは強烈な打撃を受けると掴んでいたなのはを放し、後方へとはじけ飛んだ。

「ヴュアアア

「店長・・・」

一護達がそう呟くと、なのはもまた最初うっすらと見えていたそれが段々とはっきり見えるようになると、改めてその容姿を確認し嬉しさのあまり大粒の涙を流す。

「あ・・・・・・ああ！！ユーノ君／／／／／／／／／／／／／／」

なのはの眼前に立っていたのは、深緑色の羽織と甚平服、更には特徴ある帽子で決め込んだクリーム色の髪をした丸眼鏡の青年。

青年の手には彼の力によって完全修復を遂げた逆刃刀・真打と彼があらかじめ所持していた日本刀「月山」が帯刀されていた。

そして、威風堂々とした眼差しで倒れたムーさんを凝視するユーノを見て、銀時は安堵の表情を浮かべ、全員に向かって声を上げる。

「ああ・・・――――ユーノ・スクライア、復活だ！！！」

＞ｉ２６９６２―７０９＜

受け継がれる侍魂（後書き）

教えて、ユーノ先生！

ユ「どうも、復活しました♪いや～～～本当一時はどうなるかると思ったよ。このコーナーも含めて。と言うわけで無事に復活した記念に、早速コーナー始めるとしましょう♪今日は茶渡さんについてだ♪」

ユ「茶渡さんの力は、浅黒い肌を媒介とした完現術（フルブリング）と呼ばれるもので、その名を『巨人の右腕（ブラソ・デレチャ・デ・ヒガンテ）』。右腕を変化させて霊圧に夜強力な一撃を放つんだ。ちなみに、一護さんの死神化も織姫さんの盾舜六花も完現術なんだよ♪」

茶「何故・・・復活した矢先の紹介が、俺なんだ・・・」

疑問に思う茶渡。

ユ「だって、前々から紹介しようと思っていましたけど、なかなか機会が無かったものですから、いい機会かなって♪」

茶「そう言うものなのか・・・」

ス「にしても、茶渡さんのあのパンチは本当にすごいですよね！あの、迷惑でなかったら私を弟子にしてください！！！」

茶「いや・・・お前にはなのはがいるだろ・・・」

ユ「あはは・・・茶渡さんも大変ですね・・・」

苦笑いを浮かべるユーノと困惑する茶渡であった。

魔導師図鑑ハイパー！

ユーノ・スクライアと高町なのははバッカプルだ。

普段から人前でいちゃつくのは勿論、その程度は段々と酷くなる一方だった。

パトリオット事件が終わり、最後の夏休みの日にユーノはなのはとヴィヴィオを連れて夏祭りに出かけた。

勿論特注の浴衣を身に纏い。

ヴィ「あん♪美味しいねこのたこ焼き♪」

な「はは。ヴィヴィオったらほら、青のりついてる♪」

そう言って口元についた青のりをとってあげるなのはに少々恥ずかしげな表情となるヴィヴィオ。

すると、ユーノはなのはの口元についたクレープのクリームを見・・・

ユ「そう言うなのはもホラ。クリーム、口についてるよ。」

な「あ、本当だ。じゃあユーノ君・・・・・・そっちの方でとって？」

なのははそう言うと目を閉じ、ユーノにあることを要求する。

それを受けたユーノは徐になのはの方に手を当て近づく。

ユ「じゃあ、今取ってあげるね。」

な「うん？」

ユーノはそう言うと人目を憚らずなのはの口元についたクリームをｋｉｓｓと一緒に舐め回し、見ていたものすべては砂を吐いてその場にぶっ倒れる。

ヴィ「こんな二人ですが、みなさんどうかご勘弁してください♪」

次回予告

ユーノ・スクライア復活

絶望を希望に返る守護神。

大切なものを取り戻す為、友との誓いを果たす為、彼は仲間たちと共に――――

逆刃刀を携え直走る！

茶「次回『その時、男は動いた』」

その時、男は動いた

――後日　桃谷鬼太郎提出の報告処理より抜粋――

『その時正直、何が起こったのか一瞬判んなかった。だけど直ぐにそれは判った。閃光の刹那、突風と共に轟音――――――目の前に雷が落ちたかと思ったが、それも違った。一瞬の後、気づくとあの化物は仰向けに倒れ、そして視界の彼方に見慣れた俺達のよく知る翡翠に輝く光が姿を現した。その姿、正に――――――威風堂々！！』

〈一護チームＳｉｄｅ〉

そこに立っていたのは間違いなく俺達の、この次元世界で最強と言われる翡翠の魔導死神ユーノ・スクライアだった。

俺や銀さん、なのは達も唖然としながらその威風堂々と立ち尽くす逆刃刀を手にしたユーノをじっと見つめる中、ユーノは仰向けに倒れたあの化物の方を確かな覚悟の宿った瞳で睨み付ける。

「――――――」

語らずして堂々としたユーノの姿をその目で確認した後、金太郎とフェイトは思わず涙ぐみながら言葉を口にする。

「・・・・・・どうやら・・・本当に店長の様ですな・・・」

「はい・・・／／／間違いなく、ユーノ本人です／／／」

「それにあの刀・・・・・・あれは確か明神弥彦が店長に渡した逆刃刀じゃ・・・！」

「折れた刀をリカバリーさせて、元の形に完全修復したった訳だね。」

すると、恐らく一番ユーノの事を想い、同時に彼の身を一番に案じていた高町なのは当人は呼吸をし、自分の足でしっかりと立ち、尚且つ自分たちのピンチに颯爽と駆けつけてくれたことに嬉しさのあまり涙が止まらなかった。

「ユーノ君・・・ユーノ君／／／よかった・・・本当に・・・よかった・・・／／／」

何度も何度もユーノの名を口にして現実であるかどうかを確認するなのは。

そんな頬を真っ赤に染め、涙を流すなのはを一瞥すると一護と銀時は互いの顔を見合いほくそ笑む。

同じ様に、この様子を城内に映し出されていたモニターで見ていたスバル達フォワードメンバーや隊長陣も大いに驚きながら、ユーノの復活を心から喜んだ。

「ユーノ先生が・・・・・・目を覚ました／／／」

「ユーノ先生・・・」

「ふん。やっぱりそう簡単にくたばる奴じゃなかったか。」

「土方さん。嬉しそうに聞こえますぜ。」

「だ、誰が嬉しいかよ！誰が！！」

総悟にそう言われ、思わず照れ隠しをしようとする土方にルキアが

追い打ちをかける。

「素直ではないな貴様も。」

「う、ウルセーよ！！勘違いすんじゃねぇ！！」

ま、何はともあれ全員が同じ気持ちを抱いたことは言うまでもなかった。

と、その時だった。

ユーノの放った九頭龍閃を受け、仰向けとなって倒れていたムーさんが怒号と共に起き上がる。

「コオオオオオオオオオオオオ！！！！！！！！！！！！！」

「「「うわああ！！」」」

思わず声を上げて驚き返るスクライア商店メンバー。

ムーさんはその場に起き上がると、満身創痍となった身体をまるでものともせずに右手のグレネードに左手を添え、血が走った瞳をユーノに浴びせる。

「ま、まだ立ち上がんのかよ！」

「くそ！しつこい野郎だ！！」

銀時達はあれだけやってもまだ倒れないでいるムーさんの耐久力に恐れを通り越して呆気にとられていた。

「ハァ、ハァ、ハァ・・・・・ユーノ・スクライアァアアア

ユーノを見るなりすぐさま右腕を振り上げ叩き潰そうとしてきた。

「グガアア！！」

「おおお！！！」

ユーノもそんなムーさんの右腕の関節に狙いを定めると、逆刃刀を突き上げて飛天御剣流の技を発動する。

「飛天御剣流、龍昇閃！」

ユーノが龍昇閃を発動すると、ムーさんのグレネードの右腕は吹き飛び、ものの見事に破壊されムーさんは激痛に襲われ喚き声を上げる。

「ぐっあああああああああ！」

「あ！」

「ユーノ！」

自分たちがあれだけやっても破壊することの出来なかったグレネードを容易に破壊するユーノの力に目を疑う一護達だが、ユーノの攻撃は続く。

「ほおおおおおおおお！！！」

ユーノは飛び上がり下りてくる瞬間にムーさんの背後に回り込み、体を捻って強烈な斬撃を叩きこむ。

「飛天御剣流、龍巻閃！」

龍巻閃がムーさんの脇腹に叩きこまれ、更に苦しみ声を上げるムーさん。

「ぐあああ！！やってくれたなあああああ！！」

ムーさんはその直後、左腕を１８０度回転させて背後にいるユーノ目掛けて高速回転にようる攻撃を行う。

一同はそれを見た瞬間、一瞬身の毛が凍った。

「腕が回転しやがった！！！」

「店長！！！」

高速回転する腕によるドリルのような攻撃がヒットすると、ユーノは土煙と共に姿を消してしまう。

「ユーノ君・・・！！」

なのはは目の前で姿を隠し、一瞬やられてしまったのではないかと言う思いから涙を浮かべてしまい、ムーさん本人も手ごたえを感じ不敵な笑みを浮かべる。

「ふん・・・ん！？」

と、その時ムーさんは手に違和感を感じ、煙の中の光景をじっと見ていた銀時は涙目のなのはに言う。

「ばぁか。なに涙目浮かべてんだよ。よく見ろ。」

銀時に言われ、なのはが晴れていく土煙の中の様子を窺うと、目に映ってきたのは意外な光景だった。

「あ！」

「な・・・！！」

なのはやムーさん、フェイト達が目撃したのは高速回転する腕の薄い皮の間に逆刃刀の刃の部分を突き立て、咄嗟に衝撃を最小限のものに抑え込んだユーノの姿だった。

「（な！俺の攻撃を抑え込んだ・・・そんなバカな・・・！！）」

俄かには信じがたい光景に目を見開くムーさん。

そんなムーさんに向かって鋭い瞳を宿したユーノはこう言う。

「血の味も知らない・・・命を奪うことの重さも知らない・・・そんな人形如きにこれ以上、僕の大切な仲間を傷つけさせたたまるか！！！！！」

ユーノはその瞬間、ムーさんと距離を置き、ムーさんの左手目掛けて逆刃刀を縦に一閃。

「『顎割（あざとわり）』！」

すると、途端ムーさんの左手から左脇の薄い皮に至るまで全てが綺麗に切断され、吹き飛んだ左腕の切り口から出血する大量の血を押

さえながらムーさんは激痛に襲われる。

「なあああああ!!!俺の・・・俺の腕が!!!」

「どうだ・・・どういう気分か分かるか?」

「!」

ユーノはそう言いながらムーさんに近づくと、吹き飛んだ左腕に逆刃刀の切っ先を突き刺し、鬼のような形相を浮かべて言う。

「少しは味わえただろ・・・“殺される側の気分”って奴が・・・!!!」

「!!!」

ムーさんはその瞬間、地面に尻もちし、恐怖に怯えながら後ずさりしていく。

ユーノはそんなムーさんの元に一歩一歩近づいていくと、ムーさんは心の中で恐怖のあまりこう叫んだ。

「(何だ・・・こいつ・・・何なんだよ・・・!!止めろ・・・来るな・・・!!来るな来るな来るな来るな来るなあああああああああああ!!!!!!)」

「一度血の味と痛みを味わってみるといい。さすれば自他共々の命の重さ、十二分にかみしめられる。そのデカイ図体に今ここで逆刃の一刀をお見舞いする!」

ユーノはそう言うと、徐に逆刃刀を鞘に納めて左足を軸にして構えを取る。

それを見た瞬間、なのはや銀時達は思わず目を見開く。

「！（剣を納めた・・・・・まさかあいつ！！）」

「飛天御剣流奥義」

「「！！」」

「「「「！！！」」」」

「！！」

その瞬間、彼らの眼ではほとんど視認することの出来ぬ超神速の斬撃が放たれ、ムーさんは体中を引き裂かれながら空中へと高く飛び上がる。

「天翔龍閃」

「グオアアアアアアアアアアアアアアア！！！

と、一度刃についたムーさんの血を拭って元の鞘に納める。

なのは達は一瞬の出来事に頭がついていかず、あまりの衝撃にフェイトは思わず腰が抜けてしまう。

「「「「「「・・・・・・」」」」」」

そして、暫くしてから徐に一護から順に言葉を発する。

「・・・す・・・すげえ・・・」

「あの化物を・・・・・・一瞬で・・・・・・」

「やっぱり、店長は最強だぜ！」

同様に、カトゥーンキャッスル内部で同じ映像を観賞していた悟空を除くテトラカトゥーンはユーノの技の凄さに圧倒される。

「「・・・・・・！！」」

「あれは・・・・・・抜刀斎の――――――」

斎藤は脳裏に浮かんできたかつての宿敵、緋村剣心の奥義を思い出し、同じものをユーノが使用したことに内心かなり驚いていた。

そして、最後にカトゥーンキャッスルの主たるカトゥーンの方はと言うと、不敵な笑みを浮かべてユーノの到着を心から喜んだ。

「ふふふ。やはり来たんだね。二人の侍の魂を引き継ぎ、その手に持った逆刃刀を携えて。翡翠の魔導死神・・・いや、ユーノ・スク

ライア・・・――」

◇

〈なのはＳｉｄｅ〉

なのははこの喜びを今すぐにでも表現したかった。

ユーノが生きているという事だけでもこの上もなく嬉しいことだが、そのユーノが自分たちをここまで追い詰めた厄介の敵を倒してくれたのだから。

なのはは満身創痍な体の痛みなど忘れて、徐に歩み寄ってくるユーノの胸に飛び込んでいった。

「ユーノ君！ユーノ君！！ユーノ君！！！」

なのはが飛び込んでくると、ユーノはそれに応えるかのように優しく受け止め、嬉し涙を流すなのはのことを抱擁する。

「ユーノ君／／／／／／／／よかった／／／／／／／」

「ごめんね、なのは。みんなも心配かけて。」

「いいよ／／／私は・・・私は・・・／／／／」

涙が止まらないでいるなのはと、それを優しく抱擁し背中をさするユーノ。

と、そんな二人と言うよりもユーノの元に同じく満身創痍の一護達

六人が歩み寄ってきた。

「ユーノ・・・」

一護が血塗れの顔でそう言うと、ユーノは申し訳なさそうな表情でクシャナーダと化し、暴走した自分を止めてくれた一護に謝罪の念を込めて言う。

「一護さん。あの時はすみませんでした。自分の不始末も、何もかも終わらせます。」

「・・・たく。こんな時にも律儀な奴だぜ。」

一瞬呆れてしまう一護だったが、それもユーノらしさと分かった上で納得した。

「だけど店長。あの状態からどうやって・・・!?」

「あ、そうだよユーノ君!どうして・・・」

そう・・・彼らが一番に気になっていたのはそこのところだった。

すると、ユーノは少し暗い表情を浮かべながら詳細を話し出す。

「・・・晩翠だよ。」

「え、晩翠さんが?」

「僕の魔力と霊力全てを代償に、晩翠が地獄の呪いを肩代わりしてくれた。」

「！じゃあ、今のお前は――――――」

銀時が驚きに満ちた表情でそう言おうとすると、ユーノは間を置くことなく真実の言葉を並べる。

「はい。当然力を封じられた以上、魔法も霊力の発動も不可能です。」

「そ、そんな・・・！」

訊いていたなのは達は想定外な事実に戸惑いを見せていたが、ユーノはそんな七人に一瞬笑みを浮かべると逆刃刀を取り出しこう言う。

「だけどそれでも、僕にはこいつがある。」

「それは・・・弥彦君の逆刃刀・・・！」

「あいつの・・・弥彦の魂と志は僕が代わりに受け継ぐ。だから、今の僕は翡翠の魔導死神ユーノ・スクライアじゃない。“不殺（ころさず）のユーノ・スクライア”だ！」

「「「「「「「・・・――――」」」」」」」

弥彦の魂と志を受け継ぐと決めたユーノの姿を目の当たりにした瞬間、一瞬なのは達の目に明神弥彦とその隣に立つ緋村剣心の姿が目に映ってきた。

そして、ユーノは徐に刀を所定の場所に戻すと傷だらけのなのは達を見て言う。

「取りあえず、傷・・・――治した方がいいよね。」

「え？いや、でも――――――」

「魔法と霊力が使えなくても、傷の手当ぐらい方法はいくらでもあるさ。」

ユーノはそう言うと、懐から異世界の友人「門矢士」から貰ったライダーカードを一枚取出し、それを空中に投げ捨てるとライダーカードの効果が発動し音声が聞こえた。

〈Ｂａｃｋｕｐｒｉｄｅ　Ｈｅａｌｉｎｇ　Ｐｌｕｓ〉

その瞬間、カードの表面から傷を癒す効果を秘めた特殊なパルスが発生し、それを浴びたなのは達は一瞬のうちにして今まで喰らったダメージが回復し、初めに来た時と同じ状態となった。

怪我が癒え、傷一つない体に驚きを隠せない一護達は目を疑うばかりだった。

「これは・・・」

「傷が治った・・・・・・！」

「ウソみたいだ・・・」

「こんなこともあろうかと、色々と仕込んで来て正解だったかな？」

ユーノがほくそ笑んでそう言うと、なのはは声を上げて喜びを表現

する。

「わああ・・・凄い凄い！」

「ふん。相変わらず用意周到だぜおめぇは。」

「全くだな・・・っておい！何処行く気だよユーノ！？」

と、隙を見せた直後ユーノは七人から離れて背を向けて歩き出した。

「ユーノ君！！」

「ユーノ！」

「一人で――――何処行くつもりだよ？」

銀時が低い声でそう尋ねると、背中越しにユーノは返事をする。

「新八君を・・・――――取り戻しに。」

「店長・・・！」

「またお前はそうやって・・・一人で背負い込むつもりかよ・・・んなことさせるか！俺達も連れてけ！一緒に戦ってやらあ。」

銀時が半分怒りの籠った声でそう言うと、ユーノは一瞬躊躇った表情を浮かべたが直ぐに毅然としたものへと変え、背中を向けたまま歩きだしこう言う。

「勘違いしないで下さい。僕はただ、目の前で苦しんでる人を放っ

ておけないだけ――――――」

と、言いかけたユーノだったが、その時目の前に顔を伏せた状態のなのはが立っており、なのはは顔を伏せたままユーノの胸元に手をかけ、低い声で言う。

「いい加減にしてよ・・・」

「・・・・・」

なのはの気持ちを察したユーノは何も語らずいた。

そして、なのはは声を押し殺した様子でユーノに向かって自分の気持ちをぶつける。

「ユーノ君・・・そんなの間違ってるよ・・・独りで何もかも勝手に背負い込んで勝手に行っちゃって・・・それで救われたって何にも嬉しくないよ／／／新八君を助けられても、ユーノ君がいなくなったら、助かったって何にも嬉しくないよ／／／ユーノ君が・・・居なくなったら・・・生きてたって何にも楽しくないよ!!!／／／」

瞳いっぱいの涙を宿すなのはがぶつけるユーノへの想い。

それを聞くと、ユーノは申し訳なさそうな表情を浮かべながら少々自分を自嘲しながらこう言い返した。

「――――楽しくなんかなくなっていいじゃないか・・・」

「！」

「それでも僕は、みんなには生きてて欲しいんだよ。もう御免なんだよ・・・・・あんな思いをするのは・・・・・・もう誰一人、死なせたくないんだよ・・・・・・」

ユーノはそう言いながら、脳裏に浮かべたのは約束を果たせず自分の身を守って銃弾に倒れ、命を落とした大切な友人の明神弥彦の姿だった。

なのは達はこの時のユーノの顔を見ると、何も言えなくなってしまいどうすることもできずにいると、そんな時我慢の出来なくなった男が一人。

「く！」

一護は込み上げそうな想いを必死に抑えながらユーノの元へと近づき、強引に胸ぐらをつかむ。

「一護！」

「この大馬鹿弟子が！！！！！！！！」

一護は大声を上げると、渾身の想いの籠った自分の右拳をユーノの顔面に叩きつけ、ユーノは勢い余って後方へと飛ばされる。

「一護さん！」

「おい、オレンジ頭！！てめぇなにして・・・！！」

一護の突然の行動に驚きを隠せないでいたなのは達。

一護は顔を伏せたまま何も抵抗しようとしないでいるユーノを見下ろしながら、自分の赤裸々な想いをぶつける。

「お前・・・それでもユーノ・スクライアかよ?何度大切なものを取りこぼそうと、何度守るものを失おうと、もう二度と何かを背負い込むことから逃げない!そう俺達や自分に誓ったんじゃないのかよ!!!!一旦守ると決めたものは絶対に守りとおす!!!!それがユーノ・スクライアじゃないのかよ!!!!!ちょっとくらい、新八が危ない目に遭ったくらいで何だって言うんだよ!!!新八はあれくらいじゃ死なない!!!俺らは死なない!!!!てめぇは死なない!!!!!何故なら、てめぇが俺達を守ってくれるから!!!何故なら、俺らが絶対てめぇを守るから!!!」

「・・・――」

「それが俺たちの絆じゃねぇのかよ?そうやって俺達この機動六課、今まで――――――色んなもの守って来たんじゃねぇのかよ?」

一護の言葉を耳に入れ、何も言い返すことのないユーノ。

すると、そんなユーノの元に近づき徐に殴られた箇所にハンカチを当てて来たのは金太郎だった。

「店長。私達はまだ、何も失ってどおりません。だから、その心まで失くさないでくだされ。」

「金太郎・・・」

「店長。店長はこれまで私達を幾度も守ってくれました。どんな窮

地からも、どんな困難からも。私達はずっとあなたを信じております。」

金太郎がそう言うと、それに便乗してフェイトや鬼太郎、浦太郎が言葉をかける。

「だから今度は、私達を信じてもらえるかな？」

「一緒に守りましょうぜ、店長。」

「新八君の・・・僕達の帰るべき場所を・・・僕達を引き合わせてくれたその大切な絆を――――――」

自分に向けられる暖かい言葉を耳にすると、ユーノは徐に笑みを浮かべ金太郎のハンカチで殴られた箇所を押さえながら立ち上がり、七人に向かって言う。

「ごめんね、みんな。みんなの気持ちも知らないで、いっつも勝手な事ばかり言って傷つけてしまって。分かった――――――約束するよ。“僕らの大切なものは、僕たちみんなの力で守る”。」

「ユーノ。」

「ユーノ君。」

その言葉を聞いたなのは達はこの上もなく心が温かくなると同時に、漸くユーノが自分たちの事を頼ってくれたことに嬉しさを覚えた。

そして、最後にユーノは天井を仰ぎ見ながらこう口にする。

「ふん。ありがとうね、神様。こんな素晴らしい出逢いを齎してくれて。」

それを聞くと、銀時はほくそ笑み木刀が所定の場所にあることを確かめると、表情を真剣なものへと変えて先を目指すことを促す。

「よし。先に進むぜ！」

◇

〈恋次チームＳｉｄｅ〉

さて、ユーノが復活しかなり安心したのか恋次達は心送らず戦いに専念することが出来、目の前に立ち塞がってくる敵をなぎ倒しながら奥へと進み続けていた。

「ユーノが無事に目を覚まして良かったぜ。これで心迷わず戦いに専念出来る！」

「ああ。あの状態から起き上がるとは思ってなかったが、取り敢えずなりよりだ。」

「このまま新八君の所まで急ごう。次元震のこともあるし、時間がない！」

「そうだな。その為にも早いところ、残りの敵戦力も叩いておく必要がありそうだ。」

「やっぱ、そうなってくるとテトラカトゥーンからですかね？」

総悟が近藤の言葉を聞いてそう口にすると、土方の頭の中には真っ先に斎藤一の素顔を浮かぶ。

「（斎藤一――――――――――）」

と、その時恋次は前方から見えてくるあるものを目撃する。

「お？」

「どうした？」

「見ろ。扉だ――――――」

恋次が指を差すと、全員は眼前に見えてきたあからさまに誰かがいるかのような部屋の扉を凝視し、近づいて一度安全かどうかを確かめると恋次は突入を促す。

「ようし。一気に突っ切るぜ！」

だがそう言った矢先、土方は表情を一変させる。

「！待て！」

「土方さん・・・」

「トシ、どうした？」

土方は二人を言葉を聞き流し、徐に扉の前に立つと一滴の汗を額に浮かべてその場に制止する。

訝しげな表情でそれを見ていた恋次やルキア達は声を荒げる。

「おい、ぼさっとすんなよ!何躊躇ってんだよ!訊いてるのかよ、土方!!」

「話聞こえねぇのかゴラ!!マヨネーズ鼻にブッサスアルか!!」

「（・・・・・居る!!）」

「土方!何をしておるのだ!?先へ進むのではなかったのか!?」

すると、土方は背中越しに全員に言う。

「いや・・・下手に開けるな。この中から尋常じゃねぇ殺気を感じる・・・しかも・・・“壬生の狼”の気配が・・・・・・」

「壬生の狼・・・・・って、まさか!!」

恋次がその独特のフレーズを耳にすると、ルキアや吉良と共に驚愕に満ちた表情を浮かべ、同じように近藤と総悟も目を見開く。

「トシ!」

「ああ・・・（この中に居るのはあの男・・・テトラカトゥーン、新撰組三番隊組長・斎藤一!!）」

土方が額に汗を浮かばせ扉の前で立ち尽くしていると、その扉の向こうで煙草を吹かしながら彼らが扉を開けるのを心待ちにする壬生の狼、斎藤一。

「・・・・・・フン」

総悟はしばらくの沈黙の後に、徐に土方に尋ねる。

「・・・どうするんですか、土方さん」

ルキアと神楽は総悟の言葉にも言葉を詰まらせる土方の様子を見ながら、少々焦りを覚え始め心の中でこう思っていた。

「（こうして立ち止まっている間にも、新八やこの世界にどんどん危機が迫っている・・・ここで費やしている時間などはっきり言ってないぞ！）」

「（マヨラー・・・早いところ決めるネ。じゃないと新八が本当にーーーーーー！）」

「土方さん・・・」

吉良もそのことを重々察した上で土方の名前を呼ぶと、土方は徐に言葉を発する。

「――――近藤さん。おめぇら。俺の我儘、聞いてもらっていいか？」

近藤や恋次達は土方が口にしたその言葉を聞き、一様に顔を合わせると暫くしてから返事の言葉を返す。

「・・・ああ。お前の好きなようにするといい。」

「そうっすね。いい加減決着つけて貰わねぇと、後味が悪いぜ。」

「私達は一切手は出さぬぞ。」

「やるからには、絶対勝てよ。」

「当たり前だ。この闘いだけは、死んでも他の奴には譲れねぇし、負けるつもりも毛頭ねぇ。この闘いの扉だけは、俺自らが開けなきゃならねぇんだ。」

土方は覚悟を決めると、一度深呼吸をしてから徐に扉を開く。

扉を開くと、その奥で待っていたのは不敵な笑みを浮かべて煙草を吸い終わったばかりのテトラカトゥーン筆頭にして新撰組三番隊組長斎藤一だった。

「・・・来たな・・・」

土方は斎藤の元まである程度近づいていくと、徐に懐から電子煙草を取出しこう口を切ってきた。

「よう。相も変わらず煙草くせぇなおい。どうだ一本?煙出さねぇのもあるぜ」

「いや、遠慮しておく。俺は断然煙派なんだな。」

「・・・――――」

互いに睨み合い、硬直状態を続ける二人の狼の傍らで恋次と近藤は思わず呼びかける。

「おい、土方。」

「トシ・・・」

すると、土方は恋次達残りの六人に先へ進むことを促す。

「お前らは先に行ってろ。俺も後から必ずそっちに追いつく。」

「しかし――」

不安げな表情を浮かべる吉良。

そんな吉良に土方は背中越しに語る。

「んな顔すんじゃねぇよ阿呆が。俺に余計な気遣いなんてもんはいらねェ。ウザったいだけなんだよ。それに俺は一人の方が本来の実力を発揮できるほうなんだ。とっとと行け。」

「分かった。トシ、俺達はお前を信じるぞ」

「負けたときは、そん時は俺があんたを殺すぜ。」

「銀ちゃんに殺される前に私がボコボコね」

「行こう。」

土方の事を信頼し、この場を任せると恋次達は脇目も振らずに奥へと続く通路へ向けて走り出していった。

尚、斎藤は始めから土方との勝負を望んでいたらしく恋次達を追いかけるなどと言う考えは最初からなかったのであった。

眉間に皺をよせ自分を睨み付ける土方を見て、斎藤は鼻で笑いながら言う。

「フン。土方十四郎。お前も顔に似合わず随分と甘い男の様だな。」

「てめぇこそ、そう言う割にはあんときは随分と甘い真似をしてくれたじゃねぇか」

「？」

「態と急所を外して俺に借りを作り、この機会をずっと伺っていたって口だろうが、んなもん今更関係ねぇ。ここに来た以上やることは一つだ。その為にはあいつらに居てもらうとはっきり言って邪魔なんだよ・・・・・てめぇを殺すにはな。」

土方は不敵な笑みを浮かべながらそう言うと、腰に携帯していた三本の刀のうち、二本を抜き始める。

そんな土方が戦闘態勢に入ろうとしている間にも恋次達は一目散に通路を駆け抜け、奥へと突き進んでいた。

すると、未だ心配の拭えない吉良が近藤に尋ねる。

「近藤さん、本当にいいんですか？土方さん一人斎藤のところに残して。万が一斎藤が勝ったらこっち後がなくなりますよ！」

「大丈夫だ。トシは必ず勝つ！俺はそう信じてる！それよりも今は前に進むぞ！新八君の身が危ない！」

「ああ。そうだな（・・・・・・・・・死ぬんじゃねぇぞ）」

恋次は心の中で土方の身を案じるのであった。

そして、その土方と対戦するお相手の斎藤はと言うと、土方が鞘から抜いた二本の刀を見ながら不敵な笑みを浮かべる土方に同じく不敵な笑みで言葉を返す。

「殺す？この俺を？身の程知らずが」

「どっちだかな。」

斎藤はどこか楽しんでいるかのようなそんな表情を浮かべると、徐に自分の愛刀に手をかけ鞘から抜き出す。

すると、土方は斎藤の方をじっと見ながらこんな事を口にする。

「ひょっとしてお前、これまで俺達が手にかけてきた御仲間、殺ったのを根に持ってる口じゃねぇだろうな。」

「――――・・・」

その言葉を聞いた瞬間、斎藤の眉が僅かにピクリと動き、それを見た土方は更に斎藤に向かって言葉をぶつける。

「刀を交えなくてもてめぇの考えてることなんざ大方見当がつくぜ。俺には分かる。お前の気持ちが『昂って』いるのが。」

「『昂って』いる・・・――――この俺が？」

「隠す必要はねぇだろ。いくら漫画キャラとは言え、あっちの世界では普通の人間だったわけだ。人間である以上、感情の高ぶりは至極当然な事。復讐も正義の一つ。いいじゃねぇかよ。だが、あんまり入れ込み過ぎると冷静で居られなくなるからよ。その辺は忠告しといたぜ。」

すると、土方の話を聞いた直後斎藤は鼻で笑うと不敵な笑みのままこう言う。

「成程な・・・やはりだ・・・お前の『洞察眼』は俺の思考を完全に読み違えている。」

「何？」

「お前の『洞察眼』は確かに俺の心理を読むことは出来たが、その思考までは読むことは出来ていない。かつて俺の新撰組がお前らの真選組がそうあるように、警察とは自国の治安と民衆の生活を守るのがその任務。どんな理由であろうと、一度その職に就いた以上任務の過程で命を落とすのは至極当然の事。それをイチイチ気にしたりすることの方がおかしい。死んだ者が安心してあの世へ行ける様残りの任務を完遂せんとは思うが、復讐のつもりなど毛頭ない。お前の『洞察眼』で見えぬなら教えてやる。この俺が昂ぶるのは唯一つ」

斎藤はそう言いながら、自分の左手に刀を持ち牙突の構えを取って体を身構えると、自分の感情が昂ぶるその理由を明確に口にする。

「悪・即・斬という、俺自身の正義の為だけだ!!」

土方はその言葉を聞くと、思わず嬉しくなって鼻で笑う。

「は。上等。テトラカトゥーン・・・いや、新撰組三番隊組長斎藤一！相手にとって不足無し！その熱い血、浴びさせてもらうぜ！」

「行くぞ！」

斎藤がそう言って牙突の構えを取ると、土方は一度腰の両側に一本ずつ構えた二本の鞘に刀を納め、その状態からの特殊な居合いの構えを取る。

そして、両者はほぼ同時に己の技を発動させぶつかり合って行った。

「二刀流『居合』羅生門（らしょうもん）！！」

「牙突・弐式！！」

両者の本気の技がぶつかり合った瞬間、広大な部屋の中央で土煙が巻き起こり、その技の威力の凄さがうかがえるのであった。

◇

〈ユーノチームＳｉｄｅ〉

土方と斎藤の激闘が始まった丁度その頃、ユーノを入れた一護達八人は漫画キャラの動きを上手い事回避しながら城の奥へと突き進んでいた。

「このまま真っ直ぐだ！」

と、その時銀時は走っていく中でところどころ床下から見えてくる

不気味な雰囲気を醸し出す奇妙な色の空間を見、思わず口を開く。

「おいおい・・・何だよありゃ・・・」

「その穴・・・黒い空間がある場所は気を付けてください。」

「どういう事だよ?」

走りながらなのはがそう言うと、先頭を切って走っていたユーノが銀時に説明する。

「“虚数空間”。あらゆる魔法が一切発動しなくなる空間なんです。飛行魔法もデリートされます。霊子を足場にすることもできません。もしも落ちたら、重力の底まで落下する。二度と上がってこれなくなります。」

「私の母さんも・・・・・・この穴に落ちていったんです・・・・・・」

「フェイトちゃん・・・」

虚数空間と言う言葉を聞き、嘗ての記憶を思い出してしまうフェイトの表情が曇ると、聞いていたなのはや一護達の表情も暗くなる。

銀時はそんなフェイトの顔を一瞥し、暫くの間を置いてから言葉を返す。

「・・・要は、落ちなきゃいいってだけだな。気つける。」

銀時は床下の虚数空間に落ちないように気を配りながら慎重かつ迅

速な動きで進んでいき、同じように一護やなのは達も後に続いていく。

すると、一護は前方に見えてきた扉を発見すると言葉を上げる。

「扉だ。突っ込むぜ！」

一護の言葉を聞き、ユーノと銀時は同時に駆け出し扉を強引に蹴り開ける。

「「！」」

その途端、扉の奥から無数の苦無が飛んで来、咄嗟にユーノ・一護・銀時の三人は刀を取出し飛んできた無数の苦無を弾いていった。

鬼太郎は弾かれたうちの何本かが自分の後ろの扉に突き刺さると、思わず声を上げる。

「のあああああ！！！」

後ろの方でなのはやフェイト、金太郎と浦太郎がデバイス片手に構える中、銀時は眼前に現れた有象無象の忍者漫画キャラを前に呟く。

「どうやら・・・――――ウザいガキどもは相当以上に始末が悪いらしい。見ろよ。あれりゃ絶対隠れてシャブってる奴の顔だぜ。目が死んでやがんぞ。」

「あんたが言う事かよそれ・・・」

思わずそうツッコむ一護。

するとそんな八人を前にした忍者漫画キャラは口元を隠した状態で言う。

「ふふふ。侵入者共・・・まさか斎藤組長の放った刺客を倒してしまうとは。しかしながらこの人数相手に果たして同じことが出来るかな?たった八人で、この戦局を切り抜けられぬと思うてか?」

「そうかい。言いたいことはそれで全部かな?こんなにたくさん集まって、歓迎パーティーでも開いてくれるって言うのかい?」

ユーノがそう言いながら逆刃刀を構える中、浦太郎はそんなユーノの額に突き刺さった苦無を見ると、呆然とした表情でツッコミを入れる。

「店長・・・歓迎じゃなくてお別れだと思うけど・・・」

「え、何が?」

「何がじゃねぇよ!おでこ見てみろ!思いっきりぶっ刺さってるだろう!!」

一護がそう言いながらユーノに痛烈な指摘を入れると、ユーノは何事も無かったかのように飄々とした様子で額に刺さっていた苦無を抜き取った

「え、何が。刺さってませんってば。何も♪」

「いや、刺さってたよね!?今明らかに顔赤くなってたよ!?照れ

てるでしょ！！」

フェイトも思わずそう言わざるを得なくなると、騒ぎ立てる一護達に銀時が言葉を投げかける。

「おいおいいい加減にしろよてめぇら。決めるときははばしっと決めろよな。」

しかしそう言う銀時もまた額に苦無が刺さっており、こちらも何事も無かったかのように抜き取るとそれを手で隠していたが額から出ていた血を見て一護はツッコム。

「刺さってたよな！？銀さんも今思いっきりそれ刺さってたよな！？」

「もう。今からその調子じゃ先が思いやられるな。ユーノ君も銀さんも、そんなことじゃ百年かかっても新八君を助けられないよ！」

なのははそう言ってレイジングハート片手に忍者漫画キャラに身構えるが、そのなのはの背中には数十本もの苦無が突き刺さっており、それを見てしまったユーノはなのはには聞こえないように呟く。

「ツッコミずらいんだけど・・・そっとした方がいいよね・・・知らない方がいいよねあれ・・・」

「侵入者には死を。それがここの掟！その命を以てその掟、全うするといい！」

漫画キャラはそれぞれ長槍や苦無、刀を持つと一斉に数に物を言わせてユーノ達八人に向かって突っ込んできた。

すると、ユーノはほくそ笑んでから次のように言う。

「妙な気分だね。漫画キャラ総出で掃除舞か・・・時折現実を逃避して漫画の中に逃げ込みたくもなる。だが、こう漫画ばかり見てるといい加減普通の本とか字が読みたくなってきたんでさ、僕らはやっぱり――――――」

ユーノはそう言いながら懐を全開にし、隠し持っていた大量の新聞を取り出す。

「！」

「新聞が一番でござんしょう♪」

ユーノは指の間に大量の新聞察しを挟み、それを自動発火させると人を小馬鹿にする時の銀時の様な笑みを浮かべてこう言う。

「さぁ♪楽しいパーティーの始まりだ・・・果てろ♪」

ユーノは新聞雑誌全てを前方の敵に投げつけると、その直後新聞は爆発を伴い部屋全体を覆い隠す程の煙を充満させた。

「「「「ぐあああああああああああ」」」」

ユーノ達のこの騒ぎはすぐに上の階で待機していた他の漫画キャラ達の方へと回され、辺りは次第に慌ただしさを見せ始めていた。

「そっちはエントランスの方へ回れ！我々は南側の侵入者の方に回る！」

目まぐるしく通路を往来する部下たちの様子を見ていたナルトは、漸く復活を果たした孫悟空を横目に言葉を発する。

「大した騒ぎだってばよ。」

「燃えてきたっぺ。オラも漸く体が治ったところだし、そろそろ準備運動がてら体動かさねぇと腕が鈍っちまいそうだし、いっちょ派手に相手してくる！」

悟空はそう言って軽く手を鳴らした後、徐に立ち上がりその場から立ち去ろうとする。

そんな悟空を見て、ナルトと一緒に待機していたサクラは不安げな表情で言う。

「無茶はよしなさいよ。治ったっていってもまだ八割ぐらいなものなんだから。少しは自分の身をいたわってくれた方が嬉しいんだけど・・・結局、あんたも他のみんなも自分のことよりも戦うことが好きなのよね。」

サクラはそう言うと、思わずナルトの方にも目を向ける。

ナルトはそんなサクラを見ると顔を赤くして手を振りながらこう言い返す。

「そ、そんなことないってばよ／／／俺は何も戦いばかりが好きな訳じゃなくてその・・・／／／」

「何赤くなってるのよ。気持ち悪い・・・／／／」

ナルトが赤くなると、サクラも何故だかは知らないが頬を赤く染める。

悟空はサクラが頬を染めると不思議そうな顔を浮かべる。

「おめぇも顔赤いぞ。どうした、熱でもあるのか？」

「う、うっさいわね！！いいから行くなら行くで早くしなさいよ！ほら！！」

「訳わかんねぇなおめぇら。まぁいいや。じゃ、ひと暴れしてくるぞ！」

悟空にはまるで二人の気持ちなど分かってなどいない。

羞恥心も越えた哀れな猿はただ戦いを欲するが故に行動し、その本能の赴くままに突き進み、今回もまた新たな戦いを求めてその血の臭いを追って行くのでった。

悟空がいなくなると、二人は急に気恥ずかしくなったのか、思わずそっぽを向いてしまうがお互いに意識はしていた様子だった。

「「・・・／／／」」

そんなやり取りが行われているその頃、ユーノの仕掛けた新聞型催涙ガスが部屋全体に充満し、忍者漫画キャラ達はむせ返りながら消えたユーノ達を探していた。

「げっほ！げっほ！これは、催涙ガス！？」

「舐めた真似を！」

「彼奴等め、何処に逃げた！？」

「あそこだ！」

一体の漫画キャラがそう言うと、全員は煙の中から既に飛び出し前方の巨大階段を駆け上っていくユーノ達の光景を目撃する。

最後まで階段を駆け上った後、スクライア商店は互いに目を合わせその場に立ちつくし、徐にそれぞれの武器を構えてなのは達に言う。

「私共がここで暫く食い止めます故。店長達は先に行ってくだされ。」

「金太郎！お前らも・・・！」

「三人とも、死ぬ気ですか！？」

思わず声を荒げる一護やフェイト。

鬼太郎は鼻で笑いながら烈火を肩に乗せ、浦太郎と共に言葉を返す。

「へ。こんな雑魚、俺ら三人で十分だボケ。」

「そうそう。こんな魚釣ったところで、大した面白くもないけどね。」

すると、一番先頭に立っていたユーノが徐に振り返り真顔のまま従

業員にこう言う。

「・・・三人とも。ちょっと顔向けろ。」

「？ユーノ君・・・」

「ユーノ、何だよ急に？」

唐突なユーノの言葉に訝しげな表情を浮かべるなのはや銀時を余所に、ユーノは従業員の元へと歩み寄り、こんな事を言って来た。

「従業員一同、懐に閉まった遺書を出して僕によこしな。」

「「「！」」」

三人は予想だにしてなかったユーノの言葉に驚きを隠せなかったが、懐には確かに遺書と書かれた紙が収められており、それを目撃したなのは達は唖然とする。

「店長・・・最後になるかもしれません。だからこれは――――――」

そして、金太郎は重い表情を浮かべて遺書を取出し中身を読み上げようとするが、ユーノの言葉で一蹴される。

「駄目だ。さっさとよこせ。」

三人はユーノに強要されると、大人しくそれぞれが書いた遺書をユーノに手渡し、ユーノは受け取るや否やその場で破り捨てる。

「！ユーノ・・・」

一瞬驚く一護だが、ユーノ本人は呆れかえった表情を見せてしまう。

「下らないもの書いてる暇があるなら、少しは報告書の作成きっちりすることだね。」

そう言った直後、ユーノは振り返って三人をこの場に残してそのまま前へと歩き出す。

ユーノの意外な行動に少々戸惑いを見せるなのは達。

フェイトは思わずユーノに言葉を投げかける。

「ユーノ！ホントに置いて行っちゃうの金太郎さん達！？」

すると、ユーノは背中越しに従業員三人にこう言う。

「そんなに遺書が書きたいなら戻ってこい。必ず戻って書きに来い。僕は何度でもそれを破り捨てるさ。さっさと戻ってこないと、この間の冷蔵庫代全部三人の今後の給料からさっ引くからな。」

従業員はその言葉を聞き入れると、暫くの間を置いてから笑みを浮かべて了承する。

「「「――――――了解！」」」

なのはや銀時はちょっと意外な言動を見せたユーノに何処か心が擽られる、そんな感覚に陥った。

「ユーノ君・・・」

「あいつ・・・なかなかに言うじゃねぇかよ。」

「まぁな。偶に格好いいこと言うんだ、あいつは・・・――」

一護も納得した顔を浮かべると、聞いていた浦太郎もいつもの調子でなのは達に言って来た。

「そうそう♪それでこそ店長だよね。」

「ほら、てめぇらも早く行け。」

「鬼太郎さん・・・」

「何度も言わせんじゃねぇよ。俺達従業員が身命を賭して守るのは店長と店長の守りたいものだ。てめぇら如きを守るために捨てる命なんて、最初からねぇよ。」

「――早く、行ってくだされ。」

三人がそう言うと、なのは達も気持ちを理解し、この場を金太郎たちに任せることにし、肯定の返事をする。

「――はい。」

「じゃ、任せるぜ。」

一護達はそう言うと、ユーノの後を追ってその場から駆け出して行った。

ユーノ達全員の姿が見えなくなると、その場に立ち尽くした三人に向かって忍者漫画キャラの攻撃が一斉に向けられようとしていた。

三人は己の武器を手に持ちながら、心の中でユーノの事を考えながらこう呟く。

「（そう・・・我々は店長を命を賭して守る番兵・・・）」

「（僕らの希望を・・・夜を明るく照らす満月を・・・・なのはちゃん達が暗く沈んだ時でも、闇を斬り裂き雲の奥から覗かせ光を導く満月を――――――）」

「（死ぬ覚悟なんて、とっくの昔に俺達は出来ていた。どっからでも掛かってきやがれ！誰だろうがここから先は遠さねェ！）」

「「「“店長（まんげつ）”が番兵、スクライア商店！！いざ、参らん！！」」」

スクライア商店は声を揃えてそう宣言すると、一斉に攻撃を仕掛けてきた忍者漫画キャラとの壮絶な攻防を始めるのであった。

そのスクライア商店の計らいで、前へ突き進んでいたユーノ達はと言うと、次々と現れる漫画キャラを一掃しながら只管に奥へと向かっていた。

「「「ほおおお！！！！」」」

ユーノ・一護・銀時の三人による豪快な一振りで漫画キャラは斬り捨てられ、新八を助けたいという一心の銀時の気迫は凄まじかった。

「退けゴラ！！！！」

「急いで、カトゥーンの元へ！きっとそこに新八君もいる筈です！！」

ユーノはそう言いながらなのは達を先導し、なのはとフェイトは一護達と共に背後や刺客から襲ってくる漫画キャラを魔法や霊力を駆使してまめに倒していく。

と、その時一護の直感が冴えわたり危機を感じ取った。

「！」

「おらあああああ！」

壁を突き破って一護目掛けて攻撃をしてきたのは孫悟空による強烈な鉄拳だった。

一護はその鉄拳を始解状態の斬月の刃で受け止めるも、勢い余って後方へと飛ばされる。

「ぐあああああ！！！」

「！一護さん！！」

思わず足を止めてしまう弟子のユーノやなのは達。

すると、徐に孫悟空がユーノ達に向けて言葉を発してきた。

「ようおめぇら！ちょっと寝てる間に随分派手にやってたみたいだ

な。」

「お、お前は――――――――！」

フェイトは目の前に立ち尽くす、不敵な笑みを浮かべて拳から白い煙を上げる闘争心に満ちた表情の悟空を見、目を見開く。

「孫悟空・・・！生きていたのか！？」

「あれぐらいじゃオラは死なないっぺ。」

「く。いよいよお出ましか・・・」

フェイトと同様苦い表情となる銀時やユーノ、なのはの三人。

悟空はそんな表情を浮かべる四人を見ながら徐に人数を数えはじめる。

「ひー、ふー、みー、よー・・・・・算数は苦手だからあんまし自信なんかねぇけどおかしいっぺ。一人はやったとして、もう三人足りないのはどうしてだ？」

と、この場には居ないスクライア商店メンバーの事を指摘すると、その直後悟空の耳に一護の声が聞こえてきた。

「おい。何寝ぼけたこと抜かしてんだよ。」

「！！！」

悟空が振り返った途端、卍解した一護の天鎖斬月による鋭い斬撃が

叩きこまれ、悟空はその瞬間壁を突き破って数十メートルと飛ばされる。

そして、銀時は天鎖斬月を肩に乗せながら高らかに断言した。

「誰をやっただと?舐めた口利いてんじゃねぇよ。死神代行黒崎一護!ユーノ・スクライアを除いて、てめぇなんかに超えられる男じゃねェンだよ!!」

つづく。

その時、男は動いた（後書き）

教えて、ユーノ先生！

ユ「今日は漫画『ＯＮＥ　ＰＩＥＣＥ』からロロノア・ゾロについてね♪」

ユ「ルフィの最初の仲間にして、剣士。両手の二刀に加え、三本目の刀を口にくわえて振るう「三刀流」の使い手。強敵と勝負する際には気合を入れるため、普段は左腕に巻いている黒手拭を頭に巻く。緑色の頭髪と腹巻が特徴。」

ユ「世界一の剣豪になるという野望のためストイックに強さを求道しており、一切の甘えも妥協も無い武士道精神を持ち、「背中の傷は剣士の恥だ」として、背後からの攻撃をあえて真正面から受けるなど己の命よりも信念を貫くことを選ぶんだ♪」

沖「そういや土方さんにも似たようなところあるなおい・・・勝つために妥協しないところとかプライドが高いところとか。」

近「ひょっとして本当はロロノア・ゾロの生まれ変わりなんじゃないのか？」

土「ふん。ま、それはそれで悪かねぇかもな。それよりいよいよ俺と野郎との白黒はっきりつく対決が始まったが・・・この勝負一体どれくらいひっぱるつもりだ？」

ユ「さぁ・・・それは作者の気持ち次第と言いますか何と言うか・・・第一にあの斎藤一に勝てるんですか？あっちの方が口喧嘩も性格

の悪さも一枚も二枚も上手ですよ。」

沖「どうせ副長になるなら俺はああいう人になってもらいたかったぜ。よりもよって何で土方さんみたいな犬の餌マニアなんかが・・・」

土「何だと!?誰が犬の餌マニアだ!!ああ!!マヨネーズ舐めてッと三枚に掻っ捌くぞ!!」

土方と沖田は剣を取り合い何時ものことながら喧嘩を始め、近藤は喧嘩の仲裁に必死な様子であった。

ユ「やれやれ。さて、次回は一護さんと孫悟空の精気の一戦だ。勝利を掴むのは熱血バトル漫画家それとも熱血に冷めたバトル漫画か？お楽しみに♪」

魔導師図鑑ハイパー！

とある依頼を受け、ユーノはなのはと一緒にミッドでは非常に珍しい和風建築だが築何十年もたってほったらかしとなっているボロアパートへとやって来た。

な「うわ・・・・・近くで見るとかなり酷いね・・・本当にここなの？」

ユ「はやてはそう言ってたけど、ここは夢の島か？」

恐る恐る中へと入る二人はここで何年も犯罪者を監視し、尻尾を掴もうとしている地上部隊の局員を見付ける為いたるところを探し回る。

ユ「僕の店より酷いや・・・鍵はない・・・お風呂もない・・・おまけにトイレはポットンだった・・・」

な「こんな凄いところに何年も見張りをしてる局員さんがいるのかどうか疑っちゃうね・・・」

と、なのはが部屋のドアを一つ開け徐に中に入ると――

な「きゃあああ!!!」

ユ「なのは!どうしたの!?」

な「ユーノ君、見てよこれ!畳が腐ってるよ!!」

ユ「本当だ・・・げ!こっちの壁には何か変なシミがある!人型の!!」

な「うわああ!!!押し入れの中に毒キノコが!!」

ユ「一体何なんだこのアパートは!!誰か!!誰か住んでたら返事ぐらいしてよ!!!」

途方に暮れる二人であった。

ちなみに探し人は後日ちゃんと見つかったそうだ――ただし、外に出た時。

次回予告

テトラカトゥーン　孫悟空

死神代行　黒崎一護

死闘の果てに一護が悟空に語るただ一つ破れない約束――――――

愛弟子との絆――――――

悟「次回『師弟の絆』」

漫画キャラ説明

ムーさん?号

声　一　江川央生

斎藤一が一護達に送り込んだ対魔導師及び死神封殺型漫画キャラ。山のような体躯をベースにし、ありとあらゆる武器を体に埋め込んでいる。戦うことに特化しているため、言語能力は普通の漫画キャラよりは劣っており、片言な表現が目立つ。だが、斎藤の判断ひとつで機動スイッチを切り替えるだけで思考回路と言語処理能力が向上し、更には埋め込まれたあらゆる武器が使用可能となる。素体となったのは斎藤と同じ世界出身の誇り高い武人であるが敵の殲滅ということとなると一変し、無辜（むこ）の人間を巻き込んで攻撃することすら厭わない復讐の鬼と化す。それは狂気の域に達している。戦闘では右腕部分を始め体中を変形させてそれを武器として闘う。巨大な体躯から生み出される怪力と合わさった砲撃の破壊力は脅威的なものを誇る。攻撃を付け続けるうちに錯乱状態となり銀時達と熾烈な戦いを繰り広げ、なのはを窮地に追込み止めを刺そうとしたが、直後「地獄」の呪いから復活して駆けつけたユーノに龍翔閃で武器を破壊され更には顎割により左腕を斬られ、止めの天翔龍閃を受け無

残に散っていった。

武器

ガトリング砲

ムーさん?号の左指が変形した機関砲。外部動力・多銃身式に分類される構造を持ち、複数の銃身を外部動力（人力やモーターなど）で回転させながら給弾・装填・発射・排莢のサイクルを繰り返して連続射撃を行う。

連射型改造グレネードランチャー

威力と射程は大砲より劣るが、その分連射が利く（弾薬は体に巻きつけていて、随時補充出来るようになっている）。また、先には刀剣が付いている。

師弟の絆（前書き）

次回更新は三週間後ぐらいかもしれません・・・

大学のテストが近づいているので・・・

師弟の絆

>i26829—709<

〈一護Ｓｉｄｅ〉

突然の襲撃。

テトラカトゥーンの一人にして、随一の戦闘能力を秘めた男、孫悟空がユーノ達の前に立ち塞がったが、卍解した一護が悟空を弾き飛ばし、辺りは一瞬の沈黙を保った。

一護が天鎖斬月を持ちユーノ達と共に険しい表情で土煙の上がる眼前を見つめていると、勢いよく悟空が飛び出し魔の抜けた声を上げる。

「ぶっは！いや～～～こりゃ魂消たなおい。もしやとは思ったが、そのオレンジ色の髪。その真っ黒い斬魄刀。噂に名高い伝説の死神代行黒崎一護がお出ましとは・・・・・なかなか面白いことになってきたな。いや、こりゃ最高に楽しい戦いになりそうだっぺ！！」

悟空はユーノの師匠でもあり最早死神のほとんどがその名を熟知している死神代行黒崎一護と会い見えたことに感激しつつ、その実力を高く評価した様子で一護と対峙する。

「何の因果か運命か・・・オラって奴はとことんついてるぞ！おめぇみたいな強い奴との戦いをオラ、心の奥底から望んでたんだ。ちょうどいい機会だ。いっちょ、オラとやるべ？」

一護は悟空と向き合うと、後ろに立つユーノ達に言う。

「ユーノ。銀さん。なのは。フェイト。ここは俺に任せろ。先に行け。」

「一護さん！」

「そんな一人で・・・！」

「馬鹿か。五人がかりでもやべぇ相手だ。」

と、銀時がそう言ったとき。

ユーノは一護の瞳を一瞥し、それを見た後徐に目を閉じると戸惑いを見せるなのは達に先へ進むことを促す。

「行きましょう、銀さん。」

「ユーノ君まで！？」

「どうして！？」

なのはとフェイトは愛弟子のはずのユーノがこのような事を云うとは夢にも思わず、動揺を隠し切れないでいたが、ユーノが口にした言葉で彼がそう判断した根拠が示されていた。

「信じてるからに決まってるさ。」

「ユーノ。」

銀時はその言葉を聞くと、思わずそう口にし、なのはとフェイトも同様の反応を見せた。

「さっき自分たちで言ったはずだよ。僕を信じるから、自分たちの

事も信じろって。だから僕は信じてる。一護さんの事――――――」

「・・・ふん。」

一護はユーノの言葉を耳にすると、鼻で笑い他の三人も顔を見合わせてから納得の表情を浮かべるとこの場を一護に託すことにした。

「それもそうだな。よし、じゃあここはＢＬＥＡＣＨの主人公さんに任せて、銀魂の主人公の俺やこいつらは先に行くとするか。」

「ああ。安心しろ。直ぐに追いついてやるよ。」

「一護さん。待ち合わせ場所は判ってますよね？」

ユーノがそう言うと、一護は自信に満ちた顔で口にする。

「ああ。次会う時は、新八を入れて俺たち全員機動六課で！」

「上等です。」

ユーノは一護と顔を見合わせ、顔を通じて堅い近いと再会を約束し、ユーノは銀時・なのは・フェイトと共に一護を残して奥の方へと駆け抜けていく。

ユーノ達がその場から居なくなっていく様子を一瞥した悟空は不敵な笑みを浮かべる一護を目の当たりにし、腹の底から大笑い。

「ぷ・・・っはははははは！！！！いや～～～人生ってのは生きてればそれなりに面白いもんだっぺ！どっかの誰かが言ってな。人生は重要な選択肢の連続・・・なんて。だがこんなにはっきりとあ

からさまにババを引いたのはおめぇが初めてだっぺ。あっちは間違いなくハズレだぞ。他にもテトラカトゥーンは三人、それにカトゥーン様もいる。この世界に肉の一片も残らねぇと思うぞ。」

「――――――」

「おめぇはそう言うことで正解・・・・・助かってよかったっぺ。誰にも看取られる事無くオラがミンチにして食ってやるよ・・・・・・」

すると、悟空の言葉を聞いた直後一護は天鎖斬月を両手で持ちながら次のように返事を返した。

「ハズレはてめぇだ、ボケ。その粗末なもん・・・――――粗挽きウィンナーにしてやるぜ!!」

◇

〈スクライア商店Ｓｉｄｅ〉

その頃、先にユーノ達を奥へ進ませる為忍者漫画キャラ軍団の相手を引き受けた金太郎以下スクライア商店メンバーの方はと言うと、デバイスと斬魄刀片手に有象無象の忍者漫画キャラと向かい合っていたが、間もなくして敵方が一斉攻撃を始める。

「やれ!!」

一斉に飛んでくる無数の苦無の嵐。

三人は各々が得意とする技を使って苦無の嵐を弾いていく。

「ダイナミックストーム！」

「スピアトルネード！」

「俺の必殺技パート４！」

三人の強力な攻撃が苦無の嵐をすべて弾き飛ばし、同時に彼らは勢いよく敵の懐に飛び込み圧倒的な力で敵戦力を一掃していく。

だが敵も負けじと数に物を言わせて三人を攻撃し、攻撃を受けた三人の身体は満身創痍を通り越し、立っているのがやっとの状態にまで追い詰められる。

「「「――――――」」」

三人は血塗れになりながらも背中を寄せ合い、無言のまま武器を持って立ち尽くす。

絵にもなるような三人の勇姿を目の当たりにした忍者漫画キャラは肩で息を立てながら、思わずこう言う。

「く！これだけの数を前に、まだ来るというのか！？」

「馬鹿か貴様ら！抵抗は無意味だ！」

すると、それを聞いた浦太郎・金太郎は徐に顔の血を拭いながら無表情に近い顔で言葉を発する。

「五月蠅いよ・・・そんなもん関係ないさ・・・」

「然様・・・我々の使命はただ一つ・・・店長と店長の守りたいものを守る・・・それだけだ。」

「は！元管理局の落魄れが、よく咆える！！所詮貴様らは何も守ってなどいない！！ただの使い捨ての駒だ！あの男もそうだ。ユーノ・スクライアもお前たちなど使い捨ての駒としての価値しか見ちゃいないんだよ！」

と、一体の漫画キャラがそのように罵った直後、鬼太郎が即刻否定の言葉を並べる。

「は！馬鹿だろう、てめぇら。」

「何！」

「俺達は一度、人生においてこんな筈じゃないことを味わって、大失敗して、掃き溜めみたいな生き方してきたそう言う連中なんだよ・・・だがそんな掃き溜めの俺達をあの人は拾ってくれた。俺達がどんなに堕ちようとしても、あの人だけは手を伸ばしてくれた。だから俺達は真っ直ぐ生きていける。背筋しゃんと伸ばして生きていけんだよ！」

鬼太郎の言葉を聞いたあとの二人も以下のようなことを述べる。

「管理局に勤めていたあの頃の僕も、金ちゃんも、無関係な先輩も、詰まる話何にも守ってなんかいなかったさ。管理局って言う組織の下で歯車の一部として回っていただけの僕は常に利用され、道具として扱われ、次第に人間としての機能を奪われていった。」

「時に上層部のやり方に疑問を抱いてただ一人異を唱えた私だが、誰も耳を貸すものなどいなかった。そして、為すがままに汚いやり方で管理局を動かしてきてしまい、挙句こんな世界にしてしまったのは他ならぬ我々だった――――――」

「そんな所業や歯車の一部として動いてきた僕らを初めて人間として扱い、暖かい居場所をくれたのは店長だ。店長が幸せになれるのなら何だってする。なのはちゃんと店長が幸せになれるならどんなことだってやる。店長が笑ってくれるなら、僕らは何だってする。この命、捧げることなど厭わない！」

浦太郎はそう言いながら自分の相棒のフィッシャーマンの先端を忍者漫画キャラに突きつけ、金太郎と鬼太郎も同じように先を向けると、敵方は思わず険しい表情となる。

そして、最後に鬼太郎はそんな敵に向かってこう言う。

「俺達を殺すつもりでいるようだが、てめぇらには一生かかってもムリな話だ。俺達を生かすのも殺すのも店長ただ一人。さぁ、どうするよ？こうして話している間にも時間はどんどん稼がせてもらってるぜ。」

「く！己が身を挺して、主君を守るつもりか！！！」

忍者漫画キャラの筆頭がそう言うと、三人は眼つきを一変させるや否や獰猛な獣の如く勢いで飛びかかっていった。

「「「はあああああああああ！！！」」」

三人はただ只管に漫画キャラを斬り捨て、紙くずとなるまで粉々に

斬り裂きつつ、幾度となく四方八方からの攻撃を受け血を流す中で、頭の中で次のような事を巡らせていた。

「（この世界に守る価値などある訳がない・・・そう思いながらも、僕は管理局の傀儡になり管理局を・・・掟を守ってきた・・・）」

「（何も変えられぬ・・・何も変わらぬと諦め・・・挙句野に下りのた打ち回っていた我々を・・・店長は地獄の底から救ってくださった。）」

「（そうやって、俺達は店長がいるこの居場所を守りたくて、一緒に戦って剣を振るって来た！）」

と、そう思った直後忍者漫画キャラの放った無数の苦無が三人の身体を突き刺さり、三人は血を流すと同時に持っていた相棒を徐に手放した。

「「「――――！」」」

そして、肩で息をし血塗れとなった身体を必死で起こそうとしつつ武器に手を伸ばした三人は自分を自嘲し、結局のところ自分たちが今まで守っていたものを口にする。

「・・・そう・・・俺達は何も守ってなんかいなかった・・・」

「・・・僕らが守ってきたのは・・・店長でもこの世界でもない・・・」

「“自分の檻”・・・・・・」

金太郎がそんな言葉を呟いた瞬間、三人はほぼ同時に口の中から吐血する。

「「「ぐっは！！」」」

既に体力も気力も、そして攻撃の要となる魔力と霊力の限界に達していた三人であったが、それでも彼らは朦朧とする意識の中で必死に立ち上がろうとしていた。

「ハ、ハ、ハ・・・あの頃、自分という檻を張ったのは誰でもない・・・・僕らだ・・・・・保守的な僕らは世界が、人が変わることを恐れるあまり変わることも変えることもしないで全てを諦観し・・・己が心に檻を張った・・・・・・」

「げっほ！ああ・・・自己保存の欲求・・・己の可愛さゆえに檻に閉じこもって・・・その折が壊れねぇよう必死で守っていたんだ・・・」

「店長を守る・・・店長の守りたいものを守る・・・全ては都合の言い訳・・・我々は・・・己の臆病さを隠すために、店長を利用していたのだ・・・」

「たく・・・何にも変わってなんかいなかったぜ・・・反吐が出る・・・！！」

鬼太郎と浦太郎、金太郎の三人は自分を卑下しながら、ふと自分の脳裏に浮かんで来る嘗てユーノが自分たちに向かって言ってくれた言葉を思い浮かべる。

『本当の不自由って言うのはだね、自分で心に檻を張ってしまう事

だよ。』

「僕らは・・・あの頃から何一つ全く変わってなんかいなかった・・・！」

『死ぬだなんだ喚いて逃げ回ってる暇があるなら、檻の中で戦いなよ――――――自分と』

ユーノの言葉を思い出すと、彼らはそれが発条となったのか今まで弱々しかった動きから一変しっかりと地面に根を張った気のように足場を固定してその場から立ち上がろうとする。

「店長・・・・・私達はもう逃げませぬ・・・！檻を破るために戦います！！」

そう口にした金太郎や残り二人の脳裏に、最後にユーノの言葉が浮かんできた。

『僕自身も臆病者だから、人の事言えた口じゃないけど・・・少なくとも背筋をしゃんと伸ばして、頭上の太陽を仰ぎ見ることが出来れば大丈夫。そうやって、僕ら人間は生きていかないといけないんだ――――――』

「「「く！」」」

そして、三人は決意の籠った表情でその場から立ち上がると天を仰ぎ見るような体制で三人同時にこう言う。

「「「最後の最後まで、天に向かって・・・真っ直ぐに立ちつづける！！」」」

だがその直後、忍者漫画キャラの容赦ない攻撃を襲い始める。

「やれ！！」

一斉に飛んでくる無数の苦無だったが、鬼太郎は意を決して残り全ての霊力を烈火に注ぎ込むと二人に向かって合図する。

「亀！熊！」

「「おお！！」」

二人は鬼太郎同様魔力の全てをカートリッジに集約させると、全弾をロードし己の絶対の必殺技を生み出し鬼太郎と同時に最後の攻撃を仕掛けた。

「ハデスの一振り！！！」

「ポセイドンクラッシュ！！！」

「俺の必殺技、パート3！！！」

三人の最強最後の必殺は放出と同時に上手い事合わさり合い、圧倒的な破壊力と畏怖の念を抱かせる恐るべき姿の生き物に姿を変えると、それは全ての忍者漫画キャラを飲み込み敵は一様に声を上げる。

「「「ぐあああああああああああ！！」」」

そして、有象無象解いたはずの敵はすべて紙くずとなって消え失せ、全ての力を使い果たした三人はその場に膝をついて仰向けとなって

倒れ込んだ。

「「は、は、は、は、は」」

大量の出血の所為で、最早一歩たりとも動くことが出来ない三人。

徐々に薄れ行く意識の中で彼らは荒い息を立てながらそれぞれこう言い合った。

「ど・・・・・・どうにか・・・・・・なったね・・・・・・」

「・・・我々は・・・・・・守り通せたのであろうか・・・・・・」

「どうだろうな・・・・・・俺達のしたことなんざ、店長のそれに比べれば屁みたいなもんだ。あの人が守ってくれたことに比べれば・・・――――」

「僕・・・・・・人生であんな優しい人に遭えたのは初めてだった・・・・・・店長の前では、素の自分を曝け出せる・・・店長の前で嘘なんかつきたくなかった・・・店長が笑ってくれると、こっちも自然と笑えた・・・嫌なことがあっても、全部忘れられた――――――」

「時に泣き、怒り、そして笑う――――――――そんな当たり前で平凡なように見える日常全てが私達の貴重で大切な時間――――――――あの方と一緒に過ごした四年間は・・・・・・今でもその全てを思い出すことが出来る。」

「店長は俺達にもそうだが、赤の他人にも同じ様に優しく手を差し伸べる。だけどその分自分に対しては異常なまでに毛嫌いしてる・・

・・・・自分に救いの手を差し出そうとはしねぇ・・・・・・」

「どんなに日陰になって一人になろうと、どんなに悲しいことや辛いことが遭っても、店長は決して弱みを見せなかった――――――縋る気持ちなんかこれっぽっちもなかった。いや、失くしたんだよね・・・・・・欲望と一緒に。」

「店長は私達の光であり、闇に埋もれようとしているこの世界において、星よりも雷よりも、明るく世界を照らしてくれる月なのだ・・・・・・だから我々は決して闇を恐れることなどない。何故なら、あの方がいつも照らしてくれるから――――――」

金太郎はそう言うと、鬼太郎・浦太郎と同様徐に目を瞑り遠のいていく意識の中で彼ら三人は満足げな柔かい笑顔でユーノの事を想いながら心の中で呟く。

「（なのはちゃんが星で・・・店長が月・・・・・・一見相容れないように見えるけど、なのはちゃんはそんな月を何時も見上げて、何処か寂しそうな目で見ていたんですよ店長・・・・・・あなたがなのはちゃんの存在が遠く離れてしまったと言うように、なのはちゃんもずっと、店長の背中を追いかけて・・・だけど遠く離れてしまった店長を焦がれていたんですよ・・・だけど今は漸く二人仲良く隣に立てている・・・――――鳴呼、本当に良かった――――――）」

「（出来ればもう少し――――――あなたと一緒に共にしたかったですが・・・・・・どうやら我々はここまでの様です――――――）」

「（道は照らしたっすよ、店長・・・・・・この世界と、新八を頼

みます――――――）」

◇

〈ユーノＳｉｄｅ〉

スクライア商店の三人がそんな事を想って意識を失った直後、奥を目指して移動中のユーノは不意に背中に走った電流に体を硬直させ、徐に後ろを振り返った。

「！」

なのは達は突然動きを止めて後ろを振り返ったユーノに一瞬驚き、声をかける。

「ユーノ君？」

「どうした？」

「何かあったのユーノ？」

三人が心配した様子でそう言うと、少し間を置いてから何事も無かったようにユーノは返事を返す。

「――――――いや、なんでもない。先へ急ごう。」

「「「うん（ああ）」」」

ユーノはここまで来た以上、仲間を信じて奥へ進むしかないと判断し、なのは達を連れて城の奥へとコマを進めていくのであった。

果たして、四人は無事に新八の元にたどり着くことが出来るのだろうか?!

◇

〈一護Ｓｉｄｅ〉

その頃、テトラカトゥーンの孫悟空と壮絶な戦いを繰り広げていた死神代行黒崎一護は、天鎖斬月のスピードを活かして悟空とほぼ互角の戦いを続ける。

「ほおおおおおおお!!!」

「だらああ!!」

幾度となくぶつかり合う悟空の拳と一護の斬撃。

一護は一旦距離を取ると、悟空目掛けて飛び込んでいくが、悟空は振り切られた一護の斬撃を見切ると、刃を足で押さえつけ、一護の顔面を渾身の力で殴る。

「ぐは!」

勢いよく殴られ凄まじい衝撃音を立てて一護は床に激突。

土煙が上がる中で宙に足を止めていた悟空はこう言う。

「おら、どうした!粗挽きウィンナーはまだ出来ねぇのか?」

一護は、殴れた箇所を手で抑えながら肌で実感する悟空の驚異的な力に圧倒された。

「く！（何て頑丈な奴だ・・・天鎖斬月がまるで歯が立たない・・・これがテトラカトゥーンの実力・・・化物め！）」

一護がそう思いながら煙の中から姿を現し、悟空の前に立つと悟空は不敵な笑みを浮かべた状態で一護に言う。

「オラ達は、義理や金でも動かねェ。オラが動くとき、それは血の臭い煙る戦場の臭いがあるときだけだ・・・・・なんてつい言ってみたくなっちまったがな、オラはそんなんでもねぇぞ。今はどっちかって言うと義理みたいなもんでここにいるだけだ。ま、おめぇらは元よりあのメガネを助けに来たって口だろう？」

「分かってるならごちゃごちゃ言ってんじゃねぇよ。さっさとそこを退きやがれ。」

「嫌だって言ったらどうする？」

「・・・てめぇをぶっ倒して前に進む。それだけだ。」

一護はいつのものように眉間に皺をよせながらそう断言すると、天鎖斬月の持ち手を更に強く握りしめるのであった。

◇

〈土方Ｓｉｄｅ〉

一護と悟空の戦いが激しさを増そうとしている丁度その頃、同じよ

うに土方十四郎もテトラカトゥーン斎藤一との最後の決戦に臨んでいた。

幾度となくぶつかり合う同じ真選組の名を冠する二人の狼。

「ふううううううううう！！」

「やあああああああああああ！！」

刺突を外されれば二本の刀による横薙ぎの攻撃が、横薙ぎと思えば振り払うなどとその攻撃手段は状況に応じてめまぐるしく変化する。

そして、土方と斎藤との剣戟の打ち合いが一旦終止符を打つと土方は徐に二本の刀を鞘に納めてあることを思い出した。

「そっか。思い出したぜ。おぼろげに記憶にある。確かてめぇ・・・緋村抜刀斎とか言う伝説の人斬りと唯一対等に渡り合えたほどの名うての剣客だったそうじゃねぇか。色々マンガ読んで技の研究してるうちにてめぇの事も見た覚えがある。壬生の狼・・・新撰組三番隊組長斎藤一・・・・・・それが今じゃ・・・何のために戦う？ここまで堕ちても悪・即・斬か？カトゥーンの犬が。」

「フン。」

挑発的な口調の土方の言葉を聞いても表情を崩さない斎藤一。

「それとも奴の手を舐めて、精々良い餌をもらう為か？」

「貴様・・・」

「剣に籠った、プライドの差って奴を――――――見せてやるぜ。」

土方はそう言うと、元の世界からずっと使い続けている愛刀を抜刀し、口に咥えると三刀流の技の構えとなって、斎藤に狙いを定める。

「三刀流！・・・・・・『牛針（うしばり）』！」

左右二本の刀の切っ先を闘牛の牛の角ように構え、その状態から突進しようとする土方を見て、斎藤も通常の牙突の構えを取る。

「身の程知らずも大概にしとけよ。この阿呆が。」

直後、二人の剣客はほぼ同時に敵の心臓を刺し貫くべく突進して行った。

凄まじい衝撃が二人の周囲に発生し、渦を巻いた土煙の中から二人の姿が現れると、相互に右肩部分にかすり傷を負っていた。

土方は一度刀を納めると、徐に振り返り斎藤に言う。

「流石だな。初撃をここまで見切れるとは正直思ってもいなかったぜ。大した洞察力だよ。」

「フン。潜り抜けて来た場数が違うんだよ。勿論、剣の腕もな。」

「成程参ったな・・・てめぇに一太刀浴びせるのも簡単な話じゃねェ。牙突を斬れない今の俺じゃお前には勝てねぇ・・・」

「フン。ならばどうする？」

「ああ。お前に同情するよ」

「何？」

土方の意外な言葉に一瞬耳を疑う斎藤。

土方は眉間に皺を寄せる斎藤とは裏腹に不敵な笑みを浮かべながら二本の刀を取り出す。

「こう言う窮地を俺は待ってた。てめぇをぶっ倒してもう一段階強くなりてぇと思ってたところだ。俺がお前に勝った時・・・・・俺は牙突を斬った真の真選組最強の男になってるって訳だ」

この土方の自信は一体何処から湧いてくるのだろうか？

果たして土方はこの壬生の狼斎藤一を屈服させ、真選組最強の男となりえるのであろうか？

◇

〈一護Ｓｉｄｅ〉

さて、再び一護と悟空の戦闘の場面に切り替えるが、一護と向かい合っていた悟空は徐に一護が闘いの前に口にしていた言葉を思い出し、徐にその言葉を口にする。

「そうか・・・おめぇ最初に言ってたよな。“ユーノ・スクライアを除いて、オラなんかに超えられる男じゃねェ”って？本気で言ってるとは思ってなかった。だがオラを倒すともぬかした。知ってるか？そう言うの、身の程知らずって言うんだぜ。」

「知ってるよ。そいつはてめぇの方だって言ったんだよ。」

「オラに勝てる要素も万に一つもないおめぇがか？止めといたほうがいい。ドキドキもワクワクもしねェ中途半端な仲間の絆を描いたバトル漫画じゃオラには勝てねぇ。」

「てめぇこそ、いい加減ドラゴンボールの時代は終わったんだよ。俺、あんまし熱血路線のバトル漫画は昔から好きじゃねぇんだよ。」

「友情・努力・勝利のジャンプ三大要素てんこ盛りのドラゴンボールを侮辱するたあ・・・おめぇ後で鳥山明ファンに殺されるぞ？」

「何だよ鳥山明ファンって？ドラゴンボールファンかドクター・スランプファンの間違いだろ。それとも、ドラゴンクエストって言う方がいいか？」

「ふふ・・・どうやら本当にオラ達の事が嫌いのようだな・・・ちょうどいい。殺す口実がこれではっきり出来たって訳だ。」

「悪いな。口実で来たのは俺の方だ。」

互いに不敵な笑みを浮かべる二人はその直後、恐らくこの場にギャラリーがいたらまず間違いなく身が縮んでしまうほどの途轍もない霊圧とオーラを発し、互いに士気を高めていく。

「「はあああああああああああ！！！！！」」

悟空はオーラを発した状態でスーパーサイヤ人へと変貌すると、漆黒の霊圧を身に纏った一護に向かって攻撃を宣言する。

「行くぞ。」

「全力でな。」

二人はお互いの力の姿たる霊圧とオーラを身に纏った状態で、ほぼ同時に眼前の敵に向かって飛び出して行った。

「「はあああああああああああ！！！！！！！！！」」

一護の斬撃、悟空の拳がぶつかり合った直後、戦闘フィールド全体が轟音を上げて多量の土煙を巻き上げ、あまりの凄まじさに視界が一切見えなくなった。

煙が発生し、辺りを包み込む中二人は煙の外へと身を頽りだし飛び出していくと大空中戦を勃発。

幾度となく剣と拳が鋭い音を立ててぶつかり合う中、一護は目くらましための鬼道を発動する。

「破道の二十九『屑鉄砲（くずでっぽう）』！」

指先から放たれる霊力を圧縮し、威力は小さいが連弾により攻撃の隙を与えない破道の二十九番、屑鉄砲。

「く」

悟空は一護の放った屑鉄砲をその身に受け、攻撃をする隙を封じられる。

そして、その隙に一護は呼吸を整え己の得意とする月牙八式兵法の

一端を見せる。

「月牙八式兵法三式・・・・・・」

その瞬間、一護は瞬歩により無数の分身体を作る。

「！」

“月牙幻視”」

悟空の周囲を多い囲むように複数の一護がその場に出現し、分身体の一護達はほぼ同時に悟空目掛けて月牙を放つ。

「「「「「「「はあああああ！！」」」」」」」

「分身体を作って俺の目を欺くつもりか・・・甘いぜ！」

そう言うと、気を円盤状のカッターに練り上げ、その物体を寸断する親友クリリンが独自に編み出した技、気円斬を使用。

「気円斬（きえんざん）！！」

気円斬を受けた分身体は悉く体を斬られていき、次々とその数を減らす中最後の一体、本体の一護は向かってくる複数の気円斬を同じ月牙八式の技で叩き落とす。

「月牙八式兵法五式『阿修羅月牙』！！」

目にも止まらぬ鋭い斬撃により飛んで来た全ての気円斬を叩き落とした。

一護は即座に悟空の元に突っ込んでいくと、悟空の脳天から一気に斬魄刀を振り下す。

だが、悟空はその攻撃を見切り不敵な笑みを浮かべる。

そして、態と攻撃を受けると思いきやすばやい動きで残像を残し、一護に自分の位置を誤認させ、一瞬の隙を作る。

「何・・・（残像・・・？！）」

直後、一護の背後に悟空が瞬間移動してくる。

「残像拳（ざんぞうけん）」

「後ろだ！！」

一護は咄嗟に振り返り月牙天衝を放とうとしたが、悟空は一護の攻撃よりも早く両掌から不可視の気の塊を放出しぶつけてきた。

「気合い砲（きあいほう）！」

「ぐああ！！」

一護は気合い砲を体に受けると、後方に大きく飛ばされ壁に激突する。

悟空は煙が上がる前方の光景を凝視しながら、先ほどの攻撃の瞬間に一護につけられた耳の傷を一瞥し、出血した血を拭い取った。

「――――――」

すると、間もなくして一護が煙の中より姿を現し斬魄刀片手に額から血を流した状態で悟空の元へと歩み寄ってきた。

「ぺっ」

内側から出血した血を吐き出した一護は悟空に向けて不敵な笑みを浮かべた。

「ふん」

「・・・ふふ。ははははははははは！！！」

悟空は思わずそんな一護の顔を見ると思わず高笑いをし、徐に口にする。

「ほとんど戦場に出ることもなくなった人間が、スーパーサイヤ人の俺に喰らいついてくるとはな・・・闘争本能だけ、いや何かを守るって言う覚悟と想いって奴は未だ燃え尽きてねぇって訳か。」

「たり前だ。こんなもんじゃ俺の魂は燃え尽きねぇよ」

「そうか。だが生憎だが俺からはお引越しをお勧めするぜ。あんな娑婆い奴らと一緒に微温湯に浸かっていたら、折角あるその一級品の才能潰れるぜ。ユーノ・スクライアもそうだ。何なら、俺が間に入ってカトゥーン様に頼んでやろうか。“仲間にしてやって欲しい”って・・・・・・！」

と、そう言った直後悟空は一瞬のうちに懐に飛び込んできた一護の

斬撃をその身に受け、辛うじて刃を受け止めた悟空だが表情は険しかった。

「ぐ！！」

そして、斬られた箇所から出血する血を舌でなめながら十年と言う歳月が経過しても決して燃え尽きることのない守護の魂を宿した一護の瞳を前にし、彼の言葉に耳を描傾ける。

「てめぇみたいなアホ猿の推薦なんて誰が要るかよ・・・血に流され戦場を彷徨うだけのてめぇなんかの・・・・・・俺は、自分の戦場は自分で決める・・・・・お前とは違い・・・奪ったり壊したりするためじゃない、守るために・・・魂(こころ)で！自分の守りたいもののために戦場に立つんだ。そいつの邪魔をするなら・・・漫画キャラであろうが管理局だろうが誰だろうが・・・・・・ぶっ倒す！」

一護は揺らぎのない心でそう言うと、天鎖斬月を両手で握りしめて一気に悟空へと飛びかかっていく。

「ほおおおおおおおおおお！！！」

一護の怒涛の剣戟を上手い事回避しながら、悟空は心の中でふとこう呟く。

「（血の命ずるままに戦う俺たちと、魂(こころ)の命ずるままに戦う死神・・・いや、血で戦う俺と血と戦う男って言ったほうが言いのか？どうやら最初から説得なんて無理だって話だなこれは・・・だが、残念ながら黒崎一護・・・そんなことじゃ一生掛かってもこの俺には勝てやしねぇ）」

不敵な笑みを浮かべてそう判断する悟空。

直後一護の渾身の一振りが真正面から仕掛けられる。

「はあああ!!」

漆黒の霊圧が放出され、辺りに余波が発生する最中、目の前の悟空は一護の斬撃を受け切り、それどころか刀身そのものを鷲掴みにすると不敵な表情で驚く一護に質問をしてきた。

「さて問題だ・・・”倒す拳”と”殺す拳”、一体どちらのほうが重いんだ?正解は・・・――」

すると、悟空は右の拳を掲げそれに力を込めるかと思いきや油断した一護の隙を突いて強烈な蹴りを腹部に当ててきた。

「”殺す蹴り”だ!」

蹴りの勢いで数メートル先に飛ばされた一護は地面に倒れこみ、腹部を押さえながら吐血し悶絶していた。

「がっは!げっほげっほ!!」

そして、そんな一護のもとにゆっくりと悟空が近付き言葉をかける。

「腕力よりも脚力のほうが遥かに強いからな。え?詐欺だって・・・固いこと言うなよ、たかがクイズじゃねぇか。気付かねぇのか、お前・・・無意識のうちに攻撃の際剣に急ブレーキを掛けていやがる。」

そう言うと、悶絶しながらも起き上がろうとする一護の利き腕目掛けて悟空は容赦なく全体重をかけて踏みつけてくる。

「だあああああああ！！！！」

強烈な痛みで悲鳴を上げる一護とそれを見下ろす悟空。

「内側の潜む虚の本能を押さえようとするあまり、剣が俺に届く前に死んじまってんだよ！”誰も傷つけたくない”、”誰も殺したくない”大層立派な考えだ・・・ただし飽く迄“医者”としてならな。」

「ぐうううう！」

悟空は悲鳴を上げる一護の顔を今度は力いっぱい踏みつけ、喋ることもできず一方的に攻撃を受け続ける一護。

「だが、戦場ではそんなもんは通じねぇ。戦場では・・・迷ったものから死んでいく！ちという名の本能を拒絶するお前と、それを誇る俺達、最初（はな）から勝負になんかなりゃしねぇ！」

すると、そんな悟空の言葉を聞いた一護は顔を押しつぶされながらも言葉を吐く。

「ぐ・・・・・誰が・・・・・・拒絶してるだ・・・」

「！」

「その台詞ならとっくに、内側の奴に言われてんだよ！！！」

一護はそう言うと、左手を顔面に翳しその途端現れた虚の仮面を纏い、急激な霊圧の上昇によって悟空を退かせ、体勢を立て直すと左手で刀を持ち漆黒の月牙を放つ。

「月牙天衝！！！」

悟空は瞬間移動で斬撃の軌道を読み回避すると、一護の懐に飛び込み勢いよく一護の腹をパンチ、跳び蹴りし、アックスキックをお見舞いする。

「メテオススマッシュ！」

一護はその攻撃を受けると、疲弊した上に大量の出血が仇となり虚の仮面は意地もままならずに砕け散りそのまま陰に激突する。

「がっは・・・」

肉体的にも霊力的にも既に限界に達していた一護。

そんな壁に食い込み動けないでいる一護に悟空は徐に近づくとこう言う。

「どうした？虚化してもその程度か・・・――笑わせるなよ。こんなもんじゃねぇだろ。もっと上があるだろ・・・・・・見せてみろよ。ユーノ・スクライアと同じ化物の姿を・・・完全虚化を！！」

完全虚化への移行を促す悟空だが、それを聞いた一護はユーノを化物呼ばわりした悟空に強い憤りを覚える。

「誰が・・・見せるかよ・・・・・・俺は・・・・・・てめぇなんか

には死んでも見せねぇ・・・・！！俺の事はいくら言われてもいいが・・・あいつを・・・・・・ユーノを化物呼ばわりする事だけは、死んでもゆるさねェ！！！！！！！」

「だったら――――――弟子に見取られる事無く有終の美を飾れ！」

悟空はそう言うと、壁に食い込んだ一護の足首を掴み大きく体を回転させて遠心力をつけると、一護を砲丸投げの要領で頬り投げた。

「ぐあああああああ！」

放り投げられた一護は別な壁に頭から激突し、勢いよく土煙が上がる。

そして、スーパーサイヤ人として超絶的なパワーを解放した悟空はかめはめ波の構えを取ると、自身の最強技にして最高のかめはめ波と豪語する一撃必殺の攻撃を敷ける。

「１０倍（じゅうべい）・・・・・・か・め・は・め・波！！！！！！！！！！！！！」

一護に向けて１０倍かめはめ波が放たれた瞬間、辺りは轟音と共に凄まじい爆発に巻き込まれ、視界がままならない状態となる。

そして、かめはめ波の余波が収まり爆風が徐々に消えていく中、荒れ果てた土地のような姿となった周囲の中央に姿を現したのは上半身裸で全身血塗れとなって横たわる一護の姿だった。

一護は咄嗟に虚化で技の威力を軽減したが、あの状態で維持する事はままならず、結果的にこれだけのダメージを受けることとなって

しまった。

悟空は体の残り未だ息をしている一護の姿に驚きながらも、その感情は悔しさへと変わり、一護に近づくや否や腕を掴んでこう問い詰める。

「何が守るために戦うだ?何がどうしてそこまでして守ることに執着する?お前も、ユーノ・スクライアもそしてあいつらも、守ることに何の意味があるんだ?答えろ!!!」

悟空はそう言うと怒りに満ちた様子で思うように体を動かせない一護の顔面に拳を入れる。

一護は攻撃を受け、抵抗もままならず吹き飛ばされ床に叩きつけられる。

「ぐっは!!げっほ!!げっほ!!」

吐血を吐き、それでもなお諦める様子の無い一護。

「ぐ・・・く・・・!!」

そんな一護の瞳を見、思わず険しい表情を浮かべる悟空は更に問い詰める。

「どうしてそんなに必死になる?人間もこの世界の全ても、みんな取るに足りない物質の断片に過ぎねェ。そんな儚くて脆いものの為にどうしてそこまで血を流す?何が大事で守ろうとする?」

「脆くても・・・儚くても・・・そんなもんは関係ねぇ・・・!俺

は・・・あいつと・・・ユーノと約束した・・・・！！“ユーノが俺や俺達の事を守ってくれるなら、俺はユーノとユーノの守りたいものを守る”って・・・・！ぐ・・・・！！くっ・・・・！！！！」

一護はそう言いながら、今にも力尽きそうな体を必死に起こし、地面に転がっていた愛刀を手に取り更に言う。

「欲望が枯れちまって・・・自分への執着がなくなっちまったあいつは・・・目の前で苦しんでる奴を放っておくことが出来なくなっちまった・・・だけどその分あいつは誰よりも苦しんで、誰よりも自分を責めて、そして誰よりも誰かを助けようとしている・・・！不安で、怖くて、辛いユーノの気持ちの全てを理解出来る訳じぇ・・・けど・・・！それでも俺はユーノの事を守るって・・・・・俺の・・・・・・・・俺の魂に誓ったんだあああ！！！！

それは一護はユーノの店の縁側で空を見ながら寛いでいる時だった。

ユーノが徐に近づき声をかけてきた。

『一護さん。』

『お?』

『何ボーっとしているんですか?』

『ああ。ちょっとな。』

ユーノは一護の隣に腰を下ろすと、番茶を啜り一息ついてからしみじみとした様子で一護との出逢いを徐に振り返る。

『早いですね・・・あなたと出逢ってもう三年か・・・思えばいろんなことがありましたね。』

『そうだな。』

そう言ったあと、一護は暫くの間を置いたのちユーノに向かってこう言う。

『なぁ、ユーノ。一つ約束してもいいか?』

『はい?』

『お前、前に俺に言ったよな。“僕が何が何でも俺と俺の幸せを守ってやる。その為に、戦う”って。』

『え。まぁ・・・――――』

『だから俺も約束してやるよ。“お前が俺達を守ってくれるなら、俺も命懸けでお前を守る”――――――』

一護がそう言うと、一瞬驚いた様子のユーノだったが直ぐに柔らかな笑みを浮かべて肯定の返事を返したのであった。

『はい――――――』

これが、黒崎一護が弟子であるユーノと交わしたたった一つの譲れない約束にして二人の固い絆の証の表れでもあった。

◇

「ほおおお

「・・・――――！（こいつ・・・・・・これほどの力を。）」

一護はこの一撃で悟空と決着をつける覚悟で気を練り、神経を研ぎ澄ませると天鎖斬月を両手でしっかりと握りしめ、霊圧を放出させながら同じように覚悟を決めて向かい合う悟空に言葉を発した。

「行くぞ！！」

「来い！！」

一護はその瞬間、一度通常の月牙を撃って悟空の攻撃を誘うと残り全ての霊圧を刀身に集中させると、向かって来た悟空目掛けて飛び込んでいった。

「死ね！！！！！！！！！！黒崎一護！！！！！！！！！！！！！」

「月牙八式兵法八式！！」

ほぼ同時に懐に飛び込んでいった二人だが、一瞬の隙を見た一護は悟空の脳天から最強最後の必殺の月牙を振り下す。

「一刀月牙！！！！！！！！！！！！！！！」

一刀月牙が振り下されると、悟空は悲鳴を上げ始めた。

「だあああああああああああああ！！！！！！！！！！！！！！！」

そして、漆黒の霊圧と共に悟空は崩れゆく自分の体を目の当たりにしながら心の中で自分の敗因を悟ったのであった。

「（結局・・・最後の方で迷っていたのは――――――――俺の方か――――――――）」

テトラカトゥーン、最強の攻撃力を誇る孫悟空はこうして伝説の死神代行にして翡翠の魔導死神ユーノ・スクライアの師である黒崎一護の手によって葬られ、その役目を終えると紙くずとなって跡形もなく消えていった。

「・・・う・・・・・・・・・っ」

一護は全ての力を使い切ると、その場に勢いよく倒れ伏せ、弱々しい声を上げながら思うように動かないでいる体を引きずってどこかへ向かおうとしていた。

「はっ・・・はっ」

一護は朦朧する意識の中、ユーノの事を考えながら心の中でユーノに呼びかけるように呟く。

「（死ぬな――お前は絶対に、俺が守る・・・・・・一人で死ぬな・・・・・・・・・ユーノ・・・・・・・）」

その際、一護の頭の中に走馬灯のように流れ込んでくるこれまでであって絆を紡いできたかけがえのない仲間たちの姿と、彼が人生において唯一の弟子として認めたユーノの姿。

そんな事を考えながら、一護は更に心の中で呟く。

「（一人で背負う奴の弱さを・・・俺は知ってる・・・孤独な人間の痛みを・・・俺達は知ってる・・・仲間を背負うその喜びを知っ

てる・・・その仲間が傷ついて倒れていって・・・何もかんも失くしたときの恐怖を・・・お前は知ってる・・・・・・心配すんなユーノ・・・新八は俺達が必ず助ける・・・だからお前も死ぬな・・・）」

最後の最後までユーノの身を案じ、必死で守り抜こうとする姿勢の一護は最後の力を振り絞って地面を張ってユーノの元に行こうとする。

「待って・・・ろ・・・ユー・・・ノ・・・・・・今・・・行く・・・・・・・・！」

だが、その直後一護は体力限界に達してしまい、そのまま意識を失い握りしめた刀を手から落としてしまい、動かなくなってしまった。

激闘の末、テトラカトゥーンの一人は倒されたが、同時にユーノ達もまた鍵となる戦力の一つを欠落してしまうのであった。

一護は、このまま力尽きてしまうのか・・・――

そして、これからの戦いの行く末は――――――

師弟の絆（後書き）

教えて、ユーノ先生！

ユ「今日は孫悟空についてだ♪」

ユ「孫悟空は漫画『ドラゴンボール』の主人公で、名前は勿論『西遊記』の孫悟空からとった命名だ。」

ユ「地球歴エイジ７３７年。趣味は強い相手を見つけて闘うこと。食べ物は好き嫌いなし。心優しき格闘家で作中では一時期息子の孫悟飯が主人公を務めたが、全体を通しての主人公は悟空。これについて鳥山明先生は『悟飯を主役にするつもりだったが乗れなかった。悟空と比べると役不足というかんじだった』と語っている。」

一「俺がドラゴンボールの主人公と闘うとは正直思ってなかったぜ・・・しかも相手も相手、倒すのは容易じゃなかったな・・・」

疲労感丸出しの表情の一護。

ユ「疲労困憊ですねその顔みると・・・」

一「疲れるってもんじゃねぇぞありゃ・・・たく。これだから熱血路線の漫画の相手は嫌なんだ。」

ユ「今の人ってあんまりそう言う漫画好きじゃないって言いますけど、その割にはワンピースの人気って計り知れないですよね。」

一「あの漫画・・・両さん以上に化物だよな・・・」

二人はそう語りながら、頭の中にふと麦わら帽子を被った某漫画の主人公の影を思い浮かべるのであった。

魔導師図鑑ハイパー！

甘党で知られる坂田銀時だが、管理局においても極度の甘党がいることを忘れてはいけない。

時空管理局本局統括官にして、フェイトとクロノの母親リンディ・ハラオウンだ。

銀時はリンディの計らいにより喫茶店でこれまでのことを窺っていた。

リ「そうですか。貴重なお話をありがとうございます。」

銀「けど本当にいいのかよ、あんたのおごりで？あとで割り勘なんて言ったらマジ引くけど・・・」

リ「気にしないで下さい。お金の事は何も心配ありませんので。」

リンディはそう言うと、角砂糖を手に取りそれをお茶の中に入れてミルクと一緒にかき混ぜる。

そんな光景を見ていた銀時は角砂糖全てが入った瓶をお茶の中に突っ込んだ。

リ「な！（砂糖全部を入れた・・・！）」

銀「ふん。」

挑発的な口調で目を光らせる銀時を見て闘争本能に火がついたリンディは不敵な笑みを浮かべ、オーダーを開始。

リ「すみません、スペシャルチョコレートパフェを二つ♪」

銀「じゃあ俺は五つ」

リ「じゃあ私は十個」

銀「そんじゃ俺は更にイチゴ牛乳も追加！」

リ「では私はあんみつも追加！！」

そんな二人の張り合いは暫くの間続き、隠れて見ていたクロノとフェイトは何故か悲しくなってしまう。

フェ・ク「母さん・・・糖尿病になっても知らない（ぞ）よ・・・／／／／」

次回予告

決着のついたテトラカトゥーン孫悟空ＶＳ黒崎一護の戦い。

土方は斎藤との因縁の対決を繰り広げ、他の機動六課メンバーもそれぞれの敵と熾烈な争いを勃発させる。

リ（ハ）「次回『苦しい時の神頼みなんてもんは当てにならない』」

苦しい時の神頼みなんてもんは当てにならない

＞i31972―709＜

これまでのユーノ・スクライア外伝――――――

新八救出の為にカトゥーンキャッスルへと乗り込んだ銀時を始め、機動六課前線一同。

地獄の呪いに打ち勝ち、魔力と霊力を封じられながらも逆刃刀を携え戦線に復帰した我らがユーノ・スクライア。

テトラカトゥーンとの抗争も苛烈を極め、事態は逼迫した状態であった。

〈ユーノチームＳｉｄｅ〉

ユーノ達四人は金太郎たち三人、一護のことを信じて先を目指して邁進中であったが、カトゥーンキャッスル内部の構造は非常に入り組んでいたため、行けども行けども一向に奥へとたどり着けないでいた。

「くそ！一体どういう構造になってんだこの中は！？進んでも進んでもまるで奥に向かってる気がしねぇ。」

焦りの為か苛立ちを顕著に表現する銀時。

フェイトは周囲に充満する特殊な気体が自分たちのエリアサーチを不可能しているということに気づき顔を歪める。

「エリアサーチが出来ない・・・この城の中での自力での探索は難しいか・・・」

と、その時。

「！あれは・・・！」

なのはは前方から見えてきた新たなる追っ手の姿を確認し、ユーノ達は一度その場で立ち止まった。

「ち。しつこい連中だ・・・」

と、銀時が木刀に手を掛けようとするとフェイトがその手を止めてきた。

「待って銀さん。なのはもユーノも先に行って。あれは私が引き受けるから。」

「フェイトちゃん！？」

「フェイト。だけど・・・」

不安げな表情の幼馴染二人だが、フェイトはそんな二人に微笑みかける。

「大丈夫。直ぐに追いつくよ。一瞬で終わらせてそっちに合流する。

行って。」

「・・・うん！分かった。気を付けてね、フェイトちゃん！」

「へますんじゃねぇぞ」

なのは、銀時、そしてユーノはフェイトのことを信じることにし、脇道を見付けてその場から立ち去って行った。

ユーノはフェイトの姿を一瞥すると、最後にこう言う。

「フェイト！なのはを泣かせたら承知しないよ！」

そう言ったユーノはなのは達と共に姿を小さくしていき、やがて三人の姿が完全にフェイトの視界からいなくなると、フェイトはほくそ笑みユーノの言葉に関して呟く。

「ふふ。それはお互い様だよ、ユーノ。」

フェイトは直後、戦いの目となって眼前の追っ手の方に向かい合うと、バルディッシュを握りしめて呼吸を整える。

「バルディッシュ。行くよ」

〈Ｙｅｓ　ｓｉｒ〉

フェイトはバルディッシュと心を一つにし、サードフォームであるザンバーに切り替えると、カートリッジをロードし敵戦力の殲滅に取り掛かっていった。

「はあああああああああ！！！」

高速戦闘の達人たるフェイト・Ｔ・ハラオウンが今、烏合の漫画キャラに牙をむける。

◇

〈？？？Ｓｉｄｅ〉

さて、ユーノ達を進ませるために身命を賭して漫画キャラと奮戦し、戦うことはおろか完全に力尽きてしまったスクライア商店三人の元に、唐突に一人の男が現れる。

男は紫を基調とするバリアジャケットにを身を包み、日本刀型のインテリジェントデバイスを腰に携帯した右目が紫、左目が緑のオッドアイの少年だった。

少年は徐に三人の元に近づき、仰向けとなって豪快に倒れ意識を失う血塗れの彼らを見下ろしながら、徐に呟く。

「あらら。また随分と派手にやられちゃってるね・・・・・・・・・熊さんも。亀さんも。それに、モモタロスも――――――――」

この少年はどうやら三人の事を少なからず知っているようだった。

特に少年は鬼太郎の事だけはモモタロスと口にしていた。

「昔もこの先もずっと変わらない――――――スクライア商店同士の絆。その絆の強さが今までどんな困難にも立ち向かって行ける強さで、どんな敵にも屈しない強固な心を作った。本当に、大したも

んだよ」

「「「・・・・・・・・・」」」

少年はそんな事を呟きながら、安どの表情を浮かべて目を瞑る三人を見て、一度ため息をついてからこう言う。

「安どの表情浮かべて眠ってるところ悪いけど、あなた達にはまだやるべきことが残ってるでしょ。だから眠ってもらう訳にはいかないよ。」

少年はそう言うと、徐にその場にしゃがみ込み三人に向かって手を翳すと足元に紫色のミッドチルダ式魔法陣を展開し、回復魔法を施し始める。

〈Ｐｈｙｓｉｃａｌ　Ｂａｒｒｉｅ〉

紫色の防火壁が三人に張られると、回復魔法を施すこの謎の少年は更に言う。

「三人には守るべきものがあるんでしょ?だったら何が何でも守らないと。それは死を以てしてじゃない。生を以てして。いつだって、何かを守るたびあなた達は強くなっていったはずだよ。だからこんなところで死ぬな。じゃないと――――――僕が困る。」

この少年の言葉の意味とは何か?

そして、一体この少年の正体は何なのか――――――

◇

〈フォワードチームＳｉｄｅ〉

その頃、ユーノチーム・恋次チームとは別ルートで城の奥へとコマを進めていたシグナムやヴィータ、クロノを核とするフォワードチーム十名はと言うと、奥に進むにつれて数を増す漫画キャラと壮絶な争いを続けていた。

「有象無象のしもじもよ。裁きの刃を受けるがいい。」

〈Ｗｉｎｇ　Ｃｕｔｔｅｒ〉

ウィングフォームとなった白鳥はそう言うと、両腕の先から羽根型のミサイルを飛ばして前方の漫画キャラにダメージを与える。

そして、白鳥と並んでシグナムもレヴァンティンの刀身に炎を灯して勢いよく漫画キャラに突進。

「紫電一閃・炎上！！」

剣を一振り下した瞬間、一体の漫画キャラが炎上するとそれに飛びして周囲の漫画キャラにも炎が上がり、跡形もなく灰となっていく。

「二人とも流石！」

スバルは思わず感激し、他のフォワード四人も安どの表情を見せる。

クロノは周りに漫画キャラがこれ以上いないことを念入りに確かめると、引き続き奥に進むことを促す。

「よし。このまま奥へ。」

と、全員がその場から走り出そうとした矢先、彼らの動きを止めて来たのは次のような言葉だった。

「ちょっと待ちなさい。」

「「「「「!?」」」」」

「この声は・・・」

「新手であるか・・・」

何処からともなく自分たちに向けてかけられたその言葉を聞き、思わず立ち止まる十人は武器を持って身構え辺りを警戒する。

すると、奥の方から徐に三人組と思われる足音が聞こえてきた。

「ここを通りたければ」

「私達を倒してからにしなさい」

「あら～～～なんかドキドキしてきちゃったわ～～～」

女のような口調だが、どうも何かがおかしいと思いながら全員は目の前からやってくる敵に身構える。

「来るぞ」

「「「「「く」」」」」

そして、近づいて来た三人は一定の場所で立ち止まると暗がりで姿がはっきりと捕えられないでいる彼らの自分たちの真の姿を披露する。

その際、何故かスポットライフが当てられ登場してきたのはそれぞれピンク、緑、黄色を基調とする服に身を包んだ丸坊主の男三人組だった。

三人組は絶妙の腰のスナップを利かせて、徐に動き始めその際のバックグランドミュージックが非常にこの場にはアウェイだった。

「「「たまゆら・たまゆら・たまゆら・ゆ～ら。あ・ふ・れ・た・ち・か・らが湧いてくる！」」」

三人一緒のポーズを決めると、中央に立つ関取のように太り肥えた男から順に自己紹介を始める。

「長男ローズ♪」

「次男ラベンダー♪」

「三男レモン♪」

「「「珠由良（たまゆら）ブラザーズです♪♪♪」」」

そう・・・・・もうお分かりだとは思うが彼らは俗に言うオカマであった。

「「「「「「「「「「・・・・・・・・・・」」」」」」」」」」

」

たまゆらブラザーズの登場を目の当たりにし、クロノ達全員シラケた表情となってしまった。

しかし、そんなシラケた様子の十人を前にしてもたまゆらブラザーズの三人は不敵な笑みを浮かべてそれぞれこう呟く。

「ふふふ。どうやら私達のあまりに美しい姿に言葉も出ないようね。」

「罪な人間よね、私達。」

「だけど相手は私達だけじゃないわよ。オカマなら、いくらでもいるんだからな。」

そう言って、三男のレモンが指を鳴らすと、奥の方からぞくぞくと自分たちの同類であるオカマが有象無象と登場し、それを見た瞬間クロノ達は思わず顔を引いた。

「どう、カトゥーン様に頼んであらゆる漫画世界から召喚したオカマよ♪やっぱり、私達兄弟三人だけだと寂しいし、同類の一人や二人いた方が何だか楽しいじゃない♪」

「このオカマのバリケードを越えていけるかしら?」

「それとも、ここで一人残らずお陀仏がいい?」

そうレモンが言った時だった。

徐に白鳥が前に出てくると、白鳥は顔を伏せたまま迷う事無く斬魄刀の一振りでレモンの身体を斬り裂いた。

「いやあああんん！！」

「「レモン！！」」

「し、白鳥さん！？」

白鳥の唐突な行動に思わず目を疑い驚き返るたまゆらブラザーズの兄二人、そしてフォワードメンバー。

レモンは白鳥の攻撃を受け血を吹き流すとそれが致命傷となって元の紙切れとなって白鳥の足元に降ってきた。

「・・・不愉快である」

白鳥は嘗てないほどの怒りに満ちた表情でそう言うと、眼前に映ってくるオカマと言うオカマを徹底的に狩り始めた。

最初敵対心を燃やしていたオカマ達だったが、次第に白鳥の攻撃を受けてみたいという奇妙な欲求が湧いてくると、率先してその攻撃を受けに行くようになっていった。

「いや～～～ん？」

「あっは～～～ん？」

「ぬへぬらああ～～～？」

オカマと言うオカマは白鳥の太刀筋を浴び、悉く気色の悪い声を上げて血を吹きだし紙切れとなっていく。

それでもそんな白鳥の一太刀の為にオカマが行列を作り順番を待っていた。

「次、お願いします？」

「次は私よ？」

この光景を見たたまゆらブラザーズの二男ラベンダーは思わず声を荒げる。

「ちょっと！！何やってるのよあんた達！！」

「どうせ刺されるなら、イケメンの竿に刺されて昇天したいじゃない♪」

「いや、思いっきり真剣でぶっ刺されてるでしょ！マジで真剣で昇天してんでしょ！つうか何なのよ！相手方も私達の微妙な立ち位置読んで、動くに動けないでいるのに、あいつだけ全力でオカマ獲りに来てるじゃないの！？」

と、ラベンダーがそう言った時だった。

「退がってなさい。」

徐にたまゆらブラザーズ長男ローズ事、本名「たけし」が前に出て来た。

「おにいたま？」

「あの太刀筋、見覚えがある。一子相伝で伝えられるという対オカマ用暗殺剣・・・『百須斗神剣（ホストしんけん）』」

「何か聞いたことある！」

「一千年前、ホストとオカマ間で起きた大戦、“血ヶ原の戦い”で生まれた伝説の暗殺剣・・・・・まさか、その伝承者！？」

白鳥の姿を見てそう判断するローズだが、一方でその説明を聞いていたヴィータ達は苦い表情を浮かべながらそれぞれ色々なところの色々なおかしなところにツッコミを入れる。

「何だよその戦い・・・そんな戦い訊いたことねぇよ・・・」

「て言うか白鳥さんホストでもないし・・・ホスト神剣って何なの・・・」

ローズは白鳥の前に出てくると、斬魄刀を手に取り構えを取る白鳥を見て不敵な笑みを浮かべる。

「私達オカマの天敵に、こんなところで会えるなんてね。」

すると、ローズは目を閉じた途端徐に両手を翳して気を練り始める。

白鳥はローズの構えを見るなり表情を一変させる。

「その構えはまさか・・・！」

「誤算だったわね・・・・・・そう。私こそが百須斗神剣と対を為す一子相伝のホスト撃滅拳法『伽魔仙流（かませんりゅう）』伝承者・・・・・・拳王たけしだ！！」

最後に自分の本名を言うとだけ声色を変え男のものへと変えたローズだが、その瞬間白鳥は無残にもローズの身体を斬り裂きあっさりと言う。

「いやすまぬ。私は知らん」

「たけし！！！」

ローズが切られたことに声を上げる二男ラベンダー。

ローズは仰向けとなって倒れると白鳥に感謝した言い方でこう発言する。

「ふふ・・・最後にこの呪われた名前を斬ってくれるなんて・・・・・・“我が生涯に一片の男無し！！！”」

「いやおもっきりあるわよ！！一遍どころか物凄い男の顔になってるけど！！」

劇画の様な顔となった兄の姿を鋭く指摘するラベンダー。

そして、そんな光景とやり取りを見ていたヴィータ達は顔を見合わせこのオカマ達を倒すか否かを話し合う。

「おい・・・どうするこいつら・・・」

「気が進まないが・・・倒していくとしよう・・・」

「そ、そうですね・・・」

紆余曲折はあったものの、彼らは障害となるオカマ漫画キャラを一掃すると何の問題もなく奥へと突き進むのであった。

全く、さっきの無駄なやり取りは一体何のためにあったのか――――

そんなことを誰かが思っている間に、フォワードチームは薄気味悪い生体ポットの様なものが複数立ち並んだ部屋へとたどり着き、周辺を見回しながら前へと進んでいた。

「何だか薄気味悪いものが展示されてますね・・・――」

彼らがそのポットの方へと近づき、中のものを凝視するとそこに収めれていたのは生命体ではなくカトゥーンが独自の研究の中で偶然にもこの現実世界に呼び出した漫画キャラであった。

「これは――――――漫画キャラ?!」

「こんなに沢山――――――――あ!」

と、その時キャロは唐突に瞳に映ってきた見覚えのある漫画キャラを発見した。

近づいてよく確認してみると、二つ並んだポットに入っていたのはプリズムシード、新八と共にテトラカトゥーンによって連れ去られ

た弥彦の連れのポケモン、ピカチュウとニャースだった。

「ピカチュウ・・・！ニャースも！」

「クロノ提督、直ぐに助けましょう。この子たちは、明神弥彦と同じ境遇でやって来たカトゥーンの被害者です。それに、ユーノ先生も仰ってました。願いは代わりに僕らが叶える。死んでも僕らが助けると。」

「そうだな。」

「待ってろ、ピカチュウ。ニャース。グラーフアイゼンでこのビンぶっ壊してやるからな！」

「行きましょう、ヴィータ副隊長！」

スバルとヴィータは二匹を救出するためデバイスをそれぞれ構える。

と、その時だった。

突如として壁が勢いよく突き破られ二人の元に鋼鉄の鎧の騎士が襲い掛かってきた。

「「！」」

「はあああああああ！！」

「スバル！避けて！！」

スバルとヴィータは皮一枚のところで鎧の騎士の攻撃を躱す。

「何だ・・・」

と、ヴィータが眉間に皺を寄せながら襲撃者の姿を凝視していた時だった。

天井から唐突にまたしても漫画キャラの一人が襲い掛かってきた。

「おらあああ!!」

ヴィータが声に反応して、上を向いた瞬間瞳に映ってきたのはテトラカトゥーンの一人にして、鋼の錬金術師の称号を持つエドワード・エルリックだった。

ヴィータはエドの不意打ちを左肩に受けると、勢いよく弾き飛ばされる。

「ぐあああああ!!」

「!ヴィータ副隊長!」

「大丈夫であるか!?」

スバル達はすぐさま負傷したヴィータの元に駆け寄り、ヴィータは左肩の傷を押さえながらエドワードの姿を捕える。

「く・・・そ・・・てめぇは・・・」

エドは鎧騎士の隣に着地すると、トレードマークの赤いローブを整え、不敵な笑みを浮かべながら彼ら十人を凝視する。

「――――――ようこそ。魔導師ども。手荒な歓迎だったか？」

「あなたは・・・！」

「テトラカトゥーン、鋼の錬金術師エドワード・エルリック！」

「覚えてもらって光栄だぜ。お、そうだ。序にこっちも紹介しておくぜ。俺の弟の・・・」

エドがそう言うと、隣に佇むエドの背丈の倍近くものある鎧騎士は丁寧な口調で自己紹介をした。

「アルフォンス・エルリックです。どうもこの度は兄さんが色々とご迷惑をかけてしまって申し訳ありません。」

「いや全くである。」

アルの言葉に白鳥が平然とそう答えると、エドは声を荒げてしまう。

「何謝ってるんだよおめぇは！いいんだよ謝る必要なんて！！大体、おめぇもなに言ってんだよ！そこの魔導師！！」

「私を魔導師などと言ってくれるな。私はれっきとした死神だ。そして自称・・・“白翼の魔導死神白鳥礼二”。高貴にして華麗とは、私の事だ。」

「あの人・・・かなりの自信家の様だね、兄さん。だけど、よくよく考えたら魔導死神って僕らの想像以上に強いって聞くよ。」

「ああ。ちょうどいいや。アル、お前はウザい大人の連中を叩け。俺はこっちの餓鬼どもの面倒を見る。どう料理するかは好きにしろ」

「うん。兄さんの期待に応えるように頑張る」

二人は互いに役割を決めると、エドは右腕のオートメイルとをパトに変化させ、アルはその巨体を活かして格闘術の構えを取る。

二人が戦闘体制となると、対峙していた十人も顔を渋らせる。

「とうとうこの時が来てしまいましたね・・・」

「そうだな。早く先に進まなければならぬのに、面倒な事だ。」

「早い話ぶっ潰せばいいだけだろ。受けて立つだけだ。」

「やれやれ・・・戦う相手はもう少しスマートな者が良かったのだが・・・何故私があのようなちんけな子供と・・・」

「だ、誰が子供だコラ!!!!!」

「に、兄さん!落ち着いて!!」

最初から最後まで白鳥の言葉に踊らされ、激しい怒りを募らせるエドとそれを冷静に対処しようとするしっかりものの弟、アルであった。

◇

〈ユーノＳｉｄｅ〉

一方、フェイトとも別れ三人で奥へと進むこととなったユーノ・なのは・銀時だったが、ユーノは二人の力の温存の為に一人向かってくる敵に果敢で行く。

「てあああああああああああ！！」

魔力・霊力ともに封じられた身でありながらそれ以前に鍛え上げられた超人的な身体能力と友より譲り受けた逆刃刀を使い、疾風怒濤の如く勢いで漫画キャラを一掃するユーノ。

ユーノは前を見据えると、以前自分たちの進行を阻みに来た漫画キャラを見て、思わず舌打ちをする。

「ち。ごちゃごちゃ五月蠅い奴らだ。飛天御剣流・・・」

そう言うと、ユーノは空中へと飛び上がり壁を蹴ってから助走をつけると漫画キャラの一部分のみを狙い集中乱撃する。

「龍巣閃・咬（がらみ）！！」

攻撃を受けると、その漫画キャラの爆発に伴い周囲の漫画キャラにも派生していき、更にユーノはその状態からの攻撃に転ずる。

「序でにこいつも喰らえ！」

ユーノは空中できりもみ回転しながら瞳に映る漫画キャラ全体を斬りにかかる。

「飛天御剣流『天龍閃（てんりゅうせん）』！！」

神速の斬撃が叩きこまれ、切り刻まれる漫画キャラ。

辺り一面に多量の紙屑が散らばる中、ユーノの後ろから銀時を抱えて追いついてきたなのは、そして銀時は肩で息をするユーノの事を心配した。

「おい、ユーノ！」

「ユーノ君、無茶しないで！まだ身体の方だって・・・」

「は、は、は・・・大丈夫だよ。これぐらいどうってことない。センターや後衛の魔力温存も前衛の仕事の内だってことは知ってるはずだよ。」

「だけど・・・！」

ユーノの正当な意見を耳にするも、それでもユーノの身体の事を気にするなのは。

その横で銀時も渋い顔を浮かべる。

「ユーノ――――――ん？」

と、その直後三人の元に機動六課のはやて、浦原からの直接通信が入る。

『なのはちゃん、ユーノくん、銀さん！』

『スクライアさん。高町サンと坂田サンもご無事なようですネ。』

「はやてちゃん、浦原さんも。」

『アタシの方で色々とやってみたところ、漸く玉座の間の志村サンとカトゥーンのいる場所・・・その詳細ルートが判明したところっス。今そっちに送ります。』

浦原はそう言うと、判明したカトゥーンキャッスル内部の玉座の間、そしてカトゥーンの潜伏地点を示した詳細ルートを送り、送られてきた画像を見た三人ははっとした表情になる。

「！こいつは・・・」

「真逆方向・・・！？」

そう・・・送られてきたデータによれば、今ユーノ達がいる地点と玉座の間は真逆方向にあり、現在彼らが進んでいるのはカトゥーンの潜伏している場所のルートであった。

ユーノはデータを確認すると、はやてに本局の動きを尋ねる。

「はやて。本局の突入隊は、まだ揃わないのかい？」

『リンディさんから連絡受けたけど、どんなに頑張ってもあと一時間はどうしてもかかるそうや・・・』

ユーノはそれを聞くと、深いため息をつきこう言う。

「はぁ。仕方ない・・・――――」

「「！」」

その言葉に思わず耳を傾け危惧の念を抱いたなのはと銀時。

ユーノは二人や通信画面のはやて達にこう提言してきた。

「なのはと銀さんは一緒で、僕は一人になって別行動で行くよ。」

『え！ちょ、ちょ待ってよユーノくん！？そんな無茶な・・・！ユーノくん、人の話聞いて――――』

ユーノははやての言葉を聞き流し、一方的に通信画面を閉じると徐に目を閉じ、なのは達もまたユーノの言葉に耳を疑った。

「ユーノ！お前！！」

「ユーノ君！！どうして！？」

「玉座の新八君とカトゥーン。片方をどうにかできてももう片方を止めることが出来なければ、何の解決にもなりはしないさ。それにプリズムシードの事もある。こうしてる間にも、いろんな場所で外の世界の平穏も乗り込んできたみんなの命も危なくなってる。」

「でもユーノ君。病み上がりな体なのに、ここまでの消耗が・・・！」

と、なのはがそう言った直後ユーノは振り返り自信に満ちた表情で逆刃刀片手にこう返事をする。

「だから僕がカトゥーンの元へ向かう。なのはは銀さんと一緒に新

八君をさっさと助けてに行って上げて。」

「でも！！」

「相も変わらず心配性だね、なのはは。僕が次元世界や管理局で何て呼ばれてるか知ってるでしょう？“管理局随一の頭脳を兼ね揃えた次元世界最強の男、翡翠の魔導死神ユーノ・スクライア”。最強とかって呼ばれるのは嫌いだし、今は力を封じられてるから違うけど、少なくともこんな訳の分からない場所で死ぬような魂（タマ）じゃないさ。それに約束したばかりだよ。二人を信じて頼んでるんだ。」

「ユーノ君・・・・・・」

「――――――」

思わず言葉を詰まらせてしまうなのはと銀時。

「ふん」

ユーノはそんな二人の顔を一瞥し、鼻で笑うとそのまま前へと歩き出す。

「あ！」

「ちょっと漫画に現を抜かすバーチャルボーイに叱咤してくる。新聞でも何でもいいから少しは活字を見ろってね♪さっさと終わらせて、次元震も止めて、こんなバカ騒ぎ終わらせるんだ。」

「ユーノ君――――――」

なのははユーノの言葉を聞いて、間を置いてから思わずユーノの元へと駆け寄りユーノの背中に自分の両腕を回してユーノを抱きしめる。

「！」

なのはのいきなりの行動に驚き、身体を硬直させたユーノ。

「なのは・・・・・・？」

すると、なのははユーノの背中に顔を沈めながら今にもすすり泣きそうな声で言う。

「死なないで――――――――お願いだから。」

なのはのその言葉を聞くと、ユーノもそれに応える。

「――――ああ。僕は死なない。」

ユーノは返事をした後、なのはの腕を優しく解きなのはを表情で説得させると、後ろの方で口を閉ざしてじっと見ていた銀時に言う。

「銀さん。」

「何だ」

「新八君を、必ず助け出してください。」

「――――ああ。」

銀時はユーノの言葉に真っ直ぐくな瞳でそう答える。

そしてユーノは二人の事を信じて、その場から歩き出していき、その後ろ姿を見ながらなのはと銀時はこう言う。

「気を付けてねユーノ君！絶対、死じゃ駄目だよ！」

「万が一約束破ったときは、てめぇのその顔面にパンチ食らわせてやるよ。行くぜ、なのは」

「はい！」

なのはは銀時を抱えると、玉座の新八の元目掛けてフライヤーフィンを羽ばたかせて飛んでいく。

二人がユーノの元から飛び去っていくと、ユーノは徐に振り返り誰もいないその場所でこう呟いた。

「――――上等だよ。」

彼ら三人がそれぞれのルートで進行したという報せは直ぐに機動六課の元へと伝えられ、管制室のシャーリーはその旨を司令室のはやて達に通達。

『ユーノ先生がカトゥーンの潜伏地点に、なのはさんと銀さんが玉座の間の新八さんを助けにそれぞれ別方向で向かいました。』

はやて、コン、ヴィヴィオはそれを聞くとそれぞれ険しい表情を浮かべるばかりであった。

「なのはちゃん・・・ユーノくん・・・銀さん・・・」

「ユーノ・・・」

「ママ・・・パパ・・・」

この先、果たして彼らの身にどんな苦難が待ち受けているのだろうか――――――

〈土方Ｓｉｄｅ〉

さて、カトゥーンキャッスル内部で繰り広げられる激闘のうち、とりわけ見ものとも言える真選組土方十四郎とテトラカトゥーン斎藤一の世紀の一戦。

土方の自信にあふれかえった表情を目の当たりにした斎藤一は、鼻で笑うと次のように言葉を返した。

「フン・・・お前が俺に勝った時か？その意気ごみに水を差すようだが、俺はこの牙突を絶対の技にまで昇華させてから今日まで、あらゆる敵を刺し貫いてきた。勿論お前もその一人さ。」

「あんときは随分と虚仮にされたが、そんなことはこの際どうでもいいさ。」

「そうか。だが詰まる話貴様の剣では俺には勝てぬ。」

「ああ、よく分かったよ。だがそう言う話は死んでからあの世で口にすることだな。過去にどれだけの剣士や化物と闘って来たかは知らねぇが、俺とお前はあの時初めて遭ったんだぜ。それから大分時

間は経っちまったが、それもここで片が付く。さぁ、とっとと始めようぜ。」

「口先だけは切れる奴だな。」

斎藤はそう言うと、牙突の構えを取るや否や勢いよく土方目掛けて突進してきた。

「そりゃどうも。簾頭」

土方は二本の剣で斎藤の牙突を受け切ると、その状態から斎藤は不敵な笑みを浮かべて言う。

「何分もつかな?」

「お前がな」

同じ様に不敵な笑みで言葉を返す土方。

狼と狼が己のプライド、または正義をかけて熾烈を極めた戦いを繰り広げる。

「ふん!」

斎藤は土方から距離を取ると、低い体勢から下半身の発条を使って牙突を仕掛け、土方は目にも止まらぬスピードの刺突を皮一枚のところで受け止める。

「ぐう!」

斎藤の牙突は驚異的な力を発揮し、土方を後方へと容赦なく後退させる。

「は！」

そして、斎藤は土方目掛けてがら空きとなっている腹部に蹴りを入れてきた。

「おっと！」

土方は斎藤の行動を読んで即座に反応し避けることに成功。

その後二人は互いに刀を使った斬撃と刺突の攻防を繰り返す。

「「おおおおおおおお！！！」」

手に合わせ握る一瞬の判断が勝負の行方を握る剣士と剣士の戦い。

土方は斎藤が繰り出してきた斬撃を受け止めると、今度は逆に土方が斎藤のがら空きの腹部に蹴りをヒットさせる。

「ぐ！」

「喰らえ！」

土方は腹の一撃を受け隙を見せた斎藤の顔面目掛けて刺突を繰り出してきた。

斎藤は皮一枚のところでそれを回避し、大きく後方に下がって土方と距離を置く。

と、その瞬間前方の土方は三本の刀を見覚えのある構えを取って待機していた。

「！」

「鬼・・・・・・斬り！！！」

土方が最も早く会得した漫画ワンピースの某剣士キャラが扱う三刀流の技、鬼斬り。

斎藤はその攻撃を食らうと体勢を崩していった。

そして、鬼斬りに続いて土方はその場から高く飛び上がり体を回転させながらもう一つの技をお見舞いする。

「虎・・・・・・狩り！！」

虎狩りが斎藤の身体に叩きこまれ、その瞬間土煙が巻き起こる。

土方は地面に着地すると、荒い息をしながら徐に口の刀を外し刀を鞘に納めると、土煙の中にいる筈の斎藤の死に際を確かめる。

すると、晴れていく煙の中から現れたのは・・・致命傷はおろかほとんど切り傷のついていない不敵な笑みを浮かべて斎藤一であった。

あの時、斎藤は土方の攻撃を全て見切り、ギリギリのところですべて回避していたのだ。

これには流石の土方も冷や汗をかくばかりだった。

「フン。生憎だが、一度見た技は二度と喰らわないのが俺のポリシーなんでな」

「ち。痣一つ残らねってのは、ちょっとショックだな。これだけ手ごたえを感じて立ち上がられるのも初めての経験だよ。」

「そりゃそうだろ。言ったはずだ。同じ新撰組でも、俺とお前では見て来たものが違うからな。」

「へ。違いねぇ」

すると、斎藤は頭上の方から刀を構えて、猛烈な勢いで突進して行った。

「牙突・弐式！」

土方はその軌道を瞬時に読んで回避するが、額には一粒の汗がにじみ出ていた。

「ぐ！」

「フン！」

斎藤は上手く攻撃を躱した土方の隙を突いては刺突を入れようとしてくる。

と、その時土方は戦いの間際で今の今まで気づいていなかった牙突の最大の弱点を見つけ出す。

「そうか！」

斎藤の奇襲攻撃を躱した土方は斎藤の刀を受け止めながら頭の中で牙突の性質を整理し始める。

「（こいつの牙突は、照準と突き手の反動荷重を兼ねて前方に突き出す。右腕は言わば牙突の最大の特徴にして最大の弱点！その右腕の外側に生じる一瞬の死角に滑り込めれば、勝機はある！）」

そう判断した土方は牙突を繰り出そうとしてきた斎藤の死角である右腕部分に素早く回り込み、完全に隙だらけとなった箇所目掛けて二本の刀で刺突を繰り出す。

「貰った！！」

その瞬間、土方の繰り出した刺突が斎藤の右腕を貫き、斎藤は右腕から肩にかけて血を吹きだし、一護両者は距離を置く。

「・・・」

沈黙し土方を凝視する無表情の斎藤と、勝機を見出し気分が高まる土方。

「へ。どうよ？自分の技を見切られる気分は？牙突はその性質上、どうしても右側面の一点に死角を持つ。加えて牙突の様な強烈な突撃技は繰り出している最中に視界が極端に狭くなる。だから一度死角に滑り込まれるといかにあがこうとどうしても反応が一瞬遅れちまう。いくらてめぇが先読みして横薙ぎの追加技に派生しても、てめぇの剣は俺に届かねェさ。」

すると、そんな土方の御高説を聞いた斎藤は無表情のまま呟く。

「・・・・・随分と楽しそうだな」

「まぁな。勝機が見えるとついな。戦いの最中に笑うなんて、剣士とは無礼千万だってことは重々承知。けどな、強敵を前にして勝機が見るとやっぱり気分が高揚しちまうんだ。」

そんな土方の言葉を聞いた斎藤は、再び牙突の構えを取ると些か機嫌の悪い様子で返事を返す。

「勝利と言う愉悦欲しさに戦いに身を投じてるクチだな。真選組の鬼の副長が聞いて呆れる。だったら同じ新撰組としてひとついいコトを教えてやる。勝利の前に一度、正悪に目を向けてみろ。そうすれば負け戦と手それなりには楽しめるぜ」

斎藤はその直後、負傷した右腕の傷などお構いなしに真正面から土方に向かって突進し、土方もそれに受けて立つ。

「ぬかせ!戦は勝ってこそすべて!勝たなきゃなんの意味もねぇ――」

と、言おうとした瞬間土方の顔面に斎藤の右手が伸びてきた。

「!?」

そして、そのまま土方の顔を力いっぱい鷲掴みにする斎藤。

「ブァ・・・ガッ」

「どうした？これしきでもう笑えんのか？」

「（ば、馬鹿な・・・！こいつ！！）」

「勝ち戦でしか笑えんような男の軽口など、俺には耳障りなだけだ。これ以上は付き合い切れん。」

そう言うと、斎藤は鷲掴みにした土方の顔面を潰しにかかり、土方は口から血を吹き出す。

「ブギィッ」

「吹き飛べ」

斎藤は発条を使って勢いをつけると牙突を繰り出し土方を後方へと吹き飛ばした。

斎藤の静かなる牙とその鋭さに不意を突かれ壁に激突した土方。

壁は牙突の威力に圧倒され、空しく崩れ落ちていく。

瓦礫の下敷きとなってしまう土方は全身から血を流しながら、心臓の音を高鳴らせ心の中で呟く。

「（鍛錬なら、誰よりも積んできた・・・命を削るような窮地にも、幾度となく立ってきた。だが――――――）」

『俺がお前に勝った時・・・・・俺は牙突を斬った真の真選組最強の男になってるって訳だ』

『俺はこの牙突を絶対の技にまで昇華させてから今日まで、あらゆる悪を刺し貫いてきた。』

「（俺に足りねぇものは何だ！？）」

今の自分に決定的に欠けているものが見いだせない土方。

そんな土方の脳裏に決戦に臨む前の機動六課でのとある一コマが浮かんできた。

◇

〈回想シーン〉

それは、土方が三刀流の技をものにするために隊舎の外の方で自主的な鍛錬に励んでいた時の様子だ。

「鬼・・・斬り！！」

土方が構えを取って目の前の対象部を切り刻むと、その時丁度訓練の様子を見ていた新八が拍手喝采し素直に褒めたたえる。

「うわあ！凄いですね土方さん！本当にワンピースの真似しちゃうなんて！」

「ふん。これぐらいどうってことねぇよ。ま、てめぇんとこの大将にはこんな真似出来ねぇだろがな。」

「あはは。それ銀さん聞いたら怒りますよ。でも本当にすごいな・・・土方さんは何だって斬れちゃんですから。」

と、新八が何気なくそう言った時だった。

その言葉を聞いたユーノ・スクライアが何処からともなく二人の前に現れた。

「何だって斬れちゃう？本当にそうかな・・・――」

「あ？」

「あ、ユーノさん。」

「どうも♪稽古頑張っているようですね。」

二人の前に現れたユーノはいつものと同じ、何処か飄々とした様子で立ち尽くしていたが、土方は刀を納めると少々不機嫌そうな表情で先ほどの言葉の意味を問いただす。

「おい。何だよそいつは？どういう意味だよ・・・」

「気に触っちゃいました？それでしたら謝ります。軽率でした♪ですがね――――――ちょっと言っておいた方がいいことがありましてでね。」

「土方さんに言っておいた方がいいことですか？」

新八がそう言うと、ユーノは徐に懐から一枚の髪を取出し訝しげにそれを見つめる新八と土方に言う。

「いいですか、土方さん。新八君もこの紙をよく見てご覧よ♪」

「？」

「あ、はい・・・」

ユーノの行動の意味をまるで予想できない二人。

そんな二人を余所にユーノは徐に晩翠を抜き、紙を宙に放り投げると降りてきた紙に狙いを定めてあからさまな動きでそれを斬ろうとした。

「どらあああ！」

しかし紙は切れることなくユーノの足元にそのまま落ちていて行き、土方はそれを呆れかえりながら指摘する。

「お～いユーノ・・・斬れてねぇぞ」

するとユーノはその指摘を受けると飄々とした様子で髪を拾い上げ、晩翠を納めてからこんな事を呟く。

「ははは♪いいですか土方さん。世の中にはですね・・・・・・“何も斬らないでいることが出来る剣士がいる”んですよ。」

「何も斬らないでいることが出来る剣士・・・？」

ユーノのその言葉を聞き、復唱する新八。

「そうさ。だけど、その剣士は鋼鉄だって何だって斬れる。同じ“刀”でね」

ユーノはそう言った後、背中を向けて頭上の空を仰ぎ見ながらこのような言葉を残す。

「“最強の剣”とは、守りたいものを守り、斬りたいものを斬る力。触れるものみな傷つける様な剣は・・・僕はね・・・剣だとは思わない。分かりますか？」

「「・・・・・・――――――」」

そんなユーノの言葉を聞いていた二人は長い長い沈黙を保ち、ユーノ自身も二人の方に振り返ると柔かい笑顔を向ける。

そして、秋風が唐突に吹いてから鳥の鳴き声が反響したのち、土方はユーノの言葉を聞いていたのにもかかわらずこう言う。

「――――そうか。じゃあ俺は何でも斬れる剣士になってやるよ」

「土方さん・・・話を聞いてました？」

◇

脳裏に浮かんできたその一コマを思い出した土方は持ち前の高い生命力と斎藤に負けたくないという意地から自力で立ち上がり、自分を下敷きにしていた瓦礫を落ち上げ歯を食いしばる。

そんな土方の様子を見ていた斎藤は無表情のまま腕組み一つに言う。

「フン。さっさと俺に致命傷でもつけてみろ。受けてばかりじゃ、牙突も俺の身体は斬れねぇぞ。」

「・・・生憎だが・・・お前には、俺が牙突を斬る勇姿は見せられそうにねぇ・・・！俺が牙突を斬る時は・・・お前がくたばる時だからな・・・！」

「フン。もっともだ。」

斎藤の返事が自分に返ってくると、直後土方は持っていた自分の身の丈を超える巨大な瓦礫を勢いよく斎藤に向けて放り投げる。

「うらあああああ！！！」

「何もかも――――――――微塵に斬り裂いてやる！」

斎藤は飛んで来た瓦礫に物怖じ一つせず、牙突の構えを取って迎え撃とうとする。

そして、土方は自分の刀を握りしめ満身創痍な体をふらつかせながら心の中であの時の一コマを思い出し呟く。

「（何一つ・・・斬らない剣・・・か）」

ユーノのこの意味深長な言葉の意味とは果たして何なのか――――――

窮地の土方はその意味を正しく理解することが出来るのだろうか――――――

◇

〈恋次チームＳｉｄｅ〉

さて、土方が窮地に陥る中、土方を信じつつも城の奥へと驀進する恋次達七人は目の前の漫画キャラを退けていた。

「退け！！！！！！」

恋次は蛇尾丸の一振りで漫画キャラを斬り裂き、それに続いて近藤も豪快な一撃を放つ。

「どりゃあああああああ！！！」

一刀両断された漫画キャラは紙切れとなって地面に落ちる。

その一方で神楽、総悟、ルキアも着実に数を減らす。

「わちょおおおおおおおお！！」

「ほおおおおおおおお！！」

「初の舞・月白」

爆発や轟音がひっきりなしに鳴り響く中で彼らは暴れまくり、一通りの敵を退けると一目散に奥の道へと突き進む。

「新八！！！何処アルか！？その辺にいるんなら返事ぐらいしろよなダメガネ！！」

「内部空間がここまで入り組んでいるとは、正直思ってなかった。これは時間がかかるぞ」

吉良はそう言いながら、まるで迷路の如く入り組んだ内部を見て眉間に皺を寄せる。

「しかし長い時間を割いて虱潰しに探している暇はないぞ。こうしている間にも、新八君がどうなるか分かったモノじゃない。」

と、その時奥の方から物音を感じ取った総悟が表情を一変。

「!近藤さん、何か聞こえてきやすぜ。」

「何?」

七人はその場に立ち止り、物音に耳を澄ませると徐々に物音ははっきりとそして大きくなっていく。

「なんだ・・・この音は・・・」

七人は段々と大きくなっていく物音を聞きそれぞれの武器を構えると、直後聞こえてくる物音の方角からではなく、地下より奇襲が仕掛けられる。

「「「「「「!」」」」」」

足元より飛び出してきたのは、テトラカトゥーンのうずまきナルトだった。

「螺旋丸!!」

七人はナルトの攻撃を何とか避け、周囲に散らばるがその時ナルト

の陽動で隙を窺っていた春野サクラが壁を突き破って現れる。

「しゃんなろおおお!!!」

恋次はサクラの攻撃に逸早く気づくと、蛇尾丸で強烈な打撃を受け止め、どうにか急所への攻撃を避け、後方に下がる。

ナルトとサクラは隣に並ぶと、不敵な笑みを浮かべて彼ら七人の前に立ち塞がる。

「ち。上手く躱したか。」

「一撃で仕留められとは思っていないわよ。でも結構やるじゃないの。」

「うずまきナルト!春野サクラ!」

「く・・・相変わらずとんでもねぇ奴らだ・・・今の一撃がここまでとは・・・」

総悟はそう呟きながらナルトの螺旋丸、サクラの怪力の余波を食らった大きく陥没した箇所を見て顔を歪め、他の面々も武器を構え直して二人に向き合う。

「想定していた最悪の事態の一つがやってきてしまったか。」

「ここはやっぱ、やるしかねぇか?」

「ああ。主力戦力を削れば残りはゴミみたいなものだからな。」

「しかし、本当に僕らでやれるのだろうか」

吉良が不安げな様子でそう言うと、近藤は剣の切っ先を二人に向ける。

「今更怖気づいたところで何も始まらん。剣に生き、剣に死ぬと決めた者なら覚悟を決めろ。必ず俺達はやつらを倒し、新八君を救出する！」

「どうやら覚悟は決まったみたいだってばよ。そんじゃ、俺も本気を出させてもらうとするぜ。」

「あまり無茶はしないでよね。」

「分かってるってばよ。はあああああああああああああああああ！！！！！！！！！！！！！」

ナルトはサクラに返事を返すと、仙術とは、体内にある精神エネルギーと身体エネルギーの他に、外から自然エネルギーを体内に取り込んで成り立つ術「仙術」を発動させる。

「く・・・！これは・・・！」

ナルトの急激なチャクラの上昇に驚かされる中、ナルトは仙術の発動を完了させ、仙人モードと呼ばれるモードに完了させる。

「仙人モード・・・完了」

独特の隈取りが特徴の仙人モードとなったナルトの戦力は比べ物にならないぐらいに上昇しており、それを雰囲気で予期した七人は思

わず一歩引いてしまう。

「本気って訳か。だったら――――！」

恋次はナルトの仙人モードに対抗するため、こちらも奥の手である卍解を発動。

「卍解！！！狒狒王蛇尾丸！」

恋次の背後に現れた狒狒王蛇尾丸の姿を前に、サクラはため息がてらこう言う。

「相も変わらずぶっ細工な卍解よね。蛇だか猿だかどっちかにしてよ。」

「何だと！」

思わずその言葉に反応し、怒り心頭の恋次。

ナルトは軽く準備体操をしながらサクラと共に七人を睨み付ける。

「俺達を敵に回したのがお前らの運の尽きだったな。悪いがここから先へは遠さねェ。」

「全員纏めて昇天させてあげるわ。」

サクラはそう言いながら戦闘用のグローブをはめ、不敵な笑みを浮かべる。

それに対して恋次達もまた武器を構えて二人に向かおうとしていた。

「出来るもんなら・・・やってみやがれ！！」

「真選組の誇りにかけて、通させてもらうぞ！！」

「私らは急いでんだよ。ガキはとっと用でも足してればいいネ！」

彼らは暫く睨み、硬直状態を保つと一斉に飛び出して行き全面戦争を勃発させる。

「「「「「「「「ほおおおおおおおおお！！！」」」」」」」」

「「はあああああああああああ！！！」」

今ここに、忍者・死神・侍の血で血を争う世紀の一戦が勃発する。

◇

〈なのは・銀時Ｓｉｄｅ〉

恋次達がナルト・サクラと熾烈な争いを繰り広げ始めた丁度同じころ、銀時はなのはと共にユーノとは別れて玉座の間の新八の元に急いでいた。

なのはは銀時を抱きかかえながらアクセルシューターを自動操作し襲い掛かる漫画キャラアやギャオスたちを一掃していく。

「この先に、新八君が・・・」

「新八――――――――待ってろ」

だが、そんな飛んでいくなのは達の姿をずっと監視している三人の女性がいたことに、二人は気づいていなかった。

女性の内の一人がなのはの姿を捕えると、徐にこう言う。

「ふふ・・・来た来た。あれが白き魔王じゃないの？」

彼女が不敵な笑みを浮かべてそう言うと、それに反応して残りの二人もそれぞれ応える。

「思ったよりも綺麗な人だね。」

「あれでお子さんがいるとはとても思えませんが、あの方に果たして本当に母親として名乗るだけの器があるのでしょうか。」

「それに、翡翠の魔導死神の恋人と呼べるかどうかも・・・ね」

すると、徐に赤髪の女性が立ち上がると、右拳を握りしめてから仲間である二人に向かって移動を促す。

「海ちゃん。風ちゃん。行こうか。」

「「ええ（はい）」」

三人は早速その場から移動し、なのは達の元に急いだ。

なのは達が移動を開始して数分後、なのはは飛行を続けて邁進している内に城内複数個所にある広間の内の一つを通りかかる。

と、その時なのははは周囲から感じ取れた巨大な魔力反応を確認し、思わずその場に足を止める。

「！」

「どうしたなのは！？」

抱きかかえられていた銀時が尋ねると、なのははは険しい表情で答える。

「く。また追っ手のようです。」

「何！」

銀時が驚きながらそう言った直後、二人の耳元に足音が聞こえて来て、徐に広間の奥の方にある階段から三人の女性が下りてきて声をかけてきた。

「白き魔王・・・高町なのはと」

「白夜叉・・・坂田銀時さんでいらっしゃるでしょうか？」

「誰だ！」

銀時がどすの利いた声でそう言うと、怪談から降りてきたのはセーラー服に非常に酷似した防具に身を纏った女子中学生三人だった。

一瞬驚く二人と会い見えた三人のうち、メガネをかけた緑の防具に身を包んだ女性が懇切丁寧に自己紹介を始める。

「ようそこカトゥーンキャッスルへご来場いたしましたね。私、鳳凰寺風と申します。」

風が自己紹介を済ませると、残りの二人・・・青と赤の頭髪に防具を身に付けた二人も便乗する。

「龍咲海よ。」

「そして、獅堂光。三人合わせて・・・」

光がそう言うと、三人は肩を寄せ合い自分たちの正体を暴露する。

「「「魔法騎士レイアース！」」」

「マジックナイト・・・レイアース・・・？！」

「たく。どいつもこいつも人の邪魔ばかりしやがって・・・つうか何だよてめぇら。マイナーすぎて分かんねぇよ俺。どうせならセーラームーン出しやがれコノヤロウ。」

「私達もこれでもれっきとした女子中学生よ。失礼しちゃうわ」

時代錯誤を感じる銀時の言葉を聞き、些か不機嫌な表情となる海。

「ただ違うのは、どこかの魔王さんと同じで魔法が使えるって事。」

「く・・・」

魔王と言う言葉人反応し、なのはは思わず険しい表情を浮かべ、そんな彼女の顔つきの変化を見ていた風は冷静にこう言う。

「強要はしませんが、大人しく退けば命は助けてあげます。ですが退かなければ――――――」

二人を退かせるつもりでそう言おうとした直後、なのははカートリッジを装填し魔力砲撃の体制となる。

〈Ｌｏａｄ　Ｃａｒｔｒｉｄｇｅ〉

「エクセリオンバスター！！」

なのはは容赦なく三人目掛けてエクセリオンバスターを発射。

三人はそれを回避し、突然のなのはの行動に銀時は驚いた。

「なのは！」

「銀さん、先に行ってください！新八君を早く！私がここを押さえてるその隙に！」

「だ、だけどよ・・・！」

なのはの言葉にためらいを見せる銀時。

しかしなのはは銀時に対して強い口調でこう言う。

「いいから！お願い早く！ユーノ君だって、きっと同じこと言います！！」

「！わ、分かった！」

ユーノと言う単語を聞き、決心がついた銀時はなのはを信頼して新八の元に急ぐべく広間へと続く階段を伝って走り出す。

「ああ！ちょっと待ちなさいよ！」

“炎の矢”！」

光は左手のブレスから炎を生み出し、走り去ろうとする銀時に向かって攻撃をしてきたが、それを察知したなのはは素早く防御を展開。

〈Ｐｒｏｔｅｃｔｉｏｎ〉

光の攻撃を凌ぎ切ると、なのははレイジングハートを構えて毅然とした表情を浮かべ言う。

「あなた達の相手は私よ。銀さんには手出しさせない。」

「あらら♪怖い顔して。これだから魔王って嫌になるのよね・・・」

「だけどザガートよりは幾分マシだよ。」

「そうですわね。彼女の場合は、ザガートの数十倍・・・いえ。数万倍もたちが悪いのですから。」

三人はそう呟きながら、一人で相手をすると言い出したなのはの前に立ち、防具を強化させそれぞれ特徴ある甲冑に変化させると、不敵な笑みを浮かべつつ言う。

「マジックナイト三人を相手にして、誰のサポートなしで何処まで

ついてこれる？」

「私達の魔法とあなたの魔法とじゃ格が違うって事、教えてあげる。」

「序でに、あなたがこれまで犯してきた罪の重さも今ここではっきりさせてあげますわ。あなたの最も大事な人をあなた自身の手で犯してきたその罪を――――――」

「！」

風の言葉に思わず過剰に反応するなのは。

今の彼女にとっての一番大切な人、ユーノに抱える彼女自身の贖罪の念。

そんな事を蒸し返され思わず顔を沈めてしまうなのはだが、暫くしてから顔を上げこう言う。

「・・・私の罪・・・ユーノ君への罪・・・確かにそうだ・・・私はこれまで数えきれないぐらいユーノ君に酷い事をしてきた・・・我儘ばかり言って・・・自分の事ばかりに目を向けて・・・ちゃんとユーノ君の事見てなくて・・・挙句に・・・とうとう壊すまで追い詰めた・・・／／／」

なのはの手が小刻みに震え、動揺を抑え込めていないことがうかがえるが、それでも彼女は決意を固めこう宣言する。

「犯した罪が消える訳じゃない・・・許してもらおうとも思ってない・・・だけど・・・それでも私は逃げるなんてもう嫌だ！逃げて

ばかりじゃ、一生罪の償いの答えは出ない！ユーノ君の事守るって決めたんだもん！だから私は戦う。大事な人との約束を守るために、その大事な人が守りたかったものを守るために！」

なのはがそう言うと、聞いていた愛機レイジングハートは不安げな音声でなのはに尋ねる。

〈Ｍａｓｔｅｒ〉

「大丈夫。ブラスターはもう二度と使わない。きっちり全部片付けよう。ユーノ君の・・・私達の絆の力で！」

なのははあらかじめユーノと約束していたブラスターモードの金輪際の使用禁止を固く誓うと同時に、彼が自分に託してくれた新たなる力、ＡＲカートリッジを取出しそれをレイジングハートにセットする。

〈ＡＲ　ｃａｒｔｒｉｄｇｅ　ｓｅｔ　ｕｐ〉

カートリッジをセットすると、レイジングハートの形状が変化し、刀剣上のマキシマムブレイドへと移行する。

「行くよ、レイジングハート！」

〈Ａｌｌ　ｒｉｇｈｔ〉

なのはは三人にマキシマムブレイドの先端を突き付けると、濁り気のない決意と覚悟の籠った瞳でこう言うのであった。

「全力全開であなた達を倒します！」

「大型次元震」発動まで、あと２時間１６分。

苦しい時の神頼みなんてもんは当てにならない（後書き）

教えて、ユーノ先生！

ユ「今日は映画『クレヨンしんちゃん　暗黒タマタマ大追跡』のオカマ兄弟についてだ♪」

ユ「通称珠由良（たまゆら）ブラザーズの長男ローズ、本名たけしは見た目にたがわずかなりのマザコン。ラベンダーは3人の中で最も容姿が女性に近い。三男レモンは三人の中では唯一の霊力を持っている。」

ユ「と言うか・・・何で僕がオカマの解説をしないといけない訳・・・」

そう思って何気なく言葉を漏らした直後、ユーノの周りにたまゆらブラザーズ三人が集まってきた。

ロ「あら♪この子結構可愛いじゃないの？」

ラ「ねぇあんた。私達の店で一緒に働かない？」

レ「歓迎するわよ。」

ユ「い、いいですよ僕は！！僕にそう言う趣味はありませんから／／／」

青ざめた表情で全力で拒否使用するユーノだが、なお詰め寄るたまゆらブラザーズ。

ロ「またまたそんなこと言って。本当は好きな癖に♪」

ユ「好きじゃないから！！！お願いだから頬を赤くしないでくれる！！！」

と、その時別な場所からもオカマが参上。

女顔のユーノを誘惑する。

オ「僕、一緒にやってみましょうよ。楽しいわよ♪」

オ「一度やってみれば嵌るわよ？」

有象無象と増え続けるオカマの集団に押しつぶされ、ユーノは悲鳴を上げる。

ユ「誰か！！！！！！！！何とかしてくれ！！！！！！！！！！」

魔導師図鑑ハイパー！

ある時、鬼太郎と浦太郎は怪しげな店を訪れ、ショーウィンドーの中のナイトスコープと呼ばれる代物を凝視していた。

鬼「“お買い得これで暗闇バッチリ”！！のナイトスコープ・・・１２万と５千円か・・・」

浦「やっぱ高いもんだね。」

と、その時二人を見かけた店員が近づき――

店「あ、これお買い得ですよ。」

鬼・浦「あ！」

慌てて何も見ていないふりをする二人に店員は不敵な表情で話しかける。

店「もう、夜の公園なんかばっちり。」

鬼・浦「え！夜の公園！！」

思わず口を揃える二人。

店「これね・・・頭に付けられるから両手が自由ってことなんです。で、つまり・・・抜きたい放題って訳！」

浦「抜きたい放題！？」

店「おたくら・・・“覗き”でしょ？」

スコープ越しに店員がそう言うと、鼻の下を伸ばしていた二人は我に返り、取ってつけた言い訳をする。

鬼「の、覗き！？と、とんでもない！僕達バートウォッチングだよな！？」

浦「そ、そうそう！小鳥ちゃんの観察で～す・・・ははははは！！！！」

そんな二人の現場を偶然にも目撃していた一護とユーノは唖然とし

こう言う。

ユ・一「最低だな・・・」

次回予告

続く闘い。

傷ついていく六課メンバー

銀時は我を失くし、異形の姿となった新八と対峙する。

なのはもまた戦いの間際、魔導師としての自分を疑い出す・・・立ち向かう痛みと立ち向かえない痛み・・・

エ「次回『理性じゃ斬れないものがある』」

漫画キャラ紹介

ローズ

声一　郷里大輔

映画『クレヨンしんちゃん　暗黒タマタマ大追跡』に登場するオカマの三兄弟、珠由良ブラザーズの長男。本名は「たけし」。マザコン。大柄な体躯とピンクの服が特徴。怒ると声が変わる。寝る時は指を銜える。ヘクソンのような男が好みのタイプらしい。

ラベンダー

声一　塩沢兼人

映画『クレヨンしんちゃん　暗黒タマタマ大追跡』に登場するオカマの三兄弟、珠由良ブラザーズの次男。本名は「つよし」。緑色のチャイナドレスが特徴。３人の中で最も容姿が女性に近い。ローズを「おにいたま」と呼ぶ。主に弟のレモンと行動を共にすることが多い。

レモン

声ー　大滝進矢

映画『クレヨンしんちゃん　暗黒タマタマ大追跡』に登場するオカマの三兄弟、珠由良ブラザーズの三男。本名は「きよし」。黄色の服と厚い唇が特徴。霊力を持っており、物語の序盤でひまわりが珠を誤飲したことを見抜いた。みさえの事を「おばさん」と呼んだ。

アルフォンス・エルリック

声？　釘宮理恵

漫画『鋼の錬金術師』の登場人物で、エドワード・エルリックの弟。通称「アル」。１０歳の時、亡くなった母を生き返らせようとして兄と共に人体錬成を行うが失敗。術のリバウンドにより肉体の全てを「真理の扉」に「持って行かれ」失ったが、兄が自身の右腕を対価に魂だけを真理から取り戻し、鎧（父のコレクションの１つ）に定着させたことで一命を取り留める。兄のエドと違い、基本的に温和で優しい。兄のことを誰よりも理解し、気にかけている。血気盛んな兄のフォローをしながら旅をしてきたせいか年齢の割に大人びた面が目立つが、一方で感情表現も多く、兄のボケに対して容赦ないツッコミを入れたり、「子供として扱われる」「頭をなでられる」ことを喜ぶ年相応な一面もある。錬金術は兄同様、ラジオの修理から武器の錬成まで幅広いバリエーションを誇っており、技術に関しては兄に若干劣るものの、国家錬金術師に匹敵する程の高い実力を

有する。大きな鎧を身体とする事で常人より遥かに長いリーチと軽いフットワークを持ち、加えて痛覚や疲労が存在しないなど、肉弾戦において大きなアドバンテージを有する。

理性じゃ斬れないものがある（前書き）

今日が誕生日だったのでどうしても更新したくなりました。

理性じゃ斬れないものがある

ユーノ・スクライア外伝、前回の三つの出来事。

一つ、前線メンバー各チームがテトラカトゥーンと遭遇・戦闘を開始。

二つ、ユーノはなのはと銀時達と別れ一人カトゥーンの元へと向かう。

そして、三つ。そんななのは達の前にマジックナイトレイアースが立ち塞がった。

〈不二子・第三者Ｓｉｄｅ〉

テトラカトゥーンも動きだし、ついに本格化する前線メンバーとの戦いもさることながら、カトゥーンキャッスル最深部の方に位置する玉座の間、囚われの新八は十字架に張りつけられ力なく項垂れた様子でいた。

そんな新八の姿を横でしきりに一瞥する漫画キャラ、海坊主の愛称で浦世界でその名を響かす一流の狙撃手、本名伊集院隼人はスキンヘッドにサングラスで決めた迷彩服に身を包んだ大柄な男。

彼は特注のグレネードランチャーの手入れを行いながら、何処か複雑な心境でもう一人この場にいるソファーで悠々とワイングラスを揺らす妖艶の美女、不二子に向かってため息がてら言う。

「ふう」

「あら。何溜息なんかついてるの、海坊主。」

「・・・峰不二子。正直な感想を言っていいか」

「ご自由に♪」

「この作戦・・・俺はあまり気が進まない。」

「あ～ら、どうして？」

不二子が少し酔った調子でそう言うと、海坊主は手を止め項垂れたままの様子の新八をまるでいたわるかのような表情で次のように言う。

「こんな子供を使って、こんなバカ騒ぎを起こして、その上世界を逆転させようなどと言う大それた話を聞いてな・・・そこまでしないといけないことなのか・・・現実世界が漫画世界となり、この大地に生きる全ての人間が一人残らず架空の存在となったとき、それで一体何が得られる？」

「ああ・・・あんなのカトゥーンの口先三寸。ただの出鱈目よ」

「何？そうなのか・・・」

不二子からの想定外の言葉を聞かされ、普段あまり驚かない筈の海坊主もそれなりに驚く。

不二子はワインを一口口に注ぎ込みながら、更に海坊主に言う。

「カトゥーンの目標は始めから一つだけ。世界をひっくり返そうとか、漫画世界の創造とかそんな事が彼の目標なんかじゃないの。現に次元震を起こすなんて口先では言っていたけど、本当はただ単にこういう事になることを待ち望んでいたのよ。」

「待ち望んでいた・・・何をだ?」

「ふふ・・・それを言ってしまうと、あんまり面白くないわ♪答えが知りたければ先ずは与えられた仕事をきっちり片付けてからにしなさいよ。さぁ、早く行ってきなさい・・・・・・スイーパー海坊主。本名伊集院隼人さん?」

「その名で呼ぶのは止めろ。恥ずかしいだろ・・・／／／」

頬を赤くしながら軽く不二子に注意を促す海坊主は重さ数十キロもの巨大なグレネードを担ぐと、徐に玉座の間から歩き出そうとするが、暫くしてからまた急に立ち止まる。

そんな海坊主の姿を見て、不二子は背中を向ける彼に言葉を投げかける。

「何立ち止まってるのよ?まだ何かある訳。」

「いや・・・ただ・・・その子供を見ているとな・・・――――こんなに弱くて小さな命が、それでも生きて動いてるのを見るとな・・・――――その子供も乗り込んできた奴らも関係ないんじゃないか、と思ってしまってな・・・」

すると、海坊主の言葉を聞いた不二子は不敵な笑みを浮かべて言う。

「姿を見る前なら平然とトリガーを引けたのに、ねぇ――――――」

「はぁ。すまぬ。気の迷いだ。忘れろ」

「そう。」

海坊主はそう言うと、決心をつけ徐に歩き出した。

「一応これでもカトゥーンによって送り込まれた存在。仮にも命令された任務はきっちり片を付けるさ。」

「うん。」

「そうしないと、何かと後で面倒なことになるのだろう。」

去りゆく海坊主を一瞥し、不二子は新八の方を振り返ると心の中でこのように呟いた。

「（お馬鹿な海坊主。一流のスイーパーと言っても、所詮中身はルパンたちと同じでつまらないものね。）」

不二子はそう言うと、徐に城内各地の戦闘の様子を複数のモニターで確認しつつ、テトラカトゥーンの猛攻を受ける彼らの傷ついていく様を見ながらこう言う。

「・・・うふふ。何にもできない無力な命なんて、その辺の虫と同じじゃない。いくら殺しても勝手に生まれてくる。それを弄んだり蹂躙したり、籠に閉じ込めてもがいてるのを見るのって、お宝を見

るのと同じで・・・・・こ～～～んなに楽しいのに、ね～～～」

この時の不二子の表情は嘗てのＪＳ事件の際、ゆりかごの中でヴィヴィオを操っていたナンバーズ、クアットロに酷似していた。

◇

〈エドワードＳｉｄｅ〉

さて、いよいよテトラカトゥーンとの戦いが本格化する中で先ず初めに鋼の錬金術師エドワード・エルリックと弟アルフォンス・エルリックと対峙していたスバル達前線１０名の戦いから見ていこう。

「行くぜ！」

エドワードはそう言うと、先手を仕掛けるために真っ先に動き始め、移動しながら両手を合わせて錬成。

自分の右腕を鋭利な刃物に変化させ、スバル達を襲い掛かる。

エドワードの攻撃を躱した五人。

キャロはエドワードの動きを封じるべく、ホイールプロテクションを発動。

「ホイールプロテクション！」

ホイールプロテクションに捕われたエド。

しかしエドの前では一切意味を持たない。

「効くかんなもん！」

エドは右手の刃物でキャロの技を斬り裂くと、再び五人に向かって攻撃を仕掛けるが、その際ティアナの幻術によって複数のホログラムが現れる。

「！」

一瞬の事に驚くエドだったが、そこは長年の場数と若き天才国家錬金術師。

冷静に辺りを見渡し状況を整理していく。

「（幻影と実体の混成・・・・・小細工しやがる。だが！）」

エドはそう言うと、再び両手を合わせ徐に地面に手を当てると、無数の針の山を生み出しティアナの造り出した幻覚と一緒に実体に対しても容赦なく攻撃を仕掛けた。

「これならまとめて刺し貫けるぜ！」

エドの攻撃によって一瞬のうちに消滅するティアナの幻影。

実体の五人は攻撃を回避すると持ち前のコンビネーションを利用してエドに連係攻撃を仕掛ける。

「マッハキャリバー！」

〈ＩＰ　ｃａｒｔｒｉｄｇｅ　ｓｅｔ　ｕｐ〉

「リボルバー・・・デスト・・・！」

と、スバルが狙いを定めてエドに攻撃を仕掛けようとした直後、彼女の背後に既にエドが回り込んでいた。

「え！」

驚くしまもないスバルはエドの回し蹴りを首後頭部に直撃する。

「てらああ！」

「ぐは！！」

「スバル！」

「スバルさん！」

スバルは回し蹴りを受けると後方に飛ばされ、そのまま壁へと激突。

相棒を傷つけられ、怒りの感情が湧き上がる執務官ティアナ・ランスターの瞳孔が見開き、何のためらいもなく彼女はエドの脳天目掛けてバレットを放つ。

「クロスファイアー・・・シュート！」

しかし、エドは全ての銃弾の軌道を正確に読むと無駄のない動きで難なく回避していく。

「（速い！）」

思わずそう思ってしまうギンガ。
ティアナは一度ギンガと共に牽制をしつつ距離を取ると、エリオ達と共にスバルの怪我の具合を確かめる。

「スバルさん！」

「大丈夫、スバル！？」

「うん・・・ちょっと捻っただけ・・・首の骨は折れてないよ・・・だけど、本当に強い！」

スバルは真顔でそう口にすると、自分や残りの四人の方を余裕の表情で見つめるエドに顔を向け、エドは徐に言う。

「どうしたどうした？仕舞か・・・仕舞なら、俺が終わらせてやるぜ！」

エドはそう言うと、両手を合わせて地面に手をつき、そこから薙刀を生成し、五人目掛けて走り出す。

「フリード！」

キャロはフリードに指示をだし、フリードはエド目掛けて火炎弾を放つ。

「ち。邪魔くせぇ竜だ。てめぇはスッこんでろ！」

火炎弾を交わしながら舌打ちをするエドは飛び上がると、フリードの身体を薙刀の一振りで斬り裂き、フリードは血を吹きだし重傷を

負ってしまった。

「「「「は！！」」」」

「フリード！！」

声を荒げる五人と舌を舐めまわすエド。

「まず一匹。」

フリードが元の姿に戻り、血を流すさまをキャロは泣きながら抱きしめる。

エリオは大事な友達を傷つけられたことにティアナ同様我慢が出来なくなり、怒りの感情が勝って冷静さを失いそのままエドへと突っ込んだ。

「このおおおお！！！！」

「エリオ！！」

「待ちなさい、エリオ！！」

慌てた四人がエリオの軽はずみな行動を止めにかかるが、時すでに遅し。

エリオはエドに向かってストラーダを一振り。

「でやあああああああああ！！！」

エドは薙刀で彼の攻撃を受け流しながら、心の中で冷静に分析する。

「（このガキ、動きも反応は悪かねぇ。だが――――――）」

その途端、エドはエリオの操るストラーダを吹き飛ばし、エリオの身体を刺し貫く。

「がっは・・・」

思わぬ事態に頭が真っ白になるエリオと衝撃を受けるフォワード四人。

「あ！」

「エリオ君！！！」

「爪が甘いぜ、ガキ」

そう言うと、エドは徐に刺し貫いたエリオの身体から槍を抜きとる。

槍の矛先にはエリオの血で一杯だった。

エリオは力なくその場に倒れ伏す。

スバル達はこの光景を目の当たりにした直後、一斉にエドへと向かって行く。

「このおおおおおおおおお！！！」

「はあああああああああ！！！」

スバルとギンガの二人が息の合った動きでリボルバーナックルで殴りにかかるが、エドは怒りのあまり一辺倒な動きになりがちな二人の行動を逆手にとって、姉妹同士でお互いを殴り合わせる。

「「があ！」」

二人はそれぞれ骨を砕く強力な一撃を顔に受け、勢い余って吹き飛ばされる。

「クロスミラージュ、ダガーモード！」

〈Ｄａｇｇｅｒ　ｍｏｄｅ〉

だが、それでもティアナはダガーモードで余裕綽々のエドの背後から奇襲をかける。

「一刀両断！」

ティアナの斬撃が通った瞬間、辺りに轟音と白い煙が立ち込める。

スバル達は負傷したエリオとフリードを安全な場所へと下がらせた後、ティアナと共に煙の中のエドの動きを警戒する。

「やった！？」

「手ごたえはあった。だけど、何かしら・・・この悪寒は――――――」

ティアナはそう言うと、額に一筋の汗を流す。

と、その時煙の中からエドの声が聞こえてきた。

「・・・ふん。良い一撃だったぜ、ガキ。殺す気満々だった。」

そして、煙の中から出て来たエドの意外な姿を見た途端、治療中のエリオ以外の四人は思わず目を疑った。

「な！」

「「え！」」

「だが、そんなもん俺には通じねぇよ。」

不敵な笑みを浮かべてエドがそう言うと、ボロボロとなったローブの下から四人に見せて来たのは、機械腕（オートメイル）で出来た自分の右腕だった。

ティアナもそうだが、戦闘機人の素体として生み出されたギンガやスバルも思わず目を凝らす。

「え・・・・・あれって・・・・・・」

「右腕が・・・・・」

「鋼の・・・腕・・・」

エドは呆気にとられる四人を見ながら自分の右腕を大きく回す。

「昔な、ちっとばかし錬金術における禁忌って奴を侵しちまってな。お蔭で右腕と左足を失くしちまって、この有様よ。俺達エルリック

兄弟はそう言う理由から“鋼の錬金術師”って呼ばれてるんだよ。なぁ、アル！」

エドが隊長達と闘っている最中の弟、アルフォンス・エルリックにそう言うと、その瞬間シグナムとアギトが壁に激突し、アルは血塗れのクロノと白鳥を鷲掴みにしながらエドに返事をする。

「うん。兄さんが自分の右腕を引き替えに僕の魂をこの鎧に定着させて、生かしてくれた。だから僕はこの先何があっても兄さんの味方だから。」

アルはそう言うと、余った左腕で頭の甲冑を取り、空っぽであるその体の中身と鎧に描かれたエドの血の刻印を二重の意味で驚くフォワード達に見せつけ、側に倒れていたヴィータは険しい顔を浮かべ言う。

「く・・・お前ら兄弟は・・・揃ってどうかしてるぞ・・・！」

「ヴィータ副隊長！クロノ提督！白鳥さん！」

「ふん。てめぇらにはわからねェさ。“等価交換”における物の価値観って奴をよ」

エドがローブを脱ぎ捨てながらそう言うと、聞いていた白鳥が思わず反応する。

「等価交換・・・錬金術における絶対的不可侵の原則か・・・！」

「よく知ってるじゃねぇかよ、白翼の魔導死神。ま、別に答えたところで意味はねぇけどよ。」

すると、アルは徐に鷲掴みにしていたクロノと白鳥の身体を力いっぱい握りしめる。

「「ぐあああああああああああ！！」」

「「「「白鳥さん！！クロノ提督！！」」」」

「余所見してんじゃねぇよ！」

エドはその瞬間、フォワード四人を持っていた薙刀の一振りで振り払い、真っ先に自分を殺すつもりで攻撃を仕掛けてきたティアナを棒の先端で持ち上げ、天井に押し付ける。

「ぐあああああ！」

「ティア！！」

「「ティアナ！」」

「ぐ・・・が・・・は・・・・！！」

ティアナは抵抗することもできず押し潰されようとしている内臓の痛みに声が詰まっていた。

満身創痍となって体が思う通りに動かないでいるシグナムやヴィータ達は悔しげな表情を浮かべる。

「くそが！！」

「貴様！！！」

エドは不敵な笑みを浮かべながらティアナの圧迫しつつ次のような事を言う。

「へへ。さぁ。ここで選択肢だ。次に死ぬのはどいつだ？選べ。」

「ぐ・・・あああああ！！！！」

「止めろ！！ティアナを・・・ティアナを放しやがれドちび！！！」

「てめぇほどチビじゃねぇだえろ！！」

ヴィータが口にした禁句を聞いた途端、エドは目の色を変えて錬金術により錬成した巨大な物質でヴィータの身体を押しつぶす。

「のあああああああ！！！」

「「「「ヴィータ！！」」」」

「生憎俺はチビって言われるのが一番嫌いでな。ガキの頃からのコンプレックスなんだよ。で、質問の答えだがよ、答えは勿論全員死ぬだよな。え？そんなもの訊いてないって。固いこと言うなよ。ただの言葉の綾って奴だ。デハハハハハ！！！！」

エドのサディスティックな言動を間近で見ていたアルは思わず呆気にとられながら言う。

「兄さん。見た目にたがわずドエスだね。」

「何だよアル、今頃気づいたのか？」

「く・・・」

と、その時ティアナが押しつぶされる内臓の痛みに耐えながら言葉を発しようとしていた。

「お？」

エドが顔を上げると、ティアナはエドに向かって不敵な表情でこう言い返した。

「あん・・・たが・・・死になさいよ・・・！固い事言わないでよ・・・言葉の綾って奴じゃない・・・・・・」

アルは真顔でそれを聞き入れると、少し声色を低くしてからアルに向かって言う。

「・・・アル。こいつ死刑決定な。」

「そうだね。」

エドはその直後、棒を突き上げて更にティアナの内臓を圧迫してきた。

「ぐあああああああああああああ！！！」

強烈な体の痛みに声を上げるティアナとそれを為す術もなく涙ながらに見ることしかできないスバル達。

「ティアさん！！！」

「止めて！！！止めて！！！お願いだから止めてよ！！！」

「ティア！！！！！！！！！！！！！！！！！！！！！！！」

スバルはこれでもかとばかりの涙と声を発しながら、鼻の穴から口から血が噴き出る変わり果てようとしている相棒の姿を凝視し、エドはそんな彼女たちを見下し高笑いを浮かべるのであった。

「ははははははははは！！！！！！！！！！！」

◇

〈斎藤Ｓｉｄｅ〉

一方、土方十四郎と対峙していた斎藤一のもとに土方が渾身の力で放りなげた身の丈を遥かに超える巨大な瓦礫が飛んでくる。

斎藤はそれを一瞥すると物怖じ一つすることなく冷淡な口調を呟きながら牙突の構えを取った。

「フン。下らぬ真似を。何もかも――――――――微塵に斬り裂いてやる！」

斎藤の攻撃を窺いながら愛刀を口に咥える土方はユーノの言葉を頭の中で反芻させながら深く考える。

「（何一つ斬らない剣・・・何も斬らない・・・鋼鉄は斬る・・・さっぱり意味がわらかねぇ・・・）」

土方はいくら考えても答えの導き出せそうにないそれを一旦諦めて、自分なりのやり方で斎藤に立ち向かって行こうとする。

「（圧して圧す事！これが剛健の極意！）」

「牙突・六刃！」

土方が決意を固めた瞬間、一瞬にして繰り出された斎藤一の牙突・六刃が土方の投げた巨大な瓦礫を粉砕し、粉砕したその中から土方は周囲のものを切り刻みながら斎藤に向かって走り出す。

「徹底的に斬るまでだ！！」

「ふん！！」

三本の刀を構えた土方が斎藤に向かって飛び込んでくると、斎藤も刀でそれを受け止めそこから二人は再び凄まじい剣戟を繰り広げる。

一瞬の油断の隙も許されない壮絶な剣と剣のぶつかり合い。

土方は二本の刀で斎藤に刺突を食らわせようとすると、斎藤は先ほどのことを思い返して一瞬のうちにそれを読んで後方に下がる。

すると、その直後自分の喉の途に土方の刀が突きつけられる。

「！」

「蟹（がざみ）・・・・・・獲（ど）り！」

土方は持っていた三本の刀、うち一本は逆手で持った状態で斎藤の首を狙い、引き裂こうとしてきた。

斎藤は一瞬の判断でそれを回避すると、頭上高く飛び上がり距離を取る。

「ハ、ハ、ハ、ハ、ハ」

先ほどの攻撃をまともに受けたためか、土方の息は荒くなるばかりだった。

血を流し、並みの精神力なら既に限界を超えて倒れそうな状態でも土方は立ちつづけていた。

だが、以前戦局が斎藤の優勢であることに変わりはなく、土方は目の前に平然と立ち尽くす斎藤を見るなり険しい表情を見せる。

「け・・・憎ったらしい野郎だぜ・・・」

「お互い様だ。言っておくが、俺をお前たちと同じと思うなよ。壬生の狼は誰にも買うことは出来ぬ。お前たち幕府の犬に俺達の狼の牙・・・噛み千切れる筈が無い！」

そう言うと、斎藤は牙突・弐式の構えを取って土方を狙い定める。

「牙突・・・」

「く・・・大層言ってくれるじゃねぇかよ、ヘビースモーカーがよ！」

「言ったろ。俺は壬生の狼だ」

二人は互いにそう言うと、勢いよく前へと飛び出して行く。

「弐式！！！」

「ぬらあああああああああ！！！！」

二人の渾身の一撃が繰り出され、辺りに土煙が巻き起こる。

土方は牙突を辛うじて三本の刀で受け止めている状態だが、気力・体力ともに限界寸前の土方には酷なものであった。

「（く！あんなデケー瓦礫砕いても尚この威力かよ・・・どんな破壊力なんだ牙突ってのは・・・！！弾かれる・・・！）」

段々と手と口の力がなくなってきた土方に斎藤一の狼の牙が食い込もうとする。

「お前と一緒にするな阿呆。俺は貴様ほど禁断症状に陥るほど、吸った覚えはない。」

斎藤はそう言うと、力圧しで土方を弾き返し土方は斎藤に隙を見せてしまったこの絶対的に危険な状況に思わず声を漏らす。

「しま・・・！」

その瞬間、斎藤の牙突・弐式が土方の腹部に突き刺さり土方は血を吹き出しながら後方へと勢いよく飛ばされる。

「ぐおおお！！」

辛うじて急所を外し串刺しだけは避けることが出来た土方は態勢を整え、立ち上がろうとした直後、容赦なく斎藤の牙突が再び繰り出され土方はその状態のまま牙突を正面から受けてしまった。

「ぐっは！！」

避けることもできず、正真正銘の牙突を腹部に喰らった土方は多量の血を吹き流し、魂が抜け落ちていきそうな感覚に陥る。

「一瞬の読み違いが招く者は・・・・・・死だ！」

そう言うと、斎藤は土方の身体に横薙ぎの攻撃を加え、三本の刀と共に土方を柱の方へと吹き飛ばした。

「がっは」

土方はうつ伏せで全身血塗れとなった状態で倒れ込むと、荒い息を立てつづけ斎藤はそんな土方を見ながら手に飛び散った血を舌で拭き取る。

「フン」

「う・・・ぐ・・・か・・・」

喋ることもままならない土方。

そんな土方に徐に近づいていく斎藤。

「まだ息があるな。」

そんな斎藤の言葉を聞きながら、土方は両手を床に付け必死の思いで立ち上がろうとする。

その際、彼は剣士としてのプライドに掛けて心の中でこう呟く。

「（背は・・・・・向けねぇ・・・・！）」

「素手で何をもがくんだ？」

斎藤がそう尋ねると、柱に寄り掛かった血塗れの土方は息を切らしながら返事をする。

「ハ、ハ、ハ、ハ、ハ、ハ、ハ・・・・・・人間でも、真選組ですらねぇテメェに説明しても・・・分からないだろう・・・」

「フン。そんなこと知りたくもないがな。」

「ハ、ハ、ハ、ハ、ハ、ハ」

斎藤は刀を抜くと、土方に狙いを定め間合いの無い密着状態から上半身のバネのみで繰り出す強力な最強の一撃にして、斎藤の切り札・・・牙突・零式で止めを刺しにかかった。

「牙突・零式！」

斎藤の最強の一撃をその身に喰らった土方は抵抗もできずに刺し貫かれ、それと同時に寄り掛かっていた柱にも皹が入った。

「ぐっは・・・」

「安らかに死ね」

そう言って斎藤が刀を納め静かにその場から立ち去っていくと、燁の入った柱が崩落し、複数の石が土方の頭上から降ってきた。

「（今日は・・・・・・石運が悪りぃ・・・）」

土方は朦朧とする意識の中そう心の中で呟きながら、落ちてくる石を仰ぎ見る。

石は容赦なく土方の頭上に降り注ぎ、土方はその崩落をその身を以て受けることになった。

斎藤は耳に入ってくる石の崩落音と周囲に広がる多量の砂埃を一瞥し、煙草を取出しマッチの火で煙草に火をつけ徐に吸い始めるのであった。

土方十四郎・・・・・・ここで終わりなのか！！

◇

〈銀時Ｓｉｄｅ〉

その頃、なのはと別れた銀時は一人玉座の間へと突き進んでいた。

「どらあああああああ！！！」

新八を助けるという強い想いから、銀時の前に立ち塞がる漫画キャ

ラは次々に圧倒され、木刀の一振りによって粉砕されていった。

「さっさと退けコノヤロウ！！！！！！！！！！！」

彼が通ったあとは、無残にも破壊された漫画キャラの正体たる紙の細かい屑、更には彼らが所持していた武器などが爆発を起こして黒焦げとなって煙を上げていた。

白夜叉、坂田銀時の猛進はとどまることを知らない。

「（新八――――――）」

心の中で何度も彼の名前を言い聞かせ、矢も楯もたまらない銀時。

焦りとカトゥーンへの強い怒りが湧き上がる中でも、やはり一番強かったのは助けたいという彼自身の欲望の表れだった。

そんな銀時の進む姿を玉座の間のモニターでチャックしていた不二子は不敵な笑みを浮かべながら新八の方に手を当て撫でながら耳元で囁く。

「おほほ。あれだけの漫画キャラを跳ね返すあの出鱈目な力は感嘆に値するけど・・・少しは自分の力量を分かっているのかしら。ねぇ坊や。あなたのところの銀髪は髪もさることながら中身も相当にお馬鹿さんなようね♪」

「う・・・・・銀・・・さん・・・」

銀時の事を聞かされ、朦朧とする意識の中で呟く険しい表情の新八。

と、その時閉じられていた防火壁が外からの力によって凹み始め、１０秒もしないうちに破られると中に侵入してきたのは坂田銀時その人だった。

「新八！！！」

銀時は玉座の間に入って来るなり真っ先に彼の名前を叫んだ。

そんな銀時の姿を見て、新八の横に佇む思考の全く読めないこの女、峰不二子は銀時に手を向け挨拶をする。

「いらっしゃい～～～待たせてもらったわよ。」

「てめぇは・・・ルパンの・・・！」

不二子の事を鋭い目つきで睨み付ける銀時。

しかし一方で不二子は物怖じ一つ見せない。

「だ・か・ら、二度も言わせないでよ。ルパンなんて言う陳腐な古い男の事なんてもう忘れちゃったわ。私、ブランド品には目が無いようにいい男見付けるとそっちの事しか見えなくなるのよ。私的には、あなたもタイプだけど。」

「黙れよ。てめぇみたいな薄汚ねぇ女狐に用はねェ。とっとそこを退きやがれ。」

「あらら～～～随分と血走ってること。そうかっかしなくていいじゃない。ところで、この城の各ブロックではあなたのお仲間や協力者さん達が一生懸命戦ってるようだけど――――――」

不二子はそう言うと、銀時に見えるように複数のモニターを展開し、モニター越しに映ってくるテトラカトゥーンの力に圧倒され傷つく仲間の様子を目の当たりにする。

「！神楽！ゴリラ！！」

目の前の光景に思わず目を見開く銀時と、モニターを見ながらあきれ返った様子で次のように呟く不二子。

「どうしてそこまで必死になれるのかしら？何の得にもならない、お宝がある訳でもない、なのになんで態々“無駄死”って選択肢を選ぶのかしらね～～～」

「無駄死？勘違いすんじゃねぇよ。俺達がここに来たのは他でもねェ。てめぇの側にいるその地味だけど大切な、俺の仲間を助けるためだ。御託をだらだらと語りに態々ここに来たんでもねぇ・・・・・・俺の機嫌が変わらねぇうちにとっととそいつから離れろ。」

怒りが最高潮に達しようとしていた銀時の警告。

「仲間の危機と、自分にとってかけがえのない男のピンチになると、流石にいつものやる気のない目つきはまるでなしって訳よね～～～益々タイプだわ。これでお金持ちって言ったら最高なんだけど――――」

しかし不二子はそんな言葉には一切動ず余裕の笑みを浮かべて新八の方に手を当てようとする。

その瞬間、銀時の堪忍袋の緒が切れる。

「離れろって言ってるだろうが！！！！！！！！」

銀時は血走らせた目を浮かべながら持っていた木刀を不二子に向けて力いっぱい投げつけた。

銀時の投げて木刀が回転速度を高め、不二子に激突しようとした瞬間、不二子の身体は消滅し、銀時の前から忽然と姿を消した。

一瞬戸惑う銀時だが、その瞬間ホログラムとして先ほどまで映っていた不二子の実体がモニター画面に現れ、不敵な笑みを浮かべながらこう言う。

『だ・け・ど・・・もう何もかも遅すぎなのよ。』

途端、突如として銀時の目の前で十字架に張りつけられていた新八が声を上げて苦しみだした。

「う・・・うあああ！！ああああああああああああ！！！！！！！！」

「！新八！！！！！！！！」

銀時が新八の方へ近づこうとすると、新八の身体からアンゴルモアと同じ色をした赤紫色のオーラが発生し、その凄まじい力に重圧を感じた銀時は思わず険しい表情を浮かべながら後ずさりする。

「ぐ・・・！！ぐおおお！！！！」

不二子はこの様子を見ながら銀時に向かって衝撃の事実を口にする。

『ふふふ。良い事教えてあげるわ？この世界にあなた達がやって来たのは偶然じゃない。全部カトゥーンが仕込んだ計画だったって訳♪あの日、初めて魔導師さんと一緒に戦った際の悟空のかめはめ波・・・・・ユーノ・スクライアが難なく防御できたけど、たとえその攻撃の直撃を受けていても、マテリアルであったこの子には意味はなかったわ。マテリアルはあらゆる漫画キャラの攻撃を無効化してしまう効果があってね、言ってみればそれがこの子の才能。カトゥーン曰く、その能力の名は“カトゥーン・ザ・ミラクル”。そして、五つの本型ロスト・ロギアと力とアンゴルモアとの融合を果たすことで、この子は完全にその力を引きだし新世界の創造主となる。漫画キャラの頂点に君臨し、全ての漫画キャラの能力を自在に操る究極の生態兵器・・・カトゥーン・ゼウスの姿に身を変えて。』

その時、不二子の話の傍らずっと声を上げて苦しんでいた新八が目の前の銀時を視認してから銀時の名前を叫んだ。

「銀さん！！！！！」

「新八！！！！」

「銀さん！！！！助けて！！！！銀さん！！！！！！！！！！」

「新八・・・新八！！！！！！！！！」

何度も何度も新八の名前を叫ぶ銀時。

だが、そんな銀時を嘲笑うかのように不二子は最後にこう言う。

『ふふ。直ぐに完成するわよ。私達の創造主が――――――――あらゆ

る漫画の能力を操りアンゴルモアによって無限に力を振るう究極の存在。』

「銀さん！！！！！！！！」

「新八！！！！！！！！」

「あああああああああああああああああああああああああ！！！！！！！！！！！！！！！！！！！！！！！！！！！！！！！！」

新八は体内に流れる本型ロスト・ロギアの力と、それを操り無限のエネルギーサーキットして力を増幅させるアンゴルモア核の力が臨界点に達した瞬間、赤紫色のオーラを体中から放出させ、玉座の間一帯を覆った。

銀時が徐に目を開けてみると、目の前に映ってきたのは驚くべき光景だった。

「は！」

彼の目の前に映っていたのは、全身から赤紫色のオーラを放出させながら宙に浮き、十字架から解放され血の涙を流す志村新八の姿だった。

「・・・ぎ・・・・・・銀さん・・・・・・・」

血の涙を流しそう口にする新八の耳元に、不二子の悪魔の囁きが耳に入る。

『ほら坊や。いつまでも泣いてないで、坊やの魂が言っているわよ。

“坊やを苦しめる性質の悪い銀髪の天然パーマがここにいる。頑張ってそいつを打っ殺して、苦しみから解放されよう”って。あなたの身体には、その為の力があるのよ。心のままに、思いのままにその力を解放して――――――」

その瞬間、新八の心が壊れ、彼は我を忘れて力を解放する。

「う・・・あああああああああああああああああああああ！！！

言ではないものだった。

「しん・・・ぱち・・・？」

変わり果てた仲間の姿に言葉が出なくなる銀時を余所に、悪魔の姿へと覚醒したカトゥーン・ゼウスこと志村新八はその声色と口調さえも変化させる。

「貴様は――――俺の敵。敵は抹殺。排除する。」

「新八・・・何言ってやがんだ・・・！俺だ！！分からなぇのか！！！いつもぐうたらで根無し草でぷー太郎の坂田銀時だ！！糖尿病寸前なんだよ！！」

銀時の自分に向けて言われたその赤裸々な言葉に一瞬反応する新八だが、直ぐにそれを否定する。

「！違う！」

「！」

「そんな男の記憶など、俺の中には存在しない。貴様は敵――――――敵は排除する！」

「な・・・！」

まさかの言葉に銀時は絶句する。

「不確定要素は・・・・・・直ちに排除する！！！！」

新八は怒りに満ちた様子でそう言うと、全身からアンゴルモアの力を解放して凄まじい殺気を銀時に向かってぶつける。

「新八！！！！く！！！！」

あまりに桁違いな殺気とオーラの大きさに根源的な恐怖を感じる銀時。

そんな銀時を見ながら、不二子はこう言う。

『ふふ。果たしてその子を止めることが出来るのかしら？お侍の亡霊さん？』

「てめぇ・・・！！！！！！！！新八に何しやがった！！！！！！！！

不二子は笑顔で手を振るいながらモニター画面から姿を消し、二人の男はお互いに向かい合い戦闘の体制となる。

「抹殺標的確認・・・・・・殲滅する！！！」

「新八！！！今てめぇのその目、覚まさせてやらああ！！！」

その瞬間、二人の男は同時に飛び出し衝突を繰り広げる。

伝説の侍と漫画世界の覇王。

今ここに究極バトルが勃発した！

◇

〈一護Ｓｉｄｅ〉

その頃、銀時と新八の命を懸けた壮絶な戦いが始まった丁度その頃、テトラカトゥーンの孫悟空を真っ先に葬り去り、ユーノ達の元に駆けつけようとした途端気を失ってしまった我らが死神代行黒崎一護は徐に目を開けて辺りの様子を目の当たりにする。

「・・・・・・・・・・・・・・・」

一護は自分はてっきり出血多量の為に既に命を落とし沢山の無念を抱えてしまった魂魄の姿になってしまったのとばかり思いこんでいたが、実際は違った。

彼はちゃんと意識を取り戻し、こうしてあたりの景色を目で確認で

きていたのだ。

そうして、その時一護は初めて自分が生きているということを実感する。

「・・・生きてんのか？・・・俺は・・・・・・ん・・・」

と、徐に目を向けてみると一護の瞳に映ってきたのは包帯で巻かれた自分の腹に手を当てフィジカルフィールを施す出血多量で動けないでいたはずの金太郎とその様子を窺う浦太郎、鬼太郎の二人だった。

「おい、起きたぜ！」

「よかった・・・！」

「目が覚めましたか一護殿・・・！」

「金太郎・・・鬼太郎・・・浦太郎・・・！？お前ら・・・無事だったのか・・・？魄動が弱まってたからもしやとは思ってたんだが――――――」

「へ。俺様の生命力舐めんなよ！」

「まぁでも実際ヤバかったのは本当ですけど・・・」

「我々も何故あの出血で助かったのは不明なのですが、気が付いた時には既に傷口が癒えこのように何者かが手当てをしてくださったのです。」

「何者か・・・俺達以外に仲間がいるってのか・・・・・・・!?」

「それはまだ分かりませんけど、少なくとも命拾いしたのは事実です。」

浦太郎がそう言った直後、金太郎は感覚を研ぎ澄ませ城内各地から反応が確認される前線メンバー各位の霊圧・魔力の乱れを一護に伝える。

「一護殿。もうお気づきかとは思いますが、先ほどから前線メンバー全員がテトラカトゥーンと戦いを繰り広げております。」

「・・・ああ。霊圧と魔力があちこちで乱れてる。恋次達も相当苦戦してみてぇだな。」

「なのはちゃん達もそうだけど、僕達が一番心配なのは店長ですよ。店長、どうやらカトゥーンのところに一人で向かったようなんです・・・!」

「何だと!?」

その言葉を聞いた瞬間、一護は思わず驚きながら重い体を一気に起こした。

「このまま魔導死神としての力の全てを封じられた店長が奴と闘ったとき、万が一のことがあったら――――――!」

鬼太郎が険しい表情で最悪の事態を踏まえそう言うと、一護もいても経ってもいられなくなった。

「く。こうしちゃいられねぇ。金太郎、早いところ治療終わらせてくれ。急いでユーノのとこに向かわねぇと。」

「承知いたしました。」

「鬼太郎、浦太郎。お前らは銀さん達のフォローに回ってくれ。何だかあっちも嫌な予感がするんだ。」

「おし！分かった。」

「任せておいてくださいよ。」

「（ユーノ――――――無茶すんじゃねェぞ。）」

四人はそれぞれに役割を分担すると、大急ぎでその準備に取り掛かろうとしていた。

果たして、間に合うのであろうか！？

◇

〈ナルトＳｉｄｅ〉

そして、ここでもまた死神と侍と忍者による壮絶な争いが始まろうとしていた。

テトラカトゥーン、うずまきナルト＆春野サクラ対死神・真選組・神楽のチーム。

最初に動きを見せたのは恋次だった。

「行くぜ。狒狒王蛇尾丸！！！！！」

恋次は勢いをつけて狒狒王蛇尾丸の刃節を伸ばしてナルトに攻撃。

仙人モードとなったナルトは恋次の狒狒王蛇尾丸の頭を片手で押さえつける。

「たあああ！」

そして、力圧しで狒狒王蛇尾丸を弾き返した。

「ち！」

恋次は一旦蛇尾丸を元の状態におさめると、思わず舌打ちをする。

そして、恋次の攻撃の後に今度は吉良とルキア、更には近藤・総悟の四人が刀を構えて突撃していく。

「「おおおお！！」」

「「はあああ！！」」

ナルトは咄嗟に指を齧って血を出し、高速で印を結ぶと地面に手を押さえつける。

「口寄せの術」

煙の中から出て来たのは、仙人モードの修行の際にナルトが世話になった小さな老父母の蝦蟇二匹だった。

「仙法・蛙鳴（せんぽう・かわずなき）」

蝦蟇二匹は印を無んでから口を大きく開き、身体の動きを縛り付ける強力な鳴き声を発して四人の動きを封じにかかる。

「「「「くううううう！！！！」」」」

案の定動きの出来なくなった四人は思わず体を硬直させる。

その隙にナルトが次の術式に入る。

「影分身の術」

影分身の術で二人の自分を作り出したナルトは両手にチャクラと風の性質を練り合わせた強力な螺旋丸を作りだし、一気に四人に向かって仕掛ける。

「！避けろ、お前ら！」

恋次がそう言った直後、ナルトは動けない四人に自慢の忍術を披露する。

「風遁・螺旋丸！」

「ち！鋼鉄狒骨大砲！！」

恋次は四人を守るために鋼鉄狒骨大砲をナルト目掛けて放ち、ナルトはあともう少しのところで攻撃を仕損じてしまう。

「く・・・」

その傍ら、神楽とサクラは同じ女であり馬鹿力同士熾烈な争いを繰り広げていた。

「「しゃんなろおおおおおおおおお！！！」」

二人の拳がぶつかり合った瞬間、衝撃で周りの岩場が崩れ落ちこれには恋次達やナルトでさえ目を疑うばかりだった。

「何通怪力だよ・・・」

「これぞジャンプ二大怪力女同士の戦いって訳か・・・」

神楽は舌打ちをしながらサクラと距離を取り、思わず顔を歪める。

「ち。雌豚のくせにやるネ。」

「誰が雌豚よ。芋虫団子頭の小娘が。」

「言って来るじゃねぇかよ。この私を侮辱するとたたじゃ済まないアルよ」

「そっちこそ、私を怒らせるとどうなるか思い知るがいいわ。」

二人は互いに罵倒し合いながら鬼のような形相を浮かべて腕を鳴らし、見ていたナルトは日背汗を流しながらサクラに言葉を投げかける。

「あの・・・サクラちゃん・・・あんまし派手にやるとこの辺崩れるからほどほどに・・・」

「ウッサイわね！あんたは黙ってなさいナルト！」

「は、はい・・・！」

普段は強気な筈のナルトも、サクラの前ではまるで尻に敷かれる昨今の日本のお父さんのようになってしまう。

これには思わず総悟も呟く。

「尻に敷かれる男って言うのは惨めなもんだな・・・」

「だが、あの仙人モードと言うのは実に厄介だ。」

「ああ。卍解の力を、補助デバイスで強化したこの力をもまるでものともしちゃいねぇ・・・恐るべし、テトラカトゥーン・うずまきナルト。」

恋次はそう言いながらこちの方を余裕のある表情で見つめるナルトの力量を素直に認めるのであった。

「力体力じゃ、どうしても不利が生じるか。」

「ならば、結束の力で立ち向かうまでだ。」

ルキアがそう言った直後、相互は真顔の状態でふとこんな事を言って来た。

「近藤さん。俺達チームワークいい方なんすかね？」

「なに。一月近く一緒に生活してきたんだ。息合わせることぐらい造作もねぇだろ。」

「ああ。二人とも、準備はいいかい？」

「俺は大丈夫だ！」

「ま、やるしかねぇか。」

真選組の二人は死神組三人と息を合わせて配置につくと、目の前に佇むナルトの方を見据えて武器を構える。

ナルトもまたそんな五人を誘ってくる。

「ふん。来い。」

「行くぞ！」

最初に飛びしたのは吉良だった。

「佗助！」

佗助を解放した吉良は仙人モードのナルトの動きを注意深く見極めながらナルトの身体きりにかかるが、ナルトもまた吉良同様動きを読みながら皮一枚のところで躱していく。

その間にナルトは吉良の佗助の能力を警戒する。

「（確か、重さを倍にする斬魄刀だっけか・・・下手に斬られて体が重くなってもマズい。最初に叩いておくならこいつか。）」

「く」

吉良はなかなか攻撃を当てさせてくれずその上で攻撃を仕掛けるナルトに苛立ちを覚え始め、ナルトは不敵な笑みを浮かべながら策を練る。

「（上手く躱して紙一重で攻撃しているようだが、お前たちはこの仙人モードの恐ろしさを知らねェ。見せてやるぜ。“目に見えねぇ攻撃”って奴を）」

ナルトはその瞬間、吉良の左頬をかすめるようにパンチを繰り出すが、吉良は途端上手く躱したつもりだったはずのナルトの拳が確かに左頬に食い込み思わず顔を歪めた。

「ぶっふ！」

吉良は目に見えないナルトの攻撃を受けると、その場に倒れ伏し見ていた恋次達全員は一様に目を疑った。

「吉良！」

「何だと！？」

すると、勝ち誇った笑みを浮かべていたナルトの瞳にサクラが壁に叩きつけれる光景が目に映ってきた。

「！」

「ぐ・・・！」

「サクラちゃん！」

その時、満身創痍となったサクラに狙いを定めた神楽が所持していた唐傘の先にエネルギーをチャージして、一気に止めの攻撃を仕掛ける。

「吹き飛ぶアル！」

神楽はそう言った瞬間、傘の柄を引いてエネルギー弾を発射。

サクラはその攻撃を受けると声を上げて苦しんだ。

「ぐあああああ！」

だが、途端サクラは煙となってその姿を消し、現れたのはただの木の切り株だった。

「！（分身！？）」

驚き返る神楽。

そんな神楽の背後にサクラが不敵な笑みを浮かべて近づいて来た。

「！」

「どっちがかしら？」

サクラは余裕の表情でそう言うと、渾身の拳による一撃を神楽の顔面に叩きつける。

「がっは！！」

神楽は顔面に真面に攻撃を受けると、地面に激しく叩きつけられその衝撃で刃の何本かが折れてしまい、吐血を吐いてしまう。

「チャイナ娘！！」

「野郎！おいしっかりしろ、吉良！」

恋次達は神楽の傷つくさまを目の当たりにしながら、一先ず吉良の状態を確かめる。

「くそ。躱したはずがこれかよ・・・」

「一体何の手品を使いやがった?!」

「手品じゃねぇよ。蛙組手は己の周りにある自然エネルギーを利用する。そのエネルギーが俺の体の一部となって、そいつを攻撃したんだってばよ。仙人モードは危険感知も攻撃範囲も並みのそれじゃねぇぜ。」

「野郎・・・」

「ちんたらしてっとその体、バラバラに斬り裂くぜ。見せてやるよ・・・・・仙人モードにおける俺の必殺技・・・影分身の術！」

ナルトは再び影分身を使用すると、徐に今度は自分の掌のチャクラをある形へと変化させていき、それを見ていた恋次達は思わず目を凝らす。

「あれは・・・！」

「野郎のチャクラが・・・まるで手裏剣のように・・・」

徐々に形となっていくそれを目の当たりにすると、近藤はその技の正体を思い出す。

「こいつは・・・漫画で言うところの風遁・螺旋手裏剣って奴じゃねぇのか！？」

「だとしたらこれを食らったら、あいつの言った通り俺達はバラバラに切り刻まれる！」

「止めだ。」

ナルトは風遁螺旋手裏剣を完成させると、その巨大な風の手裏剣を徐に天に掲げ、仙人モードによって強化された最強の忍術を前方の五人に向けて仕掛ける。

「仙法・風遁螺旋手裏剣！」

風遁螺旋手裏剣がナルトの手から離れると、それは凄まじい切れ味を帯びた風によって周りの岩や地面を斬り裂いて行き、恋次達はそれぞれ近藤と総悟の身と自分たちの身を守るために縛道で防ごうとする。

「「縛道の八十一『断空』！」」

「縛道の七十二『樹牢門』！」

二重に上級の縛道を発動させ固い防壁を作り出した死神三人。

しかし、風遁螺旋手裏剣はそんな上級鬼道をもものともしないと言わんばかりに直撃し、直撃を受けた瞬間目の前の断空とその後ろに張られた樹牢門が激しく揺れ動く。

「「「くううう！！」」」

「「ぬううううううう！！」」

突風が吹き荒れ、今にも破壊されそうな鬼道。

と、その時ナルトがもう一体の影分身を召喚し、通常の螺旋丸の体制となっていたのを視認したルキアは思わず目を見開き危機感を覚える。

「は！」

そして、ナルトは前方へと走り出し亀裂の入った鬼道の隙間目掛けて螺旋丸をブチ込んだ。

「仙法・螺旋丸！」

螺旋丸が入れられた瞬間、断空と樹牢門はものの見事に破壊され、恋人たち五人はその威力に圧倒されてしまい体中を鎌鼬の効果によって斬り裂かれ後方へと吹き飛ばされる。

「「「「「ぐあああああああああ！！」」」」」

彼ら五人は後方に吹き飛ばされると、力なくその場に倒れ恋次は元の姿に戻ってしまった自分の愛刀に手を伸ばしながら思わず言葉が漏れる。

「く・・・マジ・・・半端ねェ・・・」

ナルトはそんなボロボロの五人の姿を高みから見下ろすような眼つきで見、サクラもまたボロボロとなった神楽の腹に足を乗せて勝ち誇った表情を浮かべていた。

◇

〈なのはＳｉｄｅ〉

テトラカトゥーンが大人数相手にその類まれなる戦闘力で次々と前線メンバーを圧倒し、勝機を見せ始めている中、銀時を奥へ進ませるために一人残った管理局のエースオブエース、白い魔王の高町なのはは魔法騎士レイアースの光・海・風の三人と熾烈を極めた戦いを繰り広げていた。

「“赤い稲妻”！」

「“水の龍”！」

「“碧の疾風”！」

光が掌から放つその名の通りの赤い色の稲妻に、海の使った背後から水で出来た龍を生み出す魔法、そして風が生み出す緑色の疾風が同時になのはの方へと仕掛けられ、マキシマム・ブレイドを構えながらなのはは前方から向かってくる三つの攻撃を凌ごうとする。

〈Ｐｒｏｔｅｃｔｉｏｎ〉

三人のそれぞれ強力かつ異質な魔力の大きさに思わず顔を険しくするなのは。

「ぐ・・・！！！重い・・・・！！！」

なのは自慢のユーノ直伝の強力防御もいとも簡単に輝が入ってしまうほどだ。

「なかなか粘るじゃないの。だけど、３対１じゃどの道結果は見えてるわよ！」

海がそう言った直後、光はブレスレットの宝石に力を溜めると、再び炎の矢をなのはに向けて放つ。

「炎の矢！！！」

炎の矢が加わり、ついになのはの鉄壁の防御は敗れ去りなのはは勢い余って後方へと飛ばされる。

「きゃあああああああああああ！！！！！！」

体勢を立て直したなのはは先端から砲撃を撃って三人を牽制するが、三人はその攻撃を読んで素早く移動すると海が心を研ぎ澄ませて強力な魔法を発動する。

「蒼い竜巻（あおいたつまき）！」

そう言うと、なのはに向けて海が発動した蒼色の巨大な竜巻がなのはを多い尽くし、水攻めと同時に彼女の動きを封じてきた。

「く！」

息の続かない状況下で必死に脱出のタイミングを見測ったなのはは僅かな隙間を見付けると、カートリッジをロードしてエクセリオンバスターで一気に外へと脱出する。

〈Ａｌｌ　ｒｉｇｈｔ　Ｍａｓｔｅｒ〉

「エクセリオンバスター！！」

桃色に輝くなのはのエクセリオンが海の放った竜巻を突き破り、中から出て来たなのはは全身水びだしになりながら技を仕掛けてきた彼女を逆に閉じ込めようとする。

「エクシードビット！」

なのはがそう言うと、なのはの背後に現れるブラスターピットに代わる代用機種であるエクシードピッド。

エクシードピッドは海の身体を魔法で紡がれた特殊なもので拘束した後、以前ヴィヴィオとの戦いで彼女自身が使った上位拘束魔法を仕掛ける。

「クリスタールケージ・・・」

「！」

「ロック！」

その瞬間、海の身体はすっぽりなのはの仕掛けたクリスタルケージの網にかかり動けなくなってしまった。

「これは・・・」

思わず内側から破壊を試みようとする海だが、そう簡単にクリスタルゲージを破壊することは出来ない。

「海ちゃん！」

「海さん！」

仲間のピンチに外の方で見ていた光と風が声を荒げ、なのはは毅然とした表情で言う。

「卑怯かもしれないけど、私も負ける訳にはいかない。一気に行かせてもらう。」

〈Ｌｏｒｄ　Ｃａｒｔｒｉｄｇｅ〉

なのははマキシム・ブレイドにカートリッジを三発ロードし、十分に魔力を溜めると一気に片を付けるために二人に狙いを定めて攻撃する。

「エクセリオンバスター・フォースバスター！！」

〈Ｆｉｒｅ〉

なのははその瞬間、大威力砲撃をお見舞いし、風は咄嗟に前に出てくると光と後ろの方の海を守るために盾となって魔法を使用。

「護りの風！」

自信の魔力の多くを守りに徹するために風が使用した護りの風は、なのはのエクセリオンでさえも遮り、この光景を目の当たりにしたなのははあまりの光景と自分の技が意味をなさなかったことに衝撃を覚える。

「！」

そして、少し魔力を使いすぎ息を切らす風と閉じ込められた海の姿を見た光は怒り心頭な様子で剣を掲げてなのはの方へと走り出す。

「よくもよくも海ちゃんと風ちゃんを！！！」

光はなのはに殺意を向けながら高く飛び上がると、その状態から一気になのはの身体を引き裂こうと剣を振り下す。

「やあああああああ！！」

なのはも咄嗟に防衛本能からマキシム・ブレイドの先端部分を光の剣にぶつけるが、光の剣の重さに耐えかねたなのはの表情が次第に曇り始める。

「く！！！！」

小刻みに震えるなのはの手を見た光は大声で言う。

「砲撃専門の魔導師が、剣なんて使っても意味ないんだよ！！」

光はそう言うと、なのはのマキシマム・ブレイドの先端を砕いてなのはの身体に剣を振りおろし、その瞬間なのはの身体から血が噴き出す。

「がっは！！」

初めて受ける刀傷の痛みにそれ以上の言葉が出ないなのは。

幸い深手を負うことは避けられたが、なのはは出血箇所を押さえてその場にしゃがみ込むと多量の汗をかきながら必死で痛みを堪える。

その隙にクリスタルゲージに閉じ込められた海が光に助けを請う。

「光！ここから出してちょうだい！」

「うん！」

光は心を研ぎ澄ませ、自分の炎を剣の先に宿らせるとなのはのクリスタルゲージを一刀両断する。

そして、漸く拘束から解放された海はなのはに復讐の炎を燃やす。

「やってくれたじゃないの白き魔王さん・・・このお礼はたっぷり返すわよ。」

「う・・・・・」

痛みで意識が薄くなっていくなのは。

その直後、海は頭上に無数の氷で出来た刃を出現させ、標的をなのはに定めると一気にそれを降り注ぐ。

「氷の刃（こおりのやいば）」

なのはは降りかかってきた刃を斬り傷の痛みを堪えながら防御を展開するが、魔力制御が思うようにいかず結局多くの氷の刃を体に受けてしまう。

「ぐあああああ！！」

体中に突き刺さる氷の刃になのはの身体が更に悲鳴を上げる。

すると、その途端背後から近づいて来た風がなのはに向けてこう言う。

「ごめんさないね。」

「は！」

風は気配に勘付き後ろを振り返った瞬間のなのはに狙いを定めると、容赦なく剣を振りおろしなのはのレイジングハート諸共綺麗に切り伏せ、なのはは左肩から多量の血を吹き出しぶっ倒れた。

「ぐっは・・・」

自慢の防護服も斬り裂き血塗れとなって倒れる我らがエースオブエース、高町なのは。

ユーノさながらに血を流すその光景を見るのは非常に忍び難いものだ。

そんななのはに向かって三人は徐に言葉を投げかける。

「無様なものね。それでよくもエースオブエースなどと大口叩いてこれたものだわ。」

「い・・・痛い・・・／／／」

出血した箇所を押さえ多量の汗を流しそう口にするなのは。

光はその言葉を聞くと率直な事を述べる。

「そうだよ。傷は痛いんだ。だけどそれは受けた時じゃないとわからない。お前は今まで受けてきたことがある?その痛みを。これが痛みなんだよ!それが血って奴なんだ!だけど、こんな痛み大したことなんかない!お前はこれから先もっともっと残酷な痛みをその身と心にずっと受け続けないといけないの。それがあなたの――――白き魔王としてのあなたの贖罪の仕方だから!」

「私の・・・贖罪・・・・・・・!」

思わず贖罪と言う言葉に敏感に反応するなのはを見ながら、風は毅然とした表情で次のように述べる。

「遠き彼方、あなたをこの世界に導いてくれたのは他でもなく翡翠の魔導死神ユーノ・スクライアさん。あなたは現実世界における自らの可能性に戸惑い、凡庸な才能に鬱屈し半ば蔑すみ自分と言うものに諦めかけていた。そんなあなたに彼は素敵な贈り物を授けてく

れました。そしてあなたは魔法と言う贈り物を得て、その才能を開花させこれまでかけがえのないものを沢山手にしてきましたが、その代償にあなたは一番大切な事を忘れてしまった。」

「一番・・・大切な事・・・」

「友達を大事にするのは大いに結構だけど・・・・・・なのに・・・・・なのにお前は“目先の友達”にしか目を向けなかったんだ！！」

「！！」

光の言葉を耳にし、なのはは思わず目を見開いてしまう。

そして、彼女の心をさらに追い詰めるために海や光が続ける。

「大喧嘩して、大親友となったプロジェクトFの遺児、フェイト・テスタロッサ。闇の書に取り込まれ一時は世界を滅ぼしかねなかった数奇な少女、八神はやて。あなたにはかけがえのない友達であることに違いはないけど、それもみんな彼の出会いがあったからこそ巡り合えた友達でしょ？だけどあなたは自らの夢の為に、自分の便益の為に邪魔な彼を無視して、ずっと“友達”だと言って見て見ぬふりをしてきた。それでも彼があなたのことを仲良しだと言って来たのはどうしてだと思う？それは彼がただあなたを――――――許容していただけだからよ。」

「ずっとユーノは苦しみに耐えていた。孤独と言う苦しみにずっと――――――友達がどんなに遠くに行っても、どんなに手が届かなくなっても、自分の欲を殺して必死で取り繕って我慢して、最後の最後まで擦り切れる思いでずっとずっと――――――高町なのは！

！お前はユーノ・スクライアの何が分かる！周りにちやほやされ、誰かに支えられてることも忘れて、自分一人で立った気でいるお前に、あいつの何が分かる！！何が一番の仲良しだ！？何が恋人だ！？私はお前を全否定する！！」

光の罵倒を耳に、我慢に堪えられなくなったなのはは傷の痛みなど忘れて立ち上がり合負返ってくる涙を流しながら人生において今まで出したこともないような怒号を上げる。

「黙れ！！！

そんなありとあらゆる気持ちが一気に溢れかえるとなのはの頭は混沌と化していた。

海は心が非常に不安定な今のなのはを見ながらさらに追い打ちをかける。

「泣いたって彼は許してくれる訳ないじゃないの。心の中では今もあなたのこと――――――真に憎んでいる筈だから。」

「！」

海の言葉に便乗して、残りの二人も次のように言う。

「あなたは弱い。魔法があるにかかわらず弱い心の持ち主です。不屈の心などとは程遠い、脆く儚い心。そう――――――その手の魔法で何千、何万と言う人を救う力もユーノ・スクライアさんの前だけは適用できない。何故ならあなたの魔法では彼の心を温めることも、癒すこともできないのですから。」

「破壊・絶望・そして孤独。それだけのものを与えてきたのはお前だ！他の奴が同じことをしてきたとしても、お前のやって来たものに比べれば可愛いもの！どうして自分や目先の事しか考えなかった？どうして手が伸ばせるはずの友達に手を伸ばさなかった？友達なら・・・――どうしてもっと理解してあげなかった？」

「・・・・・・！！」

一つ一つの言葉がなのはの胸に突き刺さり、彼女の精神は体と同じで満身創痍の状態であった。

「そうやっていつまでも答えの出ることのない罪の意識に苦しみ続けて、死んでも尚地獄でその苦しみを永遠に攻め続けられればいいわ。彼のもう一つの姿にしてこの次元世界全てを滅ぼす力――――――地獄の番人クシャナーダにかかって！」

「は！」

海の最後の言葉、クシャナーダと言う言葉を耳にした瞬間、なのはの頭に浮かんできた嘗てＴ２で自我を失い暴走し、地獄の呪いが解放されクシャナーダと言う化物に姿を変えたユーノの姿。

その姿を思い出すと、それを真っ向から否定しながら恐怖で無意識のうちに後ずさりするなのは。

「違う・・・・・・ユーノ君はクシャナーダなんかじゃない！ユーノ君は・・・人間だよ！私の一番大切な・・・・・・私の大好きな・・・愛する人！！」

「魔王の虚言などもう聞き飽きた！お前に愛を語る資格も愛する資格もありはしない！」

光はそう言うと、自分の剣を天に掲げて二人のそれに合わせるように剣を掲げると、剣先から強力な光を放つ。

「「「魔法波導（マッジクインパルス）！！」」」

「！レイジングハート！」

〈Ｗｉｄｅ　Ｐｒｏｔｅｃｔｉｏｎ〉

なのははは咄嗟の反応で広域防御を展開し、三人の合体技をどうにか防ぐことが出来たが、先ほどにも話したように彼女の体は血塗れであり満身創痍でありいつ倒れてもおかしくないそう言う状況なのだ。

「は、は、は、は、は」

それでも尚彼女が立ちつづけられるのは、一重にユーノの力になりたい、彼と彼の守りたいものをを守りたいという強い願いからだった。

これには流石の三人も顔を引きつる。

「本当にしぶとい人よね・・・」

「ここはやはり、あれを使いましょうか。」

「そうだね。最後ぐらい、この人の好きな全力全開のやり方で倒した方がいいよね。」

三人はそう言うと、意を決して取って置きの奥の手を使うことにした。

なのははそんな三人の様子に思わず警戒する。

「何を・・・・・」

すると、三人は声を上げて自身の防具の中に眠る魔法騎士だけが使うことを許された魔神と呼ばれる三体のロボットを呼び出す。

「レイアース!!」

「セレス！！」

「ウィンダム！！」

すると、三人の防護の宝石が突然光だし、光は徐々に大きくなっていくと防護から離れ三人の背後に現れるそれぞれ赤・青・緑の三体のロボット。

魔神レイアース、セレス、ウィンダム。

「な・・・！」

なのはは思わずそのロボットの姿に目を見開き、信じられないと言わんばかりの表情を浮かべてしまう。

「ろ・・・ロボット・・・！？」

「これが私達の操る魔神。さぁ、終わりにしようよ。」

光はそう言うと、海と風と共に自分の操る魔神と融合を果たし、なのはの前に立ち塞がる。

「レイジングハート！！」

〈Ｍａｘｉｍｕｍ　Ｃｈａｒｇｅ〉

なのはは恐れながらも三体のロボットから大幅に距離を取ると、マリアの慈愛を撃つための準備に取り掛かり、自分の今ある残り全ての魔力をレイジングハート・マキシマム・ブレイドへと注ぎ込む。

徐々に集まり巨大な魔力となっていくなのはの力に三人は率直な感想を述べる。

「大した魔力だわ。だけどただ大きいだけの砲撃で私達を葬り去ることなんて出来はしないわ。」

「さぁ、撃ってみるがいい！そんな一つ覚えの砲撃、簡単に受け止めてやるよ！」

「あまり挑発しない方がいいですわよ。あの方、もう心も魔力も爆発寸前ですもの。」

風がそう言った直後、なのははまたしても涙を流しながらふとこんなことをば呟く。

「嫌だ・・・嫌だよ・・・・・・」

「「「？」」」

「・・・ユーノ君がたとえ私の事心の底から恨んでいたって、許容してたって構わない！出来ることなら相思相愛のままずっと一緒に居たいって思ってる！！だけど、それでユーノ君が本当に幸せになれるかなんてわからない！！！私は・・・ユーノ君が幸せじゃないのならこの先何が何でも幸せにしてみせる！！！それで自分が・・・私が報われることがなくたっていい・・・私はもう十分報われてきた・・・沢山の優しさと愛情をもらって来た・・・／／／」

涙ながらにまるで訴えかけるようにそう言うと、レイジングハートが魔力集束の完了を告げる。

〈Ｃｈａｒｇｅ　ｃｏｍｐｌｅｔｅ〉

「今度は・・・今度は私がユーノ君に愛を送る番だから・・・死ぬ最期の時まで私がユーノ君の事支えて愛し続けるから・・・・・／／／だから・・・・・ここで終わるなんて嫌だあああああああああ！！！！！」

なのははそう言いながらマキシマム・ブレイドを掲げると、全ての魔力とユーノへの想いを三体の魔神に向けてぶつけるのであった。

「マリアズ・アフェクト！！」

その瞬間、既になのはの心身同様ボロボロに傷ついているレイジングハートの先端部から放たれる超巨大集束砲撃。

桃色に輝く彼女の魔力が辺り一面を多い尽くし、三体の魔神は一時的に彼女の前から姿を消した。

なのはは一度空から降りると両手をついて肩で息をして今にも気絶寸前の状態であった。

「は、は、は、は、は、は、は、は」

なのはは出来るなら今の一撃で全てが終わって欲しいと心の底から願ったが、徐ジョイ腫れていく視界の奥で彼女が目のあたりにしたのは信じがたいものだった。

「・・・え・・・」

なのはの瞳に映ってきたのは、まるで傷一つ付いた様子の無い三体の魔神、レイアース・セレス・ウインダムであった。

マジックナイト三人は驚き唖然とするなのはに向けて言葉を投げかける。

「それでお仕舞ですか？」

「所詮こんなものだったわね。」

「期待して損しちゃった。」

「そ・・・そんな・・・／／／」

自分の最強にして最後の切り札が一切通じなかったことに雪辱の念以上に恐怖の感情を覚えるなのは。

三人は魔神を操り徐に剣を掲げると、なのはに狙いを定めて声をそろえる。

「「「終幕だ（ですわ）（よ）」」」

三人はその直後、炎・水・風の力が宿った剣の一撃を目の前のなのはに向けて振り下す。

「レイアース！！！」

「セレン！！！」

「ウィンダム！！！」

三体同時に振り下された剣戟を浴びると、なのはのバリアジャケットは豪快に剥がれ、肌が露骨にむき出しの状態となりながらなのはは全身から血を吹きだし声を上げる。

「きゃあああああああああああああああああああああああ！！！！！！！！！！！！！！！！」

凄まじい破壊力で以て三体の魔神は白い魔王を吹き飛ばし、吹き飛ばされたなのははボロボロになり既に原型さえとどめていない愛機レイジングハートと自分の血塗れの身体を虚ろな目で見つめ、その場に出来たクレーターの中央で仰向けとなって倒れていた。

「う・・・・・・」

そんななのはの脳裏に、自分が大好きで心から信頼する最愛の人であるユーノの優しい笑顔が浮かんで来、そのユーノはなのはの名前を口にする。

『なのは』

その途端、なのははあまりの不甲斐なさに涙を流し、同時に独りぼっちの恐怖に苛まれながらユーノの名前を口にする。

「ゆ・・・・・ユーノ・・・・・・君・・・・・・／／／／／／／／／／ユーノ君！！！！！！！！！！！！！！！！

◇

〈ユーノSide〉

なのはが絶望的な状況に陥り、弱みを露呈しているその頃、ユーノは玉座の銀時とは別に真逆方向の最深部に潜伏していると思われる城の主であり事件の首謀者、カトゥーンの元を目指して突き進んでいた。

「はあああああああああ!!!」

ユーノは最深部へと進むにつれて数に物を言わせてくる漫画キャラを逆刃刀と飛天御剣流の技を使って葬り去る。

「龍巻閃!!」

龍巻閃を使って一瞬のうちに漫画キャラを薙ぎ払い。

「龍槌閃!!」

龍槌閃で更に追い込みをかける。

瞬く間に塵と化していく漫画キャラをユーノは気にも留めず、ただ只管に奥へと目指して足を進めるだけ。

そんな最中、ユーノの頭にちょっとした回想が浮かび始めていた。

〈回想シーン〉

それは銀時達とまだ会う前。

9月の中ごろ、ユーノは珍しく私服に身を包んでなのは、ヴィヴィオ、そしてスクライア商店メンバーを連れてピクニックに出かけていた。

ユーノは木の下で本を読む傍ら、目の前で従業員と戯れるヴィヴィオの無邪気な笑顔に思わず柔らかい表情を浮かべる。

と、その時そんなユーノになのはが声をかけてきた。

「ユーノ君。」

「？」

「どうしたの。さっきからヴィヴィオ達の方ばっかり見て。」

「ああ・・・いや。何でもないよ。別に大した理由はないから。」

「そっか。」

なのははそう言って納得すると、ヴィヴィオの横に座って二人仲良く笑顔を浮かべながら愛娘と一緒に楽しくミニ野球をする鬼太郎達の様子を見守った。

「よし、行くぜ！ヴィヴィオ、しっかり打てよ！」

「はい！お願いします！」

ヴィヴィオが徐にバットを振りかぶると、鬼太郎は必殺の投球で仕掛ける。

「鬼太郎スペシャルナイトイレブン！！」

絵に描いた様な火の玉剛速球がヴィヴィオの元に飛んでくると、ヴィヴィオは臆することなく狙いを定めて――――

「必殺・・・ヴィヴィオ・・・ホームラン！！」

その瞬間、ヴィヴィオはバットを振り切り鬼太郎の剛速球を渾身の力で振り切った。

「亀！！飛んだぞ！！」

「任せて！！」

鬼太郎の言葉を聞き、浦太郎は彼方へと飛んで行こうとするヴィヴィオのホームランボールを追いかけ、そしてそのボール目掛けてジャンプする。

「とらあああああ！！！！」

浦太郎がジャンプすると、タイミングよくボールもグローブの中へと納まり彼は見事ボールを捕えることに成功。

「やった！とった・・・」

が、着地の際の姿勢制御をおろそかにしてしまい浦太郎は豪快に倒れる。

「ぎゃあああ！！」

「か、亀!!馬鹿何やってんだよ!!」

「ヴィヴィオ殿、今ですぞ!!」

金太郎の掛け声を聞いて、ヴィヴィオは猛ダッシュでベースを踏んでいき、ランニングホーマーとなった。

「やったあ!!ランニングホーマーだ!」

「くううう～～～何してんだよ亀!!おめぇの所為だぞ!!」

悔しい想いの鬼太郎は浦太郎に容赦ない罰を与える。

「いたたた!!!先輩暴力反対だってば!!」

「ウルセー!!!てめぇにはお仕置きだ!!」

そんな光景を見て、ヴィヴィオも金太郎も大笑い。

そして、ユーノとなのはも二人揃って笑みを浮かべる。

「あはは。何だか楽しそうだな。でもいいのかな、私達だけ寛いでヴィヴィオの相手してもらって?」

「構わないさ。三人も好きでヴィヴィオと遊んでるんだ。何だかんだ言っても、三人とも子供の世話とか好きだし。」

ユーノはそう言うと、再びヴィヴィオ達の方に目を移す。

「よし！次はこっちの攻撃だ！俺様がデカイの一発打ってやる！」

「負けませんよ鬼太郎さん！」

対抗心に燃える鬼太郎とヴィヴィオ。

ユーノはそんな光景を見ながら何時もの何処か寂しそうな表情を浮かべながらふとこう言う。

「こうしていると、何だか平和って言うのを実感するな・・・」

「そうだね。時間が中々取れなくて、こうやって家族みんな一緒のピクニックもなかなか出来ないしね。」

「最後になのはとヴィヴィオと一緒に行ったのは、ちょうど・・・四年前か」

「うん・・・あの時はまだヴィヴィオもユーノ君のことあんまり知らなかったけど、その時からヴィヴィオ、ユーノ君には懐いてたもんね。私的にはちょっと悔しって思っちゃったけど。」

「そうか。なのははヴィヴィオの事大好きだからそう思っちゃうのも無理ないね。」

「にゃはは。そりゃ、大事な一人娘だからね。他の人に取れたくないって思うのは当然だよ。だけどヴィヴィオもいつか・・・そう言う時が来ちゃうって考えると、やっぱり寂しいかな・・・ねぇ、ユーノ君もそう思うでしょ？」

「まぁね。だけど寂しい事にずっと恐れていたら、前には進めない

さ。それに寂しさの中にも喜びはある。ヴィヴィオがいつかその時が来て、自分にとってのパートナーが見つかって、僕らの元を旅立っていくその日が来たら・・・笑顔で見送ってあげよう。」

「・・・うん・・・そうだね・・・」

「――――――」

その言葉を最後に、二人の間に長い長い沈黙が流れる。

そして、その沈黙を破ったのはユーノの言葉だった。

「なのは。」

「ん」

「あの・・・さ・・・ずっとって保障は出来ないけどさ・・・淋しかったらその・・・僕が隣に居てあげるからさ・・・」

「！」

「勿論僕だけじゃないよ。フェイトやはやて、それにクロノ達だっている。寂しくなったら誰かがきっと慰めてくれる。暖かくしてくれる。だから、安心して。誰も君を一人になんかしないから。」

「ユーノ君・・・／／／」

思わず嬉しくなったなのはは半泣きの状態でユーノの胸の中に飛び込み、ユーノの首に手を回す。

「！」

大胆な行動を見せたなのはの行動に顔を赤くするユーノ。

「ありがとう・・・／／／私・・・ユーノ君にそう言ってもらえて嬉しい／／／」

「・・・うん」

ユーノははなのはの言葉を聞くと、自分もまた徐に手をなのはの背中に回し、優しく自分の方へと抱き寄せる。

そして、最後になのははユーノにこう言う。

「ユーノ君。ユーノ君も寂しい時は、遠慮なく私達に甘えていいからね・・・一人で背負い込むなんてしないでね。じゃないと、私・・・・・寂しくて泣いちゃうから――――――」

◇

そんなことを思い出しながら、ユーノは靴底のジェットエンジンの質力を全開にして空中を吹っ飛ばし、前方に立ち塞がってきたギャオスの超音波攻撃を華麗に躱していくが流石に数が多かったため、多少の焦りは感じていた。

「イチイチ相手してられない・・・――」

そう言うと、ユーノは腰に携えていたもう一本の刀である「月山」に手をかけ、空中を滑空した状態から二本の刀を構える。

「二刀流・・・――――」

刀を構えると、体を捻らせ土方同様漫画「ワンピース」より拝借した二刀流の技の内の飛ぶ斬撃を発動する。

「七十二煩悩鳳(ななじゅうにボンドぼう)！！」

ユーノが放った飛ぶ斬撃は、全てのギャオスの身体を斬り裂き爆発を伴ってギャオスが跡形もなく消滅すると、ユーノは再び最深部へと突き進む。

◇

〈不二子Ｓｉｄｅ〉

その光景をカトゥーンと共に余裕な態度でご観覧中である峰不二子は通信画面から聞こえてくる海坊主の言葉に耳を傾ける。

『駄目だ、不二子。手が付けられん。』

「ま、予想の範疇よ。そうよね、カトゥーン？」

不二子がそう言うと、カトゥーンは椅子に腰を掛け不敵な笑みを浮かべながら肯定の言葉を返す。

「ああ。ユーノ・スクライアの・・・彼の終幕はここ。この私・・・カトゥーンの手によって滅ぼされる。誰にも邪魔はさせない。そうでなくても、彼も私以外のものなど眼中はない。」

「うふ。どこも思ったよりも粘ってるけど、ま・時間の問題ね。」

不二子はそう言いながら、銀時を始めなのはや残りの前線メンバーの傷つき、血を流す光景を見ながら悪意に満ちた表情を浮かべていた。

「私達はゆっくり・・・見てればいいわ。うふ。」

タイムリミットまで残りわずかとなってしまった中、銀時は新八を救うために奮闘、そしてユーノはカトゥーンを目指して城を駆け巡る。

この先の未来に待っているのは絶望か、あるいは希望か――――――

「大型次元震」の発動まで、あと１時間４４分。

理性じゃ斬れないものがある（後書き）

教えて、ユーノ先生！

ユ「今日は魔法騎士レイアースについてだ♪」

ユ「『魔法騎士レイアース』（マジックナイトレイアース　Ｍａｇｉｃ　Ｋｎｉｇｈｔ　Ｒａｙｅａｒｔｈ）は、ＣＬＡＭＰによる日本の漫画作品。またはそれを原作としたテレビアニメ。１９９３年１１月から１９９６年４月まで月刊少女漫画雑誌『なかよし』で連載されたファンタジー漫画で、ＣＬＡＭＰはこの作品によって『なかよし』に初登場。」

ユ「ロボットを登場させたのは、『少女漫画に搭乗型の巨大ロボットが出た例が無いので、自分達で出して初登場という事にしよう』という意図もあったという。基本的に典型的な剣と魔法といったファンタジーロールプレイングゲームの世界を模している。また、作中で登場する固有名詞の多くに、自動車関連の固有名称が用いられているのはリリカルなのはとそっくりだね。」

な「でも本当に強いんだよあの三人。このままじゃ私負けちゃうよ！」

ユ「何時になく弱気だね。エースオブエースとは思えないくらい。」

な「本当はエースオブエースでも何でもないもん・・・いっつもユーノ君やみんなの支えがあってそれでやっと一人で歩けるから・・・私・・・一人だと怖くて心細くて・・・」

ユ「なのは・・・――」

ユーノはそんな弱々しい様子のなのはの優しく抱擁し、耳元で励ます。

ユ「大丈夫だよなのは。君ならきっと勝てる。きっと前に勧める。たとえ側に僕やみんながいなくても、必ず何とかなる。」

な「ユーノ君・・・／／／」

ユーノの優しについ頬を赤くするなのは。

ユ「それに、君には取って置きの秘策があるんだから♪」

な「え？」

思わず呆気にとられた声を上げるなのは。

果たして、その言葉の意味とは――――――

魔導師図鑑ハイパー！

機動六課男子寮の一室、銀時の仮部屋にて恋次・土方・沖田の三人は集まり麻雀大会を行っていた。

銀「ロン。メンタンピン三色」

恋「ええ！！四暗刻一向聴（スーアンコ イーシャンテン）だったんだぞ！！」

土「くそ。そのサンピン切れはねぇよな。」

麻雀パイを積み直し始める四人。

そんな部屋の物音をたまたま巡回していたはやてが耳にする。

は「お？何や随分騒がしいな・・・」

徐に部屋の中に入る。

は「遅くにごめんな・・・・・・なっ！！」

沖「お？何か用かよ？」

はやては部屋の中にとこかしこに散らばる服やゴミの山を見るなり青ざめた表情で呟く。

は「な・・・何やねんこの部屋・・・夢の島！！！？？？」

はやてのリアクションは兎も角として、銀時はテレビ画面に映っていたあられもない女性の姿が写った映像を消す。

そして、彼ら四人は目の下に濃い隈を作り返事をする。

土「悪いな。もう三日も徹マンなんだよ・・・」

銀「あとでちゃんと片付けるからよ・・・」

は「て、徹マンって・・・銀さん・・・」

恋「さ。続き続き。」

は「いい大人四人こんな時間まで。もう寝てください！」

銀「うっせーな。今それどころじゃねェンだ・・・」

厳しく叱咤するはやての言葉に耳を貸そうとしない銀時。

その瞬間、はやての踵落としが銀時の後頭部に直撃。

銀「ぐっほ！！」

は「寝ろ！！！！！！！！！やるんなら、また明日にせんかい！！！！」

恋「しゃあねぇな。引き上げるか。」

土「邪魔したな」

銀時の部屋から出ていく恋次達三人。

だが、時計の針が午前0時になった瞬間沖田が扉を開ける。

沖「お邪魔しま～す。もう明日で～す」

銀「おう。よく来たな。入れ入れ。」

は「寝ろってっつんだろ！殺すぞコラ！！」

次回予告

逃げることの出来ない決死の戦い。

それぞれが抱く強さの形。

勝利を掴むのは、何時だって踏み出す勇気と胸に宿った覚悟。

戦局は覆るのか？

そして、銀時と新八は――ーーーーー

キャ「次回『チートな敵にはチートで立ち向かえ』」

チートな敵にはチートで立ち向かえ（前書き）

な「各地に散らばったテトラカトゥーンと前線メンバー総出の熾烈な争い。圧倒的な力の前にメンバーは次々に倒れ、血を流し、絶望的な状況。」

な「だけど、ずっと側に居てくれた大切な人・・・全てを包み込む優しさ・・・我儘で前だけを気にして走り続けた私を今も昔も守ってくれた・・・ユーノ君が私に立って戦えって言ってくれた。」

な「誰にも負けないって言った言葉を、積み重ねてきた時間を、自分の信じた道を――――――もう背を向けて逃げないためにも。」

チートな敵にはチートで立ち向かえ

〈ユーノSide〉

刻々と大型次元震発動までの時間が差し迫る中、ユーノ・スクライアは靴底のジェットエンジンの推進力を全開にして、高速で飛行を続けながら逆刃刀で目の前の漫画キャラを薙ぎ払い先を進み続けていた。

「カトゥーン元までもうすぐか・・・・・・」

ユーノは送られてきた内部空間の地図を確認しながら、カトゥーンの待つポイントまであと少しと言うところまで来ていた。

そんなユーノが近づいてくる様子を、別のモニターで確認していた海坊主こと伊集院隼人は特注のグレネードランチャーをセットして体制を低くすると、徐に言葉を呟く。

「・・・こいつが噂では次元世界最強と言われる翡翠の魔導死神ユーノ・スクライアか・・・もっとも今はただの人間か――――――」

一瞬、躊躇いから神妙な表情を浮かべた海坊主だが直ぐに迷いを払しょくし首を横に振りグレネードを構える。

「お前に恨みはないが、ここで灰となってもらうぞ――――――」

海坊主はそう言うと、グレネードの砲門にエネルギーをチャージし始めると同時にカウントを開始。

「5・・・4・・・3・・・2・・・1・・・」

と、ユーノが通路を右折した瞬間、彼らは悪寒を感じその場に浮遊する。

「は！」

そして、同時に海坊主のグレネードから特大の大威力砲撃が発射される。

「０！」

ユーノは砲撃のエネルギーをセンサーで確認すると、咄嗟に懐からイギリスの友人たる柊沢エリオルが渡してくれたお守りを取出し、それを前方に投げ捨てる。

「柊沢さん、僕に力を！！」

投げ捨てると同時に、お守りは効力を発揮して強固な防御結界を発動させる。

砲撃は勢いをつけてユーノの元へと飛んでくると、その防御結界に衝突。

そのあまりの威力に思わず結界で守られているユーノも発射した海坊主本人も顔色を歪める。

「う！！！！！！」

「く！！」

暫くの間膠着状態が続いたが、意を決したユーノが両手を靴に添えると同時にダイヤルを回しエンジン質力を最大にする。

「く・・・・・ジェットエンジンブースト質力最大！！」

エンジン質力を最大にしたユーノはその推進力を使って防御壁を展開しつつ砲撃を抉る様に突き進んでいき、同時に手にした逆刃刀を使って飛天御剣流突進術最強の威力を誇る九頭龍閃を発動した。

「飛天御剣流・・・九頭龍閃！！！！！」

「は！」

海坊主は自分の撃った砲撃がユーノによって抉られていく光景を間近で捉えながら、そのまま砲撃と一緒に九頭龍閃を仕掛けてきたユーノを前に動くことが出来なかった。

「だあああああああああ！！！！！！！」

ユーノはものの見事に海坊主の身体に九撃を叩きこむ事に成功。

海坊主は跳ね返ってきた砲撃に飲み込まれながら後方へとはじけ飛んだ。

「のあああああああああああああ！！！！」

爆発が起き、通路は一瞬辺り一面煙に覆われてしまう。

徐々に煙が晴れていくと、海坊主の前に立っていたのは息を切らした状態のユーノであった。

「は、は、は、は、は」

海坊主はと言うと、九頭龍閃を受けた上に自分の放った砲撃の威力

も一緒に浴びてしまったことで、体中血塗れとなってしまい戦闘不能となってしまった。

「抜き打ちで・・・・・・俺の砲撃を突っ切りやがった・・・・・・」

朦朧とする意識の中でそう口にした海坊主は、眼前に佇む確かな覚悟を宿していると同時に力を封じられているとはとても思えないほどの常軌を逸した力を使うユーノの戦闘力に言葉を失ってしまう。

「（こいつ・・・・・・本当に人間か・・・？）」

ユーノはそんな海坊主に近づくと、懐から万能ツールを取出し、動けない海坊主の身体を拘束し、毅然とした表情を浮かべながら言葉を吐く。

「悪いな。こっちも急いでるんだ。そこでじっとしていろ。もうじき突入隊が到着するから、そしたらお前も安全な場所まで護送してくれる。」

「く・・・」

「カトゥーンと次元震は・・・僕達が止めてみせる！」

ユーノはそう言うと、再びジェットエンジンを展開して空中に浮かびあがりカトゥーンの元目指して突き進んでいった。

ユーノがその場を立ち去った後、海坊主は満身創痍の身体のまま身動きを封じられた自分に不甲斐なさを感じるのであった。

「う・・・俺も焼きが回ったな・・・！」

海坊主を撃破し、先へと進むユーノの額にはいつになく汗が溜まっていた。

ユーノは飛びながらそれを拭い取ると、現在位置を確かめながら通路を突き進んでいく。

「たく・・・余計な邪魔が入ったよ。急がないと・・・！」

逼迫した時間の中、ユーノは諸悪の根源たるカトゥーンを止めるべく、エンジン質力を全開にして通路を駆け抜けていくのであった。

そんなユーノの様子をカトゥーンと共にモニターで見ていた不二子は何処かつかみどころのない表情で笑い声をあげていた。

「ふふふ・・・おほほほほほほほ。本当・・・お馬鹿な人よね♪そうは思わない、カトゥーン？」

不二子がそう尋ねると、カトゥーンは漫画を一ページ捲ってから返事をする。

「ふふ。馬鹿ではないよ彼は。ただ――・・・・・・一度決めた事は何が何でもやり遂げようと躍起になっているだけなんだよ。それこそ、自分の命すら投げ打ってでもね。」

「嫌よね・・・そう言う熱血漢は。」

「君が少し冷めすぎているんだよ、不二子」

「余計なお世話よ。私お宝意外なものに大した興味はないのよ」

「男にもかい？」

「うふふ。イケメンなら乗ってもいいけど♪」

不二子がそう答えた後、カトゥーンは鼻で笑ってから再びユーノ・スクライアがたどり着くまでの間悠々自適に漫画を楽しむのであった。

◇

〈フォワードＳｉｄｅ〉

ユーノがカトゥーンの元に邁進しているその頃、テトラカトゥーンの一人、鋼の錬金術師のエルリック兄弟と対峙していたフォワード陣を構成単位とする前線チームは正に絶体絶命の状況。

「ぐあああああああああ！！」

エドワードの怒りを買ったティアナは天井に押し付けられたままエドに内臓を圧迫され口、鼻の穴から血を流しそんな彼女の悲惨な光景をクロノ達隊長陣やスバル達は思う通りに動けない体で凝視するしかなかった。

「ティアナ！！！」

「「ティアさん！！」」

「ティア！！！

泣き叫ぶスバルの悲鳴が辺り一帯に響き渡る。

この時、ヴィータは無力な自分を心底呪いながら誰でもいいから助けに来てほしいと強く願った。

するとその時、何処からともなくあの男の技が飛んでくる。

「巨人の一撃！」

エドを狙って飛んで来たその技に気づいたアルは声色を若干高くしてそのことを伝える。

「兄さん！」

「！」

エドは上手い事それを回避する。

が、その直後その攻撃を囮にしてエドの背後に回り込んだ巨漢が渾身の一撃を秘めた強烈なパンチをエドの身体に叩き込んだ。

「はあああああああああああ！！！」

エドの腹部に叩き込まれたそのパンチはエドの内臓をそれこそ潰してしまう。

「ぐあああああああああああ！！」

エドは吐血した状態で後方へと勢いよく飛ばされ、壁の中に叩きこ

まれ、ティアナは漸くエドから解放され吐血をしながら地面に手をついた。

「げっほ！げっほ！！」

「ティアナ！」

「ティア！！！」

スバル達は満身創痍の体を引きずって急いでティアナの元へと駆け寄り、巨漢によって助けられたヴィータはぐったりとしかかるティアナの頭を膝に乗せて安否を気遣う。

「しっかりしろ！大丈夫か！？」

「は・・・はい・・・何とか・・・」

一筋の血を口元に付着させていながらも、ティアナは何とか言葉を発し、それを聞いたスバル達は安堵の表情を浮かべた。

一方で巨漢によって吹き飛ばされたエドの元へとアルは一目散に駆け寄り、負傷した兄を壁の中から救出する。

「兄さん！兄さん！！」

「いてて・・・誰だよ・・・てめぇは・・・！」

エドは怒号を発して目の前にいる衝撃の際の煙で顔のはっきりしないその巨漢を鋭い目つきで睨み付けていると、その時そんな巨漢の後ろからもう一人の男が歩み寄って来、徐に言葉を発した。

「――やぁ。待たせてしまって申し訳なかったね。意外と敵の数が多くて苦戦を強いられてしまった。」

ティアナはそれを聞くと、唖然した表情のスバルや隊長陣同様に言葉を詰まらせながら、段々と姿がはっきりしてきた二人の男を見るなり言葉を漏らす。

「あ、あなた方は・・・――」

煙の中から現れたのは、一護の友人であり同じ霊力を持った完現術（フルブリン）士（ガー）と呼ばれる属種の男、茶渡泰虎と最後の滅却師、石田雨竜であった。

「石田さん！茶渡さん！」

驚きに満ちた声色でキャロがそう言うと、それを聞いた二人は先の戦闘で少し傷ついてしまった状態でほくそ笑んでから返事をする。

「ム」

「もう少し手早く済ませられると思っていたが、現実はそう都合よくいくものではないな。」

石田はそう言った直後、滅却師独特の高速歩法である飛簾脚を使ってエドの背後に回り込んで、銀嶺弧雀の矢を引いた。

「！」

エドがそれに気づいて後ろを振り返った瞬間、狙いを定めた石田の

矢が飛んで来た。

「疾っ！」

「ち！」

皮一枚のところで矢を回避したエドは体勢を立て直すと、アルとの共闘で石田を葬り去ろうと画策する。

「アル！」

「うん！」

兄の信頼を受けた弟アルは石田の動きを封じるために錬金術を使って止めにかかるが、それを読んでいた茶渡は即座に巨人の右腕を解放して十年間で鍛えて会得した技を使ってアルの攻撃を遮る。

「？！」

「“巨人の激怒（エル・フリア）”！」

巨人の右腕から放たれる巨人の一撃をも遥かに凌ぐ右腕の最強最大の攻撃がアルの仕掛けた錬金術共々術者であるアルも吹き飛ばす。

「ぐあああああああああ！」

「アル！！」

「余所見をしてる暇はないぞ。」

弟の安否を気遣う兄エドであったが、その直後石田が飛簾脚で近づき真顔のままで言う。

「何!?」

「ちょっとした仕掛けを施しておいた。」

石田はそう言って指を鳴らして一瞬のうちにエドの元から離れると、その瞬間エドの足元が突然光だしエドがそれに気づいた瞬間大爆発が発生。

エドは全身を黒焦げにして余りの大火力に意識を失いかけ、その場に膝をつく。

そんな兄の姿をアルは悲痛な想いを掲げて言葉を荒げる。

「兄さん!!!!!!!!!」

茶渡と石田はこの隙にスバル達の元へと駆け寄り、全員の怪我の具合を確認する。

「大丈夫ですか?」

「ああ、済まない・・・」

シグナムがそう答えると、石田は懐から薬を取出し全員にそれを手渡す。

「浦原さんから貰った薬だ。これを飲めば忽ち傷が治ります。」

「助かったぜ・・・ありがとうな石田・・・」

全員は早速石田からそれを受け取り、何のためらいもなくそれを呑み干す。

そして、全員の傷が治り始め体力が戻り出し始めたその時、黒焦げとなった兄を抱きながら怒号に満ちた声でアルが怒りの矛先を石田たちに向ける。

「よくも・・・よくも・・・兄さんを・・・・・・・許さない！」

その時、アルは兄と同様錬成陣なしで錬金術を発動させ、真っ先に石田に向けて攻撃を仕掛ける。

「！」

驚くしまもない石田だったが、そんな石田を庇って茶渡がその攻撃を巨人の右腕で受け止める。

「ぐおおおおおおおおおお！！」

「茶渡さん！」

「茶渡君！」

茶渡は攻撃を凌ぎ切ると、アルに向かって走り出す。

そして、アルもまたそんな茶渡に向かって走り出した。

「おおおおおおおおおおおおお！！！！兄さんの仇！！！！！

！！！」

二人は拳と拳による激しい衝突戦を見せつける。

意識を取り戻したエドが冷静を掻きはじめているアルを凝視しながら、拳を強く握りしめる。

「あ・・・アル・・・！」

「はあああああああああああああ！！」

兄の為に、兄の期待に応えるために、兄を傷つけたものを許さぬアルは自分の持てる力の全てを拳に乗せると、茶渡の身体にたたき込もうとする。

だが、そんな渾身の一撃を茶渡は巨人の右腕で軽々と受け止める。

「！？」

思わず目を疑い驚愕するアルに茶渡は低い声で言う。

「・・・どうした力自慢？こんなもんか？」

茶渡はアルの腕を取ると、一本背負いの要領で投げ飛ばす技「クレーン投げ（グルーア・ティラール）」でアルを豪快に投げ飛ばした。

「のあああああああああ！」

アルは茶渡によって豪快に投げ飛ばされると、壁に叩きつけられ土煙が立ち込めその光景を見ていたスバル達は度胆をぬいた。

「く・・・・・・は！」

「アル！！」

弟のピンチを目の当たりにし声を荒げる兄エドワード。

「ぐ・・・・兄さん・・・」

傷ついた鎧で地面を這いつくばるかのように動くアルの姿にエドはいても経ってもいられなくなった。

「くそ！！待ってろ！」

エドは傷ついた体を起こすと、痛みを堪えた様子が顕著に示された表情を浮かべながらアルの元へと向かうが、その直後エドに向かって意外な人物による攻撃が仕掛けられた。

〈Ｒｅｖｏｌｖｅｒ　ｓｈｏｏｔ〉

エドの顔面目掛けて仕掛けられたその攻撃、皮一枚のところで右腕で防ぐエド。

「ぐ！」

そして、エドがその仕掛けた相手の方に目を向けると、瞳に映ってきたのは完全には回復しきっていないダメージが体に残っていた状態のギンガ・ナカジマだった。

「は、は、は、は。あなたの相手は・・・は、は、は、は、は私よ・・・

」

「ギン姉！」

「「ギンガさん！」」

「無茶すんじゃねぇよ！まだ回復しきってねぇだろ！」

「ギンガ、君は――――――」

と、スバル達や隊長達がそれぞれ言葉を投げかける中、ギンガは背中を向けた状態で覚悟の籠った声色で全員に懇願する。

「お願いします。私に、やらせてください――――――」

クロノはそんなギンガの言葉を真摯に聞き入れると、一度沈黙を保ってから徐に返事をする。

「・・・・・いいだろう。君の好きにするといい」

「クロノ！」

「クロノ提督、しかし・・・」

隣りで聞いていたヴィータやシグナム、更にはフォワードメンバーはクロノとは思えない軽薄な判断に疑問の声を投げかけるが、クロノはそんな全員に言う。

「あんな目で訴えかけられて、断れる筈もない。」

クロノの言葉を聞き、徐に一同がギンガの目を横で一瞥すると、そこには確かにクロノの言う通り凛として確かな覚悟が宿ったものがギンガの瞳には映っていた。

「「「・・・・・・！」」」

これを見た途端、ヴィータ・シグナム・アギトの三人は驚き返り、スバルもまた思わず言葉を漏らす。

「ギン姉・・・」

ギンガは後ろの方で自分に対して様々な驚き方をする一同の事を一度振り返って一瞥すると、呼吸を整え構えを取ってエドに宣言する。

「行くわよ。」

エドはそんなギンガを凝視すると、闘争本能が掻き立てられ不敵な笑みを浮かべる。

「へ。上等だ。串刺しにしてやるぜ。」

「――――――」

「ふん！」

「は！は！は！」

「はあああああああ！！！」

「へへ」

不敵な笑みを浮かべるエド。

ギンガはそんなエドに鋭いまなざしを向けたまま、懐から今回新たに手にした力であり新八を守りたいという思いからユーノに開発を依頼した新型カートリッジ、「トライアルカートリッジ」を取り出す。

「すべて――――――振り切る！」

ギンガはそう言うと、トライアルカートリッジの起動スイッチを押す。

〈Ｔｒｉａｌ〉

「トライアルカートリッジ、セット！」

スイッチを押し、形を変形させてからギンガは自分の左手のリボリバーナックルに装備し、その真価を発揮させる。

〈Ｔｒｉａｌ　Ｃａｒｔｒｉｄｇｅ　Ｓｅｔ　ｕｐ〉

パワースロットルを捻った瞬間、信号機の色が赤→黄→青の順に変わる通りに、ギンガのバリアジェットが紫→黄→青の順へと変わり、軽装となったギンガの装備を見たスバル達は思わず目を凝らした。

「あれは・・・」

「ユーノ先生が造った――――――」

「ほう・・・新しいカートリッジを持っていたのか――――――」

それなりにギンガの姿と力に興味をそそられるエド。

「はあああああああああああ！！！！」

ギンガはトライアルカートリッジによる変身を完了させるや否や、ソニックムーブに匹敵するほどの速さでエドに近づき強烈なパンチを腹に喰らわせる。

「ぐおおお！」

あまりの一瞬の出来事に目が追いつけなかったエドはそのまま後方へと飛ばされ、体勢を立て直すと改めてトライアルの凄さを実感する。

「成程・・・確かに速い。だが！」

エドはそう言うと同時にギンガに向かって反撃を仕掛けようと、機械鎧の左足で蹴りを入れる。

「てらあああ！」

ギンガは両手でそれを受け止めながら後ろへと退がり距離を取る。

スバルはエドと闘ういつも以上に真剣で覚悟を宿したギンガの姿に不安を抱く。

「ギン姉・・・！」

エドは両手を合わせて錬成を開始すると、ギンガの周囲に錬金術で造った無数の棘を呼び出し全方位からの串刺しを試み、見ていたスバル達は思わず息を呑んだ。

「いくら性能がいいカートリッジでも、所詮使う奴が虫けらじゃ意味がねぇ！」

エドがそう言った後に手を握りしめると、無数の棘はギンガの身体目掛けて不規則に動き始める。

しかしギンガはそんな不規則な動きの棘に一切動じることなく正確に動きを読んでいき、全てを目にも止まらぬ動きで回避し、その中から脱出する。

「何！」

これにはエド自身も相当驚いていた。

ギンガはそんなエドの方に目を向けたままリボルバーナックルに装着されていたトライアルカートリッジに手をかけ、それを徐に外そうとする。

「見せてあげるわ。このカートリッジの・・・トライアルの力を。」

ギンガがトライアルカートリッジを外した直後、一抹の不安を覚えたスバルは思わず声を荒げて言う。

「ギン姉！本当にやるつもり・・・！？もし、失敗したら・・・・・・ギン姉！！」

すると、そんな姉想いなスバルの言葉を聞いていたティアナや意識を取り戻したエリオは徐にこう言う。

「いいえ。ギンガさんなら大丈夫よ。」

「はい。必ず成し遂げます。僕らは信じていますから。」

二人の言葉を聞き、周りの反応も確認したスバルはその言葉を信じると、御揉むろ凛とした瞳を浮かべて返事をする。

「――――――うん。」

そして、トライアルカートリッジを握りしめ暫しの沈黙を見せるギンガ・ナカジマは目を瞑りながらこの一月でいつの間にか大切な存在となっていた志村新八の素顔を思い浮かべ心の中で呟く。

「（新八さん――――――いま、行きます！）」

意を決し、ギンガはカートリッジをマキシマムモードに変形させてスイッチを押し、それを空中に投げ捨てた瞬間勢いよくエドに向かって最大加速で走り出した。

「ふん！」

エドは向かって来たギンガに錬金術による連続攻撃を仕掛け、見ていたスバル達はギンガの勝利を只管に願ってその光景を見守るのであった。

ギンガはエドの仕掛ける攻撃を超高速で回避しながらエドの懐に飛び込み、カートリッジのタイムを計算しながら「T」の字を描くよ

うに連続で横蹴りを叩き込み出した。

「はあああああああああ！！！！！！！！」

徐々にそれはスピードと回数を増やしていき、気が付いた時にはスバル達も離れた場所で闘っていたアルと茶渡もその光景に目を凝らしていた。

「「「「あ！」」」」

「「「「おおお！」」」」

痛みを感じることもままならないままエドは超高速の横蹴りを体に受け続けていき、そしてトライアルカートリッジがギンガの手の中に納まった瞬間、ギンガはスイッチを再び押して見事マキシマムドライブを成し遂げる。

〈Ｔｒｉａｌ　Ｍａｘｉｍｕｍ　Ｄｒｉｖｅ〉

「９．８秒、それがあなたの絶望までのタイムよ。」

「ぐあああああああああああ！！！！」

ギンガの放ったマキシマムドライブ、マシンガンスパイクが決定打となると、テトラカトゥーン、鋼の錬金術師エドワード・エルリックは大爆発を起こす。

エドが爆発し、辺り一面に煙が立ち込めると目を凝らしてその光景を見ていたスバル達フォワードメンバーと隊長陣は嬉々とした表情を浮かべた。

「は！やったああ！！！！」

「ギンガさん！！」

喜びに満ち溢れる前線メンバー。

ギンガ自身も力を使いこなせただけでなくその手でテトラカトゥーンに決定打を与えられたことを大いに喜んだ。

すると、爆風の中から既に虫の息となりかかっているエドが出て来た。

「ぬあああああ！！！」

「！兄さん！！」

アルは茶渡との戦闘を中断すると、直ぐに兄の元へと駆け寄り虚ろな目を浮かべギンガを凝視する兄の最後を見留める。

「ば・・・馬鹿な・・・・・・人間如きに・・・・・・・たかだか一魔導師に・・・この俺が・・・・・・・何でだよ・・・・・・・なんで・・・・・・」

エドはそう言うと、そこで力尽きてしまい弟の腕に抱かれたまま息を引き取りただの紙切れとなって消滅を果たす。

アルは紙切れとなってしまった兄の姿に絶望し、悲しみのあまり声を上げる

「兄さん！！！！！！」

最早戦意喪失し、立つ気力さえ湧いて来そうにないアルの姿を目にした瞬間、隊長陣一同は茶渡に留めの一撃を促す。

「チャド！今だ！！」

「・・・ああ」

茶渡は返事をした後、徐に左腕を白を基調にした攻撃の力が宿った腕へと変化させ、アルは茶渡の霊圧の上昇に気づくや否や後ろを振り返った。

「は！」

「悪魔の左腕（ブラソ・イスキエルダ・デル・ディアブロ）」

茶渡はそう言うと、全ての霊力を左腕に込めてからアルに向かって走り出すと、動くに動けないでいるアルの鎧に強烈な一撃を叩きこんだ。

「“魔人の一撃（ラ・ムエルテ）”」

「がああああああああああああああああああ！！！」

アルは攻撃を受け、壁に激突。

その際、口を開けた髑髏のような形になるように壁が粉砕され、アルフォンス・エルリックはそれが決定打となり鎧が砕かれ、兄と同じように紙切れとなってこの世界から消滅した。

茶渡はアルを倒したのち、左腕を元の姿へと戻し、強制的に変身が解除され息を切らしていたギンガの方へと振り返る。

「は、は、は、は、は」

「ギン姉！」

「ギンガ！！」

スバル達はギンガの元へと駆け寄り、全身汗まみれのギンガの状態を心から気遣った。

ギンガは達成感に満ちた表情を浮かべながらスバル達に言う。

「や・・・やったわ・・・ついにやったわ・・・」

「うん・・・／／／凄いよギン姉・・・／／／」

「大した成長だぜ・・・よくやったな、ギンガ」

「ム。いいものを見せてもらった」

「おめでとう、ギンガ」

周りからの暖かい言葉に思わず胸が締め付けられるギンガ。

そして、込み上げてきた嬉し涙を拭き取ってから笑顔で返事を返した。

「はい／／／」

◇

〈なのはＳｉｄｅ〉

その頃、フォワードチームが勝利を収めたこととは裏腹に、エースオブエース高町なのはは絶体絶命のピンチに陥っていた。

「う・・・・・・」

自分の魔法をも容易に上回る魔法騎士が操る三体の魔神の攻撃に為す術もなく、なのははクレーターの中で横たわり無残な姿となったボロボロのバリアジャケットを身に包み、血を流しながら自分の身体と同じようにボロボロの姿である愛機恋人グハートを見つめる。

マジックナイトはそんななのはに近づくと、魔神セレスを操る海はふとこんな事を言って来た。

「どうしたのよ？あんなもんで終わりなの？！どうしてブラスターモードとやらを使わない訳？あれを使えば、少しは魔神相手でも遣り合えるんじゃなくて？」

すると、なのはは海の質問に対して体を小刻みに振るわせながら弱々しい声で答える。

「ブラスターは・・・・・使わない・・・・・・二度と・・・・・・使わないって約束したから・・・・・ユーノ君との約束だから・・・・・」

なのはの言葉を聞くと、ウインダムとレイアースを操る風と光はそれぞれ言う。

「それはまた殊勝なことですわね。ですが――――――」

「甘いこと言ってると、死んじゃうよ。」

光はそう言うと、その瞬間魔神の右腕を振り上げ、握りしめていた剣に炎を灯らせると、目の前のなのはを一刀両断するため一気に振り下す。

「はあああああああああああ！」

「！」

思わず体を硬直させ身動きの取れなくなるなのは。

すると、本体がかなり傷ついた状態でありながらレイジングハートがなのはを守ろうと自動防御を展開する。

〈Ｒｏｕｎｄ　Ｓｈｉｅｌｄ〉

前方に張られた桃色の防御だったが、今のなのはとレイジングハートではこの斬撃を受け止めることなどほぼ不可能に近かった。

「ぐううう！！」

「しぶとい奴・・・・・・レイアース！！」

光はレイアースに力を注ぎ込むと、更に威力を増した斬撃をなのは

にお見舞いし、二度目の攻撃を受けた途端防御が崩壊しなのははクレーターの中から吹き飛ばされる。

「がああああああ！」

地面に激しく叩きつけられ、吐血するなのは。

魔法騎士たちは魔神を操り徐に近づきながら最早虫の息に近かったなのはを恐怖の大王であるかのように見下ろし、なのははボロボロのレイジングハートの切っ先を震える手で向けながらこの上もない恐怖にどうにかなりそうであった。

「（・・・身体が・・・・・・心が・・・・・・・・萎えていく・・・・・・恐怖が・・私を震え上がらせる・・・・・・・嫌だよ・・・死にたくないよ・・・助けて・・・・・・・助けて・・・・・・）」

心の中で今まで味わったことのない死の恐怖に思わず涙を流すなのは。

そして、恐怖のあまりその助けを求めたのはやはり彼だった。

「助けて・・・・・・ユーノ君／／／／／／」

なのは自身も自分でも嫌になると思っていた。

しかし、心が折れそうになるとどうしてもユーノ・スクライアに頼ってしまう。

それが彼女の、高町なのはと言う女性の最大の弱みである。

幼子のように助けを請う彼女の姿に思わず顔を見合わせるマジックナイト三人だが、直ぐにそんな弱みを全開にするなのはにこう言い返した。

「ふふふ・・・ははははは!!ばっかじゃないの!いくら叫んだところで愛しの彼はここへは来ないわよ。」

「そうやって一人で泣き叫んでいれば、仲間が、大切なパートナーが助けに来てくれるとでも思ってるの?エースオブエースが聞いて呆れる!」

「結局私達とあなたの力の差は、倒されたときから何も変わってなどいませんね。自分一人で立ったつもりでいるあなたには、誰かを支えることも支えられることも出来ない脆弱な心を死ぬ一時まで無残に曝すのがお似合いなのですから。」

と、風がそう言ってなのはを罵倒すると聞いていたなのはもそれを認めてしまい思わず顔を伏せて悔し涙を流す。

だがその時、なのはの耳に思わぬ声が飛び込んできた。

『どうだろうね』

「!」

「「「え!」」」

なのはとマジックナイト三人は一瞬聞き違いかと思ったが、声が聞こえるとすぐになのはが手に持っていたレイジングハート・マキシマムブレイドのその象徴たる赤い宝石部分が眩いばかりの光を放ち

始め、なのは達は思わず目を凝らした。

「海ちゃん！風ちゃん！」

「何なのよ一体・・・！？」

「あの方の杖が光りはじめました・・・」

「熱い・・・これは一体・・・」

状況がまるで把握できていないなのは。

すると、光り始めたレイジングハートから更になのはにとって聞きなれれた、最も安堵する男の声が聞こえてくる。

『なのは。君の心は決して脆弱なものなんかじゃない。それは今まで君と一緒に居た仲間や僕が何よりも知ってる。そしてその強い心がそう有り続けられるのは一重に、君が誰よりも優しくて、誰よりも人を慈しむことの出来る心の綺麗な人だからだよ。だから、もう泣かないで。立ち上がって。迷うことはない。その迷いを吹っ切って、全力で向かって行けばいい。その為に、必要な不屈の心は――――僕が支える』

「ひょっとして・・・ユーノ君・・・・・？」

声を聞いていたなのはが呆然とした表情でそう口にすると、なのはの予想した通りの人物であるユーノは驚くべきことを言う。

『ＡＲカートリッジシステム、最後の切り札・・・・・・漸く使う時が来た。』

「最後の切り札・・・・・・？」

思わずその言葉を繰り返すなのは。

「何処だ！？誰の声よ！！」

見ず知らずの声の主に戸惑いを隠せない海と、直感で声の主を察する風。

「（まさか・・・目の前のあの方に魔法を導き・・・幾度なく窮地を救って来た次元世界最強の翡翠の魔導死神・・・ユーノ・スクライアさん！？）」

『僕の真に愛する女性に直接力を貸してあげたいけど、生憎それは出来ない。その代り――――――――――』

と、その瞬間宝石部分から発光する光は更に強さを増し、なのはの目の前に翡翠に輝くミッド式の魔法陣が展開される。

「あ！」

「魔法陣が・・・！？」

驚くマジックナイト達と、魔法陣と一緒に現れた人物に目を丸くする高町なのは。

なのはの前に現れたその人物・・・・・翡翠の魔導死神ユーノ・スクライアはなのはの手を優しく包み込むように握りしめると柔らかな表情でこう呟いた。

『枷を外してあげるよ』

突然の出来事に発する言葉さえ見つからないなのは。

同じ様にマジックナイト達も言葉を失いかけるが、徐に光が二人に言葉を投げかける。

「海ちゃん・・・風ちゃん・・・あれは・・・」

「まさか・・・あの男は・・・・!?」

「間違いありません・・・あの方こそ翡翠の魔導死神・・・ユーノ・スクアイアさん・・・!」

「だけど、この場にはいない愛しの彼氏様をホログラムで投射するなんて・・・悪趣味にも程があるわね・・・反吐が出ちゃう!」

すると、海の言葉を聞いた瞬間レイジングハートが応答する。

〈Ｔｈｅｒｅ　ｉｓ　ｎｏ　ｈｏｌｏｇｒａｍ.（ホログラムなどではありません）〉

「レイジングハート!?」

〈ＡＲ　ｃａｒｔｒｉｄｇｅ，ｍｙ　ｍｅｍｏｒｙ　ｉｓ　ｔｈｅ　ｓｔｏｒａｇｅ　ｔｉｍｅ　ｉｓ　ｌｅｆｔ　ａｓ　ｔｈｅ　ｍａｓｔｅｒ　Ｙｕｎｏ.　Ｉｎ　ｍｙ　ｃａｓｅ，ｗａｓ　ｔｈｅ　ｍａｓｔｅｒ　Ｙｕｎｏ　ｔｉｍｅ　ｉｓ　ｓｈｏｒｔ　ｃｏｍｐａｒｅｄ　ｔｏ　ｔｈａｔ　ｏｆ　ｔｈｅ　ｍａｓｔｅｒ

now, still part of his soul has been well recorded. Then, it is embodied by the AR cartridge, I have notmaterialized as part of a hologram thus genuine soul.（このARカートリッジと、私の記憶にはマスターユーノとしての記憶と時間が残されています。私の場合、マスターユーノと居た時間は現マスターのそれに比べれば短いですが、それでも彼の魂の一部はしっかりと記録しています。そして、ARカートリッジによってそれが具現化し、こうしてホログラムではなくれっきとした魂の一部分として実体化しているのです。）〉

「魂の一部分・・・？」

途方もないことに唖然としながらも言葉を繰り返すなのは。

ユーノはそんななのはに笑みを浮かべながら、言葉を投げかける。

『あまり難しいことは考えることはないよ。さぁ、なのは。枷を外してあげるよ』

「！そう言えば、さっきもそう言っていた！」

ユーノの言葉に驚くマジックナイト。

そして、ユーノはなのはに向かって驚くべき事実を口にする。

『なのは・・・今君の使うその“マキシマム・ブレイド”は、“仮の姿”だ』

「え！仮の姿！？」

予期せぬユーノの言葉に耳を疑うなのは。

そして、ユーノはＡＲカートリッジに隠された真実を徐に暴露し始める。

『ＡＲカートリッジを作った当初、僕は君の身体への負担を考え、あらかじめ魔力の最高質力に制限を設けた。そうして、”全力全開”と言う虚言の元、僕は君の事を守ろうとしていた。それがマキシマム・ブレイドと言う仮の姿としての力。だが、もうその必要はなくなった。なのはには、やはり本当の意味で全力全開で戦ってほしい。手加減なんてもんはいらない。君になら、このカートリッジの本当の力とその意味、そして僕の意志を分かって貰えそうだから――――』

ユーノはそう言うと、ＡＲカートリッジに手を触れ、掛けられていた枷と呼ばれるものを外してあげた。

その途端、枷を外されたＡＲカートリッジは桃色の光を発し、光を放つと同時に膨大な魔力が溢れ出して来、思わずなのははその魔力の圧に堪えようと体を張った。

「う！！」

溢れ出して来た膨大な魔力は傷ついたなのはの身体とバリジャケットを元の状態へと戻し、レイジングハートもまたその姿をマキシマム・ブレイドから真の力の姿へと変化させる。

〈Ｅｘｓｔｒｅａｍ　Ｄｒｉｖｅ〉

「え」

「「「！？」」」

レイジングハートの形状が変化し始める姿を所有者であるなのはとマジックナイト三人は目を凝らして見つめ、そして変化したレイジングハートのその姿はなのはの想像を絶するものであった。

「これは・・・・・・」

〈ＥＸＳＴＲＥＡＭ　ＣＡＮＮＯＮ〉

レイジングハートのＡＲカートリッジ発動時の本当の力の姿・・・それはかなり大型の機体で、なのはの左腕に装着した手甲とジョイントすることで保持される長槍を彷彿させる長大な砲身が特徴の機体で綴束状態では「突撃槍」「重剣」として用いることの出来るデバイスの常識を超えた代物だった。

「レイジング・・・ハート・・・？」

レイジングハートは驚きによって言葉を詰まらせるなのはをサポートするため、自ら《単独飛行形態》、即ちレイジングハート自身がブラスタービットと同じ状態となって頭上に浮かび上がる。

間近で変わり果てたなのはのデバイスの姿にマジックナイト達は目を疑った。

「あれは・・・！」

「デバイスの形が変わった・・・！」

なのはは左腕に装着された真の力の姿を凝視する。

「これが・・・私とレイジングハートの本当の力・・・・・」

『そうだ。それが君の真の力の証、レイジングハート・エクストリームカノン』

「エクストリーム・・・カノン・・・」

そう復唱した直後、ユーノはなのはの肩に手を乗せ最後にこう言う。

『なのは。』

「ユーノ君・・・」

『マジックナイトの小娘たちに、一泡吹かせてきなよ。』

「・・・うん！」

ユーノの言葉で勇気をもらったなのはが不屈の心を抱いてそう返事をすると、その言葉に安心したユーノはほくそ笑んでからなのはの前より忽然と姿を消した。

風は姿を消したユーノに目を疑った。

「き、消えましたわ！」

「ムカつく・・・ふざけた事言って・・・相当私達の事舐めてるよ

うね！」

と、海が怒り心頭にそう口にした直後だった。

〈Ｄｉｖｉｎｅ　Ｂｕｓｔｅｒ〉

海が操る青の魔神セレス目掛けて強烈な威力を秘めたなのはの出射場インバスターが放たれる。

「がっは！」

桁違いなその威力を受け、魔神セレスも操縦者である海もダメージを負ってしまう。

「海ちゃん！」

「今のは・・・まるで見えませんでした！」

目にも止まらぬ、且つ人知を超えたその威力を目の当たりにし、恐怖を覚える風とその攻撃を直に受けた海は心の中で呟く。

「（う・・・ウソでしょう・・・魔神を吹き飛ばす程の砲撃って・・・一体・・・）」

そして、なのは自身もまた一発でこれだけの威力を発揮するこのエクストリームカノンの性能にただただ驚くばかりであった。

「（これが・・・・・・エクストリームカノン・・・？）」

「よくも海ちゃんを・・・・・・許さない！！」

海が傷つけられると、光は黙って居られなくなり、剣を構えてなのはに渾身の一撃を振り下す。

「レイジングハート！」

〈Ｅｘｓｔｒｅａｍ　ｐｒｏｔｅｃｔｉｏｎ〉

なのはは剣が振り下された瞬間、最高硬度を誇る絶対の防御を展開し、あのレイアースの斬撃を受け止めた。

「と、止めた！？」

風はレイアースの斬撃をも受け止めるなのはの力の上昇に目を疑い言葉を漏らしていると、その瞬間なのはの左腕のエクストリームカノンにカートリッジがロードされる。

「！」

そして、驚く光に向けてなのははエクセリオンバスターの百倍の威力を秘めた大砲撃を仕掛ける。

「エクストリームバスター！」

「（切り返しが早い！）」

咄嗟に前に出て来た風はウインダムに魔力を送り込むと、巨大な護りの風を発動させてなのはのエクストリームバスターを防ぎきるが、風の蓄積ダメージを負ってしまう。

「う！」

「「風（ちゃん）！」」

「大丈夫ですわ・・・でも残念ですわね。ここまで私達はまだ八割しか力を出していませぬよ。」

「私は五割だよ。」

そう言うと、なのはは一瞬で三体の魔神の背後へと回り込む。

「「「！」」」

そして、カートリッジを二発ロードして先ほどと同様の大威力砲撃エクストリームバスターをマジックナイト達へと叩きこむ。

〈Ｔａｒｇｅｔ　ｒｏｃｋ　ｏｎ．　Ｅｘｓｔｒｅａｍ　ｂｕｓｔｅｒ〉

「シュート！！」

砲門から発射された桃色の閃光は三体の魔神を飲み込み、直撃を受けたマジックナイトは魔神を通じてその威力に圧倒される。

「「「ぐあああああああ！！」」」

大きさに関係なく魔神を吹き飛ばしたなのはの砲撃。

これこそが彼女の真骨頂とも言うべきものであるが、やはり彼女の代名詞失くしてそれは語れないであろう。

「レイジングハート。終わらせよう。」

〈Ａｌｌ　ｒｉｇｈｔ〉

なのはは呼吸を整えると、徐に大気中の魔力素とリンカーコアに残っていた全ての魔力を消費し、最大最強の集束砲撃を行う準備に取り掛かった。

「う・・・・・あ！」

三人はその事に気づいて周囲を見渡してみると、自分の周りに遭った魔力素が次々となのはの元へと急襲されていき、その前方に現れた大砲を彷彿させる球体上の閃光に度胆をぬいた。

「あの光は・・・！」

「まさか・・・」

なのはは魔力集束に集中しながらも、息を整え三人に向かってこう言う。

「ふう・・・ごめんなさい。あの時私は私自身の本当の全力全開であなた達と向かっていなかった。だから今度こそ、全力全開で向かわせてもらう。」

「ちょ・・・ちょっと待ちなさいよ・・・まさかこのタイミングで・・・」

「マズイですわよ・・・これは・・・」

「く・・・身体が動かない・・・」

集束砲撃を前にし、この場から退避しようと考えていたマジックナイトだったが、先ほど受けた攻撃が功をを奏したのか、思う通りに体を動かすことが出来なかった。

そして、全てのリンカーコアの魔力と周囲の魔力素による魔力集束を終えたなのはは、エクストリームカノンを掲げて宣言する。

「受けてみて！これが私の全力全開！！」

〈ＥＸＳＴＲＥＡＭ　ＳＴＡＲ　ＲＩＧＨＴ　ＢＲＥＡＫＥＲ〉

そして、今放たれる高町なのは最強最大、最後の魔法。

「スターライト・・・・・・ブレイカー！！！！！！！！！！！！！！」

その瞬間、全てを飲み込むかのごとく巨大な集束砲撃魔法エクストリーム・スターライドブレイカーがマジックナイト三人の元へと発射。

三人は魔神を通じてその凄まじい威力に驚嘆しつつ、全身を吹き裂くような強烈な痛みに思わず全身から声を上げる。

「「「ぐあああああああああああああ！！！」」」

「エクストリーム・・・・・・シュート！！！！！！！！！！！！！」

そして、最後になのははは止めの一撃を加え、それを受けたマジックナイト三人は魔神諸共なのはのスターライトの餌食となって正体である紙切れとなって消滅するのであった。

「「「がああああああああああああああああああああ！！！！！！！！！」」」

スターライトによる攻撃が終了し、辺り一面が戦火に焼かれた大地とさえ錯覚しそうな風景が広がる中、爆風の中より現れる三枚の紙切れ。

なのはは空中に浮かびながら多大な魔力を使ったことにより生じた身体への負荷に息を切らしていた。

「は、は、は、は、は、は――――――」

〈Ｓｙｓｔｅｍ　ｐｏｗｅｒ　ｄｏｗｎ〉

と、その直後なのはは意識を失い飛行魔法が強制的に解除されると目を瞑り力なく空中から落下していった。

なのはは意識を完全に失う直前まで、頭の中で自分とかかわってきた人々の顔を思い浮かべ、一筋の涙を流す。

「（・・・みんな・・・ヴィヴィオ・・・ユーノ君・・・・・・ごめんね。私、甘えてばかりで・・・・・・）」

高町なのははそうして、全ての力を使い果たすと地面へと落下。

そのまま気を失い動かなくなった。

◇

〈ナルトＳｉｄｅ〉

さて、また一つ闘いに終止符が打たれたところで、次はテトラカトゥーン、うずまきナルトと春野サクラと対峙していた恋次達の方はどうだろう？

ナルトとサクラの力にまるで歯が立たないでいた恋次達は満身創痍の身体で横たわり、神楽もまたサクラによって完膚なきまでに叩きのめされ踏みつけられていた。

「く・・・・・ここまでか」

近藤がそう呟くと、聞いていた全員は顔をゆがめ神楽もまたいつも自分の傍らにいた銀時や新八の顔を思い返しながら悔し涙を流す。

「ぎ・・・銀ちゃん・・・新八・・・／／／」

ナルトとサクラは悪意に満ちた表情を浮かべると、止めを刺そうと攻撃の態勢となった。

「「終わりだ（よ）」」

二人が今まさに彼らに止めを加えようとしたその時だった。

「誰が終わりだって？」

「「！」」

何処からともなく聞こえてきた甲高い声が二人の言葉を否定し、それと同時に煌々と燃え上がる炎の斬撃がサクラの元へと飛んで来た。

「俺の必殺技、パート2！」

「きゃあああ！！」

サクラは炎の斬撃をその身に受けると、声を上げて吹き飛ばされる。

「サクラちゃん！」

サクラの危機に思わずナルトが声を荒げると、その瞬間天井が破壊され甲冑に身を包んだ青と金色の戦士が現れる。

「ダイナミックストーム！！」

「ウォーターホイッパー！」

二人が手にしていたデバイス、フィッシャーマンとアックスオーガからの水流攻撃と物理破壊力に長けた強烈な突風がナルトに直撃。

ナルトは防御もままならずサクラと同じように吹き飛ばされる。

「ぐあああ！」

唖然とする恋次達だったが、彼らは目の前の二人の男ともう一人の男の事をよく知っていた。

「お、お前ら・・・！」

彼らの前に現れた三人の男、スクライア商店従業員の熊谷金太郎・亀井浦太郎・桃谷鬼太郎は揃って甲冑に身を包んで自分の武器を手にしていた。

「よう。待たせたな！」

「スクライア商店、参上ってね♪」

「遅れてしまったこと、誠に申し訳ありませぬ。」

「ほら、こいつは餞別だ」

鬼太郎はそう言うと、恋次目掛けてユーノが作ってくれた特効薬を投げつけた。

「店長特性の回復薬。これ飲め。」

「ああ。恩に切る。」

恋次は嬉々とした表情を浮かべると、ルキア達にもいきわたる様にそれを飲んでいき、スクライア商店は仮面越しに笑みを浮かべた後目の前の敵に集中する。

ナルトとサクラは土煙の中から姿を現すと、傷を負った体を引きずりながら鬼太郎達に剣幕を浮かべた。

「く・・・・・くそが・・・・・・」

「何してくれるのよ・・・・・」

浦太郎は鬼のような形相のサクラに一瞬身震いし、その後ため息がてらこう呟く。

「本当・・・嫌になるよね。女の子は好きだけど、形振り構わず暴れる子は正直苦手なんだけどな・・・」

「こんな時にまで自分の好み語ってんじゃねぇよ、出歯亀」

総悟が真顔のままそう言うと、浦太郎は否定の言葉で反論する。

「出歯亀とは失礼だな！僕は人よりも異性に対して異常に執着があるだけなんだって！」

「世間じゃそう言うのをエロいとか、出歯亀とか言うんじゃねぇのか・・・」

浦太郎の言葉を聞いていた恋次はルキア、吉良、近藤同様の見解にし達し、呆然とした表情でそう呟く。

「もっとも、今は出歯亀と言う輩はほぼ皆無だろうがな・・・」

そして、普段から古風な口調で話すルキアでさえ、総悟が口にした出歯亀と言う言葉にはツッコミを入れざるを得なかった。

「で、どうするよこいつら・・・どうやってぶちのめす？」

「幸い、さっきの浦太郎君の攻撃でナルトの仙人モードが解けた。ここは一気に攻めに転ずるべきだよ」

「では・・・・・・白鳥殿!!」

金太郎はそう声高に叫ぶと、念話でそれを聞き取った白鳥が即座に反応する。

「（!その声は・・・ゴールデンベアーか!?どうやら生きていたようであるな・・・）」

「（かなり危ない状態ではありましたが・・・それより、白鳥殿が無事と言うことは他のものも無事と言うことでしょうか?）」

「（ああ。深手は負ったが、何とかである――――――）」

「（そうですか。では少しここで我々に力を貸してはいただけないでしょうか?久しぶりのクライマックス、甲冑バージョンで。）」

「（な・・・私はあまり気は進まぬのだが、ここは背に腹は変えられぬか・・・・・・）」

白鳥は意を決すると、徐にデバイスジークを取出し甲冑モードとなる。

「セットアップ」

〈Ｗｉｎｇ　ｆｏｒｍ〉

白鳥が突然何の前触れもなく甲冑モードとなったことに、その場にいたスバル達は大いに驚かされる。

「!し、白鳥さん・・・!?」

「どうしたんですか、急に甲冑モードになったりして・・・！？」

「悪いが、暫し留守にする。ピーチたちが危ない。」

「「「「「！」」」」」

「何だって？」

白鳥の言葉を聞き、思わず表情を凍りつかせる一同。

白鳥は甲冑に身を包むと、念話でピーチに伝える。

「（ピーチ。私は準備オーケーだ。さっさと済ませるぞ。）」

念話を聞き入れた鬼太郎は鼻で笑うと、離れた場所で返事をする。

「け。しょうがねぇ。やっぱ本家本元だ。」

「じゃ、やりますか♪」

「では参りますか。」

スクライア商店も覚悟を決めると、準備に取り掛かり、何も知らないでいる恋次達は訝しげな表情を浮かべながら尋ねる。

「一体どうするつもりだよお前ら」

「まぁ見てろって」

四人は一斉にそれぞれの色に合わせた携帯電話を取り出すと、ラピュタでのアンゴルモア回収任務でも使った強化変身の為にボタンを押していく。

〈Ｍｏｍｏ　Ｕｒａ　Ｋｉｎ　Ｔｏｒｉ〉

ボタンを押した四人は形態を天に掲げた状態で高らかに宣言する。

「「「「俺（私）（僕）、クライマックス！」」」」

〈Ｃｌｉｍａｘ　ｆｏｒｍ〉

通話ボタンを押した途端、甲冑モードの鬼太郎に集まる様に浦太郎、金太郎は光子となって吸収され、そしてまた白鳥自身も光子となって鬼太郎の元へと飛んでいく。

「な！白鳥さんが！？」

「何処行く気ですか・・・！？」

思わず困惑するティアナや他の前線メンバー。

白鳥は引き寄せられるように鬼太郎の元へと飛んでいき、鬼太郎の元へと到着すると同時に体の中へと吸い込まれ、彼ら四人は甲冑ーモードにおける強化変身を成し遂げる。

「な！」

「こいつは・・・！」

姿を変化させた鬼太郎達の容姿を目の当たりにし、言葉を失いかける恋次達と敵であるナルトとサクラ。

その見た目とは、四人のオーラを一挙にフリーエネルギーに変換し基本カラーは赤で、４つの仮面を各部（浦太郎が右肩、金太郎が左肩、白鳥が背部）に配しており、基本人格である鬼太郎の仮面もまた頭部が桃の皮が剥ける様なイメージで変形していた。

それを見た総悟は声優繋がりから思わずつぶやく。

「てんこもりってか・・・」

変身を完了させ、満足げの鬼太郎だったがその時背中の方に違和感を覚える。

「あ？何？！何だこのビラビラ！？手羽野郎お前な！！」

鬼太郎が白鳥のセンスの無さを厳しく叱咤するも、白鳥は自信満々に答える。

「（美しいであろう。有難く思え）」

「馬鹿野郎！みっともねぇんだよ今すぐ変えろ！！」

すると、鬼太郎の中に融合されている浦太郎はスペースの狭さに困惑していた。

「（もう、ちょっと金ちゃん押さないで！）」

「（狭いのだから仕方ないであろう）」

「（家臣ども、苦しゅうない）」

「苦しんだよ！」

傍から見れば異様な光景にしか思えないスクライア商店従業員だが、敵であるナルトとサクラの怒りのボルテージは上昇し続ける。

「何こそこそ喋ってんだよ！！」

「無視してんじゃないわよ！！」

浦太郎はそんな二人の態度を見ると、呆れた感じに言う。

「（あ～あ、怒らせちゃった）」

「言ってる場合か！一気に行くぜ！おい！恋次達もまだいけるな？」

「あったりめーだ。」

「俺達はこんなもんじゃ終わらんさ。」

「片を付けようぜ。」

恋次達はそう言うと、回復したばかりの体を起こして愛刀に手をかけ、神楽もまた自分の唐傘を手に取り鬼太郎の横に並ぶ。

「私も入った方がいいアルよな？」

「ああ。全員でぶちのめすぜ」

クライマックススクライア商店・死神組・夜兎・そして真選組・・・・・今ここに、最強タッグが完成する。

白鳥を含めた８人はナルトとサクラの方に目線を合わせると、注目の的となっている二人もまた８人を睨み付け、ナルトは隣のサクラに声をかける。

「サクラちゃん！行くってばよ！」

「ええ。原型が分からなくなるまでべこべこにしてあげるわ！」

二人はそう言うと、同時に走り出し恋次達もまた一斉に走り出し激しい攻防を繰り広げる。

鋭い金属音が何度も火花を散らし、暫くの間その状態が続くとナルトとサクラは距離を取り、サクラは意を決して自分の全てのチャクラをナルトに提供するのであった。

「ナルト！私のチャクラを全て、アンタの螺旋丸に！」

「オッケー。俺に力を貸してくれ。」

サクラはチャクラ全てをナルトの手を握って提供すると、ナルトは利き腕に超高速の特大螺旋丸を作り出す。

二人が最後の攻撃を行おうとすると、鬼太郎達もまた最後の攻撃に移ろうとする。

「上等だ。やってやろうじゃねぇか！」

「近藤さん。無茶苦茶にしてもいいんですよね。」

「ああ。存分に斬り刻んでいいぞ！」

「そんじゃ、俺達も」

「「ああ」」

鬼太郎はベルトに装着された携帯の中央ボタンを押し、軽快なメロディが奏でられると同時に持っていたパスを翳してエネルギーをチャージする。

〈Ｃｈａｒｇｅ　ａｎｄ　ｕｐ〉

恋次達もまた自身の霊圧を極限まで研ぎ澄ませてその時を待つ。

そして、ついに雌雄を決する両者の最後の攻撃が発動する。

「「大玉螺旋丸！！」」

ナルトとサクラは手を握りしめたまま一緒に走りだし、恋次達に向かって特大の螺旋丸を仕掛け、恋次達もまた最強最後の攻撃に転ずる。

「鋼鉄狒骨大砲！！」

「次の舞・白漣！」

「破道の五十九　氷雪雷！」

「神楽流・・・“歌舞伎町の女王舐めんじゃねぇぞ!!”」

死神たちの鬼道に上乗せする形で神楽が傘の先から砲撃を放ち、ナルトとサクラはその激しい攻撃に決して屈することなく螺旋丸を盾にして突進する。

「「はあああああ!!」」

だが、その後に続いて今度は近藤・総悟の真選組コンビネーションが待っていた。

「どりゃあああ!!」

「死ねてめぇら!!」

二人は四人の攻撃を防ぐのにエネルギーを霧散させてしまった螺旋丸の僅かな隙を見切って豪快に刀を一刀両断し、ナルトとサクラを斬り刻む。

「「ぐあああ!」」

その一撃を受け、その場に倒れる二人。

そして、最後にエネルギーを利き足に蓄えていた鬼太郎が豪快にジャンプ。

背面のウィングフォームの仮面を展開させ空中高く飛行し、上空から跳び蹴りを繰り出した。

「「は！」」

ナルトとサクラがそれに目を凝らした瞬間、スクライア商店メンバー最強の一撃が放たれる。

「「「「「とりゃあああああああああ！！」」」」」

必殺技、ボイスターキックをその身に受けた二人の忍者は豪快に吹き飛ばされ、大爆発を伴って壁に激突した。

「「だあああああああああああああ！！！！」」

爆風がその場に上がり、念を入れて二人の状態を確かめる恋次達。

すると、炎の中に残っていたのは黒炭のように炎に焼かれて消えていくただの紙切れだけであった。

恋次達は勝利を確信すると、ほくそ笑み鬼太郎はガッズポーズをとった。

「やったぜ」

かくして、テトラカトゥーンうずまきナルトをチームワークにて葬り去った恋次達。

これで残るテトラカトゥーンは斎藤一だけとなった。

◇

〈土方Ｓｉｄｅ〉

では、その斎藤一と対峙していた真選組副長、土方十四郎――――――今際の彼が見るものは――――――

〈分かった。トシ、俺達はお前を信じるぞ〉

〈負けたときは、そん時は俺があんたを殺すぜ。〉

闘いの前、仲間たちと交わした誓いの言葉。

「（あいつら・・・みんな無事なのか・・・）」

そんなことを思っていた土方。

そして、斎藤が徐に振り返ってみると、彼が見たのは信じられない光景だった。

「ん！」

振り返った先に映ってきたのは、全身血塗れで朦朧とする意識の中それでもその場に立ち尽くす土方十四郎の姿だった。

如何に壬生の狼と言われ、戦いの際は冷静さを保つことの出来る斎藤一もこの光景には目を疑いたくなる。

「・・・何で立ってる？あらだけ斬られて、あれほどの落石を避けたのか！？」

「ハ、ハ、ハ、ハ、ハ」

荒い息をしながら、土方はそんな斎藤の言葉を聞いてから心の中で呟く。

「（この石を・・・避けた?違う・・・分かったんだ・・・石の落ちてこねぇ場所が・・・・・・・・刀は・・・・・・あの石の下にあるな・・・分かる。）」

土方は刀のある場所を探り当てると、徐に瓦礫を避け始め、見ていた斎藤は思わず呟く

「何なんだ?」

瓦礫を退かし、下敷になっていた長年の愛刀を手に取り土方は息を立てながら更に心の中で呟く。

「（こういう感じは前にもあった。辺りがやけに静かで、自分の鼓動がバカにデカく聞こえる・・・・・・まさに、死の境地って奴か・・・・・落ちてくる石からは、生き物みてぇな・・・気配を感じた・・・気配じゃねぇ・・・もっとくっきりした・・・“呼吸”・・・石の呼吸・・・樹には樹の呼吸・・・土には土の・・・こう言う事か?）」

そう思い始めた瞬間、彼の脳裏に再びユーノ・スクライアの言葉が反響する。

『いいですか土方さん。世の中にはですね・・・・・・“何も斬らないでいることが出来る剣士がいる”んですよ――――――』

その時、土方はユーノが自分に諭してくれた言葉を次のように解釈した。

「（何も斬らないってのは・・・・・“呼吸”を知れって事なのか？それが、鋼鉄をも斬る力）」

一方で斎藤は、目の前で屈することなくその場に佇む土方の生命力と精神力の強さに圧倒され、斎藤には珍しく動揺を見せ始めていた。

「貴様。一体何をした？あれだけの技を受けて・・・それだけの血を流して・・・生きてられるはずが無い。」

土方は眼前で自分に向けて話しかける斎藤の言葉ではなく、彼の呼吸音そのものが全身に伝わり感覚を研ぎ澄ませる。

「（聞こえるぞ。あいつの鋼鉄の呼吸・・・刀に意思が伝わる。）」

土方はその直後、徐に握っていた愛刀で隣に佇む樹の刃を軽く撫でるように振り払うがその時には木の葉は一枚も切れず、その後振り下した際に岩が綺麗に真っ二つに両断される。

「フン。いいだろう。次で完全に息の根を止めてやろう。」

斎藤はそう言うと、多少の動揺を顔に出しながら土方に向けて刀を向けると、決着をつけるための牙突の構えを取り、土方は肩で息をしながら徐に刀を向ける。

「（あとは・・・・・俺に本当に鋼鉄を斬る力があるかどうかだ）」

「刀一本で俺の技を受け切れるとは思えぬがな」

「・・・いいんだ。もう受けねぇ」

「覚悟ありか・・・・・・上等！」

斎藤は意を決して土方目掛けて走り出す。

斎藤が攻撃を仕掛けに行くと、それと同時に土方は斎藤を鞘に納め一回転させてから自分の利き手に持って最後の技を発動する。

「一刀流「居合」獅子歌歌（ししソンソン）」

「牙突・壱式！」

両者の技が同時に仕掛けられ、暫くの沈黙が保たれる。

そして、互いに距離を置いて立ち尽くす二人の剣客だが、土方が徐に鞘に刀を納めると、その瞬間斎藤の刀は砕け散り、斎藤本人からは多量の血が噴き出てきた。

「ガッ・・・」

斎藤をその手で斬った直後、土方は斎藤に向けてこんな言葉を呟いた。

「礼を言う。俺はまだまだ強くなれる。」

その一方で血塗れとなって両膝をつく斎藤は土方の驚異的な成長速度に感服し、それと同時に完全なる自分の敗北を確信する。

「（本当に・・・この勝負の間に、成長しちまいやがった・・・）」

土方も限界に達したのか、両膝をついてそのまま動かず肩で息をしていた。

斎藤は最後に薄れゆく意識の中で意外な言葉を残していく。

「・・・土方十四郎・・・お前はこれから・・・天人によって近代化し、貪られていく江戸で・・・どこまで刀に生き・・・己が信念・・・を貫ける・・・か・・・な・・・・・・・・・・」

直後、斎藤は力尽き本来の姿である紙の形に戻ると土方の前から姿を消していったのであった。

斎藤一が消滅すると、土方はそんな斎藤の質問の答えとして次のように語るのであった。

「・・・・・・ふん。このど阿呆が。んなもん決まってるだろう。テメェと一緒だ・・・――死ぬまでこいつに生きてやる。」

土方はそう断言すると、その状態のまま気を失い動かなくなってしまった。

カトゥーンキャッスル　北ブロック

土方十四郎Ｖｓ斎藤一

勝者　土方十四郎

◇

〈なのはＳｉｄｅ〉

その頃、すべてのテトラカトゥーンが倒され城内が一気に静けさを取り戻し始めた時、マジックナイトとの戦いでほとんどの魔力を使い果たし地面の上に横たわり意識を失っていたなのはは暗闇の中で自分の全てを包み込む暖かいものに安堵していた。

「（誰だろう・・・・凄く気持ちがいい・・・）」

そう思いながら徐に目を開けると、瞳に映ってきたのはいつも自分の傍らで励まし、守ってくれていたなのはにとって誰にも変えることの出来ないただ一人の最愛の人、ユーノ・スクライアだった。

『なのは。もう大丈夫だよ。落ち着いて』

「（ゆ・・・・・ユーノ君・・・・・・）」

一瞬夢ではないかとさえ思ったなのはだが、たとえ夢であったもユーノの柔らかな顔を見て、その手に抱擁される感覚に陥ると、もう少し夢でもいいとさえ思った。

「（暖かいな・・・・・・・・・）」

なのははユーノの腕に抱かれたまま再び目を閉じた。

そして、完全に意識を取り戻して徐に現実世界を確認したとき、彼女の目に映ってきたのはユーノではなく、少しバリアジャケットの汚されたフェイトの顔であった。

「なのは。なのは！」

「おい、なのは。」

その隣には、治療を受けユーノを追いかけている途中にフェイトと遭遇した一護も一緒に居た。

なのはは意外そうな顔を浮かべながら徐に言葉を発する。

「フェイトちゃん・・・・・・一護さん・・・・・・・」

「よかった。気が付いたんだね。」

なのはが意識を取り戻したことを確認し、安どの表情を見せるフェイトと一護。

一護は状況が把握できていないなのはに説明をする。

「ここに向かう途中でフェイトとばったり会ってよ、急いでお前の反応を追って来てみれば・・・・・これはどういう状況だよ?まるで荒廃した大地そのものだぜ・・・」

一護はそう言いながら、とても一個人との戦闘で起こったものとは思えない壮絶な戦いの爪痕が刻まれたフィールドを見渡し冷や汗を流す。

「なのは。大丈夫?」

「う・・・うん・・・大丈夫だよ・・・」

フェイトにそう返事をし、彼女の手を借りて体を起こしたなのはは

その途端、一滴の涙を流して声を震わせてこう言う。

「・・・ありがとう・・・ユーノ君／／／」

「？なのは・・・」

「う・・・／／／私は・・・結局・・・最後の最後までユーノ君に守れた・・・／／／」

「なのは・・・」

訊いていた二人は思わず顔を見合わせ、複雑な表情を浮かべながら声を震わせて涙を流すなのはを見つめ、なのはは左腕に装着されたレイジングハート・エクストリームカノンに涙を零し更に続ける。

「私・・・本当は不屈でも・・・エースオブエースでもないんです・・・／／／本当は一人になると不安で怖くて・・・誰かの支えがないと恐怖でどうにかなっちゃうんです・・・／／／だけど、みんなが私の事をそう呼ぶから・・・期待を寄せるから・・・その期待に応えようって虚栄を張っちゃうんです・・・／／／」

「「・・・・・・」」

「う・・・／／／だけどユーノ君だけは・・・いっつもみんなの前で嘘の仮面をかぶる私の心を見透かして、素の私に戻してくれる・・・／／／それがたまらなく嬉しくて・・・だけどちょっと悔しくて・・・／／／私ばかりが甘えて、ユーノ君が私に何も甘えようとしないのが・・・淋しくて・・・／／／だから強くなりたかった・・・守ってあげたかった・・・だけどユーノ君がどんどん遠くに行っちゃって、追いかけてもちっとも追いつけなくて・・・／／／だから・

・・だから／／／」

これまでの長い時間の中で、急速に変わり始めそして駆け抜けていくユーノとの隔たりに心の中でそのような事を感じていたなのは。

赤裸々ななのはの告白を耳に、思わず胸が締め付けられるフェイトと一護。

「なのは・・・」

「お前は本当に、ユーノの事を好いているんだな。」

「・・・はい・・・／／／」

声を震わせながらもユーノへの想いだけはしっかりと伝えるなのは。

すると、一護は一度気持ちを整理してから和やかな表情でなのはに次のように語りかける。

「ふう・・・なぁ、なのは。お前がユーノの事をそんなに思っているのはよく分かった。その為に自分を律して強くいようとする心意気もわからねぇ訳じゃねぇが、そこまでして“不屈”ってあることに拘ることはないんじゃねぇか」

「え・・・」

「あいつなら、ユーノなら多分こう言うんじゃねぇか。『本当の事だけで生きていけるほど、人間は強くないし寧ろ弱い生き物だ。だから強くなくたっていい。甘えたっていい。どうしようもなくなって、屈してしまったときは誰かがそれを真っ直ぐにしてくれる』っ

てな」

なのははその言葉を聞いた瞬間、一護の背後に映ってきたユーノの姿に驚愕し、心を縛り付けて身動きの取れなくなっていた自分を解き放ってくれたその言葉に、涙が止まらなくなる。

「・・・一護・・・さん・・・／／／」

フェイトはそんななのはの手を握りながら、優しい声色でこう言う。

「だからもう泣かないで。困ったときは私達がそばにいるよ。さぁ涙を拭いて、新八君の所に行こう。」

「うん・・・／／／」

なのははフェイトのその言葉を聞くと、今まで流していた涙を全て拭い去ろうとするが、それでもやはり嬉し涙だけはどうしても収まることを知らず、そんな潤んだ瞳で一護とフェイトを凝視し、心の中で呟く。

「（凄いよ一護さんは・・・・・・ユーノ君はこんな凄い人といつも一緒に居たんだ・・・・・・私とは立場も考え方も全然違うのに・・・どうしてだか心が温かくなる・・・ユーノ君と一緒に居る時みたく・・・・・ありがとうございます・・・一護さん・・・フェイトちゃんも・・・いつも支えてもらってありがとう・・・それと――――――）」

なのははは真の力を解放し、自分の全力全開に応えてくれたユーノが残した最後の希望であるＡＲカートリッジを取り外しそれを凝視しながら、愛おしそうに抱き寄せ心の中でこの場には居ないユーノに

改めて言う。

「（私を守ってくれて・・・ありがとう・・・ユーノ君・・・／／／わたし・・・・・・あなたのことが大好きです／／／）」

今も昔も自分を守り続けてくれた青年への確かな愛を胸に抱き、なのはは仲間の手を借りて立ち上がり残された志村新八の救出のために動き始めた。

◇

〈不二子Ｓｉｄｅ〉

そして、カトゥーンキャッスル最深部に位置するカトゥーンの間でテトラカトゥーンが全滅したことをモニターで確認した不二子は意外そうな表情を浮かべて呟く。

「あらら・・・まさかテトラカトゥーン全滅・・・なんてね。」

カトゥーンは不二子のその言葉を耳に入れながら、何故か不敵な笑みを浮かべ依然として漫画を読み続ける。

不二子は呆れかえった様子で更に言葉を漏らす。

「どの子も使えないわね本当・・・・・・まぁいいわ。別にあの四人が倒されたって私には直接関係ないし、別段問題ないわ。さてと――――――」

不二子はそう言うと、別モニターに映された玉座の間でカトゥーン・ゼウスとなって銀時と対峙していた志村新八の様子を窺う。

「――――――」

新八は平然とした表情で自分の目の前で血塗れとなって倒れ伏す銀時を見下ろし、銀時は木刀を握りしめたまま弱々しい声で新八に呼びかけようとする。

「う・・・・・し・・・新八・・・・・・・」

不二子は銀時の哀れなる姿を見ると、悪意に満ちた笑いを浮かべるのであった。

「向こうのお侍さんも、そろそろ潰れるころね。うふふおほほほほほほほほ」

テトラカトゥーンが全滅した今、残されたのは変わり果てた新八と全ての元凶である漫画の支配者カトゥーンだけとなった。

タイムリミットは残りわずかとなった今、銀時は新八を救出できるのか!?

ユーノはカトゥーンを止めることが出来るのか!!

「大型次元震」発動まで、あと1時間36分

教えて、ユーノ先生！

ユ「今日はエクストリームカノンについてだ♪」

ユ「なのはのＡＲカートリッジはなのは自身の身体への負荷を抑えるために、僕があらかじめその魔力最高質力に制限を加えていたんだけど、その枷を取ることでなのはは真の全力全開の力を発揮するエクストリームカノンへと変化させることに成功したんだ。」

ユ「陸／空両対応型の中距離砲戦用の端末で、かなり大型の機体。腕に装着した手甲とジョイントすることで保持され単体でも使用可能。機体の大半を占める長大な砲身は、展開状態では砲弾の加速レールになるが、綴束状態では「突撃槍」「重剣」として用いられるんだ。ちなみに、レイジングハートはエクストリームカノンとは別に独立して自身がブラスターピットとなることでなのはと連携を合わせることが出来る。」

一「なぁ。この設定どっかで聞いたことあるんだけどよ・・・」

ユ「ここだけの話、実は『魔法戦記リリカルなのはＦｏｒｃｅ』から先取りしちゃってるんです♪」

一「いいのかよ、そんなことして・・・歴史が変わるんじゃねぇのか？」

ユ「もう十分変わってるじゃないですか。僕の存在自体で」

一「まぁ確かにそうだけどよ・・・つうか、銀さんはどうなるんだ？」

ユ「次回はいよいよそっちの方ですよね。そんな訳で、果たして銀さんは我を失くした新八君を助けられるのか？乞うご期待！」

魔導師図鑑ハイパー！

ユーノ・スクライア外伝　名作劇場

『シンデレラ』

な「ヨーロッパのあるところに、フェイトちゃん・・・あ、違った！シンデレラと言う綺麗な女の子が住んでいました。長い間お父さんと二人暮らしでしたがとても幸せな日々を過ごしていました。やがて、シンデレラの所に新しいお母さんとお姉さん（近藤さん・銀さん・沖田さん）がやってきました。ところが、お父さんが死んでからシンデレラは召使のように働かされました。」

な「そんなある日、お城のダンスパーティーが開かれることになり、国中から女の人が着飾ってダンスパーティーに出席することになりました。ところが、シンデレラの場合、お母さんとお姉さんの二人に固く外出を禁じられ、三人はシンデレラだけを家に残してお城のダンスパーティーに行ってしまいました」

フェ「はぁ・・・私も行きたかったな・・・」

みすぼらしい格好を見ながらため息をつくシンデレラ。

と、その時彼女の前が光り出し現れたのは――――――

ク「お城へを行きたいのだな、シンデレラ。」

フェ「あ、あなたは一体・・・！？」

ク「まぁ通りすがりの魔法使いとでも言ってもいいだろう。で、お城に行きたいのだろう？」

フェ「はい・・・ですが・・・・・・こんな格好じゃ・・・・・・」

ク「ならこれならどうだ。」

魔法使いクロノがＳＵ2を振ると、シンデレラの格好は一変し彼女にピッタリなドレスへと変わり、思わず頬を赤くするシンデレラ。

フェ「わあ・・・綺麗／／／」

ク「馬車は無難にかぼちゃでいいだろう。」

また杖を振ると、クロノが手に持っていたかぼちゃが馬車に早変わり。

ク「さて、残りは馬だが・・・」

と、辺りを見渡したそのとき彼は一匹のフェレットを見つけ出す。

ユ「きゅ？」

ク「おそうだ。フェレットを馬に・・・・・あ？フェレット・・・？」

その瞬間、クロノの脳裏に浮かんで来る悪友ユーノの素顔。

ク「このフェレットもどき！！！！！！！！！！」

ユ「きゅうう！！」

クロノは豹変すると、目の前のフェレットを鬼のような形相で追いかけていき、フェレットはあまりの怖さに逃げ出していった。

フェ「え！？あ、あの・・・！！」

思わずそう呟くシンデレラ。

な「こうして、シンデレラは魔法使いにも見捨てられそのまま立ち尽くすのでした。めでたし、めでたし・・・・・じゃないよね♪」

次回予告

大型次元震発動まで、あと僅か。

銀時Ｖｓ新八の最終決戦の行く末は一体？！

そしてユーノ対カトゥーン

いよいよ激闘開始！！

不「次回『大事なものは何が何でも手放すな』」

漫画キャラ紹介

伊集院　隼人

声：玄田哲章
漫画『シティーハンター』に登場する人物。通称・海坊主又はファルコン。元傭兵で凄腕のスイーパー（ｓｗｅｅｐｅｒ：始末屋）。失明のため屋外ではサングラスを手放せない。しかし、それにより支障が出ている様をまるで見せず、車の運転までこなしている。バズーカや機関銃などの重火器（Ｍ６０等）を好んで扱い、トラップの名手。寡黙な男で、女性や猫（特に子猫）が苦手。猫は本人曰く鳴き声（人間が鳴き声を真似た程度でも）を聞くと力が抜けるらしく、失神する。女性や美樹に対しては、ゆでたタコのように真っ赤になる。「海坊主」は、悪友である冴羽？がつけたニックネーム。裏の世界では通称で呼ばれ、誰も本名を呼ばない。３８口径程度の銃では筋肉を貫通させることは不可能で、体内にめり込んだ弾丸を全身の筋肉に力を入れた際の収縮作用だけで体外に排出している。愛車はトヨタランドクルーザー６０、フォードの４ＷＤ（彼の性格や体格に合う車はこれぐらい）。愛銃はＳ＆ａｍｐ；Ｗ　Ｍ６２９（アニメではＭ２９）。

獅堂　光

声　一　椎名へきる
漫画『魔法騎士レイアース』に登場する３人の魔法騎士の１人。明

るく元気いっぱいで誰とでも仲良くなれる性格の反面、言い出したら聞かない頑固者。3人の兄の影響からか、ややボーイッシュ口調で、一人称は「私」。海、風を「ちゃん」付けで呼んでいる。年齢よりも幼く見られやすい。女子校に通っており、学年を問わず人気がある。3人の中で1番運動神経がいい。愛犬の閃光(ひかり)を飼っているためか、動物と意思疎通ができる。3頭身の描写になると、時々猫の耳とシッポが出る。使用魔法は炎の魔法。実家が剣道の道場で、小さい頃から剣道を習っていたため剣が得意。炎の神殿において炎の魔神・レイアースを手に入れそれを操る。

技

炎の矢

炎で出来た矢を生み出し、敵に向けて乱射する。

紅い稲妻

紅色をした稲妻を生み出し、敵を攻撃する。

龍咲　海

声　一　吉田古奈美

漫画『魔法騎士レイアース』に登場する3人の魔法騎士の1人。3人の中では1番長身。モデルのような美人と評されるが、興奮しやすい性格。根は仲間思いの優しい少女であり、非常に繊細。光と風のことは呼び捨てで呼ぶ。使用魔法は水。第1部で「水の龍」、「蒼い竜巻」を習得し、第2部では新魔法「氷の刃」を習得した。海の神殿において、水の魔神・セレスを手に入れそれを操る。

水の龍

龍の姿を象った水が敵に襲い掛かる。

蒼い竜巻

巨大な竜巻を発生させ、相手を飲み込み封じ込める。

氷の刃

無数に浮かんだ鋭利な氷で相手を刺し貫く。

鳳凰寺　風

声　一　笠原弘子

漫画『魔法騎士レイアース』に登場する3人の魔法騎士の1人。いつもおっとりした笑顔で、敬語口調な反面、非常に頭が良く策略家。一人称は「わたくし」。光、海のことは「さん」付けで呼ぶ。使用魔法は風。3人の中で唯一回復魔法や防御魔法がある。弓道部所属で弓矢が得意。武器は剣である。空の神殿において、風の魔神・ウィンダムを手に入れるそれを操る。普段彼女は眼鏡をかけているが、魔神に乗ると眼鏡が無くなる。

癒しの風

体の傷は治せるが、精神力を消耗したことによる疲労は回復できないらしい。

碧の疾風

緑色の風を巻き起こし、敵を翻弄する。

護りの風

敵の攻撃に対して前方に風を生み出し盾とする。

碧の旋風

碧の疾風よりも強力。

大事なものは何が何でも手放すな（前書き）

銀「天人がやってきて、俺達の国が、俺の仲間が・・・・・・色んなもんを失くしても、それでも俺は生きている。」

銀「荷を背負って今も昔も生きているが、時間が長くなればなるほどそいつは言葉一つで片付けられねぇ程大切な、尊いものへと変わっていきやがる。」

銀「どんな形であれ、どんな境遇であれ、俺のこの剣が届く限り仲間は何が何でも守り抜く。だから待ってろ・・・・・・新八。てめぇは俺が必ず助けてやらあ。」

大事なものは何が何でも手放すな

これまでのユーノ・スクライア外伝

ついに、機動六課前線メンバーがテトラカトゥーンを壊滅。

なのは、土方、ギンガは戦いの中で自分の新たな力の覚醒を体現。

残りはカトゥーンとアンゴルモアが取り込まれた志村新八、そして臨界寸前のプリズムシードだけとなった。

ユーノ、銀時、そして機動六課は僅かなタイムリミットでこれら全てを解決することが出来るのであろうか!?

〈ナルトＳｉｄｅ〉

カトゥーンキャッスル最深部に位置するこの城を動かす動力源たる巨大駆動路。

駆動路の内部には暴走臨界点あと僅かとなった大規模次元震を引き起こすロスト・ロギア、「プリズムシード」計四つが組み込まれていた。

その駆動路の方に、一人の男が満身創痍の身体を引きずりながら徐に歩いていく様子が見てとられた。

「は、は、は、は、は」

それは、先の戦闘に於いて唯一生き残ったテトラカトゥーン、うずまきナルトだった。

ナルトはサクラの咄嗟の判断によってこうして難を逃れて皮一枚のところで生き残ることが出来たが、既に戦える状態でないことは言わずとわかることだろう。

「く・・・そ・・・・・・・」

ナルトは通路のあちこちに血を零しながら、鉛のように重い体を必死に起こし、壁に手を添えながら駆動路の方へと歩みを続ける。

「こいつは・・・・・カトゥーン様の夢なんだよ・・・だから何が何でもやり遂げなきゃならねぇんだよ・・・・・・」

ナルトは執念と意地で駆動炉の中へとたどり着くと、残されたすべての体力を振り絞って駆動路の中のプリズムシードのエネルギー供給を最大に設定すると、当初の予定よりはかなり早いが、全てのプリズムシードを駆動路諸共暴走覚悟で発動させようとレバーに手を伸ばす。

「この世界は・・・・・俺の手で終わらせてやる・・・・・・そんで、そこに理想の新たな世界が待ってる・・・・・・カトゥーン様が築く理想の世界が・・・・・・！」

ナルトは意を決し、レバーの手前の方へと力いっぱい振り下す。

「行くぜ・・・全プリズムシード発動！！」

レバーが振り下された瞬間、ナルトは力尽き紙切れとなってこの世界から消滅。

同時に、駆動路内部の全てのプリズムシードと駆動炉そのものが警戒アラートを鳴り響かせながら暴走を始め、次元世界はいよいよその時を迎える。

◇

〈機動六課Ｓｉｄｅ〉

プリズムシードが発動した直後の機動六課。

部隊長八神はやてと留守を預かっている織姫、浦原、夜一、コンは今自分たちに出来る限りの仕事をしつつ、本来のタイムリミットである時間をしきりに気にしていた。

『次元航行部隊の到着まで、あと４５分。大型次元震発動のタイムリミットまであと３８分』

「7分差か・・・」

シャーリーがその旨を伝え、はやてが険しい表情で呟くと、聞いていたヴィヴィオの顔が曇り、またコンは織姫の腕の中で焦燥を曝け出す。

「くそ！一体どいつもこいつも何してんだよ！！早くしネェとマジやべって！！」

「あなた・・・ユーノさん・・・なのはさん・・・」

「なのはちゃん・・・みんな・・・」

不安ばかりが募る機動六課全メンバー各位。

と、その時彼らは床から全身に伝わってきた突然の揺れに思わず目を見開いた。

「！」

「「「「！？」」」」

ヴィヴィオは揺れの大きさに体勢を崩し、両手をついて体を床に伏せると直感でこの揺れが何なのかを悟った。

「この揺れは・・・まさか！！」

すると、その途端グリフィスが目の色を変えてはやて達の元へと走ってくると、額に汗を滲ませながら言う。

「大型次元震です！！発動を確認！！通規模以上！！」

「そんな・・・発動は三時間後って言ってなかったのかよ！？」

「く・・・！誰かがプリズムシードの暴走を早めたんでしょう・・・！」

リィンが信じられない表情でそう言うと、浦原は険しい表情でそのように返答する。

大型次元震が観測されると、機動六課の隊舎全体に緊急警戒警報が鳴り響き、同時にミッドチルダを始めとする現在確認されている次元世界全てにおいてその影響が出始めた。

次元空間に於いてカトゥーンキャッスルへと向かって前進していた本局次元航行部隊の艦隊もまたその影響におかれ、リンディ・ハラオウン統括官はクラウディアの臨時艦長として長年の経験を活かし

て対応に当たっていた。

「震動防御！ディストーションシールド！」

クラウディアクルーは的確なリンディの指示を聞き入れ、即時対応を始め、メンバーの一人であるアレックスが観測されたデータをもとに情報を伝える。

「プリズムシード、四個発動！大型次元震更に強くなります！」

「転送間の移動を維持したまま、影響の薄い空域に移動を！」

「りょ、了解です！」

「難事件数拡大！このままだと早くに次元断層が！！震度、急激に増加しています！！」

クラウディア内部でそのようなやり取りが行われているように、機動六課でもまたシャーリー達管制人たちが詳しい情報をはやて達に伝える。

「この速度で震度が増加していくと、大型次元断層の発生予測値まであと３０分足らずです！」

「あの城内の駆動路も、プリズムシードの同系のロスト・ロギアです！それを暴走覚悟で発動させて、足りない質量を補っているんです！」

「なんてことや・・・・・こうなったら、私も現地に出るよ！織姫さん、浦原さん、夜一さん。留守を頼みます！」

不測の事態に対応するため、部隊長であるはやてはついに自らも現場へと向かい次元震を食い止める決心をする。

「はい」

「心得ました。」

「任せておけ。」

「ここは俺達に任せて思いきし行って来い！」

はやての言葉を聞いた織姫達は肯定の返事を返す。

「はい。リィン！城内でディストーションシールドを展開して、次元震の進行を抑えるで！」

「はいです！！」

はやてはリィンを連れてシュベルトクロイツと夜天の魔導書を携えると、高速転送ポートへ走り出し、世界の存亡がかかった戦いが繰り広げられているカトゥーンキャッスルへと乗り込んでいくのであった。

大型次元震が発動し、それを食い止めるために八神はやても動き出した今、世界崩壊のカウントダウンはあとわずかとなってしまった。

機動六課前線メンバー、間に合ってくれ！！

◇

〈銀時Ｓｉｄｅ〉

さて、大型次元震もさることながら、問題がいくつか残っていた。

そう――――――さらわれた異世界の少年志村新八はアンゴルモアと本型ロスト・ロギアの影響で異形の姿へと変貌し、目の前の銀髪の侍坂田銀時と死闘を繰り広げていた。

「く！おおおおおおおおおおおお！！！！！！！！！！」

銀時は血塗れになりながらも体を何とか起こし、無表情な新八に向かって走り出し僕とを振りかぶるが、新八は強烈なビンタで以て銀時を叩き飛ばす。

「がっは！！！」

「排除」

「！」

新八はそう言った瞬間、瞬間移動で床に叩きつけられた銀時の元へと移動し、銀時は目で捉えることも気配を感じさせる暇も与えまいとする新八に言葉が出ず、ただただ驚くばかりだった。

「抹殺」

新八は低い声色でそう呟くや否や、銀時の心臓目掛けて詰めを突き立て刺し貫こうとする。

銀時は攘夷戦争以来の戦いにおける戦闘勘を研ぎ澄ませると、その一撃を回避。

距離を取ってから木刀片手に新八に向かって走り出す。

「コノヤロウ！！！」

だがしかし、新八は動揺する素振りなど一切見せずに銀時の木刀を指一本で受け止め、あまりの光景に銀時は目を疑った。

「な・・・」

そして、新八はフォーカーフェイスを保ちつつ銀時の腹部に強烈な殴打を連発。

「ぶ・・・！」

銀時の内臓は一瞬で破裂し、その結果吐血する銀時。

新八は攻撃を受け体を怯ませた銀時の胸ぐらを握りしめると、右手の掌にエネルギーを圧縮させ、それを銀時の腹部に当てると直後衝撃波を放つ。

「アイネ・ドロックウィル」

新八の放った衝撃波の威力は想像を絶するものであった。

銀時はそれを受けると抵抗もできずに壁に激突。

銀時は更に血を流す。

新八が徐に白い煙の上がる方へと歩み寄り、銀時に止めを刺そうとしたが煙の中から見えたのはもぬけの殻となった銀時の身体がめり込んだ壁と、彼の流した血の痕跡だった。

「・・・隠れたか。」

新八は表情を保ちながらゆっくりと銀時の気配を追って歩きだし、その間に銀時はある意外な人物たちによってギリギリのところで難を脱していたのだ。

銀時を助けたのは、テトラカトゥーンとの戦闘を終えたばかりのスバル達フォワードチーム、そして恋次達死神組であった。

まさかの人物たちの救援に驚き返る銀時にスバルは言葉を投げかける。

「銀さん、大丈夫ですか？」

「ああ・・・助かったぜ。つうか、何時からいたんだよ」

「本当ついさっきだ。しかし――――――」

恋次はそう言うと、物陰からスバル達と共に険しい表情で変わり果ててしまった新八の姿を凝視する。

総悟、近藤の二人は人間とは思えないほどにまで身も心も浸食されてしまった新八に胸が痛むのであった。

「あれがメガネだとは、とても思いたくねぇな・・・・・・」

「新八君が・・・あんな姿になるとは・・・」

そして、神楽とギンガもまた強い不安を感じながら目の前の新八を凝視する。

「新八・・・・・・・」

「新八さん・・・・」

ヴィータは一先ず気を落ち着かせると、この場に集まった全員を一か所にまとめて新八に気づかれない程度の声で作戦を練る。

「どうするぜオイ？」

「まだ何とも言えぬが、あの力は恐らくアンゴルモアによって生み出される魔法とも霊力とも違う異質な力だ。近接戦においても遠距離からも並外れた破壊力を持つあの力・・・避けるのは至難の業だぞ。」

「しかも、彼の相手をするにしても今の僕らの状態を考えると、長期戦は不利だ。回復薬も残りわずか・・・次元震のこともある・・・短時間で決めるしかない。」

「短時間で決めるか――――――それって、俺達が死ぬか生きるかの二択ってことかよ・・・」

鬼太郎は苦笑いを浮かべてそう言うと、神楽は不安げな表情で銀時に言葉を投げかける。

「銀ちゃん・・・」

「く・・・新八。」

銀時は歯がゆい気持ちを抱えたまま、何にもできないでいる非力な自分を心底恨み募った。

すると、その時銀時達の気配に勘付いた新八は表情を崩さず徐に言葉を発する。

「・・・そろそろ鬼ごっこは終わりにさせよう。さぁ・・・終幕だ」

新八は体内に取り込まれたアンゴルモアを媒介に、本型ロスト・ロギアの力を発動させると、この玉座の間全体全てを包み込む広域結界を発動する。

広域結界が発動されると、その余波を受けた銀時達は思わず身構える。

「「「

「逃げ場は無しと言う訳か・・・」

「相当マズイ状況だぜこりゃ・・・見つかるのも時間の問題だ。」

「それまでに、何とかしてあいつをぶっ倒して目覚まさせねぇと・・・」

「だが出来るのか。新八君を、殺さずに救う方法など・・・」

近藤がそう言うと、ティアナはクロスミラージュのカートリッジを装填しながら次のような考えを口にする。

「新八さんの内部に埋め込まれたアンゴルモアコアと、本型ロスト・ロギアの力が体内から放出されれば、自然暴走は止まると思います。しかし、その隙を窺うのも難しいのも事実です」

「新八さん・・・」

ギンガはそう言いながら、胸の方で強く右拳を握りしめこの最悪の事態と変わり果てた新八とどう向き合うか思い悩んでいた。

傍らでギンガを見ていたスバルやエリオ、キャロもまた心の底から新八の事を心配するが、そんな時士気の下がり気味な全員に銀時がため息がてら言葉を漏らす。

「ごちゃごちゃ言っててても仕方ねぇんだよ。こうなりゃ出たとこ勝負だ。」

「しかしそれじゃ・・・！」

「そうアルよ！銀ちゃん、下手したら死ぬかもしれないネ！！」

銀時はただでさえ、ユーノやなのはのように仲間を救う為ならば自分の命を顧みない節が強い。

攘夷戦争で多くの仲間を失い、大切なものを取りこぼしてきた彼もまたユーノと同じ苦痛に苦しみ続ける人間だ。

しかし、彼には迷いなど一切なかった。

銀時の身を案じ心配する神楽たちに銀時はほくそ笑んでこう言う。

「馬鹿言ってんじゃねぇよ。こんなところで、仲間一人見捨てて死ねるわけねェだろ。」

「銀さん・・・」

「銀時・・・」

銀時の言葉を耳にし、思わずそう返す石田とアギト。

銀時は凛とした瞳を宿し、覚悟を決めると木刀をしっかりと握りしめて立ち上がり言う。

「何が何でも必ず助け出す。新八は、俺が助ける」

覚悟の決めた銀時を目の当たりにすると、全員もまた同じように覚悟を決めると武器を持って立ち上がり新八の出方を窺いその時を待つ。

と、その時だった。

新八は額の眼を全開にすると、そこから妖力を発し、その直後自分の背中に禍々しい形をした悪魔の翼を生やす。

「テネフェルフィルゲル・・・羽ばたけ」

翼を生やし、天井ギリギリのところまで日空した新八は物陰からそんな新八を窺い警戒する銀時達を額の眼で捉えると、一気に彼らの元へ加速していった。

銀時達は急接近してきた新八を目の当たりに、体制を取った。

「来ます！」

「「「ああ！」」」

全員は新八の攻撃を開始し、それぞれの分散すると先ず彼に立ち向かっていったのはシグナムだった。

シグナムは最初から全力全開で向かう為、飛竜一閃で勝負を仕掛ける。

「志村！！！早く目を覚ませ！！！！」

渾身の一振りが新八の元へと振り払われる。

新八はアンゴルモアの力を媒介にして左手に生成した漫画剣“カリカトゥアー・シュイワート”で受け止めると、その軌道をズラシテシグナムに向かって行く。

シグナムは疲労困憊した身でありながらその斬撃を受け止め、レヴァンティンは徐々に重みに耐えかね刃こぼれが目立ち始める。

「く・・・！志村・・・！」

「・・・・・・」

新八は無表情のままシグナムを鍔迫り合いを行う。

すると、吉良と白鳥が連携して新八の両足を縛道で封じる。

「「縛道の六十三『鎖条鎖縛』！」」

「！」

新八が両足を固定されると、シグナムは一旦その場から退き待機していた石田・茶渡・ヴィータ・アギトの四人に攻撃を促し四人は一斉攻撃に移る。

「“光の弾（リヒト・クーゲル）”！」

「“巨人の報復（ラ・ベンガザ・デル・ヒガンテ）”！」

「クラッシャーシュラーク！」

「バーニングヘルフレア！」

「四人の攻撃が一斉に仕掛けられると、辺り一面に白い煙が広がり下の方でそれを窺っていた銀時やギンガ達は目を凝らしてそれを見

た。

四人は一度離れると、煙が晴れるのを待った。

すると、煙の中から現れたのは漫画膜“カリカトゥアー・フィルム”で身を守り全く攻撃を食らった様子さえ見せつけない新八の姿だった。

思わず苦い顔を浮かべる隊長陣を前に、無表情の新八の両足を拘束する邪魔な鬼道を術で外そうとした。

「・・・砕けよ・・・ゼストロゴン」

その効果によって、鎖条鎖縛は植物が朽ち果てるように崩壊し、自由を取り戻した新八は更に額の眼を広げて力を上昇させると、背中に生やした羽を武器とする技を発動。

「血に染めよ。ブリュート・カイル（血の楔）」

「！来たぞ！」

空中に浮かぶ隊長陣も下の方で窺っていた銀時達も容赦なく襲い掛かってきたその技を目の当たりにすると、一目散に回避する。

玉座の間ではなのは対マジックナイト達宛らの激戦が繰り広げられる。

ティアナはスバルとギンガと共に、物陰に隠れながら意を決して新八の元へと向かって行く。

「行くしかないようね・・・スバル！ギンガさん！」

「おう！」

「ええ！」

スターズの三人が動き出すと、傷の癒えたばかりのエリオもキャロを連れて向かって行く。

「キャロ、フォローお願い！」

「うん！」

そして、スクライア商店メンバーもまた銀時達次元漂流者を連れて新八の元へと動き出す。

「こうなりゃとことんやってやる！行くぜ行くぜ行くぜ！！！」

「先輩、あんまり先走り過ぎないでよ！」

「銀時殿方も用意はよろしいですかな？」

「「「「ああ（おお）！」」」」

「では、参りますぞ！」

金太郎の掛け声を聞くと、銀時達は新八の元へと全速力で走り出す。

近藤は壁を蹴りながら新八の元へと飛んでいくと、刀を振りかぶって豪快に振り下そうとする。

「おおおおおお！！！新八君！！！！！！！！」

しかし、近藤の叫びもむなしく新八は刀の切っ先を指で受け止めると、容赦なく近藤の身体を漫画剣で斬り裂く。

「ぐっほ！」

近藤が血を流して墜落していくと、総悟は逸早く近藤の身体を受け止め、直ぐに石田に貰った止血剤を投与する。

その間に、再びシグナムがアギトとユニゾンによる攻撃を行う。

「レヴァンティン！」

〈Ｅｘｐｌｏｓｉｏｎ〉

『炎熱加速、最大速度！』

切っ先に宿った紫に輝く炎を最大にすると、シグナムは新八目掛けて魂の刃を振り下す。

「志村！！！」

シグナムの斬撃が猛烈な勢いと速度で仕掛けられ、新八は避けることもままならずそれに直撃。

手ごたえを感じたシグナムとアギトだったが、煙の中から出て来たのは全く以て無傷の新八であった。

「何！」

『ま、マジかよ！！』

魂の一振りをまるでものともしない新八の無茶苦茶な戦闘力に目を疑う二人だが、その直後背後へと回り込んだ吉良が侘助を解放する。

「面を上げろ、侘助！」

吉良は柄頭に補助デバイスを装着させた状態で一振り新八に仕掛けようとするが、新八は吉良の攻撃を読んで自分の身体に当たる寸前で斬撃を空中に浮遊させ、吉良の動きを封じる。

「な・・・（侘助の斬撃が通らない・・・！これでは重もさを与えられない・・・！）」

思う通りに刀を動かすことの出来ない吉良。

そんな吉良を目の当たりにしながら漫画剣片手に新八は残酷な言葉を吐いた。

「排除」

新八は鋭い攻撃を吉良へと仕掛け、攻撃を受けた吉良は近藤と同じくして容赦なく切り捨てられる。

「ぐっは・・・」

「吉良！」

思わず声を荒げるルキア。

卍解した恋次と魔力をチャージしていたティアナは狙いを定めると得意技である狒骨大砲とクロスファイアーを発射。

「狒骨大砲！！」

「クロスファイアーシュート！」

勢いよく新八の元へと飛んで行った二人の攻撃だが、新八は漫画剣の一振りでその二つを斬り捨てる。

すると今度はストラードを手に取り飛んで来たエリオとフィッシャーマンを持った浦太郎が同時攻撃を見せる。

「でらあああああ！！！」

「ほおおおおおお！！！！」

だがしかし、二人の槍撃を造作もなく躱した新八は翼を羽ばたかせ距離を置くと、開いている掌に銀時に仕掛けた時と同じ衝撃波を生成し、超高速で二人に発射。

二人は防御展開よりも先にその攻撃の直撃を受け、吐血する。

「「ぐっあ・・・！」」

「エリオ君！！！浦太郎さん！！」

エドワードの時と同様傷つくエリオの姿に堪えきれないキャロ。

銀時と神楽は新八へと向かって行くと、銀時とは木刀を、神楽は唐傘を渾身の力振り切った。

「新八!!このダメガネ!!!」

「ダメガネ!!!目覚ますアル!!!!!!」

二人の怒涛の攻撃を無表情の新八は両手で受け止め、銀時と神楽はあっさりと攻撃を受け止める今の新八の強さに言葉を見失いかける。

「「ぐ・・・!」」

と、その時新八の正面から現れたスバルとギンガが申し訳なそうな表情を浮かべながら新八の顔面目掛けてリボルバーナックルを仕掛けた。

「新八さん!」

「新八さん・・・ごめんなさい!!」

二人の絶妙なタイミングで放たれた強烈な拳は見事志村新八の顔面に直撃し、新八は後方へと吹き飛ばされ壁に激突。

これには恋次達も目を丸くした。

「よ・・・よし!」

「クリーンヒットだ!よくやった二人とも!!」

だが、喜んでいるのもつかの間。

煙の中から出て来たのはクリーンヒットを受けたのにも拘らず痛みを一切感じていない様子の無表情の新八だったのだ。

「・・・五月蠅い連中だ。」

「「「

「！まさか・・・」

そして、銀時が気づいたその瞬間には新八はエネルギーのほぼすべてをチャージし終え、足場を固定させて銀時達の方に手を差し出す。

「天地に轟く・・・破壊の咆哮・・・」

バラバラだったエネルギーが見覚えのある形になっていくと、銀時に続き他のメンバーも一様にその技の正体を察し、思わず後ずさりする。

「あれは・・・！」

新八は低い声を発しながらこう言い始める。

「か・・・め・・・は・・・め・・・」

「！みなさん、伏せてください！！」

キャロが慌ててそう言った瞬間、新八はテトラカトゥーン最強の攻撃力を秘めた孫悟空が使うものと同じ技、かめはめ波を放つ。

「波」

かめはめ波が銀時達の元に発射されると、咄嗟にキャロは前に出て来、キャロ自身の魔力を統べて費やして彼女が使う最高硬度の防御であるブーステッドプロテクションを展開し、かめはめ波を受け止める。

「ぐうううううううう！！！！！」

「キャロ！！！」

思わずエリオが険しい表情のキャロを見て声を荒げると、その直後キャロの防御がかめはめ波の威力に圧されて大破し、キャロは爆発に伴い空中へと投げ出された。

「きゃあああ！」

「「「キャロ！！」」」

「ストラーダ！！」

〈Ｓｏｎｉｃ　ｍｏｖｅ〉

エリオはソニックムーブでキャロの元へと移動し、絶妙のタイミングで受け止めるとかなりの損傷を負ったキャロを気遣う。

「大丈夫！？」

「う・・・ん・・・ありがとう・・・エリオ君・・・」

弱々しいキャロの声にエリオ自身は胸締め付けられ、駆けつけてきた恋次達もまた新八が使った想定外の技に度胆をぬいた。

「新八の野郎・・・悟空の技まで使うなんて・・・どういうことだよ！？」

「恐らく、身体に吸収された本型ロスト・ロギアが関係していると て間違いない。それぞれが体の部位を司り、そして混沌と言う名の

力を宿した今の新八君は・・・僕らの常識を超えた存在となっている。アンゴルモアという・・・無限のエネルギーサーキットを手にしてね。」

石田が仮説を立ててそう口にすると、無表情の新八はじっと銀時達の方を見つめる。

「・・・――」

挙句、困り果てたルキアや鬼太郎は思わず声を荒げる。

「ではどうするというのだ！」

「この人数相手にあんなのまで使われたら、俺達勝ち目ねぇぞ！」

「新八さん・・・――」

「新八――――――」

銀時達はこの絶望的な状況の中、一個人では決して相手に出来ない強大な力を自由自在に操る新八の強さに恐怖の念を抱きてしまう。

その時、新八は額の眼を大きく広げるとエネルギー供給を行い、両手を前に突出し今度は先ほどのかめはめ波とは比較にならないほどの超強力砲撃を仕掛けようとする。

「すべての標的に・・・・・永久の眠りを」

我を失い、ただの殺戮マシーンと化してしまった新八。

漆黒のエネルギーが両手に集束されると、それを見ていたギンガや銀時達はいたたまれなくなり、声を荒げる。

「新八さん！」

「「「新八！！！」」」

「・・・消えゆけ」

両手に邪悪なエネルギーが集束され銀時達が回避の為に距離を取ろうとした途端、銀時達の足元から漫画の蛇“カリカトゥアー・シュラゲ”が伸びて来、銀時達の身体を絡め取る。

「な！」

「なんだこりゃ！？」

蛇は銀時達の身体を絡め取ると、全身を縛り上げて身動きを完全に取れなくする。

「「「「「ぐあああああ！！」」」」」

「「「「「「「「「「「のあああああ！！」」」」」」」」」」」

「「「ぐううう！！！」」」

疲労困憊且つほとんどの力を使い切った状態の今の銀時達の力では、この蛇の呪縛から御逃れるすべはなかった。

新八は無表情のまま身動きを封じた銀時達に狙いを定めると、止めの一撃である破滅の世界“ヴェルト・デ・ゼストゥーホン”をお見舞いする。

「消えろ。」

全身全霊の力を込めた破壊の一撃は銀時達の元へ飛んでいき、銀時達は為す術もなくその攻撃の直撃を受けてしまう。

「「「

鬼の副長と言われる土方十四郎であったも、最早人間として超越した新八の姿には恐れおののくばかりだった。

新八は銀時達を倒した後、徐に土方の方へと歩きだし漫画剣を生成して徹底的な排除を試みようとする。

「敵は・・・排除・・・貴様も・・・排除」

「く・・・どうやら身も心もおかしくなっちまったようだな・・・・・」

土方は険しい表情を浮かべながら、三本の刀を取出し、新八が意図的に解放した結界の中へと侵入すると、血塗れの身体でありながら抵抗の意志を見せる。

「悪りーなメガネ。俺はあいつらと違って加減が気かねェンだ。もうこうなっちまったらどうしようもねぇ・・・一思いに今すぐに殺してやる!!」

土方はそう言うと、新八の元へと全力力で走り出し全身から無意識のうちに鬼気と呼ばれるものを発するとその力を使って三面六手の鬼神、阿修羅の幻像を見せる。

「鬼気・・・“九刀流・・・阿修羅”」

そしてその状態から目の前の新八に向かって最強最後の攻撃を仕掛ける。

「“阿修羅　弐霧銀（いちぶぎん）”！」

土方は「九刀流」状態のこの技で新八の急所に全ての剣撃を叩き込む。

だが、新八はその斬撃を受ける瞬間逆に土方の全身にそれこそ目にも止まらないほどの鋭い斬撃を土方の急所へと叩きこんだ。

一瞬の出来事に頭が真っ白となる土方は全身から血を吹きだし、口に咥え手に握りしめていた刀をその場に落として前方に倒れ込む。

「がっは・・・」

「贖罪の雨“アトニモント・レーゲン”」

銀時達の救援へと懸けつけて来た土方であったが、三刀流を使いこなしテトラカトゥーンの斎藤一を討ち取った彼の力の前にも新八を止めることは出来ず、結果銀時達は新八の前に敗れ去ってしまった。

新八は全ての始末が完了すると、どこか悲しい表情を浮かべ、玉座の間から居なくなろうと歩きはじめる。

だがそのとき彼はまだ気づいていなかった。

この場にいる全員が誰一人死んでいないということに、と言うか彼自身が無意識のうちに急所を外していたことに。

銀時は意識を取り戻すと、満身創痍の身体を震え上がらせながら徐に起こし始め、それに気づいた新八がそんな銀時の方へと振り返る。

「う・・・・・ま・・・まだ・・・終わっちゃ・・・いねぇぞ・・・・・」

「往生際が悪いな。何故そこまでして・・・・・人間の思考は理解できぬ。」

新八はそう言うと、木刀を握りしめ立ち上がろうとする銀時の顔面を掴んで勢いよく投げ飛ばした。

「のあああああああああああ！！！」

銀時は容赦なく新八の攻撃をその身に受け、壁に激突し吐血を吐く。

クロノや神楽達はそんな一方的な攻撃を一人浴び続ける銀時の姿を目の当たりにし、体の動かない自分を心底呪った。

「く・・・銀さん・・・」

「銀ちゃん・・・新八・・・／／／」

そして、新八は倒れた銀時の身体を全体重をかけて抑え込む。

「のあああ・・・！」

体中悲鳴を上げる銀時の身体を踏み台のように踏みつけるバケモノと化した新八。

新八は無表情を浮かべ漫画剣を左手に握りしめると、更に銀時の型にそれを突き刺す。

「ぐあああ！！！」

「「「「「「銀ちゃん（さん）（時）！！」」」」」」

「万事・・・屋・・・！」

銀時の苦しむ姿をただただ見つめるばかりの前線メンバー。

と、そんな銀時は険しい表情を浮かべながら何故かそんな銀時をどこか悲しそうな表情で見つめる新八の姿を目にしてこう言う。

「新八・・・・・・何でだよ・・・・・・本当に身も心もバケモノと化したんなら・・・何で俺を直ぐに殺さなかった・・・・・・何で俺達を直ぐに消そうとしなかった・・・何で・・・なんで・・・そんな瞳（め）で俺を見やがる！！！」

「・・・・・・」

銀時の思わぬ言葉に声を詰まらせる新八。

「新八よ・・・・・・てめぇが今どんだけ苦しんで、一人孤独に苛まれてるかはよくわからねぇが・・・・・・分かっていることがあるとすれば、そいつは間違いないなくてめぇが悲しいって思ってるってことぐらいだ。そうじゃなかったら、完全に心を閉ざして俺達を攻撃する事なんて出来やしねぇ・・・そうじゃなかったら、そんな顔を浮かべたりもしねェ・・・お前は・・・・・・悲しんだよ！！！！」

「・・・我は漫画の創造主。カトゥーン・ゼウス。主カトゥーンによって生み出された漫画世界を統べるためのただの“道具”だ。」

「ウソつけ！！！てめぇはんなもんじゃねぇ！！！！てめぇの名は

志村新八!!恒道館の跡取り息子で、俺達万事屋のかけがえのない仲間だ!!!それ以外の何者でもねェンだよ・・・お前は志村新八以上の何者でもねぇんだよ!!だから言え!!!!てめぇのその心の丈を!!全てを俺達にぶつけてみやがれ!!!!!!」

魂の籠った銀時の怒号が玉座の間中に響き渡るのを聞いていた他のメンバーは真摯に聞き入れる中、新八は無表情を崩し、一筋の涙を流しこう言う。

「・・・・・悲しみなど・・・・・・ない」

その瞬間、新八は剣を銀時の首筋へと向けて躊躇いもなく銀時を突き刺そうとした。

「銀ちゃん!!!」

「「「銀時!!!」」」

声を荒げる神楽たち。

と、その途端ギンガがトライアルカートリッジを取出し起動させる。

「く!ブリッツキャリバー」

〈Ｔｒｉａｌ〉

ギンガは超高速で銀時の元まで移動すると、寸前のところで銀時を救出し、新八と向かい合い切ない表情で新八に言う。

「“悲しみなどない”？そんな言葉を・・・そんな悲しい顔で言っ

ても、誰が信じるですか！？」

ギンガがそう言うと、スバル達もまたそれに便乗して新八に言葉を投げかける。

「そうですよ！！新八さんにもちゃんと心があるんです！取り込まれたって、我を失くしていたって、悲しいって思ったら悲しいって言ったっていいんですよ！！」

「新八君、自分を見失うな！君はそんな弱い男ではない筈だ！俺が認めた・・・お妙さんが愛した志村新八は断じてそんな無責任な事を言ったりはしない！！！」

「辛い事や哀しいことが遭ったとき、そんな時は僕達が君を受け止めるよ。思いっきり泣いたって構うもんか！もう・・・僕らは二度も三度もそうやって一人で背負い込む人の悲しい顔を見たくはないんだ！！」

浦太郎はそう言った瞬間、頭の中に浮かんできたユーノの悲しい顔を思い出し、聞いていた他のメンバーも同じことを考えた。

「だからお願いします新八さん！これ以上の暴走は止めてください・・・元の・・・元の優しい新八さんに戻ってください！！」

キャロが涙ながらにそう言うが、新八は先ほど同様に涙を流しながら乾いた声色で返事をする。

「・・・・・所詮道具は道具でしかない。我の存在理由は元来この世界になどありはしない。」

新八はその瞬間、目の前に立ち尽くすギンガの身体に衝撃波を叩きこむ。

「ぐっは！！」

「ギン姉！！！！！」

「「「ギンガさん！！！」」」

「「「「「ギンガ！！！」」」」」

しかし、ギンガはその攻撃を受けてもなお大勢を崩すことなく立ちつづけ、ふらふらの状態でありながら新八の元へと近づいて行き、スバル達は思わず声を荒げる。

「ギン姉！！！止めて！！！それ以上はギン姉がもたないよ！！！」

「おい！止めろって言ってんだろ！！何でなんだよ！！」

珍しく感情を表に出す総悟。

すると、ギンガは朦朧とする意識の中で赤裸々に新八に対する自分の想いを告白し始めた。

「新八さんと・・・・・約束したんです・・・！私が必ず新八さんを守る・・・私達が信じる新八さんを守る・・・！！」

「ギンガ・・・」

「化け物でも、マテリアルでも、カトゥーンの言いなりでも何でも

ない！！紳士で、ちょっと不器用で、ツッコミが凄くて・・・でもとっても優しい男の人・・・・・・／／／私の・・・私達の・・・大切な仲間を守るんです！！！これ以上・・・カトゥーンなんかのために、新八さんの手は汚させはしない！！！目を覚ましてください新八さん！！あなたの敵は・・・私達の戦う相手はここにはいない！！新八さん！！！！！！！！！！」

涙ながらにそう新八に訴えかけるギンガの姿を銀時達は唖然とした表情で見つめていた。

そして、心を閉ざした新八はギンガの言葉を聞き流すと、漫画剣を天に掲げるように振り上げると目の前のギンガ目掛けて無情な斬撃を振りおろし、辺りは白い煙に覆われる。

「ギン姉！！！！！！！！！！

銀時はほくそ笑んでからギンガに向けてこう言う。

「よくやったよ、お前。」

「銀さん！」

「万事屋！」

「大した女だぜ・・・新八にここまで惚れ込むとは・・・・・・銀さん、嫉妬しちまうぜ。」

銀時はそう言うと、木刀の一振りで新八の斬撃を弾き返し、大きく距離を取る。

その後驚愕の表情を浮かべる新八を見据えて済んだ瞳で更に続ける。

「新八よ・・・今のギンガの言葉聞いたろ・・・男なら・・・惚れた女の告白にはどんなんなんなんっても応えなきゃならねぇんだよ・・・だから今すぐに応えさせてやる・・・ただしそいつはその姿じゃなく、ギンガ・ナカジマが惚れた・・・俺達が仲間と認めた侍・・・志村新八の姿でな！！！！」

銀時はその直後、全力疾走で新八の元へと走り出し一瞬の隙を見せた新八の額の眼目掛けて全身全霊の想いを込めた刺突を仕掛けた。

「おおおお

声を上げる。

「ぐあああああああああああああああ！！！

「う・・・・・し・・・・・・・新八・・・・・・・・・・」

「銀ちゃん・・・！」

「万事屋！！」

銀時の姿を確認し、驚きながらも彼の身体の状態を心配する神楽たち。

銀時は歩みを止めることなく煙の向こう側の新八に呼びかけを続ける。

「新八・・・・・・・！」

と、その時。

「ぎ、銀さん・・・」

「！」

煙の中から聞こえてきた聞き覚えある声に銀時達全員は即座意に反応。

そして、完全に煙が晴れたその先に現れたのはボロボロの状態でありながらも元の姿に戻った志村新八その人であり、彼の周囲には砕かれた“アンゴルモアもどき”とバラバラとなった本型ロスト・ロギアが散らばっていた。

「う・・・く・・・」

新八は険しい顔を浮かべながら体を起こそうとする。

「新八さん・・・！」

「新八君！！」

全員がそんな新八の身体の状態を気遣い駆け寄ろうとするが、新八はふらふらの身体を必死の思いで立ち上がらせると銀時に目を向けてこう告げる。

「だい・・・じょうぶ・・・です・・・一人で立てますから・・・・・銀さんに・・・・・・守ってもらってばかりじゃ・・・・・・・・いられませんから・・・・・・・何時か言ったでしょ・・・・・・・僕らは死なない・・・・・・・何故なら・・・僕らがアンタを守るからって――――――」

「新八・・・――――」

銀時はそんな新八の言葉を聞くと、ちょっと照れくさそうな笑みを浮かべ、一方で神楽とギンガは嬉し涙を流しながら新八の元へと駆け寄っていった。

「新八・・・・・・新八！！！！！」

「新八さん！！！！！」

二人は新八の首に巻きつくと、顔を真っ赤にする新八を愛おしそうにきつく抱きしめる。

「良かった！！良かったアルよ！！」

「新八さん!!本当に良かったです!!助けが遅くなってごめんさい・・・／／／」

「あ、いえ・・・その・・・／／／」

新八は基本晩生の為こう言った場合のリアクションの取り方がよく分からず、ただただ顔を真っ赤にするのみだった。

浦太郎達は倒れていた土方を発見し、治療をする傍らこんな事を呟いた。

「あ～あ・・・あんなに泣いちゃって・・・」

「本当に家族なんですね。」

「たく。心配させやがって。なに赤くしてやがんだ。」

「ま。何はともあれ新八君が無事で本当に良かった。これで、お妙さんに殺されずに済んだというもの。」

「近藤さん。本音が出ちまってますぜ。」

「え!」

総悟は真顔のまま近藤に鋭い突っ込みを入れ、土方は意識を取り戻しそんな光景を目の当たりにすると、鼻で笑いながら懐に手を伸ばし煙草を口に咥えて火をつけた。

「ふう。やっぱ煙草は煙に限るぜ・・・」

と、そんなやり取りがなされていた時、新八の元に銀時が近づき徐に手を伸ばしてきた。

「ほらよ。」

「銀さん・・・・・・」

意外そうな表情を浮かべる新八に、銀時はほくそ笑みながら最後こう言う。

「無理すんじゃねぇよ。てめぇはまだまだ糞ガキなんだから、大人に頼ってもいいんだぜ。こんなアホんだらな俺で良かったらな。」

「う・・・／／／／／／／／銀さん／／／／／／／」

その言葉を聞くと、新八の目から涙が零れだし、神楽とギンガもまた涙が更に増え、新八は手を伸ばしてきてくれた銀時の手に涙でびっしょりとなった自分の手を添え、お礼の言葉を口にした。

「ありがとう・・・ございます／／／／／／／」

こうして、志村新八は無事坂田銀時以下２１名の手により救出され、残る課題はプリズムシードとカトゥーンだけとなった。

◇

〈不二子Ｓｉｄｅ〉

この様子をモニターで窺っていた峰不二子は意外そうな表情を浮か

べてカトゥーンに対して言葉を投げかける。

「あらら～～～テトラカトゥーン全滅に引き続き、坊やまでとは。流石に想定外じゃなくって？」

「まぁね。だが、こうなることもあるんじゃないかと思っていたのも事実だ。さて、白夜叉が勝利した時点で、残すはただ一人――――この私に挑戦を叩きこんでくるものがいるとすれば――――――」

と、カトゥーンが不敵な笑みを浮かべてそう呟いた瞬間、カトゥーンは後ろの方から飛んでくるものの気配を察した。

「！」

鋭い反射神経でそれを交わしたカトゥーン。

飛んできたものはカトゥーンの座っていた椅子の背もたれへと突き刺さり、それを目の当たりにした不二子は思わず表情を一変させる。

「な・・・これは・・・」

不二子とカトゥーンが目にしたもの、それは明神弥彦が所持していた峰と刃を逆さにした特殊な日本刀、逆刃刀であった。

と、その時そんな二人の後ろからあの男の声が聞こえてきた。

「おいおい・・・訊いてないよ。漫画が大好きって言う少年の心を持った広域次元犯罪者のカトゥーンがここにいるって聞いて来てみれば・・・・・・どうやら写真で見るよりも若かったらしい――――

――その童顔が何よりも証拠だ。」

二人が振り返った先、徐に歩み寄ってきたのは緑の甚平服と深緑色の羽織に身を包み、腰に携えた日本刀と帽子を被った女顔の青年。

青年は歩きながら指を鳴らすとカトゥーンに対してまるで幼子に対して使うような口調でこう言って来た。

「すみません。お遊戯の時間はもう終わったんだよね僕～～～これからは非情で悪辣で金とゴミで溢れた汚い大人の世界で生きていくための勉強をしないとならないんだ♪」

「あらま♪」

不二子は初めてお目にかかる本物のその男の姿に思わずそう声を漏らし、カトゥーンもまた不敵な表情を浮かべながらこう言う。

「へぇ。実物で見るのはこれが初めてだけど、一応月並みに聞いておくかな?君は何者だい?」

そう尋ねられると、その青年――――――次元世界最強の男と言われ、彼の無限書庫を開拓した伝説の永久名誉司書長ユーノ・スクライアは同じく不敵な笑みで返事をする。

「なぁに・・・・・・――――ただの通りすがりの考古学者で、しがない駄菓子屋ッスよ。」

ついに、ユーノ・スクライアが今カトゥーンの元に到着した!!

◇

〈前線フォワードＳｉｄｅ〉

ユーノがカトゥーンの元へとたどり着いた丁度その時、銀時達は怪我の手当てを行っていた。

と、その時唐突にクロノの元にはやてからの緊急通信が入ってきた。

「？はやてか・・・」

クロノは通信を開くと、モニター画面に映ってきた切羽詰った様子のはやてに目を向け、全員もまたそんなはやてを見つめる。

『クロノくん。一大事や。』

「何？」

『たった今、プリズムシードが四個発動してしもうた！』

「な！」

「「「「何だと！？」」」」

はやてのその言葉を聞くと、全員の表情が一気に凍りついた。

「今は私とリィンの力でどうにか次元震の進行を押さえてるけど、この大きさは一人じゃどうにもならへん・・・！クロノくん、手伝ってくれへんか？」

はやてはそう言いながら、エントランスフォール付近でユニゾンし

たリィンと共にディストーションシールドを展開する。

クロノは状況を理解すると、首を縦に振って返事をする。

「分かった。僕もすぐに向かう」

「主はやて、我々は？」

シグナムが尋ねると、はやてはシグナム達に次の指示を出す。

『シグナム達は駆動路の方に向かってもらえるか？何としてもプリズムシードの暴走を止めるんや！』

「「了解！」」

と、その時はやての通信画面の横からなのはの通信が割り込んできた。

『割り込み失礼』

「なのはさん！」

『私もいるよ』

「フェイトさん！」

スバル達は多少の怪我はあるものの無事な様子のなのはとフェイトを確認し、安どのため息をついた。

「無事だったんですね。」

「うん。こっちはあと少しで駆動路に到着する。みんなは、カトゥーンの方に向かって。一護さんもたった今そっちに向かった。」

「カトゥーンの方って・・・まさか・・・！」

「ユーノ・・・！」

銀時はユーノの事を思い出すと、完全に怪我の癒えていない体を起こしてユーノの元へ向かおうとする。

「！銀さん！」

「銀ちゃん！」

「「万事屋・・・」」

「銀さん、まさか・・・？」

吉良が驚愕の表情を浮かべながら尋ねようとすると、銀時は答える。

「あいつを・・・・・ユーノを助けに行ってくる。」

「な！」

「でも、その身体じゃまだ・・・！！」

銀時の身体の状態を考え、差し止めようとする新八だったが、直後銀時は振り返り血を流した顔で全員にこう言う。

「・・・放っておけるかよ・・・ダチを見捨てていられるかよ・・・」

「銀さん・・・」

「銀時・・・お前・・・・・・・」

銀時の瞳を目にし、思わず言葉を詰まらせた一同。

そして、銀時は前へと向きなおすとその場から走り出し、薄暗い通路を駆け抜けていく。

カトゥーンの元へと向かった翡翠の魔導死神としての力を封じられた、異世界で自分や仲間を必死で護り続けてきたかけがえのない友人、ユーノ・スクライアを助けるために。

「（待ってろ・・・今行くからな・・・ユーノ・・・）」

◇

〈不二子Ｓｉｄｅ〉

一方、ついに黒幕と直接ご対面となった翡翠の魔導死神、現ただの人間の我らがユーノ・スクライアはというと、不敵な笑みを浮かべながら目の前で自分を凝視する同じく不敵な笑みをのカトゥーンを凝視し、不二子は現れたユーノに対してこのように評価していた。

「（あらまぁ・・・あんな可愛い顔したくせして、意外と男前なところもあるじゃないの。翡翠の魔導死神ユーノ・スクライア。まさか本当に一人でここまでやってくるなんて・・・）へぇ～～～海坊

主の砲撃を逃れてあれだけの漫画キャラを相手に生き残っていたとはね。」

そして、カトゥーン自身も背もたれに突き刺さった湯気の出ている逆刃刀を一瞥し、ユーノに向かって言葉を投げかける。

「そうか。噂に名高い次元世界最強の男、翡翠の魔導死神ユーノ・スクライアは君なんだね？私の城を好き勝手にやってくれたのは君と君の仲間で間違いはないんだね？」

「好き勝手？冗談は止してよ。僕らは大事な仲間を取り戻しに来ただけだよ。序でに、君の城でパーティーをしに来たわけでもないしね。」

「そうか。ならばこれから酒宴を用意してあげよう・・・・・・血の宴をね」

「過分な心遣いありがたいが、そいつは遠慮するよ。男のV字の生え際見ながら酒飲んでも何も美味くない。こんなところで酒飲んだって、何にも美味くない。確かに、よくまぁあれだけあちこちから漫画キャラとは言え別嬪さんやら変な生き物やらを集めて来たもんだよ。目に余るぐらいだ。だがどれだけ漫画キャラを集めようが、どんなだけ美酒を用意しようが・・・僕は、君の国で酒なんか一滴たりとも飲まない。鎖で繋がれ心を失い大切なものが欠落した奴らから酒なんか注がれても、何にも美味くねぇんだよ。目的の為に人の命を平気で奪う奴らから酒なんか注がれても何にも美味かねぇんだよ。ムサイ男だらけの熱苦しい場所でも、笑って酌してくれるなら僕はそれがいい。女・子どもも入り混じった何だか訳わかんなくなりそうな花見の席でも、みんなが笑って酒が飲めるなら僕はそれがいい。美女も美酒も、屋根さえもない野原でも、月見て安い酒飲

めるならそれがいい！」

ユーノはそう言うと、腰に携えた日本刀「月山」に手をかけ徐に抜きながらカトゥーンに向かってこう言う。

「笑顔の消えた孤独な人間の作り笑いは、酒の肴（さかな）には辛すぎる。」

「鎖を断ち切りに来たか・・・このカトゥーンから孤独と言う名の鎖を・・・漆黒の闇に埋もれた孤独を解き放とうと言うのかい？」

ユーノの言葉を聞き、そのように解釈したカトゥーン。

それを聞いたユーノは月山を構えながらほくそ笑み言葉を返す。

「そんな大層なもんじゃない。僕はただ酒が飲みたいだけだ。“普通の友達に、立派な笑顔付で楽しく酌み交わしたい”と思ってね。」

すると、ユーノの言葉を聞いていた不二子が可笑しさのあまり笑い始めると、カトゥーンの肩に手を添えながらこう言って来た。

「おほほ。これは面白いわね。たかだか酒一杯と他人の為にカトゥーンに喧嘩を売るとは。おまけに、まさか“カトゥーン”に対してもそんなことを言えるとはね・・・この世界にもなかなか面白い人がいるものだわ。ねぇ、カトゥーン？」

と、その瞬間カトゥーンは細身の体には似合わないほどの腕力で不二子の傍らに立っていた柱を粉砕し、ユーノは思わず目を疑い飛び散ってくる破片をガードする。

「！（な・・・何だって・・・・！？）」」

不二子は咄嗟に下の階へと避難すると、カトゥーンに似せて作った巨大オブジェの上に乗っかり、あからさまに言う。

「あら・・・怖い怖い。そんなに怒らないでよ。安心して。別にじゃ〇つもりなんてないから♪」

「不二子。君は何が目的なんだい?どうせ君の事だ。私ですら掌にして手玉に取り、一番おいしいところを独り占めしようという魂胆だろうが、生憎ここには君の好きな金銀財宝などありはしない。だとしたらここには既に用はない筈。それなのにそうまでして何故この私の元から離れようとしない?ひょっとして・・・金銀財宝よりもずっと価値のある、何かを見付けられたとでもいうのかい?彼らの固い絆の姿を見て、忘れてしまったかつての仲間との絆が恋しくなったのかな?ふふふ」

意地の悪そうな笑みでそうカトゥーンが言うと、聞いていた不二子は鼻で笑ってからモニター画面に映る銀時達の姿を見ながら次のように答える。

「ふん。何を世迷言を。絆なんて人生において最も価値のないものに私が惹かれるとでも思ってるの?世の中はすべてお金よ。ブランド品も高級ダイヤも所詮はお金には違いないわ。坂田銀時と坊や達の絆が何よ?見なさいよ・・・一体どれほどの男かと思えば、ボロ雑巾に縋るただの惨めな男とは・・・白夜叉と恐れられた男が聞いて呆れるわ。違うんのよ、私の求めてる価値あるお宝は。こんなしみったれたものじゃない。」

すると、不二子が言い終えた直後ユーノは同じようにモニター画面の銀時達を見ながらこう言い返す。

「お金以上に心を刺激する、そう言うものかい？だとしたら僕から言わせてみればあれこそ本物の宝じゃないか・・・たとえそれぞれ血は繋がってなくても、親子より強い絆で繋がってる連中がここには山ほどいる。“絆”に価値はないだと？それは本物の絆を知らないから言えるんだろうが。」

人の絆と言うものに関して、ユーノはここ数年で最も強く意識し始めるようになっていた。

生まれた時から孤独を味わい、人に頼るに頼れない性格、そして大切なものを一度とならず二度も失っているユーノだからこそ絆とは何物にも代えられない尊く、そして価値あるものになっていた。

するとその時、ユーノの言葉に反応したカトゥーンが言って来た。

「面白いじゃないか。」

カトゥーンは白衣を脱ぎ捨てると、巨大カトゥーンオブジェの上へと降り立ち、腕を鳴らしながら言う。

「その絆とやらの強さ・・・――見せてもらおうではないか！」

「・・・――」

ユーノはカトゥーンを一瞥した後、鞘から飛ばした背もたれに突き刺さったままの逆刃刀・真打を取りに歩きだし、カトゥーンもまたオブジェが持つ身の丈を容易に超えるほどの巨大な薙刀に手を掛けようとする。

「君が、私の鎖から解き放てるのか・・・・・私が君と彼らの絆を断ち切れるか――――――勝負といこうではないか！」

カトゥーンはそう言った直後、ユーノと一緒に武器を手に取り巨大なその薙刀を右肩に乗せてユーノと睨みあった。

「今の君は魔導死神でもないただの人間。人間風情にこのカトゥーンの鎖、断ち切れるか！？」

それを聞いたユーノは右手に逆刃刀、左手に月山と言う二刀流で対抗すると、戦いの覚悟が宿った瞳で言い返す。

「漫画ばっかり読んでて、碌に人間とも向き合うことのなかった引きこもりの鼻水で出来たような鎖なんて・・・一太刀で仕舞だ。“孤独”な人間なんてこの世の何処にもいはしないんだよ。そろそろお前にもそのことをようく教えておこうと思う。嘗て“孤独”だったこの僕が直接・・・体に叩きこんでやる。だからいつまでもつまらない――――――」

ユーノはその瞬間、橋の上から飛び立ち二本の刀を構えてカトゥーンに向かって攻撃を仕掛けるため勢い飛んでいく。

「子供の遊びは止めろボケ！！！！！」

カトゥーンもまた巨大な薙刀を手に取ってユーノの元へと飛んでいき、両者は凄まじい気迫を発しながらお互いの武器を振り下そうとする。

「「うおおおおおおおおお！！！！！！！！！！！！！！！！！！！！」」

そして、ユーノの逆刃刀による第一刀が振り下された瞬間、カトゥーンは空いている左手でそれを受け止め、ユーノは全身全霊の一撃をこうも容易く受け止めたカトゥーンの力に強さに驚いた。

「！」

驚くユーノを見ながらカトゥーンは勝ち誇った様子でそれをぎっしりと握りしめ、咄嗟にユーノは左手の月山でカトゥーンを斬りつけようとするが、その途端漫画の支配者カトゥーンが漫画世界から拝借した特殊能力を発動した。

「“ラシルド”」

すると、ユーノの目前から、巨大な長方形の雷の盾が出現し、盾はユーノの斬撃を受けるや否や電撃を付与してユーノにはね返してきた。

「ぐっふ！」

付与された電撃がユーノの全身へと駆け巡り、それなりのダメージを受けると、巨大な薙刀を振りかぶったカトゥーンの第一刀がユーノの元へと振り下された。

「ふん！！」

渾身の力を込めて振り下したカトゥーンの斬撃を受けると、ユーノは背後にあった橋諸共地面へと叩きつけられ、橋は完全に大破する。

やがて、周りに充満した土煙が収まってくると薙刀を両手で握りしめていたカトゥーンが目の前の意外な光景に声を漏らす。

「ほう・・・」

カトゥーンの前方に映ってきたのは、両手の刀で薙刀の刀身を抑え込み、身体全体を震わせながらこの世のものとは思えない重圧に耐え忍んでいるユーノの姿だった。

「私の一撃を止めたか・・・流石は次元世界最強と謳われるだけある。ワンピースより拝借した“グラグラの実”の力に耐えるとは・・・・君は人間であって人間じゃないねこれは。ははは。」

高笑いを浮かべるカトゥーンだが、対照的にユーノの方は歯を食いしばり動向を開いた状態でこの極限の状態を必死で耐えていた。

「（ふ、ふざけやがって・・・!!たった一撃・・・たった一太刀受けただけで、体中から・・・気力も・・・何もかも全部削ぎ落とされた気分だ・・・!!カトゥーン・・・この男・・・本当に人間か!?もしかしたら一護さんの全力全開よりも強いんじゃないのか・・・!?）」

そんなことを考えながらも、ユーノは目の前の敵、漫画の支配者のカトゥーンの驚異的な戦闘能力に若干の恐怖を覚えながら、その攻撃に耐え続ける。

カトゥーンのオブジェの上で戦いの様子を傍観していた不二子は手を叩きながら能力も使えない生身の人間であるユーノの姿に感嘆する。

「あらまぁ。凄いじゃないの!カトゥーン相手に生身の身体で十秒ももつなんて、これは面白くなってきたわ。頑張ってね、坊や。私

応援したくなってきちゃったから？」

すると、聞いていたユーノは顔を徐に向け辛そうな表情と不敵な笑みが両方合わさり合ったそんな表情で言う。

「舐めるなよ女狐・・・十秒どころか天寿全うしてやるよ・・・なのはとヴィヴィオの子供と孫に囲まれて穏やかに死んでやるよコノヤロウ・・・！！」

ユーノはそう言いながら常人には決して堪えられない重みを逆に跳ね返すようにその場から立ち上がろうとする。

カトゥーンはそんなユーノを見ながら重みを加えつつこう言う。

「君の天寿など遠に過ぎているさ。このカトゥーンキャッスルの漫画キャラに、このカトゥーンに盾ついた時からね。」

カトゥーンはその直後、グラグラの実の力と自分の鍛え上げられた腕力を使い、更に斬撃そのものの重さを急激に増加させていき、ユーノを圧し潰そうとする。

「ふん！」

「ぐおおおおおおお！！！！！！」

ユーノは急激に重さの増えた斬撃をその全身に受けるが、それでも尚決して折れることなくマグニチュード5規模の重さに耐え続けるが、表情を見る限り決して和やかなものではなかった。

「（骨が軋む・・・！！筋肉が泣き喚く・・・！！指一本・・・筋

肉の筋一本たりとも力を抜けない・・・！！一瞬で潰される・・・！！）」

ユーノは心の中で体の異常と警告を呟きながら、カトゥーンの斬撃に堪えつづけ、その挙句彼には似合わないような濁声を発しながら全身から力を振り絞った。

「ぬううう！！！！！！この！！！！！ふんならばあああああああ！！！！！！！！！！！！！！！」

全身全ての力を結集させ斬撃を振り払おうとするユーノ。

すると、図らずもユーノの足の下にあった木の板の断片がカトゥーンの方へと飛んでいく。

「！」

カトゥーンは飛んできたそれを咄嗟に左腕で振り払う。

その時一瞬を隙を作り力を緩めたカトゥーン目掛けてユーノが月山で刃を抑えながら右手の逆刃刀で攻撃を仕掛ける。

「ふおおお！！！！！飛天御剣流！！！！！龍巻閃！！！」

だが、龍巻閃の攻撃を読んでいたカトゥーンはその場から飛び上がり、驚くユーノをしり目に左手にグラグラの実の力を溜め、それをユーノに仕掛ける。

ユーノは皮一枚のところでそれを回避できたが、あと一歩遅かったらユーノの身体は床とその場に散らばった木の断片と一緒に粉々に

砕け散っていたことだろう。

「ち！」

アクロバティックな動きで後ろの方へと回避するユーノ。

しかしカトゥーンは鷹のような鋭い目つきでユーノの動きを捕えると、一瞬のうちに移動しユーノ目掛けて薙刀を振り下す。

「はあああああ！」

この攻撃もまたギリギリのところで回避するユーノだが、カトゥーンはその後も容赦ない攻撃をユーノに続け、まるで怪物のように大地を抉る様に室内を破壊していくカトゥーンの攻撃を見切りながら、嘗てないほどの差し迫った状況にユーノ自身でも整理がつかないでいた。

「（呼吸すら・・・瞬きさえする暇もない・・・・！！一撃で・・・身体と魂（こころ）を引きはがされる！！）」

我々はここまで追い詰められたユーノをこれまでの中で見たことが遭っただろうか？

そんなことを考えている間もなく、不敵な笑みでユーノを狙い続けていたカトゥーンの一刀が振り下され、土煙が上がる同時にユーノの目の前にカトゥーンの蹴りが飛んで来、ユーノはそれを逆刃刀で受け止めようとするが、余りに力が大きすぎたため受け切ることは出来ず簡単に後ろへと飛ばされ壁に激しく叩きつけられる。

「ぐっは！！」

額から血を流し刀を放してしまったユーノ。

するとそこへカトゥーンが現れユーノの顔を鷲掴みにしグラグラの実の力と凄まじい電撃を同時に与えながら二重の意味でユーノを追い詰める。

「ごあああああああ！！！！」

「あらら。もうお仕舞か。つまらないわね。」

圧倒されたユーノの姿を見て、そう呟く不二子。

そしてカトゥーンもまたユーノに苦しみを与えながら不敵な笑みで言って来た。

「ふふふ・・・大口を叩くだけあってなかなかに頑張ったよ。飽く迄“現実の人間”の中での話だがね。流石のユーノ・スクライアも普通の力では私には勝てないかい？所詮翡翠の魔導死神と言っても、霊力と魔力を奪われてはただの人間・・・管理局の汚い湯船にどっぷりと浸かり身も心も黒に染まった者に私の鎖・・・断ち切ることもままならなかったね。獅子は縄張り争いに負ければ、縄張りと共に己の保有する雌をも明け渡す。」

「あおおおお！！！！！」

「分かるかい？君達みたいな弱い人間に、その手で誰かを抱きしめることも大切な何かを護る権利も、行使することすら出来はしないのだよ。とっくの昔に縄張りも雌も、君たちの言う絆もみな私のものになってしまっただから。」

「ぐあああああああ！！！！」

追い詰められるユーノの顔を鷲掴みにしたまま大気を砕いて直接震動させつつ電撃を流し続けるカトゥーンが徐にユーノの耳元に近づき勝ち誇った笑みで囁く。

「そう・・・この世界も人間たちも絆もすべてこのカトゥーンのもの。彼らは私の鎖に繋がれた飼い犬だ。何処にも逃げられはせぬ！そして君ら負け犬に、これを止める権利はない！悪いのは何も護ることの出来なかった君ら弱者なのだからな！負け犬は負け犬らしく、指を咥えて見ていればよいのだ。この世界が、人間たちが、絆が我ら強者に蹂躙される様を！」

「うおおおおおお！！！！」

カトゥーンの言葉を全身を駆け巡る常軌を逸した苦痛を受けながら耳にするユーノ。

カトゥーンは最後にユーノに向かってこう言う。

「君を守るために先に逝った弥彦や君が奪っていった者たちと共に、あの世でな！！」

と、その瞬間ユーノは咄嗟に懐に閉まっていた一護が自分の誕生日の日にプレゼントしてくれた伊達の煙管を取出しそれをカトゥーンの右目の瞼に突き刺した。

「！」

カトゥーンの瞼から噴き出る多量の血。

思わぬ事態に一瞬頭が真っ白になるカトゥーンに、ユーノは弱々しい声で言う。

「負けてなんかいないよ・・・！僕たちは・・・今も戦ってるよ・・・僕は！」

「き・・・貴様・・・・！！」

瞼から血を流し思わず手で右目部分を抑えるカトゥーン。

ユーノはそんなカトゥーンに全身ボロボロの状態であちこちから血を吹き出した体を動かしてカトゥーンの腹に強烈な蹴りを一発お見舞いした。

「ぐは！」

カトゥーンは蹴りを受けると目を抑えたまま後ろに倒れ、ユーノもまたその場に沈み込むように倒れた。

するとその時、奥の方からある程度の治療を終え急いでユーノの元へと駆けつけて来た男、坂田銀時が登場する。

「は、は、は、は、は。ユーノ！ユーノ！！」

銀時が到着し、辺りを見渡すと真っ先に彼の瞳に映ってきたのは黒幕であるカトゥーンとそんなカトゥーンと戦闘を繰り広げ、全身血塗れとなってぐったりとしている友人のユーノの姿だった。

「は！ユーノ！おい、ユーノ！」

銀時は急いでユーノの元へと駆け寄ろうとするが、直後ユーノが怒号を上げて銀時を止めにかかった。

「来るな、銀さん！」

「！」

思わず立ち止まってしまう銀時。

ユーノは頭上から自分を見下ろす銀時に言う。

「何してるんですか、銀さん。さっさと新八君を連れて逃げてください・・・！新八君だけじゃない・・・他のみんなも・・・一緒に連れて逃げてください！」

ユーノがそう言う最中にカトゥーンは瞼に刺さっていた煙管を放り投げ、険しい表情を浮かべながら掌についた血を見、そして銀時はユーノの言葉を聞き我慢できずに声を荒げる。

「このフェレットもどきが！！！！！んな真似出来るかよ！！！！！偉そうな口利いてんじゃねぇぞ！！！！！何でてめぇが一人で何もかも背負い込んでんだよ！？何で一人で苦しんでいやがんだよ！！！！何で・・・俺達の為に・・・そこまで体張る必要があんだよ！！厄介ごとに巻き込んだのは俺達みたいなもんだろうが！！！」

「巻き込んだ？勝手に顔突っ込んだの間違いでしょう？行ってください・・・あなた方万事屋や真選組に何かあったら、僕ら何しに来たか分かったものじゃないですよ・・・」

「舐めたこと言ってんじゃねぇよ・・・！俺達はな、もうお前やあいつらに散々助けられてばっかなんだよ!!何一つ俺もあいつらも借りを返せちゃいねぇんだよ!!お前は・・・この世界に俺達が来たとき・・・何も知らない俺達に何してくれたよ・・・おめぇは俺たち全員の身の上を命懸けで護ってくれてたじゃねぇか・・・!!」

「・・・――」

銀時の言葉に黙った耳を傾けるユーノ。

すると、銀時は取っ手を強く握りしめ小刻みに手を震わせながらユーノに向かって赤裸々にこう言って来た。

「俺達だけじゃねぇ。なのはの野郎も、六課にいる前線メンバーも、恋次達死神も・・・お前が体張って・・・無茶やらかしてまで護っていただろうが・・・！この世界に来てからずっと、俺はてめぇのそう言う姿をずっと見てきた・・・全くホントに大した野郎だよてめぇは・・・自分のこと後回しに他人のことばかり優先しやがって・・・ゴリラ以上にお人好しだよ・・・だがな、俺はあんましお人好しな人間に守られてばかりなのは御免被る。てめぇが一人で戦って苦しんで、それでもまだ戦おうなんざ馬鹿にもほどがあらあ!!一人で背負い込んでんじゃねぇよ!!てめぇのその気持ちも、何もかも俺達に受け止めさせろよ!!」

「！」

〈一人で何もかんも背負い込んでじゃねぇよ!てめぇのその気持ちも・・・全部俺達に受け止めさせろよ!〉

ユーノは最後の銀時の一文を聞いた瞬間、脳裏に浮かんできた嘗て同じことを言ってくれた師、一護の言葉が甦る。

「俺達をここまで連れて来て、尚且つ俺の大事な仲間を助けるのにここまで体張ってくれる奴を見過ごすなんて真似、俺には出来ねぇよ・・・!てめぇは俺が護ってやらあ!!大人しくそこ動くんじゃねぇぞ!!ゼッテー見殺しなんてことさせてたまるかよ!!」

銀時はそう言って、ユーノに叱咤激励する。

すると、そんな銀時の言葉を聞いていたユーノはほくそ笑み感謝の意を込めたこんな言葉を口にする。

「・・・その言葉が聞けただけで・・・僕はもう十分ですよ、銀さん。」

「!」

「・・・行ってください・・・僕はもう・・・大切なものを護れない負け犬になんかなりたくありません・・・・・・」

「・・・ユーノ・・・」

思わず絶句する銀時。

ユーノはその言葉を最後に言うと銀時に対して柔かい笑みを浮かべる。

と、その直後カトゥーンがユーノの顔面に強烈な蹴りをお見舞いする。

「！」

その光景を目の当たりにした瞬間、銀時は目を凝らして煙を上げ壁の中に食い込み意識を失ったユーノに向かって声を上げる。

「ゆ・・・ゆ・・・ユーノ！！！

大事なものは何が何でも手放すな（後書き）

教えて、ユーノ先生！

ユ「今日は本型ロスト・ロギアのそれぞれの働きを教えるよ♪」

ユ「『ハートブック』は誰にも負けない強い心を植え付け、『リムズブック』は超人的な力を秘めた手足に人の体を作り替え、『ボディーブック』と『フェイスブック』はそれぞれ強靭な肉体と同時に顔までもがその日との願った通りになる。」

ユ「で、一番重要になってくるのが『カオスブック』。これは混沌と言う名の通り、様々な方面から多種多様な力を自由に引き出すことが出来るんだ。」

新「いや～～～あの時は本当に大変でしたよ。でもお蔭で助かりました。」

な「だけど今度はとうとうカトゥーンとユーノ君が・・・ユーノ君が／／／」

一「つうか呑気にここで解説してる暇なんかあるのかよ？」

銀「全くだなオイ・・・って？あれ？ユーノ何処行った？」

辺りを見渡すと、いつの間にかユーノがいなくなっていた。

新「ゆ、ユーノさん！？」

な「ユーノ君!!何処!!」

四人がユーノの名を叫んでいる頃、ユーノ本人は突然の腹痛に襲われ、トイレに直行していたのであった。

ユ「うおおおおおおおおおおお!!!!昨夜食べたキムチ!!!!やっぱ腐ってたんだ!!!!!!!!!!」

魔導師図鑑ハイパー!

ユーノ・一護・銀時の主役三人組は揃って居酒屋で飲み明かしていた。

ユ「乾杯〜〜〜♪いや〜〜〜こうやって三人で飲むのは新鮮ですね。」

一「そうだな。銀さんも遠慮しないで今日は呑もうや。」

銀「すまねぇな。じゃ、イッチョ盛り上がろうぜ!」

三人は酒が進むにつれて、それぞれつまみ片手に各々愚痴や自慢話を反し始めた。

銀「空知の野郎〜〜〜俺がこんなに苦労してるのに何でマトモナ女の一人や二人抱かせてくれねェンだよ〜〜〜おまけに銀さん必殺技の一つも無くてマジゲーム化とかするの大変なんだぜ〜〜〜」

一「俺だって苦労してんだよ〜〜〜まぁ苦労も多いが生き甲斐があるのも事実だぜ〜〜〜医者として、死神代行としてこの力で俺は織姫やみんなを守っていける〜〜〜それにそろそろ子供の一人や二人

作ってもいいとも思ってたりもしてな～～～」

ユ「あ～～～言いましたね～～～～♪あとで織姫さんに教えておこう～～～～♪」

一「ば、馬鹿！！それは勘弁／／／」

銀「そう言うお前はどうなんだよ～～～なのはと一発・・・いや、五・六発いってんじゃねぇのか？」

ユ「な、何言ってんですか銀さん／／／僕がそんな事出来る訳ないでしょう／／／」

一「照れんな照れんな♪お前もれっきとした野獣なんだぜ・・・少しは攻めてみろって！」

ユ「いや！！そこまで僕男としては出来上がってませんし！！！何よりなのはだって、きっとまだ心の準備ってか・・・それ以前に僕とやっていいかすらわかりませんし／／／」

と、そんな事を言っていたユーノの言葉を外で聞いていたなのはは顔をほてらせながら、徐にこう呟く。

な「・・・やってもいいのに・・・／／／」

次回予告

絆を我がものにせんとする男。

漫画の支配者、カトゥーン。

その圧倒的な力の前にユーノは、成す術はないのか・・・？

ユ・全「『剣と心を賭して築き上げる絆』」

剣と心を賭して築き上げる絆（前書き）

ユ「通称カトゥーン。本名は不明。スカリエッティ同様、いくつもの世界で指名手配された広域次元犯罪者。通信映像や、音声のデータは残されているものの、未だ人前に姿を現したことはなく、逮捕歴もない。」

ユ「多くのロスト・ロギアを使い、漫画と言うフィクションから数多くの漫画キャラを召喚・漫画キャラ兵団を結成、この現実世界に戦争を仕掛け、とうとう・・・世界の逆転現象というバカげたことの為に次元震までしでかす始末。」

ユ「プリズムシードが発動し、大規模次元震が起こってしまった今、僕に出来るのは――――――」

剣と心を賭して築き上げる絆

ユーノ・スクライア外伝、前回の三つの出来事。

一つ、プリズムシードが予想よりも早く発動し、大規模次元震が発生する。

二つ、銀時の回心の一撃を受け、志村新八が我を取り戻す

そして三つ、ユーノ・スクライアはカトゥーンと対峙し、その戦力の前に圧倒される。

ユ「・・・今も戦ってるよ・・・僕は！」

ユ「何してるんですか、銀さん。さっさと新八君を連れて逃げてください・・・！新八君だけじゃない・・・他のみんなも・・・一緒に連れて逃げてください！」

銀「舐めたこと言ってんじゃねぇよ・・・！俺達はな、もうお前やあいつらに散々助けられてばっかなんだよ！！何一つ俺もあいつらも借りを返せちゃいねぇんだよ！！一人で背負い込んでんじゃねぇよ！！てめぇのその気持ちも、何もかも俺達に受け止めさせろよ！！」

銀「俺達をここまで連れて来て、尚且つ俺の大事な仲間を助けるのにここまで体張ってくれる奴を見過ごすなんて真似、俺には出来ねぇよ・・・！てめぇは俺が護ってやらあ！！」

ユ「・・・その言葉が聞けただけで・・・僕はもう十分ですよ・・・行ってください・・・僕はもう・・・大切なものを護れない負け犬になんかなりたくありません・・・・・・」

銀「・・・ユーノ・・・」

銀「！」

銀「ゆ・・・ゆ・・・ユーノ！！！！！！！！！！！！！」

〈カトゥーンＳｉｄｅ〉

ユーノ・スクライア・・・まさかの敗北。

銀時は信じられないとばかりの表情で顔から白い湯気を出すユーノを凝視し、そしてそのユーノに止めの一撃を加えたカトゥーンは徐に言う。

「哀れな男だよ。世界も家族も大切な友もすべて失い、最期は他人のものを守って死んでいくとは。」

「・・・・・・」

無残な姿となったユーノは当然のことながら口を開くことはなく、ただ空しく額から血を流しつづけ、カトゥーンは不敵な笑みでさらに続ける。

「己の剣にそんなに意味が欲しいかい？そんな剣では何も護ることなど出来ないよ。己の命すらね。」

「ユーノ・・・・・ユーノ！！！！！！」

銀時は瞳に映る変わり果てたユーノの姿を見ながら名前を叫び、そして、それと同時に込み上げてくるかけがえのない友を傷つけたカトゥーンに対する怒りの炎が爆発する。

「く！おおおおおおおおおおおおおおおおおお！！！！！！

！！！！！カトゥーン！！！！！

不二子は組んでいた足の位置を逆にし、二人の戦闘の様子を先ほど同様傍観する。

銀時がカトゥーンと鍔迫り合いを繰り広げていると、不敵な笑みを浮かべながらカトゥーンは次のように言葉を投げかけた。

「ふん。君も存外単純なんだね。たかが他人の為に、ユーノ・スクライアならいざ知らず君まで私に剣を向けるとは・・・――つくづく君たち侍は揃いも揃って面白いね。」

「ほおおおおおおおおおお！！！！！！！！！」

しかし銀時はカトゥーンの言葉を一切無視して怒りと悲しみの両方が籠った刃をただ闇雲に振りつづけ、カトゥーンはそれを軽々と防いでいく。

「だけどいいのかい？折角ユーノ・スクライアが拾わせてくれたその命を、こんなところで無駄にする気か？」

カトゥーンの挑発的な口調が銀時の耳に入ると、銀時は更に血走らせて先ほどよりもドスの利いた声で叫ぶ。

「コノヤロウ！！！！！！！！！！！！！！！」

「聞き分けのない人だね。君は――――――」

すると、カトゥーンは上空へと飛び上がりその状態から片足を振り上げ、漫画より拝借した技を使う。

「嵐脚『白雷（はくらい）』」

銀時はその攻撃を受けると、後方へと飛ばされながら勢いをつけて転げまわる。

「ぐっは！！」

「剃（ソル）」

カトゥーンは一度その場に降り立つと、今度は瞬間的に移動し、姿を消したと相手に錯覚させる移動技を使い銀時に近づく。

「！」

そして、至近距離からの豪快な一振りを銀時に浴びせる。

「はあああああ！！」

銀時はその一刀を辛うじて受け止めるが、やはりユーノ同様グラグラの実が付加されたその重さは想像を絶していた。

「のおおおおおおおおおおおお！！！！」

銀時は必死でその重さに耐え、一瞬の隙を窺うとカトゥーンと距離を取り、額の血を拭ってから勢いよく木刀片手に走り出す。

「ほおおおおおおおおおお！」

銀時が向かってくると、カトゥーンは掌を前に出し大きな重力弾を撃ち出す。

「ギガノ・レイス」

ギガノ・レイスが前方に打ち出され、銀時はその攻撃を食らうと同時に為す術もなく後方へと吹き飛んでいく。

「のあああああああ！」

銀時は壁に激しく激突。

カトゥーンは高笑いをしながら薙刀片手に言う。

「ははははは！！！どうしたんだい？そんなもので終わりかい？」

「く！」

銀時はふらふらの身体であるにも関わらず、意地と根性で言うことを利かせると、それでもなおカトゥーンに向かっていく。

カトゥーンは体力が消耗されつつある銀時の攻撃を容易に躱すと、薙刀を振り上げ銀時の頸動脈を狙う。

「フン・・・動きが遅すぎて完全に丸見え――――・・・・・・」

と、その瞬間銀時はユーノが所持していた逆刃刀・真打を拾い上げ木刀と一緒に二刀による連続攻撃を加える。

カトゥーンは目にも止まらぬ銀時の二刀流を受け止めつつ、感心した様子で言う。

「悪くないね。咄嗟にユーノ・スクライアが落としたそれで私の攻撃を凌ぎ反撃したか。だがそれでも君の敗色濃厚なこの状況には何ら変わりはないよ。」

カトゥーンはそう言うと、天井まで飛び上がり、薙刀を突き刺して銀時に狙いを定めると、嵐脚の乱れ撃ちで攻撃する。

「嵐脚『乱(らん)』」

銀時は飛んで来たカトゥーンの嵐脚を全て木刀と逆刃刀で防ぎ切り払っていく。

「うおおおおおおおおおおおおおおおお!!!!!!」

銀時が切り払った嵐脚は周囲に飛び散り、周囲はその影響で無残にも破壊されていき土煙が巻き起こる。

「（こうも自在に斬撃を・・・！色んな漫画から手当たり次第に能力をかっさらいやがって・・・！！）」

銀時は心の中でそう呟きながらも、死に物狂いで嵐脚を切り払いつづけ、そしてついに全ての嵐脚を退ける。

「は、は、は、は、は、は」

既に前回の戦いで体力も気力もかなり疲労している銀時だが、この男の底知れぬ生命力の高さと友への想いは想像を絶するものがあった。

銀時は二本の刀を握りしめると、前方に降りてきたカトゥーンの方

へと一直線。

「はあああああああああ！！！！」

しかしカトゥーンにとって、銀時の速力など亀が動くスピードと何ら変わりはなく思えた。

「遅い！！」

カトゥーンは剃で瞬間移動すると、銀時の顔面を鷲掴みにする。

「グ・・・！」

そして、そのまま人間離れした腕力で銀時を握りしめ、回転数をかけてから意識を失うユーノの傍らまで投げ飛ばした。

「地球投げ」

「ぬあおおおおおおおおおおおおお！！」

銀時はユーノの元まで投げ飛ばされ、同じように壁に食い込むと口から血を吐き、持っていた木刀と逆刃刀を手から落とした。

土煙が上がる前方の銀時を凝視しながら、カトゥーンは鼻で笑いこう言う。

「ふん。やはりこの程度だったか・・・攘夷戦争においては鬼神の如き強さから白夜叉と恐れられた君でも、そこで得たものなど何もなかった。あったのは眼前に広がるただの死体の山。そら、そこにも転がっているだろう・・・・・」

カトゥーンはそう言いながら銀時の隣で意識を失ったままのユーノを指さす。

このカトゥーンの態度には銀時も黙ってはいなかった。

「だ・・・・・まりやがれ・・・・・・・！！」

しかしカトゥーンは変わらない様子で言葉を並べる。

「本当のことを言って何がいけない？そうやって君たち人間は都合の悪い事実を受け入れられないと言い訳ばかりを並べる。威圧で誤魔化そうとする。哀れなものさ。」

「黙りやがれって言ってんだろうが！！！！！！！！！！！！！！」

銀時は怒号をまき散らしながら僕牢を再び手に取り全速力でカトゥーンの元へ走り出し怒りの一刀を浴びせようとする。

しかしカトゥーンはそれを指先で受け止め、思わず目を疑う銀時に向かってこう言う。

「一つ忠告させてもらうよ。君は先のマテリアルとの戦いで完全に疲労困憊している。体力は著しく消耗し、立っているのもやっとなぐらい。今の君の攻撃力は皆無に等しい。そんな体でこの私に盾つこうなどとは、笑い話にもなりはせん！！」

カトゥーンはそう言うと、熱せられた鋼鉄のような拳に炎を纏わせて銀時の顔面を殴る。

「ハン・・・バー・・・グー！！！！！！！！」

「ぐっ・・・は・・・！！」

ハンバーグの一撃を顔面に受け、歯の何本かが折れる銀時は勢いよく吹き飛び、結果的に先ほど同様壁に激突しユーノの横でぐったりと身体を沈ませた。

カトゥーンはそんな銀時とユーノを見ながら首を鳴らし、冷めた表情で口にする。

「惨めなものだね。嘗ての白夜叉と恐れられた男が今となってはこの様か。精一杯の力を出しても私には君たちの牙は届かなかった・・・・・いい加減目の前の現実を直視したらどうだい？分かるだろう。ユーノ・スクライアは沈んだ。いくら君が粘ったとこで、沈んだ彼は二度と起き上がることはない。誰がやっても同じことさ。」

「く・・・・・！」

カトゥーンの言葉を耳に、歯を食いしばりながらほとんどいじめに近い状態にまで追い詰められてしまった銀時。

ユーノもまた未だ意識を取り戻すことはなく、額から血を流す一方。

と、その時今まで戦闘の様子を傍観していただけの不二子がカトゥーンに対して徐に次のように口にしてきた。

「あらら。なんかここまでくると一人リンチに近いわよね・・・ホント、逆にこっちがドン引きしちゃうぐらい・・・カトゥーン。あなたは出逢ったころから何も変わってなどいないようね。漫画キャ

ラを操り世界をひっくり返すという“仮の目的”を企て、真に自分が求める“人間の絆”に縋る思いで手を伸ばしたけど、結局それを掴むことは出来なかった。どうやらあなたにとって、ユーノ・スクライアも坂田銀時も甚振ってはいるけど、本当はあなたにとっては必要なものじゃなくて？」

カトゥーンは意味深長な不二子の発言を聞き、暫くの沈黙を保ったのち、不気味な笑みを浮かべて言い返してきた。

「ふふふふふふ・・・・・必要なもの？何を言うのかと思えば・・・寧ろその逆だよ。これまで私はこの力で、金も権力も力も好きに手に入れてきた。だがこの私にも一つだけ手に入れられないものがある。このカトゥーンを以てしても屈せざるを得ない相手が――――私はこんな次元空間まで追い込まれ逃げ込んだ。だが奴は、この常世においても変わらぬ姿で存在しているのだよ。私にとって・・・いや、孤独な人間にとって最も忌むべき存在。唯一無二の天敵――――――」

カトゥーンはそう言う直前、脳裏にユーノを始めとするこの城に乗り込んできた機動六課前線メンバー全ての顔を思い浮かべながらこの言葉を残した。

「そう――――――“絆”が！どれほどの苦難に遭っても決してその心は光を失うことはない。どれほどの苦界に堕ちても、その魂は決して堕ちることはない。ユーノ・スクライアの、坂田銀時のその気高き姿はまさしく、私にとって最も忌まわしい絆の象徴・・・」

すると、カトゥーンは真顔を浮かべ自分の喉に手を当てながら更に続ける。

「渇きが癒えないものさ。どれほど漫画を読もうと、どれほど漫画キャラを操ろうと、どれほど血を浴びようと、絆が輝く限り私の渇きが癒えることはない。」

カトゥーンはそう言ってから徐に左手を天に掲げ、声高に叫ぶ。

「人の絆を無に引きずり落ろす!!人の死を以てではない・・・人の奥底に眠る気高き魂を引きずり下し、我が前に全てを屈服させる!虚無となり、絆も何もない放心状態となるまで追い詰める!」

そしてカトゥーンは言葉を並べながら絆を手に入れたつもりで右拳を握りしめる。

「“絆”を手に入れる!!それ以外に、この魂の渇きを癒す手はありはしない!絆の全てを壊し、絆の全てを私が手に入れてあげよう!!私の元に沈むがいい、ユーノ・スクライア!!!坂田銀時!!!君たちの絆は私のものだ!!!!!!!!」

高らかにそう宣言し、両手を広げるカトゥーンの声が城中に響き渡る。

と、その時。

「――――――沈められるものなら、沈めてみろよ。」

「!?」

低い男の声を聞き、カトゥーンが振り返ってみると、振り返った先に立っていたのは全身ボロボロでありながら、それでも体を起こし、木刀を握りしめる不屈の侍坂田銀時だった。

銀時は弱々しい声色ではあるが決して諦めの姿勢は見せずカトゥーンに向けてこう言う。

「俺は兎も角・・・たとえお前が、ユーノを何度沈ませようと・・・絆がある限り、あいつは・・・ユーノはまた起き上がる！何度でも！！」

「！」

「たとえお前が、何度ユーノの魂を曇らせようと、俺や一護、なのは達が真っ青に晴らす！何度でも！たとえ何度ユーノの顔を傷つけようと、俺達が笑顔に戻す！何度でも！！」

「白夜叉！貴様――――――――！」

思ってもいなかった銀時の言葉に過剰に反応するカトゥーン。

銀時は意識を失ったままのユーノを一瞥し、少し寂しそうな表情でこんなことを呟く。

「こいつは・・・――――ずっと何かを背負ってばかっで、何ひとつ俺達に背負わせちゃくれてねぇ・・・・それがこの上もなく寂しいってことに、こいつはイマイチ分かっちゃくれてねぇ・・・・・・背負わせてくれよ・・・自分ばっか背負って・・・・・・・終わらせるんじゃねぇよ・・・！ダチの一人や二人・・・背負ったとこで何も苦しかねぇ！何も重たかねぇ！今まで何も背負ってこなかった奴に比べれば・・・こんな重さ・・・これぐらいどうってことねぇんだよ。この重さが・・・嬉しくてたまんねぇんだ。」

銀時はそう言いながら、頭の中でこれまでの過去を振り返りながら、自分が背負って来た人たちの中に“ユーノ・スクライア”と言う人物の記憶をしっかりと焼きつける。

カトゥーンは先ほどとはまた違う目の輝きを見せる銀時を目の当たりにし、険しい表情を浮かべる。

「く・・・！貴様・・・・・・」

銀時とカトゥーンが膠着状態となり、睨み合っていると唐突に二人の耳にあの男の声が聞こえてきた。

「ふん。流石は銀さん。言うことが違うぜ。頼もしい限りだ。」

「！」

「な！この声――――――！」

二人がその声を聞き、振り勝った瞬間カトゥーン目掛けて声の主は漆黒の斬撃を飛ばし、カトゥーンはそれを回避し、斬撃でぱっくりと割れた床を見つめる。

「これは！」

カトゥーンは徐に斬撃が飛んできた方を仰ぎ見てみると、その瞳に映ってきた光景に心底驚かされた。

映ってきたのは、怪我が完全に言えていないにもかかわらずユーノ・スクライアと坂田銀時を助けるために伝説の死神代行黒崎一護と共に集結したなのは・フェイト・はやて・クロノを抜いた総勢２４名

だった。

一護は上の階からカトゥーンを見下ろしながら、天鎖斬月片手にこう言う。

「だったら背負ってもらおうじゃねぇか。その淫獣フェレットもどきの師匠、この黒崎一護とその仲間２４人をな！」

「な・・・！」

「たく。他人想いな優しい馬鹿弟子とそんな弟子の友達に巡り合えて、幸せだよ。俺は。」

銀時は目を丸くしながらこの場に現れた一護達の登場にただただ呆気にとられていた。

「一護！お前ら・・・！」

「貴様ら！何の真似だ！？反逆・・・・・・この私に、反逆しようというのか！？」

ドスの利いた声で上の階から自分を見下ろす一護達にカトゥーンがそう言うと、一護は真顔でこう返事を返す。

「俺が知るかよ。馬鹿な愛弟子の言うことに耳を貸して引っかかっただけだ。毎度毎度・・・相も変わらず他人他人他人って・・・自分の事これっぽっちも考えてなくて、何度言っても全然聞く耳持たなくて、何時も言ったこと右から左に聞き流しやがる。その愛弟子の恋人も友人も、それに生徒たちも・・・みんなその為に悲しい気持ちになっちまってな・・・――ほら、あそこでのびてる奴だ。

全く、助けに来てみればこの様。笑わせるんじゃねぇよ。偉そうなこと言って何だこの体たらくは?まだまだ修行が足んねぇようだな。こいつはもう一度鍛え直してやらあ。とっと目覚ましやがれ!!!この・・・・・馬鹿弟子が!!!!」

一護はそう言うと、懐から苦無を取出し勢いよくそれを意識を失ったユーノの元へと投げつけた。

と、その時奇跡は起こった。

飛ばされてきた苦無を何と直前にユーノの右手が受け止めたのだ。

「「「!」」」

思わずその光景に目を疑う銀時とカトゥーン、そして傍観者の峰不二子。

そして、徐々に晴れていく煙の中からユーノ・スクライアの声が聞こえ始めた。

「・・・・・あはは。相変わらず手酷い起こし方ですね・・・一護さんは・・・・・まぁでも・・・・・お蔭で良い眼覚ましになりましたよ。これで漸く、全力で行けそうです・・・」

ユーノはそう言いながら、顔中血塗れの状態で笑みを浮かべ、徐に全員が注目する中で立ち上がり、カトゥーンの元へと歩み寄っていった。

「き・・・貴様・・・!?」

まさかの展開に目を疑うカトゥーン。

ユーノはその場に突き刺さった月山を手に取ると、徐に呟く。

「へ。絆がそこかしこに沢山あって、眩しくて眠れやしないよ。」

銀時はユーノが意識を取り戻し、再び自分の足で立ち上がったその姿を目の当たりにすると、表情を和らげ一護もまた鼻で笑ってからこう口にする。

「は。世話掛けさせやがって・・・・・・遅せんだよ、このフェレットもどきが！！！」

「誰がフェレットもどきですか・・・！僕にはユーノ・スクライアって名前があるんですから。」

一護は後ろの方でそれぞれの表現方法でユーノ復活を喜ぶ前線メンバーを代表して鼻で笑いながら更に言葉を投げかける。

「こいつはまた手酷くやられたもんだな、ユーノ。てっきり死んでるものかと思ったぜ。だがその様じゃ、役に立ちそうにねぇな。立っているのもやっとじゃねぇか。」

「それを言わないで下さいよ師匠。て言うかそっちも同じ様なもんでしょが・・・・・・今更よくのこのこ来れたものですね。」

「私怨を辿って地獄から這い出て来たんだよ。俺も一応、地獄には縁があるからな。」

「御足労痛み入りますがね、あんまり来るのが遅いからストレス溜

まって喫煙しちゃいましたよ・・・・・お蔭で命拾いしましたけど。」

ユーノはそう言いながら床に転がっている血塗れの伊達煙管を一瞥。

すると、一護はユーノに対してこう言い返す。

「ふん。何の話だよ。そんな汚ねぇ煙管、俺はやった覚えはないぜ。」

一護はそう言うと、仲間たち２４名と共にユーノと銀時の元へと飛び降り、一か所に集まると武器を手に取り更にこう言う。

「俺がお前にやった煙管は、そんな安物じゃねぇ。ブランドものビッチ。そこいらじゃ手に入らねェ上物だろうが。失くしたなら買って返せボケ――――――てめぇの誕生日にな」

「たく。これだから派手な髪の毛した元不良は嫌なんだ。たかりもいいところですよ。」

ユーノは思わずため息をつき、傍らでそんなユーノを見ていた銀時も息を漏らしてから便乗する。

「そうだな。ユーノ・・・お前勝っても負けても一護の前じゃ地獄だな。」

そう言い終わると、ユーノ・銀時の二人は一護達と同様に自分の武器である洞爺湖木刀と月山を構えて眼前のカトゥーンを見据える。

カトゥーンは取り囲むように自分を見据えるユーノ達総勢２６人を

見てから言う。

「死に損ない共がよくもまぁぞろぞろと。君たち雑魚が何匹集まろうと、何も変えられるぬと言うことが何故わからない！？何故死なない！？何故立ち上がる！？何故君たちは揃いも揃ってそんな眼をしている！？」

怒りのボルテージが上昇するカトゥーンはそう言いながら目の前で自分に対して決して曇ることのない瞳を宿すユーノ、一護、銀時を始めとする前線メンバー全員の目を見る。

「「「「・・・・・・」」」」

「気に食わない・・・気に食わない！！その眼！！！！！！」

カトゥーンは突き刺さっていた巨大薙刀を手に取ると、凄まじい覇気を出しながらユーノに向けて切っ先を突き付け怒号を浴びせる。

「その眼を止めないか！！！！！！」

だがユーノはカトゥーンの怒号を聞いても、決して眼の色を変えることはなかった。

そして、興奮したカトゥーンを見た一護はユーノ達に声をかけた。

「行くぞ！！！！ユーノ！！！！！銀さん！！！！！みんな！！」

その瞬間、ユーノを始めとするこの場にいる全員が一斉にカトゥーン目掛けて走り出した。

「「ほおおおおおおおおお！！！！」」

「「「

刀の柄頭で一護の内臓を攻撃、一護は唐突に襲って来たあらぬ痛みに吐血する。

「ぶっほ！」

そしてカトゥーンはその状態から一護もユーノ達同様投げ飛ばす。

しかし、そこへ今度はフォワード五人が一斉に飛びかかってきた。

「「「「「はあああああああああ！！！」」」」」

「諄いわ！」

怒り心頭のカトゥーンはそう言うと、薙刀の一振りで飛びかかってきた五人を一掃、フォワード達五人は豪快に吹き飛んだ。

「「「「「がっは！」」」」」

しかし、前線メンバーの怒涛の攻撃はとどまることを知らず、次から次へと機動六課副隊長陣、死神や真選組、スクライア商店、更には特異な霊力使いなどと言った者が間髪入れずにカトゥーンに仕掛ける。

「紫電・・・一閃！！」

「テトーリヒシュラーク！！」

「バーニングサラマンダー！」

「“蛇腹連刃（じゃばらレンジン）”！！！！」

「「「破道の三十三　蒼火墜！」」」

「撃つぜ撃つぜ！！」

「ウォーターホイッパー！！」

「ダイナミッククロス！」

「「うおおおおおおおおお！！！」」

「一剛力羅（いちゴリラ）、二剛力羅（にゴリラ）、“二剛力斬（にごりざけ）”！！」

「『激昂の光弾（インテンズィーフ・リヒト・クーゲル）』！」

「『魔人の制裁（サンシオネス・デモニア）！！』

合計１５人による一斉攻撃がほぼ同時にカトゥーンの身体に衝突すると、大爆風を伴って白い煙が辺り一帯に充満し、恋次達は武器を構えたまま動きを警戒する。

「やったか！？」

しかし直後爆風の中より現れたカトゥーンは薙刀を両手で大きく振り回し恋次達１５人をまとめて吹き飛ばす。

「“神々の決断（デシション・デ・ロス・ディオシス）”！！」

「「「

一気にその攻撃によって前線メンバーが一掃されると、再び立ち上がったユーノが月山を握りしめて猛烈な気迫で迫ってきた。

「ぬらあああああああああ！！！！！」

ユーノは柄頭をカトゥーンの顎に直接たたき込み、衝撃を受けたカトゥーンは口から血と一緒に砕かれた歯を吐き捨て、その後月山の刀身を手で真っ二つに切断する。

「な！」

刀身を折られてしまったユーノが身の上の危機を感じるや否や、岩を砕く強烈な蹴りでユーノを一蹴する。

「“羊肉（ムートン）ショット”！！」

「がっは！」

ユーノは内臓の一つを潰され、大量の吐血を吐きながら後方へと飛ばされ壁に激しく激突。

すると、今度は銀時と共に新八・神楽の万事屋トリオがカトゥーンに向かって行った。

「「「ほおおおおおおおお！！！！！！」」」

カトゥーンは三人の攻撃を見極めると、薙刀を片手で振り回し三人をまとめて一掃した。

「“神の決断（ラ・デシション・デ・ディオシス）”！！」

「「「がっは・・・！！」」」

カトゥーンはこの時、いくら振り払っても振り払っても決してくることなく自分に向かって来るユーノ達を見ながら枯渇する心の叫びを全身に響かせる。

「（渇く・・・どうしようもなく渇く・・・何度地に平伏させようと、何度希望を断ち切っても、何度でも立ち上がる・・・！何なんだ・・・同じだ・・・この瞳は・・・！この気高い魂は・・・ユーノ・スクライアと同じ・・・一体何なのだ！？）」

そんな事を考えている隙に満身創痍になりながらも立ち上がった一護と銀時がカトゥーンに向かって来た。

「「はあああああああ！！！！」」

しかしそれをカトゥーンは高速の薙刀の斬撃により二人の進軍を回避、二人は攻撃を受けた瞬間切り傷から出血する。

「「くっは・・・！」」

地面に叩きつけられ、土煙が上がるとカトゥーンは嘗てないほどの怒りを赤裸々に言葉で表現する。

「要らない！この常世に、この私に、絆などいらぬわ！！！貴様ら如きか細き火など、私が必ず・・・・・・掻き消してくれる！」

銀時はそんなカトゥーンの言葉を聞き流し、地に這いつくばりなが

ら前方に転がっているユーノの刀である逆刃刀の方へと必死で手を伸ばす。

と、その直後銀時の背後に薙刀を大きく振りかざした形相のカトゥーンが現れ、銀時は思わず振り返る。

「！」

「その忌まわしき魂と身体、引き裂いてな」

「銀さん！」

新八は今まさに絶体絶命のピンチに陥っている銀時の目の当たりに、他の全員もまたそんな銀時の光景を凝視してしまう。

そして、カトゥーンは硬直してしまった銀時の頭めがけて渾身の力で薙刀の一刀を振り下すのであった。

「ぬおおお

通路を駆け抜けていた二人は駆動路へと続くエレベーターを発見し、一度地面に降り立った。

「なのは。あそこのエレベーターから、多分駆動路に向える。」

「うん。何だか、こう言うシチュエーションって・・・懐かしいね。」

ジュエルシード事件の時の状況を思い出し、なのはが何気なくそう言うとフェイトも思わずはにかんだ表情となる。

「そうだね。だけど、今は時間がない。はやてとクロノに負担がかかってる。それに、ユーノや銀さん達にも。」

「うん。早く合流して、ユーノ君を助けないと・・・！」

「行こう、なのは。」

フェイトはなのはと共に駆動路に向かって走り出そうとすると、唐突になのはがフェイトを呼び止めた。

「・・・フェイトちゃん・・・」

「？」

フェイトが振り返り、なのはを見据えるとなのはは一度レイジングハートを適当な場所に乗せ、徐にフェイトの方に歩き出すと彼女は優しく包み込むようにフェイトの手を握る。

「え・・・」

一瞬頬を赤く染め困惑するフェイト。

なのははフェイトに対してこれまで自分を支えてくれたことに深い感謝の意を表してこう言う。

「私・・・・・その・・・いつも誰かに支えられてるって、いつの間にか忘れてて・・・みんなが私の事支えてくれるから・・・私は曲がらず真っ直ぐ歩いて行ける・・・」

「なのは・・・」

「いつも支えてくれてありがとう・・・フェイトちゃん。」

なのはは飛び切りの笑顔でフェイトにそう言うと、フェイトはそんななのはの言葉が嬉しくてたまらず、思わず涙ぐんでしまうがそれ以上の笑顔をなのはに見せて言葉を返す。

「・・・ううん。こっちこそ、いつも支えてくれてありがとう。」

「えへ♪」

二人は今改めて友情の再確認を行い、今まで紡いできた絆をより強固なものへと発展させると、覚悟を決めてプリズムシードの暴走を食い止めるべく杖を携え駆動路へと向かった。

エレベータに乗って駆動路に到着した二人。

するとそこで待ち構えていたものの姿に二人は驚愕する。

「「！」」

駆動路の方で待ち構えていたのはテトラカトゥーンのナルトが最後の悪あがきの為に残して行った有象無象の漫画キャラの軍勢だった。

なのはとフェイトは眼前の漫画キャラを見据えながら奥の方にある巨大駆動路の動力源に組み込まれた四つのプリズムシードを確認する。

「あの駆動路とプリズムシードが一緒に・・・」

「だけどそう簡単には通してくれそうにないね・・・」

「大丈夫。きっと二人なら、何とかなる」

「そうだね。じゃあ、行きますか！」

二人は杖を構えると、目の前の漫画キャラを一掃するべくカートリッジをロードしようとした。

と、その時だった。

〈Ｖｉｏｌｅｔ　ｂａｒｒｅｌ〉

唐突になのはとフェイトの後ろから飛んできた紫色の魔力弾が漫画キャラ数体に着弾し、漫画キャラは爆発を伴って紙切れとなった。

「「！？」」

予想だにしなかった状況に思わず目を見開く二人。

すると、二人の後ろから人影の様なものが前に飛んでくる。

「その役割は、僕が受け持つよ。お二人さん。」

二人の目の前に現れたのは、デバイスと思わしき銃を握りしめた重厚な紫を基調とする鎧に身を包んだ謎の戦士だった。

声色から年下だと判断したなのはとフェイト唖然とした表情でその戦士に質問した。

「え・・・君は・・・」

「誰？」

「ただの通りすがりの通行人。さ、ぼやっとしてないでさっさと駆動路の封印に行きなって。」

「いや、だけど君は・・・！」

「安心しなって。こう見えて僕強いから。戦おうよ・・・一緒にみんなと。」

「「・・・・・・」」

見ず知らずの他人にそのような事を言われ、どう返事をしていいか分からなくなるなのはとフェイト。

すると紫の戦士は二人の方へと振り返り、二人に向かって次のように言う。

「僕がこいつらの相手をしていれば、その隙に二人は駆動路の方に集中できる。急ぎなって。急いで封印すれば、カトゥーンのところに向えるでしょ？」

「「！」」

「恐らく何人束になってもあの漫画の支配者であるカトゥーンを倒すことは難しいだろう・・・でも決して歯が立たない訳じゃない。カトゥーンが何故“この次元空間と言う人から隔絶した場所”に城を築いたか分かります？そう・・・――ここはどの漫画キャラのための城でも、世界でもない。あの男が、人から拒絶されることを恐れるあまり・・・絆から逃げるために造ったあの男の為だけの楽園・・・自分だけの世界なんだ。カトゥーンは何よりも人の絆を憎み恐れている。幼い頃、親にも誰からも見てもらえず友達のいなかった男の哀れなる悪あがき・・・だからその絆の力があれば、あの男を・・・あらゆる漫画の力を手にし、無敵とも言えるカトゥーンの力にも決して負けはしない。駆動路の封印に向かうんだ、早く。」

「その為に・・・見ず知らずの人を囮にしろと？」

「そんなの・・・私達には・・・！」

と、なのはが口にしようとした直後、紫の戦士はこう呟いた。

「“逃げた先に自由も何もありはしない”」

「え」

「“檻の中で戦わなきゃ、檻を蹴破らなきゃ、本当の自由も欲しい

ものも手に入りはしない”。だから戦わせてよ。」

「君は・・・」

まるでユーノ・スクライアが自分たちに諭しかけるようなその言葉にフェイトは思わず声を漏らす。

そして、なのはとフェイトは顔を居合わせ紫の戦士の言葉を聞き入れると、首を縦に振って返事を返した。

「・・・分かった。ありがとう。何処の誰だかは分からない・・・だけど・・・凄く優しくて暖かい人・・・」

「じゃあ、お願いするね。」

「行こう、フェイトちゃん!」

「うん」

二人は紫の戦士に頭を下げ、その場を任せると急いで駆動路の封印処理へと向かった。

紫の戦士はそんな二人を見送ると、仮面の下でこんな言葉を呟いた。

「・・・本当に、あの二人は仲良しだよな・・・昔も今も・・・」

そして、握りしめていた銃型のデバイスにカートリッジを装填し、紫色のミッド式魔法陣を展開すると、漫画キャラに銃口を見せエネルギーをチャージする。

「まぁ、あの人達に死んでもらっちゃこっちが困るんだよね。未来の為にも――――――」

〈Ｓｎｉｐｅ　ｓｈｏｔ〉

紫の戦士は銃口から強力な紫色の弾丸を発射し、眼前の大型漫画キャラを一体撃ち抜いた。

紫の戦士が漫画キャラの相手をしている間になのはとフェイトは駆動路の方へと到着し、駆動路の中のプリズムシードをに杖を向けると、カートリッジをロードし封印作業を開始した。

〈〈Ｓｅａｌｉｎｇ　ｓｈｏｏｔ〉〉

二人は魔法陣を展開し、全身全霊の魔力を注ぎ込んだ封印砲を駆動路の中のプリズムシードに発射する。

「「シーリング・・・・・シュート！！」」

果たして、封印は間に合うのか！？

◇

〈銀時Ｓｉｄｅ〉

今、正に銀時は絶体絶命の窮地に立たされていた。

硬直した銀時目掛けて怒り心頭のカトゥーンが渾身の力で薙刀の一刀を振り下してきた。

「ぬおおおおおおおおおおおおおお！！！！！！！！」

「銀さん！！」

思わず声を荒げる新八。

と、その瞬間土煙の中から一個の苦無がカトゥーンの右腕へと突き刺さり、カトゥーンは思わずその方向へと目を向けた。

「！！」

すると直後に煙の中から現れたのは月山の鞘を尽き立てたユーノであった。

「はあああああ！！！！！」

ユーノは斎藤一の牙突並みの突進力でカトゥーンに向かって行き、カトゥーンはそんなユーノを迎え撃つ。

「貴様！！！」

両者の攻撃がほぼ同時に仕掛けられ、舞い上がった土煙が晴れると全員の目に映ってくるのは鞘であるにもかかわらず肩を貫かれ血を吹き出すカトゥーンと、急所を外したが脇腹に一撃を受けたユーノ。

「ぐっへ・・・！」

思わず脇腹を押さえて血を吐き出すユーノ。

「つらあああああああああ！！！」

カトゥーンは身体共にそろそろ限界に近づこうとしている中で、目の前のユーノを完全に葬り去ろうと躍起になっており、薙刀を大きく振りかぶってから豪快な一振りを仕掛ける。

ユーノはその一振りを高く飛び上がって回避し、刀身の折れた月山片手に自分自身の心に言い聞かせる。

「（繋ぎ止めろ・・・・・・魂を！手繰り寄せろ・・・・・・生を！しがみ付け・・・縋り付け・・・噛み付け・・・巻きつけ！どんなになっても――――――）」

ユーノは一瞬の隙を窺うと、その瞬間カトゥーンに折れた切っ先の月山を突き立て刺突を繰り出した。

「てあああああああああああ！！！！！！」

だがカトゥーンはその刺突を左手で簡単に封じると同時に刀身を破壊する。

打つ手のなくなったユーノに今度こそ止めの一撃を加えようとする。

「終わり――――――！？」

と、カトゥーンがユーノを見た瞬間彼の右手に握られていたのは咄嗟に銀時が投げつけた逆刃刀・真打であった。

銀時はユーノに向かって大声で叫ぶ。

「行けえ！！！！！！！ユーノ！！！！！！！！！！」

「ほおおおおおおおおおお！！！！！」

ユーノはその手に握られた逆刃刀の一撃をカトゥーンの顔面へと思い切りたたきつけた。

そしてまた自分自身に言い聞かせた。

「（守り抜け！！！！！！）」

◇

〈はやて・クロノＳｉｄｅ〉

一方、エントランスホール内では機動六課部隊長八神はやてとユニゾンデバイス、リィンフォース？、そして合流したクロノ・ハラオウンがディストーションシールドを展開し、次元震の急激な進行を抑え込もうとしていた。

二人は険しい表情を浮かべながら体にかかる負担に耐えていた。

「く・・・・・・」

〈なかなかに・・・キツイです・・・！〉

「大丈夫か・・・」

「それはそっちもなんちゃうの、クロノくん・・・」

「まぁな・・・・・」

クロノはそう答えると、モニター画面の中で駆動路のプリズムシード封印に従事するなのは達を見て、徐に呟く。

「駆動の方も直封印される・・・あとはユーノか・・・・・・」

「ユーノくん・・・頼むから勝ってくれな・・・・・・・」

はやて達は切実にユーノの勝利を祈るばかりであった。

◇

〈銀時Ｓｉｄｅ〉

白夜叉こと、坂田銀時はユーノ・スクライアに自分たちにとって、最後の希望ともなりうる一本の刀を投げつけ、大声でユーノを刺激する。

「行けえええ!!!ユーノ!!!!!!!!!!!」

カトゥーンは目の前でその刀を構えるユーノを見据え、一瞬硬直する。

「！」

そして、全身全霊の力を込めてユーノは右手に持った友より託された不殺の魂が宿った刀、逆刃刀・真打を大きく振るう。

「ほおおおおおおおおおおお!!!!!」

ユーノが振るった逆刃刀の刀身がカトゥーンの左頬に勢いよく食い込み、その衝撃はカトゥーンの身体を大きく逸らすと同時に彼が手にしていた薙刀を弾け飛ばした。

「ぶっふ・・・！」

変形したカトゥーンの顔面と鼻から噴き出る鼻血がユーノの顔へと付着し、その光景を目の当たりにした銀時や一護達全員は思わず目を凝らし、不二子もまた大層驚いた表情を浮かべ、直後彼女は何故か嬉々とした表情となる。

「ぐ・・・ほおおお！！！！」

カトゥーンは鼻から出た血を拭い、ユーノを見据えると右拳に炎を灯して勢いよく殴りにかかろうとした。

「はあああああああああああ！！！」

だがそれよりも早くユーノの目にも止まらぬ斬撃がカトゥーンの顔面に怒涛のように叩きこまれ、カトゥーンはそれを為すがままにさられていく。

「げっほ・・・！」

ユーノは斬撃をする最中、また自分自身に対して言い聞かせる。

「（反撃する暇を与えるな！息さえさせるな！もうチャンスは二度とない！これで決めなきゃ負ける！終わりにするんだ！）」

残りの体力、気力も共に限界値を超えようとしていたユーノが相談

すると、彼は自分の気を一流の剣客だけが発することを許された裂帛の気合い、剣気と呼ばれるものへと変化させ、ドスの利いた声を上げてカトゥーンに攻撃を加え続ける。

「おおおおおおおおおおおお！！！！！！！！」

そして、かなりのダメージを負わせカトゥーンを満身創痍の状態にまで追い詰めたユーノはここで更に飛び上がり、その状態から飛天御剣流の連撃を叩きこむ。

「飛天御剣流・・・――――」

先ずは頭上から叩きむと同時に刀身で顎を持ち上げる小技。

「龍槌！昇閃！！」

思わずユーノの攻撃に目にし、驚愕の表情を浮かべる新八。

「二連撃！」

「いや、この機を逃すはずはない！まだ、続く！」

茶渡がそう言うと、予想通りユーノはそこから更に派生技を兼ねた三つの攻撃をカトゥーンの身体に叩き込む。

「おおおッ！！」

体を捻らせ、カトゥーンの首筋に一発。

「龍巻閃・『凩』！！！」

次はそこから二発目の攻撃。

「『旋』！！！！！」

最後はもう一度空中へと飛び上がり体を回転させながら叩きこむ三撃目。

「『嵐』！！！！！！」

「五連撃！！」

既に自分たちの予想を超え、遥か彼方の先へと佇むユーノの驚異的な潜在能力を目の当たりにし、この場にいる誰しもが息を呑んだ。

そしてユーノは最後の一撃を叩きこむため、刀を両手でしっかりと握りしめた。

「（これで――――――終いだ！！！！！！！！！！）」

ユーノはその状態から神速を最大限に活かし、既にふらふらとなって足元のおぼつかない様子のカトゥーン目掛けて突進・九つの急所に必殺の技を叩きこんだ。

「飛天御剣流　九頭龍閃！！！！！！！」

「がっは！！」

カトゥーンは九頭龍閃をその身に受けると、勢いよく後ろの方へと吹き飛ばされ、やがて彼は壁に激突しその瞬間大量の土煙が上がる。

ユーノは土煙の方へと近づき、カトゥーンが出てくるかどうかを窺う。

すると、晴れてきた土煙の中に映って来たものにユーノは目を見開かせる。

「は！」

「・・・さま・・・き、貴様・・・！！！」

カトゥーンは目を血走らせ、完全に冷静さを欠いた満身創痍の状態から目の前のユーノを殺すために向かって来た。

「でらあああああああ！！！！」

「ユーノ！！！！！！！！！」

しかしカトゥーンの攻撃からユーノを守り抜いたのは、同じく満身創痍の状態で木刀片手にカトゥーンの顔面を殴りつけた坂田銀時であった。

カトゥーンは予想だにしなかった男からの一撃に目と耳を疑った。

「のあああああああああああ！！！！」

「誰がてめぇの思う通りにさせるかよ！！！！！こいつは・・・こいつだけは死んでも俺達が護る！！！！！！！！！」

すると、その銀時の言葉に便乗した一護達総勢２６名が一斉に攻撃

を仕掛けた。

「撃て！！！！！！！！！！」

「「「「「はあああああああああああああ！！！！！」」」」」

「「「「「「「「「「のらあああああああああああああ！！！！！」」」」」」」」」」

「「「「「「「「「「どらあああああああああああああ！！！！！」」」」」」」」」」

カトゥーンは容赦なく仕掛けられたその攻撃をその身に受けると、土煙を上げたままその姿を隠し、ユーノと銀時は全員の元へと下がって来た。

二人は血塗れの状態で荒い息を立てて目の前の煙をじっと見据える。

「は、は、は、は、は、は、は、は」

「は、は、は、は、は、は、は、は」

そうして煙の中から人影が見えてこないことを視認すると、キャロはエリオの身体に掴まりながら思わずつぶやいた

「やった・・・」

キャロが呟くと、他のフォワード陣や隊長達ですらそれぞれこのような口を漏らす。

「ついに・・・」

「やった・・・！」

「カトゥーンを・・・・・・あのカトゥーンをついに倒した！僕達の勝利だよ！！」

「これでこの世界は・・・私達は・・・」

「救われた！！」

全員が嬉々とした表情を浮かべ、歓喜の声を上げて騒ぎ始めると、ユーノはその時煙の中から見えてきた見覚えのある人影を目の当たりにし、目の色を変えて全員に警告した。

「！まだだ！！！！」

その瞬間、カトゥーンは自分が最も気に入っていると同時に最も強い威力を秘めた最後の切り札でもある技を発動した。

「バオウ・ザケルガ！！」

煙の中より現れた金色に輝く巨大な雷の竜が牙を向け、全員はその姿に思わず体を硬直させてしまう。

「！」

そして、竜は真っ直ぐに銀時の元へと飛んでいき、唐突な出来事に頭も体も付いてこれていない銀時だったが、直後銀時を退かしてバオウ・ザケルガの攻撃対象となったのは銀時異常に血を流し誰より

も苦痛に耐えているユーノ・スクライアであった。

「ぐ・・・！！が・・・！！」

ユーノは全身にバオウ・ザケルガの一撃を受けると、声を上げることもままならないまま黒焦げとなり、やがて多量の血を吹き出すとその場に膝をついてしまう。

「ゆ・・・ユーノ！！！」

「「「

ルキアほどではないが傍観していた不二子もこれには少々呆れてしまうほどだ。

カトゥーンは最早いつもの人格を完全に自分で壊しながらも血塗れの顔で驚愕の表所を浮かべる一護達と銀時の傍らで顔を沈めた状態のノックダウン寸前のユーノに声高に言う。

「絆の光などとは程遠い！吹けば一瞬で消えてしまう脆弱な蝋燭のような光！それが君たちさ！！大人しく死んだような目で我が新世界の礎としてその一片を成せばよかったものを・・・まさか、一度は我らに消された残り火から飛び火をもらおうとは・・・！」

カトゥーンの言葉を聞くと、ユーノは人間の限界を超えた傷を受けているにも拘らず立ち上がり始め、眼前のカトゥーンを見据えた。

「火種は消さねばならないね・・・その・・・鈍く光る光を！」

カトゥーンにとっての絆の光の火種・・・・・・それは紛れもなくユーノであった。

銀時は舌打ちをすると、木刀を握りしめて構えを取った。

「ち！」

と、その時銀時に向かって目の前のユーノが手を出してきた。

「待ってください。」

「！ユーノ・・・」

「・・・もういい・・・もう僕だけで十分だ・・・その光は取っておいて下さい銀さん。一護さん。みんな。明日を生きる為に。」

ユーノの言葉を聞き、声を詰まらせる一同。

するとカトゥーンはそんなユーノの言葉を聞いてこう言い返す。

「“武士道”という奴かな?殊勝な事だよ・・・己の一人の命を捧げて異世界や君の仲間の命を庇い免罪を乞おうとでも・・・・・・ふん、無駄だよ。君が終われば次は君の仲間たちさ。」

しかし、ユーノはそれを聞いても尚決して失うことのない光を瞳に宿し、カトゥーンに言う。

「消させはしないさ。もう誰も――――――」

「?」

ユーノは重い足取りで一旦銀時達の前から離れていくと、別な場所に移動しながら更に言葉を並べた。

「たとえか細い蝋燭の火でも・・・集まれば闇も照らせる・・・たとえ火が消されても・・・一本でも火が残っていれば・・・また火を灯せる・・・!お前には・・・・・・僕や銀さん・・・一護さんやなのは達の火は消せないよ・・・」

ユーノがそう言うと、銀時と一護もそれに便乗する。

「そうさ・・・何度吹き消そうと無駄な話だ。俺達には取って置きの火種があるんだ。絶対に消えねぇ・・・火種がついてんだ。」

「仲間の絆がある限り、ユーノや俺達は何度消されても、何度でも燃え上がる！」

と、一護がそう言って全員がその言葉に首を縦に振るった・・・その時だった。

「！」

ユーノの逆刃刀・真打が突然光はじめ、カトゥーンはその摩訶不思議な現象に目を凝らした。

「な・・・何だ・・・何だその・・・・・・光は！？」

光は徐々に大きさを増していき、大きくなった光はユーノの背後にまるで太陽のように彼の背後を照らし、カトゥーンはその時目視で光の先に見えてきたユーノの肩に手を乗せる彼がこれまで紡いできた絆の仲間すべてが映っているのを確認し、思わず目を疑った。

「・・・お前なんぞに、僕達の絆は消せはしない・・・！」

「これは・・・！この光は・・・まさか・・・！！」

銀時や一護達も思わず目を疑ってしまうほどの摩訶不思議な光景。

よく見てみると、その中にユーノを庇って死んでいった明神弥彦と逆刃刀を通じてユーノの心を理解した弥彦の憧れの剣客にして元々の所有者、緋村剣心の姿も映っていた。

「・・・お前なんぞに、この光は・・・・・・消せはしない！」

ユーノがそう言うと、背後を照らしていた絆の光は目の前のカトゥーンの身体をまるで焼き尽くすように光を浴びせ、光を浴びてしまったカトゥーンは全身の皮膚が火傷をお越し、やがて完全に乾くと干からびて体組織が粉々となり始めていった。

「き、絆！！！！！！！！！！！」

粉々となっていく体組織もそうだが、カトゥーンは全身で絆の光を受け、自分にしかわからない壮絶な苦しみを味わいながら心の中で叫ぶ。

「（血が・・・！！肉が・・・！！魂が渇いていく！！！！！）」

それを見た一護と銀時はこの機を逃しまいと動きだし、銀時の全身全霊の刺突がカトゥーンの身体に叩き込まれる。

「ほおおおおおおおおおおおお！！！！」

「ぐあああああああああああ！！！」

身体を大きく逸らしてその攻撃を受けるカトゥーン。

その直後、吹き飛んだカトゥーンの後ろから一護が同じく全身全霊の月牙天衝をお見舞いする。

「月牙天衝！！！！！！！！！！」

「がああああああああああああ！！！！！」

カトゥーンは月牙天衝を受け、ユーノの元へと飛んでいく。

そして最後にその場にいる一護達と駆動路のなのは、フェイト、エントランスホールのはやて、クロノ、リィンはユーノに向かって同じことを口にした。

「「「

放り出され、綺麗な放物線を描いて地面に叩きつけられると、朦朧とする意識の中で嘗ての記憶を思い返し始めた。

◇

〈回想シーン〉

昔、あるところに一人の少年がいました。

少年の名前は勅使河原直哉（てしがわらなおや）。

後にこの少年は自分の事をカトゥーンと称するようになり、あの歴史に残る大次元を引き起こすこととなるとはこの時ばかりは思ってもいなかっただろう。

ある日の少年が通う小学校の休み時間。

少年の周りの男女たちが集団を作って談笑している光景が少年の目に映ってくる。

「なぁなぁ、この間の世界野球の試合見たか？」

「ああ！俺めっちゃ感動しちまったぜ！！ラルフのあのホームラン！」

「へへ。俺なんかパパと一緒にドームで見て来たもんね！」

「え、マジ！！いいな！！今度俺も連れてってくれよ！！」

「でさ、そいつがマジでさ・・・！」

「うっそ！絶対ありえないって！！」

「あ～あ、どっかにいい男の子いないかな～～～」

これはどの世界にもごくごく当たり前に行われている光景だとは思うが、少年勅使河原だけは一人寂しく漫画の本を開いて誰とも話さないでいた。

「・・・・・・」

勅使河原少年の異様な光景を目にしたクラスの児童は冷ややかな目で聞こえない程度の声で言う。

「おい、あいつ・・・」

「ああ。また漫画ばっか読んでるぜ。」

「学校に来てるのに相も変わらず漫画なんて読みやがって・・・友達居ないんだぜきっと。」

「万が一友達がいたとしても、そりゃ碌な奴じゃないだろうな。」

「はは！言えてる言えてる！」

少年はそんな自分を陰で罵るクラスの反応など、少しは気に留めながらも寂しげな表情を隠すように漫画の方に目を向けた。

――――――・・・

学校から帰っても、少年は一人だった。

少年が学校に返ってくると、玄関先に一枚の紙が貼られていた。

自分の事しか考えていない母親からの言伝だった。

「『パチンコに行ってくるから、ご飯は適当に食べな。』」

「・・・――」

少年は愛情のない生活にもう慣れてはいたが、それでは少しぐらい愛情を向けて欲しいという気持ちはあった。

しかし少年の切なる願いは決してかなうはずもなく、少年はただ一人だけの夕食を戴く。

誰もいない部屋で食べる夕食に近頃は本当に慣れてしまっていた少年は、コーンフレークをつまんだ後、今日学校で周りが言っていたことを思い出した。

『学校に来てるのに相も変わらず漫画なんて読みやがって・・・友達居ないんだぜきっと。』

『万が一友達がいたとしても、そりゃ碌な奴じゃないだろうな。』

少年はその時、頭の中で友達とはどういうものなのかを真剣に考えた。

「友達・・・・・友達って・・・・・何だろう――――――」

―――――・・・

次の日、学校の国語の時間で少年の担任の先生が漢字の説明をしていた。

取り上げた字は『絆』であった。

「『絆』と言う字は、このように糸へんに半と書くわけですが、その語源は“家畜を逃げないように繋ぎとめておく綱”から来ているようです。動物が自分のもとから離れていかないように繋ぎとめることから、人と人とが離れ離れにならない、断ち切ることができないような結びつきを表す言葉になったと言われています。しかし、古文上の意味では同じ絆でも、現在のような良い意味としてではなく、要らないもの・未練になるものと言う意味で使われていました。」

先生の言葉を何気なく頬をついて聞いていた少年は思わず絆と言う言葉を呟いた。

「絆・・・・・・か・・・・・・・」

◇

そんな嘗ての記憶を鮮明に甦らせた現広域次元犯罪者、漫画の支配者カトゥーン。

カトゥーンはひび割れた漫画の皮膚の中から本当の皮膚を見せ、天井を仰ぎ見ながらあの時ユーノの背中に見えた絆の光に嫌悪感を覚えながら弱々しい声で呟いた。

「・・・我が天敵よ・・・まさかこんな形で君と言う存在を黙視することになるとは・・・人と人とを結ぶ糸の分際で・・・このカトゥーンに盾つきおって・・・全く・・・何て忌々しいのだ・・・・・・だが・・・・・・なんと美しい姿よ・・・・・・」

当初こそは嫌悪感で満ちていたカトゥーンだったが、最後はそんな自分が忌み嫌う絆をあろうことか褒め称えていた。

するとその時、今までの戦いの行方を傍観していた峰不二子がカトゥーンの元へと歩み寄って来、こんなことを言って来た。

「人とは哀れなものね・・・・・自分にはないものほど欲しくなる・・・・・届かないものほど手を伸ばす・・・・・・カトゥーンにないもの、それは“絆の光”・・・・・カトゥーン・・・あなたは“人の絆の所為で渇いていた”んじゃない・・・・・・あなたは・・・・・・“人の絆がないことに渇いていた”のよ・・・・・・」

「・・・・・・」

「誰よりも疎み、憎みながらも、誰よりも羨み、焦がれていたのよ・・・・・私達が決して手に入れることの出来ない絆に・・・・・・冷たい社会ではなく、暖かい人の絆が溢れかえる場所で生きることに・・・・・決して消えない、その絆の光に・・・故にその絆を奪った人間たちを、己のいる架空の世界・・・この漫画と言う常世の国に引きずり込もうとした。そして、それでも尚消えぬ絆を憎み・・・・・愛したかったのよ・・・・・・」

意味深長な不二子の言葉が全員の耳にしっかりと入り、しばしの沈黙が流れると間近で聞いていたカトゥーンは仰向けの状態から不敵

な笑みを浮かべて言う。

「・・・ふふふ。ふふふふふふふふ・・・

ています。〉

「何故・・・・・・絆は“僕”を拒む・・・・・・」

〈絆・・・・・・か・・・・・・〉

「何故・・・・・・こんなにも焦がれているのに・・・・・・僕は渇いていく・・・・・・」

カトゥーンの言葉遣いが昔と同じに戻る。

弱り切った自分の心と体を守るために自分の体を覆っていた漫画の皮膚は完全に砕け散り、正体を露わにした実に弱々しいカトゥーンの身体。

カトゥーンは意識が遠のいていく中でもずっと手を伸ばし続ける。

「見えない・・・・・・もう何も・・・・・・」

一瞬意識を失ったカトゥーンは自らの心の闇の中に入り込むと、誰もいない道も分からないその世界を渇いた相貌で見詰め、徐に歩き出す。

「（いかなる光も届かぬ真の孤独の闇・・・・・・結局・・・・・僕は何処までも独り・・・・・独り他とは違う道を行き、漫画にのみ現を見出すのがカトゥーンの定めか――――――）」

そうして、全てを諦めかけようとしたカトゥーン。

しかしその時、暗黒のその世界に一筋の光が背後から差し込み、カ

トゥーンは思わずその光の方に振り返り目を見開いた。

「（これは・・・――――この光は・・・・――――！）」

光に包まれ、そこで漸く意識を取り戻したカトゥーンが重い瞼を開けると、自分の目の前に映ってきたのは柔かい表情を浮かべ自分を見つめるユーノ・スクライアの顔であった。

「ゆ・・・・・・ユーノ・スクアイア・・・・・・」

教えて、ユーノ先生！

ユ「今日はカトゥーンについてだ♪」

ユ「広域次元犯罪者カトゥーンは漫画キャラの実体化を始め、さまざまな方面にわたり高い知識と技術を持っている。そして何より、彼自身もまた様々な漫画の世界の力を宿しているんだ♪」

ユ「実際・・・あんな奴相手に一人じゃどうにもならなかったよ・・・袋叩きでさえ厳しかった・・・」

カ「ふふふ。よもや君が私に打ち勝つとはね・・・大した男だよ。」

ユ「そっちこそ、漫画ばっかり読んでるくせに随分とやるじゃないか。」

カ「生憎、私は漫画ばかり読んでいるわけでもないのだよ。こう見えて、学校の成績は常にトップだったからね。」

ユ「（ひょっとしてこいつが友達出来なかったのは実はそっちの方も原因あったんじゃないか・・・・・・）」

魔導師図鑑ハイパー！

駆動路のなのは、フェイトは突如現れた謎の仮面の戦士に関して次のようなことを言っていた。

な「ねぇ。あの紫の仮面の人・・・何処かで見たことない？」

フェ「うん。あのデザイン・・・なんか鬼太郎さん達の甲冑モードにそっくりだよね。」

な「声を聞く限り私達よりも年下したってきはしたけど・・・何が目的なんだろう？」

フェ「それにどうしてだろう・・・」

フェイトはそう言いながら紫の仮面の戦士が軽快なリズムに乗りながら楽しそうに漫画キャラを一掃する姿に思わず言う。

紫「ははは♪それ！！！」

フェ「何でこの状況で楽しそうなんだろう・・・」

な「そ・・・そうだね・・・」

謎が深まるなのはとフェイトであった。

次回予告

いつもそうだな・・・・・・

ほら吹きで無鉄砲で・・・・・・・

傲慢だった・・・・・・・

ごめんね・・・・・・・・なのは・・・・・・

カ「次回『帰ってきたときは、ただいまを言おう』」

帰ってきたときは、ただいまを言おう

これまでの、ユーノ・スクライア外伝

仲間の絆を、己の魂を信じ抜いたユーノ・スクライアはついに、漫画の支配者カトゥーンを撃破する。

カトゥーンは倒されて尚、己が真に欲する人の絆に縋り手を伸ばす。

〈友達・・・・・・友達って・・・・・・何だろう――――――〉

カ「何故・・・・・・絆は私に微笑みかけない・・・何故絆は私を嫌う・・・」

〈『絆』と言う字は、こうして人と人とが離れ離れにならない、断ち切ることができないような結びつきを表す言葉になったと言われています。〉

カ「何故・・・・・・絆は“僕”を拒む・・・・・・」

〈絆・・・・・・か・・・・・・〉

カ「何故・・・・・・こんなにも焦がれているのに・・・・・・僕は渇いていく・・・・・・」

カ「見えない・・・・・・もう何も・・・・・・」

カ「（いかなる光も届かぬ真の闇・・・・・・結局・・・・・・僕は何処までも独り・・・・・・独り他とは違う道を行き、漫画にのみ現を見出すのがカトゥーンの定めか――――――！）」

カ「（これは・・・――――この光は・・・――――！）」

カ「ゆ・・・・・・ユーノ・スクアイア・・・・・・」

〈ユーノＳｉｄｅ〉

カトゥーンは目の前に映ってきた意外な人物、ユーノ・スクアイアを目の当たりにしながら今自分が彼の膝の上で寝ていることに気づいた。

銀時や一護達はそんなユーノとカトゥーンを静かに見守りながら、ユーノの第一声を待った。

そして、疲れ切ったカトゥーンに向かってユーノは何時もの柔らかな表情で言う。

「・・・・・やっと、本音を口にしてくれた。」

「え」

「ずっと、その声を聞きたかった。戦いの間際もその言葉を。言っただろ。“孤独な人間なんてこの世の何処にもいはしない”って。」

「！」

ユーノの言葉を耳に、カトゥーンは思わず目を見開き銀時達はその様子を黙って見守った。

「僕、内心気づいていたんだ。どんなにたくさんの漫画キャラを操ったって、どんなに酷いことしたって、君が新世界の神なんて大層なものなんかじゃないってことくらい。君はただ、こうしたかったんだよね？こうして誰かと一緒にいて話をしたがってた普通の寂しがり屋な男の子なんだよね？ただそれだけなのに・・・なのに、こんなバカげた事までしでかして・・・みんなを敵に回して・・・／／／」

ユーノはそう口にしながら、瞳から涙をカトゥーンの顔へとこぼし、涙ながらにこう言った。

「馬鹿な奴だよ・・・／／／ホントに・・・馬鹿な奴・・・だよ・・・／／／」

「・・・・ユーノ・スクライア・・・・・・／／／」

カトゥーンは恐らく一番自分を憎み、殺したいと思っていると確信していた筈のユーノがまさか最後の最後で自分に慈悲をかけ涙を流す事非常に驚いたのと同時に、初めて自分の秘められた寂しさ、“孤独”と言う気持ちを共有してくれたことに嬉しさのあまり涙が溢れ返ってきた。

ユーノはその後も涙を流しながらカトゥーンに対して更に言葉を続ける。

「寂しいなら、一声どうして“寂しい”って言わなかったんだ？も

っと早くに言っていれば、いくらでもこんな痛いやり方じゃなくても、君を助け出す方法があった筈だよ・・・」

カトゥーンは最後の言葉を聞き入れると、自分の腕で目を隠し、滝のように流れ落ちてくる涙を拭いながら目の前のユーノや銀時達に謝罪の言葉を吐いた。

「う・・・／／／ご・・・・・ごめん・・・・なさい・・・・／／／僕は・・・／／／ホントに・・・君やみんなに・・・・・・酷いことを・・・／／／／／／」

すると、聞いていたユーノはそんなカトゥーンに対して優しい表情で言う。

「いいさ。寂しいのは、誰だって嫌だからね。僕だって、寂しいのは嫌いだから」

カトゥーンはそんなユーノの言葉を聞くと、益々涙を流しこれほどまでに心の広いユーノに驚嘆しつつその優しに惹かれていった。

「君は・・・本当に優しいね・・・／／／初めてだよ・・・そんなこと言ってくれたのは・・・君だけだよ・・・ユーノ・・・／／／」

「ふん・・・あいつ・・・」

銀時や一護達全員は周知の事ではあったが、敵であるにもかかわらずこのように慈悲をかけられるユーノの器量に心底感服するばかりであった。

すると、今までの流れを傍らで見てきた漫画キャラの生き残り、峰

不二子は唐突に手を叩くと、全員の注目を一身に浴びてこう言いだした。

「はいはい、御見事♪実に鮮やかなお手前・・・・・とは言い難い形(なり)だけど、恐れ入ったわ。小さき光が集いに集って・・・ついに孤独の鎖を焼き切り、絆を紡いで友達にまでなった。まさか本当にあのカトゥーンを倒しちゃうなんて、お宝もそうだけど、遠くまで来た甲斐はあったわね。久しぶりに面白いものを見せてもらったわ――――――だけどこんなことしたってそこの坊やも果ては世界すら何も変わらないと思うわよ。世界に降りかかる闇はカトゥーンだけじゃない。同じ広域次元犯罪者のジェイル・スカリエッティに、反管理局組織。闇は限りなく濃い。また第二、第三の闇が生まれることでしょうね。その闇を全て払えると思っているのかしら?本当にカトゥーンも世界も変えられると思っているのかしら・・・」

不二子の言葉がユーノ達の胸に深く痛く突き刺さる。

だが、そんな言葉に真っ向から否定したのは銀時だった。

「変わるさ。人が変われば世界も変わる。心が変われば人も変わる。これから機嫌を損ねて、心が曇って浮かないこともあるだろうが、ユーノや俺達、こいつの絆の火は・・・・・もう消えねぇよ。」

「――――――そう。大した自信じゃないの。やっぱり、遠路はるばる来てみて良かったわ。ありがとう、ユーノ・スクライア。ありがとう、坂田銀時。」

不二子はそう言いながら、あらかじめ用意しておいた小型転送システムを起動させてカトゥーンキャッスル内部から姿を消そうとし始め、全員は表情を一変させる。

「おい！お前！！」

声を荒げて不二子を止めようとする銀時に、不二子は振り返り掴みどころのない笑みを浮かべながら最後にこう言った。

「“絆”って言うお宝も悪くはないけど、どっちかって言うと私はお金の方が好きなのよね。こっちの世界にもまだまだ金目のお宝があるなら、私はそっちを優先しちゃうの？ふふ・・・じゃあね、バイビー？」

「待て！！女狐！！！峰不二子！！！！」

銀時の言葉もむなしく、不二子は転送システムを使ってユーノ達の前から忽然と姿を消してしまったのであった。

不二子が消え、長い沈黙が流れたのち、ユーノ達は唐突に大きな揺れを起こし始めた城内の異変を感じとり、体勢を崩してしまいそうになった。

「きゃ！」

「な、なんだ・・・！？」

「！この揺れは・・・！」

すると、カトゥーンは驚愕の表情を浮かべこの場にいる全員に言う。

「いけない・・・城の崩壊が始まった！早く脱出するんだ！」

「な、何!?」

「くそ・・・逃げるぞ!!!」

ユーノはカトゥーンを銀時の背中に乗せると、全員と共にその場から素早く退散し、脱出を開始した。

城の構造すべてを把握しているカトゥーンの指示に従い脱出を急いでいたユーノ達。

すると、そこへタイミングよく駆動路の封印を終えたなのはとフェイトが合流してきた。

「ユーノ君!!!」

「!なのは!フェイトも無事かい!?」

「うん!駆動路の封印は何とかなった。プリズムシードもちゃんとある。ただ・・・私達の代わり囮になった紫の仮面の戦士がどうしても見当たらなくて!」

「紫の仮面・・・!?」

「どういう事ですか、それ!?」

状況が全く理解できていないユーノ達。

なのは達も言葉で上手く表現が出来ないで居ると、更に城の崩壊が進み始め一護はそれに気づくと脱出を促す。

「マズイ！時間がねぇぞ・・・急げ！！」

全員はその言葉を聞くと、全速力で入り組んだ通路の中を駆け抜けていき、エントランスホール内で次元震の進行を抑えていたはやてとクロノも崩壊が進む城で四苦八苦していた。

「きゃああ！！」

「く！！」

すると機動六課で待機していた織姫から直接通信が届く。

『はやてさん！クロノさん！駄目です。もう崩壊が始まってる・・・脱出急いで！』

「し、しかし・・・！」

クロノはそう言いながら次元震の大きさを考え若干のためらいを見せていると、今度は次元航行部隊のリンディからの通信が届く。

『クロノ。大丈夫よ。あなた方が頑張ってくれたおかげで、この規模の次元震なら次元断層も起こらないわ。さぁ、早く脱出を！』

「クロノくん。そう言う事や。脱出、急ごう！」

「クロノ提督！急がないと！」

「・・・ああ。分かった。脱出しよう！」

はやて達三人は機動六課の転送システムで素早く脱出を達成させ、

織姫は通信で今度はユーノ達に聞こえるように脱出を促した。

「あなた！ユーノさん達も急いで！崩壊までもう時間がないよ！」

『分かってる！大丈夫だ、織姫！！今帰るよ！！』

一護は織姫にそう言うと、積極的に前に乗りだし障害となる崩れてきた岩などを切り崩して道を作り、それに便乗してなのはやフェイトも魔力弾を撃っていく。

と、直後駆け抜けていた通路が突如亀裂を生んでしまい、その影響でギンガ・ナカジマが虚数空間へと落下しそうになった。

「きゃああ！！」

「ギンガさん！！」

新八は咄嗟にギンガを助けようと手を伸ばし、ギンガは新八の手をしっかりと握りしめる。

「ギン姉！」

「ギンガさん・・・！！」

新八は険しい表情を浮かべながらギンガの手を力いっぱい握りしめ、絶対に話さないと言う意志を以てギンガの手を掴み続ける。

「新八さん・・・！」

「新八君！！みんな、新八君を手伝うんだ！」

「「「「「はい！」」」」」

近藤の呼びかけで、フォワード陣と数名の大人が新八の身体ごと引張りギンガを無事救出すると、新八とギンガは安堵のため息をついた。

「ふう。危なかった。大丈夫ですか、ギンガさん？」

「はい・・・／／／ありがとうございます！」

ギンガは新八の手を両手で握りしめ、涙を浮かべて深い感謝の念を表した。

銀時はそれを見てほくそ笑んだ後、再び全員に脱出を促す。

「よし、行くぜ！」

全員は転送ポートが用意されているエントランスホールを目指して邁進し、漸く入り口へと続く行きも通ってきた鉄橋へと差し掛かる。

「見ろ！鉄橋だ！あれを通ればもうゴールは近い！」

浦太郎がそう言うと、生存本能が働いた総勢２８人は順に鉄橋の上を渡っていき、２０名近くが渡り切って転送ポートで無事に帰還していくと、鉄橋が崩壊に乗じて崩れ始め、橋そのものが折れようとしてしまい、最後の方に残っていたなのは・フェイト・一護・銀時・そしてカトゥーンは思わず目を見開いた。

「「「「「あ！」」」」」

すると、それに気づいたユーノが後ろに振り返るや否や仕込ませていた万能ツール、手錠を伸ばして折れかかった橋の欄干にひっかけた。

「そりゃ！」

強く手錠を引っ掛け一時的に固定したユーノはなのは達に早く渡ることを促す。

「早く渡って！」

「ありがとうユーノ君！！」

「恩に切るぜ！！」

なのは達は急いで橋を渡り切り、ユーノと共にその場から離れるとあと数メートルと言う距離にまで近づいた転送ポート目掛けて全速力。

だが、直後彼らの床下が隆起し始め、カトゥーンを背に乗せていた銀時がそれに巻き込まれてしまい、全員は銀時とカトゥーンの方へと振り返る。

「「「銀さん！！」」」

「銀さん！カトゥーン！！」

すると、銀時はこのままではマズイと判断し、背中に乗せていたカトゥーンを一護のもとへ放り投げる。

「仕方ねぇ・・・おい、一護！先にこのアホだら連れてけ！」

一護は放り投げたカトゥーンを受け取ると、隆起した床の上で銀時に言う。

「え！けど、それじゃあ銀さんが！」

「俺も必ず追いつく。だから心配すんじゃ・・・――――！？」

と、言おうとした矢先。

銀時の足場が崩壊し、銀時は虚数空間の中へと堕ちそうになった。

「「「「！」」」」

「しまっ！！！」

「銀さん！！」

思わず声を荒げるなのは。

すると、咄嗟にユーノが銀時の元へと向かい、落ちそうになった銀時の手を握りしめてきた。

「「「「あ！」」」」

「ゆ、ユーノ！お前！！」

ユーノは疲労困憊且つもう体力も気力も底をついた状態であるにも

かかわらず、その手に握った銀時を離さない様に力いっぱい握りしめる。

「手を・・・!!離さないでください!!」

「ユーノ君!!」

ユーノの危険な行動を見て、先ほどよりもずっと声を荒げるなのは。

銀時は下に広がる虚数空間を一瞥すると、ユーノに向かっ言う。

「ユーノ!止せ!!お前だって分かってるだろ!!この中に落ちたらどうなるかぐらい!?」

すると、ユーノはそんな銀時に向かってこう言い返した。

「・・・前にも言っただしょ・・・手が届くのに伸ばさなかった時が死ぬほど後悔する・・・僕はそれでもう後悔するのは嫌なんだ・・・!だから、それで後悔なんてしなくても済むように・・・・・・僕自身の魂を裏切らない為にその魂に従って、銀さん・・・あなたのことを助ける。嘗てなのはや一護さんが僕にそうしてくれたように、僕も同じことを目の前で苦しんでいる人にしたい・・・!」

「ユーノ・・・!」

「だから・・・・・・こんなところで死なせてたまるか!!!!!!」

ユーノはそう言うと、全身の力を振り絞って銀時を持ち上げようと手を引っ張り、見ていられなくなったなのはと一護は二人の救出に

向かう。

「ユーノ君！今、助けるから！！」

「待ってろ、ユーノ！フェイト、悪りー。こいつを頼む！」

「りょ、了解です！」

フェイトは一護からの指示を受けると、カトゥーンを連れて先に転送ポートへと向かい、機動六課へと帰還する。

なのはと一護は崩壊が起こりいたるところ複雑に立て込んだ岩場を退けながらユーノと銀時の元へと急ぐ。

その間にもユーノは必死で銀時を引っ張り上げようとしていた。

「ぐ・・・！もうちょっと・・・・・・！！」

銀時はユーノの手をしっかりと握りしめ、手を離さずにいた。

だが、そんなユーノと銀時に不幸が起きた。

なんと、ユーノの足元までが崩壊してしまい、ユーノは体制が取れなくなると重力に従って虚数空間へと引きずり込まれるように落ちていく。

「な！」

「何！！」

ユーノと銀時は信じられないとばかりの表情を浮かべ、漸くのところで二人の元へと追いついたなのはと一護はその光景に目を疑った。

「「は！！」」

「（しまった・・・！！）」

ユーノは抵抗することもできず、魔法行使も霊力行使も封じられた生身の身体を坂田銀時と共に沈めていく。

「「ぐあああああああああああああ！！！！！！！！！！」」

「ユーノ君！！！！！！！！銀さん！！！！！！！！！」

「ユーノ！！！！！！銀さん！！！！！」

なのはと一護は落下していく二人の名を叫びながら必死で手を伸ばそうとするも、手は届くことはなくユーノと銀時は真っ逆さまに堕ちていった。

「（な・・・・・・なのは・・・・・・）」

ユーノは堕ちていく過程の中で、意識が朦朧としてくると同時に、脳裏の中にここひと月の間・・・即ち銀時達と会ってから躯した最愛の女性、なのはとの約策を一つ一つ思い出す。

〈ありがとう、なのは。僕は・・・君の言葉で変われそうだ。また一緒に、本当の笑顔で笑いあえる時が来るように、僕は必ず変わってみせる。〉

〈ユーノ君・・・・・うん。応援してるよ・・・――きっと、ユーノ君なら大丈夫。だって、ユーノ君は私の自慢の先生で、一番大切な人だから。〉

〈大丈夫。僕はなのはの側にいる。もう勝手に何処か一人で居なくなったりはしない。だから、僕も同じ気持ちだよ。出来ればなのはと――――――ずっと一緒に居たい。〉

〈・・・ありがとう。ユーノ君・・・〉

〈帰ろう・・・みんなが待っているよ。〉

〈死なないで――――――お願いだから。〉

〈――ああ。僕は死なない。〉

記憶を巡りながら、ユーノは瞳に涙を宿して頭上の泣き叫ぶなのはの顔と声を見聞きしながら、自分自身が実に駄目な存在であるかを心底呪った。

「（いつもそうだな・・・・・ほら吹きで無鉄砲で・・・・・・・傲慢だった・・・・・・ごめんね・・・・・・・・なのは・・・・・・・約束・・・・・・破ちゃった・・・・・・・）」

ユーノの涙が一滴重力に逆らって上へと上がり、なのはは堕ちていくユーノに手を伸ばしながらこれでもかとばかりの声を上げた。

「ユーノ君！！！！！！！！！！！」

「駄目だ！！！なのは！！！！」

一護はユーノ達と一緒に堕ちそうになるなのはの身体を必死に抑えつけ、大切な人が自分の元からいなくなる光景をなのはは涙ながらに見送るしかなった。

「い・・・や・・・・・・・いや・・・・・・・」

「く！！」

一護もまたかけがえのない愛弟子の無残な姿を込み上げてくる気持ちを必死に抑える。

そして、なのはは抑えきれなくなった感情が爆発し城全体に響き渡る声で目の前の現実を否定するかのように泣き叫んだ。

「いやあああああああああああああ！！！！！！！！！！！！！！！！！！！！！！」

機動六課前線メンバー総勢２８名のうち、ユーノ・スクライア・・・坂田銀時両名は虚数空間の中へ堕ちていった。

◇

〈機動六課Ｓｉｄｅ〉

ミッドチルダ郊外に位置する機動六課ロングアーチでは、帰還したメンバーの確認を取りつつ次元震の揺れが収まるをじっと堪えていた。

そして、漸く次元震が収まり静けさを取り戻すと戻ってきていた前

線メンバー全員は安堵の表情を浮かべた。

「と・・・止まった・・・」

「・・・次元震が収まったのか・・・」

「ああ。そのようだな。」

次元震が収まると、管制室のシャーリー達は次元空間の状態を確認し、詳細なデータをもとにはやて達に報告する。

「カトゥーンキャッスルの崩壊終了。全て虚数空間に吸収されました。」

「次元震停止します。断層発生はありません。」

「了解や。」

はやては一先ず安どのため息をついて、自分の椅子の上に腰かけると、もうじき戻ってくるはずの残りの四人の事を気に懸けた。

すると、転送ポートが光り出し人影が見えてきた。

「！八神部隊長！みなさん！戻ってきました！」

全員が転送ポートの中に注目すると、死神代行黒崎一護が浮かない顔を浮かべた状態で肩に担いだ我らがエースオブエース高町なのはを連れていた。

二人が戻ってくると、ヴィヴィオや織姫達は涙を流し喜んだ。

「なのはママ！！！」

「あなた！！」

「「「「「なのはさん！！一護さん！！」」」」」

全員は涙を浮かべながら雰囲気が異常に暗い二人の元へと駆け寄っていく。

「なのは、一護さん。よかった。全員無事・・・って・・・なのは・・・一護さん・・・どうしてそんなに暗いんですか・・・それにユーノと銀さんはどうしたんですか？姿が見えないようだけど・・・」

と、フェイトがそう言って周りが転送ポートを確認すると二人の後に続いて戻ってくるはずのユーノと銀時が何時まで経っても来ないことに疑問を感じた。

すると、一護の肩から離れなのははその場に膝をつくとレイジングハートを手放し、突然泣き崩れはじめた。

「あああああああああああああああああああ！！！

そんななのはの隣で虚ろな表情をした一護が口を籠らせていると、それを見て勘付いてしまった浦原は徐に質問した。

「！黒崎サン・・・まさか・・・！！」

「・・・・・ああ・・・・・ユーノと銀さんは・・・虚数空間の中に堕ちちまったな――――――」

「な・・・！」

それを聞いた瞬間、新八は全身を硬直させ他のもものもまたショックのあまり全身を凍りつかせ、ヴィヴィオはショックのあまりその場に膝をついて放心状態と化してしまった。

「・・・・・・パパが・・・・・・・パパ・・・・・・・」

「そんな・・・！？」

「うそ・・・だろ！？」

恋次達もあのユーノと銀時が虚数空間に堕ちるものだとは夢にも思わず、未だに事実を火て受け入れられない様子だったが、一護が刀を下ろすと土下座し、声を上げて全員に謝った。

「すまない・・・みんな！俺の力が及ばないばかりに・・・・・・ユーノと銀さんは・・・！！」

「あああああああああああああ！！！！！！！！！！ユーノ君！！！！！！！！！！！！！！ああああああああああああああ！！！

！！」

泣き叫ぶエースオブエースに、声を震わせて謝る伝説の死神代行。

そんな二人の姿を目の当たりにし、前線メンバーは返す言葉見つからず口を籠らせてしまう。

そうしてしばしの沈黙が流れた後、総悟がクロノに尋ねる。

「・・・助ける方法ないのか！？」

総悟の痛い言葉を聞くと、クロノは険しい表情を浮かべて残酷な科白を吐く。

「・・・残念ながら、その方法は解明されていません！」

「万事屋・・・！」

「あの野郎・・・まさか・・・」

すると、神楽は震え上がる声で全員に向かって声を荒げる。

「銀ちゃんとユーノは帰ってくるネ！絶対にどんなことがあっても！！」

「神楽ちゃん！でも！！」

「私達が二人を信じないでどうするネ、新八！！絶対戻ってくる！」

新八は神楽の瞳に宿った今にも溢れ出そうな涙に思わず表情を強張

らせ、複雑な想いで話を聞いていたはやて達大人はどう返していいか分からないでいた。

「・・・くっ！」

一護は床に悔し涙を零しながら、ユーノを守りきれなかったこと、自分の力不足だったことを酷く恨み、自分の拳を叩きつける。

「チクショー！！俺は結局何をしてきたんだよ！！！！！俺は・・・・・俺は！！！！！！！！ああああああああああああ！！！！！！！！」

「あなた・・・／／／」

「一護・・・」

「ユーノ！！！！！！！！

そうやって、この日は誰もが二人の男のためにこれでもかと涙を流し、あとで事実を聞かされたカトゥーンもまた自責の念を感じながら二人の為に涙を流した――――――

◇

〈新八Ｓｉｄｅ〉

そして、色んなことが終わった。

僕らがこの世界に来て、ユーノさん達と出逢って今日まで、終わってみればなんだかあっという間の日々。

次元震の余波が収まるまでの間、僕らは機動六課で数日を過ごしたが、誰を見てもその表情は浮かなかった。

無理もない――――――僕らもなのはさん達も、大切な人をなくしてしまったのだから。

あれからなのはさんは、人生に絶望した廃人のような状態まで追い詰められ、自室で塞ぎ込んだまま碌に食事にも手を付けない有様だ。

ヴィヴィオちゃんが必死に元気を出してもらおうと躍起になる姿は、見ていて実に痛々しい。

捕縛されたカトゥーン本人もまた、深い悲しみに暮れている。

ちなみに、あの時ユーノさんが助けようとした明神弥彦の連れのポケモン、ピカチュウとニャースはギンガさん達が無事に保護し、カ

トゥーンの力を以てして元の世界に戻された。

ただ戻ってきていないのは――――――銀さんとユーノさんだけ。

だけど僕らは信じてる。

きっとあの二人は何処かで生きて、必ず僕らの元に帰ってくるって。

そんで、帰ってきたら思いっきり・・・・・ぶん殴ってやんないと気が済まない！！

◇

〈なのはＳｉｄｅ〉

エースオブエースの称号で時空管理局で名を知らない者はいないトップエリート魔導師、高町なのははこの世界へと導き生き甲斐を与えてくれたと同時に何物にも代えることの出来ないたった一人の男・・・ユーノ・スクライアを失い、廃人同然となってしまった。

フェイトは自室に閉じこもったまま、言葉すら発しないなのはの事を心配し、事件から数日たった今日も相変わらず様子を見に来ていた。

「なのは・・・・・・」

フェイトが部屋の扉を開けると、瞳に映ってきたのはユーノを失ったことで元気と呼べるものを喪失し、生きる気力すら失った白い肌をしたなのは。

「――――――――」

なのははフェイトが入ってきたことにも気づかず、黙って口を閉ざしたまま。

フェイトはそんな痛々しい姿のなのはに胸が締め付けられる。

「なのは・・・・・・」

フェイトが横を一瞥すると、そこには昼間はやてが置いて行った一口も手に付けていない昼食が残っていた。

なのはは渇いた相貌と虚ろな目を浮かべながら体育座りをした状態で今でも克明に思い出せるユーノの声、ユーノの顔、そしてユーノの言葉を反芻させながら心の中で呟く。

「（・・・ユーノ君はもういない・・・どこにもいない・・・もう逢えないんだ・・・名前を呼んでも・・・手を伸ばしても・・・空高く飛んでも・・・・・もう逢えない・・・・・・風になびくクリーム色の艶やかな長い髪も・・・・・・吸い込まれるような優しい翡翠の瞳も・・・・・・私を包むんでくれるあたたかくて大きな手も・・・・・・耳に届く心地よい声も・・・・・・・）」

「なのは・・・・・・」

「（いや・・・もう嫌だ・・・・・・もうどうでもいい・・・何も考えたくない・・・何も楽しくない・・・・・・生きてたって仕方ない・・・・・・）」

そんな事をついつい考えてしまう今のなのはの心境を予測してか、

フェイトは言葉を発しようとしないなのはをきつく抱きしめると、瞳に涙を宿し彼女の耳元で呟く。

「なのは・・・・・きっと大丈夫だから。ユーノはきっと、銀さんと一緒に帰ってくるから。だから、諦めないで。生きることに諦めないで・・・！」

フェイトはそう言うと、なのはが時間が許す限りずっとなのはの側についていたのであった。

そんなフェイトとは裏腹に、なのはは虚ろな目を浮かべたまま心の中でまた別ことを思い、ふと呟いた。

「（夢が見つかったとき・・・・・私だけの夢が見つかったとき・・・・・一番喜んでくれたのはユーノ君だった・・・・・いつだって、一番近くにいてくれたのはユーノ君、あなただった・・・・・本当に私は何だろう・・・・・弱くて、情けなくて、なんてみっともない姿なんだろう・・・・・大切な友達やあなたに心配ばかりかけて・・・・・笑って安心させることもできなくて・・・・・ひとりで殻に閉じこもって、逃げてばかりで・・・・・私はどこまで――）」

心底自分の存在そのものを否定し、自分自身を恨み募らせるなのは。

この状態の彼女を見て、誰が言ったエースオブエースと称賛するのであろうか――――――

◇

〈スバルＳｉｄｅ〉

そして、事件から１０日後。

私達機動六課、時空管理局はこの世界を始め、全ての次元世界の平和を守るため命を賭して崩壊から救った英雄、翡翠の魔導死神『ユーノ・スクライア』と次元漂流者『坂田銀時』を永遠に語り継ぐため、ここ機動六課に慰霊碑を作りそのあまりに早過ぎる夭折を誰もが偲んだ。

勿論、認めざる人の方が多かったのだが。

喪主はリンディ・ハラオウン統括官が取り仕切り、ユーノ先生に縁にあるものすべてが参列。

親交のあった上層部局員から無限書庫の司書達。

果ては三提督までさまざまで、こうして見ると本当にユーノ先生は人脈が広かったんだろうって思ってしまう。

そしてその中に、私達機動六課局員や地球の一護さん、次元漂流者である新八君以下五人も交じっている。

なのはさんは・・・・・ヴィヴィオの隣で顔を沈めたままずっとすすり泣いていた。

ヴィヴィオも必死に涙を抑えようとしているけど、やっぱり我慢できずに泣き出してしまった。

私達もこんなことになるとは夢にも思ってもいなかったし、何よりもユーノ先生が死ぬだなんて考えたくもなかった。

そんな事を考えている間に、喪主のリンディ統括官が壇に上って二人に向けた言葉を言い始めた。

「我々のこの次元世界は、常に予想外な事ばかりが降りかかるもの。一言で表現すれば“こんな筈じゃないことばかり”と。そして、そのこんな筈じゃないことの為に私達は誰よりも献身的でそして心優しい青年と、その青年と共に自由の立場から闘ってくれた尊き二人の命を奪ってしまいました。こんな安い言葉を幾ら並べたとこで彼らの命が報われるかどうか定かではありませんが、彼らの行為を決して忘れない為にも・・・ここに彼ら二人の名を永遠に刻むことにします。『ユーノ・スクライア』。『坂田銀時』。彼らの栄誉ある行為と共に、彼らの命が報われることを祈って、黙祷を捧げます。」

リンディがそう言うと、会場となっていた機動六課隊舎中に響き渡る鐘の音。

それを聞いた出席者、一護達現世組や機動六課前線メンバー、スクライア商店一同、そして坂田銀時の関係者五人は目を瞑って黙祷をささげ、なのはは泣きつくヴィヴィオの横で首から下げていた絆の証であるレイジングハート、そして彼の写真が収められたペンダントを握りしめ、心の中でユーノに最後の別れを告げる。

「（さようなら・・・・・ユーノ君・・・・・・・・これで・・・・・本当に・・・・・・さようなら／／／）」

なのははあれからずっと止まることのない涙を一滴、そのペンダントの上に落とす。

と、その時機動六課全体で大きな揺れを観測した。

「！」

「な、何だこの揺れは！？」

突如起こった巨大な揺れを直に肌で感じた参列者全員。

するとその時、機動六課全体から緊急警戒警報が鳴り響く。

『高エネルギー反応！！次元空間より発生！！！』

「な、何やて！？」

「どういう事だよそりゃ！？」

確認が反応されたのは次元空間より確認された高エネルギーであり、その影響でこの機動六課全体が大きく振動しているのである。

その時、コンは辺りを見渡した際、ある驚くべき光景を目の当たりにし声を上げる。

「見ろ！！あれを！！」

全員がコンが差す方角に目を向けると、何の前触れもなく空間の一部が光り出し、その奇怪な光景を目の当たりにした一同は目を疑った。

「！なんだ、あの光は！？」

光は徐々に大きくなっていき、やがてその光が急激に縮小したかと

思えばその空間に亀裂が伴い、割れ始めたのであった。

「な・・・空間が・・・割れやがった!?」

「どういう事だ一体・・・・・・」

一護達死神の面々はこうした状況にはいくつか心当たりがある。

大虚(メノスグランデ)が現世への侵攻の際、或いは虚圏への行き来の時、空間を割るということは至極当然の事であったが、今回の場合はまた状況が違っていた。

何故なら割れた空間から見えてきたのは次元空間なのだから。

と、その時シグナムがその空間の割れ目から窺える奇妙な人影に目を凝らした。

「!何か来るぞ!!」

全員が身構えてその人影が出てくるのを凝視していると、次元空間の狭間より姿を現したのは実に恐るべき形相の化物だった。

恋次達はその姿を見るなり恐怖で体が凍りついた。

「な・・・・・何だよ・・・・・・ありゃ・・・・・・!」

「くっ!新手か!?」

参列者一同が目の当たりにしたのは、般若を思わせるような黒衣に身を包んだ鬼神で、その得体のしれないものの襲撃を受け、前線メ

ンバーや恋次達死神組、そして管理局の武装局員は一様に武器を構える。

すると、現れたその鬼神は黒衣を広げると、その中からこの場にいる全員の前にある人物の姿を曝け出した。

「え」

新八は瞳に映ってきたその人物の姿を目の当たりにした瞬間、一瞬の間思考を停止させ同時に自分の目を疑った。

「「「な！」」」

いや、新八だけではなかった。

神楽も近藤も、そしてその人物と少なからず時をも共に過ごしてきたもの全てが目を疑ったのだから――――――そう、彼らが目にした人物。

それは紛れもなく虚数空間へと堕ちて行ってしまったはずの白き侍、白夜叉こと万事屋坂田銀時なのであったのだから。

新八は思わず銀時の姿を見て、呆気にとられながらも彼の名を呟く。

「ぎ・・・・・・銀・・・・・・・・さん・・・・・・・・」

すると、その新八の言葉を聞いた坂田銀時は疲労困憊の瞳を向けて全員に対してほくそ笑みながら返事を返す。

「・・・よお、てめぇら・・・なんだそのしけた面は――――――」

「銀ちゃん――――――――！」

「万事屋・・・・・・じゃあ、残るこいつは――――――――」

近藤がそう口にしながら謎の鬼神の姿を凝視していると、唐突に鬼神の身体に輝が入り始め、般若の顔にも同様に輝が入ると一気にそれは弾け飛び、徐に姿を現したのは信じられない男だった。

「「「「「「！」」」」」」

「「「「な！」」」」」

「「「「「「あ！」」」」」」

「「「「！！」」」」」

参列者全員が目を開けてその男の姿に驚きを隠し切れない中、ヴィヴィオと一緒に涙を流していたなのはのリアクションは一際目立っていた。

なのはは瞼を全開にしてその男の姿を凝視し、同時に握りしめられたペンダントを一団を強く握る。

そして、誰もが現実の光景なのかと疑いを隠し切れない中、言葉を発した。

「これは・・・――――」

「う・・・――――嘘・・・・・・か！？」

「そんな訳・・・・・・ないよ・・・・・・あれは／／／／／／」

「あ・・・・・・ああ／／／／／／」

涙目のフェイトがそう言おうとすると、なのはもまた歓喜の涙を瞳いっぱいに潤し、銀時は一緒にこの場所に帰ってきたその男を一瞥しほくそ笑むと、クリーム色の髪をなびかせ翡翠の瞳を宿した甚平服に羽織を着飾ったメガネの青年・・・ユーノ・スクライアは息を切らした状態で笑顔を振りまいた。

「は、は、は、は、は。た・・・・・・ただいま。」

ヴィヴィオはもう二度と会えないとばかり思っていた父親の姿を黙視し、母親同様の歓喜の涙を流しながら大声を上げる。

「パパが・・・・・・ユーノパパが帰ってきた／／／／／／！！！！」

「ユーノ・・・・・・お前！！！！」

愛弟子の帰還をその目にした一護も嬉しさのあまりいつも以上に高い声色をだし、そして最もこの男の帰りを待ち望んでいた高町なのはは迷う事無く彼の元へと飛び込んでいった。

「ううううううう！！！！！ユーノ君／／／／／／／／／／／／／／／／／／！！！！！！！！！！！！！！」

泣きながら自分の胸に飛び込んできたなのはを優しく包み込むように抱き寄せるユーノはなのはの背中をさすりながら彼女の名前を口

にする。

「なのは。」

「うわあああああああああああああ！！！！！よかった！！！！よかった！！！！！」

「ごめんね、なのは。心配かけて・・・」

ユーノは胸の中で嬉しさのあまり声をからして泣き叫ぶ最愛の女性の髪をなでながら自分もまた再会できた喜びに一筋の涙を流す。

そして、新八や神楽たちもまたユーノと共に虚数空間より脱した銀時の元へと飛び込んでいった。

「「銀さん（ちゃん）！！」」

「旦那！！！」

なのはの後に続き、ユーノにゆかりのある全ての人物が彼の元へと急いだ。

「ユーノ！！」

「「「ユーノ先生！！」」」

「「「店長！！！！！」」」

辺りが騒然とし始める中、新八と神楽は嬉し涙を浮かべてなのはのように銀時の胸の中で声を上げる。

「銀さん！！！」

「銀ちゃん！！！心配させやがって！！！よく生きてたネ！！！」

銀時は疲れ切った様子で二人の頭に手を乗せこう言う。

「たりめーだろ。まだまだ死ぬには未練がありすぎるんだよ。それに死ぬなら死ぬで、チョコレートパフェ食ってからてめぇらの傍らで死んでやらぁ。」

「う・・・はい／／／／／／」

新八は掠れたような声でそう返事をすると、銀時の温もりを全身で感じるために再び顔を彼の胸の中に落とした。

土方は煙草を吹かしながら結果的に作った意味がなくなってしまった慰霊碑に手を乗せ、隣の近藤・総悟に呟く。

「たく。どうやら今回のこいつは杞憂に消えたようだな。」

「ああ。だが、結果オーライって奴だ。」

「内心一番喜んでるのは土方さんの方じゃないですか？」

「な、なわけねーだろ！！誰があんなもっさり天然パーマの心配するかよ！！」

すると、その言葉を耳にした瞬間銀時が目を血走らせて土方の元へと近づいて行った。

「あ!?誰がもっさり天然パーマだと!!このニコラー!!」

「やんのか?ああ!!いいぜ!!だったら俺の手で今度こそ地獄にでも送ってやろうか、あ!」

二人は火花を散らせると、この雰囲気をぶち壊すかのように腰の刀に手を添え、見ていた新八は二人の喧嘩を止めようとする。

「ちょ!二人ともこんな時でも喧嘩しないで下さい!!ああも!!お前らなんなんだよ!!!」

一方でユーノはユーノで幼馴染や一護達に囲まれながら再開を噛みしめていた。

「ユーノくん・・・よくもまぁ無事で／／／／／／」

「パパ・・・・・・／／／／本当にパパなんだよね／／／／／／」

「ああ・・・・・・間違いなくユーノ・スクライアだよ、ヴィヴィオ。」

「うん／／／」

ユーノがヴィヴィオの頭を優しく撫でてあげると、ヴィヴィオはその心地よさに浸りながらユーノの身体にぎっしりと抱きついた。

するとここでクロノが徐に脱出不可能と呼ばれる謎の多い虚数空間から脱出したその理由を尋ねる。

「だがユーノ。どうやってあの虚数空間から抜け出したんだ・・・・・」

ユーノはそう尋ねられると、何処か複雑な表情を浮かべながら核心の答えを口にした。

「――――――卍解を使ったのさ。」

「え！卍解・・・！？」

「それって、確か“月霊晩翠”って名前の・・・！？」

この場にいる全員が驚き返る中、ユーノは次のように説明する。

「うん。月霊晩翠の能力は『地獄の力を行使すること』。その能力の一端である『地獄壊象（じごくかいしょう）』を使って、事象を破壊し否定した――――つまり、“虚数空間から抜け出せない”という事象を破壊して次元空間の狭間から脱出してきたって訳。」

「そ・・・・・そんな事が・・・！！」

「信じられない・・・・・・！」

途方もないユーノの卍解の能力を聞かされ、頭がついていけなくなってしまう一同だったが、銀時はため息をつきながらその時の事を赤裸々に語る。

「ホント・・・マジあんときは死ぬかと思ったけどよ・・・・・・こいつのお蔭で俺は命拾いしたんだ。ユーノ・・・・・・あんがとよ。」

「いえ・・・・・それに僕自身にも約束がありましたしね――――“なのはやヴィヴィオ、僕の周りにいる大切な仲間を置いて行って一人でどこかに行くようなことはしない”って。だから、その約束を守るために、僕は帰ってきた――――――」

「ユーノ君・・・・・・・・／／／」

「へへ・・・・・・・」

なのははその言葉を聞かされ、嬉しさのあまり頬を赤くしてしまう。

そして、目の前のユーノを見つめながら心の中で呟く。

「（・・・罪・・・ユーノ君が抱える罪の大きさ・・・一人で背負い込むことで、自分が罪だと思ってる・・・だけどその罪の償いは、“犯したと思い込んでいる”罪の償いはどんなに心血を注ごうとも、誰でもなく自分が許す事なしでは償いにはならない・・・自分を許されないで終わるかもしれない・・・一生自問自答を続けて、報われない人生になるかもしれない・・・けれど――――――・・・）」

そんな事を呟いていると、ユーノがいつもの笑顔を向けてなのはに対してハンカチを差し出し、涙で潤った瞳を拭う事を促す。

「ただいま、なのは・・・・・・ほら、涙拭いて。」

「・・・うん（それでもユーノ君は微笑(わら)ってくれる。いっぱいの優しの中にほんの少し悲しみを隠したいつもの笑顔で・・・）」

なのははユーノからハンカチを受け取ると、体勢を崩して自分の元

に倒れ来たユーノを今度は自分が抱き寄せるように包み込むと最後自分に言い聞かせた。

「！」

「（ユーノ君の人生を代ることは出来ないけれど、せめて側で支えたい――――――――・・・）」

「あら？」

「（ずっと側で支えていたい――――――）」

こうして、二人の男・・・ユーノ・スクライアと坂田銀時は無事に皆の元に生還し、一人の犠牲者を出すことなくこの事件は終わりを迎えようとしていた――――――

しかしそこで新たに発覚する驚愕の事実にこの時彼らはどう受け止めるのであろうか・・・

帰ってきたときは、ただいまを言おう（後書き）

3年Z組、銀八先生！

銀「はぁ～い。全員席着け。今日はみんなに悲しいお知らせだ。世界史のユーノ・スクライア先生が国会議員になることになったため、今日で退職することになった。」

ユ「長い間、みんなと授業が出来て本当に楽しかったよ／／／みんなにもっと世界の色んなことを教えてあげたかった・・・！卒業式には必ず出席するからそれまで元気でね／／／」

な「ユーノ君／／／／」

金「ううううう／／／／私は悲しいですぞ／／／／」

銀「そんじゃ、Z組を代表して高町なのは。花束贈呈。」

な「はい／／／」

なのはは銀八先生に言われてクラス全員がお金を出し合って購入した花束をユーノに手渡し、最後に言葉を残した。

な「ユーノ君・・・」

ユ「なのは・・・」

な「・・・・・・私と結婚してください／／／！！！」

その瞬間、クラス全員から大ブーイング。

全「それは絶対駄目だ！！！！」

終わり。

魔導師図鑑ハイパー！

ユーノ達はこれからの方針を話し合うために会議室に集まっていた。

ユ「いよいよ次回で銀魂篇も最終回ですね。」

一「さて、こっから先はどうしたもんかな？」

石「新章の設定は既に概ね決めていると作者は言っているが、果たしてうまくいくのかどうか・・・」

な「それにスカリエッティのことだけど・・・もう完全に忘れ去られてる気がするし・・・」

フェ「あと、あの謎の少年の事も気になるし・・・う～～～んどうなるんだろう・・・」

銀「何でもいいじゃんかよ。俺達が一先ず有終の美を飾れるならよ。」

新「結局あんたは自分の事しか考えてない訳ね・・・」

次回予告

ついに終焉を迎えた世界の明暗がかかった事件。

そして訪れる結末と、別れの時。

だけど、一つの終わりは何時だって新しい何かの始まり。

受け継がれる三人の侍の魂――――――

ユーノ・スクライア外伝　アンゴルモア・銀魂篇　最終話

ユ・銀「『また遭う時はきっと笑い合おう』」

また遭う時はきっと笑い合おう（前書き）

ユ「それは、ただの結界魔導師だったはずの僕、ユーノ・スクライアと僕の大切な仲間に訪れた一つの大きな事件――」

ユ「信じたのは仲間の笑顔。手にしたのは絆の力。願ったのは・・・・・目の前で苦しむ人が救われること――――――」

ユ「旅立ちの始まりは、きっといつも心躍り、だけど想いはきっと通じ合えたから――――――」

ユ「だから“さよなら”は始まりの言葉なんだろう――――――」

ユ・銀「ユーノ・スクライア外伝　アンゴルモア・銀魂篇最終回・・・・・始まるぜ（始まります）」

また遭う時はきっと笑い合おう

＞ｉ２８４３６―７０９＜

〈回想シーン〉

ユーノが銀時と共に虚数空間から脱出するほんの僅か前の時間。

ユーノは虚数空間の中で銀時の傍らで意識を失い縦も横もそして奥行きもない空間を漂流していると、遠い意識の彼方から自分を呼ぶ声が聞こえてきた。

〈・・・ノ・・・・・・・・・・・・・・ユーノ――――――〉

「（・・・誰だ・・・誰かが僕を呼んでいる・・・・・・）」

声に気づき、ユーノが重い瞼を開けてみると、自分の目の前に現れたのは魂の相棒にして今の今まで地獄の呪いを肩代わりしていた彼の力の根源、斬魄刀『晩翠』であった。

「！」

具象化した晩翠がこの虚数空間に現れたことに心底驚きを隠せないユーノ。

「ユーノ――――――」

「晩翠・・・・・・」

晩翠は徐にユーノの肩に手を乗せると、横で浮遊する銀時を一瞥しユーノに言う。

「このままで、お前やそいつを終わらせるわけにはいかない。」

「晩翠・・・だけど・・・もう・・・」

虚数空間に堕ちてしまった以上、どうすることも出来ないとばかりの表情を浮かべるユーノだが、晩翠はそんなユーノにこの状況を解決する唯一つの方法を提案する。

「そんな顔はするな。一つだけ、方法があるだろう。」

「！まさか・・・――お前！！」

晩翠が話そうとしていることに勘付いたユーノが何時になく挙動不審な態度をとる。

晩翠はそんなユーノを見つめ、少し寂しげなだけど優しい表情を見せて赤裸々な自分の想いを告げる。

「――ユーノ。お前には、生きていて欲しい。それが、私の一番の望みだ。」

「だけど・・・だけど！！！」

「約束を、破っていいのか？」

「！」

「約束したのであろう。なのはと――――――彼女との約束を破っていいのか？お前はそんなこと心の底から望んでいない筈だ。お前だけじゃない。ヴィヴィオも、一護も、他のみんなもそうだ――――『卍解』を使え。副作用はすべて、私が受ける。だから、そいつと共に地上に戻れ。」

晩翠が固い決心の元ユーノにそう進言すると、ユーノはこの先の展開を予測して瞳から大粒の涙を流しながら自らの斬魄刀に顔を向ける。

「く・・・／／／／／／／／晩翠・・・／／／／／／／／お前／／／／／／／／」

晩翠は自分の為にここまで涙を流す主の姿に胸が痛み自分もまた涙を流すが、目の前のユーノのそれを自分の手で拭うと最後の言葉を贈る。

「泣くのは、止してほしい。お前が泣けば、私も涙が止まらなくなる。心配はいらんさ。私はあんなの奴らに屈服する訳なかろう。必ず私は戻ってくる。だから、悲しむ事なんて何もないんだ。」

「く・・・・・・／／／／／／／／」

未だ納得のいかないユーノだったが、晩翠は笑顔でそう言い残すと斬魄刀の形状となってユーノの掌に収まり、ユーノは耳に聞こえてきた晩翠の言葉を聞き入れ実行に移すことになった。

「（さらばだ――――――ユーノ。）」

ユーノは止まらない涙を流しながら、自分の胸に向かって斬魄刀『晩翠』を突き刺し、禁断の卍解『月霊晩翠』を虚数空間内で発動した。

「卍解／／／／／／！！！！！！！！」

回想シーン終了

◇

〈ユーノＳｉｄｅ〉

「！」

意識を失っていたユーノが晩翠とのやり取りを夢として見た直後、目を開けると真っ先になのはや一護、銀時と言った絆を紡いだかけがえのない仲間全員が自分の方を見つめてきた。

「「「あ！！」」」

「「「店長！」」」

「「「「ユーノ先生！」」」」

「ユーノ君！！」

なのは達は無事に意識を取り戻し、目を覚ましたユーノを見て安どのため息をつく。

「よかった！ユーノパパが起きた！！」

ヴィヴィオも心底ユーノの身体の事を心配していたので本当に嬉しそうな様子であった。

ユーノは周りを見渡し、一通りのことを確認すると自分が寝間着を着ていることからずっと眠っていたということを悟った。

「なのは。みんなも。あれ？と言うことはここ――――――」

ユーノの言葉を耳にし、目の前に立っていた一護が答える。

「六課のお前の部屋だ。」

「そうですか・・・・・・一護さんに銀さん達、怪我は？」

「ああ。とっくに治ってるよ。」

一護はそう言うと、周りにいる仲間と共にすっかり完全回復を果たした体をユーノに見せつけ、銀時は肩を回しながら織姫の凄さを実感した。

「いや～～～マジでよく効いたぜあの治療。つうかお前寝過ぎなんだよ。」

「寝過ぎ・・・？」

銀時の言葉に疑問符を浮かべるユーノ。

なのはは徐に帰ってきた直後の事を語り出す。

「ユーノ君。あれから五日も眠ってたんだよ。六課に戻ってきてすぐに気を失ってね。」

「そうか・・・五日も・・・」

「あの、ユーノさんの方は大丈夫なんですか？」

「何処かまだ悪いところとかある？」

新八とフェイトが心配した様子で尋ねると、ユーノは柔かい笑みで答える。

「・・・大丈夫だよ。“魂以外”はもうすっかりよくなったから。」

その時、ある一か所に違和感を感じた恋次がその部分を復唱する。

「？魂以外は・・・・・・・」

「どういう意味ですか、それ・・・？」

すると、尋ねてきたエリオの言葉を聞いて後、全員がユーノに注目する中でユーノは顔を伏せた状態で衝撃の事実を告白した。

「・・・――――僕は・・・・・・魔導死神としての力の全てを失った。」

「「「な！！」」」

「「「「「え！！」」」」」

「「「「「「！？」」」」」」

「「「「「「

しかしユーノは至って真面目な表情を浮かべていた。

そして、徐になのはが驚きを隠せない様子で先ほどの言葉を繰り返す。

「魔導死神の・・・・・・力を・・・・・・・」

「ど、どうして・・・・・・・！」

気になって仕方のない鬼太郎はすぐさまユーノに問い詰めると、ユーノは魔導死神としての力の全てを失ったその過程を説明した。

「“月霊晩翠”の副作用さ。元々あの卍解は人知を超えた絶対の力を発動することが出来るが、一度使えば術者をその選定と罪の贖いの為に再度地獄へと誘うんだ。だけどあの時、晩翠が僕を守ってくれた。」

「晩翠が・・・！？」

「晩翠はあの時、自らの命と僕の力の全てを引き替えにして卍解時における副作用を僕から遠ざけ、自分がその荷を背負って・・・僕の代わりに地獄に堕ちた。そうやって、僕と銀さんをこの世界に戻してくれた――――――」

「俺とユーノを守るために・・・・・・自らが地獄にだと・・・・・・」

銀時はその言葉を聞いた後、青ざめた表情を浮かべ、ユーノは窓の方に顔を向け全員の視線から遠ざかる。

部屋全体に重い空気が漂い、長い沈黙が流れたのち、はやては困惑した様子でユーノに恐る恐る尋ねる。

「ユーノくん。私達に何かできることは・・・・・・！」

すると、ユーノははやての方へと振り返り寂しげな笑みを浮かべて言う。

「・・・残念だけどこればかりはどうしようもないんだよ、はやて。あいつはあいつなりに僕の事を守って来てくれた。突っ走り続けた僕の我儘にあいつは最後まで付き合ってくれて、僕を生かしてくれた。」

直後、話を聞いていた吉良は何かに気づいた表情を浮かべてこう尋ねる。

「と言うことはユーノさん・・・・・・もう魔法も霊力も何も使えないってことですか!?」

「!ユーノ君・・・！」

なのはも吉良の言葉に反応し、驚愕の顔を浮かべユーノを見つめる。

ユーノは再び顔を窓の方に向けると背中越しに全員に告げる。

「・・・ええ。僕の中にはもうリンカーコアもなければ、死神の力の源でもある霊力も残ってない。今は恋次さん達死神は義骸に入っているから見れますが、それ以外で僕がその目で幽霊の姿を捕えることはないでしょう・・・・・・」

残酷なまでに自分自身の口からその事を告げるユーノになのは達の心が縛りつけられる。

「まぁ、これで僕はもう“翡翠の魔導死神ユーノ・スクライア”でも何でもなくなった。今の僕は・・・・・・“ただのユーノ・スクライア”だ。」

「スクライア・・・お前・・・」

「ユーノ・・・・・・」

「ユーノパパ・・・／／／／」

ヴィヴィオは力を失ってしまった父親の寂しげな姿に見ていられなくなり、涙を浮かべて言葉を投げかけると、ユーノは振り返り取り繕った笑顔で娘の頭に手を添える。

「そんな悲しい顔をしないでよ、ヴィヴィオ。兎に角みんなが無事でよかった。」

「でもユーノ君／／／」

ヴィヴィオもそうだが、なのはだって納得などしていなかった。

すると意外なところで声を震わせたクロノがユーノを怒鳴りつけて来た。

「何を言ってるんだフェレットもどき!!みんな無事だって!?お前は魔力も霊力も全部失ったんだぞ!!」

「クロノ・・・」

「クロノくん・・・」

「く・・・！」

珍しく感情的になるクロノの姿にフェイトもはやても、この場にいる全員が一様に驚き、目の前のユーノは唖然とした表情を浮かべた後鼻で笑いこう返す。

「ふん。次元航行隊の提督がそう声を荒げるなよ。らしくないったらありゃしない。」

一護はそう言った直後ユーノを見据えて、複雑な表情で問いかける。

「ユーノ・・・お前はこれでホントに良かったのかよ?!」

「いいんですよ、一護さん。全部自分で選んでやったことなんですから。後悔なんてありません。ただ、今まであったものが無くなって・・・ちょっと肌寒いだけですから。」

「・・・・・・」

ユーノの口にした言葉を耳にし、嘗ての自分も似たようなことを言っていたことを思い出してしまう一護の心境は言葉では表現できそうもないぐらい迷走していた。

口を籠らせてしまった一同はこの後どのようにユーノに話しかければいいと思っていたが、意を決したルキアが核心的なことを尋ねてみた。

「本当に・・・・・もう力は戻らないのですか、ユーノ殿?」

ルキアの質問を受け、ユーノは一度ベッドから立ち上がるとからっと晴れた秋の晴天を仰ぎ見ながら徐にこう答える。

「――――――地獄へ堕とされた晩翠は、本来ならば僕が受ける筈だった責苦を無期限に味わうことになります。永遠に戻らないというわけではありませんが、再びあいつが僕の元に戻ってくるのが何時なのか、それが確証がないってだけの話。一年後か・・・あるいはもっと先の未来か・・・・・だからそれまで、気長に待ちますよ。あいつが・・・晩翠が必ず僕の元に戻ってくると信じて。」

「ユーノ・・・・・・」

「あいつは・・・・・晩翠は僕の生涯における唯一無二、最高の相棒ですから――――――」

ユーノがそう言うと、全員は何も言えなくなりそこでまた長い長い沈黙が流れた。

部屋から出て来た一護達はロビーに集まると、暗い表情を浮かべながら結果的に一番損をすることになってしまったユーノの事について言葉を交わした。

「・・・結局、最後の最後で貧乏くじを引いたのはユーノになっちまったな・・・」

「ああ・・・」

恋次の言葉を聞いた一護が重い表情で言葉を漏らすと、その隣に座っていた銀時は申し訳なさそうな表情を浮かべ次のように言葉を漏らす。

「俺の命を助けるために、あいつは全ての力を失っちまった・・・・・俺は・・・何て言ってあいつに謝ればいいんだよ・・・・・・」

普段のだらしない態度とは一変した今の銀時の姿がとても新鮮であったが、見ていた新八たちの心は痛む一方だった。

新八は一度首を横に振ると、項垂れる銀時の肩に手を乗せこう言って来た。

「銀さんが謝る必要はないですよ。ユーノさんだってきっと同じことを言うと思いますし。」

「そうネ。ユーノ、銀ちゃんに謝られても嬉しくないネ。寧ろ、変に気を遣わない方がユーノには一番いい筈アルよ。」

二人がそう言うと、ヴィータもまた肯定の返事をする。

「そうだな。それがあいつには一番合ってるのかもしれねぇしな。」

「銀さん。ユーノの気持ち、分かってくれよ。」

一護がそう言うと、銀時は暫く考え込んだ後素直に返事を返した。

「ああ。」

と、直後スバルはもう一人この事を深く気にしている自分の憧れの

女性の方へと目を向けた。

「なのはさん・・・は」

スバルや他のメンバーが一様になのはに目を向けると、なのはは銀時以上に深く落ち込んだ様子で顔を床に向けていた。

「・・・・・・」

「なのはママ・・・・」

意気消沈する母親の姿に胸が痛むヴィヴィオ。

なのはは啜り泣きながら自分たちの為に力を失ってしまったユーノに自分のこと以上に深い悲しみを抱いていた。

「・・・ぐっす。私は・・・何て言えばいいんだろう・・・ユーノ君は私達の為に全部の力を失って、魔法も・・・霊力も・・・それでもあんな風に笑ってるユーノ君を見るのは・・・・・・辛いよ・・・／／／／」

「なのはさん。」

確かに、なのはの言う通り全員はあの時の取り繕った笑みのユーノには正直絶句した。

見ていられなくなってしまった。

しかしそれでもなのはは直後、涙を手で拭った後決意の籠った表情でこう言って来た。

「だけど、それでもユーノ君の前では笑っていよう。だって、私が変に気遣いとかすると、逆にユーノ君を悲しませるだけだから。ヴィヴィオも、そうだよね。」

「うん。パパの前では私達は笑ってよう。パパが悲しくて、凄く辛い時でも私達が笑ってれば、きっとパパも笑ってくれると信じて――――」

一同は二人のその言葉を聞くと、真摯にそれを受け入れ肯定の返事すると、一護はこの暗く淀んだ雰囲気を一色するために声高に宣言した。

「よし。そうと決まれば打ち上げの支度でもするか！」

「だね！はやてさん、準備お願いできます？」

織姫がそう尋ねると、はやては既に大方の準備を整え打ち上げの用意を行っている真っ最中だった。

「お任せください織姫さん！こういう楽しいことは私の専売特許ですから！今夜はパーッと盛り上がるよ！！」

「「「「「はい！！」」」」」

「キャッほーい！！私今日は鱈腹食べるネ！！」

「おめーは何時も喰ってるだろうが。」

「ま、俺は特大のチョコレートパフェで決まりだな。」

「ちょっと銀さん。本当に糖尿病になっても知りませんよ。」

「喧しいっての。ユーノ中毒の魔王様に比べれば程度は低い。」

「もう！！銀さんもその言い方で人をからかうのは止して下さいよ！！！」

「本当の事だろうが。なぁ」

「「「「「はい！」」」」」

一護がおちょくったようにそう言うと、フォワード陣は全力全開で肯定の返事を返し、聞いた瞬間なのはの顔が茹蛸のように赤く染まった。

「う～～～／／／全員頭冷やしてあげるの！！！」

なのははレイジングハートを起動させると、隊舎内で暴れ始めようとした。

それを切っ掛けに全員は隊舎内でなんとも騒々しいバカ騒ぎを始め、部屋から出てきて普段着に着替えたユーノはそんな全員を遠くから見守りながら、自分の事を気遣ってくれる仲間に向けて徐に感謝の言葉を呟いた。

「・・・――――ありがとう、みんな。」

◇

〈スバルＳｉｄｅ〉

アンゴルモア事件を切っ掛けに始まった、今回の任務はこうして無事に終わりを迎えました。

いくつもの世界と出来事が絡み合ったこの事件『カトゥーン事件』の最大の功労者にして、最大の被害者でもある『翡翠の魔導死神ユーノ・スクライア』は私たちすべての世界の人々と一人の男の命を救うために自らの力の全てを失い、普通の人間となってしまいました。

だけど彼はきっと後悔はしていない。

例え力を失くしても、彼はこれからもずっと強く明日を見据えて自分の足を突き進めていくはずだから――――――

◇

〈新八Ｓｉｄｅ〉

事件終結から１６日後。

次元犯罪者カトゥーンは、軌道上に位置する最高拘置所にて統監。

ユーノさんが力を失くしたことを聞いて、あの時と同様に深く悲しんでる様子だった。

カトゥーンだけじゃない。

今迄ユーノさんと形は違えど関わってきた人間すべてが、彼の力の

喪失をまるで自分の事であるかのように悲しんでいた。

だけどそれでも、ユーノさんは笑っていた。

何時もと変わらない飄々としているけど、何処か少し寂しげな柔らかい笑顔で。

ミッドチルダを始め、次元世界は再び平穏を取り戻した。

前線メンバーも全員通常勤務に戻り、ユーノさんも検査から帰ってきて、なのはさん達と一緒に今迄通り一緒に過ごしている。

ただ、今までは違うのは・・・・・ユーノさんにあった魔力と霊力がなくなっていると言う事。

◇

〈一護Ｓｉｄｅ〉

事件が無事に解決し、現世の方に帰還した一護は織姫と共に通常の医療勤務に戻っていた。

しかしその表情はどこか複雑なものであった。

それもそうだ・・・・・自身が手塩にかけて育て上げた愛弟子が今回の事件の最大の犠牲者となり、挙句力をすべて失ってしまったのだから。

休日、一護達は浦原商店へと集まり茶菓子とお茶を堪能しながらユーノの事について話し合っていると、徐にコンがかつてないほどに

大人しい様子の一護に違和感を感じ尋ねる。

「どうしたんだよ、一護？事件が終わってから、めっきり大人しいじゃねぇか。」

「やっぱり、ユーノさんの事気にしてるの？」

織姫がそう尋ねると、案の定一護は肯定の返事を呟く。

「ああ・・・ユーノの奴、あの後こう言っててな。『先走って、大失敗して、何にも無くなったけど、それでも生きてればそのうち何か見つけられるはずだから、心配なんてしなくていい』って。全く・・・・・この期に及んで他人の事ばかり気にしやがって。俺達の気も知らないでよ・・・・・・・ホント・・・・・・俺は自分が情けなくなっちまったぜ。」

「黒崎・・・・・・」

「同じ想いがあるから、傷つけたくたかったから、俺なりに色々やって来た・・・・・失ったものがあるから護りたくて、護りたいものがあるから必死になって、無茶もして・・・」

神妙な表情で出された紅茶を覗く一護。

石田や茶渡、夜一はそんな一護にこのように返答する。

「どんな気持ちも、どんな想いも、強くなり過ぎれば裏返ってしまうものだ」

「積み重ねてきた時間や、犠牲になったものが多ければ多いほど、

余計にな。」

「じゃが、急いで求め過ぎれば悲しいことばかりが増えていくものじゃ。」

「まぁな・・・・・・・・しかし何だよこの雰囲気。これ傍から見れば、出来の悪い生徒が教師に一遍に諌められてる光景だなおい・・・・・・」

一護はそんな言葉を呟きながら苦い表情で自分よりもずっと大人な対応を見せる織姫達の姿をそう表現すると、聞いていたコンや浦原は言う。

「け！今頃気づきやがったか。」

「黒崎サンもまだまだ子供ってことっスよ♪」

「う・・・・・・」

一護はその言葉を深く突き刺さり、誤魔化すように紅茶の中身を啜る。

すると、織姫が何かを思い出したように一護に尋ねる。

「そう言えばあなた。銀さん達の事だけど、帰る方法は見つかったの？」

「ああ。それならユーノがあの男に連絡を取ってるみてぇだぜ。昨日通信で言ってた。」

◇

〈新八Ｓｉｄｅ〉

そう・・・僕達はまだこの世界から帰れていない。

事件が片付きユーノさんが今必死になってその方法を探しているところ。

本当に・・・・・・ユーノさんは何処まで人の為に自分を犠牲にしてきているのだとこの時改めて思った。

◇

〈恋次・なのはＳｉｄｅ〉

事件後、なのははオフィスの仕事をする傍ら未だ煮え切らないでいるユーノの事に関してため息ばかりをついていた。

恋次はそんななのはに近づき、こう話しかける。

「まだ元気でないのか？いい加減そんな顔ばっかしてっと、またあいつに叱られるぞ。」

「そうなんですけど・・・・・・やっぱり、いまだに実感わかなくて・・・・・・」

「シャマルだってレントゲン見せてくれただろう。あいつにはもう、リンカーコアも霊力発生の源も何もかもがなくなっちまってた。」

「ユーノ君・・・・・・これからどうするんですかね・・・・・・」

「さぁな。ただ、あいつならこう言うんじゃねぇか・・・『今自分にできる精一杯のことをするだけ』だってな。」

「・・・そうですね・・・」

恋次の言葉を聞くと、なのはも多分そう言うだろうと判断し、目の前のコーヒーを少し寂しげな表情で啜り飲むのであった。

◇

〈三人称Ｓｉｄｅ〉

それから更に二日後。

機動六課の元に嬉しい吉報が届いた。

ユーノは自分のオフィスである男と連絡を交わしており、嬉々とした表情で声高に言葉を発していた。

「本当ですか！？よかった！！はい。じゃあ、こちらの方でお待ちしておりますので。はい！じゃあ、よろしくお願いします！」

ユーノは男との通信を切り終えると、椅子に深く腰掛け安どのため息をついた。

「ふう・・・漸くこれで・・・と、その前に銀さん達に報せなきゃ。」

すると、そんなユーノのオフィスに資料を持ったなのはが入ってきた。

「あれ？ユーノ君。どうしたの何か嬉しそうだけど。」

「なのは♪そりゃ嬉しいさ。何たってついさっき、漸く銀さん達の世界に帰る方法が見つかったんだ！」

「え！本当に！？」

「ああ。大分時間はかかったけど、どうにか見つけることが出来た。急いで銀さん達に報せきゃ♪」

「うん♪」

飛び切りの笑顔を浮かべたなのはは早速ユーノと一緒にロビーの方へと向かい、銀時達を集めてその事を伝えた。

「え！本当ですか！？」

「俺達・・・漸く元の世界に帰れるのか！？」

驚きで満ち溢れた表情の銀時達にユーノは飄々とした様子で更に言葉を並べる。

「はい♪僕の友人が帰る方法を知っていまして、こっちに立ち寄ってくれるので銀さん達はその人と一緒について行けば元いた世界に帰れます。」

「やったネ！！私暫くぶりに定春に会えるね！！パフパフし放題ね

！！」

「山崎の野郎俺達がいなくて大丈夫だろうか？ま、別にあいつにそこまで期待してる訳じゃねぇが、万が一ミントンで怠けてた暁には問答無用に切腹させてやる・・・！」

「ひ、土方さんそれはちょっと・・・／／／」

刀を取出し殺意剥き出しの土方に顔を青ざめる新八。

銀時はユーノに対して男が何時頃来るのかを尋ねる。

「でユーノ。そいつはいつ来るんだ？」

「今日のお昼ごろに到着の予定だそうです。銀さん達も今のうちにここを出る準備を済ませておいてください。」

「はい。」

「ああ。つっても、別に持ってくもんなんてねぇけどな俺ら・・・」

すると、そう銀時が言った後神楽は考え込んでからふとこう言った。

「強いて言えば風呂場のシャンプーとリンスアルな。」

「序でに食堂にあった醤油とわさびも持って帰るか。」

「「お前ら発想が庶民すぎるわ！！」」

二人の発言を聞き、新八と土方が久しぶりのツッコミを入れると、

ユーノやなのは達は唖然とした表情を浮かべてしまう。

「にゃはは・・・あ、相変わらずの吹っ飛んだ雰囲気・・・」

「頼むからもういい加減にしてくれよ・・・」

そして、約束の時刻に近づくと銀時達は帰り支度を済ませ機動六課の隊舎までユーノ達と共にユーノの友人が来るのを待つことになった。

「ここで待ってればいいんだな。」

「つうか店長。その友達って言うのは・・・――」

「ああ。浦太郎やはやて達なら一度遭ったことある人だから心配ないよ。」

「私達が遭ったことのある人・・・――」

「おい、ユーノ。まさかそいつって・・・――！」

はやてとクロノが勘付いたようにそう口にした直後、ユーノは目の前に現れた灰色のオーロラカーテンに目を向け、その人物が到着したことを報せる。

「お・来たよ♪」

全員が唐突に現れた灰色のオーロラカーテンを凝視すると、その中から出て来たのは胸にトイカメラをぶら下げた二十代前後の青年、仮面ライダーディケイドこと門矢士だった。

士はユーノの元へと歩み寄っていくと、ユーノと握手を交わした。

「よう。待ったか。」

「いえ。お待ちしてました士さん♪」

士の姿を黙視した直後、彼の素性を知っていたはやてやクロノ、更には浦太郎・ヴィータ・シグナムなどは目を見開き、驚愕する。

「あ！あなたは・・・！」

「確か、仮面ライダーディケイドの・・・！？」

「門矢士だ。その件は色々あったな。元気そうだな、腹黒にひょうたんタヌキ娘。」

士の痛烈な言葉を耳に、思わずこけそうになってしまうはやてとクロノ。

二人のニックネームが相当全員には可笑しかったのか、全員は聞こえない程度に笑っているが当の二人は顔を真っ赤にして士に反論する。

「な！誰がひょうたんタヌキ娘ちゃうですの！！」

「僕も腹黒じゃありませんよ！！久しぶりに会ってそれはないでしょう！！」

「おっとこれは済まなかったな。あまりに見た目がそうとしか言え

なくてついな。」

「「く・・・！」」

完全に自分のペースに二人を巻き込む士の態度にそれ以上何も言えなくなる二人を見て、フォワード陣や隊長陣は唖然としてしまう。

「こ、この人もこの人でキャラが濃いわよね・・・」

「はやてちゃんもクロノ提督も完全に出し抜かれちゃってますしね。」

銀時は徐に士に近づき言葉を投げかける。

「お前が俺達を元の世界へ送ってくれるのか？」

「ああ。事情は聞いたぜ。前に旅した世界にお前らの言う“江戸”って街があった。道順も知ってる。ユーノとの約束だし、お前たち全員俺が責任もって送り届けるぜ。」

「ありがとうございます。助かります！」

新八は礼儀正しく士に感謝の意を表すると、士は鼻で笑ってからユーノの方へと振り返り、複雑な様子であのことを尋ねた。

「それよりユーノ。お前・・・力を失ったんだってな・・・」

「・・・ええ。もう綺麗さっぱり全部。」

士は申し訳なそうな顔を浮かべると、この様に謝ってきた。

「悪かったな。海東からの話をもっと早くに聞けてれば、こんな事にはならなかったのかもしれねぇしな。」

「士さんの所為じゃありませんし、いいんですよそんな顔しなくても。僕は気にしてません。寧ろ、こうして士さんが来てくれただけで嬉しいですから。」

「・・・ああ。ありがとうな、ユーノ。」

「へへ♪」

異世界で知り合ったかけがえのない友の寛大なる態度に士自身も思わずはにかむ。

士は銀時達の方へと振り返ると、出発前に次のような事を伝えた。

「あんまり時間はないが、最後は悔いの残らないよう話しとけ。」

「ありがとうございます。」

「ああ。サンキューな。」

士の行為に甘えさせてもらい、銀時達はここ機動六課で知り合った人物と最後の挨拶をすませるため時間をもらった。

総悟はこの世界に来て自らが剣の指南をし、尚且つツンデレで知られる性格を見事なまでに改変させたティアナと言葉を交わしていた。

「沖田さん。あの時は色々ありがとうございました。お蔭でセカン

ドモードも以前に比べれば格段に使いこなせるようになった気がします。」

「そうか。ま、俺もお前と一緒に居て結構楽しかったぜ。次遭ったときは、俺に一太刀浴びせられるよう腕上げとけよ。」

「はい！頑張ります！」

その二人の隣では、近藤がフェイトと次のような言葉を交わしていた。

「近藤さん。向こうの世界に戻っても、真っ直ぐに自分のやり方で好きな人にその想い・・・伝えることを諦めないで頑張ってください。私も応援してますので。」

「くううう／／／ありがとう、フェイトさん／／／／あんた、お妙さんと同じでホントいい女だよ／／／ああ！勿論ですとも！！必ずやこの男勲！！！愛するお妙さんのハートを射抜いてみせます！！」

フェイトはうれし涙を流す顔中ぐちゃぐちゃの近藤の手を優しく握りしめると、ハンカチで鼻水を拭き取り包み込むような笑顔を向けるのであった。

また一方で、土方はマヨネーズ友達となった金太郎から餞別の品（マヨネーズ）を受け取っていた。

「土方殿。これはほんの餞別でございます。」

「ありがとな。またいつかマヨネーズで語れる時が来るの、楽しみ

にしてるぜ金太郎。」

「土方殿・・・・／／／あなたに出逢えて私は幸福でありました！！」

金太郎は並みがぐみながら土方の手を固く握りしめると、土方もまたそんな金太郎の手を握りしめ二人の周りに何故かお花畑が広がっていた。

間近でその光景を見ていたアギトと白鳥を反吐を吐きそうになりながら声を荒げる。

「おい、何だよこの絵面・・・気持ち悪いんだよ！」

「だから何故この二人の周りはお花畑で一杯なのだ！？」

まぁこの二人の気持ち悪い語らいはこれぐらいにして、次は神楽とヴィータを見てみよう。

神楽とヴィータは腕を交わし合いながら張りのある声でこのような言葉を交わした。

「神楽！今度また私と闘ってくれるか！？」

「勿論（モチ）アルよ！ヴィータとならいつでもガチンコ大歓迎ね！！今度は定春も一緒に連れてくるからそん時は可愛がって欲しいネ！」

「ああ！私も可愛い動物は大好きだからな！」

友情が芽生えた二人だったが、ヴィータの言葉を耳にし水を差して

きたのはシグナム。

「ふん。バトルマニアと普段私に言う割には、お前も存外嵌っていたな。」

「う、うっせーな!!お前ほど中毒じゃねぇよ!!」

ヴィータは顔を赤くしながらシグナムにそう言うと、聞いていたはやてはシャマルは傍らで笑みを浮かべていた。

そして、今回珍しく出演回数の多かった普段どうしても地味な扱いになってしまいがちなギンガ・ナカジマと志村新八の二人の場合は他とは大分違っていた。

「新八さん／／／」

ギンガは頬を赤くし、新八の胸に飛び込むと唖然とする全員を余所に新八もまた頬を赤くし涙ぐみながらギンガに感謝の言葉を贈る。

「ギンガさん・・・この一月、本当にありがとうございます／／／」

「新八さん・・・ううう・・・／／／」

新八は目を瞑ってギンガの背中に手を回すと、更にこう続けた。

「初めてでした・・・姉上以外で、お通ちゃん以外で僕が惚れて・・・女性として僕の事をまともな漢（おとこ）として見てくれたのは・・・／／／今は離れてしまいますけど、きっとまた遭えますから／／／／／」

「はい／／／そうしたら、またあなたの名前を呼んでもいいですか？」

「こんな僕で良ければ・・・いつでも／／／いつでも／／／僕も遭いたくなったら、きっとあなたの名前を呼びます／／／」

「は！新八さん・・・／／／／」

「だから・・・ギンガさんも忘れずに僕の名前を呼んでください／／／本当に困ったときは、僕みたいなメガネでも、駆けつけますから／／／」

「はい／／／私も・・・きっと今度はあなたの事・・・必ず守り抜きますから／／／／／／」

「ありがとう・・・ありがとうございます／／／／／／」

二人は喜びと別れの寂しさを一緒に涙に流すと、この別れを惜しむかのようにきつく抱きしめ合うのであった。

そんな二人の様子を遠くから見守っていたスバルやエリオ、キャロは思わず感動のあまりもらい泣きをしてしまう。

「う・・・ううう・・・／／／ギン姉が・・・ギン姉があんなに嬉しそうにしてる／／／新八さんは・・・本当に素晴らしい人だね・・・／／／／／／」

「ですね・・・／／／／」

「何だか・・・僕らも嬉しくなってきました／／／／／／」

しかし、その一方で鬼太郎と浦太郎、恋人の三人は呆然とした表情を浮かべ、徐にその表情で鬼太郎が言葉を発した。

「・・・・・・おい・・・・・・・」

「何だよ?」

「・・・・・・この展開誰が予想して誰が喜ぶんだよ?」

「僕らが知る訳ないでしょう。」

「と言うか多分誰もいねぇだろうね。」

では最後に、この世界に来て長い時間を過ごす中で誰よりも固い絆を紡ぎ、誰よりもお互いの事を自然と理解することが出来たユーノと銀時の方に注目しよう。

二人は機動六課の隊舎から見える海を見ながら、暫しの間沈黙を続け、徐に銀時が言葉を漏らした。

「・・・漸く。俺達も元の世界に戻れるんだよな・・・」

「ええ。銀さん達には色々と迷惑をかけてしまいました。一月以上もの間、あんな事件にまで巻き込んでしまいましたが・・・・・・安心してください。元の世界へは士さんがちゃんと責任を持って送り届けてくれますから。」

「ああ。それならひとまず安心だな・・・」

「へへ♪」

「ふん。」

二人は思わずほくそ笑むと、顔を見合わせる。

そして、ユーノが銀時の目を見据えながらこう言って来た。

「――――――銀さん。僕、不思議な感覚に陥ってるんですよね。」

「お？」

「初めて出逢ったころから今日にいたるまで、僕はあなたと一緒に居ると何故かとても心が温かくなれた。一緒に戦っているときにも、まるで一護さんやなのはと居る時みたく、恐怖なんてものこれっぽちも湧いてきませんでした。」

「俺は一護やなのはじゃねぇよ。と言うより、お前が思っているような大層な男でもねぇ。」

「そうかもしれませんけど、そうじゃないんですよ。」

「なんだよそりゃ・・・・・訳わかんねぇな。」

「この際細かいことは気にしないで下さいよ♪」

「へいへい。」

「あ、そうそう。元の世界に戻ったら、またぐうたらと過ごすつもりですか？」

「人聞きの悪い言い方だなおい。銀さんこう見えて仕事はきっちりやる男だぜ。ただ、エンジンが燃えるのに時間がかかるだけだって。」

「エンジンなんてあるんですか、そんな目して？」

「目は関係ねぇだろ！殺すぞ！！」

銀時がユーノの発言に怒りを覚えそう言うと、ユーノは怒られているのにも拘らず笑顔を振りまいた。

「ふふふ・・・ははは♪」

ユーノが笑顔を振りまくと、銀時もまた自然と笑顔を振りまき笑い声を発した。

「・・・ふん。ははははははは！！！」

暫くの間笑い合った二人。

笑いが収まると、ユーノは真摯な表情で銀時に尋ねる。

「また・・・何処かで会えるでしょうか？」

「さぁな・・・だが、今度会う時はもうこんな面倒事は御免だぜ。命が幾らあっても足らしねぇ。だが、これだけは約束するぜ。」

「？」

「“次会ったとき、もしもお前が今回みたいに困ってたら、俺達がお前の事助けてやる”。お前が俺達の事を命懸けで助けてくれたように、今度は俺やあいつらがそうしてやる。」

「銀さん・・・・・・」

銀時はそう言った後、ユーノにほくそ笑み、背中越しに口にする。

「俺は不真面目で体たらくな毎日を送ってるから、色んなところが杜撰だ。だが、ダチの事は何が何でも守り抜いてやる。だから、あんまし一人で抱え込んで無理すんじゃねぇよ。ただでさえ、今のお前にはもう・・・・・・」

「ストップ♪」

「！？」

銀時は思わずユーノの方へと振り返り、些か驚いた表情を見せたがユーノは人差し指を口に当てた状態を篤と、凛とした顔で銀時に感謝の言葉を贈る。

「・・・銀さん・・・ありがとうございます・・・！」

銀時はそんなユーノの言葉を聞き、鼻で笑う。

「ふん。お前が遭いたくなったら、俺や新八で良ければいつでも来いよ。そりゃ毎日来たら流石に迷惑だが、ダチに遠慮なんかするなよ。そん時はパフェぐらい、おごってやる。俺もお前に遭いたくなったら、何か土産でも持っていってやらあ。」

「はい。楽しみにしてますよ、銀さん――――――」

と、大方の話が終えたところで士が時計を一瞥し、銀時達に言って来た。

「おい、時間だ。そろそろ行くぞ。」

「ああ。」

銀時達は名残惜しい様子でユーノ達に別れを済ませると、士の元へと急いだ。

出発の直前、涙で目を充血させていたギンガ・ナカジマは新八の方へと近寄ってくると、徐に結っていた紫のリボンをほどいてそれを手渡した。

「新八さん・・・／／／これ、どうか受け取ってください。」

「ギンガさん・・・ありがとうございます！僕、一生大切にしますね！だから僕からも・・・これどうか受け取って・・・」

と、新八はお礼のつもりで自分のメガネをギンガに渡そうとしたが、直前で銀時と神楽の怒りを買ってしまう。

「違う！！！！！違う違う！！展開の仕方可笑しい！！何でリボンに対してそんな薄汚いメガネで釣り合うんだよ！！」

「新八！！お前純情路線にすり替えてんじゃねぇよ！！このダメガネが！！！」

二人は怒りの鉄拳を新八のメガネに向け、二人の拳を受けた新八のメガネは豪快に破壊され、新八は思わずムンクの『叫び』のような表情となって絶望した。

「ああ！！！僕のメガネが！！！！」

「たく。何やってんだかあいつは・・・・・」

「ま、偶にはいいかこんなのも――――――」

銀時は絶望する新八を引きずり士の後に続いて歩き出そうとすると、その直後ユーノが銀時を引き留めた。

「銀さん、待って。」

「？」

ユーノは銀時の方に目を向けると、被っていた特注の帽子を取り外し、埃を叩いてから銀時の方へと手渡した。

「ちょっと汗臭いかもしれないけど、結構丈夫だしいざって時に便利な機能もついてる。よかったら記念に貰ってくれませんか？」

銀時は帽子を受け取ると、目を瞑ってほくそ笑み自分もまたあるものをユーノに託すことにした。

「は。あんがとよ。だったら俺も――――――」

そう言って銀時が手にかけたものを見て、ユーノのもそうだが新八もそしてなのは達全員が大いに驚いた。

「え？」

「銀さん・・・それ！」

「万事屋・・・お前・・・」

銀時がユーノの方に手渡したのは、これまで幾度となく窮地を脱してきた自分の相棒とも呼べる洞爺湖木刀であった。

「そいつはおめぇにやるよ。ちょうどカレー零して臭かったところだしな。」

「おい！」

新八は上げる理由に思わず突っ込みを入れるが、ユーノはそれでも嬉しかったのか、快く銀時からの餞別を受け取ることにした。

「ははは♪銀さんらしいですね。じゃ、ありがたく貰っておきます。」

銀時の手からユーノの手へと渡された洞爺湖木刀。

今ここに、坂田銀時の魂はユーノ・スクライアへと託される。

木刀を手渡した後、銀時は柔かい表情で最後の最後まで世話になったユーノに正真正銘本当に最後の言葉を残す。

「――ありがとよ。ユーノ。」

「ええ。きっとまた、会える日を楽しみにしてますよ。」

二人がそうのように言葉を交わした後、残りのメンバーもまた機動六課の面々に最後の言葉を残した。

「本当に、長いようで短い間世話になった。」

「はい。こちらも大したことは出来ませんでしたが、色々とありがとうございます。」

「またいつでも遊びに来てくださいね。」

「その時は、私が相手になるぞ。」

「結局それかよ！」

シグナムのバトルマニア癖は、もう誰にも治すことは出来ないであろう・・・それこそユーノの他人優先主義と同じように。

士は前線メンバーに対してほくそ笑んだ後、ユーノに別れの挨拶を済ませる。

「それじゃユーノ。俺も行くぜ。」

「はい。士さんもありがとうございます。銀さん達を、しっかり送り届けてくださいね。」

「ああ。任せとけ。」

士はそう言うと、ユーノ達に背を向け灰色のオーロラカーテンを出

現させ、徐にその中を目指して前進していき、はやて達は銀時達に対して敬礼をする。

「機動六課一同、敬礼！」

「「「「「「「「「「はい！」」」」」」」」」」

銀時達は歩きながら後ろの方へと振り返ると、それぞれが世話になった人たちに手を振りながらカーテンの中へと消えていく。

「さようなら！！ギンガさん！！ユーノさん！みなさん！！」

「ヴィータ！！風邪ひかないようにアルな！！」

「金太郎！！今度美味いマヨネーズ持ってきてやるぞ！！」

「フェイトさん！世話になったな！！」

「ティアナ。またおめぇの精神ぐちゃぐちゃにしてやるからな。」

彼らがそう返すと、聞いていた前線メンバーもそれに応える。

「お元気で！！新八さん！！」

「沖田さんもちゃんと仕事してくださいね！」

「近藤さん、ファイトです！」

「土方殿！！私たちの友情は永遠ですぞ！」

「神楽!!またな!!」

そして、最後にこの男・・・坂田銀時はユーノから託された帽子を被ると、彼の方へと振り返り、振り返った銀時を見据えながらユーノは柔かい表情で言葉を吐いた。

「銀さん・・・・・・さようなら。」

「ああ・・・・・・ありがとうな、ユーノ。」

銀時はそう言うと、一番最後にカーテンの中へと入っていき、姿を完全に消すとその中でこの一言を残して元の世界へと戻っていくのであった。

「あばよ――――――」

その言葉が彼ら全員の耳にしっかりと届いた後、灰色のオーロラカーテンは忽然と姿を消し、この一月以上もの間同じ時を過ごした六人が帰還していったことにユーノ達は若干の寂寥の念を感じていた。

「行っちゃってね・・・――」

「嵐のような連中だったが、良い奴らだったな。」

「――――――」

ユーノは真顔を浮かべたまま、右手に握られた銀時から託された洞爺湖木刀を凝視し、そんなユーノを見ていた全員も笑顔を浮かべてこう言う。

「何はともあれ、お前も無事だったことだし・・・これでひとまず安心だな。」

恋次がそう言うと、ユーノも笑みを浮かべる。

「ですね。さて――――――」

ユーノはそう言うと、徐に隊舎の方へと振り返り、木刀を右肩に乗せながら銀時の様な気だるそうな声色でこう呟いた。

「“帰ってチョコレートパフェでも食おうかな?”」

「にゃはは。ユーノ君、銀さんみたい♪」

「頼むからあいつみたいにはなるなよ・・・・・」

なのは達は銀時の真似をしたユーノに思わずはにかみ、ユーノと共に機動六課の隊舎へと戻っていったのであった。

アンゴルモア・銀魂篇　完

また遭う時はきっと笑い合おう（後書き）

一「ああ・・・とうとう終わっちまったな・・・つうか、ユーノが魔導死神としての力失くなっちまったぜおい・・・」

ユ「あはは♪これで僕も能無し人間になってしまいましたね♪」

な「そ、そんな言い方・・・駄目だよ自分を卑下しちゃ・・・！」

恋「だが、力を失くしたこいつが一体何をしていくのか見当もつかないぜ・・・」

ル「まるでＢＬＥＡＣＨ　死神代行消失篇のような流れになってしまったな・・・」

ユ「これからの行く末が気になるかもしれないけど、次回からは取り敢えず番外編をお送りしてから新章の話をアップしていくよ♪」

一「え・・・何だって！」

ユ「どうしたんですか一護さん？」

恋「何かトラブルか？」

一「作者が・・・その・・・予定変更して新章アップするみたいだ・・・しかも設定は事件が終わって一年後だ・・・」

ユ「え・・・」

その言葉を聞いた瞬間、一瞬の沈黙が起こったのち全員は声を上げて驚いた。

全「えええええええええええええええ！！！！！！！！！！！！！！！」

次回予告

新章　ユーノ・スクライア外伝　魔導死神消失篇

ユ「あはは。いや～～～突っ走りすぎちゃいましてね、もう綺麗さっぱり何にもなくなっちゃいましたよ♪」

魔導死神の力を失い、普通の人間となったユーノ・スクライア。

カトゥーン事件より一年後、新たなアンゴルモアが動き出すとき、未だ嘗てない出逢いがユーノを待ち受ける。

１５０年の眠りから目覚める怪人「グリード」

欲望とアンゴルモアを食らい、人々を滅ぼす。

ス「グリード復活は、悪い事ばかりとは限らない」

アンゴルモアとメダルを巡る運命の物語が動き出す。

ユ「グリード・・・――」

ユーノス「メダルの元は、人間の欲望。」

グリード、伝説の七大元帥が現れたとき・・・・・力を失くした

ユーノの新たな力が目を覚ます。

ユ「変身！」

〈Ｓｌａｙｅｒ　ｍｏｄｅ〉

ユーノ・スクライア外伝　魔導死神消失篇

８月７日、朝８時スタート！

この章は「ユーノ・スクライア外伝・絆」にて掲載いたします。

アンゴルモア・銀魂篇登場人物紹介

万事屋

坂田銀時（さかた　ぎんとき）

声　一　杉田智和

「異世界関係／ユーノの関係者」を参照

志村新八（しむら　しんぱち）／ＡＭ２６（カトゥーン・ゼウス）

声　一　阪口大助（新八Ｖｅｒ）・藤原啓治（カトゥーン・ゼウスＶｅｒ）

身長１６６ｃｍ体重５５ｋｇ　８月１２日生まれ

１６歳。侍魂を学ぼうと銀時の元で働く、眼鏡をかけた一見気弱そ

うで地味な少年。登場人物の中では貴重なツッコミ担当。通称は「ぱっつあん」。一人称は基本的に「僕」で敬語を使うが、たまに「俺」になることがある。作中のあらゆるキャラのベースとなっている。非凡な人間が多い環境のせいで、自身の存在を忘れられたり、「ダメガネ」（「駄目なメガネ」の略）や「ヘタレ」などと揶揄される存在。最近では普段かけているメガネの方が新八の本体だと周囲から認識される有様。しかし、数少ない常識人としてのツッコミを入れる能力に長けており、銀時達も重要視している。基本的に純粋で優しく、誠実な心の持ち主だが、万事屋の他の二人と一緒に悪ノリをする事もある。作中では語り部になることも多い。予てよりカトゥーンが探し求めていた漫画世界と現実世界を統べる強大な力の器『マテリアル』で、拉致された後カトゥーンによってアンゴルモアもどき・及び本型ロスト・ロギア五つの力を体内に埋め込まれ、漫画世界の覇者「カトゥーン・ゼウス（ＡＭ２６）」となってしまう。その後、救出に来た銀時やギンガ達と戦闘モードへ移行、激闘を繰り広げることになる。最後は銀時の渾身の刺突によって埋め込まれていたアンゴルモアもどきが破壊され、元の姿に戻り、銀時によって救出された。ミッドチルダに来た当初からギンガとは馬が合うらしく、最終的に強い絆を紡ぐに至りギンガから紫のリボンを託され自身も目が目を託そうとしたが直前で割られてしまう。

技

技の多くはドイツ語を基調としているものが多い。

アイネ・ドロックウィル（Ｅｉｎｅ　Ｄｒｕｃｋｗｅｌｌｅ）

掌にエネルギーを圧縮させ、衝撃波を放つ。

テネフェルフィルゲル（Ｔｅｕｆｅｌ　Ｆｌ？ｇｅ）

悪魔の翼の異名をとる新八が使う飛行術。

漫画剣ー カリカトゥアー・シュイワートー（Ｋａｒｉｋａｔｕｒ Ｓｃｈｗｅｒｔ）

アンゴルモアの力を媒介にして生成する剣。切れ味は建物を一振りで破壊できるほど。

漫画膜ー カリカトゥアー・フィルムー（Ｋａｒｉｋａｔｕｒ Ｆｉｌｍ）

あらゆる外敵からの攻撃を守る絶対防御術。

ゼストロゴン（Ｚｅｒｓｔ?ｒｕｎｇ）

触れたものを植物が朽ち果てるように崩壊させる。

ブリュート・カイル（Ｂｌｕｔ Ｋｅｉｌ）

血の楔。背中に生やした羽を武器として飛ばす。

漫画の蛇ー カリカトゥアー・シュラゲー（Ｋａｒｉｋａｔｕｒ Ｓｃｈｌａｎｇｅ）

足元から漫画世界の蛇を召喚させ、敵の動きを封じる。

破滅の世界ー ヴェルト・デ・ゼストゥーホンー （Ｗｅｌｔ ｄｅｒ Ｚｅｒｓｔ?ｒｕｎｇ）

最大最強砲撃。アンゴルモアと本型ロスト・ロギア全ての力を集束させ、漆黒のエネルギー砲を両手から放つ。

贖罪の雨－アトニモント・レーゲン－（Ａｔｏｎｅｍｅｎｔ　ｒｅｇｅｎ）

漫画剣による目にも止まらぬ斬撃で相手を斬り捨てる。

かめはめ波

テトラカトゥーン「孫悟空」同様の技。身体に吸収された本型ロスト・ロギアとアンゴルモアの力により発動することが出来る。

神楽（かぐら）

声　－　釘宮理恵

身長１５５ｃｍ体重４０ｋｇ　１１月３日生まれ

１３~１４歳？宇宙最強を誇る絶滅寸前の戦闘種族・夜兎族（やとぞく）の生き残り。その肩書きに違わず、万事屋の中でもすば抜けて戦闘力が高い。　また、ジャンプ史上初の「ゲロを吐いたヒロイン」である。一人称は「私」。青色の瞳に赤橙色のセミロングの髪を両サイドで纏めてぼんぼりで団子状にしている美少女。普段は様々な種類のチャイナ服を着ている事が多く、“チャイナ”や“チャイナ娘”と呼ばれることがある。可愛い容姿とは裏腹に言動の悪さが目立ち、「超激辛チャイナ娘」などと言われている。普段は語尾に「~アル（カ）」や「~ネ」「~ヨ」「~ヨロシ」などをつけた胡散臭いチャイナ口調で喋るが、辛辣な発言をする場合などには普通に共通語や関西弁も喋る。自己中心的で型破りな性格あるが、可愛い動物の面倒を見ることを好み（そのためか動物からも好かれる）、母性的な面も強く、優しい一面を持っている。好きな食べ物は卵掛けご飯や

お茶漬けなどの炭水化物と駄菓子の酢昆布。その食欲は銀時や新八も呆れる程であり、銀時に「胃拡張娘」と言わしめた。作中で最も食い意地が張っている。ミッドチルダに来てからはヴィータと特に心を通わせていた。

真選組

近藤勲（こんどう いさお）

声　一　千葉進歩

身長１８４ｃｍ体重８０ｋｇ　９月４日生まれ。Ａ型。乙女座

２９歳。武州出身。隊士たちから多大の信望を集める真選組局長。「人のいい所を見つけるのは得意だが、悪い所を見つけるのは苦手」と言われるほどにお人好しな好漢。「清廉」、または「無垢」と称された事のある人間味の溢れる好人物で、隊員達の信頼を一身に受けている。かつては剣術道場の跡取りであり、その頃行き場の無かった土方や沖田らを門下生として迎え入れていた。真選組を結成した後、隊士達をまとめあげ、今まで引っ張ってきた偉大な人物。他のキャラより下ネタ的行動が目立つ事が多々あり、隊員達からは呆れられているようにも見えるが、時として沖田を殴りつけ厳しく諭すなど、「漢」らしい場面も見せる。数々の死線を潜り抜けただけあって、事に対して冷静で居られるものの、脇の甘い性格からボケとしての役回りの方が遥かに多い。「刀は侍の魂だ」と豪語するが、何かと刀を失う始末。しかし、局長を名乗るに相応しい実力を持っているのも事実。相手の刀と鎧さえも貫くほどの斬撃を披露出来るほど。本編では解説役の他に、実際に戦場に立って戦闘を繰り広げるなど局長らしい一面を見せている。

土方十四郎（ひじかた とうしろう）

声　一　中井和哉

身長１７７ｃｍ、体重６４ｋｇ　5月5日生まれ。Ａ型

２０代半ば。クールで熱い真選組の副長。後述のモデル同様、「鬼の副長」と呼ばれ恐れられる真選組のナンバー2。近藤と片栗虎からは「トシ」と親しみを込めて呼ばれている。勘が鋭く頭も切れるため「真選組の頭脳」としても認められ、近藤とは対照的にスパルタな言動で隊を引っ張り、全部で４５条にもなる（後に近藤が1つ足して４６条になった）局中法度をたった1人で定めた。瞳孔は常に開き気味である。ヘビースモーカーで、戦闘中であってもタバコを手放さない。昔は誰ともつるまぬ一匹狼で、近辺の道場に片っ端からケンカを売り、周りの侍たちから目をつけられていた。そんな中で近藤に拾われて恩義を感じて以来、近藤を心から慕い、自らの「大将」としている。隊の中でも人一倍真選組を大切にするが、それも幕府などのためではなくあくまで自身の大将である近藤のため。普段はニヒルかつ直情的、無愛想で意地っ張りな態度で、プライドが人一倍高く気難しい。一方で意外に面倒見が良かったり不器用な優しさを見せたりもする。金太郎と同じく極度のマヨラーであり、マヨネーズをかけて合わないものはこの世に存在しないと考えており、チャーハンやプリンなどにもあらゆる料理に大量にかけて食べる。沖田に大量のマヨネーズがかかっているカツ丼を「犬のエサ」と言われている。斎藤一の牙突に敗れ、それ以来斎藤を倒すべく独自に修練を積み重ね、漫画から拝借した「三刀流」を会得し、斎藤一を撃破している。ちなみに、金太郎とはマヨラー同士気が合う模様。

技

三刀流

鬼斬り

両手を交差させる構えから、突進しつつ斬る。両手の刀で左右の逃げ道を封じ、口の刀で上への逃げ道を封じる。

虎狩り

刀を背負うようにして構え、三本の刀を振り下ろす。斬られた人物の切り傷が虎の模様に似ていることから付けられた。

三・千・世・界

三刀流奥義。両手の刀を風車のように回転させながら、突進して一気に斬りつける。斎藤には見切られてしまい失敗に終わった。

牛針

闘牛の牛のように突進し、突きを繰り出す。

蟹獲り

相手の首を狙い、3本の刀（1本は逆手）で引き裂く。

豹琴玉

極端な前傾姿勢で重心を前に置き、回転しながら豹が狙った獲物を襲うように一気に飛び掛る。高速回転することにより破壊力は高まり、殺傷力を伴った旋風を巻き起こす。

鴉魔狩り

烏が宙で翼を広げるが如く、ジャンプした状態で周囲にあるものを

瞬時に切り裂く。

大仏斬り

巨大な建造物などをブツ斬りにする技。

二剛力斬

「一剛力羅(いちゴリラ)」「二剛力羅(にゴリラ)」の順で両腕に力を込め、斬撃を繰り出す。

二刀流

二刀流「居合」羅生門

腰の両側に1本ずつ構えた2本の刀で行う居合い。

一刀流

一刀流「居合」獅子歌歌(ししソンソン)

刀1本で行う居合い。呼吸を知る事で鉄をも切ることができる。

九刀流　阿修羅

阿修羅(アシュラ)は、三本の刀に鬼気をも加え、凄まじい闘気を立ち上らせることでその名の通り、敵に「九本の刀を持った」三面六手の鬼神、阿修羅の幻像を見せる技である。土方自身はワンピースの剣士同様この技を「鬼気“九刀流　阿修羅”」と称している。

阿修羅　弐霧銀(いちぶぎん)

「九刀流」状態で敵の急所に全ての剣撃を叩き込む。

沖田総悟（おきた　そうご）

声　―　鈴村健一

身長１７０ｃｍ体重５８ｋｇ　７月８日生まれ。蟹座

１８歳（ただし、酒を飲んだり、酒が好きという台詞や描写がある）。武州出身。副長の座（土方の命）を狙う真選組一番隊隊長。語尾に「～でさァ」「～ですぜィ」と付けてかったるく喋る江戸っ子口調が特徴。亜麻色の髪に蘇芳色の瞳と、見た目は童顔で甘いマスクのさわやかな美少年だが、腹黒・毒舌・ドＳである。黒いことを考えている時は不気味な笑みを見せる。短い時間で女性を自分に絶対服従の下僕に調教できる。しかしドＳな面を強烈に披露する一方、ナイーブで打たれ弱く不器用な面も持つ。土方にイタズラをする際に読者すら騙そうとしたり、自らも3日間飲まず食わずで楽しむなど、サドだけでは説明できないエキセントリックな性格の持ち主でもある。また「汚れた目でこそ見える、汚してならないものを汚させない」という侍道をもつ。またそのためなら自らの手を汚し、殺人鬼呼ばわりされるのを厭わないという一面も持つ。彼も銀時や土方同様、悪人を演じていることも多い。仕事をサボりがてらの昼寝の時には目玉が描かれた赤いアイマスクを愛用するなど悪ノリが大好きで、隊内で最年少の所為か子供のように自由奔放であり、土方や銀時から「クソガキ」と称される。しかし違法賭け施設である煉獄関を潰すよう万事屋に依頼するなど、自分なりの正義感もちゃんと持ち合わせている。剣の腕前は真選組随一で、作者いわく設定上は純粋に剣の腕だけなら近藤・土方を上回るらしい。近藤のことは心から慕っており、副長の座への執着も彼の場合単なる野心から来るものではなく、局長である近藤に一番近い場所だからである。近藤に刃を向ける者に対しては容赦なく、彼に仇なす者には普段は見

せない激しい怒りを見せるなど、近藤への想いは強い。本編ではどエスキャラとしてティアナの人格を変貌させた。

平賀源外（ひらがげんがい）

声　一　青野武

１２月１８日生まれ。身長１５９ｃｍ、体重５５ｋｇ。

江戸一番の発明家。自身と同じくからくり好きな息子がいたが、源外のからくりに対する姿勢に反発して家を出て行き、鬼兵隊に入るも幕府により粛清された。高杉に唆され、息子の敵を討つためにからくり軍団を率いて将軍を殺そうとしたが、銀時らの活躍によって失敗に終わった。その後は指名手配中ながらも『からくり堂』を営んでいる。銀時が愛用する原付の修理やたまの改造は彼が行っている。他にも、銀時の木刀や神楽の番傘を改造している。猿飛あやめの壊れた忍眼鏡を修理・改造した事も（全蔵曰く「兵器」）。銀時を「銀の字」、定春を「ポチ」と呼ぶ。からくりへのこだわりを持ち、「男のからくりは鎧・大砲・キャタピラ」が持論。銀時達をミッドチルダに送り込んだ張本人で、のちにそれはカトゥーンによる人為的な仕業であったことが判明する。

敵キャラボス

カトゥーン（勅使河原直哉）

声　一　古谷徹

アンゴルモアを所持し、今回の事件を引き起こした漫画以外の事に心を閉ざした、漫画キャラや漫画世界の現実化に異常な執念を抱く科学者。その目的のためにスカリエッティ同様過去幾つもの次元犯罪を起こし、広域指名手配がかかっている次元犯罪者。本名は勅使河原直哉。幼少時代に両親からのネグレクトを受け、友達もおらず

心を許せるものが漫画しかなかったことから上記のような思考を強く抱くようになった。ユーノや銀時に関する評価は高く、ユーノのクシャナーダ化についても逸早くに情報を入手していた。当初ユーノはカトゥーンの目的が“漫画キャラによる人間社会への報復”が狙いだと読んでいたが、真の目的は「マテリアル」である新八を利用し、現実世界と漫画世界を逆転させ全ての事象をひっくり返す事だった。また人の絆を必要以上に憎み忌み恐れ、それと同時に強い憧れを抱いている為、人から隔絶された次元空間に城を建造し隠れ住んでいる。それ故に城に乗り込んできた絆の象徴たるユーノの気高い魂に対して愛憎が入り混じった感情を抱き、今まで孤独に戦場で生きてきたが故に戦いでしか感情を表現出来ない為、彼のその魂を屈服させ絆を手に入るという歪んだ願望を隠し持っていた。カトゥーンが所持する武器は、身の丈を遥かに超えた大きさの薙刀である。ユーノとの交戦では単独で力を封じられたユーノを圧倒するが、銀時と一護達の加勢によってユーノの背後に現れた絆の光をその身に受け、急激に弱った所を最後ユーノが放った逆刃刀・真打による「天翔龍閃」の前に敗れ去り倒された。そして絆の力に屈服した弱り切ったカトゥーンにユーノが手を差し伸べてきたことで、漸く長年欲しがっていた人の絆を手に入れることが出来た。逮捕された後は、衛星軌道拘置所（ミッドチルダ司法の最高拘置施設である）に投獄され、自らの孤独を受け入れ真正面から向き合ってくれたユーノに感謝しそれに報いるため真っ当に刑に服することを選ぶ。

能力・技

漫画の支配者と自称するように、様々な世界の漫画からその能力を拝借することが出来る。

悪魔の実“グラグラの実”

漫画「ワンピース」より得た能力の一つ。破壊力においては最強の能力であり、世界を滅ぼす力とも呼ばれている。数ある超人系悪魔の実の中でも最強と言われている。大気を砕いて直接振動させて、衝撃を一点に集中させる事で相手を直接攻撃したり物理攻撃を防ぐことも可能

六式

６種類の超人的体技。長い訓練を重ね全身を武器とする。６種類すべてを体得した者を六式使いと呼ぶ。

剃（ソル）

瞬発的に加速し、消えたように移動する技。その際地面を瞬時に１０回以上蹴っている。

嵐脚（ランキャク）

蹴りで呼び起こす鎌風。以下はそのバリエーションである。

“嵐脚「白雷（はくらい）」”

上方から撃ち落す嵐脚。

“嵐脚「乱（らん）」”

嵐脚の乱れ撃ち。

ギガノ・レイス

掌から大きな重力弾を撃ち出す術。

ラシルド

目前の地面から、巨大な長方形の雷の盾を出現させる術。盾は敵の術に電撃を付与してはね返す。

バオウ・ザケルガ

掌から放出した力を巨大な雷の竜として放つ術。カトゥーンが使うものの中で最も威力があると同時に彼自身が最も気に入っている技。

地球投げ

人間離れした腕力で敵を握りしめ、回転数をかけてから投げ飛ばす。

ハンバーグ

熱せられた鋼鉄のような拳に炎を纏わせて敵を殴る。

神の決断（ラ・デシション・デ・ディオシス）

薙刀を片手で振り回し敵を切り払う。

神々の決断（デシション・デ・ロス・ディオシス）

神の決断の強化版。薙刀を両手で大きく振り回し周囲の敵を一掃する。

羊肉（ムートン）ショット

けた外れに強く威力の蹴りを相手に叩き込む。

テトラカトゥーン

斎藤一

声　一　鈴置洋孝

身長１８３ｃｍ、体重７１ｋｇ。天保１５年1月1日生まれ。血液型Ｏ

テトラカトゥーン筆頭にして、漫画「るろうに剣心－明治剣客浪漫譚－」に登場する人物。元新選組三番隊組長。新撰組でも屈指の剣腕の持ち主で、幕末時代からの剣心の宿敵。幕末の動乱・戊辰戦争・西南戦争を戦い抜き、明治時代における新撰組の数少ない生き残りとなる。維新後は藤田五郎に名を改め、生涯を新撰組の一員として悪・即・斬の信念を貫き続けるため明治政府にの警官となり、表向きは警部補ながら裏では警視庁の密偵として暗躍する。容姿は「痩せた狼のよう」と称される。性格は非常に冷徹かつ無愛想な一匹狼。「阿呆が」が口癖で誰に対しても突き放した態度を取る。流派は溝口派一刀流。無数の死線を潜り抜けた経験から相手の本質を見抜く想像力・洞察力に優れる。作中の戦いでも虚勢を張る相手の本心を見透かし、その奥に隠された弱さを鋭くえぐる。事ある毎に煙草を吸っており、周りからは忌み嫌われている。土方とは因縁の関係で結ばれ、最終決戦に於いてはどちらが最強かをはっきりさせるために土方と対戦。奥の手である牙突のレパートリーを繰り出し一時は土方を瀕死に追いやるも、窮地に陥ったことで鉄を斬る力を会得した土方に敗れる。

技

牙突

刺突の究極型ともいえる斎藤独自の必殺技。刃を地面に水平な状態で相手を突き、避けられても横薙ぎに派生出来る平刺突（ひらづき）を絶対の必殺技にまで昇華させたもの。平刺突の考案者は新撰組副長土方歳三。斎藤は牙突以外の目立った技を持っていないが、それは戦場では同じ相手と二度以上相対する事は極めて稀であり、見切られる心配をして小技を考案するよりも、己の得意技を徹底的に磨き上げ、戦ったその場で相手を一撃で確実に仕留めるに足りる威力を持たせる方が合理的であるという理論に基づく。技の性質は、壱式、弐式、参式、零式に別けられ、間合いの長さに関係している。

牙突・壱式（がとつ・いっしき）

いわゆる通常の牙突。平刺突なのは変わらないので突きを避けられても横薙ぎへの派生が可能。また剣が無くても素手で応用できる。突進力に関しては九頭龍閃に匹敵するという。

牙突・弐式

上方から突き降ろす上段型の牙突。斎藤が本気を出した時に使う技であり、正真正銘の牙突。壱式に比べて刀を斜め上から突き下ろすように構える。強力だが、壱式よりも長い間合いを必要とする。

牙突・参式

対空迎撃用の牙突。別名“対空”の牙突。上空にいる相手に向かって、下から突き上げる。

牙突・零式

間合いの無い密着状態から上半身のバネのみで繰り出す強力な牙突。対抜刀斎用の奥の手。手加減抜きでまともに決まれば相手の上半身がちぎれて吹き飛ぶほどの凄まじい威力を誇る。

牙突・六刃

超高速で敵に接近し一瞬で牙突の六連撃を繰り出す。技の性質は九頭龍閃に酷似している。

うずまきナルト

声　一　竹内順子

テトラカトゥーンの一人にして、漫画「ＮＡＲＵＴＯ－ナルト」に登場する人物で主人公。木ノ葉隠れの里出身で、四代目火影こと波風ミナトと渦の国出身のくノ一であるうずまきクシナの間に生まれた。父譲りの金髪と青い瞳を持つ。九尾の人柱力。名前の由来は、自来也の小説の主人公。自来也は「ラーメンを食べながら考えた適当な名前」と流石に諫めるも、ミナトとクシナ両名の強い希望により付けられる。生まれたばかりの頃、ミナトの手によって当時里を壊滅状態に陥れていた妖怪九尾の妖狐を体内に封印させられた。そのせいで九尾の妖狐を恐れる里の大人達から差別され、自分と同年代の子供達にも疎まれながら育つ。その反動から周囲の目を自分に向けさせようと、歴代の火影の顔岩に落書きしたり授業を抜け出したりと里に散々迷惑をかける問題児だった。様々な忍術を駆使してユーノ達を追い詰め、機を熟したところで新八を拉致。その後の最終決戦で恋次達と対戦。サクラと共に仙人モードの力を解放し当初は圧倒するも、途中に懸けつけて来たスクライア商店メンバーの力と恋次達のコンビネーションの前に敗北するが、消滅の寸前駆動路へと向かい予定よりも早くプリズムシードを起動させその後紙切れ

となった。

技・忍術

螺旋丸

チャクラを掌上で乱回転させ圧縮し相手にぶつける。これを食らった相手は螺旋状の傷を負い、さらに螺旋を描いて吹き飛んでいく。形態変化を極限まで高めた術であり、これ単体でも凄まじい威力を誇る。印を結ぶ必要はないが、複雑なチャクラコントロールを必要とするため会得難易度は超高等忍術。基本的に片手で発動できるが、ナルトは一人でチャクラを抑えこむことができないため、2人に影分身して発動する必要がある。

影分身の術

残像ではなく実体を作り出し、物理的攻撃の可能な上忍級の高等忍術。分身体が体験したことや目撃したものは分身体が消えたとき、術者の記憶として残るので、危険な場所への考察活動やスパイ活動などを安全に出来る。発動時にはチャクラが本体から各分身体へ均等に分けられるため、瞳術を用いても本体を見分けることはほぼ不可能。反面分身体の疲労も術者に還元されてしまい、さらには分身体の数だけ本体のチャクラも分割されるため、チャクラの少ない者には不向き。様々な術に応用することが可能。分身体が陽動になり敵の注意を引き、本体で仕留めるパターンがよく使われる。また、他の分身系術とも共通するが、オリジナルが意識不明、あるいは死亡した場合などには分身体も維持できず解除される模様。

多重影分身の術

禁術。通常の影分身より遥かに多くの分身体を作り出す。チャクラの消費量があまりにも多いために禁術とされている。ナルトの戦闘スタイルはこの術を基本としている。基本的には影分身の術と同術。

口寄せの術

血で契約した生き物を好きなとき・好きな場所に呼び出す時空間忍術の一種。使用の前提で親指に血を塗らなければならない（親指を噛んだりして血を出した場合、使用後に傷は治る）。口寄せされた生き物を従わせることができる。ナルトが契約したのは蝦蟇。

木の葉隠れの術

無数の木の葉を出現させ、姿を隠す。

仙法・風遁螺旋手裏剣

風遁・螺旋丸をさらに高めた術。形状的には螺旋丸を核にして風のチャクラが巨大な手裏剣の形を象っている。術使用時は周辺に振動と轟音が起きるほど強力で、相手に当たると対象を中心に螺旋丸が展開、表面にコーティングされていた風のチャクラが螺旋丸の乱気流に巻き込まれる形で中心部分に一気に収束、風遁系のチャクラが針状に形態変化を起こし、攻撃「濃度」と表現されるほどの攻撃回数によって、術を受けた者の細胞の経絡系を全て損傷させてしまう。リスクが非常大きくゼロ距離でしか当てられなかった術だが、ナルトは仙術チャクラを練り込むことで「手裏剣」の名のごとく術を敵に投げ飛ばし、その近くで円形に拡大し展開する術とした。

仙法・螺旋丸

螺旋丸を強化した術。仙人モードの状態で使用可能。

仙法・蛙鳴

二大仙蝦蟇のフカサク、シマが舌を硬化させて超音波の如く高い鳴き声を発して相手の身動きを封じる。

蛙組手

己の周りにある自然エネルギーを利用し、そのエネルギーがナルトの体の一部となって、敵を攻撃する。

エドワード・エルリック

声 - 朴？美

テトラカトゥーンの一人にして、漫画「鋼の錬金術師」に登場する人物で主人公。通称「エド」。史上最年少で国家錬金術師の資格を得た錬金術師で、「鋼」の二つ名を持つ（なお、本作の題名にもなっているこの二つ名「鋼の錬金術師」は、エドの右手と左足が機械鎧であることに由来する）。大陸暦１８９９年の冬生まれ。１６歳。アメストリス国の東部の街・リゼンブール出身。本来右利きであるが、機械鎧にした関係で細かい動作は左手を使う。錬金術師である父の影響か、幼少時より弟アルフォンス・エルリック（アル）と共に錬金術の初歩を独学で修得、才能の片鱗を見せる。５歳の頃に母を亡くしたことから、弟と共に人体錬成によって母を生き返らせることを目標とし、９歳の頃２人の師、イズミ・カーティスの下で錬金術を学んだ後に帰郷し、１１歳で人体錬成を行うが失敗。失敗の代償は大きく、エドは左足を、アルは肉体の全てを失った。更にエドはアルの魂を錬成したため、対価として右腕をも失ってしまう。深い絶望に陥ったエドであったが、マスタング中佐（当時）の勧め

で国家錬金術師になる事を決意する。その後は、失った右腕と左足を機械鎧（オートメイル）と呼ばれる義手と義足で補い、１２歳にして国家錬金術師の資格を取得。「覚悟を決めるため」として自らの家を焼き払い、失った手足と弟の身体を取り戻す方法（賢者の石）を探すため、アルと共に旅に出る。明神弥彦をその手にかけ殺害し、忠実なカトゥーンの部下としてナルトともに暗躍していた。最終決戦では弟アルフォンスと共にギンガ達と対戦し、「新八を守る」為に戦うことを決意した彼女が新たに手に入れたトライアルカートリッジのマキシマムドライブ「マシンガンスパイク」を受け撃破される。

孫悟空

声　一　野沢雅子

テトラカトゥーンの一人にして、漫画「ドラゴンボール」に登場する人物で主人公。地球育ちのサイヤ人。サイヤ人名は「カカロット」。惑星ベジータの消滅時には、地球に侵略目的で送り込まれていたために生き残った。最下級戦士の身であったが、さまざまな師のもとでの修行と強敵やライバルとの死闘を経て、史上最強の戦士となる。多くの仲間にも恵まれ、家庭を持つ。本編ではカトゥーンによって記憶を操作され、手駒の一人なっているが頭の悪さは四人中ダントツ。最終決戦では一護と対峙し、一刀月牙を使った一護の前に敗れ去る。

技

かめはめ波

亀仙人が５０年かけて開発した技。亀仙人が技を見せた直後、小さな威力ながら真似して見せたのが最初であり、天下一武道会でも使用し亀仙人を唖然とさせた。その後も悟空は長年必殺技として使用

し続けた。独自のアレンジとして、足からの放出や曲げて見せたり、2発を別々に放ちフェイントとして活用したりした。

残像拳

すばやい動きで残像を残し、相手に自分の位置を誤認させる。発生させる残像の数によって「三重～」「多重～」とも呼ばれる。相手が残像に攻撃を加えるよう誘導し、その際に相手の隙をつき攻撃を加える。

界王拳

全身の気をコントロールし、一時的に通常の何倍ものパワー・スピード・防御力を発揮させる。発動の際には体に大きな負担がかかるため、使用者の力量以上のパワーアップは非常に危険。気のコントロールは非常に高度なものが求められ、考案者の北銀河の界王ですら極めることはできず、悟空が初めて体得に至った。サイヤ人編でのナッパ戦で初使用。ベジータ戦では2～4倍、フリーザ戦では10倍・20倍で使用された。使用時は全身が赤く発光し、オーラを纏う。劇場版を除き、超サイヤ人への変身が可能になってからは使用されなくなった。ただしアニメでは「あの世一武道会」のパイクーハン戦にて、超サイヤ人の状態のまま「超界王拳（スーパー）」なる技を使用したことがあった。この技の特徴については触れられていない。

メテオスマッシュ

一護に使った連続攻撃。相手の腹にパンチを叩き込み、頭に飛び蹴り、蹴り落とす。

瞬間移動

知っている者の気を感じとり、瞬時にその場所まで移動する。そのため気を感じることのできない場所へは移動できない。

舞空術

全身の気をコントロールしながら放出することによって、空中を飛行する。

気円斬

気を円盤状のカッターに練り上げ、その物体を寸断する親友クリリンが独自に編み出した技。

１０倍かめはめ波

超サイヤ人状態でのみ使えるかめはめ波。悟空は１０倍を「じゅうべぇ」と発音している。具体的な性質は説明されていないが、撃つ直前に手に気を集める時に、普通のかめはめ波より少し大きい隙があり、悟空自身は「オレの最高の技」と発言しており、超サイヤ人状態での最強技である。

絆の証（前書き）

ユ「本日は数回にわたってお送りするユーノ・スクライア外伝の日常篇。別小説、ユーノ・スクライア外伝・絆では語られなかったカトゥーン事件後の情景や番外編をお送りいたします。本日最初の話は、リボーンドラマＣＤを完全にぱくったものです。では、お楽しみに下さい♪」

絆の証

〈なのはＳｉｄｅ〉

これは、機動六課戦技教導官、スターズ分隊隊長高町なのはが記した報告書の抜粋である。

“アンゴルモア事件を切っ掛けに始まったあの事件――――――『カトゥーン事件』が終結したのは、新暦００７９年の１１月のことでしたね。

あの時の事は、今でも思い出します。

異世界からやってきた真っ直ぐな魂を持った銀髪の侍、坂田銀時さんを始めとする個性豊かな万事屋メンバーに、ちょっと癖はあるけど銀さんと同じく信念に生きる真選組の皆さん。

そして、この次元世界に平和をもたらし、人と人との絆の大切さを改めて教えてくれた、次元世界最強の男こと、翡翠の魔導死神で、私の魔法の先生でもあり、世界で一番大切な――――――ユーノ・スクライアこと、ユーノ君。

だけど、そのユーノ君はもう魔導死神ではない。

自分の全ての力を引き替えに、ユーノ君は虚数空間から抜け出す際、魔法の力も死神の力も失ってしまいました。

その話を聞いて、漸く落ち着いて理解出来た私ではありますが、今でも思います・・・どうして損をするのはいつもユーノ君ばっかりなんだろうと。

それでもユーノ君は、少し寂しげな表情でいつも通りの笑みを向けてくる。

本当に・・・優しすぎるというか、お人好しと言うのか、何とも言い難い心境ではありますが、そんな大きな事件が無事に解決し、事件後のドタバタが落ち着いて、銀さん達をお見送りした１１月の中ごろ――――――ユーノ君がちょっとしたサプライズを用意してくれました。”

〈六課Ｓｉｄｅ〉

１１月の中ごろ、ここ機動六課司令室ではユーノを始めとする前線メンバー総勢２２名は、カトゥーン事件終結後に都市部で起こった事件に関して、１０８部隊との合同捜査の為の会議を開いていた。

「ぐがぁ～～～～～～」

「ひゅる～～～～～～♪」

「書類に目を通したか？」

なのはなど六課創設当初からの人間、ユーノや金太郎、それに死神である吉良とルキアは真摯に会議の内容に耳を傾けていたが、その一方で会議中にもかかわらず吉良の横で口を開けて爆睡する恋次と、退屈のあまり口笛を吹き出す浦太郎。

その光景を目の当たりにした瞬間、会議を進行するクロノは大きくため息をつき、呆れかえった様子でシグナムとルキアが二人を叱咤

する。

「おい、浦太郎。口笛を吹くな！」

「恋次！起きろ！！」

「のっは！」

恋次は熟睡しているところをルキアの猛烈な叩きを受け、机に顔を打ちつけてから顔を赤く腫れ上がらせ目を覚ます。

ヴィータは一通りの資料に目を通してから、未だ欠伸を書く恋次や他の前線メンバーにこう言った。

「次の捜査はかなり込み入っている。資料を頭に叩き込んで、気引き締めて行けよ。」

「ふぁ～～～」

隣に座る吉良は頭を抱えながら、敢えて尋ねる。

「ちゃんと聞いていたのかい、阿散井君？」

「あ・俺様？」

「君はそろそろ会議中に寝る癖を直さないといけなんじゃないのかい？」

「しゃーねーだろ。眠いもんは眠いんだ。参加してるだけ、真面目だと思えよ。」

すると、不貞腐れた態度の恋次を見た金太郎が強面の顔を近づけ恋次とは目と鼻の先とも言える至近距離から言ってくる。

「行けませぬぞ恋次殿・・・そのような発言は・・・」

「ぐ！か、顔近けーよ・・・／／／もうちょい下がれ金太郎／／／」

この時ばかりは純粋に恐怖を感じる恋次は椅子を動かし後ずさると、二人の間に入ってきたのは先ほど注意を受けたばかりの浦太郎。

「まぁまぁ金ちゃんもその辺にしてさ。恋次さんだって、ちゃんと三番隊隊長としての自覚ぐらいあるはずだよ。仕事は仕事できっちりやるって♪」

「そ、その通りだ！！流石は浦太郎！！分かってるじゃねぇーか！！」

フォローを出してきた浦太郎に親指を突き立てる恋次に、鬼太郎は完全に呆然とする。

「たく・・・調子の良い事を・・・」

他の前線メンバーも苦笑をしながら恋次や浦太郎達を見つめる中、元・翡翠の魔導死神で現在は普通の人間となった、この物語の主人公・ユーノ・スクライアだけは無言のまま何か物思いにふけった表情を浮かべていた。

そんな折、恋次が立ち上がって頃合いがついたとばかりに勝手に会議の終了を宣言する。

「よし！会議もこれで終了！！おつかれさましたー！」

「私も仕事が残っておるのだがな」

白鳥もそれに便乗して立ち上がると、部隊長のはやてが言って来た。

「まぁ待ってください。他に伝えることはないかな、ユーノくん？」

「・・・――――――」

はやてが尋ねてきたにもかかわらず、ユーノは無言のまま何も返事を返さない。

なのはは気になってユーノに再度問いかける。

「ユーノ君？」

「・・・ん。ああ・・・・・・」

「どうしたの、考え事？」

「いや。大丈夫だよ。みんな、引き続き頼んだよ。」

「「「

上がり、それぞれ伸びをしながら談笑を始める。

「う～～～どうも会議ってのは性に合わねぇな。」

「もうお昼すぎですね。」

「おお！道理で腹が鳴る訳だ！」

「いかかですかな？昼食は私が自慢の料理を披露いたしますが？」

「わっは！！やったねティア！！金太郎さんが料理してくれるって！！」

「あんまりはしゃがないのみっともない。ありがとうございます、金太郎さん。」

「ユーノ先生も食べますよね？」

エリオがそう言って来ると、ユーノは後片付けをしながら躊躇いがちに言って来た。

「ああ・・・・・・僕は・・・・・・昼食はいいんだ・・・」

「ん？」

「何だよ、たべねぇのか？」

「もしかしてユーノ君、何かあるの？」

「うん――――――ちょっと用事があってね。また後で♪」

ユーノはそう言って司令室を後にしようとすると、心配になった悪友のクロノが言ってくる。

「待て、僕も付いて行こう。護衛がいた方がいいだろう。」

「いや、一人で大丈夫だ。じゃあね、みんな。」

「あ、はい・・・それじゃまた」

一同は今回のユーノの言葉を唖然とした表情で見詰めながら、柔かい笑みを浮かべながら部屋を後にするユーノを見送った。

ユーノが司令室を後にすると、この度のユーノの発言と単独行動に関して白鳥は吐息を吐きながら呟いた。

「ふう～～～珍しいものだな。」

「ああ。店長がどっかの鳥と違って一人で外に出かけるなんてよ・・・」

「どういう意味であるか？」

「いいや。全く以て大意はねぇさ。」

「本当であるか・・・」

個人的に仲の悪い白鳥と鬼太郎が鋭い表情を向けながら睨み合っていると、フェイトやはやてなど十年来の付き合いのある者、そしてそんな彼を心から慕うフォワード陣は疑問を浮かべる。

「どうしたのかなユーノ。なんか・・・私達に行先を言いたくない様にも見えたけど？」

「魔導死神の力を失い、体調も完全に回復してからは初めての事やしな。」

すると、はやての言葉を聞いた途端、なのはは眉間にしわを寄せ考え込むように下あごに手を添えながらこう言った。

「いや・・・違う。」

「なのはさん？」

「どういう意味ですか？」

「ここ三日ほど、ユーノ君はふらっと行先も付けずに出かけることが多かった・・・」

「おや・それはまた」

「だけど今日のあの態度は確かに妙だったかな。」

「あのフェレットもどき・・・・ひょっとしてなのはに黙って浮気でもしてるんじゃないのか？」

「「「「「う、浮気!？」」」」」

クロノの発言にフォワードメンバー声を揃えて驚き返ると、浮気と言う言葉を聞いた瞬間、なのはは一瞬にしてレイジングハートを起

動させ、カトゥーン事件の際に本来の力を解放したレイジングハート・エクストリームカノンを起動させると、間髪いれずにクロノ目掛けてディバインバスターを叩きこむ。

〈Ｄｉｖｉｎｅ　ｂｕｓｔｅｒ〉

「のあああああ！！！！」

クロノは桜色に輝く凄まじき砲撃を放り込まれ、昇天寸前の状態にまで追い込まれると、恐怖のあまり身震いする前線メンバーに見られながら、なのはは冷たい笑みを浮かべてくる。

「――――クロノ君。新しくなったレイジングハート・エクストリームカノンの餌食になりたい？それとも、妹のフェイトちゃんの鎌で命を刈り獲られたい？」

「（目が完全に別世界の住人になってる／／／完全に魔王を通り越して大魔王へと進化している／／／／／／）」

フェイトは今のなのはにそのような印象を受けながら尻お餅をつき、その義兄であるクロノは命欲しさに往生際の悪い態度をとる人間の様に絶対的な存在と化しているなのはに言って来た。

「じょじょじょ冗談だ！！言葉の綾と言う奴だ今のは！」

なのはは、それを聞き、周りの者からの言葉を聞くと、武器を収めて攻撃を止める。

そして、九死に一生を得たクロノが安どのため息をつくと、鬼太郎は舌打ちをしてから軽はずみな言葉を口にした彼に激怒する。

「け！この腹黒野郎。あんましふざけた事言うと俺達もただじゃすまねぇからな！」

「だけど店長に限って浮気なんて・・・する訳ないよね？なのはちゃんぞっこんでヴィヴィオの父親だよ？みんなの模範となるような人がそんな不埒なことするとは考えにくいって。」

「分からぬものだぞ。もともとなのは、もとい中の田村ゆかりはフェイト役の水樹奈々と親友（まぶだち）を超えたようなものだと森田から聞いた。多分日頃仕事上では仕方なく水橋殿とああした会話をしていることに愚痴を零していたところを水樹が舐めるように慰めると同時にたぶらかして、この作品でも現実世界のようになのはを百合の世界に戻そうとしているのかもしれぬぞ。」

ルキアが作者の気持ちを代弁して清々し顔でそう口にすると、聞いていたはやては焦燥感に満ちた顔を浮かべて言って来た。

「なんちゅう危ない内側トークしてんですかそれ！！！大体それって作者の勝手な妄想と憶測でしょうが！！！」

「はやてちゃん、落ち着いてくださいよ！ユーノさんに限って、浮気は天地がひっくり返っても先ず絶対にありえないと思います！それより考えなくてはならないのは別の可能性ですよ！」

「別の可能性・・・ですか？」

リィンの鋭い指摘を耳にすると、吉良やザフィーラも真剣に考える。

「確かに、僕達にも話せない事情があるとしたら余程の事なのかも

しれない。」

「そうだな。機動六課の活動規模も、アンゴルモア捜査以降急激に広がっているし上、カトゥーン事件以降管理局でも、次元世界全体でもスクライアを疎ましく思っている連中は増える一方だ。」

確かに、ユーノはこれまでのアンゴルモア事件において、並々ならない活躍を見せて来ている故、良くも悪くもその名と素性が多くの世界で知れ渡っておることに加え、先のカトゥーン事件ではユーノが地獄の呪いによって暴走を起こしたことが切っ掛けで、管理局上層部の一部からは彼を排除しようとする動きが顕著に表れてきた。

なのは達はそれを聞くと、渋い顔を浮かべて、直後になのはの砲撃を受けた満身創痍のクロノが眉間にしわを寄せて呟く。

「その中で、卑劣な手段を使う者がいないとは限らない・・・か」

「ああ・・・その通りですよ！だとしたら・・・！」

「だとしたら、あまりよくない事態も考えられます。」

「例えば、もし街の人々を人質に取られでもしたら――――――」

キャロが徐にそのような推測を立てて周囲に口を漏らすと、聞いた瞬間前線メンバーの表情が一様に渋くなり、恋次やティアナはユーノの性格上から次のように言った。

「ユーノの性格から考えて、悪党どものどんな要求にも飲むだろうな。」

「たとえ、それが自分を危険にさらすことだとしても――――――」

すると、ティアナの発言を聞いた直後、浦太郎は些か不機嫌そうな顔で口を挟んできた。

「気に入らないよその言い方。僕には、態と不安を煽っているようにしか聞こえないけど？」

「あ、すみません。そんなつもりはなかったんです・・・！」

「でもあり得ない話じゃないよ。それなら、ここ最近の単独行動も説明がつくよ。」

「なのは、どうする？」

なのははこの度の事を聞かされ、もう一度真剣に深く考え始めると、恋次や鬼太郎が即座に行動の実行を促した。

「ここで心配してても始まらねェ。ユーノの後を追って真相を突き止めようぜ。」

「そうだな。店長に何かあってからじゃ遅せぇ。」

と、そんな時・・・白鳥が書類片手に部屋の外へと出ようとする。

ギンガはそれを見るなりすぐさま声をかける。

「・・・って、白鳥さん何処行くんですか！？」

「言っただろ。私は仕事が残っている。それに、どうせ主らのこと

だ。全員でユーノ店長を追いかけるつもりなのであろう。だとしたら、留守は誰が務める？」

「あ・・・」

「ザフィーラとシャマル殿だけでは何かと心細い。ここは私も残る。主らは早くユーノ店長を追うといい」

鬼太郎はこの時の妙に上からの物の言い方をしてきた白鳥には癇癪を起こしかねる。

「上から目線な言い方で何か癪に障るな・・・／／／」

「まぁ抑えて抑えて。」

なのはも意を決して、ユーノの後を追うことを全員に伝える。

「兎に角私は行くよ。今なら、まだユーノ君に間に合うかもしれないし。」

一度決めたことは絶対に曲げない性格の一途ななのはは、外へと向かったユーノの捜索するため勢いよく部屋を飛び出していく。

「あ、なのは！ちょっと待ってよ！」

「なのは、先に行くんじゃねぇよ！」

一同は足早に抜け出したなのはに戸惑いを覚えながら自分たちもその後をついて行く。

こうして、機動六課主要前線メンバーの中で残ったのは白鳥とザフィーラ、そして医務室のシャマルだけでになった。

司令室に残っていた白鳥とザフィーラは互に顔を見合わせてから徐に呟く。

「行ってしまったな――――――」

「全く・・・相も変わらず心配性なものだな。さて、私は仕事に戻るとしよう。」

白鳥はそう言ってザフィーラを後にし部屋から出ていくと、その直前にザフィーラが放任主義的場白鳥に申し付ける。

「お前も少しは心配したらどうなのだ――――――」

さてさて、ユーノは一体なのは達に内緒で何処へ向かったのであろうか？

◇

〈前線メンバーＳｉｄｅ〉

その頃、昼食もとらずに一人市内へと向かったユーノ・スクライアは、カトゥーン事件以前から信仰の熱い市民と交流を交わしながらある場所へと向かって居た。

「どうですか？最近の調子は――――――そうですか。それはよかった♪」

ユーノは笑みを浮かべて話を聞いている中、そんな彼の事が気になって彼の後を追って来た恋人のなのはの方はと言えば、建物の陰に隠れると、ユーノと話をする人間の顔を窺う。

「（ユーノ君と話しているのは、この間悪徳な高利貸しからユーノ君自らが解放したって言うお店の御主人さんか・・・・・・）」

なのはは、ユーノの歩くペースに合わせて尾行を続けながら、警戒を続ける。

「（幸い人通りも多いし、距離を保てばいくら勘のいいユーノ君でも――――――）」

と、そう思っていた直後、不意になのはの不審な行動を見かけた娘のヴィヴィオが声をかけて来た。

「なのはママ。こんなところで何してるの？」

「ふぇ！ヴぃ、ヴィヴィオ！？何でここに！？」

「ノーヴェの所から帰ってきたところ。それより、あれってユーノパパ？パパと話してるのって魚屋さんの御主人だよね？」

ヴィヴィオがそう言って来ると、それに便乗するかのように次々と他の前線メンバー各位も物陰からユーノを窺いながら魚屋の主人と話をするユーノを見守った。

「随分真剣な話の様ですね。」

「気になりますね、一体何話してるんでしょうか？」

なのははあまりの大所帯に思わず声を上げる。

「わあああ！！みんなこんなに一遍に！！！」

「大声出すなよ！あいつにばれるだろうが！」

「いや、既にばれているかもしれぬぞ。」

「スクライアの身に危険が迫っているとなれば、我々とて黙って見過ごすわけにもいかぬ」

「ああ。力を失くしてただでさえ危なっかしいのに更に危ねぇことに巻き込まれたらたまったもんじゃねぇしな。それに、私達だってあいつを守るって決めたんだ。」

「暇つぶしの間違いじゃねぇのか？」

「んだと！！」

鬼太郎の軽薄な発言にヴィータが怒鳴り声を上げると、それを危惧した一同が急いで止めにかかる。

「止して下さいよこんな街中で喧嘩なんて。これは遊びではなく立派な任務なんです！」

「せやな。ユーノくんを思う気持ちはみんな同じや。」

「ああ。万が一浮気だったらその相手がどんな相手か気になるところだしな。」

またしてもクロノがそのような発言をすると、今度は鬼太郎・フェイト・ルキアの三人がそれぞれ武器を構え、形相を向けて来た。

「「「てめぇは黙ってろバカクロ！！」」」

「ひえええええ！！！」

一同がクロノにあきれ返る中、なのは達とは別にゆっくりとした足取りである場所を目指すユーノに気を配りつつ、エリオが口にする。

「それに、万が一のときは人が多い方が優位な筈です。」

「その通りであります。」

「ママ。みんなでユーノパパの後を追おう。」

「うん。そうだね。じゃあ、ユーノ君の尾行任務、始めるよ！」

「「「「「はい！」」」」」

こうして、ヴィヴィオを含めたなのは達１９名はユーノ・スクライアの尾行を始めるのであった。

傍目から見れば今のなのは達の動きは市民の目からは異様なもの以外の何者でないことは迷惑であったが、それでもなのは達は自分たちの羞恥を吹っ切りユーノを想って尾行を続ける。

「今のところ、ユーノさんには気づかれてないようですね。」

「ああ。幸運だな」

「本当は気づかれているのではないだろうか？」

「ってうるせーんだよ！いいから黙ってろ！」

と、そんなクロノの発言に喝を入れるのは恋次。

しかし、それでもヴィヴィオやなのはもこれほどの大所帯であるにもかかわらず全く自分たちの気配に気づかないでいるユーノには疑問を抱く。

「でも変だよ。いつものパパなら気づかない筈ないよ。況してこの大所帯・・・」

「それほど追い詰められてるってことかな・・・ユーノ君――――――」

と、そんな折だ。

はやてがユーノを窺って居た時、彼女は彼に近づく人影を捕える。

「あ・誰か接触してきたみたいや」

「何!?誰だ!」

一同が表情を一変させてユーノを窺っていると、浦太郎は近づいて来た人影の詳細な情報を口にする。

「小さな女の子だよあれ。」

「おお！？しゃがんじまったぜ」

女の子の目線に合わせるため、ユーノが低くしゃがんでしまうと、なのは達は二人のやり取りが上手く見えなくなってしまう。

「人通りが多くてよく見えませんね。」

「よし、じゃあ少しだけ近づこう」

なのは達は意を決して慎重にユーノの方へと近づき、二人のやり取りを凝視していると、不意に女の子がポケットに手を突っ込み何かを取り出した。

「あ、子どもがポケットから何か出しました！」

すると、これを見た恋次の脳裏に一つの情景が浮かぶ。

「！一護から前に借りた映画じゃ・・・ギャングには、何も知らねェ子供を運び屋にするって手口があるらしいからな。手元から目放すなよ」

「そ、それはちょっとオーバーなような・・・」

そう思っていた矢先、エリオは子供がユーノに差し出した物に目を見張る。

「やや、あれは・・・！」

「何エリオ！？見えたの！？」

フェイトが額に汗を浮かばせそう言って来ると、全員がエリオに注目し唾を飲む。

そして、徐にエリオは次のように言って来た。

「あの少女が取り出したもの・・・あれは・・・・・・飴玉です！」

「ふぇ？」

「見知らぬ子供が、ユーノ先生に飴玉を上げました！」

一同は思わず肩の力が抜けてしまうが、直ぐにユーノの方に目を向け確認を始めると、確かにユーノは笑顔で女の子が差し出した飴玉を受け取り感謝の気持ちを込めて女の子の頭を撫でていた。

金太郎はこの光景に思わず歓喜の涙を文字通り滝のように流した。

「ぬ～～／／／す、素晴らしいですぞ店長！！！心温まる光景です！！！／／／」

「あ、舐めましたね」

「どうやら運び屋ではなかったようだな、恋次」

「そ、そうだな・・・」

ルキアにそう言われると、恋次は顔を引きつりながらも内心ほっとした様子となり、なのはやヴィヴィオに至ってはユーノの行動に思わず破顔一笑する。

「にゃはは。まぁユーノ君は昔から子供に好かれるからね♪ヴィヴィオの時も、そうだったし」

「うん♪今でも覚えてるよ、パパに初めて絵本読んでもらった時の事！」

と、ここでユーノが女の子に手を振られながら別れを告げる。

「お・別れたぞ」

ユーノが歩き出すと、なのは達も移動を開始する。

「ユーノ殿の足取りはゆっくりだ。何かの下見なのかもしれん」

「せやけど、この辺りで動いてる案件なんてなかったと思うけど・・・気のせいやったかな？」

「いや。ここで乱闘があったのはもう随分前の事だよ。ティアナも一緒だったから」

「はい。その通りです」

それを聞くと、益々考え込んでしまう一同。

と、ここでまたユーノが不意に立ち止まったのを目撃する。

「あ、立ち止まりましたね」

「本当だ。側には誰もいないみたいだぜ・・・」

「何やってんだろうパパ？」

そう思った直後、またしてもユーノは低くしゃがんでしまう。

「！しゃがみました！！」

「また子どもな訳？」

「いや！あれは・・・・・・！」

吉良がユーノの側にいる何かを捕えて凝視すると、あろうことかユーノの周りに子犬がやって来たのだ。

「犬だ・・・！」

子犬はユーノの足元でじゃれ付き始めると、ユーノは笑顔を浮かべながらその子犬と遊びはじめ、フェイトはその光景に思わず胸が熱くなる。

「かわいい～～～！！ユーノの足に子犬がじゃれついてる～～～！！」

「わぁ～～～本当だ♪」

先ほど同様実に心なごまる光景を目の当たりにする六課メンバーだが、そんな折、他の場所からも数匹の子犬を始め、何故かは知らぬがイタチまでもがユーノに集まってくる。

「なんと・・・他の子犬も集まって来たではないか」

「おお！よく分かんねぇけどイタチまで集まってきたぞ！」

「ち。猫は一匹も来ないのか・・・・・・」

秘かに舌打ちをし、悔しがるクロノ。

全員はユーノの元に街中の至る場所から集まってきた子犬とイタチの群れを見ながら、非情に心が温かくなる。

「イタチも・・・可愛いですね・・・」

「ユーノ君がいっぱいだねヴィヴィオ・・・♪」

「うん♪ユーノパパが沢山・・・♪」

イタチ＝ユーノと言う等式を勝手に思い浮かべるなのはとヴィヴィオの言葉と、すっかり当初の目的を忘れかけている全員に一度喝を入れようとする恋次。

「和んでんじゃねぇよ。にしても・・・すげぇ光景だな」

「ま・ユーノくん本人はにゃんこは苦手やけど、昔から動物にも好かれおったからな。」

「店長が動くまで、ここで待機か」

そう思い、なのは達はその場からユーノが動くまでの間、待機を決め込む。

動物と戯れる事1時間・・・ユーノは未だ子犬の頭を撫で続ける。

「・・・ずっと撫でてますね・・・」

「うん。そうだね。」

更に1時間後・・・やはりユーノは撫で続ける。

「・・・まだ撫でてますね・・・」

「うん・・・そうだね・・・」

それから更に2時間・・・あたりがすっかり夕暮れに染まる時間帯になっても尚、ユーノはずっと頭を撫で続けていた。

これには、流石の前線メンバーも待ちくたびれてしまい、アギトはつい不満を口にする。

「ま～だ～かよ！もう夕方になっちまったぞ！！」

「うふふ。ユーノは結構のんびりしたところがあるからね」

「のんびりしすぎだろ！！」

つい大声を上げてしまう恋次だったが、漸くここでユーノが徐に立ち上がった。

「あ、立ち上がりました！」

「はぁ～良かった。私、立ちっぱなしで足が棒になるかと思いまし

た。」

「あはは。僕もだよ。」

「ほう・・・犬とイタチたちが急に名残惜しそうにしている」

名残惜しそうにユーノを見つめる子犬とイタチに手を振りながら、ユーノも自分の目的の場所に向かって歩き出すと、なのは達も尾行を再開する。

「行こうか。」

夕暮れ時になっても続くユーノの尾行だが、先ほどのやり取りの所為で急にモチベーションが下がってしまったヴィータが徐に口にする。

「ふう・・・何だか気が抜けちまったな・・・別に危険はないんじゃねぇのか？」

「そうだね。このまま何もないといいんだけど。」

そう思っていると、目の前で歩いてユーノが通りかかった生鮮野菜市場の御上に勧められ、段ボール一箱分の野菜を持たされていた。

「あ、パパ。八百屋さんに手に溢れるぐらいの野菜持たされてる！」

「日頃の感謝の印やろうな」

「野菜一箱分とは・・・・・大盤振る舞いな事だ。」

「そう言えば店長が朝一に出かけると、地球でもこちらでもよく色々なものを持たされて帰って来られてましたな」

「お、歩き始めたぞ」

ユーノは箱いっぱいに収められた野菜を持ちながら、多少ふら付いた様子で前へと歩きつづけるさまを、なのはは少々心配に感じた。

「ユーノ君・・・ちょっと重そうだね・・・」

そう思いながらも、前線メンバーは人望の厚いユーノを始め、そんなユーノに応えるかのように親切心を振りまく市民に改めて関心をしていた。

「街の人達はみんな親切ですね」

「みんなユーノ先生に挨拶していくね。」

「そうね。それだけみんなに愛されてるってことよね・・・ホント、あの人は何処までも私達じゃ決して届かない雲の上の人なんだから。」

ティアナがそう言った時だ。

歩いていたユーノが突如酒を飲んでいた数人の男に絡まれる。

「ん?あれ、ユーノが酔っ払いに絡まれてる!?」

「ち!こいつは厄介だぜ」

「あ～あ・・・オープンテラスで大勢でワイン飲んで・・・」

「無理矢理座らされたです！」

この光景を目の当たりにし、なのはは嫉妬にも似た炎を燃やしてレイジングハートを握りしめる。

「ぬぬぬあの人達・・・私のユーノ君に妙な事したら・・・全員頭冷やしてあげるの／／／／／／」

「な、なのはさん！？それは駄目ですって！！」

スバルが止めようとした矢先、ルキアがあることに気付く。

「いや待て！」

「「？」」

「見ろ。新しいボトルが来た。みんなでユーノ殿に奢ってるつもりなのだ」

「え？」

なのはは唖然としながらもユーノの方に目を向けると、ユーノは苦笑をしながらほろ酔い気分の男たちからワインをグラスに注がれ、それを否応なく飲まされていた。

「ああ・・・飲まされてる飲まされてる・・・」

「さっき貰った野菜が摘みにされてるぞ」

「店長は本当に・・・老若男女、万遍なく好かれてるんだね♪」

すると、ユーノは先へを立つと、そのワインが出てきた酒屋の中へと入っていく。

「あ、酒屋さんの中に入っていきましたね――――――」

「う～～この角度じゃ中がよく見えないよ～～～」

「移動するよ、みんな」

なのは達は店の中の様子がよく見える場所まで移動し、その中でユーノが何をしているのかを窺った。

「ワイン・・・選んでるみたいだな」

「買い物ですかね？」

「あ・すごくいいワインを選んだよ。それに他の飲み物も」

「しかもどれもリボン掛けてもらってます。」

「リボン？プレゼントってことですか？」

「やっぱりフェレットもどき、本当に浮気相手と」

懲りずに邪推を口にすると、般若の表情と化したシグナムがレヴァンティンを構える。

〈Ｌｏａｄ　ｃａｒｔｒｉｄｇｅ〉

そして、無言のままクロノ目掛けて紫電一閃を叩きこむ。

「ぎゃああ！！」

皮一枚でそれを躱したクロノは絶叫し、振り下されたレヴァンティンを見据え、鬼太郎はそんな彼の胸ぐらを掴む。

「不謹慎な発言は控えろって言ってんだろ！」

「まだワインを渡す相手が浮気相・・・いやいや！！誰に渡すか分かったものじゃないし、安心はできないよ」

「それでは、もう少し様子を見るとするか」

「そうですね」

「あ、出てきました」

ユーノはリボンで包装したワインとジュースなどを手に取り、何事もなかったかのようにゆっくりとした足取りで歩きはじめ、なのは達も尾行を続ける。

「次は何処へ行くのでしょう？」

「浮気相手のプレゼントなら、花屋だろうな」

これを聞き、全員が一様に鋭い目線を突き立てクロノを睨み付ける。

「てめぇ・・・いい加減にしねぇとマジ殺すぞ！」

「じょ、冗談だ・・・！」

「たく・・・気を抜くのはまだ早えよ。」

そう思って居た時、ユーノを追いかけているうちに自分たちがいつの間にか人通りの少ない場所へを歩いていたことに気づき、一抹の不安を抱きはじめる。

「あ・・・何だか人通りが少なくなってきましたよ・・・」

「どうやら、裏路地に入ったようですね・・・」

「な、何か暗くなってきたし・・・ヤバい雰囲気だよな・・・！」

不安を抱き徐々に辺りも暗く染めあがってくる中、なのはは目の前のユーノが不意に立ち止まったことに反応する。

「！ユーノ君が立ち止った！みんな、隠れて！」

なのはの指示を聞き、全員が一旦建物の陰に隠れると、ユーノは明かりの灯っていない怪しげな店へと入ってしまう。

「ち。店に入っちまった・・・！」

「あれ・・・お店かな・・・看板ないし、明かりもついてないけど・・・」

「ショーウィンドウの中は見えるですか？」

リィンが尋ねると、浦太郎は目を細めて中を覗く。

「・・・羊の頭蓋骨に・・・オオトカゲの剥製・・・それに・・・瓶詰になった蛇!!」

ヘビと言う単語を聞いた途端、大きなトラウマを抱えるスバルは大声を上げた。

「いや〜〜〜!!!!ヘビは嫌い!!!!!!」

「ちょ、スバル!落ち着きなさいって!」

スバルが蹲って体を震わせる中、ヴィヴィオはなのはと顔を見合わせ思わず口にする。

「え〜〜〜何の店!?」

「ん!?よく見て・・・ところどころに光るものが置いてある」

一同がそれを聞いて目を向けると、映って来たのはネックレスを始めとする彫金類だった。

「あれは・・・ネックレス・・・?横にあるのは指輪か・・・」

「げっ!アクセサリー屋さんな訳!?まさか店長、こんな悪趣味なところで浮気・・・いやいや!!なのはちゃんとかに上げるサプライズプレゼント的なものを買うつもり!?」

「ええ!!だとしたら私嫌ですよ!いくらユーノ君からのプレゼン

トでも・・・！」

「いや待ってください。もうすでに廃業しているのかもしれませんよ。」

「確かに、廃墟の中での密会は一護の世界で言うギャングの世界の常套手段だ」

「店の中が暗くて、ココからじゃ見えない。向かい側まで行きましょう」

全員は急いで店の向かい側まで近づいて行き、中を覗こうとすると、ユーノと一緒に映って来た人影に思わず目を見開いた。

「！店長以外にもう一人いらっしゃいますぞ」

「く・・・シルエットしか見えませんね」

すると、ヴィヴィオはそのシルエットの人物が手に持つ道具を見た途端、顔を引きつりなのはの制服を引っ張った。

「ねぇ・・・ママちょっと・・・あれ・・・相手の男が手に持ってるのって・・・」

「！」

なのはや他の一同がそれを見た瞬間顔を硬直させると、ヴィヴィオは確信を持っていって来た。

「な、ナイフだ！あれナイフだよママ！！」

「え!?ユーノ君!!」

「ユーノが後ずさってる!!」

「やばいでこれは!みんな、突入するで!」

「「「「「はい!」」」」」

はやての掛け声とともに、機動六課前線メンバーは店内への突入を試みる。

と、店の中に入りこもうとしたその時、不意にドアが開いて来、なのは達は立ち止まる。

「!誰か出てきやがった!」

クロノは万が一を想定して懐から待機状態のＳＵ2を取り出す。

がしかし、実際に中から出て来たのは先ほどまで後ずさっていた筈のユーノだった。

ユーノは外に出てくると、呆気にとられた様子でなのは達を見つめる。

「あれ・・・みんな?」

「な、ユーノ!?」

クロノは驚愕の表情を浮かべて立ち止まると、後ろからついてきた

全員はその事で連鎖反応を起こすようにぶつかってしまう。

「痛っ！急に止まらないでよクロノ」

「うわわわわきゃあああああ！！」

「ぐ・・・！」

「くそ・・・！これじゃ動けねぇ・・・！」

全員はドミノ倒しの要領で倒れ込んでしまい、身動きが出来なくなると、ユーノが心配して手を伸ばしてくる。

「大丈夫かい？」

「それはこっちの台詞だよ！」

「店長、御無事でしょうか！？お怪我は！」

「パパ！！ナイフ、ナイフが～～～！！」

「ナイフ？」

「ぐっふ！あの男は何者なのだ、スクライア！」

「ユーノくん、危険な目に遭ってるんなら何であたしらに相談しないんや！？」

全員が全員でユーノの事を非常に心配し、気に掛けてくると、ユーノは思わずその光景に破顔一笑する。

「・・・ふふ。はは」

なのははユーノが自分たちの気持ちも知らずに一人で笑い出すことに些か憤りを覚える。

「もうユーノ君！何笑ってるのさ！？こっちは心配して来てるって言うのに・・・！」

「ごめんね。店主に新作の果物ナイフを進められて、断っただけなんだけど・・・ふふ、いらない心配を掛けてしまったようだね。」

それを聞かされると、なのは達一同の頭にカラスが飛び交った。

「果物ナイフ・・・だと・・・？」

「あの・・・リンゴの皮とかを剥くときに使う奴・・・」

「では、あの時後ずさってのは・・・断る動作だったのか・・・」

「滅茶苦茶紛らわしいぞ・・・！」

「焦って損したぜ・・・」

真実を聞かされ、一気に片の力が落ち、溜息をつく一同にユーノは笑みを浮かべながらこう言って来た。

「僕も驚いたよ。後ろにいたみんなが、急に前から突進してきて」

「ふぇ？にゃはは・・・やっぱり気づいてたんだ？」

「凄い凄い！！」

「う・・・僕達の完璧な尾行を見破るとは・・・流石はユーノ・スクライアか」

「知ってたなら言ってくれればいいのに」

「ちょうどいいと思ってね。」

「え？」

その言葉に思わず疑問符を浮かべると、不意になのは達の元へと一人の人物が歩いてきた。

なのは達が歩いてきた人物の物陰に目を向けると、やってきたのは六課で留守番をしていた筈の白鳥だった。

白鳥はユーノに対して言葉を投げかける。

「う～～～ん。少々遅れてしまったであるかな？」

「時間どおりです。態々すみません、白鳥さん」

白鳥の登場に驚きを隠せないでいる前線メンバーだったが、その後に続いて今度はこの二人までもがやってきた。

「は～い！はやてちゃん、みんな！シャマル先生到着です！！」

「・・・ほう。ヴィヴィオも一緒だったようだな」

なんと、あろうことかシャマルとザフィーラまでもが同席していたのだ。

「しゃ、シャマル!?ザフィーラまで!」

「シャマルさん。ザフィーラさんもよくおいで下さいました。」

ユーノが柔かい笑みでそう言うと、シャマルとザフィーラもそんなユーノに言葉を返す。

「へへ♪急に呼び出すから、もう~びっくりしちゃった。」

「ああ。スクライアから態々こちらを呼び出すことなどそうない事だからな。」

「あの、ユーノ先生・・・どういうことですかこれは!?」

「なんで・・・白鳥君・・・それにあの二人まで!?」

「へへ。さぁ、これで前線メンバー全員が揃った。行くとしよう」

ユーノは何も知らないでいるなのは達前線メンバー全員にそう言うと、先に目的の場所へと向かって歩きはじめる。

なのは達は互に顔を向けると疑問符を浮かべて首をかしげた。

「!?もう何が何やら・・・」

「全く以てチンプンカンプンです・・・!」

「な～に、このすぐ先さ。そう遠くはないよ」

そう言いながら、ユーノは全員の誘導を始める。

一体ユーノは、彼らをどこへ連れて行くつもりなのであろうか？

◇

〈ユーノＳｉｄｅ〉

しばらくユーノの後に連れられて歩きつづけるなのは達だったが、漸くユーノが目的の場所へとたどり着き、全員にそれを報せる。

「着いたよ」

「あ」

「ここは・・・」

全員が目の前に目を向けると、佇んでいたのは表通りは店を構えない隠れた名店と俗に言われる老舗のレストランであった。

「おお・・・レストランではないか・・・」

「実は、みんなを驚かせようと思って秘密で晩餐の用意をしていたんだ」

「え・・・晩餐って・・・ディナーのこと？」

「日頃の感謝を込めて、こっそり計画を立てていたんだ♪」

「私達の為に・・・ですか？」

「部屋に戻れば見つかる様に、招待状を置いていたんだけど・・・
どう言う訳か、みんなが着いて来てしまった。」

「そっか。だから――――――」

なのははそれを聞き、昼間のユーノの不自然な言葉を思い出す。

『ああ・・・・・僕は・・・・・・昼食はいいんだ・・・』

『うん――――――ちょっと用事があってね。また後で♪』

そして、全員が納得した表情を浮かべると、恋次が言って来た。

「あれは、“晩飯でまた会う”って意味だったのか」

すると、今までの事を熟知した様子で白鳥が笑みを浮かべる。

「ふふ。全く以て、飛んだ取り越し苦労だったようであるな・・・
皆の者」

「け！テメェが言うなよ・・・」

思わず癇癪を起す鬼太郎と、そんな光景を和やかに見つめるユーノ。

「ふん。さぁ、入ろう。店構えは質素だけど、味は保障するよ」

そう言うと、ユーノはなのは達を店の中へと案内し、予約していた席へと連れていくと、全員をそれぞれ円卓の机の前へと座らせ、ヴィヴィオの事も想定していたユーノはもう一個の椅子を持ってくると、紳士的にヴィヴィオを座らせる。

「ヴィヴィオ、どうぞ♪」

「わあ！ありがとうパパ！」

笑顔でヴィヴィオは父であるユーノに感謝の意を表すると、ユーノは柔かい笑みを浮かべ、その後に先ほど酒屋で購入したワインとジュースを取出し、全員のグラスに順に注ぎ始める。

「おお。これはさっき買っていたジュースとワインだな」

「ええ」

「もしかして、魚屋さんの御主人や八百屋の御上さんと話していたのも・・・」

「ああ。今日のメインディッシュの相談だよ」

「じゃああの変なお店は何だったの？」

「駆け出しの『マルコ』と言う彫金師が、店主の宝飾屋でね・・・少々変わり者でまだ若いけど腕はかなりいいんだ。」

「はぁ・・・そうなんですか・・・」

「そんなところに何の用だよ？」

「今日は受け取るものがあってね。」

そう言うと、ユーノは先ほどの店で店主のマルコから受け取った袋の中に入っていた総勢２３個の小箱を取出し、順にメンバーに配っていくと、訝しげな様子の全員にこう言った。

「みんなの為に、誂えたんだ」

徐になのはが箱を開けると、中から出て来たのは・・・ユーノがこの日の為に特別に熱られた共通の形をしたペンダントであった。

「あ、ペンダント――――――」

全員がそれを手に取り驚きを隠せないでいると、ユーノは次のように言う。

「随分前に頼んでいたんだけど、最終調整に三日もかかってしまってさ。」

「最近一人で出かけてた理由は――――――それか」

「ああ。みんなに渡すものさ。勿論ヴィヴィオにも」

「私にも！？」

そう言うと、ヴィヴィオは自分の手の中の箱を開けてペンダントを手に取り、この上もないほどの笑みを浮かべる。

ユーノは嬉々とした笑顔のヴィヴィオを見てから同じく笑みを浮か

べ言う。

「ちゃんと細部まで拘りたくてね」

「全員分ありますです！！」

ユーノの思わぬサプライズプレゼントに心が温かくなる一同。

徐に席から立ち上がったユーノは、これまでの感謝の気持ちを込めて次のように言って来た。

「みんなは僕の友であり、同志であり、かけがえのない仲間、そして家族だ。何ものにも変え難い固い絆を紡いだみんなに僕からのほんのささやかなプレゼントとして、受け取って欲しい。」

「ユーノ君――――――」

「ユーノ先生――――――」

これにはなのはや他のメンバーも顔を綻ばせる。

そして、受け取ったペンダントをひっくり返し、細部をチャックする。

「裏にそれぞれの個性に合わせた紋章と、お前のイニシャルが刻んであるな」

「みんなが口にしてくれる『ユーノ』と言う名前――――――僕はこの上もなくそう言われるのが嬉しいんだ」

「にゃはは♪良かった、そう思っててくれて。私も嬉しいよ♪ユーノ君の口からそう言ってもらえて。」

「ありがとう、なのは。君が初めて僕の名を呼んでくれた時の事は、今でもしっかり覚えてる。君の手は温かかった。君の声は優しかった。そして、君の笑顔は誰よりも素敵だ。」

真顔でそのような気障の事を言われると、なのはは一瞬にして赤面する。

「う／／／／／／そんな顔で言われると・・・私恥ずかしいよ／／／／／／」

「はは！ママ顔真っ赤だ！」

「へぇ、特別誂えか・・・流石は店長。センスいい！」

浦太郎がそう言った後、吉良がペンダントの蓋を開くと、裏にはこんな言葉が刻まれていた。

「“永久（とわ）の絆を誓う”・・・・・・」

「お！吉良にしては珍しくスゲー良いこと言うじゃねぇか！」

「あ、違うよ。裏の方に書いてあったんだ」

「お・・・――――――――おお、本当だ！」

「「ははははは」」

「「「ははははは！」」」

全員はそれを聞くと、思わず笑みを浮かべる。

「せやけど、いい言葉に違いはあらへんな」

「うん。そうだね」

「ああ」

「気に入ってもらえてよかった。」

「ちょっと、恥ずかしいっすけどね」

「恥ずかしくなどあるものですか。私は究極に感動しております／／／／／」

「じゃあ、みんな。機動六課前線一同。乾杯しようか♪」

「「「「「はい！」」」」」

全員はその言葉を聞くと、テーブルの上に置かれたグラスを持って徐に立ち上がる。

そして、クロノが照れくさそうに笑みを浮かべながら乾杯の掛け声を行う。

「やれやれ。まぁ偶にはいいであろう――――――では、事件解決と次元世界の平和の為に」

「そして、ユーノ君と私達との永久の絆に」

「ああ」

なのはの言葉にユーノがうなづいた後、全員はそれにつられて清々しい気もしで乾杯を行った。

「「「

絆の証（後書き）

重要大事の勝手に台詞選集！

今回は記念すべき、ユーノ・スクライア外伝第一話からこの台詞をピックアップ！

ユ「お早う。金太郎、鬼太郎、浦太郎。そんでいらっしゃい、白鳥さん。ちょーど昨日、新しいのを第一世界から仕入れたとこですよ。さ・今日は何をお求めで？」（第一話：消えたユーノより）

魔導師図鑑ハイパー！

晩餐会が進むにつれ、上等なワインの所為で酔いが回るはやて。

は「うっしゃー！！今日は朝まで飲みまくるでーーー！！」

酒がすっかり回り、完全に泥酔状態となってしまうと、興奮状態のままワインをグラスではなくボトルごとでラッパ飲みを始める。

慌ててシグナムやヴィータが止めにかかるが、言うことなど聞いてはくれない。

そして、はやてはグラスを置くとーーー・・・

は「今日は大サービスや！」

そう言って、突然服を脱ぎ始めようとした。

その光景を見た全員が食べていたものをのどに詰まらせたり、エリオにいたってはジュースを勢いよく噴出した。

な「はっ、はやてちゃん！それはダメー！！」

なのはやフェイトが慌ててはやてを抑えようとするが、泥酔状態のはやては隙を見てなのはとフェイトの胸を片方の手を使って揉み始めた。

な・フェ「あ／／／あああ～～ん！！」

浦太郎や恋次の興奮し、鼻血を出す。

恋「ぬのおおおお！！！！なんつー破廉恥な／／／」

浦「凄いよ！もっとエロくやらないと！」

鬼「ちげーだろが！！」

ル「この戯けどもが！！！」

すっかり優雅な晩餐会は単なる宴会へと変わり果てて、それぞれが勝手な事をし始めると、ユーノは苦笑をしながら読者に向けてこう言った。

ユ「みんな。こんな面子でも、これからもよろしくね♪」

次回予告

浦「えええ！！金ちゃんが僕に依頼！？」

ユ「マキ・ヒムロと一日デートしろだってさ。彼女今話題のバイオニリストだよ」

浦「やったあ！もつこりチャンス！」

鬼「無理じゃねぇのか？熊は彼女の足長おじさんだぜ。おまけに彼女狙わてるって」

浦「うふふ♪金ちゃんが犯人追ってる間に、マキちゃんに迫っちゃおうっと♪」

ユ「ユーノ・スクライア外伝　『浦太郎と金太郎の純情足長おじさん伝説（前編）』」

浦「絶対見てよ♪」

浦太郎と金太郎の純情足ながおじさん伝説（前編）（前書き）

浦「今回は僕と金ちゃんを軸としたサイドストーリー♪もっこりバイオ美人のマキちゃんを僕は寝とることが出来るのかな♪」

金「いけませぬぞ・・・そのような事は決して！！」

浦「ひいいいい！！！！と、取り敢えずはじめちゃって！！」

浦太郎と金太郎の純情足ながおじさん伝説（前編）

〈六課Ｓｉｄｅ〉

季節は１１月。

まだ本格的な冬を迎える直前でのとある機動六課での出来事。

前線メンバーは当初の少数精鋭から一変し、かなりの人数が加わったことで連絡の伝達が最優先事項の一つとなっており、ここ六課には独自に掲示板が設けられていた。

他愛ないことや重要な事までもが一変に描かれる前線掲示板だが、今日ここにこれまで見た連絡事項の中でも異様に目立っているものが一つ書かれていた。

「ふぇ？」

「な・・・」

「何だよこりゃ・・・」

前線メンバー全員が注目する理由・・・それは掲示板に書かれた謎のＸＹＺと言う単語が浦太郎を呼び出すところからはみ出て一杯にまで広がっていたことにあった。

これを見た一同は言葉すらでない様子だった。

「大胆と言うか・・・・一体何ですかこの“ＸＹＺ”って・・・」

すると、徐にユーノが前に出て来、この謎の暗号を書き記したであろう人物の名前を口にする。

「はは～ん。金太郎だなこれ・・・」

「え？金太郎さんが。」

「どういう事ですか？」

「ＸＹＺ・・・これはつまりもう後がないってことを表すシグナル。知ってる人は知ってる業界用語さ。」

「その通りであります」

と、唐突に金太郎がドアップで前線メンバーが立ち尽くす中から登場し、恋次を始め多くの者は度胆をぬいてしまう。

「うわああ！！どっから出やがった！！」

「お前やっぱり怖いって！！」

金太郎は性格は別としてその強面な外観故、初対面の人のほとんどが恐怖を抱いてしまうほど。

そんな怖～い顔の金太郎は後ずさっている様子のはやての肩を掴み、真摯な表情（他人からはそうは見えない形相）で言ってくる。

「今すぐに浦太郎をお呼びいただけたいのですがよろしいでしょうか？」

「は、はい・・・ただいま・・・」

金太郎の圧倒的な雰囲気にしり込みをしながら、はやては言われる

がままに浦太郎を放送で呼び出した。

◇

〈浦太郎Ｓｉｄｅ〉

数分後、浦太郎が司令室にやって来、きょとんとした表情を浮かべながら金太郎と向かい合って座る。

「ありゃまぁ～～～金ちゃん、何時にも況して怖い顔して・・・どっか具合でも悪いの？」

そう言うと、金太郎は何も言わずにバーボンウィスキーを一本取出し机の上に叩きつけるように置いた。

「「「ひ！」」」

一瞬驚いてしまうなのは達を余所に、金太郎は強面な顔で一言いう。

「飲め」

「一体何だって言うんだよ？」

「さぁ・・・」

「と、兎にも角にもグラスが必要かな。フェイトちゃん、一つお願い♪」

「は、はい」

浦太郎はフェイトに頼んでグラスを一つ用意してもらうが、これを聞いたキャロがすぐに疑問に思って聞き直す。

「あれ？どうして二つじゃないんですか？」

「その必要がないからだよ。ほら」

ユーノが代わりに答えて金太郎に目を向けさせると、金太郎は自分で持ってきたウィスキーを握りながら口でコルクを引き抜き、豪快に一本丸々呑み始める。

口を開けながら一応納得の表情となる前線メンバー。

「ははは・・・成程・・・グラス一つで十分だな・・・」

「これは本当にゴールデンベアーなのか？」

「その筈だがな」

いつもの金太郎からは考えられないような行動に少々の戸惑いを見せる一同だが、浦太郎はこんな金太郎の普通じゃない態度もひっくるめて面倒を見てやろうと思いつつ、グラスの中のウィスキーを飲み始める。

ちなみに言っておく・・・今の時間帯はれっきとした昼間なのだ。

よい成人の人は、昼間から仕事もしないでお酒を飲むなんて真似は控えましょうね。

落花生を酒のつまみに咥えながら浦太郎とユーノ達は金太郎が酒を

飲み終わるのを待っていた。

そして、しばらくの沈黙が続いていたこの妙に重苦しい雰囲気が、金太郎自身のため息で終わりを迎える。

「ふう・・・」

頃合いと判断した浦太郎はほくそ笑みながらこう言ってくる。

「で。金ちゃんがそんな深刻な顔して僕に何の相談があるって言うの？ここは普通、僕なんかよりも店長に言うべきじゃないの？“元時空管理局本局武装隊名誉元帥”・・・熊谷金太郎殿。」

すると、この発言を聞いた瞬間、番茶を啜っていた恋次が豪快に口から吐き出してしまう。

「ぶっほ！え・・・えええ！！！こいつってそんな凄い役職についてたのか！？」

驚き返る恋次を余所に、ルキアと吉良は顔を見合わせてから言う。

「今更何を言っているのだ貴様は。随分前に言っていたではないか」

「阿散井君の事だ。どうせ右から左に受け流してたんだろうね」

「う、うるせーよ！悪かったな！」

「それに、金太郎の場合は単なるの名誉元帥とは訳が違う。若い頃はそれこそ今のなのは以上に前線で大暴れして敵味方問わず“大破（マッド）壊熊（ベアー）”と恐れられ、保護施設を出るとすぐに管理局武装隊の訓練校・

・・特に傭兵部隊でも育てるかのような超スパルタ校に入って主席で卒業したって経歴を持つから、この世界で敵に回したら相当厄介な男の一人ですよ♪」

「次元最強のお前が言うかよそれ・・・」

「にゃはは・・・た、確かにそれもあるよね・・・」

飄々とした笑顔でそう言うユーノに対し、ヴィータやなのはは苦笑をしながら呟いた。

「今にして思えば・・・スクライア商店の三人にしてもユーノ先生にしても、とんでもない人達であることに変わりありませんね・・・」

「能力的なバランスと高さから見ても、ウチの前線じゃ最高クラスや・・・」

はやて自身も、今の前線メンバーの飛躍的な戦闘能力の上昇で一役も二役も買っているのが、ユーノ達スクライア商店の三人の存在が大きと自負している。

恋次達死神の隊長格とも互角に渡り合えることに加え、文字通り司令塔であるユーノが加わることで正しく完全無欠と呼べるほどだ。

その為、なのは達にとって最も敵に回したくないのがこのユーノ以下スクライア商店の三人なのであった。

そう思っていると、金太郎が残っていたボトルの酒を飲み干し、勢いよく叩きつけるように置いたのち、またしても深刻な表情で深い

ため息をつく。

「ふう～～～」

一同は目の前の金太郎の様子を目の当たりにすると、自分の事のように非常に心配になってくる。

「随分深いため息だな・・・」

「金太郎・・・要件を言っちゃいなよ」

「そうだぜ熊。もったいぶってんじゃねぇ」

ユーノと鬼太郎がそう促すと、金太郎は意を決して相談内容を打ち明けることにした。

「わかりました――――――浦太郎！」

「！？」

金太郎は机を叩きつけて浦太郎と向かい合うと、驚いた様子の彼やユーノ達全員がずっこけてしまう衝撃発言を口にした。

「ある女性と一日だけデートしてくれ！」

「ずっこ！」

「「「「ぶっげ！？」」」」

「「「「「「「「「「だあああああ！！！」」」」」」」」」」

」」」

文字通り、全員はその言葉でずっこけてしまった。

浦太郎は起き上がると、思わず苦笑しながら金太郎に顔を向ける。

「な、何なの藪から棒に・・・♪」

「わ、訳は聞くな・・・！私の身代わりにその女性と一日だけ付き合えばよいのだ・・・！」

すると、焦燥に溢れた金太郎に対して浦太郎はドライな一言を返す。

「・・・・・・やだ」

「な！」

「金ちゃんはやるの？僕や店長から訳の分からん依頼を受けたら？」

「う・・・」

浦太郎の言葉に口を閉ざす渋い顔の金太郎。

そんな金太郎に優しく声をかけてくるスバルやアギト。

「正直に話してくれませんか、金太郎さん？」

「ああ。何も隠す事ねぇだろ。私達だって、お前の仲間なんだ」

「・・・・・・」

沈黙をする金太郎だが、二人のその言葉を聞くと、徐に一枚の新聞記事の切り抜きを取り出してきた。

「見て下され」

切りぬかれた新聞記事に書かれていたのは、今話題となっている人物の一人で、見出しには『最優秀バイオリニスト賞受賞!!マキ・ヒムロ（２０）』と表記されていた。

浦太郎はそれを見ると、自分好みの美人の姿に目を光らせる。

「うっひょおお!!純粋バイオもっこりちゃ～ん?」

一方でこの記事を見たユーノはあっさりとした様子で口にする。

「何だ、マキ・ヒムロじゃないかこの子。」

「ユーノ君、知ってるの?」

「今ミッド中で話題の人だってことは、普段芸能に興味のない僕でも知ってるさ。天才バイオリニストで美人。そして、彼女を支えてきた足長おじさんの美談がね・・・」

「足長おじさん?何だそりゃ?」

恋次がそう言うと、ユーノは彼女を支えてきた謎の足長おじさんに関する事を話し出す。

「彼女は小さい頃、唯一の肉親である父親を亡くして孤児になって

しまったんです。ところが、父親の死後・・・ある人から多額のお金が毎月送られてくるようになったんです。」

「ほうほう。まるで私んところのグレアムおじさんみたいな人やな～～～」

「心温まりますね」

自分の話と被るところがあるため、はやてとシグナムは胸が温まる。

その後もユーノの話は続く。

「いや～～～実際その足長おじさんがいなかったら今の彼女は無かったって話ですよ♪お金の差出人の名前は、『昔の父親の親友G』としか書かれてなくて、何処の誰だか分からないんですって」

「へぇ～～～そうなんですか」

「けどいい話じゃねぇか。どこの誰なんだろうな、そいつ？」

「名前を名乗らないところがまた奥ゆかしい話であるな。」

すると、唐突にその足長おじさん、「G」と呼ばれる人物が自分だと言って来る男が口にする。

「私がGだ」

そう・・・金太郎だった。

ユーノや浦太郎は一瞬耳を疑った。

「「え・・・」」

他の者も同様の反応を見せた後、六課隊舎中に響き渡る甲高い叫び声。

「「「

それも元・グリーンベレー傭兵隊の所属だったことは知らん」

「よ、傭兵だったの・・・その人!?」

補足しておくと、金太郎は普通の魔導師としてのキャリアは積んでいない。

先述にも記したように、熊谷金太郎は傭兵部隊を育成するかのような非常に厳しいカリキュラムが設けられた訓練校を首席で卒業し、その後しばらくは応援があれば金で雇われる正しく傭兵として数々の危険な任務をこなしてきた。

その時、窮地に陥った金太郎の命を救い、訓練校時代から世話をしてきたのがマキ・ヒムロの父、タケシ・ヒムロであったのだ。

ユーノは話の大元を聞くと、腕組みをしながら壁に背を掛け言う。

「だから、名乗らなかった・・・いや、名乗ることが出来なかった・・・か」

「はい・・・そして会う事もありませんでした。しかし、彼女は私に会いたがった。新聞やテレビ、ネットを通じて呼びかける。世間も騒ぐ。だから私は初めて彼女に電話した――――――”私を探すな。迷惑だ”と」

辛そうに言う金太郎の言葉を聞き、浦太郎は不敵な笑みを浮かべてから解りきったように言ってくる。

「――――――泣かれたでしょ?」

「う！」

「どうしても、一度だけ会いたい・・・と？金ちゃんは女の子の涙に弱すぎるからね。」

「――――――・・・」

沈黙が続いたのち、この金太郎の依頼内容を承った浦太郎は早速マキ・ヒムロに会う為、市内まで車を走らせる。

車を運転させる浦太郎と、助手席に座るユーノ。

「いいとも。僕がGとして会おう。金ちゃんは女の子と話すのは苦手だし、その顔だ。その子は一発で気絶しちゃうからね♪ま、それに――――――」

そして後部座席で乗り出すように顔を突き出す挙動不審な金太郎。

浦太郎は金太郎を一瞥してから先ほどの新聞記事に乗った彼女の写真に鼻を伸ばしながら言ってくる。

「あ・なんたってもっこりちゃんだからな～～～？」

しかし直後、この浦太郎のふざけた言動を聞くと、すかさず金太郎が忍ばせていた銃を取出し、それを彼の後頭部に突きつける。

「ギク！」

思わず背筋が奮い立つ浦太郎に脅迫にも似た事を言ってくる金太郎。

「忘れる出ないぞ浦太郎。いつでも私や店長が見守っているということを」

「僕もなんだ・・・」

「分かってるって心配しないでよ・・・／／／」

浦太郎は自分の命が奪われるかもしれないことを考えると、あまりふざけた言動は控えることにし、急いで車を飛ばして言った。

て言うか金太郎・・・なんで質量兵器を普通に所持してるんだよ！

どっから仕入れたんだそれ！！

◇

〈三人称Ｓｉｄｅ〉

数分後、市内の公園で彼女を待ちあわるために浦太郎は彼女がつくまでの間、一人ベンチに座って新聞をそれっぽく広げて待ちぼうけ。

そんな浦太郎の様子を茂みの中から食い入る様に見守る無茶苦茶行動をとりかねない金太郎と、彼のお目付け役ともなっている物語の主人公ユーノ。

すると、そんな折・・・ついに待ち合わせ場所に金太郎目当てにやってきた女性、天才バイオリニストこと、マキ・ヒムロがやって来る。

マキは辺りを見渡しながら、Ｇと呼ばれる男の事を探していると、

浦太郎が新聞を畳んでマキの顔を見つめてくる。

「！」

マキが浦太郎に目を向けると、浦太郎が読んでいた新聞に自分の顔写真が載っていたことから、彼が念願だったGであると判断し、徐に近づいて行く。

金太郎はこれを見ると、何時になく緊迫した様子となる。

そして、柔かい表情を浮かべる浦太郎を眺めながらマキは恐る恐る呟く。

「あ・・・あなたが・・・G！？」

「そう。亀井浦太郎とも言うけどね。」

すると、マキや漸く会うことが出来たGに向かって勢いよく飛びついて行く。

「！？」

「「な！」」

マキの突然の行動に目を疑う浦太郎やユーノ達。

マキは若干うるんだ目を浮かべながら浦太郎の胸に顔を当てていき、大胆な彼女の行動に浦太郎自身は予想外だ。

「お・・・おい・・・」

「会いたかった・・・会いたかった！」

金太郎はこの時のマキの態度を見ながら、実に複雑な心境を抱く。

「会いたかった・・・会いた・・・・・・ううう／／／／／」

嬉しさのあまり、すすり泣き始めるマキに対して、浦太郎なユーノがなのはを慰めるように暖かく抱擁をするが、実際のところは彼女の胸が当たって鼻の下を伸ばしていた。

「なははは♪♪♪」

すると、これを見た金太郎がすぐさま拳銃を取り出す。

浦太郎はその男を敏感に聞き分けると、態度を改める。

「！ひっ！！た、タンマっ！」

「え？」

「あ、いや・・・その・・・人前ですよ？」

「すみません」

マキは自分の行動を反省し、浦太郎から離れる。

金太郎は口を開けて唖然とするユーノを余所に、二人の様子を窺い銃を懐にしまう。

「・・・ふん」

「あははは・・・自分の事じゃないのにこんなにドキドキするのはどうしてだろう？」

ユーノの気持ち・・・痛いほどわかるよ。

◇

〈マキＳｉｄｅ〉

その後浦太郎とマキはゆっくりと話をするために喫茶店へと移動する。

コーヒーや紅茶を飲む傍ら、マキは自分が予想していたよりもかなり容姿が若い浦太郎に驚きを隠せないでいた。

「浦太郎さんがあんまり若いので、びっくりしました。父の親友だから、もっとお年を召したお方かと。」

「親友と言っても、僕はお父さんの部下でしたからね。」

「でも、なんか声も電話とは違うみたいですけど・・・」

「へ！？いや、それは・・・“ああ、こんな声だった”でしょ？あ、あの極度の上がり症でね、電話だとあんな変な声になっちゃうんですよね・・・！」

「はぁ・・・」

咄嗟に声色を変えて誤魔化す浦太郎と、きょとんとした表情のマキ。

浦太郎は今一度、目の前のマキ・ヒムロの容姿、更には性格や一つ一つのしぐさをを見て心の中で呟いた。

「（それにしても・・・可愛いこと。照れちゃって♪あ～あ、これでお目付け役がいなけりゃ、楽しいのにな・・・）」

そう思っていると、不意にマキが浦太郎の手を握ってくる。

「あ・・・あ！？」

「浦太郎さん。あ、あの・・・実は私・・・」

浦太郎はマキの顔を見ながら、ついつい自分の目線が彼女の胸元に言ってしまい、真剣な顔から一変鼻の下を伸ばしてしまう。

「（うわあああ！！！もっこりバ～スト～～～？）」

思わず手が伸びようとした瞬間、外で見張っていた金太郎が銃を構える音が聞こえてくる。

「！（うわあ！しまった！）」

地獄耳どころの話ではないこの浦太郎の耳はさておき、金太郎は浦太郎に向けて銃を構え、引き金を引いて鉛の弾丸を発射する。

一直線上に延びる弾丸は窓ガラスを突き破り、浦太郎は咄嗟に手を引いて直撃を免れたが、店員が運ぼうとしていたコーヒーカップに直撃し、店員は声を上げる。

「だあああ！」

外で一緒に金太郎と行動を共にしていたユーノは、狂気に走った金太郎の行動を厳しく叱咤するとともに、乗り出そうとする彼の身体を抑えつける。

「だあああ！！ば、バカ！！！！お前何やってるのさぁ！！！本当に撃つ人があるか！！！！！落ち着け！！！！」

同じ様に、喫茶店の中の浦太郎も冷や汗をかきながら金太郎の行動に恐怖を覚える。

「あ、あのタコ・・・・・・本当に撃ちやがった・・・／／／／」

店内が騒々しくなる中、突き破られた窓ガラスと弾丸が通った後を見た瞬間、マキの表情が一変し、凍りついたものとなる。

「（ま、また・・・・・・昨日と同じ・・・／／／）」

「？」

浦太郎や外で見ていたユーノ達は彼女の様子がおかしいことに逸早く勘付く。

「？彼女の様子がなんか変だよ」

事情を詳しく聞くため、浦太郎はユーノ達と合流し、一先ず塒であり職場でもある機動六課へと案内することにした。

夜になり、通常勤務が終わった後でユーノはなのは達全員を呼び集めて、ロビーで巻きの話を伺うことにした。

マキは暗い顔を浮かべながら昨夜の事を徐に語り出す。

「・・・昨日の夜、突然ティーカップが砕けて・・・」

「砕けた？」

浦太郎が繰り返すと、マキは首を縦に振り、昨夜の事を詳細に説明する。

〈回想シーン〉

マキはGと会う日を控えて部屋で紅茶を飲みながら寛いでいると、突然ティーカップが何の前触れもなく砕け散り、紅茶が床に零れ落ちる。

「へ・・・」

一瞬の出来事に体を硬直させ、カップの持ち手を手に取るマキ。

すると、そんな折に突然電話が鳴り始めた。

「！」

マキは先ほどの事と重ね合わせながら、恐る恐る電話に出る。

「は、はい・・・ヒムロです・・・！」

すると、聞こえてきたのは全く聞き覚えのない男の声だった。

『タケシ・ヒムロの娘だな?Gとは、会うのか?』

「え?ええ・・・あなたは?」

『ふふふ。そうか・・・Gと会うか・・・楽しみだ。次に砕けるのはティーカップじゃないぜ――――――』

男は意味深な発言を残して唐突に電話を切る。

「あ!もしもし!もしもし!?」

これが昨夜、マキに降りかかった出来事である。

〈回想シーン終了〉

全員はこれを聞くと、極めて事件の高いものだと判断する。

そして、徐にマキは浦太郎に顔を向けて言ってくる。

「電話の人は何故私を?父やあなたの事を・・・それもお聞きしたくて今日は」

挙動不審なマキを見て、浦太郎は柔かい表情で言ってくる。

「さ。今日はもう疲れただろ?話は明日にして、シャワーでも浴びて休んでいきなさい。」

「・・・はい」

マキにそう言った後、ユーノ達は彼女の事をなのは達女性陣に任せた後、一度外の方へと出て行く。

そして、壁に寄しかかった険しい表情の金太郎に向かって浦太郎は先ほどのマキの話から彼に尋ねる。

「と言うことだよ。心当たりは？」

「ある。いけ好かない下種な男が一人。だが奴は死んだ――――――」

「調べる必要があるな。」

ユーノがそう言うと、金太郎はユーノ達スクライア商店メンバーを後にし、その場から立ち去って行く。

「店長。浦太郎の監視とマキを頼みます」

「って！僕の監視って何よ！？」

思わずその言葉に声を荒げる浦太郎と、金太郎の話を聞いていた鬼太郎が頭に手を回しながらふと言ってくる。

「熊、お前さ・・・こんな事が起こるって予感があったんじゃねぇね？だから亀に・・・・・おい。」

「さぁ。どうであろうな――――――」

金太郎はそう言って、背中を向けたまま一人調査のため、街の方へ

と向かっていく。

浦太郎は頭に指を当てながら、溜息をつきながらもこう言う。

「はぁ～あ。仕方あるまい。友の頼みだ。マキちゃんの面倒は最後まで見よう・・・・・へっへへ・・・見よう・・・♪」

下心が丸出しの浦太郎だったが、これを凝視するユーノと鬼太郎の二人。

「「ジーーー」」

「へ！？」

呆気にとられた声を上げる浦太郎を前にし、ユーノと鬼太郎は顔を見合わせ呟く。

「これが仕方ないって顔にはともて見えないっすよね店長」

「全くだよ」

「な！えっへん！！さて、マキちゃんはどうしてるかな・・・？」

「なのは達と一緒にシャワータイムだよ。でも忠告しておくけど浦太郎・・・ん！？」

すると、ユーノが忠告を言う前に浦太郎の姿が消えていた。

二人はこれにため息をつきながら、哀れな浦太郎の事を考える。

「へ。熊が何にもしないで居る訳ねぇと思ってるんすかね？」

「案外、金太郎の怖さをイマイチ分かっていない浦太郎だよね」

さてさて、変態男の浦太郎はこの後どんな報復を受けることになるのか、ああ・・・楽しみだ♪

◇

〈浦太郎Ｓｉｄｅ〉

さて、午後８時が過ぎた時点で、なのはやヴィヴィオ、それにマキは一緒にお風呂に入って寛いでいた。

まぁエロい男の妄想は人それぞれだが、ここにもそんなエロい男がいる。

亀井浦太郎は他の局員や女性陣には気づかれないよう、オプティックハイドを体に施してから女湯へと近づき、神秘の世界へと自分を誘うドアへと目を向け、中から聞こえてくる彼女たちの楽しげな会話に耳をそばだてる。

「メインディッシュの前に、なのはちゃんと一緒に前菜をちらっと・・・うふふ♪」

鼻の下を伸ばしながら徐にノブに手をかける浦太郎。

するとその瞬間、何故だかは知らぬが高圧電流が浦太郎の身体に流れ込んできた。

「ぐおおおおおおおおおおおお！！！！！！！！！！！！！」

「？」

気になったマキがバスタオルを巻いてドアを開けると、通りかかったフェイトが声をかけてきた。

「ああ、マキさん。ベッドの用意は出来てますから、ゆっくり休んでください。」

すると、それを聞いた直後、マキは床に横たわる男を発見。

「あら？」

それは、全身黒焦げとなった昇天寸前の浦太郎であった。

「だあああああああ・・・・だあああああああ・・・」

「あ、あの。浦太郎さんどうかなされたんですか？」

「ああ！！別に何も！何時もの事何時もの事♪」

フェイトは急いで彼の脚を持ってユーノ達の元まで運び届ける。

そして、ユーノと鬼太郎の元に運び込まれた浦太郎は猛抗議をする。

「どういう事ですかあれは！！」

ユーノはそれを聞くと、まるで他人事のように言ってくる。

「バスルームに人が入ってるときにノブに触れるとああなるみたいだね。」

「店長・・・いくらなのはちゃんの裸を覗かれたくないのは判るけど、僕を殺す気ですか!?」

「なのはの裸を見られたくないのは本心だけど、仕掛けたのは僕じゃない。金太郎さ」

「へ?金ちゃんが・・・・・・」

浦太郎はそれを聞くと、呆気にとられ目の前には某ハードボイルド漫画のギャグシーンに出て来そうなトンボが飛び交った。

すると、ユーノと鬼太郎は徐に席を立つと、浦太郎の部屋から出ていこうとし、その際Kれにこう言い残した。

「それとな、熊がこのドア閉めたら二度と開けるなってよ。」

「え?ど、どういう意味なのそれ?」

「このドアを開けたら、ここからマキさんの寝ている女子寮の客間まで、仕掛けられたトラップが作動するようになってるんだって♪勿論、はやて公認で。」

「ふぇ!」

「「じゃあね（な）～～～」」

「ま、待って!閉めないで!!」

「「元気でな！」」

二人はそう言うと、無情にも部屋のドアを閉める。

一人部屋に取り残されてしまった浦太郎は、金太郎が嘗て傭兵として名を馳せ、トラップの名手であったことを思い出し力なく笑う。

「・・・あ・・・あはっははは・・・そう言えば金ちゃん・・・トラップの名人だったっけかな？」

しかし、浦太郎の夜這いを掛けようとする異常な性への執着は半端ではなかった。

浦太郎は燃え上げると、全身から魔力と共に気合いを放出。

「舐めるな、熊谷金太郎・・・！男は難関が多ければ多いほど燃えるのだぁ！！！」

そう言うと、浦太郎は窓の外へを足を運び、笑みを浮かべながらブラインドへと手を伸ばす。

「とは言え、トラップが分かってて、わざわざドアから出て行けるかってね・・・へへへ♪」

意気揚々とブラインドを上げる浦太郎。

だが上げた途端に目に映って来たのはいつの間にか施された鉄格子。

「あ・・・鉄格子・・・？！」

呆然とする浦太郎であったが、鉄格子には金太郎が書き残した「おとなしくねろ！！」の紙が貼られており、浦太郎はこれに思わず腹を立てる。

「あの野郎！！ぐあああああああああ！！！！！」

鉄格子に手を触れた瞬間流れ込む高圧電流。

同じ轍を踏んでしまった全身黒焦げの浦太郎。

「・・・あ、ははは・・・なかなかやるじゃないの金ちゃんの奴・・・！」

浦太郎は最初の手が失敗すると、第二の手段を敢行し、重いベッドを一人動かし始める。

「くぬうううううううううう！！！！！うっちょおおお！！！！！！ふごおおおおおおお！！！！！！」

すると、ベッドを動かした際、床に現れる核シェルターのような抜け穴。

「へへ♪こういう時の為に抜け穴があるんですよ♪」

何時作ったのかは言及しないが、浦太郎が自信満々に抜け穴の扉を開くと、その瞬間穴の底から爆発が起こり浦太郎の顔に直撃。

「ほっ！？」

浦太郎は先んじて自分の行動を読んでしまっている金太郎に驚愕しながらも、それでも制の欲望を諦めきれず一か八かの手段に打って出る。

「くそっ!!こうなったら正面突破だ!奴だって殺すようなトラップは仕掛ける筈はねぇ・・・!」

浦太郎はそう言うと、ユーノ達の忠告を無視して、部屋のドアを蹴り飛ばして外へと飛び出す。

「いっけ!!やっほーい!!」

すると、直後天井より降り注ぐ鉄の槍。

「ぐおおお!?」

何とか串刺しは免れた浦太郎だったが、思わず苦い顔を浮かべる。

「はぁ・・・いきなりこれだもんな・・・」

浦太郎はこのトラップを抜け出すと、長い長い廊下を勢いよく走り出す。

「何のこれしき!子供だましだ!」

廊下を走っていると、唐突に目の前の床が陥没し落とし穴が出来る。

「おりゃあ!」

浦太郎はそれを軽々と飛び越える。

「ふん！なんのこれしき・・・」

と思いながら飛んでいこうとした瞬間、着地場所にも落とし穴が展開される。

「ああ！まだあるの！」

浦太郎は咄嗟に回避することが出来ず、穴の中へと落ちていく。

「何考えるわけ金ちゃんは！？本当に僕を殺す気か！？」

穴の中には金太郎が設置した竹を使ったトラップが仕掛けられており、浦太郎は器用に足の親指や手で抑えて口ざしを回避するが、ここまで本格的なトラップに流石の浦太郎も冷や汗をかいた。

その後も行くところ行くところ、金太郎が仕掛けた恐るべきトラップが浦太郎を襲いかかる。

「ふおおおおおおおお！！！」

一歩間違えれば、確実に死んでしまいそうなトラップが作動していき、天井からは何故か巨大な岩までもが降り注ぐ有様。

「ひゃあああああああ！！！！」

隊員寮は金太郎が仕掛けたトラップの巣窟と化しており、この中を命懸けで通ることは至難の業であった。

「ごおおおおおおおお！！！！」

爆発が起きたりし、もう中は滅茶苦茶となりながらも、決して浦太郎は諦めずにマキの自室を目指して進み続けた。

そして、どれほどの時間がたったであろう。

とうとう浦太郎は目的の部屋の前へとたどり着く。

既に数々のトラップに引っかかり満身創痍となりながらも、浦太郎はぼろぼろの身体を引きずり到着することが出来た。

ある意味では本当に大した男である。

「き・・・来た・・・！ついにたどり着いたぞ・・・！」

浦太郎は獰猛な獣のような眼つきでドアを見つめた後、勢いよくドアを蹴り飛ばして中へと侵入。

「どあ～ん！！マキちゅあ～～～ン？」

浦太郎は正面のベッドの中で眠るマキに夜這いを掛けようとするが、その直後思わぬ最後のトラップが仕掛けられた。

「龍槌閃！」

「ぐっほ！！！！」

なんと、部屋の中で待ち構えていたのは先日のカトゥーン事件で故人・明神弥彦より遊子ずり受けた逆刃刀を手に取り、飛天御剣流の技を仕掛けてきたユーノであった。

ユーノは無情にも浦太郎の顔面に峰の刀身を打ち付けると、浦太郎は力なく沈んでいく。

「な・・・なんでこんなことに・・・・・・！」

すると、ユーノと共にベッドの中から起き上がったのはなんとなのはであった。

なのははパジャマ姿で浦太郎に近づくと、ユーノと顔を合わせてから言って来た。

「はいご苦労様♪ごめんなさいね、浦太郎さん。私とユーノ君が金太郎さんの最後のトラップでした♪」

「マキさんは隣の部屋だよ。」

「ふ、ふふふふ・・・・・・さ、最後のトラップならば・・・今から悠々とマキちゃんのところへ行ける訳だ・・・・・・！」

しかし、そんな浦太郎の言葉を聞いた後、ユーノは部屋のカーテンを徐に開く。

カーテンを開けると、既に時刻は朝の7時を迎えており、太陽が燦々と照りつける。

「うわああ！！どふほおおお！！」

浦太郎は太陽の眩しさに当てられ、ドラキュラの様なリアクションをとる。

「それはどうかな？こんな時間に夜這いかけられるの？」

「そ・・・そんな・・・もう・・・朝・・・」

朝を迎えていたことに気付かなかった浦太郎は力なく倒れていくと、大あくびをかきながら爆睡を始めた。

「ぐがっ～～～！！ぐがっ～～～！」

眠った浦太郎を見ながら、ユーノとなのははそれぞれ言う。

「よっぽど真剣だったみたいだね・・・」

「その真剣さを別なところに回してほしいものだ・・・」

こうして、浦太郎の夜這いは失敗に終わった訳だが、今日一日のスケジュールはまだ始まってもいないのであった。

◇

〈マキＳｉｄｅ〉

数時間後。

昼の１３時を回った頃合いを見計らって、マキは浦太郎と共に市街地に足を運んでいた。

浦太郎がマキを連れてぶらぶらと散歩をしていると、不意にマキがこんな事を言って来た。

「浦太郎さん。昨夜何かあったんですか?寮の中あんなに目茶目茶になって・・・?」

「いやっ!ゴキブリの大軍が現れて・・・部隊長のはやてちゃんがパニック状態で大暴れだよっ!!」

勿論嘘である。

「でもあの荒れ方はちょっと・・・」

「ままっ!そんな話より、もっと他の話しましょう!折角のデートなんだし・・・!」

「うふ。そうですね。父の事とか、沢山聞きたいことありますし。」

「ギクっ!(それもヤバいな・・・下手な事言ったら、ニセ足長おじさんって事がばれちゃうし・・・・・・)」

徐々に自分が追い詰められていることに切羽詰る浦太郎。

と、その時目の前に注目した浦太郎の目にとんでもない光景が映って来た。

「どお!!」

「?浦太郎さん、どうかしまして?」

「あ~~~いや~~~のどが渇いちゃった~~~ジュースでも飲みたいな~~~」

「あっ。それじゃ買ってきます。待っててくださいね」

マキはそう言って、ジュースを買いに浦太郎を後にする。

「は、はいはい・・・うっ、うっへん！」

浦太郎はマキがいなくなった後で徐に咳払いし、徐に前へと歩き始めると、異様に大きなカーネルサンダースの人形に変装をした、見え見えでバレバレな金太郎に向かって苦い顔で言って来た。

「金ちゃん・・・何やってるのさ？」

「ま、マキに見つからない為の変装だ・・・よく見破ったな」

「分からないでか！！！何処の世界にこんなデッカイケンタッキーおじさんがいるのさ！！」

「シーっ！」

「な！」

浦太郎は周りの反応を窺うと、思わず焦り顔を浮かべる。

そして、一度落ち着きを取り戻してから金太郎の話に耳を傾ける。

「昨夜は大分張り切ったようだな。」

「お蔭さんでね・・・！で何の様なの！？」

「奴の事だ」

「？」

「奴は生きていた。昔同じ傭兵部隊に居た、“スネーク”と呼ばれていた男だ。」

「ふ～ん。しかし何故そいつが元上官の娘を狙う？」

「スネークは裏切り者だ。我々部隊の作戦を犯罪者側に売った。その為部隊は、私とチーフのヒムロさんを残して全滅した。だから私とチーフは奴を秘密裏に殺した・・・十年前の事だ・・・」

「だが、生きていた・・・か。そして新聞でマキちゃんや金ちゃんの事を知った・・・・・これからは、もう僕やマキちゃんに近づかないで」

「ど、どういうことだ！？」

「マキちゃんは金ちゃんにとって最愛の娘のようなものだ。その彼女を金ちゃんの目の前で無残に殺すことで、復讐を果たす気だ。」

「・・・・・・・」

「だから金ちゃんはうろちょろせず、スネークを見つけ出し、自分で始末をつけな。その間に僕はマキちゃんと楽しい時を過ごす♪」

それを聞いた瞬間、金太郎は思わず力が抜けてしまう。

「ぐっご！！き、貴様！！結局自分が楽しむために私を・・・！」

「あら♪マキちゃんだ！」

「な！」

金太郎はマキが戻ってくることを知ると、すぐさま人形のように全く動かなくなる。

マキはジュースを手に取り息を切らしながら、何事もなかったかのように立ち尽くす浦太郎に近づいた。

「は、は、は。浦太郎さんお待たせしました！私の分も買ってきちゃった！」

「じゃあ何処か静かなところで、二人っきりで飲もう♪うふふ♪」

浦太郎は敢えて金太郎を刺激するような言い方でそう言うと、マキをエスコートし別な場所へと移動する。

「ささ、あっちにいいとこがあるよ～～～♪」

金太郎はマキを浦太郎に任せてはおけなくなり、険しい顔を浮かべる。

「ぐ～～そうはさせぬぞ・・・」

と、その時だ。

「デッケー！！」

「！？」

金太郎は自分が注目の的にされていることを知ると、咄嗟に人形のふりをする。

「うわあ！デッカイケンタッキーのおじさん♪かわいい～～～」

ミッドチルダの市民もこれほどまでに大きなケンタッキーおじさんは見たことが無く、物珍しそうに写真を撮り始める。

段々と人数も増えていき、収拾がつかなくなってしまいそうになると、金太郎は意を決して大声を上げる。

「ぐあああああああ！！！！！」

「「「わあああああああ！！！」」」

驚き返る市民を余所に、金太郎は強面の顔で行き負よく走り出し、そのとっばちりを受けてしまう見知らぬ男性は彼に追い回されながら思わず言う。

「なななな何で俺！！！」

そして、金太郎はそんな男を踏み倒すと脇目も振らずに浦太郎とマキの元へとひた走る。

一方、浦太郎の方はと言うとマキが勝ってきたジュースを悠々と飲む傍ら、見張り役の金太郎がいないことをいいことに楽しい時を過ごしていた。

「ぷっは！美味しいですね～～～（金ちゃんは追っ払ったし、店長も用事でいない。今夜はマキちゃんの部屋で・・・うふふ♪うふふふ♪）美味しいな～～～ジュース♪」

しかし、そう思ってる浦太郎を余所に、彼の近くには既に金太郎がしっかりとついており、金太郎は気づかれないように派手なおばさんの格好をしながらベンチで一人本を読むふりをしていた。

周りから見ればこれほどまでに異様な存在は他に居ないだろう。

犬が金太郎に向かって咆えると、金太郎はその強面な外見から一瞬で犬を退かせる。

浦太郎もこの犬を見た後ですぐに彼の存在に勘付いた。

「ん・・・・・だっはあああ！！！！」

浦太郎は隣に座るマキの手を握ると、駆け足でその場を後にする。

「ま、マキちゃん！！！あっち行きましょうあっち！！！！ねっ！あっち！！！」

マキは言われるがままに浦太郎に手を引かれていくと、金太郎は徐にベンチから立ち上がり周りが注目する中徐に呟く。

「ふん。勘のいい奴・・・」

金太郎の追ってから逃れるため、浦太郎はマキと共に池のある公園へと場所を移した。

マキは息を切らしながら同じく息を立てる浦太郎に尋ねる。

「は、は、は、は。浦太郎さん。どうしたんですか？」

「い、いやあのちょっとね・・・！はぁ～～～～～」

疲労が見え始める浦太郎は徐に目の前で泳ぐカモを眺める。

と、その時彼はそのカモに違和感を覚える。

「ん・・・・・ぬああ！」

カモが泳ぐのを止めた後、浦太郎はまたしてもマキの手を取り急いで移動を始める。

「ままマキちゃん！！あっちがいい！！あっち！！！あっち行こう！！」

「は、はい」

二人が立ち去った後、徐に池の中より現れたのはカモの模造品を頭に付けて潜水していた金太郎だった。

「ふん。本当に勘のいい奴だ」

浦太郎は執拗に自分の事を付け回す金太郎のしつこさに徐々に嫌気がさしていた。

「たくっ！あんにゃろは・・・・・・」

そう言いながら道を歩いていると、唐突に現れる何処かの薬局の前にでも置いていていそうなオレンジ色のゾウさんに変装をした金太郎。

「「ぐあああ！」」

二人は驚愕すると、怖くなって急いでその場を後にする。

「う、浦太郎さん！何あれ！？」

「いや！何でもありません・・・！」

そう思って今度は動物園の前を通りかかると、待ち構えていたのはゴリラよりも怖いゴリラの格好をした金太郎。

「「あああああ！」」

これを後にしまた別の場所に行くと、金太郎は皇后力士像の格好で二人を待ち構えていた。

「あああああああ！！！」

これら以外にも、西郷さんの銅像と言った者もあり、最早二人はリアクションをとる事すら疲労感を感じていた。

そして、漸く金太郎のストーカー的な見張りから逃れることが出来た二人は広々とした公園の真ん中で肩で息を立てる。

「は、は、は、は。浦太郎さん・・・さっきから、大きくて不気味なものが後をつけてるような・・・」

「いやぁ～あの、気のせい・・・気のせいです・・・」

「は、は、は・・・ん？あら」

するとその時、マキは自分がいる場所をもう一度見渡、何かを思い出し様な表情を浮かべる。

「ここは――――――」

浦太郎が注目していると、マキは懐かしそうな顔で浦太郎に言って来た。

「浦太郎さん。憶えててくださったんですね。」

「え？」

「浦太郎さんと昔、一回だけ逢った場所。想い出の場所・・・・・・・だからあんなに急いでここに来たんですね――――――」

「（え！昔一回だけ逢った・・・！？聞いてないよ僕は・・・！）」

浦太郎がマキの言葉に焦りを感じる中、マキは遠い記憶を思い返しながら、空を仰ぎ見る。

「――――あの日、父に連れられてここに来たあの日。空を覆うような、広い背中を見た時、私入道雲かと思ったわ。それを見て怖くて泣きだしちゃって・・・でも、私をあやすあの困ったような目は、今でも忘れられないわ――――――」

そう言うと、マキは徐に浦太郎の背中に顔を当てて来、浦太郎は思

わず目を見開く。

「小さかったのね私・・・・・・あの広い背中が、今はほら・・・」

「マキちゃん・・・ウフフっは!!!（柔かい胸の感触!!・・・・・・）どっ!?」

と、懲りずに下心を丸出しにしていた浦太郎の目の前に映って来たのは、上半身を焦げ茶色に染め上げ、胸像に変装をした知り合いから見れば馬鹿とも言える金太郎であった。

「あのバカまたあんな・・・！」

「どうかしたの？」

「いえいえ!!別に!!」

「あら？あれは・・・！」

「え・・・うわあ！」

マキは浦太郎の元から一旦離れて、胸像に変装した金太郎の元へと歩み寄っていく。

「いつの間にか胸像がこんなところに・・・・・・」

「あっ、ダメ！それ以上近づいちゃ！」

「やけに生々しいわね。それにこの顔は――――――」

そう言いながら金太郎の身体に手を伸ばそうとした・・・その瞬間。

「！」

浦太郎は不意に聞こえてきた銃の男を敏感に感じ取り、表情を一変させる。

そして、その瞬間マキを標的にした弾丸が飛んできた。

「マキちゃん！危ない！！」

「え？」

マキが浦太郎の言葉に反応し後ろを振り返った瞬間、胸像に変装していた金太郎が足場を壊して前に出てきた。

「なっ！」

浦太郎がその光景に目を向けると、後ろからは二発の弾丸が飛んでくる。

そして、気が付いた時浦太郎とマキが目の当たりにしたものは――――

「「は！」」

それは、マキを守ろうとし、飛んできた二発の銃弾を代わりに受けた背中ら少量の血を流す金太郎の姿だった。

「う・・・・・！」

金太郎をマキに危害が及んでいないことを確認すると、痛みを堪えながら駆け寄ってきた浦太郎に尋ねる。

「や、奴は？」

「気配は消えた。それより怪我は？」

「ううううううううう！！！！！」

金太郎は全身に力を入れると、身体の中に入った鉛の弾丸二発を何と筋肉の力だけで外へと取り出すことに成功する。

傷具口から飛び出す潰れた弾丸を目の当たりにしながら、浦太郎とマキに対して金太郎はこう言った。

「奴は彼女を殺(や)るつもりで、３８口径しか持ってこなかったらしいが・・・あんなものじゃ、私の筋肉は貫通出来ぬさ」

「何ちゅう筋肉じゃ・・・／／／」

思わずそう言ってしまう苦笑いの浦太郎。

と、その直後マキが金太郎を見ながら声をかけてくる。

「浦太郎さん。」

「へ！？」

「この方、お知り合い？」

「え！いや、その！と、友達の・・・あの・・・金ちゃんって探偵なんだ！君が狙われてるって言うから、ガードを頼んどいたんだよ・・・ねっ！」

「・・・あ、ああ」

「・・・・・・」

マキはそれを聞く傍ら、どこか懐かしそうな顔で金太郎の方を凝視し、浦太郎は手に口を入れながら危惧の念を覚える。

「（あ！やば・・・ばれたかな！？）」

純情足長おじさんを買って出た浦太郎と、本物の足長おじさんの金太郎。

果たして、この事件はどんな方向に進むのか？

次回、後半です！！

浦太郎と金太郎の純情足ながおじさん伝説（前編）（後書き）

重要大事の勝手に台詞選集！

今回は人気の高かったあの話から、これをピックアップです！

な「私はあれからずっと怖くて怖くて仕方なかった・・・！！大切な人が急に居なくなって・・・初めてその重さに気付かされた・・・！！自分の手の届かない遠いところへいってしまった時の辛さも・・・寂しさもそこで思い知った！・・・・・・だから・・・もう居なくなったりしないで！もう・・・・・・私を一人にしないで！！！」

（第二十話：なのはの涙より）

魔導師図鑑ハイパー！

昨夜の騒動で六課の隊員寮はすっかりメチャクチャとなってしまい、部隊長はやてはこの責任を前線メンバーの男たちに一任し、急ピッチで修理をさせていた。

恋次達は自分たちが金太郎の所為でとっばちりを受けてしまったことに苛立ちを覚えていた。

恋「ったく！なんで俺達があいつの所為でこうなるんだよ！？」

鬼「くそー！！熊の野郎・・・帰ってきたらただじゃおかねぇ！」

白「大体、私までもがなぜこのようなことを？」

吉「文句は言わない方がいいよ。ほら、クロノ提督を見なよ。一人

セットと木材を運んでいるじゃないか」

吉良がそう言うので、全員がクロノに注目すると、クロノは一人重い木材を背に乗せ文句も言わずに仕事に従事。

エ「僕達も少しは見習わないとですね・・・」

恋「ち。分かったよ。しゃーねーな」

恋次達は仕方なく修理を続けるが、ここで鬼太郎が思わぬ光景を目の当たりにする。

鬼「ぬお！！」

吉「どうしたの？」

鬼「おい見ろよ～！いいもんが見えるぜ～！！」

全「？」

男どもが注目する中、見えてきたのは教導から戻って内勤用の制服に着替えようとする下着姿のなのはであった。

これには思わずヴァイスも興奮し、鼻血を出す。

ヴァ「うひょおおおお！！！！なのはさんの下着が！！！！」

恋「へへ・・・偶にはいいかこう言うのも・・・／／／」

しかし、これを絶対許さない男が一人いる・・・

ユ「何をしているのかな・・・・・・みんな」

全「ギク！！！」

全員が振り返ると、そこに立っていたのは殺気に満ち満ちた様子の笑顔を浮かべたユーノ・スクライア。

ユーノは洞爺湖木刀と逆刃刀を手に取り徐に近づく。

ユ「ははははは♪みんな・・・・・・よくもなのはの着替えを覗いたね♪安心しなよ・・・直ぐに地獄に落としてクシャナーダの餌食にしてあげるから♪」

ク「待て！！！待ってくれユーノ！！！！僕はまだ見ていないぞ！て言うか見たくもない！」

これが火に油を注ぐ羽目となる。

クロノは真っ先にユーノの攻撃を受け、地獄に落とされることとなった。

ユ「鬼・斬り！！！！」

ク「あああああああああああああ！！！！！！！！！！！！！」

次回予告

浦「やい金ちゃん！僕を殺す気か！？」

金「すべて貴様が悪い！」

浦「何！？」

ユ「喧嘩してる場合か！ついにスネークが動き出したんだよ！」

浦「どうせ金ちゃんは奴の手口もお見通しなんでしょ？」

金「当たり前だ」

浦「精々威張ってなって。弱点突かれて泣いたって僕は知らない」

鬼「熊に弱点なんかあんのか？」

金「ない！」

ユ「ほほ～ん。チュチュチュ♪」

金「ギク！」

ユ「ユーノ・スクライア外伝　『浦太郎と金太郎の純情足ながおじさん伝説（後編）』。絶対見てね♪」

浦太郎と金太郎の純情足ながおじさん伝説（後編）（前書き）

浦「うしししし♪さていよいよ後半戦♪この話で今まで知らなかった金ちゃんの弱点が判明するもんね～～～♪」

金「わ、私に怖いものなどない！」

ユ「ひひ。ほれ♪」

金「ぐ、ぎゃあああああああああああ！！！！！！！！！！」

怖いものの正体は物語の中で！

浦太郎と金太郎の純情足ながおじさん伝説（後編）

前回のあらすじ。

亀井浦太郎は熊谷金太郎の依頼で、バイオリストであるマキ・ヒムロとデートをすることになった。

しかし、マキはある人物から狙われていた。

狙っていたのは、金太郎が傭兵として雇われていた頃、彼や金太郎の恩人でありマキの父親でもあったタケシ・ヒムロらを裏切ったスネークと言う男だった。

浦太郎は、金太郎と共に陰からマキの命を狙うスネークの魔の手から彼女を守ることが出来るのであろうか？

〈浦太郎Ｓｉｄｅ〉

マキが狙撃されたその日の夜。

金太郎は浦太郎とマキを連れて、彼女の身を確保するために六課へは戻らず彼女の自宅である市内のマンションへと訪れていた。

ここでいやらしいことを考えるのは止しといて、健全な意味で彼女は安全を確保されている。

勿論、彼女のボディーガードは他でもなく浦太郎と、それに付き添う金太郎である。

しかし、浦太郎は非常に不満げな顔を浮かべていた。

何故なら、浦太郎の横には金太郎の意外に、もう二人のお目付け役であるユーノと鬼太郎の二人が敢えて浦太郎に顔を合わさずそっぽを向きあっているのだ。

「「「・・・・・・」」」

浦太郎は息が苦しくなりそうなこの状況で、金太郎の方に顔を向けると、徐に言って来た。

「金ちゃんこんなところにいないで、スネークを探しに行けば？」

「今となっては、マキの側に居た方が奴をやれる」

「ああ・・・そう」

そう言った後、浦太郎は一番気になっていたユーノと鬼太郎がいる理由を問い詰める。

「店長！先輩も何で二人がここに居るのさ！？帰ってよ！」

「亀が暴れまくって機動六課の宿舎寮穴だらけ。俺ら男どもは一日中修理に追われてるものでな。俺は店長の御指名で抜けることが出来たわけだ。」

「なのはとヴィヴィオに、秋の冷たい夜風に当たって風邪ひいてほしくないんだよね。それに、どっかのエロい男が万が一夜這いを掛けるなんてことになったら、きっとスキャンダルになってマキさんも迷惑がるだろうし」

「う・・・」

ユーノの言葉に反論することが出来なくなる浦太郎。

彼の考えていることは、ユーノには既にお見通しであるということだ。

すると、部屋の扉が開き、マキが人数分の紅茶を運んできた。

マキが扉を開くと、無言のまま座るユーノ達三人に挟まれ浦太郎が不満げな顔で思わずつぶやいた。

「ぶう～～～くそっ！」

このスクライア商店の四人の雰囲気を見た瞬間、マキは思わず心の中で呟いた。

「（な、何かこの四人・・・・・異様な殺気が漂ってるわね・・・）」

そんな事を思いながらも、マキは真っ先に自分を助けてくれた金太郎にコーヒーを差し出した。

「どうぞ。あ、あの・・・探偵さん」

「えっ！」

一瞬驚いてしまう金太郎と、そんな金太郎を労わってくるマキ。

「背中の傷、本当に大丈夫なんですか？」

「よ、余計なお世話である！」

マキの前では何時ものように紳士的に接することが出来ず、つい心が乱れて粗暴な言動を口走ってしまう金太郎。

それを隣で聞いていた鬼太郎は流石に頭が来た。

「おうい！お前の事気遣ってるんだぜ！！」

「ふん！」

そっぽを向く金太郎だが、マキは大して気にはしていなかった。

「あ。いえ、いいんです。私が出しゃばったことを」

「「「「「・・・・・・・」」」」」

ユーノ達は色々と複雑な事を思いながら、マキが淹れてくれたコーヒーを各々啜り出すが、マキは一人、自分を弾丸から守ってくれた金太郎の背中に奇妙な懐かしさを感じていた。

「（あの背中・・・・・・広い背中は――――――）」

どうしてもマキには分らなかった。

分別がつけずにいた――――――浦太郎と金太郎、どちらが本物のGこと、自分にとっての足ながおじさんであるのか？

考えれば考えるほど、マキの頭の中は迷走する。

夜遅くまで考えても結局分らずじまいのまま、マキは一人窓の外に乗り出すと、月明かりをぼんやりと眺める。

そんな時、彼女を見かけた浦太郎が声をかけて来た。

「寝つけないのかい？」

「あ。浦太郎さん」

浦太郎はマキの隣で同じように月を眺めながらマキの安全を考え、次のように言ってくる。

「いい月だ。眺めたくなる気持ちもわかるが、敵は何処で狙っているかわからん。気をつけなよ」

「はい」

すると、マキは寝る前にどうしても金太郎の事を浦太郎に尋ねたくなりこう言って来た。

「浦太郎さん。実はあの探偵さん・・・初めて遭った気がしないんです。父と同じ匂いがするんです。上手く言えないんですけど、体から発散する雰囲気みたいなものが同じような・・・」

「・・・・・・」

「でも、浦太郎さんもなんです！それに、ユーノさんや鬼太郎さんからも・・・あなた方からは、他の人と違うような匂いが・・・！」

浦太郎はそのマキの言葉を聞くと、神妙な顔を浮かべたまま無言で立ち尽くす。

マキはそんな浦太郎を気にして、自分の言ったことを恥ずかしく感じてしまう。

「あ・・・私・・・何訳分からないことを・・・あ。おやすみなさい！」

浦太郎にそう言った後、マキは自分の部屋に向かって歩きだし、そんな彼女の後姿を見ながら浦太郎はほくそ笑む。

「・・・ふん」

この時、マキに妙な事を仕掛けないかどうか陰で見張っていたユーノ達三人であったが、先ほどマキが口にした同じ匂いと言う言葉に関して次のように躱した。

「同じ匂いって・・・なぁ店長や俺はともかくとして、亀もどっかの傭兵だって訳じゃねぇよな」

「さぁな。私が知る事ではない」

金太郎はそう言った後、徐に立ち上がってリビングの方へと向かった。

鬼太郎はユーノと顔を合わせて苦笑いを浮かべる。

「へへへ・・・ま、まさかっすよね」

「と言うか、魔導師で傭兵出身っていう人はここいらじゃ金太郎以外にいない気がするけどね・・・」

そうして、二日目も無事に終わりを迎えようとしていたが、浦太郎にとっては今日も非常に災難な夜であることは間違いなかった。

「ううううううう／／／／」

浦太郎はいつ夜這いを掛けるかもしれないというユーノ達の考えから、絶対にそれが出来ないよう手錠で頑丈に捕まえられ、それを握りしめるのは金太郎だった。

浦太郎は半泣きの状態で床に寝ており、隣には大きな背を向けた金太郎と鬼太郎、そしてソファーにはユーノが眠っていた。

浦太郎が何時まで経っても不満げに唸り声を上げるので、ユーノはドライに注意を促した。

「静かに寝なよ」

そうして、浦太郎にとっての冴えない夜がこうしてまた終わりを迎えるのであった。

◇

〈金太郎Ｓｉｄｅ〉

そして、また朝が来た。

一日中浦太郎の手錠を離さず眠りきった金太郎は部屋の廊下を歩い

ていると、不意にマキの部屋に置かれていたあるものに目を奪われる。

「ん？」

目に映って来たのは、金太郎にとって非常に懐かしいものであり、思わず金太郎はマキがいるにいないに関係なしに部屋へと入って行き、置かれていた彼女のバイオリンケースを手に取った。

「（このバイオリンは・・・・・・）」

マキのバイオリンを神妙な顔つきで眺める金太郎だったが、直後そんな彼を見かけたマキが部屋に入ってきた。

「あ」

マキは徐に背中を向けて立ち尽くす金太郎へと歩み寄り、彼の顔を覗くと、それに気づいた金太郎がばつの悪そうにバイオリンを元の場所に戻す。

「ぬおお！！し、失敬！」

そして、金太郎が部屋から出ようとすると、マキが不意に言ってくる。

「このバイオリン――――――」

金太郎はその瞬間立ち止まり、マキはバイオリンを持つと些か寂しそうな顔を浮かべる。

「父の肩身なんです。たった一つの――――――」

そう言うと、マキは飾られた幼いころに父と撮った写真を眺めながら金太郎に語りかける。

「父もバイオリンの名手で、よく引いてくれました」

「ふん。私には関係のない」

飽く迄ドライな感じでマキに近づかないようにしようとする金太郎だが、マキは直ぐに彼を呼び止める。

「待ってください探偵さん！私、何故狙われてるんでしょう？調べて下さったんでしょう？！」

「そ、それは・・・・・・それは・・・・・・」

回答に詰まる様子の金太郎を部屋の外で窺う浦太郎。

すると、金太郎は咄嗟に思い付いたテキトウな答えを恥ずかしそうに大声で言って来た。

「女ったらしの浦太郎に騙された女が復讐を／／／」

「だあ！！」

浦太郎はその答えに思わずずっこける。

そして、マキ自身は意外な回答を耳に唖然としながらも問い返す。

「そ、それ・・・本当なんですか！？」

すると、浦太郎は起き上がると金太郎に詰め寄り猛抗議をする。

「金ちゃん！！てめぇなんてことを！！」

「あ・・・な、な・・・・・・・な～～～んちゃって♪」

金太郎は声色をこれまでにないぐらいに高くして誤魔化そうとしたのだが、二人はそんな金太郎を無言のまま見つめ、キンタ路は羞恥心のあまり全身が赤くなり湯気を発散する。

と、そんな金太郎に思わずマキが笑みを浮かべる。

「うふふ。面白い方。ありがとう探偵さん。私の緊張を解そうとしてくれたのね。」

「そ、そうなの・・・！こいつ図体デッカイ割にそういうとこ気が回るんだよね・・・！」

浦太郎も咄嗟に話を合わせようとしてそう言って来ると、金太郎は自棄になった感じで馴れ馴れしく浦太郎の首に手を回して顔を近づける。

「懐かしいであろうあのバイオリン！彼女の父親の物だそうだ！」

「え」

「懐かしいよな！！」

「う・・・うん／／／」

金太郎の迫力に圧倒された浦太郎はそう答えざるを得なくなる。

そして、あからさま様子で浦太郎はマキが手に持っているバイオリンを指さしながらこう言って来た。

「ああ！本当だ！！懐っかしいな！これでよくお父さんの演奏聞かせてもらいましたよ！」

「そ、そうですか。実は、日曜日に受賞記念コンサートがあるんです。そのコンサートで、このバイオリンを使おうと思って。練習・・・ちょっと聞いてもらえます？」

「勿論さ」

マキがコンサートで演奏する予定の曲を披露する事を聞き、浦太郎は早速ユーノと鬼太郎をリビングに集め、スクライア商店四人は誰よりも先に彼女の独演会を堪能することになった。

そして、全員がマキに注目する中、彼女は徐にバイオリンの弓を引きはじめ、演奏を始めた。

マキが演奏する曲を聞いた途端、金太郎の脳裏に蘇る情景。

「（この曲は――――――）」

それは、金太郎が傭兵魔導師として金で雇われ、各地を飛び回って大暴れをしていた頃、彼の上官でもありバイオリンの名手だったタ

ケシ・ヒムロが、戦場で戦死していった仲間の追悼の為によく引いていた曲だった。

金太郎はその時の情景を克明に思い出しながら、恩人でもあるヒムロが仲間の事を思って演奏を引きながらも涙を浮かべていたことと、今の自分の心境を重ね合わせると、眼鏡越しに涙がこみ上げてくる。

すると、演奏をしていたマキもまたそれに気づくと、思わず演奏を中断し金太郎に注目する。

「あ」

「「？」」

ユーノ達三人も同じように訝しげな様子で金太郎に目を向けると、ここで漸く金太郎は我に返り、想い出の世界から抜け出し現実に舞い戻る。

「（！しまった！）」

金太郎は自分の涙を誤魔化すために、懐からコインを一枚取り出し、それを見えない様に指で勢いよく弾くと、浦太郎の股間目掛けてヒットさせる。

勢いのついたコインが浦太郎の股間にヒットすると、浦太郎はこの上もない痛みを堪えることが出来ず、悶え苦しみ涙を流す。

「！あうううううう！！！！！」

浦太郎を心配しユーノと鬼太郎が目を向けると、金太郎は気恥ずか

しそうに先ほどの自分を取り繕うように言ってくる。

「ふん。女々しい奴。昔を思い出して泣いているのか？こんな欠伸の出るような曲など訊いておれん。」

そう言って、金太郎は部屋から立ち去ろうとし、浦太郎は蹲りながら心底金太郎の行動を恨んだ。

「ううううう！！！！！（あ、あの馬鹿・・・！もっと方法を選んでよねぇえええ！！！）」

と、その時部屋の電話が鳴りはじめ、マキの代わりに受話器の近くに立っていた鬼太郎が応答する。

「はい。え・・・誰だよてめぇ？もしもし？」

金太郎は部屋を出るのを止めると、鬼太郎の方へと歩み寄る。

「おい、貸せ」

鬼太郎から強引に受話器を奪いとった金太郎は、鬼太郎に変わって電話に出る。

「変わった」

すると、その金太郎の声を訊いた瞬間、電話の声の持ち主事、スネークが意気揚々とした様子で言ってくる。

『おお、その声は懐かしのG。昨日の君の勇姿は見せてもらった。しかしあれはあいさつ代わりだ。次は防げるかな？俺は必ずあの娘

を殺る。日曜のコンサートを楽しみにしていろ。ステージを赤く染めてやるぜ。うはははははは！！！！！』

そう言うと、スネークは一方的に電話を切った。

話しを耳にした金太郎と、電話の相手がスネークであると悟ったユーノ達は神妙な顔を浮かべながら徐に尋ねる。

「金太郎」

「オイ熊、まさか・・・」

「奴かい？」

「――――――コンサート会場で勝負です。」

マキはそれを聞くと、一抹の不安を感じ、思わず自分の胸元を強く握りしめる。

そして、コンサート当日の日曜日。

ミッドチルダ中央文芸会館で開かれるマキ・ヒムロの受賞記念コンサート。

会場には既に彼女のバイオリンの演奏を楽しみにしていた観客が大勢集まって来、外は長蛇の列を作っていた。

勿論ユーノ以下機動六課前線メンバー一同はマキのコンサートに同行し、彼女がスネークに狙撃されないようガードに来ていた。

コンサートが始まる直前、マキはこの日の為に浦太郎が用意してくれた特注の花に思わず笑顔を浮かべる。

「あ！ありがとう浦太郎さん！」

「一番、おっきいのを頼んだんです♪目立つように」

すると、それを聞いたはやてがこの会場内で最も大きな花を見ながら言ってくる。

「残念でした♪こっちの鼻の方が目立ちます」

「何？そんな筈は・・・・・・なっ！！」

浦太郎は半信半疑ではやての方に振り返ると、目の前に飾られていたのはおよそ2メートルはある巨大な花で、全員が唖然とする中浦太郎は盛大にずっこける。

そして、浦太郎は自分のそれを遥かに上回る大きさの花を送りつけた相手に不満を覚える。

「たく！！何処の馬鹿だ！そんなドデカイの！？」

「名前までド派手ですね・・・熊谷金太郎、だって！」

それを聞くと、浦太郎は愕然とする。

「なんだって・・・金ちゃんがこれ送って来たの！？はは・・・何処までもマキちゃん一筋なんだから・・・」

「それにしても、これぐらいの大きさだといくらかかったんでしょうか？」

「さぁ・・・見当もつかないわね」

各々のが送られてきた花の値段などを考えている中、マキは一人立ち尽くすと、花の真ん中に書かれた「熊谷金太郎」の文字に眼を向ける。

「熊谷金太郎・・・？」

マキが不思議そうにしていると、それを見たユーノが言ってくる。

「ああ。教えてなかったけど、あの探偵さん。本名は熊谷金太郎って言うんです」

それを聞くと、マキは頭の中で次のような連想ゲームで自分が探し求めていた足長おじさんの事をもう一度考えてみた。

「（熊谷金太郎――――――金・・・・・・金はゴールド・・・・・・GOLD・・・・・・G！）」

マキはここで漸く本当の足長おじさんが金太郎であることを述懐すると、横でマキの様子を窺っていた浦太郎もほくそ笑み、安どの表情を浮かべる。

それから数時間後、もうじきコンサートが始まろうとする中、マキは一人楽屋の中で形見のバイオリンを抱きかかえながら物思いにふけっていた。

「・・・・・・」

すると、そんなマキを気にして浦太郎と金太郎が近づいてくる。

マキが顔を向けると、浦太郎は柔かい表情で口にする。

「どうしたの？奴の事が気になるかい？」

「あっ。いえ・・・」

「大丈夫。君はステージの事だけ考えて、あとは任せるんだ」

「はい・・・」

返事をした後、マキは徐に浦太郎の隣に立つ金太郎に目を向ける。

「う！ふ、ふん！」

金太郎は気恥ずかしそうに、マキから目をそらしてそっぽを向ける。

マキはこの金太郎の態度に意外そうな顔を浮かべると、浦太郎が彼女の肩に手を当ててからコンサートの成功を祈って励ましの言葉を贈る。

「じゃあ、頑張ってね」

「はい！」

マキはエールを貰うと、父が残したバイオリンを手に取り、コンサート会場へと向かった。

◇

〈三人称Ｓｉｄｅ〉

そして、午後４時。

いよいよマキ・ヒムロによる受賞記念コンサートが開演する。

大勢の観客が拍手喝さいを送ってステージのマキに注目すると、ステージ衣装に身を包んだマキは徐にバイオリンの弓を引いて、演奏を始めた。

その演奏は聞くもの全てを包み込み、慈しみの心を自然と抱かせる。

警護中であるにもかかわらず、なのは達はその美しすぎる音色に虜となってしまう。

しかし、そんな美しいバイオリンの奏手を陰から狙う者がいる。

それこそが、今回金太郎に挑戦状を送りつけて来た、嘗ての傭兵時代の生き残り、スネークであった。

スネークはスポットライトの陰からライフルを構えると、演奏に集中しているマキの脳天に照準を合わせる。

「ふん」

このスネークの気配をいち早く察知したのは、魔導死神として力を失いながらも、研ぎ澄まされた危機察知能力から会場内に漂う殺気

を感じ取ったユーノであった。

ユーノは、別の場所で警護に当たっていた金太郎にこの事を伝えると、連絡を受けた金太郎は現場へと急行する。

と、そんなユーノ達の素早い行動とは裏腹に、何も知らずにライフル銃を構えてマキを狙っているスネークはと言うと、一人不敵な笑みを浮かべている。

「へへへ・・・あの甘ちゃんの事だ。この曲を聞きながら、涙してるに違いねぇ。へへへへへ・・・今その涙を、悲しみの涙に変えてやるぜ」

そう言いながら、スネークはライフルのスコープで位置を確かめながら、マキの脳天に向けて銃口を構える。

そして、照準が定まると、スネークは何の躊躇もなく引き金を引こうとする。

が、その直後思わぬ妨害が加わった。

「なっ！」

なんと、狙撃の直前でスネークの真正面にスポットライトが充てられてきたのだ。

一瞬何が起こったのか分らなくなるスネークだったが、直後スポットライトの向こう側から弾丸のように勢いづいた鉄の弾がスネークの手の甲に直撃する。

「ぐあああああ！」

スネークはその衝撃で、握っていたライフルを床に落としてしまい、更に言うとその鉄の弾は軌道を曲げて、スネークの顔へと直撃する。

「ぐっふ！」

スネークは人並み外れたその威力に圧倒され、壁に叩きつけられながらも、重い体を起こしてスポットライトの方へと目を向ける。

「は・・・・・・な・・・んだ・・・」

スネークが目を向けた直後、彼が目撃したのはパチンコの要領で鉄の弾を装填する嘗ての同志、熊谷金太郎の姿であった。

金太郎は次の弾を装填し、発条を力いっぱい引いてから、標的であるスネークに向けて弾を飛ばす。

弾は真っ直ぐにスネークの顔へと飛んでいき、それを受けたスネークは部屋の外へと飛ばされる。

「ぐっは！」

窓ガラスをもぶち破る恐るべき金太郎の力にたじろぎながら、スネークは非常に悔しがった様子で口にする。

「ぐ・・・おのれG・・・！あんなおもちゃで・・・！」

そう言うと、スネークは一旦マキの始末を後回しに、金太郎をおびき寄せるために屋上へと向かった。

金太郎もすぐにスネークを追いかけ、屋上へと向かうが、その傍ら金太郎は自分が先ほどおもちゃを使って攻撃した理由をこう口にする。

「ふん。おもちゃを使ったのは、マキの晴れ舞台を血で汚したくなかったからだ」

金太郎はゆっくりとした足取りで、屋上へと続く階段を上っていく。

そして、夕日が沈んでいき、辺りがもうじき夜の世界になろうかなるまいかと言う微妙な頃合いの中、金太郎は懐に潜ませたアックスオーガを取出し、屋上に身を潜めたスネークに声を上げる。

「隠れても無駄だ。出ろ！」

すると、これを聞いたスネークが意外にも簡単に手を上げて金太郎の前へと現れる。

「さ、流石だな・・・G。俺の負けだ」

「？ふん」

金太郎自身も、ここまで容易に根を上げ、当行の意志を見せて来たスネークに違和感を覚えながら、アックスオーガを起動させ徐に歩み寄る。

「やけにあっさり出て来たな。下手な小細工は無駄だぞ」

そう言って何も警戒せずに金太郎が歩み寄っていくと、不意にスネ

ークが勝ち誇ったような笑みを浮かべる。

「ふん」

「？」

すると、その瞬間金太郎の足に引っかかったピアノ線が反応し、金太郎の頭上に設置された箱の中からある動物が飛び出してきた。

それは、熊谷金太郎が唯一苦手とする生き物・・・ハムスターであった！

「！！！！！！！！！！！！！！！」

金太郎は血相を変えると、自分の頭や肩、そして足元に集まるハムスターの群れに思わず蕁麻疹が出始める。

「よ・・・止すのだ・・・！！！ははははハムスター！！！！！！！！！！！！ああああああああああああ！！！！！」

挙動不審な様子でハムスターを拒絶する金太郎だが、その直後別な場所に仕掛けられていた箱の中から別のハムスターが出てくると、金太郎は悲鳴を上げて全く動くことが出来なくなった。

「ひやあああああああああああああああ！！！！！！！！！！！」

スネークはこの事を知った上で、敢えてこの場所に金太郎を誘い込んだのだ。

「ははははは！いい様だぜ！」

「貴様！！何故私の苦手なものを！！」

「お前とは長い付き合いだからな。しかし、ここまでとは思わなかったぜ」

そう言うと、スネークは懐から拳銃を取出し金太郎に銃口を向ける。

「さぁて、手足をぶち抜いて動けなくしてやる。その間に娘を殺る。身動きできず、娘を助けられない自分を呪ってね！その後、お前もゆっくり娘の元へ送ってやる。」

「き、貴様・・・！！」

金太郎はハムスターへの恐怖と、マキを助けられない事で自分が後悔する事への恐怖が同時に湧き上がり、顔からは滝のような冷や汗が流れ落ちる。

「へへへ。先ずは、利き腕からだ」

「く・・・・・・」

小刻みに腕が振るえる金太郎と、その金太郎の利き腕を狙うスネーク。

そして、スネークが引き金を徐に引こうとした・・・まさにその時。

〈Ｗａｔｅｒ　ｓｎｉｐｅ〉

何処からともなく水の波導が飛んで来、引き金を引こうとしたスネ

ークの手を撃ち抜いた。

「ぐあああ！」

その衝撃で、スネークは握っていた銃を落としてしまう。

「！」

「だ、誰だ！」

金太郎とスネークが飛んできた水の波導の方向に目を向けると、そこにいたのはフィッシャーマンを起動させ、その先端を向けていた浦太郎であった。

「浦太郎！」

「懐かしい戦友との再会を邪魔しちゃって悪かったかな？」

浦太郎はスネークにそう言いながら金太郎の方へと近づいて行くと、今まで見てきた中で最も哀れな状態の金太郎の姿に思わず笑わずに入れなくなる。

「ふん・・・ぷっふ！ぷはははははははは！！！！！！あははは知らなかった知らなかった！！！！ハムスターが怖いだなんて知らなかった！！！」

浦太郎は大げなリアクションで大笑いをする中、金太郎はハムスターの恐怖にこらえながら膠着した身体で懸命に言ってくる。

「笑うな！！！！笑い事じゃない！！！！！！！貴様、ずっと見て

たのか！何故さっさと出てこなかったんだ！？」

「だって、その姿見て笑い転げていたもので、出番が遅れたんだって！！あははははは！！！！！！！！」

二人のやり取りを見ていたスネークは呆気にとられ、肩の力が抜けると同時に目の前には簡易なカラスが飛び交った。

金太郎は笑い転げる浦太郎に自分がハムスターが苦手な理由を口にする。

「私はハムスターの妙にカリカリってする音を聞くとですな、体中の力が抜けるのだ！！早く退けるのだ！！！」

と、その時・・・隙を見たスネークが落とした中に手を伸ばそうとする。

「うらあああ！！」

だがそれをすかさず浦太郎が止める。

〈Ｗａｔｅｒ　Ｂａｌｌｅｔ〉

「ぐあああああ！」

スネークは自分の髪の毛を削り取られると同時に、唯一の武器であった銃を無残に破壊されてしまう。

浦太郎の殺し屋顔負けの強さに恐怖を感じるスネーク。

そんな中、浦太郎は背中を向けたまま硬直するスネークに言ってくる。

「コラコラ。おイタはその辺にしておくんだね。金ちゃんしか目に入らなかったのが、御宅の敗因だ」

「き、貴様・・・・・・一体・・・・・・何者だ・・・・！？」

「今度会う時までに、次元世界最強の男こと、『翡翠の魔導死神ユーノ・スクライア』の従者とでも覚えておくことだ。まぁ最も、この名を聞いて店長や僕らの前に現れるバカは滅多にいないがな」

すると、全世界にその名を轟かせるユーノの異名を口にした瞬間、スネークの頭が真っ白となる。

「ゆ、ゆーの・すく・・・・・・お前が・・・！」

そして、スネークは恐怖で魂が抜け落ちたように白目をむける。

スネークが気を失うと、浦太郎は金太郎の方に目を向ける。

「ねぇ。コイツの始末・・・・・あら！」

と、その時浦太郎が目撃したのは、沢山のハムスターの大軍に気を保っていられなくなった同じく気絶し仰向けとなって倒れる金太郎の姿であった。

愕然としながらも浦太郎はフィッシャーマンを懐に収め、笑みを浮かべながらハムスターを一匹拾い上げる。

「これは、ハムスター飼っておけばお守りになるな♪」

こうして、スネークによるマキ・ヒムロ暗殺計画は浦太郎と金太郎の活躍により未然に防がれた。

狙撃を免れたマキは、何事もなかったかのようにコンサートを大成功させ、無事に部隊を終えることが出来た。

大勢の観客や警護に来ていたユーノ達六課メンバーが拍手喝さいを送ると、マキは頭を下げながら形見のバイオリンを大切に抱きしめる。

その後、楽屋に戻ったマキの元に浦太郎達がやって来ると、浦太郎はマキを安心させるために次のような嘘を言って来た。

「結局、奴は現れなかったよ。悪質ないたずらだったようだ。」

「でも、あの狙撃は?探偵さんだって、背中を撃たれたし?」

「実は、金ちゃんの受けた弾は強力な魔力弾によるものだと分かったんだ。しかし、質量兵器・・・本物の実弾二発も受けて、平気でいる化物みたいな人間、居る訳ないでしょ?」

「俺は一人その化け物を知ってるぜ」

恋次がユーノを一瞥してそう言うと、それを聞いた瞬間ユーノは笑顔を浮かべながら恋次の腹部に強力な肘打ちをする。

「痛い!!」

恋次はその威力に圧倒され、その場に沈み込むと、なのは達は思わず冷や汗をかく。

「店長や金ちゃんもねぇ、もうマキちゃんが狙われることはないはずだって。まぁ、プロの言う事だから、間違いないよ。」

「そうですか」

マキはそれを聞くと安心し、徐に金太郎に顔を向ける。

「お・・・」

金太郎はマキに見られると、気恥ずかしそうに敢えて顔を逸らす。

と、ここで浦太郎が残念そうにこんな事を呟いた。

「でも残念だったな。会場見回ってたから、マキちゃんの演奏聞けなくって・・・」

すると、それを聞いたマキはすぐさま言って来た。

「あ、あの！」

「？」

「だったら、お礼も含めて私の家に演奏を聞きにいらっしゃいませんか？」

「本当！？やったああ♪」

マキは金太郎にも同じように誘いの言葉をかける。

「探偵さんも、よろしかったら浦太郎さんと？」

「い、いやぁ・・・私は・・・」

と、金太郎が何かを言おうとする前に浦太郎はマキに言う。

「ああいいのいいの、あれは♪あのどうせ欠伸しかしないんだから、僕だけの為に引いてください二人っきりで♪うふふふ・・・あははは♪」

既に下心が誰から見ても分る浦太郎の表情に、マキ自身も苦い顔を浮かべると、先ほどまで躊躇った様子の金太郎がきっぱりと言ってくる。

「私も行こう」

「え・・・・・ええええ！！」

浦太郎は思わず声を上げて驚く。

そして、会場の外に出てから金太郎の襟を掴んで詰め寄った。

「スネークは追っ払ったんだから、金ちゃんはマキちゃんの前から姿を消すべきだ！！」

「お前とマキを二人っきりにさせられん。」

「どういう意味さそれ！」

「お前が私を行かせたくない理由は一つ。」

「な・・・」

浦太郎は既に自分の考えを見透かしている金太郎の言葉に愕然としながら襟を放すと、金太郎は自分の襟をと問えながら返事を返す。

「お前の手口などお見通しだ」

だが、これを聞いた浦太郎は不敵な笑みを浮かべる。

「ふん。お見通しね・・・それはどうかな?」

「何?」

「さ。帰りましょう店長」

「はいはい・・・」

「先行ってるぞ熊」

ユーノは少々疲れた様子で歩いて行き、鬼太郎もその後に続いて乗って来たヴァイスのヘリに乗り込むと、なのは達と一緒に機動六課へと帰還する。

金太郎は先ほどの浦太郎の不敵な笑みにこの上もないほどの不安を感じる。

「(な、なんだあの不敵な笑みは・・・・・私が一緒でも、二人

っきりになれる手でもあるというのか?それともまさか・・・今夜夜這いを!そ、そんな!!!)」

邪推が頭を支配し、金太郎のアドレナリンを爆発的に高めると、金太郎は興奮状態となって柱を思い切りたたきつける。

偶然にも柱の前に立っていた男は柱の装甲をものともせずに砕いてしまう金太郎に純粋に死の恐怖を感じ、思わず腰が抜ける。

「ひいいい!!たたたた助けて!!!」

男は一目散に金太郎の前から逃げ出すと、金太郎は先ほどの邪推の所為で思慮分別が全くつかなくなっていた。

「そんなことは・・・・・断じて許さん!!」

金太郎はこの後、浦太郎が夜這いを掛けると断定的に予想し、一目散にマキのマンションへと向かうが、一方の浦太郎の方はヴァイスのヘリに乗って鬼太郎とこんな話をしていた。

「なぁ亀。スネークは本当にマキちゃんを狙わねぇのか?」

「ま・よっぽどの馬鹿じゃない限り手は出さないよ。お土産もやったし」

「お土産?」

全員がその言葉に思わず耳を傾ける中、浦太郎本人は笑みを浮かべる。

で、そのお土産をプレゼントされたスネークの方はと言うと、大急ぎで部屋の荷物を片付けはじめ、逃げ出す準備に追われていた。

その理由は、浦太郎が彼の自宅のドアに貼り付けた「さっさと消えろ！この次は地獄行きの特急便となる　熊谷金太郎　翡翠の魔導死神ユーノ・スクライア」と書かれた脅迫文にあった。

「うわあああ！冗談じゃねぇ！！俺はもうヤダ！！！Gだけならまだしも、翡翠の魔導死神まで敵に回したら、生きてけねぇよ！！冗談じゃねぇよ！！ああ！乗り遅れちまう！！」

トランクいっぱいに荷物を詰め込んだスネークは、最終電車に乗るために駅へと向かって行き、それが結局のところ彼の始末屋人生の終わりでもあったとさ――――――

◇

〈金太郎Ｓｉｄｅ〉

そして、コンサートが無事に成功し、マキの命が助かった次の日の朝。

夜中からずっと浦太郎が夜這いを掛ける事を予想して草陰で待機していた金太郎だったが、結局のところ浦太郎は夜這いどころかマンションにも訪れる事は無かった。

これには、金太郎も拍子抜けた様子だ。

「・・・とうとう来なかった・・・」

だが念の為と思いつつ、金太郎はマキのマンションへと向かい、彼女の部屋のインターホンを鳴らす。

「はぁい」

マキがドアを開けると、目の前には緊張した様子で立ち尽くす金太郎がいた。

「あ。探偵さん。早かったんですね？」

「う、浦太郎は？」

「まだですわ。さ、どうぞ」

金太郎は辺りを警戒し、浦太郎がいないことを確認すると徐に部屋の中へと入っていく。

そして、リビングのソファーに腰かけ、マキが出した紅茶とお茶請けの菓子を戴いた。

「どうぞ」

笑顔で立ち尽くすマキを余所に、金太郎はこの場に自分とマキの二人だけの空間と言うものに挙動不審態度をとるが、気を落ち着かせるために紅茶に手を伸ばし徐に啜り出す。

と、その直後マキが金太郎の本名で語りかけてきた。

「あの・・・熊谷さん」

「ぶっふ！」

金太郎は思わずそれを聞くと、飲んでいた紅茶を吐いてしまう。

「げっほ！げっほ！な、何故私の本名を・・・！？」

「浦太郎さんに、お礼が遅れてすみません。立派なお花戴いて」

「いやぁ・・・」

「では、始めましょう」

「え？だがまだ浦太郎が・・・」

そう言うと、マキは徐に立ち上がり、バイオリンを抱きながら真実を口にする。

「・・・浦太郎さんはいっしゃいません」

「え・・・」

そして、マキは些か潤んだ目を浮かべながら金太郎を見つめる。

「――――――あなたでしたのね。G」

「ば、バカな・・・！」

「浦太郎さんがコンサートの始まる前に、教えてくださいました」

金太郎はそれを聞くと、足早に部屋を出ようとするが、マキはそん

な彼を呼び止める。

「待ってください。熊谷さん！」

それを聞くと、金太郎はドアノブを握ったまま立ち尽くす。

「あなたが何故、匿名で援助してくれて、私の前に現れなかったかは知らされていません。その必要はないからと・・・それは、あなたや父や浦太郎さんの意志なら聞きません。聞きませんから、せめて・・・・・私のバイオリンを・・・私のバイオリンを――――」

すると、金太郎はドアノブを放してソファーの方へと戻ると、重い腰を下ろして言って来た。

「早くしろ」

マキは嬉しくなり、明るい声で返事を返す。

「は、はい！」

そして、マキは金太郎にとっての思い出の曲を演奏し始める。

このバイオリンの音色を外の方で聞いていた浦太郎とユーノは柔かい笑みを浮かべながら車に腰かけていると、浦太郎は満足した様子でユーノに言ってくる。

「さぁて、行きましょうか♪」

「珍しいよね。浦太郎が口説かずに手を引くなんて」

「と～～んでもない。足長おじさんを止めただけ。その代り、恋人になったんです♪この通り、留学先の住所も聞いてあります」

浦太郎が住所が書かれた紙を取り出すと、ユーノは唖然としながら着ていた羽織が脱げそうになった。

「はは・・・ご立派・・・」

二人は、もうしばらくこの演奏を聞いてから六課へと戻ることにし、その間に金太郎はずっとマキの部屋のリビングで彼女が奏でる演奏をじっと聞いていた。

そして、演奏が途中で中断されると彼女は物寂しそうな顔で言って来た。

「私、明日リゼンブルグに立ちます。留学生として招かれているんです。ミッドにはいつ帰れるか・・・だから、この短いミッド滞在の内にあなたに会いたかった。」

すると、それを聞いた後、金太郎はふとこう言って来た。

「・・・親父さんの夢だった」

「え」

「マキが一流のバイオリニストになることが。十分大人になったとき、全て語ろう。まだ聞きたいと思うのなら――――――」

「熊谷さん・・・」

「その名は止せ。よそよそしい。金太郎で構わん／／／」

照れた表情で顔を逸らしてそう言うと、マキは思わず笑みを浮かべる。

「うふ」

「さぁどうした？続きだ／／／」

「はい！」

マキは金太郎に促され、再び演奏を始める。

この時、彼女の奏でるバイオリンの音色はコンサート会場で披露したそれよりもずっと澄んで、そして純粋に金太郎を包み込む、そんな音色であったそうな。

◇

〈浦太郎Ｓｉｄｅ〉

この短くも鮮烈な足長おじさん騒動がひと段落したはいいが、金太郎から今回の事を懇願された浦太郎は次の日の昼間、ウィスキーを止めどなくボトルごと飲んでいた。

勿論、他の局員やなのは達が見守る中、仕事もせずに・・・・・・・

鬼太郎は呆れながらも浦太郎に言ってやった

「みっともねぇな！昼間っから酒飲みやがって！」

「飲むしかないでしょ！金ちゃんの奴、依頼料だってちゃんと払ってくれたんだから」

そう言って酔った浦太郎が周りを見渡すと、六課には金太郎が依頼料として自分に送りつけて来た特注のウィスキーボトル三十箱と巨大な招き猫が置かれており、なのはは思わず声を上げる。

「こんなに沢山何処に置けばいいんですかもう！」

「いいじゃないのちょっとぐらい・・・！なんなら、この特大招き猫はどうしろって言うのさ？」

そう言った後、浦太郎は持っていたグラスを眺めながら柔かい表情を浮かべながら徐にこう呟く。

「・・・足長おじさんに乾杯」

そして、今回の足長おじさんこと熊谷金太郎は空港でリゼンブルグへと立ったマキを見送った後、浦太郎の事を思いながら六課への道を戻っていく。

「ふ。浦太郎め・・・お節介な奴だ――――――」

かくして、二人の足長おじさん伝説は一人のバイオリニストの胸にしっかりと刻み込まれたのであった。

浦太郎と金太郎の純情足ながおじさん伝説（後編）（後書き）

重要大事の勝手に台詞選集！

今回はユーノの師匠こと、伝説の死神代行・黒崎一護の台詞をピックアップだ！

一「不安で、怖くて、辛いユーノの気持ちの全てを理解出来る訳じぇ・・・けど・・・！それでも俺はユーノの事を守るって・・・・・俺の・・・・・・・・・俺の魂に誓ったんだあああ！！！！！！！！！！！！！」（第百三十一話：師弟の絆より）

魔導師図鑑ハイパー！

今回の事を通じて、金太郎の怖いものがハムスターであることを知った一同はあまりのおかしさに笑いが止まらなかった。

鬼「だはははははあ！！！！！熊の！！！！熊の怖いものがハムスターだとよ！！！はははは！！！！！」

ヴィ「でははははは！！見た目はそんな怖い癖して！！！あんな可愛い動物が苦手だなんてな！はははははは！！！！！」

金「／／／／／／」

金太郎はじっと顔を赤くしながら立ている様子だった。

ユ「くふふうふふ！！！金太郎、何も恥ずかしがる事じゃないよ。僕だって猫苦手だし、あの声を訊いただけで力が抜けちゃうもん♪」

な「そうですよ♪誰だって怖いものはありますって」

恋「じゃ、おめぇの怖いものは何だよ？」

な「え！そ、それは・・・・・・／／／」

なのはは自分にとっての怖いものを尋ねられると、敢えて口を閉ざして喋ろうとしないが、ユーノはそんななのはの肩に触れると震えるなのはに笑顔を向ける。

ユ「なのは・・・・・素直に言ってくれると、嬉しいんだけどな～♪」

な「う／／／／／」

ユーノの極上スマイルの中に潜む、途方もない殺気に敏感に反応したなのはは思わず涙を浮かべながら、心中で自分の怖いものを呟いた。

な「（う～～～私にとっての怖いものはある意味ではユーノ君なんだけど～～～／／／）」

ちなみに、もう一つなのはにとっての怖いモノ・・・それは意外にも幽霊だったりするのであった。

次回予告

な「前から思ってたけど、一護さんとシャマル先生って、会うたびにしょっちゅう口げんかしてない？」

ユ「根本的に医者としての考えが真逆だからねあの二人は」

ル「シャマル殿は丁寧な診察の反面、過保護すぎる面が強く、一護に至っては・・・本当に医者として働いているのか？」

一「どういう意味だよそれ！俺だってちゃんと医師免許持ってんだよ！れっきとした医者だ！」

ユ「そんな医者の一護さんとシャマルさんが、偶然にも同じ時間を過ごし・・・」

な「そして、魔法が使えない状況で生命の危機に瀕した患者を手術する！」

一「次回、ユーノ・スクライア外伝　『戦う医者と守る医者』」

シャ「絶対見てね♪」

戦う医者と守る医者（前書き）

ユ「今回は医者としての一護さんが活躍する話ですね♪」

一「ああ。だけどよりによってシャマルの野郎と組むことになるとは・・・先が思いやられるな」

シャ「ああ！それどう意味です！いい加減な医者のあなたに言われたくありませんね！」

一「てめぇ！まだ言うか！そっちこそ、現役の医者を舐めんじゃねぇ！！」

な「まぁまぁ二人とも落ち着いてください。二人の喧嘩はどうせ本編でもある訳ですし、ここは先ず話を進めましょうね」

ユ「では、始まります♪」

戦う医者と守る医者

＞i34299―709＜

機動六課主任医務官、湖の騎士シャマル。

前所属は特別補佐官及び本局医療局。

医務官資格を保有し、治療・救護を中心として、高いバックス能力を誇る六課が誇る守りの要の一人であり、なのは・そしてユーノの主治医でもある。

と、表向きではこのように表記するのだが、時々彼女はその過保護な一面から反感を買うこともある。

それは、同じ医者でありながら死神代行と言う存在であるユーノの師・黒崎一護である。

二人は同種の職業上、人を直すという理念と志は同じだが、根本的に性格が正反対な上、医者としての振る舞いも真逆。

その為、しばしばユーノの事で二人は衝突をすることがあり、互いに罵り合いシャマルは一護を「いい加減な医者」と、一護はシャマルを「過保護な医者」と呼んでいる。

もっと言うならば、戦う医者と守る医者・・・対極を為す二人。

今回はそんな二人の医者としての一面をクローズアップしたお話である。

〈六課Ｓｉｄｅ〉

機動六課ロングアーチ。

時計が既に正午を迎えた事を指し示すことを確認した、医務室で仕事をしていたシャマルは昼食をとりに席を外す。

廊下を歩きながら肩を回し、昼のメニューを考える。

「あ～お腹空いた～もうお昼ね。さて、今日は何食べようかしら・・・・・」

と、その時彼女は周囲から漂ってくる香ばしい臭いに足を止め、思わず匂いをかぎながら歩き出す。

「あら？何かしら・・・・・・いい匂い♪」

シャマルはかぐわしい臭いに釣られて歩き続け、気が付けばいつも立ち寄っている司令室の前を通りかかり、案の定その中から匂いがしてきたのでドアを開けると、開けた瞬間彼女の目に飛び込んできたのは、真剣な表情で中華鍋を操る料理をしていたユーノだった。

ユーノが料理をする傍ら、彼の作る料理を心待ちにしているなのは達と一緒に、その手伝いをしていた者が一人。

木曜日は午後から休診となっていたユーノの師、一護であった。

シャマルが唖然とした表情で調理中のユーノを見つめていると、ユーノは一護から渡された油・エビを入れてると、更に強いアルコー

ルを豪快に鍋の中に入れてフランベを起こす。

ちなみにフランベとは、アルコール度の高い酒を入れることによって食材に香りなどを付ける手法の一つで、レストランでも肉を焼くときなどに用いられる。

勢いよく炎が鍋から立ち上ると、シャマルは一瞬後ずさる。

「うわ！」

と、その時一同がシャマルの存在に気付く。

「あ・シャマル先生。ぐっとタイミングですよ」

「グッドタイミング？て言うかユーノ君、何してるの？」

「見ての通り、料理だよ」

一護がそう言った後で、シャマル自身も彼がここにいることに気付く。

「一護さん！何時からいたんですか！？」

「つい２・３０分前からですよ。あ、序に言うと今日は一護さん一人だけですから♪」

ユーノはそう言って調理を進めていくが、シャマル自身はユーノばかりに気をとられていたために彼が声を発するまで一護の存在に気付いていなかったようだ。

「そう・・・」

シャマルがヴィータやはやての方に歩み寄っていくと、ヴィータやなのはは前に一度だけ食べたユーノの料理の味を思い出しながら言ってくる。

「いや～私もびっくりなんだけどよ、ユーノって料理もギガうまなんだ」

「うんうん♪そうなんだよね～♪あの蕩けるような味がなんとも～♪」

「趣味の幅が広いからなこいつは」

と、恋次が言った後で鬼太郎はシャマルを一瞥しつつ、料理と言うものに鼻で笑いながら関して言ってくる。

「ああ、料理と言えば・・・シャマルは相変わらず下手くそだよな！」

「あああ！！！またシャマル先生が気にしてることを／／／」

シャマルが鬼太郎の発言に思わず顔を赤く染めると、それを聞いた一護は真顔で口を挟む。

「おいおいやめてくれよ、調理中にそんな食欲が失せるような話しするのは」

「食欲がなくなるって何ですか！シャマル先生、そんなに料理下手じゃないもん！」

すると、それを聞いた一同が顔を青ざめた後、恋次がすかさず口にする。

「嘘つけ！俺一度おめぇの作ったもの喰ったけど、あれで胃の中洗浄する羽目になったんぞ！」

「恋次殿でも食べられないとなると、余程酷い味だったのだろうな」

「ああ。あれは最早質量兵器並みのおそろしさだ」

白鳥の言葉にザフィーラが引きつった顔でそう言うと、シャマルの機嫌はますます悪くなる。

「ざ、ザフィーラ！そんなちょっと引いた顔で何言ってるのよ！！もう～～～みんなして人の事馬鹿にして～～～！そんなに言うなら今後怪我とかしても治療してあげないんだから／／／」

「いやそれは流石に困りますよ！」

「落ち着いてくださいって！」

フォワード陣が危機感を覚えてそっぽを向くシャマルを宥めようとすると、ここでシャマルを擁護してきたのは主であるはやてだ。

「みんなもあかんよ。あんましウチのシャマル罵倒するようなこと言っちゃ」

「ほうら！はやてちゃんだってそう言ってるでしょ！」

「しかし主はやて。かと言ってシャマルの料理が美味いとは言い切れません」

「うん。それは私も同感や」

シグナムの問いに対してきっぱりとはやてがそう言うと、シャマルは裏切られた衝撃と悲しみのあまり涙があふれる。

「あああ！！！はやてちゃんまで酷いーーー／／／」

嘆き悲しむシャマルを余所に、調理中のユーノは味見をする。

「うん♪いい感じ」

シャマルはこのユーノの態度や周りの様子に苛立ちを感じると、不機嫌そうな眼つきでユーノとそれを手伝う一護に言ってくる。

「ふ～～～ん・・・一護さんと言いユーノ君と言い、随分暇そうなのね」

「あ？何だと・・・」

「暇そうに見えますか？」

「だって、これって研究でもなんでもないでしょ？」

と、この発言を聞くと恋人であるなのはや親友であるフェイトはユーノを庇おうと反論する。

「ああ！シャマル先生その言い方はちょっとないんじゃんですか？」

「シャマル。それはいくら何でもユーノに失礼だと思うよ」

「なのは、フェイト。いいって別に僕は。気にしてないから」

ユーノはそう言って軽く受け流すも、一護は先ほどの発言が気に入らなかったのか不機嫌そうに皺を寄せながらシャマルを指さす。

「けど、言われたまんまじゃお前も虫が好かないだろ？」

「大丈夫ですよ、一護さん。こう言う口喧嘩は僕、結構得意ですから♪」

「あら。だったらどう言い返すつもりなのかしら？今のシャマル先生、あちこちから罵られてすっごく機嫌が悪いことに加えて、頭がバカに冴えているのよ。どうやって説き伏せるというのかしらね？」

今のシャマルは怒りのバロメーターが頂点に達しており、完全にキャラ崩壊が進み黒いオーラを発している。

キャロやエリオはこんなシャマルを見て、身震いを覚える。

「シャマル先生、キャラ変わり過ぎじゃ・・・」

「落ち着いてくださいよ」

すると、喧嘩を売られたユーノは鍋を操作する傍ら次のように言葉を連ねる。

「ふふ。そもそも研究室で研究をしてなければ暇だって言うこと自

体が物神崇拝に捕われたモノの視方ですよ。」

「ぶ、物神・・・何？」

「他にも仕事をしていなければ暇？実に短絡的です。シャマルさんは暇だからコーヒーを飲むんですか？暇だから風呂に入り暇だから眠るんですか？僕はこの限られた貴重な時間を真剣に趣味に費やしています」

「・・・ふ～ん・・・」

「同時に、摂食行動と言う生きるために必要な行為でもあります。つまり！大変忙しいんですはい♪わかりましたか？」

某ドラマの堅物変人科学者のような物言いで理論的に彼女の言い分を説き伏せることに成功したユーノは何事もなかった様に調理を続け、見事なまでに説き伏せられたシャマルは不機嫌そうに血管を浮かび上がらせ、心底悔しがった様子で素直に返事を返すほかなかった。

「・・・ええ・・・そのようね！」

「お・口喧嘩では流石のシャマルもユーノにはお手上げのようだな」

「ユーノ殿の口八丁ぶりは感服いたすな」

今にして思えば、ユーノと口喧嘩をして真面な理屈を並べて勝てたものはそう多くない。

と言うか、誰一人見た覚えがないのも事実である。

それだけ彼の論理的な言葉の展開にほころびが無いことを意味し、同時にユーノが如何に優秀な人間であるかを証明するものでもあった。

そんなやり取りをしている間、金太郎は人数分の皿を用意する。

「店長、お皿はココにいる全員分でよろしいでしょうか？」

「ああ。」

一護は一通りの手伝いが終わると、シャマルの肩に手を当て耳元で言う。

「ほら、おめぇも食うだろ？とっと皿運ぶの手伝え」

シャマルは皿を取りに自分から離れる一護と、自分が料理べたな事を公然と主張するメンバー全員に怒りを覚えながら拳を握りしめる。

「く～～～（全く・・・・・みんなにしてなんなのよ！人の事さんざん馬鹿にして～～～！私だってね、毎日ちょっとずつだけどお料理の本とか読んで勉強してるんだから！）」

そう思ってると、皿を並べていた一護が鼻で笑いながらシャマルに言う。

「ふん。ユーノの料理喰ってショック受けてもへこむなよ、へぼ医者」

「へ、へぼ医者って！！！いい加減な医者の一護さんには言われた

くありませんよ／／／」

「ああ！誰がいい加減な医者だってコノヤロウ！！！」

「何度でも言いますよ！ヤクザみたいな髪したいい加減なお医者さん！」

「髪と医者は関係ねーだろうが！！」

二人は顔を近づけ合い、尋常ではない剣幕を浮かべながら一歩も譲らない様子で口論を始めると、火花を散らしあう。

この二人の殺気を孕んだ口論を目の当たりにしていたスバルとティアナは思わずつぶやく。

「あはは・・・本当に仲悪いよね、あの二人って・・・」

「何と言うか、不思議よね」

と、二人の喧嘩を見つめているとシャマルは今日に限って一人で六課を訪れている一護に次のように言ってくる。

「大体今日に限って何であなた一人なんですか！織姫さんとあのライオンのぬいぐるみはどうしたんですか！欠けてるじゃないですか！」

「あ・一枚欠けてるよ」

浦太郎が欠けている皿を手に取り横でそう口にする。

「ふん！織姫は今日はたつきと前々から約束があったからいねぇんだよ！コンもコンでふらっと出かけたっきり何処にいるかわかんねぇし！」

「ああ最悪！」

またしても浦太郎が欠けた皿を見ながらそう言うと、怒りのあまりいつもの温和な雰囲気が全く漂っていないシャマルが声を荒げる。

「最悪なのはわかってるわよ！」

「何に便乗しているんですか、あなたは・・・」

思わず呆れながら吉良がツッコミを入れる。

と、ここでユーノが鍋の中の料理を皿に盛り付け作業を終了させ、完成を宣言する。

「よし、出来た」

全員は完成した料理を凝視し、思わず歓喜の声を上げる。

「うわ～～～美味しそうだ♪」

今回ユーノが作った料理は野菜と魚介類をぜいたくに使った中華風の料理で、その香しい匂いと美しい見た目が何とも食欲をそそる。

ちなみに言うが、これは『美味しんぼ』でも『味いちもんめ』などでもない。

順当に全員分の更に盛り付けをした後、ユーノはエプロンを外して席に着く。

「さ・食事にしようか」

「は～い」

全員は自分の席に座って掌を合わせる。

「ほんなら、いただきま～す！」

「「「

料理が趣味のはやてでさえ、涙を浮かべ素直に評価するほどのユーノの料理の出来栄え。

他の者も箸が一向に止まらず、口に入れるたびに新鮮な触感や味を堪能する。

が、その一方でシャマルはあまりに自分のそれと比較すると、出来過ぎている目の前の料理の味に心底悔しがりながら、不機嫌そうに口にする。

「ほんと・・・美味しいわねこれ・・・！！」

「何だよ。そんな顔して褒めても全然店長に対してありがたみが感じられねェな」

「自分が料理下手くそなのをひがんで、毒なんか入れるんじぇねぇぞ」

隣に座っていた一護がそんな事を言って来ると、シャマルは思わず立ち上がって怒りを露わにする。

「誰がそんなことするもんですか！さっきから何なんですかあなたは！人の事へぼ医者だの、料理が下手だの根も葉もないことばかり並べて！」

「料理が下手なのは公認の事実だろ」

真正面に座っていたシグナムが真顔でそう言うと、全員は例外なく首肯する。

と、それを聞いた後でシャマルの怒りのボルテージは限界を突破し、その怒りを今目の前に座っている一護にぶつける。

「そもそも私前々から気になってたんですけど！一護さんって医者って言う割に全然そんな風には見えないんですけど！本当に医者としての仕事してるのかしら？」

「当たり前だっ！こう見えても開業医って言うのも忙しいんだよ！学会だって毎回サボらず出席してんだよ！」

「ふん！何処までが本当かどうかわかったものじゃありませんね。どうせ医師免許だって、裏取引とかでとったまがい物なんじゃないですか？」

「てめぇ！！そっちこそ何根も葉もないこと言ってんだよ！ちゃんと大学でインターンを受けた後に試験受けて取得したんだよ！ほら見ろ！」

一護はそう言って、日本の法律・医師法第９～１６条に定められている医師国家試験を合格した者に送られる正式な医師免許を取出しシャマルに見せつける。

一同もシャマル程か、あるいはそれ以上に一護が医者であるかどうかを疑っていたため、れっきとした医師免許を見せて来た時には思わずそれに注目する。

ルキアは医師免許を覗き込むと、一護を小馬鹿にしたような表情を浮かべる。

「おお・・・それが医師免許と言う奴か。しかしなんだこの仏頂面は?好感が持てないな」

「うっせーな!」

すると、その後でシャマルは同じく小馬鹿にしたような顔で更に言ってくる。

「その割にはさっきも言いましたけど、随分とお暇なようにも見えますけど・・・」

「今日は午後から休診だから来てんだよ!愛弟子の様子見に来て悪いか!?」

「別に・・・そこまでは言ってませんけど、何ていうか開業医って言っても経営は芳しくないようにも思えますね。あ~あ、織姫さんがかわいそう~」

「織姫がんな事思ってると考えてんのかてめぇ!言っとくがな、開業医の年収舐めんなよ!ちゃんと食ってけるだけは稼いでるつもりだ!」

ムキになったように一護がそう言うと、ユーノはコップの水を飲みながら尋ねる。

「ちなみに聞きますが、年収はどれぐらいで?」

「石田の病院で働く医者の2.5倍ってとこだ」

「えっと・・・大体石田さんのところの病院で一か月当たりの収入

がこれぐらいだから、概算すると・・・・・・うわ！２５００万超えてるじゃないですか！！」

「うそー！！」

全員はユーノが口にした年収を聞くなり、驚愕の表情を浮かべる。

「一護！貴様そんなに稼いでいたのか！」

「オレンジ頭、そんなにあるなら俺にちょっと貸せ！」

「貸さねぇよ！」

ちなみに、２０１１年１１月２日の産経新聞によれば、厚生労働省は２日、医療機関の経営状況などを調べた「医療経済実態調査」の結果によると、開業医が多い診療所（医療法人経営）の院長の平成２２年度の平均年収は２７５５万円と前年度より０・５％増え、医師の年収は民間病院を除くと増加しており、おおむね待遇が改善していることが示された。経営状況もほとんどの医療機関で改善したと明記されていた。

と、ここでまたしてもシャマルがイジワルっぽくこんな風に言ってくる。

「それって、どうせ悪徳医療で荒稼ぎしたお金じゃないですか♪」

「俺がそんなことしてたまるかよ！！悪徳医療って言うなら、てめぇらの魔法による治療も俺から言わせれば十分悪徳医療だっつーの！」

「まぁあ！魔法による医療技術は常に進歩してるんですよ！私達は日々それを使いこなしているんです！一護さんみたいないい加減な医者が悪徳医療を続けることがユーノ君や他の患者さんの為になるとは到底思えませんけど・・・♪」

「科学や魔法がどう進歩しようがそれは構わねェさ。だがな、病はそれを超えて人間に襲い掛かってくんだよ！結局のところ、最後の最後で頼れるのは人間自身じゃねェンですかね？」

「お生憎様ですが、私人間じゃありません・・・こう見えても守護騎士プログラムなもので♪」

「ほほ～ん・・・人間じゃねェってことは、じゃあ斬月で切り刻んでも再生できるって事でいいんだよな・・・切っちゃいいんだよな・・・！」

「切れるモノなら切ってみてくださいな・・・あなたには斬れませんわ。医者としてのあなたならこの湖の騎士シャマル先生を切る事なんて・・・！」

二人は互に慇懃無礼な態度で罵り合いを続け、血管が切れそうな状況を醸し出す中、これを見ていたユーノ達は呆然と二人の喧嘩を見つめていた。

「はぁ～～～見ていて実に嘆かわしいなこれ・・・」

「ユーノ君、止めなくていいの？」

「あの二人は最初から水と油だよ。放っておくしかないね」

「やれやれ。シャマルも一護さんも困ったものや」

◇

〈一護Ｓｉｄｅ〉

口喧嘩の堪えない水と油な関係の二人の医者、一護とシャマル。

一護は本日一人でミッドチルダを訪れているため、織姫にお土産を買って行こうと考え、ユーノから金を受け取り市内へと足を運んでいたが、その足取りは重かった。

そして何より、彼の表情もいつも以上に険しかった。

その理由は実に単純なものだった。

「で・・・なんでこうなった？」

「そんなの・・・私が聞きたいですよ・・・」

不機嫌そうに歩く一護の隣には、先ほどまで喧嘩をしていたシャマルが一緒に歩いており、シャマル自身も不機嫌そうな表情を浮かべて歩いていたが、ついに我慢の限界を迎えて二人は甲高い声を上げる。

「「何で俺（私）がシャマル（一護さん）と一緒に出掛けないとならないんだよ（ですか）！？」」

二人が甲高い声を上げると、市内を歩いていた一般人が思わず二人に注目し、二人は公然であるにもかかわらず喧嘩を始めた。

「なんでおめぇと一緒なんだよ！」

「それはこっちの台詞ですよ！私も外に用事があったから来てるんです！なのに何で一護さんまで来るんですか？」

「俺だって街に用があったんだよ！織姫にクッキーでも買おうと思って・・・そしたらてめぇが一緒について来て！」

「着いて来ませんよ！誰があなたみたいな人なんかと・・・」

「俺みたいな人って何だよ！イチイチ癇に障るな！」

「もう、兎に角半径三キロ圏内には近づかないで下さい！一緒にいるだけで虫唾が走るんで！」

「おお上等だ！こっちだって俺から３０メートル以内は近づくんじゃねェぞ！」

二人は完全に拒絶しあい、異様なまでの隔たりを作って双方に歩きはじめる。

この二人の様子を密かにスパイカメラで隠し撮りをしていたのは、ユーノだった。

ユーノはアドバイザー室のモニターでなのは達一緒に二人の様子を窺っていた。

苦笑するユーノと、子どもの様に張り合う二人に呆然とする一同。

「何やってるんだろうね・・・あの二人・・・」

「あはは・・・なんか心配になって来たね」

先が思いやられる二人の様子を見ながら、自分たちの仕事を進める六課メンバー。

で、肝心の二人の方はどうしているのかと言えば、理由は定かではないが行くとこ行くとこで二人は顔を見合わせ、その都度喧嘩をしては離れるも、結局は行きつく先は同じであるために非常に罰の悪い雰囲気を醸し出す。

そして、二人は同じカフェテラスでコーヒーを飲みながら距離を意識して心の中で呟いた。

「（くそ・・・何で今日に限ってこいつと行くとかが被るんだ・・・）」

「（なんで今日に限ってこんなにイライラするのかしら・・・）」

異様な殺気を醸し出す二人に、周りの者は冷や汗をかく。

「ママ、あれ何？」

「見ちゃダメです！」

子どもが無邪気な態度で二人を指さすと、母親は子供を叱りつける。

そんな中、シャマルと一護はこんな事を考えていた。

「（う～～悔しい～～～なんとかあの派手な髪を黒に染めて生意気な鼻を曲げることはできないものかしら～～～！！）」

「（どうすりゃあのへぼ医者の生口をへし折れるんだ～～～！！何かないか・・・何か！）」

考えていることが子供染み過ぎてため息がつきたくなる心境だが、そんな折、二人の耳もとで不意に咽返る子供の声が聞こえてきた。

「う！げっほげっほ！！」

「アキホ！」

「「？」」

二人が振り返ると、目の前に飛び込んできたのは呼吸困難に陥り、立つ事はおろかその場から動けなくなってしまうほどに苦しむ喘息を患った女の子の姿だった。

一緒にいた母親や周りの者は呼吸困難で苦しむその少女を心配して近づいてくる。

「どうした？」

「げっほげっほ！！げっほ！！」

「吸入器・・・早く！」

母親の言葉を聞いてかばんを漁る少女。

取り出した携帯用の吸入器の薬を吸おうとするも、運が悪かったのか中身が既に空っぽであったのだ。

「！」

「薬が無いの！」

補足しておくと、気管支喘息を患うものが携帯用吸入器を使用する場合、器具によっては吸入器を使った感覚が乏しいものもあり、稀に空になった製品を気づかずに使用し続けてしまう患者がいる。

今回はまさにそのケースであった。

「げっほ！！げっ！がっは！！」

「大変！」

シャマルは更に咽返り動くこともままならず咳をし続けるその少女の元に近づき対応を考える。

「大丈夫？しっかり！えっと・・取り敢えず救急車を！」

と、そんなシャマルに同じく医者の一護が口を挟む。

「お前も医者なら自分で何とかしろ！」

「だけど、薬が無いんじゃどうすることも！」

焦燥に満ち溢れるシャマルがそう言うと、一護は徐に少女の体を起こし、冷静な態度で応急処置に臨む。

「落ち着くんだ。ゆっくり息を吸って。シャマル、俺のコーヒーを持ってきてくれ」

「え、何に使うんですか？」

「げっほげっほ！！」

喘息が更に激しさを増す中、一護は冷静な物言いで説明。

「カフェインが気管支を拡張する効果があるんだ、早く！」

「あ、わかりました！」

「げっほげっほがっは！！」

「ゆっくり。落ち着いて」

冷静な対応で医者としての振る舞いをする死神代行の一護。

シャマルは急いで一護の席から飲みかけのコーヒーを持ってくる。

「一護さん、コーヒー！」

一護はそれを受け取ると、少女の口元に持ってくる。

「飲むんだ」

少女は無我夢中で死にたくないという一心からコーヒーを啜り出す。

気管支拡張薬として、一般的にはキサンチン誘導体ものを用いる。

これは、カフェインの親戚みたいなものなので、コーヒーには豊富なカフェイン、緑茶、紅茶にはカフェイン、テオフィリン、ココアには、カフェイン、テオブロミンが入っている。

気管支拡張作用は、テオフィリンの方が強いが、医薬品としては、カフェインとテオフィリンが使用されている。

一護はこのことを知って、咄嗟にコーヒーを治療薬として代行した。

シャマルはこの度の一護の対応に驚きながら、コーヒーを飲んだことで先ほどまで苦しそうにしていた少女が落ち着きを取り戻していく光景に目を見張る。

「は、は、は、は、は、は」

一護の冷静な対応で命拾いをした少女は大事をとって救急車で運ばれていくことになった。

少女の母親は一護に深々と頭を下げてお礼を言う。

「本当に、ありがとうございます！この度の事、何とお礼を言ったらよいか」

「いえ。医者として当然のことをしたまでです。俺はこれで」

一護はそう言って軽く会釈し、その場から立ち去って行く。

「本当に、ありがとうございます！」

母親が涙ぐんでもう一度感謝の意を表すると、一護は振り返り柔かい笑みを浮かべる。

「娘さん、ゆっくり休ませてくださいね」

一護はそう言って、その場を後にすると、彼の後姿を見ていたシャマルは呆然と立ちつくす。

「・・・・・・」

そして、彼女はこの時死神代行以外での医者としての側面を見せた一護を見直しつつ、焦りのあまり冷静な対応が出来なかった自分に羞恥心を覚え、彼に近寄って行き声をかける。

「あの・・・」

「ん？」

「凄いですね・・・あんな冷静に対応するなんて・・・私ったらほんと恥ずかしい・・・」

「そうだな。医者としては、あの対応はあんまり褒められたものじゃねェな」

「しかし咄嗟にコーヒーのカフェインで喘息を和らげるなんて、よく思いつきましたね」

「人はいつ何が起こるか分かったもんじゃねぇしな。それこそ、唐突な死の可能性も十分に考えられる。その為の知識の備えはあるに

越したことはねェ。つっても、こいつは石田から教えてもらった受け寄りだがな。ははは」

一護は笑ってそう言うが、当のシャマルは今までの一護の認識を改め始める。

「（一護さんは・・・本当にいい加減な医者なのかしら・・・さっきの事を考えると、とてもそうは見えないわね）」

そう思いながら市内を歩いていると、またしても唐突に二人の目の前で事故が起こった。

「「うわあああああ！！」」

悲鳴が聞こえ、一護とシャマルが足を止める。

「なんなの？」

「事故らしいな」

彼等の目に飛び込んできたのは、打ち壊すつもりで作業をしていた作業員が、誤って機械の操作を誤り建物の倒壊を引き起こし、そのまま瓦礫の下にいた別の作業員が挟まれてしまったというものだった。

「あ！誰か挟まれてるぞ！」

「出られないんだわ！」

事後が起こると、野次馬が集まって辺りは騒然となる。

一護とシャマルも急いで現場へと駆け寄っていくと、瓦礫の下には体を挟まれもがき苦しむ作業員の男が目に映って来る。

「あ！大変！」

「ち」

「一護さん！」

一護は上着を放り投げ、直ぐに作業員の元に駆け寄り、シャマルもそれを追って患者の元へと近づいた。

「うおおお・・・！いたあああ！」

「大丈夫だ。俺は医者だ」

苦しむ患者にそう声をかけた後で、一護は真剣な表情で診断を始め、不安げな様子でシャマルが声をかける。

「あの、一護さん」

「うん。意識ははっきりしてるな。ほら、ぼさっとしてねぇでおめぇも手伝え。おめぇだって医者だろうが」

「あ、はい・・・！」

一護に諭され、シャマルは隣の方で瓦礫に挟まれ動けないでいる患者の容体を確認。

「足が・・・！！」

それを見て、思わずつぶやく。

「これは酷いわ・・・」

「見た感じ、右脛骨の骨折だけとは思うが・・・どうなんだ？」

「はい。その通りです」

「聞くが、魔法ってのは何でもかんでも直せるものなのか？」

「いえ。魔法と言うのは飽く迄も細胞の活性を高めたりして、治癒能力を上げるモノが根本ですから、流石にこれだけの怪我となると簡単には」

「つうことは、普通の人間のそれと同じって事か。」

一護はそう言ってこの場で出来る限りの治療を始め、シャマルも苦しむ様子の患者に声を掛けながら作業を進める。

「大丈夫よ。直ぐに治療してあげるわ。一護さん、そちらはどうなんです？」

「右腕が完全にやられちまってる。なんにせよ、クレーン車でも来なければ動かせねぇ」

すると、その場に居合わせた野次馬が要請した救急車が到着し、担架を押しながら救護班が近寄ってくる。

「大丈夫ですか?!」

シャマルは直ぐに素性を説明する。

「あ・大丈夫です。私達は同じ医者ですから」

「いてええ・・・!」

「こっちの方の痛みが激しいらしい。和らげてやらねぇとショックの危険がある。」

「すいません。レスキュー隊の到着にはまだかかります」

「じゃあキシロカインはあるか?」

「それでしたらすぐに!」

救護班の一人は直ぐに救急車へと戻り、積まれているキシロカインを取りに行く。

キシロカインとは、リドカインとも言い、世界で最も広く使用される局所麻酔剤であり、抗不整脈剤でもある。

また、神経痛や手足のしびれの症状の一部にも有効であり、広く魔法世界であるミッドチルダでも使われているらしい。

シャマルは自分の患者の治療の傍ら、医者として振る舞う一護に目を奪われる。

「(普段は普段で大雑把な感じがするけど・・・確かにユーノ君の

言って通り、一護さんはれっきとした医者なのね・・・）」

「うおおお・・・痛い！」

「大丈夫。もう少しの辛抱よ」

シャマルが自分の患者の治癒に当たっていると、隣の一護が声をかける。

「手伝おうか？」

「御冗談を。あなたは自分の患者に集中してください」

「ふん」

鼻で一護が笑うと、先ほどの救護班がキシロカインを持って戻ってくる。

「キシロカインになります」

「ああ。サンキュー」

一護はキシロカインを注射器に注入し、目の前の患者に声をかける。

「首を左に曲げて」

「う・・・」

「直ぐに楽にしてやる」

患者の服を破り、辛そうにする患者の上腕神経層を狙って麻酔注射を始める。

「大丈夫、大丈夫！これで少なくとも痛みは消えるよ」

「・・・・・・」

その様子をシャマルはじっと真剣な眼差しで窺っていた。

そして、注射が無事に済み患者の表情が和らいでくると、一護も一安心したのか溜息をつき、上着をとって口にする。

「よし。後はレスキュー待ちだ。」

一護は居合わせた救護班にこう言った。

「先ず輸血を。腕は上膊から切断しなきゃならねぇな。」

「はぁ・・・」

一護の見た目から医者だと判断すべきかどうかを迷っていた救護班がそう呟いた後で、一護は上着を羽織り応急処置を終えたシャマルに言う。

「何ぼさっとしてんだよ。行くぞ」

「あ、はい」

すると、救護班の一人が一護に声をかける。

「先生！もう少し立ち会っていただけませんか？」

「いや。あとはこっちの病院に任せた方がいいだろう。俺達はほんの行きずりだしな」

「では、これで！」

シャマルは頭を下げて一護と共にその場を後にすると、この様子をスパイカメラで見ていた六課のユーノ達はシャマル以上に呆然とし、特に驚いていたのは長年一護と繋がりのあるルキアや恋次だった。

「ほほ～～ん。これはまた随分と興味深い光景だ」

「知らなかった・・・あいつってあんなに医者だったのか？」

「普段が普段だけに、このギャップは凄まじいな」

感心する様子のユーノの横で恋次とルキアがそう言うと、フォワードメンバーも各々このように呟く。

「本当に医者なんですね・・・一護さん」

「シャマル先生が“守る医者”って言うなら、一護さんの場合は“戦う医者”ってところね」

「へへ。さて、この後どうなるのかな」

ユーノは二人の様子をモニターで窺いながら、対極を為す二人が今後どのような行動をとるのかを窺うことにした。

さて、戦う医者と守る医者と言われる一護とシャマルはと言うと、一護は早いペースで川辺を歩いており、その後を追ってシャマルが走ってくる。

「一護さん!」

「?」

シャマルは一護に追いつくと、日頃の運動不足からか息を上げながら思わず言う。

「歩くペース早いですよ」

「そうか。お前が遅いだけじぇねぇか?」

「もう・・・また意地悪いって!それって私がグズでのろまってことですか?」

「別にそこまで言ってネェだろうが・・・」

先ほどまで喧嘩をしていたこの二人だが、先の二つの事故に遭遇したことでそんな事も忘却し、こうして何事もなかったかのように二人揃って道を歩いていると、不意にシャマルがこう尋ねた。

「それにしても一護さん。一護さんは地球の何処の医大を出て?」

「別に。地元の医大だが・・・急になんだよ?」

「いえ・・・ちょっと気になる節があったものですから」

「気になる節？」

「先ほどの一護さんのコーヒーの対応と言い、注射の件といい――――」

シャマルはそう言いながら麻酔注射をした際の一護の対応を思い返す。

『首を左に曲げて。直ぐに楽にしてやる』

「たった3秒で上腕神経層に麻酔注射をなさいました。」

「だからなんだよ？」

「一般的な事を言わせてもらいますと、並みの熟練でもああもスピーディーにはやれるものではありませんよ。私ももう～びっくりしました」

「そりゃあ、どうも。ま・うちは親父も医者やってたし、石田ともよく医療支援とかで海外に出張ってたことも多いしな。自然とそう言う下積みが出来てたんじゃねぇの？」

「そうですか。」

そう言って再び一護が歩き出そうとすると、シャマルは意を決して一護に頭を下げて頭って来た。

「あの・・・ごめんなさい！」

一護は突然謝って来たシャマルに違和感を覚え、顔を引きつる。

「何いきなりに謝ってんだよ？気持ち悪いな」

「私、散々一護さんの事馬鹿にした発言をしてしまって・・・！本当は凄腕の医者だったなんて知りませんでした！魔法も何も使わない、普通の医療技術だけであれだけのことが出来るなんて・・・尊敬ものですよ！」

その言葉に、一護は意外そうな顔を浮かべるが、直ぐに鼻で笑いこう返す。

「・・・――ふん。そうかよ。お前がそんな言葉掛けるとは思いもよらなかったよ」

一護はシャマルに不敵な笑みを浮かべた後、何事もなかったように歩き出す。

「あ、一護さん！待ってくださいよ。」

すると、不意に一護が隣を歩くシャマルに言って来た。

「おめぇこそ、ちゃんと医者としての自覚は持ってて良かったよ」

「え」

「お前、ただの料理が下手くそな過保護な女じゃなかったんだな！」

「な／／／」

「ふん」

シャマルは思わず一護の言葉に顔を赤くし、一護はそのままその場を立ち去って行くと、悔しそうにシャマルは一護の後を追いかける。

「もう一護さん！さっきの言葉撤回しますよ！！」

「ははは。悔しかったら料理ぐらい出来るようになれ！」

二人はそりが合わないなりに、案外楽しくやっていたりするのであった。

◇

〈織姫Ｓｉｄｅ〉

午後５時　地球：空座町

一護がミッドチルダを訪れている間、その妻の織姫は学生時代からの親友である有沢たつきと食事をし家を留守にしており、居候である改造魂魄こと、コンもふらっと外に出ていたが、その二人が同じ時間帯で帰路につき始めた。

「いや～～～すっかり長話になっちゃったな。早く帰って夕飯の支度しなくちゃ」

「ふう～～～一護がいないと気が楽でいいぜ。お蔭で久々のウハウハのアウトドアライフを堪能できたし～～～♪」

そんな独り言をつぶやきながら、二人は自宅の前で互に顔を合わせる。

「あれ、コン君？」

「織姫さん。今帰りで？」

「そうだよ。コン君もこんな時間まで出かけてたの？駄目だよあんまり遠くに行ったら。変な人に目付けられるから」

「へへ。すいやせん♪」

照れ隠しをしながら織姫にそう言った後、コンは彼女の肩に乗り、織姫は両手に抱えたスーパーの袋の中から家の鍵を取出し、ドアを開ける。

「たっだいまー！あなた♪」

「おう、今帰ったぞ！」

二人が家の中に入って一護に声をかけるが、一護はまだ帰宅しておらず、家の中は電気も付けられずに静まり返っていた。

「あれ？誰もいない」

「なんだよあいつも出かけちまってるのかよ」

織姫は机に買い物袋を置いた後、電気をつけ一護が残した書置きを発見する。

「ユーノさんのとこ行ったのかな。それにしてもちょっと遅い気もするけど」

「何かあったんすかね？」

「う～～～ん・・・ユーノさんに聞いてみようかな」

織姫はそう言いながら、夫の愛弟子のユーノに連絡を取ることにした。

◇

〈一護Ｓｉｄｅ〉

で、織姫がユーノに連絡を取ってから一時間後。

午後６時を回ったにもかかわらず市内で買い物をしていた一護。

普段の彼なら買い物ぐらいすぐに片付けそうにも思えるが、今日は偶々シャマルが一緒であったために、思った以上に時間が買ってしまい両手には抱えられないだけの荷物で溢れかえっていた。

「たく。すっかり遅くなっちまったぜ。おまけに何でお前まで買い物付き合ってんだ？」

「織姫さんのプレゼントなら、私がアドバイスをしないとですよ♪」

「だったら、この荷物の量はなんだよ？こんなにいらねぇだろう」

「それはほら♪旦那さんとしての評価を上げる為ですよ♪」

「お前な・・・・・そう言うのがお節介だって言うんだ」

一護がため息をつきながら、シャマルと共に六課への道を歩いて行くが、そんな時シャマルの元にはやてからの通信が入る。

「？あら。はやてちゃんから」

シャマルが通信画面を開くと、血相を変えた様子のはやてが言って来た。

『シャマル！直ぐに戻ってきてな！』

「どうなさったんですか？」

「もしかして、事件か！？」

『それが、ミウラが！！』

シャマルははやてからある衝撃的な事実を訊かされると、思わず愕然とした表情を浮かべる。

「えっ！ミウラちゃんが、重傷！？」

それは、八神家が経営する道場のホープであるミウラ・リナルディが事故に巻き込まれ、重傷を負ってしまったという報せだった。

『道場から帰る途中、工事現場でクレーンに挟まれたようなんや！！シャマル、急いで戻ってきてな／／／』

「と、兎に角過ぎ行きますので！」

通信を切り終えた後、一護は真剣な眼差しで彼女に促す。

「行くぞ」

「はい！」

二人ははやて達が集まる聖王教会付属の病因へと足を運ぶ。

二人が病院に到着すると、事故に遭い重傷を負った中等部一年で、ヴィヴィオの先輩でもあるミウラ・リナルディが険しい表情を浮かべて担架に乗せられ運ばれていた。

重症のミウラを運びながらヴィータや師範のザフィーラが声をかけ、自分の子ども同然に接するはやてやシャマルは涙を浮かべる。

「ミウラ！おい、ミウラ！」

「しっかりしろ！ミウラ！」

「ミウラ／／／」

「急いで！この患者は私が！」

シャマルが手術室に運ぶと、外で待機していたユーノ達は不安げな表情を浮かべ、一護も一護で腕組みをしながら壁に寄しかかる。

手術室に入った後、シャマルはレントゲンで撮影したミウラの患部を見てショックを受ける。

「骨が砕けている上に、神経も血管もメチャクチャ・・・その上空

気塞栓の恐れも・・・」

「あああ／／／神様／／／」

嘆き悲しむシャマルと、そんなシャマルに指示を促すスタッフ。

「整復出来ませんよ、これじゃ。切断するほかないですね」

「（切断！そんな・・・！）」

ミウラの将来を期待していたシャマルにとって、その言葉はあまりに残酷なものであった。

「先生。一刻も早く処置しないと危険ですよ！」

「ダメよ・・・」

「え」

「ダメよ！そんな事ダメ！切るのは駄目よ！！」

シャマルは涙を浮かべて断固切断には拒否の姿勢を見せる。

「先生！患者の命に関わりますよ！？」

「あああああ／／／」

シャマルの嘆き悲しむ声が外へと聞こえてくると、なのは達は思わず深刻な表情を浮かべる。

「シャマル先生・・・」

そして、一旦手術室から出てきたシャマルはソファーの上でミウラの命に関わることとはいえ、優柔不断に切断を躊躇う自分に憤りを感じる。

「切れない／／／私には切断できないわ・・・どうしたらいいの／／／」

一同はこんなにも追い詰められるシャマルを見たことが無く、どう言葉をかけていいのかわからないでいるが、一刻を争う事態にはやては涙ぐんで言う。

「シャマル、早よ決断せなあかん！ミウラが死んでしもう／／／」

「待ってください／／／お願い・・・少し、時間を下さい」

「しかし」

「分かってます！時間が無いのは・・・少しだけ、一人にして！」

そう訴えかけると、ユーノ達は顔を見合わせ彼女を一人にすることにした。

「ふう。分かりました。行こう、みんな」

「うん」

一同はその場から足し去り、彼女が望んだとおりに一人にすると、シャマルはソファーの上で頭を抱え、この八方ふさがりな状況で途

方に暮れる。

「・・・・・どうすれば・・・」

大いに頭を悩ませるシャマル。

と、そんな時一人の足音が聞こえて来、徐に声をかけて来た。

「何を躊躇してんだよ」

「！」

シャマルが聞き覚えのある声に反応し顔を上げると、声をかけて来たのは一護だった。

「道場の有望株だか知らないが、大事な教え子なんだろう。」

「一護さん・・・」

「ここでじっとしてれば、確実にあのミウラって子の命のカウントダウンが縮まる・・・そんなこと分りきってるだろうが」

「・・・・・・」

「何か言えよ。昼間の元気は何処にいったんだ?」

すると、シャマルは一護を一瞥すると、重い表情を浮かべてこんな事を尋ねてきた。

「・・・・・一護さん。教えてくれませんか」

「？」

「失礼ですけど、あなたにとって最愛の妻である織姫さんが、命に関わるとき・・・あなたは遠慮なく、手でも足でもお切りになりますか？」

「切るな。」

「ご自分の命よりも大事な、愛妻の身体でも？」

「俺は医者だぜ。医者の診断に、妻だろうがイカの頭もないさ」

冷徹にそのように断言する一護の言葉を聞き、シャマルは愕然としながらもまるで嘲笑うように呟いた。

「そうね・・・／／／／やっぱり、死神代行って通り本当は冷酷な方なのね／／／／ううう・・・あああああ／／／／／／」

シャマル顔を両手で隠し、涙を流し続け、そんな彼女を一護が眉間にしわを寄せながら見つめる。

「・・・シャマル」

「ううううあああああ／／／／」

「ーーーーーーーー」

「うううううううう／／／／／／」

何時までも泣き続けるシャマル。

すると、一護は躊躇う彼女に発破を掛けようと徐に言ってくる。

「だから言ってるだろう。それならさっさとオペをやればいい。どんどん切っちまえよ。遠慮はいらねェ」

「うううううう／／／」

「どうやら今日の俺はとことん面倒な一日を味わうことになっちまったな」

「う・・・／／／」

一護は手の甲に涙を流す彼女を見ながら、机の上に乗っていたミウラの患部のレントゲン写真を一瞥し、沈黙を保つ。

戦う医者と守る医者・・・死神代行と癒しの騎士・・・真逆なこの二人がそんな会話をしていると、時間が差し迫ったことを伝えにメンバーが声をかけて来た。

「シャマル先生！」

「おいシャマル、そろそろ！」

「分かってるわ！一刻を争うの・・・でも／／／」

と、躊躇するシャマルに遂に業を煮やした一護が声を張り上げた。

「お前！このままここでぐずぐずしているうちに、大事な生徒が死

んでもいいのか！」

「いえ！いえ／／／そんなこと・・・／／／」

「兎に角オペの準備だ！」

「え！」

「「何！？」」

シャマルや恋次達が一護の言葉に耳を疑う中、一護は迷っているシャマルの手を掴み、このように言ってくる。

「俺が手伝ってやる！だからやるんだ！」

「え・・・ええ・・・？！」

唖然とするシャマルと、そんな彼女を真摯に見つめる一護。

そして、一護の言葉を聞いてシャマルは覚悟を決め、彼と共に手術衣に着替えると、全身麻酔が完了したミウラへと向かい合う。

「術式・・・開始します。大腿骨下部・・・切断します。メス」

シャマルはそう言って、メスを握りしめミウラの大腿骨下部へと近づけようとするも、その瞬間に体が硬直し指を動かすことも出来なくなる。

「う・・・・・・・く」

「どした?」

助手の一護が声をかけると、シャマルはメスを床に捨て、頭を抱えてその場に力なく沈む。

「う／／／やっぱり出来ない・・・／／／私には無理よ!!」

そんな彼女を見ながら、一護はミウラの方に顔を向け徐に口にする。

「・・・仕方ない」

「!」

「代わって俺が手術する。」

そして、驚き返るシャマルを余所に一護は次のように言って来た。

「患部を切開。砕けた骨を整復したのち、切れた神経を繋ぎ、切れた腱・筋肉を縫合して繋ぐ」

「え・・・切断・・・しないんですか?」

普通の医者の判断からは明らかに逸脱した一護の言葉に目を見開くシャマル。

一護は彼女に顔を合わせると、こう返した。

「通常ならば切断する判断が正しい。普通の医者ならオペ中に空気塞栓を起こすからな」

「！！」

一護は驚愕の表情でいっぱいのシャマルを助手として、自分がメスを握り手術を始める。

一護は最も厄介な空気塞栓を起こさぬよう、細心の注意を払いながらメスを振るって行き、これまでの自分のスキルを全力投球して治療に当たっていく。

シャマルはそんな一護のオペを食い入るように見つめ、ユーノ達も二人を信じて手術室の前で術式が無事に終わることを祈った。

そして、2時間後。

無事に手術を終えたミウラは、足を切断することなく担架に乗せられ手術室から出て来、それをはやて達は涙目を浮かべた。

「切らずに残されたんですか！」

「信じられません！」

「奇跡です！」

全員がシャマルに向かってそう言うと、シャマルは笑顔を浮かべて一護の方へと振り返る。

「私じゃないの。先生が」

それを聞くと、マスクと帽子をとった一護が言ってくる。

「お前がやったんだろ？俺は手伝っただけだ」

と、ここでスバルが寝ているミウラを見ながらあることを思い出し言って来た。

「今日はミウラちゃんの誕生日なんですよね。」

「素晴らしい贈り物になりましたね」

すると、その時手術を無事に終えたばかりのミウラがゆっくりと目を覚ます。

「う・・・」

「ミウラちゃん／／／」

「「「ミウラ！」」」

「シャマルさん。はやてさんに師匠も」

「ミウラちゃん・・・本当に良かったわ／／／」

「ほんま！ほんま良かったで／／／」

シャマルやはやては気恥ずかしそうにするミウラの顔と自分の顔を擦りつけながら嬉しさを滲み出し、それを見たユーノ達は微笑ましく見つめる。

そして、今回最も活躍した男・・・戦う医者の黒崎一護は肩を回しながら疲れ切った様子であくびをかく。

「ふぁ～～～さて、帰るとするか」

一護が廊下を歩き出すと、ルキアと恋次はほくそ笑みながらこう言った。

「どうやら貴様は、死神として戦う以外に医者としても戦っていたようだな」

「ああ。まさかこんな奇跡まで起こしちまうとは、思ってもいなかったぜ」

「それって俺の腕を信用してなかったって口かよ?」

「そんな風には言ってませんよ♪今も昔も、一護さんはずっと立派な医者ですよ」

「そうね・・・／／／この度は本当に・・・ありがとうございました!」

ユーノの言葉を聞き、シャマルが深々と頭を下げると、一護は笑みを浮かべる。

「・・・そうか。」

そして、再び歩き出した一護は背中越しにユーノに言ってくる。

「ユーノ。今度の日曜、一緒に飲みに行こうや」

「はい♪よろこんで」

黒崎一護にとって、今日のこの日はまた何時にもまして医者としての一面を垣間見せた特別な日となったであろう。

◇

〈ユーノＳｉｄｅ〉

後日。

地球の行きつけの居酒屋に足を運んだ一護とユーノは約束通り、二人で酒を飲み交わしていた。

ユーノはカウンターに座ると、隣の一護のコップにビールを注ぎ込みながらあの時の奇跡のオペの事を思い出す。

「いや～～～あの時は本当にすごかったですね～～～まぁ僕は最初から信じていましたけど」

「はは。素直にそう言ってもらえるのはお前ぐらいだぜ。あの後、ミウラって子の調子は？」

「経過は順調ですよ。今は次の大会に出られるよう、ザフィーラさん達に付き添われて一生懸命リハビリ中です」

「そうか」

ユーノからの報告を聞き、一護は安堵のため息をついてからビールを口に運ぶ。

そして、その後でふとこんな事を呟いた。

「しかしなユーノ。医者の俺がこんなこと言うとちとばかし変に聞こえるかもしれねぇけど」

「？」

「医者って言うのは、確かに人を治すことが使命なのかもしれねぇ。けど、その所為で人口が爆発的に増えちまって、食料危機が起きて、多くの人間が死んでいる――――――これって結構な皮肉じゃねぇか」

「・・・・・・」

「だけど、それでも俺達医者って言うのは人を治すんだ。医者である限りそれは絶対に曲げられねぇ。医者が人を治すのを止めたら、俺達って一体なんなんだろうな？」

「・・・そうですね」

ユーノはほくそ笑みながら相槌を打ち、自分もまたビールを口に注ぎ込む。

そして、一護がその横でこんな言葉を残した。

「まぁでも、虚妄って言われるかもしれねぇが一度見てみたいな――――――“医者の要らない世界”って奴を」

「もしそんな世界があれば、人間はどう生きるんでしょうね♪」

「さぁな。」

二人は互いに笑みを浮かべながらコップを前に持って来、一日の疲れを労うように杯を交わした。

「「今日も一日お疲れさん！」」

戦う医者と守る医者（後書き）

重要大事の勝手に台詞選集！

今回は三番隊隊長の阿散井恋次の台詞の中からこれをピックアップだ！

恋「びびることはねぇ！ただ堂々と胸を張って・・・前に踏み出せばいいことじゃねぇか！」（第六話：ユーノの斬魄刀より）

魔導師図鑑ハイパー！

空座総合病院院長、石田雨竜と黒崎一護は同じ職種上、普段からこんなやり取りが目立つ。

石「何？！またうちの病院のベッドを用意して欲しい！？君はうちの病因を何だと思ってる？」

一『重症患者なんだよ！こっちの病床が限りあるってことぐらいわかってるだろ！』

石「急にそんなこと言って来ても、こっちにも運営上の手続きと言うものがだな」

一『あ！お前って直ぐにそう言うまどろっこしいこと言ってごまかそうしやがる！良いんだな・・・・・・患者を死なせたエリート医師って汚名が新聞に載って、病院の評判が下がっても』

石「な！何を言ってるんだ君は！？僕は何もそこまでのことなど・・

・！」

一『他にもいろいろこの際バラしちまおうかな・・・お前の恥ずかしい子供時代に描いたひらひらのマントを纏ったチョーださいイラストとか♪』

それを聞いた瞬間、石田の脳裏に浮かぶ今後の最悪なビジョン。

そして、止むを得ず受話器を握りながら一護からの要請を受け入れる。

石「いいだろう・・・！！ベッドはこちらで用意する・・・！！」

一『おう！サンキューな！』

石田雨竜、彼の苦悩な日々はこれからも続く。

次回予告

な「ねぇ、ユーノ君。最近は事件も無くて落ち着いてることだし、冬休みを利用して旅行にでも出かけようよ♪」

ユ「よし。それなら取って置きの世界に連れてってあげよう♪」

ヴィ「第７７管理外世界『リュミエール』。春夏秋冬が一遍に楽しめる自然にあふれた世界なんだって！」

浦「しかももっこり美人が沢山いるって話だよ♪」

シ「おまけにそこを守護する世界国家騎士団には、強者が多いそう

だな。これは面白い旅行になりそうだ」

恋「あのな・・・これはオフトレじゃないからな言っとくが・・・」

ユ「次回、ユーノ・スクライア外伝『機動六課の慰安旅行・リュミエール篇』。夜御倉さんとのコラボレーション企画、いよいよ始動です♪」

登場人物紹介

ミウラ・リナルディ

声：矢島晶子

１２才。区立学校中等科１年生。Ｖｉｖｉｄに登場したミッドチルダ式の魔導師の子。八神家の近所のザフィーラの教え子たちの一人であり、「ヴィヴィオたちのライバルになりそうな子」とのはやての問いに対して「けっこう凄い」と名前が挙がっていた。シグナムやヴィータとも練習試合をしている。ノーヴェとも面識がある。一人称は「ボク」。明るい表情の持ち主だが、やや天然気味な雰囲気も持つ。ミウラはヴィヴィオを「兄弟子」と呼んで、仲良く接していた。本番ではガチガチに緊張するタイプ。シグナムの教えと思われる「届く距離まで近づいて斬る（蹴る）」を基本スタイルとしているようで、緊張した時には心の中で何度も復唱していた。戦闘スタイルはストライクアーツ八神流。

機動六課の慰安旅行・リュミエール篇（前書き）

ユ「はいはい、ついに始まりました！コラボ企画・夜御倉龍元さんの小説、『光の軌跡』の」

な「今回はみんなで一緒にリュミエールに旅行に行くところから始まるんだよね♪でも一体どんな世界なのかな、リュミエールって」

ヴィ「詳しく知りたい方は、夜御倉龍元さんの『光の軌跡』を一度ご覧になってくださいね」

一「それじゃ、いっちょ行くか！」

ル「ギャグとシリアスが織り交ざったコラボ企画・・・！」

ユ「ユーノ・スクライア外伝　リュミエール篇、始まります♪」

機動六課の慰安旅行・リュミエール篇

〈ユーノＳｉｄｅ〉

それは、一通の手紙から始まった。

１２月の年度末に於いて、最も忙しい時期、平穏な時を過ごしていたユーノの元に異世界に住む数年来の友から便りが届いた。

中身を見ると、そこにはこう書かれていた。

「『世界国家騎士団二番隊隊長　夜御倉』・・・・・・夜御倉龍児さんか・・・・・・そういえばしばらく顔を出してなかったな。」

しみじみとした様子でそんな事を呟くユーノ。

と、そんな時に彼の耳に聞こえてくる慌ただしく仕事をしながら切羽詰った感じが丸出しの阿散井恋次の声。

「あ～～～！！くそくそくそ！！！」

顔を向けると、恋次は自分の机の上に次々と置かれる大量の書物に目を通しては必要事項を書き込んでいた。

「なんで年度末ってのはこうも書類書類書類なんだ！！俺は今も昔も、デスクワークはそこまで得意じゃねぇんだよ！大体、六課とは別に尸魂界に出す書類まであるとはどういう事だ！」

異世界に来てから、恋次達死神はその都度母なる魂の世界・尸魂界へひと月ごとに書類を報告する義務が課せられていた。

しかも年度末はこの量が通常の２倍近くに達するため、基本的になのはと同じ事務処理よりも純戦闘向けな恋次には苦い課題であった。

そんな恋次を励ますつもりなのか叱咤しているのか、同じく書類整理に追われていたルキア、吉良が同情を掛ける。

「文句を言う暇があるなら一行でもいいから早く書け。貴様だけがノルマを終えていないのだ。このままでは我々死神部隊だけが休暇を延期することになりかねん」

「阿散井君。僕達も手伝うからさ、頑張ろうよ」

「く～～～すまねぇ／／／」

ユーノはそんな死神の組の友情に微笑ましく思っていると、そんなユーノの元に近づき別の書類を抱えて来たなのはが話しかけてくる。

「大変だね、恋次さんも」

「そうだね。ま、これぱかりは僕も手伝う訳にはいかないから、向こうの努力義務と言うことで温かく見守ることにして、僕も僕で仕事を片付けないと」

「とは言っても・・・これだけの量をそんな涼しい顔で出来るユーノ君って・・・やっぱり普通じゃないかも・・・」

なのははユーノの机の上に乗っていた山積みの書類を見ながら、それを何の苦も無く次々と整理していき、必要な事をデータ入力していくデスクワークと演算能力に関して次元世界トップの能力者・ユーノ・スクライアの凄さを実感している。

「あはは・・・無限書庫で働いてればこれぐらいは出来るようにな

るって・・・もっとも、その資料作りの大半があのバカ提督の者だったけど！」

「へっくしゅん！」

ユーノが六課で文句を呟くと、本局で別件の用があって出向いていたクロノは廊下を歩いていると思わずくしゃみをした。

しばらくの間、前線メンバーが事務処理に追われていると、午前１１時３０分を過ぎた時点で、終業式を終えたばかりのヴィヴィオが元気よく挨拶をして帰宅を告げる。

「ただいま！」

「おかえり、ヴィヴィオ」

「どうだった、期末考査のほどは？ちゃんと全力が出せた？」

「もっちろん！ではその成果のほどを・・・ご覧あれ！」

ヴィヴィオは機嫌よく、期末考査の結果が書かれた紙を取出し、それを両親であるなのはとユーノの前に堂々と公表する。

「へへ♪期末考査はこの通り、花丸評価をいただきました！」

中身を見てみると、ヴィヴィオは以前よりも成績が上がっており、五教科で５００点満点のテストに於いて、４８０点という大変すばらしい結果を出し、学年内順位はコロナ、ミツオに次いで三位と言うものだった。

なのはとユーノ、それに他の者はこのヴィヴィオの素晴らしい成績に拍手を送る。

「凄い凄い！よく頑張ってね、ヴィヴィオ♪」

「うん！」

「ヴィヴィオはやれば出来る子だから、そんな心配はしてなかったけど、取り敢えずお疲れ様。他のみんなはどうだったんだい？」

「リオもバウラも優等生だったよ。コロナとミツオは相変わらず一、二番争いを繰り広げて、結局はコロナが全教科百点で学年一位」

「そっか」

と、ここでレンジがヴィヴィオの成績を見た後でこんな事を言って来た。

「へぇ～。結構お前の友達（つれ）は出来る奴ばっかなんだな。ま、俺様もこう見えて流魂街の出身の身でありながら、真央霊術院じゃ特進クラスだったからな！」

「そうなんですか。そう言えば、死神にも学校ってあるんですよね・・・」

「ああ。何故恋次が特進だったのかはいまだに謎だが、ここにいる吉良や五番隊の雛森副隊長は同期で、互いに切磋琢磨しあった仲だ」

「ちなみに僕は、九番隊の檜佐木さんとは違って、霊術院主席合格の僕の方が色んな意味で才能は上かもしれないな」

ちょっと鼻につくような言い方をする妙に自慢げな表情の吉良を見、恋次はふと呟く。

「お前、何時のネタ引っ張ってるんだよそれ・・・」

すると、成績優秀・エリートと言う単語が大嫌いな六課メンバーの中では指折りの馬鹿と評される桃谷鬼太郎は不貞腐れる。

「け。どいつもこいつもいいとこでのエリートが！じゃあ何か！？俺はお前らとは違ってそこら辺の屑ってあてつけで言ってるんじゃネェだろうな！？」

「何もそこまでは・・・御気を悪くしたなら謝りますけど・・・」

スバルがばつの悪そうな顔でそう言うと、ヴィータが便乗し言ってくる。

「スバルもこんな顔して、陸士訓練校主席だってのは驚きだよな」

「ヴぃ、ヴィータ副隊長／／／それはちょっと人権冒涜ですよ．／／／」

「でも、学校って言う場所に一番縁がありそうなのはユーノ先生じゃないですか？」

「あ・そういや、ここには常人を遥かに凌ぐ天才的な頭脳の持ち主がいたんだっけな・・・ああ・・・」

恋次がワザとらしくそう言いながらユーノを睨み付けた感じの表情

を向けると、ユーノは苦い顔を浮かべながら恋次を宥めようとする。

「その睨み付けるような眼つきは止して下さい。ちょっと怖いです」

「聞けばユーノ店長は、7歳で大学院を卒業し、いくつかの博士号をとっているそうだが」

「その通りであります。アルハンブラナスル大学院・・・ミッドチルダ、もとい次元世界に於けるトップクラスが集められた学問の要塞です」

補足的に説明しておこう。

アルハンブルナスル大学は、第一管理世界ミッドチルダ中央部に位置する２００年以上の歴史を持つ私立大学である同時に、ユーノ・スクライアの母校だ。

ミッドチルダで最も古い高等教育機関であり、次元世界を幅広い分野でリードする。現在に至るまでユーノを含め7人の管理局名誉元帥、その一人ラルゴ・キールや、７４人のノーベル賞受賞者を輩出している。

管理局が調査した統計データによれば管理世界の学部課程ランキングで1位にランク付けされ、次元世界大学ランキングでは、1位を独占し続けている。

そんな話を聞いていると、当然のことながら恋次がユーノを妬たみを感じる。

「あ～～～やだやだ。俺達凡人の苦労をまるで根底から否定するよ

うな出来る過ぎる話は・・・」

「だからその言い方は止して下さいよ・・・大体、そっちにだって日番谷隊長って言う天才児がいるでしょうが・・・」

そう言った後、ユーノは深々と椅子に腰かけ、何処か物寂しそうな表情でこんな風に言い始めた。

「それに、出来過ぎる才能ってのはあんまり嬉しくないものですよ。はっきり言えば、僕みたいな人間は普通の人から見れば“異常”って言うものです。周りからは自然と煙たがれますし、当然大人扱いされて自由も何もなくなったりするんです。」

「ユーノ君・・・」

「お前・・・」

「パパ・・・」

こんな言葉を口にするとは予想していなかったなのは達は作業を中断し、ユーノに注目する。

その後、ユーノが物寂しそうな顔から何時もの柔かい笑みをヴィヴィオに向けてくると、優しい手で娘の手を握りしめ切に願った様子で口にした。

「だから、ヴィヴィオにはちゃんと段階踏んで大人になってもらいたいな♪僕みたいに、子どもとしての段階が欠如して、変に大人になりきれない人間にはなって欲しくないから」

「・・・・・・」

ヴィヴィオは返事をどう返したらよいか、一瞬わからなくなるが、今は黙って頷くことが最善の返し方だと判断し、首を縦に振る。

その一方でフェイトとなのはは念話越しに言葉を交わす。

「（なのは・・・ユーノは、やっぱり・・・）」

「（うん・・・ずっと気にしてたんだろうね。普通と違うことに対する切なさってものに・・・本当なら、ユーノ君だってもっと普通の成長をしたかったのかもしれない・・・変に大人扱いされることの辛さを、ユーノ君はよく知ってるから――――――）」

自分もまた、幼少時の物寂しい経験から変に大人びた性格になっていたことを振り返るが、ユーノはそんな自分や周りの誰よりも大人扱いされ、一切の許容も許されず子供としての時間を奪われていたのだ。

だからこそ彼は憧れたのかもしれない――――――普通と言う自分にはない素朴なものに。

◇

〈六課Ｓｉｄｅ〉

それから数日が経過した１２月２０日。

機動六課は先の大事件、カトゥーン事件の貢献から三提督承認のもと、長期の冬休み休暇を許されることになり、この機を利用して部

隊長八神はやては機動六課の前線メンバーの親密な交流を通じて絆を今以上に深めようと考え、慰安旅行を計画した。

その為に、早くからフォワード五人を始めなのは達隊長陣も積極的に行先を決めようとしていたのだが、これがなかなか意見がまとまらない。

「やっぱあれだよね。こっちが冬なわけだし、ここは南の島で水着全開でパーッと騒ぎたいな～！」

「それもいいですけど、緑のある綺麗な世界でハイキングとか山登りって言うのも悪くないと思います」

「でもそれだと虫よけスプレー撒かないといけないし、あれ身体に掛けると結構服にもこびり付いて後で洗うの大変なのよね～」

「冬なんだから冬らしく、雪山でスキーなんてしたいかしら」

「僕、スキーとかしたことないですから一度でいいからやってみたいです」

ロビーで女性陣を中心に話が盛り上がっていると、ホットドックを食べながら吉良やルキア、白鳥と共に廊下を歩いていた恋次がふと気になった。

「おい、何の話だ？」

「大きな事件もないし、オフタイムで今度機動六課前線メンバーで行く慰安旅行の話で盛り上がってるんだろうね」

「ほう。豪勢な話だな。こちとら昼飯代にも困ってるって言うのに」

「ならば、少しは倹約と言うことをすればよいのでは？」

「んなこと言っても、腹は減るもんだ。生物の摂食行為は必須だろうが」

「変に難しい言葉を使うな。虫唾が走る」

「どういう意味だそりゃ！！」

ルキアの痛烈な批判を受け、恋次は口から食べかすを吐きながら大声を上げる中、女性陣は旅行パンフレットを捲りながら更に話が盛り上がっている様子だ。

「私も海がいいかな～～～ユーノ君と一緒に沈む夕陽を見ながら手をつないで浜辺を歩いたりとか～～～♪」

「そやけど、みんなで山登ってキャンプファイアーとかしたら楽しいと思うよ♪」

「冬の山だって、捨てがたいって二人とも。」

「スキーもしたいし、海でも泳ぎたいし～～～ああ、悩むな～～～」

「くそ～～～意見がまとまらねェな。いっそのこと、春夏秋冬どの季節でも対応できるような世界は無いのかよ？」

「そんなご都合主義な世界、何処にあるって言うの？漫画じゃあるまいし・・・」

と、そんな言葉が聞こえてくると、これを聞いて言葉を返してきたのはあの男だった。

「春夏秋冬どの季節でも楽しめる世界――――――」

「？」

全員が一度その声の主の方へと振り返ると、そこには意味深な言葉をもう一度呟くユーノ・スクライアが立ち尽くしていた。

「もしそんな世界があったら、みんな楽しいだろうね」

「ゆ、ユーノ？」

「どうしたの、なにか言いたいことでも・・・」

なのは達はユーノの顔を見ながら、彼が徐に自分の席に座るのを確認すると、ユーノは例の異世界からの友人から届いた手紙を引き出した。

「だったら連れてってあげようか。その夢のような世界に――――――」

「「「「え」」」」

「何？」

一同は、聞き違いだと思いながら不敵な笑みを浮かべるユーノの話に耳を傾ける。

そして、ユーノはとある異世界の情報をモニターに出しながら第７７管理外世界『リュミエール』に関する情報を公開した。

「第７７管理外世界『リュミエール』？」

「そ。僕の数年来の知り合いが住む世界でさ、この前手紙を貰ったんだ。そしたら、偶には遊びに来ないかって、招待受けちゃってさ」

ユーノは手紙の中から招待状と一緒に同封されていた相手側からのメッセージをなのは達に手渡し、徐に差出人の所に書かれた文字を読み上げる。

「『世界国家騎士団』・・・何ですかこれ？」

「リュミエールを守護する国際平和維持組織、って言えばしっくりくるかな。元々は３２０年前に勃発し、２０年間に渡り繰り広げられた第１次世界戦争の終結後に組織された〔国際青年騎士団〕、通称・国際騎士団だったものが、今からおよそ１５０年前に騎士団改編を行った際に名称も変更したことで生まれたんだ。昔は１番隊から２０番隊までであったが、改編やとある事件などにより、現在は１番隊から１１番隊までの計１１部隊によって構成されている。」

「護廷十三体の騎士団バージョンって感じか？」

「そう考えてくれた方が一番わかりやすいですね♪」

なのは達はユーノの説明を受けた後で、もう一度リュミエール全体のデータを見直す。

「第７７管理外世界・現地名称〔リュミエール〕・・・総合文化レベル：Ｃ。魔法文化レベル：Ａ。緑豊かな大地と蒼く澄み渡った海、そして青々とした若葉を纏った世界樹（母なる大樹とも呼ばれる）が存在するこの世界は現在１００近い国々が存在し、中でも〔桜華国〕・〔アクナビート共和国〕・〔シャイン王国〕・〔グリーンマーク王国〕・〔フレア連邦共和国〕は５大国と呼ばれ、政治・経済・文化的に発展し、国民の生活水準も高い。そして、ブロックごとに四季折々のイベントを同時に楽しめることが出来る・・・か」

「うん。知ってる人もあまりいない隠れた観光スポットだよ♪」

「へぇ～～～そうなんだ♪」

「ほんまに、私たち全員で行ってもいいんか、ユーノくん♪」

「招待状には何人で来ても構わないって書いてたし、何より龍児さん達も大人数の方が何かと楽しめる筈だ。」

「よっしゃ！じゃあ、この世界で決まりって事で、全員手を上げろ！」

「「「「「はーい！！」」」」」

全員は甲高い元気あふれる声で肯定の返事をすると、ユーノは笑みを浮かべ、その後でなのはが素敵な贈り物をプレゼントしてくれたユーノの首に抱きつき、微笑み返した。

「うふふ♪ありがとうね、ユーノ君♪みんなの夢をかなえてくれて♪」

「へへ。日頃の感謝の気持ちとでも言っておこうかなと♪」

そう言うと、ユーノも嬉しくなりなのはと微笑みを交わした。

◇

〈ユーノＳｉｄｅ〉

そして、１２月２２日。

ミッドチルダ中央次元航行船停泊所・３番ゲート入口。

本日からの五日間の観光を楽しむべく、なのは達機動六課前線メンバー総勢１８名は必要な荷物をトランクの中に押し込め、先にターミナルで待っていたユーノと合流を果たす。

ユーノは『スクライア観光』と書かれた旗を掲げ、旅行と言うにも拘らずいつも通りの甚平服に羽織、そして様になった帽子をかぶって飄々とした笑みをなのは達に向けて来た。

「は～い♪スクライア観光をご利用の機動六課前線メンバーの皆さん～♪こちらに集合してください～♪」

なのは達はユーノに気が付くと、トランクを押し下げ足早に駆け寄った。

「お待たせ♪」

「おお。待ったか？」

「これで全員だと思いますが」

「クロノは？」

「今回はパスするって。エイミィ達と家族水入らずでハワイに出かけるんだって」

「そっか。ま、あいつがいなくて清々するからいいか」

「後で聞いたらまた怒りますよ」

ユーノは早速、クロノ以外の全員がいることを確認すると、早速搭乗券を取りにその場を後にする。

と、ユーノを待つ間どうもルキアが一人初めて目の当たりにする民間の次元船の停泊所内部と、その人だかりの多さに圧倒されながら辺りを見渡しそわそわした様子でいた。

「・・・・・・」

気になったティアナが思わず聞いてみた。

「ルキアさん？何をそんなにそわそわしてるんですか？」

「いや・・・その・・・あれだ。任務でならまだしも、休暇で異世界に旅行など初めての事だからな。妙に緊張しておるのだ。それに、この広さと人の多さにも驚かされる。何処に行けばいいかもまるで見当がつかぬ」

普段が普段だけに、この度のルキアの態度を見ると鬼太郎は思わず

あきれ返ってしまう。

「きょろきょろするなよ。それじゃあまるで地球で言うとこの”海外旅行初体験者”丸出しじゃねぇか」

「しかし・・・」

すると、鬼太郎はルキアや他のフォワード陣に向って次のように力説する。

「いいか！海外初体験者って言うのは、”スリ”とか”置き引き”とかに狙われやすいんだ。なるべく旅慣れた玄人（ベテラン）の様に落ち着いてどっしりと構えるんだ！」

「「「「「「「「「はい！」」」」」」」」」

そう言うと鬼太郎もかっこよく感じるのだが、直後、そんな鬼太郎の言葉とは裏腹に全くそんなことを関係ないとばかりに浦太郎があるものを発見し、鬼太郎に声をかけてくる。

「お！先輩先輩、あっちあっち♪」

「お？」

鬼太郎が浦太郎の指さす方に目を向けると、映って来たのはたった今から次元航行船に乗り込もうとする鬼太郎と浦太郎好みに女性乗務員の姿だった。

一番奥の方でいる先輩の乗務員が新人と思わしき二人組に優しく声をかける。

「分からなかったら、私に何でも聞いてね」

「おお！！」

鬼太郎は思わず興奮を覚えるが、直後浦太郎と鬼太郎の目の前を金髪の女性乗務員が複数通り過ぎていき、二人は更に胸を熱くする。

「「おお！！おお！！！！おお！！！！」」

呆れかえりながらなのは達が返す言葉を失っていると、その二人の様子を偶然にも目撃した搭乗券を持ったユーノが怒りを露わに搭乗券を握りしめ、拳を構える。

「お・ま・え・ら・な・・・・・・！」

そして、刹那のひと時。

二人はユーノからの御叱りを受け、頭にはギャグ漫画に出て来そうな大きなこぶを作り、そのこぶからは湯気が噴き出て、思わずなのは達は絶句する。

ユーノは拳を突き立てながら子供を叱りつける親のような気持ちで言って来た。

「さ。今から搭乗券を配るから、全員失くさないように。それと、案内の人にカウンターの場所を聞きに行くから」

「「「

取り敢えず、誰もユーノに逆らおうとなどとは思わなかったようだ・・・――――

で、場所は変わって総合案内カウンター。

ユーノは早速案内人にカウンターの場所を尋ねる。

「あの。」

「はい」

「ちょっと、カウンターを教えていただきたいんですがが？」

「航行会社と行先は、どちらになってますか？」

と、いたって普通の会話が行われていたが、ここで変に水を差すように口ずさんできたのは先ほどユーノの御叱りを受けたばかりの鬼太郎・浦太郎の馬鹿コンビである。

「そう言えば前に北海道に慰安旅行に行くとき、あれはホントついてたよな」

「うんうん。金ちゃんがクイズの懸賞に当たったお陰で僕らみんなで旅行に行けたんだから♪あれ自費だと結構厳しいからね」

「ああ。ボーナスは私欲と家の維持費であっという間に消えちまうし、俺たちの毎月の手取りは・・・」

またしてもユーノの怒りが膨れ上がり、なのは達や案内人までもが

恐怖を覚えると、今度はユーノが怒る前にお目付け役の金太郎が二人を仲良く叱りつけ、両方の拳で二人の頭を押し付ける。

「家計の事情を言わんでよろしい！」

「「いたたたた！！！」」

またしてもその光景に言葉が出なくなるなのは達一行。

「え・・・えっと・・・どうすればいいんだろう・・・」

「ツッコまない方がいいのかしら・・・」

周囲の反応を気にしつつ、ユーノはかなり恥ずかしがった様子で航空会社を口にする。

「／／／あの・・・ＤＤＴです・・・／／／」

スタッフはそれを聞くと、苦笑いを浮かべながら返事を返す。

「それでしたら、あちらのＨカウンターまでどうぞ」

ユーノ達は案内人の話を聞くと、早速トランクを引いてＨカウンターへと足を運ぶ。

ここで補足しておくと、ＤＤＴとは『次元運輸旅行社』の英語名『Ｄｉｍｅｎｓｉｏｎａｌ　Ｄｅｌｉｖｅｒｙ　Ｔｒａｖｅｌｅｒ』の頭文字をとったものである。

カウンターを目指して歩いていたユーノはスタッフから貰った紙を

見ながらカウンターの場所を確認する。

「リュミエール・レッドバレー行、『ＤＤＴ』ＡＡの４２４２便・・・・あの４番窓口だね♪」

と、この何やら不吉感漂う数字を聞くと、心配性のフェイトが思わず口にする。

「４２４２の４・・・・・・死に死にの死」

「？フェイトちゃん」

「どうかしたか？」

全員がフェイトに視線を向ける中、フェイトはトランクを置いてユーノに歩み寄ると、彼が手に持っていたカウンター番号を見、不安げな声を漏らす。

「ねぇユーノ。死に死にの死番窓口なんて、何か不吉だと思わない？ねぇ、この番号どうにかならないかな？」

「え～。今更そんなこと言ってもな」

「だって。タイタニック号が遭難した時も、こう言うや～な予感した人がいたらし」

「そんなの考え過ぎだって。大体、なんで窓口の番号とタイタニック号の事故を関連づける訳？」

二人が口論していると、ここでまたどうでもいいことを言って来る

のが恋次と白鳥の二人で、二人は4番カウンターのスタッフと3番カウンターのスタッフの顔を見比べ口にする。

「俺的には4番もいいが、3番もなかなか捨てがたいがな」

「顔だけを判断材料にするのは些か軽薄であると思うぞ」

「おめぇらも一体そこで何をしてんだよ！！！」

ヴィータは女性を顔で判断しようとする恋次達を厳しく叱りつけてやった。

さて、数分後。

ユーノが再び全員を集めて改めて出発前の手順を順に確認する。

「えっへん。それでは改めて、これから出発に際して、手続き等について説明をさせてもらうからね」

「はい。よろしくお願いします」

「「「「「お願いします！」」」」」

ヴィヴィオを始め、大変素直な人間たちは潔い返事を返し、リィンやはやては旅行スタッフと言っても過言ではないユーノに微笑みを浮かべる。

「なんか、パック旅行の案内してるみたいで感じでますね～」

「ユーノくん、こう言うキャラ案外似合うな♪」

「おおい、さっさと始めちまえよ。時間押しちまうぜ」

「はいはい♪じゃあ、早速・・・この後みんなには“出国手続き”をしてもらいます」

「何？管理局員でもか？」

恋次が呆気にとられた様子で口にすると、全員は一瞬彼の顔を見てから、さも当たり前のようにエリオや鬼太郎が言ってくる。

「管理局員だろうとなんだろうと、手続きは何処の世界でも必須条件ですよ」

「へ。常識だろうが！」

「鬼太郎・・・あとで覚えとけよ・・・」

ユーノは一瞬目を奪われるが、話を戻す為咳払いをする。

「えっへん！で、チャックインに際しては、パスポートとさっき配った搭乗券が必要だね」

「失くしちまった奴は？」

「なぬ！？」

またしても恋次がそう言って来ると、ユーノは耳を疑うが、聞いていたシグナムがその質問に率直に答える。

「それは勿論出発できぬな――――――――シャマル。お前はちゃんと持っているだろうな」

「何言ってるのよシグナムったら。私がなくす訳ないじゃ・・・」

シャマルは自信に満ちた様子で懐を漁り出すが、直ぐにシャマルの自信は消え失せ、帰ってきた言葉は衝撃的なものだった。

「ないー！！！！！」

「「「「ええええええええええ！！！」」」」

「たたたた、確かこの辺に入れといたのに！！！！」

「ダメだなシャマルは。だから料理が下手なんだぞ」

「それとこれとは関係ありません！」

シャマルは大慌てでトランクの中から自分の衣類の中と言う具合に探し始め、他のメンバーもそれに協力する傍ら、同じ轍を踏んでいないかとばかりに自分のパスポートを手に取り確認する。

辺りが騒然としてくると、ユーノは少々苛立ちを覚え来る。

「はいはいみんなお静かに！うえっへん！うっふん！おっほん！！」

「ないないないないないないない！！！！」

しかし、ユーノの話を無視してシャマルははやて達にも手伝ってもらい、いまだパスポートを探して荷物を漁り続ける。

ユーノの怒りのボルテージが徐々にマックスに近づく。

「ぬぬぬぬぬぬぬぬぬぬぬ・・・・・・・！！！」

と、その時。

「あったあった！」

「！」

「こんなところにありました！」

シャマルはトランクの中に入っていた雑誌の間に挟まれたパスポート等を発見し、はやて達はそれを見て大いに安堵する。

「ほう～良かったわ～」

「みんな。ご心配かけちゃったわね。シャマル先生、パスポートが見つかりました♪」

「「「「「おめでとうございます！」」」」」

全員はシャマルに向かって拍手喝さいを向けるが、何故こんなおっちょこちょいな人間に拍手を送るのかは不明である。

理解不明な行動をする全員に呆気にとられながら、基本くそ真面目な人間は自分の話を無視するなのは達に向かって一喝。

「・・・・・みんなー！！！僕の説明を聞いてくれ！！！！」

そうして、今一度始まったユーノの説明だが、彼の表情はすっかり強張ってしまい、いつもの和やかさがまるで醸し出せていなかった。

「だ・か・ら！カードには前もってしっかりと書き入れといて欲しいわけなんだ・・・！ふう～～以上で差しあたっての説明は終わるけど、何か他に質問がある人は？」

溜息を吹いてからそう言って来ると、浦太郎が旅とは一切無関係な事を尋ねてくる。

「なのはちゃんとの結婚はいつなの店長？」

「ふぇ／／／」

「あ・赤くなった♪」

なのはは思わずその単語に体を硬直し、顔を真っ赤に染めると、ユーノは最初真顔で答えようとするが直ぐに同様の反応を見せ後で、言葉遣いが粗暴となる。

「ああ・・・それはただいま検討ちゅ・・・・・・／／／／／／うっへん！そういう質問じゃねぇんだよ・・・・・・」

ユーノはとうとう堪忍袋の緒が切れ、なのは達に向かって投げやりな感じで言って来た。

「さっさと次に行きやがれてめぇら！！！」

「「「「「は、はい／／／／／／」」」」」

恐れおののいたなのは達は荷物片手にその場を後にし、次の場所へと向かった。

彼等がいなくなった後で、ユーノは一人重い足取りで歩きはじめる。

「はぁ～～～行く前から疲れた・・・」

出国手続きが無事に終わると、ユーノ達は自分の荷物を預けることになる。

「それではお手持ちの荷物や、ポケットの中身を全部こちらにお出しください」

係員の指示に従い、各々が上着やズボンの中から手荷物を出して台に乗せていくと、ユーノは思わずため息をついてしまう。

「やれやれ、ここが難所の一つだ」

「え？どういう意味」

「この羽織の下には一体どれだけのものが仕込んでいると思ってる？今からそれをお見せしよう――――――」

ヴィヴィオにそう言うと、ユーノは自分の番が来たので羽織の下から危険なものではないが、なのは達が想像をしていなかったどうでもいいものが次々と現れる。

おもちゃを始め・煙管に似せて作ったシャボン玉や防犯ブザー、更にはなのはの際どい水着写真が何枚かとある意味では非常にレアな

ものが多数出てくる中、ユーノは未だ羽織の中を漁っている。

「えっとあとは・・・」

全員はその光景に思わず唖然としてしまい、恋次とヴィータは次のように口にする。

「ま、まだなんか入ってるのか!?」

「ドラえもんかお前は・・・・・・」

「断じて違う」

と、大方の手荷物が出された後で順に金属探知機が備え付けられた扉を潜っていく中、そのセンサーに引っかかってしまったはやては思わず声を上げる。

「え!えええーーー!」

センサーに反応があると、女性スタッフが前に出て検査を始める。

「失礼します」

はやてはスタッフの指示に従い両手を広げ、危険なものが無いことが確かめられた後、スタッフは敬礼をする。

「ご協力、ありがとうございました」

「いいえ♪」

「では次の方・・・・・・う！」

と、スタッフが顔を向けると、そこには強面な外見で有名な金太郎が声をかけてくる。

「私でございますが・・・・・・」

スタッフは初めて見る金太郎の顔に恐怖を覚えると、仕事そっちのけで背を向けてしまい怯え切った様子で口にする。

「あ、あなたはいいです・・・／／／」

「さようですか」

「気持ちわかるな・・・」

全員はスタッフに哀れみを感じたりのするのであった。

そして、数十分に及び面倒な手続きが完了し、前線メンバーは漸く登場の手順を踏むにいたった。

「と、やっと出国手続き終了っと。」

ゲートを目指して前進していると、恋次が見覚えの無いモノを発見。

「お・何だありゃ？見た事ねぇぞ」

「動く歩道ですよ♪」

ユーノが説明をした後で、全員がその動く歩道こと、オートウォー

クに乗り込み移動をしようとする中、スバルが不意に浦太郎がいない事に気が付いた。

「あれ？浦太郎教官の姿が・・・」

「まさか・・・――」

「あ」

大方の予想をつけていたユーノ達が別の場所に目を向けると、左隣の動く歩道に乗って移動する目の前の美女に鼻の下を伸ばす浦太郎が目に見えてきた。

「へへ♪」

ユーノはその瞬間血管が切れ、魔導死神の力を失っているにもかかわらず、目にも止まらぬ速さで彼を連れ戻し金太郎と共に制裁を加えた。

「ブッス！」

浦太郎は元の場所に戻され、再びできたこぶに頭を押さえる。

「う／／／／／」

「（痛そうね・・・）」

「（ユーノ先生と金太郎さんのダブルパンチだからね、文字通り）」

そう心の中で話していると、ヴィヴィオが時間を気にしてなのはに

声をかける。

「ママ。時間大丈夫かな？」

「うん。ちょうど間に合うくらいかな」

時計を見てそう口にするなのは。

はやては堂々とした様子で更にこう口にする。

「優秀な私達が搭乗ギリギリなんてありえんありえん。ははは！！！」

がしかし、ここでそんなはやての予想を翻す予期せぬ出来事が唐突に舞い込んだ。

「ぐ・・・ごおおお・・・！」

「あ、アギト！？」

「どうした」

歩道を降りた途端、アギトが顔を真っ青にして腹を抱え込み、蹲り始めたのだ。

「は・・・急に腹が・・・！！」

「「「ええ！！」」」

予期せぬ事態を前に、全員は焦りを見せる。

「お前、朝食に何を食べた？」

そう話しかけると、白鳥が何故かわかりきった様子で言って来た。

「朝食ではない。昨日の晩だ」

「どういう意味ですか白鳥さん？」

すると、白鳥は旅行前日でのちょっとした出来事を語り始める。

それは、白鳥がロビーで寛いでいるとき、前々からとっていた大福を戴こうと手を付けたのだが、賞味期限を確認すると既に二日も経過しており、臭いをかぐと多少かび臭い匂いが漂って来た。

『う・・・一昨日だと流石に腐っておるか・・・・・・』

基本育ちがいい白鳥にとって、このまま手も付けずにただ捨てるということは自分の矜持にも反する事なので、対応に苦慮していると、そこで偶然通りかかったのがアギトであり、白鳥そんな彼女を利用できると考えた。

『アギト』

『あ？なんだよ』

『本当ならば私が食べる筈だったのだが、生憎胃が満たされておって食べきれん。お主にやろう』

『ホントかよ！あんがとよ白鳥っ！』

アギトは、この悪魔の一声を簡単に受け入れてしまい、何のためらいもなく飛びつきました。

そうです・・・これが今日になって腹痛を起こすことなど知らずに・・・・・・

「と・・・賞味期限の切れた大福をやったと言う訳だ」

「お・・・おめぇ・・・あたしを／／／ざっぱんしょりに・・・つかいやがったな・・・！！！！！！！」

と、青ざめた表情で白鳥を睨み付けるアギトだったが、ここでとうとう限界が訪れる。

「あ、アギト！？」

「おおおおおお！！もう駄目だ！！！！！！！」

「待てアギト！船の中でしろ！！アギト！！！！！」

アギトは腹を抱えたまま、一目散にトイレへと向かって行き、シグナムは立ち去って行くアギトを引き留めようとするが既に聞こえなくなっていた。

「あちゃ～～～なんてことだ！仕方ない。みんなは先に行ってて。僕らもすぐに追いつくから！」

「よし、じゃあ私も行くぜ！」

浦太郎は鬼太郎とヴィータの二人を連れてアギトの元へと走り、スバルは走り去っていく三人に大声を上げる。

「浦太郎さん！鬼太郎さん！ヴィータ副隊長！急いでくださーい！！」

「やれやれ。腹を壊すなら昨日であればよかったのにな。この先が思いやられる。」

「誰のせいだと思ってるんですか！！！」

ティアナはスケジュールをも狂わしかねない重大を犯した白鳥に制裁を加えようと、先ほど金太郎が浦太郎達にした要領で彼の頭を両手で押しつけていき、白鳥はキャラ改変したティアナに思わず声を上げる。

「のおおお！！ティアナ！！！キャラが変わっているぞよ！！！」

全員はアギト達の事を気にしながらも時計を見、先に搭乗する予定の次元航行船へと向かった。

それから数分後、アナウンスが聞こえると、次のような内容が口にされる。

『艇中ご搭乗のご案内をいたします。ＤＤＴ　４２４２便。リュミエール・レッドバレー行きにお乗りの方は、搭乗部５番ゲートへとお急ぎください』

この放送が聞こえてくると、腹痛が収まったアギトを始め、浦太郎と鬼太郎、そしてヴィータの四人は全速力でゲートを目指す。

「「「「うわあああああああああ！！！！！」」」」

四人が全速力で走って来ると、入り口付近で到着を待っていたリィンとユーノは安堵の表情を浮かべる。

「あ、来たましたです！」

「よかった間に合って～」

二人と合流を果たすと、余程真剣に走っていたのか四人は肩で息をする。

「は、は、やれやれ」

「どうにか間に合ったぜ」

「ったく、なんであのタイミングで腹なんか壊すんだよ！」

「しょうがねーだろ！自然現象なんだ！」

と、ここでキャビンアテンダントが四人に席番号を尋ねる。

「ようこそ。お席の番号は何番でしょう？」

「あ、はい。えっと・・・５５のＡからＣなんですが」

「それでしたら、こちら左側通路の中ほどになります。」

「どうも♪」

四人は船の中へと入り、与えられた席へと目指す。

すると、不意にヴィータがリィンの胸のサイズを一瞥し、何処か勝ち誇ったともとれる笑みを浮かべて言って来た。

「ん？そういやリィンの胸のサイズって・・・７４のＡだったか」

これを聞くと、リィンは顔を赤く染めてからヴィータの方へと胸を張る。

「失礼ですね！７９のＢーです！」

ユーノ達はこれを聞くと、真顔で虚栄を張るリィンに呟く。

「「「「「ウソつき・・・」」」」」

「／／／／／」

この時、リィンは人生においてこれ程までないと言う羞恥心を覚えるのであった。

席順を確認すると、前列から右側からユーノ・なのは・ヴィヴィオの三人組を起点に、スバル・ティアナ・ギンガと恋次・吉良・ルキア、はやて・シグナム・リィン。

左側がアギト・エリオ・キャロ、金太郎・シャマル・ザフィーラ（人間態）、そして浦太郎・鬼太郎・ヴィータの順になっている。

それぞれが談笑をしていると、管内アナウンスが聞こえてくる。

『お待たせいたしました。間もなく出発いたします。シートベルトをお締め下さい』

アナウンスが終わると、客室乗務員が確認に出てくる。

「シートベルトをお締め下さい。シートベルトをお締め下さい」

シートベルトを付けようと窓際の席に座っていた鬼太郎だが、不意に彼の目の前に容姿端麗な客室乗務員が笑顔を向けて来た。

「ん？」

「えへ♪」

「おおお・・・／／／」

鼻のような笑顔を見ると、鬼太郎は頬を赤く染め上げ、浦太郎とヴィータはこれに気付くと思わず乗務員と鬼太郎の顔を一瞥し、乗務員は何事もないように繰り返す。

「シートベルトをお締めください」

すると、興奮した鬼太郎は席を立とうとし始め、隣に座る二人に言って来た。

「よ、ようお前ら・・・俺やっぱ通路側の席がいいんだが・・・」

勿論、これには二人も猛反発。

「「絶対ダメ！！」」

そして、いよいよ次元航行船が本格的に動きはじめよとする中、先ほどの客室乗務員が前に出て、次元空間内で使える救命胴衣の説明を始めた。

「これより、救命胴衣のご説明をいたします。」

「おお！」

それを聞いていた鬼太郎は目を輝かせながら乗務員に注目し、一方で恋次は怪訝そうな顔を浮かべて吉良に尋ねる。

「おい吉良。あれってなんだよ？」

「次元空間でも使えるこっちの世界の救命胴衣だよ。もしも船が沈没したときに、助かるために着るんだ」

「ちぇ。じゃあ、沈まないと着られないって事か・・・つまんねぇもんだな」

「だったらどうすれば墜落すんだ？」

「う～んとそうですね・・・エンジンに何らかの異常があったりとか、あとは・・・」

と、アギトの質問にリィンが答えようとすると、はやてが咳払いをしてから叱咤する。

「こら、リィン！アギトも不謹慎や！」

「「あっ！ごめんなさい・・・！」」

その間に、乗務員は救命胴衣を実際に着用し、具体的な手順を自分を使って丁寧に説明する。

「まず、このようにこうなりました・・・ああなって、そうなりまして・・・」

「よいしょ！！あれっ！？結構難しいな・・・！？！」

胴衣を着用した乗務員の動きを見よう見まねにやろうとするリィンやアギトの動きが何とも愛らしい。

そして、最後に乗務員は備え付けられていたチューブを手に取りそれを口に咥える。

「ここを引いていただきまして、膨らみが足りないときはご自分で・・・空気を入れてください。」

すると、この胴衣にチューブを使って空気を流し込む光景を見ていたヴィータがまたしてもリィンに向かっていたずらっぽく口にした。

「ほお～～～。リィンの胸もああやって膨らませられれば良いのにな♪」

「ヴぃ、ヴィータちゃん／／／」

「お前は黙っていろ！」

あまりに恥知らずな発言を聞いたシグナムは顔を赤くしながらそう言い、他の乗客が笑い声をあげる中ユーノやなのは達は恥ずかしくなり他人のふりを決めえ込んだ。

「はは・・・以上で救命胴衣のご説明を終わります」

気恥ずかしそうに乗務員がそう言うと、唐突に鬼太郎の声が上がる。

「アンコールアンコール！」

「は？」

ユーノ達が鬼太郎に注目すると、鬼太郎は身を乗り出し声を上げる。

「アンコールアンコール！」

「お、おい！？」

「鬼太郎さん・・・？」

「あ、あのな・・・頼むからやめてくれ・・・／／／」

「アンコールアンコール！」

しかし未だ彼の声は鳴りやむことを知らず、ユーノは本で顔を隠しながらどうしたものかと考えていると、ここで予想外な便乗が聞こえてくる。

「そうだそうだ！」

「え！」

「アンコール！アンコール！アンコール！」

なんと、他の乗客も鬼太郎と同じく乗務員に何故かは知らぬがアンコールを求めて来たのだ。

「「「「「アンコール！アンコール！アンコール！」」」」」

「そ、そんな・・・／／／そうですか・・・じゃあ！」

乗務員は多少照れた様子ではあるが、満更でもないような様子で笑みを浮かべる。

そして、機内が騒然としていることを不審に思った搭乗口で案内をしていた先輩乗務員が様子を見に来ると、思わず呆気にとられてしまう。

「うわあ」

彼女の目に映って来たのは、先ほどの乗務員が陽気に手を叩きながら完全に職務中であることを忘れて意気揚々としゃべっていたのだ。

「乗ってるかーい！」

「「「イエーイ！」」」

「愛し合ってる！・・・かい！？」

乗りのつもりで指を向けた瞬間、彼女の目の前に立っていたのは様

子を見に来た先輩で、彼女を見るなり眉間にしわを寄せながら先輩乗務員は腕組みを組む。

「ト・ダ・さ・ん・・・」

そうして、先輩乗務員に御叱りを受けるトダとは別に、なのははユーノの腕を組んで先ほどの言葉を聞いていたため、小さな声で答える。

「愛し合ってま～す？」

「／／／／／」

恋人とは言え、やはり腕組みだけでも顔を染めてしまうユーノはやっぱり晩生であった。

◇

〈機内Ｓｉｄｅ〉

こうして、無事に出国が出来た次元航行船はこれからおよそ５時間をかけて、第７７管理外世界『リュミエール』と近郊の第７４管理外世界『レッドバレー』の狭間に位置する次元空港を目指して進路をとる。

吉良は椅子に腰かけながらゆったりを寛ぎ始める。

「ふう。やっとこれで一息つける・・・あれ？」

と、そう思った矢先、隣に座る恋次がやけにそわそわしていた様子

で、気になった彼は窓際で雑誌を読んでいたルキアと共に目を向ける。

「どうした恋次・・・何をそわそわしてる・・・？」

すると、恋次は小刻みに体を震わせ激しく貧乏ゆすりをしながらこんな事を呟いた。

「・・・機械の塊のくせに・・・空を飛んでいる・・・認めん・・・俺はゼッテー認めねぇぞ！！！！」

二人はその言葉に唖然としながらも、直ぐにこれを覆すような矛盾を指摘する。

「だったら、ラピュタの捜査で使ったあの母艦やクラウディアにはどうして乗れたのだ？」

「民間の船は居心地が悪いのかもしれないね。間違ってもエコノミークラス症候群なんかにならないでくれよ・・・」

とりわけ座席の狭いエコノミークラス席で発病する確率が高いと思われているためにエコノミークラス症候群と呼ばれるがファーストクラスやビジネスクラス、さらに列車やバスなどでも発生の可能性はあるらしい。

それからまた暫くしてから、客室乗務員が新たに新聞と雑誌の提供を始める。

「新聞・雑誌、いかがですか？」

浦太郎はそれに気づくと、直ぐに声をかけウｒ。

「あ・すいませーん！」

「なんだ？雑誌か」

「うん♪先輩もなんか読むでしょ」

「へ。気が利くじゃねぇか」

乗務員は雑誌を手に並べると、鬼太郎に尋ねる。

「どれにいたします？」

「そうだな・・・・・東スポあるか？」

「「「「「だー！！」」」」」

夢にも思わなかった間抜けな回答に思わずずっこける四人。

だが鬼太郎は懲りずに更に続ける。

「なんなら、週刊現代とかでもいいぜ！」

これを聞くと、三人は口をそろえて威圧感溢れる顔で言って来た。

「「「「お前（先輩）（あなた）は黙って景色でも見てろ（て）（なさい）！」」」」

「は、はい・・・／／／」

鬼太郎個人としては、浦太郎とヴィータの威圧よりも何より客室乗務員の威圧の方が恐怖を感じたものだったようだ。

出発から2時間が経過した頃、ちょうど時間はお昼時。

この時間になると乗務員が一斉にが食事を持って通路を歩いてくる。

それを見たなのはは、思わず胸躍らせて隣に座るユーノに思わず声を掛ける。

「ユーノ君!!ユーノ君!!見て見て!!機内食、機内食だよ!!」

なのはの大人な割にとてもそうは思えないような興奮した態度に対してユーノは飽く迄も冷静に返答。

「そんな珍しいものかな・・・ｖｉｖｉｄでも食べたんじゃないの、なのは。」

「だって～～～!!!機内食って毎回毎回新鮮なんだもん～～～♪」

その時、トダ乗務員が浦太郎達の席にやって来るとメニューの種類を尋ねる。

「失礼します。ビーフとチキン、どちらがよろしいですか？」

その際、三人は決まりきった様子で声をそろえる。

「「「ビーフ!!!」」」

「かしこまりました。」

「チキンよりもビーフのほうが高いからね～～～どうせタダなんだから高いほうを食べようっていうのが庶民の発想だし～～～」

そんな浦太郎の言葉を横で聞いていたユーノは赤面すると、彼の言動に気恥ずかしそうに注意を入れる。

「浦太郎／／／」

「「あはは・・・」」

隣に座るなのはとヴィヴィオはもう苦い笑いを浮かべるしかなかった。

やがて、それぞれの元に好みの食事が届けられる。

「うっは！！美味しそう～～～！！！」

スバルはティアナから借りたクロスミラージュの写真機能を使って思わず目移りしそうな機内食を撮影し始める。

「うわあっ！！」

クロスミラージュのフィルムに次々と映し出される正直しょうもない写真。

「あんたはもう・・・私のでそんなもの撮らないでよ・・・」

呆れた様子のティアナが我慢できなくなり、スバルから強引にデバ

イスを取り上げる。

「もう！フィルムが勿体無い！カメラはお預け！！」

「え～～けち～～」

だが、スバル以上にしょうもないことをするのが浦太郎である。

「Ｔｅａ　ｏｒ　ｃｏｆｆｅｅ？」

「あっ！金髪のもっこりキャビンちゃんだ！！」

浦太郎は金髪の乗務員を見るとデジカメで撮影を開始する。

写真を連写する浦太郎を見ると、食事を戴いていたヴィータは怒りを抑えきれなくなった。

「ぬぬぬ・・・浦太郎！！！！！」

ヴィータはグラーフアイゼンな身に頑丈な鉄拳を彼の頭上に叩き込み、浦太郎は本日何度目となるこぶを作ってカメラを持ったまま放心する。

「あ・・・」

「ったく。人目もはばからず懲りない男だぜ。さて、冷めないうちに食べちゃおうとするか」

と、そう言ったとき窓際の席の鬼太郎が完食を果たし言ってくる。

「おーい！おかわりねぇのか？」

「な！」

これには先ほど浦太郎に目を付けられた乗務員も驚きを見せる。

「オオ。早食い！」

「鬼太郎おめぇ何時の間に？いや流石に駄目だろおかわりなんて・・・」

「おお！だいじょう～ブイ！ちょっと、待ってクサい」

「「「？」」」

乗務員の妙に関西弁くさい言葉に訝しげな顔を浮かべる三人だが、直ぐに乗務員は両手いっぱいに抱えられた機内食を持って三人の元にやって来る。

「余ってるケン。良かったら食べる、どうぞ♪」

「おお！マジでか！？じゃ私も遠慮なく！」

「ホホ。お兄さん、ワインは？」

「は～い♪イエスワイン♪」

「俺はウーロン杯を頼む！」

「私はジュースでな！」

「は～い！お代わり自由でっすー！」

乗務員は意気揚々と注文された飲み物を持って三人へと運んでいき、機内食を追加された三人はご機嫌な様子で自分の意の中へ食料を放り込んでいく。

「あん！」

「民間の次元航行船ってのもサービス良いよな！」

「ワインお代わり～♪」

すっかり民間の次元航行船のサービスに気分を浴した三人だが、この事が後々で公開に繋がることになるである。

出発から6時間後。

ついに次元航行船は目的地であるリュミエールとレッドバレーの狭間に位置する次元空港へとドッキングを行おうとしていた。

『間もなく、次元空港とドッキングいたします。お席にお着きになって、シートベルトをお締めになって下さい』

管内アナウンスが流れると、乗客は一様にシートベルトを着用するが、にもかかわらずこの三人・・・機内食を常人よりも多めに摂取した浦太郎・鬼太郎・ヴィータの三人は席を立ち、気分のすぐれない顔色である場所を目指す。

「「「う・・・・・」」」

「お客様。危険ですのでお席にお戻りください！」

乗務員は慌てて三人を引き留めようとするが、三人は腹を押さえて険しい表情で訴えかける。

「あの、すんません・・・すみません・・・それが・・・／／／」

「トイレに行かないと、もっと危険な状態なりそうなので・・・／／／」

そう言った直後、三人は我慢の限界を迎えてトイレへと駆け込んだ。

「「「おおおお！！！」」」

ユーノ達はこの三人を見ると、思わずこのように言葉を漏らす。

「あっりゃ～～～」

「七食分も、お代わりなどするからああなるのだ」

「自業自得って奴だな」

「全くであります」

乗務員は鬼太郎が入っているトイレのドアを軽く叩くと、徐に言ってくる。

「なるべく早くお席にお戻りくださいませ・・・」

と、それを聞くとトイレのドアが開かれる。

「え？」

そして、唖然とする乗務員に対して鬼太郎は青ざめた顔で返事をする。

「トイレの中にもシートベルトつければいいんじゃないのか・・・・・／／／／／／」

「は、はあ・・・」

鬼太郎はそれだけを伝えると、再びドアを閉め、聞かされた乗務員は間を置いたのち、あっさりと口にした。

「・・・いいアイディアだわ」

リュミエール旅行・・・言ったこの先どんな未知なる触れ合いが待っているのか！？

機動六課の慰安旅行・リュミエール篇（後書き）

重要大事の勝手に台詞選集！

今回は魔導虚篇で機人四天王「ファイ」との一戦で躯したフェイトの台詞をピックアップだ！

フェ「空に命をかけてきたのは、お前だけじゃない！！」（第十七話：激突、機人四天王！より）

魔導師図鑑ハイパー！

リィンは船の中で非常に腹が立っていた。

リ「ぶ～～～！！」

理由は先ほどから散々アギトやヴィータより、自分の胸のサイズが小さいことをネタにされたことにあった。

は「そんな怒ってたらあかんよリィン」

リ「ですけどはやてちゃん・・・／／／二人して私のこと馬鹿にするんですよ！」

は「そうは言ってもな、こればっかりはしゃーないよ。それに、リィンもそのうちおっきくなるはずや。なのはちゃんがそうやったんやから」

な「ふぇ／／／はやてちゃん、突然何を！？」

赤面するなのはや隣に座るユーノを余所に、はやての話にくぎ付けとなるヴィヴィオやリィン。

ヴィ「はやてさん！一体ママの胸に何があったんですか♪」

リ「すっごく気になります！」

は「ふふふ・・・あれは小学校４年生のときや。たまたまユーノくんがなのはちゃんの家に遊びに来ていた時、なのはちゃんが言ったんや。“ユーノ君、少しマッサージお願いしてもいいかな”って。そしたらユーノ君は腕とか足とかと思ったらしいんや・・・その答えに対してなのはちゃんは・・・！」

聞いていたなのはとユーノは顔から湯気を上げながらはやての話を遮ろうとする。

な「だ、ダメ！！はやてちゃんそれは駄目だって！」

ユ「コラ！タヌキ娘！人の恥ずかしい話を何勝手に暴露して・・・！」

は「“大胸筋をもんで”って♪ようするにユーノくん、小さいころからなのはちゃんの胸を揉み続けて、今ではあんなにおっきくなったんよ♪」

それを聞くと、恋次達を始め船の中の男どもの鋭い視線がユーノに向けられ、更にはフェイトが百合思想からバルディッシュを起動させる。

フェ「ユーノ・・・よくも私のなのはに汚らわしい手で触れたね・・・殺す！」

ユ「おおおい！！！！！あれは僕だって止むを得ずやってしまったことなんだ！！！断じていやらしい目的じゃない！！！」

な「フェイトちゃんもお願いだから少し抑えて！！」

出発してからもこのような騒動はしばし繰り広げられたそうな・・・

次回予告

ユ「さぁ、みんな♪ここがリュミエールだよ♪」

ヴィ「緑がいっぱいで綺麗な世界～～～♪空気も澄んでて美味しいね♪」

フェ「え！私がもう一人！？これって一体・・・！」

ヴィ「で、これが世界国家騎士団の宮殿か・・・つうかデカイなおい」

龍児「気に入って貰えてよかったよ。さてユーノ・・・久しぶりの再会を祝って一戦交えようぞ」

セスタ「相棒！その前にオイラがユーノとやるんだ！久しぶりの喧嘩だ！派手にいこうや！」

シ「そして私は興奮が収まらん！ほおおおおおおおおお！！！！」

ユ「次回、ユーノ・スクライア外伝『リュミエールの騎士・夜御倉龍児登場！』。お手柔らかに頼みますね♪」

リュミエールの騎士・夜御倉龍児登場！（前書き）

ユ「お元気ですかみなさん。今回の話から、本格的なコラボが始まります♪」

な「さて、一体どんな感じになるのかな?楽しみだね♪」

龍児「初めての方には読み易い内容であれば幸いだが、果たして伝わるのか・・・」

フェ（L）「あまり心配してもダメよ。では、間もなく始まります」

リュミエールの騎士・夜御倉龍児登場！

本編に入る前に、もう一度リュミエールに関する基本情報を整理しておこう。

第７７管理外世界「リュミエール」

総合文化レベル：Ｃ　魔法文化レベル：Ａ

ユーノ・スクライアの友人、夜御倉龍児たち世界国家騎士団が拠点する魔法世界。

緑豊かな大地と蒼く澄み渡った海、そして青々とした若葉を纏った世界樹（母なる大樹とも呼ばれる）が存在し、現在１００近い国々が存在し、中でも〔桜華国〕・〔アクナビート共和国〕・〔シャイン王国〕・〔グリーンマーク王国〕・〔フレア連邦共和国〕は５大国と呼ばれ、政治・経済・文化的に発展し、ミッドチルダほどではないにせよ国民の生活水準も高い。

世界の気候は独特で、桜華国とその周辺では桜が開花しやすい環境であり、一方アクナビートやフレアでは温暖な環境、シャイン王国では寒冷と春夏秋冬、四季折々の気候がみられる。

〈三人称Ｓｉｄｅ〉

そんなファンタジー要素溢れる世界に於ける今回の主役こと、世界国家騎士団二番隊隊長、夜御倉龍児は丘の上から緑あふれる世界を見おろし、静かに時が来るのを待っていた。

龍児は無言のまま鳥の囀る音を聞き流し、髪の毛を風になびかせる。

するとそこへ、丘を登って報せを持って来た一人の女性が現れる。

女性は背中を向けたままの龍児に声をかける。

「龍児。」

「ん？ああ・・・フェイトか」

龍児が振り返ると、目に映って来たのは彼の婚約者であり、同じ世界国家騎士団の隊長格を務める世界国家騎士団二番隊副隊長のフェイト・Ｌ（ルス）・ムーンである。

ちなみに言っておくと、彼女はミッドチルダのフェイト・Ｔ・ハラオウンと非常に容姿が酷似しており、強いて言う違いは何かと言うと目がかなり大きいという事だ。

フェイトは龍児に微笑みを向けると、彼に歩み寄り尋ねる。

「何を考えていたの？」

「ああ。ちょっと、これから先の世界の行く末について――――――」

「ふふ。そう――――それよりセスタ隊長から言伝を預かってるわ。異世界から私達のよき友が、大人数でこの世界にやって来たと」

「おお、ユーノか。連絡は受けていたが、意外と早かったな。分かった、直ぐに出迎えに行こう」

龍児はフェイトを引き連れ、ユーノ達を迎えに移動を始める。

果たして、この二人や世界国家騎士団との出逢いがユーノ達にどんな絆を齎すものか、楽しみだ。

◇

〈六課Ｓｉｄｅ〉

龍児達が出迎えに向かった丁度その頃、機内食を食べ過ぎたせいで腹を壊してしまった鬼太郎・浦太郎・ヴィータの三人はユーノ達に見守られながら未だ自分の席でため息をついていた。

「はぁ～～～」

「はぁ～～～」

「はぁ～～～まだ腹がゴロゴロいってる・・・」

三人の顔は言うまでもなくげっそりとしており、見ているだけでも哀れみを感じさせる中、ユーノは苦笑をしながら三人に声をかける。

「と、とにかく降りよう。ほら、元気出して」

「三人とも、だそうですよ」

「「「はぁ～～～」」」

三人は力なく返事をすると、ふらふらの状態で立ち上がり軽い手荷物を持って降りる準備を始める。

恋次はため息交じりに三人に言う。

「ったくなさけねぇ連中だな。あれぐらいで腹壊すようじゃ、この先は無理だな」

「何に対して無理なのかな、それって・・・」

「大食い大会にでも出るつもりか貴様は」

すると、その時浦太郎と鬼太郎の耳に天使のようなハスキーボイスが聞こえてくる。

「いってらっしゃいませ」

「「！」」

「いってらっしゃいませ」

それは、この機内でたびたび浦太郎達の前に姿を見せたトダ乗務員だった。

転送ポートの前で乗客を見送り、お辞儀をする彼女の姿を見た瞬間、鬼太郎と浦太郎は態度を改め唐突に元気を取り戻す。

「「おお！！」」

そして、トダ乗務員に近づき目を輝かせながら驚く彼女にお礼を言う。

「お世話様でした♪」

「お世話様っした！」

「い、いってらっしゃいませ・・・」

「いってきます♪」

「また帰りの船でな！」

二人は爽やかな表情でそう言うと、隣を歩くヴィータに目を向ける。

その瞬間、急に力が抜けてしまい先ほど同様げっそりとした顔となった。

「「はぁ～～～」」

ヴィータは思わずグラーフアイゼンを取出し殴りたくなった。

「なんだよそれ・・・なんなんだよ！！！！」

と、そんなやり取りをしている間にユーノ達は一度手続等を済ませ、自分たちの預けた荷物を取りに次元空港の中へと移動する。

それぞれが自分の荷物を受け取り概ねよさそうに見えたが、ユーノだけまだ最も肝心なものが到着しておらず、彼はストレスを抱えて非常にそわそわした様子を見せる。

「／／／／／／／／／／」

ユーノの尋常ないほどの焦りがなのは達の目に映ると、前線メンバーは苦笑をしながら彼に呼びかける。

「ね、ねぇパパ・・・少し落ち着こうよ」

「そうだよ。何も盗まれる心配はないわけでだし・・・」

「お、来たぞ」

「！」

その単語を耳にした瞬間、ユーノは目を見開きベルトコンベアに乗って運ばれてくる透明な袋で封をされた自分の愛刀、「逆刃刀・真打」と「洞爺湖木刀」を見つけ出し、目の前に来ると透かさずそれを手にし、ここで漸く安堵のため息をつく。

「ふう～～～」

なのは達はこれを見ると、気持ちを知ってかこう呟いた。

「今のあいつにとっちゃ、命よりも大切なものなんだろうなあの刀は」

「しかし二本とも持ってくる必要があったか？」

そうは言ってもやはり、晩翠を失った今のユーノにとってはこの二本の刀は命よりも大切な友と友との絆の証なのだ。

誰かに妄りに触られたり盗まれたりしたらそれこそ今後の彼の死活問題となってしまう。

暫くして、全員が手続等を済ませて異世界への転移を許可されると、ユーノ達は大型の転移装置を使ってついに待ちに待った管理外世界７７番こと、『リュミエール』へ到着する。

「さぁ着いたよ。ここが、７７管理外世界こと、『リュミエール』だ」

ユーノがそう言うと、全員は眼前に広がってくる自分たちがこれまで見た事のないような緑豊かな自然や澄みきった空と空気に笑みを浮かべる。

「わぁ～本当に緑でいっぱいだ～！」

「空気も澄んでいてすごく気持ちいですね♪」

「こんないい世界があったなんて、知らなかったわ」

「世界はまだまだ広いって、思い知らされるよね」

「へへ。さて、先ずはと――――――」

ちなみに、彼らが今いるのはリュミエールにおける科学技術の本山、銀狼国・首都アイゼンの国際空港。

飛行機と言うものが発明されていないこの世界に於ける航空路の移動は飛行船であり、時間を急がないこの世界の人間性を顕著に表している。

ユーノが空港を見渡しこれからの方針をどうするかを考えていると、そんな彼に向かって聞きなれない女性の声が話しかけてきた。

「ようこそおいでくださいました、ユーノ・スクライア様。」

「？」

「そして、そのご友人の皆様」

その女性の主、フェイト・L・ムーンはユーノ達に笑みを浮かべると、軽く一礼しユーノ以外の全員はこっちの世界のフェイトと非常に酷似た容姿の彼女の素顔に驚きを隠し切れないでいた。

「「え!!」」

「う・・・うそ!」

「フェイトさんが・・・二人!?」

「ああ。みんなには話してなかったね。こちら、現地の住民で世界国家騎士団二番隊副隊長のフェイト・L・ムーンさん」

「初めまして、フェイト・L・ムーンです」

「名前までおんなじなんて・・・!」

「びっくり」

すると、ここで恐る恐るミッドチルダの執務官魔導師を務めるフェイト・T・ハラオウンが前に出て挨拶をする。

「あ、あの。私もフェイトです。フェイト・T・ハラオウン。」

「はい。お話は伺っておりますわ。お互い、戸惑うこともあるかとは思いますが、親しき関係を築けていければ幸いですね」

フェイト（L）はフェイト（百合）と親しげに握手を交わすと、百合は少々照れながらも親交を深めあう。

「はい・・・／／／ありがとうございます／／／」

で、概ね気づいているとは思うが水樹奈々が務めるフェイトは彼女自身も黙認している通り、やっぱり百合女なのである。

だから区別の為に、ここは百合とつけさせてもらう。

と、ここで鬼太郎が二人の容姿を見比べメンバーに言う。

「こっちのフェイトと比べると、随分とほんわかした感じだよな」

「うむ。それに、若干あちらのフェイト殿のほうが顔つきが可愛いというべきか」

それなりになのはが二人のフェイトに戸惑いながらもそれぞれ感想を口にしていると、ユーノはフェイト（L）に尋ねる。

「フェイトさん。龍児さんはどちらに？」

「はい。空港の前でお待ちかねです。どうぞ、こちらへ」

フェイトは早速、空港の外で待機している龍児の元へと案内する。

空港を出た直後、ユーノ達の目に飛び込んできたのは――――――

「お」

「あれは」

眼前に注目すると、ユーノ達を出迎えるのは茶髪に翡翠の瞳を持つ騎士らしい白い衣装とマントを身に着けた男・・・世界国家騎士団の夜御倉龍児であった。

龍児はユーノに顔を向けると、ユーノ共々ほくそ笑みこう言った。

「よく来たな。母なる大地リュミエールのよき友・・・そして、我が親友のユーノ・スクライア。それとも、翡翠の魔導死神といったほうがいいのかな？」

「はは。止してくださいよ、龍児さん♪堅苦しいですから。普通に接していただければ」

「そうだな。では、改めて・・・よく来てくれた、ユーノ」

「ご無沙汰しています、龍児さん」

二人は歩み寄ると、徐に固い握手を交わす。

その間にフェイトが龍児のことをなのは達に説明する。

「彼は、私の婚約者で世界国家騎士団の二番隊隊長を務める夜御倉龍児です」

「ほう～あれがか・・・（なんやちょっと私のタイプかも♪）」

と、一瞬龍児の整った容姿に頬を染めるはやて。

「それに、あの全身から発散される闘気と魔力は並々なものではない。一度でいいから刃を交えてみたいものだ」

そして、一目で龍児を強者と判断し武者震いをしだすシグナム。

これにはもう分りきってるとは思うが、全員が苦笑いを浮かべる。

「あのな・・・私らは休暇に来たんだろ・・・すぐに闘志燃やすのはやめたほうがいいって・・・」

「長旅で疲れているだろう。早速、我々の馬車に乗って貰おう」

「馬車？」

龍児は怪訝そうに首をかしげるなのは達にそう言うと、フェイトを連れて歩きだし、場所を止めている場所まで案内する。

止められていた場所を見ると、外見上は至って普通の馬車なのだが、一度扉を開ければそれは彼らが思っていたものとはまるで違っていた。

「うわ～～～！！何これ～～～！！」

なのは達が目を見開いて驚くのは、外から見れば精々４人が限界と言うべき客室なのだが、実際はリュミエールの魔術によって空間が歪曲し・圧縮された総勢１００人が乗っても余裕なほどの空間スペースが設けられていたのだ。

「外で見るより中はこんなに広いんだ・・・！」

「圧縮空間だよ。個室も設けられてる。まぁ僕らの世界の魔法じゃこうはいかないよね。」

「凄～～～い！これが魔法、もとい魔術なんだ！」

「何と言うか色んな意味で驚かされるわね～～～」

「さぁ、乗ってくれ。出発だ！」

龍児は爽やかな笑顔でそう言うと、ユーノ達総勢１８名を場所に乗せ、馬を走らせる。

時速３５マイルほどで走行する馬は馭者の手綱によって操られ、大自然あふれるこの世界を爆走する。

その間に客室のユーノ達は広々とした中で窓越しに見えてくる景色を堪能しながら快適な時間を過ごしていた。

「いや～～～馬車とはまた風情があってええな～～～まるでお伽噺みたいや」

「ほんとだね～♪」

「これで王子が制服ではなくタキシードならば、舞踏会気分を味わえたものなのに♪」

と、フェイトが甘えた声で隣に座る龍児にそう言うと、龍児は思わず頬を染め顔を逸らす。

「う／／／お前は・・・何を言う・・・／／／」

「へ。照れてやんの」

と、誰かが龍児を冷やかした直後、キャロが窓際から映るある光景に声を上げる。

「あ！みなさん、見てください！」

全員が窓の外に注目する、目に映って来たのはコバルトブルーに輝く太陽に照らされ仲が非常に透き通った濁り気のない海であった。

あまりに綺麗な海を見ると、なのは達は大興奮。

「きゃー！！海だよ！海だよ！真っ青！！キレイ！」

「スバル／／／恥ずかしいからやめなさいよ！ギンガさんもなにか言ってください」

「まぁまぁ。今日ぐらいいいじゃないの。大目に見てやって♪」

興奮する彼女たちに、龍児とフェイトはほくそ笑みながら説明する。

「リュミエールの海は、他の次元世界と比べても純度的にも申し分なしの綺麗さだ。」

「その証拠に、サンゴ礁が広く生息しています」

「成程。これは地球でもミッドでも見習いたいものですね♪」

「うわあ！あんなに水が透き通ってる！」

これには平時はそこまで興奮しない百合女も頬を染めてはしゃぎた

てるが、そんな折雰囲気をぶち壊すつもりなのか知らぬが、鬼太郎と浦太郎が余計な事を言ってくる。

「ほう・・・まるでどっかの金髪女の下着みたいなものだな」

「へぇ～～フェイトちゃんってあんな感じの下着履いてるんだ～～見てみたいな♪」

「／／／／／」

百合女はその瞬間、顔から湯気を上げて全身が熱を持って真っ赤に染まる。

なのは達がどう返していいモノか迷っていると、フェイトの気持ちを察したユーノが気恥ずかしそうに二人の頭を殴りつける。

「おっほん！静かにしようか二人とも・・・／／／」

「「は、はい・・・／／／」」

本日、御叱りを受けて四回目となる鬼太郎と浦太郎であった。

龍児はそんな状況にもかかわらず、微笑ましいとばかりにこう言う。

「はは。賑やかなのはいいことじゃないか。」

「しかし流石に今の発言はちょっといただけないのですが／／／」

「ふふ。私は結構好きですよ。浦太郎さんのような楽しい人は」

「本当ですか！いや～～～フェイトちゃんにそう言ってもらえると、ボッキも嬉しいな♪」

浦太郎は先ほど怒られたばかりだというのに、直ぐに気持ちを切り替え輝くばかりの眼つきでフェイトを見つめ、手を握りしめる。

しかしそれを見た龍児は鋭い目線となり、ユーノはこれに気付くと浦太郎を強引にフェイトから突き放す。

「おっほん！浦太郎、龍児さんが嫉妬しちゃうから、あんまり近づきすぎないの！」

「あはは・・・あ・ところでユーノ君、龍児さん。この後何処に？」

「お前たちの事をみなに紹介したい。先に世界国会騎士団のある宮殿へと向かう。総隊長が是非話を聞きたいとのことだ」

「世界国家騎士団の・・・宮殿・・・」

「総隊長・・・？」

龍児の言葉に、全員が訝しげな顔を浮かべる中、馬車は真っ直ぐに国家騎士団の本部が置かれている地を目指して邁進する。

そして、それからおよそ３０分後。

最短距離で馬を走らせたことで片道１時間はかかるところを３０分にまで短縮させることが出来た龍児達は本山・国際平和維持組織〔世界国家騎士団〕の総本部兼１番隊隊舎が置かれている地・シャイン王国王都フローライトに到着。

馬車を降り、眼前に広がる世界国家騎士団の本部宮殿を仰ぎ見る。

「さぁついたぞ。ここが我ら世界国家騎士団の宮殿だ」

なのは達は眼前に広がる荘厳な建築様式の宮殿に目を見開き思わず口を開く。

「すげぇ！」

「立派ですね～！」

「ドイツのノイシュヴァンシュタイン城にも似てるかな。シンデレラ城のモデルになった」

と、ユーノが外見上の視たからそのように言うと、フェイトが龍児と共に建物の中へと入って行き、彼らを案内する。

「こちらになりますわ。どうぞ中へ」

二人に案内され、城内へと入っていく機動六課陣。

龍児が閉ざされた門を開くと、その直後ユーノ達は圧倒される光景に出くわす。

「「「「「ようこそリュミエールへおいで下さいました！ユーノ・スクライア様！」」」」」

それは、ユーノを出迎えようと中で待機していた総勢２００人を超える世界国家騎士団の誇り高き騎士たちが左右に並んでそう言って

来たのだ。

ユーノを始め、なのは達一同は思わず唖然とする。

「お・・・おお」

「なんかすごいユーノ先生・・・歓迎されてますね」

「はは・・・仰々しいですね」

「全くだ。普通に接しろと言っといたんだがな。ま、これもひとえにお前が次元世界最強、況して世界国家騎士団の上位席官入りが確実と謳われる実力を有しているなら尚更だ」

「上位席官？」

ヴィヴィオがそう言って来ると、お目が高い我らはユーノが丁寧に説明をする。

「世界国家騎士団にも、一応法律があって、実力のある魔術師以外にも純粋に戦闘力の高いものであれば、上位席官入りは確実なんだ。なんか僕は総隊長さんや龍児さんからは酷くお気に入りの様で、ときどき勧誘させられるんだ・・・」

ユーノは少々めんどくさそうな、何処か困惑した顔を浮かべると、それを見た龍児は更に言う。

「そんな困った風に言うな。形だけでもいい・・・国家騎士団に入って世界樹の下で我らと共に明日を切り開いては見ぬか？」

「生憎それはお断りします。僕は世界なんて大層なもの・・・――――そんなもののために戦ってる訳ではありませんし。ただ只管に目の前で起こってることに一生懸命になるしかないんです」

どこか物寂しげな顔でそう言って来ると、龍児は改めてユーノの気持ちを汲み取り、少し間をおいてから返事をする。

「・・・そうか。無理を言って済まなかったな」

「いいんです別に♪僕の方こそなんかすみません」

と、この時そんなユーノの発言を聞いていたなのはとヴィヴィオが念話越しにこう話す。

「（なんか・・・さっきパパの言った言葉が・・・・・・変にさびしく聞こえたのはどうしてだろう――――――）」

「（ユーノ君・・・・・・力を失くしてから、なんかずっと物寂しいそう――――――私やみんなは世界を救ったユーノ君に、家族や友達として何が出来るのかな）」

すると、ここで不意にユーノがなのはの方へと振り返り、神妙な顔を浮かべる彼女の様子が気にかかる。

「？どうしたの」

「あ！うんうん。なんでもないよ」

「そう」

そして、なのははそう言った後で心の中でこのような述懐に達する。

「（あんまりユーノ君の事で考え過ぎると、却ってユーノ君が戸惑っちゃう。ここはいつも通り、私が笑っていれば大丈夫・・・きっと大丈夫）」

すると、その直後龍児の元に彼の事を相棒と呼び、ユーノの名前を声高に口にする男が走ってきた。

「相棒！ユーノ！」

「？」

全員が顔を向けると、走ってきたのは銀色の短髪にサファイアのように深い蒼の瞳で、やや童顔だけれども整った顔をした世界国家騎士団五番隊隊長のセスタ・ベルセリオスであった。

「よ！久しぶりだな、ユーノ！」

「セスタ君。暫くぶり♪」

二人は笑顔で握手を交わし、久しぶりの再会を喜ぶ。

「あれから随分長いこと顔合わせてなかったからな！いや～～～ホント懐かしいな」

「紹介する。こいつは世界国家騎士団五番隊隊長で、情報統括局第８代目局長のセスタ・ベルセリオス。俺の相棒だ」

「あ、どうも！初めまして！」

「「「「「よろしくお願いします」」」」」

「そんなことより相棒、総隊長が呼んでるから早く行った方がいいよ」

「分かった。では諸君。大広間の方へ案内する」

龍児達は早速、総隊長が待っている国家騎士団の隊長格同士が隊首会を執り行う大広間の方へと案内する。

そして、五分もしないうちに彼らは大広間の前の扉へとやって来、ユーノ達が緊張する中龍児は体長三人を代表して扉の前で呟く。

「五番隊隊長、及び二番隊隊長。夜御倉龍児、セスタ・ベルセリオス。二番隊副隊長、フェイト・Ｌ・ムーン、入ります」

「うむ」

龍児の呼びかけに対し、扉の向こうから老人の声が聞こえると、目の前の扉が開かれ、会議室のような広い空間に１１人の男女が座っている光景が広がってきた。

全員龍児達と同じく白い騎士の衣装を着、マントを羽織っている。

その内の中央にいる人物、白髪に紅い瞳の老人こそが世界国家騎士団を束ねる最強の古参・大宮総一郎（御年２００歳）である。

なのは達はそんな威厳漂う総隊長の姿を思わず凝視。

「あれがここの総隊長さん・・・」

「なんつーか、山本総隊長と多少似ているが、あっちの方が割と穏和そうだな」

すると、ユーノは柔らかな笑みを浮かべると徐に前へと進んでいき、総隊長である総一郎は立ち上がると、ユーノを抱き寄せ再会を祝う。

「おお、我が大樹の導きし大いなる友、ユーノ・スクライア。良く来てくれた。」

「総一郎さん。ご無沙汰しています」

その光景は一重に数年ぶりとなる父と息子、或いは祖父との再会にも似ていた。

「今日は、お主の連れも一緒なようだな」

「はい。全員、この世界国会騎士団と同じく世界の平和を守るために身命を賭す絆と言う糸で結ばれた僕のかけがえのない仲間です」

ユーノがそう説明すると、なのは達は総隊長に笑みを浮かべて頭を下げて来た。

「へへ♪」

「あ、あの！色々とお世話になります！」

「「「「よろしくお願いします！」」」」

「うむ。同じ世界を守る者同士、お互いに通じ合うことを祈っている。さぁみんな。この日を祝って世界樹に祈りを捧げようぞ」

「「「「「「「「「「はっ！！」」」」」」」」」」

「世界樹？」

聞きなれぬ単語が飛び交う中、総一郎の言葉を耳にした１０人の隊長格と一人の副隊長は姿勢を但し、総一郎が口にする言葉を復唱。

「我ら騎士と、母なる友愛者に剣と大樹の導きを！！」

「「「「「「「「「「剣と大樹の導きを！！！！！！！！！！」」」」」」」」」」

なのは達は一瞬驚いてしまうが、直ぐにそれが非常に関心の高いモノへと変わる。

「お、おお・・・なんかスゲー・・・！」

「悪くない。と言うか、素晴らしい騎士道精神だ」

「ああ。何つーか、カッコいいよな」

そして、概ねの話が終わるとユーノ達は大広間から移動を開始し、龍児達に連れられ城内を移動していた。

「いや～～～さっきの号令はかっこよかったですね！」

「あまり格式ばった挨拶はオイラはどうも苦手なんだけど、あれも

ここの仕来りだからさ」

「死神とやらも、我らのような組織構造なのか？」

「大体な。護廷隊は１３の隊で編成されてる。ちなみに、俺はその頂点の一人だ！」

と、誇らしく鼻から息を吹き出す恋次だが、これを聞いていたルキア達死神組の反応はこうだ。

「貴様が頂点と言う言葉を使うとはな」

「あんまりしっくりこないよね」

「いや寧ろ全くであるな」

「おめぇら・・・それが隊長に向かって言う台詞か・・・！」

「兎にも角にも、リュミエールに来たからには我々がこの世界を案内する。５日間を有意義に過ごせるよう全力を持ってバックアップしよう」

「はい。ありがとうございます」

「お言葉に甘えて、お世話になります」

「では、軽く城内を見学してみますか。」

と、フェイトがそう言って来ると、シグナムが真っ先に手を上げこんな事を要求してきた。

「なら私事で大変恐縮ですが、こっちの世界の騎士の訓練とやらを是非とも見学してみたいのですが？」

「はは。相変わらずシグナムは血気盛んだぜ」

「いいだろう。では、俺とセスタの隊の合同練習が間もなくこの建物で始まる。それを見せてやろう」

そう言うと、龍児はユーノ達一行を城内に設けられている庭先へと連れていくことに、シグナムは誰よりも近々自分が戦える状況が来ることを待ち望んでいたりした。

◇

〈中庭Ｓｉｄｅ〉

龍児に連れられ庭先を訪れることになったユーノ達だが、ではこの建物の中で行われている合同練習の様子を少しクローズアップして見てみよう。

「ッテェ！！」

「ハッ！！」

「よし、素振り５００回始め！！」

血気溢れるばかりの世界国家騎士団の誇り高き騎士を始め、入隊したばかりの騎士候補生が熱心な指導の下、大勢が真剣に稽古へと打ちこんでいた。

特に、龍児とセスタが所属する二番隊と五番隊はとりわけ優秀な騎士が多く、その実力は一番に次いでトップクラスとなっていた。

と、そんな説明をしている内にユーノ達が庭先へと到着。

「あちらになります」

「うわあ。凄い数・・・！」

「流石ですね」

なのは達はその人数の多さに素直にそう言葉を漏らすと、稽古に励んでいた騎士たちが次元世界最強の男こと、ユーノ・スクライアがやってきたことに逸早く気づき、稽古そっちのけで顔を向けて来た。

「「お」

「「やや」」

「お早うございます！夜御倉隊長！セスタ隊長！フェイト副隊長！そして、よくぞおいで下さいました、ユーノ・スクライア様！！」

ユーノは大勢の騎士たちが口をそろえて自分の事を敬称してくるので、思わず気恥ずかしくなってしまう。

「ど、どうも／／／」

「本当にすごい人気だね、パパ」

「にゃはは。ほら、ユーノ君も照れない照れない♪」

すると、稽古を取り仕切っていた騎士の一人がユーノ達へと近づいてくる。

「お待ちしておりました。さぁどうぞこちらの方へ。皆様方も何でも言ってください」

「そうか！じゃ、俺はプリンが食いたいな！」

「鬼太郎・・・それはないと思いますがね・・・」

金太郎が強面の顔をドアップで近づけると、思わず顔から冷や汗をかく鬼太郎。

「う・・・そ・・・そうですね・・・／／／」

「みなさん。私達にはお構いなくどーぞ、稽古を続けてください」

「彼等の言う通りだ。いちいち稽古を中断するな」

「この後は対抗戦だ。全員、各々素振りを疎かにするな！」

「「「はい！」」」

龍児とセスタの声が飛び交うと、騎士たちは再び稽古に撃ち込んでいく。

そして、騎士同士での魔術を併用した模擬戦闘が一斉に始まると、それを傍から見学していたなのは達は自分達とはまた違う魔法の在

り方や騎士らしい戦いに非常に興味がわいてきた。

「へぇ～～～これがこっちの騎士と魔術による戦いか」

「中々に手に汗握るよね」

と、そう言っていると不意にエリオが隣に立つシグナムの異変に気付く。

「ん？あの・・・シグナム副隊長？」

「ううう・・・」

「し、シグナム？」

ユーノ達も大方の予想はついていたが、シグナムは戦う光景を見ていると自然と騎士としての衝動が押さえられなくなっていき、レヴァンティンを握りしめながら小刻みに体を震わせる。

「ダメだ・・・・・禁断症状が・・・／／／」

「お、おいお前な・・・」

「何かあったか？」

「いえ。実は――――――」

ユーノは耳元でシグナムの事で龍児に話した。

「ああ。そう言う事か。なら戦ってくればいい」

「な！本当ですかそれは！？」

シグナムはあまりにあっさりとしている龍児の返事に耳を疑うが、龍児は不敵な笑みを浮かべて更に言って来た。

「構わんさ。騎士としての自然な衝動だ。好きな奴とやるといい」

「おお・・・！！あ、ありがとうございます！では、主はやて！」

「はは。しゃ～ないなほんま。ええで。行っといで♪」

「はい！では、行ってまいります！」

シグナムははやてから正式な許可を貰うと、早速騎士たちの戦いに乱入していき、同じ騎士同士剣を交えた戦いに身を投じていくが、ヴォルケンリッターであるヴィータやシャマル、ザフィーラの三人は将として時々見せるこの困った性格には手を焼いてしまう。

「たく。オフトレに来たわけじゃねぇンだぞ」

「あれがシグナム副隊長ですからね。仕方ないのでは」

「古い騎士の性と言う奴だ。強者ともなれば戦わずにはいられなくなる。大目に見てやって欲しい」

「あれがもし、更木隊長だったら問題が発生するぜ」

「えっと・・・それってあの眼帯の怖い人ですよね・・・」

「あれは人を殺しかねない。扱いには十分に注意せねばならぬ」

「「「あはは・・・」」」

なのは達三人娘は一重に更木剣八と言う男の恐ろしさが如何に自分たちの範疇を超えた存在であるかどうかを今一度再確認するのであった。

と、ここでセスタがユーノを一瞥すると龍児達と一緒にこう言ってくる。

「その点で言えば、ユーノは真逆の立場だよね。」

「ああ。お前の瞳は本当に奥が深い。いくら“眼”で威掛けてもお前の瞳は全てを受け流してしまう。その上、さも戦うのは御免とばかりに笑われれば尚更な」

「あはは・・・いや・・・なんかほんとにすみません」

「ふん。言われた側からやってやんの」

と、直後フェイトがそんな深い瞳を持つユーノを見ながら不意に呟く。

「ユーノさんには、人には言えない過去があるのでしょうね」

「！」

この事を聞かされ、一瞬耳を疑い表情を一変するなのは達だが、セスタは笑みを浮かべながら更に言ってくる。

「隠さなくてもいいって。じゃなかったら、“１０代”であんな瞳は絶対に出来ないよ」

この時、セスタはユーノの事を１０代と言ってしまったが、なのは達はそれを聞いた瞬間目を点にして、頭にカラスを浮かべた後、白鳥が当たり前のように言って来た彼に返事を返す。

「何を言っている？ユーノ店長はこう見えても既に２３歳だ」

セスタは思わず絶句し、ギャグ風の崩し顔で驚いた。

「エッーーーーーッ！！！！ウソでしょー！！！」

「おろ？」

一方で肝心のユーノはキョトンした反応を浮かべ、龍児は思わず薄ら笑う。

「はは。セスタは相変わらず忘れっぽいな。まぁそれがお前のいいとこであったりもするのだが、折角こうしてユーノやその仲間と出逢えたのも何かの縁」

「？」

龍児は訝しげな顔を浮かべるユーノを見据えると、こんな提案をしてきた。

「ユーノ。どうだろう。宿泊先や観光案内、それら一切の事は俺達が責任を持って面倒を見るから、ここはひとつ頼まれてくれないか

？」

「頼みですか？」

「一体どんな？」

「少しでいい。ここにいる隊士を相手にお前の剣を見せてはくれぬか？」

「！」

「え！」

「ユーノ先生の・・・剣を！」

「そのついでと言っちゃなんだけど、オイラと相棒の練習相手にもなってくれない？最近はそう言う強い相手と出くわす機会もないから、腕が鈍り気味で」

「これを受けてくれれば、更に豪華なサービスも提供するのだがな」

「お願いできないでしょうか？」

三人がそう言って来ると、ユーノは顎に手を当てて深く考えるが、後々のインセンティブを考えるとここは受けた方が全体の特に繋がると判断しあっさりと返す。

「・・・・・ま・偶にはいいかな」

「ユーノ君。いいの？」

「偶にはね。但し、先に言った通り僕は力を失っていますから、純粋に剣術だけでの勝負と言うことになりますが、それでもよろしくて？」

「ああ。いいだろう。」

「オイラもどっちかって言うと、魔術よりも肉弾戦の方が好きだよ！」

互に条件を飲むと、両者は握手を交わし合う。

「では、非才の身でありますが、不肖ユーノ・スクライアがお相手申します。日本刀で大変あれですが、どうかご容赦を」

「ああ。俺達は何であろうと構わんさ」

ユーノと龍児が握手を交わし合うと、セスタは一度隊士たちを呼び集め、ユーノとの降雨竜泉に関して叱咤激励を送る。

「相手は次元世界最強の実力だ。下手したら即行だぞ！気引き締めろ！」

「「「「おお！」」」」

「気合入ってるな、向こうは」

「その点ユーノはユーノで普段通りだな・・・・・・で、あっちもあっちで普段通りだぜ」

そう言うと、ヴィータやなのは達は一人無我夢中で戦いに興じるバトルマニアこと、烈火機の騎士シグナムの戦いの様子を一瞥する。

「おおお！！！はははははは！！」

もうここまで来たらツッコム気力もなくなって来るなホント・・・

しばらくして、ユーノと国家騎士団たち双方の準備が整い、フェイトが向かい合う両者の間に入って号令をとる。

「それでは、これより特別交流戦を始めます。勝利条件は至って単純明快。最後まで立っていた側が勝ちとなります。本戦は魔法・及び特殊能力の使用は一切禁止します。よろしいですか？」

「はい」

「「「大丈夫です！」」」

この誰もが注目する戦いにおいて、なのは達や龍児達世界国家騎士団の隊長格による関心は非常に高い。

魔導死神としての力を失い、にも関わらず次元世界最強と謳われるユーノの実力は、果たしていかほどのものなのか？

緊張の糸が張り巡らされる中、フェイトが下げていた腕を上げて試合の開始を宣言。

「では――――――はじめ！」

合図が出されると、ユーノは帯刀していた逆刃刀・真打の柄を握り

ながら目の前の国家騎士団たちに言って来た。

「一つ！怪我人は増やしたくない。医者通いが嫌な者は早々と退くでござるよ」

「（ござる？）」

なのはは語尾としてユーノが口にしたござるという単語に一瞬耳を疑うが、その一方で国家騎士団の精鋭たちはユーノの実力を知ってか、束になって一斉に向かって来る。

「「「「おおおおおお！！！」」」」

が、その瞬間ユーノは逆刃刀を抜くや否や、鋭い目となり瞬歩さながらの超神速で目の前の騎士たちを一瞬、一遍に切り伏せていく。

「！」

「「「「ぐあああああ！」」」」

「「「「！？！？」」」」

龍児は一瞬目で追うことが出来なかったユーノの速度に目を見開くが、ユーノは凄すぎて言葉を出すこともままならないでいるなのは達を余所に神速を活かして逆刃刀を振り回す。

「おおお！」

「「「「なああ！」」」」

国家騎士団のうち、難を逃れた一人があまりの速さと強さに恐怖で尻もちをつくと、涙目ながらに譫言の様に呟く。

「そ、そんな馬鹿な。一振りで四・五人を一遍に・・・よ・・・妖術か!?」

だが、この呟きに対して隊長格であるフェイトや龍児、セスタの三人は次のように分析する。

「（違う。妖術なんかじゃない。これは単純なる“速さ”！）」

「（剣の速さ・体のこなしの速さ・そして相手の動きの先を読む速さ・・・！）」

「（全ての速さを最大に活かして最少の動きで複数の相手を同時に仕留めている!!）」

冷静に分析できている三人。

一方で恋次は魔導死神としての能力を失ったはずのユーノがここまでの強さを秘めているとは夢に思わず、つい目の前の光景を疑いたくなった。

「おいおい・・あれで本当に力失ってるのか?」

「け。何言ってんだよ。それ以前に弥彦の時にも同じことしてたじゃねぇか」

「あ・・・そう言えば」

鬼太郎の指摘を聞くと、愕然としていた一同は漸くその事を思い出し、苦笑をしながら納得の表情を浮かべる。

そして、わずか一分足らずと言う短い時間でありながら、ただの人間“ユーノ・スクライア”は友より授かった刀一本だけで、この場にいる総勢５０人の相手、それも凄腕の精鋭たちを無傷で圧倒したのだ。

この事は、龍児やなのは達の予想の範疇を大きく超えたモノであり、ユーノは国家騎士団を全滅させた後で、左肩に逆刃刀を乗せてから語尾にござるをつけて不敵な笑みで言って来た。

「――ひとつ。言っておこう。魔導死神としての力は確かに失くしたが、空白の四年時代に培った人間離れした体力と身体能力までもが消えたわけじゃない。そして、失くした相棒の代わりという言い方をするのはあまりに失礼ではあるが、それに見合う力は手に入れた。一体多数を得意とする古流剣術――『飛天御剣流』。逆刃刀でない限り確実に人を斬り殺す神速の殺人剣でござるよ」

そう言った後、ユーノの背後に浮かんでくる元の刀の持ち主、伝説の人斬りこと、緋村剣心の面影が鮮明になのはの瞳に映って来た。

「・・・え・・・」

なのはは見間違いかと思い、思わず目を擦るとそれを見ていたヴィヴィオが声をかける。

「ママ。どうしたの？」

「えっと・・・なんかユーノ君の背後に知らない人影が映った気が・

・・」

「それって、ひょっとして弥彦？」

「うんうん。赤い髪の十字の傷の男の人・・・・・・」

なのははこの時、剣心と言う名前までは聞かされていなかったので、はっきりとは分からなかったが、少なくともユーノが現在その剣心と全く同じ匂いを発しているという事実は否めなかった。

そして後にユーノはその剣心と弥彦の魂をその身に纏い、完現術コンボと言うものを成し遂げることになるのだが、それは絆での物語となる。

完封勝利と言う形で試合があっという間に終了すると、フェイトは改めて目の前で気を失う栄えある騎士たちの姿に目を疑う。

「信じられない・・・！国家騎士団でも指折りの精鋭が瞬殺だなんて！」

愕然とするフェイトを余所に、龍児は自分の予想以上にユーノが強さを増していることに嬉々とした笑みを浮かべる。

「なるほど。これは面白くなってきたな」

と、直後セスタが同じく笑みを浮かべながら徐に前に出てきた。

「相棒。オイラから行かせてくれる。さっきから血が滾って仕方ないんだ・・・――――」

龍児は長い付き合い上、セスタが戦いで暴れ出せばどうなるかと言うことをよく存じ上げており、血が滾った様子の彼を制止しようとすることは考えず妥協して譲ることにした。

「やむを得ん。手加減しそこなうなよ」

龍児からの許しを請うと、セスタは笑みを浮かべて武器と手に取りユーノの前に現れる。

機動六課陣は動き出したセスタに注目する。

「あ、セスタさんが動いた」

「先ずはあいつからか。見せてもらおうじゃねぇか。世界国会騎士団の隊長格の実力」

「どんな相手だろうと、次元世界最強の店長には敵いっこないって」

「まだ分からぬぞ。私には見えますぞ――――――全身から発する凄まじいオーラが」

金太郎は眼鏡越しに映って来る、尋常ない闘気と魔力を発するセスタの力に純粋に恐怖を感じる中、セスタはユーノと向かい合い笑みを向ける。

念の為、もう一度龍児が声をかける。

「セスタ」

「分かってるよ」

セスタはそう言うと、自分の主力武器であり幼少期から愛用している大剣をまるで自慢げに見せびらかすように前に突き立て、冷静にそれを見つめるユーノ。

なのはは観戦の傍ら、未だ彼の事を心配する。

「ユーノ君。大丈夫かな？」

「うん。どんな方法でユーノくんと渡り合うつもりなんやろう」

と、そんな折、不意にユーノが先ほどまでしていた冷静な表情から一変、唐突に顔を綻ばせて笑みを浮かべる。

「ふふ」

「お？何か面白いことでもあったか？」

セスタも急にユーノが笑うので、そう返すが、ユーノはその返事としてセスタにこう言う。

「いや。そうじゃないけど・・・セスタ君の全身から発られる、全く隠そうとしないバカ正直な闘気がなんともね」

「へへ。そりゃどうも」

自分の身体から漲る闘気を見抜き、ユーノがそう返してくるとセスタはほくそ笑み、そして・・・自分の相棒である大剣から鞘を抜き始める。

「・・・そんじゃ、改めて自己紹介といこうか。オイラの名は『セスタ・ベルセリオス』。世界国家騎士団5番隊隊長。そして、オイラの相棒――――――」

セスタは矛先を大剣に見合っただけの大きさをした鞘から抜き放つ。

「！」

「あれは！」

ユーノを始め、なのは達一同はその巨大な姿を現した大剣の姿に目を見張り、セスタは二刀流の大剣の名を徐に口にする。

「“ルーンブレード”だ。」

「ルーンブレード・・・！」

「なんて大きさだ・・・しかも二振りなんて！」

―ルーンブレード―

細い片刃の刀身に長い柄、月のような鍔を持った西洋風の武器で、世界国家騎士団五番隊隊長セスタ・ベルセリオスが使用する。

特徴として、オパールのような不思議な輝きの刀身が相手を魅了する、だが綺麗な外観とは裏腹に膨大な魔術エネルギーを凝縮させることで莫大なエネルギーを放出。

一振りで天地をも轟かせるリュミエール屈指の名刀。

刀身には、彼の姉であるハロルド・ベルセリオスがセスタの能力をセスタ自身が制御できるように魔術文字で力を封印している。

ユーノもこれまで幾度となく剣を交えて来たが、これほどまでに美しくそして魅了される剣を見るのは初めてであり、セスタはこれ見よがしに自慢の愛刀で軽く振り回しながらユーノに笑みを向ける。

そして、ユーノ自身も今の自分の愛刀である逆刃刀を構えて口にする。

「元・翡翠の魔導死神ユーノ・スクライア。この逆刃刀で相手する。などと言わずしても、ここにいるみんなには分かりきってるとは思うけど」

「はは。確かにその通り――――――」

と、セスタはその瞬間二振りの体験を抱えたまま華奢な体からはとても想像がつかないほどの速さで勢いよくユーノに向かって行った。

「だあーーーーーー！！！！！」

「速い！」

「あの体であんな重量武器を持ってるのに！」

これには、なのは達も目を見張るばかりであった。

「うらぁ！！」

セスタは剣を構えて見据えたユーノ目掛けて、何のためらいもなく

右手のルーンブレードを振りおろし、その瞬間地面はひび割れ土の塊が無数に飛び散った。

「「な」」

「「パパ（ユーノ君）！」」

圧倒的な破壊力を前にし、なのは達は姿を消したユーノに声を荒げる。

だが、その直後セスタの頭上が影で覆われ顔を上げるとそこにはユーノが浮かんでいた。

ユーノはムーンブレードが降り下される一瞬に、その軌道を読んで空中に飛び上がっていた。

セスタはこれを見ると、すかさずもう片方の手が握ったルーンブレードで襲撃。

「つらあああああ！」

左手から振り払われた大剣が向かって来ると、ユーノは空中で体を捻ってその場に立っていた木の枝に着地する。

それだけでも、魔法や死神の力を失くして、常人を遥かに凌ぐずば抜けた身体能力を持つことが証明される。

セスタは二本の剣を持ちながら、木の枝に止まったユーノにほくそ笑み、ユーノは枝から降りるとセスタの意外な馬鹿力に思わず息を漏らす。

「ふう～～見た目に違わず力持ちだね。ヴィータといい勝負かな」

「へっ。そうこなくちゃ・・・おらああ！」

すると、今度はセスタが二本の大剣を同時に振り回してユーノを攻撃する。

ユーノは向かって来る巨大な刀剣を前に、物怖じ一つせずに軌道を正確に読み取り、なんなくそれを回避する。

セスタは距離をとって構え直すと、最強の男を前に更に闘気が燃え上がる。

「お前の動きは、見切らせてもらったよ！今度は逃がしはしない。」

すると、セスタは構えた愛刀からさながら一護の放つ月牙天衝と威力が酷似した魔術は使っていない衝撃波をユーノに放とうとする。

「魔神剣・改・・・！！」

「セスタ！魔術は駄目だと・・・！」

「だから魔術は使わず、素手だけでやるのさ！」

そう言うと、セスタは渾身の一振りから地面をも切り裂く凄まじい衝撃波を目の前の敵、ユーノ・スクライアに放つ。

あまりの威力に、観覧中の者でさえその余波と土煙が飛んで来、なのは達は思わず目を庇って腕を盾にする。

「く・・・！」

「凄い衝撃波・・・！」

「あいつはどうした！？」

一同が視界を遮る土煙の中に隠れたユーノを探していると、その直後セスタの頭上からユーノの声が聞こえてくる。

「飛天御剣流・・・――――」

「な！」

セスタが声に反応した瞬間、頭上からユーノがセスタの左脇下に降りて来、そのまま龍巻閃を叩きこんだ。

「龍巻閃！」

セスタは見た目に違わず強力な一撃を前に圧倒され、大きく体を吹き飛ばされる。

「が・・・」

一同はセスタが攻撃を受けた瞬間、晴れた土煙の中から現れる逆刃刀を手にしたユーノの姿に声を上げる。

「「「おお！」」」

「一撃決めた・・・！」

「セスタもセスタだ。ルーンブレードと言っても大剣には違いない。いくら自慢の武器で、威力が段違いだとしても、当たらなければ意味がない。」

「況して、相手はユーノさんだからね。ただ、セスタ隊長がこれしきでやられるとは思えないわね」

「え?それってどういう意味で・・・」

と、言いかけた次の瞬間、百合女がある事に気が付く。

「あ!見て」

なんと、全員がセスタの方に注目すると、セスタは満身創痍となりながらも何事もなかったかのような涼しい顔で起き上がり、ルーンブレードを手に取っていたのだ。

険しい表情を浮かべるユーノとは違い、なのは達は驚きのあまり言葉を失いかける。

「ユーノ先生の一撃を喰らって、起き上がって来た!」

「あの人の強さは、怪力や大剣の威力だけじゃない。打たれ強さも並はずれているわ!」

ティアナがそう言った後で、セスタは肩を鳴らしながらユーノを見据えて言ってくる。

「へへ・・・流石に強いや。次元世界最強って言われるわけだ。ユ

ーノさ。確かにお前の強さはホンモンだ。だけどね、結局戦いってのは、最後まで倒れないもんが強いんだ！」

「（すべての敵を、一撃のもとに倒してきたユーノ君の力・・・そして、魔導死神としての力を失っても尚手元に残った並外れた剣腕・・・それが、この人には通じない！！）」

危惧の念を抱くなのは。

それに対して、ユーノは逆刃刀を構え直すとセスタにこう言い返す。

「そうかい。だったら僕からも一つ言っておく。左様な台詞は、最後まで立っていられた時に言うことだね」

「へへ。行くぞ！セスタ・ベルセリオス、第二幕の始まりだ！」

そう言うと、セスタは勢いよく突進していきながら空中へと飛び上がり、振り上げたルーンブレードをから空気の刃を叩きつける。

「おおおお！！！！烈空刃！！」

岩と地面をも軽々と粉砕する強力な空気の刃だが、ユーノは竜が宙を舞うかのごとくそれを華麗に飛んで回避する。

だが、セスタは一瞬の隙をついてもう片方のルーンブレードを振り回す。

「この・・・勝負貰った！！」

「「あ！」」

思わず目を瞑ってしまう一同だが、セスタが前を見てみると、降りてくるはずのユーノが何時まで経っても降りてこず、ユーノの姿が何処にも見受けられないでいた。

不審に思って辺りを見渡すと、直後ユーノの声が聞こえる。

「ここだ」

「！？」

セスタが声に反応すると、なのは達は度胆をぬいた。

なんとユーノはセスタのルーンブレードの刀身の先端に着地し、低い体勢となっていたのだ。

そして、攻撃を躱したユーノは軽々とその場から飛び上がり木の上に着地すると、単純明快な斬撃を繰り出すセスタに痛烈な指摘を浴びせる。

「君のルーンブレードは、魔術と併用すれば凄まじい威力を秘めた途轍もないものだ。しかし、単純な白兵戦に於いてその形状が却って仇となる。その重さ・その大きさ故にどうしても攻撃の型が限られる。打ち下ろすか、薙ぎ払うか、二つに一つさ」

「う！」

「至極読み易い」

そう言うと、ユーノは再び飛び上がってセスタに接近。

「これで終幕でござる！」

ユーノは大剣ルーンブレードの刀身を伝ってセスタの後頭部に一撃を叩きこむ。

「グアッ！」

攻撃を受けたセスタは前に移動するユーノに狙いを定めてルーンブレードを振り払う。

「くうおおお！！」

しかし、ユーノは攻撃の軌道を読むとしゃがみ込み、セスタの懐に潜りこむ。

「セスタ君。君に『一撃』は効かない。ならば」

すると、その瞬間ユーノは逆刃刀を高速で操り目にも止まらぬ連撃を次々とセスタの身体に叩き込んでいく。

「！！！」

「（逆刃刀の連撃！）」

「ど・・・は・・・！」

セスタはユーノの圧倒的な攻撃の前に成す術もなく倒れる。

「セスタ隊長！」

「ほう。これは見事」

ユーノはセスタを倒すと、逆刃刀を肩に乗せ技の名を口にする。

「飛天御剣流『龍巣閃』」

「・・・つ・・・強い・・・（段違いなんてもんじゃない。桁も次元も違う・・・まさかこれ程にまで・・・）参ったよ・・・完敗さ・・・」

セスタは清々しい顔を浮かべて自分の敗北を認め、観戦していたなのは達は純粋な身体能力を活かした戦闘で世界国家騎士団の隊長格を圧倒したユーノに拍手を送る。

「凄い凄い！パパがまた勝った！」

「うん。これで本当に力を喪失したとは思えない・・・（私も本格的にユーノから教わってみようかな、剣・・・）」

と、ついそんな事を考えてみる百合女であった。

するとその時、向こう側からシグナムの甲高い声が聞こえてきた。

「紫電一閃！ほおおおおおおおおお！！」

「「「ぐあああああああ！！」」」

彼女を相手にしていた国家騎士団たちは紫電一閃を受けると、一斉に吹き飛んでいき、何時にも況してシグナムが興奮している様子に

一同は呆気にとられる。

「お。シグナムの奴、なんか声色が高くなってるぞ」

「それだけ、楽しくて仕方ないのね」

そして、セスタが破れた今・・・残ったのはいよいよ龍児だけとなった。

ユーノは逆刃刀を下すと龍児に顔を向けて言ってくる。

「残るは、このリュミエールで最強の魔術師であり、名のある騎士でもあるあなただけとなりますか。龍児さん」

「そうだな」

不敵な笑みを浮かべる龍児は徐に自分の愛刀、龍王牙を取出す。

フェイトは念の為龍児を気遣い声をかける。

「龍児」

「ああ。分かってる。純粋に剣技だけだ」

龍児は鞘から剣を抜き放つと、ユーノと向かい合い強者の貫録を思わせる鋭い視線を向けてくる。

「久しぶりの猛者だ。俺も全力でいかせてもらうぞ」

「お手柔らかに頼みますね」

今ここに、最強の竜騎士と最強の侍による一戦が火ぶたを切ろうとしていた!!!

リュミエールの騎士・夜御倉龍児登場！（後書き）

重要大事の勝手に台詞選集！

今回は三番隊副隊長、吉良イヅルが抱く戦いにおける絶対の信念を現したこの台詞をピックアップだ！

吉「戦いは英雄的であってはならない。戦いは爽快なものであってはならない。戦いとは、暗く・恐ろしく・陰惨なものでなくてはならない。」（第十二話：三番隊の矜持と浦太郎の願いより）

魔導師図鑑ハイパー！

キャラクター交流会・リュミエール篇

ユ「どうもどうも、リュミエールの皆さんと夜御倉龍元さん♪いよいよ本格始動の今回のコラボですが、今日は特別ゲストとしてこの方を迎えております」

そう言って現れたのは、向こうの世界のフェイト・Ｌ・ムーン。

フェ「初めまして、フェイト・Ｌ・ムーンです」

拍車喝采が起こる中でフェイトはユーノの真向えに座る。

ユ「さて、ゲストとして呼ばれたわけですが、今の心境はどうです？」

フェ「緊張半分、嬉しさ半分です。この度のコラボ、本当に感謝し

ています」

ユ「いえいえ。こちらこそ、毎回のことながら懇切丁寧な感想をありがとうございます。で、今日はフェイトさんから僕らにプレゼントがあるそうなのですが」

フェ「はい。まぁ大したものではないのですが、ちょっとしたお土産程度にと思いまして・・・リュミエールの豊かな自然が届ける新鮮な食材を利用した野菜クッキーを作ってみたので、是非食べてみてください♪」

フェイトは籠の中から色鮮やかな野菜クッキーを取り出す。

ユ「おお！これは美味しそうですね♪ありがとうございます、後で仲良く分けますね♪」

フェ「次回のゲストは、私の婚約者・龍児です。何かと歳不相応な発言がるかもしれませんが、どうかよろしくお願いします」

ユ「では、また次回お会いしましょう♪」

次回予告

龍「ユーノ。いざ尋常に勝負だ！」

ユ「はい、龍児さん。」

な「と、戦いもいいけどやっぱりせっかくの旅行なわけだし観光しようよ♪恋人岬って言う場所に行くと、凄く綺麗な夕陽が見られる上にカップルが結ばれるんだって♪」

フェ「え！じゃなのは！私とその・・・・・／／／」

恋「おめぇは別の男とでも行け。」

フェ「嫌ですよ！私、男に興味ありませんから。百合路線でなのはラブなんで／／／」

エ「フェイトさん！流石にそれはいただけません！」

浦「それよりも～～～リュミエールのフェイトちゃん以外にももっこり美人のハロルドちゃんってのがいるんだ♪もう僕チン参っちゃう♪」

な「次回、ユーノ・スクライア外伝『リュミエール観光一日目』。恋人岬でユーノ君と絶対結ばれるの♪」

リュミエール観光一日目（前書き）

ユ「さて、今回はいよいよ僕と龍児さんの一騎打ち」

セ「で、オイラの姉さんと月光院スバルが登場！」

ヴィ「そして気になるママとパパの恋の行方は！？」

な「ユーノ・スクライア外伝　リュミエール篇・・・始まります♪」

リュミエール観光一日目

リュミエールに観光旅行にやってきたユーノ達一行は、世界国家騎士団の二番隊隊長を務める夜御倉龍児と出逢った。

龍児とその婚約者のフェイト・Ｌ・ムーンに連れられ、一同は世界国家騎士団の本部へと訪れ、そこでユーノは実力の高さを買われて模擬試合をすることになった。

魔導死神としての力を失くしても尚健在の神速を活かした剣腕で、国家騎士団の精鋭たちを圧倒したユーノは、その後五番隊隊長セスタ・ベルセリオスと対峙し、その彼もひれ伏した。

そしていよいよ、リュミエール一の魔術師であり最強の騎士、夜御倉龍児と一戦交えるのであった。

〈ユーノＳｉｄｅ〉

ユーノ・スクライアは只今大変緊張している。

そんな彼を見守るなのは達機動六課一同や世界国家騎士団の隊長陣、フェイト・Ｌ・ムーンやユーノに敗れ去ったセスタ・ベルセリオスも緊張している。

その理由はいたって単純明快だ。

ユーノと向かい合ったリュミエール一の魔術師であると同時に、随一と謳われる騎士、夜御倉龍児が鋭い瞳を宿しながら、愛刀である龍王牙を振り回しただならぬ闘気を発していたのだ。

思わずユーノはその闘気に当てられ、無意識に持ち手を強く握る。

そして、龍児は軽く腕を鳴らした後で今一度ユーノと顔を見合わせる。

「さて・・・今一度言っておこう。俺も全力でいかせてもらうと」

「ははは。なら、こっちもそれ相応の力で答えないとですね」

ユーノは飄々とした笑みを浮かべた後、すぐに真剣勝負にふさわしい龍児と同じぐらいの鋭い目つきとなり、逆刃刀を構える。

思わず息を飲む六課陣と、おどおどとした様子のなのは。

「あの、ユーノ君」

「ん？ああ・・・大丈夫大丈夫♪やり過ぎないつもりだから。それより、僕らの試合はきっと長くかかると思うから、先に街に出て観光して来なよ」

「え？でも・・・」

「夕方までには終わらせるから大丈夫♪セスタ君、フェイトさん。なのは達の事、案内お願いしますね。」

「はい。では、そちらはそちらで頑張ってくださいね。あ、龍児はくれぐれも無茶なやりこみはしないように、分かってる？」

「ああ。大丈夫だよ。これでも、国家騎士団の一員だ。」

「ふふ。なら、ユーノさんとの試合・・・頑張ってね」

「ありがとう、フェイト」

龍児はそう言ってフェイトに笑みを浮かべると、フェイトも龍児に

向けて柔かい笑みを返す中、百合女のフェイトの方は自分の名前と全く同じであったがために、どっちつかずな様子で顔を右へ左へと振り向かせる。

「えっと・・・なんか偶にわからなくなるんだけど・・・」

「無理もないよね。同じ名前でしかも顔も同じな二人がこの場に居合わせてるんだし」

と、その時丁度セスタ・ベルセリオス五番隊隊長が満身創痍な体であったにもかかわらず魔術で治療を施す前に軽々と起き上った。

「よっこいしょっと！ようし！じゃあ、街に行こうか！」

「お前・・・もう回復したのか？」

「ユーノの言った通り、打たれ強いな・・・」

半分呆れ顔の恋次達ではあったが、ヴィータは行く前にある重大な事実に気付く。

「おい、シグナムはどうするんだ？」

そ・・・あの熱血バトルマニアは未だに国家騎士団の精鋭たちを相手に模擬戦をしていたのだ。

その証拠に・・・

「ははははははは！！！」

向こう側から聞こえる嬉々とした声と爆風が顕著に映って来る。

一同はそれを見ると苦笑し、溜息をもらす。

「あかんあかん。あれはあれで止めることは出来へんよ」

「仕方ないですね。じゃ、僕達だけで先ずは楽しみましょうか」

「そう言う事。じゃ、楽しんできなよ♪」

「お前たちは、陽が沈むまでには俺達国家騎士団の寄宿舎に戻って来いよ。今夜はごちそうだ」

「はい！ありがとうございます！！」

「じゃあユーノ君。ほどほどにね♪」

「行ってきまーす！」

「「いってらっしゃい」」

なのは達は二人に挨拶を済ませると、早速日が沈むまでの限られた時間を敢行に費やすために外へと向かった。

大所帯が一気にいなくなったことで、国家騎士団の本部もとい・・・中庭は奇妙な静けさで支配される。

横薙ぎの風が二人の間を通り過ぎると、ユーノと龍児は互に剣気を発して降りかかってくる落ち葉を切り刻むと、剣を構えて戦闘態勢となる。

「・・・――それじゃあ」

「始めようか」

二人は神経を研ぎ澄ませ、握った刀に気を圧縮させると、切れた落ち葉が足元に落下した瞬間に神速を活かして突進、激しい火花を散らし合わせる。

この勝負の行方はちょくちょく説明していきたいと思う。

◇

〈六課Ｓｉｄｅ〉

と、あまりバトル要素があり過ぎると折角の日常篇がまたしてもバトルモード全開となってしまいお腹いっぱいとなってしまうので、ここはやはりほのぼのとしたギャグ要素を含んだ観光の様子をクローズアップするのが一番だろう。

そんな訳で、ユーノ達と別れたなのは達は三班に分かれてリュミエールを観光することにした。

メンバーは、なのは・百合・ヴィヴィオ・スバル・ティアナ・ギンガ・エリオ・キャロ（フリード含む）・フェイト（Ｌ）の９人と、はやて・ヴィータ・シャマル・ザフィーラ・リィン・アギト・浦太郎・金太郎・白鳥・セスタの１０人、そして恋次・吉良・ルキア・鬼太郎ともう一人の案内役の計五人と言うものになった。

「それじゃ、このメンバーでそれぞれ見て回るってことでいいかな

？」

「いいんじゃないかな。でも気になることが一つ・・・恋次さん達のところだけあと一人案内役がいないようだけど・・・」

「それなら心配いらないよ。オイラの副官がしっかり案内してくれるから。おーい、スバル！スバル！」

「え？」

「私・・・？」

セスタの言葉にきょとんとした顔を浮かべながらこっちのスバルが反応すると、セスタに呼ばれて城の中から現れたのはまたしても度胆をぬくような人物だった。

「・・・・・あの・・・」

「「え！！」」

「うえええ！！！」

なのは達はフェイト（Ｌ）を見た時と同じか、場合によってはそれ以上の驚愕のリアクションをとった。

現れたのは、スバルと容姿も髪型もそして声色も瓜二つだが、少々気恥ずかしそうに自信名下げな雰囲気を醸し出す、世界国家騎士団五番隊副隊長で、セスタの部下・・・月光院スバルと言う人物だった。

「あ、どうも・・・」

「スバルが！二人！？」

「うそー！！私もなの！！」

「こちら五番隊の月光院スバル。セスタ隊長の副官なんです。」

「げ、月光院スバルです・・・・・・よろしく・・・お願いします・・・／／／」

挨拶をしたはいいが、スバルは目の前の大所帯に戸惑いを感じると、直ぐに木の陰に隠れて赤面した状態でなのは達を見守った。

これにはなのは達もリアクションに悩まされる。

「あ、あの・・・大丈夫かな・・・」

「へぇ～～～むこうのスバルはこっちのうっとうしい方と違って、随分と小心者と言うか、引っ込み思案なのね。」

「あああ！酷いよティア！そんなイジワル言うの／／／」

「あはは。ほらティアナ。あんまりスバルいじめちゃ駄目だよ」

「大丈夫ですよ。これぐらいがいつものコミュニケーションなんで♪」

と、なのはに対してティアナは悪意に満ちた笑みを浮かべながらスバルを一瞥し、サムズアップ。

スバルはそれを見ると、涙目を浮かべて訴える。

「あ！その悪意に満ちた目！絶対違うよそれ／／／」

一方でセスタは木の陰に隠れた人見知りが激しいのが難点のスバルに説得を試みる。

「ほら、スバル。いつまでも隠れてないでちゃんと出て来いよ。観光案内の方、任せられないじゃないか？」

「あ、はい・・・・・どうもすみません・・・」

引っ込み思案なスバルはセスタの説得でどうにか恋次達と同行できることになったが、それでも恋次達はこのスバルに一抹の不安を感じていた。

「本当に対照的だな・・・」

「いやこれは。面白いものが見られたな」

「それじゃ、何処から行きましょうか？」

「僕はもっこり美人が沢山いる場所がいいな～～～♪」

「私はもうちょっとココの海が近くで見られるところがいいです！」

浦太郎とヴィヴィオの要求を聞くと、セスタとフェイトは互に頭の中にイメージを膨らませていく。

「美人か・・・じゃ、オイラの姉さんに会いに行くかい？」

「海なら３０分ほど行った先に、ちょうどいい見せ物があります。そちらをご覧いただきましょう」

「ありがとうございます。ほんなら、リュミエール観光開始や！」

「「「「「「「「「「「「おおーーー！！」」」」」」」」」」」」」」」」

なのは達は意気揚々とした返事をし、フェイトとセスタに連れられ場所に乗り込み目的地へと向かって移動を開始する。

その一方、引っ込み思案なスバルが案内役を務める恋次班は出発が遅れていた。

「おい。俺達は何処へ行くんだ？」

「えっと・・・・・・その・・・／／／」

恋次や鬼太郎の顔を見た後、スバルはこれまでにないほどに顔を引きつり、直ぐに蒸発させると後ろへと振り返り、地面をいじり出す。

その光景に、死神組は一滴の汗を浮かべる。

「こんなので本当にガイドが務まるのか？」

「凄く心配になって来たよ・・・」

「け。ジャンケンで負けたとはいえ、なんで俺がこいつらと・・・」

「「こいつらって（とは）なんだ！！」」

鬼太郎の愚痴を聞き、思わず声を荒げる恋次とルキア。

そして、恐らくこの中では一番真面な立ち位置の吉良は今後の事を考えながら深いため息をつく。

「はぁ～～～」

◇

〈ユーノＳｉｄｅ〉

他のメンバーがそれぞれ観光目的で移動を開始した数分後、城内で激しい模擬戦を繰り広げていたユーノと龍児だが、ユーノは逆刃刀を振り上げそれなりに楽しげな様子で降りかかる。

「はあああ！はっ！」

ユーノの一振りを見ると、龍児は鋭い眼光で軌道を読み取り、後ろへ回避。

「やりますね♪」

ユーノはほくそ笑みながら龍児の対応に嬉しさを感じると、刀を両手で振りかぶり龍児にむけて振り下ろす。

だが、龍児はまたしてもユーノの斬撃をしっかり見定め左へ避ける。

「ふふ。ふん！」

それを見たユーノは不敵な笑みを浮かべ、持っていた刀の持ち手を右から左へと握り替え龍児を攻撃。

思ってもいなかったやり方で攻撃されてきた龍児は咄嗟に龍王牙の刃で防御し、ユーノの刀を受け流す。

ユーノは一度距離を置くと、予想通りに力量を秘めた騎士の実力に笑みを浮かべる。

「流石。リュミエール最強の竜騎士。見事な剣捌きと体捌きで。」

「次元世界最強の男にそう言われるとは――俺も満更自惚れたりはしないな」

「またそんなこと言っちゃって♪褒めても何も出ません・・・よ！」

ユーノは嬉しさを醸し出しながら再び龍児へ刀を振りかざす。

龍児はそれを龍王牙で受け止め、流した後でユーノの今もって理解出来ない底知れぬ思考の海と性格の曖昧さに険しい顔を浮かべる。

「やれやれ。相変わらず性格の読めん奴だ」

中庭の方でユーノと龍児の卓越した剣腕が披露される中、そこからそれほど距離も置かない場所で既に国家騎士団のほとんどを倒してしまったシグナムが最後の攻撃を加えようとしていた。

「レバンティン！」

〈Ｅｘｐｌｏｓｉｏｎ〉

シグナムはカートリッジをロードし、魔剣に炎を灯すと、後ずさり気味の目の前の騎士たちに向けて紫電一閃を振り下す。

「紫電・・・一閃！！！」

「「「うわあああああ！！」」」

国家騎士団はこの攻撃により、全滅を果たす。

周りにはシグナムの強さに押し負けたこれでも精鋭と呼べる強者たちが目を回して倒れていた。

シグナムはまだ物足りないと思いながらも敵がいなくなったことを確認し、レバンティンを収める。

「ふん。ざっとこんなものか」

「は。何がだよ？」

「？」

と、その時唐突にシグナムの言葉に反応してきた男の声に反応し、周りを見渡してみると、倒れた国家騎士団たちの間を跨ぎながら、黒の単髪に深紅の瞳、鋭い目付きに引き締まった顔立ちをしたその場に倒れている騎士とは一線を画す雰囲気の男がやってきた。

「やれやれ・・・騒ぎを聞きつけて来てみれば、また随分と派手に

やってるな・・・あんた」

「あなたは？」

シグナムがそう尋ねると、その男・・・シグナムと同じく戦いに生き甲斐を感じる世界国家騎士団の隊長、如月京介が不敵な笑みで返答する。

「如月京介。世界国家騎士団十一番隊隊長だ。見たとこ、あんた・・・相当強そうだな。どうだ。そこら辺の雑魚相手にするよりも、いっちょ俺と手合わせ願おうじゃねぇか。」

京介は獲物を見付けたかのような眼つきでシグナムを威嚇しながら、腰に携えた刀・・・名刀で知られる「血桜」を抜きだし、下で目釘を舐める。

「俺の愛刀・・・『血桜』が吸いたがってるんだよ・・・強者の血をな」

これを見ると、シグナムも思わず武者震いしすぐさま納めていたレバンティンを取り出す。

「成程。いいでしょう。ヴォルケンリッターが将、剣の騎士シグナムと炎の魔剣レヴァンティンがお相手いたします。」

「ふん。ちったあ楽しませてくれよ・・・せめて、こいつの錆落としが出来る程度にはな・・・」

「安心してください。ご期待以上には答えるつもりですから」

「なら、遠慮はいらねェな」

「はい。では・・・・・・参ります！」

〈Ｅｘｐｌｏｓｉｏｎ〉

シグナムは一目で如月が龍児と並ぶ強者であると判断すると、一切の遠慮は捨てさり全力全開とばかりに魔力を高めて、連結刃からレバンティンを極限まで浮かび上がらせる。

「飛竜一閃！はあああああああああああ！！！！」

シグナムはそうして全開の力で目の前に佇む如月に刃を向けると、如月は飛び上がって愛刀「血桜」を構え、魔術による剣戟を飛ばした。

「“破魔・竜王刃”！！！」

稀代のバトルマニアが今ここに、剣を交えて最強の座を争う！

◇

〈なのはＳｉｄｅ〉

対するなのは達はと言うと、フェイト（Ｌ）に連れられ場所を走らせおよそ３０分ほどの地点にあるリュミエールの海岸へと到着。

「さぁ、着きましたよ。あれがリュミエールの海です」

「「わあああ！」」

なのは達は眼前に広がってくる光景に思わず頬を赤くする。

それもその筈。

リュミエールは次元世界屈指の純度の高い水と海で知られる世界であると同時に、世界樹からもたらされる不思議な力が作用することで一種の魔力を帯びた神聖なものとなっているのだ。

多くの観光客は勿論、地元世界出身者の多くがこの海を訪れ身を清めるほか、純粋に楽しんだりするのだ。

「本当にすごーい！！！近くで見ると更にキレイ！」

「ここはリュミエールの五大国のひとつ、アクナビート共和国付近に位置するリュミエールで最もきれいな海が堪能できる場所であり、フレアと並び比較的温暖な気候なために夏そのものを満喫できる絶好の場所です。」

「そうなんですか・・・ねぇティア！ギン姉もさ！あとで泳ごう泳ごう！！」

「はいはい。そんなにはしゃがないのみっともない。」

「スバルったら興奮して♪」

大はしゃぎのスバルとは違い、ティアナはギンガと共に冷静に落ち着いた様子で彼女に相槌を打つ。

と、そんな時エリオが海岸線の奥を眺めた際にある風景を目の当た

りにする。

「ん？あれは・・・」

「あれは『恋人岬』ですよ」

「恋人岬？」

「リュミエールで一番きれいな夕陽が見られる場所で、毎日のように恋人たちが恋愛成就の為に押し入れる場所なんです。私も龍児とはあそこで結ばれましたから？」

補足しておこう。

リュミエールの恋人岬にはラブコールベル（愛の鐘）と呼ばれる鐘が設置されており、この鐘を3回鳴らすと恋愛が成就すると言われている。

また現在は金の鐘（俗称　幸せの鐘）と呼ばれる鐘も設置されており、こちらも鳴らした者は愛がかなう、または幸せになれると言われている。

鐘を愛し合う二人共が鳴らすと、この上ない幸せが訪れるとされるが、どこまでが正しいのか、あるいは眉唾なのか、その信憑性を決めるのはあなた次第だ！

と、ここで話を聞いていたなのはが頬を赤くしながらある妄想を浮かべる。

「え！と言うことはじゃあ・・・！」

ここからは、なのはの妄想です。

重要大事なりのユーなのファンに贈るべたな展開であれですが、どうかご容赦を――――――・・・

沈む夕日。

浜辺で向かい合う二人の男女。

一人はユーノ・スクライア。

もう一人は高町なのは。

二人は互に手を取り合い、なのはは頬を染めると何時にも況して整った顔立ちのユーノ（三割増し）と見つめ合う。

「ユーノ君・・・」

「なのは・・・」

愛し合う者同士が相手の名を呼び合うと、何処からともなく祝福の鐘の音が聞こえる。

「私達、やっと結ばれるんだね」

「もう結ばれてるじゃないか――僕らは」

そう言うと、ユーノは懐から小さな小箱を取出し、中を開けるとシルバー色に輝くエンゲージリングが収められており、目を見開くな

のはを見つめながらユーノは整った顔を向けてくる。

「ユーノ君・・・／／／」

「結婚しよう。なのは――――そして、二人で理想の家族を作ろう」

「うん――――――――？」

受諾を受け、なのはは左手の薬指にユーノからの素晴らしい贈り物をはめる。

そして、この門出を祝ってもう一度鐘の音が響き渡る。

妄想終了――――――

なのははそんな勝手な妄想を浮かべながら、身体をくねられ全身を赤くしながら更に自分の数多の中にべたなイメージを膨らませていく。

「私もユーノ君と・・・あそこで夕陽を見ればきっと／／／／／／／／ああああ～～～ん？結婚式が～～～子作りが～～～ヴィヴィオも遂にお姉ちゃんに～～～？」

周りの者はこのなのはの様子に言葉を失いかけるが、ここで非常に焦りを覚えるのが百合女こと、フェイトだった。

「（は！不味い！このままじゃなのはが淫獣に・・・！！！そ、そんなことはさせない！何か手を打たなければ！）」

嫉妬の炎を燃やし、ユーノを根絶やしにしようなどと企てている邪

悪な思念に支配された百合女を見て、皮肉にも彼女の保護児童であるエリオとキャロは不安を覚える。

「（フェイトさんが・・・なにやらよからぬたくらみをしているような・・・／／／）」

「（フェイトさん・・・お願いですから下手な真似はしないで下さいね）」

ここで重要から一つ言わせてもらう。

つうかさ、百合女よ・・・てめぇもいい年してるんだから、いい加減恋人の一人や二人作れや！！

あと！！いつまでもなのはと同棲なんてしてんじゃねぇよ！！それとも何か！てめぇはこの歳にもなって一人暮らしが出来ないほどの寂しがり屋なんですか！ああ！！

◇

〈ユーノＳｉｄｅ〉

その頃、相変わらず中庭で静かなる戦いを繰り広げていたユーノと龍児だが、戦いの最中シグナムと如月が互いの技を撃ちあい激しくぶつかりあう様子が耳に入ると、ユーノも思わず帽子をかぶり直しつつ感心した様子で呟く。

「おっ。お――――お――――。シグナム（あちら）さんは派手にやってるみたいですね。て言うかこの気配、知らない人だな・・・」

ユーノがそう呟く傍ら、龍児は感じ取れる魔力が如月の物であることを理解する。

「（どうやらシグナムの闘気に当てられて、血気盛んな如月隊長が出て来たようだな・・・本当にこの城、大丈夫なんだろうか？）」

すると、自分の心配よりも城の心配をしている龍児にユーノが話しかけてきた。

「どうだい？龍児さん」

「ん」

「こっちもそろそろ、ハデにいっちゃおうじゃないの？」

それを聞くと、龍児は長い間を開けてから、呆気にとられた声で言ってくる。

「・・・・・・・・・・・・マジでか」

「マジでかってなんですか？僕が派手に戦うのがそんなに珍しいですかい♪」

「いや・・・珍しいと言うよりも、お前の口からそんな言葉が出るとは夢にも思ってなかったんでな。少々戸惑ってる。魔導死神の力を失っていながら俺を相手に派手にいこうとはよく言ったものだ。ハデにたって、大体お前も本気で戦ってないだろ？二本目も抜いてないくせに」

龍児はそう言いながらユーノの腰元に差されているもう一本の愛刀、

白夜叉こと坂田銀時から譲り受けた洞爺湖木刀を指摘すると、ユーノは次のように答える。

「洞爺湖木刀は言わば脇差的なものですから。知っての通り、脇差って言うのは刀じゃ戦いづらい場所で戦うときに抜くものですよ。刀と一緒に使うものじゃないですって♪」

「そうだったか？その割にはユーノ、お前さっきから――その逆刃刀を右に左に持ち替えて戦ってるじゃないか？」

龍児の口から出た意外な言葉に、ユーノも些か驚くなか、更に龍児は彗眼から読み取った詳細なユーノの攻撃方法に口を挟む。

「それに、意識してるか知らないが・・・ユーノさ、左手で振る時より右手で振る時の方が少しだけ間合いが近いんだ・・・」

「・・・・・」

その言葉を聞いたユーノは眉間に皺を寄せ、龍児を凝視する。

「左右で間合いの違う両利きで、刀と脇差二本差してて、“二刀流じゃない”なんて・・・そんなことがあるのか？」

龍児の疑問はさておき、自分の何気ない行動を瞬時に鋭い洞察眼で見抜いた龍児を見ながら、ユーノは思わず口元を緩める。

「・・・ふふ。そこまで分かりましたか・・・参りましたね・・・左右の間合いは調節してたつもりなんですが。流石――よく見てますね♪・・・こわいこわい・・・」

その瞬間、ユーノ龍児の懐に潜りこむや否や左手に持っていた逆刃刀を龍児に一振り。

「躱すね！」

龍児がそれを躱すとユーノは嬉々とした声を上げて、今度は刀を右手に持ち替えて更に一振り。

皮一枚でユーノの斬撃を躱した龍児は目を見開き驚愕する。

「すごいな！今の一瞬で間合いを調節したのか！今のはわかんなかったぞ！」

「そいつはどうも！」

ユーノは意気揚々と龍児の龍王牙に斬撃をぶつけると、龍児はそれを両手でしっかりと取っ手を持ち衝撃を耐え抜く。

果たして、二人の勝負の行方はどんな決着となるのか、こちらも楽しみだ。

◇

〈浦太郎Ｓｉｄｅ〉

さて、一方の浦太郎達の方はどうかと言うと、セスタに連れられ彼の姉で、自称・リュミエールの大天才科学者のハロルド・ベルセリオスの拠点とするグランマニエ皇国、国立技術研究所を訪れていた。

馬車から降りた一同は、目の前に広がってくるリュミエールの科学

技術の総本山を仰ぎ見ながら、セスタの話を聞く。

「さぁ着いたよ。オイラの姉さん、ハロルド・ベルセリオスの拠点、『グランマニエ皇国国立技術研究所』だ。早速中に案内するよ」

セスタは局員に許可証を発行してもらうと、それを全員分手渡してから、身だしなみを整え、研究所内部へと入っていく。

基本的に研究所と言うとどこの世界もさほど大きな違いはないように思えるが、魔法科学が極めて発達した世界に於いては、大分事情が違ったりもする。

まぁ、コラボ企画を聞かされた当初、テイルズオブシリーズを参考にしているとは聞いてはいるが、私自身そのゲームをやったことが無いので大変恐縮ではあるが、自分なりのイメージで描かせてもらう事にしよう。

と、作者の話が長くなってしまったが、セスタの後ろをついて行くはやて達はそこで働く研究スタッフは勿論、目移りするばかりの貴重な魔法技術を生み出す研究の様子に心が奮い立ってしまう。

「なかなかに研究設備の整った場所ではないか。尸魂界の技術開発局や管理局側のそれとはまた違った感じが何とも興味深い」

「流石は異世界と言う感じですな」

「それより、もっこり美人は何処？」

と、浦太郎が尋ねてきたその時、唐突に前方から何の冗談なのかは知らぬが、一直線にミサイルが飛んでくる。

「「「

「あはははは♪ごめんごめん。まさか人がいるとは思ってもなかったもんだからさ。て言うか、セスタ来るなら来るってちゃんと連絡しなさいよね」

「ごめんごめん。急だったからつい。」

「ふ～ん。ま、今日は機嫌がいいから許してあげるけど、次はこうはいかなくてよ。また人体実験させられたくなかったら、事前のアポはとること。いい？」

「は、はぁ～い・・・」

セスタが力なくそう答えた後、浦太郎達は目の前から歩いてきたその女性、赤みがかったピンクのショートヘアーに紫の瞳をもつそれなりにスタイルや顔立ちは割りと良い方のセスタの姉、ハロルド・ベルセリオス研究所長と対面する。

初めて窺うセスタの姉の姿だが、浦太郎は意外にも自分の好みであったらしく、非情に大喜び。

「わあお！もっこりドールちゃん♪」

浦太郎はそう言うと、飛び上がり後ろに花火を上げて大袈裟に喜びを表現する。

「ヤッター！！！」

「（もっこりドール・・・ちゃん・・・）」

「（どういう意味かしら・・・）」

はやて達がそんな風に思っていると、浦太郎は普段からも女性を口説くのには御誂え向きの顔を一段と整え、ハロルドに向かって言ってくる。

「ふん。こんなセンスを感じる大胆な発明品を作る女性を見たのは、はじめてだ」

「そう言うあなたは一体？」

「次元世界最強の男こと、翡翠の魔導死神ユーノ・スクライアが従者、亀井浦太郎」

「あっそ。私はハロルド・ベルセリオス。リュミエール一の天才科学者よ。私の辞書に不可能と言う言葉は無いわ。」

「ははは。自信たっぷりな人ですな。あ、申し遅れました。私、リュミエールの観光でやってきました、第一世界ミッドチルダにお住いの八神はやてです。」

「「「「「「「「「よろしくお願いします（申す）」」」」」」」」」

「はぁーい。こちらこそよろしく。セスタが大人数で誰を連れてくるかと思えば、なんか予想以上に健康そうな実験素体だこと♪」

「「「「「「「「「じ、実験素体・・・！」」」」」」」」」

思わずその言葉で石化する一同。

セスタは不安いっぱいな様子でハロルドに言う。

「ちょ！姉さん何言ってんだよ！！彼等別にそんなんじゃないから！変なことしようなんて思わないでよ！」

「ははは！！冗談だって！何もそこまでマッドサイエンティストじゃないから！ははははは！！！」

笑ってごまかすハロルドが、はやて達は不意に虫の知らせを感じる。

「どこまで信じていいんだよ・・・こいつもスカリエッティと同じか・・・」

「まぁなんにせよ。折角研究所に来たんだからもっと面白いモノ見せてあげるわ。さぁ、奥に行きましょう。天才である私が作り上げた珠玉の発明品を披露してあげるわ」

ハロルドはそう言って、バズーカ片手に奥へと進んでいき、浦太郎はそんな破天荒ながらも魅力的な彼女にもう釘づけであった。

「だっは？ハロルドちゃんって積極的～～～♪はいはい♪♪♪」

浦太郎が先に彼女の後ろへと着いて行く中、セスタはため息をつきながら他のメンバーに自分の姉の破天荒さに羞恥心を感じていた。

「ふう～～～なんかごめんねみんな。あの破天荒振りは今に始まったことじゃなくてさ」

「お前も随分と苦労をしているようだな」

「あはは・・・お疲れさんな」

はやて達はセスタに労いの言葉を懸けた後、浦太郎の後ろへとくっつき、ハロルドに連れられ奥へと進んでいく。

と、ここで浦太郎が彼女の横でふと呟く。

「ハロルド・ベルセリオス、良い名前だ。君のイメージにぴったりだ。」

「どんなイメージなのかしら?」

「”花園に咲く高貴な薔薇”。その美しさと芳しい香りは、周りの花々をただの引き立て役にしてしまう。」

「お口が上手いのね。ミスター亀井は」

「君の美しさが僕を詩人にさせる・・・」

浦太郎はそう言いながら、どさくさに紛れて彼女の露出した足に手をかけようとする。

すると、ハロルドはそれに気づくと何気ない顔で指先に魔術で生成した火の粉を手を伸ばしてきた浦太郎の手の甲に近づけ、浦太郎はその瞬間手を引いた。

「だああ!あちゃちゃ!!」

「あらごめんなさい。手にゴミ虫がついてたものだから♪」

「(ゴミ虫って・・・今のってわざとじゃなかった?)」

明らかに彼女の悪意を目で見て感じることが出来たはやて達は絶句し、浦太郎は赤くただれた手に息を吹きかけながらハロルドに苦笑い。

「ふー！ふー！もう～～気を付けてね、ハロルドちゃ～～ん♪ところで何処行くの？」

「あそこよ」

「え・・・」

ハロルドの言葉を聞いた一同は目の前に広がってきた見た目からして何かの装置と思われる巨大なビンケースのようなものを発見し、ハロルドは訝しげな顔を浮かべるメンバーを余所に装置の電源を入れる。

セスタは皆を代表して徐に尋ねた。

「ねぇ、姉さん。これって・・・」

「生体融合装置」

その瞬間、浦太郎の顔が引きつり更に一言。

「嫌な予感がしてきた・・・まさか僕らをこれで・・・」

「そ♪これでみんなと他の動物を合体させるの♪」

「「「「「「「「「が、合体ですとーーー！！！！！！」」」」」」」」」

」」」

はやて達は思わずその言葉に衝撃を覚え、１００ワットの電流が脳裏に叩き込まれる錯覚を覚える。

ハロルドは不敵な笑みを浮かべながらビンケースの中から新鮮な実験用のカエルなどを取出し、本人の許諾をなしに勝手に準備を始めて酔うとするが、ここで浦太郎が咳払いをし、正直に自分の気持ちを言ってくる。

「えっへん！残念ながら断る。カエルさんと合体する趣味は無いんで」

「あ、そう。じゃあカエルがいやならエビとかウナギとかがいいかしらね。他にもサルとかニシキヘビでしょ、それから・・・」

ハロルドの傍若無人、唯我独尊な言葉を聞いている内に、もう諦めた方がいいのではないとか感じた浦太郎や他の一同は思わず言ってしまう。

「わかった！やりますよ！やればいいんでしょ。但し条件がある・・・――ハロルドちゃんともっこりナイト！」

「「「「「「「「「「だあああ！！！」」」」」」」」」」

思わず拍子抜けをしてしまう一同なのであった。

さて、こんな調子の浦太郎達とは別に、中庭で戦闘を続けていたユーノと龍児の方はどうかと言うと。

「はあああ・・・・は！」

「く！」

龍児は振り下されたユーノの斬撃を龍王牙で受け止める。

「やりますね♪」

ユーノは笑みを浮かべながら、繰り出された龍児の反撃を躱し、低い体勢から返し技として最も威力を発揮する龍巻閃を叩きこむ。

「龍巻閃！」

龍児は龍巻閃が叩きこまれる瞬間、軌道を呼んで皮一枚のところで回避する。

ユーノはほくそ笑むと、なかなかに苦戦を強いられ眉間にしわを寄せる龍児に尋ねる。

「そろそろ本気になってくれたころですかい？」

「マジで本気なのかよ？単純な剣術勝負でお前が本気出したら、この宮殿が崩れるって」

「そうならないように戦えばいいじゃないですか？それより一つ聞いておきますよ、龍児さん」

「何だい？」

「二本抜けば、龍児さんも本気でやってくれるんですか？」

底知れぬものを醸し出しながらユーノがそう言って来ると、龍児は一掃眉間にしわを寄せながら思わず口にする。

「カンベンしてくれ。俺だってまだアップの途中なんだ。今でも充分強いのに、先に二本抜かれちゃ困るね」

「成程――――――」

ユーノは龍児の言葉を聞くと、徐に腰に差していた洞爺湖木刀の柄に手を伸ばし、それを握りしめてから返事を返す。

「じゃあ、二本抜くしかないですね」

「・・・そうなっちまうのか」

諦めをつけると、龍児は龍王牙を構え直し、ユーノと互いに睨み合いをしながら距離を確かめると、横薙ぎの風が吹き抜けた瞬間に両者は突進し、ユーノは二本の刀で、龍児は一本の愛刀でぶつかり合う。

戦いの火花は苛烈を増してデットヒートを繰り広げる！

◇

〈恋次Ｓｉｄｅ〉

で、忘れてはいけないのが月光院スバルを案内に向えた恋次達だ。

小心者のスバルを何とか落ち着かせた恋次達は、早速場所を走らせ

1時間先にある悪なビート共和国の観光名所の一つ、アクナビート広場にやってきた。

その中央には歴史あるポリー宮殿の壁と一体となったデザインを持つ『ケレスの泉』と言うものが存在し、中央に水を司る海の神ケレスが立ち、左に豊饒の女神デメテル、右に健康の女神ヒュギエイアが配置されている。

恋次達は早速スバルの案内の元、観光を始める。

「おお！賑わってるじぇねぇか！」

「あれがケレスの泉と言う奴か」

「はい。元々は古代アクナビート時代に皇帝アクナビート三世が作らせたもので、乙女の水道の意をとるウィルゴ水道の終端施設としての泉が場所を替えた後、今の位置になりました。それで、昔からの後ろ向きに硬貨を泉へ投げ入れると願いが叶うという言い伝えがあります。投げる硬貨の枚数によって願いが異なるんですが、結構信じてる人が多いんです・・・」

「成程。それはそれは」

ルキア達は感心した様子でスバルの言う通り、硬貨を投げ入れる人たちを一瞥しながら写真を適当に写していたが、ここで吉良がファインダー越しにとんでもないものを目撃する。

「・・・あああ！！」

恋次達が目撃したのは、他の観光客が投げ入れた願いの籠った硬貨

をあろうことか拾おうとしている鬼太郎の姿だった。

「鬼太郎！貴様なんてはしたないことを／／／」

「ダメですよ鬼太郎さん！そんなことしちゃ／／／」

「でははは！金だ！金！！今日一日分の足しにはなるだろう！」

「鬼太郎！！この馬鹿野郎が！」

恋次は鬼太郎を連れ戻すと彼の頭に思い切り拳骨を入れる。

「ぐぎゃ！」

「たく！恥知らずな真似しやがって！男なら、誇りの一つってもんがあるだろ！」

そう言って、恋次はルキア達と共に先に移動するが、鬼太郎はこの時自分の頭を殴りつけて来た恋次に恨みを覚える。

「く～～～てめぇ・・・！くそ・・・恋次の奴、仕返ししてやる」

そう言って鬼太郎が用意したのは、何処にでも売っている市販のネズミ捕りだった。

その後彼らは広場に設けられた教会の外壁、教会の正面柱廊の奥に飾られているヤモリの彫刻、通称・ババイヤの口という石造へと近づいて行く。

「これがババイヤの口です。」

「おお！ヤモリだぜおい！恋次、恋次！見ろよこれ！この中に口を入れるんだ！」

「おお。これがそうか」

「知ってるかてめぇ。なんでもこいつ、嘘つきは手食いちぎられるんだぜ」

「ははは。俺は嘘つきじゃねぇからそんなことはねぇだろうがな・・・」

自信満々に恋次がヤモリの口の中に入れる寸前、鬼太郎はあらかじめ用意していたネズミ捕りを仕掛け、何も知らない恋次は手を入れた瞬間激痛が走る。

「ぎゃあああああああ！！！！ごごごごめんなさーい！実はこの前・・・ルキアの白玉をつい無断で喰っちまんですー！！許してくれ！！」

「恋次！！！私の白玉を食べたのは貴様だったのか！何て事をしてくれたのだ！！！」

「ははは！！ほうら、笑って！いいぞ！いい顔してるぞ！」

恋次の告白に怒りを露わにするルキアと、そんな涙目で絶叫する恋次にフラッシュをたき、カメラで写しまくる鬼太郎。

吉良とスバルがどうしていいか迷っていると、ここで恋次がようやく鬼太郎の罠に気付いた。

「ぐあああああ！！・・・・あ？・・・・・・・鬼太郎・・・・！！！！！」

恋次は顔を赤くしながら自分の指を挟んでいたネズミ捕りを放り投げ、笑いながらカメラを手放そうとしない鬼太郎を追いかける。

「てめぇよくも俺様に恥を！！！」

「はーい、笑って！」

「に！じゃ、ねぇよ！！」

「はい笑って！！」

「に！だからちげーよ！！！」

仲がいいのか悪いのかと尋ねられたら、おそらく多くの者が仲がいいと答えるだろう。

と、ここで鬼太郎がカメラのメモリを取出し徐に呟く。

「あ～あ・・・恋次のくだらねー写真のお陰で、メモリ三枚も使っちまったぜ」

「三枚も使ってんじゃねぇよ！大体、こりゃ俺のカメラだ！」

恋次が鬼太郎からカメラを取り上げると、鬼太郎は歩み寄ってきたルキア達を見ながら言う。

「あんまり写真ばっかしとってもいい思い出づくりとはいえねぇな。折角異世界に観光に来たんだ。想い出になるようもの持っていこうぜ」

そう言って鬼太郎は適当に辺りを見渡し、開かれていた市の店から国旗が付けられた木の棒を選択し、それを無断でへし折ろうとする。

「よし！この旗のついた訳分かんねェものにするか。」

「てめぇは何処までも誇りの無い野郎だな・・・みっともねーからやめろよ！！」

「「「はぁ～～～」」」

恋次と鬼太郎のやり取りに、取り残された三人は溜息ばかりを付いてしまう。

「それよかよ、このよく分かんねェ銅像をバックにみんなで写真撮ろうぜ。」

「け。年寄り臭いんだよ」

そう言いながら、鬼太郎が銅像をバックに中央の恋次やルキア、吉良、そして恥ずかしがるスバルを収めてファインダーを覗くと、不意に肩を誰かが叩いてき、振り返ると見知らぬ男が何かを言って来た。

「ん？なんだ・・・」

不審がる恋次達だったが、鬼太郎は嬉々とした顔を浮かべる。

「お！代わりに撮ってくれるそうだぜ！」

「そうなんだ。じゃあ、早くこっちに入りなよ」

吉良の言葉を聞き、鬼太郎はカメラをその男に持たせて輪の中に入り込む。

男はカメラを持ちながら後ろへと下がっていく。

「へーイ。ポーズ・・・」

鬼太郎は強引に恋次と肩を担ぎながらカメラ目線で訴える。

「リュミエール人も意外と親切なんだな。へーイ！チーズ、スパゲティ！」

「馴れ馴れしくくっついてんじゃねぇ！」

「いいじゃねぇかよ！折角のリュミエールだぜ！思いで作るんだろ！？」

二人が口喧嘩をする中、不意に吉良が徐々に遠くへと離れて行く男の様子に疑問を感じる。

「あれ？なんか・・・随分離れていってない？」

「銅像が入るようにするためだろ？」

「いやそれにしては離れ過ぎではないのか？」

「周りの背景も入れたいんじゃないですかね・・・？」

と、その時訝しげな五人の耳元に他の観光団体を先導するツアーコンダクターの声が聞こえてきた。

「みなさま。旅行先では悪質な盗難や窃盗が多数起こります。自分の所持品は自分でしっかりと管理するようにしましょう」

「私達は大丈夫よね」

「うん。盗まれることなんてないもんな」

これを聞いた直後、五人が前を向くと先ほどの男が、ばっくれた様子でカメラを持ったまま足早に走り出す。

「へーイ。サヨラナ～ラ！」

「「「「「あ・・・」」」」」

一瞬の沈黙が辺りを支配したのち、五人は口をそろえて大声を上げた。

「「「「「か、かっぱらい（です）だー！！！」」」」」

すっかり嵌められてしまった恋次達は急いで犯人を追いかけようとする。

「す、直ぐに取り返すのだ！あれはそんじょそこらのカメラとはわけが違うのだぞ！！給料三か月分は下らん代物なのだぞ！！！」

「つうか俺のカメラだけどな！！」

「ちくしょー！！！嵌めやがって！！！」

鬼太郎は自分をはめた男を捕まえようと、全速力で駆け出した。

「待て！！！てめぇよくも謀りやがったな！！」

多くの観光客や地元の住民が注目する中、かっぱらい犯は形相で近づいてくる鬼太郎を一瞥すると、更にペースを上げて全力疾走。

「くそ！逃げ足の早いヤツメ！日本男児を舐める・・・なーーーーー！！！」

鬼太郎は咄嗟には居ていた靴をブーメランの要領で投げつけると、それに後頭部を直撃した犯人は前へと倒れる。

「ぐあ！」

「コソ泥め！」

鬼太郎が人混みをかき分け犯人の元へと近づくと、既に犯人は逃げ去っており、残されていたのは盗んだカメラと鬼太郎の靴だけだった。

「チクショー。逃げやがったか」

鬼太郎が靴を履こうとすると、恋次達が追いついてきた。

「全く。今度遭ったらぶちのめしてやる」

「でかしたぜ鬼太郎。これで旅行が続けられるぜ！」

「ん？そういえば小心者のスバルは何処におるのだ？」

ルキアの言葉を聞いて、一同が辺りを見渡すと、吉良は物陰に隠れたスバルを発見。

「あ・・・」

「／／／／／」

スバルは気恥ずかしそうに人混みの中には入れず、一人陰から様子を窺っていたが、これには恋次達も思わず唖然とする。

「本当にコイツが世界国家騎士団の騎士なのか・・・」

「よくそんな性格で戦場を生き残ってこれたものだな・・・」

「す、すみません・・・／／／」

恋次達が一騒動に巻き込まれていた丁度その時、いまだに国家騎士団本部の中庭ではユーノと龍児の戦いが続けられており、ユーノは二刀流で本気となった龍児と対峙している。

「よっと！」

ユーノは龍児の一刀で帽子を多少傷つけられたものの、急所には至らず飛び上がって回避すると、龍児は同じく高く飛び上がって空中

で剣戟を交わし合う。

「ふん！」

そして、一度地面に降りてからユーノは息を付きながら改めて龍児の本当の強さを実感する。

「ふうっ～～～！やっぱり強いですね！ビックリしますよ、全く♪」

「そうか？俺的には、帽子も着物も飛ばさずに、“ただの人間の身”でありながらこっちの剣を躱し続けてる・・・――お前の方がよっぽどビックリするぜ。ユーノ」

「はは・・・そりゃどうも。さて、そっちが本気を出してきたところで、僕自身・・・“重荷”を外させてもらわないと対等には渡り合えませんね。」

「何？」

意味が分からない顔をする龍児だが、ユーノはそんな龍児に不敵な笑みを浮かべながら着ていた羽織を徐に脱ぐと、それを後ろの岩の方へと放り投げる。

すると、中に仕込まれていた２０貫の重りとユーノの絶妙な力加減によって、対象となった岩が崩れて震動が起こる。

「！」

これには龍児も度胆をぬいてしまう。

「へへ♪」

「・・・そんな重たいもの着ておきながら、よくあんな動きが出来たものだな。いやはや・・・この度の強者の常識は悉く俺達の範疇を超えているようだ」

「いえいえ。僕が異常なだけですから♪」

そう言うと、ユーノは右手に逆刃刀、左手に洞爺湖木刀を構え、緩急自在の動きで龍児の動きを惑わせながら攻めに出る。

「御庭番式小太刀二刀流・・・『呉鉤十字』！」

「く！『虎牙破斬』！！！」

両者の剣が激しくぶつかり合う時、凄まじい旋風が辺りを覆い、それだけでもこの二人の戦いは正しく最強の名にふさわしいモノであったことは言うまでもない。

◇

〈六課Ｓｉｄｅ〉

そうして、徐々に時間が過ぎていく中でそれぞれの場所で楽しんだり、または実験台にされている六課メンバーの様子はどうかと言うと・・・――

「ぎゃあああああああ！！！！！」

現在はやてはハロルドの研究の餌食となってしまい、あろうことか

先ほどの装置を使ってフグと合体されられていたのだ。

「やめて！！！！女の子にそれはあかんって！！！待ってなハロルドちゃん／／／」

「うしし・・・いいからいいから。大丈夫よ・・・ちゃんと元に戻る方法もあるから・・・次がタツノオトシゴにしようかしら・・・」

「あああああああああああああああ／／／／／／／」

はやては今まで生きてきた中でも最も屈辱的でありながら、恐怖の体験を味わう羽目となってしまい、それを間近で見ていた他のメンバーは青ざめた表情となってしまう。

「は、はやてちゃん・・・／／／」

「お気の毒に・・・」

「すんません！うちの姉貴が大変ご迷惑な事を！！！」

「その謝り方、どっかで聞いたことあるような・・・」

まぁ、声が坂口大介ですから、ヴィータの言うことも分らない訳ではなかった。

で、はやて達とは対照的にリュミエールの海で早速水着姿で遊びまくるなのは達はと言うと――――・・・

「いっくよー！！それー！！」

「きゃ！やったな♪」

海で思う存分水掛け合いをしたり、ビーチバレーやにやけを楽しんだりともうマニアの間にはたまらないひと時が広がっていた。

「はは♪楽しいね♪」

「こんなに楽しいのは、久しぶりね♪」

そんな中で、百合女チームと国家騎士団チームによるビーチバレーが注目を集めていた。

「フェイトさん！行きますよー！」

「うん。おいで！」

「それ！」

キャロはフェイト（L）とチームを組んで、サービスボールを上げると、返されたボールを見ながらフェイトに声をかける。

「フェイト（L）さん！」

「はあああああ！！」

フェイトは百合女同様それなにり高い運動神経でボールを打ち返すと、百合女とタッグを組むエリオが素早くそれをガードする。

と、ここで親子で水の掛け合いをしていたなのはとヴィヴィオがフェイトに顔を向けてくる。

「フェイトさん！夕陽が見られるのは何時ごろですか♪」

「今の季節だと、六時ぐらいがベストです♪」

「ようし・・・ヴィヴィオ！パパに連絡お願いしていい？」

「了解しました！えっとパパへと・・・」

ヴィヴィオは早速メールを打ち始めるが、それを見た百合女は思わず危機感を感じる。

「（いけない！このままじゃ本当に・・・！！！）」

が、これがこの女の命取りだ。

「フェイトさん！上！」

「え・・・ごおーん！！！」

百合女はエリオの声に反応した直後、フェイトが仕掛けたアタックを防御できずに顔面に直撃、鼻血を出して倒れる。

三人を始めなのは達も急いでフェイトの元へと近づく。

「「フェイトさん！」」

「だ、大丈夫ですか！？」

「な・・・なのは・・・／／／早まったらダメ・・・／／／」

と、譫言の様にそう呟く、飽く迄百合路線な百合女であった。

◇

〈ユーノＳｉｄｅ〉

そして、時間はあっという間に夕方を迎え、午後６時まで残りわずかと言える時間帯でもいまだ決着がつかずにいたユーノと龍児の勝負だが、ここで二人の勝負を終わらせる報せがユーノの元へと届く。

「お」

ユーノが届いたメールをチャックすると、それは先ほどヴィヴィオが送った例の内容の者であった。

「なるほど。」

内容を読み取り、ほくそ笑んだ後ユーノは龍児と向き合い口にする。

「長丁場になったこの試合も、この一撃で終わらせる時が来たようです。」

「そうか。ならば・・・――――この一刀に全てを捧げる！」

「行きますよ。龍児さん」

「来い。次元世界最強の男・・・ユーノ・スクライア！」

二人は互に剣を構えて精神集中し、気を練り始める。

ユーノは手にした二本の刀を逆手に持ち返ると、目を瞑り龍児の気配を見失わないように制止し、龍児も愛刀龍王牙に全身全霊の気を混ぜていく。

そして、この勝負の終わりを告げようとばかりに一枚の木の葉が舞い降りた瞬間、二人は一斉に動きだし攻撃を仕掛ける。

「御庭番式小太刀二刀流奥義・・・――――！回転剣舞・六連！！！」

「龍王牙・・・空破斬！！！」

それはまさに、刹那の出来事。

両者の大技が瞬く間に仕掛けられ、ユーノと龍児はお互いに背中を向けあいながら静かにその場に立ち尽くす。

気の遠くなるほどに長く感じた沈黙だが、ここで立っていた龍児が肩を押さえて前に倒れ込む。

「う・・・」

龍児が龍王牙を杖代わりにしてその場に膝をつき、満身創痍の状態で肩で息を上げるとユーノ自身も多量の汗をかきながら紙一重の勝負を生き残ったことに安堵のため息を漏らし、龍児の元へと歩み寄る。

「勝負・・・ありですかね♪」

「ああ・・・・・やっぱりお前は、とんでもない男だ。この俺が

ここまでになるとは、俺自身も予想だにしてなかった」

「はは♪それはそれは。」

ユーノは龍児に手を差し伸べ、体を起こす。

龍児は清々しい顔でユーノと握手を交わしたのち、剣を収めて夕陽を見ながら言って来た。

「さぁ、約束があるのだろ。急いで行くと良い」

「はい」

ユーノは龍児と一旦そこで別れると、騎士団が用意した場所に乗り込み、なのはが待ち合わせとしている恋人岬へと急いだ。

で、シグナムと如月隊長の試合はどうなったのかと言えば、めんどくさいので適当に省略いたしますが、多分如月隊長が勝ったのではないかと思います。

そして、３０分後。

ちょうど６時を迎えた時、ユーノがなのはを探しながら岬の方へと近づいて行くと、沈む夕日に黄昏る彼女の姿を発見する。

「お。なのは」

「あ！ユーノ君♪」

ユーノが彼女の元へと近づくと、不意に岬の鐘が鳴り響き、驚きな

がらもユーノは照れ臭そうに尋ねる。

「えっと・・・ここって？」

「にゃはは♪リュミエールで一番きれいな夕陽が見られる場所なんだって♪フェイトさんが教えてくれたの」

「ふーん・・・・・いやだけどさ・・・」

そう言うと、ユーノは周りに溢れかえっている有象無象のカップたちを見ながら思わず声を上げる。

「なんなのこれ!?ハネムーンのカップルだらけじゃん!!ここはグアムか!?」

思わずこれにはなのはも少々苦笑いを浮かべるが、一方でそのカップルたちに紛れて他のメンバーが一堂に集まり、完全に野次馬となって二人の様子を窺っていた。

「はぁ～～しかしホント人が多いな・・・鬱陶しいったらありゃしない・・・」

「いいじゃない、それぐらい――――――・・・私達もその一つなわけだし？」

「え／／／あ、いや・・・・・うん。そうだね・・・・・・いや参ったな／／／」

ユーノの腕に頬を染めながら腕を巻きつかせるなのはに、ユーノは照れた顔を浮かべ、その様子を窺っていた百合女は激しく嫉妬の炎

を燃やす。

そして、またしても祝福を祝う鐘の音が聞こえ、茜色に染まる夕陽を見ながらなのはとユーノは互に名前を呼び合う。

「ユーノ君・・・」

「なのは・・・」

「く～～～なのは／／／／／」

「「「「「はぁ～～～」」」」」

そして、なのはがユーノの腕に巻きつきながらこれ以上にない幸せに思わず声を漏らす。

「私、こんなに幸せで怖い？」

「俺はそんな表裏の激しい嫉妬深いお前が怖い・・・」

と、鬼太郎が間違っても言ってはいけない一言を口にした瞬間、何処からともなく飛んできた桃色の閃光によって真っ黒に染まり上がり、ユーノや一同が絶句する中でなのはは気にもしていない様子で更に言う。

「リュミエールって本当にすごいよね♪音がこんなに違うんだモン♪」

「こ、これからも仲良くやっていこうね・・・なのは／／／／／」

「ユーノ君～～～？？？」

「「「うんうん／／／」」」

と、真っ黒に焦げた鬼太郎を始め、多くの者が頷くのであった。

リュミエール観光一日目（後書き）

ユーノの部屋

ユ「どうもどうも、リュミエールの皆さんと夜御倉龍元さん♪第二回目のキャラクター交流会と言うことで、今回は某〇〇の部屋にあやかってユーノの部屋と題したこのコーナーで司会を務めさせて戴います。ユーノ・スクライアです♪さて、本日のゲストは光の軌跡の主人公で、フェイトさんの婚約者さん。夜御倉龍児さんです！」

ユーノが紹介すると、向こう側からゲストである夜御倉龍児が現れる。

龍児「フェイトから紹介を受けた、俺が夜御倉龍児と言うものだ。」

拍車喝采が起こる中で前回同様龍児はユーノの真向えに座る。

ユ「今回は遠いところを御足労願いましてありがとうございます」

龍児「いやいや。こっちこそ、遠い世界からよくぞ遊びに来てくれた。おまけに、良い剣の稽古にもなってくれたしな」

ユ「はは♪力を失っていますし、大した足しにはならないと思ったんですが・・・そう言ってもらえると嬉しいです♪」

龍児「今回の話は結構ウチの世界の隊長陣が多数出演したが、何か無礼は働いてないだろうか？」

ユ「その心配はないみたいですよ。シグナムさんも随分と楽しそう

でしたし、なにより如月隊長とこれでもないとばかりに嬉々とした声を上げて剣振り回してましたし」

龍児「あれも結構癖のある人でな・・・剣腕は卓越しているのだが、普段の怠惰が何ともな・・・」

ユ「いろいろ苦労してますねそちらも・・・と、言ってる間にもう時間です！最後に何か言い残すことはありますか？」

龍児「そうだな・・・龍元。折角こうしてこうしてキャラクター交流会をやっているのだ。そっちの小説でもこっちのユーノを介した座談会を書いてみてくれ。」

ユ「だ、そうです♪次回のゲストはセスタ・ベルセリオス君です♪それでは、また次回、バイバイ！」

魔導師図鑑ハイパー！

ちょっと次回の様子も盛り込まれています。

国家騎士団の寄宿舎に泊まることになった一同の家、同質のなのは・フェイト・ヴィヴィオの三人は明日に備えて寝静まっていたが、百合女こと、フェイト・T・ハラオウンは寝静まったヴィヴィオを確かめた後、なのはが寝ているベッドへと足音を立てずに忍び寄る。

フェ「うしし・・・いつまでもユーノばかりに良い思いはさせない。なのはは私と百合百合のラブラブ路線でずっといくんだ。リリカルなのはの売りはそこなのに、純情異性愛路線なんて邪道だよ。絶対認めないんだから。淫獣風情に・・・絶対なのはは渡さない！」

そう口にしながらフェイトはなのはの寝ている布団をまくり上げる。

が、その直後目に映って来たのはもぬけの殻のベッド。

フェ「え！な、なのは！？どこ行っちゃたの！？なのは！！！カムバーック／／／／／／」

突如行方を暗ませたなのは。

泣き叫ぶフェイトを余所に、ユーノが自室で寝ていると、不意に目を覚ます。

ユ「んっ・・・（なんか変に目が覚めちゃったな・・・）」

そう思いながら真横から感じる暖かさに顔を向けると、横には密着状態のなのはが気持ちよさそうに眠っていた。

ユ「（なのはもまだ寝てるみたいだし・・・もうちょっと寝よう）」

ユーノは再び寝ようとするが、暫くして重大な事実に気付く。

そう・・・なのはが一緒に自分のベッドで寝ているということだ。

ユ「（ちょ！ちょっと待てーーー！！！なんでなのはが僕の部屋に・・・しかも僕のとなりでさも当たり前のように寝てる訳！！！！）」

驚愕でいっぱいのユーノだったが、ここで更にとんでもない事実に気付く。

ユ「（しかもこの柔らかい感触・・・間違いなく当たってる！！な

のはのおっ〇〇が！！！更におまけつきの、綺麗な素足も絡めてきてる！！！アレとかソレとか思いっきり当たってらっしゃる！？）」

全身硬直状態と化し、顔を真っ赤に沸騰させながらも脱出を図るユーノ。

ユ「（寝起きにこれは危険だって！（なのはが）起こさないように素早く抜け出して・・・）」

が、その直後寝ぼけたなのはがそのまま脱出しようとするユーノの肩をぎっしりと掴んでき、ユーノの腕になのはのふくよかな胸が強く当てられる。

な「むにゃ・・・えへへへ・・・」

ユ「ギャワーー！！！」

ユーノの理性が完全に吹っ飛ぶまで、あと一分！

次回予告

ユ「さて、二日目を迎えた今日から僕も本格的な観光に乗り出すぞ」

な「春夏秋冬が堪能できる訳だし、四季折々が楽しめる場所に行きたいね♪」

恋「どうせなら俺はスキーとかがしてみたいな！セスタ、俺と勝負だ！」

セ「うん！負けないよ！」

フェ（L）「先ずは全体見学が終わってからですわ♪あら?そちらの彼は・・・もしや」

龍真「兄さん。久しぶりだね」

龍児「龍真・・・お前か！」

ユ「次回、ユーノ・スクライア外伝『その名は龍真・蠢くリュミエールの闇の手』。え・・・まさかまた事件の予感?!」

その名は龍真・蠢くリュミエールの闇の手（前書き）

ユ「いや～～～龍児さんとの熱戦、あれは手に汗握りましたね。」

龍児「そうだな。て言うか、如月隊長とシグナムの試合はどうなったんだ？」

如月「俺が負ける訳ねぇだろ。」

シ「悔しいが、このお方は相当強い・・・だがそう簡単に引き下がれん！もう一本お願い申します！」

如月「よっしゃ来い！何本でも相手になってやる！」

龍真「やれやれ。二人揃って血の気の多いこと・・・と、今回は兄さんの弟である僕が登場します。そして、今姿を見せる闇の魔の手・・・その正体は一体！」

浦「謎が謎を呼ぶユーノ・スクライア外伝　リュミエール篇、始まるよ♪」

その名は龍真・蠢くリュミエールの闇の手

〈六課Ｓｉｄｅ〉

午後６時半過ぎ。

観光一日目が終了した六課陣は恋人岬から戻って来ると、龍児達二番隊騎士団たちが寝泊まりをしている桜華国首都ソメイの港近くに建てられている二番隊騎士団寮へと帰還する。

龍児とフェイトは普段はこの騎士団寮を使わない。

その理由は自宅が寮のすぐ近くにあるため、隊舎までは自宅通いをしているのだ。

とは言っても、今回は初体験のユーノ達がいるということもあり、一日ぐらいは側にいた方がいいと判断し、こうして今夜は滅多に使わない騎士団寮で夜を過ごすことにした。

ちなみにセスタと月光院スバルの二人は自分たちの隊舎があるグランマニエ皇国首都ユリスの町の中心部へと戻っていたが、ここで補足しておく事柄がある。

それは、セスタの姉であるハロルドが思いのほか浦太郎達を気に入ってしまい、もっと近くで観察研究をしたいという理由から、普段は絶対に居ない筈のここ二番隊騎士団寮に足を運んでいた。

図らずもこれは浦太郎にとっては非常に好奇な機会であり、夜這いを懸ける千載一遇のチャンスがこうして唐突に舞い込んだのだ。

で、メンバー一同はロビーに集められると、主催者であるユーノの

話に注目していた。

「それじゃ、夕ご飯までの間は各自自由時間ね♪僕は四階の４１２号室にいるから。なにか分らないことがあったらいつでも相談に来て。」

「「「「「はーい」」」」」

「それじゃ、一旦解散。」

ユーノ達は割り振られた自分たちの部屋を目指して階段なり、エレベーターなりを使って移動する。

最初に言っておくが、世界国家騎士団の寮の外観は一般的な西洋建築と捕えてくれるといい。

寮内におよそ２０人ほどが収容できる大きさの浴場が男女各々あるのだが、今回は生憎改装工事中の為に、一日目は大浴場は使えない。

その為、部屋にあてがわれた個室にある風呂とシャワーを利用することになるが、これがのちにとんでもない事態を巻き起こす。

では、早速部屋に入った六課陣の反応を見てみることにしよう。

先ずはスバル達フォワード女性陣四人だが、扉を開けた瞬間目の前に広がってくる一流ホテルを思わせる優雅な内装に思わず目を見開かせる。

「わああ！これ騎士団寮って言うか、もう一流ホテルって感じ！」

「こんなに贅沢な場所に泊まっていいのかしら」

「ほんとね～。」

「この内装だと、一般のホテルだとかなりの値が張りますよね～」

また、隣の部屋でもどうようになのは・フェイト・ヴィヴィオの三人が同様の反応を見せる中、ヴィヴィオは儲けられた羽毛のベッドに思わずダイブする。

「うわああ！ふかふかだ～！このベッド！」

「なんだか何から何までユーノ達にお世話になりっぱなしだね」

「うん♪あ・だけど、どうせなら同じ部屋が良かったのになぁ・・・なんで一人部屋にするのかなユーノ君～～～」

「ホント。私もなのはママも一緒の部屋がいいって言うのに、当のパパは一人だなんて・・・」

思わず不満を漏らすなのはとヴィヴィオだが、フェイトは内心焦りを感じながら平静をよそい口にする。

「まぁ、ユーノのことだから、きっと私達に遠慮したんじゃないかな」

「「え～～～遠慮する必要ないのに～～～」」

「あはは・・・（よっしゃああ！！！淫獣がいない！これでなのはとヴィヴィオは私の！！！）」

と、焦る最中、ユーノを心の中で罵倒し百合路線を貫けることを嬉しく思う百合女であった・・・つうかさ・・・何が淫獣だとコノヤロウ!!

テメェにいたっては百合女じゃねぇか!!ユーノ馬鹿に済んじゃねーぞ!誰のおかげでお前が出てこられたと思ってるんだ!調子に乗るな!(そう思ってる重要であり、実際にファンの全員が必ずしも・・・いや、そう思ってるとはきわめて考えにくいことを条項に書き記します。)

やがて、豪勢な食事を終えたなのは達は自室に戻りそれぞれの時間を過ごしていた。

ユーノも漸く今日一日の予定が無事に終了し、龍児と明日の予定を確認してから自室に戻ってゆったりと寛ごうとしていた。

と、部屋に戻ろうとした際、不意に４１１号室の浦太郎と出くわし、浦太郎は何気ない顔で一言言葉をぶつけてき、それを聞いたユーノは思わず復唱する。

「え?着替え?」

「そうだよ。これから五日間はこの寮で寝泊まりするんでしょ?店長、その格好で着たきり雀で過ごすつもり?」

浦太郎が指摘をしたのは、ユーノが年中同じ格好で過ごしている点、即ち帽子と甚平、そして羽織と言う三点セットに関してのことだった。

ユーノは改めてその事を指摘されると、思わず顔を抑えて焦りの表情となる。

「いけなーーーい！！いろんなことが一度に起こりすぎてすっかり忘れた！！龍児さんに頼んで調達してくる！」

ユーノは慌てた様子で部屋の扉の前に立つ浦太郎を他所に何処かへ走り去ってしまった。

それを完全に見送った後、浦太郎は鼻の下を伸ばして変体モードへと移行する。

「にふにふにふに！！！燃える下心～～～もっこりタイムスタート！！」

何処からともなく聞こえてきたクラッカーの音を合図に、浦太郎は廊下に出ていた国家騎士団たちも目を見張るほどの速さでフェイトのいる部屋へとダッシュしていった。

「フェイト（Ｌ）ちゅあ～～～ん♪♪♪」

五階５０９号室のドアを静かに開けた浦太郎はドアの音を悟られないようにゴキブリのように忍び込み、まさしくゴキブリの如く低い体勢で鼻の下を延ばしながら床を這っていく。

「ぐっそうすすすす・・・・・・♪♪♪」

そして、壁の陰に隠れてフェイトの方を窺うと、浦太郎をはじめ多くの男性人にとっては夢のような光景が広がってきた。

「わああ！！！」

目を輝かせた浦太郎が凝視するのは、着替えをしている最中のフェイト・Ｌ・ムーンであり、彼女は現在胸部の下着を取り換えようとしていたのだが、ここで一つ補足しておく。

今日の彼女の下着はブラジャーではなく晒であった！

マニアの間ではかなり興奮する代物であろう。

浦太郎はフェイトに気づかれないように背後に回り込むと、気配にさえ気づいていない様子のフェイトの肩に手を置いた。

その瞬間フェイトも誰かに触られていることに気づき、恥ずかしさの余り体を硬直させ、作業を中断。

浦太郎がすぐに声をかけて来た。

「晒（さらし）はいかん晒は。形が崩れる」

あまりの恥ずかしさと恐怖故に、フェイトは思わず悲鳴を上げる。

「うわあああああああああ／／／／／／／／／」

フェイトの悲鳴が上がった瞬間、唐突に部屋のドアがこじ開けられ、巨大な１００ｔハンマーを抱えたユーノが浦太郎目掛けてハンマーを振り下す。

「この変体もっこり覗きが！！！！」

振り下ろされたハンマーは床に食い込み、浦太郎の意識を奪おうとするが今回はしぶとく耐えていた。

「店長・・・着替えはどうしたの着替えは・・・！？」

「ふん。どうせ僕は年中着たきり雀ですよ。フェイトさん、大丈・・・だあ／／／／／／」

「えっ！？あああああ／／／／／／」

その時ユーノは図らずもは見てはいけないものを見てしまった。

今のやり取りの中でうっかり床に落ちた晒。

それによりフェイトは自分のふくよかな胸を暴露する羽目になってしまい、しかもサイズは百合女と同等かそれ以上と来た。

基本晩生なユーノにとって、またしても一部のファンから淫獣などと罵られてもおかしくはない状況だが、ユーノは目をそらして顔を赤くしつつフェイトに謝罪をしてきた。

「すみません／／／／／／そんなつもりはなかったんです／／／／／／ああ～～～これじゃあ龍児さんとなのはに確実に殺される・・・！！」

と、ある意味では正解とも取れる一言を口にするが、その直後浦太郎が隙を見てフェイトの部屋から脱出を果たし、それに気づいた瞬間ユーノも我を取り戻す。

「って！！」

ユーノがちょっと油断をした途端、浦太郎は入って来た時と同様ゴキブリのような速さで出て行き、次なるターゲットがいる場所へと向った。

「しまった！あの野郎～～～ゴキブリみたいな動きしやがって、こら待てーーー！！！」

ユーノは急いで浦太郎を追って部屋を出て行った。

フェイトは床に突き刺さった１００トンハンマーと出て行ったユーノ達の様子を窺いながら、頭の上に簡易的なトンボの絵を浮かべてきょとんとしてしまう。

「な・・・なんなの・・・一体・・・・！？」

一方、フェイトの部屋を出た浦太郎は階段を更に上って行き、鼻歌交じりに廊下を駆け抜けていく。

「ふにふにふ♪♪♪本命・フェイトちゃんが駄目なら～～～対抗・ハロルドちゃんがいるのだ～～～！！！」

そう・・・この寮には今日に限ってハロルドが寝泊まりに来ていたのだ。

浦太郎はこの機会を狙って今回夜這いを懸けるつもりだったらしく、第一の標的のフェイトが失敗に終わったことで対象をハロルドに変更し、彼女のいる七階へと上がっていく。

そして、七階に到着した浦太郎はハロルドの部屋に着くや否や魔術

式のオートロックがあることを無視して部屋のドアをこじ開け中へと進入。

そのままハロルドが寝ているであろうベッドに向って助走をつけてダイブする。

「いっただき～～～～～～！！！」

と浦太郎が鼻の下を延ばして先に見えてきたのは、ハロルドはおろか誰もいない正しくもぬけの空となったベッドであった。

「うわあああ！！！すっ空っぽ！！！！！？？？？」

予想だにしていなかった浦太郎はそのまま誰も寝ていないベッドへと豪快に落ちてしまい、身体を痛めてしまった。

「ぐっへ！！」

そして、落ちた体制のまま体を捻らせ、意気消沈としながらお目当てのハロルドがいないことに大きなショックを受けてしまう。

「はっ～～何所に行ったのハロルドちゃ～～ん・・・・・・／／／／／／」

と、呟いた直後、浦太郎の耳にある物音が聞こえてきた。

「あの音は！？」

浦太郎はその物音を瞬時に難の音であるかを聞き分けると、体を起こして音の方へと急いだ。

浦太郎が身軽な動きで音の先に行ってみると、辿り着いたのはシャワールームの扉の前であった。

耳を潜めてその音を欹てて聞く浦太郎は気分が高揚し、精力が活発になっていく。

「シャワー浴びてんだ〜〜〜研究所でお約束、もっこりナイトを果たそうとはいじらしい〜〜〜♪♪♪」

そう思った直後。

「のあああああ／／／／／／」

浦太郎はバスケットの中にあったハロルドの服の上に乗っていたあるものに目を向け、思わず鼻の下を伸ばし手を取った。

それは大方見当はつくと思うが、紛れもなくハロルド・ベルセリオスが愛用する水色に輝くブラジャー。

浦太郎はそれを手に取りながら思わず涙を流してそれを胸の中に収める。

「ハロルドちゃんのブラジャー〜〜〜くっふ、遅くなってご免ね〜〜／／／／」

一方、浦太郎がいるとも知らないハロルドは、ちょうどシャワーを浴び終えるとドアを開きタオルを巻いてからベッドのほうへ向かって行った。

そして、それを待ち望んでいたかのように浦太郎がそっと後から近付き整えた顔で肩を叩く。

「はっ！」

「待たせてしまったようだね。」

「ドアにはオートロックの鍵がかかっていた筈よ？」

「二人の愛の前には小さな障害に過ぎない。遅れたお詫びは、君を幸せにすることで償おう。さっ、自然に帰ろう～」

浦太郎は何食わぬ顔でハロルドが巻いているバスタオルを外そうとし、手を伸ばしてくる。

その瞬間、ハロルドは油断している浦太郎の下顎目掛けて勢いよく掌で突き上げる。

「あっ！！」

予想だにしなかった急襲に驚きかえる浦太郎。

そして、さらに追い討ちをかけるようにハロルドは浦太郎の顔面に回し蹴りを炸裂。

「ふんっ！！」

「のああ！」

ハロルドの豪快且つ強烈な回し蹴りを喰らった浦太郎はそのまま勢

いよく、ベッドのほうまで飛ばされてた。

「なっ！！たっは！・・・・・・何所で憶えたのそんな凄い技・・・！？」

顔を押さえながら思わずそう尋ねてしまう浦太郎だが、ハロルドは毅然とした表情で次のように答える。

「自然に身についたものよ。戦いに明け暮れる戦場で生き残るためにね。私も龍児やセスタたちと同じで世界国家騎士団の一組織の人間よ。穴倉に籠ったマッドサイエンティスと一緒にしないでほしいわ。魔術師だからと言って、何も魔術以外の戦闘が不得意なんて考えは捨てた方がいいわね。弟と一緒に、剣林弾雨の中を走り回ったわ。もっこり男には想像もできない世界でしょうけど。」

「あはは・・・きついお言葉・・・でも、タオルはゆる～～い・・・♪」

と、鼻の下を伸ばしながら浦太郎がハロルドのバスタオルに注目する。

「え！？っは／／／／／／」

その瞬間、大きな動きをした結果、ハロルドが巻いていたタオルが一気に緩み始め、直後白い全裸の身体が見え始めようとしていた。

「おお／／／！！！」

固唾を飲んでそれを輝かしい眼差しで見つめる浦太郎。

が、次の瞬間。

窓の外から七階と言う高所であるにもかかわらず、ユーノが形相を浮かべながら何処からともなく持って来た丸太で窓ガラスを突き破り、浦太郎目掛けて飛んできた。

浦太郎自身はこの急襲に思わず目を疑った。

「な、なんとっーー！！！

そして、ユーノが乗った丸太の先端が勢いよく浦太郎に激突、そのまま壁へとめり込んだ。

「ああ！！！」

「このディメンショナル破廉恥男！！！」

ユーノは直ぐに浦太郎を丸太にくくりつけると、勢いをつけて最上階から浦太郎を括り付けた丸太を振りおろし、宙ずりの状態にした。

「うわああ！！！こわいよ怖いよ許して／／／／／／／悪かったよ店長／／／／／／下ろして／／／／／／／怖いよ／／／／／／／」

バイキングの要領で高所にぶら下がった状態で左右に揺れる浦太郎は、余りの恐怖に失禁寸前。

泣き叫ぶ浦太郎をハロルドと一緒に眺めながら、ユーノは甲高い声で言って来た。

「今夜はそこでゆっくり反省しな！！ふん！！」

そうして、何事もなかったかのように部屋を後にするユーノだが、ハロルド自身は先のフェイトの時と同様簡易的なトンボを頭に浮かべながら窓ガラスが割れてしまったことに思わず呟く。

「割れた窓・・・どうしてくれるの・・・」

で、これは余談だが、浦太郎は結局のところ丸太にくくりつけられた状態で恐怖に怯えるどころか普通に一夜を過ごしてしまったのことだ。

いはや・・・ある意味恐ろしい男よ・・・

◇

〈恋次Ｓｉｄｅ〉

浦太郎のお騒がせ騒動があって数分後。

四階・４０１号室を宛がわれたルームメイトの恋次と吉良はまったりと寛いでいた。

恋次はベッドに腰掛けると、荷物をおろし思わずため息をつく。

「ふう～～～とんだ一日だったな」

吉良はトイレから出てくると、疲労困憊の恋次に労いの言葉をかける。

「はは。お疲れ様。まぁ鬼太郎君には随分と振り回されたからね。

さて、夜はまだまだ長いんだ。どうだろう、この騎士団寮の中を見てこようか？この建物自体がホテルみたいな造りだし、おもしろそうだよ」

「俺はその前に風呂に入りてぇよ」

「珍しいね。君がこんなにも早く疲れるなんて」

「そりゃ疲れもたまるっつーの。兎に角風呂だ風呂だ。」

恋次はそう言うと、上着を脱いで浴室へと向かう。

「しょうがないな。あ、先に言っとくけど大浴場は今日まで使えないから、ちゃんと部屋の風呂を使うことだね。」

「分かってるよ」

恋次が浴室に入ると、吉良は物静かな部屋の中で、自分のカバンから雑記帳を取出し毎日書き綴っている日誌を書くことにした。

「さて、中を回るのはその後にしといて、先に日誌でもつけておこうかな」

そう思って筆を持とうとした直後、不意に浴室から恋次の呼ぶ声が聞こえた。

「おーい、吉良。ちょっと来てくれ。早く」

「？」

訝しげな顔を浮かべながら吉良が浴室に向かうと、恋次がふんどし姿一丁で風呂桶を眺めてジッと立ち尽くしていた。

「どうしたんだい？」

「これが風呂か？随分小さいぞ」

「え・・・」

吉良がそう言われて風呂桶を見てみると、それは一般に西洋の家庭にある比較的小さなバスタブの形をしたものであり、恋次が想像していた広々とした日本の檜風呂とは相いれぬものであった。

「日本の檜風呂とは違うからね。異世界だよ。しかもどっちかと言えば地球で言うヨーロッパに近いし。その辺はしょうがないよ」

吉良はそう説明をした後で、徐に小さなバスタブの中へと入って行き、気だるそうな眼つきで恋次に言ってくる。

「横になってこう入るんだよ。ホルマリン漬けの死体みたいにね」

「嫌な風呂だな・・・」

思わず難しい顔を浮かべる恋次だが、彼が気になったのはバスタブの大きさだけではなかった。

「それとこいつはなんだ・・・？」

「え」

吉良がそう言われてバスタブの横を覗いてみると、そこには蓋のついたイスと何もついていない穴の開いたイスらしきものが二つ並んでおかれていた。

「この蓋のついた便器みたいなのは分るんだが、こりゃなんだ?」

恋次は便器の横に並ぶ洋式便器の便座と蓋を省いた様な形状をしているそれを見て訝しげな顔を浮かべると、吉良は上向の水栓が付いているのを発見すると、真顔でこう答える。

「・・・多分ビデじゃないかな」

「ビデ!!!??」

恋次はビデと言う単語を耳にした瞬間、驚きのあまり目が突き出てしまう。

「ビデって、あれか!?ケツの穴を洗う時に水が噴射するあれか!?」

「うん。そうとしか考えられないかな。だって、これが洗顔桶に見えるかい?」

ちなみに、ビデ（ｂｉｄｅｔ　仏）は南欧、特にイタリア、スペイン、ポルトガル、ギリシャの一般家庭のバスルームにはシャワー、便器と並んで必ず設置されており、現地人（男女とも）の日常生活に於いては必須の設備とされている。

恋次は思わずカルチャーショックを受けてしまい、腕組みをしながらこう呟く。

「つくづく異世界の文化ってのは未知との遭遇で溢れかえってるな・・・面白い報告材料になりそうだ」

「それは結構だけど、あまり昭和じみたリアクションはしないほうがいいかもよ」

「お前にそんなこと言われるとは・・・ちょっと俺ショックだな」

そして、恋次が改めて風呂に入り吉良が日誌を書いていると、吉良は何気なく部屋の室温が高いことに気づき、設置された冷暖房機を見てみる。

「しかし妙に熱いと思ったら、冷房が入ってないじゃないか・・・えっとこれで操作するんだろうか。」

と、吉良がリモコンをいじっていると、入浴中の吉良が言ってくる。

「なぁ吉良。この風呂狭いが、お前も一緒に入ろうぜ」

「えー・・・その狭さだよ?」

「いいじゃねぇか。百合な絵柄ばかりのｖｉｖｉｄよりはましだろ」

あんまりこう言うのもなんだが、作者重要は何故“魔法少女リリカルなのはＶｉｖｉｄ”があのような内容で１２５万部を突破するかが分からない。

だってあれって・・・もろ百合を推し進めたけしからん漫画じゃん!

シリアスバトル漫画はお腹いっぱいと言うが、だからと言って娘のヴィヴィオに百合を押しつけて親子そろって不埒な絵柄で読者を引き付けようなどと言う作者とコンプエース側の市場優先主義には賛同できない！

と、こんな話は心の片隅にでも留めて置くことにして、吉良の台詞に戻るとしよう。

「はは・・・どういう話題を振っているのかは知らないが・・・う～～～ん・・・ま、今回ぐらいはいいかな」

「へ。素直じゃねェ奴」

「君にそこまで言われるとは心外だな」

吉良はぶつぶつとそんな事を言いながらも、日誌を書き終えてるとすぐに服を脱ぎ始め、ふんどしを外して手拭いを下半身に巻いた。

「やれやれ。男同士の付き合いも楽じゃないよな――――・・・」

と、その時だ。

「キャー！！」

「！」

不意に部屋の外から女性の悲鳴が上がって来、吉良は一目散に飛び出していく。

「なんだ！どうしたんだ！？」

吉良が勢いよく扉を開けると、目に映って来たのは紅茶を運ぼうとしてうっかり手元から落としてしまい、ティーカップを割った騎士団の女性が二名と、寮のスタッフが一名。

「なにがあっ・・・・・・！」

思わず目を合わせてしまう双方だが、ここで吉良は自分の置かれている状況に気付くや否や顔を赤くし、更には向かい合った三人も思わず悲鳴を上げる。

そう・・・彼は今手ぬぐいはしてあるものの全裸なのだから・・・／／／／

「「「キャー！！」」」

「あ／／／僕としたことがなんて恥さらしを・・・／／／阿散井君！！！」

吉良は顔を真っ赤にしながら部屋に戻ろうとするが、吉良はドアが閉じられていることに気付かずそのまま激突。

その後でドアノブを必死に捻るも、魔術式のオートロックの所為で全く開けることが出来ない。

「しまった！！魔術式のオートロックか？！阿散井君！！ドアを開けてくれ！！」

神頼みのつもりで部屋の中で風呂に浸かっている恋次に向かってドアを叩いて必死に訴えかける吉良。

すると彼の声を訊きつけた恋次が勢いよくドアを開けて来た。

「なんだ！なんだ！どうした！」

「ぐあ！」

恋次が豪快にドアを開けて来たので、吉良はその勢いに押されて鼻先を強打。

そして、出てきた恋次の姿にまたしても目の前の三人は悲鳴を上げる。

「「「キャー！！」」」

それもその筈・・・恋次に至っては吉良よりも程度が酷く、なんと風呂から直接出てきたせいもあって、彼は全身水浸しのしかも正真正銘の全裸の状態だったのだ。

恋次はその事に気付かず、前かがみとなっている吉良を見て思わず口にする。

「な！吉良！！お前なんで全裸なんだ！？」

「き、君も同じだろう・・・／／／」

「「「アアアアア！！！」」」

「は！・・・失礼しました／／／」

恋次は咄嗟に股間を手で抑えながら部屋の方へと戻ろうとし、ドアノブを捻るが当然ドアは開く事は無い。

「あれ!?くそどうなってるんだ開かないぞ!!」

「自動ロックなんだ!」

「くそー!なんでそんな変なとこは近代的なんだ!」

「それよりも下!!なんで手拭いを撒いてないんだよ／／／」

「しかたねぇだろ!!ちょうど湯に浸かってたんだ!」

「ああ・・・なんて僕らは／／／て言うか、阿散井君は鍵は持ってないの!?」

「この姿の何処にそんなものがあるって言うんだ!」

恋次はそう言いながら自分の体を両腕で叩き、鍵はおろか一切の所持品を持っていないことを主張する。

その間に、二人の破廉恥な姿を目撃した国家騎士団の女性やスタッフたちが顔を赤くし、悲鳴を上げながら立ち去って行く光景が目に映る。

「と、兎に角早く何とかしないと僕達笑いもんだよ!」

「今も十分笑いもんだ!先ずはユーノに連絡するんだ!あいつの部屋って何号室だった!?」

「えっと確か・・・４２１号室だったかな？」

「よっしゃ分かった！４２１号室だな！」

恋次は吉良の言葉を信じて、前を押さえながら道行く人をかき分け、と言うか恋次の姿を見て皆一様に逃げていくのだが、兎にも角にも恋次はユーノがいると勘違いした４２１号室の扉の前に立つと、神にもすがる気持ちで扉を叩く。

「ユーノ！俺だ！！緊急事態発生！鍵を開けてくれ！！」

だが、扉が開くと中から出て来たのはユーノではなく、騎士団の人間・・・しかも若い女性であり、彼女は目の前で立ち尽くす全裸体の恋次の姿を見るなり絶叫する。

「・・・アー！！！！！！」

恋次は足早にその場から立ち去ると、涙目を浮かべて吉良を怒鳴りつける。

「違ったじゃねぇか！！もろ見られたぜチクショー／／／」

「く・・・こうなったら仕方ない。フロントに行って事情を説明するんだ！」

「この格好で下まで行けってのか！手拭い撒いてるお前が行けよ！」

「君はこの手のネタで干される事は無いだろ！自信を持っていくんだ！」

「どんな自信だよ！んなもんいらねぇ！！」

「なんでもいいから早くいくんだ！僕が代わりにユーノさんを呼んで来るから！君はフロントに！三番隊の明日は君の手にかかってるんだ！！」

「く～～こうなったらもうやけくそだ！！！」

無茶苦茶な理屈を唱えられた挙句、恋次はそれこそ埃も何もかも捨て去り、文字通り裸の心と体で全速力で廊下を走り抜け、人目をはばからずに下のフロントへと直行する。

「くそくそくそくそくそ！！！俺って何やってるんだ！！！」

恋次は果て目から見ればストリーキング以外の何者ではないのだが、本人はいたって真面目なのが痛いな。

そうして、一回のフロントまで全速力で駆け抜けていった恋次は、眼前に見えてきたフロントの人間へと向かって息も切らさず向かっていく。

すると、フロントで作業をしていたスタッフが猛烈な勢いで近づいてくる恋次に目を向ける。

「え？」

目の前に注目していると、恋次が全裸体でフロントの前へとやって来、スタッフは思わず声をひっくり返らせる。

「おおおおおおおおおおお！！！！！！」

「わあああ！」

驚き返るスタッフを余所に、恋次は羞恥心を一時的に忘れて手を差し出す。

「鍵をくれ！早く！俺達の部屋の鍵をくれ！！４０１号室の鍵を！！」

こんな騒動が寮の中で起こったことは、直ぐに部屋で寛いでいたユーノの耳にも届き、ユーノは二人をフロントに呼び出すと恋次に手拭いを与えてから怒り心頭な様子で御説教を始める。

「こ・ま・る・ん・で・す・よ・ね～～～！！」

ユーノは半分涙目となりながら、反省の色を見せる吉良と何も言えずに顔を逸らす恋次に向かって声を荒げる。

「異世界に来てまでこんな恥ずかしいことするなんて、恋次さんはともかく吉良さんまで何やってるんですか！？」

「俺はともかくって何だよ！」

「いや！あれはほんの不可抗力でして・・・！」

「仮にもここは世界国家騎士団の由緒ある騎士団寮なんです。僕ら以外の騎士たちが寝泊まりしている場所なんですから、全裸で廊下を走り回ることは控えてください。いいですね」

まるで修学旅行で騒動を起こした学生を叱りつける教師の様な立ち

位置のユーノであったが、その直後フロントの人間が集まり騒ぎ始めた。

「ん？なんか騒がしいですね。事故でも遭ったのかな？」

「なんか水の出が変だって言ってるみたいですけど」

ユーノがそう呟いた時だ。

恋次は何かを思い出した様子で呆気にとられた声を漏らす。

「あ・・・」

「阿散井君？」

「あの、何か・・・」

二人が注目する中、恋次は徐に立ち上がり重大な事を口にした。

「風呂のお湯・・・出しっぱなしだ！！」

「「えええ！！！」」

思わず声を上げるユーノと吉良。

恋次は吉良を引き連れ部屋の鍵を持参し、急いで四階の自室へと戻って行った。

そして、部屋の前に到着すると鍵を開けようと奮闘する。

「急げ！鍵を開けろ！！」

「待ってくれ！そんなに慌てたら・・・・・・！」

吉良が鍵穴に鍵を差し込み明けようとするが、肝心のドアが中にたまった水圧によって固定され動かずにいた。

と、その直後遂に水圧に耐えきれなくなった扉が多量のお湯と共に恋次達の元へと流れ込んできた。

「「うわあああああ！！！」」

お湯に飲まれ、廊下へ流されていく恋次と吉良。

ユーノは水浸しになった廊下の真ん中で倒れる二人を見つめながら、衝撃のあまり思わず頭を抱えてこう叫ぶ。

「な・・・なんてことだ・・・まさか・・・こんなことになるなんて・・・・・・あんたら・・・この由緒あるリュミエールの地でなんばしとんねん！！！」

口調も関西弁となってしまうほど、精神的に衝撃を受けたユーノ。

恋次と吉良は罰の悪そうな顔を浮かべながら、互いに容疑を否認し、大人げなく罪を双方に擦り付け始める。

「吉良の所為だからなおい・・・」

「君の所為だろう、阿散井君」

「お前の所為だ吉良」
「阿散井君の所為だ」
「お前だ」
「阿散井君だ」
もうどっちもどっちだろうが！！
二人とも喧嘩両成敗で・・・ファイナルアンサー！！！（銀さん風）
こうして、そんなドタバタ劇が一夜で二つも続いたリュミエールでの一日は終わった。
◇
〈ユーノＳｉｄｅ〉
翌朝。
昨夜の一連の流れから考えると、ユーノの機嫌はあまりよろしくないように思えるが、いざ起きてみるとそうではなく、ユーノはなのはとヴィヴィオと食事をとりながら終始顔を赤く染めており、その横でなのはは桃色のオーラを纏いながら食事に手を付けていた。
唖然とする一同を余所に、ヴィヴィオが徐に尋ねる。
「ねぇ・・・ママ。今朝からずっとご機嫌だけど、何かいいことあった？」

「ん♪そりゃもう・・・ねぇ・・・♪♪♪」

なのははそう言いながら横でコーヒーを口にする湯気を上げるユーノに笑みを浮かべると、ユーノは顔を逸らして何事もなかったかのように皿を片付ける。

ちなみに、この二人に何があったのかは今回のあとがきに書かれている「魔導師図鑑ハイパー」を参照してもらいたい。

さて、朝食を終えた後一同は二日目となるリュミエール観光を堪能すべく、本日も馬車で移動をするため外へと向かう。

騎士団たちによくしてもらいながら今日の行先を確認していると、ユーノに御叱りを受け木に括り付けられて一夜を過ごした浦太郎が性懲りもなくフェイトへ近づき、彼女の目が少し赤いことを心配した。

「あれ?フェイトちゃん、目が赤いよ?昨日眠れなったの?」

「ああ・・・大したほどじゃありませんよ。ちょっと今日のスケジュールを確認するのに夜更かしをしただけですので・・・」

顔を引きつりながらそう答えるフェイトだが、その横から鬼太郎がこんな言葉を向けて来た。

「ふん!どっかの出歯亀と違って、木に括り付けられて眠れるほど器用じゃないっすよね」

「あらあ!!先輩も見てたの!?恥ずかしい／／／／／／」

思わず気恥ずかしそうに笑ってしまう浦太郎と、そんな彼を一瞥し苦笑しながら立ち去ろうとするフェイト。

「あっ、待って待って！」

浦太郎は直ぐにフェイトを呼び止める。

「まだ何か用ですか？」

「ぼっきの馬車（くるま）、エアコンがあんまし効かないの。フェイトちゃんの馬車に乗せて。何しろ熱いの苦手で汗っかきでさ・・・」

浦太郎はそう言いながら上着ポケットから取り出した何かで頭を拭き始めた。

それを見たフェイトは赤面し、些か起こった様子で浦太郎に言った。

「／／／何で拭いてるんですか！！」

フェイトがそう指摘すると、浦太郎は改めて自分の持っていたものを確認。

「何って・・・のああ！！何でこんなものがここに！？」

それはあろうことか、昨夜浦太郎がハロルドの部屋に忍び込んだ際に押収した彼女のブラジャーであった。

フェイトは拳を固く握りしめると、恥知らずな変態の顔面に裁きの鉄拳を食らわせる。

「自分の馬車に乗りなさい！！」

浦太郎の顔面に食い込むフェイトの鉄拳。

その結果、浦太郎は鼻血を出しながら持っていたブラジャーを手放し、それを透かさず別の人間が取り上げる。

浦太郎はブラジャーを取り上げた人間に向かって怒鳴りつけようとするが・・・

「こら！！人の大事な戦利品・・・ああ！！」

思わずばつの悪い顔を浮かべる浦太郎の正面に立っていたのは、下着の持ち主であるハロルド・ベルセリウスその人だった。

「返してもらって良いかしら？不便なの・・・ここいらじゃ見つけにくいサイズだから。」

ハロルドはそう言ってブラジャーを鞄に閉まって馬車へと乗り込むと、その光景を間近で見ていたキャロとリィンは彼女の豊満な胸と自分の貧相な胸を比較しながら思わずこう呟いた。

「リィンさん・・・何を食べたらあんなに大きくなれるんでしょうか・・・」

「私も出来ればそれが知りたいですーーー／／／」

切に胸が小さいことを気にする小さな背丈な二人組なのであった。

◇

〈六課Ｓｉｄｅ〉

それでは、二日目となる本日のスケジュールを確認しよう。

二日目は先日の三班行動から一変、全体行動を基本にみんなで市内を見学しつつ、この世界の味噌である春夏秋冬を楽しめるスポットを訪れるという趣旨だ。

スケジュール作成は、案内人の龍児・フェイトほか全体指揮のユーノ・スクライア。

現地では既にセスタとスバルが待ち合わせをしている。

ユーノは六課全員が登場した馬車の中でマイクを使って本日の流れを大まかに説明する。

「は～い、みなさん♪本日は全体行動と言うことですので、くれぐれも独りで何処かへ行ったり、あるいは人様に迷惑をかけるような行動は慎むようにしてください。いいですね～♪」

「「「

そんな話はいいとして、取り敢えず本日のスケジュール通り、ユーノ達一行は世界国家基地壇の隊長格四名と共にワクワクドキドキの観光ライフを満喫する。

最初に訪れたのはシャイン国の飛行船に乗っておよそ一時間程先にある大陸・グリーンマーク王国。

この国はリュミエール一の深緑・紅葉のスポットが多々あり、またリュミエールの歴史に関わる数多くの遺産や遺構が眠っており、”リュミエールの民の歴史はグリーンマークから始まった”という学説が飛び出す程の大国だ。

有名なスポットは、王都から程近い場所にある〔紅樹渓谷〕と、太古の戦乱を今に伝える〔戦禍の塔〕と〔戒めの古代都市・ルージュ〕で、他にもキノコや秋の果物が豊富に実る〔リシュ〕と言う大森林や、ディセンダー伝説が今も語り継がれている町〔マンダージ〕等がある。

今回、ユーノ達が向かったのは王国の外れに立地するフィールドアスレチックパークである。

ここでは恋次達男どももそうだが、活発な六課の女性陣もついはしゃいでしまうほどのテーマパークで、リュミエールの魔法技術によって整備された世にも珍しい樹木のアトラクションは目を見張るものだったそうな。

更にここでは遊び倒すだけでなく、同時に秋固有の落ち葉が色づくリュミエール随一の紅葉狩りスポットでもある紅樹渓谷でユーノ達は紅葉も一緒に堪能したそうだ。

次に一行が向かったのは、航路を戻って冬のイベントを数多く体験できるシャイン王国が経営する国立スキー場。

スキーと言うことで、今回は早速スキーを楽しんでもらう訳だが、恋次達はともかくなのはに至っては相変わらず普通の運動が苦手なため、上級者コースは滑れずユーノに付き添われて滑る練習をしていた。

「そうそう。うん。落ち着いて」

「う、うん・・・あ、でもやっぱり転ぶよ～～～」

「大丈夫だって。比較的なだらかな斜面だから。ほら、ヴィヴィオが下で待ってるよ」

ユーノがそう言うと、なのはは大好きな母親を下の方で叫ぶヴィヴィオに注目。

「なのはママ！！頑張って！」

「ヴィヴィオ！うん、ママ頑張るよ♪」

なのははヴィヴィオから元気を分け与えてもらうと、ユーノと一緒に不器用ながらもハの字でスピードを加減しながら下の方までおりていく。

無事に下まで降りることが出来ると、なのははストックをついて一息つく。

「ふう～～なんとか滑れた」

「お疲れ様。」

ユーノがそう言った直後、ヴィヴィオが上から軽快な動きで滑ってくるフェイト（L）と百合を見付ける。

「あ！フェイトママとフェイトさんだよ」

「ホントだ。フェイトちゃん！」

なのはが名前を呼ぶと、二人はなのはと違ってしっかりと足を閉じた状態で三人元まで滑り降りて来た。

「凄いな、フェイトちゃんもフェイトさんも。スキー上手なんだね」

「私は小さいころからスキーもそうですが、身体全般を使った習い事を数多く教わっていましたから。その点、フェイトさんは本当に呑み込みが早くて」

「あ、いえ。たまたまですよ♪私に言わせれば、ヴィヴィオは今回がスキー初めてなのに、もうこんなに上達してる方が凄いよ」

「へへ。伊達にストライクアーツを習ってる訳じゃないからね♪それに、教えてくれたのは他ならぬ先生の鏡みたいな人だからね♪」

「うん♪ユーノ君って本当なんでも教えるの上手なんだもん♪」

「ははは♪いやそこまで言われると照れるな♪」

満更でもない笑顔を浮かべるユーノ。

と、その時百合女が上から滑り降りてくる人物に目を向ける。

「あれ？あれって龍児さん」

「あ・本当ですね」

ユーノ達が注目すると、スキーウェアに身を包みゴーグルを着用した龍児がプロ顔負けとも言える動きで雪の上を滑走し、これを見たユーノ達は思わず拍手を送る。

「わあああ！凄いですねー！」

「流石は龍児♪この色男～？」

フェイトが甘えた声でそう言って来ると、龍児はスキーを止めてゴーグルを外し、整った笑みで言ってくる。

「ありがとう、フェイト。それよりどうだここのスキー場は？さほど気温も低くないし、雪質も柔かいから滑りやすいだろう」

「はい♪そりゃもう抜群に」

と、ユーノが笑顔でそう答えた直後だった。

「「「うわあああああ！！！退いて退いて！！！」」」

「「「「「「？」」」」」」

ユーノ達が振り返ると、なんと直滑降の状態でブレーキが利かず、勢いを増して斜面を下ってくるセスタ、恋次、そしてスバル・ナカジマの三人であった。

「す、スバル！？」

「恋次さんにセスタ君も・・・！」

「あいつら、また調子に乗って危険な事を」

龍児が呆れ顔でそう呟く中、セスタやスバルは徐々に迫ってくる龍児やユーノ達に声を上げる。

「相棒！！！！退いてくれ！！！」

「なのはさんも！！！！ぶつかりますので避けてくださーい！！！」

ユーノ達は咄嗟に道を開けて滑走する三人の通る道を作るが、勢いを増したスキーは止まるということを忘れて真っ直ぐに進み続け、挙句正面に迫ってくる大木に激突しようとしていた。

「あのまま言ったら、スバルさん達が木に！」

「ど、どうしましょう！？」

と、そう誰かが口にした時だ。

ユーノが一目散にスキーを走らせ三人の救出へと向かう。

「ユーノ君！」

「ユーノ！」

まぁ、重要大事の考えを察すれば見当はつくのだが、ユーノ自身も運動能力に関してはずば抜けて高いため、龍児の様にプロ顔負けのテクニックで滑ることなど造作もない。

ユーノはなんとか三人の正面にやってくると、気に激突しようとしている恋次達を抑え込んで直撃を回避する。

三人のスキー板が衝撃で外れると、緊張の糸が切れた三人は重い腰を付き安どのため息をついてからユーノに感謝する。

「ふう～～～助かりました～～～」

「サンキューな、ユーノ・・・マジ神だぜ」

「いやぁ～～～油断しちゃったらついね♪」

無事事なきを得た三人はなのは達と一緒にロッジに戻ると、ここで一同は昼食をとることにした。

自慢のカレーライスを口にしながら、一同は先ほどの出来事を思い返し談笑を繰り広げる。

「ははははは。しかしさっきは本当にもう駄目かと思ったな！」

「貴様と言う奴は・・・初心者のくせにいきなりカッコつけて滑るからそうなるのだ」

「でも怪我が無くて本当に良かったよ」

「これもぜーんぶ、ユーノ先生のお陰ですね。ほら、スバル。食べてばっかりいないでちゃんと謝りなさい」

「いやティア、私ちゃんと謝ったしお礼もしたって／／／」

「はは。こりゃ一生ティアナには頭が上がらないなスバルは」

「ある意味そっちの方がお姉ちゃんだったりね♪」

と、冗談気味にギンガがそう言うと、ユーノ達総勢２３名は思わず笑い声をあげる。

昼食を終えた一同は次なる目的地として、セスタの拠点であるグランマニエを訪れ、セスタとハロルドが絶賛するグルメを食べつくそうということで、港付近の繁華街を訪れていた。

主に食べ歩きな可能なジャンクフードや、スイーツなどを食べ歩くこのツアーは大変女性陣には好評だったらしく、食い意地の張った鬼太郎も大いに喜んでいた。

と、食べ歩きをしつつ馬車へと戻ろうとするユーノ達一行だが、ここでセスタ達がトイレに行きたいと言いだしたため、ユーノ達は暫く待ちになった。

テキトウに時間を潰していると、不意にユーノ達の目にある光景が映って来た。

「ん。あれは――――・・・」

「え」

ユーノ達が目撃したのは、見た目5歳から6歳ほどの少女が性質の悪いチンピラ三人に絡まれている光景であった。

「放してください！止めてください！」

「ふん！俺達にぶつかっといて何言ってやがんだ！」

「だから謝ったじゃないですか／／／」

「謝って住むなら騎士はいらねぇんだよ！ああ！」

「ううう／／／怖いよ・・・／／／／龍真パパ・・・ほのかママ／／／」

チンピラはイビリ散らしながら少女の髪の毛を鷲掴みにし、耳元で大声を上げ、少女は恐怖で思わず涙を流す。

「あ！あんな小さな子がチンピラに！」

「パパ。助けてあげて」

「ようし」

ユーノは早速少女の救出へと向かう。

「泣いてもゆるさねぇぞ！親何処だよ！慰謝料請求してやるよ！」

「それよか、こいつ人質にしたほうがもっといい見返り貰えるかもな！ははははは！！」

と、チンピラの一人がそんな事を口にしたその時だ。

「おい」

「あ？」

自分を呼ぶ声に振り返るや否や、目にも止まらぬ右ストレートがチンピラの顔面を直撃。

「あべっぼ！」

一瞬目を疑う仲間のチンピラと少女だが、その際少女は唐突に現れた日本の刀、逆刃刀・真打と洞爺湖木刀を携えたその男、ユーノ・スクライアを目撃する。

「！（騎士！？）」

剣を持っていたことからそう感じてしまった少女。

ユーノは眉間にしわを寄せながら洞爺湖木刀を取出しチンピラと対峙。

「なんだてめぇ！世界国家騎士団の騎士か！？」

そう尋ねられると、ユーノは木刀を肩に乗せ気だるそうな口調で言ってくる。

「ぎゃあぎゃあ、喧しいんだよ。発情期ですか、コノヤロー！」

この口調を聞いた瞬間、なのは達は一瞬目を点にするが、直後・・・そんなユーノの背後に浮かんでくる彼に洞爺湖木刀を授けた異世界の友人、白夜叉こと坂田銀時の面影に思わず目を疑った。

「あ・・・あれは・・・」

「どうしてだろう・・・ユーノ先生が――――――・・・」

「銀さんに見える・・・！」

なのは達がそう感じてしまう中、ユーノは徐に隣に立つ涙目の少女を一瞥してからチンピラ二人に木刀を向ける。

「見ろこれ。てめぇらがイビリ散らすもんだからこんな幼気な子供が・・・」

その瞬間、ユーノは先ほど殴りつけた男に向かって木刀の一振りを豪快に放つ。

「ワンワン泣いちまったじゃねぇーか！！！」

「ぐあああ！」

男はその一太刀を受けると、目を白くして気を失い、残った仲間の二人はユーノの無茶苦茶な強さに目を疑った。

「な、お前！何しやがんだ！」

「俺達にケンカ売るつもりかテメェ！」

「僕はな・・・弱いものイジメをするのも嫌いなんだが、それ以上に弱いものいじめを平然と目の前でする輩の方が・・・――――もっと嫌いなんだよーーー！！！」

銀時のような口調で木刀を構えたユーノは大きくそれを振り回し、目の前の二人に刹那の衝撃を与える。

一瞬の間を置いたのち、チンピラ二人は力なく倒れてしまう。

「「ぐっは・・・」」

目の前でユーノの強さを窺っていた少女は、目を見らいた状態で心の中でこう呟く。

「（その人は、騎士と言うにはあまりに荒々しく・・・しかし、チンピラと言うにはあまりに・・・）」

そう呟こうとした瞬間、ユーノが木刀を収めて唖然とする少女に手を差し伸べ優しい笑みを向けて来た。

「大丈夫かい♪」

「（優しく、真っ直ぐな瞳をして男の人だった）」

ユーノが少女を助けた丁度その時、用を済ませた龍児達がなのは達の元へと戻って来た。

「みんな、お待たせっ・・・って。何この状況！？」

「なんでこんなことに・・・？」

すると、龍児はユーノの側に居た少女の顔を見るなり徐に近づいて行く。

「ん？君は・・・」

「あ」

「？」

少女も龍児の姿を見るなり何かに気づいたらしく、お互いに近づいて行くと二人は正体を知っていた様子で嬉々とした声を上げる。

「龍児おじさん！」

「やっぱりそうだ。君は、龍真（りゅうま）の娘の美桜（みお）じゃないか！」

「え・・・龍真って？」

なのは達が訝しげな顔を浮かべると、月光院スバルが説明をする。

「夜御倉隊長の一つ下の弟さんです。夜御倉龍真さん――桜華国のギルドマスターを務めていて、あの子・・・美桜さんの父親です。」

「へぇ。あいつに弟なんていたのか・・・」

「意外であったな」

そうして、先ほどの騒動でギャラリーがそれなりに集まってくる中、人混みをかき分けて美桜の名前を呼びながら近づいてくる一人の男の姿が見えてきた。

「美桜！」

「あ！龍真パパ！」

美桜はそう言って父であるその男、茶髪にエメラルドの瞳を宿した優しい目付きにほんわかな顔をした龍児の弟、夜御倉龍真へと抱きついた。

龍真はいなくなった娘を探していたらしく、無事な様子の娘の姿に安堵の表情を浮かべていると、彼は目の前で立ち尽くす不敵な笑みの龍児を見るなり唖然とする。

「あれ！？兄さん」

「久しぶりだな、龍真。元気そうだな」

龍児は龍真との再会を果たすと、ユーノ達を連れて一度喫茶店の中へと入って行き、話を伺うことにした。

龍真は美桜を横に座らせてから、コーヒーを飲む傍ら美桜を助けてくれたユーノに感謝の意を表する。

「はは。そうでしたか。この度は娘を助けて頂きありがとうございます」

「ありがとうございます！」

「いえ。大したことはしてませんよ♪怪我人を作った野蛮な男ですよ僕は」

「あれくらいがちょうどいいって。あの手のチンピラの躾には」

「うんうん。パパは何も間違ったことしてないよ。ねぇ、ママ」

「にゃはは。そうだね。だけどちょっとだけ力加減抑えた方がよかったかも♪」

「はは。違いないね♪」

ユーノが笑みを浮かべると、他のメンバーもこぞって笑みを浮かべる。

「改めまして、僕が兄さんの弟で夜御倉龍真です。これよろしければみなさんに」

龍真はそう言うと、自分の技術を活かして作り上げたブローチをここにいる人数分用意し、多種多様なそえをプレゼントしていき、女性陣は思わず甲高い声を上げる。

「うわああ！キレイ！」

「いいんですかこんな高価なものを？」

「ほんのささやかなお礼の気持ちです。受け取ってください」

「ヤッキー！こいつは儲けたぜ！」

「ありがたく頂戴いたしますぞ」

一同が龍真の行為に感謝の言葉を表した後、龍児が周りを見渡してから気になったことを聞いてきた。

「龍真。ほのか氏は一緒じゃないのか？」

「今日は家にいるよ。僕と美桜だけで散歩をしていたんだけど、どうも都会を歩くのは苦手で・・・いつの間にか見失っちゃって」

龍真がそう言って来ると、同じ都会を歩くのが苦手なキャロが便乗してくる。

「あ。その気持ち私も分ります！私も都会を歩くはどうも苦手で・・・」

「キャロも龍真さんも似た者同士ですね」

「キャロの場合は、単に背が小さいのが原因だろうけどな」

「む～～～それもこれも、エリオ君が私の栄養成分を吸い取っちゃうのがいけないんだよ／／／」

キャロが悔しそうにコーヒーを飲むエリオに顔を向けると、なのはもこれに便乗してこう言ってくる。

「エリオ。駄目だよ。キャロの栄養成分を吸い取っちゃ」

「え！まだそれ言うつもりですか？！どうかご勘弁願います／／／／／／」

気恥ずかしそうにエリオがそう言って来ると、思わずこの場いる全員が笑い声をあげた。

「「「

この男の正体は何なのか！

次回、衝撃の事件勃発！！

その名は龍真・蠢くリュミエールの闇の手（後書き）

ユーノの部屋

ユ「みなさん♪すっかり冬到来と言うことで、防寒対策はしっかりしていますか♪本日もそんな会話から始まるこのコーナーでありますが、本日のゲストは龍児さんからの紹介を受けています。世界国家騎士団五番隊隊長で、打たれ強さはナンバーワンのセスタ・ベルセリオス君です♪」

某お昼のワイドショーで流れるＢＧＭに乗りながら、セスタが扉の向こうから現れる。

セ「はは。みなさんどうも。セスタ・ベルセリオスです！本日はオイラのためにこんなにたくさん集まって貰えて、ホント凄いな！」

思わず照れ笑いをするセスタ。

ユ「それじゃ話を始めようか。なんか最近悩みがあるって聞いたんだけど・・・具体的に何に悩んでる訳？」

セ「ああ・・・実は最近、うちの副官のスバルの様子がおかしいんだ」

ユ「おかしい？」

セ「見ての通り、あいつ・・・かなり人見知りが激しい上に小心者でさ。滅多に自分の感情とか出さない性格なんだ。ところが、この前見たときはなんかこう・・・雰囲気が違ってたっていうか、妙に

ニコニコしてたって言うか・・・部屋に戻ったらなんか一人で唸ってるんだよね・・・」

ユ「ほうほう・・・それはつまり、恋をしてるって事じゃないの♪」

セ「な！ば、バカな！あのスバルに限って恋なんて／／／」

断固否定の態度をとるセスタ。

ある意味では古来の日本の父親像にも見えなくもない。

ユ「はは。なんだか厳格なお父さんに見えなくもないけど、恋のひとつや二つ認めてもいいんじゃないの？」

セ「いや！スバルに恋なんて早いよ！恋愛のイロハも知らない奴が、その辺のチャラオとかにナンパされて振り回されて、挙句貢物とかされて養分吸い取られて干乾しになるなんて・・・オイラは死んでも許さない！！！」

ユ「どんだけ後のこと考えてる訳！具体的なこと言うとなんかホントっぽくなるから止めてくんない！」

セ「と、兎に角！このままスバルが悪い男にひっかかるなんてことは何としても防がなければ！ユーノ！この非力なオイラに力を貸してくれ！！頼む！この通りだ！！」

ユ「非力なって・・・その体であんな大剣二振り持てる人がよく言うね・・・」

次回のゲストは、スバルさんです。

果たして、気になる恋の真相は!?

魔導師図鑑ハイパー!

前回の続き。

いつの間にかユーノの部屋に忍び込み、あろうことかベッドにもぐりこんでいたなのはは理性が吹っ飛びそうなユーノの肩をぎっしりと握ったまま全く動かず幸せそうに眠っている。

なのはが抱きついて10分経過。

ユ「(何この状況どうしてこうなった!?とりあえず落ち着け冷静になれクールになるんだ僕!流石に寝ている相手にどうこうするのはマズイというか、すでに人には言えないあんなことやこんなことをやってるような雰囲気が・・・いやいや!!僕は現在欲望を失ってるブランク・オブ・デザイアなんだ!だけどこの状況は・・・!!ダメダメ!!!男としてこの矜持だけは捨ててはいけない気がするものの既にどうでもいいじゃん?と思ってる自分がいる／／／)」

心の中で葛藤するユーノ。

それから更に20分が経過し、なのはが徐々にユーノの正面に回り込む。

ユ「(えっと興奮するしないの二択なら間違いなく興奮しています!僕も立派な男ですから・・・って言うかなのはさん何か登ってきていない!?どんな夢を見たらこんな行動になるんだろう・・・その前にふくよかななのはたんの胸が・・・???・・・は!いかん

いかん！欲望に惑わされるな！だがしかし理性のライフがガンガン削られている。僕もガンガンおかっ・・・チガーう！！！頑張れよユーノ・スクライア！！堪えるんだチクショー！！しかしもう結婚（ゴール）してもいいよね？と思う自分がいるのもまた事実・・・）」

と、大いに悩み苦しむユーノだが、三十分が経過してなのはに違和感を感じる。

ユ「（しかしなんか寝息も聞こえない気がするんだけどもしかして・・・）」

ユーノは思い切って、なのはに尋ねる。

ユ「・・・なのは。もしかして起きて・・・」

な「ぐ～～～」

と、なのはは飽く迄寝たふりを続けるが、これにはユーノもため息をつき、気恥ずかしそうに決意をする。

ユ「（やっぱり寝たふりか・・・しょうがないな・・・）」

すると、ユーノは徐に布団の中に手を入れ、なのはの腰を触った。

その瞬間、なのははピクリと動いて顔を赤くしながら目を覚ます。

な「ストップ！待って！？起きるから！！」

ユ「おはよう」

な「うー・・・ちょっとした出来心なのに・・・なにも手を入れてこなくても・・・」

と、ぼやいているとユーノは満面の笑みだが、そこには確かな殺気を孕んだ様子で次のように言ってくる。

ユ「ところでなのは・・・あんなイタズラするくらいだから、何されても文句無いよね？」

な「（ドキ！）」

なのはは冷や汗をかきながら静かにベッドから出ようとする。

な「あははは♪じゃ、じゃあ・・・私部屋に戻るね／／／お休みユーノ君／／／」

だがしかし、その瞬間腕を掴まれユーノに捕獲される。

ユ「問答無用♪」

な「ふにゃあああ～～～」

なのははこの後、ユーノによって軽い御叱りと言う名の猛烈なアタックを受けることになり、フェイトは耳をそばだて中で行われる激しい行為に嫉妬の炎を燃やす。

な「あああ～～～ん？？？ユーノ君もっと激しく～～～～？？？」

ユ「こう？」

な「そ！もっと！！あ～～～？？？」

フェ「あの淫獣め・・・・・・許さん！！！！！！！」

百合女激怒まで、あと０，１秒。

次回予告

フェ（Ｌ）「さぁて、次は何処に行きましょうか」

ユ「そうですね・・・ん？危ない伏せろ！！」

フェ（Ｌ）「キャ！一体どうして・・・！？」

龍児「どういう事だ！？何故フェイトが狙われた！」

龍真「違う。狙われてるのは僕ら全員だ！」

な「どういうこと？！私達が狙われてるって・・・！」

？「ふふふ。夜御倉龍児・・・お前に絶望を与えてやるぜ」

ユ「ユーノ・スクライア外伝『動き出す魔の手・夜御倉家の秘密』」

ヴィ「絶対見てください！」

動き出す魔の手・夜御倉家の秘密（前書き）

一「おう！リュミエール篇じゃ出番が皆無な、黒崎一護だ！今回からいよいよ本格的に動き出す謎の魔の手。ユーノ達に襲い掛かる敵の正体は？そして、二十年前に夜御倉家で起こった事件とは？」

織「最後まで目が離せない、ユーノ・スクライア外伝　リュミエール篇」

コン「はじまるぜ！」

動き出す魔の手・夜御倉家の秘密

〈夜御倉家Ｓｉｄｅ〉

ユーノ達が外の方で観光を満喫している間、二番隊騎士団寮の近くに立地する、ここ夜御倉邸では比較的平穏な日常が続いており、そこで働く使用人もいつもと変わらぬ日常を送っていた。

が、そう思ったときに限って、場の空気を一変する不吉な出来事が起こったりする。

「！」

この夜御倉家の筆頭使用人であり、エルフ族で今年で４００歳を迎える白髪に深緑の柔らかな瞳、尖った耳を持つ老人、フレックス・レイリーが誤ってティーカップを落としてしまった。

フレックスは床に落ち割れたティーカップを凝視しながら、頭の中に浮かんできた虫の知らせに目を見開く中、すかさず他の使用人が近づきフレックスの安否を気遣う。

「フレックス様。大丈夫ですか？お怪我は・・・」

「ん？ああ・・・大丈夫だ。すまない。歳の所為か手が震えたな。いやはや・・・歳はとりたくないものだ」

心配を懸けまいと笑顔を作って誤魔化すフレックスは、割れたカッ

プの破片を眺めながら眉間にしわを寄せる。

「（なんだ・・・今の悪寒は・・・――――何かが起きようとしているのか）」

と、そんな時。

また別の使用人がフレックスの元にやって来、こう伝えてきた。

「フレックス様。直通のお電話です」

「私に？」

フレックスは自分に電話がかかって来たという旨を知らされると、意外そうな顔を浮かべる。

そして、真っ直ぐに電話のある部屋へと向かって受話器をとる。

「はい。レイヤーです」

すると、受話器の向こう側から聞こえてきたのは不敵な笑みを浮かべながらまるで何かを企てる気でいるフレックスに取って悪い意味で思い出に残っている男の声だった。

『ふっふはははは・・・歳はとりたくないものだな、フレックス』

「！」

『これからは自分のことより当主とその御仲間の身を心配することだな』

「き、貴様！何故その事を！！」

『ふふふっはははははは！！！』

男は高笑いを浮かべながら一方的に電話を切ってしまう。

「く・・・っが！」

フレックスは険しい顔を浮かべながら受話器を強く元に戻し、龍児とユーノ達全員に襲い掛かろうとしている悪しき存在に危惧の念を抱く。

「な・・・なんと言うことだ・・・！何と言う・・・！！」

フレックスの元にかかっていた一報と、それを示唆するかのように動き出す謎の魔の手、果たしてユーノ達の身に何が迫っているのか？

◇

〈六課Ｓｉｄｅ〉

その頃、龍児の弟である龍真とその娘、美桜と合流したユーノ達一行はすっかり意気投合した様子で、グランマニエで有名な繁華街を訪れ、そこで待ちに待ったとばかりに、お土産を購入するため店へと入っていく。

「ふふふ・・・待っていたぞ！イッツ、お土産タイム！！」

ルキアは相当嬉しそうな様子で意気揚々とする中、恋次と吉良は些

か心配した様子だった。

「なるべく少ない荷物で帰ろうな・・・」

「ふふ。分かっておるわ♪ほほほほほ♪」

異様にテンションの高いルキアは二人を後に、買い物に出かける。

残った二人は一度顔を見合わせてから、自分たちの買い物を始めようとする。

「・・・さてと、俺達は・・・」

と、その時二人の耳に聞こえてきたのはルキアの声だった。

「えーと、チョコレート３０箱だ♪」

「「えええーーー！」」

思わず耳を疑うかのような膨大な量の品を購入しようとするルキアに目を向けると、ルキアはメモを見ながら一切気にする様子もなく次々と品物を読み上げる。

「それと、ビーフジャーキー１５袋。あ、それからだな・・・」

恋次と吉良は思わず唖然としてしまう。

「全然守ってねェじゃねぇかよ」

「多分朽木隊長以外にも、一護君達現世のみんなにおすそ分けする

つもりなんだろうね」

結局のところ、土産を購入するということは男は女にとって単なる荷物持ちとしての意味しか持たなくなってしまうのだ。

恋次達がルキアに振り回されている中、他のメンバーはミッドチルダとはまた一味違ったファンタスティックで奇想天外な商品が陳列するリュミエールの名産品に目移りしながら買い物を進めていた。

「へぇ～～～リュミエールってこういうお菓子が人気あるんだ」

「シャーリーさんやヴァイス陸曹長にもちゃんと買って行かないとね」

そう言うティアナだが、隣で話を聞いていたギンガがおちょっくた笑みを浮かべながらこんなことを言ってくる。

「あら。ティアナの場合、ヴァイス陸曹長は手作りじゃなくて♪」

「な／／／ぎ、ギンガさん止めてくださいよそう言う冗談は／／／」

思わずその一言に赤面するティアナだが、スバルも面白がって便乗する。

「へへ♪満更でもないくせに～♪」

「あんたに言われたくないわよ！！」

一方で、八神家の面々はお菓子コーナーで名産品のお菓子を眺めながら、どれを購入すべきか迷っていると龍真がアドバイスをしてき

た。

「これなど如何でしょうか？」

「おう。はやて！これこれ！」

ヴィータが呼びかけると、はやて達はそのお菓子を手に取り笑みを浮かべ、龍真に感謝の言葉をかける。

「いはや、すみませんな～こんなにしてもらって♪」

「御気になさらず。こちらとしても、娘を助けてもらった身ですし、今日一日はお礼と感謝の意を込めて兄さんたちと共に案内させていただきます。」

と、ここでシグナムは先ほどから気になっていた疑問を龍真にぶつける。

「そう言えば、あなたからは龍児のような魔力反応が見受けられないが、もしや魔力資質が全くないのでは？」

「その通りです。僕は兄さんと違って魔術は使えません。その代り、特殊能力として水を自在に操ることが出来るんです」

それを聞くと、アギトとザフィーラがシグナムの横でこう言って来た。

「だったら少しこいつの頭その水で冷やしてくれよ。なりふり構わずガチンコ勝負好きにはほとほと参ってるぜ」

「一応これでも、“女”なのだ。もう少し女性らしくあって欲しいものだ」

「な／／／ザフィーラにそんなことを言われるとは思ってなかったぞ／／／」

夢にも思っていなかったものから女性らしく合って欲しいと言われてしまうと、剣の騎士のシグナムも気恥ずかしそうに赤面する。

ザフィーラの気持ちを組んで敢えて言おう・・・これでも一応女性なのだ。

そして、高町家の三人もまた仲良くお土産の品を選んでいた。

「ヴィヴィオ。買うのはこれで全部？」

「うん。コロナとリオにバウラにミツオ。でもってこっちがアインハルトさん！」

「ふふ。きっと喜ぶよ。さぁ、お会計しておいで♪」

「は～い♪」

なのはからお金を受け取ったヴィヴィオは嬉々とした表情を浮かべながら会計へと向かい、その様子をユーノとなのはは笑顔で見詰めていた。

と、高町家の様子はいいとして・・・恋次達死神組の様子は大分違っていた。

恋次と吉良は完全にルキアの荷物運びの道具とされており、その手には今にも零れ落ちそうなほどの品物が抱えられており、恋次と吉良は思わず涙を流しながら意気揚々と鼻歌を歌いながら前を歩くルキアに訴える。

「う～～ルキア～～～これぐらいにしとこうな～～～／／／」

「お！そうだ、井上にナッツの詰め合わせを！」

ルキアは二人の話を完全に無視して買い忘れをの物を買いに行く。

「はぁ～～～」

思わずため息をついてしまう恋次だが、ここで吉良がある人物の姿が見えないことに疑問を抱いた。

「そう言えば白鳥君見ないね」

「あの野郎・・・また単独で何処行きやがった。あいつも見栄っ張りだから、きっと無駄に高いモノとか買いそうだぜ」

「はぁ。僕らは今日一日荷物運びか・・・・・・」

と、何気なく吉良が周りを見渡した時、噂をすればとばかりにあるコーナーの前でじっと陳列された商品を見ながら佇むその男、白鳥礼二を発見する。

「あ。白鳥君だ」

「何見てんだあいつ？」

二人が見つめる先に映る白鳥。

無言のまま白鳥が見つめるもの・・・それはマニアでさえ買う人は滅多にいない、奇妙な体つきと顔をした木彫りの人形、それも等身大であった。

非常に興味を持った眼つきで白鳥が立ち尽くしていると、それを見た女性店員が近づき怪しげな口調で笑顔を向けてくる。

「いらっしゃいましー」

「これを四つ貰おうか。領収書の宛名は『阿散井』で頼むぞよ」

「リボンをお付けしますか？」

と、その直後に恋次達が三人が挙って走って来、必死で英語でアピール。

「「「ノノノノノノノーン！！！」」」

思わず顔を引いてしまう店員だが、更に恋次とルキアは顔を寄せて慣れない英語で主張する。

「ドントショッピング！」

「マイファミリーノーマネー！！」

が、そんなことお構いなしに白鳥は並べられた木彫りの人形を見つ

める。

「お～～これは京楽隊長の好みにピッタリの・・・」

と、そう言いかけた瞬間白鳥は三人の制裁を受ける。

全身痣だらけとなった白鳥は恋次に引きずられながら入口へと向かう。

「人の金で買い物しようとしてんじゃー！！」

「そんなデカイのどうやって持って帰るつもりだ貴様は！」

「・・・これだから小市民は・・・」

「小市民関係ないから！」

やれやれ・・・無駄に見栄を張るというのは、なんとも浅ましいことか・・・

お土産を十分に購入した一行は外に出ると、抱えられないほどの量の荷物を失くさないようにしっかりと持ちながら、満足げな笑みを浮かべる。

「ふう～～たくさん買っちゃった！」

「今日はまた随分買ったね、キャロ」

「自然保護体の皆さんの分もありますし、フェイトさんもドッグフードいっぱい買ってましたよね。」

「アルフ、きっと喜びますよ」

「うん。そうだね。あの子何だかんだ言ってドッグフードが好きなんだよね。本当は狼のくせして♪」

「「はは」」

と、和やかに談笑をしていると、龍児が振り返ってメンバーに言う。

「買い物も無事に終わったことだし、今日はそろそろ引き上げよう」

すると、それを聞いたマッドサイエンティスのハロルドが不満げな様子でこんな恐ろしいことを口にする。

「え～私まだ買いたいものあったのに～オオトカゲの皮の成分を搾り取ったエキスとか、コオロギの佃煮とか」

「うえええ！！！何つーもん買おうとしてる訳姉さん／／／」

「想像もしたくないよね・・・」

すると、何気なくその会話を聞いていたユーノが口を挟む。

「そうかな。コオロギに限らずあの手の食材は結構美味しいと思うけどな」

「って！食べたことあるんっすか店長！？」

鬼太郎はあからさまなリアクションをとって驚愕の表情を浮かべ、

なのはとヴィヴィオは苦笑いを浮かべながらユーノを見つめる。

「今更だけど、ユーノ君ってかなりのサイバーだよ・・・もしかして小さいころからそんなものを食べて来たとか？」

「これと言った食材が無い時はね。道端に生えてる食用の草だけって言う日もざらにあったよ。尤も、文句なんて言ってたら生き残っていけないからねスクライアは♪」

「道理でお前の欲が渇く訳だ・・・」

と、恋次が呟く。

まぁ実際・・・ユーノ・スクライアにとっての欲が常人には理解できないような巨大なものなのか、果ては非常に小さく一日の生活そのものに満足を得ているのかは明確にはされていないが、欲のない人間と言うのは実に気味の悪い話であったりもする。

龍児達もつい顔を引きつってしまう訳だが、時間を気にして龍児が話を元に戻す。

「おっと。立ち話が過ぎてしまった。さぁ、みんな帰ろう」

すると、ハロルドが龍児の肩に手を乗せて次のように提案する。

「それもいいけど、どうせならこのままレストランで食事でもしていかない？」

「お！流石姉さん！いいこと言う！相棒もさ、堅苦しいこと言わないでみんなで食事に行こうよ！」

「龍児。私もお二人の意見に賛成だわ」

「兄さん、僕も」

「そう言ってますが、どうします？」

ユーノがみんなの反応を一通り確認してから声をかけてくると、龍児は少しを間をおいてから諦めのついた笑みを浮かべて返事をする。

「仕方ないな。よし、なら飛び切りの店で美味い物を喰わせてやろう」

「わはは！やった、やったー！」

「よっしゃー！さっさと行こうぜ！」

一同は早速グランマニエにある絶品の料理が堪能できる繁華街を目指して馬車を走らせる。

そして、馬車から降りた一同は国家騎士団の者も頻繁に訪れるレストランへと到着、店の中に入ろうとする。

しかし、そんな一同の姿を遠い彼方に聳え立つビルの一室から組み立てたライフルのスコープ越しに覗く例の男。

ガラスカッターで適度の大きさに開けた穴にライフルの先端を付きだし、スコープで一同を覗き微調整を繰り返しながら男が標的にするのは、龍児の婚約者のフェイト・Ｌ・ムーン。

「ふふ・・・夜御倉龍児・・・絶望を味わってもらうぞ。」

そんな狙撃の的にされているとは露知らないフェイトを含むユーノ達は馬車を降りると順番に店の中に入ろうと歩き出すが、ここでフェイトの前を歩いていたハロルドが忘れ物に気付き動きを止める。

「あら？」

「何か？」

「あ、ごめんなさい。馬車にバッグを忘れてきたわ。」

「あっ、私が取って来ます」

フェイトは駆け足で馬車の方へと戻ってハロルドのバッグを取りに向かう。

「フェイトちゃん～～～何所行くの♪」

それを見た浦太郎は相変わらずの様子で声をかける。

だが、その時ユーノが何気なく見た遠方のビルから光った怪しげなものを見るや否や表情を一変。

「はっ！」

ユーノは血相を変えて馬車へと向かったフェイトの元へ駆け出し、大声で呼びかける。

「伏せろ！！」

「えっ？」

フェイトの呆気にとられた声が漏れた瞬間、フェイトに狙いを定めた男がビルの一室からライフル弾を発射。

ユーノはギリギリでフェイトを抱きかかえ銃弾を避けた。

そして、銃弾は跳ね返りレストランの窓ガラスを突き破った。

状況が直ぐに読めた六課前線メンバーと龍児達、さらには周りにいた民衆が一様に驚愕の表情を浮かべる。

「「「うおおお！？」」」

「「「え！！」」」

ユーノはフェイトを抱きかかえたまま地面を転がりながら次々と飛んでくる銃弾を避け続ける。

銃弾の一発が逸れてなのはとヴィヴィオの近くまで飛んでくる。

なのはは本能的にヴィヴィオを庇って銃弾を回避し、その瞬間近くのフロントガラスが砕け散る。

「きゃああ！ユーノ君！」

「パパ！」

「「「店長！！」」」

龍児国家騎士団は急いで周りの一般人と、六課前線メンバーを安全な場所へと避難にさせようと動き出す。

「地下へみんなを避難させろ！非常事態だ！！」

セスタの指示を受けたスバルと現場近くにいた他の国家騎士団の多くは動き始め、六課メンバーと身の回りのものたちに避難を促す。

「（フェイト！）」

龍児は心の中でそう呟きながら、ユーノと最愛の人の身を案じ、自分の為すべきことをする。

そして、一同が避難した後も容赦なく飛んで来る銃弾。

「く」

馬車の陰でフェイトを守りつつ銃弾を避け続けるユーノ。

そして、狙撃が一通り済むとユーノは狙撃が行われたビルの方へと徐に顔を出し、狙撃者に撃たれない程度で顔を覗かせる。

ユーノがビルの方へと目を向けてくると、スコープを通して見ていた例の男は、意外そうな顔を浮かべた後ほくそ笑む。

「ん・・・――――翡翠の魔導死神」

男はライフルを窓から所定の場所から外すと、嬉々とした顔で呟く。

「こいつは面白くなって来た」

一方、無事に狙撃からフェイトを守り抜いたユーノはフェイトを立たせてから言う。

「もう大丈夫です」

「ユーノさん・・・ありがとうございます／／／」

身体を張って自分を守ってくれたユーノに深い感謝の意を表するフェイト。

と、ここで龍児となのは達全員が二人の元へと走ってくる。

「ユーノ君!フェイトさん!」

「大丈夫か!?」

「ええ。何ともないわ」

フェイトの無事な姿を確認すると、なのは達、そして龍児は何よりも安どの表情を浮かべ、その後で龍児は心の底からユーノに感謝を表する。

「よかった・・・――――ユーノ、ありがとう。フェイトを守ってくれて」

「いえ。怪我が無くてよかったです」

「だけど今の狙撃は一体・・・!?」

と、その時だ。

龍真が現場に落ちていた重要な証拠を発見する。

「！兄さん。これを」

龍真は落ちていた証拠品・・・ライフルの銃弾をハンカチで手に取った後、龍児の掌に載せる。

「これは・・・」

「・・・・・・」

龍児を始め、ユーノ達も掌の中の銃弾に目を向けると、ユーノは眉をひそめて険しい顔を作った。

ユーノ達が現場を離れる直前、狙撃者であるその男はケースにライフルを分解して収納すると、ビルの一室から出ていき移動を開始。

男がグランマニエの市内に足を伸ばした少し時間が経った後、偶然にもグランマニエで御忍びの買い物に来ていた倭国出身の十一番隊隊長・如月京介は自分が仕える倭国の姫君が購入した大量の服を手に抱えながら、ぶつくさと文句を垂れる。

「まったく・・・女って奴はどうしてこうも大量に買い込むんだ」

「だって試着しましたら、京介がどれも似合うと申しますから」

「仕方ないだろ。お前は何を着ても似合うんだから」

「まぁ。それは褒めてくれていますの♪」

「事実を言ったまでだ／／／」

気恥ずかしそう言いながら、京介は姫と共に歩道を渡りきる。

と、その直後だ。

京介の耳に聞こえてくる狙撃者の声と指を鳴らす音。

「タクシー！」

「！」

京介は一瞬聞き違いではないかとさえ思った。

姫は突然足止めた京介に訝しげな眼差しを向けて言ってくる。

「あら？急に立ち止まって、どうしたのです？」

京介は狙撃者がタクシーに乗って何処へなりとも去って行ったあと、眉間にしわを寄せながら蘇ってくる忌まわしいその男の名を呟く。

「・・・・・ダンケルク・・・！」

京介とその狙撃者、ダンケルクとの間に何があったのか？

◇

〈六課Ｓｉｄｅ〉

少し時間が経ち、ユーノ達は予定を変更して足早に二番隊騎士団寮へと戻ると、全員で一か所に固まった方がいいというユーノの提案の元、一同は七階の大会議室へと集まっていた。

一方、龍児とフェイトら二番隊騎士団の直轄する桜華国ではこの度の狙撃が逸早く号外として民衆の元へと配られていた。

「号外！号外！世界国家騎士団の騎士が狙撃されたよ！号外！号外！！」

拾った記事の中身を確認すると、見出しとリード文にはこう書かれていた。

『世界国家騎士団の騎士、フェイト・Ｌ・ムーン、繁華街で何者かに狙撃される！しかし、同氏に怪我はなし。』と。

さて、現在大会議室へと集まったユーノ達他、龍児・フェイト・セスタ・ハロルド・スバル・そして龍真と美桜は、先ほどの狙撃について次のように話し合われていた。

「いや～～～さっきの狙撃はぶっ魂消たぜ。何せいきなりだもんな」

「ああ。それにしても狙撃されたのがフェイトとは――――――誰がこんなことを！」

「三番隊隠密機動が今総出で調査に出てる。その結果次第かな。僕らが動くのは」

「ああ」

渋い顔を浮かべながら腕を組む龍児。

と、ここでザフィーラが逸早く狙撃に気付いたユーノにこう言ってきた。

「しかしスクライア。あんな狙撃が来る事がよく分かったな」

「ホント。私達は全然気づかなかったのに」

「クラールヴィントのセンサーにも反応は見られなかったわ」

「なーに。危機察知能力が過敏に働いたことが功を奏しただけだよ。それに、あれは魔法による銃撃じゃない――れっきとした実弾。僕らの世界で言う“質量兵器”さ」

質量兵器と言う単語を耳にした瞬間、なのは達魔導師組もそうだが、死神組やスクライア商店メンバーも大いに驚いた。

「え！質量兵器！？」

「本当ですかそれ！」

「現場に残されていた銃弾を押収してきた。火を見るより明らかだよ」

ユーノはそう言って、懐から先ほど押収してきた銃弾を取出し、もう一度全員の目の前に公開する。

はやては白い布で指紋が付かないようにそれを手に取って目を細め、それが紛れもなく地球などで使われている銃と同じ実弾であることを断定する。

「確かに、ほんまもんの実弾や」

「これがあの時撃ち出された・・・」

すると、エリオが龍児にふと感じた疑問、即ちリュミエールにおける質量兵器に関する事情を尋ねる。

「龍児さん。この世界には質量兵器ってやっぱりあるんですか」

「多少な。もっとも、国際法に触れるから、大っぴらに製造が出来る訳ではないが、相変わらず魔力を持たないものの需要は高い為、重火器の密輸は当たり前のように裏で行われている」

「そうした武器の密輸や違法売買を取り締まるのも、世界国家騎士団の務めですから」

「そうですか」

と、その時唐突に部屋をノックする音が聞こえて来、一同が耳を傾けると、龍児が返事を返す。

「？入れ」

ドアが開くと、息を切らした様子で部屋に入ってきたのは夜御倉家筆頭使用人のフレックス・レイリーだった。

「龍児様！！」

「フレックス」

「おお！フェイト様もご無事でしたか・・・！おや？龍真様も御一緒で！」

「うん。元気そうだね、フレックス」

龍真は久しぶりの再会を果たすフレックスと握手を交わし笑みを浮かべる。

「あなた様もお元気そうで。一昨年の祝賀会以来でしょうか」

「もうそんなに会ってなかったのか」

と、ここでキョンとした顔を浮かべるユーノ達だが、代表してなのはが尋ねる。

「あの、この人は？」

「夜御倉家の執事で、フレックスだ。」

龍児がそう言うと、フレックスが前に出てきて懇切丁寧な挨拶を交わす。

「これはこれは。ユーノ・スクライア様とその御友人の方々、この度はリュミエールにようこそおいで下さいました。先ほどご紹介に上がった、フレックス・レイリーと申します」

「ああ、どうも。ご丁寧にわざわざ」

一同は杓子定規に挨拶をしてきたフレックスに頭を下げる。

そして、改めて龍児が申し訳なさそうな顔でユーノ達に言う。

「なんだか済まないなお前達。折角の観光がとんだ事になってしまって」

「あ、いえ。気にしてませんよ。」

「そんなことより、先ずはフェイトさんを撃ってきた狙撃手を見付けるのが先決です」

「しかし、ここの部外者であるお前達を危険な目に巻き込む訳には・・・」

「困ったときはお互い様ですよ♪」

「そうそう。フェイトちゃんを狙ったってことは・・・相手も相当なもっこり男に違いないよ！ここは何としても僕が守ってあげないと！」

「お前に守ってもらうくらいなら死んだ方がましだと思ってるぜ」

「どういう意味さ先輩／／／」

浦太郎が顔を真っ赤にして声を上げると、これを聞いた一同は思わず笑い声をあげる。

その後で、恋次が真剣な眼差しを浮かべて言う。

「兎に角、観光は一先ず中止だ。どうも嫌な予感がするぜ・・・明日もなんか、今日と似たことが起きそうでならねぇ――――――」

「そ、そんな悲観的に捕えるのはちょっと」

「いや。一度起こったことが必ずしも偶然だと言いきれないのも事実さ。警戒は強めていた方がいいな」

「そうですね――」

一同が眉間にしわを寄せながら先の見えない不穏な影に神経質になる中、その様子を窺っていたフレックスが先ほどから妙にズボンのすそに自分の手を擦りつけそわそわしていた。

「・・・・・・」

すると、これを見たシャマルやギンガが思わず尋ねる。

「あら?フレックスさん」

「どうしたんですか?」

「・・・い、いや。何でもありません」

フレックスはそう言って、先ほどのしぐさを意図的に止めて、平静を装うが、これを見た龍児が彼の元へと歩み寄り凝視する。

「・・・――――」

「りゅ、龍児様？」

一瞬顔を引いてしまうフレックス。

と、ここで龍児が真顔を浮かべたままこんなことを言ってくる。

「フレックスさ。相変わらず隠し事が下手だな」

「！」

「お前がそうやって妙にそわそわした様子でズボンの裾に手を擦りつけるのは、俺達に何かを隠しているときだ。」

「・・・・・・」

「あるのだろう。俺達に話さなきゃいけないことが」

龍児がそう言うと、龍真もまたフレックスに目を向ける。

「フレックス。兄さんの言う通りだよ。ちゃんと、話してほしいな」

二人の言葉、そしてユーノ達一同も同様の眼差しを向けると、観念した様子でフレックスが声を漏らす。

「・・・・・・わかりました。」

フレックスは一度カーテンの外を眺めた後で、全員の方へと振り返る。

「ではお話いたします。昼間、みなさんが外出されている間起こったほんの一コマの出来事を――――――」

一同は、フレックスから昼間夜御倉邸にかかってきた不審な男からの脅迫電話の事を赤裸々に暴露し、これを聞いた一同は目を見開き顔を見合わせる。

「え！脅迫電話！？」

「相手は？誰がそんな・・・！」

「脅迫者の特定はできていません。しかし相手の狙いが他でもなく龍児様を含むこの場にいる全員の命を狙っているということは、確かです」

「私達の命も！」

「一体どうして！？」

全員がこの言葉に耳を疑う中で、龍児は下あごに手を添えながら更に尋ねる。

「他に何か分かることは？」

「・・・もう一つはっきりしていることがあるとすれば、脅迫者は恐らく私と龍児様の御家族の過去を知る人物・・・つまり、父上様と母上様の顔見知りと言うことです」

「父上と母上の？」

すると、キャロがその話を聞いた後で徐にフェイトに尋ねる。

「あの、龍児さんの御両親は？」

「１４年前にお亡くなりました。龍児が９歳のころです」

「これが、僕達が両親と最後に撮った写真です」

龍真は懐から当時９歳と８歳の自分たちが両親と仲良く写っている古びた写真を全員に公開する。

龍真から写真を受けたったはやてだが、その直後彼女は写真に写っている龍児の母親の容姿を見るなり顔を赤く染める。

「な／／／」

気になったヴィータは硬直するはやてから写真を奪いとる。

「なんだよ、どうしたって・・・えええええ！！！」

「ふぇ！これって・・・！」

「おいおい・・・まさか龍児の母ちゃんって・・・」

全員が思わず目を擦って疑うのも無理はない。

なんと、龍児の母親は他でもなくこのリュミエールにおける八神はやてとうり二つの容姿を持つ女性だったのだ。

フォワード陣も思わず声を上げて驚いた。

「「「「「八神部隊長そっくり！！」」」」」

と、ここで長年仕えて来たフレックスが簡単なプロフィールを紹介する。

「夜御倉はやて様。龍児様と龍真様の御母上であると同時に、夜御倉家歴代全当主最高の魔力を持った女性で、リュミエールで最も美しく、また最強の魔術師でした。」

「う・・・また名前が一緒かいな・・・もしかしてなのはちゃんとユーノ君のそっくりさんもいるんちゃうの？」

「「あはは・・・」」

はやてのこの言葉には、ユーノとなのはも可能性が捨てきれずに苦笑いを浮かべる。

ここで補足。

二人の母親である夜御倉はやては八神はやてよりも容姿端麗で、且つ誰に対しても分け隔てなく接して丁寧語で話す女性であった。

そして、驚きが醒めきらない状態ではあるが、鬼太郎が写真を見つつフレックスに言う。

「で、この二人とお前がどういう間柄だって言うんだ？」

フレックスはそれを聞くと、間をおいてから徐に後ろに手を組み、感慨深そうに過去の話を始める。

「――私が夜御倉家の使用人としてやってきたのは、もう３００年前も前の事です。私は何世代と渡って夜御倉家に仕えて来ましたが、その中でもはやて様はずば抜けて素晴らしい才能と器量の持ち主でした。幼少のころから魔術を収め、その才は神童と謳われるほどでした」

「・・・・・・」

思わず口ごもる龍児やユーノ達。

フレックスははやての事を詳しく語るため、２５年程前の出来事を語り出す。

「――２５年前、夜御倉家の当主として手腕を振るっていたはやて様は、祖国であり貧困と圧政に苦しむガイナム共和国に国際ボランティアの一員として赴きました。私も付き人としてお供いたしました。はやて様は誰にでも手を差し伸べ、内戦で家族を失った戦争孤児や多くの民衆に笑顔を振りまき続け、それは正しくガイナムに舞い戻った女神・・・――純粋で正義感に溢れた優しい女性でした。」

フレックスは一息を付いた後、その後の展開を次のように述べる。

「やがてはやて様と私は矛盾を感じて、当時の二番隊隊長を務める総隊長の御氏族で、のちの龍児様と龍真様の父となるシン様と共に反政府活動に身を投じた。そんな中で、シン様とはやて様は恋に堕ちて・・・結婚した。そして生まれたのがお二方でした。反政府活動を続ける日々は決して楽なものではなかった。お二人の笑顔がどれだけ私たちの救いになったか知れない。」

「そう言えば、小さい頃にかすかだが記憶にある・・・」

「うん。だけど直ぐに戦争が激化したから桜華国に送り返されちゃったけどね・・・それが結果として、父上と母上との最後の別れになるなんて」

二人は後悔に満ちた物寂しげな顔を浮かべる中、ここで話を聞いていたハロルドが誰にも気づかれない様子で足早に部屋を後にしようとすると、浦太郎はその様子に気づいて訝しげな眼差しを向ける。

「・・・・・・」

そして、再びフレックスが龍児と龍真が桜華国に戻された後の情勢を話し始める。

「その後暫くは平穏な時が続きましたが・・・――ある時、同志であるピートとゴンザレスの二人と、活動方針の違いから対立した。興奮した彼らは銃を抜いた。はやて様はシン様と私を庇おうと飛び出してきて――――――撃たれたんです。」

「な・・・」

思わず顔を引きつる同じ名前のはやてや一同。

「シン様と私は何とか応戦したのですが、シン様もまた銃弾に倒れ、私は矢も盾もたまらず二人を追い返そうとして、とどのつまり私の放った矢は彼らの一人ピートに当たって、二人は立ち去った。私は直ぐに、撃たれたお二人のところへ駆け寄った。だがしかし、その時には既に二人の息はありませんでした・・・・・私は、夜御倉

家の執事として、お二人の同志として、最後まで自分の力でお二人を守ることが出来ませんでした・・・／／／」

フレックスは目から零れ落ちる悔し涙に思わず手を翳す。

「フレックスさん・・・」

話しを聞いていた一同は気持ちを汲んで同じように心を痛める。

と、ここで龍児と龍真がフレックスの元へと近づき柔かい表情で肩に手を当てて言う。

「すまない・・・キツイことを思い出させてしまって」

「龍児様・・・龍真様も、本当に申し訳ありません／／／私が付いていながら／／／」

「過ぎ去った過去は、二度と取り返すことはできない。それに、父上も母上もお前の事を恨んだりはしていないよ。」

「うん。きっと、遠い黄泉の世界でフレックスや僕らの事を見守っているはずだよ」

「龍児様・・・龍真様・・・／／／」

フレックスはその言葉に些か楽になったのか、涙を拭い去ることが出来た。

安堵の表情を浮かべるユーノ。

その直後に真剣な顔つきでフレックスに尋ねる。

「それで、話を元に戻しますが、龍児さんと龍真さんがはやてさんの御氏族だという事実は、公にされているのでしょうか？」

「その件に関してですが、夜御倉家は桜華国三大貴族の中でも最も格式ある家系故、後継者である御氏族が生まれた場合、それを国家騎士団や一部の貴族家系以外に口外することはありません。当主自らが口を割って話さない限り知らない筈です。したがって、我々の他には桜華国民以外に居ない筈です」

「だが、脅迫者は僕らのことを知っていた」

「その通りです――」

渋い顔でそう答えた後、一同は口を閉ざして静まり返る。

龍児は徐に上着に仕舞い込んでいた幼い頃の自分達を抱きかかえる最愛の両親の笑顔を見つめながら物寂しそうに呟く。

「父上。母上――」

◇

〈浦太郎Ｓｉｄｅ〉

さて、場所を変えてここは騎士団寮に設けられた一階のバーカウンター。

そこのカウンター席でカクテルを見つめながら、辛い表情で一人酒

をするハロルド。

そこに、話が終った浦太郎が女性を口説くときに見せるクールな表情でやって来、徐にハロルドの隣に座って飲む酒を注文。

「・・・バーボン。」

「はい。」

浦太郎は二枚目の顔を崩さずに、隣で酒を酌み交わす未だ辛い表情を見せているハロルドに話しかける。

「話を聞くのが、辛かったのかな?」

そう言われると、ハロルドはカクテルを一度コースターに置くと、次のように語たり出す。

「あれは悲しい事件だったわ・・・何しろピートは同志だったんですもの。彼は当時8歳だった私にすごく優しくしてくれた――――」

ハロルド・ベリセリオスは、弟であるセスタと違い、8歳のころまでは別々に暮らしていた。

そして、暮らしていた場所が偶然にも夜御倉はやての祖国であった、ガイナム共和国であり、数年間は本格的に反政府活動に加わっていたのだ。

浦太郎は聞いたのち、ピートの事を聞いた。

「あの後、ピートは？」

「死んだわ。逃げる途中で」

「何故、君がガイナム共和国に？」

「ガイナム共和国は、私にとっては思い出深い場所なの。あの国は今でもリュミエールに於いて最も貧困と圧政に苦しむ国家なの。だから、私もはやてさんもこのまま何の罪もないガイナムの民が死んでいく姿は、見ていられなかったのよ。反政府運動は、私達の青春を賭けた戦いだから」

「そう言うところ、うちのはやてちゃんとも似てるな。目の前で困ってる人に限らず、自分の手の届かないところにも救いの手を差し伸べるってところが。そして、個人の感情を云々言わずに直向きに歩き続ける君の姿もまた。」

「あ」

これにはハロルド自身も少々驚いたが、直ぐにほく笑んでからこうも呟く。

「そうね。もう一つ理由があるわ・・・罪の意識があったからかもしれない。幼かったとはいえ、自分一人だけが生き延びてしまったことに対する罪の償いの答えを探し求めて。だから、研究者となった今でも祖国への想いは変わらないわ」

「それで、その答えは出たのかい？」

「・・・まだ出てないわ。」

「そうか。」

浦太郎は、出されたグラスの中のバーボンを一気に飲み干すと、席を離れハロルドに挨拶を交わしてきた。

「おやすみ、ハロルド。」

「あら?今日はもっこりのお誘い・・・ないの?」

「同じ名前の友人の好だ。君とはやてさんの青春を踏みにじりたくないんでね・・・もっこりは、答が出た後にしよう。」

その言葉だけを言い残して、浦太郎はハロルドの下を去っていった。

立ち去っていく浦太郎の後姿を見ながら、ハロルドは持ってグラスを掲げて励ましをしてきた浦太郎に乾杯の仕草を見せた。

◇

〈三人称Ｓｉｄｅ〉

桜華国・南西部海岸線。

ここに停泊一層の船がある。

この船の中で密かにある取引が行われていた。

ガイナム共和国麻薬組織のボス、ゴンザレスと次元世界の各地の有力な組織に巨額の出資を行う闇の巨大資本、「財団Ｘ」の幹部・日

陰が一堂に会してガイナム共和国で栽培された麻薬との現金取引を行っていた。

ゴンザレスの部下がかばん一杯に入った透明な袋の中の麻薬を見せた後、日陰に向かってこう言って来た。

「カルシファーが３０キロある。これからは望むだけ提供しよう、ミスター日景」

日陰は物を確認すると、部下が持って来た現金が収められたアタッシュケースを机の上に置き、不敵な笑みを浮かべる。

「これからは、末永い付き合いってのをしたいもんだ。ミスターゴンザレス」

「結構！商談成立の祝いに一割ほどサービスしよう」

そう言って、ゴンザレスは部下に持たせた一割ほどの麻薬を提供。

「ほほーん。気前がいいな。だがただより高いものはないっていうぜ」

「まぁ、ちょいとしたことをやってくれればいいのさ。桜華国ってのは不便な国でな、外国人って奴は目立ちすぎる」

「なるほど。いいだろ。なんでも言ってくれ」

日陰はゴンザレスから話を伺った後、部下を引き連れ船から降り、モーターボートで岸まで戻って行った。

その様子を船の上で窺うのはゴンザレスに雇われた狙撃手、ダンケルク。

すると、そのダンケルクの元にゴンザレスが近づき夕方の狙撃が失敗したという報せに驚愕の表情を浮かべながら今一度尋ねた。

「狙撃が失敗したと聞いたが。」

「ああ。邪魔が入った・・・翡翠の魔導死神って奴がな」

「何!?翡翠の魔導死神だと・・・!く、レイヤーめ・・・とんでもない奴を」

ゴンザレスは表世界に限らず、裏の世界にもその名を轟かせるユーノの異名に思わず顔をしかめる。

ダンケルクは不敵な笑みを浮かべながら自信に満ちた顔で言ってくる。

「心配するなゴンザレス。翡翠の魔導死神は俺が片付ける。」

「はは、そうか頼むぞ。なんならギャラは別額で弾む。」

「はっ。ギャラはいらねぇ・・・もっといいものが手に入るんだな。」

「いいもの?」

訝しげな顔でゴンザレスがそう呟くと、ダンケルクは不敵な笑みを浮かべて次のように呟く。

「裏の次元世界？1という椅子がな・・・・・・」

一方、その頃ユーノはなのは達を先ほどの会議室に再び集めると、解析した銃弾のクワ脚いデータをスクリーンに映し出しながら次のように説明をする。

「こいつはね、みんな。『ＦＡ－ＭＡＳ（ファマス）』。通称“トランペット”という銃から撃ち出された弾だよ。ダンケルクの銃さ。」

「ダンケルク？」

「今次元世界で売出し中の殺し屋でね・・・手段も客も選ばない、仕事にも執着していない。あるのは自分の名前を売ることだけさ。だが気をつけた方がいいよ。ダンケルクは？1というのに拘ってる。」

と、ユーノは話をしているが、その会話を秘かに聞いていたのは如月京介だ。

どうやら彼とダンケルクとの間には深い因縁があるみたいである。

で、話を元に戻すとして、一同は顔を引きつりながら自分達でも知らない質量兵器に関する情報や殺し屋の事をさも当たり前のように口に連ねるユーノに思わず言う。

「何処で仕入れたんだよそんな裏情報・・・・・・」

「流石は人間タウンページ・・・何処にでも情報が張り巡らされてるって訳だ・・・」

「存在そのものが無限書庫なんじゃないですかね？」

「あはは・・・で、ダンケルクの雇い主は誰なの？」

そうなのはが尋ねると、ユーノは眉間にしわを寄せて龍児達がいることも前提に意外な事を口にする。

「“ゴンザレス”さ。」

「え、ゴンザレス！」

「そ。ガイナム共和国の麻薬組織のボスだよ。僕の情報網じゃ、次元世界の闇の巨大資本『財団X』の日景と取引するために今、桜華国に来ているらしい。まぁ、とにかく詳しい情報は――――このメモリに入ってるよ」

ユーノはそう言って懐から詳細なデータが収められた機密データを龍児達に渡し、セスタやはやては情報収集の早いユーノに歓喜の声を上げる。

「サンキューユーノ！このままフリーにしておくのが惜しいや」

「流石はうちの切り札で、元・翡翠の魔導死神、ほんでもって次元世界最強の無限書庫の司書長さんや！」

「大したことじゃないって。今の僕にはこれくらいしかできなから」

「ふふ。謙遜しちゃって。ありがとう、ユーノ君♪」

「本当に、パパには敵わないよね♪」

「はは。んじゃ僕はもうちょい資料を見直そうと思ってるから、先に部屋に戻ってるね」

ユーノはスクリーンを切り、先に部屋に戻ろうとする中、ここで浦太郎は真剣な顔で呼び止める。

「店長待ってくんない。もう一つ？」

「ん？重要なことだね浦太郎」

ユーノもそう思って真剣な顔つきとなり振り返ると、浦太郎はこの場にいる全員がぶっ魂消るような一言を口にした。

「いい“もっこりプロモ”ない？」

「だらああ！！！」

「「「

いや本当に、全く以て緊張感のない奴であるな・・・浦太郎は。

◇

〈六課Ｓｉｄｅ〉

リュミエールに来て三日目の朝。

昨日の事もあって本日は観光を一先ず取りやめたユーノ達だが、今日は朝から龍児達に連れられある場所へと向かっていた。

浦太郎は馬車の椅子に腰かけながら徐にユーノに尋ねる。

「え～と、なんか今日はみんなでお参りに行くんだっけ？狙われてるってのに大丈夫なの？」

「大丈夫だって。その為に朝から国家騎士団の護衛がついてるんだ。あ、始めに言っておくけど向こうに着いたら武器とかデバイスは全部預けるんだよ。何しろこれから行くのはリュミエールの“聖域”なんだ」

「聖域ですか？」

「そ。これから僕らがどうするかを、神に教えを乞うんだってさ。龍児さんが言うには」

一方その頃、先頭を走る龍児達二番隊と五番隊の隊長陣が登場した馬車の中で、セスタと数名の騎士たちが乗った馬車ではこんな会話が繰り広げられていた。

「しかしセスタ隊長。よく総隊長が今日の訪問を許可しましたね」

「龍児が総隊長に強く申し出たそうだ。歴戦の勇士だからな。並みの騎士とは器が違うんだろな。」

「ですが、仮にもあそこはリュミエールの聖域・・・いくら同じ魔法使いと言っても、そこまで彼らを信用していいモノなんでしょうか・・・」

と、ユーノ達を擁護する龍児や総隊長たちの偉功に些かの疑問を感じた騎士の一人がそう言って来ると、セスタがその騎士を怒鳴りつける。

「おい！ユーノ達はそんじょそこらの性根の腐った奴等とは訳が違うんだ！邪推はやめろ」

「も、申し訳ありません！私達が口にするような言葉ではありませんでした。」

「大丈夫だ。ユーノ達なら、世界樹もきっと――――――」

セスタは過信ではない、確かなものをユーノ達に抱いていた。

そして、馬車を走らせること二時間。

一向は港に降り立つと、そこから更に船に乗り換えリュミエール中心部に位置する世界樹島と呼ばれる島まで一直線に進んでいく。

暫くしていると、ユーノ達の瞳に目的地である新緑が溢れかえる世界樹島が映って来た。

「「「「「「おおお！」」」」」」

思わず声を漏らすユーノ達。

本島に到着したユーノ達は、先刻話した通り武器の持ち込みは出来ない為、デバイスと斬魄刀を預けて、龍児達数名の騎士団と共に島の中心へと向かい歩き出す。

未知と神秘に満ちた島の内部を見渡ながら、戦闘を歩く龍児の話に耳を傾ける。

「聖域は、中心の島嶼、およびその周辺海域が完全保護区域に指定されていて、中には４０００年以上前に築かれた大神殿がある。代々二番隊・及び夜御倉家が管理してきた場所だ。」

「そこに、神様がいるんですか？」

「私達の指導者であり、命の源でもあります」

「一体どんな奴だよ？」

そう思って恋次が口にすると、ユーノ達の目の前に神々しい輝きを放つ巨大な神木が見えてきた。

声にも出せないほどに一同がその木の輝きに魅了されていると、付き添いで来ていた龍真が徐に自分たちの神の名を告げる。

「人じゃないよ。これが、僕達の神――――――“世界樹”だ」

神の名を告げられると、ユーノ達は今一度眼前に聳え立つ、世界樹を見つめる。

神々しい輝きを放つ世界樹だが、不思議と見つめているだけなのに一同の心が温かくなっていく。

この世界樹に関して、龍児達は徐に説明を始める。

「――――４０００年前、我々の先祖がこの世界樹島に足を踏み入れたとき、一人の少年が物陰の間に、一握りの土と光る木を見付けた。大切に持ち込まれ、それからこの木はみんなの手で育てられ今の場所に戻されたんだ。」

「世界樹は、全ての生命の源であり、魔術の発動に欠かせないエネルギー〔マナ〕を生み出し、世界中に供給・循環させている。神話や文献では、世界と全ての生命は世界樹の被創造物であり、世界樹は全ての生命と調和を成しながら成長するとされているんだ。」

「以来、私達はこの世界樹から色々と学んできたのです。今では神として、我々の中心的存在なのです。悲しいこと、辛いこと、迷い事があれば、神授の実に触れて教えを乞うのです」

フェイトはそう言って、金平糖のような形をした神々しい光を放つ世界樹に実った木の実、「神授の実」に手を触れる。

「成程。」

「凄く壮大な話」

「さぁ、龍児。世界樹の教えを」

「ああ」

フェイトに促され、龍児は神授の実へと近づき、目を瞑って徐に手を触れると、その瞬間神授の実が一掃と強く光り出す。

「「「

「大方予想はしていたが、主はやてと声紋も同じとは・・・！」

龍児と龍真は１４年ぶりに再会を果たす亡き父と母に実際に手を触れ合い、言葉にさえできない感動を覚えながら端的にこの度の危機を口にする。

「父上。母上。この地で正体不明の魔の手が」

『知っています。』

「僕らはどうすればいいのでしょうか？」

『お前達の為すべきことはひとつ。この世界を、リュミエールを守り抜くんだ』

「リュミエールを！？」

父の言葉に二人は顔を見合わせると、直後に母・はやては次のように説明する。

『今あなた方に忍び寄っている魔の手は、あなた方だけでなく、このリュミエールをも喰らい尽くそうとしています。今だ嘗てない邪悪な力がこのリュミエールを渦巻いています。これを野放しにしては、世界の平和はあり得ません』

「先の見えない未知なる敵に、我々は立ち向かえるのでしょうか？」

『大丈夫。周りを見てみるのだ。』

「「え」」

二人は一度後ろに振り返ると、そんな二人に笑みを向けてくる古くからの仲間と、ユーノ達以下六課メンバー一同を見渡し、その後で両親が言ってくる。

『あなた方を愛し、あなた方を信じる者。なにより――頼りになる新しい仲間がいる筈です』

龍児と龍真はその話を聞くと、ユーノ達の元へと近づき、手を取り合い笑みを浮かべる。

『我々は、神授の実と共にいつまでも見守っている。だから、迷わず進むのだ』

そう言って、シンとはやては二人揃って天へと昇って行く。

「「父上！母上！」」

思わず声を上げて二人を呼び止める龍児と龍真。

最後に名残惜しくはやては優しい笑みでこう言い残す。

『迷わず、進むのです――――――』

その言葉を残して、二人は再び冥界へと戻って行き、龍児と龍真は声を上げて二人の子と強く欲した。

「「父上！！！母上！！！」」

◇

〈ゴンザレスＳｉｄｅ〉

その頃、桜華国に停泊中のゴンザレスと財団Ｘの日陰は中で話し合いをしていた。

「ふふ。国家騎士団が管理局の犬どもが結びついたか・・・だがこれも想定済みの事」

「ミスターゴンザレス。予定通り、狩りを始めていいんだな」

「ああ、頼むぞミスター日陰。俺はあんたを信用してるんだ」

ゴンザレスは不敵な笑みでそう言うと、日陰の部下の方に目を向け、部下たちもまた不敵な笑みを浮かべて来た。

「「ふふ・・・」」

次回、財団Xの資格がユーノ達に襲い掛かる！

動き出す魔の手・夜御倉家の秘密（後書き）

ユーノの部屋

ユ「御機嫌よう、みなさん。ユーノの部屋のコーナーがやってきました。ささ、今日は前回のセスタ君の悩みの種ともなっている、五番隊副隊長でセスタ君の義理の妹さん、月光院スバルさんです♪」

と、ユーノが紹介をするが、当の本人はいっこうに現れない。

ユ「あ、あれ？スバルさん！スバルさーん！どうしちゃったのかな？」

いくら呼びかけをしても、まるで返事が無い。

ユーノはため息を吐きながらある秘密兵器を取り出す。

ユ「なら、これなら答えてくれるかな・・・絆から拝借したこの声紋で呼びかければ・・・」

ユーノはメガホンらしき変声機を使って次のように呼びかける。

ユ「『出て来てもらっていいよね、答えは聞いてない♪』」

と、その直後スバルが声に反応してユーノの隣の席に現れる。

ユ「お・出て来たね♪」

ス「あ、あれ？さっきまで、ナーノ様の声が聞こえたような／／／」

ユ「ほほ～ん・・・どうやら本当だったようだね。君がうちのチート息子に骨抜きって言うのは・・・♪」

ス「は／／／は・・・はい／／／」

スバルは全身が赤く染まると、薬缶のように頭から湯気が沸騰する。

ユ「まぁ、恋愛でとやかく言うつもりはないけど、遠距離恋愛は本当に辛いよね。僕となのはもそんな感じだったから」

ス「あ、あの！どうすればずっと繋がっていられるんでしょうか／／／」

ユ「なーに、簡単な事だよ。絆って言うのは互に想い合っていれば切れる事は無いよ。スバルさんがナーノの事を思っている限り、ナーノもまたスバルさんのことを思い続ける。そうすればきっと、長いこと繋がっていられる」

ス「成程・・・分かりました！私、ずっとナーノ様の事を思い続けます／／／」

ユ「へへ♪と、頃合いを迎えたところで本日はここまで。次回は龍児さんの弟、龍真さんがゲストです。お楽しみに♪」

魔導師図鑑ハイパー！

１１月２２日。

俗に言う「いい夫婦の日」であったりする。

現在、本編では出番の少ない黒崎夫妻にとってその日は何の変哲もない日に思われたが、休憩がてら一護がリビングを通りかかると、織姫が雑誌を読みながらポッキーを口にしているのも目撃する。

一「織姫、何食ってんだ？」

織「ポッキーだよ」

一「よかったら一本くれねぇか？」

織「はいはい♪」

すると、織姫はポッキーを口に咥えた状態で目を瞑って一護にアピール。

織「んっ」

一瞬身震いをする一護だが、気恥ずかしそうに言う。

一「えっと・・・普通に・・・」

織「んっ！」

しかし織姫はポッキーゲームを要求し、見かねた一護はため息がてら思わずつぶやく。

一「あのな・・・ポッキーゲームなら１０日前にやるべきだったな。今日は２２日なんでな」

織「え～～だって、ユーノさんとなのはさんは今日もやってるって言ってたよ！」

一「・・・あいつらを見習うなよ・・・／／／」

そう言う一護だが、一方のユーノ達がこの日をどう過ごしているのかと言えば・・・

な「ん／／／」

ユ「ん／／／」

織姫の言った通り、誰もが砂を吐く甘い甘いポッキーゲームを続けており、見たモノは眩暈を通り越して次々と倒れていき、これに嫉妬した恋次やフェイトは大声を上げた。

恋「何本食ってんだよ！！！それ3箱めじゃねぇか！！！」

フェ「お願いだからなのは／／／私を無視してユーノばかりといちゃいちゃしないで／／／」

次回予告

鬼「ぬおおおおお！！！！急に腹が！！！！」

恋「なんでお前って奴はまいどの事腹痛になるんだ！」

フェ「取りあえず、病院に連れて行かないと・・・」

浦「病院と言えば、もっこりナースが？？？」

ユ「お前は病院の中に入るのは禁止じゃ！！」

な「って！スバルちゃんが誘拐されちゃった！」

セ「スバル！くそが・・・！逃がしてたまるか！！」

龍児「ユーノ・スクライア外伝『誘拐されたスバル・ゴンザレスの野望』」

セ「おおおおおお！！！てめぇら絶対ぶっ殺してやんよ！！！！」

ＰＤＦ小説ネット発足にあたって

　ＰＤＦ小説ネット（現、タテ書き小説ネット）は２００７年、ルビ対応の縦書き小説をインターネット上で配布するという目的の基、小説家になろうの子サイトとして誕生しました。ケータイ小説が流行し、最近では横書きの書籍も誕生しており、既存書籍の電子出版など一部を除きインターネット関連＝横書きという考えが定着しようとしています。そんな中、誰もが簡単にＰＤＦ形式の小説を作成、公開できるようにしたのがこのＰＤＦ小説ネットです。インターネット発の縦書き小説を思う存分、堪能（たんのう）してください。

この小説の詳細については以下のＵＲＬをご覧ください。
http://ncode.syosetu.com/n4807l/

ユーノ・スクライア外伝

2011年11月24日20時58分発行